俺ガイル 日常の何気ないエロス。

高橋徹

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。」の隔週更新エロ込み短編集です。

ほのぼの非エロ、どきどき微エロ、濃厚エロそれぞれのシーンをたっぷり盛り込んでいます。

ヒロインごと（複数人の場合もあり）のエピソードを単発で書くのですが、前に書いたエピソードの関係性から続いている場合は、前書きで説明します。

連載中のエピソードには「（連載中）」の文字を、最新話にはタイトルの頭に『●ＮＥＷ！』、準最新話には『▲ＮＥＷ！』と付けています。混乱しやすいと思われますので、そちらをご参考にして頂ければと思います。

リクエストは活動報告で受け付けていますので、そちらにお願いします。

Ｔｗｉｔｔｅｒアカウントもあります。

高橋徹

ｔａｋａｈａｓｈｉ＿ｔｏｒｕ＿

休む場合などは、こちらでも連絡しようと思います。

〈オリジナル作品〉

小説投稿サイト・ノクターンノベルズにて

①「社会人が築く亜人ハーレム」

②「コンビニで出会ったエロい女の子と爛れた関係になりました。」

③「ドＭでちっこい先輩とお付き合いすることになりました。」
の３作品を連載中しています。
オシリス文庫から①が第９巻、②が第８巻まで電子書籍で発売されています！
また③も紙書籍で発売中です！
それでは、よろしければぜひご覧ください（＾＾）！

目次

雪ノ下雪乃の肩を揉んでみる。
（1）……1
（2）……11
after①……16
after②……22
after③……29
after④……36
after⑤……43
やはり雪ノ下雪乃の胸は小さい。
（1）……52
（2）……57
（3）……65
古今東西、怪談噺と言うものは人を惹き付ける、そして女子が話す怪談は大抵怖くない。
（1）……76
（2）……84
（3）……89
（4）……95
（5）……104
（6）……115
（7）……121
川崎沙希の泣き顔は思いの外そそるものがある。
（1）……134
（2）……138

（3）――149
（4）――157
（5）――169
（6）――177
（7）――185
（8）――192
（9）――197

比企谷八幡にも何だかんだで嫉妬と言う感情はある。

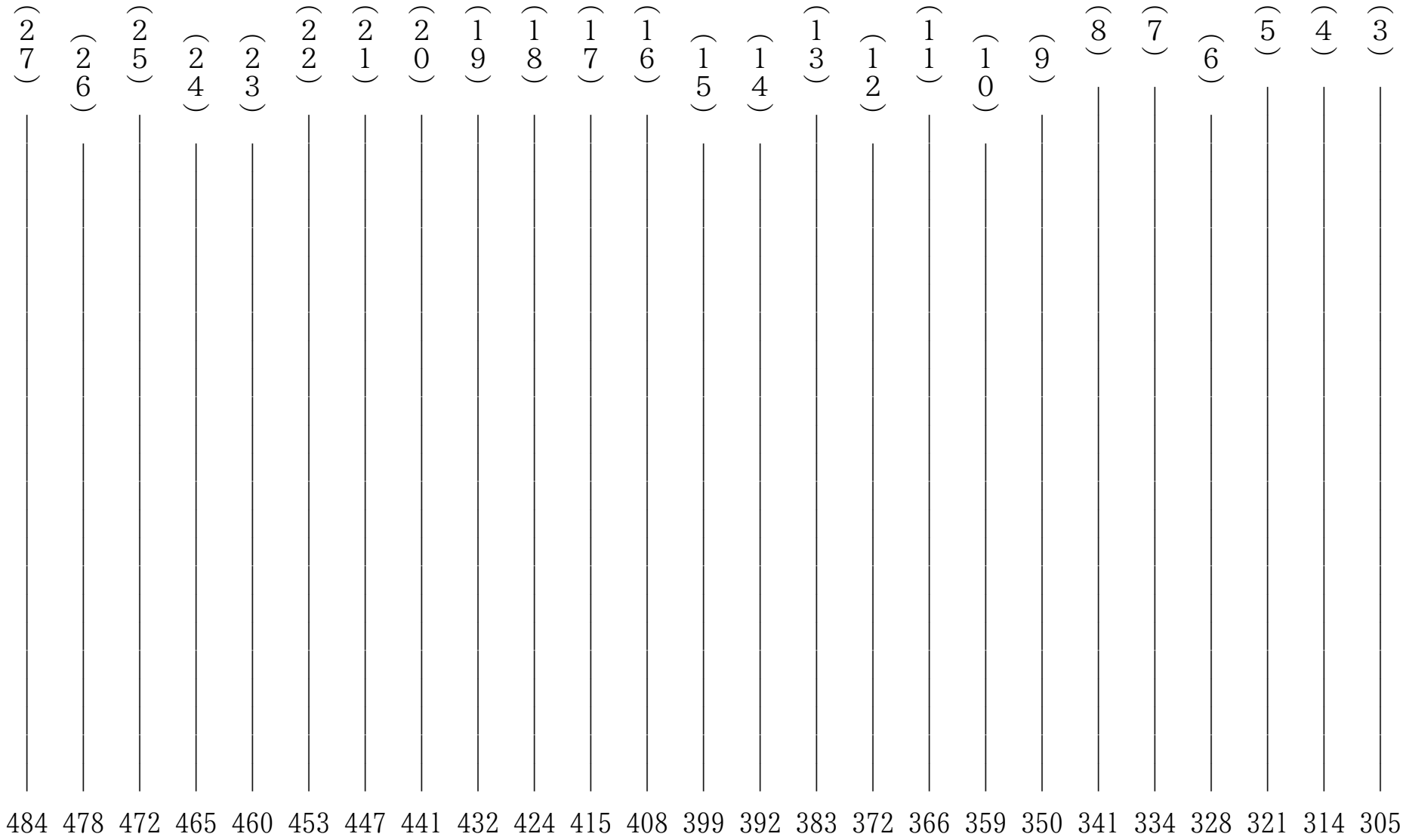
（1）――204
（2）――212
（3）――219
（4）――227
（5）――232
（6）――239

平塚静の可愛げを掘り下げてみると中々惹かれるものがある。

（1）――245
（2）――250
（3）――257
（4）――263
（5）――270
（6）――277
（7）――285

雪ノ下雪乃はやっぱりとても猫が好き。

（1）――291
（2）――296


27
26
25
24
23
22
21
20
19
18
17
16
15
14
13
12
11
10
9
8
7
6
5
4
3
484 478 472 465 460 453 447 441 432 424 415 408 399 392 383 372 366 359 350 341 334 328 321 314 305

言うまでも無く、比企谷小町はずっとそばに居る。
（1）…511
（2）…518
（3）…526
（4）…531
（5）…538
（6）…547
（7）…557
（8）…565
（9）…573
（10）…579
（11）…585
（12）…593
（13）…600
（14）…608
由比ヶ浜結衣は思っている以上に犬っぽい。
（1）…616
（2）…623
（3）…632
（4）…639
（5）…647
（6）…653
（28）…493
（29）…498
（30）…504

(7) ―― 659
(8) ―― 668
(9) ―― 677
(10) ―― 683
(11) ―― 692
(12) ―― 700
(13) ―― 707
(14) ―― 715
(15) ―― 722
(16) ―― 730
(17) ―― 738
(18) ―― 745
(19) ―― 752
(20) ―― 757
(21) ―― 764
(22) ―― 770
(23) ―― 776
(24) ―― 781
(25) ―― 786
(1) ―― 792
(2) ―― 798
(3) ―― 807
(4) ―― 815

間違いなく、一色いろははお砂糖とスパイスと素敵な何かでできている。

(29) (28) (27) (26) (25) (24) (23) (22) (21) (20) (19) (18) (17) (16) (15) (14) (13) (12) (11) (10) (9) (8) (7) (6) (5)

994 988 982 975 967 962 956 948 943 935 928 920 913 907 899 891 884 878 870 862 854 847 840 832 824

（30）……1002
（31）……1009
（32）……1018
（33）……1023
（34）……1030
（35）……1038
（36）……1043
（37）……1050
（38）……1057
（39）……1065
（40）……1072
（41）……1078

平塚静の可愛げを掘り下げてみた結果、思いの外凄まじいことになっている。

（1）……1088
（2）……1095
（3）……1104
（4）……1111
（5）……1119
（6）……1123

いつだって、城廻めぐりは見てくれている。

（1）……1130
（2）……1136
（3）……1141
（4）……1149

29
28
27
26
25
24
23
22
21
20
19
18
17
16
15
14
13
12
11
10
9
8
7
6
5
1304
1299
1294
1288
1281
1275
1270
1263
1257
1251
1244
1238
1232
1227
1222
1216
1209
1202
1196
1191
1185
1180
1174
1164
1156

54
53
52
51
50
49
48
47
46
45
44
43
42
41
40
39
38
37
36
35
34
33
32
31
30
1460
1454
1449
1443
1436
1429
1424
1419
1412
1405
1398
1393
1387
1382
1377
1370
1363
1353
1347
1341
1334
1328
1320
1315
1310

一線を越えた後の比企谷小町の視線が何やら熱っぽい。

（１）――――――

一色いろはは事ある毎におしおきを求めたがる。

（１）
（２）
（３）
（４）
（５）
（６）
（７）
（８）
（１４）
（１５）
（１６）
（１７）
（１８）
（１９）
（２０）
（２１）
（２２）
（２３）
（２４）
（２５）
（２６）
（２７）
（２８）
（２９）

1632 1639 1645 1651 1657 1663 1669 1674 1681 1688 1694 1702 1708 1714 1720 1725
1732 1737 1742 1747 1754 1761 1768 1773

由比ケ浜家で巻き起こる展開がマンガみたいである。

（1）
（2）
（3）
（4）
（5）
（6）
（7）
（8）
（9）
（10）
（11）
（12）
（13）
（14）
（15）
（16）
（17）

1837
1843
1849
1854
1861
1868
1873
1878
1883
1889
1896
1902
1908
1915
1923

1780
1787
1792
1797
1804
1812
1820
1826
1831

（16）――――1929
（17）――――1934
（18）――――1940
（19）――――1945
（20）――――1951
（21）――――1957
（22）――――1963
（23）――――1969
（24）――――1975
（25）――――1981
（26）――――1986

単発企画

比企谷八幡とヒロインたちとの各関係をひとまとめにしてしまうと、思いの外悲惨な事態になる。８月７日時点――――1992

１１月１１日という日を意識してみると案外楽しい。雪ノ下雪乃の場合。――――2000

ハーレム状態でクリスマスを控えると戦乱の予感しかしない。

（1）――――2011

ハーレム状態でクリスマスを控えると戦乱の予感しかしない。

（2）――――2018

ハーレム状態でクリスマスを控えると戦乱の予感しかしない。

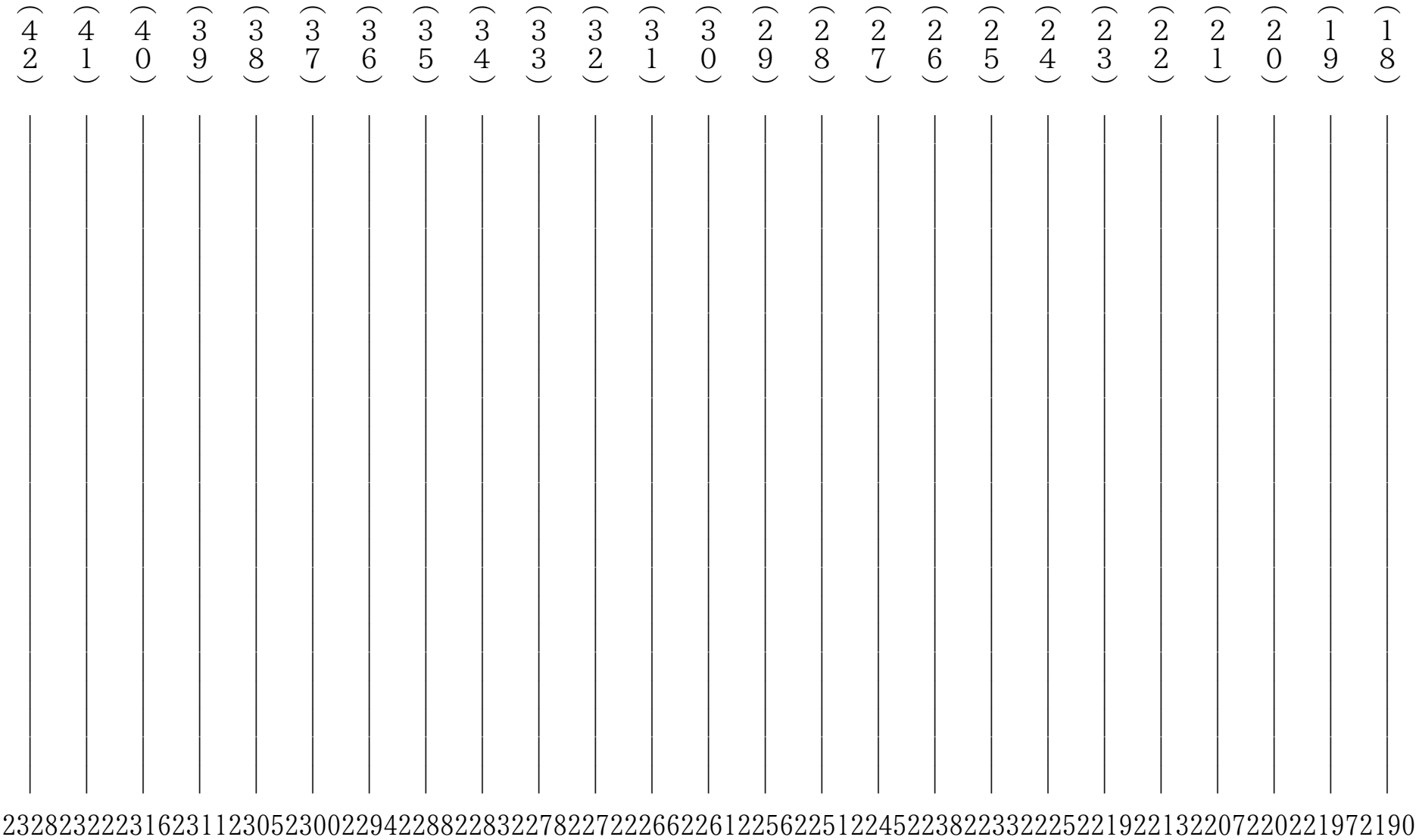
（3）――――2026

ハーレム状態でクリスマスを控えると戦乱の予感しかしない。

（4）――――2032

ハーレム状態でクリスマスを控えると戦乱の予感しかしない。

(5) ハーレム状態でクリスマスを控えると戦乱の予感しかしない。 2038
(6) ハーレム状態でクリスマスを控えると戦乱の予感しかしない。 2046
(7) ハーレム状態でクリスマスを控えると戦乱の予感しかしない。 2054
(8) 鶴見留美は寄り添う相手をしっかりと選び取る。 2062
(1) 2070
(2) 2076
(3) 2082
(4) 2089
(5) 2099
(6) 2106
(7) 2112
(8) 2121
(9) 2131
(10) 2138
(11) 2144
(12) 2152
(13) 2158
(14) 2165
(15) 2173
(16) 2178
(17) 2184


42
41
40
39
38
37
36
35
34
33
32
31
30
29
28
27
26
25
24
23
22
21
20
19
18
2328232223162311230523002294228822832278227222662261225622512245223822332225221922132207220221972190

67
66
65
64
63
62
61
60
59
58
57
56
55
54
53
52
51
50
49
48
47
46
45
44
43
2474
2469
2463
2456
2451
2446
2440
2435
2429
2423
2417
2412
2406
2401
2394
2387
2383
2377
2371
2364
2357
2351
2345
2340
2333

一色いろはとの寝起きのまぐわい。

(1)
(2)
(3)
(4)
(5)
(6)
(7)
(8)
(9)
(10)
(11)
(12)
(13)
(14)
(15)
(68)
(69)
(70)
(71)
(72)
(73)
(74)
(75)
(76)

2610260525992593258825822577257225662560255325462540253225242518251225082503249824942490248424 79

雪ノ下雪乃が女王様ぶってもあまり上手く行かない。
（１）……２６２
（２）……５２６
（３）……２０２
（４）……６１６
（５）……２６３
（６）……７２６
（７）……５７２
（８）……６５１
（９）……２６４
（１０）……５２６
（１１）……３７２
（１２）……６３０
（１３）……２６８
（１４）……９２６
（１５）……８３２
（１６）……６７８
（１７）……２６７
（１８）……３２６
（１９）……６８２
（２０）……６６３
（２１）……２６５
（２２）……７２６
（２３）……５１２
（２４）……６４５
（２５）……２６３
（２６）……７２８
（２７）……２７２
（２８）……２２７
（２９）……１６２
（３０）……７０９
（３１）……２７０
（３２）……３２６
（３３）……９８
いろいろあって川崎沙希は思いを寄せている。
（１）……２７４
（２）……６２７
（３）……４０２
（４）……７３４
（５）……２７２
（６）……８２７
（７）……２２７
（８）……１６２
（９）……７０９

34
33
32
31
30
29
28
27
26
25
24
23
22
21
20
19
18
17
16
15
14
13
12
11
10
2893288928822876287028652860285428472840283528272822281528092803279727922787278127742768276227572751

比企谷小町は夏に向けてくびれボディを作ろうと頑張っている。

(54) 3008
(53) 3001
(52) 2996
(51) 2990
(50) 2984
(49) 2977
(48) 2971
(47) 2965
(46) 2961
(45) 2955
(44) 2949
(43) 2943
(42) 2938
(41) 2932
(40) 2927
(39) 2921
(38) 2914
(37) 2908
(36) 2903
(35) 2898
(34) 3039
(33) 3032
(32) 3025
(31) 3018

1周年だからと言って調子に乗ると、色々と訳の分からないことになる。

（1）
（2）
（3）
（4）
（5）
（6）
（7）
（8）
（9）
（10）
（11）
（12）
（13）
（14）
（15）
（16）

折本かおりとの再会は、図らずも心根のわだかまりを溶かし行く。

（1）
（2）
（3）
（4）
（5）

3045 3053 3062 3073 3083 3093 3103 3113 3123 3133 3143 3150 3153 3163 3168 3173

(6) ―――― 179
(7) ―――― 184
(8) ―――― 189
(9) ―――― 194
(10) ―――― 200
(11) ―――― 205
(12) ―――― 213
(13) ―――― 222
(14) ―――― 226
(15) ―――― 232
(16) ―――― 237
(17) ―――― 244
(18) ―――― 251
(19) ―――― 257
(20) ―――― 263
(21) ―――― 268
(22) ―――― 274
(23) ―――― 279
雪ノ下雪乃をマッサージしてみると、楽しい。それも、すごく。
(1) ―――― 290
(2) ―――― 296
(3) ―――― 301
雪ノ下陽乃に道具を用いると、とてもぞくぞくする。
(1) ―――― 308
(2) ―――― 331

一日でヒロイン全員を攻略するのは中々大変である。

(26)
(25)
(24)
(23)
(22)
(21)
(20)
(19)
(18)
(17)
(16)
(15)
(14)
(13)
(12)
(11)
(10)
(9)
(8)
(7)
(6)
(5)
(4)
(3)

3452344734413436343034243420341434103405339833923387338133743369336233563350334233633303323331 8

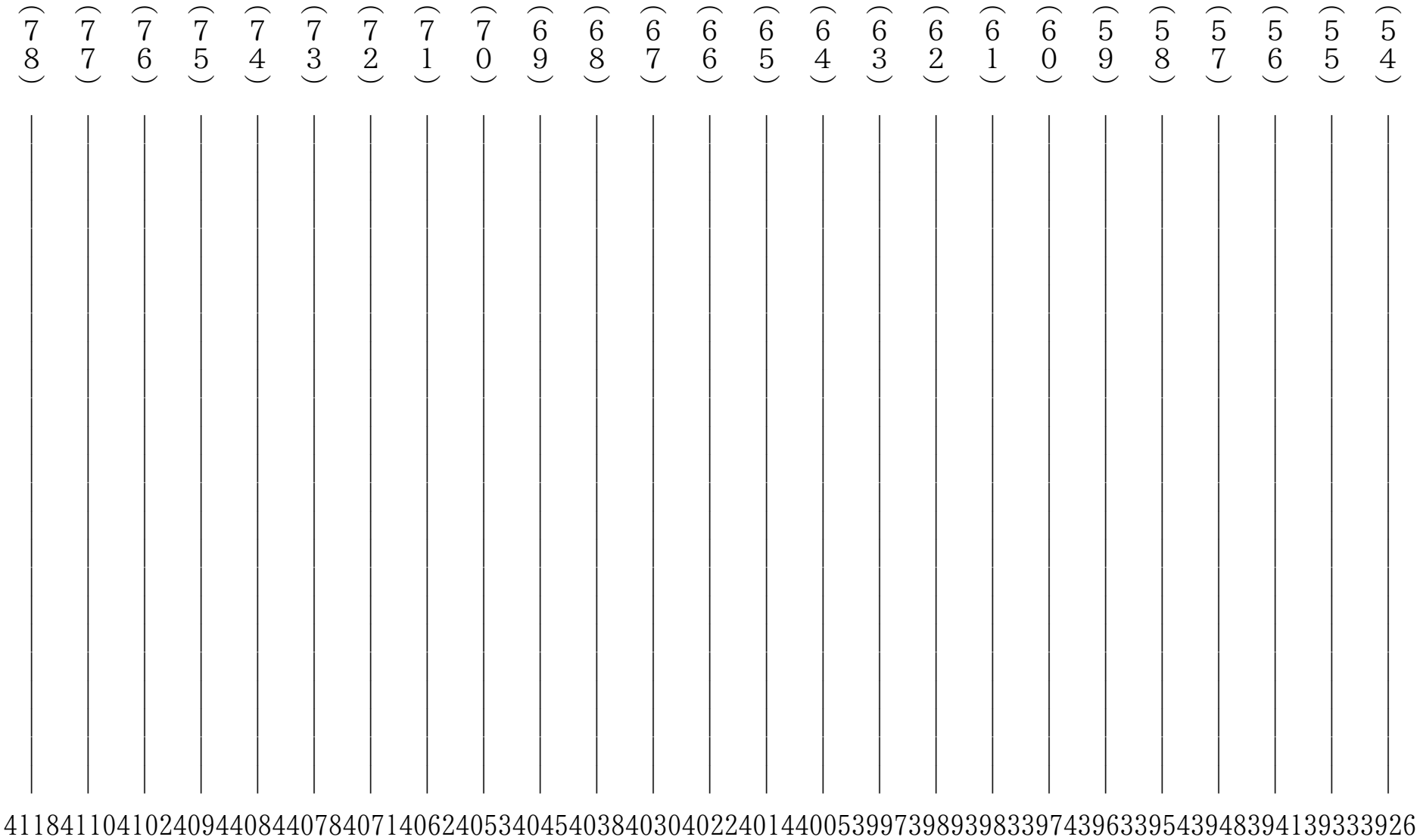
（１）　460
（２）　693
（３）　347
（４）　823
（５）　489
（６）　349
（７）　503
（８）　509
（９）　514
（１０）　352
（１１）　135
（１２）　263
（１３）　531
（１４）　383
（１５）　535
（１）　558
（２）　633
（３）　135
（４）　357
（１）　587
（２）　943
（３）　359

流されるがままに皆でこたつを囲んだりすると、何かと大変なことになる。

勇気を持って一歩を踏み出した三浦優美子は、強く可憐で美しい。

3749374437383733372837223717371137063700369236873679367236673661365336463640363436273621361436093604

3918390939033895388838803873386638593852384638393833382538183812380738003795378937823776376837623754


78
77
76
75
74
73
72
71
70
69
68
67
66
65
64
63
62
61
60
59
58
57
56
55
54
4118411041024094408440784071406240534045403840304022401440053997398939833974396339543948394139333926

（79）――――――

（3）――――――

（１６）――――447
（１７）――――564
（１８）――――461
（１９）――――468
（２０）――――475
（２１）――――480
（２２）――――487
（２３）――――492
（２４）――――500
（２５）――――508
（２６）――――515
（２７）――――521
（２８）――――526
（２９）――――531
（３０）――――536
（３１）――――542
（３２）――――547
（３３）――――552
（３４）――――558
（３５）――――563
（３６）――――570
（３７）――――577
▲ＮＥＷ！（３８）――――581
●ＮＥＷ！（３９）――――590

（コミケ本）一色いろはは元捻デレな先輩によってチョロインと化す。

（1）―――――――

雪ノ下雪乃の肩を揉んでみる。

（1）

いつからか少しずつ軋轢が生まれ、修学旅行・生徒会長選挙での出来事が決定打となり生じた大きな大きな亀裂。

それをお互いが、醜くて、みっともなくて、理論もへったくれも無いどうしようも無い本音を晒し合い、涙も流して乗り越え、久しぶりに奉仕部3人で挑んだクリスマスイベントも無事に終わり、部室には穏やかな空気が流れていた。

部室ではいつもの様に俺と雪ノ下が本を読み、由比ヶ浜が携帯をぽちぽちといじっている。二人からのクリスマスプレゼントでもらった湯呑で、雪ノ下に淹れてもらった紅茶をずずっと啜る。

何でも無い時間が、たまらなくむずがゆく、愛おし…むずがゆく思える。

携帯を時折閉じて、由比ヶ浜は楽しそうに何でもない話を切り出す。

一時期は必死に、この場所の空気を壊さない為だけに、会話の接ぎ穂を探しては繋ぐ作業を懸命にしていたが、少しずつ、以前の自然で元気な鬱陶しいテンションでお喋りをするようになっていた。

ふと、由比ヶ浜が何かを思い立つ。

「あ、そうだ、ヒッキー、ゆきのん、あれやってみない？」

「？あれ？」

「…何の事かしら？」

バカの子らしい指示代名詞で唐突に示され、首を傾げる俺と雪ノ下。

俺たちの様子を見て、由比ヶ浜があわあわと胸の前で小さく両手を振る。

「あ、そっか、いきなり言ってもわかんないか。ほら、ゆきのんと前に昼休みにやってた、じゃんけんで負けた方がジュース買いに行くやつ

！」

由比ヶ浜が元気いっぱいに言う。ああ、そう言えばそんなことがあったな。

あのときは俺がいつものベストプレイスで飯を食っていて、そこにじゃんけんで負けたって言う由比ヶ浜が通りかかって、そこで戸塚と出会って。そして戸塚が男子だと知って衝撃を受けて。そして戸塚は依然として俺にとっての天使で…。

思考が途中から戸塚一色（≠いろはす）になってにやけているのに見向きもせず、雪ノ下が「ああ」と言う顔でぽんと手を叩いた。

「あったわね、そんなことが。でも、どうして突然？」

雪ノ下の疑問も最もだった。なんで今？寒いよ？廊下も外も超寒いよ？ここ、あったかいよ？…外、寒いよ？

「あ…えっとね、ほら、また、そのときみたいな何でも無いようなことやってみたくなったんだ。ほら、最近は、…そう言うこと、する雰囲気じゃ…なかったし…」

由比ヶ浜の言葉は尻すぼみになって行った。

その言葉通り、ここ一ヶ月の部室での会話は何もかも上っ面だった。それに由比ヶ浜と雪ノ下は昼休みも部室でそんな会話を続けていた。

互いの心がすり減るであろうことは、空気をひたすら読んで生きてきた由比ヶ浜なら容易に想像がついたことであろう。それでもその行為を止めなかったのは、由比ヶ浜の、この場所を失いたくないと言う思い故だったのだと思う。

実際、まだ今も少しばかり3人の中には固さが残っている。俺と雪ノ下、雪ノ下と由比ヶ浜、由比ヶ浜と俺、そして3人、それぞれの中でだ。

ディスティニーランドに行ったことは結構重要な意味があったとは思うが、それで万事解決☆とは言えない。試しに入れた絵文字が気持ち悪いな、俺。

と、こんな風にぐるぐると考える俺同様、雪ノ下も思うところがあったのだろう。顎に手を当て、少し考えていた。

そして、その手をすっと太ももに置いて、穏やかな笑みを浮かべる。
「…そう、ね。今日は依頼が来る様子も無いし、そう言う遊びをやっても良いんじゃないかしら。」
「やったー！ゆきのんありがとー!!」
そう言って、由比ヶ浜が雪ノ下に抱き付く。
「…う、鬱陶しい…」
雪ノ下は顔をしかめて引きはがそうとするが、由比ヶ浜は離れようとしない。
今日もゆるゆりである。
「ヒッキーは?」
雪ノ下に抱き付いたまま、由比ヶ浜が目を輝かせて聞いてきた。
待ってくれ、そんなきらめいた目で俺を見ないで…腐っちゃう…！
元々腐ってるけど！分かってるけど！
「あ、まあ、そんくらいなら良いと思うぞ。」
ゆるゆりの空間に水を差す訳にもいかないしな。下手に渋って由比ヶ浜が更に抱き付きを強めようものなら、即座にガチ百合になってしまう。んなもん雪ノ下のお家でやってください！
「やったー！じゃ、やってみよー！」

「…で、じゃんけんをやって負けたやつが他二人のジュースを買いに行く…ってのでいいのか?」
椅子を少しだけ二人の側に寄せて、右側に向きを変えた雪ノ下と向き合うように左を向いて、由比ヶ浜の顔をちらりと見る。
「そうだねー…あ、せっかくだから勝った二人が負けた方に何か命令をするってのは?」
「お、え、いいのか?」
驚きの余り、自分でも分かるくらい気持ち悪い声を出してしまった。
案の定、正面を見るとまるでごみを見るような目で雪ノ下が俺を見ている。まあ、見られ慣れてるし、言われ慣れてるけどね！主に雪ノ下と小町に！ごみいちゃんって造語の語感の良さと侮蔑感やばくな

い？そんな言葉を作っちゃう小町マジ天使。つまり小町可愛い。
「…いつぞやの初対面の時を思い出すわね…。その腐った目と相俟って、思わず通報してしまいそうになるわ」
「おい待てそう言いながら携帯に手をかけるのをやめろ、て言うか画面にもう１１まで既に入力してんじゃねえか。なに？７を押すの？時報聞きたいの？」
どうでも良いけど寺宝って変換されるとシャボンフルーツが浮かぶ。あれ超食べてみたい。超どうでも良い。
俺たちのやりとりを見て、由比ヶ浜は首を傾げている。無理も無い。
バトルロワイヤルの件は平塚先生から聞いているはずだが、このやりとりはまだ由比ヶ浜が奉仕部の戸を叩く前の話であるからだ。
「？何のことかわかんないけど…そんな変なことは命令しないってことで！…ヒッキーも、そ、その、あんまり、変なこととか…言わない、でよ？」
たどたどしく、頬を染めながら、もじもじと言って来た。やめろ、急に室温が上がって来たじゃねえか。おっかしーなー暖房効き過ぎじゃない？
「まあ、取り敢えずやってみましょうか。勝敗を決するのはただのじゃんけんですもの。」
…いや、そうは言いますけど雪ノ下さん、思い切り気合入れてませんか？何で右手を左手で隠すように覆ってためてんの？そのモーションから出るのって波動的なものしか無いよ？
俺の心の中のツッコミをどこから嗅ぎ付けたのか、雪ノ下がこちらをちらっと、いや、ぎろっと睨む。本当にごめんなさい、その睨みの度に寿命が２週間ずつくらい縮んでる気がするからやめて。あれ、俺この作品の最後まで持たなくない？専業主夫になりたかった…。
「そうだな、取り敢えずやってみるか」
「よーし！それじゃあ行くよー！じゃーんけーん…」
「…」

「ヒッキー…」
「いくら運任せとは言え…比企谷くん…流石としか言いようがないわ」
じゃんけん一発目。
俺：グー
由比ヶ浜：パー
雪ノ下：パー
結果：俺、二人の奴隷☆
いや待て、ポジティブに考えるんだ。
雪ノ下と由比ヶ浜、学校でも注目を浴びやすく、タイプは違えど「可愛い」「綺麗」と称される二人。それは俺も十分理解しているし、実感もしている。雪ノ下は言葉が極悪非道で、由比ヶ浜は何かもう子供を相手にしてる気分になるレベルのあほあほちゃんだけど。
そんな二人が「えー、どうしようかー？」なんて顔を見合わせながら俺にささやかな命令をしてくるんだぞ。あ、なんかこの二人だともう今さら過ぎてありがたみねえや。あと何か似た記憶があるなって思ったら小学校の頃のトラウマ！ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤ☆への扉が開きそうだからこの辺でやめておこう。
「あー、いざやってみると、何を言ったらいいもんか分かんなくなるねー…」
いや、お前が言いだしたんだから候補の２～３つくらい考えとけよ。
「そうね…奉仕部らしく、富士山のごみ拾いなんて言うのはどうかしら」
え、それ誰依頼が前提なの？苦行過ぎるでしょ？ねえ？
二人はしばらくうんうん唸っていたが、やがて由比ヶ浜がぽんと手を叩いた。
「そうだ、肩揉んでよ！ゆきのんも最初で何言ったらわかんないだろうし、ヒッキーに肩揉んでもらおうよ！」
おいこら由比ヶ浜さんこのやろうなんて嬉し気まずいことを。
「え…でも…」

おいこら雪ノ下さんこのやろう何でただの戸惑いに見せかけて俺を冷たい目で見ながら肩を抱いてんだよ。
「いいじゃんいいじゃん！いやー、私最近肩凝っちゃってさー」
由比ヶ浜がばばくさいことを言いながら肩を回す。いや、あの、その、メロンさんもぶるんぶるん回っちゃってます…。直視出来ません…。
「あー、確かに由比ヶ浜は凝りそうだよな」
思わず、言ってしまった。しかも雪ノ下と見比べながら。
視線の移動は一瞬だったし、その意図は由比ヶ浜には伝わらなかったようで、「ほえ？」と言う顔で首を傾げている。ちょっと可愛いとか全然思ってないんだからねっ！
しかし雪ノ下はその視線に気付き、更に意図も丸々読み取ってしまったようで、一瞬はっとして自分の胸を見詰めた。ごめんなさい。
「…私だって、肩くらい…凝るわ…」
ごくごく小さな声で言った。明らかに拗ねている。え、何この子可愛い。いや待て、戸塚の方が可愛いぞとつかわいい。なんかもう何言ってんのかわかんなくなってきた。
由比ヶ浜はやっぱりまだ「ほえ？」と言う顔で首を傾げている。今度は逆側に傾げた。可愛いとか…全然思わないんだからね…！
「ゆきのんも凝ってるんだね！じゃ、やってもらおう！」
俺の意志は反映されないですよね…分かってました…。

まずは由比ヶ浜の肩を揉む。あくまで、肩だ。
女子の身体に少し触れるだけで死にそうになるのに、肩を揉む…だと…と絶望していた俺だったが、何とか覚悟を決めた。
しかし、上着を脱いで、ワイシャツ姿になって椅子に座る由比ヶ浜の後ろに立つと、その覚悟が一瞬で飛んだ。
「じゃ、よろしく～！」
由比ヶ浜が明るく言ってのけるが、俺はそんなテンションではない。
だって近付いただけで柑橘系の良い匂いがするし首細いなーとか

綺麗だなーとか後ろから見るメロンはまた格別だなーとか何て言うかもう邪念しか湧いてこない。
しかし、雪ノ下の目もある。躊躇する訳には行かない。
そっと、由比ヶ浜の肩に手を触れた。
瞬間、触れた肩がぴくりと揺れる。
「…ふあっ…」
お前ばかこのやろうその反応はやべえだろ、いや、本当に。本当に。
「だ、大丈夫だから、続けて…？」
頬を赤らめて振り返るんじゃねえよ完全に違うこと想像するだろうがーーーーー!!!やばいやばいやばい雪ノ下がこっち見てる続けないと。
「…じゃ、行くぞ」
「…ん」
俺が誇りにしている想像力を、今だけは全力でオフにしたかった。
ゆっくりマッサージを始めると、互いに慣れて来たのか、徐々に自然な動きと反応になって行く。
「お～、なんかヒッキー上手いね～…極楽だ～…」
こっちからは顔が見えないが、多分温泉にでも浸かったような顔をしてんだろうな、こいつ。
「ああ、ま、おふくろとか小町の肩を幾度となく揉んでるからな」
そう、本当によく揉んでる。親父、俺が小町の肩を揉んでる時に俺のことを射殺すような視線で見るのやめてくんねえかなあ。小町があんたに肩を揉ませることは多分無いと思うよ。叶わぬ夢なんだよ！
「そうなんだ～～～…あ～～～極楽…だ～…」
徐々に声が小さくなる。ん、え、なんで？
そっと顔を覗き込む。
「…すぴー…」
寝やがった…!!!
はええよ。ものの5分だぞ。固い椅子に座ってるし、俺も雪ノ下も居るのに。なんつうふてぶてしさだ。

…まあ、安心してくれてる、んだろうか。
「あら、由比ヶ浜さん寝てしまったの？…まったく…」
雪ノ下が呆れながらも、由比ヶ浜の隣に椅子を並べ、自分の下へ抱き寄せる。
膝枕をしてあげていた。
「…え、何、お前、お母さん？」
「…お姉さんよ」
家族なのは決定なんだ…。

「じゃ、次は私ね…」
すかぴーと阿呆みたいに幸せそうに寝ている由比ヶ浜に膝枕をしながら、雪ノ下がゆっくりと制服の上着を脱いだ。その何気無い仕草一つで、心臓がどくんと高鳴る。
格好自体は何てことの無いワイシャツ姿だが、わずかに除く首筋や、よりくっきり見えるようになった身体のラインに惚れ惚れとする。
「…よ、よろしく…ね…？」
いやちょっと待て。何でこのタイミングでそんな恥じらって頬を赤らめながら聞いてくんの？その破壊力を舐めんなよ？陽乃さんや一色みたいに計算して無くて、本当に素で恥じらってるんだからやだこの子タチ悪い！あと良い匂い！やばい！
「…おう」
由比ヶ浜のときと同様に、慎重に手を肩に置く。
その瞬間。
「ひんっ…!!」
明らかに、聞いたことが無い、甘くソプラノのような高い声がした。
一瞬がたっと動いたが、由比ヶ浜が「んあ…？」と寝ぼけ気味に起きそうになったので、慌てて元の姿勢に戻る。
…あ、思い出した。以前陽乃さんが「雪乃ちゃんねー？結構敏感なんだよー！流石にこれは私も皆の前で弄れないけどー。今度試してみてね♪」と明るく言っていたっけ。

あなたなら時間・場所を問わず弄りそうなもんですけどね…。
「…大丈夫か？」
なるべく平静を装って聞いた。
「…大丈夫よ、続けて？」
上ずった声を抑えきれないまま、雪ノ下が答える。
いや、なんで肩揉みに乗ったんだお前…。
まああれか、俺が胸を見ちゃったからか。いやもう何かほんとごめんなさい。
…由比ヶ浜が目の前で寝ていて、雪ノ下は起こすまいと声を上げるのを我慢してるこの状況。
やばい、正直言って、興奮する。
もう一度、今度はゆっくり沈み込むように手を肩に押し込む。
「はうっ…くっ…あっ…」
堪えてくぐもった声を漏らしながら、由比ヶ浜を起こさないように手で彼女の頭を押さえている。
背筋を反らしては戻しながら、懸命に堪える姿。
徐々に、嗜虐心のスイッチが入ってきた。俺にこんなスイッチあったんだって言う新発見。
「…ふっ…ふぅっ…んんっ…！」
5分も経った頃、雪ノ下は一言で言うと「出来上がって」いた。
綺麗な首筋には汗を滲ませ、ワイシャツは少しばかり透けて来て、うっすらとブラが見えてきている。
漏らす声はどんどん甘くなり、その手は途中から左手を由比ヶ浜に添え、右手は自らの口を塞ぐのに使っていた。
…何これ、なんで肩もみだけでこんなエロくなんの？身体を悩ましげにぶるぶると震わすのは反則だと思うんです。
静まれ、マイ八幡！洒落にならんぞ！さっき11まで押されてたんだぞ！
考えをぐるぐると回しながらも、徐々に徐々に、目の前のこの少女をどうかしてしまいたくなって来ている自分がいた。

続く。

（2）

肩を揉む手に込める力を突然強くしたり弱くしたり、揉む場所を急に変えたりして、どんどんかき乱す。

雪ノ下はその度に身体をびくんと震わせ、右手で必死に押さえ込んでいる口から艶っぽい声が漏れる。

その度に、俺の頭の中で理性の糸が焼き切れて行く感覚がした。

再び、陽乃さんの言葉を思い出す。

「敏感な雪乃ちゃんはねー、本当に弄りまくると段々抵抗しなくなって、すごく従順で可愛らしくなるんだよ？あんまり色っぽい声と表情になるもんだから、私中1で何かいけないものに目覚めちゃった！あ、耳フーとか背中ツツーとかやるともうたまんないよー！」

「…あの、鼻血止まらなくなるんでもうその辺で…」

「やだーもう比企谷くんったら！目が腐ってるのにピュアなんだからー♪」

「褒めるのとｄｉｓのをセットにするのやめてくれますか…どこぞの氷の女王を思い出すので…」

…あの人、小４の雪ノ下に何してんの？バカなの？魔王でしたね。

「…」

陽乃さんの言葉を思い出して、雪ノ下の背中をつつっとなぞってみた。

くすぐったがる人が多いいたずらだ。多少のリアクションでは動じまい。

そう思っていた。

「…～～～!!!」

予想を、超えていた。

雪ノ下は、声にならない悲鳴にも似た喘ぎ声を上げた。

生まれて初めて聞く、生身の女性の嬌声だった。

背筋を一瞬弓なりに反らせて、その直後にぐっと屈みこんでぶるぶると震えている。

背中越しに見ているだけで、ぞくぞくした。

こうなってくると、どんどんと試してみたくなる。
一度下ろした指を今度は上げるようにして、先程とは逆の軌道で雪ノ下の背中をなぞる。
面白いようなびくんびくんと跳ねて、声を漏らす。
あの雪ノ下が、こんな声を出すなんて。
嗜虐心がどんどん芽生えて来た。
ふと、どんな顔をしているのだろうと思い、首を伸ばして雪ノ下の顔を覗いた。
「…!!」
急に自分の顔を見られたことが余程恥ずかしかったのか、顔をかぁっと赤らめる雪ノ下。
右手は口に添えられたままだった。
その隠された口に、興味が湧く。
彼女と口を覆っている右手を、同じ右手で引き剥がした。
「…え…あ…?」
雪ノ下は甘えるような、戸惑う声を上げた。
そして、左手の中指と薬指を彼女の口にゆっくりねじ込んだ。
「んんっ!?…んっ…んむっ…」
一瞬だけ驚きを見せるも、すぐさま指を迎え入れ、それどころかアイスキャンディーでも舐めるかの如く舐め始めた。
予想に反して、どころではない従順な反応だった。
耳も…と思い、右手を雪ノ下の右耳に、そして口を左耳に近付ける。
そして、右耳をさわさわと触り、左耳に息を吹きかけるのを同時に行った。
その瞬間、雪ノ下は目を、見開いた。
声を上げんとする瞬間に、俺の左手を雪ノ下は両手で掴み、更に深く咥え込んだ。
そして涙を目にためながら、荒い息遣いをしたままぶるぶると震えている。
もう止まらなくなり、今度は息を吹きかけるだけでなく、左耳の中に舌をねじ込む。

雪ノ下の口にねじ込んだ指は、口内に居る舌を絡め取るように動き回らせる。
目にためていた涙をぽろぽろとこぼしながら、雪ノ下はうーっ、うーっとずっと呻き声を上げていた。
そのやりとりをどれくらいしていただろうか。気付くと、雪ノ下は疲れ果てていた。
肩で息をしているのが分かり、汗でワイシャツはほとんど透けてしまい、ブラがはっきりと見てとれた。
二人の荒い息遣いと、呑気に寝ている由比ヶ浜の寝息が部室に響く。
雪ノ下が、顔を上げて俺と目を合わせた。
上気した頬、潤んだ瞳、半開きの口。
抵抗など、する気配がまるで無かった。
俺は、左手を雪ノ下の口から引き抜くと、両手をそっと彼女の胸へと伸ばした。
「…ん、う～ん…」
「!!」
俺の手が今にも雪ノ下に触れそうになったところで、由比ヶ浜が今にも起きそうな声を上げた。
その瞬間、俺と雪ノ下は極めて素早く体勢を元に戻した。
指には、雪ノ下の唾液がまだくっきりと付いている。
「ん…あれ、私、寝ちゃってた!?ってあれ、ゆきのんが膝枕!?え、あれ、ええ!?」
事態を順々に把握して行く由比ヶ浜。全く呑気なやつめ。
「比企谷くんのマッサージの途中で寝てしまったのよ。邪魔するのも悪いから、この体勢にしておいたの」
雪ノ下は冷静に話した。
その首筋に、かぶりつきたくなったのをぐっと堪えた。
「あー、そうだったんだー！ごめんね、ありがとう！って言うかもうこんな時間じゃん！今日はもう無理だねー。せっかくだから明日もやんない？」

「…え、ええ、構わないわ」
「ああ、まあ、別にいいぞ」
「やった！じゃ、また明日もやろうねー！」
元気な由比ヶ浜と、まだ先程までの余韻が残っている俺たち二人は、いつも通り帰り支度をした。
「あ、私今日は優美子と姫菜とこの後買い物行くんだった。ごめん、先に行くね。また明日ねー！」
「ええ、また明日」
「じゃな、また明日」
由比ヶ浜が急ぎ足で、特別棟の廊下を駆けて行った。
廊下に二人がぽつんと残された。
何を言ったら良いものかと思っていると、雪ノ下が俺の袖をくいっと引っ張っている。
そっちを向くと、上目遣いでぽそりと言った。
「…出来たら、その、今度、私の家で…また、肩を揉んでもらえるかしら？その、最近はパソコンでの作業も多いから…」
そう言って目をふいと背けた。
え、何この可愛い生き物？おかしいな、俺の中でのＷＢＣ・ＷＢＡチャンピオンは小町と戸塚だったのに…今度はＩＢＦにこいつが？そんなまさか。いやでもちょっとこれは可愛過ぎる、どうしよう。
「…肩揉み、だけで…良いのか？」
おい、俺何言ってんの？今までの経験はどこに行ったの？ちょっと？このセリフはバッドエンドと言うかデッドエンドしか見えないよ？
すると、俺の袖を掴む手が、今度は俺の手を直接握って来た。
「それは…その時の雰囲気に…よりけり、かしら…」
あれ、予想に反して。
顔は俯いていて表情は分からない。
だけど、絶対真っ赤だ。俺の数学の成績が学年最下位なことより確信出来る。比較対象が辛い。
「…ああ」

阿呆みたいに少ない字数で答えてしまった。
特別棟から出るまで、そのまま手を繋いでいた。
その後は、人に見られては恥ずかしいと互いに思ったのか、自然と手を離した。
このまま別れるのが何となく惜しくて、雪ノ下の家の近くまで送る。
家の近くまで来ると、雪ノ下は少し寂しげに振り向いた。
俺と同じ気持ち、なのだろうか。
もしそうだったら、嬉しい。
「じゃあ、ここまで来れば大丈夫だから…」
「ああ」
「…」
さて帰るか…と思ったら、雪ノ下が俺の手を握って来た。
心臓が、どくんと跳ねあがる。
「…また、明日」
今までで一番優しく、可愛らしい笑顔だった。
「…ああ」
また阿呆みたいに少ない字数で答えてしまった。俺が今日の雪ノ下と交わした会話、Ｔｗｉｔｔｅｒの字数で言ったら５ツイート以内に収まるんじゃないだろうか。
そんなくだらないことを考えながら自転車をこぐ帰り道。
…いっけね、今、絶対にやけてる。
初めてだぞ、明日を楽しみにする感覚。明日を憂鬱に思う気持ちなら年中抱えてんのに。
ああ、家で小町にまたごみいちゃんって罵られる。
お終い。

ａｆｔｅｒ①

雪ノ下と由比ヶ浜の肩を揉んでから数日。
あいにく、あの後中々都合が合わず、雪ノ下の家に行けずにいた。
健全な男子高校生としては、すこぶるもどかしい。
目は腐っててても、身体は男ですもの。

放課後、いつものように部室に行こうとすると、由比ヶ浜が俺の所に歩いて来た。
…やっぱりいつ見ても、こいつの犬感は半端無い。
たまに変な妄想をしそうになって必死に振り払うけど、何だかんだ寝る前にちょっと妄想してますごめんなさい。
「ヒッキー、今日の部活なんだけどね、あたし家の用事あるから行けないんだ。ゆきのんにはもう伝えてるから。ごめんね！」
あらま。
「おお、そうか。わかった」
賑やかなのが居ないのはほんの少し寂しい気がしないでも無いが…今の状態だと、何よりまず、気が気でない。
…どうしよう。

部室の前に立つと、少し深呼吸をした。雑念よ、消え去れ！
無理！
なるべく平静を装って、ドアをからりと開ける。
雪ノ下がいつもの様に、椅子に座って静かに本を読んでいた。
相変わらず、やたらと絵になるな…。
そんな風に思いながら、彼女を一瞬だけ見つめた。
雪ノ下は俺に目を向けると、優しく微笑んだ。
や、相変わらずクールなんだけど、そんでもここ最近は…と言うより、あの日から、また明らかに柔らかくなった気がする。
正直、あの微笑み一発でなんかすごい動揺する。可愛いなちくしょう。

「おう」
ぎりで裏返らずに済んだ。あっぶね。
机に鞄を置いて、いつもの様に文庫本を取り出す。
栞を抜いて文字列を追い始めると少し落ち着いたので、視線を本に落としたまま話しかけた。
「今日、由比ヶ浜は休みなんだな。さっき聞いたわ」
その言葉を聞いた途端、雪ノ下の身体が一瞬だけぴくりと動いたのを視界の端で捉えた。
「…そうね。今日は…二人ね」
雪ノ下が発した『二人』と言うワードに、俺は一瞬身体が固まる感覚を覚えた。
「…そうだな」
少し間を置いて、何とか答えた。
…ただお互い本を読んで終わる、それで終わる気なんて全くしなかった。

本を読み始めて、２０分程経っただろうか。
正直、本の内容が頭に入って来ない。
今読んでる本がトルストイなのかギャグマンガ日和なのか分からないくらいには入って来ない。
本を持ちながら、頭の向きを変えないままに何度も雪ノ下に視線を送ってしまう。
雪ノ下はいつも通り本を読んでいる。
…くそ、何か俺だけ緊張して馬鹿みたいだ。
少しだけ外でも眺めようかと思い、席を立った。
その瞬間、雪ノ下の身体が、再びぴくりと動いた。
俺が窓の方へ向かおうと雪ノ下の方へ向かうと、雪ノ下のページをめくる手が明らかにぎこちなくなった。
ページを摘まむすらりと伸びた美しい指が、僅かに震えている様に見える。
雪ノ下の背後を通り過ぎて窓辺に来たとき、ちらりと雪ノ下を見て

みた。
一瞬、目が合った。
その後雪ノ下はすぐさま俺から目を逸らす。
彼女の下唇が、微かに震えた。
ああ、もう、我慢出来ない。
雪ノ下に触れようと、彼女の艶めかしいうなじに手を伸ばした瞬間。
「止まりなさい」
ぴしゃりと撥ねつけるような声がした。
声の主は、紛れも無く目の前に居る雪ノ下だ。
…あっれー？だってこの間…あっれー？
これが例のアレか、『飲み会で仲良くなったと思った女の子に後日素面で会って、こっちは仲良くなった時のノリで挨拶したら向こうは思いの外冷静に一線引いた感のある挨拶を返して来た』ってパターンか。
俺が手を伸ばしたままの体勢で固まって、ショックに打ちひしがれていると、
「…大変なことになるわよ」
ページをめくる手を止めたまま、雪ノ下が言った。
…うーわっ、追い打ちかよ。
浮かれてたのが馬鹿みてえだな…。
これ、雪ノ下の家に行くって流れも消滅したよね？
己の間抜けさに辟易して目を細めた。
そして、伸ばしていた手を下ろそうとした瞬間、雪ノ下が続きの言葉を発した。
「…私が」
…紛らわしいっっっ！
何で溜めた上に倒置法使ってんだよ。主語が極限まで分かりづらいわ。
言葉は！きちんと分かりやすく、相手に伝わるように！
これ、先生との約束！

紛らわしいことを言ったお返しと言うことで、試しにうなじをそっと撫でた。
「んんっ…」
くぐもった声を上げると同時に、少しだけ震えながら肩を竦める雪ノ下。
その反応を見た瞬間、あの時の興奮が蘇った。
両手を首に添えて、さわさわと首全体を撫で回す。
「んん…んあっ…ふぅっ…ん…」
口をつぐんで必死に声を抑えながら、読んでいた本に栞を挟むと、震える手で机の上に置いた。
それを確認すると、あの日すんでの所で堪えた事を今度こそしたくなった。
雪ノ下の首に、後ろから、まるで噛み付くかのように吸い付く。
「〜〜〜!!?」
敢えて彼女の口を押さえずに、声が漏れ出るのを期待した。
両手で二の腕を押さえ込み、椅子から離ることも自ら口を塞ぐことも封じて、彼女の首の左側面に口を付け、好き放題に舐め回す。
緊張していたのか、若干の汗のしょっぱい味がする。
それ以上に、彼女の髪から香る清楚な匂いが、背徳感をかき立てた。
行き場所を失った彼女の手は、始めは太腿の上に乗せられぶるぶると震えていたが、やがて肘を折り曲げて、俺の手を握って来た。
そして、俺の耳元で、
「…だめ、ほんとに…声、出ちゃう…から…」
と、今にも消え入りそうな声で囁いた。
…何でお前は、俺の嗜虐心を刺激するのが上手いんだよ…。
そんなことを考えながら、雪ノ下を押さえ付けていた手を放し、同時に唇も放した。
そして、ゆっくりと彼女の正面に回り込む。
「…?」
惚けた顔で、俺の行動を見守っている雪ノ下。
そんな彼女に、何一つ容赦の無い責めを与える。

「…〜〜〜っ…!!?」
言葉にならない悲鳴が、雪ノ下の口から漏れ出た。
俺は正面から雪ノ下に抱き付くと、左腕を背中に回して彼女の左右の二の腕を一度に押さえつけ、更に右手を彼女の左胸にやり、首筋に再び吸い付いた。
声を抑えることも出来ず、先程よりも刺激する場所を増やされる。
しかも胸は、初めて触られるはずだ。
興奮しきった状態で胸を触られる快感は、彼女にとっても相当予想外だったようで、全身をびくびくと痙攣させた。
「い…あっ…だめ…ほんとに…ほんとに…だめ…なの…ひっ…んんっ…」
悩ましい声が、柔肌を舐り回す俺の顔の右側から響いて来る。
『だめ』と言う言葉が、俺の頭の中で全て『もっと』に変換されていた。
そして、彼女を拘束していた左手を右の胸にやり、両手でぎゅっと彼女の両胸を揉んだ瞬間。
「いっ……んあっ!!」
椅子に座ったまま、雪ノ下の身体が跳ね上がった。

真冬だと言うのに、互いに汗をかいている。
蕩けた目をした雪ノ下と目が合うと、まるで当然の事のように顔を近付け合って、ゆっくりと唇を重ねた。
そのまま彼女の肩を持って椅子から立たせると、まるでお漏らしでもしたかのように温かい液が溜まっていた。
そして、肩を持ったまま机の前に立たせる。
「…?」
息を荒げながら、力の無い瞳で疑問を投げかけて来た。
「上半身を机に乗せて、尻を俺の前に突き出して」
ストレートに、雪ノ下のプライドをぶち壊すようなお願いをする。
彼女の目が、驚きで一瞬見開いた。
最初の数秒は戸惑っていたが、俺の目を見て本気なのだと悟ったのか、震える声で

「…どうしようも無い変態ね、あなた…」
と言って、僅かに微笑んだ。
そして、足を少しばかり開いて、上半身を机に突っ伏して尻を突き出すと、捲れたスカートの中から可愛らしい白の下着が現れた。
続く。

ａｆｔｅｒ②

目の前に、雪ノ下雪乃が居る。
いつもの、知的な雰囲気を漂わせながら本を読む姿ではない。
むしろ、普段のその雰囲気とはあまりにもかけ離れている。
机の前に立ち、膝を僅かに曲げて上半身を机に突っ伏して、下半身を突き出す。
当然の如く、スカートの中にあるショーツが露になる。
息は、荒い。
こちらから表情を窺うことは出来ないが、きっと頬を朱に染めているのだろう。
あの、雪ノ下が。
誰よりも気高く、美しい雪ノ下が。
「…」
雪ノ下がこの体勢になってから、数分が経つ。
俺は、最初にわざわざスカートを捲り、彼女のショーツが完全に見える状態にすると、後はひたすら見るだけに留めていた。
雪ノ下は俺から何もされないのに違和感を覚えたのか、こちらをちらちらと見て来る。
下着姿を露にされた下半身を、時折恥ずかしそうにもぞもぞと動かす。
扇情的な光景だった。
「…ひ、比企谷くん…？」
更に数十秒待つと、流石にもどかしく思ったのか、不安げな声を漏らした。
「ああ、悪い。あんまり綺麗なもんで、見惚れてた」
「！…そ、そんなこと…」
雪ノ下が微かに身を捩った。
思わぬタイミングで褒められて、反応に困る雪ノ下の見るのを楽しむ。
…俺、変態だな。

口にした言葉は、紛れも無い本音だったし、雪ノ下がこの言葉で更に興奮するなら問題無いよね、うん！
…この光景を由比ヶ浜か平塚先生に見られたら、一気に色んなもんが終わるなー。
…冷静になったら負けだ。
「じゃ、そろそろ…」
俺はそう言って、雪ノ下の尻に向かって手を伸ばした。
何の遠慮も無く、両手で鷲掴みにする。
その瞬間。
「!!?ひあっ！」
尻を更に突き出すようにして、雪ノ下の身体が跳ねた。
おいおい、掴まれただけでこの反応か。
ま、今まで見た敏感具合から考えれば、これも当たり前のことか。
…楽しみだ。
指をウェーブさせるように順に折り曲げて、雪ノ下のショーツと、若干露出している生の尻の感触を楽しむ。
その度に、雪ノ下はびくんびくんと尻を震わせ、必死に声を抑えている。
やがて、右手人差し指を彼女の秘部の上に置いた。
「！」
ひくっと身体が震えた後、ゆっくりとこちらを振り返る。
不安と、僅かながらも確かにある期待と。
彼女の瞳には、様々な感情が入り混じって見え隠れしていた。
そして、ゆっくりと指を、ショーツごと押し込んだ。
その瞬間。
「ひぐぅぅぅ…！」
全身を戦慄かせ、机の両端を手で掴み、膝を外に内にと行き場無く往復させる。
たったひと押しで、この反応。
もう、止まれない。
そこから数分間は、雪ノ下をひたすらに弄んだ。

押し込んだ後、ゆっくり引くと見せかけて途中で急にもう一度押し込む。
小刻みに浅く押し引きを繰り返す。
両手で尻を鷲掴みにして、両手の親指を秘部に揉み込む。
どの刺激の加え方でも、雪ノ下はたまらない声で啼いて、泣いて、鳴いた。

指を押し込む度に、いやらしい水音が絶えず聞こえるようになった頃、俺は彼女のショーツに指を掛けた。
「おろすぞ」
もはや意識が朦朧としている雪ノ下に、こんな言葉を掛けても意味は無いと分かっているが、どんな反応をするのかを見てみたかった。
首を左に動かし、ゆっくりこちらを向くと、今俺が言った言葉の意味がすぐに分からなかったのか、
「…？」
とでも言う様に、少しだけ首を傾げた。
…どんだけ可愛いんだお前は。ちょっとびっくりだぞ。
雪ノ下の首を傾げる仕草を映像に収めたいなーと思いつつも、そのままゆっくりとショーツをずり下ろす。
むわっと湯気が出そうな熱気が外に発散し、甘酸っぱい匂いを立ち込めさせながら、露になった彼女の秘部とショーツとの間に糸が伸びた。
視覚と嗅覚に叩き付けられる刺激に、思わず息を呑む。
下腹部が急に外気に晒されたことで漸く事態を察したのか、小さな声で『…あっ、やっ…』と、いつもよりも幾分幼い声を発した。
…え、なに、あなたこんな可愛くなっちゃうの？
あまりの可愛さに、いちいち余韻を味わう時間を必要としてしまった。
片足ずつ上げさせ、ショーツを完全に脱がすと、彼女の座っていた椅子に置いた。
敢えて濡れている椅子に置く。ショーツ自体がもうぐしょぐしょ

になっていることもあり、びしゃっと言う水音がした。
「机に乗って、俺の方を向いて」
「!?…。」
ショーツを脱がされた状態でそんな体勢を取ったらどうなるかがすぐに分かったのか、雪ノ下は驚いて一瞬躊躇する。
しかし、すぐに俺の命令に従った。
最後の抵抗なのか、スカートで秘部を必死に隠そうとしている。
俺はそれを、視線だけで禁じる。
雪ノ下は俺の視線で理解したのか、諦めたように手を離した。
そして、両手を机の上に置く。
俺は右の手の甲を下にして指を折り曲げ、僅かに中指だけ前に出るようにして、それを雪ノ下の下腹部へと近付ける。
敢えてそんな分かりやすい動き方をしたのは、雪ノ下の期待と不安と興奮を煽る為だ。
案の定、雪ノ下は一瞬顔を強張らせた後、口で浅く速い呼吸をして、俺の手を見守っている。
やがて、中指が彼女の秘部に触れ、ゆっくりと膣内に潜り込んだ。
熱くぬめった彼女の秘部は、いとも簡単に俺の中指を飲み込んだ。
「んあっ…!」
彼女が堪えながら出した声を最後まで聞かずに、すかさず膣内で中指を曲げて、彼女の膣肉をごりゅっとえぐる。
一瞬目を見開いて、両手で口を押さえようとしたのを、空いている左手で妨害した。
俺の左手に両手を押さえ込まれてしまい、声を出すのを抑えることがいよいよ出来ない状態になった瞬間、とどめにもう一度中指を折り曲げる。
すると。
「いっ…あああああっ!!!」
特別棟でなければ、間違いなく誰かに聞こえてしまうような、悲鳴の様な喘ぎ声を上げて、雪ノ下の身体が跳ねた。
あの、雪ノ下雪乃が。

俺の指一本で。
顔を蕩けさせ、全身汗だくになり、色っぽい声で鳴いている。
たまらなかった。
喘ぎ声を全く抑えずに上げてしまったことに気付いたのか、耳まで真っ赤になり俺から目を背けた。
そしてしばらく経つと、雪ノ下は突然俺の腰に足を絡め、ぐんと引き寄せて来た。
「うおっ!?」
突然の事態に、面食らってしまう。
気付くと、雪ノ下の綺麗な顔が目の前にあった。
「な、なんだよ?」
やっべ、すんごい情けない声出ちゃった。この流れでこの声はだっさい。
俺の言葉が聞こえているのかいないのか、雪ノ下の息は極めて荒い。疲労と興奮とでおかしくなっているのだろうか。
何を言い出すのかと、彼女の顔を見つめる。
「…なさい」
「え?」
何て言ったの?
「…でしなさいっ」
「何て?」
「…せ、責任取って、今から私の家に来て、最後までしなさいっ」
…うーわっ、すごいこと言った。
しかもここに来て、命令形…だと…。
正直、雪ノ下の家に今から行くなんてもう是非とも!って感じなんだけど、せっかくだからその前にもうちょいいじめてみよう。
普段の暴言に対する腹いせとかでは断じて無い。戸塚に誓う。
「それが人に物事を頼む態度か?」
「!そ、それ…は…!?」
雪ノ下が俺の言葉に戸惑っている内に、俺は左手一本で先程と同様に雪ノ下の両腕を両脇に固定して身動きが取れないようにして、顔は

唇が重なるぎりぎり手前で止め、右手で再び愛撫を開始した。
しかも右手での愛撫は、今度は中指と薬指の２本。
先程の責めで、指をもう一本入れても何の問題も無いことが分かっていた。
「あっ!?ひぁっ、んあっ、うっく…ひんっ！」
手で口を押さえられず、キスで口を塞ぐことも出来ず、目の前の俺に自分の淫らな顔を晒してしまう。
我ながら、ひどい責めだ。
雪ノ下は目に涙をためながら、いやいやと首を振りながら必死で助けを求める。
「ほら、ちゃんとお願いしてくれたら楽にするから」
意地悪く微笑んで言う。
俺が意地悪く微笑むってもう、大体の悪魔より邪悪な顔になってる気がすんな…。
今度小町の前でこの表情を作ってみて、感想を聞いてみよう。
…やっぱやめよう。
「…うっ、ひぐっ、お、お願い、ですっ、んあっ、今から、一緒に私の家に来てっ、ひあっ、最後まで、してください、いっぱい、いっぱい、してください…んあぅぅぅ…」
…１００点満点で、１２００点あげたいくらいの解答を叩き出しやがった。
彼女の言葉に、身体と心がぶるっと震えた。
「よーしよし、良く言えまし…たっ」
「んむぅっ!?」
俺は雪ノ下の唇を奪うと、膣内に入れた中指と薬指の動きを一気に速めた。
抜き差しと折り曲げを高速で行われ、雪ノ下は俺に足を絡めたままで、ぽろぽろと涙を零しながら、小刻みに何度も何度も震えた。
…興奮しすぎて、下の方がめっちゃいてえ…。

続く。

ａｆｔｅｒ③

１．

部室の後片付けを二人で済ませ、雪ノ下が鍵を閉めるのを見届ける。

片付けをしている時、『すげえ濡れてんなこの辺…』となるべくさり気なくぶっこんでみたら、初めて会った日に威嚇しようとして返り討ちに遭ったときくらい強く睨まれた。

超怖かった…。

多分、寿命が３０分くらい縮んだ…。

下校時刻までもうあまり時間が無かったこともあり、作業は黙々と進められた。

二人の性格のせいと言うのもあるが、それ以上に多分。

今また行為を始めたら、止まれなくなる。

そう言う確信が、言葉を交わさずとも二人の中にあったのだと思う。

職員室に鍵を返し終え、二人で昇降口へ向かう。

昇降口近くでは、部活を終えた生徒が今まさに帰ろうとして、思い思いに賑やかに騒いでいる。

いつも通りの光景だ。

こんな日常の時間の中で、ほんの少し距離が空いているだけの、あの空間で。

俺と雪ノ下は、不健全極まりない行為をしていた。

もしあの場に平塚先生が来ていたらどうなっていたのだろうか等とも考えてみたりはしたが、実際来なかったのだから結果オーライなのだろう。

後悔はしていない。

それよりも、今日これからの時間に対する期待感が半端じゃない。

心躍るどころの騒ぎじゃない。

すぐ隣に居る雪ノ下の反応を考慮したら絶対出来ないが、ほっといたら盛大に頬が緩みそうだ。

誓って言える。
…気持ち悪がられると。
「あ、チャリ取ってくるから」
そう言って、雪ノ下に待ってもらって駐輪場へ向かう。
…俺のコートの裾を掴みながら、少し俯いて付いて来るんですけど。なんでなんで？
「…すぐ戻るから、待っててくれて良いんだぞ」
「…その…に、逃げないように…よ」
もうちょっと理由考えろっての。俺はどこのサブレだ。
ったく…ああもう恥ずかしい！
「逃げる訳ねえだろ。むしろ超楽しみだっつーの」
「！…そ、そう。…そう…」
繰り返すなよ。そんな大事なことじゃねえだろ。だから恥ずかしいんだっつの。
結局、とことこと俺の後ろを付いて来た。
時間無制限でわしゃわしゃと撫でたい。
家で小町と並べて撫で回したい。
鍵を開け、チャリを押しながら俺は雪ノ下と歩いて帰り始めた。
…雪ノ下の家に。

2.

日もとうに暮れて、すっかり暗くなった人通りの少ない道を歩く。
雪ノ下が一瞬街灯に照らされる度に、怪しまれない程度に、その横顔を見惚れるように見つめる。
…絶対怪しまれるな。
「小町さんには連絡したの？」
しばらく喋らなかった雪ノ下が、穏やかな声で聞いて来た。
「ああ、さっきお前が職員室で鍵を返してる間にな。返事も来たよ」
「何て書いてあったの？」
「…これ」
読むのは気が引けるから、直接見せた。…直接見せるのも気が引け

るんだけど。
『了っっっ解！
晩御飯要らないだけ？違うよね？朝まで居ないよね？
そのまま貰われちゃってくださーい☆☆☆』
…なんだよこのテンション…。
「…た、楽しそうで何よりだわ…」
返し方下手過ぎるだろお前。顔めっちゃ赤いし。
…俺も赤いと思うけど。
短いやりとりを終え、二人の間に再び沈黙が訪れる。
別に、いつも部室でだって、他の場所でだって、仲良くぺらぺらと話す様な関係ではない。
いつもの沈黙であれば、心地良くさえ感じているのだ。
しかし、今は少し違う。
気まずさ、では無い。もっと温かいものだ。
…緊張、だろうか。…そうなんだろう。
この後の事を考えると、正直部室で勢いに任せてもう少し先まで行って良かったのでは無いかと思ってしまう。
帰り道と言う1クッションを経て、気持ちがすっかり落ち着いてしまうのだって有り得る。
それが、少し怖い。
以前、テレビで芸人が『合コンの1次会ですごい盛り上がっても、場所を変えて2次会を始めると女性陣のテンションが完全に0に戻ってて、本当にやりづらい』と言った事を話していた。
雪ノ下がそんじょそこらの女性と同じ感覚を持ち合わせているとは到底思えないが、いざこう言う状況になると、家の前まで来て『やっぱり今夜は気が進まないわ。送ってくれてありがとう。おやすみなさい』とか言われそうで怖い。
家に帰った時の小町の蔑みの目を想像するともっと怖い。
考えただけで涙が出るよ！
そんな悲しい妄想をして一人途方に暮れていると、雪ノ下が由比ヶ浜に貰った猫の手ミトンの片方を外して、素手になった左手を俺の方

にすっと近付けた。
なんだろう、静電気を食らわせたいのかな？
こんな状況下でも俺にダメージを負わせようなんて、雪ノ下さんマジぱないわー。
っべーわー。マジっべーわー。
あれ？何か少しむっとしてる。
…やめてよ可愛いんだから。
こう言う時、君妙にねこねこしいよね。マジねこねこしい。
「…手」
言葉少なに言って、近付けていた左手をぷらぷらと動かす。
あ、そう言うことか。
いや、分かってたよ？そりゃもちろん。こんな状況ですからね！
俺は右手の手袋を外して、雪ノ下とそっと手を重ねた。
人と人とで温もりを分かち合う。
それが温かいものだろうなんて言うことは十分分かっていた。相手は小町だけど。
だが、雪ノ下と繋いだ手の温もりは、小町のそれとはまた別の心地良さだった。
正直、今なら恥ずかしさによる熱も相俟って、コートすら要らないと思える。
難ならTシャツでも行ける。
ごめん、うそ。死んじゃう。
とにかく、身体の芯からぽかぽかとしていた。
互いに目線を合わせる訳でも無く、前を向いて歩き続ける。
それだけで、十分だった。
ちらりと見た時の雪ノ下の顔はいつも通りのすまし顔だったが、なんだかとても幸せそうに見えた。

3.

雪ノ下の家まで、あと半分くらいと言う所まで来た頃だろうか。
繋いでいた手が、少しだけもぞもぞと動いた事に気付く。

俺は何もしていないのだから、当然雪ノ下が動いたのだろう。
どうしたのだろうか？
ちらりと雪ノ下の方を向いたが、彼女は何事も無かったかのように前を向いたまま歩き続けている。
何だったのだろうかとは思いつつも、足を止めること無く歩き続けた。
もう数十歩歩いた所で、また手が動いた。
今度ははっきりと、こちらにより絡める様にその細い指を動かして来る。
動き自体は極めて些細なものなのだが、その感触がたまらなくむずがゆい。
と言うか、ごめん。勃った。これだけで。
せっかくだからと思い、その動きに応じて俺も彼女の指に絡み合う様に指を滑らせる。
すると、向こうも更に艶めかしく指を絡ませる。
彼女の口の中に指を入れた時のいやらしい舌の感触が、ふと蘇った。
しばらく指を絡ませ合っていると、雪ノ下が足を止めた。
どうしたのかと思い彼女を見ると、唇が僅かに震えている。
やがて、ゆっくりと俺を見つめた。
「…ごめんなさい。こんな事をしたら、あなたが我慢するのが辛くなるだけなのは分かっているのに…。
家まであと少しだと分かっているのに、何だか身体と心がばらばらになってしまったような感覚になって、気付いたら指を絡ませてた…」
雪ノ下の言葉に、心がざわつく。
心の臓が焼けたように熱を持つ。
「少し、急ぎましょう？家に着いたら、いくらで―」
彼女の言葉を最後まで聞くことすら我慢出来ず、俺は右手を離し両手で彼女の顔を押さえ、強引に唇を奪った。
雪ノ下の目が驚きで見開いている内に、畳み掛けるように舌をねじ

込む。
「んむぅっ!?んっ…んちゅる、んふ…んあ、んんん…っ」
雪ノ下の悩まし気な声が、路地に響く。
先日の十数分と、ここ数時間で、俺の中での雪ノ下のイメージが随分と変わった。
いや、正確に言えば、『イメージが広がった』と言うのが正しいのだろう。
気を許すと、こんなにも甘えて来るのか…。
正直、たまらなかった。
やがて俺の首に両腕を回して、より強く求めて来る。
いつ人が通るのかも分からない場所だと言う事も忘れ、互いの口内を貪った。

4.

長く濃厚な口付けを終え、ようやく雪ノ下の住むマンションに着いた。
手を繋いだままエレベーターに乗り、彼女の住む部屋がある階の数字のボタンを押す。
「…」
先程の余韻もあって、二人はまた更に沈黙していた。
っつうか、思い出すとさっきの恥ずかしすぎんだろ…。
いやまあ、部室での行為も十分に洒落にならんのだけど。
…やばい、思い出したら熱くなって来た。
ふと、右前に居る雪ノ下の後ろ姿に目が行く。
白いうなじと、視線を下に滑らせた先にある、形の良いお尻。
ごくり、と喉を鳴らして、思わずそのお尻に右手を伸ばした。
「ひあっ!?あっ…んぁ…」
ショーツ越しに手が触れた瞬間、飛び上がる様に驚いた。
しかしその後、すぐに触られるがままになる。
「…あ…ん…も、もうすぐだから…待って?待って…ったら…んん…っ」

赤らんだ顔を振り向かせながらも、言葉とは裏腹にお尻を突き出して来る。
エレベーターはもう１０秒もすれば扉が開く。時間は無い。
だが、その時間さえ我慢が出来なくなっている。
俺はすかさず左手も伸ばし、両手で鷲掴みにした。
「んああっ!?」
雪ノ下はがくがくと震えると、エレベーターのボタンのすぐ下に手を置き、こちらに腰を突き出して、まるで立ったまましているかの様な体勢を取った。
そのまま容赦無くお尻を揉みしだき、とどめに両手親指を秘部に当て、ぎゅむぎゅむっと何度も押し込んだ。
「だ、だめ、だめ、このままじゃ…ひぐぅっ!?あっ、イっ、イく、イく、イっ…」
エレベーターのドアが開くと同時に、雪ノ下はか細い声で鳴いて、全身を痙攣させて膝から崩れ落ちた。
誰も居なかったのは幸いだった。
俺はふらつく雪ノ下を右手で抱きかかえ、ついでにその手で彼女の胸を触りながら部屋まで連れて行った。
途中で『…へ、変態ぃぃ…』と呟いて、俺の頬をつねって来たのだが…あまりの力の弱さに少し笑ってしまった。
それでまた怒らせてしまったのだが、胸を揉む力を少し強めた途端に甘い声を上げて黙ってしまった。
…こんな敏感な妹を、陽乃さんがおもちゃにしない訳が無いよなあ…。
今の陽乃さんが雪ノ下をイジメている光景を想像してしまい、ちょっとぞくっとした。
そして、雪ノ下の部屋のドアを開け中に入ると、彼女は震える手で内鍵を閉めた。
続く。

after④

1.

雪ノ下が内鍵を閉め靴を脱いだ瞬間に、襲い掛かるように彼女の首筋に吸い付いた。

「んあっ！あっ、だ、だめ、そんな、いきなり、だめ、だっ……たら……し、寝室に、行きましょ？ね？……んあ……」

右手は彼女の首に回し、左手は尻をショーツ越しに掴む。吸い付きを強め、左手にぎゅっと力を込めると、耳元で甘美な声が漏れた。

雪ノ下は膝をがくがくと震わせながらも、何とか歩を進めようとする。しかし、俺が絡まる様に抱きしめている以上、一歩も動けない。

「お、お願いだから、このままじゃ、このままじゃ、私……」

震える声で、必死に懇願して来る。

同じ愛撫の仕方でも、先程から徐々に反応が大きくなっている事に気付く。思わずにやけそうになっちまう。危ない危ない、今の俺絶対気持ち悪いぞ。あくまで無表情で嬲らねば！……極悪だな、俺。

限界が近いのかと思い、右手も使って両手で尻を掴む。ショーツ越しに彼女の秘部も巻き込むように、指を目一杯広げて揉む。

「あっ、やっ、そこ……だめ、またイっ……」

俺の胸元に顔を埋めて、身体全体を震わせる。

次の瞬間、足元のフローリングにぱたぱたと水が落ちる音がした。

雪ノ下が派手に絶頂に達した後も、俺はまだまだ彼女をイジめ足りずに尻を揉み続ける。

正直、ここまで敏感で達しやすいとなると、責めるのが楽しくしょうがない。今まで知る機会が無かったけど、俺は意外にもＳの様だ。

……意外でもないか。

「……うう……変態、変態、変態ぃ……ひんっ、ふぐぅっ……」

俺の胸元に顔を埋めたまま、可愛らしい喘ぎ声を上げてぽすぽすと叩いて来る。

……楽し過ぎてやばい。どうしよう。何この可愛い子。なんなの！

「ここも、こんなにして……」
「!?うおっ!?」
情けない声を上げて腰を引いてしまった。死ぬほど恥ずかしい。
胸を叩いていたかと思いきや、突然俺の股間の膨らみに触れて来た。
俺の反応を見て、反撃の好機と捉えたのだろうか。顔をがばっと上げ、いつも見せる得意気な顔になる。
「あら、ここ弱いのかしら?へえ……」
と言って、その細い指で俺のモノをズボン越しになぞって来る。ぞぞぞっと背中を駆け巡る快感に頭が痺れる感覚に襲われながら、同時に思ったことがある。
……ここまでやられっぱなしになっておいて、反撃とは……すげえ腹立つ……。
と、言うことで、反撃に対する徹底的な迎撃を行いたいと思います。
「くっ……雪ノ下」
「?何かしら……?」
まるで良いおもちゃを見付けたかのように楽しそうに俺のモノを弄ぶ彼女に、全力で反撃する。見てろよこの猫ペディアさん……。
「お前さ、すげえ可愛いよ」
「……へ?」
予想もしていない言葉だったのだろう。一瞬反応が遅れて、言葉の意味が分かった途端に指の動きを止め、顔があっと言う間に真っ赤になった。
ここで更なる反撃を加える。
「よっ……」
「ひぁっ!?やっ、ちょっと、何を……!」
彼女の尻に回していた両手で、ショーツを後ろから掴み、食い込ませるように上へずり上げる。あっと言う間にTバックの様な状態にすると、今度は尻を直接揉み始めた。どうだ!
案の定、雪ノ下は今まで以上に身体をぶるぶると震わせ、目が虚ろになって来た。

「いっ!?そんな、直接、なん、て……んんんん……私だっ、て……」
「あっ、こらっ、うおっ……!?」
また情けない声を上げてしまった。
雪ノ下は更に反撃として俺のズボンのベルトを外し、チャックを下ろして来た。そして両手をパンツの中に入れ、勃起した俺のモノの竿と玉を同時に握って来た。
互いに、これでもかと言わんばかりに責め合っている。
興奮で、頭がどうにかなりそうだった。
「こんな……んんっ、熱くして、節操が、ひぅっ、無いわね……んあっ、ふふっ……」
責められて感じるか責めて微笑むかどっちかにしろよ……。何この無理して強がってる感じ?エロすぎるでしょ。やばい、めっちゃ先走ってる。
このままでは彼女の手の中にあっと言う間にぶちまけてしまう。何か負けたみたいで悔しい。
先に屈服させるため、右手を彼女の尻から放すと、ショーツが食い込んだ秘部の上に指を置いた。
そして、細く圧縮され硬くなったショーツごと、中指と薬指を彼女の膣に押し込む。
「いっ!?だ、だめ、んあぁぁぁぁぁぁ……」
長くか細い嬌声を上げて、雪ノ下は足元に崩れ落ちた。
……俺のパンツを掴んで、ずり下ろしながら。
「……はっ、はっ、はっ……あ……すごい……」
女の子座りでへたり込んだ雪ノ下が、目の前に曝け出された俺のモノに目を奪われている。
いや、これそんな凄いものなの?あんま分かんないんだけど。
「……なあに?こんな熱くて、硬くて、太くて、長くて、逞しいものを……私の中にねじ込もうとしてるの……?信じられない。どうしようもない変態だわ、あなた……こんなものでかき回されたら、私、頭がどうにかなってしまうわ……」
うっとりとした表情で竿と亀頭を触りながら、どエロい事を言って

来た。
……わー、エロすぎて何て例えたら良いかわかんないやー。淫乱過ぎるでしょ。
「すごい匂い……頭、くらくら、する……」
普段の彼女からは想像出来ないくらい淫靡な微笑みを浮かべる。
……言葉責めに入るのかな、これ？M側からの言葉責め？何これ。とにかくエロい。
俺のモノも、今まで見た事が間違いなく無いくらいいきり立っている。
ここで、自分たちの状況をふと確認する。
まだ、リビングにも行っていない。玄関で靴を脱いだだけ。
どんだけ待ちきれなかったんだよ俺、と自分に軽く引きながら、雪ノ下の頭をそっと押さえた。
「雪ノ下……咥えて、じっくり舐め回すんだ。出来るだけいやらしく」
「！……比企谷くん、あなた、今日でわたしのプライドを全部打ち壊すつもり……？」
俺の命令に一瞬驚いて目を見開いた後、口元を引くつかせながら、雪ノ下はひどく艶っぽく笑った。

2.

「んっ、んちゅっ、んんっ、れろっ、んちゅるっ、はぅっ、んむ、んっ、あむっ……」
俺の命令を受け入れて、雪ノ下が初めての口淫を行っている。
その様は、思わず息を呑んで震える程淫らで美しい。
膝立ちになり、上気しきった顔で嬉しそうに裏筋を舐め、玉を揉みほぐし、カリの隅々にまで吸い付き、尿道を尖らせた舌先で繰り返しつつき、まるで食べるかの様に咥え込んでぐむぐむと音を立てて全体を舐り回す。
あまりの気持ち良さに、腰が抜けてしまいそうだった。
「あっ、うあっ……なんでこんなに上手いんだよ？」
「……ぷはっ。……比企谷くんが気持ち良さそうにしている所を探っ

ていたら、こう言う風になっていただけよ。……別に、何か見て勉強していた訳では無いわ」
え、何その頭の良さと気遣いとエロセンス。
心がざわついた。
この子を、もっとめちゃくちゃにしたい。
「すげえな……じゃ、ちょっとこう言うのも……」
両手で雪ノ下の頭を掴む。
「え……？」
何が起きたのかと呆然としている雪ノ下の唇に亀頭を宛がうと、喉奥まで一気に突き入れた。
「んむっ!?んごっ、あがっ、うぐっ、んんっ、んんっ……！」
何度も何度も、彼女の顔に力任せに腰を打ち付ける。
彼女の手はいつの間にかだらんと下げられ、女の子座りに戻り、ただひたすら俺のモノを受け入れていた。
苦しさで目に涙を浮かべつつも、虚ろな目に僅かな喜びを浮かべ、ずっと俺を見つめ続けている。
こんなに無理やりされているのに、舌だけは懸命に動き、打ち付ける度に亀頭を器用に舐め回す。
舌による愛撫と、喉奥の感触。そして何より、あの雪ノ下を好き勝手に嬲っていると言うこの状況。
あまりの気持ち良さと興奮で、あっと言う間に限界がやって来た。
「雪ノ下、出すぞ、出すぞ……！」
「んむっ、あっ、んあっ、んんんん……」
尿道を伝って精液が噴き出す瞬間、彼女は俺の腰に手を回し、俺を自ら抱き寄せ、喉の一番奥に押し込んだ。
そして、喉に直接叩き込むかの様に、粘度の高い精液がマグマの如く噴き出て、彼女の口内を満たして行く。
「んぶっ、ごぶっ、んぐっ、うっ、んんんっ……」
大量の苦くしょっぱい液体を流し込まれても、彼女はむせたりせずに、懸命に全て飲み込んだ。
今までの人生の中でも、間違いなく一番の量の射精。これだけの量

を流し込まれたら、むせて吐き出しても何らおかしくはない。
にも関わらず、雪ノ下は全て受け入れた。
彼女が口に溜まっていた残り僅かな液体をごくん、と飲み込んだ瞬間、その光景に俺もごくりと息を呑んだ。
「……んんっ、はっ、はっ、はっ……たくさん、出たわね……」
そう言って彼女は、いつもの様な凛とした顔立ちでにこりと微笑む。
そんな雪ノ下に、片膝を床に付けて話しかけた。
「……あれだけ乱暴にして、苦しかっただろ？もっと抵抗しても良かったのに。それに、あんなに無理して飲み込まなくたって……」
伝えた言葉は、本音だった。
すると、雪ノ下は一瞬ぽかーんとした表情になった後、呆れたように腕を組んだ。え、なんでなんで？
「……はあ、全くもう……」
こめかみに手を当ててため息混じりに呟いたかと思うと、俺の背中に腕を回して、くんと引き寄せて来た。
鼻先が触れ合う程の距離で、雪ノ下の瞳が優しさを帯びる。
「いつも他人の事ばかり考えてしまうあなたが、私に自分勝手な欲望をぶつけてくれた。そして、あれだけたくさんの……その、精液……を出してくれた。
……好きな人がそれだけ興奮して、理性を飛ばしてくれてるなんて思ったら……嬉しいに決まってるじゃない。したくてやったんだから、私のことを褒める事はあっても、そんなに申し訳無さそうに言うことはないんじゃないかしら？」
少し首を傾げて、優しく微笑む。
「……！」
一気に顔が熱くなった。
心のわだかまりをひょいと拾い上げて、その笑顔で吹き飛ばしてくれる。
「……敵わねえなあ」
頭をぽりぽりと掻いて、ふっと笑った。

「ふふ。……そろそろ、移動しましょ？」
「ああ」
雪ノ下の肩を抱いて立ち上がると、俺たちは寝室へ向かった。
続く。

ａｆｔｅｒ⑤

１．

寝室に着き、ベッドの横で立ったまま雪ノ下と見つめ合う。俺の手は彼女の肩に、彼女の手は俺の腰に。一応俺はズボンを履き直した。この場面でもろ出しってちょっと頭腐ってる様にしか見えないしね。腐ってるのは目だけで十分だ。

遂に、雪ノ下と……。脳内がわくわくと興奮との坩堝と化している。

「……」

「……」

……この後、どうしよう？

経験の薄さって言うか０具合がここに来て浮彫になってしまった。

そうだ、さっきまでの流れを思い出せ！

……全部勢いで始めてた。

くそ、ここで合コンの話をまた思い出してしまった。場所を変えると気持ちが落ち着いてしまうのは男にも当てはまるんだね！勉強になりました。

取り敢えず、雪ノ下を弄ってみる。彼女の首をさわさわと撫でてみます。

「……」

「ひあっ……？あっ、んんっ……」

……よし。もう勃った。雪ノ下の悩ましげな表情と声一発で何かが目覚めたぜ。

「よし、お互いここで脱ぐか。いや、やっぱり脱がせ合うか？」

ものすごく快活な笑顔を繕って言ってみた。多分今までで一番のスマイル。どうだ！

「……気持ち悪い……」

泣いた。

ちょっと腹が立ったので、自分の服はぱぱっと脱いで、雪ノ下の服は頑張ってひん剥いた。抵抗は多少されたけど、その都度首筋に吸い

付いて抵抗をさせないように努めましたとも、ええ。毎回可愛い声出して膝をがくがく震えさすもんだから、もうたまんない。
……明日、キスマークどんだけ出来てんだろ。は、チョーカーを買って着けさせたら何かご主人様っぽい！……俺何処に向かってんの？助けて戸塚……！
一糸纏わぬ姿になった雪ノ下を見て、少しの間、呼吸を忘れてしまった。
白磁の如き肌と、ほんのり朱に染まった頬との美しいコントラスト。
長く艶やかな黒髪。
極めて整った顔立ちと、色気を帯びた表情。
……え、本当に良いの？俺だよ？
俺がそんな感想を抱いている中、雪ノ下はどうしているのかと見てみると、裸になった事が恥ずかしいのか、俺から目を逸らし下を向くも、今度は俺のモノを直視してしまいまた視線を上に戻し、再び俺と目が合って……と言うループにはまっていた。
……俺のさっき見たじゃん。あと君の目って俺の目とモノ以外も見る権利あると思うよ？どんだけテンパってんだよ。借りて来た猫もこんな気持ちなんだろうか。分かんないけど。
しかし、いざ改まってこう言う状況になると慌てふためく雪ノ下さん、やたらと可愛いです。
落ち着かせようと思い、彼女の頬に手を添えて軽く唇を重ねる。
「ん……っ」
彼女の瞳がとろんとして、徐々に緊張の色が抜け穏やかになって行く。
唇を離す頃には、俺の首の後ろに腕を回す余裕が出来ていた。
「落ち着いたか？」
「……何のことかしら？」
認めないんかーい。いっそ清々しいですねあなたったら！ま、良いか。
「……しっかし、改めてお前の身体見て惚れ惚れとするわ。本当に俺

が今からこんな綺麗なお前をめちゃくちゃにするのかと思うと……ん？」
本音トークをしてみたら、あっと言う間に雪ノ下さんが茹でダコになったよ。あ、これ……楽しくなる予感。ちょっとおちょくってみよう。
「……そ、そう。まあ私の可愛さに関してはもはや世の真理と言っても過言ではないか」
「可愛いよ」
「あ、え、そ、そんなに繰り返した所で私が動揺するとでも思っているのかしら？大体あなたはいつもそう言う安直な」
「すげえ可愛いよ」
「あ、う、や、ちょ、ちょっと、あなた、そろそろこの辺りで」
「本当に可愛いよ」
「あ、う、う……」
湯気が出た。俺の勝ち。……我ながらひどい。
雪ノ下は俺の胸に顔をぽすりと埋めて、顔を真っ赤にしたままぽしょぽしょと『ずるいわよ……』などと呟いている。くっそ可愛い。
もいっちょとどめと思って耳元でもう一回『可愛いよ、雪乃』と名前で呼んでみたら、俺の背中に腕を回して顔を完全に胸に押し付けて来た。んで『うー……』って子供っぽい声で唸ってる。そんで顔を恥ずかしそうにすりすりとして来る。死ぬ程可愛い。どうしようこの子。
……ドSの夜明けやでえ……。
「ほ、ほら、ベッドに上がりましょう？」
頭を優しく撫でていると、茹でノ下さんが足早にベッドに上がった。
……おちょくり甲斐があるなあ……。

2.

雪ノ下はベッドに腰を下ろすと、胸を腕で隠しながら、足を左に流す様にして座った。頬を赤らめ、視線を斜め下に下ろして、唇を

きゅっと結んでいる。
え、女神？
携帯を手に持ってれば今すぐ写真撮ったのに……そして携帯ごとデータを壊されてたのに……。俺のこう言う悲しい想像って本当に悲しいから手に負えない。
「比企谷くん……お、おいでなさい？ここに」
視線をわずかに上げて、雪ノ下は自分のすぐ横を手でぽんぽんと叩いた。何かもうテンション的にはルパンばりに一瞬でパンツ一丁になって『ふ～じこちゃ～ん！』って言いながら飛び込みたい。でもごみを見る目で睨まれたら多分死んじゃうからやんない。
「おう」
短く答えて、言われた場所に腰を下ろした。
「……」
「……」
はい！またまたやって来ました、沈☆黙！
なんなの、俺ら下手過ぎでしょ？こう言うコミュニケーション。まああんまり喋り過ぎても興が削がれるからアレだけど。
ここは、まずは……
「雪ノ下、足、開いてくれるか？」
「！……っ」
雪ノ下にお願いをすると、顔を逸らし、顔を真っ赤にしながら、手をベッドに付いてゆっくりと俺の前に足を広げた。
薄暗い間接照明の明かりに雪ノ下の秘部が照らされ、うっすらとしたピンク色が見える。
ごくり、とまた息を呑んだ。
「触るぞ……」
雪ノ下の秘部に目を奪われたまま、吸い込まれる様に指を近付ける。
先程から多少の時間を置いたため、ある程度乾いているのかと思いきや、指が触れると、驚く程湿っていた。
中指が抵抗も無くぬぷっと入り込み、雪ノ下の膣肉を押し広げた。

「ひぃん……っ」
か細い声で鳴く雪ノ下。俺のモノが興奮でびくんと反り返る。
俺は、今日だけで既に数えきれない程彼女を絶頂に導いている。それを考えれば、あまり慎重にならずとも、彼女に痛みを感じさせないようにしながら気持ち良くする加減は分かる。って言うか、雪ノ下が敏感過ぎるんだけどね。
そんな訳で、もはやじっくり責める程我慢をする余裕も無いので、即座に中指を彼女の膣内で高速で曲げ伸ばしし始めた。
「ひあっ!?そんな、いきなり、あくぅっ……!あっ、あっ、だめっ、すぐ、イク、イっ、イっ……～～～っ！
あっ!?ちょ、ちょっと、イってる、イってるから、止めて、止めて?や、お願い、お願いだから、あ、や、また、くる、くる、くる、イっ～～～！
……んあっ!?や、ウソでしょ!?ほ、本当に、いい加減になさ……イっ～～～！
……やっ……待って……本当に、もう、無理……無理だか、ら……もう……～～～っ。
……もう、やめ……～～～っ。……あう、あ、ぁ、ぁ、～～～っ。……～～～っ。……～～～っ。」
雪ノ下が快感に悶える姿があまりにも美しく、可愛くて、艶っぽかったので、勢いで合計8回程イカせてしまった。
途中からはまともに喋れなくなっていて、イカせるペースは彼女がちゃんとまともに呼吸を出来るかどうかと言う所のみ考慮していた。
最後の2回は、俺の首に腕を回し、焦点の合わない瞳で俺を見つめ、舌をだらしなくだらんと垂らしながら、声も無く達した。

3.

「……あ……う……」
俺に抱き付くのが精一杯と言う状況になっている雪ノ下。声ももはや言葉になっていない。
彼女の足は気が付けば、あぐらをかいた俺の足の上に乗せられ、俺

の腰の後ろに回されていた。所謂『対面座位』の体勢だった。
彼女の秘部の目の前には、痛い程に勃起した俺のモノがある。
もう、我慢の限界だった。
「雪ノ下……良いな、挿れるぞ？」
竿を持ち、亀頭をぴとぴとと秘部の入り口に当てる。
入口がぐにっと押し広げられる度、雪ノ下はぴくっと反応し、『あ、うぁ……』と小さな小さな声で鳴いている。
3回目に押し当てた時、雪ノ下はほんの少しだけ口角を上げにこやかに微笑むと、ゆっくりと頷いた。
「あ……んあぁっ……あっ、かはっ……」
ぐむっ、と言う感触と共に、俺のモノが見る見る雪ノ下の膣に飲み込まれて行く。
相当濡れていたのだろう。初めてとは思えない程すんなり入り、奥へ進めば進むほど、きゅっきゅっと心地良く締め付けて来る。
「雪ノ下、大丈夫か、痛くないか？」
一番奥まで入れて止めると、彼女の頬に手を当て、瞳の色を見ながら問いかけた。
「あ……だい、じょうぶ……いえ、それどころか……気持ち、良い……んんっ……」
何とか言葉を紡いで、雪ノ下はもっと動いて欲しいとでも言う様に、悩まし気に腰を動かす。
「……良いんだな？」
「……きて？」
雪ノ下が言った2文字を聞いた瞬間、俺は腰を大きく引いて、そこから全力で打ち付けた。
そこからの数分間は、雪ノ下の獣のような鳴き声が響き続けていた。
「いあっ！んぐっ、ひぐぅっ、くぁっ！ひんっ、えぁっ、えぐっ、うあぁっ……」
幾度となく絶頂に達し、俺のモノを膣肉で余す事無く包み込んで締め付けて来る。

もうじきイってしまいそうだと判断すると、俺は雪ノ下に命令をした。
「雪ノ下、四つん這いになってくれ」
「えぁっ……？」
一瞬、何を言われたか分からないかの様な表情になったものの、言われた事を理解すると、彼女は従順に腰を上げ、俺に背を向けると四つん這いになった。
そして、彼女の入り口に亀頭を宛がうと、尻に置いていた手を彼女の手首に持って行き、両手首を掴んで一気にこちらに引っ張り上げる。それと同時に、一気に彼女を貫いた。
「んぁぁぁぁっっっ!!?」
悲鳴にも似た大きな喘ぎ声を上げると、雪ノ下は身体をぶるぶると震わせてがくんと項垂れた。彼女の手首をぱっと放すと、まるで糸の切れた操り人形の様にベッドにへたりこみ、完全なうつ伏せ状態になった。顔を少しだけ横に向け、手は完全に伸びた状態で、まるで気を付けをしているかのような位置に置かれ、手の平は上を向いていた。
彼女が倒れ込む時に俺は挿れたまま付いて行ってしまったので、彼女がこの状態になると、俺は足を体育座りの様にして彼女の足の付け根を跨ぎ、彼女の腰に手を当てた。上半身が多少後傾になるが、これならばじっくりと挿入を楽しむことが出来る。
倒れ込んでから雪ノ下はぴくりともしないが、膣肉は一定のリズムで俺のモノを締め付けて来る。それを楽しみつつ、彼女の秘部へ亀頭から入って行くのをじっくりと観察しながら、俺は再びピストンを始めた。
徐々にピストンをペースを速めて行くと、それに合わせて膣肉の締め付けも強くなって来た。
彼女の言葉は聞こえないが、徐々に喘ぎ声が大きくなって来た。
そろそろイきそう……と思った時、不意に彼女から言葉が発せられた。
「手……」

と短く告げられ、俺の腿のすぐ下に力無く置かれていた手の指が僅かにくいくいっと誘うように動いているのに気付いた。彼女の意図を察し、その手を包み込むように握った。
尻の代わりに手を引っ張る事でピストンの助けにすると、ラストスパートで一気に腰の動きを速めた。
静かなやり取りだが、互いに出来る限り相手の肉体を貪っていた。
「うぁっ、雪ノ下、イク、出る、出る、出るぞ……」
込み上げる液体の感覚に一瞬身体を屈めた瞬間、彼女が俺の手を握る力を一瞬強めるのを感じた。
「……うぁっ……!」
「〜〜〜……っ。うぁっ、あつ、熱い……うぁっ、あぁぁぁ……」
雪ノ下は俺の精液を子宮で受け止めながら、力無い声で長い長い喘ぎ声を上げた。

4.

「全く……あの後抜かずにもう2回もするなんて、あなたどれだけ精力が強いのよ?ぞっとするわ」
「いや、だって抜こうとするとお前が中をきゅうきゅう締め付けて来るから、抜きづらい上に気持ち良くてまた勃っちまったんだもん、しょうがねえよ」
「な!?そ、そんな事……」
行為を一通り終えると、俺たちは一緒の枕で寝転がり、反省会の様なものを開いていた。……ただの猥談だけど。
「と、とにかく、こんなに性欲が強いあなたを野放しにしておけないわ。こ、これからはきちんと処理して、学校の女性に手を出さないようにするのよ?」
「今まで手を出してた体で言うんじゃねえよ……。俺がその辺きちんと分別があるのは知ってんだろ?」
「あら、さっきのあなたのいやらしい責め方を見る限り……その言葉も怪しく思えるわよ?」
雪ノ下がふふんと笑う。え、そこドヤるとこなの?結構恥ずかしい

事言ってんの自分で気付いてる？
「あれはお前が可愛かったからやりたくなっただけだっつうの。他の女子になんてやんねえよ」
「！あ、そ、そうなの……そ、それは殊勝な心掛けね。これだけ可愛い私が相手をしてあげるだけありがたいと」
「可愛いよ」
「あ、え、さ、さっきと同じ流れなんてそんな安直な事をされた所で私は」
「すげえ可愛いよ」
「あ、う、や、ちょ、ちょっと、あなた、本当にいい加減に」
「本当に可愛いよ」
「あ、う、う……」
よっしゃ、また勝った！腕枕してる俺の腕に、恥ずかしそうに顔を埋めてる。
その状態でちらっと俺を覗き見んのやめて！小動物みたいで死ぬほど可愛いから！
抵抗されるのもお構いなしに、わしゃわしゃと頭を撫でた。
「っつうかさっきの話……これからは、お前が処理を手伝ってくれるって事で良いんだな？」
「え、あ、や、その、言い方がそんな直接的だと……」
「お前が言ったんだろ……。それで、手伝ってくれるのか？」
「そ、それは、まあ、その……」
「よし、言い方を変えよう。これからもばんばん俺とヤラせてくれるのか？」
「!?な、あ、あなた、そんないやらしい言い方が……んむうっ!?」
からかいに対する反応があまりに可愛いもんで、唇を唇で塞いでやった。
これから、結構楽しくなりそうだ。
お終い。

やはり雪ノ下雪乃の胸は小さい。

（1）

２月のある日。
フリーペーパーの作成も終え、やっとのことで平穏が訪れた。
俺と雪ノ下と由比ヶ浜の３人は、部室で穏やかに談笑しながら、本を読んだり紅茶を飲んでお菓子を食べられる幸せを噛み締めていた。

読書の休憩を一旦入れようとして、本を閉じた。
そして、何の気なしに二人の方を見る。
ふと、雪ノ下と目が合った。
…なんか、最近俺と目が合う頻度が高い気がするんだけど。気のせいですかね、そうですよね。やだ、素直におしゃべり出来ない！
雪ノ下は俺から視線を逸らすと、少しばかり不自然にきょろきょろしながら、やがて机の上に置かれているパソコンへと視線が行き着いた。
可愛らしいネコのブックカバーで包んだ本をぱたんと閉じると、すっと顔を上げた。
「そう言えば…千葉県横断お悩み相談メールのチェックを最近していなかったわね」
「あ、確かに。最近マジで忙しかったもんね」
由比ヶ浜がはっとした顔になる。
秋頃から平塚先生の提案、もとい指示、もとい命令で、メールでお悩み相談を受けるようになっていた。タイトルに未だに納得が行かないんだが…。
最近は前述のフリーペーパー作成に追われていて、いやもう本当に追われてた。もう缶詰を全廃したい。あ、食物としての缶詰は今のままで良い。正しく言えば軟禁・監禁を全廃したい。でもそうすると仕事が終わらない。無限ループだね☆
あ、そう言う訳で、メールのチェックが出来ていなかった。

「…しゃーねー、チェックしてみるか…」
　スロウスの如き鈍重な手つきでパソコンを開く。
「なんでそんなに面倒そうなのよ…」
　俺の動きを見て、呆れたようにこめかみに手を当てる雪ノ下。猫ペディアさん、その仕草好きですよね。
「ええっと…なになに？メールが来たのはＰＮ：建設的具体案求むさんから。…何この固い名前？雪ノ下？」
　何とは無しに名前を読んだ瞬間、雪ノ下が一瞬びくっとした。え、なに、どしたの？何か突然呼んじゃってごめんね？
「…そんな訳無いでしょう」
「ま、そりゃそうだよな。んで本文は…」
『自分の身体の一部分について、少し、いや本当に少しだけ、悩みを抱えています。見る人によっては気にしないと言う人もいるのでしょうが、私の親しい友人に大きい人が居て、いつも近くに居る分尚更意識してしまいます。遺伝の面で考えると、家族で大きい人が居る為ある程度期待を持っていたのですが、この年齢の時点でこの大きさ、と言うことに半ば絶望感を覚えています。何卒、アドバイスの程宜しくお願い致します。』
「…」
「…」
　俺と由比ヶ浜が押し黙る。
　左を見ないようにするので精一杯。あれ、おかしいな、画面が滲んで見えるぞ？
「ふむ、成る程。まず問題の核心となる部位を直接的に書いていない辺り、メールとは言え相当恥ずかしいと思っているのかしら。まずは何のことについて述べられているかと言う点から話し合わなければいけないわね。何にせよ、ある程度継続して行える対策を取る必要がありそうね」
　…めっちゃ饒舌になってる…。
「…いや、雪ノ下…」
「ゆきのん…」

「?どうしたの?」
けろっとした顔で首傾げんじゃねえよ。可愛いだろが。
「…まさかとは思うけど…これ、ゆきのん」
「?何故そう思うの?」
食い気味に潰しちゃったよ。
あれ、さっきと同じけろっとした顔なのに。可愛いのに。何で底冷えする寒さが来てるのん?
由比ヶ浜、君の凍てつく視線で泣きそうだよ?やめたげて!やめたげてよぉ!
「…これ、思い切り胸のことじゃ…」
勇気を出して言ってみた。
…俯いちゃった。
だからさっき、変にきょろきょろしてたのか…。気付いて…欲しかったんだね、メールに…。
と悲しみが溢れ出して胸を押さえていたら、雪ノ下が顔を上げた。何でそんな無駄に凛とした顔になってんの?時雨なの?
「身長かもしれないじゃない」
マジか。この期に及んでとぼけるとは、もはや一周回って清々しいな。
由比ヶ浜とちらりと目を合わせて、どうするか考える。
そこから数秒もすると、揺さぶり方を互いに閃いたようで、二人同時に頷いた。
どこを見るでも無い虚ろな目線にして、まず俺が仕掛ける。
「…陽乃さん…か…」
がたっと音がした。左を見ると雪ノ下が極めて不自然にびくっとしたようだ。
「なんで姉さんの名前が?この人は私じゃないわよ?第一家族としか書いてないじゃない」
まだ粘るか…。
行け、由比ヶ浜!
〈ユイガハマ　ユイ〉

ビッチタイプ
えがお　ＰＰ９９
きよにゅう　ＰＰ９９
くうきよみ　ＰＰ３５
ゆるゆり　ＰＰ９９

やべえ、大体の技打ち放題だ。くうきよみって一瞬空気投げかと思って攻撃技だと期待しちゃうね！

「えへへ、親しい友人…」

メールの文面から雪ノ下の由比ヶ浜に対する好意を自然にピックアップする、純情を伴ったえげつない責め。

上記の技で言ったらえがおだな！

「ぐ、あ、いや、その、別に親しいって程じゃ…」

「え…ゆきのん…」

「あ、ちが、その、…」

「…そんなぁ…」

涙目になる由比ヶ浜。雪ノ下の袖をさり気なく掴んでいる。

行け、もっと行け。ゆるゆりも９９回使えるぞ。

「だ、大体、これはあなたのことを指してる訳じゃ…」

「ふぐぅ…」

雪ノ下の言葉を大して聞かずにどんどん泣きそうになる由比ヶ浜。

いいぞ、もっとやれ！…あれ、わざとだよね？

「その、いや、友人だとは思っているわ。その、ついここでは…」

慌てすぎてもうほとんど自白してますよ。自爆ってますよ。

「う、うう…」

あれ、由比ヶ浜、わざとじゃないの？本気なの？おーい、由比ヶ浜さーん？

「…由比ヶ浜さん、あなたは私の友人、いえ、…し、親友…よ…」

認めた☆気恥ずかしいことを書いたことと、メールの送り主が自分であることを同時に。

雪ノ下がたどたどしく言うや否や、由比ヶ浜の目が輝く。

そして、遠慮の無いハグ攻め。

「ゆきのん、だーーーいすき!!」
お前はポニョか。あれ一番衝撃的なのは何気に波間をぺたぺた走るシーンだと思うんだけど皆どう?
ハチマン、休みと小町と戸塚とただ飯だーーーいすき!
二人の比較的ガチ百合を堪能した後、事の真相に迫ることにした。
「…どうして、こんなことを?」
何か雪ノ下を崖に追い詰めた感。英一郎風味。
俺の問いかけに、雪ノ下が俯いたまま、腿に置いた手をきゅっと握りしめて答える。
「…直接…言える訳ないでしょう…!」
そう言うと、雪ノ下は両手で顔を覆った。
やめて、嗚咽を漏らさないで。それを前に見た時ってもっと全力で心が揺れ動くシーンだったよ…屈指の名場面だったよ…!この嗚咽の感じ、何か平塚先生みたいだよぉ…!違う意味の上に二重の意味で泣けて来たよぉ…!

続く。

（2）

雪ノ下が落ち着くまで、由比ヶ浜が慰めてくれていた。俺はこの場合下手に慰めても悲しいばかりだと思い、いつもの位置から見守っていた。何この悲しい状況…。

「…ふう。お待たせしてごめんなさい。では、早速取り掛かりましょうか」

え、何でさも何事も無かったかのように振る舞えるの？アイアンメンタル過ぎるでしょ？本当に？

由比ヶ浜の胸中の複雑さたるやそれはもう計り知れないものがあるな。

片や関東平野、片やヒマラヤ山脈…。

同じ立場に立てず、気持ちを共有出来ないと言う意味では、今回はある意味男である俺よりも距離が遠いかもしれん。んなことないか。

すげえ真面目に考えちゃったよ！

「…まあ、そうだな。まずはネットで調べてみるか。大体雪ノ下も調べてるとは思うけど、新しい方法が提示されてる可能性もあるし、俺の検索の方法でたまたま雪ノ下とは違うものを見付けるかもしれない」

検索ワードを考えながら、キーボードをかたかたと打ち始めた。

「あ、あまり…」

「ん？」

雪ノ下がえらく小さな声で、ぽそりと言った。

「あまり…わ、私の名前で言わないで…もらえる…？そ、その…恥ずかしい…の…」

頬を赤らめ、完全に目を見ない訳にも行かないと思ったのか俺をちらっとだけ見て、すぐに目を伏せた。

ちょっと待て、その仕草可愛いからやめろ。何か変な気持ちが芽生えちゃうぞ。あんまり純粋でない何かが。あ、むしろ純粋か。

「ゆきのん…!!」

ああ、ほら、可愛さのあまり百合ヶ浜さんが飛びついちゃったじゃねえか。
雪ノ下は嬉しさと恥ずかしさとその他の若干毛色が違う何とも言えない感情が混ざった表情をしている。
「…今は、由比ヶ浜のハグも雪ノ下にとっては辛いかも、な…」
「!!」
ぽそっと言ってみた。
豊満な胸を雪ノ下に押し付けていた由比ヶ浜がぴたっと止まる。雪ノ下も止まった。世界も止ま…らないな。
事態はすぐに把握したようで、由比ヶ浜は申し訳無さそうに雪ノ下から離れる。
「ゆきのん…ごめんね？」
「由比ヶ浜さん…謝られた方が辛いことだってあるのよ…。」
ものすごく気まずい雰囲気が流れる。あれ、なんかすーごい罪悪感。
仕方ない、ここはフォローに入るか。
「由比ヶ浜はどうやってそのメロンを入荷したんだ？その方法を挙げて言ったら雪ノ下の参考になるかもしれない」
「だれがメロンだ!?」
オブラートに包もうと思ったら、ついいつもの例えが出てしまった。
「あ、や、だって、そんな見事なもん持ってたら、もはやそう例えるしか…」
実際、由比ヶ浜の胸は大きい。ただ大きいと言うよりは、きちんと締まった身体を維持している上での張りのあるおっぱいの形をしている。爽やかだしエロい。なんかもう、エロい。
「あ、え、ええ!?そ、そんな風に…思ってたの…？」
やばい、怒らせたか。…ってあれ、ちょっと、ガハマさん？胸を抱くように腕で隠しながら、半身で顔を真っ赤にしてこっちを見てらっしゃる。あれ？
「う、嬉しいな…えへへ」

その体勢のまま、はにかんだ。おいやめろよ何だその可愛さは。二人して俺の可愛いランキングを超速で揺さぶりに来るんじゃねえよ。この部室には！3人しか居ないのだから！変な気持ちになっちゃうよーーー！

「あ、ああ…」

へったくそな返事をしてしまった。口数少ない男ってクールって思われるらしいしいっか！だめか！

「比企谷くん」

「ひゃいっ!?」

びっくりした。急に呼ぶなよ。おかげで変な声が出ちまったじゃねえか。

「…私は？」

「…ん？」

「私の、その、胸は、例えるなら何なの？」

え、何この拷問。そんな真剣な、でもどこか助けを求めるような目で見つめてくるの？

何て言えば良い？どうすればこの場が丸く収まる？ちくしょう、答えが見つからねえ…！

「えーっと…由比ヶ浜との比較でいいか？その方が考えやすい」

「ええ、構わないわ」

「台所にあるもので言ったら…由比ヶ浜がメロンで、雪ノ下がまな板だな」

「」

ごめん、食材ですら無かった。

「んで、山で言ったら…由比ヶ浜がエベレストで、雪ノ下が…砂丘？」

「」

首を傾げて言ってみた。目が腐ってるし男だから可愛くなかった。

あ、戸塚は可愛いな。じゃあ目が原因だ。

…山じゃなかった。丘じゃん…。

あれ、雪ノ下から反応が無い。

ちらっ、と雪ノ下の顔を見てみた。

顔が固まったまま、涙がつつーっと頬を伝ってらっしゃるー☆
そこから、嗚咽を漏らす雪ノ下・女子女子した責めを浴びせる由比ヶ浜・手を合わせて全力謝罪（土下座は何か見たくないと由比ヶ浜に止められた）する俺と言う地獄絵図が展開された。マジで地獄だった。

雪ノ下が泣き止んだ。もう、あなたにとってこの話どれだけトラウマなのん…。
泣き過ぎでしょう。何、教室の後ろの方に居る縦ロールさんなの？論破とガチ枕投げで泣いちゃうの？
「…その、ほんとに悪かった。お詫びに何でもするわ」
「…ぐすっ、…本当ね？」
泣き腫らした目で、上目遣いで確認してくる。
いやちょっと本当に今日どうしたの？ギャップで責められ過ぎて俺の心がどんどん攻略されてるんだけど。やめてー！戸塚ルート又は小町ルートから逸れるー！2つ挙げてる時点で既にぶれてるー！
「そ、そうだ、あたしがやってた方法だよね！えーっとえーっと…」
由比ヶ浜が話題を戻してくれた。マジ感謝、尊敬。やっすいラップみたいになってしまった。
「あ、そうだ、キャベツと牛乳！」
「…ぐすっ、それは…もう試してるわ…」
おお、流石だ。
「由比ヶ浜、後はなんかあるか？」
「後は…ストレスをためない様に発散しながら、いっぱい寝る！」
「おお…まともだ…。バカの子は胸が大きくなるんだな」
「だれがバカの子だ!?」
「あ、や、すまん。それにお前も、ただのんびり過ごしてた訳じゃないもんな。今まで見て来たんだから、それくらいは分かる」
何の気無しに言ってみたんだけど、由比ヶ浜の様子がおかしい。なに、進化するの？更に胸大きくなるのかな…。
「あ、え、あ、そっか…見てて、くれたんだ…」

お団子頭をくしくしと触りながら、嬉しそうな顔で俯く。
ああ、どうしよう、今日のこの状況は危険な気がして来た。ルート変更を迫られている。いや、今選択してる戸塚ルートも小町ルートもイレギュラー過ぎるんだけどね！
「あ、まあ、な…。あ、ストレスって言うので思い出した。神経質な人はストレスをためやすいから胸が小さい人が多くて、大らかな癒し系の人は胸が大きい傾向があるらしいな」
後者をなるべくやんわり言っておいた。由比ヶ浜の表情が胸同様にやんわりしてきた。良かった。…何が良かったんだ？
この理論で行くと我らがめぐり先輩も良い感じに隠れ巨乳なのかもしれない。あれ、ここに来て新ルート？
「だから、具体例で言うと長女の人だとストレスを抱えて小さいままの人が多いみたいだ。…あ」
思わず、あって言ってしまった。
これ、雪ノ下姉妹に当てはまらないじゃん。
雪ノ下を見ると、固まってる。アストロンかけたのってくらいに。
「…なぜ、姉さんが…」
震えだした。チワワか。猫に例えた方が良かったかな、ごめんね。
「ゆきのん…。陽乃さんのストレス発散を、ゆきのんがくらい続けたのかな…」
「うっわすーごい納得しちゃった」
「…言い得て妙ね。思い返すと思い当たる節が多すぎるわ…」
悲しみが止まらない部室。

そこへ、部室のドアをがららと開ける音がした。
「おー、やってるかねー？」
平塚先生だった。
「…ん？何か調べものをしているのか？それに、雪ノ下、お前その涙の跡は…おい、比企谷」
「俺もう犯人確定なんですか」
結構がっつり関与してるけどね！

早めに話題を逸らそう。
「先生は今日は何用ですか？相手を見付ける方が先だと思うのですが」
「ほう…」
先生の右拳が力強く握られた。なんでただ握っただけでめきっと音がするの？俺死んじゃうよ？俺の身体のタフネス、豆腐だよ？
「…まあ良い。何、少しばかり時間を持て余していてな。…で、君たちは今何をしているんだ？」
「あ、や、その、胸を大きくする方法を調べてまして…」
由比ヶ浜が言いづらそうに伝える。まあそうなるわな。
「ほう、しかし、比企谷は男だし、由比ヶ浜も…あ」
平塚先生が小さな声を上げた瞬間、雪ノ下がびくっと跳ねた。
やめて！雪ノ下を見ないであげて！彼女のライフはもう０よ！
「…ふふ、そうか、君たちはそんな分かりやすいアピールをするんだな」
「え、ええ!?ちょ、ちょっと先生、何言ってるんですかーもう！」
由比ヶ浜が慌てて否定してる。なに、何の話？
しかし先生も巨乳だよな。試しに聞いてみよう。今日は何かこういう話題の口が回りやすくなってるし。…それ、やばくね？
「先生めちゃくちゃスタイル良いですよね。胸めっちゃ大きいし、くびれもすごいし。先生が前ドレスを着てるのを見たときなんかマジで一瞬呼吸を忘れるくらい見惚れましたし。どうやって維持してるんですか？」
「あー、確かに！先生のウェディングドレスやばかったー！」
もっとも、俺の場合はウェディングドレスの前にも、先生が出席していた結婚式にたまたま出くわした時に先生のドレス姿を見ていたんだけど。
どちらの時も、あんまり綺麗なもんで一瞬誰か分からなかった。
「…先生？」
由比ヶ浜の言葉で気付いた。先生が固まっている。
「…あ、ああ！や、その、あ、そ、そんなに…褒められるとは、な…」

いつもの白衣にズボンと言う出で立ちは、イメージで言えば男前と言う言い方がふさわしい。
しかし今はどうだろう、頬を赤らめ、身体をもじもじとくねらせ、同じ格好なのにまるで違う印象を受ける。
一言で言うと、可愛い。え、何これ、また新規ルート？今日は大漁だー！
「…ふう、こほん。私は特に意識はしていなかったな。気付いたらこの方法が役立っていた、と言うパターンはあるかもしれんが…」
咳払いで一度立て直した先生が冷静に答える。
ま、そんなもんだよな。
「そうですか、ありがとうございます」
「うむ。ああ、そう言えばもうじき下校時刻になるな。そろそろ帰り支度をしたまえ」
先生の言葉を聞いて時計を確認すると、確かに良い時間だった。今日はここまでだ。
「分かりました。では先生がいらっしゃる内に片付けをして、鍵をお渡しすると言うことでよろしいでしょうか」
「ああ、それで構わんよ」
いつの間にか復活した雪ノ下が、いつもの調子で話した。

部室の片付けを終えて先生に鍵を渡すと、３人で校舎を出た。
「じゃ、俺は駐輪場に行くから。また明日な」
そう言って俺が二人に手を振って別れようとしたら、弱い力でくっと後ろに引っ張られた。
振り返ると、雪ノ下がもじもじとしながら俺の袖を引いている。
「ひ、比企谷くん、それに、由比ヶ浜さん…」
「？どうしたんだ？」
顔を赤くして、ためらいながらも何かを伝えようとしている。
「その…今から、私の家に来ない？一人では出来なくて、部室でもやれそうに無い方法があるから、その…試したいの…」
「おー！いいよいいよー！ヒッキー行こうよ！早速小町ちゃんに連絡

するね！」
「え、俺の意志、ってかお前が連絡すんのかよ？」
俺の意志なんて無いよねーはーい分かってまーす！にしても、家じゃないと出来そうにない方法って何だ…？なーんか嫌な予感がするな…嫌なのかも分からんな。なんかやたらどきどきする。
…女の子の家にお呼ばれしてんだから、それもそうか。
「…電話、終了！」
「小町、何て言ってた？」
「『結衣さんと雪乃さんで兄を美味しく頂いちゃってください』だって！どういうことだろね？」
…あのバカ妹…。
由比ヶ浜も雪ノ下も意味は分かってねえだろうけど。ってか何で中3の妹のが色々とませてんだよ。
「…そうか。まあ、良いぞ。あんまり遅くならないようにはしろよ？」
「あ、そこは小町ちゃんが『朝帰り上等ですって言うか帰ってもドアを内側から開けないようにするので絶対朝まで戻って来るな！って伝えておいてください』って…言ってたよ…」
「…そう、小町ちゃんったら…」
…あんのバカ妹…。
今度は流石に由比ヶ浜も雪ノ下も頬を赤らめてる。この空気マジ危険。でももう僕には帰る場所が無いんだ！
「…まあ、そのときそのときで判断すれば良いか」
渋々了承した。ほ、ほんとに渋々なんだからね！

そう言う訳で、雪ノ下の家に行くことになった。
危険なかほりがする。
何の危機感だろう…あ。
貞操だ。

続く。

（3）

「…んっ、んあっ、そこ、ふあっ…」

ソファに腰を掛けている俺の股座に座って、身体を密着させている雪ノ下が甘い声を漏らす。

髪から香る良い匂いに頭がくらくらする。今はこの体勢から逃げることが出来ないから、際限無く鼻腔がくすぐられる。

由比ヶ浜はと言うと、俺たちを羨ましそうに待ちながら、もじもじと自分の胸をまさぐっている。

彼女の柔らかな胸が、ぐにぐにと自由に形を変えて行く様は、見ているだけで息を呑む。

口は半開きになっていて、エサを目の前に『待て』と指示をされた犬のような期待感に満ちた目で俺を見ている。

俺は、既に薄着になっていることもあり、もはや自分のモノが爆発寸前に膨れ上がっていて、それが雪ノ下の背中に思い切り押し付けられている。

雪ノ下もそれには気付いているようで、時折悩ましげに背中をくねらせる。

今、この状況では、雪ノ下と由比ヶ浜の一挙手一投足で理性が飛びそうな程の興奮を覚える。

…あっれー、どうしてこうなった？なんでなんでー？

雪ノ下のお願いにより、俺と由比ヶ浜は部活終了後に雪ノ下の家に行くことになった。

雪ノ下が手早く料理をして振る舞ってくれた。あいつ何でこんな料理上手いの？一人暮らしだからって皆こんな上手くないでしょ？

その後、いつの間に用意していたのか、俺と由比ヶ浜用に歯ブラシを渡してくれた。

…え、計画犯？いやいや、まさかね～…。…まさかね？

「ふー、もうお腹いっぱーい！ゆきのん、ご馳走様でした！」

由比ヶ浜がお腹をぽんぽんと叩きながら、満足げに言った。
「ふふ、お粗末様。比企谷くんはどうだった？」
「ああ、いや、その悪くなかったって言うか…すげえ美味かった」
「…そ、ありがと」
なんでこんな素っ気ないの？ツンデレなの？いや、雪ノ下の場合ツンツンツンくらいだよな。
と思って雪ノ下をちらっと見ると、頬がほんのりと赤くなってる。
だからもう、やばいって！何がやばいって、もうやばい。
「そういや、お前が言ってた方法ってどんなやつなんだ？」
「あ、そうね、もう話さないといけないわね…」
雪ノ下は戸惑いがちに答えると、近くにあったデスクからプリントを持ってきた。
俺と由比ヶ浜に渡されたそれは、ネットの記事をプリントアウトしたもののようだった。
「えーっと、なになに…？」
『胸を揉むと大きくなる？自分で揉んでも減るだけ！好きな人に揉んでもらうことで性的興奮を覚えてバストアップ！』
…タイトルを見た時点で吐血しそうになった。口と、あと、鼻な。
取り敢えず読み進めてみる。
バストはほとんど脂肪で構成されているため、自分で揉みほぐすだけでは脂肪が燃焼されてしまい、却って小さくなってしまうらしい。
そこで、性的興奮を覚えやすい人に触ってもらうことで、女性ホルモンを活発化させ、バストの中心にある乳腺を発達させ、大きくなると言う理屈らしい。
…言ってることは分かるけど、この流れでこの記事を見せられるって…。
俺は鈍感ではない。むしろ過敏だ。流石にここまでされて気付かない馬鹿ではない。
ただ、如何せん心の準備が出来ていない。出来るなら東京オリンピックくらいまで待っていてほしい。
ちらりと雪ノ下を見る。そんな切実そうな目で見ないで…。

ちらりと由比ヶ浜を見る。そんなに目を輝かせてこっちを見ないで…。何で君まで…。
「…えっと、これは、つまり…」
何を手伝ってほしいのかなんて分かり切っているのだが、それでも一応聞いてみる。俺、ヘタレですから。
「…ひ、比企谷くんに、私の、む、むむ、胸を、ささ、さ、触って…ほしいの…」
信じられないくらいどもりながら、けれど確かに告げられたお願い。
心臓がどくんと鳴る。
どう答えたら良いか分からず、頭が真っ白になっていた。
すると、由比ヶ浜が先に口を開いた。
「さっき、何でもしてくれるって言ったでしょ？だから、ゆきのんの言うこと聞いてあげなよ！
…それで、その…私も興味あるかな、これ…。お願い、出来ない？」
え。何その便乗。エロ便乗にも程があるでしょ？
ここでまさかの挟み撃ち…だと…。
前門の虎、後門の狼改め、前門の猫、後門の犬。
…すげえ簡単に潜り抜けられそう…。
いやしかしこの状況ではそうもいかない。
何これ？恥ずかしいじゃ済まないよ？俺これ本当にやばいよね？
頭の中がいつもの8倍速くらいで回転していると、雪ノ下が顔を真っ赤にしながら正面から近付いて来て、俺の左腕の袖をくいと握る。
「…ね、ねえ…だ、だめかしら…？」
あかーーーん。これ、ちょっとでも状況が違ったら今すぐ押し倒しちゃうやーつ。
しないけどね！俺、チキン紳士だし！こう言うとチキンも紳士も悪口に見えちゃう不思議！
頭がフリーズしかけていると、今度は右腕の袖をくいと引っ張られた。

見ると、由比ヶ浜が顔を真っ赤にして、こっちをちらちらと見ている。
「…あ、あたしも…ね…して…？」
はい、理性飛んだ。今、生まれて初めて理性飛んだよ。
何かもう一周回って冷静になった。
「…順番」
「え？」
俺がぽそっと呟くと、二人が同時に声を漏らした。
「…順番、どっちからが良いんだ？流石に二人同時は、無理だからよ」
信じられないくらい流麗に喋ることが出来た。もしかして俺、今、男前？
「あ…。じゃ、じゃあ、そこはゆきのん先で！あたしは見てるから！」
「え、あ、ありがとう。そ、それじゃ、よ、よろしくお願い…します…」
だから上目遣いやめろっつーの。他の奴にやんなよ？

…と、言う訳で、冒頭に戻る。
最初は服の上からだったんだが、今はブラの上から揉んでいる。
いくら控えめって言っても、触れば柔らかいし、今はブラの上からだから、時折触れる突起のわずかな感触にどうしても意識が集中してしまう。
「…や、やっぱり、直接触った方が良いかしら」
「あ、ああ、そうなんじゃねえの？」
ぶっきらぼうに答えてしまう。ああもう股間が痛い痛い。
雪ノ下が俺の身体から一瞬背中を浮かせると、ブラのホックに手を回した。今度機会があるのなら、俺が外したいななんて思った。
しゅるっと言う音を立てて、ブラが下の床に落ちる。
白く滑らかな背中の全貌が見え、思わず呼吸を忘れる。
そして、何よりその胸の美しさに目を奪われる。
形の良い、整った胸。
二つの突起は、ほんのりと固くなっている。
この人はこれで良いんじゃないか、と純粋に思った。

「…なあ、わざわざこんなことしなくても良いんじゃねえか？…その、めちゃくちゃ綺麗だし」
「え…本当に？」
振り返る雪ノ下。
「ああ。目が離せなくなってる」
「…あ、ありがとう…」
雪ノ下は俯いてしまった。
やがて、くるりと向きを変えて、俺と正面から向き合った。
「…じゃあ、胸を大きくする、と言うのは副次的な目的にしておくわ。
…今は、あなたに胸を触ってほしい。それじゃ、だめかしら？」
潤んだ瞳で見つめられる。
ここまで来たら、んなもん、答えは一つしかねえだろ。
「…良いに決まってんだろ」
そのまま、どちらからともなく二人の唇は近付いて行き、やがて重なった。
柔らかい柔らかい柔らかいい匂い！
1分程唇を重ねて、唇をゆっくりと、名残惜しむように離す。
雪ノ下のとろんとした表情に、心臓が跳ね上がった。
そっと手を伸ばして、雪ノ下の胸に手を触れる。
「んん…っ」
声の大きさは先程までとさして変わらない。しかし、今度は目の前でその表情の変化を見ている。
震える声、顔にかかる甘い息、首に回されたか細い腕、濡れた瞳。
今すぐにでも、押し倒したくなるのを我慢するのに必死だった。
胸を掴んだまま、またゆっくり手を動かし始めたとき。
「…ずるいずるーい！」
その声に驚くと、すぐ右横に座って俺たちの様子を見ていた由比ヶ浜が頬を膨らませていた。
「あたしだって、あたしだって…！」
そう言って上着とブラをぽぽーいとは脱ぎ捨てる。その時、ふわっと良い匂いが舞った。

恥ずかしさよりも、何かしらの欲求が勝ったのだろうか、脱ぎ捨てるのに躊躇が無かった。
あっと言うまに上半身が露になる。
雪ノ下とは違い、健康的な肌艶。
そして、何よりもその胸。
服を着ている上からでも分かっていた胸の、生のボリューム感に圧倒される。それと同時に、脱いで尚保たれる形の良さに驚いた。
先程まで自分で触っていたためか、ほんのりと上気して、その突起は上を向くかのようにぴんと立っていた。
俺が目を奪われていると、由比ヶ浜がうーと唸る。
「あたしも、ヒッキーとキスするんだー！」
そう言って、俺に飛びつくや否や俺の唇に吸い付いた。
「…～！」
声にならなかった。
あれ、ファーストキス、なんだよね？フレンチキスなんて最初の数秒くらいで、そこからはもうディープの極みですよ？
口内に舌を侵入され、頭がくらくらしながらも由比ヶ浜を見た。
彼女も恥ずかしいのか、顔は真っ赤で、目は潤んでいる。
何というか、愛おしいと思った。
雪ノ下の胸にやっていた手を、由比ヶ浜の頬に添える。
そして、お返しとばかりに俺の舌を由比ヶ浜の口内にねじ込んだ。
由比ヶ浜は、まるでずっと待てと言われた犬が、よしと言われたときのように喜びの表情を浮かべる。
自然と、俺の心も多幸感に包まれた。
ふと、正面に居る雪ノ下の方を見た。
しまった、いつの間にか何も手を付けない状態にしている。申し訳無い。
何時の間にかソファを降りて、下の床に座り込んでいる。ほんと猫みたいだなお前。
「…」
…あれ、無言でどこを見ていらっしゃるの？…そこ、僕の大事な部

分なんですけど…。
え、あれ、興味深げに見てると思ったら手を伸ばして来た？
ベルト？ベルトを外そうとしてらっしゃる？やばいやばいやばい！
俺が手で止めようとすると、キスに集中して欲しいと思ったのか、由比ヶ浜が俺の顔を掴んで放さない。
顔を見ると、むーっと少し不機嫌になっている。
なんだこの可愛いさは…。
由比ヶ浜を俺をじっと見たと思ったら、俺の手を自分の胸に誘導した。
キスをしたままでも、ごくりと息を呑んでしまった。
誘われるままに胸に手を当てると、深く深く沈み込んだ。
由比ヶ浜の目が、切なげに細められる。
何だこの柔らかさ…一日中触ってられるぞ。カマクラと同じレベルかも？なんか比べてごめんね！
とか思ってたらいつの間にかベルトを外されてた。俺の制服のズボンとパンツを一緒に掴んで、んっんっと一生懸命脱がそうとしている。
ちょ、腰、浮く浮く。ってかなんだよその健気な顔！可愛過ぎんだろ！
抵抗しようにも由比ヶ浜さんに放して頂けません…。
やがて、ずるりと持って行かれた。
俺のモノがもうこれ以上無い程パンパンになって、雪ノ下の顔の目の前に露になる。
「…あ…」
言葉にならないのか、雪ノ下が息を呑んだ。
由比ヶ浜も、俺のモノを見るや否や唇を離した。
そして、ばっとソファを降りて、雪ノ下と同じくソファの下に座り、俺の股座に顔を入れた。
え、俺のモノを目の前にして、雪ノ下と由比ヶ浜が興味津々な目でじっと見ているんだけど。

天国？天国なの？
二人がそれとなく目を合わせたかと思うと、二人同時に舌を出して、俺のモノを舐め始めた。
最初は亀頭に同時に口付けして、まるで二人がキスしてるかのように見えた。
そんなことをされて、感じない訳が無い。
「…うっ、くぁっ…」
思わず情けない声を出してぶるぶると震えると、二人が嬉しそうに俺を見た。
その後、雪ノ下は亀頭から竿にかけてじっくりと舐め回し、由比ヶ浜は玉を咥えてころころと弄び始める。
二人の手は俺の内腿に添えられ、愛おしそうにさすっている。
あまりの気持ち良さと、あまりの絶景具合に、いっそ鼻血が出てくれた方が分かりやすい意思表示が出来るなと思った。
こう言うとき、男ってあんま感情表現を出来る手段を持ち合わせてないんだな。
しばらく弄ばれ続けたかと思うと、今度は二人が交互に俺のモノを咥えて来た。
片方が咥えている間は、もう片方は玉や内腿を舐め回す。
ねえ、なんで二人のコンビネーションは抜群なの？一応どちらも初めてですよね？来るべき日に備えて練習してたの？
やがて、最初と同じく二人同時に亀頭を舐め始めた。
二人の両手は竿をしごいたり玉を揉んだりと、ランダムに刺激を加えて来る。
徐々に限界が近付いて来ていることが分かった。
やがて。
「…あっ、もう…出る…！」
俺の声を聞いて、二人の動きが速まった。
次の瞬間。
「…あっ…!!」
ごびゅるっ、どびゅっ、どびゅるっ、ごぶっ、どぶっ、どぷっ…

今まで経験したことの無い、火山の噴火の様な射精をした。
二人の顔が、見る見る真っ白に染まって行く。
手は水を掬うような形で添えられ、愛おしそうに俺の精を受け止めている。
「…すご…い…」
雪ノ下が、手にたまった俺の精を伸ばしながらうっとりと言う。
「いっぱい、出たね…」
由比ヶ浜が、口の中の精を味わいながら、優しい声で言う。
俺は、二人の耳元にそっと手を添えた。
ただ、愛おしくて。

これはもう最後まで行くしかー！と意気込んでいたのだが、事はそう思い通りに行かなかった。
「…これ、楽しい…かも…」
と雪ノ下がぽそっと呟いたかと思うと、
「！ゆきのんもやっぱそう思った!?これすごい楽しいよね！ヒッキーの可愛い顔も見れるし！」
等と由比ヶ浜が言ったもんで、結局、朝まで搾り取られた。一方的搾取だよ！げっそりだよ！
ふらふらの足取りで雪ノ下の家を出ようとすると、玄関から出る直前、マフラーをくいっと引っ張られた。
よろめきながら振り向くと、雪ノ下がそっと口付けをして来た。
「…また、明日ではないわね…今日会いましょう。楽しみにしてる」
そう言って優しく微笑む雪ノ下がどうしようも無い程愛おしくなり、お返しに俺からもキスをした。ディープで。
朝焼けの中、由比ヶ浜を家の近くまで送ると、別れ際にキスをされた。
最初からディープだった。あかんて。また復活してまいますがな。
唇を離すと、由比ヶ浜ははにかむように微笑んだ。
「えへへ…ヒッキー、だーい好き！今度するときは…お互い、いっぱい触ろうね？」

そんなことを言いながら、俺の手を自分の胸にぱふっと埋める。
俺は何も言わぬまま、誰も居ないことを良いことに由比ヶ浜を塀に押し付けて、お返しにキスをした。よりねちっこく。
家に帰ると、早起きしていたのか、小町がリビングで勉強していた。
俺を迎える為だろうか。
「ただいま」
「！」
俺に気付くと、即座に俺の下に駆け寄る。
そして、すんすんと匂いを嗅いで来た。どしたんだよ。って言うかおかえりって言ってくれよ。
俺の顔を見て、心底驚いた顔になる。
「あ、え、お兄ちゃん…まさか、本当に頂かれたの？」
そこか。あと匂いで判断出来るの？君中3だよね？あれ？
「あ、いや、その、まあ…」
「本当に？雪乃さんと結衣さんの二人に？」
「ま、まあ…」
「こ、こ、こ、今夜は赤飯やで～～～！」
いや、何処出身なんだお前は。生まれも育ちも千葉だろうが。
「お姉さんが二人になる～！」
「いや、あれだぞ？最後まではやってないんだ。俺が一方的に搾り取られてな…」
ぼーっとした頭でつい事情説明をしてしまった。
やっべと思って小町の方を見ると、顔を真っ赤にしてぷるぷるしている。
「…誰がそんな具体的な説明しろって言ったのよこのごみいちゃんはー！」
「おぶふっ!?」
ごすっ、と言う鈍い音と共に、俺の腹部に深々と突き刺さる小町の拳。
利き手じゃないのは俺への配慮なのか、それとも受験で使う大事な手への配慮なのか。

後者に決まってるな。
流石に具体的な話まで聞ける程成熟してはいなかったようだ。そりゃそうだよな。
俺も、昨日の夕方頃まではなーんも知らなかったんだし。
小町との問答を終え、部屋のベッドに寝転がる。
寝れて2時間か。あーだるい。
…早く、学校に行きたい。
雪ノ下と由比ヶ浜の顔を思い浮かべながら、思わずにやけてしまった。今の俺の顔、絶対気持ち悪いんだろうな。

お終い。

古今東西、怪談噺と言うものは人を惹き付ける、そして女子が話す怪談は大抵怖くない。

（1）

２月のある日。

部室で俺のやる気の無いタイトルコールが響く。

「千葉県横断お悩み相談メール―…」

由比ヶ浜がぱちぱちと拍手をする。雪ノ下は諦めたような表情でこちらを見ている。

いや、まあ、ほんとダルいんですけどね、これ。大体材木座からだし。もう直接来いよ。来てほしくないけど。

「えーっと、今日のは…ＰＮ：ｓａｋｉ☆ｓａｋｉさんから…誰だ？」

「さきさき…あ、沙希ちゃんかな？」

由比ヶ浜が手をぽんと叩く。

ああ、居たなそんな川なんとかさん…川…川端？康成？

そうか、康成さんだ！

って言うかｓａｋｉ☆ｓａｋｉって何だよ。なんで皆ちょくちょく☆付けたがんの？王子様なの？ああ、戸塚を抱きしめたい。

「ああ、あいつか。んで内容は…」

『妹のけーちゃんから面白い話をリクエストされたんだけど、何を喋ったら良いか分かんない。

どう言うのが聞きたいのって聞いたら、怖い話がいいって言われた。尚更どうして良いか分かんない。

何か良い案ちょうだい』

雑かよ。雑だよ！お前メールでもこんな感じなの？俺でも引くわ！俺も大概だけど！…大概だけど！

由比ヶ浜と雪ノ下を見ると、俺と同じ気持ちだったのか、呆れたような表情をしている。

「…あはは、中々ふわっとしてるね…」

「怖い話…この案件、一見するとただ話のネタを提供すれば良さそう

だけれど、この妹さんが「面白い」と思ってくれるような話となると…中々難しそうね」
呆れながらも、雪ノ下が冷静に分析する。
「そうだな。これは話のネタの質ってよりは、話し方そのものをよく勉強する必要がある。どうやるかな…」
俺と雪ノ下がうーんと頭を捻っていると、その様子をぽけっと眺めていた由比ヶ浜が何かを閃いた顔をした。
この子なりによく考えてるんです！分かってあげてください！
「話し方を勉強…勉強…そうだ、勉強会だよ！」
「え？」
思わず素っ頓狂な声を上げてしまった。
「皆で集まってさ、それぞれが持ってる怖い話をするの！この人の話し方が上手いなーと思ったら、真似してみるって言うのはどう？」
「おお、なるほど。おバカなのにすげえ良い案だな」
「だれがおバカだ!?」
「そうね、由比ヶ浜さんなのに」
「地味にゆきのんの言い方の方が傷付く！ひどい！」
由比ヶ浜が喚いてる。わーんって。なんかごめん。
「でも実際良い案だな、それ。いきなりプロの話し方を見ても上手すぎてどう真似して良いか分からないってこともあるだろうから、身近な人を参考にするって言うのはすげえ有効だと思う」
「そうね。このやり方なら、人数は多ければ多い程良いと思うわ。早速人を集めましょうか」
「やったー！じゃあ、早速集めてみよう！場所と時間はどうする？」
「せっかくやるなら夜の方が雰囲気出るだろ。夜にそう言う話をちゃんと出来る場所…雪ノ下の家とか？」
俺がごく普通に提案して雪ノ下の方を向くと、雪ノ下の首がぎぎぎと極めて不自然に背けられた。…あれ？
「…ひ、人を集めるのも、難なら会場の提供もするから…わ、私は出かけていて良いかしら？最近、ちょっと忙しくて…」
話し方が驚く程、いや、笑える程、たどたどしい。

ウソつけ。じゃあなんでこの時間帯に悠々と本を読んでられんだよ。
…こいつ…。
「雪ノ下」
「…なにかしら？」
語調をすぐさま元に戻した。アイアンハートめ…。
「…お前、まさか…」
「なにかしら？」
食い気味やめろよ。語調強めんなよ。怖いんだよぉ。何これ凍てつく波動？スクルトの効果も切れちゃう！
しかし、ここは勇気を持って攻める。だって、楽しいから！
「…怖いのか？」
「そんな訳無いでしょう。大体幽霊なんていやしないわ。古来から『幽霊の正体見たり枯れ尾花』と言うように人は暗い場所や不気味だと思う場所で思い込みによって何でも無い木の枝が幽霊に見えたりするものなのよ、それに霊感を持ってるなんて言う人もーーー…」
…めっちゃまくし立てて来た。この感じ、慣れて来ると可愛いなって思えて来る。めっちゃ睨まれてるけど。心臓鷲掴みにされてるけど。ハートキャッチプリキュア！
めげずにとどめを刺そう。
「そうか、怖くないなら良かった。じゃあ、雪ノ下も参加出来るな？」
雪ノ下の動きがぴたっと止まる。
「…分かったわよ…参加、するわよ…」
すげえ小さな声で言った。モスキート音ばりに分かりづらい。平塚先生には聞こえないな！この冗談言ったら俺多分死ぬな！
そんな訳で、怪談大会を開くことになった。
百物語はやりません、冥界に連れて行かれたくないもん！
「…と、言う訳で、始まります！
『真冬の・大・怪・談・大会』～～～!!!（どんどんどん、ぱふぱふ（ｂｙ由比ヶ浜））

はーい、司会は私、腐り目でお馴染み比企谷八幡…の可愛い妹、比企谷小町でーす！きゃぴっ☆」
…うぜえ…。この一言に普段の２００回分の「うぜえ」を込めたぜ…。
「…なんで小町がいるんだ？」
「結衣さんに呼ばれたんだー、えへへ！学校で話せるネタが欲しくて！」
「…いや、まあ、もう、良いです、はい…」
こう言うときの小町の出席率異常に高くね？助けられてることも多いから（自覚してる範囲だけでもかなりのもの）良いけど。可愛いし。
「平塚先生まで…」
「ああ、由比ヶ浜から活動の報告を受けたときに誘われてな。ほら、私は夜は暇だから…」
「そそ、そんな事思って誘ったんじゃないですよ先生!?」
…涙が…涙が出るよ…。アラサーって女の盛りだと思うんだけど…！…高校生だからそんなの分かんないけど…！干支、先生と同じなのかなあ。
「川崎のメールが元だからとは言え、このいつもの面子の中に川崎が居るのってなんか新鮮だな」
俺が康成さん間違えた川崎の方を見ると、不機嫌そうにじろりと睨んで来た。
「…別に、あたしは普段一人なんだから、どこに混じったって変わりゃしないよ」
さいですか…。
ま、睨むのも単純に目つきが悪いだけだし、ちょっと凄みを効かせたらすぐ泣きそうになるのを知ってるしな、今は前ほど怖くない。って言うか折を見ていじめてみたい。うそうそ、やだ、お天道様、見ないで！戸塚天使、見ないで！
…ってか、夜女の子の家に来て、俺以外全員女の子って…ええやないの。ええやないの。いかん、暖房が効き過ぎてるぞこの部屋。

「さて、早速今日のこの会の進め方を発表致しま～す！
…順番に怖い話をします☆」
おいこら妹。お前マジか。
改行しなかったら1行で終わってんぞそのセリフ。間違ってはないけど。
「…しゃーねー、じゃあ誰から行く？」
呆れた顔でこきこきと首を鳴らしながら、俺は皆を見回した。
ちなみに皆、リビングで下にクッションを敷いて円状に座っていた。
クッション、みんな猫ｏｒパンさんなのね…分かりやすいね猫ペディアさん…。
「…じゃ、じゃあ、あたしから行くよ。あたしが依頼したんだし、まずはあたしがどんなもんなのか把握する必要があるだろ？」
おお、なんとまともな理由と勇気。さすが康成さん。
「じゃ、川崎から頼む」
俺、心の中でちゃんと呼ばなすぎだな。ごめんね、中島。…磯野ー！野球しようぜー！

①川崎沙希。
「ある人、取り敢えずＡさんとしておく。その人が住んでるアパートで、ある日飛び降り自殺があったらしいんだ」
「ふむふむ…うわわ～…」
おお、小町、相槌の具合がすごく良い。流石我が妹。もう俺に出来ることは無いしする気も無い！
由比ヶ浜も良いリアクション。この二人はこう言う面で似てるな。
雪ノ下は…俯いてぷるぷるしてる？え、早くない？
平塚先生…も俯いてぷるぷるしてる？え、意外と？マジで？
「それで、警察の人が来た。Ａさんも含めて、アパートの住人が事情聴取を受けることになったんだ。
ところが、ただの自殺の割には妙に質問が念入りで、違和感を覚え

た。
『昨晩の２２時頃、どこに居ましたか?それを証言出来る家族以外の人はいますか?』
まるで、刑事ドラマでよく見るアリバイを聞かれるシーンが、そのまま再現されていた」
小町と由比ヶ浜が声を上げなくなり、ぷるぷるし始めた。目を見開いて川崎を見詰めている。良い視聴者過ぎるだろ…。いいともの観覧者かっつうの。スタジオのリハーサルでＡＤにばっちりコーチしてもらってんの?
雪ノ下と平塚先生は…チワワ、っと。メモメモ。
「で、警察の人にどうしてこんなに細かく聞くのかと聞いた。その人も働いている身だったから、あまりこう言う気分が良くはないことに時間を取られて疲れるのは嫌だったようだ。
すると、警察の人の表情が急に重苦しいものになった。
なんでも、自殺した人が飛び降りたのは屋上らしいのだが、何故か階段にその人の血痕が付いていて、もしかしたら他殺なのでは、と言う懸念が生じているとのことだった」
ああ…もう４人ともチワワに…。４人の距離が縮まって来てる。もう固まったらええやないの…。
「Ａさんはその日は取り敢えず解放されたのだが…後日、真実が分かってしまう」
「え、なに、やだ、怖い怖い…」
固まった。良いと思う。ゆりゆりして下さい。
「…その人は、一度飛び降りたものの、死にきれず、もう一度自力で屋上まで登り、再び飛び降りていた…。」
「みぎゃーーーーーーーーーーーーーー!!!」
「おぐほぉっ!?」
小町が猫みたいな声を上げながら、猫みたいな俊敏さで突っ込んで来た。めっちゃ『どむっ』って言った。『どむっ』って。
…体重はいくら軽くても人間だから、このスピードはえぐい…げふっ。

抱き付いて『怖いよ～！』とわんわん泣いている小町の頭を撫でていると、由比ヶ浜と目が合った。
…なに、羨ましい…のか？何その物欲しげな目？興奮するからやめて！この状態でエレクトしたら俺比企谷家から叩き出されちゃう！
そんな由比ヶ浜の様子に気付いたのか、小町が涙を拭きながらにやっと笑う。
「…結衣さんもどうですか～？あったかいですよ～？兄も身体つきはしっかり男ですよ～！」
「え、ええっ!?そ、そんな…いいよ…別…に…」
何小っ恥ずかしいこと言ってくれてるの我が妹。
…あれ、由比ヶ浜、手を前に出して拒否の体勢を取って顔を背けてるけど、目はめっちゃこっち見てる…。何か余計に恥ずかしくなって来た…。
…と、ここまで由比ヶ浜を煽ったところで、俺の体温や体つきを不意に意識したのか、小町の顔が急に赤くなった。
でも、それでも抱き付いたまま離れない。
何この可愛い生き物？天使？あ、妹か。
「…つかお前、この話怖いけどえぐすぎだろう…こんなんけーちゃんに話せないだろ…って、川崎？」
よく見ると、川崎自身も涙目でぷるぷるしてる。え、どゆこと？
「…こ、この話、怖すぎて覚えてたから話してみたんだけど…話すだけでも怖かった…！」
…何この子、可愛い。
いつもはスキル『なでなで』は妹である小町にしか使わないんだが、あまりにも小動物みたいにぷるぷるしてる川崎が普段とのギャップでやたら頼りなく可愛く見えてしまい、小町を抱えたまま思わず撫でてしまった。
「…ふえ…？」
予想の斜め上の反応☆
おい、いつもの不良キャラはどこ行ったんだよ…！『…ふえ…？』
じゃねえんだよ可愛いなもう！

…今度は由比ヶ浜だけじゃなくて、雪ノ下も俺をめっちゃ見てる。
なに、皆撫でられたいの？俺ムツゴロウさん？

続く。

（2）

「じゃ、次は…あたし、行くね！」
「おう、任せた」
②由比ヶ浜結衣。
「こほん…じゃあ、行くね？」
おお、意外とそれっぽい雰囲気が出てる。頑張れメロンヶ浜さん。
「あたしの友達の友達から聞いた話なんだけど…」
で、出たー！俺がよく使ってその都度見破られる奴ー！
って言うか友達の友達から聞いたって。それもうネットで見たって言ってくれた方が潔いよ。
あ、でも雪ノ下はもうチワワってるな。早くね？雪ノ下チワワに改名しとく？
「ある男の人が、タクシーに乗ったときのこと。
その日は仕事が遅くなって終電も無くなったからって、タクシーで帰ることになったのね。
それ聞いてあたしはもったいない！って思ったんだけど、会社の経費で落とせるらしいから安心したの」
え、今後半お前の感想？急に私情を挟むんじゃねえよ。話が訳わかんなくなるぞ。
小町も『ほえ？』って顔になってるし。
にしてもほんとこいつ主婦みてえだな…良いお母さんになりそうだな…。
…暖房効きすぎじゃね？
「そこから家まではタクシーで３０分くらい。タクシーの運転手さんはその人が疲れてるのを察して、最低限の会話に留めてくれてたの」
雪ノ下、頑張って由比ヶ浜を見てるな。ぷるってるけど。
「１０分も経った頃かな…少しうとうとして、ぱっと目が覚めたら…助手席に、いつの間にか人が乗っていたの」
平塚先生が『ひっ！』と声を上げた。あれ、俺に近付いて来てる？
「乗っていた、と言うよりは、まるで初めから居たかのようだった。声

を上げそうになったけど、運転手さんを驚かせてはいけないと思って声を出さずにいた。
助手席に居る人は女の人だったみたいで、真冬なのに白いワンピースを着ていた。
…シートベルトも、していなかった」
おおう、それっぽい。俺もぞくぞくしてきた。ってあれ、平塚先生が俺の左腕に抱き付いてる？
胸元小町に左平塚…。
なんで女の人って皆して柔らかくて良い匂いすんの？
平塚先生はタバコの匂いがした方がまだ冷静になれた…！
「運転手さんに聞いてみようとしたら、『お客さん、温度大丈夫ですか？私一人だと基準が分からなくなるもので』なんて言われて、質問するタイミングを失った。
今の言葉で自分にしか見えていないのだと分かると、もう目を閉じて見ないフリをするしか無かった。それでも、気配は確かに感じる。暖房は効いているのに、身体の震えが止まらない」
小町・平塚ペアの震えも止まらない。って言うか先生の涙目可愛いな…。
「…それでね、それでね!?」
…あれ、話がラストに向かって来たのか、由比ヶ浜のテンションが若干上がり始めた…？
あれ、怪談でこのテンションの上げ方は危険な気が…。
「その女の人が、ゆーーーっくりと振り向いて笑いながらこう言ったの！
『…私のこと、見えるの？』
って!!ちょー怖い!!」
…うわぁ…。
めっちゃ静かになっちゃったよ。
恐怖の余韻、と言うよりはむしろ、皆して俺同様に「うわぁ…。」ってなってるからだな。
途中までは良かったのに…。

最後らへんで、感情が先走って怖くなくなっちゃうパターンになっちゃった…。
居るよねこう言う人。
「…あ、あれ…？こ、怖くなかった…？」
おいバカよせ、傷口に塩を塗るな！
「…ど、どーーーん！」
引きつった笑顔で俺を人差し指で差してきた。笑うセールスマン？
なんでだ。悪あがきにすらなってねえ。
ほら、余計場の空気が変ななっちゃった。
塩どころかブート・ジョロキア塗っちゃったよこの子…。
…まあ、今の妙に可愛かったけど…。
「あ、あっれー？あっれー？おっかしいなあ…」
顎に人差し指を当てて首を傾げている。頭の上にハテナが３つくらい見えるな…。
うん、おかしかったのは最後だけだった。惜しかったよメロヶ浜さん。
「…ふう、最後で白けて良かった」
「先生ひどい!?」
「そうですねー最後でだだすべりでしたね！」
「小町ちゃん!?笑顔で言わないで！」
由比ヶ浜が泣いてる。うわーんって。俺も悲しい。
「では、次は私が行こう。私の話は怖いぞ？ふふふ…」
「先生…噛ませ犬感がもうげぼらぁっ!?」
…食い気味に鳩尾に拳ぶち込みやがった…へへ、容赦ねえ…なあ…。
ちなみに小町はまだ俺に引っ付いている。あったかいから良いけど。
③平塚静。
「これは私が実際に体験した話だ。不幸の手紙と言うのを知っている

か？」
「ああ、今で言うチェーンメールの類ですよね？『～人に同じ手紙を出さないとあなたは不幸になります』みたいなやつですっけ」
「前にうちのクラスでも流れたね」
以前、職場見学のグループ分けの話が出た頃、葉山率いるトップカースト組の男子３人の悪口を言ったメールが出回ったことがあった。そのときの何とも言えない不快感は今でもはっきりと覚えている。
…俺にメール回って来てねえけど。泣いてない！泣いてなんかいないんだから！
…あの時は、犯人を突き止めずに問題を解決ってか解消してたから…今頃になって犯人が誰か気になって来た…。
「そうだ、私が小学校くらいの頃に流行ったのだが…それが、ここ数年再び出回るようになったのだ」
「え…マジですか？先生みたいに大人に対しても？」
「そう、大人に対しても…と、言うよりも、大人に対してのみ出回る手紙と言ったところだ」
「大人に対してのみ…出所が気になりますね。子供の間でならイタズラだと分かりますが、大人の中でとなるとまたタチが悪いですね」
雪ノ下が顎に手をやり、真剣な顔になっている。
確かに、大人が行うとなれば当然足が付かないようにしている可能性が高い。何とも面倒な話だ。
「…それは、どう言った内容なんですか？」
「ああ、まず従来の不幸の手紙とは違い、他の人に回さなくてはいけない等と言う文言が無いのが特徴だ。
内容は一見極めてまともに見えるのだが、その実一部の者にピンポイントで心に傷を負わせると言う非常に悪質なものとなっている」
「うわ…厄介ですね。具体的にどんな内容なんですか？」
「それはな…」
平塚先生の話を聞く５人全員が、ごくりと息を呑む。
幽霊の怖さとはまた別の、得体の知れない恐怖。

小町も俺の服を握る手にきゅっと力を込めている。
「…『私たち、結婚します』と言う言葉から始まる手紙だ…」
…うわぁ…。
めっちゃ静かになっちゃったよ。
さっきの由比ヶ浜の時とは違って、悲哀と憐憫の情がリビングに溢れちゃってるんですけど。
雪ノ下、目を瞑って顔を背けないで。『くっ…!』って顔、余計に傷付けちゃうから。
由比ヶ浜、困ったように眉をひそめながら『先生、諦めないで!』って感じで胸の前で両手でガッツポーズを取らないで。余計に悲しくなるから。
先生、どこ向いてるの?目が虚ろだよ?先生、先生?…先生!
やばい、視界が滲んで来た。
周りがお通夜状態になっていると、川崎が平然とした顔でぽつりと言った。
「あー、先生どんどん周りに先を越されてるんですねー」
「!?」
うおいいぃ!?川崎さーん!?何言ってくれちゃってんの!?
お前バイトのことで平塚先生に呼び止められた時もそんな感じで切り捨ててたけどもー!
ほら、先生風化した。先生風化したよ!
「…うっ、ひぐっ…もう、やだぁ…」
…子供っぽく泣く先生が結構可愛い…。
こんなの、出会ったばっかの男の人に見せることまず無いもんなあ…。
誰か!早く!俺が貰っちゃう前に!
何時の間にか、小町は俺の胸から離れて先生の背中をさすってた。
由比ヶ浜も。流石やでえ。
…涙が…止まらねえよ…。
続く。

（3）

平塚先生が何とか落ち着いたところで、話を再開することにした。
高校生と中学生に慰められるアラサーって…。
「じゃあ、次は小町が行きまーす！」
「おう、頑張れ妹よ」
④比企谷小町。
「これは、小町が小学生の時に実際に体験したお話です…」
おお、表情を陰鬱な感じにしてて雰囲気出てる。良いぞ。
…平塚先生、まだちょっとぼーっとしてんな…つら。
「夏休みが近付いていたある日の放課後、小町は他の学年の人に混ざって遊ぶ事にしました。遊び場所は登下校に使う道の途中にある、結構広い公園でした」
ふむふむ。…ん、雪ノ下、既にビビってる？はええよ。序盤も序盤だぞ。
…心持ち近付いて来てる？
「その前の日、当時よく見ていたテレビで『真夏の心霊特集』なんてものをやっていて、心霊スポットの取材や心霊写真の紹介なんかをしてました。それを見たのが大きかったのか、日が傾いて来た公園に、昼間は感じる事の無い奇妙な違和感や不安を感じていました」
おお、良いぞ良いぞ。…でもこれ、誰と遊んだんだろう？
あ、雪ノ下がさっきより近付いて来て…ん、何かむっとしてる？なんで？頬膨らますの可愛いな。
にしても何であんなに拗ねてんだ？
…左川崎、右由比ヶ浜☆
いやいやいや何で今日の俺駆け込み寺になってんの？怖いのは分かるけど皆もうちょっと冷静になろうよ？
二の腕に柔らかい感触があるんですけどこれ間違い無いですよね左右で違う柔らかさがあって何ともバカ野郎何脳内解説入れてんだ俺良いんですか良いんです！
…良くない。

雪ノ下さん何でこの状況で僕を睨んではるん？この場合俺の両脇に鎮座ましましてるツイン巨乳を睨むべきではなくて？俺そんなにやけてる？

「その日の遊びはかくれんぼでした。男の子が一人鬼に決められ、木の下で気の弱そうな声で数え始めます。

公園は広いもののあまり隠れやすい場所は無く、これは皆すぐ見つかるだろうなーなんて思いながら、取り敢えず鬼の人から一番離れた草むらに隠れたんです」

雪ノ下が粘ってる。そんなにぷるってるならこっち来れば良いのに。良いんだよ？まな板でも良いんだよ？

…平塚先生がいつの間にか後ろから抱き付いて来てる。ちょっと待って先生豊満過ぎますわ大人の魅力が！アラサーの色香が!!ちょっと泣きそうになってるのやめてギャップがまた可愛いから!!

…柔らけえ…。

「きっとすぐに『～君みーっけ！』と言う声が響くんだろうな、と思ったんです。

でも、鬼の人が数えるのをやめて５分経っても１０分経っても何の声もしない。

『…おっかしいなぁ…』そんな声が聞こえるだけです。

私が見付かったのは、結局１５分程経った頃でした。

『小町みーっけ！』と少し疲れたような、でも優しい声で言われると、小町はたははーと頭をかきながら立ち上がりました。あ、ちなみに、こう言う仕草が男子にはモテると聞いていたので、その頃から実践してました」

え、なに、そんな小さい頃からあざとかったっけ？女の子怖い。

「どうして小町を見付けるのにこんなに時間がかかったのかと、他の人は見付かったのか、その２つの事について質問しました。後者について言えば、単純に鬼の人が上げた声が小さいだけだったのかもと思っていました。

すると、その人は言いました。

『…ああ、いくら探し回っても誰も何処にも居なくて、探し方が悪いの

かと思って粘ってたんだ。だからここまで来るのも時間がかかった。
…結局、小町しか見付からなかった』
その言葉を聞いたとき、小町は夏だと言うのに背筋が凍り付くような寒気を覚えました」
『ひっ』と言う声がした。…俺と小町以外の４人全員から。
雪ノ下、そんな意地張らんで良いのに…。正座でぷるってらっしゃる。
…んん、ここまで聞いてると、確かに怖いんだけどなーんか違和感が…。
…なーんか、忘れてる気がすんだよな～…。
「…け、結局、見付からなかった人たちはどうなったの？もしかして、集団失踪事件…みたいな？」
由比ヶ浜が俺の腕への力（乳圧）を更に強めながら、そーっとした語調で小町に聞いた。柔らかいです。
…よく失踪事件なんて言葉知ってたね！偉いよ！
「…この事件の真実を話すには、この鬼だった人が誰なのか、と言う事から伝えなければいけません…」
小町はそう言うと、もったいぶるように、恐怖を煽るように、ゆっくり目を閉じた。
他の４人も、俺も、固唾を呑んで見守る。
やがて、瞑っていた目をカッと大きく見開いた。
「…鬼だった人の名は、比企谷八幡」
…ん？
「他の人が見付からなかったのは、失踪したからなどではなく、単純に、兄が数えている間に帰ってしまっていたからなのです…」
…んん？
周りから、悲しみの嗚咽と嘲笑を堪える声が聞こえてきた。
おい雪ノ下てめえこのやろう笑うんじゃねえよ。１５秒くらい前までお前めっちゃビビってただろうが。
「…おい小町、それ、もしかして小町が小４のとき、６年生に混じって遊んだ時の話か？」

「そうそう！よく覚えてるねーお兄ちゃん！」
「あれのショックは馬鹿でかかったからな…。って言うか、何俺のトラウマを良い塩梅に怖い話に仕立て上げてんの？バカなの？」
怒りの気持ちと戒めと憎しみの気持ちを込めて小町の綺麗なおでこにデコピンをお見舞いする。
『ぷぎゃっ！』って言う何とも可愛いらしい声を出した。可愛いから今度全然関係無いときにまたデコピンやってみよう。多分ぶん殴られるけど。

「…ふふ、小町さんのおかげでだいぶリラックス出来たわ。こんなお話のネタがあっさり出来てしまうのも、比企谷くんの黒歴史、いえ、黒人生のおかげね」
「黒歴史だとまだ一部で済むんだけど、黒人生って言うと俺の今までを全部否定することになるからやめてくれない？俺の目の前真っ暗なの？他のトレーナーに負けたの？」
「あら、あなたは闇の住人の様に人目に付かずひっそり、陰鬱に、蔑まれながら生きて来たのだと思っていたのだけど…違ったかしら？」
「なに、ぬ～べ～のＯＰ？バリバリ最強Ｎｏ．１？俺にも少しくらい光が当たった時期が…あれ、無いかな」
言われた通りで悲しい。
そんな訳で、雪ノ下の番です。
⑤雪ノ下雪乃。
「こほん。では始めるわね。
…あれは…平塚先生の勧めで奉仕部を作って、まだ間もない頃のこと」
おお、周りの空気が２℃くらい下がった感じがする。流石雪女さん。
え、なんでこっち睨んだの？エスパーなの？
「作ったと言っても、皆ご存じの通り普段は何もすることが無いから、放課後はゆっくりと本を読んでいたのよ。
たまに平塚先生が入って来ることはあるけれど、来客に対応したこ

とはまだ一度も無かったわ。
…ある日の放課後。その日はまだ春先でもうすら寒い日だった。特別棟の廊下もいつもより一段と冷え込んでいたわ。
誰も居ないと分かっている部室に入るのも、もう慣れた行為であるはずなのにその日は少しだけ…躊躇したわ。教室に足を踏み入れるのが何故か嫌だった。何か、妙な胸騒ぎがしていたの。」
お、由比ヶ浜と小町がぷるってる。
川崎と平塚先生もぷるってんな。
…なんで皆俺にくっついてるの？めっちゃ柔らかいし小町可愛いしで最高じゃんとか思ったけど、皆がきゅっと抱き付く力を強める度に雪ノ下の視線で体温が2℃くらい下がる感じがすんだけど。あの目は邪眼か何かなの？
「その日、いつもの様に部室で本を読んでいると、からりと扉を開ける音がした。
平塚先生だったわ。ノックをしないで開けるからすぐ分かった。そこまでは、これまで何度か見たいつも通りのシーンだった。
…でも、そのときは何かいつもと違った。平塚先生には何も変化は見受けられないのだけど、平塚先生の周りをぼんやりと見たとき、何故かゾッと寒気がしたの。
…どこが違う？何が起きてる？一瞬のうちに私の頭の中で激しく思考が巡ったわ」
なんでこいつこんなに怪談が似合うんだよ…。
平塚先生は首を傾げてる。覚えが無いんだろう。それが更に恐怖と不安を掻き立てる。
由比ヶ浜さん俺の右の二の腕にあんまりメロンを押し付けないでください。形変わってやらしいです、あかん。
たまにその状態に気付いて顔を赤らめて離すも、また怖くなって振り出しに戻るって言う流れが心臓に悪すぎるから勘弁してつかあさい。もう何弁なのかすら分かんない。
「…もう、何が何だか分からない。怖い。でもこの正体を確かめなきゃ。私はそう思った。

そして、勇気を持って平塚先生の方に目を凝らしたの」
皆がごくりと息を呑む。
「…入って来たのは、ぬぼーっとした目の腐った人だったわ…。
身体中から漂う負のオーラを見ただけで、私は身体の奥底から穢れてしまうような感覚に陥ったの」
由比ヶ浜が小さく『…ひぃっ！』と声を上げて身体が跳ねた。
いや、なんでだよ。
「ねえ、それ俺だよね？小町と言い、何で俺をこうもさらりと怪談の主人公として採用しちゃうの？ねえ？皿の枚数数えるよ？」
あと、初対面の印象そこまで悪かったの？この話の為に盛ってるんだよね？
「あら、比企谷百物語はまだまだいっぱいあるわよ？ちなみにこの話は盛ってないわよ」
心読まれた。あと、盛ってないんだ。つら。
「百物語ってなんだよ。多いよ多い、多い。
なに、俺の悲惨な体験をわざわざ全部怪談にしてくれるの？俺のこと好きなの？」
冗談で最後に付け足してみたんだが、それを聞いた途端に雪ノ下が急に頬を朱に染めた。え？あれ？
「…こほん。…まあ、今はその頃に比べれば、少しはマシに見えるけど…」
表情の変化を誤魔化すように軽く咳払いをすると、俺の方をちらっと見て来た。
え、何このツンデレの振り幅？怪談利用するとかテクニカル過ぎるでしょ？
って言うか、もうこの話も怖くないって分かったんだから…放して下さい、巨乳トリプルと天使さん。
何度でも言うけど、柔らかい。
続く。

（4）

まず、現状を整理したいと思う。

川崎が妹に面白い話、具体的には怖い話をしなければいけないので何か案が欲しいと言う相談を受けて、雪ノ下の家で怪談大会を開くことになった。

で、今。

俺の左腕には川崎（巨乳、泣くと可愛い）、右腕には由比ヶ浜（巨乳、おバカで可愛い）、胸元には小町（ぺったんこ、超可愛い）、背中には平塚先生（巨乳、綺麗だし意外と可愛い）がくっついている。

…なんだこれ？

…なんだこれ？

2回言ってしまった。

そんで、雪ノ下は今さっきまで自分で話していたのもあるが、まだ俺にくっ付いて来てはいない。

…自分で『まだ』って言ったことにびっくりだ。戸塚、何かごめん。

「…そんじゃ、最後は俺だな」

俺のターン。

⑥比企谷八幡。

…と、その前に。

まずは言っておかないといけない事がある。

「雪ノ下、大丈夫か？」

「？何が？」

俺の質問を唐突に思ったのか、雪ノ下が首を傾げる。まあ、そりゃそうか。

「いやなに…今から話す話は、本当に怖いから…そこに一人で居るのはあんまりかなって思って…。

まあ雪ノ下が大丈夫って言うならこのまま始めるんだけど」

「ま、ま、ま、待ちなさい。そ、そんなに…？」

不安げな声を漏らした。そりゃそうだ。

ここで、もう一度念を押す。
「ああ、本当にやばいぞ。正直、心配だ。だから、あんまり無理はすんなよ」
最後の辺りで、少し口調と表情を柔らかくした。どうだ俺の微笑みは！
「…今の表情、気持ち悪い」
…このアマぁぁぁ…！俺が興奮するまで泣かせてやろうか！捕まる！後ろに先生が居る！
「…でも、そこまで言う…なら…」
ぽそっと呟いたかと思うと、自分の下に敷いていたパンさんのクッションを抱え、すくっと立ち上がった。
そして、俺の目の前、小町のすぐ横に座ると、俺の右の袖をきゅっと掴む。
「…これなら…安心する、かも…」
そう言って、自信無さげに俺の顔を見上げた。
え、何この破壊力？
小町、この光景を見て全力でにやにやすんのやめて？由比ヶ浜さんがこれ見て俺への乳圧を更に強めてるから。
本当に！やめておくれ！右腕がやさしさに包まれちゃう！
「この状態…まあ、これでも良いか。由比ヶ浜、照明を一つ暗くしてくれるか？」
「えっ…ちょ、ちょっと、ここに来て暗くすんの？」
「雰囲気をとことん作りたくなってな」
最初はどうなるかと思ったけど、どうやらこのメンバーだと俺以外は皆びびりみたいだ。
…こうなると、せっかくだから全員泣かしてみたくなってくる。鳴かせないよ、泣かすんだよ。
前者は鬼畜すぎるからね。
「それじゃ、行きまーす」
「はい、お兄ちゃんどうぞー」
流石だぜ妹。余裕綽々に見えて、実は既にめっちゃビビってるけ

ど。
「これはある５０代半ばの男性が実際に体験した話。
男性がまだ２０代の若い頃、彼は京都に住んでいた。
その当時は仲の良い先輩がいて、よくその人と一緒に飲みに行っていた」
皆俺にくっ付いたまま、話の成り行きを見守っている。
「ある日、いつもの様に飲み歩いていると、一人の女性と出会い意気投合した。クラブで働いていると言う女性だった。
初対面とは思えない程話が弾み、その女性が『今晩泊まりにおいでよ。もう一人女の子を連れて来るからさ』と提案して来た」
胸元にいる小町から『きゃっ！』と言う茶化すような声と、背中にくっついている平塚先生から『良いなあ…』と言う声が聞こえてきた。
泣いた。
「そしてその晩は、男女の組み合わせで２部屋に分かれて、一晩を過ごした」
由比ヶ浜が小さく『はわわ…』と恥ずかしそうに言う声と、平塚先生が『…良いなあ…』と悲しげに言う声が聞こえて来た。
…泣いた。
「その女性は男性と一晩過ごした後も度々男性たちを遊びに誘い、４人で大阪のホテルに泊まったり、色んなことをして遊んだ。
…それからひと月ふた月経った頃だろうか。ある時、男性の家に警察官が訪れた」
川崎が小さな声で『えっ…』と呟き、身を竦める。
「警察官は『この女性をご存知ですか？』と言って、一枚の写真を見せて来た。
その女性は、男性が飲みの席で出会い、一緒に泊まったりして遊んだ女性だった」
雪ノ下が青ざめた顔で、袖を掴んでいた手を俺の手に乗せた。俺が緊張すんだけど。
「男性はその質問に対して知っていますと答えると、警察官は今度は『この女性はこちらに来ましたか？』と聞いてきた。

記憶を遡ったものの、遊んだのは大阪のホテルに泊まったときが最後で、その後は会っていないどころか連絡も取っていなかった。当時は携帯も無かったから、当たり前と言えば当たり前だったのだが。
男性は不安になり、この女性がどうしたのかと警察官に尋ねた。
警察官は、
『実はこの女性、働いているクラブのお客さんの男性にお金を借りていまして。
それが返せなくなり、その男性を殺してしまったんです』
と、暗い瞳で告げた」
小町が『ふぐぅっ…!』と小さな声を上げて、抱き付く力を強めた。嬉しいけど…この後が心配だなあ。
「…そ、それで、どうなったんだ…?」
平塚先生が、俺の肩に乗せた手を震わせながら聞いて来た。
「はい。…警察の捜査力は凄くて、『あなたは、〜の時期に彼女のお部屋に遊びに行っていましたね?』と聞いてきた。
時期も場所も完全に一致していたため、男性は『はい、行きました』と緊張した面持ちで答えた。
そして、警官は男性に言った。
『ちょうどその時、押し入れの上に、死体を隠していたんです』
」
「〜〜〜!!!」
誰の悲鳴も上がらなかった。息を吸いながら出す、恐怖に染まった小さな小さな声だけが漏れた。
全員が怖がるのかは分からないなんて思っていたんだが…見ると、皆一様に、今まで以上に俺に顔を押し付けてぶるぶると震えている。
雪ノ下はいつの間にか、小町同様俺の胸元に顔を埋めていた。
雪ノ下の口から、小さく『うう〜…うう〜…』と泣きそうな声で呻くのが聞こえる。

…やりすぎたかな。
遅いけど。めっちゃ遅いけど。
ものすごく罪悪感が湧いた。
マンションの防音がしっかりしているためか、リビングには時計の針の音しか聞こえない。
『この後、女性はちゃんと捕まりました』と言う結論まで話そうとしたのだが、このくだりは話したところで彼女たちの恐怖を緩める要素にはなり得ないと判断して、話すのをやめた。
代わりに、出来るだけ皆の頭をぽんぽんと撫でてやった。
平塚先生の頭を撫でるのは躊躇したんだけど、いざやってみると凄く素直に応じてくれた。
こう言う面をもっと出してってくれればなあ…男なんて容易く…あれ、もしかして俺、今日平塚先生にどんどん攻略されてる？

１０分程経っただろうか。
ようやく皆顔を上げ始めた。
俺はさっさと頭を切り替えて、この後どうするかを考えていた。
明日は休みとは言え、時計の針はもう２１時を示していた。
「この後どうする？もう遅いし、解散するか」
俺が言うや否や、小町が口を開いた。
「…はあああああ!!?この状況で!?お兄ちゃん以外が怯えきってるこの状況で!?」
何かもう、口を開く前の表情が既に「はあああああ!!?」って言ってた。物凄い剣幕。
「あ、いや、でも、遅かれ早かれ解散しなきゃいけないだろ？それならまだ早い方が…」
俺があたふたしながら言葉を紡いでいると、右の袖が２方向に引っ張られた。
何事かと思って横を向くと、雪ノ下と由比ヶ浜がまだまだ怯えた表情のまま、首をふるふると横に振っている。
…猫と犬からのおねだり…。

激しい煩悩が頭を過ぎり、首を物凄い勢いでぶんぶんと振った。そしたら二人にビビられた。ごめん。
どうしたものかと悩んでいると、小町がピンと閃いた顔をした。
「そうだ、このまま今日は皆で雪乃さんの家に泊まりませんか！」
「…はあ!?」
思わず変な声を上げてしまった。
雪ノ下は『ほえ？』と言う顔で首を傾げている。可愛いなもう。
「お兄ちゃんの責任でもあるんだよ！て言うかもう全部お兄ちゃんのせいだ！責任取りなさい！」
「待て待て待て、言い方に語弊しか無いぞ。養育費どんだけ発生すんの？」
「発想が卑猥だよ！ごみいちゃんのバカ！ボケナス！八幡！」
「いやだから八幡は悪口じゃねえだろ」
お正月ぶりに聞いたぞ、この罵倒。
ふとその時のことを思い出して雪ノ下の方を向くと、あの時と同様にぷるぷると肩を震わせて顔を背けていた。
そして小さな声で
「バカ、ボケナス、八幡…ぷ、くく、やっぱりこれ…」
と囁いている。
よっぽどお気に召したのね…。
でもまあ、こんな罵倒でも元気を出してくれるならお安い御用だ。
…俺の心がすり下ろされてるからやっぱお安くはねえや。
「皆で泊まるって言うなら、ハードルが下がってやりやすいかもな。雪ノ下は大丈夫なのか？」
「ぷ、くく…はあ、おかしい…。…あ、そのことね。大丈夫よ。来客用の布団も用意してあるから…何か文句でもあるの？」
こいつ、ぼっちの癖にそんなもん用意してんのかよ…と思ってたら心を読まれた。全力で目を逸らします！
「あ、じゃあさー、せっかくならゆきのんの寝室で皆寝ようよ！ゆきのん、一緒に寝よ！」
由比ヶ浜がすごいナチュラルに百合って来た。百合ヶ浜め。

「あ、じゃあ私もご一緒したいですー！」
え、小町も？百合谷小町？
「っつか、俺は別室で良くねえか？」
「そ、そそ、そうだよ！こいつが同じ部屋に居たら、何されるか…！」
川崎が顔を真っ赤にして俺を指差して来た。うっさいわ！ナニすんぞ！
「大丈夫だよ、川崎。私が比企谷の隣に寝よう。…少しでも変な動きを見せたら、抹殺のラストブリットを喰らわせてやろう…」
平塚先生が手の指を曲げ、ごきんと言う音を立てた。
…女の人が出す音じゃないと思うんです、それ…。

結局、雪ノ下（百合ノ下）と由比ヶ浜（百合ヶ浜）と小町（百合谷）がベッドでくんずほぐれつ…じゃない、仲良く一緒に寝て、俺と川崎と平塚先生が下に布団を敷いて寝ることになった。
俺たちは川の字で寝ることになったんだが…何故か俺が真ん中になった。いや、ほんとに何で？
小町に命じられるがままに動いて、気付いたらこんな風に…。
なんやかんやでお泊まりが決まると、雪ノ下だけでなく皆も安心したようで、そこから日付が変わるくらいまでわいわいと楽しく過ごした。
ちょっとした折に怪談をぶっこもうとしては平塚先生に殴られ、小町に罵倒され、雪ノ下にすごい冷たい目で見られて心臓が止まりかけ、ぶっ倒れたところで川崎のパンツ（やっぱり黒のレース）を見てしまい派手に蹴られ、由比ヶ浜に膝枕されて頭を撫でられた。
…由比ヶ浜だけ天使に見える…だと…？
ちなみに。
川崎が大志に泊まる旨を連絡していると、伝言で『お兄さんによろしく言っておいて下さい』と伝えられたので、川崎の電話を即座に奪い取って大声で『俺はこれから、小町含めお前が高校に上がってからもまともに交流することはまず無いであろう可愛いくて綺麗な女性たちとお泊まりだ。羨ましいだろう。悔しかったら二度と小町に近

付くな、羽虫が！』とまくし立てて言って電話を切った。意味が繋がってなくとも取り敢えず罵倒出来たことに満足していると、川崎に思いっきり胸ぐらを掴まれた。超謝った。これがカツアゲだったら俺超ジャンプして超ちゃりちゃり言わせてる。

でも、川崎も含めて皆顔が赤くなってた。なんでだ？

そして、布団を敷いて皆寝る準備をして、無事に就寝。

うとうとして、意識が途切れる直前まで雪ノ下の『ちょ、ちょっと、由比ヶ浜さん、小町さん、やめなさい…！』『えー、いいじゃんこれくらいー！』『そうですよー！せっかく同じベッドで寝るんですからー！』と言う、今までで一番の百合百合しい会話が聞こえてたけど気にしない。

…雪ノ下の貞操は大丈夫なんだろうか？

2時頃、ぱっと目が覚めた。

慣れない環境と言うこともあるのだろう。両脇に女性が居るし。

むくっと起き上がり、寝ぼけ眼で薄暗い部屋を見渡す。

ベッドの上の3人は、すーすーと寝息を立てている。

…結局、小町も由比ヶ浜も、雪ノ下に超密着してる…。

ベッドよりも目線が低いこちらからでも、雪ノ下が寝苦しそうにうーんうーんと言って寝返りを打ち、その度に手持無沙汰になった小町か由比ヶ浜のどちらかが手をわきわきとさせた後に再び雪ノ下の背中をがっちりホールドする様子が見えた。お気の毒に…。

ふと、川崎と平塚先生が居ないことに気付いた。すぐ横の毛布はもぬけの殻になっている。

どうしたのだろうと思い、もう少し辺りを見渡すと、俺から数m離れたところで、二人が座って何か話しているのが見えた。

おお、あの二人でこんな時間に何を話すんだろう。気になる。

俺はそちらを極力見ないようにしながら、耳をそばだてた。

「いやー、酎ハイってそんな美味くないんですねー…ヒック」

「ははは、もう酔ったのか？まあ今日が初めてのようだし、しょうがな

いな。私は梅酒で…ヒック」
「なんすかもう、先生らって酔っれるじゃらいれすかー」
「なんら川崎、ろれつがまわららくらっれるぞー（回らなくなってるぞー）？」
…おい先生。マジか。
しかもがっつり酔ってんじゃねえか。
なんか小さい時に、夜中に目を覚ましたら親父とお袋が部屋に居なくてリビングまで探しに行ったら、晩酌をしてそのままものすっごいがっつりキスしてる場面を目撃した時のことを思い出しちまった。
…糸…引いてたな…。
トラウマの話はまあ良い。
二人して酔い方がもう…ダメなＯＬ感が半端無いな…。
先生は年齢的にまだしも、川崎、お前…。
と、心の中でツッコミを入れまくっていたら、気付くと二人をガン見してしまっていた。
べろべろの二人が不意にこちらを向いて、俺と目が合う。
「あんんれ～～～？そこに居るのは…もしかして、比企谷くんではありませんか～？」
「ああ、ほんろらあ（ほんとだあ）、比企谷ら～…」
何で先生が敬語なんだよ。もう訳分からん。
…あれ、二人がこっちに四つん這いで寄って来た。
二人とも寝るためにラフな格好にしたせいか、体勢的に胸の谷間がめっちゃ強調されてやばい。
いや、そんな事より。
何で二人とも、俺の方に向かって来てんの？
続く。

（5）

現状を整理しよう。
べろんべろんの平塚先生と川崎が、なんかこっち来た。
よし、整理完了！
…雪ノ下よりも、俺の方がよっぽど貞操の危機。

「あの、え、先生？川崎？何してはりまんの？」
テンパり過ぎてキャラがブレた。
寝室の暖房が効いてる上に酒を呑んでるせいか、二人してブラトップなんですけども。
それにちょいちょいずれ落ちて見えてはいけない、いやむしろ見たい、いや見えてはいけないものが見えそうになっても、全然気にする様子が無い。羞恥心をどこに忘れて来たの？俺に預けてるの？
座ったまま、思わず後ずさりした。
…これ、ホラーとかサスペンスでよく見るシーンだな…。
…死亡フラグ…。
「お～い比企谷～遊ぼうぜ～？」
「いやですいやです」
あんたどこの中島だよ？野球もしねえぞ。
大声出すなり逃げだすなりしたいんだけど、ベッドの上の百合トリオを起こしたくはない。どうしたものか。
「まったく、人ん家で何やってんですか…って、うおっ!?」
正面から来る平塚先生にツッコんでたら、いつも間にか川崎が回り込んで俺にもたれかかって来た。
「なあ…比企谷はさあ、どんなのがタイプなんら？」
「…は？タイプ？何の話だ？」
近いでかい近い酒臭いでもその中にも良い匂い！
あと、まだ呂律が回ってない。
タイプってなんだ、ポケモン？なら間違いなく、あくタイプだけど。
「だ～か～ら～、タイプだよ、タイプ！女のタイプに決まってんらろ～

！」
…ひでえ。なんだこいつ。
これが酒によるウザ絡みってやつか…。
って言うか、何でいつの間に腕を俺の腹と背中に回してるの川崎さん？
上目遣いやめて。理性が、理性が。
普段のあなたのキャラは何処に行ったの！
「いや、タイプなんて…あれ、平塚先生？」
どうにかこうにかはぐらかそうとしてしてたら、平塚先生が目の前まで来てた。やばい。
「比企谷…」
先生がぽそっと囁いた。
紅潮した顔、とろけた目、物欲しげに半分開いた口。
…この人、本当に綺麗だな。
…いや、生徒に本気の女の顔見せられても反応に困るんですけどね。
艶っぽい表情のまま、先生の口がゆっくりと開いた。
「…既成事実…」
「ばかやろう」
とんでもないことを囁いて、思い切りキス顔で迫って来た。ばかやろう。
先生だけど、思わずタメ口で罵ってしまった。
罵ってもキス顔やめないのかよ。思い切りしてやろうか全く。そんな度胸無いけどね！
先生の顔を手で必死に押さえてたら（口には触れてません、念の為。）、川崎が俺から手を離してぱたりと仰向けになって寝てしまった。お前自由過ぎるだろ…。
よし。何にせよ、一人切り抜けた。
後は今目の前に居るこの淫獣をどうするかだな…。
「なあ、比企谷～…私とじゃ、ダメか…？」
ちょっと涙目で言うのやめて！エロ可愛いしエロい。

どうしよう、本当に。正直俺の股間がもうやばい。
「…なあ、しよ…？」
「いや、だか…ら…」
先生がぽそりと囁いたかと思うと、ブラトップの両紐をはだけさせた。
俺が目を逸らすよりも速く、先生の豊満な胸が露になる。
目が離せなくなった。
結婚ネタで散々いじられてはいるが、それでもまだアラサー。身体の魅力はむしろ若い人よりも増しているのだろう。
この辺の年齢になってからの方が性欲が強くなる女の人もいるらしいし。
垂れることなくきちんと形を保っていて、且つ抜群のボリューム感を誇る乳房。
ピンと真っ直ぐ立った突起。
要するに、エロかった。
ごくりと息を呑む。
「どうだ…？」
「…あ、いや、その…綺麗…です…」
「そうか…嬉しい。触るか…？」
先生は優しく俺に誘いかけながら、俺の手を引っ張って自分の胸に触れさせた。
沈み込む指の心地良い感覚に、脳内の神経が焼け付くような感覚を覚える。
あまりの触り心地の良さに、手を引くのを完全に忘れてしまった。
『いざこう言う場面になったら、ビビりまくるんだろうな』なんて思ってたんだが、先生が優しくリードしてくれたこともあり、あまり緊張が無かった。
だから、先生の胸をガン見した。
…めっちゃ見た、めっちゃ。
「あんっ…もっと色々試して良いんだぞ…？その代わり私は…そーれっ！」

先生が息混じりの甘い声で、更なる誘惑をかけて来たと思った次の瞬間。
先生が、俺のズボンとパンツをずり下ろした。ものすごく楽しそうに。
「んおえっ!!?ちょ、ちょっと先生!?」
一瞬何が起きたか分からず反応が遅れたが、次の瞬間には身体を右回りに回して自分のモノを隠そうとした。
しかし、振り向いて逃げようとした先には、仰向けで寝ている川崎が居た。
そのことを忘れていたと不覚に思いながら、ぶつかるのを避けるため膝立ちで何とか無理やり止める。
「…あ」
結果、寝ている川崎の頬に俺の最大限に勃ったモノが押し付けられてしまった。
頬がぷにってした。ぷにって。
ぷよぷよって触ったらこんな感じなのかなあ。
俺が一瞬どうでも良いことを考えて現実逃避をしている間に、上半身を露にしたままの先生が後ろから抱き付いて来た。
「こ〜らっ、逃げるなっ!」
声がものっすごい可愛いんですけど。え、なに、カップルが砂浜で追いかけっこしてるの?
そして背中にダイレクトに触れる感触がもう、もう。
この出っ張ってるやつは…アレですよね。
「う〜ん…」
俺が固まっていると、川崎が寝言を言い始めた。起きたらまずい。
と思ったら、起きる様子は無い。
代わりに、俺と先生がいる左側へ寝返りを打ち、左腕を枕にする体勢になったかと思うと、
「あむっ」
「へ?」
俺のモノを、ごくごく自然に咥えた。

え？え？

〈状況整理〉

横向きに寝ている川崎。何か俺のモノをぱくっと咥えちゃった。

俺。股間もろ出しの膝立ち。

先生。ほぼ上裸で俺の背中に抱き付いている。

…はい？

あまりにぶっ飛んだ状況に思考回路がショートした。寸前ですらない、もう余裕でショートしてる。

背中と股間のあまりの気持ち良さに頭がおかしくなりそうだ。

もうだめだ、誰か俺に休みをくれ。５０万もあればエジプトでゆっくり1年くらい過ごせるらしいから、俺はエジプトに行く。

そんなお金無いけど。

「んむぅ…んぐ、んぐ…」

川崎のやつ、俺のモノをアイスか何かと勘違いしたのか、幸せそうな顔をしながら口の中でもごもごと舐め始めた。

亀頭を丹念に舐められ、背筋にぞくぞくと快感が走り抜ける。

「お…い、川さ…きいぃ!?」

川崎に言葉を投げかけようとした瞬間、また違う場所、それも複数の場所から快感が襲って来た。

快感の原因を後ろに求めると、先生が俺に胸を押し付けたまま、息を微かに荒げながら俺の首筋に吸い付き、その左手は俺の玉を、右手はTシャツの中に滑り込ませて俺の左乳首をさわさわと触っていた。

…のっけから飛ばしすぎだろ？

心の中でのツッコミをかき消すように、先生は

「んむっ…ふむぅっ…比企谷…気持ち良いか…？」

と耳元で囁いて、湿り気のある息をそっと吹きかけて来た。

やばい。このままだとすぐにでも爆発してしまう。

四方から押し寄せる快感に身悶えしながらも堪えていると、ベッドの方から声がした。

「…んん、何か声がするなあ…あれ、お兄ちゃん？」

「んむぅ…あれ、小町ちゃん、どうかしたの？」

こちらの声に反応して起きた小町、そして小町が起きたことに反応して起きる由比ヶ浜。
…え、何この連鎖爆破？
考えろ、俺。ここからの選択一つで俺のその後の人生が大きく変わるぞ。今のところ９５％くらいでバッドエンドだ。やったね！
幸い部屋は薄暗くて、アホっぽく寝ぼけている二人には何が起きているかはまず分からない。ってかこの部屋でまともに意識あんの俺だけかよ。５人起きてんのに。
何とかやり過ごすんだ…！
「お兄ちゃん、どうしたの～…？」
ものすごくテンプレなむにゃむにゃ声で、目をこすりながら俺の方を向いて来た。あれ、天使かな？
「ああ、ちょっと起きちまってな。なんでもねえ…よっ」
川崎、急に吸い付きを強めないで。お蔭で語尾に促音が付いちゃった。
「あれれ～…平塚先生と沙希ちゃんは…？」
お前の寝ぼけ声もテンプレ過ぎるぞ、由比ヶ浜。にしてもこの質問は更にやばい。
しかし二人が起きてるのには気付いていないようだ。なに、二人ともどんだけ寝ぼけてんの？今二人の目見たら多分『３』の字になってる。
「ああ、さっきからぐっすり寝て…る…ぞ…!?」
平然と言葉を返そうとしたら、急に来た。
川崎が亀頭を舐める速度を急に上げ、不規則に淫猥な音を立てながら舐り回して来る。
お前、アイス舐めるときのラストスパートっていつもこんなエロいの？周りに居る奴ら皆勃っちゃうよ？
それに加えて、平塚先生がさっきまで俺の乳首を刺激していた右手を俺の竿の方に回し、俺の射精を促すようにしごき上げて来た。
ぎゅっ、ぎゅっ、と一回一回丁寧に、それでいて絶頂に達するには丁度良い力加減でしごいてくる。

もう、我慢の限界だった。
「そっかー、お兄ちゃんも早く寝なよ?今日はたくさん遊んで疲れただろうし…むにゃむにゃ…」
「ヒッキー、折角だから明日もちょっとくらい皆で遊びたいね。そんじゃ、おやすみ、むにゃむにゃ…」
文尾がシンクロするってすげえなお前ら。
「ああ。おや…す…み…っ」
平静を装って、穏やかに答えた。
その言葉の途中で、川崎の口の中に大量の精をぶちまけながら。
ごびゅっ、どびゅるっ、ごぶっ、どぶっ、ごぶごぶっ…
今まで自分がしたどんな時よりも、強烈な勢いで射精された。
解放される寸前に、尿道を通る感触が如実に分かる程濃い精子。
しかも、一回一回出るリズムに合わせて、先生が手際良くしごき上げて来た。
先生はなに、サキュバスかなんかなの?
こんなのを口の中に出されたら、とてもじゃないがむせてしまうだろう…。
と、思っていたら、川崎はまるで水でも飲むかのようにあっさりと飲み干してしまった。
何で満足げな顔してんだお前…。
もっとも、口には幾分かだけ零したものがまとわり付いていたが。
やっとの思いで川崎の口からモノを引く抜くと、先生が『ふふ…たくさん出たな』と微笑みながら言って、少しへなっとなった竿をぱくっと咥え込んだ。
そして、ずぞぞぞっと音を立てて、尿道に僅かに残っていた分と、竿全体にうっすら付いていた分を残さず舐め上げ、吸い上げる。
くぽっ、とその艶っぽい唇から解放された時には、再び全開状態になってしまっていた。
異常極まる状態で射精させられて、その後更に舐め回されて完全復活させられる。
こんな流れで興奮が収まる訳も無く、俺は目の前にいる先生を逃が

さぬように、両肩をがしっと掴んだ。
「先生…いいですよね？」
もう、ここまで来たら。
覚悟を括ったその時。
「ああ、いくらでも…いいぞ～…むにゃむにゃ…」
「え」
さあ、ここから…。と思った矢先。
先生が、俺に肩を掴まれたまま首をかくんと曲げ、急に穏やかで間抜けな顔になってそのまま寝てしまった。
「…」
ベッドの３人への気遣いが無かったら、先刻の小町と同様に『…はあああああ!!?』って言いたかった。マジで。
もし今先生の部屋で二人っきりとかだったら、起こす前に挿入して途中で起こして…みたいなえげつないことをしていたと思う。マジで。
まあそんな事をぐるぐる考えていてもしょうがない。
先生のブラトップの肩紐を上げ…る前にその胸を１分程揉んで、改めて肩紐を上げた。ご馳走様です。
そして、川崎の口周りを拭いた。朝起きたときのお前の口の中が心配でしょうがない。口にモンダミン入れたら、寝ながらでも勝手にうがいしてくんねえかな…。
そして二人を元の場所に戻し、毛布をかぶせて、最後に二人の頭にぺしっとチョップをした。いけない子たち！
…何でみんな、寝るときの文尾同じなのん？
「…さて、どうすっかな…」
小声で呟いた。
パンツとズボンはきちんと上げたのだが、いかんせんまだ野営状態だ。
さっきまで事に及んでた二人に挟まれて、このまますんなり寝られる気はしない。一人は寝てて、一人は酔ってたけど。

…これ、もはやノーカンでよくね？自分で言って悲しくなったもん。部活仲間と妹が目の前にいる状態って頭おかしいでしょ。泣く。戸塚に会いたい…。

少し落ち着こうと思い、寝室を出てリビングに行った。

そこまで明るくしないように気を付けながら電気を点け、気を紛らわそうとカーテンを開けて夜景が見える状態にして、ソファにふっと腰をかける。

時計を見たら、３時近くになっていた。

…あんだけ興奮する状況下で、一回出すまでに１時間近くかかってたのか…そりゃ噴火みたいに出るわな。

一人で納得しながら、窓の外の街並みに目を向けた。

時間も時間なので、明かりはぽつりぽつりとしか見えない。

アパートの明かりもあれば、コンビニのような２４時間営業の店の明かりもあるだろう。

何となく、あの明かりの下で、今この瞬間にどんな人たちがどんな過ごし方をしているのだろうと思いを馳せた。

…僕は、卑猥な目にあってました。

一人で何とも言えない気分に浸っていると、リビングのドアがからりと開く音がした。

「…あら、比企谷君？」

「…雪ノ下」

流石に眠いのか、少しぽけっとした表情の雪ノ下がそこに居た。

「こんな時間にどうしたの？」

「ああ、一度起きたらちょっと目が冴えちまってな。お前は？」

「私は…その、由比ヶ浜さんと小町さんにあんまり抱き付かれるものだから、少し寝苦しくなって」

少しばかり苦味を帯びた顔で雪ノ下は笑った。

…小町と由比ヶ浜、明日は説教だな。ゆるゆりを継続するには加減が大事だときちんと伝えておこう。

「そうか。そいつはお気の毒に」

「あの二人は、まったく…。ふふ、楽しく過ごさせてもらってるから、まあ良いのだけれど」
良いんだ？大丈夫かい雪ノ下さん？選択ルート間違えないでね？他のルートは知らないけど。
「そうだわ、折角だから紅茶でも飲まない？淹れるわよ」
「おお、良いな。じゃあ頼む」
「はい」
慣れ親しんだ恋人のような、或いは仲の良い親子の様な会話に、何とも言えないむず痒さを覚える。
やはり雪ノ下と話すと、こう言う言葉少なに交わすやりとりが心地良い。
紅茶を淹れる雪ノ下の様子を眺めながら、つい頬が緩んでしまうのを感じた。
…ほんの１０分前までしてたことを考えると、何かよく分からんが尋常でない罪悪感…。
そこから数分も経つと、雪ノ下がこちらに戻って来た。
「はい、どうぞ」
「おう、ありがと」
雪ノ下からティーカップを受け取ると、その琥珀色の小さな水面にそっと息を吹きかけた。
大した会話もしないが、穏やかで優しい時間。
お互い、表情は柔らかかった。
紅茶ももうじき飲み終わると言うタイミングで、雪ノ下が話しかけて来た。
「…ねえ、比企谷君」
「ん、なんだ？」
そう答え、残った紅茶をくいと口に流し込む。
「…一緒に、お風呂に入ってくれない？」
「…はい？」

口の右端から、流し込んだばかりの紅茶がほとんどそのまま流れ落ちた。

…新しいルートが、開放されました？

続く。

（6）

状況を整理しよう。
俺の口の右端から、流し込んだばかりの紅茶がほとんどそのまま流れ落ちた。
よし。

「…はい？」
「…何で2回言うの…」
意外と冷静にツッコまれた。ちょっと恥ずかしい。
「え、わたし、が、あな、た、と？」
「片言にならないで。気持ち悪い」
罵詈雑言は冷静に言えるらしい。心が痛んで泣きそう。
「…何でまた急に？」
「…その、さっきの怪談で、だいぶ怖くなってしまったの。正直、あのままではずっと身体が震えてたかもしれない。由比ヶ浜さんと小町さんは私のその様子に気付いてくれたから一緒に寝ようなんて言ってくれた…と思うの。二人の様子を見る限りでは」
「あいつら…。素晴らしいな、友情ならぬ百合情…」
思わずほろり。ハンカチをお供に。
「…今、なんて？」
「なんでもないです」
あっぶね。あっぶね。視線の冷たさが絶対零度。
「だけど…心も身体も温かくなったのだけど…それでもまだ寒くて。…比企谷くんの話が、ちょっと強烈だったからかしら」
雪ノ下が少しだけ首を竦めた。
「…あ、それは…本当に申し訳無い」
や、マジで。チョイスミスだった。怖い話なら他にもレパートリーが23個くらいはあったのに。
第一あんな怖い話、川崎がけーちゃんに話せる訳もねえもんな…。
雪ノ下はマンションに一人暮らし…となれば、俺の話によるダメー

ジは計り知れないよな。
相当反省した。
「ふふ、良いのよ。…それで、ちょっとどうしたら良いか考えていたの。そしたら寝室から出て行く人の影が見えて。一人じゃなければ大丈夫だから、気分転換も兼ねてリビングに行くことにしたの」
そう言うことか。
「それで、あなたと紅茶を飲んでいたら、何かその…急に今言った案が思い浮かんで。何でかは分からないわ。
…何でかは分からないのよ？」
若干照れて念押しするのやめて。そこ2回言っても弁解にならないよ？俺、誤解しちゃうよ？
すると、雪ノ下が俺のすぐ隣にやって来て、腰を下ろした。
俺が座った時と比べて随分と軽い感触で、ソファが僅かに沈み込む。
「…弾みで言ってしまったのは拭えないけれど、それでも、私としては、…その、もし比企谷くんが良ければ、本当に一緒に、入ってほしいの…だけれど…」
そう言って雪ノ下が、俯きながら左手をすすすと動かした。
俺の右手にちょんと触れた瞬間、背中がぞわりとして思わず弾けるように手を避けてしまった。
なんつうヘタレだよと言う自己嫌悪に陥った。俺の自己嫌悪って珍しいぞ。
一瞬目が泳いで、視線を雪ノ下の顔へ戻すと…物凄くショックを受けた顔をしてた。
自己嫌悪が８０倍くらいになった。
「わ、わりい、今のはほら、俺ビビりだから…」
言い訳にもならない言い訳をしてしまう。
雪ノ下の表情は変わらない。今にも泣きそうな顔をのままだ。
もう少し冷静な状態でこんな顔を見たら、絶対『もっと泣かせてみよう』とか言う極悪なことを考えてしまうのだが、今はそんな余裕は無い。あ、考えてるも同然だなこれ。

今はなんか、とにかく、雪ノ下を悲しませたくなかった。
だから、俺のすぐ脇に置かれた雪ノ下の小さな手に、今度は俺から手を重ねる。
「…！」
ほんの一瞬で、雪ノ下の顔が幸せいっぱいの顔になった。
口角をめいっぱい上げた笑顔と言う訳では無い。
しかし、普段感情表現がそんなに豊かでない分、とても柔らかい笑みになっているのが普段とのギャップにより一目で分かった。
ああ、何だろう。今ならこのセリフを言える気がする。
戸塚、ごめんな。
『守りたい、この笑顔』
…小町に止めてほしい、この脳内悪ふざけ。
手を重ねた後、返事をしないとって思って迷っていた時間はほんの15秒程度。
しかし、リビングで微かに響く時計の針の音を余裕で追い越す自分の心臓の鼓動が、やけにうるさく感じられた。
「…ああ、まあ、それでお前が安心するんだったら…別にいいぞ」
左手で頭をぽりぽりと掻いてしまった。照れ隠しで余計に照れる。
「本当に…？」
雪ノ下がこちらに向き直り、俺の右手の上に自分の右手を重ねて来た。
突然の雪ノ下サンドイッチに、心臓がばっくんと大きく鳴った気がした。
「あ、ああ」
しばらく無言で向き合う。
お互い、しっかりと目を合わせて。
俺の目、腐ってるよ？良いの？
改めてきちんと顔を見て、顔立ちの整い方、吸い込まれそうな青みがかった瞳、淡く色づいた唇に目を奪われる。
ちょっと、自分が置かれてる状況にびっくりした。
俺、こんな綺麗な人にとんでもない誘いを受けてるんだ。

…現状を整理したら、帰りたくなった。信じられなくて。
「…お湯、張った方が良くないか？」
「…あ、そ、そうね。ごめんなさい。少し待っててもらえる？」
「ああ」
雪ノ下は慌てて立ち上がると、ぱたぱたと浴室に向かって行った。
ものの数分で戻って来て、再び俺の横に座る雪ノ下。
いつの間にか、髪を一つにまとめていた。
俺がクリスマスプレゼントで渡した、ピンクのシュシュが見え隠れしている。
浴室に行くときに付けたのだろう。
…このタイミングでって、ずるくない？
「お待たせしてごめんなさい。あと３０分くらいでたまると思うから…」
「そうか」
「…」
「…」
気・ま・ず・い☆
裸と裸の付き合いを目前に二人で待機って何？この緊張感に相当するものを今まで経験したことも見た事も無いんですけど？
緊張しすぎてシュシュのことにも触れられなかった。
…落ち着け、素数を数えるんだ。
１、２、３、５、７、１１、１３、１４…
いっけね、もう分かんなくなって来た。多分最後らへん間違ってる。
俺が冷や汗を背中にかいていると、雪ノ下が俺の肩にもたれかかって来た。
何も話さず、こちらを見ることもしない。
なのに、何故だか安心する。
雪ノ下の気持ちの安らぎが、俺に伝わったかのようだった。
「…」
「…？」

気が付くと、雪ノ下が至近距離で俺の顔をじっと見ていた。
何事かと思いつつ、その視線に誘われるように、俺も雪ノ下を見つめ返す。
二人の距離が、近い。
やがて、まるで最初からこうなることが決まっていたかのように、ごくごく自然に、二人の唇が重なった。
直前までうるさい程に聞こえていた心臓の鼓動も、時計の針の音も今は聞こえない。
夢を見ているような、そんな気持ちだった。
数秒程度ですぐ離れると、たまらなくなってもう一度したくなる。
今度は、雪ノ下の背中に腕を回した。
そしてもう一度、口付けを交わす。
今度は一度目よりも冷静に、しっかり息を吸って。
このとき、薄目で雪ノ下の顔を見た。
瞼を下ろし、長い睫が緊張の為かかすかに震えている。
気付けば、雪ノ下も俺の背中に腕を回していた。
きゅっ、と優しく力が込められる。
初めて、人を愛おしいと思えた。
今度、もう少し勇気が出せたら、舌を入れてみたいなって思いました。
「…ぷはっ」
今度は数十秒もの間、唇を重ねていた。
このままソファに二人で寄り添って寝て、朝を一緒に迎えたかった。
まあ、そんなことやったら次の朝は迎えられそうに無いけど。
そんな妄想も含めて、今この場でやりたい事が頭の中にがんがん浮かんでくるが、目の前に超重要イベントが残されているからそんなことを実際にやっている余裕は無い。
雪ノ下は余韻に浸りつつも、ふとその事を思い出したようで、時計をちらりと見た。
「お湯…そろそろ、たまったと思うわ」

「わかった」
短い会話を終えると、再び見つめ合う。
キスをもう一度したかった。
多分、雪ノ下も同じことを考えてる。
だけど、今またやり始めたら時間を忘れてしまって、その間にお湯があふれ出してしまう。
お互いその辺は妙に冷静で、何とか我慢して立ち上がった。
ほんの数メートルの距離だが、二人はどちらから言うでもなく手を繋いだ。
浴室に並んで向かいながら、少しばかり目線を下げて雪ノ下のうなじを一瞥する。
髪を結ったことによって見える、その透き通るような白い肌と、仄かに紅潮した頬とのあまりの美しい対比に、ごくりと息を呑んだ。
…これ以上の刺激に、俺、耐えられんのかな？
続く。

（7）

脱衣所に入ろうとすると、雪ノ下が不意に立ち止まった。
繋いでいた手に相対的にくんっと引っ張られ、少し仰け反る。
「？どうした？」
少しもじもじとしているのだが、廊下の窓は点けていないため薄暗く、その表情を窺うことは出来ない。
「…あ、その、先に脱いで入っていてもらえるかしら？その…いきなり目の前で裸になるのは…恥ずかしいの…」
やだ、この子可愛い。
「あ、ああ…分かった。じゃあ、すぐ済ませるから」
ぎこちなく答える。噛まないようにするのが精いっぱいだった。
繋いでいた手に汗が滲む。どちらがかいた汗なのか分からなかった。
慌てるようにぱっと手を離した時、無性に名残惜しいような気がした。薄暗がりの中に見えた雪ノ下の顔も、ほんの少し寂しそうに見えたのは気のせいだと思いたくなかった。
脱衣所に入ると、早速服を脱ぎにかかる。
「…。」
ふと、目に止まったのは、既に用意されて丁寧に畳まれている2枚のバスタオルだった。
これからしようとしている事を改めて実感して、思わず息を呑む。
…超速で脱ごう。
『ばばばっ』って言うマンガみたいな効果音を出しながら速攻で服を脱ぎ、几帳面な雪ノ下が不快に思わないように丁寧に脱いだ服を畳む。ただし超速で。
そして浴室のドアをからりと開ける。
入る間際に、
「雪ノ下ー、もう準備出来たぞ。先に入ってるからなー」
と、控えめな声で言った。
「ええ、わかったわ」

俺と同じく控えめな声で返事をする雪ノ下の声を聞くと、俺は浴室のドアを閉めた。

「…情けねえ」

思わず呟く。

タオルを腰に巻いて風呂椅子に腰をかけたのだが、状況を考えたらマイサンが元気になっていても何らおかしくはない。

しかし、緊張の為か…全っ然。全っ然だ。何の反応も無し。泣いちゃう。

これならまだ、小学校の時に勇気を出して話しかけた大人しそうな女の子の方が反応してくれていた。

おばけでも見たようなリアクションをして、涙目で逃げたっけな。

…いっけね、視界が滲んで来た。

セルフ墓穴堀りに興じていると、脱衣所に人影が現れた。

ごそごそと動くと、しゅるりと言う音が聞こえて来る。

音の大きさはほんの僅かだったのに、はっきりと聞き取れた。

なんで俺こんな神経過敏になってんの？狂経脈なの？龍鳴閃には気を付けよう。

間も無く、からりとドアを開ける音がすると、薄いタオル一枚を纏った雪ノ下が現れた。

一瞬、いや、数秒だろうか。

呼吸をするのを、忘れてしまった。

透き通るような白い肌の持ち主だなんて言うのは、出会った瞬間から分かっていた。

だが、いざこうやって全身を見ることが出来る状態になると、また一段と美しい。

身体のラインやくびれ、慎ましくもどこか色香を漂わせる胸元。

…これ、バスタオルを剥いだらどうなんの？って言うかこの後具体的にどうするの？

頭の中を色んな考えが巡った。１０割邪念だけど。

「…あ、そ、その…」

ぽけーっと見惚れていると、雪ノ下が恥ずかしそうに口ごもった。
「？なに？」
「あ、あまりそんなに見つめないでもらえるかしら…は、恥ずかしいの。それに…」
え、なにこの照れ方。可愛過ぎるんだけど。本当に君、俺が知ってる雪ノ下さん？
あれ、何かこっちを見て…どこに目線を向けてんだ？
目線の先を追った。
…めっちゃ勃ってる☆
死にてえ…。
「…あ、えーと、いつからこうなってた…？」
あれ、死にたすぎて更に自分を追い込んじゃったよ、俺。
雪ノ下は顔を手で覆いながら、指の隙間から少しだけ、その綺麗な瞳を覗かせる。
「…あ、あなたが私のことを見つめてたら、視界の端にあったそれが段々と…」
…うーわっ、超死にてえ。
「…そうか」
いや、『…そうか』じゃねえよ、俺。何この最悪なスタート？
ってか、俺のってこんな大きかったか？今までこんな大きさになったの見たことねえよ？
「お、男の人って…皆そんな風になるの？」
「それは人によるかな。俺はいつもはここまで大きくならないって言うか、今まで一番大きくなってるみたい…って、あ」
口をボブスレーばりに滑らせてしまった。
『あ』の遅さと意味の無さが異常。
手で覆われた雪ノ下の顔が、更に赤くなるのが分かった。
「…で、どうするよ？」
浴室の入り口に立ったままの雪ノ下に呼び掛けると、ようやく顔を覆っていた手を下ろした。
「そうね…まずは」

そう言うと、俺のすぐ後ろに風呂椅子を持ってきて、腰を下ろした。
「え…あの…？」
うぶな後輩キャラみたいな声を出してしまった。純粋さが足りない。
がちがちに緊張している背中に、雪ノ下の額がこつんと当たった。
「ま、まずは、私があなたの身体を洗うから、その後は私の身体を洗ってもらえるかしら…」
そう言って、今度は両手を背中に添えて来た。
…これ、断れる男ってこの世に存在するのん？
「…が、がってんだ」
突然の江戸っ子登場。今日の俺はキャラがよくブレる。
雪ノ下が小さな声でふふっと笑うのが聞こえたかと思うと、その細い手が俺のすぐ脇に置いてあったボディソープの方へ伸びた。
お互い無言のまま、雪ノ下が黙々と俺の背中を洗う。
タオルを使えば良いのにと思ったが、実際始まって雪ノ下が俺の背中を手で丹念に撫で回して来ると…うん、別に手でも良いよね☆って思えて来た。むしろ素手推奨。
雪ノ下は男の背中に興味津々なのか、同じところを何度も何度も撫で回す。
ときどき脇の近くを通ると、くすぐったくて変な声が出てしまった。
マイサンは勿論、大使館前のデモ隊並に立ちっぱなし。あ、あれって座り込みもあるんだっけ。
必死で雑念を頭に入れ込んでいると、雪ノ下の声がした。息が背中にかかって少しぞくっとする。
「次…前を洗いたいから、こっちを向いてもらえるかしら」
声は震えていたが、確かな口調で告げる。
自分でちゃんと声になったのかも分からないような返事をしながら、ゆっくりと振り向いた。
互いに、タオルで大事なところを隠している。
…どうしよう、この状況？

すると、雪ノ下が顎に手をやり少し考える様子を見せ、こちらを向いた。
「この状態なら…お、お互いに洗い合えるわよね…？」
…すげえこと言ってきたー。
言葉を言い終えると同時に真っ赤になった。目を逸らした後ちらっとこっち向くのやめて。すげえどきどきするから。
しかし、見たい。それ以上に、見せた…い…間違えた、見たい。
「…そうだな」
乗ってみます。
「じゃ、じゃあ…」
雪ノ下がおずおずと、こっちのタオルに手を伸ばして来た。
え、脱がし合い？
しかし抵抗はせずに見守る。
太腿に乗せていただけのタオルは、あっさりと落ちた。
「…あ…」
雪ノ下が言葉を失った。
恥ずかしさで俺のモノから目を逸らすのかなと思ったけど、むしろ視線を縛られたかのようにじっと見つめている。
そして、俺のモノを凝視したまま、震える両手が伸びて来た。
右手が亀頭に、左手が竿の部分に触れる。
くすぐったさと気持ち良さが、同時に頭の中を駆け抜けた。
「…すご…い…」
口角がほんの僅かに上がり、うっすら微笑んでいるのが分かった。
今まで見たことの無いその表情に、心臓がおかしくなりそうなくらいにばくばくと鳴っている。
「…あのー、雪ノ下さん…？」
俺の呼びかけではっと我に返り、あっと言う間に顔が真っ赤になる。
猫ににゃーにゃーと話しかけている時に俺が声をかけた時と、少し反応が似ていた。
「あ…ご、ごめんなさい。じゃあ…」

そう言って、俺に身を委ねるかのように目を閉じて、手を自分の腿に置いた。
タオルの結び目に手を伸ばし、ゆっくりと解く。
解けたタオルが床にはらりと舞い落ちると、雪ノ下の肢体が露になる。
「う…お…」
思わず、感嘆の声が漏れた。
美しい。
その一言に尽きる。
全身を見て改めて感じる、透き通るような白い肌。
頬と唇の色合いの違う朱色が更に映える。
俺の視線は目を閉じていても感じるのか、雪ノ下はもどかしそうに内股をもぞもぞとさせた。
「じゃ、お互いに洗うか」
「ええ…」
まず俺が、そして次に雪ノ下が、手にボディソープを付けた。
俺は雪ノ下の胸を、雪ノ下は俺のモノを、全く同時に触った。
「――――――――――!!?」
互いに、背筋をぶるぶると震わせて言葉を失った。
互いに刺激を与え合っただけで、こんなにも気持ちが良いのか。
ならば、この先は、一体どうなってしまうんだろう。
期待と不安と興奮が、頭の中でごちゃ混ぜになった。
「…ひ、比企谷…くん…」
「雪ノ下…」
吸い込まれるように唇を重ねた。
雪ノ下の手は、いつの間にか俺の背中に回されている。
顔が見たかったのはお互い様だったのか、どちらもうっすらと目を開けて、相手の表情を確認する。
舌を絡め合う度に、頭の中で火花の様な物が何度も明滅して、思考が麻痺して行った。
そこから、手を徐々に動かし始めた。

柔らかさを楽しむように揉みほぐす度、雪ノ下は可愛らしくびくんびくんと震える。
しばらくその感触を楽しんだ後、指を突起に近付けて行った。
何が起きるか分かったのか、雪ノ下は一瞬目が動揺で泳ぐ。
どうなるか楽しみだなんて思いながら、両方の突起をきゅっと摘まんだ。
「〜〜〜!!」
キスをしている為大きな声を上げることは無いが、口の中でくぐもった甘い声が響き、直接脳内に雪ノ下の声が届くような錯覚を覚えた。
「んんっ…んむぅっ…んんんん…」
突起を摘まれながら、俺を抱きしめる力を強くして、必死で甘えるように舌をねじ込んで来る雪ノ下。
俺のモノは密着した彼女のお腹に擦れ、彼女が身を捩る度に裏筋がぐちゅぐちゅといやらしい音を立てる。
興奮の余り、頭がどうにかなりそうだった。
「…んあっ、比企谷くん…比企谷くん…」
一度唇を離すと、蕩けた瞳で俺を見つめ、何度も名前を呼んで来る。
胸にやっていた手を背中に回し、雪ノ下をぎゅっと抱き締めた。
俺の耳元でも何度も何度も名前を呼んで来て、その度に俺のモノがびくっと反応した。
「比企谷…くん…ここも…触って…?」
一度シャワーで互いの体のボディソープを洗い流すと、雪ノ下が少しだけお腹を凹ませ、腰をこちらに突き出した。
…ここに、俺のを挿れるんだな…。
この後どこまで行くのか分からないが、きっとそうなるんだろう。
そんな風に考えて、ぞくっとした感覚を覚えた。
俺は無言のまま、綺麗なピンク色をした割れ目に指を伸ばす。
中指で、そっと表面を撫でた。
「ひんっ…」
少し高めの声を上げて、雪ノ下がぶるっと震える。

その反応を楽しむように何度も表面に指を這わせると、その度に雪ノ下は分かりやすいくらい大きく震えた。
少し指を離せば意図を引く程に濡れてねばついた秘部に、そっと中指を入れる。
「んんっ…！」
悲鳴にも似た喘ぎ声を上げると、声を出したくなかったのか、雪ノ下は俺の首筋に噛み付くかのように口付けをして来た。
思わぬ反撃に、背筋がぞくぞくとする。
それでも負けずに、中指を膣内で折り曲げると、膣肉が指をきゅうきゅうと締め付けて来た。
「〜〜〜っ」
首筋に吸い付いていた雪ノ下の顔が弾けるように遠ざかる。
背中を仰け反らせ、天を仰ぐかのように顔を上に向けた。
一瞬見えた顔は、快感と羞恥で蕩けてしまい、目には涙が浮かんでいた。
首筋を俺の目の前に完全に晒したいる状態を見て、俺はお返しと言わんばかりに雪ノ下の喉仏の辺りに吸い付いた。
「!?だめ、比企谷くん、そこ、だめ…んんんん…!!」
俺を首から引き離そうにも密着していてそれも叶わず、自分の中でどんどん動きを大きく激しくして行く中指によって快感の波が幾度と無く頭の中に叩き付けられて、雪ノ下の言葉はどんどん理性を失って、徐々に幼く、可愛らしくなって行く。
「んぐぅっ…比企、谷、くん…だめっ…ひぐぅっ…だめ…お願いらから…ゆるして…もうこれ以上は…ひんっ…もう、だめ、だめだめ、だめ……んああっ!!」
膣に入れていた中指を一度大きく反らせ、肉をかき分けるようにぎゅっと折り曲げると、雪ノ下の細い肢体が弾ける様に大きく跳ね、静かに、痙攣した。
「…あぅっ、はっ、はっ、んんっ、んっ…」
惚けた目でこちらを見つめては、まるでおねだりをする子どもの様に甘えてすり寄ってくる。

軽く唇を重ねると、不満げな顔になりもう一度迫って来る。
舌で口の中をかき回してやると、それはもう幸せそうな表情で笑顔を浮かべてそれに応える。
もはや我慢の限界だった。もう、大丈夫だろう。
「雪ノ下…挿れるぞ」
雪ノ下の頬に右手を添えながら言うと、言葉を発さぬままに、こくんと小さく頷いた。

俺と雪ノ下が持っていたタオルを重ねて、ささやかながらクッションにする。
そこに寝転がろうと雪ノ下が四つん這いで向かう。
その後ろ姿…と言うよりもお尻を見て、俺は思わず手を伸ばした。
「!?」
がしっと両手でお尻を掴まれ、一瞬驚く雪ノ下。
だがそんな彼女にお構いなしに、彼女の秘部へ指を挿れる。
しかも今度は、中指に加え薬指も挿れた。
俺の指2本をあっさりと受け入れた雪ノ下の膣は、入り口はぐちょぐちょに濡れていながら、中は先程以上にいやらしくきゅうきゅうと締め付けてくる。
その感触だけで、俺がイってしまいそうだった。
指を大きく曲げて伸ばしてを往復させると、雪ノ下は顔を床に伏せてぶるぶると震えながら、何度も何度も絶頂に達した。
3回目の絶頂にもうすぐ達すると言う時に、小さな喘ぎ声で『にゃぁぁぁ…』と鳴いたのが、また更に興奮を煽り立てた。
本番前にくたくたになってしまった雪ノ下が、ようやく所定の位置に付いて仰向けに寝た。
「全く…忘れたの？これでも私、体力だけは全く無いのよ」
「あ」
そうだった…。
ってか、何でそれを自慢げに言ったの？そんな恥ずかしさＭＡＸの体勢で。

「しょうがないわね…。…だから」
手を膝の裏に回すと、ゆっくりと足を開いて、
「あなたの手で…めちゃくちゃにして？」
俺の中に僅かに残っていた理性の残滓が、音も立てずにちぎれ飛んだ。

雪ノ下の頭の後ろに手を回す配慮だけすると、俺のモノをゆっくりと、しかし決して止めずに、ずぶずぶと突き入れた。
最初は痛みを感じていたようだったが、何度もキスをして舌を絡めた後、突起を口と指でいじめる様に愛撫すると、どんどん甘い声を出して行った。
雪ノ下の手は俺の首の後ろに、細長い足は俺の腰に回され、身体を限界まで密着させる。
徐々に腰を打ち付けるスピードを速め、快感を高めて行くと、雪ノ下の思考能力がどんどん削り取られて行くのが分かった。
「んあぅっ！あ…かはっ…ひんっ！あぅ…あ…比企谷くん…あぐぅっ…好き…もっと…もっろちょうらい…」
涙を流しながら、呂律も回らぬままにもっともっとと懇願して来る彼女は、普段の理知的な印象など完全に吹き飛んでいて、ひどくみっともなくて、色気にまみれていて、そして。
どこまでも、愛おしかった。
腰を大きく引いて全力で打ち付けると、彼女は嬉しそうに、だけど少し控えめな声で、甘い鳴き声を上げた。
恐らく１０分程経過しただろうか。
雪ノ下はもう、まともに声を上げることすら出来なくなっていた。
まぐわっている間も何度も絶頂に達し、その度に俺のモノはぎちぎちと締め付けられていた。
俺も、もう限界がすぐそこまで来ていた。
「雪ノ下…俺、そろそろ…」
俺の言葉が聞こえたからか、目に光が戻る。
「…いいわよ。出して…」

そこには、口調も表情も、いつもの調子に戻った彼女がいた。
しっかりと記憶に残るようにして、受け止めたかったのだろうか。
俺は再び唇をゆっくりと重ねると、再び腰の動きを速めた。
「…出る、出す、出すぞ…雪乃…!!!」
「――――――――――」
一瞬、目の前の視界が白く霞んだように思えた。
俺が大量の精を雪乃の子宮に叩き付けるように流し込むと同時に、雪乃の意識はぷつりと途絶えた。

しばらく休憩をした後、俺と雪ノ下は同じ湯船に遣っていた。
俺が後ろで、俺の股座に雪ノ下が座るような体勢にしている。
「…今度、いえ、出来たら今夜にでも…」
「ん？」
ぽそっと呟いた雪ノ下に、彼女の頭を撫でながら返答する。
すると、彼女はこちらにゆっくりと振り向いた。
「また、ここに来てくれないかしら…？今度はベッドでしたいし、その、声を我慢せずに…したいの」
…なんつうエロいことを言い出してんだ。
しかしこの言葉を聞いてようやく、何故ここまでして声を抑えようとしていたのかが分かった。
ま、そりゃそうだよな。
…っつかやばい、今の聞いてまた勃っちまった…。
「…ああ、行くよ。また『にゃぁぁぁ…』って言う可愛い鳴き声、聞きたいしな」
「…！」
予想通り、いや、予想以上に、顔が真っ赤になった。くっそ可愛いなもう…。
「…この、変態…。」
「へーへー、変態でございますよ」
「今もこんなにして…」
そう言ったかと思うと、背中をよじって、俺のモノを擦り上げて来

た。
…バレてたー。そりゃそうですよね。
「…ああっと…もう一回ヤリたいんだけど、いいか？」
「…」
雪ノ下は前を向いて俺からその表情が見えないようにすると、こくんと頷いた。

その後、浴槽の中で立って、雪ノ下は浴槽の縁に手を乗せて俺に尻を突き出す姿勢を取り、後ろから挿れた。
先程とは違う角度で挿れられたことでまた違う快感が生じたのか、一瞬で背筋を仰け反らせる。
声を抑えられないと思ったのか、俺に口を塞いでとせがんで来た。
自分で押さえられるだろうと思ったが、ここはそっちのが興奮するよななどと冷静に考えながら、左手の人差し指・中指・薬指を雪ノ下の口にねじ込んだ。
あまりに熱心にしゃぶられたせいか、俺のモノが2回目とは思えない程に大きくなる。
程なくして、2発目の精を雪ノ下の子宮に流し込んだ。

風呂から上がったものの、すぐに寝室に戻って寝られる程冷静にはなっていないと言うことで、俺たちはもう一度リビングのソファに並んで腰かけていた。
雪ノ下が、風呂に入る前と同じように手をすすすと近付けて、俺が拒否しないことを確認すると、安心したように手を重ねて来た。
「…また、してる時だけで良いから…名前で呼んでね」
そう言って、俺の手をきゅっと優しく握る。
「…おう」
言葉少なに答えて、そっと握り返した。

朝になると、由比ヶ浜と小町はいつも通りの様子で起きていた。
しかし川崎は、俺のことを見ると昨夜の記憶がどこまで本当だった

のかとか、口の中に残っていたあの苦い液体はまさかとか色々考えたのか、俺を見るとただただ顔を真っ赤にして俯いて、黙りこくってしまった。何この顔、いじめたくなる。

平塚先生は、語調と表情で全力で謝罪の意を表しながら、『…すまない』とものすごい神妙な面持ちで謝ってきた。大丈夫ですよとさらりと言うと、『かくなる上は責任を…』と言って迫って来たので、それをやんわり受け流した。どうも、あっさり許しても向こうが納得しなそうだったので、その内お詫びとしてその胸でやってくださいって冗談のつもりで言ったら、結構満更でもない顔をされた。あれ、どうしよう。『場所は…学校の男子トイレの個室が良いか？』ってものすごく具体的に聞かれた。ほんとにどうしよう。恥じらいながら言ってて可愛いけど、セリフえげつないですからね？

「ああそうだ、比企谷くん」

皆で雪ノ下の家を出るとき、最後に靴を履いていると、不意に呼び止められた。

「なんだ…よ…」

後ろを向くと、一瞬の隙に唇を奪われた。

さっと離れると、皆には聞こえないような小さい声で

「…また、今夜ね？」

と言い、可愛らしくも少し艶っぽさを孕んだ微笑みを浮かべた。

「…ああ、連絡する」

そう言って、雪ノ下の家を出た。

…ああ、誰も見ていないなら、全力でにやけて悶え転げまわりたい。

絶対、気持ち悪いけど。

お終い。

川崎沙希の泣き顔は思いの外そそるものがある。

（1）

ある日の夜、比企谷家にて。

ソファに寝転がり、ＰＳ　Ｖｉｔａでだらだらゲームをする。夕ご飯の後は本を読むつもりだ。マジ休みって最高。外になんて予備校以外で一歩も出るもんか。

いつも以上に光を無くした目でパンダのようにだらけていると、小町がリビングに入って来た。いつ見ても可愛い。

「ごみいちゃーん」

「おう、のっけから飛ばすじゃねえか妹よ」

入りから辛い。一応俺のこと好きだよね妹よ？

「なんかねえ、大志君が『勉強の息抜きがてら遊ばないっすか！』って誘って来たんだ」

あん？

「親父の部屋にショットガン置いてあったよな」

「比企谷家にそんな設定ありませんー」

「じゃあ『私の欲求は全て兄が満たしてくれるので近付かないで下さい』って返事しとけ」

「ごみいちゃん、流石の小町でも引くよ…」

肩を抱いて引かれた。しかし毒虫から愛しの妹を守らねばならぬ。

「適当にはぐらかしゃ良いんじゃねえの」

「んー、でも一度くらいぜひ！って言う言い方されてて…断りづらいんだよねー」

以前川崎姉弟とうちの兄妹でサイゼで話した時も思ったけど、こう言う面では少し大志…もとい毒虫に少しだけ同情する。ほんの少しね。

どうしたものかと顎に人差し指を当てつつ考えていた小町が、何かを閃いた顔をした。頭の上に電球が見える。何か技を閃いたのかな？

「あ、そだ。お兄ちゃんと沙希さんも誘って４人で遊びに行けば小町も普通に楽しめるかも！」
「ん、俺は小町だけ見て小町を撫で回してれば良いのか」
「ごみいちゃん…」
悲しいものを見る目で見るなよ。お前どこの雪ノ下だ。
しかし、案としては悪くない。外に出るのは死ぬ程面倒だが、川崎と居る分には無理して喋らなくても、もっと言えば全く喋らなくても大体何とかなる。
外に出るのは面倒だが、小町とも遊べるしな。
…外に出るのは、死ぬほど面倒だが。
「しゃあねえ、付いてってやるよ。一応念の為、背中にフライパンを忍ばせとくからな」
「？お兄ちゃん、時々意味分かんないこと言うよね」
おうふ、世界征服の夢は言っても通じないなこれは…。
「あ、それでお兄ちゃんに聞きたいんだけど、女の子を見ててキュンとする、もしくはそそる仕草ってある？」
「？それを聞いてどうするんだ」
「んー、４人で遊び行くときに役立ててみようかなって」
「待て待て待て。ならん、ならんぞ。そんなことをしてあの毒虫を徒に誘惑しようもんなら何をされるか分からんぞ。そんな毒虫から小町を守る為ならば僕は悪にでもなる」
そして家なき子になる。
「あー違う違う。お兄ちゃんに向けて役立てるの。お兄ちゃんのツボを心得ておけば、おねだりでたくさんむしり取り…得出来るかなって思って！」
これはこれで嫌だった。
言い直しても内容が内容だぞ。
「その目的だとキュンとするのは分かるけど、そそるのは何か違うだろ…」
「いいからいいから！何か無い？」
うーん…身近な女の子が雪ノ下と由比ヶ浜くらいだからなあ。あ

と小町天使と戸塚大天使。
あ、戸塚は性別が戸塚だったな。危ない危ない。
「んー…。…あ、泣き顔、とか結構良いかも」
雪ノ下と由比ヶ浜の和解の時のことを思い出した。あれを見た時の感情はそそるとは言わないと思うけど、何気に女の子の涙は結構好きかも。
あと、縦ロールさんが何と無く思い浮かんだ。泣いたってのは伝え聞いたことしか無いけど。
…あれ、小町がどん引いてる。
「え、なに、ごみいちゃんドSなの？その腐った目でドSはやばいよ！ハマったら女の子は抜け出せなくなりそう」
ほう…。
「マジで？」
「ちょっと、聞き直さないでお兄ちゃん。二回言うのもきついんだから」
なんかごめん…。
由比ヶ浜だったら、多分15回くらいキモいって言ってんだろうな。
「泣き顔かー…ま、泣き真似の練習くらいはしておくかな」
「ばかやろう、嘘の涙に絆される程俺の目は腐ってねえよ」
「え？腐ってるよ？」
こいつ…。
キョトンとした顔で言うんじゃねえよ。可愛いだろうが。
「そうだ、こうなるともう一つ聞いておきたいことが。沙希さんてお兄ちゃんから見てどんな人？」
「ん？ああ、川崎…口下手、怖い、ブラコン、て辺りかな。あと、黒のレー…何でもない」
「？そっか、大体お兄ちゃんと一緒だね」
え、それぞれの意味をだいぶ広く捉えてるよね？そうだよね？
黒のレースのパンツとか履いてないし。
「そっかー、でも大体分かるかも。大志君と話してる時の沙希さん、目

が凄く優しいんだよね」
おお、そんな所にまで目が向いているとは。流石妹。
「あと、すんごい綺麗だよね。胸も大きいし」
「…ん？」
おい、急にどうしたんだ。
「あ、折角だからこの機会にお兄ちゃんの周りのフラグをもう一本増やしておこうかなーって」
お前はどこのマンガの淫乱ピンクだ。ハーレム計画とか言い出すんじゃねえぞ？
「ばか、俺の周りにフラグなんて一本たりとも立ってねえよ。雪ノ下の胸ばりに平野が広がってらあ」
「…ごみいちゃん…流石過ぎて、改めて引くよ。
早くごみいちゃんの引き取り手を見付けられるように、小町頑張るね！」
すげえ輝く笑顔で悲しいこと言わないで…。
「あ、雪乃さんの悪口はきちんと報告しておくから」
「何が欲しい？ハーゲンダッツ？ねえ、何？」
必死で媚びへつらった。

…と、言う訳で。
何か少し面倒なことになった。

泣き顔なあ…あ、そういや川崎文化祭のとき、一回泣きそうな顔を実際に見たっけな。
…結構そそるかも、あの顔。
いかんいかん俺、こんなので興奮してたら本当に捕まるぞ。
あ、同意の元でなら良いのか。
…いや、同意を得ること自体ねえか…。

続く。

（2）

…と言う訳で、翌日。早速４人で遊びに行くことになった。
それにしても、昨日の今日とは…小町さん、仕事早すぎません？やはり将来はこの子に養ってもらうしか…。
朝食をのんびり食べて、全く急ぐこと無く着替えをしながら、妹との将来についての妄想を膨らませていると、小町に脇腹を小突かれた。
「ほら、ごみいちゃん、行くよ」
妄想がばれたのだろうか、最初からごみいちゃん呼ばわり。俺そんなごみごみしいの？
とにかく、二人で集合場所へ出発した。

集合時刻は午前１０時。
あと１０分もすれば集合場所に着くと言う状況で、現在時刻は午前９時半。
ここまで念を入れなくて良かった。何なら行かなくていいまである。
「なあ、小町」
「なあに？」
比較的混み合っている電車の中で、窓から見える街の景色を眺めながら話し始める。
「時間も結構余裕あるしさ、ちょっと寄り道しないか？そんで好きなもの買ってやるから、そのまま二人でぶらついて帰ろう」
我ながら完璧なプラン。これなら誰も傷を負うことが無い。大志もデートしたらしただけ辛くなるのは目に見えてるし。
…あ、それならデートした方がいいのか。
「…あー、…やっぱり４人で遊ぼう」
すぐ切り替えた。思考の柔軟性に我ながら惚れ惚れする。
「どっちなの…」
すんごい冷たい声で言われて、ちょっと心がひしゃげたけど気にし

ない。
　そんなことを話している内に、電車が目的地最寄りの駅に着いた。
「お兄さん、おはようございます！この間はありがとうございました！」
「黙れ毒虫。お前にお兄さんと呼ばれる筋合いは無い。今すぐ帰れ」
　俺はこう言う熱いタイプは別に嫌いでは無い。興味が無いだけだ。
　しかし、妹にその毒牙を向けると言うなら話は別だ。
　いつも何度でも、身体のどこかしらをへし折ってやろう。なんなら名前の一部を奪って家に帰れなくしてやる。
「…うちの弟に何暴言吐いてんだあんたは」
　冷たいの声の元を辿ると、川崎が大志のすぐ後ろから、それはそれは凍えるような視線を飛ばしていた。
　雪ノ下と似ているようで、違う冷たさ。
　もっと言うと、川崎自身もいつもの冷たい感じと、今のように大志関連で冷たくなる時とでは若干異なる。
　全く、ブラコンめ・・・。可愛いもんだ。
　そんな風に考えると、こいつのこのキャラもほとんど怖くなくなる。
　いざ見られるとなんやかんやで結構怖いけど。
　あ、やっぱ怖いや、うん。
「よし、揃ったな、んじゃ行くか」
　怖さを克服して微笑み返すなんて言う高等なことは出来なかったので、素早く切り替えることにした。
「…」
　４人で歩いているとき、ふと今日のメンバーの服装に目をやった。
　小町は薄緑のワンピース。可愛い。活動的な格好も、こう言う女の子らしい服装も似合ってる。つまり、ただの天使だ。
　大志は普通のＴシャツに普通のジーンズ、そしてショルダーバッグ。

ああ、お前は普通だ。だから小町天使とは身分も種族も違う。諦めろ。
川崎は、黒のキャミソールの上に1枚羽織って、下は青のジーンズとシンプル。バッグは手に持ち、手首を返して肩に乗せながら歩いている。
そんなシンプルな服装で何気なく歩いているだけでも、彼女のスタイルの良さが際立つ。
…あれ、開いた胸元に目が行く。いかん、乳トン先生再び。
目を高速で泳がせていると、川崎がこちらを見ていることに気付いた。
俺の視線を追って、どこに目を向けていたのかに気付いたようで、急に顔が赤くなって
「…どこ見てんだよ」
とぼそっと呟いた。どこの青木さん？
てっきり思い切り睨まれると思ったんだが、恥じらうようにこちらを一瞥しただけで、その後は別段何も言ってこなかった。
ん、何この反応？逆に俺が恥ずかしくなってきた。
俺たちの様子を見ていたのか、小町が興味深げに話を振ってくる。
「お兄ちゃんと沙希さんって、どこで知り合ったんですかー？」
何この馴れ初め披露。んなもんどっちかの家族に結婚の挨拶に行ったときに聞いとけ。行かないけど。
「ああ、あたしが屋上の給水塔でくつろいでたら、同じく屋上に来てたこいつの進路希望の紙が風で飛んで来て…そのときかな、初めては」
「ああ、そうだな。あの時鮮やかに見えた黒のレー…」
「ん？」
川崎がぴたりと立ち止まった。
やっべ。ここで誤魔化しをミスったら即座に死ぬ。視線による凍死か打撃によるショック死。
「…―ルガンってすげえよな、通常の銃弾に比べて遥かに早い弾速で相手を吹っ飛ばせるんだもんな」
「…はあ？何の話をしてんだ？」

あっぶね、雑だけど何とか誤魔化せた。
ありがとう、黒猫さん。
「ふむふむ。じゃあ、そのときの第一印象は？」
引き続け質問を続ける小町。そんなん言われましても。
「ああ、こいつ進路希望に専業主夫なんて書いてて、現実見てねえなと思ったよ」
そう言うと川崎は、ふっと笑った。
その笑い方は、出会った当初より少しだけ柔らかくなったように思える。
ちょっとだけ、ほんのちょっとだけ、俺の言葉にどう反応するのか気になった。
なので、少しだけ揺さぶってみる。
「俺は、ああ、綺麗だなーと思った。冷たい印象はあったけど、スタイル良いし、顔立ちも整ってるし、泣きぼくろが妙に色っぽいし」
どうだ。キモがられたらそれまでだけど、そんなのもう慣れてるから平気だぜ！ちょっと夜に枕を濡らす程度だぜ！
「!?な、な、な・・・そ、そんな、え・・・」
あれ、ん、あれ？
めっちゃ照れてらっしゃる。
顔を真っ赤にして、手を顔の前でわたわたと交差させてる。
ちょっと可愛いかも。あれ？
まあ、可愛いからと言って俺がどうこうする訳でも無いからそれまでなんだけど。
「…そっか、綺麗…そっか…」
髪を指でよりよりしながら俺の言葉を繰り返すのやめて、恥ずかしいから！
これで『えへへ…』とか言ったらもう何ヶ浜さんだよって話になるぞ。
あっれー、なんか反応が予想以上に…あっれー？
俺が面食らっていると、小町の目がヤマピカリャーみたいに光った。イリオモテヤマネコのことだにゃー。

「おやー、この感じ…沙希さんが将来きっちり働いて頂けるなら、お兄ちゃんをお任せ出来るかもですねー？」
目がすんごいらんらんとしてるぞ、妹よ。ヤマピカリャー。
「!?な!?だ、だから、そんなの有り得ないって…！」
川崎さんの顔が更に赤くなった。ちょっと待って、あんまそう言うリアクションされると俺まで変な気持ちになっちゃう。
ふと、会話に全く参戦出来ないでいる大志と目が合った。
分かる、分かるぞ、会話に加われない寂しさ、疎外感。
だから俺は、彼の肩に手を置いて優しく語りかけた。
「大志…帰っても、良いんだぞ？」
「！お兄さん、ひどいっす、帰らないっす！」
「誰がお兄さんだ誰が。帰っても良いは優しすぎた。お前、帰れ。土に」
「死ねってことっすか!?」
そろそろ川崎が止めに入るかなーと思ってそろりと目線を向けると、顔を真っ赤にしたまま「そんな…お任せ出来るかなんて…大体いきなり綺麗とか言われたら…」とかってぶつぶつ言ってる。
乙女全開の表情やめて。なんかすごい恥ずかしくなってきた。
夏に恥ずかしさで体温上がるとか即座に死に繋がるから。
ほんとに！
顔が赤くなってるであろう俺の耳元に、小町が近付いて囁いて来た。
このまま抱きしめて良いのかな？良いよね？
「お兄ちゃん、どう？」
「どうって何が」
「フラグ、もうびんびんでしょ？」
「言い方言い方」
年頃の女の子がびんびんとか言わないの。
って言うか年頃じゃなくても言わないの！
取り敢えず、今日と言う日がすんなり終わりそうにない予感がすんげえする。

「お兄ちゃん、どこから行くー？小町行きたい場所があるから、そこ行ってる間に考えといて！」
あれ、大志の意見とか反映されないんだ。普通に頷いてるけど、いいのか？
まあ、こいつの希望なんて聞く気は芥程も無いけどな。
「わかった。どこ行きたいんだ？」
「えっとねー、映画館！見たいのは決めてないんだけどー」
おうふ、アバウトですね。
しかしまあ、いきなり４人で積極的に遊ぶのも中々厳しいしな。そう言う意味では中々良いチョイス。流石です妹よ。
「わかった、んじゃ行くか」
二つ返事で承諾して、映画館に向かうことにした。

映画館に入った時間は１０時２０分くらいだった。
上映時間が近いものと、見たいジャンルで絞り込みを行う。
ふと、ある映画に目が行く。
それは普段ならまず見ることは無いのだが、今日はちょっと興味が湧いた。
「じゃあ…これにするか」
「え、お兄ちゃん、これ…？」
「こ、これは、中々っすね…」
「へ…これ？これ見るのか？本当に？」
３人が一様に固まるのも無理は無い。
俺が希望した映画は、最近話題のジャパニーズホラーだった。
時折深夜のＣＭで、メインのキャラと思われる、黒髪で長髪の白い服を着た女性が古びた画面の中に映し出され、不意にズームアップしたかと思うと女性の充血した左目がどアップになり、
ミンナヲ　ウラム
と言う血文字が画面の上下におどろおどろしく出て来て、次の瞬間にざざざっと言う音と共にその文字が左右反転して女性の目が白目

を剥くと言う、えげつない映像が放映されている。
以前小町とリビングに居るときにそれを二人で見てしまい、小町が俺に泣きながら抱き付いて来て、その後しばらく泣き止まなかったのは記憶に新しい。
…あれ、苦情出てるよね絶対。
「お、お兄ちゃん、ほんとにこれ見るの？
だってこれ、前ＣＭで見たやつだよね・・・？」
小町もしっかり覚えていたようだ。
本当なら兄として妹を怖がらせるような真似などしたくないのだが、今日はちょっと、川崎の泣き顔を見てみたいと言う衝動に駆られてしまった。
だから、怖いけど見てみたい。超怖いけど。俺一人で見たら多分泣いちゃう。
「大丈夫、兄ちゃんが付いてるから」
そう言って、小町の頭をぽんぽんと撫でた。
「あ、あ、あたしも、これ…見る…の？」
川崎が心底怯えている。
「なら、小町と川崎は俺の両隣に来いよ。大志は最前列に一人で良いよな？」
「俺だけ一人っすか!?怖くて死んじゃうっす！やばいっす！」
そうだね、でもそれが俺にとっての最善っす。
なんやかんやで３人の了承を得て、席は右から大志、川崎、俺、小町と言う並びになった。
ただの俺得で、大志はただただ悲しい。
だから言ったろ？諦めろって。
俺の心の中でしか言ってねえけど。

席に座って、初めのうちは小町とぽそぽそと雑談をしていたのだが、川崎は最初からずっと、怖がってびくびくしている。
どうしたものか。
「川崎、大丈夫か？」

「あ、だ、大じょ…いや、やばいかも…」
始まる前にこれはどうなんだ。
なんかすごく申し訳無くなって来た。
映画が始まると、小町は最初からビビりにビビっているので、序盤から手を握ってやった、と言うより、いつの間にか握ってた。お兄ちゃんスキルはオートで発動するのです。
それで少し安心したようだったが、物語が進み、結構最初の方から登場していた主人公と仲の良い女性が無残に殺されたシーンで、涙目になって『ぴゃあああ…』とか細い声を上げた。何この子可愛い。
しょうがないので、お兄ちゃんスキルの上位技を発動。
左手で小町の左肩を抱いた。
『へ？』と言うリアクションを最初はされたんだが、すぐに身を委ねて来た。よっぽど心細かったんだろう。
小町を心配して小町にばかり構っていたのだが、途中でふと川崎の様子が気になった。
さっきから何の声も聞こえないんだけど、生きてる？
右を向いて見ると、画面を凝視したまま涙目になって震えている。
もう、目を閉じるくらいしても良いと思うんだけど…。
なんだろう、変な所が真面目なんだろうか。
「あー、川崎、ほれ」
「…え…」
普段怖いし、タメだし、普段すごく怖いけど、本当に怖がってるからしょうがない。
お兄ちゃんスキル、発動。手を重ねてみよう。
二人の間にある手すりを、手でぽんぽんと叩く動きをして招いてみる。
初めは何のこっちゃと言うリアクションをしていたのだが、すぐに俺の意図に気付いたようで、戸惑い始めた。
「え…あ、え？いや、そんな…」
わたわたと手を振る。腕もすらっと長いな…。
「いいから、ほれ。この後絶対、もっと怖いシーンが来るぞ」

「！…じゃ、じゃあ…」
そう言って、震える手を重ねて来た。
冷房が効いているせいか、手が冷たく感じる。
手が冷たい人は心が温かいなんて都市伝説程度にしか思っていないけれど、こいつは割と良い人なんだろうな、と何となく思った。
左手で小町を抱きしめ、右手を川崎と重ねた状態で１５分程。
いよいよ大詰めと思われるシーンまで来た。
ＣＭに出てためっちゃ怖い女性に、主人公が追い掛け回される。
追い込み方が怖すぎて、流石に俺も固まる。
と、俺が握っている右手が今まで以上にぶるぶると震えていることに気付く。
「おい、川さ…」
呼び掛けるまでも無かった。目を見開いて、涙目を通り越して涙をつつっと流して怯えてる。
あ、これは本当にだめなやつだ。
致し方ない、お兄ちゃんスキルの上位技、再び。
「川崎、ほら」
「あ、え…？」
右手で川崎の右肩を抱くと、なるべく優しくこちらに引き寄せた。
手すりがあるため密着することは無いが、それでも彼女の頭が目の前まで来て、ふわりと良い香りがする。
「あ…」
戸惑ってはいるものの、震えは止まったようだ。
良かった。セクハラによる怒りで震えてるんだったら、俺もうこのデートをほっぽり出して逃げてた。
…って言うか、肩を抱いてからずっとこっち見てる。どゆこと？
ちらりと視線をやると、川崎はぽーっとした表情で俺を見てた。
他のものや音を全く認識していないかのような、集中してるのか散漫なのか分からない目をしている。
どうしよう…恥ずかしいんですけど。
しかし、無理に映画を見させてもまたきついことになるし。

…こう言う風に見られる分には別に怖くないし、良いか、別に。
泣き顔からの乙女顔って流れは、反則だと思うんです…。

映画を観終わると、小町がいつもよりべたべたして来る。可愛過ぎて持ち帰りたい。
ま、毎日持ち帰ることが出来るんですけどね！
一方川崎は、気のせいじゃなければ、ずっと俺のことをぽけっと見てる。
え、本当にどうしたの？
恥ずかしいから、気を紛らわせる為に大志を罵ることにした。
「大志、映画どうだった？俺お前に興味無さ過ぎて全く様子を確認してなかったんだけど」
「お兄さんひどいっす！とにかく怖かったっすけど、ストーリーが緻密に練り込まれていてすごいなって思いました！」
「誰がそんな良い感じのコメントをしろと言った。海に帰れ」
「入水っすか!?」
こんなやりとりをしてる間にも、川崎は俺のことをぽけーっと見ている。
…んんん？
俺の腕に引っ付きながら、小町がその様子を見て再び目がヤマピカリャー。
「おお…お兄ちゃん、映画館で沙希さんのフラグを完全におっ立てたね！」
「なんでそうなる」
「はあ、これだからごみいちゃんは…」
俺を抱きしめながらため息を付かれましても…。
川崎の様子が、いつもとだいぶ違うのは分かってんだけどね。
「あ、そうだ、お兄ちゃんは次どこ行きたいの？」
…すまない、小町、川崎。
「お化け屋敷で」

「え、お兄さん、え？」
「お兄ちゃん、正気なの？」
「あ、あんた、それ、もう…」

試しに、もうちょっと煽ってみたくなりました。

続く。

（3）

もうちょっと川崎の泣き顔を見てみようと思います。

1.

そんな訳で、それなりにあちこちを見て回りながらお化け屋敷へ向かう。

しかし。

俺と川崎は寄り道する気0、小町は寄りたい所があるけど興味無さげな俺らを見て気を遣って諦めっぱなし、大志は興味が湧かないので俺は見てすらいない、と言う状況の為すいすい進む。この状況を分かっててそのままにしてる俺マジワイルド。

まあ、大志はどうせ「～っす！～っす！」とかって小町に言ってんだろ。何ヶ所空気漏れてんの？針で穴増やそうか？

歩いていると、雑踏の中に見慣れた二人を見付けた。

タイプは違えど、人の目に付きやすい二人だ。

絶壁美人と、可愛げメロン。

…ここで会うとは。

近付くと、まず黒髪ロングの氷の女王が俺に気付いた。

「…」

視線を逸らした。

え、なんでなんで？俺そんなに見てられない存在？目を逸らしたくなる程強大なの？どこの前生徒会長？

と、視線を逸らした先に居た小町と目が合うと、途端に微笑んだ。

「あら、小町さん」

「あー！雪乃さーん！あれ、結衣さんも一緒なんですか！やっはろー！」

「あれー小町ちゃん、…と、ひ、ヒッキー…や、やっはろー！」

「待て待て待て、雪ノ下も由比ヶ浜も俺の扱いおかしくない？一回流す&戸惑うって何？そろそろ俺って言う存在に慣れようよ？泣くよ？」

ほんと、泣く。

「あら、ごめんなさい。未だにあなたと言う存在から目を逸らさずには居られないのよ…ひ、ひき、ひきが…あ、小町さんの苗字から察するに、比企谷くん？」
「おい、妹をヒントにするとは良い度胸してんじゃねえか」
肉親をヒントにするなんて…どこの俺だよ。な、川崎！
「雪乃さんと結衣さんは二人でお買い物ですかー？」
「そう、由比ヶ浜さんがどうしてもって言うものだから…」
「えー、猫グッズがすごく揃ってる店もあるって言ったらゆきのんノリノリだったじゃんかー！」
「ちょ、由比ヶ浜さん、それは…こ、こら、抱き付かないで…」
なんでそのタイミングで抱き付くのん？
夏でもゆりゆりしくて、お兄さん一安心です。
「そう言うあなたたちは、二人かしら…あ」
ここでようやく、雪ノ下と由比ヶ浜が川崎姉弟に気付く。
「…こんにちは」
「…ああ」
雪ノ下と川崎の距離は、遠い。
互いにある程度尊重するが故の距離感だ。
普段はそれで触れないようにすればそれで済むのだが、こう言う状態だと如何せんちょっと…いや、だいぶ気まずい。
ここは…行け、我が天使！
「…あ、私たちは４人で遊びに来てるんですよー！」
「！そ、そうなんだね！良いね、楽しそう！」
小町の明るさは世界を照らす。
由比ヶ浜の空気読みスキルも世界を救う。
だいぶ良い雰囲気だ。ここで大志を生贄にして戸塚を召喚出来たらもう俺はすごく楽しいんだけど。
あ、大志一人じゃ足りねえな。材木座も生贄に捧げよう。
あと、戸部な。ついでで生贄。
と、小町が事情を説明した所で、雪ノ下が何やら俺をじーっと見ている。

何、俺ってそんな改めて侮蔑したくなる存在なの？
とか思ってたら、俺と川崎を交互に見始めた。
なになに？俺と川崎の共通点でも探してんの？……二足歩行？
「川崎さん」
「？ん、なに？」
雪ノ下の声がけに、川崎が少し驚く。そりゃそうだ。
「…この男に気を付けてね？何かされそうになったら連絡をちょうだい。ひどい目に遭わせるから」
「待て待て待て、俺どんな扱い？」
俺どんだけ年中はあはあ言ってるキャラなの？
俺の人間性を対価にして雪ノ下と川崎の絆を錬成するの？割に合わないよ？全然等価交換になってないよ？
「あら、初めて会ったときにあなた…」
「おい待てばかやろうその話はするな」
平塚先生に持ち掛けられた勝負で、『勝った方が負けた方に何でも出来る』と言うのを提案された時の俺のリアクションを未だに持ち掛けられる。たまったもんじゃありゃしない！
「え、あんた、何？そんな…」
「いやいや待て待て川崎。違うんだこれは違う」
まずいまずいまずい。
「えー、ヒッキー、なんか…やだな…」
「待て待て由比ヶ浜。誤解だ誤解」
拗ね方可愛いなお前間違えたやばいやばいやばい。
「え、ごみいちゃん、雪乃さんにそんなことしたの？」
「え、僕何も言ってないよね？ねえ？」
あかんあかんあかん。
「うわ、お兄さん、そんな」
「黙れ毒虫お前は喋るな」
「食い気味っすか!?」
貴様に発言権など無い。
貴様は桃太郎の劇で言う所のベンチだ。

つまり、登場すらしない。
舞台袖で休憩してる役者に座られてろ、空気椅子で。
そんで悶えてろ。
座るのはちょい太りめの男子だ。
って言うか、この流れは何か色々とまずい。どうにかせねば。
「あのなあ、俺の話をまず聞けよ」
「あら、面白いじゃない。どうぞ？」
腕を組むようにして、右手を少し上げて、手の甲に顎を乗せて得意気にふふんと笑う。
何この挑発的な態度…。泣かすぞ。ケンカ俺の方が弱いけど。
「大体な、もし俺が川崎に手を出すような手の早いヤツだとしたら、何で俺は奉仕部の明らかに可愛い二人には何にもしてねえんだ？」
「「え」」
「いくら川崎が冷たく見えるけど結構可愛いって分かってたって、先に関わった魅力的な二人に何もしないってのはおかしいだろ？」
「え」
「つまり、俺は、健全だ！」
「お兄ちゃん、そこは違う」
あれ、妹に脇腹を刺された。
しかし、適度によいしょも交えての反論。これなら上手く行くだろう。
「「…」」
あれ、雪ノ下も由比ヶ浜も顔が赤い…あれ、川崎も？なんで？
「…ま、まあ、そこまで言うなら、その…そう認識してあげるのも吝かではないわ。貴方の普段の言動も挙動もとても見ていられるものではないけれど、そうやって自分が思った事を素直に口に出来るようになったと言うのは成長したと捉えて良いのではないかしら。私が保障してあげる。少しは誇りなさい？」
めっちゃまくし立てて来た…。
素直に受け止めろよ…。
…にしても、顔赤いな。

「…あ、あはは、何かよく分かんないけど、今のヒッキーの言葉…結構嬉しいかも…えへへ」
あれ、人差し指同士を押し当ててもじもじしてらっしゃる？あれ、可愛いぞ？
「…か、可愛いって…可愛いって…」
頬に手を当てて…湯気が噴き出してる？気のせいかな？
俺が面食らっていると、小町が袖を引っ張って来た。よし、超可愛い。
「お兄ちゃん…スケコマシにも程があるよ…立てたフラグ全部回収するの？ハーレムなの？」
「え」
そんなだったか？フラグ回収…そういや室伏広治ってビーチフラッグ超強いよね。俊敏性が半端ない。超どうでも良い。
「はあ…まったくごみいちゃんは…二人以上落としすんだったら全員きっちり落としてね？」
「待て待て待て何の話だ」
「あの、お兄さん！恐らく」
「あー、今君はお手付きなんで」
「俺クイズ間違えてないっすよ!?」
君は番組の入りからはけまでお手付きです。
雪ノ下と由比ヶ浜は顔を赤くしたまま去って行った。なんだったんざんしょ。
小町、俺の横で俺をチラ見してはため息ついて、指折り数えながら小声で『雪乃さんでしょ？結衣さん、沙希さん…後は平塚先生も有りかな？後は…まだありそうだなあ、これからも含めて…はあ』とか言うのやめて。何その先見の明？

2.

やっとこさ、お化け屋敷に着いた。
お化け屋敷と言っても千差万別。あんまり怖すぎると俺が泣き顔を楽しむ余裕が無くなるので、程良いのが良いなー。

…理由がクズ過ぎるなー。
「え」
受付に近付いた時、小町が急に立ち止まった。
「小町、どうした？」
「お、お兄ちゃ、あれ…」
小町が指差す方向を見ると、お化け屋敷の説明がでかでかと書いてある。。
『夏季限定！今話題の最恐ジャパニーズホラーとのタイアップ！あなたは最後まで耐えられるか!?』
なんだってー。
川崎と大志の顔も固まってる。
いやしかし、これはしんどいな。
説明をよく見ると、『映画の進行に沿った恐怖があなたを襲う！途中リタイア率日本一！』などと書いてある。
これ、あかんやつや。
川崎に至っては最後の方は俺を見てたからラスト知らないし。や、俺も川崎の視線が気になって最後らへんは8割くらい頭に入ってないけど。
…俺もやばいな。
しかし、何人まで同時に入れるんだろう？
理想は3人までで、俺・小町・川崎で入って、大志に一人で行かせるパターンなんだけど。
受付で確認した所…『原則』二人一組だった。夢潰える。
さて、どうするかなー。
兄妹と姉弟で言ってもそれ只の仲良しだし、小町と大志を一緒に行かせるなんて死んでも嫌だ。難なら大志を死なせるのも厭わない。
俺がこの後どうするかを迷っていると、小町と目が合った。
俺と川崎のことを交互に2往復ぐらい見つめると、名案が閃いたのか、再び俺と目を合わせて突如として目がヤマピカリャー。
小町が突然、わざとらしくふらつく。
「あ、あれー、ちょっと体調がおかしいなー？熱でもあるのかなー？」

なるほど、そう来たか。
すかさず合わせる。
「なにー？それは大変だ！すぐ確認せねば！」
兄妹での熱演。川崎の視線が心持ち冷たいけど僕負けない！
「よし、確認しよう！」
大げさにやらねばと思い、小町のおでこに手ではなく自分のおでこを当てる。
すると、小町の顔が急に真っ赤になった。
「!?ちょ、ちょっと…お兄…ちゃん…」
最初は驚いていたが、やがてとろんとした目になった。
なんで？やり方がＴｏＬＯＶＥる式だから？
「うん、ちょっとこれは休んだ方が良いな。大志、面倒見てくれるか？」
小町の顔が赤くなったのは、よりウソに真実味が出るのでありがたかった。
川崎も心配した表情になってる。よし。
「!?え、あ、はい!!」
何はりきってんだてめえこの野郎。
「ただし、うちの妹に手え出したらただじゃ済まねえかんな？もし何かやらかしたら、城の巨大時計の短針と長針で押し潰すぞ？」
「それテレビで見た事あるっす！怖いっす！」
「うるせえ。ハートどころか命を盗むぞ、刈り取るぞ」
「怖いっす！」
威嚇完了☆
なんか今日は途中から川崎の追及も鈍くなってる。
なので、大志イジリに精が出る。
「お、お兄ちゃん、フラグを肉親にまで立てるの？反則だよ…」
え、なに、そのうっとりした顔？その顔多分、女の顔だよ？家族とか友達に見せちゃいけないやつだよ？
「あ、じゃあ、あたしと…あんたで、か？」
「ああ、そうなるな」

「そ、そっか…」
だからそこで頬を赤らめて俯くのやめて？ちょっと嬉しそうなの見えちゃったよ？
にしても、今は大丈夫でもいざ中に入ったら…絶対また怖がるよな。
なんて言うか、川崎への申し訳無さ３割、期待感１２割。
俺の心のキャパが限界突破して５割増しになってる。
流石に変なことをする気は無い。けど、多分変な感じにはなる。
自信を持って、言えます！
続く。

（4）

1.

仮病でふらつく演技をする小町を抱えてベンチに座らせる。

大志が心配そうに見ているので、こいつは良いヤツだなと思いつつも睨んで牽制しておいた。だって、毒虫は毒虫ですもの。

「小町は大丈夫だから…お兄ちゃんと沙希さん、楽しんで来てね～…。あ、大志くん、もし良かったら、これ買って来てくれる？今、必要なんだ…」

そう言って小町が何やらメモ書きらしき紙を大志に渡した。

渡す際に一瞬見えたのは、ポカリや消化に良さそうな食べ物等、風邪っぴきに必要そうなものと、自分がただただ食べたいだけとしか思えない食べ物が複数。

…お前、いつの間にこれ書いたの？瞬速過ぎるでしょ。

あと、大志をそこまでして上手いこと遠ざけるなんて…流石です。ベストだ、ベスト。俺が大志の立場だったら泣いてるけど。

「分かったっす！買ってくるっす！」

大志はメモを一通り眺めるとふむと頷き、元気に駆け出して行った。っすっす言い過ぎだけど。っべーわー連発の戸部と良い勝負だな。

しかし、良いヤツだよほんと。いつか誰かを紹介してもらいな、誰かに。全て不明瞭だけど。

「じゃ、行ってくるな」

小町にそう言うと、小町は小さく親指を立てた。アイコンタクトで「褒めて褒めて」「よくやった」と言う会話を交わす。これもはやテレパシーのレベルだよね？

「ほら、行くぞ」

未だに固まっている川崎に声を掛け、手を取って引っ張り始める。

…ついやっちゃったけど、これ、やばいかな？

冷や汗をだらだら流しながら川崎の方を振り返ると、手を繋がれた事に戸惑いはすれど嫌では無いと思ったのか「あ…うん」とだけ言っ

て、頬を赤らめて俯いた。
…これ、ゲームだったらめっちゃ何かのポイントたまってるよね？ハート的な何かとか、ザクシャドロップ的な何かとか。

2.

お化け屋敷の軽い説明を受け、いざ入口の前まで来る。
お化け屋敷の何がきついって、特にこう言う真昼間に来ると、入る直前までは周りの喧騒や明るさから『実はそんなに怖くないんじゃないか』などと錯覚してしまうことだ。
錯覚はあくまで錯覚。いざ入れば、何かもう間違って地獄に来ちゃったのかなって思うくらい違う世界に愕然とする。
だから、「一歩足を踏み入れたらもう地獄、一歩足を踏み入れたらもう地獄」と念仏みたいに唱えてから臨む事にした。手を繋いでいる川崎に心底引かれたけど致し方無い。だって、怖いんだもの。マジで。覚悟を決めないとね。
そして、いよいよ入口のドアを潜る。
一歩足を踏み入れた瞬間、そこに広がるのは目に見えておどろおどろしい、緑色の光が気味の悪い井戸を照らす不気味な世界…と言う物ではなかった。
ぱっと見、どこかの民家の様だった。アトラクションなので、普通の民家よりはかなり広く、屋敷の様に見える。映画でメインの舞台として扱われていた家と酷似しており、タイアップと言う企画が相当気合を入れたものであることが伺える。
って言うか、これだともはや元のお化け屋敷がどんなものなのか分からんのだけど…。原形はどこ？壁？
まるで他人の家に足を踏み入れた時のような不思議な感覚と、普通の家に見せかけた中に漂う違和感と、不気味な恐怖に囚われる。
川崎も底知れぬ怖さに怯えている様で、俺の手を握る力をぎゅっと強めた。
進めるルートが沢山あるのかと思ったが、埃をかぶっている様に見える古びた廊下に、沢山の足跡がある事に気付く。

アトラクションを歩いた人が付けた足跡、では無いらしい。
その足跡も廊下同様に見るからに古びたもので、足跡に沿って床が変色している。
足跡の先は、居間がある様だった。
周りを見渡すと、よく見れば他の場所へ通じる廊下にはうっすらとガラスが張られており、通ることは出来ないようになっていた。
今の様にすぐに足跡やガラスの存在に気付く事が出来ればまだ良いが、冷静さを失っていると頭から「どこに進んだら良いのか」と言う恐怖に駆られてしまうのだろう。そしてガラスに頭をごっつんするんだろう。リア充は皆それで頭にたんこぶを作れば良いと思うんだ。
まあ、最初の印象としては…なるほど、本格的だね！泣きたい。
川崎が心底ビビっているから『守らなければ』と言う意識が強くなっているが、もしそうでなかったら俺はもうここで引き返していただろう。逃げ出す時の理由作りに全力を注ぐ。例え雪ノ下相手でも負けないぞってくらいにかっこ悪くならない言い訳作りを頑張っちゃう。これが既にかっこ悪いとか思ったら負けだ。
「それじゃ、こっち行くか」
「あ、え？そ、そうか、うん・・・」
足跡やガラスには全く気付いていなかったのか、川崎は何が何だか分からない風に答えつつ、素直に付いて来る。
まあ、しょっぱなからこんな怖さ全開で来られたら、そりゃビビるわな。
居間に行くと、古びたブラウン管のテレビが置いてあった。
ケーブルが分かりやすく抜けているのに、俺たちが来た途端に白黒の画面がぶんっと音を立てて点いた。すげえ、こんな古い型なのにワイヤレスなんだね！なんでケーブルあるんだろう？
そして、つばの広い白い帽子をかぶって、真っ白なワンピースを着た長髪の女性が古びた画面に現れる。いやもうこの時点でやばい。時折画面がざざってぶれるし。
その女性が映ったまま、不気味な女性の声でナレーションが入る。

お化け屋敷、と言うより映画のストーリーの説明と、このアトラクションの進め方を教えられた。
どうやら、ただただ最後まで負けずに逃げて下さいとのこと。
・・・説明要るの？あと、この女の人映す必要ある？
そうこうしている内に、扉が開いた。
そこまででも十分に怖かったのだが、またここから段違いに怖い。
映画のストーリーとしては、自宅で惨殺された女性が悪霊と化し、その家に入った人を次々に殺めて行くと言うもの。
このアトラクションでは、映画中で一人一人が殺されて行くシーンをなぞるようにして進んで行くらしい。映画のグロい要素はほぼ全てカットされているため、子供でも何とか入れるらしい。…いや、でも、駄目でしょこれ？
泣いちゃうよ？俺が。
…川崎も震えてる。携帯バイブみたいに。
「川崎、大丈夫…じゃ、ないよな。ほれ」
「え…あ…？」
お兄ちゃんスキルの上位技を最初から活用。川崎を右手でそっと抱き寄せた。引かれるとか云々を言ってられる状態ではない。
「もう無理って思ったらいつでも言えよ？ここ、本当にやばそうだから」
自分で言ってて、これどこの心霊スポットで俺どこの霊媒師だよって思った。
「…だ、大丈夫、このままなら…」
川崎はそう言ったと思うと、俺にそっと身を寄せて来た。ちょっと乳圧がやばい。このくだりで挿絵描かれたら絶対俺の表情がやばい。恐怖とにやけの拮抗ってひどすぎるでしょ？
何とかアトラクションを進んで行く。川崎の悲鳴はもう数え切れないくらい聞いたのだが、毎回悲鳴が可愛いと言うか、何と言うか、うん、可愛い。
こう言う時に耳障りな声を上げる女性も居るんだろうが、川崎は可愛い声しか上げなかった。薄暗いから泣き顔をはっきり見る事が出

来ないのが口惜しいが、うっすらとしか見えない川崎の表情と、静まり返った時に僅かに聞こえる彼女の緊張した息遣いが、妙に色っぽかった。怖くて生存本能が高まると、子孫を残すための反応がうんたらかんたらって情報を思い出したけど今これ思い出したらいかん。何か変な感じになっちゃう。俺が。

恐らくラストの手前くらいまで来ただろうか。映画の内容を思い出すと、あと1つやばいシーンを乗り越えればもうゴールの筈。

「もうすぐだぞ…あ、わりい」

気合を入れ直したら、川崎を抱きかかえる腕に無意識に力が入ってしまい、思わず手を離してしまった。

「あ…い、良いから、ちゃんと抱き締めろよ…」

普段とは比べ物にならない程の細い声で、呟いた。

…言ってることは可愛いのに、言い方がやたら男らしくてかっこいいんですけど…。俺にこんな要素はひとかけらも無いですよ。

この状況でツッコんでいてもしょうがないので、再び川崎の肩に手を置く。

先程よりも密着する彼女の素振りに、心臓がばくばくと鳴ってうるさくてしょうがなかった。

「よし、もうじきゴー」

ごとっ、と。

俺の言葉を遮るようにして、後ろで鈍い物音がした。

川崎は前を見たまま、完全に固まっている。どうやら動けないようだ。

これ、振り向いても振り向かなくてもあかんやつちゃいますのん？

ひどく雑な関西弁を心の中で繰り出しながら、ゆっくり振り返る。

俺たちの５ｍ程後ろで、女が倒れていた。

次の瞬間、その女性が呻き始め、俺たちの方へ四つん這いで迫って来た。

動きは人間のものとは思えない程不気味で気味が悪く、その上スピードも結構速い。走らなければ追い付かれる速さだ。ってか怖すぎる。フィンガーフレアボムズが使えたらなあとか思ったけど、多分

この建物が全焼しちゃうから使わないであげた。
「おい、川崎、逃げるぞ…川崎？」
「あ、うあ、あ…」
どうやら俺に少し遅れて後ろを振り向いていた様で、追いかけて来る女を見て
完全に腰を抜かしてしまっているようだ。手を離せばへたり込んでしまいそうだ。
この状況で、言葉を掛けて奮い立たせて一緒に逃げる時間は無い。
ゴールまでは数m。まだやりようはある。
悪・即・斬。間違えた。即・決・断。前者でも良い気はするけど、俺に牙突は使えない。
「川崎…行くぞ…よっ」
「!?うひゃあっ!?」
川崎の肩を抱いていたため、そこから一番速く動けるやり方はこれしか無いと判断した。お姫様抱っこと言うやつだ。
川崎のリアクションを気にする事もなく、猛然とした勢いでゴールへ向かう。
女はあと２ｍくらいで追い付いて来そうな所まで来ていた。
ぎりぎりの所で、光が差す空間へ飛び出す。
その瞬間、「ゴーーーール!!」と言うやたらにテンションの高いアナウンスが流れた。いや、これ日本代表がゴール決めた時に言うべきセリフでしょ？このテンションである必要も全然無いし。

３．

出て来た空間は明るく開けた部屋になっていて、テレビが点いていて知らないバラエティ番組を映していた。
てっきり外の雑踏の近くに出てくるものだと思っていたので、状況が全く掴めない。
頭を捻っていると、再びアナウンスが流れた。
「ゴール、おめでとうございます！このアトラクションはリタイア率が日本一の大変えげつない場所でございます。その為、クリアされた

お客様には豪華賞品をプレゼントしております！後程受付の方でお渡ししますので、忘れずにお立ち寄りください！

尚、クリアされた方の中でも、特に女性のお客様は取り乱されている事が多く、すぐに外に出るのはよろしくない場合が多々ございます。

その為、こちらの部屋は落ち着くまで時間を過ごせる様になっております！同じ役割の部屋がもう２ヶ所ある為、安心してごゆっくりおくつろぎ下さい！

それでは、本日は当アトラクションをご利用頂き、誠にありがとうございました！」

明るく締めくくって、アナウンスが切れた。

なるほど、組によって最終的な出口だけ別れているのか。これならこの休憩室で２０分居ようが３０分居ようが他の客とかち合う事態は避けられる。

…っつうか、アフターケアとしてこんな部屋を用意するってどんだけやばいんだよ、このアトラクション。本当にやばかったけど。何がやばいってマジやばい。

「川崎、落ち着くまで休んで行こう」

「…うん」

今にも消え入りそうな声で、川崎が言った。全然大丈夫じゃない。柔らかいソファに二人で座ると、川崎は俯いたままふるふると震えている。今もまだ、泣き顔のままだ。

明るい所で見ると、またそそる…。

ちょっと邪念が湧きすぎて自分をぶん殴りたくなったので、罪滅ぼしと言っては非常に難だが、川崎の肩を再び抱き寄せた。

「…わりいな、こんな怖いとは思わなかった」

「…ぐすっ、ほんとだよ…」

少し拗ねた声で、俺に身を寄せる。そして、俺の腰に手を回して抱き付いた。

同じ事をしていても、先程までは不安で不安でたまらないから、と言う意味合いが強かったと思う。しかし今は、何だか甘えて来ている

ような気さえする。
俺も安心したせいもあるのか、急に心臓が高鳴り始めた。
彼女の髪からふんわり漂うシャンプーの匂いと、腕に当たる胸の柔らかい感触。
…やっべ。
ちょっと油断してたら、思い切り反応してしまった。こんな密着してたらすぐバレる。
バレないように、バレないようにと周りを見渡して誤魔化していた。
それが仇となったのか、川崎が俺を不思議がって見つめて、直後に俺の異変に気付く。
「…？…!?な、あ、あんた、ばっかじゃないの!?」
川崎の頬が見る見る赤く染まり、突き放して来るかと思いきや俺を抱きしめる力を更に強めた。え、ここは離れるもんじゃないの？なんで？
「あ、や、ん、なんで離れねえんだ？」
思わず疑問が口をついてしまった。
すると、俺の言葉を聞いた瞬間に川崎の顔が更に赤くなった。
「ま、まだ怖いんだよ…悪いか？」
うーっと唸るようにして、こちらを上目遣いで睨んで来る。睨んでるのに可愛いとか新鮮。
「いや、大丈夫だけど…」
「…そうか。…大体、あんたがこうなったのも、あ、あたしがその、こうしてるからだろ？だから、そこはお互い様って言うか…」
もじもじとしながら、今にも消え入りそうな声でごにょごにょと話す川崎。
時々ちらちらと俺の隆起した部分に目をやっては、恥ずかしそうに目を逸らしている。
…うーわっ、もう、たまんねえ。可愛すぎんだろ。
俺に身を任せている川崎を見て、ごくりと息を呑んだ。
時計を確認する。今はここに入ってまだ5分程度しか経っていな

い。
「川崎」
「え…んむっ!?」
彼女をソファの背もたれに押し倒して、言葉を発する前にその口を唇で塞いだ。
唇の柔らかい感触に、股間がまた少しきつくなるのを感じた。

4.

「ん、んむっ、んぐぅぅ…ふむぅっ、んん…」
室内に悩ましげな声が響く。
川崎の上に乗り、両手をソファの背もたれに押し付け、身動きが取れない状態にして口内を舐る。
場所が場所だし、意思確認もしていない。さぞ抵抗されるのだろう。って言うか俺の人生終わるかも。
ってくらいに思っていたのだが、結果で言えばそれは杞憂に終わった。
顔はパッと見ではいやがっているように見えるが、目は徐々にこの状況を受け入れて来ているのが分かる。むしろうっとりとしてさえいる。
彼女を押さえつけていた手を離し、頬に添える。そして、ゆっくりと唇を放した。二人の口の間に糸が伸び、重力に従ってゆっくりと落ちて行った。
「…ぷはっ。…な、何で、急に…」
川崎が息を切れ切れにして、顔を真っ赤にしたまま聞いて来た。
その言葉には糾弾の色は無く、純粋に俺の意思を聞いているのだと分かる。
だから、正直に答えることにした。
「…可愛かったからつい、な」
「!…あ…う…そう、なの、か…」
少し嬉しそうに呟くと、そっと俺の背中に腕を回した。完全に俺の事を受け入れている様に思える。

「お前こそ、抵抗しなくて良かったのか？…俺だぞ？」
自虐混じりの意地悪な質問。我ながら惚れ惚れする。
「だ、だってあんた、あたしのこと可愛いって言ってくれて、手も繋いでくれて肩を抱いてもくれて、それに、それに…」
言葉の最後で急に言い淀んだ。
「…それに？」
純粋に思い当たる節が無い。他に何も無いよね？…多分。
「ぶ、文化祭の時、あんた、あたしの事『愛してるぜ川崎』って…」
…思い当たる節、あったー。ってかこれが一番だな。俺、おい、俺！
「…あー、もしかして、文化祭の後俺を見ると毎回露骨に避けてたのは…」
「…わかるだろ？…言わせんなよ、バカ」
うーわっ。やってもうた。やってもうたよ俺。
あの時はノリで言ったことを伝えるべきか。いやでもそんな事を言っても傷付けるだけでは…。
そう思っていると、俺を真剣な目で見つめる川崎に気付く。
ここは、嘘をつくのが一番無粋だろう。
なら、本音で話そう。その時の気持ちと、今の気持ちを。
「…ああっと…色々正直に話しますと…」
だせえ。敬語になっちゃう感じ超だせえ。辛い。
それでも、川崎は真剣に耳を傾けてくれている。
「文化祭の時のその言葉は、正直、あの場のノリで言っちゃってて…気持ちが伴ってた訳ではないんだわ」
「！…う…」
だー、泣かないで！申し訳無さで死にそう。
「でも、今可愛いって思ってるのは本当だぞ。ほんの数時間前までは、怖いけどまあ良いヤツなんだろうなー怖いけどってくらいの印象だったけど」
「2回言うなよ…うう…」
「…わりい。あともう一つ。今日わざわざホラー映画を見たり、お化

け屋敷を希望したのは…お前の泣き顔を見たくなったからなんだ」
「…へ？」
冷たさとかが一切無い、純粋なる疑問顔だった。いや、そりゃそうですよね。そりゃそうですよね。思わず二回言っちゃう。
「昨日小町に『キュンと来たり、そそられる女の子の仕草は』ってのを聞かれてな、何となく泣き顔が良いかもって言われたら小町に引かれて。んで今日のこの流れが決まった時、お前が文化祭の時に俺がちょっときつく言葉を返しちまった時のびくびくした顔を思い出してな。
…それで、まあ、その、ちょっと、悪戯心で」
言ってる最中、怖くて顔が見れない。いや、ほんと怖い。どうしよう。小町みたいにてへぺろ顔をしたいけど、あれ俺がすると死ぬほど気持ち悪いんだよな。
…と思ってたら、割と普通に聞いてくれてる。え、なんで？
「…それで、どうだったんだ？」
「え？」
「あたしの泣き顔だよ。今日散々見ただろ？どうだったって聞いてんだよ」
うおおこええ。これいつもの川崎さんやないですか。泣いてまう。
「あ、えーっと、…想像以上に可愛くて、そそられた」
「…！」
もう勃ってる所見られたし、これくらい言っても良いかなと思ったのでぶっちゃけてみる。言ってて顔がめっちゃ熱くなった。
「…だから、あたしの事襲ったのか？」
「あ、えーと…はい…」
何この事情聴取。柔和な感じと怖い感じを組み合わせて完全に吐かされた！何なのさこの子！
「…ふふ、そっか、そっか…」
俺の背中に腕を回したまま、川崎が嬉しそうに微笑んだ。
いつも見せる事の無い素敵な笑顔に、ハートを鷲掴みにされた。
「…普段からそう言う風に笑えば、もっとモテると思うぞ？」

「…はあ？あんた、ここまでの事をしといてあたしをほっとくつもり？いくら経験無いあたしでも怒るよ？」
…今のは俺があかんかった。失言でした…。似非関西弁が止まらんでえ…。って言うか、経験無いんですね。さりげなく興奮させるのやめてくださいよ。
「…あー、ですよね…」
「だから、ほら」
ぐい、と引き寄せられる。鼻と鼻が付くくらいの距離感でにこりと微笑んで来る。
「…続き、してよ」
その言葉で、俺は弾けるように動き出した。

続く。

（5）

1．

「んあっ、そんな、いきなり、んむぅっ？んんっ、んん……」

川崎の両胸に手を伸ばしながら、さっきよりもじっくりと唇を重ねる。

彼女が差し出して来る舌を咥え、口の中で好き放題に舐り、舌を解放してやると今度は口内を隅々まで舐め尽くす。

言葉でこそ若干の抵抗の意志を示してはいるが、表情は蕩け、目はうっとりとしていて、完全にこちらの為すがままになっている。

胸は予想していた以上に大きくて柔らかく、着衣の上からでも、揉んだ時の形の変化がはっきりと見て取れる。一度揉む度に、『んああっ……』と甘い声を漏らすのは、どうしようも無い程の興奮を覚えた。

身体をより密着させ、右膝を彼女のショーツに押し当てるようにもぞもぞ動かす。すると、

「ひぃんっ!?あ、んあ、そこ、気持ち、良い……」

素直に甘えるような声を出して、耳元で息を荒げた。

もっと、これ以上の事をもっと、と焦るようにチャックに手を添えたが、ふと時計を確認すると、既に30分程経過していた。

もしかすると、係員が様子を見に来るかもしれない。

……って言うか、監視カメラとか無いよね？大丈夫だよね？

いずれにせよ、これ以上ここで続けるのは得策では無い。外には小町も待っているし。大志はきっと長い旅路についているだろう。帰って来なくても良いよ。

「川崎、一旦ここを出た方が良い。他の場所でもっと……」

と言いかけた所で、川崎が俺を更に引き寄せて、唇を奪った来た。

「んちゅるっ……んぐっ、んっ、んっ、んっ……」

今度は彼女から積極的に舌を絡ませて来る。口内を舐り回され、俺のモノが更に反応してしまう。

20秒程濃密に絡み合うと、ちゅぽっと言う音と共に彼女の唇が離

れた。
「……んはっ、ふぅっ、ふぅっ……何だよ、やめちゃうのか……？」
……エッチの時は甘えるタイプ……だと……。
これがもっとちゃんとした場所だったら、もう今すぐにでも一発決めちゃいたいレベル。何この子超可愛いんですけど。
しかし、ここはもう退散しないと本気でまずい。
「今は、な。どこか良い場所を探そう」
「……しょうがねえなあ」
ぷうっと頬を膨らませる。なに、なんなのその可愛さ？素直になるとそんな可愛くなんの？たまんないっす。
先に立ち上がり、川崎の腕を引っ張って抱き起す。ついでで、少しだけ唇を重ねた。俺の首の後ろに腕を回すときの艶っぽさが、何かもう百戦錬磨の女性並だった。他の女の人知らねえけど。
お化け屋敷に入っていた記憶が何だかもう1年前くらいの事に感じられた。どんなストーリーだっけ？少女が名前を奪われて不思議な旅館で働く話？
何事も無かったかの様に受付に行くと、豪華景品として映画のファイルを差し出された。いや、頭おかしいでしょ。すごく丁寧にお返しした。ストーリーちょっと思い出しちまったじゃねえか。帰り際にスタッフの人が3人くらいでこちらをちらちらと見ながら話している様な気がしたけど、気のせいだと信じたい。マジで。きっと監視カメラなんて無かった。

2.

「あー、お兄ちゃん！沙希さん！おかえりなさーい！」
小町がけろりとした顔で、ポカリを飲んでいる。超良い笑顔。超可愛い。
…仮病モード、やめたのん？
「おう、ただいま」「……ただいま」
おいこら川崎、俺をちらっと見て顔を赤らめるのやめろ。これすぐ周りにバレるやつ。

と、思いつつ振り向いたら、小町の目が既にヤマピカリャー。何かもうヤマピカリャーを挨拶として推進したい。戸塚、言ってくんねえかなあ。
小町が俺の脇に来て、分かりやすく右手を『おーほほほ！』と言うときの形にして話しかけて来る。
「……お兄ちゃん、何かあった？って言うか何かしたでしょ？吐きなさい、おらおら」
脇腹を肘でぐりぐりする。痛い痛い可愛い痛いくすぐったい！
「……あーっと、タイミングを見て説明するわ」
遅かれ早かれ説明をする必要はあると思うので、頭をぼりぼりと掻きながら、目を逸らしつつ呟いた。
「ほっほーーーう……？ほっほーーーう……？」
なんで2回言ったんだお前。声がふくろうで目がヤマピカリャーって高度過ぎんだろ。
あ、大志いた。すげえバテてる。報われないお仕事、ご苦労様。
難なら今からシャトルランを一人でやってもらっても良いよ？一人で。

3.

時間が時間だったので、適当に昼ご飯を食べる事にした。
場所はサイゼ。一色みたいなわがままな奴が居なくて助かる。俺の性格を分かって諦めてくれてて助かる。……諦めちゃったの？
成り行きで俺の隣に川崎が、小町の隣に毒虫が座る。
お昼のピークを過ぎている為か、あまり混んでおらず過ごしやすい。マジ素晴らしい。
「じゃあ、注文は以上で」
「かしこまりました～」
店員さんの緩い声を聞きつつ注文を終える。あの人の雰囲気、城廻先輩っぽいな……。
ちょっとぽけっと見つめてたら、右腿をぎゅっとつねられた。痛みよりもびっくりが先行したんですけど。何事？

「……なーに見惚れてんだよ」
声の調子はものっすごい怖いんだけど、膨れっ面がやたら可愛いですよ、川崎さん。小声でぽしょぽしょ言う感じもグッド。……俺何の批評家？
料理が一通り揃ったので食べ始める事にする。
「よし、皆料理揃ったな。じゃあ、いただきまー」
「お兄さん、俺、まだっす！」
「お前はドリンクバーだろ？ココア飲んでりゃ永久に糖分補給出来るぞ？」
「育ち盛りにそれはきつすぎるっす！」
「うるせえ、お前はカブトムシのエサでも良いくらいだぞ」
「あんたね……」
おおう、久しぶりの川崎ストップ。凍てつく波動が飛んできた。ああ、せっかくのバイキルトが……。
……あれ、てっきりつねってくるのかと思ったら、太腿をさわさわとしてらっしゃる？何このいやらしい撫で方。顔は怖いままで下でこんな事するってどこの淫魔だよ。
……こっちも見ずにさりげなく……。……めっちゃ勃っちまったよちくしょう。
「それで、この後はどうしましょっか」
小町がお肉をもきゅもきゅと食べながら切り出す。お肉を食べてる時すら可愛いとかマジなんなのさ妹よ。ほっぺがリスみたいですよ。飲み込むときの健康的なごっくんって音が何かもうＣＭのオファーが来てもおかしくない。って言うか、来て！そしてぐっさんと回鍋肉食べて！あれ超美味しそう。
「ああ、そうだなー……」
考える体で、ちらりと隣の川崎を見る。
正直、今すぐにどこかに入ってさっきの続きをしたい。ちょっともう煮え滾ってる。
川崎も俺の視線に気付くとこちらを見て来た。頬を朱に染め、少しだけ息を荒げ、手を今度は内腿にまで伸ばして来て、時々股間にまで

触れて来る。いや、さっきでもここまでやってなかったでしょ？一度スイッチが入るとここまで化けるの？ポテンシャルの塊や！エロ性獣やでえ！
「……小町、ちょっと良いか？」
「おや？ほいほーい」
　席を立ち、小町に意味ありげに手招きをする。困った時の小町頼み。流石妹だ、事情を察したのかすぐ付いて来てくれた。
　テーブルから離れた場所で、ごにょごにょと話す。兄妹密談。
「さっきの話なんだけどな。さっき、俺と川崎で…その、なんだ、キスとか……それ以上のことしてた」
「なん……ですと……!?」
　小町の顔がサスペンス顔になった。眠っている毛利さんの後ろで真犯人が誰かを聞いて驚く人みたい。
「そんでな、正直もう辛抱たまらんと言うか、もう、したくて」
「……え、したいって……」
「……ああ、そりゃ、まあ……」
　と口ごもっていると、小町が急に涙をどばどばと流し始めた。突然のナイアガラ。
「うう……お兄ちゃんも遂に妹離れをする日が来たんだね……小町は嬉しいような寂しいような混ざりたいような……」
「え、今最後何て」
「なんでもないよー？」
　食い気味に潰しやがった…。今ちょっと半端ない背徳感が湧き上がったっつうの。
「ま、そう言うことならお任せあれ！時間的にうちには今お父さんもお母さんも居ないし、しけこむならお兄ちゃんの部屋がいいんじゃない？」
「お前、どこでそんな言葉を……」
　お兄ちゃんびっくりだよ。いや、マジで。
「はいはい。それじゃ、上手いことやるからまっかせなさーい！」
　腰に両手を当てて、無い胸を目一杯張ってどやぁってして来た。腹

立つけど可愛いから無問題。
「すいませ～ん、お待たせしましたー！」
小町がてへぺろ顔で戻るのに同行する。おいてめえこら毒虫、小町の表情を見て『可愛いっす…』顔すんじゃねえ。両耳に手を当ててメラゾーマとマヒャドかますぞこら。君の頭でメドローア！
「それでこの後なんですけどー、ちょっと買いたいものがありまして！でも同行してもらうのは一人居れば十分なんですよね。なので、大志君一緒に来てもらえるかな？そんでお兄ちゃんと沙希さんはペアで別行動、みたいな！どうでしょう！」
おお、力任せにしつつも良い塩梅の提案を。流石だ妹。
あれ、でも、それ……。
「ん、小町はそれで大丈夫なのか？」
ちらりと毒虫の方に目をやる。『？』と言う感じで無邪気に首を傾げる様は、何も関係無い人だったら興味は一切湧かないし、今のこの状況だと殺意しか湧かないから……詰んでるよ、君。
「ん、大丈夫！……上手くやるよ」
後半を小声で言った。上手く躱してくれるんだな、安心。大志もうじき涙目。ざまあ見ろ。
「わかった。川崎、それで良いか？」
「あ、ああ……分かった……」
恥じらい方可愛過ぎんだろ。
……あれ、小町並に心の中で可愛い可愛いを連呼してる。気のせいかな？かな？

4.

サイゼを出た所で、2人ずつに分かれた。
「さて……川崎、これからなんだけど」
隣を見ると、ぽけっとしてる。どうしたの？あ、気付いた。
「！んえ!?あ、ああ、そうだな、結婚は二人とも大学を卒業してからの方が良いかな……」
「俺このタイミングでそんな将来を見据えた話を切り出すつもり無い

んだけど……」
　真剣に答えるのやめてくれよ。脳内が小学校低学年の乙女くらいの純粋ぶりだなこいつ。普段とのギャップが激し過ぎる……。
「……あ、そ、そうだよな……ごめん」
　しゅんとしちゃった。……戸塚じゃないのに抱きしめたい……だと……？
　驚きを隠せない。俺自身に。
「えーと……あれだ、俺の部屋来ないか？多分今他の場所に遊び行っても、気もそぞろで全然楽しめないと思うし」
「！い、良いのか？本当に？」
　すんごい嬉しそうな顔された。密着するのやめてよ、恥ずかしいしから。ちょっと、本当に恥ずかしい！
「ああ。今日は親は遅くまで帰って来ないし、小町もしばらく遊んで来るはずだから」
「分かった。……嬉しい、な……」
　小声で言った後半部分で悶え狂うかと思った。一瞬びくんって震えただけで済んだぜ！川崎に怪しまれたぜ！
「そんじゃ向かうか……お？」
　携帯のバイブが鳴った。小町から？
『お兄ちゃん、こっちは理由付けてもう解散したよー！その辺ぷらついて夕ご飯も食べて来るから、思う存分しけこんじゃって！』
　……最後最後。あかんて。っつかまだ5分くらいしか経ってねえぞ？メールのテンションから察するに一人で遊ぶのを満喫する気満々だな。
　大志、お前が悪いんじゃない。ただ、小町がお前に興味が無いだけなんだ。
　ごめんな、大志毒虫。早く別の女の子のケツを追っかけてくれ。ルパンルパ～ン。あれ、実際は『ルパンザサード』って歌ってるって聞いたときの衝撃が異常だった。
　と、言う訳で、俺と小町と川崎のデートは終了。これから俺の部屋に向かいます。

……川崎の視線が熱っぽい……。興奮させんのやめてくれよ……。

続く。

（6）

1．

家に向かう途中、隣を歩く川崎の顔をちらちらと見ながら思案を巡らせる。

・・・・・・川崎って、ドMなんじゃなかろうか？

今までは冷めたイメージが先行していたし、さっきまでだと可愛さとかエロさとかのイメージが先行していたけれど、思い返すとその端々にどーもMっ気が見え隠れする。

ちょっと、探ってみるか。そうしよう。わくわくが止まらないよ！

「なあ、川崎」

俺の呼びかけに反応すると、川崎がこちらを振り向く。ぽけっとしてんな……。明らかにさっきまでのテンションを引きずってる。

「ん、な、なに？」

少し目を合わせて、すぐに逸らす。頬を赤らめて、ポケットに突っ込んでいる手が少しもぞもぞとしている。

……わー、いじめたいよー。

「お前さ、今日俺が突然襲った時、一回も『いや』とか『だめ』って言わなかったよな」

川崎が急にぴたっと止まる。目が泳ぎ始めた。

「え、あ、そう、なの、か……？あ、いや、とぼけてる訳じゃないんだ。無意識に出してる言葉だから、そんなにはっきり憶えてなくて」

言葉の途中から、どんどん視線は下を向き、話し方もたどたどしくなる。

「その……夢中だったし……」

彼女の言葉に、身体がぶるっと震えた。

おいおい、マジかよ。これは思った以上か？

少し辺りを見回す。この辺りは昼間でも人通りが少なく、アパートやマンションからも角度的にあまり見えない。車や人が来ればすぐに音で分かる。

「そうか……じゃあ、こう言う事をされても大丈夫なのか？」

「え……んぶぅっ!?」
川崎の口の中に右手の中指と人差し指を突っ込み、顔を左に少しずらし、首筋の右側に思い切り吸い付く。左手はジーンズの上から尻を鷲掴みにして、乱暴に揉みしだく。身体は出来るだけ密着させ、川崎の豊満な胸が限りなく平になるまで自分の胸板を押し付ける。
傍から見れば、完全に襲っているようにしか見えない。いや、実際襲ってるんだけどね。
「んぐぅっ!んぶっ、ふぐぅっ、んんっ、んむっ、んんっ、あぅっ……」
こんな強引な事をされているにも関わらず、川崎は涙を浮かべながらも抵抗をしない。それどころか、あっと言う間に甘い声に変わって行く。
指で彼女の舌を挟んでこねくり回し、首筋を舌でつつき時に甘噛みし、尻を強弱をつけながら揉む。
一つ一つの動きを変える度に、川崎はどんどん甘ったるい声を上げ、びくびくと跳ねるように震えた。
はい、確定。MもM、ドMです。
検証に満足が行くと、俺は身体をすっと放した。
「あ……え……?」
川崎が物欲しげに見つめて来る。その表情を見て、心臓がどくんと跳ねるのを感じる。
「続きは家でな」
そう言って、川崎の頬をそっとひと撫でした。彼女の頭からはハテナがぽわぽわと出ている。そりゃそうだよね。
家でこの子に何が出来るかと考えたら、わくわくと興奮で身体がぶるりと震えた。

2.

家に着くと、鍵で玄関を開けて入った。
「少し待っててくれ、リビングを片付けるから」
「わかった」
普段から小町が掃除してくれているから大丈夫だとは思うが一応

……と思い玄関で靴を脱ぐ。
すると、靴の置場に見覚えのある可愛らしいサイズの靴が見えた。
……小町の……いつも履いてる靴？
あれ、今日はこの靴じゃなかったのか？いや、ちらっと見たけどこの靴だったはずだぞ？
と、言うことは……。
リビングに入りカーテンを開けると、一気に日差しが差し込む。
明るくなったリビングを目を皿にして見回すと、テーブルの陰に見慣れたくせっ毛がぴょんと飛び出ているのが見えた。お前、隠れ方下手すぎんだろ……。
ゆっくり近付き、小声で呼びかける。
「おい、小町」
「ひゃっ……！」
少し間抜けな、驚きの声を小さく漏らす。いや、逆に何でバレないと思ったの？
「あははー、見付かっちゃった」
手で後頭部でわしゃわしゃとしながら、小町が顔を出した。モグラ叩きのモグラみたいだな。叩く代わりに、愛でる！
「いや、何してんだ？結構遅くまで外に居るんじゃなかったか？」
「最初はそうしようと思ったんだけど……お兄ちゃんがどんな感じで沙希さんと接するのか見てみたくなって、隠れててみたの！いやー、てっきり真っ直ぐお兄ちゃんの部屋に行ってキメちゃうと思ったんだけどねー……しくじった！」
「言葉のチョイス、チョイス」
キメるとか言っちゃだめ！あと、テヘペロ顔で誤魔化すんじゃねえよ。
「間違ってはないでしょ？まだ沙希さんにはバレてないよね？沙希さんは私が居ると分かったら絶対恥ずかしくなっちゃうだろうから、言わないでおいて！邪魔はしないから」
そう言って、ウインクをしながら両手を合わせてお願いのポーズを取る。可愛いなあもう……許しちゃう！

「ったく、しゃあねぇな……良いか、何を見ても出て来るなよ？何を見てもだぞ？」
俺の言葉を聞いて、小町が目を見開き、ぶるっと震える。
頬を赤らめたその表情に、まだ子供だと思っていた小町の中の、女の顔を初めて見た気がした。
「え、そ、そんな凄い事するの……え……？」
「ほらほら、良いから隠れてろ。まずはリビングで色々するから」
「え、あ、うん……」
ぽーっとしてる小町の頭をくしゃっと撫でると、玄関に戻った。
「待たせて悪いな、じゃあ、来てくれ」
「いや、大丈夫だよ。じゃ、お邪魔……します……」
きょろきょろと見回しながら、川崎が靴を脱いだ。

3.

「じゃ、まずはジーンズを脱いでくれ」
「……へ？」
極めて平然として言ったせいか、川崎の脳内処理が止まったようだった。聞き間違いなのかと思ったかもしれないから、もう一度、ゆっくりと伝える。大事な事だしね！
「あ、ごめんな、急に言ったらぴんと来ないよな。……ジーンズを、今この場で、脱いでくれ」
驚きのあまり、口をぱくぱくとさせたまま何も言えないでいる。
「……な、そ、そんな……」
戸惑いつつも強くは拒絶出来ない川崎の表情を見て、ぞくぞくして来る。
「んー……じゃ、もう一度」
「あっ……？」
川崎の肩を掴んで、優しく囁く。
「今、ここで、俺の目の前で、ジーンズを脱いで、ショーツを俺に見せてくれ」
「……あ……うあ……」

俺と目を合わせたまま、顔を真っ赤にして口をぱくぱくとさせる。
とどめに、目の力を強めて、ゆっくり確認する様に命令する。
「自分で、脱ぐんだ」
「……！」
観念したのか、川崎は視線を少しだけ下げて、ゆっくり頷いた。
「ん……」
ベルトを外して、ジーンズを脱ぐだけの行為。極めて日常的な、慣れたと言うことさえ無意味な行動なのだが、川崎は中々進められずにいた。
手が震えてしまっているが為に、ベルトを外し、ジーンズをずり下ろす一つ一つの行動が遅れる。
俺は何も言わず、ただただじっと見つめている。
川崎と目が合うと、彼女は一瞬許しが得られるのではと期待する表情になったが、すぐにそれは無駄な希望なのだと悟ったのか、口をきゅっと結んでジーンズを一気に引き下ろした。
上に羽織っていた服も脱がせていたため、黒のキャミソールとショーツと言う悩ましい姿になった。
「黒のレース……か」
出会った時の事を思い出して、少し笑いそうになってしまった。
「言うな……ばかぁ……っ」
顔を真っ赤にしたまま、俺のすぐ横の床を見つめながら、震える声で呟く。
「すげえ色っぽいぞ。高校生とは思えない」
「……っ！」
はっとした顔で俺を見ると、顔を真っ赤にしたまま手の指をぎゅっと握りこんだ。
思えば川崎がバイトしていた時は、年齢を誤魔化して働いていた筈だ。雰囲気や身体つきを見ても、大人っぽいが為に誤魔化せたのだろう。
そんな大人の色香を漂わせながらも、震えて子どもの様な表情で恥ずかしがるギャップに激しく劣情を催した。

「じゃ、そのままソファに座って、足を開いてくれ。M字開脚ってやつだな」
「……な……あ、あんた……」
何の遠慮も無く、次の命令を下す。
川崎の反応を見るのが、楽しくしょうがない。……やべえな、俺。ってか、この会話小町に丸聞こえなんだよな……あ、今頃になって変な汗が噴き出て来た。
今度は初めから観念したのか、川崎はゆっくりとソファに腰を下ろし、せめてもの抵抗なのか、手でショーツを隠しながら足を開こうとする。
「ああ、もちろん、隠すのは無しだ。手は膝の裏に」
「!……うう……」
泣くのを堪えるかの様な表情をしながら、手をどけてゆっくりと足を開く。
俺はソファの前に座って胡坐をかき、川崎のショーツが目の前に来る状態にしてじっと見つめた。
すらりと伸びた足の根本にある、女の大事な部分。黒のレースが、少なからず、いや、かなり湿っているのが見て取れる。
にやにやするのを必死で抑えながら、川崎の表情を窺う。
目を背けて、小さな声で『恥ずかしい……』と呟くのが聞こえた瞬間、思わず右手の人差し指が彼女の秘部へと伸びた。
ぐむっ、と言う感触と共に、彼女の肉厚な秘部に指が食い込む。――と。
「ひあぁぁっ!?」
驚きと快楽が混じり合った声を上げ、海老反りになってぶるるっと震えた。
絶頂に達するまでは行かないものの、ここまでの我慢も相俟って、相当の快感を感じた様だ。
小町が隠れている方でがたたっと音がしたが、俺しか気付かなかったのは幸いだった。流石にいきなりこんな声が聞こえたら驚くよな……。

指を押し込んだまま、わざとらしく質問をする。
「ここ、気持ち良いか？」
「あう……あ……押し込んだまま聞いちゃ……うあ……」
「気持ち良いのか？」
更に指を押し込んで質問する。
「いあ……！あ、うぁ、き、気持ち良い、気持ち良いから……」
恥ずかしがりながらも何とか言葉を紡ぐ川崎の姿に、身体の奥底が熱くなる。
「そうか。じゃあ、もっとしてあげたくなるな」
「えっ!?あ、そんな……！」
川崎の言葉を意に介さず、人差し指を一度引いて、再び秘部に押し込んだ。川崎の反応を待つまでもなく、次々と押して引いてを繰り返す。
「ひあっ!?んぐっ、あうっ、ひぐっ、いっ、イく、イっちゃ……！」
指が一往復する度に、彼女の身体が面白い程にびくんびくんと跳ねる。
そして、彼女が絶頂に達しそうになった瞬間に、指をそっと放した。
「あ……え……そんな……」
立ち上がり、呆然とする彼女の真ん前に顔を近付けて、優しく語りかける。
「上、行くか」
「あ、でも、まだ……」
もう一度、微笑んで伝える。
「上、行くか」
「……は、はい……」
手を膝の裏にやったまま、力無く頷いた。
「良い子だ……」
そう言って彼女の唇にそっと唇を重ねると、背中に手を回して来て必死で舌を絡めて来た。
思った以上の反応の良さと従順さに、思わず歓喜の声を上げそうになる。

この後やろうとしている事を考えて、胸が躍った。

続く。

（7）

1.

「小町、さっき音したけど大丈夫だったか」

川崎がリビングを出たのを確認すると、小町に小声で話しかけた。もしかしたらどこかを思い切りぶつけたのかもしれないと言う不安があったので、念の為確認をしたかった。

「お、お兄ちゃん……小町は大丈夫。ありがと。で、でも……何してんのさ……？あんな、あんな……」

頬を手で押さえて、顔を真っ赤にしながら震えている小町を見たら、また何かぞくぞくするものを感じた。

……あれ、俺、小町にも……？……いやいや、そんなまさかまさか！

でも、少しだけ聞いてみたくなる。

戸惑いながら話す小町の頭をぽんぽんと撫でて、優しい声で問い掛ける。

「あんな……何だ？」

「……！そ、それ……は……」

顔を真っ赤にして、俺から目を逸らす。

……川崎に対して入っていたドSスイッチが、小町に対しても入っちゃったよ。

鼻が触れ合うくらいの距離にまで顔を近付けて、小町の目をじっと見つめる。

「この後も、どんな声が聞こえてきても出て来るんじゃないぞ？川崎は何もいやがってないからな」

「……あぅ……うん……」

「よし、良い子だ」

耳の後ろをさわさわと撫でると、小町は小さな声で「にゃぁぁ……」と鳴いた。

……たまんねえなぁ、もう。

……俺、今、本気でやばいな。まあ良いか☆

2.

リビングを出ると、川崎は左腕を右手で抱いて恥ずかしそうに立っていた。キャミソールとショーツ姿で、鍵を閉めた訳でも無い玄関近くで待たされているのだから無理も無い。

「待たせて悪いな。じゃ、行くか。この階段の上に俺の部屋があるから」

俺はそう言って、その場で階段を指差しただけで止まる。

歩き出さない俺の様子に気付き、川崎はおろおろとし始めた。

「あ……え……先に行かないのか？」

「まずはお前から行ってくれよ」

「……え？」

「ゆっくり、見せつけるように登ってくれ」

「……な……!?」

我ながらひどい。でも、止めない。

「あ、そうだ。上は全部脱いでショーツだけになってからな」

「は、はぁ!?」

川崎が顔を真っ赤にして叫んだ。そりゃそうだよね。

「ほら、早く」

少しばかり目を細めて、川崎を促す。

「うぅ……わ、わかったよ……」

二、三歩程後ずさりした後、諦めたのかゆっくりとキャミソールに手を掛けた。

にしても、よく逆らわないなこいつ……。

「……おお……」

思わず、見惚れた。

モデルと間違えられてもおかしくない長身とスタイルの良さ。そして、形の整った胸に、ぴんと前を向いた2つの突起。

「……うぅ……」

川崎は恥ずかしくてたまらないのか、顔を真っ赤にして俯いている。

しかし、胸を隠しはしなかった。隠しても俺がすぐに隠さないよう命令して来ると分かっているのだろうか。
目の前で震えている川崎の心が見えた様で、ぞくりとした。
「それじゃ、どうぞ」
「……」
川崎は無言で階段をゆっくりと登り始める。
一歩一歩登る度に、ポニーテールと形の良い尻がふりふりと揺れた。
よほど恥ずかしいのか、手すりにしがみつきながら、ふらつくように歩いている。
一度立ち止まり、心許なさそうに振り向こうとしたが、俺と目が合う前に何か諦めたような表情をして、再び歩き始めた。
「……の、登った、ぞ……」
階段を登り切り、俺に背を向けたまま、震える声で告げる。
「よしよし。じゃ、その向きのまま、ショーツを脱いでこっちに尻を突き出してくれ」
「は、はぁ!?」
我ながらひどいなぁ……。しょうがない、だって変態ですもの。
1階から川崎の形の良い尻を眺めながら、思わずにやつきそうになる。
にやついても良いんだろうけど、多分って言うか絶対気持ち悪いから真顔をキープする。
「いいから」
少しだけ、声のトーンを落とした。それに気付いたのか、川崎は背中を向けたままびくっと震える。
「……うぅ、わ、分かったよぉ……そんなに怒るなよぉ……」
彼女の反応を見て思いだした。ああ、文化祭の時も俺は同じ台詞を言ったんだな。それが巡り巡って、今、彼女の全裸姿を下から眺めようとしているんだな。人の縁って不思議！
「別に怒ってねぇよ。ほら」
少しだけ声のトーンを和らげて、それでも催促はやめない。

「……」
川崎は観念したのか、最後は無言で、ゆっくりとショーツを下ろした。
階段越しに見える、生々しい彼女の秘部。思わず、ため息が漏れた。律儀に両膝に手を付いている為、こちらに思い切り強調されている。
「よしよし、良い子だ。じゃ、登るからそのままキープな」
「うえ!?」
川崎のリアクションを意に介さず、とんとんと階段を登る。
徐々に彼女のうっすら生えた陰毛や、太腿を伝っている液体が見えて来て、否が応でも期待が高まる。
「ば、ばか、何でこんな……」
本気で恥ずかしがりながらも、川崎は拒否をしない。体勢を維持したまま震えている。
やがて目の前まで来て、何も言わず、何もせずに彼女の秘部をじっくりと見つめる。
「……な、何も……しないのかよ……?」
ふるふると震える、か細い声が聞こえた。
「ああ、そうだな……っと」
「んあぅあっ!?」
完全な不意打ちのタイミングで後ろから抱き付き、左手で右胸を、腰の前に回した右手で秘部をこねくり回す。左手は乱暴に揉みくちゃにして、右手は入口の肉をぐちゅぐちゅと音が大きく立つように握り込む。
「な、なんだよこれ、あぐっ、いきなり、ひあっ、こんな、あふあっ、イっ、あ、もう、く、来る、来ちゃ、……あっ……」
ぶるぶると震えて、川崎が絶頂に達すると言う、正にその直前。
俺は川崎からさっと手を離した。
「あ……え……そんな、また……?」
今度こそはと言う期待もあったのだろう、川崎は涙を滲ませながら切ない表情を浮かべた。
「じゃ、部屋に入るか」

あっさりと言ってのけて、戸惑う彼女の表情も見ずに部屋へと歩き出す。
後ろから、小さな声で「うぅ……なんなんだよぉ……」と切なげに呟くのが聞こえた。

3.

先に部屋に入って、川崎を手招きして入れる。
ドアをがちゃりと閉め鍵をかけると、彼女がびくっと震えた。
緊張か、期待か、不安か、興奮か、あるいはそのいずれもか。
頬を朱に染め、複雑な感情を湛えた瞳が俺を見つめていた。
「それじゃ、俺もそろそろ……うおっ!?」
油断していた。
ベッドの横で服を脱ごうとしたその時、川崎が急に俺をベッドに押し倒した。
力は元々強そうだし、完全に不意打ちをくらった形だったので、あっさりと倒されてしまった。不意打ちだからしょうがないよね。情けないとか思わない、思わない！
「な……急にどうしたんだ？」
質問はしてみるが、何でかなんて見当は付いていた。
「……ふぅっ、ふぅっ、ふぅっ……い、いい加減にしろよ、あんた……！　なんなんだよ、なんなんだよ!?　さっきから何回も何回も、……その、満足するまでしてくれないなんて……」
予想通りだった。
恥ずかしがって、中途半端に遠回しな言い回しを使っているのがまた可愛い。
「ん、満足？満足ってどうなった事を言うんだ？」
俺、今にやにやしてないよね？大丈夫だよね？
「な、あ、あんた、そんな事言える訳……」
言い淀む彼女を、何も言わずじっと見つめる。
押し倒して上になっているのは彼女だと言うのに、簡単に俺に気圧されてしまっている。

「い、イカせて……くれなかった……じゃんかよ……」
耳まで真っ赤にしながら、震える声で答える。
顔を背ける彼女がたまらない程可愛くて、愛おしさを覚えた。
「悪かったな。じゃ、そこに四つん這いになって」
「な、え、ええっ!?」
俺はベッドの端を指差した。
戸惑いつつも川崎は俺の指示に従い、ベッドの端に四つん這いになる。
ベッドから立ち上がると、ちょうど腰の位置ぐらいに彼女の突き出された尻が来る体勢になった。
「よしよし、良い子だ」
そう言って尻を優しくさすると、熱を帯びた吐息が漏れた。
「でも、俺を押し倒したのは頂けないな。お仕置きだ」
「え……?」
戸惑う彼女に構わず右手を上げると、横に薙ぐ軌道で、払う様に彼女の尻を叩いた。
ぱぁん!と言う小気味良い音が響く。
「ひぎぃっ!?」
彼女の背筋が弓なりに反り返る。
お、思いの外上手く行っちゃった……。
息をつかせる間も与えずに、2回目、3回目と叩く。
「んあっ!? ひあぁっ!」
その度に、彼女はたまらない声で鳴いた。
その後も何回か叩き続けると、川崎は完全に無言になってしまい、大きくて弾力のある尻は赤く腫れ上がり、ひくひくと痙攣していた。
「さて、次は……」
呟いて、彼女の秘部に手を伸ばす。
中指を彼女の秘部に挿し込むと、指はぐぷっと言う感触と共にあっさり飲み込まれた。
「んあぁぁぁぁっ!?」
指が体内に入るのと同時に、それまで惚けていた彼女は飛び跳ねる

様に顔を上げ、こちらに振り返った。
「そんな、今、したら、本当に……！」
息も絶え絶えに、必死で懇願して来る。
「そうか、きついよな。じゃあ……」
にやりと笑って、膣内に埋まった中指を折り曲げた。
「っ――――――」
今まで散々焦らされて来た上に、突然のスパンキングを挟んだ事で、もう限界だったのだろう。
たったの一動作で、彼女はあっさりと果ててしまい、腕に生温かい大量の液体が伝った。
「うぁ、あっ、かはっ、うぐぅ……」
熱っぽい声で呻く彼女の尻を見て、どうしようも無い程に責め立てたくなる。
今度は、ベッド脇のカーペットに膝立ちになり、彼女の両足の付け根を掴むと、既にぐしょぐしょに濡れた秘部に口を付け、舌をねじ込んだ。
「ひぃぃぃぃんっ!?」
再び、たまらない声で鳴く。
顔に何度も生温かい液が飛んで来て、興奮も相俟って視界と意識がどんどん朦朧としてくる。
ぴちゃ、くちゅ、ぴちょっといやらしい音が絶え間なく響く。
「ひあっ！　あっ、これ、また、イっ、っ～～～～。
んぐぅっ、あっ、えぐっ、イっ、イくっ、っ～～～～。
も、もう、あっ、あふぅんっ、あっ、かはっ、イっ、イく、イく、もう、これ以上は……あっ、あっ、あっ、～～～～っ……」
何度も何度も絶頂に達し続けた末に、彼女は意識を彼方へと追いやられて、力なく崩れ落ちた。
続く。

（8）

1.

「あっ、かはっ、えぅっ、あぅぅっ……」

力無くうつ伏せになった川崎が、断続的にびくびくと震えている。

彼女を持ち上げるため、ベッドに上がって左側から彼女の両脇を抱えると、くすぐったさもあってか「ひんっ……」と小さく呻く声が聞こえた。

ずるずるとベッドの真ん中に持って来ると、仰向けにしてとすっと寝かせようとした。

すると、彼女は寝る直前で押し留まった。

何事かと思っていると、シュシュを解き始めた。

それもそうか。うつ伏せの時ならまだしも、仰向けになって寝るのには邪魔だもんね。

あぐらをかいてシュシュを解く彼女の姿は、妙に絵になる気がした。

シュシュを横に置き、青みがかった長い黒髪がはらりと下りる。

絶頂の余韻がまだ残っているからだろうか、表情はまだ虚ろなままだ。

あぐらのまま両手を組んだ足に揃えて置いている様子だけを見るなら、男勝りにも程があるだろうと思う所なのだが……長い髪が汗で身体に貼り付き、口を僅かに開けて、頬を紅潮させているのが何とも言えない艶っぽさがあり、思わず見惚れてしまった。

そんな川崎の頬に手を添え、語り掛ける。

「なあ、この後、……どうしたい？」

我ながらいやらしい質問だと思う。

「なっ……あ、あんたの、好きなようにすれば良いだろ……？」

目を背けながら、川崎が答える。

「ん、俺は川崎がもう何もしたく無いんなら、これで終わりにしても良いと思ってるぞ？」

「は、はぁ!?……そんな事、言われたって……っ!?」

困り果てた様子で俯く様がたまらず、指でくいと顎を上げると、唇を優しく奪った。
「んむっ、んちゅるっ、んっ、ぷはっ、あうっ、んむっ、んむっ……」
ゆっくりと押し倒して、俺が上になった状態でたっぷりと舌を絡め合う。
川崎はまるで水泳の息継ぎでもするかの様に、時折唇を離しては大きく息を吸い、また吸い付いてくる。
その両腕は、いつの間にかこちらの背中に絡み付いていた。
もう、たまらない。
彼女の両腕を解くと、服をスムーズに脱ぎ捨て、あっと言う間に全裸になった。
「わっ、わわっ……」
見ているのが恥ずかしくなったのだろうか、目を手で覆っている。
……隙間から覗いてるけど。
そんな彼女の手をどかし、顔の両脇に上から手を付き、真正面から見つめる。
「さっきのは嘘だ、わりい。俺は、お前としたい」
言うと、ぼっ、と音を立てるのではないかと思ってしまうくらいの速度で、彼女の顔が真っ赤になった。
そして、再び手で顔を覆い、指の隙間からこちらを見つめる。
「うぅ……分かったよぉ……あ、あたしも、あんたと……したい……」
表情も言葉もあまりに可愛く思えて、そこからしばらくの間、再びじっくりと唇を重ねた。

2.

数分程した頃だろうか。
互いに名残惜しそうに唇を離すと、俺は彼女の上から移動し、彼女の頭のすぐ横で膝立ちになった。
そして、自分のモノを彼女の鼻にぺちぺちと当てる。
「な!?お、おい、何してんだよっ!?」
キスの余韻が一気に覚めて真っ赤になる。

予想通りのリアクションが可愛い。
「これ、舐めてくれ。好きな様にしてくれて良いから」
「……あ……」
言うと、彼女は小さく声を上げて一瞬考える。
そして、俺を見つめながら、
「じゃあさ、少し体勢を変えてもいいか？」
一つ、提案をして来た。
ベッドは壁際にある為、ベッドの片側と壁はくっついた状態になっている。
俺は今、背中をその壁に預け、足をだらりと伸ばした体勢を取っていた。
自室でこんなにだらりと力の抜けた格好をするのなんて、中学の時、女子に告った翌日にクラス中に広まっていたのが分かった時以来だろうか。
……思い出したら泣けて来た。
川崎はと言うと、膝枕の要領で俺の腿に頭を乗せ、こちらに顔を向けている。
そして、俺のモノをくむくむと咥え込んでいる。
彼女の提案でこの体勢を取った理由は２つ。
１つは、この体勢であれば先程の体勢と違い俺も楽になり、互いにじっくりと楽しめるから。何その嬉しい気遣い？
そしてもう１つ。
「んむっ、あむっ、んんっ……ひんっ、あっ、あんっ、んむっ……」
彼女が俺のモノを咥えながら、俺からも遠慮なく彼女の胸や秘部を責められるから。
……ちょっとこの状況が天国すぎて訳分かんない。
川崎は上気した顔で俺のモノを一生懸命に咥え、頬がぼこぼこと膨らむ。その様が何ともいやらしい。
そして、柔らかい胸や既にぐしょぐしょになった秘部に触れる度、くぐもった色っぽい声が漏れ、まるで「もっと」と懇願するかの様な目でこちらを見つめて来る。

……もっと激しくしたらどうなるんだろうか。
そんな疑問が、自然に湧いた。
彼女の秘部に指を入れたまま、それをフックにして彼女を引っ張り、身体を更に屈めさせて愛撫をやりやすくする。
「んぶぅっ!?」
快感と引っ張られる苦しさが同時に脳内に叩き付けられたのか、目に涙が浮かぶ。
そんな様子とはお構い無しに、左手を彼女の胸に伸ばし、乱暴に掴んだ。
乱暴ではあるが、このくらいなら彼女は全て快感に変換してしまう。そう言う確信にも近い計算があった。
「んぐぅっ！」
案の定、彼女の口からは荒々しい喘ぎ声が聞こえた。
両手で彼女を弄ぶ準備を整えると、背中を深く屈めて、胸を握った左腕の内肘を彼女の後頭部に当て、ぐいとこちら側に押し込む。より深く咥えさせるためだ。
そしてそれと同時に、胸と秘部に強烈な刺激を加え始める。
「んぶぁっ!?んんっ！んっ、んぐっ、んんんっ！」
苦悶と快感が入り混じった声が響く。
しかしその声も、俺のモノが口に深く深くねじ込まれているせいでくぐもった音に変わる。
呼吸もまともにさせず、鼻腔に俺の匂いを充満させた状態で、遠慮無しに力任せに愛撫する。
「んぶっ、うぐっ、あぶぁっ、えぶっ、ん～っ、んっ、んっ、ん～～～っ……！」
涙目でこちらを見つめ「助けて」と言う視線を送って来る。
でも、止めない。
こんなひどい事をされても、しっかりと口の中で亀頭を舐め回している健気な彼女を、もっと汚したい。
彼女の顔を更に引き寄せると、亀頭が喉奥に当たった感触がする。
既にここまででもかなりの刺激を受けている事もあり、もうじき限

界を迎えそうだった。
「川崎……そろそろ、出すぞ……」
そう言って、彼女を弄ぶ手に更に力を込める。
「んぶぅっ!?んんっ、んんっ、んんっ……!」
俺の言葉を聞いて、必死でいやいやと首を振る。
そう言えば、まともに拒否をしたのはこれが初めてじゃないだろうか。
そんな事を呑気に考えながら、最後の追い込みと手に力を込め、更に左肘と腰を連動させて彼女の口の中でピストン運動を行う。
「おぶっ、んぐっ、おぇっ、あぶっ、あぐっ、うぅぅぅ……」
涙を流しながらも決して目を閉じずに、口内で亀頭を舐めるのを止めない。
どうしようも無い程に、愛おしく思えた。
そして、間も無く。
「川崎、出るぞ、出るぞ……っ――」
「んぶぅぅぅっ!?……っ」
あらん限りの力で彼女を押さえ付け、信じられない程溢れ出す精を、一滴も逃す事無く彼女の喉奥に叩き付け、飲み込ませる。
蕩けた目をしながら、力無い呻き声を上げ続け、彼女は最後まで飲み干した。
続く。

（9）

1.

「……」

仰向けになり、無言で天井を仰いでいる川崎の秘部に、亀頭をぴたぴたと当てる。

「さっきの、苦しかったか？」

こくり、と頷く。

「でも、またやって良いか？」

こくり、と頷く。心がざわつく。

「今から、入れるぞ？良いか？」

ほんの少しの間を置いて、こくりと頷く。

「お前の子宮の中にありったけ注ぎ込むぞ、良いか？」

ほんの少しの間も置かず、こくりと頷く。背筋が震えた。

最後の本番くらいは――と考え、思っていた事を口にする。

彼女の頬に両手を添えて、

「……優しく、するから」

彼女の目が驚きで見開くのを見届けながら、十分にこちらを迎え入れる準備が整った肉襞に、ゆっくりと亀頭を埋めて行った。

「あっ、あぁっ、おぉぉぉっ……」

川崎の身体がぶるぶると震え、その度に肉襞がきゅうきゅうと締め付けて来る。

割かしスムーズに全部入る事が出来た。

……気持ち良すぎてすぐ出そうなんですけど。

亀頭が一番奥にぴたぴたとくっ付く感覚を楽しんでいると、涙目でこちらを見つめながら彼女が囁く。

「……なんで、今まで散々いじめて来た癖に、急に優しくなるんだよぉ……。もう……あんたの事しか考えられなくなっちゃうだろ……っ!?」

言って、俺の首の後ろに手を回し、腰の後ろにその長い両足を回して更に密着させる。

……わー、何この子？超可愛いんですけど。
「うおっ……!?」
肉襞の心地良い締め付けが更に増し、思わず腰を引いて一時撤退を余儀なくされる。
亀頭が入っているだけの状態になるまで腰を引くと、彼女が物欲しそうな顔でねだって来る。
「あんっ……やだ、もっとくれよ……」
言って、回した足に力を込めて、くっと引き寄せられる。
「うおっ……あっ、やばっ……!」
「あっ……？」
油断していた状態で再び膣奥に招かれた為に、そのあまりの刺激に耐え切れず、一部を出してしまった。
全部出てしまう前に何とか一度止めたが、正直このままでは残りもすぐに出してしまいそうだ。
……超情けない。泣いちゃう。
川崎は一瞬驚いた表情をしたが、すぐにふっと綻んだ笑顔を浮かべた。
それは、今まで見た彼女のどの表情よりも優しい笑顔だった。
「なんだ……出ちゃったのか？」
「ああ、全部じゃないけど……。ここまでやっときながら、すげぇ情けないとこ見せちまったな……」
頭をがしがしと掻いて目を逸らす。
「ふふ……良いよ、別に。それだけあたしの中が気持ち良かったって事だろ？……すげぇ嬉しい……！」
そう言って、彼女は俺の唇に吸い付き、足に力を込めてより一層肉襞の刺激が強められた。
もう少ししたら落ち着く……と思っていた矢先の、強烈な快楽。
「んむぅぅっ!?」
俺はくぐもった声を上げながら、残りの精を吐き出してしまった。
彼女は再び驚きで一瞬目を見開いたが、すぐに優しく目を細めた。
その表情があんまりにも可愛くて色っぽかったため、射精での腰の

痙攣の回数が一回増えて、少し多めに出てしまった事は恥ずかしいから絶対言わない。
完全に出し終えて、一度抜こうとすると、再び腰が彼女に足に絡め取られた。
やめて！今超敏感だから！
……いや、さっきまで好き放題川崎の事を弄ってたから、全く以て人の事を言えないじゃん俺……。
再び鼻と鼻がくっつくくらいの距離で、川崎が微笑む。
「抜かないで？……もう十分優しくしてもらったから、次は、さっきまでみたいに……目一杯イジメてくれよ。そんで、頭おかしくなるくらいにいっぱいイカセて？最後はあたしの……中、に、……子宮に、また一杯出して、あんたの……もの、に、して、よ……」
震える声で、顔を真っ赤にしながら。
あまりにも恥ずかしい事を言ってのけた。
俺から命令するのも恥ずかしくなるくらいの事を。
「……わかった」
短く返事をして、腰を大きく引いた。

2.

何の容赦も無く、ぎりぎりまで引いた腰を一気に叩き付ける。
亀頭は一瞬の内に川崎の膣の奥の奥まで到達して、
「ひあぁぁぁぁぁぁっ!?」
川崎は絶叫じみた声を上げて、激しくぶるぶると震えた。
止めるつもりは全く無く、もう何回か同じ事をしてやろうと腰を引くと、彼女が涙目でこちらを見て来た。
「……えぐっ……ひぅ……これ、好き……好き……」
「……っ！」
身体の奥で一気に湧き上がる劣情と、どういじめてやろうかと言う冷静な思考が同時に芽生えた。
次の瞬間。
彼女の胸の両突起を、身体ごと持ち上げようとするかの如き強さで

乱暴に摘み上げ、それと同時に先程と同じ腰の振り幅で、ピストンのスピードを一気に全力に引き上げた。
彼女は一瞬何が起きたか分からないと言う表情をしたが、すぐに強烈な痛みと快感と呼吸の苦しさに飲み込まれ、あられもない声を上げた。
「ひぃあっ!? いたっ、やっ、そんなっ、ひぐぅぅっ……〜〜〜っ！ やっ、だめ、今イってる、イってるからっ……〜〜〜っ！」
連続で達して、膣肉がぎちぎちに締め付けて来る。けれど、止めない。
「あっ、やっ、止めて、もう、死んじゃう、死んじゃうよ、死んじゃうから……〜〜〜っ！ も、もうやら、やめて、お願い……〜〜〜っ」
声に力が無くなって来る。それでも、止めない。
「も、聞くから、何でも言う事聞くから……〜〜〜っ」
あまりの締め付けに、膣の中程の所で思い切り射精してしまう。それでも止めず、膣肉に精を塗り込む様に、子宮に注ぎ込むように、射精しながらピストンを続ける。
「うぁ、出てる、出てるよ、何で止めないんだよぉ……あっ、あっ、あ〜〜〜……っ」
精々10〜15分の間に、彼女は一体何回絶頂に達したのだろうか。
一切の容赦無い責めに、彼女は言葉でこそ抵抗の意志を示したものの、口はだらしなく開き涎が垂れ、涙をこぼしながらうっすらと笑みを浮かべていた。
俺自身も敏感になったままピストンを続けているため、正直もう色々と限界が来ていた。
気合を入れ直して、身体にありったけの力を込める。
「これ、が、最後だ、イク、ぞ、川崎……！」
「あぇっ、かはっ、きて、きて、きて……」
焦点の定まらない瞳で俺を見つめ、腰に回している足にきゅっと力を込める。
そして、次の瞬間。

「――――――」
頭が、真っ白になった。
ふっと身体の力が抜けて、彼女の上に倒れ込む。
彼女は緩み切った顔の中に穏やかな笑みを確かに浮かべて、まるで「頑張ったな」とでも言うかのように、俺の背中をぽんぽんと撫でた。
……最後の最後にしてやられた感……。
少し時間が立ち、ようやく落ち着いて来たので顔を上げて、虚ろな目をして惚けている川崎の頬に、優しく手を添える。
「気持ち良かったか？」
こくり、と頷く。
「これから毎日やるぞ、良いな？」
こくり、と頷く。心がざわつく。
「もっと激しい事もするぞ？　思い付いたひどい事を全部するぞ？　良いな？」
ほんの少しの間を置いて、こくりと頷く。
「……これから、よろしくな」
ほんの少しの間も置かず、うっすらと笑みを浮かべて、こくりと頷いた。

3.
学校でのイメージとは程遠く思える、可愛い寝息を立てている川崎に毛布をかけると、飲み物でも持って来ようと部屋を出た。――と。
「……んん？」
部屋のドアを開けたら何かに当たる感触があった。
足元を見ると、見覚えのある可愛いやつが後頭部を押さえている。
「あたた……あ」
小町だ。え、なんで？
しかし、何をしていたかはすぐに分かった。
下はショーツ一枚で、上は以前俺が着ていた、小町にとってはだぼだぼのTシャツと言う姿。
そしてこてっと倒れた姿を見ると、右手が両股に挟まっている。

にやっ、と、自分が気持ち悪い笑みを浮かべている事が自覚出来た。
腰を下ろし、小町の顔の目の前で質問をする。
「小町……一体、何をしてたんだ？」
途端に、小町の目が泳ぐ。
「や、やー、これは、そのー……」
床を見る。
明らかに濡れている。
指を付けると、ほんの少しばかり糸を引いた。
「なあ――これ、どうしたんだ？」
「あ、や、お兄ちゃん、これは、その……」
おろおろし始める小町に、悪戯心がふつふつと湧き始める。
小町のあごをくいと上げる。
「一人で……してたんだな？」
「なっ、ななっ!? そ、そんな、わけ……」
小町が顔を真っ赤にしながら、顔を俯かせた。
あまりの興奮と背徳感にごくりと喉を鳴らすと、我を忘れてチャックに手を掛けた。
「そんな悪い子には――」
言いかけたところで。
小町は顔を上げて、一気に青ざめた。
そして、息を一気に吸ったかと思うと――。
「そ、それはダメーーーーーっ！」
「ぶげらっ!?」
突然の掌底を腹にもろに食らい、ダメージを受けた時のキャプテンファルコンみたいな声を上げてしまった。
グーがじゃなかっただけ良かったのかもしれないけど……掌底は内部破壊だから、内臓に響くんだよねぇ……。
調子乗りました。
悶絶して、ぱたり、と自分の部屋の前で卒倒した。
……原因が中学生の妹の掌底って……死ぬ程かっこ悪いな。
……どちらにしても、後でめちゃくちゃイジり倒してやろう。腹超

痛かったし。
マンガみたいにわーんと泣き声を上げながら逃げ出す小町を、悶絶したまま見送ってから数分が経ち、ようやく回復して来たのを確認してゆっくりと立ち上がる。
部屋の中をそっと覗くと、ちょうど寝返りを打ってこちらを向いている川崎の寝顔が見えた。
ああ、やっぱり可愛い。
愛してるぜ川崎！
……心の中で呟いてみただけでも、死にそうになった。

お終い。

比企谷八幡にも何だかんだで嫉妬と言う感情はある。（1）

1.

噂話と言うものは、とにもかくにも不快だ。

信憑性の無い下らない話も、回り回ればやがて、初めからさも真実であったかのように振る舞い始める。

なんで中学の時、俺が1年間で学年の女子5人にメールで告白した事になってたの？他のクラスからもあらぬキモ扱いを受けて、それで更に自分のクラスでもキモがられると言うデフレスパイラル。なんなの？ねえ。泣いちゃう。

以前雪ノ下と葉山の仲についてあらぬ噂が流れた時も、どうしようも無い程不快な気持ちになった。

人と言うものはどうして、噂と言うものが好きなのだろう。ああ、鬱陶しい。

2.

朝、教室に向かって歩いていると、テンション高めの楽しそうな会話が聞こえて来た。

「最近さあ、雪ノ下さんの雰囲気変わってない？」

「あー、分かる分かるー！何か前は話しかけるなオーラが凄かったけど、最近はちょっと柔らかくなった気がする。」

「だよね？J組の子も前よりも雪ノ下さんを囲んでること多くなった気がするんだよねー」

「分かる分かるー！」

そんな会話が、廊下を歩く時に聞こえて来た。

歩く速度がいつもの8割くらいになった気がするのだが、それは気のせいだろうか。気のせいだろう。

俺が出会う前から、彼女は有名人だ。このくらいの噂話をされる事はあるだろう。

……歩く速度がいつもの6割くらいになった気がするが、それは気

のせいだろう。
女子が女子について、良い印象について話すのだから、別にこれは聞こえて来ても不快になるような話題ではない。
俺は、何故か口が少し微笑みそうになるのを抑えながら、再び歩を速めた。
すると、それと同時に女子たちの会話に野郎の声が混じる。
「あれ、何の話してんのー？」
「あ、おっはー！今ねえ、雪ノ下さんの話してたんだー」
その挨拶、化石だよ？びっくりしちゃった。
「そうそう。何かねー、話しかけやすい雰囲気になって言うかー」
「あー、確かに。元々は綺麗だけど近寄りがたいオーラ出てたけど……それがあんまり無くなって、何か尚更魅力的になった感じがするよな。より綺麗にもなったって言うか」
あん？
「えー？ちょっとなになにー？もしかして雪ノ下さんの事狙ってるわけー？」
「いや、ばか、そんな事……あ、でも、今度話しかけてみようかな」
ああん???
「きゃー！良いじゃん良いじゃん！でも今人気やばそうだよね。」
「分かる分かる！今まで密かに人気があるくらいだったのが一気に爆発…みたいな！きゃー！」
「きゃー！マジやばい！マジやばい！」
「マジかー。っべー。マジっべーわー」
え、戸部？
振り向いたら違った。
戸部はもっと頭っからウザいノリだったな。ごめん、戸部。
て言うか、一人は口癖「分かる分かるー！」なの？最初にそれを言って会話の糸口を掴むの？
気付いたら歩いてる速度がいつもの3割くらいになってた。
なんかあのままだと歩く速度がやがて牛歩並の速さになって、最終的に0km／hになって、ムーンウォークして戻ってしまうような勢

いさえある。
「分かる分かるー！」がトレードマークの女子が怪しそうにこっちを見て来たので、足早に立ち去った。
雪ノ下がモテると言うのは、まあ分かる。
美人だと言う事に異論を挟む余地は無いし、制服を着ている分にはあの絶壁だってさして気になるものではないだろう。
それで居て、あの凍てつく様な近寄りがたさも氷解したとあっては、それでチャンスと見た男共が阿呆みたいに群がって来るのは容易に想像がつく。本当に容易。
その変化は俺も少なからず感じているし。
まあ女子は良いとして、男子の方は急に足元に穴が開いてロンハーばりに落ちたりしないかなー。行き先は一階、マット無し。
うふふふ。サザエさんじゃないよ？
3.
「最近さー、由比ケ浜さんまた可愛くなってない？」
「分かる分かるー！元々可愛いのに更にって感じー！」
少し進んだ所で、またこんな会話が聞こえて来た。
歩く速度を緩めるつもりはさらさら無い。
ただ、勝手に足が歩を進める速度を緩めてしまうだけだ。それだけです、マジで。
女子が会話をしてる分にはまあ良いか……。
「何なに、何の話してんのー？」
野郎が来た。不快指数が８０％増しで限界突破。
「あ、今由比ケ浜さんの話してたんだー」
「そうなんだ。いやーあの子マジ可愛いよねー！胸もでかいし」
あん？
「分かる分かるー…ってやだーもう！」
「もうじきバレンタインじゃん？チョコくれたりしねえかなー」
ああん???
「あんた話したことほとんど無いでしょー？」
「それもそうか、あはは！っべー。マジっべーわー」

え、戸部？
振り向いたら違った。
何か俺、戸部を求めてるみたいになってる。「振り向いてももう君は居ないと分かっていても、街で道行く人に君の面影を探してしまう」とかってフレーズ、Ｊ―ＰＯＰでありそう。あいつに会う必要無いんだけどね。あいつと出くわす運を全て戸塚に使いたい。
つうかさっきと違う男女のグループなのに、会話の切り出しと「分かる分かるー！」の返しと、「マジっべーわー」が共通するって何なの？リア充どもの会話ってそんなに固定した流れなの？Ｓｉｒｉのがよっぽど良い仕事するぞ。
まあ、由比ケ浜がモテると言うのも分かる。
可愛いしスタイルも良いし優しいし、おバカ成分だって人によっては魅力と映る。俺だってあいつのおバカ加減は呆れこそすれ、きらいではない。呆れこそするけど。マジで超呆れる。マジっべーわー。
しかし、可愛くなっただと……？何となく、分かる気はするけど。何となくね、何となく。
気付いたら歩く速度が牛になっていたので、怪しまれない内にさっさと退散する。マジで牛ってた。危ない危ない。
取り敢えず麻酔銃で男子の首筋を狙い撃ちたい。撃つ理由は何だろう、何となく。
４．
昼休み、いつもの場所に向かっていると、廊下でまたしても噂話が聞こえて来た。
「ねーねー、いろはってさー、最近可愛くなったよねー！何かあったのー？」
「えー、何も無いよー。ほんとほんと！」
「ウソつけー！このタイミングで綺麗になるとか、なに、新しい恋でも見付けたかー？うりうりー！」
「何にも無いってばー！」
……本人だった。何、この会話？あいつ新しい恋見付けたの？
一色にこちらの存在を気取られぬ内に、足早にその場を去る。こう

言う時の俺の忍者感半端無い。将来は主夫と忍者の兼業も良いかもしれない。初任務で開始8分くらいで死にそうだけど。

あっと言う間に会話の声が遠ざかる。

よし、問題無くやり過ごせた。

……と思ったら、袖を掴まれてぐんっと引っ張られた。俺力大してないんだからこう言うのやめてほしいんだけど。これでこけたら恥ずかしくて死んじゃうよ?

振り向くと、一色がぷくっと頬を膨らませていた。相変わらずあざと可愛いなこいつ……。

「先輩、今わたしの事ちらっと見てスルーしましたよね。頂けませんよそれは」

「あー、や、お話し中だったみたいだし……」

「先輩、声裏返ってて気持ち悪いですよ?大丈夫ですか?」

「気持ち悪いのはいつものことだよ」

……引いた顔すんじゃねえよ……。もう俺のテイストは多少なり知ってるでしょう?もっと!雪ノ下と由比ヶ浜みたいに!……あいつらも引いてる。あ、小町もだ。……ん、平塚先生も引くことがよくあるな。

……多少は話す女子(と女子(?))は軒並み俺に引いている。陽乃さんはただの魔王だからノーカウント。戸塚は引いてないよね?大丈夫だよね?ちなみに川崎は俺に引いてしかいない気がする。なんなのさあの黒レース!

もう大丈夫かなと思い歩き出すと、膨れっ面のまま再び裾を引っ張られる。

「……で、結局、何でわたしの事スルーしたんですか?」

ふえぇ……逃がしてくれないよぉ……。

「盛り上がってるとこを邪魔すんのは俺の主義じゃねえんだよ」

ウソは言ってない。めんどくさいとかそんな事は思ってない。多分。

目を逸らしつつ何とかやり過ごそうとしていると、一色は更に袖を引っ張って来た。何、何か技でもかけるの?俺を下に引っ張りつつ膝

蹴りとかかまして来たらマジもう武術家だわ。
俺の頭の標高を自分と同じくらいの所まで下げると、一色は俺の耳元まで口を近付けて来た。ほのかに香る香水の匂いと、柔らかい髪の感触に一瞬心臓が跳ねる。
心拍数が上がるから、こう言うのやめてくださいよぉ、寿命がリアルに縮むんですよぉ。
「……さっきの話、聞いてました？」
「あ、まあ、ちょろっと聞こえちまった。すまん」
「謝らなくて良いです。それで、どうですか？」
「え、何が」
「わたし、可愛くなりましたか？可愛いですか？」
「え、いや、そんな事言われても」
ずいっと顔を乗り出すのやめて。近いよ、近い。顔赤くさせんな！
可愛いと思った事はまあ、結構あるけど。…ほんとに結構あるな。
それを言えと言うのは流石に、流石に！
「答えてくれないと、このままわたしと先輩との間に変な噂が立つまでこの距離をキープしますよ」
何つう脅しだ。得意げに微笑むのやめろ、可愛いから。
確かに、一色の顔が目の前にあるこの状況ではあらぬ誤解を受ける事になる。
と言うか、誤解を受けても俺は大して気にしないが、一色の方がよほど応えるのではないか。
俺とカーストが明らかに違うし、ましてや今はこの高校の生徒会長なのだ。下手な噂が立つのは避けなければならない。
考えて中途半端に答えあぐねていても、誤解を受ける可能性が増すばかりだ。
だからここは、さっさと正直に言ってしまうに限る。
「ああ、可愛いよ。いちいち可愛い。それに可愛くもなってんじゃねえか？単に距離が近付いて、お前の良いとこが見えるようになっただけかもしれねえけど」
なるべく平静を装って、さらりと言った。これなら問題あるまい。

「……え……」
一色がぽかんとしている。どうしました？言われ慣れてるだろこれくらい。いや、ほんとに。
「……ま、まあ、そう言ってくれるなら……許してあげないことも無いって言うか……」
目を逸らして、頬を赤らめながら少しもじもじとしながら髪を指でくりくりと巻く。
やめろよ、恥ずかしい事言った後にこんなリアクションされたら余計恥ずかしくなるだろ！
なんで曖昧なのん？この場でグレー判定出されても対応に困る。
「あー……そう言う訳だ。行っても良いか？」
「え、あ、はい、どうぞ……。……全く、普段からそれくらい言えれば良いのに…」
後半すごい小声で何か言われた。んなもん恥ずかしくて言えるかっつーの。
去り際、微かに先程の会話の続きが聞こえる。
『えー、さっきの人といろはどう言う関係なのー？』
『何でもないってー。ただの便利な先輩！』
『えーそうなんだー。ここに来る途中に他の先輩に話しかけられてたけど、あの人たちはー？』
『知らない人たちだよー。興味無いし』
『気い付けなよー？いろはやたらモテるんだしさー』
ああん？
気付いたら歩く速度が通常の５％くらいになってた。もはや止まってる。当社比９割５分減！
やっぱり背中にフライパン仕込もうかな。……膨らみがやばくなるな……。
っつか、便利な先輩って……君ねえ……。
ようやくいつもの場所に着くと、戸塚天使がコートを舞う時間が終わってた。泣いた。

一色に戸塚鑑賞代を弁償してもらいたい勢い。

戸塚あああ……。

続く。

（2）

1.

放課後、部室に向かいながら今日聞いた会話の事を思い出す。

……なんだろうね、別に何とも思わないんだけど。

ただ、身近に居る女子の事をあんな風に褒められるのは悪い気はしない。

……あれ、俺、何様だろう。

狙う男子が居るのも当然の事だろう。一色だってあんな可愛いのだから、狙う男子もさぞや多いのだろう。今は生徒会長もやっていて、今まで見せていたあざとさだけでなく、真面目で良い子な面も沢山の人に見えているだろうし。

……あれ、俺、何様だろう。

……この気持ちは何だろう。春かな？いや、春はまだ遠いと思うんだけど。瞼閉じればそこにあるのかな？

気付くと部室の前まで来ていた。由比ケ浜の元気な声と、雪ノ下の落ち着いた声音が聞こえて来る。入った瞬間ゆりゆりしい現場を目撃とかならないよね？大丈夫だよね？……大丈夫だよね？そう言えばあなたたち、結局一緒にお風呂に入ったんですかね？

からりとドアを開け、部室に足を踏み入れる。

「あ、ヒッキーだ！やっはろー！」

「おっす」

「あら比企谷くん、目が腐っているけれど大丈夫？体調を崩しているのではないかしら」

「目が腐ってるのは元々だよ、お生憎様」

いつも通りのやりとりに、ほっとしたものを覚える。

この空間に心の底から安心するのは、閉鎖的だからなのだと思う。この三人が誰か他の人と話す事が生じ得ない状態で、ぬくぬくと話す。無理に話す事も無く、気が向いた時に喋れば良い。そんな気の抜けたこの空間が、たまらなく心地良い。

しかも今のこの空間は、完全に崩壊しかける程の不和を乗り越えて

の物だ。心の安らぎは測り知れない。
だから、何だろう、もし他の男どもがこの二人に群がって来たら、この空間が崩れる気がするのかもしれない。この穏やかな空間を侵される不快感は測り知れない。平塚先生や、それとなく入り込む様になった一色のようなやつを除けば、後は皆不快だ。あ、戸塚はオッケー。材木座？誰それ？
そうだ、このもやもやは俺のテリトリーを侵されることに対する不安と苛立ちなんだ。そうだ、きっとそうに違いない。雪ノ下や由比ヶ浜や一色に対してどうのこうのなんて言う感情では断じて無い。断じて！そうでは！無い！
頭の中の雑念を必死で振り払おうとしながら、表面上は平静を取り繕って自分の席に向かった。
「……ひ、比企谷くん、何をしているのかしら？」
「え、ヒッキー……？」
「え？」
ぐるぐると考え事をしていて気付かなかった。
無意識の内でも、俺は鞄を机の上に置き、座って読みかけの本の栞を抜こうとしているのかと思ったら、違った。
俺は雪ノ下の前に立つと、おもむろに彼女の頭を撫でていた。
突然の、凶行☆
しかも小町を撫でる事に長年習熟していたため、絶妙な力加減で撫でている。流石は俺のお兄ちゃんスキル。オートで発動するとかレベル高い。いや、こんな冷静に実況している場合ではない。発動する場所によっては、気付いたら罪を犯してる可能性さえあるし。いやだから、こんな事考えている場合ではない。
俺、何してんの、急に？なんで？どうして？
由比ヶ浜は固まっている。事態を呑みこめていないようだ。大丈夫だよ、俺も呑み込めてないから。
雪ノ下は……あれ？抵抗しない？この状況で本を読めるってのもすげえな……。
あ、手が止まった。頬が赤らんでる？

「……ど、どう言うことかと、き、聞いているのよ……」
糾弾する様な言葉の割に語調は弱々しく、拒絶の意が感じられない。ってか可愛い。目を背けてるこの感じ超可愛い。
……何だろう、この状況。
「えっと、まあ、その…つい？」
疑問形で言ってしまった。超だせえ。
「……そ、そう。まあ、それなら良いわ……」
良いんだ。受け入れちゃった。また本読み始めたし。え、じっくりやっちゃって良いの？やっちゃってとか言うんじゃねえよ、俺。おバカ！
しかし俺も、雪ノ下の髪の感触を楽しめるとなるとこの状況を受け入れるのも吝かではない。滑らかな触り心地も、ふんわり香るシャンプーの匂いも、今なら楽しみ放題だ。すぐ隣に由比ヶ浜が居るけど。めっちゃ見てるけど。
「……そうか、じゃあ、このままもう少し……」
変に照れちゃって俺マジ気持ち悪い。めげずに、そのまま雪ノ下の頭を引き続き撫で始める。
「むー……」
犬の唸り声が聞こえた。あ、違う、由比ヶ浜だ。え、それどう言うリアクション？
「……ゆきのんばっかり、ずるい……」
ぽそっと何か行った。あれ、拗ねてる？何この子可愛い。
「……由比ヶ浜さん、これは比企谷くんの歪んだ欲望が、誠に残念な事に私に向けられた事により生じた状況なのよ。だから、比企谷くんがこの色にまみれた欲求を他の人に向けないようにする為に、今、私が全力で受け止めなければならないの。だから……ね？」
『ね？』じゃねえよ。何だその言い様。泣くぞ。って言うか自分で色とか言うなよ。エロく聞こえるぞ？
「むーーー……」
長い、長いよ、唸り声。昔の山に居た野犬かよ。
膨れっ面の状態から犬ヶ浜さんがどうするのかと思ったら、椅子を

持ち上げがたがたと移動させ、雪ノ下のすぐ隣に置いた。
そして、頬を膨らませたまま俺の目の前に頭を差し出す。
「……ん」
すんごい短い言葉、と言うより声を発して、頭を俺の前にずいと突き出して来た。
……えー、何、この状況？撫でないといけない流れ？や、別にいやではないよ？でも、その、……ねえ？
うん、いいや、撫でちゃおう。雪ノ下のリアクションを見る前に！
「……じゃ、じゃあ……」
俺が恐る恐る、上ずった気持ち悪い声で受け入れる意を示すと、雪ノ下が俺の動きを止めようとするかの様にぴしゃりと言葉を発した。
「比企谷くん、あなたは私を撫でることに集中すべきでしょう。由比ヶ浜さんまで撫でるなんて、何を考えているの？あなたの劣情を二人以上の女性に向けるだなんて、世間が許すと思って？」
本に視線を落としたまま、すごい毅然としてすごい馬鹿みたいな事を言って来た。どんだけ撫でられたいんだよ。猫か。猫だ。
「えー……あたしは、良いけどな。ゆきのんと一緒に撫でられても」
おい、百合、メロン。百合メロン。流石だな、おい。
「……そ、そう、なの……。……では、仕方ないわね。比企谷くん、私と由比ヶ浜さんを同時に撫でる事を許可します。さあ」
「やった！ほらヒッキー、早く早く！」
ほら、雪ノ下さんが陥落してもうた！陥落してもうたよ！どんだけ由比ヶ浜に甘いんだよ！
二人の許可を得ちゃったんですけど。
なに、何なのこの状況？二人してバカ過ぎるでしょ？
……発端は俺だから何も言えねえ……。

2.

雪ノ下を右手で、由比ヶ浜を左手で撫で始めてもうかれこれ２０分くらい経つだろうか。なげえよ。どう言う事？止めようとするとすんごく怪訝な顔で見られるし。

いつもの様に携帯を弄ったり本を読んでいてくれればまだ良いのだが、何故か二人とも完全に手を止めて、俺の手に身を委ねている。
初めは二人ともぽけーっとした顔になっていたんだが、途中から気持ち良くなって来たのか、段々ととろんとした表情になって来ている。
「ヒッキー……」
息混じりの、妙に色っぽい声で呼ばれてどきりとした。え、何、事の最中？……俺のバカ野郎。しかし色っぽい声で呼ばれる名がヒッキーって、俺が辛すぎるんだけど。
「どうした？」
「犬ってさあ……あごの下を撫でると気持ち良いみたいなんだ」
え、何言い出してんのこの子？
「比企谷くん」
こっちも艶っぽいなもう。それぞれの持ち味を出してくんのやめてよ！変な気持ちになっちゃうでしょ！ごめん、もうなってる！すんごいなってる！
「どうした？」
「猫も……あごの下を撫でると気持ち良いらしいのよ……」
……すーごい嫌な予感がする。
「ヒッキー、ね？お願いだから……」
「比企谷くん、ちゃんと欲求を発散しないとまずい事になるだろうから……」
やばいやばいやばい。由比ヶ浜は潤んだ瞳で懇願する様な声で言って来るし、雪ノ下はこの期に及んでまだ理由を付けようとしてるし。
「あごの下、撫でて？」
……はい、来たー。息子よ、頼むから反応しないでくれ。

3.

「……んっ、ふあっ、んんんっ……」
「ひゃっ、んあ、くふぅっ、あっ、あっ……」

「……」
雪ノ下は悩まし気な声を抑えるように漏らし、時折俺を上目遣いで見つめる。
由比ヶ浜は甘い声を遠慮なく上げ、俺をずっと切なそうに見つめている。
……死ぬわ、興奮で。何これ？
何で俺が雪ノ下と由比ヶ浜のあごの下を撫で回してんの？
二人ともうっとりしすぎだろ？エロさ自覚してる？
いよいよ俺の息子もやばいかな、ぎりぎりかなって思って下を見た。
……がん勃ちやないかい……。
まあ、正直興奮しない訳が無いですよね。こんな状況でね。俺の体勢だけ見れば魔王が戦闘シーンで仁王立ちで手をわきわきさせてるみたいになってんだけど。
ああ、これ、どうしよう。このまま終われるかな？これ以上撫でよう無いよ？どうすんの？部活開始直後からこの状態だから、下校時刻までまだたっぷりある。誰か助けに来て欲しいけど、こんなん見られたら死ぬ。『本物が欲しい』と2トップを飾れるくらい恥ずかしい。思い出しただけで恥ずかしくて死ねる。
幸い、二人の視線の向きを考えると、俺の息子が起立してるのには気付かなそうだ。何とかなって……お願いですから……。
どうしようかと途方に暮れていると突然、聞き覚えのある声がした。
「わー、先輩って意外と独占欲強いんですねー。お二人をこんな風に手懐けるなんて……」
「え」
「……え」
「わわっ!?」
後ろを向くと、一色がいつの間にか椅子に腰かけ、机に肘を付いて手を組み、あごを乗せてこちらをじっと見ていた。ほえ～って感じで見てる。そんなに興味湧くの、この光景に？

あまりにもびっくりし過ぎて、俺たち三人のリアクションもいつもと違っている。
雪ノ下はいつもなら、慌てると俯いたり何かしら照れ隠しの言葉で罵倒して来る。思い出すと泣く。
由比ヶ浜なら『わわわっ!?ちょ、ちょ、ヒッキー、どうして!?やだ、キモいんだけど!』みたいにテンションで誤魔化す。思い出すと泣く。
俺ならそれはもう理路整然と破綻した論理を掲げる。毎回皆引いてるのを思い出すと泣く。
……泣きなさい、笑いなさい？
だが、この時は、この時ばかりは、三人が三人とも、ものの見事に固まった。
……だって、言い訳しようが無いんですもの……。

続く。

（3）

1.

場に気まずい空気が流れる。いや、正確に言えば気まずいではなく、気恥ずかしい空気だろうか。とにかく恥ずかしい。とにかく恥ずかしい！誰か助けてよぉ！

一色が登場してからまだ1分くらいしか経ってないはずなのに、時間の流れも空気の流れもいつもの何倍も重くゆっくりに感じられる。何、この空間はセメントか何かで出来てるの？

雪ノ下は俯いている。ただただ力無く俯いている。嵐の前の静けさでない事を祈る。嵐、即ち一色と俺が消される事だ。俺も消されちゃうのかよ。耳まで真っ赤だから今は恥ずかしさが他の全ての感情を上回ってるんだろう。嵐よ、こちらへ来ぬまま去れ……！

由比ヶ浜は顔を真っ赤にして、『いや～、たはは……』とか言いながら指を絡めてもじもじしてる。さっきの表情を思い出すとまた勃ちかねないので、あんまり直視しない様にする。……でもちょっとは見ちゃう。

「……お前、いつの間に入って来てたんだ？」

少しむっとした感じで言っちゃうのはご愛嬌。俺の語調に、一色はぷくっと頬を膨らませる。

「ちゃんとノックしましたよー？一回ノックしても返事が無くて、もう一回ノックしてもまだ返事が無いから試しに聞き耳を立ててみたんです。そしたら何か変な声が聞こえてー。すごい怪しいぞって思ったんです」

雪ノ下は下を向いたまま、由比ヶ浜は斜め下を向いたままぴたりと動きを止める。

「それで、試しにそーっと開けてみたら先輩の背中が見えて、何してるか分かんなかったんでそのまま来ちゃいました」

てへっ、と言う顔で舌を出す。いや、てへっ、じゃねえよ。おかげさまでこの状況だよ。この状況は誰のせいだと思ってんだ？俺のせいでした、てへっ。

にしても、相変わらずあざと可愛いなこいつ……。
っつうか、雪ノ下と由比ヶ浜が気付かなかったのも中々だけど、俺が気付けなかったと言う事に何よりびっくりだ。なに、俺どんだけ撫でるのに夢中になってたの？ムツゴロウさんが動物を愛でてる時より集中力あるんでないの？
次に誰が喋るのが最善なのかと考えあぐねていると、手を組んだまま一色が首を少し傾げてむふふと笑う。
「雪ノ下先輩も、結衣先輩も……先輩の事、ばっちり受け入れてましたね」
え、今なんで燃え盛る火にガソリン注いだの？出火大サービス☆
ほらほらほらもう二人の顔がもう。由比ヶ浜は凄くひたすら恥ずかしそう。雪ノ下は……え、もはや逆に白い？どう言う原理？熱が一周回って０になったとでも言うの？
「先輩先輩」
「あん、なんだよ？」
この場の何とも言えない空気にばっちり飲まれていたせいか、変につっけんどんな言い方になってしまった。
一色はそんな俺の雰囲気に、一瞬だけむーと頬を膨らませたが、すぐにきゃるんと笑顔になって話を続ける。
「わたしも撫でてくださいよ」
「あん？」
あん？
思わず実際の声と心の声で二度言ってしまった。
そして、俯いている筈の雪ノ下から突然冷気が噴き出す。え、どっから出てんのその冷気？きみドライアイスか何かなのん？
「いや、んな恥ずかしい事出来るかよ」
「なんでですかー！お二人にはやってたのにー！それに、昼にわたしに『可愛い』って言ってくれたじゃないですかー！」
ばかやろう。この空気で。ばかやろう。
一色を戦慄した表情で見つめていると、背後に犬と猫の気配を感じた。

由比ヶ浜さん、む～～～と波線があと８０個くらい続く勢いで長―く唸ってる。
雪ノ下さん、寒いです。いくら冬で本領発揮出来るからって本気出さないで下さい。この星に生きるものの代表として言います。ごめん、自惚れた。この星に生きるダメ人間を代表して言います。ごめん、これはこれで自惚れた。下には下が居るよね。
とか考えてたら、いつの間にか、一色が由比ヶ浜と雪ノ下の間に椅子を置いて陣取り、わくわく顔で頭をこちらに向けている。行動が早すぎるよぉ……。
「先輩、早くー」
いや、二人の様子を気にしないの？どんだけタフになったの？特に今の雪ノ下やばいよ？リアル雪女だよ？それかエルサ。氷のお城を作って猫と暮らしたら良いよ。猫の名前はオラフね。
俺がたじろいでいると、一色は膨れっ面で自分の腿をぺちぺちと叩き始めた。更に、頭をぽすぽすと叩いて催促をしてくる。
そんな可愛い催促あるのかよぉ……。本当の取立てより怖い人が右側で冷気を発してるんですけど。これもうちょい行くと、規模的に寒気と呼べるんでないの？
くおぉ……八幡、もう、限界だよぉ……。
一色のおねだりに負け、恐る恐る手を伸ばす。柔らかい髪の毛にぽすっと手を乗せると、
「……おお～……」
妙に感心した様な、気持ち良さそうな声を出された。なに、温泉にでも入ったの？
一度踏み出してしまったものは仕方が無いと、一色を撫でる手をゆっくり動き始めた、その時。
「一色さん」
底冷えのする声色で、雪ノ下が小さく小さく言葉を発した。俺も一色も、ついでに由比ヶ浜も動きがぴたりと止まる。あれだ、絶対零度って全ての運動が停止しちゃうもんね。生命活動が止まらないだけ良いよね！

「は、はいぃぃ……」
ほらもう一色が超震えてるよ。斜め下向いた所で不自然に止まっちゃってるし。
寒い。寒いのに汗が出る。どう言う事なの？
勇気を出して雪ノ下をちらりと見る。いつの間にか顔を上げていたのだが、あれ、錯覚かな？目にカラコン入れてるのってくらい青く見えるんだけど？
「……さっきまで、私と由比ヶ浜さんでこの男の歪んだ欲求を受け止めてあげていたのよ？そんな汚れた欲望の捌け口に、あなたまでなる必要は無いと思うのだけれど」
……可愛い、可愛いよ雪ノ下さん。言い方超怖いし使ってる言葉も無駄に怖いけど、なんか可愛いよ！でもこんな本音絶対言えない。明日の朝日を拝みたいから……。そんな時間に起きないけど……。
すると、最初は怯えていた一色の顔色が変わり、小さな声で『ははーん……』と言ったのが聞こえた。わーお、超嫌な予感。
「雪ノ下先輩……それに結衣先輩も、焼き餅焼いてるんですねー？なーんだ、初めからそう言ってくださいよー！」
おい、お前爆弾落とすペース速すぎんぞ。アイテムだいぶゲットしたボンバーマンかよ。５個くらい一気に置いてんぞ。
雪ノ下と由比ヶ浜が目を見開く。
「なっ……っ」
「そ、そんなこと……！」
二人とも言葉に詰まるのかと思いきや、由比ヶ浜がすぐさま次の言葉を発した。
「……や、そんなこと、あるかも……。あたしもヒッキーに撫でてもらいたい」
ほーん？ちょっと待って、死ぬ程恥ずかしいんですけど？
「！ゆ、由比ヶ浜さん……？」
ん、これどうなんの？
「やったー！じゃあ結衣先輩、一緒に撫でてもらいましょう！雪ノ下先輩、先輩の色欲はわたしたちで受け止めますから、そのまま休んで

いてくださいね」
ちょっとあなた？眩しい笑顔で何言っちゃってんの？
色欲って言うんじゃねえよ。間違ってねえよ全然。
「あ……」
そんな呆然自失とならないで、雪ノ下さん……！ああもうどうしよう？このままだと俺は由比ヶ浜と一色を撫でて、今にも泣きそうな雪ノ下をほったらかしにすることになんの？地獄にも程があるでしょ。
この際だ、致し方無い。
「……」
「……あ……？」
しょうがないので、雪ノ下の頭に再び手を乗せて、優しく撫で始めた。
多分、これで良いのではなかろうか。
雪ノ下の顔が安心によるものなのか、穏やかでとろんとしたものになる。
「むー……先輩、優し過ぎますよー？」
いや、お前はどう言う立場なんだ。どこの部の鬼コーチだよ。
「でも……」
一色が雪ノ下の耳元に口を寄せる。なに、ゆるゆりがパワーアップするのかい？
てっきり耳打ちをするのかと思いきや、それっぽいひそひそ声にはしているものの、明らかに声の大きさが俺に聞こえるようにしているとしか思えない声で話し始める。
「雪ノ下先輩、良かったですね？」
「な……何が良かったと言うの？」
一色がちろっと俺を見る。
「先輩に撫でてもらえて」
次の瞬間、雪ノ下が耳まで真っ赤になって目を見開いた。何かあれだ、もうちょい髪が短かったらジブリばりに髪が逆立ちそう。隣にトトロが居るのかな？
「そ、そんなこと……あ……」

これ以上言葉を続けさせるのも酷かと思って、撫でるのを再開してみた。雪ノ下の滑らかな髪をすりすりと愛おしむ様に……までは行かないけど、撫でる。
「……ん……」
少し嬉しそうな顔を一瞬浮かべたが、恥ずかしくなったのかすぐに俯いてしまい、表情が見えなくなった。
……何この子……家で飼いたいんですけど……。
女の子を家で飼うって言うフレーズの響きがマジで終わってる。意味も終わってるけど。何がやばいってマジでやばい。

2.
と、言う訳で！
雪ノ下雪乃、由比ヶ浜結衣、一色いろはの三人を俺が撫で回す会が始まりました！イェイ☆
……死にたい……。
途中参加だと言う事もあり、初めは一色を重点的に撫でて、その後は順番に撫でる。女性陣のリクエストに応じて撫で方も変える。
途中で一色が『先輩、シフトで言うと次はわたしですよー？』とか言って来た。俺はどこのパートタイムラバーだよ？時給もらいたいんですけど。
「んっ……んんっ……」
「あっ、ふあっ、んぁっ、ひぅっ……」
「……おお……」
雪ノ下と由比ヶ浜のあごの下を撫でていると、二人の反応を見て一色が少し頬を赤らめながら感嘆の声を漏らした。
「先輩、先輩。次はわたしもそれお願いしますっ。次は両手ともわたしの番ですよね？両手でお願いします」
すんごいわくわくしながら言われた。
確かに、シフトで言うと、いやシフトって何だよって話だけど、次は一色を両手で撫でる番だ。でも良いのかな……大丈夫かな……。
「先輩、早く早くー」

俺が少し躊躇していると、一色が不満げにせがんで来た。しょうがねえな……。
一色のあごの下に手を伸ばす。―と。
「ふあぁぁんっ!?」
「えっ」
えっ。
一瞬固まってしまった。
中々の音量でものっそい色っぽい声が聞こえたんだけど、気のせい？
「お、おい、一色？大丈夫か」
「？何がです？」
何事も無かったかのようにとぼけやがった……。とぼけてるのに食い気味で俺のセリフの末尾潰すんじゃねぇよ……。あと、小首傾げるんじゃねえよ。可愛いだろうが。
「さ、先輩、仕切り直しですよー」
きゃるんっと笑顔を浮かべ、胸の前で小さくガッツポーズを作る。いや、仕切り直した所で……ねえ？しかしこのわがまま姫の指示に従わない訳にも行かない。もう一度、一色のあごの下に手を伸ばす。
「あっ……んんっ……ひぐっ……あふあっ……んあんっ！」
……中途半端に堪えてる分、余計にエロくなっちゃったよぉ……。
腕を抱くなよ。マジで欲情しちゃうから。
「なあ、やっぱり止めた方が」
「どうしましたかー？」
……このやろう……。負けず嫌いって面では雪ノ下と良い勝負するかもしれない。この場面で負ける事＝感じる事なのかって聞かれたらひとかけらも分かんないけど。君は今何と闘ってるのん？
「んー、まあまあ味わった事ですし、そろそろお二人に……」
一色が言いかけた所で、由比ヶ浜がはっと何かを思い付いた顔をした。これ、小町なら絶対ヤマピカリャーってる。訳すとイリオモテヤマネコの様に目が光ってる。説明が超長くなった。
「ゆきのん」

由比ヶ浜が雪ノ下に声をかける。初めて見たぞ、由比ヶ浜のワルそうな顔……。どうやらアイコンタクトで何かを伝えようとしているみたいだ。
「何かしら……あ」
雪ノ下に伝わった。え、今のやりとりで何が伝わったの？テレパシー使えるの？むしろ百合パシーか。
由比ヶ浜がにひっと笑い、雪ノ下がうっすらとだが極悪な笑みを浮かべる。雪ノ下、お前のその笑い方……陽乃さんそっくりだぞ……。絶対言えないけど。絶対言えないけど。
そして二人が同時に一色に手を伸ばし、一色の両腕を押さえ付けて身動きが取れないようにする。
「えっ!?ちょ、結衣先輩、雪ノ下先輩、何するんですか!?」
おお、一色が本気で慌ててる。珍しいな……。いや、そんな事言ってる場合じゃないか。
「おいお前ら、一体何やって……」
俺が二人に質問を投げかけると、由比ヶ浜が再びにひっと笑う。……可愛いんですけど。何その新境地？
「さっきのお返しだよー」
「そう……お返し……」
由比ヶ浜が俺に向かって楽しそうに言った後に続いて、雪ノ下が一色の耳元に息を吹きかけて、妖しい声色で囁いた。何その小悪魔通り越した悪魔感？一色は涙を浮かべながら小声で『ひぅぅぅっ……！』って言ってる。
ってか由比ヶ浜と雪ノ下が一色の両腕を押さえてるの、何かもう尋常でないくらい百合百合しい。何かぞくぞくするんですけど。

続く。

（4）

1.

「はい、ヒッキー、どうぞ！」

由比ヶ浜が凄く楽しそうに言った。急に何に目覚めたのん？あなた……。

どうやらあごの下ナデナデをもう一度やれと言うことらしい。

「ちょ、先輩、さっきので先輩の色欲は十分に満たされましたよね？大丈夫ですよね？先輩はそこまで変態じゃないですよね？」

一色が必死で逃れようとする。この状況でまだ俺を罵倒するか……。それにしても、こんなに慌てる一色は本当に珍しい、と言うより初めて見る。超楽しいんですけど。

雪ノ下の方を見ると、先程よりも一色を押さえる力を強めて、俺に無言で『ほら、行きなさい』オーラを出している。なんか勢い余って一色の腕の関節極めちゃいそう。どんだけノリノリなのん？さっきの一色の言葉がよっぽど恥ずかしかったんですかね……。

どうするか迷った末に、出来るだけ優しい声色で一色に話しかける。

「一色」

俺の表情と声に、一色が安堵の表情を浮かべる。

「せ、先輩……分かってくれたんですね……？」

俺は一色の言葉に対して、笑顔でかぶりを振った。

「一対二だから、ごめんな」

「……変態ぃぃ！」

一色が悲しげに叫んだ。しかし声量は抑え気味。何か色んな複雑な心情が絡まってるんですかね……。この状況を他の人に見られたらそれはそれで地獄ですもんね……。

涙を堪えるフリだけしながら、一色のあごの下に手を伸ばす。

ぴとっ、と指が一色の柔肌に触れる。

「ひんっ、せ、先輩、だめですったら……あふあっ、くすぐったいんですから、いくら撫でたって、んんっ、笑っちゃうだけですよっ？ん

あっ、ひぐっ、だ、だから、ひあっ、先輩、んんっ、だめ、んんっ、本当に……だめ……あうぅぅぅ……」
一色の声がどんどん上ずって、色気を帯びて来る。マジでやばい。
「あうっ、も、もう、結衣先輩も、ひんっ、雪ノ下先輩もっ、あうぁっ、そろそろ放してくれたって、ひあぁぁっ……、い、良いじゃない、ですっ！かぁ……」
目はとろんとして、唇はほんの僅かに開いている。頬は朱に染まっている。くすぐったいだけだったら絶対こんな表情にならんだろ。今までとのギャップがありすぎて、やっぱりこの子を襲いたくなる。そして雪ノ下に社会的に消される。消されちゃうのかよ。
にしても、由比ヶ浜も雪ノ下も微動だにしないな。鬼だな。百合トリオの絵面の破壊力やばし。
「あうぅっ、も、ほんとに、先輩、やめっ、やめてくださっ…、あうぅ…、何でも、ひんっ、なんでもしますっ、ふあっ、からぁ……」
「何だって？」
何だって？
その魅惑的なフレーズに驚いて、思わず手を放してしまった。
「ヒッキー、うわぁ……」
「比企谷くん……」
由比ヶ浜と雪ノ下にそれはそれは蔑んだ目で見られた。そして、二人は自然に一色を押さえていた手を放す。
ようやく解放された一色が、大きく息を一つつき、俺に向き直る。
「……ふふふ……よくもやってくれましてね先輩！あんなのはウソに決まってます！」
な、なにぃ!?大げさにリアクションをとる。あくまで心の中でだけど。心の中でだけならいつでもノリノリだぞ、俺は。
「よくもやってくれましたね……さて、お返しに何をしてあげま……!?」
一色が変な所で言葉を切った。何をしてアゲマン？
彼女は何かに目を向けたと思ったら急にぎょっとした顔になり、頬に手を当ててあわあわと両脇の二人に目をやったかと思うと、目を閉

じて胸に手を当てて、大きく息を一つついて俯き、ほんの少しの間を空けたかと思うと、顔を上げてにやーっと笑った。
「……先輩」
「な、なに？」
笑い方が怖いよ。雪ノ下とはまた違った怖さだよ。
一色は左手を口に当て、右手の人差し指で俺の身体の下の方を指差した。
「……それ、どうしたんですか？」
ふふふと笑いながら一色が指差した場所を、雪ノ下と由比ヶ浜が見た。すると、
「……あ……」
「!?はわわ……」
二人とも頬を朱に染めた。
何かもう確定事項な気もするけど、一応確認の為恐る恐る視線を下に落とす。
……これ以上無い程勃って、今にもズボンを突き破らんとする勢いで反り返ってました☆
……死にたい……。
え、どうすんの、この状況？
完全に固まっていると、不意に一色の手が俺の股間に伸び、細い指がぴとっとズボンに触れた。――と。
「ひゃうんっ!?」
……超絶情けない声を出して、手で股間を押さえながら内股で後ずさりしちゃったよ。
一色、『へぇ……ふむふむ……』みたいな妙な納得を示してにやっとしないで。
由比ヶ浜、引かないで。いつもの２５倍くらいの勢いで引かないで。
雪ノ下、そうだよね、路傍の石を見た時にわざわざ冷たい目なんてしないよね。俺を見てる様で見てない目が辛い。その目は何を見据えてるの？

そして、3人がそれぞれ顔を見合わせたかと思うと、三者三様ににやりと笑った。由比ヶ浜と一色は女子高生っぽいにやり顔なんだけど、雪ノ下だけやっぱり超怖いよ……魔王感半端ないよ……。
「先輩、今度は結衣先輩と雪ノ下先輩を撫でる番ですよー？」
「ほら、ヒッキー、早く！」
「比企谷くん、契約した以上、きちんと働かないとだめよ？」
いや、契約した覚えなんかねぇよ。どさくさ紛れで何言ってんの？何このブラック会社？
……でも……この3人が束になってかかって来たら逆らえません……。

2.

そこからは、状況がまた更に異常な物になった。
「おぁ……うっ……うぁっ……」
「わぁ……先輩にしては可愛い顔になるんですね」
雪ノ下と由比ヶ浜の頭を撫でながら、正面に居る一色に股間をズボン越しにまさぐられる。
いや、おかしいでしょこの状況。何これ？
「比企谷くん、手つきが疎かになってるわよ。しっかりしてちょうだい」
「ヒッキー、もっとちゃんと撫でてよー」
両サイドが鬼。
「ほれほれー、これが気持ち良いんだろー？」
いや、一色さん楽しそうにも程があるでしょ。……顔が真っ赤になってて声が震えてるのは気のせいだろうか。
ズボン越しとは言え、押し寄せる快感は尋常なレベルではない。
目を閉じながらぶるぶると震えていると、不意に由比ヶ浜の声がした。
「いろはちゃん、こっち……」
由比ヶ浜の言葉に反応して、一色が『あ、はい、オッケーです！』と言うのが聞こえた。何事かと思った瞬間に、一色の手によりズボンの

チャックを下ろされる。
「は、はぁ!?」
いや、本当に、はあ!?
先程よりも更に情けない声を上げてしまった。
ボクサーパンツに包まれ俺のモノが、開いたチャックからずるりと姿を現す。
「わぁ……すご、い……」
「ヒッキーの、こんなになるんだ……すご……」
いや、由比ヶ浜さんに一色さん、何かうっとりとした表情にならないで?ちょっとぞわりとするから。二人同時に触らないで!
雪ノ下さん、無言で興味深げに見つめるのやめて?あなたもさり気なく触るのやめなさい!
続く。

（5）

1．

雪ノ下、由比ヶ浜、一色の3人に、自分のモノをパンツ越しに触られている。たどたどしい手つきが逆にたまらない。

「ね、ね、ヒッキー、男の人ってすごいね！　こんなに……なるんだ……」

由比ヶ浜が右手を自分の頬に添えて、うっとりとした表情を浮かべながら左手で裏筋をこしょこしょとまさぐる。

いつもの弾ける様な笑顔とは対照的な、艶めかしい表情を浮かべていて、正直心臓が爆発しそう。

「先輩……ちょっと変態にも程がありますよ……？　まったく……どうかしてますよ……ほんとに……ほんとに……」

一色は、口では如何にも上の立場から言ってるかのように振る舞ってるけど、顔は真っ赤のまま目が興味半分恥ずかしさ半分で物凄く緊張しているのが分かる。

両手を亀頭に添えて、きゅっと握ったり手の平で尿道の先を擦ったりして来る。

ちょっと。腰、腰浮くから！

「……」

何も言わないのかよ、雪ノ下。

ただ、由比ヶ浜よりも一色よりも、尋常でないくらい真剣な目つきで凝視してる。

玉を興味深げにもみくちゃにするの止めてね？痛くはないけど、どきどきで頭が爆発しそう。

……校内でも指折りの可愛さに入るであろう3人に、好き放題に弄られている。

この状況を改めて考えてみると、異常だし、実は超お得なんじゃないだろうか。

……ごめん、ウソ。嬉しいと言う感情の１５０倍くらいの恥ずかしさがある。

2.

「よ、よ～し……じゃあ、そろそろ剥いちゃいますよ～……!?」

「うおっ!?」

一色が目をぐるぐるさせる勢いで緊張しながら、パンツに両手を掛けた。

剥くって言うな、剥くって。どこでそんな言葉を覚えたの！

――と。

このまますぐにでも俺のパンツをずり下ろしてしまいそうな一色の手を、由比ヶ浜の手が優しく包む。

「いろはちゃん、無理はしなくて良いよ？」

「結衣先輩……」

おお、先輩としての愛情ってやつか。

「よし、じゃあ合図は、いっせーのーせで良い？」

……あれ？

「はい！」

……あれれ？

二人が爽やかにやり取りをした後、会話に加わっていなかった雪ノ下まで加わり、結局3人がかりで俺のパンツを掴んで来た。え、なに、同時に引き下ろすのん？どこの鏡開きだよ。

あと、雪ノ下、喋れよ。むっつりみたいになってるぞ。多分当たってるけど。

まあ、抵抗は無駄なんて事はもうとっくに分かっているので、時の流れに身を任せます。人ごみにも流されます。あなたは時々、遠くで叱って？

「行くよー！　いっせーのーせっ！」

由比ヶ浜の元気の良い合図で、俺のパンツがずるりと下げられた。

ごめん、本当に訳分かんない。何このイベント？バカなの？

そして、俺のいきり立ったモノが3人の前にぶるんとそびえ立つ。

「……！」

3人が、一様に声を失った。

……ちょっと、嬉しいかも。小さいとかって引かれるよりは、よっ

ぽどね。
ここに来てまさかの、嬉しさが恥ずかしさに勝ると言う事態。
……いや、だから、何これ？
「……こ、これが、男の人の……あっ」
「へ？」
一色が裏筋に手を添えたと同時に言った言葉で、俺を含めた３人の動きがぴたりと止まる。
「あ、いろはちゃん……そうだったんだ……」
由比ヶ浜の複雑そうな表情を見て、一色の顔が一気に赤くなる。
「……いやーーーー！　そ、そそ、そんな訳ないじゃないですかー！　あ、そ、そうだ！　結衣先輩、結衣先輩はどうなんですか!?」
物凄いテンパっちゃった。可愛い所もあるもんだなぁ……。
……フルチンでんな事を考えてる時点でもう、色々とやばい。
「え!?　あ、あたし!?　あ、え、えっとねー」
由比ヶ浜の目は、殺せんせーが反復横跳びをする姿を目で追ってるのかってくらいの勢いで泳いでる。しゃしゃしゃしゃっとかって物凄い効果音が聞こえそう。
本気で困っている由比ヶ浜を見て、雪ノ下が穏やかな口調で事実を話す。
「あら、由比ヶ浜さんはヴァージ――」
「わーわーわー！　ゆきのん!?　言わないでよー！　……あ」
……バカか、こいつは。……バカだった。
二人の様子を見ていた一色がにやりと笑う。
「へー、結衣先輩、そうなんですか……へー」
超にやにやしてる……楽しそうだなこいつ……。
にやにやしてたと思ったら、突然雪ノ下の方に顔を向けた。
雪ノ下も突然の事だったためか、一瞬びくっとする。
「雪ノ下先輩はどうなんですかー？」
右手人差し指を頬に当て、くいっと首を傾げる。いやらしいヤツやでえ……。
「私……は……」

雪ノ下が答えあぐねて目を一瞬泳がせた時、俺と目が合ってしまった。
「……何見てるのよ」
すんごい睨まれた。なんで？なんで俺今睨まれたの？
そのやりとりを見ていた一色が、腕を組んでふむふむと頷く。なんか腹立つな……。
「そうなんですかー……」
一色は自分が処女である事を認めない上に、由比ヶ浜も雪ノ下もぼかしてる。すんごい絶妙な空気感。
ここで俺が思い切って「皆処女と童貞だね！　仲間だね！」と爽やかに言えば事態は解決するだろうか。しねえよ。俺だぞ。
あと、フルチンだしね。

3.

「……って、あれ？　ちょっと先輩、ちゃんとキープして下さいよー」
膨れっ面の一色の言葉に反応して、下を向く。
あ、萎んでる。
半勃ちくらいの状態なのだが、さっきまでのそびえ立ち具合と比べると、もはや見る影も無い。
「……あー、まあ、変に冷静になっちまったしなぁ……」
頭をがしがしと掻きながら、気だるげに答える。
すると、そんな俺の様子を見て一色の頬がますます膨れた。なに、フグなの？
「むー……そんなの許せません！」
ぺちぺちと可愛く叩いてくる。いたいいたい。可愛いけど、叩いてるモノが叩いてるモノなので、何かすごく残念な感じがする。
ぺちぺち叩き終えたと思ったら、一色は先程と同様に、目を閉じて胸に手を当てて、大きく息を一つついて俯き、ほんの少しの間を空けたかと思うと、顔を上げた。
「だから……わ、私が……大きくして、あげ……ます……」
一色は震える声で言うと、亀頭へゆっくり唇を近付けて来た。

え、ウソ、ホントに？
雪ノ下と由比ヶ浜に目をやると、一色の行動を固唾を呑んで見守っている。なに、運動会で娘を見に来たお母さんなの？
「……きゃっ……」
一色から小さな悲鳴が上がる。
ゆっくり近付いて来る一色の張りのある唇を見つめて、彼女の温かい吐息がモノにかかった為か、再び思い切り勃っていた。
それを見て、一色の目が大きく見開く。
「……わ、わわわ……うぅっ……！」
顔を再び真っ赤にしながらも、再び唇を近付けて上から亀頭をぱくっと咥えた。
その瞬間、今まで体験した事の無い快感が、全身を電気の様に走り抜ける。
「うおっ!?」
思わず声を上げてしまう。
俺の反応を見た一色は、亀頭を咥えたままにやっと笑い、俺の腰に手を回してくむくむと味わい始めた。
先走りの液体のしょっぱさや苦さがあるのだろう、時折表情が曇る。
「んむっ、んちゅっ、あむっ、……うぅっ……、……んんっ、はぁっ、れろっ……」
しかし、俺の顔を見てはそれを必死で堪えて、懸命に味わう。
……え、ここで急にこんな健気になっちゃうの？反則でしょ？
突然のギャップに、内心激しく悶える。
すると、その様子を見ていた由比ヶ浜と雪ノ下が、
「……あたしも……」
「……私……も……」
蕩けた表情で呟いた。
そして、堪りかねた様に唇を近付けて来る。
「お、おい!?　２人とも、待て……って――!?」
俺の制止などまるで意に介さず、２人は一色が懸命に咥え込んでい

る亀頭に、吸い付くように口付けをした。
「っ――――!?」
触覚での刺激もさることながら、視覚での刺激が何よりも恐ろしい程に大きかった。
雪ノ下と、由比ヶ浜と、一色の3人が、同時に亀頭に口付けをする。
3人の柔らかい唇に亀頭は完全に飲み込まれてしまい、傍目には3人が濃厚なキスをしているようにしか見えない。
百合百合しいなどと、茶化しさえする余裕が無い
あまりに扇情的な絵面に、呼吸をするのさえ忘れてしまった。
「んむっ、ちゅるっ、はむっ、んあっ、はぁっ、んんっ……」
3人の吐息混じりの艶めいた声が、時間差で混じり合って耳朶を打つ。
まるでエサが入った一つの皿にペットが群がっているみたいだ。
……由比ヶ浜が犬で、雪ノ下が猫で、一色は……どっちなんだろう？猫っぽくもあるけどこの健気な感じは犬っぽくもあるかも……。
……とか言ってる場合じゃない。
何これ？何なのこれ！立ってらんないんですけど！
由比ヶ浜と雪ノ下の頭に手を添えて、腰も膝もがくがくと言わせていると、一色が口を開いた。
ただ開くだけではなく、わざわざ舌を垂らして見せて来た。
亀頭との間に引いた糸が妖しく光っていて、その淫靡な光景が情欲をかき立てる。
「んふふー……なんですか先輩、立ってられないんですかー？しょーがないなー。特別に、座って良いですよ」
……なんでこいつはドヤ顔でこんな偉そうなんだ……。偉いってかエロい。今の一色、ちょっとやばい。
しかしこのままでは立っていられないのもまた事実。
俺はお言葉に甘えて、すぐ横にあった椅子に座る。
3人はどうするのだろうか？と思っていたら、何やら俺の足元にてきぱきと毛布を敷き始めた。え、何事？
「こんな感じで良いですかねー」

「そうね、これなら膝も痛まないわ」
「寒くもないし、ばっちりだね」
３人が頷きながら話し合っている。
いや、だから、何事？
俺が可愛らしく小首を傾げると、３人に軒並み引かれた。つら。
……まぁ……可愛くしようと頑張ったところで、俺フルチンだしなぁ……。

続く。

（6）

1.

結果から言うと、俺は座って大股開きの状態になり、そこにさっきと同じ並びで、三人が四つん這いで群がって来た。

……助けて。死ぬ。興奮しすぎて、死ぬ。

「んんっ、んちゅっ、はふっ……先輩のしょっぱい汁の味にようやく慣れて来ましたよー。もっと甘くても良いのに、何なんですかもう！」

無茶言うな。って言うかこんな状況でいつものテイストを出せる君に脱帽なんだけど。

「んむっ、あふぅっ、んむっ、んむっ……あたしはこの味、結構好きかも……。ヒッキーのだって思うと、何かすごい興奮する……」

待って、待って。サラッと髪をかき上げながら、男を限界まで喜ばせる事言わないで！

「……あ、ヒッキーの、おっきくなった……」

……死にたい。

「んちゅるっ、れろっ、ずずずず……んっ、はむっ、あむっ、ちゅるるる……」

……何も喋らんのかーい、雪ノ下さん。玉を吸うのに夢中になっていらっしゃる……。

ってか、エロい事に集中してる雪ノ下が色っぽ過ぎてまずい。非常にまずい。

目は虚ろで、夢中で口の中で玉を転がして、時折様子を伺うようにこちらをちらりと見て来る。可愛いしエロいしマジ子猫。助けて。

言葉を発するだけでも息がかかってブルっちゃうんだから、ほんと皆さんにはその辺まで考慮して欲しいです。やばい。

好き放題に弄られているんだが、3人に共通するのは、決して過剰な刺激を加えて来ないと言う事だ。

イク寸前まで手でしごいたりとかをして来ないので、正直ずっとこうしてたいと思えるくらいの穏やかな気持ち良さ。

温泉に入るのとは全く別物だが、気付くと小さな低い声で「……あ

～……」と唸ってた。そんで3人に思いっきり引かれた。泣いた。

2.

引かれるのにもめげずに天を仰いで呻いていると、何やらもぞもぞと動きが。

下を見てみると、いつの間にか雪ノ下と一色の位置が入れ替わっていた。

それだけでなく、雪ノ下は肘を深く曲げてより低い位置を陣取り、本当の猫の様な体勢で玉をしゃぶり始めた。

そして由比ヶ浜と一色は、それぞれの側から竿に口を付けて、下から上へとつつっと舌を這わせて、その後亀頭を咥える、と言う流れを交互に行っている。何この鬼エロな当番制？

一色は舌でちょちょちょんっと亀頭の先をつついて俺の反応を見てはにこっと微笑む。ちょっと小悪魔すぎて可愛すぎて訳分かんない。

由比ヶ浜は一色の邪魔にならないよう考慮しながら、出来る限り深く咥え込んで来る。俺が言うとアレだけど、愛情一杯って感じで正直心地良すぎて死にそう。俺が言うとほんとアレだけど。暖房効きすぎどころじゃない。

さっきまでは穏やかな刺激だったけれど、正直今の責めはもう気持ち良すぎて耐えられそうにない。

１０分も耐える頃には、もはや暴発寸前にまで追いやられていた。

一色が咥えている時、いよいよ限界を迎えてぶるると震える。

「あ、やば、これ……」

まともに言葉に出来ない程の快感に、思考が霞む。

俺の様子を見た一色が、一瞬驚いた後ににこっと微笑む。

「あ……出そうですか？　しょうがないですねー。……いっぱい、出してくださいね？」

言うと、今まで見た事が無いくらい可愛らしく微笑んだ。

最後の最後で、これは反則だろう。

一色の笑顔に撃ち抜かれて、不意に腰が浮いた。

「あ、くぅ、うぁっ、も、もう、出る、出る……！」
そして、身体を屈めた次の瞬間。
「っ――――――」
ごぶっ、どぶっ、どぶどぶっ、と、今まで見た事が無いくらいの大量の精が溢れ出た。
最初は一色も懸命に咥えてそれを迎えていたのだが、あまりの量に耐えられなくなったのか、顔をぱっと離した。
「ぷあっ！　……あっ、あっ、あっ――」
その直後、彼女の顔が見事なまでに真っ白に染まった。
「……はっ、はっ、はっ……だ、大丈夫か？」
落ち着いた後、息も絶え絶えになりながら一色の安否を確認する。
「あふっ、うぁ……」
声が聞こえて来るが、うっとりしたような、虚ろな様な声で、いまいち大丈夫かどうか分からない。
乙女座りになり、頬にべとべとに塗りたくられた精を手で掬っては、ぽーっと眺めている。
時折俺と目が合っている様にも見えるが、あまりにもとろんとした瞳で惚けているため、本当に目が合っているのか、そして思考がまともに働いているのかどうかが分からない。
……って言うか、可愛いしエロいし。何なの？許されるならあと小一時間くらい眺めていたいんですけど。
そんな一色の様子を見ていた由比ヶ浜と雪ノ下が、ゆっくりと一色の顔に近付いた。え、なになに？
「……ふあ？　……やん、なんですか、お二人とも～……」
一色の全く嫌がっている様に聞こえない猫撫で声も、そのあまりに扇情的な光景に霞んだ。
雪ノ下と由比ヶ浜は、一色の顔に纏わり付いた俺の精をぺろぺろと舐め始めていた。
四つん這いのまま、本当に猫や犬が舐めているかのように。
そんな二人の行動を、一色は乙女座りのまま手をぺたんと床に付けて、完全に受け入れている。

「……」
今さっきまで、出したばっかだからってしおしおに萎んでたのに……また、がん勃ちしちゃったよ。
それに気付いた由比ヶ浜が、にこっと、少しばかりの妖しさを孕んだ笑みを浮かべる。
「……あ、ヒッキーの、また元気になった。……じゃあさ、今度はあたしに……出して？」
言うと、制服の胸元のボタンを、夏場に比べて明らかに1～2つ多く開けた。
「……ぜひ」
まあ、断る訳も無いですよね☆

3.
結局あの後、由比ヶ浜メイン、雪ノ下メイン、一色の手こきによる3人同時顔射、由比ヶ浜の手こき（以下同文）、雪ノ下（以下同文）と続いて、下校時刻を迎える頃にはばっちりとミイラみたいになっていた。
「……ふう、いやー、凄かったね、ヒッキーの！」
のびのびとエロいこと言われてせがまれたおかげで、今僕はからっからですよ、由比ヶ浜さん。
「まったくだわ。よくあれだけ出せたものね。ここできちんと処理をしておいて正解だったわ……」
いやいやいやいや。途中で「お願い……もっと出して？」って俺にしか聞こえない小さい声で囁きながら、俺の乳首を舐めつつ手でしごいて来たのはどこのどいつだよ？思い出したら身体が熱くなって来た……。
「うーん、一日でこれだけ出すとなると……これは、わたし達でどうにかした方が良さそうですね！」
いや、何きりっとした顔で言ってんの？まだ白いの付いてるよ、ほら！拭いて拭いて！
「つうか、絞り取り過ぎだろ。絞られ過ぎて、俺もはや干物だぞ」

「あら、普段から生きる気力もさして無いのだから、それはいつも通りなのではないの？」
　雪ノ下が言葉と全くリンクしていない笑顔を浮かべる。いつもの毒舌が戻って来やがった……。
　でも、何かもういちいちさっきの色っぽい表情を思い出しちゃってもう僕はダメです。
「良いじゃないですかーまったく。こーんなに可愛い女の子に絞り取られちゃうんですよ？感謝しかしてほしくないですね！ついでに何かプレゼントも欲しいところです！」
「いや、なんでどさくさまぎれに物ねだってんの？て言うかなに、こんだけの事してくれるって、３人して俺の事好きなの？なんなの？」
「……」
　あ、あれ？いつものノリで言って引いてもらう予定だったんだけど、何か皆黙って俯いちゃった……。
　おろおろしていると、由比ヶ浜が急に立ち上がって顔を上げて、俺をびしっと指差した。
「ヒッキー！　お、乙女心を弄んだ罰！　明日からも、今日みたいなことを継続するからね！」
「……は、はあ!?　なんでだよ!?」
　心臓とアレが持たない。主にアレが。
　あと、あんな事やった後に乙女とか言うな。
「お黙りなさい。これは命令よ」
「そうです、命令です。わたし達に逆らえると思ってるんですかー？」
　由比ヶ浜が腰に手を当ててふんすっとどや顔で笑い、雪ノ下が雪女風味の氷の微笑を浮かべ、一色が小悪魔属性にエロを加えて出来た夢魔属性の笑みを浮かべる。
　……さ、逆らえる訳がねえ……。
「……あー、その、なんだ……よろしくお願いします？」
「うん、よろしく！」
「……よろしく」
「よろしくお願いしますー」

三者三様に、しっかり挨拶をされた。律儀だなぁこいつら……。

4.

……由比ヶ浜のさっきのセリフを思い出す。

――今日「みたいな」こと――

……なんか、もっと過激なことになったらどうしようって言う不安って言うか期待って言うか興奮って言うか興奮が止まらない。どうしよう。

……ってか、そのうち平塚先生とか依頼人とかが来るよね絶対？依頼人ならまだ良いけど、平塚先生なんてノーノックで入って来るじゃん。どうなんの？俺、死ぬの？

先生も加わって天国にイクか、ラストブリットを喰らって地獄に落ちるかの二択かな。……後者かな。

……「奉仕部」の言葉の意味が変わる気がしてしょうがないんですけど……。

まあ、さぼったら何言われるかって言うかどんだけ絞られるか分からんし、ちゃんと来るけどね。

積極的にではないよ？断じて、積極的にではないよ？ほんとだよ？

お終い。

平塚静の可愛げを掘り下げてみると中々惹かれるものがある。

（1）

1.

冬のある日。時刻は午前9時。

短い短い週末休みを謳歌すべく、リビングのソファで盛大にだらけていた。あと5時間もしたらソファと同化する勢い。

ああ、週の休みをあと3日くらい増やしてくんねえかな。

週休2日制ならぬ週勤2日制。

そうすりゃ皆あっと言う間にダメ人間になる。俺も平凡に紛れる事が出来るんだ。そして俺を養ってくれる人もいなくな……やっぱ俺だけがダメになってれば良いな。うん、それが良い。

理想と現実の狭間を彷徨っていると、メールの着信を知らせるバイブが鳴った。

送り主は……

「平塚先生、か……」

夏休みの時の経験を振り返る。あの時は無視を決め込んだらめっちゃメールと電話が来た。メリーさんもびっくりだ。しかもその後俺をおびき寄せる為に小町を利用すると言う徹底ぶり。逃げ道なんて無い。

さて、どうするか……。どちらに転んでもあまり幸せな事にはならない気が……。

と考えている内に、メール通知が3件分来てた。え、どう言うこと？

『比企谷くん、今日お時間はありますか？もし良ければラーメンでも食べに行きたいです。いかがでしょう？』

『比企谷くん、今日お時間はありますか？寒い日にはやはりラーメンですよね？良かった食べに行きませんか？』

『比企谷くん、寒いですね。ラーメンはどうですか？今日です』

『寒い、比企谷くん、ラーメン、今日』
……最後、怪文書みたいになってんですけど……。内容のマイナーチェンジと簡略化が甚だしい。
これは、無視すると後が怖いな……。
『分かりました。何時に何処に集合にしましょうか』
送信。
『では11時に海浜幕張に集合と言うことにしましょう』
あれ、返事がもう来た?え、8秒くらいしか経ってないよ?どう言う事?
全く、平塚先生ってば。超怖い。まあ、ラーメン行くくらいなら先生とならほとんど抵抗無いから良いか。……抵抗無いってのも凄いけど。
にしても、この集合時刻は割と早い。先生はその後何か用事があるのだろうか。まあ、そんなことを考えていても仕方が無い。さっさと出かける準備をしなければ。
小町がお昼を作らなくても良いように、断りを入れておく。
「小町―、俺ちょっと昼はラーメン食べて来るわー」
「ほーい、一人だよね?それか平塚先生?」
候補に入れられている……だと……?小町にとっての先生って何なの?って言うか最初に一人であることを付加疑問文で聞くのやめてくれよ。確かにほぼ全て一人だけど。むしろ一人で行きたかった……。
「平塚先生とだ。今メールが来た」
「仲良いねーいってらっしゃーい」
偏差値25くらいしか無さそうな雑誌に視線を落としたまま、ひらひらと手を振られた。
平塚先生、小町の中でだいぶ近しい位置になってますのね……。
ところでその雑誌、夏も似たような内容書いてあったよね?そんな雑誌で身に付けた技に釣られる様な男とくっついて欲しくないぞお兄ちゃんは?むしろ、誰ともくっつかずに一生俺を養ってほしいまである。

2.

用事がある時、その時間まで中途半端な時間しか残されていないと、いつもやっている事でも途端に集中力が無くなる。あの半端な時間は人生でも指折りの無駄な時間なんじゃなかろうか。調べたら何か学術的名称とかありそう。ちょっとした隙間時間を使って勉強したり自分を高める何かを出来る程俺は意識高くない。どこぞの玉庭とは違う。ん、庭玉だっけ？庭球？……テニス？……戸塚にばったり出くわさねえかなあ。戸塚がラーメンをすすって飲み込む、その一挙手一投足をカメラに収めたい。

ゲームも読書もいまいちやる気が起きなかったので、ちょっと早めに集合場所に向かう。

もう集合場所は目の前と言う所まで来て、現在時刻は１０時３０分。……流石に早すぎたな……。

時間の潰し方を考えながら歩いていると、視界の前方に見覚えのある女性の姿があった。

「……平塚先生……？」

「おお、比企谷。もう来たのか。感心だな」

既に先生が待っていた。え、早くない？まだ３０分前だよ？

その早さにも驚いたが、何より先生の服装に目が行く。

いつもの男前な服装ではなく、トレンチコートと柔らかい橙色のタートルネックと黒のタイトスカートだ。グラマラスな身体のラインを余す事無く伝えて来る上下の服装に、先生の大人の女としての部分がはっきりと見えて思わず息を呑む。

「……どうした？」

すっかり固まってしまった俺に、先生が不思議そうな顔をして尋ねて来た。

「あ、いや、その……見惚れてました」

すごいすんなり言ってしまった。テンパっちゃったんですもの！

「え……あ、そうか、はは。……気合を入れた甲斐が……あったな……」

え、ちょ、え？何その可愛い反応？先生今日どうしたんです？
「や、でも、どうしてそんな恰好を？それにこんな早く来るなんて……」
実際、驚きだ。ラーメン食べに行くだけならもうちょいラフでいいんでない？先生にとってラーメンを食べに行く事はいつでも天王山なの？そういや夏にラーメン行ったときも先生はドレス着てたっけな。あれは成り行きだったけど。
「あ、えっと、な、時間を早めに設定したのも、実はちょっとラーメンを食べる前に少し一緒に居れないかと思ったもので、な。すまない、その事を伝えずにいてしまって」
ん？
「あ、別にどこかにがっつり出かけるとかではないぞ？その、比企谷と行くラーメンも楽しいのだが、折角だからカフェとかもっとそう言う場所にも行ってみたいと思ってな？それで、格好にもそれなりに気を遣ってみたんだが……。はは、良い大人だと言うのに、久しぶりだからと気合を入れて５０分前に着いてしまった」
んん？
って言うか５０分前？なに、先生俺より更に２０分早く来てたの？
え？
「も、もし面倒だったら、ささっとラーメンを食べるだけでも良いからな？誘ったのも急だし、ラーメンの事しか言ってなかったし……」
……んんん？
「……ど、どうだろうか？」
ハンドバッグを両手で持ち、流し目を送って来る。
……何この可愛い女の子？本当に平塚先生なの？
もじもじとしてるけど、外見は大人の色気むんむん。正直このギャップの破壊力がやばい。え、何この展開？
べ、別に断る理由も無いしな……。そ、それだけなんだからね！
「まあ、良いですよ。どうせ暇ですし」
「……そうか。良かった」
にこっと笑う先生の笑顔が、たまらない程眩しい。

……今日、大丈夫かな？先生がすんごい嬉しそうにこっちを見て来るんですけど。超どきどきするんですけど。

続く。

（2）

1.

先生に付いて行くと、駐車場に辿り着いた。

「さあ、まずは車に乗ってくれ」

「え？あ、はい……そんなに遠くに行くんですか？」

「や、その、近場だと他の生徒に見られる可能性があるし、電車に乗っても似たような事が有り得るだろう？ならば多少遠くに車で行こうと思ってな」

……んん？

「そうですか……ん、でも夏は気にしなかったじゃないですか？」

「あ、えっと、そこは、まあ、気にするな。さあ、行こう」

……めっちゃ気になるんですけど。

しっかし、先生の車本当にかっこ良いな。男気溢れてる。……いつもならそこで『だから男が気後れしちゃうんだな』って思って終わるんだけど……今日は何かやばい。何がやばいってマジでやばい。

車に乗りながら、ぽつぽつと会話をする。この密閉空間で、今のこの心境で、先生と二人きりと言うのはどうにも緊張してやばい。手汗が止まらない。

「今日はどこまで行くんですか？」

「ああ、２０分程で着く場所にあるカフェに行こうと思ってな。中々落ち着いた雰囲気の、良い所だぞ」

「へえ。……ちなみに、以前行った時はどなたかと？」

「……一人だよ、もちろん」

「……あ、まあ、一人でカフェなんてよくありますもんね」

「いつもはラーメン屋や居酒屋の様な場所にばかり行っているから、全然落ち着かなかった……」

あれ、フロントガラス越しの空が滲んで見える。何でだろう？

「一人だとどうにも性に合わなかったが、誰かと行ったら良い時間を過ごせると思ってな……」

ふと先生の顔を見た時の、前を向いたままのにこやかな笑顔に思わ

ず見惚れる。あと、コートを脱いだ先生のそれはそれは見事なパイスラにも見惚れた。慌てて視線を逸らしたけど。やばい、油断したら3分くらい凝視しちゃいそう。

……大人の世界だと、バッグだけじゃなくて車でもパイスラが見られるのか……。超どうでも良い事だった。

2.

先生の言った通り、20分もすると少し開けた場所にある、落ち着いた雰囲気のカフェに辿り着いた。

先生の車を降り、カフェの入り口まで来た所でふと悩む。

……こう言う状況だと、どちらが先に入ると良いのん？

同年代なら、まあ男の俺が先に入るのが程良いのだろうけど。この状況。いつもなら男気溢れる先生に先陣を切ってもらって何ら問題無いんだけど、今日は先生何かもうすんごい可愛いし……。

俺が悶々と数秒程考えていると、先生は見透かす様に微笑んで、俺の腰に手を当てた。

「はは……どうしたんだ？さ、行こう」

にこやかに微笑みながら、俺が先生の半歩先を行く様に押してくれた。同時な様で、ほんの少しだけ俺が先に入る。そのため、自然と店員さんも俺に話しかけて来る。……ぜ、絶妙な加減……。流石やでえ……。

カフェの中は広々としており、テーブルは椅子の所とソファの所があった。どのテーブルもお洒落なパーテーションで仕切られていて、他の客の会話がほとんど聞こえないようになっている。なるほど、これは落ち着く。

「こちらにどうぞ」

店員さんの後ろを付いて行く。平塚先生の希望もあり、ソファがあるテーブルに行く事にした。

腰を下ろすと、ふかっ、と言う柔らかい感触と共にゆっくり身体が沈み込む。

「……ふう。どうだ？ここは」

「凄く良いですね。近かったらまめに来たくなるくらいに……は……」
言葉の途中で思わず止まりかけてしまった。
ソファに腰を下ろして、膝をぴたっと閉じて足を斜めに流してにこやかに微笑む先生が、あまりにも絵になっていたからだ。ストッキングに包まれた、すらりと伸びる美しい脚は何かもう撫で回したいって俺バカ野郎。
……え、何このただの超素敵な年上お姉さん？あれー、今日俺どうなるんだろ？どうもならないと思うけど。
「？どうした？」
目をいつもより少しだけ開いて、きょとんとした顔で首を少し傾げる先生の仕草がやたらと可愛い。
「あ、いえ、何でも無いです……」
ＭＡＸ挙動不審状態で答えてしまった。超かっこ悪いし超気持ち悪い。
「せっかくだから軽く食べようか」
メニューを見ながら、先生が何気なく提案してくる。
あれ？この後ラーメン食べるんじゃないの？あれ？
「あ、はあ……」
断れない俺、超クール。
そして、飲み物と食べ物を注文する。何だかんだで食べ物が普通の昼食分くらいの量になったけど。え、あれ？ラーメン行かないの？
俺はカフェオレを、先生はブラックコーヒーを飲みながらのんびりと会話をする。
「実はな、もうここまで来たから言うのだが……」
……んん？妖しい予感。
「ラーメンに行くつもりは、実は無かったんだ。ウソをついてすまない。ここでしばらくゆっくりして、その時の君の具合を判断して行く場所を決めようと思っていたんだ」
「……はい？え、いや、まあ、ラーメンに行かないって言うのは別に良いですけど……なんでここに来てから言うんですか？」

ちょっとびっくりした。どう言うこと？
「……逃げられない様に」
いや、待って。先生、顔を背けながら言うのやめて。マジで重いから。そんな手の込んだ事するのん？
「……鬼ですか先生は」
「いやー、私もな？たまにはデートがしたくてな。久しく……やっていなかったし……」
俺の都合は何処へ？そんなもの最初から無かった……。
「俺しか誘う男が居なかったんですか……」
乾いた笑顔をやめてよ先生！思わず泣いちゃう！
ふと、先生と目が合う。表情は穏やかだ。
「君しか居ないと言うのも……まあ、あるが、それ以上に、君を誘いたかったのは事実だぞ？」
そう言って先生は頬をほんのり紅潮させて、右眼を閉じてウインクをした。……前半めっちゃ悲しかったのに、後半死ぬ程どきどきしたんですけど。ギャップが激し過ぎる……。

3.

「……でな？今日なんだが……」
先生が少しもじもじして立ち上がると、俺の横にまで歩いて来て、すとんと座った。距離が近い。こんな距離感、小町以外じゃ無理だよ！
息が耳にかかる程の距離で俺が前を向いたまま固まっていると、先生が俺を見つめているのが視界に入らずとも分かった。心拍数が一気に跳ね上がる。
「その……君が私の事を『先生』と呼ぶのは、周りに怪しい目で見られると思うんだ」
「あ、そ、それはそうでしゅね」
……すげえ気持ち悪い噛み方しちゃった。死にたい。
「だから、今日これからの時間だけは、名前で呼んでくれないか？」
一瞬、自分の動きがぴたっと止まるのが分かった。

ほーん？心拍数の限界にチャレンジしろとおっしゃるので？ほーん？

「あ、や、流石にしょれは……」

また噛んだ……恥ずかしいよぉ……。

俺が顔を真っ赤にして噛み噛みになっているのを、先生が微笑ましげに見つめる。

「ふふ……可愛いな君は。ほら、いいから呼んでくれ。さん付けで良いから」

俺の顔に手を添え、くりっと自分の方に向けさせる。

先生の潤んだ瞳を真正面から見据えてしまい、思わず緊張で肩が上がる。

だめだ、逃げられん。覚悟を決めろ、俺。

しばらく下あごが震えるようにぱくぱくした後、やっとの事で言葉を発する。

「……し、静、さん……」

俺が絞りに絞り出した声で名前を呼ぶと、先生はとてもとても幸せそうににこっと笑った。

「……ん、よろしい」

俺の顔に添えていた手を、頬を撫でるようにしてなぞりながら離した。

正直、あのままキスされていても、何ら抵抗せずに受け入れていたような気さえした。

その後はまた普通の会話に戻ったのだが、先生は一向に俺の隣を離れない。時折俺の手をきゅっと握っては、俺の反応を試すかの様な目で見て微笑んで来る。いや、まずい、これはまずい。先生みたいな年上お姉さんに遊ばれる感じが楽しいと思っちゃうこの感じはまずい。何かに目覚めそう。って言うかもう目覚めてる？あれ？

あと……ちょくちょく、俺の肩に首をこてんと預けて来る。ちょっとどきどきし過ぎて死にそうになるからマジでやめてほしい。同じ年代の子たちとはまた違う、大人な雰囲気の香水がふんわり匂って来て、正直がん勃ちです。もうバレてるのを前提で開き直らないと、恥

ずかしくてやってられない。
まずい、非常にまずい。油断したら絶対にやける。そして絶対気持ち悪い顔になる。

4.

「この後なんだが……」
先生の言葉をきっかけに、時計に目をやる。1時間半くらい経っただろうか。何だかんだで結構居座っていた。すげえ疲れた……。
よく分からない達成感と疲労感に包まれている俺に、先生が言葉を続ける。
「私の家に来ないか……？」
ほーん？なんだって？
「君の反応を見る限り、もう少し一緒に居ても良いのかと思ったんだが……」
「や、それは良いですけど……何も静さんの家じゃなくても……」
確実に二人で朝を迎えちゃう気がするんですけど。そしてはいって答えちゃいそう。
しどろもどろとしながら答えると、先生が今までで一番密着して来た。腿と腿が触れ合い、胸が右肩にもにゅっと押し付けられ、右手が俺の腿を触り、左手が俺の腰に回されている。ちょ、ここ、カフェですよカフェ！忘れてませんか！
鼻と鼻どころか、唇と唇が触れ合う程の距離で、少しだけ首を傾げて、切なそうに目を細める。
そして、先生の唇が一瞬震える。
「……ダメか……？」
あかん。こんな美人のお姉さんに懇願されるような誘い方されて断れる男なんてこの世に存在しない、と言うより存在しちゃいけない。
一瞬目が高速で泳いだ後、ごくりと息を呑むと、先生から少し目を逸らす。
「……ぜひ……」

ぜひって言っちゃったよ、俺。ぜひって言っちゃった。
「……良かった」
目を細めて、幸せそうな笑みを浮かべる。そして、俺の腿を触っていた右手も俺の腰に回して、更に密着して来た。
死ぬ。どきどきで、死ぬ。
「……せ、先生、一応ここ、お店なんで……」
俺の言葉を聞いてはっとすると、先生がぱっと離れる。
「……あ、そ、そうだな、ごめんなさい」
いつもの先生なら『すまない』と言う所を『ごめんなさい』と言った事に、先生との距離感の変化を感じて、また心臓が跳ねた。
……あっれー？俺、今、ひょっとして……もの凄い勢いで攻略されてる？
いつもの残念な先生は何処に行ったんだよぉ！本気出したときの攻撃力高すぎるよぉ！

続く。

（3）

1．

カフェを出た後、再び先生の車に乗り込む。

正直、もう緊張でどうにかなりそう。

いや、落ち着け。相手はあの平塚先生だぞ？頭の中をきちんと整理すれば、いくらでも冷静になる材料があるはずだ。

①まず、先生の見た目は？

↓グラマラスな美人。

……はい、やばい。

②先生の性格は？

↓面倒見が良くて、人の事を深く真っ直ぐに見てくれる。

……はい、更にやばい。

③先生の面倒な所！面倒な所は？

↓趣味が少年チックな所？しかし俺は大体分かるし、むしろ乗りやすいくらいだしなぁ……。

↓恋愛面で妙に重そうな所？しかしこれも、実際付き合いでもしない限り、どうなるかは分からないしなぁ……。意外とその束縛感がハマるかもしれない。

◎結論。先生は、俺にとっては最高クラスの素敵な女性。

おうふ。まずい。整理したら自爆した。

まぁ待て待て待て、俺、落ち着け、俺。先生が俺で遊んでる可能性だって……あの平塚先生が？そんなことするか？

……ふええ……逃げ道が無くなってくよぉ……。

ぐぬぬと頭を抱えていると、運転をしながら先生が話しかけてきた。

「比企谷、どうした？」

「あ、や、何でもないで……」

はい、またパイスラに目が行ったよー。最初に乗った時の１５０倍くらい意識しちゃってるから、よりやばいよー。胸元凝視しちゃうよー。

俺が先生のパイスラをちらちらとガン見していると、先生がふふっと笑った。
「ふふ、今日は妙に一定の場所に視線を感じるが……気のせいかな？」
「……すみません」
バレてた。死にたい。
手で顔を覆っていると、車が信号で止まった。
「先生の家まではどれくらいなんでっ……!?」
変な所で途切れてしまった。不自然な疑問形。
先生は、信号で止まっている僅かな時間に、左手を俺の太腿まで伸ばし、その細い指でさわさわと撫でて来た。内腿を重点的に触られ、あっと言う間にジーンズの前がぱんぱんになってしまう。先生の顔を見ると、俺の事をちらりと横目で見ながら、ほんの僅かに目を細めて、蠱惑的な笑みを浮かべていた。そのあまりの色っぽさに、ごくりと息を呑む。
「ちょっ、先生……!?」
俺がようやく声を上げたタイミングで、先生はぱっと手を離す。信号が青に変わっていた。
「……」
中途半端に触られた事で激しいもどかしさを覚える。
「さっきの質問だが」
先生がおもむろに口を開く。表情はいつもの凛々しいものに戻っていた。
「ここからは少し遠くてな、大体４０分程かかるんだ。時間がかかってすまない」
「いえ、そんな事は……」
俺がフォローで掛ける言葉に迷っていると、再び赤信号で車が止まる。
そして、先生の左手が再び内腿に伸びてくると同時に、先生がこちらを向いてぽそりと、
「……信号、たくさん止まると良いな。それとも、早く家に着いた方が君にとっては嬉しかったかな？」

にやりと妖しい笑みを浮かべながら言った。
それから１０分程度の間は、正直気が気でなかった。
信号で止まれば、必ず先生の左手が俺の内腿を触って来る。それも確実に。
しかも、その手はどんどんと俺の足の付け根まで伸びて行き、今にもジーンズの生地越しにいきり立ったモノに触れそうになっていた。
触れる時間は信号の時間によって変わる。長ければ数十秒、短ければほんの数秒。
あまりの緊張と期待と興奮とで、移り行く外の景色も目には入っても頭には全く入って来なかった。
そして、出発してから１５分程経った頃だろうか。赤信号で車が止まると、先生の手が竿と玉を同時にぎゅむっと握って来た。
「うぁっ!?」
思わず情けない声が漏れる。身体を屈め、ぶるぶると震えてしまう。先生の握り方は絶妙な力加減で、ただでさえ怒張していたモノが更に暴れ狂う様に勃起してしまった。
「おお……凄いな、君のモノはこんなに凶暴なのか……」
先生は視線を前方から外さぬまま、楽しそうな声音で話す。
話している間、手はリズム良くぎゅっぎゅっと握られ、その度に身体がびくびくと震える。
直接触れている訳でも無い。まして、先生の裸を見た訳でも無い。
なのに、この快感。
頭がおかしくなりそうだった。
どう対応するべきか考えあぐねていると、
「おっと、そろそろだな」
先生は信号を見て、何事も無かったかの様に手を離した。
俺は荒い息遣いをしたまま、虚ろな目で先生を見つめた。
……あれ？俺、調教されてなぁい？あれ？
先生のこの手際の良さはなんなのさ……。
そこから先は先生の悪戯が更に激しくなり、天国と言うべきか地獄と言うべきか分からない状態になっていた。

竿だけしっかりぎゅむっと握ってしごくように動かす時もあれば、玉だけをにぎにぎとする時もあり、時折亀頭の先端を爪でかりかりと擦る時もあった。
俺はその度にどうして良いか分からず、途中からは先生の左腕を、両手で力無く握って目を閉じていた。先生がその俺のリアクションを見る度に『ふふ……君は可愛いな』と言っていた気がするけど、恥ずかし過ぎるので聞かなかった事にする。もう言っちゃったけど。
「比企谷、チャックを下ろしたたまえ」
次の信号で止まると分かった瞬間、先生が急に指示を出して来た。
なんでここでと思いながらもチャックを下ろす。すっかり調教されてしまった……。
……やばい、超下ろしづらい。
先生は俺が手こずる時間も計算済みだったのか、ちょうど俺がチャックを下ろして、パンツの中でぱんぱんに張ったモノが下りたチャックの間からずるりと出て来た瞬間に赤信号で車が止まった。
「よしよし、良いぞ。では……」
先生が言うと、今度は俺の方を向き、切ない表情を浮かべながらぱんつ越しにモノを握って来た。
「んぐぁっ!?」
先程までの刺激から一段階引き上げられた快楽に、頭の中で電流が走るのを感じる。
先生は竿をぎゅっと握ると、指をウェーブさせながらしごき上げ始める。
パンツ一枚の隔たりしか無いため、先程までよりもはっきりと先生の手の感触が伝わって来て、手が亀頭の方へ上る度に腰を浮かせて前方へモノを突き出してしまう。
期待感がありったけ高まった所で、先生は
「信号がそろそろ変わるな……」
と平然とした調子で言って、またしても何事も無かったかの様に手を離して運転を再開する。
「家までの道で信号で止まるのは、あと2～3回かな……」

ぽそりと先生が呟いた時、艶めいた唇に思わず見入ってしまった。
街の景色に一瞬だけ目を向ける。皆さん、僕は今、学校の先生に良い様に弄ばれています……。

2.

ようやく先生のマンションの駐車場に着く。
あの後もパンツ越しにしごかれはしたのだが、事故にでも遭おうものなら洒落にならないからと、信号が赤になる度にきちんとチャックを上げてしまわされていた。まあ、確かに事故は怖いですから……。
シートベルトを外し、座席に思い切りもたれかかりながら息を荒げていると、先生がこちらを見てふふっと笑った。
「やっと着いた訳だが……この時間帯は、この駐車場を利用する住人がほとんどいないんだ。……さて、どうする？」
何とも意地悪な質問だ。て言うかもう年上の綺麗でエッチなお姉さんに悪戯されるって言うただのエロ漫画みたいな状況になってる。要するに僕、今、興奮しかしてません！
「どうするって……どんな選択肢があるんですか？」
平静を装うつもりが、声が裏返るのを堪えるので精一杯だった。て言うかちょっと裏返った。
「そうだな……例えば」
不意に先生の手がこちらに伸びて来て、頬に添えられる。そして先生の顔が見る間に近付き、先生の瞳が目の前まで来た。彼女から漂う仄かな甘い香りが、否応無しに心拍数を跳ね上げる。
ほーん？キス？ここでキス？ダメ！攻略されちゃう！
『＞＜』みたいな表情で目を閉じていたら、先生に頬をぺちぺちと叩かれた。あれ？キスは？
「……冗談だよ。さあ、行こう」
歯を見せてにっと笑う。その表情は妙に爽やかなものだった。そりゃそうだ、冗談に決まってるよね！
……っておおおおい！冗談かよっ、おおおおおおい！
思わず材木座みたいなウザいノリツッコミをしてしまった。心の

中でやるだけでもこれだけウザいのだ。実際に他人にやってしまう材木座のウザさの深みはもはや底なし沼だ。田沢湖だ。これは湖だった。

……にしても、何この焦らしプレイ？先生は鬼なの？眠鬼なの？あれは当時衝撃だったなぁ……。

て言うか、これはそもそも焦らしなの？それともここで終わるプレイであって、これ以上の進展は無いの？なんなの？なんなのさ！

頭の中で阿呆みたいに質問をしながら、前を行く先生を見つめる。

鼻歌歌ってる……機嫌良いな。……アニソンだ。

にしても、先生の尻、形良すぎだろ……。途中からもはや先生の尻しか見なくなっていた。男子高校生、略してＤＫの視線を釘付けにするとは……やりますね、先生。

マンションに入りエレベーターに乗る直前、ぱんぱんになりっぱなしの股間を少しばかりさすった。

続く。

（4）

1.

エレベーターのボタンを押すと、ドアはすぐに開いた。

先生の数歩後ろを付いて行き、エレベーターに乗り込む。

先生はボタンの前に立ち、俺は一番奥に立った。

「私の部屋は5階なんだ」

「そうなんですね」

何気ない会話を交わす。が、しかし、先生はそう言っただけで全く動かなくなる。

……あれ、ボタン押さないの？……なーんかすごい嫌な予感がするんだけど。

「あの……静さん？」

恐る恐る、先生の後ろから声をかける。その表情は読み取る事が出来ない。

「……ん、どうした？」

「や、その、ボタン、押さないのかなーって。5階なんですよね？」

「そうだよ」

……いや、おかしくない？この状況。動かないエレベーター何てただの妖しい密室空……間……。

先生が、ほんのわずかにこちらを向く。横顔が少し見える程度なのだが、その口にはうっすらと笑みを浮かべている。

そして、こちらに背を向けたまま、ゆっくりと近寄って来た。迫り来る背中って何か超怖いんだけど。超怖いんだけどぉ！

目の前まで来て、俺を壁に押し付ける様に自分の尻を突き出して押し付けて来る。その豊満な肉感に、思わず少しばかり背を屈めてしまった。

「あ……あのー……？」

いや、これ、何なの？突然の平塚ヒッププレス。

「ん、どうした？比企谷？」

先生は見上げる様に振り向き、悪戯っぽい笑みを浮かべた。息を呑

んだだけでも気付かれてしまう程の距離。完全に固まってしまう。
先生はふふんと楽しそうに笑うと、俺の腰に手を回し、尻をより露骨にぐりぐりと押し付けて来た。
やばい、やばい、やばい。何がやばいってマジでやばい。
取り敢えず、場所がアウトにも程がある。
「し、静さん！5階！と、取り敢えず、上行きましょう、上！」
理性が爆ぜそうになるのを堪えながら、何とか声を上げる。
先生はふむと考える顔をすると、顎に手を当ててほんの数秒ばかり、斜め上を見上げた。そして、再び悪戯っぽく……いや、先程よりも明らかに悪そうな笑みを浮かべる。
「そうだな、こんな所では流石に、な。では比企谷、君があのボタンを押してくれ」
先生はボタンを指差しながら、にやりと笑った。
俺が今居るのはエレベーターの一番奥の壁だ。距離で言えば2～3歩歩けばそれで済む話なのだが……いかんせん、その数歩が今は果てしなく遠い。
って言うか、先生に尻を押し付けられた状態でエレベーターのボタンを押す為に前に進まなきゃいけないって……これ、何プレイなの？
「……分かりましたよ」
まったく、先生は俺でどんだけ遊べば気が済むんだろうか。
取り敢えずこのままでは進みにくい。まずは、と思い先生の腰を掴んで、進みやすくしようとした。――と。
「……うぁ……」
先生は一瞬戸惑いの声を上げ、少女っぽさが残るあどけない声を上げた。
……あれ？
先生はすぐさまその表情を引っ込めて、先程の悪戯っぽい笑みに戻ると、「ほら、早くしたまえ」と楽しそうに言った。
先生の腰に手を添えたまま、のたのたと歩く。その度に、先生の口からほんの少しずつ「うっ、あぅっ、ふぅんっ……」と甘い声が漏れて来る。

あれ、どうしちゃったの先生？さっきまでの勢いはどこへ？
先生の表情がこちらからは見えないのがもどかしい。
しかし、あれこれ考えて行動に移すには、あまりにも時間が足りなかった。
いつもと同じ歩幅とは行かないため、何とか6歩ほど歩いてボタンの前に立ち、5の数字を押す。
先生から聞こえてくる息遣いは、心なしか熱っぽい。
それがたまらなくなり、エレベーターが上がり始めた瞬間に、先生の尻を思い切り引き寄せて、出来る限りの力で股間を押し当てた。
「うあぁぁぁん……」
長く色っぽい声を上げて、先生が小さく震えた。そして、その体勢のまま、再び俺の方に振り向く。
「こ、こら……大人をからかうんじゃないぞ……？」
そう言いながら、俺の左頬に添えられた先生の手は、しっとりと汗ばんで熱を帯びていた。
「先生こそ、俺の事を散々からかってるじゃないですか」
思わず反論してしまう。だって本当にそうですもんね！鬼です、鬼。
「ふふ……それもそうだな。お、着いたようだぞ」
先生が言葉を切った直後に、エレベーターのドアが開く。先生はするりと俺に押し付けていた尻を離して、ドアをするりと出て行った。
……さっきの、ただの立ちバックだったよな……。思い出したら、一気に顔が熱くなった。
車からのこの流れは本当にえげつないんですけど！ねえ、先生！

2.

「さあ、どうぞ」
ドアのカギを開けると、先生がにこやかに微笑んだ。
「お邪魔します」
少なからず昂揚感を覚えながら、俺は先生の部屋に足を踏み入れた。

部屋は小奇麗な１ＬＤＫだった。一緒に住む人が居れば丁度良さそうだなーと思ったけど、悲しくてそれを先生にはとてもじゃないけど言えない。

靴を脱ぎ、中へ入ろうとした瞬間――同じくヒールを脱いだ先生が、俺の手を掴んでいた。

先生にくいと引っ張られて、強制的に方向転換をする。そして、腕を広げた先生の下へ迎え入れられてしまった。

自分の胸板に先生の柔らかい感触が当たる。更に先生の腕が、絡み付く様に俺の背中に回される。

ほーん。死ぬ。心臓が爆ぜるよー。

俺が完全に固まっていると、先生が耳元で囁いた。

「ほう……思ったよりがっしりしているのだな。流石は男の子、と言った所か」

先生はそう言って耳元にふっと息を吹くと、ぱっと腕を離してしまった。

「よし、行こう」

そう言って、先生は俺の背中をぐいぐいと押して、俺をリビングに連れて行った。

え、なに、先生は数分おきに俺を誘惑しないといけない病気か何かなの？おかげで俺の心臓の律動はずっと不規則なんですけど。

３．

リビングをぱっと見た時の感想。

①きちんと整理されている。

②女性らしい可愛げのあるインテリアやぬいぐるみなどはさっぱり無い。

③好きなアニメのＤＶＤセットや、マンガや本が本棚に綺麗に整理されて置かれている。

わぁ……イメージ通りだぁ……。

「ど、どうだろうか……？」

先生は少しもじもじとしながら、俺の一歩後ろから聞いて来た。

そのあどけない姿は、さっきの先生とは似ても似つかない様に思える。
「ああ、や、すごい綺麗に片付いてますし……趣味の感じは何かもう、ＴＨＥ☆先生！って感じで分かりやすいなって思いました。良い部屋ですね」
「そ、そうか。ありがとう……」
や、そんなもじもじとされると俺も恥ずかしくなって来るんですけども。
「君になら、私の趣味も恥じる事なく晒す事が出来ると思ってな」
先生は照れながらも、嬉しそうに笑った。
ちょっと待って、抱きしめたいんですけど。
しかし、今気付いた事がある。
今は真冬。しかもついさっきまで外に居た。
なのに、この部屋は、と言うより玄関までも含めて妙に暖かい。
「なんでこんなに暖かいんですか？」
後ろを振り向いて聞いてみた。まだもじもじしてる……。
あれ、さっきより暑くなって来た。暖かいのって俺の身体と気持ちの問題じゃないよね？
「え？あ、ああ、その……その方が、色々と都合が良いと思ってな。外出前に温度設定を高めに設定して暖房を点けておいたんだ」
……都合が良いってなぁに？あと、俺を連れてくるの前提だったの？
なんかすーごい用意周到な感じがするんだけど……。
「は、はぁ……」
生返事をして、バッグを置かせてもらった。
「さて、まだ昼過ぎな訳だが……」
「そうですね、……って、ええっ!?」
用意されて座っていたクッションから、全力で転げて後ずさりした。
少し着替えると言って戻って来た先生の服装は、薄紫のブラトップにショートパンツと言う服装。しかも、胸の先端を見た感じどうも下

着を着けていない。しかもホットパンツはボタンを締めずゆるゆると前を開けていて、ずり落ちることが無いだけと言う無防備な格好だ。

俺が後ずさりした様子を見て、先生がくすりと笑う。

「んん？比企谷、一体どうしたんだ？」

「や、だって、そんな無防備な格好……」

多分、今俺の顔真っ赤になってる。そして超速で目が泳いでる。

先生の豊満な胸や形の良い尻のラインが、先程までとは比べ物にならないくらいにはっきりと見てとれる。何かもう下手すれば全裸よりエロい。

一度意識したらもはや直視なんて出来ません！遊ばれてる！小町ー！俺、今、先生に遊ばれてるよ！

全力で目を背けていると、先生は身を屈めて俺の頬に手を添え、無理やり自分の方を向かせた。ぐきって言った。首超痛いんですけど……。

「比企谷、もう一回聞くぞ？一体、どうしたんだ？」

胸、胸、谷間。やばい。その微笑み方なんなの、超可愛いんですけど。

「ひゃ、ひゃい、しょうですね……」

限界まで噛んだ。死にたい……。

俺のひどい慌て様を見て、先生はにこっと笑う。そして、手をゆるりと離した。

「君は本当に可愛い反応をしてくれるな、ふふ。……まずは、これを見ないか？」先生は「ジャーン！」とでも言いそうなくらいの勢いで、ＤＶＤのケースを見せて来た。

……先生がよく口走っているアニメの一つじゃん。こんな状況で何を見せられるのかと思ったから、すげぇ焦ったんだけど……損した。

しかし、これなら変などきどきも抑えられそうだ。

「はぁ、まぁ、良いですけど……」

乗り気には聞こえないであろうテンションで、頭をがしがしと掻き

ながら答えた。

続く。

（5）

1．

「行けー！　そこだー！」

「……」

先生は缶ビール片手に、テレビ画面の中の熱い戦闘シーンで興奮して腕をぶんぶんと振り回している。たまにこめかみに先生の裏拳が飛んで来るので、マジで避けないと死んじゃう。競馬で熱くなってるおっちゃんとかでこう言う人居そうだなぁ……。

迫りくる先生の凶拳をかいくぐりながら見ていたアニメも、一番の見せ場である最後の戦闘を終え、一緒に戦った仲間と迎える感動的なラストシーンに突入する。

先生をチラ見すると、ハンカチで目を拭いながらおいおいと泣くと言うあまりにベタな事をやっていた。こんな事、本当にする人居たんだ……。先生の目の輪郭がマンガみたいにおいおいと泣いてる目になってんだけど。

……しかし、アニメを見始めた時から、気になっていた点が一つある。

先生との距離が近い、と言うか、完全にくっ付いている。０距離だ。太腿は常に接触していて、足を伸ばせば足を絡ませて来るし、時折腕も組んで来る。俺は素肌でなくとも、薄着の先生の素肌ががんがん触れてしまう。胸がもにゅんと当たってくると正直やばい。多分俺は今、人生で一番挙動不審になっていると思う。

そんな状態の為、正直アニメの内容がどんなものか全然入って来なかった。と言うか、タイトルさえ覚えていない。えっと、すさまじいバトルシーンと感動のラスト……トトロだったかな？

って言うか、この距離で先生の拳が来るのはマジで恐かった。間合いが近いなんてもんじゃない。

エルボーもちょいちょい来るしなぁ……。

アニメは無事大団円を迎え、それを号泣しながら見ていた先生は涙を拭くと、ふうと満足気に息をついた。

やっとこの状態から解放される……。
と、思っていたら、先生がくりんとこちらに向き直ってにかっと笑う。歯、綺麗だなこの人……。
「いやー、感動したなぁ……。それじゃ、次のを見る前に……」
ん？次？
「比企谷、君も暑いだろう？　薄着になりたまえ」
はい？
笑顔でびしっと指を差された。いや、は、ええ？
「分かりづらかったか？　まあ、脱ぎたまえ」
より直接的になった……だと……？
先生、すんごいにこにことしてる。
こんだけ楽しそうに言われると、断るに断れないです……。
渋々と上着を脱いで、Ｔシャツとジーンズ姿になる。
すると、先生は腕を組んで怪訝な顔をした。
「あー……違う違う。ジーンズも脱ぎたまえ」
「……へっ？」
面喰らった。この人何言ってんの……？
「ここには私と君しか居ないんだ。もっと開放的になっても良いだろう」
先生は真顔でそれっぽい事を言うと、にかっと笑った。
「いや、でも……」
さも正論っぽく言ったけど全然正論じゃないし、俺今パンツ姿になったら相当まずいんですけど。千葉の山で例えようとしたら、５００ｍ以上の山が無いのは千葉県だけだと言う事を思い出した。だからもういいや。もこっとしてるよ、はいはい、もこっとしてますとも！
全力で渋っている俺を見て、先生はぴんと何か閃いた顔をした。
え、なに？
「仕方無いな……では、君がジーンズを脱いでくれたら、私も下のホットパンツを脱ごう」
はい？

にかっと笑って言われた。何そのおいしい交換条件？
そんな事を言われたら、出す答えなど当然決まっている。
「分かりました。じゃあ、脱ぎます」
無駄に爽やかに言っちゃって、プチ自己嫌悪。
しかし先生は俺以上に爽やかに、両手を腰に当てて答えた。
「よし」
この卑猥な流れで、こんな爽やかなやりとりが生じる筈がないんだけどな……おかしいな……。
まあ、何はともあれ、僕は脱ぎます。
「はい、脱ぎました……よ……」
ぱんぱんに張ったパンツ姿で振り向くと、黒色の薄く扇情的なデザインのショーツを履いた先生が立っていた。
あまりのスタイルの良さと、大人の女性にしか出せないであろう色気。
その妖艶な姿に見惚れていると、先生が目を細めて妖しく笑う。
「ふふ、なんだ？こんなにぱんぱんにさせて」
そう言って、竿の部分をぎゅむっと掴む。
「うあぁっ!?」
思わず声を上げてしまった。
「ふふっ……では、次はこれを見ようか」
先生は俺の竿を握ったまま、妖しい笑みを浮かべてもう一つのＤＶＤケースを取り出した。
ＤＶＤタイトル『女教師と男子生徒の濃厚プレイ～先生の自宅で一晩中～（無修正版）』
ほーん？一晩中何すんだよ。寝てたの？ならただの添い寝だな。それも中々だけど。しかも無修正？どこで手に入れたのそれ？
……っつーかもう、意図が露骨すぎていよいよ本気でやばい。
先生は俺がげんなりした様子を見つめて、再びにやりと笑う。この人、悪い笑い方似合うなぁ……。
「さ、見ようか」
「うぐっ、ちょ、ちょっと」

先生は俺の声を意に介してくれず、俺は竿を掴んだまま引っ張られて座らされた。
……もっとじっくり来るのかなーと思ったら、これもう後1時間以内に色々と大人の階段上りそうなんですけど。
……攻略されちゃうの、もうばっちり受け入れてる感があるぞ、俺……。

2.

「いや、ちょ、先生、え？」
先生が陣取った場所に、戸惑いが隠せない。
先生はＡＶを再生すると、俺の後ろに回りこみ、胸を背中に押し当てて、両手を俺の亀頭と竿に添えた。
「まあまあ、せっかくの機会だし、楽しもう」
先生は悪びれもせずふふっと笑った。
ＡＶの内容自体はよくある感じで、安っぽい演技で女教師と生徒のやり取りが交わされ、二人は学校でキスをする。そして、そのまま女教師の部屋に連れ込まれると、二人は盛った様に互いの口内を貪り合いながら、服を脱いで行く。
お互いに触り合い、愛撫し合い、互いの性器を刺激し合い――。
「ちょ、うわ、先生……くぅ……」
内容が進むごとに、先生の俺に対する行動はどんどん露骨になって行く。
どのシーンかなどは実際ほとんど関係が無く、取り敢えずひたすら俺のモノをいじくって来る。
そして、興奮するシーンの度に、耳元で「おお……」と息混じりの声を漏らし、時折パンツの中にまで滑り込ませた指が亀頭や竿、玉を好き放題に弄り回す。
どこまでもエロくてたまらないが、同時に、どこまでももどかしい行為。
頭が、どうにかなりそうだった。
女教師がいよいよ生徒と本番……と言うシーンまで来ると、先生が

リモコンに手を伸ばし、突然一時停止をした。加えて、今までずっと動き続けていた手も止まる。
「静さん？　どうして……」
うわ、すんごい物欲しそうな声を出しちゃった。
きっと、今の俺は物凄くがっついている目をしていると思う。
先生は問いかけに応じることなくふふっと笑うと、俺の正面に回り込んだ。
そして、無言のまま突如として上のブラトップと下のショーツを脱ぎ捨てる。
「ちょ、ちょっと静さん!?　何やって……！」
手で顔を隠し、再び『＞＜』みたいな顔になってしまった。
音がしなくなり、そろりと細めを開ける。
そこには、一糸纏わぬ先生が居た。
グラマラスな身体のライン、形の良い胸、薄ピンクの綺麗な胸の突起。
その肢体を手で隠す事も無く、顔はほんのり赤らんで、潤んだ目でこちらを見つめている。
あまりにも綺麗だった為先生に見惚れてしまい、顔を覆っていた手を気付いたら下ろしてしまっていた。
「ふふ……良い反応がもらえて何よりだ」
先生は前に屈んで俺の顔をゆっくり覗き込むと、ゆっくりと微笑んだ。
そして、にこーっと笑った次に、にやーっと笑う。超楽しそうで何よりです……。
にしても、笑い方のレパートリー多いなこの人……。
「比企谷、君もだ」
「へ？　……おわっ!?」
先生は俺のTシャツを引っ掴むとずばっと引き上げて脱がし、続いてパンツも同じ勢いで剥ぎ取ってしまった。何これ、俺襲われるの？やばい！今までのも十分やばいんだけど。
ってか先生、何でこんな脱がすの上手いの？痴女なの？言ったらぶ

ん殴られそうだから絶対言えないけど。
ちなみに、パンツを剥ぎ取られる時、その勢いでひっくり返りそうになった。あそこでひっくり返ってたら一生忘れられない素敵なトラウマになるくらい恥ずかしい思いをしたと思う。危なかった……。
互いに全裸になった状態で、先生は正面に座って膝立ちになり、俺の胸板に手を添えて、ゆっくりと押し倒して来た。その際の表情があまりにも艶っぽくて、あと胸がたまんなすぎて、見惚れて何の抵抗も出来なかった。後者の要素がでかいかな、ふふ。
ぽすっと仰向けに倒れた俺の上に、先生は上から覆いかぶさり、再び真っ直ぐ見つめて来た。
「なあ、比企谷。君さえ良ければ、私は君に色々な事をしたいのだけれど……どうかな？」
「や、ここまで来てその質問て。選択肢なんてもはや『はい』ｏｒ『ＹＥＳ』ｏｒ『ぜひ』くらいしか無いじゃないですか……」
ほんと、一択しか無い。一択しか。
「ほう。では、どれを選ぶんだ？」
俺に拒絶の意志は無いとは分かりつつも、心無しか先生の表情は硬い。
今日の先生は、大人ぶってはいても幾度と無く勇気を振り絞ってくれていたのではないか。
何となく、そう思った。
だから、彼女の緊張を解こう、俺なりに彼女の気持ちに応えようと、その頬に手を添えた。
「……ぜひ」
「……そう、か。そうか、そうか……」
何度も確認して、噛み締めるかのように言うと、先生の顔が綻び、心の底から幸せそうに笑った。
……え、なにこの人。死ぬ程可愛いんですけど。
「それじゃあ……」
言葉少なに言うと、先生は俺に覆いかぶさり、ゆっくりと唇を重ねた。

「んむっ、んっ、ふむっ、んちゅるっ、んぐっ、んぐっ……」
愛おしそうに身体を密着させ、汗でしっとりと湿った豊満な肉体を押し当ててくる。俺のモノは先生の太腿に挟まれ、良い様にぐりぐりと擦られていた。
最初は目を閉じていたが、ようやく状況に慣れて来てうっすらと目を開けると、先生も同じように薄目を開けていて、ぱっちりと目が合ってしまった。
一瞬、互いの動きが止まる。
「……」
先生の頬が朱に染まるのが分かった。そして、再び目を閉じ、口内に舌をねじ込んで来る。
カーペットの上で、互いに衣服を全て剥いだ状態での、濃厚な口付け。
途中で俺が上になったりもしつつ、気付けば、数分もの間ひたすら唾液の交換をしていた。
「……ぷはっ。ふふ、なんだ、比企谷……。中々のテクニックじゃないか」
「からかわないでくださいよ……夢中でしてただけです」
そう、必死も必死。初めてのチュウがこれってハードル高すぎるだろ……。
「……そうか」
先生は俺の答えを聞いて満足そうに頷く。大人な対応と、少女っぽさが同居した不思議な表情だった。
そして、ゆっくりと一度瞬きをすると、長い睫毛が微かに揺れた。
「……それじゃ、ベッドに行こうか」
先生は上から覆いかぶさっている俺の頬に手を伸ばすと、優しく、優しく笑った。
続く。

（6）

1．

先生に手を引かれ、ベッドに並んで腰を下ろす。

先生のいる左に目をやると、先生が俺の顔と下の方に視線を行ったり来たりさせて「わぁ……」と言っている。や、もう見てますよね？

相当卑猥なことやってますよね？

「なあ、比企谷……」

らんらんとした目で俺の名を呼んだかと思ったら、先生は右手をこちらの腰に回して、左手は今尚いきり立っている竿に添えて、唇を奪って来た。

「んむっ、んおっ、んくぅっ……」

先生の舌が口内に侵入して、腰に回した手は更に回り込んで右の乳首をくりくりと摘まみ、竿に添えた手は時折亀頭をぐちゅぐちゅと撫で回す。

興奮と快感でぶるぶると震えて、正直このやりとりだけで2～3回出しても良い気がした。

負けじと、俺も左手を先生同様に腰に回してそのまま先生の左胸の乳首を、右手は右胸の乳首を摘まむ。

「んふぅっ!?　んあっ、んんっ、んっ、んっ……」

一瞬目を見開いた後、先生は再び目を細めて行き、どんどん声も甘くなって行く。

「……ぷはっ」

たっぷり10分程互いに刺激しあった後、俺は先生の後ろに回り込んだ。

「んっ、どうした？」

先生は包容力たっぷりの優しい声をかけて、俺の頬に手を伸ばす。

「一回、静さんの胸をたっぷり味わいたくて……良いですよね？」

先生は穏やかにどうぞと答えると、後ろに体重を預けた。

「んあっ、あんっ、こらっ、比企……谷ぁ……胸だけじゃ……ないのか……」

先生の声は戸惑いを孕みつつも、それ以上に甘ったるいものになって来た。
後ろに回り込んでから、かれこれ３０分はずっと先生の胸を弄っている。
先生が動けないのを良いことに、胸を好き放題変形させながらうなじに吸い付き、耳たぶを甘噛みし、耳の中を舌で舐り回す。
さっきまで俺のことを良いようにしていた先生が、今は必死で喘ぎ声を抑えているのがあまりに可愛くて、ついついやり過ぎてしまう。
先生の足は、初めに比べて明らかにぱっかりと開いている。
そこへ、そっと右手を伸ばした。
「あっ!?　ひ、比企谷、そこは……！」
先生の戸惑いの声に耳を貸さず、先生の秘部に指を触れ、そのまま中指を挿入する。
ちゅるん、と言う感触と共に、あっさりと温かい肉襞に包まれた。
――と。
「んあぁぁぁっ!?」
「うおっ!?」
先生は突然、今までの比じゃない程の大きな喘ぎ声を上げ、後ろに仰け反った。
危うく後頭部の頭突きを食らいそうになったが何とか避ける。
しかし、先生の仰け反る力が思いの外強かったため、そのまま二人揃って後ろに倒れ込んでしまった。
「あひっ、うぁっ、うぅぅぅ……」
俺の指が膣に入ったまま、先生がひくひくと痙攣している。
……先生、もしかして、責められ慣れてない？
さっきの胸弄りの間も思っていたけど、どうやら先生はあまりじっくりされるのに慣れていないようだ。
……まあ、今までどころか今尚童貞の俺が言うことじゃないけどね☆
形容しがたいわくわく感を覚えながら、先生の膣に入っている中指を折り曲げた。

「ひぃぃぃんっ!?」
可愛らしい、悲鳴じみた嬌声が上がる。
これは、お返しのチャンスだな。
先生の耳元で、そっと囁く。
「静さん、しばらくこのまま、やっちゃいます」
「あ……えっ……うそ、だろう……？」
先生の顔が、ひくついた。
「ひぐっ、あがっ、かはっ、あえっ、ひんっ、も、やめ、も、むり、むり、むり、〜〜〜っ……！」
俺の上で、先生が腰を跳ね上げる。
互いに大量の汗をかいているため、先生の背中と俺の身体の前面はぴたっとくっついている。
亀頭は先生の足の間からぴょこっと顔を出したままで、時折先生が悶えて足をくねらせるときにおまけのように刺激されている。
かれこれ1時間くらいだろうか。
俺は、飽きもせずに先生の身体を貪っていた。
先生は汗と愛液で全身ぐちょぐちょになっており、いつもの凛とした顔つきはどこへやら、今や完全に俺に身を委ねて、蕩けきった顔でしきりに俺と唇を重ねていた。
先生とキスをしていようがいまいが、愛撫は一切止めない。
中指が疲れたら人差し指を入れ、それでも疲れたら今度は薬指を入れる。
途中からは指を2本入れるようになり、先生はより一層可愛らしく、俺の上で喘ぎ狂った。
「……」
……やり過ぎたかもー。
先生は途中から一切声を出さなくなり、指を膣内で動かしてもわずかにぴくっと反応するだけになっていた。
……これが、失神ってやつ？
じゃあさっき先生が思いっきり温かい液体を噴き出してたのは……あれはおしっこなのか、潮なのか……？

分からないけど、その辺の理解と開拓はまあ、これからの楽しみと言うことで。
先生の膣から指を抜き、そのまま身体も先生の下から抜け出す。
仰向けのままベッドに横たわる先生を、きちんと枕の所まで連れて行く。
お姫様だっこと言うやつだ。
お姫様なんて年齢じゃあ……なんて言おうものなら、あっと言う間に逝かされてしまうな。誤字では無い。
とすっ、と音を立てて、先生がベッドに寝転がる。
その虚ろな表情の綺麗な顔と、グラマラスで淫猥な身体に、改めてごくりと息を呑む。
聞こえていないだろうなーと思いつつも、先生の頬に手を添えて、
「先生、行きますよ……」
と言い、今や受け入れ態勢万端の秘部に亀頭をぴたりと宛てがった。
——と。
「あ、ま、待ってくれ！」
「……へ？」
突然の制止の声に、素っ頓狂な声が出てしまった。
見ると、いつの間にか意識を取り戻した先生が両手でストップの意思表示をしている。
「え、でも……」
突然のお預けに、思わず子どもみたいな声を発してしまう。
すると、先生は気まずそうに頬をぽりぽりと掻いた。
「い、いやぁ、その、な？　私の初めては前の彼とだったんだが……」
「……え……」
……なんで、ここで前の男の話なんかするんだ？　しかも前の男って確かヒモじゃなかったっけ？
俺の表情が険しくなったのに気付いたのだろうか、先生は慌てて手を振る。
「あ、ち、ちがうんだ、そんなつもりはないんだ！　……正確に言えば、

前の彼とするのが初めてに「なるはずだった」んだ……」
「……え？」
「その、な。前の彼が私の家に転がり込んで来て、その、ある夜に、そう言う雰囲気になったんだけれど、彼は私が初めてだと知るやいなや「なんだ、初めてかよ……」と面倒臭そうに言って、服を脱がすこともなくやめてしまったんだ」
　先生の目が潤んでいる。
「え、じゃあ、静さん、今日の今までのことって……」
「もちろん、全て初めてだよ。……その、比企谷、君を誘惑するのに、私も必死だったと言う訳だ。ははは……。君にどう映ったのかは分からないけどな」
　先生の笑い声が、乾いていた。
「ごめんな？　こんな話を、こんなタイミングでしてしまって。今日はまさか、こんなに順調に事が進むとは思わなくて、その、どうしたら良いか、分からなくなってな……」
　先生の声が涙ぐむ。
「こんな、この歳になっても処女で、重い女なんて嫌だろう？　さっきまでは本当にどきどきして、楽しくて、だけど、いつ告げたら良いか分からなくて……もう、どうしようもなくて……ごめんな、ごめんな？」
　俺の頬に添える手が、震えていた。
　……なんだそれ、なんだよそれ？
　先生の頬に手を添え返すと、先生は驚いたのか目を少し見開いた。
「俺、今、怒ってますよ、静さん」
　先生がびくっと震え、表情が固まる。
「あ、そ、そうだよな……」
　目を逸らした先生の顔をぐいと正面に戻す。
「違いますよ、静さんにじゃない。その元カレに、それに、今まで先生と接して来た野郎どもに、です」
「……え」
「なんでこんな素敵で可愛い人を、そんなひどい扱い出来るのか、正直

理解出来ないですよ。重いのが何ですか、そんなの知ってますよ、夏休みにメールもらった時から」
まあ、あの時はドン引きだったけどね。
「それに、処女が何ですか。今まで静さんが出会った野郎共の目が節穴だっただけでしょう」
先生の目から、涙が伝う。
「もう、我慢ならない」
先生に軽く口付けをして、目の前で言う。
「静さん、あなたは俺が、貰います」
「……ひ、比企が……！」
先生の返事が返ってくる前に、俺は先生の秘部に宛がった亀頭を、一気に押し込んだ。
「んあぁぁぁぁぁぁ……っ！」
先生の声が部屋中に響く。
痛みや苦しさの中に、僅かながらに快感が混じっていた。
息を切らしながら、先生が涙目で抱き付いてくる。
「ひ、比企谷、いいのか？　本当に私で、いいのか？　……私で、いいの、か……？」
消え入りそうな声で、先生が聞いてくる。
ああ、この人は今までどれだけしんどい目に遭って来たんだろう。
ぎゅっと抱きしめ返して、
「静さん「で」良いんじゃない、静さん「が」良いんです。覚悟してくださいよ？　俺も相当めんどくさいですから」
と、笑いながら言った。
すると先生は、顔を綻ばせた。
「ふふ……知っているよ、そんな事は」
涙を指で拭いながら、にこっと微笑む。
「……ありがとう」
言って、唇を重ねて来た。
今までで一番甘ったるい口付け。
絡んだ舌が、どこまでもどこまでも求めて来る。

舌の動きに連動するかのように、先生の肉襞がきゅうきゅうと締め付けてくる。
身体の準備が出来ている状態に加えて、心も緩んだからだろうか。
先生はものの数回出し入れしただけで、あっと言う間に声が全て色に染まった。
「あんっ、んんっ、ひぃっ、あふあっ、あんんっ……」
密着した状態で耳元で囁かれ、ぞくぞくが止まらない。
「静さん……！」
俺はそこまでゆっくり動かしていた腰の動きを、一気に速めた。
腰を強く強く打ち付けると、先生の背筋が弓なりに反りかえった。
「んあぁぁぁっ!? あっ、ひぁっ、それっ、好きっ、好きっ、比企谷っ、比企谷ぁ……」
どれだけ強く速く打ち付けても、先生はずっと密着したまま、縋りつくように甘えて来る。
それがあまりにも可愛くて、色っぽくて、愛おしくて。
どこまでも増して行く快感に、もう、限界が目の前に来ていた。
「静さん、俺、そろそろ……うおっ!?」
俺が言い終わるより先に、先生は俺の腰に足を回して来た。
「良いよ、来て？　中にいっぱい、いっぱい出してくれ……！」
中は流石に……なんて事を、ここまで来た後に思っていたりしたのだが、先生の幸せそうな顔を見たら、そんなことはどうでも良くなった。
……だから。
「静さん、出る、出る、出る……！」
「比企谷……！」
「――――――――――――――――――――――――――――」
射精の快感があまりに激しかったからか、それとも今日の疲れが溜まっていたからか、あるいはその両方なのかは分からないが。
俺は先生と唇を重ねたまま、意識を失った。
意識を失ったとは言っても、その瞬間は苦しいものではなく、むしろ幸せな気持ちに満たされていた。

意識を失う直前に見た、先生の幸せいっぱいの顔は……正直、しばらくの間忘れそうにない。

……完全に攻略されちゃったよ、俺。

続く。

（7）

1.

「……ん……」

目を覚ますと、心地良い気だるさに身体が包まれていることに気付く。

……眠い。

そしてもう一つのことに気付く。

目を開けているのに、視界が晴れない。

どうやら、顔が何やら柔らかいものに包まれているようだ。

それに、股間も何だか温い。

……んん？

「起きたか？」

おでこの辺りから、優しい声が響いた。

顔を上げると、すぐ目の前に先生の顔があった。

「先生……」

言うと、先生は俺の頭をくしゃっと撫でて、

「こら、静さんと呼べと言ったろう？」

にっこりと、微笑んだ。

学校にいるときの見慣れた先生のような、近所にいる年上のお姉さんのような、そんな優しく見守るような声音。

先生の声と笑顔にどきどきしつつ辺りをきょろきょろと見回すと、ようやく状況が分かって来た。

俺たちはベッドで寝ていて、横を向いて互いに向かい合っている。

そして俺の顔は先生の胸にすっぽりと埋まり、寝ていてもう収まっているはずの俺のモノは、ぎんぎんのまま先生の太腿に挟まれて、緩慢な動きで優しく刺激されていた。

……え、何これ。天国？

先生の胸の中で頬ずりをするように顔を動かすと、先生がくすりと笑った。

「ふふ、気持ち良さそうに寝ていたぞ？」

確かに、時計をちらりと見ると、精々３０分くらいしか寝ていないにも関わらず、ものすごく熟睡した感がある。
「あー、うん、そうですね、天国でした」
「……嬉しいな」
耳元でぽそりと呟いて、先生が俺をきゅっと抱きしめた。
「何か飲むか？」
「あ、はい……お願いします」
これ以上密着していたら、どきどきで死んでしまいそうだったので、少し惜しい気もしたが厚意に甘えることにした。
2.
「煙草をな、やめようと思うんだ」
下着も穿かないまま、クッションに座って二人でコーヒーを飲んでいると、先生がマグカップを台の上にことりと置いた。
「まあ、良いんじゃないですか」
「その、まあ、なんだ、よく聞くじゃないか。煙草は生まれてくる子どもに悪いと」
「……」
……。
飲んでいたコーヒーが喉奥まで到達することなく、顎をつつっと伝った。なんか吐血したみたいだね☆
「……高校2年生に切り出す話にしては重すぎませんかね……」
「あ、こ、これはもちろん、将来の話だぞ!?　それまでにきちんと綺麗な身体にしておきたいと言う意味でだな……」
先生があわあわと手を交差させる。なんかレフェリーストップをかける角田さんみたいだな……。
あと、そのせいでお胸がぶるんぶるん揺れるんでちょっと目のやり場に困ります！
「君の進路を阻害するような真似をしないよ。安心してくれ」
俺の腿に手をやり、先生がにこっと微笑む。
やばい。このタッチはやばい。むくむくしてきた。
「……比企谷、私は真面目な話をしているんだが……？」

叱るような言い方の割に、先生の声は明らかな悪戯心を孕んでいる。
「そ、その、静さんが裸のままでそんな触り方してきたら……まあ、こうなりますよね」
「まったく……仕方のないやつだ」
先生はそう言うと、艶っぽい笑みを浮かべて竿をきゅっと握った。
「うぁっ……」
優しげな快感が背筋を駆け抜け、落としてしまう前にマグカップを何とか台の上に置く。
「それに、禁煙によるストレスも、君が解消してくれる訳だしな……」
いつの間にか先生は女の子座りになって屈み込んでいて、亀頭を指でさわさわと撫でながら裏筋に息を吹きかけてくる。
床に手を付いてふるふると震えている俺を見て、先生が蠱惑的な笑みを浮かべる。
「もちろん、君のストレス解消も出来るよう、全力を尽くそう。したいときはいつでも言ってくれ。中にだっていくらでも出してい良いし、君が望むなら……その、学校でも……絶対にバレない場所でなら、その……しても、良い、ぞ？」
「え、マジっすか」
何その男の夢。
先生の言葉で更にむくむくと大きくしてしまい、先生が呆れたように笑う。
「なんだ、そんなにしたいのか？　……そうだな、特別棟にある、職員用トイレはどうだ？　特別棟自体あまり使われないのに、更にそこの職員用トイレとなると、何日間も誰も入らないのもざらだ。……放課後は部活があるだろうから、昼休みとか……休みの日にこっそり、でも良いな」
「うおぉぉ……」
夢が無限に膨らんで行くぅ……！
「ぜひ、ぜひお願いします」
すんごいがっついちゃった。嬉しくてもう。

「ふふ、正直なのは良いことだ。……沢山しような。君は性欲盛りの高校生で、私は私で性欲盛りの歳だ。意外とちょうど良いと思うぞ？」
「あ、そうですよね。先生もアラサうおぉぉぉ……!?」
言葉を言い終える前に、先生に深々と咥えられた。こんなエロい仕返しあるの？
先生はむっとした顔のまま俺を押し倒すと、喉奥まで咥え込んだまま両手を伸ばしてきて、こちらの乳首をくりくりと摘まみ始めた。
「んんっ、んじゅるっ、あむっ、おむっ、んんんっ……」
悩ましい声と共に、じゅぶじゅぶといやらしい音が室内に響く。
「し、静さ……んあぁぁぁ……」
あまりに濃厚な口淫と手による愛撫に悶えて、行き場を失った手を先生の手に重ねる。
先生は深く咥えたまま時折こちらを見ては、嬉しそうににっこりと笑う。そのあまりの可愛さに余計に興奮してしまって、何度も腰を跳ね上げてはクッションの上に落ちるのを繰り返した。
「んちゅっ、れろっ、あむっ、あむっ……ぷはっ。どうだ比企谷、気持ち良いか？」
先生が口を離すと、先生の唾液と我慢汁とで出来た、濃厚な糸が伸びて微かに光った。
先生のうっとりした顔に、ごくりと息を呑む。
「や、それはもう……気持ち良すぎてすぐ出そうです」
「そうか、ふふ……。何回でも出して良いからな？　あとは……そうだ、この後なんだが、その……晩御飯を一緒に食べたり、その後……」
先生が可愛らしく照れて言い淀んでいるんだけど、その手は俺のモノをにちゃにちゃとしごき続けてる。ちょーっとギャップが激し過ぎやしませんかね……？　腰が浮く、浮く。
ぷるぷる震えながらも、先生の頬に手を添える。
「良いですね。晩御飯もご一緒したいし、出来れば泊まって行っても良いですか？　小町にメールしときますんで」
言うと、先生の表情がぱあっと明るくなる。

「ほ、本当か。比企谷……比企谷ぁ……」
嬉しそうに目を細めると、甘えるような声で俺の名を呼び、再び深々と咥え込んできた。
今度は顔を捻るようにして舐める角度を変えて、刺激を更に増してくる。
「うあっ、くぅ……し、静さん、どこでこんなやり方を……」
む？　と言う表情でこちらを見ると、先生がぷはっと口を離した。
「それはもちろん、幾多ものＡＶで勉強したんだ。料金も払ってネットで無修正動画もたくさん見たぞ。あれは良いな、細部まで勉強出来るし、生々しくて興奮する」
斜め上を見ながら、きらきらとした目で熱弁された。
……なんだこの、オープンエロ教師……。
「そんな訳で……よっ」
「うおっ!?　ちょ、静さ……！」
先生は今度は俺の腰に手を回し、持ち上げることで更に深く咥え始めた。
顔の動きと手の動きの両方で咥え込む深さや速さを自由に変化させてくる。
ここまででも既に、何度かイってもおかしくない程の快感を流し込まれていたため、もう限界だった。
腰を浮かせたまま、足を先生の後頭部に回し、手で先生の顔を掴む。
「静さん、もう、イく、イく、出る、出る、うぅっ……！」
「んじゅるっ、れるっ、ぷぁっ……出して、出して……！　んむっ、れろっ、んっ、んっ、んっ……」
「うぁっ……――――――――――――――――――――っ」
ごぶっ、どぶっ、ぐぶぶっ、と。
腰が更に跳ね上がるような快感の奔流に呑み込まれ、俺は先生の口の中に大量の精をぶちまけた。
3．
「比企谷……」
「んっ、うぅっ、くぉっ……はい、なんでしょう？」

前の射精から数十分後、俺は先生に膝枕をしてもらいながら、左手で優しくしごき上げられていた。引き続き天国。
「これからも、よろしくな」
「……はい」
先生の頬に手を添えながら答えると、先生はとても幸せそうに微笑んだ。
……キスしてくんねえかなって思ったけど、多分胸に埋まっちゃって出来ないなぁ……。
何と言う凶器なんだ、胸。
先生が指をあごに当てて、んーと斜め上を見ながら考える仕草をしている。
数秒そのままでいたかと思うと、こちらを向いて目をきらきらさせながら、
「この後は夕飯まで無修正のＡＶを見ようと思うんだが、良いな？」
すんごい提案をしてきた。
「それもう決定事項じゃないですか……」
逆らう選択肢が全く用意されていないでしょ、これ。
「ふふ、よく分かったな」
「あ、くぁっ、ちょ、ちょっと、静さん……！」
褒められたからてっきり撫でてくれるのかと思いきや、しごく速さを上げられた。何この性的なご褒美？
……今日一日だけでも、ありったけ搾り取られそうだ。
ちょっと、と言うかかなりこれからが心配だけど、まあそこは何とかなるようにしかならないだろう。

お終い。

雪ノ下雪乃はやっぱりとても猫が好き。（1）

1.

ある冬の日。

冬真っ盛りで外に出る気が全くしない。その為休日は全力で引き籠もりライフを謳歌している。超楽しいよ、引き籠もり。まあ、季節関係無く何かしら理由を付けて引き篭もるんだけど。

そんな真冬の休日に、雪ノ下が家に遊びに来る事になった。何処かに遊びに行った方が良いのかと最初はお互いがぐるぐると考えていたが、無理に出かけなくても多分それで十分だろうと言う結論に達して、俺から誘ってみた。なんで誘うだけでこんなに照れるものなのん？頭をがしがし掻く率が半端なくて、雪ノ下に誤解を受けてめっちゃ間合いを取られたんだけど。瞬歩でも使って距離を縮めないと、会話もろくに出来ないくらいの距離。何なの俺、比企谷菌なの？

彼女が家に来るのは土曜の午前１０時。特に何かする訳ではない。お昼と晩御飯を一緒に食べて、後はひたすら、雪ノ下はうちの猫のカマクラを、俺は小町を愛でるだけだ。そう、俺は小町を愛でる。どさくさ紛れで久しぶりに物凄く愛でてやる。後は雪ノ下がカマクラを可愛がり過ぎてにゃーと言っちゃう場面を的確に捉えてそれを録音して、社会的に抹殺されるだけだ。抹殺されちゃうのかよ。

「お兄ちゃーん、カマクラの準備出来たよー」

何、雪そんな積もってんの？千葉の交通網全滅しちゃうよ？

と思ったら、放っておくとどこに行くか分からないカマクラを小町が捕獲していた。リビングのソファに座りながらカマクラのお腹をもふもふしている。カマクラも観念したようで、ぐてーっとしながら気持ちよさそうにもふもふされてる。なんだ、身体は正直だな、お前は……。

俺も一緒にカマクラをもふもふしながら、カマクラを愛でる小町可愛いなーと目で愛でているとすんごい軽蔑の眼差しで見られた。だ

がしかし、負けない。めげずに目で愛でる。早口言葉みたいになった。
結局侮蔑の眼差しに耐え切れず、カマクラをもふもふする事に専念した。もふもふ。

2.

10分程そうしていると、インターホンが鳴った。時計を見ると、ぴったり10時。律儀なやつだなぁ……。
小町はその音に素早く反応すると、極めて丁寧且つ迅速に俺にカマクラを預け、『はーい♪』と明るく答えると、可愛らしい足音を立てながら玄関へと向かった。
カマクラを俺に預ける手際は大ベテランの外科医の如し、そして可愛らしい足音はタラちゃんの如し。キャラの振れ幅が激しすぎる……。
って、俺にカマクラを預けたけど、俺も出迎えた方が良いよね？流石に。
カマクラをよっこらと持ち上げると、のたのたと玄関に向かった。こいつ重いな……材木座かよ？体重知らねえけど。それか平塚先生の恋愛面かよ？考えたら涙が出て来た……。
「小町さん、こんにちは」
「雪乃さん、ようこそ我が家へ―！」
俺が玄関に着く直前に、二人の会話が聞こえて来た。そこに俺とカマクラがのたのたと乗り込む。
「おう」
「……こんにちは」
俺の顔を見ると、マフラーに顔を半分埋めながら雪ノ下が小さな声で挨拶をした。え、なんで俺と小町とでは対応違うのん？そりゃあ小町が可愛くて思わず明るく挨拶しちゃう気持ちは分かるけど。
「もー、雪乃さんったら照れちゃってー！」
「べ、別に、そう言う訳……じゃ……」
雪ノ下の顔が更にマフラーに埋まった。やめて！このままじゃ顔

が全てマフラーに覆われちゃう！マフノ下さんになっちゃう！もはや誰だよそれ。
「あーもう、今日も雪乃さんは可愛いですね。ささ、まずはリビングへどうぞ！カマクラも愛で放題ですよー！」
お前はどこのジローラモだ。俺がこんな事言ったら歯が浮きすぎてオール入れ歯になるわ。そして高校生にしてポリデントについてググるようになる。
小町の言葉に反応して、雪ノ下がマフラーから顔をすばっと出した。カマクラの存在に気付いて一瞬目を見開き、少し深めの呼吸をしたかと思うと、穏やかな表情になる。
「そうね……ゆっくり頂くとするわ」
言葉のチョイス、チョイス。食べるの？じっくり食べるの？
雪ノ下もフレーズをミスったと思ったのか、顔が赤くなって再びマフラーに埋まった。猛烈にイジリたいけど、多分って言うか確実にひどい目に遭うからどうにもならないよぉ……イジリたいよぉ……。俺の心を読んでるのか、牽制の意味を込めてめっちゃ睨んでくるよぉ……。

3.

リビングに入って、雪ノ下がさらりと辺りを見回す。こう言う時の振る舞い方に人柄は出る物だなと思う。彼女はさらりと辺りを見回すと、じろじろ見回す事も無く、かと言って全く興味を示さないでもなく、程々に見回す。そして、胸に手を当てて、肩を上下して一つだけ、息を深くついた。人の家だもんな、緊張するか。ここまで緊張してる感じが見えるのも珍しい気がするけど。
「ソファ、座ってくれよ。今小町がコーヒー淹れてくれるから」
「あ……ええ、ありがとう」
雪ノ下は少し安心したのか、優しく微笑むと、ソファの端に腰を下ろした。……ああもう、笑顔がいちいち可愛いなお前は、もう……。
彼女に続いて俺も隣に腰を下ろすと、腹の上でごろごろ鳴いてるカマクラを彼女に見せる。

「ほれ、お前の大好物だぞ」
そう言って、彼女の胸元にカマクラをもふっと渡した。
「……食べないわよ、別に……」
小声でばつが悪そうに答えると、目の前のカマクラを一撫で、いや、一もふして、ぽそりと『ありがとう』と言った。時刻は午前１０時１０分。さあさあ、思うがままに愛でるが良い！

3.

「はーい、雪乃さん、コーヒーをお持ちしました……よおぉぉぉ……」
湯気の上がるマグカップをお盆の上に3つ載せて運んで来た小町が、こちらを見るや否や変な声を出した。何、能をやってる方なの？伝統芸能習ってたっけ？お兄ちゃんそんな記憶無いよ？
「ゆ、雪乃さんが天使の様に穏やかな表情でカマクラを撫でていて、それを眺めて心持ち微笑む、と言うかにやけるお兄ちゃん……何と言う和む風景！」
小町が驚愕した表情で言った。劇画タッチの顔みてえだな。
「おい、にやけてねえよ。人を変態みたいに言うな」
「にやけていたの？やっぱり……変態なのね」
雪ノ下がカマクラの前足を持ちながら、顔を背けて言った。おい、ばか、頬を赤らめながら言うんじゃねえよ。真実味が増しちゃうでしょ！カマクラはもぞもぞしてる。
「お、お、お？『やっぱり』？雪乃さん、やっぱりって言うのはどう言った理由からなんでしょうかー？」
小町が良い所に食いついた。これは雪ノ下が全力で恥ずかしがる所が見られるチャンスだ。もっと行ってしまえ！
「お兄ちゃんのどう言った所を見て、変態だって思ったんですかー？」
あ、これ、俺も恥ずかしいやつだ。小町ちゃん、鬼なの？
「あ、や、その……」
雪ノ下があわあわとしながら小町とカマクラとの間に視線を行ったり来たりしてる。こう言う時って俺も見るんじゃないの？見られたら見られたで恥ずかしいんだけど。あと、そんな慌てないで。本気

感が増すから。本当に！
っつうか、あわあわしながらカマクラの前足をぶんぶん振り回すのやめろよ。カマクラもごろな～って唸ってるぞ。……どっちも可愛いくてツッコみづらい……。
「だ、だって、あんな事……されたら……」
ちらっと俺を見ると、かまくらのお腹を掴んでもふっと持ち上げて、自分の顔の半分を隠した。何この子、超可愛いんですけど。何なの？
小町を見ると、お盆を持ったままふるふると震えている。
「ふおぉぉぉ……雪乃さんが可愛いよおぉぉぉ……！」
同じ感想だった。
「て言うかお兄ちゃん、やっぱりそう言う所で変態性が出るんだね。あまりに予想通りだよ……」
小町はがくっと肩を落とすと、ソファの前にあるこたつの上にお盆を置いた。
いや、まあ、それは、ねえ？……思い出すとにやけそうだから、死ぬ気で止めておく。
……コーヒー熱いな……。
外を見ると、寒さこそ厳しいものの、雲はあまり無く、柔らかな陽光が降り注いでいる。
いつもなら家でだらだらして、掃除機をかける小町にごみ扱いされながら足蹴にされるだけの時間。それも十二分に楽しいんだけど。蹴られる所をピックアップして楽しいって言うとまた違う意味で変態になるんだけど。
家でだらだらするのは変わらないのだが、今はその空間に彼女が、雪ノ下雪乃が居る。
何て事の無い時間なのだが、これはこれで悪くないと思えた。
……暖房、効き過ぎじゃね？
続く。

（2）

1．

リビングのソファに腰を深く下ろし、のんべんだらりと本を読む。小町はキッチンらへんからずっとこっちの様子をにやにやしながら見てる。……こっち来ないのかよ。その距離感超恥ずかしいからやめてほしい……。

テレビを見ていても良いのだろうが、この時間帯に面白い番組があるかどうか調べるのも面倒なので見ない。アニメ放送の時間帯は過ぎたし。

読みかけの文庫本を開きながら、隣をちらりと見る。

……全然飽きないのね……。

雪ノ下はカマクラの前足やらお腹やらを持って、抱えて、撫でて、もふもふして、それはもう愛でに愛でている。まるで半年ぶりにあった熱々のカップルの如きイチャつきぶりだ。実際そうなのかどうかは知らないけど。

もう何分そうしてんだよ。コーヒー冷めちゃうぞ。

そう言う意図を込めて視線を送る。いつもならそれに気付いて怪訝な顔で返されるんだけど、いやそれでもう徳光さんばりに泣けるんだけど、今は気付いてさえもらえない。つら。

……いや、その、なに、俺、今はその、あなたの、ねえ？アレな訳だし、そう言う反応ももう少しくらい、ねえ？

……我ながら気持ち悪かった。

「コーヒー、冷めるぞ」

気を取り直してさらりと伝えると、雪ノ下がようやくはっと我に返った。おかえりなさい。

「……そうね、小町さんに申し訳無いわね」

ほんとだよ。天使が入れたコーヒーだぞ？他の奴に飲ませるなら一杯８０００円はむしり取るぞ。ちなみに戸塚が淹れたコーヒーなら一杯２５０００円です。大丈夫、材木座なら買ってくれる。

一旦カマクラを解放するのかにゃーと思ったら、左手で器用にかま

くらのお腹をもふもふしながら、右手をこたつの方に伸ばしてマグカップを取った。どんだけ離したくないんだよ。Ｔ―ＢＯＬＡＮなの？

コーヒーをこくりと飲む雪ノ下の喉元に目が行く。修学旅行で平塚先生とラーメンを食べに行った時、彼女がスープを飲む際の喉の動きが無駄に艶めかしくて目を逸らしてしまった事を思い出した。

身体の奥がかぁっと熱くなるのを感じて目を逸らそうとしたが、雪ノ下に気付かれてしまった。まずい。

「……なにかしら？」

「……や、なんでも、ないです……」

敬語になっちゃったよ。だってこう言う時の雪ノ下超怖いんだもん。議論・糾弾モードに入った時の彼女はきっと今まで多くの人、主に女性を泣かせて来たのだろう。三浦とか、三浦とか、三浦とか。俺も多分まともに口喧嘩したら三日三晩泣いちゃう。

「どうしたのかしら？教えてくれる？」

笑顔が怖い、怖いよ。ふえぇ……。

「……はい、雪ノ下さんがコーヒーを飲む時の喉元を見て、修学旅行でラーメンを食べに行った時、スープを飲むあなたさまの喉の動きが妙に艶めかしくて目を逸らしてしまった時の事を思い出していました」

もう全部白状しちゃった。オール敬語で。

「……そ、そう……」

頬がほんのり赤く染まったかと思うと、雪ノ下は少しだけ目を泳がせて、一気に飲んで空にしたマグカップをお盆に置いた。なに、許してもらえたの？今の反応をどう捉えれば良いの？って言うかもうちょっと味わって飲めよ…。

その後の数分間は、カマクラの前足を振り回す事が妙に多かった。なんでなの？カマクラはぶんぶんされてる間ずっとごろな～って唸ってた。

おい小町、テーブルに肘をついてにやにやしてんじゃねぇよ。何か恥ずかしいだろうが。にしてもその感じすげえ可愛いな、まったく。

2.

かれこれ30分くらい経っただろうか。

雪ノ下は、まだカマクラを愛でている。俺もそろそろ小町の事を愛でたいなぁ……。

しかし、雪ノ下とこの距離感で長い時間一緒に居て、何もしないと言うのはどうにもむずがゆい。ぶっちゃけちょっと触れたい。だって俺高2だよ？盛りだよ？何のだよ。

我慢が出来なくなったので、右手をそっと伸ばし、集中してカマクラをもふってる雪ノ下の頭を、試しにぽんぽんと撫でてみた。

ぽふっとな。

「……」

あれ？何も反応しない。もう少し撫でてみる。どうだ、こう言うのが好きなんだろう？ほれほれ。

ぽふぽふ。

「……」

ＭＵ☆ＳＨＩ！

久しぶりの、無視を越えた黙殺だよ！泣いちゃう！

このやろう……。負けない。撫で続けてやる。

決意を新たに雪ノ下の頭を撫でていると、一分程経った頃だろうか、雪ノ下がごく自然に、俺の肩にとんと身を寄せて来た。

……突然の甘えん坊さん……だと……？

しかし、カマクラを凝視する姿勢は一切崩さない。どんだけ強固な意志なんだよ。もうお前ここに住めよって言いそうになる。死ぬ程恥ずかしいから言わないけど。

俺は雪ノ下の頭を撫でるのを止めて、そっと肩を抱き寄せた。

すると、やっと彼女がこちらを向いた。しかし、二人の目が合うと互いに恥ずかしくなって目を逸らしてしまった。

……何この幸せな時間？

――などと思っていたら。

雪ノ下はカマクラに夢中で気付かなかったが、小町が何も言わずに極めて滑らかな動きで俺たちの正面に座った。そして音の鳴らない

カメラ機能を使えるアプリでそっとこちらの3ショット写真を撮り、出来を確認してにまーっと笑うと、また何も言わずに立ち去った。
……これ、雪ノ下さんにご報告した方がよろしいんでしょうか……。音が無いとは言え、目の前で写真撮られて気付かないってどう言うことなのん？
おい小町、わざわざ写真見せつけんな。待受画面に設定すんじゃねえよ。コーヒー片手ににやにやと写真を眺めるんじゃねえよ。あとちらちらこっち見んな。にやけんな。やめてよ！恥ずかしいよぉ！

3.

雪ノ下はしばらく俺にくっついていたが、飽きてしまったのかあっさりと俺から離れ、引き続きカマクラをもふっていた。もふもふ。
……俺はカマクラ以下かよ……。
いや、分かってるけど。そうだと思うけど。
仕方ないと思い、再び本を開いた。何だかんだで、あのまま雪ノ下と引っ付いていたら絶対発情しちゃってたので、案外丁度良かったのかもしれない。
本を読んで徐々に落ち着いて来ると、右側から視線を感じた。
ちらりとそちらに目をやると、雪ノ下が俺以上にちらちらとこちらを見てる。なに、そんなに俺が本を読む姿が気に食わないの？想像の前提が悲し過ぎる。
しばらくちらちらとお互いに視線を交わし合ったかと思うと、雪ノ下がこほんこほんと咳払いをした。何回も。どうしたの？何かクリスマス前に本音をぶつけ合った翌日、部室で雪ノ下と二人きりになったときの感じを思い出した。今はあの時の様な気まずさなんて無いどころか、その、何て言うか、あはははは。……どこの由比ヶ浜だよ。
あの時と似た状態と言う事は、何かを言おうとしているのだろうか。しかも今のこの状況で気恥ずかしく思うって、え、なに？何か考えただけで熱くなって来たんだけど。
「……その……」
雪ノ下が振り絞った様にぽそっと喋った。２文字かよ。４バイト

しかねえぞ。
何をしたいのかにゃーと思っていたら、雪ノ下がかまくらを抱えてすっくと立ち上がる。何処へ行くのかと思ったら、俺の目の前に立った。え、なに？神妙な面持ちで立つのやめてよ、どきどきするから。
「……お邪魔、します……」
くるっ、と俺に背を向けると、俺の股座に座って来た。ソファの後ろから背もたれ→俺→雪ノ下→かまくらと言う並び。
え、なにこの状態？
手のやり場にＭＡＸ困る。雪ノ下の肩の横辺りで意味ありげ且つ全く無意味に手をふよふよと動かす。何かの波動を集めてるみたいになってる。
雪ノ下は俺の挙動不審さに目も暮れず、ひたすらカマクラをもふる、もふる、もふる。順応はええよ。俺が困るわ。
雪ノ下の真っ白で綺麗なうなじが目の前にあると、俄然性欲が湧く。もう堂々と言っちゃったよ。
「……」
試しに、無言できゅっと後ろから抱きしめてみた。……超良い匂いがするんですけど。
「……」
いや、ここまでやって無言かよ。いっそ清々しいな。
こうなったら反応するまで恥ずかしい事言ってやる。
「なんだか……良い匂いすんな、お前」
「……変態。助平。淫獣。色情魔。性欲魔人」
わぁ……すごい反応が返ってきたぁ……。
「えらい言われようだな。泣いちゃうぞ」
本当に泣きそう。何でそんな淫語ｄｉｓりが上手いの？
しかし、そう言っただけで、特に何も抵抗はしない。
調子に乗って、いつかリクエストしたかった事をお願いしてみる。
「なあ、雪ノ下。俺にだけ聞こえる声で良いから、にゃーって言ってくれよ」
「……あなた、正気なの？そんな事言った経験なんて一度も無いわよ」

おい、言うに事欠いて。マジかよ猫ノ下さん。
とぼけが過ぎるので、ちょっと攻める。責めるの方かな？
「……へえ。じゃ、すぐ近くで小町が見てるのに、俺がお前の首筋に吸い付くのと、恥を忍んでにゃーって言うのどっちが良い？あ、吸われながらにゃーって言うのでも良いぞ」
雪ノ下がぴくっと動いた。
「……き、鬼畜にも程があるでしょう……」
「そうか？」
息をふーっと長く吹きかけると、雪ノ下の透き通るような白いうなじがぶるるっと震えた。
表情が少なからず艶っぽくなりながら、雪ノ下が小声でぽしょぽしょと喋る。
「んあ……ちょ、ちょっと、だめよ、小町さんが見てるのよ？」
「……何か今のセリフ、『だめよ、子どもが起きちゃうでしょ？』って言う奥さんみたいだな」
「……」
「……」
言ってみた感想：死にたい。
雪ノ下さん、こっち見て？何か耳が赤く見えるけど気のせい？どうしはりましたの？俺のせいですねごめんなさい。
なんて小っ恥ずかしいやり取りをしていると。
ぴろりーん♪
唐突に電子音が鳴った。
驚いて横を見ると、小町が携帯のレンズ部分をこちらに向けていた。
ははーん、動画を撮ろうとしたな？だが甘いぞ小町、そんな露骨に音を出して撮り始めた所で、ここから俺たちが下手な事をする訳が――。
「あ、これは撮り終わった音だよー。撮り始めは手で覆って音を小さくしてたのです！」
ほーん？なんだってー？

えっへんと胸を張るんじゃねえよ。胸無いだろ。目の前に居る方にも無いけど。絶対言えないけど。
なんて考えていたら、急に腕が冷たくなって来た。え、何？デイ・アフター・トゥモロー？
「……小町さん？どうしてそんなものを撮っているのかしら？それと、いつから？」
こちらからは彼女の顔は見えない。けど、見えなくて良かったと思う。小町が涙目で震えてるし。
「え、ええっとですねぇ……お兄ちゃんが『なんだか……良い匂いすんな、お前』って言った辺りからです……」
恥ずかしい所ほぼ丸々じゃねぇか。死にたい。
「そう……。で、理由は？私に教えて？」
多分って言うか絶対笑顔だ、今。超怖い。超怖いよぉ！
小町は震えながらも、精一杯笑顔を作って、人差し指を頬に当てて小首を傾げる。
「あ、そ、そのぉ……毎朝起き抜けに観たいな～と……」
目線、目線。冷や汗だらだら流しながら斜め上の天井を見ちゃだめだろ。浮気がばれた旦那さんかよ。
「そう……。……却下します」
雪ノ下が俺の手を掴み、引き離して立ち上がろうとする。
「にゃーーー！ゆ、雪乃さん、御堪忍を、御堪忍をーーー！」
小町が涙目で命乞いをしてる。お前はどこの江戸の町娘だ。お代官様――！
「だめよ」
声が超冷たい。声だけで凍える。
今にも俺の腕が引き離されそうになった時、小町が叫んだ。
「お、お兄ちゃん、何とかしてー！」
ここでかよ。役回りが損すぎるだろ。
しかし、可愛い妹の頼みとあらば無下に出来ない。
頭をがしがしと掻いて、小町の方を向く。
「手段は問わないか？」

「何でも良い！何でも良いからー！小町、この動画を毎朝見たいの！」
どんだけ見たいんだよ。俺も恥ずかしいんだぞ？
しかし、この状況は何とかせねばなるまい。だって、可愛い妹の為だし。
俺は雪ノ下のうなじをもう一度じっと見つめた。
「お前な……ま、良いか。雪ノ下、……んっ」
「ひあっ!?」
「うえっ!?」
小町が唖然としてる中、雪ノ下の首筋に吸い付いてみた。
「あ、ちょ、あなた、んあっ、何、考えてるのよ？小町さんの目の前で、いうっ、んぐっ、だ、だめだったら、せめて、ひあっ、二人きりの時に……あう、うう、んんんん……！」
雪ノ下の動きに驚いたのか、カマクラは彼女の腕からぱっと抜け出し、とととっと去って行ってしまった。しかし雪ノ下はその事に反応する余裕が今は全く無い。口を押さえる手を掴むと、雪ノ下は泣きそうな顔で懇願して来る。
「お願いだから、ね？後でいくらでも、ひぐっ、して良いから……ひぐぅぅっ……」
雪ノ下の顔が見る間に艶っぽくなって行く。もう、たまらない。
「ゆ、ゆ、ゆ、雪乃さん……さり気なくとんでもない台詞連発してますけど……」
小町が目を見開いて、こちらの様子を凝視している。あらま、おませさん！
「あ、こ、小町さん、これは違うの。違うのよ」
あわあわと首を振って、何とか誤魔化そうとする雪ノ下。全然誤魔化せてないけど。
しかしここで責めの手を緩めては、小町が困ってしまう。
仕方ない、仕方ないよね！
俺は雪ノ下を抱きしめる力を強めると、再びうなじに吸い付いた。
「……んあぁぁっ……！」
小町に気を取られていた為か、思い切り背筋がそり返る。

それでも、追撃の手は緩めない。
彼女を抱きしめていた手を交差させて、右手は彼女の左胸を、左手は右胸をぎゅっと摘まんだ。――と。
「〜〜〜〜〜っ」
吐息に混じってほんの僅かに喘ぎ声を漏らして、雪ノ下は静かに果てた。
天井を向いて口を半開きにさせ、俺に体重を預けて断続的に痙攣している。
そのあまりの色っぽさに理性が飛んでしまい、彼女のあごの下を右手で押さえて上を向かせたまま、再び彼女の首筋に吸い付いた。
「んあ……あぅ……」
言葉にならない喘ぎ声を上げながら、雪ノ下は再び小さく痙攣した。
……あ、夢中になりすぎた。やば。
「はわわわわわ……」
小町は頬に手を当てて、口をぱくぱくとさせている。顔からは湯気がもう、温泉ばりに出てる。
……妹の前で、アレな関係の女の子をイカセちゃったよ。
小町、ごめんね。お兄ちゃん、発情しちゃいました。
この後、俺と小町は雪ノ下に正座を強いられ、すんごい説教された。
どちらかが『でも……』等とほんの少しでも反抗の意志を見せようものなら、それはもう重力万倍になる勢いの目力で黙らせられた。
……怖かったよぉ……。
続く。

（3）

1．

雪ノ下にものっすごい勢いで説教されてから３０分程経った。

説教自体は１０分程で終わってた。同じ事をくどくど言わないのは雪ノ下らしいなと、説教を受けている途中で思わずくすりと笑ってしまい、死ぬ程睨まれた。見ただけで人を殺められるのって貞子だけじゃないのん？

小町が素早く反省の意を示しつつ、お詫びのお菓子を持って来るついでに自分のパソコンに撮影した写真と動画のデータを入れて、雪ノ下の目の前でデジカメ本体のデータを削除して見せた手際には戦慄した。何なのその辣腕？

まあ、おかげで俺も便乗してさらりと謝る事が出来たんだけど。

「可愛い妹の前であなたさまをイカセてしまいごめんなさい」って言ったら、それはもう唇と唇が触れ合う程の距離で見つめられた。すごくどきどきした。ノートに名前書かれたのかなって思うくらい。

直接手を上げられた事は一度も無いのに、視線一本でここまで人を制する事が出来る雪ノ下の覇王色具合にはほんとびっくりだ。

「……」

ようやく落ち着いた雪ノ下は、再びカマクラをもふもふしている。

一度逃げてしまったが、小町がお詫びのお菓子を持って来ると同時にカマクラも捕獲していたのである。手際が良すぎてお兄ちゃん逆に心配ですよ……。

あんな事をやらかした後だから、一度距離を取られるのだろうと思っていたのだが、あろうことか再び俺の股座に座り込んだ。しかも先程とは違い、完全に俺の身体にもたれかかっている。

そんな状態なので、俺もソファの後ろにがっつりともたれかかって、少しばかり息苦しさを感じながら本を読んでいた。

……ずっと目の前から良い匂いがして来るから、全っ然集中出来ねえ……。

目の前の雪ノ下のうなじに、再び目をやる。

……わ～、やっぱりかぶりつきたいよ～。
でも、流石に我慢。ここでかぶりついたらもう終わりだぞ、今日はもう健全に過ごせないぞ。まだ昼飯だって食べてないのに。
しかし、やっぱりちょっと我慢出来ない所はある。
「雪ノ下。肩、凝ってないか？」
ちょっと遠回しに聞いてみた。遠回しにほとんどなってないけど。角度で言えばど直球から3度くらいしか変わってないけど。
カマクラをごろな～と鳴かせている雪ノ下の動きがぴたりと止まる。
「……そ、そう、ね……少し、凝っているかもしれないわ」
はい、来ました。
キッチンにちらりと目をやる。
よし、今なら小町はいない。
「そ、そうか、なら……ちょっとくらい……な？」
俺のこう言う時の喋り方、これ以上無いくらい気持ち悪い。
そろりと雪ノ下の肩に手を伸ばすと、白い肌が見えている部分に指を付ける。
ぴくっ、と雪ノ下の身体が動いた。
「んんっ……」
ささやかな甘い声を出して、首を斜め前にこてんと倒す。
だーもう、何でこんないちいち色っぽいの？
指を止めて感動に浸っていると、股間に何かが当たる感触がした。
「……硬い」
いつの間にか、雪ノ下は顔をこちらに向けて、ほんのわずかに息を荒げながら、流し目を送っていた。
視線を下に送ると、彼女が腰をくねらせて、尻で俺のモノをズボン越しに刺激して来る。
……わー、何これ？超エロいんですけど。
何かもう俺と雪ノ下の下半身の衣服をすぽぽっと剥ぎ取って、このまま合体したい勢い。んな事したら多分色んなものが終わるけど。
さあ、このクール淫乱ちゃんをどう料理してやろうかと手をわきわ

きさせていると、キッチンから可愛らしい声が飛んできた。
「お兄ちゃーん、雪乃さーん、その辺にしといてくださいねー？お昼ご飯を食べましょう！小町が作っちゃいますから！」
見ると、小町がにっこにこと笑いながら食材の野菜を持っている。なんだ、ただの天使か。
「あ、ありがとう、小町さん」
雪ノ下は慌てて背中を俺から離す。あ、立ち上がって離れるまでは行かないのね……。
「まったくー、小町が一瞬離れたくらいでそんなエッチな事しちゃうなんて、二人とも油断がならないったらありゃしない！次にこんな事があったら、雪乃さんの事「お義姉ちゃん」って呼んじゃいますからねー！」
おいこら天使、ばか天使。やめてよそう言うの！超熱くなって来た！
「や、やめてちょうだい、そんなこと……は、恥ずかしい、でしょ……？」
カマクラの前足ぶんぶん振り回さないで、雪ノ下さん。何回目なのそれ？まあ、ごろな～って唸るのを俺も結構気に入っちゃった感はあるんだけど。
「ああもう、やっぱり雪乃お義姉ちゃんは可愛いな～！それじゃ、作って参ります！」
小町がさりげなく恥ずかしい言葉をぶっこんで、野菜を持ったままきらっきらした笑顔で敬礼した。何それ超可愛いんですけど。
雪ノ下は……カマクラに顔を埋めて、湯気を噴き出してらっしゃいます。不意打ちだったもんねぇ……。しかし照れノ下さんいちいち可愛いな。

2.

「ご飯、出来たよー♪」
小町の明るい声がキッチンから聞こえた。
なんだろう、この声を聞くと、僕は毎日すごく幸せに過ごす事が出

来るんです。小町の明るい笑顔は世界を照らしますね。……俺、何言ってんだろう？

小町が鼻歌混じりに食器を並べて行く。

「さあさあ、お兄ちゃん、雪乃お義姉ちゃん、こちらへどーぞ！」

いや、マジでやめてくれその呼び方……。本人じゃないのに俺が恥ずかしくて死にそうだ……。

「……あ、ありがとう……」

雪ノ下が極小の声で呟く。本当にぽそっと言った。

いつもは小町と向かいあっているから、小町の隣に雪ノ下が座るのが無難だろうと思ったんだけど……引かれた椅子と並べられた食器の位置が、完全に俺と雪ノ下を横並びにさせるつもり満々だった。抵抗は無駄と判断して、二人揃って小さなため息をついて席に着いた。

「今日は小町特製のオムライスでーっす！ケチャップで文字を書いたげるね～」

「待て待て、お前はどこのメイドさんだ」

死ぬほど恥ずかしいから止めてほしい。

「あ、いや、そんな事をしてもらわなくても……」

雪ノ下も戸惑っている。まあ、こんなノリ見た事経験無いよね。

「良いから良いから♪」

笑顔で押し通された。邪気がひとかけらも無いからタチが悪い……。

「朝ご飯を振る舞うんだったらスコーンとか作って、イギリッシュに決めてみたかったんですけどー」

ケチャップを持った小町がるんるんと笑顔で語る。おい、まだそれ言うのかよ。

「い、イギリッ……？」

雪ノ下の首がかくんと傾いた。ですよねー。

「気にするな、ただの小町製英語だ。ブリティッシュを小町変換するとそうなるらしい」

「違うもん！和製英語みたいなものなの！グレート義太夫みたいなものなの！」

だから、グレート義太夫は和製英語じゃないと思うんだけど……。
と、そんな小町の言葉を聞いていた雪ノ下が、ふむと手をあごに手を当てて何か考え始め、すっと顔を上げた。
「小町さん」
「お？は、はい」
「イギリッシュ、等と言う言葉は無いはずよ。それに、和製英語の使い方も間違っているわ。そもそも……」
そこから数十秒、雪ノ下のプチお説教が始まった。小町はその数十秒の間にすごく風化してた。さらっさらに。
「……はい、では、ケチャップもかけたことですし、召し上がれ！」
「お、おう……いや、あの、小町ちゃん、これは……」
「こ、小町さん……これはどう言う事かしら……？」
二人そろって口をひくつかせる。
小町は雪ノ下のプチ説教が終わると、そのお返しとでも言わんばかりに、俺のオムライスには「I♡雪乃」、雪ノ下のオムライスには「I♡八幡」と堂々と書いて来た。あまりに滑らかな動作だったため、その不埒な行動を見惚れるように見送ってしまった。お前はどこの秀才氷室だ。
「召し上がれー！」
文句は受け付けませんってか……。
「……頂きます」
ふぅっ、とため息をついて、大人しく食べた。
……旨いな、まったく。この天使ちゃんめ。

3.

「ご馳走様」
「ご馳走様でした」
手を合わせて、いつもより少し大げさに感謝の言葉を述べる。
「お粗末様でしたー！お義姉ちゃん、お味の方はどうでしたか？」
おい、呼び方、呼び方。付け足して元の方をカットするってどう言う事だ。

「その呼び方を何とか……ん……こ、こほん。……お、美味しかったわ、とても。普段から料理をしっかりしているのが伝わって来たわ」
「おお！ありがとうございます！えへへ……そりゃあもう、こんなダメ兄を持っちゃったら家事頑張らないとって思いますからねー」
「……そう。それもそうね……」
二人してこっちをチラ見してふっと笑うの止めてくんない？特に雪ノ下。
「へーへー、頑張りますよっと」
「わー……やる気の無い返事だー……」
目を限界まで細めながら、小町からの憐みの視線を受けた。
「せっかくご馳走になったのだし、お茶を淹れさせてもらうわ」
雪ノ下はそう言うと、すくっと立ち上がる。
「え、良いんですか！それじゃあ、お言葉に甘えて！あ、ポットはそこですー」
小町は嬉しそうに笑うと、必要な道具の場所を教える為に立ち上がった。
「……えへへー……」
雪ノ下が紅茶を用意して、俺たちに注いでいるのを小町がずっと見つめている。にやけながら。
あまりにもじっと見られたため、流石に雪ノ下も気にしてちらちらと小町を見ている。
「こ、小町さん……どうしたのかしら？ずっと私の事を見ている様に思えるのだけど……」
「えへへへー……へ？あ、す、すいません！雪乃さん、あ、いや、お義姉さんにこれからもこんな風にお茶を注いでもらえたらなーと思って……えへへへ……」
「おい、よだれ、よだれ。あと呼び方はなに、それで定着したの？なんでわざわざ言い直したの？」
誰の賛同も得ぬままに呼び方を固定させるって、お前はどこの由比ヶ浜だ。
雪ノ下の方に目をやると、「そんなこと……」などとぽしょぽしょ呟

きながら、顔を赤くしている。やめろよ、こっちまで死ぬほど恥ずかしくなるから。

4.

紅茶を飲んでまったりする時間を終え、再びリビングでだらける。

ああ、人と居てもこれだけゆったりだらだら出来るものなのか。そんな立ち位置になる人は、小町くらいしか居ないと思ってたんだけど。

時刻はまだ午後1時。どうしよう、何をしたものか。

雪ノ下は再びカマクラをもふるのだと思っていたが、今は本を読んでいる。小町も居ない。どうやら、小町は自分の部屋にでもカマクラを連れて行ったようだ。何かもう毎度毎度あいつは分かりやすいな。お気遣い感謝致します。

雪ノ下自身はと言うと、カマクラが居なくても俺の股座に座っている。自然過ぎてちょっとびっくりなんだけど。

「……」

カマクラも小町も居ない、純粋に二人きりの空間。ああ、やばい、これは、やばい。

そろそろ行動を起こそうと手をわきわきさせていると、雪ノ下が本に栞を挟み、ぱたりと閉じた。え、なになに？

「……比企谷……くん……」

少し上ずったような、息混じりの声。

別に、普段と比べてあからさまに変化すると言う訳ではない。

しかし、二人きりの時にだけ、恐らく本人も無自覚なレベルで、ほんの少しだけ声が変わる。

今聞こえた声は、正にその声だった。

聞き慣れた筈の呼び声一つで、心拍数が跳ね上がり、息を呑む。

雪ノ下は身体の向きをくるりと変えて、俺の方に向き直った。

互いの息遣いまで感じる程の距離で、目を見つめる。

「……比企谷くん、比企谷……くん……んっ」

名前を呼ばれて、もう一度名前を呼ばれて。

そして、ゆっくりと唇を重ねて来た。
腕は俺の首に回して、絡み付く様に身体を密着させてくる。
……あー、これ、最後まで行っちゃうやつだ。
雪ノ下も、小町の気遣いに気付いているのだろう。じゃなければ、人の家のリビングでこんなに発情したりはしない。
キスの時のテンションで、この子がこの後どこまでしたいのかは何となく分かる様になって来た。今のこのテンションは……なんでだろう、ヤル気満々だ……。
「んんっ、んちゅるっ、はぁっ、んむっ、はんっ、んっ、んっ……」
唾液の交換をたっぷりと行いながら、舌が溶け合う程にねっとりと絡ませる。そして唇を俺から離したかと思うと、キスする場所を俺の唇から頬、あごの下、首筋と徐々に動かして行く。挙動の一つ一つ、吐息の一つ一つがやたらと艶めかしくて、正直これだけで理性が飛びかける。
「雪ノ下……」
彼女の名前を呼びながら、彼女のロングスカートに手を伸ばして捲り上げ、ショーツ越しに尻を鷲掴みにする。
「んあっ!?あっ、んんっ、ふっ、んむぅっ、はふっ、んあぁっ……」
思い切り反応して俺の首筋への責めを止めたかと思いきや、今度は耳たぶをはむっと咥えて来る。
「うおっ!?ちょっ、うぁっ……」
予想していない責めだったため面喰らう。尻を責めれば責める程、耳元で囁かれる喘ぎ声と、吹きかけられる息にいやらしさが増してしまい、余計に興奮する。
ロングスカートを捲り上げて尻を触った時に初めて気付いたが、彼女のショーツは既にぐしょぐしょに濡れていた。
昼飯の前にイカセてしまった後、そのまま普通に過ごして、ご飯を食べて、紅茶を入れてくれていたのだろうか……？
そう思うと、余計にぞわぞわとした感覚を覚えた。
「ね……比企谷くん……」
雪ノ下は潤んだ瞳で俺を見つめると、ショーツ越しに自分の秘部を

俺の股間にこすり付けて来た。
たまらなくなり、彼女の腰を掴むと、ゆっくり彼女の身体を上下させる。
ズボン越しに怒張したモノが、僅かながらに彼女の秘部に埋まる感触があり、その度に長めの甘い声が聞こえる。
そして、雪ノ下はもう一度俺にキスをして来たかと思うと、俺のズボンとパンツをずり下ろして隆起したモノを露にした。更に、ショーツをこちらに見える様にわざとらしくずらして、自分の秘部を晒す。
「もう……良いでしょ……？」
切なそうに、泣きそうに、そして懇願するように。雪ノ下はゆっくりと囁いた。
……わー、完全に発情しちゃってるよー……。
こんな誘い方をされて乗らない訳が無い。
「……ああ」
短めの返事をして、俺は雪ノ下の腰を掴んで、モノの位置を確認した、ゆっくりと彼女の腰を下げて行く。
「んぐぅっ、ひぐっ、あっ、あっ、あっ、あっ……」
徐々に彼女の肉襞に亀頭が食べられ、竿が食べられ、ゆっくりゆっくり飲み込まれて行く。
身も心も蕩けてしまう様な感覚を覚えながら、ふと、視線を横に移した。
その時、ある事に気付いた。
テーブルの上に、明らかに起動ランプが点いたデジカメがこちらへ向けて置かれていたのである。
……ほーん？小町ちゃん、何してらっしゃるのん？え、録画モードなの？
一瞬青ざめた瞬間、肉棒が完全に雪ノ下の肉襞に飲み込まれ、彼女は幸せそうに嬌声を上げた。
続く。

（4）

1.

目の前には俺のモノを膣で深々と咥え込んだ雪ノ下。

そして左には、そんな俺たちの様子を定点カメラの如く録画しているデジカメ。

……やばい。えぐい。

多分小町は俺らがここまでするとは思ってなかったと思う。もし、すると思ってこんな事やってたら、変態の烙印を笑顔で押してしまいそうだ。小町はそんなんじゃないもんね！

せいぜい、お昼前の様にイチャついている所を撮って後でにへらーっとしようとしてたんだと思う。それくらいならもう全く驚かないし。

だけど、これはやばい。本当にやばい。雪ノ下本人が見たら死んじゃうくらい恥ずかしい映像だぞ。

早く言わないと……。

「んんっ、ふあっ、全部、入っ、たぁ……」

びくんびくんと震えながら、雪ノ下が目の前で涙目になって微笑む。

ちょっと可愛すぎて何言ってんのか分かんない。

どちらも動いてはいないのだが、彼女が震える度に、膣肉がきゅうきゅうと心地良く締め付けて来る。これ、油断してたら全く動かなくてもイっちゃいそう。

……と、にやけるのを我慢しながらこの快感に浸っている場合ではない。超浸っていたいけど……。

「ゆ、雪ノ下。あれ、あれ見ろ」

雪ノ下の腰に回していた右手を彼女の目の前に出して、くいくいと指差す。

「ふあ……？」

惚けた目で、ゆっくりと指差した方向へ向き直った。

「……あ……？」

事態が飲み込めたようだ。
その瞬間、見る間に雪ノ下の顔が真っ赤になるのが分かった。
ああ、これでせっかくの本番も一旦お預けだな……と思った、その矢先。
「……や……！」
「え、うおっ!?」
てっきり離れるのかと思ったら、俺の腰に足を回して絡み付き、ありったけの力で俺を抱きしめて来た。ぎゅーってされた。ぎゅーって。
ちょ、割と痛い痛い。
あまりに予想外の展開に面食らう。
「お、おい、雪ノ下。まずはあれを止めないと……」
「……や、だめ。恥ずかしい……や……！」
冷静に伝えたつもりだったが、彼女はぶんぶんと首を振り、長い髪の毛が俺の顔と首をくすぐった。
……あれ、急に子どもっぽくなった？
突然の出来事過ぎて、ちょっとおかしくなっちゃったの？
何この状態。可愛すぎるんだけど……。
突如としてやたら可愛くなった雪ノ下に、どきどきが止まらない。
しかしそんな事を言っている場合ではない。子供っぽい雪ノ下まであのデジカメで録画されてしまっているのだから。後でちょっと見てみたいけど。……ちょっと見てみたいけど。
「な、おい、一回離れよう、な？」
何だか子どもに言い聞かせるみたいな言い方になってしまった。
しかしそれでも、雪ノ下は首を横に振る。
「や、だめなの、見えちゃう……恥ずかしい……や……」
一瞬首の動きを止めた雪ノ下の目には涙が滲んでいて、ああ、まだ無邪気な子供だった頃、この人はこんな風に泣きべそをかいていたのかなと思った。泣かせてくる人は陽乃さんくらいしか思いつかないけど。
ってか、ちょっと！子どもモードの雪ノ下さん、可愛すぎて死ん

じゃいそうなんですけど！
しかも、首を振ったり何かしらの動きを見せる度に、彼女の膣肉は先程よりも強くきゅうきゅうと締め付けて来る。正直、頭がおかしくなりそう。
これは……さっさと終わらせてしまった方が早く事態を収拾出来そうだ。動画は後で消せば良いし。
そう思い、彼女の尻の肉を思い切り掴んで、全力で腰を突き上げた。
――と。
「にゃあぁぁぁっ!?」
「へ？」
へ？
突然聞こえた雪ノ下の鳴き声に唖然としてしまった。
彼女も自分が上げた声にはっとする。
そして目が合うと、互いに見つめ合い、一瞬固まってしまった。
すると彼女は再び耳まで真っ赤になり、涙目で「うぅ～……」と唸り始めた。
子どもと猫のコンボだと……？
……死ぬ。目の前にいる女の子が、可愛すぎて、死ぬ。
しかし、ここで死んでいる場合ではない。
再び腰を突き上げ、そこから止まる事無く突き上げ続ける。
「ひぐっ!? あっ、うぁっ、やっ、ひんっ！ あうっ、うぐっ、や、だめ、だめ、だめ、だめ……～～～っ！」
僅か数回突き上げただけで、彼女は簡単に果ててしまった。
太腿に、彼女の下腹部から溢れ出した温かい液体が伝う。
項垂れながら息を切らしていて、明らかに体力が尽きているのが分かる。
しかし、ここまで来たらもう止められない。
繋がったまま背もたれから離れる様に左に倒れ込み、俺は寝転がってフレームアウトする。
一方、雪ノ下は俺に跨って、カメラに正面から向き合う体勢になった。

……我ながら、えげつない。
「へ……？　う、うそ……や……んあぁっ!?」
更に悪化した状況に雪ノ下が気付いた瞬間、反応を待たずに更に突き上げ始めた。
「やっ、やだっ、あうっ、だめっ、やっ、やんっ、恥ずかしっ、んあっ、やだ、やだやだやだ……ひうっ！」
突き上げるごとに、彼女はどんどん子どもっぽく、どんどん敏感になって行く。
子どもの様な泣き顔で顔を横にぶんぶんと振りながらも、何度も小刻みに痙攣して、汗だくになりながら天井を見上げて喉仏を見せつけて来る。
幼い仕草と妖艶な魅力のアンバランスさに、思わず目を見開いて、喉をごくりと鳴らす。
彼女の肉襞は際限なく俺のモノを締め付け、決して逃がすまいと咥え込んで来る。
もう、限界は目の前だった。
迫りくる射精の予感で身体がぶるりと震えた時、不意に雪ノ下の手が俺の手を握った。そして、
「……好き……」
ほとんどが息に溶け込んでしまう程の微かな声で、彼女は囁いた。
胸がどうしようも無い程の高まりを覚えた、次の瞬間。
「……うぁ……出る……！　……――――――っ」
ごぶっ、どぶっ、と、大量の精が雪ノ下の膣内に吐き出された。
尿道を伝う感覚がはっきり分かる程の濃厚さで、一度脈打つ度に、あまりの快感に意識が持って行かれそうになる。
「うあぁっ、んあっ、あっ、あっ、あっ、あっ……」
雪ノ下は焦点の定まらない目でこちらを見ながら、断続的に幾度となく鳴いた。
やがて彼女の身体はぐにゃりと折れ曲がり、俺の身体にぺたりとへたり込む。
「……あっ、うぁっ……」

絶頂の余韻を引きずって小刻みに震えながら、雪ノ下はゆっくりと唇を重ねて来た。

2.

結局、行為が終わってしばらく経っても小町は現れなかった。どんだけがっつりとイチャイチャシーンを撮りたかったんだあいつ……。

ちゃっちゃと片付けをしながら、疲れ果てた雪ノ下をソファに寝かせ、毛布をかぶせる。

毛布に包まって眠る姿は、遊び疲れて満足気に寝転がっている猫みたいで、どうしようもなく愛おしく思えた。

一段落してソファに腰を掛け、雪ノ下を眺めていると、小町がそろりとリビングに入って来た。

「……おはようございま～す……」

超ひそひそ声で何か言って来た。なに、寝起きドッキリ？

小町は俺たちの様子を見ると、きょとんとした顔になった。

「ありゃ？　雪乃さん寝てるの？　そっかー、疲れてたのかなー……」

わざとらしく語尾を伸ばしながらデジカメと俺との間に立ち、背後に置いてあるデジカメを回収しようとする。演技下手過ぎだろ……。

「デジカメ」

「うえっ!?」

この４文字で十分慌てる材料になるって言うのは面白いもんだ。

「大方、イチャついてる所を撮りたかったんだと思うけど……結構やばいもんが撮れちまったぞ」

言うと、小町が戦慄した表情になる。

「え、まさか……心霊映像とか？」

いや、バカか。バカか。

「なんでだバカ。イチャイチャの向こう側まで行っちまったんだよ」

「へ？　向こう側……って……」

俺の言葉の意味が理解出来たのか、小町の顔が見る間に顔を真っ赤に染まる。

「……ええっ!?　お、お兄ちゃん、雪乃さん、何やっちゃってんの!?」

「しーっ！　ばか、雪ノ下が起きるだろっ」
「あ、ご、ごめん……。いやでも、まさかそんな事になるとは……」
「しかも、デジカメに気付いてからのが過激だぞ」
　小町の目が点になる。見事なリアクションだなぁ……。
「……撮ってたのは小町が悪いけど、まさか二人のプレイに加担してしまうとは……」
　何で遠い目になったの？バカなの？
「プレイとか言うんじゃねえよ。……間違っちゃいねえからまた更に恥ずかしい」
　ほんと恥ずかしい。なあ雪ノ下、お前も何か言ってやれ……寝顔超可愛いな。
　会話の途中で雪ノ下の寝顔をガン見してしまった為、小町が興味を示す。
「雪乃さんの寝顔、そんなに可愛いの？　どれど……れ……～～～超っ、可愛いんですけどーーーっ!?」
　後半はテンション高い割に声をめっちゃ抑えてた。さっきの寝起きドッキリ仕様の挨拶みたいな声の出し方。器用なやつめ……。
　なんて思ってたら、無言でカシャカシャ撮り始めた。
「おい、こら。お前今日パパラッチパパラッチし過ぎだろ」
「良いの良いの。ただの家族写真だから」
「いや、おい、それは、その……」
　ここでごによごによしちゃう俺のヘタレさとごによごによ時の俺の気持ち悪さは天下一品だと思う。
　まあ、止めなくても良いか。
　なんか、動画は残したくなって来た。可愛すぎるんですもの。
　動画はまた、データをパソコンにコピーした後に本人の目の前でデジカメ本体のデータを消せば良いかな……。疑われたら一発でアウトだけど……。
　そんな事を思いつつ、カメラ小僧ならぬカメラ小娘と化している小町を眺めながら、雪ノ下の頭をそっと撫でた。
　……写真に俺の手が映り込んで、余計恥ずかしくなっちゃった

……。

これ、ＳＮＳだったらタグ付けとかされちゃうんでしょ？使った事無いから分からんけど。

使わなかったんだよ？一緒にやる相手がいなかったんじゃないよ？

続く。

（5）

1.

しばらく眠った後、雪ノ下が目を覚ます頃には時計は午後2時を回っていた。

「う……ん……」

ぱちりと目を開け、目をこしょこしょとこする。

その子供っぽい仕草にむらむら、じゃない、どきっとした。

「おう、おはよ」

「おはよ……あ」

さっきまでやっていたことを思い出したのだろうか、急に顔を毛布で覆った。

そして、毛布からちらりと顔を覗かせる。

「……あ、あの……」

何か言いたげなご様子。

頭をがしがしと掻いた後、彼女の頭にぽんと手を置く。

「動画のデータなら、ちゃんと消すように小町に言っておいたから心配すんな」

「……そ、そうな……の……？」

「ああ、ちゃんと見ないで消すようにって言っておいたから」

「……そう……」

ごめん、嘘付きました。罪悪感で死にそう。

……やっぱり、消した方が良いかな……。

逡巡していると、小町がリビングに戻って来た。

「うへへへ……」

……超にやけてる……。

こいつ、さては部屋でさっきの動画を見てやがったな……!?

小町は俺と目が合うと、ものっすごいきらめく笑顔で親指を立て、ばちこーんとウインクをして来た。

……このやろう……。

ちなみに雪ノ下はそれに気付かず、毛布で顔を覆って悶えてた。な

んだろう、さっきのことを思い出してんのかな？もぞもぞしてる。
それを眺めていると、小町がこちらに近付いて来た。
「お兄ちゃん、雪乃さ……お義姉ちゃん、ちょっと外に出てみませんか？」
「わざわざ言い直すんじゃねえよ」
すんげえ恥ずかしいんだけど。
雪ノ下は信じられないくらい小さな声で「だから、それは……」などとこしょこしょと呟いている。
そんな彼女の頭を撫でながら、会話を続ける。
「どっか行きたいとこあんのか？」
「うーんとね、夕食の買い出しに行きがてら、少し遊びたいなーって！
ずっと中に居るだけなのもアレだしねー」
ふむ、なるほど。アリだな。
「ああ、それも良いかもな。雪ノ下はどうだ？」
頭をすりすりと撫でながら問いかける。
「そ、それ自体は良いのだけれど……あ、あまり撫でないでちょうだい……」
鼻から上だけを毛布から覗かせて、ふいと目を逸らした。
……試しに更なる勢いで撫でてみたら、超睨まれた。
2.
3人で外出の準備をして、外へ出――ようとしたのだが。
「……っと？」
ドアの前に小町が立ちふさがり、俺と雪ノ下は前のめりになって止まった。
「……なんだよ？」
小町はふんすっと鼻息を鳴らして、手を両脇に構えて仁王立ちの姿勢をとっている。
や、なんでだよ？
「お兄ちゃん、お義姉ちゃん、今からの外出に、小町は一つのルールを課します！」
「はあ？」

「二人はいついかなる状況においても、手を繋いでおかなければなりません」
……。
二人して、固まった。
結婚式でもんなこと誓わねえぞ。
制限きつすぎない？
「や、なんでそんな恥ずかしいこと……なあ？」
同意を求めるつもりで隣を見たら、ふいと目を逸らされた。え、なんで？　当事者だよね？
「ふっふっふ、お義姉ちゃんは満更でもないようですね……。ちなみに、致し方ない場合を除いてそれを反故にした場合、お二人には罰を課します！」
ずびしっと、指を差された。二人に対して指差したので、なんかすごい間抜けな絵面になってる。
「罰って……なんだよ？」
言うと、小町が指を頬に当てて斜め上を向いた。え、考えてなかったの？　ウソでしょ？
「ん～……まずお義姉ちゃんは、カマクラに対するおさわりを1ヶ月禁止します」
「……な……！」
雪ノ下が戦慄の表情を浮かべた。そんなに？
って言うか、おさわりって言うな。変な感じになっちゃうだろうが。
……まあでも、あんだけがっつり触ってるのを見ると案外そう思えちまうところはあるな……。
「で、俺は？」
言うと、小町は腕を組んで、首を傾げて唸り始めた。眉までひそめている。
「う～～～～ん……お兄ちゃんのは……割とどうでもいいんだけど……」
せめて何でもいいって言えよ。泣いちゃうぞ。

「……強めに蹴る？」
「思いの外手荒だな……」
雑だった。
小町はこれで説明義務は済んだと判断したのか、手をぽんと合わせて、にぱっと微笑んだ。
「さ、では！」
言われて、俺と雪ノ下は一瞬ぐっと動いて、またすぐに固まる。
それを見た小町は、む～と唸った後、今しがたやった行為をなぞるかのように、再び手をぽんと合わせて、にぱっと微笑んだ。
「さ、では！」
「ぐ……」
俺と雪ノ下はまだ固まっている。
すると、小町の表情が見る間に曇って行く。
合わせていた手をだらんと下げ、雪ノ下を見つめた。
「そうか……お義姉ちゃんは、カマクラのことがどうだっていいんですね……？」
えげつねえ。
「！　そ、そんな……こと……ないわ」
雪ノ下は一瞬迷った後、俺をきっと睨んで、手をがしっと掴んだ。
……や、普通手を繋ぐって、もうちょっと情緒のある行為ですよね？
それを見た小町は、少し呆れたように片眉を下げて微笑むと、
「ま、及第点ってとこですかね！　じゃ、行きましょ～！」
と元気良く言い放って、ドアを開けた。
……お前はどう言う立場なんだ。
3.
電車から降りて、しばらく歩く。
「うーん、どこで遊ぼうかなー」
小町が元気良くちょこまかと動き回っているのを、俺と雪ノ下が微笑ましく見守っている。
「ふふっ……小町さんは元気ね」

右手を口元に添えて、くすりと笑う雪ノ下。
外でもすっかりリラックスした彼女の表情を見られるのは、偏に小町のおかげと言えるだろう。
……人前で手を繋いでるのは、死ぬ程恥ずかしいんだけど……。
しばらくきょろきょろしていた小町が、不意に一点を見つめた。
「あれ？　あの人は……」
「ん？　なんだ……よ……」
思わず、息を呑んだ。
小町の視線の先には、天使がいた。
天使は振り返ると、こちらに気付き、満面の笑みを浮かべてこちらに駆け寄って来る。
周りの人や景色が霞んで、スポットライトが当たり、ＢＧＭが流れ出す。
ま、眩しい、眩しいよぉ！
「八幡！」
元気に手を振りながら、戸塚が天使の如きと言うかまんま天使の微笑みを振りまく。
……世界が……光に包まれた……。
「あ、雪ノ下さん、それに小町ちゃんも！」
「戸塚さん、やっはろー！」
「やっはろー」
え、なに、由比ヶ浜がいない状態でもその挨拶すんの？　可愛いから良いけど。
なんなら由比ヶ浜が持ってる著作権を戸塚と小町に譲ってほしいまである。
戸塚はにこにことしながら、俺たちを見回す。
「３人でお出かけ？　良いなー、楽しそうで」
「あ、なら戸塚も一緒に遊ぶか？」
「え、いいの？」
戸塚がぱあっと笑みを浮かべる。
体感気温が急に下がった気がするけど、負けない！　今の俺は無敵

だ。
　手をぐっと握りしめて、出来るだけ爽やかに笑みを浮かべる。
「そしてそのままうちに来て晩御飯を一緒に食べて、なんならその後泊まっていかないか？」
「え、え、え？」
……。
……勢いで、すごいことを言ってしまった……。
　横に目をやると、小町と雪ノ下が、それはそれはごみを見るような目で見ていた。
　人って、こんなに冷たい目が出来るものなんですね！　八幡、知らなかった！
　可愛い戸塚は可愛く戸惑いの表情を見せて、可愛くきょろきょろしてる。形容詞と副詞の乱用。
「あ、それは嬉しいけど、流石に家までなんて……あ」
　ここで、戸塚が俺と雪ノ下の手に気付いた。
　顔を真っ赤にして、あわあわと慌て始める。可愛すぎて抱きしめたい……。
「あ、そ、そう言うこと？　やだなー八幡、先に言ってよ！　じゃ、お邪魔しました！」
　たははと笑って、戸塚は足早にその場を去って行った。
　恐らく、繋いだ手を見ていなかったら、この後少し一緒に遊ぶくらいは出来たのだろうけども。
「と、戸塚……！」
　思わず続けて「ち、違うんだ！　これは誤解なんだ！」などと言いそうになったけど、血を見ることになりそうだったので思い留まった。
　直後、強烈に冷たい声が耳に届く。
「……比企谷くん、仲が良いのは構わないけれど、あまり予定を崩されてもこちらが困るのよ……？」
「は、はい……」
　数十センチ横から発せられる凍てつく冷気が怖すぎて、遠ざかる戸

塚の背中から視線をずらせなかった……。

続く。

（6）

1.

戸塚と別れた後、歩きながら少しぼーっとしてしまった。

……ああ、戸塚……。

……嗚呼、戸塚……。

「ところで」

隣から聞こえた冷たい声に、反射で身体がびくりと跳ねる。

恐る恐る顔をそちらに向けると、信じられない程冷たい瞳で雪ノ下が見つめている。

「な、なんでしょう……？」

「今、あなたと一緒に居るのは誰かしら」

「ゆ、雪ノ下さんと、小町……さんです……」

怯えすぎて妹にまでさん付けしちゃった。小町が引いてるのはきっと気のせいだろう。

「そうね。じゃあ、比企谷くんが今考えるべきは誰のことかしら」

「ゆ、雪ノ下様と、小町……様です……」

ランクを上げちゃった。

小町、憐れむような目で兄を見ないで……。今のは弾みだから……。

「……分かってるのなら良いのよ」

ふいと横を向かれた。

むう、このままではご機嫌斜めなまま次の場所に突入してしまう。

挽回の言葉を伝える為、雪ノ下の手をきゅっと握る。

雪ノ下は少し驚いた顔でこちらを振り向いた。

いざ正面から相対すると、どうにも緊張してしまう。ＴＳＵＮＡＭＩか。言って懐かしくなった。

「ええと、その、なんだ、悪い。ちゃんとお前のこと見てるから、心配しないでくれ」

超くさい。

雪ノ下を見ると、急に慌てたように視線が泳いでいる。

「……あ……そ、そう、まあ、それくらいの誠意を見せてくれるのなら、いくらあなたのような軽薄で浅薄で意志薄弱な男に対してでも、憐憫の情を抱いてあげないでもないわ。これからこのようなことが無いようにきちんと責任感を持つようにしてさえくれれば、私としても安心だし、あの、その……」

……わぁ……。

効果覿面だった。

饒舌な中にも、若干デレが混じってる。

思わず。本当に思わずなんだけど。

ぽそりと。

「……ちょろノ下さん……」

呟いてしまった。

――と。

横で何か、ピシっと言う音が聞こえた気がした。

ん、大虚が登場するのかな？

体感温度が明らかに下がる。

そして、雪ノ下が俺の両手を取ると、目を細めて、口角を上げて、今まで見たことのない素敵な笑顔を向けてきた。

それを横から見ていた小町は「ゆ、雪乃さん……！」ときらきらした目で見つめている。俺の呟きは聞こえなかったのだろう。

でも、正面から見ている俺には分かる。

目が笑ってない。

恐怖で固まっている俺に、声音だけはすごく穏やかな、雪ノ下の言葉が飛んでくる。

「なにか　いった？」

こえぇよ、こえぇ。あと怖い。

今の絶対テロップだったら血文字だぞ。泣いちゃう。

なんで全部平仮名なんだよ。ドラクエなの？

俺の罪：ちょろノ下さんと呟く。

雪ノ下からの罰：冷たい声音。

……逆らったら、多分、死ぬ。

「……何も、言って、無いです……」
多分、俺史上最も震えた声で言った。
「……」
無言で見つめないで。どきどきするから。動悸的な意味で。
「……次は無いわよ」
すんごいこと言われた。
雪ノ下さん、こういう関係だとこんな感じになるんですのん？　指示語が多くなった。
2.
しばらく進むと、小町がある場所に目を留めた。
「あ、ここことかどうでしょう？」
「おー、いいんじゃねえの」
小町が指した場所は、ボーリング場だった。
……ほーん？　なーんかつい最近来たような……。
記憶が曖昧なまま、とてとてと元気に走る小町に俺と雪ノ下は付いて行く。
「あ、卓球場もあるんですねー。むー、ボーリングも良いけど、卓球をのんびりやるお兄ちゃんとお義姉ちゃんも眺めたい……むむむ……」
「あ」
思わず声に出してしまった。
あれじゃん。
ちょっと前に、一色とデートで来たとこじゃん。
なんで忘れてたんだ俺、こんな危険地帯を……！
この二人の前でこんな間抜けな声を出したら、もはや命に関わる……！
そう思って二人をちらりと見ると、きょとんとしながらも明らかに怪しんでいる。
「……お兄ちゃん？」
「……比企谷くん？」
「……や、その……」
どういう意味での怪しさなのか、二人も最初は分かっていなかった

と思う。
だけど、友人関係が皆無の俺が、こんな場所で不意に思い出したように声を上げて、更に今、意味ありげに言い淀んでいる。
迂闊の極みだった。
「誰かと来たの？」
小町がにぱっと笑った。目が笑ってない。
雪ノ下を見ると、彼女もにこっと笑った。目が笑ってない。
下手に誤魔化すと、命に関わるので早めに白状することにした。
「……あー、や、その、前に、一色と、ちょっと」
「行くわよ」
「行きましょう」
食い気味に言われた。
「はい……」
何だろう、思い出の上書き目的なのん？

3.

「雪ノ下、お前って卓球出来んのか？」
俺は小町とやりなれているため、念のため聞いてみた。妹接待プレイなら手慣れたもんだ。
「以前体育でやったことがあるくらいかしら……」
言いながら雪ノ下はコートを脱ぎ、靴を履きかえ始めた。
すらりと伸びた足が、ロングスカートの下から微かに垣間見える。
……何度見ても、見惚れちまうなぁ……。
見つめているのがバレて変態扱いされる前に、急いで目を逸らした。
既に靴を履きかえて暇だったので、ラケットで適当に玉をこんこんとリフティングする。
まあ、雪ノ下のことだ。経験が少なくとも、このプレイ中にどんどん吸収してしまうに違いない。っていうか、下手をすればガチで負けるかも。
小町を見ると、既にデジカメを構えていた。撮る気満々ですやん

……。
「じゃ、やるか」
「ええ、お先にどうぞ」
あらま。サーブを譲られた。
まあ、最初だから、なるたけ打ちやすい球を――と思い、程よい高さに跳ねるように、程よくぽこぺんと打ち込む。
――と。
「――あ？」
多分、同じ台詞で、古今東西のあらゆる噛ませ犬の敵キャラが一瞬で死んでいると思う。
玉が雪ノ下の手前で落ちたと思った瞬間、雪ノ下は既に振り抜いた体勢になっていて。
そして玉は、俺の横をすり抜け、あっと言う間に後方の壁に打ち付けられた。
「……い、1―0……」
数秒遅れて、小町がポイントを宣告する。
ポイントが入ったのは、雪ノ下だった。
何が起きたか分からないと言う顔で雪ノ下に目をやると、出会った頃を思い出すような、心底勝ち誇った顔で俺を見ていた。
「……勝負だから、手加減はしないわよ」
……くおぉ、この負けず嫌いさんはぁ……！
「お前、体育でやったことがあるくらいなんじゃねえのかよ!?」
「ええ、そうよ。何故か途中から誰も相手をしてくれなかったからつまらなかったわ……卓球部の子も、先生も」
「それは相手をしないんじゃなくて相手にならないんだろう……」
どんな吸収力なんだこいつは。スポンジって言葉じゃ足りない。ゲルマニウム？　吸収するのが衝撃になっちゃった。じゃあ衝撃貝？　放出出来るようになっちゃった。
……さて、どうしたものか。このままではこっちが0得点でタコ殴りなんてことになりかねない、というか絶対なる。
「雪ノ下、ルールをまだ決めてなかったよな」

「ん、ああ。そういえばそうね」
「……1セットにつき11点先取で、先に3セット取った方が勝ち、って言うのはどうだ？　んで、俺が勝ったら……もう昼は食ったから、その内おごってもらおう」
「セットの方は分かったわ。でも賭けの方は却下よ。それだと私が勝った場合何も得られないじゃない」
「ぐ……」
バレた。
おっかしーなー、一色には見事にはめられたんだけど……。
「ひょっとして、一色さんにそんなことを言われてはめられたのかしら？」
「うぐ……」
全部見透かされた……。
雪ノ下は小さく肩を竦めると、ラケットをこちらにびっと突き付けた。
「まあ良いわ。負けた方が何かしらおごると言うことで。では、始めましょう」
言って腰を落とす雪ノ下。その構えがやたらと堂に入っているのはなんでなんですかね……
しかし、ストレートでやられなければ勝機はある。
3セット先取にすることで、雪ノ下の少ない体力が切れるのを狙う。
ぜぇはぁ言っている雪ノ下相手なら、きっと勝ち目が見えるはず。
汚いなんて！　言わせない！

続く。

（7）

1．

卓球の真剣勝負の結果。

1ゲーム目　11―0の惨敗。

2ゲーム目　11―2の惨敗。

3ゲーム目　11―1の惨敗。

……。

悲惨にも程があるだろう。惨って漢字を使い過ぎた。

体力切れを狙ってたんだけど、基本的に1ポイントにつき一撃で決められると言うダサっぷり。

雪ノ下さん、スマッシュ鋭すぎません？　フォームが鮮やかすぎて見惚れてるうちに玉が後ろの壁にぶつかってたんですけど。

3ゲームやって俺が勝ち取ったのはたった3ポイントっていう悲しい結果に終わったけど、その3ポイントも闇雲に振り抜いたらたまたま当たったってだけだし……。

あと、そんなまぐれでも俺が点を取ったとき、一回一回鬼のような目で睨まないでくださいますか。死んじゃうよ！

「はぁ、はぁ……これで、私の勝ちね」

微かに息切れしながら、雪ノ下がふふんと笑う。

「もう、何の文句もねえ程の敗北だよ。わーかったよ。帰りに何か買ってやるよ」

頭をがしがしと掻きながら、敗北宣言をする。

雪ノ下を見ると、頬を赤らめて目をむいていた。

「そ、そう……じゃあ、後で、その……」

もじもじとしながら、しきりに外に目を向ける。どうやらお目当てのものがあるようだ。パンさんグッズでも見付けたのかな？

「おう、じゃ、後で行くか」

なんなら今からでも、と言おうとすると。

雪ノ下が少し俯いた。長い睫毛が強調されて、一瞬ながらそれに見惚れてしまう。

「そうしたいのはやまやまなのだけど……」
ああ、そういうことか。
雪ノ下がまだ息切れをしていることに気付く。
そして、それを見ていた小町が、目をヤマピカリャーのごとく光らせる。ヤマピカリャー。
「よーっし！　じゃあお兄ちゃんはそこの壁際のベンチ、ちがう、そこだと外から見えちゃう。そう、そこ。そこで雪乃さんを休ませてあげて！　小町は飲み物を買ってくるから！」
すごい元気よく俺に指示を出したかと思うと、俺に小声で、
「小町、２０分くらいぶらついとくから。今他に誰もいないし、あのベンチなら角度的に外から見えないし、それに人が来てもすぐに音で分かるから、お好きにどうぞ！」
と言い、右目をぱちっとウインクさせた。何この子、超可愛いんですけど。
って言うか。
おい。
何言ってんだこいつ？
「じゃ、そゆことでー」
俺が何か言うよりも早く、小町はぴゅーんと出て行ってしまった。有無を言わさぬその姿勢、感嘆に値します！
しかし雪ノ下を休ませなければならない状況には変わりないので、彼女の肩を抱いて、よたよたと壁際の――外からは絶妙に見えない場所にあるベンチに、二人で向かった。
２．
「大丈夫か？」
右側に座っている雪ノ下に声を掛ける。
雪ノ下の具合を見守る間、つい触りたくなって、間違えた、心配になってずっと彼女の肩を抱いていた。
「ええ、もう大体大丈夫よ。ありがとう」
俺に身を寄せるように体重を預けてふっと微笑んだかと思うと、不意に俺と目が合った。

雪ノ下の頬が、心なしか少し赤い気がする。
肩を抱いてる分、もう顔は目の前にあった。
……わー。
外からの死角になっているというこの状況が、当たり前すぎるくらいに身についている筈の倫理観を容易く揺るがす。
ちょっと見えづらいって言っても、ここ、街中だよ？　数メートル先では何百人何千人って人が行き交ってんだよ？　さっき家でした時とは、似ても似つかぬ状況なんだよ？
そんな当たり前のことの確認を心の内でするも、湧き上がってくる衝動は抑えられない。
「……あ……」
俺が顔を近付けると、雪ノ下は小さな小さな声を漏らしたが、抵抗はしなかった。
ゆっくりと唇と重ねると、柔らかい感触と共に、もっと色々したいという欲求が更に高まる。
正直、この状態になってから歯止めをかける自信は無い。
彼女の右肩に回していた手を後頭部に回すと、ゆっくりと彼女の口内に舌を侵入させた。
「んんっ……あっ、んんっ……」
抵抗しないどころか、あっさりと舌の侵入を受け入れ、歓迎さえしてくる。
入念に彼女の口内を隅々まで舐めつくして、舌を吸い上げ、唾液を流し込む。
雪ノ下の瞳は、気付けばとろんとした虚ろなものになっていた。
もっと、もっとと求め始めて、今度は左手を彼女の胸に伸ばす。
「んんっ!?」
とろんとした彼女の瞳が、一瞬大きく見開き、やがてゆっくり細められ、身体をふるふると震わせる。
彼女の手は、気付けばそれぞれ俺の腰と腿に添えられていた。
「んんっ……あっ、んちゅっ、れるっ、んちゅるっ、れろっ、んむっ、んむぅぅ……」

甘い声を漏らしながら、悩ましげな表情を見せる。
胸を揉む手に力を込め、ぎゅむっと握ると、雪ノ下は途端に口を離した。
「あぅっ……！　あっ、かはっ、ひ、比企谷く……ん……そんな強く……あうぅっ……」
ぎゅむっ、ぎゅむっと、まるで乳搾りでもするかのようにリズム良く揉みしだくと、それに合わせて彼女は面白い程背筋を仰け反らせて声を漏らす。
気付けば雪ノ下は汗をかいていて、上気した顔はより一層の色気を帯びている。
彼女の頭に回していた手を離し、そのままショーツの中に滑り込ませる。
「ひあぁっ!?　や、うそ、そんなとこ今したら、やっ、あうぅっ……！」
ささやかな抵抗を見せるが、もはや身体に力が入らないのか、声で抗うのが精一杯になっている。
中にぷっくりと膨れた突起の感触があるのを確認すると、それを強く摘まむと同時に胸を揉んでいる左手に一際強い力を入れた。
――と。
「んあぁぁぁぁぁぁんむっっ!?」
流石に外にバレてしまいそうな程の喘ぎ声を上げたので、途中で口を塞いだ。危ない危ない……。
「えぶっ、あっ、えぁっ、あむっ、かはっ、あっ、あっ、あっ……」
絶頂に達してぶるぶると身体を戦慄かせている彼女の口内に、更にねちっこく舌を絡ませながら、右手の中指と薬指を膣内に入れて、好き放題に肉襞をかき回す。
指を折り曲げて肉襞をえぐる度に、ぐっぷぐっぷと淫猥な音が聞こえ、その度に雪ノ下は目をしばたたく。
口を離したかと思うと、懇願するような目でこちらを見つめてきた。
「ぷはっ、も、もう、お願い、イってるから……」
何回もイってるから、という声を聞き流して、膣内の指を激しく出

し入れする。
すると、彼女の目が大きく見開かれた。
「ひぐぅっ……！もう、や……あ～～～……っ、あ～～～……っ――――――――」
長い長い鳴き声を断続的に上げて、涙をぽろぽろと零しながら、俺の肩にあごを乗せて、雪ノ下は一際大きな絶頂に達した。
気付けば、彼女の下のベンチはびしょびしょに濡れていた。
なんて迷惑な客なんだ。
……２００％俺のせいだけど。
名残惜しむように、彼女の膣内に入れた２本の指を数回折り曲げると、耳元で「あっ……やっ……」という子どもっぽい嬌声が漏れた。
３．
ぴろりーん♪
と。
聞き覚えがあるというか、ほんの数時間前にも聞いたような電子音が聞こえる。
既に意識が朦朧としている雪ノ下を抱き寄せながら前を向くと、携帯のカメラレンズをこちらに向けているアホ毛が角から覗いていた。
「ねえねえ小町ちゃん」
まるで小学校の女友達のごとくちゃん付けをして小町の名を呼び、左手でちょいちょいと手招きをする。
「んー、なにー？」
罪の意識などひとかけらも無いのか、小町がのうのうと近寄ってくる。
間合いに入ったところで、小町の頬をつねった。
「いひゃいいひゃいいひゃい（痛い痛い痛い）！　はんあおは、はんあおは（なんなのさ、なんなのさ）!?」
右頬をみょーんと伸ばされながら、小町が手をぶんぶんと振って可愛く抗議する。やっていた行為が可愛くなさすぎるので帳消しにはならない。
「お前、いつから居た？　っていうかなんで撮ってるのー？」

言って、つねっていた手をぱっと放す。
「はぁ……痛かった。んー、２０分くらい前からかな？　実際二人が何か始めて夢中になっちゃったら、他の人が来るとまずいかなーと思って、飲み物は2～3分くらいでぱぱっと買って来て、後はここと外の間で見張ってたの。そしたら雪乃さ……お義姉ちゃんのすんごい甘い声が聞こえたから……つい」
てへっと、握り拳で自分の頭をこつんと叩きながら小町がウインクをする。
超可愛いけど超むかつく……。
あと、まだお義姉ちゃんって言うか。死ぬ程恥ずかしいからやめてほしいんだけど。
それにしても、と小町は続ける。
「お兄ちゃん、鬼畜だよねー。お義姉ちゃんがイってからも、全然ペースを落とさないどころかむしろペースを上げて嬲るんだもん。そりゃお義姉ちゃんもメロメロのドロドロになっちゃうよ」
言うと、小町は両手を頬に当てて、涎でも垂らしそうなほど恍惚とした表情で、雪ノ下を見た。
あんまり目をキラキラさせんなよ。話題が話題だから純情さの欠片もねえぞ。
雪ノ下は疲れたのか、俺に肩を寄せてくうくうと寝息を立てていた。何この子。超守りたいんですけど。
「いや、それが撮って良い理由にはならないだろう……」
「小町の提案に乗るお兄ちゃんが悪い！」
「ぐっ……」
ビシッと俺を指差し、正論っぽいけど暴論極まりない言葉を突き付けられた。
これ以上の抵抗は無駄かと思い、はぁっとため息を吐く。
「……雪ノ下にはバレないようにしろよ？　……比企谷家の子供が全滅するぞ」
言うと、小町は肩を抱いて身体をぶるっと震わせて、
「ふおぉ……本当にありそうだから超怖い……！」

と、まるで怖い話でも聞いているかのような、戦慄した表情を浮かべた。
……。
……んー。
っていうか。
なんだこれ。
なんで俺、卓球場で雪ノ下を嬲ってんの？
冷静になろうと思い、試しにもう一度小町の頬をつねったら、流石に怒ったのかつねり返された。
右肩では雪ノ下が寝息を立てていて、正面にいる小町とは頬のつねり合いをしているという、何ともカオスな光景が出来上がっていた。
４．
１０分程経った頃、雪ノ下が目を覚ましたため、３人は外に出た。
彼女が起きたとき、「何か、妙な電子音が聞こえたような……」と言ったため、瞬間的に俺と小町は震え上がり、必死で誤魔化す羽目になった。本気で慌てた。現代の千葉に雪女伝説とか作りたくない。
割と良い時間だったので、そろそろ夕食の買い出しと行こうかという話になり、大型スーパーに向かうことになった。
「……」
楽しそうに並んで歩く小町と雪ノ下の数歩後ろを歩きながら、二人の後ろ姿を見守る。
んー、小町と雪ノ下と買い物ってのは前も行ったことはあるけど、なんか夕食の買い出しって妙に安心するような、妙にむずがゆいような気持がしてならないなー。
なんだか身体が温かくなってきましたよ！
……早いとこ家に帰らないと落ち着かない……。
続く。

（8）

1.

「あ、そうだ。雪乃さん！」

外に出て少しばかり歩いたところで、小町が不意に立ち止まり、雪ノ下の方を向いた。

「なにかしら？」

小首を傾げてきょとんとした雪ノ下に、小町は何やら紙袋らしきものを差し出した。

「雪乃さんに今すぐ必要なものをさっき買っておいたのに、渡すのをすっかり忘れてました！　不覚です。さ、どうぞ！」

「え、え？　あ、ありが……と……」

戸惑いながらもお礼を言い、紙袋の中を覗き込んだ途端に、雪ノ下がぴしっと凍り付いた。

……なんかすげえいやな予感がするんだけど。

「小町、雪ノ下に何を買ったんだ？」

「あ、そ、それは……その……」

小町が答えるより先に、雪ノ下が慌て始めた。どういうこと？

慌てながら真っ赤になっている雪ノ下をよそに、小町はくるりと振り返り、

「んー？　ふっふっふ、替えのショーツと匂いが漏れないように密閉出来る袋を買ってきたのです！」

言って、右手で大きくVサインを作った。

……。

……そりゃあ。

雪ノ下も、固まるわな。

「小町……先を見越し過ぎじゃない？」

なんかもう、色々把握されてるようで怖い。

「ん？　今日家で二人がやってたことを考えたら……お兄ちゃんはケダモノだし、雪乃さんは敏感な上に結構乗り気になると思ったから……あ」

言ったところで、小町がハッとする。
雪ノ下には、デジカメで撮影した動画を小町は見ずにデータを消したと伝えている。
……これ、やばくない？
雪ノ下の顔を見る……までもなく、明らかに体感温度が下がったので、彼女が激おこなのは手にとるように分かった。
それでも一応顔を見ると、表情だけ見るとやたら素敵な笑顔だった。表情だけ見るとね。
「小町さん……」
「はひゃいいっ!?」
素敵な笑顔を顔に貼り付けた雪女さんの口から、恐ろしく威圧感のある声が這い出てきた。
小町は既に涙目になっている。
「動画……見ていないのよね？　私は比企谷くんからそう聞いたのだけれど……」
ぎぎぎと、首がこちらを向く。
あれ、おかしいな。さっきまで結構良い雰囲気……あれ、おかしいな、俺、死ぬのかな？
脳内で、瞬間的に落としどころを探る。選択を誤れば、二人とも死ぬ。
受験の時よりも、生徒会選挙の時よりも、凄まじい速さで頭を回転させて、何とか一つの方法を絞り出した。
そして意を決して雪ノ下に話しかける。
「雪ノ下」
「……なあに？」
わぁ……。
笑顔のままなのに、口調は穏やかなのに、声音だけがただただ冷たいよぉ……！
小町が泣きそう。
無理もない、俺も泣きそう。多分由比ヶ浜や一色でも泣くだろう。
「そ、その話なんだけどな。雪ノ下が起きる前に、俺から小町に大雑把

に話したんだ。ほら、何が撮られてるのか全く分からないままデータを消されても、小町はもやもやするだろ？　だから、最低限の情報だけ教えた……ん……です、よぉ……」

怖くなって、思い切り尻すぼみになった。超ダサい。

でも、それっぽくはある。はず。

さあ、判決は……？

雪ノ下は、「そう……なの」とぽそりと呟いて俯き、じっと動かなくなった。

俺と小町でちらりと目を合わせる。一歩間違えれば、これが兄妹最期のアイコンタクトだ。何その悲しい結末。

兄妹で同時にごくりと息を呑んだとき、雪ノ下が顔を上げた。

なんとも言えない顔をしていらっしゃる。

怒ってはいないけど、すっきりもしておらず、なんだろう、この気持ちは、なんだろう……。

なんかもうひと波乱ありそう……などと思っていたら。

雪ノ下はすいっと俺に近寄ると、俺の胸元にぽすっと顔を埋めた。

「お、おい……？」

戸惑いの声を上げると、雪ノ下は顔を胸に付けたまま、

「そういうことだったら、今回のことは……まあ、よしとするわ。……でも」

つっと、目線を上げた。

雪ノ下の上目遣いなんて、普通に接している時に見れば殺人的に可愛いのだけれど……今の状況で見ると、殺人的に怖い。

恥じらってる表情なのに、なんで目だけそんなに冷たく出来るのん？　視線だけで俺の生命活動が止まりそうなんだけど。

がたがた震えている俺の様子を見て、雪ノ下はふっと笑い、

「敏感とか、結構乗り気とか……そこまで言う必要はなかったわよね？　……今後は気を付けてね」

言うと、別に平手打ちなどをするでもなく、その手を俺の胸にただそっと置いた。

すごい。

人間の力って、すごい。
女の子の細くて綺麗な手が添えられただけなのに、日本刀の切っ先を突き付けられたみたいだよ！　誰か助けて！
「……は、はい、わかりました。誓います。ごめんなさいでひた」
怖すぎて、下手に出過ぎて、敬語を使った上に普通に噛んだ。日本語としてもおかしいし。死にたい。
「……分かればよろしい」
雪ノ下はそう言うと、小町の方にもぎぎぎと向き直り、
「小町さんも、いいわね？」
「は、はいぃ！　イエス、マム！」
小町に軍隊ばりの応答をさせた。いや、したのは小町なんだけど。なんで軍隊風味なのん？
小町の返事を聞くと、雪ノ下はふっとため息を吐いた。
「それじゃあ、二人はここで少し待っていてもらえるかしら」
「え？　どうしたんだ？」
「どうしたんだって……あなた、それは……」
雪ノ下がさっきまでとは一転して、可愛らしくもじもじする。
「……あ、そ、そうか。わるい」
彼女の手には、小町から渡された紙袋が未だに握り締められていた。
「ゆ、雪乃さん、どうぞ行ってらっしゃいませー！」
「え、ええ……」
怒られてびびっている俺と小町、そして、怒ったりはずかしがったりと振る舞いが安定しない雪ノ下。
まったく、凸凹の３人だな。
まあ。
雪ノ下の不安定さの原因は、２００％俺ら兄妹にあるんだけどね！
２．
トイレから雪ノ下が戻る。
どうやら着替えたショーツは既にバッグに入れてあるようだ。バッグに入れてるだけでも相当恥ずかしいのか、ずっと俯いたままで

ある。まあ、そりゃそうだよね……。
さて、今度こそ行くか……と歩き出した所で、ふとある所に目が行き、今度は俺が立ち止まる。
「……あ、そうだ。雪ノ下」
「あなたたち、兄妹で同じことを言ってるわよ……」
雪ノ下のツッコミを聞いて、小町と目を合わせる。
なんか恥ずかしいねー☆って感じでたははと笑った。
……余計恥ずかしくなった……。
俺たちの様子を見て、雪ノ下がこめかみに手を当てながらふーと息を吐く。
「それで……どうしたのかしら？」
「あ、そうそう。あの店、さっきお前が卓球場の方からちらちら見てた店じゃねえのか？」
言って、小洒落た雑貨屋を親指でくいと差した。
「……あ」
視線をそちらに向けると、雪ノ下は小さな声を上げた。まあ、あんな事をした上で少し寝たんだから、そりゃ忘れていてもおかしくはない。
「せっかくすぐ近くまで来たんだし、今から行くか？」
聞くと、彼女は少し逡巡したものの、こちらにちらりと流し目を送って、
「そ、それじゃあ……い、行きましょう？」
言うと、俺のコートの袖をきゅっと握った。
……。
何この子。持ち帰りたい。
まあ、持ち帰るけどね！
……自分で言ってて死にたくなった……。
3.
雑貨屋に入ると、中は様々な商品で雑然としつつも、さり気なくお洒落なインテリアがそこかしこに置いてあって、そこはかとなくセンスを感じた。

……うーん、どう生きていたらこんな内装を作れるものなのん？
一生分かりそうにない。
「雪ノ下、お前のお目当て――」
言葉を言い切るまでもなかった。
彼女は入口付近に置いてあった、パンさんのストラップを凝視していた。目つきこそ怖くは無いけれど、本当にじっと見ている。ほっといたらパンさんに穴が開きそう。
「お、おい……」
戸惑いつつも呼び掛けると、雪ノ下ははっと顔を上げた。
「あ、ご、ごめんなさい。つい……」
どんだけ好きなんだよ、パンさん……。
「それがさっき目に入ったやつなのか？」
「ええ。卓球場に向かう時にこの店の前を通ったでしょう？　そのとき外からこの子がちらりと見えて、それからずっと頭から離れなくて……」
……。
まずは。
こんな雑然と商品が置いてある中から、こんなストラップ程のサイズで一つしか置いていないパンさんを見付け出しただと？　パンさん救助隊になれるぞお前。あるいはダンジョンで古代パンさん発掘とか出来そう。
それと。
「この子」って。離縁した夫に引き取られた子どもにでも会ったのかよ。
あと。
ずっと頭から離れないのかよ。好きを通り越して愛だよそれ。
まあ。
この辺のツッコミを真面目にやっていたらどれだけの時間が取られるか分かったものではないので……さらりと返事をして済ませた。
「うし、じゃあ、これ買うぞ」
「あ……良いの？　本当に？」

「良いんだ。気にすんな」
言って、頭をぽんぽんと撫でる。
店の中とはいえ、これは雪ノ下も恥ずかしいかな、いやがるかな、などと思ったのだが……。
「あ、ありがとう……」
雪ノ下はぽしょりと呟いて、俺の手に自分の手を重ねた。
それからふわりと浮かべた笑みに、心臓が止まるのではないかと思う程どきどきしたのは内緒。
会計を済ませ、雪ノ下にパンさんのストラップを渡す。
「……ありがとう」
恥ずかしそうにぽしょぽしょとお礼を言うのは良いんだけど、目線が１５０％パンさんに向けられてるのが気になりますねー。なんだかそれだとパンさんに「生まれてきてくれてありがとう」って言ってるみたいになってますねー。ただのハッピーバースデーですねーそれ。
タグは予めレジで取っておいてもらったので、雪ノ下は無言で携帯を取り出すと、妙に素早く且つ丁寧な手際でパンさんを携帯にくっつけた。
「……」
……。
……わぁ……。
雪ノ下さん、超楽しそう。
パンさんの小さな頭を両手でこしょこしょと撫で、携帯を持ち上げてパンさんを天に掲げて「おお～……」と小さく感嘆の声を上げ、再び目の前に持ってきてじっと見つめたかと思うとふふっと微笑む。
……えー、なに、この子。
死ぬほど可愛いんですけど。
横を見ると小町が両手で頭を抱えて、
「ふおぉぉぉ……雪乃さんが可愛いよぉぉぉ……！　撮りたいよぉぉぉ……！」
などと言って悶絶していた。

撮りたい気持ちも分からんでもないけど。っていうか超分かるけど。
でも、多分。
さっきのくだりを考えたら、今度撮ったら本当にもう、この街が雪と氷で閉ざされると思うんですよ……。
「雪ノ下、小町、そろそろ行くぞ」
言うと、小町ははっと我に返り、渋々頷く。どんだけ口惜しかったんだお前……。
雪ノ下はまだパンさんを愛でたかったのか、しばらくパンさんと俺に交互に視線をやり、やがて何かを思い付いたようにぱっと目を見開いた。え、何事？
彼女はとてとてとこちらに近寄ると、俺のコートの胸ポケットに携帯の本体を入れた。パンさんのストラップは、ポケットからぺろっと外に出ている。は、初めまして……。
そして、妙に満足気な顔をしながら俺の手をきゅっと握る。
「……何してんだ？」
いや、ほんとによく分かんない。なんで俺に携帯を預けたみたいになってんの？
聞くと、彼女は下を向いて、
「……これなら、どちらも見やすい……し……あ、い、今のは忘れてちょうだい」
慌てたように、ふいっと顔を背けてしまった。
……なにこれ。急に身体が熱くなってきたんですけど……。
小町を見ると、両手で頭を抱えてぶんぶん振っている。
「かわいいよぉぉぉ……！　雪乃さんが可愛すぎて死んじゃうよぉぉぉぉ……！」
悶え苦しんでいた。
……。
まあ、アレだ。
小町が俺の感想を代弁してくれてるのはありがた……なんでもない。

続く。

（9）

1.

買い出しに向かう道中、手を繋いでいる雪ノ下を見ると、いつもの凛然とした歩き方とはおおよそかけ離れたものになっていた。

元々、小町に強制されて手を繋ぎながら家を出た時点で、既に雪ノ下の歩き方は気恥ずかしさ故か多少なり崩れたものになっていたのだけれど――ある程度時間が経ってからは、慣れてきてまた元の歩き方に戻っていたはず。

なのに、その歩き方が再び崩れている。

……なんで？

と、不思議に思っていたのだけれど、割とすぐ答えは出た。

雪ノ下の視線が、まるで落ち着いていないからだ。

と言っても、別に借りてきた猫の如くきょろきょろとあちこちを見回しているとかではない。

視線が、俺の胸元に寄せられているのだ。

正確に言えば、俺のコートの胸ポケットからぺろんと顔を出しているパンさんストラップに。

このストラップは雪ノ下の携帯に付けられているのだけれど、見やすいようにしたかったようでわざわざ俺の胸ポケットに携帯を入れて、パンさんストラップだけ外に出している。

それを、雪ノ下はずーーーーっと、ちらちら見ている。

いやもうこれ、一回パンさん凝視時間とか作らないといけないレベルだと思うんだけど。5時間くらい。

前をあんま見てないから危ねえし。

たまに俺と目が合うと、照れたのか分からんけど目を逸らしがてらまたパンさんを見るし。そんなに？　ねえ、そんなに好きなの？

「……あんま見過ぎてると危ねえぞ」

ぽそっと忠告すると、愛おしげにパンさんを見ていた雪ノ下がはっと目を見開いた。

「あ、ご……ごめんなさい……つい……」

俯いてしまい、言葉の後ろに行くにつれて声がぽしょぽしょと力無さげに小さくなって行く。
……超撫でたい。
「まあ、ある程度見る分には大丈夫だからな……って、おい」
一瞬前を向いてもう一度雪ノ下を見たら、もう既にパンさんのことをがっつり見つめてた。すげえなこの子。俺の話聞いてた？
「え、あ、ああ、そうね。なるべく前方とパンさんを交互に見るように努めるわ」
何故かちょっときりっと言われた。
あれ、俺がアウトオブ眼中なのん？　さっきすげえ恥ずかしいこと言いかけてくれたような……。
うーん。
試しに、胸ポケットから雪ノ下の携帯を引き抜いて、歩きながら空いた手で彼女の目の前にパンさんストラップを垂らしてみた。
あれだ、馬の前に人参を垂らしておくやつ。
さて、どうなることやら。
ぷらぷら。
「あ……」
小さい声を上げると、雪ノ下は目の前でぷらぷらしているパンさんをほけっとした顔で見つめ始めた。
「……」
無言で、パンさんを左右に揺らしてみる。催眠術的な感じで。
「あ……」
目で追ってらっしゃる。
もう少しぷらぷらと揺らしてみる。
ぷらぷら。
「……」
引き続き目で追ってらっしゃる。無言だ。
……。
もう、完っ全にパンさんから視線が離れない。
もう、パンさん作ってる会社に入っちゃいなよ……。

歩いたまま、今度は顔を雪ノ下に近付けて、パンさんをぷらぷら左右に揺らしながら、より近くでその様子を観察することにする。
「……」
さっきと同様、惚けた顔で、どこか子供っぽい顔でぽへーっとパンさんを見つめている。
しかし、今度は何故か一定のリズムで眉をひそめている。なんで？
「パンさんに紛れて……目の腐った人が……」
雪ノ下がぽそりと呟いた。喋り方が心霊映像の解説みたい。
……。
俺が顔を目の前まで近付けてパンさんを揺らしていたため、パンさん→俺→パンさん→俺と交互に見えていたようだ。どうやらそれが不快だったらしい。
……え、なにそれ、ひどくない？
「お前な……」
「なにかしら？　どちらかと言うとあなたに謝ってほしいくらいなのだけど」
すげえ真顔で言われた。
「ああ、私だけじゃなくて、パンさんにもね」
……こいつ……。
鼻と鼻が触れるくらいの距離で、ドヤ顔の雪ノ下をぐぬぬと睨み付けていると、さっきまで横にいた小町がぱっと俺たちの前に出てきた。
「いやー、二人とも本当に仲が良いですねー！　こんな街中も街中で歩きながらそんなに顔を近付けちゃうなんて」
「あ……」
俺と雪ノ下が同時に声を上げた。
歩きながらだからまだマシなのかもしれないが、それでも道行く人の好奇の視線をありったけ集めていた。
「あ、ちなみにー」
顔を赤くしている俺と雪ノ下をよそに、小町がデジカメをちゃっと取り出した。

……んん？
「今のお二人の微笑ましいやりとりもばっちり記録してまーす！」
キラッ☆という効果音がしそうなくらいの眩い笑顔でウインクされた。
いや、超可愛いけど。超可愛いけど！
「小町ちゃん小町ちゃん、何しちゃってるの、ねえ？」
「あー、着きましたねー！」
俺の質問をガン無視して、小町が元気よくとてて駆けて行く。
こいつ（ら）、いい性格してるぜえ……。
2.
着いた先は、ショッピングモールの中に入ってあるスーパーだった。
「そう言えば、まだ何を作るか決めていないのよね……」
雪ノ下がふっと息を吐いた。割と混んでいるので、この中に入って行くのだという絶望も滲み出ている。人ごみが苦手で体力もないって大変だなあ……。
「まあ、ゆっくり品物を見ながら決めるのもありなんじゃないですか？　まずは回ってみましょう！」
小町は元気に言うと、雪ノ下の腕をくいと引っ張った。
「あ、そ、そうね……ちょ、ちょっと、小町さん、引っ張らないで……」
雪ノ下は戸惑いこそしているものの、満更でもない感じだ。色々と捗るか……いや、捗らねえな。相手は妹だぞ、妹。気持ちが複雑すぎる。
二人が先行して歩くのを、俺は後ろでカートを押しながら見守る。食材を選ぶ眼力なんて無いから後ろにいるだけなんだけどね！
3.
「……」
二人が仲良くあーでもないこーでもないと話しながら、仲良く歩いている光景を後ろから眺める。
……なんか、なんだろう、良い。
すごく良い。

「今の時期だとこの辺の野菜が……」
「そうね、これを使うのもありじゃないかしら……」
二人の会話が断片的に聞こえる。
穏やかで素敵な時間だ。
……くうぅ……。
カートを押しながら内心悶えていると、二人が腕を組んで悩み始めた。
「どうした」
聞くと、小町と雪ノ下が同時に振り返る。小町が先に口を開いた。
「うーん……中々決めらんないんだよね。いつもなら食べさせるのはお兄ちゃんだけだから、何にも考えなくても良いんだけど……」
「小町ちゃん小町ちゃん、それわざわざ言わなくてもいいよね？」
流れ弾で傷付いた感が拭えない……。
小町の発言によりそれなりに凹んでいると、雪ノ下がとことことこちらに近付いてきた。
カートを押す俺の真横まで来て、俺の目を見る。
「比企谷くん、何が食べたいかしら？　しょうがないからリクエストさせてあげるわ」
「俺の立場どんだけ低いんだよ……」
まあこの中で言えば、俺一人だけ下なのは目に見えてるんだけど。目に見えてるのかよ。
うーん。
実際、いざこんな風に質問されて、ぱっと答えられる人なんて居るんだろうか。やべぇ、戸塚が「僕、ハンバーグが食べたいな……」とか言ってくれたら鼻血噴きそうだ。ちょっと2年だけ待っててくれって言って海外にハンバーグ作りの修行に赴くまである。
「比企谷くん」
「お、おう」
妄想に浸っていたら、雪ノ下の冷や水のような声を浴びせられた。
「……何を考えていたのかしら？」
「え、や、べ、別に……」

戸塚のことを考えたら浮気になるんだろうか？　戸塚は性別の枠を越えた天使だし、良いのかな。言っちゃっていいのかなあ……どうなんだろ。
「比企谷くん」
「お、おう、おう」
「……何を、考えていたのかしら」
こえぇよ、こえぇ。あと怖い。なんでリピートするのん？
どうも今この状況で戸塚のことを考える＝俺の寿命が削れるという恐ろしい式が成り立つようだ。ここは真剣に考えよう。
……。
……何も浮かばない。
「うーん……」
「……食べたいものはないの？」
困ったように眉をひそめる雪ノ下の問いに、頭をがしがしと掻いてかぶりを振る。
「……うーん、本当に浮かばねえなあ。だからもうアレだ、カレーでいいよ、カレーで」
「安直ね……」
こめかみに手を当てて呆れる仕草をする雪ノ下。
小町もやれやれと肩を竦めている。なんかムカつくな、こいつのリアクション……。
ちょっとこれだけでは言葉が足りないかと思い、少しばかり意見を足す。
つっと雪ノ下に目線を向ける。
「お前が作ってくれるのって、別に今日だけじゃねえんだろ？　ならそんなに難しく考えなくて良いと思うんだ。第一、お前が作ってくれるんならどれも美味いに決まってるしな……ん？」
目を見ながら言うには幾分恥ずかしいので、ぼんやりと品物を眺めながら何気なく喋っていたのだが、ふと雪ノ下を見ると何故か真っ赤になっている。
「あ、そ、そう……それなら今日はカレーにしようかしら。そうね、こ、

これから、何度でも、その、そういう機会は、あ、ある訳……だし……」
……。
……ひょっとして、いや、ひょっとしなくても。
俺、すげえ恥ずかしいこと言った？　うん、言ったな。
雪ノ下のリアクションで、自分の発言の小っ恥ずかしさに気付いた。
やべえ、身体が超熱い、どうしよう。死にたい。
……雪ノ下さん、俯いちゃったよ。
この空気をどうしようかと気まずさ全開で視界をあちらこちらに移していると、ふと袖を引っ張られる感触があった。
「……ん？」
見ると、雪ノ下が袖をきゅっと掴んでいる。
恥ずかしさに縮こまっているのか、いつもよりも一回り小さく見えるその姿が、妙に愛くるしい。どんぐりあげたらかじるかなあ。
「……あの」
か細い声で囁くと、上目遣いでこちらをちらりと見る。
「ひ、比企谷くん……今後、食べたいものがあったら……言ってちょうだい？　その、気が向いたらだけど、私で良ければ、作る、から……」
……。
ワインの栓を抜く道具であるコルク抜きが名前の由来となっている、腕に軸回転を加えたパンチ、コークスクリュー。
そのコークスクリューを、左胸の心臓を狙って打ち込む変則ブローで、元日本チャンピオン伊達英二の必殺技でもある、ハートブレイクショット。
それを、何の備えも無しに打ち込まれたような感覚。
無駄に説明が長くなったけど、要は今の雪ノ下の発言がちょっと可愛すぎて心臓が止まりそうになった。って言うかもう、一回止まった。
通常のハートブレイクショットなら効果は数秒くらいらしいけど、雪ノ下のときめき攻撃による心停止の時間は恐らく5～6秒くらい。何それ本格的に死んじゃう。

「お、おう、分かった。うん、おう、楽ひみにしてる」
神田。間違えた、噛んだ。文字変換の妙だな。何にも掛かってねえけど。
っていうか、声が裏返った。しかも思いっきり。
なにこれ、なにこれ、なんだこれ？
何この可愛い子？　ちょっと訳分かんないんだけど。
「……ん？」
雪ノ下の可愛さに軽くパニックを起こしていたのだが、ふと前方を見ると、小町がぱたりと倒れていた。
普通なら全力でパニックになるくらいの衝撃的な図なんだけれど、この時はさほど驚かなかった。
何故なら、さっきハートブレイクショットの解説を脳内で行っている間に視界の隅で、小町が雪ノ下の台詞を聞いた直後にはらりと倒れるのを見たからだ。なんだこいつ……。
「こ、小町さん!?　どうしたの!?」
「いや、雪ノ下、心配するようなことは無いから大丈夫……」
「え、でも、え……？」
混乱する雪ノ下を宥める。まあ、普通はこんなリアクションになるよね……。
しょうもないとは思いつつ、小町の所へカートをからからと押して行き、小町をちろりと見る。
そんな我が妹の体勢はと言うと。
まず、うつ伏せ。
そして右足は伸びて、左足はある程度曲がっている。
右腕は伸びていて人差し指だけ立てていて、左腕は曲がって床を引っ掻くような手の形をしている。
アレだ、ダイイングメッセージを書いて死んでる人っぽい。
ダイイング小町の誕生である。それただの死にかけの小町だな。
「……小町ちゃん、何してんの？」
訝しむなどと言う表現では到底追い付かない程に全力で訝しみながら、小町の頭上から声を掛ける。

俺の声に反応したのか、ダイイングメッセージ用の右手（多分）がぴくっと動いた。
「がふっ……ゆ、雪乃さん……」
「え、私？　こ、小町さん、私がどうかしたの？」
雪ノ下はまだ混乱している。
小町は全く同じポーズのまま、言葉を続ける。
「ゆ、雪乃さんが……、お兄ちゃんに褒められて顔を真っ赤にした後に、お兄ちゃんに今後も料理を作ってあげる宣言をする様子が可愛すぎて……がふっ」
喋りながら顔をゆっくりと上げ、右手をまるで救いを求めるかのようにこちらに伸ばしたが、途中で力尽きてぱたりと床に伏せた。
……こいつ、馬鹿なのかなあ……。
心底呆れた目で小町を見つつ、脇の下を掴んでゆっくり起こす。ほーら、高い高い―い。突然掴まれて驚いたのか、はたまたコート越しでも脇の下はくすぐったかったのか、「ふにゃー！」と猫みたいな声を出された。猫撫で声とかじゃなくて、本当にただの猫。超可愛い。
小町を高い高いしたついでに、小町の言葉により再び顔が真っ赤になった雪ノ下の頭を撫でて宥めた。すりすり。
……うーん、何だこの変なご一行。
周囲に人がたまたま居なくて良かった……。
まあ、何はともあれ。
カレーを作るという目的が定まったので、その後の買い物は恙なく終える事が出来た。
このくだりの後、雪ノ下の視線が明らかにパンさんから俺にシフトした気がするけど、恥ずかしいので気のせいと言うことにしておく。
続く。

（１０）

1.

買い物兼遊び目的のお出かけを終えて、ようやく帰宅する。

時間的にはまだ夕食を作るにも少し時間があるので、何をしていようかと考えながらスーパーで買ったものを冷蔵庫に入れていると、ふと視界の隅で雪ノ下がふらふらしているのが見えた。

「おい、雪ノ下。大丈夫……じゃねえな」

話しかけると、雪ノ下がこちらを向いて苦笑いを浮かべた。

「ああ、ごめんなさい。……少し、疲れてしまったようだわ」

少し前までであれば、意地を張って大丈夫と言っていたかもしれない。

でも今は、その時と比べて、少しばかりこちらを信用してくれるようになったみたいだ。

そのことが嬉しくて、失礼かなと思いつつもふっと微笑むと、同じように微笑む小町と目が合った。ううむ、流石兄妹。

小町はこれから冷蔵庫に入れようとしている食べ物が入った袋をぺしぺしと叩き、にっこりと微笑む。

「まだ晩御飯作るまで少し時間あるし、これを冷蔵庫に入れるのもそんなに時間はかかんないから、雪乃さんとお兄ちゃんは休んでて良いですよ！　お兄ちゃん、雪乃さんを部屋に連れてってあげて？」

言うと、俺にしか見えない角度でにやりと笑った。こいつ……。

小町のにやり顔は腹立つけど、言ってることは至極まともだ。だから「わかった」とさらりと返事をして、小町の言う通り雪ノ下を俺の部屋に……と思っていたら。

「……ん？」

ふと、異変に気付く。

雪ノ下が、なんか変だ。

今はもうふらついてないんだけど、むしろぴたっと止まってるんだけど、そのぴたり具合が半端ない。なに、パントマイムの人だったの？

……なんで顔真っ赤なのん？
「お、おい、雪ノ下、どうし――」
言葉を最後まで言い切る間も無く、雪ノ下が俺の方に振り返り猛然と捲し立てる。
「べ、別に比企谷くんの部屋に行くから慌てている訳ではないわ。そうよ、私たちの今のこの関係から考えればそんなことは至極当然よね。私の部屋にはあなたは来たことがあるのだし。そうよ、これはごくごく自然な行為・成り行きだわ。だから、その……何も……緊張なんか、してないし……恥ずかしいとか……そんな……」
「……」
……。
やばい。
こいつ。
俺を、殺す気だ。
わざわざ全部事情を言ってくれちゃったよ。しかも何だよその可愛い慌てよう。ちょっと可愛すぎて意味分かんないです。
「……あ」
隣を見たら、小町が首を左手で押さえて仰向けに倒れていた。右手は天に伸ばしている。
なんか、「比企谷死すともぼっちは死せず～」とか言いそう。そりゃそうだろって話だけど。
「くうぅぅ……不意打ちだよぉ……雪乃さんの不意打ちキュートだよ……」
泣きそうな声でなんかバカみたいなこと言ってる。なんだ不意打ちキュートって……。言わんとしてることはすごい分かるけど。俺も死にかけたし。
ダイイング小町（その2）のアホらしい様子にさえ注意が行かない程、雪ノ下は余裕がさっぱり無いようなので、そっと手を引いて部屋に連れて行った。
2.
「ほいよ、まあ座ってくれ」

「……あ、ありがとう……」
クッションの上にぽすりと腰を下ろすと、雪ノ下はものすっごいきょろきょろと部屋を見回し始めた。すんごい見てる。なんか目が子どもみたい。
……あれ、リビングに入ったときはさらっとしか見回さなかったのに……この差はなんなのん？
そして俺をちらちら見たかと思うと、何か迷ってるのか少しばかりもじもじして、ゆっくりと目を閉じる。
数秒後、目を開けて妙にきりっとした顔になったかと思うと、斜め右に座っていた俺の所にクッションを持ってすすすと寄ってきた。
……なんでそんな気合入れたんだお前……。
肩を抱くか迷って手をわきわきさせていると、雪ノ下が無言で俺の肩にこてんと寄りかかった。
や、終始無言てなんなんだお前。登場したての頃の金髪幼女吸血鬼かっつの。
……すげえ良い匂いする。
何度嗅いでも、というとすげえ変態みたいだけど、ていうか変態か、俺。ツッコミによる相次ぐ脱線で1文終えてしまった。
では、改めて。
……何度嗅いでも、この匂いには慣れない。どきどきするのに安らぐし、あと、勃つ。はいサイテー。
力を入れ過ぎないようにそーっと肩を抱くと、小さく「……んっ」と声を漏らした。
……くっそ可愛い。なんだこの生き物。
もう少し匂いを嗅ごうと思って首を傾けると(変態)、雪ノ下は俺の首やあごの下辺りに自分の顔をこしょこしょと甘えるようにこすりつけてきた。なんか猫みたい。
眠そうにしながらも甘えてすりすりしてくるし、胡坐をかいている俺の太腿にごく自然と手を置いてそっちもすりすり撫で回してる。
あ、これあかんやつや。
「雪ノ下」

「……ん……」
右手で雪ノ下の首をくいとこちらに向けて軽く口付けすると、子どものような幼いとろんとした顔で、不思議そうに俺を見つめてきた。
んー、この部屋入ってから何度か僕殺されてますねー。既に残機が底を突きそうですねー。
ちょっと、むらむらがやばい。しかしこれ以上雪ノ下の身体に負担はかけたくない。でも何かしたい。
うーん。
どうしよう。
獣と人の間を心の中で行き来してぐぬぬと唸っていると、
「……あ」
一つの案が浮かんだ。
雪ノ下に向き直り、頭をくしゃくしゃと撫でながら話しかける。ポイントは子供に話しかけるような優しい口調。ただし赤ちゃん言葉を使おうものなら即座に物凄い冷たい目で見られて俺の人生ｉｓｏｖｅｒしちゃうので、あまりやりすぎないように気を付ける。
「雪ノ下、マッサージするか？　ほら、そこ、ベッドあるから、な、うつ伏せになってもらってれば良いから。何なら途中で寝てもらってもいいし。な、どう？」
……。
我ながら、すんごい気持ち悪い言い方をしてしまった。日頃からキモいキモいと言われて耐性が付いている俺でも自己嫌悪してしまう。
多分同じように自己嫌悪に陥る気持ち悪い言葉のケースとしては、「挿れるのは先っぽだけだから！」が挙げられる。本当に先っぽだけちゃんと挿れて済ますやつが居たら、そいつはもはやただの神だぞ。Ｇｏｄ　ｏｆ　亀頭。なんか違うな。
こんな誘い方しても流石にアレかなぁ……と思ったのだが、
「……ん」
目をくしくしとこすり、若干幼い喋り方を残したまま、雪ノ下がこっくりと頷いた。
よし、眠気に任せてうやむやにして押し切る作戦成功！　ちょっと

だけ本気で考えてたから俺本当にゲスい！

3.

「それじゃ、この辺りに寝てくれ」

「え、ええ……」

ここにきて我に返り始めたのか、雪ノ下の挙動がぎこちない。

ふはは……もう手遅れだぜぇ……。

恥ずかしがりはするものの、律儀にベッドにうつ伏せになる。

その際にロングスカートが少し捲れて、白いふくらはぎがちらりと見えただけで、たまらなくなった。

それじゃ、と言って、俺は雪ノ下の上に腰を下ろす。

「んんっ……」

体重を掛けると、雪ノ下が甘い声を漏らした。

俺は、雪ノ下の尻に自分の竿を宛がう位置に座っている。

いくら衣服越しとは言え、この状態でも既に興奮しすぎて頭がどうにかなりそうだ。

「じゃ、触るぞ」

言うと、雪ノ下の身体がぴくっと揺れた。

「……ん」

返事なのかもよく分からない返事をされて、俺は雪ノ下の背中に手を伸ばした。

4.

初めはちゃんとやろうと思い、肩甲骨近くを親指でぐっと押す。初めはって言っちゃった。

まあ、これくらいなら普通のマッサージになるだろう……と思ったら。

「あふっ、あぁぁぁ……っ、んっ、くふぅっ、ふあぁっ……」

……。

……助けてー。

おいバカやめろよ。最初からそんな飛ばした声出すんじゃねえよ。

ベッドのシーツをきゅっと握りしめるんじゃありません！　それは行為の最中にやるやつですよ！　このツッコミもやべえな。

それでもめげずに押し込む場所を徐々に下にずらしていくと、雪ノ下の身体の震えがどんどん増していく。
「あっ、くふっ、はぅんっ、あっ、ひあぁっ、ひんっ、んんんっ……」
もう。
お前は一生マッサージ屋さん禁止。
男にも絶対させないし、女にもなんかさせたくない。
ていうか、こんな反応してんのに全くいやがらないってのも凄いな……。
試しに、腰を浮かせて雪ノ下から離れ、背筋を指でつーっとなぞってみる。
服越しだからあまり意味無さそうだけど、その分少し強めに。
つーっ。
「〜〜〜〜〜〜〜っ！」
背筋を弓なりに反らせて、足がぴんと伸びた。
すかさず今度は下から。ちょっとだけ尻の割れ目からスタート。
つーっ。
「ひあぁぁぁ

こんなことを彼女に言ったところで、怒らせてしまうだけだろうから絶対言わないけれど。
下着も可愛らしい淡いピンクのブラ……と、白メインのショーツ。上下が別だ。
……あ、そうか、着替えたんだもんね……。
なんつう1日を過ごしてんだ俺たちは。まだしばらく続くけど。
美しい下着姿を凝視していると、雪ノ下が恥ずかしそうに身を捩らせた。
「……あ、あんまり、見ないでちょうだい……？　恥ずかしいから……」
言いはするものの、決して俺の目から隠そうとしないその健気さが、俺の心臓を鷲掴みにする。
横になっている雪ノ下の頬に、そって手を添える。
「あ、ああ、悪い。じゃあ、またうつ伏せになってくれ」
言うと、雪ノ下は頬に添えられた俺の手にそっと自分の手を重ねて、とろんとした目をして頷いた。

続く。

（11）

1.

「……う……わ……っ」

下着姿でうつ伏せになった雪ノ下の身体を眺めて、改めて感嘆のため息を吐く。

白磁のような肌がほんのり紅潮し、微かに震えながらベッドのシーツを掴んでいる様子が普段の上品な雰囲気とのギャップを生み、劣情を催す。

「じゃ、乗るぞ……」

興奮で声が震えるのを必死で堪えながら、雪ノ下の背中に呼びかける。

俺の言葉に反応して、雪ノ下の身体がぴくっと揺れ、背中が微かに震えているのが分かる。

逸る気持ちを抑えて、雪ノ下の艶やかな肢体にさっきよりも体重を掛けながら腰を下ろし、竿を雪ノ下の尻に宛がった。

――と。

「あふぅっ……あぅぅぅ……っ」

たったそれだけの行為で、さっきまでのマッサージを受けていた時と同じような反応をして、しかしそれを必死で我慢して表に出さないようにしているのが分かる。

服を1枚脱いだだけで、こうも変わるのか。

改めて、その敏感さに驚き、感動し、高揚を覚えた。

ゆっくりと背中に手を下ろすと、雪ノ下の身体がぴくっと震えた。

背中に触れた指先に、しっとりとした湿り気を感じる。

「あうっ、ひんっ、くふぅ……っ」

じっくりじっくり、第1関節、第2関節と指を着地させていくと、逃げ場を求めて雪ノ下の身体が右へ左へと動く。

試しに、その逃げ場を奪うように、脇腹に両手をやり、同時にさわさわと撫でた。

その瞬間。

「んあぁぁうぅぅ……っ！」
身体を一際激しく跳ね、腰をこちらに突き出してきた。
「うぐ……っ！」
そのはずみで、尻に押し付けていた亀頭がショーツ越しに思い切り秘裂に食い込み、布越しとは言えまるで電気が走ったような感覚を覚えた。
「あ……かは……っ」
雪ノ下は脇腹をくすぐられた上に、身体を逃がしたその先でもろに秘裂に快感を受けてしまったため、全身をびくびくと痙攣させて悶えている。
白い肌に差した赤みが更に増して、そのあまりの色っぽさにごくりと生唾を飲み込んだ。
2.
「……」
たまらず、雪ノ下のブラのホックを外すと、彼女は不思議そうにこちらを横目でちらりと見た。
もう、我慢出来ない。
そして、俺は一瞬だけ立ち上がり、着ていた服を全てさっと脱ぎ捨て、あっと言う間に全裸になった。
雪ノ下はその様子を目撃すると目を丸くしたが、もはや身体に力が入らないのか、手を僅かに開け閉めしただけで、何か言う訳でも動く訳でもなかった。
怖いくらいにいきり立った肉棒を確認すると、雪ノ下の足を跨いで膝立ちになる。
これからすることを思い、意味が無いとは分かりつつも、この言葉を口にした。
「雪ノ下……すまん」
「え……ひあぁぁぁぁっ!?」
ベッドの上で、悲鳴が上がる。
俺は雪ノ下の上にぴったりと覆いかぶさると彼女の背中に抱き付き、脇から手を回して羽交い絞めにすると、ほんのり赤らんだ背中と

首筋に吸い付いた。
舌先を固めてつつつと縦横無尽に舐め回し、舌の前面を万遍なく使ってべろりと舐め上げ、所有権を主張するかのように首筋に強く強く吸い付く。
「あ……かはっ、んぐぅっ、ひぐっ、ひぃんっ、あひぁっ……あぅぅぅ……あぅぅぅ……」
涙声で身を捩らせ、足をばたつかせるが、その足さえも器用に絡め取って、全く身動きが取れない状態にする。
今、雪ノ下は、身体のどの部位を、どの方向に、どれくらいの強さで動かそうとも、抵抗としての役目は一切果たされない。
「んぁぁぁ……あぅぅぅ……ひっ、ひっく、ひぃん、ひっく、あぅ、あぅぅ……」
抵抗しても、しなくても、俺からの責めは一切止まない。
いつしか彼女の声は諦め混じりの嗚咽に変わっていた。
ひどいことをしているというのは、十分に分かっている。
それでも、まだ、止められない。
俺は舌先を雪ノ下の背中から離し、彼女の耳元へと顔を寄せた。
「雪ノ下……脱がすぞ。いいな？」
「……っ」
彼女は無言のまま俺を見つめ、ゆっくりと唇を近付けた。
うつ伏せのままの彼女と、ささやかながら口付けを交わす。
俺はこの行為を、さっきの言葉に対する肯定と捉えて、まず、彼女の鎖骨の辺りに手を滑り込ませ、既にホックを外しているブラを抜き取った。
そして起き上がり、彼女のショーツに手をかける。
白のショーツの筈だが、信じられない程にぐしょぐしょに濡れていて、もはや元の色を正確に思い出せない程になっている。
ショーツの、腰骨の横の部分に手を掛けて、ゆっくりとずり下ろして行く。
「う……わ……」
むわっと湯気が立ち込めそうな程の熱気が霧散して、秘裂とショー

ツとの間に糸が伸びる。
甘酸っぱくて扇情的な匂いが立ち込めて、思わず目をむいた。
ゆっくりと慎重にショーツを脱がすと、改めて、秘裂の周りがぐちょぐちょのびしょびしょになっていることが分かる。
正直、今のこの状態なら。
この、猛り狂った肉棒をいきなり秘裂に押し付けて、雪ノ下を深く深く貫いたとしても、彼女は快感しか感じないだろう。
それでも、もう少しだけ、事に及ぶ前に楽しみたかった。
徐に尻を掴むと、雪ノ下の身体がびくりと跳ね上がる。
小さな呻き声を漏らしている彼女に構わず、両手の人差し指を尻の割れ目に宛がい、秘裂目がけて進んで行く。
何が起きようとしているのか分かったのだろう。
「……っ!? ……比企谷く……っ！」
微かな抵抗の意志を示してくる。
が、それだけだ。
身体の震えが大きくなっただけで、別段何かしてくる訳ではない。
――抵抗、しないんだな。
雪ノ下のこういった場面での従順性は、本当にたまらない。
俺はそれに思う存分甘えさせてもらって、そのまま秘裂に両手の人差し指を挿入した。
3.
つぷっ、と。
雪ノ下の秘裂に、それぞれ外側に指が曲がる向きで両手の人差し指を挿入する。
押し広げるように、最初から指を曲げながら膣の奥にねじ込んでいく。
――と。
「あっ、うぁっ、んぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
叫び声とも喘ぎ声ともつかないような声を上げ、雪ノ下がこちらを振り向き、いやいやと首を振った。耐え切れない程の快感だったんだろう。

その声と挙動で余計にそそり、俺は指を秘裂から抜き、雪ノ下の腰を掴んで尻を持ち上げた。
そこに右手の中指と薬指をねじ込み、中をぐじゅぐじゅとかき回す。
「～～～～～～っ！　～～～～～～～っ！　～～～～～～～っ！」
両脚の付け根を俺の左腕にぐるりと囲まれて押さえ込まれ、どこにも快感を逃がすことが出来なくなった雪ノ下の脳へと、絶え間ない巨大な快感の波が幾度と無く叩き付けられる。
片手2本指での愛撫は、時間にすれば恐らく1分にも及ばないくらいのものだった。
それでも、雪ノ下の秘裂から大量に漏れ出た愛液やその他の液は、ショーツを何枚ダメにしても足りないぐらいに溢れ出ていた。
まるでいじめのような愛撫を終えて雪ノ下を解放すると、手の甲を下にして腕を伸ばしたまま、ぱたりとうつ伏せになった。
その身体は、未だに断続的に痙攣していて、時折「あ……う……」と微かな呻き声を上げている。
こんなにめちゃくちゃにしているのに。
まだ、満たされない。
雪ノ下の身体の中を、俺で満たしたい。
征服欲がこれでもかと言う程に掻き立てられて、たまらず胸を押さえ付けた。
そうでもしないと、おかしくなってしまいそうだった。
再び雪ノ下の上に覆いかぶさると、目を半開きにして意識も定かでない雪ノ下を見つめた。
「挿れるぞ……いいな？」
確認しながら、尻の割れ目に肉棒を差し込んで、秘裂に亀頭を宛がう。
「……」
俺をきちんと認識しているのかも定かでない雪ノ下の虚ろな目が微かに開き、唇が微かに動く。
何を求めているのかを察して、唇を寄せると、弱々しい仕草で舌を

出してきた。
「んっ、んちゅるっ、れろっ……んはぁっ、はむっ、んんっ、んむぅ……っ」
唇を重ね、出されていた舌を咥え込んでくちゅくちゅと舐め回し、唾液を送り込む。
雪ノ下は横を向いたまま送り込まれた唾液をこくりと飲み込むと、ゆっくりと目を細めた。
その表情がひどく妖艶に思えて、自分の腰がぶるりと震えるのが分かった。
そしてその後、雪ノ下は自分の尻をほんの僅かに後ろへ突き出し、秘裂を亀頭にぴとぴとと押し当てる。
目を細めながら行われるその行動があまりにも淫靡で、身体中が滾ってくる。
これはもう、完全なるオーケーサインだ。
「行くぞ……」
俺は小さく呟くと、これから雪ノ下がどれだけの声を上げて悶え狂おうと、子宮の奥にありったけの精を注ぎ込むまで決して腰を振るのを止めないと心の中で誓って、しっかり狙いを定めて腰を打ち付けた――。

続く。

（１２）

うつ伏せになっている雪ノ下の足の根本に腰を下ろし、尻肉を掴んで狙いを定める。

身体中をぞくぞくとした感覚が絶え間なく流れるのを感じながら、亀頭を秘裂に宛がってずぶりと挿れた瞬間。

「あぅぅぅぅぅぅぅ……っ！」

雪ノ下が電流を流されたかのような声を上げ、背筋を反り返らせて足をばたつかせた。

亀頭を咥え込んだ膣は、残りの竿の部分をぐぷぐぷと飲み込み、俺の肉棒はあっと言う間に尻肉の間に埋まった。

「う……あ……すっ、げ……」

肉棒を包み込む肉襞の心地良さと、ほんのわずかに動くだけでも可愛らしい反応をしてくれる雪ノ下に抱く愛おしさで、頭がパンクしそうになる。

「あっ、あくぅっ、ひ、比企谷くん、これ、やっぱり、だめ、私、おかしくなっちゃ……うぅぅぅ……んあぁっ!?」

雪ノ下の言葉を最後まで聞くことなく、俺は彼女の身体に斜め方向に強く体重をかけた。

「あっ　…かはっ……」

体重をかけられる苦しみと、それにより更に深く挿入されることで増幅される快感とで、雪ノ下はあっという間に黙り込んだ。

振り向いて懇願する様はとても可愛らしいのだけれど、こんな幸せな時間を放棄するなんて、互いにとって多大なる損失でしかない。

だから俺は、やめない。

むしろ、せっかくだから、もうちょっとイジメてみるのも楽しいかもしれない。

……決して、普段散々罵倒されてるからその憂さを晴らそうなんて狭量な真似をするつもりでは一切無い。ほんとだよ！

「よ……っと」

「あう……っ？」

雪ノ下の身体に上から覆いかぶさり、肌と肌を密着させる。
そして雪ノ下の耳元に口を寄せ、今から俺が言う台詞に彼女がどんな反応をしてくれるか考えて、たまらずにやけそうになる。気持ち悪いから絶対やらないけど。
「……雪ノ下、お前、本当にやめたいと思ってるのか？」
「……え」
意地悪に問うと、雪ノ下が戸惑いの声を上げた。
「今言った通りだよ。俺は、お前が実はそんなにいやがってないんじゃないかと思ったけど、どうなんだ？」
「あ……う……それは……」
視線を泳がせる雪ノ下の表情が、どうにも艶っぽくていちいちそそる。
雪ノ下の動揺っぷりを楽しみながら、今現在肉棒に加えられている圧を確認する。
「……もし本当にだめだったら、こんな風に俺のモノをきゅうきゅうと締め付けたりしないよな？」
実際、油断するとちょっと出ちゃいそう。
「……っ。そ、そんなこと……っ！」
雪ノ下が目をむいて言った瞬間、肉襞がぐにゅりと肉棒を締め付けた。
雪ノ下は一切動いていないのに、だ。
「……っ。おいおい、じゃあ今の締め付けはなんだよ？」
「あ、う……ち、ちがうの、今のは、ちが……ひん……っ」
雪ノ下が慌てれば慌てる程、肉襞はまるで別の生き物であるかのようにぐねぐねと締め付けてくる。
反応があまりにも可愛らしくそそったので、もう少し――と思い。
ずるり、と一度腰を大きく引くと、
「おぁぁぁぁ……っ」
雪ノ下の獣じみた声が漏れ出た。
そして、ぱぁん！　と強烈な音がする程に強く打ち付けると、
「うぁぁぁぁっ！」

まるで跳ね馬のように、身体全体を大きくびくつかせた。
「ふーっ、ふーっ、ふーっ、……うぅっ、あっ、くぅ……っ」
亀頭を子宮の入り口にぐいぐいと押し当てて固定すると、雪ノ下がもどかしそうに腰を捩らせる。
……もう少し、いってみるか。
「雪ノ下、本当にいやか？　いやなら今すぐ抜くぞ？　ちゃんと認めたら程ほどにやって、お互い程ほどにイケるようにする。だけど、どっちとも言わなかったら……」
余韻を残すように言うと、腰を引いて再び強く打ち付けた。
「あくぁぁぁぁぁっ!?」
「――気絶したって止めない」
耳元で囁くと、膣肉が再びきゅっと締め付けてきた。
「あぅっ、あっ、かはっ、そ、そんなの、答え、られる訳……いぎぃっ!?　あぐぅっ！」
まるでスパンキングでもしているかのような感覚に陥りながら、雪ノ下が回答を躊躇する素振りを見せる度に腰を強く打ち付ける。
「あぅっ、あひっ！　あっ、あうっ、やっ、ひあぁっ！　あうぅ、うぅ……あんっ！」
軽くではあるが、何度か絶頂しているようだった。
「……さあ、雪ノ下。やめたいのか、したいのか。どっちだ？　答えるんだ、今すぐ」
最後通牒の如き強い口調で問うと、雪ノ下は泣きそうになりながら俯いた。
「……です」
「……ん？」
消え入りそうな声で呟いたため、なんと言ったか分からなかった。なに、ＤＥＡＴＨ？　死んでほしいの？　やばい、雪ノ下への暴挙を鑑みるに、従うしかないじゃん。
「……たい、です」
「……もっと、はっきり」
言って、腰をぐりぐりと押し付けると、「あおぉぉぉ……」と蕩けそ

うな声を上げた。
数秒の間を置いて、雪ノ下がゆっくり顔を上げて、すぐ横の俺の顔を見やる。
口元が震えて、今にも泣き出しそうな表情をしながら、それでも懸命に言葉を紡ぐ。
「……したい、です。してほしい、です。お願い……比企谷くん……」
「……っ」
雪ノ下が俺に対して発した、プライドをかなぐり捨てた懇願によって。
俺の中に残っていた理性の最後の砦が、音もなく崩れた。
「……わかった……っ！」
言って、雪ノ下の耳元から顔を離すと、両手を彼女の胸の前に滑り込ませ、口を背中に付けて、腰を目一杯引いた。
「あ、え、え、なに、程ほどって……」
雪ノ下は異状に気付いたのだろう、明らかに不安がっている。
「……悪い、ちょっと、もう、無理だ」
――そう言って。
ぱあんっ！
腰を強く打ち付けると同時に、胸の突起を強く摘まんだ。
「んむぅぅぅぅぅぅっ！」
雪ノ下は声が抑えられないと思ったのか、瞬間的に枕を引き寄せて顔をうずめた。
身体は激しく戦慄いていて、膣からは愛液がとぷとぷと流れ出てくる。
「行くぞ……っ」
そこから、再び腰を引いて激しく打ち付けるピストンを連続で行い、突起を強く摘まんだりしこり上げたりと様々な刺激を加え、尖らせた舌先で背中を舐め回す。
ぐぱんっ、ぐぱんっ、じゅぷっ、ずぐぐっ、きゅっ、れろれろっ、じゅぱんっ、ぐぱんっ……。
「んぶぅぅぅっ！　んぐっ、んぶっ！　んんんんっ、んんんん……っ

！」
枕に顔を埋めたまま、雪ノ下は足をばたつかせて何度も激しく痙攣している。
……これだけ感じてくれてるんだから、声を聞けないのは惜しいな。
そう思い、
「よっ……と」
「あっ……!?」
俺は雪ノ下が顔をうずめていた枕をひょいと掴み、手の届かない位置にぽいと投げた。
そして雪ノ下の腕を絡め取ると、気を付けをさせるように腕を真っ直ぐに身体に密着させ、その腕を固定するように抱きしめながら、再び突起を手で摘まんだ。
「うぁぁっ!? やっ、声、抑えられな……あくぅっ！」
雁字搦めにされて一切の抵抗が出来なくなった雪ノ下が、悲壮な声を上げる。
「そうだな。……いくらでも、声、上げてくれ」
言って、これまで以上の速さと強さで腰を打ち付ける。
ぱん、ぱんっ、ぱんっ、ぐっちゅっ、ぐっちゅ、ぐじゅっ、ぐぱんっ……。
「あぁぁぁぁっ！ あっ、あぁっ、あぁぁぁぁ……あっ、あっ、あっ！
……あ～、あ～、あ～……」
もはや何度突いたか見当もつかない程に嬲った頃、雪ノ下はもはや喘ぎ声ですら同じような声しか上げなくなっていた。
「あっ、あっ、あ……あっ、あ～っ、あ～っ……」
「……」
顔は上げているが、もはや絶頂に達し過ぎてハイになっているのかもしれない。
自分でやっておいて難だけど、本当にすこぶる難だけど、少し不安になる。
「お～い、大丈夫……か……っ!?」

覗き込むように雪ノ下の顔を見た瞬間、固まった。
――雪ノ下は、大粒の涙を流し、涎を垂らし、普段の上品な様からは想像もつかない程淫らな状態になりながら――。
――笑っていた。
そう、笑っていた。
嬉しそうに、楽しそうに、笑っていた。
まるで、今この瞬間が、至高の幸せを味わえている時間であるかのように。
「……ゆ、雪ノ下？」
流石に戸惑い、動揺を隠しきれないまま雪ノ下の顔を覗き込むと、
「……あ……う、あ……」
ゆっくり俺の顔を見て、僅かに目を細める。
――まだ、急に我に返って恥ずかしがってくれた方が、俺の為になったかもしれない。
しかし、そんな俺の希望とは裏腹に、雪ノ下は。
「……んっ、んっ、んん……っ」
「おっ……ど、どうした？」
雪ノ下は微かに身体を震わせながら、腰をくいくいと上げてきた。
その行為が、何を意味するか分からぬままに、戸惑って腕を離す。
すると、雪ノ下は解放された腕をベッドに付き、ゆっくりと起き上がろうとした。
俺は慌てて上半身を起こすと、雪ノ下と繋がったまま、膝立ちの体勢になる。
最終的に雪ノ下は四つん這いになった。
同じバックと呼ばれる体位でも、より一般的と言える形になっていた。
「……う……お……」
汗できらめく背中と、様々な匂いが混じってひどくいやらしい匂いを放つ下腹部の結合部分が丸見えになる。
思わず、息を呑んだ。
「あ……う……」

雪ノ下は猫のように背中をしならせ、腰を巧みにくねらせてまるで俺に交尾をねだるかのような仕草を見せる。
いや、「かのような」なんて言い方はしたけれど、間違いなくねだっているのだろう。
雪ノ下がゆっくり振り向いて、再び目を細める。
そのあまりの妖艶さに、心が打ち震えた。
俺は雪ノ下の腰を掴み、後はもう、どろどろになるまでやってしまおうと思いながら、腰を打ち付けた。

× × ×

「あっ！　うぐっ、あがっ、ふあっ！　ひぎっ、あぇっ、あっ、あっ、あぁ……っ！」
さっきまでよりも獣に近付いたような雪ノ下の喘ぎ声が、俺の部屋に響き渡る。
一突きするごとに背筋をしならせ、腰をかくかくと動かしてくる。
快楽が許容範囲を越えてまともな思考が出来なくなっているのか、腰を動かすリズムはひどく不安定で、俺が打ち付けるときにちゃんと腰を後ろに押し出すときもあれば、まるで避けるかのように引いてしまって俺のピストンが不発に終わったりした。
「そうじゃねえよ、こう……だよ！」
言って、雪ノ下の腰を掴む力を強くして彼女の動きを止め、俺のピストンに合わせた動きをさせる。
ぐぱんっ、ぐぱんっ、じゅぷっ、じゅぶっ、ぐぱんっ！
「ひあぁぁっ、あっ、はぅっ、あ～っ、いぎっ！　あぉぉ……んあぁっ！」
雪ノ下は、もはや完全に俺の為すがままになっていた。
肉襞は際限なく肉棒を締め付けてきて、限界が近かった。
「雪ノ下、俺、もう……っ」
息を荒げながら告げると、雪ノ下は喘ぎ声を上げ続けながらも振り向いて、
「……き……て」
消え入りそうな声で囁くと、目を細めて、にこりと微笑んだ。

「……っ雪ノ下！」
たまらなくなって、ピストンのペースを更に上げる。
「あっ！　あんっ、あっ、あふっ！　あぇっ、あっ、あっ！　あぁっ、あっ！　あっ！　あっ！」
「雪ノ下、出る、出るぞ……出る、出る、出る……っ！」
「あぅっ、あっ、かはっ、ひぐっ、ああっ、あっ……あ」
びくんっと、雪ノ下の身体が一際大きく跳ねた。
それと同時に、肉棒がちぎれんばかりに強く、膣が収縮する。
「雪ノ下……っ！」
びゅるるっ、ごぶっ、どぶどぶどぶっ、びゅううっ！
身体の奥底から迸った白濁液が、雪ノ下の子宮口を強烈に叩く。
「あっ、ひぁっ、あああああああっ！」
俺の射精と共に、雪ノ下が一層大きな絶頂に達した。
「はーっ、はーっ、はーっ……」
「ふーっ、かはっ、はひっ、あーっ、あっ、あっ、あっ……」
肉棒から精液を残らず搾り取ろうと、膣肉はまだ収縮を止めようとしない。
やがて、その収縮が収まると、２人とも力尽きてベッドに突っ伏した。
獣モードが解除されると、途端に冷静になる。男ってみんなそんな感じだよね、きっと。
……シーツ替えねえと。あと、これ、もうご飯の前に風呂入った方が良いのかな――などと、この後の事を考えていると。
こんこん。
「……!?」
不意に部屋をノックする音に、激しく動揺する。
雪ノ下もさぞびっくり……と思ったら、今の音が全然耳に入っていなかったっぽい。もうそれどころじゃないみたいです。そりゃそうですよね、ごめんなさい。
「お兄ちゃーん、今だいじょうぶー？」
「あ、えーっと、その……」

や、全然大丈夫じゃない。俺まだ挿れっぱなしだし。ばっちり２人で重なってるし。
笑えるくらいにテンパっていると（笑えない）、小町が言葉を続けた。
「あー、いいよいいよ、そのままで」
「……」
……。
そのままでってなに!?　何を察してるの!?　ねえ!?
「もうちょっと休んだら、お風呂入ってきなよー。……２人で」
「は？」
素っ頓狂な甲高い声が、ぷしゅっと口の端から漏れ出た。
「いや、『は？』じゃなくて。お湯沸しといたから！　あ、雪乃さんには『下着は洗濯するから出しておいてください』って伝えておいて！
雪乃さんと一緒にご飯作りたいから、小町はしばらくリビングでだらだらしてるねー！　急がなくて良いからね。ゆっくり２人で楽しんで！　そんじゃ、また後でー」
「お、おい……」
俺が間抜けな声を掛けるのも気にせず、小町はぱたぱたと足音を立てて去っていった。
姿が見える状態だったら、去り際に絶対超可愛い敬礼とかやっていきそうな明るさだったな。あいつそういうとこほんとあざとかわい可愛い。２回言っちゃった。
……ツッコミどころ、多すぎない？
……ていうか、当たり前っちゃ辺り前なんだけど、雪ノ下さん、お風呂後はノーブラノーパン……？
あ、いや、もう、それ、色々と。
……うん、楽しみだ。楽しみって言っちゃった。
ようやく落ち着きを取り戻した所で、まずは肉棒を膣から引き抜く。引き抜くの超遅いな俺。
「……うくっ」
栓が無くなった膣口からは精液がこぷこぷっと溢れ出てきて、その

扇情的な光景に再び蹂躙したくなる欲求が湧いてきたが、必死で掻き消した。
そして、うつ伏せでは大変かなと思ったので、雪ノ下を仰向けにころりと転がす。
「……」
雪ノ下は疲れたのか、小さく寝息を立てていた。
……うーん、やり過ぎた。今さらにも程があるけど。
雪ノ下は遊びに満足して眠る猫のように可愛らしい寝顔をしていた。
なんだこいつ、超可愛いな。
取り敢えず撫でるか。
なでなで。
髪の毛、汗かいててもすげえ良い匂いするんだけど。どういうこと？
……。
……和む。
……もうちょっと、良いよね？
なでなで。
なんだよこの寝顔、マジで待受にして後で消されようかな。消されるまでがセットなのかよ。
……。
うん、超和む。
……もうちょいなでなで。
「……んっ、んんっ……」
「ぐはぁっ」
甘えるような声を出しながらの寝返りでノックアウト。
あぶねえ、危うく吐血するところだったぜ……。　※原因：可愛い雪ノ下。
……。
はい、切り替え。
まずは起こさないようにタオルで汗を拭いて、毛布を掛けて――

と。
「……」
誰も見ていないし、雪ノ下本人も寝てるし――なんて思って。
「……ちゅっ」
雪ノ下の可愛らしい小ぶりな唇に、そっとキスをした。
さてさて、片付けの続きをしなければ。
「……」
ふと、片付けの動きを止める。
誰も見ていないとは思ったけれど、俺が自分でやった行為を認識している以上。
「……うぐおおお……」
……超恥ずかしかった。
続く。

（１３）

疲れて寝ている雪ノ下の身体をさっと拭いて、流石に服を着せるのは難しいと判断して、裸のままでその上に毛布を被せる。

暖房は効いているので、後は様子を見て適宜掛けるものの増減を行えば良いな、と考えた。

「……」

ベッド際に座り、すやすやと安らかに寝息を立てている雪ノ下を眺める。

ちなみに、雪ノ下が裸なのに俺は服を着ているというのもなんだか気が引けるなあと思ったので、俺も全裸だったりする。

いや。

なんでだよ。

とか、心の中でセルフツッコミを入れつつ、雪ノ下の身体を拭いていた。俺マジでクール。

雪ノ下は今現在、横向きで俺の方を向いて寝ている。

両手を顔の前で軽く握っていて、身体も屈めているため、全体的にかなりコンパクトになっている。

……やべえ、猫鍋というか雪鍋が出来そう。

……雪鍋ってググったらクックパッドでめっちゃ引っかかったからこの名称は却下せねば。

「ん……」

時折漏らす声は、今は色っぽいというよりはどこかあどけなくて、守ってあげたくなるような声だ。

……こいつの普段の振る舞いからは、考えられねえなあ。

まあ、最近（特に今日とか）の雰囲気を見る限り、少し前程頑なな感じではなくなったと思えるけれど。

まあ。

今は、取り敢えず。

可愛いので、撫でるよね。

そっと頭に手をやる。

なでなで。
「んっ……」
「……」
……。
頭に置いていた手を、つつっと首筋に移動させる。
なでなで。
「んっ……あっ……」
「……っ」
……。
既にちょっと鼻血出そう。
身を乗り出して、膝立ちで雪ノ下に向き合ってもう少し悪戯してみることにする。
もちろん、睡眠の妨害をしてはいけないので、適度なところでやめるつもりだ。それならやるなよとか言わないで。
ちなみに俺のモノは既にガン立ち。ちょっと元気すぎない？
今度は、片手を雪ノ下の背中に、もう一方の手の指を雪ノ下の口の中に入れる。
すると、雪ノ下がぴくぴくっと身体を震わせて、
「んむっ……んんっ……ふうう……んっ、んっ、んんっ……」
「……わあお」
思わず、声に出してしまった。
なんつう声を出すんだ、雪ノ下さん。しかも俺の指を現在進行形で舐めてらっしゃる。
もう少しだけ、もう少しだけ……。
雪ノ下が身体を屈めているため、背中をなぞっている手がお尻に届く事に気付く。
するりと手を移動させ、お尻の表面をすりすりと撫で回すと同時に、口に入れる指を2本に増やした。
「んんん……っ？　んむっ、んんっ、んんん……っ」
眠ったままではありながらも、反応は更に大きくなり、指を咥える口の動きに積極性が増した。

……やべえ、寝ててもエロいのかよ。
「――っと、流石に……」
これ以上はまずい、と思い、指を口内から引き抜く。
すると。
「……んっ、あっ、あっ……」
夢の中で、何かの食べ物をお預けでもくらっているかのように、口を物欲しげにぱくぱくとさせた。
「……う……わ……」
その様が、あまりにも扇情的で。
恐らく夢自体は極めて無邪気なものを見ているのだろう。だけれど、それでも、この顔は、まずい。
目を閉じたまま、切なげに口を動かし、時折舌さえちろりと出す。
真下を見やると、さっきまでよりも肉棒がぎんぎんになっていた。
「うぐ……」
入れたい。
この可愛らしい口の中に、いれたい、入れたい、挿れたい――！
でも流石にそんな真似は――と、雪ノ下の目の前で逡巡していると。
「――んっ……」
「あ」
雪ノ下さん、起きなすった☆
「……」
「……」
両者、沈黙。
多分、雪ノ下の脳内では高速で今の状況を整理しているんだろう。
寝ている雪ノ下と、全裸で目の前にいる俺。
……おうふ。やべえ。
下手したら殺されるんじゃなかろうか。
激しい危機感を抱いていると、雪ノ下が予想外の行動に出た。
「――っ、お、おい……？」
雪ノ下はそろりと手を伸ばし、俺の肉棒に手を添えた。

まだどこか寝ぼけた表情のまま、両手で竿をさわさわと撫でる。
「あっ……かっ……」
――え、なんで……？
混乱して、それでいて異様な興奮状態に陥っていた。
俺の様子をじっと見ていた雪ノ下が、亀頭にふーっと息を吹きかける。
「うあ……っ！」
たまらず身体を折り曲げると、
「……比企谷くん……苦しい、の？」
「……え」
雪ノ下は、怒張しきった俺の肉棒を触りながら、そんな疑問を口にした。
その顔に、寝こみを襲いかけていた（ていうかもはや襲ってた）俺を責める色はなく、純粋に、俺のことを気遣ってくれているようだった。
「……う……ぐう……っ」
こんな間抜けな状態でも、もう、どうしようもなかった。
「……くる、しい」
言葉少なに伝えると、
「……そう、分かったわ」
そう言って、雪ノ下は優しく目を細めて、柔らかそうな唇をひと撫でして、口をくぱっと開けた。
× × ×
「おおお……っ」
膝立ちのまま、斜めの角度で雪ノ下の口に肉棒を挿入する。
雪ノ下はそれを、なんら苦しむ素振りも見せずに、ぐぷぷとやらしい音と共に受け入れた。
「ん……っ」
この体勢では、あまり前後に動かす事は出来ないためだろうか、雪ノ下は俺の亀頭を集中的に責めてきた。
亀頭全体を舌でくちゅくちゅと舐め回し、カリの部分を舌先で何度

も往復してなぞり、尿道を舌先で幾度と無く小突く。
「んちゅっ、ぐちゅ、くぷくぷ、ちろちろ、ちゅるっ、ずずず……じゅぽっ、ちゅるるっ、ぢゅるるっ、じゅぷっ、ぴちゃぴちゃ……」
「あ……あが……」
雪ノ下の口内で、俺の大事な部分が、好き放題に味わわれている。
それも、視界が明滅する程の強烈な快感を伴って。
亀頭周りにねっとりと絡み付く雪ノ下の舌の感覚に、腰が抜けて持って行かれそうになっていた。
やがて、咥える角度を少し変えたかと思うと、今度は頬の内側に亀頭を当てて、裏筋にぬらぬらと舌を這わせてくる。
「ねちゅねちゅ、ぐぷ、ぐっぷぐっぷ、ずぞぞぞ……つつつ、ねろねろ……」
「……～～～～っ！」
さっきまでとはまた違う快楽の波にまみれて、腰ががくつく。
正常な思考が、見る間に焼き切れていく。
「ゆ、雪ノ下、もう、もう……！」
我ながら情けないと思う声で、射精しそうなことを伝えると、雪ノ下が口の動きを止めて視線を向けた。
そして、口を肉棒からくぽっと離すと、再び、優しく微笑む。
「……わかったわ。じゃあ、そうね……ここに、立ってもらえる？」
「え？　あ、ああ……」
雪ノ下が指定したのは、ベッド際の床だった。
俺がベッドのすぐ横に立ち、雪ノ下は俺の肉棒を咥えることが出来る位置で四つん這いになる。
……うわ……っ、エロ……。
「……な、なに？　何か文句でもあるのかしら？」
雪ノ下は俺の視線に気付いて急に恥ずかしくなったのか、頬を赤らめた。
俺はぶんぶんと首を振って、
「ない、ない、全然無いです、もう、超お願いします」
と、――なにこれ、年上お姉さんに筆おろししてもらうみたいに

なってるじゃんもうこういう感じのやつＡＶでよく見るよ――とか超どうでも良い事を考えてしまった。
雪ノ下は俺の反応を見て殊勝な心掛けと思ったのか、
「……ん」
満足そうに短く言葉を発して、あむっ、と、手を使わぬまま俺の肉棒を咥え込んだ。
「ぺろ、ぴちゃぴちゃ、ぐっぷぐっぷ、ちゅろっ、れろれろ、じゅるる……」
「～～～～っ！　～～～～っ！」
雪ノ下の口淫の勢いが、更に増した。
最初は四つん這いになって咥えていたが、いつの間にか女の子座りになり、両手を俺の腰に回してしっかり固定して舐め回している。
すぐ上から見る雪ノ下の、うっとりとした淫らな表情を見て、――ふと、いつも学校で見る凛とした彼女の姿を思い出して、そのギャップにまた激しく興奮した。
もともと限界が近かった状態でこんな責めをされては、もはや我慢が出来ない。
「ゆ、雪ノ下、もう、出る、出る、出る……っ！」
「……んむっ、んん……っ」
雪ノ下の頭を掴みながら言うと、彼女は悩ましい声を上げてぎゅっと唇を締めて、カリを強く刺激した。
それを引き金に、
「あっ……うああ……っ！」
雪ノ下の唾液にまみれた亀頭が膨れて、弾けた。
ぐぶぶっ、どぶっ、ごぷごぷっ、びゅるるっ、びゅっ、びゅっ、びゅっ……。
「んんんん……っ！」
「あっ、あっ、あっ、あーっ、あっ……」
噴出した精液を雪ノ下が懸命に飲み込む中、俺は天井を見上げて呆然と声を出していた。
「んっ、んっ、んっ……ぷはっ……すごい……」

大量に吐き出された精液を、一滴も零さずに飲みきった雪ノ下が口を離すと、むわっとむせ返るような匂いが立ち込めた。
「んっ……ちろっ、ちろちろっ……あむっ、ぐぷっ、ぐぷっ……」
「ちょ、お、おい……うぐっ……！」
尿道を舌先で突かれ、不意打ちで咥え込まれると、僅かに残っていた精液も残らず吸い出された。
……ちょっと、雪ノ下さんの技術面の向上がえげつないんですが……。
超気持ち良いんだけどね。
× × ×
「……あ、そういえば」
息を切らしながら、雪ノ下に伝えていなかったことを思い出す。
「小町がさっき部屋の前まで来て、少し休んだらご飯を作る前に風呂に入っておいてってよ」
「切り替えが早いわね、あなた……そう」
肉棒をむき出しにしたまま、平気で話題を切り替えた為に、こめかみに手を当てた雪ノ下に少し呆れられた。ご、ごめんなさい……。
「『雪乃さんと一緒にご飯作りたい』ってさ」
「……そう」
今度は温かみのある表情を浮かべる。
……あ。
まだ伝えてないことがあった。
「それで、その……風呂には2人で入ってって。下着は洗濯するから出しておいてって言われた……」
「……え」
雪ノ下の頬が朱に染まる。
「……あ、う、その、い、良いのかしら……お言葉に甘えて……」
さっきまであんなにエロいことをしていたというのに、ここであわあわと慌てるというのは……可愛すぎてずるい。
「構わねえよ。それに……その、俺も……入りたい、し。……一緒に」
全力で顔を背けながら消え入りそうな声で呟き、目だけでそろりと

雪ノ下を見る。
……茹でノ下さんになってらっしゃる。
「あ、あう、そ、その、そ、そそ、そうね、ひ、比企谷くんが望むのなら、しょうがないわね、うん、しょうがないわ、比企谷くんの止めどない欲望の犠牲になる人は必要だものね、良いわ、入り……ま、しょう……」
最後の方はもはや、ほとんど聞き取れないくらい小さな声になっていた。
「……嬉しいんだけど、俺を欲望の塊みたいに言うのやめてくれる？」
言うと、雪ノ下が俺の下腹部にジト目を向けた。
「……こんな凶暴なものを振りかざして、何を言っているのかしらあなたは？」
「んぐぁっ」
ぐうの音も出なかった。
雪ノ下はもじもじと顔を逸らした後、ちらりと俺を見た。
その表情は、不安そうな、だけどどこか期待を抱いているような、そんな表情だ。
「……あ、あまり、盛（さか）らないでね……？」
「……」
……。
「……そんなに、自信ないです……」
正直に伝えると、
「……はあ、しょうがないわね……まあ良いわ、散々汗もかいたことだし、お風呂をお借りするわ。……あ、それと」
「……おっ……？」
喋りながらベッドを降りて立ち上がった雪ノ下が、不意に俺を抱きしめた。
温かくて柔らかな感触に、心が安らぐのが分かる。
「……私が寝ている間に、お布団を掛けてくれて……あと、汗も拭いてくれたのかしら？　……その、ありがとう」
耳元で囁かれる感謝の言葉が、妙にこそばゆい。

「お、おう……」
言葉少なに応えると、雪ノ下が身体を離した。
脱衣所に向かうまでに取り敢えずで身に着けるバスタオルを貸すと、それを身体に巻いて、柔らかく微笑む。
「……それじゃ、行きましょ？」
「ああ」
最初はマッサージをするだけだったのになあ……何やってんだか俺たち、ていうか俺……などと思いながら、部屋を出た。

続く。

（１４）

俺と雪ノ下が、廊下に出てすぐに気付いたこと。
こんなこと、普段だったら部屋を出る遥か以前に気付くべきことなんだけれども。
この時は、気付くのが、認識するのが、状況把握が、遅れた。
ただ。
ただただ。
寒い。
超寒い。
えげつない。
や、ちょっと、というかすんごい阿呆だった。
お互い気持ちがふわついていたため、バスタオルを巻くだけという湯上り気分でうろつくのは危険だと判断するのが遅れた、というよりぶっちぎりで手遅れだった。
汗も冷えるし、このまま悠長に脱衣所まで歩いていたら、身体がどうにかなってしまいそうだ。
で、まあ。
俺と雪ノ下がどうしたかというと。
「～～～～！」
「～～～～！」
極寒の廊下の中を。
ささささささささ、と。
早歩き。
なんか７０年代のアニメとかで見そうな動きだ。
出来れば走りたかったが、もうじき高校３年生になる身で、家の廊下をバスタオル１枚だけ纏ってのダッシュは恥ずかし過ぎる。というか恥ずかしくて死ぬ。
ましてやそれを小町に見られようものならイジられるを通り越軽蔑されて悲しくて死んじゃうまである。やだ、Ｄｅａｄ　ｏｒ　Ｄｉｅ！

そんな訳で、出来るだけみっともなくならないよう、あまり足音を立てずに、しゃしゃしゃと早歩きをした。俺はまだしも、雪ノ下の早歩き姿とかシュールすぎるだろ超見たい――などと思いはしたのだけど、後ろを振り向く余裕も無かったし、雪ノ下から「振り向いたらどうなるか分かってるわね？」という寒々しいオーラががんがん飛ばされていたため、足音は確認すれどその歩き姿を視認することは出来なかった。シュールゆきのんを見たかった……。

ていうか、ただでさえ寒いんだから、オーラまで冷たいのを放たなくてもいいと思うんですけど……。

× × ×

がらら、と。

脱衣所のドアを開け、急いで駆け込む。

小町が気を利かせて、脱衣所に置いてあるミニヒーターを点けていてくれたおかげで、中はバスタオル1枚でも問題無いくらいにぽかぽかだった。ナイスだ妹よ。

ぬくぬくだにゃー。

「……はあ、はあ、はあ……」

数十メートルも無い行程を早歩きしただけなので、体力的には全く消耗してはいないのだけど、精神的にやたらめったら摩耗していた。

雪ノ下は大丈夫かと隣を見やると、

「……はあ、はあ、けほっ、けほっ、……けほっ、はっ、はっ、はあ……けほっ、はあ、はあ、はあ……はあ……はあ……はあ……」

……瀕死ですやん。

体力の無さもそうだし、寒さによる消耗もそうだし、何より、女性がこんな服装（布1枚）で人の家の廊下を歩く（超速で）っていうのは精神が削れるよなあ……。

「……雪ノ下、大丈夫か？」

聞くと、胸に手を当てたまま息を切らした雪ノ下が顔を上げる。

暖房の効いた部屋に来て血の巡りが良くなったためか、その頬がほんのり紅潮していて、その艶っぽさに胸がとくんと鳴る。やっべ、超抱きしめたい。

雪ノ下は髪を手で払うと、表情を引き締めた。
「……何のことかしら？」
「……」
……。
……えー？
ここで？　ここで強がり？　うそでしょ？　奇跡かよ。
「や、別にそんな意地張らなくても……」
ごく。ごくごく正直に気持ちを伝えたのだけれど。
「あら、比企谷くんは、はあ……私が本当に、ふう、疲れていると思っているの？　……ふうっ、ふっ、ふう……いくら私が体力に自信が無いとはいえ、はあ、それはいくらなんでも軽率な判断と、はあ、捉えざるを得ないわ……はあ、はあ、はあ……」
「……」
……奇跡だった。
雪ノ下は俺に対する弁明をまくし立てたせいか、回復することなく未だに息を切らしている。ていうか若干ひどくなってる。どんだけ体力無いんだ……。
でも、ちょっとこれは、せっかくだから煽りたくなる。
邪悪な笑みを浮かべるのをこらえつつ、肩を竦めた。
「そうか、性急な判断だったな、悪い。雪ノ下は今、全然何ともないんだな」
「……はあ、はあ……どうしたの？　急に、ふう……ふっ、ふっ、素直に、なって。捻くれとねじくれと屈折が、はあっ、比企谷くんの持ち味でしょう？　……あと、目ね。　ふう、その、はあ、はあ、……腐った目」
「……」
こいつ……調子に乗りやがって……！
ていうかまだ息切らしてんのかよ。息切れしながら強がってる姿マジで悶えるんですけど。正直今超押し倒したい。
ちょっと、イジめてみようか。
「雪ノ下、今お前は全く息切れも何もしていない訳だから、いつもやっ

ていることをやっても何も問題は無い訳だよな？」
「？　ええ、そうね。それがどうし――んむっ!?」
手始めの、キス。
舌を絡めるでもなく、シンプルに。
完全な不意打ちにやられたのか、雪ノ下の腰ががくがくと震える。
雪ノ下が巻いているバスローブの結び目をぱっと解き、尻に両手を回す。
形の整った小ぶりな尻をきゅっと掴んだ瞬間。
「んむうううううう!?」
雪ノ下は目を見開いて、全身を激しく痙攣させた。
ぱっ、と唇を離して、雪ノ下の表情を確認する。
雪ノ下は今しがた思い切り痙攣したばかりなのに、表情だけは懸命に取り繕っている。腰ががくがくしてるけど。
「あえっ、かはっ、ふうっ、ふうっ、ふうっ、ふう……い、いつも、通り、ふうっ、はっ、はっ、……でしょう？」
「……」
引くに引けなくなってるんだろうか。
可愛いなあ。
さっきみたいに、雪ノ下が負けを認めるまでめちゃくちゃにしても良かったんだけど……あんまりやりすぎると、かわいそうだよなと思ってやめることにした。
「……分かった、認める。いつも通り、何とも無かったな」
言うと、雪ノ下の表情が緩む。
「そ、そう。分かったのなら良いわ」
「ああ。じゃ、風呂に入るか」
このくだりはさっと切り上げて、死ぬ程緊張するけど一緒のお風呂を楽しむとするか――と考えていると。
――ぴたり、と。
ごく自然な流れで言った筈の台詞で、雪ノ下の動きがぴたりと止まる。
「……わ、私たち、２人で入るのよ、ね？」

「ん？　急にどうしたんだ？」
「あ、いえ、その……」
「……まさか、急に恥ずかしくなったのか？」
や、俺もめっちゃ恥ずかしいんだけどね。
俺の問いかけに対し、雪ノ下は頬を朱に染めてかぶりを振った。
「そ、そんなこと……！　……ない、けれど……」
言って、俺の背中におでこをひたりと付けた。
……。
……何この子、撫でようかしら。
撫でた。間髪入れず。
なでなで。
「あ、え、ど、どうし……て……うう」
観念した。
勢いで、後ろに振り返って、さらりと抱き寄せて引き続き撫でる。
なでなで。
……うん、超良い匂いする。お風呂入る前にこんな良い匂いするってどういうことなのん？
うーん。
まあ、直前になって躊躇するなんてこと、いくらでもあるわな。
――しかし、やめぬ。
「……さっきも言ったけど、俺はお前と風呂に入りたいぞ」
出来るだけ穏やかな声音にするように努めて語りかけると、俺の胸に顔をうずめた雪ノ下がぴくりと動く。
「……え、ええ、分かっているわ……でも、その……私は中に入ったら……確実に襲われる訳だし……」
「……」
確実なのかよ。
そんな言われ方をしたら俺、ただの歩く性器じゃねえか。歩く性器ってそれ普通だなよくよく考えてみると。
しかし、部屋で話した時は言い方が中途半端だったしな。だから雪ノ下も吹っ切れづらいのかもしれない。

よし。はっきり言おう。
雪ノ下をきゅっと抱き寄せ、はっきりとした口調で告げる。
「ああ、襲うぞ。身体を洗う時かもしれないし、風呂に入った時かもしれない。いずれにせよ、絶対どこかで襲う。だから、一緒に入ろう。……ていうか、入るぞ」
「……っ！」
雪ノ下が顔を上げて、目をむいた。
俺はといえば、真顔。
それはそれはもう、真摯で、正直で、誠実な態度を示す、真顔。
純粋なる邪な心を、顔で示す。
どうだ！
俺としばし見つめ合うと、雪ノ下がふっと頬を緩めた。
「……今日は一段と目が腐っているわね」
「……」
罵☆倒！
この子、何なのかしら、素敵な笑顔であまりに自然に悪罵を並べるから、反応が毎回遅れるんですけど。
「んむ……っ？」
腹が立ったので。
軽くキス。
雪ノ下の目がとろりと安らいだのを見て、心が妙に温かくなる。
雪ノ下が俺の背中に手を回して、優しくさすってくる。
――どうやら、改めて、正式に、オーケーを貰えたようだ。
ぷはっ、と唇を離すと、２人揃ってくすりと笑った。
「……それじゃ、入るぞ。良いな？」
「……ええ」
俺も身体に巻いていたバスタオルを外して、からりと浴室のドアを開けた。
……部屋を出て風呂に入るまでに、どんだけ時間かかってんだ、俺ら……。

続く。

（１５）

からり、と浴室のドアを開けて、さあ入るぞ――などと変に気合いを入れて足を一歩踏み入れる。

――と。

「……ん？」

違和感を覚えて、ふと、斜め後ろを振り返ると、

「……」

雪ノ下が顔を真っ赤にして俯いて、足を半歩だけ進めたものの、体重を後ろに残したままという面白い体勢で止まっていた。

……何を警戒してるの？

俺ん家の風呂、別に足場がぬかるんだりしてないと思うんですけど……。

「……どうしたんだ？」

さあ２人で風呂に入るぞ、と気合を入れていた為、気勢を削がれたのか、雪ノ下に問いかける声が必要外に低くなってしまった。

俺の声に反応すると、雪ノ下が微かに顔を上げる。

長い睫毛の間からしおらしい眼差しを向けてくる中に、確かな熱っぽさを感じる。

「な……なんでも、ない、わ……」

「や、そうは言ってもお前……」

顔は上げたものの、体勢は依然として同じだし。なんだよこの状況。

「……」

あ、足を引っ込めた。元の木阿弥。

まあ、浴室を見てこれからのことを実感して恥ずかしくなったんだろう。

俺も期待感が半端ないし……とか考えていたら、勃ってしまった……。

雪ノ下さん、訝しげに僕を見ないでください。下の方をガン見しないでください。そしてドン引きしないでください。しょうがない

じゃない！　しょうがないじゃない！　タオルを巻いてすらいないから、何にも誤魔化せないんですもの。
「……ほら、行くぞ」
言って、雪ノ下の肩を抱く。
「……っ」
手に力を込めると、彼女の折れてしまいそうな白くて細い肢体を実感して、雪ノ下にばれないように小さく息を呑んだ。
「あ……」
雪ノ下は抵抗することなく、きゅっと縮こまって俺に身を寄せた。
儚げな声と共に、濡れたような視線を俺に向ける。え、なに、イジメてほしいの？
取り敢えずキスしようかなーと思ったのだけど、また浴室に1歩しか踏み出してないので、このノリで行ったら風呂から上がるのが15時間後とかになりそうだからやめておいた。なにそれ死んじゃう。
×　×　×
雪ノ下の肩を抱いてふらふらと数歩進めて、ぴたりと立ち止まる。
……この後、どうしよう。
考えてみると、誰かと一緒に風呂に入ったのなんていつ以来だろう。
母親と入っていたのは小1の途中までだし、小町と入ったことは一時期あったけど、それもすぐに終わったし……ある日、いつものように小町を風呂に連れて行こうとしたら、小町が「お年頃なのー！」と言って拒絶したのが最後だったっけ。なにそれ泣ける。拒絶の仕方も可愛かったけど。取り敢えず撫でたら怒られた。理不尽だなあ全く。
さてさて、本当にどうしたもんかのーとのほほんと考えていると、肩で刻むように息をする雪ノ下が目に入った。
「……」
俺に肩を抱かれたまま、手を所在無げにもぞもぞ動かしている。
俯いているため、雪ノ下の凛とした長い睫毛がよく見える。ふと、雪ノ下との行為で互いに汗をたくさんかいた時、雪ノ下の睫毛が汗を

纏って、照明で艶やかに煌めいた事を思い出した。騎乗位で乱れながら、泣きそうな顔で目の周辺を妖しく光らせるその様はあまりに美しくて……ってめっちゃ現実逃避してるーーー。そして更に勃っちゃってるーーー。

――なんて悶々としていると。

「……うっ……!?」

不意に下腹部に刺激が貫き、反射で身を屈めた。

見ると、雪ノ下がいつの間にか俺の肉棒にそろりと両手を伸ばし、細い指をしゅるしゅると絡めていた。

互いに立って、横並びの状態。肩を抱いていなければ、そしてあらぬところを触られていなければ、街中を歩いているのと同じ物理的・心理的距離感なのだけれど。

「……ふっ……ふっ……」

雪ノ下の息遣いは色を帯びて荒くなり、口は物欲しげに半開きにしていた。

「雪ノ……下……」

ついさっき躊躇した時の気持ちはどこへやら、雪ノ下の扇情的な表情に吸い寄せられるように顔を近付けると、正面から向かい合う体勢に変えて、色の薄いぷるんとした唇に吸い付いた。

× × ×

「んふっ、ちゅるっ、れろ、れちゅっ、ちゅぷっ、んんっ、んんん……ちゅりゅっ、はぷっ、んん……」

生まれてから何百何千と入った慣れ親しんだ浴室に、雪ノ下の悩ましげな声が悩ましげに響く。

浴室内の反響は、自分の声も、相手の声も、いつもとは違った趣にさせる。

ただでさえ、行為に及んだ時の雪ノ下の声は官能的にも程があって、毎回興奮しすぎて後で冷静になった時めちゃくちゃ後悔しているのだけれど……。こと今回に至っては、浴室内の反響により、彼女の声自体は小さいにも関わらず、湿り気を帯びた音がねっとりと反射してきて、リアルタイムで目の前から聞こえてくる声と遅れて反射して

くる直前の声とが混ざり合って、熱に浮かされた頭の中を絶え間なく淫靡な声がかき回してくる。
雪ノ下は両手で俺の肉棒を触り、先走りを丁寧に引き伸ばしてぬちゅぬちゅといやらしい音を立てている。
下腹部から響く音と、口内から頭蓋へと直接送り込まれる音と、それらの音が反射して聞こえてくる音。
もう、これだけでも、１０回くらいイけるくらいの興奮に達していた。
「……ぷはっ、お、おい、雪ノ下、そろそろ身体洗いたいんだけど……」
雪ノ下の肩に添えていた手に力を込めて、なんとか引き離す。
すると、雪ノ下はなんとも残念そうな表情をした後、にやりとした笑みを浮かべた。
予想していなかった表情の変化に、思わず半歩後ずさりそうになる。
「あら……もう終わって良いのかしら？　せっかくこんなになっているのに……」
つつっ、と。雪ノ下の指の腹が肉棒の裏筋を舐める。
「……っ」
ほーん？　なに、今の？　ほーん？
や、正直気持ち良かったけど。
けど、今の嗜虐的な笑みはもう、なんか、猛烈に反撃したくなっちゃったぞー？
よし、と心の中で意気込んで、雪ノ下をぎゅっと抱きしめる。
「ひゃっ!?」
突然の事態に驚いたのか、今さっきとはまるで違う調子の、何とも可愛らしい驚きの声が耳元で心地良く響いた。
さっきのお返しとばかりに、指で雪ノ下の背中をなぞってやると、
「あぁうあぁぁぁ……ふあぁぁ……」
と、消え入りそうな喘ぎ声を上げて、俺にしがみついて身体をがくがくと震わせた。
再び雪ノ下を抱き寄せて、彼女の耳元に顔を寄せる。

「……ああ、この体勢でするのは終わりにしよう。まず俺が身体を洗うから……座ってくれ」
「え……あ、や、だ、大丈夫よ？　自分で洗えるから……」
「んなこと分かってるっつうの……」
　この流れで各自で洗うとか、ドライにも程があるだろ。それなら別々に入るわ。や、身体を洗うのを見ているだけでも割と良いかもしれな――
「比企谷くん、何かいかがわしいことを考えたでしょう」
「え？　あ、や、え？　なななな何のこと？」
　見透かされたことに阿呆丸出しで動揺していると、雪ノ下が呆れて眉根を寄せた。
「あなたの考えは顔に出やすいのよ……自覚なさい？　考えというより煩悩だけれど」
「は、はい……すいません……って、じゃなくて」
　なんか不意の説教（しかも極めてまとも）に流れを忘れるところだった。
　話の流れを引き戻す為、雪ノ下を強く抱きしめる。
「あう……」
　苦しそうな、それでいて少しだけ気持ち良さそうな、そんな声を上げる。
「せっかく2人で入ったんだから……な？」
　念押しをしながら、雪ノ下の尻をぐっと掴む。
「ひやあああ!?　あ、う、わ、わかったから、んあ、洗っていいから、うっく、あう、そんなに、ひんっ、強くし……ひううっ、強く、しないで、あ、あう、あうううう……」
「……っ」
　片手で軽く揉んだだけで、この反応。
　本当に、たまらない。
　このまま1回イカセようかなとも思ったけれど、それはこの後にとっておこう。
「よし、じゃあ座って……んん？」

んん？
風呂椅子に視線を落とした時、本来であれば浴室に入った瞬間に気付くであろう、いつもとの大きな違いに気が付いた。
「……や、なんでだよ」
まだ事態を把握出来ておらず、俺の反応にきょとんとしている雪ノ下（可愛い）の頭をそっと撫でながら、呆れ声を漏らした。
×　×　×
スケベ椅子。
風俗店でごく一般的に使用されている（らしい）、主に男性が座る椅子である。
女性が男性の身体を洗う際、プレイ……やり方の幅が広がるように、形状や高さに様々な工夫が施されている。
そんな、スケベ椅子。スケベ椅子、スケベ椅子……（反響）。
……。
……や。
なんでだよ。
なんでそのスケベ椅子が、うちに元々ある風呂椅子と堂々と肩を並べてんだよ。椅子が肩を並べるってなんか変な話だけど。
犯人には心当たりがある。というかあいつしか居ない。
……え、小町ちゃん、マジで何してくれちゃってるの？　お兄ちゃんびっくりだよ？　後で事情聴取だな……。
ぶっちゃけでかしたなんて言う訳ない、そんな喜んでる訳じゃないし、でかしただなんて言う訳ない……なんていうよく分からない葛藤をしていると、雪ノ下が椅子を見つめているのに気付いた。
「これは……なに、かしら……？」
「……あ」
おお。
知らないのか。
まあそれは流石にそうか。ごく自然な反応だ。
うん、そうそう、そうだよね。
や、待てよ。

ここで、雪ノ下がスケベ椅子を知らないという今の状態で、ここからどんな風に事態を発展させようかとわくわくしすぎて、変にテンションを上げたら気持ち悪がられて死んでしまうまである。
よし、ここはごく自然に、真摯に振る舞おう。
こほん、こほん。
よし、準備完了。
せーの。
「えへーと、これはだな……」
「……何を声を裏返らせているの？　女子に嫌われる練習かしら？」
「……」
ダメだった。
ていうか、すごい罵倒された。
「女子に嫌われる練習ってなに……」
「あら、いつもやっているじゃない。登校する時、授業中、休み時間に寝ている時、部活中……あなたは努めてその練習に励んでいるじゃない。その努力を継続する姿勢は尊敬に値するわ」
「あんまり丁寧すぎて一瞬褒められてるのかなと勘違いしそうになったけど、違うよね？　尋常でないくらい悪罵してるよね？」
絶望の吐息をぼへえと吐き出しながらツッコむと、雪ノ下はふふんと得意気に笑って、長く艶やかな前髪を払う。
「あら、気付くのが遅かったわね」
「……」
……。
こいつ……。
「……裸で俺を馬鹿にしたって、説得力ねえぞ……」
苦し紛れに言ってみたのだけれど。
「え、あ、う……そ、そんな、こと……」
急に現実に戻ったのか、顔を真っ赤にして恥じらう雪ノ下があまりにも可愛くて。
「ふあ……っ？　んんっ……」
思わず反射的に、喉元に吸い付いた。

×　×　×

結局、雪ノ下に吸い付いた後（すごい表現だ）、ついついキスまでしてしまい、舌を絡めたりなんかして、椅子の説明をしないままに５分程過ごしてしまった。なんだ俺。超満足です。

「えーっと、これはだな……」

口頭で説明しようとして、言葉にばりばり詰まる。スケベ椅子の説明だなんて、何言っても引かれますやん、絶対……。

うんうん唸る俺の様子を見ていた雪ノ下が、訝しみのオーラを放ちながら眉を顰める。

「……まさか、卑猥なものなんじゃないでしょうね？」

「うぐ……」

ま、まずい、このままでは俺単独で変態扱いされる！　ちがうんだ、俺だけじゃないんだ。兄妹揃って変態なんだよ！　なにこの最低な責任転嫁っていうか責任拡散。

「どうなの？」

雪ノ下がずいと近付く。今までの凛然とした魅力に加え、最近は愛嬌もたっぷり湛えるようになった、整った顔が俺を責めるように眉をきゅっと寄せる。

うーん。

可愛いすぎる。

や。

そうじゃなくて。

めいっぱい目を逸らしながら必死で何を言うべきか考える。考えろ、俺！　この場では何を言うのが一番安心なのかを！　選択肢を間違えてみろ、お前は自宅の浴室で凍死という特異な最期を迎えることになるぞ！

考える、考える、考える――

「……あ」

閃いた。

これならいける――と思っていたら。

「……」

俺の顔を見て、雪ノ下が試すような視線を送ってくる。なんかこう、ふふん、って感じ。
「あら……どんな言い訳をしてくれるのかしら？」
「なんで俺が悪いことしてる前提になってんだよ……あれだ、口では説明しづらいから……」
言葉の途中から嗜虐の感情を込めて、雪ノ下の肩を掴む。
「ひあっ……え……え……？」
雪ノ下の顔色が一気に変わり、急激に色を帯びた。俺の目つきから、事態を察したのだろう。
そう。
口で説明出来ないなら、身体で説明すれば良い。
こんなフレーズ、普段自分が聞いたら、浅薄の極みと侮蔑するような薄っぺらい言葉なのだけれど。
今はそんなありきたりなフレーズが、果てしないわくわく感を帯びている。
「……実際に、色々やりながら説明するわ。まずは座ってくれるか？」
「え、あ、ほ、本当に……？」
震えながら、上目遣いで俺を見る。その視線にはさっきまでの力は無く、たまらなく嗜虐心を誘ってくれるものだった。
「……ああ、本当だ」
――さて、どうしてくれようか。
頭の中であらゆる欲望を思い描きながら、震える雪ノ下の肩をそっと引き寄せて、椅子の下へと招いた。
続く。

（16）

雪ノ下の肩を抱くと、緊張しているのか微かに震えている。
力を入れれば折れてしまいそうな程儚げなこの身体を、今から……
と、考えただけで、背筋がぶるりと震える。
いたずら心で抱き締める手にきゅっと力を入れると、
「あう……」
と、か細く可愛らしい声が浴室の湿った空気に染み渡る。
あまりによく見知った空間が、どんどん未知の空間に変わって行く感覚を覚えて、ぞくぞくとしたものが身体中を駆け巡った。
「じゃ……ここ、座ってくれ」
雪ノ下を椅子の前まで引き寄せて、座るよう促す。
「あ……わ、わかった……わ……」
今にも泣きそうな声を出しながら、雪ノ下が承諾した――けれど。
「……？」
ん？
雪ノ下が、一向に腰を下ろそうとしない。
「……」
俯いていてその表情が見えないが、これは……。
雪ノ下の耳元に口を寄せて、そっと囁く。
「なんだ……怖いのか？」
「……っ。そ、そんなこと……っ」
精一杯強がってはいるが、それでも座る気配が一向に無い。
……ああ、もう、たまらない。
「……わかったわかった。雪ノ下、じゃあ、足を広げて、この椅子を挟むようにして立ってくれるか」
言うと、雪ノ下が目をむいた。
「な……っ、そ、そんなこと……」
「いいから」
「……うっ……わ、わかったわよ……」
強めの口調で促すと、恥ずかしさに満ち満ちた表情で、雪ノ下が

ゆっくり足を広げ始める。
恥ずかしくて座れないと言うのなら、もっと恥ずかしい目に遭ってもらおうと言う、鬼畜な考えを抱いての指示だ。
うーん、我ながらひどいなあ。
「こ……こう？」
雪ノ下が全身を羞恥で震わせながら、椅子を跨いだ格好で止まる。
こんな風に足を広げているだけでも、女性が間違ってもとらないような体勢であるため、ものすごくそそる。
しかし……少し、頂けない部分がある。
「ああ、そんな感じだ。……もちろん、タオルは取るんだぞ？」
「……う、うそ、でしょう……？」
「いいから」
「……うっ、くぅ……っ」
こんな圧、理不尽でしかないのだけれど。
それでも、雪ノ下はこの場の雰囲気に呑まれているのか、
「……っ」
目にうっすら涙を浮かべながら、ゆっくりとタオルを外した。
「……」
その艶美な肢体を、無言でまじまじと眺める。
手で胸と局部を隠してはいるが、それはここから――。
「雪ノ下……んっ」
雪ノ下にゆっくり唇を重ねて、
「んん……っ、……んんっ!?」
すかさず、その艶っぽい口に舌をねじ込む。
「んんっ、くちゅっ、ちゅりゅっ、ちゅぴっ、ちゅるるる、んはっ、ふぅんっ、んんっ、れちゅっ、ちゅりっ、んふうっ、んんっ、んんん……っ」
手で耳を押さえて、かっちり固定しての、濃厚な口付け。
「ふうん……っ、ふっ、くうっ、んふう……」
口付けに夢中になっているのか、雪ノ下の手はいつのまにか俺の腰に添えられ――
「……んくっ……？」

――俺の下腹部に伸びてきた。
……油断した。
まあ、こんなささやかな抵抗もすぐ出来なくなるんだけれど。
雪ノ下の目はすっかり発情した猫のそれになっていて。
背中を強く抱きしめながら、小ぶりな尻をぐにっと掴むと、
「んふぅっ!? んん、んんんん……はうっ、んんっ、はっ、はっ、ちゅる、じゅる、はあっ、ぢゅるるる……」
身体をぶるぶると震わせ、息を荒げた。
今度は、背中と尻に添えている手をそれぞれ、すれ違う様に上と下に移動させる。
背中の途中ですれ違うような形で、つつーっと両手同時に動かすと――
「んんんんっ!? んぐっ、じゅる、あふあっ、やっ、これ、んん……んんんん……ひうううう……!」
雪ノ下は激しく反応して、唇を離して俺の胸元に顔を埋めたかと思うと、腰をがくがくと揺らして、徐々に腰が落ちてきた。
「ふあああっ、んっく、ひぐっ、やっ、こんなの……っ、耐えられ……っ」
頼りなげに震えるその様が、あまりにも綺麗で、儚げで、色っぽくて。
「……耐えなくて良いんだぞ」
耳元で囁くと、
「え……んあああああっ!?」
雪ノ下のおでこに口付けをして、指の往復を再開する。
指先で撫でつつ、時折軽く爪を立ててより圧を高めてやると、
「あふあっ! やっ、そんな、やあっ、やあああ……っ!」
より激しい反応が返ってきて、心が躍った。
何度も、何度も、何度も。
指を、爪を、丁寧に這わせる。
雪ノ下のおでこから唾液が伝い、彼女の唇に触れる頃には――
「あ……かはっ、ああっ、ああああ……っ」
――雪ノ下は、いやらしく足を開いて、椅子に腰を下ろしていた。

×　×　×

座って尚、先程までの余韻に震える雪ノ下の背後に回り込む。

「……んっ」

「んあああっ!?」

身体を屈めて雪ノ下の首筋に吸い付きながら、両手を彼女の足の付け根に伸ばし、開いたままの足を閉じる事が出来ないようにする。

「あああ……あああああ……」

すっかり力が抜けているのか、抵抗が一切出来ずに、手を胸の前で合わせてただただ長い喘ぎ声を上げている雪ノ下を見て、思わず唇を一度離してごくりと生唾を飲み込んだ。

「あ……うあ……」

透き通るような白い肌が、背筋から尻まで濡みなく広がっている。つっと手を触れると、なめらかな肌はしっとりと汗で湿っていて、見るとうっすらと桜色に紅潮していて、たまらなく欲情をそそる甘い香りを放っている。口の中には、ほのかな汗のしょっぱさが残っていた。

「比企……谷……くん……」

ゆっくりと振り向きながら、俺の名を呼ぶその声は、普段の凛とした声とはかけ離れた、甘く蕩けるような声で。

「雪ノ下……」

首を傾けて、再び唇を重ねた。

×　×　×

「ん……ぷはっ、……ふっ、ふっ、ふっ……」

雪ノ下から唇を離して膝立ちになると、彼女がとろんと惚けた目で俺を見つめる。

口を僅かに開けたその表情は、どうしようもないくらいに扇情的で。

「……」

少し下を見ると。

がん勃ちだった。

……まあ、そりゃあ、ねえ？

「さて……」
ここでようやく、何をするか考え始める。
段階で言えば、今ようやく準備を終えたところだ。まだまだ先は長い。
……ちょっと、ここまでの時点で楽しみすぎた感はあるけど……まあ、そりゃあ、ねえ？
順当に考えれば、ここは身体を洗う流れだろう。
色々な場所を散々いやらしく洗って……と下衆の極みの顔をしながら考えて、ボディソープを置いてある場所に目をやり、手を伸ばした。
「……ん？」
伸ばした腕が、ぴたりと止まる。
まず目に入ったのは、見慣れない、ざっくり言うと良い感じのボディソープだった。本当にざっくりで我ながらちょっとびっくり。
湿気でしわしわになったメモ書き（今回俺に読ませればそれで目的は達せられるのだろう、本当に無防備でしわくちゃだ）を見ると、『雪乃さんと小町専用。お兄ちゃんの使用厳禁！　お兄ちゃんはこっち↑』
と書かれていた。
……。
……なんだろう。
泣きそう。
矢印に従って目線を滑らせると、俺がいつも使っているボディソープが置いてある。
……ああ、そうか。
小町はいつも、この見慣れない、というか初めて見るボディソープを使っていたんだな……。
並べられて比べると、もの悲しさが波のごとく押し寄せる。
俺と親父はこの安っぽいボディソープを使って……ああ……無情……。母親はどうしているのだろうか。
ボディソープを見ただけで、気持ちがとってもレ・ミゼラブル（や

や語呂悪し）になっていると、俺と親父が使っているボディソープの隣にもう1つ、メモ書きの貼ってある見慣れな……い……んん？

……んんん？

実物では見たことないけど、画面上でなら見たことがあるぞ、これ……？

事実確認をする前に、隣の雪ノ下をちらりと見やる。

「……」

……ほけっとした顔のまま、俺にぽてんと身を預けてた。どうりでさっきから右肩が妙に心地良くて軽かった訳だ（矛盾）。なんだい君、可愛すぎない？　大丈夫？　襲っちゃうよ？

ちょっと悶えた所で、再度確認の目を向ける。

「……」

……。

「……」

……。

「……や、」

うん。

「……なんでだよ」

一人で鍵括弧とモノローグを駆使してありったけ引っ張った後の、精一杯の気持ちだった。

目の前に書いてあるメモ書きの中身は以下参照。

『雪乃さんとお兄ちゃん専用、ローションってやつ？　責めにも受けにも両方どうぞ！』

「……あいつ、バカじゃねえのか？」

思わず口に出して言ってしまった。

「……？」

俺の声に反応して、雪ノ下がぽけっとした表情のまま、くりんと首を傾げる。

や、ちょっと。

あんまり子どもっぽくならないでくれますかね？

可愛すぎて死んじゃうんで。

……うーん。
この、小町のとっても馬鹿げた置き土産（家に居るけど）を、どう扱ったら良いものか……。
思案に暮れながら、雪ノ下のあごの下をこしょこしょと撫でる。
「……ん……」
「がふっ」
気持ち良さそうに、うっとりとした顔であごを上げたため、可愛さで大ダメージを受けた。
……夕飯の後、雪ノ下を撫でる時間を設けようかなあ。うん、そうしよう。

続く。

（17）

雪ノ下のあごの下（洒落ではない）を撫でるのに夢中になって、気付くと結構時間が経っていた。阿呆すぎる……。

自分に軽く引きながら、次の行動を思案する。

ローションについては物凄い興味津々だけど。興味津々だけど。

流石に最初は、普通に身体を洗うか……。

そう思い、俺に肩を寄せている雪ノ下を真っ直ぐ座らせ、膝立ち状態から立ち上がると、雪ノ下の背後に回る。

雪ノ下は俺がすぐ横に居なくなったのにすぐに気付かなかったのか、ぽわぽわした目で左側を見て、そして見上げながら後ろの俺を見る。

「あ……」

惚けた声を漏らす雪ノ下の頭をくしゃりと撫でる。

……今、ほんの一瞬だけれど、見てしまった。

雪ノ下が左側を見て、俺が居ないことに気付いてから、後ろの俺が居る事にに気付いたその時……不安げな表情から、心底ほっとした顔になった瞬間を。

「……」

雪ノ下の頭を撫でながら、ふと思う。

――この子は……なんでこう、事あるごとに、ほんの一瞬の仕草で俺を死なせにかかるのでしょうか……。

そんな勝手な事を思いながら、雪ノ下の耳をこしょこしょとくすぐる。

「あう……」

悩ましげな声を漏らすと、その声が脳の奥深くに染み渡って色を染める。

雪ノ下は手を足の付け根に置いて、閉じた足もやり場無くもじもじと動いている。

……。

……ふう、死にそう。

あれ、今何しようとしてたんだっけ？

×　×　×

そうだ、身体じゃん。

響きが最悪だった。

身体を洗うんじゃん。

やっと思い出した。雪ノ下のうなじに見惚れてる場合じゃない。

や、見惚れても良いとは思うけれど。

……と、ここで、まず確認しといた方が良いかな……よし。

雪ノ下の両肩にぽんと手を置くと、彼女の身体がぷるっと震えた。

「雪ノ下、身体はどこから洗うと良い？」

聞くと、ようやく雪ノ下がいつもの雰囲気に戻る。

「あ……え、ええと、そうね、身体の上の方から順番に洗ってもらえれば……大丈夫よ」

「そうか。……その、なんだ、あの辺の周りについては……」

もじもじと喋った時の俺のキモさは天下無敵だなあと思いつつ、雪ノ下の反応を窺うと、目をむいて顔を真っ赤にした。

「あ、え、ええと、そ、その……す、すす、好きにして、ちょうだい……」

言って、ぷいっと顔を前に向ける。

「……わかった」

あぶねえ。

危うく、声に笑いが混じる所だった。

なんて危険なセリフを言ってくれるんだい、まったく。

しかしこれで言質はとった。何をやっても文句は言わせねえぞ、ふはは！

思わぬ棚ボタに、湧き上がる喜びの高笑いを必死で堪えながら、ボディソープを手に取る。

どうでも良いけど、浴室で全力で高笑いしたら反響ですげえことになりそうだなあ……。

×　×　×

ボディソープを手の上に溜めて、少しばかりお湯を足して泡立てる。

普段自分の身体を洗う時なら、こんな動作にさしてこだわりは持たないのだけれど。
今は、拙いなりにありったけ丁寧に泡立てていた。
だって、もう、アレですよ。
泡立てるごとに、夢も膨らむ膨らむ。
俺が手の中でかちゅかちゅと音を立てているのを聞いて、雪ノ下が不安そうにちらりと後ろを覗くのを見て、危うくボディソープまみれの手で頭を撫で回す所だった。ふう、危ない危ない……。
ちなみに雪ノ下はいつの間にか髪を結えてアップにしていた。新鮮だし綺麗過ぎてなんかもうこの髪型のままで最後までしたいまである。
……ちょっと煩悩が抑えきれないてないな。
「さて……じゃあ、まずは……」
泡立てを終えて、いよいよ身体を洗いに掛かる。
この後の流れを想定してか、互いにわざわざ相談することもなく、髪は洗わないことにしていた。まあ、そんなもんだよね。
髪を結えたことで露出したうなじが、うっすら紅潮しているのを見て、ごくりと息を呑む。
ボディソープを纏った手を、雪ノ下のうなじにしゃぷっと着地させる。
「ん……」
雪ノ下の艶やかな声を聞きながら、ゆっくりと洗い始める。
――なるべく、入念に、執拗に、丹念に、丁寧に。
首回りを洗うにも、出来るだけじっくり、指の一本一本で愛撫するようにするすると撫で回す。
「ふっ……んっ、くふうっ、んんん……っ」
悩ましげに身体をくねらせ、不安になったのか、両手を俺の足に回してそのまま俺の身体を自分の下へ引き寄せた。
……って、あ、そんなことしたら……。
「あ……？」
……俺のぎんぎんにそそり立った肉棒が、雪ノ下の背中にがっちり

と擦り付けられてしまった。何ということでしょう……。
「ん……ふうっ……」
「ちょ、おい……っ」
雪ノ下は何を思ったのか、そのまま自分の背中に俺の肉棒を擦りつけるように身体をくねらせる。
裏筋が雪ノ下の滑らかな肌に擦られ、予想していなかった刺激により興奮が一気に高まり、先走りの汁が滲み出る。
……やばい、なにこのテクニカルな反撃。
さて、どうしたものか――と思っていると。
――ふと。
「……あ」
雪ノ下の身体のある場所に、目が行った。
……そう言えば、ここって……。

× × ×

脇。
小学生がくすぐりでいたずらをする時、かなりの割合で責めるだろうこの部位。
大抵の人は、くすぐったくて「やめろよ～」と言って身体を離すという程度の反応を示すだろう。中にはまるで平気と言う人もいるかもしれない。
しかし、今、目の前にいるこの美少女、雪ノ下は。
超が付く敏感体質だ。
実際、今の関係になったきっかけはこの体質と言っても過言ではない。
なんせ、制服の上から肩を揉んだだけで激しく反応してしまうのだから。
……そんな彼女の脇を、衣服のガード無しで直接触ったら、一体どうなるんだ……？
あまりの期待感に、身体がぶるりと震えた。
――あ、今の身体の震えは期待感の為だけじゃねえや。
雪ノ下が背中で俺の裏筋を刺激してくる動きで、ちょっと軽く出そ

うになった。
うん、このままではまずい。早速反撃だ。
「……」
何も告げず、背後から雪ノ下の脇に手を伸ばす。
身体を洗う順番は確認したんだから、別に大丈夫だよね！　ね！
――ぴとり、と。
ボディソープの泡を纏ったそれぞれの手が、雪ノ下の脇に触れた瞬間。
「ひあああああああああ!?」
「うぐおっ!?」
雪ノ下が背筋をあらん限りに反り返らせ、自分の背中に俺の身体ごと肉棒を更に強く押し付けた。
益々強く擦れてしまい、危うく射精してしまいそうになる。
雪ノ下は脇に入れられた俺の手を自分の腕で挟み込むと、ロックするようにぎゅううと押さえつけた。
「だめ、だめ、これは、ほんとに、だめ……！」
ふるふると震えながら、涙目で振り返る。
「……う……っわ……」
その懇願の表情が、あまりにも可愛らしく、あまりにも嗜虐心をそそって――止められる訳が、無かった。
「……身体は、ちゃんと綺麗にしないとな」
一般論とさえ言えないような安い言葉を告げて、手を雪ノ下に押さえつけられてまま、指で彼女の脇をこしょこしょとくすぐる。
「～～～～～～～っ！」
声にならない悲鳴を上げて、雪ノ下の肢体が跳ね上がった。
「あああ、あうう、だめ、だめ、だめ……っ！」
雪ノ下は首を振り、か細く弱り切った声を上げる。
――この子は、弱れば弱る程、嗜虐心をそそってくる。
また、弱ると同時に、思考能力が落ちてくるのも見て取れる。
「ふぅんっ、くふっ、ひっく、あうう、ひぃん……」
雪ノ下は、何としても俺の手を止めたい。

けれど、身体が既に密着していて逃げ場が無い。
だから、せめてこの体勢でも出来る抵抗をしようと、俺の手を押さえ付ける。
しかし、それでも俺の指の動きまでは止められない。だから結局、その抵抗も意味を成さない。
――いつもの彼女なら、この状況を脱する術を考えるなど造作も無いだろう。
でも、今は、その程度の事にも頭が回らずに。
「……あああ、あっ、かはっ、あああ……」
――俺の足からも手を離し、寒さを耐え忍ぶかのように腕を抱いて、ぶるぶると震えている。
……俺の手は、脇にがっちり固定されたまま。
「……それじゃ、もう少しだけ洗うからな？」
雪ノ下がびくっと反応するも、何か言葉を発する前に、再び脇のくすぐりを開始する。
「あああああっ!?　あっく、ひぐっ、や、やらっ、だめ、だめ……っ！」
指でかき回すようにくすぐると、ボディソープによってくぷくぷといやらしい音が形成されて、まるで秘部を弄り回しているような気分にさせられる。
……まあ、雪ノ下にとっては、ここも十分すぎるくらいに性感帯なんだよな。
今後の雪ノ下の性の開発に夢を膨らませながら、指の動きを加速させる。
――と。
雪ノ下が震えながらこちらを振り向き、不安そうに口を歪めた。
「どうした？」
聞くと、雪ノ下は今にも泣きそうな、消え入りそうな声で呟く。
「……だめ、もう、きちゃう……で、出ちゃう、から……」
「……っ！」
心が激しくざわついた。

「ひゃんっ!?」
雪ノ下の脇から手を引っこ抜くと、可愛らしい驚きの声を上げた。
そして、するりと雪ノ下の正面に回り込む。
「……え……？」
雪ノ下は何が起きたのかと、きょとんとしている。
俺は雪ノ下の顔を正面から見据え、にこりと微笑んだ。
「……出すところ、見せてくれ」
「……っ！」
雪ノ下の顔が一気に青ざめる。
抵抗を試みようとした直前、すんでのところで再び脇に手を滑りこませる。ボディソープの滑りの効果も大きかった。
「だっ、だめ……っ！」
雪ノ下の言葉を最後まで聞くことなく。
一気に指の動きを最大限に速める。
「あああああああああ！　だめ、だめ、だめ、そんな、そんな……ううう……ううううう……っ！」
雪ノ下が涙目になって、いやいやと顔を振る姿は、正面から見るとまた格別だった。
その腕は今度は自身を抱くことなく、いつのまにか俺の頬に手を添えて――
「ううううう……んっ……」
突然、唇を奪ってきた。
「んむうう……ちゅるっ、うっく、ううううう……ちゅるっ、ちゅぴっ、ちゅぱっ、うぐうう……んんんん……」
「～～～～～～～っ！」
喘ぎ声と舌を絡ませる水音が、口内に快楽の渦を醸成して、互いの脳髄を犯す。
気付けば、熱塊と化した肉棒は、腫れ上がった亀頭を雪ノ下のへそに食い込ませていた。
「んんん、んっふう……んっく、んふぅっ、ふううう……ふぅぅう……」
雪ノ下は顔は蕩けに蕩けていて、己に叩き込まれる快楽と、己が作

り出す新たな快楽とに夢中になっていた。
——と、ここで気付く。
……キスしてたら、出すとこ見れないじゃん。
そう思い、無理やり雪ノ下から口を離す。うう……勿体ない気がするけど今はしょうがない。
そして、膝立ちになり、幾分局部が見えやすくなった状態で、とどめとばかりにくすぐりを強める。
「あああああ……っ！　やっ、出る、出るから……っ、見ないで、や、出る、出る、出る……あうううう……！」
「いいぞ、ほら、イケ、イクんだ、いっぱい出すんだ……っ！」
——かっ、と。
雪ノ下の目が見開いた、次の瞬間。
「〜〜〜

続く。

（１８）

現在の状況：俺の耳たぶｉｎ雪ノ下の口。

ぱくっと咥えられて、まあすぐに離れるのだろうの思ったら……油断した。

「あむ……うう、……うううう……ちゅぴ、ちゅっ、ふっく、えう、ううう……ちゅく……」

「あ、あのう、雪ノ下さん……？」

耳たぶを咥えたまま、嗚咽を漏らすのが聞こえて慌てる。やりすぎたかな、なんでここで耳たぶなのかな、泣き声可愛いな、さりげなく舌も使ってきたぞ、などという雑考。

膝立ちのまま白い腕に抱きすくめられ、背中をしゅるしゅると撫で回される。まるで絹糸が絡みついているような心地良さに包まれる。

俺の問いかけが聞こえたのか聞こえていないのか、雪ノ下が涙声で語りかける。

「うっ、ひっく、ちゅぴ、比企谷くんの……ちゅっ、……ばか」

「う……お……」

いつも言われる罵詈雑言（そこまでひどくない）に比べて、あまりに拙い言葉を、あまりに可愛らしく言われた。

……。

……だーーーーーもっとイジメてーよーーーーー！

宙空を彷徨わせていた手で、雪ノ下をつい抱きしめてしまう。

絶頂直後で更に敏感になっているのか、

「あうううう……っ！」

控えめな声ではあるが、身体は激しくぶるぶると震えた。

肉棒の切っ先は雪ノ下のおへそに突き付けられ、吸い付くような柔肌に真っ赤な亀頭がくにくにと食い込む。

「はあっ、うっく、ひう、あああ、ひ、比企谷、くん……」

儚げな声で俺を呼ぶと、耳たぶを咥えていた小さな唇が、今度は首に吸い付いて来た。

「はぷっ、ちゅっ、んん、んっく、ちゅるる、ちゅぷ、あ、やあ、おし

り触っちゃ、今は、だめ、はあんっ、ひっ、うう、ちゅぷ、ううう……ちゅりゅ、ちゅる、ちゅるるる……」
「……っ」
俺が雪ノ下のものであることを示す為のマーキングをするかの如く、念入りに舌で舐め回し、吸い付く。
雪ノ下の言葉の一つ一つが耳朶をくすぐって頭に染み込み、雪ノ下の動きの一つ一つが目の奥まで焼き付いて身体全体を幸福感で満たす。
……7連休くらいして、部屋に籠ってこの子と色々したいです……。
雪ノ下の背中をさすりながら、春休みに雪ノ下の家に合宿（目的がやばい）に行こうかと真剣に考える俺が居た。
× × ×
「さて……じゃあそろそろ、続きをしなきゃな」
雪ノ下としばらく抱き合った後、名残惜しみつつ肩を掴んでゆっくり引き離した。
「ふあ……？」
よっぽど口付けに夢中になっていたのか、その目はとろんとしていて、口も少しばかり開いている。
……何この子、可愛すぎるでしょ。
「続きだよ、続き。……ん」
「んっ……」
可愛すぎたので。
取り敢えずキスを挟んだ。
俺、こんなキャラだったっけな……今更だよな……。うん、斧乃木ちゃんくらい自由なキャラでいいか！　それは色々とまずいな。横ピースして殴られたくない。
ほんとに軽くキスを……と思ったのに、雪ノ下が緩慢な動きながら舌を入れてきたので、しばし口内を味わう。
「んふうっ、ちゅぷっ、んはっ、比企谷くん……比企谷くん……ちゅぷ、ちゅりゅ、ちゅぴ、ぴちゃ……」

「……っ!? お、おい……っ」
舌を絡めていたら、さりげなく肉棒を触られた。しかも両手で。
雪ノ下はうっとりとキスをしながらも、薄目を開けて下を確認している。なんだいこの子は。むっつりなのかい？
……って。いかんいかん。
「……ぷはっ、雪ノ下、うっ、そろそろ続きうくっ、をっ、くああ……っ！」
俺に肩を掴まれたまま、ぽわんとした表情で首を傾げて、手だけは巧みにカリをさすり、茎をしごき上げてくる。ちょっとギャップが、ギャップが！ あかん！
反撃しつつ話を進めるか……と思い、手を秘裂の方に伸ばす。
「雪ノ下。ここは何で洗うと良い？ ……あ」
「――――――っ」
膣口に指を置いて留めるつもりだったのだけれど。
ちゅるん、と。
熱を帯びた口が、中指をあまりに容易く飲み込んだ。
そのまま椅子の窪みの方へ手が滑り、中指を膣にねじ込んだまま、手の平と五指全体で雪ノ下の尻と秘部を掴む形になってしまった。
「あっ、あっ、かはっ、あ、あ、あああ……」
雪ノ下は目をむいて、口をぱくぱくとさせている。
手首には、雪ノ下が分泌した温かい液がちょろちょろと掛かっている。
「わ、わるい。大丈夫か？」
言いながらも……つい、中指を膣の中でくいと曲げ、肉襞をえぐる。
「んひいっ!? あ、おおお……」
獣じみた声を上げて、雪ノ下が震える。
「ここ、何で洗うと良い？ ボディソープか、お湯か、どっちだろう？」
聞きながら、他の指で尻と秘部をぐにぐにと揉んで、中指はぴんと伸ばして前後に動かして肉襞を味わう。
「あうっ、ひっ、比企谷くん、ゆび、だめ、そんな動かさ、ないっ、で……お、お湯、ひぐっ、あ、かはっ、お湯で、ひぃんっ、……いい、か

ら、お湯でいいから……！」
涙声で答える雪ノ下がどうしようもなく可愛い。
「そうか、分かった」
言って、ちらりとシャワーヘッドを見る。
そして視線をそのまま椅子の方へと滑らせる。
……笑いが止まらなくなるのを、何とか留めた。
× × ×
「胸も洗わなくちゃな。あとは、下の方は……と」
ボディソープに手を伸ばす前に、シャワーヘッドを掴んで雪ノ下に手渡す。
「……？」
俺の意図がさっぱり分からないようで、雪ノ下がくりっと首を傾げた。
わくわくに心を滾らせながら立ち上がり、雪ノ下の後ろに回り込んで、肩に手を置く。
「……椅子の窪みにシャワーヘッドを入れて、上を向けるんだ」
「……っ！　そ、それは……っ」
俺の意図を理解して、雪ノ下が青ざめた顔になる。
けれど、もちろん、やめない。
「もちろん、そのままだと落ちてしまうからな、雪ノ下、ちゃんと固定してくれ」
「そ、そんなの……」
「固定してくれ」
肩に置いた手の力を、僅かに強める。
「……わ、わかった、わ……」
震える声で答えて頷いた。
「雪ノ下が下を洗ってる間、俺は胸を洗うから。同時でいいよな？」
「えっ……う、うそでしょう？　そんなの……そんなの……っ」
「うん？　その方が効率的だろ？」
「そ、そうだけど……そんなことしたら……」
「……『何回イクか分かったもんじゃない』……か？」

「……っ」
雪ノ下が喉を鳴らす音が、はっきりと聞こえた。
「いいから、ほら……シャワーヘッドの位置を調整してくれ」
「……」
最後は、無言で。
こっくりと頷くと、透き通るような白さのうなじがよく見えた。
× × ×
「よし、固定したな？　じゃあ行くぞ……せー、のっ」
きゅっ、と蛇口をひねった瞬間。
「――――――っ」
シャワーの水流の音が聞こえるのと同時に、雪ノ下の背筋が弓なりに反り返った。
雪ノ下の肩から顔を覗くと、口をぱくぱくとさせて、視線は宙空を彷徨っていた。
じょぼぼぼぼぼ……。
シャワーが雪ノ下の下腹部に当たり、水滴が絶えず椅子の窪みに落ちて音を立てる。
音だけ聞けば、なんてことのない聞き慣れたもののはずなのに。
今はこの音が、ひどく官能的に感じられた。
「あああ……あああ……」
雪ノ下が身体が断続的に震えて、足は内股にして閉じたり急にかぱっと広げたりと落ち着かない。
シャワーがそんなに強く出る訳ではなくとも、性器に対して直接的・連続的な責めであることには変わりないのだから、この反応も無理はない。
あまりに扇情的な光景に、思わず首筋に吸い付きたくなったが、これから洗おうとしているのだから我慢我慢……。
「……」
じっと、雪ノ下の様子を見る。
「あおおお……こ、こんな、うくっ、恥ずかし……あああ……っ！」
羞恥で顔を真っ赤にしながらも、律儀にシャワーヘッドから両手を

離さず、自らを慰めている。
その律儀さにまた一段と興奮を覚えると同時に、体力面での心配が再び頭を過ぎる。
――これは、同時にやるにも、早めにケリを付けた方が良いかな――。
そう思い、心持ち急ぎ気味でボディソープを手で泡立てる。
「じゃ、胸洗うぞ」
「あっ……かはっ……!?」
宣言と同時に手を伸ばし、雪ノ下の胸を後ろから洗い始める。
胸の外縁から円を描くように撫で、胸の肉を集めるようにして揉みしだき、突起も丁寧にこすり上げる。
ボディソープで泡立ってこそいるが、やっていることは愛撫そのものだった。
「あ～～～～～っ、あ～～～～～……」
雪ノ下は今も律儀にシャワーヘッドを両手で固定させたまま、俺の手とシャワーの2つ同時の責めに延々と嬌声を上げている。
その声には疲弊と一緒に悦びの色も見えて、この子はどこまで……と、悦びで背筋がぶるりと震えた。
時折大きく震えては、絶頂に至っているようだ。
しかし普段なら濃厚な匂いを漂わせる愛液も、胸から垂れ落ちるボディソープと一緒にシャワーで流されてしまって分からない。
浴室内にはシャワーの水音と雪ノ下の喜悦の声が響いて、俺はその声で高まり続ける興奮に、身体の内側が燃え上がるのを感じながら、ひたすら彼女の胸を蹂躙する。
「ほら、もっとイケ、イクんだ……っ」
雪ノ下の耳元で囁き、突起を集中的にしごき上げる。
「あっ、あがっ、イっ、もう、やら、これいりょう、イキらくらい……おかひくらっひゃう……あ～っ、あ～～～っ、あ～～～～～……っ」
雪ノ下が一際大きく震える。
――がらん、と。
シャワーヘッドが床に落ちて、浴室の壁に無意味にシャワーの水流

が当たる。
——ふっ、と雪ノ下の身体が弛緩して、後ろの俺にがくっともたれかかってきた。
「あ……あ……あ……」
あまりの絶頂に、痙攣を断続的に繰り返す雪ノ下。
「……」
シャワーヘッドに手を伸ばして、雪ノ下の身体を洗い流す。
「……」
シャワーヘッドを元の位置に戻して、雪ノ下を後ろから抱きしめながら、考える。
「……」
……。
……うん。
ちょっと、休憩しよう。流石にやばかった。
椅子の上ではふらつく上体を支えるのが大変なので、これが適切かは分からないけれど、雪ノ下の脇を抱えて椅子からおろし、彼女を促して浴槽に入る。狭い浴槽だけれど、雪ノ下の細身ならばと思ったら案の定大丈夫だった。
お湯は適度に冷めていて、火照った体にはちょうど良い。
「……」
雪ノ下を股座に座らせて、後ろから髪を撫でる。
ぬくぬくだにゃー。
なーんでこんな細くて綺麗なんだろう、何食べればこうなるんだろう、ごぼう？　などと意義がぶっちぎりで皆無の思考をぼんやり巡らせていると——
「比企谷くん……」
ようやく話せる余裕が生まれたのか、雪ノ下が振り返る。
「……ん。どうした」
「バカ」
「うぐ」
「ボケナス」

「お前がそれ言うと何か変な――」
「鬼畜」
「や、だからそれ悪口……だな」
てっきり最後に『八幡』と言うのかと思ったのだけれど。
気に入っていたフレーズだから、絶対忘れる訳が無いのになーと不思議に思って雪ノ下を見ると、湯船に顔を沈めて、ぽこぽこと泡を出している。なんだそれ可愛いなお前。
……名前を呼ぶのは、ここに来てまだ、恥ずかしいらしい。
や、まあ、俺もだけどね……。
気恥ずかしさで頬をぽりぽりと掻いていると、ぽこぽこ言ってる雪ノ下、略してぽこノ下が顔を上げた。なんだよぽこノ下って。
「は、はち……比企谷くん」
中途半端に言い直すなよ、余計恥ずかしいだろ……。
「ん？」
雪ノ下の頬に手を添えながら答えると、俺に振り向き、にやりと笑った。
「今度は……私の番ね？」
「うお……」
むやみに気圧された。
散々やらかしたから、この後がすげえ怖いなあと思いながら、ふと視線を横に滑らせると、まだ使っていない便利（？）アイテム、ローションが見えた。
……ローション、今度は雪ノ下の番……。
……うわ……。
この後の展開に、胸が躍った。超怖いけど。超怖いけど。……本当だよ？　超怖がってるよ？
続く。

（19）

ローションを眺めながら雪ノ下と湯船に浸かっている。言葉にすると中々シュールだった。

元々、さっきやりすぎたが為に雪ノ下を休ませようとして今こうやってお風呂に入っている訳だけれど……。

「……」

目の前にいる雪ノ下の滑らかなうなじをまじまじと眺める。

髪を結えて温かいお湯で安らぐその姿は、温泉の広告で見たことがある入浴美人のような艶やかさを纏っている。

――つつっ。

本当に、つい、反射で。

そのうなじに手が出るより先に、舌が出た。口が近かったもんで……。

「ひん……っ」

雪ノ下の身体がぶるりと震える。

「こら、逃げるな」

「あ、やっ、ふあっ……」

身を捩らせて上半身を離そうとする雪ノ下を、後ろからきゅっと抱きすくめる。

左手で雪ノ下の右胸を、右手で秘部ごと下腹部を掴んだ。

「あああ～～……」

雪ノ下が力の抜けた声を上げ、うなじがますます紅潮して、それと同時に――

「……うっ……？」

悩ましい視線をこちらに向けて、尻を肉棒にこすり付けてきた。玉が柔らかい尻肉に心地良く圧迫される。

きゅっ、くちゅっ、くにゅ、くにゅ……。

「うっく……うお……」

「ひあっ、はっ、あっ、ひあ……っ」

俺は雪ノ下の胸の突起と秘部に、雪ノ下は俺の肉棒にと、互いに刺

激を加える。
ちゃぷちゃぷと水面が平穏に音を立てるその下で、互いの身体を弄り合うことに夢中になっていた。
「比企谷……くん……比企谷くん、比企谷くん……」
他の人が居る時は決して聞くことの出来ない甘い声音で、雪ノ下が囁きかける。
互いの身体をまさぐりながら、ぴとりと唇を重ねた。
× × ×
「んっ、んむっ……ぷはっ。……雪ノ下、そろそろ上がるか。のぼせそうだしんむっ!?」
浴槽から出ようと促そうとしたが、その言葉が止められた。
雪ノ下は俺が話している最中のするりと俺の腕を解いて身体の向きを変え、俺に正面から向き合う形になっていた。
「んっ、んふっ、んちゅるっ、はぷっ、んっ、んっ、ちゅりゅっ、ちゅぴっ、はぷっ、はふっ、ふむぅっ……」
「〜〜〜〜〜〜っ」
膝立ちになって俺の胸板に手を置き、幸せそうに目を細めながら口内を舐り回す。
「……っ」
雪ノ下の端正な顔立ちを目の前で見て、改めてこんな綺麗な子が……と、心臓が興奮で波打つ。
……ていうか、これ、どこまでやっちゃっていいんでしょうか。
なんか勢いで最後までしたい気もするけど、これから楽しい楽しいローションプレイ……って、あ、や、別にそんな楽しみな訳では……誰に言い訳してんだ俺……。
「……ぷはっ」
悶々としているうちに、雪ノ下が名残惜しそうに唇を離した。互いの唇の間に長い糸が引いて垂れ下がり、水面にぴちょりと垂れてゆっくりと溶けて行く。
その手はまだ俺の胸板に置かれていて、お湯の温かみと興奮とが混ざり合ってか、やけどしたかのような熱を帯びている。

「……そう、ね、そろそろ上がらないとね」
キスが濃厚すぎて、一瞬何の話だったっけと本気で混乱したのだけれど。
本格的にのぼせてきたのか頭が一瞬くらっとしつつも、何とか話の流れを思い出す。
「ああ。出よう」
言って、雪ノ下と立ち上がる。
立ちくらみしないようにゆっくりと湯船から身体を解放させると、雪ノ下も同じように立っていて……って、あれ？
「どうした、出ないのか」
雪ノ下は何故か突っ立ったまま、ほけっとこちらを見つめている。結構浸かっていたし、体温が上がることもやってたから、足だけ浸かってる今の状況だけでものぼせないかとまあまあ怖い気がするんだけど……。
「……」
雪ノ下は何も言わぬまま、俺の背中に手を回して、再び唇を重ねた。
今度は舌を互いに絡み合わせることのない、シンプルで、それでいて心地良いキス。
「……たまにはこういうのも悪くないわね」
その言葉が、このお風呂のどこまでのくだりに触れているのかは分からなかったけれど。
くすりと微笑む雪ノ下の表情があまりにも可愛くて――
「ああ、そうだな。どうする、毎日一緒に入るか？」
つい調子に乗った事を言ってしまった。
……俺、何言っちゃってるのん？
流石に引かれるかなー引かれるよなーと思いながら雪ノ下の表情を見ると、顔を真っ赤にして口がぱくぱく言っている。何この子、可愛い……。
俺が見つめているのに気付いて、ハッとした顔をして首をぶるぶると横に振る。煩悩を払おうとしているのかしらん？　この場でそんなことやっても焼け石に水だと思うけど……。

「あ、そ、そんなことしたら、その、毎日、あなたに襲われるじゃない……」
可愛らしくもじもじとしながら俺をチラ見してるけど……俺の背中に置いた手を所在無げにもぞもぞするのやめてくれません？　すんごい恥ずかしいしくすぐったいです。
……ていうか、あれ？
もしかして、これ、行けそうな感じ？
勇気を振り絞って、もうひと押ししてみることにする。
「そうだな、毎日襲うぞ。さっきまでみたいに、あと、この後みたいに」
はっきりと告げると、雪ノ下の顔の赤みが更に増す。体温も上がっているようで、寄せ合った身体がやけに熱い。
「そ、そそ、そんな、こと、あう……」
「毎日襲うって言った上で聞くぞ。雪ノ下、俺と毎日風呂に入りたいか？　俺は入りたいぞ。そして襲いたい」
「〜〜〜〜〜〜っ」
もはや口をぱくぱくさせることしか出来ていない。何この子、エサにぱくつく鯉かなにか？
可愛くてしょうがないので、取り敢えず抱きしめる。
ぎゅうう。
「あう……っ」
俺の腕の中でびくんびくんと震える細い身体が、激しく劣情を催す。まだちょっと我慢、我慢……。
「どうする、毎日入るか？」
「あ、あう……」
「ちゃんと返事しないと……」
言って、首を傾ける。
そして雪ノ下の耳に狙いを定め、舌をねじ込む。
「〜〜〜〜っ!?　あ、かはっ、やっ、そんな、あああ……」
「ほら、早く答えるんだ」
言葉の合間合間に舌で雪ノ下のすべすべした耳を舐り回しながら、幾度と無く返事を促す。

雪ノ下が耳責めから逃れようと身を捩らせる度に背中をつつっとなぞり、その度に雪ノ下の腰ががくがくと震える。
やがて、
「あ、うう、ああ、わ、わかったわ、入るから、毎日、一緒に入るからあ……っ」
「……そんな渋々了承されたら、気が乗らないなあ」
我ながらひどいな思いながら、片手を雪ノ下の尻に回す。
「ひいんっ!? あ、やっ、あう、そ、その、あう、は、入りたいです……」
「いつ？　何に？　誰と？」
「あえっ、ひぐっ、ま、毎日……お風呂に……比企谷くんと……は、入り、入りたいです……」
ぞくぞくぞくぞく。
激しい興奮の波が胸中で暴れまわった。
「……よし」
涙声の雪ノ下の返答を聞いて、満足げに口を離す。
……なんか、すげえ契約を取り付けた気がする。
何気に一生もんじゃない？
……あれ、なんか急に身体が熱くなってきた……。

× × ×

「……さて、この後は……」
さっきの毎日お風呂ご一緒宣言で恥ずかしさの限界を迎えたのか、俺の背中に抱き付きながら、おでこをひたすらこすり付けている雪ノ下の手を握りながら、この後の流れを考える。ちょっとこの子、可愛すぎやしませんかね……。
雪ノ下は俺に仕返しをしようとしているだけで、ローションについては全く把握していない。
しかし俺としては何としてもローションプレイを……や、うーん、その、うん、まあ、やりたいよね！　突然の吹っ切れ。
さて、どうしたものか。
そもそも、ローションって滑るよなあ……多分。椅子に掛けるタオルとか無いと——などと考えていると。

――からり。
『!?』
突然のドアが開く音に、俺と雪ノ下が凍り付く。
開いたのは、浴室のドアの1枚手前の脱衣所のドアだ。
それでも、2人きりの空間を突如打ち破られたことに驚きを隠せない。
心臓が激しく脈打つ音を聞きながら、雪ノ下をかばうように両腕を広げる。
――とたとた。
「……んん？」
2人の緊張感とは対照的な気の抜けた足音に、途端に気が緩む。
考えてみれば、今この状況で脱衣所に入ってくる人なんて、あいつしか心当たりが無い訳で――
「お兄ちゃーん、雪乃さーん、お湯加減はどうですかー？」
――聞き慣れた小町の声を聞いて、心の底から安心した。
……ていうか、おい。
「ああ、ちょうど良いぞ。ありがとな。や、ていうか、びっくりさせんなよ。めっちゃ身構えちゃっただろうが」
ドア越しにジト目を向けると、刷りガラスの向こうで小町がてへーと笑って頭をぽりぽりとしたのが見えた。ガラス越しでも可愛いだと……!?
「やーごめんごめん。ちょっと準備し忘れてたのがあって」
ああ、そういうことか。
「そうか、わるいな。で、何を持ってきてくれたんだ？」
「タオル」
「ああ、バスタオルか」
「うんにゃ、椅子に掛けるやつ」
「……」
絶句した。
雪ノ下の顔を見ると、はて何のことやらと首を傾げている。いちいち可愛い。

「え、あ、そ、そうか、ありがとな」
「いえいえー。あ、そうだ」
小町が何か言葉を付けたそうとして、
――からり。
『!?』
今度こそ、浴室のドアが開いた。
小町はそこから顔だけによっきりと出して、にまにましている。
『〜〜〜〜〜〜っ！』
俺は瞬時に片手で股間を、もう片手で雪ノ下を隠す。雪ノ下は俺の後ろでぷるぷるしてる。なんだこの状況？
「わわ、お兄ちゃんのすご……や、なんでもない。でね？」
「待て待て待て、この状況に至る流れがまるで分からん。あと感想を言いかけてやめるなよ」
ガン勃ちしてるのを手で隠すという異様な状況を、妹にガン見されている、現在進行形で。何これ死にそう。
「顔合わせた方がこの話はしやすいからね！　ごめんなさい雪乃さん！」
「あ、そ、その、大丈夫……よ……」
雪ノ下のリアクションが可愛すぎて、俺が全然大丈夫じゃない。小声で「でも、や、やっぱり、はず……かしい……」とか呟かないで。押し倒しちゃいそう。
小町は雪ノ下の返事を聞いて、話を続ける。
「お兄ちゃん、雪乃さんは全然こういうの知らないと思うんだ」
言って、小町が椅子とローションをちらりと見やる。
「ああ、そうみたいだな」
「だから、お兄ちゃんが手取り足取り教えてあげてね」
「え」
「そういう動画好きなの知ってるからね」
頭の中がホワイトアウト。
「なんで知ってんだ!?」
「小町もお兄ちゃんが保存してる動画見てみたから。それで椅子とか

ローションのこと知ったんだー。やー、お兄ちゃん……エロガッパだね！」
「いっそ殺せー！」
てか、何やってんだこいつ……。いつの間に。エロガッパはお前もだろう。エロガッパ兄妹とか地獄でしかない。
「それでタオルを持ってきた訳なのです。これを敷いて安全にイチャついちゃってくださいなー！　……まあ、言わなくてもばっちりイチャついてるみたいだけど」
小町が口に手を当て、むふっと笑った。すげえ可愛いしすげえムカつく。
「おい、こら――」
「ほいじゃねー！　お兄ちゃん、雪乃さん、お邪魔しましたー！」
俺の言葉を最後まで聞かずに、小町がすたこらと去ろうとする。
――と。
「あ、そだそだ。お兄ちゃん」
ぴょこんと顔を出したかと思うと、悪そうな笑みを浮かべる。やな予感……。
小町はちらりと雪ノ下に目をやり、再び俺に視線を戻す。
「……動画に出てくる人、雪乃さんみたいなスラッとした綺麗な人ばっかりだったね」
「殺せー！　一思いに殺してくれー！」
「それじゃ、失礼しました！」
俺の絶叫を聞いて、小町はにやにやと笑いながら出て行った。あいつ、後で絶対泣かす……。
ていうか、なんて恥ずかしいことを……と思い、振り向くのを躊躇していると。
「……ん？」
手首をくいくいと引かれていることに気付く。
不思議に思って雪ノ下を見ると、困ったように眉をひそめて上目遣いで俺を見つめていた。
「その……比企谷くんに、し、死んでもらっては、困るのだけど……」

「ぐほあっ」
「比企谷くん!?」
どストレートに打ちのめされた。
あかん、雪ノ下さんのキュートさが、凶悪なまでに増している……！
呻き声を上げつつ、どさくさ紛れで雪ノ下に抱き付くと、雪ノ下は「？　??　???」と疑問符を浮かべながらも、心配なのか俺の背中をさすってくれた。安らぎ過ぎて浄化しそう。
続く。

（２０）

そんな訳で。どんな訳だよ。

どきどき☆雪ノ下雪乃のご奉仕タイムスタート！　言ってて自分で震えた。寒さで。

俺は椅子にタオルを敷いて、胸の高鳴りに顔がにやけるのを抑えながら（何故ならキモいから。ふひっとか言っちゃうし）いちもつをギンギンにして待っていた。なんだこいつ。

雪ノ下はお返しのことなどすっかり忘れているのか、ローションを物珍しそうにまじまじと眺めている。それ使い始めたら、そんな可愛い仕草も出来なくなるんだよ……。

「……これの使い方も気になるけれど……まずは身体を洗った方が良いわよね？」

雪ノ下の発言に、それもそうかと冷静になる。

「ああ、そうだな。最初に『お背中……お流ししますね』って言ってくれたら最高だ」

「え……」

「あ」

全然冷静じゃなかった。

やっべ俺何言っちゃってんだ分際を弁えろよ取り敢えず生まれ変わろうそしたら私は貝になりたいなどと激しく自己嫌悪に陥っていると、雪ノ下は顔を真っ赤にしながらも何かに迷うように視線を泳がせた

何事かと様子を見ていると、やがて俺の正面に膝立ちして、そろりと目を合わせた。

「……お、お背中、お流ししますね」

「……っ」

あ。

死ぬ。

あ、そうか、俺昨日ドラゴンボール７つ集めたんだった。それでそん時雪ノ下にこの夢の台詞を言ってもらうようお願いしたんだった。

そっかー忘れてたよー参ったなーあはは。
死ぬ。
「ゆ、ゆゆゆ、雪ノ下さん？　ななななんでまた……」
思わず敬語になってしまった。
雪ノ下は俺の問いに、恥ずかしげに顔を逸らす。
「……こ、これから、毎日一緒に入るのだし、い、色々試してみるべきだと思うのよ。……そ、それに……」
「それに？」
まだ追撃があるのん？　八幡のライフはとっくに０よ？
覚悟を決めて、雪ノ下の言葉に耳を澄ます。
「……そんなに、……悪い気はしなかったわ」
「……そ、そうか」
オーケー。
死ぬ。
内心悶えてのたうち回った。
俺がふるふる震えているのを不思議そうに眺めて、雪ノ下はボディソープを手に取った。
「それじゃ、どこから洗い……あ」
「あ」
雪ノ下は俺の股座に座る形になっていた為、目の前のぎんぎんになった肉棒に今更ではあるが目が釘づけになってしまった。
……どうしよう。
……。
「……背中から、お願いします」
「は、はい……」
俺の無意味な敬語に、雪ノ下まで釣られて敬語になっていた。
うるせえ、チキンとか言うな（幻聴）。物事には順番があるんだよ順番がー！
……どうでも良いけど、雪ノ下が旅館の女将とかやったら死ぬ程似合いそう。

×　×　×

「お湯、かけるわね」
雪ノ下がシャワーヘッドを持って、律儀に断りを入れる。
「ああ、頼む」
答えると、きゅっと蛇口をひねる音がして、背中に温かい圧が掛かる。
雪ノ下の手が小さな滝の中をしゃぱしゃぱと動き、背中を丁寧に撫でてくれる。
……既に天国なんですけど。
つい先程の自分が雪ノ下にやっていた責めを思い出して、笑える程自己嫌悪に陥った。次やる時はちゃんとしよう……。ちゃんと洗おうって意味だよ？　ほんとだよ？
……ん、あれ？　次って……明日？　あ、そうか、毎日って……うわわわわ。それはやばい、やばいぞ。
最初は週３くらいから始めた方が良いかもしれない。身体も心も休まるけど、それ以上に興奮しすぎて身も心も持たなそうだ。
明日以降の事に悶々と思いを馳せていると、雪ノ下が手の中でボディソープを泡立てる音がして、そこで音が止まった。
「……？」
何が起きたのかと振り返ると、雪ノ下はむむむと眉をひそめて考え事をしている。
「どうした」
「あ……普通に洗うだけで良いのかなと思ったのだけれど、その、何か……するべきかしら？」
「……え」
え、なに？　雪ノ下さん、がっつりリクエストに応えてくれる流れなの？　え、本当に？
内心狂喜乱舞しながら（脳内リオのカーニバル状態）、何をしてもらうか考える。
そして振り向いて雪ノ下を見ると、
「……そう、だな、雪ノ下の身体で洗ってほしい。背中には胸を当てて洗って、腕なんかは股間に挟んで洗ってもらいたいな」

「な……っ」
雪ノ下が戦慄の表情を浮かべた。そして一気に顔が真っ赤になる。
……流石に厳しいかなあ。やってもらえたら天国なんだけど。
無理すんなよと言って、視線を前方の鏡に戻すと、信じられないものを見た。
なんと、俺の姿が映っていなかったのだ。
ごめん、うそ。ほんとごめん。
――と。
「んっ……あふあっ、くふうっ……」
「……え？」
背後から聞こえる甘い声に、心臓が跳ね上がる。
――まさか、雪ノ下、本当に……？
「え、え、え……」
まさかの天国発生の予感に心の底から動揺していると。
――くちゅ。
「～～～～～～～～～っ」
背中に柔らかいものが着地した。２つの突起の感覚が、強制的に現状を認識させる。
あまりの事態に口をぱくぱくさせていると、突起が上下左右に動き出す。
「んっ、んっ、ふうっ……こ、こう、かしら……？　……あふあっ」
「あ、ああ、すげえ、良い、感じ……だぞ」
あまりの心地良さに、スムーズに言葉を紡ぐことが出来ない。
「んっく、あう……そ、そう、良かった……あああ……っ、んんっ、んっ、んあ……っ」
雪ノ下はこの行為で自らもかなりの快感を感じているが、それでも健気に洗ってくれる。
鏡越しに見える雪ノ下の顔が艶っぽく紅潮していて、あまりの美しさに見惚れてしまう。
俺はその夢のような光景に、背中の極楽とは対照的に、膝に置いた拳は固く握っていた。

動揺が収まらない内に雪ノ下は背中を洗い終え、快感の余韻からか震えながら立ち上がり、俺の斜め前に立つ。
「腕……上げてちょうだい？」
顔を真っ赤にしながら、雪ノ下が告げる。
「あ……じゃあ……」
震えながら右腕を少し上げて、雪ノ下に指示を出す。
「――あう、あああ……こ、こんな感じでいい……？」
雪ノ下は自分の股間と俺の腕にボディソープを塗り、俺の腕をゆっくりと股間に挟むと、右手で俺の手首を掴み、左手を俺の肩に添えた。
整った美しい顔が真っ赤になりすぎて、このままのぼせてしまうではと不安になる。
微かな声で「これ……あう、擦れて……ひあっ」と鳴いていて、なんかもう僕は死にそうです。
「じゃあ、洗うから……んくう……っ」
雪ノ下が腰を前方にスライドさせると、間延びした喘ぎ声を上げた。
そのまま、ゆっくりと腰を前後させる。
にちゅ、くちゅ、にちゅ、にちゅ、くちゅ……。
「あふっ、んんっ、ひあっ、ああ、あああ……ふあああっ、んんっ、んくっ、んはあっ……」
「……っ」
目の前で繰り広げられる痴態に、思わず呼吸を忘れる。
白く泡立つ雪ノ下の秘部が前に後ろにと擦れて、甘美な肢体の艶めかしい動きに見惚れる。
雪ノ下以外の視界のものが、深い霧に包まれたようにぼんやりとして、その分彼女の一挙手一投足が極めてクリアに見えた。
雪ノ下はびくびくと震えながらも、必死で俺を見つめて「どう……？」と何度も目で問うてくる。や、もう、最高としか言いようが無いんですけど。
放心状態でいると、右腕を洗い終えた雪ノ下がふらりと左腕の前に立つ。

「じゃ、今度は……」
「……あ、ああ……」
２人ともとろんとしたまま、左腕も同様に洗ってもらった。
……これは……なんという至福……。
続く。

（21）

両腕を雪ノ下の股座で洗ってもらい、なんかもはや息も絶え絶え。あのなんともこそばゆくて、滑らかな感触がああ……うおあああ……！

雪ノ下も似たような心境なのか顔が真っ赤なのだけれど、それでも彼女は真面目に次の行動へ移ろうとする。

「……次は、何をすれば良いかしら？」

俺の腕をシャワーで洗い流した後、ぺたんと女の子座りをして、どこか惚けた顔で首を傾げながら、俺の膝にそっと手を置く。写真撮りたい。

「あ、ええと……」

次は……とは言いつつも、頭が回らない。そもそもそんなに一つ一つの行為を丹念に記憶しながら見ていた訳ではないし、今のこの状況が異様すぎて、思考回路が完全に吹き飛んでいる。

俺が答えあぐねているのを見て、雪ノ下は決して急かさず穏やかな表情で見守りながら、手の中でボディソープをしゃぷしゃぷと泡立てている。お嫁さんに欲しい。

あ、と雪ノ下が小さく声を上げると、音の波がゆっくりと彼女の手の中の泡に溶けていった。

「……あ」

雪ノ下の視線を辿り、俺も小さく声を上げた。

超びんびんやないですか。そりゃそうだって話だけど。

雪ノ下が下腹部をぽーっと見つめて、一度手のボディソープを洗い流すと、両膝に手を置いてすすすと中心に滑らせていく。

「お、ちょ、こら……っ」

俺の戸惑いの声を気にせず、雪ノ下の絹糸のような指が玉に触れ、愛おしそうに撫でる。その心地良さとくすぐったさに、下腹部がまた反応した。

「……ここ、洗う？」

「はいもうぜひ」

「早いわね……」
即答したら呆れられた。
だって、ねえ。湯気がしっとりと肌に貼り付いて艶めかしい雰囲気を帯びた雪ノ下が、頬を紅潮させながら、俺の大事な所を触って「……ここ、洗う？」とか言ってくるんですよ。そんなの即答に決まってるじゃないですか！
× ×
「それじゃあ洗うわね」
雪ノ下が俺の股間を目の前にして、内腿に手を当てながら告げる。なんかエサの皿をじっと見つめる猫みたい。
もうこの時点で得も言われぬ期待感で心臓が爆発しそうなのに、唐突に、更なる追い打ちをかけてきた。
「匂い……濃い……」
「え、ちょ、え？　え？」
ボディソープを手に取るのかと思いきや、顔を脚の根元に顔を近付けて、隆起して反り返った肉棒の匂いを嗅ぎ始めた。
「～～～～っ」
すんすんと鼻を鳴らし、玉から裏筋、雁首、尿道口と順を追って匂いを嗅いで行く。
わ、わ、わ、うわわ。
マジでこの子、猫だ。
おかしい、口でしてもらうのも、身体を交わわらせるのも、沢山やっているのに……やたらと興奮する。
「んっ……」
雪ノ下は亀頭の匂いが特に気になったのか、しきりに匂いを嗅ぐ。
やめてー！　恥ずかしい！　恥ずかしいから！
どこを見るのが正解なんだよと視線をせわしなく動かす俺をよそに、尿道口をすんすんと嗅いだ後、目を弓なりに細めた。
「ここ……ちろっ」
「!?」
亀頭の先をちろりと一舐めされた瞬間、身体に電気が走り抜けて、

肉棒がびんと反り返った。
雪ノ下は一瞬驚いたようにその様子を見たが、すぐに目を細める。
「……ここ、すごく濃い匂いがするわ……本当に、すごく……んっ」
はむっ、と。
雪ノ下の薄めの色っぽい唇が、充血しきった亀頭を咥え込んだ。
「んむ、んむ、ちゅる、ちゅぴっ、ちゅぱっ、んむっ、はむっ、はむっ、はむ……」
「〜〜〜〜〜〜〜〜〜っ」
頭の中にアラームが鳴り響いて、反射的に雪ノ下のこめかみを掴んだ。
だめだ、これは、だめだ。
この状況による興奮と、いつもと違う雪ノ下の可愛さと色気とが相俟って……亀頭を咥えられただけで、すぐにイってしまいそうだ。
だがそんな俺の抵抗も虚しく、
「んっ……？　……んっ、んっ、くぷぷ、ちゅろろ、ちゅぴっ、ちゅぴっ……」
「お、あ、かはっ、うあ……」
雪ノ下は顔を掴まれて一瞬きょとんとしたものの、顔を引き離された訳では無かったために、そのまま亀頭を味わい続けた。美しい顔立ちが、口淫によって卑猥に頬をすぼめる痴態を見せてくることで、更に興奮が跳ね上がる。
「うう……うぐ、雪ノ下、雪ノ下ぁ……っ」
快感に喘ぐ情けない声が、浴室の蒸気に溶け消えていく。
今日は既に何度も出しているのに（本当に何度も）、凝りもせずまたくつくつと射精の衝動が湧いてくる。
俺が頼りない声で名前を呼んだのに反応して、雪ノ下がゆっくり上を向いた。
「……んっ」
「え……うおあっ!?」
雪ノ下は目を細めて優しげな笑みを浮かべたかと思うと、内腿に添えていた手を腰に回して、一気に肉棒を喉奥まで咥え込んだ。

突然の快感の濁流にいとも容易く呑み込まれ、椅子の上で腰ががくがくと前後する。
「んっく、じゅぷっ、じゅるっ、じゅぷじゅぷ、じゅるる、がちゅ、ごぷ、じゅる、じゅぴ、じゅるるるる……」
「あっ、あっ、あっ……」
格段に卑猥さを増した水音に、張り詰めていた糸がぷつぷつと音を立てて切れていく。
白濁した欲求が、精嚢から一気に上ってくる。
「雪ノ下……雪ノ下、出る、出る、出る……」
力無い声で雪ノ下の頭を撫でると、結えた艶やかな黒髪がぴょこんと揺れた。
「ん……」
雪ノ下は全てを受け入れるような、優しく包容力のある目の光を湛えて、最後に一気に口の動きを速める。
じゅぽじゅぽじゅぽ、じゅぐ、じゅぐぐぐ、じゅるるる……。
「あ～っ、あ～っ、あ～っ」
あの雪ノ下がこんな淫猥な行為に及んでいるという改めての実感が、浴室に響く音によってふつふつと湧く。
――きゅっ、と雪ノ下の後頭部を抱いて、確認するように喉奥まで咥え込ませる。
そして、
「……出……る……っ」
短く言葉を告げると。
「……んぐっ！　……んぐっ、んむっ、ごく、ごく、ごきゅ、んっ、んっ、んふう……ごきゅ、ごきゅ、ごっく……っ、……んっ、んっ、んっ……」
鉄砲水のごとき射精の奔流を、雪ノ下が躊躇なく飲み込んだ。
うっとりとした表情で肉棒から口を離すと、口から僅かにこぼれた精液を指で掬い取り、指ごとはぷっと咥えて舐めとる。
「……ふふ、たくさん出たわね。そんなに気持ち良かった？」
「……」
得意気に笑う彼女は、どうしようもないほどに可愛い。

あんまり可愛いもんで……またすぐ勃ってしまった。どうなってんだよもう……！

雪ノ下の頭をくしゅくしゅと撫でながら、ふへーと息を吐く。

「……お前、エロすぎ。あと、匂い嗅ぐのは反則だぞ。可愛すぎて訳分からん」

「……っ」

何気なく言った言葉で、雪ノ下の顔が真っ赤になった。

あ、そういやこいつ、ストレートな褒め言葉に弱いんだよな。反撃のチャーンス。ヤマピカリャー！　……目が腐っているとあまり光らないことに気付いた。

褒め言葉であわあわとしている雪ノ下に、容赦無い追撃を浴びせる。

「あ、や、う、そんなこと」

「猫みたいですげー可愛かったぞ。恥ずかしかったけど正直また見たい」

「え、そ、そんな、でも」

「普段だってやたらめったら可愛いのに、猫っぽくなったときはまた一段と可愛くなるんだよな。本当どこまで可愛くなれば気が済むんだ？」

「や、ちょ、ちょっと、そんなに言わないでちょうだい……」

「なんでだ？　お前だって自分で自分の事可愛いって言ってたじゃねえか。まあ、お前が自分で思ってる以上に可愛いけどな。自分の可愛さ舐めんなよ？　俺悶え死にそうになってんだからな」

「あ……う……」

ぷしゅーと音を立てて、茹でノ下さんの完成。あっと言う間だね！

よし、勝った。何にだ。

まあ俺も歯が浮き過ぎて総入れ歯になる勢いで褒めたから、割と相打ちに近いかもだけど。雪ノ下の反応が死ぬ程可愛いので良しとする。

「――ん？」

雪ノ下が俯きながら、自分の頭に乗せられた俺の手に自分の手を重

ねた。
何事……？　と思っていると、雪ノ下が上目遣いで一言。
「……悶え、死ぬの？　……だから、死んでもらっては……困るって、言ったでしょう？」
「ぐほあっ」
「比企谷くん!?」
相打ちくらいかと思ったら違った。圧倒的ＫＯ負けだった。
「ぐふ……だ、大丈夫だ……」
「そ、そう？　なら良いのだけど……」
頭に「??」の文字が浮かんだ状態で、雪ノ下が俺の手をくすぐったそうに、愛おしそうに握り返す。
この子は何回俺を悶え死にさせれば気が済むのだろうか……。
続く。

（２２）

「ええと……そろそろ、洗っていただけると……」

「そ、そうね……」

互いの目線が、国道の交差点から見た車の動きくらい目まぐるしい。顔をほんのり赤らめての、妙に気恥ずかしいやりとり。ちなみにこのやりとりの途中で、さっき射精後すぐに勃ったのは元に戻った。良かった……。

雪ノ下の突然の口淫によって激しく寄り道をしたのだけれど、まだ俺は身体を洗ってもらっていない。雪ノ下の行為があまりにも気持ち良い上に興奮した為、なんか頭が真っ白になっていた。

それじゃあ、と雪ノ下が再び手でボディソープを泡立てる。しゃぷしゃぷ。

流石にまあ、ここでまたすぐに勃つことはあるまい――などと安堵していると、泡の付いた雪ノ下の手がそっと陰部に触れる。

「う……お……」

柔らかい泡の感触の中に、雪ノ下の指の温もりを感じてどきりとする。

俺の反応を窺いながら、ゆっくりと玉を撫で、皮を捲って亀頭をこしゅこしゅと擦り――なんだこれ極楽やーんと思っていると、雪ノ下が小さく声を漏らした。

「あ……また……」

「え？　……あ」

気付いたらフルに隆起してた。もうやだ……。

自分の性欲に呆れ返っていると、雪ノ下が俺の様子を見ておろおろ。

「あ、そ、その、……元気なのは良いことでしょう？　こ、子どもを残す上でも大事なことだし……」

「え……」

「あ……」

「……」

「……」
なんだこれ、すげぇ唐突に死にてぇ。
雪ノ下が泡まみれの俺のモノを握ったまま、両方赤面して俯いているという地獄絵図が出来た。背景は湯気。ただの、湯気。
そういや、雪ノ下のフォローっていっつも斜め上の方向からだよなーと思い出す。なんだよ、「煮っ転がしとねっころがしってちょっと似てて可愛い感じがする」って。んなこと言うお前が可愛いっつの。顔熱いっつうの。
× × ×
二人とも立ち直り、雪ノ下が俺の身体を再び洗い始めてからしばらくしての状況説明。
「ゆ、雪ノ下？　うっく……そろそろ、うあ、良いと……思うんだ。いつもは、うあっ、そんなに、念入りに、うっ、洗ってないし……」
「そ、そう？　でももう少し……」
「うっ、くおお……っ」
や、なんでだよ。というツッコミを入れたい。
互いに赤面状態から復活すると、気合を入れて洗い始めたんだが……雪ノ下さん、すっかり俺のモノに興味津々になっちゃってる。俺の反応が大きいところを念入りに洗っては匂いを嗅いで、「まだ匂いが濃い……まだね」と言って洗い続けている。そりゃあ雪ノ下に敏感な所を洗われてもぞもぞまさぐられたら、いくらでも先走るでしょうよ。２回程洗い流したんだけど、亀頭をすんすんと嗅がれて「……まだね」と言われて再び泡まみれにされる。検閲厳し過ぎない？　税関なら帰国直後に全裸にされるレベル。
「……」
気付くと、雪ノ下の目がとろんとなってきた。今までの行為が行為だし、流石に疲れたのかな？　と思ったのだけど……次の行動を見て、ただ発情しているのだと気付く。
「……お、おい……っ!?」
女の子座りから膝立ちになったかと思うと、肉棒を２人のお腹で挟んで洗いながら、俺の乳首に吸い付いてきた。

「んっ……ちゅぷ、ちゅる、ちゅっ、ちゅりゅ、れろ、ちゅぴ、ちゅく、ちゅぱ、れるれる……」
「あ……あ……あ……」
　雪ノ下の身体をきつく抱きしめると、益々ねっとりと吸い付いてくる。肉棒は互いの身体に圧迫されているが、滑り込ませている手は泡にまみれているためその影響を受けず、ずっと洗いつつ愛撫を続けている。
「雪ノ下、だめ、だって、また出るから……」
　震える声で言うと、雪ノ下がようやく口を離した。
「あら？　良いのよ？　……遠慮なく出してちょうだい」
「え……うぐっ!?」
　にこやかに微笑んだかと思うと、再び乳首に吸い付いてくる。
　まずい、まずい、まずい。
　肩を掴んでなんとか引き離すと、雪ノ下の唇と乳首との間にいやらしい糸が引いて、電灯の光を反射した。名残惜しそうに見つめる雪ノ下の表情に、ぞくりとした昂揚が背筋を走る。
　なんとか説得しようと、言葉を急いで選ぶ。
「ほ、ほら、まだローションも使ってないし！　な!?」
　肩を掴みながら言うと、ぷくっと片頬を膨らませた。
「……そう」
「……」
　……なんだろう、口調はいつも通りなのに、仕草が幼くて……死ぬ。
　雪ノ下さん、猫属性と幼さが出てくると鼻血が出そうになるんですけど。
　シャワーで泡を洗い流す間も、肉棒をくにくにと触られた。うーん、今後がっつり玩具にされそうだなあ……。

×　×　×

「洗面器にお湯を入れて……これを、入れるの？」
「そうそう」
　ついにローションプレイ！　プレイって言っちゃった！
　まあ、マットがある訳では無いので、行為は全体的に控えめになる

んだけど。どこまでやれるかはその場その場で判断することにした。
雪ノ下に指示を出してプレイの準備中。もうプレイで良いよね。
雪ノ下は頭の上に「??」とハテナマークを出しながら、洗面器に入れたお湯にローションを垂らす。
うおおお……夢の光景……！
「これを……かき混ぜれば良いの？」
「そう。両手で回すように」
「えーと、こうかしら……」
ちゃかちゃかと音を立てて、ローションとお湯がかき混ぜられる。料理が得意なのが関係しているのか単に勘が良いからなのか分からないが、妙に手際が良い。
粘度を確認したいのか、洗面器から手を上げて、ローションの伸び具合を見ている。
てろーんと伸びるローションを見て、雪ノ下が不意に頬を赤らめた。
「……な、なんというか……いやらしいわね」
「……あ、ああ、そうだな……」
「……」
「……」
「……も、もう少し混ぜるわね？」
「……あ、ああ」
……。
……なんだこれ。
何もかも初めてな雪ノ下はもちろん、俺も実物で見るのは初めてだから妙に気恥ずかしい。
気まずさを紛らわしたいのか、顔を真っ赤にしながらひたすら混ぜ続ける雪ノ下をずっと眺めながら、俺は俺で顔にずっと熱が籠っているのを感じていた。
× × ×
散々かき混ぜたお陰で、ローションの粘っこさといやらしさは最高潮になっていた。雪ノ下は途中からは手を上げて洗面器からロー

ションを伸ばす度に恥ずかしさで顔を背けていた。それもはや確認出来てないやないですか。可愛すぎて何回瀕死に追い込まれたことか。
「それじゃそれを……お互いの身体にかけるか」
「え、ええ……」
マットを使うでもないこの状況でやれることは何か考えたが、取り敢えず身体をくっつけてみようという結論に至った。
「じゃ、じゃあかけるわよ……？」
「おう。首の下全体に掛けてほしいから、肩辺りから掛けてくれ」
雪ノ下は頷いて、その手をおずおずと俺の肩の上に伸ばし、手で掬ったローションをたっぷりと掛けた。温もりを持った粘液が身体を伝い、いやらしさと安心感という奇妙な感覚の組み合わせが身体を包む。
「満遍なく、な」
「え、ええ」
何度か追加されて、雪ノ下のすべすべした手が液体を身体全体に塗り付けていく。
やがてその手が下腹部に到達すると、雪ノ下の表情に艶っぽさが増した。
「……ここ、念入りに塗っておくわね」
「え……うおお……っ!?」
雪ノ下の手の指が１０本総動員で肉棒に液体を塗りたくり始めた。ぬるぬるしている為に、指の一本一本がまるで独立した生き物のように蠢いていて、あっと言う間に危険な領域まで追い詰められる。
「だ、だめだって、そんないきなり……うあああ……っ」
「あなたのさっきの言葉から解釈するに、ローションを使うのなら良いのよね？」
「う……」
にやりと笑う雪ノ下から目を逸らす。
自分で言った言葉にしてやられていた。
にゅこにゅこと肉棒の上を１０本の細い指が踊り、絶え間ない快感

が脳を揺さぶる。
「あ、あ、あ、あ……」
「くす……さっき出したばかりなのに、もう出すのね」
先程、不器用ながらも優しいフォローをしてくれた人と同一人物とは思えないくらいのセリフを言って、指の動きを加速させる。
「うぐあ……も、だめだ、出る……！」
――言った瞬間、雪ノ下が指を束ねて玉と竿をそれぞれしっかり握り、竿を握った手でごしゅごしゅとしごき上げた。
白い波が勢いよく頭の中に押し寄せて、一瞬世界が明滅する。
「――――――っ」
ごぶぶっ、どぶっ、どぶぉっ、ごぶっ、ごぶぉっ、どぶどぶ……。
「ふあ……」
雪ノ下が惚けた声を出しながらも肉棒をしごき続け、濃厚な精液がその艶めかしい胸元に幾度と無くぶちまけられた。
「……」
自分の身体にまとわり付いた精液をぽへーっと見つめる雪ノ下を、息を切らしながら見つめる。
……。
……ぐすん、もう、お嫁に行けない……。
× × ×
直前のふざけたセリフはさておいて。
「……雪ノ下ぁ……」
「な、なにかしら？」
シャワーで精液を洗い落としていた雪ノ下が、俺の声にびくっと跳ねた。
この短時間で2回も一方的に絞られたこの恥ずかしさ、どうしてくれようかぁ……！
や、まあ、俺も大概なんだけどね。
手をわきわきとさせながらにやりと笑う。
「さあ、今度はお前の身体に塗ってやろう……」
言うと、雪ノ下が腕を抱いた。

「変態。警察を呼ぶわよ」
「……や、この状態で警察が来ても、『イチャツキを公衆に晒したい新手の変態カップル』にしか見えないと思うんだけど……」
「う……」
阿呆なやりとりだなあ。
手をくいくいと動かして、手招き。
「良いから、ほら、洗面器をこっちによこしてくれ」
「うう……」
なんか泣きそうな顔で洗面器を差し出してきた。え、俺そんなひどいこと言った？
「大丈夫だ、優しくするか」
「信じないわよ。それで？　何かまだ言うことはある？」
「食い気味にそんな台詞言われると心が折れるんだけど……」
このままでは埒が明かないと思い、膝立ちしている雪ノ下の細い背中を抱き寄せる。
「……優しくするから。な？」
耳元で囁くと、雪ノ下がぶるりと震えた。
「……なるほど、ねっとりねちっこく私を追い込むつもりね？」
「……」
バレた。流石です。
まあ良い。
抱き心地が良すぎたので、ぬるぬるとした感触を味わうように身体を擦りつけると、か細い声で「ひあっ……」と鳴いた。
頭の中ではもう……どんな風に挿入するか、どんなに風に鳴かせてやろうか、そんなことばかり考えていた。
続く。

（２３）

「それじゃ早速……って、あれ？」

雪ノ下をローション塗れにしてやろうと（ド直球）、身体を屈めてローションとお湯が混ざった洗面器に手を伸ばすと、既に中身がほとんど無くなっていることに気が付いた。お互い、加減とか分からんし仕方ないか。

「雪ノ下、その洗面器にちょっとお湯入れて持っててくれるか」

「え？　あ、ええ、分かったわ」

俺の指示に多少慌てるも、雪ノ下はテキパキと言った事をやってくれた。膝立ちの雪ノ下が胸の前に洗面器を掲げて、どうするのかと不思議そうな顔で俺を見ている。なんか貢物みたいですげえ燃えるごめんなさい何でもないです。

「それじゃあ……よっ、と」

ローションを洗面器の中にぬらりと垂らして、かき混ぜ始める。

「……」

「……」

無言でかき混ぜる俺と、それを無言で見つめる雪ノ下。互いの顔は洗面器のすぐ前にある。

……何このシュールな光景。

時折、粘度を確かめる為に洗面器から手を掬い上げてローションを持ち上げると、それを見た雪ノ下が頬をかあっと赤らめて目を逸らす。追尾するようにぬめった手をほれほれと言いながら雪ノ下の前にかざし続けたら、すんごい圧で睨まれた。氷の女王ってよりかは縄張りを守る猫って感じ。ごめんなさい。

しかし、いくらか時間が経つと、雪ノ下の反応に変化が生じてきた。

とろんとした目で口を半開きにしてローションがかき混ぜられる様を眺め、手を上に持ち上げると少しだけ目を見開く。そのまま指の腹同士でねっとりとローションを擦っていると、「あっ、やっ……」と小さな声を上げてぶるりと身体が震えた。

「じゃ、かけるぞ。胸の前じゃなくて腹の前くらいまで下げてくれる

か」
「……ん」
雪ノ下の反応を楽しもうと必要以上にかき混ぜた所で、雪ノ下の身体にかける準備を整える。
雪ノ下が洗面器の位置を下げたことで、二人の顔が自然と近付き――
「……んっ」
どちらからともなく、唇を合わせた。互いの愛情を確かめ合う様に舌を絡めながら、俺はローションを雪ノ下の肩にまぶす。
「んんん……っ」
俺の舌に吸い付いていた雪ノ下が、とびきり甘い声を上げる。温かくてぬるぬるして、安心感があってどこかいやらしくて……この感覚は代替するものが無いように思える。従って初体験の人はほぼ全員がこの感覚に驚くのだろう。
「んはっ……んちゅっ、んんっ、ちゅぷっ、はうっ、ぴちゅっ、んはぁっ、んっ、んっ……」
ローションをかけられる心地良さと、口腔内の濃厚な舌の絡みが掛け合わさって、たまらない幸せに包まれる。
二の腕、脇、胸、胸の先端と徐々に快感が大きくなるように丹念に塗りこんで行くと、雪ノ下が身体をくねらせる動きがどんどん大きく鳴り、漏らす声もとろとろに甘くなった。
雪ノ下の反応を堪能しながらもローションを塗り続ける。脇腹を撫で、へそを愛で、そして――
「……ぷはっ。洗面器、下に置いてくれ」
「……ん」
最後にたっぷりと両手にローションを纏わせると、雪ノ下に言って洗面器を下に置いてもらう。
そして右手を陰部に、左手を尻の側に回す。
「あ……っ！　あっ、あぅっ、んっ、くふぅっ、んっ、やぁっ……」
ローションのねっとりとした粘り気と叢のしょりしょりした感触を楽しみながら、形の良い小ぶりな尻を撫で回し、秘裂に指を入れな

いように撫でる。前から回した右手と後ろから回した手の指の先が雪ノ下の秘裂の前で合流した状態で、ぐちゅぐちゅと前後させると、雪ノ下は俺の肩を掴んで切なそうに喘ぎながら、俺の手の動きに合わせて腰をがくがくと前後に振った。
「あっ……くふっ、これ、だめ、おかし、おかしくなっ……ああっ……ああっ……」
雪ノ下の目から光が失われて、どんどん言葉も拙くなってゆく。
ぞくぞくとしたものを感じながら、しばらく手の前後運動を繰り返して、やがてその動きをぴたりと止めた。
「え……」
突然の事態に雪ノ下が目をしばたたかせる。
「……この中に、欲しいか？」
言って、雪ノ下の秘裂に指をぴとぴとと当てる。
「あっ、うっく……んんっ……そ、そんな……ひぁぁっ!?」
雪ノ下が逡巡する中で、ほんの一瞬だけ、中指を膣の中へとちゅるんと滑り込ませた。ローションの滑りと淫液のぬめりが合わさって、本当にいとも簡単に中に入り込んだところで、余韻を味わわせないようすぐに抜いた。
「あっ、やっ、なんで……っ」
一瞬しか訪れなかった強い快楽に焦れったくなったのか、雪ノ下が切なそうに腰をくねらせる。
そんな雪ノ下の前にローションが残った洗面器をすいと差し出す。首を傾げる雪ノ下に、にこりと笑いかけた。
「ほら、俺のに塗ってくれ。そんで、お前がここに腰掛けるんだ」
肉棒の先をちょいちょいと指差す。
「……っ！」
雪ノ下は顔を腕で覆って顔を赤らめたものの、すぐに観念してローションを手に纏わせた。
白く細い指がそろりと伸びて、熱い粘液を肉棒に絡めていく。
「う……うおっ……」
流石にこれはやばい。さっき一方的にイカされたのを思い出すと

身体も熱くなるし。しかし今度は耐えねば……！
なんとか平静を装って（多分装えてなかったけど）ローションが塗られるのを耐え抜くと、雪ノ下がぼーっとした表情で肉棒から手を離して、シャワーで手を洗った。あまり滑っても危険だと考えたんだろう。
念のため、椅子とタオルも洗ってローションで滑らないようにした後に、雪ノ下を見据える。
「ほら……おいで」
言うと、雪ノ下は戸惑いながらも俺の太腿を跨いで立ち、俺の首に腕を回してゆっくりと腰を下ろし、亀頭を秘裂に宛がった。
「んっ……」
くぷっと音を立てて、あっさりと赤く膨れ上がった欲望が雪ノ下の中へと侵入する。
「くふぅっ……、あっ、うあぁっ……」
いきなり全部挿れてはまずいと感じているのか、ゆっくりと、まるでスクワットでもするかのような体勢を維持しながら腰を下ろしていく。必死で快感に耐える雪ノ下の淡く紅潮した肌が、ざわざわと劣情を煽り立てる。
「ほら、頑張れ頑張れ」
いたずら心で、雪ノ下の尻を掴んで、今現在の尻の標高を中心にして上下に動かすと、
「あぁぁぁっ!?　あっ、それ、やっ、ほんとっ、にっ、うぅぅぅ……っ！」
口をぱくぱくさせながら、必死で首を振る。
自分で腰を下ろす余裕は無さそうなので、尻を掴んで振りながらゆっくりと下ろしていく。
「あっ、うっ、くはぁっ、ほんっ、とっ、ダメっ、ダメなの……あぁ……っ！」
快感に抗うがそれでも徐々に打ち負けていくその様が、更に雪ノ下の美しさを引き立てる。
一番下まで挿れる段階になると、少しだけ尻を持ち上げて――ぱっ

と手を緩める。
――ごちゅんっ。
淫猥な音と共に、子宮の入り口を亀頭がノックした事による凄まじい快楽が、身体の奥を突き抜けた。
「あ――――――」
ほとんど声を上げないまま、雪ノ下がちょろろろと熱い液体を垂れ流す。
「……気持ち良いか？」
耳元で囁きながら尻をもう少し上下させてやると、
「あ、あぁっ、あっ、あっ、あっ、あぁ……っ」
こくこくと頷きながら、ぷしゃっぷしゃっと何度も温かい液を漏らした。
続く。

（２４）

椅子に座った俺に跨って、肉棒に深々と貫かれた雪ノ下がか細い声で喘ぐ。

「あっ、ふぁっ、んんん……っ」

雪ノ下の尻を揉んで、時折その軽い身体を持ち上げてはぱっと離して、上下動の刺激による彼女の反応を楽しむ。

「……」

さて、ここからどうしたものか――。

このまま、尻を掴んで雪ノ下を動かすのが一番安全だ。ローションを一度洗い流したとはいえ、椅子もその上に敷いたタオルも、俺が動くとなると如何せん心許なくて危うげだ。

どうせなら、もっとぞくぞくして、ぞわぞわして、お互いぐっちょぐちょになれるような事を……。

まずは色々試してみるか――と思い、尻を掴んでいた手を離して、背中に回す。

「ふあっ……？」

白くてすべすべとした細い肢体を抱きしめると、雪ノ下が惚けた声を漏らした。

耳元に口を寄せて、そっと囁く。

「雪ノ下」

ポイントは、少し声を低くして冷たい印象を持つ声にすること。そうすれば――

「あ、ひぅっ、は、はい……」

――雪ノ下は、とても可愛い反応をして、肉棒をきゅきゅっと締め付けてくる。

抱き締める力を更に強くして、声に吐息を混ぜながら言葉を続ける。

「お前は今、どんな状態だ？　説明してみろよ」

「あっ、えっ……？　そ、そんな……」

耳元から離れて雪ノ下の顔を見ると、首まで赤くなっていた。再び

耳元に口を寄せて囁く。
「ほら、早く」
「あっ、うぅ……っ」
「ほら、早く」
抱き締める力を更に強めて、更なる圧を加える。
「あぁぁ……っ!? あっ、かはっ、やっ、やぁっ、ゆ、言う、言うからぁ……っ」
泣きそうな声で訴えかけられてぞくぞくとしながら、雪ノ下の頭を撫でる。
「よしよし、良い子だ……さ、どうぞ」
再び雪ノ下の顔を見ながら、先を促す。
その薄く色っぽい唇は、微かに震えていた。
× × ×
「わっ……私は今、比企谷くんの家にいます」
「……」
斜め上からの奇襲だった。
頬をぽりぽりと掻いて、頭の中を整理してツッコむ。
「……えぇっと、なんでそんなリポーター風なの?」
「あ、え、だ、だめだったかしら? その、分かりやすく伝えた方が良いかと思って……」
「や、じゃあなんでお前さっきあんなに躊躇ってたんだよ?」
言うと、雪ノ下はぎくりとして目を逸らす。
「え、えっと、それは……その……」
ほーん?
これは……ひょっとして?
雪ノ下をじっと見つめる。
「雪ノ下、お前まさか……自分がさっき躊躇してた事を言うのが恥ずかしくて、少しでも時間を稼ごうとしてるんじゃねぇだろうな?」
「……っ! そ、そんなこと……ひあぁっ!?」
雪ノ下を詰問しながら、尻を強く揉む。突然の快感に肉襞は強く締め付けられ、それに伴って吐き出された甘い吐息が鼻腔を刺激する。

「本当か……？　……おっ？」
尻を撫で回しながら、時代劇に出てくるちんぴらよろしく目の前の可愛い女の子を追い込んでいると、ふと、右手中指に馴染みの無い感触があった。その場所の上をなぞると、雪ノ下が特段大きくびくんと跳ねる。ああそうか、ここは――。
とびきり意地悪なことを思い付いた。
――ああダメだ、多分今俺、「計画通り」って言ってる月みたいな顔になってる。

×　×　×

「雪ノ下」
先程よりも冷やかに、嗜虐心を秘めた声で囁く。
「なっ、なに……？　……んくぁぁっ!?」
尻穴に指の腹をぴとりと当てて少しばかり力を入れると、今までに無い色の声を上げた。
指の腹をぴとぴとと当ててはぴとぴとと当ててはぴとぴとと当てては

雪ノ下の抽象的すぎる中継に即座にレッドカードを出して、中指の第一関節までうずめた。にゅぷぷっと中指が飲み込まれ、その瞬間から絶対外に逃すまいとするかのようにきつく締め付けてくる。膣とは違った感触に息を呑んでいると、雪ノ下がふるふると首を小さく振りながら、必死で懇願していた。
「だめだ。もっと具体的に言わないと。ほらほら、早くしないともっと挿れるぞ？」
言って、第一関節から先をくにくにと折り曲げる。その度にぎゅむぎゅむと締め付けてくる感覚に胸が躍る。
「あうぅぅ……わ、わかった、わかったから、お願い、それ以上は……。……わ、私が比企谷くんに跨って、その、比企谷くんの、モノ、を……」
「モノってなんだ？」
「あ、その、お、おち……」
「……」
無言で更に指を動かす。
「うあぁぁ……！　お、おちん、ちん……おちんちんを、咥え込んでいます……」
ぞくりとした。
雪ノ下の真っ赤になった顔を見て、身体の奥底から震える。
「よしよし、よく言えたな」
「うあぁっ!?　な、なんで指をまた動かし……ひぅぅっ！　やっ、やらっ、もっ、やめっ……」
「だってまだ、お前がどこで咥え込んでるか言ってないだろ？　そこもちゃんと言わないと」
「え、あ、え……？　そ、そんな、恥ずかしくて言えな……あっ――」
にゅぷっと、中指の第二関節まで入れた瞬間、強烈に波打つ肛門の締め付けに襲われた。雪ノ下は短い声を漏らして、がくがくと震えて――くてっと寄りかかってきた。
「……先に自分だけイクなよな」
達してしまった雪ノ下を左手できゅっと抱きしめながらも、右手は再び尻穴の蹂躙を始める。

「あっ……うぁっ、かはっ……」
虚ろな目で、雪ノ下が喘ぎ続ける。眉を寄せるその表情があまりに色っぽくて、扇情的で、獣欲とも言える性への欲求が湧き上がり続ける。俺の首に巻き付いた細い腕はすっかり熱を帯びていて、もぞもぞと動く度にぞわぞわとした快感が背筋を駆け巡る。
「ほら、言えよ。お前のどこで咥え込んでるんだ」
「あっ、あぁっ、も、もう……」
「……もう？」
きちんと言うでもなく、躊躇するでもない言葉の始め方に違和感を覚える。
何事かと思っていると、雪ノ下がこちらを見つめてきた。揺れる瞳には、懇願が色濃く浮かんでいる。
「……もう、許して……お願い……」
「……っ」
あまりに儚げな表情に、嗜虐心が最大限に煽られる。
雪ノ下の懇願に、身体が反射的に動き、左手で尻を掴み、右手は尻穴に指を入れたままで、雪ノ下をぐいっと持ち上げた。
「ひぁっ!?　あぁぁぁぁ……っ！」
持ち上げた拍子に更にめり込んできた指の感触に、雪ノ下の顔が美しく歪む。
そして、今度はぱっと離すことはせずに、それぞれの指を雪ノ下の尻や蕾に食い込ませたまま――ぐいっと、勢いよく下に引き下ろした。
――ぐぷちゅっ。
『～～～～～～～～～～～っ！』
子宮の入り口をノックした俺と、ノックされた雪ノ下とで、声にならない悲鳴を上げる。
次の瞬間、膣とアナルの両方が激しく収縮して、肉棒と中指を食いちぎらんばかりに締め付ける。そしてこれまで何とか快感に耐えていた俺をあっと言う間に陥落させた。
――ぶびゅるっ、びゅぶっ、びゅぶぶぶ、びゅるびゅるびゅる

……っ。
「にゃあぁぁぁぁ……っ」
まるで栓の壊れた蛇口から溢れ出る水の様に、大量の白濁液が雪ノ下の膣を犯して、彼女は俺の耳に唇を押し当てて、猫のような喘ぎ声を聞かせてくれた。その声に興奮してしまい、また更に肉棒が激しく脈打つ。
「……はぁっ、はぁっ、はぁっ……」
長く濃い射精を終えて、アナルから指をきゅぽっと抜くと、ローションとはまた違うぬめり気を帯びていることに気付く。
「……」
放心状態の雪ノ下の背中を撫でながら、ふと思う。
……やりすぎたかなぁ。
× × ×
互いの身体をシャワーで洗い流し、ふらふらになりながらも浴室を出て、脱衣所で着替える。どちらかが先に着替えるのを待つ余裕も無いので、背を向けて着替えようとしたら、肩をとんとんと指で叩かれた。
「どうした？」
振り向くと、未だ一糸纏わぬままの雪ノ下が恥ずかしそうに俯いていた。何ごと？
「そ、その……今、腕もあまりちゃんと動かせないから……」
「え、なに、まさか……」
「……き、着替えるの、手伝ってちょうだい……」
「……」
……もう。
死ぬ。
雪ノ下がこんなことを頼むなんてよっぽどだろう。これは素早く着替えて休ませた方が良い。忘れてはいけない重要なポイントは、全部俺のせいと言う所。
「……わかった」
躊躇はしたものの頷いて、手伝うことにした。

結果から言うと、雪ノ下の着替えを手伝う途中でまた見事に勃ってしまい、服を着た彼女に脱衣所で咥えてもらいました。マジでごめんなさい。仁王立ちしたまま、膝立ちした雪ノ下に健気に咥えてもらうのが嬉しいわ気持ち良いわで……あ、マジでごめんなさい。「わたしで興奮してくれたのなら、嬉しいから、その、大丈夫よ……？」と小声で言われてまた勃ちそうになったので、急いで浴室でモノだけ洗いました。自分の性欲に呆れる。

×　×　×

「さて……」

二人とも着替えを終え、脱衣所から出る。ちなみに洗濯物は雪ノ下の下着共々一緒に洗濯機に入れた（詳しくは２ヶ月くらい前の（１２）を参照。何の話なのん？）。雪ノ下の下着を一瞬ガン見してしまい、「あれだけやっておいて……？　あなたの性欲はどうなっているの？」と小声ですんごい軽蔑交じりの罵倒を受けた。マジでごめんなさい。

リビングに向かいながら、まずすべきことを考える。

今日の比企谷家（というか比企谷兄妹）の議題：あのおバカ天使の妹の、スケベ椅子入手経路について。

可愛いけどちょっと行動が吹っ飛びすぎている小町ちゃんに、詰問しようと思います。その前に雪ノ下をソファで休ませつつ。

隣の雪ノ下をちらりと見やる。

「？　どうしたの？」

まだ半分惚けている表情をして首を傾げるのが、あまりにも可愛くて。

「ん、なんでもねぇよ」

言って、柔らかな黒髪をくしゃりと撫でた。

続く。

（２５）

「あ、お兄ちゃん、雪乃さん、お帰りなさにゃっ!?」
リビングに行き、小町がにこやかに話しかけてくるのに対して、食い気味でその両肩に手を置く。にっこり笑顔で。
「お、お兄ちゃん……？　どうしたのそんな変な顔して……？」
……にっこり笑顔で。
「小町ちゃん小町ちゃん」
「な、なんざんしょ？」
妹のキャラがおかしくなっている。
しかしそんなことは今はどうでも良い。聞いておくべきことをきちんと聞いておく。
「……あの椅子、どこで買ったかお兄ちゃんに教えてくれるかな？」
気持ち悪いくらい丁寧な口調で尋ねる。ちなみに肩に置いた手は適度に力を込めて、逃げられないようにしてます。兄妹のスキンシップって大事だよね。
小町は冷や汗をだらだらと流し、目をスプリング跳人（ホッパー）よろしく超高速で泳がせる。目ぇ回らないのん？
「え、ええっとね、その……お兄、ちゃんの……」
「ん？」
小町、もじもじ。何ごと？
「正直に言いなさい」
「お、お兄、ちゃんの、アカウント……」
「え」
心がざわつく。
「……え？」
もう一度言うと、小町がそろりと視線をこちらに向けた。
「お、お兄ちゃんの密林アカウントで……注文しちゃった……☆」
「あぁん!?」
あぁん!?
「にゃーーー！　ごめんなさいーーー！」

小町の肩を掴んでいた手を首根っこに移動して、猫を持ち上げるようにくいっと上げる。小町は目を×にして腕と足をわちゃわちゃ動かしている。マンガみたい。
「何してくれちゃってんの？　ねえ小町ちゃん、何してくれちゃってんの？」
「や、だって小町のアカウントでそんな変なの購入するの何かやだし！」
「変なのとか言うんじゃねぇよ注文したくせに」
「じゃあ卑猥なの！」
「卑猥って言うな卑猥って。ほら、雪ノ下が顔真っ赤になってるじゃねぇか」
「それ言わない方が良かったでしょ」
「いつだ？　いつやらかした？」
ちなみにまだ首根っこを摘まんだまま。ぷらんぷらんしてる。
「この間、お兄ちゃんにマンガ返しに行った時。お兄ちゃん寝てたから、ほっぺたぷにぷにするついでにポチッておいたの」
えげつねぇ。
「何その天使的所業と悪魔的所業!?　なんでセットでやったの!?」
「あ、その時お兄ちゃんの好きな動画データが開きっぱなしだったから、そこで初めてお風呂のやつを見たんだ。じっくり見て興味が湧いて、それで注文しようかなって思ったんだよ」
「あれ、俺の立つ瀬が無くなっていく!?」
「雪乃さん、ちなみにその時のお兄ちゃんの部屋は何だか栗の花の匂いがしました。知ってます？　栗の花の匂い」
「ねえなんでそれを雪ノ下にフるの？　ああもう背中に隠れちまったじゃねぇか」
超可愛いけど。超可愛いけど。
「あの女優さん、雪乃さんに似てたけど……雪乃さんの方が綺麗だねっ☆」
「お前はどこのジローラモだ」
なんかこのツッコミ、5ヶ月ぶりくらいな気がする。（1）ぶりくら

いな気がする。何の話なのん？
……と、まあ。
こんなしょうもない話を挟んだ所で、ようやく小町を下ろす。
「ふう……まったく、お兄ちゃんたら……いくら同じ猫系女子だからって、雪乃さんみたいにイジメないでよね」
「おいこらちょっとこっち来いや小町ちゃんよぉ」
「にゃーーー！」
茶番はその後、もうしばらく続いた。
× × ×
「さて、それじゃあ雪乃さんと晩御飯の準備を……って、ありゃ？」
茶番を終えて、小町がふんすっと息を吐いて気合を入れていると、雪ノ下を見て気の抜けた声を上げた。まだ俺の背中に隠れていた雪ノ下（隠れてる時間長くない？　どんだけ恥ずかしかったの？）に目をやると、何やらうつらうつらと舟をこいでいる。……まあ、そりゃそうか。
「雪ノ下、疲れたよな。ソファで休むか？」
言うと、目の下をこしこしとこする。
「……ん、大丈夫、よ……ふあ……小町さんと、料理……はうっ……」
『……』
眠気で目をとろんとさせて、口を手で隠して小さく欠伸を繰り返す雪ノ下の凶悪な可愛さに撃ち抜かれて。
俺と小町、二人揃って、死神のノートに名前だけ書かれた人の４０秒後みたいな悶え方をした。俺は動くと雪ノ下に悪いので、顔だけで表現しました。いわゆる顔面デスノート。いわゆらないし響きがやばい。
くるりと向きを変え、雪ノ下を抱きしめながらほんのりと水気を含んだ髪を撫でる。
「無理すんなって。一緒に待とう」
「そうそう。今回はお兄ちゃんが鬼畜だったからしょうがないですよ！」
「おいこら」

事実だけど。え、なんで知ってんの？　聞いてたの？
「えへへー」
え、なんでそこで鬼可愛い笑い方すんの？　何この天使？　あ、妹でしたね。
俺と小町が2人がかりで言ったのが功を奏したのか、雪ノ下が俺たちを交互に見て、そしてにこやかに微笑む。
「ん……じゃあ、お願いして良いかしら。……ふあ……っ」
『……～～～～～～～っ！』
もう1回名前を書かれた。
×　×　×
「……すう……すう……にゃー、にゃー……すう……」
「お、お兄ちゃん……ぐはっ……」
「どうした、小町……がふっ」
「……にゃーん、にゃーん、……すう、すう……」
「……ゆ、雪乃さんの寝息と寝言が可愛すぎて……集中出来ないよぉ……かはっ」
「……頑張れ、としか言いようがない……ぐほぁっ」
寝ている雪ノ下に、比企谷兄妹が2人して撃ち抜かれ続けている。もはや蜂の巣だ。
雪ノ下をソファで休ませようとして、試しに膝枕をしてみようかと思い先に座ってぽんぽんと足を叩いて招いたら、思考能力が眠気でよっぽど鈍っているのか、目をこしこしこすりながら「ん……」と幼い声で答えて、あっさりと俺の足の上に寝転がった。死ぬ。
ていうかなんなの？　にゃーにゃー言って幸せそうに微笑んでるけど、夢の中で猫と遊んでんの？　俺たちを死なせたいの？　なんなの？
小町は腰が折れ曲がって、生まれたての子鹿のごとくぷるぷるしながら料理をしている。や、これダメだろう……。これは兄として応援せねば。
「小町、頑張れ。俺はここで雪ノ下を愛でてるから」
「性的に？」

「なんでこの状態でその返しが出来る!?　しねぇよ！」
多分。
「くっそぉ……そんなことされたら雪乃さんがまた可愛くなっちゃう……小町死んじゃう……」
「その等式、悲し過ぎるな……」
俺が雪ノ下を愛でる＝雪ノ下が可愛い仕草をする＝小町死亡＝俺も死亡＝起きた雪ノ下が絶望。
なんだこの式。

×　×　×

なんだかんだ、小町は頑張っている。ちょこちょこちらを振り返っては「ごはっ！」とか言ってはぁはぁした後、「比企谷死すとも……小町は死せず」とか言ってる。それ死ぬの俺と両親じゃん。
雪ノ下は一度起きたと思ったら、寝ぼけたまま今度は俺の足をちょいちょいとつついて開かせ、股座にすっぽり収まった。俺に背中を預ける形は今はすやすや。引き続き死にそう、というか引き続き死んでる。
「……」
あごの下を指でこしょこしょ。
「ふぁ……んん……」
なでなで。
「んっ……にゃぅー……」
「……」
……。
小町が死んだ。ウソ。しかし台所にしがみついてやっとのことで姿勢を維持している。何この無駄な激戦？　料理してるだけだよね？
雪ノ下さん、今度はなんでしょう、猫になった夢でも見てるんでしょうか。
雪ノ下の夢の中身を想像していると、雪ノ下が目を閉じたままふふっと幼く笑った。
「パンさんがいっぱい……幸せだにゃー……」

言って、あごの下を撫でている俺の手に幸せそうに頬ずりをする。
「……」
いっけね、口から血が出てらぁ。あと鼻。
小町は……ダメだ、死んでる……。倒れたようでこちらからは見えない。心配で様子を見に行きたいのだが、如何せんこっちは雪ノ下の面倒を見るのに忙しい。ごめんね小町。
結局、小町がいつもの標高を取り戻す、つまり立ち上がるまでにおよそ１０分かかった。なげぇよ。
……なんだこれ。

続く。

（２６）

数多の死線をくぐり抜け、ようやくの思いで小町が調理を完遂する。「出来た―！　お兄ちゃん、小町はやった、小町はやり遂げたよ！」と、まるで四獣でも倒したかのようなテンションの高さではしゃぐ小町を見て、兄としてばりばり褒めてやった。そうか、小町は捕獲レベル３５０までならいけるのか……。

「雪ノ下、ご飯出来たぞ」

後ろから抱きしめたままで、すやすや寝息を立てている雪ノ下に声をかける。

「う……ん……」

低血圧なのか、目をゆっくり開けると緩慢な動きで辺りを見回している。状況把握なんだろうか。のろのろと周りに視線をやり、頬をくっつけるくらいの距離に居る俺を見て一言。

「……あら、濁ってるわよ？　どうしたの？」

「元々だっつの……」

寝ぼけ罵倒ってレベル高すぎない？　不意打ちで心折れそうなんだけど。

「そう……ふあぁ……すぅ」

「いや、こら、寝るな寝るな」

すげぇナチュラルに二度寝に入ったぞこの子。

「うりうり、起きろ、うりうり」

試しにほっぺたをぷにぷにとつつく。やだ柔らかい……。

雪ノ下はこれでもかってくらいに怪訝な顔をして指を避けようとするが、生憎この人差し指はホーミング機能を搭載しているため決して逃げることは出来ない。うりうり。しかし眠りかけの状態だと怪訝な顔もなんか可愛いな。ふてくされた子どもみたい。

雪ノ下は度重なる俺のいやがらせに我慢出来ず目を覚まして――という展開になると思ったのだが、不意に雪ノ下の動きが止まった。

何事か――と思っていると、不意に人差し指が温かいものに包まれる。

「え……」
目の前の光景に、目を疑った。
雪ノ下が、目を閉じたまま、俺の指をぱくりと咥えていた。エサだと思ったのだろうか、そのままぺろぺろちゅーちゅーと、起きている時なら絶対やってくれなそうなことをしてのける。ぞわわっと、何か、背徳感に近いものに背中をなぞられる。
「ぐはっ！」
近くで雄々しい悲鳴（声は可愛い）が聞こえたかと思うと、小町が血を吐きながら膝から崩れ落ちた。フローリングにだんっと強い音を立てて膝を付き、そのまま前に倒れる。顔の部分に丁度良くクッションが落ちていて、ぼふんとうずまった。そしてそのままぴくぴくと痙攣している。なんだろう、オーバーキルもいいところだな。体力ゲージが０になったのに仕合が終わらなくて、延々とローキックをげしげし食らってる感じ。
や、まあ、俺も。
「……」
目を閉じたまま、相変わらず俺の指をぺろぺろちゅーちゅーと美味しそうに咥えている雪ノ下を見て、吐血しながらがくがく痙攣していた。なんだこの兄妹。

× × ×

「あら、私結構寝ちゃって……って、２人とも、どうしたの？」
１０分程経っただろうか。
雪ノ下がようやく目を覚ましたのだが、比企谷兄妹は相変わらず死にかけていた。小町はさっきの位置のままうつ伏せになってクッションに顔をうずめて、痙攣の合間合間に「うへへへ……雪乃さんかわええのぉ……うへへへ……」と末期症状みたいなことを言ってる。駄目だこいつ……早くなんとかしないと……。カマクラは小町のクレイジーぶりを気にかけているのか、とてとてと小町の下に寄っていき、クッションに埋まった小町の頭を前足でぺしぺしやっている。平和な光景だと僕は思うんです。
かく言う俺も。

「ああ、雪ノ下。起きたかぐはっ」
「比企谷くん!?」
まだ興奮のダメージが残っていたようで、喋るだけで吐血した。やべえな俺も。

× × ×

結局、ご飯を食べている間も雪ノ下は終始眠そうにしていた。よく見ると肌艶が尋常でない程良かった。超つやっつや。絶対さっきのお風呂じゃん。なんなの、ローション様様なのと真剣にローション導入を考える。費用を考えて2秒で案を取り下げた。
小町が血反吐を吐きながら（物理的に）作った料理を1品ずつくもくもと食べては、うっすらと目を細めて、「……ん、おいし」とお姉さんっぽいような、それでいて幼さの残る声音で感想を呟いていて、小町はその度に椅子から崩れ落ちていた。いつからきみはそんなリアクション屋さんになったのん？
本当に眠そうなので、ばれないかなーと思って食事中の雪ノ下のあごをこしょこしょと撫でてみると、一瞬「？」といった表情でこちらを見るも、そのまま気にせず食べ続けていた。こしょこしょする度に気持ち良さそうに目を細める。小町は呼び掛けてもへんじがない。ただのしかばねのようだ。俺も死にそう。
「ごちそうさま。小町さん、美味しかったわ。ありがとう」
礼儀正しく両手を合わせて、雪ノ下がぺこりと頭を下げる。こういう時に育ちの良さが見えて、なんかもう他のヤツらに自慢したくなる。何をだ。他のヤツらって誰だ。
「がふぁっ、かはっ、お、お粗末さまでした……小町が、洗っときますから、雪乃さんはお兄ちゃんとテレビでも見てくつろいでてください……」
ダメージを受け過ぎたのかふらつきながら小町が言う。
「いえ、これくらいは私も……」
「小町と並んじゃだめです！　雪乃さんは小町を殺す気ですか!?　萌え死にさせたいんですか!?　きちんと小町の雪乃さんに対する耐性を見極めてもらわないと困ります！」

「えっ、えっ、えっ……？」
小町錯乱。
雪ノ下混乱。
比企谷八幡ツッコミ困難。
雪ノ下は小町の言葉に大いに動揺しながらも、渋々引き下がる。
「そ、そう、ならご厚意に甘えさせてもらうわ。それじゃあここでテレビを……」
雪ノ下の言葉に小町が髪を逆立たせた。メイちゃんかよ。
ずびっと俺の部屋の方を指差して、だだだっと捲し立てる。
「ダメです！　お兄ちゃんの部屋で見てください！　小町が後ろを振り向いた瞬間に殺す気ですか!?『振り向いて　雪乃さんを見て　果てたから　今日という日は　雪乃記念日』ですか!?」
「え、え……えっと……？」
「なんでサラダ記念日風味なんだよ」
頭を使いながら錯乱するとか器用なヤツだなぁ。辞世の句みたいだ。
小町は本来であれば、今日これまでのように俺と雪ノ下のやりとりを見たり撮ったり撮ったりしたかったのだろうけども。雪ノ下の攻撃は小町の耐久力を上回っていたようで、ここで無念のリタイアと相成った。次回の挑戦をお待ちしております。

×　×　×

自室に雪ノ下を連れて行く。片付けはしたけれど、微かに残る匂いが鼻腔をくすぐり、さっきまでの行為を思い出して下腹部が疼く。雪ノ下も同じように感じたのだろうが、頬を赤らめて俯いている。あかん、押し倒しちゃいそう。
「えぇっと、じゃあ……」
分かり切っているテレビの位置を確認して、床に置いたクッションに目をやり、雪ノ下をちらりと見る。今はただテレビを見るだけなんだけど、なんかそれでも落ち着かない。
「……先に座ってちょうだい？」
「ん？　あ、ああ、分かった」

雪ノ下の理由の分からない指示に従って先に腰を下ろそうとすると、袖を摘まんでとことこと付いてきた。数歩分の出来事なんだけど、もう、もう、もう、もう！

予想は当たり、雪ノ下は再び俺の股座に座り込んできた。どうやらこのポジションがかなりお気に召したらしい。恥ずかしいけどまあ良いか。俺が座った時点で雪ノ下の分のクッションを手に持っておいて、雪ノ下が俺のすぐ前のカーペットをじーっと見ているのを確認してさっと俺の股座に置いて、そこにすぽっと収まってくるという流れだった。猫鍋もこんな感じなんだろうか。雪ノ下が大きな段ボールの中で丸まって寝てたら、俺はもう写真を７０００枚くらい撮って起こさぬよう慎重に運んで家で大事に飼うまである。ゆき鍋……。名前のカブりはしょうがない。

漫然とテレビを点けると、バラエティで割と好きな芸人がネタをやっていた。雪ノ下ってこういうの興味無さそうだなぁ……と思っていると、

「この人たちはなんていう名前？」

と、案の定な質問をされた。名前を教えてしばし２人で鑑賞する。ううむ、笑いのツボが分からない人と一緒にこういうのを見るってなんか神経使うなぁ……今までは小町とくらいしか見ないから分からなかったけど。何それ泣いちゃう。

そんな風に思っていると、

「……ふふっ」

俺に寄りかかった体勢で、雪ノ下が口に手を当てて上品に笑った。

「おお、お前もこういうの面白いと思うのか」

言うと、雪ノ下が振り向いて不満げに眉根を寄せて、ぷくっと片頬を膨らました。死んだ。

「失礼ね、私にだって一般的なユーモア感覚はあるわよ」

さいですか。

失礼なことを言った俺に対する反撃なのか、テレビ画面を見つめたまま俺の太腿をぺちぺち。え、何この可愛い反撃？　すんごいむずがゆいんだけど。

まあ、見始めてまだ１０分も経っていない。ゆっくりするとしよう。

続く。

（２７）

俺の部屋で、雪ノ下とテレビ鑑賞会。

「……ふふっ」

お笑い芸人のネタで、意外にも雪ノ下はちょこちょこと笑っている。段々雰囲気に慣れてきたようで、笑う頻度が増えてきた。

なんとなく、なんとなーく、そんな雪ノ下を後ろから抱きしめてると、

「……んっ」

すんなりと受け入れてくれて、俺の二の腕にこてんと頬を寄せた。服の生地越しに雪ノ下の柔らかな肌の感触が伝わり、じんわりと心が温まる。

そのままテレビを見続ける。

……。

いかん。

幸せすぎて、死ぬ。

内心吐血しそうになりながら、雪ノ下の肩にあごを乗せる。ふわりと香る匂いがたまらなく心地良い。

「……なぁに、どうしたの？」

雪ノ下がお姉さんのような雰囲気で、くすりと笑って俺の頬に手を当てる。あまりに居心地が良い為、その体勢のまましばらくの間ゆっくりしていた。

× × ×

「さて、じゃあそろそろ他の番組に」

「待って」

「え？」

番組もある程度の時間観ていて、他の番組は何をやっているか調べようとリモコンを手に取ると、雪ノ下から突然の制止がかかった。

「や、どうしたんだ急に」

「あれ」

雪ノ下がこれまでと一転して、学校で見慣れたきりっとした手つき

でテレビ画面を指差す。そちらを見やると、
「……ああ、なるほど」
極めて納得の行く企画がやっていた。
『さあ、今回はパンさん特集です！　今月都内にオープンしたパンさん専門店が大変人気になっており、話題を呼んでいます』
云々かんぬん。
「……」
うっわ。
すげぇ真剣な目つきで見てる。
多分、多分だけど、この子、受験の時より今の方が真剣な気がする。
話しかけない方が良いのか？　しかしこの緊張感に、密着した状態で耐えるのはちょっと……。
「あの、雪ノし」
「静かに」
「……」
……えぇぇ……ここ、映画館か何か？　それか美術館。
喋らせてもらえないなら、せめて撫でよう……なんて思い、雪ノ下の頭をくしゃりと撫でる。
「……」
超絶無反応。
つら。
「ゆ、雪ノ下さ～ん、お元気で」
「静かに」
「……はい」
この部屋には、鬼が居る。
結局、そこから10分程、俺は雪ノ下の首に腕を回したまま微動だに出来なかった。
×　×　×
パンさん特集が終わって、雪ノ下がふっと息を吐いた。俺は雪ノ下に密着したまま何も出来ない生殺し状態で居た為にすっかりグロッキーです。ヒッキーグロッキ……うるせぇよ。

「……どうしたの？」
「……なんでもねぇよ？」
「……？　……あ、もしかして……。……ごめんなさい、ちょっと真剣になりすぎたかもしれないわ」
げんなりしている俺の雰囲気に気付いたのか、雪ノ下が振り向いて心配そうに眉を寄せて謝ってきた。この子もすっかり素直になったもんだとしみじみ思う。ちょっとどころじゃない真剣味でしたけどね！
鼻と鼻が付きそうなくらい近付くと、雪ノ下の甘い吐息がふわりと香って、たまらなく愛おしくなって唇を重ねた。
「んっ……」
雪ノ下の唇の柔らかさと、身体にじんわり染み込んでくる香りがする吐息と、うっすら目を細めた色っぽい表情を楽しむ為の、優しいキス。舌を入れるとあっと言う間にお互いのスイッチが入ってしまうから、今はしないでおく。
唇を離すと、雪ノ下は微かに眉根を寄せて、どこか寂しそうな顔をした。待って待って、またスイッチ入るから。
その表情をあまり長い時間見ないように、くしゃくしゃと髪を撫でる。絹の糸のように滑らかな髪の毛の感触は、本当に同じ人間なのかと疑ってしまう程指に心地良い。
「気にすんなって。好きなものの前だと我を失うもんだよな」
拙いなりにフォローをすると、雪ノ下が柔らかく微笑んだ。この微笑み方は、徐々に見せてくれるようになっていたから良かった。もし初対面でこんな微笑み方をされたら、その場で告白してフラれて奉仕部に入らなかった可能性さえある。
「あら、あなたもそうなのかしら？」
くすっと笑いながら雪ノ下が言う。
――何も、本当に何も考えず、いつものような軽口のつもりで、
「ああ、そうだな。俺もお前と居るといっつも我を失ってるぞ」
「え……」
「あ……」

はい。
放送事故、ドーン。
「……そ、そう……」
雪ノ下さん、目を背けないで。耳まで真っ赤なの見えてますよ。
「……」
おい、八幡。おい、比企谷八幡。うおぉぉぉぉい、比企谷八幡くーん!?
このタイミングで、なーに小っ恥ずかしいこと言っちゃってんの!?
うわーん！　やべぇよ！　身体が熱いよ！　雪ノ下の身体も熱くなってるよー！　これと同じ現象が風邪っ引きの時に起きたら1時間くらいで菌がやられて完治しちゃうよー！
この体勢では逃げるのも厳しい。俺は俯いて膝におでこを引っ付けている雪ノ下さえも視界に入れないように、ぐぎぎと首を背ける。
「……」
「……」
無言。無言。無言。
これはマジできつい。
「……そ、その……」
沈黙に耐え兼ねて、雪ノ下は俯いたまま、気遣いと恥ずかしさと気まずさに満ち満ちた声音で小さく切り出した。
「……ん」
短く声を発して続きを促すと、雪ノ下が顔を上げてもじもじとしながらこちらに目を向けた。その表情は色っぽいといった類ではなく、純粋な……自分で言うのは非常に難だが……乙女の瞳だと思った。
「……わ、悪い気は、……しない、わ……」
「……そ、そうか……」
「え、ええ……」
「……そう、か……」
「……そう、よ……」
死にそう。
2人の熱量が、なんだかんだでもう一段階上がった。

×　×　×

復帰にしばらく時間がかかったものの、ようやく落ち着いてきて、再びテレビ番組を観始める。雪ノ下は時折くすりと笑っては、身体を小さく揺らす。その慎ましい笑い方が何とも愛くるしい。俺は先程と同様に雪ノ下の首に腕を巻いて、ふわりと抱きしめたままテレビを見ていた。雪ノ下は特にそれを気にする様子も無く、平和そのものな時間が流れている。

……うん、なんか、良い。

穏やかな時間に身も心も浸っていると、ふと、雪ノ下が俺の手を握った。そしてにぎにぎとしながら、俺の二の腕にこてんともたれかかった。滑らかな髪の感触と小さな耳たぶの儚い感触がして、どきりと胸が高鳴る。

雪ノ下は何も言わず、二の腕に頬をすりすりとこすり付けてくる。俺の手をにぎにぎする手は2本に増えていて、段々と……むらむらしてきた。や、待て、まだじゃれついているだけの可能性もあるじゃないか。この甘ったるい空気の中、俺が性欲の暴走を見せて流れを壊すなんて真似したことないし出来る訳もない。うそ。壊したことは多分結構ありますごめんなさい。しかし過去はどうであれ、今はなるべく雪ノ下を無理やりどうかしてしまうなんてことはしたくない。言い方がまずすぎるなこれ。

などと悶々と考えていたら、雪ノ下が顔をこちらに向けた。唇と唇が触れる程の距離で、目をうっすら開けて、くいくいと首を動かしてまるでおねだりするような仕草を見せる。

……おねだりするような、ではなくて、これはもう、紛れもなくおねだりだよな……？

雪ノ下の瞳は潤んでいて、薄めの唇は物欲しそうに震えている。慌てるな、落ち着いて、落ち着いて……と自分に言い聞かせながら、ゆっくり唇を重ねる。

「……っ」

驚いた。

さっきとはまるで違う温度の唇に反応して、急激に下半身に血液が

集まる。
「んっ……ふぅっ……」
雪ノ下は唇を重ねたまま、ゆっくり身体を反転させて俺と正面から向かい合う体勢になった。体育座りのような体勢をとっている俺の足の隙間に雪ノ下は足を通して、女の子座りになっている。
どうしたんだ急に……と戸惑っていると、口の中に舌が侵入してきた。
「んふぅっ……ちゅぷ、ぴちゃ、れる、ちゅる、ちゅぴ、ちゅぽ、ちゅりゅりゅ、れろれろ……んっ、んんっ……」
「〜〜〜〜〜〜〜っ」
体液と吐息が染み込んでくる濃密なキスに、視界が明滅する。
そうか、雪ノ下はもう、発情しているんだ――そう思った途端、雪ノ下の身体をもっと味わいたくなって、雪ノ下の首から耳の下にかけての肌に手を添えた。
「んはぁっ……!?」
唾液の糸が伸びるのも厭わず、雪ノ下が艶っぽい声を上げて唇を離した。
「え……？」
突然の事態に、俺も雪ノ下も呆然とする。
「あ、わ、私、今、え……？　比企谷くんに触られただけ……なのに……」
雪ノ下の首に目をやると、ぶわっと鳥肌が立っている。自分の指先にも、雪ノ下の快感が伝わったかのように甘い痺れが残っている。
……敏感なのは十分分かっていたけど、なんでここにきて……？
ほんのついさっきまでは何とも無かったのに。
不安げな雪ノ下の顔を見てこのままではいけないと思い、短い時間で頭をフル回転させる。今まで過ごした時間、そして特に今日一日してきたこと、それらを思い出す。
……。
何となく見当はついた。ふっとため息が漏れる。
「……雪ノ下、大丈夫だ」

「え……？」
　自分の身体はどうなってしまったのかと不安がる雪ノ下の揺れる瞳に、出来るだけ気さくな調子で語りかける。
「あー、その、なんだ。俺とお前はさ、結構、その、なんだ、こういうことをしてきた訳だろ？　それで益々身体が……開発されたんじゃねぇかなって」
「な……っ」
「まあ待て、最後まで聞いてくれ」
　顔を真っ赤にする雪ノ下を宥めて、話を続ける。
「そんで、それに加えて……さっき、俺がぽろっと言っちまった言葉も関係あるのかもしれない。後は……さっきみたいに、こういう事をする気が無い時は何とも無いように身体が上手いこと働いてくれて、いざスイッチが入るとその分一気に反応しやすくなる……のかもしれない。あくまで仮説だけどな」
「あ、それ……あう……うぅ……」
　ある程度納得したからだろうか、物凄い勢いで赤面して、湯気が止めどなく立ち上る。
　どれか1つが正解ではなく、或いは3つとも正解なのかもしれない。心と身体は密接に繋がっているからこそ、身体と身体との繋がり、気持ちと気持ちとの繋がり、そして気持ちの切り替え等様々な要素が絡んで、雪ノ下の今の状態が出来上がったのかもしれない。そしてそのスイッチは、たまたまなのか必然なのかも分からないが、雪ノ下からの濃厚なキスではなく、俺からの軽いタッチだった――のかもしれない。
　ぞくぞくとして、好奇心が止めどなく湧いてくる。雪ノ下は、もしかしたら俺も本人もまだまだ知り得ない境地があるのかもしれない。
「雪ノ下……んっ」
「んんんっ……!?」
　試しに、俺から口付けをする。恐らく舌を入れるととんでもないことになるので、取り敢えず唇が触れ合うだけのキスを……と思ったのだが、たったそれだけで、雪ノ下はまるで乳房の突起を弄り回されて

いるかのように激しく反応する。
「んふぁっ、ふあぁ……っ」
とろとろに蕩けた目になって、腕がだらんと垂れ下がる。
舌を絡め合っていないにも関わらず、唇を離すと2人の間に糸が引いた。何事かと思い雪ノ下の顔を見ると、唇の端から我慢出来なくて零れ出た唾液が伝っている。唾液を口内に留めることさえ我慢出来なくなっているのだ。
止まらないどころか益々溢れ出して来るぞくぞくに身体の中を掻きむしられながら、今度は両耳に手を伸ばす。
「んひぃっ……！」
雪ノ下が淫らな声を上げて、肩を竦めて涙目になりながら、歯をかちかちと鳴らした。
「雪ノ下、これ、気持ち良いんだな？」
痛い程張り詰めた股間の膨らみを強く自覚しながら、雪ノ下の耳の中を丁寧に指の腹で撫でて犯す。
「あっ……ひっ、だ、だめ、これ、もう、もう……っ」
涙声で首をいやいやと振る雪ノ下に我慢ならなくなり、ずいと顔を近付けて、その耳の中にちゅっと軽く舌を挿し込むと、
「あ――」
一瞬だけ声を上げた次の瞬間、全身を激しく痙攣させて、くてんと仰向けに倒れた。慌てて頭を押さえてぶつけないようにする。
……覚醒するにも、程があるだろう……。
初めて雪ノ下の肩を揉んだ時のことを思い出す。あの時のことは人生最大の衝撃と言っても過言ではなかったが、今、それを上回ることが起きた、そう感じた。
「雪ノ下……ベッド、移動するぞ」
ぐったりしている雪ノ下の背中と膝の裏に手を回して、ひょいと持ち上げる。予想以上に軽くて驚いたが、それ以上に、
「あふぁ……っ！」
悲鳴じみた喘ぎ声を上げて、俺の腕の中で再び痙攣した雪ノ下の反応に戦慄さえ覚えた。

ベッドに寝かせると、身体を断続的に震わせながらも虚ろな目で俺を見ている。
ちらりとテーブルに目をやる。どれくらいの時間部屋に居るかも分からないから、念の為にと水やその他の飲み物を沢山置いておいた。これなら大丈夫だろう。
「雪ノ下……じっくり楽しむか」
「ひあぁ……っ」
雪ノ下は泣きそうな声を上げたが、抵抗の素振りはまるで見せない。
これでいきなり裸にひん剥いて愛撫や挿入なんてしては勿体ない。第一それでは雪ノ下が壊れてしまうかもしれない。
慎重に、愛おしんで、ねっとりと。
どこから触ろうか――夢を膨らませながら、雪ノ下の横に腰を下ろした。
続く。

（２８）

雪ノ下がベッドに横たわって、半ば怯えで、そしてもう半ばが期待で満ちた瞳で俺を見つめる。妖しい熱気と匂いが立ち込めるベッドの上は、寝転がり慣れた空間とは思えない異質さを放っている。

「雪ノ下……」

名前を呼んで、その頬にそっと手を添える。

「あっ、あぁっ、んぁっ……」

わずかな指の動きにも目を細めて小さく喘ぐ。その不安げな表情にぞくぞくとした快感を覚える。

「耳と首、どっちが感じる？」

穏やかな調子で尋ねながら、左手で雪ノ下の右耳を、右手で雪ノ下の左側の首を撫でる。

「あぁっ……！　だ、だめ、それ、うぁっ……」

「どっちが感じるんだ？」

雪ノ下の抵抗を意に介さず質問を続けると、耳まで真っ赤にした雪ノ下の綺麗な唇が震える。

「……ど、どっちも、同じくらい……やんっ！　も、もう、よく分からない……ひゃんっ！　……わよっ……んくぁぁっ！」

「……」

な、なんだろう。

今更ながら、物凄い背徳感。

一体この子は、どこまで感じるんだろうか？　興味が尽きない。せっかくなので、丁寧に検証してみることにした。今後のため。うん、今後のため。

雪ノ下の腰を挟むように膝を付き、彼女の手を軽く握る。

「あっ……」

これだけでもぴくんと反応した。

そのまま……雪ノ下の手のひらを舐めてみる。ぺろりと舌で撫でると、雪ノ下が目をむいた。

「ひあぁ……っ！」

すべすべした手のひらの感触を楽しみながら、そのまま指と指との間を舌でなぞっていく。小指の側面を舐め、薬指に差し掛かり、中指へ……丁寧になぞっていくと、雪ノ下は左手でシーツを掴んで泣きそうな顔になっていた。

「あぁっ、あっ、うそ、私、指でっ、こんなっ、ひあぁっ!?」

中指をぱっくりと咥え込むと、雪ノ下が背筋を反らせて痙攣した。危なくないように手首を掴んでおいて正解だった。

そのまま中指を舐りつつ、雪ノ下の左手を俺の股間に引き寄せる。手が触れると、雪ノ下は一瞬ぴくっと震えたものの、すぐさま愛おしそうに撫で始めた。俺が中指を舐めるのに合わせて、股間を這わせる指を動かす。意識しているのか無意識なのかは分からないが、その動きは緩慢でひどくいやらしい。頭が焼け付くような時間だった。

「あん……」

指から口を離すと、雪ノ下はさっきまで俺に舐められていた指を呆然と眺めて甘い吐息を漏らし、その指に今度は雪ノ下自身がしゃぶりついた。

「う……お……」

自らの中指を恍惚とした表情でしゃぶりながら、左手で俺の股間を愛で続ける雪ノ下のいやらしい姿態に息を呑む。その目は虚ろながらもしっかりと俺の股間を見つめていた。

「ゆ、雪ノ下……脱がすぞ」

震える声でそう告げて身体をどかすと、雪ノ下は自分の手の中指の側面を舌先でなぞりながら目を細めて頷く。起き上がるのを手伝おうと背中に手を回しつつ、背中を軽く服越しに撫でると、飛び上がるように俺の胸に顔をうずめて小さく鳴いた。

× × ×

雪ノ下の服を脱がせて、ショーツ1枚にした。全て脱がさなかったのは……果たして、このショーツがどこまで濡れるのかということを試したかったからだった。ショーツ越しでも既にむわむわと雌の匂いが漂っていて我慢出来ず、雪ノ下の上裸姿を見つめながら全裸になる。雪ノ下の艶姿と匂いにやられて、既に鈴口にはカウパーがじんわ

りと滲んでいた。
正面に向き合って座り、互いの身体を見つめると、2人してごくりと喉を鳴らした。
「あ……すごい……」
肉棒から発される雄の匂いに反応したのか、雪ノ下がゆっくりと顔を近付けてくる。今この状態で咥えられようものならすぐに果ててしまうと思い、雪ノ下の頬を手で挟んでそれを阻止する。俺に手で押さえられて、「あん……」と焦れったそうに目を細めて拗ねた顔をするのがあまりに可愛くて、その細くて白い首にむしゃぶりついた。
「んはぁっ！　やっ、あんっ、だ……め……っ、ひぐぅっ！」
俺に抱き付かれるがままになりながら、耳元で可愛らしい喘ぎ声を上げる。
その勢いで両手を双丘の上に乗せると――
「かはっ」
雪ノ下が白い喉を見せて、息を強く吐き出した。俺の手は雪ノ下の乳房を揉んでもおらず、本当に表面に触れているだけだ。激しい期待感に身体が包まれながら両手にきゅっと力を入れると、
「ひぎっ……！」
涙声で嬌声を上げて、雪ノ下の手が俺の股間に伸びてきた。両手で亀頭と竿をがっしり掴むと、絹糸のような指が敏感な男性器を刺激して、急激に腰が引けた。
「こ、この……んむっ」
反撃のために雪ノ下を抱き寄せて、乳房の突起にちゅっと口付けすると、
「あああ……っ！」
雪ノ下が身体を屈め、胡坐をかく俺の太腿の上に足を乗せ、俺の背中に足を回して絡み付いてきた。更にその状態で、快感に喘ぎながらペニスを激しく上下にこすり立てる。
「ちょ、こら……この……っ！」
俺も手に力が入らなくなっていたので、乳房の愛撫による快感で雪ノ下の手を止めようとするが、いくら快感に身を震わせても、雪ノ下

は手を止めない。
「ま、待て、待て待て、こんなのすぐ出ちまう……っ！」
「あぁっ、あふぁっ、気持ちいっ、やっ、だめ、こんなの、すぐ……っ」
俺は呼吸も忘れて雪ノ下の乳房に吸い付いて。
雪ノ下は天を仰ぎながら肉棒をぐちゅぐちゅとしごきあげて。。
わずか数十秒後、２人は激しく身を反らせて果てた。
× × ×
「あぁっ、あっ、ひあぁっ……お、お腹、熱い……」
２人とも激しく息を切らしながら互いを見つめる。雪ノ下のお腹には大量に噴射した男のエキスが撒き散らされていて、白い肌に降りた粘度の高い白濁液は恐ろしい程扇情的だった。
「雪ノ下……お前、もう、太ももまでびしょびしょだぞ……」
雪ノ下が履いているショーツは既に、お湯を垂らしたのかと思う程熱くなって体積を増していて、互いの太ももが触れる部分がびっしょりと熱い液体に覆われていた。雪ノ下の淫液の匂いと精液の匂いが混じり合い、この場にいるだけでいってしまいそうだ。
俺の言葉に雪ノ下が眉根を寄せて、頬をぽっと紅潮させる。
「あ……や、恥ずかしい……」
そんな初心なことを言いながらもその顔はうっとりとしていて、手の指に纏わりついた白濁を丁寧に舐め取っている。言動と挙動の淫らなギャップに鼓動が高鳴る。
ショーツに手を伸ばし、熱い窪みをくいと押すと、悲鳴じみた喘ぎ声が目の前で鳴った。
「あふぁぁぁっ！」
ショーツ越しに押しただけなのに、手触りはぐしょりとしていて熱く、ボタンを押すように指で押し込む度にぐしゅぐしゅといやらしい音を立てて、押し込んだ分だけ中にめり込んだ。
「あんっ！　あふぅっ！　あぁぁ……っ！」
雪ノ下は腕を俺の背中に回し、胸に顔をうずめて何度も鳴く。
――きっとこのまま愛撫を続ければ、全身ありとあらゆる場所で何度でも絶頂に導けるんだろう。でも、もう……我慢出来ない。

そう思った時、雪ノ下が耳元で囁いた。
「比企谷……くん……もう……しましょう？　……我慢、出来ないの」
劣情を煽る言葉と一緒に熱い吐息がかけられて、激しく興奮する。
同じタイミングで同じことを考えていた喜びがふつふつと湧く。
「……わかった。俺もしたい。……大丈夫か？」
念のため聞くと、雪ノ下がこちらに顔を向けて穏やかに微笑む。
「ふふ……もう。……大丈夫なわけないでしょう？　正直、どうなってしまうのか怖くてしょうがないわ。……でも、それでもしたいの。どんなになっても良いから、好きなようにいっぱい動いて。そして私を……たくさんいかせて？」
雪ノ下は信じられない程淫らな言葉を紡いで妖しく微笑むと、肉棒をきゅっと掴んだ。
うっと呻き声を漏らして、肉棒を握る雪ノ下の手を更に上から手で包み込む。
「わかった。……絶対、止めないからな。……じゃ、下、脱いでくれ」
「……はい」
ぞくり、と快感が背筋を駆け抜ける。
耳元でたった2文字囁かれただけで、勃起が更に増した。
雪ノ下のショーツを見やり、この中の熱い肉欲の海に挿入した時の快感は、一体どれほどのものなのかという妖しい期待で心が跳ねた。
続く。

（２９）

雪ノ下に後ろを向かせ、膝立ちになってもらう。緊張しているのか腕で胸を覆っていて、白く透き通るような背中にじんわりと汗が浮かんでいる姿は思わず見惚れて息を呑むほど美しい。

「そ、それじゃあ、脱ぐわよ……？」

「ああ、頼む」

膝立ちで、尻を突き出すようにしてショーツを脱いでもらう――平常時にこんな恥ずかしいお願いをしていたらどれだけ冷たい視線を浴びせられたか分かったもんじゃなかったが、今の雪ノ下は情欲に塗れていて、こういうお願いもかなり聞いてくれる。

雪ノ下の白く細い指がショーツに引っかけられ、「んっ……」と艶っぽい声を小さく漏らすと、身体を屈めてゆっくりショーツを下ろした。

その淫靡な光景に、数瞬、呼吸を忘れる。

ぐしょぐしょに濡れて重みを増したショーツが膝まで引き下ろされると、むわっとした甘酸っぱい香りが、顔を近付けなくても漂ってきた。その香りの中心にある蜜壺は男の欲望を今か今かと待ち焦がれているかのように濡れそぼっていて、こちらに婀娜っぽい流し目を送る雪ノ下の瞳も、下腹部同様に官能の火を灯している。

「ひ、比企谷、くん、も、もう、私、限界なの……っ」

小ぶりで色気をたっぷりと湛えた尻をじっと見つめていると、尻肉が艶めかしく左右に揺れた。たったそれだけの行為で、昂奮が爆発的に高まる。雪ノ下は泣きそうな声で交尾を求める声を上げて、ショーツを膝にかけたまま四つん這いになって熱っぽい視線をこちらに向けた。極上の御馳走を目の前に用意されて、ごくりと喉を鳴らす。

「……ああ、じゃあ……挿れるぞ」

竿に手を添えて、カウパーがじんわりと滲んだ亀頭を、ぴとりと雪ノ下の淫裂にあてがう。

「ひっ……!?」

たったそれだけの行為で、雪ノ下がベッドに顔を突っ伏してぶるぶ

ると震えた。
――ここから一体、どれほどの快感が待ち構えているのか――
期待と緊張を胸に抱きながら、雪ノ下の尻に手を添えて、ずぶりと挿入した。

× × ×

「うおぉ……っ!?」
雪ノ下はいつもよりも更に格段に敏感になっていて、当然挿入時の締め付けもきつくなるはず――そういう想定はしっかりしていて、その心づもりで肉棒を突き入れたのだけど……。
「ひぐぅぅ……っ！」
雪ノ下の獣じみた嬌声と共に膣肉が肉棒を締め付けてくると、その想定は甘かったことに気付いた。まだ亀頭と竿の一部分しか挿入していないというのに、肉襞の中の無数の舌が亀頭や雁首、裏筋を強烈に愛撫してきて、きゅきゅきゅっと締め付けてくる。
我慢していたのもあったし、油断をしていたのもあったが――限界は、あっと言う間に訪れた。
「ゆ、雪ノ下、だ、だめだ、も、出る……っ！」
「えっ……ひあぁぁぁっ!?」
ごぶっ、どぶっ、どぶぶぶっ……。
肉茎の半分程を挿入しただけで、四つん這いの雪ノ下の膣内に大量の熱いマグマを解き放った。膣肉の通路に白濁液が塗されて染み込んで行く。
「んおぉぁぁぁ……っ」
雪ノ下の淫裂から大量の粘液と白濁液がブレンドされたものが溢れ出て、白磁のような肌をした背中がびくんびくんと反り返っては曲がる。
「な、なんだこれ、こんなに締め付けられたら、俺もう……って、うあぁぁ……っ!?」
射精した位置で止めていた肉棒が、突如として更なる奥に入り込んでいく。何故かと思って前を見ると、雪ノ下が顔を突っ伏したまま尻をこちらに突き出していた。

「ちょ、おい、雪ノ下、やばいって、これ、そんな風にされたら……うぐぁっ、また出る……っ！」
強制的に肉襞の蠢く舌に嬲られる部分が増やされて、射精したばかりで敏感になった肉棒に絡み付く快楽が更に倍増する。頭が焼け付くような悦楽と共に、再び肉棒が数回脈打ち、白濁液が雪ノ下の子宮に叩き付けられる。
「あぁっ、あ、熱い、比企谷くんの、熱い……んあぁっ！」
精液を体内に放出されて、雪ノ下の尻が今度は上下左右と回ようにくねり、勃起に更なる刺激を与えてくる。
「ま、待て、待ってくれ……これ……うぐぅ……っ！」
腰を引けばその分雪ノ下も尻を突き出してくる為逃げられずにいると、たまらず3回目の射精をする。この数字ももはや正確ではなく、雪ノ下の快楽の壺の中に肉棒を挿入していると、自分が一体いつ射精をしていて、いつ射精をしていないのかがもはや分からなくなっていた。まるでおもらしをしているかのごとく、欲望の白濁液を垂れ流して漏らし続ける。
「あ～っ……あ～っ……あ～っ」
何か、目覚めたのだろうか。恐らく即座に失神・失禁するだろうと思っていた雪ノ下は、幾度となく絶頂に達して激しく太腿を震わせながらも、目には官能の光を宿らせたまま、いっそう激しく膣肉を蠢かせ、埋没した肉棒にまとわりつかせてくる。ショーツを膝で止めているためにまるで拘束されたように見えて、フリフリと目の前で求愛の踊りを見せる尻の扇情的な姿態と相俟って、いくら射精しても収まらなくなる程の昂ぶりをもたらす。
「くぅぁっ……な、何なんだよ、もう……っ！」
雪ノ下の変貌があまりにも艶めかしく、それに触発されていっそもっと徹底的にやってやろうと思い、雪ノ下のお腹を抱きかかえてこてんと仰向けにする。
「んぁ……？」
色っぽい中にも幼さを残した雪ノ下の顔が何事かと疑問の色を浮かべる中、ショーツをがばっと一気に脱がす。そしてそのまま躊躇無

しで、淫液と白濁液で泡立った淫裂に肉棒を挿し込んだ。

×　×　×

「んあぁぁぁぁ……っ！」

一気に押し込むと、雪ノ下がベッドのシーツを掴んで白い喉を見せた。絶頂によりびーんとVの字に伸びた足のひざ裏を掴むと、ずるりと肉棒を引き抜いて、再び突き入れる。

「あおぉぉぉ……っ」

何度も連続で抽送を繰り返すと、雪ノ下の長い喘ぎ声が部屋に響いた。結合部からは止めどなく淫液と白濁液が溢れてでて、ばちゅんっ、ばちゅんっといやらしい音を立てている。それらと汗の匂いが混じって、この場に居るだけでも興奮のあまり意識が遠のきそうになる程卑猥な空間が醸成されていた。

「はっ、ひぁっ、へひっ、ひき、ひきが、や、くん……ひきがやくん……」

膝立ちで、いくら射精しようが気にせず狂ったように腰を振り続ける俺に、雪ノ下が腕を伸ばしてきた。

「……ん」

肉棒を最奥まで突き入れて、その腕に応えて覆いかぶさって抱きしめる。

「わ、私ね……？　もう、本当に限界みたい。多分、次出されたら、もう、その……意識が飛ぶと思うから、だから、その……」

「？　なんだよ？」

ここに来て新たなリクエストだなんて、一体どんなエロい要求を――と思っていたら。

雪ノ下が頬を赤らめてもじもじとしたかと思うと、俺の目をじっと見つめた。

「ゆ、雪乃って……呼んで？」

「……っ」

心臓が、どくんと鳴った。

「だ、だめ、かしら……？」

「あ、やぁ、その……」

ここまでやっておいてなんだけど、今更なはずなんだけど、超恥ず

かしい。えー、これどういしようかな……と思っていると、雪ノ下が悲し気に眉根を寄せた。
「あ……だ、だめ……かしら……」
「え……」
雪ノ下の目にじんわりと涙が浮かんで、盛大に慌てる。
「ま、待て、待て待て。だめなんてことは全く無いんだ。だから泣くなよ、な？」
「で、でも……」
しまった、いくらフォローしたところで、この場では実際に名前で呼ばなければまず事態は改善しない。
うぐぁ……超恥ずかしい。本当に恥ずかしい。でも、この子を泣かせたくはない。
頭をがしがしと掻いて、覚悟を決める。
「……雪乃」
「え……？」
雪ノ下……いや、雪乃が、きょとんとした顔を見せる。ああもう可愛いなぁ。
「だから……雪乃。ほら、これで良いか？」
言うと、雪乃が目の下を指で拭って、くすりと笑う。
「ふふ……なぁに？　その素直じゃない言い方」
「うるせぇよ……」
「じゃあ、最後は……手を繋いでしましょう？　八幡」
「ああ、分かった……って、え？」
聞き慣れない４文字に唖然として雪乃に目をやると、顔がばっちり横を向いていた。平静を装うとしているようだが、耳まで真っ赤になっている。何この可愛すぎる女の子……！
「ほら、手繋ごうぜ、雪乃。ところで俺の名前ってなんだっけか？　雪乃」
雪乃が恥ずかしがっていることで却って冷静になったために試しに煽ってみると、すんごい冷たい目で睨まれた。
「……調子に乗らないの」

「す、すいません……」
俺、弱っ。
しゅんとした俺を見て、雪乃がくすりと笑う。
「ふふ……まったく、あなたといるといまいち締まらないわね、八幡」
「ああ、そうだな」
まだ顔が赤いが、そこはまあ触れないでおこう。
両手を繋ぐと、白く細い指が心地良く包み込んで来た。
「あったかい……」
雪乃の言葉を聞いて、この子も同じことを感じていたのかと思い、むずがゆくなる。
「そうだな。……じゃ、行くぞ」
「ええ。……んふぁぁ……っ！」
肉棒が抜ける寸前まで腰を引くと、雪乃が幸せそうに鳴いた。

続く。

（３０）

「ひぁぁぁぁっ！」

肉棒を一気に奥まで突き入れると、甘い喘ぎ声が耳朶を打った。

手を繋いだことで、心も身体も繋がりを感じて互いに敏感になっている上に、腰を打ち付ける瞬間に手を引くことでより一層強く打ち付けることが出来るようになったため、雪乃も俺も身体を突き抜ける快感が恐ろしい程高まっていた。

「もう止めねぇぞ……最後まで行くからな……っ！」

雪乃が気をやる瞬間まで射精を我慢しようとして、震える声で告げながら抽送を続ける。

ずちゅ、ぐちゅっ、ずりゅりゅっ、と淫猥な音を立てながら腰を打ち付けると、雪乃が快感であごを反り返らせそうになるが、それでも必死に堪えて俺の顔を見つめていることに気付く。たまらなく愛おしくなり唇を重ねると、

「あふっ……んっ、ふぅんっ……」

甘い声を漏らして、目に涙を溜めながら肉棒を受け入れる。舌を口内に入れると、嬉しそうに出迎えてきた。互いの唾液を混ぜ合い、興奮と愛情を分け合う。甘い唾液の味に酔いしれながら、尚も腰を振り続ける。

「も、もう、イク、ぞっ……出すぞ……雪乃……っ」

「き、きて、きて……八幡……っ」

身体の奥底からせり上がってくるマグマの奔流に身悶えしながら、手を強く握り合って一気に腰の振りを速める。いよいよ射精の瞬間が近付いてきたと思った瞬間、大きく息を吸いこんで全力で亀頭を子宮にめり込ませると、

「ひぁっ……あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……っ！」

「うぐ……っ！」

雪乃が目を細めて、俺の背中に足を回してぐっと引き寄せながら全身を激しく痙攣させると、肉襞の締め付けが一気に増した。精液を求めるような膣肉の蠕動に、下半身が決壊する。

「で、出る、射精すぞ……っ！」
言った直後に、まるで全身が持って行かれたかのように思える程の強い快楽と共に、大量の精液を雪乃の子宮に注ぎ込んだ。
「あふぁっ！　あつっ、熱…い……ひぁぁぁぁぁ……っ！」
どくっ、どくどくっ、ごぶっ、びゅるるっ、どくどくどくっ……。
終わりの見えない脈動で幾度と無く白濁液を注ぎ込む。既に何度も膣内で射精していたこともあり雪乃のお腹はぽっこりと膨れて、膣口からは白濁液がぶびゅっごぶっと卑猥な音を立てながら溢れ出していた。
「あっ、あっ、あっ、は……はち、八幡、八幡……」
「はぁっ、はぁっ、はぁっ、雪乃、雪乃……」
繋がったまま、雪乃と抱き合う。
雪乃は失神こそしなかったが、その下腹部からはちろちろと液体が溢れ出していた。
「……ゆっくり休んでろよ」
「……ええ、お言葉に甘えて、そうさせてもらうわ」
元々体力が無いのに、更に敏感になった身体で行為に及んだのだから、その負担は相当なものだったろう。穏やかに微笑むと、間も無く雪乃は俺の腕の中ですやすやと寝息を立て始めた。

×　×　×

雪乃の身体を拭いて、今出来る範囲での後片付けをした。一応雪乃が寝ているすぐ横にペットボトルを置いておく。
すやすやと寝息を立てている雪乃の寝顔は、満足して眠っている猫のように無邪気で可愛らしい。
「……」
……。
雪乃の横のベッド際に腰掛けて、考える。
……今までずっと苗字で呼んでたのに、急に名前呼びって恥ずかしくないですか？
「……」
……あああぁぁぁぁぁぁぁ！　よく考えたらさっきのすんごい恥

ずかしいじゃん！　めっちゃ恥ずかしいじゃん！　うおあああああああ！
顔を手で覆い天を仰ぐ。それでも尚恥ずかしい。恥ずかしい。恥ずかしい！
おい、おい、俺。
何急に名前で呼んでんの？　ああもう恥ずかしい！　穴があったら入りたい！　そしてやたらめったら穴を掘って地下空間を作って自活出来るようにしたい！　そしてあまつさえ俺のような恥ずかしいことをしでかした穴があったら入りたい人間を集めて一大帝国を作りたい。やだ、俺ったら働き者……。
や、そうじゃなくて。
ああもう俺はこれからどうしたら良いんだ。恥ずかしくなったら
「ゆきの……した」とかって言って誤魔化せば良いのか。絶対怒られるよどうしよう。ああもう恥ずかしい。私は貝になりたい。そして黒木場に美味しく調理されたい。調理されちゃうのかよ。
「……ん？」
これから送るであろう恥の多い人生を思って死にかけていると、ふと手が温かいものに包まれた。振り返ると、雪乃が目を覚まして、俺に手を重ねていた。
「おう。目ぇ覚めたか」
「ええ……色々片付けてもらって悪いわね、ありがとう」
「ああ、気にすんな。大したことじゃねぇし」
大したことあるのは名前呼びの方だしね。雪乃が忘れてくれてたら良いんだけど……なんで手をにぎにぎしてるのん？
雪乃は繋いだ手を見つめて目を細めると、俺に目を向けていたらずらっぽく笑った。
「それで、あなたはこれからもきちんと名前で呼んでくれるのよね？」
あかん。逃げられない。
でも、ちょっと粘る。
「何のことだ？」
「ここに来てとぼけるとは、いっそ清々しいわね……」

「俺はいつだって清々しいぞ。どろどろしたものなんてのは対人関係で生じるもんだろう。だからぼっちの俺はいつだって清いんだ」
「あなたが清いというのは勘違いも甚だしいけれど……清い水に魚が住まないのと同じで、あなたの周りに人が寄り付かないという意味では正解ね」
「おい、俺のどこか清くないって言うんだ」
「性癖」
「んぐぁっ」
喉の奥で変な音が鳴った。
「それで、あなたは私の名前を知ってるのかしら？」
さっきのお返しと言わんばかりの、気持ちの良い笑顔。ええ、とっても素敵だと思いますよ、その勝ち誇った顔。
「何だその意地の悪い聞き方は……」
「あら、私は意地悪くなんてないわよ。攻めるのが好きなだけ」
「意地よりもたちが悪いな……」
さっきまでの行為が行為なだけに、いつも通りの会話もどこか不思議な気分になる。
頭をがしがしと掻きながら、雪乃の手を握り返す。
「まあ、アレだ。３回に一回は呼べるように努力するわ」
言うと、雪乃がやれやれとこめかみに手を当てた。寝ながらやるとシュールだな……。
「……バカ」
「……おっしゃる通りで」
「……ボケナス」
「……全くもってその通りです」
あれ、これ、前は雪乃が恥ずかしがって途中でやめたやつか？　ここで名前を呼ぶやつか……？
これから恥ずかし攻撃に覚悟に対する覚悟を固めていると、
「……うおっ？」
突然背中に柔らかなものが押し当てられて動揺する。振り向くまでもなく、抱き付かれているのだと分かった。

雪乃の声が、耳からほんの数ｃｍの所で聞こえてくる。
「八幡」
「お、おお」
耳元でこの綺麗な声に囁かれると、頭の中が甘く痺れる。たどたどしい返事をすると、くすっと笑う声がした。
そして抱きしめる力が強められ、雪乃の柔らかな唇が耳に押し当てられる。
「好きよ」
甘い声で囁いて、手で俺の顔の向きを変えて、唇をそっと重ねた。
「……っ」
今なら死んでも良い、なんて言葉がふさわしい時なんて人生にあるのかよと思っていたけれど。
今が正にその時だった。
俺、今超死ねる。うそ。やっぱ死にたくない。超生きたい。
頭の悪い喋り方になるくらいに浮足立っている。
雪乃は口付けをするなりぱっと離れて俺に背を向けて正座し、ぱたぱたと顔を扇いでいる。
「あーっと、その、えーっと……」
バイトの面接なんて比較対象にならないくらいに言葉が出てこない。
どうしたものかと途方に暮れていると、雪乃がこちらを向いて、自分の隣をぽんぽんと叩いた。その顔はまだほんのりと朱に染まっている。
「さあ、ほら、一緒に寝るわよ」
ほーん？
「え」
「あなたが、今私が言ったのと同じことを言えるようになるまでしつけなきゃいけないから」
「や、何でお前は俺のブリーダーみたいになってんだよ」
言うと、雪乃が不思議そうに首を傾げた。
「違うの？」

「なんでさも当然であるかのように振る舞ってんだ……」
おかしいにも程があるし、その顔やたら可愛いしマジで何なんだこいつは。
ぐぬぬと唸っていると、雪乃が寂しそうに眉根を寄せた。
「……それとも、本当にだめなのかしら、一緒に寝るのは……？」
「うぐ……そ、それはずるいだろお前……」
言いながら雪乃に目をやると、本当に寂しそうで罪悪感湧くし押し倒したいしで大変。とっても大変。
頭をがしがしとかいて、観念する。
「ほら、寝るぞ」
言うと、雪乃が幸せそうに頬を緩めた。
「ええ、ほら、いらっしゃい」
「ここ一応俺のベッドなんですけどね……」
小さな反抗をしつつも、雪乃が広げた毛布の中にすぽっと入り込む。
「……おやすみ」
「ええ、おやすみなさい」
挨拶をすると、雪乃が俺に身体を寄せ、穏やかな表情で目を閉じた。特訓の話をもう忘れたのかと思ったけど、恐らく目を覚ましたらきっちりやらされるんだろう。マジで恥ずかし過ぎて死んじゃうとは思うけれど、まあ、可愛いにも程があるってくらい可愛いから別に良いか。
そう思って、毛布の上に掛布団をもう1枚掛けて雪乃を抱きしめて、蛍光灯のスイッチを消した。
「……すう、すう、すう……」
「……」
寝るのはええな、おい。
しかしその幸せそうな寝顔は、ずっと眺めていたい程素敵だ。
柄にもねぇなぁと思いつつも。
俺、結構幸せなんじゃねぇか？
そんな風に思った。

お終い。

言うまでも無く、比企谷小町はずっとそばに居る。

（1）

1.

冬のある休日。

今日も朝から休日ライフを満喫すべく、ソファとの同化を試みる。極めて詳しく述べると、ソファにうつ伏せになる。

……詳細感０だった。

「深い」って言う感想を言っちゃう人くらい中身が無かった。あと、人生を何かと野球に例えちゃう人くらい。

別に読書でもゲームでもたまに勉強でも良いんだけど、一度だらけると決めたらそりゃあもう限界までだらけたい。

クリスマスの時に小町が見つけた、人をダメにするソファ……あれ、やっぱり欲しかったな。あれにずぶずぶ沈み込んで本格的にダメになりたい。そしてダメ人間界の神になりたい。……マイナス方向での神って底辺中の底辺になっちゃうのん？

「お兄ちゃん、ほれほれ、掃除の邪魔だよー」

「おう、おう」

小町がほこり取りを片手に持ち、もう一方の手で頬をぺちぺちと叩いて来る。いちいち可愛いな、こいつは。

俺は俺でだらけ切っていたため、なんかオットセイみたいな声を上げてしまった。プール際でびたんびたんと揺れてやるぜぇ……。

実際、俺がここに居ると埃をかぶってしまう可能性があるので、これは純粋に気遣ってくれているのだろうけども。

「ほれほれ、邪魔だ邪魔だー」

「おう、お、おい、こら、おう」

何だか小町さんは気分がノって来てしまわれたようで、今度は拳で頬をぐりぐりして来た。いたいいたい、距離が近い、何か恋人みたいで恥ずかしい！

普通の人間の声にオットセイ風味の声が混じっちゃったので、何か

すごく気持ち悪くなった。
よろよろとソファから押し出され、テーブルに座り小町の掃除の様子を眺める。
鼻歌を口ずさみながら、手際良くこなしている。
休みの日に掃除する場合の手順は自分で決めたのだろう。母親が掃除をする時の流れとはまた違うようで、小町が自分に合ったやり方を長年かけてブラッシュアップして来た感がある。
何かもう、小町に家事を任せておけば安心だ。そして俺は養われる。
……あれ、俺本当に何もしなくなっちゃうんじゃない？
「ねー、お兄ちゃーん」
キッチンの拭き掃除をしつつ、でーんと寝転がっているカマクラをたまに愛でつつ、小町が声を掛けて来た。
ソファに移動した俺とは少しばかり距離がある上に小町自身が作業をしているからか、呼び声が少し間延びしたものになっている。
「んー」
２人分淹れたインスタントコーヒーに練乳を入れながら、何気なく返事をする。
「最近、雪乃さんとか結衣さんとはどうなのー？」
ほーん？
スプーンを持つ手がぴたりと止まった。
「……何の事だ」
俺の言葉を受けて、小町は布きんをテーブルに置き、ふむーと腕を組んで、人差し指を頬に当ててわざとらしく首を傾げる。あざと可愛いし可愛い。何なのこのマーベラス美少女は？
「うーん……言い方がごみいちゃんには回りくどかったかなぁ……」
「呼び名にナチュラルにＧの音を混ぜるのやめろ。すげえナチュラルに不用品になってる」
「そんなごみいちゃんを引き取ってくれる人、それ即ち小町のお義姉ちゃんになる人は決めたの？」
俺のツッコミをがん無視した上で、ど直球１６０ｋｍ／ｈ越えのど

ストレートを抛り込んで来た。
「……何の事だ」
打席に立ってデットボールでも食らおうもんなら下手すりゃ死んじゃうので、バッターボックスにすら立たない。難ならネクストサークルにも行かないし、ベンチにすら居ないようにする。それどころかクラブに入らないまである。
「お兄ちゃん、そんな下手なとぼけ方してたら、コナン君に簡単に追い詰められちゃうよ？」
「何で俺が犯人である事前提なの？何の罪を犯したって言うの？」
「うーん……フラグ立て過ぎ罪？」
「待て待て待て待て。俺はどこのギャルゲーの主人公だ」
「だってアレでしょ、お兄ちゃんゲームで主人公にフルネームを付けなきゃならない時の苗字は大抵「結城」「一条」「高坂」「真中」辺りの苗字なんでしょ？」
「フルネームを付ける事も滅多にねえし、具体例が生々しすぎるだろ」
って言うか、一部妹トゥルーエンドの場合があるんですけど。小町と話すと妙に話が肉感を帯びるから恐い。千葉の兄妹仲間だし。しかもそのルートは高校生活限定だぞ。
待てよ、小町は妹の魅力と猫っぽさを掛け合わせている。って事は、桐乃＆黒猫の魅力が合わさっていると言う事か。あれ、小町ルート確定じゃねえのこれ？
……俺、何考えてるのん？
取り敢えず、話を戻される前に逸らす。
「お前はどうなんだよ？」
「え、何のこと？」
「いや、何のことって……その……フラグとか」
俺がどもると心底気持ち悪いなって思う。
でも、聞いておくに越したことは無いからね！別にその情報を基に根回し周到な嫌がらせをしようとかそんな事露ほども考えてないし、大志もとい毒虫についても警戒しておこうだなんて全く考えてないし。

小町を見ると、少し眉をひそめて左上を見上げている。
「あ～、……まあ、結構告白はされるかなぁ」
「なんだって？」
なんだって？
動揺しすぎて、コーヒーの中の練乳が水面で泳ぐのをゆったりと眺めてしまった。現実逃避☆
「え、お、おま、それ、え」
どもり過ぎてすんごい気持ち悪くなった。今なら材木座越えも狙えるかもしれない。あいつを越えるって神レベルの気持ち悪さだけど。
「やー、小町は美少女だし愛想も良いからねー、夢見がちな中学生男子なんかはこっちが別に何もしてなくても、ついつい行けるかもと思って特攻して来るんだよねー。そんで残らず撃墜するんだけど」
何か恐ろしいこと言ってる。「なんか」なんて言ってくれるな。
「ちなみに、告白されそうな気配を先に察知した時は、クラスの女の子に根回しして手を打ってもらって、告白自体しないようにしてもらったりもしてるんだー。後が気まずいしね。撃墜する以前に飛び立たせもしない！」
こわい、恐い、怖い。
恐いよ、女子の世界。
でも、小町がそこまでモテモテな事自体は分かる。こいつが言ってる自己評価は何ら間違っていないだろうし、兄と言う贔屓目を差し引いても思う。贔屓目が大きすぎて差し引いたら何も残らない気がするけど。
それにしても、なぜそこまでフり続けるのだろうか。それなりにまともなヤツも居るだろうに。もちろん全員認めないけど。認めないのかよ。
「なあ、何でそんなばっさばっさと切り捨ててんだ？別に良いだろ、一人くらい付き合ってみたって」
我ながら。
心にも無い事を言う。

妹を、小町の事を思っての言葉だったが、あまりの言葉の軽さに、口から出した瞬間にこのリビングに霧散してしまいそうな気さえした。
しかし、兄のそんなしょうもない質問についても、小町は真面目に考えてくれる。
「うーん……前も言ったけど、小町が好きになる人は多分、浮気しそうになくて変に律儀で真面目で、捻デレな人だと思うんだよね」
ふふっ、と妙に含みのある笑い方をする。
いつぞや、小町本人が確かに言っていた言葉だった。
「そうか、そんなヤツはそうそう見付からないから、しばらく俺の面倒を見てもらえそうだな」
妹の男に対するハードルがよく分からない高さの為、兄は安心して養われることが出来ます。
……俺のふやけた表情を見て、小町がドン引きしてる。
「ごみいちゃんは早めに他の人に引き取ってもらわないと……」
青ざめた顔で言わないで。
あと何、俺は袋に入れて運ばれちゃうの？焼却場に担ぎ込まれちゃうの？
話をしていると、小町はもはや掃除がどうでも良くなったのか、とてとてと歩いてすぐ横に座って来た。なんかごめんね、掃除の邪魔しちゃって……。
「大体、お兄ちゃんと小町でずっと暮らしたってしょうがないでしょ？そりゃあお兄ちゃんと一緒なのは気が楽だし嬉しいけど……」
少し、もじもじとする。
いつもとは、明らかに様子が違う。あまりに聞き慣れたはずの妹の言葉の一言一句に、聴覚を集中させてしまう。
「その……普通の恋人がする様な事なんて、まずしない……でしょ？だから、一緒に暮らし続けても、何かどこか物足りなく感じちゃうのかなって」
どくん、と心臓が跳ねる音がした。
今のは、どう言う意味だろう。
や、本当にどう言うこと？

今の言葉だけで、小町の見え方が、彼女の色合いが、突然変わったような気さえした。
「え、物足りないって、例えば、どう、言う……」
小町が言い淀んだところだけを、わざわざ拾うようにして声を上げてしまった。しかも思いっきり動揺した感じで。
瞬間ＭＡＸ自己嫌悪。
俺の動揺を感じたのか、小町は頬を赤らめて俯いた。
「……バカ、ボケナス、八幡、高坂」
「最後、最後」
それもはやお前の方が意識しちゃってるんじゃないのってさえ思うんだけど。
「……そうだよ、そんな事、考えた事も……」
小町がぽしょぽしょと呟いた言葉が聞き取れてしまった。
俺が聞きとってしまった事に小町が気付いて、はたと目が合う。
二人の間に、普段の時とも喧嘩の時ともつかぬ、今まで感じた事の無い空気が生じた。
その空気に影響を受けたのか、言わば毒気に当てられた様に、
「……あー、や、これはもちろん例え話だけど。別に、嫌悪感さえなければ、その、そう言う事をしても良いとは思うぞ？ほら、日本人にとっては抵抗のあるハグとかキスも、外国だと挨拶代わりとかでフランクにやったりするだろ？」
こめかみの辺りを、指でぽりぽりと掻く。
「別に、家族だし、年も近い仲の良い兄妹なんだから、ちょっとくらい普通の家族よりも親密な事をやっても良いと思うんだ」
普段ならまず口にしない様な事まで口走ってしまう。って言うか考えた事も無い、はず。もの凄い苦しい言い分だし。論理も何もあったもんじゃない。
無茶苦茶な事を言っているのは分かってる。これは興味本位だ。
恋愛的な意味、そして、性的な意味での。
俺たちは今、恋人の真似事、恋人関係の疑似体験、ニセコイ、恋人ごっこにどこか憧れて、少しばかり手を伸ばしかけている、それだけ

のことだ。何か一瞬既存の作品が混じった。
だから、こんな馬鹿げた事、冗談のテイストで言うほか無い。
小町を見ると、少しばかり目を見開き、下唇を噛み締め、僅かに震えていた。
これは引かれたな……と思い、俯く。
そして、再び小町の方を向くと、俺に言っていると言うよりは、自分に言い聞かせるように、
「……そう、だね。小町とお兄ちゃんは仲の良い兄妹だから、もうちょっと色々しても大丈夫だよね。……そう、色々、色々……」
ぽしょぽしょと呟いた。
その、どこか惚けた表情に、何故かとてつもない背徳感を抱いた。
この後、どうしたいのか、どうなりたいのか。
そして、どうするのか、どうなるのか。
それはまるで分からないけれど。
胸の中で、異様なまでに期待感が膨らんでいた。

続く。

（2）

1.

朝、ソファに座って、小町と少し妙な会話をした。
あの時から、小町と俺の距離感が僅かに縮まった気がする。
それは心理的な意味でも、物理的な意味でも、だ。
物理的な意味での距離感は、今まででもかなり近かっただけに、ほんの僅かに縮まっただけの距離が大きな大きな意味を持つ。
……いや、まあ、ただ、スキンシップが増えただけなんだけどね。
しかし、そのスキンシップがくせ者だ。ちょっとまずい。非常にまずい。

2.

「お兄ちゃーん、ご飯だよー」
悶々とゲームをしていると、小町の声がキッチンから響いた。
集中力が無くてもゲームなら……と思ったのに、全く頭に入って来てなかった。あれ、いつの間にかスライムがばくれつけんとべホマズンとマダンテを使えるようになってる。
小町はいつも通り、機嫌良さそうに食器をテーブルに並べ、料理を運んでいる。
席につくと、小町も座るのかと思ったら、背後から突然肩にぽんと手を乗せて来た。
「えへへー、今日の料理どう？　ちょっと気合を入れて作ってみたのです！」
きゃるんと明るく喋る小町。
確かに、いつもに比べて豪華だ。休日の昼なのだから、いつもならもう少し簡素なもので済ませているのに。その簡素なのでもさらりと美味いものを作るのだから、小町はもうただのマーベラス美少女。
「ああ、そうだな。いつも美味いけど、今日は更に美味そうだ。……って言うか……」
近い、って言うか完全に触れてる。

明るく喋っていても、耳元で声がするからやたらとこそばゆい。
「……なんでこんな近いんだ？」
問い掛けると、小町が一瞬、ぴくっと揺れた。
そこから空いた僅かな間は、ここから二人の関係性をどうしたいかを真剣に吟味している様にも思えた。
そして、息を吸う音が微かに耳元で聞こえる。
「……やー、その、あれじゃん？　小町とお兄ちゃんは仲の良い兄妹だから、これくらいは、ね？」
明るく話しているが、声が少し震えていた。
何故かは分からない。分からないけれど、この「仲の良い兄妹だから」と言う言葉を一度でも受け入れたら、何か取り返しのつかない事になるような気がした。
しかし、肩に乗った手の柔らかい感触、耳にかかる息、聞き慣れた優しい声音、ほんのり香るシャンプーの匂い、そして、僅かに潤んだ目。
どうなるのか、どうなってしまうのか。その好奇心が、不安を勝った。
「……あー、そうだな。俺たちは仲の良い兄妹だしな。これくらい何の問題も無い、うん」
物凄く遠回しだけれど、「好きです」と言う言葉に「はい」と答えるくらいの意味合いを持つ様に感じた。何となくだけど。
「……ありがと」
耳元で囁かれたその言葉は、この行為に対してのものなのか、「仲の良い兄妹だから」と言う言い訳を受け入れたことに対してのものなのか、それともこれから始まる何かを了承した事に対してのものなのか、分からない。
しかし、それでも。
「……どういたしまして」
何とはなしに、そう答えた。

2.

「とーう！」
「おぶほぉっ!?」
材木座みたいな声を出してしまった。
ご飯を食べた後、ソファに全力でもたれかかってだらだらしていると、腹の上に小町がダイブをして来た。軽くても十分に威力があるんだから、やめろって！俺のガタイが良い訳でもねえんだから。
さっきのよく分からんシリアス成分を返せ、このやろう。
「いってぇ……なんだよ？　勉強は良いのか？」
「今日は合間合間にやってるから大丈夫！　今は休憩。ダイブは何となくだよ。何してんのー？」
俺の腹から下りた後も、寄りかかって来て妙にべたべた甘えて来る。近い、近い近いいい匂い！
「いや、おま、こら、近すぎ……!?」
いつの間にか、小町は太腿をさわさわと触っている。
「い、良いじゃん。私たち、仲の良い兄妹なんだから……」
そう言う小町の声は熱を帯びていて、今までなら関係的にも年齢的にも感じる事の無かった「女」の顔を見てしまった気がした。
「……そ、そうだな。俺たちは仲の良い兄妹だもんな」
言って、小町の肩を抱く。まるで免罪符の様な言葉だ。
「……あっ……」
小さな小さな声を上げて、小町は更に甘える様に身を寄せた。
しばらくの間くっついていたのだが、小町はそれだけでは我慢が出来なくなったのだろうか。
俺の正面に回り込むと、真正面から抱き付いて来た。
「うおっ!?」
思わず声を上げてしまう。
「い、良いよね？　これくらい。しばらくこうしてても……良いよね？」
耳にかかる息が帯びた熱が、増している気がした。
縋るような、懇願するような、確認の言葉。
断る理由など、もはや無い。

「あ、ああ、良いぞ」
お返しに、きゅっと抱きしめ返す……とは行かず、いや、行けず、肩に手を置いた。
そして、少しだけ目を逸らす。
今、小町の顔を見てしまったら、心の中に設けてある心許ない堤防が、いとも簡単に決壊してしまいそうだったから。

3.
翌日。
昨日の悶々を超引きずっている。いやもう本当に引きずっている。
このまま家に居ては何かもう非常にまずいと思い、買い物に出る準備をしていた。
特に用は無いが、それでも書店に行って本を買ってどこかで読んでいれば、それだけでも2～3時間は潰せるだろう。
そう思いコートを着ていると、小町が声を掛けて来た。
「あれ？　お兄ちゃん、出かけるの？」
「ああ、ふらっとな」
小町はうーんと唸った後、きゃるんっと笑った。
「じゃあ、小町も行く！」
「お、おう、分かった」
しまった。ふらっとなんて言うんじゃなかった。
いや、用事があるなんて言っても、そんな安っぽい嘘コンマ何秒かで看破されるのは目に見えてるんだけどね。
小町はものの数分でぱたぱたと準備を済ませると、
「準備完りょーう！　さ、行こ行こ！」
左手を腰に当て、右手でVサインを作って満面の笑みを浮かべた。
こんなベタを通り越した少女っぽい事をやっても、小町はやたらと絵になる。素晴らしき美少女。腹立つくらい可愛いなこいつ……。
「おう。じゃ、行くか」
きらっきらの眩しさを受け流す様に、いつも通りの素振りで玄関のドアを開けた。

二人で自転車に乗り、よろよろと進む。
「お兄ちゃん、事故らないでね」
そう言って、小町が腰にがっしり腕を回してくる。
「あー、分かってる」
コートを着ている為、胸の感触がぁぁ！なんて事にならないだけまだマシなのだが、それでも心臓は早鐘を打っていた。
自転車のバランスを取る事に集中していて、小町がくっついている事に対する動揺が相対的に薄れたのがせめてもの救いだった。
や、これ、本当にまずい。何がかは分かんないんだけど。
悶々としながらも駅に着き、電車に乗り込む。
今日の目的地の最寄の駅は割かし先にある。即ち、電車に乗っている時間も割と長くなる。
……俺、大丈夫だろうか？
……俺、今、何を危惧してたんだ？　それとも期待？
大丈夫、そんなに混んでなければ、きっと。
「わー、すっごい混んでるねー」
「だな」
休日の昼と言う事もあり、電車の中はごった返していた。
……読みが超甘かった。
満員とまではいかないが、それでもかなりの人口密度になっている。
何が言いたいかって、要は小町との距離が近すぎてやばいって事だ。
……今はなんか、凄くやばい気がする。凄くやばい気がする！
「……あ、また混んで来た」
次の駅に着いた時、更に人口密度が高くなってしまった。
その際に小町が呟いた言葉の声音は、少しだけ色を帯びている気がして……更に心拍数が増した。
気付くと、小町は俺の背中に腕を回し、胸元に顔を埋めるように抱き付いている。
傍から見たら、完全に恋人同士でイチャついてるようにしか見えな

いだろう。
　ってか、やばい、これはやばいよぉ！
「お、おい、小町……？」
「……ん？」
　こちらを見上げる、潤んだ瞳。
　そして、俺の身体を抱き締める腕に、少しばかり力が入る。
　まるで、俺が言わんとしている事を、聞かんとしている事を、言葉にする前に止めさせようとしているかのようで。
「……や、何でも無い」
　……負けた。いともあっさり。だって可愛いんですもの。
「……ん」
　小町の返事は短いにも程があるものだったが、僅かに嬉しさを含んでいる、ような気がした。
　その後もなんだかんだで密度がもう一段階上がり、小町はまるでそれに便乗するかのように抱き付く力を更に強めた。ぎゅうぅー。
　やばい。可愛い。良い匂い。
　どう振る舞ったら良いか死ぬ程迷ったが、取り敢えず、撫でる事にする。
　小町の頭をぽんぽんと撫でてやると、
「……ん」
　嬉しそうな声を漏らした。
　……って言うか、さっきから意思表示の言葉短すぎじゃないのん？
　ファービーの方がよっぽどよく喋るぞ。
　子どもの時母親が突然買ってきたファービーが、しばらく経ったら突然おかしくなって、昼間起きているときは目を閉じたまま喋り、夜は目を開けたまま寝るようになった。
　夜中リビングに飲み物を求めて入った時に、目を開けたまま寝息を立てているヤツを見た時は泣きそうになった。
　ファービーのおぞましきトラウマを思い出していると、胸元で小町がぽしょりと囁いた。
「ね、お兄ちゃん」

「ん？」
「お兄ちゃんも手、小町の背中に回して良いんだよ？」
「や、お前、それは……流石に人目が……」
既に妹に思いっきり抱き付かれてるけどね。
しかしそれでも、俺からと言うのは……恥ずかしいにも程がある。
すると、小町が何かを躊躇うような表情を見せ、やがて、ゆっくりとこちらを見つめた。
「……じゃあ、さ、コートの下で手を回してくれたら周りも分かんないよね？」
言うと、小町はコートの前のボタンをゆっくりと一つ一つ外して行く。
「……なっ……」
ただ、コートの前面を開けているだけなのに。
心なしか息を荒げて、頬を紅潮させながらボタンを開けるその光景がひどく淫靡で背徳的に思えて、何故かとてもいけないものを見ているような、いけない事をしているような気持になる。
ボタンを外し終えると、小町は少し目を細め、艶っぽく微笑みながら、コートの前面を開けてみせた。
……なんで服着てんのに、まるで露出プレイでもしてるように見えるのん？ごくごく普通に服着てるのに！
「ほら、開けたよ？　お兄ちゃん、どうぞ……？」
「お、おう……」
断る気力も無く、そろりとコートの中に手を入れる。
やばい、手が震える。痴漢みたい。超痴漢みたい！
小町はコートを着たままのため、手は自然と小町の脇の下に滑り込ませる事になる。
――と。
「……んんっ、あっ……」
……待て待て待て。
何今の色っぽい声？
知らないぞ？　お兄ちゃん、小町のこんな声知らないぞ？

って言うかここ、電車の中だぞ!?
幸い、声は俺にしか聞こえないくらいの小さな音量であったが、それでも激しく動揺した。
「んあっ、はぅぅっ……」
……助けてー。
俺、小町のこんな姿知らない。こんな色っぽい声出して俺の胸元にすり寄って来る小町を知らない。
家でもついさっき似たような事をしたのに、むしろさっきの方がよっぽど薄着だったのに、何故か今のこの状態の方が遥かにどきどきする。と、言うか、死ぬ。
原因として考えられるのはただ一つ。
小町のコートのはだけ方が異様にエロかったからだ。いやもうそれに尽きる。
目的地に着くまでの間、間違っても腰から下に触れないように、必死で手をぴたりと制止させていた。
……やっぱり、良い匂いすんなぁ……。

続く。

（3）

1.

心臓が爆発しそうなまま、電車の中でしばし抱き合う。

……早く着いて、お願い。

や、違うんです、この状況がいやなんじゃなくて、心臓が耐えられそうにないんです。

あと3駅……あと2駅……あと1駅……と、まるでカウントダウンのようなノリで目的地に着くのを待つ。

油断して下を向くと、あごのすぐ下に小町の頭があるので、シャンプーの良い匂いを嗅いでしまわないように必死で前若しくは上を向く。

あくまで不自然じゃない程度に、怪しまれない程度に。

……ちょっと、首を攣りかけた。

攣りそうになって身体がぴくっと動くと、小町の背中に回している腕も少し動いてしまい、

「んんっ……」

と、悩ましい声が聞こえてきた。

……自分から手を回して良いって言ったのに、なんでいちいちこんな色っぽい反応するのん？

死んじゃう、マジで。可愛すぎて。

色っぽい声を聞いてしまい、跳ね上がるように再び上をぐりんっと向くと、また首を攣りかけた。

攣るなぁぁぁ、俺、耐えろぉぉ……と心の中で唱えながらぷるぷるしていると、電車が目的の駅に着いてドアが開いた。

やっとのことで解放されたと喜びながら手を離すと、小町が不満げな顔でむーっと唸ってきた。

いや、なんでだよ。目的地だよ？

「……ほら、行くぞ」

声をかけると、唸り声を上げるのを止めて、握手を求めて来た。

「え、なに、仲直りかなんか？　ケンカしてないよね俺ら？」

むしろ、１０秒前まで異常なくらい仲良しだったと思うんだけど……。

すると、小町は目をぱちくりとさせて、直後に顔が更に不満げになった。

あっれー？なんでなんで？

「……ごみいちゃん、ごみにも限度ってもんがあるよ。手、手！」

言うと、小町が差し出していた手をくいっくいっと動かす。

……犬？　やだなぁ、俺、由比ヶ浜じゃねえんだけど……。

訳も分からぬまま、犬のテイストで小町の手に自分の手を乗せた。

……「殺したろか」って言わんばかりに睨まれた……なんでなのん？

「……わかった、わかったよ、お兄ちゃん。もうエスコートしてもらおうなんて淡い希望は抱かないよ。ほら、行こ？」

肩を落として大きくため息をつくと、小町がお手をしている俺の手をぱっと握った。

……あ、そう言う事でしたか……。

ボケでやったなんて誤魔化しをしようものなら、もはや八幡的なポイントが０もしくはマイナスに食い込みそうなので、何も言わずただ気まずい顔をした。

……超かっこ悪い。

２．

買い物に向かったのは、以前クリスマスパーティーの買い出しに皆で訪れたショッピングモールだった。

あれから２ヶ月と経っていないけれど、クリスマスムードの装飾が無いとまた随分と違って見える。

小町は初めは不機嫌だったものの、俺と繋いだ手を見る度に段々とにやけて行き、途中で有無を言わさず恋人繋ぎをしてきてまた更ににやけ、とどめにさっき通りかかった店の前で店員さんに「そこのカップルのお二人！　こちら今セールとなっていますよ！　記念日のプレゼントなどにいかがですか！」などと煽ってきたもんだから、もう

顔の筋肉がでろっでろになる勢いでにやけている。
ちなみに、その店員さんに「いや、兄妹なん――」と言いかけたところで、小町の強烈な水平チョップを腹にもろに食らった。身体の捻りによる力を利用した見事なチョップだった。
お前、あれご飯の後に食らってたら絶対リバースしてたぞ……。
しばらく歩いていると、小町が不意に立ち止まった。
「あ、お兄ちゃん、あれ……」
「ん？　……あ」
以前訪れた時に小町がハマっていた、人をダメにするソファだった。
君はまだ、そんな所に留まって道行く人をダメにし続けているのかい――？
心の中で語り掛けた。
虚しかった。
「……」
小町が無言でふらつくようにソファに近付いて行く。
いけない！　妹が堕落してしまう！
小町の腕をむんずと掴み、説得を始める。
「行くな、小町。あれは人をダメにするソファだぞ」
「止めないで、お兄ちゃん。小町はあそこに行かなきゃいけない。あの子が呼んでるの」
お前の中であのソファはどういうキャラ設定なんだ。
「行くな。ヤツは炬燵の仲間だ。受験を目前に控えたお前をダメにする悪魔の使徒だ」
「それでも……止めないで、お兄ちゃん。初めて出会った後、あの子が小町を呼ぶ声が、頭の中で何度も聞こえていたの。ずっと……ずっと、気になってた。目の前に来て、こうしてあの姿を、寂しそうに待っているあの姿を目の当たりにしたら、もう、止まれないよ」
話が大きくなってきた。やたらと重いストーリーになってる。
冷静になったら負けだ。
「いや、それでも、俺はお前を止める。だって、俺はお前の、たった一

人の兄なんだから」
　きりっと表情を引き締めて言うと、対照的に小町の表情が急に緩んだ。
「はー、もう飽きた。そろそろソファに沈んで良い？」
　え、鬼？
　小町が急に一歩引いた。
　あと、沈むって言うな。堕落前提じゃねえか。
　引き止めるのは難しそうだ。しかし、このまま一人で行かせても小町が無限に堕落して行くのは目に見えている。
　がしがしと頭を掻いて、
「あー……じゃあ、俺も一緒に沈むわ。それならどっちかが歯止めをかけるだろ」
　ポイントは「俺が」歯止めをかけるとは言わないところ。正直あのソファの魔力にやられる可能性は超高い。
「お、お兄ちゃん……！」
　なんで感動した風のリアクションをとったの？さっきのノリが戻ったのだろうか。
「よし、じゃあ一緒にあの悪魔の使徒を倒しに行こう」
「あー、そう言うの良いから。じゃ、行こ行こ」
　……。
　……このやろう。
「あ～～～～……」
「うおっ……あ～～～～……」
　濡れ場ではない。
　二人同時にぼふんとソファに座ると、あっと言う間に二人揃って落とされた。
　これは……想像以上だ……。
　こんなものを家に置いた日には、意識があってももはやまともな会話もろくに出来ない自信さえある。
　その時の俺は、声をかけられてもきっとへんじがない。ただのしかばねのようだ。おお、八幡、死んでしまうとは情けない……。

それにしても、小町と並んでソファで喘ぐとか、どんな幸せイベントだよ。
人目を気にして一応控えめなリアクションだけど、もし誰もいなかったら大声で「っあ～～～～～……！」って言ってた。高いところから落ちた訳でも、絶頂に達した訳でもない。
もっとこのソファの柔らかさを味わおうと、うつ伏せになってもぬもぬしてみる。やばい、沈む。もぬもぬ。
ふと、横を向くと、小町と目が合った。
小町も同じくもぬもぬしていたようだ。
同じタイミングでもぬもぬするとは、流石妹。
しょうもない事を考えていると、小町がにこっと笑いかけてきた。
小町の微笑み方は、いつものにぱっとした快活な笑い方ではなく、うっすら目を細め口角を上げる、艶っぽい笑い方だった。
「……っ～～～～！」
その笑みを見た途端に、さっきの電車の中での事を思い出してしまった。
腕に力を入れ一気に立ち上がり、小町の方に向き直る。
「……そろそろ行くか」
「え～、もう行くのー？」
不満げに言う小町の手を引き、足早にその場を去った。
……あの笑顔がきっかけで思い切り勃って、居ても立っても居られなくなったなんて言えない……。

続く。

（4）

1．

翌日。

朝、学校を出るまで、それはもう間抜けに映るであろうくらいに、ぽけっとしていた。

昨日は結局、ソファから離脱した後も小町の笑顔が頭の中を回って、なんかもういっぱいいっぱいだった。

何これ、思春期？

学校でもぽけっとしていると、由比ヶ浜に心配され、雪ノ下にバカにされ、戸塚に心配されて危うく全力で抱きしめそうになって、材木座ははぽーんとか言ってるのがウザかったので流した。戸塚は可愛いなぁ……。

家に帰ると、既に小町の靴があった。どうやら先に帰って来ていたようだ。

コートを脱いで鞄を置いて、さっさと着替える。

炬燵に入って、ひとまずこたつむりと化す事にした。

考え事が多すぎて、頭がまとまらない。

や、考え事って言っても、一つしか無いんだけど……。

それにしても、あのクッションを買わなくても、この悪魔の機械一つあれば簡単に我が家は全滅すると思う。

母親と親父はまともに利用するタイミングはあまり無さそうだけど。つまり、俺と小町だけダメになる。

ぬくぬくだにゃーなどと思っていると、愛猫のカマクラがよたよたとやって来た。

そしてノータイムで炬燵にすぽっと入る。流石だなお前は……。

炬燵の中でだらけているカマクラをもみくちゃにしていると、リビングのドアがガチャリと開き、小町がやって来た。

「ふぃー、ちょっと休憩～……」

どうやら部屋で勉強していたようだ。集中していて頭をがっつり使っていたと一目で分かる疲れ顔をしている。

上は長袖なのだが、下は何故かショートパンツ姿だ。え、なんで？寒いでしょ？
「おう、お疲れ。コーヒー飲むか？」
「飲む～……」
服装にいちいち口を出す小うるさい兄になるのもいやなので、敢えて質問はしなかった。
小町と入れ替わりに炬燵を出て、コーヒーを淹れるためキッチンに向かった。
「ほれ」
「ありがと～。あ～、沁みるね～」
中3でそんなババくさいことを言うな。ん、ジジくさいか？どっちでも良いな。
再び炬燵に入り、小町がいる面の右側の面を陣取る。
小町はコーヒーをくいっと満足気に飲み干すと、うつ伏せに寝転んで雑誌を読み始めた。また偏差値の低そうな記事を……。
再びだらけようと足をだるーんと伸ばすと、足に柔らかいものがぶつかってきた。
ははーん。さては、またカマクラだな？
前はそれで小町かと勘違いして内心恥ずかしい思いをしたから、もう騙されないぞ。それにカマクラがさっき炬燵に入ったのを知ってるんだしな！
――と、思っていたら。
「……あれ」
小町にも聞こえない程、小さく声が漏れた。
カマクラが、炬燵の外に出てソファでのびーっと伸びをしている。
……んん？　じゃあ、この柔らかいものは……。
今こうやって考え事をしている間にも、足に絡み付いてきてやたらとどきどきする。
ちらっ、と左にいる小町を見た。
「……」
何も言わないまま、俺の視線に気付いたのか、流し見るように俺の

事をちらりと見た。
ああ、この表情は、まずい。
そんなに何度も見た訳ではない。
だけれど、普段の小町のキャラからは考えられない程の艶っぽい顔。忘れる訳がない。
今はほんの一瞬、しかも横顔が見えただけだけれど、さっきまでのリラックスムードが一瞬で吹っ飛んだ。
足に絡み付いているものが、徐々に近付いてきて、手でも触れられる位置まで近付いて来た。
どくん、と心臓が跳ねる。
「……あー、小町。勉強はどんな感じだ？」
さして意味も無い会話を振りながら、小町の生足をさする。
「……あぅっ……」
ショートパンツ姿なのは、もしかしてこの為だったんじゃないかと邪推してしまう。もしそうだったとしたら正直理性がやばいけど、外れてても当たってても恥ずかしいので聞けない。
小町の様子を窺うと、雑誌をめくる手が止まり、ふるふると震えている。
「まあ、それなりかなー。試験直前までどれだけ頑張れるかどうか、って感じ」
他愛も無い問に対する、他愛も無い返事。
しかしその声は、かすかに上ずっている。
「そうか。ああ、そう言えばこの間、雪ノ下と由比ヶ浜がな――」
さっきとはまた別の、これまた他愛もない会話を始める。
今度は、小町の左足を少し引っ張ってこちらに引きずり込んで、ふくらはぎをつつつっとなぞった。
「あぐぅ……へ、へえ、そうなんだ……ひっ、ひんっ」
小町はもはや雑誌を手に取っている余裕さえないのか、雑誌を脇にやって、拳を握ってぷるぷるとしながら、必死で会話に応じている。
その様子に、ぞくりと背筋に走る何かを感じた。
「そうそう。それで――」

話を続ける。
話の内容は何でも良いのだ。
ただ、いつも通りの兄妹を演じながら、決して口に出さずに淫猥な行為に及んでいると言う今のこの状況が、たまらなく楽しい。
小町のふくらはぎをさすりながら、時折足の裏をつつっと撫でる。
触れ方を変える度に、小町は面白い程にびくびくと身体を反応させ、熱っぽい目でこちらを見て来る。
カマクラは気付くとリビングからいなくなっていた。
テレビも元から点けていなかったため、俺たち二人が何も喋らないと、家の前をたまに通り過ぎる車の音と、時計のかちっかちっと言う針の音しか聞こえてこない。
耳を澄ますと、小町の荒く深い息遣いが聞こえて来る。
うつ伏せで震える小町の足を、何度も何度も、ねちっこく撫で回す。
いつの間にか小町は、顔も完全に伏せて「あうぅぅ……」と小さく呻いていた。

2.

ひとしきり撫でると、小町が不意に振り向いた。ああ、このお楽しみ時間も終わりか――などと思っていると。
「あー……お兄ちゃん、そっち行っても良い？」
……なんだって？
小町は俺の隣に入ろうとしているらしい。
更に続けて良いのかと、胸が高鳴る。
「別に良いぞ」
言うと、炬燵の掛布団を捲り上げて、左側を空けた。
「……んぁっ、ひんっ、うぅっ……」
小町の甘い声が、耳元で絶え間なく聞こえる。
俺の左隣を陣取った小町は、胡坐をかく俺の股座に右足を伸ばし、「どうぞお好きなように」と言わんばかりの体勢になった。
それに甘えて、さっきとは違い今度は両手で小町の足をさする。

左手は小町の足の太腿を、右手はふくらはぎを、好き放題撫でて、揉みほぐす。
小町はまるで抵抗する様子を見せず、俺に肩を寄せて体重を預け、甘えるように顔を俺の耳元にすり寄せている。
耳にかかる熱い吐息と甘い喘ぎ声が、理性をゆっくりと焼き溶かして行く。
……なんでこんなに興奮するのん？　服を脱いでもないのに！
太腿をさする手が、自然と、求めるように、足の付け根に向かって行く。
「あぅっ、あっ、そこっ、あっ、あっ……」
戸惑う様子を見せながらも、まるで止めてこない小町の様子を見て、更に気分が爆発的に高揚して行く。
視線を小町に向けると、はたと目があった。
「……」
互いに無言。
だけれど、それは気まずいが故のものではない。
距離が、近い。
それはもう、今にも唇と唇が触れてしまいそうな程に。
「……お兄、ちゃん……」
「小町……」
互いを呼び合う。
何百ではきかない程に呼ばれ慣れたはずのこの言葉が、やけに耳朶を打つ。
ああ、これはもう、無理だ。
我慢なんて、出来ない。
小町の吐息が唇に触れる程の距離まで近づくと、互いに少しだけ首を傾ける。
「――――――」
3.
「……ぷはっ」

息が持たなくなり、名残惜しむように唇を離す。
時間にすればほんの１０秒程度で、普通ならその程度の時間息を止めていたくらいでは何ともないのだけれど……尋常じゃないくらいに興奮状態にあったのか、すぐ息切れしてしまった。
それは小町も同じだったようで、まるで短距離ダッシュをした直後であるかのようにはっはっと息切れをしている。
「……お兄、ちゃん……」
……やばい。
そんな潤んだ目で見ないでくれ。心臓が爆発しそう、と言うか、もう、した。粉々に爆砕した。誰かペアを！
ふと、時計を見る。小町が炬燵に入ってから、結構な時間が経っていた。
「……あー、もう結構時間が経ってるな。そろそろ勉強に戻った方が良いんじゃねえか」
言うと、物凄く切なげ顔をされた。
「……あ……そ、そうだけど……でも……」
小町の勉強面を気遣いたいのか、ただ俺の心の準備が全く間に合ってないが故の時間稼ぎなのか。
それは、正直分からないけれど。
それでも、ちょっと今はやばい。まだ。
……ほぼ後者だな、これ。
とにかく、今は一刻も早く小町のこの切なげな顔を何とかしたい。
頭をがしがしと掻いて、小町の肩に手を回す。
「あー……その、なんだ、俺は明日もこの時間に炬燵でだらだらしてようかなー……」
……下手とか色々通り越して、ただの阿呆みたいな言い方になった。
しかしそれでも、小町の気はいくらか紛れたようだった。
「……ぷっ。……お兄ちゃんはしょうがないなー」
言うと、俺の腰に手を回してにひっと笑った。
……え、何この子。超可愛いんですけど

「……じゃあ小町も、明日のこの時間にまた、休憩で来ようかなー……」
少し目を逸らして、斜め上を見ながら言う。
「ああ、それが良い。休憩は大事だ」
ふっ、と笑い、片眉を上げながら言う。
「うん、大事だよね、休憩。……じゃ、もうちょっと勉強頑張るよ」
言うと、小町は両手を握って気合を入れる仕草をした。むん、って感じで。可愛いなこいつ……。
「ん。頑張れ」
そう言って、小町の頭にぽんと手を置く。
「……ありがと」
俺の手の上に自分の手を重ねると、小町はくしゃっと笑った。
「……」
小町がとてとてとリビングを出て行く後ろ姿を見ながら、ほんの数分前に味わった唇の柔らかさを思い出していた。
……俺の妹がこんなに可愛い訳が（自主規制）
続く。

（5）

1．

明くる日。

「……」

朝、起きたらもうテント状態だった。

夢の中で欲求を吐き出すことも無く、ただただテント状態になっている。

……やばい、これは、非常にやばい。

頭をがしがしと掻いて、慣れ親しんだ家だと言うのに妙にどきどきしながらリビングに向かった。

「おはよ」

「おう」

朝食の準備をしていた小町と、いつも通りの挨拶を交わす。

いつも通り、とは言っても。

小町の声音が少し違う。

機嫌が悪いとか、そう言った類ではない。

なんて言うか、こう、中学生くらいの二人がつい昨日付き合う事になって、それで翌日学校で顔を合わせた時の気恥ずかしい感じ、のような。

……言ってて死にたくなった。

「はい、今日は目玉焼き！」

挨拶に比べたら、だいぶいつもの調子に戻ったような声で話しかけて来る。

「お、おう……!?」

不意に、肩に手を置かれた。

「……」

「……」

無言。

無言だ。

この後小町がどう言う行動に出るのかと、尋常でないくらいの緊張

を覚える。
「……」
……そのまま、よく分からない間を置いて手を離された。
何これ、どきどきさせて俺の寿命を削る作戦なのん？
その後はいつも通り向かい合ってご飯を食べた。
会話も至っていつも通り。
しかし、時折ちらちらとこちらを見て来る時の目が、流し目だったり上目遣いだったりと、明らかに質の違ったもので。
「ごちそうさま」
「あはは、お兄ちゃん、声裏返ってるよ」
……超死にたくなった。

2.

放課後、部室でいつも通り本を読む。
部活で、「いつも通り」本を読むってどうなのって今もたまに思うけれど。
まあ、もう一年近くやっている事だし、そこはもう良いだろう。
「ねえ、ヒッキー」
「んー」
由比ヶ浜が少し心配そうな声音で、俺に声を掛けてきた。
今のこの落ち着かなさを表に出したくない一心で、本に目を落としたまま返事をする。
「昨日からさ、なんか様子おかしいよね？　学校で何かある程、ヒッキーが誰かと話した所も見てないし……って言うかいつも通り一人だし……何か、家であった？」
……お前は小町か。
「心配がてら俺のぼっちを強調すんのをやめろ。慣れてるけどちょっと傷付いちゃうだろ。別に、何もねえよ」
少しだけ視線を上げて答えると、雪ノ下がぱたんと本を閉じた。
「あら、ではその時折見せるにやけ顔の説明がつかないわよ？　変に落ち込んでいるのも気持ち悪いけれど、そんなあからさまに思い出し

笑いのようににやにやされるのは中々に腹立たしいわ」
……すげえ淡々と言われた。
あと、俺にやけてたんだ。ちょっとって言うかかなり死にてえ。
由比ヶ浜をちらりと見ると、たははと苦笑いしている。さっきはすげえオブラートに包んでくれてたんですね……。
「……あー、まあ、その、なんだ、今小町とちょっと、アレで、な……」
どもりどもりそう答えると、二人の頭からハテナマークが飛び出た。
ごまかすようににひっと笑ってみると、雪ノ下が「何こいつ？」と言う侮蔑の視線を飛ばして来た。このやろう……。

3.

夜、家に帰る。
よく分からない緊張で身が持ちそうになかったので、小町にはラーメンを食って帰ると連絡しておいた。
そのため、一人で夕食を済ませて勉強をしている小町とは、昨日と同じある程度深い時間になるまで会うことが無かった。
「……」
身体が変に火照って、炬燵に入るのが暑苦しく思えてソファに座る。
……俺は何を心待ちにしてるのん？
やたらとそわそわとしていると、リビングのドアが開く音がした。
「あ……」
音に反応して、思わず立ち上がってしまう。
小町は俺のそんな反応に一瞬驚いた後、ぽしょりと呟いた。
「あ、勉強……ちょっと、疲れたからさ……」
そう言って、とことことこちらに歩いて来る。
「そうか、お疲れ。じゃあコーヒー飲むか」
いつも通りの流れで提案したのだが、
「あ、やー、その……」
やけに歯切れの悪い返事をされた。

どう返したら良いかと迷っていると、小町がドアから真っ直ぐ、ソファに居る俺の左隣に腰を下ろした。
「お……」
距離が、近い。
ちょっといきなりすぎやしませんかね……なんて思いつつ小町を見ると、既に息が荒くなり、熱を帯びていた。
「ね、お兄ちゃん……」
それが、確認を求めるための言葉だったのかどうかは分からないけれど。
小町はその言葉を皮切りに、ゆっくりと唇を重ねて来た。
「んっ、んちゅるっ、れろっ、むぐっ、えぅっ、んむっ……」
昨日のキスは何だったのだろうかと思う程、濃厚な口付け。
何も分からないなりに、互いに必死で舌を絡ませ、互いの口内を貪り合う。
小町は目を閉じて、俺の左肩を両手で掴んで支えにして懸命に身体を密着させようとする。
その姿があまりにいじらしくて、思わずそのままソファの上に小町を優しく押し倒した。
「んんっ？　……あむっ、えるっ、れるっ、んちゅっ、はぁっ……」
押し倒されたことに一瞬驚いて目を見開いたが、それもすぐに受け入れ、また懸命に舌を絡ませて来る。
今度は俺が上になっていることもあり、こちらから大量の唾液を送り込んでやると、小町が余すことなくそれを受け入れて、幾度となく喉をごくりと鳴らした。
あまりにどきどきしていて気付かなかったが、小町の服装は寝巻用と思われる薄手のキャミソールとショートパンツ姿で、昨日よりも更に薄い格好になっていた。
そのため、密着した時に伝わる肉感が更に増していて、恐らく下着を上下とも着ていない事も分かった。
……やばい。何がやばいってマジでやばい。
「……ぷはっ」

１０分程互いの唇を貪り合った後、名残惜しそうにしながら唇を離した。
互いに舌をぎりぎりまで伸ばして、その間に長い糸が引かれる。
小町の顔は、もはや１０分前までとは別人になっていた。
……いや、こんな色っぽい子知らないんですけど。本当に誰？　って勢い。
昼は清涼感溢れる元気っ娘で、夜はこんな顔を見せる……だと……？
「あー、お兄ちゃん……その、小町、勉強で身体が固まっちゃってさ。だから、ちょっとマッサージしてくんない？」
小町は少しだけ目を逸らすと、更に深みに入り込んでしまいそうなお願いをして来た。
４．
ソファの上で、うつ伏せになる小町。
手はビーチで寝そべっている時のような組み方をしている。
「じゃ、お兄ちゃん……お好きにどうぞ」
ぽしょりと言った。
……雑すぎるだろ、指示。
思ったが、可愛い妹の頼みとあっては致し方ない。そう、もうめっちゃ致し方ない。
自分に言い聞かせながら、背中に親指を押し当ててゆっくりと体重をかけた。
――と。
「あ……おぉぉぉ……」
……わぁ……。
それ、マッサージの第一声で出すには色っぽすぎません？
でも、続けるしかない。
ある程度体重をかけながら、徐々に揉む場所を変えて行く。
「あっ、そこっ、気持ちいっ、んくっ、ひんっ、あぅぅっ、そこ、気持ち良い……気持ち、良いよぉ……ひぐっ、あっ、あっ、あっ……」
……。

……いやいやいや。
死ぬ。これは、まずい。
何で懇切丁寧に愛撫してるみたいな声を上げちゃってるの小町ちゃん？　愛撫って言っちゃった。
自分の下の方に目をやると、案の定ギンギンだった。ギンギン。
ここまで来るとどんどん色々とやってみたくなってしまい、揉む場所を腰の方に下ろして行って、ギンギンのなった部分を小町の足の付け根に押し当てるようにしてみる。
俺は俺で薄手のジャージを着ているので、互いの生の肌との間には、小町のショートパンツと俺のジャージ・パンツの3枚が存在しているだけの状態になっている。
しかも、どれも薄手だ。実際は3枚もある様には感じない。
ぎゅっと、腰に当てた手に力を入れて、股間を強烈に押し当ててみる。
「んあぅぅぅ……」
小町はぶるぶると震えて、足をばたつかせた。
顔は、見えない。
でも、たまらない。
もっと、もっとと思って、今度は尻を鷲掴みにする。
予想以上の弾力に、思わず何度も揉みしだいてしまう。
小町はその度に「あうっ、うぅっ、あぅっ」と可愛らしい声を上げる。
抵抗は全くしてこない。
と、言うよりも、もはや完全に受け入れている。
「……あ」
ふと、あることに気付いて、小さな声を上げてしまった。
小町は一瞬不思議そうにこちらを見たが、尻を揉んだらまたすぐ顔の向きが戻った。
小町のショートパンツに、明らかな染みが広がっている。
顔をぐっと小町の耳元に近付け、
「小町……染み、出来てるぞ？」

と囁いた。
「え、あ、やっ……！」
小町は顔を真っ赤にして何か言おう、動こうとしたのだが、俺に上から完全に押さえ込まれて、身動き一つ取れないでいる。
「……」
一度身体を起こし、俺はゆっくりとズボンをパンツを一緒にずり下げた。
そして、小町の染みが出来た部分に、ぱんぱんに張った亀頭を押し当てる。
「えっ……？」
さっきとは明らかに違う感触に、小町が戸惑いの声を上げる。
それも当然だろう。３枚あった隔たりが、今や小町のショートパンツ１枚になっているのだから。
「……」
俺は何も言わないまま、再び小町の上にのしかかり、ゆっくりと亀頭を押し込んだ。
「んあぁぁぁぁぁぁっ……!?」
ショートパンツ越しとは言え、秘部にめり込む感触がはっきりとする。
小町はうつ伏せのままぶるぶると震えている。
染みが、広がった。
俺は一度腰を引くと、もう一度腰を左右に振りながら亀頭をねじ込む。
「あぇっ……かはっ、うぁっ、それっ、あぐっ、おに、お兄ちゃ……んぐぅぅっ……」
一度目よりも声に色が混じる。
腰を引いて押し当てる速さを一切変えることなく、尻をがっちり掴みながら、ねちっこくねちっこく何度も繰り返しめり込ませる。
２０回程押し当てると、
「お、お兄ちゃ、も、だめ、小町、だめ、い、あがっ、い、イクっ、イクっ、イっちゃう……よぉぉぉ……っ――――――」

小町は一際大きく痙攣して、背筋を弓なりに反り返らせ、ショートパンツの染みがもはや染みと認識出来ない程の大量の温かい液を噴き出した。
「……はっ、はっ、はひっ、うぅっ、うぅぅっ、はひっ、あくっ、あぅっ、あぅぅっ……」
息を切らしながら、俺のすぐ下で小町は断続的に痙攣しながら甘い声を上げている。
「……」
小町の背中から離れてパンツとズボンを上げ、小町の肩を掴んで仰向けにさせて、頭をくしゃくしゃと撫でる。
ちらり、と小町がこちらを見た時の視線に心がざわつき、唇を重ねて少しだけ舌を絡ませる。
「えぅっ、れろっ、んむぅっ……」
さっきよりも脱力した声で、小町は舌の絡み合いに身を委ねた。
口付けを終えると、ソファで小町を膝枕してやり、おでこをしばらく撫でていた。
「……そろそろ、勉強に戻れるか？」
「……ん」
気持ち良さそうにしながら、小町が短く返事をする。なんかすげえ猫みたいだなぁ、こいつ……。
むくりと起き上がると、小町はとてとてとリビングのドアに向かう。
ドアの前で、ぴたりと止まった。
「お兄ちゃん」
こちらに背を向けたまま、声を掛けてきた。
「ん？」
「明日は、晩ご飯からちゃんと一緒だからね？」
……逃げてたのばれてたー。
まあ、それもそうか。
「……あいよ」
言うと、小町がくるりと振り向いた。

「……よーし、小町との約束だかんね！　おやすみー！」
にひっと笑って、リビングから出て行った。
「……ったく……」
最後の最後まで、いちいち可愛いなぁ、あいつは。
頭をがしがしと掻いて、ソファにどかっともたれかかる。
……まだ勃ってた……。

続く。

（6）

1．

明くる日。

「……」

朝になり目を覚まして、寝ぼけ眼をこすりながら、掛布団を取っ払う。

「……」

胡坐をかき、頭をがしがしと掻く。

「……」

ちらりと、視線を下にやる。

「……おうふ」

小さなため息を漏らして、誰にも見つからないように浴室に向かった。

……そりゃまあ、あんなことしてれば、あんな夢も見ますよね……。

「お兄ちゃん、おはよー」

「おう、おはよ」

リビングに入り、小町と挨拶を交わす。

……いかん、視線が朝ごはんを作ってくれている小町の後ろ姿、と言うかお尻に集中してしまう。

じろじろ見るな。いや、ばれやしない。いや、それでも……。

「お兄ちゃん」

「ひゃいっ!?」

……これ以上無い程に情けない声を出してしまった。

小町がくるりと振り返り、にやっと笑う。

「……どーこ見てたのかなー？」

何故気付かれた……!?　なんなの、気配でも読んだの？

「や、そ、その、包丁の磨き具合とか、まな板の染みとか、その、色々……？」

「目の付け所が絶妙すぎるでしょ……」

小町が怪しんで、ずいと顔を寄せる。

調理しているものの関係だろうか、仄かに甘い香りが漂う。
ち、近い、顔が近い、顔が近いよぉ！
「……お兄ちゃん」
「なな、なんでしょう？」
にやつきながら尋問する妹と、おどおどしながら敬語を使う兄。
……これが１５年連れ添った兄妹の会話……だと……？
俺がおかしいんだけどね。
「小町のお尻、見てたでしょ？」
バレてた。
死にたい。
「いや、そんなそんな、いくら小町が可愛いからって」
「見てたでしょ？」
腰に手を当てて、更に顔を近付けてくる。
「いや、その……」
「見・て・た・で・しょ？」
更に顔が近付く。もう目の前だ。
こ、こんな、こんなベタな追及があるのか……!?
俺は断じて屈しない。屈しないぞ！
決意を新たに、小町を見つめ返す。
超威圧的。
「……はい、見てました。ガン見でした」
「……ん、正直でよろしい」
屈した。
同じ追及でも、例えば由比ヶ浜ならキモいキモいと連呼してきて、雪ノ下なら視線で俺を殺しにかかり、平塚先生ならもはや俺を殴りながら問い詰めるんだろう。戸塚なら……いや、この想像をしている時点でいろいろとまずい。
ちなみに、今の各追及パターンの予想は何の意味も無い。
小町を俺の自白を聞いて満足したのか、くるりと振り返ると鼻唄混じりで調理を再開した。
……たまにこちらをちらちら見ては、わざとらしく尻を振ったりし

てる気がするけど……気のせいだよね？　にやにやしてるのも気のせいだよね？
そこから数分後。
「出来たよー」
ソファに座ってだらけていると、小町がぱたぱたと料理をテーブルに運びながら声を掛けてきた。
「おう、ありがと」
さっきのやりとりの気恥ずかしさを残したまま、椅子に座る――と。
ぽん、と。
小町の手が、俺の肩に置かれた。
「今日は久しぶりに、スコーンにしてみました！　どう、イギリッシュでしょ」
「お前未だにそれを言うか。イギリッシュってなんだっつの」
頑なにブリティッシュって言おうとしねえな、こいつ……。
「……」
「あ、あの、小町さん……？」
「……」
急に押し黙る小町。何が何だか訳が分からん。
「え、えーと、どうしたんでしょう……？」
……妹相手に敬語になるの、もうやめたい。
「……」
「え、えーと……っ!?」
肩に置いていた手を、するりと解いて。
後ろから、俺を抱きしめてきた。
ふわりと香るシャンプーの匂いが鼻腔をくすぐる。
……ほーん？　どゆことー？
心臓が爆発した。
もはや過去形。
「……えーと……っ!?」
戸惑っているところへ。

第二波。
「あむっ」
「うおっ!?」
耳たぶを、上唇と下唇で咥えて来た。
所謂、甘噛み。
「こここここここここ小町さん？」
もう我を失う。にわとりもびっくりの「こ」連呼。
「……あむっ、あむっ……れろっ」
「……っ!?」
舌を、左耳に滑り込ませて来た。
もう、絶句。
「んちゅっ、れるっ、えろっ、むちゅっ、んんんっ……」
熱っぽい吐息と、いやらしい声が耳朶を打つ。
……今、平日の朝ですよね？　学校行く前の朝食ですよね？
抵抗の仕方すら分からず、手を膝の上に置いて、まるで卒業式に列席しているかのようにきちんと背筋を伸ばしてしまう。普段猫背だから、大してちゃんと伸ばせないんだけど。
「んむっ、はむっ、んちゅるっ、れるっ、あむっ、……ぷはっ……」
1分くらい経った頃だろうか。ようやく小町の口から俺の耳が解放された。
感覚的には小一時間弄ばれていた気がするんだけども。
小町は再び俺の肩に手を置き、耳元で囁く。
「……じゃ、食べよっか」
「お、おう」
有無を言わさぬその姿勢。感動すら覚える。
……いや、何これ？
妹の唾液で濡れた左耳を、露骨に拭いたら傷付けてしまうのかな、などとよく分からない考慮をしてしまい、指で軽くなぞっただけで朝ごはんを食べ始めた。
水分を纏った耳は少しばかり空気に敏感になっていて、ひんやりとしていた。

あ、もちろんギンギンです。放置プレイもいいところ。
2.
そして、迎えた夜。
なんかもう今日の学校での出来事が全てぼんやりしている。これは流石にまずい。
覚えているのは精々、部室に材木座が転がり込んできて「はちえもーん！　助けてよー！」とかぬかしてきたから「うるさい。たまには自分の力でなんとかしろ、この腰巾着め」と冷たくあしらったら「むおぉぉぉーん！　はちえもんが冷たいよー！」と雄叫びを上げながら部室を出て行ったことくらいだろうか。
ちなみにこのやりとりの冒頭で、由比ヶ浜は俺の方を向くと「君に任せた！」と言わんばかりに親指を立てて、そこから携帯に視線を落とすと二度と顔を上げることはなく、雪ノ下に至っては材木座の入りからはけまで、一度も読んでいる本から視線を上げることが無かった。完全なる無視だ。
二人してえぐい。
「ごはん出来たよー」
「あいよー」
小町に呼ばれ、リビングに降りる。
「……はあ」
無意識に、ため息がこぼれた。
いや、今のこの状況が嫌な訳じゃ全くないんだけどね。
ただ、緊張でどうにかなりそう。
「いただきます」
「はいはい、召し上がれ～。っと、小町も、いただきます！」
二人でご飯を食べ始める。
……普通だ……。
別に黙る訳でもなく、どちらからともなく、他愛無い話をする。
それはごくごく普通の、いつも通りの光景。
……俺、何を期待してるのん？
「ごちそうさまでした」

……結局、何事も無く食べ終えてしまった。
まあ、顔を合わせる度にあんなことをする訳も無いかと思い、皿を洗おうと立ち上がろうとした。
――と。
「……」
……ん？
何かが、股座に押し当てられた。
覗き見ると、細い足がこちらに伸びている。
小町を見ると、どう考えても、さっきまで談笑していた顔とは別人のものになっている。
「……っ？」
二人の間の空気が、ぐにゃりと歪んだような気がした。
「お、おい、小町……？」
俺の声にはどんな成分が混じっていただろう。
不安か、興奮か、期待か、期待か、緊張か、興奮か、期待か。
割とポジティブだった。
「……」
小町は何も喋らず、ただこちらをじっと見つめている。
やがて、股座に押し当てられた足がぐねぐねと動き始めた。
「あっ、くぁっ……！」
思わず、声が漏れる。
薄いジャージとパンツしか履いていないため、小町の細い指が絡み付く感覚がほとんどそのまま伝わってくる。
足の指と俺のモノとの間で布地がこすれて、遠慮無く刺激を与えてくる。
平和な食事で安心しきっていた所からの落差に呑まれ、あっと言う間にむくむくと勃ってしまった。
「あぅっ、うぅっ……」
すぐに射精してしまいそうとまではいかないが、それでも未知の快感に頭がくらくらする。
手をテーブルに置いて、ぶるぶると震える。

小町に目をやると、頬を赤らめながらにやっと笑っている。
一見すると可愛らしい悪戯っ子のようにも見えるが、上気した顔には明らかに子ども離れした色気があって。
その表情に見入ってしまい、瞬きもせずにごくりと息を呑んだ。
「ほれほれ～……お兄ちゃん、どう？　気持ち良い？」
「お、お前、なぁ……」
意地悪な言葉をかけてくる小町の声が、いつものトーンより一段低くなっている。
それが妙に艶っぽくて、鼓動が加速していく。
しかし、このままやられっぱなしなのは気に食わない。
小町がこちらに伸ばしているのは右足だ。
だから、俺は小町と同じく右足を伸ばした。
今日の小町はミニスカートを履いていたので、スカートの中に足を滑り込ませて、ショーツ越しに秘部を刺激する。
「にゃあっ!?」
俺からの反撃は予想してなかったのだろうか、ものすごく驚いたような声を上げた。
ぶるぶると震えながら、涙目で抗議してくる。
「こ、こら、お兄ちゃん、反撃は、だめぇ……っ」
いや。
なんでだよ。
若干イラッとしたので、小町に押し当てた足の指を押し当て、前後させ、震わせ、出来る限りの快感を流し込む。
「にゃあぁぁぁぁぁ……っ」
途中から小町は俺の股座から足を放して、椅子に手を置いて上を見上げた。
小町の綺麗な喉が見える。
快感に耐えられなくなっているのか、腰が引けて来ている。
このままでは責めづらい。
なので。
「なあ、小町」

「ふあ……な、なに？」
「やりづらいからさ、ぎりぎりまで椅子を前に引けよ」
「えっ!?　そ、そんなこと……」
「元はお前がやりだしたことだろ？」
「あ、あう……」
「いいから、ほら」
「あうぅ……」
今にも泣き出しそうな顔をしながら、小町が椅子を前に引いた。
「足も開いて」
「えうっ……」
もはや抵抗も出来ないのか、小町は恥ずかしがりながらもすんなりと足を開いた。
……やり過ぎたかもー。
まあ、止めないけどね。
そして、開いた足の付け根に、再び自分の足をねじ込む。
親指を秘部に食い込ませるように、ゆっくりと、ぐいぐいと押し込む。
ぐじゅっと言う水分を含んだ感触と共に、小町が嬌声を上げた。
「うぐぅぅぅ……これ、だめ、これだめ、お兄ちゃん、これだめぇ……っ！」
さっきと比べて、より奥までねじ込まれているのだろうか。
小町は上半身をテーブルの上に倒れ込ませて、あごもテーブルに乗せたまま泣き顔で震えている。
「だめだ、やめない。ほら、頑張れ」
にやけるのを必死で堪えながら、小町に腰を引かぬよう促す。
そして、ぐいっぐいっと何度も足の指を押し込む。
「えうっ、これ、だめ、お兄ちゃ、おかしくな、いぎっ、あうっ、だめ、だめ、だめ、だめ、だめぇぇ……っ！」
「ほら」
最後のひと押しと、一層深く親指を押し込む。
「……っ！」

すると、小町は跳ねるように顔を上げ、背筋をぴんと伸ばして、斜め上を見上げて目を見開いて、口を半開きにしたまま、ぶるりと震えた。
「にゃぁぁぁぁぁぁぁ……っ」
少し長い、猫のような可愛らしい呻き声を上げて、小町の秘部から大量の液が噴き出した。
「よしよし、よく頑張ったな」
右足が小町の液でびしょびしょに濡れて行くのを感じながら、届くのかも分からない優しい言葉を投げかける。
そして、指をもう数回、くいくいと動かす。
「んあっ!? ……やっ、やっ……」
とどめの責めに小町は再び目を見開くと、こちらを見ていやいやと首を振る。
それにも構わず、もう一度親指を押し込むと、小町は「かはっ……」と小さく声を上げて、テーブルの上に崩れ落ちた。
一度目程ではないが、再び温かい液が小町の膣内から溢れ出た。
「……」
ようやく少し冷静になったので、落ち着いて今の状況を整理してみることにする。
小町の様子：虚ろな目をして、口をぱくぱくとしている。身体全体はびくんびくんと痙攣している。
俺：妹をイカせたド変態。
結論：状況を整理するんじゃなかった。
今後の方針：でも、やめない。
よし。整理終了。
立ち上がって小町の下へ行き、脇を抱えるようにして立ち上がらせる。
そして耳元で、
「小町。この弄り合い結構気に入ったわ。ソファで続きやらないか？」
と囁いた。

小町は一瞬で目を見開いたが、俺の顔を見て抵抗は出来ないと悟ったのだろうか。

「あうぅ……分かったよぉ……やるよぉ……」

と力無げに呟いて、体重を預けてきた。

続く。

（7）

1.

ふらつく小町の脇を右腕で抱えながら、ソファまで歩く。

「……」

ふと、思い立つことがあり。

ぴたりと、歩を止めた。

「お、お兄ちゃん……？」

虚ろな目で、小町がこちらを見上げてくる。

上気した顔は、ただ見るだけで劣情を催す程の色気を帯びている。

ソファに座る前に少しだけ……と思い、右手を小町の胸まで伸ばして、鷲掴み一歩手前の強さで揉みしだいた。

「にゃぁっ!?」

突然の責めに、小町が飛び跳ねる。

「ちょ、ちょっと、お兄ちゃ……あぁぁぁ……」

抵抗しようとはするが、既に力が入らなくなっているためそれも叶わない。

小町の胸は、慎ましいながらもしっかりと発育していて、しかも感度が良く揉み甲斐があった。

ゆっくりと小町を自分の正面に寄せて、今度は両手同時に、小町の服の中に滑りこませる。

ブラを着けていなかったので、直接二つの突起を摘み上げることが出来た。

「ひぃぃぃんっ!?」

面白い程に反応して、膝をがくがくと震わせる。

あまりここで時間をとってもなと思い、胸を揉むのをそこそこに、突起を摘まみ、指で弾き、指でしごき上げて、一気にスパートをかける。

「やあぁぁっ……お兄ちゃん、これ、だめ、こんなの、すぐ、イっ、イクっ、イっ、あっ、あっ、ひんっ、ひぐぅっ……～～～～～～～～～っ」

両腕を俺の首に回して支えにすると、小町は全身をぶるぶると震わせた。

2.

更にふらふらになった小町をお姫様だっこで持ち上げてみる。

……軽いなぁ……。

妹の思った以上の軽さに、少しびっくりした。

通常状態でこんなことをされたら絶対恥ずかしがるのだろうが、既に意識が朦朧としている状態だったため、リアクションはほとんど無かった。

……うーん、惜しい真似をしたかな……。今度、突然やってみよう。そんで怒られよう。俺はどこに向かってるんだ……性癖的な意味で……。

ソファの端に小町を下ろすと、ソファの上で向かい合えるように身体の向きを横に変えた。

そして俺も同じようにソファに座り横を向いて、小町と正面から向き合う体勢になる。

……弄り合いって言ったけど、さっきから俺がやたらめったら一方的に弄ったせいで、もはや小町さん戦闘不能ですわ……。

小町の足は体育座りのようになっているが、力が抜けて内股になっており、ショーツが丸見えになっている。

うむ、絶景。

しばしの間、まじまじと眺めた。

その間、約１０秒。

……もう、完全なる変態ですね、俺……。

何を今さらと自らにツッコミを入れ、もう一度小町の顔を見る。

まだ少し息が荒く、焦点も定まっていない。

……どうしようかなぁ……。

迷った末の結論。

より、ひどいことをしてみる。

「小町」

「ふえ……？」

俺の呼び掛けに、まるで寝起きのような声で答えて、小首を傾げてくる。何なのこの子、超可愛いんですけど。
「今からお前のこと、一方的に責めるぞ。いいな？」
「え、ふあ……あぇ……？　う、うん……？」
よっし、あやふやなまま承諾を得た！
「じゃ、失礼します……」
そう言って。
俺は。
小町の両足首をがしりと掴み、かぱっと開けた。
目の前には足を思い切り開いて、ショーツを丸見えにさせている小町がいる。
ここで小町の意識がようやくはっきりとしてきた。
見る見るうちに、目に光が戻る。
「……え……え、えええっ!?」
驚きの声を上げた瞬間、足をばたばたと動かし始めて。
「や、やだやだ！　お兄ちゃん、恥ずかしい！　変態！　変態！」
「ぐ……」
正面から言われると、傷付くな……。
まあ。
１ｍｍも間違ってないんだけど。
「そんな、頑張って抵抗している小町さんにはプレゼントを差し上げます」
「え、なにな……に……ちょ、ちょっと!?　まさか、ウソ……！」
小町の足の付け根に、右足をそろりと伸ばす。
驚きを隠せない小町をよそに、足の裏を小町の秘部に、ショーツ越しにぴとりと付けた。
所謂、電気アンマというやつだ。
「じゃ……行くぞ？」
「や……！」
小町の抵抗も虚しく。
限界まで小刻みに、足をぐりぐりと押し付け始めた。

「にゃあぁぁぁ

あの後小町は気を失ってしまい、流石にやりすぎたなと思いしばらく休ませることにした。
ソファに座り、股座に小町を座らせて、小町を後ろから抱きかかえるようにしてベタベタしている。ぬくぬくだにゃー。
小町は何かご不満なようで、俺の腕に手を添えてぷくーっと頬を膨らませている。可愛いなーと思って頬をつつくと、ぎろりと睨まれた。結構恐い目つきするなこいつ……。
「むー……」
「どうした」
「……なーんか、一方的にされるの腹立つなぁ……」
「最初はお前からだったじゃねえか」
「あの後はお兄ちゃんが一方的に責めたじゃん……。小町、震えてにゃーにゃー言ってただけだよ？」
……すげえまとめ方したな……。
でも、合ってる。
「……じゃあ、咥えてみるか？」
「え」
試しに言ってみたら、小町が目を見開いた。
「……やってみるか？」
もう一度押してみる。
「え、あ、やー、どうしようかなー……」
「小町がしてくれたら、さぞかし気持ち良いんだろうなぁ……」
小町の胸を抱きしめて頬をすり寄せながら、もう一度押してみる。
「ふあぁぁんっ……あんっ……も、もう、分かった、分かったから！……すればいいんでしょ、お兄ちゃん……」
よし。押してみるもんだ。
少し潤んだ目でこちらを見上げる小町を見て、心拍数が跳ね上がるのを感じた。
4.
「……小町が咥えるんだよね？」
「ああ、そうだ」

小町が不安そうに訊ねる。
小町はソファにもたれかかり、俺はソファの上に立って、小町の目の前に仁王立ちしていた。
自分がイメージしていた構図とは、だいぶ違ったのだろう。
小町は不安げに上目遣いで俺を見つめてくる。
……いちいち可愛いな、お前は……。
「大丈夫。……あまり、無理して動かなくて良いから」
言うと、俺はズボンとパンツを一気にずり下げて、脇に脱ぎ捨てた。
「ふあ……」
目の前でそそり立つものを見て、小町がごくりと息を呑む。
「これを咥えてもらうからな……」
小町の顔に裏筋をぺちぺちと、う～～と唸られた。
「なーんかなー……。……お兄ちゃん、相手が小町だからって若干調子に乗ってるでしょ？　……若干でもないか。すごく調子に乗ってるよね」
「ぎくっ」
バレた。
「そ、そんなことはないぞ？　さあ……！」
誤魔化すように、亀頭を小町の唇に押し付けた。
「むぐっ……んんっ」
「口を開けて」
「……あーん……んぶっ、んぐっ、んぶぅっ……」
咥えてもらうと言うよりは、小町の口に挿入する、という表現の方が正しい気がした。
小町は位置的にこれ以上後ろへは下がれないため、俺が腰を前に押し出した分だけ、小町の口の中に竿がねじ込まれる。
「……んちゅっ、れるっ、おむっ、はむっ、んちゅるっ、れろっ……」
「うおっ、くぅっ……」
予想に反して、小町はすんなりと口の中に受け入れ、亀頭や裏筋にむしゃぶりついて来た。
ぶっちゃけ当初の予定では、苦しそうに悶える小町の口に何度も腰

を打ち付けて涙目になる小町を蹂躙する……くらいの鬼畜なことを考えていたのだけれど。
……これでは無理そうだ。
責めやすくするためにこの構図にしたんだけどな……。
っていうか、めっちゃ気持ち良い。なんだこれ？
涎を垂らしてしまいそうなくらいの気持ち良さに情けない声を漏らしていると、小町が深々と咥え込んだまま、俺の腰をとんとんと指で叩いてきた。
ジェスチャーで、「抜いて」と言う指図をしてくる。
その指示に従い、モノを抜いた。
ぶっちゃけ、すぐに出そうだったしね！
「……ぷはっ。休憩休憩～」
小町は呑気な顔で、深めに呼吸をした。
なんだかんだで、互いに息を切らしていた。なんで俺もなんだよって話だけど。
このタイミングで、思ったことを言ってみることにした。
「小町、お前すげえな。よく初めてなのにこんな風に……」
「え、初めてなんて言ったっけ？」
「え、初めてじゃないの？　え、え、え？」
今世紀最大ってくらいの勢いで動揺する。
え、どうしよう？　世界が反転しちゃうよ？　流転しちゃうよ？
俺の目に見える動揺を見て、小町がにやりとワルい笑みを浮かべる。
「いや、初めてだよ？」
けろりと言われた。
……くぅ……こいつぅ……！
兄の乙女心を弄びやがってぇ……！
……自分で言ってて気持ち悪くなるぅ……！
小町は、ん～～と考える仕草をすると、こちらを向いてにこっと笑った。
「別にそういうビデオとかを見たことある訳でもないのに、なんか不

思議と色々してあげたくなっちゃって、気付いたらぺろぺろって舐めまわしてた」
……うーわ、すんごいエロいこと言っちゃってる……。
「あとねー、お兄ちゃんのだって思うと、どんなに凶悪に太くて逞しくても、すんなり受け入れることが出来たんだよね。不思議〜。他の人ならこうはいかないと思う」
「安心しろ。お前の上下の口に俺以外のモノは入れさせない」
「お兄ちゃん……プロポーズともとれるそのセリフ、お兄ちゃん史上最高に気持ち悪いよ……」
……。
……頑張って、ドヤ顔したんだけどなぁ……。
小町はふうとため息をつくと、竿をきゅっと握った。
「そういうお兄ちゃんは思ったより感じてくれちゃってるね。なに、最初は乱暴にしようとでも思ってた？」
小町がにやりと笑う。
バレてた。
でも、頑張って誤魔化そうとしてみる。
「な、そ、そんな訳ねえし！　紳士に行くつもり満々だったし！」
「紳士がとる体勢じゃなかったでしょさっきの……」
すんごい呆れられた。あっれー？　おっかしいなぁ……。
脳内プチ反省会をしていると、こちらを見た小町がふっと笑った。
「……ん、もっとしっかり舐めたげる。今度はお兄ちゃんが座って？」
そう言ってにひっと笑う小町の顔は、最高に可愛かった。

続く。

（８）

１．

と、言う訳で。

何がどう言う訳だって話ではあるのだけれど。

今現在、俺はソファに下裸で座っている。上裸の対義語のつもりで使ったけど、これ何て読もう。から？　……ＫＡＲＡ？　久しぶりに聞いた。

小町はそんな俺の足と足の間に座り込んでいる。女の子座りでぺたりと。

「……むむむ」

小町が少しばかり眉をひそめて唸っている。どうしたの？　可愛いからいいけど。

どうした、と声を掛けると、ぱっと顔を上げた。

「お兄ちゃん、何で小さくなってるの？　さっきまでもう小町にやばいことする気しか無いですってくらいにギンギンだっただじゃん！

ギンギンだったじゃん！」

恥ずかしい言葉を２回も言いやがった。

そこから、膨れっ面で内腿をぺちぺち叩かれた。こらこら。

あ、今度は萎んでる竿自体をぺちぺち叩き始めた。こらこら。ちょっと変な気分になりそうだからやめなさい！

なんて思っていたら、小町が目をぱちくりさせた。

「……あれ、ちょっと反応した？」

……。

……もう既に、変な気持ちになってた。

「でもこれ、本当にほんのちょっとしか大きくなってないよね。なんで落ち着いちゃったのー？」

言って、小町が少しだけ大きくなった竿の部分をぺちぺちとデコピンする。

子どもらしくて最高に可愛いけど、攻撃する箇所がちょっと危険な匂いがぷんぷんしてますね！

「や、その、ここに来て少し冷静になっちまったっつうか……改めて今のこの状況を見て、やべえな～とか思ったり思わなかったり……」
全力で目を泳がせていると、小町にしらっとした目つきで見られた。
「……はあぁ？　ここに来て？　小町のこと散々めちゃくちゃにしといて？」
……ぐうの音も出ないです。
気まずさに耐え切れずばりばり目を逸らしていると、小町がふうっとため息を吐いた。
そして、呆れ気味に笑みを浮かべる。
「まったくお兄ちゃんはしょうがないなぁ……じゃあ、すぐにその気にさせたげる」
「え……うおっ!?」
小町は俺の返答を待たぬまま、その小さい口で亀頭をぱくっと包み込んだ。
「んっ、んむっ、むぐむぐ、んんっ……」
内腿に手を添え、頬張るようにして亀頭をゆっくり舐めてくる。
頬が幾度と無くぼこぼこと隆起を繰り返す。
小町の表情は、ほんのついさっきまで見せていた見慣れた表情ではなく、目を妖しく細めて上気している何とも色っぽい顔つきになっていた。
「おっ、くおっ、うおぁっ……」
妙な声を漏らしてしまった。
あっと言うまに、俺のモノが小町の口の中でむくむくと大きくなっていく。
小町はというと、大きくなってきたのに気付くと、にこっと微笑んで「気持ち良い？」と目で聞いてくる。咥えた状態での上目遣いは可愛いしエロいしでもう大変。
「……ぷはっ。……ふう」
ほんの数分でいきり立ったところで、小町は満足気に口を離した。
「……どやっ！」

ぺかーっと光らんばかりの笑顔でどやられた。
なんか微妙に腹が立ったので、小町の両頬をむにーっと引っ張る。
「いひゃいいひゃいいひゃい(痛い痛い痛い)！　なんれっ(なんでっ)!?　なんれっ(なんでっ)!?」
すげえ良いリアクションくれた……。ちょっと涙目になる辺りとても良いと思います！　むにーっ。
ぱっと手を離すと、小町は恨めしそうな目でじっと睨んできた。
「むうぅぅ……お兄ちゃん、実の妹に手を出すなんて……！」
「それ、答え方に超迷うんだけど……」
「……あ」
なんだろう。
唐突に、死にたくなった。
二人とも、顔を真っ赤にしてしばし目を逸らした。
2.
「それにしてもさあ、お兄ちゃんのこれ、匂いがすごいよね」
小町は唾液でぬめった竿をゆっくりとしごいて、にちゃにちゃと音を立てながら突然なんか恥ずかしいことを言って来た。
「え、そんなに？　毎日ちゃんと洗ってんだけどなぁ……」
ちゃんと剥いて洗ってますよ？　これ良識、常識！
言うと、小町が手をぱぱっと振った。
「あ、ごめんごめん。そういうんじゃなくて……なんかこう、すごいやらしい匂いがするって感じ？　特におっきくなってからが何かもうすごくて……口の中に入れてると、なんか、変な気持ちになるんだよ、ね……」
小町がなんかすごいこと言ってるー！
と思っていたら。
言葉の途中で、小町の様子がおかしい、と言うより、おかしくなってきたことに気付いた。
「おい、小町、どうした？」
「んー……」
見ると、目がとろんとして、口も半開きになっている。

そんなうっとり顔で竿を見つめたかと思うと、ゆっくりと舌を伸ばして、裏筋に這わせてきた。
竿に手を添えて、舌を伸ばし切った状態で固定して、舌の先で裏筋を舐め、そのまま口を玉の方まで移動させる。
今度は玉を咥えて、口の中でころころと転がし始めた。
しかも。
その間中、ずっと。
「んむっ、れろっ、くんくんっ、んむぅっ、んちゅっ、はぁっ、くんくん……」
……めっちゃ匂い嗅いでる……。
いや、だめでしょこれ。
こんなやらしい匂いの嗅ぎ方あるの？
うっとり顔でじっくり舐り回されて、徐々に徐々に思考が甘い快楽によりとろけて麻痺してくる。
「ぷはっ、あー……これ、癖になるかも」
また。
すげえこと言いやがった。
「あ、またおっきくなった」
蕩けておっとりした表情で、にへっと笑った。
……くうぅ……身体は正直なんです……。
小町の言葉一つ一つで、いちいち反応してしまう。
だってしょうがないじゃない。
可愛いんだもの、エロいんだもの！
緩慢な刺激で完全に思考が溶かし流され、まるで大浴場で温泉に浸かっているかのように腕を広げて天を仰いでいると、急に新たな刺激が加えられて、跳ね上がるように首を前に出した。
「な、何してんだお前!?」
見ると、小町が内腿に添えていた手を外腿にまわして、まるで竿を固定するかのような体勢をとり、自ら喉奥まで咥え込んでいた。
口をぷはっと離すと、小町がにやりと笑う。
「んー……？　なんかね、もっと濃い匂いが欲しくなっちゃった」

言って、にぱっと笑う。
……いやいやいやいや。
語調と笑顔は超可愛いけど。
内容がやばいでしょ？
「いやお前それ、どうい……う……!?」
俺の言葉も待たずに。
小町は再び竿を喉奥まで咥え込んで、ずぞぞっと吸い上げながら口を離し、またがぽがぽと咥えてくる。
喉奥まで咥え込んだ際もしっかりと舌で亀頭をつつき、口内・舌・喉奥の3つの異なる感触に責められ続けた。
がっぽ、がっぽ、ぐじゅっ、と。
ほんの数分前までは全く聞こえなかった、いやらしい水音がリビングに鈍く響き渡る。
俺はというと、もはや小町に流し込まれる快楽の為すがままになり、小町の後頭部に足を回して、上半身を屈めて小町の耳に手を添えて震えるばかりだった。
もう、限界が近い。
正直、この状態だといずれ近いうちに出るし、ちょっと敏感すぎるので責める手を緩めてほしいのだけど……。
「こ、小町、出る、そろそろ出るから、もうちょっとゆっくり……」
懇願するように言うと、小町はそれはそれはもう、悪そうな笑みを浮かべた。
そして、ストロークをそのままに、口を往復させる速さをこれ以上無い程までに上げてきた。
「うわ、ちょ、ま、待て、小町、だめ、無理、これ無理だから……!」
多分、同じような台詞を小町にがんがん言わせてたので、これは報いなんだろうなーとか呑気に考えちゃった。ぶるぶる震えながら。
小町は嬉しそうにこちらを見上げている。この顔写メって待受にしたいなぁ……。誰に見られても一発アウトだけど。
そんなことを考えていた、その数十秒後。
「あ、うあ、だ、だめだ、出る、出る、出る……!」

小町の顔をがしっと掴んで思い切り引き寄せて、ぐりぐりと喉奥に亀頭を押し付ける。
「んぶぅっ!? うぇっ、うぐっ、んむぅぅぅ……」
再び涙目になった小町が、苦悶の声を漏らした。
次の瞬間。
「う……あ……――――――――っ」
小町の口の中に、大量の精を吐き出す。
あまりに粘度が高いためか、尿道を通る感覚がはっきりと分かった。
一回一回痙攣する度に、腰を押し出し、手を引き寄せ、小町の喉奥に亀頭を押し付ける。
「んぶっ、ぷぁっ、んぐっ、うぇっ、あぅぅぅ…」
小町は涙目で一通り精を喉奥で受け取ると、ゆっくりと口を離した。
それにつられるように、俺も小町の頭に絡めていた足を解く。
小町は苦しそうな表情を浮かべながら、一・二度ごくっと喉を鳴らした後、舌をでろりと出して見せた。
舌の上には大量の精が残っていて、下に差し出した手の平にそれがぽたぽたと落ちて来る。
小町は焦点の定まらないまま、恍惚とした表情を浮かべた。
この後はどういう行動に移るのかとどぎまぎしながら見つめていると、手の平に溜まった精を見ながら、
「ほんとに……濃い匂い……すご……」
そう、うっとりとした口調で言って、やがて手の平に舌を伸ばして、ぺろぺろと舐め始めた。
胸の奥に邪な欲望が凄まじい勢いで渦巻くのを感じながら、何とか堪えて小町の髪をくしゃりと撫でた。
それに気付いた小町は、舐め終えた手を下げ、俺の目を見てにこっと笑った。
3.
それからしばらく経った後。

手と顔を洗った小町が、まだ惚けた表情のまま、ソファで俺に身を寄せていた。
「あ、そうだ」
ぽつりと、小町が呟く。
軽く見やって続きを促すと、顔をこちらにすいと向けた。
「明日さ、塾の友達と勉強会するから、帰りが遅くなるんだ。だから、ご飯どこかで食べて来てくれる？」
「おい待てまさか毒虫と一緒なのか」
思わず肩を掴んじゃった。話聞いてない感半端ない。
小町は一瞬目をぱちくりさせたが、すぐにふっとふやけたように笑った。お兄ちゃんにとっては大事な話なんだけどな！
「もー。一緒は一緒だけど、他に男女合わせて４人くらい居るし、大丈夫だよ」
それにね、と俺の手を不意に握って、
「今、こんな……感じだし、お兄ちゃん以外の人とあんまり居ても……ね？」
目を逸らしながら、ぽしょぽしょと。
俺の妹が、そう言った。
やばい。
死ぬ。
この可愛すぎる妹を全世界に自慢したい。そして一生傍らで守りたい。
なんかこのまま愛を叫んでしまいそうになっていたところで、小町がまだ何か言いたそうにしているのに気付く。
「でさ、そういうことだから、明日は帰るのが遅くなるんだけど……あの、その……」
妙に言い淀んでいる小町の表情に、尋常ならざる気持ちの昂ぶりを覚える。
やがて小町はそっと視線を上げて、上目遣いでにへっと笑うと、
「よかったら、い、一緒に……寝ない？」
そう言って、ぼふんっと音が出そうな程の勢いで顔を真っ赤にし

た。
……。
……え。
「いいぞ」
……。
……あ。
びっくりしすぎて、いやどうせこう答えるとは思ったけど、全く以ての即答で。
誘いに、乗っちゃった。
「あ、ありが、とう……」
照れ照れとはにかみながら、小町は人差し指同士を合わせてもぞもぞと動かした。
……いかん。
今日、まともに寝られる気がしないんだけど。
続く。

（9）

1．

明くる日の夜。

小町に言われた通り、帰り道で晩飯を済ませておいた。食べたのはもちろんラーメンである。なりたけは通ってしまうなぁ……。

誰も居ない家に帰って、まずはカマクラを愛でてやろうと近付いたが、ふーっと不機嫌に鳴いて、すいっとどこかに行ってしまった。家でもぼっちだぜぇ……。

むん。

ただただ。

そわそわする。

寝るまで、というか小町が帰ってくるまで何をしてようかなーなどと考えて、手当り次第に本やらゲームやら勉強やらテレビやらと試してみる。

……何をしてても落ち着かない。

なに、俺どんだけ小町に依存してるのん？　びっくりだね。

取り敢えずシャワーを浴びて、パジャマに着替える。

一応、念の為、どうなるか分からないから等というよく分からない予防線を心の中に張って、パンツを履かずTシャツも着ないでおいた。パジャマの下は裸の状態。一応ね、一応。

部屋に入ると、妙なテンションの高さによりベッドに飛び込んだ。

「ぐお」

思いの外跳ねて、ベッド横の壁に肩をぶつけた。何これ、超ダサいんですけど。

アイシングしているスポーツ選手よろしく肩を押さえていると、玄関が開く音がした。

とててと階段を登る音がしたかと思うと、部屋のドアがきいっとゆっくり開いた。

隙間から、小町がぴょこっと顔を出す。その手はドアに添えられていた。なんか小動物みたいだな。超可愛い。

「ただいまー」
「おう、おかえり」
「……」
……。
突然の、沈黙。
見つめ合って沈黙ってなんだよ。恥ずかし過ぎるだろ。
数秒黙っていると、小町が照れくさそうに、
「あー……シャワー、浴びてくるね？」
ぽしょりと言って、ドアを閉めるととととてと小走りで去って行った。
……何この緊張。むずむずが止まらないんですけど。
枕を抱きしめてベッド上を転がっていると、また壁に肩を打った。
今度は逆。
腕を交差させて両肩を押さえることでザビエル感が出た。超どうでもいい。
あぐらをかいてそんなポーズをとってるもんだから、ちょっと暗めに撮影してもらえれば何かのアルバムのジャケットに使ってもらえそうとか思っちゃった。ほんとどうでもいい。
2.
数十分後、シャワーを浴びてほかほかパジャマ姿になった小町が部屋に入ってきた。
「ど……どーもー……」
「なんだその挨拶……」
どうやら、小町は小町で緊張しているようだ。15年連れ添っておきながら、お互い緊張してる兄妹ってなんなんだ……。
「よし、じゃああれだな、お前がベッドで寝て、俺が床で寝れば良いんだったな」
「なんで友達の家に泊まりに来た人みたいになってんの……」
呆れ返った目で見られた。
……動揺しすぎて訳わからんこと言っちゃった。
「じゃ、じゃあ、ほら、ここ」

「あ、ありがと……」
寝そべった状態で、掛布団を小町の側に開いて入るよう促す。
……恥ずかしくて死ぬ。
小町はするすると入ったかと思うと、ぺたりとうつ伏せになった。
「ん、何してんだおまえ？」
「んふふー、お兄ちゃん、まずはお喋りしよう！」
うつ伏せしてる為限度があるが、それでも目一杯首を振り向かせてにひっと笑った。
ほーん？　何このイベント？
まあ。
可愛いから、許す！
おう、と軽く応じて、小町の隣でうつ伏せになった。もぞもぞ。
3.
互いにビーチフラッグのスタート時のような体勢で、のんびりと話す。この状態のせいで既にちょっとおねむ。
「お兄ちゃんと一緒に寝たのって、小町が小学校低学年のときが最後かなー？」
「そうかもな」
確かあの時は、寝る前に心霊番組を見た小町が、ビビり過ぎて俺の部屋に来たんだっけ。もちろん、兄として全力で助けた。ただ一緒に布団に包まっただけだけど。
ちなみに現在、部屋の明かりは消していて、枕元に小町が部屋から持ってきた間接照明を置いている。温白色の柔らかい光がなんとも心地良い。
照明を褒めると小町が「へへーん、ムーヴィーでしょー！」とかぬかした時は絶望したけど。なんだムーヴィーって。それただの映画だろうが。あと発音だけちゃんとしてんのが腹立つ。ムーディーって正解を言われたとしてもなんか腹立つし。もう二重に三重にダメ。
「は～、そう考えると……あの頃から色々あったね～……」
小町がややとろんとした顔で、間抜けな事を言い出した。
「なに、俺ら老夫婦かなにか？」

金婚式間近な感じ。
あとこんな台詞を言うとしたら、魔王との決戦前夜とかか。パーティーで焚火を囲って話してそう。
小町は俺のツッコミも大して聞かず、というか完全にスルーしてまどろんでいる。むう、こいつ、すっかりくつろいでやがるな……。
「ん～、色々あった、色々あった……」
お前は何の番組のナレーションだ。
んー。
なんか、てっきり今夜はそれはそれはもう、えげつないことになるのかなって期待してたけど、期待してるって言っちゃったけど、なんかこのままままったり寝そうな気がする。
小町も最初はどうするつもりだったかは分からんけども、この調子だと気付いたらすやすや寝ちまいそうだな。
小町を見るとすっかり舟をこいでいて、ただのおねむさんである。ほんとに何しに来たんだお前……。
顔の前で軽く手を振っても「んにゃ？」と寝ぼけた反応しかされなかった。超可愛かったけど。
こりゃもう、俺も寝た方が良いかな……と思い、小町が隣に居る状態で寝ることにまだ抵抗があったため、小町に背を向けてごろりと横を向いた。掛布団、ちょっと巻き込んでそっち薄くしてごめんね。
なんかドキドキし損だったなぁ……なんて思いながらゆっくり目を閉じた。
――と。
「お兄ちゃん」
背後で、さっきまでとは明らかに違う声音の、小町の声がした。
3.
「なーに寝ようとしてんの……？」
息混じりの妙に色っぽい声を出しながら、すすすと俺に身を寄せてくる。
「や、だって、お前もう今にも寝そうだったから……」
いつの間にか背中から抱きしめられていたため、がちがちに緊張し

ながら返事をする。
「寝る訳ないでしょ……」
耳元で囁かれ、鼓動が跳ね上がった。
「お兄ちゃんもおっきくなって、小町もすっかりおっきく……とはまだ言えないかもしれないけど、それでもそれなりには育ったつもりだよ？　ほれほれ……どう？　どう？」
言うと、小町が俺の背中に自分の胸をむにむにと押し付けてきた。柔らかっ……！
……あ。
……こ、こいつ……。
ブラ、着けてねえ……！
いや、考えてみれば、寝るときに下着を着けないのなんて当たり前とも言えるんだろうけど。
しかしこの感触はまずい。背中になんか二つの固いものが当たっている。
既に触ったことはあるけれど、直接見ながらでもないし、今のこの状況による興奮も相俟って、背中に当たる突起がやたらと気になる。
それでも、背中越しなんだから下手に喋らなければ動揺も伝わらないだろうと高を括っていたら、
「んふふー……お兄ちゃん、動揺してるでしょ？　心臓の音、ばっくばく聞こえてるよ」
おでこを俺の背中に当てて、小町がくすっと笑った。
……めっちゃあっさりバレてた……。
死ぬほど恥ずかしいんですけど。
ここからどうしようかと考えあぐねていると、小町が顔を更に近づけた。
そして。
「はむっ」
「――――っ!?」
耳たぶを咥えられた。上唇と下唇で、はむっと。
え、なに、どうしたの小町ちゃん？　お兄ちゃん、ドキドキで死ん

じゃうよ？

小町は何か言うこともなく、ひたすら耳たぶを咥えてくる。やばい、小町が耳たぶはむはむしてくれるサービスがあったら毎日やってもらいたい……。寝る前の３０分間みっちりと。

しばらく咥えていたかと思ったら、不意にぷはっと言って唇を離した。その際の些細な吐息さえ、脳髄に電流が走ったかのような刺激に変わる。

ぶるっと身体を震わせると、小町が急に右肩を掴んできた。

そしてそのまま、ぐるりと小町の方に向くようひっくり返される。

「うおぉっ!? おい、何やって……」

小町を見て、言葉を呑み込んだ。

雰囲気が、ほんの数分前とまるで別人だったからだ。

とろんとして、どことなく潤んだ目。

上気した頬。

少しばかりボタンを開けて、妙に色気を発している胸元。

呼吸の度に下唇が微かに震える、半開きの口。

完全に、「その気」になっていた。

「ねえ、お兄ちゃん」

俺の首に手を回し、甘ったるい猫撫で声を出す。

時間の流れがひどくゆっくりに感じられて、小町が一文字一文字発するごとの口の動きがはっきり見て取れる。

やがて、更に顔を近付けて、おでこをこつんと当てて、目を細めながら、

「小町と……しよ？」

更に甘ったるい声音で言うと、俺の返事も待たぬままに唇を重ねてきた。

わずかばかり残されていた理性の糸が、本当に、いとも容易く焼き切れた。

続く。

（１０）

１．

「んっ、んふっ、んむぅっ、あっ、ひぁっ、やんっ、あむっ、れろっ、んんぅっ……」

小町の悩ましい声が耳朶を打つ。

ベッドの上で寝たまま向かい合って、舌を絡ませながら互いの身体をパジャマの上からまさぐる。

間接照明の柔らかい光に照らされながら、俺は小町の胸を、小町は俺の股間を弄り回していた。

「あっ、んあっ、あぅっ、お、お兄ちゃん、変態さんだぁ……」

口を離すと、小町が喘ぎ声に紛れてなんか言ってきた。こんにゃろう……。

小悪魔っぽい笑みが可愛すぎて余裕で許すんだけどね！

「お前こそ、まさぐり方がエロいにも程があるぞ。淫乱さんだな」

言うと、小町が急にしらっとした目つきで見てくる。

「うーわっ……お兄ちゃんがさん付けすると、マジで気持ち悪いね」

……。

イラッ。

八幡、ややおこ。

お返しとばかりに、左手は胸の先端の突起を生地の上から摘み上げ、右手は秘部を責める。

「にゃぁっ!?　ちょ、ちょっと待って！　いきなりそんな、だめっ、ひんっ、ごめんってば、ごめんって、あぅっ、ほ、ほんと、ほんとだめ、そんなのされたら、イっ、あくぅっ、ひぐっ、ひぎっ、あっ、かはっ、あーっ、あっ、あっ、あっ、ひぁっ、あーっ……――――――」

言葉が途切れたかと思うと、こちらの首に腕を回して、目をむいてびくんびくんと痙攣した。震えながら、腰をこちらに近付けたり遠ざけたりしている。

抵抗の言葉も掻き消え、途中から呂律さえまともに回らなくなった小町の虚ろな表情がたまらなくなり、ついついやり過ぎた。

……まあ、ここからもっとひどいことをたくさんすると思うけど。っていうか絶対するけど。
「ひっ、ひぐっ、んぁぁっ……んむっ、んちゅっ、れるっ……」
依然として震えながら、涙を流して唇を重ねてくる。
こちらの唇を食べるかのようにあむっ、あむっと咥えてくる。視線はまだ虚ろなままだ。
やがて、ぷはっと言って唇を離すと、こちらの胸に顔をぽすりと埋めた。
「……鬼畜」
言って、顔を上げるとぷくっと頬を膨らませていた。うん、いつものあざと可愛い妹だな。頭をぽんぽんと撫でて謝る。
「すまんすまん。……でも、これくらいの方が良いだろ？」
聞くと、小町は顔を真っ赤にして再び顔を胸に埋めた。俺の胸ってこんなに需要あったんだ……。気のせいだな。
「……そ、そんなこと……！」
胸板に顔を押し付けた状態で言うものだから、小町の声が心臓に直接響いたような気がした。
やがて、顔を離すと、
「お兄ちゃん、そろそろ……ちゃんと触ろっか」
言って、にこりと口角を上げた。
ぱっと見はただの可愛らしい笑顔だけれど、こんな笑顔を男が見たら、白昼の街中だろうか皆勃ってしまうんじゃなかろうか。
そう思ってしまう程の、艶っぽい笑みだった。
「お……おう」
ごくりと息を呑んで応じると、小町はこちらのパジャマの前のボタンをゆっくり開けて行き、上半身の前面を露にした。
「おぉー……思ったより逞しいんだね、お兄ちゃんの身体」
胸板や腹などを触りながら、うっとりとした顔で言ってくる。
うーん。
この子、本当に小町なの？
そう思ってしまう程、いちいち色っぽい。

妹に全力で疑いを掛けていると、今度は小町は自分のパジャマの前のボタンを開けて行く。
ゆっくり、一つずつ。
外す度に、悩ましげな視線を向ける。
視線が、完全に小町の上半身に釘付けになってしまった。
やがて全部ボタンを取り終えると、片手でパジャマの上着を掴み、ぺらりと捲って自分の胸を見せてきた。
「さ……どうぞ？」
息混じりの艶美な声と、目を細めた笑顔に撃ち抜かれ、吸い込まれるように手を伸ばした。
2.
ゆっくりと小町の胸に触れると、「あっ……」と小さな声を漏らした。
荒々しくならないよう慎重に、ゆっくりと揉みほぐす。
「んっ、あっ、ひっ、気持ち良い……それ、気持ち良い、よぉ……」
泣きそうになりながら、可愛らしい喘ぎ声を上げる。
愛撫の最中、胸の突起に目をやると、先程前の責めも相俟ってか、既にこれ以上無いのではと思うくらいにぴんと立っていた。色は鮮やかなピンク色をしている。
それを見て、心がざわつく。我慢出来ない。
「お兄ちゃん……どうしたの？」
俺の様子に気付いた小町が、やや不安げに声を掛けてきた。
だが、その声で余計にそそられてしまった。
優しく、腫れ物にさわるように揉んでいたところから、一転して不意に2つの突起を強く摘み上げる。
「ひぃぃぃぃぃんっ!?」
完全に油断してうっとりしていた為か、突起を摘み上げた瞬間の小町の反応は凄まじかった。
飛び跳ねるのではないかと思う程痙攣したものの、それでも俺は手を小町の胸から離さず、空いた指で胸を触りながらも、繰り返し何度も何度も突起を摘まんでしごき上げる。

「いぎっ、あがっ、やっ、伸びちゃう、小町のそこ、伸びちゃうからぁ……っ、引っ張んないで、引っ張んないでよぉ……えぐっ、ひぎっ、い、イく、またイく、お兄ちゃんに無理矢理イカされちゃうぅっ……んあぁぁぁぁっ！」

小町は絶叫に似た嬌声を上げると、背筋をありったけ反り返らせて、口から涎を垂らしながら激しく絶頂した。

「……あ」

何か妙にあったかいような……などと思って下を見ると、小町は秘部から大量の液体を漏らしていた。パジャマがぐしょぐしょになってしまっている。

「うぅぅ……お兄ちゃんのばかぁ……」

「……あー、その、なんだ、……すまん」

流石にちょっと反省した。

3.

「大体お兄ちゃんは小町のことイジメすぎなの！　毎回毎回頭おかしくなりそうになってるんだよ!?」

「いや、そうは言ってもだな。毎回初めはそこまで激しくする気は無いんだぞ？　でもお前の反応があまりに可愛くて、もっと反応を見たくなってしまうからどんどん責めてしまうんだ。つまり、俺は悪くない。小町が可愛いのが悪い。いやでも、可愛い小町は悪くない。ああ、そうか。結局、誰も悪くないんだな」

「ごみいちゃん……何めちゃくちゃな論法立ててんの……」

ちょっと小町の体力が持ちそうに無いので、休憩中。

ベッドの上で俺が壁に背を付けて胡坐をかき、小町が股座に座り込んでいる。ぬくぬくだにゃー。

小町の下半身にはその場しのぎでタオルを掛けている。

小町の身体を後ろから抱きかかえるようにしながら、小町の身体良い匂いすんなー何のシャンプー使ってんのかなーとか思いながら、小町の糾弾に対して適当に応戦していた。本当に対応が適当だったようで、相当な勢いで白眼視された。でもぬくぬくしてて鷹揚になっている今なら効かない！

やけにタフな俺を見て、小町が呆れながらため息を吐く。
「……ふう。あ、小町そろそろ行けるよー」
「おう」
テンションが心の中でだけ急に上がって、声が若干裏返りそうになった。
「ちょ、ちょっと、そのテンションのまま胸触るのやめてよ。付いて行けないから」
む、気付いたら触ってたぞ。魔性の胸ってやつだな……。
しかし、このテンションだとそう思われるのか。なら……。
「はっはっはー！　お前の胸を揉んでやろうかー！　これでどう？」
「気持ち悪い。二度としないで」
「ごめんなさい……」
こんなひどい会話もお手の物。そう、比企谷兄妹ならね！
「次……何しよっか？」
俺の腕に顔を埋めながら、少しだけ息混じりの声で聞いてきた。
声音のわずかな変化だけでも、小町のモードが切り替わったのが分かる。
「んー、そうだな。言っても引かない？　引いてもやるけど」
「え、なに、そんなやばいやつなの？　ていうか小町の抵抗は関係ないんだ……」
「ああ」
「鬼いちゃん……鬼畜だね。色鬼だよ、色鬼」
「一文で鬼って漢字使いすぎだろ」
あと、色鬼って言葉をこんなとこで使うな。場違い過ぎる。
やや間を置いて、小町ははふーとため息を吐くと、
「……で？　なんなのさ」
諦めの混じった表情でこちらを振り返った。
ここで変に躊躇したら余計に気持ち悪くなるので、すぱっと言うことにする。
「お前のアソコを舐めたい」
小町の顔が止まった。や、もう、ほんとに止まったとしか言いよう

がない。ぴたって。
うーん。
試しにもう一度言ってみる。
「小町、お前のアソコを舐め」
「2回言わなくて良いよ恥ずかしい！」
すんごい勢いで遮られた。どうやら聞こえていたらしい。
「そうか。……じゃあ、舐めるぞ？」
言うと、小町は困った顔をしながら、
「うー……意思確認の意味ないじゃん……でも、どうせ抵抗したら余計めちゃくちゃにされるんだし……」
「おいおい、兄を何だと思ってるんだ」
当たってるけどね。１０割１０分。１１０パーセントになっちゃった。
「んー……高坂？」
同志の名前を出された。
「向こうはこんな鬼畜なことはしてないぞ、多分」
何故か別のご家庭のフォローをする流れに。
まあ。
ここでぐだぐだやりとりをしていても仕方が無い。今さらだけど。
小町の耳に唇を付けて、声を直接耳に送り込む。
「小町。舐めるぞ」
言うと、小町は顔をぶるるっと震わせた。
そして、顔の向きを固定したまま、
「わ……わかったよぉ……」
なんともそそる声で、要望を受け入れてくれた。
続く。

（11）

1.

「じゃ、小町。タオル取って足開いて」
「う、うん……」
小町に指示を出すと、おずおずとタオルに手をかける。
横から間接照明の光が入る位置に居るため、妙に味わい深いシルエットが出来ている。
「うぅ……やっぱり恥ずかしいよぉ……」
小町を見ると、タオルは取ったものの足をぴったりと閉じてもじもじさせている。
よほど恥ずかしくなったのか、胸まで腕で隠してしまっている。
「大丈夫だって。なんも恥ずかしくねえよ。さあ」
じりっと寄ったら、仰け反るようにして距離を取られた。
「お、お兄ちゃん、目、目。キモ怖いいよ……」
「キモ怖いい？　キモいと怖いと可愛いの略か？」
「ううん、キモいと怖いとキモいの略」
……。
「なんでキモいって2回言ったんだお前……」
しかも2回目に関しては「い」のみの採用って。絶対わかんねえだろ、それ。
「だってほんとなんだもん！」
恥ずかしさで目を潤ませながら、悲しい事を言ってきた。
うーん。
どう行こうか。
「よし、じゃあ――」
――と。
俺が何かしら時間をかけた策を講じてくれるのかと、小町が油断した瞬間。
「そいっ」
「わきゃあっ!?」

小町の膝に手をかけて、その両足をかぱっと開いた。
本当に急に開くと危ないから、最初の一瞬だけゆっくりと動いて、その後グイーンとややゆっくり開く。
その速度で開いても効果はてきめんだったようで、小町が制止する前に彼女の陰部をまじまじと見ることが出来た。
「おお……」
思わず、感嘆の声が漏れた。
「み、見ないでえ……」
小町はなんだかんだで俺の顔を手で押さえたり陰部を隠したりはせず、ただただ恥ずかしさで、自分の顔を両手で覆っていた。
「いや……すげえ綺麗だぞ、小町」
「ううぅ……そ、そうなの？」
指と指の隙間から、ちらりと顔を窺わせる。その仕草がなんとも可愛らしい。
ってか超可愛い。
「ああ、綺麗だ」
実際、綺麗だった。
毛がまだ生えていないことに少し驚いたけれど、まあそういう人もいるだろうと言う結論にすぐ落ち着く。
俺に何度かイカされたからか、休憩を挟んだ今でもうっすらと濡れ光っている。
そんな小町の局部が、間接照明にうっすらと照らし出されているこの淫靡さに、身体が震えた。
「じゃ……舐めるぞ」
「う、うん……」
小町は腹を括ったのか、自分の顔を覆っていた手を、そっと俺の頬に添えた。
2.
小町の股座に顔を沈め、舌をゆっくりと秘裂に近付ける。
そっ、と舌が触れた瞬間。
「ひゃんっ！」

小町が可愛らしい声を上げた。
そのままゆっくりと、割れ目に沿って舌を這わせる。
「あっ、ひゃん、くすぐった、ひうぅぅっ、なんか変、なんか変だよぉぉ……」
今までの責めがみな着衣の上からだったのに加えて、手の指ではなく舌で触れられればこんな反応にもなるのだろう。
頭上から聞こえる小町の可愛らしい声を楽しみながら、引き続き舌を這わせる。
「あっ、あっ……？　な、なんか、ぞくぞくする、ひぁっ、あっ、んあぁっ、あうぅぅっ……」
徐々に、緊張がほぐれてきたのか声が甘くなってきた。
直線的に這わせていただけの舌の動きを変え、少しずつ、肉の感触を楽しむようにぐにぐにと同じ場所をつついたり、一定の場所を舌先を固く尖らせて何度もなぞる。
「あっ、やんっ！　お兄ちゃん、だめっ、これ、気持ちいっ、気持ちいいよぉ……ひんっ！」
はっきりと声を上げるようになってきた小町の声を聞いて、益々興奮が高まる。
徐々に徐々に、秘裂から愛液が溢れ出してくるのが分かる。
匂いはしない。味は……少ししょっぱいか？　しかしそれもほとんど気にならない程度で、全体的には無味無臭と言える気がする。
しかし、それでも……なんだろう。
舌を這わせる肉の感触が。
小町が漏らす甘い声が。
そして秘裂から溢れ出してくる、愛撫に対する反応の証拠となる愛液が。
脳髄を痺れさせ、もっと舐めたい、もっともっとと、身体を急かしてくる。
もっと小町の身体を味わいたいと思い、舌を割れ目の中に入れる。
つぷっ、と言う感触と共に、舌先を僅かばかり挿入する。
――と。

「ひぁぁぁんっ!?」
「うぐっ!?」
小町が急な刺激に耐え切れなくなったのか、太腿をがちっと閉じてきた。ぎゅうぅ。
「こ、こら、小町、放せ！　苦しいから！」
幸い舌を噛んだりはしなかったけど、結構ぎりぎりだった。
呼吸がまともに出来なくなり、必死でじたばたする。
「だ、だって、これ以上されたら、もう……もう……！」
言いながら、足をくねらせて俺の顔を締め付けてくる。恥ずかしがるのはしょうがないし可愛いから良いんだけど、その都度俺の顔を攻撃すんのやめてもらえませんかね……。
いつもみたいに頭をがしがし掻くことは出来ないので代わりに、まるで降参するためのタップの様に小町の太腿をとんとんと叩く。
「じゃあ、しゃーねえ。足を閉じてた方が楽なら、そのまま閉じてろ」
「あ、う、うん……お、お兄ちゃんは大丈夫なの？」
「分かんねえ……まあ、なんとかなるだろ」
「そっか……ありがと」
言って、小町が俺の頭をぽんぽんと撫でた。
……前の行だけ見たら、ただの仲の良い兄妹図で終わるんだけど。
如何せん、この状況だと。
小町からの頭ぽんぽんはシュールすぎた。
3.
「じゃ、行くぞ」
「うん……」
再び、舌を割れ目につぷっと入れる。
「ひぅぅぅぅ……！」
小町は声をさっきよりも我慢して、足を閉じる力も入れ過ぎない様に堪えている。健気なやつめ……。
膣の中は、匂いも味もより濃厚な気がした。
と言っても、露骨に匂いがしたりしょっぱかったりする訳ではない。

まあ多少はそんな感じはあるけれど、あくまで多少だ。
何て言うか、本当にただただ、濃い。
部位の様々な呼び名のうち、多くのものに「秘」という漢字が使われるのも分かる気がする。
女が一番、秘する所……か。
などと言うことを頭の中でつらつら考えながら、舌を徐々に押し込んでいく。
「んあっ、はぅっ、あっ、あっ、あっ……」
徐々に快感に慣れてきたのか、小町の声音に滲んでいた緊張がほぐれていく。
肉襞が、俺の舌をきゅうきゅうと心地良く締め付けてきた。
舌をできる限り奥まで挿入して、ゆっくりと上下左右に動かし始める。
「あぅ、なんかこれ、すごっ、いいっ、あっ、あっ、うあっ、あうっ……」
小町の声に色が混じってくるのに合わせて、舌を動かすペースを上げる。
「あっ、おにい、ちゃっ、んあっ、あふっ、すごっ、もっ、もっと……もっと……」
おねだりの言葉さえ交え始めて、俺の頬に手を添えてさわさわと撫でてくる。
受け入れてくれる喜びというものが、身体の奥底にじわじわと芽生え始めた。
膣内で舌を上下左右に動かし、抜き差しも加え、割れ目に沿って舐める。
「あひっ、あっ、ふぅっ、おにいちゃっ、おにいちゃっ、きもひ、いひっ、よぉ……気持ちいいよぉ……小町のここ、どうなっちゃったの……！」
気付けば足をあらん限り広げて、完全に俺を受け入れていた。
大人びて、でもどことなくまだ子供っぽさが残る声と表情に、たまらなくぞくぞくする。
秘裂からは、もう舐めても舐めても追い付かない程の愛液が溢れ出

していた。
ふと、ここで。
自分が舐め回している箇所のすぐ上に、豆のようなものがあるのを見付ける。
……これが、陰核――クリトリスってやつか？　皮を被ってるようだけど……。
今なら小町もかなり身を委ねてくれてるし、やってみるか――と思い。
陰核の上にたっぷりと唾液を垂らし、豆を覆った包皮をゆっくりと舌でまくり上げていく。
「あっ、え、えっ、なに？　おにいちゃん、なにしてるの？　なにっ……」
包皮の中から顔を出した陰核に唇を寄せ、軽く吸い上げる。
――と。
「ふあぁぁぁぁぁぁ!?　ひっ、ひんっ！　なにこれ、しらな、こんなの小町、しらな……ひぁぁぁぁぁ！」
今までにない反応が返ってきた。
もっと責めたらどうなるのだろうかとぞくぞくしながら、すっかり顔を出した陰核を上下左右に舌で転がす。
「ひあっ、えぐっ、ひんっ、やっ、これだめ、おにいちゃ、訳わかんないよぉ……っ、なんなのこれぇっ……ひんっ！　ひあっ！」
俺の頬に手を添えたまま、小町が何度もびくんびくんと背筋を反り返らせる。
顔は見えないが、声が涙声になっていることを考えると、恐らく涙をぽろぽろ流しているんだろう。
そろそろ限界かと思い、陰核をくにっと甘噛みし、逃げられないように小町の尻をがっちり掴んで、舌を左右に動かして陰核を何度も弾いて、ずぞぞっと吸い上げる。
「イっ、イくっ、もう、小町、きちゃ、きちゃう……ああっ」
小町の全身が震え、ぎゅっと目を瞑りながら身体を屈める。
「あっ、あああっ……」

今度は天を仰ぐように上を向いて、足をばたつかせる。
「ひぐっ、おにいちゃっ、もう、もう……」
一瞬、小町の全身が脱力してふっと緩んだ。
そして、最後にもう一度、陰核を強く吸い上げる。
次の瞬間。
「……ふあああああああああぁぁぁぁぁ――――――――――っ！」
全身を激しく痙攣させ、大きな大きな喘ぎ声を上げ、仰向けにぐったりと倒れた。
俺の顔には、小町が絶頂と同時に大量に噴き出した愛液が、ありったけ浴びせ掛けられた。
4.
再び、俺が壁に背を預けて、股座に小町が座り込む体勢になっていた。
小町の頭を撫でながら、もう片方の手で身体を抱く。
「……」
小町はまだ余韻が抜けないのか、ぽへっとした顔のまま何も喋らない。
「……大丈夫か？」
聞くと、少しだけ振り向き、流し目を送る。
「だいじょうぶ……ふへへぇ……」
急ににやけたかと思うと、小町を抱いている腕に急に抱き付いてきた。
そしてすりすりと頬ずりをしてくる。すりすり。
すりすり。
……え、なにこれ、超恥ずかしいんだけど。
恥ずかしいとは思うけど、可愛いのには変わりないので引き続き撫でる。
「……入れて、いいか」
囁くように聞くと、小町の動きがぴたっと止まった。
数秒の間を置いて振り向くと、俺に顔を寄せて、軽く口付けをした。
「……ん、いいよ」

目を細めて微笑む顔は、横から照らす間接照明も相俟って、年相応でない艶めかしさを纏っていた。

続く。

（１２）

１．

「それじゃ、寝転がってくれ」

「うん……」

俺の言葉に従って、小町がころりと仰向けになる。

「……小町？」

小町の様子が、少し違うことに気が付いた。

僅かにだが、震えている。

「あ、えへへ……バレちゃった？　ちょーっと怖くてさ……」

胸元に手を置きながら、小町がてへへと苦笑いを浮かべる。

そんな小町のおでこにそっと手を当てて、愛おしむように撫でた。

「……ばか、変な遠慮すんな」

言って、困ったように笑みを浮かべると、小町の唇に顔を近付ける。

「お兄ちゃん……んっ……」

小町は静かに目を閉じて、それを受け入れた。

ちゅっ、と。

互いの唇が軽く触れ合う程度の、ささやかなキス。

ほんの数秒で唇を離すと、小町は目をうっすらと開け、俺の頬に手を添えてきた。

「お兄ちゃん……んっ」

今度は小町が俺の顔を引っ張って、口付けをねだってくる。

目を細めて肯定の意を示すと、再び唇を重ねた。

「んっ……ふぅ。んんっ……んっ……ぷはっ。お兄ちゃん……んっ、れろっ、んんっ……はぷっ……ぷはっ。お兄ちゃん、お兄ちゃん、お兄ちゃん……んちゅっ、れるっ、ちゅるるっ、んちゅるっ、はむっ、んむぅっ、はぅっ、んんんっ……」

小町の緊張を解すように、何度も何度も優しく口付けを重ねる。

徐々に徐々に舌を絡ませて、何度も愛情を確かめるように互いの口内を舐り、歯列を舐め回し、唾液の交換をする。

回数を重ねるごとに唇を重ねる時間を長くしていくと、小町の声は

どんどん悩ましく、甘ったるく、甘えるような声音になっていき、興奮すると同時にどんどん愛おしさが増していく。
小町はうっとりとした目をして、気付けば俺の後頭部に腕を回し、足はするすると俺の腰や足に回して絡み付いていた。
小町の顔をさわさわと撫でていた手を胸に回すと、一瞬だけ目を見開いたものの、またすぐにうっとりとした顔になった。
「あっ、ふあっ、お兄ちゃ……んんっ、ひんっ、あぅっ、すごい、なんかさっきよりも気持ち良い……かも……あんっ、あふあっ……」
責めはさっきよりも明らかに穏やかなのだが、キス責めが効いたのかもしれない。よし、今度からは毎回キスから行為に持ち込もう。なんか掴んじゃったよ、俺。
ささやかな胸のふくらみを撫で、揉みしだき、突起を指でこすこすとしごき、更に口に咥えて舌で転がす。
「ふあっ、あっ、すごっ、なんか、だんだん、あっ、ひんっ、気持ち良くなっ、あひっ、んんんっ、なにこれ、ひんっ、きもひいい、きもひいいよ、お兄ちゃん、あぅぅっ……」
力が抜けてきたのか、小町は段々と足を広げてきた。
「うっ……!? こ、小町……っ」
「お兄ひゃんのこれ、すごい、かたい……」
不意に、小町は自分の腹に押し付けられていた俺の竿を両手で触り始めた。
既に先走っていた液が潤滑油になり、軽く撫で回されただけでもたまらなく気持ち良い。
下手をすればこのままあっさり出してしまう気がしたので、こちらからの責めを更に強くしようと小町の割れ目に指を這わせる。
「あひゃぁっ!? やんっ、お兄ちゃん、だめ、今そこいじったら、だめ、だめ、だめなのぉっ……」
涙目で甘えるような猫撫で声で懇願してくる。何だよもう超可愛いなこいつ……。
既に愛液でびっしょりになっていたが、さっきまでとは様子が違うように感じた。

さっきまでは溢れ出すようにぴしゃぴしゃと愛液が溢れ出ていたのに対して、今はとろとろと、まるでおもらしでもしているかのようにゆっくりと間断なく溢れ出ている。
その様子に、静かに興奮が高まってくる。
今すぐに襲い掛かりたいという欲求よりも、今目の前にいる小町を大事にしたい、時間をかけて目一杯気持ち良くしてやりたいという気持ちが溢れてくる。
小町の頬に再び手を添えて、優しく語りかける。
「小町、ちょっとずつ慣らしていこうな」
「え？　う、うん……ひあぁぁ……っ！」
小町の突起の片方を咥えて、もう片方は指でつまみ、更に秘裂に中指をゆっくりと挿入する。
つぷぷぷっと指が入り込んでいくと、小町の肉襞がきゅうきゅうと中指を締め付けてくる。
「あ、あぅぅっ、ひぁっ、あっ、あんっ、ひあっ！　ひっ、ひんっ、あっ、あぁっ、んあぅっ！　ひんっ、ひっ、ひんっ……」
中指の第1・第2関節をくいくいと曲げると、その度に小町の背筋が弓なりに反りかえる。愛液は溢れ出す量を徐々に増しており、その表情も色っぽくなっていく。
これで挿入するにはまだ早いと思い、今度は薬指を慎重に挿入する。
「あぐっ、ひぅっ、あぁぁぁぁ……っ」
小町は最初だけやや苦しそうな声を上げたものの、一度入ると徐々に力みも抜けて、少し時間を掛けて2本の指を丸々受け入れることができた。
「よしよし、小町、えらいぞ」
小町の頭をくしゃくしゃと撫でると、小町が照れたように笑う。
「んん……お兄ちゃん、はいっ」
頑張ったご褒美をちょうだいとでも言わんばかりに、小町が口をすぼめて目を閉じた。
ふっと笑みをこぼし、小町の後頭部に左手を回すと、ゆっくりと唇

を重ねた。
2.
そこから何度も唇を重ねて、その間も互いにひたすら愛撫を行い続ける。
数えきれない程に舌を絡め合って、ようやく唇を離す頃には、俺の竿はがちがちにそそり立ち、小町の秘部はとろとろのどろどろになっていて、その表情は完全に出来上がっていた。
小町の頭をくしゃっと撫で、真っ直ぐに目を見る。
「小町、そろそろ行けるか？」
言うと、小町は目を細めて優しく微笑む。
「……ん。きて？　お兄ちゃん」
足をかぱっと開いて、俺の亀頭を自らの秘裂に当てがった。
「この辺か……？」
挿入する場所に亀頭を当てて狙いを定めると、小町は少し青ざめた顔で俺の首に腕を回してきた。
「うん、そう、そこ。……お、お兄ちゃん、その、まだ怖いから……出来れば、キスしながらでいい？」
少し泣きそうな顔でねだる小町の顔を見て、まだ小町が小さいときに、俺に一緒に寝てほしいと言ってきたときの顔が重なって見えた。
ああ、そうか。
俺たちは、ずっと一緒に居たんだな。
そして、出来ることなら、これからもずっと……。
「おう、もちろんだ。なんせ俺はお前の兄ちゃんだからな。どんだけ甘えても良いぞ」
言うと、小町はぷっと噴き出した。
「くすっ……なあにそれ？　まったく、お兄ちゃんはこんな場面でも気が抜けるようなこと言うんだから。……でも、ありがとね。少し楽になった」
そう言って微笑む小町の表情はとても大人びていて。
散々見てきたはずの妹の表情だけれど、きっとこれからも触れ合っていけば、もっとたくさんの表情が見れるようになるはず。

そう思うと、益々一緒に居たい気持ちが強くなった。
「そか。……んっ」
自分でも分かるくらいに穏やかな声を出して、小町と唇を重ねる。
そして、ゆっくりと亀頭を小町の秘裂に挿入した。
3.
「あぐぅぅぅ……」
竿が小町の膣に入り込んで行くにつれて、小町が苦しそうに声を漏らす。
いくら口付けで気を緩めても、流石にそれにも限度がある。
小町の目からは、涙がぽろぽろとこぼれていた。
「うっ、ぐぅっ、ふぅぅっ……」
小町の肉襞は竿を揉み込むようにきゅむきゅむと締め付けてきて、俺も思わず声が出てしまう。
正直、気持ち良すぎて……油断したら、あっという間に出てしまいそうだ。
それに、かなり焦れったくて、やっぱり今すぐにでも動かしたくなる。
それでも、急に動かしたら小町はきっと痛がってしまう。
ゆっくり、ゆっくりと、労わるように、愛おしむように入れていく。
「ぷはっ、あっ、あぅっ、お兄ちゃん、い、痛いよぉ……っ」
中程まで入ったところで、小町は唇を話し、苦しみを口にした。
「そうか……じゃあ、一旦止めるぞ」
「うん……ごめん」
「気にすんな」
言って、一度挿入を止める。
一度抜こうかとも思ったが、抜くのにも痛みは伴うだろうし、何より一からやり直すというのは俺は大丈夫でも、小町からすれば気の遠くなるような行程に思えるだろう。迂闊に動くことは出来ない。
気付けば、俺を抱きしめている小町の身体にはがちがちに力が入ってしまっていた。
もう一度脱力させようと、挿入した部分を押しも引きもしないよう

に気を付けながら、小町の胸の突起に指と舌を添える。
ゆっくりと愛撫を始めると、小町から聞き慣れた喘ぎ声が漏れ始めた。
「あ、お兄ちゃん……？　ひゃっ、あっ、ああん……んあっ、あふ……っ」
嬌声が上がるにつれ、膣の不必要な緊張も取れてきたようで、締め付けが楽になってきた。
「お兄ちゃん……これ、もうちょっとしてくれたら、大丈夫かも……ひんっ」
小町自身にも少し余裕が出てきたようで、うっすらと笑みを浮かべる。
「わかった、続けるぞ。でも無理はするなよ。きつかったらいつでも言え」
「うん……ありがと」
小町が小さく頷いた。
4.
「んあっ、あひっ、ひんっ、ひんっ、あふぅっ、あんっ、あっ、ああっ、ひぐっ、えぐっ、ひぁんっ、あっ、あぁぁ……っ」
小町の声が、かなり甘ったるくなってきた。
そろそろ、行けるかもしれない。
「小町、もうちょっと奥に入れるぞ。舐めながらやるから」
「ん、分かった……んっ」
言って、再び突起に吸い付きながら、長らく止めていた竿を再び奥に入れていく。
締め付けこそきついが、これならなんとかなりそうだ。
ゆっくり、ゆっくり、ゆっくり。
小町の身体の一番奥を目指して、突き進んで行く。
「あっ、んあっ、きつっ、あひっ、いたっ、んんっ、あんっ、ひあっ、あんっ、ひぃんっ……」
痛みに唸る声に混じって、甘い声が聞こえてきた。
そのままゆっくり突き進む。

やがて、こつんと奥に当たる感覚がした。
「あっ、あっ、あっ、あぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……っ！」
ようやく小町の一番奥まで入ったようだ。小町は痛みと快感の入り混じった、長い長い声を艶っぽく上げた。
はぁはぁと息切れする小町の頬に手を添える。
「小町、一番奥まで入ったぞ。頑張ったな」
「えぐっ……うん、小町がんばったよ？　もっと褒めて？　お兄ちゃん、お兄ちゃん……」
幼さの混じる甘えた声を出しながら、俺に両手をそっと伸ばしてくる。
どうしようもない程に愛おしくなって、一番奥まで入れたまま、何度も何度も口付けを重ねた。
その度に小町の膣は気持ち良さそうにきゅうきゅうと締め付けてきて、正直先走りまくった。
やがて、どちらから言うでもなく唇を離す。
この数十分の間だけでも、一体何度口付けを交わしたか分からない。
小町は虚ろな瞳で俺を見て、にへっと笑った。
「お兄ちゃん……動いて良いよ」
「……わかった」
小町の言葉に答えて、小町の腰をがしりと掴んだ。
続く。

（１３）

１．

小町の腰を引っ掴んで、まずはゆっくりと竿を抜きにかかる。

「あひぁっ……あうっ、あっ、んんっ……」

苦しそうにしつつも、微かに甘い声を漏らす小町を見て、何とかもっと気持ち良く、そして少しでも楽にしようと思い、胸の突起に吸い付き、陰核を指でこしょこしょとこする。

そうしながらゆっくりと竿を抜いて、再び押し込むと、小町の反応に変化が現れた。

「あっ、んぁっ、ひんっ!?　あ、まだ苦しいけど、なんか……あうぅ、あっ!?　ひあっ、やっ、これ、なんか、変、変だよぉっ……」

自分の身体の変化に付いていけないのか、頬に手を当てて震える。

そんな小町の頭を撫でて、そっと笑いかける。

「だーいじょうぶだよ。段々慣れてきたんだ。ほら、ゆっくり行くぞ」

「あ、う、うん……」

言って、小町は口をつぐむと、俺の目をじっと見た。

まるで「後は任せた！」とでも言わんばかりの目だ。

こんな風に信頼されてしまっては、俺として、兄としても張り切ってしまう。

再び、さっきと同じように小町の敏感な部分を責めながら、今度は竿をゆっくり抜き差しする以外にも、上下や左右に少しずつ動かして、様々な場所の刺激を試みる。

「ひんっ！　あっ、あっ、すごっ、あ、なんか気持ち良くなって……？　あっ！　ひんっ！　あう、お兄ちゃん、小町これ、だめ、変な顔になっちゃう……やら、恥ずかし……あぅんっ！」

小町の顔も声もどんどん蕩けていき、愛おしいと思うと同時にどうしようもない程の興奮を覚える。

正直、今すぐにでも狂ったように腰を振りたい。

でも、それはいけない。まだ我慢、我慢……。

少しずつ、少しずつ、竿の抜き差し及びそれ以外の動きの速度を上

げていく。
段々と、竿の動きに対する反応だけででも、秘裂から愛液がとろとろと溢れ出てくるのが分かった。
「あっ、えぐっ、お、お兄ちゃっ、小町、ひぁんっ！　だめ、気持ち良いのっ、あひぁっ！　恥ずかしいよぉ、恥ずかしいよぉ……にゃあぁぁっ！」
……うーわ、可愛すぎてどうしよう、この子。
しかしそれでも小町自身は恥ずかしがってるんだ。何とかしてあげたい。
「恥ずかしくないぞ、小町。世界一可愛いまである」
小町の頬に手を添えてきりっとした顔で言うと、小町が一転してしらっとした顔になった。
「うーわ……ここでそんな恥ずかしいこと言うんだ……」
……。
いらっ。
八幡、ややおこ。
「ほーう、そういうこと言うのか……」
小町の耳を撫で回しながら、我ながらひどい顔してんだろうなと思いながら悪い笑顔を浮かべる。
「あっ、えっ、お兄ちゃん……？　あう、その、今のは……ひあぁぁぁぁぁぁぁっ!?」
小町の耳に手を添えたまま、引くだけ引いて竿だけ挿入した状態にしていた竿を、一気に押し込んだ。
今までの感触から考えて、そろそろ本腰を入れて動き始めても良いだろうと思いやってみたのだけれど、予想通り、いや、予想を遥かに超えた反応が返ってきた。
突然竿を突き入れられた小町が、目を見開いたまま俺を見つめる。
「あう、お兄ちゃん、ずるいよぉ……そんなのされたら……あっ、ひあぁっ!?　やっ、ちょっと、止めっ、あっ、だめ、はやっ、すごいよぉぉぉぉ……んあぁぁっ！　ひぎっ！　あっ！　ひぐぅっ！　お兄ちゃ、んあぁっ！」

ピストンを速めて行くと、小町が背筋を弓なりに反らして何度も何度も飛び跳ねる。
背筋にぞくぞくしたものが走り、たまらずピストンのペースを上げる。
「ひぁぁぁっ！　お、おにっ、かはっ、お兄ちゃっ、んぐっ、あぇっ、かはっ、もっ、やっ、小町、だめ、おかひくなる、おかひくなるからぁ……っ！」
小町の呼吸がどんどん乱れ、嬌声はどんどん激しく甘くなっていく。
もう、小町のことが可愛くて、愛しくてしょうがない。
もっとくっついて、もっとどろどろになりたい。
そう考えて、小町の頬に手を添えると、ずいと顔を近寄せた。
「小町、体勢変えるぞ」
「ひっ、ひっ、ひっ……はぇっ？　わ、分かった……にゃあぁぁぁぁぁっ!?」
膝立ちの体勢で小町の背中を抱え、一気に上に持ち上げる。
そして胡坐の姿勢をとると、小町は俺の股座に腰を下ろして、足を俺の背中に回して絡み付くような体位になった。所謂対面座位というやつだ。
うーん、軽いなあこいつ……。抱き締めやすい。
小町の膣の中には俺の竿が丸々収まり、小町は目をむいて息も絶え絶えに口をぱくぱくしている。
「あっ、かはっ、お兄ひゃん、深いよぉ……一番奥まで入って……やら、うごからいでぇ……」
幼い頃の小町を思わせる、少し舌っ足らずな喋り方が、たまらなく可愛い。
小町の背中に腕を回して、耳元で囁く。
「もっとぴったりくっついてくれ」
「あ、え……？　う、うん……」
俺の言葉におずおずと従い、小町が腕と足を更にきゅっと絡めてくる。

ぴたっ、と。
二人の身体が密着した。
じっとりと汗ばんだ肌と肌が密着するのは、他人同士であればさぞ不快なのだろうけれど、今こうやって小町と触れ合うのは、あまりにも心地良かった。
小町も同じことを思ったのだろうか、
「えへへ……なんかこれ、安心するね」
おでこ同士をこつんとぶつけて、小町がにこっと笑う。
「ああ、そうだな……んっ」
唇が軽く触れる程度の、ささやかな口付けをする。
「んっ……あ、お兄ちゃん……れろっ、んんっ……」
小町はそれに応じると、もっともっとと求めてくる。
そこから、再び濃密な口付けを交わし合う。
舌を絡め、吸い取る度に、小町の膣奥にまで入り込んだ竿の全体が心地良くきゅうきゅうと締め付けられた。
互いの口内を堪能し終えて唇を離すと、小町は満足気な表情でにへっと笑った。
「お兄ちゃん……最後は、お兄ちゃんが好きなだけ動いて良いよ？」
そう言って目を細める小町がたまらなく愛おしくなって、もう一度口付けをした。
「分かった……じゃあ、行くぞ……っ」
小町の背中を抱きしめる腕に、力を込めた。
2.
「んあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！　お、お兄ちゃん、小町そんな激しくされたら……あっ、かはっ、やっ、お兄ちゃん、もう止めて、止めてよぉ……もうおかひくなっちゃうから……あっ、あっ、あっ、ひぐぅぅ……っ！」
小町と対面座位の状態で抱き合って、本気で突き入れ始めてからほんの数分。
その間に、小町の顔は完全に発情した雌の顔になっていた。
涙をぽろぽろと流し、熱っぽい視線をこちらに向けて、上気した顔

で何度も俺の首筋や唇に吸い付いてくる。
俺は小町の背中や尻など色々な場所を掴んでは、微妙に違う角度と速さで小町への抽送を徹底的に繰り返す。
ここを突けば小町は気持ち良くなるかな、ここを抉るように突くとどんな反応をするんだろう、ああ、ここで思い切り突き入れれば軽くお漏らしするのか――などと、小町の表情と反応の変化を見ながら色々試すのが楽しくてしょうがない。
小町はそんな俺の実験に付き合わされるのだからたまったものではないだろうけど。
もはや目の焦点が合ってないし。ごめんね小町、超可愛いよ。
小町は全身をびくびくと震わせながら、ふと俺に唇を重ねてきた。
その間も竿をぐりぐりとねじ込み、呼吸がちゃんと出来ない状態で快感を叩き込まれる小町の表情を楽しむ。
やがて唇を離した小町が、俺の目を真っ直ぐに見つめた。
「お兄ちゃん……もしかして……お兄ちゃんも小町もイカないように加減してる？　小町もう、多分立てないくらいに腰がくがくだよ？」
「うっ」
バレた。
「あ、やー、その……せっかくだし、楽しみたいなーって……」
目を逸らして頭をがしがし掻きながら言うと、小町が俺の胸元に顔を埋めた。
「うー……お兄ちゃんのエッチは粘着気質なのかぁ……これから大変だなぁ……でもそんなお兄ちゃんでも小町は大好きだから、求めてくれたら最初は渋りながらも結局毎日しちゃうよ！　今の小町的に超ポイント高い！」
「お前……最後のはいつも通り鬱陶しいけど、確かに今のはポイント超高いわ。ていうか、え、なに、毎日してくれんの？　え、ほんとに？　高校生男子相手にそれ言っちゃって大丈夫？」
すんごいがつがつした鬱陶しい調子で聞くと、小町がくゆっと眉をひそめた。
「あう……お兄ちゃん、小町の中でおちんちんおっきくしないで……」

……思わず、大きくなってしまった。
「や、すまん。しかし今お前がさりげなく淫語を口にしたことで、更にテンションがやばくなってるんだけど……」
「うぅ……小町、自爆しちゃった……」
兄妹でする内容とは思えない、ひどい会話だった。
「しかし、まだ慣れてない内にあんま長いことやるのも確かにまずいかな。……じゃあ、本当に本気出すぞ、良いな？」
言うと、小町は少しびくっと震えた。
「え、あ、あそこから更に激しくなるの？　あはは……小町大丈夫かな……」
「うーん……大丈夫じゃないかもしれん。動けなくても大丈夫なように、もう一回仰向けになってくれるか？」
言って、小町の脇の下を持ち上げると、「にゃあぁぁっ！」と可愛らしい声を上げた。やばい、今の声もそそる……。
小町をベッドの上にころんと転がすと、小町が胸を手で隠して、顔を赤くしながらこちらを見た。
「うわぁ……お兄ちゃんが快楽で動けなくなった妹をめちゃくちゃにして中出しする気だぁ……鬼いちゃんだぁ……」
なんか、すごい長いエロゲのタイトルみたいなことを言ってきた。
「鬼いちゃんってお前……ん？　……中だ……し……」
小町が何気なく言った言葉に、心が激しくざわつく。
「あ……」
自分で爆弾を投下したことに気付いたのか、小町が耳まで真っ赤になる。
「小町……もう、我慢出来ねえぞ」
言って肩を押さえ付けるように掴むと、小町の表情が引きつった。
「て……手加減してね？」
言われて、ゆっくりとかぶりを振る。
「……無理だ」
「ですよねぇ……」
小町は観念したのか、ゆっくりと足を開いた。

4.

「〜〜〜〜っ！　あっ、かはっ、〜〜〜〜っ！　やっ、これ、もっ、またっ、イっ、イクっ、イっ、――――――――っ！　かはっ、はっ、はっ、はっ、うあぁぁぁあっ！　やっ、まっ、また、イっ、うぐぅぅぅ、もっ、お兄ちゃっ、ダメだってえええええ……んあぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

小町の全身が痙攣して、膣から大量の愛液が噴き出す。

恐らく、５回目の絶頂だ。

小町の腰を抑えて、それまで手加減していた分を全部解き放って、己の肉欲を満たす為に腰を打ち付けると、小町は可愛らしい声で幾度となく鳴いて、泣いて、果てた。

そうか、快感でどろどろになった小町は、こんな淫らな顔をするのか――涎を垂らして口を開けっ放しにする小町を見て、たまらなくなった。

「小町、俺、そろそろイケそうだ」

言うと、小町の目に微かに光が戻る。

「出す……の……？　きて、お兄ちゃん……きて、いっぱい出して、小町のこと、お兄ちゃんのものにして……」

「〜〜〜〜っ！」

ここにきて、こんなにも嗜虐心をそそる言葉をかけてくるなんて。

「小町――っ！」

上から覆いかぶさるようにして小町に密着すると、するりと背中に足が絡まった。

「えへへ……逃がさないからね？」

言って、にひっと妖しく微笑む小町は、既に立てない程消耗しているようには全く見えなくて。

「……敵わねえなぁ」

と言ってふっと笑うと、小町もそれに応じてもう一度にひっと笑った。

そして、最後の最後にと思い、力を振り絞って全力で腰を打ち付ける。

「んひぃぃっ！　ふあっ、あふぅっ、うぐうっ、お兄ちゃん、お兄ちゃ

ん、お兄ちゃん……っ！」
「はっ、はっ、はっ、小町、小町、小町……っ！」
互いを呼び合って、唇を合わせたその時。
身体の内側から、マグマの如き奔流が押し寄せてきた。
思わず俺が唇を離して目を剥くと、小町は事態を察したのか俺の背中に絡めた足に力を目一杯入れた。
「イ、イク、イクぞ小町、出る、出る、出る……っ！」
「きて、きて、きて、お兄ちゃん……あああぁぁぁ

（14）

1.

事を終えて、ティッシュだなんだで互いの身体を拭き終えて、小町と2人でベッドに並んで寝そべる。

……これが、ピロートークと言うやつか……。

小町に腕枕をして、天井を見つめながらのんびりとする。

「……こらこら」

小町はむふふと笑いながら、ずっと俺の頬をぷにぷにと突いている。何この子、超可愛いんですけど。なんか恥ずかしいなこれ……。

「ぐおっ」

「ありゃ、ごめん」

小町の方に向き直ると、頬を小突いていた小町の人差し指が鼻先にぽちっと当たった。やや痛い。

「小町ちゃん小町ちゃん、さっきから一体何をしてるんですかね？お兄ちゃん恥ずかしいんですけど？」

「やー、なんか試しにやってみたら楽しくなっちゃって……つい」

「よし、許す」

「早いよ……」

てへへーと笑いながら謝る小町を見て、可愛かったので即断で許しちゃった。

さてさて、流石に眠くなってきたなと思い時計を確認しようとすると、小町がこほんと咳払いをした。

「どうした」

言って目を向けると、小町が照れくさそうに見つめてくる。

「や、えーっとね、お兄ちゃん。こういう関係になった訳ですけども……明日から、どうする？」

「ん、どうするって……」

言われて、うーんと頭を捻った。

小町の言った「どうする」っていう言葉は、恐らく「どれくらいの頻度でする」ってことなんだろうけども……実際こういうのって目安

が分からん。普通の中高生の恋人の目安が分からんし。聞ける相手もいないし。ていうか今思うと俺の周りフリーの人だらけじゃないのん？　俺が知らないだけかもしれないけど。例えば平塚先生とか、平塚先生とか、平塚先生とか。

いくら考えたところで答えは出ないので、小町の頭をくしゃくしゃと撫でながら俺なりの答えを提示する。

「どっちからしたいと思ったら、好きなだけすれば良いんじゃねえか？」

言うと、小町の頬がほんのり朱に染まった。

「え……い、良いの？」

「え、や、良いけど、え、そんなにしたいの？」

小町の反応に戸惑ってしまった。

小町はそんな俺の反応を見て釣られて慌てたようで、目をきょろきょろと泳がせて、苦し紛れにへっと笑う。

「や、まあ、その……お兄ちゃん、お兄ちゃんはどうなの？」

「え、ま、まあ……それなりにしたいかな……」

「そ、そう……」

兄妹で戸惑い方が似てるので、なんかややこしくなった。

頭をがしがしと掻いて、んーと伸びをする。

「まあ、その、なんだ……小町、改めて、明日からもよろしく」

言うと、小町がふっと顔を綻ばせた。

「うん、お兄ちゃん、改めて、明日からもよろしくね。……おやすみ」

「おう、おやすみ」

挨拶をすると、小町が「えーい」と言いながら俺の胸元に顔をうずめてきた。

いやいやいやいや。可愛すぎるだろもうムツゴロウばりに愛でてやろうかと思ったけれど、流石にそこまでするとお互い寝れねえやと思い留まり、小町の頭をぽんぽんと撫でて、大人しく目を閉じた。

2.

翌朝。

「うーん……んん？」

起きて唸り声を上げていると、身体の違和感に気付いた。
まず、身体全体、特に腰周りがえげつない程の筋肉痛だ。２日後とかに筋肉痛が来ないだけまだマシだけど。ああいう行為で使う筋肉って普段使うのとはまた別なんだなあ。慣れないとなあ……。
と、ぼんやり考えていると、それ以上の違和感があることに気付く。
下腹部が、なんかやけに温い。
あと、なんか妙に気持ち良い。
……んんん？
まさか……と思って掛け布団をぺらりと捲る。
「ふぁ（あ）、ふぉふぁおお（おはよう）」
「……早速だな」
小町が俺の亀頭をおいしそうにくむくむと咥え、舌で丁寧に舐め上げていた。
……何この夢のようなシチュエーション？
ぷはっ、と声を上げて、小町が口を離す。
「やー、なんかね、朝起きてお兄ちゃんの寝顔見ながらほっぺたをぷにぷにつっついてたんだけど、お兄ちゃんのがおっきくなってるのに気付いて。それでついね！」
……すげえ恥ずかしいとこ見られた……。ていうか前半の行動なんだよ、可愛すぎるだろ。
しかしここで動揺していることを悟られると更に恥ずかしくなるので、こほんと咳払いして平静を装う。竿は触られっぱなしだけど。
「そか。いつから？」
「んー、３０分前くらいからかな？　ずっと咥えてるとあご疲れちゃうから、アイス舐める感じでぺろぺろとあちこち舐めてたよ」
……こいつ……今すげえ恥ずかしいこと言ってるって気付いてんのか……？
まあ、このまま舐められっぱなし（文字通り）なのも恥ずかしいので、具体的にどうこうするかは後で考えるとして、まずは起き上がろう。
――と。

「……いてて……」
筋肉痛が思ったよりひどいようだ。起き上がれないとまではいかないが、これではいつも通りすんなりとは立てそうにない。
その様子を見ていた小町が声を掛けてくる。
「ありゃ、お兄ちゃん、筋肉痛？　じゃあしょうがないね、ちゃんと休んでなよ！　……その間に、小町がしたげる……」
「え、お、おい……」
戸惑う俺に構わず、小町は上半身を起こしていた俺をこてんと押し倒した。
ついさっきまでは、口淫をしているとはいえ表情はいつもの元気な少女然としていたのに、今はまるで別人のような大人びた笑みを湛えている。
高まる期待にごくりと息を呑むと、小町は口をあんぐりと開け、俺の竿を一気にぱくりと咥え込んできた。
3.
「くあ……」
押し寄せる快感に、たまらず目を強く閉じる。
口内で舐り回される快感ももちろんだが、下を見た時に小町がにっこりといやらしく微笑む様がたまらず、余計に快楽を感じてしまう。
話しているときは一度落ち着きを取り戻して、半勃ちくらいになっていたのだが、大きくなっていないということは咥えやすいということでもある。亀頭を温かな口内にすっぽり包まれ、まるでアイスを舐めているかのようにれろれろと舐め回される。
「ん……れろっ、ぴちゃっ、あむっ、くむくむっ、はぁっ……んむっ、んっ、んっ、あはっ、はむっ……」
まるでどんぐりを食べるリスのような愛くるしい仕草と、唾液を垂らしながら信じられない程いやらしく目を細めた表情とのギャップがたまらない。
布団でこもっているせいか、小町の汗と甘い匂いが混じった女くささがもわっと漂ってくる。
「うっ……あっ……小町……くぅっ……」

触覚・視覚・聴覚・嗅覚を同時に刺激され、小町の中で怖い程に勃起する。
小町が垂らす大量の唾液にまみれているが、相当量の液が先走っているのが分かる。
「はむっ、んむ、れるっ、ぴちゃっ……はぁぁっ、んんっ……お兄ちゃん、気持ちいい？　ひもひいいっ……？　れるれるれる……」
途中で口を離し、俺に確認をとったかと思うと、そのまま同じことを聞きながら裏筋をべろべろと見せつけるように舐め回す。
顔が暗がりでぼんやりとしか見えないため、それが淫靡さをかき立てている。
快感にぶるぶると震えていると、小町はにまっと笑みを浮かべた。
「もっと……気持ちよくしたげる」
言って、竿を直立にさせたかと思うと、頬を膨らませくちゅくちゅと音を立てて、やがてべろりと舌を出したかと思うと、その先から大量の唾液を垂らした。
まるでローションのようにたっぷりと垂らされた唾液が、亀頭の先から竿の根本までどろどろと流れ落ちる。
俺がその様に目を奪われているのを見て小町は満足気に微笑む。
「じゃ……いただきまーす」
言って、口を大きく開くと、その手を俺の太腿に回した。
さわさわと撫で回すように指を動かしてきたため、背筋にぞくぞくしたものが駆け巡る。
竿は深々と咥え込まれ、亀頭の先には小町の喉奥と思われる感触がした。
「んぐっ、うぶっ、んんっ、んっ、んっ、んんっ……」
少し涙ぐんだその表情に、不安が過ぎる。
「お、おい、小町、そんなに無理はしなくていいぞ？　もっと浅くしても……」
言うと、小町が口を離し、にっこり微笑む。
「小町はお兄ちゃんに気持ち良くなってもらいたいからしてるだけだよ。だから、気にしないで？」

言うと、もう一度喉奥まで咥え込み、更に俺の太腿にやっていた手を俺の尻に回し、くいと上に持ち上げた。
それにより更に奥まで咥え込まれる形になり、小町が苦しさに呻く。
「こ、小町……あっ、うぁ……」
小町を心配する声ももちろん上げた。
だが、それ以上に。
まともにその行動を制止出来ない程に、気持ち良かった。
亀頭をぐにぐにと押し付ける感覚、こんな状況にあっても竿全体を舐め回してくる小町の舌、そして、苦しさにより虚ろになる小町の瞳に、身体の奥から込み上げてくるものを感じる。
「っ――――小町っ！」
名前を呼んで、小町の頭をぐっと掴んだ――次の瞬間、小町の口の中いっぱいに火傷しそうな程熱い精を大量に放つ。
「んあぁんんっ～～～～～～～っ！」
小町は苦しみと恍惚が混ざり合った表情をしてぶるぶると震え、溢れ出しそうな程の量の精を最後の一滴まできっちり飲み干して行く。
喉を鳴らして飲み込む様があまりにも艶めかしく、その度に頭をぐっと押し付けた。そうする度に、小町は「うぇっ、んんっ……」と小さく喘いだ。
4.
ティッシュで俺の股間を拭き取ると、ようやく一息ついた小町が安らいだ顔を見せた。――さっきと同じ、布団の中で。
「……なんでまだそこに居るんだ？」
呆れ気味に聞くと、小町はにひっと笑いを浮かべた。超可愛い。
「昨日まで散々やられたからね、そのお返しにあと何回か搾り取ってあげる！」
「や、そんな爽やか美少女スマイルで言うことじゃねえと思うぞ……。ていうか、そんなことされたらアレだ、俺は更に3倍返しでしてやるぞ。気絶させてやるからな」
冗談半分で言うと、小町は目をむいて固まった。下あごが微かに震

えている。
「……小町のこと、そんなにめちゃくちゃにするの……？」
竿を両手で包み込みながら、上目遣いでこちらを見つめてくる。
くっそ、筋肉痛さえなかったらもう押し倒してたのに……！
「……ああ、する。めっちゃしてやるからな。ありとあらゆる方法を使って」
追い打ちを掛けるように言うと、小町の表情はみるみる蕩けていく。
「あは、すごい、小町、お兄ちゃんにめちゃくちゃにされちゃう……あれ？」
小町の声に反応して下を見やる。
……小町の表情と声に興奮して、もう勃っちゃった。
「……じゃ、ちゃんと3倍返しにしてね？　それじゃ取り敢えず、もう1回したげる……」
言って、小町が裏筋にちゅっと口付けをする。
「……お好きにどうぞ」
天井を仰ぐように、ぱったりと寝転んだ。
5．
どうやら、今日も明日も明後日も、毎日責めて責められての泥仕合になりそうだ。
「んむっ、ぴちゃっ、れろっ、あんっ、れろっ、れろっ、れろっ……んちゅっ」
一生懸命俺の竿を咥える小町の頭をそっと撫でる。
「んにゃっ……？」
どうしたのかと不思議そうに俺を見る小町を見て、また愛おしくなる。
「なんでもねえよ、よろしくな」
言うと、小町は「はて？」と小首を傾げた。
「……っ？　うん、よろしくね。……んちゅるっ……」
言葉を返して、再び咥え込む小町。
……うん、悪くない。
というか、俺には過ぎた幸せだ。

そうは言っても、この幸せを他の人に譲る気になんて到底なれない。

だから、ありがたく噛み締めさせてもらうとしよう。

お終い。

由比ヶ浜結衣は思っている以上に犬っぽい。（1）

1.

冬のある日。

学校に着いて、駐輪場に自転車を停めて校舎に向かっていると、携帯が着信通知で震えた。

「……」

確認すると、メールの送り主は由比ヶ浜だった。

☆★ゆい★☆

……この名前、本当になんとかならないかなぁ……。

たまに素で間違えて、スパムメールだと思って削除しそうになっちゃう。

って言うか一回、しちゃった。

しかも割かし大事なメールだったみたいで、後で何で返事が無いのかとすげえ怒られた。あいつの怒り方はぷんすかって感じだからあんま恐くなかったんだけどね。ごめんなさい……。

内容を見てみる。

「ヒッキー、ごめん、今日風邪引いたから部活休むね。ゆきのんにはメールしといたから……」

……すごい元気無さそうなんですけど。

スマホでしゃしゃっと返事を打つ。うそ。そこまで速く打てない。

「了解。看てくれる人はいるのか」

「？　かんてくれる……？」

……こいつマジかよ……。

「みてくれる」だよ、バカ。看病してくれる人はいるのか？」

説明するのもバカバカしいんだけど。

「あ、そ、そう言うこと？　し、知ってたし！　……今日はお父さんとお母さん、有給使って泊まりで出かけてるんだよね。朝早くから出ちゃってたから、あたしが風邪引いたの自体知らないし……」

「そうなのか。わかった。お大事にな」
「うん、ありがと」
短いのか長いのかも分からんやりとりを終えて、電源を消す。
……なんかそわそわするので、やっぱりマナーモードにした。
って言うか由比ヶ浜のご両親、仲良いのね……。
教室に入ると、トップカーストの連中にも連絡は行っていたようで、6人の話題は由比ヶ浜のことで持ちきりだった。
「あーしさー、見舞い行けるなら行きたいんだけど……今日は無理なんだよね……」
「あー、私もなんだよね。結衣、大丈夫かな～……」
……話が聞こえて来る感じ、由比ヶ浜の見舞いに行きたい気持ちは皆やまやまだが、どうにも都合が悪いようだ。
「……むう」
「……八幡？」
無意識に唸り声を上げていたら、戸塚、間違えた、天使に声を掛けられた。
おいおい、髪を耳の後ろにかき上げるなよ。変な気持ちになっちゃうぞ？
「八幡、どうかしたの？　元気ないよ？」
「……あー、そう見えるか？」
「うん、見えるよ。……今まで、ずっと見て来たんだし、それくらい分かるよ」
……何この子。超持ち帰りたい。
戸塚ルートどころか戸塚と家庭を築くルートが欲しい。もしくはタイに旅行に行くイベントが欲しい。
「……そ、そうか……」
どう説明したものか迷って、視線を自然とトップカーストの連中に向けてしまった。
その視線に気付いた戸塚が、事情を察する。
「あ、由比ヶ浜さんがいないね……もしかして、今日休みなの？」
「ああ、さっきメールが来てな。風邪引いたらしい」

「そっか、……だから八幡は元気が無いんだね」
……すごい自然に、しかも優しい笑顔で言われた。
「……いや、なんでだよ」
「え、そうじゃないの？」
「や、その……」
待て、他の理由だって挙げられるはず！
例えば今朝、カマクラを愛でようとしたら一瞬で逃げられたとか、小町にいつもの感じでドヤ顔で喋ったら１０分間で２回引かれたとか、昇降口で雪ノ下に会ったら、一瞬「……誰？」って顔をされたとか。
……いつも通りだ……。
って言うか雪ノ下さん、朝のあれはジョークですよね？　あの小首の傾げ方は悪意あってのものですよね？　泣いちゃうよ？
「そんなに心配なら、お見舞いに行ってみたら？」
戸塚がごく普通に提案して来た。
眩しくて瞼が溶けそう。やばい、瞬きが出来ない！
「や、迷惑になるだろ」
「由比ヶ浜さんなら喜んでくれるよ」
にぱっと笑って言われた。
……くおぉ……戸塚の家に行きたいよぉ……。
しかし、ここまで言ってもらったんだ。後で雪ノ下と相談するか。
「……ん、分かった。ありがとな」
「いえいえ」
戸塚とのやりとりで、毎回心の闇が洗い流される感じがする。
ざっと計算すると、戸塚と一日１０時間一緒に居れば、約１０年で俺の心の傷をほぼ全て洗い流せることになる。何の計算かは知らんし、同棲してても難しい前提を立てちゃった。
戸塚がとてとてと自分の席に向かう背中をぼんやりと眺めながら、ふとため息をついた。
２．
放課後、一人部室に向かう。

別に大体は一人だけど、たまに、いやちょくちょく、いやかなりの頻度で由比ヶ浜が一緒に付いて来るので、一人だと相対的に冬の廊下が一層寒々しく感じられる。
……いや、別に何とも無いんだけどね？
部室につきドアを開けると、雪ノ下が一瞬顔を上げて、明らかに落胆した顔をした。
や、どんだけ失礼なのん？びっくりしたわ。
「……うす」
近付いて挨拶をすると、まるで今初めて俺を見たような反応をする。
「こんにちは」
……すげえ、今しがた自分がやったリアクションを完全に無かったことにしやがった。
それにしても、雪ノ下さん。
平静を装っているように見えるけど……実際のところ、明らかにそわそわとしていらっしゃる。
まあ、気持ちは分からんでもない。
「……由比ヶ浜のことか」
クリリンではない。
言うと、ぴくっと雪ノ下の肩が揺れた。
「……そう、ね。少し心配なのよ。ご両親が今日はいらっしゃらないみたいだし……」
や、もうそわそわの仕方が少しで括れるレベルじゃねえよ。
「……俺も心配っちゃ心配だから、その、あれだ、見舞い行かねえか？今から」
「……そうしたいのはやまやまだけれど、部活の時間帯はしっかり活動するべきでしょう」
律儀なヤツめ……。
「平塚先生に事情を話せば分かってくれるだろ。依頼人が居るとしたら基本的に平塚先生経由だから今から直接確認すれば良いし、お悩み相談メールも一応確認して、今の時点で受信メールが無ければ見舞い

に行っても良いと思うんだ」
ま、こんなこと言ったら毎日同じやり方で即座に帰れちゃうんだけどね。今日は特例と言うことで。
「……そう、ね。そう言うことなら、しょうがないわね」
明らかに表情がぱぁっと明るくなると、ノートパソコンを即座に開いてメールが来てないのを確認して、せかせかと帰り支度を始めた。
……行動超早いな。言行不一致にも程があるだろう。
「どうしたの？　早く鍵を閉めたいのだけれど。閉じ込められたいの？」
「出るよ、今出る」
だから早いんだよ。相当心配してたのね……。
二人で平塚先生の下へ行き、事情説明と依頼が無いかの確認を行って、その場で鍵を返した。
雪ノ下のこの行動は明らかに依頼が無いことを前提としていたので、平塚先生は一瞬苦笑いを浮かべたが……雪ノ下のそわそわした様子を見て、ふっと微笑んで鍵を受け取ってくれた。
……改めて、なんでこの人が結婚出来ないんだろうって思ったけど、それは言わないでおく。
3.
養生の為に必要そうなものを買い出すことにしたのだが、俺がコンビニで良いだろうと言ったら一瞬で反対、いや、否定された。「馬鹿なの？」って目で見るのやめてよぉ……。
栄養を摂れるものを作るため、きちんとスーパーで買い出しをすることになった。
……どんだけがっつり看てやろうとしてんだよ。
雪ノ下とスーパーで買い物だなんて、何このどきどきイベント……と思ったのだけど、買い出しはわずか15分で終わった。
店に入ってから出るまでできっかり15分。
迷いが無さ過ぎて惚れる……。
学校を出る際に雪ノ下が由比ヶ浜に電話をして、メールで住所と周辺地図を送ってもらっていたため、家には割とあっさりと辿り着い

た。
インターホンを鳴らすと、弱々しい声が返って来た。
「けほっ……はい」
「由比ヶ浜さん。雪ノ下です」
雪ノ下の声を聞いて、由比ヶ浜の声がぱあっと明るくなる。
「わあ、ゆきのん！　ありがとう！　今行くね！」
がちゃりと音がして、通話が切れた。
……んん？　俺は？　忘れられてなあい？
4.
「ゆきのん、ありがとー！　……って、わわ!?　ヒッキー!?　なな、なんで!?」
すげえ驚かれた。
雪ノ下にジト目を向けると、はて何のことかしらと言わんばかりのきょとんとした表情で首を傾げられた。くそ、可愛いなこいつ……。
「……雪ノ下が何故か伝え忘れてたようだけど、俺も来た……ん、だ……」
言葉が止まってしまった。
由比ヶ浜は雪ノ下だけが来ると思っていたようだから無理も無いのだが、由比ヶ浜の服装はオレンジ色の生地に騒々しい柄が描かれたパジャマ姿で、髪もいつものお団子ヘアーではなく、下ろしている。
そこまではまだ良いのだが、家に居て……しかもパジャマ姿なのだから尚更なのだろうが、どう見てもブラを着けていなかった。
熱が出て暑いのだろうか、胸元のボタンをかなり開け、じっとり汗ばんだ谷間が洒落にならないくらいの色気を放っている。
思わずとかじゃない、これはもう男の義務だと言わんばかりの勢いでそれを見つめていると、由比ヶ浜が俺の視線に気付いた。
「あ、ちょ、ひ、ヒッキー！　……あ、あんまり、見ないでよ……」
言うと、由比ヶ浜が恥ずかしそうに胸を手で隠して、もじもじした。
「あ……す、すまん」
……あれ、いつもならここでキモいキモいと連呼されて、それがあまりに大声だったために周りの住人が窓を開け始めて、軽い騒ぎにな

るくらいするんじゃなかろうか？　そこまで事態が悪化したら泣くけど。
どうやら、風邪でいつもみたいにテンション高く俺を罵倒することは出来ないようだ。
俺たちのやりとりを眺めていた雪ノ下が、すっと口を挟む。
「由比ヶ浜さん、あまり外気に身体を晒すのは良くないと思うわ。……お邪魔して、良いかしら？」
「え、あ、そうだよね、うん！　……ヒッキーも、か……。……どうぞ」
「お、おう。お邪魔します……」
「お邪魔します」
まあ、女の子しか来ないと思ってたのにそこに男子が混ざっちゃあ、そりゃやりづらいよな。
半ば同情しつつ、由比ヶ浜の家に足を踏み入れた。
……パジャマってだけで、異様なまでにどきどきするんですけど……。

続く。

（2）

1．

由比ヶ浜の家は、ごくごくありふれた一軒家の二世帯住宅だった。俺の家とほぼ同じ雰囲気と言えるだろう。

しかし、うちのように子どもに男がいないと、また雰囲気が違うな……などと思いながら、ついきょろきょろしてしまう。

すると、隣の雪ノ下が小さなため息を漏らした。

「……人の家で、きょろきょろしない」

「は、はい……」

至極真っ当なご意見を頂いた。ましてや女の子が住む家ですしね……。

こういうときに、今までの経験の浅さっていうか、経験の０さが浮き彫りになる。ぜろさ。

俺たちをどう扱ったら良いのか困ったのだろうか、由比ヶ浜がきょろきょろとしている。

「あはは……ど、どうしよっか……？」

困ったように笑うと、雪ノ下が買い物袋を少しばかり持ち上げた。

「ここに来る途中、あなたに料理をこしらえられないかと思って食材を買って来たのだけれど……早速でごめんなさい、台所を使わせてもらっていいかしら？」

すると、由比ヶ浜の目がぱっと輝いた。

「え、ほんと!?　わーい、ゆきのんの手料理だー！」

嬉しそうに雪ノ下に抱き付く。わんわん。

「こ、こら……そんなにくっつかないで……」

相変わらず仲がよろしいことで。雪ノ下さん、もはや全然いやがってませんよね？

由比ヶ浜のこの様子は……ほっといたら、犬みたいに雪ノ下を舐めかねない。舐めないか。流石にそれはゆるゆりの域を越えてしまう。……本当に、大丈夫だよね？

由比ヶ浜が台所で最低限の調理器具の場所を説明すると、雪ノ下が

てきぱきと準備を始める。
手伝いたそうに由比ヶ浜がうろちょろするのを見て、雪ノ下が優しく諭す。
「由比ヶ浜さん……風邪を引いてる状態で無理をしなくても良いわ。あなたは比企谷くんの相手をしてあげて？　２０分くらいで終わらせるから」
……ゆ、雪ノ下のやつ……優しさに見せかけて、由比ヶ浜を台所から追い出しやがった……！
いやまあ、本当の優しさもあるんだろうけど。
でもこれ絶対、一緒に料理したくないだけだろ……。
あと、ついででさり気なく俺がひどい扱いを受けてる。俺はどこの子どもだ。
「ゆきのん……ありがとう！　よし、ヒッキー、あたしの部屋に行こう！　相手してあげる！」
「お、おう……」
由比ヶ浜の勢いに押されて、台所を出た。
――と。
雪ノ下が見えない位置まで来た所で、ふと立ち止まる。
……これから２０分間、由比ヶ浜の部屋に２人きり？
由比ヶ浜も同じことに気付いたのだろうか。立ち止まったまま固まっている。全然こっちを見てくれない。
数秒すると、ぎぎぎと振り返って、にひっと笑った。どんだけ気まずいんだよ……。
「ひ、ヒッキー、あ、ああ、あたしの部屋、にに、２階だから……どど、どうぞ……」
由比ヶ浜は緊張した声音で言うと、階段をとんとんと昇り始めた。
……こっちにまで緊張が伝播しちゃったぞ……。
階段を登っていると、あることに気が付いた。
……由比ヶ浜さん、しっとりとかいた汗のせいで、ちょっとばかしだけどお尻にパジャマが貼り付いておるやないですか……。
ガン見してたら、遅かれ早かれバレる。

なので、早めに目を伏せた。
「はい、どう……ぞ……」
しずしずと部屋に通された。
何この２人の雰囲気……？
初対面でもこんな緊張しねえぞ。
ウソ、俺はする、超緊張する。
「失礼します……おお」
しかし中に入ると、２人の間の固い空気もどうでも良くなってしまった。
由比ヶ浜の部屋は、一言で言えば、「ＴＨＥ　☆　女の子」という雰囲気だった。
ピンク色の可愛らしいインテリアやぬいぐるみ等、一目で分かる女の子っぽさ。
……これが……女子の部屋か……。
小町の部屋しか見たことがなかったからなあ。雪ノ下の部屋は彼女のキャラも部屋事情も特殊なので除外します。
しかし視覚的な印象以外にも、妙に惹きつけられるものがあった。
そこはかとなく漂ってくる、甘い香りだ。
多分、何々を置いているからなどと言う単純な理由では無いのだろう。
総合的に、何か、甘い。
ここだけ読むと、なんか俺が雑で辛口な審査員みたいになってるけど、実際はそうではない。
何かもう、ただただ良い匂いなのだ。
……それに、恐らくさっきまで寝ていたからだろうか、どことなく汗の匂いがこもっているのだけれど……普通汗の臭いと言ったらマイナスのイメージしかないのに、この甘い匂いと絡まると何とも言えない感情が湧き出て来る。
要約すると。
俺、今、匂いで興奮してます。
「……ヒッキー？」

部屋の解説のナレーションを頭の中で一生懸命流しているうちに、由比ヶ浜が心配そうに声をかけてくれた。超ごめん。
「あ、ああ、わるい、何でもない」
「ん、そっか」
言うと、由比ヶ浜はとことこと歩き、ベッドに腰を掛けた。
「……じゃあ、ここ座って？」
少し頬を赤らめて、ぽすぽすと手で叩いて招かれたのは……由比ヶ浜のすぐ隣だった。
……はい？
「……え、いや、床でいいぞ？」
「あ、その……ゆ、床は掃除してないし、クッションも今全くないから！」
……クッションらしきものが、ぱっと見でも3つくらい見えるんですけど……。
しかし抵抗するのも難だと思ったので、
「そ、そうか……じゃあ、失礼します……」
お言葉に甘えることにした。
ぼふっとベッドのクッションで身体が沈み込み、すぐに元の高さに戻る。
「……」
「……」
……気・ま・ず・い・☆
何だこの状況。
由比ヶ浜のベッドに、二人並んで座るって。
由比ヶ浜は手を太腿で挟んで、もじもじとしている。やめて！　どきどきするから！
「あ、あの、さ……」
もじもじしたまま、由比ヶ浜が口を開いた。
「ん？」
「今日は……ありがと。その……嬉しかった、すごく」
ちらりとこちらを見て、恥ずかしげに視線を送る。

心臓が、どくんと跳ねた。
……あれ、なんだこれ？
「あ、ああ、まあ何てことねえよ」
目を逸らして、意味も無くカーテンの縁を見つめる。わあ、綺麗なピンク色のカーテンの縁ですね……ただの事実報告だね！
「ゆきのんが来てくれるって言うのもすごく、すごく嬉しかったんだけど……ヒッキーが来てくれたって分かったら、嬉しくて、嬉しくて……びっくりしすぎて、ちゃんと言葉にして伝えられなかったから……今言うね」
ぽす、と。
腿に彼女の手が乗せられる。
「ありがと。本当に嬉しい。心細かったんだ……すごく」
視界が、ぐらりと揺れた気がした。
由比ヶ浜との距離が近い。
時間感覚まで麻痺したように感じる。
二人の間は更に詰められて、鼻と鼻が触れそうな距離になる。
心臓は早鐘を打ち、由比ヶ浜から目を逸らせなくなっている。
今にも唇と唇が触れてしまいそうな距離にまで近付き、震える声で彼女の名を呼ぶ。
「由比ヶ――」
がちゃり、と音がした。
「ごめんなさい、２０分は言いすぎたわ。今から料理を持ってくるからドアを開けておいて……どうしたの？」
ドアを開けた雪ノ下が、不思議そうな顔をしている。
由比ヶ浜はベッドに不自然な体勢で寝転がり、俺は床に転がっていた。奇跡の反射神経と身体能力。
「……何をしているのかしら？　まあ良いわ、今から持ってくるわね」
ぱたぱたと、雪ノ下が階段を降りていった。
……なんか、お母さんになった時の雪ノ下が垣間見えた気がする……。
ぱちっと由比ヶ浜と目が合うと、燃えるように身体が熱くなった。

由比ヶ浜も顔を真っ赤にしている。
そこから雪ノ下が料理を持ってくるまでの数分間、俺たちは何故か正座で待機していた。
2.
「はい、どうぞ」
雪ノ下が持ってきたのは、消化に良い具材を入れたお粥だった。
「わー！　すごいすごい！　ゆきのん、お母さんみたい！」
……その褒め言葉のチョイス、どうなのん？　雪ノ下も絶妙な表情になってるし。
あと、君が言うお母さんって、まさか君のお母さんじゃないよね？
多分君のお母さん、こんなお店で出てきそうなクオリティの料理は作れないよね？
「あ、ありがとう……それじゃ、召し上がれ」
雪ノ下は苦笑して、土鍋のお粥を小皿に取り分けて由比ヶ浜に差し出した。
「はーい！　いただきまーす！　……あーん……」
……はい？
雪ノ下もぽかんとしている。
由比ヶ浜は、小皿を受け取るかと思いきや、雪ノ下に向けて口をぱかっと開けている。
……まさかこいつ、雪ノ下にあーんを要求しているのか……!?
し、信じられねえ！
「え、あ、その……由比ヶ浜さん？」
「ゆきのん……あーん……」
せめて言葉にして伝えろよ。いや、まあ、一応言葉にはしてるけど。
しかし雪ノ下は由比ヶ浜の責めに弱い。責めって表記にすると急に妖しくなる。
口を開けたままの由比ヶ浜にずいっと迫られ、雪ノ下がたじろぐ。
「……」
いや、なんで無言で俺を見るの？　俺に何が出来るの？
あれか、フェイントで俺にあーんしてみるか。一生の記念になるぞ

？　悪い意味でな。
　ふいと目を逸らすと、左のこめかみに雪ノ下の恨めしい視線を感じた。だが、それでもめげずに逸らし続けると、ふうと諦めたようなため息が聞こえた。
「……分かったわよ。はい、あーん……」
「あーん……んむっ、むぐ、むぐ……んーーーー！　美味しいーーーー！」
　星、３つ！　とでも言わんばかりに。
　由比ヶ浜は満面の笑みで握り拳をぶんぶん振っている。
　こいつ、良いリアクションすんなぁ……。
　素の反応だから、作った方は本当に嬉しいだろう。
　ちらりと雪ノ下に目をやると、顔を真っ赤にして俯いて「そ、そう……」とかなんとか、ぽしょぽしょと呟いている。何この子、可愛い……。
　その後も結局あーんを強要され、３０口ほど食べるまでひたすらあーんさせられた雪ノ下は、由比ヶ浜が満足気にご馳走様でしたと言う頃には既に疲弊しきっていた。お疲れ様でした……。
３．
　片付けも済んで落ち着くと、ベッドに雪ノ下と並んで座っていた由比ヶ浜がぱたぱたと手で仰ぎ始めた。
「由比ヶ浜さん、暑いの？」
「うん。温かいものを食べたからかな……でも、ちょっと前を開ければ大丈夫！」
　さっき家の前で、俺がいるのに気付いて一度はパジャマの胸のボタンをほぼ全て閉じていたのだが、そのことをすっかり忘れてしまったのか、再びボタンを開けようとした。
「……あ」
　そして途中で俺と目が合ってさっきのことを思い出したのか、由比ヶ浜はボタンを開ける手をぴたりと止めた。
　しかし、由比ヶ浜の体調を考慮すれば、ここでボタンを外すのをやめさせるのは非常に申し訳ない。

決して、断じて、谷間が見たい訳ではない。
なので、優しく微笑みかけてみる。
「大丈夫だ、由比ヶ浜。俺はお前の胸元になど全く興味が無いから、遠慮なくボタンを開けてくれ。本当にもう、ふなっしーの中の人くらい興味が無いから安心してくれ」
「それ本当に興味ないのかいまいち分かんないんだけど!? ……むー、なんかムカつく……でも、うぅ……」
北風と太陽作戦、成功なるか？　北風しか吹かせてないけど。
由比ヶ浜は数秒迷った後、意を決したように顔を上げた。
「もういいや！　……んっ……」
「ちょ、ちょっと、由比ヶ浜さん!?」
「……うおっ……」
目を限界まで見開いてしまった。
さっき玄関で見たときより、更にボタンを1～2つ多く開けたようだ。
あと一歩で突起が見えてしまうだろうかと言うくらいにまで、胸元を開けていた。
……わぁ……凶器だよぉ……。
危なかった。ジャージでも履いてようものなら、慌てて手で隠さなければならなかった。
何だよあの谷間……腕差し込んで「充電～」とか言いてえよ……俺何言ってんだろ……。
由比ヶ浜が恥ずかしさからかふるふると震え、俺は興奮でふるふると震えていると、雪ノ下も震えていることに気付いた。え、なんで？
じっと見ていると目が合い、ふいと逸らされた。
「……気に、してない」
小さく呟いた言葉に、死ぬ程悶えた。
由比ヶ浜をもう一度見ると、「や、やー、涼しいなー……」と言いながら、ベッドに両手を付いて目を泳がせていた。もはややけになっている感がある。
見える、見えちゃうから！

……自分の目が血走ってないか、心底心配になった。

続く。

（3）

1.

「あ、そう言えば」

由比ヶ浜の胸元騒動も一段落ついて、しばらくの間3人でのほほんと過ごしているときに、用事の一つをすっかり忘れていたことに気付く。

「ヒッキー、どうしたの？」

「これこれ、今日のノートのコピー」

由比ヶ浜が休んだ分のノートのコピーを翳す。

別に、何となく落ち着かなくて、昼休みと放課後部室に行く前にせっせとコピーしていたりはしていない。断じてしていない。

由比ヶ浜をコピーをじっと見て、呆気にとられているようだった。

「……これ、ヒッキーが用意してくれたの？」

……俺、そんなに不親切に見えますかね？

「コピーしただけだ。さらっとやれるぞこれくらいなら」

ベッド際に座っている由比ヶ浜の方に歩いて行き、ぱさりと手渡す。

……胸元を凝視してしまった……！

って言うか、ここからだともはや突起がチラ見出来てしまう。

いかん、見るな、見るな俺、見るな……！

……ダメだ、「押すなよ、絶対押すなよ」に変換されて行く……！

「ヒッキー」

雑念にまみれていたところで、由比ヶ浜の声がしてはっと目を覚ます。いや、起きてるけどね。

由比ヶ浜はノートのコピーたちをきゅっと抱きしめるように持つと、目を細めて笑った。

「……ありがと」

少しトーンを落とした、優しい声音と潤んだ瞳に思わず目を見開いてしまう。

「……っ！　……お、おうおう、どど、どういたしまして」

「あなたはどこのオットセイなのよ……」
尋常でない程にどもっていたら、雪ノ下の呆れたトーンでのツッコミが聞こえてきた。
……あれは、耐えようとしたって耐えられないぜぇ……。
由比ヶ浜さん、コピーを見てえへへっと笑うのはちょっと……どきどきしすぎてやばいので……ねえ？
2.
そこからもうしばらく経つと、由比ヶ浜がうとうととし始めて、雪ノ下に肩を寄せて体重を預けるようになってきた。
「あら、疲れたのかしら？」
「むにゃ……んん……」
雪ノ下が右肩に寄りかかっている由比ヶ浜を左手で優しく撫でると、由比ヶ浜はおねむの子供のような声で返した。
……姉妹兼母娘だと……？　レベル高いじゃねえか……！
雪ノ下が、由比ヶ浜を撫でつつこちらをちらりと見る。
「……そうよね。風邪で体力を消耗している所へこの男が来たんだものね……」
「なんで俺だけなの？　俺はエナジードレインの使い手なの？」
それどこのブラック羽川だよ。もしくは武装錬金のやつ。お前に抱き付いて体力を吸ってやろうか！　そして社会的に抹殺されてやろうか！
「私たちには構わないでいいから、もう横になって休んでいてちょうだい？　大丈夫、もうしばらくそばにいるから」
「むにゅ……うん……ありがと」
雪ノ下が由比ヶ浜を抱きしめて横にして、枕の位置を調整しながら布団を掛ける。
寝るための準備が完全に整うと、由比ヶ浜がにへっと安堵の表情を浮かべた。
……雪ノ下がお母さんになったら、こりゃ安定だなぁ……。
……なんか身体が熱くなってきた……。
由比ヶ浜をゆっくりと撫でた後、雪ノ下がくるりと振り返る。

「もう少しだけ様子を見ていきましょう」
「ああ、そうだな」
雪ノ下はふっと微笑むと、紅茶を淹れると言ってぱたぱたと部屋を出て行った。
……紅茶を用意出来る程、由比ヶ浜家の台所の諸々を既に把握してるのん？　早くない？
そこからまたしばらくの間、のんびりとした時間を過ごした。
場所は由比ヶ浜の部屋というイレギュラーな状況ではあるが、紅茶の香り漂う場所で３人で過ごすこの時間は、部室で過ごすときと雰囲気が自然に似てくる。由比ヶ浜はもう寝てるけど。
由比ヶ浜はたまにむにゃむにゃ言っては、にへらーっと笑っている。幸せな夢を見てるんだわーん。
雪ノ下はそんな由比ヶ浜を見る度に、愛おしそうに撫でている。
……雪ノ下さん、由比ヶ浜のこと好きすぎじゃありません？　あ、布団掛け直した。幼い女の子を育ててるお母さんみたいだな……。
……母ノ下さんって死ぬほど言いたいけど、死ぬ気で我慢する。
ふと。
雪ノ下がちらりと携帯を開くと、一瞬眉をひそめるのが見えた。
表情はすぐに戻ったため、それについて追及することは控えることにした。
３．
「もう、大丈夫そうね」
もうしばらく経った後、雪ノ下は由比ヶ浜の顔を覗き込むと、安心したように言った。
「そうか。じゃ、行くか」
言って片付けを始めると、雪ノ下がメモ紙らしきものに何やら書き始めた。
「何書いてんだ？」
ちらりと覗き込みながら質問する。こいつ、やたら字上手いな……。書道何段とか普通に取ってそう。

「置き手紙よ。一応ね」
淡々と書いてペンを置くと、雪ノ下も片付けを始めた。
どちらも一通り帰る準備を終えたところで、俺も　ちらりと由比ヶ浜の顔を見る。
……うん、これなら大丈夫そうだ。今は横を向いて、くうくうと穏やかな寝息を立てている。
「……」
……。
……うん、大丈夫。変な気持ちになんてならない。絶対に！
「何をしているのよ……」
固まっていると、後ろから呆れたような声が聞こえてくる。
振り向くと、雪ノ下がこめかみに手を当てて眉を寄せていた。
「あ、ああ、すまん」
……「つい」って最後に付け加えそうになった。あぶねえあぶねえ……。
「さあ、帰りましょう」
「そうだな」
それじゃ帰りますかと言って、ベッドから離れようとした。
――と。
「……っとぉ……？」
何かに、右手をくんと引っ張られた。
そんな事態を想定してはいなかったため、後ろに大きく仰け反る。
視線の先では、雪ノ下が何事かときょとんとしている。
「……んん……？」
後ろを振り向くと、由比ヶ浜が寝たまま、俺の手を握っていた。
……なんつう寝相だ。
無理に振りほどくのもなぁ……と思い、雪ノ下に助けを求める視線を送る。
しかし雪ノ下は俺と目を合わせず、代わりに由比ヶ浜のことを真っ直ぐに見つめていた。
「ん、なんだよ？　……あ」

雪ノ下の視線を辿って由比ヶ浜の顔に辿り着くと、由比ヶ浜は少し苦しそうな表情を見せていた。
――と思ったのだけれど。
よく見ると、目こそ閉じてはいるが、その表情はどこか寂しさを漂わせている、そんな気がした。きっと雪ノ下も同じように感じたのだろう。
犬だったら眉をひそめて「く～ん……」とか鳴きそうな感じ。
具合が悪い訳ではないのだろうけれど、このまま残して行くのは忍びない気がした。って言うか後ろ髪が超引っ張られる。
「……どうする？」
雪ノ下にちらりと目をやって聞くと、由比ヶ浜から俺へと視線をずらし、にこやかに微笑んだ。
「……比企谷くんだけ残って行ったらいいんじゃないかしら」
ほーん？
なんでなんで？
「……えっと……なんで？　お前を一人で帰すのもあぶねえし」
本音だった。
俺が由比ヶ浜の部屋で二人きりになる緊張も、雪ノ下に夜道を歩かせるという心配も。
聞くと、
「由比ヶ浜さんは寂しがってるようだから、出来るなら私たち二人で残っていてあげたいけれど……」
雪ノ下はため息交じりに携帯を取り出して、画面を見せてきた。メールを見せたいらしい。
「これは……げっ、陽乃さん？」
思わず、げって言っちゃった。本人が居なくて良かった……。
「そう。姉さんがね、私の家に遊びに行きたいって突然言ってきたの。もちろん断固拒否したんだけど、清濁併せ呑んだ交渉をされて、結局折れたのよ……。まったく、あの人の気ままさには本当に迷惑するわ」
うーわー……あの人らしいなぁ……。

あと、清濁って何なの……？　超気になるんですけど。
「今は由比ヶ浜さんの家にいるということを伝えたら、じゃあ家の前まで迎えに行くから、地図を送ってと言われて……由比ヶ浜さんには申し訳ないけど、本当に申し訳ないけれど、添付してもらった地図を姉さんに送ったの。それで、恐らくもうすぐそこまで来ているのよ。だから、私がこれ以上ここに居ることも出来なければ、私の帰りの心配をする必要もないの。……お願い、出来るかしら」
困ったように眉をちょっと寄せるのやめろよ、可愛いだろうが！
しかし、この状況はどうしたものだろうか。
下手に時間が経てば、陽乃さんがこの家に突入さえしてきかねない。
いや、あの人ならむしろ喜んで突入してくるだろう。
だから、あまり迷っている時間は無い。
由比ヶ浜に手を握られたまま、左手で頭をがしがしと掻く。
「……分かったよ。ちょっとだけ残ってくわ」
「ありがとう。それじゃあ、由比ヶ浜さんによろしくね。……無理矢理襲ったら駄目よ？」
「するか、んなこと」
俺の返しを聞いてふっと微笑むと、雪ノ下は由比ヶ浜をそっと撫でて小声で挨拶をしてから、俺に視線を向けて胸の近くで小さく手を振ると、静かに部屋を出た。
そして間もなく、車の発車音が聞こえた。
「車で来てたのかよ……」
流石だな、陽乃さんってか雪ノ下家。
頑張れ、魔王に負けるな、母ノ下！
「……さて、と」
繋いだ手を離したら余計に寂しがってしまうだろうから、手を繋いだままベッド際に腰を下ろす。コートをまだ着てなくて良かった……。
使い慣れない手でなんとか小町に事情説明のメールを送る。
「ふう」

ほっと一息をつく。
由比ヶ浜の顔を見ると、再び穏やかな表情になって、くうくうと寝息を立てていた。
「……ちょっとだけだぞ」
言って、少しだけ、右手を握り返した。
続く。

（４）

１．

由比ヶ浜と右手同士を繋いだ状態で二人きりになって、かれこれだいぶ経った気がする。

体感的には、大体３０分くらい経っただろうか。

どれ、時計は……。

……まだ５分しか経ってなかった。

なんだこれ。一人で緊張してるのがバカみたいなんだけど。

由比ヶ浜を見ると、時折にへらっと笑ってむにゃむにゃと何か呟き、その度に握っている手にきゅっと優しく力が込められる。その絶妙な力加減にいちいちドキドキしてしまう。

うーん。

何というか、最低と分かってて言うけれど。

襲うなんてことは絶対しないけど、せめてあの谷間はもう少し眺めたい。

しかし、掛け布団に綺麗に包まっている為見ることは叶わない。

……もどかしい。

見ることが出来ないならせめて手は離したい。ドキドキしすぎて心臓に悪いし、ゆっくりと床に座っていたい。

――などと考えていたとき。

「うーん……暑い……」

由比ヶ浜が、ぶうたれる子どものような口調で呟くと、空いている左手で掛け布団の上半分をばほっと取り払った。ばほっ。

「……う……お……」

目を見開いた。下手をすれば血走っていたかもしれない。

由比ヶ浜は、右手は変わらず俺と繋いだままで、何も上に掛けずに、さっきまでの服の状態のまま、堂々と仰向けで寝ている。

つまり、胸元のボタンを明らかに開けすぎた状態で寝ている。

それどころか、さっきよりも更にボタンがもう一つくらい開けられているのではなかろうか。

見えてはいけない突起が、ちらちらと見え隠れしている。
……。
……っっっだあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！
触りてえ！
何だこれ!?　据え膳にも程があるだろう？
でも、でも、でも！
左手で頭を抱えて、由比ヶ浜の繋いで手は下手に動かさないようにしながら全力で悩み苦しんでいると、由比ヶ浜が少し声を漏らしたことに気付いた。
んんっ……と。
悩ましいような、苦しんでいるような、そんな声。
「おい、由比ヶ浜、大丈――」
寝ているとは知りつつ、思わず声を掛けた俺の言葉が、由比ヶ浜の行動により遮られた。
「寒い……」
言うや否や、由比ヶ浜は繋いでいた俺の右手を両手で全力で引っ張った。
「うおぉ……っ!?」
俺の戸惑う声も意に介することなく、まあ寝ているのだからそれも当然だが、遠慮無しにぐいぐいと引っ張りこんでくる。
その結果として。
俺の顔は、気付けば彼女の胸元に完全に埋まってた。ぽふっと。
……。
……抱き枕……だと……？
流れとしては何となく分かる。
夢の中で不安になって、伸ばした手がたまたま俺の手を掴んで。
そして熱もあるからか布団が暑くなったためにそれを取り払って。
最後に、やっぱり寒くなったからと近くにあったどころか掴んでいた俺の身体を抱き寄せる。
うん。まあ。
分かるには分かる。

しかし、これは。
まずい。
互いに横向きになり、由比ヶ浜は安らかな寝息を立てながら、俺の頭をすりすりと撫でている。
何、俺の髪の毛そんなに撫で心地良いのん？　何と勘違いしてんだろう……。
そう言えば、布団に包まっていたせいか由比ヶ浜の身体はじっとり汗ばんでいて、パジャマがしっとりと肌に貼り付いている。
そのため、二人の身体の密着感がより増してしまっている。これは非常にまずい。全裸で抱き合っているよりエロいかも。そんな状態になったことないから分かんねえけど。
心地良すぎてやばい。特に顔が気持ち良い。柔らかすぎんだろ、こいつの胸……。
しかしそろそろ離れないと、俺の理性がいよいよまずい、もう離れようか……と思った矢先。
耳元で、
「えへへ……ヒッキー……」
由比ヶ浜がぽそりと俺の名を呼び、とびきりの幸せな笑みを浮かべた。
や。
これ。
だめでしょ。
可愛すぎる。もうだめ。
いくら目が腐ってても、男ですもの。このままじゃ据え膳も片付けられちゃう。
所在無げにふわふわさせていた両手を急にわきわきさせていると、
「――え？」
二人同時に、声を上げた。
そう。
二人、同時に。
由比ヶ浜が目を覚まして、ばっちりと目が合ってしまった。

2.

「……え」

由比ヶ浜が、もう一度声を漏らした。

俺はというと、多分目も当てられない程の苦笑いを浮かべていたと思う。

ちなみに目は合っているけれど、顔は彼女の胸に埋まってるので自然と上目遣いみたいになっている。俺の上目遣いとか気持ち悪くて死んじゃう。俺が。

状況を、というより二人の体勢を把握したのか、由比ヶ浜が目をむいた。

悲鳴でも上げられたら色々とまずい、普通の女の子ならまず確実にそうするだろうし……！

――と。

思ったのだけれど。

「……あ、あはは、あたし、寝相悪かったかな……？」

顔を真っ赤にしながら、俺をしっかり抱き寄せたまま。

彼女は、気まずそうに笑った。

状況の理解がやたら早いのね……。

彼女の胸に埋まりながら、俺もたははと苦笑いを浮かべた。

3.

二人でベッド際に並んで座り、事の経緯を一から説明する。

「そっか、そうだったんだね。……ごめんね？　ヒッキー」

足をぷらぷらさせながら、こちらをちらりと見る。

「や、俺こそ、その、なんか、すまん。ていうか、悲鳴を上げずにいてもらえて助かった。普通自分が起きて男が抱き付いてたりしたら、それこそ一瞬で警察沙汰だろ？」

言うと、由比ヶ浜は一瞬目を見開いて、やがてゆっくりと細めた。

「あー……うん、もちろん最初はびっくりしたよ？　だけど、その……ヒッキーがくっついてくれてたって言うのがなんか、びっくりはしたけど、凄い安心して……嬉しくて、さ」

指をもじもじと絡めながら、下を見つめてぽそりと呟く。

「あ、そ、そうか……なら、何より……だな」
頬をぽりぽりと掻きながら、俺も目を逸らす。
「……」
互いに目を逸らすこと、丸々一分。
何だこれ。アニメでこんなシーン流したらただの放送事故だって思われるぞ。
そろそろ向き直らねばと思って首の向きを変えると。
「……あ」
目線を戻すタイミングがばっちり一致してしまい、思い切り目が合った。
互いに顔が真っ赤になるが、今度は由比ヶ浜が目を逸らさない。
「……ヒッキー、あのね？」
由比ヶ浜がこちらの右腿に手を乗せ、するりと身体を寄せてくる。
離れようという気が、起きない。
離れられないし、離れたくない。
何となく、そんな気持ちになった。
「ほんとに、ありがとう」
ヒッキーは……と由比ヶ浜は続けて、
「しょっちゅうよく分かんないこと言うし、あたしのこと馬鹿馬鹿言うし、本読んでにやけるとほんとキモいけど……」
待て待て。
逆接の前の罵倒ラインナップが辛すぎるぞ。
だけどあたしにとっては、と由比ヶ浜は言い、顔を更に近付ける。
「あたしが困ったときに駆け付けてくれる、ヒーロー……にしてはちょっと目が腐ってるけど、……でも、ほんとに、本当に、頼りになって、かっこいい男の子なんだよ。ずっと、ずっと……今も」
ずどん、と。
心臓がとんでもない力でぶん殴られた感覚に陥った後、今までと比べ物にならないくらいの速度で心臓が早鐘を打つ。
由比ヶ浜の目は潤んで、でも顔には幸せそうな笑みを浮かべていて。

二人の唇は、微かな吐息さえ分かる程に近付いていた。
「由比、ヶ、浜……」
自然と、彼女の名を呼ぶ。
「ヒッキー……」
由比ヶ浜はゆっくりと目を閉じて、やがてどちらからともなく、二人の唇が重なった。
4.
「んんっ、んむっ、んちゅっ、えむっ、あふあっ……」
初めてのキスだからと、少し唇同士が触れてはいお終いとは行かなかった。
座りながら互いの唇を貪って、口内を貪ると、二人はそのまま後ろに倒れ、互いに横向きになって更に舌を絡め合った。
俺が上になって唾液を流し込めば、由比ヶ浜も同じように上になって唾液を流し込んでくる。
彼女の唇の柔らかさと、口内や唾液の得も言われぬ甘さが、ゆっくりと理性を蕩けさせていった。
身体を更に密着させたいと思い、完全に彼女の上に乗る体勢をとり、好き放題に口内を舐り回し、舌に吸い付いて自分の口内で彼女の舌を根本から蹂躙し、耳にもゆっくりと指を入れてさわさわと撫で回す。
「んぐっ、れるっ、んはっ、はむっ、んちゅるっ、はぅっ、ヒッキー、ヒッキー、ヒッキー……」
なんだこれ？
なんだこれ？
なんだこれ？
可愛すぎる。
柔らかい。
温かい。
頭が、おかしくなる。
密着してたわわな胸が潰れるのも厭わず、彼女は俺の背中に手を回して、愛おしむようにさすり続けた。

途中からは互いに手を握り合って、指も舌も絶え間なく絡ませ合った。

5.

「……ぷはっ。……ねえ」

口を離すと、由比ヶ浜がにこやかに微笑みながら口を開いた。

このときは俺が上になって唾液を流し込んでいたため、唇と唇が離れるとその間に糸が引かれて、それが切れると、彼女は口の周りをうっとりとした表情で一舐めした。

「今日、金曜日でしょ？　それと、お父さんとお母さんが帰って来るの、日曜なんだ。だから……今日、泊まっていかない？」

由比ヶ浜の表情は、今まで見たことがない程に大人びていて。

目を細めて微笑む仕草に、たまらない程胸が高まった。

「……な……あ、や、いくらなんでもそれは……」

「じゃあ、あの、さ……明日も看病してほしいからって理由じゃ……だめ？」

少し困ったように、上目遣いで笑う。

これを了承したら、この後どういうことになるかなんてのは分かりきっている。

正直、その展開の魅力に抗えないなという気持ちはあった。

いや、この言い方自体彼女に失礼だろう。

よし、自分に正直になろう。

したい！

……思っただけで死にたくなった……。

「……わかったよ。泊まってく。小町に連絡するから待っててくれ」

言って、由比ヶ浜の表情がぱあっと明るくなるのを見ながら、携帯を手に取るとぱぱっとメールを打って送信する。

ものの数十秒で返信が来たかと思うと、異常な数の星マークと共に「おめでとう！」と返ってきた。やべえ、超うっとうしい……。

「これでオーケー。……じゃ、その、なんだ、よろしくお願いします」

頬をぽりぽり掻きながら、妙に恭しく挨拶してしまう。

「あ、こちらこそ……その、よろしくお願いします」

何故か同じテイストで返された。
互いに目を合わせると、ぷっと笑い合った。
「それじゃあ、さ」
由比ヶ浜がきちんとした向きで仰向けに寝転がると、少し恥ずかしそうに胸元を手で押さえた。
「ここ……どうぞ？　ヒッキー、いつも見てて興味津々みたいだし……」
バレてた。
死にてえ。
内心絶望していると、由比ヶ浜は戸惑いながら言葉を続ける。
「でも、その……ここ、さ、結構……っていうか、すごく弱いから……あんまり、イジめないでね？」
もじもじと内股をすり合わせながら、首だけ横を向いて、頬を朱に染めながら、潤んだ瞳で流し目を送った。
……。
なんという、素晴らしいフリなんだ……！
続く。

（5）

1．

「じゃ、触るぞ……」

「う、うん……」

仰向けで寝ている由比ヶ浜の腹の上に乗り、胸へ手を伸ばす。まだパジャマは着ているが、そのほとんどははだけており、胸の突起が今にも見えそうな状態になっている。

互いにあまりにも緊張していて、彼女の身体も、俺の手も震えていた。

一番長い中指の指先が胸にぴたりと付くと、彼女がんんっと悩ましげな声を漏らす。

がっつきたくなる気持ちを必死で抑えながら、人差し指と薬指、親指と小指の順番で指を付け、ゆっくりと沈めて行く。

「あうっ、ふあっ……」

彼女の甘い声を聞いて、痛くは無いようだと安堵に胸を撫で下ろす。

そして、ゆっくり、ゆっくり指を沈める。

……。

……んん？

なんか、沈んでも沈んでも底に行き着かない。

気付けば、１０本全ての指がほとんど見えなくなる程に沈み込んでしまい、それに合わせてパジャマもはだけて、突起が完全に見えてしまっていた。

……わぁ……。

「ひんっ、あぅぅっ……」

涙目で声を漏らして、俺のことを必死で見つめてくる彼女。

……んー。

理性が、ぎりぎり。

「由比ヶ浜……大丈夫か？　痛くないか？」

指が完全に沈んだところで、心配になって声を掛けた。

「大丈夫だよ……えへへ、ヒッキー、優しいね……」
そう言って彼女はこちらの頬に手を添えて、優しく微笑んだ。
沈み込んだ指をゆっくり、ゆっくりと動かし始めると、彼女の声はより甘味を帯びてきた。
「あっ、んんっ、ひぁっ、すごっ、ヒッキー、これ、気持ちいっ、ひんっ！　……気持ち……良いよぉ……」
恥ずかしいのか手で顔を覆っているが、ちらりと覗いた目が色を帯びていることに気付く。
彼女が最初自分で言ったように、確かに敏感なようだし、俺が与える刺激にも慣れてきた感じがする。
それならば、と。
試しに、下から掬い取るように荒々しく揉んで、２つの突起を摘まんだ。
――と。
「ひあぁぁぁあぁぁあぁぁあぁっ!?」
「えっ……うおっ!?」
突起を摘まんだ瞬間に、彼女は手で顔を更にしっかりと覆い、腰が俺を振り落さんばかりに跳ね上がった。
一瞬、まるでロデオのような格好になったが、すぐにまた元の体勢になる。
「お、おい、大丈夫か……？」
未だに顔を覆っている彼女に声を掛ける。
すると、顔を隠したまま、震える声で、
「や……そこ、本当に弱いの……おかしくなっちゃうの……ヒッキーに変なとこ見せちゃう……変な顔見せちゃうから……優しく……して……」
言って、手をほんの少しだけ動かし、涙に潤んだ目を覗かせた。
……うーわ。
これは、もう、無理。
「すまん、由比ヶ浜」
「……え？」

突然の俺からの謝罪に面食らって、素っ頓狂な声を上げる。
「……優しくって言うのは、もう無理そうだ」
「え……ひあぁぁぁぁぁぁっ!?」
宣言した直後、左手で彼女の両手を掴み、彼女が顔を隠せないようにして、右手はまるで乳搾りでもするかのように乳房全体を激しく揉みしだき、突起を全力でしごき上げるように動かした。
「やぁぁぁぁぁっ!? ほんと、ほんとだめだから、ヒッキー、や、こんな顔見てほしくないよぉ……!」
涙を流し、口を半開きにさせ、懇願しながら首をいやいやと横に振る。
「そんなことないぞ。全然変なんかじゃない」
言って、左手による拘束をぱっと放す。それと同時に右手も放した。
「ほ、ほんとに……? えっ、あっ、ちょっと!?」
油断して手を下ろした彼女の両手を掴み、腰の方に下ろさせ、彼女自身の腰と、俺の膝とで挟み込むと、気を付けの体勢で身動きが取れない状態にした。
そしてまだ彼女の思考が事態に付いてこない内に、今度は両手で彼女の胸を揉みしだく。
「ひぎっ!? いぁぁぁぁぁぁ……っ! あっ、だめ、両手でなんてされたら、や、だめ、またすぐ……いぅぅぅっ……!」
雁字搦めにされたまま、彼女は全身をぶるると震わせた。
震えている最中も手は止めず、今度はこりこりに立った突起を集中的にしごき上げる。
「ひぁっ!? ちょ、ちょっと、そんな風にひたら、やらっ、いっ、イっ、イっ……〜〜〜っ……!」
呂律が回らなくなってきたのか、舌ったらずの甘ったるい声を上げる。
こちらの体重など意に介さないかのように、何度も何度も繰り返し背筋を弓なりに仰け反らせる。
「あ〜……っ、あ〜……っ、あ〜……っ」

焦点の合わない目でぼーっと天井を見つめ、口から涎を垂らしながら、一定の感覚で呻き声を上げている。
事の最中の甘い声も、繰り返し絶頂に達して限界を迎えた後のこの低い唸り声も、どこまでも可愛く思えて仕方なかった。
その身体からは、風邪の熱と快楽により大量に汗が噴き出していて、もはやパジャマを着ている意味がまるで無くなっていた。
「……ちょっと、飲み物持ってくるわ」
言って、彼女の頬をさすると、冷蔵庫に入れておいた飲み物を取りに部屋を出た。
2.
飲み物を持って来ると、由比ヶ浜は力なく起き上がり受け取った。
こくっ、こくっと飲む音がした後、ベッドのライトの所にコップをことりと置く。
「……ふぅ。ありがと。……でもヒッキー、あぅっ、あんなに激しく責めて、ひんっ、くるなんて……って、ちょっと、話聞いてんの!?」
「ああ、ちゃんと聞いてるぞ」
休憩する為、ベッド横の壁に背を付けて、股座に彼女が座った状態でくつろいでいた。
ちなみに彼女は既に上着は脱いでいて、上半身裸で座っている。
そんな状況の為我慢が出来ず、話の腰を折るのも厭わずに胸を揉んでしまった。
んー。
まずい。
許可さえもらえれば、一週間でも揉んでいたいぞ、この乳。
大きいし柔らかいし、エロいのに包容力もあるって……何なんだこれ。天の恵み？
話は本当に聞いているんだが、胸は揉むわ顔は明らかににやけているわでひどいものだ。
おかげで彼女はぷりぷりと怒っている。その顔がまた可愛いもんで更に胸を揉んでしまい、また更に怒られるというデフレスパイラル。

「……まったく、んっ、しょうがないんだかっ、らぁっ……ってこらー！」
「お、おう、すまん……」
ノリツッコミなどという高度な技術まで使わせてしまった。俺のおかげで彼女のお笑いスキルが上がったと言っても過言ではないのでなかろうか。ごめん、うそ。
彼女ははーっと深くため息を吐くと、少し顔を赤らめた。
「だから、い、言ったじゃん……弱いって。あんな恥ずかしい顔、ヒッキーに見せたくなかったんだよ……？」
言って、ちらりと流し目を送ってくる。
……わー、何この子。抱きしめ……る。うん。
後ろからそっと腕を回すと、彼女の身体を包み込んだ。
「ん、や、さっきも言ったけど、全然変じゃないぞ？　むしろその可愛いっていうか……うん、アレだ。エロい。超エロかった」
「……うわぁ……」
……。
照れ隠しで言い直したら失敗した。
由比ヶ浜さん、超引いた目で見てるよぉ……。
「うーん……それは嬉しいんだけど、やっぱり釈然としないや……あ、そうだ」
言って、彼女はぽんと手を叩いた。
すっと腰を上げたかと思うと、正面からこちらを見つめて四つん這いの姿勢になった。
距離がやたらと近い。鼻と鼻が触れ合いそうな距離だ。
……なんでそんなに目がキラキラしてるのん？
一度目を逸らし、少しもじもじしたかと思うと、意を決したようにこちらへ向き直った。
「今度はあたしがするよ。……どうしてほし」
「胸。ぜひ挟んで頂きたいです。よろしくお願いします」
「……ヒッキー、どんだけあたしの胸に興味あんのさ……」
食い気味で答えたのも相俟って、すんごい引かれた。

「でも……どうやるかいまいち分かんないよ？」
「大丈夫。俺もあんま分かんないから、じっくりやろう。何事もじっくり取り組むことが大切だから」
「ヒッキー……。目が腐ってるのにキラキラ輝いてると、なんかもうすごい不気味だよ……」
……。
どうやら、俺は。
目を輝かせてはいけない男らしい。
情熱を持つことを今後極力控えたいと思います。あ、情熱を持ってても表に出さなければ良いのか。情熱を胸に秘めて、最後まで秘めたままにしておこう。それ普通の人じゃないのん？
「ヒッキー。んっ……」
内心凹んでいると、不意に彼女が唇を重ねてきた。
ほんの数秒触れ合うだけの、優しい口付け。
ぱっと離すと、えへへっと笑い、
「んー……惚れた弱みってやつかなぁ……。しょうがない、やったげる。まずどうすると良い？」
照れながら頬を赤らめ、小首を傾げる彼女が、どうしようもなく可愛く思えた。

続く。

（6）

1.

どうすると良い？　と言って、小首を傾げる由比ヶ浜。

「うーん……」

どの体勢で挟んでもらおうかという、今までの人生でもっとも卑猥な悩みを抱えた訳だけれども。

「……お……」

……ふと。

目の前の光景を改めて見たとき、思わず息を呑んだ。

髪をおろし、身体全体がじっとり汗ばんで、何とも言えない艶っぽさを放つ由比ヶ浜が、上半身裸で四つん這いになって、目の前まで顔を近付けて微笑んでいる。

……うわぁ……。

「……んっ、あっ、ヒッキー……？」

思わず。

ほんと、思わず。

どの体勢で挟んでもらうかを考える顔をしながら、重力により蠱惑的に下に伸びた彼女の乳房を揉んでいた。

や、ほんと。いつの間にか。

無意識って恐いね！

当の彼女はというと、触られて反応しつつも、それ以上に戸惑っている。そりゃそうだよね。

彼女の胸をこの角度で揉んでみて、改めてこの狂気じみた凶器の狂喜すべき魅力に取りつかれる。なんか言葉遊びしちゃうくらいにはテンションが上がっている。

「あー……その、なんだ、やっぱり……もうちょっと、……触って良いか？」

頬をぽりぽりと掻いて、目を逸らしながら伝える。

すると、彼女はくすっと笑い、

「ふふっ……もう。ヒッキーは胸がそんなに好きなんだ」

「ああ、大好きだぞ、牛乳」
「誰が牛だっ!?」
四つん這いで上裸の女の子にツッコミを入れられるという、クールっぷりである。
はあ、と彼女はため息を吐き、
「まったく……。……いいよ。ヒッキーにだったら」
言って優しく微笑むと、再び軽く口付けをしてきた。
2.
「あっ……ひぁっ……ふあぁあんっ……んっ、んちゅるっ、れろっ、ふむぅっ……」
四つん這いのままの由比ヶ浜と舌を絡ませ合って、胸とその突起を自由に弄り回す。
前足……じゃなかった、腕はがくがくと震えて、崩れるのを堪えるので精一杯といった風だ。
彼女がそんな状態でも、口を体重の支えのように扱いながら、まるで乳を搾るかのように彼女の胸をぎゅむぎゅむと絞り上げる。
「んんっ、ひぐっ！　んんっ、んんんっ……んあぅっ！」
胸の根本から絞り、最後に突起をきゅっと摘み上げる度に、切なそうに目を細めて喘ぐのがたまらなく可愛い。
突起を集中的にしごき上げると、あまりの快感に耐えられなくなったのか、唇を離して顔を俺の胸元に埋めた。
「ひぃんっ、あんっ、だめっ、ヒッキー、それ、ダメ、だってばぁ……イっ……あぁぁぁぁぁっ！」
とどめに突起を思い切り力を込めて摘まむと、最後は顔を上げて目を見開いて全身を痙攣させた。
「おっ……うおっ……!?」
彼女はそのまま崩れ落ちると、俺の股間の目の前に彼女の顔がくる体勢になった。
くつろぎづらいからと、途中からパンツ姿になっていたのが、ここで仇になった。仇、と言うのが適切な表現なのかどうかは分からないが。

「あっ、かはっ……ひぅっ……あっ……ヒッキーのこれ……すご……匂い……」
角度的に彼女の顔はよく見えないが、微かに見えるだけでも明らかに発情している。
んー。
正直、超舐めてほしいけど。
今はまだ、責めたい。
パンツ越しに、俺の股座の匂いをすんすん嗅いでいる由比ヶ浜の艶姿に頭がくらくらしながらも、彼女の頬に手を添える。
「由比ヶ浜。膝立ちになってくれるか？」
「ふあ……？　……はい」
ぽけっとした顔で、俺の言うがままに目の前で膝立ちになる。ぞくぞくするけど、これはこれで心配になるぞ、お前……。
膝立ちになり、手を俺の肩に置き、胸が目の前に来る。
……うおぉ……。
目の前で見ると、破壊力がやばい。
何これ、国宝？
あまり見惚れていても彼女が戸惑うと思い、早速責めることにする。
――両手は彼女の胸の肉を揉みしだき、同時に彼女の突起に吸い付いて、舌でつつき、舐め回し、時折甘噛みする。
そんな責めを、ものの１０秒程度の間に一気に行う。
――と。
「ひあぁぁぁぁっ!?　あぐぅぅぅぅ……それ、それすぐイっ……あぁっ！」
悲鳴じみた嬌声を上げ、彼女はあっと言う間に絶頂に達して、前に倒れるかと思いきや後ろに倒れそうになる。
慌てて背中を抱いて支えると、女の子座りでぺたんと腰を下ろして落ち着いた。
「はっ、んあっ、ひぐっ、うっ、うぅっ……」
目は焦点が定まらず、口からは舌がひとりでに出入りしている。

――まだ、まだ。
「ひぎぃっ!?」
唇を戦慄かせている彼女の胸の突起に吸い付くと、そのまま後ろへと押し倒した。
3.
「あひっ、やっ、もうっ、許しっ、んぐぅっ！　……あっ、ひっ、やっ、まだ？　まだイカせるの？　やら、もうやら……イっ、ひぎっ、……あぅあっ！　……もうやらよぉ……あたしの胸おかひくなっひゃうよぉ……イっ、イく、またイく、イく、イっ……――――――っ！」
仰向けになった彼女の胸に吸い付き、手で彼女の胸や口、耳を蹂躙し、押さえ付けがてらに自分のモノをパンツ越しに彼女の秘裂にぐいぐいと押し付ける。
パジャマのズボンを履いているとはいえショーツは履いていなかったようで、十分に快感が叩き込まれているのか、腰を押し込む度に彼女は良い声で啼いて、泣いて、鳴いた。
とどめに……と思い、パンツを下ろし、自分のモノを由比ヶ浜の前に晒す。
意識が朦朧としている中でも、俺のモノを見た瞬間に彼女が小さく「うぁっ……おっき……すご……」とか細く呟いたのが聞こえ、背筋がぶるりと震えた。
そして、胸の突起に再び吸い付いて、そのまま亀頭をパジャマ越しに彼女の秘裂へ宛がうと、彼女は小さくひっと悲鳴を上げた。
「由比ヶ浜、行くぞ……」
「あっ、やっ……」
彼女が両手を突き出して交差させて、制止のポーズを取るのも意に介さずに、亀頭を割れ目にパジャマの布地ごと僅かに食い込ませた。それと同時に、胸の突起をまるで持ち上げるかのように2つ同時に摘み上げる。
布ごしに彼女の肉襞の感触を微かに感じると共に、目の前で彼女の顔が、こちらからその綺麗な喉が見える程に反り返ったのが見えた。

「――――――っ！」
今までででも一番大きな反り返りを見せると、彼女は全身の力をだらりと抜いた。
４．
……さて、ここからどうしようか……と考えていると。
「……あ」
ふと、ある重要なことを忘れていたことに気付く。
なんでこのことを忘れるんだお前意味分かんねえよと言われそうなことだ。
……由比ヶ浜さん、風邪引いてらっしゃいますやん。
「お、おーい……由比ヶ浜、さーん……大丈夫ですかー……？」
思わず敬語になる。
俺の声に反応したのか、虚ろだった彼女の目に光が戻る。
「……うーん……ちょーっと、今日はもう……きついかも……」
困ったように眉を寄せて、たははと笑った。
「ですよねごめんなさい今すぐ身体を拭くセット一式をご用意致します」
「ふえ……？」
惚けている彼女をよそに、敬語全開で謝り、雪ノ下が買ってきていた袋を漁り、厚手のタオルを取り出した。
「ごめん、お風呂場のものちょっと借りるな」
「あ、うん……」
許可を取ると、風呂場にある洗面器にお湯を出した。多分何往復もするだろうけど、今更そんな手間は惜しむまい。
なんか、もう。
性欲に負けて、風邪で弱った彼女をイジめ抜いたことによる罪悪感が半端ない。
「うぅぅぅ……！」
自責の念で変な唸り声を上げながら、冷蔵庫に入れていたスポーツドリンクも持って、急いで彼女の部屋に戻った。

続く。

（7）

1.

お湯を入れた洗面器とタオル、スポーツドリンクを持って由比ヶ浜の部屋に戻ると、彼女はいつの間にか下を別のパジャマに着替えて、上は裸のまま、ベッド際で胡坐をかいてぽへーっとしていた。

「大丈夫か？　今、身体拭くから」

言って、お湯にタオルを浸けて絞る。

「あ…うん、よろしく……」

熱がまた上がってしまったのか、ぽわぽわとした調子で返事をする。

「じゃ、まずは顔から拭くぞ」

「ん……」

彼女の頬に手を添えて、顔を拭き始めた。

こしこし。

「んっ、んっ、んっ……ふいぃぃ……」

「……」

よっぽど拭かれるのが気持ち良いのか、拭き取る度にほにゃっと頬を緩めている。

「ふわっ……？」

なんか妙に何かしたくなって、頬をぷにぷにと触ってみた。超柔らかい。

彼女は相変わらずぽわぽわとしており、頬を摘まれても目立った反応を示さない。ぷにぷに。

ぷにぷに。

「……はっ！」

……はっ！

思わず顔を拭く手も止めて、夢中になってしまった。

これ以上同じことをしていては流石に不自然に思われだろうと思い、次に首筋や肩を拭き取ろうとした。

――と、その時。

「……ヒッキー」
「ん？」
不意に、声を掛けられた。
表情は相変わらずぽわぽわしたままであるが、その目は真っ直ぐ俺を見つめている。
「……んっ」
「おっ……？」
俺の名を呼んだ後、そっと目を閉じて、口先をすぼめた。
……。
……恥ずかしいから、首を拭き始めた。
「ちょっと！　無視はひどくない!?」
すんごい勢いで怒られた。由比ヶ浜さん、ここに来て覚醒。
「いや、だって恥ずかしいし……」
「そんなこと言ったら……さっきのなんて……」
指をいじいじと合わせて、顔を真っ赤にしながらぽしょぽしょと呟いた。
「あ、いや……それは……」
「……」
「……」
……。
なんだろう。
唐突に、死にたくなった。
「ほ、ほら、一回やっちゃえば楽になれるよ！　ほら！」
「怖い薬の誘い文句みたいなこと言うな。ええい、放せ放せ！」
この弱った身体のどこにこんな力が残っているのか、本気になっても引き離せないような力で腕を引っ張られる。
それでも抵抗し続けていると、不意にその力が緩められた。
「……あ……」
彼女の顔を見ると、明らかにしょんぼりとしている。
やってしまった。
瞬時に、そう思った。

「……ほんとに、だめ……？」
涙に潤んだ目で、袖をくいくいと引っ張ってくる。
「あ、いや……」
「……ほんとに……？」
「うぐ……」
今にも泣き出しそうなその表情に、見る見る追い詰められて行く。
ああ、雪ノ下はいつもこんな気持ちだったのかなあ……お疲れ様です。
これ以上恥ずかしがっていては本気で悲しませてしまう。
しょうがねえか……ほんと恥ずかしいけど。
頭をがしがしと掻いて、彼女の肩に手を添えた。
「……言っとくけど、すげえ恥ずかしいんだからな」
「……ぷっ。ヒッキーが言うとなんか気持ち悪いね」
「……うっせ」
胡坐をかいたままの彼女の唇の位置を確認して、そっと顔を傾けた。
2.
「んっ、んふっ、んっ、あんっ、んんっ……」
唇を重ね合わせたまま、それでも一応やることはやらねばと思い、首筋や肩を拭く。
タオルを這わせる度に彼女はぴくぴくと震え、甘い声を漏らしているが、今の俺は特に性的な意味合いを持って彼女に触れていない。
なんで興奮しないのか、不思議に思った。
いや、正確に言えば、興奮はしている。下を見たらギンギンになってるし。別にこれは言う必要なかった。
でも、なんだろう。
その気持ちが分からないまま、手を胸にまで伸ばしたとき、その気持ちの正体が分かった。
タオル越しに胸に触れると、ふにゅん、と柔らかく沈み込む。
「あっ……ふあっ……」
彼女の気持ち良さそうな声が漏れ聞こえる。

その耳心地の良い声をもっと聞きたくて、うっとりとした顔をもっと見たくなって、気付けば片手では胸や背中をタオルで拭き続け、もう片方の手は胸を優しく揉んでいた。
自分のその手つきも、さっき激しい愛撫をした時と比べて明らかに優しい。
自然と、優しくなっていた。
ああ、なんていうか。
もちろん、気持ち良いのだけれど。
なんていうか、楽しくて、安心する。
由比ヶ浜が時折目をうっすら開けて、俺と目が合うとすごく幸せそうに微笑むのを見るのも、俺が身体に触れる度に気持ち良さそうに声を出すのも。
なんていうか、幸せだ。
タオルで上半身を一通り拭き終えると、ごく自然と、俺は彼女の肩を掴み、口付けをしたまま押し倒した。
彼女も何も言わず、嬉しそうに目を細めて受け入れた。
3.
しばらくの間抱き合った後、俺が彼女の上から退いて、徐に二人とも起き上がる。
「……そういや、今更だけど」
「ん、なに？」
「風邪、俺すげえうつりそうだよな」
「本当に今さらだっ!?　……そ、そのときは……あたしが、お粥作ったげるよ……？」
「……」
「え、ヒッキー？　どうしたの？」
「なあ、知ってるか、由比ヶ浜」
「え、な、なに？」
「お粥ってな、お米で出来てるんだぞ」
「知ってるよ！　それくらい知ってるよ！」
「あとな、柔らかいんだ。水分が多いってことな」

「分かるから！　それくらい分かるから！　あたしのことバカにしすぎだし！」
「ほら、馬鹿と書かずバカと書く辺りがもうばかっぽい」
「え、なに、急に訳分かんないこと言わないで……」
　混乱させてしまった。
「じゃあ、ご飯の炊き方は分かるよな？　流石に」
「バカにしないでよ！　……えっと……まずは調味料が……」
「え、え、え？」
　背筋がぞわっとした。なんだこれ、超怖い。
「由比ヶ浜、お前それ本気で言ってる？」
「え、なんかおかしかった……？」
「いや、いい……お前はそのままでいてくれ……」
　レリビーでも、レリゴーでも、何でも良いから。
　今何時って聞かれて、そうね大体ねって言うのでも、一大事って言うのでも良いから。
「え、ちょ、ちょっと、教えてよ！　気になるから！」
「……今度な」
「……う、うん……」
　……なんか。
　お粥の話一つで、話が妙な広がりを見せた。
　由比ヶ浜が、おバカだけどちゃんとツッコんでくれるという性質を持っているせいで、ついこんなやりとりをしたくなってしまう。二人きりでこんな馬鹿話をすることも今までそんなに無かったし。結構楽しいかも、これ。
　お粥ついでに、もう一つ話をしてみることにする。
「なあ、由比ヶ浜」
「なに？」
「肩たたき券ってあるだろ。よく子どもが母の日とか父の日にあげるやつ。１０枚綴りくらいで」
「あー、あるね。あたしも子どもの頃やったかも」
「だよな。俺はやってないけど」

「やってないんだ……」
「小町はほんと小さい時、超可愛かったんだけど、そん時に一回だけ親父に肩たたき券をあげたんだよ」
「へー、小町ちゃん良い子だなー。……ん、一回だけ？」
「そう、一回だけ」
「次からはやんなかったの？　なんで？」
「……親父が……１０枚綴りの肩たたき券をコピーして、合計２００枚にしやがった……」
「うわ……」
「最初はにこにこしながら親父の肩をたたいてた小町も、１２回目くらいで違和感を覚えて俺に相談してきてな。それで俺がこっそり調べたら、鉛筆で書いたはずの小町の字が消しゴムで消せない状態になってて。これコピーしたやつじゃんって分かったんだ」
「不正の発覚だ……」
「おお、よく知ってたな、そんな言葉。馬鹿なのに」
「誰がバカだっ!?」
　はい、ひと休憩終わり。
「それでそのことを小町に伝えたら、そりゃあもう怒りに怒ってな。「ろうきほういはんだー！」って、そりゃあもうぷりぷりと可愛く怒ったんだ」
「よくそんな言葉知ってたね……その、ろうき、ほう？　ってやつ」
　こいつ……頭の中で労基法が漢字変換されてねえ……。
「それから、小町はもう親父に肩たたき券どころか、何もあげなくなったって訳だ」
「自業自得だね……。……あ、そういえばさ」
「ん？」
「ヒッキー、小町ちゃんのこと可愛い可愛いって言い過ぎだよね。話の中にちょこちょこ挟んできてすごいキモかったよ」
「うっせえよ、乳牛……」
「誰がホルスタインだっ!?」
　ひどい罵り合いになった。

はい、ひと休憩終わり。
確認すると、由比ヶ浜は上半身裸である。再び胡坐をかいている。
なんの確認だろう、これ。
「ところで、なんで肩たたき券の話を急にしたの？」
「ああ、それな。肩たたき券があったら、肩もみ券もあって良いと思わないか？」
「え？　うーん……まあ、同じようなもんだし、良いんじゃない？」
「じゃあ、その流れで胸揉み券もあって良いと思わないか？」
「ヒッキー、変態だー！　ゆきのんに伝えなきゃ！」
「やめろ！　殺す気か！」
雪ノ下に電話しようとする由比ヶ浜を、羽交い絞めにして止める。
ひどいっていうかもう、酷い。
凄惨な現場だ。
悪ノリしたらえらい目に遭った。
しばらくじたばたしたものの、取り押さえ続けた結果電話をする気は無くなったようで、大人しくなった。
腕をぱっと放すと、再びベッドに二人とも腰かける。
「ヒッキー……それって、1枚で何回……その、揉めるとかって……決めてる？」
「おお？」
おお？
なに、まさか、乗ってくれるのん？　夢のようなんだけど。
や、本当に、夢の極み。
「うーん、そうだな……回数っていうよりは、時間かな。1枚で何分みたいな」
「ふーん……例えば、その、1枚で1分とか？」
「や、120分だな」
「2時間!?　長すぎるよ！　映画見終わっちゃう！」
「……あ、映画。良いな、それ」
「え……」
胸を腕で抱いて後ずさりした。お願い、引かないで！

「ヒッキー……なに、それ、一緒に映画見て、その間、ずっと……ってこと？」
「え」
おずおずと。
上目遣いをしながら、聞いてきた。
……んんん？
なんか、由比ヶ浜さん。
イジめ甲斐がありそうな気がしてきた。
……落ち着け、落ち着け、俺……。
「……そ、そうだな、ありだと……思う」
おどおどしちゃった。超ダサい。
「……ふーん……ひ、ヒッキーが、ほんとにしたいんなら……いい、よ？」
少し俯いて、俺をちらっと見ながら囁いた。
……うぐぉぉぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！
あぶねえ。
ぎりぎりで叫ぶのを止めることが出来た。
めっちゃ怪しまれてるけど。
でも、と。
俯いていた彼女はぽそりと言うと、顔を上げた。
にひっと笑っている。やな予感……。
「その券を発行するに当たっては、何か代わりにヒッキーもやらなきゃだよね？」
「……あ」
しまった。
母の日とか父の日に当たるものがない。これじゃあ、楽して胸揉み券を入手出来ないじゃないか！
別に引きこもりの日とか無いよね。八幡の日とか無いし。戸塚の日なら将来的に意地でも作ろうと思うけど。
「だから……その……」
急にもじもじし始めたかと思うと、俺の服の袖をきゅっと握った。

「いっぱい……遊びに行こ？」
少し困ったような笑顔で、照れくさそうに。
まるでお日様みたいなぽかぽかとした雰囲気を滲ませながら。
彼女が、由比ヶ浜が、はにかんだ。
うーん。
なんか、すんごくむずむずする。
去年の俺が今の俺を見たら、全力で爆破しにくるんじゃなかろうか。
いや、俺にそんな度胸は無いと分かってんだけどね。
「……おう」
目を逸らしながら彼女の頭をくしゃくしゃと撫でると、えへへと幸せそうに笑った。
続く。

（８）

１．

由比ヶ浜の身体を拭き終え、使い終えたタオルは彼女の許可を取って洗濯機に入れさせてもらった。

「……さて、どうするか……」

洗濯機に手を乗せて、この後の事をぼんやりと考える。

時間帯としてはまだそこまで遅くない。一人で過ごす分にはまだ余裕で起きている時間だ。

けれど、彼女の体調を考えれば早めに休むに越したことは無い。

……ここはさっさと、寝るとするか……。

頭をがしがしと掻きながら、彼女の部屋に向かった。

ドアを開けると、彼女はベッド際で足をぷらぷらとさせていた。うん、すごい馬鹿っぽい。

「由比ヶ浜、俺はリビングとかで寝ればいいか？　ソファでも使わせてもらえると助かるんだけど」

まあ、これが一番妥当な案だろう。絶対とは言わないまでも、それなりの自信を持って提案する。

しかし、そんな提案に対する彼女の返答はあまり予想していない――正確に言えば、言われたらどうしようかな、困るなと思っていたものだった。

「え、ヒッキー……この部屋で寝てくれないの？」

……くう、来やがった……！

見ると、彼女は女の子座りになって、困ったように眉をひそめている。

「い、いや、だって、その……なあ……」

我慢ならなくなる可能性が超高い。えぐいぞ同室は。

何とか別室にする言い訳を考えながら彼女をちらりと見ると、今にも泣き出しそうな顔をしている。

「……だめ……？」

「うぐ……」

自然と後ずさりをして、ドアにぶつかった。後ろ脇腹がドアノブにぶつかって変な声が出そうになった――後ろ脇腹ってどこだよ。背中だろ、背中。でも感覚的に後ろ脇腹って言いたい。超どうでもいいなこれ。

気まずさの解消の代償に泣かれるというのも後味が悪い、ものすごく悪い。

腕を組んでむむむと唸る。うむむむ……。

数瞬だけ悩み抜いて、顔を上げた。

「……しゃあねえな。……寝てる時に具合悪くなっても、ここならすぐ対応出来るしな」

言うと、彼女の顔がぱあっと明るくなる。

「やったー！　ありがとヒッキー！」

女の子座りのまま、ベッドの上で器用にぴょんぴょん跳ねている。

俺が同じことやったら足の色んなとこ千切れそうな動きすんなこいつ……。

そして彼女は、勢いそのままにベッドに寝そべり、掛布団の中に潜り込んだ。

さてさて、床に適当に寝転がるか――などと思っていると。

「何してんのヒッキー。……こっちだよ、こっち」

「……え」

見ると、顔を赤らめた彼女が、掛布団の手前側を開けてぽんぽんと叩いていた。

……まさかの添い寝希望……だと……？

「や、それはちょっと……」

「……うぅ……」

だあぁぁぁぁぁぁ！　泣き落としパターンやめろって！

効くんだから！　超効く！　死ぬから！

「いや、だから、な？　流石に一緒に寝たりしたら俺がその……」

なんとか逃れようとすると、彼女の目に目に見えて涙が溜まっていく。めにめに。

「……うう、うぇ……」

「うぐぉ……」
対処法が分からない事態に、呻き声が漏れた。
何、退行起こしてんの？　防衛機制なの？
……と言ってもまあ、対処法なんてそんな大それたものは必要無いんだろう。
「……わーかったよ。ほれ、泣くな」
近付いて行き、彼女の頭をそっと撫でる。
「……ヒッキー……」
俺を呼ぶと、彼女は幸せそうににこっと笑った。
俺が、まあ、その、一緒に寝てやれば、その、ねえ？　それで済む話です、し、ねえ？
心の声でどもるとかもう、底無しに気持ち悪いな俺……。
うん、八幡、頑張って我慢する。由比ヶ浜、襲わない。人間やっつける力欲しい。間違えた。
2.
これから寝るに当たり、歯磨きとトイレを済ませることにする。
歯ブラシ持って来てる訳ねえやーどうしよーとか思っていたら、雪ノ下が買ってきたものの中に何故か青い歯ブラシが入っていた。
え、なに、え、どういうことですか雪ノ下さん？　え、え、え？
千里眼でも持ってるの？　それとも才気煥発の極みを会得してるの？
背中がぶるりと震えた。
まあ、ありがたく使わせていただきました。かしこ。
「はい、ヒッキー……どうぞ」
準備を終えると、由比ヶ浜が再び掛布団の手前側を開いて俺を招き入れる。
ちなみにさっきの時点では彼女は上半身裸で、今は流石に新しく着直している。
さっきの状態でほいほいベッドインしたら、欲情する余り、峰不二子を前にしたルパンよろしくパンツ一丁になるところだった。もちろんその後パンツも脱いで襲っちゃう。……危ないところだった

……。
「ええっと……お邪魔、します……？」
「くすっ……はーい、どうぞ」
緊張して変な挨拶をしてしまったのに対して、彼女は包み込むように優しく笑った。うう、和む……。
そして、いざ布団に入って、互いに向き合うようにして寝てみると、一つのことが分かった。
今さっき。
包み込むという表現を、あくまで比喩として使ったけれど、今の状況は、状況こそは。
本当に、正に、彼女が、俺を包みこんでいる。
彼女は優しく微笑んだかと思うと、おでこ同士をこつんとぶつけた。
そして軽く口付けをしたかと思うとえへへと笑い、「んー」と嬉しそうに唸りながらおでこ同士をこすこすと擦り合わせ、俺の顔を胸元に引き寄せる。
……興奮はしてるけど、もちろんしてるけど。
それ以上に、なんかものすごく安らぐ。理由は分からないけれど。
自分が今まで体験してきた中で比較出来るものがまるで無い程に、ただただ安らぐ。
ぶっちゃけベッドに入る直前までは、もっと言えばほんの1～2分程前までは、絶対手を出しちゃうだろうなと思っていたのだけど。
彼女がうつらうつらとし始めて、やがてすうすうと穏やかな寝息を立てるまでの一連の流れを、気付けば慈愛顔で見ていた。
やっべ、何時間でも見てられそうなんだけど。
少しだけ頬をこしょこしょとくすぐると、「んむぅ……」と眉を少しだけ潜めて口を尖らせたのを見たときは、危うく死ぬところだった。死因は何になるんだろう、悶え？
そんな彼女の、由比ヶ浜の温もりに包まれて、気付けば俺も眠りに就いていた。
3．

「……ん」
目が覚め、周りを見渡す。
どこだここ？　左腕を捲って、『俺は比企谷八幡。１７歳。総武高生。』とか書いてあったらマジ俺忘却探偵。天井にペンキで『お前は今日から、比企谷八幡。ぼっちとして生きていく。』とか書いてあったらもう完璧。何がだよ。
部屋を見渡して、昨日の一連の流れを思い出す。ほっ、良かった、俺には今日以外の時間もあったんだ……。
「……ん？」
ふと、疑問に思った。
隣に居る筈の由比ヶ浜が居ない。
それに、寝ている身体の傾斜がなんだか違う。
しかも何だか後頭部が柔らかい。非常に柔らかい。
「あ、ヒッキー、起きたんだね。おはよ」
頭上から、温かい声がした。
「お、おう、おは……よ……」
ここで初めて、俺と彼女の体勢に気が付いた。
彼女はベッドの枕側の壁に背中を付けてだらりと座り、足をＶ字に開いて伸ばしている。
対する俺は彼女に背を向ける形で、ちょうど俺の頭が彼女の胸のところに来るような体勢で仰向けに寝そべっていた。
座椅子をある程度倒したような姿勢だった。彼女が背もたれの役割を果たしている。
……え、何この極楽椅子？
「えへへ……ごめんね？　先に目が覚めたんだけど、すっかり元気になってたからシャワー浴びてて。部屋に戻ってきてもまだヒッキーは寝てたから、ちょっとやってみたくなったんだ」
俺のおでこを愛おしむように撫でながら、彼女がたははと笑った。
「あ、いや、まあ、大丈夫だけど……」
勢い余って『ぜひ！』とか言いそうになっちゃった。
「そ、そっか、よかった……。じゃあ、もう少しだけ、このままでいい

？」
「お、おう……」
オットセイみたいなパッとしない返事をした。略しておっぱ……なんでもない。……黒歴史が増えるところだった。危ない危ない……。
それからしばらくの間、ずっと彼女におでこを撫でられていた。
うーん。
胸揉み券も良いけど、極楽椅子券も捨て難い……。
4.
しばらくうとうとして目を覚ますと、由比ヶ浜は変わらず撫でてくれていた。や、流石に恥ずかしくなってきた……。
恥ずかしくは思うものの気持ち良さに負けて、結局抵抗０で彼女に愛でられていると、ふと、彼女が手を止めた。
「今日さ、どっか遊びに行かない？　あたしも結構元気になったし」
「や、それはまだやめといた方が良いだろう。病み上がりだぞ？」
「うー、元気になったのに引きこもるのやだなあ……」
「しゃあねえだろそれは。ちょっと一回帰って、着替えついでに何か暇を潰せそうなの持ってきてやるぞ。んー、小町に電話して、何か用意しといてもらうか」
「え、小町ちゃんと電話するの？　じゃあスピーカーモードにしてよ！　あたしも喋りたい！」
急に元気になった。ほんと仲良いのね君たち……。
「わかったわかった」
この極楽から離れるのを少し、いやかなり惜しみながら、ベッドを降りて携帯を手に取った。
5.
「もしもし、俺だけ」
「小町ちゃーん！　やっはろー！」
「あ、結衣さんだー！　やっはろー！　具合はどうですかー？」
……俺を置いて行きやがったぞこいつら……。
楽しそうに会話を始める２人に何とか割り込んで、小町に事情を説

明する。
「つう訳だ。今から一旦戻るから、こいつが暇潰せそうなもの用意しといてくれるか」
　言うと、電話の向こうでむむむと唸る声がする。
「うーん……どうしよう……悪いかな……いやでも結衣さん結構元気っぽいし……」
　……。
　なんか、俺の頼みと関係無い考え事をしてるっぽい。
「もしもーし？　小町ちゃーん？　お兄ちゃんだよー？　お話聞いてくれてたかなー？」
「いやでもこのチャンスは……うんうん、やっぱりそうしよう」
　ＭＵ☆ＳＨＩ！
　妹の華麗なる兄スルー！　おっと目に涙が……いや、雨だよ。
　雨に降られている兄をこれまた華麗に無視して、小町が由比ヶ浜に声をかける。
「結衣さん」
「ほえ？　どうしたの小町ちゃん？」
　小町が急にきりっとした声で呼んだため、由比ヶ浜は素っ頓狂な声を出した。や、別に、この声よく聞くな。やっぱりお馬鹿なんだろう、こいつは。
「今日、今からうちに来ませんか！」
「ええ!?　え、い、良いの？」
「いや、おい、小町。こいつ病み上がりっつったろ？」
「今結衣さんの家には雪乃さんがもう居ないんでしょ？　ごみいちゃんだけの看病じゃ体調が却って悪化しちゃうよ」
　……ゆきのんパワーが無いと比企谷菌が繁殖するのん？
「だから、こっちに来てもらえれば、小町が結衣さんの暇を全力で潰しつつ、魂込めて看病しちゃいます！」
　電話の向こうで無い胸を張っているような気がする。
「いや、でもな、帰りをどうするんだって話」
「泊まっていけばいいじゃん」

「ほーん？」
なんだってー？
「今日はお父さんお母さん居ないでしょ？　お母さんが会社の何かで、お父さんは……まあ何でもいいや」
親父……強く生きて……！　そして俺と小町を養って……！
「だから、うちに泊まっていけば安心！」
「いや、でも……」
それでも反駁しようとしていると、隣でわざとらしい咳払いが聞こえてきた。
「けほっ、けほっ……あー、どうしよう、片道分くらいの体力はあるんだけどな……けほっ、けほっ……」
……。
咳払いの意味ねえだろ、馬鹿なのかこいつは？
由比ヶ浜を憐れんだ目で見ていると、小町が更に攻め立ててくる。
「さあ、お兄ちゃん、二人で来るの？　それとも二人ですぐさま来るの？　それとも二人で腕を組んですぐさま来るの？　さあ、どれ！」
……なんだこの妹……。
横を見ると、ペットショップのチワワのような目で由比ヶ浜が俺を見つめている。
「ヒッキー……」
やめろ、ウルウルした目で見るな！　お前今別に悲しくねえだろ！
いずれにせよ、この懇願の表情は俺に対する効果が高い。高すぎる。
うぐぐ……。
目の前の犬と電話口の猫に挟まれた。何だこれ。
これ以上ごねられても疲れるだけだと判断して、折れることにした。
「……分かったよ。でも、絶対無理すんなよ？」
言うと、生声と電話越しの声で揃って「やったー！」と言う声が部屋に響いた。

続く。

（９）

１．

小町との電話を終えて、俺と由比ヶ浜は支度を始める。

由比ヶ浜は自分が既にシャワーを済ませていたことから、俺にもシャワーを勧めてきたのだけれど、着替えは持ってきてないし、勢いで入ろうものなら何かしら洒落にならないＴｏＬＯＶＥり方をしそうだったので、自分ん家で済ませるからと言って遠慮しておいた。

あー、風呂入ってたら突然浴室がめっちゃ広くなって、そこに戸塚が気付かずに入ってきて広々とした湯船にはしゃいで泳いじゃって途中でばったり俺と目が合って戸塚の顔が真っ赤になるイベント発生しねえかなー。具体的すぎた。

支度とは言っても、俺はコートを着て荷物をまとめるくらいなのでさらりと済ませる。

自分の支度はなるべく早めに済ませて、由比ヶ浜が着替えられるように部屋の外に出た。

――別にいいのに……恥ずかしいけど。

俺がぱぱぱっと急いで支度をしていると、由比ヶ浜が俺に背を向けたまま、少し拗ねたような声でそんな言葉を呟いた。……やたら気恥ずかしくて、さりげなく曖昧な返事をして流してしまった。多分全然さりげなくなかったけど。ていうか後半に「恥ずかしいけど」って付けたりすんじゃねえよ。お互いただただ顔を真っ赤にして部屋に佇む地獄の着替えタイムになるぞ、分かってんのかこのメロンパンナちゃん（主に胸）が。

２．

由比ヶ浜の着替えが終わり、二人で玄関に向かって階段を降りる。

由比ヶ浜の髪はいつものお団子ヘアーではなく、下ろしたままだ。それが妙に大人っぽく見えて、彼女にばれない範囲で何度かチラ見した。……バレるかなあこういうのって……。

「……ん？」

靴を履こうとした時、由比ヶ浜が立ち止まってぽけっとしているの

に気付いた。
目を向けて何やってんだと顔で言うと、由比ヶ浜がはっと我に返って、目を見開いて手をぶんぶんと左右に振る。
「あ、ご、ごめん……」
なんかさ、と指で頬をぽりぽりと掻く。
妙に照れている様子から、何かすごい恥ずかしいことを言ってきそうな気配がする……。
「ヒッキーと二人で支度して家を出るのって……なんか、すごい良いなーって……」
手を合わせてもぞもぞと指を絡ませながら、頬をほんのり朱に染めて流し目で俺を見る。
「……」
……。
「なんで無言だっ!?」
全力でツッコまれた。
しまった。
つい。
これが呆然自失というやつか。
……予想以上の恥ずかしさだった……。
「……あ、や、すまん、そう、か、まあ、良いんじゃねえのかな……」
頭をがしがしと掻きながら、動揺を隠さんと全力で視線を泳がせる。
玄関の靴箱、壁にかけられた絵、由比ヶ浜の胸、階段、由比ヶ浜の胸、リビングから見える台所、胸、階段、胸、胸……。
由比ヶ浜が、腕を抱きながら身体の向きを変えた。
「ヒッキー、胸ばっか見すぎ……」
「うぐ……すまん」
すぐバレた。
「あと、あたしがお団子じゃないとそんなに変かな？　階段降りてくる前まですごいちらちら見てたよね？」
「うぐぉぉ……」

さっきのもバレてた。死にたい。
「あ、や、変ではないと思う、ぞよ……」
「誰なのそれ……」
もう。
動揺しすぎて、キャラがぶれぶれだ。
勢い余って「生きることは劇的だ！」とか言っちゃいそう。僕のことは親しみを込めて比企谷菌と呼びなさい……やっぱやめなさい……泣いちゃうから……。
だいたい、バリアー効かないってどんだけ強力なんだよ比企谷菌。強力すぎて、比企谷菌に端を発したバイオハザードが起きるまである。
俺に異常（アブノーマル）があったとしたら何が良いかなーいやむしろ俺の場合備わってんのは過負荷（マイナス）かなーとか考えていると、由比ヶ浜がふっと息を吐いた。
呆れるような目で俺を見ているが、湛える雰囲気は柔和そのものだ。
「もう……、ヒッキーはほんといつでもきょどっちゃうしいちいちキモいよね」
「うるせえよ……」
何を今さら入念に罵倒してんだこいつ、と忌々しげに視線を飛ばすと、由比ヶ浜がにぱっと笑った。
「……でも、ま、いっか。これくらい、慣れれば大丈夫だよね」
その言葉は、俺に向けたものなのか、それとも自分に向けて言ったものなのか。
恐らく両方含まれているのだろうとは思うけれど、今はそれをわざわざ聞くようなタイミングではない。
由比ヶ浜のひまわりみたいな笑顔を見習って、俺もにぱっと微笑む（卑屈に）。
「ああ、我慢だ我慢。俺もお前のバカさ加減にはすげー頑張って慣れてやるとするから」
言って、片眉を上げる（卑屈に）。

すると、由比ヶ浜が目をむいて、
「誰がバカだっ!?　しかもなんで偉そうなのさ!?　あとヒッキー、前の顔も今の顔もすごいキモいから！」
ツッコミついでに、必死で作り込んだ笑顔についてものすごい罵倒を受けた。や、まあ、そんな必死じゃなかったっつうか全く必死じゃなかったけど。やっぱどっちの笑顔もわざわざ括弧で「卑屈に」とか言わなきゃ良かったかな……変わんねえか。
由比ヶ浜の強烈なツッコミの直後、２人の間に少しばかりの沈黙が流れる。
「……ぷっ、くく……あはははっ」
今のやりとりも、それにより生じたであろう沈黙も、ほとほとばからしくなったのかどちらからでもなく自然と吹き出して笑った。
由比ヶ浜はからからと笑って、笑いが収まる頃には目にうっすらと涙を浮かべていた。
はー、と息を吐いてその目を拭い、由比ヶ浜がこちらにとてとてと近付いてくる。
「……どうした？」
目の前まで来た由比ヶ浜の髪の毛が目の前にちらつき、支度の際に付けたらしい香水のさりげない匂いがふわりと舞う。
俺の問いに答えず、由比ヶ浜がつと顔を向ける。
「……ん」
俺の二の腕に手を添えて、すっと目を閉じる。
何を求めているかは、すぐに分かった。
後は応えるだけ、そう、応えるだけ……。
……。
「……」
……。
「なんでっ!?」
乙女モードから一瞬でお笑いモードに切り替えてもらってしまった。申し訳ない。
「や、こんな恥ずかしいこと出来るかよ……なにこれ？　お出かけ前

の……的なやつ？　お前も出掛けんのに？」
　言うと、由比ヶ浜がもじもじとして目を泳がせた。
「そ、それはそうだけど……ほら、ヒッキーの家まで行くのにそれなりに時間がかかるでしょ？　だから……その、良い雰囲気でもうちょっとだけこういうことしておきたいなーって……だめ？」
　俺の二の腕を掴んだまま、由比ヶ浜がおねだりモード全開になる。
　……くうぅ……。
　雪ノ下はこんなおねだりを1年弱の間シャワーの如く浴び続けてきたのか……そりゃあ由比ヶ浜に対して甘くもなるわ……。
　だがしかし、俺は負けん。いくら可愛いおねだりをされても、お出かけ前のチューだなんて恥ずかしい真似は……。
「ヒッキー……」
　うぐ……いや、それでも、こんな恥ずかしい真似は……！
「……だめ？」
　うぐぅぅ……りょ、良心が、良心が痛むぅ……！　だがしかし、それでも……！
　苦悶に喘ぐ俺に対して、由比ヶ浜は畳み掛けるように、甘えるような表情で更に顔を近付ける。
「……あたし、ヒッキーと……き、キス、したいよ……」
「よし、しよう。今すぐしよう」
「急に心変わり!?」
　はい、落ちた。今俺の最終防衛ラインが突破されたよ。入り込んできたのが歩だったらもう金にランクアップして好き勝手暴れちゃうよ。
　こんなおねだりの波状攻撃を受けて無事なやつなんて、この世にいないぜぇ……。
「……そんでも恥ずかしいんだからな、さっと済ませるぞ」
「……うん、ヒッキー、ありがと」
「本当にさっと済ませるからな。いいな、絶対だぞ？　絶対さっと済ませろよ？」
「どっかで見たことあるやりとりだっ!?」

とまあ、小ボケを挟みつつ。
嬉しそうに微笑む由比ヶ浜を見て、どうしようもない程に幸せな気持ちになって、彼女のことがたまらなく愛おしくなる。
由比ヶ浜の肩に手を添えると、そっと目を閉じた。
3.
うーん。
家を出るだけのはずだったのに、こんなに気持ちがふわふわするとは思わなかった。全く足が地に着いてない感じがする。
色々とイベント起きすぎじゃない？　や、良いんだけど、良いんだけどね。どきどき疲れが半端ない……。
隣を見ると由比ヶ浜が、口付けの余韻からか幸せそうに口元を緩めて、えへへーと阿呆っぽく言っている。
そんな由比ヶ浜の頭をぽんぽんと撫で、その手を引いて玄関のドアを開けた。
小町のイジりがめんどそうだなぁ……。
続く。

（１０）

１．

二人で家を出て、駅に向かってとことこと歩き始める。

由比ヶ浜の取り留めのない話を聞きつつ、周りを見渡す。

すぐ右側のガードレールの向こうを通り過ぎる車の気配にそれとなく注意を向けながら、左手に感じる温もりを噛み締める。

ふわふわとした心地良い感覚が、身体を柔らかく包んでいた。

「……」

ふと。

人通りの無い路地に差し掛かった時に、由比ヶ浜が無言になったのに気付く。

振り向いて歩速を落とし、どうしたと顔で聞くと、由比ヶ浜がもじもじとしながらちらりと俺の顔を見た。

「……ん」

言って、俺の手を引いて足を止め、目を閉じる。

や、「ん」じゃねえよ。情報足りな過ぎるだろ。三浦の口下手な誘いに影響受け過ぎだっつの。

とは言ったものの、まあ。

やることは分かっている。

……にしても、ここでなのん？　さっきしたのって道中我慢する為じゃあなかったんですか？

周囲に目配せをして、間違っても人に見られないよう細心の注意を払う。

誰もいないのを確認すると、こほんと咳払いをして由比ヶ浜の肩に手を添える。

「……ん」

同じく超絶短い言葉、略して三浦語で返事をして、唇を重ねた。略でも何でもねえなこれ。

互いの唇を、ほんのわずかに接触させる。ただそれだけ。

そんな単純な行為で、恥ずかしさを覗けば難易度なんて無いに等し

い行為だというのに。
「……えへへ」
幸せそうに笑う由比ヶ浜を見て、不思議と心がぽかぽかになる。
数秒前までの恥ずかしさが、由比ヶ浜の温かみでとろりと溶け落ちた気がした。
や、ごめん、盛った。そんでもやっぱ恥ずかしいわ。超恥ずかしい。
2.
手を繋いだまま駅に着き、そこから電車に乗って降りるまでは流石に手は離していた。
由比ヶ浜は改札を通る時以外、俺の袖をずっと握ってたけど。
や、俺の袖握り過ぎでしょ。そんなに袖好きなの？　お前の前世はなに、袖なの？　袖だったの？　どんだけ善行積んで人間になったんだよ。すげえなお前の前世。袖なのに。
駅を出て俺の家に向かうと、今度は由比ヶ浜から手を繋いできた。
細い指がするりと絡んできて、妙にどきどきしてしまう。
「えへへ、また繋げた」
にぱっと笑う由比ヶ浜から、思わず目を逸らす。
……うーん。
幸せ全開モードの由比ヶ浜がまさか、こんなとてつもない破壊力を備えているとは思わなかった。ただの、前世が袖だったメロンパンナちゃん（主に胸）じゃなかった。俺のこいつに対する認識がもはや訳わかんねえな。
それにしても、何も話していない時でもにこにこと俺を見てるのやめてくれませんかねえ……恥ずかし過ぎて灰になっちゃう。俺と由比ヶ浜＝吸血鬼と太陽。ぎゃあぁぁぁ

こほんこほんと、再び咳払いをする。
「あれだ、世の中、胸の大きさを表す言葉って色々あるだろ」
「何があれなの……」
唐突すぎる上に阿呆極まりない話題に、思い切り呆れられてしまった。
しかし由比ヶ浜は会話を切るつもりはないらしく、小さく頷いて続きを促す。
「まあ大きい方でよく聞くのが巨乳だよな。小さいのなら微乳とかちっぱいとか」
「……なんかヒッキーの言い方が全体的にキモいよ」
ジト目を向けられた。こいつにこういう顔されるとすげえ凹むな……。
「うるせえ、気にすんな。で、大きい方は他に爆乳とか、スイカップとか、愛がいっぱいIカップとか、メロンパンナちゃんとか、色々あるな」
「え、え、え？　スイカップまでは聞いたことあるけど……後半、何言ってんの？」
由比ヶ浜の頭の上に物凄い勢いでハテナが浮かんでいる。特定の個人のキャッチフレーズと、俺のお前に対する勝手なイメージだからそりゃ訳分からんよね……。
「まあ、胸には何かとそれを表す言葉が付けられることが多いっていう話だ」
「ふーん……？　あ、じゃあ、その……あ、あたしは……？」
頬を赤らめて、上目遣いで見つめてくる。うーわ押し倒してえ。この欲望丸出しの感じはどう考えても路上で逆立ちしちゃう吸血鬼もどきにしか思えない。
うーん、と考えて、にこやかな笑顔（卑屈）を由比ヶ浜に向ける。
「お前はあれだ、バカップ」
「ひどすぎるでしょ!?」
由比ヶ浜がわーんと泣き声を上げた。だって、一番適切なフレーズだと思ったんだもん……。

「元気出せよ、きっと良い事あるから、な？　バカップ」
「うぅぅ……バカにすんな！」
頬をぷくっと膨らませて、眉を寄せる。
「はっはっは、照れるなよ」
調子に乗ってイジメていたら、由比ヶ浜が少し迷った表情を見せた後、俺をきっと睨み付けた。
「……もう、触らせてあげないよ？」
「んがっ！」
身体に衝撃が走った。電気が走った。雷が落ちた。
なんかもう、小町に「お兄ちゃんなんて嫌い！」と言われたときくらいショック。あれは死ぬかと思った……。
早々に状況を改善しなければいけない。
なので。
「ごめんなさい」
謝った。
即座に。
両手をぱんと音を立てて合わせて、深々と頭を下げる。
「もうバカップなんて馬鹿にする気満々で言いません。これからも貴方様の胸を触らせてくだもがっ」
言葉を遮るように由比ヶ浜が俺の口を手で押さえ、身体も無理矢理真っ直ぐに起こされた。
「しーっ！　しーっ！　ちょっと、いくら周りに誰もいないからって！　いつ人が来るかわかんないんだよ!?　バカ！」
言われてハッとする。しまった、ショックの余り周りが見えなくなっていた……。
「ああ、わりいわりい……。じゃあ今度からは、きちんと人目を気にしてお前に謝って胸を触るとするわ」
「なにそれ!?　ほんとに反省してんの!?」
と、まあ。
こいつが相手だと、どうもこういう会話をしがちになってしまう。ツッコミって大事ですね。

阿呆みたいな話でも道中の時間を潰すには程良かったようで、気が付けば自宅の前に辿り着いていた。
……ていうか、いつ人が来るのか分かんないのは、キスしたときも同じだったんじゃないの？
3．
「ただいまー」
「おかえりー」
俺の声に反応して、小町がとてとてと小走りでリビングから出てきた。なにこの子、超けなげ。うん、今日も小町は可愛いな。
「小町ちゃん、やっはろー！」
「結衣さん、やっはろー！　ようこそ我が家へー！」
キラッ☆とか言っちゃいそうな眩しい笑顔で小町が迎える。いかん、太陽が空に1つとこの空間内にもう2つ……。
小町は俺と由比ヶ浜がリビングに入るなり、越後屋よろしくとても悪い顔をして俺に近寄ってきた。
「ふふふ……昨日はお楽しみで？」
こいつ……どこでそんな言葉覚えたんだ……。
「別に。……それなりだよ」
しっしっと手で追っ払いながら、適当にぼかす。
すると、小町は目をむいて一瞬止まった。
「え、なに、その言い方だと余計に気になるんだけど……」
「やめろやめろ、追及するんじゃねえよ……」
どうかわしたものかと考えていると、隣で由比ヶ浜が所在なげにたははと笑っているのが目に入った。
小町も気付いたのか、俺と小町が申し訳なさそうに顔を見合わせる。
「あ、わりい由比ヶ浜。ほら小町、まずは由比ヶ浜を休ませねえと」
「そうだね、結衣さんごめんなさい！」
「あはは、良いよ良いよ。やっぱり仲良いねー2人は」
そんな話をしつつ、俺と由比ヶ浜がソファに座ると、小町はコーヒーを入れにキッチンに向かった。

4.
「お兄ちゃんと結衣さんって、2人きりのときどういう会話をするんですか？」
ソファに座り、3人でコーヒーを飲みながらのんびりのんびりのんのんびよりしていると、小町がふと疑問を口にした。
こういうのって、パッと説明出来ねえなぁ……何話してたっけ？
と思い、つと由比ヶ浜に視線を向ける。
俺の視線を受けて、由比ヶ浜があごに人差し指を当てて、んーと考える。
数秒考えたかと思うと、不意に何か思い付いた顔をした。
「あー……ヒッキーはあたしの胸ばっか見て、胸の話ばっかしてるかも」
「おまっ……！」
よりにもよって、一番恥ずかしいことを言いやがった。
しかも何がやばいって、それがただの事実ってことだ。
つまり、俺の胸好き具合がやばい。何がやばいってマジでやばい。
小町はもう予想通りというか予想を余裕で超えた軽蔑顔で俺を見ている。
「……バカ、ボケナス、八幡、おっぱい星人」
「最後、最後」
小学生みたいなことを言われた。
由比ヶ浜に目をやると、顔を真っ赤にして俯いている。
うぅ……なんだこの状況……。
「ちなみに、胸の話ってどんなことを話してたんですか？」
小町が表情をニュートラルに戻して、会話を膨らまし始める。顔の切り替え超はええなこいつ。章変えの術かよ。これなら体育会系変態少女に襲われても次の行で何も無かったことに出来るな。
「あ、えーっとね……」
由比ヶ浜はまだ顔を赤くしつつも、由比ヶ浜の家でした会話とここに来る途中でした会話についてぽつりぽつりと話し始めた。
5.

一通り聞いた小町が、目を細める。呆れたような、慈愛に満ちた顔のような、そんな顔だ。
「お兄ちゃん……結衣さん……その会話はもうバカップっていうかただのバカップルだよ……」
「うぐっ……」
俺と由比ヶ浜が同時にダメージを受けた。
小町はその話を聞いた段階で、俺と由比ヶ浜がどこまで行ったのかある程度の見当は付いたようで、俺と由比ヶ浜を交互に見やってふむふむと頷く。
腕を組んで天井を見上げてうんうん唸ったかと思うと、胸の前で手をぽんと合わせた。
「あ、小町、お昼の食材まだ買ってませんでした！　ちょっと1時間程買い物に行ってきます！　帰ってくる頃にはお兄ちゃんに連絡入れるので！　結衣さんはごゆっくり！　ではでは、行ってきまーす！」
「え、あ、おい……」
戸惑う俺と由比ヶ浜に構うことなく、小町は支度をちゃっちゃと終え、俺と由比ヶ浜にばちこーんとウインクをしたかと思うと、風の如く出掛けて行った。
「小町ちゃん……色々とすごいね」
前に乗り出していた身体を元の位置に戻して、由比ヶ浜がたははと笑った。
6.
小町が家を出てから10分程経った頃からだろうか。
由比ヶ浜が、ソファで俺の隣に座ったまま、妙にそわそわし始めた。
落ち着きなく俺をちらちら見て、かといって俺と目が合うとすぐに逸らしてしまう。
どうしたんだかと思いながらもぼへーっとしていると、不意に右肩に重みがかかる。
見れば、由比ヶ浜が寄りかかり、俺に体重を預けてきていた。
「……ね、ヒッキー」
熱っぽい視線を向けて、ゆっくりと目を閉じる。

「……ん」
これくらいなら、まあ、大丈夫。
さっきの場所に比べたら、よっぽど抵抗は少ない。
言葉少なに俺を求めた由比ヶ浜の唇に、そっと唇を重ねる。
唇同士の軽いキスをすると、由比ヶ浜の目がとろんとしたのが分かった。
更に甘えるようにすり寄ってきて、続きをねだる。
ま、まあ、これくらいなら、ね。まだ大丈夫、うん。
今度は、舌を軽く入れて……と思っていると、由比ヶ浜が思いの外情熱的に舌を絡めてきて、俺も思わず乗ってしまった。
気付けばしばらくの間、座ったままだったり、どちらかが上になったりしながら、ひたすらに互いの唇を貪り合った。
唇を離す頃には、由比ヶ浜の顔はすっかり上気していて、俺は完全に勃起していた。
「……あ」
それに気付いた由比ヶ浜が、小さく声を上げる。
そしてテントを張った俺の股間を興味深げに見つめると、指でつんつんと突いてきた。
「こらこら、やめろやめろ」
「わぁ……」
全然やめてくれない。なんか悪戯を止めない幼稚園児を相手にしてるみたい。
この状況、どうしたもんかな――そんな風に思っていると。
「ね、ヒッキー」
「ん？」
由比ヶ浜が、少し上ずった、やたらと色っぽい声で俺を呼んだ。
つんつん突いていただけの俺の竿を突然両手で包み込み、さわさわと指で弄り始める。
そして、さっきまでのひまわりみたいな笑顔とはまた違う、艶っぽい笑みを浮かべた。
「……ここで、ヒッキーの……してあげよっか？」

「……え？」

由比ヶ浜は俺の戸惑いを気にすることなく、俺の竿に顔を近付けて、すんすんと匂いを嗅ぐ。

その扇情的な光景に、俺の心臓は早鐘を打った。

続く。

（１１）

「ね、いいでしょ？　ヒッキーのこと……気持ち良く……したいな」
由比ヶ浜が俺の太腿に手を添えて、熱っぽい視線を向ける。
昨日から既に何度か食らっているメロンパンナちゃん（主に胸が）のおねだり攻撃だけれど、今受けているこの攻撃は一際強烈だった。
「うっ、くぁっ……こ、こら……っ」
鼻と鼻がくっつく程の距離で甘えた声を出されて、ズボン越しに俺の竿をこしこしと擦りあげてくる。
うーん。
内なる八幡「お・し・た・お・せ！　お・し・た・お・せ！」
って感じ。
しかし小町がいくら気遣ってると言えど、初めての行為を時間が限られた中でしかもリビングでとかもう背徳の香りしかしないしなー。それに由比ヶ浜にしてもらう分には時間的にも難易度的にも程良さそうだしなー。由比ヶ浜もノリノリだしなー。
よし、整理完了。
目の前まで顔を寄せている由比ヶ浜を見つめると、くりっと大きな瞳が見つめ返してきた。
これだけ淫猥な雰囲気を放っておきながら、その瞳は純粋そのものだ。
言葉になんら偽りも誇張も無いということがありありと伝わり、急に恥ずかしくなる。
それでもなんとか、由比ヶ浜の頬に手を添えて、僅かばかり口角を上げた。
「……よろしくお願いします」
「……ん。やった……」
視界の隅で由比ヶ浜が小さくガッツポーズをしているのを見て、内心死ぬ程悶えたのは内緒。
由比ヶ浜はにっこりと笑うと、俺の正面に回り込んでソファの上に膝立ちになり、そのまま俺にもう一度唇を重ねてきた。

「んっ……んふぅっ、んっ、んっ、んんん……っ」
互いに相手の肩に手を添えての、先程のものと比べれば少しさらりとした、それでも十分に濃厚な口付け。
互いの舌を味わうように舐り合い、交代で吸い合って、何度も互いの身体を味わう。
由比ヶ浜の顔を見ると、そろそろ慣れてきたのか、うっすらと目を開けてうっとりとした目でこちらを見つめていた。
……ああもう、可愛すぎるだろ。なんなんだよお前は……。
「……んむっ……!?」
そんなことを考えていると、由比ヶ浜が俺の股間に両手で触れてきた。
ズボン越しに触るのかと思ったら、その時間はほんのわずかしかなく、程なくしてジーンズに巻いているベルトを外し、いきり立った一物が原因で苦戦しつつも、何とかチャックを開け、パンツ越しにさわさわと撫で始めた。
「んっ、くぅっ、あっ、うぐっ……」
俺の手は由比ヶ浜の肩に添えているだけなので、この状況は圧倒的に俺の不利だ。不利ってなんだよ。
しかし、どうにも負けているようにしか思えず口付けをしながらも呻いている俺の顔を見て、由比ヶ浜がとても幸せそうに目を細めるのが見えて、釣られて俺まで穏やかで幸せな気持ちになった。……パンツ越しにすげえまさぐられてるけど。
やがて由比ヶ浜は俺のジーンズに手を掛けて脱がそうとしてきたのだけれど、座ったままだと脱ぎづらいので俺も手を添えて手伝って下ろすことにした。
ジーンズを下ろし終えた後由比ヶ浜はすぐにパンツにも手を掛け、こちらは比較的あっさり下ろされた。
どちらも足からすぽんと抜き取られると、下半身が完全に裸になった。
「……わぁっ……」
初めて見るであろう実物にたいそう驚いたようで、由比ヶ浜は唇を

離して口をぽかんと開けた。
「……ヒッキーのこれ、すごっ……おっきい。これが……あたしの中……わわわ……っ」
由比ヶ浜は肉棒を凝視すると、この後のことを考えたのか、急に頬を赤らめた。
「なんか今の感じ、すげえむっつりっぽいな」
からかうと、由比ヶ浜がむーっと頬を膨らませた。
「むっつりって言うなし！　もう……」
「あっ、うぉっ、ちょっ、おい……っ！」
俺にからかわれてムカッときたのか、由比ヶ浜は両手で俺の肉棒をまさぐり出した。
興奮して既に先走っていたせいか、それが潤滑油となり由比ヶ浜の細く長い指が愛撫する手助けをしてしまう。
「こう？　こうかな……こんな感じ？　ね、ね、どう？」
「あ、うあ、待て、それ、やば……くぅっ……」
一人遊びで慣れ親しんだ行為も、自分以外の人が、ましてこんなに可愛くて素敵な子がやってくれると、こうも快感が跳ね上がるものなのか。
由比ヶ浜の手つきはぎこちないものの、頬を紅潮させて興奮しながら、熱心に俺の気持ち良い所を探るその健気さが、あまりにも幸せで心地良くて、あっと言う間に限界に追い込まれた。
「由比ヶ浜……」
快感に耐え兼ねて、俺は由比ヶ浜のたわわな胸に両手を伸ばした。
「あっ……あん、ヒッキー、やぁっ……あっ、あんっ……」
肉棒を責められている為俺の愛撫が甘くなっているのか、或いは俺を責めていることで自身に対する快感が紛れているのか、あるいはその両方なのかは分からないが、由比ヶ浜は俺の必死の抵抗も心地良いマッサージ程度にしか受け止めていないように見えた。
しかしそれでも、俺とて気を紛らわしていないとあっと言う間に果ててしまうのは目に見えている。この時間はもっとたっぷり味わいたい。

だから、揉み続ける。
もみもみ。
「あっ、あんっ、もう、あっ、ふあっ……」
もみもみ。
「ちょっと、ヒッキー……あんっ、いい加減、に……」
もみもみ。
「あぅっ、んんんっ、も、もう……っ」
もみもみ。
「こらーーーーっ！」
怒られた。
「あたしがしてあげるって言ってるでしょ！　……もう……」
ぷんすかと、怖くはないがそれとなく母親のような雰囲気の怒り方をしたかと思うと、由比ヶ浜が俺の手を見つめた。ちなみにまだ指は巨大なマシュマロの中にうずもれてます。
「ヒッキー、どっちかの手をあたしの前に出して」
「？　こう……か？」
由比ヶ浜からの突然の謎の指示に首を捻りつつも、彼女の口の前に手を差し出す。
すると。
「……あむっ」
「……っ!?」
突如として、由比ヶ浜が俺の右手中指をぱくっと咥え込んだ。
「んんっ、じゅるるる……んちゅるっ、れるっ、はむっ、んんっ、ちゅるっ、ぷちゅ、ぢゅるるる……」
「～～～～～～……っ！」
きゃーっ！　きゃーっ！　ぎゃーっ！
由比ヶ浜は俺の中指を、まるで舌を絡め合っている時、いや、その時以上に好き放題に舐り回している。
指の腹を舌で何往復もなぞられて、その度に腰がびくんびくんと跳ねる。
……指って、こんなに気持ち良いの……!?

まるで中指がどこかへ行ってしまったかのような感覚に陥って震える俺をよそに、由比ヶ浜は手による肉棒への愛撫を再開する。
こんなの、耐えられる訳ねえだろ……っ！
そう思い、左手で何とかこの事態を打開・もしくはもうちょっと刺激を柔らかく出来ないかと考えていると、由比ヶ浜が指から口を話し、更なる追い打ちをかけてきた。
「左手も出して。両手の指舐めたげる」
「……はい……」
もう、抵抗しようがないじゃないですか。
どうやると良いものかと考えて、最終的に手の甲を合わせる形で由比ヶ浜の前に差し出すと、両手中指を2本まとめて咥えられた。
「うぐぁ……っ！」
快感が2倍、いや、それ以上にも思える。
手の甲を合わせて、親指を下にした状態で由比ヶ浜に咥えられたことで、まるで拘束されているかのように見える。そのことに気付いて、余計に身体が熱くなった。
咥える角度を自由に変え、両中指の腹を丹念に舐め回される。
これに加えて、肉棒をしごく手の動きがより激しくなり、上から聞こえるくちゅくちゅという水音と、下から聞こえるぐちゅぐちゅという水音が同時に聞こえてきて、頭がおかしくなりそうだ。
「ゆ、由比ヶ浜、これ、もう……！　……へ？」
限界を訴えると、由比ヶ浜が突然口と手の動きを止めた。
不意の安息にきょとんとしていると、由比ヶ浜が立ち上がってソファから降りる。
「ど、どうしたんだ……？」
不安げに聞くと、由比ヶ浜がにひっと笑った。やな予感がする……。
「……」
由比ヶ浜は再びソファに上がると、今度は俺と背もたれの間に身体を滑り込み、俺の背中に柔らかな胸を押し当てる体勢になった。
「え、な、なに？　なにすんの？」

更に増した不安により、上ずった声で背後の由比ヶ浜に声をかける。
「んー？　……えへへ、せっかくだから……胸をいじめられた時の、お返し」
「え……うぐぁぁぁぁぁ――――――っ!?」
由比ヶ浜は悪戯っぽく耳元で囁いたかと思うと、勃起したままの肉棒を背後から両手で掴み、先程までに比べて一層強くしごき始めた。
右手で竿から亀頭にかけてこすり上げ、左手は玉をくにくにと触っている。
「待て待て待て待て……待ってくれ……」
止めようにも、あまりの快感に力が入らない。
「えへへ……さっきので、ヒッキーが気持ち良いって思うとことか、どれくらい強くすれば良いかとか、結構分かったと思うんだ。だから……いっぱい気持ち良くしたげる」
「……っ！」
なんでそんな学習能力がやたら高いんだよ！　天然スケベメロンめぇ……！
このままでは正面のフローリングにありったけぶちまけてしまう。
なんとか抵抗しようと、必死で力を込めて由比ヶ浜の右手の手首を掴むと、手首から先だけでにちゃにちゃと音を立てながらしごかれる。
かと言って手首から先を掴むと、今度は腕全体を動かすことでしごかれる。
もはや、逃げ場が無かった。
「あっ……あがっ……」
そうこうしている内に、もう、限界が近い。
抵抗を止めて、ぶるぶると震えながら身体を海老のように屈めると、興奮で上ずった由比ヶ浜の声が耳元で聞こえた。
「ヒッキー、出る？　出る？　出ちゃう？　いいよ、いっぱい出して？　ね、ね、ね……っ」
囁いた直後、由比ヶ浜のしごき上げる速度が更に増す。

数秒と持たないうちに、身体の奥底から強烈な勢いで込み上げてくるものを感じる。
「うぐぁぁぁぁぁぁぁ……っ！」
出る直前、長い唸り声を上げた。
そして、次の瞬間。
「――――――――っ」
どびゅるっ、ごぶっ、ごぶごぶっ、どぶっ、びゅるるっ、びゅるるっ、びゅるっ、びゅるるっ……。
今まで見たことが無い量の精液が、今まで見た事の無い距離を、猛然とした勢いで飛んだ。
視界が白むのを感じながら、呆然と正面を見渡すと、自分が解き放ったものの軌道がはっきりと見てとれた。
……。
……疲れた……。
「わぁ……すごい飛んだね。よしよし、頑張った、頑張った……」
「恥ずかしいからやめてくれ……」
由比ヶ浜は感心の声を上げると、頭を撫でようとしたものの手は使えないと判断したのか、俺の肩にあごを乗せ、頬と頬をくっつけてすりすりしてきた。あったか恥ずかしい……。
そして、ほいっ、と小さく声を上げると、俺の背中から離れて、近くにあったティッシュで俺の竿を拭き取り始めた。
「……」
何やら、じーっと竿を凝視している。
「……どうした？」
射精の余韻が残っているため、ぼけっとした口調で尋ねると、由比ヶ浜がむうと唸った。
「んー、最初は口とか胸でしようと思ってたんだけど、勢いでつい、手でやっちゃった……。今からもう1回する元気ある？」
「や、流石にすぐには……。なんか魂抜き取られた気分だし……」
瀕死の状態で答えると、由比ヶ浜がゆっくりと頷いた。
「……そか、そうだよね」

じゃあ、と言いながら、ソファに膝立ちになり、俺の首に手を回す。
「……また、後でしたげるね」
「……ぜひ」
弱々しく答えると、由比ヶ浜はにこりと笑い、軽く唇を重ねてきた。
……早く、床拭かないとなんだけど……。
うん、絶対匂いってか臭いで小町にバレるな。部屋から消臭スプレー持ってこよう……。

続く。

（１２）

由比ヶ浜との一戦を終えて、後片付けを始める。一戦などという言い方はしたけれど、ゴングが鳴った直後から一方的にタコ殴りにされて、マグレで繰り出した弱々しいパンチが一撃当たって相手を更に激昂させてしまい見るも無残な敗北をした感じです。

「……」

黙々と、カーペットにぶちまけられた俺のアレをティッシュで拭きとる。

いちいち水を使うのも面倒なので、消臭スプレーの水気を利用することで、消臭兼拭き掃除をしていたら、由比ヶ浜がしゃがみ込んで俺の掃除する様子を興味深そうに見ていた。

「ほえー……」

なんだよクジラかよ。潮吹いちゃうの？　……最低だな、俺。

視線が気になりどうにも集中出来ない。ちらりと見やって何用だと目で尋ねると、由比ヶ浜が首をくりっと傾げた。

「いつもそうやって掃除してるの？」

「うぐ……っ」

こ、こいつ……。自分がどんだけ恥ずかしいこと聞いてんのか、分かってねえのかよ。

由比ヶ浜の目は純粋そのもので、自分の発言の恥ずかしさにまるで気付いていない。

このおバカメロンめ……。

どう答えたものかと思案していると、ある場所……というか部位に目が行った。

それは体育祭の準備での一幕をふと思い出す光景だった。

正確には言えば、あの時はぎりセーフだったのが今回は余裕でアウト！　みたいな感じ。

「……見えてんぞ」

顔を逸らしながら言うと、由比ヶ浜は再びほえ？　とおバカっぽいリアクションをして、俺の発言の意味を探る。

そして何の事を言っていたのか気付いたのか、
「……あ」
小さい声で呟くと、しゃがんだままで、両手をお尻から回して恥ずかしい場所を隠したのが視界の端で見えた。
「……見ないでよ」
由比ヶ浜の顔を見ると、頬を膨らませて、顔を赤らめながら俺を見ている。その表情がなんとも可愛らしい。
見てねえし！　とか小学生みたいな事を言おうかと一瞬思ったのだけれど、指摘したのは俺でしたね☆
「……見えたものはしょうがねえだろ」
首をぐいと逸らしたまま答えると、由比ヶ浜はうーんと唸った後俯いて、しばらくもじもじとしたと思ったら、そろりと顔を上げた。
「……見たい？」
「うん見たい。超見たい」
「早いな⁉」
由比ヶ浜の躊躇した遅れを取り戻すかの如き音速の返しをしてしまった。
や、だって、ねえ。見たいですやんか！
「そ、そか、男の子って、そういうの興味あるんだもんね……」
「ああ、すげえ興味あるぞ。お前の牛とか」
「牛飼ってるみたいになってる⁉」
うーん。
どうにも。
ガハマさん相手だと、ツッコミ欲しさにとんとんとボケてしまう。
俺の牛発言で再び頬を膨らませる由比ヶ浜を見て、ふっと頬を緩める。
……こいつ、ほんとしょっちゅう頬を膨らませるよな。フグかよ。
……牛兼フグって、すげえなこいつ。
ていうかフグにさせてる原因は軒並み俺だった。やべえ、責任を持って食べないと……。
極めて勝手な妄想に心躍らせていると、由比ヶ浜が上目遣いでこち

らに視線を向けた。
「……ほんとに、見たい？」
「……見たい」
真剣な表情を見て茶化すことなど出来ないと思い、真摯に答えた。
や。
真摯な変態になってるな、俺。
まあいいか。
由比ヶ浜は俺の返事を聞いて、目をきょろきょろとさせたかと思うと、やがて頬を真っ赤にしながら、俺に視線を向けた。
「……」
ふと、由比ヶ浜の身体に視線を向ける。
スカートから見えている、むっちりとした太腿。
別に太っている訳ではない。むしろ身体はよく締まっているように見える。
ただ、部分部分が女性らしいにも程がある、艶めかしい肉付きをしているのだ。
そんな色っぽさを放つ足の根本、女性の大事な部分への期待が、どんどんと高まっていく。
「……じゃあ、はい」
か細い声で呟くと、大事な部分が見えないようにしていた手をそっと外す。
「……う……お……」
言葉を失う。
見えたのは、真っ白なショーツだった。
汗でなのか、それとも他の要因に依るものなのか、うっすらと湿っているように見える。
足を寄せていることによって強調される恥丘の形に、思わず目を奪われた。
「……あ、あんまり、まじまじ見ないで……恥ずかしい、から……」
顔を背けて、耳まで真っ赤にしながら、由比ヶ浜がこちらを見やる。
その目がなんとも色っぽくて、益々興奮が高まってしまう。

由比ヶ浜の手を見ると、所在無げに膝の上に置かれていた。
「や、もっと見たい。もっとこう……エロテロリストみたいに……」
これなら直接的な表現も避けられると思って言ってみたところ、由比ヶ浜がはてと首を傾げた。
「え、エロテロ……なに？」
あ、あっれー？　おっかしいなー、一時グラビア界を席巻したM字開脚のあの方を知らないのかなー？　これがジェネレーションギャップか……。……俺と由比ヶ浜はタメだった。男女差ですかね。
「いや、分からんならそのままで良い。全力で見るから」
「そんなに!?　……うー……」
由比ヶ浜は恥ずかしそうにぶつぶつ言いながらも、何だかんだで今の体勢を維持してくれている。
しゃがんでショーツをスカートから見せる女の子（牛）と。
膝立ちで、手を膝に置いてそれを凝視するぼっち（妹が可愛い）。
字面で見ると、ただの悪夢みたいな状態だった。
「……」
「……」
互いに無言。
俺はショーツを凝視して、由比ヶ浜はしきりに目を泳がせているのが視界に映る。
「あまり動揺するなよ。焦らなくてもショーツは逃げないから大丈夫だ」
「それ誰に何の為に言ってんの!?」
うん。
錯乱しちゃった。
ごめんねメロンパンナちゃん。
心の中でテヘペロ☆としていると、由比ヶ浜の視線がふと下に移った。
「……あ」
微かに囁いた声が聞こえて、由比ヶ浜の視線を追う。
……ガン勃ちしてらっしゃる☆

緩いズボンに替えたのが災いしたと言えば良いのか、俺の股間は完全にテント状態になっていて、流石にすぐには……とか言ってたついさっきの俺をぶん殴りたくなった。男って単純だね！

「……あ、あたしの見て、そう、なっちゃったのか……な……？」

由比ヶ浜が髪をくしくしと撫でながら、照れくさそうに笑う。くっそ、可愛いなこいつ……。

「ああ、ま、そうだな……」

目をリビング中に不自然に泳がせながら答えると、由比ヶ浜が急に姿勢を解いて、四つん這いで迫ってきた。目がすんごいきらきらしてる。

「ね、ね、ね。……口で、したげよっか？」

「え、や、その……」

勢いに押されて後ずさると、由比ヶ浜が更に距離を詰めて来て、俺のズボンに手を掛けた。

「ちょ、おい……っ」

抵抗の言葉も虚しく、ホルスタインメロンパンナちゃん、略してホルスタパンナちゃんの必殺技が繰り出される。なんかジェロムレバンナみたいになった。

「……だめ？」

「……っ」

だから上目遣いやめろっつうの！　何でもその感じで頼めば通ると思ってんのか！　通るよ！　ああ、もう、余裕で通るよ！

「……お好きにどうぞ」

煮え切らない肯定の返事をすると、由比ヶ浜は一瞬不満げな顔をしたが、すぐに切り替えてにこっと微笑むと、俺のズボンをずるりと下ろした。

×　×　×

「うっわ……すごい……がちがちだぁ……」

俺の肉棒を見て、由比ヶ浜が興奮した声を出す。俺もびっくりだよ。さっきあんだけ出したのに。どんだけパンチラに弱いんだ、俺。

由比ヶ浜は亀頭をぴとぴとと触り、竿全体を愛おしそうに撫で回

し、下からなぞるように匂いを嗅ぐ。や、こいつほんと犬みてえだな……。

しかしこういうじっくりとした行為が、これからしてもらう行為への期待をどうしようも無い程に高める。

「それじゃ……いただきます」

わくわくが抑えきれない表情で由比ヶ浜が手短に挨拶すると、竿の根元に手を添えて、口をくぱっと開けた。

「……っ」

口の奥に見えていた綺麗なピンク色をした舌がてろりと出てきて、由比ヶ浜の目もとろんとしたものになる。

その扇情的な光景に、思わず息を呑んだ。

早く、早く、早く……！　と待ち焦がれていると、不意にとたとたと聞き慣れた足音がした。

「ただいま―！　お兄ちゃん、結衣さん、食材買ってきました……よ……」

「え……」

「あれ……」

ザ・ワールド。なるほどの方ではない。

もうしばらくお待ちください。只今テレビ画面には花畑の映像が出ております。

もうしばらくお待ちください。

もうしばら――。

「えええええええええええっ!?」

小町の盛大な悲鳴が木霊した。

大声を上げて固まる小町を見て、ようやく声を絞り出す。

「こ、小町、なんでお前、メールは……あ」

１０分程前、一戦終えて手を洗ったタイミングで、丁度良く小町からもう帰っていいかと確認するメールが届いていて、あと１０分くらい待ってくれれば大丈夫と送ったんだった……。

小町からすれば、例え俺たちが何をしていても、小町が帰る頃には綺麗に片付けを終えて何事も無かったかのように振る舞っていて、そ

れを後で追及するのを楽しみにしていたんだろう。何その楽しみ鬼畜すぎる。
「はわわ、えっと、小町ちゃん、これは、その……」
由比ヶ浜は完全に混乱している。俺の竿を右手でがっちり掴んだままですけど……。
むずむずするなあ。
うぐっ、パニくってるからって手をこにょこにょと動かすな……！
「あー……その、なんだ、小町、これにはその、訳が――」
「お兄ちゃん、結衣さん正座」
「え、あの小町」
「いいから、正座」
「あ、その、小町ちゃん」
「結衣さんもです」
……。
有無を言わさぬ圧力。
「はい……」
２人揃って力なく返事をすると、取り敢えず俺はパンツとズボンを上げた。
続く。

（13）

現状整理。

俺と由比ヶ浜が、小町に正座させられている。小町は腕を組んでがっつり仁王立ち。

おうふ、無駄に迫力がありますね……。

「お兄ちゃん、余計なこと考えてない？」

「なんでさらりと兄の心が読めるんだお前は……」

「お兄ちゃんは自分が思っている以上に表情が分かりやすいことを認識した方が良いよ。思ってるよりキモい顔になってることが多いんだから」

「え、あれ、そうなの、え、ほんとに？」

叱るついでの罵倒って感じが拭えないんだけど。マジで廊下歩いてるだけで流れ弾食らった感がある。

小町の罵詈雑言で心がべこべこになっていると、由比ヶ浜が気まずそうに、それはそれは気まずそうに顔を上げた。や、まあ、そりゃあ、俺のを咥えようとしてたらそれを妹に目撃されたとか、ショッキングにも程があるもんねえ……。

……それを言ったら、俺はもはや現物を見せてんだよな、実の妹に……。何それエグい。

「こ、小町ちゃん、ごめんね……？　変なとこ見せちゃって」

そろりと言うと、小町の表情が一変して明るいものになった。え、あれ？

「あー、良いんですよー結衣さん！　勢いで結衣さんにまで正座させちゃいました、ごめんなさい！　取り敢えず楽にしてください！」

「え？　あ、う、うん……」

小町の急な切り替えに由比ヶ浜が戸惑う。そりゃそうだよね……。

じゃあ、俺も――と思ったら。

「お兄ちゃんはそのまま」

おうふ。

「はい……」

解放されたのは由比ヶ浜だけだった。俺は依然人質状態。や、この言い方もおかしいんだけどね。
「元々は2人のイチャイチャを助長する為に家を出た訳ですが……それでも、もしあられもない姿になっていたら流石にそれを目撃するのは気まずすぎると思ったから、お兄ちゃんに連絡して確認を取っていたのに……全くもう！　お兄ちゃんのバカ！　変態！　色情魔！　思いの外巨根！」
「最後のはマジでやばくないか!?」
全力でツッコんだ。
「キョコン……」
由比ヶ浜がきょとんとした顔で首を傾げている。明らかにこの子の脳内で漢字変換されていない。良かった、ぴんと来てなくて……。
「あー、結衣さん、キョコンというのは漢字で『巨根』と書きましてー……」
「おい馬鹿やめろ小町。なんか変な感じになっちゃうだろうが」
なんか小町の方が耳年増の感があるなあ……。
由比ヶ浜はまだぽへーっとしてる。くっそ、なんか妙に恥ずかしい……。
まあ。
普通、兄のガン勃ちしたものを見たら、そんなのトラウマにしかならないのだろうけれど。
その辺をユーモア交じりで受け流す辺りに、小町の寛容さが伺える。素晴らしいと思います、僕の妹。
小町ならお世辞も言わないだろうから、巨根扱いされたのは嬉しくもある。何言ってんだろう俺。
「キョコン……」
「由比ヶ浜、それ何度も繰り返し呟くような単語じゃねえぞ、やめとけ」
この子、阿呆すぎますやんか……。
×　×　×
小町が（俺に）説教、というより今後の振る舞い方の指導をしてい

る間、由比ヶ浜は女の子座りで、俺は正座のままだった。俺そろそろ足が痺れるを通り越して腐りそうなんですけど……。法事かよ。
「――と、言う訳で」
足の痺れとの闘いに全精力を費やしていると、小町のまとめにかかるセリフが聞こえた。おお、やっと地獄から解放される……。
「小町へのお詫びとして、２人がいちゃついている所を見せてください！」
「――はい？」
２人同時に。
素っ頓狂な声を出した。
「……えーと、小町ちゃん、何言ってらっしゃるの？」
「はいそこ、お兄ちゃん。微妙に腰を浮かせて楽しようとしない」
「うぐおお……はい……」
マジで容赦ねえ。
「別にさっきみたいなエグいのを見たいって訳じゃないよ。例えばハグとか、き、キスとか、……き、キスとか、キスとかで良いから！」
「……」
……。
……こいつ、バカじゃねえのか？
「小町、お前、それは流石に――」
俺はもちろん、由比ヶ浜もしんどいだろう――と言いかけたところで。
「わ、分かったよ、小町ちゃん！」
「え」
隣のゆいがはま@女の子座りが、胸の前で小さくガッツポーズを作った。なにそれ可愛いなお前。
……や。ていうか。
「おい、由比ヶ浜は……ま……!?」
俺が言葉を言い終える間も無く。
由比ヶ浜が四つん這いになって、顔を俺にずいと寄せた。
「小町ちゃんにお詫びはしなきゃだし、これで済むなら、ね、ね、ね？」

「いやいやいやいや」
顔が近い近い近いまた良い匂いして変な気持ちになる！
由比ヶ浜の肩を掴んで離そうとすると。
「――あ」
その反動でよろけ、足が痺れに痺れていたため踏ん張りが効かず、仰向けにこてんと倒れてしまった。
「あ、大丈夫……？」
由比ヶ浜が俺を心配しながら、俺の身体に重なるような体勢で寄ってくる。おい、その間合いの詰め方おかしいだろ！　事態が悪化してるぞ！
小町につと目をやると、両手で顔を覆い、指の隙間からばっちり覗いて「きゃー！　はちゆいきゃー！」とか言ってる。あれ、このテンション、どこかで見た覚えが……ぐ腐腐腐腐……。
頭の中がタイタニック間違えた大パニック状態になっていると（確かにタイタニックは大パニックだったろうけれど）、由比ヶ浜が顔を近付けて、鼻と鼻が触れ合う程に接近した。
そして困ったような笑みを浮かべて、小首を傾げると、
「……ね、だめ？」
とどめの一撃を放ってきた。
「……っ」
……だーーーーーっ！　なんだよこのメロンパンナさん！　キスしたいだけなんちゃいますのん!?　千葉県民とは思えない喋り方になっちゃった！
ていうかなんだよ可愛すぎるだろ！　目を潤ませるんじゃねえよ！　「だめ？」とか聞いておきながら、もう吐息がかかるくらい唇が近付いてるぞ！　これ男だったら本番を迫って「ね、先っぽだけだから！　先っぽだかだから！」とか言ってる状態だぞ！　この例えはなんか色々アレだぞ！
……ふう。別に賢者モードではないけれど、落ち着いた。
「……しゃーねえなあ」
ぽそりと言うと、由比ヶ浜の表情がほわんと明るくなる。

「……やった」
嬉しそうに呟いて、由比ヶ浜がゆっくりと目を閉じた。
×　×　×
由比ヶ浜は俺と唇を重ねると、その豊満な肉体を重ねてきた。心地良い重みと圧迫感が身体に掛けられ、たぷんっという胸の柔らかな感触が脳髄を痺れさせる。
「んむっ、ちゅるっ、ぴちゃぴちゃ、ちゅう、ちゅうちゅう、ちゅるる、あむっ、じゅるるっ……」
俺の耳を押さえて、愛おしそうに俺の口蓋、歯列の裏表、頬の内側を舐めて、舌を絡めてくる。
「じゅるっ、ぴちゃぴちゃぴちゃ……ちゅぴ、ちゅる、ちゅる……んはっ、ヒッキー、ヒッキー、ヒッキー……んん……っ、んぐっ、んぐっ……」
時折唇を離しては俺を呼び、おでこを気持ちよさそうにこすり付け、味わう様に俺の唇をついばみ、なぞる。
「……あっ、ふああっ、んふぅっ……」
俺は吸い寄せられるように由比ヶ浜の尻に手を伸ばし、胸同様の柔らかな奥行きを思う存分貪っていた。
どうも、由比ヶ浜とのこういった肉体的接触は、半端じゃない多幸感が伴うようだ。
何ならあと数時間はこうしていたいまである。
……あれ、なんでこんな体勢になってるんだっけ？
……。
……あ。
今思い出した！　すぐ横に小町居るじゃん！　何してんの俺ら!?
きゃーっ！　きゃーっ！　ぎゃーっ！
慌てて、由比ヶ浜の肩にタップする。
「ん……っ？　……んっ、んっ、ちゅるっ、ぴちゃっ……」
いやいやいや気付いて認識して目を覚まして。俺のタップを一瞬だけ疑問に感じたもののすぐに切り替えてまた濃厚なキスを始めないで！

「……んんっ……ぶはっ！　おい、由比ヶ浜むおっ、ぷはっ、こら、横見ろって……んむっ、小町が居るんちゅるっ……ってこらー！」
なんか。
いつかの仕返しをされたような感じだった。
由比ヶ浜はそんな意識はさらさら無かったようで、小町の名前を出したことでようやくはっと我に返ったようだった。
ぴたり、と。由比ヶ浜の動きが止まり、見る見る顔が真っ赤になる。
「……ぷはっ、そ、そうだ、あたし何やって――っ!?　こ、小町ちゃん、ごめん、あたした……ち……？」
「……え……」
ようやく冷静になって、横にいる小町に目をやると。
「はわわわ……お兄ちゃんと結衣さんが……こんな……はわわわ……」
「……」
なんだろう、マンガで、温泉入ってのぼせちゃった人みたいになってる。
両手で顔を覆って指の隙間から覗く体勢は変えぬまま、顔を真っ赤にして目をぐるぐると回して、仰向けでこてんと倒れていた。
「……」
……うん、まあ。
幸せそうな顔で気を失ってるようなので、良しとしよう。全然良くないけど。ていうかどうやって気を失ったんだ……心配よりも呆れが先立つ。
「……な、なんかごめんなさいだね……」
俺の上に乗ったまま、上半身を起こした状態で、由比ヶ浜がたははと気まずそうに笑って頬を掻く。
全くだよこの発情期の雌め――なんて詰りながら、お返しに絶頂するまで揉んでやろうかと思ったけれど。
「あふあっ!?　え、やっ……あんっ！　……え、あれ？」
軽く揉んだだけで留めておいた。服の上からでも、キスで高まっていたこともあるのか激しく喘いだ。あぶねえ、反応が色っぽすぎて押

し倒す所だった……。
俺としては欲求を何とか抑えたつもりだったけれど。
「……むー……」
由比ヶ浜が不満げに口を尖らせる。
「……もっと、触って？」
「え……」
あかん。
この子のスイッチ入れてもうた。
「ほら……もっと……」
完全に雌の顔になった由比ヶ浜が、俺の手を掴んで自分の胸へと引き寄せる。
「お、おい、流石にこれ以上は……」
「だーめ。ヒッキーから触ったんだから、ちゃんと責に……ん」
由比ヶ浜の顔が、不意に固まった。
「え、どうし……あ」
何事かと横を見ると、小町が起き上がっていた。
しかし、俺たちの犯行未遂現場（？）を見るなり、ぶつぶつと呟くように、
「うーん……結衣さんが……淫乱だよぉ……」
なんかえげつない捨てセリフを残して、またぱたりと倒れた。
「小町ちゃん!?　なんか今すごい恥ずかしいセリフ言わなかった!?」
由比ヶ浜のツッコミも、今は届かない。淫乱て言葉を知らなくても、何となく雰囲気で分かったんだろう。
小町が再び目をぐるぐるさせてばたんきゅーしているのを見て、ぽそりと呟く。
「……取り敢えず、小町をソファで休ませるか」
「うん……」
なんか変な所で、この会（？）は終了した。
起き上がりながら、今さっきの口付けと、胸を揉んだときの由比ヶ浜の反応を思い出す。
……うん、よし。

胸も含めて、後で由比ヶ浜をぐちょぐちょにしよう。
えらく卑猥で鬼畜な覚悟を決めながら、小町をソファに寝かせた。
続く。

（１４）

「えへへ……」

「……」

現在の状況。

自宅のリビングのソファで、俺と由比ヶ浜が抱き合っていて、そのすぐ横で気を失った小町がうんうん唸っている。気絶の理由はくだらなすぎるので割愛。

……や、おかしいでしょ。

何これ？

何がどうしたらこんな状況になるの？　おかしいでしょ？

なんとか記憶を辿って（と言っても、せいぜいここ１０分くらい）、ここまでの流れの説明を簡単にしようと思う。

安心して欲しい、この話に深みなんて全くないから。水たまりくらいしかないレベル。あるいはプリンのカラメル部分くらい。

×　×　×

「小町をまずはソファに……っと」

マンガみたいに目をぐるぐる回しながら倒れている小町（面白いし可愛い。超可愛い）をお姫様だっこで持ち上げる。

内心、柔らかいなあ間違えた軽いなあとか思いながら、のっそのっそとソファに連行。

そっと下ろして寝かしつけると、その横にぽすっと座った。

「ふぃー」

温泉に浸かったおっさんのような声を出して、ふへーと気を抜いた。

ふと、横に目をやると。

「……」

一連の様子を見ていた由比ヶ浜が、俺のことをじーっと見ている。

や、ほんと、じーっと見てる。なんか犬が生まれて初めて見る珍しいものに出くわしたみたい。撫でたいなあ……。どうでも良いけど、生まれたてのパグが手を叩く音とかに反応して首を傾げるのが殺人的

に可愛い。何回も傾げさせている内に音に慣れて、何の音を出してもきょとんとした顔しかしなくなった時のショックは異常。
由比ヶ浜を撫でるにはやや距離が遠いので（既に動く気０。今ならチャンネルを替えるにもリモコンをカマクラに取りに行かせるまである。カマクラが俺の居る所までリモコンを弾いてくれる確率なんて天文学的な低さになりそうだけど）、由比ヶ浜もこっち来ないかなーとふやけた顔をして考えていたら、由比ヶ浜が立ち上がってとてとてとこっちに向かってきた。人差し指を唇に当てていて、なんか食べ物を欲しがる子供みたい。よし、こっちに来るんだ……俺に撫でさせろ……！
――と。
「……んん？」
近くに来たら由比ヶ浜がどんな体勢をとろうが撫で回す気満々でいたのだけれど。
「……ほっ」
俺の予想を軽々と飛び越えて、妙に気の抜けた掛け声と共に、俺に正面から抱き付いてきた。
その瞬間、むにゅっという至福の感触が押し寄せる。
乳トン先生、Ｃｏｍｅ　Ａｇａｉｎ☆！
……いや。
なんでだよ。
あ、冒頭のシーンまでの流れの説明は以上になります。ね、水たまりでしょ？
「えーと、由比ヶ浜さん？　また小町を気絶させたいの？」
言うと、由比ヶ浜の目ががんがん泳ぎ出した。アメンボくらい縦横無尽に泳ぎ回ってる。。
「……い、今は……抱き合ってるだけだから大丈夫だよ、きっと、多分、おそらく、多分」
「どんだけ自信ねえんだよ……」
きっととか多分って言うことで、コンマいくつの掛け算をしてる感じがする。最終的に小町が無事な可能性が３％くらいになってそう。

何してんのかしらこの子はとジト目を向けると、由比ヶ浜が口を尖らせる。
「……だって、もっとヒッキーとこういうことしたいんだもん……」
「……っ」
ほーん？
なんでしょうか、この子。
いつもは空気を読んで、自分の言いたい事もなるべく上手いオブラートに包んで喋るような子なのに……なんか、なんか。
程好くわがままになっている。
２人きり（正確には横に世界の妹（気絶）が１人）だからなのか？
いや、それでも、今まではこういう事を言うヤツではなかった。
……気を許してくれているんだろうか。前よりも、少しずつ、少しずつ。
なんだろう、この気持ちは何だろう。声にならない叫びとはならない。
なんていうか、うん。
この状況はアレだ。
嬉しい。
妙に気持ちがぽかぽかして、こそばゆい。
本当にこそばゆいので、しょうもない例えで気を紛らわそう。
うん。
あれだ、八九寺と再会した時くらい嬉しい。俺あの子に会ったことなかった。
「……仕方ねえな、あとちょっとだけだぞ？」
言って、さりげなく由比ヶ浜の腰に腕を回しつつ、頭を撫でる。うん、顔が近いからなんかもう良い匂いを感じすぎてやばいです。あと抱き締めたら身体のむちむち感が伝わってなんかもう死にそう。
俺に頭を撫でられて、由比ヶ浜はこそばゆそうに身体をもじもじとさせて、頬を緩めた。
「……えへへ……ありが、と、う……」
「ん？」

由比ヶ浜が急に、バッテリー切れを起こしたロボットみたいになった。
顔は俺を向いているが、目だけは横にぎぎぎと不自然に動いている。
「……」
――何かの気配を感じた私は、恐る恐る、横を振り向きました。
その時、見えてしまったのです！　なんだこのノリ。
「……あ」
世界の妹、小町ちゃんが復活してました。
わー……超目ぇ細めてる。その瞳に宿る感情は何、親心？　呆れ？
それともぶ・べ・つ？　侮蔑？
俺と由比ヶ浜が静止画の如く止まって固まっていると（本当にぴたっと止まっている。今の俺たちよりも、ハリーポッターの世界の写真の方がよっぽどアクティブだ）、小町がおもむろに何かを探す動きを始める。
そして。
「……」
かしゃり、と。
小町は、無言でスマホを翳すと、俺たちががっつり抱き合っている写真を撮った。
そして、
「う～ん……まだ小町は気を失っている～……妹を気絶させておきながらその横で更にイチャついている兄とその相手のお姉さんの写真なんて撮っていない～……」
ひどいクオリティの寝言（のつもりらしい）を呟いたかと思うと、小町は再びぱたりと寝た。無駄にう～んう～んと唸ってる。
……。
ひでえ。
なんかもう、ひどすぎる。
ツッコミ所が多すぎて試合放棄したい。
「……」

「……」
由比ヶ浜と、そろりと目を合わせる。
「……」
「……」
数秒の、沈黙。
「……」
「……」
――沈黙、終了。
「小町ちゃん？　何してくれちゃってんの？　お兄ちゃん流石に今のは看過出来ないぞ？」
「そうだよ小町ちゃん！　絶対カンカ出来ないよ！」
……こいつ今、看過をカタカナ表記で言わなかったか……？　何語だよ。
しかし、呼び掛けも虚しく、俺と由比ヶ浜の言葉に小町は反応しない。
揺する。
反応しない。
ぴくりとも。
更に揺すりつつ、言葉を掛ける。
「おい、小町、起きろ、お前が起きてるのは、由比ヶ浜の胸がＦカップ以上あるのと同じくらい明らかだぞ」
どさくさ紛れで言ったらバレないかなあと思ったが、由比ヶ浜が目ざとく（ひどい）反応した。
「なんでそれ言ったの!?　あたし自分の胸の事何も言ってないよね!?」
「じゃあＧはあるのか？」
「や、そんなには……ってこら―！」
はい。
流れ弾から、軽いコントを挟んでみた。
ちなみに小町は……と、見てみると。
「う～ん……結衣さんはＦカップ……羨ましい……小町も雪乃さんと

頑張らないと……」
……。
なんか、雪ノ下も巻き込みやがった。寝言のフリでさらりと罵倒するそのメンタル、マジでクールだと思います。
「小町ちゃん!?　あたしはそんなに……あ、うう……小町ちゃん、起きて、起きて！」
否定しねえのかよ。もう確定だな。Ｆだな？　信じるぞ？　それにしても、あの大きさなのにアレがつんと上を向いてる釣鐘型とか素晴らし……おっと、口が過ぎたようだ。
由比ヶ浜が涙目で小町を起こしにかかっていると、小町は寝たフリのまま更に言葉を続ける。なんでこいつ寝たフリ続けてんだよ……。
「う～ん……取り敢えず今の写真は小町のスマホの待受けと、Ｔｗｉｔｔｅｒのヘッダー画像と、ｍｉｘｉのアイコンと、Ｆａｃｅｂｏｏｋのカバー写真に設定して……後はＦＢのアルバムにこの写真を載せて２人をタグ付けしないと……あ、でもお兄ちゃんはぼっちだからＳＮＳとは無縁だった……」
「Ｔｗｉｔｔｅｒのアカウントぐらいあるわあああ！」
妹に絶叫してツッコミをする、酷くてひどい兄がいるらしい。
俺だった。
ていうか、こいつすげえこと言ってる。流石に止めないと。薄目を開けてスマホを弄り出してるし。寝たフリするんならもうちょっとちゃんとやれよ。なんだこの茶番。
……そろそろ、本気で起こすか。
「小町ちゃ～ん、朝ですよ～」
「う～ん……あと５分……いや、３分で全部設定が終わるの……」
うーん。
こいつ、バカなのかにゃー？
……かくなる上は。
「お、おい、由比ヶ浜、急に脱ぐなって！　何やってんだ、小町がいるのに！」
「え、あたし!?　まだ何にもしてないよ!?」

「お、お、お、おーーー!?」
「はい、起きた」
「あ」
捕獲。
由比ヶ浜の痴態（ウソ）を見ようと、目を爛々と輝かせて起き上がった小町の首根っこを猫みたいにふん捕まえると、小町は「ふにー!」と鳴いた。なんで猫に寄せてくれたの？　可愛いけど。
「……え、あ、そういうこと？　なーんだ、あはは……」
事情を数秒遅れで察した由比ヶ浜が苦笑いを浮かべた。
……きみ、今、「『まだ』何にもしてないよ!?」って言ったよね？　すごいこと言った自覚あるのかしらん？　まあ、もう既に色々やってる訳だけど。ど淫乱メロンめえ……。
と、言う訳で。何がだよ。
いよいよお昼ご飯作りです。すんごいドキドキする。結果によっては本気で心臓がドキドキして止まる可能性もあるから洒落にならない。
……本来、こんな緊張するイベントじゃないはずなんだけどなあ……。可愛い妹と、まあ、その、アレな関係の子がご飯を作ってくれるとか、胸アツの筈なのに！　……筈なのに！
続く。

（１５）

「人間、長期的で大きな目標を持つ他にも、毎日のちょっとした物事に対する目標も持った方が良いと思う！」

小町が突然小さな胸を張ってなにかの本の受け売りを偉そうに語った。

「え……どうしたんだ急に」

小町に対して心底テンションの低いジト目を向ける。や、本当に、急にどうしたんだこいつは……。

俺の言葉に対して、小町がくるりと振り返ると、鬱陶しいドヤ顔をしてちっちっちと指を左右に振った。ウザいけど超可愛いなこいつ……。

「お兄ちゃん、甘いよ、甘々だよ。微糖コーヒーくらい甘いよ」

「『微』って付いてる時点で甘味は推してねえだろ」

「じゃあ……羊羹？」

「上品な甘みだ……」

「じゃあ角砂糖！」

「お前比喩で粘るつもりないだろ」

「じゃあ、結衣さんがころころ甘えてきた時の雰囲気」

「小町ちゃん、やめてーーー！」

「ああ、甘々だな。確かにあれは甘々だ」

「ヒッキー!?　なんで答えるの!?　超恥ずかしいからやめてよ！」

「大丈夫ですよ結衣さん。今後もきちんと写真・動画共に収めて行きますから」

「何が大丈夫なの小町ちゃん!?　それやばいから！」

「おいおい由比ヶ浜、もう少し語彙豊かなツッコミを入れないと俺たちの心は動かないぞ」

「この話はどこに向かってんの!?」

「う」

「う」

「兄妹揃って同じ反応だ!?」

目が覚めた。
「で、小町、なんで目標がどうのなんて言い出したんだ？」
そもそも今日はそんな気合の入れたイベントなんて――
「お兄ちゃん。検索ワード『お昼ご飯　手作り　結衣さん　地雷地帯』」
「……あ」
「なんで納得したの!?」
由比ヶ浜が横で悲痛な叫びを上げているが、まあ気にしない。お胸様が揺れてらっしゃる……。
「確かに、由比ヶ浜とのポイズンクッキングだもんな……何気ない日常の1コマが、死に直結する危険性を孕んでいる訳だ」
「なんでポイズンって言葉を最初から付けてんの!?　前は大丈夫だったじゃん！」
「や、あれだ。人間、喉元過ぎれば熱さ忘れる、なんて言うだろ？　だから危険性を忘れないように、敢えて大袈裟に言ってるんだ」
小ボケを挟んだつもりが、由比ヶ浜が曖昧な表情で首を傾げて、更なるボケをぶっこんできた。
「あ、う、うん、えーと……そ、そうだね……喉元……熱さ……うん、え、うん、んん？　本当に言うんだっけ？」
マジかこいつ……。
「言うんだよ、バカ。揉むぞ」
「バカって言うな……って、え、あれ、え、え、え……？」
どさくさ紛れですごい事を言ってしまった。
由比ヶ浜が頬を赤らめながら俺から目を逸らし、ちらちらと見てくる。うう、恥ずかしい……。
「お兄ちゃん、結衣さんとの関係性に安心してそういう安易なセクハラ発言をするのは小町的にポイント低いよ」
小町からアイスバケツチャレンジばりの冷水（物理的・世論的両面）を浴びせられた。
「うぐ……た、確かに。……由比ヶ浜、すまん」
気まずさ全開で謝ると、由比ヶ浜がもじもじとして上目遣いでこち

らを見た。
「あ、や、うん、で、でも、あたしとしては別に……」
「え……」
一瞬、心臓がどくんと鳴り、二人の目が合う。
自然と二人の距離が近付く。
そして――
「はいはいはいはいそう言うのは後でやってねー」
「う……」
「う……」
ぱんぱんぱんと、小町が手を叩いて先生のような口調で窘める。
小町が見かねて止めに入るという異常事態になっていた。止められなかったら勢いで「エンダーーーーーーーーイアーーーー」とか流れそうなノリだった。流れねえよ。
ふーと息を吐くと、小町が神妙な面持ちで由比ヶ浜を見る。
「お昼ご飯作りは小町と結衣さんでやってみようかなあと思ってるんですが……ご存じの通り、結衣さんは、まあ、料理の腕がとってもアレなので……」
「小町ちゃん、ぼかし方がかえって辛いよ！　はっきり言っていいから！」
由比ヶ浜が悲痛な叫びを上げると、小町は瞑目して、ゆっくりとかぶりを振った。
「小町からは……とても言えません」
「重いよーーーー！」
なにやら2人で悲しい劇を繰り広げていた。ああ、無情。
「そんな訳で、このお昼の料理タイムにも何か目標をはっきりと掲げて、結衣さんはそれをしっかり頭に置きながら料理してもらいたいのです。じゃないと死者が出ます。比企谷家から死者を出す訳にはいきません」
「そんなに!?　ねえ、あたしの腕ってそんなに!?　でも、そのアイディア自体は……うん、なるほど……小町ちゃん、頭良いね」
「うう……なんか褒められてる気が全くしませんが……。じゃあ、ま

あ、取り敢えず考えてみましょうか。目標が浮かんだ人は手を上げてー」
小町が幼稚園の先生みたいなノリで明るくフってきた。こいつ自由だな……。
「はい！」
「はい、結衣さん！」
由比ヶ浜が小学生低学年ばりの元気さで手を上げると、小町も負けずにずびしっと指差した。楽しそうだな……。
由比ヶ浜は軽く息を吐いて、俺をちらりと見て、少し照れながら、
「ヒッキーの為に美味しい料理を作る」
「却下です」
「なんで!?」
「不可能なことを掲げても意味がありません。それに具体的じゃないですし」
「うう……たしかに……」
……その「たしかに……」は前半について？　後半について？　前半だったら俺泣いちゃうよ？　だって不可能なんでしょ？　もうラーメン食べに外出るよ？
事態を少しでも好転させる為、俺も手を上げる。
「はい」
「おや、お兄ちゃん、どうぞ！」
小町は相変わらず楽しそうに、振り向き様に俺を指差した。かっこ可愛い。やだ、ハイスペック……！
瞑目して軽く呼吸して、ゆっくりと目を開いて小町を見据える。
「今日は小町が1人で作る。それでその後、由比ヶ浜には料理の修行に出てもらう」
「なんでさ!?　そんなに!?」
「うーん……」
「小町ちゃん、悩む程現実的な話なの!?」
由比ヶ浜のツッコミ文が長くなってきた。良いことだ。
「お兄ちゃん、ちなみに結衣さんの修行期間は？」

「安全を鑑みて、３年ってとこだな」
「その間に見込まれる被害は？」
「７００人程が実験に定期的に付きあわされ、度重なる健康被害を訴えて休学・休職に追い込まれる」
「うそでしょ!?　あたし、そんなに被害を及ぼすの!?」
「それでも、これは希望的観測なんだが……」
　俺と小町が絶望した表情で俯く。
「なんで２人揃ってあたしをそんな危険視するの!?」
「まあまあ」
「小町ちゃん！　あたしは２人にツッコんでるからこんな風に――」
「由比ヶ浜、あんま騒ぐなよ。揉むぞ」
「あ、う……」
　また勢いで言ってしまった。しかし、由比ヶ浜のリアクションが予想外の可愛さで若干動揺して――
「お兄ちゃん、調子に乗らないで。もぐぞ」
「何を!?　小町の口調が急に変わった!?」
「……で、目標なんですが……」
　小町の急な方向転換で、俺と由比ヶ浜がはっとする。脱線がこんなにも楽しいだなんて……思いもしなかった……。
「お兄ちゃん、もっと良いのない？」
「んー……」
　……もうちょっと具体的に……。
「……あ。はい」
　さっきまでのノリで、手を上げる。
「お、お、お？　はい、お兄ちゃん！」
　小町が再び俺をビシッと指差して指名する。今更ながら人を指差すなと言おうとしたが、元気溌剌として指を差す小町がやたら可愛いので許そう。
「えっと……『料理死亡事故絶対０～余計なものを入れるな。小町とレシピ本の言うことはー？　絶対！　～』ってのはどうだ？」
「なんかすごいサブタイトルが付いた!?　最後はなんか王様ゲームみ

たいだし！」
「ああ、お兄ちゃん、それ良いかも。具体的にしてほしいことが集約されてる感じ」
「良いんだ!?」
「よし、決定な。由比ヶ浜、今からお前は小町に対して絶対服従を貫くんだぞ？　良いな？」
「うう、なんかすごいことになってる……」
と、まあ。
由比ヶ浜に絶対服従を誓わせたところで（響きがやばい）。
お料理、スタートです。
いきーのーこーりーたーいー（ここしか知らない）。
×　×　×
「じゃあ結衣さん、まずは包丁の持ち方から行きましょう」
「う、うん」
小町と由比ヶ浜がキッチンの前で並び、何やら絶望的なくだりからの説明が入っていた。
包丁の持ち方って……。
まあ、猫の手が出来るかどうかってレベルの話だろう。最悪それが出来ていなくても、小町がこの場で教えれば済む話だ。大丈夫、きっと大丈夫……あれ、なんかフリにしか見えない……。
「結衣さんはどういう風に包丁を持ってますか？」
すぐにはお手本を見せず、優しく諭すように小町が聞く。
「あ、え、ええっと、その時その時でちょっとずつアレンジしてるんだけど……」
「え」
「え」
「え？」
小町と俺が固まり、由比ヶ浜も「あたし、何かまずいこと言った……？」みたいな雰囲気を出している。言ってる、超言ってるから。
なんだよ持ち方のアレンジって。斬新すぎるだろ。剣術家がオリジナル技考えてるんじゃねえんだから。

「え、ええっと……じゃ、じゃあ、その中でもよくする持ち方はどんな感じですか？」
小町が顔を引き攣らせながらも笑顔を保ち、由比ヶ浜に質問をする。妹のこんな顔、見たくなかった……。
小町の質問に対して、由比ヶ浜はふむとあごに手を当てて思案する。思案内容が拙すぎて悲しい……。
「あ、これならよくやってるかも」
ぴんと閃いた様子の由比ヶ浜を見て、小町が妙な緊張感を持ちながら尋ねる。
「ええと、じゃあ、それ……を――」
言い切る間も無く。
小町も、俺も、ぴたりと固まった。
「え、えっと、結衣さん……？　誰か刺したいんですか……？」
「え、なんで？」
「や、なんでって、その……」
小町が言い知れぬ恐怖でぷるぷる震えて、後ずさりするのも無理はない。
由比ヶ浜は両手で包丁を持ち、まな板の上の人参に向けて、まるで人参が親の仇であるかのようにその切っ先を向けていた。
この後考えられるセリフとしては、「死ぃぃぃねぇぇぇ！」以外のものがあまり考えられない。この状態から「お料理しちゃうぞ☆」とか言われたら戦慄ものだ。すごい残酷な響きに聞こえちゃう。
冷や汗が背中をつつっと伝うのを感じながら、小町も俺も、由比ヶ浜の弁明を待つ。
由比ヶ浜は包丁の切っ先を人参に向けたまま、小町に向き直ってくりっと首を傾げた。
「えと……これで、お料理するんじゃ、ないの、かな？」
戦慄。
小町が深く深く息を吸って、ふぃーと吐き出した。その目は明らかに、大いなる覚悟で据わっている。
「お兄ちゃん、これは……戦争だね」

「否定できないのが悲しいな……」
「なんで!?」
底の知れない絶望と共に、恐怖のクッキングタイムがスタートした。前文の物々しさが異常。
ここからのシーン、上手く工夫したら楳図かずお作品に使ってもらえそうなくらい凄惨な事になりそうな気がする……。

続く。

（１６）

由比ヶ浜と小町のお料理作りがスタート。どきどきが止まらない、悪い意味で。

さっきまでは戦々恐々としていた小町も吹っ切れたのか、調理器具と食材を用意しながら楽しそうに何やら口遊んでいる。

「てれれってってってって、てれれってってってって、てれれってってってってってってってってってれーれーれ～」

「……」

うわあ……。

取り敢えず、こんなに刺激的な３分クッキングは他にそうそう無いだろうなと思いながら、ソファに座って２人の様子をぬぼーっと眺める。

鼻唄でテーマソングを歌う事でむやみにテンションが上がったのか、小町が高らかにタイトルコール。

「比企谷結衣の～!?　ハーフ☆ポイズン☆クッキング～！」

「!?」

「!?」

ソファの上で身体をものすごい勢いで９０度回転させて、小町の方を見た。腰がいかれそう。

由比ヶ浜の顔も無駄に劇画タッチに……というよりは、なんだろう、アタックＮｏ．１とかエースをねらえとかあの辺りの雰囲気になってる。

……なんで１フレーズでこんなにツッコみどころを持ってこられるんだこいつは……。

「ここここ、小町ちゃん!?　ひ、比企谷結衣って、あの、その……えと……」

ツッコむなら最後まで責任を持って！　俺が恥ずかしくて死にそうだから！

由比ヶ浜のツッコミに、小町が人参を持って人差し指を立てながら答える。人参、今要る？

「ああ、最初は『小町と結衣の～』って言おうとしたんですが、こっちの方が結衣さんとお兄ちゃんが照れるかなあと思ってくっつけてみました☆」
　なんだこいつ。
「や、お前ばかだろ」
「え？　それとも由比ヶ浜八幡が良い？」
「そういう問題じゃ――」
　何この恥ずかしさで死にそうな話題……と思っていたら、由比ヶ浜がぷしゅーと茹でダコさんになっていた。
「あわ……あわわわ……」
　粟……阿波和倭？　動揺を抑える為に、無駄に漢字変換してみた。無駄でした。
「あわわわ……ひ、ヒッキーと……はわわわ……」
　やめろやめろ、こっちをちらちら見るな。死んじゃう、死んじゃうよお！
　このままではまずいと思い、小町に向き直る。
「あと、なんだよハーフって」
「ん、ああ、小町がある程度中和するけどそれでも限界があるからね。ポイズン成分は小町が０％、結衣さんが１００％だよ」
「あたし１００％なんだ!?」
「そうですね、第一級危険生物です」
「お前それどこのココだよ」
「昨日ジャンプ読んでみたんだ」
「少年の心を持ち合わせた美少女とか、最高だなお前」
「えへへ～」
「あたしを置いてくなー！　そんな危険じゃないし！」
　由比ヶ浜が息を切らしてツッコむ。このまま３人で会話し続けたら良いダイエットになるんでなかろうか。はっ、それでは胸まで痩せてしまう……!?　むしろ胸から痩せると聞くし、うん、やめといた方が良いな。
　という訳で、どういう訳だよ。

今度こそ、お料理作り、スタート。

× × ×

以下、ダイジェストでお送りします。

「結衣さん、今です。そこでルーを入れるんです。分かりますか？　このビニールを外して、それを鍋の上に持って行って中身を鍋に入れるだけ、そう、それでいいんです……ってなんですか、その調味料は!?　要りませんよ！　ていうかうちにこんなのあったんだ!?」

「あ、ええっと、美味しくなると思って……」

「目標をもう忘れたんですか、まったく！　ほら、次の動作に早く移るんですよ！」

「うう……小町ちゃんがスパルタだよお……。」

「お義姉ちゃんの為に心を鬼にしてるんです。未来の義妹として！　ほら、こんな所に埃がまだ残ってますよ。指に付いたじゃないですか」

「なんかドラマで見た事あるお姑さんだ!?　義妹じゃないの!?」

「うちのお母さんは結衣さんみたいな人は大好きだと思うので、きっと甘やかすと思うんです。なので代わりに小町がイジメてあげます。うへへへへ……」

「イジメる必要ないよ!?　ていうかその笑い方なに!?　怖いから！」

「結衣さん、どこをイジメられるのが好きですか？　今後の参考に……」

「今後ってなに!?　言ったらそこをずっとイジメられるの!?」

「やっぱり結衣さんと言えばということで、そのお胸様ですか？」

お胸様ってなんだよ。信仰を集めるのか。胸神様……あ、雪ノ下が毎日通いそうだな。

「え、や、あう、そ、その……」

「へ～……ふ～ん……お兄ちゃん、そうなの？」

「なんでこれ以上無い危険なタイミングで俺に話を振るんだよ。さっきの嫁姑話でも恥ずかし過ぎたのに」

「なるほど。結衣さんは胸が敏感……っと」

「小町ちゃん!?　あたしもヒッキーも何も言ってないよ!?」

「顔に出てました。お兄ちゃんこういう時分かりやすいんですよね。今は一瞬顔がにやけるのを止めることが出来てませんでしたし。ちょっとキモかったです」
「小町？　さりげなくお兄ちゃんのことぼこぼこにしないでくれる？　泣いちゃうよ？」
「お兄ちゃんは結衣さんの胸好きそうだなあ……結衣さん、責められすぎそうになったらちゃんと言って下さいね？　お兄ちゃん優しいから、きちんと伝えれば加減してくれるはずですから」
「なんでそんな具体的なアドバイスを!?　……うう、わ、わかったよお……」
「おいバカ、由比ヶ浜。メロン。そこで乗るなよ。恥ずかしいだろ」
「だれがメロンだ!?」
「そう言えば、全然料理が進んでませんでしたね。ほらお義姉ちゃん、早く進めないと何かしちゃいますよ？」
「突然切り替えた！　何かってなに!?　怖いよ！　あと、その、呼び方……」
「早くしろよ由比ヶ浜、揉むぞ」
「あう……」
「だからお兄ちゃん、調子乗ってお義姉ちゃんにセクハラ発言するのやめなさい。もぐぞ」
「だから何を!?　あとなんでそれ言う時だけお前の口調は変わるんだ!?」
　脱線に次ぐ脱線である。
「ぎゃー！　火柱がー！　なんで!?　鍋でことこと煮込んでるだけなのに!?」
「あ、あたし今その辺の小麦粉？　っぽいのを入れたんだけど……だめだった？」
「小麦粉でこんな事になりませんよ！　ていうかなんで『？』が付くものを入れたんですか！」
「や、美味しくなるかなーと……」
「そういう所がポイズン！　もうアレです、今だけは結衣さんの名前

は『毒ヶ浜マユリ』で行きましょう」
「もうほとんど原形無いよ!?　毒って付けないでよ！　あとマユリって誰!?」
　やべえ、痛覚だけ残して四肢の動きを封じられてしまう……！
「ふう、消えた……良かった、具材は焦げてないみたい。お兄ちゃん、消火器持ってきてくれてありがとう」
「気にすんな。使わない内に消えて良かった。……しかし、火柱が立っておきながらどこも焦げないって奇跡だな。今のをメロンファイアと名付けよう」
「なにそのネーミング!?」
「はいはーい、大体煮えてきたからお皿の準備しますよー」
「あ、はーい。お義母さん」
「俺と小町を勝手に親子にするなよ……しかも小町が母か。……超可愛いな、このお母さん」
「うわ……シスコン……ていうか、こうなるとマザコン?」
「二人で何の会話してるんですか……はいはい、お義姉ちゃん、早くお皿を出さないとそのお胸に何かしらすごい事をしますよ」
「具体的になってる!?」
「お前も由比ヶ浜へのセクハラ気に入ってんじゃねえか……」
「うう……兄妹揃って鬼畜だよお……」

×　×　×

　でーん、と。
　目の前に鎮座している料理を眺める。
　……おお、見た目は普通の……シチューだな。
　……シチューなんだよな？　あれ、小町が目を逸らしてるぞ？
「ええっと……これは、シチューだよな？　結構ちゃんとしてるっぽいな」
　恐る恐る確認すると、由比ヶ浜が首をくりっと傾げた。
「え？　カレーだよ？　あはは、シチューだったらご飯と一緒にお皿に盛らないって」
「え」

「え？」
「……」
……。
……白いよ？
しばし考える。考えろ、なるべく都合の良い方へ……！
ぽんと手を打つ。
「ああそうか、ホワイトカレーってやつか。初めて実物を見たな」
「え？　ホワイトカレーってなに？　これはカレーだよ？　普通のカレー」
逃げ場がねえ。
あと、普通のって言うんじゃねえよ。今までの人生で幾度となく食べてきたカレーの常識を、国外に出た訳でもないのに根っこからひっくり返すんじゃねえよ。
説明を求める視線を小町に送ると、依然として不自然に顔を背けたままだった。吹けない口笛を吹くんじゃねえよ。ピューピュー言ってんぞ。ジャガーさんかよ。
小町の現実逃避に負けじと視線を送ると、冷や汗だらだらでやっとこちらを向く。
「……や、ええとお……その……犯行の手口はまだ掴めてないんだよね……」
なんか無駄にミステリーの匂いがする。ミステリーには違いないんだけどね？
「原因が分からんのか……超怖い」
本当に怖い。
「ちなみに味見は？」
２人を見ると、正面に座る小町が再び顔を背け、左隣に座る由比ヶ浜がごく自然にはにかむ。
「……その、ヒッキーに最初に食べてもらいたいなーって……」
「……」
……。
静かに息を吐く。

「そのセリフ、すげえ嬉しいけど……絶対今ここで言うセリフじゃないよな？　……よし、小町。毒見で川崎大志を連れてこい。あいつも美少女の料理を食って死ねるなら本望だろうよ」
「どんだけ大志くんのこと敵視してんのさお兄ちゃん……あ、結衣さん、今お兄ちゃんさりげなく結衣さんのこと美少女って言いましたよ」
小町が由比ヶ浜に流れ弾を注ぐ。自業自得にも程があって何も言えない……。
「あ、あわわ、え、えと、その……ひ、ヒッキー、ありがと……」
「死にそう……」
なんだこれ。
兎にも角にも、食べないことには死ねない。死ぬのかよ。
「じゃあ、いただきます。……今までありがとう」
「死ぬのを前提にしないで！」
由比ヶ浜のテンション高いツッコミを聞くのもこれが最後かとしみじみしながら、恐る恐るスプーンを口に運ぶ。
――もぐ。
もぐもぐ。
「……？」
もぐもぐもぐ。
「……カレーだ。うん、あれ？　美味いぞ？」
疑問形の感想になっちゃったけれど、言った瞬間に小町が驚愕の表情を浮かべ、由比ヶ浜がぱあっと顔を輝かせる。
「ほんと!?　良かった～……」
「や、うん、ほんと美味い。びっくりした」
この白さが味に何の影響も出てないっていうのがもはやバミューダトライアングルばりに謎だけれど、とにかく味は普通のカレーだ。しかもちゃんとしてる。
……なんで？
まあ、兎に角、生きてて良かった……。
謎は尽きないけれど、どうやらまともな食事が出来そうだ。

俺の様子を見て安心したのか（結局俺が毒見役になってた。納得いかない）、小町と由比ヶ浜も食べ始め、和やかに食事は進んだ。

幸せそうに食べる由比ヶ浜を見て顔を綻ばせると、時折由比ヶ浜と目が合う。互いにすぐさま目を逸らすこの雰囲気が、妙にこそばゆかった。

ちなみに小町はずっと頭の上に疑問符を並べながら食べていた。や、まあ、そりゃそうだよね……。

続く。

（17）

「ごちそうさま」

『は～い、お粗末さま～』

謎カレーを食べ終えた俺の言葉に2人が答える。やだ、嫁が2人……？　なんでもないですごめんなさい。

「やー、ちゃんと出来て良かったー」

由比ヶ浜がぷはーと息を吐く。達成感が漲ってるなあ。

「小町は未だになんでちゃんと出来たか分からないんですが……何はともあれ、結衣さん、お疲れさまでした！」

台詞の前半を暗澹たる表情で、後半はぺかーっとした笑顔で語る小町。器用だなあ。

「や、小町ちゃんこそ！　本当にありがとう！　これからもよろしくね！」

由比ヶ浜が胸の前でぐっと両手で小さくガッツポーズをすると、小町の顔が引き攣る。目を逸らす。冷や汗が流れる。

「あ、や～、うん、まあ、え～と、結衣さんの頼みだしな～……、でもなあ……や、うむむむ……ぐぬぬぬぬぬ……むぐおおお……！　……ふう。……はい♪」

「すごい苦悶した末の決断だ!?　良いんだよ小町ちゃん！　そんなに無理しなくて！　逆に今の感じの方が辛いよ！」

「いえ、不肖ながら全力で頑張りたいと思います！　散々苦労したご褒美として毎回結衣さんのお胸様を好き放題出来る訳ですから」

「そんなこと一言も言ってないよ!?　小町ちゃんの中で私の台詞が改竄されてるよね!?」

「おお、由比ヶ浜。お前よく改竄なんて言葉知ってたな」

「ここで要らない茶々を入れるなー！」

怒られた。

「や～、楽しみだな～……結衣さんの胸」

「恐い、恐いよ小町ちゃん！　大体、好き放題ってなんなの!?」

小町がきょとんとした顔でくりっと首を傾げる。すんごい可愛い

けどこのタイミングでやる必要無いよね？
「見る、触る、撮る、吸う、摘まむ、電動する何かを当てる、５時間くらい触る、拘束して電動する何かを押し当ててその様子を録画して出かける……？」
「ヒッキー！　小町ちゃんが恐いよー！」
目がヤマピカリャーになって口から涎をたらりと垂らして恐ろしい事を口走る小町に、由比ヶ浜が全力で戦いて俺の方に飛んできた。
たしかに、前半の羅列もえぐいし、後半が特に洒落にならない。興味はあるけど。興味はあるけど。２回言っちゃった。
――と、ここで不意に。
むにゅん、と柔らかな感触が。
思わずそちらに目をやる。そして一気に思考の向きを捻じ曲げる。
「そうだな、恐いな……兄妹のシンクロ率が」
「敵が２人になった!?」
「バカ言うなよ由比ヶ浜。俺は小町が出かけてる間、電動する何かを当てられてるお前にずっと悪戯してるくらいだから」
「何に対しての『バカ』なのかもはや分からない!?　ていうかそれも録られるじゃん！」
「あ」
何だこの会話。
続けるとろくな事にならなそうなので（ていうかもうなってるので）、さらりと話題を切り替える。
「取り敢えず食器を片付けるか。ほら由比ヶ浜、その柔らかいものを離せよ。や、やっぱりこのままでも良いかもしれない。むしろこのままが良い。仕方ない、片付けは小町に――」
「もぐぞ」
「言葉少なに言うのやめてくれないか!?　なんで小町はそのフレーズが気に入ってんだ!?」
と、まあ。
雑談の結論としては、今後、出来るだけ近い内に、由比ヶ浜にえげつないエロ責めをするという事で。由比ヶ浜にこの結論は伝えない

でおく。比企谷兄妹での結論です。何それ超恐い。

×　×　×

片付け終了。

３人でこたつにｉｎ。ぬくぬくだにゃー。

ちなみに小町に強制されて、俺と由比ヶ浜は隣同士で座らされました。やだ、僕人権が無い……。

「ふい～、楽しかったな～」

由比ヶ浜が露天風呂で今日一日の旅行を振り返っているかのような口調で喋ると、こてんと身体を前に倒した。

――と。

「……おおお……」

思わず感嘆のため息が漏れた。

豊かな双丘がむにゃりと形を歪めて、こたつ台の上に鎮座ましましている。

……む、む、む。

胸神様やでえ……！

だっておかしくない？　胸が着いた時点で安定して、顔が着地してないのにもう「ふへ～」とか言ってんだよ？　どういうこと？

目の前で起きている神の御業を心の中でひれ伏しながら崇めていると。

「……ごくり……」

なんかもう一人、息を呑んでるヤツが居た。こいつバカなのか……？　人の事一切言えないけど。

……おい小町、由比ヶ浜を見る目がキラキラしすぎじゃない？

あ、今手を伸ばして引っ込めた。チラ見して目を逸らすなよ。可愛いけど理由が不純……や、もはや一周回って純粋だな。むしろ純水まである。やだ、小町ったら電気が効かない……？

俺と小町が煩悩にまみれていると、由比ヶ浜が首だけこちらに向けて、にへっと笑った。

「良かった、ヒッキーが美味しいって言ってくれて」

「お、おう……」

快活な笑いと優しい笑みのコンボに撃ち抜かれる。なんだお前、超可愛いなと思い、気が付けば手が出ていた。この言い方語弊しか産まないな。
由比ヶ浜の頭をくしゃくしゃと撫でる。良いよね、小町が見てるくらいだし。……良い、よね？
お団子の無い頭をくしゃくしゃと撫でると、由比ヶ浜の顔がてろんと綻ぶ。
「……ふわあ……えへへ～……もっと撫でて～……」
ふやけた声に甘える成分が混ざる。
「……っ」
え、何この子、俺を殺したいの？
取り敢えず引き続き撫でていると、小町がこたつに肘を乗せて手を組み、にひっと笑った。
「や～、イチャついてるね～、小町も居るってのにお熱いことで！」
「バカ言うな、これのどこがイチャついてるって言うんだ。俺はただ由比ヶ浜の頭部を愛でているだけだ」
「ヒッキー、言い方が恐いよ～頭部って言わないで～……」
「結衣さん、温泉にでも入ってるんですか……すんごい声がふやっとしてますよ」
小町に呆れられるという異常事態だった。

× × ×

「さて、この後どうするかな……」
しばらく由比ヶ浜の頭部を愛で続けて、危うく胸を触りそうになるのを２５回程すんでの所で止めた後、ふとこの後の事を考えた。俺胸好きすぎだろう。引くわ。
「ん～……」
小町が頬に人差し指を当てて思案している。なんで由比ヶ浜の胸を見ながら考えてんの……。
ちなみに由比ヶ浜はうつらうつらと舟をこいでいる。首が動く度に胸もぽよんと動くんだけど、兄妹揃ってその様子を凝視するのやめたい。なんなんだこの兄妹。胸神様の狂信者：現在２人。

「あ」
　と、小町が手をぽんと叩いた。頭の上に電球が見える。技を閃いたのかしらん？
「この後、お兄ちゃんと結衣さんはお兄ちゃんの部屋でテレビ鑑賞なんてのはどう？　のんびりしなよ！　ついでにお兄ちゃんは結衣さんの胸を弄びなよ」
「お前もはや何の遠慮も無くなってるな……。……撮るなよ？」
　意味は無いだろうと思いつつも確認の言葉を告げると、
「……うん、大丈夫」
「躊躇いが長すぎんだろ。え、何、撮る気だったの？　え？」
「そんなそんな、Ｗｅｂカメラを使おうだなんてそんなそんな」
「ＰＣのとこに設置してんだな。分かった。ちゃんとＯＦＦにしておく」
「にゃー！　ご堪忍をー！」
「だめだだめだ。俺のプライバシーはどこ行ったんだよ」
「にゃー！　お兄ちゃんが大量の巨乳ものの動画データを持ってるのは絶対言わないからー！」
「俺のプライバシーはどこ行ったんだよ!?」
　繰り返しで意志を強めた。
「うううう……お兄ちゃんのバカ！　ボケナス！　八幡！　巨乳で挟むやつ好き！」
「おいなんで人が大好きなプレイ内容を暴露してんだ!?」
「あたしを挟んで変な話するなー！」
『あ』
「兄妹揃って同じ反応だ!?」
　兄妹の阿呆会話で起きた由比ヶ浜に、しっかりツッコまれた。
　と、まあ。
　なんかこの後すごい事になりそうだなあと期待しながら、こたつをのそのそと抜け出すと、俺と由比ヶ浜は部屋に向かった。
　ちなみに小町はいつもの料理の２００倍疲れたらしく、英気を養うためお昼寝するとのこと。何の英気だよ。２００倍という数字に由

比ヶ浜が絶望してたけど、まあまずは５０倍目指して頑張りなさい。とにかくまずは知らない調味料を召喚・使役するのはやめなさい。

×　×　×

「どうぞ」

「おお～……ここがヒッキーの……へええ……へええええ……」

由比ヶ浜の好奇心満々な表情が何か妙にくすぐったい。

「へええ……ほおおお……」

「やめろやめろ、恥ずかしいからあんまじろじろ見るなって」

すんごいあちこちきょろきょろ見てるんですけど。俺の部屋、珍しいものなんて何も無いぞ？

しっぽあったら絶対ぱたぱた振ってるぞこいつ。しっぽ挿れてやろうかしら。……ちょっとえぐいなそれは。ちょっとね。

「あんまりはしゃぐなよ、揉むぞ」

「え……」

「あ……」

思わずさっきのノリで言ってしまったのだけれど……しまった、今ここにはもぎ人（もぎびと）が居ない。そんな職業ねえよ。

ただのセクハラ発言に自分で動揺していると、由比ヶ浜が微かに口を開いた。

「ヒッキー……」

由比ヶ浜の目に、ほんのりと色が宿る。

「……っ」

さっきまでバカ騒ぎをしていた（主に俺と小町だけど）時とのあまりの空気感の違いに、身体が戦慄いた。

「……取り敢えず、テレビ見よっか。座るのはベッドで良い？」

「あ、ああ、そう、だな……」

「ん、じゃ、座ろ」

由比ヶ浜が伸ばした手に自然と手を伸ばして応える。

……うん、そうだ、俺たちは今から、ベッドでテレビを見るだけ……見るだけ……。

……んな訳ねえよなあ……。

続く。

（１８）

二人でテレビを見る……取り敢えず、うん、それに集中……出来る訳もねえな、うん。「取り敢えず」って言っちゃったし。

脳内メーカー（懐かしい）がＨの字で埋まった状態でベッド際に座ると、由比ヶ浜が唇に指を当ててんーと小さく唸りながらこちらを見ている。なんかデパートで欲しいものをねだる子どもみたい。

「ヒッキー……」

「うぐ……」

むむむ。

なーんで名前を呼ばれただけなのに、その声のトーンと表情で望んでいることが分かってしまうのか……。君が望んでいるであろう体勢は絶対あかんやん。絶対あかんやん。２回言っちゃった。

なんて考えていると、由比ヶ浜が更に俺をじーっと見てくる。うう……別に睨んでる訳でも物凄い懇願する目つきでも無いのに、なんなんだこれ、絶対望み通りしてあげたくなる感じ……これが天然もののあざとさなのか……！

根負け。７秒でＫＯ。早いな。

「ほら」

「……うん」

ベッド際から少しばかり後ろに下がると、股座に由比ヶ浜がすぽっと収まった。

「……」

……うおあああ、超良い匂いがするううう、手は触れてないけどちょっと当たるだけの背中が既に超柔らかいいい。さっき搾り取られた分余計になんか、もう……うおあああ。脳内絶叫。

真後ろにいる俺が何もしないのに気付いて（脳内ではのたうち回っているけれど）、由比ヶ浜が振り返ってぽわんとした表情で首を傾げる。

「ヒッキー、どしたの？　テレビ見よ？」

「そうだな、乳搾りをしよう」

「話聞いてない!?」
「あ」
動揺が前面に出た。ううむ、既に臨界状態。
リモコンを探すと、今の体勢からぎりぎり手で届く位置にあった。ほんとぎりっぎりで届く感じ。リモコンを取ってから座れば良かったんだけど、まさかこうなるとは思って……や、うん、やっぱりちょっと期待してた。出来れば後ろから腕を回してお腹辺りを抱きしめたい。
「リモコン……と。ぬおおお……」
右手を右方に目一杯伸ばしていると、由比ヶ浜が「あ……」と小さく声を上げた。
「どうした？」
「背中……。……硬い、ね？」
「……」
……。
死にたい。
どうやら、俺が身体を右に傾けた事で、びんびんになっている股間が由比ヶ浜の背中にごりごりと擦りつけられたようです。臨界状態は尚も続く。

× × ×

ようやくリモコンを手に取って（普段はそんな難事業ではない）、テレビを点けようと由比ヶ浜の肩の上から手を伸ばすと、由比ヶ浜が前を向いたままぽしょりと囁いた。
「ヒッキー、もっとくっついて良いよ？」
由比ヶ浜の許可に、心臓がとくんと鳴る。
「あ、じゃあ……腕、回してもいいか？」
「ん、どうぞ」
その声音はとても優しい。
あまりの幸福感に、テレビは邪魔だと思ってリモコンを横に置き、左腕を由比ヶ浜のお腹に、右腕を首に回して、きゅっと力を込めて密着する。上乳と下乳の感触を楽しんでごめんなさいなんでもないで

す。
顔は自然と由比ヶ浜の首筋の目の前に来る。両腕での抱き締めと、呼吸によるうなじへの息の吹きかけで、由比ヶ浜の身体がふるふると震えた。
「あ、ふあ……んんっ、んん……」
「……っ」
限☆界。
もう色々とやっちゃって……良いかな、良いよね、良いって言われた気がする！　躊躇・付加疑問・幻聴の三段進行！
抱き締める力を緩めて、両手とも由比ヶ浜の胸の下に滑り込ませる。
改めて、この子の胸は本当に大きい。今度下乳にバナナを挟んでみよう。たぷんてさせよう。……最低すぎてびっくりした、自分に。
「由比ヶ浜……」
「……ん」
「触りたい。……てか、触る……ぞ」
「……ん」
前を向いたまま由比ヶ浜が頷くと、下ろしている髪の毛がふわりと揺れて、鼻腔を心地良くくすぐった。
×　×　×
ゆっくり下から持ち上げるように胸を触ると、由比ヶ浜の身体がぶるぶると震えた。
「あふあああああ……っ」
俯いて、既に十分に色を帯びた声で艶めかしく鳴く。
ゆっくりと指を柔肉に沈ませると、どこまでも指が進んでいって、終わりがないようにさえ思えた。
「くふううう……ひっ、ヒッキー、そんなに強くしちゃ、んはあああ……っ」
長く息を吐きながら、天井を仰いだ。
普段が明るくておバカなキャラであるが為に、こういった表情を魅せた時のギャップがたまらない。

我慢が効かなくなり、上を向いた事で覗かせた綺麗な首に吸い付いて、更に手の動きを速めて強く揉みしだく。
もにゅん、もにゅんと心地良い弾力を感じる度に、由比ヶ浜の身体が跳ねた。
「んはあっ！　やっ、あっ、これやば……ふあああ、あふぅあああ……んんっ、くひいっ、あうっ、ヒッキー、んあああ……」
息が荒くなり、反応がどんどん良くなってくる。
首筋から唇を離してそっと横顔を覗き見ると、ぞくぞくする程上気した顔で、恍惚の表情を浮かべている。
「……うお……!?」
――そして、気付けば俺に胸を揉まれながら腰を悩ましくくねらせ、太腿に手を添えてこちらの股間に柔らかなお尻をスカート越しに擦り付けていた。
「んん……ヒッキー、ヒッキー……」
振り向いた顔はもう別人で、今すぐ汚したくなる程劣情を煽る目になっていて、口は快楽でだらしなく緩んでいる。
大きなお尻をくねらせると徐々にミニスカートが捲り上り、本人は気付いているのか分からないが、何時の間にか完全に捲れ上がっていた。それでも由比ヶ浜は行為を止めず、ショーツ越しにお尻の割れ目で俺の肉棒をぐにゅぐにゅと擦っている。
「あ、ぐあ……」
思わぬ反撃に、恐い程勃起してしまう。対抗するように胸を揉む力を更に力を入れると、俺の太腿に添えられた手にきゅっと力が入った。
「あ、やあん、こんな、あふう、んくう、あふあ……っ」
益々色っぽい声を出す由比ヶ浜の恍惚とした表情を見て、頭がくらくらすると同時に――ある特定の感覚を、強く感じた。
――なんというか、楽しい。
こんなエロいやりとりをしているのに、どこかじゃれついているような、そんな感覚。
振り向いている由比ヶ浜の顔にも、艶っぽさの中に僅かに無邪気さ

が紛れている。
ああ、うん。
やっぱり、俺はこの子と居ると幸せらしい。
――だから。
「由比ヶ浜……脱いでくれるか？」
――もっとこの幸せを、感じたくなった。
× × ×
俺の言葉に、由比ヶ浜がぴくっと反応する。
「……ん、いいよ。ここで脱いでいい？」
「ああ、頼む」
すぐ後ろから、由比ヶ浜が脱ぐ様の一部始終を見るという至福。
由比ヶ浜はちらりと照れくさそうにこちらを振り返り、やがてゆっくりと脱ぎ始めた。
「んしょ……」
可愛い声を漏らして、由比ヶ浜が上着を脱ぐ。一瞬視界が閉ざされた次の瞬間――息を呑んだ。
髪の色に似たピンクのブラを着けた由比ヶ浜の身体。じっとりと汗ばんでいて、情欲をそそる。さっきまで香っていた良い匂いに汗の匂いとそれ以外のどこか卑猥な匂いが混じって、頭がくらくらする程の扇情的な匂いに変わっていた。
一度見たはずなのに、今はまた違って見える。後ろから見ている事も関係するかもしれない。
……もっと、彼女の、由比ヶ浜の綺麗な身体を見たい。見つめたい。
「……その、下着も脱いでくれるか？」
期待感に塗れた声で囁くと、由比ヶ浜がちらりとこちらを見る。
「……ヒッキー、脱がしたい？」
「え」
素っ頓狂な声を上げてしまった。
「ホック、後ろに付いてるから……ね？」
由比ヶ浜が優しく微笑んで、ハートを撃ち抜かれた。
「じゃ、じゃあ……」

震える手でホックに触れて、外そうと試みる。かちゃかちゃと音を立てて……あれ？
「むむむ……」
緊張してるのも相俟ってか、中々外れない。
いかん、ここでかっこ悪い所を見せる訳には……と思っていると、頬にそっと手が添えられた。見ると、振り向いた由比ヶ浜が穏やかに目を細めている。
「大丈夫だよ、ヒッキー。焦らなくていいから」
「……っ」
母のような優しさと、お姉さんのような色っぽさが同居した、素敵な笑顔。
ああ、もう。
可愛すぎるだろう。
「わかった。……あ」
ふっと微笑んで、身体の力が抜けた途端にあっさりとホックが外れた。
「やったね。……んしょ」
向き合っていたら頭を撫でてくれそうな褒め言葉をかけて、ホックの外れたブラを手で外す。
由比ヶ浜が手に持ったブラを、ゆっくりとした動きでベッドに下ろした。
ぱさり、と。
乾いた音と共に、可愛らしいブラがベッドに落ちる。
あまりの心地良さと興奮で神経が高ぶって、一連の動きがスローモーションで見えた。
そして、由比ヶ浜の身体に視線を戻す。
「……っ」
言葉が出てこない。
後ろから見る双丘の、圧巻なまでの大きさと艶っぽさに、由比ヶ浜の耳元でごくりと息を呑んだ。
一度見ていてもこの破壊力に対する耐性は全く身に付いておらず、

頭が縫い付けられたかのように目を離せない。
ごくり、と喉を鳴らした。
さあ触るぞ――と手を動かそうとした矢先。
「ヒッキー……ヒッキーの、苦しそうだよ？」
「え……うあ……っ」
俺の太腿に添えられていた由比ヶ浜の手が、いつの間にか股間に伸びていた。ズボン越しに熱を帯びた指でさわさわとまさぐられ、下腹部に痺れるような熱が伝播する。
「えへへ……えいっ」
「お……？」
由比ヶ浜が唐突に身体の向きを変えて、ベッドの上に膝立ちになった。
俺よりも体の標高が高くなった状態で、俺の肩に手を添えてにっこりと微笑む。
「ね……あたしも、下脱ぐからさ。……向かい合って、さわりっこしたいな。……どう、かな？」
「……っ」
あくまで無邪気さは纏いつつも、発言自体は卑猥そのもの。
肩に乗った由比ヶ浜の手の指がほんの少し動くだけで、ぞくりと快感が背筋を駆け抜けた。
目の前には、大きいながらも形のしっかり整った乳房とぴんと張り詰めた突起。そして、由比ヶ浜の微笑み。
期待と興奮で、頭が爆発しそうになるのを堪えながら。
「……ああ」
こくりと、小さく頷いた。
続く。

（１９）

「じゃ、ヒッキーのから……ね？」

「……ああ」

由比ヶ浜の熱の篭った声と視線に息を呑みながら、立ち上がろうとベッドに手を置くと、由比ヶ浜が俺の肩に手を添えたまま――こてんと、後ろに押し倒してきた。

……え？

「……っ」

目の前の光景に、一瞬呼吸を忘れる。

睫毛のすぐ前にはたわわな双丘がぶらりと実っていて、突起が下を向いている状態でも若々しい弾力を示している。なんかインフェリアから見たセレスティアの山みたい。

なんだろう、取り敢えず搾れば良いのかな？　たしかやり方は――などと錯乱していると、由比ヶ浜はすぐに身体を起こして、俺の股間に手を伸ばした。あら、乳搾りの時間って意外と短いんだね！　まだ混乱してる。

「えっと、ベルトは……こうかな。それで……んしょ、んしょ、……よっ、と」

「……っ」

由比ヶ浜が一生懸命に俺のベルトを緩めて、ジーンズを下ろしてくれている……のだけど、俺はもうその間中、たぷたぷと揺れている巨峰に完全に目が行っていた。気付いたら脱がされてたってくらいの凄まじい集中力。この集中力は戸塚の昼練風景を見つめている時に匹敵する。

「じゃ、パンツも……えいっ、ひゃっ!?」

由比ヶ浜が、こんもりと盛り上がっているパンツを見て赤面しながら、パンツをずるり。緊張で力が入っていたのか、脱がす時に思いの外勢いが付いていて、肉棒が力強くぶるんと飛び出た。飛び出た後も反動で数回揺れる肉棒の凶悪な動きに驚いて、由比ヶ浜が可愛らしく驚きの声を上げる。

「わ、わ、すご……」
!?
「こらこら……こ、ら……っ」
やめろやめろ、亀頭をつんつんするな、指で竿をぺちぺち弾いて揺らすな、雁首を人差し指と親指で挟んでくにくにするな！　恥ずかしいし気持ち良いし恥ずかしいしお胸様が揺れてる！
「こ、こらっ……ほら、由比ヶ浜、お前も脱ぐんだろ」
好き放題弄っていた由比ヶ浜がハッとする。や、ハッとしてる間も亀頭をぷにぷにつまんでるのおかしいでしょ？
「そだね……じゃ、お願い、していい？」
「あ、ああ」
子どもっぽい好奇心に満ちていた少女の瞳に、成熟した淫猥な光が燈る。
汗でしっとり湿った瑞々しい肌と、桜色の頬。
それらを見つめるとごくりと喉を鳴らして、由比ヶ浜の下半身へ視線を滑らせた。

×　×　×

身体を起こして、先程と同じく、俺が胡坐で由比ヶ浜が膝立ちの状態になる。
「じゃあ……行くぞ」
「う、うん……」
スカートを脱がせようとして手を伸ばした……が、せっかくだから、この瞬間ももう少し楽しみたい。そう思い、まずは太腿に手を添える。
「ひゃ……っ？」
むっちりとした肉感のある太腿に手が触れると、由比ヶ浜が愛くるしい声を上げた。そのまま手を尻の方に滑らせて、また戻ってきて……と、すりすり往復させる。
「あっ、ふあっ、やあんっ、ヒッキーの手、やらし……っ、んっ、くふうっ」
俺の首に腕を回して抱き付き、甘えた声を上げながら身をくねらせ

る。
たまらなくなって、目の前に実っている柔肉の先端をかぷりと咥えると、
「ひぁあぁんっ!?」
由比ヶ浜が激しく嬌声を上げ、身体全体を震わせた。
突起を咥えて舌でちろちろとつつきながら、膝の裏を撫で回し、腿全体を揉んで、ショーツ越しに尻を揉む。がくがくと震える反応を楽しんでいると、耳元に熱い吐息がかかった。
「ひ、ヒッキー、これ、だめ、気持ち良すぎて……」
「え……うおっ!?」
言葉を最後まで言い切らないうちに、由比ヶ浜が前のめりになったかと思うと、そのまま覆いかぶさって倒れてきた。
ぎしっとベッドが軋む音がして、自分が再び押し倒された体勢になったのに気付く――こんな回りくどいことを言うのも、由比ヶ浜の胸で視界が完全に塞がっているからだ。視界も匂いも、とても温かくて柔らかい。
由比ヶ浜の胸がこの位置に来るということは……自然と、反り返った肉棒が由比ヶ浜のスカートの中に入り込んで、ショーツ越しに彼女の秘部に対してぐいぐいと押し付ける形になっていた。
「ふあぁ……っ、……ひあんっ!? あっ、あっ、あっ……」
由比ヶ浜の息混じりの声に更に劣情を煽られ、ショーツ越しに尻を揉みながら、亀頭をぐいぐいと擦りつける。スカートの中は熱と湿気に覆われていて、更なる勃起を促した。
ぐにゅぐにゅと秘部に亀頭がめり込む度に、あっあっと由比ヶ浜の嬌声が漏れる。ショーツはぐしょぐしょに濡れていて、先走りの汁が紛れてしまう程だ。
「あう、ヒッキー、あっ、ひあっ、ひんっ、あっ、んくっ、ふあぁ……っ」
甘える声にも熱が混じり、耳朶に染み込む度に勃起が強まる。
視界が柔肉に埋まっている状態ながらも、まるで乳飲み子のように突起を咥えて何度も吸い付く。
挿入せんばかりの勢いで亀頭を秘裂に押し当てて、淫液に塗れた

ショーツの感触を味わいつつ、由比ヶ浜との疑似性交を思う存分に楽しむ。
1度、2度、3度、それ以上――とねっとり突き上げていると、由比ヶ浜の反応に変化が生じた。
「あっ、ああっ、あっ、あっ……あう、あうう、あうううう……」
「……っ」
今までの可愛らしい喘ぎ声とは何か違う、どこか動物じみた鳴き声に驚く。
由比ヶ浜の尻を触っていた手を離し、大きな乳房を手で持ってよけて彼女の顔を見ると、表情は蕩けていて目はどこを見ているか分からなかった。
虚ろな由比ヶ浜の顔がぐらりと傾いたかと思うと、おでこ同士がこつんとぶつかった。あ、なんだ、今までと同じ感じでイチャつきたいのか――と思った矢先、由比ヶ浜がひどく妖しく微笑んだ。今までと何かが違うと感じて、反射的に身を竦める。
「あう、ヒッキー……これ、気持ち良い、よお……」
由比ヶ浜はそう言うと俺の首に腕を回し、唇を重ねてきた。もっと身体を貪りたくて、再び尻を掴んで肉棒で突き上げてやると、由比ヶ浜の目がしばたたく。
「あむっ、じゅるっ、んぶうっ、あううっ、あっ、んぐうっ、んんん……んんんん……」
「～～～～っ」
くぐもった喘ぎ声と舌を絡める音が、口蓋に直接染み込んで思考を削り取る。由比ヶ浜は背筋を伸ばしては縮めてを繰り返し、俺が突き上げるのに合わせて秘部を突き出してくる。
ぐちゅり、ちゅぐ、じゅぽっ、じゅぐ、ぐちゅ……っ。
口の中に響く音と下腹部から侵食して来る音とであまりに興奮して、意識がどんどんと曖昧なものになっていく。
もう少し続けたら、このままショーツ越しにぶちまけてしまうのでは――と予感した矢先。
「ヒッキー……これ、舐めていい？　……舐めたいよ……」

唇を離した由比ヶ浜が、艶っぽく目を細めて言った。

×　×　×

それは、今までなんだかんだで流れていた行為だ。こちらからお願いしたいくらい……なのだけれど、その前に。

「ああ、いいぞ。でもその前に……下、そろそろ脱がないか？」

まだ互いに服をきちんと脱いですらいない。ちょっと夢中になりすぎていた。

「ほえ？　……あ」

由比ヶ浜が一瞬きょとんとした顔で首を傾げた後、下に目をやって小さな声を上げた。由比ヶ浜の下腹部から内腿にかけてが、互いの分泌液によりぐしょぐしょに濡れていた。

「……ん、そだね。……じゃあ、脱がして？」

「え……うお……っ!?」

由比ヶ浜が首を傾げておねだりしたかと思うと、ゆったり立ち上がって足を広げて、俺の目の前に自らの股間を晒す体勢をとった。

「お前……これは、さすがに恥ずかしいだろ？」

目の前の湿り気を帯びたショーツに目を奪われながらも質問する。

「……？」

反応が無いことを不思議に思い顔を上げると、由比ヶ浜が顔を真っ赤にして小刻みに震えていた。よく見ると足も震えている。

「……恥ずかしい、よ。でも、でも……ヒッキーに、ちゃんと見てもらいたいから……っ」

「……っ」

由比ヶ浜の真っ直ぐな言葉に、心臓が心地良く跳ね上がった。

「……わかった。いくぞ」

「ん……っ」

由比ヶ浜が頷くのを確認して、ショーツに手を掛けた。

続く。

（２０）

由比ヶ浜のショーツに指を引っかけると、彼女の肌の熱と湿り気に頭がくらくらした。

そして――ずるりと由比ヶ浜のショーツをずり下げると、

「……っ!?」

視界が塞がった。

何も、お風呂場の様に湯気が上がった訳ではない。

視界を塞ぐようなものは何も無い。無いはずなのに――立ち込めた匂いによって、あまりに濃厚な刺激によって、視界が霞む錯覚を起こしていた。

由比ヶ浜のショーツを下ろしたことにより生じた匂いは、あまりにも淫猥で濃厚な雌の匂いで――良い匂いなどという表現を通り越して、交尾に対する欲求を強制的に跳ね上げるものだった。

ごくりと喉を鳴らしながら顔を近付けると、うっすらとした茂みの奥に、一対の花弁と小さく赤い肉芽が見える。

あまりに近付きすぎたのだろうか、自然と吐息が陰部に吹きかかり、由比ヶ浜の腰がびくんと震える。

「あうぅ……そんなに近くで、見ないでぇ……っ」

震えて訴えかけるその表情が、あまりに愛おしくて。

反射的に、秘裂に口付けをした。

――と。

「あふぁぁぁぁっ!?」

「んぶっ!?」

腰をがくつかせた由比ヶ浜が俺の頭を掴んで、秘部を口にぐいぐいと押し付けてきた。濃厚な甘酸っぱい匂いが鼻腔を突き抜けて、下腹部へ急激に血液が流れ込む。

「あうぅ……ヒッキーの、えっちぃ……っ」

「……っ」

俺のことを言いながらも、由比ヶ浜はぐいぐいと自分の大事な部分を押し付けてくる。

……ええと、何をしようとしてたんだっけ、由比ヶ浜のショーツを脱がせて、それから咥えてもらって……？

……何とも脱線しまくりなこの行為が、妙に面白い。俺たちはこれで良いのかな、などとも思う。そんなことを考えている今現在のこの体勢が完全に変態にしか見えないけど、そんなことは気にしない。

猛烈にしゃぶりつきたい欲求に駆られながらも、それはまあ後で楽しもうと思い、解放してもらおうと由比ヶ浜の尻をタップ。ぺちぺち。

「ひぁっ……？」

「……」

……。

……反応が可愛いな。

……ついでに尻をもみもみ。

「あ、あう、ひ、ヒッキー……？」

もみもみ。

「あっ、やんっ、なにっ、ひぐっ……」

どれ、そろそろ吸い付くか。

「そろそろ脱がせてよぉ……」

「あ」

正気に戻った。いかんいかん、ついこの極上の身体を味わってしまう……。ていうかさっき、しゃぶりつくのは後で楽しもうとか考えてたのに。……まだまだ時間はたっぷりあるんだから、それはゆっくりと、だな。

ゆっくりとショーツを下げていくと、足を広げたままでは途中で限界が来ることにすぐ気付いた。

「由比ヶ浜、これじゃ最後まで脱がせらんねえぞ」

「あ、そだね。……って、ひゃうぅっ!?」

勢いで吸い付いてしまった。頭をぽかぽかやられたけど、顔が股間に余計にめり込むからそれやらない方が良いと思うんだ……。ていうか、俺誘惑にやられっぱなしだな。全く我慢出来てない。

どうしたものかと考え、仰向けに寝てもらうことにした。足を伸ば

すよりこっちの方が燃えるからと猛烈に押して、両足を揃えて上げてもらってショーツをずり下げ、途中で膝を曲げてもらい足の先から抜く。ゆっくりやったって数十秒で終わる作業であろう所を、そのむっちりした艶っぽい足に理性が飛んで、何度も撫で回したり口付けしていたりしたので、脱ぐだけで１０分くらいかかった。変態って３０回くらい言われた。多くない？

×　×　×

由比ヶ浜の服を全て脱がし終え、そう言えばと思い俺もきちんと全て脱ぐ。

「んっ、んふぅっ、んんっ、ちゅぷっ、れろっ、はむっ、ちゅぴっ、ちゅりゅ……」

俺は胡坐をかき、由比ヶ浜は俺の股座に腰を下ろして体育座りになり、俺の両脇に足を置いた。こういった挙動の一つ一つを見る度に、本当にこの子はスタイルが良いんだなと感心する。太っているとは絶対思わない絶妙なラインでの肉付きで、見ているだけでむらむらとする。薄い着衣の状態でもとても興奮するが、こうして素肌だけになった状態を見るのはまた格別だ。

そんな由比ヶ浜と正面から抱き合い、長いことキスをしていた。口内の甘い感触と、胸に心地良く押し当てられる双丘の感触を楽しみながら、彼女をきゅっと抱きしめる。

「……ぷはっ。……ヒッキー。……ヒッキー……」

「……っ」

うっとりとした顔で俺の名を呼んで顔を綻ばせ、ころころと甘えるように俺の首に吸い付く。ちゅぴちゅぴと口付けの音が聞こえる度に、愛おしさが増してゆく。

「由比ヶ浜、そろそろ……」

言って、由比ヶ浜のへそに当たっていた肉棒を指で摘まみ、彼女のお腹にぺちぺちと当てる。

「ふあぁ……うん、そだよね。……いっぱい、したげる」

下を見て仄かに頬を赤らめ、髪をかき上げながら目を細める。たったこれだけの挙動で、心臓に弓で撃ち抜かれるような衝撃が走った。

×　×　×

俺は体勢をそのままに、由比ヶ浜が四つん這いになって肉棒の前に顔を寄せる。既に興奮でぎんぎんにそそり立っている肉棒は、青筋を立ててその欲望を存分に主張していた。

「ふあ、すごい匂い……さっきよりも大きくない？」

匂いを嗅いだ途端にぽわんとした顔になり、手で肉棒を愛でながら由比ヶ浜がこちらに目を向ける。

「ああ、お前の裸を見たからだろうな。お前の身体すげぇエロいからびっくりした」

「……うぅ……」

顔を赤らめて目を逸らした。思わず髪をくしゃくしゃと撫でる。

「そ、それじゃ、舐めるよ……？」

しゅるしゅると竿に指を絡ませながら、由比ヶ浜が確認してくる。

「ああ、頼む」

期待に胸を膨らませながら、ゆっくりと頷いた。

由比ヶ浜が数瞬だけ逡巡した後、口をくぱっと開けて舌を垂らした。

開いた口が亀頭の目の前まで迫ると、温かいを通り越して熱いとさえ思える程の温度の吐息が亀頭にかかる。

「……あむっ」

最初に少し舐めてから――などといった準備運動も無しに、由比ヶ浜がぱくりと亀頭を咥えた。

×　×　×

亀頭を咥えられた瞬間に感じたのは、「あ、これ天国だ」という思いだった。

不慣れな人の口淫では、よく歯が当たってしまうと聞く。しかし由比ヶ浜のそれは、まるでそんな心配が感じられない。何というか……初めてだというのに、これ以上無い程に俺に対する思いやりを感じる、そんな感覚だった。彼女の優しさを粘膜越しに感じて、とてつもなくむずがゆい気持ちになる。

「あむっ、あむっ、あむっ……ちゅるっ、ちゅぴっ、ちゅっ、ちゅっ、

ちゅるっ……」
　咥える前の準備運動は無かったが、一度咥えてからは何度か口を離して亀頭に口付けしたり、尿道口に吸い付いて、快感によりぷっくり浮かんだ先走りの汁を吸い取ったりしている。
　ああ、どれも気持ち良いなぁ……と浸っていると、不意に妙な感覚に襲われた。
「……あぐっ、あぐっ」
「……っ？」
　謎の声と奇妙な感覚に、何事かと顔を下に向ける。
「……何やってんだ？」
　下を見ると、由比ヶ浜が俺の竿を甘噛みしていた。
「……んっ……なんなとく。……ちゅっ、ちゅぴっ、あぐっ、あぐっ……」
「……っ」
　さっきまでの心地良い行為の合間に、ちょこちょこと甘噛みされる。全く痛くないのだが、竿や亀頭をくにくにと噛まれて、それで逐一俺の反応を見られるとやたらと恥ずかしい。顔がどんどん熱くなる。
　恥ずかしくなると同時に、はて、なんかこの恥ずかしさは前にも経験が……と思い返して、ある事が思い当たった。
　雪ノ下の誕生日を買いに行った時に、店にあったミトンのわんちゃんで手に噛み付かれた時のことを。
「……なあ、由比ヶ浜、お前ってさ」
「あぐっ、あむっ、んっ？　あむっ、ちゅりゅっ、あむっ……」
「……噛むの好きなの？」
「……～～～～～～～～～っ!?」
　何気なく聞いたのだけど、由比ヶ浜には甚大なダメージがあったようだ。顔から湯気がぼしゅっと噴き出して真っ赤になり、大慌てで口を離し、女の子座りになってこちらに背を向ける。
「お、おい……？」
　そんなまずい事言ったか？　と思いながら、そろりと手を伸ばして

由比ヶ浜の肩に手を触れる。熱を帯びた柔肌に手を触れた瞬間、身体がびくんと跳ねた。
「……」
そろりと振り返った由比ヶ浜の顔は真っ赤なままで、眉毛をくにゃっと寄せて、両手で口を覆っている。やがてゆっくり手を離すと、おずおずとこちらへ向き直り、上目遣いで見つめてきた。
「……ヒッキー……こういうの、きらい？」
「……～～～～っ？」
何その可愛い聞き方!?　やめろ！　恥ずかしい！　死ぬ！　超可愛い！
「……や、そんなことねぇけど……」
目を背けながら頬をぽりぽりと掻くと、由比ヶ浜がほっと息を吐いた。
「……良かった。そんなつもり無かったんだけど、ヒッキーの味濃いなー、なんか美味しいなあーって思ってたらいつの間にか……って、あ……」
「……あー、そうか」
自分がとんでもないことを言ってる事に途中で気付いたのか、由比ヶ浜の顔がまた真っ赤になる。最後まで気付かなくて良かったのに……！　おかげで俺まで顔が熱くなった。多分真っ赤。
2人してしばらく俯いてから、由比ヶ浜の頬を撫でる。
「まあ、好きにやってくれ。いっぱい噛んでいいぞ。ほれほれ」
ちょっとおどけながら、肉棒をぷるぷると振る。銭湯とかで男の子が遊んでる状態のアダルトバージョンだな。はいサイテー。ちなみに肉棒は、恥ずかしいやりとりの間に半勃ち状態になっていた。
「っ!?　ちょ、ちょっと、そんな風に言われたらやりづらいじゃん！　うぅ……もう……」
由比ヶ浜はぷんすか怒りながらも、髪をかき上げて再び屈んで肉棒に顔を寄せる。表情がスイッチで切り替わったかのようにがらりと変わり、その雰囲気だけであっと言う間に復活した。
そして、

「じゃ、いくよ？　……あむっ、ちゅるっ、ちゅぴっ、ちゅっ、ちゅぷぷ……あぐっ、あぐっ……」

……やっぱり噛むんじゃん。

いたずらしたい気持ちはあるけど、今責めたら甘くない噛み方をされるよなーと思ってやめておいた。

続く。

（21）

由比ヶ浜には好きなように咥えてくれと言って、身を委ねていた。
「ぐっちゅ、ぐぽっ、ちゅぷっ、ちゅる、ちゅぷぷ、ずぞぞぞ、じゅぱっ……んはっ、ぺろ、れるれる、くんくんっ、あぐっ、あぐあぐっ、れろれろ……」
「あぁぁ……うっ、あっ、あぁ……うっく……あっ、うぁっ、あぁっ……」
――油断していた。
仰向けになって良いよと言われて、どっかりと寝転がってから、由比ヶ浜の終わりの無い凄まじい口淫が始まった。
まるで子供がキャンディーを舐めるかのように無邪気に口内で肉棒を味わってしゃぶり、その間も全く歯を当てることなく、内頬と舌と喉奥それぞれのとろける温かさに包まれた。
そしてあごが疲れると一旦顔を離し、エサに飛びついた犬のように竿やカリをぺろぺろと舐め、匂いを嗅ぎ、甘噛みする。
よくも飽きずにこれだけ……と思ってふと時計を見ると、長針が2周していた。もはや時間感覚がめちゃくちゃになっていた事に気付く。
これだけの刺激をこれだけ長時間味わわされているのだから、もちろん我慢など出来る訳がない。
「あぁ、由比ヶ浜、また……うっ」
「んっ……ごっく、ごく、じゅるる、ごく、じゅぷっ、じゅるるるる……」
由比ヶ浜の頭に手を添えて、何度目か分からない射精をした。
止めどない口淫と度重なる絶頂により、もはや意識も感覚もどろどろになっていて、どこまでが自分の性器で、どこからが由比ヶ浜の口なのか、その境界さえ曖昧になっていた。今も少しは正常な思考と保とうとして、射精する時は宣言するようにしているが、油断するとまるで用を足すような気軽さで、精液が溢れ出してしまいそうだった。
「じゅるる、じゅる……ちゅぽっ。……えへへ……ヒッキーのここ、す

ごいね。まだ出るんだ……んっ、んっく、んんんっ……」
尿道口から精子を残らず吸い付くして唇を離し、由比ヶ浜がにこっと笑う。話しながらもしょっちゅう肉茎を味わってくるため、射精直後は「もう無理……」とどれだけ思っていても、気付いたらびんびんにそそり立ってしまう。……今も、またすぐに勃起してしまった。
「おっきい、すご、んんっ、んふぅっ、ヒッキー、気持ち良い？」
睾丸を口に含んで転がしながら、にちゃにちゃといやらしい音を立ててしごき上げてくる。……これじゃあ、またすぐにイってしまう。
そろそろ、寝そべってされるがままになるのはやめよう。決断が遅すぎるけど。だって気持ち良いんですもの……。
「由比ヶ浜、そろそろちが……あっ、こらっ、尿道に舌先入れるなって、あっ、くおっ、裏筋に舌這わせんのやばっ……ああっ、カリにぱくつくなって、ほんとやば……あぁっ、あぁぁぁ……」
……。
……。
……また出してしまった。量こそ少なくなったものの、一向に打ち止めの気配が来ない。どうしてしまったんだ俺の身体は……。
どうしよう、次の展開を俺から提示するのがマジで困難だぞ……と内心頭を抱えて（とは言いつつも実際は腕はベッドに投げだして）いると、不意に由比ヶ浜が口を離した。
「ヒッキー……胸で、したげよっか？」
「え」
マジで？
マジで？
マジで？
「……またおっきくなった」
「……正直者ですいません」
由比ヶ浜の素敵すぎる提案の声を反芻しただけで、むくむくと大きくなってしまった。
× × ×
「えっと……言ったはいいけど、どうやると良いのかな……」

由比ヶ浜がたははと頬をぽりぽりと掻く。
そんな由比ヶ浜を見て、俺は胸を張って主張した。仰向けのままだけど。
「安心しろ。数多の動画を見てきたから、大体のことは分かる」
「あはは、そうなんだ……」
やべぇ、苦笑いされちゃった。おかしいな。
でも、と由比ヶ浜が言う。
「……うん、それ、頼りになるよ。……教えてくれる？」
頬を紅潮させてはにかみ、首を傾げる由比ヶ浜が強烈に可愛くて。
「ああもうばっちり教えてやるぞ。今日から君はパイズリマスターだ」
「直接的なこと言うなー！」
テンションが上がりすぎて、叱られました。単語1つで顔を真っ赤にして胸まで腕で隠されてしまった。

× × ×

「えーっと、この体勢……で良いの？」
「そうそう、こんな感じ」
由比ヶ浜に指示を出して、正座している彼女の太腿に、仰向けになっている俺の尻を乗せて、足を背中に回して彼女の身体を挟む体勢になっていた。
「もうちょっと引き寄せて……んしょっ」
「うお……っ」
肉棒はまだその極上の胸に触れていなかったのだけど、由比ヶ浜が俺の身体を引き寄せたことで――たぷんという豊かな感触と共に、俺の肉棒があっという間に姿を消した。
「んっ……これで良いのかな？　ヒッキー、どう――」
「最高」
「言うのすごい早い!?」
「や……もう、最高。温かい、柔らかい、エロい、安心するの三拍子揃ってる」
「1個多いよ……」

「う」
いかん、混乱している。
俺がてろってろに蕩けているのを見て嬉しくなったのか、由比ヶ浜が両手で胸を左右から押して、心地良く肉茎を圧迫してきた。
じっとり汗ばんだ柔肉に挟まれ、尿道口から先走りの汁がどんどん溢れ出す。それにより滑りが増して、また更に快感が増す。恐ろしい循環が起きていた。
「んしょ、んしょ、んしょ……どう？　ヒッキー……あ、顔出たよ」
由比ヶ浜の言葉に反応して視線を天井から彼女の胸の方に移すと、双丘の間から亀頭がやっは（自主規制）していた。これ口に出して言ったら一生口を利いてもらえないんじゃなかろうか。
――ここで、ふと気になったことを口にする。
「由比ヶ浜、お前、胸は大丈夫なのか？　あんだけ敏感なのに」
由比ヶ浜の家では、彼女の激しい反応が楽しくて、その敏感な胸を責めに責めていただけに、こうやって自分から積極的に胸を活用していると言う事に、少なからず驚いていた。
聞くと、由比ヶ浜がそういえばそだねと言った。どうやら自覚は無かったらしい。
斜め上を見て、んーと唸った後、視線をゆっくり俺の方に戻した。
「んー……なんかね、自分からすると結構大丈夫みたい。気持ち良いには良いけど、もう何も考えられないーってまではならないんだ」
「へえ、そうなのか」
確かに、一方的に責められる時に比べると、その辺の違いは生じるのかもしれない。
勉強になるなーなどと、この場にいまいちそぐわない呑気な事を考えながら、次のステップに進むことにする。
「由比ヶ浜、口から垂らしてくれるか？　それで更に滑りが良くなるから」
「え、垂らすって、何を……？」
「や、その、てろーんって……な？」
「や、『な？』じゃなくて……って、あ、え、え……？」

俺の意図した事にピンときたようで、由比ヶ浜が顔を赤くする。
はわわわと可愛く唸りながらも胸をぐにぐに動かしてるんだけどそのサービス精神はちょっとまずい。すぐ出ちゃうから、すぐ出ちゃうから！
「うぅ……その方が気持ち良くなるんなら……やるね」
戸惑いながら決意を示して、由比ヶ浜が口をもごもごとさせた後、くぱっと開ける。ひどく劣情を煽る目つきに、柔肉に埋もれた陰茎が恐いくらいに勃起する。舌を垂らすと、その先からてろんと唾液が垂れ下がったきて、まるで熱いローションのように亀頭に降り注いだ。
くちゅくちゅ……ぐちゅ、ぐちゅ、ぐむぐむ……にちゃ、にちゃ……。
「う……お……」
口をもごもごさせては唾液を垂らし、緩慢な動きで桃色の乳房を動かす。急激に増した粘度と滑りで亀頭やカリや竿が更なる刺激を受けて、心地良い痺れが下半身を包む。
「んっ……これで、どう……？」
唾液を垂らし終えた由比ヶ浜が、自らの乳房を下から掬い上げるように持って、内側から外側へとゆっくり回す動きを始める。
右の乳房は時計回りに、左の乳房は反時計回りに艶めかしく動く。むぐちゅっといういやらしい水音と共に肉棒全体が締め付けられ、くぱっと音を立てて解放されるという、圧迫と解放の周期的快感が幾度と無く身体に染み込んでいく。
にちゅっ、くぽぉっ、じゅっ、ぐっちゅ、ぐっちゅ、じゅにゅっ……。
「あぁっ、これ、すげ……」
腕は再びベッドに投げ出し、力無い瞳で天井を仰いでいた。
――と、不意に。
マグマの奔流の気配を身体の奥に感じて、顔を上げて由比ヶ浜を見る。
「あ、やばいかも。また出そう」
言うと、由比ヶ浜が目をぱちくりとさせて、ふっとにこやかに笑った。

「……ん。良いよ。いっぱい出して？　……んんっ、んっ、んっ……」
温かい笑みを浮かべたまま、愛おしそうに亀頭を見つめて乳房を何度も寄せては離す。
やがて、心地良い高揚感に包まれてふつふつと湧き上がるものを感じて――
「――うっ」
「あふぁっ、あっ、あふっ、熱っ、んんっ、ふぁぁ……っ」
ごぶごぶっと尿道口から噴水のように噴き出した白濁液が、たちまち由比ヶ浜の乳房を汚していく。脈打つごとに由比ヶ浜が乳房を寄せて搾り上げる為、強烈な快感が身体全体を駆け抜ける。
あっと言う間に胸の谷間に白い池が出来て、その真ん中に真っ赤な亀頭が見え隠れしている。
「……ん、いっぱい出たね。……嬉しいな」
「……っ」
幸せにも程がある言葉を言ったかと思うと、愛おしそうに亀頭にちゅっと口付けをした。そして谷間に出来た白い池に口を付けて、一滴も残すまいと綺麗に舐め取っていく。
……出した後、毎回毎回そういう可愛かったりエロかったりすることばっかりやってくれるから、俺の勃起が全く収まらないんだな……と、ひとりで納得した。

続く。

（２２）

由比ヶ浜の双丘の谷間に大量に噴き出した白濁液が、彼女の紅い舌によって残す事無く丁寧に舐め取られる。その淫靡な光景に、ごくりと喉を鳴らす。

「んふぅっ……濃いよぉ……っ」

うっとりとした顔で由比ヶ浜が発する言葉は、普段の快活な彼女からはとても想像出来ない程にいやらしい。肉棒は今も柔肉に挟まれていて、時折白濁液と一緒に亀頭もぺろぺろと舐められた。その為、あれだけ射精した直後にも関わらず、今も青筋立って勃起している。

由比ヶ浜はやがて肉棒を解放すると、竿も丁寧に舐め上げ、竿に触れていた乳房の面を自分の手で持ち上げて、愛おしそうに舐り上げていく。

「う……お……っ」

あまりにも色っぽい光景に、呼吸さえ忘れてしまう。

やがて一通り舐め終えると、少しばかり残った白濁液を指でひと掬いして、ぷるぷると弾力のある唇で咥え込む。こくりと喉を鳴らして、「んっ、よし」と小さく呟いた。

「えへへ……ヒッキー、気持ち良かった？」

仰向けの俺に上から乗ってきて、胸と胸が重なる。心地良い重量感にため息を漏らしながら、由比ヶ浜の頭をくしゃりと撫でた。髪を触ったことでふわりと香る甘やかな匂いが、幸せと興奮の２つの感情を生じさせる。

「ああ、もう最高だったぞ。お前はアレだな、乳マスターだな」

「だれが乳マスターだ!?」

１５１種類の乳を集めた人的な。なんで初代なのん？　どんだけポケモン増えてんだよ、シリーズ進んでも使うポケモン割と同じやつになりがちなんだよ、俺。

「その凶器をここまで使いこなすだなんて……末恐ろしい子！」

「ヒッキー、それ誰のマネ？　なんかキモいんだけど」

「うぐ……」

冷や水を浴びせかけられるも、柔らかい感触が身体の前面をぷよぷよと動きまわっている為、興奮が一向に収まらない。
「由比ヶ浜、次は俺がやるぞ」
「え……ひゃんっ!?」
由比ヶ浜の肩を掴んで、くるりと半回転。今度は俺が上になって馬乗りの体勢になる。何の取っ組み合いだよって話だけれど。
わざとらしく手をわきわきさせて、不敵な笑みを浮かべる。
「ふふふ……さっきのお返しだ。たっぷりと気持ち良くしてやるぞ……まだ、ここもちゃんと嬲ってないしな」
言って、後ろに手を伸ばして、熱く湿った薄い茂みの中に指を入れて、ぐっしょり濡れた割れ目に指を這わせる。
「ひぁぁんっ！　あっ、うぅっ、お、お返しなんて、いいよぉっ……」
頬を赤らめて顔を逸らし、目だけこちらに向けてくる。その表情に胸がとくんと高鳴りながら、ふっと頬を緩めて彼女の顔に手を添える。
「……お返しのこと、『終わらなくても、いいと思うけど……』って言ったのは、お前だろ？」
それは、クリスマスの日、プレゼント交換用の品を選んでいる時に、由比ヶ浜と交わした会話だった。
由比ヶ浜は俺の言葉に目を見開いて、やがてふっと目を細めた。その笑顔はどこか優しい。
「……ん、そだね……。じゃ、お返しさせたげる」
「なんで上からなんだよ……」
「あはは、ごめんごめん」
由比ヶ浜とのこんな調子でする会話は、いつまで経っても続けていたくなる。
２人揃ってふっと相好を崩した。
×　×　×
馬乗りの体勢を止めて由比ヶ浜のへその横辺りに座り、手を伸ばして熱い割れ目に指を宛がう。ねっとりとした淫液を宿した秘裂は、劣情を煽る光沢を放っている。

ほんのりと力を入れると、中指がいとも簡単に割れ目に引き込まれていく。
「あぁっ……ふあっ……」
初めて触れる由比ヶ浜の大切な場所は、温かくて、柔らかくて、熱くて、心地良くて、暖かった。指でこれだけ心地良いのだから、果たして、その先の行為に進んだ時、一体どれだけ……と、幸福の予感に身震いする。
「大丈夫か？　痛くないか？」
左手で由比ヶ浜のお腹をさすりながら声をかける。由比ヶ浜がうっとりと目を細めて、仄かに口を震わせて答える。
「ん、大丈夫……痛くないよ。ていうか、すご……い……気持ち、良い……」
「え……」
由比ヶ浜がハッとして、首をぷるぷると振って、首をぷいっと逸らす。そしてちらりとこちらを見やる。
「……かも」
「曖昧なのかよ」
「そこ追及しないで恥ずかしいから！」
ぷんすかされた。こんな体勢では締まらないのだけど。
由比ヶ浜の反応を慎重に伺いながら、中指の関節を曲げる。指の動きに合わせて熱い肉襞がくにゅりと歪んで、由比ヶ浜が慌てたように口を手で覆った。
「んん……っ！」
顔を真っ赤にして、甘い声を漏らす由比ヶ浜。
「……声、聞かせてくれ」
本心からそう願って、由比ヶ浜の髪をくしゃりと撫でる。
すると由比ヶ浜は一瞬目を見開いた後、ゆっくりと口から手を離した。その手はゆったりとベッドに投げられ、何とも色っぽい雰囲気を醸し出す。
そんな扇情的な姿態に加え、仰向けになってたゆんと揺れる大きな双丘が目につき、それぞれの丘の頂点の突起がぴんと張り詰めている

のに息を呑む。
――思わず、それぞれの突起を片方は口で、もう片方は左手で摘まみ、秘裂に挿入していた中指を折り曲げて、指の腹で内壁をぐぷりと抉った。
――と。
「ひぐぅっ！」
短く嬌声を発して、由比ヶ浜が背筋を弓なりに反らせた。釣られて俺まで身体を浮かせながら由比ヶ浜の顔を見ると、目を見開いて口を半開きにして、更にその手はシーツをぎりぎりと力強く掴んでいた。
反り返った身体が元の状態に戻ると、歯をかちかちと鳴らす音が聞こえる。見ると、由比ヶ浜が首をふるふると振っていた。口の端からはかすかに唾液が光を反射している。
「だ、だめ、これダメ、ヒッキー、本当にだめ……ひあぁっ!?」
由比ヶ浜の言葉を聞きながらも右手の親指を動かしていると、何か豆のようなものに当たった。ああそうか、これが……。
突起にますます強く吸い付きながら、親指に当たった豆にくしゅりと圧をかける。
「ひぐっ!?　いっ……イクぅぅ〜〜〜

由比ヶ浜と一緒に気持ち良くなれるのなら、何でもしたい。
頬を紅潮させて優しくも淫猥な光を湛えた目をしている由比ヶ浜を見て、そう思った。

×　×　×

「あむっ、ぐちゅっ、じゅぷっ、んふぅっ、ちゅぷぷ……あっ、かはっ、んぁぁぁ……じゅぷっ、じゅっぽ、じゅっぽ、じゅるるる……っ」
「あっ、うぉっ、この……っ、ほら、どうだ、気持ち良……くぁっ、うっく……」
頭がくらくらする程の興奮で、視覚も聴覚も嗅覚も触覚も味覚もぼんやりと夢見心地になっていた。
俺は由比ヶ浜の顔の右横に座り、左足内腿で彼女を膝枕する形をとった。右足をどうするか悩んだのだが、こうした方が包まれてる感じがして心地良いからと言われ、彼女のへその上に、身体を跨ぐ形でどかっと乗せていた。苦しくないかと心配したんだが、当の由比ヶ浜が愛おしそうに両手で俺の右足を撫でているから良しとしよう。左手は絶えず由比ヶ浜の胸を揉み、右手は秘部をかき回したり左手同様乳房を嬲っていた。左腕の位置によっては由比ヶ浜の顔が隠れて、これはこれでまた違う興奮を催す。
当の由比ヶ浜は首だけ俺の方に向け、夢中になって肉棒を貪っている。自身も嬲られている為俺同様、もしくは俺以上に感覚がぼんやり麻痺してきたのか、焦点が定まらない目をしたまま一心不乱に亀頭に吸い付き、尿道口を舌先でつつき、喉奥まで咥え込む。違う角度で舐められるとこうも快感の種類が違うのかと驚くと同時に、絶え間ない快楽があっと言う間に射精へと誘う。「気持ち良いぞ」と髪を撫でると、嬉しくなるのかしゃぶりつきが更に激しくなった。
「うっ……くっ、由比ヶ浜、俺、また……っ」
「んっく、ぐちゅぷっ、んくぅぅっ!?　……じゅるる、じゅるるるる……」
この体勢になって何度目かの射精をしそうになり、由比ヶ浜の両突起を持ち上げる程強く引っ張る。由比ヶ浜は目をしばたたかせ、足をはしたなく広げて、口の吸い付きを殊更強くした。由比ヶ浜が唇を輪

の形にすると、ずぞぞぞと竿も亀頭も強烈に吸い付かれ、その引力に屈したマグマの奔流が見る見るうちに外へ飛び出そうと睾丸からせり上がってくる。
「うあっ、も、もう……出る……っ！」
　言って、左手で由比ヶ浜の後頭部をぐっと押さえ付け、右手は両突起をまとめて掴んで、今さっきまでよりも強い力で引っ張る。彼女の巨峰を想像を超えた大きさと弾力性を備えていて、こんなにも伸びるのかと思う程上に伸びて、その圧倒的な存在感を示した。もっともその分、由比ヶ浜にかかる痛みと快感も果てしなくて――
「んんんんん――――――っ！」
　肉棒を咥えたまま、由比ヶ浜が長い喘ぎ声を上げて――それを聞きながら、大量の白濁液を由比ヶ浜の口に発射した。
「ごぶっ、おぶっ、うっく、んぶっ、ごっく、ごっく、ふむぅぅ……ごっく、ごっく、ごっく……」
　喉を鳴らしながら白濁液を嬉しそうに飲み込む由比ヶ浜を見て興奮してしまい、射精しながらもまるで萎む気配を見せない。はしたなく広げた由比ヶ浜の足の間から噴き出した液が、シーツを遠慮無しにびしょびしょに濡らした。
　結局、由比ヶ浜が尿道口を吸い取って、亀頭もカリも竿も全て綺麗に舐め取ってきゅぽんと口を離す頃には、まるで幾度かに渡る射精など無かったかのようにぎちぎちに反り返っていた。
「……」
　――そろそろ、かな……。
　由比ヶ浜のほうっと幸せそうに惚ける表情を見て安堵の息を吐き、その下の――ぐしょぐしょに濡れて熱された秘部に視線を移して、ごくりと息を呑んだ。

　続く。

（２３）

由比ヶ浜の足の根本に目をやる。ぐしょぐしょに熱されたそこは、今か今かとその時を待ち焦がれていてくれているように見えた。

由比ヶ浜の顔を見る。顔に限らず全身汗だくで、火照った身体がたまらなく色っぽい。

「……あはは、汗だくだね、あたしたち……」

俺の片足に膝枕をして、もう片方の足に乗っかられた状態で由比ヶ浜がたははと笑う。その手は、お腹に乗った俺の足を愛おしそうに撫でていた。

「……ん、ああ、そうだな」

由比ヶ浜の指摘で初めて気付く。俺もじっとりという言葉では済まされないくらいに汗ばんでいた。２人して行為に心の底から没頭していたということをまざまざと見せつけられたようで、妙に気恥ずかしい。

照れて頭をがしがしと掻くと、由比ヶ浜の頭を撫でながら聞いた。

「由比ヶ浜……そろそろ、良いか？」

俺の声音の違いを感じ取ったのか、由比ヶ浜が目を見開いて動きを止める。

「え、それって……」

「……分かってんだろ？」

言って、由比ヶ浜のあごを撫でる。「んふぅ……っ」と気持ち良さそうな声を上げて、俺の手にじゃれつくように手を絡めた。

「あ、や、うん、まあ、その……あ、あの……」

目を逸らしながら、しどろもどろに言葉を淀ませる。

由比ヶ浜の首筋に手を伸ばし、くいっと起こした。そして正面から相対する体勢にすると、由比ヶ浜が女の子座りをしながら何事かと首を傾げる。

ぐっと首に力を入れて、視線を強める。由比ヶ浜を俺の変化を見て、喉をこきゅっと鳴らした。

「由比ヶ浜。俺は、お前と、今、ここで――」

言いかけたところで、
「結衣」
――かぶせるように、そう言われた。
「……え」
突然のことに混乱していると、由比ヶ浜がふっと微笑んだ。
「あたしのこと、結衣って呼んで？　そしたらあたしも、……勇気、出るから……」
俺の手を握り締めながら、頬を赤らめて上目遣いでこちらを見る。
その表情が、たまらなく可愛らしく、そして微笑ましくて。
でも恥ずかしいなあこれ……なんて思いながら、頭をがしがしと掻く。照れ笑いを浮かべながら、由比ヶ浜を見た。
「分かったよ……結衣」
「……っ、また呼んでくれた……っ！」
由比ヶ浜が……いや、結衣が、嬉しそうに声を上げながら俺に抱き付いてくる。1年近く前の結衣の誕生日パーティーで一度だけ言った事を、律儀にも覚えていてくれたらしい。
「うぐぉっ」
抱き付きの勢いが思いの外強くて、ベッドに転がった。「あ、ごめん……」と謝る結衣を見て俺が笑い、そんな俺を見て結衣が釣られて笑う。
2人のこんな空気が、割と好きかもしれない。
「えへへ～、もっと呼んで呼んで～……」
「え、や、ちょ、こら、あんまりすりすりすんなって」
結衣が俺と頬をこすり合わせ、犬ばりの懐き方を見せてくる。裸と裸の状態でやるもんだから気恥ずかしいし柔らかいし気持ち良いし良い匂いがするしでもう大変。しっぽが生えていたら全力でぶんぶん振ってそう。
そのあと結衣って１００回言わされた。ピンク髪と巨乳繋がりかなぁ。
×　×　×
「……んちゅっ、ちゅぴ、ちゅる、ちゅぷぷ、じゅるじゅる……ん

はぁっ」
　じゃれつきが終わり、今度は同じじゃれつきでも互いの目の色が変わっていた。俺は胡坐で、結衣は俺の脇に足を置くようにして体育座りの形になり、抱きしめ合いながら濃厚に口付けを交わす。舌を絡め、互いの唇をついばみ、熱い唾液と湿り気のある吐息を交換する度に結衣はうっとりとした表情になっていく。俺の肉棒もぎちぎちに勃っていて、結衣のへそにぐいぐいと押し付けられていた。
　結衣の乳房に手を伸ばすと、目を見開いて、俺の首に回した腕に力を込める。１０本の指が豊かな柔肉に沈み込んでいくと、結衣がぶるりと震えた。
「んはぁぁぁ……っ、あ、だめっ、なんか、さっきより気持ち良くなって……うぅぅ……っ」
「……っ」
　恍惚とした表情で涙目になりながら快感を訴える結衣に見惚れてしまって。
　――思わず。
「結衣……可愛いよ」
「あふぁっ!?」
　耳元で囁きながら２つの突起を摘まむと、結衣が身体全体をビクンと震わせた。単に胸を責めている時に比べて、今の反応は明らかに大きい。これはもしかして……？
　今度は耳に唇を付けながら、俺自身も恥ずかしい言葉を連呼する。
「結衣、すげぇエロいし、すげぇ可愛いよ」
　息混じりの声で囁きながら、突起を人差し指と親指で摘まんで、残りの６本の指で柔肉を堪能する。
「あぁぁっ……だ、だめ、それ、やばい、やばいからぁっ……」
「なんでだ？　さっき散々名前で呼ばせたじゃねぇか」
「そ、そうだけどぉ……っ」
　徐々に言葉に力が無くなり、代わりに色を帯びてくる。
「ほら、結衣、どこが気持ち良いか言ってくれよ」
　ねちっこく言葉を続けると、由比ヶ浜が益々色っぽい反応を見せ

る。
「あぇっ……かはっ、やぁっ、い、いじめないでぇ……っ」
開いた口の上唇と下唇との間には糸が引き、目も虚ろなものになる。
――と、不意に、結衣のへそに押し付けている肉棒にむずがゆい快感が走った。
「うっ……？」
見ると、結衣が１０本の指を絡ませて、愛おしそうに包み込んでさすっている。
「ヒッキーの熱い……よぉっ、胸、気持ち良いよぉ……っ」
「……っ」
声を震わせる由比ヶ浜の切なげな表情と、２人の間のシーツに広がる染みと、互いの匂いが混じった淫猥な空気に酔いしれて。
「……結衣……っ」
肩を掴んで、ゆっくりと結衣を押し倒した。
× × ×
「ヒッキー……良いよ、来て？」
仰向けになって、胸の上で手を重ねた由比ヶ浜が囁く。
こくんと頷くと、弾む呼吸を必死で抑えながら、肉棒を結衣の先に宛がった。挿れるのは生まれて初めてだが、指での愛撫の甲斐あってか、大体の目星はついている。
「ここで……大丈夫か？」
念の為聞くと、結衣がこくりと頷く。
「ん……大丈夫。来て……」
結衣が、覚悟を決めた微笑みを浮かべる。
「行くぞ……っ」
肉棒を掴んで固定しながらゆっくりと体重をかけていくと、亀頭がゆっくりと結衣の中に呑み込まれていく。それと同時に、今まで体感したことのない熱い感触に亀頭が包み込まれて、衝撃が走った。
「ひぐぅっ……！」
結衣が苦悶とも喘ぎともつかない声を出す。

「大丈夫か？」
「んっ……大丈夫、えへへ、ヒッキーが濡らしてくれたからかな？　意外と平気。……もっと、奥まで来て」
「……ん。わかった」
ゆっくりと、慎重に、体重をかけていく。結衣はゆっくりと息を吐きながら俺のモノを受け入れていく。結衣の中はきつきつで締め付けが尋常でなく、腰を振るも何も、僅かに気を抜いただけでもあっと言う間に出てしまいそうだ。
途中で、何か引っかかるものがあった。ああ、これが……。
結衣の顔を見ると、少なからず緊張しているのがわかった。何か俺に出来ないか……と考えて、ふと閃く。
「結衣……んっ」
「んっ……ふむぅっ？」
唇を重ねると、結衣の緊張が少しほぐれたのが感覚で分かった。
「……ぷはっ。……大丈夫だから、な？」
「……ん。ありがと」
由比ヶ浜の手が、するりと首の後ろに伸びて俺を包み込む。
勇気を出して、更に体重をかけた。

続く。

（２４）

「んんん……っ！」

結衣の呻き声が耳朶を打つ。ぐぐっと肉棒を押し込んで行くと――

「……うおっ？」

破けた、という感覚は無いのだが、ある時、不意に結衣の膣の中が広がるような感覚があった。直感的に「貫通した」という感覚が分かったと同時に、結衣が俺を抱きしめる腕に力を急激に込める。

「うぅぅっ……うぅぅ……っ！」

……っ。

涙目だった。身体も再び、先程以上に強張っている。どうにかしてあげたくて、再び唇を合わせた。

「んむぅっ、ひっ、ひっ、んっく、んんん……っ」

俺と必死で舌を交わらせる結衣の頬に、っっっと涙が伝う。少しは表情が和らいだが、まだ辛そうだ。

もっと何とかしたいと思い、手をゆっくりと、愛おしみながら乳房に這わせると、結衣の反応に変化が訪れた。

「んむぅっ……？　んっ、ふっ、ふぅっ、んん……っ」

涙が止まり、俺の下で悩まし気に身体をくねらせる。進行を止めていた肉棒を、まるで更なる奥に誘おうとするかのように吸い付き、締め付けてくる。

誘われるがまま、体重を掛けて再び肉棒を膣の中に埋め込んでいくと、結衣がぷはっと唇を離した。

「んはぁ……っ！　あっ、やぁっ、なんか、すごっ、さっきと、ぜんぜん、ちがうよぉっ……」

俺の肩を掴み、戸惑ったように首を振る。

「良かった……もっと、気持ち良くなってくれ」

言って、結衣の突起に吸い付く。

「ひあぁっ!?」

電撃が走ったかのように身体を反らせると同時に、肉襞がぐにゅぐ

にゅと締め付けてくる。
「うあっ……すげ、結衣、お前の中、めちゃくちゃ締め付けてくる……っ！」
「ひぐぅっ……やんっ、言わないでぇっ……」
顔を手で隠していやいやと首を振る結衣を愛おしく思いながらも、少し余裕が出てきたのか、悪魔的な案が浮かぶ。
「……ダメだ、顔も、声も、隠すなよ」
結衣の手を掴み、頭の上で手首を重ねてそれを俺が左手1本で固定し、右手は結衣の左の乳房を鷲掴みにして、右の乳房の突起に吸い付く。それと同時に、一気に最奥まで肉棒をねじ込んだ。
——と。
「〜〜〜〜〜〜ひあぁぁぁぁぁぁっ！」
一際大きな喘ぎ声を上げて、結衣の全身が痙攣し、股間から温かな液体が噴き出した。それと同時に肉棒がぎちゅぎちゅと締め付けられ、心地良い快感が頭を貫く。
「結衣……イったんだな」
「あ〜っ、あ〜っ、あっ、あっ、……あぁっ、ひっ、ひっ、ひっ……」
確認したが、返事は無い。しかしこの反応は十二分にイエスと取れた。
結衣の奥で、こつんと何かに当たる感触がする。これが子宮の入り口なのだろうか？　腰をぐりぐりと押し込んで突いてやると身体がびくんと跳ねる。責める場所を確認してずるりと竿を抜きにかかると、自分の中から逃がすまいと肉襞全体で揉みしだくように締め付けてくる。
「……俺も、イクまでやるぞ」
亀頭だけが残ったところでそう宣言して、一気に子宮の入り口にノックする所まで腰を打ち付ける。その瞬間、結衣は目を見開いて、
「あっ……んあぁぁぁぁ……っ！」
あごを反らせた。
上気した顔は、ひどく淫らで、そしてどこまでも綺麗だった。
×　×　×

ばちゅっ、どちゅっ、ぼちゅっ、じゅぽっ、ぱぢゅっ……。
「あぁっ！　んっく、ひっく、んひぃっ！　うっく、だ、だめ、もうおかしくなってるよぉっ、ヒッキー、これ、もうっ、あぁぁっ……！」
結衣の乳房を両手で蹂躙しながら、幾度となく抽送を行う。一気に突き入れると俺を跳ね飛ばさんばかりの勢いで背中を反らし、ゆっくり抜き差しすると「んあぁぁ……」と獣じみた声を上げてあごを逸らした。既に何度か達していて、膣の中の肉棒もすっかりと淫液漬けになっていた。
キスと胸への愛撫をきっかけに開かれた結衣の身体は、想像以上に淫らで、包容力があって、気持ち良かった。正直、これから毎日したくなるのが目に見えている。こんな、愛情を伴った快感を知ってしまったらも、もうこの行為に及ぶ前の生活には戻れない。
「ゆ、結衣……。俺、もう、出そうだ……っ」
腰を打ち付けながら言うと、結衣がこくこくと頷いた。
「ヒッキー、きて……んひぃんっ！　きて、きて、きて……っ！」
涙目で微笑みながら、何度も言う。たわわな乳房を揉みしだいていた手に結衣の手が重ねられて、手を繋ぎたいという意思表示をしていることに気付く。結衣の顔の横で手を重ねて置くと、結衣は幸せそうに、にこやかに笑った。
「結衣、結衣、結衣……っ！」
打ち付ける速度は最大限に上げる。
「あっ、ふあぁんっ！　ヒッキー、ヒッキー、ヒッキー……っ！」
互いに何度も呼び合い目合（まぐわ）って、汗ばんだ身体を密着させ、体液を交わらせ、匂いを絡み合わせる。こんな行為を知ることが出来たことが、たまらなく幸せだった。
「あっ……もう、出る、出る、出る……っ！」
マグマの奔流が身体の奥底から込み上げる感覚がして、結衣と唇を重ねる。
そして、唇を重ねると同時に。
『～～～～～～～っ！』
あまりの快感に、２人して唇が弾けるように離れた。それとは対照

的に、重ねた手は強く強く握られる。
射精が始まると、膣がそれに反応してあらん限り搾り取ろうと収縮して、根こそぎ吸い出してくる。
ごぶぶっ、ごぶっ、ぶりゅりゅっ、どぶっ、どぶっ、どぶっ……。
「あっ、あっ、ひっ、ひぃんっ！　ひぁっ、あっ、……あっ、……あっ、……あっ……」
脈打つのに合わせて、結衣が艶めかしい声を上げる。
「はぁ……はぁ……結衣……」
とてつもない満足感と幸福感に浸りながら、結衣と再び口付けを交わす。軽い口付けにしようとしたんだが、舌を入れられたので結局濃厚なものになった。
「ちゅぱっ……はぁ、はぁ、はぁ……。……ヒッキー……あたし、すごい幸せ」
そう言って目を細める結衣の顔を見て、胸がとくんと鳴る。
「俺もだよ」
言って、もう一度唇を重ねた。

×　×　×

秘裂から肉棒を抜き出すと、白濁液がごぶっと溢れ出した。まだ射精の余韻で思考がぼやけていても、この光景には息を呑む。
結衣の横にこてんと寝転がると、すりすりと甘えてきた。
「えへへ～、ヒッキー、ヒッキー……」
「ん、どうした」
「ヒッキー、ヒッキー……えへへ～」
「……」
……さいですか。
呼びたいだけらしいと納得して、大仕事を終えた心地良い気だるさに包まれて目を閉じようとすると、不意に快感が走る。
「……っ？」
何事かと視線を下に滑らせると、結衣が俺の乳首に吸い付いていた。
「ちょっ、こ、こら、お前何し……くおぉっ……」

結衣の舌先が俺の乳首をつんつんとつつき、連続的な細かい快感に身体が震える。いつの間にか俺の上に乗り、上目遣いで俺の反応を見てくるその目は熱っぽい。
「ヒッキー……もっと、出来る？」
「え、お前、さっきあれだけイって……」
と、戸惑っている間も乳首への愛撫は続く。いつの間にかもう片方の乳首は指でくりくりと摘まれていて、その手つきが心なしか俺に似ている。……あれ、なんかやり返されてる？
「大丈夫、今度はあたしが上になるから……」
や、そういう問題じゃなくてですね……。
俺が何も言わないのを肯定と捉えたのか、結衣が俺の肉棒の真上に立ち、ゆっくりと腰を下ろしＭ字の形をとる。
……うん、まあ良いか。

続く。

（２５）

「あぉ……んんんん……っ！」

俺の腹に手を添えて、結衣がゆっくりと腰を下ろす。赤みを帯びた襞に肉棒がくむくむと食べられていく様に、思わず息を呑む。亀頭をつぷりと飲み込むと、結衣が荒い息を漏らした。

「さ……さっきと角度が違って、これ、すごっ……すごいよぉ……っ」

ふるふると震えながら、亀頭を咥え込んだまま愛おしそうに腰を前後左右に振る。先端だけがきちゅきちゅと締め付けられ、身体が歓喜で震えた。頬を朱に染めてゆっくりと肉棒を味わっているその艶姿に、思わず腰を突き上げたくなる。だが今は結衣が能動的に楽しむ番だ。大人しく見守る事にする。

更に腰を沈ませていくと、結衣の唇が戦慄いて、かすかに口の端で唾液が光って見えた。

「ふぅっ、くふぅぅ……」

ゆっくり味わおうとしてそれがかえって快感を助長しているようで、背筋の曲げ伸ばしを繰り返している。

「結衣、大丈夫か……？」

「だ、大丈夫だよ。えへへ、ありがとう。んんっ……」

にへらっと笑うと、再び腰を下ろしていく。

俺の腹に添えていた結衣の手が徐々に上ってきて、不意に俺の乳首を摘まんだ。

「うっ……」

予期していなかった快感に呻いて、肉棒がぴくりと反応した、その瞬間。

「ふあぁぁっ!?」

肉棒の動きに肉襞が激しく反応して、急激に締め付けてくる。元々限界すれすれだったのか、結衣の腰ががくがくと震えて、やがて、

「――あっ」

どちゅんっ、といやらしい音を立てて、結衣の腰が一気に沈み、肉棒の先端が子宮の入り口を小突いた。結衣は俺の上に倒れかかり、胸

に柔らかな感触が押し付けられる。
「あっ、あっ、あっ、あぁっ……」
散々耐えていたのに、不意に一気に貫かれてしまって、限界を越えたのだろう。結衣は俺の耳元で断続的に声を上げながら、熱の篭った秘部から淫液を溢れ出させた。
あまりに卑猥な光景に、もう我慢が出来なくなり、結衣の豊かな尻を鷲掴みにしてぐいと持ち上げると、腰の突き出しに合わせて一気に引き下ろした。
ずぱんっ！　という激しい音と共に、
「ひあぁっ!?」
結衣が目をむいて悲鳴に似た喘ぎ声を上げ、一気に身体を起こして膝立ちになる。それに構わず、力技で尻を持ち合げ、再び突き立てる。その度に結衣の身体は跳ね上がり、そして――
「……うおっ」
――ぶるんぶるんと、たわわな双丘が揺れた。もっと見たくなり、腰と手の動きを速める。
ずぱんっ、じゅぽっ、じゅぱんっ、ずるる、だぱんっ、じゅぐぐ……。
「あっ、かはっ、あぇっ、い、息、出来なっ……」
抵抗する力も無いのか、結衣はただ喘ぎに喘ぐ。結衣の声の力の無さとは対照的に、豊かな乳房は弾力のある揺れ方をして、膣内は突き上げる度に悦び戦慄いて竿を包み込んで、引き抜く度に名残惜しそうに締め付けて引き止めてくる。
手を伸ばして柔肉を鷲掴みにすると、結衣が「あぅっ、これ以上、あっ、だっ、だめ……っ」と言いながら、俺の二の腕を掴んできた。しかし掴んだ手に力は無く、ただ手の置き場所を見付けただけのように見える。だめと言いながらも、腰をぐねぐねと本能のままに動かすその姿は止めどない興奮を誘う。
「結衣。また出すぞ。良いな」
掴んだ乳房を引っ張ることで抽送を激しくしていると、限界が近付いてきたので結衣に呼びかける。
「らひてぇっ……もっ、むりらからぁっ、らひてぇっ……」

涙目で涎を垂らしながら、結衣が何度も頷く。
「イクっ……ぞ……っ！」
噴射の瞬間、結衣の突起を強烈な力で摘まんで引っ張る。
「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……っ」
目をしばたたかせて獣じみた声を上げる結衣の子宮に、大量の白濁液を噴き出した。
ごぶっ、どぶぶっ、どぶどぶどぶっ、と、ついさっき射精したのがまるで無かったことになったいるかのように、大量の精液が飛び出てくる。
「あっ、うぁっ、ヒッキー、お腹、熱いよぉ……とくとくって言ってるぅ……」
「……っ」
口の端から涎を垂らしながら、うっとりとした顔をしてお腹を幸せそうに撫でる結衣を見て、気が狂う程の興奮を覚える。
だから、くたりと寄りかかる結衣を優しく抱きしめて――
「結衣……よっ」
「あふぁぁっ!?」
最後にもう一度だけ突くと、残っていた白濁液が噴き出し、結衣の秘部からもぷしゃっと淫液が溢れた。
× × ×
「はぁ、はぁ、はぁ……って、そういやまだ夕方なのか……」
結衣から肉棒を引き抜き、並んで寝転がっていると、ふと現実に帰った。そうだ、まだまだ時間は余裕じゃん……。
隣の結衣を見やると、すうすうと穏やかな寝息を立てている。このまま寝かせておくのが良いだろう。
最低限拭けるだけ拭いて、しばらく寝るか――と思って身体を起こすと、お腹を撫でる手に気付いた。
「あ、起こしちまったか。わるいな」
「ん、大丈夫。ヒッキーの、綺麗にしてなかった……」
「えっ、ちょっ、ええっ……!?」
上体を起こした俺の肉棒に手を触れたかと思うと、女の子座りに

なって背を丸めて、ぱくりと咥え込んできた。あっと言う間すぎて、何の反応も出来ない内に、下腹部に温かな快感が走る。
「ちゅぷ、ちゅぷ、ちゅるる、あむっ、あぐっ、あぐっ、ちゅるるる……」
「あっ、うぁっ、お、おい、もう綺麗になったから……ってかなんでまた甘噛みしてんだよ……」
なんてツッコミを意に介される訳も無く。
俺が気持ち良いと思う場所をすっかり心得たのか、ついさっきの射精は何だったのかと思う程あっと言う間に高まってしまう。
「結衣、もう……っ！」
「ん……っ」
俺の声に応えて、結衣がより一層深く咥え込み、迸る白濁液を喉奥で迎えてくれる。
「んっ、んっ、んふぅっ、んっ、んっ……」
「……」
こくこくと飲み込む様を、呆然と見守る。
口を輪の形にして頬をすぼめて吸い付き、最後の一滴まで搾り取ると、にこやかに笑った。
「ん、綺麗になったね」
「ああ……でも……」
「あ……」
お掃除フェラで興奮して、また勃起してしまった。
「……もうちょっと、良いか？」
「……ふふっ、しょうがないなぁ、ヒッキーは」
「うるせぇ、お前がエロいから悪いんだ」
「お前？」
「うっ……判定厳しすぎんだろ。さっきずっと呼んでたのに」
「毎回呼ばないとだめー」
いたずらっぽく笑ってわざとらしくそっぽを向く姿は、妙に愛くるしい。
「……結衣」
「ん、なぁに？」

名前を呼ぶと、優しい声で返事をされた。何となく、この声をずっと聞いていたいなと思った。
「……行くぞ」
「……ん」
時間の感覚も忘れて、夕飯時までずっと身体を重ねた。
× × ×
そういや小町と夕食の話してねぇじゃんと思っていたら、既に料理を始めてくれていた。
「結衣さんはアレですね、エロエロですね」
隣の自室で休んでいた小町には一部始終が聞こえていたらしく（そりゃそうだって話だけど）、ぽろりと言った言葉に結衣は耳まで真っ赤にしていた。ちなみに俺も、結衣の名を呼ぶ時の真似を小町にされて、首根っこを掴んでぷらぷら吊るしてやった。はちまん。こまち。つるす。
俺と結衣をからかい、俺に吊るされながらも小町は手際良く準備をしてくれて（吊るされる直前に、煮込みの待ち時間を設けていた。器用すぎる）、お昼同様3人で食卓を囲む。
「……」
ふと、隣でにこにこと美味しそうにご飯にぱくついている結衣を見やる。俺の視線に気付いた結衣が、こちらを向いて小首を傾げた。
「？　どしたの？」
「や、なんでもねぇよ」
ふいと目を背けながら言う。少し顔が熱い。
「？　そっか。あはは、ヒッキー変なの～」
「……うっせ」
なんであんなに自然と見つめてしまったんだか……と思っていると。
『え』
今のやりとりを見て、なのかは分からないけれど。
小町が向かいで血を吐いて椅子の背にもたれかかっていた。口からなんか魂的なのが出てる。ご、ごめんね……。

「あ、あはは……小町ちゃん、どうしたんだろうね」
結衣が箸を持ちながら頬をぽりぽり。……と、俺を見た結衣が小さく「あれ？」と呟いて、俺の頬に手を伸ばしてきた。え、なに、ここで――？　としょうもないことを思っていると、
「ほら、ごはんつぶ付いてたよ。んっ」
俺の頬に付いていたごはんつぶを指で取って俺に見せ、そのままひょいと食べてしまった。
「え……っ」
何この恥ずかしすぎるイベント……と思っていると、結衣も今のやりとりの恥ずかしさに気付いたらしく、
「……あっ……」
消えそうな程小さな声で呟いて、顔を真っ赤にした。
「がふぁっ！　……追い打ち……」
小町が派手に吐血して、びくんびくんと痙攣して動きがぱたりと止んだ。う、ううん、ごめんね……。
結衣はしばらく俯いていたかと思うと、もじもじしながら上目遣いでこちらを見た。
「あ、その……今みたいなの、これからも……やって、良い？　大丈」
「是非ともよろしくお願いします」
「早いな!?」
こんなやりとりも心地良い。
結衣の頬に手を当てると、くすぐったそうにしながら俺の手の上に自分の手を重ねて、愛おしそうに目を細めた。
これからの日々が、割と楽しくなるんじゃないかと思った。多分割と体力を消耗するし、料理で死ぬ危険性もあるけれど。
まあ、なるようになるだろう。この子となら。
結衣の笑顔を見て、そう思った。

お終い。

間違いなく、一色いろははお砂糖とスパイスと素敵な何かでできている。

（1）

1.

冬のある日。

今日も奉仕部の部室はヒーターのおかげでぽかぽかぬくぬくである。

一度修理に出してからは、この子は快調そのものだ。

「ね、ね、ゆきのん。今度ここ遊び行ってみない？」

「あ、ちょ、ちょっと、由比ヶ浜さん、話は聞くから、もう少し離れて……」

今日も由比ヶ浜も雪ノ下のゆるゆりコンビは絶好調である。

なんかもう、由比ヶ浜ももう少し強引に行ったら、雪ノ下を押し倒せるんじゃないかって最近割と真剣に思ってる。ゆるゆりが進化してがちゆりになるにゃわーん。

「あー、その店、わたしも行ってみたいんですよねー。と、いう訳です、先輩」

「いや、何がどういう訳なんだよ……」

ていうかそもそもなーんでこいつがいるんですかね……。

一色は、まるでここに居るのがさも当然であるかのように居座り、俺の質問に対しても『はぁ？』と言わんばかりの勢いで小首を傾げている。くそ、腹立つけど可愛いなこいつ……。

「あ、そうだ」

一色がぽんと手を叩く。

「今日は生徒会のちょっとした仕事があるんでした」

「じゃあなんでここに居るんだよお前」

すると一色は頬をむーと膨らませて俺を睨んでくる。

「残りちょっとしかない仕事で、わたしが居残って終わらせることが出来るような仕事なんですよー」

「ならちゃっちゃと終わらせてくればいいだろ」
「それが、わたし一人だと微妙に今日中に終わらないんですよねー」
「それ言ってることおかしいだろ……あ。……おい、まさか」
瞬間的に、自分の顔が青ざめるのが分かる。
「なので、雪ノ下先輩、結衣先輩、先輩をお借りしていいですか？」
一色はきゃるんっと笑って、図々しくお願いしてきた。
や、俺の意志はどこ行ったの？
二人を見ると、ぴたりと動きを止めている。
え、どういう状況？
「一色さん」
「は、はいっ」
雪ノ下の冷たい声音に、一色は跳ねるように背筋を伸ばす。
仲良くはなったけど、未だにこの辺は慣れないのね……。
「比企谷くんは奉仕部の所有物だから、あまり頻繁に貸出はしたくないのだけど」
「え、なに、俺って人の扱いを受けてなかったの？　部員名簿に載ってる？　大丈夫？」
言うと、雪ノ下が首をくりんっと傾げた。妙に可愛いからやめろよそれ……。
「……備品欄、かしら？」
「おい、人を椅子や机と一緒にすんじゃねえよ」
「あら、ペンよりは値段は張ると思っているわよ？」
「ねえ、俺が椅子や机を例として挙げた後になんでわざわざペンを引き合いに出すの？　俺は椅子や机未満なの？」
「……」
「なんか言ってくれよ……」
泣くぞ。
「まあ、比企谷くんの価値の議論は時間の無駄だから置いておくとして」
置くなよ。俺の人生とかプライドとか色んなもんがかかってんだぞ。

「比企谷くんを貸し出すのは、気が乗らないわね……」
「はわわわわ……」
雪ノ下の、言い方はそれなりに遠回しなものの、明らかに冷たく拒絶していることが分かる声音に、一色が震えあがっている。
負けないで！　いや、ごめん、やっぱ負けて！
「むむむ……」
一色はこめかみに指を当てて難しそうな顔をしている。なーんかやな予感がするんですけど……。
数秒後、一色はぱっと目を見開いて何かを閃いたような表情をしたかと思うと、突然わざとらしく俺に流し目を送り始めた。やばい。超怖い。怖可愛恐い。
「はぁ……卓球」
「うぐっ……!?」
えらい最近の記憶にあるワードが、一色の口から漏れ出た。
「はぁぁ……ラーメン……」
「うぐうっ……!?」
記憶がどんどんとはっきりしていく。まずい、雪ノ下と由比ヶ浜が訝しげにこちらを見ている。
「はぁぁぁ……カフェ……」
「うぐうぉっ……!?」
こ、こいつ……！
フリーペーパー作成の時に俺を脅す材料に使ったデートの件を、ここでまたぶり返すだと……!?
雪ノ下と由比ヶ浜は、俺と一色がカフェで一緒に写ってる写真を見ちゃってるから、最後のカフェという単語を聞いたことで、その前の卓球とラーメンが何を意味するのかを察しが付いたようで、二人してぎぎぎと首をこちらへ向けてきた。
雪ノ下はもう、雪女。うん、雪女。殺さないで！　雪の城を作って引きこもって！
由比ヶ浜は眉をひそめてむむーっと唸っている。やばい。吠えられる。侵入したのがバレる！

まずい。これは、非常にまずい。
一色を見ると、もう「お前の運命は私が握っているのだよ」顔をしてやがる。超腹立つ……。
とにかく、この場に居ては取り返しがつかないことになる。多分２０分後くらいに、全身噛み跡だらけの俺の凍死体が見付かる。俺の死に際、苛烈過ぎない？
「と、取り敢えず、一色、廊下出るか、廊下！　な！」
「ひゃっ!?」
馬鹿みたいに取り乱しながら、一色の背中に手を添えて教室を出る。一色が何やら変な声を出したけど気にしない。
「ちょ、ヒッキー!?」
「……」
二人の方を一瞬見て、ごめんと手で謝りながら教室のドアを閉めた。
雪ノ下さん、その沈黙超怖いです……。
「ふぅ……まったくお前は……って、一色？」
一色を見ると、さっきまでとは打って変わって、顔を赤くしてしおらしくなっていた。え、なんでなんで？
俺から目を逸らしたまま、もじもじとしている。
「……いきなり触るのは……ちょっと、どきどきするんでやめてもら……」
ぴたっと言葉と動きを止めると、一色がものすごい勢いで俺を振り返る。
「はっ！　もしかして今わたしとスキンシップを図ることで距離を縮めるなんて安直なアプローチをしてたんですがそういうのはもっと流れを作ってからやってもらわないとこっちとしてもリアクションに余裕がなくなっちゃうしなんかもうとにかくごめんなさい」
……。
「……いや、その、悪かった……」
最後、ごめんなさいって言うまでの繋ぎ雑になってない？
ふいー、ふいーとわざとらしく息を整えると、一色は再びくるりと

振り返る。
「それじゃ、生徒会室に行きましょう」
「お、おう……」
もう、手伝うことが決定してた……。
2.
静かな生徒会室に、俺がパソコンのキーボードを打つ音と、一色がさらさらと書類に何かを書き込んでいる音がひたすら響く。
……本気でガチの、雑用☆
いや別に、一色と二人でおしゃべりする期待感とかそんなの芥程も無かったけどね？
なんか純粋にこき使われてる感が否めないんですけど……。
取り敢えず、作業しながらでも何か話さないと間が持たない。というか俺のメンタルが持たない。
キーボードを打つ手を止め、パソコンの画面に視線を集中させたまま話を切り出す。
「あー、なんだ、一色、ちゃんと仕事してんだな」
「……なんですか急に？」
ごみを見る目で見ないでよぉ……。決死の話題提起をはたき落とさないでよぉ……。
「いや、今やってる仕事とかもそうだし、生徒会始まってから今までお前たちがやってきたこともちょこちょこ見てきたけど……頑張ってんだな」
「……あ、その……どうも、です……」
一色にしては珍しい、歯切れの悪い返事だ。
見ると、遠くを見ながら手で顔をぱたぱたと扇いでいる。
まあ、取り敢えず間を繋ぐことは出来ただろう。うん、きっと出来た気がする。
パソコンの画面に視線を戻して、再び黙々と作業を始めた。
隣でぽそりと「急に言うなんて……」とかなんとかって聞こえたけど、何のことだか分からないし、独り言だろうと思い聞き流すことにした。

続く。

（2）

1.

放課後の生徒会室には、相変わらず一色がペンを走らせる音と俺がパソコンのキーボードを打つ音だけが淡々と響いている。

一色をちらりと見るが、なんかもう完全に会話する気が無いようにしか見えない。いや、集中してるのは良いんですけど……ねえ？　なんかもうちょっと……楽しくなくても良いからこの場の空気を繋ぐ簡単な会話でも……などと思っていたら。

「先輩」

一色が、視線を紙に落としたまま、何の気なしに話しかけてきた。

おうふ、ちょうど良いところに。

「んー」

無駄にテンションが上がりそうになるのを何とか堪えて、いつものテイストで返事をする。

「先輩ってー、付き合ってる人はいないんですよね？」

……。

……んん？

ほーん。ここで突然の飛び道具？　急に来たね、急に！

この後の展開がどうなるか全く読めな過ぎて怖いんですけど。恐いって言うよりかは怖いって感じ。

一先ず、この話題には変にひねりを加えずに乗るしかない。

キーボードを打つ手を止めて、視線は画面に向けたまま、小さく息を吐いて吸った。

「……ああ、まあ、居ない……けど」

「ですよねー。前聞きましたしねー」

全く以て平坦な調子でのご回答。

くそ……っ、興味無さげに言いやがって……！

「じゃあ、付き合ったことはあるんですかー？」

あれ、この感じがまだ続くのん？　一色さん、気紛れが過ぎますよ？　帰りたくなってきた……。

この状況、俺にとっては質問タイムって言うよりは詰問タイム、もっと言えば尋問タイム、下手をすれば拷問タイムなんですけどね。
しかし、どう頭を捻って答えたところで、どうせ興味無さげな反応が返ってくるんだろう。
それならば、俺も何とはなしに答えちゃうおうじゃないの！
「ねえよ」
視線だけ横に動かし、一色の反応を窺う。
「……ふむふむ」
あれ。
あごに手を当てて、何やら考える仕草を見せていらっしゃる。
え、なにその反応？
ここで一色はついにペンを置いてしまい、椅子の向きをくるりと変えて俺を振り返る。
目が雑談のときに比べて、いくらか真剣味を帯びている。
「じゃあ、告白したことは？」
「……形式を問わないなら、何回か」
ちゃんと答えたぞ。瞬間的にトラウマと向き合ったぞ。やばい、超帰りたくなってきた！
一色をちらりと見たら、尋常でないほど悲しげな顔をしていた。
「……うわぁ……なんか、聞いちゃってごめんなさい」
「うるせえよ……」
すげえ気の毒がりながら引くんじゃねえよ……。
謝った場合の方が人を傷付けることがあることを知れ……！
俺をチラ見しながら、うわーうわーかわいそーとか鬼みたいなことをしばしぶつぶつと呟いていた一色が、突然動きをピタリと止めた。
足を揃えて、手を膝の上に置く。
拳が握られていて、何だか男子学生の卒業式みたいだ。
この妙な気合はなんなんだろうなんて思ったら、何か急にどきどきした。
こんなどきどき、あんまり経験無いぞ。
ちょっとこの数瞬の間に、過去のどきどき経験を振り返ってみたい

と思います。
①告白したとき。あとフラれた翌日、朝教室に入る時。
泣いちゃう。
②由比ヶ浜と行った花火大会の帰り。
思い出したら顔が熱くなってきた……。
③雪ノ下に笑顔で見つめられたとき。
心臓がどきどき動くって言うかびきびきと不自然に硬直してやがて止まりそう。
④戸塚とおしゃべりしているとき。
文句無しのどきどき。
結論：戸塚はただの天使。
なんてどうでも良い現実逃避をしてしまうくらいには、この数瞬は異常に長く感じられた。
一瞬俯いた一色が、くいと顔を上げる。
「……じゃ、じゃあ、告白された……ことは……あるんですか？」
どくん、と心臓が跳ねた。
一色は最初こそ俺を見つめていたが、言葉が進むにつれて視線がふわふわと漂い出して、どこを見るでもなくなっている。
「……ね、ねえよ？」
危うく裏返りそうになりながら答える。
緊張の余り一瞬視線をパソコンの画面に移すが、文字情報がまるで頭に入ってこない。
「……そ、そうです……か……」
ぽそりと呟くと、一色は再び作業に戻る。
今の質問は、どんな意図があってしたのか。
そして、もしかしたら一色は、今の質問をするためにわざわざこんな質問タイムを作っていたのか。
疑問は色々と尽きないけれど。
まあ、女の子にあれやこれやと聞くのも無粋だろう。
ふう、と短く息を吐く。
俺は、結局何も言うことなく作業を再開した。

２．
２０分程経った頃だろうか。
「先輩」
「ん」
一色が再び、紙から視線を上げることなく話しかけてきた。
なんか、この不思議な空気での会話に慣れてきた感があるな……。
仕事自体はだいぶ終わりが見えて来たのだろうか、一色の声音はさっきよりも幾分柔らかい。
両手を上にんんーっと伸ばして、ふいーっと息を吐くと、首をくるりとこちらに向けた。
「女の子の好みのタイプってありますか？」
「え？　……や、えっと……」
何、詰問タイム続いてたの？　そんな真実知りたくなかった！
「具体的に、芸能人とか……周りの、人とかでも、挙げてくれていいんですよ？」
声が、心なしか少し震えている。
両手を合わせて、指をこちょこちょと動かしていた。
「あ、あーっと、あ、そうだ」
「あ、はい、どうぞ」
初めての冠番組を持つＭＣみたいなふわふわ感を漂わせながら、一色が俺に回答の許可を与える。
「戸塚と、小町」
「却下」
……ふえぇ……ばっさり切るのに躊躇が無さ過ぎるよぉ……。
一色はどん引きした目で俺を一度見て、はあぁと分かりやすいため息を吐いた。
「うーん……じゃあ、先輩・同輩・後輩だとどれがタイプですか」
……詰問から逃げられない……。
なんか包囲網が狭められて行く。
「いや、そんなこと言われても……」
「じゃあ具体例出しますね。先輩だとはるさん先輩、城廻先輩かな。

それで同輩は雪ノ下先輩と結衣先輩。それで、後輩はわたし。さあ、誰を選ぶ!?」
なんだこのえげつない選択肢？
戸塚とか小町とか材木座とかが居ない分、ネタとかその他の成分で逃げることが出来ない。
しかも結構それっぽいところを並べやがってぇ……！
腕を組んでうんうん悩んでいると、一色がどんどん不機嫌になっているのに気付いた。ふぇぇ……怖いよぉ……後輩の女の子にビビるとか情けなすぎるよぉ……。
「……先輩、あんまり答えないと、今挙げた人一人一人の名前を順に言っていって、先輩の反応を見ますよ。すっごく見ますよ」
「え、なに、俺今質問されてるんじゃなくて責められてるの？　これ何の裁判？」
言うと、一色はふぃーとため息を吐いて、肩を竦めた。
馬鹿にした表情になるのかと思いきや、妙に温かみのある呆れ顔になった。
……ちょっと、小町っぽいかも。いやそんな筈はない。小町は唯一無二の天使だ。
優しい眼差しで見つめられてどきどきしていると、一色がゆっくり口を開いた。
「まったく……先輩はとことんこういう会話に弱いですね。もっと言えば女の子との会話に弱いです」
「いや待て、俺には」
「小町が、って言うのはもう絶対無しですよ？　言ったら引きます。超引きます」
……。
……何だろう、心臓を手で鷲掴みにされてる気分……。
「だから」
一色がこちらにずいと身を乗り出す。近い近い、顔が近い！
「先輩が女の子慣れをするのを、わたしが手伝ってあげましょう！」
えっへんと言わんばかりのドヤ顔で、すげえこと言われた。

「……いや、なんでだよ」
俺の抵抗の言葉を一切聞くことなく、一色はさっきよりも更に顔を近付け、両手をこちらの胸にとんと置いた。
そして、一瞬視線を伏せる。
その間が、妙な期待感を持たせてくる。
やがて顔を上げると、熱のこもった眼差しを向けてきた。
「先輩……。今、好きな人って、……いますか？」
熱くて、微かに甘い香りのする吐息が、鼻腔をくすぐった。
今にも泣き出しそうな、潤んだ瞳。
ごくりと息を呑みそうになったが、その音を聞かれまいと何とか堪えた。
「いない、けど……」
やっとのことで言葉を絞り出すと、一色がにっこり微笑んで、安堵の表情を浮かべた。
その表情に、いつものあざとさはなく、妙に少女っぽさがあって。
正直、ものすごくグッときた。
完全に固まっていると、一色が顔を離し、ふうぅと妙に長い息を吐いた。
「……はい、練習第1弾、終了です！」
「え、第1弾って何？　これ何弾かあんの？」
「さあて、どうでしょう？」
指を頬に添えながら、斜め上を見ながらわざとらしい声音でとぼけられた。ちくしょう……可愛いって思っちまったせいでツッコみ損ねた……！
3.
「……ふう。今日はこんなところですかね」
辺りがすっかり暗くなった頃、やっとのことで仕事から解放された。
「おう。お疲れ」
パソコンをちゃっちゃと片付けて、帰る準備をする。ああもう何かやたらと疲れましたよ今日は！　原因の十割はそこに居るあざと可

愛い後輩のせいですね！
部室に一瞬顔を出すか迷いながら立ち上がると、背中に何か温かいものが触れた。
「……え」
首だけ振り返ると、いつの間にか立ち上がっていた一色がこちらの背中に手を添えて、おでこをぽすっと当ててきていた。
え、何この恋人みたいな体勢？　今の二人の状況を横から見た場合を想像したら、それだけで顔が熱くなってきた……！
「先輩」
「はひゃい！」
「なんですかその声……もう」
さっきも垣間見えた、優しい呆れ声が、背中から沁み渡るように響く。
「明日、お昼ここでご一緒しませんか？　その……もうちょっと、先輩には練習が必要ですし……」
物理的な距離が近いからだろうか。
一色の言葉が、背中を伝って、直接心臓に響いたような気がした。
「や、いいってそんなの」
「……さっきの台詞、また言ってあげますよ……？」
「や、ちょっ、おいっ……？」
一色は、今度は俺の両肩に手を添えて、右耳をこちらの背中に当てるようにして、更に身体を密着させて来た。
胸がばっちり当たり、一色の心音がはっきり聞こえてきそうな程にくっついている。
「先輩さえ良ければ、別に今日だけ、明日だけじゃなくても、その後もいくらでも付き合いますよ？　それに、他の台詞だって言ってあげます。それに……」
一色が一呼吸置く。息に混じる声が、微かに震えていた。
「せ、先輩からわたしに何かする練習も……して、良いんですよ？」
……って、おぉぉぉぉぉぉいぃぃぃ！
思わず心の中で、材木座のウザいノリツッコミが発動してしまっ

た。
「え、そ、それ、どういう……」
どもりながら質問すると、とーんと背中を押された。
「うおっ!?　っとっと……何すんだ……」
振り返ると、一色がにこにこと満面の笑みを浮かべている。
そして俺の目の前まで歩み寄ると、
「それは、明日のお楽しみです！　……どうですか？」
上目遣いで、少し困ったように眉をひそめて、やや緊張した面持ちで一色が問い掛ける。
……。
……いや。
こんなの。
無理でしょ？
断るのなんて。
「……昼休みに、ここで良いんだな？」
頭をがしがしと掻きながら確認すると、一色の表情がぱぁっと明るくなった。
「はい！　よぉっし……よぉっし……」
俺に背を向けて、小さくガッツポーズしたように見えたのは気のせいだろうか。
数秒後、一色は妙にやる気に満ちた顔で振り返ると、ぱたぱたと手早く片付けを済ませて、俺の背中をぐいぐい押して、あっと言う間に生徒会室の鍵を閉めた。
取り留めのない会話をしながら校舎を歩いて外に出る。
駐輪場に差し掛かったとき、一色がぱたぱたと小走りで、俺から2、3歩前に出たかと思うと、くるりと振り返った。
「楽しみにしてますからね？」
言って、にひっと笑う。
「お、おう……」
普段のあざとさが欠片もない、あまりにも眩しいその笑顔に、思わず目を少しばかり逸らしてしまった。

「それじゃ、今日はありがとうございました！」
元気な挨拶をして、ぱたぱたと駆けて行く一色の後ろ姿を、ぼーっと眺めていた。
……あ、結局部室に顔出せなかったな。後でメールしとこう。
……なんなの、なんなのさあの子！　死んじゃう！　どきどきで死んじゃう！
明日以降……俺、どうなるんだろ？

続く。

（3）

1．

明くる日。

もう朝から全く落ち着かない。

教室の机で腕を枕にして寝ていても、妙にそわそわしてもぞもぞ顔を動かすもんだから、名も知らぬクラスメイトからは不気味がられ、川なんとかさんには信じられない程冷たい目をされ、由比ヶ浜には「ヒッキー、ちょっとっていうかだいぶキモいよ？　何があったか知らないけどもう少し抑えて！　……キモいし」となんかもう心配りと一緒に初めて部室で会話したときばりにキモいを連呼された。しかも耳元で、囁くように。

くすぐったいし優しく罵倒されるしで、何かに目覚めそうになったけど戸塚と挨拶したら何とかリセットされた。ふう、やはり戸塚は俺の人生には必須だな……。

2．

昼休み。

さっと購買に行ってパン2つを、更に途中の自販機でマッカンを買い盤石の体勢でいつもの場所へ……向かう程、うっかり忘れてしまう程、残念ながら今日これからのイベントの印象は薄くなかった。

忘れることが出来たら、後であいつにも自分にも言い訳が出来たんだけどなぁ……。

重い、というよりは落ち着かない足取りで、生徒会室へ向かう。

別に誰かに見られたからと言ってどうということもないのだけど、妙に周りを気にしてしまい、その結果俺の挙動は抜群に気持ち悪くなった。負けない！　何にだ。

こんこん、と。

控えめにノックをすると、中からはーいという気の抜けた声がした。

「失礼しまーす……」

生徒会室に入ると、一色が落ち着かないのか座りながらもぞもぞと

動いていた。
俺を見ると、若干驚いた表情を見せる。え、なんで？
「あ……本当に、来てくれた……」
ぽしょりと呟いて、ふいと目を逸らす。
「や、なんでだよ。あれだぞ、俺は誘われた時点でなら、どんなに暇であろうとありとあらゆる手段を用いて全力で断るが、一度受けた約束は絶対守るぞ。多分な」
「前半最悪な上に、なんで最後に多分って付け加えたんですか……」
のっけからドン引きである。
負けない。
ん？
一色の前の机を見やると、小さく可愛らしい弁当箱があった。
数は、２つ。
……んん？
「おい一色、その弁と」
「先輩の席はここですよー」
先輩の言葉をぶった切って、あざと可愛い後輩は自分の隣にある椅子をぽんぽんと叩いた。ほんと可愛くねえなこいつ……。
しかし、断るのも難なので、取り敢えず座る。
人目が無いのは助かるが、それはそれで何かとてつもない危機感を覚えるのは僕だけでしょうか。僕だけですね。
よっこいせと言いながら腰を下ろすと、ものの見事にドン引かれた。こいつ、俺に引いてばっかだな。……俺のせいだな。
「なあ、その弁当……」
気になったのでもう一度聞いてみたのだが、さっきの一色の五右衛門ばりのぶった切りが精神的に尾を引いたのか、語尾がすんごいふわっとした。超ダサい。
若干気恥ずかしさを覚えたが、気にしていても仕方ない。
一色の反応を窺うと、若干目を泳がせながら、
「あー、そのー、まあ、そのー……わたしがお昼を誘ったのもありますし、これでも一応先輩にはそれなりにお世話になってるというかむし

ろわたしがお世話してるっていうか……」
え、なに、さりげなく罵倒したいの？
どうせ、と。
一色は更に目を泳がせながら、言葉を続ける。
「普段は親御さんにも妹さんにもお弁当を作ってもらえず、専業主婦が夢だなんて言いながら大して料理の勉強もしていないであろう先輩のことをほんのちょっと頭の隅で考えてみてですね……」
ちょっと待って、視界が滲んできた。
この表現Ｊ―ＰＯＰでよく見るよね。素敵だけど。よく見る。
ベタなのは良いことだ。大事なのはそのベタな要素の組み合わせ方とそれを繰り出すタイミングと、後はさりげない繰り返しによる印象付けだ。急にどうしたんだ俺。
私、と。
裏返りそうな妙に危うい声で、ちょっとだけ声を張り、
「そ、そそ、その、先輩に、お弁当を作ってみました……！」
言うと、弁当の蓋を開け、俺の前に差し出した。
「おお……」
感嘆の声が、自然に漏れた。
一色の弁当箱は既に蓋が開いていたのだが（こいつ、俺を待ってる間に若干食いやがったな……）、そっちのとてもＪＫＪＫした弁当と比べて、こちらの弁当はサイズこそ一色のもの同様小ぶりなものの、唐揚げを筆頭とした肉類を主体にした、男が喜びそうな弁当であった。
なんか、意外。
弁当を自分で作って持ってくると言うのも、俺に合わせていつもは作らないであろうラインナップにしてくれたということも。
普段であればここでばっちり気の利かないことを言って冷たい目で見られるところだけれど。
素直に感動したので、率直に感想を言うことにする。
「すげえ美味そうだ。ありがとな」
言うと、一色の顔が一気に真っ赤になり、首をぶんぶんと振られた。

「ななな、なんですか後輩の可愛い女の子がお弁当を作ってきてくれたからって優しくお礼を言って素直で誠実アピールをしてなんだかんだで口説こうっていうつもりですかそういうのは何ていうかもっとお願いしますじゃなくてあれ私何言おうとしてたんだろうわわわわわ」

一色いろは、大混乱である。

実にメダパニ。

一色はスポーティーで左腕に包帯を巻いたド変態少女ではないし、俺は俺でロリで巨乳好きで妹にもキスしちゃうような鬼畜な吸血鬼もどきでもないけれど。

激しく息を切らしている一色に声を掛けてもあれかなと思い、ふーふー言ってる彼女をしばし見守る。

……。

なんか、息切れしてる感じ、妙に色っぽいなぁ……。

自分の右頬に軽くビンタして自制した。あっぶね。

いろはちゃん、息を切らしながらも青ざめてドン引かなくても良いと思うんですがね……。

3.

「ふう、じゃあ、先輩」

ようやく落ち着いた一色が、箸を出してアスパラベーコン巻を取ると、

「あーん」

極めて自然に。

まるで毎朝やっているかのように。

俺の口に差し出してきた。

「あーん……ってうおぉぉぉ!?」

口を開けて半ば入れかけちゃった。

あまりに自然で、なんかもう自分で食べてるかのような感覚だった。

あぶねえ、と息を切らしながら一色を見やると、ものすごい不快な顔をしていらっしゃる。

「……ちっ、あと少しだったのに」
……。
その台詞を言うの、登場人物を殺そうとしてた人か、ヒロインとかの重要人物の肉体に憑りつこうとして防がれたやつくらいだと思うんだけど……。
「先輩」
アスパラベーコン巻の標高をそのままに、一色が満面の笑みを浮かべる。待て、超怖い。
「お箸、一膳しか持ってきてませんからね？　だからと言ってわたしが使い終えた箸を先輩が堂々と使うなんて許せません。とても不快です」
だから、と。
「はい、あーん」
……いや。
だから、じゃねえよ。何そのえげつない手段？
しかし一色はまるで一時停止のボタンを押しでもしたかのように、笑顔で俺の口にアスパラベーコン巻を差し出したまま固まっている。罪悪感が半端ない。
「……あーん」
結局。
乗る事にした。
もぐもぐとじっくり噛み、ごくりと飲み込む。
嚥下の瞬間までまじまじと見られるの恥ずかしいんですけど……。
別にどこぞの美食屋マンガで出てくるみたいに、今食道を通ったとかそんな実感が湧く訳でもないから、なんかただじっと見られてるようにしか思えなくてやたら恥ずかしい。
「どう……ですか」
上目遣いで、少し不安げに一色が聞いてくる。
「ああ、美味いよ」
可愛い後輩め、なんて思ったからだろうか。
気付くと、一色の頭に手をぽすっと乗せて撫でていた。

やばい、引かれる！
なんて思ったのだけれど。
「あ、ありがとう、ございます……」
手を膝の上に置いて、俯きながらぽしょぽしょとお礼を言った。
……あっれー？
何この子。
もしかして、超可愛かったりする？
まさかまさか、そんなはずは――と。
悠長に考えていたら。
「はい、じゃあ先輩、続き行きますよ、あーん」
まさかの試合続行。
さっきはまだ、自然とは言いつつも恥じらいの感情が垣間見えたのだけれど、今度は悪戯心たっぷりな笑みだ。
「は、はあ!?　なんでだよ！」
「だから、さっき言ったじゃないですかー。箸は一膳しかないって。大人しく従ってください」
にやりと笑いながら、一色にそう言われた。
むう……。
考えていても仕方ない。
不満げにしながらも、乗っかることにした。
「じゃあ先輩、改めまして！　はい、あーん」
「あーん……」
薄目を開けながら、口をかぱっと開けて一色の箸とおかずを受け入れる。
――と。
ぱしゃりと、よく聞き覚えのある音がした。
「――え？」
見ると、一色が箸を持っていない方の手で携帯を持ち、思い切りこちらの写真を撮っていた。
「ふもえ（お前）！　ふわへんわ（ふざけんな）！」
「先輩、汚いから口開けないでくださーい」

俺の言葉を一切意に介さず、一色は携帯を弄っている。恐らく俺の写真をどうにかしているのだろう。
一色が、俺の写真を、どうにかしている。というのが非常に怖い。
はらはらしながらもぐもぐとしていると、やがて一色がにへっと満足気に笑い、携帯をしまった。
ようやく全て飲み込み、右手を一色に突き出す。
「おい、見せろ」
「やです！　……渡したら、最初の画面見ただけで何したかバレちゃうし……」
ぽそりと。
一色が何かを呟いたのが聞こえた。
4.
「ごちそうさまでした」
「はい、お粗末さまでした」
俺が挨拶をすると、一色が丁寧に応えてくれた。こういうとこ、意外とまめなんだよなーこいつ……。
結局、あの後全部あーんされた。
ついでに、パンも。
全部あーんされた。
一色の弁当はとても美味かったのだけれど、量は少なかったので意外とパン2つをプラスしてちょうど良いくらいだった。
じゃあいつもパン2つしか買わねえの、腹の具合に合ってねえじゃんって話なんだけれど。
「それじゃ、先輩、その……」
一色がすすすっとこちらに近寄り、流し目を送ってくる。
さっきまでとは明らかに違う雰囲気に、心拍数が急に上がるのを感じた。
「先輩が女の子慣れする練習、始めましょうか……」
照れながら微笑む一色を見て、妙に緊張してしまったのだろうか。
「あ、ああ。その……よろしくお願いひましゅ」
超噛んだ。

一色の目が「台無しだよこの野郎」ってめっちゃ言ってる。
直接言われるよりダメージでかいぞこれ……。
続く。

（４）

１．

昼休みの時間は、一色による強制あーんにより残り時間はわずかなものになっていた。強制あーんって語感がなんか凄い。

そんな訳で、この謎の練習の前に躊躇っている時間もあまり残されていない。

もしこれで５限に遅れて、その理由を部室で由比ヶ浜に聞かれでもしたら、雪の女王の猛攻にあっさり屈する自信がある。助けて！

「じゃ、じゃあ、行きます……よ？」

隣り合った状態で、互いに前を向いて視線を交わさぬまま、一色がぽそりと宣言する。

視界の端でもじもじするのが見えて、正直もう落ち着かないっていうか緊張で逃げ出したい……。

「……先輩。今、逃げ出したいとか思いませんでしたか？」

読まれた。

何とか弁解しようと、一色の首をぐるりと向けて、

「そ、そんなことないぞ。むしろぜひ言ってもらいたいくらい……だ……」

と、言って。

やらかしたことに気付く。

「あ、そ、そそ、そうですか……」

一色が全力で俺から目を背ける。

なんだろう。

唐突に、死にたくなった。

一色はそれでもすぐに切り替えようとしたのか、髪を手でちょいちょいと直し、胸に手を当て深く呼吸をすると、慎ましい胸が緩やかに上下した。慎ましいって言っちゃった。

こほん、それでは、と。

一色は首の向きは変えず、代わりにすすすと椅子を近付けて、俺に身を寄せるようにぴたりとくっつく。

近い近い近いいい匂い！
この距離感はまずい。距離感っていうか０距離感。
一色の二の腕の柔らかさが制服越しでも分かるなーとかつい考えちゃったけど。
テンぱったときの殺せんせーばりに目を泳がせていると、一色が顔をこちらに向けた。
さっきまでと、纏っている雰囲気がまるで違う。
この緊張感は、まるで。
告は――。
「先輩」
心の声を言い終える間も無く、一色が口を開いた。
「先輩……。今、好きな人って、……いますか？」
切なさを帯びて潤んだ瞳を、俺を真っ直ぐに見据える。
好き、というフレーズだけ、何故かほんの少し噛み締めるようにゆっくり言ったように聞こえたのは、俺の気のせいなのだろうか。
「いま……っぶねぇ！」
「……はぁ？」
俺のリアクション一つで、一色が一瞬でいつもの侮蔑モードに戻った。
簡単に説明すると、今俺は、一色のあまりの可愛さとこの密着具合にテンションがおかしくなり、一色の言葉に対して「います。今目の前にいるあなたです」とかって勢いで答えそうになった。
いや、ほんと危なかった。勢いって怖い。
一色はしらっとした目で見ている。
「……はぁ。なんなんですか、今のリアクションは。こんなんじゃまだ全然ダメですね、先輩」
立ち上がって、んーと伸びをしながら、呆れ顔で一色が言う。
「いや、どうしろってんだよ……」
何を言いかけたのかと追及されなかったのは、不幸中の幸いだろうか。
だから、と。

一色は唐突に切り出してきた。
「ほ、放課後……先輩が部活終わった後も……少し、練習しましょう？
場所はまたここで。今日は生徒会の仕事も無いけど、わたしは適当に仕事をでっち上げて一人で残っておきますから」
でっち上げるって。いいのかそれ？
「い、いや、でも」
「今度は」
反駁の言葉をまたしてもぶった切られた。お前はどこの抜刀斎だ。
「……先輩から、その、わたしにする、練習をします」
「え」
本当にやるの？　ていうか何させられるの？　超怖いんですけど。
一色は更にまくし立てるように、手をぶんぶんと振りながら鼻をふんすっと鳴らす。いちいちあざと可愛いなこいつは……。
「絶対ですよ。来てくださいね。先輩の連絡先知らないから、ドタキャンなんかされたらわたし泣いちゃいますよ。泣いて泣いて泣いて先輩を学校社会的に終わらせますよ」
「それは勘弁してくれ……」
そのあざといキャラと生徒会長という立ち位置をフルに利用されたら、それこそあっと言う間にぼこぼこにされてしまう。俺のＨＰに対して攻撃力が高すぎる。物語の最初に出てくるぶちスライムにバイキルト&ばくれつけんをかますくらい攻撃力が余っている。
「いいですか」
「……わーかったよ。いつもの部活終わりの時間まで待ってろ」
あー、その、なんだ、と。
少しばかり言葉を付け加える。
「生徒会室に一人で居ても退屈だし寂しいだろ。練習は生徒会室以外でも良いし、部活終わるまで……その、なんだ、遊びに来ててもいいぞ。その後は適当にごまかすから」
頭をがしがしと掻いて、一色から目を逸らしながら伝えた。
ごまかせるかは甚だ疑問だけど。本当に疑問だけどね！　どうしよう！

「……あ……」
一色は、スカートの裾を両手できゅっと掴み、何故か少し泣きそうな表情を浮かべた。
ついっと俺の方に近寄り、袖を摘まんできた。なんか小動物みたい。
「お気遣いありがとうございます。……先輩のそういうとこ、あざといですよね……」
言って、少し口を尖らせる一色に、
「お前が言うな。世界中の誰よりもお前が言うな」
ふっ、と呆れたような声を出しながら、俺は一色の頭をぽんぽんと撫でた。
俺の妹スキルの攻撃を受けた一色は、「あう……」と小さな声を漏らしたかと思うと、自分の頭を撫でている俺の手に、小さな両手をぽすりと重ねた。
そして、数秒だけむ～と唸ると、
「でも、奉仕部に行くのは今日は遠慮しておきます。だって、先輩も……多分、私も、きっと顔に出ちゃうじゃないですか」
「顔に出るって、何がだよ」
俺の手を頭の上で捕獲したまま、一色がんーと唸る。
『俺たちこれから、逢引するんだよなー！　どうしよう、どきどきするなー！』……みたいな気持ち？」
「お前ばかじゃねえのか……」
ちょっとだけだけど。
素で言っちゃった。
「ばかとか失礼ですよ。目が腐ってるくせに……」
「そっちのがひどいじゃねえか」
お返しに一色の髪をくしゃくしゃに撫でると、ちょっと不機嫌でちょっと楽しそうに「わーっ！　きゃーっ！」という声を出した。なんだこいつ。超可愛いんだけど。
「それじゃ、放課後、部活の後。……生徒会室で待ってますね」
「改めて言うなよ。なんか急に恥ずかしくなるだろ」

告白されるみたいじゃねえか。
「だって先輩との約束だと、念を入れないと怖いんですもん」
そう言って、一色はくすっと笑った。
2.
そして、迎えた放課後。
部活に行くとは言っても、依頼が無ければただの茶話会だ。
今日も今日とて平和に過ごして、部活動終了の時刻を迎えると、3人で部室を出た。
「じゃ、俺ちょっと職員室に用事があるから、先帰っててくれ」
「あ、そうなんだ」
「平塚先生にまた呼び出されたの？　あなたも大変ね」
「満面の笑みで言うんじゃねえよ。ちがうっつの。じゃあな」
「ええ、さよなら。また明日」
「ヒッキー、また明日ね」
「おう。また明日」
確認するように、その言葉の大事さを確認するかのように、3人で同じ言葉を口にして、俺は生徒会室に足を向けた。
「あ、おかえりなさーい」
「お、おう……ただい、ま……」
生徒会室に入るなり、一色がのんびりとした様子で俺に声を掛けて来た。
あまりに自然だったので、つい勢いで答えてしまった。
……。
……え、なにこののっけから超絶恥ずかしい感じ？
一色も、言うならもっと平然と言って俺を一方的に困らせろよ。なんでちょっと恥ずかしげに目を逸らすんだよ。やりきれよ！　こっちは余計恥ずかしくなるんだから！
こほん、と一色が軽く咳払いをする。
すっくと立ち上がると、
「それじゃ、時間も遅いですから、早速お題に移りましょう」
言って、何故か腰に手を当てて妙に気合の入った立ち姿になった。

「お、おう」
「先輩にやってもらう練習は……」
すぐに言うのかと思ったら、若干躊躇して、顔を赤くして目を泳がせている。なんだなんだ？
「か、か、かか、かべ……」
「かべ？」
かべ、カベ、壁、ＫＡＢＥ？　だめだ、分からん。
「か、壁ドンです！」
びしっと指差された。
……。
……いや。
なんでそんな、「ただしイケメンに限る」って注釈が付く代表格みたいな行為をしなきゃいけないのん？
「あー、それな。よく俺も夜中本読んで声を上げて笑ってると、隣の部屋の小町にやられるわ」
「近所迷惑に対する抗議行動のことじゃないですよ！」
ぷんすかと頬を膨らませた。その頬をぷにってしたい。
や。
とぼけて、ごめんなさい。
「だろうな。でもなんでまた？」
「そんなの、やってほしいからに決まっ……さあ、やりましょう！」
「お前自由すぎるだろ」
自分の言葉を言い終えるのすら待たないって。お前の中には何人の意識が混在してるんだ。
と、まあ。
多少の抵抗はするものの。
もはやこの強引な流れにも慣れてきた節はある。
恥ずかしいのは変わりないけどね。これからやることを考えただけでなんかもう夜空を見上げたくなるけどね。
「……わーかったよ」
頭をがしがしと掻きながら、しぶしぶ了承した。

3.

「……」

……。

壁に背中を付けて、おどおどしている一色の目の前に、俺が立ちすくんでいる。

だめだ、俺がやると色気の欠片もねえ。

「せ、先輩、まずは実践ですよ」

上ずった声を出して、一色が両手で小さくガッツポーズをする。なるほど、このポーズで練習のときや試合前にサッカー部員を虜にしてたんだな。恐ろしいやつめ。これからはそのポーズを傾国のピーカブーと名付けよう。やっぱやめた。

「じゃあ、右手を、私の左耳ぎりぎりのとこを通って壁に……そう、そう……」

一色の指示に従い、右手を壁に付ける。

自然と、一色との顔の距離が近くなる。

ん、なんだろう。死にそう。

「そうそう。良い感じ……です。じゃ、次は、わたしに何か囁きかけてみてください。日頃から思ってる褒め言葉をわたしに！　さあ！」

緊張はしているものの、すごい楽しそうで僕は嬉しいです。

でも、ちょーっと何言ってるか分かんないですね！

「早く早く」

俺の躊躇なんざ眼中に無いらしい。

期待に満ちた目で自分の右耳をちょんちょんと指差す。

むう。

何を言ったら良いのか。

褒め言葉って……あざとい、は絶対怒られるし、頑張ってる、ってのは昨日言ったし……。

しょうがない。

少し深めに息を吸って、ゆっくり吐く。

一色の右耳に口を寄せると、思った以上に身体が近くなって。

なんかもう、傍から見たらこれ絶対キス……ショット・アセロラオ

リオン・ハートアンダーブレード。
ふう、危ない危ない。口にしたら超絶恥ずかしい台詞を、何とか人名で誤魔化せた。やはり木を隠すなら森の中だな。人名って言ったけど、吸血鬼の名前って人名で括っちゃっていいのかな。
一色を見ると、俺が耳元で呼吸をするだけでも吐息が耳に当たるのか、俺が軽く息を吐く度にふるふると身体を震わせていた。
ぞくっ、と何かいけないものが背筋を駆け抜けるのを感じながら、ゆっくりと口を開いた。
「一色……お前、すげえ可愛いよ」
言ってて悪寒が走ったけど。超走ったけど。
やるならちゃんとやらなきゃと思って！
超恥ずかしいけど！
言い終えて、ちょっと息を吹きかけてみました。
さー、一色はさぞドン引きなんだろうなと思って顔を引いて一色を見ると、意外や意外、特に引いた様子は見せていなかった。
それどころか、耳まで真っ赤にして、頬に手を当てている。
「はわ……はわわわ……」
あわあわと慌てているところは昼休みにも見たけれど。
前回と今回の違いは、慌てた後の行動にあった。
「うー……うー……」
依然として頬に手を当てたまま、今度は今にも泣きそうな唸り声を上げ始めた。
何かしたくて、でもそれを我慢しているような。
犬がエサを前にして、待てと言われているような。
言ってしまえば、物欲しそうな目をしている。
何度も俺を見ては目を逸らしを繰り返した後、不意に俯いた。
そして、顔を上げたかと思うと、
「うー……先輩……先輩……！」
泣き出しそうな、感情を爆発させたような表情で、俺の背中に手を回して抱きしめてきた。

続く。

（５）

１．

「うう～……」

一色が、俺の胸に顔を埋めて唸っている。

切なそうに漏らすその声は、泣き声のようにも聞こえる。

……この状況、どうすると良いのん？

「お、おい……？」

取り敢えず声を掛けてみるものの、一色は返事をすることなく、代わりに顔をすりすりと擦り付けてきた。くすぐったいくすぐったい。

なんだろう、この子犬感。

「うう～～……！　……ずるいです。ずるいですずるいです……！」

ほーん？　どういうこと？

すりすりされながらずるいずるいと連呼されている。「す」が大活躍。

「や、その……なんか、すまん……」

取り敢えず謝るヘタレっぷり。

それでもどうにかこうにかフォローを入れようと、未だに顔を埋めたままの一色の頭をぽんぽんと撫でる。

すると、一色がばっと顔を上げた。

「今のもずるいですよ！」

「え、今のも？」

なに、俺は存在自体がずるいの？　なんなの？

「そうです。ずるいです。ずるずるです」

意味が変わってきてる……。なんか俺引きずったっけ？

「なんでそうやって、いつもわたしのことドキドキ……う～～……！」

何か言いかけたと思ったら、顔を真っ赤にしてまた顔を埋めた。からのすりすりずるずるアゲイン。

……なんだこれ。忙しいやつだな。

……。

むう。

現状を整理すると。
・後輩の女の子に抱き付かれている。
・泣きながら色々と言われてる。
・柔らかい感触がさっきから何の遠慮も無しに鳩尾の辺りにむにむにっと。
・頭が目の前にあってシャンプーの良い匂い。
結論：理性が！ぎり☆ぎり！
っていうか何だこれ、本当になんだよこの状況？
一色の泣き顔、やたらと可愛いな……そりゃ元が可愛いんだしな……っていやいやいやいや。
……この状況が続くと、色々とまずい。主に俺の理性が。
必死で頭をぶんぶん振っていると、一色が再び顔を上げた。
亜麻色のセミロングの髪がはらりと舞い、思わず見入ってしまって思い切り目が合う。
涙ぐんだ目で、いつものあざとさがまるで無い、意味深な表情を浮かべる。
口をつぐんで、溢れ出す思いと言葉を必死で抑えるようにしながら、絞り出すように、
「……先輩」
一言だけ、俺を呼んだ。
「……あ……」
何の返事にもなっていない言葉、いや声を漏らす。
一色はそれ以外に何か言葉を発した訳でも無いのに、そのあまりにも真剣な表情に見惚れてしまった。
気付けば、二人の顔の距離が近い。
どちらかが寄って行っているのだろうか、自然と近付く。
一色はゆっくりと目を閉じて、唇を委ねるようにこちらに向ける。
無意識の内に、一色の肩を握っていた。
唇の距離が、もうあと1～2ｃｍのところまで近付く。互いの息遣いを感じる。
一色が顔を傾けた。

俺も、それに合わせて逆側に顔を傾ける。
やがて、二人の唇がそっと重なった。
2.
「……んっ……」
唇を離すと、一色が甘い声を漏らした。
口付けはほんの数秒、本当に互いの唇を少し重ねただけで終わった。
……超……柔らけえ……！
完全に目を閉じてしまっていたのが悔やまれる。開ける度胸は無かった……。
二人とも徐々に目を開けて、完全に開いたとき、ぱちっと目が合った。
その瞬間、一色は顔を真っ赤にして顔を激しくぶんぶんと振り出した。
「なななにしてくれちゃってるんですかもうあれですかキスしたから俺の女になれとか男らしいこと言っちゃう気ですか大体1回キスしたくらいでそんなこと言うなんてほんとにもうせっかちというかなんというかとにかくもっといや違うあれおかしいなあわわわわ」
……。
一色いろは、更に大混乱である。
実にメダパニ。
大慌てする一色を見てぷっと吹き出すと、それを見た彼女は頬をぷくっと膨らませて怒った。いちいち可愛いなあもう……。
「な、なに笑ってるんですか！　先輩のくせに生意気です！」
こんなことを言ってるけども。
一色は俺の背中に手を回したままで、俺も一色の肩を掴んだままなのだから、どうにも締まらない。
「ああ、わりいわりい。そうだよな。1回キスしたくらいじゃな」
言って、一色の肩を掴む手に少し力を込めると、一色がびくっと跳ねた。

「そ、そそ、そうですよ、1回くらいじゃ……1回……くらいじゃ……」
顔を近付けると、一色はうっとりした顔をして、再び目を閉じた。
3.
「んっ……」
唇を重ねるだけなのは変わらないが、今度は時間が長い。
2回目ということもあり、うっすら目を開ける余裕も出来たので、ちょっと一色の顔を見てみる。
……うわぁ……。
睫毛ながっ。色っぽ。超可愛い。こいつ、こんな可愛かったの？
口に出して言うのは恥ずかし過ぎるので、心の中で一色褒めちぎり大会を一人で開催する。
ここまで来ると、更にその先まで進んでみたい。
そう思い、試しに舌をそろっと伸ばしてみた。
――と。
一色の唇に舌がつんと当たった瞬間、彼女が目を見開いた。
そしてばっと唇を離すと、
「ななななんですか2回キスしたくらいでもう舌入れようっていうんですかどれだけわたしのこと自分の女にしたいんですかもうほんとこっちの心の準備が出来てないうちにそんなことされても困るしもっとゆっくり落としにかかってもらわないとってわたしさっきから何言ってあわわわわわ」
再びまくし立てる。
……うわぁ……。
一色いろは、これ以上無い程に大混乱である。
実にＴＨＥ　メダパニエスト（最上級）。
一色の耳をさわさわと撫でながら、
「ああ、そうだよな。わりいわりい。ちゃんと心の準備をしてもらわないとな」
「んんっ……ちょ、ちょっと、先輩、あぅっ……そ、そうですよ、ひんっ、ちゃんと言ってもらわないと」
……。

反応が可愛すぎて、死ぬ。
……今までの！　反動で！
超！　イジメたくなるんですけど！
でも！　なんとか我慢します！　我慢してます！
それじゃあ、と言って、肩を掴む手に一層力を込めながら彼女の目を見つめる。
「舌、入れるぞ」
言うと、一色が目をむいた。
「は、はい……」
一色は震えながら、泣きそうな顔で笑った。
4．
3回目の口付けで、一色の口の中に舌を入れた。
唇に舌が触れたとき、唇はがちがちに緊張して固まっていたため、ここまで彼女の肩を掴んでいた手を今度は、左手は彼女の背中に、右手は彼女の頭を撫でるように置いて彼女の身体を包み込んだ。
くしゃくしゃと頭を撫でると、リラックスしたのかそこからはすんなりと口内に侵入を許した。
「んあっ、んちゅっ、んふぅっ、はむっ、んんっ、れろっ、んん……」
初めて入る一色の身体の中の感覚に興奮して、たまらなくなり何度も何度も口内のあらゆる場所を舐め回す。
一色はそれであっという間にスイッチが入ったのか、薄目を開けて身も心も委ねたようにこちらに体重を預けてくる。
「んんんんっ!?」
彼女の舌に吸い付いて吸い上げてやると、途端に跳ねるように声を上げ、膝を生まれたての小鹿のように膝をがくがくと震わせた。
腕に力を入れて身体の密着度を更に高めて逃げられないようにすると、今度は彼女の舌の底面を徹底的に舐め回す。
「えぁぁぁぁ……いぅ、ひぅぅぅぅ……」
涙目で甘い声を上げて、俺を抱きしめる手に力を入れてくる。
二人の体勢は、最初は一色を壁に押し付けて口付けしていた状態だったのだけれど、そこから徐々に二人の腰がずるずると下りていっ

た。
その間も、唇を離すことはなかった。
やがて、完全に腰を下ろすと、俺はあぐらを書いて、股座に一色を乗せる体勢になっていた。
彼女は足を俺の背中に回し、巻きつけるようにしている。
頬ををつつっと撫でると、互いに交換している唾液が一色の口から微かにと垂れているのが分かった。
「んむっ、えむっ、あむっ、あむっ、んちゅるっ、んあぅっ、あっ、あっ、あっ……」
時折口を離して一瞬だけ息を吸い込んでは、また吸い付いてくる。
その体勢のまま、しばらくの間二人は互いの口内を貪り続けた。
5.
「……ぷはっ、はぁっ、はぁっ、はぁっ……はぁ」
15分も経った頃だろうか。
ようやく、二人が唇を離す。
唇がもはやふやけてしまうのではないかと思う程の、長くて濃厚な口付けだった。
気付けばもう結構な時間になっていた。
これ以上遅くまで残っていれば、先生に何を言われるか分かったものではない。
平塚先生ならまだ良いが、他の先生に俺まで居るところを見られては、どんな誤解を受けるかも分かったものではない。
……多分、もう、誤解とは言えないけど。
「……そろそろ、帰んなきゃな」
言うと、一色は口を尖らせて、
「……え～、もう終わりですか？」
と言う。
「ばか、生徒会長がんなこと言ったら洒落にならんだろ」
言って一色の頭を撫でると、再びむ～と唸った。この唸り声も中々可愛いな……。
……あれ、可愛いと思うポイントが加速度的に増えてる？

「……仕方ないですね。じゃあ、出ましょうか」
「ああ」
ゆっくり立ち上がったのだが、一色は既に足腰ががくがくになっており、やっとのことで立ったのを見届けた時は、なんかもうクララが立った時ばりの拍手を送りたかった。
6.
「はー！　外は寒いですねー」
「そうだな」
生徒会室の鍵を閉め、校内から一歩足を踏み出すと、突き刺さるような寒い風が吹いていた。
「ここはもちろん……」
隣の一色が、そう言ってにやりと笑う。悪い笑みだな……。
なんて思っていたら。
一色は俺の腕にがっちり絡まるように抱き付いて、にこにこし始めた。
え、なにこれ。
超恥ずかしいんですけど。
「よーし、これであったかい！　じゃ、駐輪場に行きましょー！」
「元気だなおまえは……。っていうか、駐輪場までこの状態で行くのはいやすぎるんだけど……」
「はーい、文句言わなーい」
抵抗虚しく、更にぎゅっと抱きしめられた。左腕が天国やでえ……！
わがまま姫の言うことにも逆らえず、結局腕を組んだまま駐輪場へ行き、そのまま一色の家の近くまで送った。
その別れ際。
「今日はありがとうございました。もうあの辺が家なので、これくらいで大丈夫です」
言うと、一色はたたたっと俺の数歩前に行き、くるりと振り返り、にひっと笑……ったかと思いきや。
「ぐほっ!?」

タックルしてきた。
いや、ハグか？　ハグってこんなデンジャラスだっけ……？
「げほっ、げほっ……おまえなぁ」
不満の意を込めて目線を下に向けると、今さっきの自分のハグのことなど既に忘れたのか、一色はにひっと笑っていた。
その無邪気な笑顔に、思わず心を奪われる。
「先輩、明日からもよろしくお願いしますね」
言うと、唇をすっと重ねてきた。
「ん……!?」
俺がまともにリアクションをするまでもなくあっという間に唇を離すと、俺の首に手を回してきて顔を近付けて、
「舌を入れるのは、また明日から練習しましょうね」
目を細めて、くすっと笑った。
……うおぉ……無邪気な笑顔と艶っぽい笑顔を自在に使いこなすだとぉ……!?
「お、おう……」
なんとか最低限の応答だけすると、一色はぱっと離れてたたたっと軽快に走っていき、くるりと振り返った。
「それじゃ先輩、また明日――！」
言って、元気よくぶんぶんと手を振る。
「……おう、また明日」
敵わねえなぁ、こいつには。
なんて思いながら、ふっと笑って手を振った。

続く。

（6）

1．

「うおぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

俺の絶叫。

時刻は割と深夜。

場所は家。俺の部屋。俺のベッド。

寝転がって、枕に顔を埋めながら。

理由：さっきまでの出来事。

「うおぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

もう一回叫んだ。枕に顔を埋めながらの叫び声はこもりにこもってさぞ不気味に聞こえるだろう。しかし、周囲に配慮する余裕も今は全く無い。

「はぁ、はぁ、はぁ……」

だ、だめだ。

だめだダメだ駄目だ。

一色の笑顔とか唇の柔らかさとかあわあわ慌てるとことか唇の柔らかさとか胸の柔らかさとか唇の柔らかさとかが頭の中をぐるぐると巡って……。

……って、

「ほとんど柔らかさについてしか覚えてねえのか！」

思わず枕を離した状態でセルフツッコミを入れてしまった。

――と。

隣の部屋のドアががちゃ、ばたんとえらい勢いで開閉されたかと思うと、次の瞬間に俺の部屋のドアがものすごい勢いで開けられた。

目をむいてドアの方を見ると、小町が目を腐らせて不機嫌そうに立っていた。

や、目腐ってるとほんと可愛くねえな、こいつ……。小町でも可愛くなくなるって、やっぱ普段の俺が放ってる負のオーラって相当やべえんだろうな……改めて確認。

「お兄ちゃん」

「お、おうっ」
普段と比べて明らかに威圧的な声に、思わず跳ね起きる。
「さっきからうるさい。勉強の邪魔しないで」
「お、おう、すまん」
妹にビビってオットセイ化している。
「ちゃんと謝って」
「ご、ごめんなさい」
やべえ、勢い余って土下座しそうだ。本当にしたら色んなものが俺の中で終わる気がする。
俺の本気謝罪を聞いて、やっとこさ小町が表情を緩めてため息をついた。
「はぁ……ま、いいや。で、なんだったの、さっきの奇声は？　お兄ちゃんが本とかゲームで気持ち悪い声出すのは聞き慣れてるけど、今日のは特にひどいよ？」
さりげなくぼこぼこにされた……。
「や、その、ちょっと浮かれてて……あ」
口を滑らせてしまった。
「浮かれて」というフレーズを聞いた途端に、小町の目が見る見る輝き出す。腐った目からの通常状態からのキラキラモードって、変化のスピードおかしくないですかね……。
目がヤマピカリャーな小町が、つかつかと歩いてきてベッド際にぼふんと座る。
「え、え、誰？　そんな浮かれてるってことはもうすることしたの？　やることやったの？　雪乃さん？　結衣さん？　それとも他の伏兵さん？」
……。
質問の洪水……。
「あの……黙秘権は……」
「ないよ、そんなの」
冷え切った目で見られた。え、そんなに俺人権無いのん？
……今さっきやらかしたことを思うと、強く拒否することが出来な

い……。
「じゃあ段階とかは良いから。だれ？　だれ!?」
くおお……小町が眩しいよぉ……！
「うぐ……い、いっ、いっ……」
「んん？」
更に迫ってくる。やばいやばい、変な気持ちになっちゃう。お前の歯を磨いてやろうかぁ……。
「い、いっし……き……」
「ほーん？」
なんか俺みたいなリアクションをした。流石妹……。
「一色さんってあの生徒会長の？　ほーん？　ほーん……？」
ぴょんっとベッドから飛び降りると、部屋の中をくるくる回り出す。
「ううむ……前聞いた感じだと小町と似てるとこがあるみたいだけど……女の子を評価したときのお兄ちゃんの言葉って全然信用できないしなぁ……でも見る目はあるはずだから、まずは直接会ってみないと……むむむ」
ひとしきりぶつぶつと独り言を言ったかと思うと、くるりと振り向いた。
「お兄ちゃん、今度紹介してね！　じゃ、おやすみー」
「お、おい……」
俺のリアクションを一切見ることなく、ちゃきっと敬礼をして部屋を去って行った。なにあの敬礼。超可愛いんですけど。
……まぁ、そのうち……かな。
そろそろ寝ようかと思ったときに、ふとメールでもしてみようかと思い立つ。女子に自分からメールするなんて中学生以来！　思い出したら涙が出てきた……。
何を話そうかと考えながら、携帯を手に取って数秒。
「……あ」
……。
……連絡先、聞いてなかった……。

2.

翌朝。

「あれ？　お兄ちゃんおはよー。早いねー」

結局ほとんど寝られなかったにも関わらず、そわそわして妙に早く起きてしまった。

「うっす。……今日はちょっと早く学校行くわ」

「ほえ？　……ほーん？　……ほーん？　逢引ですかな？　逢引ですかな？」

時代劇の越後屋ばりの悪い顔をしてすりよってきた。超可愛いし超うぜえ……。

適当にいなして、簡単に朝ごはんを食べて家を出る支度をする。

「行ってらっしゃーい！　楽しんでねー」

すんごく楽しそうに手を振られた。

お前は子供を遠足に送り出すお母さんか。

冬の朝早い時間とあって、外は底冷えのする寒さ……のはずなんだけれど。

妙に気持ちも身体もふわついて、寒気をほとんど感じない。

これが恋……あ、いや、寝不足によるハイテンションか。そうだ、そうに違いない。ゲーム徹夜しちゃったときもこんな感じだった気がするし。こんな感じだった気がするし！

周りを見ると、珍しく霧が濃かった。これ、夜にこの状態だったら超怖いよなぁ……なんて思いつつ自転車を漕いでいると、あっと言う間に学校に着いた。どうやら思っていた以上に飛ばしていたらしい。

……別に、そわそわしてたとかじゃ……。

誰に言い訳してんだ、俺。

まあ、早くは来てみたところで、まだ誰も学校に来てないような時間だ。教室で本を読んでるかなどと考えながら、駐輪場へ向かう。

――と。

誰か、いる。

前2行だけ見るとただのホラーだけど、駐輪場で立っている人が、霧の中にうっすらと浮かび上がっている。

ちょっとというかかなりビビって、速度をありったけ落としながらゆっくり近付く。
「……あ」
声を上げたのは、二人同時だった。
「……一色」
「先輩」
――瞬間的に。
色々な感情がごちゃ混ぜになって、心臓が飛び跳ねそうっていうかもう飛び跳ねた。
3.
「先輩、早いですね」
一色はマフラーに顔を埋めて、少し目を逸らしている。
「お前こそ……って、あれ？」
よく見ると、一色の鼻が赤くなっている。
「お前、いつから居たんだ？」
「や、やだなー、今来たとこですよ！」
「デートの待ち合わせのテンプレをここでやってどうする……」
ツッコむと、一色はうーんと少し唸り、とてとてとこちらへ近付き、袖をくいと引っ張った。
「……ちょ、ちょっと、ほんのちょっとですよ？　ほんのちょーっと……早く会えたりしないかなー、なんて……」
言い終わると、上目遣いでこちらを見つめた。
……っっっだぁぁぁ

「そ、そういや昨日の別れ際……よ……」
「ん？　なんですか？」
「れ、練習……」
「……あ」
　俺がその単語を発すると、一色の顔が見る間に赤くなった。
「い、言いましたけど……え、ここで……です……か……？」
　スカートの裾をきゅっと握りながら、辺りを見回す。
　困った表情はしているものの、断る気があるようには見えない。
「霧もあるし、見えにくいだろうから大丈夫。その、なんだ、……すぐ、終わるから」
「あ……」
　一色の肩を掴むと、ゆっくりと顔を傾けた。
　４．
「んんっ、んぐっ、あっ、あぅぅっ、んちゅるっ、んちゅっ、あうっ、やんっ、あっ、あぅっ、ひぅっ……」
　霧が立ち込める早朝の駐輪場で、一色と唇を重ねる。
　昨日で多少慣れて自信が付いたことと、一晩悶々とした反動からか、初めから積極的に舌を絡める。
　一色はわずかに見せていた抵抗を最初の１０秒程でやめ、後は侵入してくる舌をひたすら従順に受け入れている。
「んんんっ!?　んぐっ、えぐっ、んんんんっ……！」
　舌を吸い取ると、またしても面白い程に敏感に反応する。
　がくがくと膝を揺らして目を細める彼女が、たまらなく愛おしく思えてくる。
　どうしても我慢出来なくなり、口付けをしたまま彼女のコートのボタンを開けた。
「……？」
　俺の行動の意図が読めないのか、唇を離さぬまま、くりっと首を傾げる。可愛いし柔らかいしでもう訳分かんない。どうしよう。
　しかしそんな彼女も、俺が手を肩から離したことと、俺の視線の先を辿ったことから、これから何が起きるのかに気付いたらしく、目を

見開いた。
「んーっ！　んーっ！　んーっ！」
小さく首を振っているが、手は最初から変わらず俺の腰に回したままだ。
一色の舌を再び強く吸い上げると同時に、制服の上から彼女の胸に手をやった。
むにっ、という思いの外奥行きのある感触に驚いた次の瞬間。
「んんんんんん――――――っ……！」
口を塞がれたまま目をしばたたくと、彼女は一際激しく痙攣して、がくんと腰を落とした。
驚いて、口を離して急いで肩を抱く。
「お、おい、大丈夫か？」
一色の顔を見ると、焦点が定まっていない目で、口を半開きにしてうっとりとしていた。
「あ、うぁ……うぅ……」
……やりすぎたー。
しばらく背中を抱いて頭をぽんぽんと撫でていると、ようやく復活した。
俺の顔を見るや否や、顔を真っ赤にして、うーと唸りながら俺の胸に顔を埋めた。
「……先輩の変態」
「う……す、すまん」
「……それで、どうでしたか？」
「え？」
「わたしの胸です。あんなに思い切り触るなんて、もう乙女心がズタズタです。今すぐ感想を正直に言ってください」
「え、いや、それは……」
言うと、一色は顔をずばっと上げてこちらを見つめた。むーと頬を膨らませている。
「ああもうじれったい！　さあ、早く！」
ふえぇ……逃げられないよぉ……。

「うーん……想像してたより大きくて、超柔らかかった。お前、着やせするんだな」
言うと、一色は目をむいた。
「変態だー！」
「正直に言ったのに!?」
変質者が出た時くらいの勢いで叫ばれたので、急いで口を塞いだ。
口を塞いだのは手です。あしからず。
その後二人で校舎に向かいながら、俺たち朝っぱらから何やってんだろうな、とくすくす笑い合った。

続く。

（7）

1.

校舎内に入り、1年と2年の階が違う為そろそろ解散だな、と考えていると、一色が不意に袖を掴んできた。お前、その仕草ほんと好きだな……。

「ん、どうした？」

「あ、あの、先輩……連絡先……」

「あーっ！　いろはー！　おはよー」

一色が何か言いかけたところで、彼女の友達と思しき女子が声を掛けてきた。

一瞬、ほんの一瞬だけど、一色が尋常でない程機嫌が悪そうな顔になって身震いしたけど、まあそれは見なかったことにしよう。下手に記憶に留めると、怖くて泣いちゃう。

頭をがしがしと掻いて、その友達からは見えない角度で、一色の肩にそっと手を添える。

「ほら、行ってやれ」

言うと、一色は何か言いたげな顔を一瞬だけして、すぐにやめた。

「……はい、また後で」

少し切なそうに笑うと、いつものあざと可愛い笑顔を振りまいて、その友達の下へと駆けて行った。

2.

その日の昼休み。

購買でパンを買おうと思ったところ、行列の最後尾によく見慣れた二人を見付けた。

見慣れた二人ではあるが、「この場所では見慣れない」と言うのが正しいだろう。

「あ、ヒッキーだ！」

二人のうちの一人が、というか由比ヶ浜がこちらに気付き、元気よく手を振ってきた。やめろ、二つのメロンがたゆんたゆんと揺れてるから！　目の保養……違う、目に毒だから！

「あら、こんなに沢山の人が居る中でも、負のオーラは目立つものなのね。すぐ分かったわよ？」
雪ノ下が振り返り、いつも通りの毒を吐いてきた。日常的に毒を吐くってお前どこのマタドガスだ……。
「……」
ん？
雪ノ下は毒を吐きつつも、視線が何故か由比ヶ浜に向いている。なに、そんなにこいつのこと好きなのん？　いよいよがちゆりの世界に……。
などと思っていたけれど、よく見たら違った。
由比ヶ浜のたゆんたゆんと揺れている胸元に視線が行っていた。
今この瞬間の雪ノ下の瞳に宿る感情が、もう色々と複雑すぎて煩雑すぎてやばい。
由比ヶ浜への親愛、羨望、嫉妬、その他諸々。
うーん、切ない。
あ、自分の胸に手を当てた。やめて！　傷の上塗りをしないで！
もっと自分に優しく！
俺が見ている事に気付いたのか、雪ノ下ははっとして、キッと睨み付けてきた。誤解だ、俺は戦争を仕掛けるつもりなんて無いんだ……。
ものの数秒の間にやたらと複雑なやりとりをしながら歩いて行くと、俺と雪ノ下・由比ヶ浜との中間くらいの位置に、一色が友達と雑談しながら並んでいるのが見えた。
おうふ。こんなこともあるものなのか。
まあ、奉仕部の部室でよく顔を合わせる４人なのだ。場所が違う分妙な気恥ずかしさはあるが、別にそれまでのことだろう。雪ノ下と由比ヶ浜は二人仲良く百合ってるし、一色も友達と居るのだから、ここは軽い挨拶を済ませたら即座に空気に溶け込もう、闇に紛れ込もう。
一色はまだこちらに気付いていないが、かといってスルーして向こうに気付かれると、またいつものように何で挨拶をしないのかと怒られてしまう。

不自然じゃないように、不自然じゃないように……。この言い聞かせが既に不自然だけども。
いつもなら声を掛けるだけなのだが、この時は一色との関係性に気が緩んでいたのか、
「おう」
挨拶をしながら、肩をぽんと軽く叩いてしまった。
その瞬間。
「わひゃぁっ!?」
一色がこちらの声と顔に気付いて、驚きのあまり妙ちきりんな声を出した。
「あっ、わわっ、うわっ……わわわっ!?」
「うおっ!? ……とぉ……」
そして財布をぽーんと上に放り投げてしまい、受け止めようとして慌ててお手玉のように弾ませた後、最終的に俺の胸に不時着した。
朝も嗅いだ、一色の髪から香るシャンプーの匂いに頭がくらっとする。
「あ……」
ほんの数瞬ではあるが、一色は公衆の面前であることを忘れて、俺の胸に身を預けていた。
「わりいな、急に声かけて。大丈夫か?」
言って、ここでもまだ懲りずに、一色の頭をぽんぽんと撫でてしまった。や、つい……。
俺が撫でた後の頭をさすりながら、一色が顔を赤らめる。
「あ、ご、ごめんなさい……それと、ありがとうございます……」
頬を赤らめながら、上目遣いでこちらを見つめる。
……あー、ちょっと、もう。
あと少しで、思わず抱きしめるところだった。や、ほんと危なかった。
一色もこの雰囲気は非常にまずいということに気付いたのか、一緒に来ていた友達の方に向き直ると、
「ご、ごめん。わたしの分も買っといてもらえる!?」

「あ、ちょ、ちょっと！　いろはー!?」
友達の制止も意に介さず、ぺこりと頭を下げて、足早に去ってしまった。
……なんか悪いことしちまったなぁ……。
などと思っていると。
大事なことを忘れている事に気付いた。
「ヒッキー……？」
「比企谷くん……？」
背後から俺を呼ぶ声。
……。
振り向いたら、殺（や）られる。
3.
あの後、購買でまだ何も買ってないのに部室に引きずっていかれ、尋問を受けた。あなたたちも何も買ってなかったでしょうに……。
このままでは死ぬ……！　と思ったいたら、タイミング良く平塚先生が俺を探して部室に来てくれたため、それに便乗して難を逃れた。
奇跡的なタイミングで部室に来てくれた先生があまりにも眩しく見えて、廊下を歩いている間褒めちぎっていたら先生が本気で照れてしまい、対応に困って「アラサーでもそれだけ素敵なところがあるなら、きっと良いことありますよ」とほざくという出来る限りの悪手を打ってしまい、派手にぶん殴られた。5～6限は殴られた腹部をさすり続けていた。痛すぎて寝ることも出来なかったんだけど……。
しかし授業中にそれっぽい言い訳を考えていたため、部活中はそれとなくはぐらかすことが出来た。いややっぱり全然それとなくなかった。命懸け。超ギリ。川の向こうに材木座が見えた。やめろ……応募する訳でもないラノベのプロットを見せるな……！
そして部活終わり。
自転車を取りに行こうと駐輪場に向かうと、再び人影が見えた。
「一色……？」
暗がりのためやや不安げに声をかけると、亜麻色の髪がふわっとなびくのが見えた。

こちらの声に反応して、一色がぱぁっと表情を明るくして振り返った。
……うぅ、ほんと、いちいち可愛いなこいつ……。素じゃねえかよどう見ても……。
「先輩、お疲れ様です」
とててとこちらに小走りで駆け付けて、少しばかり照れながらも満面の笑みを浮かべる。
……うおぉぉ……何この可愛い生き物ぉ……!?
「お、おう、お疲れ。……どうした、こんな所で」
理由は聞かなくても……とは一瞬考えたけれど、思わず聞かずには居られなかった。
聞くと、髪の毛先を指でくりくりとして、少し目線を逸らす。
「……もう、察してくださいよぉ……」
……。
んー。
やばい。
戸塚だったら、もう5～6回プロポーズしてるところだ。
しばらく照れていた一色だが、はっと何かを思い出したように手を叩く。
「あ、そうだ、先輩。連絡先交換しましょう？　朝出来なかったですし。そもそも今こんな状態で連絡先を聞いてないとかおかしいですもんねー」
言って、きゃるんと笑った。
あ、そういうことだったのね。
「そうだな。じゃあ……ほれ」
「おわっとっ……とっ……!?」
自分の携帯をほいと放り投げて渡すと、慌てて受け取られた。
呆れた顔をして、携帯を見つめる。
「もう……どんだけ無防備なんですかー」
「良いだろ別に。見られて困るものはない」
ふんすっと鼻息を慣らしてドヤった。

「へー」
「……」
華麗なるスルー。ほんといい性格してんなこいつ……。
「へー、ほー、ふむふむ……」
「あ、あの、一色さん……？」
すぐに自分の連絡先を入力して返してもらうつもりだったのだけれど、何やらまじまじと見られている。入力らしき操作は最初にしていたようだけれど……。
「えーっと……何をご覧になっているんですかね……？」
「あ、先輩の着信履歴と受信メールと送信メールですー」
「返せこら」
あらん限り調べられてた。
「最初だけですよー最初だけ！　見られて困るものはないと言っても、今後見るつもりは無いので安心してください。……いやーでも、ほんと妹さんとばっかり電話してるんですねー。メールは妹さんと後は……アマゾンか――……ドン引きです」
「うるせえよ……」
客観的に言われると悲しくなっちゃう。
「あとー、結衣先輩への送信メールを見てるとどうもぶっきらぼうですよねー。もうちょっとしっかり文を考えないとー」
「おいこら、返せ。今すぐ返せ。お仕置きすんぞ」
「きゃー！」
逃げやがった。
なんか楽しそうな追いかけっこになったけど、ダメ出しを鬼のように受けている俺としてはたまったものではない。
楽しそうにきゃーきゃーと言いながら、ぱたぱた逃げ回る一色の肩を掴み、やっとのことで携帯を取り返す。
一色の連絡先は……あった。打つのどんだけはええんだよ……。
一色といい由比ヶ浜といい、もはや存在が奇跡だな。
「先輩……」
ふと、一色に呼ばれて彼女の方を振り返ると、携帯を片手に、未だ

に彼女の肩をもう片方の手で掴んでいたことに気付く。
「お、おう、すまんすまん」
慌てて手を放す。
しかし、一色は振り向かない。
「先輩……わたしに、その……お仕置き、するんですか……？」
声音が、不意に変わった。
声も震えている。
さっきまでの一色と、何かが違う。
「お、おお、そうだな、お仕置きしなきゃな……」
相槌を打ちながら、言いようのない期待感が身体中を駆け巡る。
一色はゆっくり振り返り、目の前まで寄ってきてぴたりと止まった。
唇が、微かに震えている。
「じゃ、じゃあ、お仕置きしてくださいよ……ろーろ（どーぞ）？」
「う……お……」
熱を帯びた目でこちらを見つめると、目の前に自分の舌を伸ばして差し出してきた。
両手はこちらの腰にそっと添えられ、本当に「どうにでもしてください」とでも言っているかのようだ。
……っていうか、こいつ……自分でお仕置きを指定するってどういうことだよ……。
それでも、そんなことがどうでもよくなるくらいに。
背中に、ぞくぞくとしたものが駆け抜けた。
「じゃ、じゃあ、行くぞ……」
彼女の背中に腕を回し、舌をまるまる食べてしまうかのように咥え込むと、腕の中で細い身体がびくんと震えた。
続く。

（8）

1.

ずぞぞっ、と。

一色の舌を吸い上げる。

「んぐぅぅぅ……っ！」

苦悶と、それ以外の何かが入り混じった、くぐもった声がする。

俺に腕を動かせない程の力で拘束され、逃れることが出来ない状態で、身体を悩ましくくねらせている様がひどく妖艶に映る。

「えぅっ、せんぱっ、いっ……んんっ、ひぅっ、えぅぅっ、んぅぅっ……！」

涙ぐむだけでは収まらず、もはや頬に涙がはっきりと伝っているのが見て取れる。

左腕で彼女の両腕を押さえ付け、右腕は後頭部に回し、しっかり頭をカバーしながら、駐輪場の柱に押し付ける。

「んんっ、んんんっ、んむぅぅっ……」

蕩けた目と、途切れ途切れの吐息と、上気した頬が際限なく劣情を催させる。

首の角度を固定して、飲み込めようが飲み込めなかろうが関係なく、大量の唾液を流し込む。

ごくっ、ごくっ、ごくっ、と。

彼女の綺麗な白い喉が、幾度となく鳴る。そして、涙が伝ったすぐ横を飲みきれなかった唾液が伝う。

その間、彼女の身体はずっと、ずっと、静かに震えていた。

2.

どれくらいそうしていたのか、本当に全く分からない程に無我夢中で一色の唇を貪って、ようやく解放したときには、既に彼女の顔は見た事が無い程色に染まっていた。

「あっ、ふあっ、ひっ、ひぅっ、ひぐっ、えぐっ、あっ、あっ……」

肩を押さえるくらいしかしていないにも関わらず、さっきまでの余韻なのか、ずっと断続的に震えて、その度に甘い声を漏らしている。

……。
んー。
もう、これくらいで十分だろう。
「一色、そろそろ――」
帰ろう、送るから、と言いかけたその時。
「……先輩」
彼女の声が、俺の言葉を遮った。
「どうした？」
「お仕置き……」
……？
「ん？　お仕置きならもう……」
「終わり……ですか？」
上目遣いで、口の周りに付いた唾液を艶めかしく舐め取りながら、息混じりの声で囁く。
「え……」
「お仕置き……もう、終わり……ですか？　終わっちゃうんですか……？」
言って、袖をぎゅっと摘まんできた瞬間。
弾けるように、一色を力任せに抱きしめた。
3.
「一色……！　んんっ……」
「ひぃんっ!?　あっ、ひぁっ、あぅぅっ、そんな、とこっ、ひぁぁぁ……っ！」
抱き締めて、どこでも良いから貪りたくなり、彼女の首筋に吸い付いた。
好き放題に舌でつつき、下から上へ舐め上げ、吸い上げる。
刺激を加える度に、一色の身体が俺の腕の中で激しく跳ねた。
でも、これでも。
これでも、きっと。
足りない。
俺も。

一色も。
力をもっと込めれば簡単に壊れてしまいそうな彼女の背中に回していた両手で、ゆっくりと彼女のコートのボタンを開けて中をまさぐり、行き当たったスカートを遠慮無しに捲り上げる。
「あっ……!?　やっ……！」
何が起ころうとしているのかにやっと気付いた彼女が抵抗の言葉を上げたが、何ら遠慮することなく、彼女の尻をショーツ越しに掴んだ。
小指から順に握り込むようにして、スレンダーな割に意外と肉感のある尻に指を食い込ませると、
「ひぁぁぁぁぁぁぁっ!?」
天を仰いで、長い長い嬌声を上げた。
それでも構わず、何度も尻を揉みしだいて、時折ショーツを少しばかり捲って、直接触る。
その度に、上唇と下唇の間に糸を引いた彼女の口が大きく大きく開いて、可愛らしい喘ぎ声を漏らした。
しばらくはそうして楽しんでいたが、やがてそれでも物足りなくなった。もっとこいつが可愛くなるところをみたい。
そう思って、右手を太腿伝いに動かして、中指と薬指を秘部の上にそっと置いた。
「ひっ……！」
それに気付いた彼女が、怯えと期待の入り混じったような声を上げる。
「一色……行くぞ……」
言って、指をショーツ越しに秘部へと食い込ませようとした瞬間。
「んんんっ……！」
彼女が目を閉じて、俺の唇を奪ってきた。
彼女が俺の唇を奪ったのと、俺が彼女の秘部へショーツ越しに指を食い込ませたのはほぼ同時で。
その瞬間。
「――――――――――――っ！」

彼女はまるで火花が散っているかのようにばちばちと瞬きをして、俺の口内に直接、悲鳴じみた喘ぎ声を送り込んで来た。
まるで脳内に直接喘ぎ声を叩き込まれたような感覚に陥る。
やがて、彼女の目から急に光が失われ、身体がふっと重みを増した。
4.
「……あれ……」
「おう、起きたか」
あの後、失神してしまった一色をすぐ近くのベンチまで運び、コートで包んで休ませていた。
「……あぅ……わたし……」
さっきまでのことを思い出したのか、顔を真っ赤にして俺のコートで顔の下半分を覆った。
「や、その、なんだ、俺も、……やりすぎたわ……わりぃ」
頬をぽりぽりと掻きながら謝り、隣を見ると、彼女は俯いていた。
「お、おい、一色、どうした……？」
「先輩……」
彼女が顔を上げた。
……うわぁ……悪そうな笑顔だぁ……。
絶対ろくなこと言わなそう。
でも、なんだろう。
たまに見るこの顔だけれど、今回は何て言うか、いくらか色が混じっている。
んん、なんか余計に怖い……！
そんなことを思っていると。
ふわっ、と。
彼女が俺に横から抱き付き、耳にくっついてしまうくらいの距離に唇を寄せた。
「先輩……」
「う……うおぉぉぉ……!?」
近い近い近いいいい匂い息遣いエロいくすぐったい！
仰け反って逃げようとするが、彼女の腕が俺の肩をしっかりロック

していて逃げることが出来ない。
彼女を見ると、目を細めてにぃっと微笑む。
その表情が、どうしようも無い程に色っぽい。
どきどきするなんて言葉を通り越して、心臓が爆発しそうだった。
「せーんぱい……」
再び、耳に息を吹きかけるかのように、息が多量に混じった声で呼んでくる。
「な、なんだよ……？」
声が震えて情けないとは思いっつ、それでもなんとか返事をする。
「わたし……先輩にお仕置きされちゃいました……んんっ……」
「ちょっ、はぁっ!?　おまっ、こらっ……！」
息をあらん限り耳に送り込んだ直後に、今度は耳の穴に舌を入れてきた。
いやらしい水音が耳朶を打つ。
「こっ、こらっ、やめっ……！」
抵抗はするものの、くすぐったさと快感とで、ろくに身動きが取れない。
本当にそうなのかは、自分でも分からないけれど。
彼女は尚も責めを止めない。
「先輩……んちゅっ……わたし……れるっ、んちゅるっ、先輩に、んんっ……お仕置き、されちゃい、ましたぁ……っ……」
「～～～～～っ！　ちょぉぉっと待てぇぇぇ！」
本当に洒落にならないと思い、必死で彼女の腕を振りほどき、ベンチから立ち上がって離れて、右手を前に突き出して制止のポーズをとった。
……なに！　なんなのこのイベント!?
こんなエロい事実報告あんの!?　この報告、要る!?
知ってるよ！　お前にお仕置きしたのなんて！　ここ当事者しか居ねえじゃん！
興奮で俺を殺す気か！
右手を前に翳したまま、全力で彼女にツッコんだ。……心の中で。

「ありゃりゃ……逃げられちゃった」
人差し指を唇に当て、むーと唇を尖らせる。
「いやいやいやいや……なんだよ今の？」
「えー？」
聞くと、彼女は頬に人差し指を当てて、斜め上を向いた。
数秒経つと、
「んー、先輩に一方的にお仕置きされたのがなんか悔しかったので、反撃してみました！」
舌を出して、まさかのテヘペロ。
……。
こんのクソ後輩がぁ……！
どう料理してやろうかと、ゴールキーパーよろしく両手を上げながらにじり寄っていると、彼女はそんな俺をまるで気にも留めず、手をぽんと叩いた。
「あ、そうだ。先輩ってー、明日暇じゃないですかー？」
……。
……正真正銘の、ガン無視＆話題の自由旅行。
そして俺の予定の無さをずけずけと指摘。
ん、まあ。
俺がけだものみたいな表情で一色に迫ってるっていう光景は、ぶっちぎりでアウトだったからいいんだけどね！
すっかり毒気を抜かれて、腕を下ろす。
「……いや、まあ、暇っちゃあ暇だけど……」
言うと、一色が右手をぐっと握って上げた。
「じゃあ、デートに行きましょー！」
「お、おおお？　お、おう」
めっちゃ「お」を乱発してしまった。
「先輩には断る権利なんてありませーん」
びしっと俺を指差して、きゃるんっと笑った。こいつ……。
「あ、いや、まあそれは良いんだが、どこ行くかとかいつ決めるんだ？
今から？　それとも明日その場でか？」

「それはですねー……」
ふっふっふと溜め気味に笑う。さっさと言えよ……。
何を言うのかと見守っていると、一度目を閉じて、俺の目を見てにぱっと笑った。
「後で、先輩がわたしに電話してください」
……んん？
「え、いや、なんで？」
聞くと、人差し指を立ててちっちっちっと左右へ動かした。いちいち表現豊かだなぁこいつ……。
「ふっふっふ。電話で話すからこそ分かることがあるんですよ」
「あ、そうですか……」
「わたしの連絡先に電話番号もちゃんと入れてますから。よろしくお願いしますね！　じゃ、帰りましょー」
「あ、おい……」
一色は元気に立ち上がると、俺の腕を掴んでずるずる引っ張って行く。
俺が自分の自転車を見付けると、そこからそのまま彼女を家まで送る流れになった。まあ、初めから送るつもりではいたけど。
……んー。
こいつの自由さには割と、いや、かなり参ってるんだけど。
割と心地良いと思ってしまう俺がいる……いや、やっぱ認めない。
続く。

（9）

1.

一色を家まで送り、その後一人家路に就く。

……別れ際のキスとか、お前いつのドラマだよ……。ってかこれ、二度目か。全然慣れないんだけど……。

スイッチが入った、入ってしまった一色がまさかあんな風になるとは思わなかった。

未だに恥ずかしくて、凍えるような寒さの風が吹いているというのに、まるで気にならない。

……と、いうより、割と汗ばんでいる。信じられない。

うーん。

こんな風に舞い上がるなんて俺らしくない、とは思うのだけれど。

そもそも、一人の女の子とこんな関係になったこと自体今まで無い訳で。

それを考えると、今みっともない程に舞い上がっている俺は、「俺らしくない俺」というよりは、「新たに発見した俺」という感じなのだろうか。コロンブスな気分だ。うるせえよ。

……動揺が収まらなくて、一人でクオリティが微妙なボケとツッコミをしてしまう。

……きっと今の一色も、それが彼女にとって初めての状態なのかは分からないけれど、俺からすれば「彼女らしくない彼女」ではなく、「新たに俺が発見した彼女」なのだろう。

そんなことをつらつらと考えながら、ゆっくりと歩く。

空を仰ぎながら、顔を手でぱたぱたと扇ぐ。手で扇ぐよりも自然に吹く風の方がよっぽど冷たいのだけれど、何故だかそうしてしまった。

2.

ただいまと浮ついた調子で言い、玄関で靴を脱ぐ。

リビングに入ると、小町が炬燵でごろごろしていた。

や、もう。

盛大にだらけている。
だらけるときのその潔さは兄妹揃って目を見張るものがある。
「あ、お兄ちゃん、おかえりー」
炬燵に下半身を埋め込んで仰向けになったまま、小町がくいっと顔を向ける。なんつう横着ものだ……。今のこいつなら、炬燵の上のみかんを取る手間さえ惜しみそう。
と。
こんな風に思っていると。
小町が不意に目をむいて、そこから急にばっと身体を反転させ、炬燵から飛び出した。
うつ伏せの状態から下半身を炬燵からザッと抜き取ったものだから、なんか絵面的にガンタンクみたいになった。
そのまま正座になったガンタンク小町が、俺の前にシュザッと着地した。すね、痛くないのん？
「どうしたんだお前？」
聞くと、小町は半分真剣に、半分は浮ついた調子で、
「お兄ちゃん……何か良いことあった？　いや、あったでしょ。それと、何かこれから良いことがあるの？　いや、あるでしょ」
……。
全部決めつけられた。
最初っから付加疑問文で来るとか、お前もなかなかだな……。
「や、なんでだよ。今帰ってきたばっかの俺のどこにそんな情報が」
「顔。にやけ顔。だいぶ気持ち悪いよ」
「……」
食い気味に。
叩き潰された。
副詞に「だいぶ」を採用したのは、妹なりの考慮だったのだろうか。
油断した状態の俺のにやけ顔なんて、俺自身見たくもないし。
「あー……その、なんだ、……明日、ちょっとな」
嘘は通じないと思い、仕方なく微妙にぼかして言うことにした。
すると、小町は目を輝かせて、

「え、え、え。ほんとに？　一色さんとだよね？　きゃーっ！　きゃーっ！　ぎゃーっ！」
「はしゃぎすぎだろ、お前」
妹が馬鹿はしゃぎする姿と言うのは、見ていてあまり気持ちの良いものではないということが分かった。
この場にこれ以上居ては、何を聞かれるか分からない。
というか、恐らく根掘り葉掘り聞かれる。掘り尽くされて俺という源泉が枯れ果てる。
そんな結論に至ったので。
「まー、明日気が向いたら話すから、お前は勉強頑張れ」
言って、小町の頭にぽふっと手を乗せると、
「ほーん……？　……明日、果たして帰ってくるのかにゃー……？」
「なんだその語尾……」
怪しい笑みを浮かべられた。可愛いけど腹立つ、いや、むしろ、可愛いからこそ腹立つな、こいつ……。
「うるせえよ。おやすみ」
「ぶー。おやすみー」
小町もこれ以上の追及は無駄と悟ったのか、早々に炬燵に戻った。暖かさや温さを貪るように、もぞもぞと動いている。ガンタンクからこたつむりへの超進化……。
何やかんやで、炬燵の外は結構寒かったらしい。
どんだけ俺の話を聞きたかったんだ、お前……。
3.
自室に戻って、初めはすぐに電話をしようとした。
しかし、あいつはあいつでシャワーを浴びたりなんだりをしてからの方が良いのかなどと考えた結果、俺もいつも通りさっさと風呂に入ることにした。
かぽーん。
「……」
寒さと疲労で弱った身体に、温かいお湯の熱が実に心地良く沁みる。俺本当に高校2年生なのかな……。

「……」
ふと、唇をふにっと触る。
彼女の、一色の唇の感触を。
ほんのついさっきまで、あれだけ積極的に貪った彼女の唇の感触を、生々しく思い出す。
「……」
急に身体が熱くなった気がしたので、目のすぐ下の辺りまでお湯に浸かって、ぶくぶくと気泡を浮かべた。
絵面的にこうした方がそれっぽいかなと思ったんだけど、余計に身体が熱くなってすぐに上がった。阿呆みたいだな、俺……。
4.
ほっかほかの茹で八幡になったところで、電話を取り出す。茹で八幡って微妙に実在しそうと思ってググったら、「ゆで太郎　八幡宿店」というのがヒットした。絶妙。
「……」
……うーん。
緊張する。めちゃくちゃに。
女の子に自分からメールをしたのは結局中学校の頃が最後だし、電話に至ってはそんな恐いこと出来る訳が無いと思い未だに経験0だ。
でも、かけないと後で恐い。
多分深夜くらいに、あいつから幾度と無く着信があるだろう。
流石にそんな恐ろしい事態は避けたい。
「……ふう」
深呼吸と言うよりは、半ば、いや、9割5分ため息だったけれど。
深く深く息を吐いて、意を決して一色に電話を掛ける。
ぷるるるる……と。
無機質な呼び出し音が鳴る。
電話で話すからこそ分かることがある、なんてドヤ顔であいつは言っていたけど……実際問題、何が変わるんだろう？
ぷるるる……ぴっ。
電話に出た音がすると、一瞬の静寂が流れた。

そして。
「……はい」
……うおお。
「あ、ああ、俺、俺だけど」
動揺して、もはや古典的な詐欺の常套句を使ってしまった。
や、確かに。
電話してみないと、分からないことがあるもんだ。電話したからこそ、分かることがあるもんだ。
なんか、一色の雰囲気が違う。
学校であざとく、俺の前では最近妙にデレている感のある一色の、今まで見た事がない側面。
自宅での、もっと言えば自室での、更に言えば一人でいる時の、テンション。
別に電話で多少大声になったとしてもたかが知れている。親御さんも、そんなに気にすることは無いだろう。
だけど、それでも夜遅くなのには違いない。
だから、ほんの少し、心持ち。
声を、優しく、穏やかに抑えている。
最初の第一声だけで、いつもとの違いを色々と感じ取ってしまって、瞬間的に悶えて、動揺してしまった。
しかし、当の一色本人はというと、俺の動揺に気付いてもなんら遠慮することなく、むしろより遠慮せずに、
「ふふ……どちら様ですかー？」
と、あざと可愛く聞いてきた。
その声の調子も、いつもに比べてどことなく穏やかで、大人しい。
初めて見る彼女の顔――といっても、声しかわからないけれど――に、妙にどきどきしてしまう。
「……比企谷だよ。分かってんだろ」
「ふふ、よく言えましたー。……待ってたんですよ？」
ほーん？
「……お、おお、すまん、シャワーとか浴びてるかと思ってな。落ち着

いてからの方が良いと思って」
「そっか、色々考えてくれてたんですね。でも残念、わたしはまだシャワーを浴びていません！」
「え、あれ、そうか。何かしてたのか？」
聞くと、少し拗ねたような声音で、
「……先輩からの電話を待ってたからですよぉ……」
と。
破壊力抜群の「待っていた」発言を、２回叩き込んできた。
……死ぬ。
「あ、ああ、そうか。わるい。要らん気遣いだったな……」
「良いですよ。先輩のそういうとこ……こほんこほん。……さて」
すげえ気になるとこで切りやがった……。
「明日のデートのことなんですけど」
「改めて言われると恥ずかしいな……」
「……わたしだって、さっきは勢いで言えただけであって……今すごく恥ずかしいんですよ……こほんこほん。で、場所なんですけど……」
何この隠し方!?　全然隠せてない！　なんなの!?
「どこに行くかは、もうわたしが決めちゃってますから、当日のお楽しみにしておいてください」
「……へ？」
「だーかーら、明日のデー……ト、のコースはもう決めてるんです。だから、明日はわたしの指示に従ってくださいね」
えらい明るく言われた。
「……や、じゃあ、なんで電話する必要があったんだよ？　それに俺からかける意味も……」
ないじゃん、と言葉を続けようとしたところ、一色に遮られる。
「電話で話すからこそ分かることがある、って言ったじゃないですか。先輩がどう聞こえたか分からないですけど……わたしは、電話での先輩の声が聞いてみたかったんです。……なんか、電話から聞こえてくる先輩の声って……安心しますね。いつもの気持ち悪い要素も、声だ

けだと介入してこないんですかね。……やっぱり良い声だなー……」
　それに、と。
「先輩からかけてくれるのが大事なんですよ？　携帯の画面に、先輩の名前が出るのを見れてすごい嬉しかったです」
「……」
「……あー、わたし、死ぬほど恥ずかしいこと言っちゃいましたね」
「……」
「……先輩？」
「……」
「……ふふ、電話を切った後の先輩の姿をぜひ見てみたいですー」
「……」
「それじゃ、明日は１０時に駅前集合でお願いしますね」
「……」
「……むう。……せんぱーい！　良いですかー！」
「あ、お、おう。わかった」
「はい、確認。明日は？」
「え、駅前に、１０時集合」
「はい、よく出来ましたー。……楽しみにしてますからね。えへへへ……」
「……」
「……では、おやすみなさい」
「……おや、すみ……」
　ぷーっ、ぷーっ、と。
　通話が切れた音がする。
　携帯の画面を袖で拭い、枕元に置く。
　そして、徐に、顔を枕に埋める。
　大丈夫、大丈夫、落ち着け、八幡、君なら大丈夫――――。
「うおぉぁぁぁ

いつ怒ると超怖いんだよな……。
いや、これ、もう。
あかんですって。
曖昧な方言を使っちゃうくらいに。
落ち着け、落ち着け、八幡。
落ち着いて、両手で頭を抱えて。
そして、心の中で叫べ、悶えろ――――。
……うおおおぁぁぁ

（１０）

１．

翌日。

集合場所である駅前で、何の気なしに周りを見回して、時計を見る。

現在時刻は朝９時２０分。

「早すぎた……」

どちらにせよ早めに来るつもりではあったが、妙に気が急いてしまって、気が付いたら集合時刻の４０分前に着いていた。周りを見ると、お昼時に比べればまだそこまで人の往来も無い。

何が楽しくてこんな寒い中……と思ったのだけれど、空を仰いでみると今日は良い具合に日の光が差していて、そこまで寒さを感じることがなかった。２月くらいに暖かい日があると「小春日和だねー」と言いがちだけど、あれ誤用だからね？　晩秋から初冬にかけて使う言葉だからね？

一色が来るまでどうしたものか……と思っていると。

「うおっ……？」

不意に、視界が真っ暗になった。

妙に暖かい感触に、目の周りが覆われる。

「だーれだ？」

……。

「俺の知り合いにこんなしょうもない事をする人がいた覚えは」

「だーれだ？」

……。

叩き潰された……。

「さあてね……誰でしょうねえ……」

とぼけていると。

「だ～、れ、だ～……？」

「うおっ……!?　おい……っ！」

俺の目を覆っていた手から一部の指だけ位置がずれ、恐らく小指と思われる指が俺の口の両端を引っ張ってきた。

一歩間違えば激エロなイベントになる！　とか期待してしまった自分をぶん殴りたいのだけど、単純に口を左右に引っ張られた。
「うふっ（うぐっ）……い、いっひひ（一色）……！」
「え～？　何て言ったんですか～？」
小悪魔を通り越した悪魔の嘲笑が耳元で聞こえる。
や、この子、マジで。
何やってんの？
「早く答えないとぉ……」
ものすごい意味ありげな口調で、中途半端な所で言葉を切る。
……。
……何だよ！　早く答えないと何なんだよ!?
何かもう色々限界だったので、口に突っ込まれている指を引っこ抜く。
「一色だろ、一色！」
言って振り返ると、一色がにぱっと笑った。
「正解でーす！　もー、先輩、分かるまで時間かかりすぎですよー」
「いや、んなもん、最初の手の感触ですぐ……あ」
「あ、え、え？　手の……あ、そ、そうです、か……」
一色が急に慌てたように目をきょろきょろさせ、頬を赤らめる。
……。
自爆した。
「にしても早いな？　もしかして俺より先に来てたか？」
「んー、どうでしょー」
なんでそこ曖昧にするの？　いつ如何なるときも自分が持っている情報の半分までしか渡さないの？
しかし、一色の顔をよく見ると、鼻が赤くなっていることに気付いた。
……まあ、あんま根掘り葉掘り聞かれるのも癪かもしれない。
「ま、スタートが早い分には構わねえわな。行くか」
「はーい」
元気よく返事をすると、少し前屈みになって敬礼をして、きゃるん

と笑った。何その可愛い仕草？
時刻は９時２５分。集合時刻の３５分前。
巻きにも程があるけれど、とにかくデー……お出かけ、スタート。
２．
歩き始めた瞬間、いきなり腕に抱き付かれた。
「いや、なんでだよ……」
「いや、なんでですか……」
呆れ気味の質問に呆れ気味の質問で返された。
や、流石にそんな、のっけから、ねえ？
全力で戸惑っていると、一色は腕を組んだまま指をあごに当てて何か考える仕草をした。
そしてパッとこちらを向くと、
「なんですか先輩のくせにデートの雰囲気に上手いこと合わせて手を繋いだりちょっと抱き締めちゃったりきききキスしちゃったりとかあわよくばその先のこととかする気だったんですかすいませんそんなこと先輩のペースでされたらわたしの心臓が持ちませんからわたしのペースでやらせてもらわないとってあれ私何言ってあわわわわ」
……。
一色いろは、大混乱である。
実にメダパニ。
なんか慌て方のテイストがどんどん変わって行くな、こいつ……。
まあ、俺たちの関係性が変わって行ってるんだから、それも当然か。
「はいはい、分かりましたよ。行くぞ、ほら」
頭をぽんぽんと撫でると、頬を膨らませてむーと唸られた。
「先輩の癖に……生意気です」
「後輩の癖に……生意気です」
ほぼほぼオウム返しをして、頭をくしゃくしゃに撫で回す。
「きゃーっ！　ちょっと、まだ序盤、きゃーっ！」
「うっせ、調子乗るからだ」
その後しばらくこのやりとりが続いた。がうっ！　とか言われて

手に噛み付かれなくて良かった……。

3.

一色に連れられて行った先は映画館だった。

以前のデートで来た時は、俺の別々に映画を見るという提案が何故か流されて、結局卓球をやったんだけれど……。

「先に言っておきますけど」

入った瞬間、釘を刺すような口調で一色が切り出す。

「映画です。別々に見るのは問題外です。見るのはあの映画です。良いですね？」

にっこり微笑まれた。

……全部がっちがちに決められてた。ここ何処の東ゴルトー？

と思ったけど、実際そんな独断でもないか。

「おう」

抵抗しても難なので、大人しく従うことにする。

どんな映画なのかとパンフレットを手に取ってみる。

「……おおう……？」

変な声が漏れてしまい、一色に怪訝な顔で見られる。

①ラブロマンス

②結構濃厚な予感

③上映期間終了間際

こんな感じ。

よくよく思い出すと、一時期ＣＭでよく見た気がする。

「公開された最初の頃はかなり売れたみたいなんですけど、今はどうなってるか分かんないんですよねー」

「へえ。ま、行ってみるか」

「はーい」

腕を組んだままのため、のろのろとチケット売り場へ向かう。恥ずかしいし動きにくいし恥ずかしいし恥ずかしいから振りほどきたい……。

4.

「……マジか」

「うわー、休日なのにすごいですねえ」
上映期間の終わり際だし、休日とは言え朝一の上映に滑り込んだというのも考慮しても。
びっくりするくらい、人が少なかった。
カップルと思しき人たちが最前列近くに1組、入り口近くの壁際にもう1組居るだけだ。
え、なにここ、本当に千葉なの？　田舎のレイトショーじゃないんだから。
「……よし、よし」
隣で一色が何かを確認するかのようにぽしょぽしょと言ったように思えたのは、気のせいだろうか。
「先輩、こっちですー」
「え、でもチケットだと、え？」
チケットを見て真ん中のやや前の方くらいだな……などと見当を付けていたら、一色に腕を引っ張られた。
俺を引っ張ったまま、彼女は階段をとんとんとテンポ良く登って行く。
「人少ないですし、どこに座っても大丈夫ですよーきっと」
言いながら、一色が連れてきたのは入口とは逆サイドの壁際最後列の席。他の客ともかなりの距離が空いている。
……。
……なーんか怖いんですけど……。
言いようのない不安に囚われていると、一色がむすっとした顔で覗き込んで来た。近い近い、顔が近い！
「先輩、早くー。先輩は奥の席です」
「お、おう、おう」
オットセイみたいな声を出しながら、奥の席に押し込まれた。
座ると、クッションにより僅かに腰が沈み込む。
一色に抱き付かれていたせいかこの時点で妙に疲れていたようで、腰を落ち着かせた途端にふいーとジジ臭い声が自然と漏れた。
「なんですかもー今の声。ポイント低いですよ」

一色が俺の仕草を見てくすっと笑い、辛口の批評をしながら隣に座った。
しかも、座ると同時に既に、俺が肘掛に置いている左手を握っていた。
いや、お前マルチタスク過ぎんだろ。どこの掟上さんだっつの。
「や、お前、まだ明るいのに……」
「あれー、暗くなったらいいんですか？」
にまーっと意地悪な笑みを浮かべる一色。
「うぐっ……」
くそ……好き放題に弄ばれている……！
しかも今気付いたけど、ここだと俺は一色と壁に挟まれてどこにも逃げられないな。
逃げる想定をしてる時点でおかしいんだけど。
その後、映画が始まるまでの15分程はひたすら取り留めの無い話をしていた。
その間、一色は握った手をしきりにさわさわと動かしてきて、なんかもう手玉に取られていた。死ぬ程恥ずかしいんだけど。
緊張の為手汗をだらだらかいてしまい、「何ですかもー汗すごいかいてるじゃないですか。気持ち悪いなー」などと罵倒されたのだけれど、そうは言いつつもその後一度も手を離そうとしない事に気付き、何この子もしかしてすげえ優しいんじゃねえのとか考えて一人で死ぬ程悶えた。
流石にその身悶えする様は本気で引かれた。それでも彼女は手を離そうとはしなかったけれど。
5.
映画が始まった。
開始1分の感想。
やられた。
濃厚なラブロマンスの予感……はしてたけど、冒頭が濡れ場ってどういうことだ。
そのシーンが数分で終わった後も、度々抱き合ったりキスしたりす

るシーンを連発する。
ストーリー自体は良さげなんだけど、その色っぽいシーンのインパクトのせいで内容が全く頭に入って来ない。
でも、内容が頭に入ってこない原因は、何よりも。
隣に座っている一色の雰囲気が、明らかに変わったことだと思う。
映画が始まる前と比べて、明らかに彼女の手が熱い。
過激なシーンが入る度に、「わ……うわ……わわわ……」と可愛らしい声を漏らして、その度に繋いだ手の指をもじもじさせる。
スクリーンの光に照らし出される彼女の横顔は妙に色っぽくて。
ふと、彼女と花火を見たらどんな気分になるのだろうかと、そんなことを考えた。
色々などきどきがごちゃ混ぜになったまま３０分程経過して、ようやく映画の中身も落ち着いてきた。
彼女の様子も落ち着いてきたようだし、これでしばらくは安心だな……などと思っていたが。
その認識は、完全に間違っていた。
「……おっ……？」
不意に、彼女が身体を寄せ、俺の肩に頭をぽすっと乗せた。
肘掛邪魔なんだよ！　と反射的に思ったけど、それは理不尽すぎましたね、ごめんなさい。
「先輩……」
ぽそっと、囁くように、俺を呼ぶ。
その声音に、ひどく鼓動が浮ついた。
「どうした」
言って、彼女の方をちらりと見た瞬間に固まった。
彼女が、首をこちらに向けて潤んだ瞳で真っ直ぐに俺を見つめていたからだ。
……ああ、これは、だめだ。
やばい。
「……先輩」
もう一度、俺を呼ぶ。

……いや、もうちょっと何か言えよ。俺の判断に任せ過ぎだって。俺の自主性の無さ舐めんなよ！

でも、ここで自主性の無さを主張しても後々ろくなことにならない。決断はお早めに。

彼女が、一色が、目を細め、顔を少し傾ける。

スクリーンの光が、彼女のあどけない顔をうっすらと照らし出す。

彼女とは逆側に顔を傾け、ゆっくりと唇を近付けた。

続く。

（１１）

１．

肘掛の上で手を握り合ったまま、一色とそっと唇を重ねる。

「んっ……」

映画の音に紛れて、彼女の息混じりの声が漏れる。

自然と、繋いだ手は互いに求めるように指を絡め合う。

「んっ、あっ、んんっ……」

徐に、徐々に、互いの舌を絡ませ合う。

こんな場所でという緊張が相俟って、否が応でも興奮が高まる。

「ふあっ、あふっ、んむぅ……っ」

彼女の声は痺れるような甘さを帯びていき、空いていた左手が俺の右肩を掴み、顔や身体を更に密着するよう促してくる。

彼女の求めに応じて、身体ごと左を向いて、更に密着して彼女の口内を貪り、仄かに香る甘い匂いを堪能する。

いつからか、映画の音がほとんど耳に入らなくなっていた。

２．

「……ぷはっ。……うー……うー……」

唇を離すと、一色は物欲しげな顔をしながら、可愛らしい唸り声を上げ始めた。

……いや、その声すごい可愛いんだけど、え、なに、ここでもっと何かしたいの？　何すれば良いの？

彼女の顔を目の前で凝視しながら考えていると、彼女が突然立ち上がった。

「うおっ？　お、おい、どうしたんだよ……？」

距離的に離れているとは言え他の客が居る為、声は自然と小さくなる。

「うー……」

彼女は子供が拗ねているような表情を浮かべながら、そのまま俺の正面に立って仁王立ちした。

……え、なんで？

「お、おい、一色……？」
自分でもびっくりするくらい恐る恐る聞くと、彼女は俺の言葉を聞くことなく、前屈みになって俺に顔をぐっと近付けた。俺の質問ガン無視☆
俺の戸惑いに構わず、右足を上げて、そのまま膝を俺が座っている椅子に乗せようとしてきた。
――が。
「いって……！」
「あっ……ご、ごめんなさい……！」
映画館の椅子はそんなに横幅の余裕が無い為、余裕を無くしていた彼女はその点に気付かずに、物の見事に俺の腿へ膝を乗せてきた。
幸いすぐ気付いて離してくれたので、そこまで痛くはなかったけれど。
……ってか、こいつほんと軽いな……。
何食べてたらこんな軽くて甘い匂いのする身体になるの？　わたあめ？
「あう……ごめんなさい……うー、でも、でも……うー……あ」
両頬に手を当てながら、謝ったり唸ったり困ったりと忙しそうにしていたが、不意に何かを思い付いたような声を上げる。こっちは未だに、君が何をしようとしてるのか分からないんですけど……。
「先輩、こっちです、こっち」
いつもの小悪魔顔スマイルを浮かべたかと思うと、俺の腕をくいくいと引っ張ってきた。いたいいたい鬱陶しい可愛い恥ずかしいいい匂い！
「え、ここ？　え？」
「早く座ってください！」
目の前でこしょこしょと指示を出される。
指示された場所は、自分の席の目の前。の、床。
椅子と椅子の間の狭い通路だ。
そこに腰を下ろして、壁にもたれかかるように言われる。足は投げ出したように前に伸ばしている。

言われた通りにすると、すぐ左側には自分が座っていた椅子、正面には前屈みでこちらを覗き込んでいる一色、右側には前の椅子及びスクリーンと言う状態になっていた。
……まだ、これから何が起きるのか分かんないんだけど。何で俺、映画上映中に床に座らされてるの？　カーペットっぽいからそれなりにはもふもふしてるけど。
「おい、一色。ほんとに何なん……だ……よ……」
思わず言葉が失速する。
一色の表情がさっきよりも更に色を帯びていて、正直その顔を見ただけで勃ってしまいそうだったからだ。
「うふふ……せーんぱい……」
とろんとした声音で俺を呼んだかと思うと、彼女自身も腰を下ろして、女の子座りで俺に密着してきた。
所謂、対面座位と呼ばれる体勢だ。
ズボン越しに、彼女の柔らかい尻の感触を味わう体勢。
え、この子何してはりまんの？　思わず言葉がぶれた。
流石にやばいだろうと思って彼女の顔を見ると、もう、完全にスイッチが入っていた。
「えへへ……んっ……」
「んむっ……!?」
にへっと笑うと、そのまま細い腕を俺の首に回して、待ち焦がれたかのように唇を重ねてきた。
3.
「んっ、んちゅるっ、れろっ、じゅるるっ、はむっ、あむっ、れるっ、んむっ、ちゅるるっ、んんっ……んんんっ……」
「～～～～……っ！　～～～～……っ！」
想像を超えていた。
一色の舌による蹂躙があまりにも激しくて、声にならない悲鳴を断続的に上げてしまう。
首に絡めた腕が巧みに俺の顔の角度を変え、様々な角度から俺の口内を舐め、歯列を舐り、舌を咥え込んで啜りに啜る。

しかもこの責めをしている間中、彼女は腰を悩ましくくねらせて絶え間なく俺のモノを刺激してくる。
頭がおかしくなりそうだった。
映画の音が微かに聞こえる。どうやらまた濡れ場のようだ。
きっと、さっき見た綺麗な俳優と女優が艶めかしく抱き合ってるんだろう。
でも、そんなものはもうどうでも良かった。
今目の前にいるこの子の方が、絶対に何倍も、何十倍も色っぽい。
キスだけで、思考が溶け、視界が霞み、何も分からなくなる。
気付けば、俺も彼女の背中に腕を回して、目一杯密着していた。
コートこそ脱いでいるが、互いに何枚も服を着ている状態で、こんな狂おしい程の快感に支配されてしまうのなら。
互いに一糸纏わぬ姿で同じことをしたら、一体どうなってしまうのか。
虚ろな瞳でぼんやりと彼女の淫靡な表情を眺めながら、そんなことを考えていた。
4.
ふと、一色が唇を離した。
「……はぁっ、はっ、はっ、はぁっ、うぅっ……」
自分の息が尋常でない程荒れていて、尚且つさっきの彼女と同じように唸り声を漏らしたことに自分で驚く。
「……はっ、はっ、はっ……先輩」
俺をしっかり見つめているかどうかも怪しい程焦点の合わぬ目で、一色が俺を呼ぶ。
鼻と鼻が触れ合う程近い距離で、彼女がにっこりと微笑む。その艶やかさに、腹の奥底から震えた。
「今度は……先輩からどうぞ？」
言って、俺の目の前に舌をべろりと垂らして見せ、とびきりいやらしく目を細める。
まるで待ての合図を解かれた犬のように、彼女の舌にかぶりついた。

5.

「えぐっ、んぶっ、じゅるるるっ、ごくっ、うぇっ、んっく、ひぅっ、ふぐぅっ、じゅるるっ、ごくっ、あふあっ、じゅるっ、ごきゅっ、んあっ、んあぁぁ……っ」

右手で一色の後頭部を、左手で背中を押さえ込む。何をしても逃げられぬように、きつくきつく抱きしめる。

彼女を仰け反らせるようにして、止めどなく唾液を彼女の口に流し込む。

口の中では、彼女にさっきやられたことをそのまま仕返すようにひたすら彼女の粘膜を蹂躙している。

既に散々高揚している状態でこんな責めを受けたためか、彼女は腕をだらりと垂らして、目をむいては細めむいては細めを繰り返し、断続的に幾度となく痙攣していた。

それでも、責めるのを止めない。

「ひぐっ、んぐっ、わたしだっ、てぇっ……！」

彼女が力の抜けたまま、舌だけで反撃をしてきた。

その後も、責められて、責めて、少しだけ休んで、また責められて、責めて……と繰り返し続け、気付けば映画はエンドロールを迎えていた。

6.

館内が明るくなった所で、二人ともようやく我に返る。

「うおっ、やべっ。一色、立つぞ。……一色？」

「あ、あはは……腰が……」

俺の上で、一色は腰を抜かしていた。

……まあ、そりゃそうか。

「取り敢えず俺の上からどかすぞ。……うりゃっ」

「わひゃぁっ!?」

脇を掴んで横にずらしたら、何気に今日一で大きい声を出された。

あうあう言って顔を真っ赤にしながら俺の頭をぽかぽか叩いてくるけれど、そんな可愛い攻撃は意に介さない。

先に立ち上がり、彼女に手を伸ばす。

「あ……ありがとうございます」
少し頬を赤らめながら、俺の手を握った。
「他の人が先に帰ってて良かったな。見つかったら恥ずかしいなんてもんじゃねえぞ……」
「あはは……そうですね……」
彼女はどうやら完全に素に戻ったようで、明らかに言動がしどろもどろになっていた。
……今頃恥ずかしくなったの？　２時間くらい遅いよ？
「取り敢えず、どっかで休むか」
「……ですね」
立ち上がらせる時に繋いだ手はそのままに、出口に向かって歩き始めた。
7.
映画館というものは、本当に時間感覚を狂わせる。
まだ建物の中だが、映画館を出ただけで「そう言えば、まだ日中だったな」と驚きを覚えた。
手近な所にベンチがあったので、そこに一色を座らせる。
「ほら、ここ座っとけ」
「あ……ありがとうございます」
「ちょっと飲み物買ってくるから待ってろ」
「は、はい」
しどろもどろなないろはす、略してろはすを残して自販機に向かう。この略称、いろはすを更に略したようにしか見えねえな。
「……」
二人分のマッカンを買いながら、ふとさっきの行為を思い返す。
結果。
映画を見た時間：最初の１０分弱。
キスしてた時間：残りの２時間強。
……。
……いやいやいや。
頭おかしいでしょ、俺も、一色も。

唇ふやけるわ。ふにゅんふにゅんになるわ。
……触ったら割と普通だった。人体って丈夫！
っていうか、思い出したら勃っちゃった。
マッカン２本を持ってテント張って佇む男とかもう怪しい気配しかしないので、足早に戻ることにした。
「ほれ」
「あ、ありがとうござ……うわ……」
……こいつ、マッカンを見てうわって言いやがった……！
「おい、何が不満なんだ。千葉県民みんな大好きマッカンだぞ」
「わたしも千葉県民ですよ……この時点で先輩の認識間違ってますよ……」
すんごい悲しげな表情で言われた。おいおい、今日は表情が豊かにも程があるぞいろはす。何かいいことでもあったのかい？
「まあ、ありがたくもらっておきますよ……うへぇ」
飲んですぐのこの怪訝な表情……腹立つ……！
マッカンを両手で持って、くゆくゆとかき混ぜるように回しながら彼女がちらりと俺を見る。
……かき混ぜて攪拌したところで甘さは柔らがないからね？
「その……さっきはすみませんでした。やり過ぎちゃいました……ちょっと」
「や、別に良いぞ。俺も乗ったんだし」
ていうか、あれでちょっとなの？　上限が見えない……。
「朝一なのに、いざ先輩と過ごすと、なんかもう……あうぅ」
くぅんと鳴きそうなくらいに、眉をくにゃっと曲げる。何この子、超可愛いんですけど。
「気にすんなよ。休憩したら次行こうぜ」
言って彼女の頭に手をぽんと乗せると、ほわっと顔がほころんだ。
「……はい。……それで、次なんですけど……もうお昼ですよね」
「ん、ああ、そういやそうだな」
時計を見ると、既に１２時を回っていた。ちょうど良い時間帯だ。
「それで……最初は前先輩が連れて行ってくれたラーメン屋さんに

行って、その後またぷらぷらしようとしてたんですけど……」
「おお、マジで？」
おいおいいろはす、ラーメンの魅力が分かっちゃったの？　どんどん深みに落とし込んでやるよ？
「でも、ちょっと今は気分がそういう感じじゃないので……場所を変えようと思います」
なんだ残念……ああ、いとしのなりたけ……。
不意に、彼女が顔をしゅばっと上げて、にこっと微笑んだ。しゅばにこっ！
朝ズバッ！　と同じテンションで言えばなんとかならないかな？
ならないな。
「お昼ごはんは私が作りますね」
「ん、そうか。……って、え？」
作ります？
どっかに行くんじゃなくて？
実はお弁当作ってきましたとかでもなく？
「え、なに、お好み焼きとかもんじゃ焼きとかに行くの？」
「そんな訳無いじゃないですか……」
呆れられた……。
「ほら、行きますよー！」
「あ、お、おい……」
急に元気に立ち上がったかと思うと、俺の腕を強引に引っ張って行く。
……もう、好きにしてください……。
俺の腕を引っ張る一色の横顔をちらりと見る。
……まあ、すげえ楽しそうだから良いか。
続く。

（１２）

１．

一色に腕を引っ張られて歩き始めたが、途中から彼女はごく自然に俺の手を握っていた。

彼女の手から伝わる温もりが、妙にこそばゆい。

うーん。

さっきは腕に抱き付かれてやんややんやと騒いでいたけど、こうも普通に手を繋がれるとどうにも断りづらい。

いや、別にいやって訳じゃないんだけどね。

恥ずかしいんです。鬼恥ずかしいんです。ほんと。

悶々としながらも彼女を見ると、相変わらず楽しそうな表情だ。まあ、これくらいの恥ずかしさなら我慢するか……。

しかし、歩きはじめてからそれなりに時間が経つ。そろそろどこに向かうのか本格的に気になってきた。

「おい一色、一体どこに……」

「はい、ここです」

「……え？」

連れられて行った先は、この街へ来る時に使った駅だった。

……ご飯を作るって言われて、更に駅に……。

「なあ、一色。もしかしてお前が行こうとしてるのってお前の」

「まずは電車に乗りましょー」

ＭＵ☆ＳＨＩ！

みんな、もうちょっと俺の人権について考えてほしいな！　泣いちゃうぞ☆

言葉を叩き潰されたショックから立ち直る間も無く、二人で電車に乗り込んだ。

つら。

２．

電車の中は中々の込み具合だった。

ふと、目の前に居る一色を見る。

電車に乗るときまで続けるのは迷惑だと思ったのか、どちらから言うでもなく繋いだ手は離していた。繋いだ手を離さぬようにとかＪ―ＰＯＰでよく見る歌詞だよね。素敵なフレーズだから良いんだけどね。もう離さないから的なね。

周りをちらりと見渡すと、男どもが彼女をちらちらと見ているのが分かる。

……うーん。

なんだか……うーん。

彼女が可愛いのは、まあ、認めよう。実際かなり可愛いと言うことをここ数日で猛烈に実感してるし。

でも、なんだか、うーん。

なーんか、なーんかやだな。

……うん、すごいやだな。

この密閉された狭い空間で、彼女が男どもの視線に晒されるというこの状況が、なんかものすごくやだ。

腕を組んでうんうん悩んだ後、ちっぽけな決意を心の中で固めて、彼女に話しかける。

「一色、これからしばらくこの電車乗るのか？」

「そうですねー、８駅くらいですかね」

「そうか……じゃ、ちょっとこっち来てくれ」

「え、ちょっと、先輩？」

戸惑う彼女の手を引いて、少しばかり移動することにした。

３．

「わ、わー……わー……」

一色が俺の顎のすぐ下で、何とも言えない声を上げている。

あの後俺は一色に、電車の壁に背を付けるように言って、俺が彼女を周りから守る形になるようにした。

男どもに彼女が見られるのもいやだし、もっと混んできたときに彼女を安全な状態にしていたい。

そう考えたら、自然とこの行動に移っていた。

……ただ、ちょっとまずいことになっている。

思った以上に混んでしまい、気が付けば右手は彼女の肩に添え、左手は彼女の耳のすぐ横を通り過ぎてすぐ後ろの壁に付けている。
つい数日前の、生徒会室での壁ドンを思い出した。あれと同じ状況だ。
逃げ場がない分、今の状態の方がより激アツ……間違えた、色々とまずい。
こんな体勢の為か、彼女はずっとおろおろしている。可愛いなこいつ。うりうり。実際は何もしてないけど、心の中で彼女の頬当たりを指でうりうり。……俺超気持ち悪いな。
「ふ、ふふ……せ、せせ、先輩、わたしをこんな風にしっかり守ろうとするなんて……良いですよ、ポイント高いですよー？」
……震える声で上から目線ってすげえなこいつ。
「小町みてえなこと言ってんじゃねえよ。わりいな、もうちょっとスペース確保したかったんだけど」
「い、いえ、大丈夫……です、よ？」
言って、彼女が俺の胸にそっと手を添える。
ただ添えただけで終わらなそうな、そんな手の添え方だった。
「お、おい、こら、ここ電車だぞ、やめろって」
ひそひそ声で彼女に注意を促す。どうでもいいけどひそひそ声って案外周りに聞こえちゃうみたい。意外と喉への負担もあるから、喉を傷めた時にしゃべると逆効果みたいだし。じゃあいつ使うんだって話だよな。ちなみに今はこんなこと考えてる余裕ないのでひそひそしちゃいます。この段落見てると余裕綽綽みたいだけどね。
俺の注意を聞いて、不意に彼女が顔を上げ、にやっと笑った。うっ、いやな予感……。
「そっか、そうですよね……先輩困っちゃいますよねー。……じゃ、どうします？　抱き合っちゃいますか？」
「ばっ……！」
馬鹿と言おうとするも言葉にならず、ミス・メリークリスマスみたいになってしまった。このバッ！
「あ、じゃあ、先輩はどちらでも良いですよ？　わたしは抱き付いちゃ

いますねー」
呑気な口調で言って、彼女が本当に俺の背中に腕を回してくる。
「こ、こら……っ！」
幸い、端っこにいることも相俟ってまだ周りからの視線は感じないが、バレるのは時間の問題だ。
「うふふー……あー、先輩に抱き付くとなんか安心しちゃうなー……」
嬉しそうに俺の胸におでこをすりすりとこすり付ける。
……え、なに、この子。
超押し倒したいんですけど。
や、でも、今はそんなこと考えてる場合じゃない。
「こら、離れろって……」
「えへへー」
……全然離れない。超楽しそうですね、いろはす。
離れろと言う側と、言われても離れない側との完全ないたちごっこになっている。や、マジでどうしよう？
どうしようかと悩んだ末に、彼女の肩に添えていた手を彼女の耳元に動かし、もう一方の耳に顔を近付けて囁きかける。
「いいから、離れろよ。言うこと聞かないと……」
息混じりで、少しだけ雰囲気を作ってみる。
この後の言葉は特に考えてはいなかった。まあ多少怯んでくれれば良いだろうという程度の、苦肉の策に過ぎない。
そう思って掛けた言葉だったが、彼女の反応は予想していなかったものだった。
ぴたりと止まっている。
俺からは彼女のつむじしか見えないのだけど、本当にぴたりと止まっているのが分かった。
「お、おい、一色……？」
彼女に問いかけると、震えるような呼吸音が聞こえた。
「……ど、どうするんですか……？」
「ん？」
俺を抱きしめる腕の力が、不意に増す。

「離れなかったら……どうするんですか？　わたし、何かされるんですか？　先輩、わたしに、何かするんですか……？」
彼女は不安と期待が入り混じった声音でそう呟くと、ゆっくり顔を上げた。
色を帯びた瞳に、胸がどくんと高鳴る。
つい昨日の駐輪場でのやりとりが、頭を過ぎった。
「あ、や、流石にこんな場所じゃ……」
言うと、彼女は再び俯いた。
電車の中は車両の駆動音や人の声などが溢れている筈なのに、気付けばそれらの音が全く耳に入らなくなっていた。
聞こえるのは、互いの呼吸の音だけだ。
「……じゃ、じゃあ、ここじゃなかったら、先輩の言うことを聞かずにこのままくっついてたら、何かするんですか、何かしてくれるんですか……？」
声音に期待がどんどん混じっていく。俺を抱きしめる腕は絡めるようにして、背中をしゅるしゅると撫でている。
完全に固まってしまい、何も答えることが出来ないでいると、彼女は再び顔を上げ、俺の耳元に顔を近付けた。
「えへへ……わたし、先輩の言うこと聞かずにこんな恥ずかしいことしちゃいました。……後で、その……おしお……き……あう……」
自分で言っていて途中で恥ずかしくなったのだろうか、言葉は尻すぼみになっていき、最後の部分はほとんど聞き取れなかった。
ぱっと俺から顔を離した彼女は耳まで真っ赤になっていて。
小悪魔が覗かせた可愛げに、正直心臓のＢＰＭが死ぬぎりぎりくらいまで上がっていた。
……恥ずかしがってんのに、抱き付きは解除しないのね……。
可愛すぎて頭がくらくらしてきたので、少しでも思考を整理しようと質問を投げかけることにする。
「や、お前、ほんとどうしたんだよここ数日？」
「え、何がですか？」
「今まであれだかあざとくやってきたのに、ここ数日の間はお前ほと

んどあざとくなかったぞ？　これじゃもうただのめっちゃ可愛い……あ」
「え、あう、え、え、え？」
……しまった。
勢いに任せて一息に話そうとしたら、ものの見事に自爆した。ただの本音暴露になっちゃった。
比企谷八幡、だいばくはつである。
むしろメガンテ。
「あ、あう、可愛いって……先輩がわたしのこと可愛いって……あう」
生徒会室でも一応言ったことはあるけど、今回は口が滑って言った分、より本気度が高いように聞こえたのかもしれない。
彼女は俺の胸に再びおでこをこすり付け、あうあう言いながらぷるぷるしてた。
……くうぅ。
理性が、理性が、もう！
ぶっちゃけ途中から周りの視線をちょくちょく感じてはいたのだけれど、もうどうでも良くなっていた。
残りの数駅は、俺が彼女の頭をひたすら撫で、彼女は俺の胸元でひたすらあうあう言いながらおでこをこすり続けるというシュール極まりない光景になっていた。
や、本当に、何これ？
そんで結局、俺たちはどこに向かってるのん？

続く。

（13）

1.

目的の駅（と思われる場所）まで、あとほんの少しというところまで来た。

一色は依然として俺の胸元に顔をうずめたままなのだけれど、流石にそろそろ切り替えてもらわなければいけない。これ、ほっといたら山手線なら2周くらいしちゃいそう。2周しちゃうのかよ。

「おい一色、そろそろじゃねえのか？」

頭上から呼びかけると、一色は俺のコートを掴んだまま、ほんの少しだけ目線を上げた。

頬は依然として赤いままで、恥ずかしがっているためかその目は小動物のように愛くるしい。

……わぁ……2周くらいしてもいいかもー……。

いや待て、そもそもここは山手線じゃない。ていうか山手線だから良いという訳でもないし。落ち着け、俺。一時の煩悩に流されていては流石にくたびれてしまう。

ここは泣いて馬謖を斬る思いで……と無駄に深刻な覚悟を決めている内に、また一色が顔をうずめてしまった。なんでだよ。二度寝なの？

……またあうあう言って、おでこをこすこすとこすり付けてる。

この感じだと、こいつ俺の言葉がまともに耳に入ってないんじゃないだろうか。

仕方ないので、もう一度呼び掛けることにする。

「一色、お前が降りようとしてた駅、もうすぐなんじゃねえのか？」

今度は耳元で囁くと、くぐもった声で「ひゃうっ！」と驚く声が聞こえた。

しかし、まだ顔を出さない。

なに、俺の胸元は天岩戸なの？　外で楽しそうに騒げば何事かと思って出てくるの？

……んー。

もはや、あと1駅くらいしかないぞ。
よし。
実力行使。
一色の両頬に手を添えて、内側にむにーっと押さえつけながら、無理やり顔を上げる。
「ひゃむっ!?」
変な声が出た。もはや何の生き物だろう……可愛いけど。
「話を聞けっつの。お前が降りようとした駅、次なんじゃねえのか？」
言って手を離すと、やっと俺の目をちゃんと見た。天岩戸からの脱出、おめでとう！
ようやく話の意味が理解出来たか……この１０数分間どんだけ恥ずかしかったんだよ……と呆れていると。
「……ほえ？」
すんごいすっとぼけた、幼い声を上げて小首を傾げた。
こいつ、マジかよ。
まだ余韻が残ってるの？　俺が一回可愛いって言うだけでこんなに引きずるの？
びっくりだよ、いろはす。
……うん、可愛いというフレーズは、必殺技として温存しておいて、然るべきときに不意を突く形で連発してみよう。
よし、そうと決めたらこいつに可愛いってしばらく言わないぞ。我慢、我慢。
「いや、お前寝起きの小町みてえな声出してんじゃねえよ。可愛いだろうが」
出し惜しみ出来なかった。1行も待てなかった。
まあ、小町を引き合いに出しちゃったらそりゃ言っちゃうよね。
俺としては小町のことを会話に出すイコール可愛いという賛辞がセットで出てくるという式が成り立つので、ごくごく自然な言葉を発したつもりだったのだけれど、一色はそんな俺の台詞に対して、この電車に乗ってから一番の白け顔を見せてくれた。
「うーわ、シスコンだぁ……先輩、やっぱり気持ち悪いですね……」

すげえ。
俺への嫌悪感で、一瞬で一色のモードが切り替わった。
ちょっと凹むけど、これで会話が成り立つならまあ良いだろう。
「今更だろバカ。ほら、この駅じゃねえのか？」
言ったところで、丁度ドアがぷしゅーと音を立てて開いた。
「え、あ、そうですそうです。なんでもっと早く言ってくれないんですかもー！」
「いや、お前それ理不尽過ぎるだろ……」
呆れる俺に見向きもせず、それでもしっかり俺の手は掴んで、一色はホームに向かって早足で歩き出した。
2．
駅に降り立ち、益々疑念が募る。なーんかここ最近この近くをよく通ってるような……。
「なあ、一色、これから行くのってやっぱりお前の」
「あ、コンビニ寄りたいんであそこ入りますねー」
ＭＵ☆ＳＨＩ！
こいつすげえな！　今の俺の言葉及び俺がコンビニに入るのを是とするかどうかという2つの俺の意志をガン無視したぞ！　別にコンビニくらい良いんだけど！　良いんだけどね！
俺はまだ経験した事がないけど、こいつの買い物に付き合わされる戸部に少しだけ同情しちまうわ……あ、でも戸部だからいっか。あれ、でも、その役目って今後俺が……え、どうするの？　俺そんな買い物地獄に付き合わされたら死んじゃうよ？　ねえいろはす、大丈夫？
「先輩―、ほら早く早くー」
来たる暗い将来に不安な思いを馳せていると、一色が腰に手を当てて少し屈んで、膨れっ面で俺を急かした。ちくしょう、ここであざとく攻めてくるか……。
「はいはい、わかりましたよ」
がしがしと頭を掻いて、何とはなしに周りを見渡してから、一色と共にコンビニに足を踏み入れた。

3．

一色はコンビニに入るなり、即座に入口近くのコーナーで足を止める。

隣でぼーっと立っていても気持ち悪がられるだけだろうと思い、ぶらぶらとコンビニ内を散策し始めた。

お、ニセコイの新刊出てんじゃん。戸塚はニセコイで言ったら誰かなあ……小野寺さんかなあ？　俺にとっちゃあメインヒロインだしなあ。はっ！　まさか、戸塚は俺と一緒の高校に入りたくて受験勉強を頑張ってくれたのか……!?

抜群にくだらない妄想をしながらぽてぽてと歩いていると、ふとR—18のコーナーが目に入った。……あ、六角八十助先生だ。この人のマンガ、肉感半端ないしラブラブ感出ててすげえ好きなんだよな……。

と、足を止めて一瞬にやけていたら、横から物凄い嫌悪の視線を感じた。

ぞっとして振り向くと、一色が品定めしようと身体を屈めたまま、顔だけこちらに向けてごみを見るかの如き目で俺を睨めつけている。

……やばい、死ぬ。

誤魔化そうとして適当に雑誌を手に取って立ち読むフリをしよう。

表紙が壇蜜だった。

しかもかなりぎりぎりのセクシー衣装。裸よりエロい。

罪の上塗り。

横から感じる負のオーラが跳ね上がった。キメラアントで言うとモラットがいきなりネフェルピトーになるくらいの差。やべえそれすぐ右腕持ってかれちゃう。

極めて迅速且つ丁寧に壇蜜が表紙の雑誌を戻し、飲み物コーナーに逃げた。マジで逃げた。

4．

適当に二人分の飲み物を見繕って、かごの中身を確認する。

中身……マッカン×2、その他の飲み物。

よし、オーケー。一分の隙も無い。

その他の飲み物で一色からクレームが来ても、マッカンをあげれば黙ってくれるはず。だって千葉県民だもの。
……さっき露骨に渋ってたのを思い出した。
まあ俺が2本飲めば良いかと思い、かごの中身はそのままに一色を探す。
時間にしてまだ数分しか経っていないのもあるが、まだ一色はさっきのコーナーに居た。
一色はさっきと同じ少し屈んだ体勢のまま、目線を変えずに口を開く。
「あ、先輩の分の歯ブラシはもうかごに入れてるんで大丈夫ですよー」
「お、おう、おう？　んん？」
え？　歯ブラシ？　なんで？　それどこの阿良々木家？
などと思いながら一色のかごを覗くと、更に驚いた。
歯ブラシに加えて、男物の下着も入っている。
「え、なに、一色って兄弟いるの？」
「えー？　居ないですよー。まあ今日は土曜日ですしねー」
え、何言ってんの？　飛躍しすぎじゃない？
でも、え、それなら、え、あ、そうか。
確かに今日は土曜日だ！
ということは次の日も休みだ！
それなら安心だね！
……じゃなくて。
え、え、え？
頭の中がクレヨンしんちゃんばりにパニクっている。
「ま、こんなもんかな」
パニックパニックしてオラはにんきものーなどと思っていると、一色が一仕事終えた様な表情で身体を起こした。
そして俺を見て、にぱっと笑う。
「じゃ、買っちゃいましょう！」
言った直後に、俺のかごの中身を見て、うへぇと唸りながら、
「……またマッカンですかー？」

と、不満たらたらの顔でぼやいた。
……こいつ……一応お前の分もと思って買ったらこれかよ……！
確かにさっき渋ってたのをもう忘れてた俺もアレだけど！
心の中でトトロのメイちゃんばりに髪を逆立てて怒っていると、一色が俺にぎりぎり聞こえるくらいの声で、
「でも、これから慣れていかなくちゃなぁ……そこは頑張るかぁ……」
と、ぽしょりと呟くのが聞こえた。
うぐっ。
あぶねえ。
悶えて死ぬとこだった。
コンビニの日用品コーナーの前で悶え死にとか比企谷家末代までの恥だわ。小町が居るからうちの家系は続くはず。
心臓を押さえて心を落ち着けていると、一色が急に俺の腕に絡んできた。おい、また落ち着かなくなるから！　ほんとに！
「じゃ、買っちゃいましょう？」
「お、おう。じゃあ俺がまとめて払うわ」
言って一色のかごから品物をひょいと取って俺のかごに入れると、一色が一瞬きょとんとした顔になる。
「えー、いいですよー。わたしが買おうとして入れたんですし」
「でもこれ、多分全部俺用だろ？」
この、お泊まりセット……。
「むー、そうですけどー……」
一色がぷーっと頬を膨らませる。指で押して空気をぷひーと吐き出させてやりたい。
……ていうか、否定されなかった……。
まあ、なるようにしかならないだろう。……うん、うん。大丈夫かな？　かな？
「これくらいなんてことねえよ、気にすんな」
あんまりここで押し問答をしてもしょうがないので、一色の頭をぽんぽんと撫でて会話を切り上げると、さっさとレジに向かう。
一色は俺に撫でられると気持ち良さそうにあうあうと唸った後、

さっきよりも頬を膨らませて俺を恨めし気に見た。
結局払っちゃうんですねーとぼやいて、口を尖らせる。
「先輩のくせに生意気です……」
「後輩のくせに生意気です……」
このオウム返しは前もしたなあと思いながら、レジで店員にポイントカードを渡した。

続く。

（１４）

１．

一色と俺はコンビニを出て、再び目的地へ向かって歩き始める。

まあ、俺は未だに行き先を知らないんだけどね。

一色は俺の手をしっかり握ったままずんずん進んでいる。俺はただただ連行されるだけだ。

……や、もう、場所はだいぶ前から見当が付いてるし、普通に言ってくれたって良いじゃないですかねえいろはすさん……。

ふう、とため息を吐きながらも歩き続けると、見覚えのある住宅街の景色が周りに広がってきた。

……うん。もう、これは確定だ。

まさかここから一色のお友達の家に行くとかいう訳の分からん展開は無いだろうし。もしそんな状況になったら、俺はうごくせきぞうならぬうごかぬせきぞうになる。それただの石像だな。

「はーい、ここでーす！」

一色がぴたりと止まり、ぴしっと指を差した先は、２階建ての一軒家だった。うちと同じような、一般的な水準の家だ。

「……ここ、お前ん家だよな？」

確認の意を込めて疑問を投げかけると一色は、

「はい、そーです！　驚きましたか？」

と、とてもわざとらしく笑顔を作った。

「や、そんなの電車に乗る前から見当は付いてたけど……。昼ご飯作るって言っちゃってたし……」

「あー、確かに分かりやすかったかもですねー。ま、いいでしょう！じゃあ入りますよー」

……ここまで引っ張った意味、全然無いやないかーい。

心の中で似非関西弁でツッコんでいると、一色のある挙動に対して神経が集中した。

「……あ」

一色にも聞こえない程度の、小さい声が出た。

ちゃりん、という音と共に一色が出したのは、家の鍵だった。
その行動から導き出される結論に、心拍数が跳ね上がる。
「……家、誰も居ないんだな」
一色が鍵を開けてドアからかちゃっと言う音がすると共に、俺がぽそりとさりげなく言うと、一色が一瞬だけ動きを止めた。
一色が言葉を発するまでの僅かな間が、妖しい空気を作る。
「……はい、明日まで居ないんですよ」
「……っ」
振り向きもしないまま言った言葉に、心臓を鷲掴みにされた。
息をするのも忘れて固まっている俺を尻目に、一色は家のドアをがちゃりと開けた。
2.
「はい、どうぞー」
一色が身体を玄関の中に入れた状態で手招きする。
「おう、お邪魔し……ま……!?」
その瞬間。
俺が玄関に一歩足を踏み入れて、まだドアは外に開け放たれている状態で。
一色は、俺に抱き付いて唇を重ねてきた。
「……んっ……はむっ、んんっ……」
映画館の時程の濃厚さはないものの、味わうように舌を絡ませながら、左手を俺の背後に伸ばしてそろりとドアを閉める。
ばたん、とドアが閉まる音がしたと同時に、一色は両手を再び俺の首や背中に絡めるように回し、身体を密着させてきた。
「～～～～っ！　～～～～っ!?」
俺は思考が追い付かず、腕は真っ直ぐ下に伸ばしたまま、指をただただわきわきと動かしている。
そのまま１０秒程、俺は一切動けぬまま一色に口内を蹂躙され続けた。
「……ぷはっ……ふふ、先輩、いらっしゃいませ」
「……お邪魔……します……」

唇を離して、目を細めて艶やかに微笑む一色が発する言葉に、俺は完全に固まって放心したまま、ぽけーっと返事をした。
一色が腕を離し、くるりと向きを変える。
「はい、スリッパはこれをどうぞ。まずはリビングに来てもらっていいですかー？」
ぱたぱたと手際良く準備し始める一色の切り替えの早さに驚愕した。や、ちょっと、2時間程待って頂きたい……。頭が付いていかないよぉ……。
「あ、ああ、わかった」
外国人に日本語を教えるとき、「生返事」という言葉はこういう時に使うんだよって言えるくらいの、典型的な生返事をしてしまった。
一色の後ろ姿を追いながら、ぼそりと一言、
「小悪魔め……」
と、唇をさすりながら呟いた。
3.
「先輩、お腹減ってますか？　減ってますよね？」
リビングに入るなり、質問というか付加疑問文を投げかけられた。ねえ、それ、聞く意味ある？
しかし実際、腹は割と減っていた。
……午前中が濃厚すぎたしなぁ……。
「ああ、結構減ってるわ」
腹をさすりながら一色をちらりと見ると、俺の返事を受けてきゃるんと笑った。
「よーし、じゃあ、がっつりしたの作っちゃいますね！」
胸の前で両手で小さくガッツポーズを作って、むんと気合を入れる。
……くっそ、いちいち可愛いな……。
さっきの不意打ちのこともあり、心がぐらんぐらんに揺らいでいると、一色がぽんと手を叩いた。
「あ、そうだ、その前に……」
言って、ぱたぱたと小走りで視界から消えた。え、なになに？

一色はものの１０数秒程で戻ってきた。
「先輩、これ、どうですかー？」
「うお……」
一色は戻ってくると、エプロンを身に着けていた。
イメージに反して、と言うべきなのかは分からないが、着ていたのはシックなベージュのエプロンだった。
お腹の辺りにリボンが結ばれているのもまた可愛らしい。
まだ幼さが残る容姿と、大人っぽい落ち着いた雰囲気のエプロンとのギャップもまたたまらない。
なんと言うか、下手に可愛らしいものを着るよりも遥かに似合っていた。
うん、可愛――。
「どうですか？」
心の中で感想を述べ終わらないうちに、一色がにこにことしながら俺に顔をずいと近付けてきた。
……すんごいにこにこしてる。
「うっ……ま、まあ、悪くないんじゃねえか？」
にこにこ顔の圧力、略してにこ圧に負けて、思い切り目を逸らしながら答えた。超恥ずかしいんだけど……。
俺の感想に対して、一色があごに手を当ててむむむと唸る。
「うーん……それ、本音じゃないですよね？　嘘とまでは言いませんけど、控えめに言ってる感じがします」
「うぐっ……」
バレた。
「さあ、どうですか？　正直に」
更にずいと近寄られる。にこ圧も増している。ふええ、怖いよぉ……。
「ま、まあ、似合ってんじゃねえかな……」
背中に冷や汗をかきながら答える。
すると、一色が再びむむむと唸った。
「……まだ、ですね？」

「うっぐぅ……」
もうやめて！　とっくに八幡のライフは０よ！
「ど・う・で・す・か？　わたしのエプロン姿は？」
鼻と鼻が触れ合う程の距離にまで近付いて、一色がにこにこと笑う。
……もはやこれまで……。
観念して、一色の目をあまり見ないようにしながら、
「……あー、なんだ、その、すげえ、可愛い、と、思う……」
ぽそりと言うと、途端に一色が耳まで真っ赤になった。
「……あう……」
小さく呻いたかと思うと、くるりと向きを変えて、両頬に手を当てたままぱたぱたと冷蔵庫の方に走って行った。
……そんなに照れるなら、追及しなきゃいいだろうが……！
言う方も。
聞く方も。
顔が真っ赤だった。
4.
リビングのソファに腰を下ろし、ぷひーと深く息を吐く。なんか温泉に入ったみたいな声が出た。
台所からは、一色がハミングするように小さく口ずさむ歌声と、とんとんと小気味良いリズムで野菜を切る音がする。
……ううむ……素敵な時間だ……。
一色が何を作ってくれるのかは分からないが、この間作ってもらった弁当のクオリティを考えれば、きっと良い感じのものを作ってくれるに違いない。
美味しいご飯もそうだけれど、一色が作ってくれるという事実が、また妙にこそばゆい。
ソファに座りながら、せわしなくもぞもぞ動いていると、台所に居る一色から声をかけられた。
「せんぱーい」
「んー」

「落ち着いてください。キモいですよー」
……。
「……はい」
全然。
容赦が無かった。
そこから料理が出来るまでの間、どう振る舞えば良いか全く分からなくなり、ひたすらソファの上で固まっていた。……ソファで姿勢を固めると変なとこに力入って超きついんだな……こんな発見要らなかった……。
5.
「はーい、出来ましたよー。テーブルのお箸置いてあるとこに座ってくださーい」
「おー」
さりげない気配りが上手いなーと思いながら、テーブルに腰を下ろす。
運ばれてきたのは、蓋をかぶせた丼だった。
俺がごきゅっと唾を飲み込む音が聞こえたのか、一色がにんまりと微笑む。
「うふふ……ではでは、開けたいと思います！」
じゃじゃーん！　と、ベタを通り越して古典的な効果音を自分の口で言うと、一色は丼の蓋をかぱっと開けた。
金色に彩られた丼の表面と、ところどころに見え隠れする肉厚な鶏肉。
見た目の細かな違いはあれど、よく見慣れた料理だ。
「……これは、親子丼？」
聞くと、一色がにこっと微笑んだ。
「正解です！　では、どうぞ」
一色は俺の正面に座って、両肘をついてあごに手を乗せると、大人びた笑みを浮かべて食べるように促した。
一色の仕草にどきどきしながらも、深く呼吸をして手を合わせる。
「いただきます」

言って、一色が作ってくれた親子丼を箸でかきこむ。
口の中で、ふんわりとした卵とボリューミーな鶏肉とふっくらしたご飯が心地良く混ざり合い、時折玉ねぎがしゃきしゃきとした食感を提供してくれて、それに加えて程好い甘味がふわっと広がる。
「……すげえ美味い」
心の底からそう感じて、なんら躊躇することなく思ったことが口から出た。
一色はそれを聞いて安心したのか、ほっと胸を撫で下ろす。
「良かったぁ……先輩の味覚を考慮して甘めにしてみたんですけど、お口に合ったようで良かったです」
「お……マジか？」
驚いて聞き直すと、一色は気恥ずかしそうに笑った。
「えへへ……はい。……こう見えて、結構頑張ったんですよ？」
顔を逸らしながら流し目を送るその振る舞いに、鼓動が跳ね上がった。
動揺がバレないように必死で平静を装っていると、一色がすっと席を立ち、俺の隣に座った。
「……だから、はい、お願いします。わたし、頑張りました……よ？」
ねだるような声音でもう一度自分の頑張りを強調すると、俺の前にすっと頭を差し出す。
……。
……んん？
……あ、そういうことね。
仕方ねえなあと呟きながら、一色の方を向く。
「……ありがとな」
一色の頭をくしゃりと撫でると、ふわりとシャンプーの良い匂いがした。「あう」と唸る可愛らしい声も聞こえてくる。
その後、一色はそのまま俺の隣で食べ始めたものの、視線が丼：俺＝０．５：９．５くらいの比率だったもんでやたら恥ずかしかった。そんなに俺のこと見る必要ある？　超恥ずかしいんだけど……。

続く。

（１５）

１．

「ごちそう様でした」

「はーい、お粗末さまでしたー」

ついこの間も聞いた、一色からの丁寧な返しに顔が綻ぶ。

食べた丼を洗い場に持って行き、さて俺の出番だと袖を捲ると、一色が横から手を伸ばし、俺の腕を引っ掴んで止めにかかってきた。

「いいですよー、わたしが洗いますから」

「や、せっかく作ってもらったんだし、これくらいはさせてもらわねえと」

俺は俺で負けじと、一色が伸ばした細い腕をもう片方の手で掴んで応戦する。

「むむむむ……」

「むむむむ……」

謎の家事争奪戦ｉｎ一色家キッチン。

いや。

なんでだよ。

この状況ではまあ、一色の厚意に甘えるのが無難だろう。

「……わかったよ、よろしくな」

一色の腕を放しながら言うと、一色がにこっと微笑んだ。

「はい。先輩はソファで大人しく座っててください！」

「なんでその副詞付けたの？　俺は犬か何かなの？」

「んー、何の犬種が混ざったらそんなに目が腐るんですかねえ……。……んん……」

「例えることが出来ないなら無理に捻り出そうとすんなよ……」

ここで変にそれっぽい神話上の生き物とかを引き合いに出してきたらすげえなって思うけど、一色はそういうタイプではなかった。

キッチンでの軽いめお……ミニ漫才を終えたところで、一色の頭をくしゃりと撫でる。

あうっ、と小さな声で唸った一色にちょっと抱き付きたいなとか考

えながらソファに向かった。
うん、それなりにくつろぐとしよう。
2.
「くつろぎすぎです……」
耳元で発せられる幾分冷ややかな声で、世界が不意に明転する。
「……はっ！　しまった、いつの間に！」
時間にすれば２０分程度だったのだけど、既に今日ここまでの時間が物凄く濃厚だったせいだろうか、気付けば人様の家だというのに、食事前も加えて２度目のソファと言うだけで、何故か安心してがっつり寝そべっていた。
すげえ、この短時間で夢まで見ちゃった。まさか戸塚があんなあられも無い格好で俺の家に来てくれるなんて……！　※学ラン。
「や、すまん。……ご飯が旨かったからかな。すっかり安らいでた」
「あ、そ、そうです、か……それなら、まあ……」
寝ていた言い訳にしては稚拙極まりないものだと思うけれど、一色には思いの外効果的だったようだ。「不意打ちで褒められると顔がにやけちゃうよぉ……」と何やらこしょこしょ言っている気がするが、なんかすごく恥ずかしいので聞き流すことにする。
「……あれ」
ふと、時計を見て思うことがあった。
「……思ったより長かったな？」
頭をぶんぶんと振って無理矢理意識を覚醒させた所で、皿洗いだけにしては時間がかかったなと思いふと尋ねた。
「ああ、ちょっと用意したいものがありまして」
言って、一色がにっこりと微笑む。
……うーん。
今日一色と会って一緒に過ごした時間はまだ数時間なのだけど、素の表情をこうも連続で見せられると、正直ちょっともう心臓どきどきしすぎてが持ちそうにないんだけど。素いろはすすげえな。
「ん、用意ってなんのだ？」
「まーまー、まずは起き上がりましょう」

疑問を口にすると、一色が俺の両腕を引っ張って起き上がらせてくれた。ここまでの会話を寝転がったまましちゃう俺マジでワイルド。単に横着者なだけですねごめんなさい。
「これからすぐお出ししますから！　その前にまず……わたしの部屋に行きましょう」
俺を起き上がらせた後、その勢いでそのまま俺を立たせると、俺の背中に手とおでこを当てて、甘く優しい声で囁いた。
「あ、は、ひゃいっ」
「キモいですよ……」
……。
緊張で裏返った俺も俺だけど、自宅にまで呼んでおいて先輩を罵倒する一色さんマジクール。っべーわー。
3.
一色の部屋は、なんとなく想定内の雰囲気だった。
なんというか、全体的にさっぱりしている。
部屋のポイントポイントには可愛らしいぬいぐるみ等を置いているが、それ以外は家具の色遣いなどが控えめなため、学校でのあざとい一色しか知らない人が見たら驚くようなシンプルな印象を受ける部屋だった。
「……どうですか？」
部屋に1歩入った俺に感想を尋ねてくる。や、その質問するのに背中から抱き付く必要無いと思うんですけど……どうなんでしょうかね一色さん……。
「や、なんか想像してた通りな気がする。お前のさばさばした部分がよく表れてる」
「それ褒めてるつもりなんですか……」
背中に感じる柔らかい感触に動揺を示さないように取り繕いながらも答えると、背後で呆れ気味の声とため息を吐く音が聞こえた。ご、ごめんね、こんな気の遣えない先輩で……。
ま、わたしのことをよく見てくれてると思えば良いか、と一色が呟くと、そのまま俺を部屋の中にぐいぐいと押していった。

ドアがばたんと閉められた瞬間、さっぱりしていると感じた部屋の中とはいえ、やはり女の子の部屋なのだと思わせる、色々な要因が混じっているであろう甘い匂いがしていることに気付き、緊張の度合いが跳ね上がった。

4.

「ちょっと持ってくるものがあるので、ここに座っててください。1mmでも動いたら……分かってますね？」

「や、何されるんだよ……何ここ、どこの国の領地？　俺はどこのスパイなの？」

俺のツッコミも最後までちゃんと聞いたんだか聞いてないんだか曖昧なまま（多分聞いてない）、一色はぱたぱたと部屋を出ていった。

きちんとドアを閉められ、一色の部屋の中にぼっち1人という状態になると、妙にそわそわしてしまう。

首を動かすくらいは良いだろう……とそれとなく見回していると、シンプルな白色のクローゼットが目に入った。

……クローゼット、か……。

……ここで俺が変態キャラだったら、迷わず開けに行くんだろうなあ……などと阿呆な妄想に浸っていると、一色が部屋に戻ってきた。

「おう、おかえり」

慌てて視線を戻したが、俺の妙な挙動ですぐに「こいつ、わたしの部屋で何かしてたんじゃないか」と思ったのだろう、目を細めてごみを見るような目で俺を睨ねつける。

「……な、何もしてないぞ？」

よせばいいのに、と数秒後の俺から警告されそうなしょうもない言い訳をすると、一色がちらりと視線を横に向けた。

しまった、クローゼットを見ている。

「……クローゼットを見付けたものの、動くのは躊躇われた為に何かしら妄想することで気を紛らわせていた……という感じですか？先輩、キモいですよ」

なんだよこいつ、鋭すぎるだろ。お前はどこの珈琲店の女バリスタなんだっつの。コリコリコリ。

「あ、えーっと、その……」
冷や汗をだらだら流す俺をよそに、一色としてはこの件は大した意味を持っていないと考えたのか、ふっと息を吐いて瞑目すると、一転してにっこりと笑みを浮かべた。
「コーヒーと手作りお菓子、お持ちしました！」
やっぱりこいつ、バリスタかもしれない。勢いで言ったみただけ。
……ここ、千葉だよね？　京都じゃないよね？　コリコリコリ。
コーヒー豆を挽く音を脳内再生させながら、トレイに乗せられたものを見て自然と頬が緩んだ。
5.
テーブルの上にあるのは、湯気立つコーヒーが入ったマグカップが2つと、可愛らしいクッキーが入っている大き目の皿。
「さ、さ、どうぞ、召し上がってください」
一色が俺の隣で今にもくっつきそうなくらい、ていうかもうくっついてる、ていうか既に腕を組んでる状態で俺にコーヒーとクッキーを勧めてきた。状況説明してる途中で俺に絡み付いてくるのやめてくんないかな……説明が二転三転してややこしいから……。
「おう、じゃ、頂きます」
言って、まずはクッキーに手を伸ばす。
程好いサイズで焼き上げられたクッキーで、形の良さや焼き加減の程良さから、一色がお菓子作りが趣味なのは嘘偽りの無いことなんだなと思い、改めて感心する。別に嘘偽りだとは思っていないけれど、それでもこうして実物を見ると何だか嬉しくなってしまう。
口に運び込み、半分程噛んで口に入れる。
さくっ、さくっ、さくっ。
口の中で小気味良い音が鳴り、程良い甘味を帯びた風味がふわりと広がって、口腔と鼻腔を心地良く満たしていく。
思わず、続けざまにもう1つを手に取って、再び口の中に運び入れる。
さくっ、さくっ、ぽりっ。
今度はチョコが入っていたようで、クッキーの軽やかな食感の中に

素敵なアクセントを加えてくれている。
しかし、2つ食べてふと気づいたことがある。
心地良い甘味なのだけれど、どことなく控えめな風に思えるのだ。
ここで、目の前に置かれたコーヒーの優しい色合いを改めてよく見てみる。
「……あ、そうか」
小さく声を上げた俺を見て、一色が嬉しそうに微笑む。
「ふふ、気付いちゃいました？　……3つ目は、食べてる途中にコーヒーを飲んでみて下さい」
「……なるほど」
言われて、3つ目のクッキーを口にする。
やはり穏やかで愛情に満ちた味わいだ。
そしてそれを口の中で咀嚼している間に、マグカップを手にとり、中のコーヒーを口の中にくぴりと流し込む。
「……おお……っ」
自然と、感嘆の声が漏れた。
甘さ控えめなクッキーと、マッカン程までは行かないが、それでもかなり甘めにされたコーヒーとが、素晴らしく合う。
俺のリアクションを見て、一色が満足そうに微笑んだ。
「先輩にクッキーを作ろうって思ったんですけど、それなら一緒に口にするであろう飲み物のことも考えなきゃなーって思ったんです。マッカンだと甘すぎてちょっとクッキーとのバランスが取れなそうだったので、色々試してこのバランスに落ち着きました」
一色の言葉に、一瞬動きが止まってしまう。
「……え……そんなこと考えてくれてたのか……？」
驚いた。いつの間にそんなことを。
俺の声でハッとしたのか、一色の顔が急に赤く染まる。
「いえいえいえいえ勘違いしないでくださいよ別に昨日の夜先輩と電話した後に『明日先輩とデートだー！』って張り切って夜遅くまで作ってたなんてそんなことは全然ないんですほんと勘違いしないでください別にそのまま興奮で寝付けなくってそれで朝もそわそわし

て早く出掛けちゃったなんてそんなそんなそんな」

……。

一色いろは、大混乱である。

まさかのオール自白。

……だから、あんなに早く来てたのか。いつ来たかは正確には分からないけれど、かなりの時間あの辺りでうろうろしていたんだろう。その様子を想像して、目の前にいるこのあざと可愛い後輩が、たまらなく愛おしく思えた。

俺が憐みの視線を向けると、自爆行為をしていたことに気付いたのか、更に真っ赤になってあうあう言っている一色に、「美味かったぞ」と微笑みながら言って宥めた。

6.

数分で落ち着くと、一色は唐突に俺に体育座りで足を開いた状態にするよう指示を出してきた。

ちなみに今俺が座っているのは壁際で、一色の指示通り足を開きながら壁に背を付けたことで、不良高校生が街でたむろしてるときの様な体勢になった。おうこら、何見てんだーみたいな。イメージが雑。むしろ俺はジャンプさせられる側だわ……。

「はい、そんな感じでオッケーです。こほん、こほん。……それでは……」

俺の体勢を見てオーケーサインを出したかと思うと、一色はそそくさと俺の前に座り込み、そのまま俺に背を向けて俺の股座にすっぽりと入った。リクライニングっぽく少し後傾にしていた俺の身体にすっぽりと重なるように身体を倒してきて、気付けば一色の柔らかな甘い香りのする後頭部が目の前に来ていた。

「……あのー、一色さん、これは一体何なんでしょう？」

背後から呼びかけると、一色が少しだけ首をこちらに向けた。

「先輩。わたし、お昼ごはんに加えて、クッキーとコーヒーも頑張って作りました」

「お、おう、そうだな」

「だから、先輩はそんな頑張ったわたしを全力で労わるべきです」

「それ、お前が言っちゃうの……」
「そんなの気にしなくていいです。はいっ」
俺のツッコミを一蹴すると、一色は自分の頭をぽんぽんと叩いた。
おうふ、頭なでなでリクエスト再び？
しかもこの体勢で要求すると言うことは、結構持久戦になるんですかね？
「……あいよ」
ツッコミたいことは多々あるけれど、一色が俺の為に頑張ってくれたというのは紛うこと無き事実だ。
それには感謝の意をきちんと示さなければならない。
……まあ、正直そんな義務感よりも、ただただ「撫でたい」って気持が勝ってるんだけれど。
だから、俺は特に躊躇することもなく、左腕で一色の首回りをそっと抱きしめて、彼女の肩にあごを乗せると、一色の頭をくしゃくしゃと撫で始めた。
抱きしめとあご乗せは想定外だったのか、一色が「ひゃうっ！」と可愛らしい声を上げた。
その声に驚いて一度あごも腕も離してしまったけれど、お前がこんなに健気で可愛いのが悪いんだぞと心の中で言い訳をして、２人の温もりを混ぜ合わせるかのように一色を再びきゅっと抱きしめた。
「あう……」
耳元で聞こえる、この恥ずかしがっているような、あるいは困っているような可愛らしい声は、ずっと聞いていたくなるなあ……。
……心の中で考えただけで死にたくなった……。
続く。

（16）

1.

「あう……」

一色の、恥ずかしそうな、それでいてどこか心地良さそうな、甘い声が耳にふわりと響く。

壁を背に座って、俺の股座に一色が背を預けるように座っていて、そんな彼女に首に左腕を回してきゅっと抱きしめ、左肩にあごをそっと乗せて、右手で彼女の頭をくしゃくしゃと撫でる。

……うーん。

今なら遠月学園の全敷地を均せるくらい悶え転がれそう。や、流石にそれは死んじゃうな。

こんな体勢なので、一色はいくら恥ずかしがってもどこへも逃げられないでずっとあわあわとしている。慌てる一色さん可愛すぎてちょっと意味分かんないです。

一色が右に顔を逸らせば俺が彼女の右耳をこしょこしょとくすぐって逃げ場を無くし、首を前へ曲げれば抱きしめる腕の力を強めて引き戻し、首を左に傾ければ互いの頬と頬が触れ合ってむにゅっとなり、後ろへ逸らせば口付けしてやる。

どうだ、どう動いてもとっても恥ずかしいだろう、ふははは！

実際やったのは右と前のケースだけだけどな！　左と後ろのパターンは恥ずかしくて俺が死んじゃうぜ！

頼むから左と後ろのパターンは来ないでくれよ、いややっぱり来て、やっぱり来ないで……と複雑な気分で祈っていると。

「……はう……」

わー。

頬を自分からくっつけてきたよ、この子。

「……ん……」

気持ち良さそうにすりすりしてくるなよ、可愛すぎるだろ。頬ずりしてやろうかあ！　もうしてる。

「……んん……っ」

だあぁぁぁぁぁぁ！　唇こっち向けんな！　何して欲しいのか分かりやすぎる！　死ぬ！

なんでしょう、もうこの子のことをどうにかしちゃっていいのかしら。思考回路は暴徒同然。今すぐ襲いたい……。

と、まあ、そんなことを思ったりもするのだけれど。

それ以上に、今こうやってベタベタしている時間が、死ぬ程恥ずかしいと同時にすんごい安らぐ。あとそれと同時に死ぬ程恥ずかしい。……うん、死ぬ程恥ずかしい。大事なことなので3回言いました。

腕の中のわがまま姫様（奉仕精神が何気に豊か）の機嫌を損ねたくはないので、ちょっとというかすんごい逡巡した後、近付けられた唇にそっと口付けをした。

2.

唇を離すと、一色の目がとろんとしていることに気付いた。

なんかこの後すごい恥ずかしいことを言ってきそうな雰囲気。

こういう予想は当たるもので、一色は幸せそうに蕩けた表情を謎の緊張で引き締めて、俺を見つめた。

「せ、せせ、せせせせ、す、すすすす、……」

……なに、なんかサ行っていうかｓの子音が一色の口からすんごい勢いで漏れ出てる。

……何を言おうとしてんだ？

「おい、どうした、一色。さっきから――」

俺が言い切らない内に、一色がやっとちゃんとした文を口にした。

「せ、せ、先輩。す、すすす、『好き』、って、いい、い、言ってあげても、い、い、良いんですよ？」

「……」

……。

この間、たっぷり5秒程。

一色にとっては地獄のような長い時間ではないだろうか。

どうでも良いけど、なんで女の人って告白された時にオーケーだと思ってても1週間時間を開けたりするの？　あの時間、男にとって地獄だからね？　自分の気持ちにクーリングオフが効く間に熟考を重

ねてるの？　それとも男にその時間を耐えて更に自分のわがままを耐え忍んでくれるか試してるの？　鬼にも程があるでしょ？

話が逸れた。過去のトラウマの扉がもう人体錬成をした時ばりにぱっかーーーんと開いてた。

で、八幡のアンサー、オープン！

「……お断りします」

「なんでですか!?」

目をむいてツッコまれた。ツッコミ兼怒り、って感じ。

いや、そんなん、無理でしょ。だって、ねえ？

驚きやら怒りやら悲しみやらで、一色の可愛らしい顔つきがくしゃくしゃと歪む。

「何でですか、え、本当にいやなんですか？　う、うえ……」

「……え」

え、涙目？

「えっく、ひっく、ぐす……っ」

え、え、え？　うそ、ほんとに？

「お、おい、一色……っ」

「ひっ、ひっく、ひっく……」

ぬあぁぁぁぁぁぁぁ！

突然の泣きいろはすに尋常でない程慌てて、一色の頭を撫でながら言い訳をする。ぽふぽふ。

「待て、待て待て待て待て。ちがうんだ、一色。恥ずかしいから、恥ずかしいからなんだよ。今言われたら多分心臓が耐えられなくて死んじゃうと思ったからなんだって。だから泣くな、泣くなって。な？　な？」

超みっともねえ……。

非常に失礼だけど、ウソ泣きとかだったら「なんだよー！」で済むんだけどなあ……なんて期待をしていたら。

「ぐすっ……ほ、ホントですか？　ひっく、良かった……」

目元の涙を袖でこしこしと拭って、一色がにぱっと笑った。

その瞬間。

「……っ」
「ふえっ、えっ、えっ、え……っ？」
一色の戸惑いの声で、自分がたった今やったことに気付く。
振り向いて微笑む一色があまりに可愛くて、気付いたら両腕でぎゅっと抱きしめていた。
こんなことをしたら、いつもならば、ハッと我に返った瞬間に即座に平身低頭して謝り倒して全力で両腕を離して手の甲を壁にぶつけて悶絶するまであるんだけど、今は、今は。
「あっ……ん、もう、先輩ったら……甘えんぼさんですね……」
俺の心情を分かったような分かってないようなことを言って、一色が俺の腕に優しく手を添える。
肘の内側に首をくてっと傾けて「ふいぃ……」と温泉にでも浸かっているかのように気持ち良さそうな声を出したかと思うと、くりんと俺の方に向き直った。う、いやな予感……。
「先輩、わたしのこと泣かせちゃいましたね？」
「んぐぁっ……あ、や、まあ、その……」
「泣かせちゃいましたね？」
なんで当事者しか居ない状態でこの聞き方するのん？　鬼？
抵抗しようがねえよ……。
「……は、はい……」
力無く答えると、一色がにんまりと笑みを浮かべた。やべえ、いやな予感がピーク。ピークだよ！
「それじゃ……わたしにちゃんと『好き』って言ってください」
「断る」
「早いですよ!?」
食い気味の拒否に対して食い気味にツッコまれた。このタイミングの繊細さは刹那の見斬りを彷彿とさせる。あのゲームは伝説だぜぇ……。
「や、俺が言われるのだって恥ずかしさの限界突破は確実なのに、俺から言うとか絶対無理だろ。むりむり、死んじゃう。もっとシチュエーションがそれっぽくないと」

「今のこのシチュエーションで言えないとかどんだけなんですか……じゃあ、いつなら言えるんですか？」
一色の言葉に、頭を抱える（心の中で）。
ううむ。
言わないという選択肢は流石に危険すぎるので、どこかで、しかも近いうちに……。
……ふと、一色から一方的に指定されるであろう今日1日の流れ――正確に言えば明日までの流れだが――を考えて、あるタイミングが頭に浮かんだ。
「今日の……夜、とか？」
頭に浮かんだままに口走ったのだけれど、
「あ、あう、そ、そうですか……そうです、か……それならまあ……はわわわ……あうう……」
耳まで真っ赤な茹でタコいろはす、略して茹ではすが出来上がっているのを見て、もしかしてこれとんでもないこと言ってんじゃないのかと今頃になって気付いた。ていうか茹ではすって何だよ。もはや全部気化してるわ。
茹ではすは頬に手を当てて、首をきょろきょろさせて少し落ち着いたかと思うと、時折俺を見てわざわざ自分の顔の赤みをＭＡＸに引き戻して、またきょろきょろして……という阿呆みたいな行動をとっている。超可愛いけど。お持ち帰りやでえ……そんな勇気無いでえ……。
「あうう……先輩、そういうとこほんとずるいです……ずるずるです……」
「や、俺なんも引きずってねえよ。その表現おかしいかんね？」
俺のツッコミをまるで意に介さず（泣いちゃう）、一色はぽしょぽしょと独り言なんだか分からないことをしばらく呟いた後、ぴたりと動きを止めて俺に向き直った。
「……先輩、わたしは落ち着きを取り戻したいです。最近よくしてることをやれば落ち着くと思うんです」
「そんな変なことを言う時点でだいぶ落ち着いてると思うけ……ど

……っ？」
俺の返答も待たぬまま、一色はこちらに振り向いて目を閉じ、俺の太腿に手を添える。
一色が目を閉じる直前、期待に満ちた瞳とほんの一瞬だけ見つめ合った。
……ああ、これは、多分。
ここから先、互いにどろどろになるんだろうな。
さっきまでは安心感が勝っていたので、まだ何とか抑えることが出来ていた欲求が、再び顔を出して俺の中で暴れ始めたのを感じながら、首を左に傾けて一色と唇を重ねた――。
続く。

（１７）

１．

一色と唇を重ねて、ちろちろと互いの舌を絡め合う。

「んっ、れろっ、ちゅりゅっ、んむっ、あうぅっ、ふむんっ、あむっ、あむっ……」

舌先をつつき合い、俺が一色の下唇を咥えてなぞってきょぽっと離すと、今度は彼女が俺の上唇を咥えてなぞってきゅぽっと離す。

互いの身体を味わいたいだけ味わって、身体の密着度もどんどん高めていく。

２人の唇と唇との境界線が分からなくなる程、とろとろになっていた。

「はぷっ、はぷっ、んんっ、れちゅるっ、んっ、んっ、ちゅるるる……ぷはっ。……うー……っ」

一色が唇を離すと、なんだかもどかしそうな目で俺を見てきた。

後ろを向いた状態での口付けだったから、あんまり熱心にやりすぎると一色の首を痛めかねないと思って唇周辺を重点的に弄ったんだろうけれど……ご不満？　うーん、わからん。努力はするけども。

「先輩……」

一色が俺の腕に顔をうずめたまま、振り向かずに呼んでくる。

てっきり不満を言ってくるのかと思ったら、

「……おしおき、しても良いんですよ？」

「……」

なんか。

すげえこと言ってきた、こいつ。

「おしおきって、される側が許可するもんだったっけ……」

「細かいことは気にしないでください。それで……おしお、き、して、くれます、か……」

潤んだ目でこっち見てくんなよ……これもうおしおきじゃねえじゃん……。

なんてツッコミは置いておきます。理性とか昨日の燃えるゴミの

日に出しちゃったわ、多分。後で回収しないと……。
「……それじゃ、おしおき致しますかね」
頭をがしがしと掻きながら言うと、俺の腕の中で一色がぶるりと震えた。
2.
とは言ったものの、どうしたものか。
この体勢は安定感が半端ないので維持していたいし、そもそもマニアックなことをやろうものならたちまち引かれそう。や、ほんと引かれそう。つら。
ここは、無難にやりたいことをやろう。
「じゃあ……」
俺は小声で呟くと、恐る恐る一色の脇の下に腕をするりと通し、胸の前に手をやった。
「ひうっ……」
俺の意図を察した一色が一瞬声を出して怯んだが、すぐに口をつぐんだ。
「おしおきだし、良いよな？」
囁きかけるようにして問うと、一色が横目でちらりと俺に目をやる。
「そ、そうですね、おしおきですから……お、おす、おすす、お好きにどうぞ……」
……めっちゃ緊張してらっしゃる。おすすってなんだよ。
前触ったときは勢い任せだったからなあ。少しでも落ち着いてるとこうなってしまうのもしょうがない気がする。
「……まあ、ゆっくりやろうぜ」
あまり構えず気楽にやるよう促すと、一色からほんの少しだけ肩の力が抜けたのが分かった。
一色はこちらを見て、胸の前で両手でガッツポーズをとる。
「……お願いします」
だから、そんな気合入れんなっつうの。
……まあ、そうは言っても、女の子としては怖いよな。

もう一度後ろからぎゅっと抱きしめて、一色の緊張を出来るだけ解すと、俺は手の平を一色の胸の上にゆっくりと着地させた。
3.
「あっ、ふあっ、んんっ、ふぅんっ、ひぃんっ……あっ、あっ、あっ……」
「……」
……。
……さっきの緊張はどこへ行ったのん？
一色の胸は思っていたより大きく（失礼）、上着とブラ越しとは言え、手の指が心地良く沈んでいくのがはっきりと分かる。
緊張していたとは言え俺に触れられるのはそれなりに慣れたからだろうか、最初から中々悩ましげな声を聞かせてくれた。やべえ、全部録音しておきたかった……。
「あんっ、ふあっ、ひんっ、くふぅっ、先輩、先輩……」
「……」
や、もう。
この状況、天国ですやん。
少しでも長くこの状況を維持していたい。
そう思い、一色に呼びかける。
「なあ、一色」
「ふあっ……なんですか？」
「5時間くらいこうしてて良いか？」
「それはちょっと長すぎです……」
「ですよね……」
流石にダメだった。でもこの数字を出して「ちょっと」と言っちゃう辺りが素晴らしい。今後に期待。俺、何様なのん？
気を取り直して、再び一色の胸を揉み始める。
「……」
一色の後頭部から漂う匂いは、さっきまでの甘い匂いに加えて汗の匂いが混じってきて、なんだかやたらと色っぽさを醸し出している。
視覚：ふるふると一色が震える姿。
聴覚：一色の息混じりの控えめな喘ぎ声。

触覚：柔らかな一色の胸の感触。
嗅覚：甘い匂いと汗の匂いが混じった艶めかしい香り。
もう、頭がくらくらする。
後は味覚か……と思ったとき、一色の左耳が目に入った。
「……」
そろりと顔を近付けて、左耳に口を付ける。
「わひゃぁっ!? あっ、あぅっ、せんぱっ、いひぁっ、あぇっ、あぁっ、あぅぅぅ……っ」
驚いたのは最初だけで、一色の耳に舌を侵入させると、胸への愛撫も相俟ってあっと言う間に目の焦点が定まらなくなった。
ほんのりと舌先を刺激する汗のしょっぱさが、今やっていることの卑猥さを意識させて、背筋がぞわりぞわりとする。
「せ、せんぱっ、だめ、だめです、頭にやらしい音響いて、やっ、これ、変になっちゃいますから、だめです、だめです、んあぁぁぁ……っ」
「……っ」
きゃーっ！ きゃーっ！ ぎゃーっ！
頭はクールにしながら一色の耳をねぶっていたのだけれど、一色は口でこんなことを言いながら一色の耳をねぶっていたのだけれど、一色は左手を俺の後頭部に回して、自分の耳への愛撫を更に要求しているようにしか見えない。
あまりにもたまらなくなって、もっと責めようと思い、服の上からではあるが胸の突起がありそうなところを探してそこを人差し指できゅっと押す。
その瞬間、一色の身体がびくんと震えて、顔が跳ねるように上を向いた。
「あひぃっ！ あぇっ、かはっ、ひんっ、ひぃんっ、す、好き、これ、好きぃっ……あっ、あっ、あぅぅぅ……」
喘ぎ声に混じる甘味がより強くなり、更に欲情をかき立てる。
人差し指以外の指でマシュマロみたいな胸を楽しみながら、人差し指で胸の突起をぽちぽちとボタンのように両手交互に押したり、時折同時にぎゅっと深く押し込んだりすると、一色がそれはもう面白いくらいに反応してくれる。

「あ〜〜っ、あ〜〜っ、あっ、かふっ、あぅっ、らめっ、あぇっ、ひっ、ひっ……」
一色は天井を見上げたまま、足を艶めかしくくねらせ続け、目からは涙を流し、口からは涎を微かに垂らて、呂律の回らなくなった口で絶え間なく喘いでいる。
一色が更に快感を感じてくれるように、耳に侵入させる舌には唾液をたっぷりと含ませた。
ぐちゅっ、ちゅぴっ、にちゃっ、ちゅぱっ、にちゅにちゅ……。
一色の脳髄にいやらしい水音を直接送り込んで、その度に彼女の目がしばたたいて身体が震えるのを見ると、愛おしさと同時に「もっとめちゃくちゃにしたい」という欲求が溢れ出してきた。
しかし……。
正直、これ以上やったら今はちょっとやばいのではないだろうか。
そう懸念して、そろそろ休もうかと思って手を緩めた矢先。
「先輩……」
震える声がした。
「どうした？」
問い掛けると、一色がそろりと振り向いた。
「やめないでくださいよぉ……もっと、おしおきしてください……」
「……っ！」
必死で抑えていた理性の蓋が、音を立てて弾け飛んだ。
4．
「ひぁぁぁぁぁぁっ!?」
一色が激しく身体を反らせて、口を大きく開けて何ら我慢することなく声を上げる。
俺は一色がよじっていた足をかき分けて右手を彼女のスカートの中に潜り込ませた。
胸を触ろうとした時に抱いた躊躇いは、一色のあまりに扇情的な言葉によって完全に霧散していた。
スカートの中に手が入った時点で、明らかに温度と湿度が違うことに驚く。

もわっ、とした空気が手に纏わり付き、それだけでもたまらなかった。
そしてその中の最奥に手を入れると、更に熱を帯びた柔らかい場所にたどり着く。
一色のショーツは、既にぐっしょりと濡れていた。
そこに中指と薬指を添えて、くにっと軽く押してやると、一色は悲鳴じみた喘ぎ声を上げた。
「あ、あっ、ひんっ、あ～～っ、あっ、あっ！　ひぐうっ！　んにいいい……だめだめだめだめ……んあぁっ！　あぇっ、かはっ、ふあぁぁぁっ！」
一色が身体を暴れるようによじらせる。
左腕で一色の右胸を掴んで、両足は彼女のそれぞれの足の内側に滑り込ませて、強制的に開脚させている。
そのため、どれだけ恥ずかしくても、どれだけ快感から逃げたいと思っても、一色は身動き一つ取れない。
そう、一切、動けない。
「いっ、いやっ、せんぱっ、これっ、だめ、くるっ、くるっ、きちゃいます……だめ、だめ……っ！」
一色が首を振りながら懇願してくる様に、ぞくりとする。
こんな状況でも敬語を使うなんて、こいつはつくづく律儀だなぁ……などと場違いな事を考えながら、一色と目を合わせる。
「大丈夫、イって良いぞ。……何度でもな」
「……っ！」
最後に付け加えた一言で、一色は目を剥いた。
「やっ、やっ、怖い、今きちゃったら絶対やばいれす、怖い、怖いよぉ……」
まるで子供のように怯える顔をした一色は、あまりにも可愛くて、あまりにもイジメたくなって、あまりにも守りたくなって、あまりにも愛おしかった。
「だーいじょうぶだって。ほら……っ」
安心させようと、一色にちゅっと軽く口付けをすると、そのまま指

でショーツ越しに彼女の秘部をぐにぐにと押し込む動きを速めた。
「んっ……んんんんっ!?　んーっ！　んーっ！　んーっ！」
唇を塞がれて声に出せないまま一色がもがく。
一色の身体がぶるぶると震えるのを見て、「きっとそろそろだ」と感じる。
「ぷはっ、ほら、イクんだ、イクんだ。声、聞かせてくれ……っ！」
唇を離して、一色にそう促すと、俺は彼女の首筋に吸い付き、両手の動きを更に速く強くする。
一色の身体が、一際大きく痙攣した。
「あっ、もう、もう……っ！　……あぁぁぁぁぁぁぁぁぁ――――――っ！」
一色は一際高く甘い喘ぎ声を上げて、俺の腕の中で果てた。
かくっ、と力無く項垂れて、虚ろな目で俺を見つめている一色の頭をくしゃりと撫でると、俺はもう一度彼女の秘部に手を伸ばした。

続く。

（１８）

1.

「えっく、ひっく、もう、やめれ、やめれくらはい……やっ、イっ、また、イっ、イっ、イクぅぅぅぅ……ひぁぁっ！」
「も、もう、おしおきはおわりれいいれひょう（おしおきは終わりでいいでしょう）？　も、感じすぎて、おかひく、……んぐぅぅぅっ！」
「やらぁ……もうこれいりょうイカさらいれえ……あぁぁぁ……っ」
一色はもうまともに言葉を口にすることも出来ず、ただただ懇願することしか出来なくなっている。
着衣の上で、という状態は崩さなかったけれど。
俺は一色が最初に果ててからも、一向に責めはやめることは無かった。
指を全力で動かす愛撫ならば手首が疲れてやめるということもあるのだろうが、俺がやっているのはゆっくり大きく一色の胸と秘部を揉みしだくという単純で負担の少ない行為だったため、俺の欲求が続く限り一色を弄り続けることが出来た。
正直俺の股間はもうずっと張りっ放しなのだけど、今は一色を一方的に弄るこの状態が楽しいから良しとする。
俺の腕の中で細い肢体を悩ましくくねらせながら、一色は蕩けきった声を上げ、その口は何か伝えようとしているのかそうでないのかも定かではないような緩慢な動きをしている。
「またイクのか？」
一色の絶頂に達する予兆が掴めてきた為、彼女の震えが再び達しそうであることを示していると思い、彼女の耳元で囁く。
「あ、えぁっ、も、もう、や、せんぱい、わたし、もう……」
一色が潤んだ目で見つめて来て、たまらない恍惚感に包まれる。
「そうか。ほら、イケっ、イケっ、イクんだ……っ！」
語気を強め、指の動きを速めると、一色は目をむいて身体の動きを大きくした。
「ひぐぅぅぅ……っ！　あ、らめらめらめ、これ以上、あぁぁっ、

ひぐぅっ！　あふぁっ、あくぅっ……イっ、イっ、イクっ、イクっ、イクっ、あぁっ、あっ、あっ、……――――っ」
もはや、達する時に声を上げる体力すら尽きた一色の身体が、再びびくんびくんと震えた。
2.
「あ……うぁ……」
もはや何度目かも分からない絶頂の後、ようやく一色から手を放した。
くてっ、と俺に寄りかかってきたので、俺は両腕を一色の胸に回し抱きかかえる。
既に体力の限界を迎えているように見える一色が、力無い視線を俺に向ける。
いつものあざとい笑顔を作ろうとしているようだが、余裕が無い為かそれが妙にぎこちなく、そのたどたどしさがまた抱きしめたくなる程に可愛らしい。抱きしめてんだけどね。
「……はっ、はっ、へ、へんぱい、へんたいれすね……」
え、なに、「変態、先輩ですね」？　「近頃噂になってたあの変態って先輩のことだったんですね！　納得！」みたいな？
や、まあ。言いたいことは分かってんだけどね。
一色から顔は見えないから、罵られないだろうと思ってにやりと笑う。
「そうだぞ。今頃気付いたか？」
「今笑ってると思いますけど、多分キモいです」
「……」
……。
お前は複眼の持ち主か。
や、見えてないから「多分」って付けたのか。
ていうか「多分キモいです」って罵り方、斬新すぎない？
呂律が回るようになってきたのか、一色は「それにしても思ってた以上でした」と呟くと、たははと笑った。
「先輩、鬼畜すぎます……わたし、意識飛びかけたんですよ？」

「でも、意識飛びかけるくらい気持ち良かったってことだろ？」
「あう……」
俺からのカウンターに、顔を赤くする一色。うーん、撫でたい。
撫でた。躊躇ゼロだった。
なでなで。
「はうぅ……」
頭をくしゃくしゃと撫でられ、一色が困ったように声を上げる。
ちょっと可愛すぎてどうしたら良いか分かんない。
取り敢えず、引き続き撫でる。
なでなで。
「……」
しかし、ここからどうしたものか。
一度休憩を挟んだ形になっているけれど、この後どうしよう。
一色の体力を考慮したらもっと休んだ方が良いのかな……でも正直今すぐにでも押し倒したいな……。
ぼんやりと葛藤しながらも一色の頭を撫でていると、一色がこそばゆそうにしながら、ちらりとこちらを向いた。
「先輩」
なでなで。
「んー？」
なでなで。
「わたし、疲れました」
なでな――。
「ん」
撫でる手を、ぴたりと止めた。
え、なに、熟年離婚？　色々おかしいなこれ。
俺の戸惑いを気にもせず、一色は部屋のクローゼットを指差した。
「あそこから、わたしの替えのブラとショーツを持ってきてください。あ、あと上着とスカートも」
ほーん？　全身？
「や、ちょっと難易度高すぎて何言ってるのか分かんない」

この命令、えぐくない？　色々と。
「先輩のせいでわたし今まともに立てないんですよ？　だからわたしの代わりに持ってきてください。このままだと汗で気持ち悪いし風邪引くかもです」
「む……確かにそうだけど……でもなあ……」
渋る俺を見て、一色がにやりと笑う。
「……後で先輩が見たいと思うものを取ってきて良いんですよ？」
はーん!?　何その魅力的な提案!?
「……や、それは流石に……」
内心「喜んで☆」とか言っちゃいそうになるのを必死で堪えながら、何とか渋った。
「……はあ、しょうがないですね。じゃあ、目を瞑って適当に取ってきてください」
「おお、ナイス妥協案。それで行くわ」
もしかしたら、このまま最後まで……などと考えてもいたのだけれど。
現実はそう簡単には行かないらしい。
ていうか、一色は見た目には分からないけど、相当疲れてるはずだしな……。
ついさっきまでは一人で考えていたけれど、一色とのやりとりから鑑みるに、今はやめておいた方が良いのだろう。
残念に思う気持ちやら滾る気持ちやら色々なものを頭の中でごちゃごちゃさせながら、一色から聞いたクローゼットの下着が入った棚をしゅるりと開ける。
すぐ目を閉じたかったのだけど、如何せんすぐ閉じるとブラとショーツの位置が分からないので、最初だけうっすらと目を開けることにする。しょうがないよね、うん！
「……うお……」
ピンクとかうっすら紫とか大人びた黒とか色んな色が見えるー！
フリル付きとかあるんだ！　へーー！　すげーー！
「……先輩、すっごい見てませんか？」

「ごめんなさい」
振り返るまでもなく、一色が極めて冷たいジト目を向けているのを感じて、謝罪しながら瞬時に目を閉じた。
……クローゼットの下着ゾーン、ちょっと目を開ける程度のつもりが、気付いたらガン見してました☆
3.
「じゃ、わたしこの場で着替えるので、先輩はそこで後ろ向いて正座して今までの行いを後悔しててください」
「ちょっと、後半おかしくない？」
お前はどこの氷の女王だっつの。
まあ、部屋を追い出されないのはなんか嬉しいような、むしろ恥ずかしいような。
取り敢えず、指示通り後ろを向いて正座することにした。
今までの行い……んー、材木座をゴミ扱いしたのは問題ないだろ？
由比ヶ浜のおバカイジりは呼吸も同然だし、戸部の扱いは心の中でこそひどいけど実際は雪ノ下の方がよっぽどひどいし……うん、雪ノ下は反省すべきだな。よし、今度注意しよう。絶対無理だけど。
「んっ……」
悩ましい息混じりの声と、衣擦れの音がする。
あ、え、なんだろうこれ、すんごい恥ずかしい。
なんだかんだで一色の下着姿すら見た事ないから、すんげえどきどきするんですけど……!?
「見ますか？」
「はひゃいっ!?」
突然耳元でした声に、心臓が跳ね上がる。
俺の動揺を笑うように、一色が意地悪な猫撫で声で囁いてくる。
「今、まだ下着姿なんですよぉ……見ます？」
「あ、え、や、まあ、その、一色さんが良いと言うんでしたら、後学のためにも何て言うか、その……」
全力で慌てていると、くすっと笑う声がした。
「……はあ、もう、そんなに慌てちゃって……かわい、いや、キモいで

すよ？」
「や、今、可愛いって言いかけたよね？　なんで罵倒に切り替えたの？」
俺のツッコミ（目を閉じたまま）をスルーして、再び一色は着替えを始めた。も、弄ばれた……！
待つことしばし。
「さて、と……はい、目を開けて良いですよー」
言われて振り向くと、一色はすっかり着替えていた。
身体のラインがよく見えるセーターに、やや短いスカート。
……うん、シンプルでなんか、良い。
一応、俺は目を閉じながら下着が上下揃っているかを一色に見せながら確認して、上着とスカートは1つ1つ取り出して検討してもらった。俺はただひたすら一色に服と下着を見せる係になっていた。
なので一色が今着用しているセーターとスカートは一度見たものではあるんだけど、……本人が着ているのを見るのは……また格別だなあ……。
なんかね、なんか、良いんだ、すごく。
にやつくのを抑えていると、軽蔑した目でじっと見られた。あれ、バレた？　おっかしいなあ……。
「えーっと、この辺は今軽く拭いて、消臭スプレーをかけて……はあ、カーペットは後で洗濯しなくちゃなあ……」
一色は何やらぶつぶつ呟きながら、ぱたぱたとせわしなく動き回っている。
「あ、一色、何か手伝えることあるか？」
問い掛けると、一色はくるりと軽やかに振り返った。
「すぐ終わるので大丈夫ですよー。……先輩は……その、手を、洗っておいてもらえますか？　洗面所は廊下の角にあるので……」
「お、おう……そうだよな、わ、分かった……」
一色の恥ずかしそうにしている顔に釣られて、俺まで恥ずかしくなった。死にそう。
一色の部屋を出て廊下を歩きながら、ついさっきまで彼女の身体を

弄り抜いていた自分の手の平を見つめる。
あの時の一色のあまりに艶めかしい姿態と声は、しばらく忘れそうにないな、と思った。「しばらく」と思ったのは、きっとそれ以上のものをこれから見聞きするだろうから、という予感よりも確信に近いものがあったからだ。
……やべえ、何かもうどきどきが止まんねえ。
などと思っていたら。
「んぐぁ」
喉の奥で変な音が鳴った。
半ばにやけてぼんやりと歩いていたら、つま先を廊下の床でぐきりとやってしまった。
別に怪我をする程のものではなかったのだが、しばらく悶絶した。
くうう……。
4.
「それじゃ、この後どうする？」
コーヒーなども含めて一通り片付けを終え、やっと落ち着いて再び座ったところで一色に尋ねた。
すると、一色はきゃるんと笑って、さも自分の中では決まりきったことのように答えた。
「寝ましょう」
「え」
「寝ましょう」
「え」
まるで全く同じ腕の振りで行われた卓球のラリーのようなやりとりに、一色が呆れ気味にため息を吐く。
「……さっきも言ったと思いますけど、おしおきが激し過ぎたので疲れちゃいました。ちょっと寝不足ですし。だから、添い寝してください。夕ご飯までも時間がかなりありますし」
「……マジで？」
「大マジです」
……。

この子、ぱねえ。色々と。
「……あの、俺に抵抗する権利は……」
「え？　ないですよ？」
何で小首を傾げながらそんなひどいこと言えるのん？　可愛いからって許されることと許されないことがある！
「……分かったよ」
許しちゃった。
「よーっし、じゃ、早速寝ましょう！」
一色はこれから寝るとは思えないようなハイテンションで右手を上げた。
……なんだこの流れ？
まあ、繰り返し言うけど、一色も実際かなり疲れたろうしな。特に最後。……俺じゃん、犯人。
一色に怪しまれないように、見えないようにしながら、寝やすいようにベルトを外した。
結局見られて「けだものー！」とか言われた。本当に襲うならそんな面倒なことしないと思うんですけど……。

続く。

（１９）

1.

一色に手を引かれるままに進むと、彼女が先にベッドに上がり、女の子座りをしてその隣をぽふぽふと叩いた。はいはい、座りますよ……。

一色に相対するように腰を下ろして胡坐をかくと、なんだか勉強をしない娘を叱る父親みたいな構図になった。

「……寝る、んだよな？」

俺が漫然と胡坐をかいていても何も言ってこないところからすると、別にこの行動は間違いではないらしい。しかしそれはそれで、この後の展開が分からなくて困ってしまう。

「はい。……まあ、ゆっくりしましょ？」

艶っぽく目を細める一色の大人びた表情に、心臓が爆発するのではないかと思う程に跳ね上がる。

言われて時計を見れば、まだ午後２時を回った所だった。

……まだ、めっちゃ時間あるんじゃん……。

この後のことを思って、異様なまでの期待に胸を震わせていると。

「とーう！」

「うおっ!?」

一色が俺にタックルをして、あっさりと倒されてしまった。超弱いな俺。

ベッドの枕を背に座っていたので、枕の上に収まり良く寝そべるような形になった。

……え、何この死ぬ程恥ずかしい状態？

「えへへー、せんぱーい、せんぱーい……」

「……っ」

一色は親猫にじゃれつく子猫のような甘えた声で、俺の腹に頬をすりすりしてくる。

振る舞いは子供みたいでも身体がは大人なんだから自覚してください！　どこがとは言わないけど柔らかくて危ないよ！　何なの、ど

この邪神三姉妹の三女なのん？
ていうか、やばい。何がやばいってマジでやばい。
何だこの可愛い生き物。
ちょっと前までのあざとい感じがもう本当にどっか行った感じ。
正確に言えば、あざとさを出す時もその気持ちが全力で俺に向けられているのが分かってしまって、恥ずかしさで死にそうになってる。
「ふへへぇ……」
変態じみた声を出し始めた……。
あ、ちょっと身体をよじ登ってきた。
俺の胸に顔をうずめると、これまた幸せそうに頬ずりをしてくる。
「……」
取り敢えず。
撫でた。
背中を抱きながら、頭をくしゃくしゃと。
「はう……」
ちょっと顔を赤らめながらも頬ずりはやめない。やめないのかよ。
そろそろ恥ずかしくて死んじゃうよ？　俺が。
――不意に。
「先輩、わたし、重くないですか？」
一色が不安げに顔を上げて、俺に問うてきた。
確かに、今の2人の体勢は、仰向けで寝ている俺に一色が覆いかぶさっている状態で、俺は一色の体重をもろに感じていることになる。
けれど、いくらベッドのクッションのおかげで負担も減っているとはいえ、答えの内容は変わらない。
「全然。ていうか軽すぎてびっくりしてる。お前普段何食ってんの？　わたあめ？」
身体の匂いも甘いし。なんなの？　食べちゃうよ？
ごくごく自然に言ったつもりだったんだが、一色は目をぱちくりとさせた後、急に目を泳がせた。
「あ、そ、そそ、そうですか……それなら良かったです……」
……これは、照れてるんだろうか？　まあ、きっとそうなんだろう。

今のが褒め言葉に該当するのかは分からないけれど、一色は褒め言葉にめっぽう弱いらしいというのは最近何となく分かってきた。
まだ照れているのか、眉根を困ったように寄せていたかと思うと、
「うにゅ……」
今度は俺の頬に頬ずりしてきた。
まさかの奇襲。しかもより強力な攻撃になった。
「うお……っ」
対応力０で、情けない声を出す。
やめろやめろ甘い良い匂い柔らかい可愛い柔らかい可愛い可愛い可愛い！　どんだけ可愛いんだよ。
ていうか、こいつ目的忘れてないか？
「こらっ」
「はうっ」
一色の頬を両手で挟むと、俺との密着状態から離脱させた。
まだ頬ずりしていたかったのか、一色は何とも不満そうな顔をしている。
「お前、寝るんじゃなかったのかよ」
聞くと、一色は下唇を指で押し上げて、うーんと唸った。
「そうなんですけど……あ、そうだ」
何か思い付いたのか、きゃるんとした笑顔を作る。
「おやすみのチュウ、じゃあちょっと足りないので、わたしが寝るまでチュウしててください」
「……」
……。
びっくりしすぎて。
「……は？」
極めて淡泊な反応をしてしまった。
俺の訝しげな表情をみて、一色がむーと頬を膨らませる。
「むう……ダメなんですか？」
「や、寝るまでってどういう……ん……っ？」
俺が事態を呑み込めていないうちに、一色が俺の上に覆いかぶさ

り、唇を重ねてきた。
「んっ、んむっ、んちゅっ、ちゅるるるっ、れろっ、れるっ、ちゅるっ、れちゅっ、はむっ、んんっ、んんっ、あむっ、んんん……っ」
「……っ！」
こいつ、はなから全開じゃねえか！
俺の耳に手を添え、細く色っぽい肢体を悩ましげにくねらせながら万遍なく密着して、恍惚とした表情で俺の口内を貪る。
じゅるっ、ぴちゃっ、ちゅうぅっ。
口付けに伴う様々な音が、耳を覆われていることではっきりと脳内に響く。
もちろん下腹部は大いに反応してしまい、屹立したものの存在に一色は気付いて、一瞬驚きと羞恥の表情を見せた。
だが今はそれよりも口付けを優先したのか、動揺したのはほんの一瞬ですぐまた口内を蹂躙してくる。
「あむっ、ぴちゃっ、んぁっ、あはっ、先輩、先輩、せんぱいぃ……じゅるるる……っ」
時折口を離して俺の唇をついばむように味わっては、愛おしそうに俺を呼んで、また口付けに没頭する。
……こいつ、寝る気あんの？
一方的に良いようにやられながらも、これ俺が反撃したら本格的にこいつ寝れなくなるよな……などと考えていると、一色の身体が不意に横に動いた。
「……っ？」
一色はゆっくりと俺の横に身体をずらすと、首と身体を横に向けるよう俺に促して、口付けは続けながらも決して無理の無い速度でゆっくりと同じ枕の上に倒れ込む。
「んちゅっ、ちゅっ、ちゅぴっ、ちゅぷ……ぷはっ。えへへ……」
「……お、お前、どうい――」
――「どういうつもりだ」と聞くまでもなく。
一色は俺と同じように横向きで寝転がり、俺の方を向いた状態で、再び俺の唇に吸い付いてきた。

今さっきまでと同じように俺の耳に手を添えると、一色が蠱惑的に目を細める。
「ちゅるっ、にちゅっ、ちゅぱ……っ、んはぁっ、はふっ、んちゅるっ、じゅるっ、じゅぱっ、ちゅるじゅるる……っ」
「〜〜〜っ!?　〜〜〜!」
脳髄に響く水音が、どんどん大きく、そしていやらしくなっていく。
一色は俺の耳を塞ぎつつも、細い指でしゅるしゅると耳たぶを触り、耳全体を沿うように撫で回してくる。
……や、こいつ。
寝る気、本当にあるのん？
質問さえさせてくれないし。
目の前にいる、可愛すぎて意味分からん少女をひん剥かないように必死で我慢しながら、よく考えたらまだ布団もかぶってねえじゃん、今はまだ良いけどこれいざ寝たら風邪引いちまうだろ……などという考えが頭を過ぎった。俺が風邪を引いて、受験を目前に控えた小町に移しちゃったりしたら、ね！　そういうことだから！
「……っ」
一色の口嬲りに耐えながらも（耐えられてない）何とか掛布団に手を伸ばすと、自分たちの上に一気に被せた。
「わぷ……っ？」
口付けに夢中になっていた一色も、流石に驚いて口を離す。
「……ありがとうございます」
素直に礼を言ってくれた。結構嬉しい。
「どういたしまして。……お前、うっすら汗かいてんじゃねえか。着替えた意味無くなるぞ」
指摘すると、一色は俺から目を逸らして、いつもよりも子供っぽく拗ねて見せる。
「うー……だって……キス、したかったんですもん……」
唸りながらもぽそりと告げて、俺の顔をちら見する。
……。
死ぬ。

マウンド上で、どのコースに投げるのかを、キャッチャーとアイコンタクトで相談するピッチャーよろしく背中に手をやり、激しくわきわきさせる。や、ほんとまずい。
「……寝られる程度にしとけ」
いやそれどんな程度だよと心の中で自分にツッコミを入れながら、一色の頭をムツゴロウばりにわしゃわしゃーと撫でてやると、あうあう言って手を重ねてきた。さりげなくその指を絡めるのやめなさい！　興奮するから！
「……仕方ないですね、従ってあげます」
なんでこいつ偉そうなんだ……。
まあ、これでやっと落ち着い――。
「ちゅっ」
「んっ」
キスされた。
しかし、このくらいならまあ――。
「ちゅっ」
「んむっ」
また。
キスされた。
一色の手は俺の胸元に置かれていて、キスをするときに背伸びするように首をにゅいっと伸ばす感じがたまらなく可愛い。
……や、そうじゃなくて。
なんでこの子連発して――。
「ちゅっ」
「……」
はーん!?
1回1回は軽いけど！　連発ってなに!?　はーん!?
「えへへ……これくらいだと却って落ち着きます」
なんでだよ。俺心臓ばっくばく言ってんぞ。
しかし一色は言葉の通りと言っていいのか、ちょっとずつ目がとろんとしてきた。

……どうやら、本格的に疲れが出てきたんだろう。
「そうかそうか。じゃあそろそ――」
「ちゅっ」
やめねえのかよ！
好きすぎるだろ、キス！
そんなに!?　ねえ、そんなに!?
俺の手は背中で王蟲ばりにわしゃわしゃと動いてます。らんーらんらららんらんらん……。
「えへへ……せんぱい……」
キスをしては、てろてろに蕩けた笑みを浮かべて、たまに俺を呼んで、んーと幼い声を出しながら俺の胸元に顔をうずめてすりすりする。
この謎の鬼かわいいローテーションが、しばらく続いた。
2.
「……すう……すう……」
謎鬼かわ（謎の鬼かわいい）ローテーションを幾度となく繰り返して、俺の頬が本気で緩みそうになった頃、俺の胸元で安らかな寝息が聞こえてきた。
「……寝顔、幼いんだな……」
聞こえることは無いと分かっていながら独りごちると、一色の髪を手櫛で梳く。
亜麻色の髪の感触は柔らかで、持ち上げて手を離すとはらりと舞い落ちて、甘い香りがふわりと漂った。
……うーん。
俺、寝れるかなあ。
どきどきしすぎて、もう。
そんな心配もしていたのだけれど、結局、一色の髪に顔をくっつけて寝ると、妙な安心感によりすぐ眠りに就いた。
……やべえ、昼寝の密度が超上りそう。
続く。

（２０）

「ん……」

昼寝から目を覚ますと、電灯に少し目が眩んだ。

明かりが点きっぱなしだった部屋の中を見回すと、カーテンの隙間から覗く外がすっかり暗くなっていた。

寝ぼけ眼をこすり、一色のベッドに置いてある時計を見る。

「5時……か」

昼ご飯を食べて、クッキーとコーヒーを頂いて、その、まあ、なんやかんやあって。

……寝ていたのは、大体3時間くらいだろうか。

睡眠時間としてはキリの良い時間なんだろうけれど、昼寝としてはかなりがっつりの部類に入ると思う。

……ていうか、寝すぎじゃない？　どんだけ安らいでたんだ、俺……と。

「おーい、一色、起きろー」

……こいつ、ね。

一色が俺の胸元に綺麗にくっついてるおかげで、部屋を見回すにも時計を確認するにもひと苦労だった。

「おーい」

「……すう、すう……」

……。

……全然起きねえ。

やっぱり寝顔もすげえ可愛いな、一色……とか思って死にそうになった。

引き続き、起こす努力を続けてみる。

「おーい……起きないと、その、なんか、するぞー……」

すげえ変態みたいなこと言っちゃった。ていうか完全にアウトだな。

「……すう……すう……」

……こんなことを言っても、まだ起きない。超安らか。睫毛長いな

……。
……うん。
なんか、する！
という訳で、取り敢えず、耳をこしょこしょ。
一色の左耳をそっと撫で回す。
こしょこしょ。
触り始めた途端に、一色の身体がぴくりと動いた。
「ふあ……んん……すう……すう……」
……起きないんかい。
今度はもうちょっと盛大に。
こしょこしょこしょこしょ。
「ん……っ、ふぅ……っ、あっ、あん……っ」
「……っ」
やべえ。
死ぬ。
しかも完全なる自爆。
だがしかし、負けぬ！　何にだ。
ここからどうしたものか――と考えた結果、一色の後頭部を右手で押さえて首の角度を少しだけ変え、さっきから責めている左耳を舐めてみる。
「ちゅっ、ちゅぴっ、ぴちゃっ、んん……」
分かりやすく水音を立てながら舐めると、一色の反応が一気に増す。
「ふぅ……っ！　んっ、くひぃんっ、はぅっ、ひっ、ひん……っ、ひぃん……すう、すう……」
「……」
なんか、もう。
俄然やる気が出てきました、僕。
いや、何のやる気だよ。
一色は反応すればする程、俺の胸元に更にうずくまってくる。
ばかめぇ、そこは行き止まりだぁ……！　今なら誰も見てないから

キモいこと考え放題だぜぇ。いつもは考えただけで誰かしら（一色とか小町とか）に見透かされるから今はすごい解放感があるぜえ！

という訳で。

もう少し、舐めてみる。

「ぴちゃぴちゃっ、ちゅりっ、ちゅりゅっ、れろっ、ちゅぴっ、ちゅっ、ぴちゃぴちゃ……」

「あうぅっ、あぇっ、ひんっ、ひぅぅっ、あうぅぅ……あうぅぅぅ……」

一色の声が、寝ながらではあるものの、どんどん間延びした、官能的な響きになってきた。

これはもう、止まらない――！

――と。

「……先輩」

「あひゃいっ!?」

突然呼ばれて、面白い程情けない声が出た。

そろりと胸元を見ると、一色が俺にジト目を向けている。

「え、えーと……おはよう？」

「おはようございます、えーと……比企谷ルパン先輩？」

「……」

や。

たぶん。

ルパン3世はこんなねちっこいことしないと思う。

「そうですね、先輩の方がよっぽどねちっこいです」

……読まれた。

「それに……すごい、やらしいです。先輩に呼ばれたような気がしたなって思ったそのすぐ後から、耳が妙に気持ち良……変な感じになってたから目を覚ましたら……」

「あれ？　今、気持ち良いって言いかけ――」

「先輩は変態ですね」

「うぐっ……」

揚げ足取りをしようとしたけれど。

カウンターで、ぐうの音も出なくなった。

「や……その、すまん。起こそうとしてたら段々と……な」
頭をぽそぽそと掻きながら謝ると、一色はふっと息を吐いて、ふわりと優しい笑みを浮かべた。
「まあ……しょうがないですね、それだけわたしが魅力的だということですね！」
「あ……あ、ああ」
一色の冗談めいた調子に、顔を赤らめて変に本気のリアクションをしてしまったため、
「あ……あう、ま、そ、そういうこと……で……」
一色に対して、予期せぬカウンターを食らわせてしまった。
「ああもう……先輩はこういうところあざといんだよなぁ……」
一色が俺の胸元でやたら恥ずかしいことをぶつぶつ言ってるので、頭をくしゃくしゃと撫でた。
うーん。
この子、ちょっと、可愛すぎる。

× × ×

「ていうか実際、そろそろ起きた方が良いと思うぞ？」
一通りのやりとりを終えてから、一色はむにゃむにゃ言いながら、俺の胸でころころと甘えている。ちょっと死にそう。
「うーん……今、何時ですか？」
「5時過ぎってとこだな」
「うーん……もうちょっと……」
「平日の朝みてえなこと言うな。今の時間帯がどうのっていうよりは、これ以上寝ると夜寝付けなくなるぞってことだよ」
ごく普通の調子で言ったはずなのだけれど、言葉を掛けた瞬間、一色の動きがぴたりと止まった。
微かに、息が荒い。
俺の胸にそっと手を当てて、まるで俺の心音を確かめるかのように手の平を押し当てながら、潤んだ目を俺に向けた。
「夜……別にいいじゃないですか」
「……え」

「……寝なきゃ、良いじゃない、です、か……」
「……っ」
一色の瞳と声が揺れる。
心が、ひどくざわついた。
この言葉を否定する意味、必要性も、全く無かった。
だから、
「……あ、ああ、そ、そう、だな……」
小刻みに震える声で、何とか返事をした。
俺の言葉を聞いて、一色が目を細める様を見ると、身体の奥底が灼熱の如く煮え滾る感覚を覚えた。
夜を待たずに今やろうとしても罰は当たらないのでは――などと考えていたら。
一色が表情をかちっと切り替えて、きゃるんと笑みを浮かべた。
「それじゃ、もうちょっと寝ていいですよね」
「あ、ああ……え、あれ？　ん、あれ？」
「はーい、決定でーす。二度寝二度寝～……すう、すう……」
はやっ。
……なんか。
いつの間にか、もうちょい寝る流れになっちゃった。

× × ×

「……せーんぱい」
「……どうした？」
「……せーんぱい、せんぱい、せんぱい……えへへ……」
「……」
現在、時刻は6時過ぎ。
一色は、少し寝てすぐ起きてから、俺の胸元で絶賛ころころ継続中。
しかも俺のことを幾度となく呼ぶだけ呼んでにへっと笑って終わりという、ただただ恥ずかしいやりとりを延々と繰り返している。
これ、地味にライフ削られる。恥ずかし過ぎて。
今こうやって一色と寝ていて分かったことが1つある。
この子は、眠いと妙に幼くなるようだ。

俺を呼ぶ時の表情も、笑うときの仕草や声音も、明らかにいつもと比べて幼い。
油断しきったこの子はこんな風になるのか――と思うと、ちょっと悶えて死にそう。
……それにしても。
「……流石に、そろそろ起きないとまずくないか？　その、夕食の支度とか、あるだろ？」
言うと、一色がむむむと眉を顰めて顔を上げた。
「むー……たしかにそうですね……でもまだこうしてたいなー……」
「やめろやめろ。恥ずかしくて俺の残機はとっくに0になってもはや3回くらいコンティニューしてんだぞ」
言うと、一色はむーんと唸りながら再び俺の胸元でころころする。こいつ、気に入りやがったな……。
ていうか話聞いてねえ。猫みたい。
「はー……あったかーい……えへへ……」
……くっそ！　可愛いから何も言えねえ！　くっそ！
一色の背中に回して右手を変幻自在にわきわきさせて必死で欲求を抑えていると、一色が何か閃いたように目を見開いた。
……目覚めのキスとか要求してきたら、ほっぺたを引っ張ろう。左右にびろーんて。
一色は妖しげに不敵な笑みを浮かべたかと思うと、にぱっと微笑んだ。
「わたし、もうちょっと目が覚めないととてもご飯なんて作れそうにないので……目覚めのキスいひゃいいひゃいいひゃいっ!?」
「……」
はい、びろーん。
こいつ、マジかよ。
俺を恥ずかしさで殺す気だ。
「らんれすかー（何ですかー）！　らんらんれすかー（何なんですかー）！」
両頬をみょいーんと引っ張られた状態で、一色は懸命に抗議してく

る。やだこの子かわいい……。
「お前、俺のチキン具合をなめんなよ。そんな恥ずかしいことが出来ると思ってんのか」
言って、既に引っ張っている頬を更に上下にうにうにと動かして弄んだ後、やっとこさ解放する。
引っ張られていた頬を手でさすりながら、一色がジト目を向けてきた。
「……寝る前。胸。下の方。おしおき」
「うぐっ」
なんか、検索ワードみたいなまくし立て方をされた。下の方ってぼかし方が絶妙とかどうでも良いことを考えてしまった。
……うん、恥ずかしいこと、超してたわ、俺。
敗北感を漂わせる俺を見て一色は満足気に頷くと、にこりと微笑んだ。
「さ、そういうことで、先輩が好きなようにして良いですよ！　ただし、キスだけ……ですからね？」
――んん？
ぴくり、と俺のアンテナ（アホ毛）が反応する。
「……好きなように、って言ったな？」
「え、あ、え？　あ、はい……でも、キスだけ、で、すよ……？」
「そうか、そうかそうか……」
甘い、甘い、甘い。
マッ缶に角砂糖を入れたものより甘いぞ、一色。それもはやただの砂糖だな。
一色は今「キスだけ」という点を強調したかったのだろうが、俺はそこは大して問題にしていない。
大事なのは「好きなように」という点だ。
「一色」
「え、は、はい……」
明らかに俺の目が嗜虐的なものに変わっているのを察して、一色が縮こまる。

「仰向けになってくれるか？」
「は、はい……っ」
出来るだけ優しく言ったつもりだけれど、一色のびびり具合は変わらない。
一色がころりと仰向けになると、俺はその上に馬乗りになった。
「え、せ、先輩……？」
一色、びびりまくりである。もはやＭＡＸびびり。
「一色、お前の言い方からすると、『好きなように』『キスを』して良い、ってことなんだよな？」
「え、あ、はあ、まあ、そうで……す、ね」
俺からどんな屁理屈が飛び出すのかと不安がっているのが手に取るように分かる。やべえ、俺の日頃の行いの成果がすげえ出てる。
俺は意図的に、嗜虐的で、凄惨な笑いを浮かべた。
「そうか、じゃあ、『どれだけ激しく』『色々な場所にキス』しても文句は無いよな？」
「え、あ、え……ひっ、ひぃん……っ」
一色の目に明らかに怯えの色が宿る。
でも、この目は何度か見た事がある。
一色が自分から「おしおき」を望んだときの目だ。
たまらず、ごくり、と生唾を飲み込む。
「大丈夫、脱がせたりはしないし、お前の上半身しか責めないから」
「え、あ、う、うそ、だって、先輩、それじゃ――」
一色が言葉を言い終えるのを待たずに。
俺は、一色の上にのしかかった。

続く。

（２１）

仰向けになった一色の顔の両脇に、ゆっくりと手を沈み込ませる。
顔を寄せると、一色がびくっと震えた。
「……ひっ、ひぃんっ、ふっ、ふっ、ふっ……」
その瞳には、不安と、怯えと、緊張と、――期待が、ないまぜになっている。
一色の表情を楽しみながら、耳をさわさわと撫でる。
「あふあっ、あひぁっ、ひぃぃん……っ、やあっ……」
朱色に染まった細い首を、うねうねとくねらせた。
徐々に、徐々に――と思い、初めは一色の頬に口を付ける。
ふにっと柔らかい感触がして、唇が頬肉に沈み込んだ。
「ふあっ……？」
こんなにソフトな責めをされると思っていなかったのだろうか、一色は間の抜けた声を上げた。
頬に唇を付けたまま、ちろちろと舌先で頬をつつく。
「ふあ……あ、んん……っ」
横から見える一色の目が、蕩けて上気したものになってくる。
唇を付けたまま、つつーっと下にスライドして、細い首に舌を這わせる。
そこでべろりと舐めてやると、一色がびくっと跳ねた。
「ひあぁっ!?　あっ、ふあっ、んんん……っ」
急に声を上げてしまって恥ずかしくなったのだろうか、一色は口を手の甲で押さえて、悩ましげに目を細めた。
――そんな顔するなよ、余計にそそるだろ？
爆発しそうになる何かを堪えながら、首を責めるのを止めず、絶えずれろれろと舌を這わせながら移動させてゆく。
やがて鎖骨の上の窪みに舌が到達すると、
「ちゅるるる、ずず、ずぞぞぞ……」
「ふあああああっ!?」
一色の首に腕を回して押さえ込み、ここぞとばかりに吸い付いた。

一色は足をくねらせ、震えながら内股になり、時折背筋をくいと反り返らせる。
「ちゅるっ、じゅる、ちろちろ、ちゅっ、くちゅくちゅくちゅ……」
「～～～～！　～～～～！」
水音を大きく立てるように舐め回すと、一色は手の甲で口を押さえながら、涙目でぎゅっと目を瞑る。
執拗に、執拗に、何度も同じ場所を舌で舐り続けると、一色が頭上から、理性を蕩かすような猫撫で声を掛けてきた。
「……先輩、……キス、したいです……」
「……っ」
ここで更に焦らして、もっともっとイジメるというのもありだったのだけれど。
「……んむっ……はむっ、先輩、先輩、せんぱいぃ……」
目を細めて甘えてくる一色の顔があまりにも可愛くて、そんな焦らしなど頭の中から霧散してしまった。
「んちゅるっ、れるっ、ぴちゃぴちゃ、れるっ、ごくっ、ごくっ、くちゅくちゅ……んはっ、せんぱ……い、んむぅ……っ、はうっ、ごくっ、ちゅぴっ、ちゅぱっ、ごくごくっ、ふあっ、あはっ、ひぅぅ……んむぅ……」
俺が上から覆いかぶさってキスをする体勢になっているので、さあ一方的に蹂躙してやるぞ……と思ったのだけれど。
一色は俺の背中に腕を回し、そしてあろうことか俺の腰にその細くしなやかな足を回して絡み付いてきた。
そして俺が流し込む大量の唾液を嬉々として飲み込み、その度に幸せそうに目を細める。
……わー。何この子。エロ可愛すぎるんですけど。
もはや、一緒に暮らしたいまである。
……考えただけで恥ずかしくて死にそうになった。
一色はキスに集中しているようで、俺が唾液を流し込むのを一時的にでもやめると、
「……んむっ！　あむっ、あむっ、じゅるるるるる……ごくっ、ごくっ……あむっ、あむっ、じゅるるる……ごくっ、ごくっ」

「〜〜〜っ!?」
俺の舌に吸い付いて唾液を奪い取り、幾度となく飲み込んでくる。
……なんだよ、これ？
なんだよ、そのうっとりとした表情？
……こんな顔、絶対他の誰にも見せたくない。
「……ぷはっ、……えへへ……、ひぇんぱい、もっと……もっとくらはい……」
「……っ」
ふやっと緩んだ表情で、舌っ足らずに甘えてくる一色のおねだりは強烈で。
「んあっ……？　もう、先輩、そんなに強く抱き付かなくても……はうっ、あっ、首っ、そんな、あんっ、……んむっ、ちゅるっ、じゅるるっ、はむっ、んんん……っ」
一色が次々と見せてくる魅力的な顔に、柄にもなく独占欲なぞというものが果てしなく膨らむのが分かった。独占欲なんて小町くらいにしか抱かないものと思ってたんだけどなあ……。あと戸塚。
× × ×
「……ぷはっ。……うー……うー……」
たっぷりと互いの唇と口内を味わって唇を離すと、一色が切なそうな、物欲しそうな唸り声を上げ始めた。
いつかも見たその仕草に、とくんと胸が高鳴る。
「……どうした？」
問い掛けて、一色の髪を撫でる。
シャンプーと汗の匂いが混じった女の匂いがふわりと漂い、頭がくらくらする。うーん、ずっと嗅いでいたい。
「はう……」
一色は俺の手に自分の手を重ね、心地良さそうに目を閉じる。
ころころと甘えるように俺の胸におでこをすりすりとこすり付けてくる。やだ、一緒に暮らしても良し、飼っても良しなの……？
わしゃわしゃと撫でていると、ぱちっと目を開けて、まるで今しがた忘れていた欲求を思い出したかのように、また唸り始めた。

「先輩……」
「ん？」
一色の声が、明らかに震えている。
「……って……いです……」
「……え？」
「だから、さ……て、ほし……です……」
「……」
ここまで聞こえれば、一色の望んでいることは分かる。
聞こえなかった部分を補填してやるのも優しさなんだろう……とは思いつつも。
「なんだって？　よく聞こえないぞ、一色。もっとはっきり言ってくれないと」
「……っ」
鬼畜モード、全開。
首まで真っ赤になった一色を見て、ああもう何だこの可愛すぎる子は……と身悶えした。
今にも泣きそうな顔になりながら、一色が俺を見つめる。
懇願と、哀願と、嘆願と、熱願と。
ありったけの願いを込めた双眸が、俺を見つめる。
「……だか、ら、わたしの、身体、触ってください。も、う、我慢出来なくなっちゃいました……。……あ、あの、でも、それでも、ご飯食べ終わった後にちゃんとしたいっていうか、その……」
たどたどしくも、自分の欲する事を伝えてくる一色を見て、ふっと頬を緩める。
一色の頬に手を添えると、表情がぽわんとして、少しばかり見え隠れしていた緊張が溶け出したのが分かった。
「……分かったよ。その辺もきっちりするから」
「……っ！　……はい……っ」
一色が、心の底から嬉しそうに返事をする。
――家に来て、昼ご飯を食べた後辺りからだろうか。
閉じた空間で2人きりで過ごす内に、少しずつある種の空気が醸成

されて行ったのを感じていた。
――最後までするのは夜。そしてその時を迎えたら、もう歯止めなんて掛けない――気付けば、そんな暗黙の了解が出来ていた気がする。
そんな認識を抱きつつも、今こうして一色が改めてきちんと口にしたことで、それはより強固な約束事になった。
正直、一色の言葉が前半までで止まっていたら、もうひん剥いていたかもしれない。というか今まで押し倒してなかったのが我ながら信じられない。
……ふう、危ない危ない。
楽しみはディナーの後で。
「じゃあ、一色」
「……はい」
「……下着くらいは見せてくれよ」
言うと、一色は目をむいて、唇を戦慄かせながら目を逸らした。
そして、目だけちらりとこちらに向け、両手を胸にきゅっと押し当てる。
「……はい」
弱々しくも、ひどく熱の籠った声が耳朶を打った。
続く。

（２２）

下着姿になるために、一色がゆっくりと起き上がる。
とろんとした目つきではあるが、それでも視線は俺の目から外さない。
あまり、意識してやっているとは考えづらい。恐らく無意識なのだろう。
――だからこそ。
意図しない、考えない、無意識でやっているからこそ、その視線は。
――俺の劣情を、狂おしい程に煽ってくる。
「……」
……？
一色が、ベッドから起き上がって女の子座りになると、右腕で身体を抱いて動かなくなってしまった。
……ああ、そうか。
なんで、と聞く必要は無いだろう。
結局のところ、恥ずかしいのだ。
そんな一色を見て、敢えて俺からは――
「……」
――何も、言わない。
何か言うでも、凝視するでもなく、ただ、見る。
一色の顔を、見る。
「……うう……」
沈黙に耐え兼ねたのか、一色が泣きそうな声を上げた。可愛い。
「どうした？」
ここで何も言わないのも難だなと判断して、質問をする。白々しさ全開だけど。
「……うううう……」
身を捩って、引き続き呻く。可愛い。
うーん。
ちょっと、イジメてみようかな。

「……昼寝前は、自分から見せてこようとしたくせに……」
ざくり、と指摘のナイフで刺してやると、一色がぴくっと動き、泣きそうな顔になる。
「……だって、あれはわたしから攻めてたから……」
「……お前なあ……」
なんて後輩だ……。
斜め上の天井を見上げて頬をぽりぽりと掻き、顔の向きをそのままに視線だけを一色に向ける。
「へー、じゃあ俺から指示されると、脱げなくなっちまうくらい恥ずかしいんだな。まったく……」
挑発するような言葉で煽ると、一色がばっと顔を上げた。その表情には焦りが滲んでいる。
「な……そ、そんなこと――」
「だったら」
一色が顔を真っ赤にして反論しようとするのを制して、口を挟んだ。
「……俺が脱がせるか」
「え……」
一色の身体が、ぶるりと震えた。
実際、最初は一色が脱ぐのを見るのも一興と思っていた。
しかし、いざこうやって躊躇しているのを見ると、せっかくなら俺が脱がせて、更にその羞恥心を煽って恥じらいに恥じらう一色を見てみたい、あ、間違えた、男として、先輩として、一色にあまり恥をかかせないようリードしてやりたい気持ちになった。やばい、心の声の中で更に本音がだだ漏れになっている。
「……で、でも、流石にこれくらいは自分で……」
驚きの声を上げてから数秒間で、俺に脱がせられる光景をイメージしたのだろうか、一色は急に毛布で身体をばふっと覆い、顔の上半分だけ覗かせてもじもじとして、小動物のような目をこちらに向けた。何この可愛い生き物？　叩いたらボーナスポイントもらえるかなあ。
まあ。

取り敢えず。
「おりゃ」
ばふぉっ、と。
「うきゃぁっ!?」
俺が毛布を剥ぐと、一色は変な声を出した。まだ服着てんのになんでそんな恥ずかしがるんだよ……。
「ううう……先輩にひん剥かれるぅ……」
「……」
さっき俺に下着を見せると言った事をしっかり忘れたのか、わざとらしく身体を縮こまらせている。
「はわわわわ……」
縮こまりながらも、なんか、わざとらしく俺をちらちら見てくる。
……なんかこいつ、明らかに楽しんでない？　緊張してんの？　遊びたいの？　どっち？　……大方、緊張しまくってるのを、こういうおふざけで紛らわせたいんだろうな。流石にそこを指摘したらマジで泣いちゃいそうなのでやめておこう。
……まあ、一色がそういう態度で臨むのならば。
――それはそれで、こっちにも考えがある。
一瞬だけ俯いて、目をゆっくり閉じて、気合を入れた上でゆっくりと目を開ける。
……よし。
比企谷ルパン、再出勤です。夜這いの次は脱がせます。
まあ、実際やるなら――
「動くな」
「え……」
――本気で、ひん剥いてやるけどね。
×　×　×
動きを止めた一色の下へとにじり寄る。
一色は俺の声音から、俺の（変態としての）真剣さを感じ取ったらしい。
顔を強張らせながらも、決して逃げようとしない。

「あ、あう……あうう……」
微かに口元を震わせながら、涙目で俺を見る。
緊張と、不安と、――期待とを滲ませて。
……この子のこの表情は、どうしてこうも俺の気持ちを高めてくれるのだろう。
「じゃ、まずは上からだな。……めくるぞ？」
言って、一色のセーターの裾を掴むと、びくりと震えた。
「……はい……」
上気して、頬を朱に染めたその顔は、たまらない色っぽさを宿している。
くいっ、と。
一色のセーターをずり上げていくと、やがて双丘に行き当たった。
その時だけ、セーターを更に引っ張って、その丘を乗り越えると――可愛らしい、ピンク色をした、フリル付きのブラが姿を現した。
「……っ」
一色は顔を背けて、ふるふると震えている。
たまらない。
ブラに彩られた一色の胸も、そして、恥ずかしがる一色の仕草も。
……たまらない。
――ここで、敢えて何も言わず、何もせず、１０秒程の間を空ける。
その間にする事はと言えば、、ただただ一色の胸を見るだけの簡単なお仕事です。なんかバイトの募集広告みたいになった。
その間を不思議に思ったのだろう、一色がちらりと目だけこちらに向ける。
「……あ、あの――」
「はい、両手を上げて！」
「え？　あ、はいぃひゃあああああ!?」
また変な声が漏れた。
一色の戸惑いに割って入るように指示を出し、混乱極まる中何とはなしに俺の指示通りに腕を上げた所を、俺がぺろんと全部剥いでやった。

一色の上半身を包む衣服が、下着1枚になった。
「……う……わ……」
呼吸をするのを忘れてしまう。
俺は、今まであれだけ色々しておきながら、まだ下着姿を拝めていなかった。
その焦らしもあってか、――ネットや本で散々見慣れた、コンビニに行けば平然と雑誌の表紙を飾っている筈の、見慣れた筈の――下着姿が。
これ以上無い程に、可愛く、色っぽく、美しく見える。
俺が感動で打ち震えている中、当の一色はというと。
「……わたしは何も見えない……わたしは何も見えない……」
両手で顔を覆って、ぶつぶつと訳の分からない事を言っていた。
ちょっと可愛すぎたので、ぽふぽふと頭を撫でた。その間も一色は現実逃避を続けていた。なんだこいつ、超可愛いな。

× × ×

「さて、次は……」
言って、スカートの裾に手をやった、その刹那。
「はわーーーーー!」
「え」
がしっ、と。
ほんのコンマ数秒前までは顔を手で覆っていた一色が、妙に真剣な顔で俺の手を押さえ込んでいた。手に込められた力が割とマジ。意外と力あるなこいつ……。
「せせせせ先輩……わたしですね、今日は、その、アレです、その、あの……ス、スカートの調子が、わ、悪くって……」
「……」
……。
……テンパりすぎて、絶望的な言い訳を始めやがった。
なんだよスカートの調子って。万物の声に耳を傾けられるのかよ。それどこのロジャーさんだ。ていうかスカートの調子が悪いとどうなるんだよ。なに、急にホックが外れたりすんの？　何そのラッ

キー・結城・イベント。
ううむ。
一色がこれだけおバカ丸出しの事を言うのは極めて稀、というより、初めてかもしれない。
……この状況は、楽しまなきゃ損だな。
俺はにやりと笑うと、スカートに添えた手に力を込める。
「そうか、じゃあ脱がせてスカートを休ませてやらなくっちゃな……！」
俺の八百万信仰半端ねえなと思いつつ、スカートのホックの位置を探ろうとする。
しかし、一色の抵抗も半端ない。
「そ、そうですね、今日一日頑張ってもらったら、明日休んでもらうことにします……」
なんか2人がかりで、社員の勤務時間の調整をしてるみたいになってる。
「むむむむ……」
「むむむむ……」
……。
ううむ。
なんか、この展開おかしくない？
だって、下着姿になるのを了承したのは、今目の前で俺と唸り合いしてるこの子自身だよ？
ううむ。
……全ては恥ずかしさが故、か。
……ちょっと、強気に行くか。
「一色」
「ひゃいっ!?」
目を見据えて、強めの口調で一色を呼ぶ。
「……いつまで抵抗するつもりだ？」
冷や水を浴びせ掛けるような低い温度の声音で言うと、一色の目が泳いだ。

「あ、う、そ、その……」
「俺に下着姿を見せてくれるんじゃなかったのか？」
「そ、そうです……けど……」
なんだか一色さん、泣きそう。ちょっちょやりすぎたかしら。
「……ふう。……ほら」
軽く息を吐き、一色を抱き寄せる。
「ふあ……？」
一色が甘えた声を出す。心底安心したような声だ。
軽く抱きしめて、一色とおでこをこすこすと擦り合う。
そして、そこから、
「……ちゅっ、ちゅぴっ、ちゅるっ、はむっ、あむっ、ちゅりっ、ちゅりゅっ、ちゅっ……」
一色に軽く唇を重ね、彼女と舌を緩やかに重ね合い、そこから唇や舌を何度も咥える。
ゆっくりと押し倒そうとすると、一色は抵抗することなく俺を受け入れて、そのまま仰向けに倒れ込んだ。
「ふあっ、ちゅるっ、あふっ、せんぱ……んふうっ、ふむっ、ちゅるっ、ちゅるるっ、んはぁっ、んん……っ」
意識をぐちゃぐちゃに混濁させるような濃厚なキスではなく、その2歩手前くらいの、愛情をゆっくり確かめ合うような、穏やかなキス。
下着姿になるというだけでも、よほど緊張していたんだろう。
一色の身体を包んでいた強張りが、ゆっくりと解れていった。

× × ×

「……ぷはっ。……どうだ？」
気付けば夢中で互いに口付けを楽しんでいた。いかんいかん、病みつきになるところだった……や、もう、ぶっちぎりで手遅れだな、俺ら。
俺の問いに、一色がこっくりと頷く。その拍子に、亜麻色の髪の毛先がふわりと揺れて、甘い香りが鼻腔をくすぐった。
「……はい。……お願いします」
仰向けのまま、手を胸に重ねて、一色が目を細める。

「じゃ……行くぞ」
今度はゆっくりとスカートのホックを探す。
そして金属の感触を見付けると、それをゆっくりずらす。
かちっ、という音と共に、一色のやや短めのスカートが緩んだ。
「……腰、浮かせてくれるか」
言うと、一色が小さく肩を竦めて、くいと腰を上げる。
それに合わせて、ついにスカートを一色の細い肢体から剥ぎ取った。
続く。

（２３）

「……」

「……」

２人しての、無言。

一色は、上下ともに下着姿になったことによる恥ずかしさから。

俺は、一色の、まだ幼さが残るものの十二分にそそる色っぽい肢体に見惚れて。

……何て言うか。

や、もう。

一色いろは、最高。

何この、華奢でありながら適度な肉感のある感じ。

ピンク色の、ふわりとしたフリルの付いたショーツがまたとても可愛い。

ぼんやり見惚れながら、じっくり凝視していた。

「うう……」

一色は顔を真っ赤にして目を逸らしているものの、手で下着を隠すようなことはせず、胸に手を重ねていた。

女の子のこういう状態を見た時、小町には「はいはい世界一可愛い」と雑な事を言っていたツケが回ってきたのだろうか、きちんと意志を持って、能動的に自分の気持ちを一色に伝えることが中々出来ない。

でも、そんなヘタレ全開の俺でも。

――一色が、ちらりと俺を見て、

「……ど、う……です、か……」

震える声で言ってくれたから。

なんとか、頑張って――

「……綺麗だ」

――本音を口にすることが出来た。

「……」

「……」

そこから、再び。

２人しての、無言。
言って恥ずかしくて、言われて恥ずかしい。
ウブかよ。なんなんだ、俺ら。
膝立ちで、一色の身体を凝視したまま固まっていたが、そもそも何の為にこの状況になったんだっけ？　と考える。
――そうだ。
京都へ行こう、ではない。
一色が、触ってほしいからと言って、俺が交換条件と言う程でもないだろうけれど、下着姿を所望したからだ。
なんか下着姿を拝むまでの時間がすごい長かった気がするから、もはや何が目的なんだか分からなくなってた。
……こんな綺麗な身体をした子を、これから――。
考えただけで、身体がぶるりと震えた。
「……じゃ、触るぞ」
高まる興奮を隠しきれないようにそう言うと、
「……はい」
一色が、小さく小さく頷いた。
×　×　×
一色の腰の上に跨り、胸にそろりと手を伸ばすと、手が柔らかな双丘に触れる直前で、彼女の身体がぴくっと震えた。
「……」
顔を逸らしながらも頬を赤らめ、目だけはこちらを凝視している彼女の艶美な表情に見惚れながら、ゆっくりと指を胸に沈み込ませる。
手の平は下着部分に、何本かの指の腹は彼女の肉体に直接触れる。
ふにゅん、と。
指が心地良い感触に包まれた。
「……う……お……」
超柔らけえ。なにこれ、なにこれ、なにこれ？
「あっ……ふぅっ……んんっ……」
一色が悩ましい声を上げる。あまりの昂揚感に、今すぐめちゃくちゃにしたいのを必死で抑える、抑える、抑える。

ゆっくり、ゆっくりと、一色を慈しむようにゆっくりと、胸の感触を楽しむ。
程好い大きさの胸に、幾度と無く指が沈み込み、その度に、
「あっ、ふあぁっ、あっ、ひんっ、ふううっ、ふううっ、んっ、くうっ……」
――日々の鬱憤がまとめて吹き飛ぶような、それはそれは甘い、心地良い声が聞こえてくる。
「せんぱ……い……」
一色の表情を見て、今の揉む強さで大丈夫かと慎重に探っていると、彼女が途切れ途切れの上ずった声で俺を呼ぶ。
「どうした？」
なんだよこの子可愛すぎるだろと悶えながらも、平静を装って聞くと、
「その……もっと、強くしても、大丈夫ですよ？　先輩、やっぱり優しいなあ……えへへ」
目を細めて、俺の手に自分の手を重ねて、一色がにっこり笑う。
「……っ」
多幸感に打ち震えて。
「……わかった」
――小さく、頷いた。
× × ×
「ふあああっ!?」
不意を突く形で思い切り揉んだら、一色の身体がびくりと跳ね上がった。
や、ついね。
「あっ、ふあっ、急に……、そんな……っ」
手の甲で口を覆って、恥ずかしそうにこちらを見る一色。
――それでも。
「……止めないからな」
念を押してそう告げると、指の速度を一気に上げる。
もにゅっ、ぐにゅっ、たぷっ、ぐにゅにゅっ、むにゅっ。

柔らかな双丘の感触を楽しみながらも嬲ると、
「ひあああああっ!?　あふっ、ああっ、ああっ、ああああっ！　ひぐううっ、ひんっ！　ひあっ、あはっ、ひぃんっ！」
一色は声の抑えが利かなくなったのか、恥じらいも忘れた声を上げ、どこか嬉しそうな表情で背筋を反り返らせ、俺の腰を持ち上げんばかりに身体全体を跳ね上げる。
――高まっていたのは、俺だけではなかった。一色も、興奮していたんだ。
どうしようもない程に、嬉しい。
さっきまでの気遣いなどどこ吹く風で、どんどん乱暴に揉むようになっていく。
「あくぅっ、いぎっ、ひぃんっ、ひぃんっ、ひあああっ！　せんぱ、これっ、すごっ、すごいっ、すごいいい……気持良いよおおお……」
一色は涙目で口をだらしなく開き、両手はベッドのシーツを固く握りしめている。
もっと、もっと、もっと。
今この場でどこまで行っていいものかという理性的な思案と、一色の身体も心も、外側も内側も全部ぐちゃぐちゃにして、全部自分のものにしたいという独占欲と性欲と支配欲とが、激しくせめぎ合う。
「……あ」
――ふと。
一色のブラのホックが、双丘の間にあるのを見付けた。フロントホックってやつか。
こんな分かりやすいもの、普通は一発で分かるだろう、とは思うのだけれど。
あまりの興奮で、一色の胸そのものと、ブラの全体像しか見えていなくて、局所的な部分に目が行かなかった。
今はたまたま、自分の中で理性と本能がせめぎ合っていて、視界がほんの少しだけ広くなったから見えたようだ。
「……」
何も言わず、吸い込まれるように手を伸ばす。

「あっ……!?　そこは、まだ、だめ……!」
俺の行動に気付いた一色が、手を伸ばして俺の行動を制しようとしたけれど。
「んむっ!?」
その行動を更に制すべく、一色の唇を奪った。
馬乗りだった状態から、一色と完全に身体を重ねる。
――もうちょっとだけ、この子の理性を溶かしてしまおう。
――抵抗する気力が、根こそぎ無くなるくらいに。
そう思い、一色の耳に手を添えると、驚きで目を見開く彼女の口内に舌をねじ込んだ。
×　×　×
「んぶぅっ……!?　んじゅるっ、じゅるるっ、うぶっ、じゅぴっ、あうっ、じゅるるる……ぢゅりゅっ、ぢゅるるる……ぷはっ、ああっ、あっ、ふむぅっ!?　じゅるるる……じゅるるるる……うううう、ううう……じゅるる……んんんん……っ！」
ほんの僅かな呼吸の時以外、一切の休憩を与えない。
のしかかる様に体重を掛けている為、一色はいくら身を捩らせてもどこにも逃げ場が無く、諦めたのだろうか、
「じゅるるる……ぷはっ、やっ、もう、そんな、飲ませない、でえ、んぐううう……じゅるるる……じゅるるるるるる……」
僅かな抵抗の言葉を口にするだけで、俺が流し込み続ける唾液を、流し込まれるがままに飲み込み続ける。
耳に添えている手に、一色の涙が伝って当たる。彼女の頬には、飲み込み切れなかった大量の唾液が垂れていた。
いつからか、一色は俺の背中に腕を回して、すりすりと愛おしそうに撫で回していた。
「あふっ、あうううう……」
唇を離すと、すっかりキスへの依存が強まっていたのか、一色はか細い呻き声を上げて、涙を流しながら、俺の首筋に愛おしそうに吸い付く。
「あむっ、うっく、ちゅるるっ、ひっく、せんぱいの、ばかぁ、もう、

ひっく、ちゅりゅ、わけわかんない……えっく、ひっく、ちゅっ、んんっ、ちゅっ、ちゅっ……」
「……」
……。
甘えたいんだか、俺に文句を言いたいんだか、照れ隠しなんだか、ただむしゃぶりつきたいんだか、なんなんだか。
一色自身も「わけわかんない」と言っているし、本当に、頭の中がごちゃごちゃなんだろう。
――それでも、この行為は続けたい。この子が気持ち良くなる姿をもっと見たい。
「……上、外すぞ、良いな？」
頭をくしゃくしゃと撫でながら聞くと。
「……はい。……あむっ、ちゅりゅっ……」
蕩けた瞳で短く答えて、また俺の首筋に舌を這わせた。
続く。

（２４）

再び一色の腰の上に跨って、もぞもぞと動いてブラのホックに手を掛ける。

「……っと……こうか……？」

女性の下着を脱がすっていう経験なんて、無いんですよ。

なにこれ、超どきどきする。

思った以上の苦戦をしてしまう。

多少手こずるのならまだしも、下手をすればこの場の空気が冷めるくらいに時間を掛けかねない。

慎重に、けれど迅速に。

慣れたら一瞬で外せそうなものだけれど、それでも数秒がかりで、何とか――外した。

「……」

まるで宝箱を開けるかのようなわくわく感を抱きながら、拘束を解かれたブラを左右に広げる。

「……」

……。

――何の声も、出なかった。

可愛らしいピンク色の突起が２つ、ぴんと張り詰めて立っていて、これまで一色が感じていた興奮と快楽を如実に主張していた。

一色は……あ、両手で顔を覆ってる。指もぴったりと閉じて、ちっちゃな声で「はわわわ……」と呻いている。なんだこいつ、超可愛いな。

……今度は、きちんと。

「一色」

「はい……なんでしょう……」

口も手で覆われている為、なんか「もーいーかーい」って言ってる時みたいな声の籠り方になっている。なんだかなあ。

この言葉は恥ずかしいけれど、きちんと目を見て言いたい。

だから。

「……ひゃっ……？」
一色の手を掴んで、顔を露にする。
「すごく綺麗だ」
躊躇していたらどんどん言いづらくなるので、一色と目が合った瞬間に告げた。心臓が止まりそう。
さあ、どう反応する……と思ったら。
「はわわわわわ……ちょ、ちょっと、かっこ良すぎて、何言ってるのかわかんないです……だ、だから、その、機会を改めてまた言って欲しいって言うか、なんかもう毎日言ってもらわないと、ちゃんと理解出来ないっていうか、なんていうか、その……ありがとう、ございます……」
「……お、おう……」
……。
なんか、すげえ恥ずかしいことを言ってきた。
いつものまくし立てっぽいことを言おうとしたんだろうけれど、恥ずかしさでたどたどしくなってるからか、尺がいつもの倍くらいになってる。何この長台詞？　聞いてるこっちが恥ずかしさで死にそうなんですけど。
まったく、可愛いやつめ。心の中で言う分には余裕です。
「それじゃあ……」
行くぞ、と囁いて、手を伸ばす。
指の先、指の腹、手の平とゆっくり一色の胸に当てていくと、ふにゅんっと手が沈み込んで、熱を帯びて汗ばんだ肌に指が吸い付く。
手の平全体で感じる一色の乳房の感触は、あまりにも心地良いものだった。
「あふあああああ……っ」
一色が腕を俺の腰に添えて、うっとりとした顔で、可愛らしく、切なそうに喘ぐ。
脇の下辺りから乳房を持ち上げるように触ると、
「ふああっ？　あふっ、ふっ、ふうっ……」
一層甘い声が漏れる。

時折一色の唇に吸い付きながら、乳房の外周から優しく責める。
「あっ、ふあっ、ひんっ、せんぱい……きもちいい……これ、すご、いいい……ふっ、ふっ、ふあああんっ!?」
持ち上げるように揉んで、すりすりと表面を撫で、時折きゅっとほんの少し強く力を込めると、一色は軒並み期待以上の反応をしてくれる。
一色の手は俺の腰周りに添えられて、撫でる場所が段々と中心部に近付いている。
……ん、中心部？
……まあ良いか、後で考えよう。
「あっ、ふうっ、せ、せんぱい……やらあ……っ、じんじんする……切ないよお……触ってくれなきゃやだあ……っ」
一色が涙目で、脳髄を痺れさせる甘い声でおねだりをしてきた。ああもうなんだよ、なんなんだよ！　全部録音録画したい。
はっきりとは言わないが、どこへの刺激を求めているのかはすぐに分かった。
まだ、突起には一切触れていないからだ。
今や、ブラを取った時の状態に輪をかけてぴんと張り詰めていて、じっと見つめると、よっぽど触ってほしいのか、微かに震えていた。
だけど。
「ん？　一色、悪い、どこを触ってほしいかきちんと言ってくれないと、俺にはわかんねえわ」
意地悪全開（恐らく気持ち悪いにやけ顔）で言ってやると、
「ううう……やあ……っ、恥ずかしいのお……っ」
手で顔を覆って、いやいやと首を振る。
うーん。
ちょっと、可愛すぎて死にそう。
そんな一色の手を除けて、軽く口付けをすると、ぽわんとした表情にきょとんとした目の色が加わった。うん、可愛い。
そして、耳元に口を近付けて……耳の中をちろりと舐める。
「ふあああっ……ああっ、やあ……っ」

「……」
この後の台詞を言う前段階のちょっとしたいたずらのつもりだったんだけど。
「ちゅりゅっ、ぴちゃっ、ぴちゃぴちゃぴちゃ、ちゅぴっ、ちゅっ、ぴちゃ……」
――ついつい、責め過ぎてしまう。
「あふあっ！　やああ……っ、耳、ひびいて、あたま、おかひくなるう……っ、やあっ、やらっ、ひいん、ひいいいん……」
俺の下で身体をくねらせながら、一色がぶるぶる震える。
耳を責めるついでに、突起を触らないようにしながら胸を触ると、
「ひあああっ!?　そこ、や、同時なんて、あうう、あううう……らめええ……おかひくなるからあ……っ」
「……っ」
こんな、エロマンガの典型みたいな台詞も。
目の前で、こんなに可愛くて、こんなに誰にも渡したくない女の子が囁くと。
破壊力が、段違いだった。
耳から口を離して、それから手も胸から離す。
「ふやあ……っ」
一色は脱力して、手をこてっとベッドに置いた。
「一色……」
「あ……っ？　せんぱい……んっ」
おでこをこつんと当てて、互いの唇をはむはむと咥え合う、優しいキスをする。
「はむっ、あむっ、ちゅっ、ちゅぴっ、せんぱい……せんぱい……」
一色の声が、頭の中を幾度と無く反響する。
「ぷはっ……一色」
唇を離して、おでこをくっつけて、互いの目が限界まで寄った状態で、声音を少し強くする。
「ひっ……は、はい……」
それだけの変化で、一色は肩を縮こまらせる。

「さっきも言っただろ？　……自分で、どこを責めてほしいか、きちんと言うんだ。どこを、どんな風に、どれくらい責めてほしいかを。手で顔を隠すのはなしだぞ」
「うあ……」
目も顔も逸らすことが出来ずに、一色が躊躇する声を出す。
「ほら」
そうとだけ言って促すと、一色は顔を真っ赤にしながら、口を開いた。
「……わ、わたし、の、ち、ちく、ちくび……を、触ってほしいです」
「触るだけか？」
「ち、ちがいます……触ってほしいし、つ、つまんでほしい、し……、きゅって強く引っ張ってほしいし、いっぱい、舐めてほしいです……」
「どれくらいだ？　１０秒か？　１分か？」
「……っ。……ク、まで……」
「ん？」
「あう……いっ、……ク、ま、で……」
「聞こえないぞ」
「ひんっ……い、いっぱい、イクまで、してください、何回もイクまで……めちゃくちゃに……してください……」
「……そうか」
興奮の余り、声が裏返りそうになる。
じゃあ、と言って、顔を離して再び腰に跨る。
「……お望みの通り、めちゃくちゃにしてやるからな」
胸と胸の間を爪でつつっとなぞりながら囁くと、
「ひぃん……っ、は、はい、お願いします……」
泣きそうな顔で、一色がひどく色っぽい笑みを浮かべた。
続く。

（２５）

「あふあああっ！」

一色の胸の突起を軽く摘まむと、彼女はその瞬間に目の色を変えて天井を向いた。

……さて、たっぷりとイジメてやろう。

くりくりと指の腹で撫で回しすと、

「あふっ、ひんっ、ひああっ、それ、あう、すごいで、す……ああああ……ああああ……」

両手を握り込んで口元に添えて、子どもが怯えているような声を上げた。

子どもっぽい仕草と、大人びた色香の矛盾とギャップ。

それがまた、情欲を掻き立てる。

――きゅっ、と。

突起を強めに摘まみ、そのまま軽くしごき上げると。

「ひあああああっ!? なにこれなにこれなにこれぇぇぇ……お、おかひ、おかひくなるううう、おかひくなるよおおお……」

手を頬に当てて、うっとりとした顔で天井を見つめ、全身をぶるぶると震わせる。

「……どれ、そろそろこっちでも……」

言って、口を近付ける。

「ふあっ……？」

一色が蕩けた表情で俺を見つめるが、何をされそうになっているのか、まるで分かっていないようだ。ううむ、可愛いなあ……。

「……あむっ」

突起を、上唇と下唇で軽く咥えた、そのとき。

「～～～～～～～～っ！」

「むぐっ!?」

声にならない声を上げて、一色が俺の頭を抱え込んで、俺の髪に自分の顔をうずめて、足を俺の腰に絡ませた。

俺を、一色自らが全身を使ってぎちぎちに拘束した形になる。

……え、何事？
軽く咥えただけのはずだったが、一色のこの行動により、俺は唇の位置はそのまま、つまり突起を咥え込んだままで、顔を思い切り彼女の胸にうずめる形になった。なんか赤ちゃんみたいで死ぬほど恥ずかしいんですけど……。
一色に何か言おうにも、ぱふぱふ状態では何も出来ない。うん、だからこれは時間の経過による解決を待つしかないな、しょうがない、しょうがない！
「……」
「ふーっ、ふーっ、ふーっ……」
一色さん、猫みたいな声を出して、息を荒げてらっしゃる。俺の身体をホールドした時の動きもめちゃくちゃ速かったし、よっぽど反射的に、自分の体力の事を考える余裕も無いままにこの体勢になったんだな……。
しかし、このままだと流石に呼吸もやりづらいし、ちょっと動く事にする。
唯一動かせる、舌をくいっと。
――ちろっ。
「ひぐうっ！」
びくっという身体の動きと共に、再び俺の頭がロックされた。近い近い近いっていうかさっきからもう０距離！　０距離！　柔らかい！　もっと！　間違えた！　やばいやばいやばい！
「うー……うー……うー……」
一色は体勢で言えばまるで母親のようであるが、心の余裕はまるで無いようで、俺の髪に顔をうずめながらいやいやと首を振る様子は、まるでだだをこねる子供のようだった。
……一色は、あれだ。
『唇』で及ぶ行為に、とてつもなく弱く、そして好きなようだ。
キスをするのも、キスをされるのも、――他の場所にキスをされるのも。
どの行為に及んでも、彼女自身が怯えてしまうくらいに、心も身体

も、彼女の中の『女』も昂ぶる。
――ふと。
……この子が俺の他の場所に口を付けたら……それこそ、俺のモノに口を付けたら、どうなるのだろうか。
考えただけで、ぞくぞくした。
まあそれは、追々やっていくとしよう。
まずは――
「ちゅるっ」
「ひんっ!?」
「ちゅるっ、ちゅっ」
「ひぐっ、うううっ……っ」
「ちゅぷっ、ちゅぴっ、ちゅぴぴっ、じゅっ、じゅるっ、じゅるるる……」
「うあああああ……っ！」
一色に強く強く抱きしめられたまま、舌での愛撫を再開した。
俺が舐める前から既にびんびんに張り詰めていた一色の突起は、程好い長さと弾力を湛えていて、しかも舐める度にあまりに可愛い喘ぎ声が聞こえてくる。
……やばい、これ、ハマりそう。
舌を湿らせ、意図的にいやらしく水音を立てながら、舌先を固めてつつき、突起全体を舐め上げ、平手打ちの様に左右に動かしてねぶり、たっぷりと吸い上げる。
「ちゅぴっ、じゅるっ、ちゅっ、ちゅっ、ちゅりゅりゅっ、じゅるっ、ぴちゃ、ぴちゃぴちゃぴちゃ、れるっ、れるれる、あむっ、あむっ、あむっ、じゅるるる……」
「あおおおお……やあっ、これ、やらあっ、おかひくなる、おかひくなる、おかひくなる、おかひくなる、……気持ひ、良いよぉ……っ」
あまりの快感が故か、俺を抱きしめる力は強めようとしているにも関わらず、実際には強まるどころか弱まる一方だ。
もっとこの声が聞きたい――そう思い、
「……ぷはっ。……一色」

突起から唇を離し、僅かに空間を作って、意識朦朧とした一色に話しかける。
「ふあっ、あふっ、……ふえっ？　なんれすか？」
「……っ」
胸元の俺を見つめながら、とろんとした目で小首を傾げる。俺を何回殺したら気が済むんだい、君は……。
「……両方同時に行くぞ」
言って、自分の手を一色の腕の内側に滑り込ませ、彼女の胸を直接触れる状態にする。
「ふえ……？　……あ、や、やあああああ!?」
双丘を寄せて、真ん中に揃った2つの突起をぱっくりと咥え込むと、一色が悲鳴に似た喘ぎ声を上げた。
×　×　×
「じゅっ、じゅるるっ、ちゅぴっ、ちゅっ、じゅるるっ、ちゅぴちゅぴちゅぴちゅぴ……」
「あぐうっ……やらやらやら、こんなのむり、だめ、もう……いひああああ……あうっ、ひっく、ああああ……」
涙声の喘ぎ声が絶え間なく一色の部屋に染み渡る。
俺を拘束していたはずの腕は、いつの間にか俺の頭をすりすりと愛おしそうに撫でていた。
「……」
ちらりと目線を上にやって、一色の様子を見る。
「ううっ、ううううっ、ひっく、あうううう……」
ちろり、と突起を舐めると。
「ひうううっ!?　ひいっ、やああっ、も、もう、もう……っ！」
ぶるぶると震えて、限界が近いことを訴える。。
――そろそろか。
「……」
おもむろに、一色の腕を除けて、腰を上げる。
「ふあ……？」
それを抵抗することなく受け入れ、一色の手がこてんとベッドに投

げ出される。
「……約束通り、めちゃくちゃにしてやるよ……」
「え――」
一色の反応を待つことなく、身体を少し横にずらして、口は彼女の突起の1つを、左手で彼女のもう一方の突起を、そして右手を――彼女の、ショーツに宛がう。
そして。
――ぐちゅり、と。
それら3点を同時に責めると。
「うあああああああああああっ!? そ、そんな、もう、ほんとむり、むり、やらあっ、だめ、だめ、だめ……!」
涙声で抵抗する一色に、
「ぷはっ。……『いっぱいイクまでめちゃくちゃにしてください』って言ったろ?」
意地悪く笑う。
「うう、そうです、けどお……」
涙を目に浮かべてふるふると小動物のように震える一色を見て、改めて、何かのスイッチがかちっと入る音が、頭の中で極めて明瞭に響いた。
中指と薬指で、既にぐしょぐしょになっているショーツを弄る。
ぐっちゅ、ぐっちゅ、ぐちゅちゅっ……。
「あがっ、うぐっ、ひぎっ、あああっ、ああああ……」
一色の可愛らしい喘ぎ声に、獣じみた声が混じる。
ひどく卑猥な水音と共に、女くさい匂いがベッドの上により一層濃厚に立ち込めた。
「ほら、お前の身体もイキたがってるぞ? ほら、ほら、ほら、ほら。イケ、イケ、イケ、イケっ……!」
両手で一色の身体を嬲り続けながら、耳元で囁くと、左手で突起をぎゅむっと強く上に引っ張り上げる。そしてそれと同時に、もう片方の突起に再び吸い付いた。
「うあああああっ! あっく、ひぐうっ、やっ、も、もう、せんぱい、イ

ク、イっちゃいます、やっ、くる、くる、くる、くる、くる、……〜〜〜〜〜〜っ！」
次の瞬間。
ほんの一瞬、まるで嵐の前の静けさのように。
「……あっ……」
一色が呆けた顔になったかと思うと。
「……ああああああああああ〜〜〜〜〜〜〜〜っ！」
身体を大きく反らせて、びくびくびくびくっと戦慄いたかと思うと、ショーツから大量の温かい液体が溢れ出た。
× × ×
「……がんばったな、えらいぞ」
絶頂に達して、放心状態になっている一色を、左手でよしよしと撫でる。
「あうう……気持ち良かったよおお……怖かったよおお……」
仰向けのまま、横向きで寝ている俺に胸元にすりよって、顔をうずめてくる。
うーん。
今までの人生で全く経験したことが無いレベルのどきどきを、ここ数日、特にここに来てからがんがん感じてる気がする。思考回路がもうぱっぱらぱー。ぱっぱらぱー。
……そんな状態ではあるけれど、今後の流れの確認を行うことにする。
「……なあ、『いっぱい』イカセてほしいんだよな？」
ぽそりと囁くと、一色の肩がぴくりと揺れた。なんかすごく気まずそうな顔をしてる。
「あ……や〜〜……、その、あんなに激しく……い、イっちゃったので……その、ちょっと、2回目はもう少し後でも良いかな〜、なんて……」
気まずそうに目を泳がせた後、上目遣いでちらりと俺を見やる。
「……そ、そういう方向で、どうでしょうか？」
「……」

なんでプロジェクトの方針を上司に相談してるみたいな言い方になってんだ。しかも自信０。
まあ、実際、一色の言っていることも分かる。
あれだけ焦らしての絶頂ということで、相当激しく、かなり体力を持って行かれた筈だ。
だから、昼寝前に何度となく迎えていた絶頂と同じ括りという認識を持つのは危ないかなとさえ思っていたから、これで良しとするか。
……。
……昼寝した意味……。
まあ、うん。
良しとするか。一色がふらつくくらい疲れてるんなら、俺が代わって何か簡単な料理（インスタントラーメンにそれっぽく具材を加えたやつ）を作ればいいだろう。
それじゃあ起き上がって……と思っていたら。
「……」
……ん？
一色が、何やら無言で、俺の腰周りをさすっている。
その手が……段々中心部に……って、あれ？　同じ光景をさっきも見たような……。
「……ふっ、ふっ、……ふっ……」
「……っ」
気が付くと、一色の息遣いがさっきよりも荒い。
俺の股間は、言うまでもなくぱんぱんになっていて。
一色はそんな俺のモノに、明らかに興味を示していて。
――だけど、夜までは、最後まで、しない。
……と、いうことは……。
「せん……ぱい……」
一色の声が、思考を蕩けさせる。
「一色……」
――どくん、と。
心臓が、跳ねた。

続く。

（２６）

これからしてもらうであろう行為を想像すると、既に頭がおかしくなりそうだ。

「一色……こっち、来てくれるか？」

言って仰向けに寝転がり、自分の股座を指差す。

「あ……は、はい……」

一色の瞳には、一瞬戸惑いと緊張が宿り、次の瞬間に色情へとすり替わった。

「じゃあ……」

熱っぽい声でぽそりと呟くと、俺の股座に移動する。

一色の移動に合わせて足を開くと、ぺたりと女の子座りになり、そこから屈んで俺の股間に顔を寄せた。一色の胸を見ると、胸の突起はまだまだはっきりと彼女自身の興奮の具合を主張している。

「……せん、ぱい……せんぱい、せんぱい……」

焼け付くような興奮を催す声が耳朶を打つ。

俺の腰周りをさする一色の手が、徐々に下腹部に近付いて行く。

幾度と無く上目遣いで俺を見つめてくるため、ますます股間が張り詰める。

「……っ」

互いの、高鳴る心臓の音が聞こえそうな程の緊張感・期待感。

「……」

一色はうっとりとした表情で俺の身体に視線を這わせ、やがて手がさする場所と視線を一致させた。

「……開け、ますね？」

「……おう」

短く答えると、ちー……と金属が擦れる音と共に、チャックが下ろされた。

ジーンズの中から、勃起の為に生地が伸びたボクサーパンツが顔を出す。あまりにがちがちに勃起している為、チャックの内側から完全に露出している。

「ふあ……」
一色は目を見開いて、頬に朱を注ぐ。
「す……ごい……はわ、はわわわ……」
可愛らしい慌て方を見せながら、一色が細い指を竿とカリに絡ませる。
「う……くお……」
しゅるるる、しゅる、しゅるるる……。
たどたどしい手つきながらも、興味津々で愛情深く触ってくれるため、生地1枚越しのこそばゆい快感がさざ波のごとくゆったりと押し寄せる。
「せんぱいの……ふあ……あ、先っぽ濡れてますね」
いたずらっぽい笑みを浮かべ、亀頭に指の腹をぴとぴととくっつけては離して、俺の性的高揚が糸を引くのを楽しんでいる。
……ていうか。
「恥ずかしい事言うなよ……」
なんか、手で顔を覆いたくなった。足を開いた今の体勢でそんな事やったらお嫁に行けないから絶対やらないけど。お嫁に行く気なのかよ。
一色が感嘆の声を漏らしながら肉棒をしばらく弄って（おかげで先走りが凄い事になっている）、再び彼女が俺の目をじっと見つめた。
「……じゃ、……中身、出しますね……？」
息混じりの熱の籠った声に、呼吸さえ忘れる程の昂揚が心臓と下腹部を貫く。
「……ああ、よろしく」
短く答えると、一色がにこりと笑った。
× × ×
一色がチャックの中に手を滑り込ませ、パンツの上端に指を引っかける。
「じゃあ……行きます」
すーはーと呼吸を整えて、一色が合図をする。竿の部分がチャックの内側からはみ出ているため、パンツを下ろすというよりは、一色の

側へ引っ張るような形になる。
「んしょ……」
可愛らしい掛け声（本当に可愛い。まめに言ってほしいまである）と共に、一色の手がぐっとパンツを引く。
――ぶるん、と。
「……ふわっ？」
凶悪なまでに勃起した肉棒が、一色の顔の目の前に晒された。
「うわ、うわ、うわ、うわ、うわわわわ……!?」
一色の反応が、さっきよりも明らかに大きい。
実際、中々異様なものだろう。
見た目もそうだし、触感もそうだし、あとは実際問題として……匂いが、うん。
昨日の夜はめちゃくちゃに気合を入れて身体を洗っていたのだけれど（他意はない。うん、ごめん、うそ。超ある。他意、超ある）、それでも今日これまで2人で過ごした時間が濃密すぎて、冬とは言え結構な汗をかいてしまっている。
なので、どう思われるかなと心配していたのだけれど。
「きゃー！　きゃー！　きゃー！」
「……」
……。
一回思い切り見たのに、その後両手で顔を覆って、でも指の隙間から目を覗かせてきゃーきゃー言ってる……。
……この子、何してますのん？
「あー……その、なんだ、大丈夫か？　その……匂いとか」
言うと、一色の動きがぴたりと止まる。
そして、無言で鼻を近づけて、裏筋の匂いをすんすんと嗅いだ。これ、結果によっては立ち直れなそうだけど……。
一色はふむーと可愛らしく首を傾げて斜め上を向いたかと思うと、真面目な顔でこちらに向き直った。そして、確認のためかもう一度匂いを嗅ぐ。やっべ、超恥ずかしい……。
「んー……ふわあ、濃いですね……。ん、別にいやじゃないですよ。

……ていうかちょっとくせになるかも」
「え」
え？
「……あ」
しまった、という顔をして、一色が目を背ける。
しかし俺としては、なんかすごいおいしい場面がやってきたような気がしてならない。何を言うといい、何を言うと良い？　何を言うのがベスト!?　教えて、ギャルゲーの選択肢たち（経験談）！
――回答の選択、完了。
「……じゃあ、触りながら、たくさん匂い嗅いでくれよ」
「え……」
言うと、一色が驚きの目を向けた。
その瞳は微かに揺れている。
「……先輩、自分が何言ってるか分かってます？」
避難するような言葉に全くそぐわない、期待に満ち満ちた声音と、嗜虐心をそそる色にまみれた目。
「……ああ、分かってるぞ。……ほら」
言って、肉棒をずいと突き出すと、
「……はい」
抵抗することなく、一色が頷いた。
その顔は、既に発情した雌のそれになっていた。
×　×　×
「じゃあ……」
一色の指先が、肉棒にそろりと伸びる。
さわ――と。
指の腹が亀頭と竿に触れると、
「うあ……」
予期せぬ快感に、つい情けない声を漏らしてしまった。
自分で触るのと、こうも違うのかと驚愕する。
一色は俺の様子を目を細めて見つめて、やがて手で肉棒を引き寄せて、鼻の目の前に近付けた。

「すんすん……ふわ、これ、本当にすご……くん、くん、あう……や、こんなの続けたら、すん、あう……すんすん、すん……すん……はっ、はっ、はっ、……すん、すん、すん……」
「……っ」
犬！　この子、犬！
肉棒の角度や自分の首の角度を変えて、裏筋、亀頭、カリ、玉等の匂いを万遍なく嗅ぎまわる一色。
その様子は、まるで目の前にある食べ物が、本当に食べて大丈夫か匂いを嗅いで判断する動物のようだ。
――匂いを嗅いで。
――食べて大丈夫か判断する。
――動物の、ようだ。
「あう……すん、すん、先輩、くん、これ、くんくん、こんなの続けたら、すーはー、わたし、おかしくなっちゃいます……」
一色はそんなことを言いながらも、朦朧とした目つきでそれはそれは楽しそうに、夢中になって匂いを嗅いでいる。ちょっとエロすぎて何言ってるのかわかんないです、僕。
「ああ、そうか。じゃあもっと嗅いでいいぞ」
「ふあ……!?」
一色の頭を掴んで、肉棒を更に前に突き出す。
体勢としてはほとんど変わらないが、さっきよりも更に能動的に匂いを嗅がせる形になる。
「あ、うあ……」
一色が、なんともそそる戸惑いの声を漏らす。
……ここは、もっと責めてみてもいいか――？
そう思い、
「それとも……」
「ひゃんっ!?」
肉棒に手を添えて、一色の顔に正面からぺちんと肉棒の裏筋を当てる。
「……咥えたいか？」

ぺちぺちと一色の柔らかな頬に竿を当てて、頬にぐりぐりと亀頭を押し付けながら、更なる行為を求める。
「……あ、うあ……」
一色は、泣きそうな顔で笑った。
――ああ、この子はどうして、こんなにも俺の嗜虐心をそそってくれるんだろう――
「きゃうん……っ!?」
きちんと返事をするまで、一色の乳房を弄ぶ。
胸全体を優しく揉み、乳輪を爪先でねちっこくなぞって、突起を摘まむ。
「あふあっ!? んっく、ひん、ひぃん……っ!」
俺の肉棒を握って頬ずりをしながら、一色が俺の耳責めに必死で堪える。
「ほら、一色。どうしたいか、ちゃんと言葉にしないと。お前はどうしたいんだ?」
意地悪く追い打ちを掛けると、一色がうーと泣きそうな声で唸る。
「せんぱい……うー、うー、うううう……せんぱい……」
切なそうに俺を呼び、愛おしそうに肉棒をさすり、そして、
「……うあ……?」
――劣情を煽るように、亀頭に息を吹きかけた。
「せんぱい……言い方、それでいいんですか?」
「……え?」
なに、え、どういうこと……?
俺の戸惑う顔を見て、一色がぷくっと頬を膨らませる。くっそ、可愛いなもう……。
「もう……だからぁ、『咥えたいか?』なんて言い方でいいんですか?
……そんな、優しい言い方で……いいんですか? ……本当に、いいんですか?」
「……っ」
俺を見つめる瞳が、極めて能動的に嗜虐心を煽ってくる。
「……一色……っ!」

――もっと、この子を、めちゃくちゃに――

そう思って、一色の頭を強く掴んだ。

続く。

（２７）

「一色……咥えるんだ」

一色の顔を己の肉棒の前に引き寄せて、先程よりも強い口調で言う。

けれど、一色は俺の言葉に従うことなく、それでいて物欲しげに肉棒を愛おしそうにさする。

「……だめ、もっと……」

ぽそりと呟いた筈の言葉が、やけにはっきりと頭に響く。

……もっと、って……？

俺が戸惑っている間も、一色は肉棒をさすり続け、その目から放たれる視線はひどく熱っぽくてねっとりとした質感を持っている。

「……もっと」

同じ言葉を呟く一色に。

や、だから、もっとって何だよ……。説明不足にも程がある。

……んん？

……あ。

一色が望むことを、やっと理解した。

理解したはしたけれど……こいつ、どれだけ……。

そんな風に、戸惑いながらも。

「ひゃっ……？」

一色の顔を更に引き寄せて、肉棒を柔らかな頬にこすり付ける。

そして、

「一色……」

先程よりも声を一段低くして、威圧的な声音で囁く。

「は、い……」

一色は、俺の言わんとしていることが分かったのか、震えながらも微かに笑みを浮かべて返事をした。

「……咥えろ」

「……っ！」

俺の言葉に反応して、一色が嬉しそうに目を細める。

きっと、今の言葉が一色の求めていた言葉だったんだろう。
「わ、わかり――」
「ただし」
「え……」
だけれど。
俺はまだ、言葉を止めない。
一色の髪をゆったりと撫でて、あごを手でくいと上げる。
「……ちゃんと、今からお前が、何を、どんな風に咥えるのかも口に出して言うんだ。咥えるのはそれからだ」
命令すると、一色が目をむいた。
「……っ。ひ、ひう……あ、あうう……せ、せんぱい、わたし、何もそこまで……」
「言うんだ」
「ひぃんっ！　ひ、ひっく、あうう……わかり、まし、た……」
涙目で命令に従う一色を目の当たりにして、ひどく心がざわついた。

× × ×

「わ、わたしは……今から、そ、その、あう……せんぱいの……モノ、を」
「モノってなんだ？　そんなぼかしちゃ何のことを言ってるか分からないぞ」
「あうう……せんぱいの意地悪……っ」
一色が、耳まで真っ赤にしながら俯く。
うーん、やばい。
超楽しい。
一色はふるふる震えていて、かわいそうとは思うが、それ以上に、その何十倍もの程度で、この子が可愛い。可愛くてしょうがない。
大体、一色が煽らなきゃ俺もここまで恥ずかしい事を要求することはなかったんだしな、うん。因果応報ってやつだろう。多分言葉の使い方のピントがずれてる気がするけど。
「ほら、ちゃんとさすりながら、俺の目を見て言うんだ」

優しく頭を撫でながらも、決してこの場から逃さない。
一色の小ぶりな唇が震え、やがてゆっくりと口を開く。
「あうう……わ、わたしは、今から、せ、せんぱい、の……お、おち、おち、おちん……ちん、を舐めたいと、お、思います」
ぞわり、と。
背骨に沿って、得体の知れない恍惚感が下から上へと駆け抜けて、脳を直撃した。
「よーし、よく言えたな。……だけど、それだけか？」
「え……？」
「舐めるだけなのか？　アイスを舐めるみたいに、単調に舐めるだけなのか？」
更に追い込むと、一色が目を潤ませる。
「あ、や、うう……な、舐めるだけじゃ、ないです……」
「じゃあ他には？　全部言えよ？　きちんと言わないと……」
言って、一色の両胸の突起を強く摘まむ。
「ひあああああっ!?　ひうっ、やあっ、いじめらいれえ……」
俺の足の付け根に腕を添えて、四つん這いになってぶるぶると快感に震える。
「呂律も回らないくらいに悦んどいて何言ってんだ。ほら、お前がやりたいことを全部言うんだ」
突起をくりくりと指で弄びながら促すと、一色は観念したのか、喘ぎながら言葉を紡いだ。
「あ、あう、せ、せんぱいの、おちんちん……に、き、キス、して、舐めて、啜って、吸い上げて、舌先でつついて、先っぽをいっぱいしゃぶって、匂いをいっぱい嗅いで、喉奥まで目一杯飲み込んで……せんぱいに、いっぱい、気持ち良くなって、もらいたいです……っ」
「……う……お……」
予想の斜め上を行くいやらしい宣言に、感嘆の息が漏れた。ちょっとエロすぎて、次なるいじめの言葉が浮かばない……！
――と。
「せ、せんぱい、これ、で、いいですか……？　もう、舐めて、いいで

すか……お願いします、はやく……」
泣きそうな程に潤んだ瞳で、肉棒に頬ずりをしながら、囁きかけてくる。
「……っ」
あまりの状況に、言葉を失う。
俺の様子を見て、一色は焦れったそうにそわそわと目線を俺の目と肉棒の間を往復して、
「先輩……」
舌を垂らして甘ったるい唾液を零しながら、今にも亀頭を舐めそうな程に顔を近付ける。
――ああ、もう。
「……わかった。ほら、咥えろ」
言って、耳を軽くくすぐると、
「ふあ……はい……ありがとう、ございます……」
「……っ」
あろうことかお礼を言って、一色が口をくぱっと開ける。
むわっと熱い吐息が亀頭にかかって、天国へ誘われる確かな予感がした。

× × ×

「せんぱい、の、おちん、ちん……」
裏筋に両手の親指を揃えて添えると、一色の口からピンク色の舌がねろりと伸びた。
――そして。
「……ちゅっ」
「〜〜〜〜……!?」
亀頭の先、尿道口に口付けをされた瞬間、背筋を電流が貫いた。
「あ、え……?」
未知の感覚に、昂揚と共に激しく不安を覚える。
え、マジで？　こんなに……？
……これ、大丈夫なのか、俺……？
一色はというと、キスをしたままうっとりと目を細めている。

ちゅぴっという音と共に口を離すと、
「あう……すごい、濃い味……」
竿をにぎにぎと心地良く揉みながら、舌先でつんつんと尿道口をつつく。
すると、ぷくっと先走りの汁が滲み出てきた。
一色はきょとんとした顔でそれを見ると、
「あは……なんか、おいしそ……」
ぽそっと呟くと、再び亀頭に吸い付いた。
「ちゅっ、ちゅぴっ、ちゅるっ、ちゅるるる……ずずずず……はぷっ、せんぱい、今の、もっと出してくださいよぉ……ちゅぴっ、ぴちゃ、ちゅりゅ、ちゅっ、ちゅっ、……あ？　……あはっ、また出てきた……んっ、ちゅるるる、ずずずず……」
「～～～～!?　～～～～！　～～～～～～～～！」
なんだ。
なんだ、これ。
俺、まだ、先っぽしか舐められてないんだぞ。
なんで、なんでこんな――
「……もっと……あむっ」
「あがっ……!?」
一色が物欲しげに俺の亀頭を見つめたかと思うと、ぱんぱんに膨れ上がった真っ赤な亀頭をかぽっと口に含んだ。
「かぽっ、ぐじゅっ、じゅぽっ、がぽ、じゅるる、ちゅぴっ、ちゅるる……じゅるるる……ごく、ごく、ごく……じゅぽ、じゅぐじゅぐ、ごちゅ、じゅり、ぐっぷ、ぐっぷ、ちゅぷ、ぢゅるるる……」
「あえっ、かはっ、あ、ああ、あああああ……」
視界が蕩けて、自分と一色の身体以外の景色が霞む。
頭がおかしくなる程に好き放題に味わわれている肉棒は、その茎に血管をはっきりと浮かび上がらせている。
一色はおいしそうに先走りの汁を舐め、吸い取り、啜り、飲み込む。
茎には一色の唾液がだらだらと垂れ落ちて、玉の方にまで伝ってきた。

「……ぷはっ、せんぱい、気持ち良いですか、気持ち良いですか……？」
一色は口を離すと、竿を手で抑えながら、もう片方の手のひらで亀頭を撫で回す。にちゃにちゃといやらしい音が部屋に染み渡る。
「うぐあ……き、気持ち、良い、気持ち良いから……そんなに、強く、あぐあ……っ！」
爆発寸前の肉棒がひくひくと震えて、顔は情けなく天井を向くばかりだ。
「えへへ……良かった……もっといーっぱい気持ち良くなって、気持ち良くなって、気持ち良くなって……たくさん、ください。いっぱい出してください……ね？」
「……っ」
まるで娼婦のような淫猥な言葉を口にして、にこやかに微笑む一色を見て……ごくり、と息を呑んだ。

続く。

（２８）

「……」

一色が、見ただけで勃起してしまいそうな程の色香を纏って瞬きをすると、長い睫毛の動き一つにさえ目が奪われる。

「せんぱい……」

俺を呼ぶ甘ったるい声音は、病みつきになってしまいそうな程に身体も心もじんと痺れさせる。

「う……っ!?」

一色が、亀頭を撫で回したまま、裏筋に舌を這わせる。

つつーっと心地良い感覚がしたかと思うと、ゆっくり、ゆっくりと幾度となく往復する。

「ちゅるる……んっ、ちゅっ、ちゅっ、ちゅっ、ちゅるっ、ちゅぴっ、ぴちゃぴちゃ……」

舌を這わせた場所に逐一キスをして、丹念に舐め上げるその様子は、見ているだけで絶頂に達してしまいそうだった。

「ここも……」

言うと、今度は玉を口に含んで、ころころと転がす。

「あむっ、はぷっ……ちゅっ、ちゅっ、んんっ、ちゅっ、ちゅっ、ちゅっ、はう……ちゅっ、ちゅっ……」

「……あ～っ、あ～……あ～……っ」

もはや、時間感覚さえ飛んでしまう程の快楽。

想像を遥かに超える丹念で丁寧で卑猥な口淫に、いつしか手をだらりとベッドに下ろして、一色にすっかり身を委ねてしまっていた。

かろうじて時計に目をやると、既に３０分程経過していた。もうこんなに時間が経っていたのか……。

「……ぷはっ、……気持ち、良いですか？　せんぱい、先っぽとか、裏のとことか、玉のとことか……気持ち良いですか？」

唾液でてらてらと光る亀頭を美味しそうに舐めながら、とろりとした視線を向けて問うてくる。

一色の頭によろよろと手を差し出して、くしゃりと髪を撫でると、

汗のためかしっとりとしていて、女の匂いがふわりと香った。
「……ああ、気持ち、良いぞ……すげえ、気持ち良い。……そろそろ、出したい」
本当なら、もう3回は射精していただろう。
けれど一色は敢えてなのか、過度な刺激を与えないように、ずっと緩やかな口淫を続けていた。
そのため、俺はずっと先走りの汁を溢れさせながら、極楽の如き悦楽に浸っていた。
このまま何時間でも浸っていたいとも思うけれど。
……それでも、もう、射精したい。
この子の口の中に、思い切りぶちまけたい。
だから、はっきりと欲望を口にした。
俺の言葉を聞いて、一色はとびきりの微笑みを浮かべる。
「えへへ……わかりました。……わたしの口の中に、いっぱい出してくださいね？」
言葉にしなかった欲求まで拾い上げてくれると、
「――がぽっ」
再び、肉棒を咥え込んだ。
俺の腰に腕を回して、自ら喉奥まで咥え込む。
「んぐ……っ、ぐじゅ、じゅっ、じゅっぽ、じゅっぽ、じゅるる、ぐっぽ、ぐっぽ、がぽ、ぐぷぷ……」
「うあああ……っ！」
頬をすぼめ、信じられない程卑猥な表情を浮かべながら、一際大きな音を立ててしゃぶる。
こんな行為に及んでいるのに、細めた目はずっと俺に「気持ち良いですか？」と問うてくる。
その健気さと、行為の淫猥さとのギャップに、気が狂いそうになる。
「い、一色、一色、一色……っ」
「んふぅ……っ？」
たまらず、名前を呼びながら、彼女の頭を押さえる。
押さえるとは言っても、手に力は入らず、添える程度しか出来ない。

もう、限界だ……。
懇願の目で一色を見つめると、目でにっこりと微笑んだ。
「……んっ。せんぱい……いっぱい出してください……いっぱい飲ませてください……」
言うと、肉棒をぐぽっと咥え込み、ゆっくりと前後し始めた。
「ぐっぽ、がっぽ、じゅく、じゅるるるる、ずぞぞ、ぐちゅ、ちゅる、ちゅるる、じゅるる、ずぞぞぞぞぞ……」
「〜〜〜〜〜」
まるで、睾丸から無理矢理精液を引きずり出そうとしているかのような、強烈な吸引。
仰向けでいながらも、あまりの快感に腰がかくかくと揺れる。
——ぞくっ、と。
一度寒気が走ると、次の瞬間畳み掛けるように寒気が強烈に走り抜け、ぞぞぞっと下腹部を包み込む。
「一色、もう、出る、出る、出る……っ！」
身体を縮こまらせて言うと、一色の動きが一層激しくなる。
「ぐっちゅ、がっぽ、じゅく、じゅるるる、ずぞぞぞ、ぢゅるる、ぐちゅぐちゅぐちゅ、じゅるるるるる……」
「——あ」
ぶるっ、と震えた、次の瞬間。
「……〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜っ！」
どくっ、どくくっ、どぶっ、ごぶぶっ、どぶりゅっ、びゅるる、びゅるる……。
「んぶっ、ごく、ごく、ごく、んんん……ごくっ、ごくっ、ごくごくっ、ごくっ……」
脈打つごとに、夥しい量の精液をぶちまける。
一色はそれを苦しそうにしながらも、ごくりごくりと余す事無く飲み込んで行く。
やがて、脈動が収まると、一色はしばらく口の中で亀頭をちゅるちゅる啜って残りが無いか確認して、ゆっくりと、名残惜しそうに唇を離した。

「……ぷはっ。ふう……たくさん出ましたね～……」
にこやかに笑うと、良く出来ましたとでも言うかのように亀頭を撫でる。やめて、そんな卑猥な褒め方しないで！　くすぐったいし！
……それにしても、これは……。
一色が満足げに俺の隣に並んで寝る。さり気なく腕を出して見たら、極めて自然にそこに寝転がったので腕枕が成り立った。不意の感動。
一色が「ふは～、先輩の腕枕気持ち良いですね～……やりますね、先輩！」と妙に上から目線で言ってきたので、髪をわしゃわしゃする。「きゃー！」と楽しそうに言って、俺の胸元におでこをこすり付けてきて、何回もされてる筈なのに全く慣れず、嬉しいやら恥ずかしいやら幸せやらでなんかもう死にそう。
「……一色。めっちゃ気持ち良かったわ。なんであんな上手いの？　勉強したことあるのか？」
聞くと、一色の頬がぽっと桜色に染まる。
「……そんなの、見たこと……ちょっとはありますけど……」
あるんだ。
「でも、ほんとちょっとですよ？　後はその、何て言うか……」
急に一色の喋りがもごもごとする。え、なにごと？
「そ、その……先輩の、を見たら……なんかもう、夢中になっちゃって、後はその、勢いに任せてっていうか……あう」
「そ、そうか……」
途中で枕を掴んで顔を覆ってしまったけど、ほぼほぼ全て言っちゃいましたやんか……。俺まで恥ずかしくなった……巻き添え赤面。
しばらく枕に顔をうずめたまま首を振ってあうあう言ってた。超可愛いなこいつ。
――と、不意にその動きがぴたりと止まる。
そして、枕を顔から離すと、
「うん」
「うん？」
突然の切り替えに驚いて、オウム返しをしてしまった。

「先輩、そろそろご飯時ですよ」
「ああ、そうか、もうそんな時間か」
時計を見ると、午後7時を回ったところだった。
……午前も濃かったけど、午後も濃すぎる……。
ていうか、誇張抜きで、今日この子と会ってから身体が触れ合ってる時間の長さがやばい気がする。なにこれ、なにこれ？
思い出して悶絶していると、一色が俺の胸に顔をうずめた。「うへへ～」と若干変な声を出しながらころころしてる。今度は腕を俺の背中に回してきてがっちり固定してるので、この恥ずかしい攻撃から逃げられない……！　まあ、逃げないけどね。
あごを撫でた。
こしょこしょ。
「はう……」
気持ち良さげな声を出して、一色が更に甘えてすりよってくる。
うーん。
死んじゃう。
取り敢えず。
更に撫でる。
こしょこしょ、こしょこしょ。
「はうう……」
わー。
マジで死んでまうー。
と、まあ、おバカなやりとりをしたところで。
「そろそろ起きるか。……俺たち、このベッドの上に5時間くらい居たことになるんだな……」
「うわ……それは引きますよ、先輩」
「いや、お前もだっつの……」
エロエロなやりとりがずっと続いていたので、こんなバカなめお……ミニ漫才も懐かしく感じる。なんでだろう、一ヶ月ぶりくらいに感じるなあ……。
ほへーっとこれまでのいちゃつきを思い出して、また死にそうにな

る。
「ほらほら、先輩、行きますよー」
「おう、……おおっ？」
一色に腕を引っ張られて起きたところで、視界が突然のブラックアウト。別に顎に強烈なフックを貰った訳ではない。フェラからのフックって斬新すぎる。くの一がターゲットとヤった後に殺すパターンの軽いバージョンか。何それ超怖い。
とかいう妄想は置いておいて。
「えへへ……」
実際は、一色の胸に顔が埋まっていた。
……ぺァラダァイス（「楽園」をきちんとした英語の発音風に）。
「あと5分くらいしたら行きましょうねー」
一色が母親のような優しい声で言うと、ゆらゆらと左右に揺れた。赤ん坊を寝かしつけるかのような慈愛に満ちたその動きが、たまらなく幸せな気持ちにしてくれる。
「ふぁい（はい）……」
顔が柔らかい天国に埋もれているので、もごもごと返事をする。
ちょっと、極楽すぎて。
俺だけでなく一色もこの状態を気に入ったのか、この後、どちらも延長希望をし続けて、結局３０分程ゆらゆらしてた。なんなの俺ら、バカすぎるでしょ……。
続く。

（２９）

一色の御胸に抱かれてから３０分ほどゆらゆら。

そろそろ行かないとなーでもまだもうちょっとーと、平日の朝の寝起きみたいな問答をしていると、耳元で柔らかな声がした。

「えへへ……先輩、こうしてると赤ちゃんみたいですねえ……」

「……」

……。

こんにゃろう……。

胸の谷間（ある程度はある）から恨めし気な目を向けると、一色が目を細めて穏やかな表情を浮かべて俺を見つめた。あ、あれれ？　怒るに怒れないぞ……？

ううむ、反応に困るなあ……と思っていたら。

「ほ～れほれ、よしよし～」

「……」

頭をさすさすと撫でられた。

え、なにこの羞恥プレイ……？

一色の声音は明らかに俺をからかう時のそれで、恥ずかしいやら悔しいやらこいつ可愛いなやら色々な感情が入り乱れる。

うん、これは反撃せねば。

汗ばんだ一色の身体から、ほんわりと漂う甘い香りにくらくらしながらも、どうしてやろうかと考えを巡らせる。

思考中。

思考中。

思考――

よし、決めた。

「ひあっ!?」

行動に出た途端、一色が驚きの声を上げた。

胸の突起に吸い付いてみたのである。赤ちゃん扱いされたから、折角だから便乗してみた。

……まあ、外から見た絵面は気にしない、うん。

ちゅぴっ、とわざと音を立てながら突起を舌で転がすと、俺の頭を抱く腕がふるふると震える。
「あ、あん……先輩、だめですよお……？　そろそろ行かない……と……ひんっ、ひうう……っ」
ほんのついさっきまでは穏やかだった一色の声音が、平静を装いながらもみるみる色を帯びていく。
口に含んだ突起を舌先でつつき、もう片方の突起を人差し指と親指できゅっと摘まむ。
びくん、と。
一色の身体が一瞬跳ねて、身体の震えが増した。
「いううう……！　せ、先輩、だめ、だめですって、やんっ、ほ、本当に……ひんっ、あっ、あっ、あっ……」
じっとりと汗ばんで、桜色に染まっていく柔肌に益々昂揚する。やばい、ほんのちょっと反撃したらやめるつもりだったのに、やめるにやめられなくなってる……！
まあ、どうせならもう少し楽しもう。
舌を左右に往復させながら、摘まんだ指に更に力を込めると、
「ひあああああっ!?　だめ、だめだめだめ、だめ、おかしくなっちゃう、……スイッチ、入っちゃうよお……」
「……っ！」
耳元でこんな、男の理性を簡単に焼き切るようなセリフを、とびきり甘い猫撫で声で囁かれるなんて……と、一瞬、それだけで気持ちが昇天してしまいそうだった。
まずい、非常にこれはまずい。
本当に、襲ってしまいそうだ。
双丘に更に顔をうずめて、もう少しだけ、もう少しだけ――と、止まれなくなる予感を抱きながらも行為を進めようとすると。
――こつん、と。
おでこに心地良い硬さのものが当たる。
「……？」
見上げると、一色がおでこを当てていた。互いの睫毛が触れ合う程

の距離にまで迫ると、一色が色めいた目を細めて、ゆっくりと口を開く。
「もうちょっと……待って。……ね？」
可愛く首を傾げて、おでこにちゅっと軽くキスをする。
「～～～～～～～っ！」
わー！　きゃー！　わー！
タメ口は今までは喘ぎ声の中にだけ混じっていて、普段はきっちりと敬語を使う一色なんだけれども（律儀なやつだなあと思う。その分、色っぽい声でタメ口を使われた時の破壊力がいちいちえげつない）……こんな、こんな風に……うおあああ！
尋常でない程興奮すると同時に、はっと目が覚めた。まだ返事をしていない。
「……はい」
何故か敬語で答えてしまったが、
「わかったのならよろしい！　……えへへ……」
「うぐ……」
あの……おでこをこすこすするのやめてもらえませんかね……またなんか、理性がぶっ飛んで同じ流れになりそうで怖いです、はい……。

×　×　×

ようやく起き上がると、一色が下着を着替えたいと言ったため、今は俺はベッドの上に座り、一色が着替える間後ろを見るようにしていた。壁とお喋りするのは慣れてるから平気である。平気っていうか正気じゃねえなそれ。
……うーん。
さっきの「……ね？」が、頭の中を反芻する。
一言どころか、一文字の破壊力。ううむ……恐るべし、一色いろは。
後ろから微かに聞こえる、下着と肌がしゅるしゅるとすれ合う音がものすごく想像をかき立ててくるので、必死で他の考え事を……と思ったのだけれど、結局一色のことを考えていた。ううむ……恥ずかしい。

下着を替えるだけならそんなに時間は掛からないか。でもちゃんと選ぶのならもう少し時間がかかるのかなー……などと考えていると。

――しゅる……ぱさっ。

「……っ」

静かで乾いた、落下音がした。

聞き慣れたようで聞き慣れない、微かなのに強く脳髄に染み込む音。

……今、一色は……。

知らず知らずの内に身体は強張り、こくりと喉を鳴らした。

――と。

「……ん？」

得も言われぬ感覚が突如押し寄せてきて、小さく疑問の声を漏らす。

何か音がした訳ではないし、この空間に居るのは俺と一色だけ。その事実も変わらない。

なのに、この感覚はなんだ？

そう言えば、一色は何をしているのだろう？　てっきり、着替えを取りに行って下着を着けるとばかり……まあ、何も着ないままそんな行動をするというのも変な話だけれど……などと思っていると。

今度は、得体の知れない感覚がもっとはっきりとしてきた。

熱を持った何かが近付いてくる。

一色はどこだ？　なんで何も音を立てない？　もしかして何かあったのか？　疲れて倒れてたりしないだろうか？

頭の中を様々な思考が、複数放ったねずみ花火の如く激しく入り乱れる。

――これは、振り向いて様子を見た方が……。

そう思い、背筋を伸ばしたその時。

「……え」

ふっと視界が暗転した。

……んん？

瞼の上に、柔らかな細長い感触がある。
……何事だ？
先程までの混乱も伴い、脳がキャパオーバーになって思考停止状態になる。
すると、背後から、気の抜けた声が聞こえてきた。
「だーれだ？」
「……」
……。
……俺のシリアスな展開風モノローグに費やした時間を返せこんにゃろう……。
しかし、そんな雰囲気を引きずっていてもしょうがない。さっさと思考を切り替えて、こいつの悪ふざけに付きあってやるとするか。
「こんな可愛いことをするのはアレだな、小町だな」
「うわ、ここで妹さんの名前を出す神経を疑います……ていうか、あれ、今可愛いって……」
「あ、や、それはちょっと、その」
「『その』、なんですか？　今の言葉はうそなんですか？」
「お前明らかにからかってるだろ。絶対にやにやしてるだろ、今」
「えー、そんなことないですよー？　先輩がうそついたのかと悲しんでる所ですー。えーんえーん」
「やめろやめろ、心がこもってないセリフを言ってウソ泣きしながら、指をもぞもぞさせるのやめろ。目が休まっちゃうだろうが、気持ち良いだろうが」
「ノリノリじゃないですか……」
と、こんなやりとりをしている間も、依然として視界は暗転したまま。
そして背中に柔らかい感触が。ぽちぽちと2つのものが……んん？
あ、そうか、あの音がした後、結局――
「先輩、わたし今、何も着てないんですよ？」
「なっ……」

ある程度予想していたとは言え、こうやって本人からはっきりと告げられると、鼓動が一気に高鳴る。
「ふふ……」
一色が、慌てる俺の様子を見て楽しそうに笑う。
「……っ、お、おい……？」
一色が、俺の目を片手で覆って、解放されたもう片方の腕を俺の首にしゅるりと回す。
それと同時に、身体の密着度を更に強め、身体が満遍なく触れ合う。
……満遍なく……上も、下、も……。
一色の下腹部の想像が勝手に頭の中を駆け巡る。
頭の中に浮かぶのは下腹部が薄白い靄に包まれた一色の裸体だ。ついさっきまで見ていた分、強く鮮明に思い浮かべる事が出来る。
現在進行形で背中に感じる柔肉の感触と、頭の中に想起される一色の裸体とで、頭の中がすっかりかき回されて、思考がまとまらないままに本能だけはきっちり反応して、肉棒がぎちぎちに反り返っているのが感覚で分かった。
「……ちゅっ」
「……っ!?」
一色の唇が、耳にそっと触れる。
びくっと震えると、一色が小さく笑った。
「……あは、先輩の、すごいですね……」
言って、首に回した手でしゅるしゅると胸板やお腹を撫でる。その手は下腹部に及びそうで及ばない。
期待と焦れったさに震えていると、一色の手が胸板の上でぴたりと止まる。
「……見たい、ですか？」
「……っ!?　う……あ、や、その……」
指の腹で乳首をさすりながらの、突然の誘惑。
思いがけぬ言葉に、どう返したら良いかと答えに詰まる。
しかし、俺の迷いをあざ笑うかのように、一色がくすりと笑う。
「……あは。だめですよー？　……今は、まだ……ね？」

甘く囁くと、再び首に腕を回し、両手にきゅっと力を込めてくる。
そして、耳に口を近付けたかと思うと、
「ちゅっ、ちゅぴっ、今は……はうっ、ちゅぱっ、まだ、……んふうっ、ぴちゃ、ダメですけど……ちゅぴゅ、ちゅぱ……その分、ちゅぴ、ちゅっ、んはあっ、ちゅっ、……後で、んちゅるっ、ちゅぽっ、……いっぱい……ちゅっ、……可愛がってくださいね？」
「～～～～～～～～～～～～っ！」
耳に舌を入れられ、信じられない程いやらしい誘いと共に、水音が幾度と無く弾ける。
「ちゅぴ、ちゅぴゅ……ふふ、……わかりましたか？　わかったら……」
ぱっ、と視界が明転する。
実際経過した時間よりも妙に長い時間目を覆われていたように思えて、久しぶりに感じる電灯の眩さに目を細める。
視線を横に滑らせると、一色の艶めいた表情をした顔が俺の肩に乗っていて、頬と頬が触れ合っていた。先程までの異様な興奮とはまるで違う、幸せなくすぐったさが身体に染み渡る。
「……わかったら、キスしてください」
そこだけ妙に可愛らしくおねだりされて。
「……あいよ」
我ながらやけに素直だなと思う即答をすると、軽く口付けを交わした。
「……んっ。えへへ……じゃあ、着替えますから、もう少し我慢してくださいねー……んっ」
「ちょっ、おい……っ!?」
離れ際に、身体を屈めて亀頭にキスをするという信じられない事をしてきた一色に、理性が吹き飛びそうな予感を覚えながらも、何とか見ないように、襲わないようにと我慢して、耐え忍んでいる内に一色の着替えが終わった。
耳から脳内に直接送り込まれた一色の甘い言葉と、離れ際の亀頭へのキスが脳裏を過ぎる。

……や、もう、小悪魔のレベル、越えてますやん……。ちょっと可愛すぎて訳分かんない。

耳をさすりながら、ぽへっと正面の壁を見つめる。

耳に残る湿り気が、つい先程までの婀娜やか（あだやか）な時間が決して夢ではないことを告げていた。

続く。

（３０）

一色いろはは可愛い。

その事実は、もう、中途半端に否定しようものなら、誰から何か言われるよりも先に自分の中で「こいつまだそんなこと言ってんのかよ（笑）」「逆にすげえな（笑）」みたいな嘲りの声が大発生するので、もはや素直に認めるしかない。

しかし、この「可愛い」という表現は、今まではあくまでも一高校生としての「可愛い」という表現に留まっていた。や、まあ、こう言葉にするとそりゃそうだろとなるのだけれど。

「今まで」というのは、正確には「昨日まで」と言える。や、まあ、結構キス漬けになっていた感はあるけれど。それでもまだ、「可愛い」という表現はその言葉通りのものだった。

けれど、今は。

なんというか、可愛いは可愛いでも、その一言の中にもっと色々な意味が内包されている。

壁を見つめながら、なんと表現したら良いものかと考えていた。

――魅惑的。

そんな言葉がしっくりくることに気付く。

この感情、まるで一色に心を囚われたかのような感情は、恐らく通常の恋愛感情よりももっと依存や縛り付けの度合いが激しい。

しかしそれが危機感をもたらすかと言ったら、決してそんなことはない。

むしろ、この感覚にずっと身を任せていたくなるような、溺れたくなるような、そんな浮遊感の伴った心地良さがある。

……だあああああ、頭の中が、もう、もう、もう！

× × ×

「先輩、お待たせしました」

「あひゃいっ!?」

「うわ……」

悶々としている時に一色が俺の肩に手をぽんと置いたため、変な声

が出てしまった。即座にどん引くって……一色さん、ひどくないです？
「そう言えば……まだ先輩は服着てませんでしたね」
「あ」
よくよく考えると、よくよく考えなくても。
とってもシュールな絵面だった。
一色はもう服を着た為、俺も安心して振り向ける。振り向いたら一色がバニーガール姿でしたーなんて夢のような展開があったら、即座に押し倒して服を着たまましちゃうレベル。どうしたんだ俺。
服を着ようと立ち上がると、一色が俺の下の方をじっと見ている事に気付く。
「……ん？　どうしたんだ？」
俺だけ裸って何の羞恥プレイだよって話だから、早く服を着たいんだけど……。
聞くと、一色がんーと可愛らしく唸る。撫でていいかしらん？
「……わたしが着替えてる間に、ちょっと元気無くなっちゃいましたね」
「ん？　ああ、まあしょうがないだろ」
俺のモノが半勃ち状態になっている事を残念がっているらしい。
や、ずっと勃ってたらそれもうすぐさま捕まるからね。
「むー……」
なんだよフグかよ。頬をつっつくぞ。
つっついた。
ふにふに。
やだ、柔らかい……。
「ふぁふっ、ふぁふっ……って、何するんですか」
「や、つい……」
つっついたら変な声が漏れたが、割と冷静に返された。気持ち良さそうに身を委ねかけてたから、今度研究調査してみよう。
「じゃあ、服着るぞ」
言うと、一色が目を細める。

「はい。……ああそうだ、その前にちょっと……」
「え……」
一色が蠱惑的な笑みを浮かべたかと思うと、ニットセーターのボタンをいくつか開けた。
「……え、お前、それ……」
一色の胸が、突起が見える寸前まで露出した所で、その光景に息を呑むと同時にあることに気付く。
……下着、着てないじゃん。
「んふふ……さてさて、下はどうなってるんでしょうかね～……？」
頬を紅潮させた一色が舌をちろりと出し、ミニスカートの端をぺらりとめくる。
「わ、うお、や、ちょっと待っ、その……っ！」
あまりにもあまりな展開に頭が付いて行かず、それはそれはかっこ悪い声を上げる。
だって、こんなに胸を露出させておいて、更にスカートを捲るって、それもう、もう、もう……！
そんな俺の慌てる様子を心底楽しそうに一色が見ている。こ、こいつ……っ。
「あ、すっかり元気になりましたね」
「え……あ」
一色の言葉を聞いて下を見ると。
……なんていうか、びーんって感じで、肉棒が屹立していた。ど、どうもこんにちは……。
一色がこの状態を見て満足気に目を細めると、
「んしょ……」
「え、おい……!?」
突然しゃがみ込んできた。
一色の亜麻色の柔らかな髪が一瞬だけ亀頭に触れ、びくっと反応してしまう。
「あは……すごぉい、かちかちですねぇ……」
「うっ、くおっ、こ、こら……っ」

間延びした口調で甘えるように呟くと、尿道口を指の腹でぴとぴとと触る。僅かながらも快楽が生じて、俺の理性を確実に削り取る。
「ふあ……糸引いたぁ……」
指を離した際に、尿道口と一色の指との間に透明な糸が伸びて、それを彼女がうっとりとした目で見つめる。あまりにたまらない光景にぞくぞくとする。
「お、おい、そろそろ――」
服着たいんだけど、と言おうとした矢先。
「……あむっ」
「うあああっ!?」
一色が、亀頭をぱくりと咥え込んだ。
「ちょ、ちょっと、一色、だめだっての……うああ……っ」
柔らかな唇がカリを包み込んでいて、これから来るであろう快楽の波を想起させる。
俺の言葉を聞いて、一色が視線だけこちらに向けると、にいっと目を細めた。
――来る、と思った瞬間。一色の口が蹂躙を始める。
「んっ、ちゅるっ、ちゅぴっ、ちゅるるっ、ちゅぱっ、ちゅぱっ、ちゅぽっ、ちゅりゅっ、ちゅちゅっ、れるれるれる……ちゅぷっ、ぺちゅっ、ちゅるるる……ちゅるるるるる……」
「～～～～～～～っ！」
亀頭と雁首を集中的に責められ、腰ががくがくと震える。
予想を超えるあまりの快楽に、自重にさえ耐え切れなくなり、徐々に腰の高度が落ちていく。
「お、おい、一色」
「ちゅぴっ、ちゅるるっ、ちゅぱっ」
「こ、こら」
「ちゅりゅ、ちゅぽ、ちゅぴ、ちゅぴっ」
「ほ、本当に……」
「くちゅくちゅ、ちゅりゅりゅ、ぢゅる、じゅる、じゅるる……」
「だめ……だって……」

「ちゅるるるる……ずぞぞぞぞ……ちゅぽっ、じゅるるるる……」
「〜〜〜〜……っ」
ゆっくりと腰が下がっていく間も、一色の唇は亀頭から離れない。
気付けば、カーペットの上にへなへなと座り込み、それでも止まない責めに屈して、仰向けになってびくびくと震えるだけになっていた。
「い、一色、くあ、なんでこんな、あくうっ、うお、うあああああ……」
一色が顔を動かし、内頬に亀頭がくにくにと当たる。
その間、俺に熱っぽい視線を送り続けて、その視線だけでもたやすく俺の思考が爆ぜてしまう。
さっき大量に出したばかりだと言うのに、それに勝るとも劣らない量の精液が出そうな予感がする。
――不意に、ぴたりと。
俺の言葉に反応して、一色の口の動きが不意にぴたりと止まった。
ちゅぽっ、といやらしい音を立てて口を離すと、肉棒の根元に両手を添えて、ゆっくりと口を開く。
「せんぱい……ごめんなさい、ちょっとだけのつもりだったのに、……ちゅっ、気付いたら夢中になってて、ちゅぱっ、ちゅぴっ、どうしましょう、せんぱい、まだいっぱい出せますか？　今ここで、もう1回飲ませてもらっても、ちゅりゅりゅっ、れろっ、ちゅぱちゅぱ、いい、ですか……？」
「喋るか舐めるかどっちかにしてくれ……っ！」
切実だった。もうエロすぎて訳分かんないです、いろはす。
「その……なんだ、多分俺一人だったら1日にそう何回も出せないけど……なんか、お前とこういうことしてると何回でも出せそうな気がする」
喋っている間も加えられる亀頭への刺激になんとか耐えながら（喋る時くらいやめてほしいんだけど……）、なんとか考えた事を口にする。
言うと、一色がぱあっと明るい表情を浮かべる。
「やった……っ。……それじゃ、……いただきます」

口を大袈裟にくぱあっと開けた瞬間、心臓がどくんと鳴った。
――食べ、られる――
「あむっ……ちゅるっ、ちゅぴっ、ちゅぱっ……じゅるるる、ずぞぞ、ぐちゅ、がっぽがっぽ、んはあっ、れちゅっ、ちゅぱっ、ぐちゅぐちゅ、ちゅるるる……はぷっ、じゅぱじゅぱ、ずぞぞぞぞ……」
「うあああああ……っ！　ま、待て、そんな激しく、くお……っ！」
一気に竿まで咥えられて、亀頭やカリへの刺激に加え裏筋に好き放題に舌で蹂躙されて悶絶する。
あまりの快感に足をばたつかせ、背中が不規則に跳ね上がる。
「あはっ、せんぱいの、びくんびくん言ってます……すごい……ふふっ、かわいいなあ……ちゅぴっ、ちゅるっ、せんぱい、イキそうですか？　イキたいですか？　いいですよ、いっぱい出してください、いっぱい飲ませてください、せんぱい、せんぱい……」
劣情的な目が俺を見つめ、両手で俺の肉棒をしごき上げる。
「あっ、あがっ、あああ……」
足が動きが更にせわしなくなり、耐えずばたつかせて捩らせている。
「い、一色、もう、出る、出る、出る、出るから……っ！」
「いいですよ？　出してください、せんぱい……んっ」
再び一色が肉棒を咥えて、愛おしそうに舌で舐る。
「……あ」
小さく声を上げると、
「んぐうっ!?」
ほとんど反射的に一色の頭を掴んで、ぐんと引き寄せた。それと同時に腰を跳ね上げ、弓なりに反りかえる。
亀頭が喉奥に当たり、一色が苦しそうな声を漏らす。
その声が聞きながら、マグマの奔流が身体の奥底から湧き出てくるのを感じる。
そして、次の瞬間。
「――――――っ」

「んぶうっ!? ごぶっ、んっく、んぐ、ごっく、おぶ、ごきゅ、ごきゅ、ごく、あぐうう……んっ、んっ、んっ、んっ、んっ……」
声も無く大量の精液を一色の口の中にぶちまけたが、涙ぐみながらも一滴残らず飲み込み、舐め上げ、吸い取った。
「んんん……ぷはっ、すごい、こんなに出るなんて……って、あれ？……あは」
一色は元気いっぱいに顔をうっとりとさせると、何かに気付いてくすりと笑った。
「ん？ どうしたんだよ……あ」
ぐったりとしたままで見たものは。
がっつり勃起したままの、肉棒だった。
……うーん、今日はあらゆる意味でやばい気がするなあ。
「せんぱい、すごいですねー、えい、えい」
「こら、先っぽをつつくな。恥ずかしいからやめろ」
「えー？ だってかわいいんですもん、おりゃ、おりゃ」
「撫でるな撫でるな！今敏感なんだから……くう、ってこら！」
「あう」
おでこに優しくチョップした。
この後、流石にさっさと服を着た。
なんで服を着ようしただけでこんなに時間がかかったんだろう……。
「……」
既に2回出しておきながら、未だにぱんぱんに張り詰めたズボンの前面を見て、我ながら呆れた。
続く。

（31）

「先輩。さ、行きましょ？」
部屋を出ようとすると、半歩前から一色が俺の手を引いた。
「お、おう……」
するりと絡んだ指の感触にどきりとする。なんだよ俺、ウブかよ。
……これよりももっとすごい事、いっぱいしてるはずなんだけどなあ……。
どうにも、この子には振り回されっぱなしだ。
「どうしました？」
「……や、なんでもねえよ」
くりっと首を傾げて尋ねる一色にまたどきっとしながら、目を逸らして答えた。

× × ×

「じゃ、先輩はここで待っててくださいね」
「ああ、わかっ……!?」
「んふふ～」
ソファに座った俺に、一色が立ったまま抱き付いて首筋にキスしてきた。
……いかん、一色の翻弄されっ放しだ。お釈迦様の手の上の悟空ばりに踊らされてる。ううむ……。
ちゃっちゃかとエプロンを着て料理を始める一色の背中を見て、いきなり抱き付いたらどんな反応をするかなーなどと末期なことを考えた。やんないけどね、多分。うん……多分。

× × ×

「……」
「ふんふふんふ～ん……」
鼻唄混じりに楽しそうに料理をする一色を、幾度と無く見やる。
一度はテレビを点けてみたりもしたのだけれど、今は2人だけのこの空間に他の音や光は出来るだけ入れたくなかった。どんなに楽しいトークも、どんなに感動的な歌や映画も、今はノイズにしかならな

い。
一応本を手に持ってはいるのだけれど、まるで頭に入ってこない。あれ、なんかいつの間にか妹に肩車されてる主人公がいる……どういう流れ？
２人の間に流れる空気は穏やかで、会話が無くとも、一色の鼻唄一つでこの空間が満たされる。
――しかし。
不意に、一色が俺をちらりと見た。
その、ほんの僅かな流し目が、たまらない程扇情的で。
穏やかな空間に、妖しい色をした細い糸が何本も紛れ込む。
「……っ」
居てもたっても居られなくなり、急にそわそわし始める。
やがて、我慢出来なくなって、
――ぱたり、と。
徐に本を閉じて、ふらりと台所へと足を運ぶ。
「……」
一色は一瞬調理の手を止めたが、こちらを見ることなくまたすぐに作業を始めた。
まるで甘い水に誘い寄せられる蛍のように、おぼつかない足取りで一色の背中に近付く。
「……どうしたんですか？」
一色の言葉に、足を止める。
「……や、その……」
言葉が咄嗟に出ることはなかった。正確に言えば、喉元まで出かかっているという段階ですらなく、伝えたい言葉をお腹の中で生成してさえいなかった。
ここでやっと思考を始める。
近付いたからといって、いきなり何かしてしまえば一色の邪魔になるだけでなく、怪我の危険性さえある。だから、何も出来ない。
それでも、ただ、漠然と。
……一色の近くに居たかった。

やっと生まれた言葉を、しかしそのまま口に出すのは恥ずかしくて。
「……ちょっと、あそこは遠いなーって……」
ふわっとした言い方になった。
何この恥ずかしい暴露と思い、頭をがしがしと掻く。……うわ、超恥ずかしい。
何とか口にした言葉を、一色はどう取るのか――と彼女の顔を見やると。
「……ふふ。先輩、ちょっとこれ見てくれますか？」
「ん？　おう、どれどれ」
一色が鍋の火を止めて、ちょいちょいと手招きをする。指の動きは手招きをするのにその緩慢さは要らないだろうと思うくらいにゆっくりとしていて、一本一本の指が波打つ姿にひどく胸がざわつく。
一色が見せたのは、鍋の中でことこと煮込まれているシチューだった。
……うん、美味そうだ。
「どうですか？」
何その鬼みたいなフリ？　２行前の感想と同じやつしか浮かばないぞ？
しかしここで下手に躊躇すればポイントを下げてしまう。他人のポイントの上下なんて普段はまるで気にしないが、今の一色は別だ。あとは小町と、戸塚。俺が媚びへつらう対象となる３人だ。何だこのカミングアウト。
うーんと唸り、なんとか答えを捻り出そうと苦心する。
その結果。
「うん、美味そうだ」
地の文と同じだった。ボキャ貧を露呈する。まあ、俺が彦摩呂ばりの表現を駆使したら、それはそれで一色がドン引きするんだろうけど。あれ、逃げ道無くない？
……これ、怒られるんじゃなかろうか……と思っていたが、そんなことはなく。

一色は感想を聞いて一瞬目をぱちくりさせると、優しくふっと目を細めた。
「……ん、良かったです。……ほっ。」
安心して小さく息を吐く姿が、妙に愛嬌がある。わー抱きしめていいかしら。さっきは「多分」やらないとしか言ってないから良いよね？　ね？
手をわきわきさせていると、ふと一色の行動に目が行く。
小皿に鍋の中の具材とスープを入れたかと思うと、
「ふー、ふー、ふー……」
念入りに冷まし始めた。息を吹きかける唇の形を見て、キスの瞬間の一色の唇を思い出して思わず目を逸らす。
「先輩先輩」
「ん」
目を逸らしていると、一色に呼ばれたので振り向いた。
――と。
「えいっ！」
一色の指と、それに挟まれた具材らしきものが口の中に突っ込まれる。
……なんで指で？　あ、箸だと危ないからか。
混乱しつつもそんな一色の気遣いについて考えていると、一色がにこりと微笑む。
「先輩、美味しいですか？」
聞かれながら、口の中をもぐもぐ。
口の中に入れられたのは鶏肉だったのだが、良い塩梅に柔らかく煮込まれていてとても食べやすい。味も程よく染みてている。
「……ん、美味いぞ」
言って、一色の頭をぽんぽんと撫でると、一色はこそばゆそうに「あう……」と呻いた。ちょっと可愛すぎて死んじゃう。
「やった……。よし、じゃあ次は……」
「え……」
次に一色が差し出したのは、人参だった。

「ほれほーお（これどーぞ）」
「……」
……。
や、人参自体は良いのだけれど……なんで君が唇に咥えてはんねやろ？　思わずはんなりしちゃった。
「ん……」
「……っ」
うっとりとした表情を浮かべた後に目を閉じないでー！　俺にこの後の展開を委ねないでー！　くっそ、恥ずかしい、くっそ！
内心死にそうになりながら、唇を重ねる。
――ちゅるん。
「んむ……っ!?」
唇を重ねた瞬間、一色は俺の中に人参を舌で押し込んだ。
シチューのスープの味と、野菜特有の甘味を感じた、次の瞬間。
一色が俺の背中に腕を回し、ぐっと密着する。
「ちゅぴっ、くちゅくちゅ、ぐちゅ、じゅぷぷ、んちゅるっ、ずりゅっ、ちゅぱっ、ちゅぴちゅぴ……ちゅぴゅっ、じゅるる……じゅるるる……」
「～～～～～～～～～～～～っ」
突然の蹂躙に、反射で一色の身体を抱き返した。
それにより一色とのキスが更に濃厚なものとなり、まるで炎天下のアスファルトに投げ出された氷のように、理性がどろどろに溶けていく。
「あっ、んぐっ、じゅぷっ……ぷはっ、い、一色……んぐっ!?」
少しでも唇を離そうものなら、腕に力を入れられてまた唇を奪われる。
「じゅぷるっ、くちゅっ、ちゅぱっ、ちゅぴゅ、んむうっ、あむっ、あむっ、じゅるるる……ちゅぱっ」
口に入れられた人参が、元々柔らかくなっていたとは言え、気付けば全く噛むことなく無くなってしまっていた。
人参と一緒に思考まで溶け落ちて、視界が揺らぐ。

「……んむっ……!?」
不意に、一色の手がこちらの下の方に伸び、チャックに手を掛けて躊躇なく下ろした。
片手を俺の後頭部に回して俺とのキスは続けたままで、もう一方の手は波打つように指をうねらせて股間をまさぐり、パンツをずり下ろす。
そしてそのままぶるりと肉棒が外気に晒されると、一色は唇を離し、発情しきった雌の顔を見せつけてくる。
「……はっ、はっ、はっ……せんぱいの、すご、硬い……硬いよお……」
「……っ」
俺の胸元に顔をうずめ、すーはーと荒く匂いを嗅ぐ音を立てながら、愛おしそうに肉茎に指を這わせる。
なんだこれ、なんだこれ、なんだこれ……？
俺、たしか一色が料理してるところを覗きに行って、それから……。
「――せんぱい、ちょっとだけ腰落としてもらって良いですか？」
「え？　あ、お、おう」
ぼんやりした記憶の糸を手繰り寄せていると、不意にその思考が一色のお願いにより掻き消された。
僅かに膝を開いて、腰を落とす。不格好にならざるを得ないけど、こんな感じか……？
「ありがとうございます。……んっ」
――にゅるん。
「うおあっ!?」
一色が礼を言って、微笑んだ瞬間。
一色の指に招かれて、白い太腿の狭間に亀頭が――食べられた。
既に我慢汁が大量に滲んでいた為、柔らかな肉の間にあっさりと吸い込まれる。
一色の秘部から僅かに離れてはいるが、この場所も確かな熱を帯びていて、そして――
「……一色、お前、濡れてんむっ？」
一色の局部から肉棒に滴る熱い液体を指摘しようとすると、唇に人

差し指を当てられた。
「もう……そういう恥ずかしいのは言いっこなしですよ。それにしても、せんぱいったら、こんなに硬くして……後でって言ったのに、いけない子ですね……」
そんなこと言っといて、さっき俺のをたっぷり咥えてたのはどこのどいつだ――なんてツッコミをしようかとも思ったけれど。
にゅこっ、にゅこっ、ぬこ、にゅるっ、くにゅにゅ……。
「あっ、あっ、あっ……せんぱいの、くひぃんっ、熱っ、熱いよお……あっ、あうっ、ああっ……」
一色がゆっくりと腰を前後して、太腿の狭間での抽送を開始すると、あっと言う間にそんな思考も吹き飛んだ。
「あっ、おああ……っ」
あまりの心地良さに、がに股になった足ががくがくと揺れる。
「ひっく、あう、せんぱいの、熱いよ、硬いよ、気持ち良いよ、変な感じ……くひぃん……っ」
「あっ、うあっ……」
耳元で一色が絶えず送り込んでくるいやらしい言葉によって、肉棒にどんどんと血液が流れ込み、その硬度が恐いくらいに増していく。
一色が腰をゆっくり前に突き出すと、俺もそれに合わせて腰を前に。
同様に、一色が腰をゆっくり後ろに引くと、俺もそれに合わせて腰を後ろに。
時折、一色は腰を左右に揺らしながら前後してくるため、違う角度から柔肉に締め付けられて、それだけで果ててしまいそうになる。
この疑似交尾に、頭がおかしくなりそうだった。
「せんぱい……んちゅっ、ちゅぴっ、ちゅるる、れる、れるれる、ちゅぷっ、んはあっ、ちゅるる、くちゅ、ちゅくちゅく、ちゅぱっ、ぷちゅ、ぷちゅちゅ……」
互いの口内を舐り合い、肉棒と太腿をたっぷり味わう。
一色の太腿に肉棒がにゅくにゅくと絞められ続けて、そろそろ限界が近い。

「一色、俺、そろそ……ろ……？」
出そうだー――と言おうとすると。
一色が腰を引いて、肉棒が彼女の太腿からにゅぽんと抜けた。
「え……」
戸惑う俺に、一色がにやりと笑う。
「……もう。……台所に一杯出しちゃったら後片付けが大変じゃないですか。……だから、もう少し我慢してくださいね」
「……な……っ」
絶句した。
……はーん!?　ここまでやっといて!?　はーん!?　爆発寸前なんですけど!?
ありったけの恨みがましい目で見つめると、一色がんーと唸って、蠱惑的に笑う。
「……そうですよね、先輩、出したかったんですよね。……わたし、ひどいですよね」
「え？　あ、や、別にそんな責めるつもりは……」
予想外の返しに慌てると、一色は再び俺の背中に腕を回し、上目遣いで熱っぽい視線を投げかけた。
「……いいえ、わたし、ひどいです」
だから、と。とびっきりの甘えた表情を魅せる。
「……これはもう、後でた～っぷりおしおきしてもらう必要があります」
「……」
……。
……おしおきって、こんな爛々と瞳を輝かせてリクエストされるものだったっけなあ。
ていうかもうちょっと表情に出さないよう努力しろよ。めっちゃ良い笑顔だぞお前。可愛いなもう！
しばし沈黙して、一色を抱きしめ返す。
「……ん、そうだな。たっぷりおしおきしてやるぞ。……たっぷりな」
言って、一色を抱きしめる力を敢えてかなり強くする。

「あっ……かはっ、は、はいっ、あぐうっ、お、お願い、お願いします……お願いします……っ」

一色の喜びに満ちた声音を聞いて、こいつはどれだけ……と、興奮で身体がぶるりと震えた。

続く。

（３２）

「いただきます」

「はい、召し上がれ」

一色が用意してくれたご飯を前に手を合わせる。

この面だけを取り出して見てみれば、さぞ幸せな光景に映ることだろう。

――幸せなのには違いないのだけれど……今、二人の間に漂う空気の妖しさは、この食事を素直に楽しめるようなものではまるでなかった。

一色が作ってくれたのはハンバーグとシチュー。一色がシチューにおたまを入れると、湯気を立てながらスープが柔らかく揺らぐ。ハンバーグの焼けた肉の匂いはお腹まで浸透して、程好く食欲をそそる。実際口に運ぶと、期待通りの幸福感が身体を包んだ。

通常の食事ならば、このまま舌鼓を打って楽しんだのだろう。

――けれど、今は……。

「せんぱい、美味しいですか？」

「うっく……ああ、美味い……ぞ……くうっ……」

右隣りにいる一色との距離はとても近い、というよりはもはや密着している。一色は俺が食べている間、肩を寄せながらずっと俺の股間をズボン越しに撫で回している。ズボンの布地が軋む程に盛り上がった山のてっぺんを、艶めかしく垂らした指でつつっと何度もなぞっている。

最初の２～３口は自分で食べたのだけれど、その後箸を伸ばしたら、不意に手首を掴まれた。そっと握られただけで、鼓動ががこんと音を成して加速する。

「せんぱい、ここからは……んっ……」

「……え」

一色が自分の箸でハンバーグを取ったかと思うと、それを瑞々しい唇で挟んで、ゆっくりと目を閉じた。

……ええー？　「ここからは」ってことは、これをずっと……ええー

？

……持つかなあ、俺。色んな意味で。

しかし、あまり考えてこのあざとい姫君を待たせる訳にもいかない。

「わかったよ……んっ」

首を傾けて、ハンバーグを譲り受けるようにそっと唇を付ける。

唇はそっとふれるだけのつもりだったのだけれど、一色の舌が動いて俺の唇を割った。

ちゅるりと口内に侵入してきた舌が、さも自分の家であるかのごとく自由に動き回る。

「んちゅっ、ちゅるっ、ちゅりゅ、ちゅぴ、くちゅるっ、ちゅぷっ……ぷはっ……はぷっ、くちゅ、じゅる、ぢゅりゅ、じゅぷっ、んちゅ、ちゅる……」

「〜〜〜〜っ」

横を向いた姿勢で口内を蹂躙され、蕩けるような快楽とは対照的に頭の中はスパークしていた。

一色は本当にこれを食事を終えるまで続けるつもりなのだろうか？　と思うくらいの濃厚なキス。

口の中のハンバーグは二人の舌に弄ばれて噛まないままにほとんど溶けてしまい、一色の唾液と一緒に喉奥へ流し込まれた。

身体はがちがちに硬直し、気付けば一色の肩を強く抱いていた。抱きしめた瞬間に一色が嬉しそうに目を細めるのを見て、幸福感と同時に大量の血液が下腹部に流れ込んだ。

「ぷはっ……せんぱい……ちゅっ。……じゃあ、どんどん行きますよ？」

えへっと笑う一色。可愛い上に艶っぽいとか、もうどれだけ俺を喜ばせりゃ気が済むんだろうかこの子は……。

今度はシチューをスプーンで掬い、はぷっと咥えた。

「ん……」

「……うお……」

今度は、口内の白いスープを見せつけるように口を縦に開いた。上

唇と下唇の間にうっすら引いた糸が微かに反射している。
目の前のこの光景はたまらなく扇情的で――
「……いただきます」
――食べたい、と思った。
今度は俺が一色の口内を貪る流れのようだ。
「……んっ、ちゅるっ、じゅるっ、ちゅぴ、くちゅちゅ、ずぞぞ、あむっ、じゅるるるる……」
「あうううう、あうううう……っ」
スープを吸い上げると、途中からは一色の舌に吸い付き、存分にしゃぶり尽くす。
一色は涙目でふるふると震えた。
スープの味は、触覚と嗅覚と聴覚を支配する高揚感により麻痺してしまい、まるで分からなかった。スープを味わうというよりは、一色の舌を味わうという具合だ。
「……ぷはっ、はあっ、はあっ、もっと、もっとしましょ……？」
「……おう」
股間を鷲掴みにしてしまう程の威力がある目で見つめられたら、断る理由など辺りを見回してもどこにもなかった。

× × ×

どれくらい時間が経っただろうか。
「ちゅぴっ、んはあっ、ちゅぷ、あむ、ひぐうっ……ちゅりゅりゅ、れるれる……あは、せんぱいの、すごい……もうおつゆがいっぱい出ちゃってますよ？」
「……お前だって、さっきからずっと震えてるじゃねえか」
互いの身体を弄りながら、ずっとこんなやりとりをしている。
気付けばとうに皿は空になり、それでも飽き足らずにキスに興じていた。
一色は途中からチャックを開けて、パンツ越しに肉棒の感触を楽しんでいた。ボクサーパンツは一色が握ると、生地が自由に形を変えて伸び縮みして、彼女のいやらしい指の動きに応じて肉棒を擦り上げて

いる。
俺は一色の背中に腕を回してそのまま後ろから胸を揉み、セーター越しに下着を装着していない柔肉の感触を楽しむ。キスをしている時に突起を摘まむと、くぐもった素敵な声で鳴いてくれて、それが口内から顔中に染み渡るのがなんとも心地良い。
時計を見る気は起きない。時計を見る必要もない。
寝ている時と同じくらいに、時を忘れた。
このまま一晩過ごしても良いんじゃなかろうかと思う程にこの快楽に身を浸していたのだけれど、ここで一色が動いた。
「――ぷはっ……せんぱい。まずは片付けて、歯を磨きましょ？」
「あ、ああ」
それじゃあ――と一色から手を離し、立ち上がろうとした矢先。
一色が、そっと口を耳元に近付けた。
「……早く、せんぱいとエッチしたいです」
「……っ」
ごくり、と喉が鳴った。
一色の顔を見ると、頬は紅潮し全体的に熱っぽい。下着を外した上半身は、服1枚纏っているだけで身体のラインがはっきりとしていて劣情を煽る。
そして下半身は――今更になって気付いたが、一色の座る椅子はびしょびしょになっていて、まるでコップの水を溢したかのように椅子から床へと滴っている。
一色の肩に手が伸びた。
「一色……！」
肩を掴まれた一色は、あっと一瞬驚いたもののくすりと笑って。
「あん……っ、だめですよ？　ちゃんと今言った、片付けと歯磨きをしてからじゃないと」
「や、だってお前、今、俺と、その……」
がっついていると思われてもしょうがない。もはや我慢の限界だった。
それでも一色は、

「ふふ、こう言った方が先輩を煽れるかなーと思ったんです」
てへっと可愛く笑ったかと思うと、すっと表情を入れ替えて目に妖しい光を燈す。
「……わたし、ひどいですよね」
――このフレーズは、ついさっき聞いたような気がした。
こんな言葉を紡がれたら、もう流れに乗らない訳にはいかなかった。
「……そうだな、かなりひどい」
「……ですよね。……だから、その……」
一色が言い終える前に、肩を掴む手に力をぐっと込める。
「……焦らしてくれてる分、更におしおきしてやるからな。めちゃくちゃにするぞ」
一色の目を見据えてはっきりとした口調で告げると、彼女の唇がふるると震えた。
そして俺の太腿に手を添えると、嗜虐心をそそる目の光を湛えて微笑む。
「……はい、おね、がい、します……」
「……っ」
真後ろから手を回されて下腹部を触られたような、ぞくぞくとした快感が身体を包んで。
肉棒の先から、ぷくっと露が浮かんだ。

続く。

（３３）

――……早く、せんぱいとエッチしたいです――

「……」

並んで片付けを手伝いながら、ついさっき一色が言った言葉をぼんやりと、けれど鮮明に反芻する。あまりに破壊力の高いその言葉は、心臓に、腹の奥に、下腹部に、深い熱と疼きを与えた。

「先輩、洗うのはこれでお終いです、ありがとうございます。……先輩？」

「ん、あ、ああ、そうか。どういたしまして」

ひょこっと横から顔を覗かせる一色にびっくりして、意識が現在に引き戻された。うーん、今までならあざといと思ったであろう仕草なのになあ……今はなんかもう死ぬ程可愛いとしか思えないなあ……どうしよう……。

「……えいっ」

「んっ？」

ぼへっとしている俺の顔をじーっと見ていたかと思うと、俺の胸にぼすんと突っ込んできた。

「えへへー」

「……」

特に何をする訳でもなく、おでこを胸板にこすりこすり。甘えたかったのだろうか。うん、死んじゃう。無言で頭をくしゃくしゃと撫でていると、不意に上を向いて目が合った。

「んっ」

「えっ」

え、目を閉じた。え、なに、唐突に？　俺からキス的なのを要求してらっしゃるの？　え？

「んっ」

「う……」

瞑目したままで圧力が掛かる。

何この恥ずかしイベント。避ける方法は何か無いか――

「んっ」
「うぐぐ……んっ」
無理だった。
軽く唇を重ねると、一色が俺の上唇をはむはむと咥える。続けて下唇も咥えると、舌をちろりと絡める。懐っこく愛情確認をするその動きがたまらなく愛おしい。
一色の行為をなぞるようにお返して、しばらく互いの唇を味わう。……これ、街中で軽いキスでも要求されようもんなら、なんだかんだで夢中になって、最終的に衆人環視の下での口付けになりそうで怖い。ドラマタイトルは「あざと姫君とＤＨＡ」で良いかな。遠回しすぎて訳分からんな。
……しかし、本当にそうなりそうで怖い。
どれだけ、理性を保とうと気合を入れてキスに臨んでも、一色の唇は俺の覚悟なんて容易く蕩かしてしまう。
やがて唇が離れると、一色がはっとした表情をした。
「はう！　ちょっと先輩、早く歯磨きに行かないとですよ！　あんな優しい顔つきでキスされちゃったら甘えたくなっちゃうからつい先輩の唇を味わっちゃったじゃないですか！　それになんですかこの抱きしめ心地、抱きしめる度に腕前が上がってますよ！　全くもうなんなんですかこれからもどうぞよろしくお願いします」
「……お、おう」
こ、こいつ……もはや恥ずかしげもなく……。
胸板に顔をうずめて「ん～……♪」と気持ち良さそうにおでこをこすってくるのは……ちょっと精神的にダメージが……幸せすぎて死にそう。俺の胸板そんなに気に入ったの？　一色にとって俺の胸板はモルディブかなんかなの？
「ほれ、行くぞ」
「あう」
頭をぽんぽんと撫でると、ようやく俺から離脱した……と思いきや、俺の袖をちょこんと摘まんでいる。
「さ、行きましょ？」

「あ、ああ……」
……。
なんだろう、一瞬も油断させてくれない……心臓に悪いなあ……。
×　×　×
やっとのことで歯磨きタイム。
まあこれはさらりと終わるイベントだろう、お互い口と片手が塞がってるんだし――と思っていたのだが。
……油断していた。
――現在の状況説明。
「う……うぐ……カシュカシュカシュカシュ……」
「ふうっ、んっ、ふあっ……カシュカシュカシュカシュ……」
――歯磨きは、している。しているけど。
一色は俺の前に立ち、少し左にずれた場所に居る。
――剥き出しになった俺の肉棒を握りながら。
――さ、歯を磨きましょう！
ついさっき、一色はそう言いながらまず俺のチャックを開けた。頭おかしい。そしてそのままパンツに手を掛けて、ぶるんと剥き出しにしてしまった。ちなみに俺はあまりの突然の奇行にそれを茫然と見ていて、ツッコむ前に歯磨き粉を付けた歯ブラシを手渡された為に何も言えなかった。笑うがいい、笑うがいいさ！
――そんな訳で。
俺は今、自分の肉棒をしごかれながら、空いた左手を一色の背中に回し、そのまま更に伸ばして左胸を揉んでいた。
俺への攻撃を緩めさせようと胸の突起を摘み上げてきゅむきゅむと触ってやると、「ひゃうんっ！」と可愛い声を上げて一色が――俺の肉棒を掴む手に力を入れて、雁首を先走りの汁でぬめった手でぐちゅりと握ってくるので、なんかもうすごい泥仕合になっている。
「はふっ、あっ、くひっ、んんっ、んんん……っ」
「……カシュカシュカシュカシュ」
……や、歯ぁ磨いてくれませんかね……この泥仕合終わらないんですよ……。腰をがくつかせながら、心の中でツッコむ。だって喋れな

いんだもん。
結局、標準時間3分とされている歯磨きに15分かかって何とか終了した。
お互い絶頂までは行かなかったもののだいぶぎりぎりで、うがいが終わった後は二人してふらついた状態で、台所でコップ1杯の水を飲んだ。
……この後、どうなるんでしょう……。
× × ×
「さ……行きま、しょう、か……」
水を飲み終えた一色が振り返ると、その表情は明らかに期待と緊張に染まっていて、固いものになっていた。
「……そうだな、行こう」
言って一色の肩を抱くと、彼女はびくっと震えて俺をちらりと見た。
時計を見ると、まだ21時を回ったばかりだった。
夜は、長い。
× × ×
ばたん、と一色の部屋のドアが閉まる。
部屋の中で、肩を抱いたまま一色を見ると、俯いていて表情が見えない。
ぞくりと期待感が背筋を駆け抜けるのを感じながら、俺はドアをロックする部分を探した。
――かちゃり。
ロックをした瞬間、一色の身体がびくっと跳ねた。
「あ、え……せ、せんぱい？　どうして……？」
不安の炎が瞳の中に揺らめく一色を見つめる。彼女には今俺の瞳がどんな風に映っているのだろうか。
「……なんとなく、だよ」
言って、肩を抱く力を強める。
「……っ」
一色は無言でぶるりと震えた。

「ベッド、上がるか」
一色の背を押して招くと、こくりと頷いて従った。
ぽすんと2人分の体重でベッドが沈み、すぐに跳ねかえって元の位置に戻ってくる。
俺は胡坐で、一色は女の子座り。
向かい合って、俺は一色を見る。一色は俯いている。
――少し、緊張をほぐすか。
「一色……んっ」
「……んっ……んむっ!?」
肩を掴んで優しく唇を重ねて、僅かに舌を入れた瞬間――一色の目が見開いた。
キスに弱いのはもう十二分に知ってるけど……それにしても、この反応は……？
不思議に思いながら舌を一色の口内に侵入させて動き始めると、更に反応が顕著になった。
「んんっ!? んっ、んくっ、んんん……っ、ふっ、くふうっ、んちゅるっ、ふうっ、んんん……あうううう……うううう……っ」
「……っ」
だ、大丈夫か？
一色は俺の肩を掴み返していて、その手もずっと震えている。
……もしかして、更にキスに弱くなってる？　なんで？　最後まで行くって思って興奮してるからか？
疑問は晴れないけれど、取り敢えず一色の緊張そのものは解れたようなので、唇を離す。
「んはぁ……っ」
「……っ」
上気しきった一色の顔はだらしなく口元が緩んでいて、舌がてろりと出たその先から伸びた糸が、俺の舌先と繋がっていた。
……完っ全にスイッチが入ってらっしゃる。
「せん……ぱい……」
一色が俺の上着の裾を掴み、くいくいと引っ張っている。脱げって

ことか？
俺ももう辛抱ならない状況だったので、胡坐のままで、一色の要望に応えて上着をがばっと脱ぐ。
「ふわ……」
一色が両手を頬に当てて、目を見開いて俺の上半身を見つめる。
「結構がっしり……わ、うわ、わわ……」
「こらこら」
胸板をぺたぺた触るのは恥ずかしいからやめて！
「……」
「こらこら」
乳首を見つめないで！　絶対なんかする気だろ！
「……下も脱ぐぞ」
一色の興味をずらそうとして言うと、
「あ、下は……わたしが。えいっ」
「えっ」
一色が茶目っ気のある表情で俺の肩をとーんと押すと、抵抗することも出来ずにぽてんと仰向けに倒れた。
「えーと……」
２度目とあってか、幾分手際よくチャックをちー……と下ろす。
そして顔を出したボクサーパンツごと、んしょんしょと可愛い掛け声を上げながら引き下げる。ずるりずるり。
やがて。
――ぶるん、と肉棒が顔を出すと、ついさっきも見ていた……というか触って咥えていたというのに、一色の目が爛々と輝く。
「ふああ……すごい、大きいよお……」
「……」
うっとりとした顔がエロすぎて、見ただけで更に勃っちゃった。
ていうか、この状況はあかん。俺が仰向けで寝っ転がっていて、一色が乗っかっている。攻め込まれる前にこの無防備な状態を打破せねば！
素早く起き上がって、一色の肩を掴む。

「一色も脱いでくれるか。全部」
「……あ……う……」
一色の目が泳ぎ、ちらりちらりとこちらを見る。
脱ぐ前から、衣服の下にこもっている媚薬じみた女の匂いが微かに香っていて、頭がくらくらする。
「……わかり、ました……」
こくりと頷くと、ニットセーターのボタンにゆっくり手をかけた。
続く。

（３４）

互いに元の体勢――俺は胡坐、一色は女の子座りに戻る。

一色の震える手が、ニットセーターのボタンを外し始めた。暖かそうな生地の中から、熱を帯びた膨らみが徐々に顔を出す。ボタンを外す動きはわざとかと思うくらいに緩慢で、どうにも焦れったい。

あと１つ外せば突起が顔を出す……という所で、一色が手を止めて、ついとこちらを見た。

「……見たいですか？」

「……」

ほーん？　ここに来てそのいたずらっぽい笑顔ですと？　ほーん？　可愛いけど、めっちゃ可愛いけど！　腹立つなぁ！

俺がぐぬぬと唸っている間も、一色はほれほれーとボタンを外して開いた部分をぱたぱたとさせ、見えそうで見えない状態で焦らしてくる。これ一歩間違えたらお金取れるサービスになりそうで怖い。誰にも見せないけど。

……しかし、そろそろ我慢の限界だ。

「ほーれほれ、見たいで」

「よし、もう脱がすぞ」

「わきゃー!?」

あまりの焦れったさに、思わず押し倒した。食い気味で。

細い肩を掴んでどさっと後ろに倒すと、ぎしっとベッドが軋む音がした。

一色を真上から見つめると、今さっきの無邪気な表情から一変して、頬を赤らめた色っぽい表情を浮かべている。

「……脱がせて、くれるんですか？」

一色が、腕をベッドに投げやった状態で、甘えた声で囁く。

「……ああ、脱がしてやるよ」

言うと、一色が泣きそうな声で、嬉しそうに「はい」と答えた。

×　×　×

仰向けになった一色に馬乗りになって、ボタンに手を伸ばす。手を

伸ばした瞬間一色はびくっとしたが、やがてゆっくりと目を逸らして、そのまま目を閉じた。
ボタンを1つ、2つと外す――と、ぴんと張り詰めた突起が顔を出す。
「……っ」
一度見ている。見ている筈なのに。
こんな、傍から見れば無理矢理しているようにしか見えない体勢というせいもあるのだろうか、やけに興奮する。
このまますぐ下も脱がそうと思ったが――思いながら、手は自然と双丘に伸びていた。
ふわりと手のひらで柔肉を包み込むと、一色の身体がぴくんと跳ねて息遣いが荒くなる。
「あふあ……んっ……ふふ、なんですかーもう。脱がせてくれるんじゃないんですか？」
頬を紅潮させながらも、包容力のある笑顔で優しい言葉をかけられてどきんとする。
「あ、や、すまん。つい」
率直に言いながら、もみもみ。
「んっ……ふうっ、くふぅっ……」
一色はうっとりした顔で、足をくねらせている。
しばらく揉んだところで、よし、軽くキスして下を脱がそう……と口を近付けて、唇を重ねた瞬間。
「んふううう……っ!?」
「……っ!?」
一色が目を見開いて、身体をびくつかせた。さっきも敏感になっていたけれど、なんだろう、今のは更に……？
好奇心が湧いて、乳房を優しく揉むのは変えないまま、口内に舌を侵入させる。
「んんんん……っ！　んっ、ふうっ、んっく、ううううっ！」
胸を触る手の動きよりも、口内の舌の動き1つ1つに敏感に反応して、くぐもった喘ぎ声を漏らす。シーツを掴んで身体を震わせる様

は、本気で感じていることを俺に知らせた。
……これは、もしかしたら……。
更なる好奇心が湧き出す。仮説の検証の為に唇を離して身体も馬乗りに戻ると、すっかり蕩けきった表情の一色が、潤んだ目で俺を見上げた。
「せ、せんぱい、わたしさっきからおかしいです。いくらなんでも、キスでこんな……わたし、わたし……」
泣きそうな声で言う一色の頬に手を添える。
「気持ち良くなる分には構わねぇと思うぞ。だいじょうぶだ、可愛いから」
「か、かわ……っ!?」
ふっと微笑んで本心を告げたら、思いの外効果的だった。なんだよこいつもうこの先ずっと可愛い可愛い言ってやろうか。
慌てふためく一色のセーターを脱がせて、更に顔が赤くなるのを楽しむ。
そして、さて、と腰を上げて、一色の足の方へ移動する。
「……じゃ、下も脱がすぞ?」
聞くと、一色は静かに頷いた。

× × ×

さあ、下を脱がせる――の前に、一つ確認しておきたいことがある。
一色は、ショーツを履いているのだろうか?
晩御飯前に胸をチラ見せして、上は下着を着けていない事を把握していたけど……下がどうなっているかは確認出来ていなかった。料理中の卑猥な攻撃の時も、触れたのは太腿までだったから確認出来なかった。俺どんだけ確認したいんだよ。
なので、まずはそのチェックを――と、スカートを裾を指で摘まんで捲ろうとしたら、一色の声が聞こえた。
「な、なんか……せんぱい、すごい変態さんみたいですね……」
「……うるせぇよ……」
や、まあ、うん。
全裸で美少女のスカートを捲ろうとしてんだもんね。相当だよね、

うん！　雪原の青もびっくりだ！
気を取り直して、ぺらり。
「……」
履いていた。
履いていなかったらいなかったで物凄く興奮していたし、履いていたら履いていたで……脱がす喜びがあるしな。まあそこはどちらでも良しとしよう。
一色をちらりと見る。
「……っ」
腕を交差させて口元を覆い、ふるふると震えている。やはり恥ずかしいのだろうか。
「……じゃあ、脱がすぞ」
言って、一色の太腿に手を添えると、一色がびくっと震えながらも頷いた。
まずはスカートを……と思い、スカートのホックを探してぱちんと外す。
「……」
……わぁ……。
ショーツ1枚のみの姿になった一色に見惚れる。待ち受けにしてえなぁ……。
続いて、ショーツに手を掛けると、下腹部周辺が一際熱と湿り気を帯びていることに気付く。
ごくり、と喉が鳴った。
そして、期待感に包まれながらずるりとショーツを少しばかり下げると、薄い叢が見えて、そことショーツとの間にぬめった糸が光っていることに気付いた。
「一色……これ……」
無粋にも程があると思いつつも、ついつい尋ねながら視線を向けると、一色は手で顔全体を覆っていやいやと首を振っていた。なんだよもうこの子可愛すぎて死んじゃう。
そのままショーツを膝まで下ろして身体の位置を一旦変え、足から

ショーツを抜き取る。その間も一色は顔を手で覆っていたが、腰を浮かせる等の協力はきちんとしていた。律儀なヤツめ……。
一色が一糸纏わぬ姿になったところで、彼女の手を掴んで顔から外した。
「はう……」
隠す物が無くなって真っ赤な顔を覗かせる一色は、たまらない程愛らしい。
「お前の身体を全部見たいんだ。良いか？」
「……は、はい……」
伝えると、一色は観念して腕を頭の横に投げ出した。
× × ×
「……」
「せ、せんぱい……？」
何も言わない俺に対して、一色が心配する声を上げた。
「あ、わりい。見惚れてた」
「はう……」
本当にそうとしか言いようがなかったので、しょうがない。
一色の身体を上から下まで見つめると、思わずため息が出る程美しかった。
亜麻色のセミロングの髪、愛くるしい顔立ち、潤んだ瞳、紅潮した頬、細い首や肩、思っていたよりも存在を主張していて色っぽい乳房、美しいくびれ、形の良い小ぶりな尻、そして、既に湿っていてこの後の行為に対してどうしようもない程に期待感を与えてくれる、叢の奥の秘部。
……本当に、こんな子と、俺は……。
改めてそう感じた。喜びに身震いした。
一色の顔を見る。
一色も、まだ目立った愛撫を受けておらずとも、これからの行為に胸を昂ぶらせているのだろう。その視線はとても甘ったるくて熱っぽい。
――さて、ここで先程の仮説の検証に行きたいと思う。

陰部に手を触れることはせず、一色の頬に手を伸ばす。
「ふあ……」
一色がとろんとした目で迎え入れてくれる。そのまま唇を重ねようとして――。
――彼女の後頭部と背中に手を回して、身体の前面を一気に密着させて、唇に吸い付いた。
「んんんんっ!?」
突然の力強い拘束に一色が目をしばたたかせる。舌を侵入させると、先程ショーツ1枚で口付けした時よりも、更に激しく身体が跳ねた。
予想通り、期待通り、と言える。
恐らく一色は、このベッドに上がってからは、「いよいよ自分たちは本番に及ぶんだ」という意識から心と体を昂ぶらせて敏感になっていた。その影響は身体全体に現れているのだろうが、特に敏感で、もはや性感帯とさえ言える唇にその影響が顕著に現れているようだ。そしてその快感も、上着を脱いだことによる興奮で更に高まり、スカートとショーツも脱いで全裸になった今は最高潮に達しているようだ。先程の感じ方を見るに、今なら、互いの素肌を密着させている今なら……一色は、キスで達するんじゃないだろうか？　一色の反応を見て、その可能性は十分に有り得ると考えた。
「んぐっ、んちゅるっ、ちゅぶっ、じゅるるるる……ごくっ、ごくっ、ぷはっ、あうっ、んふうっ、うう、んん、ちゅる、ぢゅるっ、れちゅ、じゅるるる……じゅるるるる……ごく、ごく、ごく、ごく……あう、あうう……」
まだ繋がっていないものの、正に「交尾」と呼べるくらいに、本能的に身体を貪る。一色の口蓋や内頬を舐め回し、歯列の裏を舐り、舌を吸い、唾液を流し込んで飲み込ませる……そのどれもを、激しく音を立てながら行う。
口そのものへの刺激以外でも、抱きしめる力を痛いくらいに強くすると、その分だけ一色の反応も良くなる。まるで乱暴にされるのを望んでいるかのようだ。

唇を離して、一色の名を呼びながら身体を起こし、胡坐をかいたその上に座らせて、足は俺の背中に絡ませた。彼女のへそに肉棒の裏筋が当たった状態で、強く強く抱きしめながらキス――もはや口淫と呼べる行為を続ける。
「あぐっ、れろっ、ちゅぴっ、じゅる、ちゅぱっ、あっ、あう、ひっく、えぐ、せ、せんぱい、んっく、じゅるるる……ごくっ、んはっ、も、や、やら、おかひくなる、おかひくなる……んぶっ、じゅるるる……」
一色の腕は完全に力を無くして、だらりとぶら下がっている。目は虚ろで、身体はずっと痙攣していて快楽の波が大きくなっていることが分かる。
あと一押し――と思い、抱きしめる力を殊更強め、舌に吸い付いて思い切り啜る。
「んふぅぅぅぅぅ……あぅぅぅぅぅ……ひっ、ひっ、あうっ、あっ、あっ、あっ……っ!?」
一色の身体が、びくんと跳ねた。とどめに、舌に吸い付きながらその舌の裏をねっとりと舐め上げる。
「～～～～～～んくぅぅぅぅぅぅぅ……っ！」
反射的に口を離すと、一色は激しく痙攣して天井を仰ぎ、腕の中でくたりと力を失って寄りかかってきた。まるで背骨が無くなったかのようにくにゃりと脱力している。
……一色……本当に、キスでイったんだ……。
その事実に、背中がぞくぞくとした。
さてここからどうしようかと考えていると、一色の目に少しばかり光が戻った。
「せんぱい……わたし、キスで……？」
「ああ、イったな」
「……」
俺の返答に対して、一瞬目を見開いて頬を赤らめたものの、その直後ににへっと笑った。無邪気さと艶っぽさを孕んだその笑顔を見て、下腹部に血液が流れるのを感じた。
――と。

一色の腕が、俺の首に絡まる。腕と足の両方が俺の身体に絡まっていて、交わっていないのが不思議なくらいだ。
「せんぱい……わたし、もうちょっとだけせんぱいを受け入れる準備がしたいです。だから……もっと、してください。……おしおきと思って、めちゃくちゃにしてください」
「……っ」
さっきの行為だって、あれだけ強制的に及んだものなら、おしおきと思われてもなんら差支えないのに（俺はおしおきどうこうをすっかり忘れていたが）。この期に及んで、おしおきを持ち出して更に激しくするのを要求するだと……こいつ、どんだけ……。
ふっと息を吐いて、一色の髪を撫でる。絶頂に至るまでに汗をたくさんかいたのだろう、亜麻色の髪はしっとりと濡れていた。
「……わかった。おしおきしてやるよ。……覚悟しろよ？」
言って、力強く抱きしめる。
「は、はい……いっぱい、してください……」
耳元で、甘えて、震えて、潤んだ声で懇願される。
その声に、どうしようもない程心がざわついた。

続く。

（３５）

一色の足を挟むように膝立ちして、彼女の様子をまじまじと見る。
一色は腕で胸を隠し、足をもじもじとくねらせながら、頬を赤らめてこちらをちらちらと見ている。うん、超可愛い。や、そうじゃなくて。
――おしおき、か……。
何回分かのおしおきがたまってることだし、なるべく恥ずかしいやつを……恥ずかしいやつ……とびきり恥ずかしいやつを……あ。
閃いた。
口から邪悪な笑みがこぼれるのを必死で抑えながら、一色の足先へ移動する。
「一色。……足を開けるんだ」
「……っ」
一色がこきゅっと喉を鳴らす音が聞こえた。
おしおきを望んではいても、羞恥心のキャパを越えた要求だったのだろう、その顔が見る間に真っ赤に染まる。
要求の言葉を続けて紡ぐことはせず、その代りに太腿をさわさわと撫でて圧をかける。すべすべの肌の上で手を滑らせると、一色の身体が可愛らしくぴくんと跳ねた。
「あ……や……そ、そんな……」
躊躇する一色を見て、足を撫でる手を2本に増やす。足先からふくらはぎ、内腿へと、緩慢な動きでしゅるしゅると手のひらを滑らせる。時折尻まで手を伸ばしてきゅっと力を込めると、ひあっとか細い声で鳴いた。
「……」
何も言わず、ただじっと見つめながら……一色の足を嬲る。
足はぴたりと閉じているが、それでも何度も撫で続けていると、徐々に足の根本から甘酸っぱい匂いが立ちこめてきた。
「……なんだ、気持ち良いのか？」
反応が一際大きい太腿と尻を重点的に撫でながら、やっと口を開

く。
「あう……ひっ、ひんっ、やあぁ……っ」
顔を真っ赤にしながら、首をいやいやと振る。
――もっとねちっこくいじめてやろうと思い、一色の首に手を回して、ひょいと上体を起こす。
「ひゃう……っ？」
突然の事態に目を見開いて驚き、きょとんとしている一色の耳元に口を寄せる。軽い呼吸で息がかかっただけでも、ぶるりと全身がわなないた。
「おしおきしてほしいって言ったのは、お前だろ……？　……足を、開けるんだ」
「……っ！」
一色が息を呑む音を聞きながら、口を彼女の唇に滑らせ、そっと重ねる。そして片手を首に、もう片手をベッドに伸ばして、ゆっくりと押し倒していく。
「んっふぅ……ちゅぷっ、ちゅるっ、んはぁっ、んんっ、んんんん……っ！　……んふぅっ？　……んっく、ふぅっ、んふぁっ、ちゅぴっ、ちゅぽ、ちゅぱ、ちゅりゅ、ちゅっ、ちゅっ、ちゅっ……んはぁっ」
さっきの絶頂で殊更敏感になっている一色の唇を、なるべく達する直前まで追い詰めてはそこで止め、また寸前まで追い詰めては止め、と繰り返す。一色がより強い快楽を欲して、下腹部をぐしょぐしょに濡らしながら火照るまで追い詰めて……3度絶頂寸前まで追いやったところで、唇を離した。髪をくしゃりと撫でながら、おでこ同士をこつんとぶつけて囁く。
「ほぅら……ちゃんと言う通りにしないと、ずっと寸止めのままだぞ？」
「……え……」
「ああ、しょうがない、すげえ不本意だけど、今からでも帰るか。出直しだな。電車はまだあるし、今から着替えれば大丈夫だろ。さて……」
こんなのは口だけで、実際は全く行動に移っていないのだけど。

しかしそれでも今の一色には効果抜群だったようで。
「あ、や、やぁっ、せんぱい、帰っちゃ、やだ……お願い、します……、足、開きますからぁっ……」
潤んだ目で見つめて、抱きしめてきた。
「……うそだよ。お前の反応が見たかっただけだって。ごめんな。俺だって絶対帰りたくねぇよ」
内心一色の懇願にのたうち回りながら、ふっと笑って真意を告げる。
俺の言葉を聞いて、一色は安堵の表情を浮かべ、別の感情が起因して涙ぐむ。俺の胸に顔をうずめて、おでこをくしくしとこすり付けながら、猫撫で声を出した。
「あうう……せんぱいの、オオカミ少年～……」
「……」
一色の頭をぽんぽんと撫でながら、考える。
……俺、そんなにうそつきまくってたっけ？　言葉のチョイスおかしくない？

× × ×

「じゃ、どうぞ」
「あうっ……」
再び足先に移動して、今度は胡坐で御開帳の様を拝見することにする。なんか凄い神聖なものを拝むみたいな言い方になった。まあ、実際神聖なものと言ってもなんら差支えないと思うが。
一色はしばらくもじもじした後（今回は俺は何も言わない且つ全く触らないでいた。それはそれで物足りなそうにしていたから、ほんとこいつどんだけMなんだよと思った）、やがて意を決した顔で、腕は胸を隠したまま、ゆっくりと足を広げ始めた。
ゆっくり開いていく足の真ん中が徐々に見えてきて――。
「おお……」
思わず、感嘆の声を上げた。
姿を現した初々しい秘部の中に、綺麗な桃色をした一対の花弁が見える。かすかにひくつく様を見ているだけでも息を呑んだが、それと

同時に、酔ってしまいそうな程の新鮮で馥郁な芳香が鼻腔に甘ったるく染みわたる。
「あ……う……」
一色は両手で顔をすっぽりカバー。顔は見えないけれど、耳が真っ赤なのでもはや見るまでもないだろう。なんだよこの子可愛すぎだろもう。
――でも、これで満足する訳もない。本当のおしおきはここからだ。
「一色……ちょっと、もっとよく見たいんだ。手で広げてくれるか？
見えやすいように」
一色の身体の動きが、綺麗にぴたりと止まった。
手を横にずらして片目だけを覗かせながら、ぽそり。
「……そ、それ、本気で言ってますか？」
一色の問いに、至極真剣な表情で頷く。
「ああ、本気。超本気だぞ」
「……それ、断ったら……どうなりま」
「さあて、帰る準備を――」
「やぁっ！」
「むおっ!?」
さっきと同じで台詞だけだったのだけど……一色は俺の言葉にびくんと反応して、猛スピードで上体を起こして俺に抱き付いて来た。
俺の顔ｉｎ一色の胸。
「や、やです、せんぱい、帰っちゃやです。今夜はせんぱいと居たいんです。帰っちゃやだぁ……っ」
俺を柔らかな胸で包んだまま、一色がいやいやと首を振る。その動きに合わせて俺の首もゆらゆら。……あかん、死んでまう。ほんの数日前から今にかけての短い時間で、どんだけデレてんだこの子は……。
柔肉から顔を脱出させ、一色を見る。若干見上げるような形になって、なんか本当に一色の子どもみたいな気分になってすげぇ恥ずかしい。

「……まぁた釣られやがって。うそだよ、全く。ごめんな？　ていうかお前、可愛すぎだろ。なんだよ今の駄々っ子感は」
「あう……」
ぷしゅうと湯気が漏れた。
……うーん、本当に悶え死んでしまいそうだ……。
「……開いて見せてくれるな？」
抱き締めながら聞くと、
「……はい」
一色は掠れた声で頷いて、俺の首にちゅっと口付けをした。
続く。

（３６）

一色が自身の性器を自らの手で広げて見せるという、本人からすれば恥ずかしさで死んでしまいそうであろう行為を、彼女は震えながら了承した。

「……っ」

いきなり触るのは恥ずかしいと思ったのか、まずは内腿に手を置く。彼女の羞恥と興奮を掻き立てるように、ふくらはぎに触れて撫で回すと、身体を震わせながら一色が涙声を漏らした。

「……あぅ……はっ、はぁっ、あっ、あぁっ……」

今にも泣きそうになりながらも、その両の手はゆっくり着実に大事な部分へと向かっている。

やっとのことで大陰唇まで手の指が辿り着くと、ぷはぁっと緊張の糸が切れたように大きく息を吐いた。……まだまだ、これからではあるのだけれど。しかしそれでも、きちんと褒めよう。追撃とセットで。

「よく頑張ったな、えらいぞ。……じゃあ、仕上げにここを広げてみせてくれ」

言って、一色の秘部に顔を近付け、息をふっと一吹き。

「ひあぅぅっ!?」

――たったそれだけの行為で、一色の身体がびくりと飛び跳ねた。

「ほら、頑張れ頑張れ」

急かしながら、今度は肉芽に狙いを定めて、唇をきゅっとすぼめて息を吹きかける。

「あぁぁあ……っ！」

一色が顔を真っ赤にしながら、手を下腹部に添えたままびくびくと震える。

薄めのヘアから立ち込める濃厚な匂いとあまりに愛おしい反応に誘われて、目の前の果実につい口を付けてしまいそうになるけれど。

それを、平静を装いながらも内心必死で堪えて、一色の身体を快感で急かし続ける。

「……わか、り、ました、か……らぁっ、ひぃんっ!?　も、もう、やんっ、息……かけないでぇ……っ」
身体を硬くしながら懇願して、震える指をそっと小陰唇に添える。
そして、躊躇しながらもゆっくり確実に、恥肉の扉をくぱぁっと開けていく。
「……」
その一部始終を、まるでスローモーションで見ているかのような集中力で凝視する。
顔を出した膣口を見て、ここに自分の欲望の象徴が入るのかと思い、心が震えた。
「うぅぅぅ……恥ずかしいよぉ……っ」
さっきまで顔を隠していた手は、今は羞恥から守ってくれるどころかその恥ずかしさを爆発的に助長させている。逃げ場の無い羞恥心にやられてしまい、一色は首まで真っ赤にしながら泣きかけている。
――と、ここで、ある現象に気付く。
「……っ！　一色、お前……」
「……え？」
「今、つつって、何かが……」
「ふぁっ!?」
凝視していた膣口から、粘っこい液体が零れたのを確かに見た。
その光景に、一気に官能が高まる。
……これだけ恥ずかしがっていても、きちんと濡れるんだな。いや、恥ずかしいからこそ濡れるのか。
今後、しっかり勉強してこの子をいじめて開発しようなんていう、恐ろしい決意を心の中でしっかりと固めた。
「一色……指、入れるぞ」
秘裂に触れそうで触れない位置に手を留めて、そっと囁く。
「……はい……」
律儀に秘部を押し広げたまま、一色が答える。
「……手、外して良いぞ」
言うと、そっと手が離れた。思わずその手を掴んで指の間を舐める

と、これまた可愛らしく口をぱくぱくさせて鳴いた。

×　×　×

指をぴとりと秘部に宛がうと、しっとりとした湿り気を感じた。

優しく、丁寧に、優しく、丁寧に……。何度も頭の中で反芻しながら、中指を膣口に当て――つぷりと挿入した。

第一関節が温かで窮屈な水たまりに浸った――その瞬間。

「――――――っ」

「え……？」

一色はひゅっと呼吸音を小さく出して、ベッドのシーツを強く握り締めて背筋を弓なりに反らせて痙攣した。

「一色……？　お前、まさか、今のだけでイって……？」

……まさかそんな、いくらなんでも。……でも、既に敏感の極みになってるであろうことを考えると有り得るか。第一キスでイったんだし。……なんて考えながら尋ねると、一色は僅かに顔を持ち上げた。

「あ、あうう……イってはない、ですけ、ど……ちょっと、ヤバいです……」

「……そうか」

ここで、いくつかの選択肢が浮かんだ。

①ガンガンイこうぜ

②ねっとりイこうぜ

③よういにイかすな

「……」

「……せ、せんぱい……？」

「……うん、③だな」

「……何言ってんですか？」

思わず声に出てしまった。一色も久しぶりにいつもの感じ。お久しぶりです！

反応を確かめる為に、ゆっくりと第2関節まで指を滑り込ませて、そこからゆっくりと抜ける直前まで引く。

「くっふぅ……んはぁっ、あっ、あぁっ……」

先程に比べると心構えの違いからか、反応は大きいものの幾分か落ち着いていた。
もう一度第2関節まで挿れて、今度は引き抜かずにくいくいと折り曲げる。
「ひぃんっ!? あっ、あっ、あっ……」
一色が頬に手を当てて、目を細めて俺を見つめる。むわっと立ち込める女の匂が心地良くて、ぼんやりと視界が霞む。
指の位置を変えずに指の折り曲げを繰り返すと、徐々に一色の身体に押し寄せる快楽の波が増していく。
「あっ、くひぃっ、ひぐっ、あくぅっ、やっ、これ、ダメ、やっ、あっ、あっ、あっ、あっ……」
華奢な肢体ががくがくと上下して、こちらを見つめる目の光も淡くなっていく。
「……」
少しだけ、ほんの少しだけ、指を動かす速さを上げると――。
「あふぁっ!? あっ、ひぁっ、せっ、せんぱっ、いっ、イク、イク、イっちゃうよぉ……っ！」
ぴたり。
一色の身体が一際大きく痙攣する――その直前に、指の動きを止めた。一色はもう達する気満々だったのだろう、大きな波が自分に襲い掛かる事無く消え去った事がまだ現実として呑み込めていないのか、潤んだ目で首を傾げている。
「せ、せんぱい……なんで……？」
小動物のような、庇護欲をそそられる目をして、純粋無垢な質問を投げかけてくる。
そんな一色の腰に手を添えて、にこりと笑う。
「おしおき、って言ったろ？ ……こんなもんじゃねぇぞ」
「え……ひぃんっ!?」
挿入した中指の関節を、再び深く折り曲げた。
× × ×
「あっ、あっ、あっ、もっ、もうだめっ、いっ、イクっ、イクっ、イっ

……。……あぅっ……止め、ないでぇっ……」
「あっ、あっ、あっ、イクっ、もっ、すぐイっ……うう、やだぁっ……」
「あっ、あっ、イク、もうイっ……うっ、ひっく、やらぁっ、イカせてぇ……イカせてよぉ……っ」
一色が泣きながら懇願するのを、ぞくぞくしながら見つめる。
今この部屋に聞こえるのは、俺の指が一色の肉襞をかき回して生じる水音と、一色の泣き声と喘ぎ声、そして興奮で荒げるのを必死で抑えている俺の呼吸音だけだ。
時間がどれだけ経ったのかも分からない。
一色の淫肉の中を指の腹でかき回しながら、彼女の表情をよく観察して、イク寸前で止めるというのを何度も何度も繰り返した。
そうは言っても、同じ膣への刺激を何度も続けていると、絶頂に達しそうになるまでの時間もどんどん短くなってくる。そこで、これ以上続けると、もはや指を挿れただけでも達してしまうなと判断すると、一度指を抜いて下腹部をじっくりと撫で回して、へそを舐めながら休憩がてら緩慢な責めを行った。一色はこの一連の流れにより、一度膣内への愛撫で高まった感覚が、0とまではいかないものの大方リセットされるが、身体全体の昂ぶりは一定の程度を強制的にキープさせられるという状況になる。
膣を嬲り、その合間に下半身を緩慢に責め、再び膣を嬲る……この流れを、何度も何度も繰り返す。
――生かさず、殺さず。
正にこの言葉がぴったりな状況だった。
「えっく、ひっく、もう、お願いらから、イカせて、イカせてください、お願いしますぅ……っ」
涙をぽろぽろと零す一色の頬に手を添えて、そっと口付けをする。発情した獣同然の状態だから、てっきり唇が触れ合った瞬間に舌を入れてくるかと思ったのだけど、目を閉じて涙を流しながら俺の唇をあむあむと咥えてきた。あーもう抱き枕にしたい。よし、今度やろう。
「……そうか、イキたいのか」
髪をくしゃくしゃと撫でながら聞くと、一色が口をきゅっと結んで

こくこくと頷いた。
「イキ……たいです。せんぱい。イキたいです」
髪を撫でていた俺の手を掴んで自分の頬に当て、愛おしそうに頬ずりをする。その姿はあまりに愛おしく、あまりに嗜虐心をそそる。
「……じゃあ、イカせてやるよ」
「ほ、本当ですか……っ！　……って、え、あれ……？」
喜びも束の間で、一色は予想していない事態に面食らう。
俺は、一色の肩を挟む形で膝立ちになり、彼女の目の前に肉棒が陣取るようにした。
「……どうした？　お前を今からイカせようとしてるんだが」
言って、肉棒で一色の顔をぺちぺちと叩くと、「あうぅ……」と可愛く唸った。なんか俺大正時代の成金みたいだな。どうだ明るくなったろう？
一色は俺と肉棒を交互にちらちらと見て、状況を整理しているようだ。やがて、おずおずと口を開いた。
「せ、せんぱい……そ、その、せんぱいは、今からこれをわたしの口に挿れようとしてる……んですよね？」
「そうだ」
「あ、あの……わたし、それでイケるかちょっとわかんないです……」
「キスでイったのに、か？」
「……っ！」
一色の顔がぼっと真っ赤に染まった。
そして一度顔を横に向けたかと思うと、目だけでこちらを見る。そして迷った末に受け入れる覚悟を決めたのか、竿に両手を添えた。その瞳は儚げに、けれど確かな熱を帯びて揺れている。
「……行くぞ。口開けて。なるべくいやらしく、な」
ねっとりとした口調で命令すると、一色が震えながらも口をゆっくりと上下に大きく開き、俺の肉棒を迎え入れんと舌を出した。口の中でぬらりと光る唾液が劣情を煽る。
この先どれ程の快感が待っているのだろうかと心を躍らせながら、一色の口に狙いを定めた。

続く。

（３７）

暖房を消してからしばらく経っていて、恐らく昼間に初めてこの部屋を訪れた時と同じくらい室温が低くなっているはずだが……俺も、一色も、じっとりと汗ばんでいた。

時間感覚が無くなり、ここが一色の部屋という認識さえ薄れている。

「……」

仰向けで横たわる一色の肩を挟む形で膝立ちになり、期待に胸を膨らませながら身体を傾けて、くぱっと開かれた彼女の口にゆっくりと肉棒を近付ける。

口の前まで亀頭が近付いたところで、一色は物欲しそうに尿道口をちろちろと舌の先でつついて、

「……あむっ」

そのまま、亀頭の前半分をぱくりと咥え、そこからずるずると亀頭全体を飲み込んでいく。

「う……お……っ」

予想を超える吸引力に面食らって、亀頭を咥えられたままよろよろと四つん這いになる。一色の口に、肉棒を真上に近い角度から突き立てる形になった。あれ、これ攻守逆転してない――？　なんて冷静に考えていられたのも束の間。

「くちゅっ、くぽっ、じゅぷぷっ、ぐちゅぽっ……」

「あっ……うあっ……」

一色が首を僅かに上げては俺の肉棒を引っ張って、徐々に咥える部分を増やしていく。その吸引力と、吸引された場所に加えられるたまらない快感に我慢出来ず、徐々に足を広げて、ベッドに突き立てていた腕も崩れ落ちていく。

「ぐぷっ、ぐちゅっ、ぢゅりゅっ、じゅぽっ……」

ぶるぶると震えながら、根本まで咥えられた肉棒に目をやる。

「……っ」

そこで見たものに、息を呑んだ。

一色は信じられない程うっとりした顔で、俺と同じくらい、いやそれ以上に身体を震わせていた。手はシーツをあらん限りの力でぐっと掴んでいて、足をもじもじとくねらせているのが視界の端に見える。

ああそうか、この子は待っているんだ――。

気付いたら、後はもうやるだけだ。

畳み掛けていた肘を伸ばし、上体をぐっと起こす。

そして、意を決して肉棒を熱い舌が蠢く口から引き抜きにかかる。

「んんっ……？　じゅぽっ、じゅぷぷぷぷ……」

「うっ……くぁっ……」

決して離すまいと、唇をすぼめて竿を締め付けてくる。その刺激だけであっと言う間に果ててしまいそうになるのを我慢しながらも、亀頭より手前の竿の部分まで抜くことに成功した。カリが唇に引っかかっている状態で、一色は唇による締め付けの強さを巧みに変えながら、舌で亀頭全体を丹念に舐り回してくる。気を抜けば射精どころか気を失ってしまいそうな気持ち良さだ。

「一色……行く、ぞ……」

快感に打ちひしがれて、か細い声で囁くと、一色が「うん？」と視線を上げた。その僅かな動きでも咥えられる角度が変わって、また違った刺激が電流のように頭の中を駆け抜ける。

次の瞬間――腰をくんっと下ろし、一気に一色の喉奥まで肉棒を突き立てた。

――と。

「～～～～～～～!?」

一色が目をばちばちとしばたたかせ、背筋を反らしてがくがくと痙攣した。達したかどうかは本人に聞いてみないと分からない微妙なラインだが、生憎と本人の口は塞がっている。

それなら……続けるしかないよな、うん。

一色が脱力したことにより、舌と唇による極上の刺激が一気に減った口内から再び肉棒を引き抜く。今度は尿道口が一色とキスする位置まで完全に引き抜いてから、ゆっくりと紅い割れ目に挿入してい

く。
じゅぐっ、ぐぽっ、ぐぽぽっ……。
唾液と先走りの汁でいやらしく泡立って、口という性器に欲望の塊が入り込んでいく。一色は今にも意識が飛んでしまうのではないかという程虚ろな目で、緩慢な動きで舌を絡ませながらも肉棒を受け入れる。
もう一度喉奥まで突き立てた所で、理性の糸がぷつぷつと音を立てて切れた。
「一色……っ！」
「んぶぅっ!?」
肉棒を一気に引き抜き、今度はどこまで抜いたかも気にせずに乱暴に突き立てる。
「ぐぷっ、おごっ、じゅぷぷぷ……かはっ、あがっ、うぐぅっ、えぅぅぅ……」
口への激しい抽送に、一色は苦しげに、しかしどこか嬉しそうな喘ぎ声を漏らす。その反応がたまらず、足を広げては閉じ広げては閉じを繰り返して、どうやったら一番効率良く支配欲を満たせる動きが出来るかを考えながら、一色の口をひたすらに蹂躙する。
「うっ……あっ……一色、俺、もう……っ」
ピストンを続けながら、徐々に湧き上がるマグマの奔流に身を震わせる。
「うぐぅっ……んっ、んっ……んっ」
肉棒に口を力づくで犯されながらも、一色が涙目で頷いた。
——たまらなく愛おしくて、どうしようもないほどに壊したい。
そんな感情が湧いて、一際大きく肉棒を上に引き上げる。
そして最後にぐぱんっ！　と音がする程強く突き入れると。
「————っ」
一色は大きく震えて、口の中の締め付けを一気に強めて……。
ごぶっ、どぶどぶっ、ごぶぶっ……。
「……うあっ、あぁっ……」
凄まじい倦怠感が生まれる程の射精をして、大量の白濁液を一色の

口に流し込んだ。
「ごくっ、ぐぷぷっ、んぐっ、ごくごくっ、……んっ、んっ、んんんっ……」
喉奥に叩き付けられた精液を、苦しそうにしながらも飲み干す。
魂が抜けた感覚に襲われながらも気だるい身体を起こすと、一色がベッドに腕を投げ出した状態で、艶やかに目を細めた。
「せん……ぱい、濃いよぉ……っ。……もっと、もっと、おしおき、してくりゃはい……」
「……っ」
舌っ足らずな喋り方で懇願して、ふるふると震えながら口を開け、いやらしく舌を垂らす。
「……お、お前なぁ……っ」
そのあまりの色っぽさに釣られて、一色の頭を掴んだ。

× × ×

「ふぁっ……？」
一色の頭を掴んで、その上体をくいと起こす。
そして、一色の前に仁王立ちして、射精直後にも関わらず猛り狂った肉棒を、一色の口の前に突き出す。
さっきの体勢も非常にそそるものがあったが、無理やり口を犯すならこの体勢の方が楽――そう思ってこの体勢にした。
一色の後頭部を両手でがっちり固定して、亀頭を一色の瑞々しい唇にキスさせる。一色は愛おしそうにちゅぴちゅぴと吸い付き、舌先でつつく。
「行くぞ……」
再び宣言して、ゆっくりと一色の唇の中に押し入る。
女の子座りをした一色の身体からは力がすっかり抜けているが、口だけは俺のモノを受け入れる気満々で、上唇と下唇が亀頭を挟み込むと、俺が押し込まずとも勝手に全部飲み込む勢いで吸い上げてくる。
今度は初めからめちゃくちゃにするつもりで、喉奥まで達した時点ですぐに引き抜こうとした。

――しかし。
「うっ……あぁっ……!?」
一色が俺のひざ裏を掴んで自分の方へぐんと引き寄せ、喉奥まで咥え込んだまま離そうとしない。亀頭も竿も丸々飲み込まれて、喉奥のざりざりした感触や熱を帯びた舌の舐りによる快感に、あっと言う間に身体が痺れる程感じてしまう。
「こ、こら、一色。お前、これじゃあおしおきにならな……うくぁっ……!」
「んふぅっ、くちゅるっ、じゅぱっ、ぐちゅっ、ちゅぷぷ、ちゅるるる……じゅぷっ、ずぞぞぞぞぞ……」
一色の頬がいやらしく歪み、カリを唇で締め付け、裏筋を前に後ろにと舐り回してくる。雄と雌の体液が交わり合い、頭がくらくらする匂いを発していて、更にその下から、どんどん濃くなる雌の匂いがする。目を下にやると、唾液が一色のあごを伝って胸まで垂れて、一色の足の根本のシーツの染みは更に広がっていた。
腰が抜けそうな程の快感の奔流にあごを震わせながらも、一色の頭を強く掴む。
「お前……な……いい、加減に……しろっ」
強引に口から肉棒を引き抜き、抜け落ちる直前で止め、そこから一気に貫く。
――ぐぷぷっ。
「おごっ……」
短い声を上げて、一色は目をしばたたいてがくがくと震え、俺のひざ裏を掴んでいた手はだらりと下げられた。俺を見つめているようだが、その焦点は定まらない。
「はぁっ、はぁっ、……ようやく離したな……一気に行くぞ」
言って、ゆっくりと腰を引く。
そしてここからは一気に……。
――ごちゅっ、ぐぷぷ、ずりゅっ、ごちゅっ、ぐぷぷぷ、ずりゅりゅっ、がちゅっ、じゅぷぷ、ずぐりゅっ……。
「あぐっ、んんんっ、えぉぉっ、ひぐっ、んんんっ、おぉぉっ、あぐっ、

んむぅぅ、あぇぇぇ……」
一気に喉奥に突き立てて、ぐりぐりと捻じりながら押し付けて、ゆっくり引き抜く。その動きを何度も繰り返す。引き抜いた時に見える一色の股間からは、大量の熱い液体が噴き出していた。
何度か繰り返すうち、一色が再び俺のひざ裏を掴んだ。
「……イクのか？」
耳の中に指を入れて嬲りながら聞くと、一色がこくこくと頷いた。
「そうか。じゃあ……一気に行くぞ」
最後に向けて、一気に腰の動きを速める。
――ごちゅん、じゅごっ、がちゅっ、じゅりゅっ、じゅぱんっ、ずるるるっ、どちゅん、ぐぷぷぷ、ばちゅんっ……。
「あがっ、あぐぁっ、うぐぅっ……」
一色の顔は苦悶と喜びに満ちていて、涙目になりながらも幸せそうな顔をしている。その表情を楽しみながらも抽送を繰り返し、やがて――
「んっ、んぐぅっ、んっ!? んっ、んんっ、んっ、んっ、……んぐぅぅぅぅぅ～～～～～～～～っ！」
喉奥に亀頭を押し当てた所で、一色が長い喘ぎ声を上げて全身を激しく痙攣させ、手を離し、肉棒から口を離し、ふらりと身体が後ろに傾いた。
「うおっ、とぉ……っ!?」
なんとか背中を抱きとめ、ゆっくりとベッドに寝かせる。
「あぁっ、あっ、あはっ、ひゅごいっ、せんぱっ、うぅぅっ、きもひ良い……よぉ……っ」
「……っ」
足をくにゃりと曲げてもじもじとしながら、恍惚の表情で俺を見つめる。
互いにどろどろに溶けあう程の、疑似交尾。正直、これだけでも相当満足している。
――でも、最後には、やっぱり――。
「一色……」

一色の足元に腰を下ろして、膝を押さえて広げようとすると、小さい声で「ひぁっ……」と声は漏らしたものの、あっさりと開くことが出来た。
「すっ……げ……っ」
ぐしょぐしょに濡れて、濃厚で甘酸っぱい雌の匂いが鼻腔を犯す。絶頂に達する前に口淫が終わって、欲求不満だった肉棒が更に凶暴になる。
……ここに……今から、俺のを……。
「一色……もう、大丈夫だな？」
喉をごくりと鳴らして、一色の目を見つめた。
続く。

（３８）

「ひぅ……えっく、ひぐっ、ちゅぴっ、んふぁっ、れろっ、ひぅぅっ……せんぱい、せんぱいぃ……」

震えながら、恍惚とした表情で一色が口に纏わり付いた白濁液を舌で舐め取り、舌が届かない所は指で掬ってちゅぽっと指ごと咥えて舐めとる。開いた足を俺に絡ませるようにこすりつけながら行われるその行為は、あまりに扇情的で――。

「一色……もう、行くぞ？」

つい、気が急いてしまい、一色の返事も聞かぬままに竿に手を添え、亀頭を秘裂に当てがった。

「ひっ……！」

「え……」

一色の身体がびくっと震えたことに驚き、腰を止めて一色の顔を見る。さっきまでのような、いやがりながらも求めるような反応ではなく、本気で怯えているような……。

「あ……」

鏡を見た訳では無い。見た訳では無いが、それでも何となく分かった。

きっと今の俺は、今までの行為から考えればこのまま最後まで行って大丈夫だろうと、肝心な所で一色への心遣いを欠いて性欲を滾らせている、濁った獣の目をしている。

頭をいつもより強めにがしがしと掻いて、一色を見つめる。

「……わりぃ、ちょっと焦りすぎた」

言うと、一色がはっとして、困ったように眉根を寄せた。

「あ、や、そんな、違うんです、先輩が悪いんじゃないんです。あれだけおしおきしてくださいとか言っておいて、先輩が興奮しておサルさんモードにならないわけないですよね」

「おサルさん言うな……」

ぐうの音も出ねぇけど。

「そこまでは分かってたんです。だけど、その……あ、あはは、ここま

で来て、いざ……となると、尻込みしちゃったんです。ほんと、情けないですよね、めんどくさいですよね、……ほん、と……」
「……一色……？」
一色が腕で目を覆う。小さく嗚咽の声が漏れる。
「……ご、ごめ、なさ……い……早く、先輩に全部あげたいのに……あげたいのに……なんで、こんなに怖くなっちゃうの……っ」
「一色……」
ひっく、ひっくと聞こえる一色の顔に手を伸ばし、温かな水を拭う。震える口元に気付き、胸がきゅんと締め付けられた。
俺は、この子に、何が出来る。
こんなに俺のことを思ってくれる、この、生意気で可愛くて強引で……本当に素敵な女の子に、何が出来る。
――必死で考えを巡らせると、ある一つの考え……言うべき言葉が浮かんだ。今の俺なら、この子にこの言葉を伝えたい。きっと今なら出来るし、この子にとっても必要な言葉だ。そう思える。
……。
……。
……。
「……」
ああでも、恥ずかしい。もう超恥ずかしい。分かっちゃいるけど、本当に言うのか、俺。小学校の先生をお母さんと呼んだ時の２０００倍くらい恥ずかしい。どうでも良い比較対象を持ち出しちゃうくらいには恥ずかしい。どうしよう、死んでしまいそうだ。分かってる、分かってるんですよ？　一色の為に今こそ勇気を振り絞って伝えるべきなんだって。ところがどっこい、今までこんな本気と言える言葉を弾みでも何でもなく確信を持って相手に伝えたことなんて無い訳ですよ。例えるならそう、今からやろうとしている行為は、はじめてのおつかいで「はちみつとバンダナと官能小説を買ってきて」というくらいの難易度だ。はちみつって何扱いなんだよ。調味料コーナー辺りかなと思って行ってみても置いてなくて、隣のホットケーキの素の横に置いてあったりするし。どんだけ曖昧な存在なんだよ。ホッ

トケーキの扱いもよくわかんねぇし。バンダナなんてもはや大人でもどこに売ってあるか分からんぞ。思わずググったら１００均で売ってるとか書いてあったけど近くに無い田舎ならどうすんだって話だよ。ダイソーが全都道府県にあったって、自宅の近くにあるとは限らん訳だ。結局服屋で「あの……バンダナってありますか？」と聞いてハンカチコーナーに連れて行ってもらったりする。極めつけは官能小説。何その指定。エロ本でもないんだ。本屋さんでＲ―１８コーナーをチラ見するも一部しか見えず、散々迷って男性店員やおばちゃん店員に聞こうとするも、おどおどしている間に別用でそれらの人が目の前から居なくなり、最終的に若い女性店員に「あの……官能小説って、どこにありますか？」と聞くというセクハラ全開の行為になる訳だ。まあはじめてのおつかいをやる歳に依るんだろうけど。ていうか子供に官能小説買いに行かせるって前提がおかしいですかねおかしいね。

……。

こんなどうでも良いことを全力で考えてしまうくらいには恥ずかしい。本当に恥ずかしい。死んでしまいそうだ。なんならこれから、何でもは知らない、知ってることだけ知っている委員長の中の委員長のパンチラシーンのごとく４ページ分の尺と同じくらいの長さで、この恥ずかしさをあの手この手で例えて、老若男女問わず俺のこの恥ずかしさに共感してもらいたい。

「……」

流石に迷い過ぎた。一色は頬に添えられた俺の手を握って、「先輩……ごめ、なさい……」と今も消え入りそうな声で謝っている。

「……」

ああ、もう。

こんな自分がイヤになる。

いい加減腹を括れ、比企谷八幡。

一色に添えていた手を離し、両手でばちんと頬を叩くと、一色が「ふぇ……？」と戸惑いながら首を傾げた。なんだそれ超可愛いな俺。

不自然極まりない回数の咳払いをして、一色の身体に覆いかぶさっ

て抱き付いた。
「ふあぁ……？」
可愛らしい戸惑いの声を上げる一色を、目一杯優しく抱きしめる。その力を緩めて、おでこ同士をこつんと当てた。互いに目の逸らしようもない程の距離で、深く穏やかに息を吸って、躊躇いに躊躇った言葉を一色に伝える。
「いろは。好きだ」
「……へ？」
一色の……いや、いろはの時間が、面白い程ぴたりと止まった。
まだ言葉が飲み込めていないのか、頭の上に大量のハテナが浮かんで……あ、消えた。それと同時にいろはの顔が見る見る真っ赤になっていく。
「な、なな、え、せ、先輩、今、え、えええ……っ!?」
「そんなに驚くことなのかよ……ったく」
あのな、と、声音を柔らかくして言葉を続ける。
「だから、その……俺は、いろは、お前が好きだ。大切にしたい、大切にする、大切にしていく。……だから、その……そんなに全部やってくれようと、そんなに全部頑張ろうとしなくて良いと思うぞ。……ゆっくり、二人で、やって行けばいいんじゃねぇか、な……」
死ぬ程恥ずかしいどころかオーバーキルも良い所だが、それでもなんとか言いきった。恥ずかし過ぎてもはや3ヶ月程休暇を頂きたい。そしたら好きなラノベの次巻が軒並み発売されているだろう。
いろははどんな反応を返すのかと思っていたら、
「え……」
予想の斜め上を行く反応を見せた。
「あ、あぅ、あぅぅ……」
ぽろぽろと止めどなく溢れ出してくるのは、紛れもない涙。でも、今のこの涙はさっきと違って、きっと――
「うっ、うぇっ、ひっく、うあぁぁぁぁん……なんですか、なんなんですか、このタイミングでなんて、ずるいです、ずるずるです、うぇ、うぇぇぇぇぇ……っ」

「お、おい……」
いろはが声を上げて泣き始める。ずるずるに対してツッコんでいる場合ではなさそうだ。
ひっくひっくとしゃくり上げながら、俺の背中にきゅっと腕を回す。どうしようも無い程優しくて温かい肌の感触に、心が解けていく。
「ひっく……せ、先輩、えっく、ひっく、……好きです、大好きです、うえぇぇぇ……っ」
「……っ」
いろはのストレートな言葉に、胸を撃ち抜かれる。
「せんぱい、せんぱい、せんぱいぃ……っ」
「いろは……っ」
涙で潤んだ綺麗な瞳を見つめて、ゆっくりと唇を重ねた。
× × ×
「んっ、んふぅっ、ちゅっ、ちゅぴっ、ふむぅっ、ちゅぷっ、ふぅっ、んっく……」
何度も唇を交わらせ、舌を絡め合う。愛情を交換し合うこの行為は、至福とも言える時間だった。
「……ぷはっ、えへへぇ……せんぱぁい……大好きですぅ……」
唇を離しておでこをこつんと当てると、いろはが幸せ一杯の表情で微笑んだ。
あ、これあかんやつや。
死ぬ。
「そ、そうか……」
ちょっと待って、何このデレ具合。行動だけでなくはっきりと言葉で言われるとこうも破壊力が上がるのん？
目だけ必死に逸らして、高まった鼓動が静まるよう心の中で般若心経を唱えようとしたが、全く分からなくてすぐやめた。なんでチャレンジしようとしたのかって話だが、まあ動揺したからですよね。
俺の反応を見て、いろはがぷくっと頬を膨らませた。
「むぅ……先輩、わたし、先輩のこと、好きですよ、大好きですよ？

先輩はどう思ってくれてるんでしたっけ？」
「ぐぅ……っ」
いろはに視線を戻すと、それはもう楽しそうに笑っている。こ、こいつ……っ！
「言ってくれないと、ずっとこのまま離しませんよ」
「それはそれで……や、なんでもない、なんでもないから」
やめろやめろ、自分から言った癖に照れるな！　可愛いだろうが！
「……言ったらどうなるんだ？」
「え？　んー……」
考えてねぇのかよ。
「……一生離さない、とか！」
にぱっと笑って言ってますけども。え、それって……。
「……お前が言うことなのか？」
プロポーズ的なやつにしか聞こえないんですけど。
「え？　……あ……えへへ……」
一瞬きょとんとしたが、俺の言葉の意図が分かったようだ。
やめろやめろやめろ！　さっきより照れてんじゃねぇよ！　ああもう可愛いなもう！
むう。
これは、逃げようが無いようだ。なんで逃げるんだって話だけども。
まだちょっと躊躇っちまうなぁと思い、頬をぽりぽりと掻く。うし、覚悟完了。
「……好きだよ」
「誰がですか？」
「うぐ……っ、お前が、だよ」
「どれくらいですか？」
「んぐぁ……す、すげぇ、ってくらい」
動揺しすぎて日本語が変になった。
「はい、じゃあそれを繋げると？」
何この授業？

「……ああ、もう……」
つくづく、この子には敵わない。そう思って笑いそうになったが、ここで笑ったらいろはからしたら訳がわからんと思うのでやめておく。
「お前のことが、すげぇ好きだよ。ほら、どう――」
言葉を最後まで紡ぐまでもなく。
いろはさん、顔が真っ赤っ赤。
「……そそそ、そうですか、ま、ままま、まぁ、合格点をあげましょう……」
耳まで真っ赤にして言う言葉じゃねぇだろ。すげぇ速さで目が泳いでんだけど。
「ま、まぁ、これから毎日言ってもらう訳ですから、そうすればいくら先輩と言えど慣れてくれることでしょうし」
「え」
「え？」
「毎日？」
「毎日」
「ほんとに？」
「だめなんですか？」
「俺死んじゃうよ？」
「死なせませんよ？　毎日言ってもらいます」
いろはさん、ザオリク使えるんです？
「ほんとに？」
「ほんとです」
「毎日？」
「何回言わせる気ですか」
「うぐっ」
だ、だめだ、このままでは……今後の人生に多大なる影響を及ぼす習慣を義務付けられてしまう！
「えっと、毎日は流石に……」
「先輩、毎日朝ご飯食べますよね」

「ん？　ああ、それがどうしたんだ」
「そういうことです」
「だからそれがどういう――」
「慣れです、慣れ」
鬼か。
「じゃあお前、アレか、俺がこなれた感じで『いろは、好きだよ』とか言うキャラになっても良いってのか。気持ち悪いだろ絶対」
言うと、いろはの頬がぽっと朱に染まる。
「……ありですね」
「ありなのか……」
取り敢えず、明日以降この子がこのくだりを忘れてくれることを祈りつつ。
「……わかったよ」
「ほんとですか!?　……嬉しいな……」
「……」
……忘れてくれることを……祈りつつ。
「……それじゃ、そろそろ……するか」
「……はい」
「もう一度言うけど、頑張らなくていいぞ？　２人でするんだから」
「はい。……先輩」
「ん」
「……大好きです」
「……おう」
このあまりに幸せな気持ちは、しばらく慣れそうにねぇなぁ……と思いながら、いろはと穏やかに抱き合った。
続く。

（３９）

抱きしめ合って、いろはの身体がすっかりリラックスしたことを確認すると、ゆっくりと離れた。

「あう……」

いやいや、腕と胸を離しただけでそんな寂しそうにしないでくださいいろはさん。

「いろは……行くぞ」

言うと、いろはの目が僅かに見開く。

「……はい」

頷く顔には、覚悟の色がありつつも笑みが浮かんでいる。この笑みを、一刻も早く強がりじゃないものにしたい。

「力、抜くんだぞ」

「はい」

いろはの髪をくしゃりと撫でて、再び、亀頭を秘裂に宛てがった。

× × ×

何故だろうか、直前まで興奮に興奮を重ねてぐっしょり濡れていたさっきと比べたら、直前まで会話をしていた今の方が乾いているかな……もう一度愛撫をした方が良いかな……と考えていたのだけれど。

実際は、予想通りびしょびしょに濡れている訳では無かったにも関わらず、陰唇はつやつやと濡れ光っていて、亀頭が当たっている膣口はとても温かく、俺を柔らかく包み込もうとしている。なんというか、迎え入れる準備が出来ている――そう感じた。

「よし、行くぞ」

「はい……っ」

いろはが深く息を吐いて、俺の背中を抱く。身体を密着させて、ゆっくりといろはの中に入っていく。

くぷっ、と亀頭の半分程が埋まると、

「ひぁぁん……っ！」

いろはの身体がびくりと跳ねて、その瞬間亀頭がきゅきゅきゅっと締め付けられる。

「だ、大丈夫か？」
　戸惑いながら聞くと、いろはは辛いというよりはどちらかと言うと恥ずかしそう。え、どうして？
「大丈夫です……むしろ気持ち良……なんでもないですっ」
「え、え、え？」
「良いからほらっ、続きです続きー！」
「あ、ああ」
　なんだか締まらないスタートになってしまった。しかしいろはが痛がるよりはよっぽど良いだろう。
「ふぁっ……？」
　なるべく痛くならないよう、いろはの胸をゆっくり揉みながら進めていく。
「うくぅっ、んはっ、くぅぅん……っ」
　亀頭が全部挿入って、更に進めていく。いろはは緊張する度にぷはっと息を吐いて弛緩させるのを繰り返していた。いろはの緊張と弛緩に伴って膣内も収縮が起きて、それだけでもう出してしまいそうになる。
　途中で、漠然と引っかかる感触がした。これがそうかと思い、いろはの目を見る。
「いろは。力、なるべく抜いてくれよ」
　いろはも感触で分かったのだろう。こくりと頷いて、
「せんぱい……キス、しながらでも良いですか？」
「もちろんだ」
　ゆっくり唇を重ねて、髪をくしゃりと撫でて、いろはの目を見る。うっすらと開いているつぶらな瞳を見つめて、目で合図を送った。
　ぐぐっ、と押していく。
「んぐぅっ……！」
　苦悶の声を漏らすいろはの顔を見て、泣きそうになってしまう。まだだ……まだ……っ。
　更に押し込んでいく間、耐えずいろはの髪を撫でて、目で「大丈夫だ」と伝える。いろはは涙目でこくこくと頷いた。

そして――ある所でぐっと腰を押し出してつっかえを抜けると、不意に強烈な締め付けから解放されて、膣内がふわっと弛緩した。
「んむぅぅぅぅ……っ！」
いろはが涙を流して、俺を抱きしめる力を強める。
ぎゅっと抱きしめて唇を押し当てて、一度唇を離す。
「大丈夫か？　しばらく動かずにいるから。頑張ったな」
言って、いろはの髪を撫でて頬を擦る。
「あう……い、痛いよぉ……でも、わたし、頑張りましたよね？　あうぅ……っ」
「……そうだな、頑張った。えらいぞ」
涙目ながらもくしゃっとした笑みを浮かべて、でもやっぱり泣きそうな顔で俺の胸におでこをこすりつけるいろはが可愛すぎて……よく冷静に頭を撫でながら言葉を掛けられたもんだと、自分に感動すら覚えた。
「えへへぇ……もっとほめてほめて……」
「……よしよし、えらいえらい」
「はうぅ……」
死ぬ。
内心悶え転げまわりながら、努めて冷静に頭を撫でた。冷静に頭を撫でるってなんだよ。

× × ×

しばしムツゴロウタイム（よーしよしよし）が続いた後、いろはを撫でていた手を乳房に乗せる。
「もっと……楽にしてやるからな」
「あ、ふぁ……はっ、はい、んふぅ……っ」
山場を越えて、すっかりリラックスしたのだろう。さっきと比べて反応も良い。
ゆっくり揉んで、片方の突起をぱくりと咥えて、もう片方を指できゅっとつまむと――
「ひあぁぁんっ！」
甘い声を出していろはが喘ぐ。それと同時に肉襞が心地良く締め

付けてきて、心臓が高鳴る。
「だいぶほぐれてきたな。ゆっくり動くぞ」
「あっ、くふぅっ……はい」
ゆっくりと最奥を目指して、胸への愛撫を忘れないようにしながら肉棒を推し進めていく。
「あぁっ、あっ、あっ、あっ……」
「……っ」
いろはの表情が変わってきた。
あどけなさの残る少女の顔が、見る見る女の顔になっていく。己の体内に埋まっていく熱く硬い棒を熱っぽい視線で見つめて、俺の背中を撫でる手の指も艶めかしく蠢いている。長い睫毛がまばたきで揺れる度に、その色っぽい表情に吸い込まれそうになる。
ほぐしながら進めようと腰をじっくり回すように動くと、いろはがあごを上げた。
「あふぁっ！　……せ、せんぱい、なんか、これ、やばいです、どんどん変な感じがして……ひあぁぁ……っ」
身体に汗を滲ませながら、いろはの瞳がどんどん艶っぽくなっていく。膣の収縮も徐々に多彩になってきて、様々な角度から肉棒を締め付けて、精液を搾り取ろうとしてくる。
あまりの気持ち良さに動揺さえ覚えながら、肉棒を推し進めていくと――こつんと、何か当たるものを感じた。
「……一番奥まで……来た、のか？」
「……そう、みたい、ですね……」
２人で確認すると、いろはがくすりと笑った。すっかり見慣れたいたずらっぽい笑みだ。え、なんで今――と思った瞬間、
「うおっ!?」
首に腕を巻き付けてきて、ぐいっと引き寄せられた。いろはの身体に密着した状態で、いろはが耳に唇を押し当てる。吐息一つでぞくぞくと快感が湧いて、鈴口からぷくっと汁が出たのが分かった。
「せんぱい……」
艶めかしい声音に、快感がどきどきが止まらない。

「せんぱいのおちんちん……わたしのいっちばん奥の、大事な所にキスしちゃってますよ……？」
全身が、あまりの興奮にびりびりと痺れた。
本能的に、腰を引いて亀頭が残っている程度まで一気に引き抜く。
「ひぁっ!?」と喘ぐいろはの反応を気にする余裕も無いまま――一気に腰を打ち付けた。
「くひぃぃぃん……っ！」
ぐぽんっという音と共に、いろはがおとがいを上げて仰け反る。
「あえっ、かはっ、あぁっ、あっ、あっ、あっ……」
虚ろな瞳でひくひく震えるいろはを見て、はっと我に返る。
「あっ……いろは、ごめん。大丈夫か？　ごめん……っ」
あれだけ優しく優しくと気を付けていたのに……と猛省していると、頬に手が添えられた。
「大丈夫ですよ……今のはわたしが焚き付けちゃったわけですし。……えへへ、なんか、言いたくなっちゃったんです」
にっこり微笑む姿は、相も変わらず素敵……いや、尚更素敵になっていた。
「……そっか。このいたずらっこめ」
「きゃー！」
髪を両手でくしゃくしゃにすると、いろはは楽しそうに声を上げた。
「……続き、するぞ」
「はい……」
髪をくしゃくしゃにしたことで、しっとりかいた汗も相俟ってどきりとするくらい色っぽい姿をしたいろはが、幸せそうにこくりと頷いた。

×　×　×

いろはの膣内の感触を確かめるようにゆっくりと抜いていき、肉茎が抜ける直前まで引いたところで、またゆっくり押し込んでいく。少しでもリラックス出来るように、唇を重ねたり乳房をゆっくり揉んだりしていると……いろはの様子が目まぐるしく変わって行く。

「あっ、あぁっ、すご、抜けてく……あっ、ひぃんっ……」
「あくうっ、せんぱいの太いの、入ってくる……ああ、ごりごりってする……ひぅぅ……」
「だめ、だめ、だめ、奥に何回も押し付けないで。ぐにぐにってしないで。なんか熱くなってきたよぉ……っ」
己の感覚を猫撫で声で事細かに説明されて、それにより興奮が加速する。
いろはの躰の内側が、どんどん熱くなっていく。
徐々に分泌が増していく愛液により、肉茎がまるで煮え滾るシチューの中にいるような感覚になる。
いろはの躰がほぐれて、俺を受け入れてくれるようになってくると、熱いだけでなく肉襞全体がざわめいてきた。穴の中に無数の小さな舌が蠢いていて、敏感な男性器官を寄ってたかって舐め回し、必要な汁を絞り出そうとしてくる。
こんな快感を知ってしまって、俺はこの先大丈夫なのか。そんな、一種の恐怖さえも覚えながら抽送を繰り返していると、
「せんぱい……」
いろはが熱っぽい視線を送り、甘える声で囁いてきた。
「どうした」
「その、もう、だいぶ慣れてきたから……動いてください。……せんぱい、ずっと我慢してますよね？」
「っ……。……あ、や、その……」
ずばり言い当てられ、どきんと鼓動が高鳴る。
俺が慌てて顔を熱くしているのを見て、いろはがにこやかに笑う。なんで女の子は笑い顔一つとってもこんなに多彩なんだろうかと思う。
「ふふ。……ここまでは、せんぱいにいーっぱい大事にしてもらいました。だから最後は思う存分、せんぱいが好きなようにして動いてください。……それで、一緒に……ね？」
艶っぽさと優しさ、そしていたずらっぽさを宿した笑みを浮かべて、小首を傾げる。

「……っ」
ああ、だめだ。
こんな素敵な子から、こんなことを言われたら……もう。
「分かった。じゃあ思いっき」
「あ、そうだ」
「……」
……人権……。
「せんぱいはおサルさんなので、きっと色んな、その、体位……って言うんですか？　それをやりたいと思ってるんでしょうけども」
「おサルさんて言うな……」
あとお前、絶対前から体位って言葉知ってたろ。
「その……この後でも、これからでも、せんぱいがしてみたいことは出来る限り全部応えますから。だから今は……最後まで、このままで良いですか？」
「え……や、このままなのは全然問題無いっていうか大歓迎なんだけど、え、本当に全部やってくれるの？」
言うと、いろはが目をむいた。
「変態だー！」
「お前が言ったのに!?」
もう、身体と身体が奥深くまで繋がった状態だというのに。
俺といろはの関係は、いつも通りだった。
続く。

（４０）

「じゃ、本気で行くぞ」
「は、はいぃ……っ、な、なんかせんぱい、目つきが変わってませんか？」
「そうか？　いつも通りだけど」
「や、おサルさん。おサルさんです。せんぱいは今からわたしと全力で交尾しようとしてます」
「……今もじゃねぇの？」
「ちがうんです。なんかちがひぐぅっ!?」
なんとなく、いろはは自分から俺に動いて良いと言っておきながら、躊躇して先延ばしにしている気がしたので。
いろはの手首を掴んで、全力で腰を打ち付けた。
「あっ、ひぃんっ、ひっく、あっ、あぁっ……」
奥まで突き入れられた余韻に浸るいろはの艶めかしい表情を見て、息を呑む。
もう一度。
ゆっくり腰を引いて、全力で打ち付ける。
「ひぐぅっ！」
ゆっくり腰を引いて、全力で打ち付ける。
「あひぁぁ……っ！」
ゆっくり腰を引いて、全力で打ち付ける。
「ひんっ！　やっ……ばっ、これ、息、できな――」
ゆっくり腰を引いて――今度は連続で打ち付ける。
ばちゅっ、じゅちゅっ、じゅぱんっ、ずぶぶっ……。
「んくあぁっ！　ひぐっ!?　あぁっ！　んひぃぃ……っ」
俺に手首を掴まれたまま、いろはが仰け反って白い喉を見せる。その官能的な姿態に、全身の細胞が喜んでいるのを感じる。
一突きごとにいろははがくがくと痙攣して、人形のように従順になっていく。力が抜けていくのに反比例して、いろはの膣内は快感に喜びざわめいて、肉茎にこれでもかと無数の小さな舌を絡め吸い付い

てくる。
「あっ、ひんっ、あへぁっ……やっ、変な声出ちゃ……はひぃっ……」
かろうじて口が動くが呂律が回っておらず、目は艶やかな光を微かに残している。
もっと気持ち良くするにはどうしたら良いかと思い、時折ゆっくりと、いろはのお腹を両手で押さえながらぐりぐりと回して挿入してみると、
「あひゃぁぁ……らめ、中、えぐらいれぇっ……あひぃっ！」
反応が可愛くて、一気に引き抜いて一気に奥まで突き立てると、天を仰いで喘いだ。
「あぁっ、あっ、あっ……」
「？　どうした……？」
抽送を繰り返している中、いろはがゆっくりと起き上がってきた。何事かは分からないまま、いろはを迎え入れるため胡坐をかくと、いろはは尻をベッドに付けたまま俺に抱き付き、体育座りのようにして俺の両脇に足を伸ばし、細く白い足を背中に絡めてきた。
この体勢ではあまり速くは出来ないなと思い、ぬこぬこと緩慢に抜き差しを繰り返す。
「あっ、はひっ、ひあぁっ……せんぱ、い……休憩させて……くださいよぉっ……」
「なんだ、それを言う為にわざわざこの体勢になったのか？　言ってくれれば良かったのに」
「さっきの状態で言ったら、せんぱい余計にペース上げそうだなって思って」
「……んなことはねぇよ」
「なんで一瞬迷ったんですか……」
休ませてと必死で懇願するいろはをめちゃくちゃにする……という状況を考えて、やっべ、それ超良いじゃんとか思ってしまった。
「やっぱりせんぱいはおサルさんですね……」
「こらこら」
背中を両足の踵でとんとんされた。何この可愛い抗議？

俺の首に回した腕と背中に回した足にきゅっと力を入れて、いろはが耳元に口を近付ける。たったそれだけの行為にも肉棒は著しく反応して、いろはの中でびくんと脈動した。
「あんっ……えへへ、せんぱいの……すっごい固くておっきいですね。……それに、なんだかすっごく上手いです……わたし、もう意識飛んじゃいそうだったんですよ？」
「……っ」
耳元で艶やかな声で囁かれて、思考が痺れる。湿った亜麻色の髪の毛が顔の側面をくすぐり、悲鳴を上げそうになる程の快感が走る。
「わたしたち……お互い初めてですよね？　なのにこんな風になるなんて……正直、この先どうなっちゃうんだろうなって思って、ちょっと怖くなります」
おでこ同士をこつんとぶつけて、眉根を寄せて困ったようにいろはが笑う。
いろはも、俺と同じ気持ちだったのか。
そう思って、しかしそれを告げたところでどうにもなるものでないと思い、何て答えるのが正解なのか……と迷っていると、つと唇が重なった。
「……それでも、わたしは、その先が知ってみたいです」
……やっぱり、この子には敵わない。
「……そうか。……俺も知りたい」
「えへへ……じゃあ、休憩終わりますか」
「もう大丈夫なのか？」
「話しながらずーっとゆっくり動いてるくせに……ひんっ」
バレてた。当たり前だけど。
「や、わりい。お前が息を荒げて喘ぐ顔が可愛すぎうおっ!?」
褒めようとしたら、いろはがどこに力を入れたようにも見えないのに急に膣が締まった。
「やぁっ……だめ、今そういうこと言わないで……身体、喜んじゃうからぁ……っ」
「……そうか」

良い情報を聞いた。鼻血が出なくて良かった。
いろはの肩を掴んで、ゆっくりと押し倒す。
「せ、せんぱい……？　あ、あの、激しくするのは大丈夫ですけど……その、ほどほどにしてくださいね？」
いろはの言葉に、斜め上を向いてうーんと唸る。
「……善処する」
「ひぃん……っ」
思ったよりも悪い顔になっていたのだろうか、いろはがか細い悲鳴を上げる。しかしどこか楽しんでいるような笑みも浮かべていた。
「……最後まで、止めないからな」
声を低くして言うと、いろはが泣きそうな笑顔で頷いた。
×　×　×
「んあぁぁぁっ！　ひぐっ、ひんっ！　あおぉぉ……あひぁっ!?　あふぁっ！」
いろはの腰を押さえて動き始めると、艶美な喘ぎ声が部屋に響いた。
苦し気に眉根を寄せて、唇を震わせ、顔の脇でシーツを掴んで何度も白い喉を見せる。
「いろは……いろは……いろは……っ」
息を弾ませながら、狂ったようにいろはに腰を打ち付ける。
もう、時間感覚などすっかり飛んでいた。夜だろうが朝だろうが昼だろうが、とにかくこの身体を貪りたかった。
互いの汗が混じり合い、淫液が混じり合い、頭がくらくらするような濃厚な匂いが立ち込める。
「ひぐぅっ!?　そこ、やっ、こすらないで……っ！」
可愛く顔を覗かせた肉芽を親指で擦ると、いろはが必死で顔を上げてかぶりを振った。もちろん弄るのはやめず、更に腰の速度を上げる。
ぐちゅっ、じゅぶっ、じゅぼっ、ぐぷぷっ、じゅぱんっ。
先程よりも水音がより大きく、より淫らになっている。
「せ、せんぱい、わたしもう、もう、だめ、もう……」

「俺も……そろそろ……」
言いながら、更に抽送の速度を速める。
「あぁぁぁ……っ！　せんぱい、せんぱい、せんぱい。最後は……最後は……っ」
いろはが腕をこちらに伸ばして、互いが果てる時にしておきたいことを示してくる。
「わかった……」
いろはの上に覆いかぶさると、いろはが嬉しそうに熱を帯びた腕を背中に絡ませた。そして穏やかに唇を重ねて、舌をねっとりと絡ませながら、最後に向けて腰を懸命に打ち付ける。
「んむぅぅ……っ、せんぱい、せんぱい、せんぱい……ちゅりゅっ、ちゅぷぷ、れる……」
「いろは……んむっ……」
上と下から襲われる快感により、身体の奥底からマグマの奔流が押し寄せてくる。
最後にもうひと押しと思って、唇を離して、
「いろは……可愛いよ」
囁きかけると、いろはの顔が真っ赤になった。
「っ!?　やぁっ……今、そんなこと言われたら……っ！」
「うぐぁ……っ！」
膣内がぐねぐねと蠢き、ここぞとばかりに締め上げて来る。
マグマの奔流が、もうすぐそこまで迫ってきた。
「いろは、もう、出る……っ！」
「きて、きて、きて……んむぅぅぅ……っ！」
最後は、もう一度唇を重ねて。
『――――――――――――っ！』
――ごぶごぶごぶっ、どぶぶっ、ぶびゅるるる、びゅるっ、びゅっ、びゅっ、びゅっ――。
いろはの躰がびくんと痙攣して、それと同時に膣が今までで一番の強さで締め付けてくる。身体から液体という液体が根こそぎ絞り出されるような感覚に陥りながら、半ば飛びかけた意識の中、信じられ

ない量の白濁液をいろはの中に注いだ。鼻呼吸でも間に合わなくなり唇を離すと、いろはは虚ろな目で口を開いた。
「あっ、すごっ、まだどくどくって出て、あっ、あっ、あっ……」
いろはの痙攣も、自分の射精も、ゆっくりペースを落としながら続く。射精が終わるまで腰を緩慢に動かし続け、ようやく脈動が収まると、がくっと力が抜けていろはに体重を預けた。
「……わりい、重いよな」
「んー？　だいじょうぶですよ。……えへへ……いっぱい出ましたね～」
いろはがにこやかに笑う。俺はそれに力無い笑いをにへっと返した。
脱力しきった背中に温かい手の感触がする。そしてそのまま柔らかな手のひらに撫でられる。
「よーしよし、頑張りましたね～……」
「……」
なんでここで子ども扱い……？　とは思ったが、今の疲れ切った状態だといろはのこの行為が天国のように感じられる。まあツッコまないでおこう。
しばしの間、２人で初めての行為の余韻に浸った。

続く。

（４１）

しばしの間抱き合った、その後。

いろはの横にこてんと仰向けで寝転がる。や、もう、やりきった感が半端ない。

「ふう……」

ゆっくり息を吐く俺の手を握りながら、いろはが呆けた声で話し出す。

「すごかったですね～……」

「そうだな……」

「ほんとすごかったですよ？　先輩のおサルさんモード」

「なんでその言い方気に入ってんの？　ねえ？」

「ふい～」

「俺のツッコミに対応してくれよ……」

これが噂に聞くピロートークか……今日はもうこれで終わりかな……なんてぼんやり考えていると、いろはが自分のお腹を愛おしそうに撫でた。

「どうした？」

聞くと、いろはが顔を向けてにこやかに笑う。

「先輩の……まだ中にいっぱい残ってるなーって思って。……気持ち良かったぁ……」

「……そ、そうか……」

あ、あれ、おかしいな。まださっきのから１０分と経ってないのに、もう勃ってきたぞ？　おかしいな？

着衣の状態ならごまかしようもあったが、如何せん今は全裸だ。隠す手段が無いままむくむくと屹立するものにちらりと目をやると、いろはが俺の目線に気付いて目線を下にやり、変化に気付いて頬を赤らめた。

「わ……わわ……せんぱいの、すご……まだ、し足りないんですか……？」

「や、その……って、ちょ、おい……っ!?」

恥ずかしいなあと思っていたら、いろはの手が股間に伸びてきた。半勃ち状態だった竿が、いろはの指の滑らかな肌触りにより再びびきびきと勃ってくる。
「ちょ、こら、いろは……」
抗議の声も虚しく、いろはの顔は完全にスイッチが入った雌の顔をしていて、その熱っぽい視線は肉棒に注がれている。ざわざわと期待感が込み上げてきて、血液が下半身に集まっていく。
「せんぱい……せんぱい……」
肉茎に指を這わせながら、いろはの口が乳首に吸い付いてくる。ちゅっ、と口付けをされると、まるで電気が走ったかのような感覚を覚えた。
「ちょっ、こ、こら、そこは……くぅっ……」
「ちゅっ、ちゅぴっ、ちゅうぅ……はぷ、はぷ、れるれる……あはっ、せんぱい、可愛い声出ちゃってますよ？」
「や、これは……」
正直、もう心も身体も許し合ったこんな可愛い子に、色っぽい表情で見つめられながら乳首を吸われて肉棒をしごかれるなんて、興奮しないわけが無い。頭がくらくらする。
俺の反応を見て楽しみながら、乳首を舌で転がし、固めた舌先で突いて来る。責められる度に、躰ががくがくと震えた。
「えへへ……ちゅっ、ちゅぴっ、ちゅるる……んむっ？」
たまらなくなって、乳首に吸い付いてくるいろはの乳房を弄り、突起をつまむと、いろはの表情が更に妖しく歪む。
「ちゅっ、ちゅぴっ、ちゅろろろ……あっ、あんっ、それ、気持ちいい……あっ、やんっ、ちゅっ、ちゅぷっ、こすられるの、すごっ、良いっ……んんっ、ちゅっ、ちゅるっ……」
乳首への愛撫と同時に、吸い付かれる音と喘ぎ声が間断なく聞こえてきて、先端からカウパーがどんどん滲み出て更にいやらしい音が響く。
「はぁ、はぁ、はぁ……せんぱい、せんぱい……んんっ」
いろはが手と口を離し、俺の上に移動する。そして、腰を上げると

肉棒の先を膣口にあてがった。
「お、おい、大丈夫なのか？」
「えへへ……大丈夫ですよ。せんぱい疲れてるでしょ？　だから休んでてください。わたしが上になりますから……あんっ」
　この会話さえも焦れったいのか、いろはの手が亀頭を動かし、花びらにくにくにと押し付けてくる。膣口は準備万端なのか熱く濡れており、肉棒を飲み込むのを心待ちにしていた。
「や、お前だって疲れてるだろ？　腰だってがくついてるし」
　いろはは妖しく微笑みながらも、下半身はかくかくと揺れていた。先程の快感の余韻は確実にまだ残っている。
　俺の言葉を聞いて、いろはが艶やかに笑う。
「……そうなんですけどね。……なんか、えっちな気分がまだまだ湧いてくるのもあるんですけど……それ以上に、なんというか、先輩と繋がってたいんです。……だめ、ですか？」
「……っ」
　困ったように眉根を寄せるその笑顔は、ずるい。頭が心地良く痺れる。
「……わかった。でも、無理はすんなよ」
「えへへ……ありがとうございます。……んん……っ」
　いろはが嬉しそうに笑って腰を下ろすと、肉棒がくぷぷと音を立てていろはに食べられた。

×　×　×

「あぅぅ……奥まで、刺さるぅ……っ、かはっ！」
　一息で一番奥まで入れると、いろはが息を大きく吐いた。
　足をM字に開いて肉棒を飲み込み、腰をがくつかせながらも前後左右に動かして美味しそうに肉棒を味わういろはの姿態は、息を呑む程美しくていやらしい。
　いろはが膝を付き、こちらにしなだれかかってきた。耳元で妖しい息遣いが聞こえる。
「せんぱい……せんぱいの、すごい、です……こんなのに毎日何回もされちゃったら……わたし、どうなっちゃうんだろう……？」

「……っ」
こんな状況ではとてもツッコめないのだけど。
いろはの中では、「毎日俺がいろはに好きと言う」「毎日、それも何回も2人でする」ということが決定事項になっているらしい。
……どうやら、この子は結構強欲なようだ。しかし可愛いから許す。許すっていうか俺もしたいし。好きって言うのは恥ずかしいけど。
いろはが身体を密着させたまま、腰を上下し始める。
「はひっ……あっ、くふぅ……っ、ひんっ、硬いよぉ……熱いよぉっ、気持ち良いよぉ……っ」
腰をへこへこと動かしながら、耳元で淫らな言葉を涙声で囁いてくる。
さっきと比べたら刺激はそこまで強くないはずなのに、いろはのあまりのいやらしさにもう出してしまいそうになっている。
「いろは……っ！」
「え……ひゃあぁんっ!?」
我慢出来なくなり、いろはの柔らかな尻を掴んで一気に突き上げた。いろはは驚いて俺にぎゅっと抱き付く。
「やぁんっ……だめっ、だめっ、せんぱいが動いたら……こんなの、すぐ、すぐ……っ」
「すぐ……なんだ？」
「ひぃん……っ、……す、すぐ、イっちゃう……よぉ……っ」
ああ、もう。
あまりの可愛さとエロさに我慢が出来なくなり、更に激しく腰を打ち付ける。
「んはぁぁぁっ！　だ、だめ、これ、ほんと、あっ、あぁぁ……あぁぁ……っ！」
喘ぎ声が加速するいろはを見て、興奮が更に高まる。緩急をつけてぐりぐりとゆっくり腰を押し付けると、すっかり発情したのか、
「あぅぅぅ……も、もっと、もっとぉ……っ、いっぱい、してぇっ、もう、らめっ、いっぱい、突いて……出してぇ……っ」

恐ろしくなる程に淫らな言葉を吐いて、いやらしく顔を歪めて笑う。
「……わかった」
短く答えて、腰を突き上げる。
「んはぁっ！　ひぃんっ！　くひぃっ！　も、もう、もう……っ！」
いろはがいよいよ絶頂に達しそうになったとき。
腰の裏側がざわざわとざわめいて、いきり立った肉棒の感度が上がってきた。
玉袋が迫り上がり、股間にきつく埋まり込んでくる。
マグマの奔流が、すぐそこまで迫っていた。
そう気付いた瞬間、膣内で勃起が痙攣して暴れ出した。
「うぐぁ……っ、いろは、で、出る、出るぞ……っ！」
「ひへぁっ……らひて、らひてぇ……っ！」
いろはの返事を聞いた瞬間、下半身が決壊した。
先程と同様かそれ以上の快美感が込み上げ、固体にさえ思える塊がペニスを通過して、煮え滾る欲望のエキスを噴射した。
「いっ……イクぅぅぅ……っ！」
いろはがひときわ甲高いで鳴いて、腰をぐりぐりと押し付けてくる。
「あっ……うぐぁ……っ！」
いろはが腰をくねらせることで、肉襞の小さな舌も縦横無尽に肉棒に絡まってきて、一滴残らず白濁液を搾り取ってくる。
射精が始まってからはこちらが腰を全く動かすことなく、いろはの躰が残らず搾り取っていった。
「あぁっ、ひっ、ひぅっ、せんぱいぃ……んむっ、んむっ……」
いろはが泣きながら唇を重ねてくる。
抱きしめながら、それに応じた。
×　×　×
「はっ、はっ、はっ……うぐぅっ……！」
「あひぃぁぁぁぁ……」
うつ伏せになったいろはの手を握り、体重をずっしりかけていろは

の奥まで貫きながら、もう何度目か分からない射精をする。
「お腹……熱いよぉ……っ、先輩に身体つぶされるくらいに乗っかられるの、気持ち良いよぉ……っ」
「……っ」
この子は、やはりと言うかなんというか。筋金入りのドMらしい。おしおきおしおき言ってるしね。
実際、抽送しながらぐりぐりと身体を押し付けると、「あへぁぁ……っ」と情けなくて可愛い喘ぎ声を漏らして、膣内がきゅむきゅむと嬉しそうに締め付けてきた。今後が楽しみすぎてやばい。
朦朧としたままいろはの背中に覆いかぶさり、時計をちらりと見る。
「……もう、4時か……」
「……そんなに経ってたんですね……あはは……」
外はまだ暗いが、時間は既に早朝と言っていい時間だった。一度行為を終える度に僅かに休憩を置いて、もうこれで終わりかなと思ったタイミングで、まるで当番制にしているかのように必ずどちらかが相手を愛撫して誘いその気にさせて、延々と行為に及んでいた。
……ここまでハマってしまうとは、予想外だった……。
「なあ、いろは。そろそろ寝……あっ、うおぉ……っ」
寝ないか――と言おうとしたら、いろはががばっと起き上がって、膝立ちしていた俺に向き合い、にこっと笑ったかと思うと四つん這いになって肉棒を咥え込んできた。もう無理だ、無理だと思っていても、いろはの口の中で舌で転がされると、俺の睾丸がバカになってしまったのかと思うくらい、いとも簡単に勃起してしまう。
それは散々ヤった今でもそうだった。　あっと言う間にむくむくと大きくなり、それを確認したいろはがいやらしく目を細めて口を離す。その際に毎回鈴口にちゅっと口付けをするのがたまらない。
「ん……なんですか、何か言おうとしましたか？」
こ、こいつ……絶対わかって言ってるだろ……！
「えぇっと……その……次は、松葉崩しを試して良いか？」
初耳なのだろう、いろはがくりっと小首を傾げる。なんだよお前超

可愛いな。
「それってどんなのですか？」
「えぇっと……」
　入れる寸前の所まで、実際にやってみて説明。
「こんな感じ」
　言うと、いろはが目をむいた。
「ド変態だー！」
「うるせぇ！」
　結局、この後この体位で挿入した。いろはが思いの外気に入って、抜かずに3発。マジで死ぬかと思った。
×　×　×
　そこから数時間経って、お互い本当に体力が尽きて隣り合って寝そべっていた。
「……せんぱい、今度泊まりに行って良いですか？」
「おお、良いぞ。どんどん来てくれ」
　なんだか気持ちが鷹揚としている。気持ちが大きくなりすぎて比企谷・D・八幡とか名乗れそう。
　俺の言葉が嬉しかったのか、いろはがぱぁっと笑う。
「じゃあ……今日行きますね」
　今日？　え、今日？
「はぇぇよ……明日学校だぞ？」
「じゃあ制服持っていきます。鞄も」
「待て待て、いきなり半同棲みたいなこと言い出すな。色々と心の準備が追い付かん」
「半同棲……はわわわ……」
「うぐ……」
　茹でダコになったいろはす、略して茹ではすを久しぶりに見る。水がただ蒸発してるだけだなこれ。
　会話が途切れている間も、天井を仰いでぼーっとしながらいろはの頭をぽんぽんと撫でていると……猛烈な視線を感じた。
「……どうした？」

いろはさん、なんだかすんごい幸せそう。
「えへへ……先輩。わたしが今まで磨いてきた女の武器、これからぜーんぶ先輩の為に使っちゃいますからね。メロメロにしちゃいますよ。……覚悟してくださいね」
「う……お……」
大ダメージ。
目を見ると恥ずかしくてしょうがないので、天井を仰いだまま言葉を返す。
「や、もうメロメ……あ、なんでもない。……俺も、その分頑張んなきゃな。お前がそんな風に努力してくれるんなら、それに見合うやつになんねぇ……と……？」
ああもう恥ずかしい……と思っていたら、隣がやけに熱いことに気付く。何事かと思ってすぐ横を見やると、いろはが頬に手を当てて耳まで真っ赤にしていた。今日はよく茹だってますね。
「はわわわ……先輩……！」
「うおっ!?」
いろはがものすごい勢いで上に乗っかってきた。軽いので何ともないが、単純にその勢いにびっくりする。
俺の胸におでこをこすりつけて、あうあう唸っている。
「……どうした」
頭を撫でながら聞くと、いろはがばっと顔を上げた。
「もう、もう、もう……っ！　どうしてくれるんですかっ。あれだけ優しくされて、あれだけ気持ち良くしてもらって、更にそんなかっこいいこと言われたら……もう、先輩のことしか考えられないですよっ！」
「お、おう……っ」
あかん。
死ぬ。
何か茶化すようなことでも言わないと、恥ずかしさで死ぬ。そうだ、アメリカのハリケーンに女性の名前が付けられるのと同じノリで、日本の台風に男性の名前を付けるゲームを始めてみよう。ニュー

スで「今朝未明、台風『のぶお』が沖縄に上陸しました」とか言ってたら超シュールだよな……などと猛烈な勢いで現実逃避をしていたら、いろはのおでこが俺のおでこにこつんと当たった。
そして、ちゅっと優しく口付けをして、いろはが頬を赤らめて笑う。少し俯いて視線をこちらに向けているので、この距離なのに上目遣いになっていて鼓動が高鳴る。
「先輩のせいですからね、わたしがこうなったの」
「……っ！　お前、それ……」
いつかのディスティニーランドの帰りの電車での会話を思い出す言葉に驚いていると、いろはが俺の耳元に口を寄せて囁く。
「責任、とってくださいね」
そして、俺のあざと可愛い後輩は、小悪魔めいた笑顔で微笑んだ。
「……っ」
心臓が鷲掴みにされた。
直感で、きっと今のいろはの言葉と表情は、一生忘れないだろうと思った。
お返しにちゅっと口付けをすると、いろはが「んむぅ……っ」と小さく声を漏らして、心地良さそうに目を細めた。
「もちろんだ」
どんなに恥ずかしくても、これはきちんと目を見て言わねばと思い、しっかり見つめながら言うと、一色がまたしても茹だった。
「はわ……はわわわわわ……先輩……先輩……っ」
「あっ、おい、こら……っ」
いろはが目をきらきらさせて、更に強く抱き付く。
「えへへへぇ……先輩、好きです、大好きです……っ」
「……俺も、好きだよ」
歯の浮くような言葉も、今は解禁で。多分これから毎日解禁しなくちゃならんのだけど。やだ、死んじゃう……。毎日がボジョレー。
幸せそうに笑ういろはを見て、これからの日々が今までよりもにぎやかで、楽しいものになる――そんな確信めいた予感がした。
……取り敢えず、今後の課題として……体力付けないとなぁ。

「？　先輩、どうしました？」
「ん、なんでもねぇよ」
いろはの髪をくしゃりと撫でると、ふにゃっと頬を緩めた……が、すぐに何かに気付いたのか目を見開いた。
「はっ！　まさか、もうえっちなこと考えてるんですか!?　変態だー！」
「なんですぐそっちに持っていく!?」
「あ、でも先輩のほんとにおっきくなってますよ？　やっぱりおサルさんですね」
「反論出来ねぇ……」
まったく。
この、あざと可愛い後輩である一色いろはと一緒に居れば、一生退屈しそうにないな――そう思った。

お終い。

平塚静の可愛げを掘り下げてみた結果、思いの外凄まじいことになっている。

（1）

1.

「ん、どうした、比企谷？　顔が赤いぞ」

「いや、だって、その……」

職員室横にある応接室で、俺はひたすらに動揺していた。

先生と、まあ、その、アレな関係になってからの、二人で過ごす時の彼女の態度の変化は凄かった。それはそれはもう素晴らしかった。

そう、なんだけれども。

それ以外でも、周りの人が先生をぱっと見ただけでも分かる、明らかな変化が起こっていた。

それはもう、とてつもない変化だ。

簡単に言うと、先生がスカートを履いた。

学校で。

今まではパンツスーツに白衣を着てぴしっとキメていたため、美人でスタイルが良くても、その姿を見た多くの人は「かっこいい」と評していた。

しかし、ここに来てまさかの、突然の、黒のタイトスカート。

改めて、いや、むしろここに来て初めて強調された先生の女性としての魅力に、女子生徒は顔を赤らめて羨望の眼差しを向け、男子生徒はなんかもう色々とやばい視線を向けている。

多分、恐らく、生徒だけでなく他の先生も含めて、彼女の薬指に指輪がないか確認しただろう。

1千人以上の人が居るこの学校で、一人の女性がスカートを履いたというだけでこんな騒ぎになるのだから、彼女の認知度や人気は以前から相当なものだったのだろうと改めて実感した。

なんか、むずむずする。

ちなみにうちのクラスでもこの件はしょっちゅう話題に上るよう

で、本を読んでいても戸部が「やべーよ、最近の平塚先生。っべー。マジっべーわー」と元気に言っているのが聞こえた。相変わらず薄いな、お前の感嘆の台詞……。

と、まあ。

そんな平塚先生、もとい静さんなのだが。

以前からも教育的指導及び若干ただの雑談目的で、俺を呼びだすことはあったのだけれど……この関係になって、そして先生がスカートを履き始めてから初めて、俺を呼びだしていた。

んー。

ちょっと、緊張で訳分からん状態です。

「ふぅ……まだ慣れないな、これは……」

言うと、先生は黒のストッキング越しにその長い足を艶めかしく揉みほぐす。

生足でもやばいのだろうけれど、ミニスカ黒ストッキングという組み合わせも破壊力がえげつない。

聞き耳調査だと、ミニスカになって先生の胸の破壊力に初めて気付いた愚か者が男女問わず一定の率で存在しているが、足の魅力に今頃になってようやく気付いた愚か者も相当数いるようだった。

先生のことをどれだけ説明するんだ、俺。

まあ、要は。

静さんが、尚更に可愛く、綺麗に、色っぽくなっているということだ。

「や、先生……一体どうしたんです？　学校中先生のことで話がもちきりですよ」

足をなるべく見ないようにしながら、それでもある程度チラ見しながら、先生に話を振る。

すると、先生は一瞬だけ眉を上げ、そしてふっと微笑んだ。

ああ、これだよ、もう。

大人のお姉さん特有の、この柔らかで余裕のある笑み。

くっそ、もう、くっそ！

すぐ近くに先生がごまんと居る状況じゃなかったら、絶対先生に何

かしてんのに！　何かってなんだ俺！
「ああ。……その、なんだ、私も、折角君とこういう関係に……なったのだし……」
だから、と。
「その、もっと女らしさを磨いてみようと思ってな。学校という場は、きちんとした服装である限りは、見られるという練習をするにはもってこいの環境だろう？　ふふ、まあ、教師としての本分は絶対に忘れないけどな。それでも、私は――」
組んでいた足を解いて、斜めに流すと、
「……君の、女だからな」
言って、目を細めて、艶めかしく微笑む。
ほーん？
「……あ、はひっ、そうでふね」
ちょっと。
いや、かなり。
ドキッとしすぎて、声が裏返った上に噛み噛みだった。
もうテンパりパラダイスである。
だめでしょ、今のはだめでしょ。
どきどきで死んじゃうんですけど。
先生はちらりと周りを窺って、近くに誰もいないことを確認すると、足の低いテーブルに手を付いて、身を乗り出した。
「それで、どうだ……似合うか？」
表情は至って真剣だ。
「あ、え、いや、その……に、似合ってると……思います」
戸惑いながらも、何とか答えた。
実際、初めてのデート――と言っても、あれは不意打ちとしか思えなかったが――の時もタイトスカートを履いていたので、似合うのは十分に分かっている。
というか、なんか、もう。
このスカート姿が似合いすぎていて、他の人――というか男に見せたくない。

戸塚以外の全男子生徒及び全男性教員に目潰しを喰らわせたいまである。
「そうか……良かった」
俺の返事を聞いた先生が、心底ほっとした顔でソファに再び腰を下ろす。
うーん。
こんな、精神面でも肉体面でも立派な大人の女性が、まだ高校生の俺に対してこうも健気っていうのは……反則にも程があるなあ。可愛すぎるでしょ。
そうだ、と。
先生はうきうきしたような表情をしながら立ち上がると、ぷいっと後ろを向いた。
俺に先生のむっちりした尻が向けられる。
え、なに、叩かれたいの？
え、なに、俺何考えてんの？
落ち着け！
「スカートだとな……その」
落ち着こうとして、カップに注がれたコーヒーを口に運ぶ俺に、先生が頬を赤く染めて顔だけ振り返る。
「学校でも……しやすい、だろう？」
「……」
……。
……無言で、コーヒーをこぼした。
ミルクと砂糖のたっぷり入ったコーヒーが、だばだばと顎を伝う。
「ああっ、すまない！　タイミングが悪かったな」
「いや、タイミングどうこう以前に内容が……」
俺のツッコミも聞かず、先生がおしぼりを持ってかつかつと俺の下へやってくる。
……んん？
なんかこういうの、どこかでよく見るような……。
……あ、ＡＶだ！

……だめじゃん！
「あ、ちょっと、先生？」
俺の反応も気にせずに、先生は俺の足と足との間にしゃがみ込み、手で股間をズボン越しに撫で始めた。
「せ、先生、だめですって……」
一応ズボンを拭くという体は成しているのだが、明らかに目的が別にあるとしか思えない。
目線も、表情も。
艶やかで、妖しい。
「ん？　どうした？」
わざとらしくとぼけながら、制服のズボンの中でいきり立った竿を、もはやおしぼりすら横に置いて手で直接ぎゅむぎゅむと握る先生の姿に、理性が爆発寸前に追い込まれる。
「ば、場所。場所と、時間……考えてくださ……うぐっ……」
スリルも伴って、身体に叩き込まれる快感の度合いが尋常でないことになっている。
「こらこら、比企谷。こんな場所でこんな時間からそんな声を出すとは……けしからんな、実にけしからん」
先生がにこにこと悪い笑みを浮かべながら、俺の抗議などまるで聞き入れもせず手による愛撫を続ける。
……いやいやいやいや。
何この超絶恥ずかしいイベント？
死ぬよ？　俺が。恥ずかしさで。
まあ、これと同じことを先生の家でやってたら、あと1～2時間は楽しんでいたいけど。
「あっ、かはっ……」
小刻みに震え始めた俺を見て、先生が手の動きは止めずに立ち上がり、嬉しそうに微笑む。
「イキそうか？　比企谷、イクのか？」
耳元で囁かれ、更に限界が近付く。
「も、むり、です……」

呟いた瞬間。
「そうか」
ぱっ、と。
先生はいともあっさりと手を放した。
「……へ？」
このとき発した一文字は、さぞ間抜けな響きだったろう。
それくらい、気の抜けた声を上げてしまった。
先生は何も言わぬまま最初に居た場所に戻ると、にっこり微笑む。
「けしからん、と言ったろう？　第一、今こんな場所で射精したら、君は5・6限、そして放課後とどうするつもりだったんだね？　精液の匂い……男は嗅ぎ慣れた匂いだし、女子は匂いそのものに敏感だ。きっと白い目で見られるぞ。……それに、部室でそんな匂いを漂わせてみたまえ。……心配、してしまうぞ？」
……。
台詞の最後に頬を赤らめて、ぷいっと横を向いて流し目を送る仕草は超可愛かったけど。
超可愛いけど！
「いや、そもそも……やり始めたのは先生ですよね？」
「ああ、そうだな。一度やってみたくてな」
すごい快活に、にぱっと笑った。
清々しいなあ、この人……。
……いや、それでも。
「どうしてくれるんですか、これ……」
いきり立った股間をさすりながら、物悲しげに言った。
「ふむ……ああ、そうだ」
先生は何か思い付いた顔をして、手をぽんと叩いた。
「さっきは部室でどうのこうのと言ったが、今日は雪ノ下も由比ヶ浜も所用で来られないそうじゃないか」
「あ、そう言えば由比ヶ浜からは聞きました。雪ノ下もなんですか？」
「そうだ。……だから」
何も、特別な身体の動きはしていない。

ただ、舌。
先生が軽く、舌なめずりをした。
それだけで、心臓が跳ね上がる感覚を覚えた。
「……放課後、特別棟の職員用トイレの前に来たまえ」
いやらしく口の端を上げた先生の笑顔に、目を奪われる。
鼓動が聞こえそうな程の高まりを覚えながら、ごくりと息を呑む。
「……は、はい」
まるで面接に臨んでいるかのように、手を膝に置き、背筋を伸ばしながら答えた。
「ふふ……忘れるなよ？」
そう言った先生の表情は、よく見慣れた、素敵な笑顔だった。
続く。

（２）

１．

「くっそ……」

自分にしか聞こえない声で、ぼそっと呟く。

昼休みに平塚先生と話してから迎えた５限。

いつもならお昼時と言うことでばりばり眠気を催す時間だ。まして数学が５限の時などもはや２００％寝てる。むしろ数学なら何限にあっても寝てる。ちなみに今受けてる授業は数学です。

しかし、今は。

全く眠くない。

し、まったく集中も出来ない。

いきり立つ股間を机の下でそっと撫でて、小さくため息を吐いた。

２．

遡ること、ほんの２０分程前。

「もうじき昼休みも終わるな。それじゃあ比企谷、また放課後にな」

「はい、先せ……いぃっ!?」

応接室を離れようとした時、突然先生が抱き付いてきた。

後ろから絡まるように抱き付き、左手で俺の身体を拘束して、右手であっと言う間に俺のズボンのベルトを外して、パンツの中に手を突っ込む。

いきり立った竿に手を添え、結構な量が滲み出ていた我慢汁を潤滑油に、にちゃにちゃといやらしい音を立てながらしごき上げる。

抱き付いてからここまでかかった時間は、わずか５～６秒だった。

俺は声を上げる間も無く、情けなく腰を引いて屈みこんだ。

「ちょ、ちょっと……先生……!」

震える声で抵抗すると、耳にたっぷりと息を吹きかけられ、べろりと舌をねじ込まれた。

「んふぅっ、はっ、比企谷……放課後、んちゅるるっ、たっぷり、んはぁっ、……気持ち良くしてやるからな？　れろっ、んんっ、……楽しみにしてなさい？」

言って、先生は再び俺の耳に舌をねじ込んでくる。
「わ、分かりました、分かりましたから……！」
何とか力を振り絞って先生を引き離す。
「あん……ふふ、じゃあ、戻りたまえ」
口ではしっかりとした先生然としたことを言いながら、今さっきまで俺の竿を好き放題弄っていた右手の指を、いやらしく目を細めながられろっと舐めた。
「……はい」
この場で押し倒したくなる衝動を必死で堪えながら、応接室を後にした。
3.
「くっそ……」
そして冒頭に戻る。
もう、頭がこの後のことでいっぱいだった。
先生に色々してもらいたい。
先生をめちゃくちゃにしたい。
先生とどろどろになるまでしたい。
男子高校生の性欲を刺激するには、先生の魅力は十二分すぎる。
ぼんやりと黒板を眺めていても、いつも以上に内容が入ってこない。難なら先生の抑揚の無い平坦な日本語が英語に聞こえるまである。やっぱそれはない。
……寝るか。
腕を枕に突っ伏して、完全に寝る体勢を作った。
……思いっきり淫夢を見て、10分後に起きてしまった……。飛び起きるのは反射で避けることが出来たのが救い。
結局その後、6限でも全く同じ流れが繰り返された。
4.
ようやく迎えた放課後。
後ろを見やると、既に由比ヶ浜は所用で帰ったようだ。いつも挨拶はしてくるので、割と急ぎだったんだなあとぼんやり考えつつ、鞄を持って足早に教室を出た。

特別棟に入り、一際冷えるこの空間にぶるりと震えながら、職員用トイレへと向かう。
……何だこの状況……。
自分が今置かれている状況を考えて、思わず心の中でツッコんでしまった。
口では独り言で寒い寒いと言いながらも股間はずっと盛り上がったままだ。流石にこれには自分でも引く。どんだけ期待してんだよ俺。
気持ちは急くが、走ってしまうのもがっついてるようでかっこ悪い。いやもう既に十分かっこ悪いんだけど。
廊下に響く自分の足音を聞きながら、精一杯いつも通りの速さで歩いた。
「ここか……」
職員用トイレに着くと、先生がまだ居ないことに気付く。
んー。
少し、急ぎすぎたかもしれない。直行だったしな。
手持無沙汰にしながらトイレの前をうろうろしていると、不意に男子トイレのドアが開いた。
「うおっ……」
思わず驚きの声を上げてしまう。
そうか、普通に利用する先生も居るんだよな。怪しまれるかもしれない。何て答えよう――？　などと考えていると。
「おお、比企谷。待っていたぞ」
「……へ？」
ドアを開けて男子トイレから出てきたのは、平塚先生だった。
4.
「いやあ、万が一にでも男子トイレに誰か居ないかどうか、確認しようと思っていてね」
先生が腰に手を当てあははと笑う。お、男らしい……。
しかしタイトスカートを履いているため、いつもの男らしい仕草もどこか違う味わいがある。

「や、先生が見なくても……って言うか、なんで男子トイレなんですか？」
言うと、先生は目を細めて柔らかく微笑んだ。
「……少しでも早く、君としたくてな……。それに、男子トイレでやりたいこともあるんだ」
「……っ！」
舌なめずりをする先生を見て、ごくりと息を呑んで、首から上がぶるっと震えた。
「さ、来たまえ」
にこりと笑って、先生が俺の腕を引く。
「ああ、先に言っておくが」
中に入る直前、先生は流し目を送りながら、
「ここに入ったら、もう私のことは静さんと呼んでくれ――」
そう言って浮かべた笑みは、とても綺麗で、とても可愛らしかった。
腕を引っ張られながらも廊下に誰もいないのを確認して、俺は先生と共に男子トイレの中へと入った。
5.
「んむっ、んちゅっ、んんんんっ、じゅるるっ、れろっ、あむっ、んぶっ、れろっ、れるっ、はふあっ、んんんん……っ！」
トイレに入った瞬間、先生はドアに俺を押し付けるようにして俺の唇を奪ってきた。
まるで、1ヶ月間禁欲していたかのような、突然で、強引で、強欲で、淫猥な責め。
目をしばたたきながら、彼女のあまりの強引さと色気に打ちのめされて、両手でかりかりとドアを引っ掻いていた。
やがて、彼女は俺の唇をしっかり咥えたまま、両手で俺のズボンのベルトを外し、ズボンとパンツを少しばかり下ろして、あっと言う間にいきり立った竿を露出させた。
彼女はこれを見て何か言った訳ではないが、明らかに嬉しそうに目を細めた。
顔は上気していて、もう完全に発情してしまっている――。

――以前、彼女の部屋で何度目かの行為に及んだ時、バックで彼女の腕を掴みながら突きまくったところ、彼女が悲鳴の様な喘ぎ声を嬉しそうに上げて、失禁する程の絶頂に達した時があった。
どれ、散々彼女を味わったし、そろそろ休憩を――なんていう風に思っていると。
「比企谷ぁ……えぐっ、もっ、もっと、してくれ……っ！」
「え、ちょ、静さ……うわっ!?」
彼女は腰が痙攣しているのも厭わず、同じ体位のまま今度は彼女が俺の腕を引っ張って何度も強制的に俺を先生の中に突き入れさせ、絶頂しっぱなしのような状態にも関わらず、腰を器用に上下左右に動かし、回して、ぐちゅぐちゅと音を立てながら俺の竿からその後もたっぷりと精を搾り取った。
あの時は確か、既に先生の中に2回出していたにも関わらず、スイッチの入った先生によって、同じバックのままもう3回、抜かずに射精させられたんだった。
翌日の股間の痛さたるや。や、当日の時点でも結構痛かった。
――そんな時のことを思い出していた。と言っても、精々1週間程度前という極めて最近の話なのだけど。
まあ、変に過去に遡りすぎるより、こういう最近の記憶の方が頼りにしやすいな――そんな風に思った。
ちなみに。
この回想をしている間も、ずっと俺は舌を舐られ、歯茎を舐られ、口内中の粘膜という粘膜を舐られながら、竿は彼女の手で好き放題にしごかれていた。
腰をがくがくと震わせていると、不意に彼女が手を離した。
「ぷはっ……ふふ、すごいな比企谷。がっちがちのびんびんだ……」
「……うぁっ……」
俺の耳元に顔を寄せてわざわざ淫語を言ったことにより、俺の竿は更にがちがちになった。
それを見て、彼女がくすりと笑う。
「ふふ……じゃあ、こっちに来てくれるか？」

腰に手を添えられ、俺はよたよたと歩き始めた。
ちなみにこの間も先生は俺の竿をしごいている。どんだけ好きなんだよ……。
6.
「えっ、ここですか?」
俺が先生に連れて来られた先は、見慣れた小便器の前だった。先生は横に立っている。
あまりに見慣れた光景に、竿がしおしおと萎んでしまう。
「こらこら、何を元気を無くしている。……君は、今まで数えきれない程の回数、この便器で小便をしてきたのだろうが……まだ、精液を撒き散らしたことは無いだろう?」
どくん、と。
彼女が耳元で囁く言葉に、心臓が跳ね上がった。
言葉一つで、言いようの無い興奮により竿がむくむくと大きくなる。
「や、静さん、そりゃそうで」
言い切る間も無く。
彼女は俺の後ろに回り込むと、再び勃起した竿をぐちゅぐちゅといやらしい音を立てながらしごき始めた。
「うあっ!? うっ、くぅっ、やめっ、静さっ、そんないきなり、あっ、ぐあっ……」
自分の身体を支えることもろくに出来ず、背後の彼女の腰に手を添えて必死で耐える。
だが、こんな刺激を受けてしまっていては、すぐに崩壊するのが目に見えている。
手でしごくという行為は、男がもっとも慣れた、言わばイクと言う目的に特化した動きだ。
全く慣れていない女性にされるのならまだしも、彼女とは既に何度も交わっていて、俺自身と並ぶとは言わないまでも相当俺のツボを心得ている。
このままでは、数分と持たずに果ててしまう――。

そんな俺の心配も露知らず、彼女は俺の首筋にしゃぶりつき、その後俺の肩にあごを乗せてそのまま唾液を口の中にぐむぐむと溜めて、れろっと竿に垂らしてきた。
そして、よりどろどろになった竿を右手の指でウェーブしながらしごき上げ、左手は玉を心地良く揉みしだく。
「ほら、どうだ比企谷、気持ち良いか、気持ち良いだろう？　いっぱい出して良いんだぞ？　何時間も溜めた小便の様に、たくさんたくさん吐き出してしまえ。遠慮は要らないぞ？　ほら、ほら、ほら……」
「あっ、かはっ、うぐぅぅ……っ！」
彼女は耳に唇を付けて、鼓膜に直接いやらしい言葉を送り込み、更に耳たぶを咥えたり耳の穴に舌をねじ込んだりと、耳が溶けそうになるほどに蹂躙する。
こんな情けない体勢で。
こんな、まだ小さい男の子が母親におしっこの手伝いをしてもらっているかのような、情けなさ極まるこの体勢で。
もう間もなく、俺は、イク。
何の抵抗も出来ないまま、子どもの元になる精子を、精液を、この小便器に、ぶちまける。
大きな波が来る予感に、声を震わせながら彼女に話しかける。
「静、さん、イキます、もうダメだ、出る、出る、出る……っ！」
「出るのか？　いいぞ。いっぱい出してくれ。ほら、ほら、ほら……っ！」
言うと、俺の竿をしごくスピードを一気に上げる。
ぐちゅぐちゅぐちゅと言う水音が更に大きくなり、俺はもはや声を上げることすら出来ず口をぱくぱくする。
「あっ、えぁっ、で、る――――っ」
大きな大きな波に、一瞬身体を仰け反らせて竿を前に突き出し、射精の瞬間の刺激に少しでも耐えやすいように、次の瞬間身体を屈ませた。
出る――――そう思ったその時。
彼女が、静さんが、自分の腰をくんと前に突き出して、屈めた俺の

身体を無理やり伸ばし、竿を再び前に突き出させた。
「あっ……あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ――――――っ！」
快感に何ら備えることが出来ない体勢にされた上で、更にしごく速さを上げられ、視界が白くなるのを感じながら、マグマの奔流が身体の内側を通るのを感じた。
どぶっ、ごぶごぶっ、どびゅるっ、びゅるるるっ、びゅるるっ、びゅるるっ、びゅるるっ……。
信じられない程の量の射精をしているにも関わらず、先生はしごく手を、玉を揉む手を、一切止めない。
「あっ、うぁっ、あっ、あーっ、あっ、あっ、あっ……」
結局、俺が力尽きて声を上げるのを止めるまで、彼女は敏感になった俺の竿を、亀頭を、ひたすらにしごき上げ続けた。
7.
「……」
鬼だ。
この人は、鬼だ。
立ったまま膝をがくがくと震わせ、背中に密着した先生にジト目を向ける。
彼女は一度は手を止めていたが、俺がまた回復して来たと見るや、今度はゆっくりゆっくりと、マッサージをするようにちゃにちゃとしごき始めた。
正直これくらいだと適度に気持ち良くてなんならずっとやってもらいたいまであるんだけど、流石に今はもう、疲れた……八幡、疲れたよ……。
「さて」
俺のジト目も意に介さず、彼女はうきうきとした声音で話し出した。
「君は今、私に思い切り、それはもう思い切りイカされたな？」
「……ええ、そりゃもうばっちりと。気絶するかと思いました」
目の前の小便器は、べっとりと精液で汚れている。早く流させて……。

「そうかそうか。じゃあ、次はどうしたい？」
彼女からの純粋な問いかけに、うーんと唸る。
「……お返しに、静さんをめちゃくちゃにしたいです」
言って、彼女の口に指を入れると、愛おしそうに舐め回された。
「んんっ、んむっ……ふふ、そうか。じゃあ……たくさん、してくれ」
彼女は飛びきり甘えるような声音で囁くと、小便器のスイッチを押して俺の精液を流した。
「さ、行こう……」
ひどく淫猥な笑みを浮かべて、彼女は俺を個室に引っ張って行った。

続く。

（3）

1.

先生と一緒に男子トイレの個室に入ると、先生は悪戯っぽく微笑み、俺の肩にあごを乗せて、ドアの鍵をかちゃりと閉めた。

そしてあごを乗せたまま、俺の耳元で、

「……まだ、君の逞しい竿がべとべとのままだったな」

と囁く。

耳にかかる吐息にぶるりと震えつつも下を見ると、言われた通り、半勃ちの竿が白濁液でべとべとに汚れたままになっていることに気付いた。

「ああ、そうですね……って、ちょっと、静さん!?」

俺のぼへっとした返事を聞いたか聞いていないかくらいのタイミングで、先生は急に腰を下ろし、足を開いて爪先立ちになり、べとべとの竿の前に顔が来るような体勢になった。

タイトスカートを履いているため、そんな風に足を開けば完全に下着が見えてしまう。

「……う……わ……」

ため息交じりの、半ば感動したような声が漏れた。

先生が履いていたのは、かなり透けた黒のレースだった。ちゃんと光に翳せば、性器の形がくっきり見えてしまいそうな程だ。

薄暗いトイレの個室の中とはいえ、急にそんな妖艶なポーズをされたために、半勃ちだった俺の竿はあっと言う間に反り返る程になった。

先生はそんな目の前の竿を見つめ、嬉しそうに笑う。

「ふふ、また元気になってくれたな……」

手で竿をすりすりと撫でながら、俺の顔をちらりと見たかと思うと、口をぱかっと開けた。

「じゃあ、掃除を始めるぞ……」

「ちょ、ちょっと……っ」

何が起きるか予想が付いて、せめて心の準備をさせてほしいと思っ

て声を上げたが、もう遅かった。
先生は俺の竿をぱくっと咥え、その艶っぽい唇と舌で存分に舐り始めた。
「うぐ……っ」
舐め、つつき、吸い上げる。
あまりの唐突さとその激しさに、誇張抜きに「俺の竿が食べられている」と感じた。
今までずっと自分の身体の一部として一緒に過ごしてきたはずの竿が、今、先生に丸ごと咥え込まれ、まるで自分のものでなくなったかのような感覚に陥る程の快感を与えられている。
頭の中が、真っ白になりそうだ。
「んじゅるっ、れろっ、ちゅりゅ、れる、んはぁっ、はぷ……んぁむ、ぢゅる、はぁふ、じゅるるる……」
「〜〜〜っ！」
声にならない叫びを上げ、身体をぶるぶると震わせる。
個室のドアに背中を付けていたため、がたがたとドアが軋む。
――油断すれば、気を失ってしまう。
そう思ってしまう程の、狂おしいまでの快感。
「ぢゅるる……んん……はぁふ……ちゅぅる……ぴちゃ、……えるんっ……んはっ……ぁ、れるれる、ぷちゅ、じゅるるる……」
強烈なバキュームで、一気に達してしまいそうになるのを必死で堪える。
少しでも楽な体勢を取りたいのだが、いつの間にか腰に先生の手が回されて完全に固定されてしまい、腰を下ろすどころかほんの少し動かすことさえままならない。
先生が美味しそうにしゃぶる顔を見て興奮が高まり、その先生と目が合った時に、じゅるじゅると淫猥な音を立てながら、まるで何も特別な事などしていないかのような、いつも通りの微笑みを先生が浮かべるのを見て、たまらず俺の竿が先生の口の中で強烈に脈打つ。
「くあっ、し、静さん、これじゃ、掃除どころか、また、で、出る……うぐぅ……」

何とか先生に呼びかけると、先生がふっと口を放した。
「ふふ、もう一度出して良いんだぞ？　大丈夫だ、また綺麗にしてやるから……」
先生然として言っている間も、舌は裏筋をなぞり、手は玉を揉みほぐし、刺激を与えることをやめない。
何とか抵抗せねばと思い、何か出来ないかと必死で考えて、一つの案が浮かんだ。
「静さん……俺も……」
言って、腰を屈めて先生の胸に両手を伸ばす。
服越しに先生の胸を掴むように触ると、むにゅんと沈み込む感覚がすると同時に、先生が甘い声を漏らした。
「あん……ふふ、ちょっと待ってなさい」
言うと、先生は再び竿を咥え込み、亀頭とカリの部分を丁寧に舐り回しながら、上着を脱ぎ始めた。
白衣はトイレに来る前に脱いでいたようで、ジャケットとシャツ、そしてブラを手際良く脱いで行く。
その間も先生は、ずっと俺をことをいやらしく細めた目で見ながら、亀頭をしゃぶっている。
……こんないやらしいストリップショーがあるのかよ……っ？
竿の先端に絶え間なく襲いくる快感の波に耐えながら、先生の脱衣を虚ろな目で眺めていた。
2.
「さあ、これでいくらでも出来るぞ……んむっ」
先生は上半身が完全に裸になり、胸を持ち上げてこちらにその突起を突き出す形にして、自身は再び俺の竿をしゃぶり始めた。どんだけ俺のが好きなんですか……。
「じゃあ、遠慮なく……」
言って、恐る恐る先生の胸に手を伸ばす。
先生の肌はじっとり汗ばんでいて、俺の手は吸い付くように先生の胸に着地した。
先生は十分にその気になっていると判断して、最初から強めに揉み

しだく。
すると、先生が口を放して喘ぎ声を上げた。
「あはっ、んあっ、ふあっ、んんんっ……比企谷、気持ち、良い、よ……あふぅあっ、あんっ、んあぁぁぁ……っ」
先生の蕩けた顔に心が震える。
更に強く、めちゃくちゃに揉みしだくと、俺の指は先生の胸の肉の中に深く深く埋まる。
その度に、胸の形が淫らに変わり、その淫靡な光景にどうしようもない程の高揚を覚えた。
先生はいやらしく股を開いて俺のものをしゃぶり、俺は立ったまま腰を屈めて先生の胸を揉みしだく。
時間の感覚さえなくなりそうな程の濃厚な絡みは、誰の邪魔も入ることなくひたすら続けられた。
3.
「あむっ、れちゅるっ、んぶぅっ、ぢゅるるっ……あはっ、ちゅぅるっ、れろれろっ、あんっ、じゅるる、ずぞぞぞ、ちゅるるる……」
発情した雌にしか見えない先生の上気した顔と、先生の口からこぼれ落ちる卑猥な音と声以外、もはや何も認識出来なくなっていた。
視界がぼんやりして、腰は引っ切り無しにかくかくと前後に動いている。
「し……ずか……さん……」
弱々しい声で先生の名前を呼んで、先生の胸を揉んでいた手を突起にやると、それを強く手前に引っ張った。
「んぶぅっ!? あっ、ひ、比企谷、そんな、強く、んぶっ、おぶっ、あふあっ、んぐぅぅぅ……」
ひたすら手前に引っ張ることで、先生の張りのある大きな胸は左右に伸び、強制的に先生の口に竿が深く深くねじ込まれた。
突起を引っ張りながら断続的に力を入れて摘まむと、先生はその度にびくんびくんと身体を震わせる。
ぼんやりした意識の中で、先生がむせながらも嬉しそうに竿を咥える姿を眺め、更に劣情を催した。

そもそもなんでこんな事になってるんだっけ？
俺が先生をむちゃくちゃにしたいって言って、先生はその前に俺のを綺麗にすると言って咥え始めて……。
ああ、今はもう、何でもいいや。
今の先生はいつにも増してめっちゃ綺麗で可愛いし、イジメるのもイジメられるのも楽しいし、何より、死ぬ程気持ち良いし。
……もうそろそろ、限界が近い。
「静さん……俺……そろそろ……」
腰を更に屈めて、竿を喉奥まで咥えて必死でしゃぶる先生の髪に顔を近付ける。
すると、汗とシャンプーの匂いが入り混じった女の匂いが強烈にして、頭がくらくらした。
「おぶっ、んぇぇっ、んぐっ、んぐっ、んぐっ……」
興奮して更に竿が大きくなったのか、先生が一瞬むせるような反応を見せたが、すぐにまた必死でしゃぶってくれる。
そんな先生がたまらなく愛おしくなると同時にもっともっとイジメたくなり、俺は先生の胸の突起を引っ張る力を一気に強め、竿を更に喉奥深くで咥えさせた。
「んぐぅぅぅ……っ！
先生の目に涙が浮かぶ。快感と苦しさが入り混じったその表情に、背筋がぞくぞくする。
「うぁ……静さん……出る……もう、出……」
熱い奔流が込み上げてくるのを感じた瞬間、突起を摘まんでいた手を放し、先生の後頭部をがっしり掴む。
その次の瞬間。
「んむぅぅぅぅ――――――――っ！」
俺は、先生の口内に、熱い快楽の塊をぶちまけた。
先生が焦点の定まらない虚ろな目をして、ごくりごくりと喉を鳴らす度に、確認するように、決して零さないように、念入りに亀頭を喉奥へ押し込み、先生の喉へ精液を直接解き放った。
やがて先生が全て飲み干したのを確認すると、綺麗に舐めとってく

ださいと囁き、先生の髪をくしゃりと撫でる。
それを聞いて、先生は嬉しそうに、幸せそうにぺちゃぺちゃと音を立てながら、尿道に残った精液を吸い上げ、竿を綺麗に舐め上げた。
「……ぷはっ」
竿をすっかり綺麗にしたところで、先生はやっと口を離した。
舐めとりがあまりに気持ち良かった為、先生が口を離した時点で再び勃起していた。
先生はそれをぼーっと惚けた表情で眺めていると、よろよろと立ち上がる。
そして、ドアと逆側の壁に両手を付け、便器を跨ぐようにして立つ。
「……」
何も言わずに、こちらにひどく発情した表情で流し目を送り、いやらしく尻を突き出す。
そして、ぐしょぐしょになったショーツをくいとずらし、物欲しそうに淫猥にひくつく秘部を俺に見せつけてきた。
「っ――――――」
その扇情的な光景に、身体をぶるりと震わせ、先生の腰を掴む。
「……あんまり、声出しちゃダメですよ?」
「……ああ、分かっているさ。それでも耐えられなくなってしまったら……比企谷、君が黙らせてくれ」
先生が振り返ってにこりと微笑み、指で「お口にチャック」のジェスチャーをする。
放課後、多くの生徒が部活や勉強に勤しみ、また多くの先生も仕事に励んでいるこの時間帯に、校舎のトイレで先生と生徒が獣のように交わろうとしているという、この状況の異常さに興奮して、鼓動は速まるばかりだ。
「……ええ、分かりました。……多分、手加減出来ません。ていうか、しません。先生が立てなくなるまでします、気絶するまでします、失禁するまでします――めちゃくちゃに、します」
言うと、先生の背中がぶるりと震えた。
「……はは……比企谷……あ、あんまり、私を、喜ばせないでくれ……

！　もう、我慢出来ない。早く、早く、早く、早く……！」
我慢の限界を迎えた先生が、懇願しながら腰を突き出し、秘裂を亀頭に押し当ててくる。
僅かに挿入されかかった亀頭の位置をそのままに、先生の腰を掴む手に力を込める。
「……分かりました。行きます」
「比企谷……きて、きて、きてくれ……っ」
ずぶり、と先生の膣に俺の竿を思い切り突き入れた瞬間。
先生は跳ね上がるように背筋を反らせ、肉襞がきゅんと竿全体を締め付けた――。
続く。

（4）

1.

怖いくらいにがちがちになった肉棒を、先生の秘裂に突き入れる。

――「突き入れる」という表現が正しいのか、「飲み込まれる」という表現が正しいのか、一瞬分からなくなった。

先生の秘部は、まるで甘い蜜を垂らして餌をおびき寄せてるかのようにするりと飲み込むと、強烈な締め付けで俺の肉棒を決して逃がすまいとしてきた。

しかしこの締め付けは、耐え難い快感を俺だけに与える訳では決してない。

俺の肉棒を咥え込んだ瞬間、先生の身体が激しく戦慄いた。

「いっ――――――あぁぁぁぁぁぁぁんぐっ!?」

先生は快感に耐え兼ねて、最初の一突きで信じられない程の声を上げた。

慌てて先生の口を手で塞ぐ。

「……っぶねぇ……ていうか、大丈夫かな、今の……？」

や、いきなり何してくれちゃってるのこの人？　八幡びっくりだよ。

もし今の先生の声に気付く人が居たら、ひと気が無い分余計に場所を特定される可能性が高まる。

辺りの様子を窺うため、動きをぴたりと止めた。

「ん～～っ……ん～～っ！」

「こっ、こらっ……静さん……っ！　ちょっ、あんまり締め付けないでくださ……い……うぐうっ……！」

俺が腰を止めている間も、先生はいやらしく腰をくねらせて亀頭や竿をぐにぐにと締め付けてくる。

誰かが来るかもしれないという緊張状態と相俟って、

「……あっ……うぐ……っ！」

びゅるっ、と。

ある程度感触に慣れた筈の先生の膣内で、腰も動かしていないとい

うのに、不覚にも軽く射精してしまった。
「ふぅぅぅ……っ、んんっ、んんん……っ」
先生は肉棒から漏れ出した精液に気付き、口を手でしっかり塞がれながらも恍惚とした表情を浮かべる。
……あんたっていう人は……っ。
その瞬間、心が激しくざわついた。
2.
「……」
湧き上がる衝動を必死で抑えながら、口をつぐんで聞き耳を立てる。
……誰も、来ないようだ。足音も話し声も聞こえず、物音一つしない。
ようやく安心して、目の前で痴態を晒している女性に目を向ける。
壁に手を付いていた先生の身体を、口を塞いだままぐいと起こす。
「んぐっ……？」
何が起きようとしているのかと不安がっているのか、先生が眉をひそめる。
「……まったく、こっちは誰かが来やしないかとひやひやしてるっていうのに、好き勝手締め付けて……っ」
言って、先生の口を塞いでいた手の指を、先生の口内にねじ込む。
「んぐっ!?　あがっ、ゆ、ゆるひ……あうぅぅっ……」
許しを請おうとする先生の舌を指で挟んで、最後まで喋らせない。
今言った通り、多少は先生に対する怒りはある。
だがそれは、他のある感情に比べれば大した事はない。八幡、ややおこくらいです、ええ。
そんなちょっとした怒りよりも、そう。
こんな異常と言える状況を心から楽しんでいる、目の前の女性教師を、心底ぐちゃぐちゃにしてしまいたい。壊してしまいたい。
そんな苛烈な欲求が、心の中ではっきりと芽生えていた。
「……っ！　……っ」
先生がゆっくりと首だけ振り返って俺の表情を見て、息を呑むのが

分かった。
きっと今の俺は、嗜虐心に満ち満ちた酷い顔をしているのだろう。
でも、それで構わない。
「静。下、脱げよ」
「……っ!?」
恐らく、出会ってから今までで初めてのタメ口だったからだろう、先生はがつんと殴られたかのようなショックを受けて、目を見開いた。
俺もこんな口をきいた自分に内心びっくりしてる。後で殴られないかなあ……心配。
唖然として固まっている先生に、追い打ちをかける。
「一回言って分からないのか？　ショーツを脱ぐんだよ」
言って、俺は先生の腰に両手を添えて、一度肉棒を引き抜いた。
「ひあぁぁぁっ!?」
突然カリで膣内をえぐられて、先生の腰ががくがくと震える。
そして俺があごをくいと動かして脱ぐよう促すと、先生は口が自由になったものの、特に何か言葉を発することなく、大人しくショーツを脱いだ。
「よし、それを貸して」
俺に言われるがままに、先生は恐る恐る俺にショーツを手渡す。
ぐしょぐしょに濡れたショーツは、むわっと女くさい匂いを漂わせ、ただ手に持っただけで異様な興奮を与えてくれた。
俺はショーツを広げると、先生の前に突き出して見せる。
「あーあー、こんな垂らしちゃって……。信じられない淫乱だな、静は」
「……あ……うあ……」
目を泳がせてふるふると震える先生の反応を見て、確かな手応えを感じた。
こんな反応が返ってくるなら、ここからいくらでも好き放題出来る。
そう思い、敢えてにやにやとした表情を浮かべながら言葉を続け

る。
「それに声も全然我慢出来てないし。なんだよ、一突き目であんな声出しやがって……あんた本当に我慢する気あったのか？」
言って、先生の唇を親指でなぞる。
スカートしか着用していない先生が、手のやり場に困ったようにわきわきとさせながら、羞恥で身体を震わせている。
「正直、手でずっと押さえてるのもきついんだよな。静はどうせここからも声を我慢する気なんてないだろうし」
「あ……っ」
俺の言葉に何かしら反駁しようとしたのだろうか、一瞬口を開いたが、その口は少し震えただけで、またすぐに閉じられた。
「そんな淫乱女には口を塞ぐものが必要だよな――ほら」
「んむぅっ!?」
先生の後頭部を押さえて、ショーツを口にねじ込んだ。
「んぶぅっ、うぇっ、うぅぅぅ――――……っ」
生温かい感触や自分の性器の匂いには抵抗があったのだろう、最初はいくらかえずいたのだが、いくら苦しもうと俺が抜き取る気は無いという意思表示を、表情で固く示したのを見て諦めたのか、何とか口から出さずに留めた。
「よーしよし、頑張ったな」
いつもの関係からは考えられないような、年下の女の子を扱うような態度で先生の頭を撫でると、苦しさや悔しさからか目に涙を滲ませた。
普段なら絶対見る事の出来ない先生の表情に、身体の奥から震える程の恍惚感を覚える。
これで、準備は整った。
先生の腰に手を当ててくるりと反転させると、再び腰をこちらに突き出させた。
ただし、今度は先生の両腕を引っ張った形になっている。
「じゃ、静さん。……好きなだけ、声上げてくださいね」
「……っ！」

先生を言葉でイジメるのはここまでで十分と思い、再び敬語に戻すと、先生の反応も見ぬままに、俺は更なる興奮でいきり立つ肉棒を、少々乱暴に先生の膣にねじ込んだ。

3.

「んぐぅっ!? んぶぅぅっ！ んーっ！ んーっ！ んんんんーっ！」

最初から全開で打ち込むピストンで、先生はショーツを咥えていても声が遠くへ聞こえてしまうのではと心配になる程の喘ぎ声を漏らした。

先生の腕を掴んでいるため、腰の打ち込みと腕の引っ張りにより凄まじい強さと速さで先生の膣を蹂躙することが出来る。

「うぶぅぅっ！ んぐっ！ んぶぇっ、あぐっ、ぅあぁぁぁぁ……っ！」

先生はかぶりを振って必死で動きを止めるよう訴えてくるが、到底やめる気など起きない。

ばちゅんっ、ぐちゅっ、ぐぽんっ、と激しい音が鳴る度、肉襞がぎちゅぎちゅと締め付けてくる。

俺はこの時点で、ある予感をしていた。

「うっ、うぐっ、し、静さん、出る、出る、出ます――――っ！」

言って、一際強く腰を打ち付けると、ばちゅっ！ という水音混じりの激しい音と共に、身体の奥底から込み上げる奔流を感じた。

先生もほぼ同時に全身を痙攣させる。

次の瞬間。

「んぐぅぅぅ――――――――っ」

どぶっ、ごぶっ、ごぶりゅっ、どぶどぶっ……。

先生の膣に、子宮に、たっぷりと塗り付けるように精液を放った。

「ふーっ、ふーっ、ふー……っ」

射精による脈動に合わせて腰を戦慄かせていた先生は、息も絶え絶えにだらりと下を向いた。

射精が止んでも、先生はまだ断続的な痙攣から抜け出せないでいる。

そんな先生の耳元に口を寄せる。
「なーに休んでんですか静さん。……まだまだこれからです――よっ！」
ばちゅんっ。
「んぁぁぁぁっ!?」
射精からまだ大した時間も経たぬ内に、俺は再び先生の膣奥に肉棒をねじ込んだ。
先程まで抱いていた予感、それは互いに1度や2度の絶頂程度で決して満足出来ないであろうということだった。
正直、ここまでの流れがあまりにも異常で、俺の肉棒も興奮の余り何かが壊れてしまったのかと思うくらいに、数度の射精を経て尚、いや、更に凶暴なまでにいきり立っている。
射精したばかりでかなり敏感になっているが、それでも動かせないことはない。
敏感になっているのは先生も同じだし。
先生の耳に届いても、果たしてきちんと認識してくれるのかなどと思いながら、言葉を掛ける。
「うっ、くおおっ、静さん、何度でもしましょう……っ」
「うぐっ、んぶっ、うぅぅぅぅ……っ」
ここからは、ほんのわずかに残っていた理性もどろどろに溶けるまで、互いの頭の中がぐちょぐちょにとろけるまで、泥仕合を続けよう。
4.
「んあぁぁっ、う～っ、う～っ、あっ、かはっ、あぁぁぁ……っ」
「あっ、うぐっ、で、出る、また、出――――っ」
ごぶごぶっ、と。
意識まで一緒に持って行かれそうな感覚を覚えながら、何度目か分からない射精をして、先生の膣内を満たす。
満たす、とは言っても、先生の膣内はとっくにぱんぱんになっていて、お腹がわずかに膨らんでいるのが分かった。
途中から先生はまともな声も上げなくなっていたので、ショーツを口から外して、先生のシャツの上に置いた。帰り道、一瞬たりとも今

日の行為を忘れることが出来ないように、念入りにぐじゅりと押し付けておく。
肉棒をずるりと引き抜くと、先生の膝がかくりと折れて、今にも崩れ落ちそうになった。
「……っとぉ、危ない危ない……」
「ひん……っ」
すんでのところで先生の腹の辺りを抱えて留めると、その弾みで先生の膣から精液が漏れた。
微かに漏れた先生の可愛らしい喘ぎ声は、また更に情欲を掻き立ててくれた。
「じゃ、次は……」
ごくごく自然に言ったつもりだったが、先生にとっては衝撃だったようで、身体がびくんと跳ねた。
「あ……え……まだ……？」
あれだけ俺との交わりを希っていた先生の唇が、微かに戦慄いている。
それが、たまらない。
俺は先生の肩を掴んで、互いの位置を入れ替わるようにくるりと回ると、便器の上にすとんと座った。
体勢の都合上、俺の手は自然と先生の腰を押さえるようになっていた。
肉棒は依然として、ぎちぎちなままだ。
本当に、どうしてしまったんだろう？　と思うくらいに萎えない。
まるで、先生をひたすら嬲りたいと願う俺の心とリンクしているようだ。
……ちょっとシンクロ率高すぎない？
「あ……」
先生が俺の手を握り返しながら、肉棒を見てごくりと生唾を飲み込む音がはっきりと聞こえた。
「静さん……挿れたいですか？」
腰ががくがくになり、とっくに限界を迎えている筈の先生に、我な

がら意地悪な質問をする。
先生は顔を引き攣らせた笑みを浮かべる。
「……ひ、比企谷、いくらなんでも、意地悪が過ぎるぞ？　あまり年上をからかうんじゃ」
「静、俺は挿れたいかどうかを聞いてるんだよ」
「うぁ……っ」
間髪を入れず、先生の尊厳を打ち砕く言葉を畳み掛ける。
後でいくらでも謝ろう、実際ひどいことをしてるんだし。
でも、今は、やめない。絶対に。
「どうなんだ？」
射るような視線を向けると、先生が俺の目と肉棒を交互に見つめた。
やがて。
「……うっ、うっ、うぅぅ……っ」
先生は唇を震わせると、泣きそうになりながら、何とも嗜虐心をそそる笑みを浮かべて、ゆっくりと歩み寄ってきた――。
続く。

（5）

「うっ、うう……うあ……」

返事に戸惑って、普段の凛とした佇まいからは考えられない程、言葉にもならないような稚拙な声を先生が漏らす。

放課後の、特別棟の中の、職員用男子トイレ。

ただでさえ人が訪れない特別棟の中でも、一際訪れる人がいない場所だ。

そんな場所が故に、放課後になってしばらく経った今でも、この空間は物音一つしない静けさを保っている。

窓を開けたら、グラウンドで部活動に精を出しているサッカー部や野球部の声が聞こえるかもしれない。今度はもっと人が来る可能性が高い場所で、先生の羞恥心を煽るのも良いかも。……程ほどにしないとな。

そんなことを何とはなしに考えていると、頭上から手が伸びてきた。

その手が俺の肩を掴む。

微かに、震えていた。

「ひ、比企谷……何を考え事をしてるのかは分からないが……ほ、放って、おかないで、くれ……」

……あ。

やってしまった。

時間にしては恐らく十数秒程度のことだろうけれど、今すぐにでも貫いて欲しい、返事をしなくともその意を汲んでほしいと言わんばかりの顔をした先生を放って、今後の楽しみに思いを馳せてしまっていた。

しかし、この失態を表出させる旨みはない。

先生の腕を掴んで引き離すと、先生が僅かによろめいた。

「……いえ、静さんの反応をじっくり見たいと思ったんですよ。それで？　挿れたいんですか、どうなんですか？」

再びいつもの敬語に戻して、ゆっくり丁寧に、意地悪く聞く。

先生のお腹が肉棒にくっつくほどに、2人の距離は近い。というより、先生がふらふらと近寄ってきて当たっていた。
「あ、う……」
「静さんから言ってくれないと分からないですよ。俺としてはそりゃあ挿れたいですけど、ぐっちょぐちょにかき回してやりたいですけど、静さんの奥深くに白いのを何度でもぶちまけてやりたいですけど」
――それでも、と。先生のお腹に肉棒をぺちぺちと当てながら言葉を続ける。
我ながら、よくこんな卑猥な言葉がすらすらと出たものだ。完全に先生をいたぶるモードに入っている。
「――静さんが望まぬことはしたくないですしね」
だから、と。
先生の秘裂に亀頭を宛がう。
「ひぐぅっ……！」
先生が小さく呻いた。すっかり弱気になっているのか、その声は何とも可愛らしい。
肉厚な入口を楽しむように、亀頭をぐりぐりと押し付けると、何度か射精した分の精液が漏れ出てきて、亀頭から竿へと白い筋が伝った。
「……挿れたいなら、挿れたいって言ってください」
「……っ」
先生の腰に手を添えて、優しく言葉を掛けた。
ほんの一言、ほんの4文字を言っただけで、子宮の入り口まで、この肉棒が突き立てられる。
そのことが十二分に分かっている先生は、俺の顔と、自分に突き付けられた肉棒を何度も交互に見て、自分に突き付けられた言葉に対してどうするか迷っている。
恐らく、まだ中途半端なプライドが残っているのだろう。
……まあ、それもそうか。俺とこの人との関係は、いつもなら、生徒と教師――なのだから。

そう考えた時、肉棒がびくんと跳ねてしまい、先生が「ひあっ……？」と可愛らしい声を上げた。
ここから俺は、もう、敢えて、何も言わない。
先生の腰に添えた手を動かして、秘裂に宛てがった亀頭を、ぐにぐにと挿れそうで挿れない動きを繰り返す。
――やがて、我慢の限界が訪れた。
先生が再び俺の肩に手をやる。
そして、期待通りの言葉を口にする。
「……ひ、比企谷、お願いだ、思いっきり、挿れてくうあああああああ!?」
――先生の言葉が終わらぬ内に、というより、敢えて食い気味に。
予め先生の秘裂に狙いを定めておいて、腰に添えていた手に力を込めて、思い切り先生の腰を落とした。
不意を突く形で、先生の発情しきった秘部を一気に貫いて。
ごちゅん、と。
亀頭が子宮の入り口に当たった。
「あっ、がっ、あへあっ、あ、あ、あああ……」
俺の肩に手を添えたまま、先生がぶるぶると震えている。
涙目で、涎を垂らし、下腹部からは――
……ちょろろろろろろ……。
――温かい液体が、溢れ出していた。
「……はは、静さん、凄いですね。一発で失禁だなんて。……ほら、ほら、ほら、ほら」
更に煽るように、先生のお腹に手の平を押し当て、ぐいぐいと押し込む。
「あひぁっ!? やっ、やめっ、あぐっ、あっ、あっ、あ～……っ」
先生が気持ち良さそうに喘ぐと、俺が手を押し込むのに合わせて、ぷしゃっ、ぷしゃっと液が噴き出した。
「ほら、先生、何してるんですか。折角入ったんだから、きちんと動かさないと」
腰をぐりぐりと回して肉襞の感触を楽しみながら、意地悪く言う。

「あ……う、あ……そ、そうだ、な、動か、ない、と……」
今にも意識が飛びそうな虚ろな目をして、先生がゆっくりと腰を上げる。
膝をがくつかせながら立ち上がる先生の身体の震えは膣肉に連動して、子種を搾り取ろうとぎちゅぎちゅと締め付けてきた。
先生の中に入っているのは亀頭だけ、という状態にまで身体を上げた所で、先生の動きが止まる。
「はあ……はあ、はあ……」
どうやら、もはや限界のようだ。
「静さん……よく頑張りましたね」
「あ……ふあ……？」
言って、先生の頭をそっと撫でると、先生から幼い声が漏れた。
――ふと、この人が高校生の時にこうした行為に及んでいたら、どんな反応を示していたのだろうか、などと考えた。
……制服プレイ？　先生はグラマラスだからそれっぽくならないかな……ちょっと検討してみよう。
――などと考えていると。
「ひ、比企谷ぁ……わ、私は、もう、動けないんだぞぉ……」
先生が涙目で訴えかけてきた。
……わー、幼い感じの先生も中々……うん、たまらん。超可愛い。
「ああ、すみません、またちょっとイジメてみました」
そして非を認めないという俺、超クール。
「じゃあ、ここからは……」
言って、腰に添えていた手をずらして、たわわな尻肉を掴む。
「ひあああっ!?」
先生が驚く声を聞いて、にやりと笑う。
「――俺が、動かします」
そう告げて、手に力を込めた瞬間、先生の顔がひくっと引き攣ったのが見えた。
続く。

（6）

「うあああああっ!?　あっ、あくぁっ！　うぐうう、ひぎっ、ひあっ、あっ、あううう……あひっ！　ああっ！　へああ……っ」

トイレの中に、先生の嬌声があらん限りに響く。

放課後に特別棟で部活動をしてきた経験、そして今さっきまでの状況から見るに、恐らく人が来ることは無いだろう。

――そう思い、俺に跨っている先生を、全力で犯すことにした。

「あぐっ、あっ、いぎっ、まっ、待って、こんなのすぐ……いあああああ……！」

弓なりに反りかえって、先生の白い喉が晒される。

――人が来ないとは言っても、それはあくまで確率が低いというだけの話であって、確証ではない。

……だから、早めに終わらせよう。

そう思い、何の容赦もなく、腰を突き上げながら先生の尻を上下させて、一回一回肉棒で強烈に先生の膣を抉る。

先生の膣はまるで、先生の意識から切り離された別の生き物であるかのように、肉棒を入れるときは根本まで包み込むように温かく迎え入れて、きゅむきゅむと心地良く咥え込んでくる。そして抜くときは、決して膣内から逃がすまいとぎゅむぎゅむと力強く締め付けてくる。

「うぐっ、静さん……やば、うぐぁ……っ！」

先生の身体で味わう、余りにも強い快感に、これだけ先生のことをイジメておいて難だが、ピストンの途中で何度も先走りでない汁が出てしまっていた。

さっきまでのように自分から動くやり方だととてもピストンなど続ける余裕は無かったが、今は自分が動けなくても先生を動かせば何とか行為は続けられる。

そのため、先生だけでなく自分自身にも無理矢理快感を脳髄に叩き付けて、油断すれば意識が刈り取られそうなスリルを楽しんでいた。

「あっ、うあっ、あえっ、かはっ、比企谷のが、わたひの中、えぐって、

あっ、あがっ、あおおおおおお……」
先生が涙を流して、呂律の回らない、獣のような喘ぎ声を上げながら、再び果てる。
汗と、精液と、愛液と、尿とで。
普段使われていないせいか、何の匂いもしなかったはずのトイレには今や、立ち入っただけで勃起してしまいそうな程の、淫猥な匂いが形成されていた。
先生は最初こそ自分の足で身体を支えて、前傾で俺に身を寄せていたのだが、途中からは快楽に耐えられなくなったのか、足を俺の方、即ち先生から見て前方に投げ出し、俺の首に腕を回して身体は後傾させ、俺のなすがまま、されるがままになっていた。
「静さん、気持ち良いですか？　静さんの中、ぐちゃぐちゃのきつきつですよ」
「やああ……言わないで……くれえ……！」
上を向いて虚ろな目をしている先生を煽ると、膣腔がぐちゅぐちゅと鳴り、肉棒をきゅいきゅいと締め付けてきた。
ああ、なんでこの人は――。
「あえっ、かはっ、ひぐっ、うぐうっ、あひぁっ、また、イっ、イク――」
――こんなに、綺麗なんだ。
噴き出す汗、焦点の定まらない目、乳房を伝う唾液。
どれも、普段の先生からはかけ離れたものだ。
普段学校で見る、凛とした姿こそが至高だなどと野暮な考えは持っていないが、それでも、このギャップには心底驚く。
だが、それでこそ、それだからこそ、綺麗で、美しくて、ぞくぞくして。
――めちゃくちゃに、したくなる。
このまま射精するまで、一気にペースを速めよう、ぐちゃぐちゃにしよう――と思った矢先。
「比企……谷ぁ……」
先生が涙声で俺の名を呼び、俺を見つめる。もっとも、その目もき

ちんと合っているか定かではない程うつろなのだけれど。
「なんですか？」
動きを止めて、先生に答える。
「……これ、だめ、だ……こんなこと……してたら、私は、もう、我慢出来なくなる……朝昼晩お前に抱かれないと……もう、耐えられなく……なる……うう……あっ、かはっ、ううう……」
「……な……っ」
俺の動揺をまるで気にすることなく。
先生は、俺に唇を重ねてきた。
「んむぅっ、んぐっ、ぐちゅるっ、じゅるっ、ちゅぴっ、あはっ、ひうっ、んんんっ……んぐうううう……っ」
「〜〜〜っ！」
先生は足の位置を戻して、身体も前傾に戻していた。
先生の量感溢れる双乳が押し当てられ、ぴんと張り詰めた乳首の感触が伝わる。
俺が圧倒されている内に、先生は自ら腰を上げた。
そして唇を離して、俺の首に吸い付きながら、ぐぷぷとゆっくり肉棒を飲み込んでくる。
「静さん……っ!?　うあああ……っ！」
ゆっくり、ゆっくり、ゆっくりと。
先生の舌の口が、肉棒を入念に貪る。
それも、腰を悩ましげにくねらせ、回しながら。
「あっ、あがっ……〜〜〜っ！」
自分のペースで、目の前に居る愛しい女性の中にぶちまけようと思っていたのだけれど。
「ほら、比企谷も、気持ち良くなってくれ……？」
まるで予想していなかった、緩慢な腰の動作と、柔らかな膣の締め付けと……耳元で囁かれた、甘い、甘い囁き声によって。
「うあああああああああああ……〜〜〜〜〜〜〜〜〜っ！」
どくっ、どびゅっ、ずびゅっ、びゅびゅるっ、どぷっ、ぐびゅるるる……。

「比企谷、比企谷、比企谷ぁ……ひあああああああっ！」
長い呻ぎ声と共に、それと同じくらいの時間をかけて、まるで何日も溜めていたかのような精液が、先生の子宮に叩き付けられた。
それと同時に、先生も全身を戦慄かせて絶頂に達し、下腹部に生温かい液体がかけられる。
「……はあ……はあ……はあ」
「……あっ、かはっ、あっ、あっ、あっ～～っ、あっ……」
膣肉が、名残惜しそうにきゅっきゅっと収縮を繰り返し、尿道に残っていた精液を搾り取る。
そして、深く深く繋がったまま、２人とも息を切らせて。
――やがて、短い眠りに落ちた。
× × ×
「そういえば」
帰り道――俺は学校を出て少し離れた所で待っておいて、先生の車に乗り込んでいた。
「明日は土曜……だな」
赤信号で止まり、先生が前を向いたまま、楽しそうに呟く。ううん、ガンプラを前にした時と同じようなはしゃぎようなんだけれど……どう考えても、この状況では意味することは一つしかないよなあ。
……試しに。
「そうですね。先生がせっかく朝昼晩抱かれないと耐えられないなんてエロすぎる事を言ったんですし、ヤリまくりましょう。ああそうか、今日これから始めて日曜までやるんだったら、夜朝昼夜朝昼夜とヤレますね。はは、月曜は立てるか不安ですね」
などと。
普段だったら絶対言わない、言ったら恥ずかしさで死んでしまうようなことを、惜しげもなく言ってみた。
や、恥ずかしくて死にそうなんだけどね。
さて、こんな恥ずかしい、半ば冗談のような事を言った訳だけれど、先生の反応は――
「ほほう……」

信号が青になりアクセルを踏む直前、先生が鋭い目つきで俺を見る。いかん、本気の目だ！
「あ、や、今のは、えーと……」
やばい。超後悔してる。
「……比企谷妹に連絡しておきたまえ。お兄ちゃんは土日、帰りませんとな。ああ、安心すると良い、下着の類はきちんと買うからな」
「……」
……。
やばい。
搾られる。
肉体的に。
徹底的に。
……性的に。
「……引き返す道は、ありますかね……？」
恐る恐る尋ねると、先生ははっはっはと高らかに笑った。
「比企谷、君は面白い事を言うな。あれだけの事を私と学校でやって、更に今しがたあれだけ卑猥な発言をして煽っておいて、今更引き返す？　まさか本気じゃないだろうな？」
「うぐぁっ……」
再び赤信号で止まると、先生が俺の股間に手を置き、艶っぽい笑顔をこちらに向けると、ちろっと舌なめずりをした。
「……いえ……」
はい、投了。
「うむ、よろしい。では景気づけにラーメンでも食べに行くか！　さーてどこに行こうかなあ……」
「……」
心底楽しそうにはしゃぐ先生を見て、この人は本当にさっきと同じ人なんだろうかと疑問に思ったけれど。
……うん、可愛いし、しっかりしてるし、美人だし、巨乳だし、包容力あるし、エロいし。
……あとは……。

「先生、今日ラーメンにするのは何の問題も無いので、明日か明後日、料理の練習をしませんか？」
「お、おお？　どうしたんだ急に？」
「や、俺たち2人とも、大した料理は出来ないでしょう？　だから、2人で練習出来たらなあと……」
　再びの赤信号で止まった時、頬をぽりぽりと掻きながら言うと、
「そ、そうか、そうだな……うん、これから、2人には、そういうことも必要になる訳だし……なあ……」
　先生が乙女丸出しの表情で照れて、もじもじとこちらを見た。
　……うーわ、ずるいわこの人。どんだけ可愛いんだよ。
「……ま、ゆっくりやって行きましょう」
　言うと、青信号に変わってちょうど先生がアクセルと踏む所だった。
「……ああ、そうだな。……でもまずは、ラーメンだ！　さーてさてさて……」
「……ふふ」
　再びはしゃぐ先生を見て、小さな声でくすりと笑った。
　人と丸二日半も居たら、高等ぼっちの俺は物凄く疲れるとは思うけれど。
「なりたけかなー？　いや、今日は少し足を伸ばしてみる手も……」
　……こんな、綺麗で、可愛くて、少年チックで、面白くて、包容力のある人と過ごすならば。
　疲れはしても、結構楽しむことは出来そうだ。
　……どんだけ搾り取られるんだろうなあ……。
　隣の先生をちらりと見やる。
「ああそうだ、帰りに精力のつく栄養ドリンクやら何やらを買っていこうか。さあて楽しみだ楽しみだ……」
「マジですか……」
　……あれだけいつも鬱だ鬱だと言っている月曜日だけれども。
　この時ばかりは、何としても次の月曜日を生きて迎えたいと、心の底から願った。

お終い。

いつだって、城廻めぐりは見てくれている。

（1）

1.

「……」

「……」

穏やかな静寂。

だけれど、恐らく俺だけが一方的に緊張している。

手元の本の文字列を目で追いながら、時折ティーカップに注がれたコーヒーに口を付け、こくりと飲み込む。

……苦い。

あまりに謎な状況の為かテンパってしまい、ガムシロップを入れるのをすっかり忘れてしまっていた。

ティーカップを見つめてぐぬぬと唸っていると、向かい側からくすりと笑う声がする。

「比企谷くん、それブラックだよね？　苦くない？」

「ああ、や、その、大丈夫です、先輩」

めぐり先輩の問いかけに慌ててしまい、一切思っていないことを口走ってしまう。この時点で超かっこ悪い……。

「ふふ、もう……。そんなに無理しなくて良いんだよ？　わたしさっき余計にガムシロップ貰ってきちゃったから、はい、あげるね」

にこっと微笑んで、めぐり先輩が手元に置いていたガムシロップを差し出してくれる。

受け取ろうとすると、めぐり先輩の白く細い指につと触れた。

「あ、す、すいません……それと、ありがとうございます」

「あはは、いいよいいよ。比企谷くんはかわいいなー」

文庫本を片手にほわんと柔和な笑みを浮かべるめぐり先輩を見て、内心でろでろになる程気持ちが蕩けていた。

どうしよう、一家に一台、いや一家に一めぐり欲しい。

おいおいどうすんだよ、家に帰ったら姉めぐりんと妹小町がいるん

だろ？　何それ来世もこの家で暮らしたいレベル。
うーん。
ていうか、なーんでこんな状況になってるのん？
2．
遡ること1日、というか昨日。
2月のある日のこと。
「というわけで、先輩方、ご飯に行きませんか！」
「……は？」
部室に現れた一色の突然のお誘いに、拒絶の意たっぷりの声を発した。
俺のそんな返事を聞いて、一色が膨れっ面になる。
「むー……」
なんだよフグかよ。外敵でも現れたの？
膨れっ面であざとくぷりぷり怒りながら、一色が抗議してくる。
「ちゃんと話を聞いてからにしてくださいよー！」
「や、お前がのっけから俺が断るとしか思えないような要約をしてくるのが悪い。あんな誘い方されたら俺は誰に誘われたって断るぞ」
「ヒッキー、相変わらずだね……」
「なんでそんな酷いことを堂々と胸を張っていえるのかしら……」
俺の台詞を受けて、由比ヶ浜と雪ノ下が同時に呆れる。ううむ、シンクロ率高いなこいつら……。
「急にごめんね。忙しくなかった？」
一色の隣に居ためぐり先輩が口を開く。おお、一色と違ってちゃんと話を聞く気が起きるな。やばいな俺超失礼。
ほんわかめぐりんの問いかけに対して、雪ノ下は目線を上げ、ふっと微笑む。
「大丈夫ですよ、城廻先輩。この男に忙しい時なんて年中ありませんから」
「おいこら、ついこないだのフリーペーパー作りの地獄をもう忘れたのか。あれで忙しくないとか言ったらもうこの部活を完全にブラック認定すんぞ」

「あの、どういう流れであたしたちがお誘いを受けてるんでしょうか？」
由比ヶ浜がふと口を開いた。おお、まともな発言だ、珍しい。記録しておけば良かった。それとなく俺のツッコミをスルーする辺りも流石と言える。思わず泣いちゃいそう。
由比ヶ浜の問いに対して、一色が口を開いた。
「えっとですね、もうじき城廻先輩が卒業されるじゃないですかー。それで、生徒会で送別会をしようってなったんです」
「で、その前にね、すごくお世話になった奉仕部のみんなとも一度じっくりお話したいなってことをさっき一色さんに言ったの。そしたら『それなら今すぐお願いしに行きましょう！』って一色さんがはりきっちゃって……」
めぐり先輩が一色の言葉を引き継いで、たははと苦笑する。
おお、苦笑するめぐり先輩もなんか和む。良いぞ一色、お前のはりきりはよく分からんが、それによりめぐり先輩の苦笑顔を見ることが出来た。でかした、いろはす！
「そんな訳でー、奉仕部との食事に関しては生徒会とっていうよりはわたしと城廻先輩が個人で動いてるんです。いかがですか？　日頃の感謝を込めて、奉仕部のお三方とぜひお食事をしたいなーって」
一色が手をもじもじさせながら、ちらちらと見てくる。俺を。……え、なんで俺？
ふと隣を見ると、なんか膨れっ面の奴がいた。
「むー……」
なんだよまたフグかよ。ここって下関だったっけ？
「ヒッキー、でれでれしてる」
不機嫌そうな由比ヶ浜が言い、再び膨れっ面になる。忙しいなお前……。
「や、なんでだよ」
まあ、冷静に考えたら、可愛い女子（先輩、同期２人、後輩）に囲まれてるこの状態っていうのは、多くの男どもから見たら射殺の対象になるよな。

「今の一色の言い方だとアレだ、雪ノ下と由比ヶ浜が奉仕部への感謝を受け取ってくれれば俺がいなくても十分にその食事の目的を果たせる訳だな。第一俺はその日はほら、アレだから」
「ヒッキー、まだいつ行くか聞いてないよ」
「うぐ……」
　由比ヶ浜からの冷静なツッコミに呻いていると、正面から全く容赦ない声が飛んでくる。
「なんですかー先輩のその屁理屈。キモいですよ、キモいです」
「なんで今キモいって2回言ったの？　そんなに大事なの？」
　こいつ……何の容赦もねえな……。
　ぐぬぬと唸って一色を睨んでいると、雪ノ下がすいと手帳を取り出した。
「日にちはいつを予定してるのでしょうか？」
　それに対してめぐり先輩が瞑目してうーんと唸り、やがてぱっと目を開いた。
「みんなが空いてるなら、出来れば明日でもいいかなって。ほら、今日金曜日でしょ？」
　それを聞いて、雪ノ下は手帳を、由比ヶ浜が携帯を確認する。そして雪ノ下と由比ヶ浜が目を合わせて、それからめぐり先輩に視線を向けてこくりと頷いた。ま、まずい、急に慣れない予定を入れられる！
「や、ほら、アレです、急に予定を入れられるとちょっと心の準備が間に合わないんで、明日はちょっと……」
「どんだけ緊張してんのっ!?」
　由比ヶ浜からのツッコミが入る。
「それならいつが良いの？　来週の土曜日？」
　雪ノ下から冷静に別案を提示をされて、腕を組んで考え込む。
「うーん……そうやってちょっと遠くに予定を組むと、3日前から『やっぱ行きたくなーい！』って思うんだよな……だからその場合もちょっとアレだ」
「それじゃ永久に予定を組めないじゃない……」
　雪ノ下はこめかみに手を当てて、ふうとため息を吐いた。ごめん

ね、めんどくさい奴で……。
　このやりとりを聞いていた一色が、更に露骨にため息を吐いてまとめにかかる。
「先輩ってほんとめんどくさいですねー。じゃあ、明日で良いですか？」
「ねえ、俺の話聞いてた？　俺にも人権あるんだよ？」
「城廻先輩も、雪ノ下先輩も、結衣先輩も明日で大丈夫なんですよね？　それで先輩も明日は暇な訳じゃないですか。……何か、言いたいことはありますか？」
「ぐ……」
　状況整理すんじゃねえよ……そうだよ、この状況だと俺がただの空気読めない奴だよ……。読みたくもない空気だけど……！
「や、その、明日はアレだ、小町と家で兄妹水入らずで過ごしたいから」
　言うと、由比ヶ浜がちゃっと携帯を取り出してすいすいとイジリ出し、何かの確認を始める。
「あー、小町ちゃんなら明日出かけるってさ。昨日メールしてたとき聞いたよ」
　おいいいぃ！　由比ヶ浜さん、何追い込みかけてくれちゃってんのおぉぉぉ!?　っていうか2人仲良いなおい……。
　気付くと、4人からの視線の圧がやたらと高まっていることに気付く。めぐり先輩の期待の目が一番きついよぉ……！
「うぐぐ……」
　額にしわを寄せて唸っていると、ふと両袖が引っ張られたことに気付く。
　右を見ると由比ヶ浜が、左を見るといつの間にか机を回り込んだ一色が、それぞれ俺の袖を摘まんでいる。由比ヶ浜は「ヒッキー、来てくれないの？」という子犬みたいな目を、一色は「さっさと返事しろよこのノロマ」という鬼みたいな目をしている。一色のはちょっと盛りましたごめんなさい。
　雪ノ下はそんな由比ヶ浜の行動を見て、ふっとため息を吐いて温かい目で見ている。ちょーっと聖母感が半端ないですねー。

「比企谷くん……来てくれるかな？」
取り囲まれた俺を見て困ったように笑いながら、めぐり先輩が問うてくる。
……逃げ場がないぜぇ……。
頭をがしがしと掻いて（心の中で）、ふぃーと息を吐く。
「……明日、何時集合にしますか？」
言うと、めぐり先輩と由比ヶ浜の目がぱぁっと明るく輝き、一色と雪ノ下が「ほお？」と驚いた顔をした。後ろ２人は俺をなんだと思ってるのん？
「やった、ありがとうね、比企谷くん！　それじゃあ明日の集合時間と場所は……」
それぞれが手帳や携帯を取り出しながら、机に身を寄せ合う。
……まあ、たまには、ね。
こんだけ居れば俺が喋る必要も無いし、程ほどに空気と化すとしよう。

続く。

（２）

１．

翌日土曜日。

集合したのはとあるスイーツパラダイスの前だった。

集合時刻の２０分前と割と早めに着いてしまったので、辺りを見渡しながら、ベンチに腰掛けて文庫本を読む。

「……」

しかしスイパラか……なんてこった。これじゃあ会話以外でも女性陣のテンションが無駄に上がるじゃねえか……由比ヶ浜とか一色とか。俺絶対付いていけねえよ。普段も付いていけてないけど。

文庫本を読みながら、これからの食事会に対する無駄なイメトレをして絶望していると、横から柔らかな声が聞こえた。

「あ、比企谷くんだ。おはよー」

振り向くと、めぐり先輩がほんわか笑顔を湛えて立っていた。

「……どもです」

それなりの挨拶を交わして、めぐり先輩を見やる。

柔らかなクリーム色をしたダッフルコートを着て、バッグを両手で持っている。

いつも通りのほんわかした雰囲気と私服の可愛さとが相俟って、なんか、もう。

……やべえ、超和む……。

めぐり先輩は俺のすぐ横にごく自然に座ると、ふーと一息ついた。

「早いね。結構待ってた？」

「いえ、全然ですよ」

……。

……何この会話。デートみたいじゃね？

……うそうそ、何でもないです。誰か知らないけど許して……。

この状況で読書に勤しむのは流石に憚られて、そそくさと文庫本を鞄にしまう。

面接を受ける時のような妙にかちこちした姿勢をとると、めぐり先

輩がくすりと笑った。
「ふふ、どうしたの急に？」
「あ、や、まあその、緊張と言いますか……」
まともに受け答えが出来ない自己嫌悪に陥りながら、冷や汗を垂らしつつ向かいの通りに目をやる。
「あはは、比企谷くんは面白いね」
「……はぁ、ありがとうございます」
……。
返事自体は生返事もいいところだったのだけど。
内心、心臓がばくばくしていた。
や、そんな全く大したことのない（失礼）褒め言葉なのに、にっこにっこにーな笑顔で言われるとそんな言葉でも心にすっと入ってくる。
こ、これがめぐりんパワーか……！
動揺がバレないか心配しながら目を泳がせていると、見慣れた女の子たちが歩いてきた。
……ううむ、目立つな、こいつら……。
……って、ん、あれ？
予想していなかった人物に目を凝らしていると、由比ヶ浜がとてとてと小走りで向かってきた。あかん、メロンが揺れてる！　ばるるんばるるんって！
「ヒッキー、やっはろー！　……ととっ……!?　城廻先輩、おはようございます！」
途中でめぐり先輩の存在に気付いたようで、由比ヶ浜が慌てて挨拶をする。
由比ヶ浜がたははと笑っていると、彼女の肩にそっと手を添えて、雪ノ下が顔を出した。
「城廻先輩、おはようございます。それと、えーっと……」
「ねえ、ここにきて忘れるのおかしくない？　記憶力大丈夫？」
お前はどこの忘却探偵だよ。あ、でもめぐり先輩のことは覚えてるのな。あ、俺がどこぞの元生徒会長みたいなもんなのかな。あれ、そ

れだと元から認識されてなくない？　どうしよう、詰んでる！
　俺のツッコミに対して、雪ノ下が平然とした様子で艶やかな黒髪を払う。
「失礼ね、あなたより遥かに優秀よ」
「よく存じ上げてます……」
　のっけからの忘却イジメにげんなりしていると、雪ノ下の肩口から一色がひょこっと顔を出す。なんでみんな肩経由なのん？
「先輩、城廻先輩、おはようございますー。……なんか先輩がわたし達より早く来てるのって生意気ですね」
「や、なんでだよ。立派な心掛けだと褒めるべきとこだろうが」
「あら、いつもろくな行動しかしない償いかしら」
　雪ノ下が追い打ちを掛けてくすりと笑う。ほんといい性格してるわこいつら……。
　……と、それよりも。
「……なんでお前が居るんだ？」
　いつツッコむか迷っていると、気が付いたら由比ヶ浜と雪ノ下の間に、小町がにこにこしながら立っていた。いつの間にそんな良いポジションに……。
「やー、昨日結衣さんからこの話を聞いてね。綺麗な女の人たちに囲まれて、ごみいちゃんがまともに振る舞える訳が無いから支えないとって思って、結衣さん経由で一色さんにお願いしたらオーケーもらえたので来ちゃいましたー！　今の小町的にポイント高い！」
「そうなのか。最後のは相変わらず要らんけど……って、あれ？　お前用事あったんじゃないのか？」
「キャンセルしちゃった！」
「……」
　ぺかーと光り輝くような笑顔になって、大げさにVサインを作る我が妹。
　……うん、まあ、可愛いから良いか。
　それに、と小町が言葉を付け加える。手を後ろで組んでむふふーと笑いながら。なんだおい、超可愛いな妹よ。

「将来のお義姉さん探しもしておきたいしねー！　こんなに綺麗で可愛い人たちが一同に会することなんて滅多にないだろうし！　邪魔者もいないしねー！　あー楽しみだなー☆」
「小町ちゃん小町ちゃん、なんでそんな恥ずかしいことを躊躇無く言えちゃうの？」
あとさりげなく邪魔者がどうのって言ったのが超怖いんだけど。どう考えてもクリパの時の材木座を思い出したとしか思えない。
……なんで雪ノ下も由比ヶ浜も一色も顔赤くしてるのん？　死にたくなるからやめてよお！
冬なのにやけに火照る顔を手で扇ぎながら、もう一つ不思議に感じたことを思い出した。
「ま、良いんだけど……それなら俺と一緒に来れば良かったんじゃねえのか？」
小町に疑問を投げかけると、人差し指で下唇を押し上げて、んーと考える仕草をする。はいはい、可愛い可愛い。本当に可愛い。
「せっかくだから驚かそうと思って！　まあそれは理由の２％くらいで、実際は先に一色さんと仲良くなった方が何かと話が早いなーと思って、先にお三方と合流してたのでしたー！」
２％かよ。それもうほぼほぼ０じゃねえか。
またまたぺかーと光り輝く笑顔になる小町に、一色が声を掛ける。
「小町ちゃん、名前で呼んでってさっき言ったでしょー！　もっとフランクで良いよ？」
にこやかな一色の表情を見て、少し驚く。
おお、これがこいつの先輩としての顔なんだな……ちょっとどきっとした。
一色の言葉を聞いて、小町がテヘペロ顔をする。くっそ、うざかわいい……。
「そうでした！　いろはさん、よろしくです！」
「きゃーっ！　もう小町ちゃんってばほんとかわいー！」
一色が小町に頬ずりを始めた。なんなの、俺の周りは百合だらけなの？　あ、由比ヶ浜も混じった。雪ノ下が仲間に入っていいものか

迷っている！　あ、由比ヶ浜が迷っている雪ノ下を強引に仲間に引き込んだ！　百合パーティーが４人になった。パーティーのメンバーは、絶壁の氷魔法使い、メロン武闘家、あざ盗賊、天使の４人になります。宿で相部屋になったら毎晩大変です、色々と。

新たな展開を見せた百合百合しいやりとりを、ぱちくりした目で見ていためぐり先輩が、俺の耳元に顔を寄せ、内緒話のように囁きかけた。

「比企谷くん、モテモテだね」

「いや、どこを見てそう思うんすか……」

呆れた目をめぐり先輩に向けるが、めぐり先輩はうふふーと妙に含みのある声を出して微笑み、４人の女の子たちへ向き直った。

「さ、皆揃ったことだし、入っちゃおうか」

めぐり先輩の笑顔につられて、４人の表情がより明るくなる。

４人とも頷いたかと思うと、小町と由比ヶ浜と一色がこちらに寄ってきて、それぞれ俺の胸ぐらと両腕を掴んで引っ張ってきた。ちなみに胸ぐらを掴んできたのは小町です。おかしくない？　俺を投げたいの？　柔に目覚めたの？

「ほら、お兄ちゃん、行くよー！」

「ほらヒッキー、行こ行こ」

「せんぱーい、早くー！」

「え、なんでなんで？　立つだけだよ？　俺そんなに足腰弱くないよ？」

俺の扱いの謎さに首を傾げていると、隣でその様子を見ていためぐり先輩がくすりと笑った。

続く。

（3）

「おお……」

店内に入るなり、感嘆のため息が漏れた。

スイパラには初めて入ったのだが、なるほど、これは天国だ。

色とりどりのスイーツやパスタが所狭しと並べられている。パスタは恐らく糖分ばかり摂ってげふんとなったときの口直しを兼ねているんだろう。

……血が騒ぐぜぇ……。

……は、いかん、中二病が再発するところだった……！　再発したら命（社会的な）は無いってお医者さま（小町）に言われたんだった。

スイーツを眺めながらどういう戦法を取ろうか考えていると、めぐり先輩がその様子に気付いたらしく、とててとこちらに寄って話しかけてきた。

「比企谷くん、甘いの好きなんだ？」

「ええ、まあそうですね」

「良かったー、もし嫌いだったらどうしようかと思った」

言って、めぐり先輩がにぱっと微笑む。

……。

……や、昨日の時点で俺の意見を全く聞くことなく４人で決めて予約とってましたよね？　まあ雪ノ下や由比ヶ浜は俺が甘党だと知ってるだろうから、それを基に判断したのだと信じたい。うん、信じる。信じよう。信じたい。

×　×　×

テーブルについて、まずは各々が食べ物を取りに出かける。

全員が席を離れるのは避けたいので、初めは俺とめぐり先輩が留守番を務めることになった。

女の子４人が三三五五に散っていく様を見ながら、ぼんやりと窓の外を見る。

テーブルの上で手を組み、その上にあごを乗せながらめぐり先輩が楽しそうに女の子たちを遠目に見ている。

「うーん、こういうの良いなー、とっても楽しい。これからもっと楽しくなるだろうし。うん、今日は良い日だ！」
鼻唄でも歌い出しそうな程上機嫌なめぐり先輩を見て、思わず頬が緩む。
「そうっすね。俺は小町が居るので取り敢えずこの場は大丈夫そうです」
「あはは、小町さん次第なんだね……」
うぐ。
めぐり先輩に苦笑させてしまった。
ちなみにめぐり先輩は基本的にみんなを苗字で呼ぶのだけれど、「比企谷くん」と「比企谷さん」ではどうにも分かりづらいので、小町だけ名前で呼んでもらうことにした。うーむ、めぐり先輩に名前で呼ばれるなんて……光栄に思え、妹よ。
遠征組をちらりと見たら、由比ヶ浜がいつも通り雪ノ下に抱き付いてた。うん、今日もゆりゆりしいですね。
一色は嬉々とした表情でスイーツを選んでいる。あいつと由比ヶ浜は実に分かりやすくＪＫＪＫしてるな。雪ノ下は異端で小町は天使。
しばらくすると４人がぱらぱらと戻ってきたので、今度は俺とめぐり先輩が席を立った。
× × ×
「ほわぁー、ほんとにたくさんあるねー。これは食べ甲斐があるぞー！」
めぐり先輩がトレイを持って、ふんすっと気合を入れる。
「先輩、こういうとこ来ないんですか？」
聞くと、めぐり先輩はショートケーキを見てむむむと唸りながら、ゆっくりと俺に目を向けた。
「うーん、たまには来るんだけどねー。どうしても、ほら、体重とか気にしちゃうから、あんまり行けないんだよね……」
言って、めぐり先輩がちらりとお腹に目をやる。
「失礼かもしれないですけど、先輩、全然太ってるように見えないです

よ？　そんなに気にしなくて良くないですか？」
　ほんと、女子の「太ったー！」に対して男子が「や、どこかだよ……」と思う率は異常。男子っていうか俺な。やだ、俺男子の代表になっちゃった！
　俺の意見に対して、めぐり先輩はたははと力無く笑う。
「あー、よく聞くねーそれ。うーん、何て言うかなあ……わたしもそうなんだけど、女の子がそういうことを言うときって、大抵部分的な所を言ってると思うんだよね。見た目では分かんなくても、『二の腕がー！』とか、『お腹周りがー！』とか、そういうピンポイントな悩みが多いと思うんだ……」
　後ろに行くにつれてめぐり先輩の口調が暗くなる。その視線は今自分で挙げた部位に向けられていた。ご、ごめんなさい……。
「そ、そうですか、なんかすいません」
　すごすごと謝ると、いやいや大丈夫だよーとめぐり先輩がぶんぶん手を振った。やだ何この仕草超可愛い。
「だからこそ、こういうときは沢山食べたいんだよね！　それで帰りは大股早足で帰るんだ！」
　わざわざ一旦トレイを置いて、腰に手を当ててむんっとやる気に満ちた表情をした。
　あー。
　なんだろう。
　この人を見てると、自然と元気になるなあ……。
　毎朝出かけるときに、晴れ空の下ベランダで布団を干すめぐり先輩を見たい。もちろんエプロン着用で。やべえ、すぐにでもＣＭのスカウトが来るぞ。洗剤とかの。
　こんな感じで、めぐり先輩と他愛も無い談笑をしながら、皿にケーキやら何やらを取り分けてほくほくしながら席に戻ると、何やら空気が重くなっていた。え、なんで？
　見渡すと、既に着席している４人の視線が一様に俺とめぐり先輩に注がれている。
「むー……」

由比ヶ浜が唸っている。お前ちょっとフグフグしすぎだぞ。毒入ってんの？
「……」
雪ノ下さん、無言の圧はあかん。八幡、潰れ死んでまう。
「伏兵がさらに……」
一色、何を言ってはりまんの？　鋭い目つきで見つめてくるのやめてね？
「お義姉ちゃん候補がもう一人……大奥……」
「おいこら小町、やばげな単語を呟くな」
目をキラキラさせてる小町にだけ、声を出してツッコんだ。
この様子を見ていためぐり先輩が、またもくすくすと楽しそうに笑う。
「比企谷くん、やっぱりモテモテだね」
ほんわかとした笑顔で言うと、めぐり先輩はぽわんと笑みを浮かべた。
「ま、眩しい……！」
何故か小町が両手を翳して呻いた。何だお前……。

×　×　×

「むむむ……これ、美味しいな……後で作り方調べよっかな……」
口にしたケーキを見つめ、一色が思案顔をしている。
「一色さん、お菓子作りが趣味なんだったっけ？　こういうのも作るの？」
めぐり先輩が楽しそうに質問をすると、一色がきりっとしたまま顔を上げた。
「そうなんですよー。美味しいのに出会うと家で作れないかなーって考えちゃって……」
言って再びむむむと唸る一色に、由比ヶ浜が食いつく。
「あー、分かる分かるー！　美味しいの食べると自分で作りたくなるよねー！」
「由比ヶ浜さん、周りの人間の為にも、それは思うだけに留めてちょうだいね」

「ゆきのんひどい!?」
「結衣さん、ご友人やご家族と険悪になりたくなかったら実行はしないでおく方が無難かと……」
「小町ちゃんまで!?　なんでー!?」
　由比ヶ浜が笑顔でちょっと狂った事を言い出したので、方々からツッコミと言う名の罵声が浴びせられる。良いぞ、もっとやれ。殺戮兵器を奉仕部から産み出す訳にはいかん。絶対に！
　みんな思い思いにスイーツを食べながら、雑談が続けられる。
　ふと、この布陣を見たとき、多人数でのお喋りに明らかに慣れてなさそうなヤツがいるなあ……と思ってちらと見やると、そいつとちょうど目が合った。
「……なにかしら？」
「……や、なんでもないです……」
　こえぇよ。あと怖い。
　なんだよこいつ、俺の悪意を読んだのん？　悪意って言っちゃった。
「あなたも人のことは言えないと思うけれど」
「え、なに、お前俺の心読めるの？　なんなの？　俺のこと好きなの？」
　言うと、雪ノ下は動きをぴたりと動きを止めて目をむいた。
「……え……」
　ごくごく短い言葉を発すると、一瞬顔が赤くなったように見えたが、すぐに俯いてしまって何が起きたのか分からなくなった。
　……俺、なんか変なこと言った？
　事態を呑み込めずほけーっとしていると、急に横から圧力がかかってきた。
「ヒッキー、なにゆきのんのことといじめてるの！」
　オカン登場。メロン登場とも言える。
「や、別に……ていうか」
　近い。
　由比ヶ浜さん、勢いでやっちゃったのか知りませんけども、腕に思

いっきり乳圧が……！
「？　どしたの？」
や、気付けよ。お前の乳だぞ。
妙に熱い顔を必死で逸らしていると、
「……あ」
由比ヶ浜がようやく状況に気付いた。
「ご、ごめん……」
「や、大丈夫……」
もっとして良いよー！　とか死んでも言えないしね。
俺と雪ノ下と由比ヶ浜がいつの間にか真っ赤になって俯くというバカさ極まる状況になっているのを見て、一色がケーキから目を離して何やら膨れっ面をしている。今日はフグ祭りだね！　比企谷、冬のフグ祭り！　誰の為の祭りだよそれ。
「むー……なーんか悔しいですね……そうだ、先輩」
「え、なに、なに？」
ずいずいっと寄ってくる一色に、並々ならぬ恐怖というか緊張を覚える。
「今雪ノ下先輩と結衣先輩が真っ赤になってるのって何でですか？　教えてください。わたしも……」
や、「わたしも」じゃねえよ。連続乳圧とか何それ死んじゃう。
「んー、理由ったってなあ……」
「いいから教えてくださいよー。耳打ちで、耳打ちで！　ね！」
すんごい楽しそうに一色が耳を近付けてきた。俺が吸血鬼もどきじゃなくて良かったな、こいつめ。もしそうだったら今頃その耳をべろんべろんに舐め回されてるところだぞ。
「……しゃあねえなあ。えーっと……」
雪ノ下が真っ赤になった理由は分からないので、取り敢えずどんな台詞を言ったのかを伝え、それに加えて由比ヶ浜が真っ赤になった理由も教えた。
ごにょごにょ。
「……っ！」

伝えた途端、一色がぴーっとやかんが沸く音がしそうな勢いで真っ赤になった。
「あう……」
小さく唸ると、両頬を手で押さえて俺の横から離れていった。なんだったんだあいつ……。
そんな俺の様子を見ていた小町が、やれやれとため息を吐く。
「お兄ちゃん、タラシだねえ……お義姉ちゃん候補が増えるのは良い事だけど！」
「いや、なんでだよ。俺そんな変なことしたか？　俺が堂々と可愛いと言ってるのは小町だけだぞ」
あと戸塚な。
「……ん？」
いつもの流れで言ったつもりだったんだけど、小町の顔が妙に赤い。
「……はわわわわ……」
妙に慌てた表情を浮かべている。
え、なんでなんで？
「……し、しまったああ……兄妹だからって油断してた……捻デレお兄ちゃんに攻略される……ひん剥かれる……」
「最後、最後」
俺鬼畜すぎるだろ。１５年一緒に過ごした上でのイメージがそれなの？
茹でノ下と茹でヶ浜と茹ではすと茹で谷小町（突然のフルネーム）を眺めてなんなんだこの状況は……と思っていると、めぐり先輩が目を見開いてほえーと間抜けな声を出した。
「比企谷くん……タラシだねえ」
「いや、なんでですか」
そんなにこにこしながら言わないで……。ただでさえ先輩だからって接し方を未だに測りかねてるのに……。
や。
測りかねてるのは先輩だけじゃなかった。多分小町と戸塚以外に

対しては全員測りかねてる……。

続く。

（4）

その後も適宜合間にパスタなどを食べながら、食事会は和やかに続く。

「ゆきのん、そのパスタ美味しそう！　食べさせて！」

由比ヶ浜の入りからおバカな頼み事に、雪ノ下は温かい笑みで応じる。おおう、完全に母親だな……。

「ええ、良いわよ。じゃあ取り分けて――」

雪ノ下が和やかに対応しようとした、その時。

「あーん」

「え」

由比ヶ浜が雪ノ下の方を向いて、目を閉じて口をあんぐりと開けた。

「え、あ、その……由比ヶ浜さん？　流石にそれは……」

雪ノ下は対応に困っているようで、目に見えて狼狽えている。

しかし由比ヶ浜は、雪ノ下のそんな慌てっぷりなど意に介しない。

「ゆきのん、あーん」

「あう……」

……ガハマさん、ぱねえ。百合クイーンだな。

雪ノ下が頬を赤らめながら、小町に助けを求める視線を送ると、小町が「ばっちこーい！」と言わんばかりに弾ける笑顔で親指を立て、ばちこーん☆とウインクをした。なんだこのノリ？

てっきり雪ノ下を助けるのかと思いきや。

「雪乃さん、あーん」

……。

雪ノ下に、小町が自分で食べているパスタをフォークでくるくると巻いて差し出してきた。

え、何、あーんで1周させたいの？　ウロボロス？

「あ、え……こ、小町さん？　それはどういう……」

「見たまんまですよー？　雪乃さん、あーん」

「ゆきのん、あーん」

「あ……う……うぅ……」
顔を真っ赤にして俯いちゃった。
雪ノ下、撃沈。
……なんだこいつら。
由比ヶ浜と小町がちぇー残念だなーと口を尖らせている。ちょっと君たち鬼畜すぎるんじゃないですかねえ……。
一連の流れをめぐり先輩はにこにこと見守っている。うん、ただの女神だな、この人。
そして一色は、雪ノ下たちのやりとりを見ながら何やら俺の方をちらちらと見ている。え、何事？
そのまま、くるりと身体の向きを変えて俺を見つめたかと思うと、パスタをフォークで巻き始めた。
そして、いつものあざとさと、謎の緊張を伴った笑みを浮かべる。
「はい、先輩……あーん」
「え……」
俺が呆気にとられた瞬間に、視界の端で２人立ち上がった。
「ちょっ、いろはちゃん!?」
「おおう、いろはさん、大胆ですねー！」
……なんだこいつら……。
「や、一色、こんな状況で……ていうかこんな状況でなくても無理だし……」
「いいですから。ほら、あーん」
……ふえぇ……ここは法治国家の日本なのに人権が無いよう……。千葉特有の年下の女の子に虐げられる風習なのん？
めいっぱい仰け反って避けていると、別な所からもパスタが出てきた。ま、まずい、パスタに囲まれた！
見ると、由比ヶ浜が一色にばちばちと強烈な視線を送って、俺に妙にぎらぎらした目を向けながらパスタを巻いたフォークを差し出していた。
「はい、ヒッキー、あーん」
なんで!?　なんでここで畳み掛けてくるの？　俺を心労でハゲさ

せたいの!?
「おおう……さあお兄ちゃん、どう出る、どっちにも応えるのも有りだぞこのスケコマシ！」
「おいこら小町」
なんか、妹が実況兼変な道への勧誘兼罵倒を繰り出してきた。１つの文で色々意図を込めすぎててこの子怖い……。
一色と由比ヶ浜から逃れようと、よく分からない角度で身体を捩りながら仰け反っているため、なんか妖怪みたいになった。雪ノ下、引かないで！　俺も必死で生きてるから！
本当にどうしよう――と思っていると。
「比企谷くん」
「え？」
肩をぽんぽんと叩かれ、振り向いた瞬間。
「あーん」
「あむっ……んんんっ!?」
振り向き様だった。
めぐり先輩が、俺を振り向かせた瞬間に、口の中にショートケーキをむぎゅっと押し込んだ。
目を白黒させて混乱していると、大パニック状態の意識とは関係無しに、口の中に食べ慣れた優しい甘味が広がる。
場を支配する、一瞬の静寂。
それも、すぐに破られた。
「えええええええ!?」
由比ヶ浜と一色と小町が目を見開いて大声を上げ、雪ノ下が口を開けてぽかんとしている。
俺はというと、
「……」
まだ、固まっていた。
口にケーキを入れたまま噛む事もせずに動きを止めている俺を見て、めぐり先輩がにこりと笑う。
「ふふ、比企谷くん、ケーキ、美味しい？」

あまりにも通常営業な喋り方に、ようやく俺も冷静さを取り戻す。
「ふぁ、ふぁい、ふぉいふぃーえふ（は、はい、美味しいです）……」
間抜け極まり無い喋り方になっちゃった。ケーキがまだ口の中にがっつり残ってるんだからしょうがないよね！
……ていうか。
いや。
いやいや。
いやいやいやいや。
「し、し、城廻先輩……なんで……」
一色がサスペンスばりの真剣な顔でわなわなとしている。あれ、ここは崖なのかな？　でででっでででっでーでー！　ＣＭ前とＣＭ明けな。
めぐり先輩は一色の方を向いて、そして由比ヶ浜と小町にも視線を巡らせる。
そして手を胸の前でぽんと合わせると、にぱっと笑った。
「はい、このケンカはこれでお終い！　みんな、あんまり比企谷くんを困らせちゃだめだぞー」
「……っ！」
みんな、ハッとして口をあんぐりと開けた。
……うおお。
如何にも年上なお姉さんという感じの、素敵な場の収め方だ。
こんな風に場を支配されたのでは、これ以上は何も出来ないと悟ったのであろう。
「なにも城廻先輩がやらなくても……」
「ヒッキー……」
一色や由比ヶ浜がぶつぶつと言いながらも、めぐり先輩の言葉に素直に従って席に着く。
雪ノ下は感心した様子でめぐり先輩を見ていて、小町は……んんん？
「おおお……なんて素敵な立ち回り方……！　溢れ出る癒しオーラといい、これはもう是非お義姉ちゃん候補に……！」

……。
……なんかぶつぶつ言ってるけど、気にしない。なんか目がやたらぎらぎらしてるけど、気にしない。
×　×　×
「……」
「ん？　比企谷くん、どうしたの？」
「あ、や、なんでもないです、すみません……」
さっきのあーんがかなり衝撃的だったから、めぐり先輩を妙に意識してしまう……。
しかも見たら見たで、気恥ずかしくて目を合わせられない。いつもだってあんまり合わせられないけれど、今日はまた更に。
……やばい、どうしよう。
ぐぬぬと唸っていると、小町が不意に目を光らせた。なんだかお久しぶりですヤマピカリャー。
「ではでは、せっかくこんなに素敵な方々がいるんですから……ここいらで恋バナをしませんか！」
「んぐぁっ」
喉の奥で変な音が鳴った。
あぶねえ、何か口の中に入れてなくて良かった……。
周りのみんなもぽかんとしている。
数瞬遅れて、先程と同様に由比ヶ浜と一色が起動した。
「ちょ、ちょちょちょ、小町ちゃん!?　いくらなんでもそれは……っ！」
「良いね、小町ちゃん！　やろうやろう！」
おうふ。
由比ヶ浜と一色が、ぎぎぎと首の向きを変えて、互いの目を見る。
「え、いろはちゃん……？」
「あれ、結衣先輩……？」
正☆面☆衝☆突！
なんだよこれ俺の知らない組み合わせで戦いが起こるのかよそう言えばこの２人前から知り合いっぽいのにそこまで話してるの見た

事ないから結構面白いかも――などと高速で思考を巡らせていると。
「結衣先輩、耳貸してください」
と、一色が先んじて由比ヶ浜に告げると、それに応じた由比ヶ浜に何やらごしょごしょと耳打ちを始めた。
「……だから、自分のことはのらりくらりと交わして、先輩の好みとか過去の恋愛体験とか告白した人のタイプとか根掘り葉掘り聞いちゃえばいいんですよ……！」
「な、なるほど……いろはちゃん、ナイス！」
……。
……なんか、すげえ、怖い話が聞こえてきた。
一色が耳打ちを終えると、由比ヶ浜と仲良く動きを揃えて俺に向き直る。
「じゃあ、やっちゃおう（いましょう）！」
……すげえやだよお……。
助けを求めよう。
小町……はダメだ。可愛いけどこの状況においては諸悪の根源でしかない。可愛いけど。
雪ノ下……は、あれ？　なんでずっと下向いてんの？「私は……そんな……」とかなんとかってぽしょぽしょと呟いてる。あ、由比ヶ浜が抱き付いた。こいつもダメか……。
最後の1人に救いを求めて、顔の向きを変える。
「先輩――」
「うん、良いんじゃない？」
めぐり先輩が、俺の助けを呼ぶ声を聞くことなく、ごくごく自然に、にこやかにに微笑んだ。
……くそう……良い笑顔すぎるだろ……！
「よーし、じゃあ、全員の賛同を得られた所で、恋バナ、はっじめっましょー！」
小町が太陽のような笑み（可愛い）を浮かべて（超可愛い）、どんどんぱふぱふと口で言った。やべえ、超ばかっぽいな、どんどんぱふぱふ。さりげなく由比ヶ浜もそれにのっかってぱふぱふやっている。

あれ、何かこう言うと意味合いが変わるような……？

まあいいか。

ぱふぱふ。

続く。

（5）

「……とは言ったものの」

ぱふぱふ（意味深）を終えて、ここからまたテンションを上げるのかと思いきや、小町は急に落ち着いた。お前自由すぎるだろう……。

俺のジト目など一切意に介さず、小町が仕切りを続ける。

「順番に回してくと妙に緊張しちゃうと思うので、まあ適当に雑談しながらそれとなく聞いちゃいましょう！」

「出た！　細かい所で適当になる小町の謎の癖！」

「小町さん、なんで毎回細部が雑になるのかしら……」

雪ノ下がこめかみに手を当てて呆れている。ツッコミ義務に伴って復活したのん？

「まあまあ。聞くのは今の話でも過去の話でも今の話でもいいですよー！　……今の話が良いですよー！」

「おい、過去はどこに行った、どこに」

言うと、小町が振り向き、神妙な面持ちでかぶりを振る。

「お兄ちゃん……過去よりも、今を見つめた方が大事な時はたくさんあるんだよ？」

「うぜえ……」

ものっそい怪訝な目で小町を睨んでいると、雪ノ下が妙に優しく微笑んだ。

「そうね、あなたにとって過去とは全て、見ないフリをして、見捨てて、切り捨てるべきものなんですものね」

「なんで俺の過去が全て黒歴史前提なの？　一応それなりの時間部活で一緒に行動してたよね？」

雪ノ下の強烈な心的攻撃が胸を抉る。俺は別にこの攻撃で胸が減っても何ら問題は無――。

「……何を考えているのかしら？」

読まれた！　なんでかしら！

誰か助けて！

うわっ、怖っ、睨むなよ、あれ、何か心臓の動きが鈍く……ぎゃーっ

！
「ヒッキー、なんかよく分かんないけどキモいよ」
「先輩、とにかくただただキモいです」
「……」
……。
脳内で一人ではしゃいでただけなのに、激しく罵倒された。
がっくりと項垂れていると（心の中で）、一色が由比ヶ浜を突っつき始めた。むふふって感じで笑ってる。超分かりやすいな。
「結衣先輩はどうなんですかー？」
「えっ!? な、なにが!?」
目に見えて慌てる由比ヶ浜。この話になる時点で、ある程度覚悟はしとけよ……。
ていうか一色、さっき由比ヶ浜と協定結んでたんじゃないの？のっけから裏切るとかいい性格してるわ……めっちゃにやにやしてるし。
「もー、分かってるくせにー！」
「え、や、やー、その、あはははは……」
ガハマさん、汗かきすぎです。動揺しすぎだよ。あなたが汗かくとメロンも相俟って妙に色っぽく見えるからちゃんと調整して！
「そ、そだ！ ゆきのん！ ゆきのんは!?」
「え……っ」
やべえ。
泥仕合だ。
「あら、たしかに、雪ノ下さんのそういう話聞いたことなかったな。わたしも聞いてみたいなー」
「え、え……っ」
ここでまさかのめぐり先輩参戦。
「雪乃さん、どうなんですかー、好きな人、いないんですかー？」
小町が越後屋よろしく、悪そうな顔をしながら雪ノ下にすり寄る。あれ、なんか雪ノ下包囲網が出来てる？
「あ、そ、その、い、いえ、そんな人は……」

「ほーん？　じゃあ、そんなにはっきり『好き』と言える人がいなくても、気になる人はいませんか？」
小町の攻めがえげつねえ。
「あ……ええっと……」
雪ノ下があごに手をやり、真面目に考え出す。ばか、そんなまともに取り合うな！
「……あ」
不意に、雪ノ下と目が合った。
そしてその瞬間、雪ノ下の顔が見る間に赤くなり、背を縮こまらせて俯いてしまった。
……なんで？
それを見て小町が大興奮する。
「お、お、おおお？　もしや、もしや……っ？」
なんでこいつ、もしやを連呼しながら俺を見てんだ？　俺のこと好きなの？
「……」
雪ノ下、だんまり。
あ、顔を手で覆っちゃった。天岩戸モード突入です。邪神三姉妹を呼ばないと。
結局この後、雪ノ下はいくら質問されても、顔を手で覆ったままふるふると首を振るだけだった。なんだお前、可愛いなもう。

×　×　×

「そういえばー」
雪ノ下冬の陣を終え、皆が一息をついていると、一色があごに人差し指を当てて話を切り出した。
「なんだよ？」
俺が問うと、一色は一度俺に視線を向け、そこからその視線をめぐり先輩へと滑らせた。
「城廻先輩が恋愛事情って聞いたことないんですよー。城廻先輩、どんな恋してたんですか、それかしてるんですか？」
一色が目を輝かせて、めぐり先輩を見た。うおお、超ＪＫっぽい

……！　まあ正真正銘ＪＫなんだけど。
　めぐり先輩はどんな反応をするのかと皆固唾を呑んで見守っていると、手に持ったティーカップを一度見やり、んーと小さく悩まし気な声を漏らして、やがてやや苦笑気味に顔を上げた。
「んー、あんまり恋愛らしい恋愛はしてこなかったかもなー」
「え、そうなんですか、意外です！」
　小町が程好い相槌を打つ。うん、小町と一色と由比ヶ浜という空気読みの達人たちが居れば何とでもなりそうだ。雪ノ下はどんな表情をしたらいいのか分からないという顔をしている。ほんとこういう話に縁が無かったのね……。や、違うか。こういう話をするような女子に嫉妬され続けてきたんだよな。ううん、大変ざます……。
「もちろん、憧れの先輩みたいな人も居たけど、遠くから見てるだけだったなー」
「わあ、わあ、わあ、そうなんですか、へー！」
　由比ヶ浜が頬を紅潮させながら楽しそうに言う。すげえ女子女子してんなこいつら……。
　めぐり先輩はその食いつきの良さを見て少し話しやすくなったのか、どことなくあった身体の強張りが少し取れたように、頬を緩めた。
「じゃあ、告白……されたりとかは……？」
　一色がそろりと聞くと、小町と由比ヶ浜がきゃー！　と騒いだ。うるせえなあ……話を集中して聞かせろよ！　我らがめぐめぐ☆めぐりんのお話だぞ！
　質問を聞いてめぐり先輩は目をぱちくりとさせると、ふっと優しく微笑んだ。
「うーん、何度かあったかな。なんか私、こんな感じだからなのか分かんないけど……ちょっと大人しめな子によく告白されてたっけ」
　たははと苦笑いを浮かべて、めぐり先輩は紅茶を一口くいと飲んだ。
　うおお……予想通りだ。めぐり先輩みたいなぽわぽわタイプは地味男に告白されまくるんだな。
「お、お、お？　『よく』と言いますと……？」

小町がテーブルに身を乗り出して、目を超キラキラさせて質問する。うぜえ、超可愛い……。
「うーん……小学校の時と中学校の時とここに入ってからを合わせると……うーん」
こめかみに人差し指を押し当てて、うにゅにゅと悩み始めた。
……え、なに、数えきれないの？　恐ろしい……！
や、そんなことよりも。そんなことって言っちゃって良いのか分からんけど。
やべえ、めぐり先輩、悩む姿すら和むだと……!?　もっと悩んでください！　この際思い出せなくても良いんで！　もっとうにゅにゅってして下さい！　うにゅにゅって下さい！
一人興奮していると（気持ち悪い）、雪ノ下が小さく頷いたのが見えた。
「……分かり、ます」
めぐり先輩にだけかろうじて聞こえるような声だったので、他の3人には届いていなかっただろう。俺に聞かせるつもりはなかったようで、俺と目が合うと恥ずかしそうに目を逸らした。めぐり先輩はそんな雪ノ下に優しく微笑んでいた。
と、めぐり先輩と雪ノ下が密かなやりとりをしているのをよそに、一色と小町は腕を組んで大げさに頷いて、由比ヶ浜はたははと苦笑を浮かべていた。え、なになに？　なんなの？
「分かります、その感じ。小町もあんまり来られると大変なんですよね……」
「わたしもなー、もうちょっと上手いこと告白前に躱したいんだけど……」
「え……マジで？」
こ、こええ……この子ら怖いよ……！
と、視線を横に逸らすと、由比ヶ浜と目が合った。
「あ、あはは……あたしも、それなりに大変だったかなあ……」
……。
何このモテモテ集団？

５人全員の今まで告られた人数を合わせたら、えらいことになりそう。やだ、中学までの俺だったら多分５人全員に告白して玉砕して気が付いたら学校全体に知れ渡って泣くまである。バッドエンドっていうかデッドエンドっていうか冒頭からエンドロールって感じだ。
４人それぞれのリアクションを見て、めぐり先輩がふっと柔らかく微笑む。
「ふふ、みんな大変だね」
それとなくまとめにかかったように思える台詞だったが、ここで由比ヶ浜が更に切り込んできた。
「城廻先輩、じゃあ、その、た、タイプとか、ありますか……？　す、好きなタイプ……」
なんでお前はめぐり先輩のことが好きでチャンスがあるかそれとなく探ろうとしてる男子みてえなことやってんだ。
俺が由比ヶ浜にジト目を向けていると、めぐり先輩はあごに指を当ててんーと考え、首を可愛らしく傾げた。その拍子におさげ髪がふわりと揺れて、ほんわかした空気が辺りを包む。
「そうだな……わたしこう見えて、って言うのもおかしいかもしれないけど、結構年下に甘えられるのが好きかも。絶対って訳じゃないけどね」
「へえ……」
めぐり先輩の何気ない言葉に対し、俺が何気ない返事をすると、場の空気がぴしっと固まるのを感じた。あれ、おかしいな、めぐめぐめぐりん☆めぐりっしゅ効果が消失した……？
「……先輩、何にやけてるんですか？　キモいです」
「へ、俺？　にやけてた？　へ？」
なんか一色に罵倒された。
「ヒッキー、でれでれしてる。キモい」
「へ、俺？　でれでれしてた？　へ？」
なんか続けざまに由比ヶ浜にも罵倒された。
「比企谷くんなら大丈夫よね、人への甘え方なんて知らないものね」
「おい、なんか妙に重々しい事を生温かい目をしながら言うな。なん

か俺が親から愛情もらってないみたいに聞こえるぞ。小町もいるからなんか複雑な感じになっちゃうだろうが」
あれ。
なんか。
すんごい集中砲火食らってませんか？　俺。
何これ世の中理不尽過ぎると嘆いていると、小町だけ全く違う反応をしていることに気付いた。
一人だけ、ヤマピカリャー。
「お、お、お……？　これは……チャンス？　よし、お兄ちゃん、今日から甘えんぼさんになろう！」
「何言ってくれちゃってんの？　俺が甘えんぼさんとか気持ち悪いにも程が……っておい、雪ノ下、由比ヶ浜、一色。勝手に引くんじゃねえよ。泣いちゃうだろうが」
三者三様の引き方をしてる。面白い。雪ノ下さん、腕を抱く様にする感じはちょっとガチすぎるのでやめません？　俺が本気で襲うみたいになってんじゃん。
「うぐぐ……」
いかん、何を言っても裏目に出る。雁字搦めだ。
困り果てて目線を泳がせていると、めぐり先輩と目が合った。
「……？」
「……っ」
どうしたの？　ときょとんとした顔で小首を傾げるめぐり先輩の仕草に、思わずどきりとする。
目を逸らすことさえ忘れて見入っていると、こほんと咳払いする音が聞こえた。
「……比企谷くん、私は奉仕部の部長として、部員、いえ、備品であるあなたが間違いを犯す前にそれを止める義務があるのだけれど……」
……。
……ツッコミどころが多すぎる。
「備品が間違いを犯すってどういうケースだよ。俺は付喪神かなんかなの？　１００歳越えてんの？」

「へ、ヒッキー、１７歳でしょ？　何言ってんの？」
「……」
雪ノ下に対するツッコミなのに、更にツッコミを誘発させるバカメロンが飛び込んできた。や、まあ、知らない人が居てもしょうがないか、こういう知識は。
よし、ちゃんと説明してあげよう。
「由比ヶ浜、ググれ」
「なんか雑にあしらわれた!?」
あれ、なんかさらりと流してしまった。ついね、つい！
こんなわちゃわちゃしたやりとりがしばらく続いたため、何の話をしていたのかもよく分からなくなり、俺の話もそれとなく流れてくれた。あぶねえ……。
……疲れたよぉ……。
つと横に目をやると、紅茶を飲んでいためぐり先輩と再び目が合った。
「うふふ、楽しいね、比企谷くん」
にこやかに目を細める様に、心の老廃物が物凄い勢いで排出されたような気がした。
……老廃物が全部出てったら、なんか俺の心、空っぽになりそうだな……。
続く。

（６）

それからしばらくして。

「……それでね、そのとき優美子が――」

今は由比ヶ浜が、楽しそうに三浦や海老名さんの話をしている。あんまりはしゃぐなよ、揺れてるぞ？　あ、やっぱり揺らしててほしいです。どうぞロデオのごとく。

雪ノ下はそんな由比ヶ浜を穏やかに見つめている。うん、百合百合しい。はしゃいではないけど、はしゃいでも揺れるものはないぞ？　あれ、なんで雪ノ下がこっち見てるんだろう、おかしいなあ……。

結局あの後、俺の恋バナはうやむやになって流れた。めぐり先輩がもたらした混乱のおかげだろう。ありがとうございますと言うべき……なのかどうか。

そして、そんな感じでたくさん話した後（主に小町と由比ヶ浜と一色が）、めぐり先輩がティーカップをことりとテーブルに置いた。

「そろそろ出よっか？　だいぶ話し込んじゃったね」

言われて時計を見ると、スイパラの制限時間が迫っていた。

「えー、もうそんな時間ですか？　あっと言う間ですねー……」

一色が驚いて、残念そうにため息を吐く。

「まあ、７０分制限だしな。こんなメンバーで話してたら、すぐに終わっちまうだろ」

お開きモード全開で言うと、由比ヶ浜がうーんと唸った。

「あ、じゃあ、この後皆でもう１軒くらいどう？」

「……」

きみはどこの大学のサークルの人なのん？

「俺は無理だ、すまん」

「早いな!?　なんでさ!?」

「いや、その、アレだ。この後色々アレだから」

「あなた、指示代名詞を使い過ぎでしょう……」

まずい、雪ノ下も参加してきた。説得力０で勢いだけが取り柄の、あるいは勢いすらない言葉は冷静なツッコミに弱い。勢いすらな

いってもう何なんだよって話だけど。
「いやこれはその、アレだ、これから迎えるであろう大学生活や社会人生活において必須であろう、二次会を断る能力を養うのに必要なトレーニングというか……」
「ごみいちゃん……ちょっとクズっぷりが過ぎるよ……」
「先輩……流石にドン引きです……いつも引いてますけど……」
年下コンビからのアッパー連打。２ＨＩＴ！　ていうか一色、いつも引いてるの？　え、ほんとに？　なんか俺にキモいと言われた時の材木座の気持ちが少し分かった気がする。やっぱあいつのことはどうでも良いや。
「ヒッキー……」
おいやめろ、そんな犬が悲しんでるような目で見るな。ちょっとエサあげたくなっちゃうだろうが。
由比ヶ浜の目線から逃れようと猛烈に首を逸らしていると、由比ヶ浜が小さくあっと声を漏らした。
「そう言えば……さっきの恋バナの時、なーんか大事な事を忘れてた気がする……」
「……」
まずい。
どうしよう、この場で下手に俺が発言しても余計に記憶を想起させてしまう。どうしよう、超どうしよう！
「あ、確かにそうですねー」
一色まで考え始めた。やばい、誰か助けて！
「あ、そ、そうだ、ほら、もう７０分経つぞ。ほら、早く出ないと」
「あ」
「あ」
俺が焦って声を上げた瞬間、由比ヶ浜と一色が同時に俺を見た。
や、ほんと同時。こんなシンクロ率高かったの君たち？
「ヒッキーの……恋バナ……」
「先輩の……面白トラウマ」
「待て、ちょっと一色がひどすぎるぞ」

トラウマと言った時点で既に罵倒してんのに、面白ってフレーズを付けんじゃねえよ。何かすげえ愉快な柄の虎と馬みたいじゃねえか。なんだろう、身体の側面にコボちゃんの４コマとか描いてあるとかかな。

逃げたいという願いしか抱けないままに、じりじりと後ずさる。ちなみにこの会話をしながらも後片付けをしていて、もう立ち上がって歩き始めそうです。それでもこの子たちは逃がしてくれません。僕のステータスに「まわりこまれやすい」を追加したいです。

×　×　×

以下、会計をめぐり先輩がやってくれている間、及び外に出ようと移動している間、及び外に出てからこの後どうしようかというぐだぐだタイムでの会話。依然、俺への追及は続いている。

「大丈夫ですよー先輩……すぐに楽になれますから……」

「こえぇよ。なんなの？　俺を尋問する為に生まれてきたの？」

「良いからお兄ちゃん、早く言っちゃいなよー。どうせ大した話じゃないんだから」

「え、小町ちゃん、事情をがっつり知ってる君がそれ言うの？　俺が枕を濡らしてたのを気遣ってくれたときあったよね？」

「？　なんでヒッキーが枕を濡らすの？　何かこぼしたの？」

「由比ヶ浜、お前そのボケちょっとひどすぎるから、ちょっと花畑牧場で修業して出直してこい」

「誰が牛だ!?」

「あら、比企谷くんこそ修行が必要ではないの？　良いお寺を紹介するわよ？　まずチベットの……」

「まずってなんだ、まずって。複数紹介してくれんのかよ。せめて国内にしろよ。いや、国内でもいやだけど」

「……」

「あなたの目と性根の腐敗を治して直すには、国内だけでは中々骨が折れるわ。だからまず目の治療及び修正でアメリカに、そして性根を叩き直して生まれ変わる為にインドへ行きなさい。そしてついでに特殊な呼吸方法を身に付けてきて、１度息を吸ったら１日呼吸しない

でいられるようになってくれれば、地球の為にも私の為にもなるわ」
「それただのお前に媚びる為の治療じゃねえか。俺どんだけお前にぞっこんなんだよ」
「え、あ……え……？」
「え、何、俺なんか変な事言った？　なんで雪ノ下が顔赤くしてんの？」
「先輩、絶望的にキモいです」
「おい一色、俺を泣かせにかかるんじゃねえよ。北風と太陽の話を知らねえのか。俺は逆風に強いからな。北風なんかじゃ泣かねえぞ」
「なんかよく分かんないけど、ヒッキーはなんだかんだでいつも頑張ってるもんね。あたしはちゃんと見てるよ」
「突然の太陽だと!?」
「お兄ちゃんが一生懸命なのは妹である小町が一番見てきているのです！」
「太陽が２つだと!?　どこの銀河系だここは!?　やめろ、泣いちまうだろ！」
「……」
「という訳でお兄ちゃん、ほら早く恋バナしてよ」
「話の方向転換下手すぎるだろ。片方の太陽が消滅した上にカーブを曲がり切れなくて横転した気分なんだけど」
「先輩、よく分かんないこと言っててキモいですよ。早く恋バナしてください」
「ここで北風だと!?」
「ヒッキーの話聞きたいんだけどな……だめ？」
「やめろ！　俺を揺さぶるな！」
「……」
「うー……あれ、ゆきのん、ずっと俯いてどうしたの？　顔赤いよ？」
「雪乃さん、まだやられてたんですか……お兄ちゃんの捻デレ攻撃に……」
「なんかやな名称を付けんじゃねえよ」
「もー、ゆきのんはかわいいなー！」

「はっ！　結衣さんの百合攻撃が！」
「やめろやめろ、俺と由比ヶ浜の変な部分を同列に並べるな。引きこもりたくなる」
「そんなに!?　ヒッキーひどい！　キモい！　ばか！　キモい！」
「もう１つの太陽も消えた……あと語彙が貧弱……」
「……」
「先輩も往生際が悪いですねー。あんまり話さないと生徒会の仕事増やしますよ？」
「太陽が２つとも消えた後に北風が強くなっただと……!?　あとなんで俺がもはやただの生徒会役員になってんだよ。お前が俺に仕事を振る権限はねえよ」
「比企谷くん、奉仕部の備品がどうして生徒会の備品も兼任するようになっているのかしら？　勝手なことはしてもらっては困るわ、備品のくせに」
「備品の兼任ってなんだよ。会議の時だけ使われるホワイトボードか俺は」
「先輩はホワイトボードなんて大それたものじゃないですよ。良くてポインターですねー」
「お前ポインターの開発者及び生産している皆々様に謝れ。良いじゃねえか、ポインター」
「ぽいんたー……」
「由比ヶ浜、由比ヶ浜、由比ヶ浜？　まさか知らない訳ないよな？　ちなみにポインターは片仮名だぞ？　漢字じゃないぞ？」
「わ、分かってるし！　ばかにしないでよ！」
「……」
「じゃあこれは読めるか？　『魑魅魍魎』」
「え、何それ……本当にあるの？　そんな漢字」
「俺にこんなかっこいい漢字を開発する能力はねえよ」
「由比ヶ浜さん、ヒントよ。『比企谷くん』」
「すげえナチュラルに俺を妖の類で括るんじゃねえよ」
「うーん、ヒッキーかあ……キモい……うーん……」

「太陽が消えたかと思ったら、今度は北風に化けた……」
「由比ヶ浜さん、ヒントを付け加えると、『あびきょうかん』ではないわ」
「俺を傷付ける為だけのヒントはやめろ。俺はそんな悲惨でもねえし救いも求めてねえよ。ちょっとリアルな感じやめろよ」
――と、まあ。
俺たちが取り留めもなく喋り続けていると（俺はほぼツッコんでしかいないが。あと由比ヶ浜は最後は結局唸るだけで終わった。雪ノ下が小声で答えを教えると「え、なに？　ちんみ……珍味？　もうろう……朦朧？」などと言って雪ノ下を絶望させていた。なんだ珍味朦朧って。ただの食当たりだろ、それ）、ずっとその様子を見ていた城廻先輩が手をぱちんと叩いた。
「はーい、そろそろこの辺で終わりにしようか。外寒いし、風邪引いちゃうよ？　比企谷くんは自分の恋バナはしたくなさそうだし、実際わたしたち女子に囲まれたら中々疲れちゃっただろうしね。ほら、お開きお開き！」
――と、それから。と、めぐり先輩が言葉を繋いで、笑顔でみんなを見渡す。
「……今日は、本当にありがとう。すごく楽しかった。また近い内に、……わたしが卒業する前に、同じメンバーで、この会を開いても良いかな？」
めぐり先輩の言葉に、皆心を打たれたのだろう。もちろん、俺もだ。
「はい！　ぜひ！」
元気な女子３人がはきはきと答え、俺と雪ノ下がこくりと頷いた。
皆の返事を聞いて、めぐり先輩が心から嬉しそうに笑みを浮かべて、うんうんと頷く。
――そして、突然。
「よし、それじゃー解散！　いよーおっ！」「え？」「え？」「え？」「え？」「え？」
「え？」の５連鎖（セリフで言えば「ブレインダムド！」だ。隕石に変化するくらいの連鎖である）をガン無視しての。

――ぱんっ！
一本締めだった。
正確に言えば、皆慌てて対応したため、めぐり先輩から数瞬遅れてばらばらに手を叩き、ぱぱぱぱぱぱんっ！　と爆竹みたいな音がした。何この力の抜ける終わり方？
×　×　×
駅に向かっていると、気付いたら周りにめぐり先輩しかいなくなっていた。
所謂神隠しである。
ちげえよ。
一人ノリツッコミならぬ一人ボケツッコミ。なんだろう、一人で野球のノックをしてキャッチした時の達成感と虚しさを思い出した。
他の４人はいつの間にやらどこかに遊びに行っていた。めぐり先輩は誘われはしたが、用事があると言って辞退していた。
「……」
隣をちらと見やると、
「ふんふふ～ん……」
よほど楽しかったのだろう、めぐり先輩は楽しそうに鼻唄を歌っている。可愛い声だなあ……。
「……」
……。
や。
それより。
緊張しすぎて、無理。
なんで俺、完全にめぐり先輩と二人っきりになってんの？　何のイベント？　めぐりんルートが開放されたの？　究極の癒しとデトックスを求めるルートなのん？
「あー……先輩、あいつらに付いていかなくて良かったんですか？　断ってたようですけど……」
この場の空気をなんとか繋ごうと、場繋ぎの達人である俺が本気で動く。うそ、そんなスキルない。俺のスキルは言葉を発する度に場の

空気だけでなく空間まで断絶させる奥義・絶影断絶無双（スベリヤサーン）だけだ。何それ悲し過ぎる。
　めぐり先輩は俺の質問に一瞬目をぱちくりさせて、んーと可愛らしく首をひねる。
「そうだね、それでも良かったんだけど……なんか今日はのんびりして、さっきまでの楽しい時間を反芻するのもありかなーって。比企谷くんは無いかな？　そういう風に、一人でのんびりしたいときって」
　めぐり先輩の問い掛けに、歩きながら腕を組んで深々と頷く。
「ああ……分かります、すごく。むしろ俺は一人でのんびりしたい時しか無いですね」
「あはは……比企谷くん、いっそ清々しいね」
「え、ええ、まあ……」
　むう、苦笑いされた。
　なんか申し訳ない。
　反省はしつつも一切フォローも出来ずにいると、「そういえば」とめぐり先輩が振り向いた。
「比企谷くんは、真っ直ぐ家に帰るの？」
「え、ああ、いや……今日は元々、この後本屋に寄るつもりでした」
　俺が答えると。
　めぐり先輩は「そっかー」と言いながら、何やら思案顔。
　あごに人差し指を当てて、空を見上げるようにしながらぽとぽと歩く姿はなんとも可愛らしい。
　やがて、何かを決めたのか、ぱっと笑顔を咲かせて俺を見る。
「わたしも行っていい？　わたしも買いたい本あるんだ」
　ほーん？　なんだってー？
「え、でも……」
　遠慮全開の俺の声を意に介さず、めぐり先輩は話し続ける。
「それに、比企谷くんともう少し話してみたいなーと思ってたんだ」
「や、でも、それなら全員でそのままどっかに行けば良かったんじゃ……」
「比企谷くんが疲れてたのは事実でしょ？　結構ぐったりしてたもん

ね」
うお……バレてた。
確かに、楽しいには楽しいんだが、実際問題として、結構バテていた。家で過ごすときの２００倍くらい体力使うんだもん。俺家でどんだけエネルギー使ってないんだよ。
「大丈夫、わたしもはしゃぎたくて同行する訳じゃないから。比企谷くんと話すなら、静かに過ごしてのんびり出来るかなって。……あ、なんか後付けみたいな理由ばっかりだね、ごめんね？」
「……」
めぐり先輩の表情から、先輩が何の裏も無く本音で話しているのが分かり、俺が何も言えずにいると。
でも、とめぐり先輩が続ける。
「比企谷くんとお話してみたいっていうのは本当なんだ。面白い子だなっては思っていても、普段話す機会が全然無かったし。……だめ、かな？」
「うぐ……」
ず、ずるい！　たたっと小走りで俺の前に回り込んで、正面から俺の顔を覗き込むように首を傾げてきての上目遣いとか！　小町にされたら２万円くらいお小遣いあげちゃって破産するまである。
……うぐおお……別に断る理由は「気まずいから」くらいしか無いから、これ以上跳ね除けるのは罪悪感ががが……。
ふう、と小さく息を吐いて、頭をがしがしと掻く。
「……分かりました。一緒に行きましょう」
渋々なテイストが尋常でない程に出ちゃったけれど、めぐり先輩は気にする様子も無く。
「やった！　ありがとね、比企谷くん！」
俺の手を握って胸の前まで持ち上げ、にこーっと笑った。
うん、やばい、癒されすぎてにやける。
なんだよ、聖母かよ。新番組スタート！　めぐ☆マリ！　第１話は来週火曜２６時からだよ！　ディープな時間帯だけど頑張って見てね！　録画よりも生で見てくれた方が嬉しいよ！　見てね！　約束

だよ！　なんだこれ。
「……」
隣を歩いている、さっきよりも一層、天使みたいににこやかな笑みを浮かべているめぐり先輩を見る。
「ふんふふんふんふんふ～ん……」
何故かアメリカ国歌だ。鼻唄チョイスが謎すぎる。
取り敢えず、今日これからの展開を考える。
……緊張ががっつり続く事が確定したので、俺の身体がもつか心配です。
緊張による体力の消耗及び魂の摩耗と、めぐり先輩のめぐりっしゅパワーによる癒しのせめぎ合いという謎の展開になりそうだ。なんだこれ。
続く。

（７）

「……」

めぐり先輩と本屋に向かうという、謎の道中。

〈以下、このパーティーのスペック〉

①城廻めぐり（めぐりん）

ジョブ：プリースト

スキル：ヒーリング、リラクゼーション、リザレクション、デトックス

特徴：お姉さん属性、たまに見せる大人びた雰囲気、あどけない仕草

説明：味方を癒すと同時に、癒し過ぎて死に至らしめるケースもあり。過回復効果。アンデッドに対する効果抜群。

②比企谷八幡（ぼっち）

ジョブ：ニート

スキル：卑屈な笑い、寝ているフリして聞き耳立てる、チャリ通学、妙技・妹接待（１～１０８まで）、ステルスヒッキー、ＢＬ疑惑

特徴：アンデッド属性

説明：誰にも見られない事を至上の旨とする。味方の癒しが基本的に巡り巡ってダメージになる（めぐりだけに）

〈以上〉

……なんだこの設定。

自分で作っておいて難だが、俺のがひどすぎた。腐った目とは幾度と無く言われてるけど、アンデッドは流石に……。

勝手な妄想で自分に引きながら、めぐり先輩を見る。

「……」

「ふんふんふんふふ～ん　ふんふんふふ～ん　ふーふふふふふふ……」

……どうやら、今度の鼻唄は８０年代の国民的アイドルの曲のようだ。セレクトが自由すぎるし、何よりその前のアメリカ国歌が謎すぎる……。

あと、字面だけで見ると後半が怪しげな笑い声にしなか見えないけれど、ちゃんとメロディーになってます。バラードです。
と、まあ、こんな感じで。
元からめぐり先輩が宣言していたこともあり、そこまで活発に会話をしている訳ではない。
中々思考がまとまらず、そこまで通り慣れていない道とは言え、いつもよりも「次はここを曲がって……」などという道順がすんなりと出てこない。
通り慣れていない以上の理由の割合を占めているものの正体は明らかだ。
緊張。
緊張である。
緊張する、緊張してる。
ああもう、超緊張する。
そこまで慣れていない人と歩く緊張によるダメージと、めぐり先輩から放たれる癒しオーラによる超回復の均衡状態がマジでスリリング。ここに少しでも更なる心労の要素が混じろうものなら即座に均衡が崩れて、多分死ぬ（重い）。
「うーん、たまには歩いてみるもんだね～」
ぽてぽてと歩きながら、めぐり先輩がなんとも呑気なセリフを言って（この落ち着きはもはや、縁側でお茶を飲んでいるレベルだ）、ぽわんと笑った。
……よし、癒しオーラ優勢。
そう、俺とめぐり先輩は今、結構がっつりと歩いていた。
電車に乗ったら本当にすぐ着くけれど、歩くにはだいぶ遠い場所にあったので、駅に向かおうかなーまずは電車に乗る旨を伝えないとと思っていたところ、めぐり先輩が、
「それなら歩いて行こう！　わたし最近運動不足だし」
と言ったため、徒歩での移動と相成った。
たぶん、一人で歩いていたら中々億劫な時間になったのだと思うけど（寒いし、まあまあ遠いし、あと寒いし）、誰かと歩くというのなら

割となんとかなるものだ、うん。
「比企谷くんは普段運動してるの？」
「や、俺は……精々チャリ通学してるくらいですかね」
……。
いざ、答えてみて思うけれど。
改めて自分の運動状況を考えると、ほんと大した運動じゃないよなと思う。
マラソン大会の時はチャリ通学で良かったなんて思ったものの、大した距離やアップダウンがある訳でもない道を、のんべんだらりと漕いでいるだけなのだから、確かにバスや電車通学よりは運動してるとは言えるけれど、けれど本当にそれまでだと言える。
うーん……もう少し運動した方が良いのかしらん。
しかし運動をすることによって達成したい目標も無いし……あ。
そうか、発想の逆転だ。
運動によって何かを達成するという、運動を手段として捉える考え方ではなく。
運動そのものを目的とすればいい。正確に言えば、運動が手段と目的を兼ねるのだ。
そう、戸塚。
戸塚ならば（敢えて『彼』という言い方をしないのには別に他意はない。ホントだよ？　八幡、ウソつかない、人間、食う。間違えた、これはもののけ姫のキャラだ）、俺が運動したいと言えば、きっと一緒にジョギングしたりしてくれるかもしれない。そして戸塚が汗で身体を湿らせて、息を艶めかしく切らす所を見る事が出来るかもしれない。やばい、どうしよう、夢が止まらない。戸塚――！
「……比企谷、くん？　どうしたの？」
「あ」
めぐり先輩が首を傾げて、妄想世界にダイブしていた俺に声を掛けてきた。
めぐり先輩への回答一つで、ここまで周りを見ないで妄想を繰り広げてしまった事に驚く。これが戸塚の魔力か……恐るべし、傾国の美

戸塚（超語呂悪かった、戸塚ごめんね）。
俺がチャリ通学を大した運動じゃないと捉えたのに対して、めぐり先輩はだいぶ違う印象を受けたようで、
「そっかー、良いね、自転車。わたしは電車だからなあ……やっぱり普段からちょくちょく運動しないとなあ……」
言うと、めぐり先輩は絶望した面持ちで、スイパラでも見ていた自分の二の腕やお腹をちらりと見る。その目があまりにも悲しげで、うう……空気が重い……。
「ま、まあ、今から始めても全然遅くないですよ。せっかく時間が出来たんですし」
めぐり先輩は指定校推薦とやらで既に進路が決まっている。ぱないっす。
そのため、他の3年生と比べて比較的時間はある筈なのである。
そう思って、気休め程度のつもりで言ってみたのだけれど、思いの外効果はあったようで。
「……あ、確かにそうだね。うん、うん……よし、頑張ってみるよ、うん、色々、色々！　比企谷くん、ありがとね！」
「は、はあ……」
ふわっとした努力宣言だなあと思いつつ、めぐり先輩が元気になったのを見てほっとする。この人は笑顔が一番だ、うんうん。この調子でがんがん俺を日々の疲れから解放して欲しいまである。
「頑張るぞー、おー！」
「お、お～……え？」
あまりに唐突な巻き込み事故に、思わず自然と乗っかって、素で戸惑ってしまった。

×　×　×

「やっぱり食事制限に安易に走るのは良くないんだよね？　うーん……」
道中の会話が、途中からダイエット一色になる。一色いろはの事ではない。なんだよダイエットいろはすって。元々ほぼ皆無の水のカロリーが更に落ちるの？　それとも唐辛子でも混じってるの？

「そうですね、元々間食だなんだで食べ過ぎていたのを減らす分には良いんでしょうけど、そこから更にリバウンドもしない食事制限をしようとなると……中々素人判断では怖いですよね」
「確かに……って、んん？」
　ぽてぽてと歩きながら、先輩がふと俺に向き直り、首を傾げる。柔らかなクリーム色をしたダッフルコートと、いつもの三つ編みヘアーでくりっと首を傾げる幼い雰囲気がやたらとしっくりして、思わず見惚れて躓きそうになる。
「な、なんですか？」
　歩きながらも心持ち距離を縮められ、避けて距離を取ろうとすると、すぐ隣に一定の感覚で生えている街路樹に肩を強打しかねないので、どうしようも無くてテンパってしまう。
「んー……なんか、比企谷くん、男の子の割にはこういうのに詳しくない？　別に太ってて困ってるようには見えないんだけど……」
　めぐり先輩がじっと俺の身体とお腹を見つめる。流石に舐めるように全身を見たりはしないが、コートの上からでは分かりづらいでしょうに……。
　しかし、詳しいのか、俺は。
　……あ、そうか。
「あー……多分、小町の影響かなと思います」
「小町さん？」
　めぐり先輩が目をぱちくりとさせる。やだ可愛い。撫でていいかしらん？
「はい。小町は中学生に上がったくらいから毎年毎年『今年はダイエットしなきゃー！』って言って、コンビニに毎年出るようなダイエットやエクササイズ本を買ってくるんですよ。それとしょっちゅうネットでも調べてるみたいで、よく『お兄ちゃん、こんなやり方知らないでしょ？　小町は今度こそ痩せるのだーそしてぼんきゅっぼんのボディを手に入れるのだーふはは！』とか偉そうに言って、1ヶ月後くらいに絶望した顔になってるのを見てきたので。ある程度努力はしてるみたいなんですけど……」

ちなみに本を買う小遣いのうち５％くらいは母親から、残りは軒並み親父から、貰っている。経済的負担の差が恐ろしい。ちなみに俺もたまに小町が頑張った時のご褒美で本を買ってあげたりしている。その本が見事なまでに活かされなかった時の悲しみは半端じゃない。

「あはは……小町さんも大変だね」

めぐり先輩が苦笑した。

でも、それなら――と、めぐり先輩はくるりと身体の向きを変えて俺の前に立ちふさがり、期待に爛々と目を輝かせてこちらを見やる。ちょ、ちょっと……視線がきらきらしすぎて……ま、眩しい！　灰になる！

「比企谷くん、色々知ってそうな気がする。わたしに教えてくれないかな？」

眩しい光を遮るように手を顔で覆う……のは流石に阿呆らしいのでなんとか堪えていると（結局何もしていない）、めぐり先輩が期待と羨望と期待と期待と期待にまみれた視線をぶつけてきた。８０％期待じゃん、これ。

あー……と、頬をぽりぽり掻きながら、

「取り敢えず、また歩きながらでも良いですか？　なんか……」

距離が近くて恥ずかしい――とは言えないままに。

「あ、そうだね。ごめんごめん」

めぐり先輩がてへっと笑った。

……。

ふう。

危ない危ない。

これでめぐり先輩が自分の頭を握り拳で可愛くこつっとやって、舌をぺろりと出そうものなら、今すぐ養子縁組を両親に相談して姉として迎える所だった……。

続く。

（8）

とてとてと歩きつつ、今までテレビで見たり小町経由で聞いた話について、記憶の糸を手繰り寄せる。
「えーっと……先輩は短期的に痩せたいんですか？　それとも長期的に痩せたいんですか？」
聞くと、めぐり先輩が目を閉じて顔を上げながらうーんと唸る。
「んー……長期的に、かな。別に直近で海に行くから痩せたいとかって訳でもないしね」
「なるほど……ははっ」
「？　どうしたの？」
「や……小町が前、夏休みに入ってから『海に行くから痩せるんだー！　くびれを作るんだー！』って言って腹筋してたのを思い出しまして。急にすみません」
「あはは……小町さん、可愛いなあ。……それにしても、比企谷くん、本当小町さんのこと好きだよね」
「ええ、そりゃあもう。どこに出しても恥ずかしくないまであります」
まあ、どこにも出さないけどな。
「はは……すごいなあ……」
あれ、またちょっと引かれた感。
むう。
小町推しはやりすぎない方が良いのかしらん？
……超今更だけど。
や、むしろ、めぐり先輩と仲良くなったらその分だけ小町を売り込んで行けば良いのか。やり方次第だな！
……ちょっと自分に引いた。
あと、めぐり先輩とそんなに仲良くなるという展開なんて有り得るのだろうか？　ううむ。
まあ、良いか。その時はその時だ。
こほん、と咳払いをして、視線を前方の風景に戻す。一瞬戸部が見えたけど気のせい気のせい。

「それで、長期的に、徐々に……と言うのであれば、スイパラで先輩が言っていた大股早足っていうのはとても良いと思います」
「ふむふむ、やっぱりかー。でも、効く理由はあんまり知らないんだよね。やってみたらきついって言うのは分かるんだけど」
「俺も色々な所でかじり聞きしたくらいなんであまり詳しくは知らないんですけど……」
　きちんと前置きをして、ちらりとめぐり先輩を見る。
　めぐり先輩、歩きながらだけれど、よっぽどこの話に興味があるのか、視線が2割前方、8割俺になってる。良いのかな、危なくないんですかね？　むう。
「筋肉がきちんと付いていると基礎代謝が上がる、っていうのは知ってますか？」
「うん、それくらいなら」
「で、その筋肉を付ける為の筋トレなんですが、例えば二の腕を痩せさせたいからとダンベルで腕の筋トレだけをする。お腹を痩せさせたいからと腹筋だけをする、という風にしても、ちょっと効率が悪いんです」
「え、そうなの？」
「はい。単純に二の腕やお腹だけだと、筋肉量自体があまり無いから、そこだけ頑張って鍛えても基礎代謝があまり上がらないそうなんです。脂肪を燃やせるようになるには、筋肉量が多い下半身を鍛えるのが良いみたいですね」
「あ、だから大股早足なのかな？」
「そう、みたいです。下半身、特に太腿はかなり筋肉があるので、そこをきちんと鍛える事で、身体全体の基礎代謝をアップして脂肪を燃やす……って寸法ですね。例えば……」
　以前かじり読みした記事を思い出す。
「腹筋５００回＝スクワット１５回なんて言い方をしているものを見ました。同じ筋肉量を増やそうとしても、それだけ労力が違うみたいですね」
　具体的な数字を出すと、めぐり先輩が目をむいた。

「ほわあ、そうなんだ……スクワット１５回ならなんとかなりそうだけど、腹筋５００回なんてやったら……次の日、起き上がれそうにないなあ……」
　言って、めぐり先輩がちらりとお腹を見やる。今度はお肉はお肉でも、筋肉について考えているようだ。むむむと唸るその表情がやたらめったら可愛い。
　――でも、スクワットを１５回、とは言っても……と、めぐり先輩が顔を上げて言葉を続ける。
「筋トレって中々続かなそうなんだよね……」
「それもそうですね。だからこそ、普段の生活の中で大股早足で歩くのは効果的みたいです。ジョギングも良さそうですけど、足を着地したときに自分の身体もきちんとその上に乗るので、足の筋肉への負担があまりかからないんだとか。なので、大股で歩いて、ふくらはぎに負担が来るなあと感じるくらいの歩幅で歩くとかなり効くみたいですよ」
「へええ……へええええ……」
　めぐり先輩が目を爛々とというかもはや燦々と輝かせて、トリビアみたいな声を上げている。懐かしいなあ、『メロンパン入れになってまーす』……。
　めぐり先輩がふんすっと気合を入れて（なんか腹筋してる時の小町みたいだ）、俺をちらりと見やる。
「こんな感じかな？」
「あ、ちょっと……」
　俺の反応を見る前に、ずんずんと大股早足で歩き出す。
　ほとんど前を見ていなかったのに、いきなりそんな事をしたら危ないだろう。
　――注意を呼びかけようとしたら、その前に。
「あう」
　ぽふんっ、と。
　売り物なのか、歩道の端に置かれた小さなテーブルに紐の先を括りつけられて、自由を制限されながらもぷかぷかとのんびり浮いていた

風船群に――めぐり先輩がそれなりの速度で突っ込んだ。
……何この、超和む風景。
「はわわ、ごめんなさい！」
めぐり先輩が慌てて抜け出して、風船の所有者らしき女の人に謝る。
女の人も、俺同様和んだのだろう。なんら怒ることなく、それどころかおかしそうに笑いながら「大丈夫ですか？」とめぐり先輩に聞いた。
「だ、大丈夫です。や～、お恥ずかしい……」
たははと笑うと、その女の人と俺だけでなく、現場を目撃していた周りの通行人もほわんと和んでいた。めぐめぐ☆めぐりんは世界を救う……！　なんだか、めぐり先輩のポテンシャルを垣間見た気がしました。なんだこの締め方。
めぐり先輩がててて俺の下に戻ってくる。
「たはは……やらかしちゃった……」
てへっと笑いながら、可愛らしく舌を出す。
……うおお、マジか。
本当に舌を出しちゃったよ、この人！
内心尋常でない程の喜びと興奮を覚えながらも、なんとか平静を装う。
「まあ、だひじょうぶですよ、これくらい。向こうの人も笑って許してくれてましたし」
「そうだね……って、どうしたの？　声裏返らせて」
「……」
全然、装えてなかった。
「こほん、ま、まあ、行きますか」
「ん、そうだね」
下手にも程がある切り替えを行って、なんとかこの場を切り抜けた。
……それにしても。
なんで俺、めぐり先輩にこんな、ダイエットトレーナーばりの指導

をしてるんだろう……。
「……」
ちらりと隣に目をやる。
今度は前をきちんと見ながら、大股だけれど俺を追い抜かないようにスピードを調整している為か、どこかぎこちない歩き方をしているめぐり先輩の真剣な表情が見えて、その微笑ましさにくすりと笑った。
続く。

（9）

「でね、その時あの子ったら……」

「へえ……」

気が付くと。

話題はダイエットのことなどどこへやら、めぐり先輩の面白クラスメイト（こう言うと凄く馬鹿にしているようだが、もちろんそんな意図は無い）の女子の話に移り変わっていた。ちなみにめぐり先輩の歩き方はものの数分で元に戻っていた。わざとでなく、素で戻っていたよな……うーん、道のりは長そうだなあ……。

楽しそうに話すめぐり先輩を見て、俺はそれとなく相槌を打つ。

俺にはそんな面白クラスメイトなど居ないので（戸塚は面白い面白くないの問題ではなく、そもそも天使だ。戸部はウザいし）――と思っていたけれど、由比ヶ浜がいるじゃん。といっても、どちらも知ってるヤツだしなあ……や、むしろ、普通なら共通の友人の話をして「あいつこの間さー（笑）」「マジでー（笑）」みたいな軽い笑いを追求するのがスクールカースト上位のヤツらの薄っぺらトークの醍醐味なのか。俺酷いな。

……スクールカーストのヤツらの会話がどうであれ、俺が人のことを面白く伝えることなどまず出来そうにないな……ぼっちの弊害か、これは。

――と言っても。

「――それで、わたしに振り向いて、『卒業してもずっと一緒だよね？　ね？　ね？』って手を握りながら何度も確認してくるからさ、驚いちゃった」

――めぐり先輩の話も、そんなに面白いと言う訳ではない。ていうかそのクラスメイト、怖いよ。大丈夫なのか？　めぐり先輩……。返答によっては今後の人生を左右しかねない展開が待ってそうだけど……。

しかし、話が面白いとは言えなくても、めぐり先輩がぽわぽわとした雰囲気で話すと、それだけで小さな可愛らしい花がぽぽぽんと咲く

気がして、とても和む。
極端な話、めぐり先輩が『でね、この間久しぶりにサバゲー用のエアガンを新調したんだけど、これがもう、デザインも渋くてたまらないし、射程距離も凄くて～』とか言ってても和みそう。……や、流石にそれは無理だった。迷彩服を着ためぐり先輩はなんかちょっと和みそうだけど、流石に銃は持たせられない。どちらかと言うとエプロンを着て俺が帰ってきたら台所でとんとんと人参を切りながら『お帰りなさい』と言ってほしい。どうした俺。
どうした俺。
なんか、妄想が止まらない。
ううむ。
……そう言えば。
さっきまでは緊張する緊張すると言っていた（心の中で）のに、いつの間にか、全然何ともなくなっている。
年上女性は良いものだと思いながらも、実際話すとなると中々しんどい。平塚先生も陽乃さんもぐいぐい来るタイプだから（失礼）、俺から能動的に絡んでいるとは言い難いし。
なんで俺、こんなに年上女性に苦手意識があるんだっけ――と思いを馳せると、ああ、そうだ、きつい経験があったじゃんかと思い出す。
小学生の時、勇気を出して同学年の子に告白したらこっぴどくフラれ（確か『え、だれ？　なんかキモいんだけど』という、存在及び告白を認識されない鬼のような返事だった。思い出しただけで涙が出る）、それで終わりかと思いきや、あろうことかその女子が２つ上の姉にその事を言ったらしく、翌日教室に俺を見に来て、姉妹揃って笑いものにしてきた――という、おぞましい思い出。
……やだ、思い出したら本当にしんどくない？
表情には出さないものの、小声で「うぐ……」と唸っていると。
「……どうしたの？」
「……え」
気付いた時には。
めぐり先輩の顔が、目の前にあって……。

慌てて、視線だけ周りに巡らせる。
ちょっとした小道を通っていて、周りは人がいなかった。
とはいえ……この距離は、ちょっと、や、非常にまずい。
後ろに下がろうとすると、壁に背中がどんとぶつかる。
めぐり先輩が心配そうな表情をしていなかったら、完全に変な気分になるところだった。
「あ、や、その……」
互いの顔の間に手を差し込むのでさえ難儀する程に顔が近付いていて。
鼓動が聞こえてしまいそうな程に心臓をばくつかせていると、めぐり先輩がにこっと微笑む。
――その笑顔は、今まで見た中でもとびっきりの優しい笑顔で。
「……言いづらかったら、今は言わなくて良いからね？　でも、言える時が来たら……いつでもお姉さんに相談しなさい？」
言って、えっへんと控えめな胸を張るめぐり先輩を見て。
「……っ」
俺は、固まっていた。
なんだこれ、なんだこれ、なんだこれ……？
原因不明の動悸に慌てていると、めぐり先輩が再び顔を寄せる。
「……だいじょうぶ？」
「……っ！」
おでこがくっつきそうな程接近しためぐり先輩の、澄んだ瞳がありありと見える。
何にも裏がない、純粋な気遣い。
積極的でありながらも空気を読んでどこか控えめになる女の子が、ふと頭を過ぎった。
「ななな、なんでもないです……！」
「あ……？」
後頭部が若干壁に擦れながらも、なんとか超近接距離にいたところから抜け出す。
「ちょっとー、比企谷くん、あんまり急ぐと危ないよー？」

めぐり先輩の心配する声が背中から聞こえるが、今はそれどころではない。
ちょっと、落ち着かないと……。
数分、なんならめぐり先輩が追い付く10秒程の間でも良い――と思っていたら。
――ごん、と。
「いっ……!?」
突然身体を走り抜けた痛みに、いらいらするような、驚くような、様々な感情が入り乱れる。
「いっ……て……うわ」
見ると、路地を出た直後にある街路樹に、おでこを強かぶつけたようだった。
……めぐり先輩は風船に突っ込んだだけだったのに……これが日頃の行いの差なのか？　悲し過ぎる……。
「比企谷くん！　大丈夫!?」
めぐり先輩が、慌てて駆け寄ってきた。
ちなみに俺は蹲って『くおお……』と悶絶していた。
「あ、先輩……だいじょ……う、ぶ……？」
俺が答えるのを待つことなく。
めぐり先輩は、おでこを押さえていた俺の手をそっと握って横にずらし、その柔らかい手をそっと俺のおでこに乗せた。
「痛かったでしょ……しばらくこのままで良いから」
「……！」
幸い、人通りはほとんど無いのだけれど。
それでも、しゃがんでいる俺の頭を、同じく屈みこんでよしよしと撫でるめぐり先輩という図は……恥ずかしいを通り越して、死ぬ。むしろ死んだ。
「……ん」
「え……」
俺のおでこを撫でていためぐり先輩が、優しく目を細めたかと思うと、俺のおでこを撫でている手の甲に、そっと自分のおでこを当てた。

何とはなしに、祈りを捧げる体になっているように見えた。
「こぶにならないと良いけど……いたいのいたいの、飛んでけー、いたいのいたいの、飛んでけー……」
「……っ!?　ちょ、ちょっと、先輩……っ」
全力で慌てる。
や、子ども扱いされてる恥ずかしさもあるけど。
なんでこの人、もう片方の腕を俺の首に回して、横から軽く抱き付いてるみたいにしてんの!?　なんで、なんで!?　いいの!?　勘違いしちゃうよ俺!?　そして告白してフラれて翌日以降それはもう冷たく扱われちゃうよ!?　未来予想図が悲惨すぎる。
俺が身を捩って立ち上がろうとすると、俺を抱きしめる腕に力が入る。
「こら、だめでしょ？　まだもうちょっと、このままにしておきなよ。……ん、血は出てないね、木に当たったら棘が刺さってもおかしくないけど……だいじょうぶ？」
「あ、はい……」
逃げ出すのをあまりにも柔らかく止められ、もはや為す術もなかった。
こんなに純粋に心配してくれるのは……本当に母親くらいのものではないだろうか。
うーん。
ちょっとこの人、素敵すぎる。
たまに通る人からじろじろと視線を感じたけれど、今はどうでも良い。
……もっと言えば、ほんの数分前に思い出して苦しくなっていたトラウマのことも、どうでも良くなっていた。ええと、あの人たちの苗字ってなんだっけ、田中と山本？　あ、姉妹だから普通は同じか。じゃあ橋本Ａ（姉）、橋本Ｂ（妹）でいいや。
……や、ほんとどうでも良くなってんな。すげえ、これがめぐりん効果か……。
……こんな、素敵な年上お姉さんが居たら。

そりゃあ、しょうもない人たちとの、どうでも良い記憶なんて、消し飛んでも当然と言えた。
――と、そんなことを考えていると。
「うーん……これ、中々気持ち良いかも……」
「え」
俺のおでこを撫でていた先輩の手が、いつの間にかその動きの延長線上で髪も撫でるようになっていて、若干うっとりとした声でまさかのセリフを言われた。
「や、先輩、何を……？」
聞くと、めぐり先輩は手を止めることもなく、のんびりとした声音で、
「ん～？　気にしないでいいよ～……ふふ……」
「……」
なんだこれ。
この人のツボがいまいち分からん――なんて思いつつも、頭全体を撫でられる俺自身もかなり気持ちが良かったので、しばらくこのまま身を任せることにした。
……やっぱ、超恥ずかしい……。

続く。

（１０）

２人でのんびり歩いて、ようやく行きつけの大型書店に辿り着いた。

「ふー、やっと着いたね」

めぐり先輩が指を組んで、んーと伸びをする。なんかちょっと猫みたい。

ですね、と短く答えると、めぐり先輩に釣られて俺も身体をぐいっと伸ばす。

冬とは言え、昼時だしここまで歩いてきたこともあってか、身体は凍えるどころか火照ってさえいた。

……いや、こんな理由を並べてはいるけれど、もちろんこれらもきちんと理由には含まれているのだけれど。

実際の所は、さっきめぐり先輩に頭を撫でられながら抱きしめられた事による、尋常でないどきどきを思い切り引きずった事が、理由としては一番大きかった。

なんで一緒に道を歩いただけでこんなどきどきしてんだ――と悶々としていると。

「比企谷くん？　どうしたの？」

「はひゃいっ!?」

びっくりしすぎて飛び跳ねた。

めぐり先輩から見れば、俺が書店の入り口を凝視して顔をしかめて考え事をしているようにしか見えない状況だった。俺バカすぎるよお……。

ここであまり狼狽えて怪しまれてもしょうがないので、何とか無理矢理表情を通常モードに戻して、平静を取り繕う。

「あ、だ、大丈夫です。取り敢えず中行きましょう。寒いでふしね」

「？　うん、そうだね」

めぐり先輩は俺の様子を不思議に思って、首をくりっと傾げながらも了承してくれた。ふわりと踊るおさげに心が安らぐ。

テンパりすぎて声が裏返って軽く死にたくなったのは内緒。でふ

しって何だ、でふしって。
そんなこんなで、ようやく書店に足を踏み入れた。
×　×　×
「ほわ～、いつ見ても凄いなーこの店」
めぐり先輩がぽわんとした調子で、感嘆の声を漏らした。
「まあ……そうですね」
この店は俺が信頼しているだけあって(言い方が鬱陶しい)、品揃えがかなり良い。純文学からライトノベル、R―18の本まで充実していて、まだまだ踏破するに至っていない。
店員さんも文学に精通したベテラン店員や、ラノベやコミックに精通した若い店員などが居て、ちょっと探し物をしている際もかなり聞きやすい。質問すると大体、「ああ、それはこの辺りに……あ、ありましたね」というくらいの時間で解決してくれる。神速の店員の集いである。
ちなみにR―18コーナーはめっちゃ興味あるけど、昼に入るのはきついし、夜に行くと帰りが遅くなって小町に怪しまれるから中々行けない。やだ、兄思いな小町の自慢になっちゃった！
「比企谷くんはどういう本を買いたいの？」
めぐり先輩から言葉をかけられて、数秒前までの説明感たっぷりの思考があっと言う間に霧散した。
「ああ、俺はあっちのコーナーにある本を買おうかと」
言って、ラノベのコーナーを指す。
「へー、わたし読んだこと無さそうなジャンルだ」
「そうなんですね。先輩は？」
「わたしはあっちのコーナーだね」
振り向いた際におさげ髪が揺れて、爽やかな香りがふわりと舞った。後頭部に鼻を押し付けて匂いを嗅ぎたいとか信じられない煩悩が過ぎったけど、漏れなく放送カットしました、俺の脳内で。
めぐり先輩が指差したのは文学コーナーだった。うん、イメージ通り。
「じゃあ、ここで別れて今日は解散ですかね。お疲れ様でした」

ぺこりと礼をして顔を上げると、めぐり先輩がきょとんとした顔で俺を見た後、ははあんと唸った。え、なに、いつもと違う雰囲気……。
腕を組んで瞑目し、むむむと唸ると、呆れたような、それでいて愛情一杯の笑みを浮かべる。
「なるほどなるほど……比企谷くん、こんな感じなんだね」
「え、や、いつもこんな感じですけど……なにか？」
何が何やらと混乱しながら答えると、めぐり先輩が斜め上を見て、何かを考えている。
「……雪ノ下さんと由比ヶ浜さん……それに最近は一色さんもかな？
中々苦労してそうだなあ」
「え、え、え？　何のことですか？」
なんかすげえ恥ずかしいこと言われてる気がするんだけど。
なんか前もこんな感じのこと言われた気がするなーなどと呑気に考えていると、めぐり先輩がふふっと笑った。
「しょうがないなー……」
言って、とてとてと俺の背中に回ると、
「よいしょっとー」
両手のひらで、俺を押し出すめぐり先輩――えらく可愛らしい突っ張りもあったものである。
「ちょ、ちょっと……」
コート越しとはいえ、背中にめぐり先輩の手のひらの感触を感じてどきどきしていると、めぐり先輩がにこっと笑った。
「ここまで来たんだから、一緒に本を見て回ろうよ。ね？」
「……っ、は、はい……」
俺の背中を押しながら、目を細めて首を傾げるめぐり先輩の仕草に、死ぬほどどきっとした。
……ん、うん。やっぱり、年上も良いな。むしろ最高まである。
「……」
とはいえ。
……そろそろ手を離してくんないかなあ……。恥ずかしくて死にそうなんだけど。

めぐり先輩は俺を押すのが楽しくなったのか、「ほれほれ～♪」と妙にうきうきした調子で俺を煽っていた。この人は徹頭徹尾俺を癒しで浄化しにかかっているようだ。

……なんだこれ。

× × ×

最初に来たのは、めぐり先輩がお目当ての文学コーナーだった。俺の趣味に興味があるらしく、楽しみは後にとっておきたいとのこと。ご飯の時にめぐり先輩がどんな順番で食べるのかっていう主義を聞いた感がある。

「買いたい本があるとは言ったんだけど、実際はいくつか候補があってね。シリーズの新作が出てるかどうかちょっと曖昧なのがあるんだけど、それを確認するついでに他に良さそうな本が無いか探してみようと思ったんだー」

めぐり先輩が頬に指を当てて、書籍を眺めながら語る。

時折本を手にとってはぱらぱらと捲る様はとても知的で、普段とのギャップに思わず見惚れそうになる。めぐり先輩がちらりとこちらに目を向けたので、慌てて視線を別の書棚に移した。

「ええと……先輩は好きな作家はいますか？」

所在無げに視線をうろつかせながらめぐり先輩に質問すると、本をぱたんと閉じてしばし黙考。

「んー、海外の作家だとヘルマン・ヘッセやサリンジャー辺りが結構好きで、日本の作家だと恩田陸とか綿矢りさ、吉本ばななんかが好きかなー」

「へえ……」

ううむ、なんか分かりやすいようなそうでないような。

実際、同じ作家でも作品によってテイストががらりと変わることはよくあるしな。今度めぐり先輩に本を借りて読んでみて、趣味が合うかどうか確認するのも悪くな――って、んん？

……なんか俺、めぐり先輩にすごい深入りしようとしてない？　どうした俺？　どれだけ癒しを求めてるんだ？　そんなに日々の疲れが溜まってるのか？

「まあ、言ってはみたものの、今挙げた人の本だって精々３～５冊ずつ読んだくらいだけどね」
「や、十分じゃないすか？　その人の作品を何十作も読まないと語っちゃいけないなんてルールは無いですし」
「ふふ、それもそうだね……お、あったあった」
　めぐり先輩はお目当てのものを見付けたようで、手に取って上機嫌に表紙と帯を眺めている。
「どんな本なんですか」
　近くに寄って裏表紙を眺めながら聞くと、めぐり先輩が「うーん、結構好きなんだけど、どう説明すると良いかなー……あ、そうか」と言って、帯の売り文句を読み始めた。
「『――ほんわか先輩女子と根暗後輩男子のウブな恋愛絵巻、シリーズ３作目。先輩女子の卒業を前に、２人を取り巻く環境が一気に動き出す――』……あ」
「え……」
　二人同時に、ぴたりと止まった。
「……」
「……」
　なんだこの空気。
　めぐり先輩の顔は本に向いたままぴたりと止まり、その横顔しか見ることが出来ない。
「と、取り敢えず、他の所に行こっか。また後ででも買えるしね！　うん、そうしよう！」
「え、あ、ちょ、ちょっと……っ」
　めぐり先輩が頬をほんのり紅潮させて、ぱたぱたと歩いて行く。
　慌てながらもきちんと丁寧に戻された本の表紙を見ると、制服を着た男女が手を繋いだ表紙絵が淡いタッチで描かれていた。
　……深くは、考えないようにしよう、うん。
　……うん。
　続く。

（11）

めぐり先輩がぱたぱたと駆けて行くのを追いかけていて、ふと気付く。

……どこに向かってんだ？

てっきり自分の探し物から切り替えて、ラノベコーナーに行ったと思ったんだけど……そっちに向かった様子は無い。はてさて。

「……お」

しばらく歩いて回ると、見覚えのあるおさげ頭を見て安心した。

「ふいー……」

めぐり先輩は何やら大きめの本をぱたんと閉じて、一息ついていた。

「先輩」

「あ、比企谷くん」

声を掛けると、めぐり先輩がいつも通りの笑顔で迎えてくれた。おお、もう切り替えている……。一体何を読んで切り替えたんだ……と思って上を見ると、「動物コーナー」と記されていた。

「ふふ、ごめんね？　落ち着きたくて……これ読んでたの」

「……」

めぐり先輩が掲げたのは、だいぶ大き目の表紙にでかでかと書かれた「ペットで和もう」という死ぬ程分かりやすいタイトルの本だった。その本で顔を隠して、ちょろりと顔を覗かせながら照れ照れとしているめぐり先輩がやたらと可愛い。なんだこの人、撫でるぞもう。あと何気に読むの速いな……。

しかし、ここで深くツッコもうとすると、さっきの件に触れてしまいそうだ。

「……そうでしたか。じゃ、次ラノベの方行きましょうか？」

「うん、そうだね」

言葉少なに切り上げる事にした。

にしても先輩がペットの本読むとか……神がかって似合うな……。癒しに癒しをかけるとか、やだもう、もはやヘルシングの敵にさえ成

り得るかも。……絵のタッチのギャップが激し過ぎるな。

×　×　×

「へええ、こんな感じなんだ……」

俺が目的としていたラノベコーナーに連れて行くと、文学コーナーとはかけ離れた雰囲気にめぐり先輩が感嘆の声を上げていた。

ふむふむと言いながら本を眺めるめぐり先輩。なんかもうアレだ、撮りたい。ごめんなさい何でもないです捕まえないで！

「色々と種類があるみたいだけど……あ、なんか可愛い女の子のイラストが多いね。後は結構タイトルが長いのが多いのかな？」

めぐり先輩が平積みにされた本を見ながら、ふと気付いた傾向を並べる。確かにどちらもラノベにはよくあることだ。

「そうですね。後は本の中でイラストが描かれている事が多いですよ」

「へえ……あ、本当だ。女の子可愛いな～」

ぽわぽわした表情で、口をほえーと感嘆の形に変えながら、めぐり先輩が唸る。や、あなたの方が……とか、もう似合わな過ぎて来世でも言う権利が無い程恥ずかしい事を言いそうになったのはめぐりん効果が故だろうか……？

「ちなみに比企谷くんはどんな作品が好きなの？」

「ああ、青い本が好きですね。すぐ目につきますし」

「ふむふむ」

そんな会話をしながら、めぐり先輩はぱらぱらと本を手に取り、イラストを含めて文の雰囲気を探っている。

青い本が好きと言ったためか心持ち青い本を手に取る事が多いのだけれど……しまった、お目当ても青い本だったから、探すとなると妙に近付いてしまう。

なるべくぶつからないように――と気を付けながら青い本のエリアに踏み入った矢先。

――とん、と。

「あ、ごめんね？」

「い、いえ」

横にスライドしてきためぐり先輩に、ベタとしか言えないぶつかり方をされた。何これ恥ずかしく死にそう。
先輩の二の腕柔らかいなーそういやさっきダイエットのくだりでふにふに触ってたりもしたなーとか考えた所で、必死に頭を振って煩悩退散。無理だった。
「ちょっとこっちも見てみるかな……」
先輩があごに人差し指を当てて屈むと、先輩の物色の対象が青い本以外に変わった。
ふう……と安心して（さっきのが何気にダメージがでかい）物色を再開すると、突然耳に密度の大きな空気の振動が叩き付けられて飛び上がった。
「ええ!?」
「!?」
めぐり先輩から発せられた声だと気付くのに一瞬間が空く程の、大きな声。周りにちらほら居た客もちらちらとこちらを見ている（普段このコーナーであまり見かけないタイプの女の子が居るからだろう、さっきからちらちら見てきてはいたのだけれど。なんだお前ら目に水平チョップかますぞ）。
「せ、先輩、どうしました？」
本を開いたまま顔を茹でダコの様に真っ赤にしているめぐり先輩に声を掛けると、ぎぎぎと首だけこちらに振り向いた。顔を真っ赤にしながら何とも形容しがたい面白い顔になっている。
俺が近寄ろうとすると、面白顔（失礼）をこちらに向けたまま、本をしぱーん！　と閉じた。
「ななななな、なんでもないよ!?　うん！　ほんと、なーんでもない！　あ、騒がしくてすみません！　あ、わた、わたし、もう一回文学コーナーに行ってくるね！　買いたい本持ってくるから！」
「え、あ、ええ？　あ、は、はい」
「じゃ、じゃあ、うん、また後で！　……む、胸……」
丁寧に周りに謝りつつも、今まで聞いた事がない速さで捲し立てると、最後にやたら気になる単語を呟いて、ぴゅーという擬音が付きそ

うな速度で早歩きしていった。あれだけ慌てていても、走りはしない辺りが律儀だなあ。

……それにしても。

「何を読んだらあんな反応を……あ」

先輩が読んでいた本を手に取ると、色々と合点がいった。

「新妹魔王の……ああ、これは……」

バトルものとラブコメ、正確にはバトルものとどエロを組み合わせた、現在8巻程出ている作品だった。俺も最近読み始めていて、今は3巻をちまちまと読んでいた。この本ではやたらとレベルの高い絵師が、仕事中に会社の人と「それ何のエロゲの仕事？」「ラノベの作業です」「!?」なんて会話をする程エロいシーンとイラストをたくさん載せている。具体的に言うと、本番だけしてない。しかしそこまででも十二分にエロい。本当にエロい。どんだけエロいを連呼してんだ俺。

そういやめぐり先輩、開いていたのは最初のカラーイラストだったな。それで「む、胸……」って言ってたのを考慮すると――などと、無駄に推理しながら彼女が見たものが何かを探る。

ぺらぺらとページを捲ると、

「……あ」

恐らくこれが正解だろう。とんでもないものに行き当たった。

4巻のカラーイラストで、美しすぎる養護教諭が、自宅の浴室で主人公のモノを胸で挟み込んで、それをタオルで覆っているという洒落にならない程エロいイラストだった。タオルに包まれた先端が何とも生々しい。

……いきなりこれを見かけたらびっくりするよなあ。画力が半端ない分、余計に。

「……」

……。

……うん、買っておこう。

早くこのシーンに行き着きたい一心で、購入したい本の間にさりげなく挟んだ。

× × ×

「先輩」
「ひゃわっ!?」
　文学コーナーで本を手に取っていた先輩に、もう落ち着いたかと思って声を掛けたんだけど……。普通に声を掛けただけで、本がぴょいんと手から跳ねた。なんだよ付喪神か？
　落としそうになった本をお手玉をした末になんとかキャッチすると、胸に抱えてぜえはあ言いつつこちらを見る。
「あ、ひ、ひき、比企谷くん、ごご、御機嫌よう」
「……」
　動揺が甚だしい。甚だし過ぎる。キャラが変な事になってるし。さっきより時間を置いたのに、まるで回復出来ていない。
　……思わず、ほんの少しだけ、さっきの件に触れてみたくなった。
「先輩、さっきの――」
「わー！　わー！　わー！　わたしは何も見てないよ？　ぜーんぜん！　なーんにも！　や、やだなあ比企谷くん、あ、あんな、胸でするなんて……ってわたし何をー!?」
「せ、先輩？　落ち着いてください」
　顔を真っ赤にして目をくるくる回しながら慌てる先輩はとんでもなく可愛いんだけど、周りの視線が痛すぎる。「胸でする」とか直接言っちゃってるし。さっきのイラストで確定じゃん、もう！
「そ、そろそろ本買おうか！　ね！」
「あ、は、はい」
　大慌てのめぐり先輩が、お目当ての本と思われるものを3冊程手に持って――
「……んん？」
　めぐり先輩には聞こえなくくらいの音量で、小さく呟いた。
　……あの本、さっき先輩が見てた本じゃあ……？　あ、でも初めから買おうとしてたっぽいしな。
　……なんか妙にどきどきすんのは何故なんでしょうか。
　――と、そんな事を考えていると。
「……」

めぐり先輩も、ちらちらと俺が買おうとしている本を見ていた。
「……」
悪戯心が過ぎって、他のコーナーに目をやって歩きながら、さりげなくさっきめぐり先輩がイラストを見た本の表紙を、先輩に見えるように手の中で位置を変えてみた。
――すると。
「ほわあっ!?」
ぼしゅっ、と音がしそうな程の勢いで、めぐり先輩の顔が真っ赤になった。
そして顔を本で覆って何も知らぬ存ぜぬという振りをしつつも、ちらちらと顔を覗かせてこっちを見ている。
……え、なにこの可愛い人。死んじゃう。
しかも可愛さに加えて、こういうものに疎いながらも興味はあるという凶悪な属性を兼ね備えている……だと……？
なんだか、不意に。
後は本屋を出て別れるだけ……のはずなのに、妙な高揚感が身体を包んでいた。

続く。

（１２）

めぐり先輩が顔の熱（部位限定）を冷ますのにひたすら顔を扇いで何とか持ち直した後、それぞれのお目当ての本を購入。ちなみにめぐり先輩の提案で、２人分をめぐり先輩がまとめて買って、後でレシートを見て俺が自分の分をめぐり先輩に払うことになった。

しかし、そうする予定にも関わらず、気付けば雑談しながら一緒に並んでいた。隣同士で並んで一緒の会計とかなんかもう中々恥ずかしい。

「さてさて、それじゃあ……あ」

書店の出口に向かっていると、紙袋に入った本を胸に抱きながらめぐり先輩がある場所に視線を向けた。

そこは書店と併設されたカフェで、書店で買い物したらそのままそのカフェで読めるというお店だった。会計の際に書店でのレシートを提示すればちょっと割り引いてくれるという粋なサービスもある。

本来であればめぐり先輩とはここでお別れの筈なのだが……そのカフェを見付けた先輩が俺とカフェとをちらりちらりと交互に見やる。や、もう意図は分かったので……大丈夫ですから……！　そんなに純粋な瞳で見ないで……！

「比企谷くん、せっかくだし……どうかな？」

「ああ……はい、まあ良いですよ。せっかくですし」

何がせっかくなのかは芥程も分からないけど。

俺にしては珍しく、本当に珍しく、もう少しくらいこの時間を楽しんでみても良いかなと思っていた。

と言う訳で、身体の向きをカフェに向けてとことことこ。

×　×　×

――こうして、冒頭（よく分からんけど（１）の冒頭辺りの気がする。２ヶ月くらい前な気がする）に戻る訳だ。回想なのかどうかももはやよく分からん。

「……」

めぐり先輩に貰ったガムシロップをコーヒーに入れながら（なんか

先輩に貰ったと考えると、普通のガムシロップより甘そうな気がする。絶対気のせいだけど)、読書に耽るめぐり先輩をちらりと見やる。

その落ち着いた雰囲気はいつもと一味違っていて、とても大人びて見える。

……うーん、お姉さん、って感じだなあ……。

やっぱり俺が出かける時に洗濯物を干しながら「行ってらっしゃい」とか言ってくれたらそりゃあもう馬車馬の如く働く元気が……あれ、今、専業主夫への道が閉ざされた……?

そしてアレだ、帰ってきたらめぐり先輩と小町がご飯を作ってくれてて、そこにきらきら笑顔の戸塚も帰ってくる。やだ、天国……!

俺何言ってるのん?

――なんて妄想をしていると、どうやらめぐり先輩をガン見していてしまったらしく、ぱっちりと目が合った。

「ん? どうかした?」

「あ、い、いえ、なんでも……」

慌てて顔を逸らして目だけめぐり先輩に向けると、首を傾げたままにっこりと目を細めた。そしてまた本に視線を戻す。

「……」

絵を描きたいからモデルになってと言って、2時間くらいガン見してたいなあ……嘘が3分でバレると思うけど。絶対口元が緩んで「うへへ……」とか言っちゃいそうだし。何それ即座に通報されちゃう。

ふと、自分が読んでいる本に視線を戻す。今自分が読んでいるのは、何冊か買ったうちの1冊だ。――さっきめぐり先輩が耳まで真っ赤にしたイラストが描いていあるラノベは、紙袋の中に入れてある。

試しに――と思い、今読んでいる本に栞を挟んで鞄にしまい、例のラノベを取り出した。読み始める際、わざとらしく本を立てて表紙がめぐり先輩に見えやすいように仕向けた。

まあ、集中しているようだし、気付くとしてもしばらく先かなと思っていたら、

「〜〜〜〜〜〜っ!?」

ぼんっと蒸気が噴き出す音。

見ると、めぐり先輩が読んでいた本で顔を隠してちらちらとこちらを覗いていた。
俺が読む本を替えるという行為にたまたま意識が向いたようだ。こうかはばつぐんだ！
リアクションを見る事が出来て、ああもうめぐり先輩可愛いわー癒されたわーと思った所で、俺も読書を開始したのだけど……。
「……」
めぐり先輩、もう、全っ然集中出来てない。ちょっと面白すぎる。
視線の比率が、読んでいる本：俺が読んでいる本＝2：1くらいなもんで、ちょくちょくと小声で「あ、あれ？　どこまで読んだっけ……」とか言ってる。なんだよ超お茶目だな。
予想を超えるリアクションに、なんというか、うん、夢が膨らむよね！
今日やっと、ある程度会話をするようになった先輩という関係に過ぎないのだけど、ここで珍しくいたずら心が働いた。
「昼の方が混むんですかね？　思ったより空いてる感じが……」
――などと他愛も無い事を言いながら、例のカラーイラストが描いてあるページを開いて、周りを見渡しつつ本をぱたっとテーブルの上に広げる。
――その瞬間。
「ほわあっ!?」
――ぼしゅうっ、と。
さっきの蒸気がやかんの湯気だとしたら、今のは草津温泉の湯気かな……なんてどうでもいいことを考えてしまうくらいには、とんでもないレベルで湯気が噴き出した。
そこまで大きい声ではなかったものの、カフェ及び書店でまず聞く事が無い類の声であったため、周囲の視線が一斉に自分たちのテーブルに向けられる。
めぐり先輩は口を手で塞ぎながら、方々にぺこぺこと頭を下げていた。
あ、これあかんやつや。

やりすぎた。
――そう思った矢先、案の定、平静を取り戻しためぐり先輩が最後にすーはーと深呼吸をして、ゆっくりとこちらを見やった。あ、やばい、笑顔が超恐いぞ。
「比企谷くん……？」
「は、ひゃいっ」
地の底を這うような声に思わず身が竦む。あ、あれ、おかしいな、癒しのめぐりんの声の筈なのにな……。
めぐり先輩が超絶恐い笑顔のまま言葉を続ける。
「……わざとやってるなら、怒るよ？」
「……っ」
やっべ、心臓止まりそう。
仲が良いというのもあるのだろうか、めぐり先輩があの魔王にどことなく重なる部分があるように思えた。
まあ、これは明らかに俺が悪い。悪ノリが過ぎた。
そう思い、ぺこりと頭を下げる。
「ごめんなさい」
努めて真面目に言うと、ふっと息を吐く音がした。
「……うん、顔上げて良いよ」
「……はい」
顔を上げると、めぐり先輩は穏やかながらもどこか呆れたような、なんとも大人びた表情を浮かべている。
「素直に謝る点はとてもよろしい。……じゃ、理由を聞かせてもらおうかな」
「え」
理由って、え、え、え？　なに、「先輩の反応が可愛いもんでやっちゃいました、テヘ☆」とか言えばいいの？　俺超気持ち悪いな。
逡巡していると、めぐり先輩が顔をずいと乗り出してきた。甘い吐息が顔にかかり、心臓がどくんと跳ねあがる。
「り・ゆ・う・は？」
「うぐ……」

どうしよう、めぐり先輩の頬を両手で挟んでむぎゅーってしたい……なんて現実逃避をしてしまうくらいにはパニくっている。
顔を逸らしながら、ちらりとめぐり先輩を見やる。あかん、めっちゃ見てる！
……どうやら逃げ場は無いようだ。ウソなどついてもコンマ何秒でバレそうなので、素直に言うことにする。
頬をぽりぽりと掻きながら、
「ええとですね……その、最初に先輩がこの本のイラストを見たと思われる時の反応があまりにも可愛くて……で、まあ、元々買おうとも思っていた本でもあったので……あと、いざここに来たら先輩のあの可愛い反応をもう一度見れないかなあ……なんて思いまして……」
しどろもどろにも程があるだろう、俺……と、呆れながらも一通り話した……のだけど、めぐり先輩からの返事が無い。
「……？」
不思議に思い、めぐり先輩を見やる。
……なんで顔が真っ赤なのん？
俺と目が合うと、めぐり先輩はハッとして両手を頬に当ててあわあわ。
「……あ、え、えと、その、ええ？　わ、わたしが、か、かわい……ええ……？」
「……」
やべえ、なんだこの可愛い生き物。死ぬ。
「……えと、可愛い、って言ったんですが……」
言うと、顔が更に赤くなる。
「あ、え、ええ？　あう、そ、その、わたし、そんな風に言われたことないから……」
「え？　告白された事が結構あるって言ってましたよね？」
確か地味男に告白された経験が結構告白されたと言ってたはず。大人しめな、という優しい表現だったけどね！
その時は――と、めぐり先輩が話を続ける。
「その、あまり話した事が無かった男の子が急に『好きです、付き合っ

て下さい』って言ってくるばっかりだったから……」
うわあ、ひでえ。と言っても俺も全く人のこと言えねえけど。
しかし、なんだ。
めぐり先輩が恥ずかしがってうーうー唸る姿が可愛すぎて、なんかもう……わー！　思考が爆発する。
ちょっとだけ……ちょっとだけ、攻めてみる。
「そうなんですね。こんなに可愛くて素敵なのに」
「か、かわ……!?　す、すて……!?」
皮捨て？
「先輩、ぽわぽわしててすごい癒されるし、可愛いですよ。あと可愛い」
「あ、あわわわ……」
「先輩と話す度に和んでるんですよ。癒し系の上に可愛いとか反則ですね」
「あう、あうううう……ちょ、ちょっと、比企谷くん、もう……」
「や、本当に可愛いですよ。他にも――」
「こらー！」
怒られた。
「す、すいません」
「あうう……まったく、調子に乗っちゃだめだぞ！」
さっきと比べると怒り方がずいぶんと愛らしい。腕をぶんぶん振ってぷりぷりと怒っている。撫でていいかなあ。
それに、と顔を逸らしていためぐり先輩がちらりとこちらを見やる。
「……いいの？　なんか今の、……その、口説いてる……ようにしか見えないんだけど」
「え……あ」
自分の言動を思い出して、顔が熱くなる。
めぐり先輩を見ると、先程とは種類の違う、ほのかな紅潮が頬に見える。
「……」

「……」
「……ええと、その、なんか、すいません」
「……いや、その、大丈夫だよ」
「……でも、さっき言った事に嘘は含まれてませんから」
「……！　ま、またそうやって……っ」
気付けば、２人して真っ赤になって俯いていた。
……なんだこの状況。
この、カフェでの不思議な時間は、もう少しだけ続きそうだ。
……まだ顔が熱い……。

続く。

（１３）

「……」

「……」

さっきの恥ずかしいやりとりがあってから、どうも……お互いにぎこちない。

互いになるべく変に意識しないようにしているのだが、それでも読書を続けながら俺はちらちらとめぐり先輩を見てしまうし、俺が本に視線を落としている時はめぐり先輩からの視線をちょくちょく感じる。

……あゝ、恥ずかしい。

たまにばちっと目が合うと、二人して超速で目を逸らす。めぐり先輩はその直後、毎回頬を赤らめながらちらりと見てくる。死んじゃうよぉ！　ちなみに目を逸らした時の俺の勢いは若干首を痛めかけるレベル。

「そ、そういえばっ」

「え、あ、はい」

めぐり先輩が違和感ばりばりながらも話題を切り出してきた。年上お姉さんとしての余裕がまるで感じられない。だがそれが良い。……だいぶ重傷だな、俺。

「比企谷くんは進路はどんな風に考えてるの？」

思いの外手堅い話題だった。しかし今は何を話しても裏目に出そうなので、こういった話の方が助かる。

「そうですね、俺は……専業主夫一択です。愛する妻が一生懸命働くのを全力でサポートすることにします」

「あ、愛す……っ!?」

「え？」

「あ、や、なんでもないよ、そ、そか、うんうん、へえ……っ」

手をぶんぶんと振って、顔を真っ赤にするめぐり先輩。や、そんな反応されるとすげぇ恥ずかしくなるんですけど……。

「で、でも、大学には行かないの？」

すはーすはーと控えめな胸を上下させて、めぐり先輩が尋ねる。
「そうですね、大学には行きます。けどその後プータロ―になる時期は作りたくないので、卒業するまでには相手を見付けて、俺が働かなくても良い状況を作りたいです」
いつもの調子で答えた――のだけど。
「……」
「……先輩？」
何やら固まっていた先輩が、俺が呼び掛けた瞬間にハッと目を見開き、慌てて手をぶんぶんと振る。
「っ！　あ、ご、ごめん、そ、そか、うんうん、へえ……っ」
……。
こ、この人、自分で掘り下げては俺を巻き込んで自爆してくる……！　腹にダイナマイトを巻き付けてタックルかましてくる感じ。
ふぃーふぃーと控えめな胸を上下させて、めぐり先輩が尚も話題を続ける。なにこの共倒れの旅路。
「……ふーっ。……ふう。……どの辺の大学を狙ってるの？」
どんだけ落ち着くのに苦戦してんですか。
「そうですね、私立文系を狙ってます」
以前から変わらず考えている進路計画を話す。や、まあ、私立文系→専業主夫ってだけ言うと壮絶なまでにアバウトな計画にしか聞こえないんだけど。
「そっかー。私立文系っていうと、受験教科を絞れるよね」
「そうなんですよ。俺は入学して早い段階で決めてたんで、数学を早々に捨てました」
要らない事を言ったな、と思った。
めぐり先輩は俺の言葉を聞くと、眉をぴくりと動かす。
「ん、数学を捨てたって……今は成績どれくらいなの？　例えばこの間の期末テストは？」
んんん？　なんかまずい流れになっている？
「え、やー、その……」
別にやましいことをしている意識は無いのだが、物凄い勢いで目が

泳いでしまう。ふぁふぁふぁふぁって効果音が付くレベル。
「……そんなに悪いの？」
「う……」
なんだろう、怒るとかってよりかは、なんか悲しむような目で見られてる……。
うぐぐと唸って、自分が叩き出した数字をぽろっと告げる。
「……９点、です」
「え」
「……だから、その、９点、です」
「……１０点満点の小テスト……じゃないよね？」
「うぐ……や、その、１００点満点の、普通の期末テスト、です」
「その期末テストで、え？」
え、何これ、返ってきたテスト結果の報告を母親に強制されるのび太の気分。
「……その、期末テスト、で、９点、です……」
「……なんと……」
すんごい渋面。すんごい渋面。すんごい渋面。３回言っちゃった。
改めてこう言われると、ダメージが半端じゃない。他の人に言われてもさらりと流せるんだけど、めぐり先輩みたいなタイプは周りに居ないから、この攻められ方はどうにも慣れない。
コナン君よろしく左腕で右腕の肘を抱き、右手の指をあごに当ててむむむと唸りながら考えこむめぐり先輩。
ここからどんな展開が起きるのかと戦々恐々としていると、めぐり先輩が長考を終えて顔を上げた。
「比企谷くん、お節介なのは分かってるし、これはあくまでわたしの考えなんだけど」
「は、はい」
「数学、勉強し――」
「ません」
「早いよ!?」
クロスカウンター。

ここでめぐり先輩に押し切られると、ろくな流れにならなそうだ。負けない！
「や、比企谷くん、あのね」
「今日は暖かいですよねー。もう夏かなってさえ思えますね」
「コート着てちょうど良いくらいだよ!?　だから、あのね」
「恥ずかしくなるのも厭わずに言わせてもらえば、先輩すげぇ可愛いです」
「かっ、かわっ……!?　や、だから、あのねったら」
「本当に可愛いです」
「はわわわわ……っ！　や、だから、その」
「……」
めげないめぐり先輩にとどめを刺すべく、例のラノベのカラーイラストをぺらり、ちらり。
「ほわあっ!?」
はい、湯気どーん！
「こ、こらー！　いい加減にしなさーい！」
「いやです、断固として俺は戦います、抗います、逆らい続けます」
カラーイラストをめぐり先輩の目の前にかざしながら、他の客の迷惑にはなるべくならないように互いに小声で応酬。
（ぎゃーぎゃーぎゃー）
（ぎゃーぎゃーぎゃー）
（ぎゃーぎゃーぎゃー）
……すごいシュールだった。
5分後。
「はぁ、はぁ、はぁ……」
「ぜはぁ、ぜはぁ、ぜはぁ……」
互いに疲弊しきって、テーブルに突っ伏す。カフェで絶対見ない光景だろう。テーブルに鼻を付けていても、周りからの視線がよく分かる。超突き刺さってる。
「はぁ、はぁ、はぁ……比企谷くん、お願いだから、少しで良いから話を聞いて？　ね？」

「うぐぐ……ここまで粘られたのは先輩が初めてなんで、渋々聞くことにします」
「渋々って言わなくても良いよね!?」
なんか、この5分間でめぐり先輩とやたら仲良くなった気がする。
×　×　×
コーヒー1杯ならおかわり可というありがたいサービスで、2人共にコーヒーで一息。ふひー。
「……でね、さっきの話なんだけど」
ついさっきまでの壮絶にショボい争いがよっぽど応えたのだろう、仄かに苦笑いを浮かべている。
「君のやり方自体はありだと思う。ただ、例えばわたしがこの話をあと半年後くらいに聞いてたらもう方向転換しようもないから何も言えないと思うけど、受験まで……少なくともセンターまで1年弱ある今の段階でなら、まだ何かしら言えそうだから言っておくね」
コーヒーを一口飲んで、柔らかな笑みで俺を見つめる。
「もし、君がここからの1年間で、新しくやりたいことを見付けて、あ、やりたいことっていうのは勉強でもそれ以外でも何でもありで考えてね？　で、もしそのやりたいことに取り組むのに適した環境が国立の大学にあった……っていう事態になったとき、例えその大学のレベルがそこまで高くなくても、数学の実力がほとんど0に近い状態では一気に望みが薄くなると思うんだ」
「……そう、ですね」
確かに、一理ある話ではある。もちろん大学によっては傾斜配点等があるだろうが、センターで数学だけ2割とか笑える点数を出しては、大抵の場合合格から大いに遠ざかってしまうだろう。
「だから、別に今から数学を得意教科にしよう！　とまでは行かなくても、もし受験に必要だって状況になった場合に、本番までに足を引っ張らない程度に点数を伸ばす最低限の地盤を築く……くらいはしていても良いんじゃないかなって」
「……」
先輩の言葉を聞きながら、コーヒーの水面に視線を下げる。

「それに、数学を切り捨てるからと言って、数学の授業時間を丸々他の教科の勉強に割り当てるなんて訳にはいかないでしょ？　今だと寝てたりするのかな？」
「あ、や、まあ……その場合が多いですね。あとたまに内職したりもしてます」
「こらこら。……ふふ。あまり、集中出来ないでしょ？」
「……まあ、そうですね」
「うんうん。……仮にどんなに先生の授業が退屈で分かりづらかったとしても、『自分は今目の前で行われていて、皆が当たり前に受けている数学の授業から目を背けている』っていう負い目は出てきちゃうと思うんだ。それならいっそ、ほんの少しでも良いから向き合ってみたらどうかな。それで少しは楽になって、物理的に他の教科の勉強時間が減ったとしても、精神的には、数学に向き合うようになるまでよりテンポ良く勉強出来るようになると思うよ」
「……」
内心、驚いていた。
まさかめぐり先輩がここまで考えてくれるとは……。
しかし、それでも丸2年近くかなぐり捨てていた数学だ。平塚先生ならまだしも、数学の先生に今更飛びついた所で良い顔をされるとはとても思えない。俺の授業態度やばいし。
それでも、めぐり先輩の言葉には様々な経験に裏打ちされた、流石1年間先輩で且つ推薦を勝ち取っていると言える芯が通っている。
うんうん唸っていると、めぐり先輩の様子が急に変わった。真面目な顔から一転して顔を綻ばせ、そして微かに頬を紅潮させてこほんこほんと咳払い。
何事か――と思っていると、めぐり先輩が口を開いた。
「……良かったら、わたしが勉強教えようか？」
「はい？」
……はい？
……はい？

続く。

（１４）

――良かったら、わたしが勉強教えようか――

この言葉から漂う甘美な匂いたるや。

直接的に考えただけであれば、単純に「先輩女子が後輩男子たる自分に勉強を教えてくれる」という話であって、もちろんこれはこれで胸アツなイベントではあるのだけれど、それだけではないと考えると、途端に夢が膨らむ。貧しい少年が大富豪になるくらいのビッグドリームの予感がする。

先輩女子に勉強を教えてもらう。まずは場所から考えるのが良いだろう。ひと気のない放課後の図書館、ひと気の無い放課後の教室、親が居ない日の自室……あゝ、夢が膨らむ。

次に内容だ。数学、数学、数学。考えてみれば数学ってなんだ？　数字を扱う訳だ。それならば互いの身体の様々な要素を数値化する遊びをしてみてはどうだろう。それは身体の一部の何かしかを測っても良いし、あるいは感覚的な何かを自分たちで便宜的に数値化するのでも良い。お医者さんごっこの要領で互いに色々なものを卑猥に測り合うのだ。回数なんかを測るのも良いかもしれない。あゝ、夢が膨らむ。アメリカンドリーム、鉄道王、自動車王、バイク王、石油王、あゝ、夢が膨らむ――

「……比企谷くん？　どうしたの？」

「あ」

脳内が祭りと化してしまっていた。盛り上がりのレベルで言うと、ラピュタ放映日のＴｗｉｔｔｅｒ上のバルス祭りくらいの盛り上がり。

めぐり先輩から見れば、自分が提案した途端に後輩男子が急に固まって目の焦点が定まらなくなったのだから、不思議にしか映らないだろう。ていうかそれもはやただのホラーだな。

「こほんこほん、あー、すみません、ぼーっとしてました。……でもその、勉強なんて……良いんですか？　第一、１回教えてもらったくらいじゃ俺は手に負えませんよ？」

「なんでそこ胸を張って言うかな……。ん、えっとね、その……1回だけじゃなくて、出来れば定期的に……その、理想としては毎日ちょっとずつ教えたいんだけど……」
「え」
　めぐり先輩が頬を赤らめて、ちらちらと周りに視線をせわしなく動かして、上目遣いで告げてくる。抱きしめろと言うことか。ちげぇよ。どうしたんだ俺。
　めぐり先輩はあわあわと慌てるように、まるで言い訳でもするかのように早口で捲し立てる。
「あ、その、わたしね？　実際、推薦で決まってるのもあって、同級生の前では大きな声で言えないけど……結構暇なんだ。大学行った時に頭がふやけてたら困るから一応みんなと一緒に受験対策の授業は受けてるけど、あくまで一応だしね。……だから、その、何度もお世話になった比企谷くんに、多少なりともお礼が出来たらなー……なん、て……。……ダメ、かな？　無理にとは言わな――」
「お願いします」
「早いね!?」
「あ」
　しまった、癒しの天使のオーラにやられてしまってつい。頭がふやけためぐり先輩とか超見てみたい。や、そうじゃなくて。
「ほ、本当に良いの？　出来るのなら、その、わたしも嬉しいなって――」
「ぜひ」
「もう確定だね!?」
「あ」
　あかん、俺にこの天使の誘いを断る能力なんてない。もうこの人の苗字は『天使（あまつか）』で良いんでなかろうか。やべぇ、天使めぐりとかもはや1字違いじゃん。フキダシ作って遊ぼうかな――
「……比企谷くん？」
「あ、はい、またぼーっとしてました、すみません。今日の紅茶はニルギリですか？」

「……本当にどうしたの？」
「……すみません」
いかん、めぐり先輩が紅茶タンクと化している幻まで見えてしまった。
「こほんこほん、がふっ、すみません、むせました。……その、毎日となると決まった時間帯の方がやりやすいですよね？」
「ん、そうだね。昼休みはお昼を食べる時間や合流する時間を差し引くとだいぶ短くなっちゃうし、放課後は奉仕部の活動があるんだもんね。んー……あ」
頬に指を当てて、天井を見上げていためぐり先輩がぽんと手を叩く。
「……ちょっと、出来るかどうか先生に確認してみるね」
「え？　あ、はい、分かりました」
めぐり先輩の閃きの内容を聞かされぬままに、これから必要だしねと言われて連絡先を交換した。その日の晩に彼女から送られてきた1発目のメッセージがやたら可愛いスタンプで、危うく悶え死ぬところだった。

×　×　×

火曜日。
先生への確認とやらは平日になってからでないと出来ないので、少し時間が空いた。めぐり先輩は月曜に先生に確認を取ると、その日の夕方に俺に電話をしてきた。いつも登校していた時間から小一時間程早く来るように言われ、欠伸を噛み殺しながら学校へ向かって、着いた所だ。取り敢えず試しでこの時間帯にしたらしい。めぐり先輩の電話越しの声は癒し力が高すぎてなんかもう毎日電話したいまである。朝晩5分ずつで良いから。
「あ、比企谷くん、おはよう。ごめんね？　朝早くから」
「どもです。いえいえ、世話になるのは俺ですから」
昇降口前で白い息を吐きながら、鞄を両手で持っていためぐり先輩と挨拶を交わした。何故中に入っていなかったのかと聞くと、なんか身体が熱くて……と頬を赤らめながら言われた。熱は無いらしい。

なんでかしらん？
まだひと気の無い校舎を歩きながら、めぐり先輩をちらりと見やる。
「結局、場所はどうするんですか？」
聞くと、めぐり先輩がふふっと微笑んで、ポケットから鍵を取り出した。
「図書館……ですか。よく借りられましたね」
鍵に取り付けられたプレートに書かれた「図書館」の文字を見て、どうして図書委員でもないのにと不思議に思う。
「ふふ。先生にね、『もう受験は終わったけど、図書館で勉強をさせてもらいたい。人の居ない早朝の時間だと特に集中出来るから』ってだいぶ強引な事を言って、これから毎日借りられるようにしたんだ。ま、今まで行いが良かったんだろうね」
歩きながら、えっへんと胸を張るめぐり先輩が何とも可愛らしい。実際、今までの行いが良かったというのはもはや全校一致の事実だろう。誰も文句は言うまい、俺もそう思うし。
……って、ん？　んん？　んんん？
「あ、じゃあ、これからしばらくは、この時間帯に、その……2人きりで、図書館で勉強ってことでしょうか……？」
よく考えたら、よく考えなくても、これって相当心臓に悪いんじゃ……と思って質問すると、めぐり先輩がぴたりと立ち止まった。慌ててつんのめるように止まってめぐり先輩を見ると、明らかに目が泳いでいる。
「ま、まま、ま、まあ、そうなるかかか、かなぁ……？　さ、ささ、行こ行こ！」
テンパりにテンパってＤＪスクラッチみたいな声を出して、めぐり先輩が足早に歩き出す。
「……」
慌てて追いかけながら、考える。
……俺が言うまで、気付いてなかったのん？
×　×　×

鍵を開けて、早朝の図書館へ足を踏み入れる。
誰も居ない図書館はいつも以上に無音で、静謐な森の中を思わせる。
この場所で、２人きりか――
そう思った瞬間、顔がかっと熱くなった。
見ると、めぐり先輩も実感を同じくしていたのか、明らかに落ち着かない様子だ。
「せ、先輩、どこ座りましょうか」
「あ、そ、そうだね、じゃ、こっちに……」
そそくさと歩き出す先輩の後を追う。……俺たち、大丈夫なのかしらん？
行き着いた先は、入り口から一番遠くて、ドアを開けても直接は見えない奥まった場所だった。
「えーと……なんでこんな奥に……？」
正直、卑猥な妄想しか出来ない。卑猥って言っちゃった！
聞くと、めぐり先輩は今の質問の意図を感じ取ったのか、慌ててぶんぶんと首を振る。
「あ、ち、違うからね？　落ち着いた場所って考えると、普段からひと気の少ないこういう場所が自然と浮かんだだけで……ち、違うからね？　ほんとだよ？」
「……は、はい」
「沈黙が長いよ!?」
大慌てするめぐり先輩を見て、余計に死ぬ程恥ずかしくなった。
結局、場所を移動するのは意識しているのだと自白するようなものだと思ったのか、互いにその提案をすることはなく、一番奥まったこの場所にそのまま陣取った。
座った席は……隣同士。
「……ええっと――」
「教えやすいようにだからね？　向かいからだと書いたものも見せづらいし。それだけだからね？　ほんとだよ？」
「え、あ、はい」

冷静なようでいて、明らかに目が泳ぐめぐり先輩からの素早い弁明に、疑問が食い気味に叩き潰された。
「さ、それじゃ始めようか」
「はい」
「じゃあまずは、現状の把握から――」
兎にも角にも、俺とめぐり先輩の早朝勉強会はこうして幕を開けた。

続く。

（１５）

めぐり先輩に、俺の数学における現状というか惨状について説明中。

以下、俺が予め整理していた、各単元における理解度を説明している時のめぐり先輩の反応を抜粋。

「ふむふむ、まあ、ここはきちんと教科書を見ながら演習すれば大丈夫で……」

「あ、ここは全然分からないんだ。でも授業を聞いてなかったってだけならまあなんとかなるかな？」

「あれ、昨日確認したらここは初めて見たって？　本当に？　定期テストで結構問題が出る単元だよ？　センターでも必ずと言っていいくらい出るよ？」

「え？　最近習ってる範囲がどこまでなのかさえ分からない？　え、どういうこと？　比企谷くん、学校にはきちんと来てるんだよね？」

「……ううん、そっか、そっかぁ……」

……。

……～～～～……。

……っ！　……～～っ！　……～～～～っ!?

……。

「くぅぅぅ……」

しばらくして、めぐり先輩はすっかり意気消沈といった雰囲気で机に突っ伏していた。唸り声からして既に可愛い。ぶつぶつと「まさかここまでとは……いやでも別に明日いきなりテストをする訳でもないんだし、最低限理解のきっかけさえ掴んでもらえれば……それにしても分からない範囲が……いやでもやるしかないよね……」と葛藤している言葉が呪詛のごとく溢れ出している。空也上人像みたいなノリでミニめぐり先輩が出てきたりしねぇかなぁ。そしたら３体くらい持ち帰って、夜寝る前に枕元で３体が遊んでるのを眺めて心安らかに眠りたい。

教えてもらう立場だというのに呑気にミニめぐり先輩、略してミニ

ぐりん（響きが歪）について妄想をしまくっていると、めぐり先輩が唐突にガバッと顔を上げて、俺を真剣な目で見つめた。
え、あれ、もしかして妄想がバレた……？　などとテンパっていると。
「比企谷くん」
「はっ、ひゃいっ」
安定の裏返り。
「……頑張ろうね」
「……はい」
ふんすっと息を吐きながら、胸の前で小さく両手でガッツポーズをするめぐり先輩の力強い言葉で、思った以上にこの勉強会はガチなのだということに気付いた。これならきっと大丈夫！　……何が大丈夫なのん？

×　×　×

それからある程度経った頃。
「う～んとね？　ここについてはこのページの問題を何問か解けば慣れてくると思うから……」
うんうん唸りながら、めぐり先輩は辛抱強く俺に教えてくれていた。俺の惨状はめぐり先輩の想定を超えていたらしく、そのため初めは教え方も探り探りだったのだけれど（偉そうな言い方）、途中から慣れてきたのか、「最初の説明はきちんとする」「少しでも分かったと判断したら、手早く目の前で練習問題を解かせて、それにより俺が自立して勉強出来る状態に持っていく」という方針及び目標設定に変えたようで、きびきびと迷いなく教えてくれるようになっていた。
めぐり先輩と二人きりだからというどきどきも、集中し始めるとあまり……というか、ほとんど感じなくなっていた。よし、この調子で……と意気込んでいると、不意に右手の小指に何かが当たった。
『あ……』
二人同時に声を出す。
俺の右手小指と、めぐり先輩の左手小指が、こつんとぶつかった。ただそれだけの筈なのに、じんわりと顔が熱くなっていく。めぐり先

輩は平気なのだろうかと思って見てみると、もう茹でダコだった。超茹だってる。
「ごごごご、ごめんね……」
消え入りそうな声で謝りながら、そろそろと手を引いて、両膝に手を置いて俯いてしまう。
「あ、や、その、大丈夫です。俺こそすいません……」
もうめぐり先輩の手は離れているのに、俺も手を引いた。そしてめぐり先輩に釣られる様に、両膝に手を置いて俯く。
なんか、向かいに座る先生に怒られる二人みたいな構図。
なんだこれ。
「……」
「……」
「……」
「……」
「……せ、先輩、続き」
「ひゃうっ!?」
「うぇっ!?」
「あ、ご、ごめん……」
「い、いえ……」
……。
沈黙は金、雄弁は銀とは言うけれど。
この場合、喋らないと死んじゃうと思った。色んな意味で。
× × ×
その後しばらくしてから2人とも復活して、再び勉強に励んでいた。途中消しゴムを落として、それを2人同時に触れようとしたものだから再び手が触れてしまい、2分程機能停止していた。なんだろうもうこれ超恥ずかしい。
「ちょっと休憩しよっか。ちょっと外行くね」
「あ、分かりました」
ぱたぱたと出ていくめぐり先輩の後ろ姿を見守る。
「む……」

からりとドアが開いて閉まる音がすると、不意に眠気が襲ってきた。慣れない早起きをしたからだろうか、うつらうつらと舟をこぐ。
「ちょっと寝てもいいか。まぁ、そんなに深くは寝ないだろうし……」
言い訳のような独り言をふわふわと呟いて、机に突っ伏す。
緊張も伴っていた為か疲労は予想以上に溜まっていたようで、あっさりと意識を手放した。

× × ×

「う……ん……んん？」
目を開けると、まず真っ暗な事に驚いた。そして今は何時で、場所はどこで、どういう状況なのかと言う事を瞬時に思い出す。ほんの2～3分寝てるつもりだけのつもりだったのだけど、予想以上に寝てしまったらしい。
それにしても、妙に気持ち良いような……？
机に突っ伏したまま、何事かと思考を巡らせていると、どうやら頭が撫でられているらしいという状況に気が付いた。
……って、あれ？
今この状況で頭を撫でる人なんて、1人しか……？
「……っ」
事態を把握すると、急に心臓がばくばく鳴り出して、眠気が吹き飛ぶ。しかしいきなり起き上がっては驚かせてしまうだろうと思い、「うーん……」とわざとらしく寝起きっぽい声を出してもぞもぞと動く。
すると、
「あ、起きた？」
頭上から優しい声がふわりと降りてきて、寝起きの頭に穏やかに染み込む。手が離れる感触がしたので顔を上げると、めぐり先輩がとびきり優しい笑顔で微笑んでいた。どうしよう、三日三晩くらいなら不眠不休で働けちゃいそう。
「あ……」
身体が熱くなるのを感じていると、めぐり先輩がてへへと笑う。
「たまに見える寝顔が可愛くて、ついね。……あ、考えてみたら、わた

し、結構恥ずかしいことしちゃってた……？　迷惑だったかな？」
変な時間差でめぐり先輩が顔を赤くして慌てだす。なんだこの可愛い生き物。
慌てて首を振って、自分の気持ちを伝える。
「や、迷惑だなんてことないです。むしろもっと……あ」
「え……」
「……」
「……」
2人して俯く。
「……」
「……」
「……むしろ」
「……むしろ？」
ちらりと左を見やる。めぐり先輩がそろりと視線を上げて、一瞬だけ視線が交差する。
「……もっとしてもらっても、良いか、も……しれ、ません……」
「……そ、そっか……」
2人して、再び俯く。
「……」
「……」
2人して、両膝に手を置いて。
顔を赤らめて、視線を泳がせて。
他の生徒が登校し始めて、勉強会がお開きになるまでの時間、ずっと2人は黙っていた。
恥ずかしい上によく分からない時間なんだから、とっととお開きにするなりすれば良かったのだけれど、何故だか2人とも、その選択肢は取らなかった。
続く。

（16）

翌日。

昨日同様、朝も早くからきいこきいこと自転車を漕いで学校へ向かう。真冬の早朝という、本来なら寒くて絶対外になぞ出たくない状況であるにも関わらず、ペダルを動かす足は軽い。心なしか息も弾んでいる。

「……」

ペダルをこぎながら、自己分析をしてみる。

俺はあれか、浮かれているのか。

ここ数日のことを考えたら、恥ずかしさで死にそうになった。

なんで俺、めぐり先輩と一緒に本屋まで歩いて、のんびり本屋で過ごして、カフェでめぐり先輩にラノベのエロいイラストを見せてんだ？　そこだけ切り取ると俺がただ変態みたいだな。否定はしない。

……それに、昨日から始まった勉強が……今日これから、また……。しかも明日以降も……。

……。

いかん、更に寒さが和らいできた。日が昇ってきたから？　違う、身体が熱くなっている。

「……」

どうにも、1つの結論に至らざるを得ないらしい。

俺の普段の女性に対する距離の取り方はどこへやら。

俺は、この勉強会を、めぐり先輩と過ごす時間をどうやら心待ちにしているらしい。

ゆっくり移動しているにも関わらず、学校へ着く頃にはうっすら汗ばんでさえいた。

×　×　×

「あ、ひ、比企谷くん、おは、おはよう……」

「あ、ど、どもです……」

昨日同様、昇降口前で俺を待っていためぐり先輩と挨拶を交わす。のっけからもう恥ずかしい。やめて、そんな顔を背けながら目だけち

らちらと向けないで！　そんでおさげの先を指でくりくりっとするのやめて！　くっそ、なんだこれ、くっそ！　なんだよこのめぐり先輩、超可愛いなもう！
「じゃ、じゃあ入ろうか」
「あ、はい」
並んだ所で、２人ともテンパりにテンパって――
『あ』
２人同時にドアに手を伸ばし、互いの手の甲がつと触れる。
「ごごごごごめんね!?」
「い、いえ、全然大丈夫です。ほんともう全然全く以て大丈夫です」
もう、校舎に入る前から。
しっちゃかめっちゃかだった。
×　×　×
舞い上がりながらも、本来の目的は忘れまいと昨日同様の勉強を続ける。めぐり先輩も俺という厄介な数学ポンコツ生物の生態を掴めてきたのか、定義や問題の解き方のコツなどの教え方がスムーズになってきた。だからなんで俺は偉そうな言い方をしてんだ。
「それじゃちょっと休憩しよっか。ちょっと外出るね」
「あ、はい」
昨日と大体同じくらいの時間に、めぐり先輩が席を立つ。
ぱたぱたと柔和な足音がして、からりと図書室のドアが開いて閉まる。
「……」
ふと、昨日の出来事が蘇る。
あの時は、俺が寝てて、その間にめぐり先輩が俺の頭を……。
「……いやいやいやいや、何考えてんだよ俺。いくらなんでもそんなことする訳……」
リアクション集団の十八番のようなフリを心の中でやって（ぼっちだからこういうのには慣れている）、言葉とは裏腹に机に突っ伏す。どきどきして、きっと寝られはしないだろう。でも、それで良い。そうじゃないと、あの天国をきちんと認識して、味わえないから……。

×　×　×

「ただいま～。……って、あれ？　比企谷くん、また……？」

おうふ、「ただいま」なんて素敵な台詞を言ってくれてたんですか。なんですかもう一緒に住みたいレベル。

めぐり先輩は小声で「んんん……？」と訝しんで唸りながら近付いてくるのが気配で分かる。ちなみに俺の視界は真っ暗。机の傷を暗がりで鑑賞中。

やがて、ゆっくり顔が近付いてくるのを感じた。どうやら間近で観察しているらしい。しかし突っ伏しているため判断出来ないと思ったのか、顔を離して隣に腰を下ろす。

「お～い、比企谷く～ん、起きてる～？」

小声でぽしょぽしょと呼び掛けてくる。なんでこんな声がけ一つからして可愛いんだこの人は。

何度か同様に声掛けをするも、俺に返事が無いと諦めたのか、「ふむふむ……」と何か納得したような声を出して、その直後に頭上に仄かな熱を感じた。

髪の上から、柔らかな感触が心地良く乗せられる。めぐり先輩の顔が近いのか、シャンプーの香りがふわりと鼻腔をくすぐった。

ああ、また撫でてもらえた……なんて、本当に俺なのかと疑いたくなるようなことを考えていると、髪の上に乗せられた手がゆっくりと前後に動き始める。

「……寝てるのかな……ふふ、可愛いんだから……」

「……っ」

わー！　きゃー！　ぎゃー！

独り言として呟くとか、それマジのやつですやん！　わーーーー！

――なんて浮かれていると、めぐり先輩の手の動きが止まった。

「……比企谷くん、起きてるでしょ？」

「……っ」

思わぬ指摘に息を呑む。その声は怒気を孕んではおらず、むしろいたずらっぽい声音だ。いや待て待て待て、カマをかけてるかもしれないじゃないか、きっとそう――

「今、ぷるぷるしてたの見えたよ？」
うっぷす。
さっきの動揺がもろに行動に出てたよ。あかん。いやでもそれでも、ここでしらを切って寝てるフリをすればきっと――
「正直に言わないと～……？」
語尾に向かってテンションが上がっていくような言い方をしたかと思うと、めぐり先輩の声が途絶えた。代わりにさっきよりも更に気配が近付いたことに気付く。
……何事？　と思っていると。
「……ふーーっ」
「～～～～～～～おひゃふぃ○×△◇▽×○
!?!!!?!?!」
「わわわっ!?」
「うおぇあっ!?」
「わーっ！」
「なーっ！」
突然の「耳ふー」に死ぬ程驚いて、朝の静寂を派手に打ち破る奇声を上げる。その声に驚いためぐり先輩を見て更に驚き、そんな俺を見てめぐり先輩がまた驚き、そのめぐり先輩を見て俺がまた驚いてクラクションみたいな声を上げる。地獄みたいな連鎖だ。
……周りに誰も居なくて、本当に良かった。
「ななな何やってんですか先輩!?」
「ややややっぱり起きてたんじゃん！」
「今起きたんですよ！　『可愛い』なんて、そんなこと言う方が可愛いだろと思うような言葉聞いてないですし」
「思いっきり起きてるじゃん！　ってきゃー!?　なんか今すごく恥ずかしいこと言われた!?」
「あっ、えっ、やっ……なーーー！」
クラクション再び。
1分程お互いに声を上げまくった。図書館で。ここでこれだけ好き放題大声を出すなんて、その自由さは正に純・ゲバル。マジヤイサホー。

『はぁ……はぁ……はぁ……』
色気も何もあったもんじゃない、本気の息切れ。お互いに机に突っ伏して、腕をぴろ～んと伸ばしている。なんだ俺ら。
「はぁ……はぁ……ひ、比企谷くん、なんで、寝たフリなんかしたの……？」
顔だけぐりんとこちらに向けて、めぐり先輩が問うてくる。俺も同じように顔だけめぐり先輩を向いた。
「はぁ……はぁ……や、その……昨日のが、ですね……思いの外心地良くて、その、ええっと、また、してくれないかな～、なんて……」
言って、恥ずかしくしなり再び突っ伏す。
「……？」
反応が無いので、恐る恐る顔をめぐり先輩に向けると、既に普通の姿勢で座っていた。しかし手は指を絡ませてもじもじとしており、顔も赤い。
「……そ、そっか、だから、ね……なるほど、うん、それならしょうがない……」
「え、あ、はい、まぁ、そんな感じ……です……」
納得して許してもらえたのなら何より。
……何より、なんだけど……。
「……そ、そっか、うん、うん、なるほど……」
俺をちらちら見ながら、何度も自分に言い聞かせるかのように同じセリフを繰り返すめぐり先輩を見て、妙にどきどきした。めぐり先輩のこの不自然な仕草を見るまでは、この寝たフリのくだりはこれで終わり……と思っていたのだけど。
……どうにも、期待のような不安のような、不思議な予感がしてならない。
結局この日は、このくだりの後は何事も無かったかのように勉強会は続いた。前日の反省をちゃんと生かせてますね！
続く。

（１７）

再び翌朝。

「……」

起床して、まず思うこと。

……なんか、早起きするの慣れてきた……。

リビングでトーストにジャムを塗りながら、早起きの割に……どころか、いつもよりも明らかに爽やかな気分になっていることに気付く。全然ぬぼーっとしてない。どうしよう。

「ありゃ？　お兄ちゃん、こんな朝早くからどしたの？」

うぬぬと唸っていたら天使が降臨した（訳：小町がリビングに来た）。寝ぼけ眼をこしょこしょとこすっていてただの天使だと思いました。

俺のキャラを１５年間見てきた小町に、試しに現状を伝えてみることにする。

「小町。お兄ちゃんな、早起き爽やかキャラになっちまった。アイデンティティクライシスだ」

哀愁たっぷり（＆ウザさたっぷり）に言ってトーストをはもはもしていると、小町が目を半開きにして口をへの字に曲げた。あれ、どっかで見たことあるような……？

「ちょっとやそっとで変わるものが個性なわけあるかよ」

「うぐ……」

伝説の名台詞（訳：黒歴史のトラウマ発言）直後に小町との会話で言われたことをもう一度言われた。しかも俺の真似をきちんと添えて。

俺がトーストをもぐもぐしながら羞恥心に悶えていると、小町は腰に両手を当てて満足気にふんすっと息を吐いた。可愛いけどムカつく……。

「ごみいちゃんの個性に対するどうでも良い執着は置いておいて……お兄ちゃん、なんでまたそんな早起きしてんの？」

「あ、や、まあ、その、なんだ、うん、ちょっとな……」

目を逸らしてコーヒーを飲む。しまった、まだ砂糖を入れてなかった……！　なんか胃に変な負担が来る。
俺の抜群のキョドりっぷり、略してキョロ（慣れたらオレマンでも良い）を見て、最初は訝し気だった小町の眼差しが不意にきらりと輝いた。
ずいずいずいっと俺に近付いて、テーブルの向かい側からきらきら笑顔で身を乗り出す。なんだよこいつ超可愛いな。キスするぞ。しねぇよ。
「お、お、お？　おやおやおや？　お兄ちゃん、まさか、ほーん、こんな健康的な時間帯を利用して？　ほーん？　ほーん？」
「なんでもねぇよ……」
なんだこいつ、ほーんが鳴き声みたいになってんだけど。
俺が下手にも程があるはぐらかし方をして目を再び逸らすと、今度は俺の後ろに回り込んで、よいしょ感丸出しで肩を揉み始めた。砂糖を混ぜづらい……。
「やー、そうかそうかー、お兄ちゃんもついに、うん、そうかそうかー……小町は嬉しいようで寂しいような……よよよ」
「肩揉みながら泣き真似って器用すぎんだろ。別に、何でもねぇよ」
「この間のスイパラで一緒に居た人？」
「……」
あれ、詰問タイムスタートしてる？
小町は肩を揉む速度を緩めて、むふふと邪悪な笑みを浮かべながら俺のすぐ横に顔をにょきっと出してきた。なんで吐息が甘いんだこいつ。変な気持ちになるからやめてほしい……。
「お兄ちゃん。無言って大抵肯定にとられるよね」
「黙秘権って知ってるか？」
「じゃあさっきのは当たりってことでいいね」
「人権って知ってるか？」
決めつけちゃった。
「お兄ちゃんがよくバッグから落としちゃうもの？」
「俺のバッグにそんな一生もんの大事なものを入れて持ち歩いたりす

るかよ」
あ、でも、雪ノ下との会話の時ならいつも余裕で落としてるな、うん。
「いろはさん？」
この尋問の仕方、ダメだと思うんだ。
「ねえ小町ちゃん」
「めぐりさん？」
「ねえ小町ちゃん」
全く同じ声音で台詞を言えた俺に拍手を送りたい。心臓のＢＰＭが１５くらい上がった気がする。
俺の薄い反応を全く意に介さず、小町が腕を組んでむむむと唸る。パイプを加える動きをジェスチャーでやってるんだけど下手すぎて可愛い。
「なんとなく、雪乃さんや結衣さんじゃない気がするんだよなぁ……。もう一緒に時間を過ごすようになってかなり経つのに、今になってこんな時間をかけた籠絡をしようなんてこと考えるかなぁ……」
あれ、これマジなやつなのん？
「ねえ小町ちゃん、推理を続けないでくれるかな」
肩叩きを再開して、とんてんとんてんと俺の肩を叩きながら、小町の推理が続く。今は崖の上にいるイメージ。小町が船越さんな。
「お兄ちゃん、この中には居るんだよね？」
「や、そんなこと一言も――」
「めぐりさんだね」
助けて。
小町が肩たたきの手を止めて、首にそっと両手を添えた。え、何この絶対逃がすまいとする強い意志は……？
バレるとなんか色々恥ずかしい。なんとか誤魔化さねば。
「ふむ、君の推理を聞かひえてもらおうかな」
裏返った。
死にたい。
小町ちゃん、俺の首に添えた手が笑ってぷるぷる震えてんだけど。

やめて、笑わないで。
「ぷっ……くくくっ……ふぅ。では、小町の推理を聞かせてあげましょう！」
「頬をわしゃわしゃってするな。頬をわしゃわしゃってするな」
なんで自慢げなセリフと鬱陶しいテンションと共にムツゴロウさんみたいなノリで、俺の頬をわしゃわしゃしてんだこいつ。
いつもよりもテンションが高くなった小町が、再びふんすっと息を吐く。
「お兄ちゃん、早起きしだしたのはつい最近……どころか、今週に入ってからだよね。で、先週末はスイパラに行った訳だけど、その後小町はお兄ちゃんと別れて雪乃さん、結衣さん、いろはさんと遊びに行ったわけです。それでその後のお兄ちゃんの動向は確認出来ていません。しかし、そこから後、お兄ちゃんは真っ直ぐ帰ったからかもしれないし、あるいは他の行動をしていたかもしれない。ここであの日の夜を思い出すと、お兄ちゃんは心持ちぽーっとしていた覚えがあります」
勉強会という響きに浮き足立ってたり、初ＬＩＮＥの時に悶えてたのが鮮やかにバレてる。やべぇ。
「以上のことから……お兄ちゃんは小町たちと別れた後、何らかの流れでめぐりさんと一緒にどこかに行き、その時に何らかの約束をして今こういった状況になってるんじゃないかな、と思ったのです」
「……」
女の子、こわい。
何この推測。何一つ具体性は帯びてないのに、真に迫った感じが――
「例えば2人でお兄ちゃんが行きつけの本屋さんに行って、併設されたカフェでお話してたらお兄ちゃんの勉強を見てあげようかーって流れになって、放課後だと奉仕部があるしお昼休みじゃまとまった時間は取れないから、それなら朝にしようと思った……とかね！」
「お前は俺の心を読んだのか!?」
こわっ！　急に俺の心がハッキングされた！　こわっ！

「ふ、ふむ、まあ、それなりにそれっぽい推理をするじゃあないか、小町くん。しかし物的証拠が無い限りは……」
冷や汗をだらだら流しながらなんとか言葉を紡ぐと、目の前ににゅっと手が伸びてきた。何、なんか欲しいの？
「ＬＩＮＥのトーク履歴。見せて☆」
追及が止まらねぇ。
「いや、『☆』じゃねぇよ。なんで見せなきゃいけねぇんだ。お前は俺の彼女か」
「彼女にだって普通見せないよ。まあその立場には恐らくめぐりさんがスポッと収まってくれるわけだけど」
「や、お前、何言ってんだ、よ、こら」
「お兄ちゃん慌ててる～、図星だ～！」
「なんで急に中学生みたいなノリになってんだお前」
「中学生だもん小町」
「そういやそうだった」
問答で食事が長引いたなと思い、トーストを食べるペースを上げると、頭にぽすりと柔らかなものが置かれた。身に覚えのある感覚に神経を集中して、数秒後にそれが手だと気付いて振り返ると、小町がにこやかに微笑んでいる。
「……お兄ちゃんのこと、あったか～く見ててくれる人だと良いね」
「……さあ、どうだろうな」
返しに困る言葉に、中途半端な返答しか出来なかった。むう、顔が熱い。
目をぷいっと背けたままの俺の目の前に回り込んで、小町がにぱっと笑う。
「今の、小町的にポイント高いよね！」
「うるせぇよ……」
なんで時間差で言ったのん？
俺のげんなりしたジト目など気にもせず、小町がにぱぱーっと笑う。眩し過ぎて溶けそう。
「よーし、お兄ちゃん、頑張ってね！」

「……勉強を、だよな？　……あいよ」
頭をがしがしと掻いて、ごちそうさまの挨拶をして、皿をシンクに置く。小町が洗ってくれるとのことで、もうただの小町大明神様だなと思い崇め奉ってよいしょしすぎたら白い目で見られた。つら。
着替えも済んでいたので、ささっとコートを着て玄関で靴紐を結ぶ。立ち上がってドアノブに手を掛けると、小町が手を振って満面の笑みを向けてきた。
「それじゃあ、お義姉ちゃんによろしにゃっ!?」
「うっせ、行ってきます」
「うぅ……行ってらっしゃい……」
恥ずかしいことを何度も言うアホ可愛い妹のおでこにチョップをして、まだ凍える寒さ漂う外へ足を踏み出す。小町はおでこを両手で押さえてうにゅにゅと唸りながらも、指を数本上げて器用にひらひらと振って見送ってくれた。
小町に恥ずかしいことを言われたから尚更なのか、身体が熱い。きっと、学校へ近付くにつれてコートが要らないと感じるくらい熱くなるんだろう。
この心地良い昂揚感は一体何なのかと自問しながら、自転車を漕ぎだした。

続く。

（１８）

学校へ向かう道中。ふと昨日の、俺が寝たフリをした理由を自白した時のめぐり先輩の反応を思い出す。

――なんだろう、ただ許してくれた、というだけの反応にも思えなかった、不思議な感じ。違和感の正体が拭えず、胸の奥がむず痒い。

「うおっと」

ぼへっとしながら運転していたら、目の前を猫が通り過ぎた。慌てて止まると、野良のはずなのにどこか育ちの良さそうな、綺麗な顔立ちの猫がこちらをじっと見据えて、やがてふいっと顔を背けて優雅に立ち去って行った。なんか雪ノ下みたいなお澄ましさん。

雪ノ下似の猫、略して雪猫（捻り０）を見て、ふと土曜日のスイパラのことを思い出す。あそこから話がトントン拍子に進んだ感がある。何に対して進んでるんだって話だけど。

うーん。

……俺とめぐり先輩、なーんでこんな仲良くなってるのん？　ほんの数日前までは「君って……最低だね」って言われるだけの関係だったのに。言い方がまずすぎる。しかしあの人のことを冷静に考えると癒されるわ可愛いわ和むわでもう良い要素しかないから困る。多分お味噌汁を作るのが上手い。ただのイメージだけど。小町・戸塚ラインに並べるか真剣に悩むレベル。……って。

「……俺は何を……」

調子に乗ったことを――なんて考えながら漕いでいると、気付けば校門に辿り着いていた。予想通り身体はすっかり熱くなっていて、今日は何が起きるのやらと思いながら駐輪場に向かった。

×　×　×

３日目ならもう現地集合で良いかな、というめぐり先輩の提案により、図書館に直接向かう。一人で静かな朝の校舎を歩くというのは、どうも不思議な感じ。いかん、窓から差し込む朝日のせいで目の濁りが取れていく……！

どうでも良いことを考えながら歩いていると図書館に着いた。ド

アに手を掛けると既に開いていて、めぐり先輩が来ているのだと知る。
「先輩、おはようございまー……？」
もはや２人の定位置と言っても過言ではない、図書館奥のスペースに迷うことなく歩を進めると、予想もしていない光景が目に入った。
「……」
えーと。
めぐり先輩が、寝てる。
……なんで？
や、朝早いから眠くなるのは自然な現象ではあるんだけど。
俺が来る前からそんな限界を迎えてたの？　なんかすんごい違和感あるんだけど？
そろりと近付いて、もう一度声がけをする。
「先輩、おはようございます」
「っ」
ん、今ぴくっと動いたような――
「すぴー」
「!?」
え、なに!?
今、すぴーって言った!?
実際寝てる人が言わないセリフトップ２に入るセリフを!?
「ＺＺＺ」
「!?」
トップ２のもう片方まで!?
え、なに、どうなってんの――と朝から混乱の極みに達していると、ふと昨日までのことを思い出した。
突っ伏して寝ていたら俺が撫でられて。
寝たフリをした時、もう一度撫でられて、自白しても許してもらえて。
自白して許してもらえたと思ったら、なんだかそれだけじゃない奇妙な反応が混ざってて。

「……」
これは……まさか。
すーはーと深く息を吸って吐いて、もう一度だけ声がけを行う。
「先輩、起きてますかー……？」
「……すぴー」
「……」
うん。
確定、としよう。
何事も無いかのように、口笛を吹くくらいの気軽さでめぐり先輩の隣に腰を下ろして鞄を下ろすと、めぐり先輩がぴくりと動いた。これもう絶対起きてるだろ……。
迷いに迷って、恐る恐るめぐり先輩の頭に手を伸ばす。髪に触れるか触れないかの位置で手を止めると、緊張でぷるぷると震えた。いいのか、本当にいいのか――？　そんな疑問を心の中で何十回と繰り返し発するが、今からやろうとしている行為以外には解は無いとしか思えない。
めぐり先輩に聞こえないように、小さく喉を鳴らす。
勇気を出して先輩の髪の毛に震える手を着地させると、
「んっ……」
めぐり先輩が小さな声を上げた。
「……っ」
シャンプーの良い香りに混じって聞こえたその声音は、微かな音量でもはっきり分かるくらい、穏やかでどこか甘味を帯びた声で。
反射で離しそうになる手の動きを、好奇心が止めた。
恐る恐る、髪の毛に乗せた手をそのまま動かして、ゆっくりと左右に動かす。すべすべとした滑らかな髪はとても撫で心地が良く、いつまでも撫でていたくなる。めぐり先輩は甘い吐息を漏らしてもぞもぞと動くが、起きるフリをすることもない。フリって言っちゃった。
「う……わ……」
めぐり先輩の匂いと、触り心地と、反応に、正常な思考がとろとろと心地良く蕩けてゆく。

気が付くともう片方の手も伸ばしていて、両手でめぐり先輩の髪を愛で始めた。
「んん……っ、んっ、んん……っ」
めぐり先輩の声が、少し抑えているという程度ではなく、徐々に押し殺したものに変わってゆく。なんでこんなに反応するんだ……？
疑問は尽きないが、今はただただ撫でていたい。続けることにする。
ただ撫でるだけの動きから、徐々に手櫛で梳いたり、マッサージをするように揉む動きを加えていく。
「ふぁっ……んっ、ふっ、くふぅっ、んんん……っ」
めぐり先輩は腕を重ねてそれを枕に寝ていたが、その腕は徐々に解かれて開いていき、今はそのおでこに両手の中指と人差し指が触れるだけになっていて、丁寧にお辞儀をするような姿勢になっていた。微かに横顔が見えるが、影になっていてよく見えない。
「先輩……」
うっすらと呟いて、めぐり先輩の髪の毛を触る手にほんの少し力を入れると、
「あっ、それ以上は……っ！」
「えっ」
「……ん、あれ、わたし、寝ちゃってた……？」
「……」
ちょっと待て。
すんごい気になる反応と、すんごい白々しい演技を畳み掛けられたんですけど。
めぐり先輩が下手にも程がある演技をしながら顔を起こしてきたので、それに伴って手を離す。
「あはは、ごめんね比企谷くん。気付いたら寝ちゃってたよ……って、あ、れ、比企谷……くん……？」
「あ……すいません、触り心地が良くて、つい……」
めぐり先輩が頭をぽりぽりとして笑う姿を見て何か込み上げるものを感じて、反射のごとく両手を伸ばして、先輩の頭をしゅるしゅる

と撫でてしまった。この場面だけ切り取ればただの俺の乱心なんだが、直前までの過程を考えると我慢出来なくてもしょうがないよねーなどと言い訳してしまう。
こんな俺の行動にも怒りもせず、めぐり先輩は少し笑って、
「あはは……なあに、比企谷くんは撫でられるのも撫でるのも……好き、なの？」
俺に頭を撫でられながら、穏やかに目を細めて首を傾げる。大人びたその仕草に、心臓がとくんと鳴った。
「……ええ、そうですね。すげぇ好きです。……撫でられるのも、撫でるのも」
今まで見たことの無い、ぽーっとした表情のめぐり先輩とうっすらとした中身の無い会話を交わす。
「あっ……んっ、んん……」
「……っ」
うっとりとした表情で、時折明らかに、ただ髪を触られて心地良いだけとは言えない反応が返ってくるこの状況に、心拍数がどんどん跳ね上がる。真正面から見るめぐり先輩の顔は、穏やかさに混じってどこか色を帯びた目をしていて、頬が桜色に紅潮していてとても色っぽい。めぐり先輩って、まさか……？
「比企谷……くん」
熱を帯びた声音で、めぐり先輩が俺の名を呼ぶ。
「は、はいっ」
え、まさか、これは、おおお……っ!?
何だかよく分からないが、これから起こりそうな何かに対してものすごく期待を抱いていると、めぐり先輩の髪の毛の上に置いた両手に、更に手がぽすりと重ねられた。温かな手の感触がなんとも心地良い。
「比企谷くん……」
「は、はい、何でしょう」
妙に舞い上がってしまい、やたらとはきはきと答えてしまう。
「……勉強、しよっか」

「……
そうですね」
穏やかながらもはっきりとした口調で。
ばっちり、本来やるべきことを突き付けられた。
この後、普通に、真面目に勉強しました。そうだよね、そういう会だもんね。
めぐり先輩の顔をちらちらと見て、自分の手のひらを見て、めぐり先輩の反応を思い出してもやもやした気持ちになっていると、その度にめぐり先輩に叱られた。叱り方が可愛すぎて永遠に叱られてたいまである。永遠に叱るってそれ地獄よりやばくないか。ちなみに叱られた回数は約１５回。数分に１回ペースだった。バカすぎるだろ、俺。
続く。

（１９）

翌日。もう金曜日で、平日も終わりに差し掛かっていた。

起床時点で元気もりもりな自分を見て「ウケる」とか思ってしまった。お前はどこの折本だ。

前日までと同様、この生活リズムに慣れてきた……というのもあるけれど、まためぐり先輩に会える……というのもあるけれど。

何よりも……めぐり先輩に対して今まで抱いたことの無い、むしろ本来であれば一生抱かなかったであろう種類の感情が身体の中に燻っていて、それをめぐり先輩にまた会うことで確かめたい……そんな、焦りにも似た欲求が心を心地良く満たしていて、それが眠気を吹き飛ばしているのかもしれない。早起きのコツは朝起きた時に楽しみ（まだ読んでいない本やマンガなど）を残しておくことなんて記述を読んだことがあるけれど、今の状態が正にそれだと思った。

西郷隆盛よろしく、掛布団を足でばふぉっと蹴飛ばして起きる。

「……」

さむっ。

眠気は更に吹き飛んだが、その代り興奮が少し鳴りを潜めた。柄にもないことはするもんじゃない。

×　×　×

早朝の学校へ辿り付き、足早に図書館に向かう。

「先輩、おはようござ……」

奥のスペースに足を踏み入れて、固まった。

「……すぅ……すぅ……」

「……」

……ええっと。

また、寝てらっしゃる？

そろりそろりと近付いて、様子を窺う。

昨日は机に突っ伏して寝ていた（寝ていたということにしておこう）けれど、今日は、椅子の背にもたれかかって、足は女の子らしく内股で膝を合わせて、手はきちんと膝の裏で重ねている。何かすごい

出来た絵面で、何かもういかにも過ぎて、超怪しい。
取り敢えず、昨日同様隣に腰を下ろすと……やっぱり、ぴくっと震えた。いやもうこれ絶対ダウトだろ。……ダウト、だよね？
「……せんぱ～い？」
字面だけ見ると一色みたいだけど、れっきとした俺の声でめぐり先輩にそろりと呼び掛ける。
「……すぅ……すぅ……」
応答なし。昨日よりは自然な寝息ですね。慣れってあるのかな。慣れって言っちゃった。
しかし、まあ、なんだ。
この状況で俺が取るべき行動は、ただ一つではなかろうか。
そう、撫でる。
ただそれだけだ。
数日前までの俺だったら、「しゃーねぇ、勉強するか」又は「本でも読むか」なんていう風に考えたかもしれない。いや、考えただろう。
しかしもう、昨日の今日だから。思考回路もだいぶ組み替わっている。
今のめぐり先輩が昨日同様寝たフリなのであれば問題無いどころか撫でるという行為は推奨される訳だし、寝たフリじゃなかったとしても撫でるだけなんだから、起きた時にきちんと謝れば済む話だ。なんか思考が安易にゴールに行き着いているような気はするがまあ良いだろう。
右手をそっと伸ばして、めぐり先輩の髪の毛にふわりと着地させる。
「ん……」
めぐり先輩の寝息がぴたりと止んで、微かに声が漏れた。はいもう寝たフリ確定。
や、しかし。
もはや「さあ撫でて良いですよ」と言われてるも同然の状況ではあるのだけど、それでもめぐり先輩が起きている状態で「撫でて」と言われるのと比べると、かなり状況が異なっている。なんというか、妙

にぞくぞくしたものを感じる。このまま続けたら、何かいけないことを考えてしまうのではないか……と思いながらも、ふわりと漂う甘い匂いと手に伝わる柔らかな感触の誘惑にはとても勝てそうにない。

そのまましばらく撫でていると、徐々にめぐり先輩の反応に変化が生まれてきた。

「ん……ふっ……んふぅっ……」

「……っ」

なんだか段々色っぽくなってきた声に、興奮が加速度的に高まっていく。

めぐり先輩の顔を見ると、その頬はほんのりと紅潮していて、綺麗に伸びた睫毛もふるふると震えている。手はいつの間にか解かれて椅子を押さえていて、足は悩ましく気にくねらせて内股をこすり合わせている。スカートの為いけないものが見えてしまいそうなスリルにどきどきする。

うわ、うわ、うわ。

ちょっと待って、待って、待って。

俺、こんなめぐり先輩、知らないぞ。

思考が追い付くまで一旦手を止めたいところだが、生憎それは本能が許さない。

やがて、横から片手で撫でるだけでも満足出来なくなって……すっくと立ち上がった。めぐり先輩は机から若干距離を空けて座っていたので、机とめぐり先輩との間に立つ。正面からめぐり先輩を見ると、俺の移動に気配で気付いたのか、体勢はそのままに口をきゅっと引き結んで、事の成り行きを見守っているように見える。

心臓は爆発しそうな程に鼓動を速めていて、息が荒くなるのを抑えるので精一杯だ。

両手を使うためにこの体勢にした。ごくりと喉を鳴らして覚悟を決めて、そろりと両手をめぐり先輩の下へ伸ばす。

手の平が触れる直前、めぐり先輩がぴくっと震えたのが見えた。

× × ×

めぐり先輩の髪――耳の辺りに触れると、反応がより一層大きく

なった。めぐり先輩の色付く息遣いに言いようのない昂揚を覚えながら、ゆっくり指を蠢かせていく。
「あ……んっ、ふぁっ、んっく……あぅっ……」
悩まし気に眉を寄せてまぶたをひくつかせ、椅子を押さえる腕に力が入っているのか、腕全体が棒のようにぴんと張り詰めている。
なんだこれ、なんだこれ、なんだこれ。
俺は何をやっているんだという自己嫌悪もある。だが、それ以上に、あのめぐり先輩が、清純な癒しの天使であるめぐり先輩が、こんな姿を俺に見せてくれている……そんな嬉しさと興奮とが、自己嫌悪を軽く上回っていた。
もっと見ていたい……と思い、もはやめぐり先輩が寝たフリをしていようが、本当に寝ていようが関係無いとでも言うようなふてぶてしい行動に出る。手はめぐり先輩の髪を愛でたまま、顔をずいと近付けてめぐり先輩の反応を目の前で見つめた。
互いの息がかかりそうな距離でしょりしょりとめぐり先輩の髪を愛でながら、ついでに耳にもそれとなく触れていると、僅かな反応も見逃すことなく観察することが出来て、ますます興奮する。
ああ、どうしよう。ここから何が出来るだろうか――と、昂揚がピークに達したところで。
「……え？」
俺の両手に、めぐり先輩の手が重ねられていた。
「ひき……がや、くん……」
うっすらと目を開けためぐり先輩を見て、身体が凍り付く。あ、これ、やりすぎたかな？　やりすぎたよね？　うわ、終わった――なんて思っていると、めぐり先輩の目がうっとりとしていて、昂揚と期待に満ちていることに気付く。
「比企谷くん……」
もう一度、熱を帯びた声で俺を呼ぶと、その手を俺の頬に伸ばしてきた。
互いが互いに、相手の身体に触れている状態。
その体勢で、しばし時間が止まる。その時間は、この先起こるであ

ろう展開への期待で俺の心の空のプールを満たした。
互いの吐息がかかる。女の人の吐息はなんでこんなに甘いんだろうかと不思議に思った。
「せん……ぱい……」
「比企谷くん……」
後は、星と星とが引力で引き寄せ合うように。
吸い込まれるように、めぐり先輩と唇を重ねた。
× × ×
「……」
「……」
互いに、無言。
唇を離した後、互いにハッと目が覚めたように冷静になった。２人して真っ赤になり、俺は急いで隣に腰を下ろして俯いた。めぐり先輩を見ると、俺と同じように俯いている。
……やってしまった。
や、あそこまで来たらキス一択なのは分かってますよ？　分かってるんですけど、いざ冷静になると、もう、もう、もう！
いやしかし、めぐり先輩の唇超柔らかかった。この世にあんな柔らかいものがあるだなんて……って、そうじゃなくて。
「……あーっと、その……」
ここは俺から話し始めた方が良いかと思い、頬を掻きながら切り出す。
「さっきのはですね、その――」
「あのねっ」
切り出したものの、何を言えば良いかと言葉に詰まっていると、めぐり先輩が切り出してきた。
「わ、わたし、自分の髪がこんなに弱いだなんて、昨日まで知らなくって。自分で触っても何とも思わなかったし。だから、あれは何だったんだろうってすごく気になったの。それで、このことは比企谷くんとのやりとりで気付いた訳だし、もしかしたら比企谷くんとやりとりを続けたら、もっと自分のことが分かるかも……なんて思った……ん

……だよ、ね……」
めぐり先輩が珍しく早口で捲し立てるが、後半はしおしおと勢いが萎んでいく。
比企谷くんとはここ最近すごく仲良くなれたから良いかなと思って、と付け加えて、めぐり先輩が続ける。
「そ、その……いざ撫で始めてもらったら、比企谷くんの手が意外とごつごつしてて男の子してるなって思っちゃって」
ん？
「しかもその割に手つきがすごく優しくて、それで段々気分がふわふわしてきて……」
んん？
「比企谷くんが正面に来たとき、もう心臓が爆発しそうになってて。しかも両手で撫でられちゃって、そ、それで、なんかよく分かんないけど、無性に……その……あぅっ」
両手で顔を覆って、俯いてしまった。時折いやいやと首を振っている。
……ええと、その、なんだ、あーっと、その……。
もはや地の文でさえ思考が追い付かない。地の文って言っちゃった。
まあ、その、なんだ。
これはお互い勢いでやってしまったことであり、そのため、ここで示し合わせて無かったことにしさえすれば、今後もこの関係を維持出来るのだろうか――などと考えていると、めぐり先輩が手を外して顔を上げ、頬を朱に染めたまま俺の袖をきゅっと頼りなげに摘まんだ。
「比企谷くんは……いやだった？」
「全っ然」
あ。
しまった。
俺が脊髄反射の勢いでした返答を聞いて、一瞬めぐり先輩は驚いたように目を見開き、間もなく満開の笑みを咲かせた。向日葵を思わせるその笑顔は、まだ暖房の効きが弱い図書館にいることさえ忘れる程

に、心と体をぽかぽかにしてくれる。
「そ、そっか……あ、あの、ね？　せっかくだし、その……さっきはあっと言う間だったから……」
めぐり先輩がもじもじとしながら、椅子をすすすと寄せてくる。
「あ、や、まあ……はい」
どれだけ情けない返事をしてんだ俺はと我ながらびっくりしながら、ゆっくりと近付いてくるめぐり先輩の唇を迎えた。

続く。

（２０）

どうしよう。

「……」

無言でシャーペンをノートに走らせながら、ちらりと隣を見やる。

めぐり先輩の様子が、昨日までとどこか違う。

ぱっと見は何も変わらない。いつも通りのただの天使だ。ただの天使ってなんだよ。ただの紅茶タンク、いやただの駄女神……ああ違う違う、混乱しすぎだ。めぐり先輩の髪の毛はピンクじゃないのに。

どこか違うのは、めぐり先輩のもっと奥深くの何かだ。

昨日までの、俺が数学の問題を解いているのを見守る表情は、真剣でいて且つ包容力のある母のような暖かみのある表情……だったのだけど。今はその表情に、何だか熱っぽい視線が加わっている。最初はもちろん自意識過剰だと思った。もちろんって言うのも悲しいけど。

しかし、確認しようと思ってめぐり先輩を見てみた時、頬をかぁっと赤らめて顔を背けてしまったのを見て、一気に考えが変わった。

や、まあ、ついさっき2回キスしといて何言ってんだって話だけども。

俺としてはさっきのはギリ夢オチも有り得ると思っていたので、今尚続くこの熱に浮かされた感じが非常にむずむずする。まさか現実だったとは。

「比企谷くん、どうしたの？　手が止まってるよ？」

「あ、すいません」

全力で煩悩を巡らせていたら、手がばっちり止まっていた。なんで最後に計算した数をaを代入するだけの所で止まってんだって話。

「あ」

変な位置でシャーペンを止めていたせいで、手を動かした瞬間ノートに不要な線を書き加えてしまった。何やってんだかと思いながら消しゴムに手を伸ばすと、小指が何かに当たる。

『あ……』

めぐり先輩の小指と再びぶつかった。前回はめぐり先輩が茹でダコになって手を引っ込めたけど――。
「……」
「え……」
めぐり先輩がぽわんと熱に浮かされた表情で、自分の小指を俺の小指に絡めてきた。右手の小指に触れてくるめぐり先輩の左手小指の動きが妙に艶めかしい。
「せ、先輩……？」
声を掛ければ正気に戻るだろう――と思ったのだけど。
「ん、なぁに？」
見た事の無い色っぽい顔でふわりと微笑み、可愛らしく首を傾げる。
心臓が止まる、マジで。
一体どうしちまったんだ……と思っていると、めぐり先輩がごく自然に顔を寄せてきた。待って待って、なんでうっとりとした表情で目を閉じてんの!?
「ん……」
なんで俺の顔の目の前で止まったの!? 俺からじゃないとダメなやつなの!?
頭の中がワニワニパニック状態に陥っているが、いくらあわあわと慌てふためいた所で、めぐり先輩は一向に目を開けてくれない。完全に待ちの状態だ。
「うぐ……」
こんなどきどきの場面で漏らす声じゃねえよなと思いながら。
僅かに首の角度を変えて、めぐり先輩の唇に自分の唇を重ねた。
「んぅ……っ」
めぐり先輩の甘い息が鼻腔を満たす。唇の柔らかさは、もはや毎日でも堪能したくなる程甘美なものだった。
もっと味わいたい――そう思い、右手が自然とめぐり先輩の右耳の上に伸びて、髪ごとめぐり先輩を引き寄せる。
「んんっ……！　……ふぅっ……」

めぐり先輩は一瞬目を見開いたがまたすぐにうっとりと薄目になる。
唇と唇を押し当てているだけなのに、なんでこんなに気持ちが良いんだろうか。
髪をくしゃりと撫でると、めぐり先輩の身体がぴくりと反応する。その反応が可愛らしくてたまらなくなり、ゆっくりと手のひらを上下に動かして撫でると、耳の上を通過した時が一際大きく反応した。
俺の手の動きに触発されたのか、めぐり先輩の手がそっと俺の太腿に乗せられた。何か明確な目的がある訳でもなかったのだろう、緩慢な動きで漫然と撫でさすってくる。だがその目的の無い動きが何とも言えず心地良い。
そのまま、互いの満足が行くまで唇を重ね合わせ続けた。

× × ×

「……ぷはっ」
口を離すと、妙に口周りが寂しくなる。出来ることなら、もっとしていたかった。
めぐり先輩が俺の太腿を撫でながら、微かな苦笑いを浮かべる。
「比企谷くん……ごめんね？　勉強しなきゃいけないのに……。……その、我慢出来なくなっちゃって……」
「……っ、や、まあ、その、良い息抜きになってると……思います、から、大丈夫だと思いますよ？」
恥ずかしそうに頬を赤らめて上目遣いでそんなことを言われたら、何としてでも擁護したくなる。
「あ、そ、そっか……ありがとね。……あの……」
ん、あれ、まだ何か？
「どうしました？」
もじもじとするめぐり先輩に続きを促すと、手をきゅっと両手で握られた。
「比企谷くんと……立って、その、ちゃんと……したいんだけど……良い、かな？」
「え？」

めぐり先輩、どうやら俺よりもハマってしまったようだ。

×　×　×

椅子から立ち上がって、もう少し奥まった所に行く。ここからは多分……誰かが近付いてきても、気付くことは出来そうにない。

おずおずと俺の正面に立つめぐり先輩の初々しさが、たまらなく愛らしい。なんで上から目線なんだって話だけど。

「比企谷……くん……」

「は、はい……っ」

背の高さの関係上、自然と上目遣いになるめぐり先輩の熱っぽい視線に、一撃で撃ち抜かれる。

めぐり先輩が目を閉じてすっとあごを上げた。

めぐり先輩の肩に手を置くと、めぐり先輩がぴくりと反応した。周りを見て、耳を澄まし、誰も近くに居ないことを確認する。

目を閉じためぐり先輩のあごをくっと指で持ち上げて、唇をゆっくり重ねると、

「んっ……」

甘い声を漏らして、めぐり先輩がそっと俺を抱きしめてきた。それに応えて、左手をめぐり先輩の背中に、右手を頭に回してきゅっと抱きしめる。

「んふぁっ……んん……っ」

もじもじと腕の中で身体をくねらせる様が妙に色っぽい。

早朝の学校の図書館で何てことを……とどきどきしていると、

「……んんっ……？」

不意に襲った未知の感触に、疑問形の調子で声が漏れた。

めぐり先輩の舌が、俺の唇に当たっている。めぐり先輩の目を見るとうっすら開いていて、その目は今さっきとはまた別種の熱っぽさがある。

ぞくぞくっと期待が背中を駆け抜ける。

口を開けてめぐり先輩の舌を迎えると同時に、めぐり先輩の頭をゆっくりと撫で始める。

「んふぅぅ……っ！　んふっ、あふぁっ、ちゅっ、ちゅぴっ、ちゅる

るっ、ちゅくっ、んんん……っ」
「〜〜〜〜〜〜〜〜っ!?」
待て、待て、待って。
めぐり先輩、なんで俺をこんなにきつく抱きしめてるの？　なんでそんなに瞳に火が点いてるの？　なんで……なんでこんなに情熱的に舌を絡めてくるの？
予想もしていなかっためぐり先輩の濃厚な舌の動きに、指先が固まって視界が明滅する。めぐり先輩の舌は拙いながらも極めて能動的に俺の口内を舐り回してくる。密着するめぐり先輩の身体が悩ましく動くことで身体の前面がこすれ合い、口内の快感と相俟って勃ってきてしまった。
「〜〜〜〜っ……」
ここで、ふと思う。
……なんで俺は、責められっぱなしになってるんだろう？　めぐり先輩からねだってきたし、めぐり先輩から舌を入れてきたのは事実だ。
でも、だからと言って俺が責めていけないということにはならないだろう。
……よし。
「んはぁっ!?」
反撃に転ずるべく、両手でめぐり先輩の髪に触れながら耳を撫でると、めぐり先輩が弾けるように唇を離した。
「はぁっ、んっ、んくぅっ、ひ、ひきがやくっ、んっ……だっ、だめ、だめぇ……っ」
両耳と髪をさわさわと撫でつけると、めぐり先輩の甘ったるい声が耳朶を打った。だめと言いながらもその顔はとろとろに蕩けていて、その両腕は俺をきつく抱きしめている。汗もかいているのだろうか、元々纏っていた甘い匂いに汗の匂いが混じって、劣情を煽る官能的な匂いが立ち込めて鼻腔に染み渡る。
「先輩……今度は、俺からしますね」
言うと、めぐり先輩が驚きで目を見開く。

「あっ、そんなっ、あぁっ……!?」
戸惑うめぐり先輩を追い詰めるように、撫で続けながら首にちゅっと口付けをする。
「……俺から、しますね」
もう一度、目を真っ直ぐに見据えて言うと、
「……っ」
半開きにした唇を震わせて。
めぐり先輩が、こくりと頷いた。
その瞳は興奮に揺らめいていて、本当にあのめぐり先輩なのかと思う程に劣情的な光を宿していた。
続く。

（２１）

めぐり先輩の耳を髪越しに愛でながら、唇を重ねてゆっくりと舌を伸ばし、薄い上下の唇を押し開いて口内に侵入する。

「んふぅぅ……っ」

めぐり先輩は固く目を閉じて、俺の舌の動き一つ一つに敏感に反応する。

舌で舌を舐めて。

歯茎の裏を端から端へ舐って。

そして舌に吸い付――こうとしたら、

「ぷはっ！　だ、だめ……っ！」

「え？」

めぐり先輩が突然口を離し、唖然とする。

めぐり先輩は声の調子とは違って、顔は上気していて目もとろとろに蕩けていて、口は半開きになっていて涎が垂れていてもおかしくない状態で息を弾ませている。

「だめ……なんですか？」

突然の拒否に驚いて恐る恐る聞くと、めぐり先輩が否定とも肯定ともとれない俯き方をした。

「そ、その……っ、もう、ここまででも頭の中がわけ分かんなくなっちゃって……これ以上したら、ちょっとまずい気がするんだ……っ」

ふむふむ、そうか。ならば仕方あるまい――とはなるまい。あれだけ火の点いた顔を見せておきながら、今更何を言っているんだろう。

「だから、ね？　その、また、今度以降、ゆっくり――」

「舌、出してください」

「え……」

俺の要求に、めぐり先輩が固まる。細く白い喉が、くぴりと鳴って動いた。

「え、比企谷くん、今なんて……」

「舌、出してくださいって言ったんです」

「……あ、あはは、だから、その、そういうのはまた今度でも……」

「今、したいんです。先輩と」
「あ、う……こ、こらこら……せ、先輩をあんまりからかうんじゃありま」
「本気ですよ」
「ひぁ……っ!?」
抵抗を跳ね除けて左腕をめぐり先輩の背中に回し、力を込めて抱きしめる。めぐり先輩の耳元にふっと息を吹きかけると、彼女の身体はぶるりと震えた。
「あ、う……っ」
戸惑った末に観念したのだろう、めぐり先輩が舌を口から伸ばした。真っ直ぐ伸ばした舌はふるふると震えていて、目は怖いもの見たさなのか閉じる事はせずにうっすらと開いている。
たまらない喜びに打ち震えながら、わざとめぐり先輩の目をじっと見ながら、ゆっくりと口を大きく開けて、めぐり先輩の舌を咥え込んだ。

× × ×

「～～～～っ!? ～～～～っ! ……～～～～っ!」
めぐり先輩の言葉に成らないくぐもった喘ぎ声が、口の中から直接頭の中に響く。
めぐり先輩が律儀に真っ直ぐ伸ばした舌を上下の唇で挟むと、ゆっくりと前後して舌を味わう。奥まで咥え込んだら舌の裏をねっとりと舐め上げ、抜くときは舌先同士でつつき合う。
「あ、あぇっ、はひっ、ひぁぁぁ……っ」
ようやくはっきりしてきた声も情けないもので、嗜虐心をそそられる。こんな状態でも目を完全に閉じはしないため、綺麗な瞳が揺らぐのをじっくり目で嬲りながら、執拗に舌を責め立てる。
「あっ、あっ、あっ……」
「んむっ……?」
めぐり先輩が目をしばたたかせて、後ろに体重をかけた。どうやら後ずさりしそうになっているようだ。危ないと思いすかさず舌を解放すると、そのまま1歩2歩と下がって……とすっと、めぐり先輩の

後ろにあった椅子に座り込んでしまった。
「……ち、力、入んない……立ってらんない……」
泣きそうな目で見上げてくるめぐり先輩の顔は、今すぐ押し倒したくなるほどいやらしい。
めぐり先輩のあごの下に曲げた人差し指を添えて、くいっと上げる。
そしてもう一度唇を重ねると……今度は、唾液を流し込む。
「んんっ!?　……んんっ、ごくっ、んっく、んぐぅっ、ごくっ、ごくっ、んむぅぅ……っ」
抵抗しようとするもすぐに無駄だと悟ったのか、まるで人形のように腕をだらりと下げて、俺に耳を押さえられたままなすがままに唾液を飲み込んでいく。めぐり先輩の喉が艶めかしく鳴る度に、凄まじい興奮の波が押し寄せた。
「……ぷはっ」
唇を離すと、２人の間に長い糸が伸びた。
「先輩……すごいですね。全部飲んでくれ……あ、少しこぼしちゃいましたね」
めぐり先輩の顔を見ると、上を向いたまま口の端から涎を垂らしていた。
「ふぁ……？　あ、やだ……んっ」
めぐり先輩が俺に指摘されて気付くと、恥ずかしがりながらその唾液を指で掬い、ぺろりと舐めた。その艶姿にごくりと息を呑む。
本当に、この人はあのめぐり先輩なのか……？　普段とのあまりのギャップに背徳感さえ覚える。
既にズボンは痛い程張り詰めていた。もう、我慢出来ない。
「先輩……これ、触ってくれますか？」
「え……っ!?」
どれだけ変態なことを言っているかは百も承知で、めぐり先輩の両手首を掴んで、張り詰めた部分に引き寄せた。
めぐり先輩が顔を真っ赤にしてあわあわと慌てている。
「あっ、やっ、そんな……っ、やぁっ、こんな急に……っ」

「……」
……。
今更だけど。
先輩の口を嬲って、更に自分の股間を触らせようとするとか……変態を通り越して犯罪の匂いさえするような気がする。気がするってかこれもうアウトだろ。
いくらなんでもやりすぎだ……と我（数十分くらい前の我）に返ってめぐり先輩の手を掴む力を緩めると、
「え……？」
めぐり先輩が、顔を逸らしながらも目だけはこちらに向けて、そろそろと手を伸ばしてくる。え、なに、自分から……？　と驚いていると、俺に掴まれたまま、めぐり先輩の手がパンツとズボン越しに肉棒に触れた。
「うぁ……っ！」
予想しなかった事態に加え、２枚の生地を間に挟んでいるにも関わらず走った快感の衝撃に驚いて声を漏らすと、めぐり先輩がハッと目を見開いて顔をこちらに向けた。
「あっ、ご、ごめん。痛かった？」
「や、違うんです。大丈夫です。むしろ気持ち良かったです。あっ」
口が盛大に滑った。ボブスレーくらいの勢いで滑った。
めぐり先輩は顔を真っ赤にして再び顔を逸らしたが、手は股間から離れない。
「そ、そう……なら、良かったんだけど……」
ぽしょぽしょと呟きながらも目だけはしっかりこちらに向けていて、徐々に指が艶めかしくズボンの生地の上を這ってくる。
「お、おぉぉ……っ」
めぐり先輩の手首を掴んだまま、言い知れぬ快感に身を震わせる。
ちょっと待て、あのめぐり先輩が、俺のを触ってる？　ズボン越しとは言え、今までの関係でなら絶対有り得ない行為を、顔を真っ赤にしながらやってくれている？
感動と焦れったい快感で頭がおかしくなりそうだった。

「気持ち……良い？」
たどたどしい口調で尋ねてくるめぐり先輩の声には、緊張と、それ以上の興奮が混ざっている。
「すっ、げ……や、ばい、です……」
もっと触って欲しくて、がくつかせながらも腰を前に突き出すと、めぐり先輩が色っぽく眉をひそめて震える。口の端を微かに上げて、ぞくぞくする程淫らな微笑を浮かべた。
「あ……すごい……どんどん硬くなってる……」
いきり立った肉棒はズボンの中でぱんぱんに膨れ上がって反り返り、めぐり先輩は肉棒の裏を撫でていた。亀頭ははちきれんばかりに充血して、ベルトと腰の間で狭そうに暴れている。
「こ、これ、もう、外に出してあげた方が楽になるかな……？」
「ちょ、せ、先輩……？」
めぐり先輩がいつの間にか顔をこちらに向けて、何やら興奮で顔から湯気を噴き出しながら目をぐるぐるさせている。こ、これ、流石にやばくないか？
「先輩、無理しなくて良いですよ？　先輩？」
「うん、大丈夫。全くもって大丈夫だよ。うん、うん、うん……」
まるで自分を納得させようとしているかのように何度も頷いて、ズボンのチャックに手を掛ける。
おい、マジか、本当に？　ここで、手で――？　と思っていると。
「はわ、はわわわわ……きゅぅぅ」
「……え……」
興奮が最高潮に達したのか、めぐり先輩は俺の股間から手を離して、椅子にもたれかかって目をぐるぐるとさせたまま……ダウンした。完全にぐったりしている。
「……」
……。
ピュアな人が頑張ると、こうなるのか……。
一つ新たな事を学んだ、冬の朝だった。
ちなみに、この日はもちろん数学の勉強も何もあったもんじゃな

かった。先輩が目を覚ましたのは勉強会が終わる直前だったし。もっと言うとその後の授業も気もそぞろでやばかった。なんかもう色々と駄目だった。朝何度もめぐり先輩に謝られて、その後もＬＩＮＥで何度もごめんねと謝られて、その度に妙に可愛い動物が申し訳なさそうに謝っているスタンプが送られてきて、これはこれで和んだ。「和みました」って返信したら「あ、ごめん。茶化してるように見えちゃったよね、ごめんね」と返ってきた。真面目か。

……明日以降……どうなるんだろう、俺たち……。

続く。

（２２）

「めぐりさんとどう？　キスした？」

「ごふぉっ！」

土曜日。

つい一昨日、小町からめぐり先輩との関係を推理されてからまだ２日しか経っていないというのに、突然強烈なぶっこみを食らった。朝ごはんを２人で食べている時に話す内容じゃねぇだろ。しかも当たってるし。

盛大にむせながらも、何とか誤魔化しを試みる。

「ごふっ、げほっ、がほっ、ごふぁっ、はぽん……はて、我には何のことやらさっぱり……」

「なに中二さんみたいになってんの？　キモいよ？　そのキモい真似はどうでもいいとして、めぐりさんとキスしたの？」

悪・即・斬。

ばっさり斬るスピードがえげつねぇし、俺がキモいのか材木座がキモいのかわかんねぇし。あ、両方か。それでいて話題を一切逸らしてくれない。

「小町ちゃん小町ちゃん。川崎・毒虫・大志は元気か？　元気だったら残念なんだが」

「元気だよ。残念だったね。で、キスしたの？」

なんだろう、しなやかな木の枝を引っ張って脱線させようとしても、すぐに勢い良く戻ってくる感じ。川崎大志使えねぇなぁもう……！　折角お似合いのミドルネームまで付けてやったのに。ほら、略せばＤだぞ？

「あ、そうだ。俺最近マジで早起きが習慣になってるから……小町、どうだ？　朝リフレッシュがてら一緒に軽く散歩して、勉強前の頭をすっきりさせたりとか――」

「キス、したね」

助けてー。

小町ちゃん、お椀と箸を手に持ったまま、一切表情を変えずに追及

してきなさる。精神的圧力でお兄ちゃん瀕死です。
「いや、えーと、その……」
「早く認めないと、剥ぐぞ」
「何を!?」
身ぐるみを!?　家族なのに!?
「……」
「お兄ちゃん。無言って大抵肯定にとられるよね」
あ、また言われた。一昨日ぶりです。
「……」
負けた。ギブ。降参。
「……なんでそう思った？」
罪を認めた犯人が「いつ気付いた？」と言う流れとそっくり。妥当な返事は「最初から疑っていた訳ではありません」辺りか。
どんなミステリーチックな答えをしてくれるだろうかと勝手に期待していると、小町が人差し指を顎に当てて上を向いて考え始めた。うん、超可愛い。
そして顔をこちらに向けて、にやはっと笑う。
「女の勘、ってやつ？」
「……そうか」
勘だった。ミステリー感０。おのれ……取り敢えず十角館辺りから読ませるか。なんでだよ。
ていうか中学生でそんなに女の勘って働くもんなの？　早熟なの？　もしここから育つとしたら、こいつ大人になる頃にはエスパーにでもなってるんでなかろうか。
妹の将来について杞憂を重ねていると、小町がずいっと身を乗り出す。追及をやめる気はまるで無いようだ。わたし、気になります！
「で？　お兄ちゃん、せっかくそういう仲になったんだから、遊び行ったりしないの？　いくらヒキコモリッキーなお兄ちゃんでも、流石にそうも言ってられないでしょ？　めぐりさんとの仲を深めるためにも」
「ヒッキーの正式名称みたいな雰囲気で言うな」

しかも、もはや完全にめぐり先輩との仲を認定されている。間違っているとは言えないからもう何も反論出来ない……。
むん。
頭をがしがしと掻いて、窓から見える外を見ながら答える。
「あー……や、うん、今日の昼、ご飯食べに行く」
「ほーん？　ほーん？　ほーん？」
小町の目がきらりと光った。ヤマピカリャー。音も無くお椀と箸をテーブルに置いて、俺の後ろに忍のごとくするりと回り込み、肩を揉んでくる。気持ち良いけどここに至るまでの過程が気持ち悪い。
「それはお兄ちゃんが誘ったの？　それともめぐりさんから？」
なんだこいつ。むふーむふーって鼻息が荒いぞ。絶対目もびかびか光ってる。
どこまで根掘り葉掘り聞かれるんだ……とため息を吐きながら、小町の顔をちらりと見てまた視線を戻す。やっぱり目が光ってた。
「……先輩から」
昨日の夜、めぐり先輩から電話があった。ど頭にやはり「勉強出来なくてごめんね？」と謝られてから、「お詫びというか……あ、いや、うん、こういう言い方はよくないかな。わたし、比企谷くんともっとお話したいな。明日、ご飯行かない？」と誘われていた。どきどきしすぎて、どんなテンションで返事をしたのかは覚えていない。
渋々感全開で答えると、小町の手がぴたりと止まった。
「ほほーう？　年上お姉さんがお兄ちゃんに夢中とな？　ほーん？　ほーん？」
うぜぇ……。肩とんとんすんなよ、気持ち良いだろ……力加減うめぇなもう……。
「はいはい。ごちそうさま。美味かったよ、愛してるぞ」
「お粗末さまー。そのセリフ、そのうちめぐりさんにも言ってあげてね」
「言ったら死ぬから無理だ」
名前を言ってはいけないあの人のごとく。
答えると、小町が肩を掴んで揺すってきた。

「なんで！　なんでさお兄ちゃん！」
　や、やめろ、酔う……！　住み慣れた家で酒も無しに酔うとか斬新すぎる……！
「うぐぉ……小町は身内だから言えるんだよ」
「じゃあ、めぐりさんも身内になれば良いんだよ。比企谷めぐり……ふおぉぉぉ！」
「うぜぇ……」
　一人ですげぇテンション上がってる妹が超うざ可愛い。
「大体、比企谷めぐりだとあれだ、苗字と名前で同じ文字を繰り返すキャラが多いこの世界の法則を乱しちまう」
「何の話してんの？」
「なんでもない」
　どこぞのでかいリュックを背負ったツインテール少女のごとくメタな話をしてしまった。
　小町が食器を台所に運びながら、んーと唸る。
「じゃあ、婿入り？　城廻八幡？」
「なんかすげぇごつい響きになったな……」
　戦国時代に居そう。
「ま、お兄ちゃんが外に出るのは良いことだね！　小町がまたコーディネートしてあげよう！」
　小町が言いながら、くるりと振り返って人差し指を立ててキラッと笑った。マジでアイドルとしてデビューさせたい。しかし川崎大志的毒虫が大量発生するのはいただけん。やはりどこにも出さずにおこう。
　この後、午前中はのんびりするつもりだったのに、まさかのコーディネートのみで丸々午前が潰れるという事態に陥った。正確には小町の「お兄ちゃんが小町無しでもまともな着こなしをする為の養成講座」が開講されたために時間をくったんだけど。や、まあ、為になったんでいいんだけどね。超疲れた。寝ないので精一杯。
×　×　×
「あ、比企谷くん。こんにちは」

「ども」
待ち合わせの場所に行くと、既にめぐり先輩が待っていた。おっかしーなー、まだ３０分前なのになー？
今日はここ最近の中でも特に冷え込んでいて、昼時だと言うのにめぐり先輩の吐く息は白い。俺も、ポケットに手を突っ込んでなければ凍えそうだ。
「……先輩、いつから待っててくれたんですか？」
いつから待っていたのか分からない先輩の身体が心配で、「ごめーん、待ったー？」「ううん、今来たとこ」みたいなテンプレート会話をする余裕も無い。
俺の問いに、めぐり先輩が一瞬目を泳がせる。
「え？　ん、うーん、ほんの５分前くらい……だ……よ……へくちっ！」
恐ろしい程可愛いくしゃみに戦慄する。
「え、可愛いっ、え？」
思わず口に出すと、めぐり先輩が目をぱちくりさせた。
「え？」
「あ、や、なんでもないです」
「え、でも、今、可愛いって……へくちっ！」
「殺す気ですか俺を」
「なんで!?」
しまった、まただ。
「なんでもないです」
「え、だって今可愛いって言ったよね？　あれ？　気のせい？」
めぐり先輩がずずいっと迫ってくる。下から可愛らしい顔が迫ってくるとちょっとキスしたく何でもありません。
顔をぐぎぎと逸らしながら答える。
「気のせいかもしれないですし、気のせいじゃないかもしれません」
「何それ!?　……もう……」
俺が誤魔化し続けたのがお気に召さなかったのか、めぐり先輩は両手でバッグを持ったまま、頬を膨らませてぷいっとそっぽを向いてし

まった。眉根を寄せて目を閉じている。うーん、ちょっと可愛すぎますねー。引き続き俺を殺そうとしていらっしゃいますねー。
「先輩……？」
「……」
「せんぱ～い……？」
字面だけ一色、再び。
「……つーん」
「!?」
え!?　口で言ったのか今!?　つーんって!?　効果音だろそれ!?
うーむ、がっつりへそを曲げられてしまった。
髪をがしがしと掻いて、先輩に気になっていたことを聞くことにする。この話題ならばきっと振り向いてくれる……はず。
「先輩、なんで店で直接集合にしなかったんですか？」
初めは店の前もしくはどちらかが先に店に入って……という流れになるのかと思ったら、集合場所は外だった。目的地も聞いていないので、どれくらい歩くのかも分からない。何故わざわざ……？　と思う。
尋ねると、そっぽを向いていた先輩がぱちりと目を開けて、ちらりと目だけこちらに向ける。その頬は寒さのせいか、ほんのり紅潮している。
「あ……えっとね？　その……」
「え……」
めぐり先輩がもじもじしたかと思うと、左手の手袋を外して、素手になった手を差し出した。
「えーっと……握手ですか？」
「怒るよ」
「はい、すみません。ほんとすみません。準備します、すぐ準備します」
何を求められているかは分かっていながら悪ふざけをしたら、明らかに温度低めの声で返された。めぐり先輩が怒ったら超怖いんでなかろうか。やべぇ、叱られたい。そして癖になりそう。どうしたんだ

俺。
手袋を外そうとしながら、ふと思う。
めぐり先輩の圧が地味に怖い。なんで笑顔なんだよ。フキダシでごごごごって台詞を作って持ってる幻覚さえ見える。
「あ、やべ……」
右手の手袋を外す所なのに、慌てたら間違えて左手の手袋を外してしまった。これではめぐり先輩と逆を向いて歩くシュールな絵面になってしまう。後ろ向きでウォーキングしてるおばちゃんたまにいるよね。
「ふふ、比企谷くんはおっちょこちょいだなぁ」
「……っ」
今のミスはあなたの圧によるものです……なんてとてもじゃないが言えない。そしておっちょこちょいという言葉をめぐり先輩が使うと異常なまでに可愛いという事実に戦慄する。
ようやく右手の手袋を外して（左手の手袋は再びはめた。寒いし）、めぐり先輩の左手を握る。俺が慌てている時間が長かったのか、めぐり先輩の左手はひんやりとしていた。
「ん、ありがと。……えへへ、ちょっと、こうやって歩きたかったんだ」
「わかりました。取り敢えず１５ｋｍくらいですかね」
「そんなに歩かないよ!?」
はっ！　いかん、照れ笑いするめぐり先輩が可愛すぎて、やたらストイックな散歩をするところだった。
「それじゃ……行こうか」
「はい」
行き交う人をぼんやり眺めると、カップルも沢山見かける。彼・彼女らの見え方が今までと何か違うなと思いながら、２人で歩き始める。
握ったときはひんやりしていためぐり先輩の手が、もう温かくなっていた。
続く。

（２３）

お昼時、目的地へ向かってめぐり先輩と２人でとっとことっとこ歩いていく。道行く人の視線を妙に気にしてしまうのは何故なのか。

すれ違う人、すぐ左のガードレールの向こうを通り過ぎていく車に気を向けながら、何とはなしに隣のめぐり先輩をちらりと見やる。めぐり先輩が俺の視線に気付いて小首を傾げた。

「？　どうしたの？」

「や、なんでもないです」

上機嫌なめぐり先輩を見て、思わず顔がふやけそうになった。

「ふふふふふふふふふふふ～ん」

「!?」

え、なに!?　今の鼻唄!?　すげえ詰め込んでたけど!?　字面で見ると笑ってるようにしか見えないし！

「せ、先輩、今のは……？」

人の鼻唄に言及するなんて野暮かとも思ったが、あまりに気になったのでつい尋ねてしまった。めぐり先輩はくりっと首を傾げて、ああ、この曲ねと言ってにっこり笑う。

「知ってるかな？　アリアナ・グランデって人。その人の歌なんだけど。とっても可愛いしすごい歌が上手なんだよ。この間テレビで出てるのを見てすっごい素敵だなって思って」

「そ、そうなんですか……」

初めて聞いた……と思う。アリアナ？　蟻穴？　や、いくらなんでもこんなしょうもないボケを脳内でやってもしょうがない。落ち着け。取り敢えずさっきの鼻唄は、英語の歌詞でダカダカと畳み掛けて歌っている部分らしい。めぐり先輩のほんわかボイス＆ハミングで歌われるとただの発声練習にしか見えない。

「……」

そこからしばらく歩いて、ふと自分の手元を見やる。俺の右手はめぐり先輩の小さな手に包まれていて、とても温かい。身体的に温かいのはもちろんなんだけど、心理的にも緊張してしまって、もはや暑く

さえ感じる。今の気持ちを端的に表せばうれしい！　たのしい！
大好……何でもない。
　しかし、めぐり先輩は俺とはちょっと違うことを考えていたらしい。
「……」
「……？」
　めぐり先輩が、繋いだ手をじっと見ている。歩いてるんだから前は気を付けてほしいんだけど、そこは致し方無いと判断して俺が気を付けることにする。大丈夫、ぶつかりそうになったら庇えば良いし、絡まれたら神速の土下座で何とかしよう。
「……」
「……ど、どうしました？」
　尚も見つめ続けるめぐり先輩にしびれを切らして尋ねると、めぐり先輩はひょいと顔を上げてにっこり微笑んだ。
「手、やっぱり素手だと寒いね」
「ああ、そうですね。まあでも、繋いでる分にはそんなに寒くは……」
「手、結構寒いね」
　……んん？
「……手袋、はめますか？」
「ん、そうじゃなくて。手、結構寒いよね？」
　え、何この禅問答？　答えを見つけるまで店には一生辿りつけないのかしらん？
「……ん」
　めぐり先輩の視線を辿ると、繋いだ手ではなく俺のコートのポケットに向けられていることに気付く。
　……えー？　それ、……えー？　恥ずかしくないです？
　俺の表情の変化を察したのか、めぐり先輩が歩きながら身体を寄せてくる。にっこり笑顔に明らかに含みがあって恐いんですけど。
「手、結構、寒いよね？」
　なんで文節で区切って圧をかけてきたのこの人？
　えーと、その、つまり、まあ……アレだよな、アレ。

「……俺のポケットの中で繋ぎますか？」
頭をがしがしと掻いていつもの半分くらいの声量で言うと、めぐり先輩の目がぱっと輝いた。
「うん！　……やった……」
呟くように言った後半部分と頬を赤らめた笑顔は可愛すぎるのでスルーすることにした。死んじゃう。
道の端に寄って、一度立ち止まる。そして手を離して先に俺が右ポケットに手を入れると、めぐり先輩が口元をもにゅもにゅとして、こきゅっと喉を鳴らした。え、なに、そんなに？　そんなに緊張するイベントなの？　俺まで緊張しちゃうんだけど。
「じゃ、お邪魔……します」
「あ、はい……どうぞいらっしゃい」
めぐり先輩の妙に丁寧な挨拶に思わず乗っかってしまった。何このお宅訪問のテンション。
めぐり先輩の左手がポケットに入ると、冬の外気の冷たさが無い上に素肌の温もりが加わって、ぽかぽかと温かくなった。ぬくぬくだにゃー。
「えへへ……温かいね」
そう言って、めぐり先輩が腕が触れ合うくらい近付いてくる。
「……そうですね」
気の利いた言葉も返せなくて歯がゆいとは思ったが、今はマジでもう緊張しすぎて声が裏返らなかっただけマシだと思うんだ。ほんとに！　褒めて褒めて！
「もうちょっとで着くからね」
「ひゃい」
油断した瞬間にやってしまった。
顔が熱くなるのを感じながらちらりと隣を見やると、めぐり先輩が目を細めてくすりと笑う。
「ふふ……比企谷くんは可愛いなぁ」
「……行きましょう」
「ふふ、うん、行こっか」

今すぐめぐり先輩の肩を掴んで、「あんたの方が可愛いわー！」とビックリマーク５０個分くらいのテンションで叫びたかった。

×　×　×

先輩が連れてきてくれたのは、お洒落で落ち着いた外装のカフェだった。

「前にここを通り過ぎた時に見付けて、いつか入ってみたいなーって思ってたんだ」

めぐり先輩が嬉しそうに言いながらカフェの入り口まで行くと、あっと小さく声を上げた。その視線は２人分の手がすっぽり収まっているポケットに注がれている。

「……お邪魔しました」

「あ、はい……またお越しください」

めぐり先輩が手をポケットから抜くと同時にまたしても丁寧に挨拶してきたため、慌ててしまいそれを上回る珍奇な返しをしてしまった。めぐり先輩が頬を赤らめながらふっと目を細めるのを見て、どうしようもなく気持ちが浮き立ってしまう。

ドアを開けると、からんからんと心地良い音が鳴った。外装は新しかったが、店内を見ると結構長いこと営業していると思われる、どこか渋さのある空間だった。中はそれほど広くなく、カウンター席が５つと、テーブル席が３つ程あった。昼時のピークを少し過ぎているからだろうか、俺たち以外の客はカウンターでのんびりコーヒーを飲みながら本を読んでいる落ち着いた雰囲気の中年男性と、テーブル席で女性向け雑誌を読んでいる落ち着いた雰囲気の中年男性と、テーブル席で女性向け雑誌を読んでいる女子大生らしき人がいるだけだった。んん……？　あの女子大生っぽい人、どこかで見たことがあるような……？

「いらっしゃいませ。お好きな席へどうぞ」

女性店員に言われて、女子大生らしき人の隣にテーブルに腰を下ろすと、彼女がこちらを見るなり小声で「こ、高校生カップル……っ！　初々しい……っ！」と興奮気味に呟く声が聞こえた。そして「お、落ち着け、落ち着けわたし。そ、そうだ、コーヒーを飲んで落ち着こあっつ!?」と、まだ熱いコーヒーに悶えていた。なんだこの愉快で可愛い

生き物。店員さんがさっき俺たちに応対した時より明らかに高いテンションで「だ、大丈夫ですか!? おしぼり!? 水!? 氷要りますか!?」などと言いながら駆け付けてきて、「だ、大丈夫です！ ほら、なんともないですよこのコーヒー美味しいですねあっつー!?」とコントみたいなやりとりをしていた。この人たちなんなのん？ めぐり先輩は目をぱちくりさせながら一連のやりとりを眺めていた。頭撫でたい。

メニューを見て、無難な品を注文する。こういうカフェランチって、雰囲気やコーヒーを楽しむというのが主目的にあって、腹が減った男ががっつりと食べにくる場所では無いよなと思う。

まあ、もしかしたらこういう場所に行くのではと予想して、朝ごはんは結構がっつり食べてきたんだけど。それでもめぐり先輩との道中で妙にエネルギーを使ったから、それなりに腹は減っていた。

注文した料理が届くと、２人で手を合わせる。

「それじゃ、いただきます」

「いただきます」

めぐり先輩の穏やかな声に続いて、俺も挨拶をする。

「……」

幸せそうに料理を口に運ぶめぐり先輩を見て、ふっと頬が緩む。

お店の中ではあるけれども。

２人で食卓を囲うという状況が、たまらなくむずがゆかった。

続く。

（２４）

「ふー、美味しかったね」

「そうですね」

食後のコーヒーを飲みながらのんびりする。料理は思ったよりも量があって助かった。美味かったし。「思ったより多いね……比企谷くん、ごめん、ちょっと食べてもらって良い？」と言われて了承した後、めぐり先輩が「じゃ、じゃあ……こほんこほん、……あ、あーん……」と危険球を投げかけたので、「そうですね、アンコールワットってほんとすごい遺跡だなと思います」と適当に言ったら、ぷんぷん可愛く怒られたもののなんとかうやむやに出来た。危なかった……人前であんな恥ずかしいことやったら死んでしまう。ちなみにその時隣を見たら、どこの古典部部長だってくらい好奇心でいっぱいの目を爛々と輝かせて、女子大生らしき人（もういちいち言うのが面倒なので、女子大生のえる、略してＪＤＥと呼ぶことにする。……なんかどっかで見たような……？）が頬に手を当てて「わー、わー、年上のお姉さんとちょっとひねた感じの年下の男の子……わー、わー……っ！」と小さく騒いでいた。一人で。この人絶対良い人だろ。

コーヒーカップを口元に寄せて、めぐり先輩がふわりと漂うコーヒーの香りを嗅いで穏やかに目を細める。

子どもっぽかったり、可愛かったり、お姉さんだったり、大人っぽかったり。

どうして女の人は、こうもたくさんの顔を持ち合わせているんだろうか。ころころ変わる表情にいちちどきどきする身にもなってほしい。要するにもっと色んな表情を見てみたいってなんだ俺、なにＪ―ＰＯＰの歌詞みたいなこと言ってんだ。

めぐり先輩がコーヒーをこくっと飲む姿に思わず見惚れていると、ぱちっと目が合った。

「……」

最初は片手でコーヒーカップを持って飲んでいためぐり先輩が、俺

と目が合うと急にきょろきょろしだした。何事かと思い引き続きじっと見ていると、一度コーヒーカップをソーサーに置いてふぃーと息を吐く。そして今度は両手でカップを持って、ふーふーと念入りに冷ましてさっきよりも顔が隠れるようにしながらくぴくぴと飲んで、その状態で俺を見つめ返してきた。無邪気な瞳がカップの上からひょっこり覗きこんできて、小さな妖精と出くわしたような、そんな幸せな気分になる。マジめぐりエッティ。

……ていうか、なんで顔を隠したんだ？

めぐり先輩の、理由が分からないがとにかく尋常でない程可愛い行動を見つめていると、めぐり先輩がカップをソーサーに置いて、一度目を伏せた後上目遣いでこちらを見つめてきた。

「ひ、比企谷くん……そ、そんなに見ないで……？　は、恥ずかしいよ……」

「……っ」

ほんのり頬を赤らめて、口元をもにょもにょさせて言うめぐり先輩があまりにも可愛くて、思わず声を上げそうになった――その時。

「ぐはぁっ！」

『!?』

俺が声を上げる直前に、隣の席のＪＤＥがコーヒーを噴き出して机に突っ伏した。コナンくーん、出番ですよー？

先程のテンションで女性店員が「だ、大丈夫ですか!?　事件ですか!?」とか言いつつもちゃんと布きんを持ってきた。んなわけねぇだろ。ＪＤＥはびくんびくんと痙攣しながら、顔だけぐりんとこちらに向けて「うへへぇ……お姉さんキャラでその上恥じらいも見せるとか……ええのぅ……日本の文化じゃのう……」とか言ってきた。駄目だこいつ……早くなんとかしないと……。今初めて見た（気がする）けど、多分興奮のあまりキャラ崩壊してるということだけは分かる。女性店員はＪＤＥの狂った呟きを聞いてるのか聞いてないのか、コーヒーを拭き取りながら「ああ、一度で良いからこんな現場に出くわしてみたかったのよね。コーヒーに毒……まるで十角館のようだわ。いやしかしでも、誰がこんなことを……？　落ち着いて、私はエラリ

イ、推理小説研究会の名探偵よ……いやでもエラリイだと最後がアレか……」などという、縁起でもないこと言っている。だから死んでねぇっつの。あんたが勝手に死亡判定出してる人、すぐ目の前でめぐり先輩を見つめながらうへへとか言ってるぞ。
「な、なんか大変なことになってるね……」
　事態は呑み込めていないようだが、取り敢えず自分が凝視されていることには気付いているらしく、めぐり先輩はＪＤＥの視線から逃れるようにして苦笑をこちらに向けてくる。メニューでめぐり先輩の顔を隠した方が良いんでなかろうか。
「あの……」
　あまりに変態的な瞳でめぐり先輩が視姦間違えた凝視されているので、たまらず声を掛ける。俺のそろりとした物言いで察したのか、ＪＤＥはアッと声を上げて、がばっと起き上がってぺこりと頭を下げた。顔を上げるとその表情は真剣そのもので、ほんの数秒前までとのギャップに驚く。
「ごめんなさい。あまりにも微笑ましかったもんでつい吐血しちゃいました」
　真面目な顔なのに……。
　微笑ましく思って吐血って、それどういう身体の仕組みなのん？
「本当に申し訳ないわ……こういう時、ついつい我を忘れちゃうのよね……こんな性格のせいで一日何回痙攣することか……」
　なんだろう、すれ違う人みんなにスタンガンくらってるのかなこの人？
「そんな訳で、これ以上隣にいると迷惑かけちゃいそうだから、わたしはこれにて退散するとします！　じゃ、またどこかで会えると良いね！」
「あ、はぁ、はい、どうも」
　よく分からぬうちにぶわーっと捲し立てて、何やらＪＤＥがメモ紙に何かをさらさらと書いて立ち上がり、めぐり先輩の前にぽすりと置いて、めぐり先輩にちょいちょいと手招きをした。めぐり先輩が何事かと耳を近付けると、ＪＤＥがぽしょぽしょと囁く。

「あ……え、いや、その……っ！」
囁かれるなり、めぐり先輩がぼっと顔を赤らめて慌てだした。二人とも明らかに俺を見てるのは気のせい？
「それじゃ、おさげのお姉さん、デレ捻くん、またね」
小町が俺に使う形容詞の業界用語バージョンみたいなことを言って、ＪＤＥがひらひらと手を振ってドアに向かう。からんからんと音を立てて――
「お客様、お勘定！」
「ああ、忘れてたごめんなさい！」
『……』
女性店員に呼び止められて、コントみたいなやりとりをしていた。レジでお金を払いながら「６００円……コーヒー大体噴いちゃって飲めなかったんで、２００円くらいにしてもらったりとかしちゃったり出来ないですかねとか思ったり」「お客様の口に入った時点でもうアレなので６００円です」「はい……」というやりとりをしている。コントの尺が結構長い。
お金を払い終えて、再びからんころんと音を立てて今度こそＪＤＥ退場。と思ったら、窓に顔を寄せて、俺たちに向かって投げキッスをしてきた。しかも窓に寄り過ぎていたため、投げキッスの手の動きで指の爪を窓ガラスにこつんとぶつけて悶絶していた。涙目で手を振りながら去っていく黒髪ストレートの残念美人の後ろ姿を２人で見届けると、ふーと一息ついた。
「先輩、Ｊ……あの人、何のメモを置いていったんですか？」
「ああ、これね」
聞くと、めぐり先輩がなんだかなーと笑いながらメモをこちらに見せる。そこにはよく見慣れた形式の１１桁の数字が書かれていた。
「なんで電話番号……」
キザな男がやるやつじゃないのん？　びっくりした。またどこかで会えると良いねって、あの人意図的にめぐり先輩に会う気満々じゃねぇか。
「あ、あと、さっきあの人はめぐり先輩に何て言ったんですか？」

言うと、めぐり先輩の頬がぽっと桜色に染まる。やだもう家に連れ帰りたい。
「え、えっと……そ、その……」
「？　何ですか？」
この後、追及なんてしなきゃ良かったと思った。何故なら次のめぐり先輩の言葉が、
「……『彼氏くん、素敵だね。優しいし、ちょっと捻くれてるけどそこが可愛いし。あと何気に顔もかっこいいし。仲良くね』って……」
「……
そ、そうですか……」
「う、うん……」
「……」
「……」
『……』
恥ずかしさで。
死ねる。
二人して膝に手を置いて、顔を俯かせて黙りこくる。聞こえてくるのはカップを洗う女性店員の「あの人、多分二口くらいしか飲めてないわよね……」という絶妙な独り言だけだ。マジかよ。
ちらりとめぐり先輩を見やると、向こうもちょうど俺に視線を向けたようで、ぱちりと目が合った。顔が熱くなってまた目を伏せる。もう一度めぐり先輩を見やると、また目が合った。そしてまた目を伏せる……という流れを、幾度と無く繰り返す。
……は、恥ずかしい……！　恥ずかしいよぉ……！　あの人、何言ってくれちゃってんの⁉　そしてめぐり先輩、何で一言一句違えずに俺に伝えちゃったの⁉　聞いたのは俺なんだけども！
ちらりとレジの方に目をやると、皿洗いを終えた女性店員が椅子に座って完全にスイッチオフになっている。サスペンドしてる。お前はどこの小森さんだ。
店内に、うごかぬせきぞうが３つ。
そこから数分の間、カフェ内には無音が響き渡っていた。

続く。

（２５）

蛍の光を脳内再生すること数分、やっと落ち着いてきて顔を上げた。めぐり先輩を見やるとちょうど彼女も顔を上げたようで、ぱちっと目が合う。今度は多少頬を朱に染めただけで、めぐり先輩はたははと笑って返した。

「こ、コーヒー、おかわりもらおうか」

「あ、そ、そうですね、ええ」

ぎこちない会話をして、サスペンド状態の女性店員を呼んでおかわりをお願いする。

運ばれてきたコーヒーに角砂糖をぽしゃぽしゃ入れていると、めぐり先輩がその様をじーっと見ていた。むむむと唸りながら眉根を寄せていて、何やらただ事じゃないご様子。

「……どうしました？」

聞くと、めぐり先輩がぱっと顔を上げて、眉をひそめたまま首を傾げた。

「……さっきもそれくらい入れてたよね？」

「ええ、まあ」

俺の答えを聞いて、めぐり先輩が更に首を傾げる。なんかすごいシュールな絵面になってる。

「……太らない？」

むむ。

言われてふと考える。体重計は毎日乗っている訳じゃないけど、それでもまぁ……。

「ん、太らないですね。食べ過ぎたらその日だけちょっと体重増えるくらいはあるでしょうけど。食べ盛りですしね」

俺くらいの年齢の男子であればこういう身体状況にあるのはごく自然なことだろう。２０年後に今と同じ食生活をしていたらまずそうだが、未来はどうであれ今は大丈夫だ。

何気なく答えたつもりだったんだが、めぐり先輩は俺の何気ない言葉に対して極めて陰鬱な表情を浮かべ、ぼへーと息を吐いた。

「……良いなぁ、そっかぁ、太らないんだ……良いなぁ……」
「……」
ご、ごめんなさい……。
「良いなぁ……」
「……」
「……はぁ、良いなぁ……」
……人間って？
「……良いなぁ……」
「……ぶふっ」
脳内でのフリにめぐり先輩が見事に応えてくれたので思わず小さく噴き出すと、めぐり先輩の周りの空気がぴしっと固まった。あかん。ごごごごってフキダシが見える気がする。
「……比企谷くん、今、笑った？」
超怖い。どうしよう。超怖い。
「何でもないです、気のせいです、何でもないです」
目以外は笑ってるのに。目以外は笑ってるのに！
「……ほんとに？」
「ほんとです、ほんと」
笑うに至る経緯があほらし過ぎて、説明してもピンとこなさそうだ。だから今ははぐらかす。それはもう、必死ではぐらかす。
「……そっか。……」
お、来るか来るか？　人間って？
「……良いなぁ……」
「……ぶふぁっ」
「やっぱり笑ったよね!?　比企谷くん最低！」
「あ、ち、違うんです、これはその……」
自業自得でしかなかった。
結局、誤魔化しは無理と判断して事情を洗いざらい話した。話した上でばっちり呆れられた。そりゃそうですよね……。
×　×　×
「うん、うん、あはは、そうなんだー」

しばらくして、すっかり元のペースに戻っためぐり先輩は俺の話に心地良い相槌を打ってくれていた。この人と話すと本当に話しやすくて、ホステスとか話が聞くのが上手い人ってこんな感じなんだろうかなんて考えることがある。ベクトルは違うんだろうけど。めぐり先輩と話してると自分が話し上手に思えてくるから不思議だ。それで調子に乗って他の人に話しかけてだだスベリするまである。やだ、お先真っ暗……。

俺が一通り話し終えると、めぐり先輩が手を組んで顎を乗せて、首を傾げて大人びた表情で微笑んだ。

「それで、その後どうなったの？　比企谷くんの話って面白いから、どんどん聞きたくなっちゃう」

「……」

それならこっちはお金を払っちゃう！　とかって錯乱しちゃうくらいには、今のめぐり先輩は強烈に可愛かった。

あまりの可愛さに次の言葉が紡げずにいると、ふとめぐり先輩の唇に目が行く。薄くて綺麗な唇を見て、昨日の出来事をふと思い出す。そしてめぐり先輩の別人のような色っぽい姿を思い出して、鼓動がどんどん速まって――

「……比企谷くん？」

「あっ、す、すみません」

めぐり先輩の言葉にハッとして謝るが、視線は唇に釘づけだ。

めぐり先輩は何事かと俺の視線を追い、事態に気付いて頬をほんのり紅潮させる。

「こ、こらっ」

バレた。

「す、すいません……」

めぐり先輩は叱りながらも上品に手を口に当てて、横を向いて流し目を送る。妙に色っぽい仕草にどきどきして、唇を更に凝視してしまって――

「めっ」

「は、はいっ」

お姉さんの窘め口調の言葉に、思わず背筋が伸びる。
ああもうやっちまった……と嘆いて、コーヒーの残りを口に運ぼうと手を伸ばすと、その手にそっとめぐり先輩の手が重ねられた。
「え……」
戸惑う俺を見て、めぐり先輩が眉根を寄せて困ったように笑う。
「……その、今は、ダメだよ？　だけど、その……後で……なら……な、なんでもない！」
言って、手をしゅばっと離す。手をテーブルの下に潜り込ませて、頬を朱に染めて俯き黙りこくってしまった。
「……っ」
はーん!?　今は!?　後で!?　良いの!?　はーん!?
鬼のような引きでめぐり先輩が言葉を切ったことで、尋常でない程のしこりが胸中に残った。

×　×　×

「……良いなぁ……」
「え」
おかわりしたコーヒーも飲み終えて、水を頼りにお喋りが続いていた。我ながら珍しいことをしているもんだなぁ、かれこれ1ヶ月分くらいは喋ってるんじゃなかろうかとか思いながら談笑していると、めぐり先輩が会話の継ぎ目で唐突に、さっきも言った言葉を口にした。
……今度は何に対して？　はっ、まさか本当に人間に憧れているのか!?　有り得る、有り得るぞ。この人はきっと元女神というか駄女神で、肩入れしすぎる程人間を好いている過去があって……などと妄想していると。
「……比企谷くん、めっ」
「っ!?」
何も喋ってはいないのだけど思考はだだ漏れだったんだろう、めぐり先輩がぐいっと身を乗り出し、俺の唇に人差し指をぴとりと当てた。その顔はぷりぷりと怒っていて、なんかもう待受けにしたい……って、そうじゃなくて。
「……ふいあへん（すいません）」

「ん、よろしい」
指を口に押し当てられたまま謝ると、めぐり先輩はにっこり微笑んで元の姿勢に戻った。
……か、可愛すぎる……。
拙い感想が、幾度と無く頭の中を駆け巡る。グルメリポートだってありとあらゆる言葉を尽くすよりもとても良い表情で一言「美味い」って言った方が視聴者に沁みる時だってあるだろう、きっと？
その要領だよ。それはもう良い顔で「可愛い」って言えればそれで良いんだよ。俺に良い顔なんて出来ないのを忘れてたのでこの案はボツにしますごめんなさい。口の端をひくつかせながら吊り上げて「ふひっ」て笑うのが限界だったわ。
めぐり先輩は手を組んで顎を乗せると、物憂げに呟く。
「はぁ……太らない身体、良いなぁ……」
あ、さっきの話だったんだ。
「運動したりはしないんですか？　食事だけで痩せるよりも、今後のことを考えると運動の習慣を付けた方が良いと思いますけど」
「う……す、すごく正論な気がする……」
俺の言葉にめぐり先輩がはうぅと唸る。撫で回したい。
めぐり先輩が手を膝の上に置いて、椅子にもたれかかってはふっとため息を吐く。
「運動かぁ……前比企谷くんに教えてもらった大股早足で歩くやり方をちょこちょこやってみてるんだけど……結構疲れちゃって、中々続かないんだよね……」
「そうですか……ん？」
めぐり先輩がため息を吐きながら、意味ありげに視線をちらちらと送ってくる。何事？
「中々続かないんだよね……」
「そ、そうですか……？」
疑問形になってしまった。「こんな根気の無い生き物初めて見ました」くらいのテイストになってしまっただろうか。ならねぇか別に。
めぐり先輩は俺の返答がお気に召さなかったのだろうか、頬を膨ら

ませてむうと唸り、もう一度ため息を吐いて、ちらりとこちらを見やる。
「……続かないんだよね……」
「……あ」
……そういうことか。やっと分かった。
えー、でも、これ結構面倒なんじゃなかろうか。しかしめぐり先輩の更なる可愛い姿を見ることが出来るとなれば吝かではないというかむしろ望むところだというか何というか。
まあ、うん。
乗っかるか。乗っかるとするか。
頭をがしがしと掻いて、めぐり先輩の目を見る。めぐり先輩の「察して！」オーラが半端ない。
「……あー、じゃあ、一緒にやってみますか？　運動」
言うと、めぐり先輩がぱぁっと花のように笑った。ああもうダメだ、浄化される……！
「っ！　うん、やろうやろう！　よろしくね！」
「ぬぉっ、ちょ、ちょっと……っ！」
めぐり先輩が俺の手をぎゅーっと握って、手の温度と同時に顔の温度も急激に上昇する。
「あっ……ご、ごめん……」
「……あの……」
めぐり先輩、謝ってるのに手を離してくれない。そして何やら手がもぞもぞ動いてこそばゆい。
口をもごもごさせながら、めぐり先輩がこちらを向く。
「あ、その、それで、ね……？　お礼というか何というか……あ、お礼じゃなんかわたしエラそうだなぁ……あ、そ、その……」
「ん、なんです？」
あまりにもじもじするもんだから、一向に言いたいことが分からない。
「……その、この店を出たら、ちょっとだけ、ちょっとだけね？　その、……したいの」

「……」

鮮やかなまでの。

思考停止。

俺はめぐり先輩の唇を凝視しながら、しかるべき言葉を紡ぐ。

「……でんぐり返りをですか？」

「その話はもういいよ！」

お後がよろしいようで。

よし、おちゃらけた雰囲気で終わらせることが出来たぞ――と思いきや、めぐり先輩が俺を握る手に力を込めた。眉根を寄せて懇願の色を浮かべた小動物のような表情で、上目遣いになって儚げに言葉を口にする。

「……だめ？」

「よし、しましょう。すぐ店を出ましょう。すぐしましょう」

「ちょ、ちょっと比企谷くん!?」

上目遣いにノックアウトされてすっくと立ち上がると、めぐり先輩の手を掴んでずんずんと店の出口に向かう。ドアベルがからんからんと音を立てて――

「お客様、お勘定！」

「あ」

ここでまさかの。

ＪＤＥ的ボケを俺がやらかしてしまった。

お後がよろしいようで。

続く。

（２６）

慌てて店を出ようとしたところで女性店員に呼び止められて、お会計を忘れていたことに気付く。いくらめぐり先輩からのお願いが強烈だったからといって、ここまで我を忘れるものなのかと驚いた。

「……」

めぐり先輩の手を握っている自分の手のひらにはじんわりと汗が滲んでいて、心底がっついてるじゃねぇか俺……と心底呆れた。

一旦ここで冷静になろう、うん、うん、うん……。

くるりと振り向いて、女性店員の目を見て頭をがしがしと掻く。

「ひゅいません、すぐ払います」

……。

……冷静になろうとしたんだけどなぁ。

あ、女性店員が目を逸らした。ぷるぷる震えんのやめてよ。やめてよぉ！　遣る瀬無くて隣に視線を走らせたら、めぐり先輩は「もう、しょうがないなぁ比企谷くんは」的な微笑みを浮かべていた。恥ずかしすぎて何かもう出家したい。御髪おろしたい。

×　×　×

会計で値段を聞いて、お金を払う間もずっと落ち着かなかった。なんで俺女性２人にこんな微笑ましく見守られながらお金を払ってんだ？　って思うくらい、何やら暖かい空間が出来上がっていた。ドラマのフルハウスくらい暖かい。ベクトルがちょっと違った。ぽたぽた焼のおばあちゃんくらい暖かい。もはや何が言いたいか分からなくなった。

「ありがとうございましたー」

もう一度からんからんとドアベルを鳴らして、女性店員の挨拶を聞きながら店を出る。時間帯は昼過ぎで、店に入るよりも幾分気温は上がっていて、身体を撫でる風に感じる冷気も幾分収まっていた。

しかし、今からやろうとしている行為を考えると、春を感じさせる晴れ渡った空はどうにもミスマッチに思えて落ち着かない。

「先輩、行きましょうか」

めぐり先輩の手を引きながら歩き始め、手頃な場所が近くに無いかと視線を巡らせる。別に裸になろうなどという訳では無いから、ちょっと人目につかない場所でさえあれば……と考えながらしばし歩いていると、めぐり先輩の手がさっきまでと比べて熱を帯びていることに気付く。
「……先輩？」
立ち止まってめぐり先輩に顔を向けると、手を繋いだまま俯いていることに気付いた。心配になって声を掛けると、めぐり先輩がゆっくりと顔を上げた。眉根を悩ましく寄せて、頬を朱に染めた顔はたまらない程色っぽくて、微かに震える薄く綺麗な唇は見ているだけで息を呑む。
「……あ、そ、その……自分から言っておいて難なんだけど……ちょ、ちょっと、恥ずかしくなっちゃった……えへへ」
「……っ」
とぼけたように笑って首を傾けるその仕草に、心臓を鷲掴みにされる。それと同時に、ちょっとした悪戯心が湧いた。めぐり先輩の手を握る力を強めて、一歩距離を詰める。
「……先輩は、したくないんですか？　キス」
「……っ。……あ……ぅ……」
今口にした直接的な表現はたった2文字だと言うのに、身体の底から火が点いたように熱くなるのを感じる。恥ずかしさもあるけれど、それ以上に、これから2人でしようとしている行為を明確に示したことで、この流れを曖昧にしてうやむやにすることはもう出来ない状況に追い込むことが出来た面が大きい。これからやろうとしている行為を強く実感して、心が昂っていくのを感じる。めぐり先輩は俺の言葉に目を見開いて驚き、唇を戦慄かせながら顔を逸らした。
「……そ、そういう訳じゃ……無い、んだよ……？　だ、だけど、その、やっぱり、昼間から、外でっていうのは、その、は、恥ずかしい……かなって……」
顔を逸らして目だけこちらに向けることで、婀娜っぽい流し目を送っているようにしか見えなくなっていることに本人は気付いてい

るのだろうか。震える唇をか細い指で艶かしく撫で回しているのは、意識してやっているのだろうか。ただキスをしたいというシンプルな欲求だった筈なのに、めぐり先輩の躊躇う様があまりにも扇情的で、シンプルになるはずの行為が急に複雑で、背徳的で、淫猥な行為に思えてきて、下腹部に血液が集まってくる。

先輩の両手を握って、ぐっと引き寄せた。

「先輩は、今、したくないんですか」

「……っ」

こきゅっ、と可愛く喉を鳴らす音が聞こえる。熱を帯びた瞳が微かに波打つ。

やがて、めぐり先輩は困ったように眉根を寄せて、目に笑みを浮かべながら、泣きそうな声で囁いた。

「……したい、な」

「……俺もです。行きましょう」

めぐり先輩の手を握る力を思い切り強めてしまいそうになるのを必死で堪えながら、平静を装って歩き出す。

視線を巡らせると、通りの向こうに広い公園が見えた。あそこなら……出来るかもしれない。めぐり先輩に顔を向けて、公園をちょいちょいと指差す。めぐり先輩は公園に視線を向けた後俯き、小さくこくこくと頷いた。

× × ×

都会の中にも自然を……という売りなのだろうか、その公園は中々の広さで、手入れの行き届いた木が林のように沢山存在していた。休日だがそこまで人通りは無く、その中でも特に人通りが無い場所を探して、更に公園の中の通りからは見えづらい林の中に足を踏み込んだ。特に立ち入り禁止になっている訳でもなく、幾分か人が通った事あることを示す、折れた木の枝や足跡が散見される。確率は低いだろうが、絶対人に見つからない訳では無い……そう思っただけで、ぞくぞくした。

「先輩、ここで……」

木を背にした状態でめぐり先輩を立たせて相対すると、めぐり先輩

は不安げに周りに視線を巡らせて、胸に手を当ててこくりと頷いた。
「ん……」
息混じりの艶っぽい声を漏らして、めぐり先輩が目を閉じて顎を上げる。手で顎を支えるようにして、前髪をかき上げると白く可愛らしいおでこが見えた。
さっき店を出てからまだ15分程しか経っていないと言うのに、どうしてこんなにも、まるで何時間も何日も待ちわびたかのような高揚感に包まれているのか。
確実に訪れる幸福は、それを待つ時間にこそ真の幸福がある。
どこかで聞いた言葉を思い出しながら、めぐり先輩にそっと唇を重ねた。

× × ×

唇を重ねた瞬間、まるで電気が走ったような感覚に陥った。
待ち侘びていた事もあるからだろうけど、それ以上に、めぐり先輩の唇が、昨日よりも熱く、柔らかく感じたからだ。
「んっ……んふぅ……っ」
めぐり先輩が目を閉じたまま俺の腰にそっと手を添えて、唇を愛おしそうに咥えてくる。はむっはむっと何度もあどけない仕草で咥えてくる様は本当に愛らしくて、たまらない幸福感をもたらしてくれる。待つ時間も幸せだけれど、やっぱり今この瞬間この身を包んでいる幸福感の方が大きいし心地良い。そう思った。
めぐり先輩の手を握って、そっと舌を絡める。
「んぅ……ふむぅ……っ」
その吐息には徐々に色が宿ってきて、うっすら開けられた目は幸せそうに細められている。互いの手の感触を味わいながら、ゆっくりその手を離して、今度はめぐり先輩の髪を撫で始める。頭頂部と後頭部に手を添えると、めぐり先輩がびくりと跳ねた。
「んんっ……!? んっ、んふぅっ、んむぅぅぅ……」
触れている唇がより熱を帯びて、艶めかしく震える。たまらなくなって、めぐり先輩の顎の下に再び手を添えて、くいっと上げて口内に唾液を流し込む。

「んむふぅ……っ、んっ、んっく、ごく、んふぅっ……ごく、ごく、ごく……んはぁっ、……はっ、はっ、はっ……」
　めぐり先輩が喉を鳴らす音を心行くまで堪能して唇を離すと、二人の間に淫猥な液体の橋がかかった。めぐり先輩は腰をがくつかせていて、顔は紅潮しきっていて目もとろんと蕩けている。
「はっ、はっ、はぁっ、比企谷、くん……んっ、ふあぁ……っ!?」
　上目遣いで名前を呼ばれてたまらなくなり、めぐり先輩の白く滑らかな肌触りの首に吸い付いた。唇を押し付けて強く吸い付くと、めぐり先輩が俺の背中をぎゅっと抱きしめてがくがくと震えた。
「ふあぁぁ……っ！　あっ、んはぁっ、だ、だめ、比企谷くん、これ、変、なんか変だよぉっ……ひあぁっ！」
　舌先でつついてなぞる度にめぐり先輩の身体がびくんびくんと跳ねる。その間も絶えず髪を撫で回しているのもより効果的なのか、めぐり先輩はもはや立っていられないくらいに足をがくつかせていた。
「も、もう、無理、無理だよぉ……っ。比企谷くん、お願い、許して……っ」
「……っ」
　めぐり先輩の扇情的な哀願に心が激しくざわめく。もっともっと色々したいしさせたくなったけれど……ここは外なのだと言うことを、今になって思い出した。
　めぐり先輩の首から口を離して、そっと抱き寄せる。
「はぁっ、はぁっ、んっく、はっ、はっ、はっ……」
「……」
　めぐり先輩の荒い息遣いと艶めかしい声が、胸骨から全身に響き染み渡るのを感じながら、めぐり先輩の頭をぽんぽんと撫でる。
　しばらくそうしていると、落ち着いたのかめぐり先輩から離れた。
「……ん、もう大丈夫。ありがとう」
「いえいえ。……その、俺もやりすぎました。すみません」
　頬をぽりぽりと掻きながら謝ると、めぐり先輩が首をぶんぶんと左右に振った。
「ううん、そんなことないよ。わたしも気持ち良かっ……あ」

「え」
　めぐり先輩が一瞬ぴたりと止まったかと思うと、急にざっざっと歩き始めた。あれ、歩くの超速いぞ？
「ちょ、ちょっと、めぐり先輩？」
「何でもない。何にも言ってないよ？　わたし何にも言ってないよ？」
　引き離されないのが精一杯な程の早歩きで進みめぐり先輩を、必死で追いかけながら会話を交わす。
「そうですね、気持ち良かったなんて言ってないですもんね」
　ちょっと悪戯心を含んだ言葉を言った瞬間――めぐり先輩がぴたりと止まって、くるりと振り向いた。ぷるぷると震えている顔は真っ赤で、目にはうっすら涙が浮かんでいる。
「う……うぅ……そ、そんなこと……言ってないもん……っ！」
「あ、え、ちょっと、めぐり先輩⁉」
　子どものような喋り方をしたかと思うと、踵を返して再び進み始めた。今度はさっきより更に速い。油断したら見失うレベルの早歩き。
　結局、この後追い付いて謝り倒して機嫌を直してもらうまで相当時間がかかった。どうしよう、ぷんぷんしてるめぐり先輩が可愛すぎてまた怒らせたくなってしまった……。

　　続く。

（２７）

「……さむ……っ」

早朝の澄んだ空気に身震いしながら、公園でめぐり先輩を待つ。

二人で運動することでめぐり先輩のダイエットに協力するということになったため、休みの日にも関わらず凄まじく早い時間帯に起きて、ジャージに着替えて公園に来ていた。こんな気合の要るイベントを行った事が無いので、どうしたものかとそわそわしてしまう。寒いしこれから運動するということもあり、ベンチにも座らず公園の土を踏みしめながら屈伸をしたり伸脚をしたり、震脚をしたり……俺そんな達人じゃねぇな。とにかく落ち着かずにあれやこれやと試す。

早朝にも関わらず、いやむしろ早朝だからこそなのか、公園には俺たちと同じように運動に励む人（俺たちはこれからだけど）が沢山居た。腕を大きく振ってウォーキングをしている中年女性の２人組、一体どれだけ走ったのか、まだ冬だと言うのに半袖シャツにスパッツ姿で汗ばみながら走っている２０代と思しき男性。それに向こうの広場では太極拳をやっている。やっている人は皆お爺さんお婆さんのようで……って、んん？　あの女子大生みたいな人、つい最近どっかのカフェで見たような……？　……うん、気のせいだな。気のせい。なんであの人蟷螂拳の構えしてるのか分かんねえし。太極拳やれよ。ついでに、何故かあの人に向かい合って蛇蝎拳の構えを取ってるどっかのカフェで店員として見たような女性も全然記憶に無い。記憶には無いけどツッコミたいから言うけど、太極拳やれよ。あと何で真剣勝負の雰囲気を醸し出してんだよ。周りは叱りでもするのかと思いきや、各々真面目に太極拳を行いながら、「ここから、どうなるんだ……!?」という目つきでこのアホ２人を見つめてる。ノリ良いなぁ。ていうかあの人たち、もうすっかり友達じゃねぇか。おおっと、あの人たちは知らない人知らない人……。

「あ、比企谷くん。おはよう」

ぽわんとした癒しの声音に呼びかけられて振り返ると、落ち着いた色のジャージを着用しためぐり先輩が居た。彼女はいつものおさげ

髪ではなく、ポニーテールにしていた。お、おお、新鮮……！　今思ったけどめぐり先輩にメイドさんくるりんをやってもらったら俺死ぬんじゃなかろうか。思考に脈絡が無さすぎてびっくりした。

俺がほわーと見蕩れていると、めぐり先輩が「あれ？」と呟いて、俺の後ろに視線を向けた。

「あの人たち……」

「気のせいです。行きましょう」

「え、でも」

「ここでヤツらと絡むとそれで1話分終わっちゃいますから、行きましょう」

「それ何の話？」

「何でもないです、行きましょう」

「えええ……？　う、うん……」

メタい話をしつつも、その場を離れる。ついめぐり先輩の手を掴んでしまったが、めぐり先輩が一瞬だけ目を見開いて驚いたものの、すぐに顔を綻ばせて目を細めたから安心した。というかときめいて死んだ。ちなみに背後から「ほわたぁぁぁ！」とここの作風に合わない無駄に気合の入った声が聞こえてきたけど気にしない。お互い素手の筈なのにぎゃりーんという金属音がしたんだけど、これどういうことなのん？　まあ気になるけど気にしない。

×　×　×

「うぅぅ……寒いね」

「そうですね……」

深く霧が立ち込めた公園の中を進みながら、2人して凍える。

いきなり走るのも大変かということで、まずは大股で歩くことにした。めぐり先輩よりも歩幅は大きくなるが、その分足の動きそのものを遅くすることで帳尻合わせをする。変な所に力が入ってぷるぷるしながら歩いていると、めぐり先輩が身体をぶるりと震わせた。

「……」

ここでふと、めぐり先輩に何を言おうか考えてみる。

最近はめぐり先輩に対してふざけた事を言うのもだいぶ慣れてき

たので、例え早朝であろうと自分のユニークセンスを発揮することも厭わないくらいのメンタルの強さを身に付けていた。寒さで凍えるめぐり先輩にちょっとしたジョークを言ってみよう。
「本当寒いですよね、俺が温めましょうか」
「……あ、ええっと……」
うん。
スベった。
めぐり先輩がこれ以上無い程苦々しい苦笑いを浮かべて、掛けるべき言葉を探す様子があまりに悲しくて恥ずかしい。私は貝になりたい。
うあぁぁぁぁ！　俺何してんの!?　何調子に乗ってんの!?　最近俺結構幸せなんじゃねえかとかもうちょっと明るくしてみようかとか要らんこと考えるから！　ああもう！
空を仰いで心の中で「このおーぞらーにーつーばーさーをーひろーげー」と熱唱していると、めぐり先輩がつと足を止めて、顎に手を当ててむむと考え出した。
「……どうしました？」
比企谷だだスベリ事件における心の傷はまだ癒えていなかったが、めぐり先輩の様子の変化に気になって声を掛ける。この状況で俺の心の傷とかどうでもいい。ただの自爆だし。
俺の質問にハッとして、めぐり先輩が顔を上げた。
「……それ、意外と、結構……あり、かも」
「え……」
きっと、気まずさ抜群の笑顔で、両手でガッツポーズを胸の前でしながら「う、うん、大丈夫だよ！　頑張って温まるまで歩こう！」とか言われて切なさに死ぬんだろうと予想していただけに、思いも寄らぬ返答に心底驚く。ていうか俺の予想が悲しすぎる。
めぐり先輩を見やると、顔を逸らして婀娜っぽい流し目を送っている。いつもぽわぽわと癒しオーラを放っている彼女だけに、こういう雰囲気を醸し出されるとそのギャップでくらくらする。

めぐり先輩が突然乗り気になった事に動揺しつつも、視線は自然と周りを巡って、人目に付かない場所を探していた。
「あ、そ、その、控えめで良いから、その」
「あそこ良さそうですよ。行きましょう」
「早いよ!?」
めぐり先輩のテンション高いツッコミが入った。はいはい超可愛い超可愛い。

× × ×

向かった先は屋根とベンチがある休憩所のような所で、木の柱とベンチが趣を感じさせる場所だった。この時間ならばまず人の目にはつかないだろう。その内家で落ち着いてしたいなぁという願望も湧いたが、今はこの状況を楽しもう。
朝、それも早朝だと言うのに、めぐり先輩とこういうことが出来ると分かった途端にテンションが上がってしまい、今はもう寒さなどほとんど感じなくなっていた。人って変わるもんだなぁと思う、獣に。李徴かよ。
「ひ、比企谷くん……ひあぁっ!?」
場所に着くなり、いきなりめぐり先輩の首に吸い付いた。隣を歩いているとき、髪を上げていることでちらちらと見えるうなじにずっとどきどきしていて、もう我慢出来なかった。めぐり先輩に抱きついて首の側面に吸い付きながら舌でつつくと、甘い香りを漂わせながらめぐり先輩がびくびくと震えた。
「あぁっ、ひっ、あふぁっ、だ、だめ、比企谷くん、こんなっ、あんっ、わ、わたし、ただ、ちょっと身体を寄せ合えたらって思ってただけなのに……」
震える声で宥めてくるが、その声音に俺を本気で説得しようとする力は無く、興奮で荒くなった吐息は劣情を煽ってくる。
「そうですね、もっと温め合わないと」
「え、そ、それ……はぅぅっ!」
抱きしめる力を強めて、めぐり先輩の身体を立ったままぎちぎちに拘束する。めぐり先輩のお腹に隆起した肉棒がズボン越しに押し付

けられると、めぐり先輩が泣きそうななりながら真っ赤な顔で、
「や、やぁっ……硬いよぉ……っ」
と耳元で囁いた。
前回の経験で分かったことがある。
めぐり先輩は今の関係ならきっと、こういう行為を戸惑いながらも受け入れてくれる……それは前回のめぐり先輩の行動から感じたこと。
しかし、もちろんここでがっついて怖がらせたくはない。ましてめぐり先輩のピュアすぎる反応を見てしまっているから、尚のこと気を付けねばならない。
だから、ゆっくり、徐々に、進めて行きたい。出来ればこうやって、めぐり先輩のスイッチが入った時に。今この場で出来ることは限られるから、その中でも出来ることをしよう。
周りに視線を巡らせて、人気の無い状態であることを確認する。
「先輩、今日は……この間よりもっとじっくり触ってみてください」
「え……？」
俺の腕に拘束されたままのめぐり先輩が、上気した声を上げて俺を見つめる。香ってくる甘い匂いはいっそう増していて、互いの理性がゆっくりと削られて行っているのが分かる。
めぐり先輩の瞳が、色香を纏ってゆらりと揺れる。
めぐり先輩の腕が、俺の背中にそろりと回される。
めぐり先輩が俺を抱きしめる腕にきゅっと力を込めると、めぐり先輩の手が背中から徐々に下に降りてくる。
ざわりと、股間が疼いた。
続く。

（２８）

早朝に運動する人が行き交う場所からほんの少ししか離れていない休憩所で、めぐり先輩と立ったまま抱き合う。めぐり先輩の色香を纏った瞳は、本当に俺の知っているめぐり先輩なのかと疑ってしまう程扇情的で、恐ろしい程心がざわめく。制服よりもジャージの方が、抱き合った時の密着度が上がって興奮するんだな……などと要らぬ事も考えてしまった。

「比企谷……くん……」

「……っ」

めぐり先輩が俺の胸に顔をうずめて、俺を抱きしめる手で背中を撫で回しながら徐々に下ろしていく。手のひら全体で撫でる時もあれば、指1本だけでつつっと撫でることもあり、一挙動ごとに心臓の鼓動が高鳴る。めぐり先輩のさらさらの髪を撫でながら首に舌を這わせると、「んふぁっ……」と吐息混じりの色めいた声が漏れた。

「うぐっ……」

めぐり先輩の手が、俺の腰まで辿り着き……尻に手が届いた。さわさわと尻をまさぐられてくすぐったさと心地良さに包まれていると、その手がゆっくりと身体の前面に回されてきた。期待と興奮が頭を駆け巡る内に、やがて細い指が隆起した肉棒にズボン越しで触れた。

「ふあぁっ……、こ、こんなに、こんなに硬いの……っ？」

「……っ」

めぐり先輩が俺の胸から顔を離し、顔を真っ赤にしながら両手で俺の肉棒をまさぐる。上目遣いでいやらしい質問をされて心臓が爆発しそうになるのを感じながら、めぐり先輩の両耳を髪と一緒にさらさらと撫で回す。

「あっ、んぁっ、ふっ、くふぅっ……ひ、比企谷くん、どうして、……こんなに、硬くなってるの……っ？」

「っ!?」

うわ、うわ、うわ。

卑猥だし、答えづらいし、卑猥だし。何この質問？

めぐり先輩は俺をからかっているのか本心から言っているのか判断のつきかねる表情をしながら、唇を震わせてうっとりとした表情で首を傾げて俺を見つめている。こ、これは、真面目に答えるべきなのか……？

数瞬考えたが、めぐり先輩が俺の返事を待っているであろうことに気付いて、

「……先輩とこんな風にくっついて、先輩の柔らかい感触を味わって、先輩の色っぽい声を聞いてるから……こんなになってるんですよ」

と答えると。

「――――っ」

瞳を揺らしためぐり先輩が、頬を朱に染めてこきゅっと喉を鳴らした。

「……そ、そうなん、だ……は、恥ずかしい、けど、嬉しい……かも……っ」

言って、めぐり先輩が不意に俺の首に両手を回してくんと引き寄せてきて――ちゅっ、と軽く口付けをする。驚いていると今度は俺の首に吸い付いてきて、ちゅぴちゅぴといやらしい音を立てながら再び肉棒を撫で始めた。その手つきも今さっきより明らかに積極的になっていて、一体何が起きているのかと思考が追いつかなくなる。

「うっ……んぐっ……」

首を舐めまわすめぐり先輩のざらついた舌の感触と、股間を撫で回す細い指の感触が同時に押し寄せて、腰ががくがくと震える。

「あっ、んぅっ、ちゅぴっ、ちゅぷ、ちゅるる……ぷはっ。……ふふっ」

めぐり先輩が首から唇を離すと、どきっとする程艶っぽく笑った。耳元に口を寄せてきたかと思うと、ふーっと吐息を吹きかけてきて、

「えへへ……さっきの、お返しだよ」

言って顔を離し、いたずらっぽく笑う。色香と無邪気さを混ぜ込んだ不思議な笑みに、心臓が止まるのではないかと思う程の衝撃を受ける。

いや、え、あれ？

だってめぐり先輩、図書館の時は目をぐるぐる回して……あれ、あ

れ、あれ……？
　先輩の慣れどころか成長どころか進化かよと思う程の変化に戸惑っていると、俺の混乱を汲み取ったのかめぐり先輩が優しく微笑んだ。
「えへへ、何だか……だんだん慣れてきたみたい。……んっ」
「うぐ……っ!?」
　再び首に吸い付いてきて、今度は舌先でつついたり舐ったりと口の中の動きまで激しくなる。ズボン越しとは言え、左手が玉をくにゅくにゅと揉んで、右手が反り返った竿の裏筋を波立つ動きで撫で回してくると、気が狂ってしまいそうだった。
「せ、先輩……っ」
「んふぅ……っ？」
　ズボン越しに触られるのが我慢出来なくなり、先輩の右手を掴んでズボンの中に導く。
「……ぷはっ。わ、わわっ、すご、さっきよりも硬さが分かるよぉ……っ」
　口を離して、パンツ越しに肉棒に触れて、めぐり先輩が目を見開いて興奮した声を上げる。右手でしばらくくにくにと触ると、左手をズボンの中に滑り込ませようとして、ぴたりと止まった。
「んー……ジャージだとちょっと……」
　めぐり先輩がぽそりと呟いて、俺をちらりと見る。ああ、確かに、ジャージのズボンの中に片手を滑り込ませるだけでもそれなりに大変なのに、両手を滑り込ませるなんていうのは……かなり面倒だろう。
「……じゃあ、先輩が下ろしてください」
　試しに言ってみると、めぐり先輩が一瞬目をむいて驚いたが、やがてこくりと頷いた。
×　×　×
「……しゃがんでいい？」
「え？　あ、はい」
　めぐり先輩の意図がよく分からぬまま了承すると、めぐり先輩が

すっとしゃがみこんだ。何で体勢を変えたんだ……？　と思ったけれど、すぐにその視線の熱っぽさに気付いて、彼女の心づもりが分かった。
「……そんなに、近くで見たいんですか？」
「っ!?　あ、そ、そんな、こと、は……っ」
　ストレートに言うと、めぐり先輩が顔を真っ赤にして目を泳がせた。めぐり先輩の不自然な首の動きに合わせて、ポニーテールもゆらゆらと揺れる。どんどんエロくなっていくのに、こういうピュアな可愛さもそのまま残してるとか……何だろう、この人は俺を悶え死にさせたいのだろうか。
「そ、そういうのはいいからっ！　ほら、じゃあ、下げ、る、よ……？」
「あ、は、はい、お願いします」
　なんだろう、ズボンを下げるだけ、言ったらパンツを見せるだけなんだけど、こうもめぐり先輩に恥ずかしがられると、俺だけ恥ずかしくなってくる。まあ、単純に異性の下着姿を見るのが恥ずかしいのかもしれない。
　スイッチが入ったと思われるめぐり先輩でも、ここに来てまた恥ずかしくなったのか、図書館の時のように目をぐるぐるとさせる。あ、これあかんやつか……？　と思ったが、前回と違って今回は恥ずかしさを興奮が上回ったのか、ズボンに指を引っ掛けて、ゆっくりと下げていった。
　めぐり先輩が手を俺の太腿の中程まで下ろしてボクサーパンツが姿を現すと、冷えた外気に下半身が晒されてぶるりと身震いした。案の定思い切り隆起した布を見て、ここまで興奮していたのかと自分自身に驚く。
「ふわぁ……っ」
　めぐり先輩が可愛らしい声を上げて、あわあわ言いながら手で目を覆った。ああもう撫で回したい。
「……」
　あ、ちらっと指の隙間から覗いた。こんにちは。
「……」

あ、段々手を下げていく。よし、もうちょっとだ！

「……」

手を完全に下げた。

「……」

俺の腰に手を添えて、じーっと見てる。あれ、何か俺が恥ずかしくなってきた……。

めぐり先輩が、こきゅっと喉を鳴らした。

「す……ごい……っ」

その瞳にはもう恥ずかしがっている気配は無く、確かな好奇心と興奮を宿していた。

続く。

（２９）

「わ、わ、わ、す……ごい……っ」

興奮で上ずった声を上げて、めぐり先輩が顔を傾けてゆっくりとその綺麗な顔を下腹部に近付けてくる。手をそろりと伸ばして、指が布越しに肉棒に触れる。

「すご、い、熱……い、よぉ……っ」

唇をふるふると震わせて、めぐり先輩が泣きそうな声を上げる。その声とは対照的に顔は微かな笑みを浮かべていて、妖艶なギャップに心臓がどくんと跳ねる。

「うおっ……!?」

めぐり先輩が突然、反り返った肉棒の裏筋をきゅむっと握り締めた為に思わず声が出た。

「硬い……こんなに熱くて、あ、すご、太……い……」

「〜〜〜〜!?」

うっとりとした表情で事細かに解説されて、あまりの混乱と興奮で頭が爆発しそうになる。

「ちょ、ちょっと、先輩、今自分が何言ってるか分かって――」

「あ、先っぽ……濡れてる？」

「え……」

死にてえ。

下に目をやると、パンツの一部――肉棒の先端が、あまりに分かりやすく濡れていた。

何これ。今の状況を冷静に考えれば考える程恥ずかしくなってくるんだけど。

ああもうどうしよう、いっそ何も考えない方が良いのか、無我の境地にこの場で達すれば良いのか、いやでもそれ難易度高すぎるだろ――などと考えていると。

「ひゃん……っ！」

「うぇっ？」

めぐり先輩が可愛らしい声を上げて驚いた。見ると、めぐり先輩の

指とパンツとの間に――うっすらと糸が引いていた。めぐり先輩は口にもう片方の手を当てて、目を見開いて見つめている。
「比企谷くん……これって、何？　どうしてこんな風になるの……？」
鬼の追撃、再び。
「え、えーと、これは、その……っ!?」
どう答えたら良いものやらと心底困っていると、めぐり先輩が糸を引いていた方の手で亀頭をくにりと握って、口に当てていた方の手で竿の下の方と玉を触ってきた。そのまま指をさわさわと動かすと、焦れったくもたまらない快感が下腹部から全身にじんわりと広がる。
「ね、どうして……っ？」
「……っ」
とろんとした目で首を傾げながら、顔を肉棒に近付けて微かに鼻をすんすんと鳴らし、熱っぽい上目遣いで問うてくる。
ちょ、ちょっと待って、頭が追いつかない……っ！
え、何、これが言葉責めってやつ？　しかも天然物？　え、え、え？
答えに詰まっていると。
「んー……もうっ、早く答えてっ？」
「え……うおっ!?」
めぐり先輩がパンツのゴム部分に指を引っ掛けて――ぐんと引き下ろした。

×　×　×

ぶるんっ。
パンツを下ろした瞬間、一度下に向きを変えた肉棒が再び重力に逆らって反り立ち、めぐり先輩の目の前に姿を現した。
「わ、わ、わ……っ」
めぐり先輩が両手を口に当てて驚いている。その瞳には微かな恥じらいも浮かんでいるが、それ以上の興奮と好奇心が滲んでいる。
……どうやら、今の衝撃で質問のことは忘れてくれたらしい。良かった良かった……のか？
「お、男の人、って……こんなに、なるんだ……わ、わ、わ……っ」

「う……っ！」
　めぐり先輩の手が肉棒にそっと添えられて、呻き声が漏れる。肉棒は冬の外気に何ら負けることなく、湯気が立ちそうな程の熱を帯びている。そしてめぐり先輩の手に愛でられて悦ぶかのようにひくひくと震えている。本当に今目の前で起きていることは現実なのかと疑いたくなった。
「おつゆ……ここから出てるんだね……」
「くぉっ……」
　めぐり先輩が鈴口に人差し指を当ててぴとぴとと音を立てる。その度にぴくぴくと反応してしまい、鈴口と指との間に伸びている糸の粘度が増していく。
「せ、先輩……っ」
「ん……なぁに？」
　左手人差し指と親指で輪を作り、それで雁首をきゅっと締め付けて、右手の指で亀頭を撫でて焦らすような刺激を与え続けながら、めぐり先輩が目を細めて首を傾げた。本当に言っていいものかと迷いながらも、ごくりと喉を鳴らして要求を告げる。
「舐めて……くれますか？」
×　×　×
　言った瞬間、めぐり先輩の目が見開いて、肉棒で遊ぶ指の動きが止まった。
「舐めて……ほしいの？」
「はい」
「……わたしに？」
「はい」
「わたしで……良いの？」
「願ってもないです」
　ここまで言ったところでめぐり先輩が「ん……」と吐息混じりの声を漏らしながら俯いて、こくりと喉を鳴らした。そして顔を上げると、にっこり目を細める。
「……わかった」

「……っ！　ありがとうございま……っ」
お礼の言葉が止まってしまった。
てっきり、俺がお礼を言うのを聞いて、そこから逡巡しながらもゆっくり舌を伸ばして……くらいのじっくりとした展開になるかと思っていたのに。
めぐり先輩は――両手で竿を掴み固定して、口を縦に大きく開けて舌をべろりと垂らし、その淫らな顔をゆっくり近付けてきた。
「……っ」
あまりの事態に、思考も言葉も溶けて消えていく。
めぐり先輩の口に、俺の肉棒が、食べられる。
そんな、確かな予感がした。
「んふぁっ……」
めぐり先輩の熱い吐息が反り返った肉棒の裏筋に当たると、竿がめぐり先輩の手の中でびくりと跳ねた。めぐり先輩はよほど夢中になっているのか、俺の反応を意にも介さず顔を近付けて――やがて、ざらりとした舌の感触が亀頭の裏に着地した。
「お……ぁ……っ」
たまらず両手でめぐり先輩の頭を掴むと、口を開けたままめぐり先輩が「んふぁぁ……っ」と甘い声を漏らし、更に熱い吐息で肉棒全体を包んだ。
まずい、まずい、まずい。
あまりに気持ち良すぎて、あまりに興奮しすぎて、このままではめぐり先輩に何をしてしまうか分からない。引き返すなら今だ、と思った瞬間。
「れろっ……あむっ」
「んぐっ!?」
めぐり先輩はあろうことか、舌を引っ込めるのと同時に唇をOの字に開いて、亀頭をぐぷりと咥え込んだ。
「んっ、んぐっ……おごっ、ぅんっ、ぅんぐっ……」
どうしたら良いのか分からないのだろうか、目に微かに涙を浮かべながら上目遣いで俺を見て、そのまま掘り進むように口を左右にゆっ

くり揺らしながら奥まで咥え込んでいく。
「おっ、んぐぅっ、んおぉっ、おぅっ、んむぅぅぅ……っ」
「あっ、それ、やば、やばい……です……っ」
歯が当たらないようにきちんと唇をすぼめているめぐり先輩に驚きながら快感に悶えるが、このままではめぐり先輩がどんどん苦しくなっていくのは目に見えている。
「先輩……っ！」
「んふぅっ……？」
めぐり先輩の頭をゆっくりぐいっと引っ張って、ここまでの快感とこれから訪れていたであろう更なる快感に名残惜しみながらも別れを告げて、肉棒から口を引き抜いた。でろりと垂れた先輩の舌と肉棒の間に何本もの太さの違う糸が引かれ、めぐり先輩の口の中で起きていた淫猥な出来事を思って劣情で背筋が焼ける。
「んはぁっ……はぁ、はぁ、はぁ……。……ごめんね？　気持ち良く、なかった？」
眉根を寄せて寂しそうに尋ねるめぐり先輩の瞳に撃ち抜かれながら、ぶんぶんと猛烈な勢いで首を振る。
「ぜんぜん。ぜんぜん。めっちゃ気持ち良かったです。だけど……あれだと、めぐり先輩がどんどん苦しくなっちゃいますから。……だから、徐々に慣れていきましょう」
今後いつか喉奥まで咥えてもらいたいという期待を込めて、「あれはやらない方が良い」という言い方は避けた。
「……うん」
俺の提案にめぐり先輩がこくりと頷くと、再び竿を両手で押さえて、鈴口にちゅっとキスをした。たったそれだけの行為でも再び鈴口からぷっくりとカウパーが浮かんで、それをめぐり先輩がちゅるりと吸い取って、にっこり微笑みながら首を傾げる。
「じゃあ……比企谷くんがしてほしいことを言って？　わたし、頑張るから」
「……は、はい……っ」
ああ、もう。

正直。
お嫁さんに欲しい。
それも、今すぐ。
めぐり先輩の健気さに内心悶え転がりつつも、何とか平静を保って返事が出来た。
めぐり先輩の頭をくしゃりと撫でると、気持ち良さそうに目を細めた。
「それじゃ、まずは俺がベンチに座ります。そこでしてください」
「……ん、わかった」
めぐり先輩が頬を朱に染めて、こくりと頷く。
めぐり先輩の頭を撫でながら、早速何をしてもらおうかと夢を膨らませながら、めぐり先輩の可愛らしい顔を見つめて頬を緩めた。
続く。

（３０）

ベンチに座って、ひと呼吸置く。

まだ早朝と呼べる時間帯だし、仮に人が通ってもここからは距離があるから、もし人がこちらに近付いてきてもすぐに身だしなみを整える事は出来る。……存分に楽しみたいが故の、全身全霊の予防線を貼る作業だ。

周りに視線を巡らせながら、ズボンとパンツを同時にずるりと脱ぐ。めぐり先輩が「ひゃわ……っ」と小さな声を上げたけど今は気にしない。可愛すぎて死ぬかと思ったけど気にしない。

「先輩、ここ……座ってください」

ズボンを尻の下に敷いて足を開き、真ん中にめぐり先輩が入り込むスペースを確保して、ゆっくりと視線で促す。

「ん……」

熱に浮かされてぽへっとした顔をしためぐり先輩がこくりと頷いて、ゆっくりと腰を下ろした。冬の外気に晒されながらも火山のような熱を保って屹立している肉棒の横から、しゃがみこんだめぐり先輩の顔がひょいと覗き込んできた。

「それじゃ、まずは……」

「う、うん……」

めぐり先輩の目が虚ろなのを気にしつつも、どこから舐めてもらおうかと思っていると――突然、亀頭がぱくりと飲み込まれた。口腔の湿り気とぬめりに下半身が痺れる。

「ちょ、ちょっと、先輩……っ!?」

「んちゅっ、ちゅぷっ、ちゅるる、ちゅりゅ、くぷくぷ、んふぅぅぅ……っ」

めぐり先輩が虚ろな目をしたまま、頬をすぼめて亀頭をしゃぶる。早朝の澄んだ空気の中に卑猥なすすり音が響く。

興奮で膝をがくがく震わせながらめぐり先輩の頭を掴んで引き離そうとすると、

「んふぅぁぁぁぁ……っ」

「……っ」
淫猥な吐息を漏らしながら、めぐり先輩がOの字に窄めた唇で亀頭を締め付けてきた。引き離す動作が自分で快感を増幅させる動作になってしまい、ぞわぞわとした感覚が背中を駆け抜ける。めぐり先輩の喉奥に肉棒を突き立てたい強烈な欲求に駆られたが、それを何とか抑えた。
ずるりと引き離すと、亀頭とめぐり先輩のかぽっと開けた口との間に幾本もの糸が伸びて、思い思いの速度で落下していく。
「せ、先輩、いきなり何やってんですか……っ」
息を荒げながら、めぐり先輩の髪を撫でて叱る。めぐり先輩はハッとして、頬を真っ赤に染めて俺の手の甲に自分の手を重ねた。
「ご、ごめんね……？　比企谷くんが望もうようにって思ってたのに……いざ目の前にしたら、なんか我慢出来なくなっちゃっ……て……っ」
言いながら、めぐり先輩が再び口を艶かしく開けて、物欲しそうに舌を垂らして亀頭に顔を寄せる。
「ちょ、ちょっと……っ」
予想外にも程があった。
あの、ピュアで天使そのものだっためぐり先輩が……まさか、こんなに淫猥になるだなんて。
最高。
や、そうじゃなくて。
どうするのが良いかと、考えを巡らせる。
「……」
……このままでは、無理はさせないようにする為に仕切り直した意味が無くなってしまう。
「せ、先輩……っ」
「んはぁっ……？」
頭をがしっと掴んで、口淫の進撃を食い止める。先輩はまたスイッチが入ってしまったようで、「どうして止めるの？」と言わんばかりの表情で首を傾げて、舌をちろちろと悩ましげに動かしている。

「……ちゃんと言うこと聞かないと、またウォーキングに戻っちゃいますよ」
「……あっ……」
寂しげな声を漏らして、めぐり先輩が舌を口にしまって、唇を引き結ぶ。やがて口をゆっくり開いて中にある赤い舌を覗かせると、首をふるふると振った。
「そ……それは、やだ、だめ……。ごめんなさい、ちゃんと言うこと聞くから……許して……ね……？」
「……っ」
あ、あれ、別にめぐり先輩が謝ることでも無い気がするんだけどな……なんでこんな従順になってんのかな……。い、いかん、何かに目覚めそうだ。
めぐり先輩は肉棒の裏側に顔をうずめて、竿の根元の裏筋に緩慢な動きで舌をちろちろと這わせながら亀頭をゆっくりと撫で回している。
「ごめ……んっ……ちゅく、くちゅくちゅ……許し……て……っ」
必死で奉仕してくれる姿が、何ともいじらしくて、可愛くて、愛おしくて――いじめたくなってしまう。だけど今は我慢。めぐり先輩にどれくらいやっていいのか、まだ分からないし。
取り敢えず、感想を述べよう。
「……それめっちゃ良いです」
めぐり先輩が謝罪の意を込めてやっていた行為ではあるのだけど。俺はこれでイクことは無いだろうけれど気持ち良いからずっとやってほしいし、めぐり先輩もあごが痛くならないであろうやり方だったので、最初に取り組むやり方としてはベストに近い選択だった。
「んふぅっ……本当？」
めぐり先輩が嬉しそうに目を細める。あーもうほんと家に持ち帰りたい。……真剣に検討するべきだろうか。
「ほんとです、すげえ気持ち良いです」
「許してくれる……？」
「余裕で許しますよ。てか最初から責める気は無いですよ」

言うと、めぐり先輩が目をぱちくりとさせて、口を離した。
「そっか……比企谷くん、優しいね」
「や、別にそんなことは――」
言いかけたところで、めぐり先輩が鈴口にちゅっと口付けをする。固まっていると、めぐり先輩はにっこり微笑んで、そのまま舌を亀頭の裏筋に押し当てて、竿に手を当ててつつつと根元まで舌を滑らせていった。
「おぉぉぉ……っ」
極楽のごとき快感に身体を震わせると、めぐり先輩が上目遣いで嬉しそうに目を細めた。
「じゃあ……これ、いっぱいしてあげるね」
「お、お願い、します……っ」
これから確実に訪れる天国の予感に心を躍らせながら、めぐり先輩の頭をくしゃりと撫でた。

× × ×

「ちろちろ、ちゅく、ちゅぷ、ぷちゅ、ちゅるる、んふぅっ、ちゅっ、ちゅっ、ぴちゃぴちゃ……んはぁっ」
「あっ、うっ、くぅっ、おっ、おぉっ、うぁぁ……っ」
情けない声を際限なく漏らしてしまう。
めぐり先輩は俺の反応を具に観察して、健気に気持ち良いところを探ってくれる。どうしてほしいかと何度も聞いては、求めたことを忠実にやってくれる。天国としか言いようがなかった。
その努力の甲斐あってか、時間を追うごとに凄まじい勢いで快感が増してくる。今は陰嚢に吸い付いて、口の中でころころと転がされていた。
「んっ、んふぅっ、ちゅっ、ちゅぷぷっ、ちゅぱっ……んはぁっ」
めぐり先輩のせわしない息遣いに、唾液にまみれた陰毛がそよぐ。めぐり先輩の唾液が尻まで伝ってひんやりして、この人がどれだけ一生懸命舐めてくれているのかが分かった。
「先輩……、そろそろ、もう一度咥えてみますか？」
「ん……っ」

亀頭の裏にざらりとした舌をめいっぱい這わせて舐り回しながら、めぐり先輩がこくりと頷いた。

続く。

（３１）

「あーーー……んっ」
「くぁっ……」
　亀頭をぱくりと咥え込まれて、たまらず声を漏らす。先輩が頬をすぼめている様はひどく淫猥で、見ているだけで背筋がちりちりと焼ける思いがする。めぐり先輩の口内の温もりに浸りながら、やってほしいことを少しずつ伝える。
「徐々に奥まで咥えながら、舌で亀頭――先っぽの赤い部分のことです。そこ、つついてください」
「んっ、んふぅっ？　ちゅっ、ちゅぴっ、ちゅぷちゅぷ……」
「……うっ、くぅぁっ、やば、先輩、めっちゃ気持ち良いです……っ」
　めぐり先輩の髪を撫でると、めぐり先輩が心の底から嬉しそうに目を細めた。
「それじゃ、舌でつつくのをやめないようにしながら、そう、唇で咥えて歯が当たらないようにして、徐々に奥に……うぁぁ……っ」
　めぐり先輩が目で「こう？」と聞きながら、ゆっくりと深く咥え込んでゆく。止まることなく喉奥に達すると、喉奥に亀頭がこつこつと当たって、口内全体がきゅうっと締まって射精への欲求が一気に増した。
「あ、先輩、これもうやばいですっ……うぁっ!?」
　めぐり先輩が、口をＯの字にすぼめたまま口が肉棒から離れる寸前まで引いて、再びぐぽんと咥え込んできた。引き抜く際の唇によるしごき上げと、咥え込んだ際の口内全体の締め付けが連続して襲ってきて、下半身の決壊が一気に近付く。
「じゅっぷ、ぐぽっ、がっぽ、ぐぽっ、ぐぽっ、じゅるる、ぢゅるるる、ちゅぷぷぷぷ……っ」
「あっ、あっ、うっ、くぅっ、うおぉぉ……っ」
　意識が刈り取られそうになる程の快感に脳を焼かれる。めぐり先輩を見ると、俺の腰に腕を回して抱きしめてながら一生懸命咥え込んでいて、決してその綺麗な唇を肉棒から離れようとしない。

「せ、先輩、先輩、俺、もう……っ」
懇願するように呟いて、足を先輩の背中に回してぐんと引き寄せる。その分だけめぐり先輩が更に深く肉棒を咥え込む形になり、苦しくないだろうか心配になる。しかしめぐり先輩は苦しいどころか、むしろ喜悦ととれる声を漏らした。
「んむぅぅぅ……っ、んっ、んふぅっ、ちゅっ、ちゅぷ、くぷぷ、ぐぷぷぷ、じゅるる、じゅっ、じゅぽっ、じゅぷぷぷ……」
「あっ、あっ、やばっ、先輩、もう、出ます、出ます、思いっきり出します……っ」
言って、先輩の両頬に手を添える。
「んふぅっ……？」
先輩がうっとりとした目で、疑問符を浮かべる。
「……あ……」
か細い声を漏らして、ふと気付く。
先輩は今はこうやって積極的に性的な奉仕をしてくれているけれど、本来はきっと、そういうものにほとんど触れていない気がする。そうでなければ図書館であんなリアクションはしなかっただろうし（もちろん、生で見ての驚きというのは大きいのだろうけれど）。
――ということは、今から何が起こるのか、めぐり先輩はちゃんと分かっていないんじゃないか……？　射精のことは知っていたとしても、恐らくこれから先輩の口を犯す精液の噴射の勢いは、尋常ならざるものになるはずだ。心の準備無しではとても耐えられないだろう。
「先輩、俺、今から――」
説明をしようとした、その矢先。
「んふぅ……っ」
――「今から『出します』」と捉えてしまったのだろうか。
めぐり先輩は、目を細めて小さく頷き、そこからずるりと肉棒を唇でしごきながら顔を引いていき、唇が雁首に引っかかったところで唇できゅっと一際強く締め付けて、一気に喉奥まで咥え込んできた。――喉奥まで咥えてなお、舌で亀頭をちろちろと舐りながら。

「あっ――」
視界が明滅して、マグマの奔流が制御しきれない勢いとなって下腹部からせり上がってくる。まだ伝えるべきことを伝えていないのに……崩壊の瞬間は、一切の我慢も及ばずに訪れて、粘度の高い液体が尿道を伝って、一気に噴き出した。
――ごぶっ、どぶっ、どぶどぶっ、ぶびゅるっ、びゅぶっ、びゅるるる……っ。
「んふぅっ!? んんっ、おぐっ、んっく、ごくっ、おごっ、んぐぅっ、んくぅぅ……っ」
めぐり先輩が目を白黒させながら、喉奥に叩きつけられるゼリーの如き粘度の精液を必死で飲み込む。俺が足でめぐり先輩を拘束しているし、めぐり先輩自身も俺の背中に腕を回してぎゅぅっと抱きしめている為、飲み込む以外の対処の方法は無い。
「んっ、ごくっ、んふぅっ、んっく、ごく、ごきゅっ、んふぅっ、んむぅぅ……んむぅぅ、んふぅぅぅぅ……んっ、んっく……ぷはっ、はっ、はっ、はぁっ……」
「……っ」
な、なんか。
なんだろう。
めぐり先輩……途中から、なんか美味しそうに飲み込んでなかったか？　気のせい？　あれ？
めぐり先輩は最後まできっちり飲み込むと、口が本能的に動いたのか、唇をすぼめて残った白濁液を残さず吸い取った。背中をぶるりと震わせて、めぐり先輩が頬をすぼめた淫猥な絵面に見とれる。
「……ぷはっ」
今度こそ口を離しためぐり先輩は、幸せそうに口をかぱっと縦に開けて舌を垂らし、まるで「わたし、全部飲んだよ」とアピールせんばかりに口の中を見せた。口の中は唾液と若干の白濁液が入り混じった粘度の高い液体で糸を引いていて、出したばかりだというのに全く勃起が収まらなくなってしまった。
「せ、先輩、大丈夫でしたか？　説明してなくてすいません……」

理由はどうであれ、めぐり先輩を驚かせてしまったことに変わりはない。
申し訳ないと思っていると、めぐり先輩が首をふるふると横に振った。
「大丈夫だよ、比企谷くん」
「あ、そ、そうですか。それなら良かった……」
「そ、それに……」
「？　それに？」
許しを得た上に何の言葉が追加されるのか、不思議に思う。
めぐり先輩は頬をほんのり朱に染めながら、言うべきが否か迷っているのか視線をちらちらと俺に合わせては逸らしている。
「めぐり先輩？」
「え、ええっと、その……」
もう一度目を逸らして、そして視線を俺に向けた。
「わ、わたし、この味、結構好き、かも……っ」
「え」
なんだって。
頭が真っ白になった。
「え、え、え？　せ、先輩、今のはどういう……」
どきどきが止まらないままめぐり先輩に詰め寄ると、めぐり先輩は激しく目を泳がせてあわあわ慌て始めた。
「あ、べ、別に深い意味は無くてね？　その、今まで口にしたことの無い味で、しょっぱいような苦いような感じがするんだけど……その、何て言うか、く、く、くせに……なり、そうで……」
「え、ほんとですか、え、え、え」
「も、もう！　この話はおしまい！」
全力で追求すると、めぐり先輩は顔を真っ赤にしながらぷいと顔を背けてしまった。背けたところで顔は股座にあるのでとてもシュール。
――ここで、不意に少しだけいじめたくなった。
「先輩。そうは言っても、俺のここ、まだぐしょぐしょですよ」

「え？　……あ……」
先輩の視線を肉棒に向けさせる。先輩が吸い取りながら口を離したとはいえ、まだ先輩の唾液や白濁液がところどころに散見される。
「……ちゃんと、綺麗にしてください」
言って、めぐり先輩の頭を掴んでゆっくりと引き寄せる。
「あっ、やっ、だめ、また舐めたりなんかしたら、わたし、わたし……っ」
言葉ではそんなことを言いながらも、めぐり先輩の目には確かに情欲の炎が点っていて。たまらないギャップにごくりと喉を鳴らして、ここから再び訪れる悦楽の時間に心を躍らせた。

続く。

（３２）

「ほら、先輩、きちんと綺麗にしてください」
「あ、う、うぅ……」
射精を終えて尚隆起したままの肉棒に、めぐり先輩の顔をぐぐぐと引き寄せる。めぐり先輩は顔を逸らしながらも熱に惚けた視線を肉棒に送っていて、顔を寄せるにつれ徐々に正面を向いて、やがて肉棒を目の前から見つめる体勢になった。
「ほら、舌出してください。じゃないと綺麗に出来ませんよ」
「あ、比企谷……くんっ、そんな……うぅ……」
めぐり先輩をいじめる楽しさというものが分かってきた自分を認識して、俄かにぞくぞくし始めた。
めぐり先輩の鼻に亀頭が当たる寸前まで顔を引き寄せると、めぐり先輩は観念したのか恥ずかしそうに舌をちろりと出した。
「んっ……ちゅぴ、ちゅっ、ちゅるっ……」
「うっ……くぅっ……」
鈴口を舌先で様子を見るようにつつかれて、ゆっくりと口付けされる。味見するかのように亀頭に口付けするめぐり先輩の目が、ゆっくりと艶を帯び始めた。
「それ、すげぇ良いです。今度は自分が思うように綺麗にしてみてください」
「え……う、うん……」
頭を撫でながら言うと、めぐり先輩は眉根を寄せて困った顔をしながらも、鈴口を再び舌先でつついて、竿に手を添えるとそのままゆっくりと亀頭の裏から竿を伝って陰嚢まで舌を這わせた。
「んふぅっ、んんっ、ちゅぴっ、ちゅぷぷ、ちゅろろろ……ん、んっく、あむ、あむ、あむ……」
「うぐっ……」
陰嚢を口の中で転がされて、ふと気付く。
……これ、お掃除じゃないんじゃなかろうか。
めぐり先輩の顔を見てみる。

「んっ、ふぅんっ、ちゅっ、ちゅっ、ちゅっ、ちゅぴ、ちゅぽっ……」
……ものすごく、うっとりしてらっしゃる。
めぐり先輩、もしかして……スイッチが入ったんじゃなかろうか。
「あ、あの～……先輩？」
寝起きドッキリばりのそろりとした声音で、めぐり先輩に呼びかける。
「んっ、んふぅっ……うん？　なぁに？　どうしたの？」
亀頭を念入りに舐めていためぐり先輩が、数秒遅れてようやく反応する。しかしその様子もどこかいつもとは違って、なんとなくぽわんとした表情をしていて……何となく、ああ、これが女の人が発情した顔なのか、と、そう思った。
しかし、どうしたものか。取り敢えず、綺麗にしてもらうという最初の目的は果たすか。そのためにはめぐり先輩に一度歯止めをかけてもらわないと。
「えぇっと……めぐり先輩？　そんなに念入りに舐められると……その、またやばくなるんで、それくらいで十分ですよ？」
「あぁっ……また、先っぽからぁ……っ」
「え」
めぐり先輩がうっとりと間延びした声を出して、鈴口に目をやる。そこには、めぐり先輩の度重なる口淫により再びカウパーがぷっくりと滲んでいた。
「綺麗に……しなきゃ、ね？」
「ちょ、ちょっと……っ」
明らかに様子がおかしいめぐり先輩に戸惑う。いくらなんでも、こんなに変わるもんなのか……？
めぐり先輩はおもむろに口をぱっくりと縦に開いて、
「……あむっ」
亀頭に、かぶりついた。
「んっ、んぐんぐっ、ちゅる、ぢゅるる、じゅぷっ、じゅぷぷ……」
亀頭を丸々咥えられて、熱く湿った口内でめぐり先輩の舌が鈴口を幾度と無くつつき、撫で、舐り回している。

「せ、先輩っ、だから……っ」
　めぐり先輩の頭を掴んで、何とか引き離す。
「んふぅぅ……っ、比企谷くん、まだ、綺麗にしなきゃいけないよ……？　いくら舐めても出てくる……」
「うぐ……」
　めぐり先輩の熱い眼差しが、凝りもせずカウパーを浮かばせている鈴口に向けられている。
「それに……やっぱり、これ、この味……好き……っ」
「え――」
　一瞬、頭が真っ白になった。
　俺がそんな状態になっても尚、めぐり先輩は言葉を続ける。
「ほら、ね？　綺麗にしなきゃ……」
　艶っぽく微笑んで、めぐり先輩が俺の手を掴み、俺の太腿の上に乗せて固定する。
「ほら、綺麗にしよ……っ？」
　俺が返事をするのを待ちもせずに、めぐり先輩はもう一度肉棒を咥え込んで……今度は、一気に喉奥まで咥え込んで来た。めぐり先輩の口内を犯す感触にぞわぞわとした快感が走る。
「んっ……おごっ……」
　めぐり先輩が頬をすぼめて、喉奥に亀頭を当てた状態で苦しそうに、でもどこか嬉しそうに呻く。めぐり先輩の熱い鼻息が恥毛をそよがせて、本当に喉奥まで咥えているのだという実感が視覚から叩き込まれる。
「せ、先輩、これ、ほんとに……っ」
　一気に込み上げてきた射精の衝動に身悶えしながら、めぐり先輩に何とか歯止めをかけようと身を捩るけれど……めぐり先輩はそんな俺の抵抗を意に介さず、俺の手をがっちり掴んだまま動こうとしない。そのため、俺が抵抗のため身を捩った行為は、めぐり先輩の口内に肉茎を擦り付けて快感を助長させるだけに終わった。
「おごっ……んぐっ、じゅるっ、じゅっぷ、じゅぷぷぷ、ぐぽんっ、ぐぽんっ、ぢゅろろろろろ……っ」

めぐり先輩が口内の肉棒をぬめった舌で蹂躙しながら、ゆっくりと口を上下に動かす。
……ああ、もう、これはダメそうだ……。
「せ、先輩、俺、また出ます、これ、やばいっ、出ます、出ます、出ます……っ」
言うと、めぐり先輩が顔をこちらに向けて……その瞳が、妖しく光った。不安が過ぎった次の瞬間、めぐり先輩が一気に肉棒から口を離し、そこからぐぽんっと奥まで咥え込んだ。そこから止まることなく、唇を強烈にすぼめながらピストンを始める。
「じゅっぷ、ぐぷっ、じゅぽんっ、ごぷっ、んふぅっ、じゅるる、んふぁっ、んぐぅぅ……っ」
めぐり先輩が肉棒を一心不乱に舐る姿を見て、この人は本当にあのめぐり先輩なのかという疑問さえ湧く。けれどそんな疑問も、込み上げる欲望にあっと言う間に押し流された。
「あっ、もう、出っ、る……っ」
引き抜きにかかっていためぐり先輩の頭を掴んで、熱く滾った口内にずぐんと肉棒を突き立てる。めぐり先輩が目を明滅させながらも口内をぎゅっと締めると、身体中が強張って、下半身が決壊した。
「うぐっ、もう、イっ――」
言葉を最後まで紡ぐことも叶わずに。
めぐり先輩の口内に、夥しい量の白濁を撒き散らした。
「んっ、んっ、んっ、んっ……」
先程の射精とさほど変わらない勢いで噴き出したにも関わらず、めぐり先輩は蕩けた表情のまま、ゆっくりと飲み込んでいる。
「ふぅぅぅぅ……っ」
短時間で2度、それも自分でした時とは比べ物にならない程の量の白濁液を吐き出して、身体の底から力が抜ける。
……結局、お掃除のつもりがもう一度抜いてもらってしまった。しかもさっきよりも積極的に責められての射精だ。正直、もう何が何だか分からない。
「先輩……まだちょっと先に残ってると思いますから、吸い出してく

れますか……」
　気だるげな声でお願いしてめぐり先輩の頭を撫でると、嬉しそうに目を細めてちゅるちゅると鈴口から残りの白濁を吸い取ってくれた。
×　×　×
「うぅぅぅ

「しましたしました。めっちゃしてくれました。まさかあそこまでしてくれるとは……嬉しい意味での予想外でした。戸惑いはしましたけど、でも、最高でしたよ」
全力で褒めたつもりで言うと、めぐり先輩の目がぐるぐる回り出した。
「あ、あぅ、あぅぅぅ……」
「？　先輩？」
「はわわわわわわ……て、て、て……」
「？　て？」
立ち上がりながら妙なことを言い出しためぐり先輩の言葉を繰り返すと、
「うぅぅぅぅぅぅぅぅ……手、洗ってくるーーーーーーーーっ！」
「あ、先輩？　ちょ、ええっ？」
近くにあったトイレに、転んだら3回転くらいしてしまいそうな勢いで駆け込んでいった。
そして、今。
恥ずかしがってるめぐり先輩が、超可愛い。
や、そうじゃなくて。
「あうぅぅぅぅぅぅぅ……」
……どうやらめぐり先輩、さっきの（恐らく2回目の）自分が相当夢中になって……所謂トランス状態になって、物凄く淫猥なことを言ったり行ったりしていたことを、全力で恥ずかしがっているようだ。さっきのやりとりで俺はめぐり先輩が恥ずかしがっていることに気付かず、追い打ちをかけてしまったらしい。あれだけのことをしていたんだから、まさか今更……と思っての会話だったのだけど、めぐり先輩からするとほんのついさっきまでの自分に相当の驚きを持っていたようだ。
さて、どうしたものか。
頭をがしがしと掻いて、隣（もはやくっついてる）を見やる。
「あー……っと、先輩」

呼びかけると、唸り声がぴたりと止まった。
「……なに？」
手と顔の隙間から目を覗かせて、俺をちらりと覗いてくる。撫でたい。
「まぁ、その、何でしょう……ええっと、うん、俺としては、さっきの先輩はめちゃくちゃ可愛かったし、その、言ってしまえば……すげぇ気持ち良かったんで……あんまり、気にしないでください。可愛かったです」
「……」
めぐり先輩が、再び手で顔を覆ってしばし止まる。
……掛ける言葉を、間違えただろうか？
待つことしばし。
やがて、
「……くすくす……っ」
「……え？」
何やら笑い声が聞こえて、何事かと驚く。
見ると、やはり笑っているのはめぐり先輩だった。
めぐり先輩が手を顔からどかすと、俺を見て少し困ったように眉根を寄せて、ふふっと笑った。
「もう……なぁに？　その下手なフォロー」
「うぐ……っ」
や、まあ、確かにそうなんですけども……。
顔を背けて唸る俺の頭を撫でて、めぐり先輩がくすりと微笑む。
「……でも、嬉しいよ、ありがと。……比企谷くんがそんなに言ってくれるなら、やめなくても……いいのか」
「ぜひ続けてください今後もお願いします」
「早いよ!?」
久しぶりに良いツッコミをもらった。食い気味に答えた甲斐があるってもんだ。
「もう……ふふ、比企谷くんは可愛いなぁ」
「……っ」

今、あまりのたまらなさに。
脳内でめぐり先輩を押し倒していた。
慌ててぶんぶんと頭を振って、急展開すぎる自分の欲求とイメージを振り払う。
「それじゃ……行こっか。今日はもうウォーキングだけで良いかな」
立ち上がり、微笑みながら手を差し出すめぐり先輩に。
「……そうですね」
ゆっくり答えて、手を握り返した。
その後は、どちらから何か言うでもなく、手を握ったまま、朝の公園を歩いて行った。

続く。

（３３）

めぐり先輩と早朝にあれこれした、後日。

日差しが程良く差す、朝。

「お兄ちゃんさ」

「んー」

小町と朝ご飯を食べていると、ふと小町から話題を切り出してきた。小町手作りの味噌汁を飲んでいるため、確実に顔がふやけていると思われる。だって冬に味噌汁とかもう五臓六腑に染み渡るしかないじゃん？　しかも小町が作ってくれたんだぞ？

温かい汁を喉から身体の内にに流し込みながら目を細めて生返事をすると、小町がにぱっと笑った。やだ、この子ったら天使なの……？

「めぐりさんと上手くいってるみたいだね」

「……」

味噌汁をこぼすところだった。

「……」

黙っておわんを置いて、ゲンドウさんのポーズをとる。俺が黙り込む様子を見て、小町が「はりゃ？」と言って首をくりっと傾げた。ＭＡＸ可愛い。マジで。

「聞こえなかった？　お兄ちゃん、最近めぐりさんと上手く」

「待て、聞こえてる。聞こえてるから」

しゅばっと右手を突き出して（張り手してるみたいになった）小町の言葉を止める。小町は再び「ほえ？」と首を傾げた。可愛すぎて、もはやこれから一生味噌汁を作ってほしいまである。あ、もう作ってもらってるわ。じゃあこれを継続させる方向で――と全力で現実逃避していると、小町がにやりと目を細めた。むぅ、いつの間にこんな邪悪な顔を……。

「……お兄ちゃん、照れてるんだ」

「ばっ、おまっ、そんな訳っ、なっ」

セリフの全ての文字に下手なスタッカートを入れてるのかってく

らいの勢いで喋ってしまった。すんごい跳ねてる。ミス・メリークリスマスかよ。
俺が高速目泳ぎをしていると、小町が肘をテーブルについて顎を手に乗せた。マナー上どうかと思ったけど、小町はもう食べ終わっていたようで、食器はちゃっかり横に片付けられている。出来た子ですよまったく。要は、小町の仕草が何の文句も問題もツッコミどころも無く可愛いということだ。
「んふふー、お兄ちゃん分かりやすいよねー。ポーカーフェイスにしようとしてるのに、あちこちで不自然ににやけてるんだもん。ほーんと分かりやすい」
「そうかそうか、ということはあちこちで俺は可愛い顔をしていたということか」
「うんにゃ、気持ち悪かったよ。口角を上げなれてないからか知らないけど、口がひくひくしててなんか危ない人に見えたよ」
つら。
「……そんなにか……」
味噌汁に目線を落として絶望に打ちひしがれる。味噌汁よ、お前なら分かってくれるか……。
妹（天使）による言葉の暴力でぶへぁぁっという変な声と共に盛大に息を吐くと、小町がにひひと笑った。
「……まあ、気持ち悪かったのは確かだけど。それでもお兄ちゃんがそれだけ無防備な顔をするくらい、めぐり先輩と過ごす時間が楽しくて幸せなんだなーって思って。なんだか小町も嬉しくなっちゃったのです」
「……そうか」
小町が優しく目を細めるのを見て、心から安らぐのを感じた。ずっと俺の隣にいたこいつがこんな風に言ってくれると、こうも嬉しいものなのか……。感慨に浸っていると、急に小町が立ち上がって、自分の椅子を持って、お尻に付けたままとたとたと隣にやってきた。何この小学生みたいな行動。超可愛いんですけど。
「それでそれでー？　今お兄ちゃんはどれくらい幸せなのですかー？

うりうりうりうり」
「やめろやめろやめろやめろ」
肘で二の腕にぐりぐりするのと、人差し指で頬にぐりぐりするのの合わせ技とか器用なことをするなよ。
「ほれほれー、答えないとずっとぐりぐりしちゃうぞー。うりうりうりうり」
可愛すぎていっそ答えないのも手かと思ったけど、このまま行くとうりがゲシュタルト崩壊しそうなので回答を考える。２ヶ所をぐりぐりされながら。
ぐりぐり。
ぐりぐり。
ぐりぐり。
……。
「……家に帰った時、先輩と小町がおかえりって言ってくれたら、一生頑張れる気がする」
「そんなに!?　しかも小町もセットなんだ!?」
小町が凄まじいオーバーリアクションでのけぞった。顔が瞬間的に劇画タッチになっている。あ、戻った。今度は両頬に手を当ててくりくりとせわしなく顔を動かし始めた。
「うぅ……お兄ちゃんったら、この場面で小町まで攻略しようとするなんて……もう、これだから捻デレは……」
「お前そのワード気に入りすぎだろ」
「うん、すごい気に入ってる」
照れる演技(演技なのかは分からないが)から一瞬で切り替えて、にぱぁっと笑った。あゝもうほんと天使。あゝとか書いちゃうくらい天使。
「それで、今日はめぐりさんと何かするの？」
言われて、少しばかり身体が強張る。
「あー……昼くらいに、ウォーキングをしようとしてる。この間はあんまり捗らなかったから、先輩がやる気満々になってるんだよな」
「お、お、お？」

何気なく答えたつもりだったのだが、急に小町が食いついてきた。目をきらきら輝かせて、ぐいと顔を寄せる。このままほっぺにキスしてくれないかなぁ。
「この間拗らなかった、とは？」
……しまった。
「……あー、気にすんな。何でもない」
「ほーん、ほーん、ほーん？」
益々目を輝かせて、俺の太腿をぺちぺちしだした。そろそろちょっと変な気分になりそうだからやめてほしい。俺の獣モードを舐めるなよ。
「へー、ふーん、そっかそっかー、まぁ、敢えてこれ以上追求はしないでおこうかな。えへへー」
「……それだと助かる」
小町がにへっと笑って顔を離して、やっと一安心する。
「今度めぐりさん、家に招待してよ」
「ん、まあ、気が向いたらな」
「じゃあ連絡しとくねー」
「あれ、俺のタイミングとか考慮してくれないの？」
俺に頼んだ意味ねぇじゃねぇか。
「？　なんで？」
「すげぇナチュラルに人権を踏みにじるよな」
「そんなことないよー、うん、ぜーんぜん……うん」
「もうちょっとちゃんと言葉を続けろよ。全くフォローになってねぇじゃねぇか」
「えーと、めぐりさんの連絡先は……」
「待て待て待て、早い早い早い早い」
心の準備が一切整ってないっての。
――こんな会話を交わしながら。
兄妹の朝は、穏やかに過ぎた。
×　×　×
数時間後。

昼ごはんを軽く食べて、前回と同じ公園でめぐり先輩を待っていた。気温が一日の中で最も高くなる時間帯だからか、前回待ち合わせた早朝に比べると流石にかなり暖かい。正確に言えば寒くないという言い方になるが、それでも相対的にかなり暖かく感じる。春に近付いているというのもあるのだろう。
「あ、いたいた。比企谷くーん」
「ども」
めぐり先輩が俺を見付けて、穏やかに手を振りながらとてとてと歩いてきた。会って早々既に可愛い。
「ごめんね、待った？」
「いえ、今来たばっかりどころか、もはや先輩が先に来てたまでありま す」
「？　あはは、比企谷くんは面白いなー」
むぅ。
軽くボケてみたが、今日は不発だったようだ。めぐり先輩ももう少しテンションが高かったら良い感じにツッコんでくれるんだけどなぁ。まあ、可愛いから何でも良いけど。何でも良いのかよ。
「それじゃあ、早速行き――」
話しながら2人とも歩き出すと、互いの手と手がちょんと触れた。
「……あ……」
どちらが漏らしたのか、あるいはどちらも漏らしたのか分からない程の、ささやかな声。
めぐり先輩が、周囲を気恥かしそうに見回す。
「……その、今暖かいし、しばらくしたら手に汗かいちゃうだろうから……最初だけ、ね？」
「……はい」
めぐり先輩がそっと差し出した手を、そっと握り返す。やっべ俺幸せすぎるでしょこれ俺爆発するべきかなこれで俺は過去の俺にさよならするんだいやでも過去の俺も誇るべき自分なんだからさよならするというのは過去の自分にかなり失礼だよなあはは俺ったらもうキャラを見失ってるじゃんしっかりしろよな……等という、しっちゃ

かめっちゃかな思考が頭を駆け巡る。
「じゃ、行こっか」
「はい」
右手に優しい温もりを感じながら。
めぐり先輩と、歩き始めた。
歩くペースは段々上げるから、最初だけね、最初だけ。

続く。

（３４）

ウォーキングをするという目的でめぐり先輩と待ち合わせをして、歩き始めるなり手を繋ぐ。最初だけゆっくり歩いて、後は手を離してペースを上げれば良いか……と思っていたのだけど。

ものの数分で、自分の考えが如何に甘かったのかを痛感した。

「……」

俺も、めぐり先輩も、手を繋いでからほとんど喋っていない。

話題が無いからとか、気まずいからとか、そんな理由ではない。

ごく単純に、幸せすぎて。

めぐり先輩の手に触れたことは何度か、何度もあるというのに、改めてこの温かさと柔らかさにうっとりとする程の心地良さを覚える。

めぐり先輩も同じことを考えているのか、時々ぽーっとした目でちらりと俺を見つめては、感触を確かめるように手をにぎにぎと握ってくる。

段々、指を絡め合った繋ぎ方に変化していく。しかもそれでも満足行かないのか、どちらから言うでもなく、自然に身体を寄せて、悩ましげに指を動かして、絡ませ合う。

……あれ、なんか変な気分になってきたぞ？　　ちょっと前までピュアそのものだったはずなんだけど。

「あ、あはは……なんだか、恥ずかしいね……」

「そう……ですね……」

二人の会話が、ひどく空々しい。

会話だけ切り取れば純なカップルでしかないのだけれど……めぐり先輩がこの言葉を喋っている時に俺に送る視線が、明らかに熱を持っていて、それに答える俺の声音にも確かな熱が篭もり始めて、なんだかまずいことになっている。

……だってここ、真昼間の公園だよ？　めぐり先輩も２人の間に流れる空気の変化を如実に感じ取っているようで、笑顔の中に戸惑いが混じっている。

まずいなぁ、これ、本当にまずいなぁ。

リベンジの為に今日2人で歩いてるんだし、これはもう、本当に名残惜しいけど手を離して、ウォーキングに切り替えた方が良いかもしれない。めぐり先輩も、俺が手を離そうと提案すれば乗ってくれるだろう。

そう考えていると。

「あれ？　八幡？」

聞き覚えのある声に、思考が止まった。

×　×　×

――春も近付いてきた、冬の昼下がり。

穏やかな声音で名前を呼ばれ振り返ると、そこに見覚えのある、いや、例え忘れようとしても忘れられないであろう程、俺の記憶に深く深く刻み込まれた人物が佇んでいた。

肩に掛けたラケットが、妙に大きく見える、華奢で儚げな体躯。

透き通るような白い肌。

部活を終えたのか、その肌がまだ微かに紅潮している。

息が切れている訳でもないのに、その吐息が妙に艶めかしい。

澄んだ瞳は純真そのもので、接する時に心にもたらしてくれる安寧は今まで接してきた人たちの中でも随一だ。

俺に向かって笑顔で手を上げようとしたが、同行者に気付いたからか、胸の前で軽く手をひらひらと振る可愛らしい様は、見ているだけで心の底から守りたくなる。

まあ、なんていうか、うん。

戸塚である。

「やっぱり、八幡だ」

俺の顔を見て、戸塚が嬉しそうに頬を朱に染める。や、やだ、この子なんでこんなに嬉しそうなの……？

「……家に帰ったら、戸塚も待っててくれねぇかなぁ……」

「……え？」

「あー、すまん。間違えた」

不意に出くわした戸塚のあまりの可憐さに一瞬本気で言う言葉を間違えてしまった。

家に帰ったら小町とめぐり先輩と戸塚が居るとか、もう1日３０時間とか働ける勢い。物理的矛盾も飛び越えちゃう。
ふと、戸塚がその視線を下に移した。何かおかしなことでもあったのか……と視線を移すと、
『あ……っ』
めぐり先輩と手を繋いだままな気付いた。めぐり先輩と揃って小さな声を上げて、ぱちっと目を合わせ、２人同時にそろりと繋いだ指を解く。
「こんにちは、戸塚くん」
めぐり先輩が平静を装いながら、けれど頬をわすかに朱に染めながら、戸塚に挨拶をする。
「こ、こんにちは……」
戸塚が挨拶を返す……けど、なんでそんな切なそうなの？　あれ？
「と、戸塚はあれか、部活終わりか」
妙な場の空気を少しでも払おうと、簡単な質問を投げかける。聞くと、戸塚は目を細めて肩に掛けたラケットを手に持った。
「うん。……来年度になれば、高校生最後の大会が待ってるからね。自主練もやってたら、思ったより時間が経っちゃった」
何気なく話しているが、手に持ったラケットに注ぐ視線は愛情に満ちていて、また、最後のシーズンに向けて十分に気合を入れている様も見て取れる。
……良いなぁ、ラケット。俺もあんな風に見つめてもらいたい。
「……比企谷くん？」
「なんでもないです、なんでもないです」
突如隣から冷水の如く浴びせられた呼びかけに心底震えあがり、背筋を伸ばしながら食い気味に容疑を否認して、頭の中の煩悩を振り払った。
戸塚は俺とめぐり先輩のやりとりをきょとんとした目で見ていて、可愛らしく首をくりんと傾げた。すごい勢いで押し倒したい。それはマジでやばい。
「……ふふっ、変な八幡」

「毎日俺に味噌汁を作ってくれないか」
「え、ええっ!?」
「あー、すまん。間違えた。ほんとすまん」
い、いかん。あまりの可愛さにどんどん正気を失いつつある。そして身体のすぐ右横の温度が急に下がったぞ。
っべー、マジっべー。
氷の女王様みたいな冷気を出していらっしゃるぞ。やばい。ウケる。や、ウケねーよ。
俺が冷や汗だらだらで固まっていると、戸塚が苦笑した。
「そ、それじゃ、ぼくはこれで」
「お、おう。何か悪いな」
「ううん、大丈夫だよ。それと……」
言葉を止めて、戸塚が視線を落として――ちょうど、さっき俺とめぐり先輩が繋いでいた手の部分に視線を向ける。
そして、ゆっくり顔を上げて、俺と目が合った。
「八幡」
「ん、なんだ」
「……おめでとう」
「……っ」
簡潔に思いを伝えて、戸塚が寂しそうに笑う。俺の言葉を待たない内に、戸塚はめぐり先輩と会釈を交わして、それじゃ……と小さな声で言って手を振り、小走りで駆けていった。
「と……」
心臓がぎしぎしと痛む。
「……と……」
言葉が出てこない。
なんでこんな、いつもは無駄口をいくらでも叩けるのに、いざとなったらこんな短い言葉すら喉から出てこないのか。
「……と、と……」
視界が滲む。喉元まで出かかった言葉が、鉛のように重く沈殿している。

手を前に突き出して、叫んだ。
「戸塚ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……っ！」
地面に崩れ落ちて、膝を突く。
俺の声が届かなかったのか、戸塚は振り返ることなく角へと吸い込まれていった。
……俺は、なんて無力なんだ……。
「……え、ええっと……比企谷くん？」
「あ、はい、すいません」
勢いで変なコントじみたことをしたところで。
めぐり先輩の呼び掛けで我に返って立ち上がり、膝に付いた砂を払った。

× × ×

……コントじみたこと、とは言ったものの。
「ふはぁぁ……」
小さく、それでいて長いため息を吐く。
戸塚と別れてから（他意は無い）しばらく歩いて、今は休憩中でベンチに座っていた。
めぐり先輩は飲み物を買いに行くと言うと、俺が行くと言っても聞かずに行ってしまった。や、ちょっと天使すぎて申し訳無い。
「ふはぁぁぁぁぁぁ……」
また、長いため息を吐く。
しょうもないコントで誤魔化そうとはしたが、やはり戸塚のあの切なそうな表情は忘れられない。
なんだろう、恋人との別れってこんな感じなんだろうか。多分違うな。
第一さっきのやりとりの意味を深く考えると、俺の知らない世界の深淵を覗き込んでしまいそうだ。やだ、向こうからも覗かれちゃう……。
膝に肘を置いて情けなく背中を丸めて俯いていると、めぐり先輩がとてとてと戻ってきた。
「お待たせ。はい、比企谷くん」

「……ありがとうございます」
鬱々と顔を上げて、ホットのマッ缶を受け取って、熱い熱いと手の中で転がしながらプルタブをぷしゅっと開ける。
くぴくぴと飲んで、人心地つく。
ふひー。
「……比企谷くん、さっきから元気ないよね」
「あ……すいません」
めぐり先輩が、手に持ったカフェオレの缶を両手の平でころころと回しながら、切なそうに笑った。
あー、いかん。
俺、何でこの人に心配をかけてるんだ。
「気にしないでください。しばらく時間経って、アニメの2、3本でも見ればすぐ元気になるので」
「分かりやすいんだね……」
たははとめぐり先輩が苦笑いを浮かべる。
友達に慰めてもらうなんていう選択肢が今まで無かった分、一人で心をケアする方法はありとあらゆるものを探し求めたから、慣れたもんです。
ちなみに、たまに小町が心配してくれて話を聞いてくれたことはあった。
うちの妹は可愛い上にそういう頼れるところもあってほんと完璧超人。
どこにも貰われないように策を練りたいまである。
うーん……と、めぐり先輩が小さく唸った。
「……よし」
小さく気合の声を上げためぐり先輩に、はてなんぞやと首を傾げて視線を向ける。
めぐり先輩は俺と目を合わせると、にっこり目を細めた。
「比企谷くん、ちょっとこっち来てもらっていいかな」
言って、めぐり先輩がすっくと立ち上がり、微笑んだままちょいちょいと手招きをする。妖精さんかなぁ。

「……はい」

呆けたまま気の無い返事をして、めぐり先輩の後に付いて行った。

続く。

（３５）

めぐり先輩に可愛らしく手招きをされて、戸塚ショックを引きずりながら付いて行く。

なんだろう、何事だろう？

ていうかもう、めぐり先輩が微笑みながらとてとて歩いていく姿が可愛すぎて、何かもう付いて行きながら浄化されそう。身体の前面から羽になって分解していく感じ。言ってて怖くなった。

めぐり先輩はきょろきょろしながら、「ん～……ここなら大丈夫かな？　やっぱりもう少し奥にしようかな……」などと呟いて、ゆっくり歩みを進めていく。

やがて、通行人をほとんど見かけない場所にやってきた。道から少し逸れた林の中だった。

「ん、この辺なら良いかな」

めぐり先輩が頬に指を当ててうんうんと頷き、後ろ手を組んでくるりと振り返った。即死する程癒されるという矛盾。

「……ここ、ですか？」

「うん、そうだね」

……え、なに、なに？

変な動揺が身体の中を駆け巡る。

ひと気無いですよ？　ん、んん？　ていうか俺らひと気の無い場所好きすぎる感が否めない。

めぐり先輩がふっと目を細めて、にっこりと微笑む。

「ここなら、あまり人が通らないないからね」

「え……」

戸塚ショックの落ち込みから。

急転直下、違う、恋の滝登り、鬱陶しい気取り方しちゃったよ違う、剣呑剣呑、これは作品が違う。

えーと、えーと、えーと。

取り敢えず。

もの凄い勢いでテンションが上がった。

×　×　×

めぐり先輩がくるりと後ろを向く。小さな声で「うん、よし、がんばるぞ……」と小さく気合を入れている声が聞こえる。めぐり先輩に応援されたら１００ｍのタイムが１４秒８くらいから一気に１１秒２くらいまで縮みそう。もはや別人だわそれ。

気合を入れ終えたのか、めぐり先輩がくるりと振り向いた。

「さ、どうぞ」

「え……」

頬を紅潮させてもじもじしながらも、めぐり先輩が俺に向かって両手を広げた。え、なに、外国式の挨拶？

「あ、えーと……お邪魔します……？」

よく分からないままに。

ぎゅー。

「ふわぁ……っ」

めぐり先輩の招きに応じて立ったまま抱き付くと、耳元で果てしない癒しボイスが聞こえた。

「えーと、先輩？」

「うん」

取り敢えず、今更だけどめぐり先輩の行動の真意を知りたい。

「なんでまたこんな柔らか」

「え」

間違えた。

「何でもないです。なんでまたこんな良い匂い」

「え!?」

間違いの上塗り。

「ほんと何でもないです。えーと……なんでまたこんなことを……？」

聞くと、めぐり先輩が手が俺の頭をぽんぽんと撫でた。自然と身体の力が抜けてめぐり先輩に体重をかけてしまい、二人しておっとっとと後ろに数歩よろめいた。

「すいません」

「いいよいいよ。……比企谷くんが元気ない理由は分からないけど、何とか元気出してほしいなーって……ね？」
めぐり先輩が俺の両頬に手を添えて正面から見つめて、にっこり微笑んだ。
……。
……。
……。
「……将来、毎晩俺をこうしてくれて会社の愚痴を聞いてくれたら、俺は馬車馬の如く働きます」
「えっ、ええっ!?」
「あ」
癒されすぎて、１０年先の未来まで見据えてしまった。
「すいません、何でもないです」
「え、や、ええっ？　ひ、比企谷くん、今のは……」
めぐり先輩の身体がみるみる熱くなっていく。分かりやすいなぁ。俺も超熱いけどね！
「恥ずかし過ぎて死にそうなんで忘れてください」
「そんなに!?　……わ、わたしは別に、それでも……」
「え」
「あ」
「え、先輩、今のは、え？」
「わーっ！　なし！　今のはなしなし！」
「なしで良いんで、取り敢えずさっき言った言葉を復唱してもらって良いですか」
「それなしになってないよ!?　もー！」
「むぐっ」
めぐり先輩は顔を真っ赤にして大慌てした後、誤魔化すように俺の後頭部を掴んで……自分の胸元に俺の顔をうずめた。ほゆんとした柔らかい感触に一瞬激しく動揺するも、それ以上の安らぎに目がとろんとする。
俺が黙ったことに満足したのか、めぐり先輩が愛おしそうに俺の頭

をなでた。その手つきはとても優しい。
「ふふ……よしよし。元気出た？」
「……ふぁい」
変な篭り方をした声になった。
「……もうちょっとこのままでも良いですか」
目だけ上を向けてむぐむぐとお願いすると、めぐり先輩が穏やかに微笑んだ。
「ん、いくらでもどうぞ」
「……ほもです」
「え？」
「どもです」
発音が疎かになって恐ろしい勘違いをされそうになったので、顔を上げてきちんとお礼を言った。

× × ×

そこからしばらく、俺はめぐり先輩に抱き付いたままでいた。
なんかもう、癒されすぎて。
過去のぼっちトラウマが悉く洗い流されて、そう言えば俺結構人気者だった気がするなどという記憶の改竄まで起こりかけて、流石にそれは違うだろとセルフツッコミを入れた。
「ふ～ふふ～♪　ふ～ふふ～♪」
「……」
立ったままなんだけど、めぐり先輩が俺の頭を撫でながら子守歌を歌ってらっしゃる。
言ってしまえば、今の体勢は俺より背の低いめぐり先輩の胸元に顔をうずめる為に結構シュールな姿勢になっているんだけど、そんなのは気にしない。
めぐり先輩が心地良く揺らしてくれるから、この体勢でも寝れそう。
たまに腰の角度を変えようと顔をもぞもぞ動かすと、
「あっ、んっ、ふあぁっ……？　あん……っ、ふふ、もう……っ」
俺が甘えていると思ったのか、めぐり先輩が蕩けるような甘い声を

上げた後、より一層愛おしそうに撫でてくれる。
なんだろう、めぐり先輩の頭なでなでサービスをやったら１回１５００円くらいとれるんじゃなかろうか。
材木座とかが来たらちゃんと櫻子さんがはめてそうな薄いゴム手袋を着用してなでてもらうようにしよう。
多分摩擦で髪が引っ張られるだろうけどそんなのは気にしない。だって材木座だもの。
「……先輩、そろそろ大丈夫でふ」
まだ籠った発音になった。でふって何だよ。
「……そっか。じゃあ、はい」
めぐり先輩がぱっと俺を離した。少しだけ寂しそうだったのは気のせいだろうか。
俺の顔を下からまじまじと見つめて、うん、と小さく頷く。
「すっかり元気になったみたいだね」
「はい、おかげさまですげぇ柔らかかったし可愛かったです」
「え、ちょ、ちょっと!?」
「すいません、つい本音が出ちゃいました間違えたなんでもないです」
「あぅ……」
いかん、頭がぽけーっとして発言の線引きがゆるゆるになっている。日本語もなんか変だし。
めぐり先輩は両頬に手を当てて顔を真っ赤にしながらあわあわとあっちを向いたりこっちを向いたりしている。
……守りたい、この笑顔。
笑顔じゃねぇけど。
しばらくしてめぐり先輩が平常モードに戻ると、口に手を当ててこほんこほんと咳払いをした。
「それじゃ、また歩こっか」
「はい」
めぐり先輩が自然と差し出した左手を――左手で握った。
「ぐるぐる回っちゃうよ……」
「……すいません」

めぐり先輩が眉根を寄せて、困ったように笑いながらツッコんでくれた。

×　×　×

今度はちゃんと手を繋いで、とことこと歩く。結局大股だの早足だのの話は流れて、老夫婦の散歩ばりののんびりとしたペースで歩いていた。

他愛もない雑談をしながら（学校のこととか、本のこととか、マンガのこととか）、景色を眺めていると……めぐり先輩が、俺の手を握る力を僅かに強めた。どうしたのかとめぐり先輩の顔を見ると、繋いだ手をじっと見つめていた。

「……どうしました？」

尋ねると、

「……ちょっとずつで良いから、もっと堂々と手を繋げるようになりたいね」

「あ……」

さっき戸塚と会ったとき、二人揃って手を離したことを思い出した。あの行動は戸塚に限らず、2人の知人であれば誰とでも同じ行動を起こすだろう。

そう思うと、何とも言えないもやもやが胸に立ち込めた。

材木座や川崎大志に会ったら見せつけてやるんだけども。

「……そう、ですね。ちょっとずつ、ゆっくりやってきましょう」

空いた手で頬をぽりぽりと掻きながら、繋いだ手を握り返す。

「……ん、そうだね」

言って、めぐり先輩がそっと寄り添ってきた。

互いの腕がふわりと触れて、心に温かいものが満ちていく。

どうにも俺は、この人のことを相当……あー、恥ずかしい。

顔が熱くなってるのは気のせいだよなと思いながら、しばらくの間、めぐり先輩の顔を見ることが出来ないでいた。

こうして、色々と盛り沢山だった2度目のウォーキングを終えた。

続く。

（３６）

しばらくして、再び休日。

今日は、めぐり先輩と学校から少しばかり離れた場所にある図書館に来ていた。

本当はカフェでのんびり読書でもしようかと考えていたのだけど、最近早朝に図書館で勉強をしていると、毎回何だかんだであれやこれしてしまっていた為、その埋め合わせをすべく今日はがっつりと数学漬けになることになった。

隣に居る人がめぐり先輩ｏｒ小町ｏｒ戸塚でなければ、即死してしまうレベルできつい状況だ。マジで。

ちなみに、早朝の勉強の時のあれやこれやのきっかけは大体俺からなんだけど、たまにめぐり先輩からの場合もある。

ふとした拍子に俺と手が触れると、その後で顔を真っ赤にしてしばらく考え込んで、気合を入れて俺に顔を向けて、目を閉じるまでの流れが可愛すぎて（その後ももちろん可愛いけど）、後でその一部始終を見てましたと言ったらマジ説教をくらってしまい、そのままその日の勉強会を終えたこともある。

ぷんすか怒ってる顔も可愛いので全く説教にならないけどそれはまあ良しとしよう。

良くねえけど。

「おお……」

めぐり先輩と図書館に足を踏み入れると、思わず感嘆の声が漏れた。

初めて来た図書館だったのだけど、中々の広さに驚く。

５階まで蔵書があり、入口から１階の様子を見ると、机がずらりと並んでいる。

案内板を見るとどの階にもラウンジがあり、飲み物などはそこで飲めるようになっているようだ。

俺がふへーと唸っていると、めぐり先輩が胸の前で小さくガッツポーズをした。

「えへへー、わたしも1回くらいしか来たことなかったんだけどね。こういう場所の方が比企谷くんのやる気も出るかと思って。どうかな？」
「あー……そうですね。確かにこういう場所の方が集中出来るかもです」
クラスメイトががやがやうるさい教室よりもカフェの方が、カフェよりも勉学に対するベクトルがはっきりしている図書館の方が、もっと言えば受験生や、ゼミの勉強でもしていそうな大学生がたくさん居る、俺たちが今居るこういった場所の方が、勉強のテンションは上がりやすい。
集中出来る場所については人にもよるのだろうが（騒がしい方が却って集中出来る人もいるし、科目によっても静かな場所の方が勉強に向いている科目、周りが騒がしい方が捗る科目があるらしい）、こういった場所では他にもメリットがある。
それと、勉強の休憩をしようとふっと顔を上げた時に、目に映る光景が結構大事らしいと聞いたことがある。
ここならば、ふと顔を上げた時に周りに本と熱心に勉強している人しか見えないという状況なので、中々気合が入りそうだ。
例え数学でも。
例え数学でも。
２回言っちゃったよ。
俺の返事を聞いて、めぐり先輩がほっと胸を撫で下ろした。
「そっかー、良かった。じゃ、行こうか」
「はい」
めぐり先輩の半歩後ろを付いて行きながら、呆けた返事をしないように努める。
今日のめぐり先輩は、コートを脱ぐと春を感じさせる暖かさのためか白のワンピースにピンクのカーディガンという女の子らしさ全開の出で立ちで、最初見たとき思わずがっつりと見蕩れてしまった。
超蕩れてた。
「……比企谷くん？」と不思議そうに声をかけられるまで完全に停止

していた。
現地集合にしていたため会ってからまだ5分も経っておらず、未だにその影響を引きずっている。
なんだろう、もう。
この気持ちは何だろう。
取り敢えずめぐり先輩と手を繋いでいる所を材木座にだけ見せて学校に来る気をなくさせようか。性格悪すぎるな。平塚先生に見られた日には命の危険さえある。
「比企谷くん、どうしたの？　行こうよ」
「あっ、はい。すいません」
……結局、ぼーっとしてしまっていた。
×　×
階段で登って各階の様子を見ながら移動していると、どうやら1～2階は中々の混み具合になっている（恐らく、蔵書の種類に関係無く勉強をしにやってきている人が多い）が、3階以降はそうでもなく、5階になるとパッと見休日なのか平日なのか分からないくらいの人しかいない事が分かった。
「今日は場所が場所だからなるべく喋らないつもりでいるけど、それでも人から離れてた方が迷惑にならないよね」
めぐり先輩のそんな言葉により、5階の端も端、周りに誰も居なくて、夜になって警備員が巡回するまでこのまま誰も来ないのではと思うような所に腰を下ろした。
……ちょっとばかし、俺らはこういう所が好きすぎる感がある。
全く問題無いけどね！
席に着くと、めぐり先輩もすぐ横に座った。
うんしょうんしょと椅子を移動して、身体が触れ合うぎりぎりまで近付いてくれたのが妙に嬉しい。
めぐり先輩に触れそうになっている右腕が浄化されそう。
めぐり先輩はもしかしたらスピリット・オブ・ファイアなのかもしれない。
やだ、浄化どころか魂ごと消されちゃう……。

勉強道具（数学）を取り出して、ふーっと息を吐く。
「それじゃ、始めよっか」
「はい、死なないように頑張ります」
「そんなに頑張んなくて良いんだよ!?」
めぐり先輩の小声ツッコミが入る。ちなみにヒソヒソ声は周りに聞こえやすいので、かなり絶妙な声音だった。
めぐり先輩の気遣いにくすりと笑いそうになる。
「それじゃ、お願いします」
「うん、こちらこそ」
いつもとは一味違う場所で、いつも一緒に居る人と。
楽しい楽しいお勉強（地獄で地獄な数学地獄）が始まった。

× × ×

2時間程経っただろうか。
数学に対するアレルギー発作（症状：小町と戸塚に無意味にＬＩＮＥを送って構ってちゃんになる。ちなみに小町にはめんどくささを看破されたのか既読スルーされ、戸塚は極めて優しく対応してくれた。この他にもめぐり先輩の二の腕を見つめて見つめて見つめ続けるなど、その症状は多岐に渡る）を何度も迎えて、その都度乗り越えながらひたすら勉強する。
定義をめぐり先輩から一から教えてもらい（めぐり先輩曰く授業で習ってるしテストにも絶対出るところらしいが、俺にとっての数学はルーン文字くらい縁が無いので、そんなこと言われても全く分からない）、問題集を解いていると、めぐり先輩が両肘を机に付いて、あごを手に乗せて物憂げに窓を見ていた。
「……あ、ごめんね？」
俺の視線に気付いて、めぐり先輩がたははと苦笑いする。
「……どうしたんですか？」
聞くと、めぐり先輩が視線を斜め下にずらし、うーんと唸る。
「あー、心配させちゃったよね、ごめんね。大したことじゃないんだ。なんていうか、その……」
わたしたち、とめぐり先輩が続ける。

「まだ、２人でそんなにゆっくりしたこと無かったなーって」
「……？」
めぐり先輩の発言に首を傾げる。
これはじっくり話そうと思いノートを閉じると、めぐり先輩も休憩と捉えたのか、咎められはしなかった。
「えぇっと、どういうことでしょう？　俺たち、図書館だったりカフェだったり公園だったり……それなりにゆったりしたところに行ってますよね？」
むしろゆったりした所にしか行ってないまである。
もはやまったりしすぎて急がず焦らず参っちゃうレベル。
言うと、めぐり先輩の頬がぽっと朱に染まった。
「あ、えぇっと……ね？　確かにああいう場所もゆったり出来るけど、その、なんていうか……」
めぐり先輩が胸の前で両手の人差し指の先を合わせて、くりくりと回し始めた。
何それ超可愛い。
あまり言葉で急かすのも気が引けるので、めぐり先輩を努めて穏やかな目で見ながら、続きを促す。
めぐり先輩が、こきゅっと息を呑んだ。そして、俺をもじもじと見つめる。
「そ、その……２人で、本当に２人っきりで……ゆっくりしてみたいなーって……」
「……へ？」
な、え、んん？
めぐり先輩、それは、どういう意味で……？
当惑していると、めぐり先輩が身体ごと俺を向いて、ぐいっと前のめりになった。
急に近付いためぐり先輩の綺麗な顔と、いつも以上に心地良い気がする甘い匂いに頭がくらくらする。
「た、例えば。例えばだよ!?　そ、外じゃなくて、わ、わ、わ……」
めぐり先輩が、目をぐるぐるさせている。

とんぼだったら墜落してるレベルでぐるぐるしてる。
「せ、先輩？　大丈夫ですか？」
俺も先輩に向き直って肩を押さえると、めぐり先輩があわあわ言いながら顔からぷしゅーと湯気を出して、俺の胸にゆっくり沈み込んだ。
先輩がおでこと両手を俺の胸につけて、その手をきゅっと握る。
僅かな間を開けて、めぐり先輩が顔をちらりと上げて、上目遣いで囁いた。
「……た、たとえば……わたしの、家、とか……」
「……え？」
先輩の肩を抱いたまま。
広い広い図書館の奥の奥で。
先輩の言葉に、固まった。
微熱を湛えた先輩の目を見て、ごくりと息を呑む。
静寂な図書館の中では、その音があまりにもはっきりと聞こえた。
続く。

（３７）

――めぐり先輩の言葉に、頭が真っ白になる。

……めぐり先輩の？　家に？　俺が？

言葉の意味は聞いたままだろう。同音異義語など考える余地はない、はず。

……それにしても俺の胸に顔をうずめためぐり先輩が可愛すぎてどうしよう。

良い匂いするなー、図書館の一角に急に花畑が現れたような、そんな感覚がして癒されすぎてどうしよう……って、そうじゃなくて。

「……え、ええっと……？」

脳の処理速度を上回っている事態に、言葉が出てこない。めぐり先輩は俺の反応を上目遣いでじっと伺っている。リス？　リスなの？

俺が目を泳がせてあっぷあっぷしていると、めぐり先輩の腕が俺の背中に伸びて、ふわりと抱きしめてきた。

瞬間的に周りを見渡して誰もいないことを確認すると、するりと抱きしめ返す。

「……だめ、かな……？」

俺に問うてくるめぐり先輩の声が震えている。

２人の関係を考えれば、家に来てほしいなんて、意味合いは一つしかないだろう。

もうちょっと吹っ飛んだ人ならば「両親に紹介するから☆」なんて展開もあるかもしれないが、生憎この作品にはそんな人はいない。

作品って言っちゃったよ。

……平塚先生なら有り得るかもしれない。

質問を投げかけて、めぐり先輩が目を伏せた。

長いまつげが儚げにちらちらと揺れる。

思わず見蕩れてしまって、時間が止まってしまうかのような錯覚を覚えた。

めぐり先輩に聞こえないようにして、緊張により生じたものをごく

りと飲み下す。
めぐり先輩を抱きしめる腕にほんの少しだけ力を込めて、耳元に口を寄せた。
「……喜んで」
「……っ」
めぐり先輩がはっと息を呑む音が聞こえた。今はそれさえも愛おしい。
「……ありがとう」
何をお礼を言う必要があるんだろう。俺こそお礼を言いたいことだらけだと言うのに。
広い広い図書館の奥の奥で、静かに抱きしめ合った。
× × ×
……それにしても。
「……今日なんだ……」
「？　比企谷くん、何か言った？」
「あ、や、何でもないです……」
めぐり先輩と図書館で交わした抱擁の興奮が冷めやらぬ……今日。
正確には、ものの数時間後。
俺とめぐり先輩は、彼女の自宅へと向かっていた。
早くても明日以降の話かと思っていたんだけど、しばらく抱き合った後にめぐり先輩に告げられた日時は「今日の夕方」とのことだった。
なんと早い展開だ。
身体と心臓が付いて行かない。
まあよく考えれば「家に……来ない？　明後日」なんて流れはドラマでも現実でも無いよなとは思った。
何その時間差って話だし。
ちなみにあの後も一応勉強会を続けはしたものの、俺が……というよりも、めぐり先輩がまるで集中出来ていなかった。
＜以下、あの後の勉強会でのやりとり＞
「先輩、このページの分を解き終えました」
「……」

「……先輩？」
「……」
……ぽーっとしてらっしゃる。
顔の前で手を振る。ベタベタだけど効果はあるだろう。
ふりふり。
「先輩？」
「……」
へんじがない。しかばねなのかい？
手を握ってみる。
ぎゅっ。
「先輩？」
「ひゃわわっ!?　……はわ、わ……」
……。
あ、あれ、おかしいな。一回顔を真っ赤にして物凄い驚いたと思ったら、握られてる手をぽーっと見つめ始めたぞ？
ちょっと鼓動の速さがやばい。
寿命が縮むレベル。
ていうか、これ本当に勉強にならないぞ。良いのかこれ？
今度は頭を撫でてみる。
さわさわ。
「……あ……？　あぅ……はぅぅ……」
……。
死にそう。
さっきよりも目がとろんとして、俺に撫でられるがままになって、自分の手を腿できゅっと挟んでぽーっとしてらっしゃる。
めぐり先輩の肩を掴んで、俺と相対させる。
これはめぐり先輩を正気に戻すための行動だから。
これはめぐり先輩を正気に戻すための行動だから！
正面から、両手で髪や耳や頬を撫でてみる。
さわさわ。さわさわ。
「……ぁ……」

先輩がうっとりした顔で、俺に身体を委ねている。
「……」
あ、これあかんやつや。
更に状況が悪化した。
なんかもうめぐり先輩、もっと撫でてもらいたそうな目を向けていらっしゃる。
身体から芯が抜けたみたいにふわふわと揺れていて、あごの下を撫でると気持ち良さそうに目を細める。
俺もムツゴロウに近付けただろうか……。
しばらく目的を忘れて、わしゃわしゃ。
「ふぁぁ……っ」
めぐり先輩は髪が本当に弱点のようで、撫で続けると段々めぐり先輩も俺も変な感じになってきた。
流石にここでは危ないだろうと（今更だけど）思い手を離すと、めぐり先輩が心底残念そうな顔をした。幼い女の子だったら指を咥えてぶーぶー言いそうな感じ。撫でたい。
＜回想終了＞
……と、そんなやりとりを経て、気付けばあっという間にお昼時になっていた。
問題集の進みの遅さが異常だった。
ぽーっとしたままのめぐり先輩とご飯を外で食べて、その後も勉強会は続けようとしたんだけど……俺が一人で勉強するよりも進みが遅かったので、結局夕方になる前にめぐり先輩の家に向かうことにした。
それを提案するとめぐり先輩に猛烈に謝られたんだけど、まあしょうがないだろう。
俺がムツゴロウすぎるのが悪いんだきっと。形容詞になっちゃった。
家に向かう頃になるとめぐり先輩のぽーっとモード（勝手に命名）は解除されていたが、俺と繋いだ手が異様に熱いままだ。
熱でもあるんじゃないかと思うほど。

「そ、そろそろ着くから。ね？」
「あ、はい、どうもです」
そろりと振り返るその仕草はとても可愛いのだけど、顔を真っ赤にしているためこっちまで恥ずかしくなってしまう。
……これ、家に俺が入ったらめぐり先輩は爆発してしまうんじゃなかろうか。
めぐり先輩のテンパりっぷりを見て、冷静に考えてしまった。
「あ、見えてきた。あそこだよ」
めぐり先輩が空いた手で指を差す。
市街地から程よく離れた場所に、めぐり先輩が住んでいるマンションが見えた。

× × ×

「いらっしゃい」
「お邪魔します」
めぐり先輩に招かれて、一呼吸置いてドアの内側へと足を踏み入れる。
両親と住んでいるそうで、玄関から見える範囲を一瞥した感想は「うん、普通」だった。
大体どこの家もそうだとは思うけど。うちもだし。
「……あ、先輩、すみません」
ふと、まだ済ませていないことがあったのを思い出した。
「ん、どうしたの？」
家に入って少しばかり表情が柔らかくなっためぐり先輩が、くるりと振り返る。
ふわりと揺れたおさげに見惚れながら、スマホを取り出す。
「小町に連絡するのを忘れてたんで、ちょっと良いですか」
「あ、それもそうだね。どうぞどうぞ」
ありがとうございますと軽く礼を言って、小町に電話をする。
めぐり先輩が離れようとしたが、どうせすぐ終わるからとこの場に引き止めた。
２コール程で、「はいは～い」という元気な声が電話の向こうから聞

こえてきた。
「おう、愛しのお兄ちゃんだぞ」
「まだそのノリ続いてたんだ。切るよ」
「待って待って待っ」
本当に切られた。さっきのＬＩＮＥがよほど不快だったらしい。
受話器から漏れ出るツーッツーッと言う音を聞いて、めぐり先輩が抜群に気まずそうな顔をした。ご、ごめんなさい……。
……あんにゃろう……。冷たすぎる。
もう一度掛ける。今度は強気に行こう。
「もしもし」
「反省した？」
「……ごめんなさい……」
電話をして開口一番で妹に謝罪を要求される俺、マジクール。
こほんと小さく咳払いをして、用件を伝える。
「あー、小町。お兄ちゃんな、今日帰りが遅くなるわ……？」
話しながらふとめぐり先輩に目を向けると、物凄く哀しそうな顔をしていることに気付いた。
え、あれ、俺なんか変なこと言った？
「ほえー!?　お兄ちゃん手が早――い！」
めぐり先輩からぼんっと湯気が噴き出した。
「ばか、すぐ隣にいるんだよ。でかい声出すな！」
音声だけで興奮しているのが如実に伝わる妹のバカテンション。
まったく可愛い妹ですよ、ええ。
……と、興奮するばかりかと思った小町が、小さな声で「んん……？」と訝しみの声を上げた。
「お兄ちゃん。今、《帰りが遅くなる》って言った？」
「ああ。だから、夕食はすまんがお前一人で――」
「そういうことじゃなくて。帰ってくるの？」
「え、俺って帰宅する権利無いの？」
まさかの自宅追放だったの？
「や、そうじゃなくて。お兄ちゃん、今日というこれ以上無いチャンス

の日に、家に帰るつもりなの？　正気？」
　正気を疑われた。
　ふへーと盛大にため息を吐いて、小町が言葉を続ける。
「これだからごみいちゃんは……ちょっと、電話をスピーカーモードに変えてくれる？」
「え、なんで」
「いいから」
　ぴしゃりとはねつける言い方をされて、なんなんだとぶつくさ言いながらめぐり先輩に目配せして許可を得ると、スピーカーモードに切り替えた。
　この機能独特の少し金属質な音の中で、小町が陽気な声を発した。
「めぐりさん、こんにちは！」
「小町さん、こんにちは」
　天使と天使の会合である。
　通話記録及びレコーダーでの音声記録及びカメラでの画像・映像記録を残したい。もっと言えばＵｓｔ配信もしたい。
　どこにだよ。
　ああもう和むなぁ――と思っていた矢先に、小町が予想していなかった言葉を言い出した。
「めぐりさん、つかぬことをお聞きしますが」
「なにかな？」
「本日は、めぐり先輩のお宅にご家族はいらっしゃいますか？」
「……っ」
　めぐり先輩の動きがぴたりと止まる。
　……え、この子、何言い出してんの？
「いかがですか？　お返事によって兄の処遇が変わるんですが」
「おい待て。これなんの審問なんだ」
「お兄ちゃんは黙って」
「はい……」
　理不尽だ……。
「ついでに正座してて」

「なんでだよ」
「お兄ちゃんうるさいよ」
「お前この状況を楽しんでんじゃねえよ」
「はぁ……これだからごみいちゃんは」
　めぐり先輩の耳に入る状況で言いやがったこいつ。やっぱり理不尽だし。
　やめて、めぐり先輩。くりっと可愛く首を傾げて俺を見ながら「ごみいちゃんって……？」と小声で呟かないで！
「それで、いかがでしょうか？」
　もう一度小町が言って、めぐり先輩が目をあわあわと泳がせる。
　たっぷり１０秒近く悩んだ末に、顔を真っ赤にしながら口を開いた。
「……え、ええっと……誰も……いません……」
「え」
　素っ頓狂な声が出てしまった。
　めぐり先輩の返事を聞いて、小町の声が穏やかになる。
「すいません、お恥ずかしいことを言わせてしまって。一応確認しておきますが、明日まで居ませんか？」
　めぐり先輩が頬に手を当てて、うぅ……と小さく呻いた。
「うん……両親と住んでるんだけど、ちょっと前から旅行に行ってるんだ。帰るのは……明日の……夜……っ」
　顔を茹でダコにして、めぐり先輩が手で顔を覆った。信じられないくらい和む。
「わかりました。こんなことをお聞きして本当にごめんなさい。小町は今聞いたことを綺麗さっぱり忘れておきますので！」
「は、はい……」
　めぐり先輩が顔を隠したままふるふると首を振った。死にそう。
　それじゃあ、と小町が言った。
「ごみいちゃん@捻デレ」
「人をＴｗｉｔｔｅｒのアカウント名みたいに言うな」
「今の聞いてたよね」

「ああ」
「どうするべきか、分かってるよね」
「……えぇっと……」
「明日の夜までうちの敷居は跨がせないよ」
「急にかっこいい口調でひどいこと言ったな」
「４０秒で支度しな」
「お前はどこの空賊だ」
　ロブスターすげぇ旨そうだったなぁ。
「まあそれは良いとして。……お兄ちゃん、今日は帰ってきちゃだめだよ？」
「……お、おう……」
　な、なんだ。急に可愛い口調になったぞ。
　こんな口調で囁かれたらどんな男だって……群がってきても俺が始末するから良いか。特に毒虫な。
「それじゃ、めぐりさん、お兄ちゃん、良い夜を！　ハヴァナイスデーイ！」
「う、うん、ありがとう」
「お、おう、おやすみ」
　突然の明るい英語（しかも使うタイミングが遅い。今夕方前なんだけど）に二人して戸惑い、ふわっとした返答をしたところで小町が通話を切った。
　スマホをポケットにしまって、つとめぐり先輩に目を向ける。
「え、ええと……よろしく、お願いします……？」
　めぐり先輩が、ぎぎぎと顔を向けた。
　多分江戸時代のカラクリ人形の方がもっと滑らかに動けると思う。
「はっ、はひっ、お願い、しまひゅ……っ」
　顔を真っ赤にして俯きながら、めぐり先輩が噛みに噛む。
　ちょっと俺を殺しにかかってるとしか思えない。
　めぐり先輩が両頬に手を当てて、うーんと唸った。
「うぅ……これじゃ、最初から部屋に行くなんて、とてもじゃないけど……」

「？　何か言いましたか？」
「な、何でもない！　こっちに来て、こっち！」
小声で何かを言うのが聞こえたんだけど、聞き返したら首と手をすごい勢いでぶんぶん振られた。立ちくらみしないか心配になる。
やたらと慌てた様子で、めぐり先輩が俺の手を掴んで歩き出す。
「取り敢えず、リビング行こう！　ね！　楽しいよ！」
「は、はぁ。わかりました」
どんなリビングだよ、と思いつつ。
先輩の手が更に熱くなったなぁ……と呑気に思いながら、柔らかな手に引かれてリビングへと向かった。

続く。

（３８）

めぐり先輩の家のリビングに入り、そのままつかつかとソファに連れて行かれる。

傍から見ればめぐり先輩が強引な人にさえ見える光景だけど……。

めぐり先輩が小声でずっとぽそぽそ呟いている。

「も、もう……小町さんってば……あんなこと、比企谷くんの前で言わせるなんて……でも必要なことではあったのかなぁ……あのままだと比企谷くん帰ってたかもしれないしなぁ……うぅ……でも恥ずかしいよぉ……」

「……」

……八幡、聞かなかったフリ出来る子。今俺は何も聞いてなかった、うん。

めぐり先輩が独り言を続けるにつれて、心持ち繋いだ手の温度が上がっている気がした。

そのままつったかとソファの前に連れて行かれると、めぐり先輩がひどくぎこちない笑みを浮かべた。

「さ、さぁ、お茶淹れるから、少しだけ待っててもらって良いかなっ!?」

「あ、は、はい」

なんか「いいともーっ！」って回答を強制されているかのようなテンションだった。

× × ×

ソファに腰掛けて、めぐり先輩が両頬に手を当ててぱたぱたと去る様子（可愛い）を見ながら辺りを見回す。

うん、やっぱり普通だ。何の変哲も無い家具が並んでいて、配置やら何やらも至って普通。

「……お」

写真立てを２つ程見付けた。ソファに座ったまま写真をじっと見つめると、どうやら家族で旅行に行った時に撮った写真のようだ。

片方はめぐり先輩がやや幼い印象……中学生くらいだろうか？

どこかの運命の国で撮った写真のようだ。可愛い。

もう片方はもう少し前の物のようで、小学生……１０歳くらいの時の写真だろうか、動物園で撮った写真のようだ。うん、可愛い。めぐり先輩を褒める際の俺の語彙の貧困具合ももはや可愛い。
これだけ純粋で可愛い子どもを育てていて、ご両親は浄化されなかったんだろうかと若干的外れな思考を巡らせていると、めぐり先輩がお盆にティーカップを乗せてとてとてと向かってきた。
「はい、紅茶です。どうぞ」
「ありがとうございます」
「もうお砂糖は入れてあるから大丈夫だよ」
「……どもです」
やだ、気遣いが神……。俺のカフェでの様子をばっちり見られてたらしい。
ふーふー息を吹きかけていると、めぐり先輩がお盆で顔の下半分を隠してこちらをじーっと見ていた。どうやら感想を聞きたいらしい。ついでに俺を殺したいらしい。
いただきますと小さく呟いて、ティーカップをくっと傾ける。
ぷひー。
「……美味しいです」
思ったままのことを口にすると、めぐり先輩がふわーっと息を吐いて、お盆を少し下げて顔を覗かせ、その縁に顎をぽすっと乗せた。そして顔を綻ばせて、ぽろぽろと話し出す。
「良かったぁ……比企谷くん、奉仕部で雪ノ下さんの紅茶いつも飲んでるじゃない？　だから舌が肥えてるんじゃないかと思って……どきどきしてたんだぁ。砂糖の量もカフェで比企谷くんが入れてる時のを参考にしたんだけど、どうだったかな？」
……。
……えー、何この幸せ過ぎる時間。家に帰る頃には目の濁りが取れてそう。それはないか。
もう一口こくりと飲む。ふわりと優雅な香りが鼻腔を満たして、心の底から満たされる。
「……や、本当に美味しいですよ。雪ノ下が淹れる紅茶とはまた違っ

た感じがして」
紅茶に詳しい訳ではないから、ここでそれらしい事を言えないのがもどかしいところだけど。
実際めぐり先輩が淹れてくれた紅茶は……何というか、雪ノ下が淹れてくれる紅茶とは別ベクトルの美味しさだった。
「そっかー……えへへ、良かったぁ……」
「……」
八幡、もう、だめかもしれない。
癒しによる精神的摩耗という矛盾に陥りながらも紅茶をくぴくぴ飲んでいると、めぐり先輩がお盆でもう一度顔の下半分を隠しながら「あ、あの……」ともじもじしながら言った。
「隣……良いかな？」
「え？　あ、はい、もちろん」
「うん……ありがと」
……。
なにこの、関係性がリセットされたんじゃないかってくらいの初々しさ。
めぐり先輩がお盆を前のテーブルに置いて、ぽすりと隣に腰を下ろす。
「……」
「……」
妙な緊張感の中、紅茶を飲む。
「……」
「……」
もう一度、紅茶を飲む。
「……」
「……」
ああ、紅茶、飲み干しちゃった。
「ごちそうさまです」
「あ、はい。お粗末さまです」
めぐり先輩がティーカップをお盆に乗せてくれた。

「……」
「……」
「……」
「……」
……。
放送事故かよ。
まあ、理由はさっきの小町との電話ってことは分かり切ってるんだけど。
あんな会話をして、今は周りに誰も居ない、完全な二人っきりだ。
小町との電話で俺もその状況を認識してしまったし、めぐり先輩も俺が認識した事を分かったからこそ余計に緊張しているのかもしれない。
何か今下手に喋ると自爆しそうなくらいには俺も緊張している。
さて実際どうしたものか……と考えていると、めぐり先輩が苦笑を浮かべながらもじもじと足をすり合わせた。
「……小町さん、お元気そうで何よりだよ」
「あ、そ、そうですね、可愛いです」
「会話が噛み合ってないよ」
「え？　めぐり先輩がですか？」
「わたしは正常だよ!?　ちょ、ちょっと緊張はしてるけど……」
「あ、す、すいません」
はい、テイク1、NG。事故発生。
めぐり先輩も必死で話題を探しているようで、えーとうーんとと唸っている。ちょこちょこと身体を動かす様子が小動物みたい。
めぐり先輩がこほんと咳払いをした。今度は落ち着いて応対しよう。
「あ、そうだ。奉仕部は最近どんな感じかな？」
「そうですね、戸塚は可愛いです」
「一言も言ってないよ!?」
テイク2、NG。玉突き事故発生。
2度に渡る事故で俺が何気に相当テンパっていることに気付いた

のか、めぐり先輩がじーっと俺を見つめてきた。今心拍数１５くらい上がったぞ絶対。
「……比企谷くん、大丈夫？」
「え、あ、はい、大丈夫ですよ。由比ヶ浜のこの間の英語の小テストの結果くらい大丈夫です」
「……それは、結果を聞いて良いのかな？」
「……１０点満点中３点てした」
「……それは……」
めぐり先輩が目を伏せた。
テイク３、ＮＧ。由比ヶ浜も巻き込んで更なる玉突きが発生した。もはや事故渋滞が発生するまである。由比ヶ浜、ごめん。や、むしろ由比ヶ浜がおバカなのが悪いのかもしれない。
ちなみに由比ヶ浜は小テストを受け終えた直後、「８点は行けたー！」と息巻いているのが聞こえた。それ自信満々に言うことじゃないと思う。
結果を聞いた時、お前その５点分の自信はどこから来たんだとツッコもうとしたら、「……外したと思ってた２点分が当たってた……」という斜め上の回答が返ってきた。英単語を書く問題で外れると思っておきながら当たるって器用すぎるだろ。宙に浮いた７点が報われない。
由比ヶ浜の愚かさに思いを馳せていると、めぐり先輩がくすりと笑った。なんだか緊張がほぐれたような笑い方だ。
「くす……わたしたち、ちょっと緊張しすぎだね。むしろおかしくなってきちゃった……あー、そう考えると変な力が抜けたかも」
めぐり先輩が手を組み、んーっと伸びをした。
「そうですか、それなら良かったです」
「なんで上から目線なの!?　比企谷くんも緊張してたよね!?」
伸びを中断してツッコミをさせてしまった。申し訳無い。
しかし、これはまずい。会話が何ていうかもうくっしゃくしゃだ。
めぐり先輩も危機感を察したのだろう、「あ、そうだ」と若干演技じみた仕草で胸の前で手を合わせて、

「ちょっとお菓子でも持ってくるね」
と言って立ち上がった――途端に、履いていたスリッパの先がフローリングに引っかかった。
「あぶな――」
めぐり先輩が目を見開いて倒れそうになる所に手を伸ばす。
「……ひ、比企谷くん？」
「……え？」
確かに身体を掴んだ感触がして――閉じていた目を開ける。
手には柔らかい感触。
これは、アレか。
例の結城さんの伝家の宝刀か。
テンション高く目を見開く。
「……あ、ありがとう」
めぐり先輩がごく普通にお礼を言っている。
「……いえ」
俺が掴んでいるのは、めぐり先輩の二の腕だった。
……。
……。
……むにむに。
「……ひ、比企谷くん？」
……。
……都市伝説とは、分かってはいるんだけれど。
……むにむに。
「……ど、どうしたの？」
……。
「……なるほど」
「なにが!?」
すごい勢いでツッコまれた。
しかし今のくだりで互いの緊張はだいぶほぐれたようで、めぐり先輩は「もう……」と柔らかく微笑みながら俺の頭をぽんぽんと撫でて、ぱたぱたとお菓子を取りに行った。身体が持たない……。

続く。

（３９）

めぐり先輩の二の腕をむにむにした後、彼女がお菓子を持ってきてくれるのを待ってしばしぼーっとする。

や、この言い方だとお菓子を待ち望んでるみたいに見えるけど、単純に気もそぞろってるだけだ。そぞろってるって何だよ。

「……」

自分の手をじーっと見る。

これで「まだ……足りないか……」とか呟くと一気に厨二感が増す気がする。

以前、材木座と「如何にして厨二っぽいセリフを言えるか」大会をサイゼでやったところ、我ながら引くくらいに盛り上がった。そして周りの客及び店員に物凄い冷たい目で見られた。

ちなみに俺は過去の記憶とアニメとラノベを基に考えて言うのに対して、材木座はほぼ呼吸をするくらいの自然さで厨二台詞をぽんぽん出してきたため、ものの見事にあいつの圧勝だった。

流石、由比ヶ浜に中二と呼ばれるだけはある。

……ヒッキーなどと言う俺の呼び名もそうだけど、あいつの考える呼び名って悪意無き悪意って感じでむしろ何よりも恐ろしい。

「お待たせ」

めぐり先輩がお盆を持ってとてとてと戻ってきた。

ソファの前のテーブルにお盆を置くと、中には形の良いクッキーがぎっしり詰まっていた。

「……ん？」

……何だろう、置いた場所若干遠くない？

これだと取ろうとしたらいちいち腕を伸ばさないといけないんだけど……。

「……」

お菓子の配置に違和感を覚えていると、めぐり先輩がクッキーを１つ取って、手の中のそれと俺の顔を交互に見ている。めっちゃ凝視している。

あ、俺を見た。ぎこちない笑顔。い、いかん、来る！
「ひ、比企谷くん……あ、あーん……」
「……」
手をぷるぷるさせながら、めぐり先輩が笑顔で口元にクッキーを差し出してくる。
カフェでは恥ずかし過ぎて避けたんだけど、ここで避けるのは流石に……。
……でも二人きりと考えると余計恥ずかしい……！
てかこの人、俺が自分でクッキーを取るのが面倒になるように遠くに置いたの？
何その愛らしい小細工？　可愛すぎるでしょ。
数秒の間に夥しい程の逡巡を終えて、静かに悟りを開く。
「……あーん」
悟りを開いた割に物凄く戸惑いながら、ゆっくり口を開ける。
めぐり先輩の手が、おずおずと伸びた。
あむっ。
むぐむぐ。
ごくん。
「……美味しい？」
めぐり先輩が微かに俯いて、上目遣いで問うてくる。アンデッドを浄化させる癒しの光の威力がやばい。
「……美味いです」
目を逸らして答えると、めぐり先輩は嬉しそうに小さな声で「良かった……」と呟いた。
……んん？
「……えと……？」
店で売っているお菓子ならこんなリアクションするか……？　と思っていると、めぐり先輩がたははと笑って頬に手を当てた。
「……そ、その、作ってみたん、だけど……昨日」
「……え、あ、そうなんすか。凄いっすね、美味いです……って、え？」
え、これ手作りなの？　……ていうか、昨日？　なんで？　毎日

作ってるのか？
一体何が起きているのかがさっぱり掴めない。
なんだこれ？　取り敢えず妙に恥ずかしいぞ？　何でだ？
「と、とにかく！」
俺が頭の上にクエスチョンマークを乱立させていると（材木座が奉仕部に来て俺と話している時の、雪ノ下と由比ヶ浜と一色がいつもこんな感じだ）、めぐり先輩が無理矢理話題を切るように声を上げた。
そしてクッキーをもう1つ摘まんで、俺の目の前におずおずと差し出す。
「はい、あーん」
「え……」
「……あーん」
ちょっと。
「食べてくれないの……？」みたいな悲しげな顔はやめてよぉ！
拾って飼いたくなっちゃうまである。飼うって表現が色々とまずい。
「うぐぐ……あーん」
観念して2つ目を口にする。
あむっ。
むぐむぐ。
ごくん。
「……どうかな？」
「……これも美味いです」
「やった……ありがとう。それじゃあ次ね」
「え」
「あーん」
この後、わんこクッキーの時間になった。ギブアップは認めてもらえませんでした。
×　×　×
「げふ……」
クッキー地獄から十数分後。

俺はソファでぐったりと寝転がっていた。
量自体はそこまでひどくなかった。ゆうてクッキーだし。
しかし同じ味のクッキーを間髪入れずに口に入れられ、苦しいっすという顔をするとこれまた間髪入れずに紅茶を飲ませてくれたので、何かもう色々としんどい。飲ませてくれたって言っておこう、彼女の名誉の為に。あの人はリアル紅茶タンクだったのか……。
まあ、こんな状態でも食べ盛りの高校生なので、このままでもあと1時間もすれば回復するし、運動を挟めば夕飯時にはちゃんと腹も減るだろう。
……。
「……運動、か……」
「比企谷くん、運動がどうしたの？」
「すいません激しくなんでもないですすいません」
めぐり先輩がクッキーや紅茶を片付けて戻ってきた。
何で俺はあのワードを呟いたんでしょうまるで分かりません。
めぐり先輩は寝転がる俺の頭のすぐ横に座ると、呻く俺のおでこを柔らかな手で撫でてくれた。柔らかな手の温もりに、自然と頬が緩む。
「……ごめんね？　嬉しくてつい……」
「……や、大丈夫ですよこれくらい。運動すればすぐです」
「運動？」
「あ、や、何でも無いです」
頭のすぐ上にめぐり先輩の太腿があるという状況の為に気が気でない。何なのこの甘い匂いは。こんなこと考えてるけど俺は断じて変態じゃない。
口を滑らせて目を泳がせていると、めぐり先輩が身体の向きを変えて、俺の顔を上から覗き込んできた。
「比企谷くん、さっきも運動って言ってたよね？　それって何のこと？　どうしてそんなにこの話を避けようとするの？　別に運動自体は恥ずかしいことじゃないよね？」
めぐり先輩が、優しくも気の強いしっかりした姉のような口調で問

うてくる。
何でも知ってるんですねって言った場合の返しが気になる。や、そうじゃなくて。
「や、えーと、その……っ？」
これを直接答えたら絶対気まずくなるし、どうしよう……四股踏みとか言って適当にごまかそうかなぁ、バランスボールとか言っときゃ良いかなぁ、めぐり先輩がバランスボール乗りながら「よっ……ほっ」とか言ってる光景を見たら和みすぎて来世に直行しちゃうなぁ……などと考えていると、めぐり先輩の顔の……すぐ下の部位に目が行った。
瞬間的に目を逸らして、そろりと声をかける。
「あー、えーっと、先輩、その……」
「？　比企谷くん、どうした……の……」
事態に気付いためぐり先輩の顔が、見る間に赤く染まる。なんだか仮装大賞の採点を思い出した。超どうでもいいな。
めぐり先輩が着ているのは白のワンピースとピンクのカーディガンで、立ったり座ったりしている分には気になっていなかったけれど……今のこの体勢だと、見えてはいけないものがちらりと見えてしまっている。
「あわわ……うぅ……」
めぐり先輩が固まったまま目をきょろきょろさせて口をもにゅもにゅ動かす。
死ぬほど可愛いけど、こんな恥ずかしい指摘をしてしまったのは申し訳ない。
一刻も早く体勢を戻してください……と祈っていると、めぐり先輩が落ち着いたのかふぃーっと息を吐いて、どこか艶のある笑みを浮かべた。
「……見ても、良いよ？」
「……え……？」
あまりに予想外な言葉に、言葉を失った。
×　×　×

――言葉を失った……とは言いつつも、めぐり先輩の言葉を聞いて、俺は仰向けのままでいることを良しとせず、満腹感に呻いていたことも忘れて、神速で起き上がってめぐり先輩の横に正座していた。

俺ってこんな速く動けたんだな。火事場の馬鹿力ってやつだろうか。違うな。

「ひ、比企谷くん……？」

俺の余りの変貌ぶりに、めぐり先輩が存分に戸惑っていた。引いていないだけマシというものだ。

俺のテンションはあの緊迫した状況下でのめぐり先輩の思いがけぬ言葉により、完全に振り切れてしまっている。童貞みたいだ。童貞だけど。

「……見て、良いんですよね？」

あまり声がぎらつかない程度に抑えながら聞くと、めぐり先輩が「う、うん……」と戸惑いながら頷いた。

……ほんの十数秒前に自分で言ったことを繰り返すのが躊躇われるくらい、今の俺はウザいテンションなんだろうか。

腕を組んで、熟考する。

めぐり先輩の胸を見て良いという、今のこの状況について。

――この言葉の、何と甘美なことか。

めぐり先輩の胸を見るということはそれ即ち天使の胸を見るということ。そしてそれ即ち戸塚のごめんなさいなんでもないですやり直し。

……めぐり先輩は見ても良いとは言ってくれたが、どの程度まで許してくれるのかまでは言及してはいない。

なので、さっきの状況――所謂胸チラという状況までは少なくとも許可されていると見るのが妥当だろう。

……よし、決めた。

「……これなら負けない」

「何に!?」

めぐり先輩の強めのツッコミが返ってきた。

正座を解いて、ソファの背もたれにもたれかかる。

ふひー。
「……先輩」
「……な、何かな？　比企谷くん」
座っている俺の脚と脚の間を指差す。
「……ここ、座ってもらえますか？」
「え……？」
めぐり先輩が、期待を孕んだ声で返事を……とはいかなかった。
心底戸惑っちゃってる。どうしようごめんなさい。
「あ、すいません、ここ座ってもらえますか？　きついのならやんなくて良いんで」
頭をがしがし掻いてポップめに言い直すと、めぐり先輩はどこか安心した表情を浮かべた。
数秒前までの俺、猛省。
「あ……ううん、きつくなんてないよ？　……わかった」
まだ戸惑いは見せながらも、めぐり先輩が柔らかな微笑みを浮かべる。
「……っ」
俺の前に立って、小ぶりで可憐なお尻をこちらに向けたとき――どうしようも無い程の劣情と、この人にこれからこんなことをして良いのかという迷いとが、胸の中で同時に湧き起こった。
続く。

（４０）

「それじゃあ……お邪魔、します……」

ソファに座る俺の前に、めぐり先輩が背を向けて立っている。

振り向いて恥ずかし気にぽしょりと呟くと、お尻の部分の衣服を手で押さえてゆっくり腰を下ろした。

ぽすんっ、と。

柔らかな音と共に、俺の両脚の間にめぐり先輩がすっぽり収まる。

……。

「……取り敢えず、あと５時間くらいこうしてましょう」

「それは流石にきついよ……」

げんなり気味に返された。意外とイケる気がするんだけども。

……語弊しかないな、この表記。

――ここで、さっきのめぐり先輩の言葉をもう一度思い出す。

『……見ても、良いよ？』

……思い出したら吐血しそうになった。

この言葉から今の自分がやっても良い行為を分析して、さっきと同じように胸を覗き込むまでなら許されると仮定した。

早速行動を開始する。

ソファの背もたれから身体を起こしてめぐり先輩のふわりとした背中に密着する。

「……はわっ……ひ、比企谷くん……っ？」

戸惑うめぐり先輩に内心悶えながら、両腕をめぐり先輩のお腹にそろりと回して、後ろからきゅっと抱きしめた。

「はわ……わ……っ」

めぐり先輩の首がせわしなく動き、腕も所在無げにちょろちょろと動いている。何この可愛い生き物……。

――見るべきものを見る為に、めぐり先輩の左肩にぽすりと顎を乗せた。

「んぁ……っ」

俺の行為に対して、今度は若干違った反応をめぐり先輩が見せる。

どことなく色っぽい吐息が混じった声は、本人が恥ずかしがるくらい分かりやすいものだった。
そこからしばし、何も言うことなく特定の箇所をじっと見つめる。
「……ぁ……っ」
俺が何をしているのかに気付いたようで、めぐり先輩が頬を朱に染めて微かに身じろぎする。
しかしその抵抗も形だけのもので、本当に抵抗するつもりなどまるで無いということが手に取るように分かる。
それでも、念を押すように言葉を紡ぐ。
「……先輩。……見ても、良いんですよね？」
耳元で囁くと、めぐり先輩はおとがいを上げて小さく呻いた。
めぐり先輩が、ちらりと熱っぽい流し目を送る。その視線には一抹の不安と期待とが込められていて、言葉として返事を聞くまでもなかった。
「じゃあ……先輩。お願いがあるんですけど、良いですか？」
「な……なに？」
俺の言葉にぴくりと反応しためぐり先輩のお腹を、絶対に逃がさないという意志を示す為にきゅっと優しく締める。
その瞬間、めぐり先輩が薄くて愛らしい唇を震わせた。

× × ×

「先輩に広げて見せてほしいです」
「え……？」
めぐり先輩がこちらを振り向く。
その顔にははっきりとした疑問の色が浮かんでいる。
うなじに軽く口付けをして、もう一度伝える。
「だから、先輩の胸元を、先輩自身で広げて見せてほしいんです。もちろん無理なら言ってくださいね」
「え、あ、ええ？　そ、それは、そんな、でも、その……うう……」
余計な言葉を付け加えたことで、めぐり先輩が更にテンパる。可愛いなぁ……。
敢えて何もせずに、お腹をさすさすと撫でながらめぐり先輩の動き

を見守る。
俺が返事を待っていると気付いたのか、めぐり先輩はうんうん唸って、最終的に顔を真っ赤にして振り向いた。
「……わかったよぉ……っ」
「……ありがとうございます」
可愛すぎて押し倒すところだった。危ねぇ……。
返事をした後もめぐり先輩はまたしばらくうんうん唸り、小さな声で「比企谷くんのエッチ……」と呟いた。死にそう。
めぐり先輩がおずおずと自分のワンピースの胸元に手を伸ばす。
ワンピースは前側をボタンで留めるタイプのものなんだけど、そもそもこれってボタンを2つくらい開けてないと、さっきみたいに胸元が見えたりしないということに今更気が付いた。
……あれ？　めぐり先輩……今日一日、ボタン開けてたっけ？　閉めてたっけ？　途中から開けたの？　それとも最初から開けてたけど俺が気付いてなかっただけ？
……あれ？
頭の中であれあれ言っていると、めぐり先輩が手を震わせながらもボタンを2つ程外した。
「……っ」
はっきりと見える、めぐり先輩の愛らしい双丘と小さな谷間にごくりと息を呑む。
ワンピースと乳房の間に微かに見える純白の生地が、鼓動を一気に跳ね上げた。
俺の反応が音だけで分かったのか、めぐり先輩が恥ずかしそうに顔を逸らした。
しばし、互いに無言になる。
俺はひたすらめぐり先輩の双丘を見つめ続けて、めぐり先輩は顔を必死で逸らし続ける。
「……っ？」
めぐり先輩の手が、俺の手に重ねられた。聖母のような温もりに安心感を覚える。

めぐり先輩が振り向いた。顔は真っ赤なままで、今にも泣き出しそうな程目が潤んでいる。
愛らしい唇が開いて、言葉が紡がれた。
「……恥ずかしいよ……っ」
「……っ」
ほんの少し子供っぽくなった声音で囁かれて、愛おしさのあまりめぐり先輩の唇に吸い付いた。
「んふぅっ……？　……んむっ、ちゅるっ、ちゅぴっ、んはぁ……っ、あふっ、くふぅん……っ」
抵抗することなく俺の舌を口内へ招き入れると、めぐり先輩も舌を絡めてきた。
互いの舌が相手の口内に侵入して、優しく犯していく。
めぐり先輩の舌を咥えてちゅぽちゅぽと音を立てて吸い付き、舌にまぶされた、クッキーと紅茶の風味の残る甘い唾液を丁寧に啜る。
「んひゃぅぅ……んふぅっ、ちゅぴっ、ちゅぽっ、ちゅりゅ、じゅぷ、ちゅぴぴ、ちゅりゅりゅ……」
めぐり先輩も俺の舌に吸い付いて、陶然とした表情で唾液を啜る。こくりと音を立てて唾液を飲み込む様は、息が止まる程艶めかしい。
めぐり先輩が俺の両の手を握って、悩ましく指を絡ませてくる。
艶を帯びた瞳に。
淫猥な動きをする指の動きに。
熱を帯びた背中に。
甘い匂いを放つうなじに。
耳が蕩ける程耽美な声音に。
ふるふると震えながら、しっとりと湿り気を帯びている双丘に。
――幾層にも積み上げたはずの理性が、丁寧に一枚ずつ剥ぎ取られていく。
「……ぷはぁっ、……はぁっ、はっ、ふぁぁ……っ、んふぅっ、はぁっ、はぁっ……」
糸を引きながら唇を離す。キスをする時に傾けた首の角度をそのままにして、静かに息を荒げる様子は、見ているだけでジーンズの中

身がぎしぎしと痛む。
ずっとめぐり先輩のお腹を抱いていた腕を解いて、脇腹に手を添えた。
「……ぁ……っ」
めぐり先輩が言葉にならない声を上げて、ちらりと俺を見た。
脇腹に添えた手を、少しずつ、緩慢な動作でずり上げていく。
めぐり先輩は俺の太ももに手を添えて俯き、手の動きをじっと見つめている。どんな表情をしているかは分からないが、荒くなった息ははっきりと聞き取れる。
やがて、双丘のすぐ下まで手が行き着いた。
何も言わず、めぐり先輩の横顔を見つめる。
……こきゅっ。
可愛らしく鳴った喉の音が、許可と期待の両方を表していた。
続く。

（41）

めぐり先輩のお腹に手を添えて徐々に上に滑らせていき、可愛らしい双丘のすぐ下に行き着く。

手の動きを止めてめぐり先輩の横顔を見つめると、細い喉が小さく鳴った。

それを承認と捉えて、ゆっくりと手を上に滑らせる。

――ふにゅん、と。

めぐり先輩の乳房を下から支える形で、手のひらが柔らかな重みに触れた。

「ん……っ」

めぐり先輩が、頬をほんのり朱に染めて目を閉じて俯く。

愛おしむように指をほんの少しだけ内側に曲げると、心地良い弾力が返ってくる。

そのまま、指の曲げ伸ばしの強さも幅も一定に保ちながら、ゆっくりとめぐり先輩の乳房を揉みしだいていく。

「ふっ……くふぅっ、んふぁぁ……っ」

切なそうな、それでいて甘い声をめぐり先輩が漏らす。

両手で自分のお腹を抱くようにしてふるふると震える様は、愛おしさが湧くと同時に抑えがたい劣情を催す。

それでも決して乱暴にすまいと、努めてゆっくりゆっくり揉み続ける。

「……」

もにゅもにゅと形を変えるめぐり先輩の柔乳をもっと見ようと、肩越しに目を凝らす。

抑えきれずに微かに荒くなった息がめぐり先輩の耳に吹きかかると、その途端びくんとおとがいを上げた。

「んふぅぅ……っ！」

「え……っ」

めぐり先輩の反応が変わったことに驚いて声を上げると、恥ずかしくなったのか顔を真っ赤にして再び俯いた。

可愛さとピュアさと癒しに加えて、今度は慎ましい色気がめぐり先輩の属性に追加された。要は死にそう。
あまりに反応が可愛かったため、これなら乱暴にはならないよな……と自分の心の中で予防線を張りつつ、今度は意図的に息を長めに吹きかける。
「んふぅぁぁぁ……っ？　んぁっ、やんっ、比企谷、くん？　そんなの、だめ、だめだったらぁ……っ」
俺の息から逃れようと、めぐり先輩がへにゃりと首を曲げる。
そんなことをしても俺との距離は大して変わらないので、柔乳を揉む指の動きも止めぬままに更に口を近付けて、耳にキスしながら息を吹きかける。
「あふぁぁぁ……っ、それ、だめ、おねがい、比企谷くん、やぁん……っ」
ますます身体を震わせて、やり場を無くした手を俺の頬と太ももに添えてくる。
何とは無しにやった行動なのだろうが、その行動の結果俺とめぐり先輩の口が急に近付いた。
吸い寄せられるように唇を合わせると、耳に息を吹きかけられるのを防ぐためなのか、積極的に舌を絡めてくる。
「んふぅぅっ、くちゅっ、れろっ、ちゅる、ちゅぷぷ、はぁんっ、んふぁぁ……っ」
よほど興奮しているのか、めぐり先輩の舌はまるで熱湯に浸したように熱く、柔らかい。
甘い唾液と相俟って、口付けだけで意識が蕩けそうになる。
「……ぷはっ、はぁっ、んはっ、ふぅぅ……っ」
キスを終えためぐり先輩の顔は柔らかな快感に浸かっていて、目はとろんとして半開きの口の中には糸が引いている。
この人をもっととろとろにしたい――そう思い、乳房を揉みしだいていた右手で今度はめぐり先輩の頭を撫でて、もう一度耳に息を吹きかけ耳たぶを咥える。
「はぁぁぁ……っ！　ひ、比企谷くん、そんな、だめ、だめだよぉ……っ、あっ、ふぁぁぁ……っ」

めぐり先輩の身体が弓なりに反りかえって、それによって乳房を味わう手の指がますます沈み込んだ。
めぐり先輩の両手が俺の右手に伸びて、意味もなくすりすりとさする。
だめだなんて言いながらもその顔はすっかりこのやりとりにハマっていて。目の前のこの愛くるしくて艶めかしい女の人を益々とろけさせたくなる。
不意に、めぐり先輩の両手に力が入った。
「……どうしました？」
耳の中に直接息を送り込むように話しかけると、めぐり先輩がびくりと跳ねた。
「……もっと、強くして、いい、から……っ」
消え入るような声で呟くと、めぐり先輩は顔を真っ赤にして俯いた。

× × ×

「はぁぁぁぁぁぁ……っ」
純白の丘に両手の指を深く沈み込ませると、めぐり先輩は天井を見上げて官能的な吐息を漏らした。
体重が後ろに預けられてそのまま倒れてしまい、ソファの背もたれとめぐり先輩の背中に挟まれる形になる。
もにゅ、もにゅ、もにゅ……。
ゆっくりと、それでいて一定のペースでめぐり先輩の胸を味わうと、顔の横から荒い息遣いが聞こえた。
「はぁぁっ、ひゃぅっ、んくぅぅっ、ふぁぁんっ、くぁぁぁ……っ」
両手をソファに投げ出し、俺になされるがままにめぐり先輩が甘ったるい艶声を漏らす。
時々悪戯するように耳を咥えてめぐり先輩の反応を楽しんでいると、ふと視線が双丘の下の方に移った。
そこにあるのは、まだ見ぬめぐり先輩の一番大事な部分。
「……」
喉が鳴るのをバレないようにするため、ごくりと鳴る瞬間にめぐり

先輩の乳丘をきゅむっと強めに揉んだ。
可愛らしい嬌声を上げて仰け反るめぐり先輩の表情を見て、普段の姿からは考えも付かない程扇情的なことに改めて驚く。
――俺はこれから、この人と……。
考えただけで、息を呑んだ。
「先輩……」
どこか余裕の無い声で呼びかけて、両手を双丘から離し――ロングスカートのワンピースの裾をまくり上げ、太ももにぴとりと触れた。
「ひぁっ!?」
目をむいて驚くめぐり先輩を見て、この行為は彼女にとって大丈夫なのかどうかを探る。
「……っ？　……っ」
俺の視線に気付いためぐり先輩が、そっと俯いて視線を外す。
拒否もしなければ、肯定もしない。
それを肯定と捉えて、ゆっくりと裾を捲りながら、白くすべすべとした太ももを撫でていく。
「んふぅぅ……っ」
僅かに指を動かしただけでも敏感に反応するめぐり先輩の様子を楽しみながら、指の腹で撫で、手の平で揉み込み、爪でつつっとなぞる。
焦らすように責める度に、めぐり先輩は身体を悩ましくくねらせた。
「ふぅっ、ふっ、ふっ、ふっ、ふぁぁ……っ」
「……」
……うーん、少しやりすぎたかもしれない。
めぐり先輩はさっきまでの乳房への責めもあってかくたくたになっていた。上気した顔にも疲れが滲んでいてかなりしんどそうだ。
めぐり先輩からそっと手を離す。
……少し、休憩することにした。
「先輩、疲れましたよね。ちょっと休みましょうか」
休んでる間ずっと撫でてようかなぁなどと考えていると、めぐり先

輩がきょとんとした顔をした。
「え、続けてくれな……あ」
「え」
「……」
「……」
「……」
「……」
茹でダコの出来上がり。
ああもう何なんだよこの人可愛すぎるだろ……。
めぐり先輩に見えるように、目の前で手をわきわきとさせる。
「続き、しますね」
「ひゃぁぁぁ……っ」
可愛らしい泣き声をめぐり先輩が上げた。
わざわざ自分から言ってくれたんだから、やらない手は無い。
――まだ見ぬ、めぐり先輩の一番大事な所。
そこは一体どれだけ綺麗で。
どんな匂いで。
どれだけ濃厚な味わいで。どんな音を立てて。
どれほど柔らかくて熱いんだろうか。
そんなことを楽しみにしながら、自爆しちゃったと頭を抱え嘆くめぐり先輩の太ももに、情欲と愛情に溢れた手を伸ばした。

続く。

（４２）

俺の腕に包まれてもじもじと身体をくねらせるめぐり先輩。
うなじから香る匂いは時間の経過と共に甘ったるさを増して、匂いを嗅いだだけでその心地良さに陶然としてしまう。
めぐり先輩の一番大事な所に触れよう――と思った時、ふと気付いたことがあった。
「あー……先輩、先にこっち良いですか」
「え……ひゃんっ!?」
めぐり先輩に質問はしながらも返答を待つことなく、ワンピースのボタンを更に開ける。
――先に、めぐり先輩の上の下着を見ときたいよね、うん。
ここまで来た所で、自分の中で守りたい順番がある事に気付いた。
ボタンを外して手で広げてやると……めぐり先輩の下着が姿を現した。
純白に白のフリルが付いた下着はとても可愛らしくて、それでいてめぐり先輩の白い肌は興奮で桜色に紅潮していて、そのコントラストに思わず息を呑んだ。
「うぅ……っ」
めぐり先輩はよほど恥ずかしいのか、俺から顔を背けて横を向いてぷるぷると震えている。
ちゅっ、とめぐり先輩のうなじに吸い付いて、それと同時に指を純白の丘に沈み込ませると、めぐり先輩がびくりと身体を戦慄かせた。
舌先でうなじをなぞり、音を立てて吸い付き、乳房の頂をそれぞれの手の中指でくにゅくにゅと押し込む。
「あぁぁぁ……っ、あっ、やっ、んくぅぅぅ……ひんっ、ひぁっ、あっ、あぁっ、あぁぁ……っ」
恥ずかしさの中にも確かな官能の色を帯びた声を漏らして、めぐり先輩が愛撫に合わせて悩ましく身体をくねらせる。
ふと、めぐり先輩が再び前を向いた。そして小さく震えながら、婀娜っぽい流し目を送る。どうしたのかと思ったのだけど、その視線の

動きから何がお望みかに気付いて思わずにやけそうになった。
つぷり、と。
めぐり先輩の耳の中に舌を挿し込むと、めぐり先輩はくひんっと短く声を上げてびくりと震えた。双丘を両手いっぱいで包み込んで更に強く揉みしだく。
スポンジの泡を出す時のように１０本の指で同時に握り込み、時にはウェーブするように揉み込み、生地越しにはっきりと感じる双丘の頂を中指と親指で摘まみ、徹底的に柔肉を味わう。
「はぁぁぁぁ……っ」
耳への責めも相俟って、めぐり先輩の嬌声がとろとろに蕩けたものに変わる。
思考を溶かす快感の逃がし方を必死で探っているのか、手は所在無さげに俺の太ももを撫でていて、内ももは艶めかしくすり合わせている。
耳から舌を離してめぐり先輩の横顔を見ると、目はすっかり虚ろになっていて――完全な無抵抗状態になっていた。
――そろそろ、良いかな。
上を責めるのはここまで。後は……。
左手はめぐり先輩の柔肉を味わったまま、右手だけ手を離す。
「……っ？」
何故右手が離れたのかと、めぐり先輩が甘える目つきでこちらを見た瞬間――一息に白のワンピースをめくり上げ、下腹部に手を滑り込ませた。
中指の腹でショーツの中心部を押し込むと……熱くとろとろに濡れた感触があった。
「～～～～っ!?　んふぁぁぁぁ……っ！」
めぐり先輩が一際大きく身をよじらせ、不意に襲った快楽の大波に悶える。
――恐らく、めぐり先輩の局部はある程度は濡れているだろう、これくらい感じてくれてるんだし……と思って触ったのだけど、実際はその予想を遥かに超える事態になっていた。

ショーツは温めたローションに浸したのかと思うくらいに熱くいやらしい水気を含んでいて、クレバスに沿って中指を前後に動かすと、ぐちゅぐちゅと淫猥な音を奏でた。
「はっ、はぁんっ、だっ、だめっ、これ以上……んはぁっ！」
めぐり先輩は首をふるふると振って懇願するような目で俺を見てきたけれど、中指を膣口に生地越しに沈み込ませると、身体を跳ね上げて背中を反らせた。
めぐり先輩のうなじを見ると桃色に紅潮した肌はじっとりと汗ばんでいて、白のワンピースが肌にぺたりと貼り付いていた。
扇情的な肢体にごくりと息を呑んで、乳房と淫裂を嬲る指の動きを激しくする。
「あっ、んっく、ひんっ、はぁぁっ、ひ、比企谷、くん……っ、だめ、だめだった……らぁ……っ！」
腕の中でびくびくと身体を跳ねて喘いでいたが、ふと、後ろに体重を預けていた状態から身体を起こした。
何をしようとしているのかと様子を見てみると、どうやら立ち上がって逃げようとしているようだった。
……そんなこと、させる訳が無いのに。
「先輩。何逃げようとしてるんですか」
めぐり先輩の羞恥を煽りたい、且つ目の前の柔らかな牝の象徴を生で見たい――そんな意思から、耳元で囁いてめぐり先輩の動きを一瞬止めて、その隙にブラのホックを外した。
フロントホックのタイプにしていたのは、経験の無い俺でも外しやすいようにしていたのだろうか……なんてことを呑気に思いながら。
「ひゃあああぁぁんっ!?」
俺が生の柔肉を拝むよりも早く、めぐり先輩が身体を丸め込んで隠してしまう。
……途中から、明らかにめぐり先輩をいじめる方向に進んで行ってるなとは思ったけど……めぐり先輩は恥ずかしがるだけでまるでいやがっていないから良しとする。
めぐり先輩のお腹を抱きかかえて身体を起こして互いの背筋が

真っ直ぐ伸びた状態にすると、胸の部分を手で隠しながら顔を真っ赤にしてやんやんと首を振った。
……恥ずかしがるだけで、まるでいやがっていない……よな？　うん。きっと大丈夫。きっと大丈……夫？
こんな不安を抱えながらも、手は自然と動いて、ワンピースの前を留めているボタンを全て外す。
「ひゃうぅぅぅ……っ」
もう限界に達しているのではと思うくらい真っ赤になっているめぐり先輩の手をどかして……一切隠す物が無くなった柔乳に見惚れる。
程好い大きさに、柔らかな肉付き。ぴんと張り詰めた乳頭はひくひくと震えていて、その先端を摘まむ者を待ち望んでいるようだ。
「……綺麗、です」
お世辞でも何でもなく、自然と言葉が零れ落ちる。
めぐり先輩は見られることは諦めたのか両手で顔を隠していたけれど、俺の言葉を聞いてそろそろと両頬に手をずらして、涙目で俺を覗き込んだ。
「……ほんとう？」
ちょっと可愛すぎて動悸がしたけど、何とか平静を装う。
「……本当です。何かもうちょい気の利いた言い方が出来れば良いんですけど……本当に、綺麗だな、って」
たどたどしく伝えると、めぐり先輩は再び手で顔を覆ってやんやんと首を振り、その動きを止めるとちらりと覗きこんできた。
「その……あり、が、とう……。……嬉しい、な……」
「……っ」
つだあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！
自慢してぇ！
周りに自慢してぇよぉ！
何この可愛い人!?
はぁん!?
はぁん!?

はぁん!?
ふぅ。
内心だんじり祭りばりの盛り上がりを見せて、何とか落ち着いた。
「……じゃあ、触ります。先輩の表情見たいんで、その手は取ってください」
「それは……だめぇ……っ」
言うと、めぐり先輩がまたまた手で顔を覆ってやんやんと首を振った。そろそろ死にそうなんだけど。
首を振った拍子に顔におさげがぺちぺち当たりますし。可愛いから良いんですけどね。
「先輩が手をどかしてくれないと……」
「……っ」
優しく耳元で囁いて、めぐり先輩のお腹をゆっくりと擦る。
「……何するかわからないですよ？」
「……っ」
こきゅっという音がして、めぐり先輩の喉が動いた。
しばし待つと、めぐり先輩の手がゆっくりとどけられる。
「……優しく、して……っ？　さっきまでしてくれてたみたいに……ねっ？」
「……っ」
カウンターが凶悪すぎる。
ぶんぶんと首を上下に激しく振ると、めぐり先輩が頬を朱に染めながらくすりと笑った。その微笑みに安らぎを覚えながら、視線をめぐり先輩の胸元に動かす。
「……それじゃ、いただきます」
「……その言い方、何かえっちだよ……？　……あ」
「え」
「何でもない、何でもないからっ」
こういうことを言うのにまだ抵抗があったようで、自分から言ったにも関わらず会話が切られた。切り方もやたらめったら可愛いから良しとする。

会話が長かったからか、めぐり先輩が一瞬ぶるりと震えた。
いけないいけない、早く温めないと。
……優しく、徹底的に。
続く。

（４３）

めぐり先輩のワンピースの前面を留めているボタンを全て外し、皮を剥くようにするりとはだけさせる。

「……っ」

すっかり上気した半裸の身体に、ごくりと息を呑む。

めぐり先輩は微かに顎を震わせながらも懸命に目は開けていて、恥ずかしさに頬を真っ赤にしながらもさっきまでのように顔を手で隠したりはしない。

ワンピースを掴み、目で促して腰を浮かせて腕を抜いてもらい、ショーツ一枚の格好にしてしまう。すると、めぐり先輩が小さく声を漏らした。

寒いだろうと思いながらも、つい見惚れてしまう。

……こんな綺麗な身体の、一体何を恥じる必要があるんだろう。

そう思ったけれど、そのまま言う度胸も無いが故に、

「……綺麗です」

さっきも言った言葉を、改めて、噛み締めるように伝えると、めぐり先輩は婀娜っぽい流し目を送り、恥ずかしがりながらも嬉しそうにこくりと頷いた。

めぐり先輩の身体に手を伸ばす。

まずは、めぐり先輩をお腹をさすって、ゆっくり焦らすように指を這わせる。

めぐり先輩の肩に顎を乗せて表情を確認すると、不安げではあるけれど、しっかりと俺の手の動きを見つめていた。

「ひゃん……っ」

脇腹を撫でると、くすぐったそうに身を捩らせた。

愛おしさを感じながら、ゆっくりと手を上に滑らせて、やがて小ぶりな山の麓に行き着く。

「……じゃ、行きます」

言うと、めぐり先輩が戸惑いながらもこくりと頷いた。

――ふにゅん。

「んふぁぁぁぁ……っ」
双丘の下の部分を触ると、めぐり先輩が悩ましい声を漏らす。
そのまま指で優しく揉み込みながら上に上っていくと、めぐり先輩は自分の人差し指を唇ではむっと咥えて声を押し殺した。
「……だめですよ。ちゃんと声を聞かせてください」
耳元で囁いて――可愛らしい乳頭をきゅっと指で摘まんだ。
「やぁんっ！」
突然の強い快感に一際甲高い声を上げて、めぐり先輩が口から手を離して身体を丸めた。
追いかけるように俺も身体を丸めて、止めることなく責め続ける。
乳頭を摘まんでもめぐり先輩は痛がるどころかかなり良い反応を示したので、更に理性の糸を焼き切らんと指一杯に広げて乳房を揉みしだく。
手の中にちょうど収まる柔肉は、十本の指の中で自由自在に形を変えてくれた。
「あっ、んふぁっ、いきなり、そんなの、だめ、だよぉっ……はぁんっ！　だめ、だめ、だめだったらぁ……っ」
みるみる内に声がとろとろに蕩けていき、めぐり先輩の瞳に欲情の火が灯る。
身体は丸めたままで、俺の手に自分の手を重ねて抵抗の素振りを見せようとしているけれど、力はまるで入っていない。
めぐり先輩の心の葛藤が手に取るように分かった、思わずにやけそうになる。
めぐり先輩のじっとり汗ばんだ背中にごくりと喉を鳴らして、中心に沿ってずるりと舌を這わせた。
「ひぃんっ!?　だ、だめ、ほんとに……っ、もう、わけわかんないよぉ……っ」
背中を襲った刺激に背中を微かに伸ばした。
その顔は今にも泣き出しそうだ。
流石にちょっと気が引けてしまい、そろりと尋ねる。
「あの……先輩。本当にやめたかったら言ってくださいね」

真摯に言ったつもりだったんだけど……めぐり先輩は、どういう訳か口を尖らせた。
「……そんなの、言う訳ないでしょ……ばか……っ」
「……っ」
真っ赤な顔でこちらに流し目を送るめぐり先輩の表情があまりにも可愛くて。
「ひゃぁんっ!? あっ、ちょ、ちょっと、比企谷くん……っ！」
両手で愛らしい膨らみをもみくちゃにしながら、人差し指で乳頭をぐりぐりと嬲る。
指の腹でこねくり回し、爪で弾き、親指も使って挟み込む。
「あっ……ひっ、ひぁっ、……比企谷、くん、ひき……がや……くん……っ」
前屈みになって、めぐり先輩の声がどんどん甘ったるく変化していく。たまらなくなってめぐり先輩の両脚の根元に右手を滑り込ませると、純白のショーツは先程に比べて更に濡れていて、触れただけで発情の具合が手に取るように分かった。
「うぅぅぅ……っ、うぅぅぅ……っ！」
ぐっしょりいやらしく濡れた生地に中指と薬指を押し込むと、めぐり先輩が口を真一文字に引き結んで必死で堪え始めた。
じゅぷじゅぷと音を立てながら濡れた渓谷を指でなぞり、時折押し込むと、泉の底から更に淫液が溢れ出てくる。
媚香でも焚いているのかと思う程に淫猥な匂いが立ち込めて、妖しく鼻腔をくすぐる。
「先輩……すごいです。ぐっしょぐしょですよ」
「やぁ……っ」
恥ずかしい言葉を投げかけても、めぐり先輩は手で口を覆うことはせずに（律儀だ）、必死で声を抑える。
もっと声が聞きたい一心で、二本の指を淫裂にぎゅっと押し込んだ。
ぶじゅぷぷといやらしい音を立てて、大陰唇の中に指とショーツがめり込む。

「あぁぁぁぁぁっ！」
「っ！」
めぐり先輩が口をかぱりと大きく開け、抑えることの無い喘ぎ声を上げた。
上唇と下唇の間にはいやらしい糸が引いていて、あまりに淫靡な光景に目が血走るのではと思う程にその艶姿を凝視してしまう。
「ひ、ひきがや、くん……っ、ひぐぅっ、も、もう、お部屋に行こう？
ひんっ！　……ね？　もう、これ以上ここでされたら……んふぁぁっ！　ほんとに、本当に……んくぁぁぁぁ……っ」
めぐり先輩が振り返って、必死の顔で懇願してくる。
その間も発情した乳房と淫裂への愛撫を止めないでいると、哀願の言葉が面白い程途切れ途切れになって、たまらなく嗜虐心をそそってくれた。
「んー……もうちょっとだけ、させてください」
「そんな……んはぁぁっ!?」
痛みを感じない程度の荒々しさで、指を折り曲げて生地を巻き込むように、淫裂をぐちゅぐちゅと指の腹で押し込む。
清純さを纏っていた純白のショーツは見る影もない程淫猥に濡れそぼっていて、中の恥毛がうっすらと透けて見えた。
「だめ、だめ、だめ、だめ……っ、ほんとに、だめなのぉ……っ！」
「あ……っ？」
めぐり先輩の身体からがくりと力が抜けて、前によろけて倒れ込みそうになる。
慌ててお腹を掴んだが、速度を落としたものの止まることなくゆっくりと前に倒れ込んで――こちらに尻を突き出して顎をカーペットにくっつけて、まるでどこかの王様にひれ伏しているかのような体勢になってしまった。
「う……ぉ……っ」
目の前に突き出された、予想外に肉付きの良いむっちりとした尻が放つ強烈な魅力に言葉を失う。
「もう……だめ、なのぉ……っ、お部屋行こうよぉ……っ」

めぐり先輩は今の自分の格好が、どれだけいやらしいものなのか気付いていないのだろうか。
うわごとのようにさっきと同じ言葉を繰り返しているのをよそに、俺は急いで服を脱ぎ捨てる。
これからの流れに備えての脱衣だったんだけれど、焦るあまりにみっともない脱ぎ方をした気がする。
まあ、そんな俺の姿も今のめぐり先輩は見る余裕が無い訳だけど。
無言のまま、もう一度めぐり先輩の臀部を眺めて期待に胸を膨らませる。
この薄い生地一枚を剥いだら、一体どんな極上の光景が待っているのか……ぎらぎらと獣欲を滾らせた瞳で見つめながら、めぐり先輩の身体に手を伸ばした。

続く。

（４４）

めぐり先輩がソファから崩れ落ちて、俺に向けて尻を突き出す形になる。

ぐっしょりと濡れたショーツは肉付きの良いむちむちとした尻にぴたりと張り付いて、雨にでも打たれたのかと錯覚する。

ソファからゆっくりと下りて、膝立ちになってめぐり先輩の尻をがしりと掴んだ。

湿ったショーツの生地に親指が、上気したもちもちの肌にそれ以外の指がぐにりと食い込む。饅頭を掴んだかのような柔らかさに驚いた。

「ひぃぃん……っ、ひ、ひきがやくん……だめ、だめだよぉ……っ」

めぐり先輩は俺が尻を鷲掴みにした瞬間びくりと身体が跳ねたものの、もはや抵抗する余力も無いのか、力ない瞳で必死で懇願するに留まっている。

そんな弱々しい瞳で見つめられたら、余計にめちゃくちゃにしたくなるのは目に見えているのに。

「……先輩。だめじゃないですか、こんな挑発的な格好しちゃ。こんな格好されたら……」

言って、期待の念で喉を鳴らす。

ショーツの端に指を引っ掛けて、焦らすように緩慢な動作でずぶ濡れの下着を下ろしていく。

「あぁぁぁ……っ、やぁぁぁ……っ」

めぐり先輩はおでこをカーペットにこすりつけて、涙声を漏らして震えている。

小さく縮こまっている背中を視線で舐りながら、ずるりと引き下ろす。

太ももまで引き下ろした所で手を離すと、淫らに湿ったショーツはべしゃりと音を立てて膝まで一気に落ちた。

その音と感触で恥ずかしくなったのか、めぐり先輩は小さな声で「やぁぁ……っ」と唸った。

「……っ」
めぐり先輩の大事な所を凝視して、言葉を失う。
香り立つ甘酸っぱい媚香に目がくらみ、ひくひくと蠢く花びらは極上のご馳走に見える。楚々と生えた恥毛は淫液で張り付き、めぐり先輩の荒い呼吸に合わせて淫部全体が緩やかに震えていた。
今までの行為でだって、めぐり先輩はこんなにも発情して、牝の身体になっている。これ以上のことをした時、この身体はどんな反応を見せてくれるんだろう……？
期待感にぶるりと身体を震わせて、尻の双丘を指いっぱい広げて鷲掴みにした。
「あぅぅぅ……っ」
めぐり先輩のくぐもった甘い声が耳朶に染み入るのを楽しみながら、ぐにぐにと揉みほぐしていく。親指で中心部を押し広げると、膣口と菊穴が物欲しそうにいやらしくひくついた。
「先輩の尻って、普段のイメージと違ってなんかすごいエロいんですね。むちむちしてて、いかにも触ってくれと言わんばかりですよ。なんでこんなに良い肉付きをしてるんですか？」
めいっぱい淫部を押し広げながら意地悪な質問をすると、
「やぁぁ……っ、そんなの、知らないよぉ……っ、ばかぁ……っ」
涙声で答えて、めぐり先輩がきゅっと下半身に力を込める。
それに合わせて膣口が収縮したのを見てどきりとした。
「それもそうですよね……」
生返事をして、手のひらを上向きにして濡れそぼったクレバスに中指を這わせる。
指の腹を入念に押し付けると、めぐり先輩の身体の熱が一段と上がった。
押し付けるようにしながら指を前後に動かすと、熱い粘液がくちゅくちゅと溢れ出してきた。
「やぁん、もう……だめ、ほんとに……うぅぅぅ……っ」
めぐり先輩の淫裂を嬲る度に、淫らな声を聞く度に、反り返った肉茎がびくびくと脈打つ。

手のひらを下向きにして中指を膣口に宛てがうと、僅かな力を入れただけで第一関節までちゅるんと入り込んだ。
「ひぁぁぁぁぁぁ……っ！」
たまらなくなったのか、めぐり先輩が肘を伸ばして上半身を起こし、こちらを振り向いていやいやと首を振った。
そんな仕草とは裏腹に、第一関節まで飲み込んだ指を肉襞はきゅむきゅむと締めつけてくる。
己の痴態に喘ぐめぐり先輩の格好は犬を彷彿とさせて、更なる劣情を煽る。
左手で尻肉を押さえて、更に中指を推し進める。
「あおぉぉぉ……っ、ひっ、ひっく、やらぁぁぁ……っ」
めぐり先輩は顔を上に向けて背中を反らし、まるで犬の遠吠えのような格好で獣じみた声を上げる。
めちゃくちゃに掻き回したくなる衝動を必死で抑えながら、じっくり味わうように関節をくにくにと曲げて膣肉にしゃぶりつく。
指を曲げ伸ばしする度に中は解れていって、めぐり先輩の両足も徐々にだらしなく開いていった。
指でかき回していくと、ぐちゅぐちゅといやらしい水音がリビングに響き始める。
淫猥な粘液が手のひらから前腕を伝って、カーペットにしみを作っていく。
「あっ、あぅっ、あっ、あれっ、これ、本当にやば……っ、あっ、あうっ、うぅぅぅ……うぅぅぅ……っ！」
めぐり先輩が背中を丸めて呻き声を上げる。
「先輩、イキそうなんですか？」
言いながら、指の動きを益々大きく激しくする。
カーペットに出来るしみが加速度的に広がっていく。
「やっ、ちがっ、そんなっ、だめ、うそっ、これ、ひっ、ひぁぁっ、ひぁぁぁぁ……っ！」
「いいですよ。イってください、思いっきりイってください」
とどめにと薬指も挿入すると、めぐり先輩はびくびくと痙攣して背

筋を反らした。
がっちゅ、ぐぽぐぽ、じゅくく、じゅぷじゅぷ……。
「んくぅぅぅぅ……っ！」
「ほら、この音、先輩が出してるんですよ。どうですか、どんな気分ですか？」
「やめてぇ……聞かないでぇ……っ、ひぁぁぁんっ！」
めぐり先輩が限界を迎えたのを察して、二本の指の動きを更に速める。
「ほら、イってください。ほら、ほら、ほら……っ！」
ぐちゅじゅぷじゅぽぶちゅじゅぷぢゅぷぢゅぷぢゅぷ……。
「い、い、イっ――んはぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁんっ！」
指を食いちぎらんばかりに締め付けて、めぐり先輩が全身を戦慄かせて果てた。
淫裂からは栓が壊れたのかと思う程大量の淫液が溢れ出して、カーペットを見下ろすと小さな湖が出来ていた。
……もう、我慢出来ない。
「先輩。……入れて、いいですか」
肯定しかさせないつもりで言ったのだけど。
「……うぅ、ひっく……」
「……え？」
めぐり先輩が、先程とは違う声音で嗚咽を漏らしていることに気付き、情欲に染まった身体の動きがぴたりと止まった。
× × ×
「ひっく、うぇ、うぇぇぇん……っ」
「あ、せ、先輩……？」
四つん這いで鳴き声を漏らす先輩に戸惑い、ひとまず先輩の肩を掴んで身体を起こし、正面で向かい合う形でぺたんと腰を下ろす。
めぐり先輩は、まるで子供のように泣きべそをかいていた。
「うぅ……ばかぁっ……」
「あ、その、えぇっと……」
こ、これは何に対しての「ばか」なんだろうか……？　泣いてるめ

ぐり先輩可愛いなぁ……や、そうじゃなくて。
めぐり先輩の両頬に一筋の跡が見えて、ただただ慌てる。
どうしたものかと当惑していると、めぐり先輩が言葉を続けた。
「うっ……ひっく、比企谷くんと、初めてはちゃんとした所でしたいのに……比企谷くん、ぜんぜんわたしの言葉聞いてくれないし……」
「う……」
ずくんと心が痛む。
あー……そうか。
俺が大丈夫だ大丈夫だと勝手に思っていただけで、本当は、やりすぎていたんだな。どこからがめぐり先輩にとってやりすぎだったのかは分からないけれど、これはやってしまった。
早計だった。
「うぅ……っ、ひっく……っ」
しゃくり上げるめぐり先輩を見て、心が締め付けられる。
ああ、もう、もう！
「先輩」
めぐり先輩の目を見つめて、正座する。
めぐり先輩は俺の顔つきを不思議に思ったのか、きょとんと首を傾げている。
そして。
「え、ひ、比企谷くん……？」
僅かばかり迷ってからの。
土下座。
完全なる土下座である。
「先輩、すみませんでした。先輩の優しさに甘えてました。こんなことしても意味は無いかもしれないですけど……それでも、精一杯謝らせてください」
「あ、ちょ、ちょっと……」
カーペットにこすり付けたおでこの上で、めぐり先輩がおろおろと慌てるのが音だけで伝わる。
こんなことをしても、俺の気が晴れるだけかもしれない。

それでも、今ここできちんと謝らないと、二人の間に細いながら切れることのない隔たりの川が出来てしまうと思った。
だからこそ、今こうやって土下座に及んでいる。
目を開けたままカーペットにおでこをこすり付けてから、しばし。
めぐり先輩が、呆れたようなため息をついた。
「……もう」
天女のような声音が身体を包んだかと思うと、肩を持ってひょいと身体を起こされて、ふわりと抱きしめられた。
素肌と素肌が触れ合う感覚が何とも心地良い。
ほふにゃーんって感じだ。
俺が言うと洒落にならないなこれ。
「先輩……？」
「もう……ばか」
その声はさっきまでとは違い、どこまでも穏やかで澄みきっている。
こんな愛情たっぷりのお叱りの言葉が、心に沁みない訳がない。
「……すいません」
「もっと、優しくしてね？」
「はい。誓います」
出来るだけはっきりとそう告げると、めぐり先輩は天使のような微笑みを浮かべた。
……と思いきや。
その直後、急に頬を赤らめてぷいと顔を逸らし、可愛らしい流し目を送ってきた。
「……わたしが大丈夫だってきちんと確認出来てるなら、その……もっと、いっぱい、色んなことしても……いいから、ね？」
「え」
「……」
なんかとんでもない言葉を聞いたような……と目を丸くしていると、きゅっと抱きしめられて顔が見れなくなった。
何とか視線を向けるとその横顔は「恥ずかしいんだからこれ以上言

わせないで」と言っていて。
どうしようもない程愛おしくなって、そっと抱きしめ返した。
無言のまま、柔らかい抱擁を続ける。
ゆっくりと、温かな欲求が湧いてきて、めぐり先輩の耳元でそっと囁いた。
「……先輩の部屋、行っていいですか」
「……ん、いいよ。行こう」
心がほぐれるやりとりに、長い言葉は要らなかった。
俺は、この人と、身も心も一つになりたい。
続く。

（４５）

めぐり先輩の優しさに甘えて。
めぐり先輩に対して調子に乗って。
めぐり先輩に泣かれて。
めぐり先輩に土下座して。
めぐり先輩に許してもらって。
めぐり先輩の部屋に行くことになった。
こう言うと、俺のクズ具合とめぐり先輩の天使具合が際立つな。
あとめぐり先輩って言葉がゲシュタルト崩壊しそう。
それでは……と、めぐり先輩の部屋に行こうとして、二人の格好をはたと見る。
「……」
……いくら身体が火照ってるといっても、お互い全裸なのはまずいよな……。
めぐり先輩は同じことを思ったのか、気恥ずかしそうに俺をちらりと見た。
「あはは……流石に寒いよね。一旦、服着よっか」
「そ、そうですね」
めぐり先輩の上目遣いって、なんか小動物みたいですげぇ愛くるしいんだよな……などと考えながら、二人でたははと笑い合う。
部屋に行って、一刻も早く続きをしたいという思いが溢れてきて。
慌てないように心掛けて、けれど結局慌てて、ぱたぱたと服を着る。
行為をする為に、脱いだ服を着るという行為は中々シュールなものだった。
ささっと下着と上着、ジーンズを着用して、さあ出陣だ――と意気込むと。
「……」
めぐり先輩はまだ、恥ずかしそうに足の根本と胸を手で隠して、もじもじとしていた。
何ぞやと思い視線を辿ると、そこにはびしょびしょに濡れたショー

ツが。
あー……。
やってしまったな、俺。
「……」
そんなことを考えていると。
ふと、悪いにも程がある考えが浮かんだ。
これくらいならやってくれるかな……良いよな。ね、きっと大丈夫！　うん！
「先輩」
「あ、な、なに？」
このタイミングで声を掛けられると思っていなかったのか、俺の呼び掛けにびくんと身体が跳ねた。
身体の跳ね方って色々あるんだなぁ……と反省具合０の卑猥なことを考えてしまい、首をぶるぶると振って妄想を跳ね除ける。
「下着……着けなくて良いんじゃないですか。移動するだけですし。……どうでしょうか」
エロい妄想を跳ね除けておいて、言う台詞がこれである。
……『絶対エロいと思うんで見てみたいです』という本音中の本音だけは言わずに何とか我慢したのだけれど。
「……っ」
それでも、めぐり先輩の顔は――見ているこっちが恥ずかしくなるくらい、耳まで真っ赤に染まった。
×　×　×
「あ、え、そ、そんな……」
「良いじゃないですか。廊下を移動するくらいですし。その……湿ったのを履いたら、それこそ風邪ひいちゃいますよ」
「～～～～っ!?」
おお。
めぐり先輩が茹で上がったまま俺の胸元に飛び込んできて、胸をぽかぽかと叩いてきた。
やだ何これ、ずっと叩かれていたい……。

何に目覚めてんだ俺は。
まあ、しょうがないよね。良い匂いだし。
時間いっぱい匂いを嗅いでいたいまである。何の時間だよ。
しばらく無言のまま、めぐり先輩の頭をくしゃくしゃと撫でる。
撫でる際にふわりと香る匂いに安らぎを感じていると、めぐり先輩は叩き疲れたのか、割と早い内に手の動きが止まった。
うー、という唸り声が、骨を伝って直接脳に響く。
何とも可愛らしい拗ねた声が、身体を心地良く包み込んだ。
「……比企谷くんのえっち」
「……承知してます」
「変態」
「そりゃそうですよね」
「……でも、そんなとこも……」
「……え？」
「何でもない」
続きが鬼のように気になるタイミングで、めぐり先輩は俺の胸元からふわりと離れた。
何すかそれ、続きはどこで視聴出来るんですか、とは思いつつも。
「……っ」
俺から逸らした顔が、首まで真っ赤に染まっていて。
一目見ただけで、どう考えても照れ隠しだなと分かった。
顔がにやけるのを必死で抑えていると、めぐり先輩が身体を屈め、ワンピースを手に取った。
「……良いんですか」
一応聞いてみると、めぐり先輩が頬を膨らまして恨めし気に見つめてきた。
「……だって、誰かさんがわたしの下着を履けない状態にしちゃったのは事実だし」
ワンピースを羽織りながら、めぐり先輩が言う。
拗ねた表情を作る顔は、どこまでも可愛らしくて。
頬がゆるんゆるんにふやけるのを堪えるので精一杯だ。

「でも、何だかんだめぐり先輩も「比企谷くん？」なんでもないですごめんなさい」
何でこの人、笑顔のままで瞳の温度を一気に下げられるのん？　女の人って怖いよぉ……。
調子に乗ると、天使でも、女神でも、怒るものは怒る。
そんな当たり前のことを知って、なんだか妙に嬉しくなった。
まずは反省しろって話なんだけどね。
まったく……とぶつくさ言いながら、めぐり先輩が俺に背を向けてボタンを留めていく。
愚痴を言う様ですら可愛いのだから、この人は一体何をすれば可愛くないのかと逆に考えてしまうくらいには可愛い。
なんだろう、ごついことをさせれば良いのだろうか。
ボクシング？　ああだめだ、グローブに振り回される様子を想像したら既に鬼可愛い。
柔道？　あゝだめだ、めぐり先輩と乱取りしたい。そんで「やぁ！」とかやたら可愛い気合の声を入れながら俺を投げようとするのを紙一重で避け続けて、とことん息切れさせたい。俺性格悪すぎるな。
あとは……戦車かな？　嗚呼だめだ、きりりとした顔で戦車に乗って、ふとした時に汗ばんだ顔を拭いて「ふぅ……」とか言って爽やかな笑みを浮かべられたら成仏してしまう。アニメチェックしねぇとなぁ……。
「はい」
めぐり先輩のｉｆストーリーに熱く思いを馳せていると、めぐり先輩がくるりと振り返った。
さて、下着無しというのが一体どれだけの破壊力を――
「う……お……っ!?」
俺の想像力はどれだけ貧困だったのか。
俺の想定はここまで甘かったのか。
そんな風に思った。
上下の下着を着けずに（上がどうこうというのは言及しなかったが、上だけ着けるということはしなかったらしい。バランスの問題と

かがあるのだろうか）白のワンピースを着用するという状況は、想像を絶する破壊力を持っていた。
前のボタンをきっちり閉めたことで、却って強調される胸部と、浮かび上がる二つの頂点。
汗をかいたこともあってか、生地がしっとりと肌に貼り付いた臀部。
さっきはこの人を裸にした事で完全に理性が飛んだというのに。
服を着ている今でも、ちょっと前屈みになるか、同じ体勢でちょっと俺に尻を向けただけで、簡単に俺の理性は爆ぜてしまいそうだった。
「ひ、比企谷くん……」
「あ」
気付くと、俺はめぐり先輩の両肩を掴んでいた。
軽くではあるけれど、決して逃がすまいとする意志を自分の握力から感じる。
……俺、どんだけ盛ってんだよ……。発情期の犬もびっくりだぞ、おい。
「や……その、すいません」
「う、ううん……」
慌てて手を離すと、めぐり先輩は恥ずかしそうに目を逸らして、ちらりと流し目を送った。
つい先程までとは違った熱を持った視線に、どくんと心臓が鳴る。
「それじゃ……行きましょうか、部屋に」
「う、うん……きゃっ!?」
驚いたような声が上がる。
めぐり先輩の背中に右腕を回し、そのまま脇の下をすり抜けて、乳房を掴んで抱き寄せていた。
生地越しに形の整った乳房を触ると、5本の指が気持ち良く沈み込んだ。
「ひ、比企谷……くん……っ？」
ビンタされても仕方ないかと思ったのだけど。

めぐり先輩は、驚きこそすれ、俺を呼ぶ声に嫌悪の色は無くて。
むしろ――
「ひあぁぁぁんっ!?」
――乳房の形を指で存分に変えても、甘い嬌声を上げるくらいには受け入れてくれている。
下着無しでワンピースを着てもらうという希望は通ってはいたけれど。
先程の泣かれた件もあるので、ちょっとどきどきしながらやったのは事実だった。
結果、なんとかなった。
めぐり先輩、本当に寛大だ。
一安心。
ほっ。
「どうしました？　行きましょうよ」
平然と言ってのけて、リビングの入り口へと向かう。
「あっ……んくぅっ、あぅ……あっ、あぁっ、わ、わかったから、行くから、そん、な……手で、しない、でぇ……っ」
見る見る内に淫熱を帯びていく声音と、穏やかながらも確かな獣性を帯びて揺らめく瞳にくらくらするが、これ以上は部屋に行くまで我慢だと必死で言い聞かせる。
それでも、もう少しだけ強く揉んでみる。
手にすっぽりと収まるサイズの乳房が、指を動かした分だけ淫らに形を変える。
めぐり先輩は俺の手を握り返して、困ったように眉根を寄せて、口を引き結んで俺を見つめた。
だめだよ、と目が言っている。
それは、分かっている。それも十分な程に。
「……」
それでも。
視線を下に移した時に見える、めぐり先輩が履いている、温かそうなスリッパに広がる染みは。

めぐり先輩の発情の具合を、あまりにも分かりやすく示していた。
こんなものを見てしまって、平常心でいられる訳が無い。
左手でドアノブに手を掛ける際、両手の動きが連動しているのかと思う程自然に右手も動かす。
乳を搾るようにゆっくり右手で揉みしだくと、めぐり先輩は両足をがくがくと震わせて、可憐な顔を羞恥と興奮で美しく歪めた。

続く。

（４６）

右手でめぐり先輩の乳房を包み込みながら、空いた左手でリビングのドアを開ける。

ひんやりとした廊下の空気が流れ込んできて、本来であればぶるりと震える所なのだけれど。

俺も、めぐり先輩も、火照りきった身体には丁度良いと言わんばかりに、何ともない顔をしていた。

「あ……うぅ……」

めぐり先輩が発するか細い声に気付き振り向くと、焦点の定まらない瞳のまま俺の腕の中でもじもじと身体を捩っている。

部屋に行くまで我慢しようと考えた、ほんの数十秒前の自分の決意が早くも揺らぐ。

発情した乳房は手の中でマシュマロのように柔らかく形を変え、しっとりと汗ばんでいるためにワンピースが肌に貼り付き、何ともいやらしい様を演出している。

部屋に行くまで、我慢。

大丈夫、めぐり先輩にどの部屋なのかを聞いて、そこまで歩くだけだ。

一分とかかる作業じゃない。

すぐ終わらせられる。

大丈夫、大丈夫、大丈夫――。

「……えぇと、先輩の部屋はここですかね？」

「え、あ、あれ？　まだ何も言ってな……ひゃぁんっ!?」

めぐり先輩の後ろに回りこんで、色付いた二つの桃を両手で鷲掴みにする。

快感によりがくがくと震え、めぐり先輩の臀丘が後ろに突き出される。そこに自分の滾った剛直をジーンズ越しに擦りつけると、めぐり先輩は内股になり子鹿のように戦慄く。

よたよたと、傍から見れば滑稽な図のまま歩く。

一つの扉の前に来て、扉に駆けられた表札の様なものを確認する。

そこがめぐり先輩の部屋でないことも、自分の判断で開けても恐らく大丈夫なことも、その表札らしきものが教えてくれる。
めぐり先輩が何かを言う前に、乳房の頂点をぎちりと摘まむ。
「ひぐぅぅぅ……っ！」
おとがいを上げて喘ぐめぐり先輩に劣情を煽られながら、扉を開けた。

× × ×

「比企谷……くん……ここ、トイレだよ……っ？」
消え入りそうな声でめぐり先輩が言う。息も絶え絶えといった様子だが、まだきちんとしゃべる余裕があってどこかほっとした。
めぐり先輩が言うように、ここは紛れもなくトイレだ。目の前にはこちらを向いた洋式の便器が一つあり、広めの空間の中に小さな収納スペースがある。そこにはトイレットペーパーや消臭グッズなどの備品が置かれていて、壁にさりげなくかけられた二つの絵はとても可愛らしいものだった。
なんでここに入ったかと言えば。
単純に、何というか、もう。
我慢出来なかったからだ。
もっと言えば、めぐり先輩との今の状況をもっと楽しみたかったからだ。
部屋に行けば、お互いこれだけ発情しているんだから、何をするかはもはや目に見えている。
もちろんそれも狂おしい程に楽しみではあるのだけど。
今のうちに、もっとやってみたいことがある。
そう思った時にちょうどトイレのマークに気付き、考えるより先に身体が動いていた。
だから、何かやりたいけれど、具体的に何かやりたいことがある訳ではない。
そんな、曖昧な状態になっている。
めぐり先輩の都合をまるっきり無視してしまい本当に申し訳ないけれど。

この人の身体を沢山嬲りながら、何をするかその場その場で考えよう。
そう思いながら、二つの乳頭を人差し指と親指でにちっと摘まむ。
「ひぃぃぃんっ！」
腕の中で、めぐり先輩が跳ねた。電流を流されたかのように震えて、俺の腰に手を添えて必死で耐える。
薄布一枚で隔てられためぐり先輩の柔肌を楽しみながら、よたよたと前に進む。可愛らしい突起を生地の摩擦を利用してこしこしとしごくと、めぐり先輩の声音が益々扇情的に変化する。
「先輩。座ってもらえますか」
「え……？　わ、わかった……」
手を離して指示を出すと、ぽけっとした調子で答えて便器の蓋を開けた。そして身体の向きを変えて、おずおずとした様子で俺を見つめる。
「あ、あの……」
ワンピースの裾に手を掛けようとした所で動きを止めて、恥ずかし気に上目遣いを向けてくる。
無言で頷いて促すと、観念したのかそろりと布をたくし上げて座り込んだ。
柔らかな双丘がプラスチックの器に着地するとき、くちゅりと水音がして心がざわめいた。
「ひ、比企谷くん……その、どうしたいの……かな？」
めぐり先輩は股の間に腕を挟むようにして、ワンピースの真ん中をそれとなく下に引っ張っていた。写真に収めたい。や、そうじゃなくて。
「……ちょっと、あまりにも我慢が出来なくなったもんで。……これ、お願い出来ますか？」
言って、ジーンズのチャックを開ける。その動きに気付いた途端、めぐり先輩の身体がぴくりと反応した。
中でパンツを下げ、ずるりと欲望の塊を曝け出す。めぐり先輩は目を見開いて、青筋だった凶器を見つめている。興奮により汗ばんでい

る剛直の匂いに、めぐり先輩が小さく唸り声を上げた。
めぐり先輩が何か言うより先に、頭を両手でがしりと掴む。
めぐり先輩と目が合う。
めぐり先輩の瞳が揺れる。
見つめ合ったまま、ゆっくり肉棒の切っ先を近付けると、めぐり先輩はゆっくりと上下の唇を離した。中に見える紅色の粘膜に見惚れながら腰を進める。口内から這い出た粘膜が、鈴口をちろりと舐める。快感中枢を煽り立てる刺激に身震いしながら、ゆっくりと口腔を犯す。
「お……っ、んぐぅ……っ」
小さく唸って、めぐり先輩が肉槍を迎え入れる。どういう訳か視線は俺に向けたままだ。それがたまらない程蠱惑的で、今すぐ乱暴に突き入れたくなるのを必死で抑える。動きを止めることなく、ゆっくり、けれど確実に喉奥に突き進む。めぐり先輩の目に涙が浮かぶ。けれど、まるでいやがらない。それどころか、どこか喜悦の感情が見え隠れしている。喉奥に亀頭が到達する。めぐり先輩の息は荒い。鼻息が恥毛をそよがせて、溢れ出す唾液がぽたぽたと下を濡らす。
これだけしても、まだ、めぐり先輩は俺を見ている。その瞳が愛おしくなり、怖くなり、依存してしまいそうになる。
ずっとこうやって見つめていてくれるのか、ふと気になった。
「先輩……ちょっと刺激が強いですから、注意してくださいね」
「んぐ……っ？」
めぐり先輩が不思議そうに俺を見つめてくる。めぐり先輩の頭を撫でるようにして下に押して僅かに屈むと、脇にあるビデのボタンを押す。勢いを最大に設定する。
ウィイイン……という音がした瞬間、めぐり先輩ははっと目を見開いた。でももう遅い。
強烈な勢いで、めぐり先輩の秘裂にお湯が叩き付けられる。
「んぐぅぅぅ……んむぅぅっ!?」
尚も瞳を逸らさないめぐり先輩を見つめながら、喉奥に肉棒を突き入れる。ビデの激しい水音に紛れて、ぐぶぐぶと唾液が攪拌される淫

猥な音色が聞こえる。
めぐり先輩は、それでも、尚、目を逸らさない。
めぐり先輩が俺の両膝の裏を押さえた。全身をがくがくと戦慄かせている。淫欲の坩堝に溺れ続けていて、俺にも間も無く限界が訪れた。
「せんぱ、い……俺、もう、出る、出る、出る……っ！」
めぐり先輩が、愛おしそうに目を細めて、こくりと頷いた。
――どうにも、この人にはかなわないなと思いながら、マグマの奔流が湧き上がるのを感じる。
尿道を、凄まじい速度で粘液が通過する。
包容力のある穏やかな瞳を見つめたまま、歯を食いしばる。
めぐり先輩の喉奥に、大量の白濁を叩き付けた。
「んぶぐぅっ、ごぼっ、んぐぅぅぅぅ……っ」
苦しそうに嗚咽を漏らしながら、尚も俺から目を逸らさない。その瞳が催淫剤となり、ゼリーのような粘度の欲望が、めぐり先輩の口から溢れ出す程大量に噴き出る。汗で透けたワンピースの上に、濃厚な白濁がぼたぼたと零れ落ちた。
脈動が収まると、めぐり先輩がビデのスイッチを切った。装置が引っ込む機械音と入れ替えに、狭い空間の中に静寂が訪れる。めぐり先輩の静かに昂ぶった鼻息が、行為の激しさを物語っていた。
口腔粘膜から、肉棒をずるりと引き抜く。でろりと垂れ下がった舌と肉棒の間には、幾筋もの唾液や白濁の糸が連なっている。めぐり先輩はそれを一つ一つ丁寧に咥え舐めとるが、そのうちの何本かはめぐり先輩の胸元に滴り落ちて、扇情的な染みを形作った。
「……」
……。
冷静に考える。
また、やりすぎたよね、俺？
わー、俺、わー、わー！
この後どう言えば良いだろうかと逡巡していると、めぐり先輩がこほんと咳払いをした。

「比企谷くん。今のは……わたしも受け入れてたから、別に怒ってないよ」
「あ、そ、そうですか……」
その言葉に心底ほっとする。
「でも、鬼畜なのは変わらないね……」
言って、胸元に視線を落とす。汗と唾液と白濁とで、恐ろしく淫猥な光景が出来上がっていた。
「あ、す、すみません……」
へどもどして謝ると、めぐり先輩がくすりと笑う。お姉さんっぽく、いたずらっぽく。
「……ずっと比企谷くんの好きなようにされちゃってたからなー。どうしよっかなー」
「すみません、ほんとすみません」
ぶらぶらさせながら、平謝りする。地獄みたいな光景だ。
「……一度着替えて、歯も磨こうかな」
「……へ？」
「それで、わたしの部屋でのんびりテレビでも見ようよ」
「……へ？」
それってまさか、これで終わりってこと……？
俺の不安を表情から感じ取ったのか、めぐり先輩は手をにょきっと伸ばして俺の頭をくしゃくしゃと撫でた。
「今度はわたしの好きな風にさせて？　大丈夫だよ、その後はその、ちゃんと、お互いに、気分に応じてって言うか……その……」
胸の前で人差し指を合わせてもじもじする。何この人、死ぬ程可愛いんですけど。
頭をがしがしと掻いて、めぐり先輩を見つめる。可愛らしいことをもにょもにょ話しているだけなのに、さっきよりも明らかに恥ずかしがっているのが何とも愛らしい。
「……わかりました。俺も本能に流されすぎてましたんで、一旦仕切り直しましょう」
言うと、めぐり先輩がふわりと花のように笑った。

「……ん。ありがとう……ひゃ……っ？」
あまりにも可愛くって。
めぐり先輩の頭を撫でた。
ほとんど反射的に。
「……はぅ……もう、わたしの方がお姉さんなのに……」
ぶつぶつと不満を言いながらも、その表情は温かくて柔らかい。
お互いこの状況にハマってしまい、めぐり先輩がくしゃみをするまでつい夢中になって撫で続けてしまった。
くちゅんっ！　って言ったよこの人。くちゅんっ！　って。
可愛すぎて死ぬぞ、俺。

続く。

（４７）

めぐり先輩と一緒にトイレを出た後、一度リビングに戻った。
めぐり先輩は脱衣所に向かい着替えてくると行って、俺をソファに座らせるとリビングを出ていく。
程なくして、めぐり先輩が戻ってきた。
「……」
めぐり先輩の服装を見て、言葉を失う。
めぐり先輩が着ていたのは、もこもこ生地のワンピースで、前面にファスナーが付いているタイプのものだった。可愛らしいピンク色をしていて、いかにもくつろげそうな格好だ。
明らかに、部屋着である。
まさかの攻め方だった。
「……ど、どうか、な……？」
めぐり先輩が後ろ手を組んで、頬を赤らめてもじもじと俺を見つめてくる。
「……死ぬ程似合ってます」
めぐり先輩の目を見ては逸らしを繰り返しながら、やっとのことで言葉を捻り出す。
可愛いにも程があるのもそうなんだけど。
それ以上に、部屋着を着たことで、これから二人で過ごす時間の現実味が急に湧いた気がした。
さっきまでは勢いに任せていたため、そういうことを考える余裕さえなかったのだけど。
俺の言葉を聞いて、めぐり先輩が目を見開いて俺を見つめる。
はわわと小さく声を漏らして、両頬に手を当てた。
「そ、そっか。ありがとう……っ」
こ、紅茶淹れてくるね――と早口で告げて、足早に駆けていった。
しばらくして、お盆に紅茶カップを乗せてきてくれた。
俺が紅茶を飲んでくつろいでいる内に歯磨きをしてくる旨を告げて、めぐり先輩が再びリビングを出る。忙しくさせてしまって申し訳

ない……。
のほほんと紅茶を飲んでいると、めぐり先輩が一足先に歯磨きを終えて、ソファで俺のすぐ隣に座る。
にこにこしながら、こちらをじーっと見てらっしゃる。
じー。
じー……。
じー……。
「……どうしました」
視線に耐え兼ねて、カップを手に持ったまま顔を逸らして尋ねる。
めぐり先輩が、俺の太ももにそっと手を置いてくすりと笑った。
「ふふ。ええっとね？　この後何しようかなーって考えてたの」
「……それなら、そんなに俺を見なくても……」
「比企谷くんを見てた方が色々浮かびやすそうだなって思って」
答えになってるようでなってないような、ふわっとした理由だった。
頬をぽりぽりと掻き、紅茶の残りをくっと飲み込む。思ったより熱かったけれど、少し我慢すれば事足りる程度だった。
「ごちそう様でした。行きますか」
「ん、そうだね」
立ち上がってめぐり先輩を促すと、めぐり先輩も立ち上がる。
カップは自分で洗わせてほしいと言うと、めぐり先輩は最初こそ渋ったものの結局折れて洗わせてくれた。
小声で「そ、そうだよね……これからのことを考えると、洗剤とかスポンジとか洗った食器を置く場所とか、知っておいた方が良いもんね……」と呟いていたけれど、恥ずかしすぎるので聞こえなかったことにする。
今度こそ部屋に向かおうとすると、めぐり先輩は俺の手を握った。
自分の手の指と指の間に、細くて温かい指が入り込んでくる。
この感触は、しばらく忘れられそうもなかった。
×　×　×
めぐり先輩の部屋に入った途端、ふわりとした甘い匂いが鼻腔を

擽った。
めぐり先輩に怪しまれない程度に視線を巡らせる。
所々に女の子らしさを感じさせるぬいぐるみや可愛らしい小物などが見受けられるが、全体的に見れば物が少なくすっきりした印象で、めぐり先輩の人柄が見えるようだった。
こっちこっちと手招きされて、カーペットの上のクッションに腰を下ろす。
めぐり先輩が隣のクッションに腰を下ろして、落ち着かなさそうにもじもじとしたかと思うと、えへへと微笑んだ。可愛すぎて爆ぜる。
近くに置いていた別のクッションを胸元に抱き寄せて、ちらちらと俺を窺い見る。
「それじゃ、まずは何をしようかな……。色々考えてるんだけど……」
む。
思案してみる。
至極真面目に、思い付いた意見を述べる。
「ツイスター……とか……」
「比企谷くん？」
「何でもないです、何でもないです」
ぷりぷり怒るめぐり先輩が可愛すぎるから、今度適度に怒らせるやり方をメモしたノートを作ろうかな。真面目にクズだな俺。
めぐり先輩はクッションを抱きしめたまま、あれにしようかなこれにしようかなと呟きながら左右にゆらゆら揺れる。
カーペットの上の俺の手に、さりげなく自分の手を重ねてチラ見してくるのはちょっと破壊力が過ぎる。
「……よし」
動きをぴたりと止めたかと思うと、めぐり先輩はすっくと立ち上がり、近くにあったリモコンを手に取った。
そして自分のクッションの位置をずらして座り、二人並んでテレビを見ることが出来る状態にする。
クッションを抱いて体育座りをして、録画番組一覧を何やら真剣な顔で見つめたかと思うと、「これかな……」と小さく呟いた。

リモコンのスイッチを押して画面が切り替わると、少し古めの、雰囲気の良さげな洋画らしき作品が映される。
すぐさま一時停止をすると、めぐり先輩がこちらを見て柔らかにはにかんだ。
「えへへ……この間番組表を見て面白そうだなって思ったんだけど、観る時間が無くて。それで録画してたんだー」
「そうなんですか」
「うん。……これ、一緒に観ない？」
クッションに口元をうずめて、こちらをちらりと見やるめぐり先輩。
正直、普通に見てたら2時間前後も生殺しが続くのかな、しんどいなと思ったんだけど。
――お互いに、気分に応じてって言うか――
めぐり先輩の言葉を思い出し、前向きに解釈することにする。
……うん、やりようはあるよな、きっと。
「良いですよ。観ましょう」
答えると、めぐり先輩が目を細める。
花の咲いたよう笑顔に癒されて、心が綻ぶ。
「ありがとう。……じゃ、観よっか」
二人の視線は交差するのを止め、テレビ画面に向けられる。
リモコンを操作して、一時停止が解かれる。
二人の距離が、自然に縮まる。
めぐり先輩の手の上に、自分の手を重ねる。
ぴくりと反応した華奢な手は、ゆっくりと握り返してきた。
こくりと息を呑む。
めぐり先輩も緊張しているのか、小さく喉を鳴らすのが聞こえた。
映画が、始まる。
×　×　×
映画自体は、よくある昔の洋画という感じだ。
ベタなストーリーに、良い感じに影のある渋い主人公に、これまた綺麗ながらもどこか影のあるヒロイン。

二人が出会う所から始まり、物語は淡々と進んでいく。
物語の途中で訪れる二人のすれ違いも何とか乗り越え、二人が情熱的なキスをする。
「ほわぁ……っ」
めぐり先輩に視線を滑らせると、口を開けて頬を赤らめて画面を凝視している。
画面の中で行われるキスが、思いの外激しいからだろう。
俺は吐息だけを静かに漏らして、めぐり先輩の手をきゅっと握る。
めぐり先輩がぴくりと反応して、ゆっくりこちらを振り向く。
俺が首を傾けると、めぐり先輩が逆側に首を傾けた。
ゆっくりと二人の間の空間を縮める。
徐々に唇に柔らかな感触が広がる。
唇を離すと、めぐり先輩はうっとりとした表情を浮かべていた。
肩を抱いて、もう一度唇を重ねる。
今度はさっきよりも、もう少しだけ長く。
二つの唇が触れている部分がやけに熱い。
これは、めぐり先輩が熱いのか。
それとも、俺が熱いのか。
あるいは、両方なのか。
実際どうかなんてことは分からないが、それでも心地良い。
心の底から、身体の底から、幸せな気持ちが湧いてくる。
唇を離すと、目が合った。
お互いどこかぎこちなく笑うが、交わす視線は温かい。
肩を抱き寄せたまま、映画に戻る。
映画はまだまだ続くようだ。

続く。

（４８）

めぐり先輩の部屋で、並んで座って映画を見る。
めぐり先輩は、俺に抱き寄せられると何も言うことなく身体を預けてくる。
部屋着を着ためぐり先輩の身体からは、日常の穏やかな匂いと非日常の扇情的な匂いが混在していて、牡の器官がむずむずと疼く。
映画の中では、結ばれたカップルが仲睦まじく過ごす日々が描写されていた。
めぐり先輩はとろんとした目で見ていて、映画をちゃんと見ているんだか見ていないんだか分からない。
今、どの程度の行為まで許してもらえるのか、知りたい。
このもどかしい興奮をもっとたっぷりと味わいたい。
その一心で、テレビに視線を向けている細い首に、ちゅっと吸い付く。
「ひぁ……っ」
めぐり先輩はか細い声を上げると、胡坐をかいた俺の内ももに手を添えてきて、小動物のように震えた。
……抵抗は、しないのか。
抱き寄せる手と、押し付ける口に力を込める。
ちゅっ、ちゅくっ、ちゅるる……っ。
わざとらしく音を立てると、
「あぁぁぁ……っ、んはぁっ、ひっ、あっ、あぁっ……」
まるで吸血鬼に血を吸われる美女の如く、うっとりとした表情で喘ぎ声を上げる。
空いていた左手の人差し指と中指を、小さな口の中に挿し込む。
「ひゃへぁ……はっ、ひぁっ、へぁぁ……っ」
自由を奪われた声に嗜虐心を煽られながら、首と口内をねっとりと蹂躙する。
めぐり先輩は、何があっても映画を見なければならないというルールでも決めているかのように、ひたすら前を見ている。

唇と指を離して、真横からめぐり先輩をじっと見る。
「……っ」
めぐり先輩は前を向いたまま、唇を引き結んだ。
何をされるのかという不安と、期待が入り混じったような、そんな顔。
ゆっくり顔を近付ける。
けれど、すぐには敢えて何もしない。
抱き寄せている身体が、緊張でふるふると震えている。
ふーっ、と耳に息を吹きかけると、
「ひぁぁんっ!?」
びくりと跳ねて、恥ずかし気に縮こまって俺に身体を寄せる。
……もっといじめて欲しいんだろうか。
尚もテレビから視線を離さないめぐり先輩の、可愛らしい耳に唇を押し当てる。
わざとらしく耳の中で音を立てて、舌で耳の中を余すことなく撫で回す。
「うぅぅぅ……うぅぅぅ……っ」
俺の内ももを掴む細く白い指が、寄る辺を求めるかのようにぎゅむぎゅむと掴んでくる。藁をも掴もうとしているかのような姿は、無尽蔵に劣情を煽る。
肩を抱いていた手を離して、口付けしている耳とは逆側を押さえ付ける。
めぐり先輩がひゅうっと息を吸いこんだのを聞きながら、更に激しく耳を犯し始めた。
くちゅ、ちゅぴぴ、ぴちゃぴちゃ、ちゅるちゅぷぷ、ぴちゃちゅぴぴ、ちゅくくちゅく……っ。
「んぅぅぅぅ……っ!」
「うお……っ!?」
めぐり先輩が空いていた手を俺の内ももに置いて、元々内ももに置いていた手を俺の足の根本に滑らせてきた。
陰嚢ごと竿をむんずと掴まれて、流石に面食らう。

負けじと耳の中を舐り回すと、陰嚢と竿がぎゅっぎゅっと乳を搾るかのように握られる。そのリズムはめぐり先輩の快感の波に沿っているようで、極めて不安定だ。
それが却って快楽を助長する。
めぐり先輩の頭をくしゃりと撫でる。もう片方の手でめぐり先輩のお腹を抱く。
「ひぃぃぃん……ひぃぃぃん……っ」
情欲に塗れた牝の鳴き声を上げるめぐり先輩。
気が付けば、綺麗な双眸からは玉のような涙がぽろぽろと零れ落ちていた。
唇を離して、首の向きを変えて目を合わせる。
「ひぁ……っ」
恥ずかしいのか頬を真っ赤に染めながら、俺の腕の中でもじもじとする。
唇を重ねると、どちらからともなく舌を絡め合った。
発情した舌の味は、極上の蜜を想起させる程甘い。
俺の興奮を組み取ったのか、めぐり先輩が俺のジーンズのチャックを下ろし、パンツを突き破らんばかりにぎちぎちに勃起している肉棒の先端を、愛おしそうに手の平でこする。
これだけで、簡単に果ててしまいそうな程の快感に襲われる。
「んふぅぅっ、くちゅる、ちゅぷ、くちゅぷ、ちゅりゅ、ちゅぴぴ、へぁぁ……んむふぅっ、ちゅく、ちゅりゅ、ちゅくく……っ」
めぐり先輩は俺の亀頭を手の平で弄り回しながら、目を細めて陶然とした表情を浮かべている。
半分眠っているような夢見心地の表情は、精巣をひどくざわつかせる。
これ以上続けると俺が先に果ててしまう……そう思い、名残惜しみつつも、唇を離す。
ぽけっとした顔で見つめるめぐり先輩が何か反応を示す前に、クッションをめぐり先輩の隣から後ろにずらして座り込む。
しばらく見ていなかった映画は、ベッドシーンに入っていた。

しかし、今この状態では、めぐり先輩以外のものを見る意味なんてない。
リモコンに手を伸ばし、電源を落とす。
糸が切れたような静寂が訪れると、めぐり先輩が顔を横に向け、婀娜っぽい流し目を送ってくる。
「……」
何も言わずに唇を震わせて、ただただ俺を見つめる。
その瞳に吸い込まれるように、後ろからめぐり先輩のお腹を抱きしめた。
「ひぁ……っ」
驚いた声を上げたものの、めぐり先輩はすぐに俺の手に自分の手を重ねる。
柔らかい肩の上に顎を乗せて、めぐり先輩との密着をじっくり楽しむ。
不意に、めぐり先輩が俺の手を掴んだ。
「……？」
何事かと視線を送ると、めぐり先輩は切なげな表情で何かを訴えかけてくる。
抱きしめる腕を解かれて……その手が、わずかに上がる。
……この人、まさか自分から……。
身体の奥底から、嗜虐の喜悦が湧いてくる。
めぐり先輩に手を握られたまま、ゆっくりと手の位置をずらして行き……部屋着の上から乳房にたゆんと着地させる。
「んふぁぁぁ……っ」
甘露のような蜜声を漏らして、めぐり先輩が身を捩る。
この反応と、手の感触で気付く。
この人、中、下着着けてないのか……？
もこもこの生地の上から指をウェーブさせて揉みしだき、事の真偽を確かめる。
「んっく、ひぅっ、んはぁっ、あっ、ひんっ、あふぁぁぁ……っ」
声を何とか押し殺そうとしている様が、却って互いの性感を高めて

いる。
手の中でマシュマロを揉みしだきながら、人差し指でボタンを押すようにして乳頭を責め立てる。
「んひぃぃんっ!?」
声を上げた直後、めぐり先輩は両手で口を塞いで、荒い息を漏らした。
やっぱり、着てない。
そりゃまあ、寝巻で下着を着けないというのは何ら不思議ではないのだけど。
俺とこうなることが十二分に分かっているというのに、着ないという行為が表す、その意味。
「ふーっ……ふーっ……ふーっ……」
声を押さえて、必死で発情した身体を鎮めようとしているめぐり先輩をじっと見つめる。
――嗜虐心が、下り坂に放り投げられた鉄球のごとく、走り出して一気に加速した。
続く。

（４９）

めぐり先輩の乳頭を押し込む人差し指に、ぎちりと力を込める。そしてそのまま、指の腹で生地の上から乳頭を強く擦り立てると、

「んくぅぅぅ……っ!?」

めぐり先輩が、口を自分で塞いだまま縮こまった。しかし縮こまった所で俺の手は乳房を丸々包み込んでいるから、却って身体の密着度を高めるだけだ。

足を回り込ませてめぐり先輩の尻を挟み、股座に座らせているような状態を作る。ぴんと張り詰めた乳頭はしごきやすく、どこまでの劣情を煽る。

こりこり、こしゅこしゅ、ごしごし、ぎゅっぎゅっ……。

「んふぅぅぅ……っ、んふぅぅぅ……っ」

めぐり先輩は目を虚ろにさせながら、乳頭への刺激に幾度と無く身体を震わせる。

その手には、めぐり先輩の口から零れでた唾液が伝っている。

けれど。

「はぁ……っ、はぁ……っ、はぁ……っ」

気付けば、俺の息が荒い。めぐり先輩が相当追い詰められているのと同様に、俺も相当きていた。身体が密着しているめぐり先輩は牝の匂いをもわもわと放っていて、その香りに誘われるように、むっちりとした尻に開いたチャックから突き出した肉鉾をぐいぐいと押し付けている。

まるで、盛った獣のようだ。

尚も執拗に愛撫を続けていると、めぐり先輩が首をぶるぶると振った。

「……イきそうですか？」

この部屋で、身体の接触を始めてから、初めてまともに口にした言葉。めぐり先輩が、小さく喉を鳴らす音が聞こえる。口を塞いだままが振り向いて俺を見つめる瞳には泣きそうな、懇願するような色が見える。

きっと、色んな感情が含まれているんだろう。
興奮、不安、期待、劣情、羞恥、依存、愛情。
それらを全て汲み取るなんてことは、例えめぐり先輩が一から十まで説明してくれたとしても、理解出来るものではない。するものでもない。
だから、俺は自分で判断する。
めぐり先輩の、訴えかけるような、この瞳の意味を。
――再び、めぐり先輩の発情した二つの豆を人差し指で擦り立てる。
「ひぐっ……んんんんん……っ！」
めぐり先輩が必死で声を抑える。
けれど、いやがらない。
たまらない幸福感が押し寄せてきて、指の動きを加速する。
「んんんんん……っ、んんんん……っ！」
漏れる吐息が荒くなり、目の前の女性に限界が訪れそうなのだと気付く。
――ぎゅっ、と。
人差し指と親指で、二つの豆を強く摘まむと、めぐり先輩はおとがいを上げて天井を見上げた。
「んんんんんんんん……っ!!」
足を投げ出して、まるで足全体に一本の棒が通ったかのようにぴんと張り詰めさせて、激しく痙攣を起こした。
「……う……わ……っ」
感嘆のため息が漏れる。
俺の腕の中でくにゃりと脱力して、めぐり先輩が息を荒げている。目はとろんとして焦点が定まっておらず、口も半開きになっている。断続的に戦慄く身体は、絶頂を迎えたことを確かに伝えてくれていた。
めぐり先輩の肩に顎を乗せて、薄く色づいた小さな谷間を見つめる。そろりと手を伸ばしてファスナーに指を掛けると、めぐり先輩がぴくっと震えた。

ちぃぃぃぃ……。
敢えて牛歩のようにゆっくりとファスナーを下ろして、めぐり先輩の反応を窺う。震えながらも俺の手を見つめるあどけない顔に、ふつふつと愛おしさが湧く。
へそまで下ろしたところで、そこに両手を添えてゆっくりと上げていき、めぐり先輩の胸元を晒していく。
「……っ」
泣きそうな顔で俺を見ながら、めぐり先輩が震える。
お椀を伏せたような可愛らしい二つの盛り上がりが顔を出し、改めて見惚れる。
「……綺麗です」
「……っ、あ、う、ありがと……っ」
こんな状況でも可愛らしい返しをしてくれるめぐり先輩に、益々魅せられながら。
「今度は、口を塞がないでくださいね。声、聞きたいんで」
「……っ」
どんな羞恥の表情を浮かべてくれるのかと期待しながら、双丘を柔らかく包み込む。ふにゅんと指が沈み込むと、手の平全体に桜色の肌がもっちりと吸い付いた。まるでめぐり先輩の身体が俺を迎え入れてくれているかのようだ。
「あふぅぅ……っ、んはぁぁぁぁ……っ」
めぐり先輩の声に徐々に吐息が混ざり、艶を帯びていく。もっと声を聞きたい一心で、さくらんぼのような乳頭を人差し指と中指で強く摘まむ。
「んはぁぁぁぁっ！」
我慢出来なかったのか、めぐり先輩が口を大きく開けて喘ぐ。自分の行動に気付いて顔を真っ赤にして口を引き結ぶが、もう止めることは出来ない。リズム良く乳首をしごき上げて、絶頂へと追いやる。ごしゅごしゅと擦る度に、めぐり先輩の身体が腕の中でがくがくと動く。
「くふぅぅ……ひぃぃぃぃん……っ」

涙をぽろぽろと流しながら、口を必死で引き結ぶ。だがとうとう耐えられなくなったのか、めぐり先輩は口に両手を伸ばした。その手を掴み、囁きかける。
「だめですよ、先輩。ちゃんと声を聞かせてくれないと。……気持ち、良いんですよね？」
「……～～～～っ」
めぐり先輩が首まで真っ赤になって俯く。俺はめぐり先輩から手を離し、代わりに二の腕を掴んだ。手を滑らせて肘まで下りた所で、両腕を固定したままめぐり先輩への愛撫を再開する。いきなり乳首を摘まんでしごき上げると、めぐり先輩がかはっと息を吐き出した。
強く摘まんで、正面から押し潰すように圧迫して、二本の指で挟んでしごき上げる。
繰り返し訪れる快感と羞恥の波に、めぐり先輩の心と身体が爆ぜた。
「うぅぅぅ……うぅぅぅ……んはぁぁっ！　だめ、だめ、だめ、イっちゃう、イっちゃうよぉっ、比企谷くん、許して、許して、お願い……ひぃんっ！」
「……っ」
声を我慢するのを止めて、涙をぽろぽろと流しながら身体を捩るめぐり先輩。拘束された中で身体を振って懇願する様子はあまりに扇情的で、とても止められるものではない。
右手を、へそまで開いたファスナーに伸ばす。今度は一気に下まで引き下ろすと、めぐり先輩の艶めかしい身体が露になった。部屋を満たす牝の香りに股間を疼かせながら、足の付け根に手を伸ばす。フリルの付いた可愛らしいショーツに指の腹を付けると、ぐしょりとした湿り気を感じた。
「下着も可愛いし、もうぐっしょぐしょだし……先輩、止められる訳ないですよ、こんなの」
「やぁぁぁ……っ」
めぐり先輩が首をふるふると振る。益々愛おしく思いながら、ショーツの中心の筋に指を食い込ませる。力を僅かに込めながらな

ぞっていくと、ある場所でぐぷっと指が呑み込まれた。
「はぁぁぁんっ！」
めぐり先輩が狂ったように身を捩る。ショーツごと膣の中に食い込んだ指に、大量に滲み出てきた愛液が染み込んでゆく。二度三度と指を食い込ませると、それに応じてとぷとぷと淫液が止めどなく湧き出てくる。
「も、もう……ほんとに、だめ……お願い、お願いだからぁ……っ」
めぐり先輩は涙を零しながら、振り向いて俺にキスをしてきた。ちゅっ、ちゅっ、と啄むような口付けをして、「……ね？」と綺麗な瞳で訴えかけてくる。
「そうですね、めぐり先輩の願い通り、ちゃんとイかせてあげますよ」
「っ!?　ち、ちが……んはぁぁぁぁっ!?」
ショーツの中に手を滑り込ませて中指をずるりと膣に挿入すると、めぐり先輩の嬌声が更に艶を帯びて甲高くなった。直接膣の中の湖に浸かると、愛液の熱さに驚く。ぐっちゅぐっちゅとなるべくいやらしく音を立てながら、指を折り曲げてめぐり先輩の反応が大きい部位を指の腹で抉る。
「はぁぁぁぁ……っ！　だめ、ちがうの、そうじゃないのぉ……はぁぁぁんっ！」
「うお……っ!?」
快楽中枢を絶えず刺激され耐え切れなくなったのか、めぐり先輩がよろけて後ろに倒れ込んできた。慌てて膣から指を抜いて、衝撃に備える。ゆっくりと倒れたからほとんど痛くはないが、それでも背中にはどすんと鈍い衝撃が走った。
「あ……ご、ごめん。比企谷くん、大丈夫？」
めぐり先輩は仰向けで俺に重なったまま心配してくれた。俺の腕がしっかりとめぐり先輩を抱きかかえているから、身体を動かせないようだ。
「ありがとうございます、大丈夫です。……こんなになるくらい、感じてくれてるんですね」
密かにパンツを引き下ろし、めぐり先輩の足の間にぶるりと肉棒を

晒す。
「ひぁ……っ」
内ももに触れる熱い感触に気付いて視線を下に向けると、めぐり先輩が艶っぽい声を漏らした。俺が何も言わないうちに、両手をそろりと伸ばしてさわさわと肉槍を撫で始める。
「くぁ……っ、そのまま、触っててください」
「え……ひぅぅぅっ！」
ぐしょぐしょのショーツの中に手を割り込ませ、今度は中指と薬指を同時に挿入する。左手は色付いた乳房を揉みしだき、ぴんと張り詰めた乳首をしごき上げる。
「はぁぁんっ！　やっ、んくぅっ！　こんなの、こんなの、だめぇぇぇ……っ！」
身体を弓なりに反らせて痙攣しながらも、俺の肉棒に這わせる指の動きは止まらない。雁首に指を沿わせて回すように撫でこすりながら、竿をごしゅごしゅとしごき立てる。こんな状況でも牡を射精に導く動きが出来るのは、牝の本能が故なのか。
「うぅぅぅ……もう、だめ、だめだめだめ、ほんとに、イク、イク、イク……っ！」
「良いですよ。イってください。思いっきりイってください」
さっきよりも身体の震えを我慢する素振りがはっきりと見てとれて、まるで活火山の噴火前のような熱量を感じる。肉襞を掻き回す指の動きを強くして速め、乳首をぎちぎちと摘まむ。
「ひぐぅぅぅ……イク、イク、イっちゃうよぉ……イっちゃうよぉ……っ、……いっ」
めぐり先輩の震えが止まり、身体がくっと丸まった、次の瞬間。
「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっっっっっ!!」
仰け反って、めぐり先輩とは思えない程の獣のような激しい喘ぎ声を上げると、俺の手首に熱い飛沫が大量にかかった。物凄い勢いで放出される液は、俺の手首から跳ねてカーペットに雨のごとく降り注ぐ。
「はひっ、ひぃんっ、ひっく、あぁ、あぁぁぁ……っ」

めぐり先輩のお腹を抱きしめると、目を腕で覆ってひたすら息を荒げていた。嗚咽を漏らすような声に、どこか喜悦の色が混じっている。身体から発せられる媚香は増すばかりだ。
左手でめぐり先輩の頭をくしゃくしゃと撫でていると、めぐり先輩が起き上がって身体を反転させ、覆いかぶさってきた。
「んむ……っ？」
身体に心地良い圧力がかかると同時に、唇が塞がれる。それはじゃれつくような、甘えるような口付けで。舌が滑り込んでくると、親愛の情を示すかのように舌を絡めてくる。
「はむぅんっ……んんっ、んふぅんっ、はむっ、ちゅぷ、ちゅぴ、ちゅろろ……っ」
まだ絶頂の余韻が残っているのか、時折ぴくんぴくんと震えながらも、舌のまぐわいをやめない。唾液がとろとろと流し込まれ、与えられるがままに呑み込むと、発情した女性の甘い味がした。
「……ぷはっ。比企谷くんの……ばか……っ」
「……すいません」
言葉とは裏腹に、その表情も口調もまるで怒っていなくて。
優しく叱る姿に、また愛おしさが湧く。
めぐり先輩の視線が、俺の上を通り過ぎてある場所へ向く。
見上げると、そこにはベッドがあった。
どくんと鼓動が跳ね上がり、めぐり先輩をじっと見つめる。俺の視線に気付いためぐり先輩が、にっこりと微笑んだ。
「……行こっか」
「……はい」
ほんの一言ずつ、短い言葉を交わして。
もう一度、めぐり先輩が身体を重ねてくる。
柔らかな唇と身体を堪能すると、ゆっくりと起き上がった。
続く。

（５０）

ゆっくりと起き上がり、めぐり先輩と手を繋いでベッドに向かう。繋いだ手は温かく、こちらを見やるめぐり先輩の目はどこまでも優しい。

ベッドの前に来ると、めぐり先輩がくるりと振り返った。途端に顕になる瑞々しい乳房にごくりと息を呑むと、めぐり先輩がにっこり微笑む。

「比企谷くんも脱ごっか」

「……あ、はい……」

そういえば自分がまだ脱いでいないことに気付く。というかここまでの流れですっかり浮かれてしまってたけど、俺思いっきりモノだけ晒してる状態じゃん。何してんの。

色々と気付いて慌てる俺を見て、めぐり先輩がお姉さんっぽい笑みを浮かべた。

「ふふ。比企谷くん……わたしが脱がせてあげようか？」

「え」

「いやだったらしょうがな」「お願いします」「早いよ!?」

良いツッコミである。何様なんだ俺。

ちょっと久しぶりだ、このやりとり。しかしこんな楽し気なイベント、やってほしい気持ちしかないからしょうがない。めぐり先輩はこほんと咳払いをすると、俺の上着のボタンに手を掛けた。にこにこと微笑みながらボタンを外されると、何だか遠いのか遠くないのか分からない未来を想像してしまって恥ずかしくなる。

「……」

あ、めぐり先輩の顔が真っ赤になった。多分これ、俺と同じ想像をしたな。めぐり先輩は俯いたまま俺の上着を脱がせると、顔を上げて左右にぶんぶんと振った。

「ひ、比企谷くん！　バンザイして！」

「え、あ、はい」

恥ずかしさを振り切ろうとしているのか、変なテンションになって

いる。しかしこれはこれですげぇ可愛いからもう何でも良いと思います。言われた通りに手を上げると、Tシャツの裾を掴み、ゆっくりと持ち上げて脱がせてくれた。うん、やっぱり恥ずかしい。めぐり先輩も結局顔真っ赤だし。
「……」
「？　どうしました？」
　めぐり先輩は俺の上半身をぽへーと見つめている。
「比企谷くん……思ったより逞しいね。男の子、って感じ」
「あ、ありがとうございます……っっても、さっきも見ましたよね？」
「さっきはその、それどころじゃなかったし……」
　胸の前で指先を合わせてもじもじとしていらっしゃる。抱きしめて良いだろうか。
　引き続き抜群の気恥かしさを感じていると、めぐり先輩が更に一歩踏み込んできた。
「さ、触っても、いいかな？」
　なんですと。
「どこをですか？」
「あの、その……」
「ちゃんと言ってくれないと分かりませんよ」
「む、む、む……」
「む？」
「……む、胸板……」
「……ど、どうぞ」
　試しに煽ったら火傷した。言わせておいて難だけどすげぇ恥ずかしい。今後気を付けたいところだが、恥ずかしいと思いつつもやたらと楽しかったので、こういうやりとりを止める自信は全く無い。
　さっきまでやっていたことの方が遥かに恥ずかしいはずなのに、こんなに可愛らしく頬を赤らめれてはどうにも照れてしまう。
「そ、それじゃ、失礼します……」
　妙に丁寧な挨拶をして、めぐり先輩が俺の胸板を触る。
　指先が触れ、そこから徐々に触れる部分が大きくなっていく。

やがて手のひら全体が胸板に着地すると、めぐり先輩はほわわと口を開けて感心した。そんなに？　ねえ、そんなに？

ぺたぺた。

「わぁ……」

ぺたぺた。

「ほわわ、うわぁ……」

ぺたぺた。

「わわわ……」

ぺたぺ――

「うぐ……っ!?」

めぐり先輩の手が、不意に二つの乳首に触れる。油断していた為に変な声が出てしまった。めぐり先輩は俺の反応を興味深そうに見ている。

「男の人も……ここって、気持ち良いの？」

「自分で触ったって何にも思わないんで、初めてだったんですけど……そうかも、しれないです」

ここで肯定したことが、良くなかったのかもしれない。

「へぇ……」

「あ、ちょ……っ」

めぐり先輩の瞳に好奇の色が宿ったかと思うと、俺の乳首を指の腹や手のひらで撫でさすり始めた。しかも、俺の反応をじっと見ながら。断続的に送られてくる緩やかな刺激に、身体がびくびくと戦慄く。

「気持ち……良いんだ？」

めぐり先輩が真剣な、けれどどこか子供っぽい無邪気さも含んだ表情で俺を見つめる。その瞳にも反応してしまい、気付けば一度落ち着いた肉棒が再び隆起していた。

「わわ、すごい……本当に、気持ち、良いんだね……」

俺の肉槍を目の当たりにして、めぐり先輩の目がうっとりと細められると、ぞくりとしたものが背筋を駆け抜けた。艶っぽさを纏ったためぐり先輩の顔が近付いてくる。

「う……っ!?」
めぐり先輩は俺の乳首にちゅっと優しく口付けをすると、そのままちゅうちゅうと吸い立て始めた。
「んっ……ちゅっ、ちゅぴっ、はむっ、ちゅちゅっ、ちゅりゅりゅ……んふぅぅ……っ」
「うっ、わっ、ちょ、ちょっと……っ」
俺の顔を見つめながら、乳首を舌先でつつき、舌の腹でべろりと舐め上げ、柔らかな唇で挟みしごき立てる。たまらず腰をがくがくと震わせると、めぐり先輩の手がベルトを外し始めて、そのまま滑らかにジーンズとパンツを下ろしてしまった。自分で最後まで脱ぐよう目で俺に訴えかけてきたので、なされるがままに足から抜く。肉棒は、ねちっこい愛撫と艶やかな瞳の魅力にやられて、鈴口からぷっくりとカウパーが滲み出ていた。
「……」
めぐり先輩は両方の乳首を丁寧に舐め終えると、ゆっくりと口を離した。安心したような惜しいような複雑な気持ちに襲われていると、不意打ちでもう一度口付けをして、舌先を固めて小突いてくる。それだけで、まるで電気が走ったように身体が震えた。
めぐり先輩がベッドに腰を下ろす。反り返った肉棒が、めぐり先輩が少し屈めば届く位置にある。俺の腰に手が添えられた。俺をじっと見ている。肉茎の角度が更に急になる。俺が柔らかな乳房を揉むと、口を微かに開けて「んぁ……っ」と艶っぽい吐息を漏らした。
めぐり先輩が、そろりと舌を伸ばす。朱い粘膜が亀頭に迫り、鈴口にちろりと触れる。
「うぐ……っ」
もどかしく、けれどたまらない快感が背筋を駆け抜ける。この人は、普段あれだけ癒し系かつしっかり者でありながら、こういった行為をする時はまるで別の顔をする。それも、回を追うごとに、行為が深くなるごとに、醸し出される色香が濃密なものになっていく。これが、牝の顔と言うものなんだろうと思った。
めぐり先輩の頭を掴んで、ぐぐぐと亀頭に近付ける。めぐり先輩は

手に力を込めて微かに抵抗するが、それでもゆっくりと唇が肉鉾に近付いていく。
鼻が触れ合う程の距離になった時、めぐり先輩が囁いた。
「……イっちゃだめだよ？」
いたずらっぽく微笑むと、すんすんと亀頭の匂いを嗅いで、上下の唇を開いた。口をOの字にすぼめ、ゆったりと亀頭を咥え込んで行く。
「うお……お……っ」
めぐり先輩の口内に肉茎が割り入って行くに従って、腰に添えられていた手が徐々に尻に回されていく。ゆっくりと俺の尻を撫でさすりながら、じっくりねっとりと肉棒を食んでいく。今心を満たしているのが、征服欲なのか被征服欲なのか判別が付かなかった。
「んふぅぅ……んふぅぅ……っ」
めぐり先輩は頬をすぼめ、鼻で息をしながら口内で肉棒を舐めしゃぶっている。裏筋に舌が張って、鈴口を舌先で小突かれて、その度に肉悦が迸って先走りが溢れてくる。内頬で歯磨きをするようにぐむぐむと亀頭をしごかれ、喜悦が絶えず溢れ出す。
「あぐ……っ、ちょ、先輩、これ、やばいです」
何回でも射精出来そうな程の口淫に陶然としていると、めぐり先輩が唇を離して口を尖らせて。
「だーめ。……もう少し、我慢して？」
「え……うぐぅ……っ!?」
めぐり先輩は何かスイッチが入ったのか、今度は一気に喉奥まで咥えた。そして顔を前後させて、ぐっぽぐっぽと粘着質な水音を立てながら肉棒をしごき上げる。
「ちょ、ほんとに、やばいですって……！」
焦って顔を掴むが、めぐり先輩は俺を見つめたまま舌の動きを止めない。唾液の蜜壺の中でにゅくにゅくと這い回る舌は、精液を求めて亀頭を撫でさすってくる。襲い来る快楽の波に負けて手の力を緩めると、再び喉奥に咥え込まれた。喉奥でしごかれる悦楽により、本当に限界が訪れそうになる。今度は必死で舌の蹂躙に耐えながらも顔

を肉棒から引き離したが、それでもめぐり先輩は、俺をじっと見つめながら舌を伸ばし、鈴口をちろちろと舐めてくる。
息を荒げながら、めぐり先輩の瞳をじっと見つめた。
「はぁ……はぁ……っ、せ、先輩、エロすぎです。ほんと、どうしちゃったんですか」
尋ねると、めぐり先輩はくりっと首を傾げて、それから目を細めてくすりと笑った。
「うーん……そうだなぁ……比企谷くんのせいかもね」
「……へ？」
「比企谷くんがわたしにいっぱいエッチなことをして、こんなにしちゃったんだよ？」
「え、あ、や、それは、その……」
身に覚えがありすぎてぐうの音も出ねぇ。
うぐぐと呻いていると、めぐり先輩がベッドに乗り、俺の手を引いた。
引っ張られるままにベッドに乗ると、めぐり先輩が女の子座りになり、お下げをするりと解いた。
「……うわ……」
髪を解いためぐり先輩の変貌に、感嘆のため息が漏れる。
それくらい、ただ単純に、美しい。
艶やかな黒髪がはらりと広がると、まるで女神の水浴びを見ているような気持ちになった。
俺の視線の熱量に気付いたのか、めぐり先輩が顔を逸らした。そしてちらりとこちらを窺うように流し目を送る。
「……そんなにいつもと違う？」
「え、あ、はい。……すげぇ、綺麗、です……いつもだって可愛いですけど、今は何かもう、その、全然それらしい褒め言葉が出なくて申し訳ないんですけど、本当に、綺麗です……」
「あぅ……そ、そっか……ありがとう」
俺の率直な感想に、めぐり先輩が頬を赤らめる。頬に手を当てて、上目遣いで俺をちらりと見た。死ぬ。

めぐり先輩がゆっくり寝転がると、髪がふわりと広がってベッドを彩った。
芸術的な程に美しい肢体に見惚れていると、めぐり先輩が口を開いた。
「比企谷くん。わたし、本当に……自分がこんなにエッチだなんて思わなかった。比企谷くんに教えてもらったんだよ」
優しく微笑んで、俺に向けて目一杯手を広げた。
「……だから、最後まで、責任とってくれる？」
「……っ」
その言葉に、胸が心地良くとくんと鳴って。
「はい、ぜひ」
迷うことなく、承諾の言葉を口にして。
「……ありがとう」
めぐり先輩が嬉しそうに目を細めるのを見て、泣きそうなくらいに嬉しくなって。
ゆっくり身体を重ねて抱きしめ合うと、柔らかな温もりに包み込まれた。

続く。

（５１）

「んむっ……」

めぐり先輩と身体を重ねて抱きしめ合い、ゆっくりと唇を交わらせる。淫熱を抱えた肢体に触れることで、一度引いた官能が再び湧き上がる。めぐり先輩が俺の背中を撫でさする動きが艶めかしくて、ぞくぞくとしたものが身体を駆け回る。お返しに髪を撫でてやると、可愛らしい目がとろんと細められた。

「……ぷはっ、……はぁっ、あっ、あぅ……っ、比企谷くん、もっと、撫でて？」

「……っ」

甘える声で囁いたかと思うと、俺を抱きしめて唇を押し付けてきた。口腔粘膜を舐って俺の唾液を掬い上げて、こくりこくりと喉を鳴らして呑み込む様は、思わず目を見張る程に艶やかで美しい。気付けば、肉棒はぎちぎちに反り返ってめぐり先輩のお腹に押し付けられていた。

お望み通り、めぐり先輩の髪を撫でることにする。今度は両手で丹念に、くまなく。

「んふぁぁぁ……あふぅんっ、んふぅぅぅ……っ」

後頭部を舐めるように撫で回し、時折耳をさわさわとさすると、めぐり先輩から漏れる甘美な喘ぎ声が頭蓋に直接響いた。

「んむ……っ？」

肉棒の裏筋に予期せぬ快感が走り、疑問の声が出る。

「んふぅぅ……んむふぁぁ……っ」

よほど発情しているのか、気付けばめぐり先輩が俺を強く抱きしめながら、背筋を曲げ伸ばしして俺の肉棒をお腹や陰部でこすっていた。楚々として生えた恥毛が裏筋をざわざわと撫でて、その度に快楽中枢を刺激されて身体がびくりと跳ねる。

「んふぁぁ……あっ、だめ、まだ、もっと……っ」

たまりかねて唇を離すが、めぐり先輩は物足りなそうな顔をして、更に腰の動きを速めてしまう。このままされるがままになっていて

は、めぐり先輩の綺麗な肌にいともあっさりと白濁を塗りたくることになってしまう。
「先輩、すごいですね。こんなにエロくなるなんて」
宥めるように髪を撫でながら、さりげなく羞恥を煽る。今までであればこれで急に恥ずかしくなってやめてしまうんだけど……。
めぐり先輩は俺の言葉を聞いて、蕩けた表情のまま首をくりんと傾げた。
「そう……なの？　わたし、そんなにエッチだったかな……？」
「え……うおっ!?」
予期せぬ返しに戸惑っていると、下腹部に押し寄せる快感が急に増して変な声が出た。見ると、めぐり先輩の腰の動きが大きくなって、下腹部をぐいぐいと押し付けるようにくねらせている。
「ちょ、先輩、これは流石に……んむっ!?」
唇を奪われ、舌を挿し込まれ、口内と一緒に思考まで掻き回される。既に腰は不規則に痙攣していて、限界一歩手前だ。
「……ぷはっ。比企谷くん、わたし、エッチなのかな？　それに比企谷くん、さっきからずっと苦しそうだよ？　どうしたのかな？　比企谷くん、こういうのはきらい？」
「〜〜〜〜〜〜〜〜っ」
ベッドの上に広がった髪が、まるで俺を幻惑しているように見える。この人、どこまで素で言ってんだ？
尚も腰の動きを止めずに、めぐり先輩が淫猥に目を細める。
「わたしは比企谷くんとこういうことをしたいな。ねえ、だめ？　ねえ……っ」
「うぐぅぅぅ……っ」
くにゅくにゅとした牝襞が裏筋に絡み付き、時折亀頭とキスをする。絶えず送られてくる悩ましい快感が、じっくりと理性を焼き焦がしていく。こすれるときの水音が大きくなっているのは、彼女自身の官能も高まっていることを示していた。ねっとりと濡れた感触と共に、鼻腔を擽る淫猥な匂いが立ち込めている。
……もう、限界だ。

「先輩……っ」
「んふぅぅ……ひゃぁんっ!?」
めぐり先輩が甲高い声を上げて、腰の動きをぴたりと止める。
俺は腰を僅かに引いて、めぐり先輩の膣口に肉棒を押し当てていた。どちらかが腰を押し出せば、簡単に繋がってしまう状態になっている。
めぐり先輩の淫裂はひくひくと蠢いていて、僅かに侵入しかけている亀頭に、肉襞が物欲しそうにキスをしてくる。
「先輩……」
「……っ」
真剣な目で見つめると、めぐり先輩がこきゅっと小さく息を呑んだ。
「俺、もう……挿れたいです」
めぐり先輩の目が大きく見開かれると同時に、膣口が収縮して鈴口に吸い付いてきた。僅かな結合部分からでも精を搾り取ろうとするように、肉襞が妖しく蠢く。挿れたら一体どれだけの快感が待ち受けているのか、まるで想像がつかない。
「良いですか？　俺もう我慢出来ないで――」
「わたしは」
「……え？」
俺の言葉を、めぐり先輩がはっきりとした口調で遮った。そしてすぐに穏やかな表情に戻ると、にっこり微笑む。
「比企谷くんが、好きです」
「……っ」
……こ、こ……。
……この、タイミングで……っ？
心臓がどくんと大きく脈打って、全力疾走を始めたかのように高速で、痛い程に躍動し始める。
「比企谷くんは？」

当然来るであろう流れに、妙な汗が滲み出る。
「……言ってくれないの？」
ああもう、何でこんな泣きそうな顔で言うのか。言うよ、言いますよ！
「……好き、です」
「牛乳が？」
「なんで!?」
「だって、何が好きなのか、誰が好きなのか、具体的に言ってないもーん」
いたずらっぽく微笑んで、めぐり先輩がくすくすと笑う。ここに来て新たな魅力発見とかなんなんだよもう可愛すぎて死んでしまいそう。
「うぐ……せ、先輩が、好きです」
「先輩って呼び方をする人って、世の中にいっぱいいるよね？」
逃がしてくれない……。
「俺にとって先輩は先輩一人です」
「それは今後社会を生きていく上でどうなの……」
本気で心配された。
「うぅ……うおっ!?」
不意に、めぐり先輩が俺を抱き寄せて、おでこ同士をこつんとぶつけた。
「……言ってくれないの？」
困ったように眉根を寄せて、甘ったるい声で囁く。続けざまにちゅっと軽く口付けを……一度、二度……三度。もうノックアウト寸前だ。
ああもう、死ぬ程恥ずかしい。
恥ずかしいけど。
こほんと咳払いをして、一瞬だけ目をぎゅっと瞑り、ばっちり開いてめぐり先輩を見つめる。覚悟を決めると、意外と何とかなる気がした。

「……俺は、めぐり先輩が、好きです」

……言えた。

言えたけど。

何とか口に出して言うことが出来たけど。

ああもう恥ずかしい、超恥ずかしい！

穴があったら心が落ち着くまでそこでがっつり暮らしたい……なんて思っていると。

「……あれ？」

めぐり先輩が、何故か両手で顔を覆っている。なんで？

「あのぉ……めぐり先輩？」

恐る恐る声を掛けてみると、めぐり先輩が顔を隠したままやんやんと首を振った。

「……いざ、言われてみたら、ちょっと嬉し過ぎて……」

「……そ、そうっすか……」

恥ずかしさが倍増した。

「あと、恥ずかしくて……」

「奇遇ですね」

お互い死にそうになっている。

めぐり先輩が手の隙間を開けて、ちらりと覗きこんできた。森のリスみたいな愛くるしさだなぁ。

「……よ、よろしくお願い、します……。優しくしてね……？」

「は、はいっ。こちらこそ、よろしく、お願い、します……」

最後の方は消え入るような声になっていた。

めぐり先輩の顔は真っ赤だ。俺もすげぇ顔が熱い。きっと真っ赤なんだろう。

しかし、本番はここからだ。

ちょっとやりとりが長くなったので、まずはめぐり先輩の大事な所をもう一度きちんと刺激しておこう――と思って、ベッドに手を置いて、ゆっくりと腰を滑らせて淫裂を裏筋で刺激すると。

「んはぁぁぁん……っ、ひぁぁんっ、んくぅぅぅ……っ」

「……っ」
めぐり先輩の秘裂はとろとろのままで、こすり合うといやらしい水音と共に艶やかな淫声が漏れた。シーツをきゅっと握って喘ぐ様は、ずっと見ていたくなるほど淫靡だ。
髪を撫でながら、頬を赤らめためぐり先輩をじっと見つめる。
「めぐり先輩……すげぇ濡れてますよ」
「やぁぁ……言わないでぇ……っ」
また、羞恥心が戻ったらしい。めぐり先輩は俺を抱きしめると、首をぶんぶんと振った。目にはうっすらと涙が滲んでいて、庇護欲と嗜虐心という相反した感情が湧き出てくる。
「もう、大丈夫。わたし、大丈夫だから。もう、挿れて？　比企谷くんと、したいの……っ」
「……っ、はい、じゃ、挿れますよ……っ」
あまりに可愛いめぐり先輩のおねだりに、腰が自然と進んでいく。
――ぬぷっ。
溝をなぞるだけだった今までとは、明らかに異なる熱さが肉先を包んだ、その瞬間。
「あふぅあぁぁぁ……っ！」
めぐり先輩がおとがいを上げて、甲高い牝の声を上げた。
続く。

（５２）

めぐり先輩の蜜壺の中に入り込むと、いきり立った剛直を肉襞が隈なく締め付けてくる。熱く湿った膣内が、肉棒を奥に奥にと招き入れるかのように蠢く。

痛くないように、優しく、優しく、優しく……と強く意識しながら、ゆっくり腰を進める。

「めぐり先輩……大丈夫、ですか？」

「んっ……んんん……っ、だ、大丈夫、だよ……っ、もっと、きて……っ？」

「はい……っ」

溢れ出ている愛液のおかげで腰を進めること自体はそこまで難しくないのだけど、めぐり先輩も力んでいるのか内襞の締め付けが相当強く、肉悦に身を任せるとあっと言う間に果ててしまいそうになる。

「めぐり先輩、もっと力抜いてください……っ」

「う、うん、でも、どうしても力が入っちゃ……んはあぁぁあぁぁぁぁっ！」

狭かった膣内が急に何かから解放されたかのように広くなったかと思った瞬間、めぐり先輩が弓反りになって甲高い声を上げた。

ハッとして二人の結合部に視線を向けると、そこにはめぐり先輩が処女であった証が、紅い筋となって流れ落ちていた。

「め、めぐり先輩。大丈夫ですか？　痛くならないようにほぐしてたのに……すみません……」

眉間を寄せて泣き出しそうな顔をしているめぐり先輩に謝ると、両頬に温かな手が添えられた。

「……えへへ、大丈夫だよ、比企谷くん。流石に今は痛いけど……ね。大体比企谷くんはさっきあれだけわたしを気持ち良くさせてくれたんだから、そんな責任なんて感じなくて良いのっ！　めっ！」

「……ありがとう、ございます……っ」

こんな時でもお姉さん然として俺に気を遣ってくれるめぐり先輩が、心底愛おしく思えて。

この人と繋がれて良かったと、心の底から思った。
めぐり先輩の頬に手を添えて、澄んだ瞳をじっと見つめる。
「……じゃあ、動きますよ。ゆっくりにしますから」
「うん、でもあまり気にしなくて良いからね？　私ならだいじょう……んくぅぅぅ……っ！」
めぐり先輩の言葉とは裏腹に、僅かに動いただけでめぐり先輩の身体ががちがちに強張ってしまう。めぐり先輩の顔を見やると、綺麗な双眸から涙が流れ落ちていた。
「……もっと、ゆっくりしましょう。俺は大丈夫ですから」
「う、うん……ごめんね？　ごめんね？」
「これじゃ立場がさっきと逆ですね」
ふっと笑うとめぐり先輩も釣られて笑って、強張りが少しほぐれた。
「えへへ、そうだね。……比企谷くん、優しくしてね？」
めぐり先輩が俺をきゅっと抱き寄せ、耳元でめいっぱい甘えた声音で囁く。
「……はい、いくらでも」
抱きしめ返して軽く口付けをすると、めぐり先輩は幸せそうな笑みを浮かべた。

×　×　×

「それじゃ、ゆっくり行きましょう」
腰が動かぬように注意しながら、まずはめぐり先輩の髪をふわりと撫でる。
「ん……っ」
めぐり先輩は不安げに胸の前で手を重ねながら、甘い吐息を漏らす。そのままゆっくりと、愛おしむように撫で続ける。
「んふぅぅ……んはぁぁ……っ」
元々撫でられるのに弱いというのが、ここでは本当にありがたい。撫でれば撫でるだけめぐり先輩は目をうっとりと細めていき、やがてシーツの上に腕を投げ出した。俺を信頼して身を預けてくれているという事実が、たまらなく嬉しい。キスしながら撫でようかと思った

が、身体を屈めると腰が動いてしまいそうで怖い。結合部が潤ってくるのがはっきり分かるまで、ゆっくり事を進めよう。
今度は乳房に手を伸ばして、手ですっぽりと覆って慎重に揉む。
「んふぅぅ……はぁぁん……っ」
めぐり先輩は視線を宙空に投げ出し、手を震わせながら握って開いてを繰り返している。徐々に揉む手に力を込めていくと、めぐり先輩は唇を引き結んでしばらく耐えて、やがてぷはっと大きく息を吐いた。
「はぁぁん……はぁぁぁ……ひぃんっ!?」
双丘の頂にある、サクランボのような可愛らしい豆を二つ同時に摘まむと、めぐり先輩は甲高い喘ぎ声を上げてシーツを握り込んだ。
「あっ、あふぁっ、んんっ、くふぅぅ……っ」
乳頭を指でくりくりと弄ると、めぐり先輩の首筋に見る見る赤みが差してきた。リズム良くきゅっきゅっと摘まむと、その度に細い身体がびくりと反り返る。
下腹部に神経を集中させると、結合部は先程までに比べてかなり濡れていた。
……そろそろ、頃合いかもしれない。
「めぐり先輩。ゆっくり動きますよ。触りながらやるので、リラックスしててください。大丈夫ですからね」
「あふぅぅっ、んっ、ひぃぃん……う、うん……んはぁぁっ!?」
ピンク色をした可愛らしい乳頭を人差し指で弾きながら腰を進めると、奥へ引き込むような締め付けが肉竿を包む。柔らかく包み込んでくる感触は、明らかに先程とは締め付けの種類が違っていて、最初挿れた時はめぐり先輩が本当に力んでいたのだと分かる。それもそうだろう、不安でいっぱいだっただろうから。もう、痛い思いなんて絶対にさせない。
「あふぁぁぁ……っ!?」
身体を屈めて腰をゆっくりと押し進めながら、めぐり先輩の乳頭に吸い付くと、悩ましい喘ぎ声が漏れ聞こえた。もう片方の乳頭も摘まみながら、口の中で瑞々しい豆をゆっくり舌を使って転がす。使って

いない手でめぐり先輩の髪をしゅるしゅると撫でながら、ゆっくり肉茎を挿入していく。
「ひっ、ひぁぁぁ……っ、比企谷くん、比企谷くぅん……っ」
めぐり先輩が顔を近付けて、俺の耳元で囁く。甘ったるい声に緊張の色は無く、心の底から安心する。
「痛くないですか？　大丈夫ですか？」
「うん、大丈夫だよ……っ、それどころか、もう……んはぁんっ！」
舌先を固めて乳首をつつくと、めぐり先輩がおとがいを上げた。赤らんだ首が見えて、発情の具合が窺い知れる。
「それどころかもう、……何ですか？」
「やぁぁん……言えないよぉ……くひぃぃん……っ!?」
華奢な身体を力強く抱きしめて肉槍を突き立てると、膣の最奥に辿り着いた。子宮の入り口にぐりぐりとキスをすると、膣内に愛液が溢れ出す。めぐり先輩がもう痛がらずに気持ち良くなってくれているという嬉しさが心を満たす。
「ほら……一番奥まで辿り着きましたよ。どうですか？　もう痛くないんですよね？　どういう気持ちなんですか？」
「やあぁぁ……っ」
意地悪に責めると、めぐり先輩は両手で顔を覆った。耳まで真っ赤になったその姿は、たまらなく可愛らしいと同時に艶っぽい。
「言わないと……」
声を一段低くして囁きかけながら、ゆっくり腰を引いて行く。
「あっ、あぁっ、あっ、あっ、あ……っ」
乳房を揉みしだきながら腰を引くと、めぐり先輩の肢体が戦慄いて、肉襞がきゅむきゅむと肉茎をしごき上げてくる。抜ける寸前まで腰を引いたところで、めぐり先輩の両手を掴んでベッドの上に固定した。
「……言わないと、めちゃくちゃにしちゃいますよ？」
「……っ」
こきゅっ、と。
俺を真っ直ぐに見つめながら、めぐり先輩が小さく喉を鳴らした。

「……どうですか、言えますか？」
「……言えない、よぉ……っ」
めぐり先輩が恥ずかしそうに顔を背ける。
「……じゃあ、いじめちゃいますよ？　もうしっかり濡れてるみたいですから、痛くないでしょうし。もちろんめぐり先輩のことも考慮します。痛くしないで、優しく……めちゃくちゃにします」
がっしりと掴んでいるめぐり先輩の手が、びくりと震えた。
「……っ」
めぐり先輩が無言で顔を逸らしたまま、ちらりと流し目を送る。羞恥と、期待と、不安と、信頼と。色々な感情がごちゃ混ぜになった瞳は、言葉を返すよりもめぐり先輩の気持ちをはっきりと伝えてくれる。
「……いいんですね？」
最後の確認をすると、めぐり先輩は顔の向きを戻して、俺をじっと見つめた。
そして、
「……」
俺に手を押さえ付けられたまま、めぐり先輩がこくりと小さく頷く。
艶めいた眼差しが、俺の庇護欲と嗜虐心、愛情と劣情を一気に爆発させた。
続く。

（５３）

「ああ、そう言えば」
　めぐり先輩の手をベッドの上に押さえつけたまま、何とはなしに話しかける。めぐり先輩は頬を朱に染めたまま、微かに首を傾げた。
「……この状態だと、めぐり先輩がいくら恥ずかしがっても顔を隠せませんね」
「……～～～～っ!?　んはぁぁぁぁぁん！」
　めぐり先輩が瞬間的に耳まで真っ赤になったと同時に、引いていた腰を一気に突き出し、肉襞の最奥を抉る。予想通りどころか予想以上に湿り気とぬめり気を帯びた膣内は、淫靡に締め付けるばかりで抵抗はしてこなかった。
「あっ、あっ、これっ、だめっ、ひきがや、くん……っ」
　目に涙を溜めためぐり先輩が、襲い来る快感の波に恐怖を感じたのか、唇を戦慄かせながら頭を振る。自分の口の端がにやりと歪むのを感じながら、ゆっくり腰を引く。
「あぁぁぁぁぁぁ……」
　おとがいを上げて獣めいた声を漏らすめぐり先輩。嗜虐心を煽るばかりのその姿態を、もっと味わいたいという欲求に駆られる。
　もう一度、一気に奥まで突く。そしてゆっくり引く。
　奥まで突く。ゆっくり引く。
　奥まで突く。ゆっくり引く。
「ひぃんっ！　はひっ、はひぃん……ひぁぁぁ……ひゃぅぅっ！　あう、あひぁ、へはぁぁぁ……っ」
　めぐり先輩の声が、どんどんとろとろに蕩けていく。普段のほんわかとした癒し系のめぐり先輩が顔を引っ込めて、今は牝としての本能をむき出しにしためぐり先輩が俺の蹂躙に喘いでいる。
　今度は少し、肉槍を上向きにして突き上げた。
「んひぃぃんっ!?　やっ、さっきまでとなんかちがっ……へぁぁぁぁ……」
　快感の種類が変わったのか、めぐり先輩は敏感に反応して肉襞を心

地良く締め付けてくる。肉棒を抜いていく時の脱力した声は何とも可愛らしく、またすぐに突き立てたい欲求を煽ってくる。
今度は、奥まで突いてゆっくり引いた直後、間髪入れずにもう一度奥まで突く。それも一度目よりも少し速く。
「はぁぁんっ！　んふぁぁひぐぅっ!?」
今さっきまでのリズムで身体が慣れていたであろう所に、新たな快感が叩き込まれてめぐり先輩が派手に乱れる。
奥まで力強く突き入れて、ゆっくり引いて、間髪入れずに奥まで入れて今度は素早く引いて三度目の突き上げを行う。
「ひぃんっ！　はひぃんひぐっ!?　んふぅんはぁぁっ!?」
ぐじゅじゅぶと結合部からいやらしい音が響き、汗と愛液とカウパーが混じった淫猥な匂いが二人を包み込む。
徐々に不規則になる抽送と、明らかに増大している快感にめぐり先輩は付いて行けてないようで、俺の手を不安げに握り返してくる。
「ひっ、ひぃんっ、ひきがやくんっ、はぁんっ！　もっ、もう、ひっく、えぐ……んはぁぁっ!?　……ひっく、ひっく、わけ、わかんないよぉぉ……っ」
「……っ」
泣きべそをかきながら、子どものように声を漏らすめぐり先輩が心底愛おしくなって、めちゃくちゃにしてしまいたくなって。嗜虐心が庇護欲をほんの少しばかり上回る。
「……めぐり先輩。先に言っておきます。ごめんなさい」
「……え……？　それってどういう……あぁぁあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?　だめだめだめだめだめだめぇぇ……っ！」
今まで押さえ込んでいた欲求を解き放ち、獣のように腰を振る。めぐり先輩は泣きじゃくりながら顔を振り拒絶しようとするが、結合部から大量に溢れ出す愛液の量が、めぐり先輩の挙動とは裏腹の激しい愉悦を示している。
腰を突き入れる度に肉襞が食いちぎらんばかりに締め付けてきて、牝としての本性を晒して牡の性を搾り取ろうとする。腰を引くと逃がすかと言わんばかりに身体の奥へと強烈な収縮をしてきて、尿道に

たまらぬ肉悦が込み上げる。
「やだ、やだやだやだぁ……っ、なんでこんな気持ち、良いのぉ……っ？」
めぐり先輩は泣きじゃくりながら、俺にすがりつくような視線を送る。覆いかぶさるようにして身体を重ねて口付けをすると、めぐり先輩は何も言わずとも舌を挿し入れてきた。
「んちゅっ、ちゅぷりゅっ、ひゃぷぁっ、んふゃぁぁぁ……っ」
「……っ」
めぐり先輩は、気付いているのだろうか。今自分が、どれだけ淫らに蕩けた表情をしているのかを。絡んでくる舌は濃厚な牝の味がして、俺の舌と口内粘膜を貪ってくる。唾液を流し込むと、こくこくと美味しそうに飲み込んでもっともっととせがんでくる。あまりに淫靡な姿に肉竿が反応すると、めぐり先輩はうっとりと目を細めて肉襞でぴくんぴくんと反応した。
唇を離し、二人の間に伸びた唾液の糸をめぐり先輩が呑み込んだのを確認して、敢えて問い掛ける。
「……なんで気持ち良いかって聞きましたよね」
「……っ？　う、うん……」
「めぐり先輩がエロいからに決まってます」
「～～～～っ!?　はぁぁぁぁんっ！」
めぐり先輩が目を見開いた瞬間、手を強く握り込んで強烈に腰を打ち付ける。ぎちぎちと締め付ける膣肉の愉悦に射精欲が込み上げてくるのを必死で耐えながら、再び激しい抽送を始める。
「ひぃんっ！　んはぁぁっ！　ち、ちがう、ちがうの、わたしそんな、えっちなんかじゃ、ひぁぁぁんっ！」
「どこが違うんですか？　こんなにさっきからよがって、めぐり先輩の中、ぐっしょぐしょですよ？　これでエロくないなんて、どの口が言うんですか？」
「やぁぁぁ……言わないでぇぇ……ひっく、ちがうの、ちがうのぉぉ……っ」
めぐり先輩が話す時だけ僅かに抽送のペースを落とす。泣きじゃ

くって子どものような舌ったらずの喋り方をしているにも関わらず、その表情はどんどん艶っぽく淫猥になっていき、肉襞の締め付けはぐんぐん増していく。そのギャップがたまらなくなり、もっといじめたくなる。
「ちがう？　ちがうってどこがですか？　認めちゃいましょうよ。めぐり先輩はエロいんですよ。ほら、ほら、ほら」
浅く速く突き立て、深くゆっくり突き入れ、めぐり先輩の膣と思考をかき乱す。
「はひぃぃ……も、や、やら、いじめらいれぇ……あ、あれ、や、やらっ、くるっ、なにか……っ!?」
呂律も回らなくなり始めためぐり先輩の顔が、不意に強張る。きゅんきゅんと締め付けてくる肉襞のざわめきが、めぐり先輩の限界を知らせてきた。
「ああ、もうイキたいんですね。俺より先にイっちゃうとかどれだけエロいんですか。でもまあ良いでしょう。一回イってすっきりしちゃいましょう」
意地悪に煽り続けて、腰の動きをより一層苛烈なものにする。
「ひぃぃんっ！　やっ、やぁっ、だめ、こんなの、すっきりできるわけないからぁっ、それどころかもっと……ひぁぁぁぁっ!?」
肉と肉が乾いた音を立ててぶつかり合い、膣口からは泉のごとく淫液が湧き出ている。口から涎がこぼれてしまいそうな快感に、頭の中が白んできた。でも、俺はまだだ。まずは目の前のめぐり先輩の頭の中を、真っ白にしてやる。
「ほら、イってください。ほら、ほら、ほら」
絶頂寸前の痙攣を始めためぐり先輩を煽る。この後何回も一方的にイカせてやるんだ……なんて考えていると。
「……え？」
めぐり先輩の両足が、俺の腰に絡み付いてきた。今までベッドの上に投げ出されていただけなのに、一体どうしたのだろうか。
「……めぐり先輩？」
不安げに尋ねると、めぐり先輩が泣きべそをかきながら俺を見つめ

る。
「ひっく……や、なのぉ……わたしだけでイクなんて……ひきがやくんも一緒じゃなきゃ、やだぁ……っ」
「〜〜〜〜〜〜〜っ」
あぁ、これはもう、むりだ。
「分かりました。じゃあ、一緒にイきましょう」
「うん、一緒に、ね？」
甘える声は、心の底から嬉しそうで。
身体を重ねて、互いの首に腕を回し、抱きしめ合う。そして腰をめいっぱい打ち付けて、再び抽送を始める。
「んひぃんっ！　すごい、すごいよぉぉ……ひきがやくん、ひきがやくぅん……っ」
腕も足も俺の身体に絡ませて、耳元で甘ったるい声でささやくめぐり先輩。
「めぐり先輩、めぐり先輩、めぐり先輩……っ！」
俺ももう、めぐり先輩の羞恥を煽る余裕なんてどこにもなかった。本当は今すぐにでも射精したいが、この天国のような幸せと快感を一秒でも長く味わっていたい。けれど、もう下半身の決壊は目の前だ。
「ひきがやくん、ひきがやくん、ひきがやくん……っ！」
「めぐり先輩、めぐり先輩、めぐり先輩……っ！」
互いの名を何度も何度も呼び続けて。
びくん、と。
二人の身体が痙攣した、次の瞬間。
「あ……あぁぁぁ

めぐり先輩が恍惚とした表情で射精を受け入れる。凄まじい量の精子はめぐり先輩の子宮と膣内をあっと言う間に満たして、結合部からごぶごぶと溢れ出してくる。めぐり先輩の絶頂の余韻による締め付けで、尿道から一滴残らず精が絞り出された。

「はぁうぅぅ……ひきがやくん、ひきがやくん……」

めぐり先輩が満足そうに微笑んで、俺の名を愛おしそうに呼んでくれる。

「めぐり先輩……」

俺もめぐり先輩の名を呼んで。

二人、唇を重ねた。

続く。

（５４）

「……比企谷くん」
「何でしょう」
「……君って、変態だね」
「そうですよ？」
「全く否定しないんだね!?」
こんな呑気な会話をしているけれど、状況は中々シュールである。
今俺は、めぐり先輩に膝枕をしてもらっている。
……お互いに、全裸で。
さっきの行為の後、俺は射精の余韻でへとへとになりながらも、めぐり先輩と一緒にシャワーを浴びることを希望した。
しかしめぐり先輩は、
「今日これ以上恥ずかしいことしたらわたし死んじゃう！」
と真っ赤な顔をして早口で言って、別々にシャワーを浴びることになった。まあ断る時の表情が死ぬ程可愛かったから許すとしよう。俺何様だよ。まあ、「今日は」という言い方をしていたから、明日また頼むとしよう。どんだけ癒されるか分かったもんじゃない。
そして、一緒にシャワーを浴びないのと交換条件で、全裸膝枕と相成ったのである。何でこの取引が成り立ったのか甚だ疑問ではあるが、幸せなので気にしない。
「……こっちの方が恥ずかしい気がするんだけど……」
めぐり先輩の太ももがぷるぷる震えている。俺は今、誰かに撃たれても文句は言えない気がする。
「……だめですか？」
少しだけ悲しそうに言うと、柔らかな手の平がおでこに乗せられた。
「……ふふ、もう。大丈夫だよ、これからもこういうこと、いっぱいさせられそうだから……慣れないとね」
「……っ」
女神のような笑顔に撃ち抜かれて。

しまった、やられたと思った。
この人のこんな可愛い顔にやられたら、とても叶わない。
……。
よし。
もっと調子に乗ろう。
「……女神のようなめぐり先輩」
「……なぁに、その言い方。どうしたの？」
褒めちぎりつつ呼んだら（俺にとっては誇張でも何でも無く、ただの事実なんだけども。今はそこをいくら熱弁した所でめぐり先輩に笑われてしまうだろう）、めぐり先輩は穏やかな表情で微笑んで、俺のおでこをゆっくり撫でてくれた。
めぐり先輩の手を掴む。
「あのですね、よろしければ……」
「え、え、え……？」
言いながら、その手を自分の下腹部に招いていく。めぐり先輩は俺が何を望んでいるのかに気付くと、頬を赤らめて眉根を寄せた。
「……比企谷くんのエッチ」
その言葉で、下腹部がびくんと反応した。
めぐり先輩の手がそろりと俺の股間に伸びる。俺はめぐり先輩の手と顔を交互に見つめる。めぐり先輩は頬を朱に染めながらも、肉竿をきゅっと握った。
「うっ……」
細い指が絡まっただけで、たまらない愉悦が訪れる。
「……気持ち良いの？」
めぐり先輩は艶っぽく目を細めると、ゆっくり手を上下にしごき始めた。しゅるしゅると肉肌を撫で上げる、滑らかな指の質感が心地良い。自分でする時よりも明らかにゆっくりとした動作にも関わらず、腰がびくびくと反応してしまう。
「あん……」
目の前に実っている二つの房に触れると、めぐり先輩は色っぽい吐息を漏らした。艶めいていながらも母性に溢れた表情に、興奮は高ま

るばかりだ。
「あ……ふふ、比企谷くん、エッチな音してきたよ？」
めぐり先輩の言葉にどきりとする。気付けばめぐり先輩の指と肉棒の間で、にちにちといやらしい音が立ち始めている。時折人差し指で鈴口をぴとぴとと触れられる度、頭蓋から蕩ける程の愉悦が込み上げる。
反撃の意味を込めて乳頭を摘まんでみるが、
「あぁん……ん……っ、ふふ、だーめ。今はわたしが比企谷くんを気持ち良くしてあげるんだから……ね？」
反撃を止められる訳ではないが、今はそんなことをしても形勢は逆転しないということを告げられた。
徐々に近付く限界に身体を震わせていると、めぐり先輩がふわりと微笑んだ。
「比企谷くん……こうしてると、赤ちゃんみたいだね」
「……死ぬ程恥ずかしいんですけど」
こんな目が腐った赤ん坊がいてたまるか。
俺が目を背けると、めぐり先輩が俺のおでこを撫でた。
「ふふ。……それじゃあ……これは、どう？」
「え……うお……っ？」
少し恥ずかしがったような声が聞こえたかと思うと、目の前に乳房が迫ってきた。めぐり先輩はどうやらわざわざ上半身を屈めたらしい。
「比企谷くん……どうぞ」
上ずった声で言いながら、肉棒をしごく手の動きを速める。
「うぐ……っ」
もうじき訪れる限界を悟り、射精欲に意識が集中する中でめぐり先輩の乳頭に吸い付く。こんなことをしても恥ずかしさに拍車がかかるだけなんだけど、射精直前だというのに意外と心は落ち着いた。
「んんっ、ふぅぅ……比企谷くん、比企谷くん……っ」
俺に乳首を舐め転がされながら、めぐり先輩が愛おしそうに俺の名を呼ぶ。細い指と肉棒が立てる音が益々大きくなり、にちゃにちゃと

いう音が互いの官能を高める。
「んむっ……ぐぅ……っ」
自分の口から洩れる呻き声が、間もなく訪れる下半身の決壊を伝えてくる。
限界が訪れる瞬間。
俺は、声を上げて限界を知らせる代わりに、めぐり先輩の手を握った。めぐり先輩が握り返してくれたのを感じた瞬間に、身体の奥底から心地良い欲望の奔流が込み上げてきた。
「――――――っ」
めぐり先輩の手の中で、白濁の爆発が起きる。
「わっ、わわっ、わっ……すごい……あっ、あんっ、もう、こらぁ……っ」
脈動を続ける間も乳頭に吸い付いていると、めぐり先輩が困ったように笑った。

× × ×

「はぁぁ～～……これ、すごく気持ち良いよ」
「……それなら良かったです」
あの後、俺はあまりに沢山の量を出したが為に、もう一度シャワーを浴びた。試しにと思ってめぐり先輩を誘ったが、「今度ちゃんと一緒に入ろ……あ、な、何でも無い」と言われた。どうやら相当しっかりと一緒に入ってもらえるらしい。今日は駄目のようだが、今後が楽しみだ。ものすごく。
そして、現在。
今度はめぐり先輩のリクエストを聞くことになり、二人ともきちんと服を着た上で、俺がめぐり先輩を後ろから抱きしめる体勢をとっていた。二人ともベッドに座り、俺が背中を壁に付ける形だ。中々の安定感である。
めぐり先輩の頬は緩みきって、俺が回した腕に顔をうずめている。もうちょいしたら「ほふにゃ～ん」とか言いそうだ。言わないか。でも言ってほしい……。
「……もうすぐ卒業かぁ」
「……そうですね」

めぐり先輩の言葉に、胸がきゅっと詰まる。
今は同じ学び舎にいても、間もなく、次の春が来れば俺たちは離ればなれになる。
「先輩はここから通うんですか？」
先輩が推薦で合格を決めた大学は、ここから結構近いはずだ。宅通をしようと思えば出来る距離ではある。
俺の言葉に、めぐり先輩は「んー……」と、考え込むように小さな声を漏らした。
「最初はそのつもりだったんだけど……つい最近、一人暮らししようってことにしたんだ」
「え、そうなんですか？」
めぐり先輩の発言を嬉しく思いつつも、それ以上に驚く。めぐり先輩は何やら恥ずかしそうに俺に流し目を送ってくる。
「そ、その……今みたいな距離ならまだしも、これから大学に行って、しかもわたしが実家暮らしじゃあ……あんまり、一緒にゆっくり出来ないでしょ？」
「え、あ、そ、そうですね」
何だろう、すごい勢いで心拍数が上がっていく。確かに、大学一年生と高校三年生では、新しい生活と受験勉強が重なって中々時間が合わない気がする。
「だから、その……両親には迷惑をかけるけど、ずっと実家に居る訳にもいかないから、一人暮らしの練習をさせてって言って……引っ越すことにしたの。大学からも近くて、ここからもすぐ行けるくらいの距離のマンションに」
「……マジですか」
「うん」
セキュリティがちゃんとしてなきゃ、不安で住まわせることが出来ない――っていうのが両親の意見でね、とめぐり先輩が笑う。確かに、年頃の女の人が一人暮らしをするなら、相応のセキュリティが必要になるだろう。
だから……と、めぐり先輩が俺の腕をきゅっと握る。

「その……いつでも泊まりに来て良いよ？　もちろん、お互いが負担にならない程度に……ね？」
「……っ、は、はい……っ」
　溢れ出す喜びに、転げ回りそうになった。思わずぎゅっと抱きしめると、めぐり先輩は「あう……」と恥ずかしそうに呻いて、潤んだ瞳でこちらを見つめた。
「ん……っ」
　唇を合わせると、たまらない幸せが溢れ出してくる。めぐり先輩も同じ気持ちなのか、穏やかな瞳で俺を見つめている。
「俺、頑張ります。大学生活で疲れためぐり先輩の為に料理も掃除もしますし、何ならマッサージもします」
　主夫をする気満々の発言をしてしまった。
「そ、そんなに？　あはは……でも、本当に嬉しいな、そうしてくれるのって」
　若干の苦笑いを浮かべながらも、めぐり先輩は幸せそうに目を細め、俺の頬に手を添えた。
「それに……その、めぐり先輩の家に泊まれるなら、色々出来ますしね」
　頬をかきながら、視線を明後日の方向に向けながら呟くと、めぐり先輩の顔が一気に赤くなった。
「……比企谷くんのエッチ」
「……そうですね、俺は相当ですよ」
「比企谷くんは、どうして私にそういうことをしたいの？」
「え……」
　めぐり先輩がいつの間にか、いたずらっ子のような表情を浮かべている。
「え、や、その……それはですね……」
　理由は性的欲求ですとか言ったらすげぇ冷たい目で見られそうだ。どう答えれば良いんだろう。
「わたしのことをどう思ってるから、そういうことをしたいの？」
「うぐ……」

そういう方向か。ちくしょう、急に恥ずかしくなってきた……！
「比企谷くん？　……聞かせて？」
「うぐぐ……」
諦めの嘆息を一つ。
ふぃー。
こうなりゃ開き直るしかない。
めぐり先輩の細身の体を、優しく抱きしめる。
「……好きだから、です。ああもう、好きですよ、大好きです。だからもう、たくさんエロいことしますから。ありとあらゆることを、めぐり先輩が喜ぶ範囲でがんがんしちゃいますからね。覚悟しておいてください」
「……っ」
俺がまくし立てた言葉に、腕の中のめぐり先輩の身体が一気に熱を帯びる。
「……比企谷くん。やっぱり君は最低だね」
「……っ」
そう言いつつもめぐり先輩の表情は、眩しいくらいの笑みを浮かべていて。いつか同じ言葉を言われた時とは、二人の関係が明らかに違うんだという実感が湧いた。
「……そうです。最低ですよ、俺は」
「……ふふ、でも大好きだよ」
「うぐ……」
面と向かってのカウンター攻撃に悶える。
「うぐ……お、俺も好きです」
「……わたしは、『大好き』だよ？」
「うぐぐ……」
え、まだ言わせたいの？　鬼なの？
「……大好き、です」
「アイスが？」
「だからなんで!?」
「つーん」

何でこの人、口に出してこのフレーズを言うんだろう。死ぬ程可愛いから今後も継続して頂きたい。
顔を逸らして、咳払いを一つ挟む。
「めぐり先輩。あなたのことが、大好きです」
「……えへへ、嬉しい」
めぐり先輩ははにかんだかと思うと、もぞもぞと身体の向きを変えた。俺と正面から向かい合って、真っ直ぐに見つめてくる瞳はどこまでも優しい。
「比企谷くん」
「はい」
「卒業しても……ずっと一緒にいたいです。……いいかな？」
「……ぜひとも。こちらこそよろしくお願いします」
「えへへ……嬉しい。ありがとう。大好きだよ、比企谷くん」
「俺も大好きです、めぐり先輩」
好きという言葉がすんなりと口から出て、慣れとは怖いなと思いながら。
めぐり先輩と抱きしめ合って。
「……んっ」
優しく唇を重ねる。
この先、どんなことが待っているか分からないし、大変なことはそれこそ山のようにあるんだろうけれど。
「……ぷはっ。えへへ……」
「……」
目の前で向日葵みたいに笑うこの人となら、そんな道程も楽しめるんじゃないか――そう、思えた。
実際に過ぎた時間の割に、やたらと濃密に覚えた日々も、これにてお終い。
新たな物語が。
いや、物語と言う程でも無い、何気ない日常が。
これから、ゆるりゆるりと、始まる。
「比企谷くん。……泊まってく？」

「……ぜひとも」

――そう。

いつだって、城廻めぐりは見てくれている。

お終い。

一線を越えた後の比企谷小町の視線が何やら熱っぽい。

（1）

妹である比企谷小町と一線を越えた。

その後の生活についての話なのだが、最初は如何に俺が迸る愛情を抑えるか苦心するんだろうと思っていた。

今までも散々妹可愛い小町可愛い小町は世界に誇れる妹いや世界の妹だなどと言っていたのだけれど、ひとたび今の関係になってしまえば、妹として注いでいた愛情が、妹兼恋人に注がれるものに変換されて、しかも同じ家に住んでいるのだから下手をすれば暴走気味になるのでは、そんな風に考えていた。

しかし。

結果で言えば、逆だった。

何が逆なのか分からんわこのボケがこらぁとか言われたらぐうの音も出ないです、ごめんなさい。

それで、まあ、結局の所。

俺がどうこうする以前に、小町がデレた。

別に今までツンだった訳ではないのだけれど、それにしても、これはやばいだろうと言うくらいにデレた。

どこぞのヒロインは最初はツンデレというかツンドラと言われ、その後改心するとツンデレというかツンドロなどと言われていたのだが、小町の場合、なんかもう、デレもドロも通り越して気化している勢いである。もうちょいレベルを越えたら次はプラズマ化するんだろうか。理系科目は全捨てしてる俺ではあるが、プラズマの存在はどこかで聞いた気がする。

そんな訳で。どんな訳だ。

冬のある日々を境にアレな関係になった俺と小町の生活ぶりを、いくつかのケースに分けてつらつらと報告してみようと思う。「いやー困ったわーでも小町可愛いから断れなくてねー」みたいなテイストで

書くので、気が向いたらぶん殴ってくれて構わない。氷嚢でケアしながら俺はのろける。のろける。のろける！

×　×　×

冬のある日。

いつも通り朝の戸塚を愛で、いつも通り授業を受け、いつも通り昼休みの戸塚を慈しみ、いつも通りに午後の授業（数学）を受け（寝て）、いつも通り部活に元気よく出かける戸塚を鼻の下を伸ばしながら見送り、そしていつも通り部活を終えて、家路に着いた。俺どんだけ戸塚好きなんだよ。

自転車をきいこきいこ漕いでいると、前方に見慣れた後ろ姿を発見する。

八九寺だ。間違えた、小町だ。別に小町はリュックキャラじゃないしツインテールでもないし、共通点はなんだろう、可愛いとこ？　あとは……可愛いこと？

まあ、例の変態吸血鬼もどきさんよりも俺の方がよっぽどやばいことをしてるよなーなどと思いつつ、とてとてと歩いている小町に後ろから接近し、途中で自転車から降りてそろりと近付く。

「お疲れ」

「わひゃぁっ!?」

ごく自然に声を掛けたのだが、小町は盛大に飛び上がり、慌てるあまりにあわあわとよろけて、つんのめった末に俺の胸元にぽすりとうずまった。器用だなあこいつ……。

俺の胸元であたたと唸りながら、小町が顔を上げる。

おでこを手ですりすりと撫でながら、目にうっすら涙を浮かべている姿は何とも可愛らしく、なんだよこいつ抱き締めちゃうぞとか思った。既に抱き締めてるけど。

「お兄ちゃん、びっくりしたよー」

「おう、わりぃわりぃ」

ここで「挨拶代わりにセクハラしてこないお兄ちゃんなんて何の価値も無いのに」とか言ってきたらそれはもう盛大にツッコめたのだけど、まあそれはハードルが高すぎるというものだ。

――などと考えていたら。
「最近のお兄ちゃんなら、てっきり出会い頭にセクハラしてくるものかと思ってた。意外と大人しいんだね」
「お前は俺の心を読んだのか!?」
珍しく。
大声でツッコんでしまった。
小町はツッコミにより息を荒げている俺に対して、ほけーとした顔で「こいつ馬鹿なのかにゃー？」みたいな顔でこっちを見てくる。うう、やめろよ……俺にそっちの気はねえよ……たぶん。
× × ×
「お兄ちゃんも今帰りなんだ」
「ああ、小町は勉強してたのか？」
「そうそう。ちょっと塾の自習室でねー」
２人並んでぽてぽてと歩きながら、他愛も無い会話をする。
ぱっと見なら、まあ恐らく仲の良い兄妹に見えるだろう。そうじゃなかった場合は通報される未来しか見えない。何それつらい。
……しかし。
「……なあ、小町」
「うん？　なあに？」
「なんですんごいナチュラルに手を繋いでんだ？」
そう。
小町は、会話の開始直後に極めて自然に俺と手を繋いできた。そのナチュラルさはまるで始業１時間前に会社に来て陰鬱な顔でＰＣを起動するサラリーマンのようである。なにそれどこのうちの親父だよ。
小町は俺の質問の意図が理解出来ないと言わんばかりに、不思議そうにくりんと首を傾げる。なんだお前超可愛いな。
「うん？　ダメなの？」
「や、ダメっていうか、その……」
恥ずかしい。超恥ずかしい。
なんでこの子、堂々と恋人繋ぎしてきてんの？　なんでしゅるしゅ

ると指を動かして愛おしそうに俺の指を撫で回してくんの？　やめてよぉ！　死んじゃう！

冬の冷たい外気に晒されているというのに、やけに顔が熱い。

電柱に書かれた落書きを見て「もうちょい面白いこと書けよ、センスねえなあ……」などと悪態をついて気を紛らわせていると、小町が手を握る力をきゅっと強めた。

そして少しおどおどした様子で、上目遣いでこちらを見つめる。

その瞳はしっとりと濡れていて、切実な感情を纏っていた。

「……だめ？」

「いやもう全然問題無い超大歓迎だぞ」

「よっし」

妹のおねだりに瞬殺される兄と。

ＫＯしたと見るや瞬時に素に戻る妹。

なんだこいつら。自分のことだった。

×　×　×

しばらくゆっくりと歩いていると、やがて広い公園の前を通りがかった。

既に日もとっぷりと暮れて、真冬の寒々しい宵闇が辺りを包んでいて、当然の如くその公園にも人影は無かった。

「……」

不意に、ぴたりと。

手を繋いでいた小町の動きが止まり、俺もそれに合わせて立ち止まった。

振り向くと、小町は俯いていてどんな表情をしているのかが見えない。

「どうした」

尋ねると、小町はゆっくり顔を上げ、にへっと笑った。

苦笑いのような、それでいて蠱惑的にも思えるその笑みに、どきりとして心臓が跳ねる。

学校に居る間は（主に戸塚のおかげで）忘れていた感情と情欲が、不意に頭をもたげた。

「ちょっと……寄り道して行かない？」
公園に視線をやってそう言うと、俺の返事を聞きもせずに俺の手をくいと引っ張って歩き出した。
「お、おい、ちょっと……」
片手で引っ張っていた自転車を倒さないようにしながら、俺はなされるがままに付いて行った。
× × ×
「ここなら……大丈夫かな。お兄ちゃん、自転車その辺に止めて」
小町が連れてきたのは、公園の幾分奥の方で、木や遊具により周囲から死角になっている所だった。
……こんな所に連れてくるなんて……。
こんな所にいる時点で、小町がやろうとしていることなんて限られている。
それは別にいやではない。むしろ大歓迎だ。
……でも、恥ずかしいなあ。
これからの展開に覚悟を決めながら、俺は数メートル離れた場所に自転車を止めた。
「お兄ちゃん、鞄ここに置いといたよ」
小町が指差した先を見ると、ベンチの上に俺と小町の荷物が並んで置かれているのが見えた。
「おう、ありがとな」
言って、いつもの流れで小町の頭を撫でようとして……その動きが止まった。
小町の表情が、明らかに、夜、家で2人きりの時に見るものだったからだ。
「お兄ちゃん、ちょっとだけ、ちょっとだけでいいから……」
熱を帯びた声でねだるように囁くと、小町は俺に抱き付いてきた。
「え、や、おい、小町……っ!?」
普通そういうのを言うのって男じゃないのん？　とか野暮なことを考えながらも激しく混乱していると、小町は俺のコートをボタンをいつの間にか外しに掛かっている。

俺のコートのボタンを全て外し終えると、今度は自分のコートのボタンを外す。
別に脱がせる訳でも、脱ぐ訳でもない。
ただ、ボタンを外すだけ。
それだけの行為、の筈なのに。
「お兄ちゃん……」
「……っ」
もう我慢の限界だとでも言いたげな、泣きそうな声で語りかけてくる。
その双眸に映る熱情が、ひどく心をざわつかせた。
小町が半歩、距離を詰める。
俺は自然に、腕を広げて小町を迎え入れる体勢を作る。
腕は、心なしか震えていた。
「お兄ちゃん、お兄ちゃん、お兄ちゃん……っ」
今にも爆発しそうな欲求を必死で我慢しながら、小町が俺に抱き付いて来た。

続く。

（2）

「ふーっ、ふーっ、ふー……っ」

真冬の宵闇に包まれた公園に、荒い息遣いが静かに響く。

小町は俺のコートの中に腕を滑り込ませ、手を背中に回して抱き付いていた。

小町自身もコートの前面をはだけている為、互いの制服が触れ合っている形になる。

そんな衣服を介しての接触ですら小町にはもどかしいのか、ぐりぐりと必死で自分の身体を押し付けてくるため、慎ましい胸の柔らかな感触が伝わってきた。

「小町……」

俺は小町の名を呼ぶと、頭をそっと撫でる。

そして、その手をゆっくりと小町の耳にスライドさせ、こしょこしょとくすぐってやる。

「あっ……ふあっ、お兄ちゃん、お兄ちゃん……ふうぅっ……」

まるで飢え死に寸前まで追い込まれた獣が、食料を目の前にして首輪で拘束されているかのような、酷く荒々しい息遣い。

その口はかたかたと震えている。

寒さでこうなっているのではないことは分かっていた。現に、小町の顔は上気して、今にもじっとりと汗ばみそうだったからだ。

「……」

……や、それにしても。

「小町……なんでお前、そんなに……」

発情してんの？　と。

流石に、そんなどストレートなことは聞けなかった。

しかしそれでも、小町には俺の意図が伝わったようで、俺の胸にうずめていた顔をゆっくりと上げた。

「わ、わかんない……わかんないよぉ……学校でもお兄ちゃんのことばっか考えてて、それでも何とか勉強に集中してたんだけど……帰り道はまたお兄ちゃんのことで頭が埋まっちゃって、だめ、もう帰った

らすぐにお兄ちゃんと……とか考えてたらお兄ちゃんに急に会ったから……うぅ……うぅ……」
「……そうか」
……。
大人な対応をしたものの。
取り敢えず、心の中でちょっとばかし叫びたい。
それでは皆さん、御唱和ください。
……うおわぁぁぁ

よ。
そもそもその家にだって、あと15分も歩けば辿り着くというのに。
それでも、それさえ我慢出来ない程に。
小町は、高ぶっていたのだろう。
まるで、発情期の猫のように。
わかったよ、と冷静な対応をして、頭をぽんぽんと撫でよう、キスをねちっこくして、それで一旦落ち着いたら万々歳だ――そう思って、
「……わかったよ――っ!?」
心に描いた言葉を口にしかけた瞬間。
小町は、俺の唇に飛びついた。
「んむっ、あむっ、んちゅるっ、ちゅるるるっ、じゅるっ、あむっ、んんっ、んっ、んっ、はむっ、じゅるるるるるっ、じゅるるるるるる……っ」
「……～～～っ！　～～～っ!?　～～～っ！」
獣。
その一言に尽きるような、そんな貪りつき方だった。
頭の位置は俺より低い為、そこまで優位に立たれることはないと高を括っていた自分が恥ずかしい。
小町は俺の首に腕を回しぐいと引き寄せると、慌てている俺の口内に舌をねじ込み、すぐさま歯列の裏や口蓋、口の内膜中をその柔らかい舌で蹂躙し、息つく間も無く続けざまに俺の舌に吸い付き、いやらしくじゅるじゅると水音を立てた。
「あむっ、じゅるっ、じゅるるるる……っ、ぷはっ、んむっ、れちゅっ、れろれろ……」
舌を吸われている間の視界はばちばちと明滅していたのだが、小町が息継ぎの為に口を離した瞬間不意に明滅が止んだ。
しかし視野が正常な状態に戻った瞬間に、目の前に居た小町の顔に視線が集中して、うっとりとして上気した艶めかしい小町の顔に心臓が止まりそうになった。

そんな高揚も束の間、またすぐに唇を奪われ、再び世界が明滅する。
「あむっ、んっ、んっ、……んっ」
ふと。
小町の左手が、俺の右足の太腿の辺りをつんつんと触ってきた。
なんだよ更に新たなプレイを掘り下げるつもりかよ、全く優秀にも程があるな俺の妹は、さあさあどんなプレイを要求するつもりだい……などと馬鹿なことを考えたのだが、どうやら違うようだ。
その視線と手の動きから察するに、どうやら俺の右足を動かせと指示しているらしい。
それにしても、どこに――？　と思っていると、すぐにその目的が分かった。
「……っ」
その光景と、小町が望んでいる事に息を呑んだ。
小町がゆっくりと足を広げ、その間に俺の右足を入れようとしていたのだ。
キスは少し穏やかになり、早く足を入れるよう促してくる。
それでも、これは……。
躊躇していると、小町は焦れったく思ったのか、唇を離した。
「……ぷはっ、お兄ちゃん、もう……早く、早くして……っ」
切実な声で俺に懇願すると、再び俺の唇を奪う。
足を広げたまま、下腹部を扇情的な動きでゆっくり前後に動かして、俺に右足を差し込んでくるよう促す様は、この世のものとは思えない程にいやらしかった。
やがて俺は観念すると、そろり、と右足を小町の両足の間、下腹部に自分の太腿を押し当てるように滑り込ませた。
そして、小町が腰の位置をやや下げ、更に俺に密着して、俺の太腿がショーツと思われる柔らかくて熱っぽい何かに触れた瞬間。
「～～～～～～～～～～～～～～～っ！」
小町は足をぱたんと閉じ、俺の右足を綺麗に挟み込んだまま目をしばたたかせ、全身を小刻みに震わせた。
ほんの少し触れただけでも、こんなに反応してしまうというのに。

「あうっ、あぇっ、かはっ、ふーっ、ふーっ、お兄ちゃん……お兄ちゃん、お兄ちゃん……っ」
こんなに、まるで身体がどうかしてしまったかのように喘ぎに喘いで、自分から下腹部をこすり付けて腰をがくがくと震わせている。
……発情した猫って、こんな感じなのかなあ。
そんな呑気なことを考えでもしていないと、目の前にいるこの愛しい子をどうにかしてしまいそうだった。
「――って、おい、小町!?」
心の声、中断。
小町はいつの間にか、俺の太腿に自分の下腹部をこすり当てるように、腰をひくひくと動かしていた。
「あっ、かひっ、ひぐぅっ、お兄ちゃん、やっ、やんっ、動かしちゃ、だめ、だめ、ひっく、ひぃん……っ」
「……っ」
いや。
いやいや。
いやいやいやいや。
動かしてるのお前じゃん！
俺が慌てるのを意にも介さず、小町は尚も動き続ける。
俺の太腿が徐々に熱を帯びて行く。摩擦どうこうではないのは分かりきっていた。
明らかに、湿っているからだ。
「うぐぅ……お兄ちゃん、お兄ちゃん、小町のあそこ、変だよ、切ないよ、やだよ、やだよ、やだよぉ……っ」
「小町……」
目に涙を浮かべながら、必死で腰を動かしている。
小町は、あまりにも身体が欲求を溜め込みすぎて、どうしようもなくなっている。
それが分かって、居てもたってもいられなくなった。
「……分かった。小町、もうちょっとの辛抱だぞ……」
「へ……？　ひあぁっ!?」

一度、盛大にイカせてやれば、きっと楽になる。
そう判断して、俺は小町のスカートの中に手を入れて、両手でショーツ越しに尻を鷲掴みにした。
そして小町にこすり付けている右足のつま先を上げ、それと同時に小町の腰の位置も下げて、下腹部との密着度を更に高める。
「え、ひんっ、お兄ちゃん、これ、なに……」
「大丈夫、大丈夫。……行くぞ」
不安がる小町に優しく語りかけて、尻を掴んでいる手に一気に力を込めて動かす。
小町の腰を俺が能動的に前後に動かして、小町の下腹部を俺の太腿に強制的に強くこすり付けた。
――と。
「ひあぁぁっ!?　えっ、なにっ!?　んあぁっ！　お、お兄ちゃ、ひんっ！　こ、これ、だめ、こんなの、しらなっ、小町、知らないよぉ……」
たまりかねて、小町が嬌声を上げて俺にしがみついてきた。
だが、しがみついたら余計に密着してしまう。
それはつまり――。
「ひぐぅぅぅ……っ！　あぎっ、うぅっ、うぐぅぅ、ひっ、や、やら、これ、おかひくらるぅ……っ！」
秘部への刺激が高まり、小町の反応が更に増すことになる。
「でも、お前がしてほしいって言ったことだぞ？」
意地悪な言葉を掛けると、小町は力無い動作で顔を上げる。
「こんなに……してほしいなん、ひぐっ、て……言ってな……うぐっ、い、よぉ……っ！」
「そうだな、どれくらいしてほしいなんて言ってなかったな。じゃあそこは俺のさじ加減次第な訳だ」
にやりと悪い笑みを浮かべると、小町が恨めしそうな視線を送ってくる。
「うう……お兄ちゃんの変態、鬼畜、鬼いちゃん……！」
「……」
お前は無表情キャラ不安定童女か。

しかし、こんなことを言われても止まりはしない。
「そうだな、お兄ちゃんは変態だ。……だから、やめない」
「……っ！」
小町の耳元で囁いて、目を見開くのを見た瞬間、背筋がぞくぞくとした。
「よし、じゃ、そろそろ……」
言って、手の動き及び小町の腰の動きを更に速める。
「んあぁぁぁぁ!? だ、だめ、そんな早くしたら、だめ、出ちゃう、出ちゃう、イク、イク、イク、イク……っ！」
「イケ、イケ、イケ……っ！」
小町とおでこを合わせて、目を見開いて促すと、
「……あっ、あぁっ、あぁぁぁぁ～～～～～っ！」
伸ばす言葉も途中で途絶えて、小町は目をしばたたかせ、俺の太腿に温かい液体をぶちまけた。

× × ×

「……」
ちょっとどうしたら良いのか分からなかったため、同じ体勢を維持している。流石につま先立ちはやめたけど。
「……」
「お……？」
小町の足の間にねじ込んだ俺の足も元に戻すようにと、俺の太腿をつつくことで意思表示をしてきたのでするりと戻した。うーん、なんかこのつんつんする仕草も何気に可愛いんだよなぁ……後で撫でる回数を増やそう。
「ふーっ、ふーっ、ふー……っ、……ふっ、ふっ、……ふぃー……っ、……はう」
呼吸を落ち着けて、やがて温泉に入ったかのような気の抜けた声を出したかと思うと、俺の胸に再び顔をうずめた。忙しいやつめ……。
うーん。
右足の太腿、びしょびしょだなあ。
匂いはちゃんと消さないとな……こんな匂い、少しでも残ってたら

それだけで勃ってしまうし。
「……もう、大丈夫そうか？」
言って、小町の頭をくしゃくしゃと撫でる。あー、そのうち一緒にお風呂入ろうとか言ってみっかなあ。ぶん殴られそうだけど。
「……ん、ありがと。……気持ち良かった……えへへ」
「……っ」
にへっと、目を細めながら、無邪気さと艶やかさが同居した不思議な笑みを浮かべられたものだから。
「ん……っ？」
ちょっとばかし勢いで、軽くキスをした。
「はぷ……っ、……あはは、お兄ちゃんもしたくなったんだ？」
「バカ言うな、俺は小町とだったら年中したいと思ってるぞ」
ごく自然と言ったつもりだったのだけど。
この言葉に対して、小町は頬を朱に染めて、無邪気にはにかんだ。
「あ、そ、そっか……えへへ……嬉しい……な。小町も……お兄ちゃんと、……いっぱいしたい」
「……」
……。
えげつないカウンターがきた。
「と、とにかく、もう大丈夫なんだな？　それじゃ、一旦ベンチに座るか」
「う、うん……？」
気恥ずかしさで妙に慌てながら言ったため、小町に不思議がられた。

×　×　×

ベンチに並んで座ると、小町はだいぶ疲れた様子で、俺に肩を寄せていた。
その肩を抱いて、小町の髪に自分の頬をくっつけてすりすりとしていると、小町が「あう……」と可愛らしい声を上げた。何この子、超持ち帰る。
実際、そろそろ帰らないと、またすぐ身体が冷えてしまうだろう。

この甘えんぼ時間を終えるのは惜しいけれど、それはまた家で――などと考えていると。
「お兄ちゃん」
不意に、小町から呼ばれた。
「どうした」
言いながらも、小町の髪にすりすりする。すりすり。
すりすり。
「あう……お兄ちゃん、それ気に入りすぎ……。……あの、ね、お兄ちゃん、その……」
「どうし……っ!?」
突然背後から殴られて、頭の中で火花が散った。
とか言えそうな台詞だった。
実際はというと、小町が急に俺の股間に手をやっていた。
「あ、えーと……小町ちゃん？　一体何を……」
「……舐めたい」
どくん、と心臓が跳ねる。
小町は既に口を半開きにして、目がとろんとしている。もしかしてベンチに座ってからもずっと考えていたのだろうか。そういや心なしか呼吸が荒かったような……。
「そうか、じゃあリンゴ飴でいいか」
「どこまで買いに行く気なのさ……」
しょうもないボケを投じてみたのだけれど、ちゃんと受け止めてくれた。お兄ちゃん嬉しいです。
小町のつむじを見て、その辺りをこしょこしょと撫でる。
「はう……な、なに？　はうぅ……」
「ん、なんでもない。可愛いなーと思っただけだ」
「あうぅ……」
小町の困った声も、たまらなく可愛い。
「……舐めたら、流石に家帰るぞ？　体調崩させたりしたくないからな」
言って、小町の耳に手を回して顔をこちらに向けさせ、軽くキスを

する。
「ん……っ、……えへへ、ありがと。じゃあ――」
小町がどういう体勢でしようかという相談をする前に、俺は立ちあがって小町の手を引き、手近な壁に背を付けた。
ひんやりした壁も、コートと制服を纏っている今なら何ともないようだ。身体は小町のおかげで火照りっぱなしだし。
「……ここで、いいか？」
聞くと、小町はにへっと笑って、すとんとしゃがんだ。
そして俺の股間をさわさわと撫でて、俺を見上げて目を細める。
「……ん。……いただきます」
艶っぽく笑うと、小町はゆっくりとチャックに手を掛けた。
続く。

（3）

「……ん。……いただきます」

小町が丁寧に挨拶をして、チャックに手を掛ける。

期待が否応なしに膨らんで、緊張して見つめていると、ゆっくりとチャックが下ろされた。

ちー……と。

いつもならば全く気にしない、チャックを開ける際の金属同士がじじと擦れるほんのわずかな音が、やけにはっきりと聞こえる。

チャックを開けきると、小町がうっとりとした顔で、僅かに覗いたパンツを見つめている。

「えへへ……もう、濃い匂いがするよ？　お兄ちゃん……」

「え……うお……!?」

言うや否や、小町がチャックの隙間に自分の顔を押し付けた。

既に興奮でがちがちになっているため、肉棒の裏筋に、パンツ越しとはいえ小町の鼻がつんと当たる。

「ちょ、おい……っ」

何この変態っぽい行為!?　小町ちゃん、ちょっとスイッチ入り過ぎじゃない!?

俺の激しい動揺など意に介さず、小町はすりすりと鼻をこすり付ける。

「えへへ……んー……お兄ちゃんの匂いだー……あむっ」

「うっ……くあっ……!」

小町は首を横に傾けると、裏筋を咥え込んだ。

「あぐ、あぐ、あぐ……」

舌を這わせてもあまり意味は無いと思ったのか、ゆっくりと唇で挟み込んでいる。

「う……お……」

直接的でなく、ゆっくりと高められていく興奮が焦れったい。

この行為がしばし続けられて、気付けばパンツは小町の唾液と俺の先走りですっかり濡れていた。

「あぐ、あぐ……ぷはっ……うん、味わった！」
「お、おう……」
唇を離すと、蕩けた目から一転して、急にぺかーっと太陽みたいに笑った。表情の変化が急ハンドル過ぎて、お兄ちゃん付いて行けてないです……。
この後どうするのだろうと期待し……どきどきして待っていると（ほとんど同じことを言ってしまった）、小町が目を細めた。
真冬の凍える寒さの中では、小町の桜色に染まった頬が際立つ。
小町の瞳は、薄明かりの下で妖しく色めいていた。
「……じゃ、直接……するね？」
「……ああ」
言うと、小町がチャックの中に手を入れ、ボクサーパンツをずるりと引き下ろす。
「きゃん……っ」
ぶるん、と寒空の下に弾き出された肉棒が、小町の顔に勢いよくぴたんと当たった。
「あ、わ、悪い。大丈夫か？」
「ん。大丈夫。ううむ、小町の計算以上にびんびんになってて、動きが読めなかったよ……この暴れん坊さんめ～、うりうり！」
さり気なくやたら恥ずかしい擬音を使ったかと思ったら、肉棒の根本を押さえて亀頭を指でつんつんとしてきた。やめろやめろ恥ずかしい恥ずかしいちょっと気持ち良い恥ずかしい！
「こんなに興奮してくれてるんだから、じっくり楽しんでもらいたいな……」
小町がうっとりした顔で言うと、肉棒に両手を添えて、口をくぱっと開けた。可愛らしく覗いた八重歯に、小町の小悪魔めいた魅力を感じて、脳髄に痺れが走る。
……や、風邪引いてほしくないから、あまり長居したくないんだけど……。
しかし、小町も俺も汗ばむ一歩手前くらいまでには身体が熱を持っている。汗をかいたら後始末だけきちんとして、二人乗りで急ぎ気味

で帰ろう……なんて思っていると。
「……うおおお……っ!?」
突然の展開に、素っ頓狂な声を出してしまった。
「ちろちろ、ぴちゃ、んっ……ちゅむ、ちゅむ、ぺちゃ、ぴちゃぴちゃ、ちゅるるる……」
尖らせた舌を亀頭に伸ばしてつんつんとつつき、尿道口を舐め、軽くキスをして、快感で浮かび上がってきた先走りを丁寧に吸い取る。
「おあ……おおお……」
情けない呻き声を上げて、行き場を失って手が小町の頭を掴んだ。
「んんっ、ぴちゃ、ぴちゃ、ちゅりゅっ、ちゅぴっ、ちゅぱっ……んはあっ」
唇を離すと、あごに指を当てて、んー……と考える仕草をした。え、何、作戦を練ってるのん？
俺の肉棒をじーっと見つめていたかと思うと（超恥ずかしい）、ようやく方針が決まったのか、よし、と小さく気合の声を上げたかと思うと、口をくぱっと開けた。
公園の僅かな灯りに照らされた小町の顔に影が出来て淫靡さが増して、口の中に見えるピンクの発情した舌が見えると、激しい期待の波が押し寄せる。
「……あむっ」
「くおっ……」
愛おしむように、ゆっくりと亀頭を咥えたかと思うと、竿の部分を両手で握って、しっかり固定した。
そして、
「ちゅぴっ、ちゅるっ、くちゅっ、じゅるるっ、くぷぷ、くぷ、くぷ、あむ、じゅる、ぷちゅ、ちゅぱちゅぱ……」
「〜〜〜！」
亀頭だけを集中的に責められ、その快感に頭が付いてこなくて、否応なしに悶絶する。
「れろれろ、くちゅ、にちゅ、ちゅぴ、ちろちろ、あむ、あむ、ぐぼ、んんんん……」

「あっ、ぐあ……うあああ……っ」
ひたすらに舐められ、つつかれ、啜られて、多少なり残っていた筈の冷静な思考ががりがりと削り取られて、その残滓が公園の暗がりに溶けて行く。
小町が亀頭を咥えたまま俺の顔を見ると、嬉しそうに目を細めた。その顔は発情しきっていて、この顔を見るだけでも抜けそうだな……なんて思ってしまった。
「……ぷはっ、えへへ……お兄ちゃん、気持ち良いんだね？　可愛い顔しちゃって」
「恥ずかしいこと言うな……うっ、くっ……」
再び咥えられて、何も言えなくなる。
「んぶっ……」
今度は竿の方まで咥えられて、肉棒全体が小町の口内の温かさに包まれた。
「ぐぷ、ぐぷぷ、がっぽ、がっぽ、じゅぴっ、ぢゅっぷぢゅっぷ、じゅりゅっ、ぐぷぷぷ……ぐりゅ、ぐりゅ、ぐりゅ」
「あっ……かっ……」
籠った水音にいやらしさが増し、視界が霞む。
小町は時折顔の角度を変えて咥え込むことで、亀頭に内頬や口蓋が当たるようにしている。その度に絶妙に異なる感触がして、それがまた、たまらなく気持ち良い。
「小町……小町、小町、小町……」
「んん……？　……んぐっ……!?」
我慢出来なくなって。
小町の頭を掴む手に力を入れて、ゆっくりと最奥までねじ込んで咥えさせる。
「うぐう……じゅる、くちゅくちゅ、ぐぷぷ……んっく、んっ、れろれろ……」
涙目になりながらも、小町は顔の角度を変え、舌を駆使して、深く咥え込んだままで亀頭や裏筋を巧みに刺激する。
――もう、我慢出来ない。

小町の許しを得て、小町の頭を掴んで、小町の口の中を蹂躙しよう。
そして目一杯欲望を吐き出そう――そう思った瞬間。
「じゅるるるるる……」
「うあああっ!?」
突然小町が亀頭を強烈に吸い上げ、たまらず声を上げてしまった。
「うっ、ぐっ、うあああ……っ！」
耐え切れなくなって、一時避難を……と思って腰を引いたが、小町が俺の腰に腕を回してがっちりロックしていて、どこにも逃げる事が出来ない。
「じゅるるる……じゅぽっ、ぐっぽ、がっぽ、じゅるるるる……」
「あ……かはっ……」
予想していなかったタイミングでの強烈すぎる快感に、思考回路がゆっくり解かれて、何の意味も成さない糸に変わり果てていく。
未だに激しい口淫の音が鳴りやまぬ中、あまりに意識が朦朧として、下腹部に絶えず押し寄せる悦楽の波がまるで別世界のことのように感じられる。
……あれ、ここ、どこだったっけ……？
茫然とした目つきで周りを見渡すと、暗い中、灯りの下でほんのり浮かび上がる遊具が目に入る。
――ああ、そうか、俺、公園で、小町に――
今の状況を、改めて認識した瞬間。
「う……うあああああ!?」
身体の内側から溢れ出すマグマの奔流の感覚に、身体全体がさざめき立つ。
「じゅるる、じゅぷっ、んっく、んぶっ、ぢゅるる、ぢゅるっ、じゅるる……」
「あっ、うあっ、こ、小町、それやばっ、うう、うぐあ……っ！」
既にある程度こういった行為にも慣れて、俺の射精の予兆も分かるようになっていて、いつもならにっこり微笑んで「良いよ……出して？」なんて、優しく穏やかに言ってくれる小町が。
ただただ、我を忘れた獣のように、俺の肉棒にしゃぶりついて、離

さない。
「あ……うあ、うう、小町、出る、出るから、もうやばいから……うぐうう……！」
気付けば、背中の冷たい壁に手を付けて、必死で身体の標高を保っていた。
小町がしゃぶればしゃぶる程、頭の中で火花が散って、気が狂いそうになる。
なのに、小町はそんな俺の様子を一向に気にすることなく――と、思っていたら。
「……」
――ふと、下からの視線を感じた。
……気にはしているのだ。
ただ、発情した目つきで俺を見る目は嗜虐心に満ち満ちていて、まるで如何に俺を盛大に絶頂に追い込むのかだけを考えているかのようだ。
腰がひっきりなしに情けなくかくかくと前後して、壁に腰をぶってはは反射で前に突き出して、その度に小町の喉奥のざらざらした部分に亀頭が当たって、あまりの快感に、油断すると腰を抜かしそうになる。
「じゅるるる……じゅぶじゅぶ、ぐぽっ、がぽっ、ぐじゅ、じゅるるる……」
小町の顎には大量の唾液が伝い、灯りに照らされて妖しく光る。
――もう、だめだ――。
がしっ、と。
小町の後頭部をぐっと掴む。小町は一瞬だけ素の表情に戻り、「ほえ？」という感じで可愛らしく首を傾げた。今この状態だと、それで内頬に亀頭が擦れるから尚のことやばいです……。
「小町、出る、出る、出るぞ。もう、だめだ。本当にだめだ。一滴残らず飲んでくれ……」
冷静さなど欠片も残っていない口調で告げると。
小町はこくりと小さく頷いて、
「……ずぞぞぞぞ、じゅるる、じゅぼっ、ぐじゅる、じゅぶぶ、じゅ

るるるる、ぢゅるるるる……」
——俺の意識ごと刈り取ろうとするかのように、俺の腰ごと刈り取ろうとするかのように、凄絶なまでの勢いで肉棒全体を吸い上げてきた。
「あが……うぐあああ……」
もはや、力無くおとがいを上げて、優しい月明かりを覆い尽くす黒い雲たちを見つめることしか出来ない。
——そして。
「……あ……」
最後には、もはや、声も出なかった。
確かな予感に、くんっ、と腰を引いた次の瞬間。
——どぶぶっ、どぶっ、びゅぶぶ、ぶびゅるっ、びゅるるっ、びゅるっ、びゅるっ、びゅるっ、びゅるっ、びゅるる……。
「……」
「……」
俺も、小町も互いに無言で。
俺は真冬の冷気漂う宵闇の景色が白むのを感じながら、夥しい量の白濁液を小町の喉奥に幾重にも吐き出して。
小町はその白濁液を、何も言うことなく、ごきゅっ、ごきゅっ、と喉を鳴らして、頼んだ通り、一切零さずに飲み込んだ。
「あ……うあ……」
俺は壁に背を付けたまま、ずるずると腰を下ろした。
× × ×
「……はあ」
帰り道。
家まであと僅かという所で、疲労のせいかため息を吐いてしまった。
「どうしたのお兄ちゃん？」
手を繋いでいた小町が、目をくりっとさせて首を傾げる。発情が尾を引いてるのか、指の絡ませ方がいちいちいやらしいんですけど気のせいですかね……。

「や、もう、さっきので魂吸い取られたわ。昔の人が写真撮られた時もこんな感じだったのかなとさえ思う」
「……お兄ちゃん、何言ってんの？」
今度は腐った目で首を傾げられた。くっそ、可愛くねえから救いようの無い絶望が押し寄せる！　やめてよお！
「どっちにしろ、家帰ったらしばらく休憩な。マジで腰がくがくだし」
ぬぼーっと前を見ながら言うと、小町はうーんと唸って瞑目した。
見慣れた自分たちの家が見えた頃に、小町がぱちっと目を開けて手を離し、俺の前に回り込む。
「……どうした？」
「うん、今日は小町もちょっとやり過ぎたなーって反省したのです！　ごめんなさい」
ぺこりと謝る……のかと思ったら、胸元に飛び込んできた。お辞儀代わりにおでこをすりすりこすり付けながら「ごめんなさい～」と謝ってくる。可愛い可愛いやめろ可愛い離れろいやもっと抱き付いてこい可愛い可愛いもう超可愛い！
「……」
やがて、ぴたっと動きを止めたかと思うと、おねだり全開の表情で上目遣いをした。いかん、死ぬぞ、俺。
「……でね？　今日はもうやめにしておいて……明日、その……やっぱこれは明日言うよ。お兄ちゃんは明日の夜、リビングに居て！　いい？　いいよね？　はい決定――！」
「え、おい……」
俺の返答を一切待たぬまま、勝手に俺の行動を縛ったかと思うと、にぱっと笑って愛くるしい八重歯を覗かせた。うーん、さっきと今では同じ八重歯でも受ける印象が全く違うな……女の子って不思議。
「ふふふー、小町との約束なのです！　お兄ちゃん、破っちゃやだよ？」
前をとてとて歩いていた小町が、手を後ろに組んでくるりと振り返った。
その純真無垢な可愛らしさに、思わず思考が固まって。

「……おう」
短く答えると、小町が再び俺の手を握った。今度はいやらしさが無い……恋人繋ぎだった。どっちにしろ恥ずかしい……。
「よし！　やー、楽しみだな～」
「……」
めっちゃ振り回されてんじゃん、俺。
……などと思いながら。
小町のにこにこと幸せそうな笑顔を見ると、多少の不満はどうでも良くなってしまった。
やがて家に着いて、自転車を停めると、何とはなしに小町の頭をくしゃりと撫でる。「ふあ……？」と気持ち良さそうにする小町に内心悶えながら、鍵を開けて中に入る。
まず電気を点けると、
「ただいまー！」
「おう、おかえり」
元気に挨拶をする小町に、一緒に帰ってきた身ではあるが、俺が返事をする。
明日どうなるのか超不安だけど超楽しみいやそんなことは……などと考えつつ。
隣の小町を見て、家の暖かさとはまた別の、優しい温もりが身体を包む感覚に頬を緩ませた。

続く。

（４）

帰り道の公園でわーきゃーあった、その翌日。
昨日小町から言われた指示が気になり、授業をいまいち集中して聞く事が出来なかった。
昼休みにぼへーっとベストプレイスでご飯を食べていると、目の前のテニスコートで昼練に精を出している戸塚と目が合う。
「はちまーん！」
「……おう」
首にかけたタオルで煌めく汗を拭きながら、戸塚が満面の笑みで手を振ってきたのに対し、動揺を悟られぬよう努めながら手を振る。
結婚していいかなあ。
……妹とアレな関係になっている上に戸塚と結婚って、中々攻めてるな、俺の人生……。
ホットのマッ缶をくぴりと飲んで、パンと一緒に流し込む。
冬なので、本来であれば外でご飯なんて耐えられないだろうと思うかもしれないが、ゆうて昼休みの時間帯なので意外となんとかなる。慣れってすごい。こんな事に慣れるのもどうかとは思うけれど……。
まあ、今は。
その慣れ以上に、戸塚と目が合った事と、夜に何が起きるのかという言い知れぬ期待感が身体を包んで、制服の下にカイロを１５個くらい貼り付けているのではないかと思うくらい程身体が火照っていた。
１５個ってえぐいな。
時計を確認すると、もうじき昼休みが終わりそうだ。
さて、行くか……。
去り際、もう一度戸塚と目が合ったので、再び軽く手を振る。
結婚していいかなあ。
×　×　×
時間は少し飛んで、夜。だいぶ飛ばした。戸塚との触れ合いを伝えたかっただけかもしれない。手を振っただけだけど。
放課後は案の定、夜が近付いていることもありかなりそわそわして

しまい、雪ノ下と由比ヶ浜にそれはもう盛大に引かれた。由比ヶ浜には読書中に二の腕をつんつんとされ（恥ずかしいからやめてほしい……）、『ヒッキー、どうしたの？　さっきからそわそわして……すごいキモいよ？』と心配そうに言われた。憐みを持った目でキモい呼ばわりって中々心が折れるものがある。ちなみに雪ノ下は無言で俺をゴミを見る目で見つめた後、俺と目が合うと腕を抱いて身体を９０度回した。じゃあ目を合わせなければ良いじゃないのさ……俺と目が合ったからって妊娠するとか、そんな高いレベルの生殖能力は無いからね？

さてさて。

小町の指定は『夜、リビングに居て』という極めて曖昧なものだったので、どうしたものかと迷う。どこに居るのがベストなのだろうか？

とはいえ、リビングで待機出来る場所は限られているから、自然と選択肢は限定される。台所の調理台の上に足を組んで座るのも斬新で良いかもしれないが、下手をすれば小町が冷めてデレ成分が消滅するかもしれない。それは避けねば。

「……さむ」

リビングの中で一人で呟くと、まだ暖まっていない室内に自分の声が薄く溶け渡るのを感じた。

つい数秒前までのしょうもない案は軒並み頭の中から舞い去って、その足がこたつに向かう。

こたつ、ｉｎ。

ぬくぬくだにゃー。

「……ふう」

温泉気分でこたつに入っていると、少しばかり眠くなる。

仰向けになって手を頭の後ろで組んでごろごろしていると、玄関が開く音がした。

とてとてという聞き慣れた足音に、今までにない昂揚を覚える自分が不思議だった。

かちゃり、と。

リビングのドアが開いて、コートを着た小町が姿を現す。
「ただいまー」
「おう、おかえり」
「ちゃんとリビングに居てくれたね。小町的にポイント高いよ！」
きゃるんと笑う小町。はいはい超可愛いよ、超可愛い。
「……おう」
「むう……お兄ちゃん、返事に元気が足りないよ。今の小町的にポイント低い！」
気だるげな返事をすると、小町が頬を膨らませて拗ねた素振りを見せた。はいはい超可愛い超可愛い。
や、だって、未だ寝転がった状態で褒められると、なんだか妙に申し訳ない気分になるものでねえ……。
流石にこの体勢ではひどいなと思い、ぐいっと状態を起こす。心持ち腹筋が攣りそうになった気がするけど、そこまで身体がふやけてはない、は、ず、だよ、ね？　動揺のあまり心の声が片言になった。
小町に向き直り、呆れた表情を見せる。
「や、ポイント獲得のハードル低すぎだろ……。どこに居たら良いのか迷ったんだけど、ここでも良いのか？」
「良いのです！　ていうか、お兄ちゃんならどうせ寒さに耐え兼ねてこたつに行くかなと思って敢えてそこをぼかしたんだけど、予想通りだったなー」
ここで良いのかと言う問いに対して、腰に手を当ててふんすっと息を吐いて肯定したかと思えば、弄んでいた発言をしてけらけらと笑った。
うーん、ちょっと。
本当に可愛いんだけど、どうしよう。
若干こんにゃろめーと思った感は否めないが、可愛いから簡単に許す。
――と。
不意に、無邪気な笑顔を浮かべていた小町の表情が、艶めかしいものに変わる。

「……じゃ、着替えてくるから。ちょっとだけ待ってて……？」
「お、おう……」
急なスイッチの切り替わりに、脳が付いて行けない。
リビングから出る時、小町がちらりと俺を見る。
「……えへへ」
「……っ」
その流し目は強烈で、一瞬で眠気が吹き飛んだ。
×　×　×
「ふー、お待たせ！」
リビングに小町が戻ってくると、ミニスカートを履いていた。
ミニスカートを履いていた。
何故か2回言ってしまった。
や、そのすべすべした足がはっきりと見えているのは非常に嬉しいんだけど……。
「……寒くないか？」
率直な感想だった。
制服じゃないんだから、いくら暖房が効いてきたとはいえ、わざわざ家でそんな恰好をしなくても……なんて思っていると。
「大丈夫大丈夫！　おお寒い寒い……」
抜群に矛盾したことを言いながら、こたつに入った俺の下へとてとてと寄ってくる。
そして。
こたつ、ｉｎ。
……場所は俺の隣。
「……なんで？」
暖かいから良いんだけど。なんかまだ恥ずかしいな……。
俺の問いかけに対して、小町は『なんでそんな質問をするの？』と言わんばかりの表情で首をくりっと傾げる。
「んー？　……なんでだろうね」
意味ありげなことを呟くと、そのまま何食わぬ顔でテレビのリモコンのスイッチを入れた。

×　×　×

比較的よく見ているバラエティ番組を2人でぼんやりと見ている。

うーん。

状況が状況なだけに、全く内容が頭に入ってこない……。

――ふと。

「……？」

小町の手が、俺の太腿に添えられた事に気付く。

そのまますりすりと撫で回し、時に指先で円を描くようにつつっとなぞってきて、びくっと反応してしまう。

「お、おい……あ」

「……」

小町の表情が色を纏っている事に気付き、言葉を途中で止めてしまう。

「……っ」

小町の表情の変化を目の前で見て、自然と下腹部が反応して、むくむくと大きくなる。

小町の目はとろんとして、息は心なしか荒い。

テレビの音量も下げて、今や画面の動きだけ目で追うような状態になっていた。

「……」

何食わぬ顔で、小町への反撃を試みる。

「にゃあ……っ」

スカートの中に手を滑り込ませて、太腿を撫で回すと、可愛らしい声を上げた。

俺の動きに対抗してなのか、小町の手が更に足の付け根に滑って行き、やがて中心部に辿り着く。

無言のまま、こきゅっ、と。

小町が可愛らしく、息を呑んだ。

小町は俺に熱っぽい視線を送り、ゆっくりとズボンに手を掛け、ずり下げる。

パンツ越しに怒張した俺の肉棒を見ると、

「すご……」
小町が驚いたように、嬉しそうに呟いた。
「くお……」
その細い手が肉棒に伸び、竿をきゅむと掴む。
「お兄ちゃん……」
ぽそっと俺を呼ぶ小町の目の色は、昨日公園で見た目とひどく似ていた。
「うっ、くう……っ」
くにくにと悩ましげに股間を弄られ、身体が震えてくる。
快感を紛らわす意味でも、負けじと小町の太腿に這わせた手を、足の付け根へと滑らせる。
――と。
「……え」
ある事に気が付いた。
指を這わせて行き着く先にはショーツの感触があって……というのを想定していたのだけれど。
そのショーツの感触が、無い。
僅かばかり生えた叢の、しょりしょりした感覚に行き着いて、予想だにしていない展開に面食らう。
叢の周辺ははっきりと熱を帯びていて、欲情を示す湿り気を帯びていた。
「小町、お前……？」
なんて嬉しいこと……じゃなくて、なんてけしからんことを、というつもりで小町を見たのだけれど。
小町は色を纏った表情のまま、可愛らしくはにかんで。
「……えへへ……お兄ちゃん、喜んでくれるかな～、って思って。……いじりっこ、しよ？」
「……っ」
あまりに魅惑的な誘いに、黙って頷いた。
俺の返答を見て、小町が嬉しそうに頷き返すと、俺のパンツをずるりと下げ、益々怒張した俺の肉棒に手を添えた。

時間はまだ夕飯時の少し前。
そして、気が付く。
……明日は土曜日。
小町と見つめ合う。
――どくん、と。
鼓動が跳ね上がる音が、確かに聞こえた。
テレビの画面は今も、せわしなく、賑やかに、色鮮やかな光を放っている。

続く。

（5）

期待と緊張感で張り詰めた二人の空気が、小町が手をつっと上げることで、温めた牛乳の膜にスプーンを入れたかのように柔らかく裂かれた。

「……っ!?」

状況が状況なだけに、小町の小さな動き一つにも、身体をびくっと震わせて反応させてしまう。

すると、俺の反応を目撃した小町は、一瞬きょとんとした後けらけらと笑った。

「あはは……リモコン取ろうとしただけだよ」

「……っ」

……超恥ずかしい。

恥ずかしさで俯く俺の顔を、小町がにゅっと覗き込む。

「……もう、お兄ちゃんったら……いいんだよ？　いつも通りで……」

言って、にひっと笑う小町の目には、快活さとはまるで別の艶めいた色が見えて。

「お、おう……」

生返事にも程がある言葉を返す。

……。

や。

いやいやいやいや。

この状況でいつも通りとか無理だろ。え、いじりっこって言ったよね？　あれ？　すんごいエロい提案してきたんだよね？　あれれ？

頭の上に盛大にハテナを咲かせていると、小町がテレビの音量を上げる。

見慣れたバラエティに再び目をやるも、やはり内容は頭に入ってこない。

だって、互いの手が互いの大事な部分にさわさわと触れているんだから。

「あははー、やっぱこの人面白いなー。小町この人結構好きなんだよ

ねー」
俺の悶々とした表情も気にせず、小町がからからと笑う。
「あ、ああ、あの人な。それ結構わかる……っ!?」
何とはなしに返した言葉を、途中で呑み込む。
小町が俺の表情を気にしていないなんていうのは気のせいだった。
「……そうそう。……ほんと面白いよねぇ……」
口では上滑りの会話を続けていながら、視線はテレビから逸らし、俺の顔と肉棒に向けてその色めいた視線を滑らせ、這わせ、舐めるように見つめてくる。
言葉と挙動が、まるで一致していない。
「……そ、そ、う、だな……」
何の中身も無い会話を続けながら、空いている右手をきゅっと握りしめる。
興奮で、頭がどうかしてしまいそうだった。
「お兄ちゃんはぁ……この中だと他に好きな人はいるのぉ……？」
上っ面の会話は続く。
小町の声音は、俺におねだりしてくる時とはまた種類の違う、扇情的なものになっていて。
そしてその口調も、いつものはきはきとしたものではなく、妙に間延びしたものになっている。
１５年寄り添ってきたはずのこの少女が、まるで知らない女性にさえ見えて、昂揚が一向に収まらない。
「あ、ああ。ええっと……」
小町の言葉を受けて、視線をテレビに移す。
本当に、会話だけが全く別世界の話であるかのように、いつも通り進められていく。
小町は、亀頭を手の平でゆっくりとこすり、カリを５本の指の第一関節から先で包み込んでくにくにと触ってくる。
「お……あ……」
たまらなく焦れったい感覚に、身体がぶるりと震える。
視線はテレビ画面の上を彷徨ってはいるが、すぐ隣の小町から注が

れる視線の温度が、明らかに上がっているのが分かる。
「ねえ、どの人―？　お兄ちゃん、どういう人が好きなのぉ……？」
「う……っ!?」
耳元で熱い息混じりで囁かれ、思わずたじろぐ。
小町は俺に寄りかかり、首をくにゃりと傾げて、とろんとした目つきで甘えてきていた。
「んふふ…どうしたの？　お兄ちゃん。そんなにテンパっちゃって……」
小町の表情に、悪戯っぽさが混じる。
こ、こいつ……。
しかし、俺が迷っている間も（正確には、迷っているというよりは出演者の顔を見ても頭の中できちんと認識出来ずに手こずっている）、小町は俺の亀頭を弄り回し、更に左手も伸ばしてきて、玉にさらさらとした指を這わせてきた。
「う……くうっ……。……あ」
不意に。
タレントの一人に目が留まる。
その人は、巨乳むっちりタイプの癒し系で、もう結婚している人だった。
そう言えば、この人は割と好きかも……。
とは思うも、流石に今この状況で女性の好みを小町に伝えるのは危険すぎる。
誰か他に、出来れば男性で探さないと……と、思った矢先。
「へえ……お兄ちゃん、ああいう感じの人が好きなんだ……へえ……」
「え……」
小町の冷たい声音に、背筋が凍る。
なんでバレて……と思ったのだけど、簡単な話だった。
複数人が映っている場面で俺が声を漏らしていればいくらでも誤魔化せたんだろうけれど、俺が声を上げたのは件の女性タレント一人にカメラが向けられ、過去のエピソードを話し始めた場面だったからだ。ぬかった……。

「へえ、そうなんだ……へえ……ふーん」
口では大して興味無さそうに言いながら、表情は明らかに拗ねていて。
「あ……くう……お、おい……っ!?」
拗ねた表情を浮かべておきながら、不意に肉棒にだらりと唾液を垂らし、玉をぐにぐにと揉みながら肉棒をしごき上げてくる。
……言葉と表情と行動の完全なる不一致って、すげえなお前!
ぐちゅ、にちゅにちゅ、ぬちゅ、ぐちゅぐちゅぐちゅ……。
「うああ……っ!」
突然襲ってきた、もっとも射精に導かれやすい強烈な刺激に、思わず身体を捩らせる。
「へえ、そうなんだあ……へえ……」
小町は俺の服をずり上げると、乳首を舌を這わせる。それと同時に、しごき上げる速度も上がってきた。
ぐじゅ、ぐじゅぐじゅ、じゅぐ、ぐじゅじゅじゅじゅ……。
「あっ……あがっ……!」
更に強められた快感が、頭の中を食い荒らす。
「んちゅっ、ちゅぴっ、ちゅるるる……はう……お兄ちゃん、ああいう感じ好きなのか……ふうん……別にいいんだけど……ちゅぴ、ちゅぴ、小町はそんなの気にしないし……」
「〜〜〜〜〜〜〜っ!」
小町はテレビの中の女性タレントに視線を向けながらも、舌の動きは更にねちっこく、手の動きはより一層射精に導こうと激しくする。
……いやいやいやいや。
嫉妬自体は可愛いけど、超可愛いけど。
その可愛い感情によって巻き起こされる展開が! 全然可愛くないんですけど!
「うぐう……」
身体の震えが止まらない。
このままでは、まずい。あっと言う間にぶちまけてしまう。
何とかしなければと、小町の腕の、肘と手首の間の部分をがしっと

掴む。
「ふあ……？」
小町が惚けた声を上げる。白い肌に食い込ませた指に、小町の火照った体温がじんわりと伝った。
「こ、小町。気にしてないのは分かったから、な……っ!?」
『な？』と言おうとしたら、語尾がずり上がってしまった。
「うん、そうだよ？　小町、ぜーんぜん気にしてないし……」
にちゅ、くちゅくちゅ、ちゅくく、くちゅくちゅくちゅ……。
俺に腕を掴まれながら、小町は手首から先を器用に動かしてしごき続ける。
先程までとまた違う角度でこすり上げられることになり、事態が全く良くならないどころか悪化している気配さえある。
「や、やばいって……！」
必死で訴えかけ、今度は手首を掴む。
「……何がやばいの？」
小町は俺に手首を掴まれても動揺せず、にやりと笑う。
そして。
「う……うあああ……っ!?」
手首を掴まれたまま、今度は指５本をフルに使って、ウェーブさせながら裏筋とカリをにゅるにゅると撫で回す。
既に小町の唾液と、先走りの汁とでぐちょぐちょになっているため、この行為による刺激は尋常ではない。
――更に。
「えへへぇ……何がやばいのかな？　お兄ちゃんは……」
「うぐあっ!?」
今度は。
左手も肉棒に伸ばしてきたため、慌てて手首を掴んだが……遅かった。
左手は亀頭の上で止まり、手首から先を使って尿道口をくすぐり、手の平で亀頭を丹念に撫で回す。
「あっ……かっ……」

あまりに強い刺激に、世界が明滅する。
「お兄ちゃん……出るの？　出ちゃうの？」
もはや嫉妬していたことさえ忘れて、小町が俺の耳元に口を寄せて甘ったるい声で囁き、
「んっ……ぐちゅっ、ちゅぴっ、ちゅっ、ちゅっ、にちゅっ、ちゅっ……ちゅ……」
耳に舌を這わせ、いやらしい音を立てる。
「う……あ……」
頭の中に火花が散っているのを感じながら、視線を下にやる。
青筋立った肉棒が唾液と先走りの汁でてらてらと光り、亀頭は爆発の予感を孕んで赤々と膨れ上がっている。
もはや抵抗する気力も失せ、小町の両手首を掴んでいた手を離し、へなへなと仰向けに寝転がる。
行為の途中、無意識に暑いと感じていたのか、身体を倒す前から既にこたつから離れていて、仰向けになったときはほとんど足首から先しかこたつに入っていなかった。
「ありゃ、お兄ちゃん、降参？　そっかー……じゃ、いっぱい気持ち良くしたげる」
小町が目を細めてにひっと笑うと、可愛らしい八重歯が覗く。
いつもなら可愛い可愛いとばかり思うこの仕草も、今はただただ扇情的で……。
その表情を見ただけで、肉棒がびんと反り返った。
小町が俺の上に寝そべるように乗っかると、再び乳首を舐めながら、両手で肉棒を蹂躙しにかかる。
「ちゅぴっ、ぴちゃっ、んんっ、お兄ちゃん……ちゅるる、ちゅるるる……はぷっ、お兄ちゃん、お兄ちゃん、気持ち良い？　ね、気持ち良い？　お兄ちゃんのおちんちん、もうかちかちだよ……すごいびくびくしてるよ……？　ね、気持ち良い？　気持ち良い？　……気持ち……良い……？」
「〜〜〜〜〜〜〜っ！」
妹の信じられない程淫らな言葉と表情に、脳の中がかき回される。

小町は乳首を舐め、両手とも指を激しくウェーブさせながら、左手で玉を撫で回し、右手で竿と亀頭をしごき上げている。
ぐっちゅ、ぐっちゅ、ぐちゅちゅ、ぐじゅっ、ぐちゅぐちゅぐちゅ……。
カーペットに指を食い込ませ、ただただ、もうじき訪れるであろう限界の時を待つ。
「――あ」
慣れた感覚が、全身をぶるぶると震わせる。
反射的に、小町の尻をがしりと掴む。
「きゃんっ!?」
可愛らしい悲鳴が聞こえたが、今はそれを謝る余裕も無い。
「こ、小町。出る、出る、出る。もうダメだ。出る……！」
震える声で訴えかけると、小町がにっこりと笑った。
「……そっか。……じゃ、いっぱい出して……ね……？」
言ったと思うと、小町が立ち上がり、俺の股座に座り込んだ。
そして、わくわくした顔で、恐ろしい言葉を漏らす。
「……どれくらい高くまで飛ぶのかなあ……？　……よおっし」
小町が舌をぺろりと出すのを見て、ぞくりと悪寒が襲う。
「こ、小町、待て、お前それどういう……」
聞く意味も無かったのかもしれない。
小町は肉棒にこれでもかとふんだんに唾液を垂らし、己の体液で爆発寸前の肉棒をたっぷりと濡らすと、にやりと笑う。
「……え？　なに、お兄ちゃん、わかってて聞いてるでしょ？　やだなあもう……えいっ」
「うあああああっ!?」
左手で玉を揉みながら、右手で全力でしごき上げ始める。
「ほら、お兄ちゃん、イキそうなんでしょ？　出して？　出して？　ね？　いーっぱい気持ち良くなって、いーっぱい出して良いよ？　ほら、ほら、ね？」
「うぐうう……うあああ……っ！」
先程までとはまた違う、好奇心に満ち満ちた目を爛々と輝かせなが

ら、肉棒全体を長いストロークで力強くしごき上げ、時折亀頭とカリを中心に細かく速いストロークでしごき上げる動作を織り交ぜてくる。

――もう、限界だった。

「小町、ダメだ、も、出る、出る、本当に、出る、出る――っ！」

「お兄ちゃん、出るの？　出るんだね？　いいよ、いっぱい出して？　ね、ね、ね？　いっぱい出して――！」

小町の射精を促しながら、しごき上げる速度を更に上げた、その時。

「――うあああああああああああ……っ！」

どびゅっ、ごびゅっ、ごびゅるっ、どぶどぶどぶっ、ごぶりゅっ、びゅるっ、びゅるるっ……。

小町に肉棒の角度を固定されることで、夥しい量の精液が真上に飛び、僅かに逸れた分が俺の腹や小町の顔・胸元に撒き散らされる。

「ふあ、すごい、すごい、すごい、こんな高くまで飛んで、ふあ、顔にも……あはっ、お兄ちゃん、すごい……すごいよ……！」

「ちょ、待て、小町、今敏感だから……うぐうううう……っ！」

小町が目を輝かせて、肉棒をしごき続ける。

そのせいで、もう3～4回余計に射精の波が来て、しごいた角度が傾いていた為に更にあちらこちらに撒き散らかされた。

「すご……お兄ちゃんの……濃いよ……」

小町の胸の突起にべっとりとかかった精液を指で掬い、うっとりとした顔でそれをちろりと舐める小町を見て。

「……っ」

力無く寝転がりながらも、息を呑んだ。

×　×　×

「なあ、小町」

「んー？」

ぽへっとした呼びかけに対する、ぽへっとした返事。

俺も小町も、幾分気が抜けていた。

俺が射精の余韻でぐったりしている間に、小町がティッシュやらウェットティッシュやらその他諸々で綺麗にしてくれた。うん、うち

の妹、超出来る子。
そして今は、俺の股座に小町を座らせて、後ろから小町のお腹を抱きしめてころころとしていた。やだ、超なごむ……。
小町は振り向いて俺の顔を覗き込むと、
「……んっ」
俺が言葉を続けるより先に、軽くキスをした。
……え、なに、この子。可愛すぎて死にそう。
これから言おうとしていた事を危うく忘れそうになったが、何とか踏みとどまる。
「小町、お前さっき『いじりっこ、しよ？』って言ったよな？」
「お兄ちゃん、小町の声と喋り方の真似しないで……似てないしキモいから」
「……」
ちょっと泣きそう。
心が折れそうになりながらも、小町を抱きしめる腕にきゅっと力を込めて、小町の耳元に顔を寄せる。
「……こほん。……そう、言ったよな？　でも俺はさっき一方的に弄られただけだったよな」
俺の言葉に、小町がぴくんと反応する。
「あー……ま、そう、かも、うん……」
この後の展開を予期したのか、急に歯切れが悪くなる。
抱き締める腕に更に力を込めて、口も小町の耳に半ばくっつける。
「……だから今度は、俺がするぞ？　しかもあんだけ激しくやられたんだからな。……何倍にして返してやろうか……」
「ひう……っ」
声を一段低くして語りかけると、小町がか細い悲鳴を上げた。
そしてそろりと俺を振り返ると、力無くにひっと笑う。
「あ、あのぉ……お、お手柔らかに、お願い、します……」
……なんで敬語なんだ……。
うーんと、少し考えると、やがてにやりと笑って、それに答える。
「すまんな小町、無理だ」

「はうう……！　で、ですよねぇ……」
小町が俺の腕の中でぷるぷると震える。超可愛い。
俺自身のセリフに、心の中で「お前はどこの蛾王だ」とツッコミを入れつつも。
「……」
――腕の中で震えるこの少女をどうしてやろうかと考えて、ひどく心がざわついた。
続く。

（6）

――ここからは、俺の番。

目の前で震えている小町のお腹を優しく抱いて、そのうなじにそっと舌を付ける。

舌先でつつき、そのまま下から上へなぞると、

「はにゃあっ!?　あうううう……っ」

小町はびくんと跳ね、何とも可愛い声を上げた。

再び始まった熱っぽい行為に、小町の首筋からうっすらと汗が滲む。

くちゅっ、ちゅぴっ、ぴちゃ……。

うなじに丹念に唾液を塗り付け、わざと大きな水音を立てると、小町の身体がぶるぶると戦慄いた。

「あおおおっ……お兄ちゃ、お兄ちゃん、くひいっ……」

声に色が混じり、少女のそれとはかけ離れていく。

二人が作る空気がぐにゃりと歪み、ほんの数分前とはまるで別物の空気になっていた。

ちゅぴっ、ちゅろっ、ちゅりゅっ、くちゅくちゅ……。

お腹を抱きしめる腕に力を込めて、尚も入念に舐め続けると、

「あううっ、やんっ、お兄ちゃん？　そんなにいっぱい舐めなくても、ひぐっ、やっ、首だけでおかひくなるっ、ひっく、あああっ、お兄ちゃん、やらあっ、小町、おかひくなるからあ……っ」

「……っ」

涙声で愛おしい声を上げて、わざわざ俺を煽ってくれる。

――そんなことを言ったら、尚の事したくなるというのに。

一通り堪能して舌を離すと、小町が首をこてんと傾けてこちらに預けて来た。

「はへえっ、はうっ、ひっ、ひっ、ひっ……え？」

小町のきょとんとした声が聞こえる。

俺は、小町に見えるようにわざとらしく両手を広げて見せていた。

そしてそれを不思議そうに見る小町の様子を確認して、その手を

ゆっくりと小町の胸に近付ける。
「あ、う……っ」
事態を察したようだけれど、だからと言ってやめたりはしない。単に、心の準備をさせただけだ。
さあ、揉みくちゃにしてやろう。
× × ×
「にゃあああああ……っ」
服の上から双丘をふにっと触ると――案の定、下着の感触が無かった。そこまで厚手でない生地の感触の下に、うっすらと膨らんだ突起の感触がある。
「上も……着けてないんだな」
耳に軽く口付けしながら囁くと、小町が振り向いた。その顔は劣情に満ち満ちていて、吐息にさえ媚薬が混じっているかのようだった。
「えへへ……そうだよ？　……どう、かな」
ぽしょりと呟いた小町の顔が、あまりにも可愛くて。
「ああ……最高だ」
答えながら、服の上から2つのくりっとした突起をきゅむと摘まむ。そしてそのまま、胸全体を激しく揉み始めた。
「にゃあああああ!?　あひっ、や、いきなりそんな、きひいいんっ！　え、首も……あおおお、やっ、やらっ、そんな、ひいんっ……！」
既に興奮状態にあったため、多少痛いくらいに力を込めた方が、この小さな肢体はよく跳ねる。胸を弄りながら、身体を更に密着させようと首筋に吸い付くと、胸に加えられている快感と相俟って、とびきり激しい嬌声がリビングに響いた。
もっとこの身体を貪りたい。そう思って、上着をぺろりと捲り上げて。
「う……わ……」
まるで空腹の真っただ中で目の前にご馳走を用意されたかのような、極上の期待感が身体を包んだ。
小町の乳房は、外気に晒されてちょうど良いのだろうと思うくらいに熱っぽく、じっとりと汗ばんでいて。その突起は、まるで無理矢理

引っ張られたのかと思うくらいにぴんと張り詰めていた。
――無理矢理、引っ張られたのかと思うくらいに。
……じゃあ、もっと引っ張ったら――？
そう思った瞬間に、ごくりと喉が鳴っていた。
震える手で小町の突起を直接摘まみ、前方に引っ張る。
「ひぐううっ!?」
小町が背筋を弓なりに反り返らせて、天井を仰ぎ見た。
まだ、止めない。もっと、もっと、もっと。
突起を引っ張るだけ引っ張ると、そのまま突起をごしゅごしゅとしごき始める。
「あああ、なっ、それっ、やっ、おかひっ、おかひくなる、やらっ、あおおお、あああああ……っ」
小町の顔は天井を仰いだまま動かない。その顔を覗き込むと、目からは涙が伝い筋が出来て、口から零れだ唾液が頬を伝ってまた別の筋を形作っていた。
「ふえ……？」
頬に伝う唾液をぺろりと舐めると、小町が虚ろな目をこちらに向ける。
――もう、限界は近いようだ。
右手を離し、スカートの中に手を入れる。
「ひきゃっ!?　お、お兄ちゃん、そこ、今触られたら……！」
太腿からゆっくりと中心部に手を這わせる動きに、小町が震える。
僅かな叢に手が触れて、胸を躍らせながらそれをかき分けていくと、熱い液体でぐちょぐちょに濡れそぼっている、赤ん坊の耳たぶのようにふっくらとした一対の花弁に行き着いた。
「だめ……えぐっ、お兄ちゃん、ひっく、許して、そこ今触られたら……」
嗚咽を漏らしながらイヤイヤと首を振る小町があまりに可愛くて。
左手で、くしゃりと頭を撫でながら優しく呟く。
「大丈夫だぞ、小町。お前はなーんにも悪いことはしてないから。……だから、安心して気持ち良くなっていいから」

「……っ！」
小町の目が見開いた、その瞬間。
中指と薬指を亀裂に宛がうと、まるで吸い込まれるようにあっさりと、ちゅるんという感触と共に2本の指が肉襞に呑み込まれた。指が、熱いゼリーに包まれて絞られるような感覚を覚える。
「～～～～～～～～っ」
小町が声にならない声を上げて、俺の太腿を掴みながらがくがくと震えた。それと同時に膣内に溢れ出した液体が外にまで零れて、手首を心地良く濡らす。
まだまだ、ここからだ。
「あっ、あえっ、お、お兄ちゃ……!?　お兄ちゃん!?　何してるの!?　小町イッてるよ!?　イッてるからあ！　やっ……んむ……っ」
一気に追い立てようと、小町の唇を唇で塞ぎ、左手は再び胸の突起を摘まんで捻じり上げ、右手は小町の肉襞をかき回す。狂おしい程に勃起した突起は摘まみやすく、肉襞は自分を犯す俺の指を歓迎するかのように絶えず潤滑油を生成していた。
「んちゅっ、ちゅるるっ、んぶえっ、じゅるるっ、あっ、お兄ちゃっ、息、出来ないよお……っ、んぶっ、んむううう……じゅるるる……んんん……っ、じゅるるるるる……」
脳を焼く快感に晒されながらも、小町は俺がその小さな口に流し込む唾液をきちんと飲み込む。
さっきまでは小町の唾液が伝っていたその頬に、小町の涙と2人の唾液がブレンドされた液が波打った筋を描く。
肉襞は指を食べてしまおうとしているが如くきゅむきゅむと締め付けてくる。内壁のつぶつぶとした感触を指の腹で楽しみながら関節を折り曲げると、その度に小町の身体が跳ねて、時折反射的に唇を離して、息を大きく吸った上で甲高い声で鳴いた。
「あっ、あうっ、かはっ、はひっ、あああっ、あああああ……っ」
どれくらいの時間、小町の身体を嬲っていたのかはもはや分からない。
気紛れに小町の唇や首筋に吸い付いて、乳房を弄んで、秘部を指で

幾度となく犯した。
小町が断続的に痙攣する度に、時に追い立てるように、時に焦らすように、ひたすら弄り続ける。
「お、兄ちゃん……お兄ちゃん……も、小町、何回、イッたか、わかんらいよお……」
疲弊しきった小町の声に、はっと気付く。
「おお、そうだな。そろそろ休憩するか」
俺の声に、小町は少しばかり身体の力を弛緩させた。
「う、うん、もう、無理……休ませて？」
「……その前に、お前のここを綺麗にしないとな」
言って、小町の肉襞を再び指でかき回す。
「うあああああっ!?　お、お兄ちゃ、も、や、指でくちゅくちゅってしらいれえ……っ！　やあ……もう、くちゅくちゅ、くちゅくちゅやらあっ……」
「……っ」
うわうわうわうわ。
ここに来て更に一段階可愛くなった小町の艶姿に、身体が歓喜でぶるりと震えた。
……今後、開発のし甲斐があるなあ……夢が広がるなあ……ふふふふふ。
……俺すげえキモいな。
自己嫌悪に陥りながらも、小町への言葉を続ける。
「ああ、悪い悪い。……で、だ。休憩する前に綺麗にした方が良いよな？」
「え？　あ、まあ、……うん？」
惚けた表情で、ぽわんと返事をする。
ここで膣に挿れていた指を引き抜くと、「にゃうっ！」と小さな声で鳴いた。ちょっとこの子可愛すぎて死んでまう。
「だから……ちょっと立ち上がって、こたつに手を付いて、尻をこっちに向けてくれ」
「……え」

惚けていた小町の表情が、冷水を浴びせかけられたかのようにはっと覚める。
「良いから良いから、ほら」
「ふにゃあっ!?」
勢いで押し切るべく脇を持ち上げると、可愛らしい声が聞こえた。
小町は子鹿のごとく膝をがくつかせながら立ち上がると、渋々俺の指示した体勢を取る。
瑞々しいお尻が、目の前の視界一杯にぷりんと広がった。
「うう、なんでこんな恥ずかしい格好を……ってお兄ちゃん!?
にゃー! 何してんの!」
小町の抗議の声が聞こえるけど、そんな愛らしい抗議受け付けません。
ミニスカートを綺麗に捲って足の付け根を持ってこちらにくいと引き寄せると、むわっと甘酸っぱい匂いが広がり、薄い茂みの奥で桃色の肉唇が蜜にまみれてぬらぬらと照り光っていた。
「え、お兄ちゃん、小町、もう、がくがくなんだよ……?」
小町が振り向いたようだが、今の俺の視線は目の前の淫猥な性器に集中しているため、確認することは出来ない。
「ああ、そうだな。でも、それ以上にきちんと綺麗にした方が良いと思うんだ」
変態丸出しの内容をさも正論であるかのように言って、白くすべすべしたお尻をさわさわと撫でる。
「にゃうう……あうう、お兄ちゃんが手の付けられない変態になっちゃったよお……」
俺の手の動きに反応してひくひくと下腹部を震わせながら、小町がよよよと泣く。ご、ごめんね、お兄ちゃん、元から素養があったと思うの……。目覚めただけなんだと思うの……。
「……まあ、小町はこたつに手を付いてるだけで良いから。足はちゃんと俺が押さえて逃げられないようにするし」
「なんか凄いこと言わなかった今!? ……ひゃんっ!」
ツッコミと同時にお尻が前後に触れ、一瞬だけ秘裂が鼻先に触れ

た。小町の声と同時に、先程よりも濃厚な匂いが鼻腔を突き抜けて、ぞくぞくと欲情を煽り立てる。
……ああ、もう、我慢出来ない。
「……じゃ、食べるぞ」
「ひ……う、うん……」
小町は観念したのか、恐る恐るお尻を突き出した。
ズボンの中で痛い程に張り詰めた肉棒をちらりと見やって、自分の興奮度合を確かめる。
小町の太腿を包むように押さえると、下半身がぴくんと揺れて、淫らな蜜が腿を伝って膝の裏まで伝った。
――もう、小町は逃げられない。
――そう、どれだけの快感が小町の身体を焦がしても、絶対に逃がさない。
続く。

（7）

立ち上がり、こたつに手を付けてこちらにお尻を突き出す体勢をとっている小町。

突き出されたお尻の中心でひくついている花弁を、座りながら凝視する俺。

「……」

――興奮で、頭がどうにかなりそうだった。

太腿に手を添える事で尻を固定すると、むわっと女くさい甘酸っぱさが鼻腔を貫き、下腹部に電流が走った。

「じゃあ……」

言葉少なに呟き、昂揚で震える唇の間から舌をそろりと出して、卑猥に覗いている充血した媚肉に口を付ける。

つぷっ……と舌を秘裂に挿し込んだ。

ほんのりとしょっぱさを感じて、舌を通じて更に卑猥な匂いが頭に染み渡った瞬間。

「くひぃぃぃ……っ」

顔の見えない小町が、膝をがくがくと震わせて呻いた。

明らかに反応が大きい事に対して、ああ、感度がどんどん良くなっているんだな――と冷静に考える。昨日今日と及んだ行為が、互いの欲求を獣欲の如く本能的に昂ぶらせているのかもしれない。

――まだ舌を入れただけなのに、この先どうなってしまうんだ……？

そう思いながらも、たとえ小町が全身を弛緩させて崩れ落ちようとこの口を離すことが無いように、太腿を押さえる手に力を込める。

そして舌を更に奥深くまで、膣内を味わうように挿れると。

「にゃあああああ……っ」

小町が鳴いた。

もっとこの声を耳朶の奥まで焼き付けたい。そう思って、舌で肉襞をかき回し、肉芽を舐め回す。舌の動きに伴って、小町は身体を捩らせ、何度も尻をひくつかせる。

「あぐううう……お、お兄ちゃん、なにこれ、前より、気持ち良いよお……気持ち良いよお……お兄ちゃんの舌、小町の中かき回して、やっ、もうこれ、訳分かんな……あううう……あううう……」

声に混じる卑猥さがどんどん増していき、気分の昂揚が止まらない。肉襞を蹂躙する舌を歓迎するかのように絶えず溢れ出す淫液は、本当に人が生成した液体なのかと疑問に思うくらいに熱く、その温度が小町の興奮に呼応しているように思えて、凄まじい昂揚が全身を駆け巡る。

「ぐじゅ、じゅぷぷ、ぴちゃ、ちゅろっ、ちゅりゅりゅ、ちゅぽ、じゅぱ、ぐちゅ……じゅるるる……」

「あがあああ、そんな、舐めないで、吸わないで、そこ敏感だからぁ……っ」

肉芽を吸うと、また良い反応を返ってくる。それなら——と思い、くにっと軽く甘噛みすると。

「ひぐうううっ!? お、お兄、やっ、そこ——」

「ちゅぴちゅぴ、ちゅりゅっ、ぴとぴと、くりゅ、じゅるるるるるる……」

「——あが、うぐ、あおおおお……」

抵抗したかったのだろうが、甘噛みの直後に更に肉芽を舌先でつつき、転がし、強烈な勢いで吸い取ると、小町の懇願の声はすぐにやんで獣のごとき嬌声だけが長く響いた。

「あえっ、かはっ、ううう……ううう……」

唇を離して様子を窺うと、小町はこたつに顔を突っ伏して、静かに鳴いていた。

ああ、少々やりすぎてしまったかな。でも——

「——まだ、イってないよな?」

小町の震えがぴたりとやんだ。

そしてそろりと振り返る。

「お、お兄ちゃん、もう小町、無理だよ——んあああああああ!?」

小町の泣き顔だけ確認して言葉は最後まで聞かずに、とどめを刺す為に秘裂に舌を挿し込むと、小町の身体が感電したかのようにぴんと

張り詰めた。
「ぐちゅ、ちゅぶ、ちゅるるる、じゅぷ、じゅるるるる……」
顔が満遍なく小町の下腹部に当たるくらいに、強く密着して激しく膣口を吸い上げ、愛撫に伴って溢れ出す熱いゼリーを余す事無く吸い上げて行く。
「あが、あああ、ああああ……」
小町の身体からはすっかり力が抜けて、腕は無造作に投げ出され、おでこがこたつ台にこすり付けられている。
「ほら、そんなんじゃ痛いだろ？」
「えあ、あ、ああ……っ」
小町の両手首を掴んでこちらにぐんと引き寄せると、小町の顔と上半身がまるで操り人形のように為されるがままに起き上がる。
太腿を掴めなくなった為にバランスとしては少々心許ないが、しっかり腕を引っ張っておけば問題は無い。
そのまま再び舌で嬲り始めると、小町の首が着地点を求めてかくかくと揺れた。
「ああ、あが、お兄ちゃ、ひっく、もう、だめ、小町、イク、イッちゃうよお……もうイッちゃうよお……えぐ、ひっく、うううう……もう、イカセてよお……もう、訳わかんないのぉ……っ」
嗚咽交じりの声で懇願されて、心臓が興奮の太い槍で貫かれる。
「……ああ」
短く返事をして。
「――ぐちゅっ、じゅぽっ、じゅるるるる、じゅぴっ、ちゅぱっ、じゅぷじゅぷ、ぐじゅぷっ、じゅりゅりゅりゅ……」
小町の秘裂を存分に堪能する。
「あ、あが、えぐ、も、もう、もうだめ、イク、イク、イク……っ」
小町の身体が、大きく震えた次の瞬間。
「あがっ、ひっ、ふぁあああああ！」
「んぶぉっ!?」
全身を激しく痙攣させて、到底飲みきれない程の淫液を、まるで鉄砲水の如き勢いで噴き出した。

「あがっ、あ、あえっ、かはっ、あおおお……あおおおおお……っ」
震える小町の腕を、引っ張ったままゆっくりと下げると、それに合わせて小町の腰もがくんと落ちる。腰を支えながらゆっくり下ろすと、断続的に痙攣したまま、虚ろな目で俺を見つめた。
……超今更なんだけど。
……全然、掃除になってなかった。
× × ×
「ねえ鬼いちゃん」
「うぐ……な、なんだ？」
「……小町の言い方にダメージを受けてるような、んあっ、素振りを見せて、る、けどさ。ひぐっ……小町の身体を弄るの、んあっ、全然やめる気ないでしょ？　……んっ、んんっ、ほ、ほら……っ」
さっきと同じ、俺の股座に小町が座るスタイルでくつろいでいるのだけれど。
俺の欲求はまるで留まる事を知らず、けれどあまり激しくしすぎるのもなーと思い、小町の胸と下腹部をずっと緩慢な動きで愛撫し続けていた。
小町も口ではこんな事を言いながらも、その表情はとろんとしていて、互いの頬をくっつけてころころと甘えている。なんだ、身体は正直だな、お前――
「もぐぞ」
「あれ!?」
なんかどっかで聞いたことがある!?　あとなんで地の文を読まれたの!?
「そ、そう言えば、お前は結局、今日はどうしたかったんだ？」
「え？」
無理矢理話題転換を図ると、小町が少し面食らった表情をした。
「いや、今日この時間、この場所を指定したのはお前だろ？　何かしたいことがあったのかなって」
言うと、小町が照れた様に顔を赤らめ、頬をぽりぽりと掻いた。
ちょっと可愛すぎるので、言葉を待ちながらもくしゃくしゃと撫で

る。
「あ、や～、その……こたつでこう、何て言うか……いちゃいちゃ出来たらいいな～、なんて、ね？」
「……っ」
にへっとはにかむその笑顔があまりにも可愛くて。
さっきは小町の体力が尽きたためにすぐには実行に移せなかった事を遂行することにした。
「……そうか。じゃあ、休憩しなきゃな」
「え？　今のこれは……あう」
休憩じゃないのと聞こうとしたようだが、自分の身体をまさぐられ続けている状況を思い出したからだろう、頬を赤らめ俯いた。やだ、１０時間くらい撫でたい……。
「いや、もっとしっかりと支えのある場所で座った方が、お前も休めると思うんだ」
「？　何言って……って、……え」
小町の顔が引き攣る。
俺は、小町の背中に、ズボン越しながらも怒張したモノを押し付けていた。
「……ほら、これできちんと身体を固定して、な？」
俺何言ってんだろうという心の中でのセルフツッコミは、この際ガン無視しよう。
さあ、ここから力押しで行くぞ……と気合を入れる。
――と。
小町はふうと息を吐いて、身体の向きをくりんと変えて正面に向き直ると、俺の顔をまじまじと見た。
小町の澄んだ瞳を見据えると、うっすらと俺が反射して見える。
しばし見つめ合うと、小町がふっと呆れたように笑う。愛情の籠ったその笑みに、ふわふわと心地良い安心感を覚えた。
「鬼いちゃん……ばかでしょ？」
「そうだな、ばかはばかでも大馬鹿だよ」
「ボケナス」

「ああそうだな」
「八幡」
「おいだからそれ」
悪口じゃねぇだろ――とツッコみかけた、その時。
「大好き」
「いやそれも悪口じゃ……へ？」
心臓が止まるかと思った。
とんでもない反撃に口をぱくぱくさせている俺を気にせずに、小町がんーと伸びをする。
平然としているが、その顔はどことなく赤い。
「あーああ、こんなど変態の鬼畜プレイ好きのお兄ちゃんでも、惚れちゃったもんはしょうがないよなー。うん、わかった、お兄ちゃんの上で休憩したげる。どっち向くと良い？」
軽快にとんでもない事を喋って、にゃはっと笑う小町を見て、俺は戸惑いを隠せないまま言葉を何とか紡ぐ。
「え、や、お前どうして急にあんな恥ずかしいこと……」
顔が尋常でない程熱くなるのを感じながらしどろもどろに言うと、小町が自分の口に手を当ててにひっと笑った。
「このままだとお兄ちゃんに一方的にやられちゃうなーと思って。だから、それならちょっと反撃して、ノリノリでやった方が良いかなと思ったのでした！」
「……っ」
……な。
……なんて妹だ。や、俺も大概だけど。
ぽりぽりと頬を掻いて、俺もふっと笑う。
「……そうか。じゃ、向かい合ってしよう」
言って、肉棒をずるりと外気に晒す。
「……わあお、さっきあんなに出したのに……」
小町がこきゅっと喉を鳴らしたのが聞こえた。
その瞳には既に色が宿っていて、うっとりとした表情を見るだけで屹立した肉棒が更に欲情してそそり立つ。

……なんでお前の瞳は、こうもころころと表情を変える事が出来るんだ？

そう思いながら、小町の髪をくしゃりと撫でると、「はにゃ……」と気持ち良さそうに目を細めた。くっそ、油断した、死ぬとこだった。くっそ！　可愛いなあもう！

そんなこんなで、さっきまでの妖しさ全開の空気はちょっと薄れましたが。

次回、本番です。

……これ、誰に言ってるのん？

続く。

（８）

こたつから少し離れて座り、あぐらをかいた俺の首に、小町の細い腕がしゅるりと絡む。

その目は爛々と光っていて、どこか猫のような、獣性を思わせるものがある。

「すっご……さっきよりも大きいんじゃない？　こんなの入ったら……んはあっ、んくっ……」

濡れそぼった二枚の花弁を、亀頭にくにゅくにゅと押し当てて楽しむ小町。

小町の髪から香るシャンプーの匂いと、互いの汗の匂いと、股間から漂う甘酸っぱい匂いと……俺の、精液の匂い。様々な匂いが混じり合って、ずっと浸かっていたいような、それでいてこれ以上浸かっていては危険な気がするような、中毒性のある空間が形成されていた。

小町はこの寸止めの状態を楽しんでいるようで、わくわくしながら腰を動かし続けている。

「入るかな～、入るかな～、さあ、どうなるのかな～？」

「……」

……何の子供番組だ。言葉はそれっぽいけど、絵面がぶっちぎりでR―１８だわいな。

――と、ここで、ふと妙案を思い付く。

小町の肩をがしりと掴んで、にやっと笑った。

「小町」

「お兄ちゃん、にやけ顔が本格的にキモいよ、大丈夫？」

「……」

「あれ、ちっちゃくなった？　ごめんね？」

「……」

こんにゃろめ。泣くぞ。「大丈夫？」ってどういう心配だよ。「今後の生活において妹の小町以外がそのキモいにやけ顔を見た時の周りに及ぼすダメージは今のの比じゃないけど、その時周りの人とお兄ちゃん自身の心は大丈夫？」って意味かこら。なげえな。

気を取り直して……の前に、思い付いた事を伝える前に、こいつを復活させねばと思い、小町の可愛らしい胸の突起に吸い付いた。
ちゅっ、と口を付けた瞬間、小町の表情が一変する。
「にゃあっ!? あっ、や、なんで急……にいっ、ひんっ、あう、やっ、吸わないで、今ほんとだめ……いうう、いたいよお……だめだってばあ……なんで小町、いたくされて気持ちよく……うあああん……」
「……っ」
試しに――と思って吸ってみたら、思いの外強烈な反応が返って来た。
「……」
視線を下にスライドする。……よし、あっと言う間に全快。ありがとう妹よ、君のエロい反応のお陰ですぐ勃ちました。
これならば……と思い、小町の胸から唇を離し、涎を垂らして惚けている小町の顔を見つめる。……わー、また大きくなっちゃったよー。
「小町……徐々に腰を下ろして、ゆっくり挿入するんだ。あくまでお前のペースで」
頬をさすりながら言うと、俺の手にころころと甘えながらも徐々に言われた事が理解できてきたのか、小町が目を見開いた。
「ふわ……あふうう……にゃむにゃむ……え、ええ? なんでそんな……にゃうう……」
「……」
あかん。卑猥なことをしたいのに、可愛すぎてつい撫ですぎてしまう……!
結局、数分間すりすりしてしまった。うん、これから毎日愛でよう。
× × ×
こほん、と咳払いをして、気を取り直す。
撫でられて顔がてろーんと弛緩しきっていた小町も、再び亀頭が秘部に宛がわれると、スイッチが入ったのか目に色が宿った。
「えっと……お兄ちゃんは動かないってこと?」
「そうだな」

「最後までゆっくり挿入できたら、それでお終い？」
「そうだな」
「……途中で腰が抜けちゃって、くちゅんて全部入れちゃったら？」
なんで挿入の音がくしゃみみたいになってんだ。
「んー……罰ゲームかな」
「……どんな……？」
「ん、小町が泣きわめいて失禁するまで、めちゃくちゃに腰を打ち付ける」
ちょっどどきどきしながら言うと、小町の顔が青ざめた。
「わあ……そんなことされたらハマっちゃいそうだな……どうしよう……」
ちょっと待て、あんま興奮するようなこと言うなよ。ていうか、え、ハマるの？　マジで？
……まあ、今はその辺の追及はしないでおこう。
「ちなみに俺が我慢出来なくなって、お前の肩を掴んで一気に挿れたりしたら……俺も罰ゲームがある」
「そうなの？」
「ああ、今思い付いた」
「わあ……適当だー……」
小町が呆れた口調で目を細めた。何気にこの仕草も超可愛いくて好きだったりする。なんだ俺。
小町が首をくりんと傾げて、俺に問う。
「ちなみにどんな？」
「ああ、小町の中で４回出すまで抜いてはいけない。やー、大変な罰ゲームだなー」
「あれ？　小町、さっきのよりハードじゃない？　あれ？」
小町が首を傾げた。ぬん、バレたか……。
「まあ良いだろ。さ、やるぞ」
「や、小町このままだと、どうあってもお兄ちゃんにどろどろにされて――」
ぐぷっ。

小町が喋っている途中で、亀頭の一部でぷにっとした淫唇に割って入る。
――瞬間、小町の表情が変わった。
「おあ……かは……ふう、ふう、ふう……」
発情した雌猫――そんな言葉がよく似合う、卑猥な顔だ。
首に回された腕が、やけどするように熱い。
――思い付きで言ったけれど、これ、もしかしてすごい楽しくなるんじゃないか……？
そんな風に思いながら、小町の腰に手を添えた。
×　×　×
「お、お兄ちゃんの、先っぽ、熱い、熱いよお……っ」
熱の籠った吐息が首にかかる。
まだ肉棒は、亀頭の一部が入っただけの状態だ。ゆっくり挿れるとなると先は長い。
「ほら、ゆっくり食べてくれ」
小町の腰に手を添えたまま言うと、虚ろな目がこちらを向いた。
「わ、わかったぁ……っ」
にへっと笑ったその顔にどきりとして、血液が一気に下に集まった。
「んくうう……っ」
にゅぷぷ……。
「うお……っ!?」
ようやく亀頭全体を飲み込んだ所で――この流れを提案したことに、少しだけ後悔した。
小町の肉襞は焦らしに焦らされている分飢えていて、まだ自分の口に亀頭しか入っていないことがとても不満なのだろう。その亀頭をくむくむとうねりながら締め上げ、「もっと食べさせろ、もっと食べさせろ」と強烈に訴えてくる。
「あっ、うあ……っ」
上下動をしていないにも関わらず、雁首がめくられるように刺激される。

正直、この状態でも既に射精してしまいそうだ。
一気に挿入して小町がおかしくなるまで突き上げたい衝動に駆られ、必死で頭から振り払う。
先走りの汁がくぷくぷと溢れるのを感じながら、思わず腰を掴む手に力を入れてしまうと、
「にゃあんっ!?」
くすぐったかったのか、小町が可愛い悲鳴を上げた。
「お兄ちゃん、気持ち良いんだ……？　えへへぇ……小町も、気持ち良いよ」
「……っ」
やばい。
鼻血出そう。
小町は淫猥に微笑んで、挿入の度合いは変えないように前後左右に腰を動かす。
「うああ……っ」
腰の動きは緩慢なんだが、外側との動きとは独立した、肉襞の動きが洒落にならない。
精液を搾り取ろうと亀頭をきゅむきゅむと締め付ける為に更に汁が漏れて、情けない声が口から垂れ流される。
静かなリビングに聞こえるのは、無機質な時計の針の音と、互いの微かで荒い息遣いと、互いの粘膜がにちにちと貪り合う音。
「じゃ……もっと挿れるね……」
小町が俺の耳元で、耳朶を焼く熱気を持った息と声を吹きかけた。
夜は、長い。

続く。

（9）

「んくあああ……い、今、どれくらい……？」

足を更に開いてぶるぶると震える小町が、俺に抱き付きながら耳元で囁く。息と声は熱っぽく、それらをおくり込まれた頭の奥がじんと痺れるのがわかった。

ちらりと下を見る。

「ん、今はそうだな……全体の4割ってとこかな。良い感じだ、うりうり」

「ふわ……」

くしゃりと頭を撫でると、小町が安らいだように目を細める。

――油断しているであろうタイミングで、小町の頭に置いた手に力を込めると、ぐちゅっと音を立てて、小町の濡襞が肉棒を更に飲み込んだ。

「ふあああああ……っ!?」

小町の身体ががくがくと痙攣した。もう2割程だけ進んだだけなのだが、それでも相当の快感を得たのだろう、「ぬくうう……ひぐうう……」と、俺に抗議するでもなく可愛らしい嬌声を聞かせてくれる。

ちなみに今のは、小町の反応が見たかったからやってみただけだ。意地悪なんてレベルじゃないけれど、どうしてもやってみたくなったので、つい。

だから、

「ああ、小町、悪いな、手に力が入っちまった。戻すから」

「ふわ？　い、いいよそんな……ひあああ!?」

小ぶりで瑞々しい小町のお尻をがしっと掴むと、上に持ち上げた。

雁首が膣口に引っかかった所で、ぴたりと動きを止める。

「あえ……うっ、くうっ、お兄ちゃん、戻し過ぎぃ……」

小町が涙目で訴えかけてきて、ぞわりぞわりと嗜虐心がそそられる。

――さっき自分で言った言葉を思い出す。

――「俺が我慢出来なくなって、お前の肩を掴んで一気に挿れたり

したら」……罰ゲーム、と俺は言った。
――ああ、そうか、それならば……。
小町に見えない状態でにやりと笑って、小町のお尻を掴む手に力を込めた。
「ああ、本当に悪いな。じゃあこの辺か？」
言って、手の力を瞬間的に抜いて、全部挿れる少し手前……8割くらいまで一気に挿入する。
ずちゅんと音がすると、ひゅっ、と小町が息を吸う音がした。
「あ……あ……あ……」
小町は目を見開いて俺を見つめ、口をぱくぱくとさせている。
俺はその表情を見て、わざとらしく困ったように笑う。
「あれ、ここでもなかったか？　じゃあこの辺か……」
言って、小町のお尻を掴む手を互い違いに前後に動かして白桃のような柔肉を揉みしだきながら、ゆっくりと腰をずり上げる。雁首で膣口をかき乱すと、小町が目をしばたたかせた。
「あえっ、かはっ、お、お兄ちゃん、や、やめ――」
がちゅっ、と。
瞬間的に、小町の腰を肉棒が全て飲み込まれる一歩手前まで押し込み、すぐさま元の位置まで戻した。身体の反応が追い付いてこなかったのか、往復した際は肉襞元来の締め付けによるものだけだった刺激が、
「～～～～～～～～～っ！」
上まで戻った直後に事態を認識した小町の身体が、これでもかというくらいに亀頭から竿まで満遍なく万力の如く締め付けてきた。
「うぐっ……！」
予想を超える締め付けに、僅かではあるが射精してしまった。脈動を何とか1回で止めることが出来てほっと安心していたが、小町はそれに気付く余裕は無かったようだ。
「あ～っ、あ～っ、ああああああ……お、お兄ちゃん、も、無理、これ、無理、我慢出来ないよお……も、小町、だめ、あうううう……」
小町が涙を流しながら懇願すると、肉棒が心地良くこりゅこりゅと

締めつけられた。
　不意に、小町が見つめてきた。純粋な懇願の光を宿していて、庇護欲と嗜虐心を同時にそそる、困った目をしている。
「お兄ちゃん……お兄ちゃん、お兄ちゃん、お兄ちゃん……んむっ……」
「……っ」
　唇をはぷっと咥えられて、反撃する間も無く口内に舌を入れられて舐られる。
「んちゅっ、ちゅるっ、ちゅぴっ、んはあっ、にゃう……んちゅっ、ちゅる、くちゅるっ、ちゅぴゅ、ちゅぱ、ちゅぱ、ちゅぱ……」
「……～～～～～っ」
　内頬を舐められ、舌を吸われて舌先同士でつつき合って、唇を食べられ、唾液の交換をする。
　視界がぼやけていくと同時に、小町の腰がずるずると下がっていくのに目が行った。すんでの所で手に力を入れて、小町の膣の侵食を食い止める。
「……こらこら、あんまり夢中になると全部入っちゃうだろ？　ちゃんと上からゆっくり挿れないとダメだろ？」
　言うと、小町がやだやだと首を横に振る。
「も、もう、小町無理だよお……我慢出来ないよう……お兄ちゃん、小町、全部挿れたいよお……」
　子どものような声で、ひどく淫猥なお願いをする小町。
　下を見やると、7割程入った所で止まっていた。腰が動かずとも、俺の肉棒を全部飲み込もうとぐむぐむと吸い寄せてくるので、重力も相俟って手が震える。
　……そろそろ、か。
「……そうか、我慢出来ないか。じゃあ、小町が失禁しても失神しても俺が4回出すまではやめないけどいいんだな？」
「え、あれ、何か混じってない？」
「ん、そんなことないぞ？　これは小町が我慢出来なかった時の罰ゲームだ」

「んん……？」
やばい、調子に乗っちゃった。
小町はむむむと眉を寄せて俺の目をじっと見る。うーん、可愛い。
や、そうじゃなくて。
「お兄ちゃんが負けた時の罰ゲームは？」
「雪ノ下の罵倒記録を１週間分ノートに記録して、それを眺めながら『僕は幸せです！』と２０回叫ぶ。学校で」
「大迷惑だ……しかも誰も幸せになれない……。ていうかそんなんだったっけ？　あれ？　んん、お兄ちゃん、ウソついてない？」
やばい、適当なウソ（本当に適当）をついてたら、小町の疑念が深まってしまった。
このまま見つめられたら絶対アウトだ。
小町のお尻を掴んで、無理やり主導権を握る。
「にゃあっ!?」
手に力を入れると、小町が目をぱちぱちとしばたたいた。
「あ～ああ、小町が負けを認めたら、物凄く気持ち良いことが出来るのにな～、あ～ああ」
言いながら、決して全部は入らないよう調節しながら、小町の腰をゆっさゆっさと揺らす。
「おあっ、くひいんっ、んっく、はう、あうう、や、お兄ちゃん、それ、やめ……」
「あ～ああ、あ～ああ」
わざとらしく残念がりながら更に揺らすと、小町が仰け反って天井を仰ぐ。
まるで小町が負けを認めて、いつの間にか内容が増えた罰ゲームを受けることが唯一の選択肢であるかのように振る舞い、快楽を与え続ける事で利発な小町の思考を削り取る。
この目論見は成功して、小町の顔からは俺への疑念が溶けて流れ出ていくのが分かった。
そして、ついに。
「お、お兄ちゃん……わかったから……小町の負けで良いから、もう、

して、めちゃくちゃにして、お願い……」
「ん、俺の４回中出しと小町の失禁・失神が全部達成されるまでやめなくて良いんだな」
「なん……で、また微妙に変わってるかな……も、良いから、それで良いから、お願い……」
――よおし、これでもうここからは獣になるぜえ、散々焦らされたは俺も同じだからさぞや興奮して――などと思っていると。
「……ん……っ？」
突然小町に口付けをされて面食らった。唇が触れ合うだけの優しいキス。
「えへへ……」
余裕が無いながらも、小町は太陽みたいに明るく笑う。
そして、おでこ同士をこつんとぶつけて、にへっと笑ってさらりと。
「お兄ちゃん、大好き。いっぱいしよ？」
「～～～～～～～～～～～～～～～っ」
……やられた。
あれだけいやらしい事をされておいて、なんだこの可愛さは。ああもう、なんかもう俺の負けかな！　負けだよね！　はい負けた！
心の中でだけ負けを認め（正直今はもうどっちが負けとかあまり関係が無いので、言わないでおく）、小町の目を見つめてふっと笑う。
「……ああ、いっぱいしよう。……口閉じて。舌、噛むなよ」
「……っ」
言って、小町の脇を掴むと、小町はびくっと震えると同時にきゅっと口をつぐんだ。

×　×　×

亀頭が膣から抜け落ちる寸前まで、高い高いの要領で小町の身体を持ち上げる。
そして、軌道を確かめて、手の力をふっと抜くと――ごちゅん、と音を立てて、亀頭が小町の子宮口に突き当たった。
「にゃあああぁぁぁぁあああああ！」
散々焦らされた上で最奥まで貫かれた小町は、全身を痙攣させなが

ら悲鳴に似た嬌声を上げて、俺の腰に足を絡ませた。
「うぐっ……!?」
我慢の限界だったのは俺も同じで。
膣の恐ろしいまでの収縮に呑み込まれた上に、小町が足を絡ませたことで身体の密着度が上がり、それで更に快感を高められて、あっと言う間に――
「あ――――――」
どぶりゅっ、どぶっ、ごぶごぶっ、びゅるる、びゅる、びゅるるる……。
マグマの奔流が身体の内から外へ押し出ていくのを感じながら、反射的に腰をかくかくと前後に動かした。
「ひぐうっ!?　お兄ちゃん、熱っ、熱い、熱いよお……あ～、あ～、これ、すご、気持ち良い、どくどくって言ってる、お兄ちゃんの硬いのが脈打ってる……あ～、あ～……ふああ……」
俺の耳元で射精を受け止める実況をされた為に、興奮して更に射精の勢いが増してしまい、それで小町の膣の搾り取りが更に強められて、また射精を促されるというえげつない循環に。
栓をしていても、小町の膣に収まりきらない精液が微かに竿を伝って溢れ出る。
「ふーっ、ふーっ、ふーっ……お兄ちゃん、こんなのをあと3回もするんだ、あは、やばいね、鬼畜だあ……も、小町腰動かないから、後は仰向けとかうつ伏せとかにして良いから……」
とろんとした目で言うと、ちゅっちゅっと何度も口や頬に口付けしてくる。
……自分で言っといて難だけど、あと3回ってやばくね？　しかも失禁及び失神までミッションに入れてしまった。
まだ行為は続いていて、肉棒も硬さを失っていないどころか先程よりも元気になっているのだけども。それでも、一度出したことにより冷静さを取り戻すと……うわー、さっきの俺、うわーと猛烈に引いた。
しかし、ここで引き下がる訳にもいかない。
「ああ、分かった」

短く答えて強く抱きしめると、
「はにゃあああ……っ」
心地良さそうに、小町が鳴いた。
うーん、ちょっと可愛すぎますねー。
続く。

（１０）

腰の抜けた小町をお姫様抱っこで抱えてソファへ移動する。
ぽふっとソファに乗せると、はにゃあと唸ってへにゃへにゃとへたりこんだ。超可愛い。
どれ、休憩がてら膝枕でもしてやるか――などと呑気なことを考えていたのだけど、小町はそうは考えなかったようで。
「お兄ちゃん……」
ぞくっとする程の色気を含んだ声で囁いたかと思うと、小町はこちらに背を向けてソファの背もたれに手を付き、微かに震えながら尻を突き出した。ぷりっとしたお尻はしっかりと上を向いていて、これならば立ったまま突き入れる事が出来る。
ここからの凄絶な行為を思うと、それだけで精液が漏れ出てしまいそうになる程に興奮が高まる。
小町の尻を掴むと、少女としての肌の張りと、女性としての柔らかさを同時に感じて、この身体が変貌の過渡期にある事を実感する。小町のこの肌の質感は、今しか味わえない。
己の欲望を突き立てる場所を確認するように、親指で秘部を押し広げると、そこからつつっと精液がこぼれ出た。
「あう……漏れちゃった」
小町が頬を赤らめてこちらを振り返る。背もたれにしなだれかかって、甘えた声を出す。このまま指でめちゃくちゃにかき回してやりたい衝動に駆られる。
亀頭をぴとぴとと花弁に押し当てると、背中がふるふると震えた。
「じゃあ、行く……ぞ――」
言葉の途中で我慢出来なくなって、尻を掴んで肉棒を思い切り突き入れると、心地良い抵抗と共に肉棒が生温かい膣に呑み込まれた。
「――――――っ」
一気に一番奥まで到達してぐりぐりと亀頭を押し付けると、小町の身体ががくがくと震えて、ぷしゃっ、ぷしゃっと断続的に淫液が漏れ出る。「あ～、あ～……」と唸り声を上げて、ソファの生地を小さな手

で握り締めている。
挿れている間も小町の淫肉は絶えず肉棒全体をくいくいと締め付けてきて、放っておいても互いにイってしまいそうにさえ思えた。
小町が発する声や音に聴覚を集中させながら、ゆっくりと引き抜く。カリが肉襞を抉る度に、小町の背中が伸びたり屈んだりを繰り返して、その都度挿入の角度が変わって互いの快感が増幅される。亀頭がもう少しで膣口から抜けるというところに差し掛かったところで、再び突き入れる。亀頭が最奥に到達すると、小町が鳴いた。
また抜ける寸前まで腰を引き、突き入れる。
抜ける寸前まで左右にくねらせながら引いて、強烈に突き上げる。
徐々に、徐々に、抜き差しの速度を上げていく。
ぱんっ、ぐちゅっ、じゅぷっ、じゅぽっ、ぐぱんっ、ぐぱんっ、ずぷっ、ずりゅりゅ、ぐぷぷ……っ。
「あっ、あがっ、かはっ、あえっ、あああっ、あああああ……っ」
腰を打ち付ける音が徐々に大きくなり、膣口も白く泡立ってくる。膣内は温かな液体に溢れ、締め付けはどんどん増していく。小町の喘ぎ声もますます大きくなっていく。
ある衝動に駆られ、小町の両手首を掴んだ。
小町が何事かと振り返る。その直後――手首をぐんと引っ張りながら、腰を全力で打ち付けた。
――どぱんっ、と激しい音がした。
「にゃっ――――――」
瞬間的に小町の身体にぎちっと力が入り、膣に物凄い圧力がかかる。
「うぐ……っ！」
予想を遥かに超える締め付けに、あっと言う間に性の奔流が身体の奥から込み上げて――
「うああ……っ！」
ごぶごぶごぶごぶっ、と。大量の精液が小町の子宮目がけて噴き出した。
「……」

突き入れてから射精を終えるまでの間、小町の反応は薄かった……というよりは、殆ど反応自体が無かった。
小町が振り返っている状態で突き入れると、一瞬驚きで目を見開き、射精すると身体全体がぶるぶると震え、射精で肉棒が脈打っている途中で表情を失って首がかくんと下を向いた。そして生温かさを感じたかと思うと、小町の股からちょろろろ……と液体が次から次へと漏れ出た。
白濁した欲望と激しい快楽の証拠がブレンドされ、淫猥な匂いが立ち込める。その匂いでが鼻腔を貫いて、膣の中の肉棒がまたすぐさま勃起した。
……流石に、一度拭いておくか……。
びしょびしょになったソファを眺めて、少し冷静になった。
――小町は、俺に腕を掴まれたまま今もびくんびくんと痙攣している。少し子宮の入り口を小突くと、ぷしゃっと温かな液体が膣口から漏れた。

× × ×

「……う、うーん……ひゃんっ、んくっ……あれ、あんっ、小町、ひぐっ、何してたん、くひっ、だっけ……って、にゃあっ!? お兄ちゃん、あふっ、何してんの!?」
小町がノリツッコミの如き時間差で良いツッコミをくれた。
小町が気絶している間、俺は一通り拭き掃除をすると、小町をソファに寝かせて休ませていた。しかし毛布を掛けようとした時に、気絶していても膣口がひくついているのを見てしまって我慢出来なくなり、ズボンを脱ぎ捨てて再び挿入していた。小町が目を覚ましたら膣の締め付けがとても良くなったので、やはり意識の有無は大事らしい。なんか俺凄いこと言ってる気がするけど気にしない。
「ん、続きをしてたんだ。失禁と失神はクリアしたからな。あと2回だ。この体勢で2回。大丈夫か?」
話をしながらも抽送を続けると、粘膜が擦れる音にがっぽ、ぐじゅ、ぐっぽといやらしい水音が混ざり始める。
「あぐっ、だからって、ひぐ、こんな、かはっ、かっ、こ……うううう、

ひぐぅっ！」
失神を挟んでも身体の昂ぶりはすぐ復活するのか、小町がびくんと痙攣してあっと言う間に達した。
「あうう、やば、敏感、に、なって、ひぎっ、だめ、お兄ちゃ、あああ……」
小町が背中に腕を回してきて、きゅっと抱きしめてくる。ぶるぶると震える腕に力は入っておらず、不安が伝わってきた。それに応えるように俺も小町の背中に腕を回して抱きしめる。
「だいじょうぶだ、だいじょうぶ。……さ、いっぱいイクんだ」
「……っ」
小町がごくりと息を呑む音が聞こえた。
腰を引いて、思い切り欲望を突き入れる。
小町の身体が一際大きく跳ねて、それと同時に3度目の射精をした。
――後で思い返せば、2度目の時点で止めておけば良かったのかもしれない、と思った。
何故なら。
「ふーっ、ふーっ、ふーっ……ふ、ふふ、ふふふふふ……」
3度目の射精を終えて、さあラスト1回だ、このまま俺のペースで最後まで……と意気込んでいると、小町が腕で顔を覆った状態で、突如不敵な笑い声を上げ始めた。
「え、こ、小町……？」
肉襞をひくつかせながらも、笑い声は止まらない。
そして。
「ふふふふふ……にゃーーーーーーーーーーーー！」
「えっ……うおっ!?」
小町が突然起き上がり、俺をでーんと突き飛ばす。何が何だか分からぬまま天井を仰ぐと、小町が馬乗りになってきた。ぽすっと乗っかってくる身体はとても軽い。
「こ、小町ちゃん……？　どうしたんでしょう……？」
小町の豹変に恐れ慄き、敬語で尋ねる。

「ふふふふふ……お兄ちゃんの度重なる鬼畜な行為により、小町……なんか、スイッチ入っちゃった。……元々は、あと1回だったよね？」
「え？　あ、ああ」
　え、なに、スイッチってなに……？
「あれ、やめよ」
「え」
「お兄ちゃんが勃たなくなるまでに変更しよ」
「え」
「大丈夫、小町が上になってしたげるから」
「え」
「さあ、観念するのだー！」
　小町がふしゃーと猫みたいな声を上げながら、俺の肩を掴んで、肉棒を垂直に立てて秘裂に宛がった。
「え、え、え!?　きゃー！　きゃー！　ぎゃー！」
　差し迫った緊急事態の危険性に気付いて、随分と遅い反応で八九寺的悲鳴を上げる。
「ふふふ……もう遅いのです！　じゃ……いくよ」
「あっ――――」
　小町が色っぽい表情を浮かべて、腰を沈めた瞬間……この後確実に訪れるであろう快楽地獄の予感が身体を駆け抜けて、背筋がぶるりと震えた。

×　×　×

　ぐっちゅ、ばちゅ、じゅぷ、じゅっぷ、ずりゅりゅ……。
「お……あ……あ、ま、また、で、あ、あ、あ――」
　ソファに仰向けになったまま、もう何度目か分からない射精を、馬乗りになっている小町に強制された。
　もはや空撃ちになってもおかしくない状況なのだが、それでも確かに尿道を液体が伝う感触があった。
「ん……っ、うん、まだ出るんだね。えらいえらい。これで6回目かな？　お兄ちゃん、頑張るねー。まだしっかり勃ってるんだもん」
　えらい目に遭っていた。

小町は宣言通り俺の上で腰を振り続け、俺が何度射精しようと、何度射精直後敏感になった状態で腰を振られて気が狂いそうになろうと、耐えず俺の肉棒を己の粘膜でしごき続けた。
何度射精しても、心地良い膣の締め付けに強制的に勃起させられてしまう。その為エンドレスで絞られ続けていた。ちょっと予想外すぎてお兄ちゃん心折れそう。
「うーん……まだ勃ってはいるけど、流石にもうほとんど出なくなってるね。しょうがない、次で最後にしたげよう」
小町が身体を起こして、腰を娼婦のようにくねらせながらも腕を組んで真面目に考えていた。考えてる内容は非常にアレなんだけど。あ、ちょっと先走りの汁が出た。
こんな風に考えてはいるけれど、喋る余裕はまるで無い。部活の厳しい先輩みたいな台詞に対して何も反応出来ずにいると、小町がにひっと笑った。
「よーし、じゃあ最後は特に気合を入れて……とうっ！」
「うおっ!?」
俺にぴったりと重なってきて、甘えるように頬ずりしてきた。そして顔を上げると、腰を引いて――最後まで肉棒を貪ろうと一気に下ろした。
「うぐあああ……っ！」
俺の反応を鼻先が触れ合う程の距離で楽しそうに見ながら、小町が腰を振り続ける。
「ほ～れほれ、どう、お兄ちゃん、気持ち良い？　気持ち良いでしょ？」
目の前の顔はよく見慣れたいたずらっぽい表情なのに、その下の動きはとんでもなくいやらしい。腰をしっかりゆっくり引いては深く速く下ろし、ゆっくり浅く引いてはねっとりと下ろし、緩急を付けながらくねらせる。肉棒からはもう何も出ないと思っていたのに、あっと言う間に高まってしまい、限界が足早に訪れた。
「こ、小町、も、で、出る……っ」
「ん、良いよ、お兄ちゃん……いっぱい出して」
ふっと優しい微笑みを浮かべた次の瞬間、俺の乳首をきゅっと摘ま

みながら猛烈な勢いで腰を打ち付け始めた。
「あああああ……っ！」
最後の最後に今までで一番強烈な締め付けを与えられ、白いマグマが今にも噴火せんと上ってくる。
「小町……っ」
震える声で小町を呼んで、尻を掴む。
――ごぶっ、どぶっ、びゅるる……っ。
「にゃあぁぁぁぁぁぁぁぁ……」
小町が顎を上げて、気持ち良さそうに長い喘ぎ声を上げて――こてんと倒れかかってきた。
「えへへ～、お兄ちゃん、お兄ちゃん……」
「……」
もう、先程までの淫獣の面影は無く。
よく見慣れた、ただの天使な、可愛い妹がそこに居た。

× × ×

「小町」
「んー？」
一通り掃除を終えて、二人で並んでこたつでぬくぬく、だにゃー。
ふと話を切り出すと、小町が肩に寄りかかってきた。うーん抱きしめたい。
抱きしめた。あごの下をころころ。
「お前、なんかやってみたい事とかあるか？　まあ、その、あの、なんだ、ええと……」
全力でどもっていると、小町がうへぇと辟易した表情を見せた。
「お兄ちゃん……エッチなことについてでどもると、いつにも増してキモいね……こりゃ早めに直さないと……」
「凹むこと言うなよ……」
哀しいカウンターに打ちひしがれていると、小町がうーんとあごに指を当てて考える。
「やってみたいこと……か。小町、どういうのがあるのかほとんど知らないんだよね、そもそも」

「ん、そうか」
そりゃそうか。人にもよるんだろうけれど、あまり知らなくてもおかしくはない。
「だから……その、今度、一緒に見たりとか……どう、かな？」
「え」
「……だめ？」
「……っ」
必殺・上目遣い。しかも肩に寄りかかった状態での、とろっとろに甘えた声。
「……ね、だめ？」
撃沈。
「よし、今から見るか」
「流石に早いよ……」
根負けを通り越してもはややる気満々になってしまったが、流石に呆れられた。
――と、まあ。
こんな感じで、俺と小町は日々イチャついていたりする。

お終い。

雪ノ下陽乃の傍にいると、意外と見えてくるものもある。

（1）

冬のある日。

部活（という名の読書&ティータイム）を終えた後、足早に行きつけの大型書店へ向かった。

愛読しているラノベのシリーズ最新刊が発売する日であったため、新刊コーナーでそれを見付けると速攻で手に取り購入。

書店を出て、寒風吹き荒ぶ中コートのポケットに手を突っ込むと、それと同時に身体がぶるりと震えた。

「さて……」

明日は休日ということもあり、ある程度ゆっくり出来る。

そんな浮かれ気分と新刊を早く読みたい気持ちとで、帰る前にさわりだけでも読んでおこうと思い帰り道でカフェに寄った。

さわりだけと言っても、そのまま勢いで半分、もはや全部……と読んでしまいそうで怖いけど。しかもその場合集中しすぎて小町に連絡を忘れるから、後でこってり絞られる。中学生の妹にがっつり怒られる高校生の兄というのもいとをかし。……やっぱり、いとすさまじ。

カフェで適当に食べ物とコーヒーを頼み、甘々にする為にガムシロップをいくつかトレイに乗せ、くつろげる場所を探す。

店内はあまり混んでおらず、空いた2人用のテーブル席を視界の奥に見付けることが出来た。

片方はソファになっている席で、テーブルにトレイを乗せると、そこにもふっと腰を下ろす。はー極楽だにゃー。

コーヒーにガムシロップをがんがん投入し、これが角砂糖ならなんかLっぽいなあとか若干懐かしい事を思いながら本を取り出そうとすると、隣で本を読んでいたお姉さんがこちらを向いたのが視界の端に見えた。

……んん？
「ありゃ、比企谷くんだ。ひゃっはろー」
……。
聞き慣れた声にげんなりして振り向くと、ソファに座って同じく本を読んでいる陽乃さんがいた。
立ち襟の白ブラウスに赤のカーディガン、上品さが漂うロングスカートを身に纏っていて、小洒落たカフェの中でも一際存在感を放っている。
……俺、この人とのエンカウント率高すぎない？　ゲーム序盤の草原でがんがん魔王が出てくる感じ。何それ一生引きこもりたい。
「……あ、ども」
うわー会っちゃったー感を出さないよう気を付けながら軽く会釈をして、流れるように再び本に視線を落とす。
なんでこのタイミングで……せっかくの新刊を楽しむ時間が……。ううむ、これはさっさとコーヒーを飲んで退散するか……。
などと心の中で嘆いていると、不意にソファの真横の部分がもふっと沈み込んだ。
「うお……っ？」
不自然なまでにソファが沈み込んだ為に右側によろけ、次の瞬間柔らかくて良い匂いがするものに顔が包まれた。
え。
「あらあら、比企谷くんったらだいたーん」
心のこもっていない声が頭上からして、状況を把握した。
俺は陽乃さんの胸にうずまり、左手で顔を固定され、ばっちりその豊満なお胸様の中で休らぐ形になっていた。
「……っ」
……いや、この人何してくれちゃってるのん？
一瞬思考が停止したが、すぐさま顔を仰け反らせ離れる。陽乃さんが左手に力を入れてたら、首がぐきって言ったかもしれない。
「あん、そんなにすぐ離れなくてもいいのにー」
陽乃さんが無邪気にくすくすと笑う。相変わらずなんなんだこの

人は……超良い匂いだし……。陽乃さんの身体が一瞬震えているように見えたが、次の瞬間には止まっていたので気のせいなのかどうか分からなかった。
俺の警戒心ばりばりの顔を見て、陽乃さんが底冷えのするような笑みを浮かべる。
「比企谷くんはずーっとわたしのこと怖がってるよね」
「……っ」
喉元を禍々しい手で押さえられたような感覚。
口調は軽いし表情もにこやかだ。けれど、目が全く笑っていない。
恐れで手が震え出すのではないかと思いながら、ちらりと陽乃さんを見やる。
「そうですね、雪ノ下さんは底知れない怖さがあるんで」
「ふーん、きみはわたしに恐怖を感じた時、具体的にどんな風にわたしのことを捉えるの？」
陽乃さんに質問（詰問）されて、うーんと考える。
……。
少し間を置いて。
「……心臓に悪いなこの人、って思います」
答えた瞬間、陽乃さんは一瞬目を見開いて、
「あっはははははっ！」
「……え……」
まさかの大爆笑。
陽乃さんの突然の爆笑に戸惑っていると、けらけらと笑いながら俺の頬をぷにぷにと突いてきた。ついでに腕に抱きついてきた。近い近い近い柔らかい近いいい匂いもっとしてくださ間違えたやめてやめて！
「あーお腹痛い。もー最高！　比企谷くんは正直で良いよねー。……でもわたしとしては、比企谷くんでもっと遊びたいから、もうちょっとくらいその抵抗を減らしてもらって仲良くなりたいなって思ってるんだよね」
……比企谷くん「で」ってはっきり言っちゃったよこの人……。

絡められた腕を外そうともぞもぞしながら（そのもぞもぞに合わせて、更に指やらなんやらを絡めてくる。なに、この人前世はクラーケンかなにかなの？）、何と言ったものか考える。変なとこは触らないように注意せねば……。

答えあぐねていると、陽乃さんは言葉を続ける。

「その怖さ、ってさ。仮にわたしが『今までこうこうこう言うことがあって、その度にこうこうこう言う風に考えながら生きてきた結果、こうなりました』なんて全部余す事無く説明したところで、君の中で和らぐものではないよね」

「そう……ですね」

確かに、それもそうだ。

俺は、率直に、この人が怖い。

その理由を、仮に余すことなく聞いたところで、その恐怖が目減りする訳ではないのだ。

貞子や伽耶子が怨念を残すに至った経緯を知ったところで、テレビ画面から出てくる貞子が、天井裏から這い出てくる伽耶子が、怖くなくなる訳ではない。いや、むしろ尚更怖くなるかもしれない。

だから、これから先どれだけこの人のことを知ろうとも、その恐怖が根本的に無くなることはないのだろう。

――だからね、と。

俺が考えてることなどお見通しなのか、陽乃さんは言葉を繋ぐ。

「わたしに抱く恐怖を和らげるには、単純に上塗りしてあげたら良いと思うんだ」

「あー……なるほど」

割とすんなりと腑に落ちた。

確かに、下手に恐怖を抱く対象ばかり睨んでうんうん考えるよりも、そのやり方の方がよっぽど効率的な気がする。

……って、なんか……いつの間にか、俺が陽乃さんへの苦手意識を克服する流れになってる……？

これは抵抗しないと何か取り返しのつかない事態に至るのではと危惧を抱いていたのだが（嫌いな食べ物を克服するのとは訳が違う。

嫌な予感しかしない）、陽乃さんは気にせずに話を続ける。
人差し指をぴこんと立てて、一言。
「例えば、素の私を見せる――とかね」
「……それは、例えばどういうことですか？」
訝しみの目を向けると、陽乃さんがふっと微笑む。
そしてこほんと咳払いをして息を整えると、穏やかな目で俺を見つめる。
「笑顔」
言うと、陽乃さんがにこっと笑った。
「う……お……」
固まってしまった。
笑顔自体は陽乃さんは意図的に作ったものなのは間違いない。
だけれどその笑顔には何も含みがなく、今この場にいることを心から楽しんでいるような、幸せな表情をしている。
陽乃さんの初めて見る本気（であろう）の笑顔に、心臓を撃ち抜かれたような感覚を覚えて、鼓動がどんどん速まっていく。
心臓を労わって胸に手を当てていると、陽乃さんがふっと表情を緩めた。
「……どう？　そうそう見れるもんじゃないよー？　わたしの本気スマイル」
そう言ってにっこり微笑む陽乃さんの表情もまた、陰の無い素敵な笑顔だった。
顔が熱い。なにこれ、超熱い。なにこれ！
「や、その……良いと思います」
あっれー？　陽乃さんってこんなに……あっれー？
元々半端ない美人なのは分かってたけど、そのどきどきも今まで怖さで中和されてたのに……。
……あ、これあかんやつや。
だめだぞ、俺。ちょろすぎるぞ。今ものすごく現在進行形で陽乃さんに弄ばれてるぞ。勘違い、ダメ、絶対。ちょろ谷、ダメ、絶対！
陽乃さんは俺の感想を聞いて、満足げにうんうんと頷く。

そして、俺に顔を急に近づけて、いたずらっぽく目を細める。
「よしよし、順調だね。こうやって丁寧に逢瀬を重ねていけば、比企谷くんもきっと誠実なわたしに心を許してくれるはずだ！」
逢瀬って言うな、逢瀬って。素敵じゃねえか。あと誠実って言うな、戸塚に謝って！
「や、俺そんなちょろくないんで……」
「えー？　今結構ときめいてたでしょー？　ほれほれ！」
「ちょっ……」
やめてやめて、頬を指でぐりぐりしないで！　あと身体の色んな部分をくっつけてこないで！
「うーん……」
陽乃さんが俺の頬をぐりぐりし続けながら、ふと何か考えるように唸る。
「やっぱり雪乃ちゃんのものにするにはもったいないかなー……」
何かすごい恐いこと言ってる。なんか凄い怖い事いってる！
冷や汗をだらだら流していると、陽乃さんは更に恐ろしい事を言ってのける。
「よーし、比企谷くん、わたし暇だか……忙しい合間を縫って、これから毎日お姉さんが遊んであげよう！」
「今暇だからって言いかけましたよね？」
9割5分言ってからの言い直しとか、悪意しか感じないんだけど。
ていうか、え？　毎日？　はい？
「あはは、君のそういう、細かい所をちゃんとツッコむとこ好きだよー」
俺のツッコミを笑って聞き流し、肩をばんばんと叩いてくる。
「や、あんまり触らな――」
――いでください、と、まるで乙女のようなセリフを言いかけた所で、不意に陽乃さんが俺の後頭部に腕を回してそのまま耳に手を添えて俺の首をロックして、もう片方の腕を腰の前面に回した。隣にいる陽乃さんに、前後から上半身をがっちり拘束される。
「いいからいいから。君が気張ってもアレだから、遊びに行くとして

も行き慣れた場所にするよ？　大丈夫大丈夫、お姉さんに全て委ねて良いから。……ぜーんぶ委ねちゃいなよ、楽になるよ？」
「～～～～～～～っ」
今のセリフの状況説明。
陽乃さんの身体が思い切り密着していて、俺の右肩に豊満な双丘が押し当てられた状態で、耳元で甘ったるい声で囁かれた。心地良い陶酔感のする声に、思わず本当に身を委ねてしまいそうになる。
「……」
下をちらり。
……あかん、下半身が変な感じになってる。
俺の動揺などお見通しなようで、陽乃さんは視線を下に滑らせると、くすりと笑う。
「ふふ、なあに？　身体は正直だねえ比企谷くん。性格はひねくれてても、健康な男子高校生だもんねえ」
「……っ」
死にたい。
制服のズボン越しでもはっきりと分かる山を見られた。しかも陽乃さんに。
あゝ、死にたい。書き方を変えたら無駄にそれっぽくなった。
羞恥心で今すぐ天岩戸に潜りたい欲求に塗りたくられた俺に、陽乃さんからとどめのお言葉。
「明日からたっぷり比企谷くんと遊んで、比企谷くんがわたしにちょっとは心を許して、わたしも比企谷くんのこと良いなー、可愛いなーって改めて思ったら……そういうこと、してあげてもいいよ？」
「え」
え!?
なに!?
そういうことって、どういうこと!?
いかん、俺がこういう感じになった時に冷たい目でツッコミをしてくれる素敵な女の子たち及び天使な妹が居ないから、煩悩が暴走する！

心の中でどんちゃん騒ぎ（町内の盆踊り大会くらい）をしていると、陽乃さんからとどめに次ぐとどめのお言葉。
「ちなみに、『そういうこと』っていうのは……君が想像してる事と多分一致してるし、それ以上の事も含まれてるからね」
「え」
はーん!?
それ以上ってなに!?
はーん!?
心の中でどんちゃん騒ぎ（ねぶた祭りくらい）をしていると、陽乃さんがぱっと離れた。
「あ……」
長い時間味わった柔らかい感触が消えて、ほんの少しばかり名残惜しくて思わず声が――
「今、ちょっと名残惜しく思ったでしょ？」
「……そんな事は」
ばれてた。
もうあかん。
助けて。
恥ずかし過ぎて頭を抱えていると、陽乃さんがその様子を見てけらけらと笑う。ほんと楽しそうだなこの人……くっそ……。笑いながらも、微かに震えているように見えたのは気のせいだろうか。
陽乃さんは本をしまってトレイを持って立ち上がり、俺の正面に来ておだやかな瞳で見下ろす。その瞳はただ優しく、胸が高鳴る。
「色々すごいこと言ってみたけどね、わたし、比企谷くんで遊ぶのが楽しいのは本当だよ？　……明日から、よろしくね」
「……っ」
いやいやいやいや。
ずるいでしょ。それはずるいでしょ。え、なんなの？　ギャップで籠絡的な？
相変わらず比企谷くん「で」って言ってるのに！　明日から毎日遊ぶことなんて一切了承してないのに！

何その純粋な感情の吐露は!?　純粋なんだよね!?　もう訳分かんないんですけど！

顔が物凄い勢いで熱くなるのを感じていると、陽乃さんがにひっと笑った。

「うん、うん。比企谷くんも、わたしの手にかかれば結構ちょろいね！」

「……っ！」

ぴたっと止まった。

「じゃあね比企谷くん、また明日～」

「え、あ、ちょっと……」

行ってしまった。

「……」

……。

……ぬあああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！

陽乃さんが視界から消えると、他の客が周りに居ないのを確認して、ソファの上で悶え転がる。

なんだこれ、なんだこれ、なんだこれ!?

俺、短時間でどんだけ転がされてんの!?　掌の上で踊らされるにも程があるだろ！　恥ずかしい！　死ぬ！　わー！　きゃー！　わー！

うぐぐと小さく唸っていると、視界の端に何かが映る。

「……え」

顔を上げると、もう去ったと思った陽乃さんが角から顔だけ覗かせて、口に手を当てて面白そうにこちらを見ていた。

……今の、見られた？

「……」

……。

恥ずかしさの限界を越えて、もはや声が出ない。

そんな俺の様子を見て、陽乃さんはにやっと微笑みながら投げキッスをして、手をひらひらと振って今度こそ去った。何も言わずに。文面だと「～～♪」って感じ。

「……」

……。

この夜、自室のベッドで布団にくるまりながら「恥ずかしいよーーーー！」と叫んだ。小町にすげえ勢いで壁ドンされた。ご、ごめんなさい……。

……明日からの日々が、尋常でないレベルで不安になった。

続く。

（2）

翌日、土曜日。

俺は陽乃さんに呼び出されて、昼間にサイゼに来ていた。

正直超億劫だけど、来てしまった。

別に弱みを握られてる訳ではない……けど。

昨日の別れ際に悶える所を見られたのが致命的だった。

あの後家に帰ると、誰かしらから聞いたのか、ＬＩＮＥで突然望まないメッセージが届いた。

『陽乃でーす☆　よろしくね！　あ、比企谷くんの最後の面白い所は別に何かに撮ってる訳じゃないから安心してね。まあ、わたしはしっかり覚えてるけど。　　で、明日なんだけど』

と鬼のようなメッセージが送られてきて、もはや従うしかなかった。話題を切り替える前に改行しないで敢えて空白を入れる感じがもう引くほど恐い。ああもうしんどい、超恐い。あの人なら記憶に留めておくだけであらゆる悪事に有効活用出来そうなんだもん。悪事って言っちゃった。

そんなこんなで、陽乃さんに引っ掻き回されているのを十二分に自覚しながらのサイゼ遠征（心理的に遠征）と相成った。

サイゼに入って、陽乃さんを探すこと十数秒。

「おー、来たか少年。こっちこっち」

「……ども」

本を片手に持った陽乃さんが、笑顔で手を振って俺に視線をやっただけで、周りの客（主に男）の「なんでこんな奴と……」という嫌悪の視線が痛い程突き刺さった。理不尽すぎる。なんでこんな目に……。

「サイゼで良いんですね」

陽乃さんの向かいに座ってバッグを置くと、率直な意見を述べた。

実際この人と相対するとなると、それなりに洒落乙なカフェか高級レストランでランチをしなければならないのだろうかという強迫観念に駆られる。

それに対して陽乃さんは手を組んで、首を傾げて微笑む。
「言ったでしょ？　行き慣れた場所で遊ぶって」
「……っ」
何の事はないセリフを言っただけの陽乃さんの挙動が、とんでもなく素敵で思わず息を呑んだ。
この人はどこに居ても輝く。その場所がどんな場所であろうとも、相手から映る背景を自分が映える為の額縁に変えてしまう。そんな魔力のある仕草だった。
「ん？　どうしたの、赤くなって？」
「……いえ。注文していいですかね？」
「ああ、どうぞどうぞ。わたしも頼もうっとー」
ああもう、絶対大変だよ、ここから。
鼻唄混じりでメニューを眺める陽乃さんを、メニュー越しにちらりと眺める。……やたらと鼻唄が上手い。超人かよこの人。

×　×　×

メニューが届くまで、ひたすらそわそわする俺を陽乃さんがあの手この手でからかうという地獄を潜り抜けること１０分程。
「お待たせしましたー」
ウェイトレスが注文した品々を順に置いて行く。２０後半くらいの……なんていうか、良い感じに綺麗な人だ。
「あ、それはこっちですね。で、それは彼に……あ」
陽乃さんがてきぱきと指示して俺の方に流される皿を受け取っていると、不意に陽乃さんと手が触れた。
「……」
固まった。
なんでこの人、涼しい顔して手が触れた状態から更にしっかりと指をにぎにぎしてらっしゃるの？　しかも超笑顔で！　恥ずかしいし指がすべすべしてるしくすぐったいし心地良いし恥ずかしい！
こんなのウェイトレスさんが反応に困るだろ、早く解かないと……と思って、ちらりと目線をウェイトレスさんに目をやると。
「あら……きゃー、きゃー、きゃー……！　……どうぞごゆっくり♪」

「……」
俺らが軽く手を繋いでいるのをにまにまと眺めながら、丁寧さはそのままに配膳のスピードだけ倍にして、満面の笑みで去っていった。わあ……良い人だなあ……。
……。
「……あの、食べない、ん、です、か？」
緊張の余り片言になった。
対する陽乃さんは、無言。謎の無言。
「ふむふむ……」
「……」
やっと発した声が、何やら調べものをしているような声だった。なに、なんで両手で俺の右手をにぎにぎしてんの？　マッサージ？　手相占い？　なになに？
しばらく俺の手をじっと見つめていた陽乃さんが、俺を見てにっこり笑った。
「思ったよりごつごつしてるね……文学少年はもっとひょろっとしてるかと思ったけど、思ったより男の子してるじゃん」
「え、あ、はあ。ありがとうございます……？」
テンパって最後が無駄に疑問形になった。
俺の高速目泳ぎ（時速３０ｋｍ）を見て、陽乃さんがからからと笑う。うーん、楽しそうだなあ……。
「それじゃ食べよっか。いただきます」
「あ、はい、いただきます」
雪ノ下もなのだから、陽乃さんは言わずもがななのだろうけど。
手を合わせるという極めて当たり前で見慣れた動作一つとっても、この人は洗練されていてとても美しい。
それに見惚れて反応が遅れたのではないろうかとびくびくしながら、数瞬後に手を合わせた。
……おいおい頑張れよ比企谷八幡。お前はそんなにちょろくないはずだぞ……。
……「押すなよ？　押すなよ!?」に変換するのをやめろ、俺の脳内

！

×　×　×

食事を終えて、ドリンクバーで夢の無限飲料タイム。そんな飲まないけど。

「ふー、美味しかったね。わたしサイゼ結構好きなんだー」

「え、そうなんですか」

「なに、そんなに意外？　わたしこういう手頃なお店も好きなんだよ」

「へえ……」

食後のコーヒー（ミルク少々、ガムシロップはがんがん投入）を飲みながら、他愛もない話をする。陽乃さんのフランクな絡みですっかり力が抜けたのか、いつの間にか気分は落ち着いていた。

ちなみに食事中は自然と言葉を交わす頻度も減り、陽乃さんの美しい食事姿に見惚れてしまい、「こらこら、あんまり女の子を見つめるんじゃありません。マナー違反だぞっ」と恐ろしい程テンプレートなセリフと共におでこを指でこつんとつつかれたことで、その後食べたものの味がろくに分からなかった。

陽乃さんはコーヒーカップを置くと、窓の外をふっと眺める。ほんの数秒の出来事だったが、この人は街の風景を眺めて一体何を思うのだろうかと考えた。

視線をつとこちらに戻すとぱちっと目が合い、陽乃さんが柔らかく微笑む。

うーん。

なんか、昨日よりもいたずら成分や恐怖成分（ひどい）が減って、ただの凄まじく素敵なお姉さんになっている。ひょっとして俺は少しばかり誤解をしていたのでは……いやいや、油断するな、相手は魔王、魔王、りゅうおう、デスタムーア、ダークドレアム……！

「……失礼なこと考えてるでしょ」

「はひゃいっ!?」

冷たい目に射すくめられて、今日イチ大きな声を裏返しながら出してしまった。

「まったく……君は相変わらずだねえ」

そう言ってふっと呆れ気味に笑みをこぼす。
……あ、そうか。
今日は向かい合って座ってるから、陽乃さんとの肉体的接触（語弊しか無い）がほとんど無い。だから安心しているというのもあるのかもしれない。
この人のそういう行為がいやかと言われると、すぐに「いや！」と言えないのが男の悲しい性だなと思うが……正直、一度でも、軽くでも、冗談でも、この人のスキンシップを受け入れてしまえば、取り返しがつかない深みに引きずり込まれそうな気がする。だから過剰に恐れているのかもしれない。
この人のスキンシップは、一般的なリア充（笑）やビッチとは一線を画している――そんな気がする。
そんなことを考えていると、ふと陽乃さんが口を開いた。
「さてさて少年、奉仕部の方はどうなってるかね？」
「や、どうもこうも……普通ですよ」
「本物は見つかった？」
ごくごく普通の質問の体で、だいぶ恥ずかしい質問をしてきた。
コーヒーカップに目線を落としながら、ぽつぽつと答える。
「そんな、見つかったからって大々的に報告するようなもんでもあるまいし。分かりませんよ、まだ」
陽乃さんの目が細められる。この話題になったら、また底の見えない表情になった。ああもう心臓に悪い……。
てっきりこの話題でぐりぐりと心を掘り返されるのかと思ったが、陽乃さんはにっこり笑って切すぐにり替えた。
「ま、雪乃ちゃんが居ない状態で比企谷くんだけねちっこく追及してもねー。うーん……あ、それじゃ比企谷くん、雪乃ちゃんとガハマちゃんは付き合うならどっち？」
「ごふっ！」
むせた。
この人、人がコーヒーを口に含んだタイミングでなんつうことを聞いてんだ……。

ジト目を向けると、陽乃さんはけらけらと笑う。
「あはは、なあに、高校生ならよくある話題でしょー？　わたしのお勧めとしては雪乃ちゃんだけど……比企谷くんはガハマちゃんみたいな可愛くて胸が大きい子も好きかな？」
「なななな何のことでしょうねえ……」
やべえ、「可愛くて」までなら平静を装えたけど、「胸が大きい」ってワードはまずい、目が泳ぐ。
陽乃さんが俺の反応を見て、我が意を得たりとばかりに笑う。
「あれー？　いつもわたしと会ったとき、胸元に目が行ってるよねー？　それで胸元が開いてないと心持ちほっとした顔になってる。がっかりするよりはマシだけど分かりやすいよねー。ちなみに初対面の時が一番チラ見が多かったな。あの時胸元がっつり開けてたしねー」
「……ええと、死んで詫びるといいですかね」
それかジャンピング土下座したい。又は土下寝。
絶望に沈む俺を見て、陽乃さんが微笑む。
「あはは、良いって良いって。可愛い男の子が興味を示してくれるのは悪くない気分だよ」
「は、はあ……」
陽乃さん認識の「可愛くない男」が興味を示した場合のことは、恐くて聞けなかった。
――と、ここで。
不意に陽乃さんが豊満な胸の下で両腕を組んで、双丘を寄せて上げた。
「うお……え……!?」
顔が熱くなる。目を離すべきなのに離せない。
「どう？　雪乃ちゃんと同じ美貌に、ガハマちゃんに負けず劣らずのこの胸。……わたし、とーってもお得だと思わない？」
たゆんたゆんと揺れる豊満な胸の引力が尋常でない。
「え、あ、や、その、ああっと、ええと……」
あかん、人生ワーストのテンパりだ。

なんでこの人、妖しい上に無邪気な笑顔が出来んの？　エロいし綺麗だし可愛いし。やだ、ハイブリッド……。
高速で泳ぐ目の動きを止めて、こほんと咳払い。
「俺には小町が居ますから」
「君はシスコンだねえ……」
呆れられた。やべえ、年上お姉さんの呆れた笑みとかクセになりそうだ……。
まあ、何はともあれ、呆れられたら話題もそんなに膨らまないだろう。
この話題も終わりかと安堵の息を吐くと、陽乃さんが次の話題を切り出した。
「ま、いいよ。あ、ところでさ」
「はい」
「わたしの胸、君が触りたくなったらいつでも触らせてあげるから」
「え、マジですか」
「マジマジ。直接でも良いよ」
「え、え、え？　ほんとですか？」
「立ち上がっちゃった……」
「あ」
陽乃さんが苦笑いするとか、相当だぞ俺。
……「ところでさ」っていう話題転換の言葉に油断して生じた心の隙間に、悪魔の誘惑がするりと入り込んできたんです……魔が差しました……。知り合いが居なくて助かった……。
「比企谷くんはお色気責めにも弱い……と」
「今何をメモしたんですか。今何をメモしたんですか」
「ん？　何もメモなんてしてないよー？」
「うぐ……」
ほれほれーと胸を寄せて上げられて黙る俺、マジクール。……マジクール。
――と、ここで陽乃さんが上げていた胸をたゆんと降ろした。その上下運動にがっつり見惚れていると、

「……？」
下半身に違和感が発生した。
なにか柔らかくて温かいものが、ジーンズ越しに俺の足をまさぐっているような感触。
「……っ!?」
その柔らかくて温かいなにかは、俺の太腿を執拗に這い回り、時折内股をかすめていく。
そしてついには、
「う……くっ……」
身体が小さく跳ねてしまった。柔らかくて温かいなにかが、ええと、そのですね、俺の股間に侵入し、モノをまさぐり始めたのだ。
「どうしたの？」
テーブルの上で手を組んだ陽乃さんが、涼やかな表情で首を傾げる。
「いえ、その、なんでも」
受け答えする間にも、なにかの動きは激しく、的確になっていく。
俺の反応を直に確認して、その都度学習しつつ動きを修正しているかのように。
スマートフォンを見るふりをして、ちらりと陽乃さんの表情を盗み見る。
「……っ」
陽乃さんは悪魔的に口角を上げ、顔色は全く変えず、ねっとりとした視線で俺を観察していた。疑念が確信に変わる。
いま俺の股間は、パンストにコーティングされた陽乃さんの御御足に攻め込まれている。
……や、うん。
……この人、頭おかしいんじゃない？
続く。

（3）

一行で分かる前回のあらすじ！
陽乃さんの足ｏｎ俺の股間！
言うんじゃなかった。テンション上げても虚しさしかない。
「そう言えば、比企谷くんはさ――」
陽乃さんが他愛も無い話をコーヒー片手に続けている。続けているけれど……俺は、まともに受け答えする余裕が無い。
股間を的確に捉えた陽乃さんの足が、指を生き物のようにくねくねと動かして刺激してくる。亀頭を集中的に弄ったかと思うと、ぐいと向きを変え、裏返った肉棒の裏筋を、足の裏を肉棒に向けることで５本の指全てで掴んでくる。
「ちょ、ゆ、雪ノ下さん、何……を……っ」
テーブルの縁を掴んで、ぶるぶると震えながら何とか質問するが、陽乃さんはくすっと笑って真っ直ぐに見据えてくる。
「えー？　何のこと？　……よっ」
なんでこの期に及んでとぼけて……って、
「うえっ!?」
一瞬、自分の身に起きたことが信じられなかった。
陽乃さんはパンストを身に付けた足で、器用に俺のジーンズのチャックを親指と人差し指で挟むと、ジーッとあっさり下ろしてしまった。
「……っ」
事態の異常さに、声を上げることさえ出来ない。
陽乃さんはそんな俺の動揺を楽しむようにくすっと笑うと、ずいっと前のめりになった。たわわな胸がテーブルに乗ってどきんとするが、その手前に腕が乗せられてあえなく見えなくなってしまった。残念！　……や、そうじゃなくて。
なんで前のめりに――？　そう思った、その瞬間。
俺の股間に触れる陽乃さんの足が、２本になった。片足は俺の靴を踏みつけ床に縫い付けるように固定し、もう片足で俺の内腿を開く。

チャックが開いた隙間から、室内の暖気が僅かに流れ込んだ。
「……なに、を……っ」
何の感情を抱いているのか自分でも掴めないままに、か細い声を上げた。
こんな、両足を押さえ付けられた状態じゃあ何も出来ないし、それに――
「……今、期待したでしょ？　両足でされるかも、って」
「……っ！」
微かに頭を過ぎった予感を見透かされて、カッと顔が熱くなる。
陽乃さんは妖艶に微笑んで、内腿を押さえている足をもぞもぞと動かして、中心に近付いていく。
「比企谷くん、どう？　気持ち良い？」
目を細めて穏やかに微笑む表情の裏側が、これでもかと言う程に嗜虐心に満ちているのが手に取るように分かる。
足は内腿の上を焦れったく移動して、決して股間には触れてこない。――チャックを開けられてから、まだ中心部に触れられていない。これではチャックを開けた意味が……って、おい、俺！　何を期待してんだっての！　おい！
――なんて、油断すべきではなかった。
陽乃さんが、靴を踏みつけていた足を放したかと思うと、テーブルの上に乗せていた腕を浮かせて、テーブルの縁を両手で掴んだ。まるで足を自由に扱う為のような体勢を取って――
「えいっ」
「うああ……っ!?」
陽乃さんの足が突如として両足共に俊敏に動き、ジーンズの中の逸物をチャックから外へ引きずり出した。パンツに包まれているとはいえ、こんなファミレスの中で自分の性器を外気に晒すという行為は背徳感にまみれている。
「それでは……ほっ」
陽乃さんのお気楽な掛け声と共に、１０本の細い足の指が肉棒に襲い掛かってきた。

どちらも足の裏を肉棒に向けて挟み込まれ、片方の足は亀頭を中心に、もう片方の足は玉を中心に責めてきて、交互に竿にやってきてはぐにぐにとまさぐってくる。
「〜〜〜〜〜〜〜〜っ」
未知の快感に、震えが止まらない。
自分から見えるのは、陽乃さんのにこやかな笑顔だけ。この状況を理解するのは、全て触覚からだ。他の感覚に頼れない分、この感覚に神経が集中してしまって敏感になる。
——俺は今、陽乃さんに足で……え、え、ウソだろ？　なんで……ああ、だめだ、気持ち良さが頭に靄をかけてしまって、明瞭な思考が出来なくなっている。
「突っ伏して力入れてても良いことないよ？　背もたれに背中預けてゆっくりしなよ」
「……」
陽乃さんの指示に、全く何の思考を巡らせることなく従う。
力無くもたれかかると、身体の感覚が尚更に股間に集中するのがわかった。
陽乃さんは気持ち良くしすぎることもなく、絶妙な力加減で刺激を続けていて、一種のマッサージのようにも思えるような上手さだった。
——これ、いつまで続くんだろう？
にこにこと微笑みながら、テーブルの下で淫猥な行為を続ける陽乃さんの顔を見たとき、ふと彼女が口を開いた。
「じゃ、そろそろ……出しちゃおっか」
「え……」
——不意に、頭の中の靄が晴れた。
×　×　×
「え、だ、出すってどういう……」
がばっと前のめりになって、陽乃さんに聞く。
「えー？　言った通りだよ……ほいっ」
「ちょ、ちょっと……っ!?」

陽乃さんが掛け声と共に足を動かすと、更に激しい動きでパンツ越しに愛撫してくる。
「あぐ……あああ……っ」
突然強まった刺激に悶絶する。今の今までの刺激ならば耐えることは出来ていたが、この状態では……我慢しても、遅かれ早かれ達してしまう。
陽乃さんを押さえようにも、陽乃さんは後傾しながらテーブルの縁を掴んでいてその身体に手が届かない。通路に離脱しようとすると、片足で靴を痛いくらいに踏みつけて固定し、見せしめと言わんばかりに亀頭を指の腹で殊更激しくぐしゅぐしゅと刺激する。
「ちょっ……陽乃、さん……やばっ、これ、ほんとに……っ」
泣きそうになりながら訴えかけると、陽乃さんが目をぱちくりとさせた後に、片手を離してちょいちょいと手招きした。
「手、出して。両手ね」
「え……？」
何が何だか分からないながらも、両手をそろりと伸ばす。
すると、手首をがしっと掴まれた。
「……これで、ほんとに逃げられないね」
「……っ！」
俺の反応を見るか見ないかのうちに――陽乃さんは俺の手をぎりぎりとひっぱり、テーブルに腹筋がめり込むくらいの力で押さえ付けてきて、足の動きを更に激しくする。パンツに先走りの汁が染み込んでいくのが分かり、危機的状況を益々実感する。
「あっ、あがっ、うぐあ……っ」
呻き声を上げる俺を見て、陽乃さんが心底楽しそうに笑う。
「あはっ……比企谷くんは本当に可愛いねぇ……もーっとイジメたくなっちゃう」
その声の底冷えする響きにぞっとした。
足の動きは既に、両足で挟み込んでごしゅごしゅとしごき上げる動きになっていた。いよいよ仕留めにかかってきている。このままでは、本当にあと数十秒と持たずに出してしまう。

どうしたら――と考えてふと通路に視線を向けると、先程の女性店員がちょうど通りかかった。
「あ、お姉さん、すいませーん」
その人に陽乃さんがフランクに声を掛けて、何事かと思う。
「はいはーい、何でしょうか？」
ぱたぱたとこちらへやってきたお姉さんに対して、陽乃さんがにこりと微笑む。
「すみません、おしぼりを……5本程持ってきてもらっていいですか？　ちょっと使いたいので……」
「かしこまりましたー。……お二人さん、本当に仲が良いですね♪」
お姉さんが口に手を当ててむふふと笑う。確かに、傍から見れば俺たちはファミレスでわざわざ手を繋ぐバカップルに見えるだろう。このお姉さん本当に良い人だなぁ。でも気付いて！　テーブルの下が大惨事だよ！　何か落としてテーブルの下に屈んでみて！　お願いだから！
「そうなんですよー、わたしたちお互いにベタ惚れでぇ～」
「まあまあ♪」
「～～……っ」
何この会話。足こきしながらする会話じゃなくね？　俺超ぷるぷるしてるんだけど。ちなみにもう既に、一瞬でも油断したらぶちまけちゃう状態です。
その後も軽く雑談を続けていたが、俺の意識は股間に集中していて話を聞くどころではなかった。しかし嘘を言っているのだけは分かる。なんだよお互い一目惚れって。
「それじゃ、持ってきますねー♪」
お姉さんが離脱すると、陽乃さんはゆっくりとこちらに顔を向ける。
「……出した後は、ちゃんと拭かないとね？」
「……っ」
愕然とした。
え、なに、この人、本当に俺をイカセようとしてて、その後片付け

の用意までしてんの？
　唖然としている間も俺の股間は蹂躙され続け、いよいよ限界が迫ってくる。
「お待たせしました～♪」
　お姉さんが素早くおしぼりを持ってきて「ではでは、ごゆっくり～♪」と笑顔で言って去る間も、足の動きは止まらない。
「さ、じゃあ、最後はどうする？」
「え？　最後って……」
「パンツの中に出しちゃうか、それともパンツも脱がせて、このテーブルの下に直接出しちゃうか。どっちも中々興奮するよねぇ。さ、君はどっちが良い？」
　信じられない事を言って、両足で竿をぎゅっと締め付ける。
　……あ、この人、本当にイカセようとしてる。まだどこかで、冗談なんじゃないかと思っていたけど……本気みたいだ。
　今までの抵抗はなるべく良識に沿っていたものだけど、もう手段は選んでいられない。
「さ、どっちに――」
「雪ノ下さんっ、もう流石に――っ！」
　陽乃さんの言葉を遮って、彼女の足の膝の裏辺りをがしっと掴む。セクハラにしかならないだろうが、このまま本当に店の中でぶちまけるよりはマシと判断した。
　これならばなんとか――と思い、反応を見ようとすると。
「――え？」
　自分の目を疑った。

続く。

（4）

「んんんん……っ！」

――俺が陽乃さんの足を掴んだ瞬間、彼女は両手で口を覆うと弾けるように背筋を弓なりに反らせ、身体全体をぶるぶると震わせた。腕の支えが無くなったことで身体は背もたれに寄りかかり、熱っぽい目をして力無く天井を仰いでいる。

「え……」

……今のって、なんだ……？

未だに両手で口を覆い、頬を桜色に紅潮させている陽乃さんの、異様なまでの――艶めかしい姿に、固まって息を呑む。

やがて陽乃さんは手を口から離すと、未だに身体を断続的に震わせながら、ゆっくりとこちらを見た。

「……手、放してちょうだい？　わたしも放すから」

「え、あ……はい」

何が何だか分からぬうちに、互いの手と足を放す。下半身の拘束を解かれて、安心と共にほんの少しばかりの名残惜しさも感じた……ような気もした。

「……出よっか。ちょっと外に出てから話したいな」

「は、はい」

どこか疲弊した様子で微笑む陽乃さんに戸惑いながらも、一緒にテーブルを立った。

レジに向かう際に振り返ると、使わないで済んだ5つのおしぼりを見てほっと胸をなでおろす。けれど、今はそれ以上に――さっきの陽乃さんの反応が気になってしょうがなかった。

×　×　×

「ふー、寒い寒い」

「ですね……」

サイゼを出ると、近場の公園のベンチを探して二人で腰を下ろした。

コート姿でポケットに手を入れて、寒さにうひゃーと声を上げてい

る陽乃さんに、さっきの異様な様子の面影は見当たらない。
木立を眺めていても、陽乃さんの艶姿を思い出して身体がぞくぞくとしてしまい、まるで落ち着かない。
「あの、さっきのって……」
中々本題に移ろうとしない陽乃さんを見て我慢が出来なくなり、勇気を振り絞っておずおずと聞くと、陽乃さんの動きがぴたりと止まった。ゆっくりと振り向くと、その顔はどこか諦観の混じった笑顔で、どんな気持ちなのかは澱んだ湖の底を見るように掴めない。
「……比企谷くん、命拾いしたね。あそこでわたしのこと触らなかったら、間違いなく出させてたよ」
「……っ」
その言葉にぞっとする。この人はどんだけSなんだ……。
わたしね、と陽乃さんが言葉を続ける。
「さっきの反応を見て分かると思うけど、すぅっっっごく、敏感な体質なんだ」
「え」
告げられた言葉にどきんとして、鼓動が加速する。
なんか今、すごい事言わなかったか……？
陽乃さんは視線をずらして、道行く親子を見つめた。その瞳が一瞬和らいで見えたのは気のせいなのだろうか。
「自分から触る時……それこそ手で触れるくらいならなんでもないの。でも自分から触るでも手以外が触れたりすると結構キちゃうんだ……それが、相手からとなると、尚更ね」
ちなみに、と伸びをしながら。
「この体質に気付いたのは、それなりに大きくなってからなんだ。幼い頃からそんな状態だったら両親は大変にも程があるだろうしね。多分、身体が性に目覚めるのに伴って……なんだと思う」
「……」
前を見ながら話していた陽乃さんが、ついと振り向く。
「……以上、雪ノ下陽乃の最大の弱点についての告白でした～」
気楽そうに、にっこり笑顔になる。

「……えっ、と……」
頭の中が混迷の極み。
なになに、えっと、陽乃さんは身体が敏感で、えっと、幼い頃は大丈夫で、えっと、えっと……？
頭の中がしっちゃかめっちゃかになっている俺の様子を見て、陽乃さんがくすりと笑う。
「ちなみに、何とも思ってない人とかに触られてもこういう反応はしないんだ。ただただ気持ち悪いなって思うだけ。心を許してたり、この人良いなーって思ってる人に触られると……ね。……うふふ、比企谷くん、良かったね～」
「え、や、その……」
なんでこの人、こんなカミングアウトをしながらも攻めの姿勢なんだよ？　ていうか今すんごい恥ずかしい事言わなかったかこの人？
陽乃さんがずいと顔を近付ける。目を逸らすが、頬に手を添えられた。冷たい指の腹の感触がひどく緊張を誘う。
「明日からも私は君でたくさん遊ぶけど……せっかく弱点を知ったんだから、君もどんどん反撃していいよ？　君が迷いながらもエッチなことしてくれるのなら、それはそれで面白いしね」
「……っ」
喉を鳴らせば聞こえてしまう距離だから、それさえ出来ない。冷や汗が背中に伝うのを感じながら、ただただ硬直する。
頬に手を添えたまま、それじゃ最後に――と陽乃さんが囁く。
「今日は飛ばし過ぎた感があるからね。お詫びと言っちゃあなんだけど、ちょっとサービスしてあげよう」
「え」
え？
何そのエロいフレーズ？
突然の展開に今の今までの混乱が霧散して、胸をときめかせていると、陽乃さんが俺の左腕を掴んで、自分の左肩のすぐ横まで持っていく。
「あの……何を？」

これじゃまるで肩を抱いて良いと言ってるみたいじゃないか――と手をわきわきさせていると、陽乃さんがにっこり笑顔で、

「肩、抱いていいよ」

ごく普通に囁いた。

……ええー？

再び大混乱。びっくりし過ぎて最初の２文字を省略して考えるとこだった。

いやいやいや、いくらなんでも、そんな恋人みたいなこと……と思っていると。

陽乃さんの口が、耳元に付けられた。ぞくっとすると同時に、艶っぽい声が耳朶を打つ。

「……ちょっとだけだぞ？」

「～～～～～～～っ！」

――「いくらでも触っていいよ」などと言われた方が、まだ理性を保てたのかもしれない。しかしここでこの言葉をチョイスするというのは、やはり人心掌握術に長けている雪ノ下陽乃らしいと言える……なんてそれっぽい言葉を並べてみたのだけど。

要は、陽乃さんの囁きで反射的に、左手でぐっと彼女の肩を抱いた。ほんの数分前に彼女の体質を聞いたばかりだというのに、それにも構わず。

その瞬間――

「あふあああああ……っ！」

耳元で色っぽい嬌声がして、たまらない官能の音色が身体中に染み渡った。

見ると、陽乃さんは俺の肩に寄りかかって、はあはあと荒い息遣いをしている。

陽乃さんに聞こえるのももはや厭わずにごくりと喉を鳴らして、肩を掴む手に力を込めると、再び「くふうう……っ！」と甘い声が漏れた。

その艶姿に見惚れていると、陽乃さんが顔を上げ、上目遣いで熱っぽい視線を送ってくる。

「ふふ……比企谷くんも、男の子だねえ……どうする？　今日わたしの部屋、泊まりに来る？」
「……っ!?　や、流石にそれは……っ！」
顔が火照るのを感じながら全力で目を逸らすと、陽乃さんがくすりと笑った。
「……ま、徐々に、ってとこかな」
「……」
はーん!?
徐々にってなに？　徐々にってなに!?
「さーて」
俺が手を離すと、陽乃さんはすっくと立って、んーと気持ち良さそうに伸びをする。こんな何気ない動きでさえ、ＣＭで使えそうな程に絵になるのだから、この人はずるい。あと上に伸びる事で強調される凶悪なバストがずるい。大丈夫、別に触りたいなんて――
「触りたいの？」
「あれ!?」
読まれた!?　俺そんなに鼻の下伸ばしたりしてた!?　「ヌルフフフ……」とか言ってた!?
心を読まれた事に激しく動揺している俺を見て陽乃さんがくすくす笑う。うぐぐ……いたずらっぽく笑うその笑顔に裏が見えなくて、逆にやりづらい……。
「それじゃ、今日の所はここまでかな。それじゃ比企谷くん、……んっ」
「えっ？」
陽乃さん、なんで俺の肩に手を置いて顔を目の前まで近付けて目を閉じてはりまんの？
数秒硬直していると、陽乃さんが目を開けた。そして口を尖らせて拗ねたような口調で、
「お別れのキスに決まってるでしょー？」
!?　ちょ、でっ、出来る訳ないでしょう!?」
「あははっ」

楽しそうに笑って、ぱっと手を離した。くっそ、もう、普通に笑うとこの人は可愛すぎて手が付けらんねえ……！

くるっと反転して背を向けると、バッグを後ろ手に持ちながら、顔だけこちらを振り返る。

「……それじゃ、また、明日ね？」

その顔は楽しみや期待と同時に、どこか不安も孕んだような、泣いてしまいそうな儚げな顔で。どこまでが計算なのか、どこからが本心なのか、まるで分からない。

――「だから」なのか、「だけど」なのか分からないけれど。

本来なら断る所なのに、こんな事を連日やられたら身が持たないなんて分かり気っているのに、

「……は、はい……」

肯定の返事をしてしまった。

陽乃さんは俺の返事を聞いてにこりと笑い、くるりと振り返ると顔の横で控えめに手を振って立ち去って行く。

……あれ、なんか、気付いたら明日の約束も取り付けてる……あれ？　あれれ？

「……っ」

ふと、陽乃さんに身体に触れた手のひらと……彼女にまさぐられた、股間に目を見やる。

……あー、どうしよ、今日の夜。

……お姉さん物で探すか……。

続く。

（5）

「……」

昨日一日の事を思い返す。

昨晩は結局、あまり良いお姉さん物が見付からなくて……じゃなくて。そうじゃなくて。あのスタイルに見合う人なんてそうそう居ないよなぁ……じゃなくて。そうじゃなくて！

雪ノ下陽乃という人物について、今一度考えてみる。

あの人は今でも、やはり怖い。なんというか、理解しようと追いかけても距離を詰めた分だけ離れる逃げ水のような、似たもので言えばゼノンのパラドックスのような、そんな、手応えが掴めない感覚。或いはもっと危険なものにさえ思える。海に半身が浸かった彼女を助けようと追いかけて海に入ると、気付いたら自分は溺れていて、彼女は浜でにこにこしながら手を振っているような、そんな感覚。

彼女の言動から、或いは妹である雪ノ下雪乃の言動から、或いは幼馴染である葉山隼人の言葉から、或いは上記の人物の立居振舞からいくら推測しても、雪ノ下陽乃という人物を把握する事は出来ないだろう。奥が深いなんて言う言葉でさえ括る事が出来ないような、深淵の闇を覗き込んでいるような、そんな感覚。

――と、まあ、ここまで長々と抽象的な思考を垂れ流した訳だけど。

「……お兄ちゃん、朝からどしたの？」

今は、小町と朝ごはん中だった。

「ん、や、何でも無い」

平静を装って答えながら、視線を下方へ移す。昨日はこの視界に、陽乃さんの艶めかしい足が伸びてきて……と、それを考えただけで、妹を目の前にしているというの勃ってしまいそうになる。なんか小町に興奮しているようで洒落にならん。そんなこと無いはずだよ、ね！

俺の返事を聞いて、小町が首を傾げながら「んんん……？」と目を細める。その視線に明らかに疑念が込められていて、朝からとても空気が重い。なんだろう、この家って盤古幡を置いてたんだっけ？

スーパー宝貝があるとかすごいなぁ。
「……何でもない割に、顔がやけににやけてたよ？　すんごい気持ち悪かったよ？　大丈夫？　すんごい気持ち悪かったよ？」
「ねえなんで２回言ったの？　ねえなんで２回言ったの？　すげぇ凹むんだけど」
動揺しすぎて俺も２回言ってしまった。ていうかあんな真面目なモノローグを垂れ流しておきながらにやけてるとか俺マジ器用だな。
そう。
冒頭のモノローグ――冒頭とか言っちゃったよもう――は全て、昨日の陽乃さんのアレな行為について必死で思考するが故に生じたものだった。
や、もう。
あの人、なんなのさ！
カフェでのスキンシップはまだぎりっぎり分かる。他に知り合いが居ないからいつもより過激に俺をからかおうとしたんだろう。
でも！　昨日の！　サイゼの！　一件は！
足!?　あんな衆人環視の下で！　なんなの!?　ねえ、なんなの!?
思い出してぐぬぬと唸りながら、なんか彼氏の浮気を知って家に帰ってきた彼氏を問い詰める女性みたいな思考をしてしまったと恥ずかしくなった。
「お兄ちゃん、またにやけてる……」
「あ」
小町が目玉焼を箸で割りながら（ちなみに黄身が固まるくらいの焼き加減なので、それで黄身がとろりと行くことはない）、ジト目を向けている。ハッと気付けば、頬はだらしなく緩み、ズボンはしっかり上に持ち上がっていた。もうやだ……。
ここまで来ても理由を話さない俺を見て、小町は追及は諦めたのだろう。ふっと呆れ笑いを浮かべて食事を続ける。
「それで？　今日のご予定は？」
「んー、ちょっと昼頃から出かけるわ」
「ふむふむ。そのにやけの理由になってる人と出かける訳ね」

「……」
箸を落とした。かっつーんって。
器用に左右に散らばった箸をあわあわとしながら拾い、水洗いをしに台所を向かう。
ぱしゃぱしゃとやっていると、小町の声が背中にぷすりと刺さる。
「お兄ちゃん……分かりやすすぎ」
「うぐ……」
水気を拭き取ってテーブルに戻ると、小町がにこりと破顔する。
「そんなお兄ちゃんの可愛い面も、愛してくれる人だと良いね」
「……うるせぇよ」
――比企谷くんは本当に可愛いねぇ――
あの言葉を思い出して、身体が熱くなった。
……可愛がられてはいるみたいですよ、小町ちゃん。笑えないくらいに。お兄ちゃん、取り敢えず頑張ります。
ごちそうさまと手を合わせると、小町が洗うからそこ置いといてと言われて軽く礼を言う。しっかり気合を入れて支度しなよ～とうざ可愛い笑顔で言われた。気合を入れるも何もいつも通りの服装しかやりようが無いのでいつもの外出着で外へ出ようとしたら、小町のファッション批評でぼこぼこにされた。マジで容赦が無い。

× × ×

「おーい、こっちだよ～」
「……ども」
昨日の晩、陽乃さんから電話が掛かってきて、今日の待ち合わせ場所と時刻を聞いた。用件を済ませて電話を切る直前に息混じりの声で「明日も……楽しもうね」と囁くのやめてほしい。びーんって勃っちゃったっての。電話の直後に再びネットでお姉さん物探しちゃったし。
陽乃さんが指定した待ち合わせ場所は駅の改札前だった。どこかの店で話すのかと思ったが、そうでもないらしい。まあ、昨日の今日で店で向かい合ったら、とても平常心でいられそうにないから良いんだけど……。

「おー、なになに、キマってるじゃーん」
俺の格好を見た陽乃さんが、にこにこ笑いながらばしばしと俺の背中を叩く。いたいいたいいたいなんでコート越しでもそんな良い匂いが漂うの！
「……」
背中をさすりながら、陽乃さんを見る。
ああもう、なんでこんなに綺麗なんだ――そんな言葉しか出てこない。
陽乃さんは俺を見て手を振ったが、実際はそんな行為を見るまでもなく、かなり遠目からでも一目で陽乃さんだと分かった。もっと言えば、陽乃さん本人を見付けていない状態でも、道行く人の視線が自然と集まる箇所を探せば陽乃さんが見付かると言っても過言ではない。実際、街頭の巨大モニターのように、人々にとって今やそこにあるのが当たり前になっているものよりも、陽乃さんの方がよっぽど人目に付くのではないか、と真剣に思う。こうしてやりとりしている間も、周りの男どもの視線が超痛いし。
「ほらほら、行こっ？」
陽乃さんは俺の挙動不審な様子などどこ吹く風で、俺の手を引いて改札へ向かう。
チャージはしてあるよな、と考えながら、陽乃さんが握った手を見る。
……この手を強く握り返したら、陽乃さんは身体を震わせてうずくまるのだろうか？
とんでもない爆弾の存在を告げられてから、たった一晩の間でこういった想像を何度もしてしまった。
敏感な魔王様は、にこにこと上機嫌に鼻唄を歌いながら、俺を引っ張っていく。
……俺がカードを取り出す前に陽乃さんがぐいぐい引っ張るから、俺だけ改札のドアに拒絶された。結構な勢いでボディブローを食らった。何この辱め……。
×　×　×

「今日はどこに行くんですか？」
「ん、今日はねぇ……あ、来た来た」
陽乃さんが艶やかに微笑んだ直後、ホームに電車のアナウンスが流れる。それと同時に陽乃さんがコートを脱いだので、ざわりと妖しい予感がした。
「今日は、これからしばらくはひたすら電車に乗るよ。出来れば混んでる路線が良いな」
「え……」
言葉の意図を呑み込めずにいると、電車が到着して、ぷしゅーと音が鳴ってドアが開く。
次々と人が降りて、乗り込む段階になって陽乃さんが再び俺の手を握って振り返る。
「比企谷くんが、混み混みの電車の中でわたしのことをどうするのか……お姉さん、気になります」
あんたはどこの古典部部長だ。
いたずらっぽく微笑んで、俺の手を引いて電車へと入る。
……この人、なんつうことを……！
電車に乗り込んだ直後、駆け込もうとした人たちを弾くようにドアが閉まる。ダメだったかーと笑い合う人たちをドアの内側から眺めながら、俺もそっちに行きたいなぁ……と密かに羨ましがった。
陽乃さんの手は、未だに繋がれている。滑らかな肌ざわりに伴って確かな熱を感じて、鼓動がどくんと高鳴った。

続く。

（6）

動き出した電車と一緒に、鼓動も速まっていく。

どきどき☆淫猥電車の旅、スタート！

無理だ。どんなテンションでタイトルコールしたってテンションなんて上がらない。というより落ち着かない。

陽乃さんと繋がれた手を見ると、いつの間にか恋人繋ぎになっていた。道理でやたらと手が気持ち良い訳だ……じゃなくて。

……この人、本気で何考えてんだ？　まったく……。

乗り込む際の簡略過ぎる説明に対する抗議の意も込めて、陽乃さんにジト目を送る。

電車に乗り合わせた人たちの視線は、街中と比べるとそこまで直接的でないものの、それでもやはりちらりちらりと陽乃さんの下へ向けられていた。これだけ綺麗な人だと、もはや痴漢さえ気後れしそうな気がする。まあ、勇気を出して痴漢をした場合のその後は想像したくもないけど。なんで陽乃さん今手をにぎにぎしたの？

視線と言うものは好奇にしろ嫌悪にしろ、肌に刺さるものだろうに。こんな視線慣れたもので何ともないとでも言うように、陽乃さんは涼しげな顔で窓の外の景色を眺めている。なんで陽乃さんまた手をにぎにぎしたの？　ちょっとやめて！　もうちょいされたら本当に変な反応しちゃうから！

「……」

電車が動き出してから、陽乃さんは一言も喋っていない。憂いを湛えた目で窓の外を眺めるその光景は、あまりにも絵になる。こんな感想を考えてる間も手をにぎにぎするのさえやめてくれればなぁ。

――ふと、陽乃さんの表情を見て、考える。

陽乃さんが言っていたように、彼女の事情を全部漏れなく聞いた所で、今の彼女を理解出来る訳では決して無い。

でも……それでも。

もう少しくらい、彼女の遊びに付き合っても良いかな……なんて考えていると、陽乃さんがふっとため息を吐いた。この完璧美人のため

息はなんでこんなにも、ドラマの女優と並んでも遜色無い程に様になるのか。
物憂げになる理由はなんだろうか、聞いても良いのか、聞いても仕方ないか等と逡巡していると、陽乃さんがこちらへくるりと振り返る。正面から向かい合う形になった。
「……ここで出しちゃうのは流石にまずいよねぇ」
前言撤回。
あんたは雪原の青か。いいえ魔王でしたね。
「……絶対ダメですよ」
ジト目を向けながら言うと、陽乃さんがうーんと首を傾げる。なんかわがままな妹キャラみたい。あくまでキャラな。
「じゃあキスは……」
あぶねぇ。
噴くとこだった。鼻血ではない。
「……声抑えてください」
こんな会話、誰にも聞かれたくない。もっと言えば二人きりでもしたくないけど。
俺の返しを聞いて、陽乃さんが更にむむむと唸る。
「ん、じゃあ声を抑えてのキスなら良いの？」
「――っ!?」
甘えたように、拗ねたように唇を尖らせながら、空いた手をそっとへその辺りに置いてきた。
「ちょ、ちょっと……っ、だめです、声を抑えてのキスもダメです」
心臓がばくばくするのを感じながら、へそに置かれた方の手首を掴むと、手首の先の指がまるで別の生き物のように艶めかしく蠢いた。あかん、これだけで勃起する。
両手が塞がった状態で、陽乃さんはふてくされた表情を浮かべる。
「なになに～、日本の電車は倫理観が厳しいの？」
「や、なによくラブコメにいがちなスキンシップ過剰な外国人美人キャラみたいな体で話してんすか」
ツッコむと一瞬陽乃さんはきょとんとした顔になり、その後くすく

すと笑った。その微笑みには作ったものは感じなくて……って、んん？

……そう言えば、一昨日から陽乃さんと接してるけど、仮面を被った感じがあんまり無いような……？

なんでだろうかと疑問に思っていると、陽乃さんが俺のツッコミについてまだ考えていたようで、その点にふと触れてきた。

「何気に『美人』キャラって言う辺り、あざといねぇ比企谷くん」

そこかよ。

「や、まあ、事実を言ったまでなんで」

「やだもう。嬉しくて抱き付いちゃうぞ？」

「なんすかその脅迫……。色々まずいんで勘弁してください」

陽乃さんが目をぱちくりとした後、薄い笑みを浮かべる。

「ん、もう勃ってるんだから別に良いんじゃない？」

「え」

そろりと視線を下に。

「……ええと、それでも勘弁してください」

めっちゃテント張ってた。

死にてぇ。

× × ×

「ん、混んできたね」

「そう、です……ね……」

電車に揺られて数駅程通過すると、徐々に車内も混み合ってきた。なんで腰の両側に手を添えられてんのかは考えない。なんでたまにさわさわと指を動かしてにこにこと俺の反応を見てくるのかも考えない。

や、もう。

本当にこの状況は、まずい。

向かい合った状態で、陽乃さんが壁を背にしていて、俺は片手を吊り革に、もう片手は所在無げにポケットの中をもぞもぞしている。

時折陽乃さんが「ん……」と甘い吐息を耳元で漏らして、ポケットの中に手を突っ込んで、俺の手に指を絡ませながら身を委ねてくる。

ああだめだこれ。今日の夜は絶対、今のこの場面を思い出して抜いておこう。じゃないと身体が持たん。
どんな良いシャンプーを使えば、こんな馥郁たる香りを纏うことが出来るのか。鳩尾の辺りに断続的にもにゅもにゅと押し当てられる双丘の感触は、大量の血液を下腹部に送り込んでしまう。
……そして何より……。
「んっ……ふっ、んんっ、あっ、んふぅっ……」
「……」
たすけてー。
俺の胸板に顔を押し付けながら、小さい声で喘いでるような気がするんですけど気のせいですか。周りの人には聞こえない音量で、しかも俺は胸にその甘い声が直接響くので、正直もう頭がおかしくなりそう。
「ゆ、雪ノ下さん、ちょっと……っ」
抗議の意を込めて小声で話しかけると、熱っぽい目で見つめてきた。
「ん、なぁに、キスしたくなった？」
何この凶悪に可愛い生き物。押し倒してやろうか。社会的その他あらゆる意味で死ぬのでやめておきます。
「んな訳ないでしょう。ていうか大丈夫ですか？　このままで」
「ん、どう言う事？」
「だって、赤の他人と触れ合うなんて、雪ノ下さんの、その……体質的に、まずくないですか？」
言うと、一瞬目をぱちくりとさせ、やがてにこーっと笑った。
「ん、良いとこ突くねぇ。そうなんだー、だからわたし、あんまり電車乗らないんだよね」
あの豪華なリムジンで送迎？　まさかね。
「や、だから、それならなんでこんな……」
しどろもどろに喋ると、雪ノ下さんがふっと目を細める。
「だから、こんな状況ならわたしが赤の他人に触れてひどく神経を害するか、君がわたしを守るかの二択になるじゃない？　それで君なら

守るって選択肢を選ぶはず。守るって選択肢を取るとしたら、『他の奴に触れられるくらいなら～！』って熱血な感じでわたしの事を抱きしめてくれるかなって思ったの。どう？　このアイディア」
「……んな……っ」
驚きと呆れで声も出ない。
この人、俺で遊ぶ為にどれだけ……！
返事を練られずにいると、陽乃さんが再びにこーっと笑った。
「さ、楽しみにしてるぞ、少年！」
「……っ」
……。
……不安しかねえんだけど。
電車は相変わらず外のビル街を映しているが、俺は意識はそのほとんどが目の前の陽乃さんに向いていて、たたんたたんと言う電車の音も、どこか遠くの世界の物音に聞こえた。

続く。

（7）

このままそれとなく電車が空いていったら、どんなに良かっただろうかと思う。

しかし、今目の前にいる美し過ぎる魔王、雪ノ下陽乃に遊ばれているこの状況下で、そんな俺に都合の良い展開など待っている訳が無かった。

「……もうちょっと詰めますか」

「そうだねー、ふふ」

――はい、順調に混んでます。順調にピンチに陥ってます。

何この人、まさかこの路線の今の時間帯の混み具合とか把握してんの？　混んでくるペースは緩慢で、良～い感じで俺の神経をさりさりと削ってくる。泣きそう。

絶望している俺の様子を見て、陽乃さんがそれはそれは楽しそうに笑った。お楽しみ頂けているようで何よりです……くっそ……！

「ふふ、順調に二人の距離が縮まってるねぇ」

「９０年代のドラマ展開の説明みたいな実況は止めてください。物理的な距離は確かに縮まってますけど」

「この状況でもツッコむとかやるねー。うりうり」

「ちょ、ちょっと、脇腹突っつくのやめてくださいって、ちょっと――」

「……えいっ」

「……～～～～～～っ!?」

あっぶねえ！

めっちゃ変な声出るとこだった！

何でこの人、可愛く脇腹を突っついた後に急に手を下げてったの!?

腰から更にちょっとだけ下げたよね!?　やばいとこまで下げかけたよね!?

すーはーと静かに深く呼吸をして、陽乃さんにジト目を向ける。

「……雪ノ下さん、いい加減に」

「えいっ」

「～～～～～～っ」

だあぁぁっ！　なんで2連続!?　しかもなんで今度は手のひらを上に向けてついっと撫でながら手を離したの!?
ぬぐぐと唸っていると、陽乃さんがあまりにわざとらしく、あざとく、そして凶悪なまでの可愛さを纏って頬を膨らませた。
「……だって、比企谷くん、触ってくれないんだもん」
「なんすかそのビッチ発言」
「『比企谷くん専用ビッチ』とか、どう？　響きエロくない？」
「すげぇやばい気分になるんでやめてください」
「じゃあ、キスしてもいい？」
「キムチでもいい？」
「え？」
「なんでもないです」
突然の花澤・東山ペア。なんで声優で言ったんだ俺。しかしはぐらかすには最適だった。だってキムチだぞ？
しかし、多少のはぐらかし程度で魔王の猛攻が止む訳もなく。
「比企谷くん、本当は触りたいんでしょ？　ほれほれ～、触りなよ～」
「やめてくださいやめてください。そんなことじゃ俺という巨大な牙城は崩せ――」
「比企谷くんが触ってくれないんだったら……わたしが触っちゃうよ？」
「え――」
心臓が一瞬止まるかと思った。
そのとんでもない発言に口をぱくぱくさせていると、電車が止まり、ドアが開いた。
そう言えば、この電車旅のゴールが決まってないってことは、この責め苦のゴールも決まってないんだよな――と今更ながらに気付き、どくんと心臓が跳ねた。
×　×　×
どかどかどか――と聞き慣れない大きな足音と共に、大勢の外国人が入ってきた。妙ににぎやかで、今から皆でどこかを回るのだろうか、聞き慣れない言語で楽しそうに会話していて、会話の端々に聞き

覚えのある地名や建物の名前が聞こえる。この路線でこういう人たちを見かけるのは珍しい。
――この、予期せぬ外国人観光客の乗車の影響は大きかった。みんな体格ががっしりしていて、一人一人が占めるスペースも大きい。
……となると、自然と……。
「うおっ!?」
「おっとー」
俺は慌ててしまい、陽乃さんは呑気な声を出す。
何もしていなくても、俺の鼻が陽乃さんの髪の毛の香りをがっつり嗅いでしまう程近付いていた。こう言うと俺、変態みたいだな。一切間違ってねぇけど。
……ていうか、このままだと……。
「比企谷くん、そろそろ触らないでいるのは限界があるんじゃない？」
わくわくした顔で、嬉しそうに陽乃さんが言う。
俺の手は現在、両手で1つの吊り革にぶら下がっている状態。陽乃さんからくっついてくる時以外は極力彼女の身体に触れないようにしていた。
しかしそんな抵抗も虚しく、限界は刻一刻と近付いてきていた。
これ以上車内の密度が増したら――と危惧していると、次の駅に着いて電車のドアが開く。さあ、どう転ぶ……と神にすがるような気持ちで目を閉じると、次の瞬間ぎゅむっと背中が押された。
「うおっ――とぉっ」
「んっ……？」
不本意ながら。
吊り革に掴まっていられる位置から更に前方に押された為、結果として陽乃さんの顔の両脇に手を付く形となった。所謂壁ドンである。しかも両手バージョン。
「おお～……比企谷くん、やるねぇ。そんなにわたしのこと落としたいの？」
死にてぇ。
なんでこの人、この状況ですんごい嬉しそうににひっと笑ってんの

？　すげぇ可愛いからやめてほしい。
「全然そういうんじゃないんで。神様が俺にこういう体勢をとれと言ってるんですよ」
「比企谷くん、神様とか信じてなさそうだよね」
「何言ってんですか、いざという時に都合良く助けてくれる可能性を少しでも上げておこうと、毎年きちんと初詣に行ってますよ」
「で、ここから比企谷くんはわたしにどんな風にアプローチしてくれるのかな？」
「……や、その、えっと……」
たすけてー。話を逸らせないよー。
この状態の何がやばいって、通常の壁ドン（通常ってなんだ）なら腕をきっちりと伸ばして壁に手を付けて、顔がずいっと近付けるような流れをとるのだろうが、今は背中にかかる圧力の関係上、止むを得ない状況で行っている。
そんな状況のため、ほとんど腕立て状態なのである。
より具体的に言うと、俺が少し下を向いて、陽乃さんが少し顔を上げれば、簡単に唇と唇が触れ合う。
少しでも気を抜くと簡単に押されて、陽乃さんに密着してしまう。そのため必死にこらえてぷるぷるしていると、つっと陽乃さんの手がコート越しに胸に触れた。
「……ゆ、雪ノ下さん？　何を……」
「……」
陽乃さんが、俺のコートのボタンを1つ1つ外している。上からは俯き気味の陽乃さんの顔は見えない。何も抵抗出来ずにただ茫然とその様子を眺めていると、全てのボタンを外し終えて、前面をぱらりと開けた。
「……何をって……い・た・ず・ら」
「……～～～～っ」
胸におでこを押し当てて、まるで心臓に直接響かせるように囁く。
……非常にまずい。
もう、ジーンズは痛い程張ってしまっているというのに。

×　×　×

「あっ……うっ、あぁっ、やめ、やめてくだ……さい……っ」

陽乃さんの責めは、想像以上に大胆だった。

コートを開けたその中に腕を伸ばし、コートの内側で俺をぎゅっと抱きしめる。グラマラスな肢体が密着して、甘い匂いと共に信じられない程柔らかい感覚が身体の前面を襲った。

そして今現在、首に幾度となく息を吹きつけている。熱い吐息に理性がじりじりと焼かれていく。

「ふふ……可愛い声出しちゃって……ほぅら、もっと気持ち良くなぁれ～……」

陽乃さんのいたずら心たっぷりの声がしたと思うと、その次の瞬間

――

「……ちゅっ」

「!?」

首に、柔らかくて熱い感触がした。焦って下を見ると、既に唇を離していた陽乃さんがぺろっと舌を出している。

「いきなり唇同士はハードルが高いみたいだったから、こっちにしてみたよ？　どう？」

なにこの鬼みたいな質問。「はい！　超気持ち良いです！」とか言えば良いの？

「や、その……」

目を逸らして口ごもると、陽乃さんがむむむと唸った。

「なぁに、これじゃ足りないの？　しょうがないなー」

この人頭おかしいんじゃないのか。

や、何言ってんですか……と、ツッコもうとすると。

それより先に、同じ場所に再び唇を押し当てられた。

しかも今度は、それで終わらない。

「ちゅっ……ちゅぴっ、ちゅぱっ、ちゅりゅ、ちゅぷ、ちゅぷぷ……んはっ、ちゅっ、ちゅっ、ちゅぷぷ……」

「～～～～～～～っ」

言葉に出来ない。

陽乃さんは俺にだけ聞こえる程度の音量で、いやらしい水音をねちっこく奏でる。その淫猥なメロディーが耳朶を打ち、下半身を熱くする。
舌でなぞり、つつき、何度も吸い付いてきて、まるで「これはわたしのモノだ」と主張する為のマーキングを行っているかのようだ。
俺は陽乃さんを引き離す事よりも、恥ずかしさにより周りにバレたくないという意識が先立って、行動を起こした。
俺たちが居るのは、壁際は壁際でも車両の端なので、隠しようはまだある。
俺は壁に付いた手を片方だけ離して、その手でコートを掴んで陽乃さんの姿を隠した。
片側が壁になっていて、陽乃さんは俺よりも身長は小さいので、こうすれば見てくれは不自然でも陽乃さんの顔を隠すことが出来る。
――よし、これなら大丈夫――
ほっと仮初めの安心に浸っていると、陽乃さんが唇を離した。
「……んはぁっ、ふっ、ふっ……ふぅっ。なぁに、比企谷くん、わたしが他の人の目に触れないように庇ってくれてるの？　それとも……誰にも邪魔されずに、わたしにいたずらされたいの？
「……っ」
ぶるりと震え、喉を鳴らす。
陽乃さんの言葉により、自分の行動に意図していない意図を見付けてしまったようで、急に顔が熱くなる。
「……まだまだ、いっぱいしてあげる」
囁かれた魔性の言葉で、身体中の血流がぎゅんと加速する。
俺はまだ、この電車旅のゴールを聞いていない――。
続く。

（８）

コートで陽乃さんを周りから隠したのは、単にこの痴態を見られたくなくて咄嗟に――と思ったのだけれど。陽乃さんの言葉で、その意志が大きく揺らいだ。

「ふふ……どこまで我慢出来るかな……えいっ」

「……～～～～っ!?」

陽乃さんの両の手が、股間のすぐ周りを妖しく蠢く。ゆっくりと周回しながら中心部に迫ってくるその動きに否が応でも期待してしまい、ジーンズの膨らみが更なる熱を帯びてしまう。

陽乃さんはその変化を見逃さず、くすりと笑う。

「あは……なぁに、そんなに興奮しちゃったの？　嬉しいなぁ……じゃあ、えいっ」

「――――っ」

直前までの焦らす動きから一転して――陽乃さんは、膨らんで山になっている部分に１０本の細い指を一斉に絡ませて、ぐにゅりと握った。

突然身体の奥底まで突き抜けた強烈な快楽に、身体がぶるぶると震えるが……今身体を大きく動かせば、きっと周りにバレてしまう。必死に堪えていると、陽乃さんがたまらなく幸せそうな顔をした。

「ああもう……君は本当に可愛いなぁ。……もーっとイジメたくなっちゃう」

ぞっとする言葉を言い放ったかと思うと、ジーンズのチャックに手を掛けた。

「っ!?　ちょっと……っ！」

信じられない展開に小声で牽制すると、陽乃さんは人差し指を口に当ててチャーミングにウインクした。

「声出すと、せっかく気持ちよくなれるチャンスを逃しちゃうよ？」

や、それ、何もここでじゃなくても……って、そうじゃなくて！

「や、だから……って、う……っ!?」

チャックを開けるとそのままその中に手を滑り込ませて、パンツ越

しに勃起した肉棒を握ってぎた。ジーンズの上からとパンツの上からとでは、与えられる快感の度合いがまるで違う。俺は必死で口をつぐんで、声を殺した。
「あはっ、すごい熱いねぇ……比企谷くん、良いもの持ってるじゃない。……じゃ、直接触っちゃおうか」
「えっ……」
戸惑いの言葉さえ口にする前に。
陽乃さんはチャックの中に手を滑り込ませたまま、その中でパンツをずり下ろし、反り返った肉棒を外気の下へ引きずり出して、亀頭を手の平に含んでぎゅっと握った。きゅっと、ではない。ぎゅっと、だ。
「〜〜〜〜〜〜〜〜っ」
あまりに甘美な快感に、コートを持つ手もぶるぶると震える。戸惑う余裕さえない。
「大丈夫。周りに見えないようにきちんと両手で隠すから……」
陽乃さんが耳に口を近付け息混じりで囁き、亀頭と竿をそれぞれの手で包みこんで、ぎゅっ、ぎゅっと握り込んでくる。
「うぐぁっ……ゆ、雪ノ下さん、さっき、ここで出すのはまずいって言ったんじゃ……」
自分の歯がかちかちと鳴るのを聞きながら、陽乃さんに尋ねる。すると陽乃さんはんーと小さく唸って、にこっと笑った。
「比企谷くんの反応がすごく可愛いから、予定変更しても良いかなって。大丈夫、本当にイク時は停車した瞬間に調整してあげる。そしたらすぐ逃げられるでしょ？」
「……っ」
心臓が凍り付くかと思った。
いっそ助けを呼びたいとさえ思ったが、陽乃さんが手さえ離してしまえば、傍から見れば俺はただ美女に興奮した露出魔にしか見えないだろう。詰んだ。
「さてさて、比企谷くんは綺麗なお姉さんにいたずらされると、一体どれだけ出しちゃうのかな……？」
助けて、マジで。

……これはもう諦めて、如何に早くこの車両から逃げ出すかを考えた方が良いかな……と絶望した気持ちでいると、電車が次の駅に着いた。

×　×　×

もう大丈夫かと思ったが、ここに来てまさかの更なる混雑。

「ありゃー、まーた混んできたね。大変だー」

まるで他人事のように呑気な調子で陽乃さんが呟く。なんで俺のモノを雑巾みたいに絞りながらそんな平然と喋れるの？　にちゅにちゅ音がしてんですけど。

「ところで比企谷くん……良いの？　その体勢で」

「……しょうがないでしょう」

更に混んでから、俺はコートを掴んでいた手を離して、再び両手での壁ドンに戻っていた。乗客密度は更に上がったため、もはやコートで隠さなくても、俺の身体の目の前でいたずらをする陽乃さんの悪行は誰にも見えない。悪行って言っちゃった。

それに、理由はこれだけではない。

「……この体勢以外じゃ、雪ノ下さんに思い切り負荷がかかるんで……」

涼し気を装いながら（出来てないけど）言うと、陽乃さんが目をぱちくりとさせて、目を狡猾に細める。

「ふぅん……立派だねぇ。……これでも、まだ守りたいって思ってくれる？」

陽乃さんの捻じり込む手の動きが更に加速して、ぐっちゅぐっちゅという水音が更に増す。竿を掴む手は時折玉まで揉んできて、激しい快感の中にも柔らかい快感を混ぜてきて、更に快感が増す。

「あっ、うぐぁ……っ！　……そ、それでも、で、す……っ。女の人は男が守るものだって母ちゃんにしつけられてるんで」

答えると、陽乃さんは楽しげに笑う。

「……これでも？」

陽乃さんの身体に、他人も自分も触れていないぎりぎりの状態をキープしていると、今度は亀頭を包んでいた手で肉棒の先半分を強烈

にしごき上げてきた。
「〜〜〜〜〜〜〜〜っ！」
狂いそうな程の快感に視界が霞むが――今ここで力を抜いてしまえば、良くても俺、悪ければどこぞその不特定多数の他人の身体が一気に陽乃さんへ圧を掛けてしまう。それは避けたい。その一心で、腰を震わせながらも必死で今の体勢を保つ。
「……」
陽乃さんは俺の顔を見ながら、何か考えこんでいる。
「……比企谷くん、良いの？　もう出ちゃうでしょ？」
陽乃さんの言う通りだ。正直もう、８割方出かかっている。
でも、それでも。
「……ここでこの手を離す訳にはいかないんで。もし出したら……後処理の手伝いお願いします」
にひっと不自然に笑って言うと、陽乃さんの動きがぴたりと止まった。妙な緊張感に包まれたまま数秒経つと、
「……ん、そっか」
とさらりと言って、手を離し、俺の肉棒をパンツの中に収め、チャックを閉めた。コートの前面だけは開いた状態で、陽乃さんがするりと抱き付いてきた。今度はいたずらっぽくなく、まるでただ甘えるような仕草だった。今さっきまでとの雰囲気の違いにとくんと心臓が鳴る。
「……雪ノ下さん？」
艶やかな黒髪とつむじに向かって呼び掛けると、陽乃さんが顔を上げた。その表情は穏やかで優しい。
「ん、比企谷くん、かっこいいね。怒りもせず、快感に負けもせず、守ろうとするなんて……中々ポイント高いぞ」
「……っ」
にっこり微笑むその表情は凶悪なくらいに可愛くて。
ここから続けられた追撃に、更に理性がぐらつく。
「……ここまで頑張ったご褒美に、もうわたしを壊すくらいの勢いで抱きしめても良いよ？」

「……え……っ」
安心した所で、違う角度からのボディブローを浴びせられる。
俺の胸に顔を埋めて、すりすりとしながら甘えた声で誘惑を続ける。
「ねえ……そんなにわたしのこと抱きしめたくないの？」
「や、だから、そんなことしたら雪ノ下さんが」
「わたしね」
陽乃さんが俺の言葉に割って入る。まるでそんな言葉を聞く必要は無いと言わんばかりに。
そしてすうはあと息を吸って、潤んだ目でとびきりの爆弾を放り込んできた。
「わたし……比企谷くんなら、良いよ？」
「……っ!?」
なんてずるい言葉を……！　首を傾げて尋ねる陽乃さんの魅力は、わざとなんだとどれだけ心から分かっていても、今まで築き上げてきた自衛意識がどれだけ分厚くても、それを軽々と突き破ってくる。
ずがんという衝撃が頭に走ると同時に、電車ががたんと揺れた。そしてそれを合図に、壁に付いていた手をぱっと離して、そのまま陽乃さんの背中に回して――
ぎゅっと、ではなく、ぎちゅっと言うくらいの強さで。
陽乃さんを、強く強く抱きしめた。
――と、その瞬間。
「――――あっ……これ、やばっ……」
陽乃さんは耳元で小さな声を上げて、きゅっと強くしがみついてきて、全身をがくがくと震わせた。息遣いを荒くしながら目をしばたたかせる様子が、事態の異常さを物語っている。
「ゆ、雪ノ下さん……？」
予想外の反応に面食らって陽乃さんの顔を見ると、その目は虚ろな色を孕んでいた。そして口を数回ぱくぱくと開いて何か言ったような仕草を見せたかと思うと、そのままはらりと目を閉じた。彼女の身体からもがくんと力が抜ける。

……え、まさか、これって……？
事態を呑み込めていないうちに電車はまた止まり、空気を読んでいるかのように乗客が一気に降りた。車内が座れる程に空いた為、俺は陽乃さんの肩を抱いて、慌てて空いた席に腰を下ろす。
「……」
焦りで誤魔化していたつもりだが、それでも感じてしまう。
陽乃さんから漂う女性の匂いが、明らかに濃くなったことを。

続く。

（9）

電車の空いた席に座り、陽乃さんをシートの端の、手すりのすぐ脇の席に座らせ、俺はその隣に座る。眠りに就いている（と思われる）陽乃さんへの周りからの視線を気にしていたが、陽乃さんの前に立っている人が女性で助かった。陽乃さんと同じ女子大生くらいに見える人で、陽乃さんを見て「わー、わー、すご、綺麗、わー、わー……」と両手で口を覆って小さくはしゃいでいる。なんだこの可愛い生き物。

電車は自分が乗ったことのない場所まで来ていたようで、見たことは無いがどことなく見慣れたようなビル街を眺める。無機質な街並みはどこも同じように見えるものなのだろうか。つと目をやると、陽乃さんの前に立っている女性は顔の前に本を翳しながら、好奇心旺盛な目で陽乃さんをちらちらと見ている。あんたはどこの古典部部長だ。

「ん……」

陽乃さんが小さく声を上げたため、視線を彼女に滑らせる。今はただ眠っているだけのようで、ほっと一息吐いた。

……それにしても……。

単に寝ているだけの状態だと、本当に、どこのモデルさん、いや女優だよと誇張無しに思う。電車の中吊り広告にちょうど、新作映画の宣伝で今話題の若手女優の写真が大きく載っているが、この女性の横に陽乃さんを並べても全く以て自然だと思えるくらいに、純粋に綺麗だ。

……この人、喋らなければ本当に綺麗で可愛くて胸が大き（自主規制）だよなぁ……なんて、ちらりと見ながらふっと笑っていると、陽乃さんがむにゃむにゃと口を動かした。な、なんだ、寝言だと!? 失礼とは分かっていながらも、はてさてどんな寝言を……と思って耳を澄ます。どんなギャップ萌えにも対応する心づもりでいると、

「……ふふ、比企谷くん、調子に乗っちゃって～……あんまり調子に乗ると、めちゃくちゃにしちゃうぞ～？　……ふふふふ……」

こわっ。

なんでこの人、眠っててても俺のことイジメてんの？　俺のこと好きなの？

あぁ、俺のリアクションを見て陽乃さんの前に立っている女性（もういちいち言うのが面倒だから女子大生のえる、略してＪＤＥと呼ぶ。なんか物々しくなった）が俺のことを陽乃さんの連れと認識したようで、「え、この綺麗な人、この男の人と……わー、わー、わー……」と顔を赤くしながら一人で舞い上がって本で顔を隠した。なんかもう無駄に可愛いから許す。

――と、ここで不意に、電車ががたんと大きく揺れた。その拍子に陽乃さんの身体がふわりと不安定に動き、手すりにぶつかりそうになる。

「あぶな――っとぉ」

陽乃さんの肩を反射で抱きとめて、事なきを得る。まぁ、陽乃さんは今は寝てるんだし――

「んくぅっ……ふぁ……っ」

「!?」

はーん!?

寝てても!?

やめて！　俺そんな色っぽい寝顔知らないから！

あかん、ＪＤＥが今のやりとりに興奮しすぎて、「カップルがいちゃついてるお姉さんすごい綺麗男の人今の感じすごく男前お姉さん今の息遣いすごいセクシー男の人慌ててて可愛いなんなのリア充爆発しないで幸せになれ」と物凄い早口で言いながら、本から顔を出しては引っ込め出しては引っ込めを繰り返している。なんかもうこの人面白すぎて友達になりたい。サイゼの店員さんと言い、妙な人（且つ良い人）に出会うもんだなぁ。

そんなこんなをしている内に、陽乃さんが「ん……」と少し幼い声音で呟いて、ゆっくりと目を開けた。

×　×　×

「ん……ここは……」

陽乃さんが意識を手放す直前とはがらりと変わった光景ではあっ

たが、陽乃さんは目を2～3回だけぱちくりとさせて、無機質な声で「ああ……そっか」と呟いた。
俺をちらりと見て、ゆっくり語りかけてくる。ねえなんで自然に手を握ってきたの？　ねえなんで自然に手を握ってきたの!?　ＪＤＥ！　興奮すんのやめなさい！
「……ん、悔しいけど、予想外だったな。あんなに反応しちゃうなんて」
肩だけ上げて口も歪めずに小さく欠伸をする。なんで欠伸でさえ様になるんだろうか。ふいーっと息を吐いて肩を下ろすと、にんまりと微笑んだ。
「……わたしの身体が、比企谷くんのことを受け入れたのかな」
「……ばか言わないでください」
顔が熱くなった。
恐ろしい爆弾を放り込まないでほしい。さっきのやりとりを思い出しただけでテントを張る自信があるんだから。ちなみにＪＤＥは「え、今のやりとりって何!?　まさかこの2人、もう……!?　キャー！　きましたわー！」とか言ってる。なんか段々本性出てきた？　海老名さんのベクトルが腐に向いてないバージョンだろうか。親戚の方かな。腹立つけど可愛いからなんかもう良いや。
俺の反応を見て、陽乃さんはふふっと微笑む。なんで指絡めたの？
「……次の駅で降りよっか」
「……はい」
そう言って、陽乃さんが俺の肩に顔をこてんと乗せた。その仕草があまりに自然で、あまりに可愛らしくて、本当に魔王なのか、もしかしたら俺が魔王と思ってた人なんて本当は存在しなくて、実は陽乃さんは女神なんじゃないかとか色々しょうもないことを考えていると。
「……ここで比企谷くんの触ったら――」
「だめです」
やっぱり魔王だった。
アナウンスが聞こえ、電車が減速してゆく。周りを見渡すと色々な人が思い思いの表情で降車や出口付近の通り道を譲る準備をしてい

る。
「じゃ、降りよっか」
「はい」
陽乃さんは立ち上がる寸前、もう一度俺の手をきゅっと握った。
×　×　×
降りる際、ＪＤＥ（女子大生のえる）と目が合って、何となく会釈してしまった。どんな反応をされるかとびくびくしていたが、ＪＤＥは俺の会釈に目を輝かせて、何故かヒールの踵をかっつーんと合わせて、目をきらっきらさせながら敬礼してきた。なんかもうまた会いたいわ。濃すぎる。
「ここからどうしますか？」
駅の壁に２人揃ってもたれかかって、次の行動について尋ねる。ちなみに手はもう死ぬ程恥ずかしいから何度か外そうとしたんだけど、そうする度に逃がすまいと指を絡ませてきて、その後しばらく尋常じゃないくらい艶めかしい指の動きをするもんだからもう諦めました。手繋ぐのってこんなエロい事のはずじゃないと思うんです。
「ん……そうだね。ちょっとこの街を散歩してみよっか」
「え……」
え、それ、え、サイゼの惨劇再び？　と絶望した顔をしていると、陽乃さんがふふっと笑う。
「だーいじょうぶだって。変なことしないから」
「や、なんでそう言いながらにぎにぎしてんですか。おかしいでしょ」
「え、これ変なこと？」
「俺と雪ノ下さんはどうやら生まれ育った文化圏が違うようですね」
きっとどこかの官能王国の出身なんでしょう。
「あはは、まったく、君は面白いなー」
けらけらと無邪気に笑って、陽乃さんが腕を絡ませてくる。ちょっと柔らかすぎて心臓が爆ぜそう。
「……本当に、大丈夫だから。ね？」
「……っ、は、はい……っ」
上目遣いで、ほんのりと頬を紅潮させる陽乃さんがあまりにも可憐

で、反射的に返事をしてしまった。
この人は、一体どこまでが演技なんだろう。全て素だと言われたら流石に信じられないが、それでも、今みたいな時だけでも素であるのなら俺も嬉しいし、陽乃さんにとっても多少は良いことなんではなかろうか。まあ、全て演技と言われても今更驚かないが……もしそうだったら、流石に泣きそう。
「ほら、行くよ？」
「あ、はい」
楽し気に俺の手を引っ張る陽乃さんの顔を見て、ふと思う。
この人がまだ幼い頃、きっとこんな風にして雪ノ下を楽しそうに連れ回していたのではないだろうか。
そんな事を思いながら、陽乃さんに合わせて足を速める。鼻唄混じりに歩く陽乃さんは、やはりただの可愛いお姉さんに見えた。

× × ×

予想通り、と言うべきか、予想に反して、と言うべきか。
本当に……普通に、街を散歩した。
ウインドウショッピングを楽しんだり、ファミレスで昼食をとったり、ゲーセンで無理くりプリクラを撮らされたり。その間、スキンシップやからかいは相変わらずだったものの、なんと痴漢行為は０でした！　ノーチカン万歳！
なんだかんだ振り回されつつも楽しんでいる内に、あっと言う間に夕暮れ時。使った電車を乗り継いで（俺は全く覚えてなかったのに、陽乃さんはきっちりと記憶していた。使った事は無いと言われて戦慄が走る。ていうかあなた途中気ぃ失ってたでしょう。どういうこと？）、今は駅からとてとてとのんびり歩いていた。もう知り合いに会ったっておかしくない場所なのに、一向に手を離してくれない。あかん。
「最後さ、公園行こっか」
「いいですよ」
このやりとりにもすっかり慣れてしまい、素直に従って学校近くの公園に。

移動している間に夕陽もどんどん沈んでいき、日没は目の前に迫った頃。
「比企谷くん」
何とは無しに公園の木立を眺めている時に陽乃さんに名を呼ばれ、何事かと振り返る。
「え……」
今まで見た事が無い表情に、時が止まる。
潤んだ目、きゅっと引き結んだ口、俺の手を両手で不安げに握る仕草。
さっき考えていた、演技がどうだとか、素がどうだとか、そんなことがどうでも良くなるようなその佇まいに、ただただ見惚れて、戸惑う。
「比企谷くん」
もう一度俺の名を呼んで、陽乃さんが一歩近付いた。
続く。

（１０）

陽乃さんが俺に向かって一歩近付く。

陽乃さんの顔が近い。身体のどこも触れていないけれど、それでも陽乃さんの熱を確かに感じる程に。

「比企谷くん」

もう一度俺を呼ぶその声は、微かに妖しさを帯びている。

「えっ……」

細く柔らかな腕がするりと首に巻かれる。そしてもう片方の手が後頭部を押さえたかと思うと、陽乃さんのおでこが、俺のおでこにこつんと当てられた。

……ここまで来たら、陽乃さんが何をしようとしているかはもう分かってしまう。陽乃さんの甘い吐息が鼻腔に浸透して、まともな思考が麻痺していく。

きっと、この人はわざとやっている。いきなりその「行為」をしてしまって、俺が「え、えっ、えっ!?」と驚くのを見ても良いのだろうが、それ以上に、今からやる行為が幻でもなんでもなく、ただの事実としてしか俺が受け止める事が出来ないようにしている。こんな状態では、身体も思考も逃げ場が無い。

――唇と唇が、近い。

俺の腕は緊張でぴんと伸びて、手は不自然に開いて固まっている。

陽乃さんは、もう俺の名を呼ばなかった。

「ん……っ」

「――――――っ」

ため息に似た悩ましい吐息を漏らして、陽乃さんの唇がゆっくりと重なった。

「んんっ……」

柔らかな唇の感触が、今のこの状況が夢や幻の類ではないことを突き付けてくる。あまりの衝撃に目を閉じることさえ出来なくなり、陽乃さんの目をまじまじと見ながら固まる。陽乃さんはうっすらと目を開け、うっとりしているのがわかった。

時間にしたら数秒なのだろう。けれど、
「……ぷはっ」
陽乃さんが唇を離した時、まるで何時間もそうしていたかのような感覚に囚われた。
「なっ……なっ……なっ……」
何一つ具体的な言葉を言えずにいると、陽乃さんが口に手を当ててにんまり笑う。
「あら、なぁに？　もっとしてほしいの？　しょうがないなー」
「や、そんなこと言って――!?」
有無を言わさず、2度目の口付け。更に目を見開いて固まってしまう。
しかも今度は、俺の閉じていた口を押し開いて、熱くぬめった舌が口内に侵入してきた。
「んむっ、ちゅるっ、れろ、れろれろ、れるっ、ちゅぴっ、んふぅっ、ちゅるるる……」
「～～～～～～～～～」
先程を上回る衝撃が身体を駆け抜けて、完全に茫然自失となる。
滑らかに蠢く熱っぽい舌が歯並びを舐め、こちらの舌に幾度と無く絡まってくる。
こんな甘美な感覚があるなんて、知らなかった。口の中をかき回されたことによる快感が思考を蕩けさせて、心地良いふわふわとした浮遊感に包まれる。気付けば手を陽乃さんの腰に回していた。陽乃さんはぴくんと反応したものの、さして気にもせず俺の口内を舐り回すのを楽しむ。
「じゅりゅ、ちゅぷぷ、ぢゅぷ、ぢゅぷ、ちゅるるる、ずぞぞ、ずぞぞぞぞぞ……」
「あっ、へぁ……」
舌を強烈に吸い付かれ、纏っていた唾液を根こそぎ持っていかれる。意識を刈り取る快感に、見開いていた目が徐々に細められる。対照的に、陽乃さんの目ははっきりと開かれていて、獲物を食い散らかす獰猛な獣の目をしていた。

×　×　×

「……ぷはっ、……ふぅ。……ありゃりゃ、比企谷くん、すっかり出来上がっちゃってるねぇ、ふふ」

陽乃さんがねっとりと笑う。俺は呆然としたまま漫然と陽乃さんを見つめていた。あまりに強烈な快感は中毒性があるようで、無意識に陽乃さんの唇を求めて顔が近付いていく。

すると、陽乃さんは人差し指を俺の口に当てて、ぱちっとウインクをした。

「ここまで夢中になってくれるのは予想外だったな……お姉さん嬉しいぞ。……でも今日はもうだめ。じっくり慣らしていってあげる。……ふふ、純情な攻めも効果的だったんだねぇ。唇が触れた瞬間の比企谷くんの強張り方といったら」

「……っ」

1回目のキスの時のことを思い出して、顔が熱くなる。

そんな俺の様子を笑いながら、陽乃さんは言葉を続ける。

「今日は思ったよりもすごく楽しかったから、今のはそのお礼……のつもりだったんだけど、そのお礼でまた君にハマっちゃった。ふふ、比企谷くん、やるねぇ」

「え、や、俺は何も……」

「ふふ、良いんだよ。……明日も、またしよっか」

「え……っ」

俺がごくりと喉を鳴らすと、陽乃さんはそれを肯定と捉えたのか、

「……ん、よし、決まりね。……少しは慣れただろうから、今度は比企谷くんからして良いよ？　ちなみに……」

ずいっと顔を寄せて、陽乃さんの端正な顔立ちが目の前に迫る。

「今日はわたしからしてたから、腰に手を回されてもまだ我慢出来たけど……比企谷くんからされたらわたし多分……ね？」

これ以上は言わなくても分かるでしょ、と言わんばかりに言葉を半端な所で止めて、上目遣いで俺を見上げながら、細くしなやかな指を俺の喉仏にとんと置いて、つつつっとへそまでゆっくりとなぞっていく。

陽乃さんのことだから、俺の返事なんて聞かずともどちらにしろ……なんて思っていると。
「……比企谷くんはどう？　わたしとキスしたい？」
「っ！　……あ、や、それは……」
「したい？」
「あ、や、その……」
目を逸らしてどもっていると、再び首に腕が巻き付いてきた。
おでこ同士がこつんと当たり、陽乃さんがぽそりと囁く。
「わたしは……比企谷くんと、キスしたいよ？」
「～～～～～～～っ」
髪が逆立つような気さえする衝撃。
俺の反応を見て陽乃さんがくすくすと笑い、顔を離した。
「ふふ……あ、そうだ、やっぱりもう少し……」
言って、陽乃さんが突然屈み込み、俺のジーンズのチャックに指を掛ける。
「ちょ、ちょっと陽乃さん!?　何を……っ」
俺の言葉など意に介さず、ちーっと音を立ててチャックが下ろされる。正直、抵抗らしい抵抗はこの言葉くらいで、あたふたとしながらもどこか期待してしまっている俺がいた。
陽乃さんはパンツ越しに俺の竿を掴むと艶めかしく指を這わせていき、ぞわぞわとした快感が身体を駆け巡ると同時に、一段と勃起した。
「寒いけど……今なら大丈夫だよね。えいっ」
「ちょっ――」
その言葉が意味するところがすぐ分かり、慌てたのも束の間――パンツを剥かれ、そそり立った肉棒が冬の冷えた外気に晒された。肉棒を見て、陽乃さんは口を縦に開いて「お～」と感嘆の声を上げている。超恥ずかしいんですけど。
「電車ではちらっとしか見えなかったからね。ここでも薄明かりしかないからはっきりとは見えないけど……良いね」
屈んだまま片手を頬に当てて、もう片方の手で亀頭をつんつんとつ

つく。
「比企谷くん。今日の夜は抜いちゃダメだよ」
「……え」
突然の自慰行為禁止指令に面食らっていると、陽乃さんが竿をぐっと掴んだ。んぐぁっと唸って身体を屈めると、上を向いた陽乃さんの顔が目の前にくる。
「その方が明日楽しめるから、ね？」
天使の笑みと、悪魔の囁き。
「や、なんですか、明日何するって」
言うんですか――と言おうとした時。
「……ちゅっ」
「～～～～っ!?」
ぷっくりと先走り汁の玉が浮かんだ亀頭の先端に、陽乃さんがほんの一瞬、ほんの一瞬だけ、口付けをした。
「雪ノ下さん……っ」
理性が弾け飛んで、ほとんど反射的に陽乃さんの後頭部を掴むと、
「だーめっ」
それに抗うように俺の足の付け根に手を当てて、決して唇と肉棒が触れ合わないようにする。
「なんっ……で、です……か……っ」
興奮のあまり歯がかちかちと鳴りながら、必死で力を込める。しかし陽乃さんのこの細い体のどこにこんな力があるのかと思う程抵抗の力が強く、膠着状態が続く。
やがて諦めて手の力を抜くと、陽乃さんは妖艶に微笑んで、舌をてろりと垂らした。
「今のキスはね、君の興奮を煽る為だよ。我慢して、我慢して、我慢して、明日会いに来てくれたら……一緒に、どろどろになろっか」
「……っ!?」
衝撃的なセリフを言ったかと思うと、亀頭にふっと生温かい吐息を吹きかけた。
完全に、陽乃さんの手のひらの上で転がされてるじゃないか。本当

に良いのか――そんな自問も虚しく、本能による言葉が口から流れ出る。。
「……分かり、ました」
渋々答えて手を離すと、
「うん、素直でよろしい。ではご褒美をあげよう」
何ですかそれ――と言う間も無く。
「……あむっ」
「っ!?」
もう今日はここまでだと名残惜しみつつもどこか安心したのも束の間。
陽乃さんが俺の亀頭をぱっくり咥え込み、口を輪の形にして頬をすぼめ、きゅぽっと吸いついた。
「ちゅくちゅく、ちゅっ、ちゅぴっ、ちゅくちゅく……」
「あっ、あがっ、あぁっ……」
俺の腰に手を添え、足を大胆に開き、上目遣いで悩まし気に見つめる。
気持ち良い。今まで経験した何よりも。でもなんで？　我慢させるんじゃ……と思っていたら、時間にしてはほんの１０秒足らずで唇が離れた。
「あ……え……？」
呆然とする俺を見て陽乃さんがくすくすと笑う。
「これで、今夜はもうわたしのことしか考えられないでしょ？」
「……っ」
こ、この人は……っ！
「比企谷くんがお望みなら、さっきのをもう１回だけやって写真撮らせてあげよっか？　待受けにしても良いよ」
「……する訳無いでしょう」
すげぇ考えちゃったよ。何その魅力的な提案。
亀頭にふーっふーっと繰り返し息を吹きかけると、陽乃さんはゆっくり起き上がってくるりと俺に背を向けた。
「今日はほんとにこれでお終い。比企谷くんが我慢してくれたら

……」
半転して、俺を見つめる。その目は穏やかで、それなのに色っぽくもある。
「……いーっぱい、楽しいことしようね」
「……っ」
ごくっ、と。陽乃さんにも聞こえたであろうくらいの音量で、俺の喉が鳴った。
「ふふ、比企谷くんも楽しみにしてくれてるみたいだね。それじゃ帰ろっか。迎えがもう来るから」
さらっと言ったけど、え、なに、この状況を全て想定してたの？
え、どういうこと？
「それじゃあ、また明日ね、比企谷くん」
「あ、はい、また……あし」
「そうそう」
挨拶もさせてくれない。
「……わたしも、自分でするのは我慢するからね。……ちょっと頑張らないとだけど」
「え、ちょ、え？　今の、え、え、え？」
「じゃあねー」
さっきまでの俺との密着は何だったのか、名残惜しくも何ともないかのように陽乃さんが大きく手を振って駆け出していく。まだ表情が読み取れるくらいの距離で、もう一度可愛らしい笑顔で手を振ってきた。小さく手を振って答えると、陽乃さんの姿が消え、直後に車のドアが閉まる音と駆けだしていく音が聞こえる。無駄が無さ過ぎる……。
「……」
唇を触って、さっきの夢のような行為を思い出す。
「……あ」
未だに寒さに負けずそそり立っている肉棒をしまった。
明日、何をされるんだろう、何をするんだろう。
……どうやって、どろどろになるんだろう。

もはや、意地さえ張れそうにない。
不安など無くて、ぞくぞくとした期待感だけが心の中を支配していた。
もうじき夜が来る。冷静になって寒さを感じるようになった身体にきゅっと竦ませて、家に向かって歩き出した。

続く。

（１１）

帰宅後。

ふらふらと玄関のドアを開け、靴を脱ぎ、小さな声で「ただいま」と言い靴下を洗濯機に入れ、手洗いうがい歯磨きをして、部屋に辿り着く。

「……」

無言。

もくもくとコートを脱ぎ、ベッドの上に転がるように倒れ込む。取り敢えず横向きでごろり。

「……」

無言。

大の字に寝転がって、今日一日のことを思い出す。

その結果。

「……」

ぶっちぎりの。

無言。

もはや、叫ぶことさえままならない。奉仕部で文集を作ろうなんてことになったら、文集のタイトルで「氷菓」とか付けちゃう勢い。そうです、わたしが関谷八幡です……。

だめだ、ダメだ、駄目だ。

もう、視覚も、嗅覚も、触覚も、聴覚も……味覚も、完全にあの人――陽乃さんに染まってしまった。

一日前、いや数日前に戻れたら、どんなにか気が楽だろう。

嫌だ……という訳ではない。この……何と言えば良いのか、自分の感情が、自分の心が、ぐらぐらに揺さぶられている感覚が、どうにも不安になる。一度転がって行ったら二度と戻れないのではという不安。それでも溺れてみたいと思ってしまう気持ちが湧いてくることによる不安。様々な感情が入り混じる。

――ここから、どうしようか……。

煌々と光る蛍光灯を見ながらぼんやりと考えていると、ＬＩＮＥの

通知が来た。
「誰から……って、げ……」
いきなりの陽乃さんだった。嬉しいような不安なような嬉しいような……。
内容がどうであれ、今見ると精神的によろしくなさそうだ。今すぐには見ないほうが……って、んん？
もう一度画面をよく見ると、何件も来ているメッセージの最後に画像が添付されている。え、なに、画像、どういうこと？
「……うぐ……」
小さく唸って、指を震わせながら画面に近付ける。好奇心に……本能に抗えないよぉ……！
タップして、メッセージを確認する。
『ひゃっはろー』
どうも。
『今日はありがとうね。すごく楽しかった。』
普通にお礼言うのやめてください。どきどきするから。
『今わたしは服を脱いでます』
なんで!? なんでそれ言ったの!?
『今、全裸になりました』
実況なんだ!?
『興奮してるでしょ』
既読機能がこういう時だけ疎ましい。多分この人にはメールでもバレるけど。
『それで明日のことなんだけど（全裸で話を切り出す）』
ねえ、（）の中身要る？ 要らないよね？
『明日は取り敢えず、学校が終わったら家に帰っておいでよ。話はその後です、隠館さん』
脈絡ねぇの来たな。なんで急に人に疑われっぱなしの巨漢扱いになったの？ 陽乃さん、総白髪じゃないよね？
『それじゃ、最後に』
ん、ん、んんん……？

『(画像添付)』
『おやすみ♡』
「……」
ええと。
ティッシュティッシュ。
はい、セーフ。シーツを赤く汚さずに済んだ。
あの人、頭おかしいんじゃなかろうかって思ってたけど、うん。これはぶっちぎりでクロだわ。
あの人、頭おかしい。
「……寝れるかな、今夜……」
ベッドの上で無意味に正座をして、もう一度添付された画像を見る。
画像は、陽乃さんが自分で撮った、胸を腕で隠しつつ寄せて上げた豊満で凶悪な谷間と、ついさっきの行為を思い出させる瑞々しい唇を映した写真だった。なんであの人本当に脱いでんだ。これ、多分、陽乃さんが抜いちゃダメと言わなかったら3回くらい抜いちゃうやつなんですけど。なんかもうこれを携帯の――
もう1件メッセージが届いた。恐る恐る開いて見る。
『待受けにしても良いよ?』
超高速で部屋を見回した。
見られてる!? あれ、見られてるのかな!? ていうか口に出して言ってる訳でもないじゃん!? あれ!? どういうこと!?
もう1件メッセージが届く。もうやだ……。
恐る恐る開いて見る。
『あー、ダメだ。今日のこと思い返すと、何だか熱くなってきて……あ、濡れて……おやすみ♡』
布団をかぶった。
「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおい!」
はい、予定変更。
アイ、スクリーム。
何!? 何が熱くなったの!? 何が濡れたの!? そしてその後どう

しようと思ったの!?　陽乃さんも我慢するって言って……って、これもうあのことしか考えてないじゃん、俺！
　全力で叫んだ所、ものの見事な壁ドンをされた。
「お兄ちゃん、うっさい」
「うぐ、すまん」
「もぐぞ」
「あれ!?」
　どっかで聞いたことある!?
「噛むぞ」
「部長さん？」
「背中蹴るぞ」
「綿矢さん？」
「やっぱもぐわ」
「え」
　すたすたと歩く音と、ばたんとドアが開く音を聞いて――反射でドアの方へ飛び出した。
　がちゃがちゃがちゃがちゃがちゃがちゃ。
「うおぉぉぉ！　小町、もぐな、もぐな、もがんでいい！」
　ホラーよろしく強制的に開けられようとしているドアを必死で押さえて叫ぶ。
「大丈夫だよお兄ちゃん、お兄ちゃんの表情から反省具合を読み取って、小町の判断でもぐｏｒもぐを決めるから」
「もぐ一択じゃねえか！　いつからそんなバイオレンスキャラになったんだ!?」
「お兄ちゃんが小町の安眠を妨げた、その瞬間から」
「ごめんなさい。ごめんなさい。マジでごめんなさい」
　中々のホラー展開に気を紛らわされて、この夜は妄想で頭を支配されるのを免れる……と思ったんだけど。
　小町事変を切り抜けた直後、ドアの鍵をかけて（夜這いによるもぎ、略してヨモギを防ぐため）、着替えて今度こそ寝ようとしたところ、陽乃さんから一言『……ふぅ』と送られてきたことで一遍に思考を引き

戻された。え、それ何のため息？　何かやり終えた訳じゃないよね？
なんなの？　なんなの！
「……ふぅ」
枕にぼふんと顔をうずめて、ため息を吐く。
……良いように弄ばれてんなぁ。
何がやばいって、この感じが少し楽しいとか思い始めてることだ。
取り敢えず、うつ伏せだと股間が痛いのですぐに仰向けになった。
×　×　×
翌日はもう、朝からひどい有様だった。
結局寝不足だわ、寝不足によって変に興奮してハイになって制服に着替えてもまだ勃ってるわでもう大変。
学校で眠くて居眠りをすれば、夢の中ですかさず陽乃さんが出てきた。そんな出席率高くなくて良いんだけど。
由比ヶ浜に起こされた時がっちがちに勃起してた時は本気で焦った。奉仕部永久追放になりかねんっていうか絶対なっちゃう。
部活中に読んでいた小説で軽いキスシーンが出てきた時は本気で焦った。勃起した瞬間に雪ノ下に話しかけられて唇を見てしまって、姉妹だとどう似ててどう違うのかなどと考えていたら、「どうしたの比企谷くん、顔が罪を犯しているわよ？」と言って腕を抱かれた。顔が罪を犯すってどんだけやばい顔してたんだ俺。
×　×　×
昨日の指示だと家に帰る所までしか言われてなかったので、取り敢えず帰宅する。
「ただいま」
「おかえりなさい、比企谷くん」
「……」
「ひゃっはろー」
……なに、このＳＳのタイトルみたいなやりとり？
「お邪魔しました」
なんだ、家を間違えたか、いっけね、高校３年生にして自宅を間違えるだなんておっちょこちょいだなー☆なんて思いながら外へ出よ

うとすると、陽乃さんに手首をむんずと掴まれた。振り返ると、陽乃さんがわざとらしく頬を膨らませて拗ねている。わざとと分かっているのに可愛すぎて死にそう。

……ていうか、もう。

ツッコミどころが多すぎて。

「……ええと、状況を整理して良いですか……って、あれ？」

陽乃さんの後ろに目をやると、小町が居ることに気付いた。腕を組んで何やらうんうん唸っている。

「ううん……雪乃さんでも結衣さんでもない、新たなお義姉ちゃん候補……と考えていいのかなぁ？　そりゃあ超絶美人だしスタイルも抜群で頭も良さそうだけど、お兄ちゃんこの人得意じゃない気がするんだよねぇ……でも子どもは絶対イケメンｏｒ美人になるよねぇ……ううん……」

家に入れてからする考え事じゃねぇ。あと先を見越し過ぎだ。

陽乃さんは俺を家の中に引き入れてドアの鍵をかけると（なんでかけたんだろう）、小町の下に歩いていった。そして小町が「ほへ？　どうしたんですか、陽乃さ――」と最後まで言葉を言い切らないうちに、豊かな胸元に小町を抱き寄せた。

「ほふぁああ……!?」

腑抜けた変な叫び声が、くぐもって聞こえてくる。

「小町ちゃん、わたしのことお義姉ちゃんって呼んで良いんだよ？　うりうり～」

言いながら、ゆらゆらと緩慢に動く。立ったままやっているせいで、脱力した小町の腕がぷらぷらと垂れ下がって、なんかあずまんがみたいな絵面になってる。

「うへへぇ……お義姉ちゃん……」

はえぇよ。胸が大きけりゃ良いのか……や、大事だけどね！　とっても！

「おいこら小町、あっさり攻略されてんじゃねぇよ。あと雪ノ下さん、俺の小町を誘惑しないでください」

陽乃さんがゆっくり顔をこちらへ向ける。聖母のような穏やかな

表情に一瞬どきりとした。かと思いきや、いつものいたずらっぽい笑顔に戻る。
「ふふ、やだなぁ、わたしが誘惑してるのは比企谷くんだけだぞ」
「なんでそう言いながら更に強く抱きしめてんですか」
小町がくぐもった声で「ふおぉぉ……高まるぅぅぅ……」とか言い始めた。やべぇ。
ていうか陽乃さん、微妙に震えてんじゃん。小町にばっちり気を許してるってことだから良いことだけど。俺が気付くことも予想してるんだろうなぁ……なんて思っていると、陽乃さんが小町を解放した。小町はぷひーと息を吐いた後、「うへへ……楽園がここにはあるんやでぇ……」と何やら出身がぶれる喋り方でぶつぶつ呟いている。どうしたら元の天使の戻るのかしらん？
「それじゃ、比企谷くん、行こっか」
「あ、はい。どこに行くんですか？　どっかの店ですかね」
もはや為す術も無いので、さっさと移動することにする。
「うんにゃ、ここから歩いてすぐのとこだよ」
「え、どこですか？　この近くにそんな程好い店なんて」
「くつろげると思うよ。君の部屋だし」
「ああ、なるほど……って、へ？」
素っ頓狂な声を上げてしまう。
歩いてすぐそこにも程があるけど。徒歩15秒とかだけど。
「ほらほら、案内してよ」
「え……」
ゆるく言いながら、俺にふわりと抱き付く。全身を覆う柔らかな感触に固まった。小町は「にゃぁぁっ!?」と叫んでリビングに逃げていった。待って、逃げないで、置いて行かないで！
俺の耳に柔らかな唇をぴったりと付けて、脳髄に直接囁いてくる。
「比企谷くんのお部屋で……良いこと、いっぱいしよ？」
「……っ」
ああ、これは、ダメだ。
逃げられない。

「……は、い……」
震える声で返事をすると、陽乃さんは微笑みながら離れた。部屋に向かう前の手洗いうがい歯磨きを入念に済ませる間、陽乃さんにリビングで待ってもらうことにする。戻ったら小町が再び楽園間違えた胸元にうずまっていた。何この既に定番扱いになってるコース？
「それじゃ……行きますか」
ぽそぽそと喋ってリビングを出て部屋に向かって歩き出すと、ちょこんと袖を摘まれた。陽乃さんの後ろではソファに寝そべった小町が「うへへぇ……この弾力は神の御業やでぇ……」とかほざいている。羽川さんに更生を依頼したいです。
陽乃さんは上目遣いで見つめて、ふいと目を逸らした。そしてまた、ちらりと上目遣いをする。
「……よろしくね」
「……はい」
うっすら頬を赤らめているのはわざとですよね？　ね？
うん、楽しいこと。楽しいことって世の中いっぱいあるよな。そうだ、爽やかなことをやって遊べば良いんだ。
人生ゲームとか、チェスとか、……ポッキーゲームとか、……ツイスター、とか、……王様ゲーム、と、か。
……思考がもう、ダメだ……。
気付いたら俺の手を握っていた陽乃さんの足元を気遣いながら、自室のドアを開けた。
続く。

（１２）

陽乃さんと一緒に自室に入ると、すぐ後ろでかちゃりと聞き慣れた音がした。

「……ええっと……？」

見ると、陽乃さんが極めて自然な手つきで部屋の鍵をかけている。

……いやいやいやいや。

「ん、どうしたの？」

なんで俺が何かおかしな反応をしたのかなと錯覚しそうな勢いできょとんとしてるんですかね？

「え、や、なんで鍵――」

「わたしここに座っていいかなー」

俺の話を遮り、しかも俺の返事を聞かないまま、陽乃さんがベッドに腰掛けた。ぎしっとベッドが軋む音がして、陽乃さんがすぐさま我が家であるかのようにくつろぎはじめる。

「……は、はい……」

ずっと自分が使ってきたベッドに目をやれば、あの、雪ノ下陽乃が居る。今のこの状況を改めて認識して、ごくりと息を呑んだ。

先は長そうだ。

× × ×

俺がカーペットの上のクッションに腰を下ろした直後、お茶を持ってきてくれた小町が部屋をノックした。俺が返事するよりも先に陽乃さんが「は～い」とやけに明るい声音で返事をして鍵を開けた。さりげなさすぎて一歩も動けませんでした、はい。

鍵を開けたという行為に驚いたのだろう、小町が、

「お兄ちゃん……いくらなんでも、もうなの……？」

台にお盆を乗せながら、小町がジト目を俺に向ける。もう、何だよ。

「待て待て。早まるな、俺は何もしていない」

何を言ったら弁解出来るんだろうかと焦っていると、首にするりと熱を帯びた何かが巻き付いてきた。

「あら、これからするんでしょ？　小町ちゃん、変な声が聞こえちゃっ

たらごめんね？」
『……～～～～～～～っ!?』
俺に後ろから抱き付いた陽乃さんが、とんでもないことを言った直後に俺の耳たぶをぱくりと咥えた。
小町は耳まで真っ赤にして髪の毛を半ば逆立てて、口をぱくぱくさせている。はわわわと可愛い声を上げながら、ぎぎぎと首を不自然に動かして俺と目を合わせた。
「お、お、お、お兄ちゃん……明日お兄ちゃんの顔を見た時、一皮剥けてることを信じてるよ……っ！」
「待て待て待て待て、お前何言って……」
感動なんだか子どもの巣立ちを寂しく思う親心なんだかよく分からない涙を流しながら、小町が俺のツッコミも意に介さず部屋を去った。足音から察するに、どうやら自室ではなくリビングに行ったようだ。「にゃあぁぁぁぁぁ！」とか叫ぶのやめろよ恥ずかしいから。
「……ちょーっと刺激が強すぎたかな？　後で謝っとかないと」
俺に抱き付いたまま、陽乃さんが反省の弁を口にする。真面目なことを言ってるけど、喋る度に耳に息がかかってぞくぞくするんで離れてもらえませんかね。
「や、もう、小町までその調子に巻き込むのはやめてくださいよ。俺はまだ良いですけど」
少し声音に棘が混じってしまっただろうか、陽乃さんが身体が強張り、しゅんとするのが分かった。
「……ごめんね？」
「あ、や、まあ、その、今後気を付けてもらえば……」
急にしおらしくなられても困る。覗かせている顔をちらりと見ると、心底悔やんでいるのか眉根を悲し気に寄せていて、そのギャップに内心どきどきしてしまう。
この後なんて繋げば良いものかと考えていると、
「お詫びに……」
短く告げて、陽乃さんが俺の身体の向きをくるりと反転させて、そのまま俺の唇を奪った。

×　×　×

「んちゅっ、ちゅぷっ、ちゅく、ちゅぴっ、ずろろろ……」

「〜〜〜〜〜〜〜っ」

謝罪ってなんだっけ……まあ良いか、と思考が吹き飛んでしまう程の、濃厚な口付け。唇をはむはむと咥えられ、歯列を舐められ、舌を吸われ、陽乃さんの口内で吸われた舌がねっとりと味わわれる。口だけでなく手も動いていて、張り詰めた股間を愛おしそうに擦っている。

あまりに突然な方向転換に、頭がおかしくなりそうだ。

「……ぷはっ。ちょ、ちょっと、雪ノ下さん……」

肩を押さえて引き離すと、俺の手が触れているからか、微かに震えながら陽乃さんが笑う。その目にははっきりと色が宿っていて、本能だけで動けるのならば今すぐ押し倒したくなった。

「あれ……いやだった？」

困ったように眉根を寄せながらもその口元はうっすら笑みを浮かべていて、首を傾げながら両手で俺の股間を弄んでくる。

陽乃さんは胸元が大きく開いたニットとミニのプリーツスカートという出で立ちで、正直家に入った瞬間から内心股間がまずいことになっていた。抜かずに溜まっているものの量が多すぎて、今すぐこの胸を揉みしだいて気絶させてやりたい……なんて、気遣いの欠片も無いことを考えてしまうくらいには、頭の中が色欲に侵食されている。

「あれれー、だめ？　本当にだめ？　本当に？」

嘘みたいに同じ表情のまま、俺の制止を意に介さずじりじりと近付いて、股間を撫でる手の動きを速める。ジーンズ越しに踊る手のひらの感触に、確実に射精の衝動が高まっていることが分かる。

「ちょ、雪ノ下さん、本当に……っ！」

今はだめです——と言って、無理やり引き離す。俺の言葉と挙動に一瞬きょとんとしてから、陽乃さんはにやりと笑みを浮かべた。

「ふーん、そっか、『今は』だめなんだね」

「あ、や、今のは……」

言葉の綾で——と言葉を続ける前に、陽乃さんがぱっと離れる。

「うん、じゃあやめとく。まずはせっかく貰ったお茶を飲まないとね」
「あ、え？　あ……はい……」
にぱっと笑うその表情は、ほんの１０数秒前までとはまるで別人のものだった。
×　×　×
お茶を飲んでいる間も、陽乃さんは初めに座ったベッド際から動かない。二人の間の１ｍに満たない距離は、いつもならまるで気にしないものなのだけど、ほんのついさっきまでと比べると果てしなく遠く感じる。それがどうにももどかしい。
「ふー、ごちそうさま。小町ちゃん、お茶淹れるの上手いねー。後で言っておこっと」
「はぁ、ありがとうございます」
小町が褒められるのは嬉しいことなんだが……今の状況が状況なだけに、どうしても生返事になってしまう。
陽乃さんはベッドからひょいと降りると、テーブルに置いてあるお盆に湯呑を置いた。……俺の肩に手を置いて。
「……」
何この焦れったい感じ……とやきもきしていると、肩に手を置いたまま陽乃さんがにんまり笑顔で覗き込んできた。
「……なぁに、そんな不満げな顔して」
「……なんでもないですよ」
「そ」
素っ気ない返事をしたかと思うと、俺の唇にちゅっと羽のように軽い口付けをして、再びベッドに戻った。
「……」
はーん!?
さっきから何なわけ!?　マジウケるんですけど!?　や、ウケねぇけど。
一人で流れを完成させるくらいには混乱した。実にメダパニ。
「え、えーと、雪ノ下さん、どうします？　ご飯とか」
多分追及しても無駄なので、話題をさっさと切り替えることにす

る。
部活に行ってからの帰宅だったので、時間はもう夕飯時だった。今の今まですっかり日常の感覚が飛んでいたが、よくよく考えなくても腹が減っている。部屋に来る前に考えるべきことだった。
「あ、そうだね。比企谷くんもご飯食べてないよね？」
この言い方からすると、陽乃さんも食べていないようだ。
「そうですね。学校から直帰したんで」
「あはは、良いねー。奥さん一筋の旦那って感じで」
「何言ってんですか……」
けらけらと笑われて、顔が熱くなるのを感じながら俯く。
陽乃さんが頬に人差し指を当てて、天井を見上げながら小さくんーと声を上げる。この世で誰も勝てないんじゃないかと思うくらいにはあざとい。俺の心拍数をいたずらに上げるのはほんとにやめてほしい。
「今日は親御さん居ないんだよね？」
「なんで知ってんですか……そうですよ」
確かに今日は、両親揃って居ない。どちらも会社関係の旅行だか飲み会だかが入っていたはずだ。プライベートにも割り込んでくる会社のそういうシステムには一生馴染めそうにない。
「小町ちゃんに聞いたんだ。それじゃあ……」
ベッドから降りて、俺の目の前まで来て身体を屈める。目の前に強烈な谷間が見えて顔を逸らそうとしたら、ものの見事に顔を掴まれて視線を固定された。え、なんで俺の目をあなたの顔じゃなくて谷間に向けさせるの？　あー、手を突っ込んだら1日中入れてられそうだなぁ……や、そうじゃなくて。
脳内が大混乱に陥っていると、陽乃さんが耳元に唇を寄せる。陽乃さんがこういった行動をする度に、この人の声も吐息も、その全てが男の生殖機能を最大限に活発化させる為にあるように思えてしまう。
陽乃さんが絶妙な間を空けて、妖しい口調で一言。
「お姉さんが、晩御飯作ってあ・げ・る」
「～～～～～～～～～っ……」

道を歩いていていきなりリバーブローを食らった、というくらいの衝撃。
焦るな、俺。落ち着け、俺。こういうベタなのって皆好きだからこそベタであり続けるんだよな……や、落ち着け、俺。
「……こ、小町に作ってもらうよう頼みま」
「えー、良いでしょう？」
「ちょ……っ!?」
俺の提案の言葉を叩き切って、陽乃さんが俺に覆いかぶさってきた。そして俺の身体にその豊満な肢体を密着させて、耳にぴったりと唇を付けて囁いてくる。
「比企谷くんのためにご飯作りたいんだってばー。ねー、良いでしょう？」
「ちょっ、ほんと、ちょっ……！」
情けない声を上げながら必死で振りほどこうとするが、陽乃さんのすらりと伸びた腕と足は、こちらの力の入れように関係無くするすると絡み付いてきて離さない。
陽乃さんの甘えた声が俺を動揺させる為だと分かっているのに、それでも頭が心地良く痺れてしまう。
や、別に陽乃さんに作ってもらっても良いんだけど。絶対旨いんだろうし。
ただ、完全にペースを持って行かれるのは――
「作らせてくれなかったらヒマになっちゃうから、小町ちゃんが作ってくれてる間比企谷くんのこれ、ずっと弄ってようかな」
「え……」
同じく耳元で囁かれた言葉だが、その声音の温度差にぞっとした。陽乃さんの目を見ると、まるで猛禽類のような瞳孔をしていて心臓がキュッと締め付けられる。締め付けられるのに……股間が異常なくらい反応してしまう。
「や、それは流石に……」
「わたし、男の人の潮吹きって見てみたかったんだー。比企谷くんはわたしが擦るとすーごい感じてくれるみたいだし、多分出来るよ。あ

あ、どうしようかなあ、どっちもすごく魅力的だなー」
　わざとらしい台詞と共に、流れるような動作で俺のジーンズのチャックを開け、パンツの中に手をするりと侵入させ、すべすべの指を肉棒に絡ませてきた。数瞬遅れてぞわぞわとした感覚が身体中を駆け巡るのと同時に、俺がやるより手際が良いんじゃないかという程の速さでするりと肉棒が外にひきずり出される。
「ちょ、ちょっと……っ」
「あー、残念だなー、料理作りたかったなー。でもその分潮吹きが見れるんだから良いかー。……何回見れるかな？」
　陽乃さんは手では肉棒を擦り上げて亀頭をくちゅくちゅと楽し気に鳴らしているが、声音は凍てつく程冷たい。
　……っていうか、これは、もう、ペースどうこう言っている場合ではない。
「……わかりました、料理、お願い、します……っ」
　言うと、陽乃さんの顔がぱぁっと明るくなる。
「ほんと？　わー、ありがとう！　じゃあお礼に……」
「うぐぁっ!?」
　これで手が止まると思いきや、急激にしごき始めた。先走り汁が潤滑油になって、まるで痛むことなく一気に射精の衝動が高まる。
　まずい、まずい、まずい。
　出したい気持ちはあるけれど、なんかここで出すのは悔しい。なんか違う気がする。……何とか止めないと。
　――そう思って、
「雪ノ下さん、良い加減に……っ！」
「んむっ……？」
　陽乃さんの肩を掴んで逆に押し倒しながら、その唇を奪った。
　続く。

（13）

――もう、この人の好き勝手にされてたまるか――。

そんな思いに憑りつかれて、陽乃さんの肩を掴んで押し倒す。一言たりとて言う間も与えずに唇を奪い、間髪入れずに上下の唇を割って舌を差し入れる。

「んふぅぅぅ……っ！」

陽乃さんが漏らした甘い声と吐息が、口内を通して耳と鼻腔に直接染み渡ってくる。あまりの多幸感に一瞬固まってしまうが、すぐにまた動き出し、陽乃さんの口内を丁寧に蹂躙する。

「んふぁっ、あふぅっ、んっく、んんん……っ」

甘い吐息に浸りながら舌先で陽乃さんの舌をつつき、舌先を尖らせて内頬をなぞり、舌を吸い上げて唇で陽乃さんの舌をしごく。

「あっ、あぇっ、はひぁっ、はへっ、ひぁぁぁ……っ！」

陽乃さんが目をしばたたかせて、俺の背中に悩まし気に手の指を這わせる。唇を離して下に目をやると、プリーツスカートがずり上がり下着が見えそうになっていて、細いながらも肉感があるいやらしい太腿を悩まし気にすり合わせているのが見えた。

陽乃さんの反応にぞくぞくしながら再び唇を重ね、手の指を陽乃さんの耳に挿し込んで撫でると、俺の背中を撫でていた手に力が入った。

「んんんん……っ！」

内股をすり合わせていた足が突然ばっと開き、俺の腰をがっちりとロックした。思わぬ力で引き寄せられて、なすがままに勃起した肉棒を陽乃さんの身体に密着させてしまう。

裏筋に確かに感じる、柔らかな生地の感触。明らかに、スカートの感触ではない。恐らく、スカートがずり上がって肉茎とショーツがこすれているのだろう。目には見えていない状況を想像しただけで、たまらない程の昂揚の波が押し寄せてきて、自然と腰ががくがくと前後に緩慢に動いた。その動きに反応して、陽乃さんが目を細めて痙攣する。陽乃さんの下半身は淫らな熱を帯びていて、このままこすり合わ

せているだけで達してしまいそうだった。
一度休憩を挟もうと唇を離すと、
「んんっ……ぷはっ。……比企谷くん、すごいねぇ。こんなにえっちになっちゃうんだ……？」
息を震わせながら、陽乃さんがくすりと笑う。
興奮と、苛立ちと、嗜虐心に煽られて。
「あんたは一体、なんなんだ……っ！」
声を静かに荒げて、陽乃さんの口に右手人差し指と親指を突っ込む。
「ひぇあっ!?」
陽乃さんが目をむく。その、驚いた声さえ艶めかしい。そのまま2本の指で陽乃さんの舌を挟んで口内から引きずり出す。
「……っ」
舌を引きずり出して気付く。
明らかに常人よりも長いと思われる舌に戦慄する。こんなの、淫らなことをする為にあるようなもんじゃないか……そう思って、興奮で肉棒が反り返った。
「……ほら、どうせこんなことされても平気なんでしょう？」
意地悪なことを言いながら、引きずり出した舌を左手の人差し指と親指で摘まんで固定して、そこから舌先までの部分を右手親指と人差し指でしごきあげる。
「あぇあぁぁぁ……っ！」
気の抜けた声に牝の色を混ぜて、陽乃さんが遠吠えのようにか細く鳴く。舌を上に向けているため分泌される唾液も届かず、あっと言う間に乾いてしまう。陽乃さんの舌を潤すためだらりと唾液を垂らし、それで再びしごき上げる。
危なくならないように左手の指で上の歯と舌の歯を押さえているため、遠慮無しにぐちゅぐちゅと指を前後させると、陽乃さんは背中を弓なりに反らせて幾度どなく痙攣した。
「あへぁっ、ひぁっ、ひぇひぃ……っ」
微かな声を漏らしながらも、その瞳の奥には情欲の炎が燃えたぎっ

ている。この目はサイゼでも電車でも、公園でも見た目だ。きっとこの人はもっとされたいし、もっとしたいのだろう。
舌に触れるということは、大抵の人の場合何てことはないだろう。しかし今舌を嬲られているのは、雪ノ下陽乃なのだ。その快感は想像することさえ覚束ない。しかも今は互いの大事な部分が生地1枚を通じて触れている。この愛撫が陽乃さんの身体にもたらす結果は火を見るより明らかだった。
愛撫を重ねるごとに、肉棒に接しているショーツがぐしょぐしょに熱く濡れていく。
陽乃さんに足を絡められたまま、彼女の舌をじっくりと指で愛でて、陽乃さんの目から光が失われたのを見てようやく手を離す。
「あっ……はひぁっ……」
まだ舌足らずの声を上げながら、陽乃さんが俺に絡めていた足をこてんと下に降ろす。
「はぁ……はぁ……まったく、これで少しは大人しく……っ!?」
これだけやればもう大人しくなるだろうと思い、安心して胡坐をかいた瞬間。
陽乃さんの瞳が、ぎらりと光った。

× × ×

「あむっ」
胡坐をかいて、大して長くもない言葉の後半部分を喋る時に疲労で一瞬だけ目を閉じると、その僅かな隙に陽乃さんが勢いよく身体を起こし、そのまま俺に覆いかぶさってきた。仰向けに転がされた次の瞬間に、まだほんの先っぽだけしか舐められたことのなかった肉棒が、丸々陽乃さんに食べられた。
あまりに急な展開に、快感以上に頭が混乱していると、陽乃さんがすかさず長い舌を存分にうねらせ、木の幹に巻き付く蛇のごとく竿に舌を這わせてくる。
「んむっ、ちゅるっ、ぴちゃっ、ちゅぷぷぷ、くぷぷ、ちゅろろ、じゅぷ、じゅぷ、じゅるるるる……」
「あ……あが……っ！」

亀頭だけ舐められた時は分からなかった、舌の長さがもたらす快楽の大きさに慄然として、あっと言う間に高まってきた射精の予感に焦りを覚える。腰を陽乃さんの腕でロックされて動けないまま、足をばたつかせて迫りくるマグマの噴出を必死で防ごうとする。
「陽乃さん、だめ、だめです、それ、やば……っ！」
「ずろろろろ……ぐっぷ、ぐっぷ、じゅぷ、ぢゅりゅ、ぐっちゅ、ぐぽっ、がっぽ、がぽ、ちゅくく、ちゅぷちゅぷちゅぷ……」
「うぐぁぁ……ほ、ほんとに、本当に……っ！」
耐え兼ねて、陽乃さんの頭を両手で掴んで無理矢理引き離す。
「えー？　なんで離しちゃうの？　気持ちよくなりたいでしょ？」
俺に顔を掴まれたまま、陽乃さんがぐぐぐと近付いて、亀頭の目の前で舌をれろれろと蠢かせる。ずるりと伸びた長い舌は今にも鈴口に届きそうで、触れていないのにおぞましい程の快感を想像して下半身がびくついた。
「だ、だめです、本当に……っ」
折角反撃出来たと思ったのに、ものの数十秒で逆転されたショックに打ちひしがれたいところだが、今ほんの少しでも気を抜いたら、たちまちあの悦楽の渦の中に呑み込まれて、ちっぽけなプライドごと全て尿道口から吐き出して、陽乃さんに屈服してしまう。そんな予感がして、震える手で必死で陽乃さんの顔を押さえる。
そんな俺の気持ちを知ってか知らずか、陽乃さんは瞳に淫猥な光を宿したままで、ぷくっと片頬を膨らませる。や、可愛いけど。可愛いけど、その幼い感じと目の妖しさが不釣り合いすぎてもはや笑える。やっぱり笑えない。笑って力を抜いたら最後だから。や、最期だから。
「……なんでだめなのー？　ねぇ、ほら……比企谷くんの、おっきいおちんちん食べさせてよ」
「っ!?　だ、だめ、です……っ」
あまりにストレートに言われた淫語に、もやもやした思考が一瞬全て吹き飛びかけた。しかし陽乃さんが再びれろれろと舌を蛇のごとく蠢かせたのを見て、はっと我に返る。

別に、陽乃さんにしてもらうのが嫌なんじゃない。しかし、さっきも考えていたように良いようにしてやられるのは癪だというのと、その……一度この行為を許したら、底の見えない淫欲の沼に引きずり込まれる気がして、どうにも怖いのだ。この行為を知ってしまったら、一体自分はどうなってしまうのか。いくら杞憂だと思おうとしても、心配は拭えない。
「えー、なんでー？」
陽乃さんが意地悪く笑いながら、再び顔をぐぐぐと寄せてくる。今思えば陽乃さん、手も使えるよね？　四つん這いになったままで敢えて口だけ使おうとしているというこの状況に様々な意図を感じて、マジこの人何なのというシンプルな疑問兼不満しか湧かない。
「本当に、その……すぐ、限界がきちゃいますから」
上ずった声で答えると、陽乃さんがにやりといやらしく口の端を吊り上げる。
「えー？　なに、そんなにぎりぎりなんだー？」
陽乃さんは呑気な口調で話しながら、涼しい顔をして顔をぐぐぐと寄せてくる。
「うぐ……っ」
先に俺の腕の力が限界に達して、徐々に陽乃さんの熱くぬめった舌が近付いてくる。
ちろり、と舌の先が亀頭に触れた。
「うぐぁ……っ！　だめです、ほんとに、だめなんです……っ」
陽乃さんの舌が触れたことでまた力が抜けて、触れる面積が増えた舌先が鈴口をちろちろと舐め回し、カウパーがとめどなく溢れ出てくる。
「ちゅっ、ちゅぱっ……良いんだよ？　ちゅぴ、ちゅぷぷ……わたしの口にいっぱい出して、飲ませて？　……れろ、れろ、ちゅるるる……」
「……っ」
舌先で亀頭を舐りながら、淫らな瞳と対照的な天使のような笑みを浮かべられて、一気に陥落しそうになる。
「だめです、だめ、だめです、本当に……っ」

泣きそうになって本当にどうしようと思っていると、こんこんとドアをノックする音が聞こえた。
「お兄ちゃん、陽乃さん、ご飯持ってきましたよー」
耳によく馴染んだ温かい声を聞いて、はっと我に返る。
小町、なんて良いタイミングで来てくれるんだ！　今陽乃さんはまともに喋れる状況じゃないし、喋ろうとして舌を離したら逃げる事が出来るし、何よりさっき小町のことについて陽乃さんを叱ったばかりだ。そんな無茶な事は、少なくとも小町がすぐ近くにいるこの状況ではまずしないだろう。
さあ、陽乃さん。その長い舌を引っ込めて、どうぞ何事も無かったかのように振る舞ってください！　俺も合わせますから！
――なんていう、俺の甘い考えを吹き飛ばすように、陽乃さんが舌を伸ばしたまま目を細めた。何かろくでもないことをする気だという確たる予感にぞっとしつつも、陽乃さんのあまりに淫靡な表情を見てごくりと喉を鳴らした。

続く。

（１４）

小町がドア１枚を隔てたすぐ向こうにいるこの状況で。

この人は、一体何をしているんだ――？

陽乃さんはいやらしく伸ばした長い舌を口の中にしまうと、ドアの方に顔を向けた。

「小町ちゃーん。さっきはごめんねー？」

「あ、いえいえー！　びっくりはしましたけど、びっくりはしましたけど！」

大丈夫とは言わないんだな。

陽乃さんはドアに顔を向けたまま話を続ける――と思いきや、目線をドアに向けて小町との会話を続けながら、突如手の指を肉棒に絡めてきた。

「ちょ……っ!?」

目と声で抗議をするが、もちろんそんなものは通らない。もちろんって言うのも悲しいけど。

陽乃さんが肉棒に、しゅるしゅると淫猥な動きで指を絡めてくるのに悶絶していると、

「小町ちゃん。今ちょっと取り込み中だから、ドアの前に置いておいてくれる？　ごめんねー」

「うっ……ぐぁっ……」

陽乃さんの指が亀頭を念入りに責め立ててきて、にちゃにちゃという淫猥な音と共に耐えがたい射精の衝動が押し寄せる。小町にばれないように必死で声を殺していると、小町の声が聞こえた。

「了解しましたー！　お兄ちゃん、ファイト！」

「何をだよ……っ!?」

小町がお盆を下に置いた音がした瞬間、視線をドアに向けたために陽乃さんから目を離した。その一瞬の隙を突かれて、再び肉茎が陽乃さんの口に呑み込まれた。

「ちょっ……ま、待って、待って、待って……っ！」

小町がとててと可愛らしい足音を立てて離れていくが聞こえる。

待ってという言葉は2人に対して投げかけたように思えた。
「じゅるっ、あむっ、じゅぷぷ、ごぷっ、んふぁっ、じゅぷぷぷ……」
「あがっ、ぐぅぅぅ……っ！」
陽乃さんはさっきよりも深々と咥え込んできていて、亀頭が喉奥に当たる感触がした。恐ろしい程の快感にぞわっとして陽乃さんの顔を見ると、発情しきった牝の顔をしていて、その顔を見ただけで射精してしまいそうになる。
「ちょっ……陽乃さん、本当にやばいですから……っ！」
顔を引き離そうと手を伸ばすと、陽乃さんは肉棒をぱっくり咥えたまま俺の両手首を掴み、ぎりっと締め上げるような角度で固めたまま、再び口の中で肉棒を蹂躙し始めた。
「うぐぁぁぁぁ……っ！」
腕が脇腹にぴったりくっついた状態でぴんと伸びたまま、がっちりロックされる。少しでも抵抗や逃亡を試みようと動こうものなら激痛が走り、その行為が無駄であることを思い知らせてくる。
快感で足にも力が入らず、抵抗の手段が絶たれた。
陽乃さんはとても楽しそうに目を細めて、亀頭から玉まで満遍なく舌を這わせてくる。舌が持つ独特のザラついた感触に肉棒を撫で回されて、痛みが走らないように腕を固定したまま、何度も背筋をぐにゃぐにゃと悶えさせる。
「じゅぷぷ、ぐぷ、じゅぶ、ずぞぞぞ、ぢゅりゅ、ぢゅっぷ、ぐぽっ、ずろろろろ……っ」
「あっ、あがっ、あっ、あっ、あっ……」
意識を刈り取られそうな快感の波に翻弄されて、無意識に足を彷徨わせて陽乃さんの首を後ろから挟み込んだ。少しでも安定した場所が欲しかったのだろうか。
間もなく決壊を迎えそうな下半身の感覚に打ち震えていると、陽乃さんが俺の足に挟まれたまま、にやりと目を細めた。
何を考えているか全く読めない陽乃さんだが、この時だけは何を云わんとしているのか、手に取るように分かった。
『出して、良いよ』

そんな、シンプルなメッセージ。
次の瞬間、一気に俺を射精へ追い立てようと、陽乃さんの顔が左右に動き出す。
「じゅぶぶ、ずろろろ、じゅぶ、ぐぶぶ、ずりゅ、じゅっぷ、ぐぷ、ずぞぞぞ、じゅるるる……っ」
喉奥と内頬の触感に脳を焼かれ、口内で蠢く長い舌に理性を舐め取られる。
もう、だめだ――。
そう思った時。
「ぎっ……!?」
陽乃さんが手首をくいっと返すと、抵抗さえしなければ痛むことはなかった両手首に激痛が走った。それと同時に口内の愛撫も激しさを増す。
そこから射精に至るまでの１０数秒くらいは、天国と地獄が明確に存在していた。
口淫による、全てを忘れそうな程の快感という名の天国と。
関節技による、余計な動きをしなくても強烈な痛みが走る地獄と。
「あがぁぁぁ……っ！」
陽乃さんの口の動きの激しさと、手首に加えられる痛みが比例する。
狂おしい程の快感が背中を駆け上がり、下腹部の奥で燻る熱い塊が限界を迎えてせり上がってきた。
「もう、出る――っ！」
泣きそうな声で告げると、不意に手首が解放された。何故なのかを考えるよりも先に手が動き、陽乃さんの頭をがしっと掴む。逃げはしないだろうが、それでもたとえむせようが何をしようが逃がさない為に……そう思った、のだろう。自分でもよく分からなかった。
「うぐぁ――っ！」
頭の中が真っ白になる程の快感と同時に、口内で舐られ続けた肉茎が激しく戦慄き、白濁の塊を解き放った。
「んふぅぅぅ……っ！」

大きく膨れたペニスから熱い滾りが濁流の如く噴き出たことで、陽乃さんが口で受け止めながらくぐもった声で悶える。
「んむふぅぅぅ……んむっ、んぐっ、ごくっ、ごくっ、んぐぅっ、んんんん……ごくっ、んんんん……っ！」
全ての精液を、陽乃さんは何とか全て飲み込もうとしていた。陽乃さんの目に涙が浮かんでいることに気付く。
やがて大きな波が去って脈動が落ち着くと、陽乃さんの口の動きも止まった。陽乃さんの顔を押さえ込んでいた足と手を離すと、陽乃さんが口をすぼめてちゅるちゅると音を立てて尿道口から残りの汁を吸い出した。それだけでもたまらず、またむくむくと勃起してしまう。
「ぷはっ……はぁ、はぁ、けほっ、比企谷、くん、かふっ、すごいね。ゼリーみたいに濃かった。あは、こんなすごいのに嬲られたら、わたしおかしくなっちゃうかも……」
「あんたねぇ……」
いたずらっぽく、また妖艶に微笑む陽乃さんにどきどきしながら、さっきまでがっちり極められていた手首をぷらぷらとする。うん、まぁ大体大丈夫そうだ。この人、こんな状況下でぎりぎりまで力加減が出来るってマジどういうスペックなんだよ。
しかし。
「……」
俺の仕草を見た陽乃さんは一瞬目を見開いて、しゅんと眉根を寄せた。
「……ごめんね？　少し……やりすぎちゃった。痛かったでしょ？」
「？　どうしました？」
どうしたのかと思い尋ねると、陽乃さんの視線が俺の手首に向けられる。
「え？　あ、いや……」
突然そんな素直に謝られても……。
頬をぽりぽりと掻いて、本棚に目をやりながら答える。
「まぁ、驚きましたし、実際痛かったですけど。今は何ともないみたい

ですから、別に良いですよ、もう」
　言ってちらりと陽乃さんを見ると、目にふんわりと光が灯った。
「……ほんと？」
「ほんとですよ」
「……ほんとに良いの？」
「だから良いですって。何度も言わせないでください」
「何もしなくて良いの？」
「何ですかそれ。何もしないですよ。良いからまずはこいつをしまわせてくださ――」
　再びてろんと大人しくなった自分のモノを見て何とも言えない気持ちになり、早くしまいたいと言おうとしたところ――
「わたしのこと、全裸で目隠ししてボールギャグ噛ませて腕と足をぎちぎちにしばり上げておもちゃでイジメたりしなくて良いの？」
　えげつない危険球を放ってきやがった。
「だか、らっ、て、俺、あ、え、えい？　いや、その、ええ？」
　やべぇ。
　今の俺、超ダサい。
　なんで陽乃さん、今のえげつない台詞を純真無垢な顔で首をくりっと傾げながら言えるの？　超可愛いけど違和感が半端ないんですけど。タラちゃんが中尾彬の声で喋るくらいの違和感。何だこの例え。落ち着け俺。
　テンパりにテンパっていると、陽乃さんが可愛らしいきょとんとした顔のまま、更に追い打ちをかけてきた。
「おもちゃじゃなくて比企谷くんの手でも良いよ？　わたしそっちの方がやばいかも」
「ちょ、ちょっと、その話やめてください」
　鼻血出そう。やばい。この人何言ってんだ。実際にそんなことしたらあなた無事じゃ済まないでしょう。
　陽乃さんは俺の制止など歯牙にもかけず、勝手に感慨深げに頷く。
「比企谷くんの指で胸もアソコもめちゃくちゃにされてどろどろになったわたしの中に、比企谷くんがこの逞しいものをずぷりと……

あ、これやばいね。わたし一発で意識飛んじゃいそう」
「あんたはどこの痴女だーっ！」
「きゃーん！」
たまらず叫ぶと、陽乃さんは楽しそうに叫んで……よりによって、陽乃さんの話によってがちがちに勃った俺のモノの陰に顔を隠しやがった。何この卑猥なかくれんぼ？
まったくこの人は……と思っていると、陽乃さんがひょっこり顔を出した。うん、顔も表情も超可愛いけど、状況がシュールすぎるのでもう何とも言えません。
「でも……本当に良いの？　比企谷くん。わたしは結構本気でやってもらってみたいかもって思ってるよ？」
「え、いや、ちょ、いやいや、その、あーっと、うん、えーっと」
比企谷八幡、大混乱。
頭をぶんぶんと振る。
考えろ。どうしたらこの地獄みたいな状況を打破出来る？　考えろ、考えろ、考えろ――
あ、そうだ。
「……あー、アレです、また今度、ってことで」
保留。
苦肉の策だが悪くないのではと思いつつ陽乃さんの顔をちらりと見やると、陽乃さんは一瞬ぽけっとした顔をして、間もなく呆れ混じりのため息をふっと吐いた。
「……ん、わかった。じゃあ今度、比企谷くんがわたしの四肢をベッドに縛り付けて、抵抗出来ないのを良いことに何回も何十回もイカせてくれるんだね！　まったく、比企谷くんは鬼畜だなぁ」
「鼻血出ました」
「なんでなの……」
今度は本気で呆れられた。
ティッシュで拭きながら、ふと今の状況を思い出す。
……俺の股間に陽乃さんが顔をうずめたままでこんな会話してたのか、俺たち……。

「あ、小町が作ってくれたご飯」
大事なことを思い出した。なんでマイエンジェル小町、大天使コマチエルが作りたもうた夕食の存在を忘れていたんだろうか、我ながら信じられない。
「ん、そうだね。せっかく小町ちゃんが作ってくれたんだもんね」
陽乃さんが、いつも通り、いやいつも以上に優しく、ふわりと微笑んた。
ああ、ずるい。
どれだけ理不尽な目に遭って、どれだけ寿命が縮む思いがしても、この笑顔を見るとまぁ良いかと思えてしまうのだから。
取り敢えず手を洗わなきゃなぁ……と思いながら、何とはなしに陽乃さんの髪をくしゃりと撫でた。
「んぁ……」
「え……」
うっとりとした顔で艶っぽい声を上げたため、本気で唖然とする。陽乃さんは目を細めて気持ち良さそうに身を委ねている。
そこから数分程、ついさっきまで悲惨且つ淫猥な目に遭っていたことも忘れ、夢中で陽乃さんの頭を撫でていた。もちろんモノはしまった上で。勢いで陽乃さんを抱きしめると、陽乃さんは何も言わずに俺の胸に顔をうずめた。
「ふぅ……ん……っ」
「……っ」
撫でる度に漏れる気持ち良さそうな声に、心が蕩かされる。
――本当に、この人は一体何なんだ……。

続く。

（１５）

動揺しながらも陽乃さんの頭を撫で続けてしばらく経ち、ハッと我に返る。

「あ、小町のご飯……」

ぽそっと呟くと、俺の声に反応して陽乃さんがゆっくり顔を上げた。まるで寝起きのようなぽわぽわした表情で、さっきまでとのギャップがありすぎて、そして可愛すぎて、全くもって落ち着かない。

「ん……そうだね。よ～し、比企谷くん、取ってくるのだ～……」

「え、あ、ちょっと……っ」

まるで今のセリフが寝言であったかのように、再び俺の胸元に陽乃さんが顔をうずめる。う、動きづらい……可愛い……。

小町に申し訳無いが、正直今はほんのちょっとでもこの幸せな時間を長く……と思っていると、陽乃さんが顔をくりんと上げて、いたずらっぽく微笑んだ。

「早く取りに行かないと……また、搾り出しちゃうぞ？」

「イエス、マム。すぐ取りに行きます。すぐ行きます」

「よろしい」

女王様に命令される兵士のごとき勢いで返事をして、陽乃さんをそっと引き離して立ち上がる。脅し文句が恐ろしすぎる。

ドアを開けると、すぐ足元にお盆が置いてあった。料理は幸い冷めても美味しい類のものだった。部屋に戻ってテーブルに料理を置くと、陽乃さんが穏やかに目を細める。

「ん、美味しそうだね」

「そうですね、自慢の妹が作った料理なんで。心して味わってください」

学校で言ったら毎回どん引かれるようなセリフを言うと、陽乃さんはにっこりと微笑んだ。

「ん、そうだね。ありがたく頂きます」

「え、あ……はい。ぜひ」

うぐ……か、寛容だ……。

何これ、これが年上お姉さんという存在なのかと戦々恐々としていると、陽乃さんが小さな声で「あっ」と言った。
「そうだ、手、洗わないと」
「……それもそうですね」
俺はまだともかく、陽乃さんの手は今色々と……うん、卑猥だ。
陽乃さんの手をじっと見つめていると、陽乃さんがふっと妖艶に微笑んだ。
「比企谷くん。一緒に手、洗いに行こうか」
「……っ!? は、はい……っ」
喋っている言葉は極めて普通なのに、異様なまでに心拍数が跳ね上がった。
落ち着け落ち着けと言い聞かせながら立ち上がると――不意に、陽乃さんの手がこちらに伸びてきた。
× × ×
「ちょ……っ!?」
陽乃さんは手を伸ばして、既に閉めてあるジーンズのチャックにその細い指をかけた。事態を認識出来ない内にあっという間にチャックは下ろされ、それと同時に陽乃さんがぐいっと顔を寄せてきて、耳元で熱っぽい息混じりの声で囁く。
「比企谷くんが逃げないように、ちゃんと掴んでてあげる」
「っ!? な、何を……って、うおっ!?」
混乱がやまないうちに、陽乃さんが肉棒をパンツ越しになぞった。たったそれだけの行為で再び勃起すると、すかさずパンツの中に手を突っ込まれ、肉棒をずるりと引き出された。
――掴むって、そんな、犬のリードみたいな言い方しておいて……まさか、俺のを掴んでってことか……!?
いやな予感は当たるもので、陽乃さんは竿の部分をがっしりと掴むと、にこやかに微笑んだ。
「よし、じゃあ洗面所に行こうか」
「……っ、は、はぁっ!?」
全力で抗議の声を上げると、陽乃さんがいやらしく目を細める。

「大丈夫だよ。小町ちゃん、きっと今キッチンでしょ？」
「た、確かに、きっと今は後片付けをしてる頃でしょうが、いくらなんでもそれは……んぐぁっ!?」
　問題なんてあるのかと言わんばかりに、陽乃さんが肉棒をぐいっと引っ張って歩き出し、ドアノブを回す。廊下の冷気が身体を撫でても、肉棒はまるで熱を失わないどころか、益々強烈な熱を帯びている。
「ちょ、ちょっと、雪ノ下さん、ほんとに……っ！」
　泣きそうな声で言うと、陽乃さんが振り返ってにっこり微笑む。
「あはは、比企谷くん、なに泣きそうな顔してるの？　……ほーんと、可愛いんだから」
　言うやいなや、肉棒をぎちゅっと握って、前に歩を進めながら亀頭をしごき上げてきた。
「うあぁぁぁ……っ、や、やばい、それ、やばいですから……っ！」
「ほらほら、頑張れ少年。廊下に撒き散らかしたくないでしょ？」
　しごきながら、陽乃さんは楽しそうに歩き続ける。しかしある程度歩くとぴたりと止まり、くるりと振り向いた。穏やかな笑顔に心がざわめく。
「あ、そうだ。洗面所ってどこ？　まだ聞いてなかったね」
「それは雪ノ下さんが勝手に歩き始めるか……ら……っ!?」
　陽乃さんが不意に手を肉棒から離したかと思ったら、呆然と目で追ってしまう程美しく滑らかな動きで俺の後ろに周りこみ、俺の両腕を背中に回して片手でぎりりと極めて、もう片方の手で再び肉棒を握った。
「あーん、ごめんね、許して？　ここからはちゃんと比企谷くんに案内してもらう……から……っ」
　俺の耳元で艶っぽい声で囁くと、ぐちゅぐちゅといやらしい音を立てながら肉棒をしごき始めた。
「うぐぁぁ……っ!?　ちょ、行きますから、行きますから……っ！」
　今にも達してしまいそうな衝動に駆られながら歩き始めると、陽乃さんが今度はぞっとする程冷たい声で囁いた。
「あ、ちなみに洗面所に行くまでに出しちゃっても、止めずに歩かせる

からね。手も止めないから」
「……っ」
底冷えのする声とそれ以上に恐ろしい言葉の内容に心臓が激しく高鳴る。
「わか……りっ、まし……たっ、から……っ」
変わらず俺を快楽の泥沼に引きずりこもうとする手の動きに、腰をがくつかせつつも耐えながら、洗面所に向けて歩き始めた。
× × ×
「はぁっ、はぁっ、はぁっ……着きましたよ」
「ありゃ、ざんねーん。ここまでだね。案内ありがとね」
洗面所に着くと、陽乃さんはあっさりと手を離した。
「さ、まずは比企谷くんから洗って」
「え、あ、はい」
なんでこの家に初めて入る陽乃さんがこんなに偉そうなんだ……と内心文句をぶつくさ言いながらモノをズボンの中にしまおうとすると、陽乃さんが俺の手をがしりと掴んだ。
「それは出したままだよ」
「え」
「良いから」
「……」
……全然、良くない……。
しかしこの人には文句の言いようが無いので、大人しくオープン状態のまま手を洗う。後ろでぶつぶつと「やっぱりここで一回出させようかなぁ……いやでも流石に……」などという恐ろしい呟きが聞こえる。ここ、あなたにとっては人様の家の洗面所ですよね？　そこんとこ把握してますよね？
実際は特に何かされる訳でもなく、恙なく手を洗い終えた。手当たりってこんなスリリングじゃないと思うんだけどな……俺の記憶違いかな……。
「じゃ、次はあたしだね。比企谷くんはわたしの後ろで待っててね」
「え？　あ、はい」

なんで場所の指定を……？　と思っていたが、その理由はすぐに分かった。
「……」
陽乃さんが、わざとらしく尻を突き出して、手を洗いながらも緩慢な動きで形の良い尻を振り始めた。プリーツスカートの奥にある下着が見えそうで見えなくて、もどかしさと興奮が爆発的に高まる。
「う……」
まるで動物の求愛行動に魅せられたかのように陽乃さんの下へふらふらと2歩3歩と歩み寄る。陽乃さんはうがいをしているのかこぽこぽと音が聞こえるが、今はそちらに目をやる余裕も無い。外気に晒されたままの肉棒は反り返る程に勃起して、鈴口にはカウパーが新しくぷっくりと滲んでいる。
甘い水に惹かれる蛍のように、悩ましい動きを続ける美しい臀部に本能的に震える手を伸ばすと、柔らかそうな肉に触れる寸前で陽乃さんがくるりと振り返った。
「あ……んんっ？」
情けない程に名残惜しそうな声を上げると、陽乃さんがちゅっと軽く口付けをしてきた。そして俺の口に一本指を当てて、楽しそうに目を細める。
「んふっ。比企谷くん、えっちだねぇ～。……でも、まだまだここからだよ？　じっくりね、じ～っくり……」
「……っ」
唇に当たっている人差し指の温もりを感じながら、陽乃さんの言葉に身体を固まらせる。
陽乃さんがつと視線を下にやると、ふっと笑った。
「あ、それもうしまって良いよ。悪戯するタイミング逃しちゃったし」
「……はい」
振り回されっぱなしである。
すごすごとチャックを閉めている内に、陽乃さんは手を離した。洗面所の出口に立ったところで、陽乃さんがくるりと振り返る。その表情は優しく美しく、振り向いただけでそれが一枚の絵画として成り立

ちそうな程に映える光景だった。
「ほら、帰ろ？」
「え、あ、はい」
陽乃さんが「行こう」ではなく「帰ろう」と言った事にひどく心臓を高鳴らせながら、どうせそれも計算だろうとは思いつつも、今日これからのこと、そしてもっと先の事まで妄想を膨らませてしまって、恥ずかしさで顔が熱くなった。
部屋に着くまでの短い間、陽乃さんは俺の手を握っていた。その手は柔らかくて温かく、もはや冬の廊下の寒さなどすっかり忘れていた。
続く。

（１６）

食事の前の手洗いって、こんなにハードな行程だっけな。
そんなことを思いながら、陽乃さんと手を繋いで部屋に戻る。
「んむっ？」
部屋に入ってドアを閉めるなり、陽乃さんが身体の向きをくるりと変えて口付けをしてきた。陽乃さんの唇のぷるんとした心地良い感触にほんの一瞬浸ると、陽乃さんはすぐに唇を離してクッションの上に座り込んだ。
「……」
今さっきまで陽乃さんの唇と交わっていた自分の唇をもぞもぞと動かす。妙に寂しい。この人、手口が巧妙すぎるでしょ……。ほら、笑ってる！　俺のリアクションを見て笑ってるよこの人！
俺の忌々し気な視線など歯牙にもかけずにテーブルの上を眺めてから、陽乃さんはぱっと俺に顔を向けた。
「さ、ご飯食べよ？」
「……」
「比企谷くん？」
「え、あ、すいません。そうですね」
……言えない。クッションの上で綺麗な正座をしている陽乃さんのスカートから伸びる足があまりに美しくて目を奪われてたなんて。ましてスカートが短い分、これはもしかしたら何かの拍子にさっき見ることが叶わなかったスカートの奥が見えるのではなどと思っていただなんて言えない。言えないよ……。
「あ、ちなみにスカートの中身って案外見えないからね」
「あれ!?」
なんかすんごいナチュラルに心を読まれた!?　あれ!?
動揺しながら陽乃さんの隣に腰を下ろす。何でバレたのかと悶々としながら胡座をかくと、太ももに陽乃さんの手がそっと触れた。
「比企谷くん」
「は、はひっ、なんでしょう」

にっこり笑顔が怖すぎて、久しぶりに裏返った。陽乃さんは俺の返事にくすりと微笑んで、もう片方の手を自身の太ももに置く。
「わたしの足、見すぎだよ」
「……すいません」
超バレてた。死にてえ。
「あと、スカートと足の境目を見すぎだね。『その中を見せてくださーい！』って顔に書いてあったよ。それはもうはっきりと」
「……はっきりとですか……」
もはや軽やかに死にてえ。
小町のご飯を目の前にしながら絶望に沈んでいると、陽乃さんが俺を見てけらけらと笑う。くっそ、楽しそうでほんと腹立つしやたら可愛い……！
「それじゃ、ご飯食べよっか。ご飯食べてる途中もしくはその後でスカートの中見せてあげるね」
「え」
「いただきます」
「え」
「ほら、比企谷くんもちゃんと言わないと」
「え、あ、いただきます」
「ん、よし」
なんかすんごい爆弾を放り込まれた状態で、陽乃さんとの食事が始まった。

× × ×

「……」
陽乃さんから放り込まれた爆弾により。
「……」
気も、そぞろ。
「……」
そぞろそぞろ、大そぞろ。
「ん、美味しいね」
「……ですね。……」

「小町ちゃん、ほんと可愛いし家事も出来るし……良い義妹を持てて幸せだなぁ」
「……」
「今度小町ちゃんと遊び行こうかな。そこで比企谷くんの弱点とか色々聞いちゃおっと」
「……家事が出来ることをいつの間に把握してたんですか……あと義妹とか言わないでください恥ずかしいから……」
「小町ちゃんと結託したら、今後比企谷くんいじり……いじめがもっと楽しく出来そうだなぁ。あー楽しみ楽しみ」
「……俺抜きで小町と外出とか小町が心配過ぎるんですけど……」
「あ、小町ちゃんとたくさんお話しておいて、小町ちゃん伝いで比企谷くんにわたしの良いところを話してもらうのもありかな」
「……なんでいじりをわざわざいじめって言い直したんですか……」
「比企谷くん」
「……何でしょう？」
「会話、一つずつずれてる」
「……あ」
コントみたいなことをしていた。何だこの器用なボケは。
「ご飯食べ終わったのも気付いてないでしょ？」
陽乃さんの指摘により、ちらりと視線を手元に下ろして、とっくにご飯を食べ終えていたことに気付く。
……や、俺、どんだけ気になってんだよ……。
「比企谷くん」
「……っ」
急にずいと近寄った陽乃さんの息が耳にかかり、意識が一気に覚醒する。
「……な、なんでしょう？」
めいっぱい首を逸らしながら答えると、陽乃さんの手が顔に伸びて、目線を彼女の方に強制的に向けられた。陽乃さんはいたずらっぽい笑みを浮かべていて、これから何を言われるのかと心臓がばくばくする。

「もう……どれだけ気になってるの？　わたしのスカートの中」
「っ……や、そ、そんなことは……」
精一杯平静を装うが、この人の前では意味は無さそうだ。
陽乃さんの手が太ももに添えられて、肩が密着する。柔らかな二の腕の感触と甘い香りにくらくらしていると、陽乃さんがにやりとワルそうな笑みを浮かべた。
「どうするの？　わたしがクマさんパンツだったら」
「またすごい例えを出してきましたね……」
まさかの流れに却って冷静になった。く、クマさんかぁ……陽乃さんが履いてたらギャップがあってそれはそれでかわい……いやでもなぁ……。
「今、わたしの下着姿想像してたでしょ」
「……そんなことは……」
超あった。
なにこれ、俺陽乃さんにスカートの中一つでどんだけ振り回されてんの……と悲しみにくれていると、陽乃さんがにっこり微笑んで、テーブルの上の食器を手際よく片付けた。
「うおっ……？」
俺の首にするりと手を回して、滑らかな動きで押し倒される。動きのあまりの流麗さに、自分が押し倒されているのだと分かっても身体が途中で動くことはなかった。
カーペットの上に倒されて仰向けで天井を仰ぐと、いつもと違う見え方をする蛍光灯に目が釘付けになった。その光にすっと影が差して、何事かと目を凝らすと——陽乃さんが膝立ちになって俺の両腕を足でがちっと挟み込んで固定していて、顔だけ俺の真上にぬっと覗かせいた。これはもしやと思って視線を下にやると、陽乃さんの手はさりげなくスカートを固定していて、中が一切見えないようにしていた。うーん、残念。
影になって表情がはっきり見えないまま、陽乃さんの声が真上から降り注ぐ。
「わたしからすれば、こんなのチラッと見せればそれで終わりなんだ

けど……どうやら比企谷くんは焦らした分だけわくわく感が止まらなくなるみたいだね。よしよし、面白くなってきた。……たっぷり興奮してくれてた方がこの後都合が良いから……いーっぱい焦らしてあげる」
「……なっ……」
抗議したいこと、質問したいことが多すぎて、却って一言も言葉に出来なかった。
ごくりと息を呑んで次の展開を待つと、陽乃さんがスカートを押さえる手をぱっと離した。その行為を目撃して、反射的に視線を下に向ける――よりも先に、陽乃さんの顔が目の前に来たことで固まってしまった。
「……今、見ようとしたでしょ？」
「……や、そ、そんなことは……」
言いながら目を逸らすと、陽乃さんの手が俺の両耳の横のカーペットに置かれていることに気付いた。やだ、これが床ドン……？
普通逆だろ、いや俺はやらねぇか……と思ったけどさっき反撃で襲ってたわ俺……などと悶々としていると、陽乃さんが手を自分の胸元に寄せて――ただでさえ大胆に開いた胸元を、更に広げた。
「ちょ、ちょっと……っ!?」
腕を固定されているが為に手で顔を覆うことも出来ず、全力で目をつぶる。柔らかそうな双丘が大きく覗いた瞬間にむわっと甘い牝の匂いが香って、下半身に血液が一気に流れ込んでズボンの下で痛い程に勃起した。
「あはは、男の子は興味があるものが多くて大変だね」
「……？」
陽乃さんがくすくす笑いながら、すっと俺から身体を離した。急に自由を取り戻したことによる浮遊感と、スカートの中身を見せてくれるはずだったんじゃ……と結局ばりばり期待している自分に呆れる気持ちとで頭の中がごちゃまぜになっていると、陽乃さんがいやらしく目を細めて妖艶に微笑んだ。
「……今ここで見せてあげようかと思ったけど、ちょっと予定変更し

ようかな。ここまででも十分興奮してくれてるみたいだし」
「え……」
「比企谷くん。ゲーム、しよっか」
「……っ？」
陽乃さんからの突飛な提案に、思考が働かなくなる。なに、ゲーム？　どういうこと……？
「大丈夫、やることは簡単だし、別に勝ち負けがある訳じゃないから」
言って、俺の胸に手を這わせて妖しく蠢かせる。的確に指の腹で乳首を捉えてしゅるしゅると撫でてきて、ぴくぴくと反応してしまう。
「ね、どう？　やる？」
「うっく……うぉっ……や、やるしか選択肢はないんでしょう？」
用意された回答が「イエス」「はい」「ぜひ！」くらいしか無いんだもの。
「あはは、分かってるじゃない」
陽乃さんは笑って、俺の首に手を回したかと思うとそのまま滑らかに俺の身体を起こした。そして俺にちゅっと軽い口付けをして、目を細める。
「それじゃ、ルールを説明するね。まずは――」
陽乃さんの妖しい熱を持った言の葉が耳朶を打つ。
慣れ親しんだ部屋の空気が、甘く歪んでいくような気がした。

続く。

（17）

「ゲームって言うのはね、一言で言うと『脳内デート』だよ」
「え……？」
何ぞそれはと首を傾げる。
陽乃さんは胡座をかいている俺の横に回り込んで、俺の肩に体重を預けて座っていた。この時点で興奮しすぎてどうにかなりそうなんですけど。
しかし、脳内デートって？
想像してもさっぱり分からんのだけど。
俺の疑問が前面に浮かんだ表情を見て、陽乃さんがくすりと笑った。
「ちゃんと説明するから大丈夫だよ。……とは言っても、実際にやって見せた方が……いや、正確に言えば『言ってみせた方が』分かりやすいかな。取り敢えず始めてみるよ」
「え、え、え？」
取り敢えず始めるという言葉に胸騒ぎを覚えながら、なんであんた俺の内腿のかなり際どいラインを撫でてんだよというツッコミを心の中でする。
「始めれば分かるから。あ、でも最低限必要なことだけ言っておくね」
「はい」
「これはあくまで『言葉による』ゲームだよ。わたしが取り敢えず喋るけど、比企谷くんもいつ喋ってもオーケー。喋った内容はよっぽど支離滅裂じゃない限り、わたしは全部受け入れるから。……だから、わたしが言う内容も全て受け入れてね？」
「……っ」
耳元で囁かれた妖しい言葉で、下腹部にぞわりと紫色の快感のもやが立ち込める。
「あと、これも言っといた方が良いかな。……『言葉による』ゲームではあるけど……比企谷くん、わたしの身体、触りたくなったらいつでも触って良いからね？　断りも入れなくて良いから。……わたしも

触るからね」
「……っ!?」
耳元に息をふっと吹きかけられて、心臓が止まりそうな程の衝撃を受ける。
「じゃ……始めよっか。あ、それと」
まだあるのかというのを顔に出さないようにしながら、続きを促す。
「……現実でのわたしたちの関係を気にせずに、比企谷くんがやりたいようにやること。いい？」
「……？　はい」
「ん、よし。それじゃちゃんとイメージしたいから、お互い目を閉じよっか。いい？」
何が何だか分からぬままに。
「……はい」
声を震わせながらこくりと頷いて、ゆっくり目を閉じた。
×　×　×
「まずは待ち合わせだね。場所はショッピングモールの入口かな」
「あ、そういう感じですか」
陽乃さんの最初の言葉ですぐさま感じが掴めて、胸を撫で下ろす。
要は、「互いの言葉でデートの具体的な状況や会話を作り上げる」ということだろう。「何処其処に行って、どんな会話をして、どんなものを見て……」などといった感じだろうか。
……正直、普通にやったらこれ以上無い程つまらないものになりそうだ。それなら直接行けよって話になるし。一体どうやってこの話を面白くするんだ……まぁ、面白くならなくても良いんだろうけど。しかし陽乃さんの意図がいまいち読めない。
著しく疑問に思っていると、陽乃さんがくすりと笑う声がした。目を閉じているだけで、妙な緊張感が走る。
「服装は何が良いかな……じゃあわたしは、比企谷くんに命令されたってことで、コートの下は全裸かな」
この人頭おかしいんじゃなかろうか。

「却下です」
「えー？　わたしが言ったこと、全部受け入れてくれるんじゃないの？」
「あそこで俺は何も返事はしてませんよ」
「でも最後に『はい』って言ったでしょ？　あれでもう全てに対して『はい』って言ったことになるよ」
「なりませんよ、理不尽すぎるでしょう」
「じゃあ黒ビキニ？」
「その路線から離れてください」
　コートを脱いだら黒ビキニってシュールすぎるだろ。痴女だろそれ。陽乃さんは俺のつっぱねに対して、不満げにむーと唸る。多分今顔を見たら頬を膨らませてるんだろう。そんなのわざとやったって俺はなんとも……やっぱ超見たい。でも見たら多分すぐバレるからやめておく。バレそうという根拠は無い。本能。
「でも水着は見たいでしょ？」
　ほらこの人、こういう絶妙に痛いとこ突いてくんだもん。鬼畜かよ。
「……ノーコメントで」
　ためにためて答えると、陽乃さんがあらあらと楽しそうに言いながら内腿を撫でてきた。やめてやめて、指を立ててつつつーっとなぞるのやめて！
　答えてなお、陽乃さんの攻撃はやまない。
「じゃあ、今度温水プール行こっか、人があまりいないタイミングで。それともお風呂で水着着て挟んであげるのが良い？」
　あかん。
「挟むって何をですか。パンでハムでも挟むんですか」
「え、何、わたしに具体的に言わせるつもり？　比企谷くん、変態さんだね～」
「うぐ……」
　聞いてみたいとか思ったけど、それはまだやめておこう。まだって何だよ。

ああ。
なんか、分かってきた。
こんなのどうやったって面白くならないだろって思ったけど……この人が俺と遊んで、いや、俺で遊んでいた今までのやり方を考えて鑑みると、見えてくるものがある。
この人、こういうエロティックなくだりを逐一挟んでくる気だ。サイゼの時は実際あんなことをやったことに加えて、現時点で既に一度口でしたこの段階で、妄想でこんなことを話そうというのだから……もうどんなことを言われるのかと考えただけでぞくぞく……あ、いや、恐ろしくなる。
しかも、互いに目を瞑って、言葉だけでこの話をするという、この状況。
視覚を閉ざされて、今働いているのはメインで聴覚、そして嗅覚か。あ、触られてるから触覚もだな。さわさわ。一つの感覚を閉ざすとその他の感覚が鋭敏になるというから、今から聞く内容により起こる精神の高揚は並々ならぬものがあるだろう。
……ここから、もし陽乃さんが仕掛けてきたり、俺が我慢出来なくなるようなことがあれば（既に一回決壊してるしね、俺の理性）、一体どうなってしまうのか……想像しただけで喉を鳴らしてしまう。
とにかく。
これは、きっと。
回りくどいくらいに遠回りな、「言葉責め」なのだろう。
そう気付いた時、知らず知らずのうちに手を強く握りこんでいて、洗ったばかりの手には既にじっとりと汗が滲んでいた。
「比企谷くん、どこ行きたい？」
耳元で艶美な声で囁かれて。
「じゃあ、まずは……」
開けてはいけない扉を開けたような、そんな感覚を抱きながら、俺と陽乃さんの、言葉だけでのデートが始まった。
× × ×
「ふーん、映画館か。まあ悪くはないかな」

暗闇の中で、陽乃さんがいつもの調子で話すのが聞こえる。
ただいま、絶賛デート中。
ただし、脳内で。
一度言ったように、これが本当にただのデートを言葉で言うだけだったら、「何この想像力を養いますとかっていう名目で授業でやりそうなやつ」と思うだけの、退屈極まりないものだっただろう。
しかし、この人は、雪ノ下陽乃は。
絶対、そんな普通のデートで終わらせるはずが、ない。
「何を見ようか」
問われて思考する。なるべく当たり障りの無いもの……。
よし。
「……ポニョ、ですかね」
今。
すんごい小さな声で「……はい？　……はぁ」って言うのが聞こえた。すんごい小さい声で。
「時間設定が分かんないんだけど。今何年？」
「ごめんなさい、もののけ姫で」
陽乃さんの糾弾じみたツッコミに頭の中がワニワニパニック。T字路を直進する勢いで混乱している。
「なんで更に遡ってんの？」
どうしよう、すごい淡々とツッコまれる。
「じゃあわたしが決めちゃおうかな。――ね」
「え……」
陽乃さんが提案したのは、最近公開された、過激なベッドシーンが話題になっている映画だった。ＣＭやテレビでの宣伝をよく目にする。
「えーっと、でも、俺それ見たことありませんよ」
「大丈夫、わたしも無いから。第一、映画の内容を話し合ったってつまんないでしょ？」
「あ、それもそうですね」
ここで誰と誰が言い争って、とか想像で言うなんて、想像したくも

ないくらいつまらなそうだ。
「そうそう。……だから、そういうシーンがある映画を見ていて、その間わたしたちが、暗がりの中で何をするかっていうことが重要なの」
「え」
「はい、じゃあ中に入るよー」
「ちょ」
「あ、その前に持ち物確認しとくね。えーっと……うん、ちゃんとウェットティッシュはバッグに入ってる。よし」
おい。
「ちょ、雪ノ下さん、それって」
「はい行こう行こ〜」
言葉だけで話しているにも関わらず。
陽乃さんが俺の手を握って鼻唄混じりに引っ張って行く姿が、極めて鮮明に浮かんだ。

続く。

（18）

陽乃さんとの脳内デート、続行中。

現在、陽乃さんの指定により、濃厚ベッドシーンが話題の映画を見に来ていた。

「はい、上映部屋に入ったよー」

陽乃さんがのんびりと状況を説明する。

脳内デートでの状況の指定は互いに権利がある。なるべく変なことにならないように……。

よし、と心の中で気合を入れて、ぐっと握り拳に力を込める。

「あー、結構人が居ますね。こりゃあとてもじゃないけど、普通に観る以外のことは」

「あー、がらがらだね。公開中のはずなのに。昼間に観る気は起きないのかなー。うーん、わたし達の他には……うわ、一人で見に来てる人が前の方と真ん中手前に……うん、2人しか居ないみたいだね。じゃ、私たちは一番後ろの奥に座ろっか」

「……」

俺の方が、先に言ったよね？

「えーと、雪ノ下さん、あの」

「あー、がらっがらなのかー、しょうがないなー。……じゃ、比企谷くん、後ろ行こっか」

理不尽だ……。

「……はい……」

引き続き脳内で、陽乃さんに手を引っ張られていくのを想像しながらも場面は進む。

× × ×

「うわー、冒頭からベッドシーンだ。うひゃー」

陽乃さんがわざとらしく驚く。この言ったもん勝ち感、すごいな……。ちなみに俺は陽乃さんが今の言葉を喋る直前まで、映画泥棒のことを思い浮かべてました。勝手に振付とか考えるの楽しい。彼（？）が楽しそうにボックスステップを踏む姿を思い浮かべて勝手に

和んでみた。
「……俺はベッドシーンなんてまともに観たことないですよ」
小学生の頃家族でテレビを見ていた時（あの頃はまだ両親とも今ほど社畜になってはいなかった。平和な時期だった、うん）、ベッドシーンが流れた時の気まずさを思い出してしまい、その後見ようと思えば見られるタイミングがあっても、忌避するように見ていなかった。ちなみにベッドシーンが流れたとき、小学校低学年だった小町は「ほえ？　お母さん、あれなにー？」と可愛く首を傾げて可愛く質問していて（超可愛い）、母は抜群に気まずい顔をして「え、えぇっとね……お、お父さん、何とかして！」という目配せを親父にするも、当の親父は朝読んだ筈の新聞を熟読するという下手極まりない逃げ方をしていたのを鮮明に覚えている。その夜両親の部屋で母が親父を叱る声が聞こえてきて、物凄く切ない気持ちになった。ケンカにさえなってなかったし。
ああ、この状況が緊張しすぎて、つい現実逃避してしまった。
具体的な描写を何とか避けようとする俺の意思は見え透いているのか、陽乃さんがくすりと笑って内腿を撫でてきて、耳にふっと息を吹きかけた。
「わたしも観たことないよ。だから、想像しよっか」
……妖しい流れになってきた……。
「あ、俺アレなんです。こういう映画ってどこまで描写するのか分からないから、全然加減が分からないんです。だからやっぱり今からでも違う映画に」
「わたしも分からないから大丈夫だよ。それにこれはあくまで想像だから。さ、考えてみよう」
逃げ場が無い。
「……じゃ、じゃあ……」
「うんうん」
「まず、２組の男女がベッドに入ってます」
「それ４人になるけど」
間違えた。いかん、テンパっている。「何頼もうか」「あたし、同じ

のでいいよ」「じゃあ、ラーメン２つ」「あたしも」という黄金パターンのコントみたいになっていた。
「えーと、２人の男女がベッドに入って、布団をかぶってます」
「そっか。それで、男の人が顔を出して、何やら仰向けで気持ち良さそうにしてるね。何をしてもらってるのかな？」
　え、こんな責め方ありますのん？
「え、ええっと……」
　思考を詰まらせ、答えに詰まる。下半身に血液が流れ込み、徐々に欲望が屹立していく。じわじわと真綿で締められるような感覚は、決して一時で済むものではないのだろう。きっと、ここからどんどん……。
「……お、女の人に、モノを触ってもらってます」
「モノって……なぁに？」
「うぇ……っ!?」
　言って、陽乃さんが俺の首に手を回して、ぐいと顔を近付けた。
「ねぇ、モノって……なぁに？」
　耽美な声を、吐息がかかる程近くで耳から流し込まれて、身体全体に甘い痺れが走る。ズボンの中で、肉棒が狭そうにびくびくと蠢いている。
「や、それは、その……」
　面接でも受けているかのように両手を固く握りしめて、唇をきゅっと引き結ぶ。答えられずにいると、陽乃さんが更に唇を近付けた。
「もう……ちゃんと答えてよ。……おちんちん、でしょ？」
「……っ、……は、はい……っ」
　蠱惑的な響きを持った声で淫語を囁かれて、背中に稲妻が走った。今すぐ社交界に行ったとしても、容姿の面でも礼儀の面でも何ら問題の無いであろう気品を持つ彼女が、こんな言葉を……そう思うと、言い知れぬ背徳感を覚えた。
　陽乃さんは身体を俺の方に向けて密着して、尚も続ける。左腕に感じる熱と柔らかさ、そして漂う甘い香りに思考が陽炎の様に揺らぐ。
「それで？　その女の人はどんな風に触ってるの？　それに女の人の

口が空いてるよね？　口で男の人に何かしてない？」
いよいよ、逃れることが出来なくなってきた。陽乃さんの細い指が内腿を蠢いて、答えを急かすように、答える以外の選択肢は無いとでも言うように、とんとんと指先でつついてくる。
「うっ……そ、その……き、亀頭、を、……手の平と指で嬲るようにじっくり撫で回してます。それに口は……男の人の、乳首をねっとりと舐め上げて、舌先で執拗につついてます」
言うと、陽乃さんが耳元でくすりと笑った。陽乃さんのもう片方の手も内腿を撫でてきて、生地の上を柔らかい指の腹が熱っぽく這い回る。
「あはっ……良いね、良いね。どんどん具体的になってきた。楽しくなってきたよ。それで、それで？　今度は女の人が布団を剥いじゃって、お互いの姿がはっきり見える状態になって、口を男の人の胸からお腹に這わせてきたよ。この後女の人はどうするのかな？」
「うっ……そ、その、裏筋に舌をゆっくり這わせて、上目遣いで男の人を見ながら、何度も何度も舌を這わせます。途中で陰嚢も舐めて、口に含んで転がして……その間も、ずっと男の人を見つめ続けて男の人の反応を見ています」
陽乃さんの魔性の声に思考が麻痺して、催眠術でもかけられているかのように淫猥な言葉がするすると出てくる。
「ふむふむ、それで、男の人はどんな反応をしたの？」
「たまらなくなって、何度も『気持ち良いよ』と言いながら、身体を震わせて、『頼む、咥えてくれ』ってお願いします」
「へー……」
不意に。
陽乃さんの声の温度が下がり、ぞくりとする。
唇を俺の耳元に近付けて……柔らかな唇がちゅっと触れた。
「……それが、比企谷くんがされたいことなんだ？」
「……っ」
どこまでも冷たいのに、どこまでも扇情的な、そんな声音。
「……そ、そんなことは……っ」

声を詰まらせながらも答えると、陽乃さんはふっと軽く息を吹きかけて、ぱっと顔を離した。
「ふーん……取り敢えず、さっきの話の続きにしようか。ただし今度は映画のベッドシーンの話じゃなくて、そのシーンを見てるわたしたちの話ね」
「え……っと……」
「すごく淫猥なシーンを見てわたしたちはすぐさま興奮してきた。わたしはたまらなくなって、比企谷くんの手をきゅっと握る」
自分たちの話になった途端に、同じ想像の中での話だと言うのに、緊張感が跳ね上がった。
「難しいことは考えないでね。やりたいようにやるの。……やらなきゃだめ」
陽乃さんの、俺の行動から逃げの選択肢を排除する姿勢は尋常ではない。一種の執念さえ感じてしまう。
「……じゃ、じゃあ……雪ノ下さんが握ってきた手を、握り返します」
「どれくらい強く？」
「結構……力を入れてます」
「どうして？　どんな感情を抱いてるの？」
言われて、考える。
「……多分、独占欲……とか、……征服欲に、近いんじゃないかなと思います」
「……っ」
答えると、隣でこきゅっと喉を鳴らす音が聞こえて、自分の足に触れている陽乃さんの足がもぞもぞと動いた。
「ん……んくぁ……っ」
「？　雪ノ下さん？」
「ふぅっ、んふぅぅ……っ、……何でもないよ」
明らかに挙動不審だったんだけど……追求しない方が良さそうだ。
「そっか……征服欲ね、ふふふ。……それで？」
目を閉じたまま、何も考えずに、考える。
映画館という薄暗い空間で、声を殺して、陽乃さんと手を繋いで

……そこから、やりたいこと？
「……陽乃さんの脇の下に手を伸ばして、胸を思い切り揉みしだきながら引き寄せて、唇に吸い付きます」
考えたことを何の推敲もせずに宙に吐き出した。何を言ってるんだ、俺、こんなこと考えてたのかよと自分に呆れていると、隣から思わぬ声が漏れた。
「んくぅぅ……っ！」
「え、ちょっと……雪ノ下さん？」
陽乃さんが甘ったるい声を上げると同時に、俺に抱きついてきた。柔らかな感触が胸に押し付けられて、そのままこてんとカーペットの上に倒れる。
「あの……」
問い掛ける。こんな状況でも一応目は閉じているので、何が起きているのかさっぱり分からない。陽乃さんも俺も、後頭部をぶつけたりしなくて良かったなどと呑気に考えていた。
陽乃さんが切なそうに身を捩らせて、頬と頬をすり寄せてきた。
「……どうしよう、こういう流れもあるかもとは思ってたけど、いざ本当にこうなると予想以上に……」
「ゆ、雪ノ下さん？」
暗闇の中問い掛けるが、陽乃さんは答えない。
「……その後は？」
口を開いたと思いきや、続きを促す言葉だった。
このくだりをきちんと終わらせないと、落ち着くことは無さそうだ。
陽乃さんとのやりとりは、尚も続く。
続く。

（１９）

陽乃さんに先を促されて、脳内デートは尚も続く。……まあ、序盤も序盤から、デートの体は成さなくなってたけど……。

陽乃さんは俺に柔らかな肢体をすり寄せたまま、続く言葉を待っている。

こめかみをぽりぽりと掻いて、先の展開を考える。

「映画のベッドシーンが本番に入った所で、お互いの興奮も高まって益々激しく口付けをします。陽乃さんに俺が大量の唾液を飲ませて、胸元に手を突っ込んで胸を揉んで――」

――よくもここまでするすると話せるものだと驚くと同時に、あることに気付く。

陽乃さんの、このゲームでの目論見は、言葉と僅かなスキンシップで俺の欲求を引き出して、理性を剥ぎ取ることだったのかもしれない。確信は無いけれど自信はある。

けれど、いざ俺の欲求が止めどなく吐き出され始めると、それに思い切り影響を受けて、陽乃さん自身に火が点いてきた……そう、考えることも出来る。

あくまで推測に過ぎないけれど。

相手は、あの、雪ノ下陽乃なんだから。

しかし、この推測ならばさっきの陽乃さんの異変も、それに構わずゲームを続けようとする姿勢も納得出来る。……ここまでも含めて陽乃さんの計算と考えても、何ら不思議は無いのだけど。

……まあ、今はどう考えるにせよ、続けるしかないだろう。

陽乃さんの背中に片腕を回して、そっと撫でる。衣服越しに感じる確かな熱に、心臓がどくんと高鳴った。

「うっ……くぅ……っ、それで？」

「雪ノ下さんは体質の関係もあって相当反応しやすいので、口付けをしてる間絶えずくぐもった声を上げます。口を離して胸の形がぐにゃぐにゃと変わるくらいに強く揉むと、陽乃さんは自分で口を押さえて必死で声を上げないよう我慢します」

「あ……うぁっ……」
仰向けにされたまま紡ぐ俺の言葉に、頬をすり寄せたまま陽乃さんが悩ましい声を上げる。陽乃さんから香る甘い匂いが濃くなって、益々陶然として身体から力が抜ける。
――今、一体、俺はこの人をどうしたいんだろう。この人はどうされたいんだろう。
……色々、やってみるか……。
そう思い、試しに、背中に腕を回してぎゅっと抱きしめて、一気に捲し立てる。
「今度は両手で雪ノ下さんの胸を揉みくちゃにします。余りの柔らかさと弾力に夢中になって、雪ノ下さんがどれだけ痙攣しようが何しようが構わず、めちゃくちゃに、めちゃくちゃにします」
「うぁぁぁぁ……っ」
陽乃さんがもぞもぞと身体を蠢かせながら、艶っぽい声で喘ぐ。艶かしい肢体を揺らして密着されて、狂おしい程の興奮を覚える。強い嗜虐心が身体の奥底から溢れ出てくるのを感じた。
妄想による蹂躙は、尚も続く。
「……散々揉みしだいた後、今度は雪ノ下さんの素肌を見たくなります。映画は日常のシーンに入っていますが、そんなのは関係ありません。……雪ノ下さんに命令を出して、俺の目の前に立って、全裸になってもらいます」
「……っ」
こきゅっ、と陽乃さんの喉が鳴った。
そして、首の後ろにそっと腕が回され、甘い吐息が顔にかかって鼻腔に染み渡る。俺の腰をすらりと伸びた脚がぴたりと挟み込んできた。密着状態で身体を動かしたため、スカートが捲れ上がり中の柔らかい生地が股間に擦り付けられる。
陽乃さんが、ふぅ……と息を吐く。興奮と、不安と、幾分の諦観が混じったような、そんな吐息。
「あー……もう、これやばいかも」
「？　雪ノ下さん……？」

「……ま、いっか……」
陽乃さんが呟いた言葉の意図を考えていると、陽乃さんに突然身体を起こされた。戸惑っている内に胡座をかかされ、股座に陽乃さんが向かい合って座ってきて、俺の腰に美しく長い脚をするりと回してきた。互いの太腿が重なり、俺の足が下に、陽乃さんの足が上になる形になる。陽乃さんの手に誘導され暗闇の中足を動かすと、どうやら互いの腰に互いの足を巻きつけた形になったようだ。
陽乃さんの手が首に回され、指の腹が、指先が、蠱惑的にうなじの上を這い回る。
暗闇の中から、一段と妖しい雰囲気を纏った声が聞こえた。
「比企谷くん、さっきのシーンで確認したい部分があるんだけど」
「……何でしょう」
「さっきのシーンで、比企谷くんはわたしの胸を揉みくちゃにしたんだよね」
「……まあ、そうですね」
「そっか……」
「そうで……す――っ!?」
心臓が止まりそうになった。
陽乃さんが、俺の手を引っ張って自分の胸にまで寄せて、触らせてきた。目を開けて確認するまでも無く分かる、この柔らかい感触。幾度となく身体に当てられていた、あの感触だった。
「……揉みくちゃに、したんだね……」
確認するように、自分に言い聞かせるように呟きながら、陽乃さんが俺の手を掴むのをやめた。柔肉に沈み込んだままの指が置いていかれて、どうしたら良いか分からなくなる。
俺の手は、今、陽乃さんのたっぷりとした乳肉に埋もれている。ニット越しとは言えその事実は揺るぎない。
「……揉みくちゃに、したんだね……」
念を押すように耳朶を打つ、陽乃さんの淫猥な艶声。
本能を抑え込む理性が、陽乃さんの乳肉を掴む指を伝って、陽乃さんの身体の中に流れ溶けて行った。

「そう、ですね……」
言いながら、指を乳房に深く食い込ませると――
「んくぅぅぁあぁぁ……っ！」
陽乃さんが、俺の腰に巻きつけた足にぎゅっと力を込めた。予想を上回る柔らかさと弾力に、ごくりと息を呑む。指に力を込めればその分だけ柔肉に埋まっていって、その感触に夢中になって揉み始める。
「あぁっ、あっ、あぁぁ……っ」
陽乃さんの甘い喘ぎを楽しみながら、目を見開いて無言で揉み続ける。
陽乃さんの服は胸元が開いている為に、乳肉を揉みしだく手の指が、自然と陽乃さんの２つの乳鞠の谷間の柔肌に直接触れて食い込む。
直接触れた部分は淫らな熱が篭っていて、押し込めば押し込むだけ指が埋没してしまう程の淫らな柔らかさを持っていた。
陽乃さんの艶美な姿態を、この目で見たい――そう思ったとき、陽乃さんが腕を背中にまわして抱きしめてきて、おでこ同士をこつんと当てた。
「……目は開けちゃだめだよ。その方が楽しめるから、ね？」
「お……ぁ……っ、……はい……っ」
甘美な声と吐息に顔を包まれ、限定された感覚が更に研ぎ澄まされる。
「……あっ、くぅっ、ふぅん……っ」
手の指が陽乃さんの乳房に埋まるごとに、悩ましい衣擦れの音がする。陽乃さんの手が背中を離れて今度は下腹部に迫ってくると、心の底から言い知れぬ期待感を抱いた。
「ねぇ……っ、次、どうしたい？　映画館の中で、わたしたち、どうしちゃおっか……？」
言いながら、ジーンズの上から肉棒に指を這わせてきて、指を動かして先端をぐりぐりと刺激してくる。快感に身悶えして手を動かすとその分陽乃さんの双丘に指が深く沈み込んで、陽乃さんの身体がびくびくと跳ねた。

……この状況で次のことを言ったら……陽乃さん、絶対ここで実際にやりそう、というか絶対やるよな……。
――こんな逡巡も、もはや自分の中では予定調和と化した自己対話に成り下がっていた。
陽乃さんの身体をほんの少し貪っただけで、これだけの喜びが身体を包み込むなんて……ここで止まれる程、正常で異常な思考回路は持っていない、もはや持っていない。
ごくりと喉を鳴らす。
「雪ノ下さん、さっきも言ったでしょう？」
「え……？」
陽乃さんは動揺を声に滲ませながらも、手の指でジーンズ越しに亀頭をぐりぐりと刺激するのをやめない。
「……雪ノ下さんには、全裸になってもらいます」
「……っ」
「聞こえませんでしたか？　全部脱いでもらうって言ったんです」
陽乃さんの身体が、ぶるりと震えた。
表面上は、あくまで、俺が妄想を語っているだけ。しかも、その内容はひどく稚拙で卑猥だ。
けれど、今は。
妄想を語っているだけという表面上の意味とは別で、俺が話したことが、そのまま陽乃さんに対する命令と化す。
「……そ、そっか、そうだよね、そうだったよね……」
「……そうですよ。忘れるなんて雪ノ下さんらしくない……」
ひどく白々しい会話をしながら手の指を動かすと、陽乃さんの身体がびくびくと跳ねた。跳ねたら跳ねた分だけ下腹部をまさぐる手の動きも激しくなる為に、陽乃さんへの愛撫に連動して鈴口からカウパーが滲み出る。
「……そっか、映画館の中でわたし、……裸……に……」
消え入るような声で陽乃さんが呟くと、俺の手をそっと掴んで、たわわな双丘から離した。まるでこちらの指を弾くかのような弾力に驚きながらも、この後の展開に胸を弾ませ、暗闇の中で息を呑む。

「……そっ、か……」

自分に言い聞かせるように何度も呟いて、陽乃さんがこきゅっと喉を鳴らした。

続く。

（２０）

胡座をかいた俺の目の前に座る陽乃さん。
目はずっと閉じているためにその表情は見て取れないが、頬に添えられた彼女の手がしっとりと湿っていて、顔にかかる甘ったるい吐息もどこか荒く、発情しているということが手に取るように伝わる。
陽乃さんが身体をぶるりと震わせて、おどけたように軽く笑った。
「そっか、わたし、裸になるんだね……」
「……そうです。他の人に気付かれないように脱いでくださいね」
２人が話しているのは、あくまで妄想の話。
けれど今は、陽乃さんがその妄想で俺が話す事をなぞってそのままやってくれる、そんな流れになっている。
俺の言葉を聞いて、陽乃さんが身体の密着度を高めた。たわわな乳房が押し付けられて、心地良い圧迫感の波が押し寄せる。
そしてそのまま、唇を重ねてきた。
しゅるりと伸びてきた発情している舌を、特に抵抗することもなく受け入れる。
「んふぅ……ちゅるっ、ちゅろろ、れろ、れる、れる、くちゅる……っ」
目を閉じている為か、嗅覚も嗅覚も触覚も敏感になっている気がする。
陽乃さんが甘ったるい牝の匂いを漂わせながら、いやらしい音を立てて長い舌で口内を舐り回してくることによる快感が、さっきまでよりも格段に大きく感じる。
俺の頬を押さえての念入りな口付けを終える……かと思いきや、俺の舌を吸って引っ張り出し、舌の腹同士をぺたりと擦り合わせた。
「えぅ……ふぁふぅ……んふぅぅ……」
「……っ」
上唇が接触した状態で、広い面積を使って舌で交わり合う。
――濃厚にも程がある粘膜同士の接触に、どこまでが俺の口で、どこからが陽乃さんの口なのか分からなくなる。
そんな感覚に襲われた。

「……んふぁぁぁ……っ」
舌でのまぐわいに満足したのか、うっとりした声を垂れ流しながら陽乃さんが口を離す。
そのまま俺の胸に顔をうずめると、きゅっと抱きしめられた。急にしおらしくなられても戸惑ってしまうんだけど……。
これはどうしたものかと思っていると、少し子供っぽい声がした。
「……今からちょっと音がするけど、気にしないでね？　音が聞こえたとしても……何も……起きてないから」
「……っ、……わかりました。別に何も起きないなら気にしませんよ」
「……ふふ、ありがと」
言って、軽く触れるような口付けをしたかと思うと、陽乃さんの身体がふっと離れた。
×　×　×
陽乃さんの身体が俺から完全に離れたのが感覚で分かったが、どうやら気配からしてすぐ目の前にいるようだった。
恐らく……俺の目の前に立っているんだろう。
今陽乃さんはひょっとしたら目を開けているかもしれないが、正直今はどっちでも良い。
「……んっ……」
悩ましげな声がしたかと思うと、微かな衣擦れの音が聞こえる。
しゅる……ぱさっ。しゅるる……ぱさっ。
２回分の衣擦れの音がして、目の前から漂う香りが微かに甘ったるさを増す。
鼓動が跳ね上がるのを感じていると、不意に陽乃さんが身体を近付ける気配がした。
「ふふ……さっきも言ったように、何もしてないからね？」
「……わかってますって。雪ノ下さんは今何もしていな――」
言葉が止まった。
陽乃さんの手が再び俺の手を掴んで、気付けば１０本の指がしっとりと湿った、熱く柔らかい肉の中に埋まっていた。
陽乃さんが小さく「ぁん……っ」と声を漏らしたのを聞いて、今自

分の身に何が起きたのかに気付く。
「ちょ、ちょっと……っ!?」
不意に手指を包んだ吸い付いて離れないようなたまらない感触に、何も言葉が思いつかぬまま声を上げようとしたが、それさえ待たずに陽乃さんは極上の柔肉から俺の手を離した。
「はいはーい、わたしは何もしてなーい、何もしてなーい」
「……」
……すげぇ腹立つ。
何らかの抗議（肉体的と言うか言論的と言うか身体的と言うか肉体的と言うか）を企てていると、再び陽乃さんの気配が離れた。いたぶって後は放置するというクールな対応である。
「……んっ……」
もう一度聞こえた悩ましげな声に息を呑む。
……きっと、今、陽乃さんがしているのは……。
どうしようもない程に期待を高まらせていると、再び衣擦れの音がした。
しゅる……ぱさっ。……びしょっ。
「……え？」
今、何か一つだけ音が変じゃなかったか？
まさか今の音は……と思っていると、気配が再び近付いて来た。
「……うお……っ？」
――それと同時に、鼻腔を埋め尽くす程の濃厚で甘酸っぱい匂いが広がる。
細い糸のようなものが鼻先をくすぐって、何かが文字通り目と鼻の先にあることを知らせてくる。
……これって……。
頭上から震える声が降りてきた。
「……わたし、何もしてないからね？」
まるで嘘をつくのが下手な子供のような、たどたどしい口調。
「……そう、ですか」
手短に答えて、深く息を吸う。

途端に、身体の中の空間という空間が媚薬の如き濃厚な牝の匂いに満たされて、頭がくらくらとした。
ふーっ、と。
息を吸った勢いそのままに、優しく長めに、目の前の空間に息を吐き出す。
「ひぐぅぅ……っ!?」
「んむぉっ?」
何があるのかが分からない空間に息を吹きかけると、途端に口に生暖かい液体を纏った何かがぶつかった。
すぐに離れたものの、入れ違いで両耳に陽乃さんの手が伸びた。
陽乃さんの手は、ふるふると戦慄いている。
「……ど、どうしたの？　比企谷くん？　急にそんな深く呼吸しちゃって。緊張してるのかな？」
「……そうですね、そうかもしれません」
白々しい会話をして、もう一度目の前の空間に息を吹きかける。
「んくはぁぁぁぁぁ……っ」
甘ったるい声を漏らして、陽乃さんの手が切なげに俺の耳をさわさわと撫でた。
ほんの僅かに顔を前に出すと、鼻先にしょりしょりとした感覚がした。
「……ぁ……」
陽乃さんの儚げな声が嗜虐心をそそる。
もう少し近付けると、唇に熱く湿ったものが当たった。
ごくりと喉を鳴らして、陽乃さんの身体の後ろに手を回すと――くんっと引き寄せて、目の前の陽乃さんの淫裂にぐちゅりと口を付けた。
「んひぃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……っ!?」
突然の責めに動揺したのか、陽乃さんが声を抑えることもせずに激しく喘いで、腰をぶるぶると震わせた。
目を閉じているためどこがどうなっているかは分からないので、闇雲に舐めまわす。

「んひぃっ、んぐっ、あぐぅっ、うっ、ひぁぁっ、あっ、そこはっ……んあぁぁぁっ！」
陽乃さんの反応を伺いながら、探り当てた割れ目を舌先で丁寧になぞり、小さな豆を唇で咥え、淫液が溢れ出している小さな穴に舌を尖らせてねじこむ。
むせ返る程濃厚な匂いと甘酸っぱい味に包まれながら、ぐちゅぐちゅと中を掻き回すと、陽乃さんの下半身ががくがくとだらしなく前後に震えた。
「うくぅぅぅ……んひぁっ！　あふぁっ！　うぁぁぁぁぁ……っ」
舌の愛撫による快楽は陽乃さんの想定を越えていたのか、必死に腰を動かして俺の舌から逃れようとする。
しかし陽乃さんの尻を揉みしだきながらしっかり拘束している為、ほとんど動くことは叶わないでいる。
口を離して、目は閉じたまま顔だけ上を向ける。
「雪ノ下さん、どうしたんですか？　そんな声出してたら他の人にバレちゃいますよ？」
今更にも程がある脳内デートの設定を口にすると、目の前でとすんと言う軽い音がした。
そして背中に再び長い脚が絡みつき、耳元に口を寄せられる。
子供が甘えたような幼い声で、陽乃さんが囁く。
「なんでも……ないよ？　……ちょっと、ね」
声の震えを抑えながら、陽乃さんが必死で、言い訳にさえなっていない言葉を紡ぐ。
一糸纏わぬ状態になった陽乃さんは姿が見えなくても強烈で、柔らかな肉の感触と濃厚な牝の匂いが支配欲を強烈に駆り立てる。
陽乃さんがもう一度耳元で囁いた。
「……なんでも、ないよ？」
明らかに期待を込めた声音でそう言うと、艶かしく絡んだ脚にきゅっと力が込められた。
続く。

（２１）

俺が胡坐をかき目を閉じた状態で、陽乃さんが柔らかな肢体を密着させてくる。

陽乃さんは俺の首に腕を回し、静かに息を荒げている。

甘ったるい吐息が鼻先を掠めて、このゲームによって益々陽乃さんにのめり込んでいる実感が湧く。

「それで……次は、どうするのかな？」

陽乃さんが脳内デートの続きを促す。ひと気の少ない映画館で、陽乃さんは今、纏っていた衣服を全て脱ぎ捨てて、映画に出ている女優顔負けのプロポーションを惜しげもなく晒している。

……そして、その状態は今の陽乃さんともリンクしている。

今、俺が脳内デートの中での行為という名目で言うことは、目の前の陽乃さんが余すことなくやってくれる。二人の間に存在する暗黙のルールが空気を妖しく歪めて、身も心もどんどん深みに沈み込んでいく。

「そうですね、雪ノ下さんには全部脱いでもらったので、今度はいやらしく足を開いてもらいます。映画館の席は狭いですから、立ったままやってくださいね。はしたなくがに股になってください」

「ぁあ……っ!? んぅっ、ぅあ……っ」

言って、陽乃さんの脇の下に手を伸ばし、くんと持ち上げて立ち上がるよう促す。

脳内デートではまだ服を脱いだだけの陽乃さんだけど、実際はついさっきまで敏感な乳鞠とむちむちとした淫部をたっぷりと責めていた。そのため立ち上がる際も陽乃さんの足腰はがくがくと頼りなく震えてしまい、まるで生まれたての子鹿のようになっているのが、陽乃さんの脚に添えた手から伝わる感触で分かった。

「立った……よ……っ」

何とか立ち上がった陽乃さんの声が、頭上からそろりと降ってくる。

陽乃さんは報告は、現実のものと脳内のもの、両方を兼ねているん

だろう。
奇妙なやりとりは尚も続く。
「足は広げましたか？」
既に目の前から立ち上る濃厚な牝の匂いに陶然としながらも、確認の言葉を陽乃さんに投げかける。
こきゅっ、と。
小さく喉が鳴る音がして、陽乃さんの息が一層荒くなった。
目の前から香る甘ったるい匂いが一層強まって、酔ってしまいそうな程の心地良さをもたらす。
陽乃さんの脚に手をそろりと這わせて、脚の角度を確認する。触れた瞬間陽乃さんがびくりと反応したのが何とも可愛らしい。
「……広げたようですね」
「……っ」
太ももから膝までの部分を幾度も撫で回して、陽乃さんが目の前で肉感のある脚をはしたなく広げて羞恥に震えている様を想像する。
薄暗い映画館でスクリーンの光を背景に震える陽乃さんと、明るい部屋の中で全くぼかされることなく陰部を晒される羞恥に震える陽乃さん。
暗闇の中で浮かび上がる2人の陽乃さんに、堪えるのに必死にならねばならぬ程の興奮が湧き上がる。
行き当たりばったりで流れを考えているが、ここでもう、完全にこの人の理性をどろどろに溶かしてしまいたい。今までのお返しも兼ねて、徹底的にだ。
陽乃さんの太ももに添えた手を、ゆっくりと中心部に滑らせていく。
「ひぁっ!?　あっ、ひ、比企谷くん……？」
「？　どうしました？　まだ次の指示は出してませんよね？」
「うぅっ、ぁっ、そ、それはそうだけ、ど……っ」
脳内デートはどんどん過激になっているが、現実の俺たちはただ目を閉じて身体を寄り添っているだけ――そんな、小めんどくさい設定がいつの間にか出来上がっている。

――だからこそ、俺は好き勝手な指示を陽乃さんに出して、陽乃さんはそれに従うという奇妙な関係も成り立っている。
――だからこそ、今、この場では、俺は陽乃さんに好きなことが出来る。
左手で陽乃さんの太ももを押さえて、弾力のある瑞々しい肌に指を食い込ませる。そして右手をそっと中心部に這わせると、
「ひぃんっ!?」
電気が走ったような声を陽乃さんが上げた。
陽乃さんはいったいどういうつもりなんだろう、どこまで乗ってくれるんだろう。
そんな疑問は絶えず湧いてくるけれど、今はそれよりも、目の前のこの身体を――めちゃくちゃにしたい。
それも、迂遠で、ねちっこくて、いやらしいやり方で。
このゲームを提案したのは陽乃さんだから、きっと問題無いはず。
幾重にも予防線を張って、目を閉じたまま陽乃さんに顔を向ける。
「今から、雪ノ下さんの大事な所を指で責めます。声が出そうになると思いますが、極力我慢してください。映画が終わるまで気ままに責めるんで、頑張ってくださいね」
「え……っ」
凍り付いたような陽乃さんの声を新鮮に思いながら、右手をゆっくりと陽乃さんの秘所に這わせる。
暗闇の中で、触覚と嗅覚で陽乃さんの大事な部分を味わう。手が触れた肉厚のクレバスは既にぐしょぐしょに濡れていて、軽くなぞっただけで陽乃さんの身体ががくがくと震えた。
「ふっ……くぅっ、んんん……っ」
秘部への愛撫に対して、陽乃さんは手で口を覆っているのだろうか、くぐもった悩ましい声を漏らしている。その艶声をＢＧＭに、指を更に動かす。
うっすらと生えた恥毛は熱を帯びた愛液に塗れ、ぺったりと肌に貼り付いている。
愛おしむようにしょりしょりとそれを撫でて、大陰唇を指で外側か

ら挟み込み、揉むように動かす。すると頭上から垂れ流れてくる淫靡な声と、目の前から香る甘酸っぱい香りが更に濃厚なものになった。
ぐしょ、ちゅぷ、にゅく、にちゃ、にゅくにゅく、……。
「んんんっ、んんっ、んふぅぅぅ……っ！」
大陰唇を指で挟んだ状態で、中の襞を解すように上下に互い違いで揉みほぐすと、肉厚の淫谷の中でいやらしい水音が聞こえる。
スポンジを扱うようにぎゅっぎゅっと揉みしだくと、中から淫猥な肉汁がぷちゅぷちゅと音を立てて手のひらを伝った。
「雪ノ下さん、後ろの席って言っても声を出したらほんとバレちゃいますからね？　注意してくださいよ？」
映画館では後ろの壁際に座っているということになっている。もし他の人が陽乃さんの声に気付いて振り向けば、陽乃さんの艶めかしい背中が見えてしまう。
「んっ、んふぅっ、だ、大丈夫、大丈夫だか、らぁ……っ！」
クレバスに中指を這わせると、陽乃さんの声が色っぽく揺らいだ。益々熱を帯びた割れ目は指でなぞる度にその水量を増して、渓谷の増水を連想させる。
にゅっぷ、にちゅ、ちゅりり、にちゃ、くちゅぷ……。
「～～～～っ！　～～～～っ！」
陽乃さんのくぐもった喘ぎに、一層甘さが混じる。
熱い淫汁が肘まで伝った所で、花弁を掻き分けて膣口に中指を宛がった。
濡れそぼった牝穴はひくひくと疼いていて、牡の身体を招き入れようと、指先にちゅっとキスをしてくる。ここに俺のモノを挿入したらどれだけ……と、想像しただけでぶるりと背筋が震えた。
僅かに力を込めて指を中指を押し入れると、いとも簡単に指の根本まで吸い込まれた。
「～～～～んぁぁぁぁ……っ！」
「うぉっ？」
更に跳ね上がった快感に耐え切れなくなったのか、陽乃さんは身体を折り曲げて両手で俺の頭を掴み、耳元に口を寄せて耽美な吐息を吹

きかけてきた。
「雪ノ下さん、大丈夫ですよね？　声、出しませんよね？」
敢えて優しく問いかけながら、熱いゼリーに浸っている中指をくいくいと曲げ伸ばしする。男性器だと思ったのだろうか、柔らかな肉襞が別の生き物の様に蠢いて、きゅむきゅむと根本から締め付けてくる。
にちゅぐちゅぐぽちゅぐぐぽじゅぴじゅぷじゅぽじゅぽ……。
「これ、やっ、やば、ほんと、あっ、あぐぁ……あっ、あっ、あぁぁ……っ」
耳たぶを唇でぱくりと咥え込んで、愛撫のリズムに合わせて卑猥な声を絶えず俺の耳に流し込んでくる。
熱く湿った吐息は身震いする程にいやらしく、股間に恐ろしい程の疼きをもたらす。
「ひ、比企谷、くんっ？　わ、わたし、ずっと、軽くイってるんだ、よ……っ？　それ、分かってる、分かってるよね……んひぃぃっ!?」
窘めるように優しく語り掛ける陽乃さんの言葉は、特に敏感だと分かった箇所を指の腹でぐりぐりと押し込むことで掻き消した。
不意に、陽乃さんの手が俺の頬に添えられた。顔を上に上げられ、おでこ同士がこつんと当たる。
「もう、だめ……比企谷くん、ゲームは終わりにしよう？　……わたしがイク所、見て？」
「……っ」
陽乃さんから発せられたゲーム終了宣言と共に、映画館での陽乃さんの痴態の映像が陽炎の様に消えていく。
陽乃さんの魅惑的な言葉でうっすら目を開けると……息を呑んだ。
とろとろに蕩けた瞳。
だらしなく緩んだ頬。
じっとり汗ばんだ雪のように白い肌。
半開きになった口から覗く桃色の舌。
顎を伝う唾液。
牡を狂わせる、先端が痛々しい程にぴんと張り詰めた乳鞠。
そして目の前にある――俺の指に反応して絶えず痙攣している陰

部。
何もかもが恐ろしい程蠱惑的で、劣情を催すものだった。
中でも陰部は格段にいやらしく、淫液で貼り付いた恥毛はばらばらに伸びて不規則に貼り付いていて、左右の花弁は触った通り肉厚な桃色で、牡の身体を惑わす強烈な魅力を纏っている。
目の前の極上の肢体を余す所なく見ようと必死に目を凝らしていると、陽乃さんの手が俺の頬に触れた。
「……わたしが特に気持ち良い所、もう分かってるでしょ？　お願い……んっ」
優しく語り掛けてきて、そのまま唇を重ねた。まるで愛情を確認するかのようなキスに意識が甘く蕩ける。
唇が離れると、陽乃さんがにっこり微笑んだ。それを合図に、今度は薬指も挿入して、陽乃さんがとびきり敏感に反応する場所を一気に押し上げる。
ぐにゅぷっ、じゅぷっ、ぐじゅぐじゅ、じゅぐぐ、ぢゅぽぢゅぽぢゅぽ……。
「んはぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……っ！　や、やば、これ、すぐイっちゃう、イっちゃう、イっちゃうぅぅぅぅ……っ」
声を抑えることなく、陽乃さんが解放されたように大きく嬌声を上げる。
可愛らしい言葉を口にしながら、快感に耐え切れず腰をがくがくと前後に動かす。
「雪ノ下さん、ほら、動いちゃダメですよ」
「んひぃっ!?　うぐぅぅぅ……っ！」
左手で尻肉を強めに掴むと、陽乃さんの声が一層の熱を帯びた。逃げ場を失った快感が、膣肉から脳へと一直線に余すことなく叩き付けられる。
「あっ、あがっ、も、もうだめ、イク、イク、イクぅぅぅぅ……っ！」
はしたない言葉を戸惑うことなく吐き出して、陽乃さんが全身を痙攣させ、おとがいを上げて絶頂に達した。
中指と薬指が痛い程に締め付けられ、膣口からはまるで滝のように

愛液が溢れ出し俺の腕をびしょびしょに濡らす。
痙攣の最中も指を動かすと、陽乃さんは獣じみた声を漏らして、腰を前後にかくかくと揺らして更に淫液を分泌した。
「……あっ、あぁっ、あっ、あっ、ぁあ……っ」
陽乃さんが力無く崩れ落ち、再び腕と足を絡めてくる。息を整えながらも絡ませた四肢はいやらしく首や背中を這い回って、興奮を収めさせてくれない。
「……ねえ、比企谷くん」
「……なんでしょう」
陽乃さんの呼び掛けに答えると、目が合った。陽乃さんの瞳に発情の色は見えないものの、それよりも強い感情の炎が双眸に宿っている。
陽乃さんが下腹部を俺の股間に押し付ける。ジーンズと陰部とが擦れ合ってくちゅりと鳴る音に俺が息を呑むと、陽乃さんがくすっと笑った。
「……しよっか」
「え……っ」
陽乃さんの言葉に呼吸が止まる。
俺が言葉を詰まらると、陽乃さんは穏やかに微笑んだ。

続く。

（２２）

胡座をかいた俺に、一糸纏わぬ陽乃さんの艶めかしい素肌が甘えるように絡みつく。

うなじをさわさわと撫でて、腰に回した足はきゅっと締められ、度重なる愛撫によってぐしょぐしょに濡れた淫部がジーンズ越しに肉棒と触れ合う。

陽乃さんは穏やかな笑みを浮かべながら、肉付きの良い大陰唇をジーンズのチャックにくにくにと擦りつけてくる。

その様は、いやらしい中にも不思議と安心感を覚えるものだった。

「……しょっか」

陽乃さんがもう一度、耳元で囁く。

たった四文字の言葉が耳朶から脳内に染み渡り、極上の甘露のごとく思考をとろけさせる。

陽乃さんの言葉の意味を、目の前の陽乃さんの艶姿に惑わされることのないよう必死で集中して考える。

陽乃さんが言ってることの意味なんて、ここまで来たら一つだろう。

陽乃さんのぐしょぐしょに濡れた淫部に、俺のぎちぎちに反り返った肉棒を突き立てて、お互いが狂うまで腰を振る。

それだけのこと。

きっと、細かいテクニックなんて要らない。互いが互いにやりたいようにやれば、それが相手の快感にも繋がる。

獣のように腰を突き立てて、ぷるぷるの唇に吸い付き、発情した乳肉を手で嬲る。

簡単なことだ。

きっと、夢中になって、気が付けば全身精液漬けになった陽乃さんが出来上がっているだろう。

そして、その姿態を見てまた興奮して、陽乃さんが気絶しても腰を振り続けるだろう。

そんな未来が、他のどんな事よりも明らかに見えている。

初めてという事による不安なんて、まるで意味を成さない。
……でも、それでも。
「……雪ノ下さん、あの」
「陽乃」
陽乃さんの人差し指が唇にぴとっと当てられて言葉を止められた。
この場面でついでのように唇の中に指を割り入れようとするのは何でなんでしょうか。
「……？」
なんで陽乃さんは自身の名を呼んだのかと首を傾げると（陽乃さんの指も一緒に傾いたので中々シュールな絵だ）、陽乃さんがくすりと微笑んだ。
「比企谷くん。わたしたち、もうここまで色んなことしてるんだよ？
……そろそろ、名前で呼んでくれても良いんじゃない？」
陽乃さんがお姉さんのような優しい口調で言って、指をすっと離す。
穏やかな瞳を見て、ああ、この人も姉をやっているんだなあ、だいぶひねくれた姉だけど……なんて、場違いなことを考えた。
……それにしても。
「えぇ……」
なんかもうそんなの今更じゃん、恥ずかしいじゃんという意味を込めて、全力で不満げな声を漏らす。
すると、陽乃さんの目からすぅっと温もりが消えた。あ、やべ、超怖い。
「ここまで……しておいて……？」
「……っ」
やっべやっべ超怖い。言葉数が少ない方がこの人は怖いんじゃなかろうか。
瞳孔が猫みたいになってるよ。雪ノ下が食いつきそうだなっていや今はそれはいいだろ超怖い！
「あ、えーっと、そのですね、ここで急にそんなことをしても、何と言うか小っ恥ずかしいというか……」

目を泳がせながらあわあわと答えると、陽乃さんの目にすぅっと光が戻り（人体って不思議）、怖すぎる表情から一転してきょとんとした顔をした。
そしてふっと微笑むと、身体を一気に密着させて、甘えるようにおでこをくっつけた。
「……もう。だからぁ……わたしたち、もう、それよりずっと恥ずかしいことしてるでしょ……？」
「……～～～～っ」
想定を遥かに上回る、とろっとろのおねだり攻撃を浴びせられる。
ギャップが激しすぎて心臓に悪いですあと超可愛い。
唇が触れ合う寸前の所でふーっと息を吹きかけられるのが何ともこそばゆくて心地良い。
「……名前で呼んでもらいながら比企谷くんにいっぱい突かれたら、何回気絶しても足りないくらい気持ち良いんだろうなぁ……」
「……～～～～っ」
あかん。
死ぬ。
おでこをくっつけてるから、全く逃げ場が無い。
さりげなく腰を前後に動かして、くちゅくちゅ音を立てながら「ん……っ」なんて甘く鳴くのをやめてほしい。
かっこ悪すぎるけど、ジーンズの中で爆ぜるとか十分有り得るぞ。
――と、ここで、さっき陽乃さんに言いかけたことを思い出す。
「……あの、本当に俺で良いんですか？」
聞くと、陽乃さんは微かに驚いたように目を見開いた。
目線を斜めに巡らせて、んーと唸って考える素振りを見せていたかと思うと、俺にふわりと口付けをして微笑んだ。わーなにこの人―死なせる気満々ですやーん。
「……さぁね」
「や、さぁねと言われても……」
「比企谷くんは、じゃあここでわたしが『比企谷くんのこと、好きになっちゃったの！　愛してるの！　抱いて！』なんて言ったら……信

じる？」
「信じる信じないどころか吐くかもです」
「きみ、急に失礼な時あるよね……」
「うぐ……すいません」
「ま、そういうとこも可愛いんだけどね」
そう言ってくすくすと笑う陽乃さんは、本当に純朴な愛らしさがある。
こんな笑顔を傍でずっと見ていられるというのは、中々良いのではなんていう風に思った。
……もうちょっとからかいのスリルを減らして貰えると嬉しいんだけど。
だからね、と陽乃さんが続ける。
「今、わたしは比企谷くんとしたい。比企谷くんもしたいなら……いっぱいしようよ。それで、明日以降も、お互い合意の上でならいつでもしよう」
「……っ」
「……あと、どこでもしよう」
「ちょっと待ってください」
「あはは、冗談じゃないって」
「なんだ……って冗談じゃないんですか」
ノリツッコミをすると、陽乃さんがけらけらと笑った。
腹が立ったけど何か仕掛けようもないので、背中をきゅっと抱きしめると、笑いながらも「あん……っ」と甘い声を上げて、ぽすんと俺に体重を預けた。引き続き死にそう。
「あー面白い……。……比企谷くん、普通わたしのこんな格好を見て、冷静にこんな会話出来る人なんていないよ」
「そうですかね」
「そうだよ。すぐ犯しちゃうよ」
「直接的な言葉を使わないでください」
「比企谷くん、さっきいやらしい言葉ばんばん使ってたよね」
「……」

ぐうの音も出ねぇ。
うぐぐと唸っていると、陽乃さんが優しく目を細めた。
「……明日以降も、したい時があれば……くらいの言い方をしたけどね」
多分、比企谷くんも想像ついてると思うけど――と言って、陽乃さんが俺をきゅっと抱きしめる。
「……比企谷くんと一度でもしたら、多分、お互い狂っちゃうくらいハマると思うんだ……」
「……っ」
言葉に混じった微かな艶に、心臓がどくんと跳ねる。
「それって、要するに……」
言葉にしながら考える。
陽乃さんは今、俺としたい。明日以降もしたい時があれば……とは言いつつも、でもお互いに一度したら確実にハマると言っていて……？
ああもう、こんな安易な言い回しさえ、今は思考が纏まらない。
俺がぐるぐる考え込んでいる様子を見て、陽乃さんが俺の頭をくしゃりと撫でた。
「色々喋ってみたけどね、今わたしが比企谷くんにしてもらいたいのは、『陽乃と交尾したい』って言ってもらうことだよ」
「ぶほぁっ!?」
噴き出した。
直前の仕草との落差がえぐいなおい。
まとめ方おかしくない？　おかしいよね？
今度は俺が名前を呼ぶまで逃がすつもりが無いのか、陽乃さんは目を細め、獲物をロックオンした表情で見つめてくる。
「比企谷くんがわたしとしたいと思ってくれるなら、名前で呼んで？
そしたら……わたしの身体、めちゃくちゃにしていいよ。でも、呼んでくれないなら……残念だけど、ベッドの上でこの格好のまま寝転がって散々誘惑しておいて、何もしないで帰るからね」
「……っ」

選択肢もえぐい。
あー、もう、もう！
頭をがしがし掻くと、陽乃さんが更にハードルを上げてくる。
「言葉は何でも良いけど、それと一緒に何か刺激的なことをしてくれた方がお姉さん燃え上がるな～」
「……」
……なんか、腹立ってきた。
でも、こういう煽り方をされた方が名前で呼ぶ気になるんだから不思議なもんだ。
……うん、俺、この人に順調に調教されてるな。調教って言っちゃったよ。
「お……っ？」
陽乃さんをしっかり抱きしめて、俺が上になるようにゆっくり倒れこむと、陽乃さんが期待を滲ませた声を漏らした。
ぽすんと音を立ててカーペットの上で身体が重なると、陽乃さんがわくわくした表情を浮かべて――俺の顔を見た瞬間、急に身体を強ばらせた。
俺の表情はきっと、ほんの数秒前までとはまるで違っていただろう。
陽乃さんの身体を、ぎちぎちに抱きしめる。
「あおぉぉぉ……っ、くひぃぃぃん……っ」
ぎりぎりと締め付けると、俺の腕の中で陽乃さんが苦しそうに、でもそれでいてどこか嬉しそうにじたばたともがく。
今度は俺からおでこをくっつけて、獲物を見つめる目で陽乃さんの瞳を覗き込む。
「陽乃のいやらしく濡れたここに、俺のをめいっぱいねじ込みます。陽乃の腰が抜けようが、失禁しようが、気絶しようが、泣いて許しを乞おうが、絶対やめません。……いいですね」
一段低い声でそう告げて、隆起した陰茎をぐりぐりと淫裂に押し付ける。
「くはぁぁぁ……っ！」

陽乃さんの全身が、不意にぶるぶると震えたかと思うと――漏らしたのかと見紛う程の大量の淫液がジーンズを汚した。
くてっと脱力しながら、陽乃さんがにっこりと微笑む。しゅるりと俺の首に腕を回すと、愛情いっぱいに目を細めた。
「……うん。……いっぱい、してください……っ」
言って、口の中から長い舌をぬるりと差し出した。
それを口の中に迎え入れて、卑猥な口付けを交わす。
「んむふぅぅ……んふぅっ、へぅっ、んはぁぁぁぁ……っ」
キスをしながら、既に挿入しているのかと錯覚する程の甘く欲情した声に陶然とする。
舌を官能的に絡め合って、陽乃さんがもう一度激しく痙攣するまでこの行為は続いた。

続く。

（２３）

胡坐をかいて座る俺に、陽乃さんが一糸纏わぬ姿で密着している。
背中と首を蠱惑的に包み込む腕。
腰を締め付ける妖艶な足。
胸を柔らかく圧迫する乳鞠。
極上の肢体が俺の肉体を拘束して、甘え縋るような濃厚な視線が俺の心を拘束する。
「それじゃ、ベッドに行きましょうか」
口付けで全身を戦慄かせた陽乃さんの背中を撫でながら、ゆっくりと囁きかける。
陽乃さんの肉体は火照りきっていて、衣服越しでも発熱しているのではと錯覚する程の温度を感じる。
「んっ……ちゅっ」
陽乃さんはぽーっとした表情で俺の言葉を聞くと、名残惜しそうにもう一度唇を優しく添えた。
むにゅりと押し付けられた柔らかい感触の愉悦に浸りながら、陽乃さんの肩を掴んで立ち上がらせる。
案外簡単に立ち上がってくれるんだなと思ったのは内緒。
この人の場合、油断するとどこまでも思い通りに行かないからなぁ……。
「やったぁ……比企谷くんに襲われるぞぉ……」
前言撤回。
二人で立ち上がった直後に爆弾を放り込まれた。
にへらっと笑う陽乃さんに対して、この笑い方初めて見たなーなんて呑気に思っていたらこれである。
「その言い方やめてください、マジで恥ずかしいんで」
「えー？　でも、何も間違ってないでしょ？　今から比企谷くんは私とベッドで繋がるんだよ。それで最初はわたしのこと気遣ってすごく優しくするんだけど、段々獣になっていくんだよね？」
「待って待って、やめて」

なんで付加疑問文なの？　なんで既に打ち合わせしたかのような言い方なの？
「ちなみに獣は『けもの』じゃなくて『けだもの』の方ね」
「口頭の会話だったらどう表現すれば良いんですか今のくだり」
それもそうだねー、と陽乃さんがくすくす笑う。可愛いな……マジなんなの……。
「わたしも比企谷くんを挑発するようなことを沢山囁いて、比企谷くんの理性の皮を一枚一枚丁寧に剥がすの。そしたら比企谷くんはたまらなくなって、わたしの肩を思い切りベッドに押しつけて、すごい形相でわたしの中をかき回すんだ。四つん這いにするのも良いね。わたしの腕を引っ張ってすごい勢いで腰を打ち付けるの。わたしの胸がぶるぶる震えるのを見て、好き放題詰るのも良いね。わたし、きっともっと感じちゃうな」
「ティッシュ使います」
「まだダメなんだ……」
全くもって、ダメだった。
嬉しそうに卑猥な妄想を語る陽乃さんが、一転して呆れ顔になる。
しかしその表情の中にも、どこか愛おしいものを見るような優しさが混じっていて、照れくさくなって顔を逸らす。
「一応耐性は上がってるつもりなんですけど。雪ノ下さんの火力を上げられちゃどうにもなりません」
「比企谷くん、わたしの名前って知ってたっけ？」
「……陽乃さん、です」
「はるのさん？　わたしの名前、『雪ノ下はるのさん』って言うの？　名前長いね～」
え、呼び捨て確定なの。
さっきのは勢いで言ったに過ぎないんだけども。
……それならば、これはどうだろう。
「……雪ノ下のお姉さん」
「なんで出会った頃くらいに戻ったの……」
ハードルが高すぎて、思わずくぐった結果がこれである。

陽乃さんが俺の頬に手を添える。
俺の頬は、きっと火が出る程熱くなっているんだろう。
くすくすと笑う陽乃さんは、子どものようないたずらっぽい表情を浮かべている。
この人の素直な表情を見る度に、心を鷲掴みにされてしまうから困ったものだ。
「ほれほれ、呼んでみ？　呼んでみ？」
「うぐ……」
う、うぜぇ……可愛い……。
あ、なんか小町に抱く感情と同じ感じがする。
……。
恥ずかしいので、そっちの方向の思考はやめた。
陽乃さんの腕に手を添えて、目を泳がせる。
「……陽乃」
陽乃さんの顔が、幸せそうに綻んだ。
「……ん、よし。もう十回ね。はいスタート」
鬼嫁か。
……今のはなしで。死んじゃう。
「ちなみに今のはあんまりわたしの目を見てなかったから、次からはきちんと目を見ながら言わないとカウントに入れないからねー」
手心を加えるつもりは無いらしい。泣きそう。
はい、深呼吸。
「……陽乃、陽乃、陽乃、陽乃、陽乃、陽乃、陽乃、陽乃、陽乃、陽乃、陽乃、陽乃、陽乃、陽乃、陽乃、陽乃」
「比企谷くんが大好きなのは？」
「小町」
「ぶれないね……」
ちょっと予想してました、うん。
ちなみに他の回答候補としては戸塚が挙げられる。
「まあ、今何気に十一回言ったのはポイント高いね。そんなにわたしの名前を呼びたかったかー」

予想外の方向から矢が飛んできた。ただの数え間違いなんだけど。
「や、そんなことは」
「比企谷くん。部活のメニューでさ、『五回三セット』みたいな言葉、よく聞かない？」
指摘するだけして思い切り話題のハンドルを切ったぞこの人。
俺の言葉もぶった切るという気持ち良さ。
……ていうか、この言い方は……えぇ……？
いやな予感しかしない。
どうにか逃れたい、この蟻地獄から。
「俺体育会系の部活に入ったことないんで知らないです」
ちなみに奉仕部は体育会系でも文化系でもなく、言うなればＧＪ部系である。
紅茶飲んでるし、ゆるゆるだし。
「ふーん、そっか。じゃあ十回十セットね」
話聞いてくれないよぉ……。
「スクワットですか。そんなにやったら明日動けるか心配です」
「どうせ明日はわたしも動けないから大丈夫だよ。仲間仲間」
「え、ちょっと今なんて」
「はいスタートー」
とぼけてみたらえげつない返しをされた。
俺の小ボケを叩き潰して、陽乃さんがわくわくとした顔で俺を見つめる。
なんでこんな楽しそうなのこの人……。
ちなみに、と陽乃さんが言う。
「結構時間かかるから、その間わたしの好きなとこ触っていいか」
陽乃さんが言い切る前に。
即座に胸を触った。
反射的行動にも程がある。
「……比企谷くん、本当にえっちだね」
よっぽど驚いたのか、陽乃さんは身体が反応するよりも呆れが勝っていたようで、お姉さん然としてふふっと笑った。

「……反省します」
言いながらむにむに。
今度は甘美な反応をされて、心臓が高鳴る。
「ん……っ、どうぞ」
「はい」
答えて、改めて陽乃さんの顔を見る。
……胸を触りながら、顔を直視して呼び捨てで名前を百回呼ぶ？
……どんだけ寿命が縮むか、想像もつかない。
× × ×
デスゲーム、スタート。
「えぇっと……陽乃、陽乃、陽乃、陽乃、陽乃、陽乃……」
ひたすら陽乃さんの名前を繰り返す。本人が居なかったら完全に危ないヤツだ。
陽乃さんはにこにこした顔で頷きながら、時折恥ずかしさでどもる俺を煽る。「がんばれ♡がんばれ♡」とかどこで覚えたんだこの人……。
なんか癪なので、胸に添えた手に力を込めた。
「んはぁぁぁ……っ」
陽乃さんが口を開けて、甘ったるい息を吐き出した。
指がほとんど見えなくなる程乳肉にうずまる。
よし、反撃出来た――と思った矢先。
陽乃さんの足が子鹿のようにがくがくと震えて、支えを求めたのか俺の頬に添えた手を首に回し、くんと引き寄せた。
おでこ同士をぴたりとくっつけて、艶っぽく微笑む。
「……続けて？」
「……っ」
あかん。
事態が悪化した。
早めに終わらせないと、本当にやばい。
「えぇっと……陽乃、陽乃んむっ、……ぷはっ、陽乃、陽乃、陽乃、陽乃んむぅ……っ、……ぷはっ、ちょっ、舌入れるのはマジでやばんむっ

……ぶはぁっ！」
ぜんぜん。
終わらねぇ。
それでもめげずに名前を呼び続ける。
どうやら連続で呼ばなくても良いらしく、これだけのことをしながらも陽乃さんはきちんとカウントをしてくれているようなので（スペックの贅沢な無駄遣いだ）、細かいことは気にせずに無我夢中で呼び続ける。
こうしている間、しょっちゅう挟まれるキス攻撃に負けて、よろよろと後ろに退いていた。
俺の背中が、部屋の壁にぴとりと付いた時。
「――陽乃、陽乃、陽乃、陽乃、陽乃……どうですか」
「ん、オーケー。ばっちり百回言えたね。お疲れ様」
ようやく百回言い終えると、陽乃さんがうんうん頷いて、俺の頭をぽんぽんと撫でた。
ぐ……こんな単純なことが嬉しいだと……。
さてそれじゃあ――と、陽乃さんが楽しそうに言って目を細めた。
「ご褒美に、お姉さんが比企谷くんの服を脱がせてあげよう」
「……え……」
それが何を意味するのか、正直予想しきれないけれど。
陽乃さんが纏う空気感が変わって、俺の足の間に陽乃さんが足を差し込むと、下半身に急速に血流が集まるのを感じた。
続く。

（２４）

――ご褒美に、お姉さんが比企谷くんの服を脱がせてあげよう――

陽乃さんは蠱惑的な声で囁いて立ち上がり、目線で俺を促した。

部屋の壁に追い立てられていた為、背中の圧迫感も相俟って妙な緊張が走る。

立ち上がると、陽乃さんが俺の腰に手を添えた。

そして俺の足と足の間に自分の足を差し込んで、にこりと微笑む。

「さ、比企谷くん。まずは上からだね」

「え、あ、はい……っ!?」

陽乃さんが、上着のボタンを外しにかかる。

驚いて、上ずった声を上げてしまった。

ただ普通に外しているだけなのに。

ましてや今、陽乃さんは一糸纏わぬ生まれたままの姿だというのに。

「～♪」

――鼻唄混じりにボタンを外す光景が、あまりにも絵になっている。

心臓がばくばく言うのを感じながら見守っていると、陽乃さんはすぐにボタンを外し終えた。

上着を外側に開いて、中に来ているTシャツを何故か上にくるくると巻いていく。なんか聴音機を当てられる時に似ていて、いやな予感がした。

そして上着の肩の辺りに手を添えて、するりと脱がす――かと思いきや。

「……？」

脱げる寸前のところで、脱がす動きがぴたりと止まった。

今、俺の腕は両方とも後ろにぴんと伸びた状態になっている。

陽乃さんはどう力を込めているのか、俺は手首を押さえられてまるで動くことが叶わない。

陽乃さんは何故か俯いていて、その表情を窺うことが出来ない。

「……は、陽乃……？」
まだ名前で呼ぶのは抵抗しか無いのだけど、取り敢えず呼んでみる。
ゆらりと陽乃さんの顔が上がる。
先程までのにこやかな表情はどこへ行ったのか、その瞳は蛇のような鋭い光を湛えていて。
瞬間的に、今の自分が被捕食者であることを自覚する。
「脱がせるって言ってもさ」
陽乃さんが呟く。
空間に広がっていくはずの声が、湿り気を帯びて俺の身体に巻き付いてくる。
俺を捉える声の糸は、温もりが抜け落ちている気がした。
「……途中で何もしない訳じゃないよ？」
陽乃さんが首を傾げて、微かに口の端を吊り上げる。
……ちょっと待て、何だその微笑みは。
心臓が尋常でない程締め付けられるのに、その中でも確かな興奮を覚える。
陽乃さんが顔を近付けてくる。けれど俺の顔に近付いてくる訳ではなく――
「……っ」
ここで、陽乃さんの意図に気付く。
が、気付いたからと言って、何かが出来る訳ではない。
ほんの数瞬後、陽乃さんの瑞々しい唇が、俺の乳首に吸い付いた。
「……ちゅっ」
「っっ～～～……」
快感の電流が走る。
反射的に、反応してはいけないと思い声を出すのを堪える。
そんな中、陽乃さんはゆっくりと唇を押し当てると、
「ちゅっ、ちゅぴっ、れろれるっ、んちゅるっ、ちゅるるる、ちゅぴゅっ、ちゅぱっ、れろれろ……んちゅるるる……っ」
一切の容赦なく、紅い粘膜で責め立ててきた。

予想を超えた悦楽の波に、我慢が利かなくなる。
「うぐぅぅぅ……っ！」
呻き声を上げてもがく俺を、陽乃さんは上目遣いで覗き見る。
まるで、俺の反応の一挙動さえ見逃すまいとしているかのように。
黒曜石の如く光を放つ瞳が、心を捉えて離さない。
陽乃さんの手が動き、俺の両手首をくっつけた。
それを片手で拘束すると、空いた手でジーンズのベルトをゆるめ、するりと下ろしてしまう。
残されたパンツの中に、陽乃さんの右手がするりと滑り込む。
ぞわりとした感覚が背筋を駆け抜ける。
既に暴発寸前にまで勃起した肉棒に指を絡めると、パンツの中でゆっくりしごきだした。
「うぐぁぁぁ……っ！」
乳首への刺激に加えて、直接的を肉棒を愛撫され悶絶する。
足首にジーンズが引っかかった情けない格好で、腰を子鹿のようにがくがくと震わせる。
陽乃さんは尚も俺の顔を覗き込んでいる。
扇情的な瞳を見ているだけで、肉槍の硬度が増してゆく。
不意に、陽乃さんが口を離した。陽乃さんの口と乳首の間に、細い欲望の糸が伝う。
「パンツの中で出すのと、お姉さんのお腹に出しちゃうの、どっちが良い？」
「……」
この人、性格悪すぎるだろう。
どっちにしろ、言うの超恥ずかしいじゃん。
けれど、もう限界だ。
パンツの中に出すのは、被害の拡散は防げるものの……如何せん、不快になるのは避けられない。
もう一つの選択肢が「カーペットに出す」なんていうものだったら、流石にもっと考えたのだけど。
迷うと、それだけ言うのが恥ずかしくなる。かと言って答えなかっ

た何をされるか分からない。本当に怖い。
なので。
「……お腹で」
早めに答えることにした。
陽乃さんは予想外の早さだったのか、きょとんとした顔をした。
しかし、陽乃さんは手を緩めてくれない。
「誰の？」
「うぐ……っ」
この体勢では頭を掻くことも出来ないなと思いながら。
「……陽乃の、お腹で」
答えると、陽乃さんがにやりと目を細めた。
「……ん、素直でよろしい。比企谷くんが思ったより素直だったから、お姉さん奮発しちゃおうかな」
至極楽しそうに言うと、陽乃さんは俺を引っ張って数歩下がり、膝立ちになった。
そして――その豊満かつ弾力性に富んだ乳房を、両側から掴んだかと思うと――一息に肉棒を飲み込んだ。
ぴんと張り詰めた肉槍が、柔乳の谷間に垂直の向きで突き刺さる。
「うおっ!?」
突如肉茎を包んだ柔らかな感触に、びくりと跳ねる。
極上の乳圧に加えて、じっとりと滲んだ汗のぬめりがたまらない。
陶然としていると、陽乃さんが俺に顔を向けて、でろりと舌を出した。
性の象徴のような長い舌に息を呑む。
「ん……っ」
紅い粘膜が口の中を行き来する度に、液体が溜まっていく。敢えて緩慢にしているのであろう動作は、目が離せなくなる程劣情を煽るものだった。
でろりと溜まった唾液が重力に負けると、ゆっくりと蜘蛛の糸のように伸びて、柔肉の谷間を潤していく。
極上の光景に目が釘付けになる中、陽乃さんが自ら乳肉をこねくり

回し、唾液を肉棒にまで浸透させる。
「……比企谷くん、良いよ」
「え……」
「予行演習ってことで、ね？　いっぱい、好きなように突いて」
陽乃さんの誘惑の言葉。
何か考える前に。
身体が動いた。
陽乃さんの双丘の先端部分を両手で挟み込んで、めいっぱい腰を引いて打ち付ける。
唾液と汗と先走りとが潤滑油になり、獣欲を妨げることなく最奥まで一瞬で到達する。
俺の下腹と陽乃さんの柔乳がぶつかり合い、ぐぽんっと卑猥な音が打ち鳴らされる。
陽乃さんがおとがいを上げ、喜悦の表情を浮かべた。
「あはぁっ！　こっ、これ、すごい、ひぁんっ！　えっち、だね……ひぃぃんっ！」
陽乃さんの乳頭を竿の根本に擦り付けながら抽送をしている為、俺だけでなく陽乃さんも疑似性交の虜になる。
乳房は、二足歩行になった人類が尻同様のセックスアピールをする為に発達したもの。
どこかで聞いた、そんな言葉を思い出す。
だから、この行為も至極自然に思える。
陽乃さんの顔を見る。
敏感な身体の中でも一際感じやすい場所を自ら蹂躙させ、頬を桜色に染め、眉を八の字に寄せて喘ぎ続けている。
扇情的すぎる顔は、見ているだけで達してしまいそうだ。
何度も腰を引いては打ち付ける。
陽乃さんは目が虚ろになりながらも、手に込める力加減を絶妙に変えていて、腰を打ち付ける度に微妙に違う快感が身を包む。
すぐに出してはもったいない気がして腰を止めると、左右で互い違いに扱き上げてきて、止まることを許してくれない。

陽乃さんが俺を見上げる。
くぱぁっと、口を開けた。
口内粘膜が見えて、陽乃さんの身体の内側を知ったような背徳感が湧き出る。
腰を屈めて、口の中に唾液を溜めて、陽乃さんの口に垂らす。
陽乃さんはそれを受け止めて、口の中でしばらく味わうと、こくりと飲み込んだ。
満足気な表情を見て、腰の動きを加速させる。
「んぐぅぅ……比企谷、くん、これ、やばっ、気持ちいっ……ひぃぃん！　ひぃぃぃんっ！」
陽乃さんの口がだらしなく開き、快感に溺れているのだと淫らな表情が伝えてくる。
下半身がざわめいて、射精衝動が込み上げてくる。
「うぐ……も、もう、出る、出る、出る……っ！」
「あはっ、出るんだ？　いっぱい出しちゃうんだ？　出して、出して、出して……っ！」
陽乃さんが興奮で声を上ずらせる。
陽乃さん自身もびくびくと戦慄いている。
抽送を繰り返す中、陽乃さんが射精を促そうと力を込めて、互い違いに乳房を擦り合わせる。
乳房を介して、陽乃さんの手でしごかれているような感覚に陥ると、陰嚢がきゅんと持ち上がり、輸精管を疼痛が突き抜けた。
「い……っ、もう、出る、陽乃、出る、出る、出る……っ！」
「出して、比企谷くん、いっぱい出して……っ！」
身体の奥底からマグマの奔流が湧き上がり、尿道を固体のような粘度の灼熱が伝う。
――びゅぶっ、ぶびゅるっ、びゅるるるっ、びゅくっ、びゅくびゅくっ、どぶどぶどぶ……っ。
「あっ、熱っ、熱いぃ……っっ」
陽乃さんが陶然とした表情で、全身を歓喜で震わせながら双丘の奥底にマグマを受け入れる。

受けきれなくなった白濁が、谷間からぼたぼたと下へ零れ落ちる。
凄まじい濃度のようで、谷間からゼラチンの糸が長く伸びて、床の近くまで来た所でようやく切れた。
「いっぱい出したねぇ……っ」
陽乃さんが流石に驚いたという口調で話す。恥ずかしいような嬉しいような。
陽乃さん自身も達したようで、息を荒げる様子が何とも色っぽい。
「これ、毎日してあげよっか？」
「え、マジっすか」
「ただし、最低でも二回はさせてくれないとダメっていう条件ね」
「二回だと足りないな……」
「え」
「何でもないです」
「比企谷くん」
「何でしょう」
「けだもの」
「平仮名で書かれた……」
けものより、けだものの方がダメージがあるのは何でだろう。日本語って不思議。
ティッシュとウエットティッシュで胸を綺麗に拭きとると、陽乃さんは「そう言えば」と言ってあっと言う間に俺の服を脱がせた。
さっきまでのは何だったんだ……。
陽乃さんが俺の手を取る。
不意に気付いた。
初めて、お互い一糸纏わぬ姿になっていることに。
「比企谷くん」
「はい」
「もう一回言うよ」
「はい」
「しよっか」
「はい」

短く三回答えると、互いにくすりと笑い合う。
俺と陽乃さんは、ベッドに向かう。
狭い部屋だから、それはたかだか数歩程度の出来事なのだけど。
時間がやけにゆっくりに感じられて、幸せが身体の奥底から湧き上がった。
続く。

（２５）

陽乃さんとベッドまで歩を進めると、陽乃さんが先にベッドに乗り、ちょいちょいと手招きをしてきた。

「～♪」

……ばりばりの、女の子座り。

両手を足の間に挟んで、あどけない顔で微笑んでくる。少女らしい仕草と艶めかしい身体のギャップは破壊力が凄まじく、見ているだけで頭がくらくらする。

「比企谷くん、こういうの好きでしょ？」

陽乃さんが色っぽく目を細めて、にっこりと微笑む。質問が質問の意味を成していない気がするんですけど。正しく言えば「こういうの好きでしょ（好きって知ってるけどね。比企谷くんの羞恥を煽る為に敢えて聞くよ）」という感じだ。解説したら余計恥ずかしくなった。

陽乃さんの両手が俺に向けて伸びる。俺はその手を握って、すとんと腰を下ろして胡坐をかいた。陽乃さんはにこにこしている。物凄く上機嫌だ。

「……まあ、結構好きです。たまらないとは思います」

「うむうむ。素直でよろしい」

陽乃さんが満足げに頷く。こういうやりとりが心底楽しいと思い始めてるんだけど、今後の人生を考えるとどうなんだろうか。……まあ、良いか……。

「比企谷くん……」

陽乃さんが不意に艶を帯びた声で囁き、れろっと舌を出した。長い長い舌が妖しく蠢いて、その蠱惑的な動きを見ているだけで下腹部の欲望が硬く膨張する。

「折角ベッドに居るんだから、ベッドでしか出来ないことをしよっか」

「そうですね」

「今まであんまり落ち着く場所でしてなかったし」

「自覚はあったのか……」

「お、今のタメ口っぽいの良いね。もっと来なさーい」

「御免こうむる」
「何その口調」
「誤魔化せるかなと思って……」
「……」
「……」
「……」
「……」
軽快な会話がぬるっと終わり、空気が変わる。温度と湿度が少し上がって、空間の粘度が高くなるような感覚。陽乃さんは両手を再び足の間に挟んでいて、女の子っぽい佇まいをしている。
何となく、陽乃さんの顔に手を伸ばした。
「……っ？」
頬に触れると、陽乃さんが仄かに顔を赤らめて、くりっと首を傾げる。薄く開いた口から零れ出る吐息には、期待の念が混じっているような気がした。
もう片方の手も伸ばして、今度は両手で頬に触れる。
「……あっ、あっ、……ぁあ……っ」
さわさわと撫でると、人の目を引いてやまない美貌がうっとりとろける。薄く色づいた肢体は微かに震えていて、牝の匂いがもわりと立ち込めてきた。滑るように指を移動させて、耳の穴に指を入れる。陽乃さんがきゅっと唇を引き結んで俯いた。
じっくりと陽乃さんの身体を侵食していく感触が、たまらなく心地良い。
陽乃さんは俯いているものの、時折不安げにちらりとこちらを見てくる。嗜虐心をそそる瞳に思考を溶かされながら、耳朶に直接音が響くように、耳の中で指をしゅるしゅると蠢かせる。
「はぁぁぁぁ……っ」
陽乃さんが顔を上げて、俺を正面から見つめながら、大きく口を開けて戦慄いた。二の腕に寄せられた豊満な谷間を目の当たりにすると、じっとりと汗が滲んでいるのが見える。
陽乃さんは双丘の谷間を強調して見せるように、悩ましく肢体をく

ねらせる。吸い寄せられるように手を寄せていき、剥き出しになった乳房をむにゅんと掴んだ。
「んはぁっ！　あっ、んふぅぅ、あふぁぁ……っ」
陽乃さんの声が更なる艶を帯びて、息も荒くなる。たっぷりとした丸い乳房を裾野からすくい上げるように揉みしだくと、陽乃さんは自分の手を足の間から抜いて俺の内ももに添えた。すると支えが無くなった乳鞠の重みがずっしりと手の平にのしかかり、そのくせ柔肉には手の指がいとも簡単に沈みこむ。陽乃さんのしっとりと淫熱を帯びた指は、触れただけでぞくぞくした。
「はうぅんっ！」
母乳を搾るかのごとくむにゅむにゅと乳房を揉みしだくと、陽乃さんが甲高い嬌声を上げた。俺に顔を近付けて唇を突き出しキスをせがんでくるが、敢えてそれを拒む。
「だめですよ。ちゃんと声を聞かせてください」
「やぁん……いじわるぅ……っ」
陽乃さんが甘ったるい声で囁いて、絶え間のない快感の波にびくびくと身悶えをする。意地悪と言いながらも嬉しそうな笑みを浮かべているのを見て、この人はSもMも心底楽しめるんだなと、場違いながら冷静に考えてしまった。
「はぁん……んんんん……んはぁぁっ!?」
指に吸い付いてくるような触り心地の乳房を揉みしだき、その先端にある発情した突起をきゅっと摘まむと、陽乃さんがおとがいを上げて甘く喘いだ。その瞬間陽乃さんの下腹部から漂う牝の香りが一層強まり、触れてもいないのに肉竿の先端から我慢汁が零れる。
「あぁ……んはぁっ！　そんなにじっくりしちゃったら……っ、ひぁぁんっ！　……あ～っ、あ～っ、あ～……っ」
尖りきった乳首をリズム良くぎゅっぎゅっと摘まむと、ものの数回で激しく身体を痙攣させた。天を仰いで涙を流し、口をぱっくりと開けて余韻に打ち震える様は、恐ろしい程に淫靡で美しい。
「あぁぁ……あぁ……んんっ……すご、きゅって摘ままれるの、すごく、良いぃ……っ」

陽乃さんが俺を見つめて、虚ろな瞳に情欲の炎を宿らせる。
「んはぁぁんっ!?」
たまらなくなって陽乃さんの淫猥な乳頭に吸い付くと、陽乃さんの身体が弾けるように仰け反った。背中を抱きしめて逃げられないようにして、舌先で本能の赴くままに先端を舐め転がす。
「んぁぁぁぁ……これ、もう、ぜんぜんがまんできな……はぁうううっ！　……あっ、あっ、あぁぁ……っ」
散々舌で舐ってから強烈に吸い付くと、陽乃さんが再び絶頂に達する。陽乃さんの肢体の痙攣が柔乳を介して口の中に伝わり、心を昂ぶらせる。
「あぁぁぁ……っ、……も、もう……っ」
陽乃さんの身体から力が抜けて、へなへなと後ろに倒れ込む。女の子座りが解かれ、ぺたんと仰向けになろうとする。俺は乳頭に吸い付いたまま、陽乃さんの上にかぶさるように倒れ込んだ。
「あはっ……比企谷くん、わたしの胸、そんなに好きなの？　もう、甘えん坊なんだか……んあぁぁぁっ！」
陽乃さんの言葉を遮るように、乳頭に強く吸い付き、もう片方を指でぎゅむと摘まむ。
――今は俺の番だ、ほんの僅かでも陽乃さんにリードをさせることは許さない。そう思ったら、身体が勝手に動いていた。
「あくぅぅぅ……あぁぁぁ……はぁぁぁ……っ」
陽乃さんは手を斜め上に投げ出して、シーツを力無く握っている。口を離して下の方に目をやると、すらりと伸びた足も投げ出している。時折押し寄せる小さな絶頂の度に、足の指に力を込めてシーツを挟んでいる。意識しようがしまいが、この人はいくらでも男を興奮させる力があるらしい。そして今はその力が、余すことなく俺に向けられている。たまらない愉悦が込み上げた。
「んんんん……はぁん……っ？　あんっ、あぁぁぁ……っ」
乳房から手を離して再び耳を撫でさすると、先程よりも大きく敏感に反応した。繰り返される絶頂で、淫猥な身体は益々敏感になっている。

「はぁっ、はぁっ、はぁっ……あっ、あっ、あっ、あっ……？」
耳を撫でる手を滑らせて、頬を撫で、首をさすり、横乳に触れ、脇腹をいたぶり、腰の形を堪能し、尻を揉み、下腹部に到達する。陽乃さんは敏感に反応しながらも戸惑った声を上げていたが、足の根本まで手が迫った所で、これから何が起きるか気付いたようだ。
「……比企谷くん、一応言っておくけどね？　わたし、もう、たっくさんイってるんだよ？」
「そうですね」
「……わかってる……よね？」
「……だからこそ、ですよ」
「……っ」
陽乃さんが口をもぞもぞと動かして、そっと足を閉じる。些細な動作の一つ一つが、たまらぬ程扇情的でいやらしい。
俺が自由に扱えるのは、口と両手、合わせて三つ。
その内の左手と口は陽乃さんの上半身を、そして残る右手は陽乃さんの下半身を。
それはもう、めちゃくちゃにしてやろう。
ここはベッドだ。どんなに激しく痙攣して身体をばたつかせたって、落ちる心配はない。どんなに大事な場所から淫らな粘液を噴き出した所で、気にする必要も無い。
陽乃さんには、思うままに喘ぎ狂ってもらおう。
そして、陽乃さんがくたくたになったら……。
「……」
陽乃さんの、腕の下に見えている艶めかしい唇を見つめる。
俺はこれから、指でも陽乃さんの中をめちゃくちゃに掻き回すし、先程からずっと滾っている肉棒でも陽乃さんを貫く。気持ち良すぎて陽乃さんが何度も気をやって失神するまで、いくらでも。
今は引き結ばれている、ぷるぷるとした瑞々しい上下の唇が次に開く時、一体どれだけ甘い吐息と声が漏れるのか……考えただけで、ぞくぞくした。
陽乃さんの下腹部に手のひらを這わせる。

「……っ」
陽乃さんが小さく息を呑んで、僅かに腕をずらす。
その下から覗く瞳は、期待と淫欲とでしっとりと濡れていた。
続く。

（２６）

陽乃さんの中をかき回して、度重なる絶頂で息も絶え絶えになっている身体を貫いて、完全に自分のものにする。

――そう思って、陽乃さんの内ももに手をかけたのだけど。

「……ん？」

――足が、開かない。

「……陽乃さ……陽乃。あの、足……」

ここからは俺が一方的に……と勢いづいた矢先だったので、心に動揺が走る。おかげで、敬称を付けて呼びそうになるわ、言葉が尻すぼみになるわで散々だ。

陽乃さんはどういうつもりなんだ……と思いつつ陽乃さんを見やると。

「……んべーっ」

腕をおでこに乗せた状態でちらりと瞳を覗かせ、さっきとは打って変わっていたずらっぽい表情を浮かべて、言葉通り舌を出している。ずるりと長く伸びる分、いたずらっ子のように舌を出しただけでも艶っぽく映って、一瞬陶然としてしまった。

……ここに来て、まだ抵抗するか……。まあ、この人の場合は、こういう一筋縄ではいかないやりとりを楽しんでるんだろうけども。

きっちり合わせた膝の間に手を差し込んで開けようとするが、そもそも手が間に入らない。くたくたの筈なのに、まだこんな力が残ってるのか、この人……。

口をへの字に曲げて抗議する。

「往生際が悪いですよ」

しかし陽乃さんは、

「女の子の一番大事な所なんだから、自力で辿り着いてみなさーい」

「うぐ……」

くすくすと笑って、自分の腕で再び目を隠した。腹立つけど心底可愛いと思ってしまう俺はもう手遅れなんだろうか。

しかし、目を覆うということは……俺の行動を見る気が無いのか。

ということは、手段は問わないらしい。……好き放題やって良いということか。
横になっている陽乃さんのお腹のすぐ隣に移動する。ベッドが軋むと、陽乃さんがぴくっと反応した。ぴっちり合わせた膝の上に右手を乗せ、左手を豊満な乳房に伸ばし、口を――陽乃さんの、可愛らしいへそに伸ばす。
「後悔しないでくださいね」
「ふふ、一体何をしてくれるのか……んはぁぁぁんっ!?」
乳房の形をぐにょりと変え、へそに舌を挿入した瞬間、陽乃さんの身体が弓なりに反り返った。
「ひっ、ひぁぁんっ！　お、おへそ責めるなんて、比企谷くんったらマニアッ……ク……あっ、うそ、それやばっ、はぁぁぁぁぁぁ……っ！」
陽乃さんの身体の力が抜けるのを見計らって、膝と膝の間に手を差し入れた。手刀を仕掛けるように入り込んでいくと、むっちりした太ももに挟み込まれて動けなくなる。
「ほーら、ちゃんと力入れてないと、どんどん俺の手が陽乃の大事な所に近付いて行きますよ……んむっ」
「あっ、んふぁっ、も、もうっ、おへそなんて、慣れてないから、はぁぁぁぁ……んぁぁっ、胸、そんな、搾ったら、ひぃんっ！」
四本の指で乳鞠を揉みしだきながら、人差し指でぐにぐにと桃色の乳首を押し込む。陽乃さんの艶美な肢体が、まるで押しボタンに反応する機械のように、人差し指の動きに合わせてびくびくと跳ね上がる。へそに舌を押し込めば、陽乃さんの身体が悩ましくよじれる。へそは気持ち良さよりもくすぐったさが勝っているようで足の力が抜けやすく、乳房を責められる快楽と相俟って陽乃さんの抵抗する気力を削り取っていく。艶めかしい足の間を右手がゆっくりと侵入していき、両足の根本に近付いてきた。
「陽乃……すごく熱くて湿ってますよ」
まだ右手が最深部まで到達していないと言うのに、溢れ出す発情の熱気を感じ取って驚いた。俺の言葉を聞いて、腕の下から覗かせる瞳にはまるで拒絶感が無くて。

「こっ、こらっ、お姉さんをからかっちゃ、いけないぞぉ……っ？」
扇情的な瞳に益々気持ちが昂ぶって、へそを責めていた口を、陽乃さんのもう片方の乳房に移す。ぴんと張り詰めた乳首をぱくりと咥え込んだ、その瞬間、
「ひっ……はぁぁぁっ！　ゆび、ゆびが、ひきがやくんのゆび、あそこに当たって……あぁぁぁぁ……っ！」
二つの乳頭を責められて激しく反応したのか、陽乃さんの足が一瞬だけぱっくりと開いた。すかさず手を滑り込ませると、ぬちょりとした感覚と共に、中指の腹が熱い蜜に浸った。
「すご……ぐっしょぐしょですよ、ここ」
乳房を嬲る手と口を離して、右手でゆっくりと淫蜜に溢れたクレバスを撫で上げる。陽乃さんの足が抗を試みて未だに締め付けてくるが、俺の手の動きは止まらない。肉感的な内ももに力無く押さえ付けられた程度では、もはやどうしようもない。
「あっ、あっ、あっ……」
陽乃さんの口数が徐々に減り、指の動きに合わせてびくびくと身体を戦慄かせる。こちらを探るように見ている瞳には、不安と興奮が入り混じっている。
焦らすような指遣いでなぞっていくと、淫裂からは愛液が止まることなく溢れてくる。指先の感覚に神経を集中させて、肉裂の中の窪みを見付けると――ぬぷん、と音を立てて中指を挿し込んだ。
「んはぁぁっ！」
陽乃さんの両腕が跳ね上がり、両手でぎゅっと俺の腕を掴んだ。熱くぬめった肉壺と、不安げに俺にすがる腕の温かさのギャップに心臓が高鳴る。
「ゆっくり、動かしますからね」
安心させるように囁いて、中指をずにゅりと第二関節まで侵入させる。探るように膣内を抉り始めると、漂う牝の香りがぐっと濃密になった。
「ひっ、はひっ、はぁぁっ、はぁぁぁぁ……っ」
俺の腕をぐいぐい引っ張って抱き寄せるため、俺の顔は必然的に陽

乃さんの上気した顔に近付く。目の前で潤んだ瞳と見つめ合いながら、ゆっくり指を動かす。ずちゅぐちゅといやらしい水音が聞こえる度に、艶やかな瞳の中の炎が揺れて、肉悦の波に瑞々しい唇が戦慄く。すらりと伸びた足は徐々に開かれ、俺の手を受け入れていく。
「あぁっ……これ、すごいね、比企谷くん。ひんっ……これ、まだ手加減してるでしょ？　それなのに、もう……頭、おかしくなりそ……はぁんっ！」
強めに肉襞をえぐると、陽乃さんの湿った吐息が鼻腔を擽った。徐々に表情から余裕が消えて行って、色っぽくもどこか子供のようなあどけない表情を見せる陽乃さんに胸が高鳴る。
「この後、手の動きをどんどん激しくして、空いた手と口で陽乃の胸をめちゃくちゃにしようと思ってます。いいですね？」
淡々と述べると、陽乃さんの目が動揺で見開かれる。
「あ……はは……。それ、わざわざ宣言する必要ある？　ほんと比企谷くんは鬼畜なんだから……」
陽乃さんは引きつった笑みを浮かべながらも、腕をするりと俺の背中に回して抱き寄せて、唇を求めてきた。
「んむふぅ……んむっ、んちゅっ、ひぇふっ、んずちゅるる……はふぁっ、ひぃんっ、んんん……んんんん……っ」
弱り切っていても、ずるりと伸びた長い舌は執拗に俺の口の中をかき回してくる。陽乃さんをめちゃくちゃにしたいという嗜虐心と、包み込むように快感に浸らせたいという庇護欲が、口の中同様に攪拌されてあやふやになっていく。
「んむ……っ？」
右腕が俺の背中を離れたと思ったら、下向きに隆起している肉棒に指を絡みつかせた。白魚のような指がざわざわと蠢く度に、にちゃにちゃとカウパーが音を立てる。互いの官能から湧き上がる分泌液が、ベッドの上の空間を濃密に編み込んで行く。
「……ぷはっ。……良いよ、比企谷くん。わたしの胸、いっぱい責めて。わたしもこのけだものみたいなおちんちん、手でしてあげるから」

「……っ、は、はい……っ」
舌をてろりと晒しながら、艶っぽく微笑む陽乃さんの表情にごくりと息を呑んで。
口と左手を一直線に弾力ある乳鞠の頂に向かわせ、淫裂と合わせて三点を同時に責める。
「……あぁぁぁあああぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
陽乃さんが絹を裂くような悲鳴を上げて、しなやかな背中を蛇のようにしならせた。肉竿を掴む手がぎちっと力強く握り込んできて悶絶するが、負けずに責めを続ける。
淫裂に潜り込ませた中指は食いちぎらんばかりに締め付けられ、どぷどぷと淫裂から溢れ出したお湯のような熱さの愛液が、陽乃さんの中をかき回した分だけ手のひらに注がれる。
「はっ、へぁっ、はひっ、かはっ、はひぁぁぁぁ……っ」
呼吸が快感に追い付けないのか、普段の凛とした振る舞いからは想像も付かない程気の抜けた声を上げて、陽乃さんの身体が幾度と無く波打つ。連続で絶頂に達している中でも、肉棒を痛めることなくゆっくりしごく動きは、ほとんど無意識でやっているように思えた。
「ひき、がや、くん……ひきがやくん、ひきがやくん……っ」
力無く俺の名を呼ぶ陽乃さんの身体は、冬だというのに噴き出すように汗をかいている。汗と愛液でぐしょぐしょになったシーツは、既に事を終えたかのようだった。
今の時点でこんなことになっているのなら、本番は一体どうなるんだ……？　考えただけで、ぶるりと身体が震えた。
「あぁっ、あっ、あっ、あっ、あぁぁぁぁぁ……っ！」
何度目か分からない絶頂を迎えた時、陽乃さんの全身から一気に力が抜けた。肉槍をしごく手がぱたんと落ちて、足は開かれたままＹの字に伸びる。超が付く程敏感な体質の人が、発情した状態で限界まで愛撫されるとこうなるのか――と分かって、恐怖と興奮がないまぜになって頭の中を巡った。
「……」
ゆっくりと身体をずらし、陽乃さんの足を開く。身体をひくつかせ

るだけで、陽乃さんの反応はない。
「う……お……っ」
目の前で眺めて、言葉を失う。
肉付きの良い恥丘が惜しげもなく晒され、花弁は度重なる絶頂でじゅくじゅくと濡れそぼっている。恥毛は淫液と汗で肌に貼り付いていて、目の前の肢体の生々しさが増す。奥に見える膣口が物欲しそうにひくついていて、穴の大きさはつい先程まで中指を挿入していたとは思えない程に小さい。鼻腔を直撃する甘酸っぱい牝の匂いが、陽乃さんを嬲り続けた快楽の波の大きさを知らせてくれる。
無言のまま、膝立ちで身体を寄せる。
限界まで欲情した肉棒に手を添えて。
真っ赤に膨れ上がった亀頭を、弱々しくひくつく牝穴の入口に宛がった。
続く。

（２７）

にちり、と。

陽乃さんの花びらに男根の切っ先を宛がうと、たっぷりと分泌された愛液が粘っこい音を立てた。竿に手を添えて、割れ目を上下になぞっていくと、ひくついた淫裂がいやらしく裏筋をしゃぶり、挿入への期待感をぞくぞくと高めてくれる。

「あっ、あぁっ、あぁぁ……っ」

陽乃さんは全身を脱力させたまま、力無い声を上げた。汗で髪が額に張り付き、天性の美貌が淫靡な魅力を纏って極上のものとなっている。虚ろな視線が俺を捉えているが、その瞳に拒絶の色は無い。

「陽乃……入れますからね」

なるべく落ち着いた声で言ったつもりだが、緊張で微かに上ずっていた。陽乃さんは俺の言葉を聞くと微かに目を見開いて、やがて唇を引き結んでシーツを掴んだ。ぎりぎり見える程度で頷いて俺を見つめて、泣きそうな顔で微笑む。この人を自分のものに出来る……という征服感が心を包む。浅ましい欲望だと分かっていても、陽乃さんの表情を見たら止められない。

肉竿をなぞった時、どこで一番切っ先が沈み込むかも何となく分かっていた。そこへ亀頭を持っていき、ゆっくりと沈み込ませていく。

じゅぶりと亀頭を挿入した瞬間。

極上の肉悦が、肉茎を包み込んだ。

「う……ぁ……っ」

生き物のように蠢く肉襞が男根の上半分を包み込み、ざわざわと締め付けてくる。悦楽のさざ波が下腹部から全身を這い回って、入れただけで口が開いて呆然としてしまう程気持ちが良い。

「う……くぁ……」

あっと言う間に湧き上がる射精の欲求を、歯を食いしばって耐える。こんなにきつく締めつけられるものなのかと驚いていた。締め付けは強くなるばかりで、まるで男性器官を押し出そうとしているか

のように思える。あれだけ濡れていたのに、徐々に膣内が乾いていくような感覚がする。どうしたのかと思ってふと陽乃さんを見やると、その表情に違和感を覚えた。
「陽乃……？」
陽乃さんは、顔を横に向けて震えていた。そう言えば、さっき指を入れていた時と締め付ける感覚が違った。今は何だか、全身が力んでいるような……。
ピンときて、まさかと思った。
「陽乃……って、まさか……」
恐る恐る聞くと、陽乃さんがゆっくりとこちらに顔を向けた。
「あら……思ったより早くバレたなぁ……あはは。……どっちにしろ、このままじゃいられないでしょ？　ゆっくり、進めて……」
「は、はい……っ」
確かに、言われた通りするしかなかった。俺も陽乃さんも、ここまで来て後戻りなんてするつもりは無い。二人の関係を更に深めていくしかなかった。
腰を進めると、いよいよ違和感が強まってきた。締め付ける強さが増して行き、快感を通り越して軽い痛みさえ感じる。
「うっ、くぅ、うぅぅ……っ」
陽乃さんはそれ以上に苦しそうで、眉根を寄せて痛みを堪えているようだった。絶世の美貌は歪んでなお美しいのかと驚く。
ほんのついさっきまでの、この人を蹂躙したい、自分のものにしたいという欲求が、気が付けば自分の中から霧散していた。
腰を止めて、身体を屈める。豊満な乳房を包み込むように撫でて、上気した色っぽい唇を啄んだ。陽乃さんは目を見開いて驚いたが、すぐにうっとりと目を細めた。
「んんっ、くぅ……ちょ、ちょっと、んむぅ……ぷはっ、あっ、あふぁっ、こら、そんな優しいキスするなんて……生意気だぞ……っ」
お姉さん然として喋ろうとするが、その声はいつになく余裕が無くて愛らしい。
「陽乃さん……」

呼び捨ては、この場にはそぐわないと思ってやめた。
「初めて……だったんですね」
そろりと言葉を投げかけると、陽乃さんがむうっと頬を膨らませて、首に腕を絡めて抱き寄せてきた。驚いている内に唇を重ねられる。ちゅっと小さな音を立ててすぐ離されると、もっとキスしたいというシンプルな欲求に駆られた。
「わたしがモテるのは分かるでしょ？」
「……そうですね」
陽乃さんは至極いつも通りの顔をして言う。この人が言うと自慢でも何でもないから困りものだ。ただの事実報告でしかないのだから。
俺の返事に、陽乃さんはくすりと微笑む。
「わたしの性格も知ってる訳だ」
「……ほんの、ごく一部ですけど」
「それでも十分だよ。……それで、周りの男が、わたしとそう簡単に、こんな関係になれると思う？」
「……全然思いませんね」
陽乃さんが俺を抱き寄せる。首筋を撫でる艶やかなセミロングの髪がくすぐったくて身を捩ると、逃げられないようにするためか、より強く抱きしめられた。膣内の力みがほんの少し和らいでいる。
「そういうこと。途中で割に合わないって思っちゃうのかな、みんな離れて他の女の人の所に行っちゃう訳。わたしとまだ何も始まっていない内からね」
「うわぁ……美人は大変ですね」
心のそこから思ったことを口にしただけだったが、陽乃さんは目を瞠った。ぽかんとした表情はどこか子供っぽくて、あどけない表情に心がくすぐられる。
「……君ってそういうとこあるよね」
「へ……それってどういう……っ!?」
陽乃さんが突然、奪うように唇を重ねる。瑞々しい唇は先程よりも熱を帯びていて、驚きで閉じていた唇を長い舌が割り開いてくる。舌

と舌が艶めかしく混ぜ合わされ、頭蓋に直接響くいやらしい舌のまぐわいに、肉竿がびきりと脈動した。
「……ぷはっ」
陽乃さんが唇を離して、やけに楽しそうに笑う。
「……何ですか、今の」
「んー？　照れ隠しかな」
「こんなアグレッシブな照れ隠しがあってたまるか……。ていうか何に対する照れ隠しですか。俺は美人は大変と言っただけ……って、あ、そういうんむっ!?」
また唇を奪われた。陽乃さんを見ると、拗ねたように眉根を寄せている。再び口内を蹂躙されると、陽乃さんの表情を見ている余裕はあっと言う間に無くなった。いつか、俺は陽乃さんとのキスだけで射精をしてしまうかもしれない。飽きるどころか、口付けを交わす度に高まっていく官能に、そんなことを思った。
「……ぷはっ。まったく君は……」
「……なんかすいません」
「ふふ、許してあげよう」
「すげぇ上からだ……」
「比企谷くん。……光栄に思いなさい？」
陽乃さんが俺の頭をくしゃりと撫で、背中に腕を回して抱きしめて、啄むようなキスをする。流れるような動きにぽかんと惚けていると、陽乃さんがいたずらっぽく笑った。
な、なんか……。
「は、陽乃さん……」
「ん？　なぁに？」
目を細めて、にっこりと微笑みながら首を傾げる陽乃さんは。
「な、なんか、陽乃さん、すげぇ可愛いです」
「……え、ちょ、ちょっと……っ」
陽乃さんの顔が瞬く間に真っ赤にそまり、耳まで赤くなったところで陽乃さんが自分の腕で顔を隠した。反応の遅れが、そのまま彼女の動揺を示すようだった。

「う……っ？」
陽乃さんが顔を背けて「うぅ……」と小さく呻いているのを聞いて益々可愛いなと思っていると、乾いていた膣内に愛液がとろりと溢れ出した。温かく肉棒を包み込んで、膣粘膜との摩擦を和らげてくれる。陽乃さんも自分の身体の変化に気付いたようで、これから先見ることが出来るのか分からないくらいに、顔が真っ赤に茹で上がっている。
「陽乃さん……本当に、本当に、可愛いです……っ」
「こ、こら……っ、いい加減に……っ」
俺が本心から告げる言葉に、陽乃さんの声から益々余裕が削られていく。痛がっている時の陽乃さんよりも余裕が無いことにくすりと笑みがこぼれてしまう。
「な、何を笑ってるの。君はまったく……あ、こら……っ」
顔を隠す腕を引き離すと、陽乃さんは眉根を寄せて口を尖らせていて、まるで幼い少女が拗ねているかのようだった。
極上の美貌に見惚れて。
淫らな肢体に息を呑み。
かと思えば、こんなあどけない愛らしい面まで見せてくる。
俺はこの人の虜になっているんだと、今更ながらに気付いた。
「陽乃さん。ゆっくり、慎重にしますから」
陽乃さんの頭をくしゃりと撫でると、陽乃さんは俺の手に自分の手を重ねてむぅと唸った。
「話はまだ終わってないのに……んむっ？」
今度は俺から唇を重ねる。背中と首に腕を回すとベッドがぎしりと鳴った。少し意固地になっている上下の唇の合わせ目をなぞると、容易く舌を侵入させることが出来た。
「んむふぅぅ……んちゅっ、ちゅぷりゅっ、んふぅぅ……んんんん……っ」
陽乃さんの目がとろんと細められて、互いの唾液が混じり溢れた口内と同じように、膣内が愛液で益々温かくぬめっていく。温かくて甘い口内をたっぷりと味わって唇を離すと、今度は陽乃さんが名残惜し

そうな顔をした。いてもたってもいられなくなるような愛おしさが湧いてくる。
「……腰、進めますよ」
「……うん」
陽乃さんが俺を抱きしめる。
思った以上にその身体は細くて。
その表情にはまだどこか不安が滲んでいて。
目の前の女性が、一人のとても可愛い女の子なのだと、今更ながらに気付いた。
続く。

（２８）

陽乃さんの中に入れた肉棒を、ゆっくりと押し進めていく。

「くふぁぁぁ……っ」

陽乃さんは最初に比べたらよっぽど楽になったようだが、それでもやはりきつそうだ。腰の動きを止まる寸前まで遅めながら、陽乃さんの乳房に指を沈め、乳頭を爪弾く。

「ひん……っ」

弱々しくて掠れた声を漏らして、陽乃さんが身体をひくつかせる。やはり愛撫の効果はあるようで、軽く刺激しただけでも膣内には温かな愛液が湧き上がってくる。

今度は手をゆっくりと下にずらして――結合部のすぐ上の、皮を被った肉芽に親指を押し当てた。

「ひぁ……っ！」

ぐにゅっとした感触を味わった途端に、陽乃さんの背中が弓なりに反り返り、膣内の愛液が溢れ出して途端に滑りが良くなった。

次の瞬間、ゆっくり進めていた腰をずっと押し留めようとしていた抵抗が無くなり――どちゅんっ、と鈍い音がした。

「んはぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!?」

「うぐ……っ！」

気が付くと、亀頭が陽乃さんの一番奥に到達し、強烈に押し上げていた。その瞬間肉襞が肉竿から精を搾り取ろうとざわざわと蠢き絞め上げてくる。陽乃さんの顔を見ると、まるで自分の反応に驚いたかのように両手で口を塞いでいる。

「あっ、あぁぁ……ひぃんっ、え、うそ……一番奥まで入ったの？」

「そう……みたいですね。きつすぎるくらいの締め付けも無くなりました」

「なんで……」

「え？」

陽乃さんの艶やかな肢体が、ぶるりと震える。

「なんで……痛くなくなったと思った途端に、気持ち良くなったの

……っ？」
陽乃さんが消え入るような声で呟いた言葉には、微かな官能の炎が灯っていて。手を震わせながらゆっくり下げていくと、肉感的な上下の唇が露になる。膣内には、どぶどぶと淫液が溢れ出ていて、彼女の性的興奮が紛れも無いものであることを証明していた。
「……～～～～～～～っ」
この事実に打ち震えて。
危うく、ついさっきまでの気持ちも忘れて、獣のように腰を振りそうになった。
「……痛くなくなったなら、良かったです。本当に良かった……。ゆっくり動かしましょう」
溢れ出る獣欲を押さえ付けながら恐る恐る腰を引こうとすると、両頬が温もりに包まれた。見ると、陽乃さんが艶っぽく目を細めて微笑んでいる。心臓が躍動し、官能が昂ぶる。
「比企谷くん……もう、わたしは大丈夫だよ？」
だから、ね？　と薄い笑みを浮かべて、陽乃さんが蠱惑的に首を傾げる。微かに動く髪の毛一本一本の動きにさえ見入ってしまうような、魅惑的な仕草だ。
「さっき言ってくれたみたいにさ……わたしのこと、めちゃくちゃにして良いよ？」
優しく甘ったるい声でそう囁くと、陽乃さんは胸板に手を這わせて、膣肉を柔らかく締め付けてきた。膣肉の蠕動まで俺を誘っているかのような動きに陶然とする。
行き過ぎた興奮に、歯がかちかちと鳴る。
俺は何も返事をせずに、陽乃さんの両手首をベッドに押し付けた。
「ひぁ……あは、スイッチ入っ……ちゃっ、た？」
陽乃さんは初めはただ嬉しそうに言っていたが、俺がぎらついた目つきでじっと見つめると、次第に言葉が途切れ途切れになり、顔を背けて流し目を送ってきた。俺の本気を感じ取ったのか、唇が緊張で戦慄いている。
逃がすまいとする意志を示す為に、陽乃さんの手を強く握り締め

る。
陽乃さんが、顔をこちらに向けて、泣きそうな顔で笑みを浮かべる。
それは、牡の欲求を煽る、ひどく扇情的な笑みだった。
×　×　×
「んはぁぁぁぁぁっ！　ひぁっ、ひぐっ、ひぃぃぃんっ！」
腰を一気に引き抜いて、鐘を突く様にずどんと腰を押し込むと、目の前の愛おしい女性の身体が跳ね上がった。背中を反らせるその体勢は、彼女の美しい身体のラインをありありと映し出し、更なる興奮を与えてくれる。
陽乃さんの両手を握ったまま、腕を引くと同時に腰を突き立て、腕を押すと同時に腰を引く。どこまでも単調な動きで、技術も何もあったものじゃない、ただ繋がった牝を蹂躙する為の動き。女性によってはこういう動きが絶対に合わない人もいるだろう。しかし目の前の女性――陽乃さんは、目に涙を浮かべて喜んでいる。蜜壺に浸る肉悦と、陽乃さんの反応を見つめる悦楽とが混じり合って、意識が飛びそうなくらいに気持ちが良い。初々しくひくつく膣肉を肉竿を抉る度に、たまらない幸福感が脳内を突き抜ける。
「ひっ、はひっ、ひきが、や、くん、も、もうっ……んはぁぁっ！」
夢中で突き立てていると、陽乃さんが全身を強張らせ、瞳をぎゅっとつぶって激しく痙攣した。肉襞が急激に収縮して、危うく射精しそうになる。陽乃さんを見やると、瞳は溢れ出す官能にとろりと蕩けて、口の端が電灯の光を反射して微かに光っている。
「陽乃さん……イったんですね」
「あっ、あぁっ、あぁぁ……っ」
質問というよりはただの確認の言葉を呟いて、再びカリで膣肉を抉る。
「い、今、敏感に、なって……るんだよ？」
「それがどうかしましたか？」
「う、うわ、うわぁ……っ」
陽乃さんの顔が、興奮と不安とでくしゃくしゃに歪む。ひどく不安定な表情は、獣欲の炎に火を注ぐばかりだ。

今度は、何の加減もせずに腰を打ち付けた。そして陽乃さんの反応を見る前にすぐに腰を引き、また力いっぱい打ち付ける。
「いひぃぃんっ！　んっく、ひぐっ、ひぁぁっ、んはぁぁぁ……ひんっ！」
夢中で腰を振っていると、陽乃さんはすぐさま再び絶頂した。本当に敏感になっているようで、いとも簡単に達してしまう。ただでさえ全身性感帯の様な体質なのに、更に感じやすくなっているようだ。達する様子がいかに美しく扇情的と言えど、ここで腰を止めてはもったいない。じっと見つめることはせず、すぐさま絶頂の余韻に浸る陽乃さんを犯す。徹底的に絶頂の味を覚えさせる。
「はひぃぃぃぃ……はひぃぃぃぃ……っ」
子宮口を亀頭でぐりぐりと押し付けると、形の良い眉が悩ましげな八の字になり、豊満な乳鞠がぶるぶると形を変えて揺らめく。足は攣ったようにぴんと伸びきっている。打ち付ける度に顔が悦楽で歪み、乳房がぶるんと揺らいで形を変え、結合部からは濃厚な交尾の匂いが立ち込める。ばちゅっ、ばちゅっといやらしく響く水音が、行為の激しさを物語っていた。
下半身の決壊が近付き、上下の歯をぎりぎりと合わせる。
「陽乃、さん……俺、そろそろ……っ」
「はっ、はひっ、ひきがやくん……イクの？　出すの？」
陽乃さんが息を荒げながらも甘えた声で囁いて、俺の背中に腕を回して抱きしめて、足はまるで蛇のように俺の腰にするりと絡みつく。抽送の邪魔はしないが、決して抜かせはしないという意志を感じる、絶妙な力加減だ。
射精と同時に今までで最高の快感を叩きつけようと、腰の動きを速めて追い込みにかかる。
ずぶっ、ずじゅぶっ、じゅぶぶっ、じゅぽ、じゅこじゅこ、じゅぽじゅぽじゅぽ……っ。
「ひぃっ！　ひんっ！　ひぁぁっ！　あ、あたま、おかひくなるぅ……はぁんっ！　ひぃっ、ひぃぃっ！」
陽乃さんが獣のような声を上げて、狂ったように首を振る。しかし

それでも、絡めた足は解くどころかより一層強く締め付けてくる。足に込める力と連動して肉襞の収縮も強まり、射精欲求が噴火寸前にまで高まる。
「出しますからね。陽乃さんの一番奥に、ありったけ注いでやりますからね」
「ひっ、ひぐっ、わかった……わかったからぁ……っ、らひて、らひて、ひきがやくん……いっぱい、らひて……っ！」
呂律が回らなくなり、まるで酩酊しているかのように頬を赤らめる陽乃さんが、たまらなく愛おしい。身体の奥底から湧いて来る幸福感が身体中を包み込む。
「イく、出る、出します、出しますよ、陽乃さん……っ！」
「らひて、らひて、らひてぇ……っ！」
限界まで押し留めていた欲求が、堰を切って爆発する。
――どびゅるっ、ぶびゅっ、びゅびゅるっ、ごぶごぶごぶ、どぶどぶどぶ……。
「ひぁぁぁぁぁ……っ！　奥、わらひの奥に、出てる、ひきがやくんの、いっぱい出てるぅぅぅ……っ！」
陽乃さんが絶頂するのと同時に、膨らみきった亀頭が爆ぜて、大量の白濁をどくどくと子宮へと注ぎ込んでいく。
陽乃さんは綺麗な瞳から涙を流し、口を力なく開いて、うっとりとした表情で俺を見つめていた。

続く。

（２９）

「エッチは気絶してからが本番なのかもしれない」

謎の名言が誕生した。

――ねえ、比企谷くん。わたし思ったんだけど……などという、やたらどきどきする前置きで、陽乃さんがもじもじと頬を赤らめて言った台詞に。

「ぶほぁっ！」

俺は、口に入れていたカフェオレをまあまあの勢いでテーブルに噴いた。ぶびゅーって。

初めて、この人はバカなんじゃないか……なんてことを思ってしまった。

最初に陽乃さんの中に射精した後は、それはもうお互いが溶け合う程の泥仕合と相成った。絶頂に達した時に陽乃さんが足をＶ字にぴんと伸ばしたので、その膝裏を掴んで獣の如く腰を振ると、陽乃さんが鳴いて泣きながら何度も全身を痙攣させた。俺も射精で敏感になっている肉棒を挿入したまま抽送を繰り返した為、気が狂いそうな程の快感に脳を焼かれた。

陽乃さんが気絶した時は至極自然で必然的な流れだとは思ったが、膣内の締まりが急に緩くなった時は「人が気絶する」という現象が一番生々しく感じられた。

そして、その後だ、問題は。

陽乃さんは気絶から回復すると、うっすらと笑みを浮かべて俺を押し倒し、騎乗位で跨ってきた。もちろん敏感なのは相変わらずで、それどころか更に敏感になっていたので、肉棒を柔らかな膣肉に呑み込んだだけで、陽乃さんは達してしまった。しかしそれでも笑みを浮かべたままで、俺の腹に手を置いて腰を前後にぐいぐいとグラインドさせ始めた時は……その蠱惑的な光景を見ているだけで射精してしまいそうだった。実際その後すぐに射精してしまったのだけど、陽乃さんは俺の射精と同時に絶頂したにも関わらず、満足しなかった。身体

をぴったりと重ねられて、耳元で「まだ、出来るでしょ……？」と吐息混じりの声で囁かれた時に見えた電灯の光は、しばらく忘れられそうにない。囁いた後、陽乃さんは腰を前後左右上下に振り、時にぐりぐりと回転までさせた。まるで、牡の貪り方を本能的に熟知しているかの如き動きに翻弄されて、俺は気絶する直前まで射精し続けた。

その後一緒にシャワーを浴びた。てっきりいたずらされるかとどきどき（期待ではない、断じて期待ではない）していたのだけど、陽乃さんは疲れ果てていたのか驚く程大人しかった。しかし後ろから抱きしめて丁寧に肉棒を洗われると、あっと言う間にがちがちに勃起してしまった。陽乃さんはボディソープをシャワーで洗い流すと、「うわぁ……」と上ずった声を上げて亀頭をつんつんとつつき、「いっぱい気持ち良くしてくれたから……ね？」と、頭がくらくらする程優しい声で囁いた。そして俺を椅子に座らせ、裏筋や玉も丹念にねっとりと舐め上げる丁寧な口淫をしてくれた。上目遣いで俺を見つめながら、口をOの字にして頬をすぼめる様は淫猥そのもので、最初から最後まで目が離せなかった。唾液たっぷりで肉竿をしゃぶる陽乃さんの蜜壺がもたらす快感は、ついさっきまでの行為と比べて穏やかそのもので、まるで適温の温泉に浸かっているかのような心地良さがあった。射精すると、陽乃さんは俺の様子を窺いながら最後の一滴まで丁寧に搾り、啜ってくれた。

そんなこんなで、今は二人とも服を着て、ゆっくりとホットのカフェオレを飲んでいた。陽乃さんは俺と同じくカフェオレを飲んでいるんだけど、びっくりするくらい機嫌が良い。さりげなく鼻唄を口ずさみながら（引くほど上手い）、何故か俺の腕を抱いて猫のようにころころと甘えてくる。そっかー俺今日死ぬのかなー、などと自然に思うくらいには幸せだったりする。

陽乃さんがマグカップをテーブルに置いて、満足げに息を吐く。

「ふぅ。ごちそうさま。美味しかったよ」

「お粗末さまです。それなら良かった」

「んふふ……」

陽乃さんが俺を見つめて怪しげな笑みを浮かべる。そしてクッ

ションを俺のすぐ後ろに動かしたかと思うと……俺の後ろを陣取り、そのまま抱き付いて来た。背中が天国みたいな感触に包み込まれる。
「あ、あの、陽乃さん？」
「なぁに？」
「あ、当たってます……」
　全力で真っ直ぐ前を見ながら言うと、陽乃さんが俺の肩に顎を乗せた。吐息に混じったカフェオレの甘い香りに陶然としていると、耳たぶをはむっと唇で咥えられた。心臓が爆発しそうになっている俺に、陽乃さんがくすりと笑って囁きかける。
「当ててるのよ……」
「え、あ、はあ、はい、そうですか……」
　目が高速で泳ぐ。おいおい、俺と陽乃さんはついさっきまで散々もっとすごいことをしてきたんだぞ。どうした比企谷八幡。お前、これじゃあまるで――
「なんか、比企谷くんさ。わたしとあれだけしたのに、反応がまるで童貞みたいだね」
「……」
　心の代弁者、現る。
　涙が出そう。
「比企谷くん。なんで泣いてるの？」
「……」
　涙、出てた。
「……や、こんな可愛くて色っぽい人に当てられたら、こうなりますって。こんな幸せ、慣れて当たり前になる方がいやですよ……って、あれ？」
　陽乃さんが何も喋らないので振り返ると、目の前の顔の動きがぴったりと止まっていた。無表情といえばそうだが、まるで無理に平静を装っているかのようだ。
「……」
「……あ、陽乃さん……もしかして、照れてます？」
「……」

「あの、陽乃さん、知ってますか？」
「何かな？」
「人間の手首って、そういう方向に曲がらないんですよ？」
「比企谷くん。人間、限界に挑戦するべき時があると思うの」
「そのタイミングは俺が決めるし第一これは人間の限界って言うか人体の限界って言うか関節の限界って言うかいたたた！」
　陽乃さんがびっくりする程素敵な笑みを浮かべたまま、俺の手首をあらぬ方向に曲げようとする。俺のお腹に回された腕が、今は俺を抱きしめる為ではなく、逃がさぬよう拘束する為に機能しているという恐ろしい状況だ。
　しばらくの間手首の関節がグッバイするのを必死で防いでいたが、やがて陽乃さんは飽きたのか唐突に俺をぱっと解放した。
「比企谷くん。こっち」
　陽乃さんは立ち上がると、俺の腕を引いてベッドに向かった。促されて仰向けに寝転がると、陽乃さんが上から乗ってきた。柔らかな乳圧が胸板にかかるが、これだけ肉感的な身体をしていながらこの人の身体自体は驚く程軽い。
「比企谷くん」
「なんでしょう」
「生意気」
「すいませ……っ!?」
　謝ろうとした所で、陽乃さんが急に顔を近付けた。おでこを付けた状態で俺をじっと見つめ、顔をずらして耳元で囁く。
「比企谷くん。わたしね、君のことが、　　」
　――その声は、陽乃さんが今まで俺に発したどの声よりも優しくて。
　耳に流れ込むと、兜卒の天の甘露が如く俺の心を魅了した。
　心臓が一瞬活動を止めた、気がする。
　心臓が木っ端微塵に爆発四散した、気がする。

それほど、有り得ない程の衝撃が俺の心をめちゃくちゃにかき回していた。
陽乃さんがくすりと笑う。セミロングの艶やかな黒髪が俺の頬を撫で、白魚のような指が俺の手に絡み付く。気が付けば、二人の身体は余す事無く密着していた。
「それで、比企谷くん。君はどうなのかな？」
「うぐ……」
「あれー？　お姉さん勇気出したのになー」
「や、んなことないでしょう。すげぇあっさり……って、あ……」
陽乃さんが飄々と振る舞うものだから、気付くのが遅れた。
よく見ると、陽乃さんの頬がほんのり朱に染まっている。
心臓に、血液が一気に流れ込んだ。
「陽乃さん……っ」
「え、きゃ……っ？」
愛おしさで我慢出来なくなり、陽乃さんの肩を掴んでひっくり返す。今度は下になった陽乃さんが、一体何が起きたのかと目をぱちくりさせている。珍しい光景に思わず心の中でガッツポーズをした。
「陽乃さん……俺、も、す、好きです……っ」
陽乃さんの手を握って、ありったけの勇気をかき集めて震える声で伝えると。
「……ふぅん。そっか……」
陽乃さんは平静を装っているつもりのようだが、耳まで真っ赤に染まり、目を泳がせている。本当に直球で行くと、実はかなり弱いらしい。
顔をゆっくり近付ける。吸い寄せられるように唇を重ねると、陽乃さんが背中に腕を回してきた。抱きしめ返すと、陽乃さんの腕に力が込められる。離れたくないという愛くるしい感情がうっすらと透けて見えて、尚のこと愛おしさが湧く。
唇を離すと、陽乃さんがまるで試すように笑った。

「比企谷くん……わたし、めんどくさいよ？」
「……なんだ、そんなことですか」
「……結構、ていうかかなり重要だと思うんだけど」
「ああ、や、言い方が悪かったですね、ごめんなさい。そんなの今更ですよ」
「あんまり変わってないんだけど……」
拗ねたように頬をぷっくり膨らませる。この人は自分がこういうことをすると可愛いと分かってやっている訳だけど、それでも想定が甘いと言わざるを得ない。
可愛すぎて死にそうなんだぞ、こっちは。
何言ってんだ俺。
頬をぽりぽりと掻いて、陽乃さんを優しく抱きしめる。
「まあ、それも込み込みで好きってことで……どうですか」
恐る恐る聞くと、陽乃さんは「んー……どうしようかなー？」と焦らすように言う。あんたさっき俺に……ああもう。しかし、こんなことを言いながらも、陽乃さんの笑顔はとても幸せそうで。ただただ俺をおちょくっているだけだとすぐに分かった。
「……ま、採用してあげよう」
「陽乃さんは人事の人だったのか……」
「ん、似たようなもんじゃない？」
「え、それってどういう……」
陽乃さんの言葉に戸惑っていると、陽乃さんがにっこりと微笑んだ。
「よく、永久就職……って言い方聞くでしょ？　あんな感じ」
「え……うおっ!?」
陽乃さんが俺を強く抱きしめて、俺の肩に顎を乗せる。顔が見えないようにしたのは、陽乃さん自身、今の台詞が相当恥ずかしかったからなのだろうか。
ほんの少し前までは、この人は強化外骨格に包まれた、どこまでも底が見えない魔王のような存在だと思っていた。
しかし今では、その認識はすっかり変わった。

底が見えない、という点は今でもそう思っているが、それは怖いという意味ではない。
まだまだ知らない魅力があるという意味だ。
とんでもなく美人で、スタイルも良くて、外面の良さは最強で。
それでいて、とんでもなく可愛くて、エロくて、女の子っぽくて、大人っぽくて、子供っぽい。
「比企谷くんと好き放題する為だけの部屋を借りようかなー……」
「発想が斜め上すぎる……」
こんな吹っ飛んだことを言われても、本当にやってくれたらどれだけ楽しいかということばかり考えてしまう。
俺の心も身体も、この美しい女王様にすっかり捕らえられてしまった。
多分物凄く苦労するとは思うけれど、それ以上に楽しいことが沢山待っていそうで。
目の前の年上美人を見ていると、どうにも頬が緩んでしまう。
試しに陽乃さんの頬をむにっと摘まんでみる。
「……何してるの？」
冷えた声音で言いつつも、その瞳はとても優しい。この人がもたらすギャップは破壊力が高すぎるようだ。また、新たな面を一つ発見出来た。
これからも少しずつ、こういう発見をし続けて行けたら嬉しい。
ころころと表情が変わるようになったこの人を見ていると、心の底からそう思う。

――そう。

雪ノ下陽乃の傍にいると、意外と見えてくるものもある。

お終い。

一色いろはは事ある毎におしおきを求めたがる。

（1）

一色いろは、一生の不覚。

――そう、言わざるを得ない。

「ふぅ……」

とてとてと道を歩きながら、ゆっくり深めのため息を漏らす。

本日は冬の寒さがまだ残る４月上旬の、土曜日。

先輩のおうちにお邪魔する約束をしたのは午後１時。本当は午前中から行きたかったんだけど、何やら用事（平塚先生の雑用）に駆り出されているらしく、すまんと謝られてしまった。先輩は悪くないと思うんです……ご愁傷さまです……。

そして今の時刻は１１時５５分。ちなみに先輩の家にはあと５分後には着く。……行ってもまだ先輩は居ないと分かってるのに、迷惑をかけてしまうと分かっているのに、なんでこんなに気が急いてるんだわたしは……。

一生の不覚、それは、先輩――比企谷八幡先輩に惚れたこと……ではない。その言い方は流石に本人に失礼だしね。あの人、さりげなく凹むからなぁ。そこがまた可愛いんだけど……って、そうじゃなくて。

今の思考の流れでも分かる通り。まさかわたしが――誰にでも可愛い子ぶって、男はみんな手玉に取る対象としてしか見てなかったような、あの一色いろはが……先輩に、比企谷八幡先輩に、こんなにベタ惚れしてしまうなんて、今までのことを思い出すだけで火が出る程恥ずかしくなるくらい惚れてしまうなんて……と、いう意味での不覚だ。どっちにしろ先輩に失礼な気もするけど、まぁ良いか。

ちなみにさっきのため息は、寒い中歩いていることに対してでもなければ、疲れている訳でもない。言うのも恥ずかしいけれど、所謂「恋煩い」っていうやつだ。言ったらほんとに恥ずかしかった。手で顔を隠したいよぉ。

――あの日、何時間したかも分からないくらい先輩と交わったことで、元々先輩に惹かれていたわたしの心は、キスをしたことで先輩の心に更に寄り添っていったわたしの感情は、もうどうしようもないくらいに深く、とろとろに蕩けてしまった。先輩がわたしのことをとろとろにした。

わたしは、先輩が好きだ。

そんなことを恥ずかしげもなく言えるくらい、先輩が好きだ。……恥ずかしげもなく言えるのは、心の中でだけだけど。心の中で言うのだって、最初すごく苦戦したくらい。

先輩にはいくら普段あざとい事を言っていても、夜になったら全部蕩かされて素直な気持ちを言ってしまうんだから、もうどうしようもない。

本当は今日だって、午前中どころか前日夜から行きたいくらいだった。友達の家に泊まりに行くと言えばわたしは大丈夫だったし。こういうの前乗りって言うんだっけ？

昨日の夜にそれを提案してみたら、先輩のご両親がいらっしゃるから駄目だと言われた。流石に言うのが直前すぎたのもあったけど、それでも名残惜しくて粘ったら、「お前は自分の恥ずかしい声を俺の親に聞かせたいのか」と言われたから「じゃあ口になんかはめてくださいよぉ。猿ぐつわって言うんでしたっけ？」と試しに言ったらおでこにチョップされた。理不尽だ。ちなみにそのまま手の横の部分でわたしをぐりぐりしてきて、きゃーきゃー言ってるわたしの仕草に発情したのか、先輩がキスをしてきた。ちなみに場所は駐輪場。なんかわたしたち、あそこでよくキスしてるなぁ。コート越しに背中にぐりぐりと押し付けられる、駐輪場の柱の感触をすっかり覚えてしまった。

どうやらわたしはキスがすごく好きで、キスにすごく弱くて、キスでとろとろに蕩けてしまうらしい。お互い、唇をちゅっと合わせた時に、今具体的にどの辺までしたいのかが分かるようになった。唇の触れ方や舌の絡め方、そして何より目の色で、キスだけしたいのか、ちょっとお互いの身体を触り合いたいくらいなのか、お口でしてほしいのか、最後までしたいのか、先輩の望むことが全部分かる。

これは先輩とわざわざ言葉を交わさなくても、互いに通じ合うものだと思っている。
共通認識。以心伝心。不文律。
そんな感じ。
ちなみに昨晩駐輪場でキスした時は、先輩が何を思ったのかエッチする気満々な舌の絡ませ方をしてきた。ちょっとしたエッチをしたい舌の動きじゃない。あれはここでわたしに入れたいという意思表示を兼ねたキスだった。
だめです、そこまでは……なんて言おうとしても、強く抱きしめられて腕を固定されて、唾液を何回も飲まされたらあっと言う間に何も言えなくなっちゃう。口の中をぐっちょぐちょにかき回されて、はしたないくらいお股をぐしょぐしょに濡らして、わたしは激しくイった。
先輩がショーツ越しにお尻を激しく触ってくるから余計に感じてしまって、立つのもままならないくらいに腰ががくついた。
先輩が強く抱きしめているから、全く動けないままかくんと力を抜くと、先輩が「柱に手を付いて、尻をこっち向けてくれ……」と息を荒くした声で言ってきた。この状態になった先輩はもうやばい。最近わたしはこの状態の先輩を「おサルさんモード」と名付けた。本人に言ったらすっごい怒られたけど。怒り方が面白いし可愛いので、しばらく言い続けてみることにする。えらい目に遭いそうだけど。
ああ、話が逸れた。
それで、これ声抑えられるかな……と思いながらも言う通りにして、「手短にね……？」と言ってショーツをずらしたら、自分でも分かるくらいか細い声での懇願になってしまって、先輩に劣情に火を点けてしまった。「わかった……っ」と短く囁いて、先輩が思い切り貫いてきた瞬間……頭に火花が散った。あまりに激しく腰を打ち付けてくるから、わたしはコートを唇で咥えて必死で声を殺した。
何十回か腰を打ち付けられて、先輩から出たお汁がわたしの子宮の入り口に叩き付けられると、視界に花火みたいにぱちぱちって光が散って、意識が飛んだ。意識を手放しながらも感じたお腹の奥の温

もりが、どうしようもない程に心地良かった。
その後、起きたら先輩がわたしをおんぶして運んでくれていた。自転車はなんか手を気持ち悪い角度にしてなんとか一緒に運んでいた。ありがたいけど気持ち悪かった。
先輩に「ありがとうございます。でもなんか手の角度が気持ち悪いですね」って正直に言ったら「おしおきすんぞこら」と言われたので、「ぜひ♪」と返したら黙ってしまった。多分顔が真っ赤になっていたと思う。でもその後、結局先輩は自転車を一度止めて、おんぶしたままショーツをずらして私のアソコを指でかき回してきたから、泣きながらイってしまった。先輩ってこういう時本当に鬼畜でどきどきしちゃ……こほんこほん。
昨日は外だったからあれくらいで済んだけど、普段はもっと……もう、本当にすごい。先輩、マジでおサルさん。学校で口だけとか手だけとかでもよくするけど、というか毎日してるけど、本番までは中々出来ない。流石に生徒会長という肩書があるしね。それを考えるなら口だけとか手だけとか言ってる場合じゃないだろって話になるけど。
ああ、また話が逸れた。
角を曲がると猫がててと駆けて行った。あの天然のあざとさには見習うべき点がたくさんあると思う……ってこの前先輩に言ってみたら、へっと鼻で笑われた。マジ許すまじ、おサルさん。
先輩は、夜、どちらかの家で本気でエッチする時、思い切り力強く抱きしめてくる。その時は全く動けないどころか、息も絶え絶えになる。そんな状態で全力で子宮に先輩の逞しいものを打ち付けてきて、何十回何百回何千回とわたしを鳴かせるんだ。
先輩が上になって、手をぎゅっと握られてキスをしながら打ち付けられると、もうたまらない。うつ伏せになった状態で上からのしかかられながら獣のように交尾をするのなんて、本当におかしくなりそうになる。
仰向けでもうつ伏せでも、脇の下から腕を通されてがっちり固定されながら犯されると、頭の芯まで幸せな感覚で痺れてしまう。先輩の

心と身体と欲望と愛情を全身で感じながら中に出されると、もう身体中が喜んでしまう。もちろん、わたしの心もいっぱいに満たされる。
それに、ここで思い出すことさえ恥ずかしくなるような言葉を毎晩のように言わされるんだ。もっとも、最近では言わされてるのか進んで言ってるのかちょっと曖昧になってきたけど。そしてそんな言葉を口にする度に、身体の奥がきゅんと疼く。そして中に出された後、わたしのアソコは喜びに震えて先輩のモノをきゅきゅきゅっと締め付けて、先輩のお汁を残すことなく吸い出してしまう。
正直、わたしたちがこれから大学生になって、それでも関係が続いていて一緒に社会人になれたら、すぐにでもあの人の子どもを欲しがってしまいそう。今だって先輩に「俺の子を孕め」なんて言われたら、喜んで受け入れてしまうだろうなと思う。もちろん、そこは2人とも自制してるけど。結構必死で。
だいたい、なんであの人はあれだけ激しくわたしとしておいて、終わったらずっと撫でてくれたり腕枕してくれたりコーヒーを飲ませてくれたりと、あんなに優しくしてくれるんだろう。反則だ。男らしさと優しさのダブルパンチでわたしが悶えていることに先輩は気付いているんだろうか、まったくもう！
「……はぁ」
もう一度、恋煩いのため息。2回目でもやっぱり恥ずかしい。むしろわざわざ言ったことで更に恥ずかしくなった。
もうじき、先輩の家に着く。確かご両親は居なくて、小町ちゃんが居るはずだ。小町ちゃんとは最近一気に仲良くなったから、一緒にカマクラちゃんを愛でながらお話してようかな。
「……はぁ」
こんなこと、考えるようになるだなんて夢にも思わなかったけど。
先輩に、早く、会いたい。

続く。

（2）

「ふぅ……」

平塚先生から言い渡された雑用を終えて、自転車のペダルを漕ぐ足に力を込めて、足早に家へと向かう。や、もうほんと勘弁してほしい。最初は「比企谷。すまないが、休日にちょっと奉仕部関連で頼み事があるんだが……もちろん無理にとは言わんが」と控えめに言ってきたのに、俺が「すいません、その日はちょっと……」と目を泳がせながら答えた瞬間目の色を変えて、「なんだ、女か？　それとも現生徒会長か？　それとも一色か？」と詰め寄ってきた。段階を踏んで特定してくのやめてほしい。キスすんじゃないかってくらい顔が近付いたんだけど、思いっきり血の涙を流してたから違う意味でどきどきした。血涙って本当に流せる人居るんだ・　……。

平塚先生の言葉からも分かるように、俺といろはの関係はそこはかとなく、けれど確実に学校内に知れ渡っていた。俺は学校で他の人の目がある時はあくまで今まで通り接するつもりで居たんだが、いろはの振る舞いが予想外にかわい……下手だった。

学校で俺を見た途端に目を輝かせて、

「あ、先輩！　おはようございます！　えへへぇ……」

と腕に抱きついてくる。

「お、おい、こら、こら」

必死で訴え掛けると、

「あっ、す、すみません、そうでした……あぅ」

と、顔を赤くしながら離れていく。

こんな流れはしょっちゅうで、というか毎日のことで。しかも毎回無邪気極まりない仕草で抱きついてくるもんだから手に負えない。反射で抱きしめ返しそうになって毎回ヘッドバンキングして理性を保っていたら、この間1年生と思しき女子グループの前を通りがかった時に「あ、ヘドバンの人だ」と言われて激しくショックを受けた。俺のキャラ付けが確実に変な方向へ向かっている。

ダントツで気まずくなるであろうと予測していた奉仕部での空気

は意外といつも通りだったが、この件はきちんと話題に出た。
雪ノ下が「一色さん、最近なんだか変わったわね。……比企谷くんのばか」と拗ねたように呟いて、それを聞いた由比ケ浜が「そうだね、いろはちゃん、すごく可愛くなったよね。……ヒッキーのばか」とこれまた拗ねたように呟かれた。人生で一番返答に困って、膝に手を置いて机に視線を落としながら「お……おう」と言うのが精一杯だった。俺の回答の拙さマジクール。
そんなこんなで、周りに少しずつ知られつつもいろはとの付き合いは続いているのだけど、気付いたことが一つある。
俺は、身内にとことん甘いらしい。
ここで言う身内は小町のような肉親に当たる人のみを指すのではなく、漠然と「心を許した人」という意味で言っている。雪ノ下と由比ケ浜は身内と言っていいような恥ずかしいような……という感じ。戸塚と俺との関係は神とそれを崇める宗教の教主っていう関係な。材木座？　もちろん他人だけど。
実際、俺はいろはに対して、日が経つにつれて小町を甘やかすときと同じくらいの勢いで愛でるようになってきた。いろはも以前のように事あるごとにあざとかったり変な行動をすることが減って、それはもうデレッデレになってきたために、俺のこの変化にも拍車がかかっているのかもしれない。
ちなみにいろはに以前ぽろっとこの話をしたら、
「み、身内!?　ちょ、ちょっと、そりゃもう先輩とは毎日毎日一緒に居て夜も可愛がってもらってますけどそんな言い方されたらもうお前は一生俺の女だって言ってるも同然じゃないですか何ですか何なんですかもうもうちょっと直接的に言ってくださいお願いします」
と畳み掛けられたので、恥ずかしくなって逃げた。ダッシュで。ちなみに「逃げたら今まで先輩がわたしにした数々の淫猥な行為を白日の下に晒しますよー」と爽やかに言われたので即座に戻った。それはお前の立場もやばくなるだろうが。そしてその後本当にプロポーズじみたことを言わされそうになったので、キスで誤魔化した。１５ＨＩＴくらいしたんじゃなかろうか。・　……うん、まあね、そのうち

ね。
　あと５分程で家に着く。時計を見ると、時刻は１２時４０分。待ち合わせは１３時だから、きっとまだいろはは来ていないだろう。急がなくても時間には間に合うと分かっているのに、ついつい気が急いてしまう。
　毎日会っているというのに、もう。
　いろはに、早く、会いたい。
×　×　×
　時刻は正午。先輩と会う予定のぴったり１時間前に家に着いた。
「いらっしゃいませー！　って、ありゃ？　いろはさん、早いですね！　ようこそ我が家へー♪」
　予定より明らかに早く着いたわたしを、先輩自慢の妹さん、小町ちゃんが暖かく迎えてくれた。
「小町ちゃん、こんにちは。お邪魔します」
「はーい、どうぞどうぞー♪」
　小町ちゃんがにぱっと笑うと、ほんとに天使みたいで思わず頬が緩む。先輩がシスコンになるのも分かる気がするなぁ。先輩は何故かシスコンと認めなくて気持ち悪いし、シスコンじゃないと言いながら小町ちゃんの事を話し出すと急に目の色を変えて喋り出すのはもっと気持ち悪いけど。ダブルで気持ち悪いとこの間本人に直接言ってみたら、思いの外凹んでしまったので、その後立ち直ってもらうまでかなり大変だった。先輩、変なとこでメンタル弱いなぁ……まぁそういうとこがかわい……こほんこほん。
　靴を脱いでいると、小町ちゃんが後ろでテンション高めに喋りだした。
「うへへぇ……未来のお義姉ちゃん……ええのぉ、かわええのぅ……」
「……お、お邪魔します」
　な、なんだろうなぁ。すごい可愛いんだけどなぁ。小町ちゃん、時々変なテンションになるんだよなぁ。こういうとこを見ると、ああ、２人は兄弟なんだなぁと実感する。そう思ってほっこりすると同時に、２人の間にはわたしの知らない思い出が沢山あるんだと思うと

ちょっぴり悔しくなる。うぅ――
「いろはさんはこれからお兄ちゃんといっぱい素敵な思い出を作れば、それで良いと思うんです」
「え!?」
あれ!? 今、わたし心読まれた!? 気のせい!? あれ!?
「なんとなくですよー」
またしても心を読んだようなことを言って、小町ちゃんが腕を頭の後ろに回してにかっと笑った。可愛いけど。可愛いんだけど！ なんなの!?
突然小町ちゃんが発揮した超能力者じみた力に動揺していると、小町ちゃんがわたしの目の前にとててと寄ってきた。抱きしめちゃおうかなぁ。
「いろはさん、お兄ちゃんの部屋で待ってますか？」
「え？ だ、大丈夫だよ？ わたし、早めに来ちゃった分は小町ちゃんとお話したり、カマクラちゃんを可愛がりたいなぁって思ってたから」
突然の提案に戸惑いながら答えると、ちょうど良いタイミングでカマクラちゃんがのそのそと足元によってきて、なーごと可愛く鳴きながらすりすりしてきた。ふふん、この辺りがわたしと先輩の差だよね……っていうのをこの間先輩に言ったら、がっつり凹んでしまった。地雷って程じゃないけど結構な弱点だったらしい。ああもう可愛いしめんどくさいし可愛い。
わたしの答えを聞いて、小町ちゃんがにへっと笑った。いたずらっぽい笑顔に心臓が高鳴る。
「いろはさん……お兄ちゃんと会わないうちに小町たちと遊んでても、絶対上の空になりますよ？」
「うぇっ!? そ、そんな、こ、と……っ」
小町ちゃんからの突然の指摘に、顔が急に熱くなる。両頬に手を当ててうーと唸ると、小町ちゃんが「ぐはぁっ！」と悲鳴を上げて倒れた。どたんという大きな音に心臓が飛び上がりそうな程驚く。
「こ、小町ちゃん!? 大丈夫!?」

慌てて駆け寄ると、小町ちゃんが首だけくりんとこちらに向ける。
一歩間違えるとホラーになりそうな絵面だなぁ。
「うへへ……ええのう、恋焦がれる相手を思って顔を真っ赤にする未来のお義姉ちゃん。かわええのぅ……うへへへ……」
「……」
こ、小町ちゃん……。
やっぱりこの子……ちょっと、というよりはかなり……変なのかもしれない。すごい可愛いんだけどね。
そんなやりとりを経て、結局わたしは小町ちゃんのご厚意に甘えて先輩の部屋で待つことにした。時刻は１２時５分。まだ５０分以上あるんだ……と、気が遠くなりそうになりながら、わたしはすっかり通い慣れた先輩の部屋に向かった。

続く。

（3）

先輩の部屋に一人で入り、つい癖でドアの鍵を閉めかける。

あぶないあぶない、これじゃただの籠城だ。

先輩の部屋で籠城とか何それ楽しそうとか思ったけど、お腹がすぐ空いちゃいそうだなぁ。着眼点が子どもみたいだ。

「ふぅ……」

疲れていないどころか元気いっぱいなのに、またため息を漏らす。そしてふらふらと歩いて、先輩のベッドにぽすんと座る。ここに座った時の擬音がぼすんになったら激しく危機感を抱く所だけれど、先輩とするようになってから体重が良い感じに落ちた……上に、脱衣所で自分の身体を見ると、何だか漠然と……こう、なんだろう、身体つきが……えっちになった、ような気がする。あくまで気がするって話ね、うん。

「ん……」

ベッド際に腰掛けたまま、こてんと横に寝転がる。手は自然と内股に挟んでいた。ふへへー、こういう時は真っ先に先輩のベッドに上がって良いって先輩に許可を貰ってるもんねー。先輩のものはわたしのもの、そしてわたしは先輩のも――

「あぅ……」

……自爆した。すっごい恥ずかしい。

恥ずかしくて穴に潜りたい気分なので、穴の代わりに先輩のお布団をかぶって中で丸まる。

もぞもぞ。

うーん、気持ち良いなぁ。

すんすんと鼻を鳴らすと、嗅ぎ慣れた先輩の匂いがして、胸と下半身の奥底が同時にきゅんとする。

人の家や部屋は、その場所に居る人特有の匂いがして中々慣れない。

それはこの家にも、この部屋にも当てはまる。

けど……それでも。

最近は少しずつ、この部屋にわたしの匂いが混じってきたような気がする。もう半年くらいしたらもっとわたしの匂いの割合も増えて、同棲してるかのような匂いになるんだろうか。あ、やば、想像しただけで顔が熱くなってきた。どうしよう、先輩と同棲したら毎朝先輩に朝ご飯を作らきゃいけないのかな。大歓迎だよもう。

頭の中を先輩に埋め尽くされたまま、布団の中でもぞもぞ。

もぞもぞ。

あー、落ち着く。

もぞもぞ。

あー、先輩、早く来ないかな。

もぞもぞ。

時計をちらり。

「……12時20分……」

まだ全然余裕があった。それでもこの部屋で先輩のことだけ考えて15分間ごろごろしてたと思うと中々だな、わたし。ふふん。

「……んっ」

何とは無しにこぼした声に、不意に甘い吐息が混じった。布団で包まっているから自分の息も跳ね返ってくるけど、うん、ばっちり歯磨きしたから全く問題無いな。

先輩に「お前の吐息が毎回甘くてどきどきすんだけど、一体何なの？　何かそういう良い匂いがするもん食べてんの？　ガムとか？　それとも女性ってみんなそうなの？」と聞かれたことがあったけど、別に特別な事は何もしていない。歯磨き粉の匂いならしてもおかしくはないけど……何だろう、男の子からしたら、女の子は皆甘い匂いがするのかもしれない。先輩、エッチしてるときは気付くと私のうなじの匂いとか嗅いでるしなぁ。まったくもう、おサルさんめ。

……とは言いつつ、わたしも結構っていうかかなり嗅いでた……。

ていうか、女性がみんな甘い匂いがするって言ったらあなたはどうするつもりなんですかねえ。そこんとこ、わたし、気になります。

「……うー、どうしよう……」

ベッドの中でこれだけ妄想に浸っていたら、当然そっち方面のこと

も思い出す訳で。いつもならもっとすぐこういう事を思い出しそうなものだけど、今日は同棲の妄想が捗ったから幾分健全な妄想が先立っていた。健全って言っちゃったよ。

うー、だめだ。

一度こういうことを考え出すと、もう止められない。

「……よし、これは不可抗力、不可抗力……」

言い訳に便利だよね、不可抗力って言葉。言い訳って言っちゃった。

まあ、こんな前置きをしておきまして。

ちょっと我慢できないから、ここで少しだけ触っちゃおうと思う。時計を見れば１２時２５分。大丈夫、先輩が帰ってくるまであと３５分もある。

元々一人でする頻度はそこまで多くなかった。そして先輩とこの関係になってからはずっと二人でしていた。だから、身体がその、何て言うか……、……先輩に、開発、されてから……一人でするのは、初めてだ。

布団が作る暗闇の中で、自分の手を見つめる。ぼんやり闇の中に浮かび上がる見慣れた手の甲に、指の腹に、指先に、先輩の感触を思い出して乗り移らせる。今わたしが見てる手は、先輩の手。そうイメージしただけで、お腹の奥がぐっと疼いた。

「……流石に、脱いだらまずいか……」

冷静に変なことを言う。しかしこれは重要な問題だ。だって脱いでやっちゃったら多分もう何の遠慮もなくなってしまう。そして恐らく時間も忘れる。いいかわたし、絶対やるなよ？　絶対やるなよ？

あれ、これ何の人たちだっけ……？　先輩が言ってた気がするけど忘れてしまった。

……何にせよ、今は。

服を着てするとしよう。それで適度にすっきりして、先輩の前で余裕を演じてやるんだ。でもわたしのこういうウソって先輩にすぐバレるんだよなぁ……しかも食い気味に。あの人のＴｗｉｔｔｅｒのアカウント名、「おサルさん@ウソ発見器」で良いんじゃないかな。何

そのおサルさん、テレビに出れそう。
「ふっ……んんっ……」
布団に包まったまま、服の上から胸に手を触れる。身体を洗う時とはまるで違う感触と感覚で、肉の柔らかさが伝わる。
……自分で触ったからこそ分かる。
確実に、柔らかくなってるぞ、わたしの胸。
サイズは正直最近は1カップ大きくなってて、それを聞いて先輩が狂喜乱舞してて何だこのおっぱいモンスターはと冷たい目で見たんだけど、柔らかさまで増しているみたい。ああもう、どうりで最近、先輩がわたしの胸を触る時間も長くなってる訳だ。ほんと勘弁してほしい、敏感さも増してるし。胸だけで3回イカされた時は流石に気持ち良すぎて怖くなった。……まあ、その後も全く歯止めをかけずに責められ続けて、最後はみっともなくおねだりして何回も挿れられ……あう。ああもうだめだ、わたし今日は自爆してばっかりだ。
「あ、そうだ」
服を着たままするかどうかを考えている内に、先輩の手をイメージしたのをすっかり忘れていた。よーし、集中集中……。
……。
……うん。
今、わたしの手＝先輩の手だ。
それじゃもう一回、今度は先輩に触られるつもりで――
「んひぃっ!?」
布団の中で跳ねた。
さっきと同じように、まずは触れる程度で――と思っていたのに、先輩の手をイメージしたら……いきなり、両手で鷲掴みにしてしまった。さっきの何倍かも分からない電流が駆け抜けて、自分の胸を触っただけの筈なのに頭が真っ白になる。
う、うそ、先輩の手って思っただけで、こんなに……？
こ、これはだめだ、もうやめないと、戻れなく――
「んはぁっ！」
今度は布団を蹴飛ばしてしまった。

もうやめなきゃと思いつつも、先輩が次に何をしてくれるかをイメージしていたら……右手をショーツの上に当ててぎゅっと押し込んで、それと同時に左手は胸をさっきよりも強く揉んでしまった。背筋を弓なりに反らせてぶるぶる震えて、戻る時に勢い余って布団を蹴飛ばした。うう、先輩ごめんなさい……。

実際、先輩は今のと同じような流れをやってくれることがある。わたしが相当高まっている時、「本当に、大丈夫だな？」と確認した上でやってくれるんだ。わたしの大事な部分が先輩の手に力強く包まれるのがあまりに気持ち良くてあまりに幸せで、この行為だけで私はすぐに果ててしまう。

「だ、だめ、だめ、だめ……」

これ以上したら、まずいことになる。

そんなこと、分かりきっているのに……。

気付けば、わたしは先輩のベッドの上で衣服をするすると脱ぎ始めていた。

続く。

（4）

「せん……ぱい……」

まだ帰宅していない先輩のことをか細い声で呼んで、ドアを見つめる。身体が熱くなると同時に、先輩にもっと会いたくなってどうしようもないくらい寂しくなった。

服を脱ぎにかかって、ニットをがばっと脱ごうとしたとき、そこでぴたりと止まった。今わたしの上半身は裏返ったニットに覆われている。すごいシュールだなぁ。

取り敢えず、元の状態に戻す。

するする。

ふう。

服を脱ぐに至った経緯を思い返す。

ああ、そうだそうだ。

……ただ脱ぐだけじゃなくて、ここからもう先輩のことをイメージした方が良いかもしれない。一人でする分にはもはや慣れきった日常の一部と化している着替えという行為も、先輩と居る時にやると途端に色彩を帯びる。

先輩はわたしが服を脱ぐ時、そういうおしおきとかじゃない限り（結構羞恥プレイと言われるような事もわたし達はしている。やりすぎそうになったらどっちかが固辞するよう頑張ろうと誓い合うくらいには夢中になっちゃう節があるからも結構まずい。こんなことを言いながらも何だかんだでどっちも歯止めをかけるつもりが無さそうなのが更にまずい）、なるべくわたしを見ないようにしている。見ないようにはしている……んだけど、それでも抑えきれないのか、ちらちらとわたしの身体を見ている。ちょっとずつしか見られていないのにその視線は強烈で、なんというか……獣欲でぎらついている感じがする。

見られただけで、触られる、舐られる、嬲られる。

そんな感じ。

他の男の人にそんな事されたら……なんてことは考えただけで身

の毛もよだつけど、先輩にそんな視線を向けられるのは……わたしの身体を飽きずに見てくれてるんだって思って、嬉しくなる。
ああ、話が逸れた。
でも、もう少しだけ。
以前、先輩に「何度も同じ事をしてたら飽きないですか？」と聞いたことがある。その時先輩は、
「ばか、お前、どうやって飽きろってんだよ。お前の反応がいちいち可愛くてエロいし、お前の色んなやり方もどんどん上手くなってるし、繰り返しやりたいこともこれからやってみたいことも盛り沢山なんだぞ。むしろお前が体力的に大丈夫か心配だっての」
と言われた。ちょっと嬉しすぎて頬が緩んで、がばっと抱きついちゃった。まったくもう、なんなんだあの人は！
ちなみにその時。先輩はわたしがこのことで悩んでいると思ったのか、更に言葉を続けた。
「だから……お前はアレだよ、ほら」
「え、なんですかなんですか？」
先輩がわたしの事をめいっぱい愛してくれてるんだーって思って、幸せで内心とろとろに蕩けながら続きを促すと、先輩がうんうん悩んだ顔をした後、ぱっとわたしの顔を見た。
「テーマパーク、って感じだ」
心理的温度がすごい勢いで下がった。先輩のやってたゲームを見てたときに出てきた「いてつくはどう」ってこんな感じなんだろうか。
「……そ、そうですか……ありがとうございます……」
「……あ、な、なんか、その、すまん……」
わたしが気まずさ全開で答えると、先輩も気まずさ全開で謝ってきた。先輩が小声で「や、まあ、その、いくらでも楽しめるとか、どんどん新たな楽しみが見つかるとか、そんな意味で、ああもう……」とかぼそぼそ呟いてるのはやたら可愛い。先輩はわたしが露骨に冷たい態度であしらうより、こうやって気遣いも見える感じで接せられた方がダメージが大きいみたい。この場合わたしに先輩を凹ませるつ

もりは全く無いから、わたしもすごく罪悪感に駆られちゃう。実際、この会話を始めたのは行為を終えた後だったんだけど、このくだりで先輩のものは見る間にしおしおと小さくなった。

ちなみにその後、ちっちゃくなったものが可愛くて、えいえいと言いながらデコピンしてたら「うぉっ、ちょ、やめ、こらっ」と先輩が可愛く反応して段々おっきくなってきたので、楽しくなってぱくっと咥えてしまった。

悶える先輩の反応が可愛すぎてつい、ばっちり出すまで味わったら……これのせいでおサルさんモードになった先輩にめちゃくちゃにされた。うつ伏せにされて頭を押さえつけられるのが結構ツボらしいという自分の新たな一面に気付いて、わたしどんだけMなんだよって驚いた。この一面は今後加速する気配しかしないぞ。まずいなぁ、えへへ。

よし、脱線終了。学校に行こうとして途中でスタバに寄って、そのまま午後3時くらいまでぐだぐだするくらいひどい脱線だった。……うーん、先輩みたいにもっと妙な引用をした方が良いのかな。今度色々借りて勉強してみよう。あ、ここで読んだり観たりすれば良いのか。うーん、先輩の純粋な一人の時間を削っちゃうかなぁ……今度先輩に聞いて、顔色で判断しよう。先輩はわたしのウソが分かるけど、わたしも先輩のウソは分かるからね。遠慮無しに歓迎してくれたら、わたしは先輩の部屋により入り浸れるようになるのだ。ふふふ。

いけない、頬が緩みっぱなしだ。

うん、今度こそ脱線終了。

さあ、先輩の視線を思い出しながら服を脱ぐぞ……と思い、強くイメージしながら衣服を脱ぐ。

するする。

「……あ……れ……？」

たまらず、疑問の声が漏れた。

先輩の視線を思いだしながらニットを脱ぐと、衣擦れの音だけで妙にどきどきする。それに肌の上を衣服が滑っていく感触だけで、ぞわぞわとした感触がわたしを襲う。興奮で頭がくらくらしながらニッ

トをベッドの上に置いた。
しゅるっ、ぱさっ。
乾いた音がして、上半身が下着姿になる。
うわ、うわ、うわ。
なんだろう、なんだろうこれ。
先輩の視線を意識しただけで、火が出そうなくらいに顔が熱くなってしまう。
今手を止めると、あまりに恥ずかしくてもう脱げなくなってしまいそう。
あー、もう。
わたしこの後、先輩にじっと見つめられたら……一体、どうなるんだろう？
だめだめ、今は脱ぐことに集中！　集中ってなんだよって話だけど。
何百何千回とやっている筈の作業をまるで異質なものに感じながら、手早くスカートを脱いで下着姿になり、頭の中の先輩の視線が強くなった気がしながらブラを外して、最後にショーツを脱いで――こてんと寝転がった。一人で居るのに、手は自然と胸と大事な部分を隠していた。
なにこれ、なにこれ、なんなのこれ？
先輩のことを意識しただけで、まだ何も始めてないのに、胸の先っぽがぴんと張り詰めて腕に当たってる。
だ、大丈夫かな？　先輩が帰ってくるまでに、わたし、いつもの自分に戻れるかな？　不安しかないよぉ……。
でも……今は、そんな不安を軽く越えてしまうくらいに、先輩を思いながら一人でしてみたい。ふふん、先輩、感謝してくださいね。わたしにこれだけ思われていることを！　……わたし、何言ってんだろう……。
「だ、大丈夫、ちょっとだけ、ちょっとだけ……」
身体を覆う手をずらして、震える指先をそっと胸に近付けた。
×　×　×

「ただいま」
「おかえりー、お兄ちゃん」
帰宅すると、我が家の天使こと小町が出迎えてくれた。
時刻は１２時４５分。いろはが来るにはまだ早いだろう。
さて、いろはが来る前に部屋の最終チェックでもしようか――と思っていると、
「ふふふ……」
「……どうしたんだよ？」
小町ちゃんが何やら妙に上機嫌だった。手を口に当ててえらく楽しそうに笑っている。どうしたのん？
片眉を上げて訝しげに尋ねると、小町がゆるりと俺の部屋を指差した。
「いろはさん、もう来てるよ」
「おう、そうだったのか。んで、その指はなに？」
「お兄ちゃんの部屋に先入ってもらってるよ」
なんですと。
「お前……まぁ、別に見られて困るようなもんは置いてねぇけど」
見られて困るものは全てＰＣに入ってるしね！
「えー、そうなの？　じゃあお兄ちゃん、パスワード教えて」
ＰＣに入ってるのはモロバレらしい。
「なんでお前に俺の性癖を晒さにゃならんのだ」
「うそうそ、お兄ちゃんの性癖なんて全然興味無いから安心して！」
「お、お前な……」
さりげに辛辣なことを言って、にぱっと天使みたいに微笑まれた。可愛いけど超腹立つ。
ぐぬぬと唸っていると、小町がにこにこして俺にとてとて近寄ってきた。抱きしめろってことん？　この喋り方、妲己みたいだな。やだ、国家を振り回して最後には地球と一体化しちゃう……。
しかし、この距離感はもう、抱きしめて良い、それどころかお兄ちゃん抱きしめてという意思の現れだろう。千葉の兄たるもの、妹の意思にはきちんと応え――

「それはないけど」
「お前は俺の心を読んだのか!?」
なんか俺、小町に地の文読まれ過ぎな気がする。
「いろはさん、12時には来ちゃったんだよ。時間まで待ちきれずに早めに来ちゃう、恋するお義姉ちゃん……素敵やのう……うへへへ……」
「お前は何のキャラなんだ……」
俺のツッコミをさらりとスルーして、小町がむふふと笑う。
「いろはさん、最初は小町とお話しようとしてたんだけどね。どうせお兄ちゃんに会うまで気もそぞろになっちゃうだろうから、それならお兄ちゃんの部屋で待ってればって提案したんだ」
「……そ、そうなのか」
なんだか聞いてて死にそうな程恥ずかしくなった。
頭をがしがしと掻いて、ふぃーと息を吐く。
「わかった、じゃあ行くわ。いろはの応対をしてくれてありがとな」
言って小町の頭をわしわしと撫でると、小町が気持ちよさそうに目を細めた。やだ、家に嫁が2人……何でもないですごめんなさい。
「ふひゅぃ〜……はっ、いかんいかん、お兄ちゃんに攻略されるところだった」
うっとり顔から小町がハッと目を見開くと、訳の分からんことを言った。
「俺にそんなルートの選択肢はねぇよ」
あれ、うん、無いよね？　ね？
妹攻略ルートの実在の有無について考えを巡らせていると、小町が俺の手をぱしっと掴んで頭から離し、にこっと笑った。
「ほらほら、早くいろはさんのとこに行ったげて！」
「ああ、そうだな」
答えて、もう一度小町の頭をくしゃりと撫でた。「あぅ……」と小さな声で唸る小町に吐血しそうな程悶えながら自室に向かう。まったく、最高の妹に恵まれたもんだ。本当にうちの小町は天使。もはや妹さえいれば……まではいかないな。いろはに言ったらマジで怒られ

るやつだ。
「あいつ、何やってんだろな……」
ぽそりと呟いて、俺の部屋に居るという、あざと可愛い彼女の下へと向かった。
続く。

（5）

身に纏うものを全て脱ぎ去って、捕らえられた蝶のようにベッドの上でもぞもぞとしながら、自分の手を自分の胸に近付ける。

ぴとりと触れる。

「あっ」

――火傷した。

一瞬、そんな錯覚さえ覚える程の熱さを感じた。先輩のことを考えただけで、わたしはこんなにも……っ。

先輩、今頃こっちに向かってるのかな。

わたしのこと、考えてくれてたりするのかな。

そうだったら、わたしは嬉しい。

「んはぁぁ……っ」

先輩ともうじき会えると思いながら指を胸の肉に沈めていくと、自分でも驚くほど甘い声が漏れた。そうか、先輩はわたしのこの声にくらくらきてるんだな。もっといっぱい聞かせてあげよう。そしていっぱい愛してもらうんだ。

「くひぃんっ！」

ぴんと張り詰めた先っぽを、試しに両方同時に摘んでみたら……意識が飛ぶ程の快感が脳内を突き抜けた。

だめだ、だめだ、だめだ。

わたし、先輩のことを考えながらすると、もう――本当に、だめだ。もしこれが、今日この後先輩と会う予定は無いと言う状態だったのなら、振り切って最後まで夢中でやっても良いかもしれない。それこそ失神して――あられもない顔をして意識を手放すまで。あ、でもそれだと起きた時先輩が居ないから寂しいなぁ……って、そうじゃなくて。

このままじゃ、先輩がこの部屋に入ってきたとき……わたしがどうなってるのか、本当に予想がつかない。

いや、本当は予想はついてる。でも、それを今は考えたくない。

「や、やってみるだけ、試してみるだけ……」

繰り返し心の中に予防線を張りながら、左手で胸を揉み続けて、右手をそろりと下半身に伸ばした。

×　×　×

部屋の前に来て、ふと立ち止まる。時刻は１２時５０分。小町とのやりとりを含めればまあこんなもんだろう。いろはがこんなに早く来たのは流石に驚いたけど、まあ……楽しみにしてくれていたのなら、結構……いや、かなり嬉しい。

しかし今、立ち止まったのはこういったことを考えるためではない。

立ち止まったのは、ある違和感を感じたからだ。いろはが居ると分かった上での、大きな違和感。それを突き止めるべく、部屋に入る直前で歩を止めた。

「……」

ドアノブに手を掛けたところで、静かに息を潜める。

「うぅぅ……うぅん……っ」

「……っ？」

微かに、それでも確かに聞こえる、苦しそうな声。

ごくりと、喉を鳴らす。

「……まさか……っ」

いろはが、俺が来るまでに体調を悪くしたのか――？　昨日までは元気だったし、小町の話を聞いた限りでは特に体調が悪いとは思わなかった。ということは、何か急な症状が出たのか――？

ドアノブを握る手を震わせながら、そんな心配をしていると、

「うあぁぁぁ……せんぱいぃ……っ！」

中から、一層苦しそうな声が漏れてきた。俺を呼ぶ声を聞いて、いてもたってもいられなくなる。

「いろはっ！」

いろはがどこかに行ってしまう――そんな恐ろしい想像をして、跳ねるようにドアを開けた。

――すると。

「……へ？」

何とも素っ頓狂な声が、部屋の入口とベッドの上から聞こえた。

×　×　×

「はぁ、はぁ、はぁ……んっ、ひぅぅっ！」

恥丘からお尻の穴にかけてのラインを緩慢な動きでなぞって、小さな膨らみと膣口を繰り返し刺激すると、もう何度目か分からない絶頂に達した。さっきまでは、四つん這いの状態で先輩に思い切り突かれるのをイメージしながら指を激しく抜き差しして沢山イって、今は仰向けで先輩のおっきくて逞しいものに焦らされるようにアソコをこすられるのをイメージしながら自慰をしていた。

……や、やばい。

どうしよう。

先輩との行為を思い出しながら思いつくままに一人で色んなことをするのって、超楽しい。本当に楽しい。何これ。

……ただ、これの何が困るって、先輩のことがもっと好きになっちゃって、頭の中が本当に先輩のことだけでいっぱいになっちゃうことが困る。

あ、それ別に困ってないな。

なら良いか。

……。

いや、やばいでしょ。

ベッドのシーツ、もうぐしょぐしょだし。わたし、どれだけやってるの？

「うぅぅ……うぅん……っ」

あごを上げて、甘い陶酔感に浸りながら指でこすり続ける。

時計をちらりと見る。

１２時５０分。

流石にもう、先輩が来るかもしれない。あの人は律儀だからきっと１３時より早く来るはずだから。一応声は抑えてるけど、それでも限度はある。下手をすればわたしがしてるのが部屋に入らなくてもバレてしまうかもしれない。何それ恥ずかしくて死んじゃう。

でも、でも、でも……。

自分の下半身に目を向ける。
何にも意識してないのに、足は物欲しそうにもじもじとくねっていて、悶々と考え事をしながらも手は一切動きを止めることなく動いて、膣に入れたそうに周りをぐちゅぐちゅといやらしい音を立てて愛撫している。
……今なら、ほんのちょっとだけでもイケるはず。
「あと、一回だけ……」
そう言い聞かせて、アソコをちゅくちゅくとこねくり回していた手の指を膣口に宛てがい、中指と薬指をずぶりと挿れた。
じゅぷんと指が沈み吸い込まれた瞬間、頭の中を電気が駆け抜けた。
「うあぁぁぁ……せんぱいぃ……っ！」
いくら抑えていても、流石に限度があった。高まりに高まった身体の内側に指を侵入させる快楽は絶大で、入れただけで全身が悦んで反応してしまう。
すぐイキたい、すぐイキたい、すぐイキたい……！
我ながら、信じられない程えっちなことを考えてるなと思うけど……今はそんな冷静なことを考えている場合じゃない。先輩にのしかかられてめちゃくちゃにされるのをイメージしながら、指を曲げてぐっちゅぐちゅにかき回して、最後に思い切りイクんだ――そう思った、その時。
ドアが跳ねるように押し開けられて。
「いろはっ！」
先輩が血相を変えて、部屋に乗り込んできた。
「……へ？」
２人揃って間抜けな声を上げたのは、全く同じタイミングだった。
× × ×
――いろはが急に体調を崩して、苦しみながら俺に助けを求めていた――そんな状況なんだと、そう信じきって部屋に入ったら……目に入ったのは、ベッドの上で横たわって一糸纏わぬ姿で夢中で自慰行為にふけるいろはの姿だった。すげぇ、女の子が一人でする時ってこん

な感じになるのか……じゃなくて。
「いろ……は……？　無事、だったのか……？」
呆然としながら、安堵と共に湧いた疑問を投げかける。
「え……？」
いろはがきょとんとしながらも身体をぶるりと震わせる。一瞬寒いのかと思ったけど、ちがう。こいつ、指をアソコに入れたまんまだぞ。え、なに、会話しながらしてんの？　まさかね？
俺同様、いやそれ以上に呆然としているいろはに説明をする。
「や、だって、部屋の前に来たらお前の苦しそうな声が聞こえて……」
言うと、いろはの顔が真っ赤になった。
「あ……そ、それは、その、声を抑えても我慢出来なくて……」
ほーん？　なんかすごいこと言い出したぞー？
「じゃ、じゃあ、俺を呼んだのは？」
聞くと、いろはがぐるんとすごい勢いで横を向いて俺に背を向けた。白く滑らかな背中が見えてどきりと……って、そうじゃなくて。なんで背を向けたの？　あと手を内股に挟んでるのはなんで？　もぞもぞしてるのは行為を続けてるからじゃないよね？　そんな訳ないよね？
いろははしばらくもじもじとした後ぴたりと動きを止め、身体をわずかにこちらに向き直して、ちらりと視線を送ってきた。
「……せ、先輩のこと、考えながら、ずっと、その、一人で……してたんです」
ほーん？　なんか更にすごいこと言い出したぞー？
え、なに、いろはが俺の部屋で？　俺が来るまでに？　俺のことを考えて一人で？　え、ほんとに？　どういうこと？　世の中分からないことだらけ。
頭の中がワニワニパニックに陥っていると、いろはが急に目を見開いて、手を下半身から離した。そしてぺたりと女の子座り（裸で女の子座りって、見える光景が殺人的にエロいことを知った瞬間であった）をして、俺に向かってちょいちょいと手招きをする。なんぞや……と思いながら、とてとてといろはの下へ歩を進めた。

×　×　×

見つかった。

先輩に。

動転しすぎて倒置法を使ってしまった。

どうしよう、わたしは貝になりたい。

それか出家しよう。

そして源氏物語の現代語訳をして、堂々と開き直った二番煎じとして脚光を浴びるんだ……わーい……。

……。

驚きと恥ずかしさと恥ずかしさと恥ずかしさとで、思考が訳の分からない、まるで先輩みたいな飛び方をした。先輩いつもこういうこと考えてそうだな。どういうイメージだよって話だけど。

や、そうじゃなくて。

頭が真っ白になりながらも、2本指は膣内でくにくにと刺激を与えてくる。先輩と目が合った瞬間に抜こうとしたのに、抜こうとしたその瞬間に2本揃ってぐいっと曲がってわたしの頭をかき回して、わたしが引き抜くことを許してくれなかった。先輩と話してる間も続けてるなんて、あまりに失礼だよね……とは思いつつも、さっきから一つの事柄がずっと頭の中をぐるぐる回っている。

最後に一回、思い切りイこうとしたのに……まだイけてない。

どうしよう、どうしよう、どうしよう——そんな風に考えながら、先輩に背を向けて内股をすり合わせていると、ある考えが浮かんだ。わたしの今の状況を冷静に考えれば、この流れに持っていくのは難しくないはずだ。難しいとかどうとか言える立場ではないんだけどね。

こうすれば、きっとお互いハッピーだ……。

きっとこれなら、先輩も乗ってくれる。そう信じて——ぺたりと座り込んで先輩を手招きする。なんか座った途端にすごい凝視してきたんだけど、何かツボだったんだろうか。後で聞いておこっと。後学のためにね。

×　×　×

いろはの目の前まで来ると、いろはは恥ずかしそうに顔を俯かせて

いた。
「いろは……？」
具合が悪いのではと心配になって声をかけると、いろはがゆっくり顔を上げた。その顔は上気しきっていて、欲情した雌の顔にしか見えなかった。
……ああ、この顔は見覚えがある。
この後、きっとこの子は――
「せんぱい……」
いろはが、俺の袖をちょんとつまんだ。潤んだ瞳で俺を見つめて、唇を戦慄かせて、泣きそうな顔で目を細める。
「……わたし、せんぱいが部屋に来てくれるのを待ちきれなくて、一人でしちゃいました。いっぱいしちゃいました」
「……ああ」
「わたし、いけない子です」
「……そうだな」
「だから……」
いろはが俺の両手をきゅっと握った。その柔らかで華奢な感触に心音がとくんと鳴る。
「わたしに……おしおき、してください」
ああ、やっぱり――とは思いながらも、目を見開いた。
今日はいつもと流れが違う。さあ、ここからこの子に何をしようか――そんなことを考えながら、いろはの目を真っ直ぐに見つめて、静かに、けれどはっきりと、頷いた。
続く。

（6）

ベッド際で、衣服を一切纏っていないいろはが、女の子座りになって上目遣いで俺を見つめる。その手は俺の手を弱々しくもきゅっと握っていて震えている。自分だけが、この子を守って、そしていじめたくなるような……そんな、庇護欲と嗜虐心の両方を同時に煽る、たまらない姿。

さて、いろははおしおきをご所望な訳だけれども。

どうしたものか。

「……じゃあ……」

じゃあ、とは言いつつも、いざこの場面に来て何をしたら良いか分からない。まあ、突然すぎる出来事だったしね。部屋に入ったら恋人が俺の名前を呼んで一人でしてるとか何この衝撃的場面。

「せんぱい……」

何が出来るか悩んで黙りこくると、いろはが不安げに、潤んだ瞳で見つめてきた。たまらぬ程愛おしくなって、立ったままきゅっと抱き寄せて、背中をぽんぽんと撫でて――何をするか考えるついでに、背筋を爪先でつつつとなぞる。

「あひぁっ……ひっ、ひぃん……っ」

あ、もう押し倒したい。

しかし、この場でそれをやったらおしおき感が皆無だ。いろはがおしおきしてほしいと言ったんだから、何としても叶えてやらねば。

「……」

やべえ。

全然浮かばない。

おしおきが浮かばないフラストレーションから、手遊びが段々エスカレートしてくる。「んー……」と考える声を漏らしながら、いろはの右耳たぶをはむはむと咥え、左胸を右手で弄び、左手で尻をぐにゅぐにゅと揉みしだく。

「あっ、ひっ、んぐっ、ら、らめっ、ひぇんぱい、これ、おひおきに、ならない、れすよぉ……っ」

徐々に身体を後ろに倒しながら、いろはがとろけきった甘ったるいスープのような声を耳に流し込んでくる。いかん、可愛すぎてこのままいつもの展開にしてしまいそうだ。

むん。

ああ、そうか。

今この場で何をしたいかを考えても浮かばないのなら、以前「今度やってみたいなー」と思っていたことを思い出せば良いんだ。

そう考えて、部屋に視線を巡らせる。この部屋で過ごす時間が一番長いが故に、いろはがこの部屋に来た時、どの場所でどんなことをしたら楽しそうか、何を使ったらいろはが狂おしい程に達するのか……などと言うことをたまに妄想していたので、それを思い出してみる。

……うそ。

たまにじゃなくて、しょっちゅう妄想してました。

「あふぁっ……せ、せんぱい、しぇんぱいぃ……」

こういったことを考えている間も手遊びは続いていて、いつの間にか舌をいろはの耳に挿し込んで、右手はいろはの左胸の突起をしごき上げて、左手は尻から手を回して秘裂に指を挿入してぐちゅぐちゅとかき回していた。あー、もう、超楽しい。や、そうじゃなくて。

「あ、そうだ」

「ひゃわぁ……っ？」

良い案を思いついたと同時に、おしおきに入る前にいろはをもう少し味わっておこうと思い、いろはをベッドの上にこてんと押し倒した。力無く仰向けになったいろはの首に左手を回して頭をがっちりと固定して、唇を重ねて唾液を流し込み、右手中指を秘裂に挿入して関節を曲げてぐにぐにと膣肉の感触を楽しむ。

「あへぇぁぁぁぁ……っ、はぷっ、ちゅるっ、んふぅっ、ごく、ごく、んくぅぅっ、ひゃぅぅぅ……っ」

とろとろに甘えた声を上げて、唾液を飲み込んで愛撫で身体を跳ねるいろは。敢えて体重をかけて身体を締め付けてやると、肉襞の収縮が強まり中指を愛おし気に抱きしめてきた。こんなに可愛い反応をされたのでは、いくらでもしたくなってしまう。

……。
おっと、いけないいけない。
おしおきをするんだった。すっかり忘れていた。忘れちゃうのかよ。
「……ぷはっ、いろは、思いついたぞ。ちょっと道具を持ってくんむっ？」
唇を離して話し始めた直後に、いろはが俺の首に手を回して唇を塞いで、ぐっと引き寄せた。そのまま俺の背中を足でするりと絡め取り、衣服越しにぎちぎちに勃起した肉茎がいろはの花びらに押し当てられる形になる。
「んちゅっ、ちゅぷっ、んふぅっ、はふっ、ちゅぴっ、ぢゅるるる……んはぁっ、……はい、教えてください。せんぱい、わたしにどんなおしおきをしてくれるんですかぁ……？」
耳朶に染み込む甘ったるい声を上げて、いろはが目を細めて色っぽく首を傾げる。おしおき云々のくだりが無かったら、もう獣のように犯しているところだ。
「や、お前、俺に喋らせる気がねぇだろんむっ？」
また唇を塞がれた。
毎回、俺の言葉尻がなんか変なことになってるんですけど。だろんむって何だよ。
結局この後、一度完全に抵抗する力を無くそうということで、いろはの上体を起こしてその後ろに回り込んで、背中側から手を回して膣の中を2本指で潮を吹くまで嬲った。「はぅぅぅ……」と力無くくてんと寝転がったいろはの髪を撫でながら、やっとこさおしおきの説明に移ることが出来た。
× × ×
「おしおきはな、道具を使おうと思う」
「？　道具……？」
くたくたになって仰向けになっているいろはの下を一旦離れて、引き出しを開けてあるものを持ってきた。ちなみに一瞬離れるだけなのにいろはがものすごく寂しそうな顔をしたため、内心悶え転がって

いた。これはもう一刻も早く同棲を……などと考えてしまった。2年後の休日が心配だ。歯止め0はまずいぞ、ふふふ。

俺が手に持ったものを見て、いろはがこてんと首を傾げる。

「それは……アイマスク、ですか？」

「そうだ」

いろはに見せたのは、時折自分で使うアイマスクだった。話す人がいない学校イベントでの遠出の時などに着けるととてもよく寝れる。目的地に着いた時、一人だけぐっすり寝ていて元気なために内心テンションが上がっている自分と、話し疲れた—と楽しげに言い合っているクラスメイトを比べたりなんかしたら負けだと思っている。ほんとに。

「これを……こう」

「ふぁ……っ？」

いろはにアイマスクを装着させると、不安げな声が漏れた。突然襲った暗闇に、いろはがおろおろと首を動かす。かわいい。

「あ、せ、せんぱい……こ、これがおしおきですか？」

「んー、あとは……」

言いながら考えていると、いろはの様子が目に入る。

目隠しをされて、どこか不安げに身を縮こまらせて、闇の中で辺りを伺っている。なんだか小動物みたいだ。

何この子、超可愛いんですけど。

「せんぱい……」

「あ」

「あ、って何ですか……」

「……すまん」

お前のこと考えてたとか口に出したら、自分のクサさで死ねる自信があるので、何も言わないでおく。

ふと、いろはの腕に目が行く。女の子座りになって手をぺたっとベッドに置いているのを見た時、その手首の辺りに視線が自然とロックオンされた。

ああ、そうだ。

これは良い。
「いろは、縛るぞ」
溢れ出るわくわく感を抑えながら言うと、いろはがぴくっと身体を震わせた。
「え……き、亀甲縛りってやつですか？」
……マジかこいつ……。
「なんで知ってんだ……」
「先輩も知ってるじゃないですか……」
こんな会話をしてるけど。
いろはさん、全裸で目隠し中です。
「そんな大層な事は今はしねぇよ。ちょっと手首を縛ってみるだけだ」
俺の言葉を聞くと、いろはがにへっと笑った。目を隠しててもかわいい。
「今は、ってことは今後してくれるんですね」
そこかよ。
「あ、いや、その」
「してくれるんですね」
「いや、え、あれ？　何かお互いの立場がおかしくない？　ねえ？」
「やったー、先輩がその内入念に勉強して縛ってくれるぞー」
「……」
何この子、どんだけ貪欲なの？
取り敢えず、それ系の小説やビデオを見て勉強しようかしらん。
「……まあ、それは置いておいて。じゃあベルトか何かで」
「先輩のTシャツが良いです」
「え」
いろはさん、普通にアイマスクを取って、極めて真剣な顔で訳の分からんことを言ってきなすった。
え、なに、俺のTシャツ？　なんで？
「俺のTシャツの材質は別に縛りに向いてるものではないと思うんだけど」

「や、畳んでしまってある方じゃなくて、先輩が今着てる方です」
「え」
「今着てる方です」
もう一度言われて、ちらりと自分の服を見やる。確かに上着の下にはTシャツを着てるけど……なんで？
目をきらっきらさせながら、いろはが俺の袖を引っ張ってくる。顔が目の前に来て、不意打ちのせいか妙に照れた。今更すぎるけど。
「良いから早く、ほら、先輩、脱いでください」
「上は着るぞ」
「下を履いてくださいよ」
おお、すげぇないろは。こういうネタも分かるのか。
「変なの挟まないでください」
変なのって言われた。
「ほらほら、上を脱いでください。そしてTシャツでわたしの腕を縛ってください。あ、ちなみに本当に下は履いててくださいね？　今そっちの匂い嗅いじゃったら……あ」
「……」
「……なんでも、ないです」
……。
……なんでこの子、頬をぽっと赤らめて、顔を背けて婀娜っぽい流し目を送ってきたの？　今のくだりだけで物凄い勃っちゃったんだけど。
「分かった分かった、脱げば良いんだろ」
「今のセリフだけ聞くと何かすごいですね……」
「うるせぇよ……」
恋人を人質にとられた美人キャラが悪役に「おら、脱げよ」とか言われたらこんなセリフで答えるんだろうか。超どうでもいい。
「ほらほら、早く早くー」
「分かった分かった」
何だかシュールな雰囲気になりながらも。
おしおきの準備は着々と進む。

続く。

（7）

「あ……う……」

「……」

いろはがもどかしそうに身体をよじるのを、悶々としながら眺める。

――いろはの手首に俺のTシャツを巻くと、いろははアイマスクをしたままそれに顔を寄せてすんすんと鼻を鳴らし、「えへへ……」と嬉しそうに声を漏らした。やめろやめろ、頬を緩めるな、可愛すぎて死にそう。

その後いろはを仰向けでころんとベッドの上に寝転がらせて、手首を掴むといろはの頭の上に拘束された両手を持って行った。上から吊るされているかのような、そんな状態。

いろはから手を離すと「あぅ……」と寂しそうな、不安そうな声が聞こえて……あー、なんか俺、おしおき向いてないかも、と思った。触れながらするのは大歓迎なんだけどね。

もし今いろはにアイマスクを着けていなくて、いろはの寂しそうな目を見てしまったら……多分その目に負けていろはの拘束を解いて抱きしめて、いろはに「もー、先輩、それじゃおしおきにならないですよー」とか言われつつ頭をぽんぽん撫でられてそのままいつもの流れになっていただろう。何それ結構良いかも。

や、そうじゃなくて。

もう一度、いろはを見やる。ちなみに俺は上裸で、胡座をかいていろはの様子を見守っていた。

いろはとの距離は、互いに触れそうで触れない、そんな距離。

俺からすれば、目の前にいろはが居るのだから、別になんてことのない距離なのだけれど。

いろはにとっては、視覚を塞がれた今のいろはにとっては、この距離は果てしなく遠かったようで。

身体をよじらせて、内股を切なそうにこすり合わせているいろはが、顔を俺が居る（と思っている方向。実際合っているけれど）に向

けて、唇を震わせた。
「あぅ……せんぱいぃ……っ、どこぉ……っ？　やぁっ……怖いよぉ……っ」
「……」
笑わないで聞いてほしい。
鼻血出た。
「……」
無言でベッドから離れ、ティッシュが置いてある場所に向かう。まさかの事態だった。この時、ベッドが軋んだ感触にいろはが気付いたのだろう、顔を僅かに起こして口を開いた。
「あっ、せ、せんぱぃ……っ、やぁっ、行かないでぇ……っ」
「……」
ティッシュ3枚追加。
ふきふき。
ついでにウェットティッシュも使って念入りに手を拭く。手は汚れてなかったけど、一応。
別におしおきの内容は厳密には決めてないんだから、声で答えても良いとは思うんだけれど……何故だか今は、自分の中で声に出して応じてはいけないというルールを勝手に作っていた。全くもってめんどくさいヤツだなぁ、俺。
綺麗に拭き取って再びベッドに上がる。ベッドの軋みがいろはに伝わると、いろはの頬が緩んだ。危ない危ない、危うくムツゴロウばりに撫でるところだった……。
さて。
どうしたものか。
試しに……と思い、いろはに気付かれないように顔を近付ける。いろはが相変わらず身をよじらせて「せんぱいぃ……どこぉ……っ？　やぁっ……」と呟いている。ああもう可愛すぎて死にそう。
唇をいろはの左の耳元に近付けて、
「……ふーーっ」
と息を吹きかけた。

すると、
「ひぁぁぁんっ！」
いろはが身体を仰け反らせて、ブリッジせんばかりに身を反らした。
「え……」
あまりの反応の大きさに、呆然とする。緊張で高ぶっているから、こんなことになるのか……？
――ここで、一つ。
とびきり楽しそうなことを思いついた。
× × ×
いろはから顔を離して、
「10、9、8……」
と、ゆっくりカウントを始めた。それと同時に、いろはの逆側へと回り込む。
「……っ？　え、せ、せんぱい……？」
不安げに首を傾げるいろはをよそに、「7、6、5、4」とカウントを続ける。3まで行ってから、いろはの右耳に顔を近付ける。
今度は、声を微かに混ぜた、先程よりも更に熱を帯びた吐息を浴びせた。
「んひぃぃぃっ!?」
いろはが先程よりも激しく背筋を反らした。
「？　??　???」
快感に身悶えしながらも、一体何が起きているのかといろはが視線を巡らせる（と言っても、目隠しをしているので実際は顔を動かしているだけなのだけれど）。
「10、9、8、……」
「ひっ……!?」
引きつった声を上げて、いろはがびくっと身体を強張らせた。この子は賢いから、すぐに事態を察してくれたのだろう。内股に力を込めて、唇を引き結んで身体を震わせる様は、どうしようも無い程蠱惑的で、どうしようも無い程愛おしい。

今度は位置を変えないままで待機する。
「……5、4……」
この辺りで、いろはの首の後ろに手を回し、いろはを身体ごとぐりんとこちらに向けた。横向きで、左耳が上になった状態で――1まで数えて、耳の中に舌を挿入した。
ちろちろ、ちゅる、ちゅぷぷぷ……。
「あおぉぉぉ……あっ、あへぇぁっ、ひぁぁぁ……っ」
今度は俺に首を固定されているために激しく動くことも出来ず、俺の腕の中でびくびくと震える。足の指が不自然なまでに緊張して、びくびくと痙攣しながら指の曲げ伸ばしを繰り返す。
そしていろはの身体を仰向けに戻すが、首に手を回して逃げられない状態にして、再びカウントを始める。
「10、9、8……」
「ひぁぁぁ……っ、やっ、やぁ……っ」
身悶えしながらも、諦めているのか逃げようとはしない。1まで数えたところで、今度は右耳が上に来るように身体の向きを変えて、耳の中につぷりと舌を挿入する。肩にも手を回してがっちりと固定してより念入りに舐めると、
「あっ、かへぁっ、あっ、あぁぉぉぉ……あっ、あっ、あっ……」
先程とはまた違った、獣のような声をいろはが上げた。足を折り畳んでぶるぶると震えている。この子はやはり、力強く拘束した方が興奮するみたいだ。
耳に顔を近付けて「まだまだやるぞ……」と囁こうかと思ったが、やっぱりやめた。何をされるかも分からず、どう進めていくのかも分からず、いつ終わるかも分からない。
その状態で嬲るこの状況の、なんと、楽しいことか。
おしおきを渋っていたさっきの自分は何処に行ったのだろうと不思議に思いながら、心ゆくまでこの時間を楽しむ事に決めた。
× × ×
ここで、下も脱ぐことにした。
いろはが匂いに気付くように、いろはの頭のすぐ横で大げさにごそ

ごそと音を立てて脱いで、ぎちぎちに隆起した男根をいろはの顔のすぐ上に晒す。
「ひぁ……っ!?」
匂いで気付いたのか、いろはがびくっと身体を震わせた。この後どんなリアクションをするのかと思いきや、
「あ、あ、あ……」
顎を震わせて、ゆっくりと舌を上に伸ばし、顔を起こしてきた。
「うおっ……とぉっ」
鈴口にカウパーが滲んだ亀頭に、とろとろに発情しきった舌先が触れそうになったところで、慌てて離れた。危ない危ない、今咥えられたらあっという間に理性が飛んでしまうところだった……。
今度はいろはの左隣に添い寝するようにして、いろはの左腕をぐいと頭の上の方に上げる。
「あっ、え、え、え……っ?」
俺の目の前に腋を晒して恥ずかしくなったのだろうか、いろはが恥ずかしそうに身悶えした。その体勢のまま、いろはの腋の下に自分の吐息がかかるくらい顔を近付けて、
「10、9、8……」
とカウントを始める。
「っ!? やっ、え、そんな、そこ、ほんとにっ? やっ、やぁ……っ」
今度は明らかな予告をしたことにより、いろはにもこれから自分がどこを責められるのかが伝わった。敢えてさっきよりも間延びしたカウントをして、いろはの緊張を高める。
「……3、2、1」
「ひっ……ひぁっ、やぁっ、やらぁ……っ」
いろはの涙声に劣情を催しながら。
ゆっくりと、いろはの腋に舌を伸ばした。
続く。

（8）

いろはの腋に舌を伸ばして、膣口を愛撫するのと変わらぬ程の情欲を持って、ざらりと舌を這わせる。甘ったるいミルクにも似た汗の匂いにくらくらしながらも、ゆっくりと舐め上げる。

「んんん……くひぃん……っ」

いろはの可愛らしい反応を見ながら、ゆっくりと舌を上下に動かす。舌の表を使って下から上へ舐めればいろはは背筋を反らせて甘美な嬌声を上げて、舌先から裏を使って上から下へ舐めれば唇を引き結んで耽美でくぐもった声を漏らした。

腕の根元に狙いを定めて入念に舐めると、

「あぁぁぁ……やぁっ、これっ、ひっ、ひぃんっ、うぅぅぅ……っ」

内股をすり合わせて、涙声でいろはが喘ぐ。

左手でいろはの腰を抱きしめ、右手でいろはの左肩を掴む。がっちり拘束した状態で更に入念に舌で舐ると、今度はすり合わせていた足をゆっくり開いて、足の指でベッドのシーツを強く掴んで激しく震えた。

一度舌を離して、いろはの股座のシーツをちらりと見やると――直接秘裂に指を挿しこんで愛撫した時と遜色無いくらいに、元のシーツの色が分からない程に、ぐしょぐしょになっていた。

「……あっ、あっ、あぁっ……」

様々な反応をしてひたすら悶えたことで疲れ果てたのか、いろはが息も絶え絶えにくたりと体中を弛緩させる。

――無理はさせない。けれど、それでも、境界線の一歩手前までは。

たっぷりと、いじめ抜く。

改めて意識して、もう一度口を開いた。

「10、9、8、……」

「……っ、も、もう、せんぱいぃ……っ」

俺が居る方に顔を向けて、哀願の声を上げるいろはに。

「……5、4、3……」

「ひぅぅ……」

答えることなく、いろはの身体を右側を上にして横向きにする。そして腕を掴んでぐいと上に上げて、
「……2、1」
「……っ」
いろはがごくりと息を呑むのを聞きながら。
唾液をたっぷり含ませた舌を伸ばした。
×　×　×
両脇を舐めた後も、責めは続く。
お腹を舐め、へそを舐め、腰を舐め、太ももを舐め、ふくらはぎを舐め、足を舐め……その間も、絶対に10カウントをゆっくりと行うのをやめなかった。いろははどこか諦めた様子にはなるものの、快感に抗うことは出来ずに、体力の続く限り汗を滲ませながらよがり、喘ぎ、悶えた。
「……せ、せんぱいぃ……っ」
足の裏を舐り尽くしたところで、いろはが力ない声で呼びかけてきた。今までの哀願とも違う声音に、今までとは何か別のことを伝えたいのだと気付く。
「なんだ？」
聞きながら、頬に手を這わせる。いろはは一瞬びくりと反応したが、すぐに愛おしそうに身を委ねた。
「……なんで、なんで舐めて、くれないんですかぁ……っ」
甘ったるい猫撫で声を上げて、手のひらにちろちろと舌を這わせる。他の人に見せることのない甘え方だと分かっていると、何とも言えない幸せな気分になる。
「舐めてほしいのか？」
耳元に顔を寄せて囁くと、「ひんっ！」と甲高い声を可愛らしく上げた。
「……は、い……」
こくこくと頷くいろはの頬を撫でて問いかける。
「……多分、さっきまでと比べ物にならんぞ。大丈夫か？」
聞くと、いろはが幸せそうに口元に笑みを浮かべた。

「良いんです、大丈夫です。……せんぱいに、いじめてほしいんです」
ごくりと喉が鳴った。
「……わかった」
いろはの口に指をつぷりと挿入すると、唇をすぼめて愛おしそうに咥えてくれた。そして、いろはの背中に腕を回して、ぎちぎちに隆起した肉棒を2人のお腹で挟んで、ゆっくりと体重をかける。
いろはの左の乳房を口付けをして、ぷっくりと張り詰めた桜色の突起を唇で挟んで舌先を数回往復させる。
「ひっ……」
一度、短い声を上げて。
「ひぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
のしかかっている俺を跳ね除けんばかりに、弓なりに背筋を反らせた。なおも痙攣するいろはの身体を押さえつけて、唇と舌先と口内による蹂躙を続ける。
「いっ、ひぎっ、こ、これっ、やばっ、あぁっ、あぅぅ、あぅぅぅぅぅ……っ」
足をばたばたとさせながら、口の端から涎を垂らすのも厭わずにいろはが喘ぐ狂う。
もう、俺自身、カウントする余裕さえ無かった。
今度は右の乳房の突起にむさぼりついて、左手で右乳房の柔肉を揉みしだく。右手は数秒前まで舐り回していた左の乳房に伸ばして、人差し指と親指の腹でぎゅっぎゅっと圧縮しながらしごき上げる。
「あぁぁぁ……あぁぁぁぁ……」
俺の腰に細い足を絡みつかせてもぞもぞと這わせ、愛撫で更なる快感を送り込むと足を開いてベッドのシーツを掴んで痙攣する。足を絡みつかせてきたとき、下腹部に密着したいろはの膣はどろどろにとろけた濃厚な熱いスープのようになっていた。
どれくらいの時間嬲ったのか分からない程にいろはの柔肉を堪能して、ようやく口と指による蹂躙から解放する。
「あっ……かはっ、あぇっ、ひっく、うぇっ、ひぅぅぅ……」
嗚咽を漏らして、たたんだ足を力なく左右に開いて、いろはが余韻

に浸る。
いろはの股座に身体を割り入れて、前屈みになった。
「……まだだぞ」
意識して一段低い声で囁くと、「え……？」と震える声が返ってきた。舌で責める場所は、ここが最後だ。より一層、念入りに、どれだけ熱く濡れていようとそれを全て舐めとるつもりで、いろはの足を掴んで左右に押し広げた。
× × ×
「……」
ここまで何十分していたかも分からない愛撫に次ぐ愛撫を重ねて、その途中、いろはの発情した声を聞いて、シーツの状態を確認することはあっても、秘部を至近距離で確認してはいなかった。
――驚いた。
いろはの色白の肌は度重なる責めにより紅潮していて、見慣れた恥丘の膨らみも熱を持って特段の艶を纏っている。わずかばかり生えている柔らかそうな恥毛は、幾度となく噴き出した淫液によりしっとりと湿っていて、肉づきの良い割れ目は発情しきってひくひくと戦慄いている。
指を挿れても。
舌を挿れても。
肉棒を挿れても。
何を挿れても、何をしても、極上の快感と愉悦が待っているに決まっている――そう確信させるだけの、牡にめちゃくちゃにされるのを待つ、牝の器。
「いろは……ここも、舐めてほしいか？」
顔を上げて聞くと、いろはが僅かに首を起こした。
「……はい、舐めてほしいです。……でも……」
言葉の途中で、いろはがもじもじと恥ずかしそうな仕草を見せる。
「ん？　でも、なんだ？」
聞くと、
「今度は、わたしも……舐めたいです」

心臓が、とくんとなった。
「……そうか」
これに応えるならば、おしおきは終了ということになるだろう。
「さっきまでのは、ちゃんといろはにとっておしおきになったか？」
聞くと、妙に子供っぽい溌剌とした動きでぶんぶんと首を縦に振った。
「なりました。なりました。先輩ってこんなに鬼畜になっちゃうんだって思ってもう内心きゃーきゃー言ってました」
……さいですか。おしおきって何なんだろうか……。
「でも、お前途中で何度も『やぁ……っ』て言ってたじゃねぇか。あれは何だったんだ？」
「今声真似したのは非常に気持ち悪かったですけど」
「……」
……「非常に気持ち悪い」って……。丁寧な罵倒って中々答える。
「あれは……アレです。女の子ですから。その辺のめんどくささはぜひとも許容してください」
「そうか、わかった。じゃあ今度からお前がこういう時にやだって言ったら全部肯定と捉えて良いんだな」
「杓子定規すぎます。先輩はおバカなんですか。そこはちゃんとその場その場で空気読んでください」
「お前、容赦無いな……」
言葉のフリッカージャブが止まらない。後で地味に腫れそう。
「これくらいじゃないと、先輩の彼女は務まりませんからね」
むぅ。
「まあ……そりゃそうか」
いろはがふんすっと鼻息を吐く。すんごいどや顔してるっぽいけど、まだ目隠しはしてるし、拘束された腕はいろはの頭上にあるので、何だかすごいシュールだ。
「それじゃ、やるか。もう目隠しも縛るのもやめるけど、良いな？」
「はい。先輩、次やる時までに同じ状況での違う責め方を考えておいてくださいね」

「え」
「宿題です」
「これ、おしおきだよな？」
「？　おしおきですよ？」
　目隠し状態で「ほえ？」って顔で首傾げんなよ。可愛いなぁもう。
「おしおきって、やられる側がリクエストするもんだっけ？」
「少なくとも、わたしと先輩でする場合はそうじゃないんですか？」
「なんでさも確定事項であるかのように言ってんだよ」
「先輩はいやなんですか？」
「お前が指定するんだろ？　それでそのやり方でお前をおしおきする訳だよな」
「はい」
「お前は喜ぶ訳だ。しかもすごく」
「そうですね」
「じゃあ良いか」
「先輩、わたしにどんだけ甘いんですか……」
「うるせぇ、今更だろうが」
「くす……それもそうですね」
　ついさっきまでのおしおきの時間があまりにも濃厚だったので、こんなやり取りが妙に懐かしく思える。
「それじゃ、やるか」
「はい」
　そんな訳で。
　長かったおしおきを終えて、ここからはいつも通り。
　――そうは言っても、いろはの身体に目をやると、雑談を挟んで尚発情しきって疼いていたままだ。いろははこれに気付いているのか、気付いていて知らぬフリをしているのか……どちらにせよ、この後もたっぷりと楽しめそうだ。
「じゃ、先輩……取ってくれますか」
「おう」
　心地良い熱を持ったいろはの声に応じて、まずは目隠しと手首の拘

束を解く事にした。

続く。

（９）

まず、いろはの目隠しから取ることにした。アイマスクの紐に指を掛けて、するりと上に持ち上げて外す。

「……」

目隠しを取ることで久しぶりに目が合ったところで、息を呑んだ。

いろはの目は、雑談を挟んでいながらも今なおはっきりと発情の火を灯していて、平常時に見たとしても一気に興奮状態に陥るであろう程の魔力を秘めている。まして高揚しきっている今なら、その効力は尚更だ。

「せん……ぱい？　あ、やぁん……っ」

いろはの声ではっとする。いろはの瞳に魅入られながら、気が付けば紅潮した乳房に手を伸ばして、指の腹で味わうように指を這わせていた。

「あ、やっ、せんぱい、腕、ほどいてぇ……っ、んはぁ……っ」

身体をもじもじとくねらせるいろはの声から、徐々に色香が漂い始める。いろはの柔肉は汗で程良く指に吸い付き、熱っぽさと弾力を兼ね備えている。ついさっきまで弄っていたというのに、まるで飽きることが無い。それどころか、際限なく味わいたくなる。

そっと、いろはの腰の上に馬乗りになる。軽く体重を掛けると、

「んはぁぁぁ……っ」

と、いろはが悩ましげな息を吐きだした。拒絶の意なんて欠片も見当たらない、服従の吐息。いろはのお腹に当たっている肉棒が、多幸感にびくんと跳ねた。

再び手を伸ばして、柔肉を下から持ち上げるように揉んで、１０本の指で乳房全体をこねくり回す。乳房の先端の可愛らしい桃色をした突起を指で弾き、押し込み、こねくり回し、しごき上げる。

「あぁぁぁ……っ、ぁぁあぁぁぁぁ……っ」

俺がのしかかって体重を掛けているその下で、いろはが快楽で身体をくねらせる。表情はとろけきっていて、目はうっとりと半目になり、口も半開きになっている。

「……？」
ふと。
喘ぎながらも、いろはが必死に顔を起こしているのが見えた。いろは自身の胸に顔を近付けているような、そんな動作。
「いろは、どうし――」
尋ねながら手を伸ばすと、
「あむっ」
「うく……っ!?」
不意に、いろはが右手中指にしゃぶりついてきた。
「んむっ、ちゅるっ、んむふぅっ、あふぁっ、んちゅるっ、じゅぞ、ずちゅるるるる……っ」
「あっ……ぅあ……っ」
まるで肉棒に食らいつくかのようにいろはが凄まじい勢いで中指を舐り回す。手の指を咥えられているだけの筈なのに、焦れったい快感に腰ががくがくと震えた。
「……んぷぁっ、はぁっ、はぁっ、……んむっ、ちゅぽっ、あむっ、ちゅぱっ、んふぅっ、んっ、んっ、んっ……」
固まっている俺に対して、今度はピストン運動を咥えて中指を咥え込む。アイスだったらとっくに何本も溶け落ちているであろう程舐られ続けて、へたり込むようにいろはに身体を重ねた。
「……ちゅっ、ちゅっ、……んはぁっ。えへへ……せんぱい、おサルさんモードになっちゃってて先に進まなそうだったので、止めるついでにサービスしてみました」
「……すまん。……しかし、これは……やばいな……」
ぼーっと呆けて言うと、いろはが頬を俺の頬にすり寄せてきた。多分、手が自由だったらいろはは俺の頭を撫でていたんだろう。
「んふふー、良かったです。気に入ってくれたなら……どうです、毎日してあげましょうか」
頗る幸せそうな表情で、いろはが悪戯っぽくにこっと笑う。
「なんかすごい性感帯を開発する流れだよなこれ。やってほしいけど、大丈夫かな俺……」

「やるのはオッケーなんですね、流石おサルさんです」
「おサルさん言うな」
「さっきのは？」
「……すいません」
　ぐうの音も出ない。
「よろしい。毎日指を舐めたら……そのうち、指だけでイケるようになるんじゃないですか？」
「それレベル高すぎるだろ」
「それで、デートの時さりげなーくわたしが先輩の手を握って……えへへ」
「ちょっと待て、変なとこで止めるな」
　すげぇ恐ろしくてエロい想像が膨らんじゃうっての。
「それでわたしのおいたに対して先輩が結構怒って、トイレに連れ込んでわたしに無理やりお掃除させるとか」
「お前そういう流れ好きすぎるだろ」
「何か問題でも？」
「いっそ清々しいな……」
「で、どうですか。先輩、こんな流れ楽しそうじゃないですか」
「……多分、ていうか絶対興奮するな」
「うわぁ……先輩、変態だぁ……」
「お前が言ったんだろ」
「何のことでしたっけ」
「なんでだよ」
　とぼけるタイミングが下手すぎるだろ。
「お前な……じゃあアレだ、掃除させるときは便座にお前が座って、俺が立った状態で咥えさせるからな」
「え、やだ、先輩、それでわたしの頭を押さえ込んで、喉奥でしごいちゃうんですか？　変態だー！」
「自分で勝手に膨らませておいて!?」
　まぁ、結構そんなシチュエーションをイメージしてたけど。以心伝心すぎて怖い。

……なんだろう、こんな猥談を気兼ねなくするような関係になってるんだな、俺達……という、気恥ずかしい気付きを得た。本当に恥ずかしい。
「それじゃ先輩、そろそろこれほどいてください。いっぱいしてあげますから」
「……おう」
さっき指を咥えられた時の感覚を思い出して、楽しみすぎて逆に素っ気無い返事になってしまった。口を使った技の上達度が半端無いんだよな、こいつ。もちろん他もだけど、口を使った行為は特にだ。
いろはは俺の返事から内心を読み取ったのか、にんまりと笑って耳元に口を寄せた。くすぐったい吐息に甘い熱が篭もり、甘美な囁き声が息に乗って耳朶に流れ込む。
「……先輩が満足するまで、いっぱい舐めてあげますからね？」
「……っ、……お、おう……っ」
ごくりと喉を鳴らした音があまりに大きくて、いろはがくすりと笑った。うぅ、恥ずかしい……。
「……じゃ、外すぞ」
「はーい」
ここからは、お互いに責め合う。
言いようのない高揚感に包まれながら、いろはを拘束するTシャツに手を伸ばした。

× × ×

Tシャツによる拘束を解いてやると、いろはが何やらそれを名残惜しそうに見ている。
「どうしたんだ」
「うーん……もっと先輩の匂いを堪能しながらするにはどうしたら良いかなーって……」
「真面目な顔して何悩んでんだお前は……」
いちいち下半身をざわつかせる発言をするな、こいつ。
いろはは俺の呆れた顔を見て、ぷりぷりと怒るフリをした。フリって言っちゃった。

「大事なことなんですよー！　ほら、先輩も考えてください」
すげぇやな注文が来た。えー、そんなの考えたくもねぇよ……逆の立場ならまだしも。……逆の立場だったら、それはそれで言うこと成すこと全部ドン引きされそうだけど。
「……鼻だけ覆うってのは厳しいし……アレだ、俺の布団に包まってやれば良いんじゃねえか？　まだ寒いからほとんど汗かいてないし、俺としてもそれくらいが限度というか程良いラインだと思うんだが」
言うと、いろはが顎に手を当ててむむむと唸った。
「……うーん、よし、採用で！」
採用されちゃったよ。いいんだそれで。
疑念が声音に乗ってしまって、
「……ありがとうございます……？」
初めて、お礼の言葉で語尾を釣り上げてしまった。
いろはは悩み事が解決したからか、胸の前で両手でガッツポーズをしてふんすっと息を吐いた。思わず髪をくしゃりと撫でると「あぅ……」と恥ずかしそうに唸った。ああもう押し倒したい。
「それじゃ、それは今度やるとして」
「？　今日は良いのか」
聞くと、いろはがふっふっふと変な調子で不敵な声を上げて、人差し指を立ててちっちっちと左右に振った。なんだお前。
「先輩、このお布団、洗濯したばかりですよね？　匂いで分かります」
「あ、そういえば」
そうだな――と言おうとすると、いろはがきゅっと抱きついてきた。柔らかな温もりに包まれて、心音が優しくとくんと鳴る。
「実は、前から気付いてました。先輩、わたしが予め来ると分かってる日っていつもばっちりお布団やらシーツやらを洗濯してくれてますよね？　元々きちんとやってるんでしょうけど、わたしが突発的に来る日と比べていつもほんのり洗剤の匂いがしてるから分かるんです」
言われて、頬をぽりぽりと掻く。どうにもお見通しのようだ。
「……ん、まぁな。わざわざ言うことでもないと思ってた。これくらいの配慮は当たり前だと思ってるし」

視線を泳がせながら答えると、いろはが俺を見てにまーっと目を細めて、抱きついたまま倒れ込んできた。おふぉ……と変な声を出しながら仰向けに倒れると、いろはが猫のようにすり寄って甘えてくる。
「ああ……もう、先輩はそういうところが……あうぅ……」
「……」
いろはさん、言葉を最後まで言わんとすんごいすりすりしてきなさる。アニメとかマンガだったら絶対いろはの身体からハートマークがぽんぽん出てるぞ。
まぁ、そういう状況なので――といろはが俺の胸に顔をすりすりしながら上機嫌な声で続ける。
「もうちょっと……5日くらいですかね、それくらい経ったら二人で布団に包まっていっぱいしましょう」
「すげぇ具体的な提案だな……」
この子、匂いフェチなのかしらん。
俺の訝しげな表情に気付いて、いろはがこれまたぷりぷりと怒る。たまらなくなって、尻の谷間を指でつつとなぞると、
「あっ、ひぃぁ……んっ、ふあぁ……っ」
と甘い声を上げて、一気に発情する様を見せながら、俺の首に吸い付いた。
「んふぅっ、くちゅっ……くちゅりっ、んんっ……わたし、そんなに匂いフェチじゃないと思いますよ？　先輩の匂いじゃないとこんなにならないですし」
俺の心を読んだようなことを言って、少々ふてくされた表情を見せた。いろはの桃のような尻を両手でぎゅっと揉みながら、
「……それ、十分フェチって言えると思うけど……」
言いながら、陰唇と菊穴を広げるように尻を引き伸ばし、押し縮め、互いに逆回りでぐにぐにと回してやると、いろははびくんと跳ねて、目が虚ろなものに変わった。
「あっ、やっ、それっ、あっ、ぁあ……っ」
俺の両肩に手を置いて、反り返った肉棒の裏筋に柔らかなお腹を押し付けてくる。いろはが震えながら背を丸めて身体を縮めると、楚々

とした恥毛が陰嚢にこすれて、カウパーがくぷっと鈴口から溢れ出た。
「せん、ぱい……っ、せんぱぃ……舐め合いっこする前に、キス、したいです。いっぱいしたいです……っ」
切実に訴えかけながら、いろはがおでこをこつんと当てて、潤んだ瞳で見つめてくる。ごくりと喉を鳴らすと、いろはもそれに応えるようにこきゅっと小さく喉を鳴らした。
「……ああ、いくらでも」
短く答えると、いろはが幸せそうに目を細めた。
続く。

（１０）

「……ぁ……ぅぅ……せんぱいぃ……っ」

仰向けになった俺の上にいろはが柔らかい肢体を重ねて、悩ましげに身体をくねらせる。

……なんか、どことなく様子がおかしい。俺の肩に置いた手がふるふると震えていて、口はゆっくりと開いては閉じている。

「いろは、どうした……？」

「んふぅぅ……っ」

「んむ……っ」

俺の言葉に答えることなく、いろはが唇を重ねてきた。舌を絡めるでもない、唇と唇を接触させるだけのキス……のはずなのに。

「んふぅぅ……んむっ、ふむぅっ、んむふぅぅ……っ」

「……っ！」

まるで俺の口を食べるかのようにいろはの唇が蠢いて、身体がびくりと強ばる。今までそんなことはほとんど無かったのに、キスの途中で時折歯がかちかちと当たる。

いろはの瑞々しい唇の感触に陶然としながら、情欲の火を灯した瞳で唇を貪り続けるいろはにただただ見惚れる。

「……はぷぁっ。……はぁっ、はぁっ、……ふぅぅっ、ふぅぅっ……」

唇を離すと、いろはが息を荒げる。

長い口付けによる息切れよりも、興奮による息切れの方が勝っているかのような表情を見て、いろはのへそに刺さる肉槍がびくんと跳ねた。

「い、いろは、大丈夫か……？」

明らかにいつもと違う様子にごくりと息を呑みながら聞くと、いろはが目だけ合わせて、何も答えることなく再び肉体を重ねてきた。

今度は首に腕を回して……更に密着度を高めてくる。

「ちゅっ……んっ、んむぅ……っ、はぷっ、ぷはっ、あぅ、あぅぅ……っ」

「……？」

またしても唇をねっとりと重ねたところでいろはが離れる。

いろはに一体何が起きているのか、まるで想像がつかない。
「なあ、いろは、お前本当にどうしたんだ……？」
いろはの頬を撫でながら問うと、こつんとおでこ同士を触れてきた。瞳に興奮の色と、確かな不安を浮かべて、俺に真っ直ぐに視線を注ぐ。
「……せ、せんぱい、ど……どうしよう、わたし、さっきのおしおきでどきどきしすぎて、こんな状態でいつもみたいにキスしちゃったら絶対やばいって思っちゃって……」
――でも……それで、と続けながら、いろはがきゅっと眉根を寄せる。
「……我慢するとすごく焦れったくて、もう、訳分かんないですぅぅ……どうしよう、どうしよう……っ」
「……っ」
今にも泣きそうな顔で、いろはが懇願するように言葉を紡ぐ。どう答えたものか、一旦休んだ方が良いのか……そんな風に考え始めたとき、いろはがつと目を伏せた。
そして。
こきゅっ。
小さく、微かに。
けれど、確かに。
喉を鳴らす音がした。
……ああ、そうか。
この子は……いろはは。
これから、俺にこうしてほしいんだろう……。
一人合点がいって、いろはの腰に腕を回す。
「そうか……じゃあ、俺からしてやるよ」
目に嗜虐の火を灯して告げると、いろはの瞳孔が開いて、口元が緩んですぐにきゅっと引き結ばれた。
「……ぁ……で、でも……っ」
予定調和の演技が半分、本気でまだ迷ってる部分が半分。そんな、迷いとゆらぎが見える声を漏らして、いろはが婀娜っぽい流し目を送

る。
いろはの背中と腰に腕を回して、力を込める。
「いいから……ほら」
「うあ……っ」
くるりと二人の身体を反転させると、いろはが儚げな声を漏らした。
× × ×
「ぁ……うぁ……ひっ、ひぃん……っ」
今度は俺の下になって仰向けになったいろはが、胸を手で隠しながらか細い声を漏らす。
顔は背けられていて、小動物を思わせる振る舞いに、たまらぬ程嗜虐心がそそられる。
「ほら、行くぞ」
言っていろはの顎に手をかけて、顔を上向かせると、
「は、はぃ……っ」
掠れた声でいろはが答えて、胸を覆っていた手を自ら離して、シーツを握り締めた。
これから自分の身体を蝕むであろう快感をよほど恐れているのか、俺が顔を近付けるといろはは目を背けて……ちらりと、期待を込めた流し目を送った。
矛盾した感情がいろはの中に渦巻いているのだと確信して、期待が溢れ出して止まらない。
「んぅっ――っ！」
何度も重ねている筈なのに、今日はまるで違った感触に思える。
いろはの薄く瑞々しい唇を、遠慮なく啄んでいく。
「うあっ、んふぅっ、ひんっ、やばっ、んふぁっ、……せんぱぃ、やっぱりこれ、んむふぅ……っ、ほんとにやば……っ、んふぅぅ……っ！」
いろはが唇を引き離していやいやと首を振る。
「……じゃあ、なんでお前は俺に足を絡めてるんだ？」
「……ぅ……ぁ……っ」
いろはは自分が無意識に俺の腰に足を絡ませていることに気付き、

目を伏せて真っ赤になった。
この子はなんでこうも、いじめたくなる仕草を自然に出来るんだろう。
もう一度ちゅっと唇を啄むと、いろはは眉根をひそめて唇をきゅっと引き結んで、これ以上のキスを拒んだ。
「あぁっ、ぅぅ、それでも、やなのぉっ、こわいのぉ……っ」
今にも泣き出しそうな顔をして、いろはがいやいやと首を振る。腰に絡ませた足は更に力を込めていて、いろは自身、身体と心の矛盾に怯えているようにも見える。
「……いろは」
そっと、いろはの頬に手を添える。
「ふぇ……？」
手のひらに頬を寄せながらも、いろはが少しばかりリラックスした表情を見せる。
「……ちゃんと、唇を俺に向けるんだ」
穏やかな仕草を見せてから、一段低い声でゆっくりと命令する。
いろはがこきゅっと小さく息を呑んだ音がした。
「……はい……っ」
不安げに目を閉じて、いろはが顔を再び上に向けた。
× × ×
再びいろはと唇を重ねたけれど、いろはの唇はまだ閉じられたままで、舌の侵入を許さない。
一体どれだけ恐れを抱いてるんだ……と驚くと同時に、この中に舌を割り入れた時、一体どんな事態が待っているのかという期待も胸の中に溢れる。
いろはの唇の隙間を、舌先で丁寧になぞる。
「んん……っ、ふぅっ、んっく、ふぅんっ、んふぅぅ……っ」
いろはの緊張がじりじりと抜けていき、唇に力が入らなくなっていく。
「……ぷはっ、どうだ、いろは、もう大丈夫そうだろ？」
「……あぅ……で、でも、これ以上はやっぱり……っ、んむふぅ……っ

!?」
いろはが油断してわずかに開けた唇の隙間に舌先をねじ入れた。
それと同時にいろはの首に腕を回し、力強く拘束する。
「んむぅっ、んふぅぅっ、くちゅり、ちゅりゅ、ちゅりゅりゅ……んむふぅぅ……っ！」
ぬるりと差し込まれ口腔内を犯す舌に、いろはが目を白黒させて反応する。
腰に絡まった足をばたつかせ、伸びては縮みを繰り返し、必死で快感の逃がし場所を探している。
しかしどんなに逃げようとしても、ぎちぎちと力を込めて拘束して決して逃がさない。
「ちゅっ、ちゅく、ちゅくちゅく……ちゅぴっ、ぴちゃぴちゃ、んひぅぅぅ……」
口腔内で俺の舌から必死で逃げるいろはの舌を追いかけ回し、口腔粘膜ごと犯すように舐め溶かしていく。
執拗に幾度となく口内を掻き回すと、いろはの身体の力がほとんど抜けて、くたっと脱力して腕も足もシーツの上に投げ出された。
「ひっ、ぁぁっ、あへぁっ、ひっ、ひっく、ひぅぅぅ……っ」
子供が泣いてしゃくりあげるような声を漏らしながらも、その顔は信じられない程淫らに染まっている。
「いろは……舌を出すんだ」
先程よりは幾分穏やかな口調で命令する。
「……はっ、はぃ……」
いろはは声を震わせて答えると、舌をおずおずと差し出した。
続く。

（11）

――舌を出すんだ――

いろはに命令をすると、一瞬逡巡する素振りを見せたが、俺に見せるつもりがあるのかないのか、ほんの少しだけ喜悦に口角を上げたのが見えた。

おしおきにより身体がいつもよりも高まってしまい、元々感じやすいキスで更に感じるようになって、立派な愛撫と化している。

それが怖くて今まで積極的なな口付けは避けていたというのに、この子は……。

返事を促そうと、いろはの頬に手を添えてそろそろと撫でる。

「……はっ、はぃ……っ、ひぅぅぅ……っ」

いろはがためらいながらもおずおずと舌を差し出す。

目をうっとりと細めて、顔を震わせながらもめいっぱい舌を伸ばすその姿は、たまらぬ程健気で愛おしくて、下半身がざわりと疼く。

極上のご馳走を食べるような気分で、いろはの舌に吸い付く。

ずぞぞ、ちゅぶ、ちゅろろ、じゅぶぶ……。

「ぅ……んぐっ、あへぁ、ひぃんっ、ひぃぃん……っ」

様子を見ながら、わざと大きな音を立ててすすり、いろはの舌を咥え込んでいく。

いろはは自らの舌が俺の口に飲み込まれていくのを陶然と見つめながら、シーツを固く握りしめている。

咥える限界の所まで吸い付いたところで、一気に顔を引いて、唇でいろはの舌をぎゅっと挟んでしごき始めた。

ずっちゅ、ずちゅ、ぢゅりゅ、ずちゅく……。

「っ!? ひぃぃぃんっ! ひぅっ、はへぁっ、あぁぁ〜〜〜〜……っ!」

突然始まった唇の往復運動にいろはは身悶えて、俺の動きを押さえようとしたのか、両手両足を必死で俺に絡めてきた。

しかし力の抜けた女の子の拘束に大した意味はなく、この抵抗も可愛らしいものにしか思えない。

いろはの行動に対して、俺は更にいろはの身体全体を締め付けるように力を込めて抱きしめて、いろはの側頭部を押さえ付けて桃色の舌を蹂躙する。
「あぇぇ……あへぁ……へひぁぁぁぁ……っ」
涙を流しながら、口を閉じることが出来ずに口の端から唾液を垂れ流すいろはに見惚れる。
その間も舌を唇で強く挟んでしごき上げて、時折舌先をこすり合わせつつざらざらの感触を楽しんでいると……いろはの舌がひくひくと甘く淫靡に戦慄いた。
……これは……そろそろか……？
いろはの舌を解放してやると、いろはの舌先と俺の唇の間に欲情の糸が引いて、重力に従ってとろりといろはの口内に流れ込んだ。
「んくっ、こくっ、んふぅぅ……。……あっ、ひぅぅっ、もっ、もうっ、やぁっ、これ、もう――っ」
「……イクんだな？」
「……っ」
俺の言葉に、いろはがこきゅっと息を呑む。
さっきの反応からして、もう少し嬲ってやれば絶頂に達するのは、今までの経験上明らかだった。
「どうする？　そろそろお互いに――」
舐め合うか――と言おうとすると、いろはがきゅっと俺を抱きすくめた。
突然の事態に一体なんぞやと動揺していると、いろはがしゃくり上げるのが聞こえた。
「あぅっ、あぅぅ、ひっ、ひっく、も、もう……せんぱいのキスがえっちすぎて、我慢出来なくなっちゃいましたぁ……っ」
背中をざわりと嗜虐心がなぞった。
いろはの頭を撫でながら、耳に唇を押し当てて囁く。
「じゃあ、どうしたいんだ？」
ひぅっ、といろはが小動物のように頼りない声を上げて身体をびくりと跳ねさせると、同じく俺の耳に唇を押し当ててきた。

「……えっち、したいです」
　睾丸がずくんと疼く。
「どんな風にしたいんだ？」
「……せ、せんぱいに、力任せに、獣みたいに、いっぱい腰を打ち付けられたいです」
　耳にかかる吐息が熱くなる。
「それで？」
「あぅ……そ、それで、せんぱいの……太くて熱くて硬いのでごりごりと中をえぐられて、声にならないくらい気持ち良くなって身体がびくんてなって……」
「……なって、どうなりたいんだ？」
「……せんぱいの熱くて白いの、いっぱい、いっぱい、出して欲しいです」
「……わかった」
　いろはが囁く淫猥な言葉に、焼け付くような幸福感を覚える。
　これはきっと性欲を満たす行為で、愛欲を満たす行為で、嗜虐心を満たす行為で、庇護欲を満たす行為で、征服欲を満たす行為で……愛情を満たす行為なんだろう。
　いろはから身体を離して足元に移動して、いろはの足を開くとその間に座った。
　目の前には、とろとろに熱を持ったいろはの身体と、期待に満ち満ちたいろはの顔と、蹂躙されるのを心待ちにしている淫裂がある。
　いろはが、シーツを握りしめて、こきゅっと喉を鳴らした。
×　×　×
――今日は、多分、本当にやばい。
　わたしは、確信に近いレベルでそう思っていた。
　先輩のおしおきは強烈だった。
　次におしおきする時は～なんて話をしたけど、正直……2回もこんなことをされたら、わたしはもう先輩に毎日いじめ抜かれないと生きていけない身体になってしまうのではないか、そう思ってる。
　先輩はきっと律儀に考えてくれるから、わたしが望んだらいくらで

ももっと焦れったくて、もっと気持ち良くて……もっと、わたしがおかしくなるようなことをしてくれるから、余計に。
そんなおしおきの後のキスで、わたしは初めて先輩とキスした時ともまた違う緊張と不安に襲われた。
そして予想通り、いつも程激しくなく、むしろ優しいくらいの先輩の責めで、神経回路が焼き切れるんじゃないかってくらいの快感が頭の中で火花みたいに弾け飛んだ。
そして先輩に促されるまま、正確に言えばそこまで言えと命令された訳でもないのに、恥ずかしい言葉を言っておねだりしてしまった。
先輩と行為を重ねる上で慣れてきてしまったとはいえ、今日はいつも以上にするすると喋ってしまった。
明らかに心も身体も高まってるって、きっと先輩にバレちゃってる。
どうしようかな、えへへ。
……って、そうじゃなくて。
そういった経緯があって(そもそもおしおきの原因はわたしが一人でしてたことだし、それによって高まってた部分も大きい。上塗りに上塗りに上塗りを重ねてしまった)、今、わたしの身体は多分、相当やばい。
口を責められても、胸を責められても簡単にめちゃくちゃになってしまうのに……わたしは、先輩に一番の快楽を望んでしまった。
今、先輩の目の前でわたしは、仰向けになって足を広げて、あられもない姿を見せている。
何一つ隠せない、隠さない、隠そうとしない。
身も、心も。
あぁ、そう言えばもう一つの穴はまだ何もしてないなぁ、今度じっくりと遊んでもらおうかな……って、なんでわたしはこの期に及んで今後の展望を考えてるんだ。
現実逃避……にもならないか。
多分今考えたことは、遅かれ早かれやっちゃうんだろうなぁ。
まあそれは良いとして。

「いろは……行くぞ」
「……っ」
先輩が愛おしくなるくらいに硬くなった逞しいモノを、わたしの足の根元にぺちぺちと当てて、ゆっくりと下にずらしてくる。
わたしの返事を待ってくれてるけど、これ、頷いた瞬間に気絶しちゃうんじゃないかなぁ……でも、それがたまらなく怖くて、たまらなく楽しみに思っちゃってる。
そんな事を考えながら、ゆっくりと頷く。
先輩が、わたしの手を見てちょいちょいと手招きした。
「……？」
なんだろうと思いながらも手を差し出すと、その手をぐっと握られた。
一体なんで……？
あ。
「……っ」
何が起きるかが分かって、全身の産毛が逆立った。
「……行くぞ」
もう一度、先輩が言う。
今度は、わたしの返事を待たずに、わたしの手をぐっと引っ張って
――先輩が腰を突き立てた。
続く。

（１２）

先輩がわたしの手を引っ張って、ゆっくりと腰を突き立てる。
アソコに宛てがわれた先輩の熱いモノが肉をかき分けて、ずぶりと入ってきた。
「いぃ……っ！」
――予想を超えた衝撃に、全身に電流が走る。
顔を起こして様子を見ると、先輩のモノはまだ先っぽしか埋まっていない。
身体の感覚を研ぎ澄ますと、わたしの中の入口で先輩のモノのエラが引っかかっているのが分かった。
「くひぃんっ!?」
先輩がほんの少し動いただけで――押したのか引いたのかも分からないくらい動いただけで、わたしの身体は綺麗に仰け反った。
待って、待って、待って。
こんなの、知らない。こんなの、シャレにならない。
どうしよう、どうしよう、どうしよう。
頭の中がごちゃごちゃしていると、先輩が切なそうに声を上げた。
「いろ、は……入れてく、ぞ……っ」
先輩の声音にハッとする。
先輩も、気持ち良いんだ。
わたしの中は、思考がばかになってしまいそうな程の快感で先輩のモノを満遍なくきゅうきゅうと締め付けていて、それに反応した先輩のモノがむくむくと大きくなって、それでまた先輩のモノが大きくなる……という、とんでもない循環が起きていた。
これ以上気持ち良くなった時の事を考えると、本当に大丈夫かなと不安が過ぎる。
けど、それ以上に。
「うっ、くぁっ……いろは……っ」
「……っ」
先輩が気持ち良さそうに震えて、わたしの手を力強く、でも本当に

優しく握ってくれている。
その切なそうな表情に胸がきゅんとしてしまって、こんな状態なのに頬がだらしなく緩みそうになる。
なんだよ、もう。
先輩、可愛すぎるでしょ。
先輩……わたしでこんなに気持ち良くなってくれてるんだ――
「うおっ!? い、いろは、こら、そんな締め付けるな……っ」
「あ」
あまりに悶えていると、さっき以上に締め付けちゃったみたいだ。
先輩、瀕死である。
うふふー、申し訳無いなー。
さーて、どうしようかなー。
「えへへへー……とうっ！」
「うおっ!?」
先輩と手を繋いでいることを良いことに、私が下になっている状態のまま、先輩をぐっと引き寄せて、先輩が私の身体にダイブするようにした。
勢いが余ると、ぐえっ、て先輩みたいなキモかわいい声が出ちゃうからそこは上手いこと調整する。
ぎゅむっ。
「ふへ～……」
「……おまえ、なぁ……っ!?」
先輩と密着して、温泉の更なる上を行く極楽状態に浸っていると、耳元で先輩が切なそうに声を上げた。
どうやら今の拍子に先輩のモノが半分くらいまで入って、先輩が悶絶してしまっているようだ。
今気付いたけどわたしもかなりやばいかも。
イキそう。
こんな軽く言う言葉じゃないと思うんだけど、イキそうなものはしょうがない。
責めてる側だとこうも感覚が違うものなのかー……勉強になった

ぞ、ふふふ。
「せんぱい？　もっと進んで良いんですよ？」
耳元で楽しげに囁きながら（ていうか本当に超楽しい）、先輩の腰に足を絡めてぐぐぐと引き寄せた。
「……？」
あれ。
先輩の腰が進んでこないぞ。
すーごい抵抗されてる。
「……せんぱい？」
「……タイム」
まさかのタイム。
先輩、わたしが動けないように巧みに手を握る力や方向を調整しながら、ぷるぷると震えてる。
あー、なんだろう。
すっごく嬉しい。
なんだよなんだよ、先輩、こんなにわたしで気持ち良くなってくれてるの？
やめてー！　きゅんきゅんするよー！
「……せーんぱい、タイムは認めませんよー？　ここは戦場ですよー？」
こんなに先輩が可愛くなるのなんてレアだから、たっぷりいじめちゃおう。
いたずらっぽく囁きながら、先輩の腰を引き寄せる足に力を込める。
「うおっ、ちょっ、まっ、ほんとに……っ！」
先輩が情けなくて、頼りなくて、女の子みたいにか細い声を上げた瞬間――先輩のモノが、どくんと脈打った。
「うぐっ……！」
「ひゃあぁぁぁぁっ!?」
先輩は短く、わたしは長く、先輩は切なそうに、わたしは驚いて、それぞれ声を上げた。

まだ7割入ったからどうかというところで、先輩が勢いよく中で噴き出した。
「ひゃあぁぁぁぁぁ……っ」
突然の事態に目をぱちくりさせながら、小さな絶頂を迎えてしまう。
身体の奥が、熱く熱く満たされていく。
今はわたしが責めていたからわたしは軽くで済んだけど、普段だったら下手すれば気絶してたかもしれないくらいに気持ち良かった。
「うっ……うぐっ……」
先輩がわたしの首に顔をうずめて、何度目かの脈動を終える。
ふあぁ……中がいっぱいだぁ……。
「……」
……しかし、これはいくらなんでも……。
まさか先輩が、こんなに気持ち良くなってただなんて。
こんなに……早くイってしまうだなんて。
うーん。
「せんぱい？」
「……」
ありゃりゃ。
先輩、凹んでるご様子。
そりゃそうか、今まであれだけ交わっておいて、今日も今日とてわたしを責めるだけ責めて、先輩が圧倒的優位の立場（わたしとしても本望）でこんなことになるなんて……びっくりだよなぁ。
わたしは全然問題無いんだけど。
先輩、すっごく可愛かったし。
うーん。
これは、優しく慰めてあげるのが良いかな。
うん、それが年下彼女なるものの務めだ！
ふんすっと小さく息を吐いて心の中で気合を入れて、先輩の耳元で、出来るだけ優しく囁く。
「せんぱい」

「……どうした」
お、今度は返事が来たぞ。もっとヤケになっててもおかしくないんだけど、声音は優しいままだ。
うぅ……悶えるぅ……！
そんな先輩に、精一杯の励ましの言葉をプレゼント。
「せんぱい。なんか、童貞みたいでしたねっ」
「……
うわ。
この世で一番長い沈黙、って感じ。
悪戯心が過ぎたかなー、ちょっと悪いことしたなー、申し訳無いなー、と思いましたまる。
この後、先輩の頭をぽんぽんと撫でながら「まぁまぁ、こういう日もありますよ。せんぱいが童貞っぽくなっちゃう日だって」と言ったら、ものすごく忌々しげに「おのれ……」って呟かれた。
超怖い。
× × ×
しばらくの間、先輩を抱きしめてゆーらゆら。
うーん、すごく幸せ。
先輩の顔を見ると、拗ねたような、自分の情けなさに打ちひしがれてるような、そんな顔。さっきよりはマシになったけど。
ど、どうしよう、可愛すぎて育てたい……！
はっ、いけない、これでは先輩の思うツボだっ！
……なんか、思考が先輩みたいになってきてるなぁ。
大歓迎だけど。
歓迎しちゃったよ。
「……」
先輩の母親よろしく抱きしめていると、段々身体の奥が疼いてきた。
なんだかんだで、先輩のモノはまだわたしの中に入ったままだ。
今は半分くらい入った所で留まってるけど、場所が場所のせいか先輩のモノはほとんど衰えずに時折小さく脈打ってて、その度にわたし

もぴくんと反応してしまう。
……何がまずいって、先輩の熱い液がわたしの中を浸してることだ。
入れっぱなしにしてるから、先輩のモノで栓をしてる形になって、わたしの中の奥半分でこぷこぷと揺れている。
なんだか、わたしの中の肉から先輩の液がとろとろに染み込んできてるような気がして、意識するとどんどん身体が高まってしまう。
「……せんぱい、そろそろ続きしませんか？」
少し、余裕が無い声になってしまった気がする。
先輩はわたしのそんな声音に気付いたのか、
「……おう、そうだな」
答えた時の目が……幾分、嗜虐心に染まっていた。
……これは、まずい予感。
予感というか確信だ。
上半身を起こして、先輩が徐に腰を引く。
そして、一気に突き立てるようなことをせず、わたしをじっくり堕とすように、腰を上下左右にぐりぐりと動かし、時に回しながら、ゆっくりと挿入してきた。
「あぉぉぉぉ……っ」
……だ、だめだ、動物みたいな声が抑えられない。
先輩が掻き分けた分だけ、先輩の汁が奥まで押し込まれて……身体がいっぱい喜んでしまう。
「さーて、童貞扱いされない為にも、ゆっくり慣らしていかなきゃな……」
「うわ……」
先輩、超根に持ってるじゃん。
あれだけあやしたのに！
「せんぱい、陰湿です、陰険です、極悪ですぅぅぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……っ！」
抗議すると、ゆっくりと腰を回しながら、先輩が一番奥まで突き入れてきた。

ゆっくりな分、子宮の入口にノックされた感覚があまりにはっきりと分かって、じんわりと身体が喜んで、たまらない程幸せになる。
「んふぅ……っ？」
先輩が、わたしの唇をつと奪った。
すぐに離れた唇に名残惜しさを感じていると、先輩がすごく嗜虐的な笑みを浮かべた。
「……じっくり、いじめてやるからな」
「……っ」
あー……やばい。
今、こきゅって喉が鳴ったの、絶対聞かれちゃった。
「……は……い……っ」
なんで、わたしはこんなにも。
先輩にいじめられるのを、楽しみにしてるんだろう。
先輩がゆっくり腰を引く。
それに合わせて、わたしの身体が。
わたしの喉が。
喜びの声を上げた。

続く。

（13）

「うぁぁぁぁぁ……っ」

先輩は一度わたしの奥まで突き立てると、入れた時以上に緩慢な速度で引いて行く。

先輩のカリの部分がわたしの中をゆっくりじっくりと擦り上げて、頭の中で火花がパチパチと飛び散る。

「……」

先輩はわたしが静かに身悶える様をじっくり見ている。その目は獲物をじっくり弱らせようとする獣のようで、先輩の目を見ているだけで子宮がずくんと疼く。

あなたのその目が、どれだけわたしの身体を昂ぶらせているのか、知っていますか？

知らないですよね。

……知って、もらいたい。

もっともっと、わたしのことを。

「……くひぃぃん……っ！」

カリだけ入っている状態まで腰を引くと、先輩はわたしの手を掴んで——両腕をクロスさせて引っ張り、ゆっくり腰を進め始めた。

あー……これ、やばいんだよなぁ……今までは物凄い速さで打ち付ける時にこのやり方をしてたけど、今回はきっと……じっくり責めても、わたしが逃げられないようにするためだ。

「いろは……っ」

「……っ」

あーもう、先輩のこの目はずるい。ずるずるだ。意味は違うと分かってても つい語感が気に入って使っちゃってる。それは良いとして。

なんでこれだけ粘着質な（失礼）責めをしてる時も、先輩の目の奥はこんなに優しいんだろう。どれだけ激しくする時も、いつも先輩はわたしのことを気遣い過ぎなくらいに気遣ってくれる。

『せんぱい、こんなに気を遣わなくても良いんですよ？　わたし体力

はそれなりにはあるんですから』
これは以前先輩とした後に言った言葉。
体力があるというのはだいぶ誇張しているけど（実際はへっぽこもへっぽこだ。体育を不真面目にしか受けない女子を舐めないでほしい）、別に身体が弱いなんていうことはない。
その日は正直もっと激しくしてもらいたいとさえ思ったが為に出た言葉だったんだけど……それに対する先輩の返答が、
『……好きなやつの身体は大事にしたいんだよ。……あー恥ずかしい』
というものだった。この後わたしが悶え転がったのは言うまでもない。
先輩もこんな歯が浮くようなことを言えるようになったんだから成長したもんだ。何様だろわたし。
ちなみにこの後、照れ隠しで『先輩、好きなやつの身体《は》って言いましたよね。ていうことはわたし以外の人は大事にしないんですか？　わー鬼畜だー！』と茶化したら……その５分後に気絶させられた。その日の激しくしてほしいレベルを遥かに上回る責めだった。あれーおかしいなぁ……？
「ひぃあぁぁぁぁぁ……っ!?　あっ、あふぁっ、んはぁっ！」
軽い回想をしている間に先輩の半身は再びわたしの奥底まで到達していた。
しかも今度は子宮の入口に先っぽを入念にぐりぐりこすりつけてくる。
少し離しては押し込んで、回すようにぐりぐり。
「ひぅぅぅぅ……っ」
ダメだダメだダメだ。声、我慢出来ないよぉ……っ。
先輩の責めに対して子宮が喜んで、その入口で先輩の先っぽにキスしてしまう。身体も心も待ち望んでいるんだ。
先輩が押し込む度に、子宮の中にはさっき先輩がいっぱい出してくれた汁も押し込まれて、こぷこぷと小さな海を作っている。
先輩がもう一度腰を引いた。今度はわたしの手を掴んでいること

を利用して、少し引いては戻すという行動を繰り返す。
「〜〜〜〜〜〜〜〜っ」
これも、だめ。全然抵抗出来ないまま小さくイっちゃう。
引くときはカリが中に引っかかって意識が飛びそうになるし、押し込む時はちょっとだけしか腰は進めないけど、その代わり手を引っ張ってほんの少しだけ速く突かれる。ずぐって言う感触と一緒に、身体がぶるぶると震えてしまう。
そして口も閉じれないくらい余裕がなくなったところで、今度は腰をぐりぐり回しながらゆっくり引かれる。
「んぐぅっ、ひっ、ひぐぅっ、ぇうぅぅ……んはぁっ、あひぁぁ……っ」
あーもう、めちゃくちゃだ。先輩にはわたしが弱いところを全部把握されてる……いや、正確に言えば、先輩がしてくれることは全部感じてしまうんだろうな。
あーもう、この人にすっかりとろとろにされちゃったなぁ。今更だけど。
「いろは……っ、いろは……っ」
先輩が切なそうな声でわたしを呼ぶ。……可愛いなぁもう。
その濁った目にも病みつきになってしまって、アバタもえくぼとはこの事だなぁなんて実感してるんですよ？　わたし。
一度射精した後でも、もう先輩は限界が近いみたい。毎日してるおかげでどんどんタフになってるみたいだ。
ふふふー、ほらほらイってしまえー。
……まあ、こんなこと考えてはいても、実際はわたしの方がよっぽど余裕が無いんだけど――っ？
「ひ……っ!?」
上ずった声が口から漏れてしまった。
もう一度抜ける寸前まで腰を引いた先輩が、片手を離し、わたしの小さくぷっくりとした豆に親指を添えていた。
今そんなところを責められたら、わたしは――。
「せ、せんぱい、あ、あの、その……」
「童貞かぁ……」

まさかの返答である。
それいくらなんでも引っ張りすぎでしょ……とジト目を向けると、先輩はウッと小さく怯んだ。先輩はちょろいなぁ。
この隙を突いて交渉するのだ。
「せんぱい、あのですね、流石に今そこを責められると」
「責められると……なんだ？」
あ、やば。先輩の目つきが戻ったどころか、更に鬼畜になった。
……ご愁傷様、わたし。
……いや、待てわたし。
もう少しだけ粘るんだ。
「……あの、その、ですね？　流石にそこを責められると、気持ち良くなりすぎて……と言いますか……」
「何だその、上司に言い訳するダメな部下みたいな喋り方は……」
呆れられてしまった。むぅ。
こうなったら話を逸らすしかないか。
「あー、それ良いかもですね」
「何がだ？」
「先輩と同じ大学に行って、会社も同じところに行くんです。それで先輩が上司になって……とかどうですか？」
「……や、何その現実味の薄い話」
半目で見られた。不本意だ。
「なんでですかー。会社はまた話は別ですけど、大学は一緒のとこ行きたいじゃないですかー！」
ぷんすかと頬を膨らませたけど、わたしの中に先輩の先っぽが入った状態で、腕を引っ張られてる状態です。超シュール。
「や、まあ、そりゃそうだけどよ……お前がやりたいことも考えてほしいし、もしそれが俺の行く大学で出来るとしても、受かるとは限らない訳で……」
……？
なんだろう、先輩、何か弱気な感じがする。何か変だ。
「先輩、どうしたんですか？　何か不安げですよ？」

「や、その、何ていうか……この後、お互い大学生になった時、同じ大学にしろ違う大学にしろ、どういう風にすると良いかなって考えることもあるんだけど……たまにな？　たまにだぞ？」
おぉ？
何この可愛い生き物。これ絶対しょっちゅう考えてるぞ？
……先輩、そんな先のこと……といっても、順当に行けばもう2年もしない内にお互い大学生になるんだよなぁ。
どうでも良いけど、こういう会話って普通家とかカフェでのんびりくつろいでる時にしたい気がする。
油断してどっちかが動くとその都度お互いが小さな声で「うっ……」って言ってるのシュールすぎるでしょ。
……それにしても。
……嬉しいなぁ。こんな風に考えてくれてるんだ……。
テンションが上がっちゃうぞ、いろはちゃん。
「それじゃそれじゃ、先輩はどうしたいんですかー？　可愛い可愛いいろはちゃんとどうしたいんですかー？」
「うぜぇ……あざとい……」
まあ、腰を数センチ進められただけで一瞬で崩壊するくらいの危うげなあざとさなんですけどね。えへ。
しかしこんなことを言いながらも先輩はその辺を具体的に考えていたようで、『それについてなんだが……』ともごもご言っている。あ、あれ？　なんでそんな恥ずかしそうなの？　なんか急にわたしまで恥ずかしくなってきた……。
こほんこほんと咳払いして、先輩が目を泳がせながら口を開いた。
「あー……その、なんだ」
「はい」
「……同棲、とか……」
「え」
時間が止まった。
わたしのリアクションに先輩が慌てふためく。やめてやめて、動かないで！　話の内容が頭から飛んじゃうから！

「あ、や、お互い学生で経済的にもあんま余裕は無いだろ？　それにお前の親御さんもいきなりお前に一人暮らしさせるのは不安だろうし、お互いがパートナーのことを考えてハウスワークの役割をシェアしたりするってのも今後のビジョンとしてはウインウインと言えるというか、後は、その、なんだ、えーと……」
「……」
先輩、大混乱である。
実にメダパニ。
なんか後半が意識高くなってる気がするし。使い方もくしゃくしゃだよ、もう。ルーさんだよもはや。
「……くすっ」
思わず笑ってしまった。
一つ一つの理由は、簡単に論破出来ちゃう簡単なもので、そんな理由を咄嗟に出すくらい先輩が慌ててるのが可愛くて。
そして……そんなに、わたしのことを考えてくれてることが、どうしようもなく嬉しく……て……。
――と。
「……んぁぁ……っ？」
「うぉ……っ？」
二人同時に声を上げた。
先輩の言葉が染み込んできて、不意にわたしの中の締め付けが増した。先っぽしか入っていない先輩のモノをきゅうきゅうと締め付けて、欲しい欲しいと訴えている。
……あー……もう、ダメだ。
「……せんぱい」
「うあ……どうした？」
「ここ、思い切り指でぎゅってしてください」
わたしが視線を向けたのは、先輩の親指が微かに触れている小さな豆。
「え、良いのか？」
わたしの急な方向転換に、先輩がきょとんとする。そりゃそうだよ

ね。
「良いんです。……先輩のずるい言葉で、わたし、火が付いちゃいました。……いっぱい、気持ち良くしてください。いっぱい、いじめてください。……いっぱい、中に出してください」
「……っ」
先輩の喉が、ごきゅっと強めに鳴った。そして目に強い光が灯る。ぞわりと何かが背中を駆け上り、子宮が先輩の先っぽとのキスを求めて下りてくる。
「……行くぞ」
先輩が言って、わたしの豆に親指をゆっくり押し付けていく。
「ひぐぅぅぅ……っ！」
身体の中を暴れまわる快感に脳を焼かれながら、先輩の腰に足を絡めて――一気に引き寄せた。その行動に先輩が目をむく。
「こ、こら、いろは……っ！」
先輩の熱くて硬くて太いモノが一気にわたしの中を貫いて、子宮の入口にキスをする。
ドチュンッという音と共に、急に引き寄せられた反動で先輩の親指がわたしの豆を一層強く圧迫する。
奥行きたった数十センチの空間を満たされただけで、信じられないくらいの快感と幸福が脳に叩きつけられて、世界が明転する。
わたしの中の襞という襞が先輩から子種を搾り取ろうと、根元から先までざわざわ、きゅうきゅうと絡みつき、締め付ける。
「いろは……っ！」
先輩が切なそうな声を上げて、わたしの豆を強く押して、腰を強く打ち付けた。
先輩の身体がぶるりと震える。
ほんの一瞬の空隙を経て――先輩の先っぽから、大量の白濁液が注がれた。
「んはぁぁぁ

そして、そのままわたしの意識は闇に溶けた。
「いろ……は……っ」
――先輩が泣きそうな、でもすごく幸せそうな顔でわたしの名前を呼ぶのを見て、どうしようも無い程に頬を緩ませながら。
続く。

（14）

いろはの躰の奥底に、愛情と欲望の入り混じった白濁をたっぷり注ぎ込むと、思わず涙が出そうになった。

いろはは絶頂に打ち震える最中に俺のそんな顔を見て、何とも幸せそうに頬を緩ませて、気をやってしまった。

「……うぐ……っ」

いろはの腰に手を添えて、射精を終えた敏感な剛直を引き抜く。

気絶していると言うのに、いろはの身体はまるで自分の中から俺が抜け出ていくのを名残惜しむかのように、いろはの心臓の鼓動に合わせるかのようにひくひくと収縮している。

その度に肉棒がびくんびくんと跳ねて残った粘液を搾り出され、数十センチの道のりを戻るだけなのにかなり神経を使った。

ずるりと引き出すと、いろはの朱い肉裂からこぽりと白濁が溢れ出た。その光景に思わず息を呑んだが、当のいろは本人はと言うとすうすうと穏やかな寝息を立てている。何かむにゃむにゃ言ってる。

「……片付けるか」

正直、ここまでの流れがあまりにも劣情を催すものであった為、抜かずに2回戦3回戦と行くくらいのつもりはあった。

それくらいのつもりでいて、更にこんな淫猥な光景を見せつけられては……ちょっとこの後に対処に困る。

うーん、一通り掃除したら自分で……って、そうか、そういや今昼間なのか。

昼間なのか。

びっくりしすぎて2回言ってしまった。

まあ昼なら、一度お昼寝タイムをとって夕飯の後にでも……うん、そうしよう。それまで我慢だ我慢。

「んん……っ」

いろはが目を閉じたまま、身体をぶるりと震わせた。

行為による熱気が身体から抜け落ちれば、今はまだ冬の寒さが残る時期だからこうなるのも当然だろう。

立ち上がってティッシュを取って来て、いろはの身体を丁寧に拭きつつ毛布をかける。
ふわりとした生地がいろはを包み込むと、いろはがふにゃっと顔の筋肉を緩ませた。
「えへへぇ……先輩、あったかいですぅ……」
「……」
……発狂しそうになった。
眠りの世界でも俺と話してるのか。そんなに俺と絡んでると飽きちゃわないか心配――
「飽きないですよぉ……？　先輩見てて面白いですし……」
「あれ!?」
睡眠中の人間とモノローグで話す人間の意思疎通!?　レベル高くない!?
「油断するとすぐキモいくらい挙動不審になりますし……」
「おい」
寝ているのにツッコミを入れてしまった。こいつどんだけ俺のことを罵りたいんだ……。
「先輩がわたしに敬語を使うようになるまでですぅ……」
「あれ!?」
また読まれた!?　しかもなに、こいつ俺に敬語使わせたかったの!?
何の為に!?　腹立つ！
「嘘ですよぉ……ばかですねぇ先輩は……」
「……」
……夢の中の後輩に弄ばれた……。
ジト目を向けて、頬を引っ張る。
むにー。
「ひゃうぅ……」
……何で嬉しそうなんだ、この子……。
試しにもう一度。まずは手を離す。ぷるんとした艶肌が元の形状に戻る。つるっつるやでぇ……。
はい、むにー。

「ひゃわぁ……」
……よし、決めた。
今度からこの子が寝てる時、毎回これやろう。超楽しい。和む。そして死ぬ。死ぬのかよ。
「……っとぉ」
不意に、ぶるりと身体が震えた。
なんで俺は全裸のまま毛布に包まった後輩（中は全裸）の頬をむにむにしてんだ。字で整理すると色々とまずい。
取り敢えず、いろはと一緒に毛布に入る。こういう時に別々の毛布に包まったりすると後でいろはに猛烈な勢いでぷんすか怒られるからだ。ほんともう、プリプリ怒る。プリプリ。
何とはなしにいろはの頭の後ろに腕をまわすと、いろははころんと首をこちらに向け、穏やかな寝顔を見せた。
「……」
頬をつついてみる。
つんつん。
やだ柔らかい……。
「ふへぇ……」
いろははさっきよりも気の緩んだ声を上げている。ふふん、俺に骨抜きにされているな……言ってて死にたくなった。
まあ、寝てるんだからそりゃ気も抜けるだろうけど。
「……くぁっ……」
毛布の中でぐーっと身体を伸ばし、小さくあくびをする。
さて、落ち着いた所で一眠りするか――と瞼を下ろしかけた時。
「……んん……っ」
いろはが穏やかに、その目を開けた。
× × ×
いろはは俺と目が合うなり、目をぱちくりとしながら2人の状況を確認した。
ふむふむと納得したように頷いて、きりっとした目つきで俺を見る。

「……拘束プレイですね」
色々と待て。
斜め上すぎる予想にびっくりした。何で自信満々なんだよ。頭の斜め上でキラーンて光ってそうなんだけど。
「……なんでだよ」
目の前でジト目を向けると、いろははんーと小さな声で唸った。
「だって、お互い毛布に包まれてるじゃないですか」
「ああ」
「それでわたしは、今まで寝ていた訳です」
「ああ」
「だからです」
「待て待て」
ステップを飛ばしすぎてる。下り階段だったら転げ落ちてるぞ。
なんでこいつ、こんなしょうもないことをにぱーっと良い笑顔で言えるんだ……可愛いけど。
空いた手で頬をぽりぽりと掻いて、ふぅと軽く息を吐く。
「……一回寝ようと思ったんだよ」
言うと、いろはが寝たまま「ふえ？」と首を傾げて（器用だしあざといし可愛いしでもう大変）、直後、しゅんと眉根を寄せた。
「……ごめんなさい、わたしが気絶しちゃったからですよね」
「や、別に気にすることじゃねえよ。お互い気持ち良かったんだから良いだろ別に」
実際、この子が気をやるくらい気持ち良くなってもらえたというのは、とても嬉しいことだ。だからこれは掛け値無しの本音だ。
しかしいろははぷるぷると首を振って（腕枕してる状態だから二の腕に亜麻色の髪がしゅるしゅると擦れてこそばゆい。あと可愛い）、ふんすっと息を吐いた。
「それでも、です。先輩……まだしたかったですよね？」
「あ、や、まぁ……」
痛い所を突かれて目を泳がせる。
いろはは俺の様子を見て、また申し訳無さそうに眉根を寄せた。

「先輩は優しいから……今わたしがいくら言葉で言っても休ませてくれようとしちゃうと思うんです。だから……その気にさせてあげますね」
「え……」
それはどういう――と言いかけた所で、いろはが急に身体を起こして俺の肩を掴み仰向けにさせ膝立ちになり、マウントを取る形になった。
え、なに、一方的にボコられるの？　あなたどこの暴力ポニーテールぺったんこクラスメイトさん？
「ん……っ」
「お、おい……っ」
何をするかと思っていたら、いろはの手が俺のしぼんだ棒に伸びて、竿を掴むとそのまま自分の陰唇に押し付けた。どちらの体もきちんと拭き取っていたため、ぺちんと乾いた音が鳴る。
「お、おい、無理すんなって」
そんなことしても――と言いかけたところで、いろはが妖しく口元を歪めた。
……あ、あれ？　何か今すげぇぞくっとしたぞ？
「せんぱぁい……」
互いの敏感な部位をこすり合わせながら、いろはが甘ったるい声を上げた。
その声に今までの局所的な記憶が想起されて、ぶるりと身体が震える。
――いろはは普段、ここまで甘えた声は出さない。
そういう行為をしたい時、しかも自分からしたい時に、合図代わりに、まるで求愛行動のようにこんな声を出す。
それが分かっていることもあり、この一言だけでびくんと欲望が跳ねる。
いろははそれに気付くと、いやらしく目を細めた。
「せんぱい……わたし、せんぱいに無理やりされるのすごい好きなんです」

「え……」
びくん、と肉棒が跳ねる。いろはは「あん……」と耽美な声を上げて、薄桃色の小さなひだひだがちゅくんと潤んだ。
いろはが背中を悩ましく反らせて前屈みになった。下を向いた乳頭はうっすら張り詰めていて、官能に震えている。
「せんぱいに後ろから突かれて……わたしの中ぐちょぐちょに掻き回されて……わたしがいくらダメって言っても止めないどころか、むしろ言えば言うほど激しくされて……」
「ちょ、ちょっと待て、ちょっと待て」
鼻血が出る、鼻血が出る！
何この告白!?　死ぬ！
しかし、そこは流石一色いろは。俺のこんな反応を見てやめる訳が無い。
「せんぱい、その時のわたしの気持ち分かります？　好きな人に押さえつけられて、気が狂うくらい腰を突き立てられて、一番奥の大事なところを何度も何度も力強くキスされて……」
「〜〜〜〜っ」
ほ、保健室……！　保健室に連れて行って！　誰か！
……何このドMとしての言葉責め。
下に目をやると、さっきまで平常モードだった竿はすっかり剛直と化していた。そりゃそうだ。
「んっ……」
いろはが青筋だった肉茎に手を添えて、欲情の川が出来たクレバスをぐちゅぐちゅとなぞる。
わずかに腰を前後するだけでぞくぞくとした官能が身体を駆け巡る。
「……そ、それで、わたしの身体をめいっぱい押さえつけながら、耳元で『出して欲しいか？』なんて聞くんですよ？　そんなの、答えなんて一つしかないのに」
愛涎をくちゅくちゅと鳴らしながら、いろはの手が亀頭を撫で回す。

気付けばいろはの腰に手を当てて、快楽に酔いながらいろはに合わせて腰を動かし欲望を貪っていた。
「……それで、せんぱいは出そうになると、ものすごいスパートをかけますよね。そこまででわたしはもうイってることが多いんですけど……あの速さで、あの力強さで打ち付けられると、もう頭の中でばちばち火花が飛んじゃって、何も考えられなくなるんですよ」
――いろはの声に靄がかかる。
もう、目の前のぐちゅぐちゅに濡れそぼった孔に入れたい、挿れたい、犯したい。
いろはの耳朶を打つ艶声は、耳元に降るのをやめない。
「……それで、最後にせんぱいのお汁がびゅーって出ると、もう、身体中が喜んじゃうんです。もっと出して貰えって、もっと搾り取っちゃえって、身体中が大声で言ってくるんです。それでわたしは意識が飛びそうになりながらも勝手にせんぱいのおちんちんをきゅうきゅう締め付けて、それでまたわたしが感じちゃって……もう、大変なんですよ？」
いろはが困ったように笑う。ちっともいやがっていない、包容力のある笑顔。
だから――と、言葉を繋いで、いろはが暴発寸前の肉槍から手を離した。
俺にくるりと背を向けて、身体をゆっくり前傾させて四つん這いになる。
どくん、と。
心臓が、下腹部が、跳ね上がった。
「だから……」
震える声でいろはがもう一度言い、首だけこちらに向けて婀娜っぽい流し目を送る。
「……わたし、せんぱいにめちゃくちゃにされるの、好きなんです。……いっぱい、突いてください。いっぱい、かき回してください。……いっぱい、出してください」
「――――っ」

何も、言葉を発する事が出来ないまま。
獣のように目をぎらつかせて。
跳ねるように起き上がると――体躯の割にむっちりとした、牝を感じさせるいろはの尻肉を掴み、狂おしい程にいきり立った肉鉾を、淫靡に潤んだ女淫に宛てがった。
続く。

（15）

四つん這いで発情した目を向けるいろはの、情欲をそそる柔らかな尻肉を掴むと、シーツを手でぐっと掴んで背中を反らせた。

「ひぐぅぅ……っ！　せ、せんぱいの、せんぱいの、早く、早くください……っ！」

いろはが振り向いて泣きそうな顔で懇願してくる。

いろはに宛てがった肉棒に対して、いろはの意思同様早く早くとせっつくように、愛液とカウパーにまみれた大陰唇がエラを挟み込み、ひくひくと戦慄いている膣口が、充血しきった亀頭にきゅむっと吸い付く。

「わかった……後悔するなよ？」

「大丈夫です、大丈夫ですからぁ……っ、早く、早くせんぱいの硬くて太いおちんちん、わたしの中に思いっきり突き立ててください！」

ごくり――と息を飲んで、尻肉を掴んでいた手を、抽送に備えて足の根元に移動させて、がっちりと掴む。

もう一度だけ、焦らすようにぐにぐにと亀頭を上下にこすり合わせると、いろはの背中が曲げて伸ばしてを繰り返して快感を伝えてくる。

いろはが期待で溢れさせた愛液を亀頭にたっぷりと塗りつけて、もう一度、ぴたりと膣口に亀頭を宛てがった。

いろはが、こきゅっと息を呑んでシーツを殊更強く掴んだ。

「行くぞ……」

「あっ、あぁっ、あぁぁぁ……っ！」

にゅぶぶぶ……ぐぼんッッ！

「ひぁぁぁぁぁぁっ！　あぐっ、ふぐぅぅっ、あつ、熱い、太いぃ……っ！」

ぎちぎちに勃起した肉槍で一気に最奥まで突くと、空間を余すことなく埋め尽くされた肉襞が喜んでぎちぎちと締め付けてきた。

いろはは四つん這いの体勢で必死に堪えながら、激しく息を荒げ

る。
「あぇっ、かはぁっ、これ、やばっ、すごい、やっ、やらっ、これ、ダメになる、わらひ、バカになっひゃうぅぅ……っ！」
　自分で恥ずかしい言葉を言うごとに、いろはは自らの快感を高めている――そう気付いてからは、こういった状態になってからの責めがまた楽しくてしょうがない。……今日はまた格段と感じているようだから、たっぷりいじめてやろう。
「ほら、いろは。今お前の中で何がどうなってるんだ？　きちんと説明してみろ」
　言って、ゆっくり腰を引くとそこから2度3度と力強く腰を叩きつけて、いろはの愉悦に塗れた肉穴を貪る。
「ひぅぅっ！　あひっ、ひぐぅぅ……む、むり、こんらの、ひゃべれらいぃ……んにぃっ!?」
　いろはの腕を掴んで、引っ張りながら膣肉をかき分けて抉ってやると、いろはの声がまた一段と艶を帯びた。
　内股はもはや愛液なのかさえ分からない程にぐしょぐしょに濡れていて、濃厚な牝の匂いが牡として本能を刺激する。
「ほら、突きやすくしてやったぞ」
　声を一段低くして、囁き声で耳を犯すように語りかけながら、子宮口にキスしている亀頭をにちゅにちゅと押し付ける。
「あっ、あぇっ、かはっ、へひっ、あ、ありらとう、ごらいまふ……」
　快感でいよいよ口が回らなくなってきたようで、まるで幼子のような舌っ足らずの喋り方をするいろは。
　しかしその表情は全く子供とは思えない淫らなもので、目にするだけで心臓がどくんどくんと跳ねる。
　どちゅんっ！
「んくひぃぃっ！」
　もう一度腰を引いて思い切り突き入れる。
「ほら、まだ説明をしてないだろ。ちゃんとしろよ」
　意地悪く言いながら、いろはの手を引っ張って肉竿をぐりぐりと回して膣肉をかき回し、いろはの牝の味を堪能する。

「ひぐぅぅ……はっ、はい、します、説明……しますぅ……っ」
言って、いろはが俺に腕を引っ張られたままゆっくりと上半身を起こし、欲情した顔を振り向かせた。
「い、今、わらひの中に、せんぱいの、おひんひ――んはぁぁっ!?」
「だめだ、ちゃんと言うんだ」
淫語が発音出来ていなかったと判断した瞬間に腰を力強く突き入れる。
油断していた肉襞は一瞬遅れてからざわざわと絡みついてきて、愉しそうに肉竿を搾り上げてくる。
「あっ、あがっ、い、言います、言いますからぁ……、い、今、わたしの中に、せんぱいのおちんちんが、熱くて硬くて太くて長くて、わたしの気持ち良いところを抉ってくれる反り返ったおちんちんが、根元まで入ってます。わたしの一番奥がノックされて、もう気持ち良すぎて頭がどうにかなっちゃいそうです……っ」
「……っ」
ぶるぶると震えながらも、よくこれだけ恥ずかしいことを……と感動さえ覚える。
「よく言えたな……ご褒美だ」
もう一度腰を、今度はじっくり焦らすように引いて、いろはの期待が高まるだけ高まった瞬間に一気に突き入れる。
「あぐぁぁっ！　んぐぅぅっ、えぐっ、ひぁぁぁっ！」
続けざまに3度4度と欲望の塊を熱いゼリーに浸しながら突き入れると、いろはがいやいやと首を振った。
「なんだ、突かれるのがいやなのか？」
「ちっ、ちがっ、そうじゃなっ……んはぁぁっ！」
質問しながら、ごりゅごりゅと膣肉を貪る。
「じゃあなんだ、もっとやってほしいのか？」
「ちっ、ちがっ、そういう訳でもぉひぃぃぃぃ!!」
いまいちはっきりしない答え方に、自然とピストンも速くなり、その分だけいろはの悲鳴も激しさを増す。
いろはの言葉が止まったので、そのまま抽送を続ける。

「んくぅっ、あっく、ひぃっ、あひぁっ、ひぐっ、ひっく、ひっく、ひんっ！　……えぐっ、なんれ、なんれぇ……っ」
「……っ？」
雄肉に突き上げられる快感に打ち震えていたいろはが、不意に嗚咽を漏らした。なんで、という言葉の意味を尋ねる意味で沈黙を返すと、いろはが目に涙を浮かべてゆっくりと振り返った。
「なんで……せんぱいにいじめられるの、こんなに嬉しいの……こんなに幸せなのぉ……っ？」
「……っ」
獣欲と、支配欲と、独占欲と、情欲と、嗜虐欲が、一気に膨れ上がって爆ぜた。
「おまえなぁ……っ！」
いろはの腕を離すといろはの背中をぐいと押して、牝穴に挿入したままいろはの身体をベッドに押し付けた。
そしていろはの脇の下に腕を滑り込ませて、いろはの肩をがしりと掴んで身動きが取れないようにする。
何も言わずに、全身全霊を込めて腰を打ち付けた。
どちゅんっ！　ぐちゅっ！　じゅこじゅぷじゅくくく……っ。
「んはぁぁぁぁっ！　ひぎっ、ひぐっ、あぉ、んぉぉぉ……んにぃっ！　ひっ、はへっ、す、すき、これ、すき、らいすきぃ……っ」
いろはの顔を覗き込むと、涙と涎を垂らしながら幸せそうに喘ぎ狂っている。
「はぁっ、はぁっ、いろは、いろは、いろは、いろは……っ！」
たまらなくなって、いろはの名を何度も何度も呼ぶ。
「ひぇっ、ひぇんぱぃ、ひぇんぱぃぃ……っ」
いろはも俺の呼びかけに応えて、自分の肩を押さえつけている俺の手をきゅっと握った。
「んむっ……」
獣のように腰を打ち付けながら、手を繋いで口付けを交わす。
舌を絡ませる訳ではないが、たまらなく興奮して、たまらなく幸せな気持ちになる。

「んふぅっ、ひへぁっ、ひゃふぅぅっ、んむふぅっ、ひぇふぁぁぁ……っ」
唇を幾度となく重ねながら、いろはが恍惚とし艶声を上げる。声自体は穏やかになっているが、剛直を締め付けるいろはの肉襞は激しく蠕動して、雄の子種を搾りとろうとする。
「んむっ……いろは、もう、出る、出すぞ、お前の中に……っ！」
「はへぇぁ……んはぁっ！　らひて、らひてくらはいっ、あひぁっ！　ひぇんぱいの、おしる、くひぃんっ！　いっぱい、ひぐぅっ！　わらひのなかに、ひぃぃんっ！　らひてぇ……っ！」
淫液とカウパーとでぐちょぐちょに濡れそぼった怒張を、抜ける寸前まで引いては一気に奥底まで突き入れる。
互いの愛情と欲望がぐしょぐしょに混ぜ合わされて、腰が射精欲に戦慄く。
「いろは、も、もう、イクぞ……っ！」
「はひぁっ！　はひっ、はげしぃっ!!　ひぇんぱいの、ひゅごいぃぃっ!!　いっ、イクッ、ひぇんぱい、わらひも、イク、イク、イク、イクぅ……っ!!」
いろはが俺の律動に合わせて、必死で腰をかくかくと動かして射精を促す。
最後の最後、爆発寸前の肉槍を一気に最奥に突き立てると、身体の奥底から湧き上がった射精欲を解放した。
ごぶどびゅるぅぅっ!!　どくどぶどぶぶっ、ぶびゅるるるっ!!
「あひぃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……っ!!　あひっ、ひんっ！　んひぃぃぃん……っ!!」
膣内を洪水にせんばかりの勢いで吐き出される灼熱の白濁液が、いろはの肉穴を一気に満たして逆流し、まるで蛇口をひねったかのように結合部からごぶごぶと溢れ出す。
「いっ、イクっ、イっひゃぅぅぅ……!!」
牝穴を蹂躙する白濁の奔流に、抑えようの無い快楽の波がいろはを襲い、全身を痙攣させていろはが絶頂に達する。
「あっ、あぇっ、はひっ、くひぃんっ、あっ、はふっ、ひっ、ひっく、

あひっ、ええうっ、ええうぅ……」
いろはが涙を流しながら、微かに笑みを浮かべて身体をひくつかせる。その度にこぷっこぷっと白濁が流れ出し、行為の激しさを物語る。
互いに数十秒、或いは数分の間、息を荒げながら沈黙を繰り返す。
落ち着いた頃、いろはが顔をこちらに向けた。
「……せんぱい……」
「どうした」
細い掠れ声に顔を近付けて応えると、いろはがちゅっと軽く口付けをしてきた。
「……大好きです」
「……俺もだよ」
照れてしまって目をきょろきょろさせながら言うと、いろははえへへ……と笑ってくてっと脱力して、そのままゆっくりと寝息を立て始めた。
……俺も寝るかな。この体勢のままでいいや。

続く。

（16）

「……ん……っ？」

目を覚まして、俺は今どこで何をしていたんだっけかなと思い返す。

目の前のどこか艶っぽい肌を見て、ゆっくりと記憶の糸を手繰り寄せる。

ああそうだ、ついさっきまでいろはとあんなに激しく――

「……ぅおっ？」

――と、いろはとのまぐわいを思い出していると、不意に下腹部を快感が襲った。

何事かと思ったが、そういえばうつ伏せのいろはに乗ったまま寝て、挿入もしていたままだと言う事に気付く。

入れっぱなしだったら、どちらかが少し動いただけでも擦れるんだから、そりゃ気持ち良くもなるよな――と思っていたら、どうやらちょっと理由が違ったようだ。

「……ひぅっ、あっ、あんんっ……」

「……っ」

俺にのしかかられたまま、俺より先に目を覚ましていたらしいいろはがいつの間にか枕を手元に引き寄せて顔をうずめて、俺と両手を繋ぎながらもどかしそうに腰をもぞもぞと動かしていた。

寝ていて全く動かない俺の身体を、うつ伏せのまま必死で貪っているようだ。

……え、何この状況？　死ぬ程エロいんですけど。

「……せんぱぃ……っ、ひんっ、寝てるのに……寝てても、すごっ……いぃ……っ」

甘ったるい、幸せそうな声を漏らしながら、いろはが腰を艶めかしく蠢かせて、俺を起こすまいと静かに肉棒を貪る。

寝ている間も俺の身体はしっかり反応していたようで、熱く湿ったゼリーの海に浸かった肉棒は既に決壊寸前になっていた。

……エロい上に健気とか、精神崩壊するレベルで可愛いんですけ

ど。
　どうすると良いかなー、このまま寝たフリをしてても気持ち良く出せそうだなぁ……とは思ったけれど、折角起きたんだからと言う事で行動指針を変える。
　……よし。
「あふぁ……せんぱいの、ひくひくしてきたぁ……っ、イっちゃう？　せんぱい、寝たままイっちゃうんですか？　えへへ……ひっ、んあぁぁぁぁっ!?」
　いろはが腰を引いた瞬間に、繋いでいた手を力強く握り締めて、子宮の入り口を強烈に圧迫するようにぐりぐりとゆっくり剛直を突き入れると、いろはが甲高い嬌声を上げた。
「あぁぁぁぁ……あっ、あひぁっ、せ、せんぱい？　起きて……んひぃっ！　やっ、やっ、あっ、今動かれたらぁ……っ、ひゃぅぅぅぅ……っ！」
　寝起きなのもあり、激しく突くことはしない。
　代わりに、抜ける寸前まで腰を引いて奥底まで突き入れる抽送をねちっこく行うと、俺同様絶頂寸前になっていたいろはは全身をぶるぶる震わせて肉襞を蠢かせ、肉棒から子種を搾り出そうとしてくる。
　起きた時点で結構限界に近付いていた事もあり、自分から抽送を始めて間もなくして下半身の限界を感じた。
　いろはの耳元に口を寄せて、耳たぶを唇でぱくりと咥える。
「ひゃぁんっ!?　ふあぁっ、ひぇんぱぃぃっ、ひゃぅぅぅぅ……っ」
　耳たぶを唇でなぞり、舌で耳の中を舐め取り、頭の中に直接言葉を送り込むように囁く。
「……イケよ……」
「〜〜〜〜んひぃぃぃぃぃ……っ！」
　囁いた途端にいろはは両足をばたばたと動かし、膣内の収縮を一層強めた。
　蠢く肉襞が亀頭から竿の根本まで満遍なく絡み付き、射精の予感にぞくぞくと背筋を泡立たせる。
　いろはが俺の手をぎゅっと掴んで、泣きそうな顔を向けた。

「イっ、イクっ、イっひゃうよぉぉぉ……っ!!」
掠れた声で甘ったるく囁いて、いろはは次の瞬間足をびーんと伸ばして全身を激しく痙攣させた。
膣肉の収縮が殊更強くなり、下半身が決壊して射精欲を一気に解放する。
――びゅくびゅるっ、どぶりゅっ、びゅぶぶっ、ごぷごぷごぷ……。
「あぁぁぁぁぁ……あつっ、あついよぉぉぉ……きもひぃぃよぉ……っ」
いろはの身体の一番奥に灼熱の濁流を注ぎ込むと、涙を流しながら嬉しそうに悲鳴を上げた。
穏やかな膣肉の収縮に余す事無く残り汁を搾り取られ、恍惚としながら再びいろはの身体に体重を預けた。
ベッドがぎしっと音を立てると、いろはは「あぅぅ……せんぱい、これ好きぃ……っ」と嬉しそうに呻いた。
……どんどん開発が進んでるなあ……。

× × ×

それからしばらくして。
俺といろはは、最低限の片付けをすると服を着ないまま布団の中でごろごろしていた。自堕落の極みである。
行為を終えたんだから、服を着ようと思ったんだけど……。
以下、ついさっきの二人の会話。
「いろは、そろそろ服着るか」
「え？」
服を着るって言葉を初めて聞きましたってくらいのリアクション……。
「え、や、その、服を、な？　あの……」
「え？」
「あ、あれ、その……」
「え？」
「……」
何も変なことは言ってないはずなのに。

え？　の一言に押し通されて。
結果、裸のままである。
これ、夕飯時までにもう何回かヤっちゃいそうだなあ。おサルさんかよ。よく言われます、目の前のこの子に。
当の本人はと言うと、裸でくっついているだけというこの状態に飽きることもなく、鼻唄混じりでころころと甘えている。鼻血を我慢するので精一杯です。
腕枕をしてやると、俺の二の腕を縦横無尽にごろごろし始めた。こいつ自由かよ。
「あぁ～……極楽ですねぇ～……」
「……」
……ツッコミ所が盛り沢山だけど、まあ良いか。
空いた手で髪を撫でる。
しゃくしゃく。
くしゃくしゃ。
「うにー……」
お前は青色サヴァンか。
くしゃくしゃ。
「……」
撫で回しながら、ふと思う。
この子がこんな甘えた幼い声を出すようになったのはいつ頃からだったか。
未だにこういう声を出した後ほんの少し照れている様が何とも可愛らしい。
しばらく撫で回していると、いろはが顔を上げた。話を聞こうと手を止めると、ふわりと手を重ねられた。
「……まだ撫でててください。話してる途中でもです」
「お、おう」
わしゃわしゃ。
「先輩、この後夕飯時までどうしましょう？」
「あー、そうだなー……」

わしゃわしゃ。
「あぅ……わたしとしては、このままベッドの中に居たいんですけど……あぅ」
「お前が飽きないなら別にそれで良いけど。飽きたら言えよ？」
わしゃわしゃ。
「はうぅ……飽きそうにありません……」
また胸に顔をうずめられた。
両手で抱きしめてさわさわしていると、いろはが目線だけこちらに向けて、にやりと笑った。
「先輩……おっきくなってますよ？」
「え……」
言われて気付く。いつの間にか再び隆起した硬直が、いろはの柔らかなお腹をつっついていた。
「えいっ」
「うっ……？」
いろはが手で硬直を掴むと、太ももの間に挟んでしまった。
「今おサルさんモードになられると……わたしもスイッチが入っちゃいますから。だからこれで封印しちゃいます」
「俺は魔物か何かなのか」
「性的な？」
「何でお前その返しを知ってんだ」
普段のキャラ的にびっくりした。
俺のツッコミに対して何故か得意気な顔をしながら（微妙に腹立つ）、いろはがきゅっと太ももを締めた。
……これ、勃ちっぱなしにならざるを得ないんですけど……。
続く。

（17）

それからしばし。

未だにいろはの柔らかな太腿に、むにむに極楽感触で挟まれていると、いろはの方に変化が起きた。

ゆっくりと腰を前後させ、太ももで肉棒をこすってきて……って、あれ？

「なあ、いろは、何で動いてんだ？」

聞くと、いろはがどことなくぽーっとした表情でこちらに目を向けた。

「……何で、でしょうねぇ……？」

「……」

……あれ？　これ、スイッチ入ってなーい？　大丈夫じゃないよね、これ？

「な、なあ、いろは。そろそろ抜いた方が」

――言いかけたところで、いろはが俺の肩を掴んで、ころんと仰向けにした。

「お、おい――!?」

状況が掴めず慌てている内に、布団の中でいろはがもぞもぞと動き俺の上に乗ってきた。

重さなどまるで感じない、心地良い柔らかさが身体を包み込む。

「……せんぱい」

「……っ」

俺に語りかける目が、確かな情欲の火を灯している。

……完全に発情してんじゃん。挟んでた意味……。

ていうかこいつ、こうなるって絶対分かってたろ。

呆れながらもいろはの髪をくしゃりと撫でると、気持ち良さそうに目を細めて、そのまま下腹部を肉槍にこすり付けてきた。

「……せんぱい、せんぱい、せんぱぃ……っ」

「……ぉ……ぁ……っ」

おでこ同士をこつんと当てて、熱っぽさを湛えた唇でついばむよう

なキスをしてくる。
　大陰唇が反り返った肉棒の裏筋をにゅくにゅくとこすり上げ、肉竿にねちっこく淫液を纏わり付かせていく。
「せんぱい……ゆ～っくりしましょ？　せんぱいのおちんちんたっぷり味わいたいんです……いいですか？」
　いろはがおねだりするように言って、唇から首へと順にキスをして、ちゅうちゅうと吸い立ててくる。
　あまりの淫猥さに頭がくらくらする。
　こいつ……甘えてくる時の破壊力高すぎだろ……。
「……わかったよ」
　ここで断る選択肢が無いのは分かっているので迷う意味も必要性もないのだけど、一応少しばかり躊躇するフリだけして頷く。
　俺の答えを聞いて、いろはが嬉しそうに頬を緩めた。
「えへへぇ……せんぱい……せんぱぃ……っ」
　いろはが愛おしそうに何度も俺を呼ぶと、亀頭をきゅっと掴んだ。

×　×　×

　にゅこここ……にゅぷ、にゅぷぷぷ……。
「あはぁぁぁぁ……っ」
　いろはの中は熱くほぐれていて、挿入していくごとに締め付けをやんわり強めてきた。一番奥まで達すると、いろはの口から甘美な吐息が漏れて、もう一度首に吸い付いてくる。
「せんぱぃぃ……きもひぃぃよぉ……っ」
　首に腕を回してしがみつくと、俺の耳に唇をぴったりくっつけたまま腰を前後し始めた。
　ああ……これは穏やかな快感だ。
　これなら射精まで行かない程度でいくらでも楽しめ――
「はぁぁん……せんぱいのぉ……きもひいいところに当たるのぉ……っ」
「やぁん、おしりさわっちゃやらぁっ、もっろきもひよくなっひゃぅぅ……っ」
「あっ、今ちょっとイっひゃったぁ……ひんっ、えっちなお汁、いっぱ

い出ひゃうぅ……っ」
「……っ」
あ、これあかんやつや。
何これ、耳元でこんなエロい実況されるって状況ある？
熱い吐息が絶え間なく耳に吹きかけられて、ちゅぱちゅぱと淫靡な音を立てながら何度も口付けされて語り掛けられる快感が尋常でない。
下半身から込み上げてくる射精衝動にぶるりと身震いする。
「い、いろは、ちょっとこれやばい。ゆっくりやってんのにもう出そうだ」
「え～……？　もう出ひゃうんれすかぁ……？　まあ許ひてあげましょう……この後もいっぱいらひてくらさいね……？」
まるで酔っ払ったかのような口調で言うと、いろはが腰の密着度を更に強めて、肉襞の締め付けを一層強めながら、それでも速度を変えず緩慢に腰を前後する。
にゅこっ、にゅぷっ、にゅくくっ、にゅぷぷぷ……。
「おお、あっ……イっ、イクぞ、イクぞ……っ！」
身体を瞬間的に硬直させていろはを強く抱きしめると、いろはも負けないくらい強く抱きしめ返してきた。
心地良い射精欲が、身体の奥底から解き放たれる。
……どびゅるっ、どぷっ、ごぷごぷごぷ……っ。
「はぁぁぁぁぁん……ひぃんっ、ひゅごいよぉ……きもひいぃよぉ……っ」
「なっ、ちょっ、おい……っ!?」
いろはの子宮へと大量の白濁を注ぎ込むと、まだ射精が終わってない内に、いろはが腰を振る速度を上げた。精液の滑りも手伝って結合部がより卑猥な音を立てる。
にゅぶっ、じゅぶじゅぽっ、ぐちゅぷっ、じゅぷっ、じゅぽっ……。
「ま、待て、いろは、本当に……っ！」
「えへへぇ……せんぱぁい、もっろらひてくらさぁい……っ」
「……っ」

え、何この子、精液に酔ってんの？
夥しい量の精液を吐き出すと共に、魂まで抜け出てしまいそうな感覚に陥る。
脱力して、四肢をベッドの上にくてんと投げ出しても、いろはの腰は止まらない。
――結局この後、いろはがひたすらゆっくりと腰を振り続け、入れっぱなしでもう2回射精をするまでひたすらまぐわい続けた。
× × ×
結局、短時間寝ては行為に及び、掃除してまた短時間寝ては行為に及ぶ……という規則的で（性的に）乱れた時間を過ごすこと数時間、やっと俺といろはは服を着てリビングに向かった。
まだ夕飯前だというのに、既に2人とも動きが何か変だ。かくかくしてる。
「おう、小町、夕飯の準備の手伝い――」
「ちょっとごめん、ティッシュ取ってくる」
「え」
リビングに入って、既に夕食の準備を始めていた小町に俺たちが顔を見せた瞬間、小町が超速でボックスティッシュの下へ向かった。
あ、あれ、何か見たことあるような光景……。
待つことしばし。
「えーと、いろはさん、お兄ちゃん」
「おう」
「何かな？」
未だにティッシュで鼻を包んでいる小町が、若干間抜けな声で俺たちを呼ぶ。
「今後なんですけども。小町が居る時はですね、ちょっと声が大きくなりそうだなーって思った時は小町にＬＩＮＥの一つで良いから入れてもらえるでしょうか。あの……控えめな時はそこまで気にならないんですけど、その……すごく声が大きくなると、もう、小町死んじゃいそうです……」
死にてえ。

いろはが茹でダコになって腕に抱き付いてきた。
「あーっと……わかった、わりぃ」
謝ると、小町が頬を赤らめながら目を逸らした。
「や、まあ、良いってばよ……」
「キャラブレてるぞ……」
「鼻血が出過ぎて小町のキャラがブレブレなのです……」
「ほんとごめんなさい……」
ところでキャラって失血量によって変わるものなのん？
「仲が良いって証拠だから構わないんだけどね。でもちょーっと、いろはさんの声が可愛すぎて死んじゃいそうだったよ」
いろはが胸元に顔をうずめて全力で抱き付いてきた。鯖折りで背骨をへし折られそうなんだけど。
あれ、これ小町わざと煽ってない？　あれ？
「えーと、その、本当にすまん。良いやり方が浮かんだら提案するわ」
「そうしてね……まあ、もう一回くらいはいろはさんの甘えた舌ったらずな声を聞いてみたいけどねっ！」
「いろは、いろは、いろは。折れるぞ、俺の背中がポッキーみたいに折れるぞ」
いろはが小声であぅあぅ言いながらぎりぎりと締め付けてくる。可愛いけど、物凄く可愛いけど、照れ隠しで死にたくない。この子こんな力強かったのん？
と、まあ。
こんなやりとりをしながらも、結局は小町といろはの２人でご飯を作ってくれた。
小町は何だかんだでいろはの事を相当イジり、いろははその度に「小町ちゃん……それはちょっと……言わないで……」と言って手で顔を覆い首をぷるぷる振っていた。
その度に小町と目を合わせて二人でぐおぉと悶えていた。なんだこの兄妹。
食卓を囲んで、いろはが作ってくれたという料理をもりもり食べる。

「……やっぱ美味いな」
「あ、ありがとうございます……」
隣で俺の様子を窺っていたいろはが、ほっと胸を撫で下ろす。
何とはなしに目を合わせ、互いにふと微笑む。
可愛らしい笑みを見ていろはに触れたくなり、小町からは見えないし良いかと思いいろはの太ももに手を伸ばし――
「良い雰囲気になった途端にいろはさんの太ももを触ったりはしないよね、お兄ちゃん？」
「そそそそんな訳ないやないか」
「何で急に語調が変わったの……」
小町の目が冷たい。ごみを見るような目つきに磨きがかかってる感がある。
「……ん？」
「どうしたのお兄ちゃん？」
「あー、や、何でもない……」
こんなやりとりをいろははまるで気にしていなかったのか、俺が伸ばしていた手にいろはが触れて、そっと自分の太ももに置いた。
「……えへへ……」
『がふぁっ』
「えぇっ!?」
いろはの照れっ照れの笑みに撃ち抜かれて、比企谷兄妹が同時に血を噴いた。鼻と口から。
あわあわとするいろはをぼんやりとした意識の中で見つめながら、ああ、まだまだこれから先も楽しくなりそうだなぁ……と思った。

お終い。

由比ケ浜家で巻き起こる展開がマンガみたいである。

（1）

「ふぅ……」

ベッド際に座って息を吐く。

季節は春。曜日は金曜日。時間帯は深夜。時刻は……分からない。

そして、場所は由比ケ浜家の結衣の部屋。

隣に目をやると、結衣が疲れてすやすやと寝息を立てている。その寝顔は安らかそのもので、見ているだけで気持ちが穏やかになる。

「えへへぇ……ヒッキー、ヒッキー……あんっ、そこ……えへへ……」

「……」

……え、なに、夢の中で続きをやってんの？　まだやってんの？　ストイックすぎない？

晩御飯を由比ケ浜マ（＝由比ケ浜のママ）に頂いて（感想は伏せておく）、その後部屋に行ったら自然と……というより、即座にやっていた。ほんと即座。どうなってんのってくらい即座。部屋に入った瞬間からだった。

何となく想像はしていたけど、結衣は思っていた以上にそっち方面に興味津々だった。回数を重ねれば重ねる程自分なりに研究して上達していく。健気に「これ、気持ち良い？　こっちのが良い？」などと一回一回尋ねられて、最初はそんないちいち聞かなくても……と思っていたが、感想を伝える度に上手くなっていくのを見ると、なんかもうむしろどんどん聞いてくださいってくらいの勢いになっていた。結衣自身の感度も増しているようで、特に胸を責めると本当に大丈夫かよってくらいの勢いで身体が跳ねる。雑談していて「最近、なんか胸がまた大きくなったような……」と呟いたのを聞いたときは思わずガン見してそのまま触ってしまい、全然そんな雰囲気じゃなかったためにすんごい叱られた。ぷんぷんと怒られた。

それに加えて、どうやら騎乗位をお気に召したらしく、仰向けになった俺に乗っかって泣きそうな顔をして俺を何度も呼びながら、震

える腰を前後左右にくねらせる様はあまりにも扇情的で、何度見ても鼻血が出そうになってしまう。いやもう何度でもやってほしいんですけどね。

さっきは最後に四つん這いで後ろから突いて、肉棒を包み込む結衣の柔らかい膣肉の中に大量の精液を注いだ。腕を引っ張りながら付くとたわわな乳房がぶるんぶるんと揺れて、後ろからでも躍動しているのが分かった。射精を始めると「んぁぁぁ……」と色に染まった獣じみた声を上げながら全身を痙攣させて、肉棒から白濁液を際限なく搾り取られた。仕草の一つ一つがあまりに可愛くて、あまりに艶っぽくて、普段のぽやぽやした面、しっかりした面とはまるで違う顔にいちいちどきどきしてしまう。

そんなこんなで、今は休憩中。この後続きをやるかどうかは、目が覚めた結衣のテンション次第。結衣が乗り気でないのにやっても楽しくないので、あくまで結衣に合わせることにしている。ちなみに俺がする気が無くても、結衣が上目遣いで「……したい」と言ってくると一発でその気になるから俺も単純なものだと驚く。俺から誘っても良いんだろうけど、いまいちやり方が分からない。結衣と同じことをやれば良いのか。やべぇ、絵面を想像しただけで吐きそうだ。

「……トイレ行くか」

ぼんやりした状態で、誰に言うでもなく呟く。時計の針の音もぼーっとしていると大して聞こえなくなるらしい。ぬっと首の向きを変えて時計に目をやると、深夜の1時だった。うーん、明日も休みだしなぁ、もうちょっとしたいような……と考えながら立ち上がる。

「……」

下につと目をやると、さっきまでのこと、結衣が起きてまだその気があった時にしたいことを想像したからか、何度も出していたにも関わらずぎんぎんに勃ってしまっていた。

何だか、出しなれてどんどん回数が増えている。結衣にもなんかどんどんいっぱい出るようになってるよと言われたっけ。これがいわゆる絶倫というやつなんだろうか。

むん、分からん。

今結衣の家に誰がいるんだっけな……どっちにしろトイレはほぼ目の前だし、夜中だしいいか……と、普段ならまず有り得ないのだけれど、この時はそんな雄丸出しの格好のまま部屋を出てしまった。
ドアノブに手を掛け――ようとした、その時。
自分の手がドアノブに触れる直前に、ドアが自然と開いた。
「え……」
「あら～」
現れたのは、結衣と容姿のよく似た……というか、姉妹と言われても違和感の無い、茶髪お団子ヘアーの女性、結衣の母、由比ケ浜マだった。
ていうか、あれ、え、俺、今全裸ですよね？
× × ×
「あらあら、まあまあ……」
由比ケ浜マはお盆を片手にもって、もう片方の手は口に当てて目は驚きで見開いている。
「あ、や、その、これは、あれです、えっと、えっと……」
隠すことさえ忘れ、何これこの後俺どうなるんだろう死ぬのかな等と大混乱していると、由比ケ浜マ――取り敢えずここでは「彼女」と呼ぶことにする――がそっと一歩近づいた。いつものおっとりとした目ではなく、その瞳には確かに色が宿っていて、その目に見つめられただけで勃起が更に増してしまう。
「声が聞こえなくなったから、そろそろ差し入れでもしようかと思ったんだけど……すごい所に出くわしちゃったわね～」
何その気の利いたお節介。
「あ、や、その……」
心臓が恐ろしい程に高鳴る。彼女は俺の肉棒を見つめ続けていて、その視線だけでも狂おしい程に興奮してしまって、こんな異常な状況だと言うのに、鈴口からはぷっくりとカウパーが滲んでいる。
「ノックもしたんだけど返事が無かったから勝手に開けちゃった。ごめんね～」
「あ、すいません。気付きませんでした」

そうか。いくらなんでもこんなタイミングでいきなり開けたりはしないか。ぼんやりしていてノックの音も意識に届かなかったらしい。
「それにしても……」
「あ……」
彼女は俺の横をするりとすり抜けて部屋に入り、カフェオレとクッキーを乗せたお盆を台に置いて、くるりと踵を返して俺の手首を掴み部屋の外に出て、ドアをばたりと閉めた。春にはなったがまだ夜は薄ら寒く、当然深夜の廊下も寒くなる。……その筈なのに、興奮のせいかまるで寒くならない。なんで閉めたのかと聞くより先に、彼女が一気に近付いてきたため、その言葉は喉の奥で掻き消えた。
俺の肩に手を置いて、彼女が目の前まで顔を寄せる。
「……な～に、ヒッキーくん？　こ～んな凶悪なので結衣を鳴かせてるのかしら？」
「……っ」
普段の雰囲気とかけ離れた表情に、心拍数が跳ね上がる。どこかで見た事があると思ったら、行為をしている時の結衣と似ている。しかしこちらはその雰囲気をもっと妖しく成熟させていて、その表情と声だけで軽く達してしまいそうになる。
「え、えっと……」
いやいやいやいや、そもそもこの状況何なんだよ。
深夜に全裸で部屋の外に出たら結衣の母親と出くわして？　その母親と今密着しそうな程近づいてる？　や、どういうこと？　俺が発端ですねすいません。
全力で目を泳がせていると、彼女がにっこりと微笑んだ。
「……結衣ったら、羨ましい」
「え……？」
この人は今なんて言ったんだ……と思っていると、彼女がにっこりと笑う。
「ヒッキーくん。ＬＩＮＥ、お友達になりましょうか」
「え？　あ、はい、え？」

突然の展開に頭が付いて行かない。しかし言われるがままに携帯を取り出してその場で連絡先の交換を行うと、彼女が突然身体を屈めて、俺の肉棒の目の前に顔を迫らせた。
「ちょ、ちょ……っ!?」
え、この人何やってんの……!? と動揺していると、彼女はすんすんと鼻を鳴らして、微かに唇を震わせて目を細めて、艶やかに微笑んだ。
「ん……やらしい匂い……」
「……っ」
はーん!? え、今、この人、はーん!?
俺が何も言えずに固まっていると、彼女はすっくと立ち上がり、再び俺に顔を寄せた。目の前で見ても、とても高校生の娘を持つ母親とは思えない艶肌に驚きを覚える。
「ヒッキーくん、明日の午前中にでも連絡するわ～。……じゃ、この後も楽しんでね」
「え、あ、はい……」
なすがままに頷くと、彼女は微笑みながらひらひらと手を振ってドアを閉めた。
「……何だったんだ……」
ぼそりと呟いて、ベッド際に力無く腰を下ろす。時間にすれば2分かそこらだったのに、どっと疲れた。
このやりとりで体力が尽きた為、その日は寝てしまった。翌朝目を覚ましすと結衣が目覚めていたので、寝てしまったことを謝ると「んーん、気にしないから大丈夫だよ」と優しく言われてほっとした。だけどその後裸で抱きついてくるのは良くないですね。柔らかいのが前に当たってまた勃ってしまってすぐやりたくなるからね！
× × ×
「それじゃまたね」
「おう。じゃあ……んん？」
「えへへ……じゃあね！」
「……おう」

さらりとした挨拶にするつもりが、突然キスされて思考が停止した。ぼんやりと手を振って、この後どうしようかと考える。

結衣は午後から用事があってその準備があるとのことで、午前中に帰宅した。何となく手持無沙汰な気分になり、勉強にもあまり手が付かないまま夜を迎えた。

続く。

（２）

夜もぼちぼち更けてきた。眠りに就くまで何かしようとベッドに寝転がりながら、ペーパーバックを斜め読みする。ううん、やっぱり俺はラノベの方が好きだなぁ……。読めない訳ではないのだけど、これをメインに読もうとはあまり思わない。単純に好みの問題だけど。

「……ん」

ふと、枕元に置いてあるｉＰｈｏｎｅにＬＩＮＥの通知が届いた。こんな時間にＬＩＮＥしてくれる人なんて限られている。ちなみに２番目に多い相手は小町で、内容は「お兄ちゃん。笑い声うるさい。ふひひとか言わないで。もぐぞ」という鬼のようなもの。可愛くてしょうがないけど最後の１フレーズが毎回怖い。そんで１番多いのは材木座だけどまあそれはどうでも良い。

ｉＰｈｏｎｅを手に取り、一体誰から来たのかと確認すると、思わず小さい声で「うぉっ」と唸ってしまった。

連絡してきたのは由比ケ浜のママ、略して由比ケ浜マだった。相変わらず略せてない。せめて本名を知りたいけど、結衣に「お前のお母さんの名前教えて」なんて聞けない。変な空気になるのが目に見えている。

眠りかけていた頭が途端に冴え渡って、どきどきしながらトーク画面を開いた。

以下、ＬＩＮＥでのトーク。

『ヒッキーくん、こんばんは。いつも結衣がお世話になっています』

『こんばんは。いえいえ、こちらこそお世話になってます』

『うふふ、何だか堅苦しくなっちゃうわね』

『まあ、初めてＬＩＮＥで会話したらこんなものじゃないですかね』

『あはは、ヒッキーくんは素直で面白いわね～』

『いえいえ、そんなことないですよ』

俺の言葉に既読が付いた瞬間、電話がかかってきて驚く。相手は予想通り由比ケ浜マ……彼女だった。

「もしもし～？　ヒッキーくん？」

「はい。どうされたんですか？」
「あら、もっとくだけて良いのよ？」
「そうは言いましても……で、どうしたんですか？」
　わざわざ電話をしてきた目的を問うと、電話の向こうで彼女が「んー」と小さく唸る声が聞こえた。その年齢を感じさせない可愛らしい声音に、きっと今電話の向こうで、結衣がいつもしているような仕草をしているのだろうかと思うと、自然と頬が緩んだ。
「声を聞きたくなっちゃった、っていうのはどうかしら？」
「……
はぁ、どうもです」
　……なに、その、すげぇ可愛いけどこの先の展開が全くもって謎に包まれそうな不安に駆られる言葉？
「あら、やっぱりヒッキーくんは結衣が話してた通りねぇ」
「え、それどういうことですか」
「うふふ、秘密～」
「うぐっ……」
　今の関係になる前から結衣は俺の話をしていたみたいだし……、やばい、恥ずかしくて死にそう。
　俺の唸り声を聞いて彼女はくすくすと楽しそうに笑う。その声はとても聞き心地が良くて、ずっと電話していても良いかもしれないと思った。
「ヒッキーくん」
「は、はいっ」
　急に雰囲気が変わった彼女の声に驚いて、寝転がっていた状態からがばっと起き上がり、ベッドの上で正座をした。
　彼女は電話の向こうで微かな呼吸音を聞かせるだけで、何も喋る気配が無い。たっぷり１０秒程経ったところで、耐え切れずに口火を切る。
「あの、一体何の」
「ヒッキーくんは、明日の結衣の予定を知ってる？」
「……え、ええ、まぁ」

え、なに、クロスカウンター待ちだったの？　何だったの今の間は？　俺の心臓をいじめたかったの？

取り敢えず答えた後に、ようやく彼女の質問の内容を正確に脳内に落とし込んだ。

明日は、結衣は雪ノ下の家にお泊りする予定だ。俺との関係がどうなろうが、あそこの仲は不変なんだろう。むしろ百合百合しさが進化してるまである。やだ、結衣が一妻一夫一妻状態に……！　恐ろしく恥ずかしいことを言ってしまったので黙ろう。

俺の答えを聞いて、彼女が「うん、よろしい」と嬉しそうに言った。本当に、見た目も声も若くて、結衣のお母さんというよりはお姉さんという感じがする。

「それでなんだけど……ヒッキーくん、明日の予定は空いているかしら？」

「え、や、俺はその、えーと、アレです、アレ」

「良かった、何も無いのね」

「や、それは何て言うかその、えーと」

「良かったわー、もしヒッキーくんに用事が入ってたら、この貴重な機会を逃すところだったから」

「や、だから、その」

「それでね？　明日なんだけど」

「……」

……。

……話、聞いてくれないよぉ……。どっちにしろ予定は無いから、遅かれ早かれ追い詰められるんだろうけど。追い詰められるって言っちゃったよ。

大体、この流れはいやな予感しかしない。平塚先生然り、陽乃さん然り、一色然り。やだ、厄介な人だらけ……！　しかも今挙げた人は皆して美人もしくは可愛いもんだから余計扱いに困る。

ここからの流れに漠然ながらも明確にいやな予感を覚えていると、彼女がわくわくした声で次の言葉を紡いだ。

「よし、じゃあヒッキーくん、明日うちに来てもらえないかしら？」

「え」
え、なに、どういうこと？　結衣は居ないんだよ？　あの子はもう……居ないんだよ!?　動揺しすぎて無駄にドラマチックにしてみた。彼女は俺の声音から動揺を読み取ったのか、少し迷ったような声を漏らす。
「あー、ええっとね？　あの子が居ない時に、ヒッキーくんからあの子の話を沢山聞いてみたいのよ。言うなればヒッキーくんは由比ケ浜家を家庭訪問する訪ねる先生の役割ね」
「……ああ、そういうことですか」
確かに、普段結衣が居ては話せない事は沢山あるだろう。いやしかし、それでも緊張するしなぁ……と思っていると、彼女が「うふふ……」と怪しく笑った。
「そして家庭訪問の先生は大抵の場合その家の奥さんと怪しい関係になるわ」
「ごふぁっ！」
盛大に吹いた。
え、この人、何言ってんの？　あとそれ何の官能小説？
俺の咳き込む音を聞いて、彼女があらと言ってくすくす笑う。
「あら、ごめんね？　間違えちゃった」
「げほっ、ごほっ、勘弁してくださいよ、もう……」
「『怪しい』ではなく『妖しい』ね」
「悪化してるじゃないですか！」
え、何この人!?　結衣も将来こんな感じになるの!?
動揺しまくっている俺の声を聞いて、電話の向こうで彼女がうふふと笑った。俺のテンションの上下はまるで気にしていない様子で、おっとりとした空気感を変わることなく纏っている。
「ごめんなさいね、つい。ヒッキーくん可愛いなって思ってたから、ついついからかいたくなっちゃって。……それで、明日、来てくれるかしら？」
「え、あ、や、その……」
一瞬どこのタモさんだよとか思ったけど、そんな雰囲気では無い。

肝心の返答のタイミングの直前で激しく動揺した為に、思考と言葉が詰まる。さっきのって、別にこの場限りの冗談だよね？　俺が間に受けて彼女が「やだ～、ヒッキーくんたらエッチなんだから～」とかってからかうくらいだよね？
頭をがしがしと掻いて、何も無い壁をじっと見つめる。部屋の中は静かで、隣の部屋の小町ももう寝ているのか、物音一つしない。
まあ、結衣のご家族と親睦を深めることは良いことだろう。さっきの冗談は気になるけど。ものすごく気になるけど！
「あー、大丈夫です。伺いますね」
戸惑いながらもそう答えると、彼女は「あら～！」と嬉しそうに声を上げた。
「嬉しいわ～。ありがとうね、ヒッキーくん。それじゃ、明日結衣が出かけた後の、１９時くらいで良いかしら？　せっかくだからご飯でも」
「あ、ご飯は食べて行くので大丈夫です。ありがとうございます」
「……何か今、食い気味に言わなかった……？」
「あ、や、そんなこと、ないです、はい」
やべぇ、バレた。電話越しの表情を想像しただけで怖い。
ここからどうしようかと心の中で悲鳴を上げていると、ふーっと息を吐く音が聞こえた。どうやら許してはもらえるらしい。
「ふー……まぁ良いわ。それじゃ、比企谷くんはご飯を食べてから、１９時に来てちょうだいね。うふふ、楽しみだわ～」
またおっとりとした声音で嬉しそうに声を上げる。
「あ、はぁ、よろしくお願いします……」
一体どんなテンションで臨めば良いか分からない状況に困惑していると、
「それじゃあ、比企谷くん」
「？　はい」
急に彼女の息遣いが近付いて聞こえた。恐らく彼女は画面に口を近付けたのだろう。何事だろう――と思っていると、息混じりの艶やかなひそひそ声で、彼女がそっと囁いた。

「おやすみなさい」
「……っ、お、おやすみなさい……」
「うふふ～、じゃあ、失礼しました～」
正座したまま固まっていると、彼女から電話を切った。
ｉＰｈｏｎｅをベッドに置いて、がくっと力を抜いてベッドに寝転がる。
……なに、今の？　破壊力高すぎだろう。さっき彼女が言った冗談と相まって、どきっとするを通り越して若干……や、かなり、勃ってしまった。
「……明日、１９時、か……」
天井を見上げながら、何とは無しに予定の確認をする。
どうなるか分からないけれど、それでも、心が妙なざわめきを覚えていることだけは確かだ。
……ていうか、訪問の時間帯明らかに遅いだろ……大学生の食事＆飲み会かよ……と思ったのは、この後５分程経ってからのことだった。

続く。

（３）

翌日。

由比ケ浜マにお誘いを受けた件が気になって気になって、気もそぞろの極みだった。何をやっても手につかず、ゲームをしても落ち着かず、本を読んでも各行の頭文字くらいしか頭に入ってこない。古典的な暗号探しみたい。

そんなこんなで、現在。１９時３分前。

由比ケ浜宅の前に着いて、ドアを目の前にしてふぃーと息を吐く。３０分程前に「結衣が家を出ました。……待ってます」というＬＩＮＥが届いて尚更気持ちが変な感じになっていた。や、「……待ってます」の「……」って居る？　その記号１つで俺の心拍数が跳ね上がるの分かってる？　分かってそうで怖い。

見慣れた筈のドアが、まるで異質なものに感じられる。

はい、深呼吸。

すーはー。すーはー。

よし。

状況整理だ。

今から俺は、結衣のお母さんとお話をする。内容は結衣が居る時にはあの子が恥ずかしがって言えないような、あの子についての話。後はきっと俺自身の事もある程度聞かれるんだろう。まぁそれは予想の範囲内だ。無難にこなそう。

やらなくてもいいことなら、やらない。やらなければいけないことは手短に。

……。

……キャラを間違えた。

いかん、動揺している。落ち着け、落ち着け、データベースは結論を出せない……待て待て待て、キャラがまた変わった……落ち着け、落ち着け。

……。

……さてさて、このドアを開けた先に待ち受ける展開は!?　乞うご

期待！
カミングスーン、神だけに。
……。
……ダメだ、一向にキャラが落ち着かない。性別さえ飛び越えてしまった。
あー、どうしよう、次はどのキャラの名台詞を思い出そうかと訳の分からない思考を巡らせていると、ドアがかちゃりと開く音がした。
× × ×
「……いらっしゃい」
「あ、ども……です」
ドアが静かに開いて、その隙間から由比ケ浜マ――彼女が顔を覗かせる。そのあどけない仕草は結衣と重なるものがあって、本当に姉妹かと勘違いしそうになる。
「何だかドアの向こうで気配がするけどチャイムも何も鳴らされないから、インターホンのカメラで確認したのよ～。そしたら比企谷くんが何だか思い悩んだようにくるくる回ってるから、面白くてしばらく見ちゃった」
「……恥ずかしくて死にそうなんで帰っていいですか」
言うと、ドアの隙間から覗いている、可愛らしい面立ちの彼女がけらけらと笑った。
「あらあら、良いのよ～。可愛いなって思ったんだから」
「……あ、そ、そうですか……」
言葉尻で目を細めたのが妙に色っぽく映って、思わず目を逸らしてしまった。
「それにしても、何であんなことしてたの？」
「え、あ、や、えーと……まあ、アレです。ちょっとした準備運動です」
しどろもどろに答えると彼女はきょとんとした顔をして、またけらけらと笑った。
「も～、なにそれ？　ヒッキーくんは面白いわね～」
「や、そんなことは……っ!?」
恥ずかしすぎてマジで帰れないかななどと思っていると、突然ドア

の隙間から伸びてきた手に手首を掴まれた。手首を包む柔らかくて熱い感触に、ごくりと息を呑む。
「……そんなに緊張しなくて良いわよ？　別に、取って食う訳じゃないんだから」
「……っ」
　にっこり微笑むその表情があまりに妖艶で、呼吸するのを数瞬忘れてしまった。
「それじゃ、どうぞ」
「……はい……っ」
　手首を掴まれたまま固まっていると、ゆっくりと扉が開いた。そのまますると引き寄せられて、家に入った。
　ドアが閉められる瞬間に見慣れた街の風景が見えて、次に同じ風景を見る時、俺は一体どうなっているのだろう……と思って、心がひどくざわついた。

×　×　×

「お邪魔し……ま……」
　言葉を最後まで繋ぐことは出来なかった。慌てて目を逸らしたが、どうやら俺の視線が行った事はばっちりバレたようで、すぐ後ろでくすくすと笑う声が聞こえる。
　彼女の着ている服は、胸元が大胆に開いたVネックの長袖Tシャツだった。そこから覗く谷間の広さと、その……胸のボリュームが、明らかに結衣の胸を超えている。いやいやいやいや、めっちゃスタイル良いのに、それでこの胸の大きさってなに？　なに？　なんなの!?
「ふふ、どうしたの？」
　彼女がくすくすと笑う。２人とも三和土に居る為、彼女との距離が妙に近い。顔の斜め下からふわりと漂う甘い香りが鼻腔をくすぐって、どうにも良からぬことを考えてしまう。いかんいかん、これはきっと彼女が俺をからかっているだけだ、うん。きっとそうなんだろう。それか家ではオープンエロなんだきっと。オープンエロってなんだよ。家限定のオープンってそれもうオープンじゃねえだろ。ああもう思考が纏まらない。

決して胸元を見ないようにぐいっと顔を逸らしていると、彼女がくすくすと笑った。
「どうする？　歓迎のハグでもしようかしら」
「ぜひお願いします。間違えましたやめときます。ぜひやめときます」
「あらあら～、残念ね～」
もうほんとダメ。何だよぜひやめときますって。どんだけ拒否したいんだよ。しかも一回お願いしますとか言っちゃったし。まあ、本当にハグされたら乳圧で頭おかしくなってただろうから、拒否したのは正解だった。
「それじゃ、どうぞ上がって？」
「あ、はい」
一山越えて、ふぃーと息を吐きながら靴を脱ぐ。全く、これからは一瞬たりとも気を抜けないな……と思いながら、立ち上がりつつ振り返ると――
もにゅっ。
そんな、感触がした。
「あらあら～」
視界が暗転して、柔らかくて温かい感触が顔を包んで、頭が真っ白になった。
え、なに、え？
思考が目まぐるしい速度で巡って、視界・感触・彼女の声から状況を察する。
「ぬぁっ!?」
素早く仰け反って離脱すると――案の定、自分が数瞬前まで顔をうずめていたのは、彼女の豊かな双丘の谷間だった。
「ごめんなさいね～、ヒッキーくんのことじーっと見てたら立ち止まっちゃってたわ」
「え、あ、や、大丈夫です」
「怪我はない～？」
「大丈夫です、スライムってこんな感じなのかと」

「？　何の話かしら～？」
いかん、錯乱している。
「何でもないです、全然何でもないです。行きましょう、行きましょう」
「あらあら～」
焦りに焦りつつも促すと、彼女はくすくす笑いながらリビングへと歩を進める。
……何、今のくだり？　この人、わざとやったのん？　や、本当になに？　何かもう混乱しすぎている。頭の中がマジでスライム一色。
マジでスライム。しかもほかほかの。
……俺、何言ってんだろう。
楽しそうに鼻唄混じりで歩く彼女の後姿を見て、ああ、なんか背中も柔らかそうでむっちりしてんなぁ……と、完全にやばい方向に思考が進んでいた。

続く。

（4）

来慣れたはずの由比ケ浜宅が、まるで別世界のように感じられる。由比ケ浜マ……彼女の背中を見つめていると、その周りの空気がどことなく、ピンクや紫色に歪んでいるように見えた。

「はい、ここにどうぞ～」

「あ、どもです」

リビングに入ると、彼女は椅子を引いて俺に座るよう促した。とすっと座って、何とはなしに自分の下半身に目をやる。……うん、俺、これからちゃんと平常心を保つんだぞ。絶対な？　絶対だぞ？

「――え……」

不意に、彼女の温かい手が肩に添えられた。何事かと思い首だけ後ろに向けると、彼女が優しく微笑んでいる。

「……それじゃ、お茶、淹れるわね」

「……は、はい」

近い。

なんでお茶を淹れる報告をするためだけにこんなに近づいてるの？　もうちょい近付いたら耳に息がかかるし。今この時点でも既に甘い匂いがふわりと香っていて、心地良さと共にあらぬ方向に思考が向いてしまう。いけない、いけない。我慢、我慢、我慢……。

「いっぱい、楽しみましょうね？」

「っ!?　え、は、はい……っ」

我慢しようとしていた矢先、彼女の手が俺の肩から首にすすすと滑っていき、顔がより近付いた。とろけるような声音でとんでもないことを言われて、頭が一気にパニックに陥る。や、ほんとワニワニパニック。

待て、落ち着け。

今のは単純に「お話を楽しみましょうね」という意味だろう。普通に考えたらそうだろう。よかったー変な勘違いをするとこだったわーほんと危ないとこだっ――

「……色々と、ね」

勘違いじゃなかったっぽい。
反応に困りに困って、冷や汗が背中を伝うのを生々しく感じながら、言葉も無くひたすらにこくこくと頷いた。
×　×　×
彼女が２つのコーヒーカップを持って、俺の向かいの席に座る。
「ヒッキーくんは甘くするのが好きなのよね～」
「そうですね、座る時に足を椅子に乗せないと集中力が４０％落ちる世界的名探偵と同じくらいには好きです」
「？　何の話～？」
「すみません、何でもないです」
パニクりすぎて、ぱっと分かることはまず無さそうなネタを出してしまった。申し訳ない。
彼女がにこにことしながらコーヒーにミルクと砂糖を入れるのをぬぼーっと眺める。
コーヒー……。
砂糖……。
ミルク……。
……。
……ミルク……。
……牛乳……。
……乳……。
視線を少しだけ上にスライド。
……乳……。
……谷間……。
……乳……。
……母……。
……乳……。
「……」
「ヒッキーくん、どうぞ～」
「え、あ、はい、ありがとうございます、ありがとうございます」
もはや。

思考がかなりまずいことになっていた。
彼女は俺にコーヒーを渡すと、自分のものにも砂糖を入れ始めた。俺程ではないにしろ、それなりの量を入れている。
「さて、と」
コーヒーカップを手に取って、彼女が俺に向き直る。揺らめく湯気にちらりと目をやるその仕草は、年を重ねたことによる艶っぽさを感じて、どくんと心臓が高鳴る。
「それじゃあ、早速……」
「は、はいっ」
なんだ、なにが来る？
背筋をしゃっきりと伸ばして居住まいを正す。
そして、彼女がにっこりと微笑んで――
「結衣の話、聞かせてもらおうかしら」
ん。
それもそうか。
「……はい」
「？　どうしたの～？」
「や、なんでもないです。じゃあどんな話からしましょうか」
「そうね～、まずは――」
さっきまでのテンションのインフレから急に落ち着いて、二人で結衣についての話を始めた。
×　×　×
「あはは、なるほどね～。もう、結衣ったら……」
雑談を始めてからしばらくして。
会話は、穏やかそのものだった。
「他にももっと聞きたいわ～。何か、ないかしら？」
「そうですね、他には……」
次に何を話そうかと考えていると、彼女がほんの僅かに姿勢を変える。
……。
１０分程前からだろうか。

少し……ほんの少しずつ、何か違和感が生じてきていた。
今、彼女は両腕をテーブルに乗せて前のめりになり、その腕の上に豊満な胸を乗せてこれ以上無い程に、身に纏った凶器を強調させている。話に強い興味を示した前のめりの姿勢を取ってくれているから本当は彼女の目を見て応えたいんだが、そうすると視線が強制的に一点に固定されてしまうから本当に困る。
どうしよう、超見たい。
や、そうじゃなくて。
さっきから彼女は、時折胸を強調させた状態でからからと笑ってその凶悪な胸をゆさゆさと揺らしたり、時折席を立って飲み物を持ってきてくれる際に、ちょっとしたものを落として「あらあら、わたしったら～」と言いながら屈んで、年齢を重ねたことにより艶やかな色香を纏った足をミニスカートから覗かせてくる。どれも考えすぎと言えば考えすぎなのかもしれない。わざとかなんて分からないし。しかし、何でこの人、子供一人生んで更にその子供が高校3年生になってるってのに、こんなにミニスカートが似合うんだろう。超可愛いんですけど。
「ヒッキーくん？　どうしたの～？」
「っ!?　あ、や、その……っ」
不意に、彼女の顔が目の前まで近付いていたことに驚く。慌てて顔を逸らして、彼女をちらりと見る。
「……うふふ、変なヒッキーくん。どうしようかな、もっと近くでお話ししたいな」
「え……？」
彼女はにこにこしながら、テレビ前に置いてあるソファを指差した。
「あっち、移動しましょうか。コーヒーカップは片付けるわね」
「え、あ、はい……」
何が何だから分からないままに場所移動が決まった。
……もっと近くって……？
ざわざわとした胸騒ぎを覚えながら席を立つ。

椅子を押さえる自分の手が、微かに震えていた。

×　×　×

「あ、あの……」

「ん～？　なぁに～？」

「い、いや、これって……」

「どうかしたの～？」

俺の疑問及び抗議の声が面白い程に届かない。助けて。

コーヒーを飲みながらの雑談を終えてソファに移動すると、彼女は俺の左隣に座った。いや、それだけでもどきどきはするのだけど、この場合、その距離感が問題だった。

「……」

肩と肩とが触れ合って、彼女の柔らかな二の腕のふわりとした感触を楽しめる程に、密着している。

現時点での結論。

さっきまでの挑発なのか天然なのか分からなかった行為の数々は、全部かは分からないが、意図的なものである。

うん、決定。

「それでね？　今度はちょっと話を変えたいんだけど……」

「おわっ……は、はい……っ」

密着した状態で彼女が首をこちらに傾けて、髪のくすぐったくも心地良い感触が首に降りてくると同時に、彼女の身体から漂う濃厚な甘い匂いが一層増した。

がちがちに固まって真っ直ぐ前を向いている俺を見て、耳元でくすりと笑う声がする。

「ヒッキーくんは、Ｓなの？」

「え」

思考が止まった。

え、話題を変えるって、結衣のこと以外だったり、俺のことだったりってことじゃなくて？　え、なに、さっきの話からよりディープになるってこと？　あ、俺のことっていうのは当たってるのか。や、そうじゃなくて。

「え、ええと……何で急に……」
「……興味があってね」
おっとりした声音はそのままに、どこか糸が張り詰めたような緊張感がその声に含まれている。間延びした喋り方も無くなっていて、状況の変化に頭が付いて行かない。
「や、でも、流石にこんな話は――」
言葉を最後まで続けるよりも先に。
彼女は俺の前にするりと回り込んで、膝立ちで俺の首に腕を回した。下半身に彼女の豊満な尻がずっしりと乗って、それだけで勃起が痛い程に増す。
鼻と鼻が触れ合う程の距離で、彼女が妖艶な声音で囁く。
「わたしはね？　とってもMなの。いっぱい尽くして、いっぱいいじめてもらうのが好きなの。……大好きなの」
「……っ」
頬をほんのり朱に染めて、理性の糸を焼き切るような発言をして尚にっこりと笑う彼女を見て、ぶるりと身体を震わせる。彼女にもはっきりと聞こえるだろう音量で喉を鳴らした。何も言葉を返すことが出来ないままに、彼女の手が俺の頬に添えられる。
「結衣はわたしに似てるからね。そういうことをする時もわたしと似てる気がしたんだ。相性が良くなかったらあんなにいっぱいすることは無いだろうから。わたしと似てるなら、きっと結衣と相性の良いヒッキーくんはSか、もしくはドSなのかなーって。……合ってる、かな？」
唇と唇が触れ合いそうな距離になっても、喋ることも出来ず、逃げる気さえおきない。頭の中がびりびりと痺れて、呼吸が疎かになる。手はソファの上に置いて、がちがちに固まっていた。
「……そうだよね？」
彼女が更に問いかけてくる。おでこがくっついて、なんで唇が触れていないのか分からない程の近さになっていた。
「……は、はい……っ」
こんな距離感では意味は無いだろうが、それでも目を逸らしながら

答える。
「ん、ありがと。答えづらい質問しちゃってごめんね？　ずっと気になってて～」
急に元の調子に戻って、俺からぱっと顔を離したかと思うと、俺の股座に座り込んだ。
「……へ？」
何が起こったのかとぽかーんとしていると。
「ごめんね～、ちょっと後ろ下がってもらえる～？」
「え、あ、うぉあっ!?」
彼女は自分が座るスペースを確保しようと、俺の太ももに手を置いて尻をぐりぐりと押し付けて後ろに下がり始めた。ミニスカートの中の柔らかい感触と摩擦に、突き出された尻を犯そうとするかのように股間がぎちぎちに勃起してしまう。
少しばかり下がると彼女はその動きを止めて首だけくるりと振り返り、婀娜っぽい流し目を送ってくすりと微笑んだ。
「ヒッキーくん、肩、揉んでくれるかしら？　最近凝っちゃってて～」
「へ……？」
頼みごと自体は……まあ、こんな色っぽい人の身体に触れるんだからどきどきはするだろうけど、それでも決して難易度が高いものではない。そういった意味では拍子抜けさえする。しかし、今さっきまでのやりとりを終えた後にこんなことを言われたら、この後の展開を思って緊張しか出来ない。
「急にごめんね～？　……なんだか、ヒッキーくんに揉んでほしくなっちゃって」
「……っ」
「……やって、くれるかしら？」
「……は……い……っ」
目の前に見えているうなじに目を奪われながら、こくりと頷いた。
続く。

（5）

「それじゃヒッキーくん、お願いね～」

「は、はい」

由比ケ浜家のソファに由比ケ浜マ――彼女と座って、彼女の肩を揉む。それだけなら多少のどきどきで済むのだけれど、いかんせんさっきまでの流れがあんまりにもあんまりで――心臓のばくばくが一向に収まらない。

「……」

それに、今のこの体勢。

彼女が俺の股座に座り込んで背中を預けて、大胆な切れ込みの入ったニットから覗く胸の谷間と、首を前に傾けることで顕になるほんのり色づいたうなじとが、強烈な魅力を持って目に焼き付く。身体を密着しているために女性特有の甘美な匂い……結衣とはまた違う、年齢を重ねたことによる蠱惑的な香りがして、目の前のうなじにかぶりつかないのが精一杯という程に、理性がぎりぎりの状態に追い込まれていた。

「どうしたの～？　早く早く～」

「うぐ……っ」

ちらりとこちらを見やり、婀娜っぽい流し目を送って目を細めて、がちがちに屹立している肉茎を欲しがるかのように尻をぐりぐりと押し付けてくる。その動きでスカートがめくれてきて、もう少しでショーツが見えてしまいそうになっている。

「わ、分かりました……やります、やりますから」

スカートの中なんて見た日にはもう理性が終わるのではという危機感から、首をぐいと逸らしてあらぬ方向を見ながら、彼女の肩へとそろりと手を伸ばす。

むにゅっ……という、肩の肉とは思えない程柔らかい感触に驚いた。そして、

「んふぁぁ……っ」

「……っ」

手が肩に着地するなり、彼女は耳朶に染み込む耽美な声を上げて、肩を揉む俺の手に首をこてんと傾けた。
「だ、大丈夫ですか？　痛くないですか？」
聞くと、彼女が振り返ってにっこり微笑んだ。
「ん、大丈夫。上手よ、ヒッキーくん……」
「……っ」
彼女に言われる「上手よ」という言葉に喉をごくりと鳴らしながら、
「分かりました……じゃ、行きます」
背を逸らして上体は彼女に密着しないようにしながら、肩揉みを再開した。

×　×　×

「んっ、ふぅんっ、くふぅ……っ」
「あふぅっ、ひっ、んはぁぁ……っ」
「あっ、あっ、そこっ、んっ、くひぃんっ、あっ、あっ、あっ……」
あかん。
肩揉みを始めて数分ほどで、極めてはっきりと、心から、心の底から抱いた感想だった。
なんでこの人、肩揉みでこんなエロい声出すの？　ウソでしょ？
これ飲み会とかで軽いノリで始めたら絶対変な空気になるやつだよ？　周りの野郎共の目の色が変わるやつだよ？
そしてここで気付いたことが一つ。
彼女が喘ぎ声を上げるとき、声のトーンが一段階上がると……一瞬、目の前のこの人の背中が結衣と重なる。母娘なんだからそれはそうだろうと言えばそれまでなんだけど、喘ぎ声が結衣と重なると……正直、恐ろしい程に欲情してしまって、ただの肩揉みじゃ済まなくなりそうになってしまう。
「あっ、あんっ、ひ、ヒッキーくん、ほんと上手ね。なんだか身体がとろけちゃいそ……あっ、あんっ、そ、そこ、もっと強く、んっ、ひぁぁっ、ぎゅって、ぎゅって押して？　そう、そうそう、あっ、これほんとに……んんんん……っ」
「……」

待て待て待て待て。
あれ、これ肩揉みだよね？　あれ？　おかしくない？
いかんぞ。ここに来て、うちでお袋と小町の肩を揉んだ際の経験を存分に生かしてしまっている。いやでもそれでも、普通だったら「あ～、気持ち良いわ～、ヒッキーくんお上手ね～」「ありがとうございます」くらいの会話で終わるでしょ？　何これ？
彼女は気が付けば息を荒げて声を上擦らせていて、じっとり汗ばんだうなじと谷間が雌の匂いをたまらない程漂わせていて……ん？
……あれ？
俺、今、なんで谷間が見えてんだ？　肩を揉み始めた時、なるべく上体を離してたのに……。
「うふふ……な～に、ヒッキーくん、そんなにくっついちゃって～」
「あ……」
言われて気が付く。
いつの間にか、本当にいつの間にか、俺は、彼女に自分の身体をこすりつけるかの如く密着していた。
「すいません、すぐ離れますんで」
言って上体を離そうとすると……俺の腿に、彼女の両の手がそっと置かれた。固まっていると、彼女がゆっくり振り返る。唇が触れてしまいそうな程の距離で、彼女の魅惑的な甘い香りのする吐息がかかって理性が熱で擦り切れる。
「良いのよ……ちゃんとくっついてて？　ね？」
言って、俺の手を掴んでぐいと引っ張り、上体を密着させた。背中とは言え程好い肉付きをしていてとても柔らかく、安心すると同時に劣情を催す。
「……っ、は、はい……っ」
何の抵抗も出来ぬまま、身体を密着させた危険な状態のままで肩揉みを再開した。

×　×　×

上体を密着させた状態で肩揉みをしばらく続ける。
「あっ、あんっ……も、もっと下も揉んでくれるかしら。そう、その辺

り……親指でぎゅーっして？　お願い……」
「……はい……」
……。
や、この人。
肩揉みのリクエスト1つすんのに、どれだけエロくなるんだよ。完全にこれ本番中に甘えてるようにしかごめんなさい何でもないです。
しかし、この人は一体……どこまでする気なんだろう？　単に俺をからかってるだけにしては、その……行き過ぎているし。あ、親指で揉まなきゃ。
えーっと、親指で押しやすいように……。
ぎゅっ。
「んはぁっ！」
「っ!?」
突然彼女が背筋を弓なりに反り返らせて、一際甲高い甘美な声を上げた。
手元に目をやると――俺の手の指は、2本の親指が彼女の背中を押して、その他の8本の指は親指で押すのを手助けする為に、自然と彼女の脇の下に添えられていた。どうやら、親指同様他の指にも力を込めて握りこんでしまったようだ。
「あ、す、すいません」
慌てて謝ると、彼女がゆっくりと振り向く。息を荒げて目を細める姿はあまりにも艶っぽくて、ジーンズの中で張り詰めた肉茎の先に、ぷっくりとカウパーが滲んだのが分かった。
「大丈夫……よ。くすぐったいのも……気持ち良くて、好きなの」
「……っ」
劣情を煽る彼女の言葉に、全身の産毛がちりちりと逆立つ。
「ああ……も、もっと、もっとしてちょうだい？」
「え、でも……大丈夫ですか？」
聞くと、耳にそっと手を添えられた。やけに熱っぽいその手のひらに、安らぎと劣情が湧く。
「うふふ……大丈夫よ。お願い……続けて、ほしいの」

「……っ、は、はい……っ」
彼女の懇願に容易く屈して――もう一度、手を伸ばした。
×　×　×
「そう、そこ、そこ、ぎゅーってして？　あ、あふぁぁっ、も、もっと、力を込めて良いから……んくぁぁぁ……っ、そう、そう、すごく良い、すごく良いわぁ……っ、ぐりぐりして、そう、そう、あぁぁぁぁ……っ、」
「短く何回も押してみて、そっ、そうっ、あんっ、あんっ、あふぁぁぁ……っ」
「あんっ、やぁっ、脇腹そんなに、あんっ、ふぁぁっ、だっ、だめ、そんなっ、いじめない……っ、でぇ……っ、ひぃん……っ」
……。
一歩間違えると、流血沙汰になりそう。
俺が。
鼻血で。
まずいことに、俺自身が結構楽しくなってきて、若干この人をいじめ始めていた。良い反応をする場所・刺激の方法を探って、そこを集中的に責めると……彼女は面白い程に反応した。
「あぁぁ……っ、あっ、あんっ……も、もう……ヒッキーくんったら、自分が何してるか分かってる……？」
いたずらっぽく微笑んで振り返り、太ももを愛おしげに撫でられる。
「すいません、反応が可愛いもんでつい」
長い時間この状況に身を置いていたからか、言うことややることに自制が利かなくなっていた。そう、言わざるを得ない。
そんな状態で何気なく言った言葉ではあったが、彼女はぴくんと反応して――
「うぐっ？」
突然、後ろに体重を掛けて、俺をソファの背もたれに追い込んだ。今さっきまでは俺が身体をほとんどまっすぐ立てていたが、今は２人とも後傾になっている。彼女は俺にすっかり体重を預けていた。心

地良い柔らかさと重さとが俺の前面を包む。
「もう……ヒッキーくんったら。結衣が好きになるのも分かるわ。可愛いだなんて言われたの……いつぶりかしら」
言って、彼女は頬に手を当ててほうっと嬉しそうなため息を吐く。
――その言葉を聞いて、単純な疑問が浮かんだ。
「え、ほんとですか？　何ででしょうね、こんなに可愛いのに」
結衣と接することで身に付けた、クサいことをさらりと言う能力と。
この異様な状況下で作り上げられた、「今なら思ったことをそのまま言って良い」という、根拠の無い認識。
そんな組み合わせから発せられた言葉に、彼女はぽっと頬を赤らめた。
「……ヒッキーくんはタラシねぇ」
む。
「そんな訳ないですっ……て……っ」
反論しようとした矢先、彼女があごを逸らして俺の耳元に口を寄せる。温い吐息に心臓が跳ね上がって言葉を止めると、彼女が唇を耳に押し当てる程近付けた。
「……でも、そういうところ、好きよ」
「……っ!?」
な、は、ええっ!?
あまりの混乱に意味もなく手をばたばたさせる。それを見て、彼女がくすりと笑った。
「うふふ、ヒッキーくんは可愛いわねぇ。……それじゃ、続き、お願いしようかしら」
「……は、はい……っ」
ソファの背もたれに背中を支えられて、前には彼女の柔らかい背中がある。両方からの圧迫感が、彼女との密着感を更に強く感じさせる。
そんな状況の中、この濃密な時間はまだまだ続くことが分かって、俺は本当にこの後どうなるんだろうという不安と、妖しい期待とが胸

を満たした。

続く。

（6）

「ヒッキーくん、今度はね……もう少し前の方を触ってくれるかしら」
「え……」
ソファに座り、俺の股座に座り込んだ由比ケ浜マ――彼女に後ろに体重を預けられて、今の俺はソファの背もたれと彼女の柔らかな背中に挟まれた状態だった。どきどきは尋常でないけれど、この体勢で肩揉みを継続出来ないことはない（そもそも何でこの体勢なんだって話なんだけど）ので、まあ良いかと思っていたんだけれど……え、この人今何て言った？　前の方？
「それって、具体的にどういう……」
俺がそろりと尋ねると、彼女は俺の手を掴み、彼女の身体の前にぐいと引っ張った。
「この辺かしら。お願い出来る？」
「え……」
俺の手が着地した場所は、彼女の肩と、山の如く隆起した乳房との間の部分だった。手の指が鎖骨を挟んでいる形になる。
「えっと、この辺ですか？」
言って、鎖骨の横――肩に近い方をぐっと押すと、
「あっ、あんっ……そこも気持ち良いけど、私が揉んでほしいのは、こっちね」
彼女は妖艶な声で囁いて、俺の手を鎖骨の肩側ではなく、胸の側に押し当てた。
「え、ちょ、それは流石に……」
慌てて目を背けると、頬に柔らかくて温かな感触が当たった。見ると、振り返った彼女が手を添えていた。
「こんな場所、恥ずかしくて他の人にお願い出来ないのよ……良いでしょ？」
心臓に焼き石を当てられたかのような熱を感じて、喉を震わせる。
「……わかり、ました」
たどたどしく答えると、彼女がにっこりと笑う。

「ありがと。……ちゃんと見ておいてね？　でないと……違う所、触っちゃうと思うから」
艶っぽい笑みを浮かべて、目を細める彼女。
「……っ。……気を付けます」
頷くしかないだろうと思い、躊躇いながらも了承する。
この、視線を限定させる指示が持つ意味を、この時、まだきちんと把握出来ていなかった。
×　×　×
「……あっ、あぁっ、あっ、あんっ、あっ……」
……。
指定された場所を、誤ってとんでもない場所を触ることの無いように凝視しながら揉み続ける。彼女はさっきまでと比べるとやや控えめな、けれどそれによって却って官能的になった甘い声を漏らしている。
この状況で気付いたことが一つ。
それは、俺が揉んでいる場所を凝視することで、さっきまでなるべく見ないようにしていた、彼女のたまらなく扇情的な香りを漂わせている柔肉の谷間をはっきりと視界に入れてしまうということだ。彼女の肩の上から谷間を凝視しているようにしか見えなくて、奇妙な罪悪感に駆られる。
……それに……。
「あ、あの……すいません」
「あふぁぁ……っ、……んん？　な～に？」
とろんと惚けた声で、彼女が聞き返す。や、その……。
「……なんで、俺の足をこんなに触ってるんでしょうか？」
彼女は、揉み始めると気持ち良くなったのか最初よりも更に俺に体重を預けて、あごを上げて天井を仰ぐような体勢になった。それだけでなく、途中から両手をそれぞれ俺の太ももに乗せて、初めは単調にすりすりと撫でるだけだったのに、徐々に手を内股にまで伸ばして、艶かしい手つきで股間のすぐ横を撫で回していた。
「あっ、あんっ、んふぅぅ……だめかしら？　わたしもヒッキーくんに

気持ち良くなってもらいたいんだけど……」
　言い方言い方。
「いや、流石にこれ……は……」
　言葉の途中であることに気付き、固まる。
　ふと目についた、彼女の双丘の先端。
　そこに、どう見ても見間違いが無い程にはっきりと、ぷっくりとした先端が浮き出ていた。反射的にごくりと喉を鳴らすと、彼女が俺の反応に気付いて目を細めた。
「あら……言ってなかったわね。わたし今、下着着けてないのよ」
「なん……で……」
「さ～？　なんでかしら～？」
　急にいつもの口調に戻ってとぼける。腹立つし可愛い……。
「ヒッキーくん、揉んでほしい場所は変わらないんだけど、今度はちょっと揉み方を変えてもらえるかしら」
「？　はい、いいですけど。もっと強くしたり弱くしたりとかですか」
「ううん、今度は……こう」
「うお……っ!?」
　一度離していた両手を掴まれ、そのまま、彼女の腋の下をくぐって、双丘の横を危うげに通り抜けて、柔肉のすぐ上に手のひらを着地させられた。さっきまでは肩の上から手を伸ばしていたが、今度は腋の下から手を伸ばした形になる。
　……ていうか、これって……。
「あ、あの……これって……」
　流石に……と言おうとすると、彼女が切なそうに眉根を寄せた。
「……だめ？」
「うぐ……っ」
　……なんで、こんなに可愛いんだこの人……。
「……わかりましたよ。気を付けます」
「ありがとね～」
　けろっとした顔で微笑む彼女を見て、ハメられたなどとは今更思わなくなっていた。

×　×　×

「うっ、うっく、うふぁぁ……うっ、うぅぅ……っ」

彼女の声が、先程までと比べてより切なそうに、より苦しそうに、より焦れったそうな熱を帯び始めている。

彼女の腋の下から腕を通して揉むという体勢になって、細かいが、けれど大きい変化が生まれていた。

まず、揉み方。

さっきは親指以外の指の先で押し込むような形だったが、今は親指以外の指の腹で満遍なく揉みしだく形になっていた。自然と、揉み方の幅も広がる。

そして、顔の位置。

さっきは肩の上から覗き込む時、彼女の肩と自分の顔との間には自分自身の腕があった。しかし今はそれが無い。それでも彼女の肩と自分の顔との間に距離を開けることは可能だったはずだけれど……この空間に精神をとろとろに蕩かされていて、気が付けば、彼女の柔肌を求めるように、彼女の肩に顎を乗せて双丘の谷間を凝視していた。

「あっ、はぁっ、ひ、ヒッキーくん、すご……上手、よぉっ……んはぁっ……」

待て待て待て。

ちょっと、この状況でこんな声を聞くと、もう、ね。

あかん。

こんなことを考えている間も、手を止める訳にはいかない。

そう思い、彼女の胸と鎖骨の間の柔らかい部分をひたすら揉みしだく。

「んっ、んふぅっ、くふぅっ、あぅぅ……っ」

耳元で垂れ流され続ける甘美な声が、全身の皮膚から余すことなく身体の奥底へと染み渡る。

徐々に、徐々に。

自分が今、何をしているのかという自覚が、薄れてきた。

「ね……ヒッキーくん……」

「なんでしょう」
　言いながら、揉み方に変化を加える。親指以外の指をくっつけた状態で手のひらを伸ばしてから、関節を折り曲げてぎゅむっと肉を引き寄せるようにして揉むと、彼女があごを反らした。
「んおぉぉぉぉ……あっ、あっ、これ、ほんとに……っ」
　彼女の足に目をやると、切なそうに足をもじもじとすり合わせていた。構わず何度も揉みしだくと、内腿をぴたりとくっつけてぶるぶると震える。
「さっきの、何て言おうとしたんですか？」
　聞きながらも、手を止めない。
「ふっ、んふぁぁ……っ、ひ、ヒッキーくんて、鬼畜なのねぇ」
　言って、彼女が汗の滲んだ顔で微笑む。彼女がかいた汗は甘ったるい匂いを放って、揉めば揉む程に、下腹部に血流が集まった。
　――どうして俺は、こんなに――。
「……はっ、はぁっ、んんんっ……わ、わたしね？　せ、切ない、のぉ……っ」
　言って、彼女が俺の両手を掴む。
「え……」
　彼女の言葉と手のひらが纏う淫気に心がざわめく。
「も、もう少し……下の方、触って？」
「……っ」
　ここまで、お互いがどこかボーダーラインを引いて、必死で堪えてきて。
　そして、彼女自身も決して口にしなかった言葉を。
　彼女は、ついに口にした。
　続く。

（7）

「ね……もっと、下の方も、触って？」
「あ、や、その……」
手を掴まれたまま囁かれる甘い誘惑に、世界がぐらぐらと揺らぐ。
「……流石に、それは……」
これ以上は……と心の中で一歩引くと、彼女が俺の耳元に口を寄せて――ちゅっ、と口付けをした。唇同士ですれば囁かな音しか聞こえないが、耳に直接送り込まれる口付けの音はあまりに強烈で、異様な浮遊感に包まれた。
「ね、お願い……じゃあ、少し手を下げるだけて良いから、ね？」
「……わ、わかりました。でも、本当に少ししか下げませんからね」
言うと、彼女が目を細めた。
「ん、大丈夫よ。ありがとう」
そう言って、彼女が俺を掴んだ手をすすすと下に下げる。
「あ、もうこの辺が限界です」
あとほんの数センチで、思い切り胸の肉を揉んでしまうという位置で、かろうじて踏みとどまる。少しばかり手を滑らせれば、双丘が作る深く柔らかい谷間に簡単に手が埋没しそうだった。
「わかったわ、じゃあ、お願いね」
言って、彼女が手を離した。

× × ×

彼女の胸と鎖骨の間を揉む。それも、さっきより明らかに胸に近付いた位置を。しかしここならまだ胸を揉んでいるとは言わないだろう。大丈夫、大丈夫――。
……むにゅ。
「え……」
想定していたよりも柔らかい感触に驚く。もう一度良く見るが、やはり胸とは言えない位置、のはずだ。
……これだけ大きい胸だと、境目も柔らかいのか……？
戸惑いながらも指で揉みほぐす。

彼女の反応を伺うと、唇をきゅっと引き結んで、懸命に声を堪えているようだった。
「大丈夫ですか？　この辺、凝ってますか？」
聞きながら、４本ずつ、計８本の指でこねくり回す。やはり、柔らかい。この場所でこれだけ柔らかいのなら、この下は一体どれだけ……。
言い知れぬ昂揚に、ちりちりと心臓が焼け付く
「んっ、くぅっ、んんっ、……ひ、ヒッキーくん、ここ、そこまで凝ってなかったみたい」
「そう、ですか」
２人の間で交わされる、空々しい会話。
「それに、もう少し下を揉んでもらってもきっと大丈夫だと思うのよ」
「……そう、ですか」
静かに迫る、臨界点。
「だから……ね？」
俺の内腿を撫でる彼女の手が更に中心部に近付き、１０本の細い指が生き物のように蠢きながら、快楽のざわめきを送ってくる。
――理性の糸が、静かに焼き切れた。
「……わかりました。でも、先に言っておきます」
「何かしら」
「……ちょっとだけですよ」
言うと、彼女がくすりと笑う。
「ふふ、わかったわ」
彼女の返事を聞いて、焦れったい場所から手を離した。
×　×　×
――乗りかかった船だから、しっかり乗ることにする。それも、全力で。
「口、閉じててくれますか？」
「？　いいけど、どうして？」
「多分、危ないんで」
「……？　ヒッキーくんがそう言うなら、じゃあ、取り敢えず、んっ

……」
彼女が口を閉じたのを確認して、彼女の乳房の２つの突起の前で、１０本の手の指をあらん限り開く。俺の手の動きに気付いて、彼女がひゅっと息を吸った。
そして、彼女の柔肉に、１０本の指を食い込ませた。
「ひっ……！」
彼女が顎をそらせて天を仰いだ。信じられない程柔らかな感触に見舞われ、自分の手で彼女の乳房を覆うつもりだったのに、自分の手が彼女の柔肉に包み込まれた。それ程の、大きさと柔らかさ。
ほんのコンマ数秒の時間を置いて。
「――ひぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
彼女の全身が痙攣した。無理もない、恐らく彼女は結衣と同じ、もしかしたらそれ以上敏感かもしれないのだから。全体的に敏感で、且つ、胸は息を呑む程艶やかな反応を示してくれる程の、強烈で妖艶な性感帯。
「多分、あんまり長い時間続けると、体力的にきついと思うんですよ」
「ひっ、ひぃんっ！　あぐっ、かはっ、うあぁっ！」
ぎゅっぎゅっと、乳を搾るかのごとき強さで彼女の乳房を揉みしだきながら、喘ぎ狂う彼女をよそに冷静に語りかける。
「だから、一気に気持ち良くして、短時間で……って、ちゃんと聞いてます？」
俺の言葉がまるで届いていなさそうな彼女の乳房の先端を、生地の上からぎゅむと摘む。
「ひぎ……っ！」
俺に体重を預けたまま、彼女が背筋を反らせて全身を激しく戦慄かせた。
「おぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……っ」
獣じみた嬌声を上げると、彼女の下腹部から甘酸っぱい匂いがもわりと立ち込めた。……どうやら、達したようだ。
でも、きっとこの人は。
この程度では満足しないだろう。

自分の下半身も濡れてしまったが、そこは気にせず続けることにする。
「あんまり動かれると揉みづらいですね。今度はこうしますね」
「ひぃんっ!?」
言って、彼女の肩の上から手を回して、双丘が形作るぬめった谷間に手を突っ込む。右手は彼女の左の乳房に、左手は右の乳房に伸ばして――直接、鷲掴みにする。
「くひぃぃぃぃぃん……っ」
可愛らしい喘ぎ声が耳朶を打つ。
ついさっき生地の上から触った時もその感触に驚いたけれど――生で触ると、彼女の乳房は極上の一言に尽きるものだった。汗ばんで官能的な熱を持ち、手のひらに吸い付いて名残惜しんで離れようとしないかのような、もちもちの肌。
この人の年齢がどうとか、自分の立場がどうとか、この時はそう言ったことが頭の中から消し飛んでいて……今はただ、目の前の極上の肉体を、自分の経験と肉体を駆使して、力の限り蹂躙したかった。
「どうですか？　気持ち良いですか？　もう切なくないですか？」
ぐにゅぐにゅと自在に形を変える乳房の感触を楽しみながら、事務的な声音で尋ねる。
「おっ、あがっ、んぐぅぅぅぅ……」
クロスした両腕にがっちりと固定されているために、身悶えして快感を逸らすことが出来なくなった彼女が、ひたすら苦悶と喜悦の声を漏らす。
「しっかりしてくださいよ。ほら」
ぷっくりと膨らんだ可愛らしい突起を、きゅっと摘んだ。彼女が鳴き声を上げるまでのほんの僅かな空隙の時間で、更に突起をきゅきゅっとしごき上げる。
「――――あおぉぉぉぉぉぉぉ……」
彼女は涙を流しながら鳴き声を上げて、足をばたつかせた。そして俺の股間に這わせていた指でチャックを開け始めた。それに構わず、突起をしごき続ける。

「あっ、あがっ、あぁぁぁっ……」
「ほらほら、何してるんですか、もう。鳴き声ばっかり上げてないで返事してください。どうです？　気持ち良いですか？　もう切なくないですか？　どうですか？」
「あぁぁぁぁぁ……っ」
　質問しながら更に強く突起をしごき上げる。彼女の目はもはや虚ろだったが、手での愛撫を一旦止めると、口をぱくぱくしながらも徐々に落ち着いてきた。
　しかし、
「うぐっ……？」
　あれだけ絶頂に達していながら、一体どこに余裕があったのか――いつの間にか、チャックを開けていた筈の彼女の手はパンツまでずり下げていて、鈴口に粘液が滲んだ肉棒を、器用に後ろ手でがっしり握りしめていた。
「あっ、うぁっ、だ、だめなの……いっぱい気持ち良くしてもらったら、もっと切なくなっちゃったのぉ……っ」
　左手で玉を揉み、右手で竿をにちゃにちゃとしごきながら、彼女が耳元で甘えるような声を上げた。
「……っ、しょ、しょうがない、ですね……」
　一本切れた理性の糸が、続けざまにどんどん切れていく。
「……それじゃ、もっといっぱい触ってあげます」
「あ、あり、がとう……あはぁっ！」
　返事と同時に柔肉をもう一度強く揉むと、彼女が喜悦の嬌声を上げた。それに応じるように肉棒をくちゅくちゅとしごかれ、カウパー粘液がくぷぷと溢れ出る。
　胸を揉んでもこの人は満足出来ないらしい。
　それじゃあ、ここからは――
　続く。

（8）

由比ケ浜マ――彼女の目もくらむ痴態を目の当たりにして、静かに思考回路が狂っていく。異様で異彩で異常な事態なのは違いないのだけれど、今は。

――自分のこの有様さえも、心の奥底から楽しんでしまっている。

彼女の柔らかな背中に、甘く香るうなじに、陶然とした荒い息遣いに、そして凶暴なまでにいやらしい乳肉に。

その一つ一つに、自分は強く魅了されている。それが分かっていて、尚心地が良い。

このままではどこまで行ってしまうか分かったものではない。流石にどこかでブレーキを踏まなくては。

これ以上は、いけない、いけない、いけない――

「んくぅぅっ、あっ、くひぃんっ、んぁぁっ、あおぉぉぉぉ……っ」

「……あ」

今の自分を省みて思考の沼に沈んでいると、無意識のうちに彼女の極上の乳房を背中越しに揉みしだいていた。

腕をクロスさせて彼女の身体を拘束しているので、俺が動かない限り彼女も動けないということをすっかり失念していた。

……と、こんなことを考えている間も、俺の手は彼女の柔肉に吸い付いたままだ。

なんだよこの人の身体、魔性にも程があるだろ……ぼんやり思いながら、ぎゅっぎゅっと搾るようにもちもちの乳肉肌を揉みしだいて、彼女の反応がとびきり大きくなった瞬間に、先端に張り詰めた突起を強めに摘むと、彼女は後ろ手に掴んでいた俺の肉棒に一段と力を込めて、おとがいを反らして上に向けた。

「くひぃぃぃん……ま、また、イっちゃ……んはぁぁぁぁぁっ！」

甲高い悲鳴を上げて、彼女が全身を戦慄かせる。甘えるように俺の耳元に口をすり寄せた。

「んはぁぁ……っ、あっ、あんっ、ふっく、ひぐっ、すご、ぃぃぃぃっ、ひっ、ひぅんっ……」

淫猥な息遣いと言葉を送り込んでくる。
手指でしごかれている快感に加えてこんなに艶っぽく囁かれると、思考に靄がかかって、ひたすらに、目の前の極上の女肉を味わいたい欲求に脳内が埋め尽くされていく。
――と、ここであることに気付く。
「あっ、あはぁっ、んっく、はっ、はぁっ、はっ、はぁっ、はぁっ……」
色っぽく息を荒げる彼女の身体の下半身……というよりは下腹部。彼女の身体とソファの境目。
そこが、明らかに温かく濡れそぼっていた。
彼女に握られていることに意識が行っていて気付いていなかったが、肉棒の下の陰嚢にも、その温かな液体が触れている。
いや、触れているというよりは、もはや浸かっている、という表現がしっくり来る程に、その液体は大量に溢れ出していた。
……ショーツを履いてるのに、こんなになるもんなのか……？
単に彼女が濡れやすいだけなんだろう、そう思うことにしようとしていると、彼女がつと振り向いた。俺の思考を見透かしたように細められた目はひどく淫らで、彼女の指に包まれた肉棒が高揚でぶるりと震えた。
「……ヒッキーくん、上手ね。びっくりしちゃった」
「あ……はい、どうもです」
「うふふ……下、びしょびしょになっちゃったわね」
「……そう、ですね……」
「……さっき、わたし、下着を着けてないって言ったわよね」
「はい」
「……ヒッキーくん、今日わたしのスカートの中身は見たかしら？」
「……いえ、見えそうにはなりましたけど、直接は……」
言うと、彼女がくすりと微笑んだ。
「うふふ、ヒッキーくんは素直ねぇ」
気恥ずかしくなり、顔を背ける。
実際、直接見てはいなかった。ぐりぐりとお尻をこすり付けられた時は、スカートの中の柔らかい感触はしたけど……って、んん？

……何でこの人、今こんな話をしてんだ？

彼女の顔を見る。上気した頬、艶かしく細められた目、意味深にゆっくりと開け閉めされる唇。

「……っ」

彼女が何を何を言おうとしているのか、気付いてしまった。ごくりと生唾を飲み込んで、何か喋らないとと思った、その瞬間。

彼女が肉茎から手を離したかと思うと――くるりと振り返って俺と相対する体勢になった。俺の腰に足を回してがっちり固定して、彼女の下腹部が、肉棒の裏筋に当たりそうな程に近付く。

俺の首に腕を回して、彼女が妖艶に微笑んだ。

「うふふ……もっと気持ち良くしてちょうだい？　……わたしも、気持ち良くしてあげるから」

「……っ」

媚薬のごとき声が、頭から爪先にまで染み渡る。

彼女がほとんど中身の見えかけたスカートを、敢えて手で摘むことをせずに焦れったい腰の動きでずり上げていくと……その下には、何の布地による覆いもなくて――彼女の熟れた陰唇が、ひくひくと動いていた。

× × ×

「うふふ……バレちゃった」

彼女がわざとらしく言って、人好きのする笑顔を向けた。

「ちょ、ちょっと――っ!?」

あまりの事態に混乱しきっていると、更に追い打ちをかけられた。

「ほっ……と」

彼女が手を自分の上着の裾に引っ掛けたかと思うと、一息に脱いでしまった。予め本人が言っていた通り、ブラを着用していなくて……上着を脱ぐ際に一度上を向いた巨大な乳鞠が、重力でぶるんと戻って、重みの為に一往復で止まらずに二度三度と弾むように上下に揺れた。

「う……お……」

呼吸を忘れそうになる程の、凶悪な肢体。

今さっきまで揉んでいた柔肉も、こうして生で目の前で見ると迫力が違う。
脱衣による揺れが収まった後も、彼女がほんの少し身体を揺らしただけで2つの山がゆさゆさと揺れ動く。
ふわりと淡い桃色を纏った乳輪はやや大きく、母性と淫猥さの両方を想起させる矛盾した魅力を持っている。
そんな乳輪の真ん中の乳首は……熱っぽく濃い桃色を纏っていて、快楽と興奮でぴんと張り詰めてひくひくと震えている。
「……どうかしら……？」
彼女が俺の頬に手を添えて顔の向きを双丘の方に固定させて、僅かに不安の滲んだ声で囁いた。
「……本当に、綺麗です……それに、死ぬ程エロいです」
言葉が出ないあまりに、凝視したまま本能のままに答えると、彼女はくすりと笑った。
「あらぁ……嬉しい。こんなにじっくり見つめてくれてるとなんだか少し恥ずかしいけど……恥ずかしい以上に、とっても幸せになっちゃうわ」
本当に嬉しそうに言って、腰を悩ましくくねらせる。
あまりにも淫猥な光景に目が眩んで。
――震える手が自然と伸びて、彼女のスカートの裾を掴んだ。
「……あ……」
自分がした事に気付きぼへっとした声を出すと、彼女がお姉さんのような喋り方で尋ねてきた。
「あらぁ……こっちも見たくなっちゃった？」
「……っ、は、はい……っ」
まるで余裕の無い声で答えると、
「ん、わかったわ。じゃあちょっと……」
言って、彼女がすっと腰を上げて、俺の隣に腰を下ろした。久しぶりに彼女と身体が密着していない状態になって、少しばかり空虚な気持ちになる。
彼女は、俺の方に向き直って体育座りになると、俺も横を向くよう

促されて、ソファで隣り合いながらも相対する形をとった。
彼女が、スカートのホックに手を掛ける。
するり、ぱさっ。
あっさりとした乾いた音がしたかと思うと、彼女が恥ずかしそうに頬を上気させて、ゆっくりと足をMの字に開いた。
「……っ」
押し倒して、今すぐこの場でめちゃくちゃにしてしまいたい衝動に駆られた。
彼女の足の根元の淫部は溢れ出す蜜でとろとろに濡れており、あまり濃くない恥毛と、ひくひくと物欲しそうに疼く肉厚のひだに目を奪われた。
――こんな所に突っ込んだら、一体どれだけ……？
想像しただけで、鈴口からカウパーが滲み出た。
吸い寄せられるように顔を近付けて凝視していると、頬に手を添えられた。
「……わたしの身体、どこでも良いから、いっぱい、好きなようにして、気持ち良くして？　……そしたら、わたしもあなたのその硬くて太いのを、いっぱい気持ち良くしてあげるから」
さっきの言葉を確認するように、より卑猥に俺に告げて。
「……は、い……っ」
頭が熱に浮かされたようにくらくらとしたまま、彼女の肢体を見つめながら、ぎこちなく頷いた。

続く。

（9）

由比ケ浜マ――彼女とソファの上で見つめ合う。
相対した状態で彼女が俺の腰に足を絡ませていて、ほんのちょっとした拍子で熱を帯びた身体同士が触れ合いそうになる。
彼女が、艶かしい手つきで肉棒に指を這わせた。
「うっ……くっ……」
小さく呻くと、彼女がにこりと微笑んだ。
その目の奥にはっきりと見える情欲の炎に、下腹部に集まる血液が更に量を増す。
彼女が、そっと耳元に唇を寄せる。
息混じりの声で、くすりと笑った。
「……すごく硬いのね。太くて、熱くて、反り返ってて……」
「……っ」
艶を帯びた彼女の声に、理性が一枚一枚ゆっくりと剥ぎ取られる。
陰嚢に手を添えると、さわさわと愛おしそうに撫でてきた。
ぞくぞくとした快感で身体が甘く痺れると同時に、得も言われぬ安心感に包まれる。
彼女が顔を離して、視線を下に向けながら目を細めた。
「ここも……いっぱい、お汁を作ってるのね。今すっごく元気だから、きっと……たっくさんたまってるのよね……」
「んむ……っ!?」
彼女がにっこり微笑んで、ゆっくり唇を重ねてきた。
「んっ……んふぅ……っ」
悩ましい息遣いと共に、ぷっくりとして温かい彼女の唇が、俺の唇に穏やかに重ねられる。
背中に手を回して抱きついてきた為に、反り返った肉茎が互いの腹に挟まれて柔らかな刺激を裏筋に受けて、胸には彼女の凶暴極まりない双丘の感触がする。
むにゅりと押し付けられた柔肉は本当に大きく、ぴったり密着すると身体の横から乳鞠がはみ出してしまうのではないかと思う程のボ

リュームと柔らかさを備えている。
「んふぅっ……んちゅるっ……くちゅっ、ちゅりゅ、くちゅるっ……」
彼女の舌が口内に侵入し、歯列をなぞり、上顎をくすぐるように舐める。
大人の女性の情熱的なキスに陶然としながらも、まだ自分が彼女を気持ち良くさせていないことに気付く。
彼女はキスの間もお腹を肉棒に擦りつけるようにゆらゆらと揺れていて、むっちりとした身体に裏筋を愛撫されて、これだけでもしばらく続ければ下半身が決壊してしまうと思った。
これではいけない。
横からそっと手を伸ばし、彼女の乳肉を掴む。
「んふぁぁっ!? あっ、ぁんっ、んあっ、んくぁっ……!」
信じられない程の奥行と柔らかな感触に、改めて感動を覚えながら指の曲げ伸ばしを繰り返すと、彼女が耐えられなくなったのか唇を離し、目の前で愛らしく喘ぎ始めた。
指を沈めるごとにその指が見えなくなり、優しく押し戻される感覚がたまらない。
「うあっ……あっ、あんっ、んっく、ふぅぅ……っ」
彼女は反撃しようと肉棒を掴んでくるが、快感が強いためか握る手に力が入らない。
反撃されないのを良いことに目の前でむにむにと形が変わる乳鞠の感触を楽しんでいると、段々彼女から力が抜けて行くのが分かった。
「はっ……ひぁっ、へぁぁ……っ」
あどけない表情で目に涙を貯め、うっとりとした瞳で俺をしっとりと見つめる。
嗜虐心をそそるたまらない視線に煽られて、乳肉を揉む力を更に強めた。
「んひぃぃ……っ!」
おとがいを上げてびくびくと跳ねる彼女の手の指は、肉棒から離れもはやどこも掴んでいなかった。

双丘の中程を掴んで搾るように揉みしだき、ぷっくりと隆起した桃色の先端を凝視していると……ふと、ある衝動が湧いた。
豊満な乳房の前で、ゆっくりと口を開く。
「……あむっ」
「ひ……っ！」
左胸の先端に吸い付くと、彼女の身体がびくりと跳ねた。
それとほぼ同時に、右胸の先端を指で強く摘むと、彼女の挙動が途端に焦りの色を帯びた。
「んむふぅぅぅ……っ！」
声が我慢出来ないと思ったのだろうか、さっきはそんなことはしなかったのに、健気に手で口を覆って首をぶるぶると振った。
――好きにしてと言ったのは彼女なので、手を緩めることは一切しないが。
右腕を彼女の背中に回して、唇で先端をついばみ、口内で転がし、舌先を固めて幾度となく押し込む。
左手でも人差し指と親指を使って先端を強く揉み、指の腹で擦り上げる。
「んんんっ、んぐっ、んんんん……っ！」
頭上に響くくぐもった甘い声に、下腹部の勃起がますます強くなる。
身体をよじられても強く抱きしめて拘束し、決して逃がすことなく嬲り続ける。
しばらくすると、口を手で覆ったまま、彼女がゆっくりと後ろに倒れ始めた。
その流れに逆らうことなく一緒に倒れると、彼女がゆっくりと自分の口を覆っている手を離した。
「……はぁっ、んっ、んはぁっ、はっ、はっ、はぁ……っ。……ふふ、本当にすごいわね、もうひぃんっ!?」
彼女の余裕を見せんとする気持ちをへし折ろうと、両手で乳首を強く摘んで、上に持ち上げる。
まるで餅のように伸びる乳肉に驚きながらも、幾分冷えた目を彼女

に向ける。
「ここに来て何余裕見せようとしてんですか？　……もっと気持ち良くしてあげますから」
　言って、ゲームのコントローラーか何かのように、左右ばらばらの向きに乳首を引っ張る。
「ひぃいん……っ、あっ、だめ、わたしの胸、そんなにしちゃ……っ」
　涙目でいやいやと首を振る仕草は、劣情を煽る為にわざとやっているとしか思えない程に色っぽくて、見ているだけでもっと責めたいという衝動がむくむくと湧いてくる。
　彼女の股間に手を伸ばす。
「ひあぁっ!?」
　むっちりとした大陰唇の割れ目をこすり上げると、俺の下で彼女の身体がびくりと跳ねる。この段階で既に手は淫液でびっしょりと濡れていて、今日ここまでの行為の濃密さを彼女の身体が語っていた。
　胸を高鳴らせながら柔らかい秘丘の谷間に指を浅く潜り込ませると、淫液が泉のように湧き出てくる。
「やあ……っ、ここ、本当に、おかしくなっちゃうぅ……っ」
　言いながら、淫裂を愛撫する俺の腕に彼女が手を添えるが、それも一応やっているだけに過ぎないという事はもう分かり切っている。
「もっと、気持ち良くしてあげますよ……」
　浅くねちねちと秘丘の谷間を擦り上げ続けて、彼女の目が虚ろになった所でそう告げる。
「え……」
　彼女の戸惑う声を聞きながら、親切心で彼女の口を俺の手で覆う。
　口を塞がれて何事かと目をぱちくりさせている彼女を微笑ましく思いながら、淫液の泉の中心の膣口に中指を宛てがい、くっと僅かばかりの力を込めると、いとも簡単に中指が入り込んだ。
　すかさず膣内で指をぐにっと曲げて肉襞をえぐると、彼女が目を白黒させて、口を覆っている俺の腕を掴んだ。
「んぐぅぅぅぅぅぅ……っ！」
　大量の愛液を撒き散らしながら、盛大に痙攣して絶頂に達した。恐

らく彼女が手で口を覆うのも間に合わないだろうと思い俺が口を塞いだんだけど……なんか、絵面が完全にアウトの構図になってる。
まぁ、構わないけど。
指を入れただけなのにすげぇ温かいなー、締め付けが気持ち良いなーなどと呑気に考えながら、口を押さえる手にぐっと力を込めて、解放する意思は無いことを示す。
彼女が目から涙をぽろぽろと流すのを見ながら、中指に加えて人差し指も挿入して、膣肉をぐちゅぐちゅと掻き回す。
手のひらでわざと、ぐっぽぐっぽといやらしく水音を立ててやると、彼女が顔を真っ赤にして膣内の締め付けを強めた。
「んむぅっ、んふぅっ！　ふーっ、ふーっ、ふーっ……んぐぅぅっ！　んぐっ、んぐぅっ、んんんん……っ！」
獣のような声を俺の手の中で漏らし続けていると、手のひらが淫猥な吐息でしっとりと湿った。
流石にやりすぎかなぁ……とは思いつつも、今度は指を抜き差ししようか……などと考えながら愛撫を続ける。
――ふと。
「……んん？」
思わぬ事態に、間抜けな声が口から漏れた。
彼女が、口を押さえられてめちゃくちゃにされているにも関わらず、その両手をいつの間にか俺の肉槍に伸ばしていた。
やむことの無い快楽に目をしばたたかせながらも、その手つきはとても淫猥で、こちらの手つきとは対照的で緩慢な指遣いが却って焦れったくて心地良い。
……この人は、本当に……っ。
ごくりと息を飲み、彼女の口を押さえる手に一段と力を込めて、最後にとびきり強めに指を折り曲げて膣内をかき混ぜてやる。
「んんんん……っ、んんんん……っ、……～～んふぅぅぅ～～～～～～……っ！」
彼女の反応が大きかった場所のみを念入りに丹念に執拗に責めてやると、彼女は白目になりかけてびくびくと痙攣して、愛撫している

腕の肘にまで飛沫が飛ぶ程の淫液を撒き散らして激しく達した。
「……」
膣から指をぐぽんと抜いて下を見ると、大惨事という言葉が似つかわしいくらいにソファがびしょびしょになっていた。
彼女はソファの上で腕を投げ出し、やや膝を曲げて脚をぱっくりと広げた卑猥な格好で息を整えている。
「はぁっ、はぁっ、はぁっ……ど、どうしよう……」
「え……っ」
疑問の声になんぞと思っていると、突然腕を引っ張られて倒されてしまい、その拍子に口付けを交わした。軽く唇の交わりを済ませると、彼女が艶っぽく微笑んだ。
「……あなた、最高だわ。まさかあんなに激しく責めてくれるなんて……」
「……っ、え、あ、そ、そりゃ良かった、です……っ」
……。
……Mのレベルたっけぇ……。
この人は、どれだけ責めたら本気でやめてと言うのか、その境界線が激しく気になった。
そっと、俺の頬に手が添えられる。
「……次は、わたしの番よ。……ここで、してあげる」
言って、彼女がくぱぁっと唾液の糸を引きながら口を開けた。まるで性器を開いたかのような光景にごくりと息を呑む。
あまりにも艶美な光景に、肉槍がくんと反り返って、鈴口からはカウパーが滲んだ。
続く。

（１０）

由比ケ浜マ――彼女が、咥えてくれると言った。

その言葉を理解して身体の奥底に落とし込むと、身体の内側が燃え滾るような興奮に見舞われた。

どれだけ濃厚な口淫をされるのかとうきうきわくわく（全くもって誇張はしていない）していると、彼女がくすりと笑った。

「すごい期待してくれてるところで悪いけど……せっかくだから、服も脱いでもらおうかしら」

「あ……」

現在の状況。

二人の位置関係：ソファで隣同士

彼女の服装：全裸。

俺の服装：一通り着ている（ただしアレだけがっつりはみ出し中）

……。

……これはアレだな、外で二人のこの状態だったら、完全に調教の一風景って俺は一体何言うてはんねやろーーーー。

ふう。

錯乱終了。

「あー……それもそうですね。じゃあさっさと脱ぎま……？」

言いながらＴシャツの裾を掴むと、彼女にぱっと手を押さえられた。

「？　ど、どうしたんですか？」

脱衣の邪魔をされるという稀有な体験に戸惑っていると、彼女がにっこり笑った。

「ちょっと順番があべこべになっちゃったけど……せっかくだから、わたしが脱がせてあげるわ」

「え……いいですよ別に」

この時俺の脳裏に浮かんだのは、まだ一人で着替えも出来ない時期に母親に手伝ってもらった光景だった。

そんなこと、ここでやったら絶対シュールな感じになっちゃうっ

て。
そんな風に思っていると、案の定ガチガチだった肉棒がしおしおと萎んでしまった。ほれ見たことか。
俺の心身の変化を見て、彼女がぷーと頬を膨らました。
……この人と同年代の人がこんなことをやったら「はぁ？」と言わずにいられなかったのだろうけど、彼女がやると本当に結衣のような現役の女子高生がやるのとほとんど変わりが無かった。
長くなったけど、要するに可愛いです。
「むぅ……」
なんだよフグかよ。外敵でも現れたの？
俺がほけーっと彼女を見ていると、突然びしっと指差された。
「ヒッキーくん。今すぐそのしおれちゃったものをしまって、そこに座りなさい」
「え、座ってますけど……」
この指示は何ぞやと思いながら、戦を一時的に終えた相棒をかちゃかちゃとジーンズの中にしまいこむ。お疲れ様……。
俺の言葉に対して、彼女がまたむぅと唸る。何この可愛さ？
「背もたれにちゃんと背中をくっつけて、くつろぐの！」
ぷりぷりと言われた。可愛いけどそれ言われないと分かる訳ないよね？
接すれば接するほど結衣とこの人は母娘、見た目も考慮すれば姉妹だよなぁ……と思う。
言われるがままに背もたれに体重を預けて、身体をソファに沈みこませながら息を吐く。
ぷひー。
さっきまでの時間が濃すぎたから、その反動で眠気さえ――
「うお……っ!?」
吹っ飛んだ。
彼女が一糸纏わぬ姿のまま俺にまたがり、首に腕を回して艶やかに微笑んだからだ。
え、ちょっと、急に刺激の段階を跳ね上げるの止めてもらえません

か？
「うふふ……大人の脱がし方を教えてあげる」
「……っ」
……。
……なんか、もう、もう、もう。
漠然とした考えだけど……何て言うか……この人と知り合えて良かった……。
感慨に浸るタイミングおかしいだろとセルフツッコミを心の中でしていると、彼女の手がそっと俺の頬を撫でた。
× × ×
ただ服を脱がせられる……よくよく考えれば、この状況だったら相当どきどきするんだろう。さっきの自分の冷め具合にびっくりだ。
でも、大人の脱がせ方って何だ……？
頭の中でどうでも良いシミュレーション映像をぐるぐる回していると、俺の頬に手を添えたまま、彼女が艶っぽく目を細めて、そっと顔を近付けた。
「んむ……っ」
あまりにも自然に重ねられた唇に、一瞬何が起きたか分からなかった。
ふわりと甘い香りが鼻腔をくすぐり、身体の前面には信じられないくらい柔らかくて心地良い重みがかかって、その感触だけで自然とパンツの中でむくむくと隆起が生じる。
彼女の舌先がちろちろと唇の隙間をなぞり上げ、するりと舌を忍び込ませた。
「んむぅ……っ、ふっ、くふぅんっ、んくちゅっ、れろっ、ちゅぴっ、ちゅりゅりゅ、れるれる、ちゅぽっ、ちゅぽっ、んふぅぅ……っ」
「〜〜〜〜……っ」
歯列をなぞり、上顎を丹念に舐め上げ、舌先をまるで交尾のように濃密に絡み合わせる彼女の口付けは、これだけで射精しそうな程の快楽を与えてきた。
思考が靄で霞むほど濃密な官能に、思わずソファの革をぎゅっと掴

んでしまう。
「んふぅっ、ちゅっ、ちゅっ、くちゅるっ、ちゅぴっ、ちゅぅぅっ、ちゅっ、んんん……っ」
彼女の口付けが、徐々に口内を味わうものから唇そのものを味わうやり方にシフトしていく。
それと同時に、彼女の手が上着のボタンに伸びて、ゆっくりと、たおやかな手つきで、焦らすように一つ一つ外していく。
「んっ……ふふ。……ちゅっ、ちゅぴっ、れるっ、んふぁぁ……っ」
彼女の唇が口から離れて、頬を妖艶に舐め上げ、耳に到達した。
「んむふぅぅ……っ、ちゅっ、ちゅぷっ、どう？　気持ち良い？」
「……っ」
耳元で囁かれる甘い声音に、言葉も出ないままこくりと頷く。
「うふっ……可愛いのね」
一言言い残してもう一度耳に口付けすると、先程の道程を戻る形で頬を舐め上げる。
そしてもう一度口付けをすると、今度は逆の頬を舐め上げながら登って行き、もう片方の耳に口付けした。
「ちゅっ、くちゅっ、ちゅぴっ、ちゅぴゅっ……上着、もうボタン外したから……脱いで？　ね？」
「……お……ぁっ……はぃ……っ」
甘ったるい猫撫で声で囁かれて、震えながら返事をする。
身体を背もたれから浮かせようとすると、彼女は微笑みながら背中に手を回して手助けしてくれた。
上着を脱ぐだけだと言うのに手が震えてしまっていて、それに気付いた彼女がもう一度頬に手を添えた。
「緊張してるの？　……もう、本当に可愛いんだから……んっ……」
「……っ」
優しく口付けをしながら、彼女が上着を脱がせてくれた。
「はぁい……よく出来ました」
「えっ、ちょっ……!?」
上着を横に置いた途端、彼女がふわりと背もたれに押し倒してき

て、Tシャツ姿になった俺の胸に指を這わせてきた。
すりすりと楽しそうに撫でていたかと思うと、指が生地越しに乳首に当たった途端、小悪魔めいた表情を浮かべた。
「さてさて……ヒッキーくんはここはどうなのかな？」
言って、彼女がゆっくりと乳首を指で撫で上げる。
「や、そんなとこ、別……に……っ？」
自分で触っても何とも思わない場所だと言うのに、彼女の指の腹に丹念に撫でられると、途端に弱い電流が走った。
「うふふ……気持ち良いのね？」
「や、そんな……ことは……っ」
……くっそ、なんでこんな楽しそうなんだこの人。
ああもう可愛い柔らかい腹立つ可愛い良い匂いエロい可愛い！
「うっ……うぁ……っ」
彼女の指が執拗なまでに乳首をゆっくりと刺激してきて、下腹部にどんどん血液が送り込まれていく。
彼女の瞳はどこか嗜虐の色を帯びていて、さっきまでとはまるで別人に見える。
「それじゃあ次は……えいっ」
「うお……っ!?」
今度はTシャツの裾を握って、一気に俺の顎の下まで捲り上げた。
……え、これって――
「……ちゅっ」
「うぐぁ……っ！」
何が起きるか気付いたすぐ次の瞬間、彼女の柔らかでぽってりとした唇が乳首に迫って、ちゅるりと吸い付いた。
「ちゅっ、くちゅくちゅっ、あむっ、あぐっ、あぐっ、あぐっ……ちゅぴちゅぴ、ちゅりゅるる……ちゅぽっ、あぐっ、あぐっ、ちゅるるるる……」
「～～～～～～～っ！」
これは、本当に、やばい。
舌で直接責められるのはあまりに危険だ。

顔を引き離そうとしても、背中に腕を回してがっちり抱きしめられている為に何も出来ない。
ていうか母娘揃って甘噛みが好きなのかよ!?　犬！　ほんと犬！
ああもう可愛いってそれどころじゃない！

「ちょっ、ちょっと待って、ほんとに、これはやば……っ！」
泣きそうな声を上げるが、彼女は責めを緩めないどころか、もう片方に指を這わせてしゅるしゅるとさすり始めた。
「はむちゅっ、くちゅりっ、じゅるる、ぢゅりゅ、くちゅぷぷぷ……じゅりゅりゅ、じゅぴゅっ、ぢゅろろろろ……」
「おっ、ぁっ、ぁがっ……」
身体を締め付けてくる肢体の柔らかさと、乳首を嬲る指遣いと、舌が立てるいやらしい音に快楽中枢がめちゃくちゃに責められて、本当の限界が近付いてきた。
「ぢゅるる、ちゅぽっ、くちゅくちゅ、じゅぴっ、ちゅるるる……じゅるるるる……」
「……ぁ……ぁ……」
身体が小さく痙攣し始めて、いよいよ限界が――と思った途端に、彼女の口が離れた。
「……え……？」
ぼーっとしたまま彼女を見つめると、彼女はややバツ悪そうにたははと笑って頬をぽりぽり掻いた。
「ごめんなさいね？　あまりに可愛く反応してくれるから……ついやりすぎちゃった」
「……そうです、か……」
肉棒をびくびくと脈打たせながら、まぁパンツの中で出すよりはマシだったかなどと考えていたら、彼女が妖しく口を歪めた。
「……今、わたしがあなたのことをいっぱい責めてる分、いえ、それ以上に……後で責めて良いからね？」
「え……？」
今、この人、何て……？

……。
……や、もう、ほんとに。
この人、ＭはＭでもちょっと……というか、だいぶアグレッシブすぎない？
……いや、この人は……単純に、ごく単純に、エロいんだろうなぁ。
「……わかりました」
頭をがしがし掻きながら答えると、彼女が口に手を当ててうふふと笑った。
「よろしくね……楽しみにしてるわ。……それじゃあ、次はお待ちかねの……」
言って、彼女がジーンズのベルトに手を掛ける。
「……この逞しいのを、いっぱい可愛がってあげるわね」
「……っ、……は、はい……っ」
喉をごくりと鳴らしながら、彼女の婀娜っぽい微笑みを見入る。
……あー、やっべ。
超楽しいわ、この時間。
服を脱ぐ過程がエキサイティング過ぎて、鼓動は一向に平常の速さに戻ってくれないままだ。った。

続く。

（１１）

由比ケ浜マ――彼女の手がジーンズのベルトに掛かる。
ソファに寄りかかった俺はその様子を息を呑みながら見守っている。
彼女の甘美な匂いが鼻腔をくすぐると、二人の間の空気が薄桃色に妖しく歪み、これから訪れるであろう快感に対しての期待がいやが上にも高まる。
「うふふ……」
「……？」
……なんか、妙にベルトを外すのに手間取っているような……？
「……うふふ」
「……」
……や、待て。
この人、わざとゆっくりやってるぞ。すげぇ怪しく笑ってるし。
俺が焦れったさにもぞもぞしていることに気付いたのか、彼女が上目遣いでにっこり微笑んだ。
「……うふふ……」
「……」
何も言わねぇのかよ。
まあ、もうしばらく待てば期待通りに……と思っていたら、そうも行かなかった。
「あら、間違って更にきつく締めちゃった～」
「や、あの」
「最近のベルトって難しいのかしら。どうも外し方がピンとこないわ～」
「ベルトの根本的な変化なんて多分世紀単位でありませんよ」
「それもそうね～。……うふふ……」
「……」
……ってな具合。
流石に、期待を魔人ブウくらい膨らませていたので（よく分からな

い例えだ)、そろそろ我慢の限界になって――ほとんど反射的に、彼女の髪をぐっと掴んでしまった。
俺の行動に対して彼女はあら、と飄々とした声を漏らし、顔を上げるとゆっくり目を細めた。
「どうしたの～？」
「や、あの、その、流石にそろそろ――」
ちゃんとしてもらって――と言おうとした瞬間。
「えいっ」
「えっ」
――素早い手つきで一瞬でベルトを外され、反射で腰を上げたらあっという間にジーンズが足の先からすぽんと抜けた。
……えっ。はやっ。
「うふふ～……どうだったかしら、今の焦らしは？」
「え、や、その……」
さっきまでのことを考えようにも、彼女が間髪を入れずにその可愛らしい顔をボクサーパンツに寄せて、微かに鼻を鳴らしながらにこにこしているため、まるで思考がまとまらない。犬がいるぞ犬が。
「すんすん……うふふ、どうだったかしら？　すごい焦れったくて、すんすん、早く下ろしてくれよー！　とか思った？　すんすん」
「や、その……」
待って待って、段々顔が近付いてる。匂いをすげぇ嗅いでる！
彼女がうふふと笑い――生地を突き破らんばかりに隆起した肉棒の裏筋に手を触れた。
「……焦らした分、余計に先っぽが濡れてるのかしらね。それともさっきの分？」
言って、彼女がつんつんと鈴口の辺りを指でつつく。ぞわぞわとした快感が走り、パンツの中で熱い塊が脈動してびくびくと揺れる。
「や、それは、その……分からない、です」
俺どんだけ遊ばれてんだよとは思いつつも、やはり、というよりも尚更、期待が高まってしまう。
――不意に。

うぐっ、と小さく呻いた。
彼女の右手が竿の部分に、左手が陰嚢に添えられていたからだ。
「……少し、遊びすぎたわ。ごめんなさいね。……いっぱい、気持ち良くしてあげる」
「……う……ぁ……」
言葉にならない喜びを、情けない呻き声に変換して漏らす。
彼女が、くぱっと口を開け、艶めかしく舌を蠢かせた。
先程も見た、まるで性器を連想させるようないやらしい口の開け方。
口を開けるという単純な日常的行為が、どうしてこうも扇情的に映るのか。
彼女が一度口を閉じて、いやらしく目を細めて再び口を開く。
「……いただきます」
彼女の言葉に、心臓が跳ねた。
× × ×
……あれ、俺、まだパンツ履いてるけど――と思った瞬間。
彼女は、見えなくても充血しきっていることが分かる亀頭を、パンツ越しにぱくりと咥えた。
「ふおぁぁ……っ!?」
それと同時に右手がぎゅむぎゅむと生地の上から心地よく竿を握って、左手が陰嚢を優しく揉みしだいてきた。予想外の、それでいて予想以上の快感に間抜けな声が漏れる。
「えるっ、れちゅ、ちゅぴっ、ぐむっ、くむくむっ、んふぅっ、すごい……濃い匂い……んふぁっ、ちゅぽっ、ちゅぱっ、ふぅんっ、んふぁぁ……っ」
彼女の舌は亀頭が当たっている部分をびしょびしょに湿らせていて、視覚と嗅覚に訴え掛ける快感を与えてくる。
そして唇をOの字にすぼめて前後に動かすことで、亀頭を生地越しにごしゅごしゅとしごき上げてくる。もどかしい舌の感触と、生地を使っての摩擦が甘美な快感を生む。
「ううっ、ぅぁあっ……」

考えもしていなかった、パンツ越しの口淫。
しかしその効果は、射精に導くその快感はとてつもない。
「んふぅっ、ちゅくっ、れちゅるっ、ぐっぷ、ぐぷぐぷ……」
彼女の口の動きの激しさとは裏腹に、その両の手はまるでマッサージするかのごとく優しく揉み上げてくる。
強めの快楽と微弱な悦楽が交互に波となって押し寄せてきて、あっという間に睾丸から子種が這い上がってくる気配を感じる。
彼女の頭を掴む。彼女はしゃぶりついたまま、「んむ？」と首を可愛らしく傾げた。
「あ、あの……も、もう、このまま出ちゃいそうなんで、その、直接、舐めてくれますか……っ」
切実な声で訴えると、彼女はにいっと目を細め、もう数回だけ唇を前後させてからゆっくりと口を離した。
「んはぁっ……うふふ、気持ち良くなりたいのね？　そうよね、ここがもうこんなに……」
言って、彼女が先程と同じように鈴口を生地越しに指の腹で弄ぶ。
彼女の唾液と溢れ出したカウパーとで、布1枚隔てているというのに細い糸が引いた。
――これ以上は、もう、我慢出来ない。
「う……は、はい……」
素直に返事をする。
「ん……よし」
俺の返答に上機嫌にうんうんと頷くと、彼女の手がパンツの縁にかかった。

× × ×

彼女の手の動きに合わせて、僅かに腰を浮かせる。
「ん……しょっ……と――っ!?」
彼女がパンツをずるりと下ろした瞬間――青筋立った肉鉾が久方ぶりに外気の下に解放されて、喜び勇むように反り返った。まず俺の腹にべちんと当たり、勢いそのままに――彼女の頬に当たる。
「ひゃわっ!?」

彼女の可愛らしい、けれどどこか間抜けな声が漏れた。
猛り狂った剛直は彼女の頬に当たった後すぐに戻り、今は隆々と天を突くようにそそり立っている。
「わ、わわ……っ、さっきもすごかったけど、今は、こんなに……こんな……に……」
彼女がどこかぼぉっとした表情で、肉棒の下に顔を寄せる。幼さを感じる声音で呟いて、手を内腿に添えて……まるで、餌の入った皿に顔を寄せる犬のような体勢になる。
ふと過ぎる、あの子の顔。
「……ん？」
頭の中に見慣れた笑顔が過ぎった時――かたかたと、微かな物音がした。正確に言えばもっと前からしていたと思われる物音が、途中で意識が目の前の彼女から逸れて外に向いた事で聞こえたような、そんな音。
彼女をちらりと見る。その顔はうっとりとしていて、今の物音にはまるで気付いていない。
……まさか、な。
自分の家で聞き慣れない音がすれば一発で分かるが、ここはまだまだ来慣れていない家だ。家鳴り等もあるだろう。
気を取り直して、彼女の髪をくしゃりと撫でる。
「……あなたが焦らしに焦らしたせいで、ぎっちぎちになった上に思い切り蒸れちゃいましたよ。……綺麗にしてくださいね」
言うと、彼女の顔が震えた。
「……はい、わかりました」
「……っ」
さっきまでの悪戯お姉さんな雰囲気から一転して、従順な面を見せる。思わずごくりと息を呑んで、目の前の艶美な女性を見つめる。
……この人は、本当に、一体どこまで……。
彼女の顔を両手で掴んで、顔の真ん中に肉槍の裏筋をぺたんとくっつけると、「ひぁ……っ」と小さく声を上げた。
「……匂いも、いくらでも嗅いで良いですからね？　……犬みたいに」

「……っ」
今度は彼女がこくりと息を呑んだ。
彼女の手が、肉棒の根元に添えられる。
そして、震える声で言葉を紡ぐ。
「……は、はい……っ」
彼女の返事一つ、吐息一つで。
可愛らしい顔に擦り付けられている肉棒が、喜びでびくんと跳ねた。
続く。

（１２）

由比ケ浜マ――彼女が、ぎちぎちにそそり立っている肉棒にうっとりとした視線を向けている。

口は半開きで、熱く湿った息を吐く口の中では微かに紅い舌が蠢いているのが見えて、ソファに座ったまま彼女のそんな艶姿を見てごくりと息を呑んだ。

「それじゃあ……んっ……」

彼女が肉竿の根元に手を添えて、ゆっくり鼻を近付けた。

そしてゆっくりと鼻をすんすん鳴らして、丹念に下から匂いを嗅いでいく。

「んふぅ……すん、すん……あんっ、すごい匂い、くらくらしちゃう……くん、くん、んふぁっ、すんすん、上の方は……あぅっ、おつゆが垂れてきちゃってるわ……うふふ、んっ、んふぅっ、すん、すん、すん……っ」

「……っ」

陰嚢から始まり、裏筋を根元から鈴口に向かって嗅いだと思えば、今度は肉槍を掴んで自分の方に押し倒し、首の角度を変えて肉棒の表側を丹念に嗅ぎ始める。

犬よりも念が入っているのではないかと思うような嗅ぎ方に、鼓動がどんどん高鳴る。

「んぅっ……あぁっ、すん、すん、これ……っ、すん、すん、ほんとうに、くん、くん、すごいわぁ……っ」

陶然とした表情で彼女が鼻を鳴らしている間中、鈴口からはカウパーがくぷぷと滲んでいた。

彼女がふと顔を上げ、艶美に口を歪ませ目を細める。

「この匂いを嗅いだだけで、もう犯されたのかと思っちゃうわ……本当にすごいわね」

「……っ」

歯がかちかちと鳴り、震える手を彼女の頭に伸ばす。

サラサラの髪を掴みくしゃりと撫でると、彼女のぷっくりとした朱

い唇をいきり立った剛直の目の前に引き寄せた。
「……もう、舐めてください」
震える声でそう告げると、彼女は楽しそうに笑った。
「……はい。……これから舐める訳だけど、たくさん舐めるけれど、その前にひとつ」
「？　何でしょう？」
尋ねると、彼女が両の手で愛おしそうに長竿を撫で回しながら、舌をちろちろと出して微笑んだ。
「あなたがしてほしいことがあったら、何でも言ってね？　ねっとり舐めてほしいとか、具体的にここをこう舐めてほしいとか、……無理やり、お口の中を犯したいとか、何でもありだからね？」
「……っ」
全身が喜悦で震えて、鈴口からカウパーがこぷっと滲んだ。
「それじゃあ……いただきます」
彼女が緩慢な動作で口を開け、上唇と下唇の間にねっとりとした唾液の糸を伸ばした。
――かたん、と。
先程物音がした方向から、また何か音がしたな……と思った次の瞬間、熱く湿った口腔粘膜が青筋立った淫茎を呑み込んだ。
×　×　×
「おっ……ぉおお……っ」
彼女の口内の温かさといやらしさに身を震わせる。
彼女は先に舌で舐めるなどといった準備運動に近いことを一切やらずに、ノータイムで咥えてきた。
そして、半分程咥え込んだところで進攻を止め、俺を見てにやりと目を細める。
――まるで、行くわよとでも言うかのように。
すぅっ、と彼女が鼻で息を吸った音が聞こえた。
「ぐちゅっ、じゅぽっ、じゅるる、ぐじゅぽっ、じゅるぐちゅっ、じゅぷぷっ、ぢゅりゅっ、れろれろ、じゅぴぷぷっ、じゅるるる……っ」
「!?　～～～～っ!?　～～～～っ！」

――あまりに激しい口淫に、目の前の世界がばちばちと明滅する。
彼女は口の前後運動こそゆっくりするものの、その中では信じられない速度で淫靡に舌を這わせてきた。
亀頭に巻き付くように舐め、竿の裏筋を卑猥な音を立てながら舐りまわし、頬裏を亀頭に密着させぐりぐりと擦り付ける。
「あっ、ちょっ、えっ、なんでっ、うぁっ、こんなっ、うぐっ、急に……っ！」
彼女の口の動きを止めようと頭を掴んで押し戻そうとするが、
「んぐちゅっ、ちゅぷっ、ぢゅぽぽっ、れろっ、れるれるっ……じゅぐぐ、ぢゅぷりゅっ、ぢゅぴじゅぽ、ぢゅりゅりゅりゅ……っ」
「～～～～～～～っ」
――口腔内の嵐は、まるで収まる気配を見せない。
「ちょっ、ちょっと待って、ほんとに、これ、すぐ……っ！」
あっという間にイカされそうになっているこの状況に泣きそうな声を上げると、彼女がはっと目を見開いて、ゆっくりと肉棒を口から解放した。
むわっとした湯気が上がり、その湿り気も二人の間に漂う熱であっという間に霧散する。
「……ごめんなさい。嬉しくなっちゃって、ちょっとやりすぎちゃったわ……」
頬に手を当てて、首を傾げながら彼女が申し訳無さそうに言う。
……ちょっとって何だ、ちょっとって。
「……えっと、いつもこんな感じなんですか？」
聞くと、彼女は分かりやすく手と首をぶんぶんと振った。
「そんな、全然よ！」
「ほっ……」
「本当はもっとしたいくらいなんだけどね。そうすると、相手の人がもう干物になっちゃうなって思って、いつもはすごくセーブしてるの」
「……」
マジかこの人。

干物って表現が比喩に聞こえない……。
ほんとごめんね――と彼女がもう一度謝ると、未だ硬直したままの肉茎をちろりと舐めた。え、何そのエロい動作？　もう一回やってほしいんだけど。
「どういう風にされるのが好きかしら？　……いくらでも、してあげるから」
「……っ、は、はいっ……」
話しながらも、愛らしい笑顔のまま舌先でちろちろと亀頭を舐める彼女が、蕩けてしまいそうな程に可愛かった。

×　×　×

「じゃあ……亀頭だけ咥えてもらえますか」
「ほう（こう）？」
俺が指示を出すと、彼女はあっさりと咥えた。
なんか、さっきのでこの人のリミッターの一部が外れた感じがする……。
……結衣も将来、こんな感じになるんだろうか……。
……ごくり。
「ふぃっふぃーふん（ヒッキーくん）？」
「あ、すいません」
ふぃっふぃーってやたら愉快な響きだな。
早速、希望を口にしてみることにする。
「口の中で、なるべくねっとりと亀頭を舐めてください。裏筋と、カリの部分を特に丹念に」
言うと、彼女がにっこりと目を細めた。
……「あなたも好きねぇ」って言ってるのが目だけで伝わる……。
「んふぅっ……ちゅろっ、ちゅぴっ、ちゅりゅっ、ちゅくっ、ちゅぷぷ……っ」
「おぉぉぉ……っ」
舌の腹がじっくりと裏筋を上下に舐めこすり、ちゅるりと舌を伸ばしてカリを丁寧になぞり上げる。
さっきまでの責めが強制的に絶頂に連行する口淫だとすれば、今の

舐め方は心地良く絶頂に導いてくれるマッサージのような快感をもたらしてくれる。
「んっふぅ……ちゅぷ、ちゅこ、ずぞぞぞ……こくっ、ちゅく、ちゅここ、くぷぷ、ちゅぷぷぷ……っ、こくんっ、こくん……っ」
「お、おぉぅ、それやばいっす……っ」
大量の先走りを滲ませていると、彼女の柔らかな上下の唇がカリ首をぱくりと咥え込み、頬をすぼめて唇をOの字にして鈴口からカウパーを吸い取った。
亀頭への刺激とカウパーの吸い上げという流れを何度も繰り返されているうちに、下半身がすっかり蕩けてしまう。
「あ〜っ……そろそろ、出そうです……。そのままゆっくり舐めてもらって良いですか」
まるで温泉に入っているかのように、背もたれに体重を預けて天を仰ぎ、彼女の頭をくしゃりと撫でる。
「……んんっ」
彼女は肯定と取れる返事をして、舌や唇での愛撫の速度は変えぬまに、擦りつける力や吸い取る力を僅かに強めて、射精を促した。
心地良い幸福感が身体を包み、睾丸からゆっくりと濃密なゼリーが登ってくる。
「あー……っ、もう、イキそうです」
言って、彼女の顔を見つめながら頭を両手でがしりと掴み、両足を背中に絡ませた。
口を離したりはしないだろうが、この方が何となく興奮すると思ったためだ。
ふくらはぎや内腿が柔らかくて温かな背中に密着すると、彼女は俺の顔を見てにっこりと微笑んだ。どうやら俺の意思を汲み取ってくれたらしい。
俺が足にぎゅっと力を込めると同時に、彼女が口をすぼめて、力強く亀頭を吸い始めた。
「んちゅるるる……ちゅぷ、ちゅぴちゅぴ、ちゅくく、ちゅろろ、くちゅ、ちゅぴぴ、じゅるるる……」

肉棒を包む極楽に身を委ねると、身体の根元から尿道を伝う感覚がはっきりと分かる程濃密な粘液が込み上げてきた。
――ぐびゅるる、びゅろっ、どびゅるるる……っ、ごぶっ、どぶどぶっ、びゅるるる……。
「んふぅぅ……っ!? んっ、ごくっ、んぐぅっ、ごくごくごくっ、んふぉ……んっく、んっっく、んふぅぅ……ごく、ごく、ごく、ごく……っ」
溜まりに溜まった興奮の為か、粘度が高い白濁が絶え間なく彼女の口の中に溢れる。
固形物を飲み込んでいるのはと思う程、彼女が飲み込む度に大きな音で喉が鳴る。
「ふぅぅ……すげぇ良かったです……って、あれ……?」
心地良い脱力感を伴った絶頂の余韻に浸っていると、ふと彼女の表情の変化に気付いた。
つい数十秒前までの穏やかな表情ではなく、どちらかと言えば、さっき貪りついていた時のような獣性を帯びた目つき。
「……」
肉棒を咥え込んだまま、彼女が俺をじっと見つめる。
その瞳が湛えている熱に、射精を終えたばかりの肉茎が反応して、彼女の熱く湿った口内で微かに疼いた。

続く。

（１３）

由比ヶ浜マ――彼女が、射精を終えた肉棒を口内で愛おしそうに舌で転がす。行き過ぎない程度の程好い快楽を送り込まれて、あれだけ射精したにも関わらず彼女の舌の上でまたむくむくと屹立してしまう。

そろりと、彼女の目を見る。

「……」

その目は明らかに、二人の今の行為がここで終わらないことを示していて。

瞳の中で揺らぐ情欲の炎を見ただけで、下腹部に獣じみた疼きが走る。

「ちゅぴ、ちゅく、ちゅぷぷ、ちゅりゅ、ずろろろろ……ぷはっ、ちゅっ、ちゅっ、ちゅっ……」

「お……おぉぉ……っ」

彼女が口を離すような動きを見せたかと思いきや、口を離しながらも頬をすぼめて竿を扱き上げ、舌先で亀頭をつつき、裏筋を舌の腹でべろりと舐め上げた。

最終的には口を離したものの、そこまでのたった１０秒足らずの行程で、肉竿はあっと言う間に硬くぎちぎちに反り返ってしまった。

しかも口を離した後に鈴口にキスまでしてきた。ちょっとエロ過ぎませんかね……。

彼女がにっこりと微笑んで、目の前の肉棒の竿に舌を這わせる。

「んふぅぅ……れろ、れろ……っ、……うふふ、あなたのおちんちん、まだまだ元気みたいね」

「あ、そんなエロいことされたらすぐ勃ちますよ……」

さりげなく破壊力のある言葉を言うもんだから手に負えない。

彼女が、俺の内股に手を添えてずいと身を乗り出した。

「……ねえ、ヒッキーくん……お願いがあるんだけど……」

「……な、なんでしょう？」

彼女の手の指が、しゅるりと肉竿を包み込む。

「……これ、欲しいな」
「……っ」
――来たか。
そりゃあそうだよな、ここまでやったんだもんな。ここまでやったんだもんな。何で俺今2回言ったんだろう。
彼女の目には確かな期待が宿っていて、俺も満更でもない……どころか、パンツ一丁になってベッドに飛び込むルパンばりにやる気満々である。据え膳食わぬは男の恥とも言うし。
……でも、それでも。
頭の中にはいつだってあの子がいる。
頭をがしがしと掻いて、何とか言葉を紡ぐ。
「……あー、えっとですね、流石にそれ」
「わたしのぐしょぐしょに濡れたアソコにあなたの凶悪なおちんちんをねじ込んで、めちゃくちゃにして欲しいな」
「……っ」
「正常位でもバックでも騎乗位でも良いわ。どの体位でする時も、胸を揉みくちゃにしてほしい。胸が形をぐにゃぐにゃに変えられながら、わたしがどれだけダメと叫んでも、あなたは子宮の入り口までごりごりと抉るの。わたしの乳首を扱くのも止めてくれなくて、わたしは泣きながら何度もイっちゃうの」
「……ちょ、ちょっと、ちょっと……っ！」
はぁぁぁぁっ!?
何このおねだりの仕方!?　斬新ですね！　殺す気かよ！
このおねだりの効果は抜群で、言葉だけで肉棒は青筋立って反り返ってしまった。
「それであなたに一度射精されて気を失っちゃったわたしを、あなたは抜かないで更に責め立てるの。『なに寝てんですか、もっとちゃんと声上げてくださいよ。牝丸出しのエロい身体してるんだからそれくらい出来るでしょう』とか言いながらね」
「～～～～～～～っ！」
やばい、やばい、やばい。

この人が描く場面が、あまりにもリアルに肉感を持って浮かんでしまう。
ていうかこの人なんだよ、M度合が増してんじゃねぇよ！　絶対ヤったら気持ち良いじゃん！　楽しそうじゃん！
「……あなたとしたら、絶対楽しいと思うんだけどなぁ……」
気持ちも通じちゃったよ。
「あ、や、その……っ」
目を泳がせて答えあぐねていると、彼女が「もう……っ」と小さく呟いて、ゆっくりと立ち上がった。そしてソファに座る俺の上に跨って膝立ちになる。
「……あなたのおちんちん、食べていーい？」
「……っ」
目の前の艶姿に、目を奪われる。
全身にぞわりとした興奮が走り、目の前の人を犯せと、完全に自分の牝にしてしまえと本能が全力で叫ぶ。
――でも、それでも、俺は……。
「あの、すいません、俺――」
やっぱりそこまでは――と言いかけた所で、勢いよくリビングのドアが開いた。

×　×　×

「それ以上はだめーーーーーーーーーーーーーーーー!!」
『え……』
突然の闖入者に、俺も彼女もぴたりと固まる。
ドアの方に目をやると――そこには、恋人である由比ヶ浜結衣が目に涙を溜めて、息を荒げながら立っていた。
「え、あ、え……？」
思考がストップした俺と対照的に、由比ヶ浜マ――彼女の行動は早かった。結衣が現れるやいなや俺の上から退いて、横に置いてあったウェットティッシュで手を拭き取り、それをきちんとゴミ箱に捨て、結衣の下へと歩いて行く。全裸で。
結衣は彼女の様子にものすごく慌てたけれど、彼女に対して何も出

来ないでいる内に、彼女は結衣を自分の胸にすぽっとうずめて抱きしめた。
「ふわぁっ!?」
結衣の声が急にくぐもった声になる。洞窟にでも入ったんだろうか。
「……結衣、ゆきのんちゃんの家でのお泊まりはどうなったの？」
結衣をその大いなる御胸に抱きながら（大仰）、彼女が穏やかな声で話しかける。
や、なんでそんな平気そうなのあなた？　俺頭真っ白ですよ？
彼女の問いかけに対し、結衣はふるふると首を振ろうとして……諦めた。スライムの中じゃしょうがないよね。
結衣はこのままでは喋れないと気付いたのか顔を離して、拗ねた顔で俺と彼女を交互に見つめる。
「……ゆきのん、急な用事が入ってお泊まりが無くなっちゃったの。それで寄り道してから帰ってきたら、ヒッキーの靴があるし、しかもなんか変な音がするし……それで、それで……っ」
冷静に説明してくれているが、それでも結衣自身も相当混乱しているんだろう。
誰が悪いって俺と彼女が１００％悪いよね。どう償えば良いのかまるで想像がつかん。
「ドアの隙間から覗いたら、ヒッキーとママが……うっ、ひっく、えぐ……っ」
結衣が段々嗚咽を漏らし始めて、胸がずきんと痛む。
「結衣……俺……」
何もかけることが出来る言葉が無いまま声を掛けると、彼女がにっこりと俺を見た。わたしが何とかするから、と目で言われてしまい、すごすごと座り直す。
「結衣……ごめんね？　結衣とヒッキーくんが毎日すごく仲良さそうにしてるのを見ちゃって、わたしもすごく……若い頃を思い出しちゃったの。だけどその気になってパパに迫っても、疲れてるからって断られちゃって……」

彼女が、結衣の肩に手を置きながら訥々と話し出す。
彼女が話していることは本当なんだろう。仕事で疲れた夫が妻との情事を断る……あらゆる所でよく聞く話だ。
『わたし、久しぶりにパパと全力でしたいわ！』ってえっちな下着を着て言ったら、『お前は俺をミイラにする気か』って……失礼しちゃうわ、全く」
……全然、よく聞く話じゃなかった。
「それで、もうどうしても我慢出来なくなっちゃって……ヒッキーくんを誘ったのよ。かなり強引なお誘いをしたから、ヒッキーくんは悪くないわ」
腰を上げて何か言おうとしたが、今この場で俺が話して良いことなど無い気がして、何も言えない。
「結衣……ごめんなさいね？　つらかったわよね？」
言って、彼女が結衣をその豊満な胸にうずめてゆらゆら揺らす。
「う～……」
結衣はと言えば、彼女の言葉を全て聞いても当然納得しきれてはいないようなのだけど、それでも段々と表情から強張りが抜けていく。スライム効果だろうか何でもないですごめんなさい反省してます。
しばらく唸っていた結衣だが、しばらくすると声を上げるのをぴたりと止めた。
「……わかった。ママ、もう大丈夫。……今度、スイパラ連れてってね」
彼女の胸からぺいっと離れると、結衣が口を尖らせて彼女を上目遣いで見つめ、何とも可愛らしい言葉を口にした。
……結衣が、本当に素敵な子なんだと改めて思った。
「うふふ……もちろん。結衣、ごめんね？　……ありがとう」
彼女もどこかほっとした様子で言って、結衣と優しく抱き合った。
身体を離すと、結衣が俺をジト目で見つめた。
「ヒッキー……」
「う……」
その視線に思わずたじろぐと、俺の前まで結衣がずんずんと歩いて

くる。
あっと言う間に俺の前に仁王立ちすると、物凄い威圧感を持って俺を見下ろしてきた。あ、あれ？　結衣さん、怒るとこんな怖いんですのん？
「ヒッキー。起立」
「は、はい」
結衣に発した、初めての敬語である。
慌ててソファから立ち上がると、結衣が彼女に向けたのと同様の拗ねた顔になり、俺の手をきゅっと握って上目遣いで見つめてきた。柔らかな温もりに、彼女と重ねた時間を思い出して心が解れて、それと同時に罪悪感でずきんと胸が疼く。
「……ヒッキーのばか」
「……ごめん」
「ばかばか」
「……ごめん」
「ばかばかばかばか」
「……ごめん」
「……ほんと、ばか」
「……ごめん」
結衣が俺の胸に顔をうずめてきた。そっと抱きしめると、結衣が潤んだ瞳をこちらに向けた。
「ヒッキー……今度、旅行行こう？」
くしゃりと痛んだ心を、ぽかぽかとした温かなものが包んでいく。
「いいぞ。どこへでも連れてってやる。……それ、罰になってねぇと思うんだけど、良いのか？」
彼女にスイパラと言った時と抱いた疑問と同じものをぶつけると、結衣はふっと柔らかく微笑んだ。
「いいの！　……行き先とか、全部ヒッキーが決めるんだよ？」
「お安い御用だ」
「泊まりにしてね？」
「バイトでも何でもする。２泊３日くらいにするか」

「いっぱい甘えるよ？」
「どんとこい。俺は甘いもの好きだからな」
勢いでよく分からんことを言ってしまった。
「じゃあ……夜も、甘えていい？」
「……っ。……今までのは何だったんだってくらい甘やかしてやるよ」
「……嬉しい」
結衣が短くも幸せが滲み出た言葉を紡いで、再び俺の胸に顔をうずめた。
――本当に、この子と一緒に居られて良かった。
俺のやらかしで生じた不和が、全部とは行かずとも解消したことに安心していると――
「うふふ、良かったわ～」
『……え？』
彼女が結衣の後ろに立って、にこやかに微笑みながら結衣の肩に手を置いていた。え、何してんのこの人？
彼女が胸の前でぽんと手を合わせて、にっこりと笑う。
「それじゃ、親睦を深めようってことで……三人で一緒にお風呂に入りましょうか～」
『は？』
ずいぶんと間抜けな甲高い声が、俺と結衣の口の端からぷしゅっと漏れ出た。
続く。

（１４）

由比ケ浜マ――彼女が謎すぎる提案をしてから、ほんの１５分程経った現在。

『……』

俺と結衣は、由比ケ浜家の浴室で並んで座っていた。

タオル１枚だけ身体に巻いて、完全な入浴スタイルである。

「……ママ、まだ来ないね……」

「あ、ああ、そうだな……」

何これ。どうしてこうなったの。気を抜くと目の前のむちむちした太ももに手を這わせそうになるからまずい。

「ヒッキー……その、ママ、いつ来るかわかんないから……」

「……すまん」

触ってた。ナチュラルに罪を犯した感が半端無い。

ていうか何で結衣に触っただけでこんな背徳感が湧くのん？　おかしくない？

『……』

二人して、もう一度黙り込む。

……もう一度言う。

どうしてこうなった。

×　×　×

ほんの１５分前。

彼女が俺と結衣に対して一緒にお風呂に入ろうと言った時、もちろん最初は全力で抵抗した。主に結衣が。厳密に言えば九割九分八厘くらいで結衣が。

「マ、マ、ママ!?　何言ってんの！　さっきあたしに謝ったばっかじゃん！」

結衣が必死で捲し立てるが、その剣幕に対して彼女は頬に手を当てて「あらあら」と涼しげに受け流している。

受け流し方が郭海皇ばりに上手いなこの人。消力の使い手だろう

か。一度で良いからあんなにリラックスして壁に穴を開けてみたい。
「私は結衣の為にもなると思って言ってるんだけど……だめかしら～？」
彼女が呑気に言葉を返すと、結衣はぶんぶんと首を振る。脳震盪が心配されるレベル。
……結衣の為に『も』ってなんだよ……。
「だからダメだって！　ママ、ほんとに何言ってるか分からないの!?　そんなの出来る訳ないって！」
必死で言い募る結衣を見ていた彼女が、不意に目を妖しく細めた。僅かながらも明確な変化に俺も結衣も気付き、びくりと身体を竦ませる。
彼女が一歩前に出て結衣に近付く。結衣は一瞬後ずさりそうになったが、すぐに踏み止まった。
彼女は結衣の頬に手を伸ばすと、傾国の美女として名を知らしめた妖狐の如く、妖艶に目を細めた。
結衣の緊張をほぐすように頬を撫でると、にっこり微笑む。
「結衣……あなた、ここに入ってくるとき何て言ったか覚えてる？」
「え……」
突然の質問に、結衣が詰まる。どういう意味かと思い、記憶を数分程遡る。
『――《それ以上は》だめ――』
……あ……。
結衣のこの言葉と、何度か聞こえていた物音を思い出し、点と点が繋がり一筋の線になる。
……つまり、結衣は……。
事態を把握して結衣に顔を向けると、顔を真っ赤にして俯いていた。恐らくさっきの言葉は反射的に言ったんだろう。
彼女は、俺と結衣の反応を見て尚も言葉を続ける。
結衣の両頬に手を添えて、いっそうにこやかに微笑む。
どうして同じ微笑みでこうも違う印象が生まれるのか、女の人の顔はつくづく不思議だなどという場違いな感想を抱いた。

「結衣？　あなた……『それ以上は』って言ったわよね？　あなたが入ってくる前も物音が二回くらい聞こえたんだけど……」
彼女の言葉にハッとする。彼女は物音に気付いていなかったのではない。
気付いても、俺と同様に反応していなかっただけだった。
結衣は一体、何のつもりで――？
不思議に思い結衣に目をやると、さっきまでとは打って変わっておどおどとした様子に変わっている。
「ぁ……ち、ちがうの、ヒッキー。あのね？　あのね……？」
手をわたわたと動かし、胸の前で人差し指を合わせてくりくり回して上目遣いで見つめてくる。ちょーっとさりげなく殺しにかかって来てますねー。可愛すぎますねー。
俺が結衣の仕草に悶絶していると、彼女がそれを見てくすりと笑い、胸の前でもう一度手をぽんと合わせた。手と首それぞれをちょっと斜めにしてるのが可愛すぎてつらい。
「だから、三人でお風呂に入りたいな～って」
彼女がのんびりとした口調で言うと、指をくりくりしていた結衣がぴたりと止まった。　彼女の方へ向き直り、背後に「ごごごごご」のフキダシが出てそうな雰囲気を醸し出す。普段が温和な分、ギャップで鬼みたいに恐い……。
「ママ、だからなんでそうなるの？　大体、さっきまで二人が一体何をして――」
「ママがどんな風にヒッキーくんにしてあげるのか、見たくない？」
静かに怒ろうとしていた結衣がぴたりと止まった。
「え……」
小さく呟いて、どういうことなのかと訝しむように彼女を見つめる。
「だって結衣……すぐに入ってこなかったってことは、そういうことに興味がある……いえ、興味津々なんでしょう？」
「あ、う、それは……」
「もしかしたらだけど、ママがしてるのが見えて、それが自分よりも上

手いと思って、つい見ちゃったんじゃない？」
「あ、う……」
「しばらくじーっと見てたんだけど、わたしとヒッキーくんがそれ以上のことをしそうになって、それで我慢出来なくなって……っていう感じかしら？　……どう？」
　え、何このえげつない詰問？　口調は優しいのに。
「……」
「待て待て待て、結衣。なんで俺に抱き付くんだ」
　小さな声で「うぅ……」と唸りながら抱き付いていた。
　甘い匂いがするし柔らかすぎるし柔らかすぎる。二回言っちゃうくらい柔らかい。三回言っちゃった。
　だから、と彼女が言葉を続ける。
「せっかくだから、じっくり見せて結衣に勉強してもらえればと思って。償いの意味も兼ねて……ね？」
　そう言って微笑む彼女の顔は、母親としてのもので。
　それを結衣は敏感に感じ取ったのだろう、とても複雑な表情を浮かべる。
「うぅ～～……。……ヒッキー」
「なんだ？」
　頭をくしくしと撫でてやると、潤んだ目で俺を見つめてきた。
　押し倒して良いでしょうか。ここではだめですかね。ここではって言っちゃったよ。
「……ママと、最後までするのは無しだよ？」
「……分かったよ」
　頭を撫でながら肯定すると、彼女もうんうんと頷いた。
「もちろんよ～。ママ、それくらい分別は付けるわ～」
　言いながら、彼女は俺に向けてぱちんとウインクして――妖しく、舌をぺろりと出した。
　や、この人絶対その気あるじゃん。むしろその気しか無いまである。
　ああもう全くこの人はしょうがな――

「ヒッキー、なんでおっきくなったの今……？」
心臓がきゅっと締まった。きゅって。
「ちょ、待て、結衣、お前今すげえ怖いぞ。可愛い顔が台無しだぞ。な？　な？」
「え、か、可愛い？　えへへへ……っ」
あっぶねぇ……。この子、瞬間的に雪ノ下さんばりの怖さを滲ませてきた。
うつらなくて良いとこがうつるの止めて頂きたい。俺の命の為にも。
ていうか俺の躱し方が変にこなれてて自分で自分がイヤになった……。
「そういうことで、三人で一緒にお風呂に入りましょ～。わたしはちょっと準備があるから、二人は先に入っててちょうだい。あ、ヒッキーくんの椅子だけ先に出しておくわね～」
「あ、は、はい」
おっとりとした口調のままてきぱきと指示を出されて、結局由比ヶ浜母娘との混浴と相成った。
……や、なんでだよ。

×　×　×

思い出しただけで興ふ……変な気持ちになる。言い直した意味が壊滅的に無かった。
「……」
目のやり場に困って、視線を巡らせる。
この家の風呂はやたらと広い。どこのアニメでの阿良々木家だよと思う。
や、実際はそこまでではないけれど、それでもとても一般家庭の浴室とは思えない広さだ。
何でまたこんな広さなんだ……？
これから先の展開が読めな過ぎて途方に暮れていると、隣の椅子に座っている結衣がじっと俺を……というより、俺の下の椅子を見ていることに気付いた。

「どうした」
「や、うーん、その椅子……うちで今まで見たことないなーって」
そう言う結衣の椅子は元々この風呂場で使っているようで、結衣はごく自然に座っている。
そりゃまあ急遽出してきたんだから、結衣が見たこと無いとしてもそりゃそうだろうとは思うんだけども。
……そもそも、何で急遽出せるような椅子があるんだ？
急に不安を感じて、よく見ずに座った椅子の形を立ち上がって確認する。
「……」
「ヒッキー!? どしたの!?」
口の端からつつつと吐血する俺を見て、結衣が慌てる。
俺が彼女に用意してもらって座っていた椅子は、動画やマンガでしか見たことが無い椅子で……所謂「スケベ椅子」と呼ばれるものだった。
……や、あの人、何考えてんの？
結衣が頭の上にハテナマークをぽへぽへと浮かべていると、浴室のドアがからりと開いた。
そこには居たのは、再び一糸纏わぬ姿になった彼女――ではなく。
正確に言えば、彼女が持ってきた、これまた動画やマンガでしか見たことが無いもので彼女の姿が隠れていた。たまにキングスライム×2が見えてます。
「ごめんなさいね～。これを引っ張り出すのに手間取っちゃって……」
飄々とした調子で喋りながら、『それ』を浴室に運び入れる。
俺と結衣はぽかんとしたままその様子を見つめていた。
正確に言えば、俺と結衣ではぽかんとする意味合いは違うんだけど。
広い浴室の床に『それ』をどさりと置いて、彼女が満足げに一息つく。
「ふー。やっと運び込めたわ～。二人の前でこれに空気を入れるって

いうのはちょっと、舞台裏を見せるような感じがして気が引けたから、部屋で準備してきたのよ～」
「ママ……それ、なに？」
結衣がはてさてと首を傾げる。俺はその横でこぷこぷと吐血する。今度は口の両端から器用に吐血している。
……この人、何でマット持ってきてんの？
「ああ、そうだわ～」
彼女が胸の前でぽんと手を合わせて、脱衣所に戻る。
何事かと思いじっと見ていると……何かお世話になったことがあるような無いような気がする、透明な液体の入った容器を持ってきた。
「これも無いとね～」
彼女がうきうきとした調子で言う。のんびりした雰囲気はいつも通りだけど、明らかにテンションが高い。この人酔ったらまたエロそうだなぁ何でもないですごめんなさい。
一度目を閉じて気持ちを落ち着かせて、目を開けてもう一度それを見る。
……ローションやないかい。
「……」
引き続きはてさてと首を傾げる結衣の横で、今この浴室に用意されているものを見渡す。
ボディソープ。
シャンプー。
リンス。
椅子（通常版）。
椅子（限定版。スケベ）。
ローション。
マット。
「……」
今度は、今俺とこの空間に居る二人の肢体を眺める。
若く瑞々しい中にも色っぽさを備えた、二つの豊かにも程がある乳

鞠を備えた結衣。
年齢をどう見積もっても信じられない程若い見た目でありながら、年齢特有の艶っぽさと結衣よりも更に大きな凶器を携えた彼女。
……何が起きるのか、手に取るように分かる。
そしてもっと言えば、これくらいは起こるであろうと言う内容を更に上回る事も起きるであろうことが手に取るように分かる。
「うふふ～楽しみだわ～」
「ママ、だからそれ、なに？」
「ゆっくり説明するから～」
「？　うん……」
二人のやりとりを見ながら、タオルの下に欲望の血流がどくんと集まるのを感じた。

続く。

（１５）

「えーっと……」

由比ヶ浜マ――彼女が浴室に用意したエログッズを見て、改めて戸惑う。エログッズって言っちゃったよ。

結衣は相変わらず首をくりくり傾げていて、その度にタオルが巻かれた豊満な果実がぷるんぷるんと揺れる。ＧＩＦ動画にして保存したい。

ちなみに俺と結衣は、彼女が諸々を持ってきた時にひな壇の芸人ばりに立ってしまい、座るタイミングを逃してそのままになっていた。

さあ、説明を求むという目線を結衣と俺が揃って彼女に送ると、視線の圧力を毛ほども気にせずに満面の笑みを返してきた。

「これはね～、パパとお風呂で色々してみたいな～と思って用意したのよ～」

結衣が俯いた。どうやら今の言葉で何となく察しはついたらしい。正しい反応だ。

「新しく引っ越すっていう時に、こういう事がしたいからなるべくお風呂が広い所にしてって言ったの。わたしのわがままのせいでお家探しが難航してね～」

待て待て待て待て。判断基準がぶっ飛びすぎだろう。

「それで引っ越した後は……もう……ねえ？　うふふふふ～」

サザエさん？

……ていうか、それを聞いた限り、このマットってお古……？

結衣も同様の疑問を感じたのか、露骨に「うぇぇ……」という表情を浮かべていた。お父さんがすこぶる不憫だけど、今は俺も結衣と同じ気持ちだ。

「ママ、じゃあこのマットって……」

青ざめた顔で結衣が尋ねると、彼女は一度くりっと首を傾げた（母娘で傾げ方が似ていて、やたら可愛くて困る）。

そして結衣が言わんとしていることに気付いて「ああ」と手を合わせる。

「それは大丈夫よ～。結構使い込んじゃったからって椅子もマットも新しいのに替えたんだけど、パパったらその後こういう事をさせてくれなくなっちゃって～……」
彼女が困ったもんだと言わんばかりの表情で頬に手を当てる。
……それ、どれだけ使い込んだのん？　どこの幻の６人目の練習用ボール？
そりゃまあ、お父さんもげっそりする訳だ。
「……結衣、大丈夫か」
「……うん、ぎりぎり」
振り返って結衣の様子を見ると、色んな感情が混ざり合った表情でぷるぷるしていた。
俺が居る状態でこんな話を聞いたから、尚更ダメージが大きいかもしれない。
結衣が後悔を前面に押し出していると――
「うおほぅぉっ!?」
――背中に物凄く柔らかい感触がして、自分でもびっくりするくらい気持ち悪い声が出た。
今の声はもう、結衣が一体どれ程気持ち悪がることやら……と恐る恐る見てみると、予想した反応と違って、結衣はわなわなと震えて俺の肩の辺りを見ていた。
「ま、ママ！　何やってんの!?」
「うふふ～」
「え……」
振り返ると、彼女が俺の背中に凶悪な程豊満な果実を押し付けて、両肩にそっと手を乗せていた。タイミングによっては完全にホラーだろこれ。
ていうかこの状況でこの人だけタオルさえ巻いてないっていうのが本当に意味がわからない。ごちそうさまです。や、そうじゃなくて。
結衣は彼女を指差してぷるぷる震えている。ちょっとこの構図地獄すぎるんですけども。

彼女は結衣の反応を見て、ん～と唸って何やら考え始めた。そして「こう言えば良いかしらね～」と小声で呟いた。俺に聞こえてますけども……。
「結衣……恥ずかしいのは分かるけど、今からわたしが教えることをきちんと覚えたら……ヒッキーくん、とっても喜ぶわよ～」
「え……」
「え……」
あ、そういうアプローチで来ますのん？　マジで？
結衣は彼女の言葉を聞くと目を見開いて、俺にぽてぽてと近寄ってきた。袖をつまむ代わりだろうか、俺の指先をちょんと掴んで、もじもじと上目遣いで見つめてくる。
「……ヒッキー、本当？」
「……っ」
喉に重い石が詰まったかのように、言葉が出なくなる。
や、別に答えに迷ってる訳ではなくて。
ガハマさんの健気さがちょーっと殺人級に可愛いもんだから、思考が止まりました。数秒程ね。
頬をぽりぽりと掻いて、答える恥ずかしさから浴室の壁を見ながら（ふと視線を向けた壁が地味に遠い。本当に広いなここ）、ぽそりと呟く。
「……ああ。超喜ぶぞ」
目を逸らしたまま言うと、結衣の手が俺の両手をふわりと包み込んだ。
「……ん、わかった」
ママ、と結衣が呼ぶと、彼女が「なぁに？」と首を傾げた。
「あたし、ちゃんと頑張るから……よろしくお願いします」
「……ん。よろしい」
なんか師弟関係が成立したっぽい。
……何この青春じみた流れ？
あと、彼女は結衣と会話してんのに、なんで俺の背中に胸を更に押し付けたんでしょうか。

ぜひ説明して頂きたい。その柔らかさの訳を。これ質問の主旨がぶれぶれだな。

×　×　×

もう一度椅子（スケベな方）に座るように言われて、ぽすりと腰掛ける。

タオルを巻いているとはいえ、わずかな興奮ですぐに欲望の主張がばれてしまうから、何だか全裸よりも恥ずかしい気がする。

裸よりも裸エプロンの方が恥ずかしいというのはこういう理屈だろうか。俺何言ってるのん？

どうでも良いけど、今既に半勃ちである。本当にどうでも良かった。

「うふふ～」

彼女がにこにこと（本当に上機嫌そうに）笑いながら、俺の前に膝を下ろした。

その様子を結衣が横からじっと見ているというシュールな状況になっている。

天国なんだか何なんだかもはやよく分からない。

「お店で経験がある訳じゃないから、自分なりに調べて勉強してみたのよ～。だからあまり細かいことは気にしないでね～」

そんなことを言って（細かいことが分かる訳もないので、取り敢えず頷いた）、彼女が、それでは……と、急に艶っぽくなった声を発する。

「本日は……よろしくお願いします」

膝立ちの状態からゆっくり腰を下ろして……ぺたりと正座すると、そのままこちらにぺこりとお辞儀をしてきた。

「……っ」

その上品な振る舞いに完全に不意を打たれ、鼓動が跳ね上がる。結衣は俺の反応を見てあわあわと彼女と俺とを交互にみている。

時が止まったかのように彼女はお辞儀をしたままだったけれど、やがてゆっくりと顔を上げて――俺の脚の間に目を向けるなり、頬に手を当ててあらあらと嬉しそうな声を上げた。

「……あ……」

何事かと思って下に視線を滑らせると、彼女の今のお辞儀一つで、タオルがこんもりとした山を作っていた。
何でだ……と一瞬疑問に思ったけれど、彼女の礼儀正しいお辞儀を見て、これから自分がどれだけ極楽な事をしてもらえるかという、確かな予感と期待が湧き上がったが故だとすぐに気付いた。
「ヒッキー……」
横を見ると、結衣が膨れっ面をして俺の太ももに手を添えていた。な、なんかごめん……。
結衣はジト目でしばらく俺を見ていたものの、こんなことをしてもどうしようも無いと思ったのか、やがて手をすっと離した。
なんか飼い主にお預けをくらっている犬みたいで、見てるだけでぞわぞわする。ぞわぞわするって言っちゃった。
それにしても……と目の前から声がしたので振り向くと、彼女が俺の股間をまじまじと見ていた。
余計に勃つからやめてほしい。
「……どうしました？」
聞くと、彼女は何やらうっとりとした様子で惚けたように口を開く。
「今の挨拶は、なるべくわたしの立場が下になるような言い方にしたんだけど……それでこんなに大きくなるなんて……やっぱり、ご主人様の才能があるのねぇ……」
「え」
「え」
「何でもないわ～」
俺と結衣が目をむいて固まると、彼女は俺たちの視線をひょいと躱して立ち上がった。え、この人、今なんて……？
俺と結衣のどちらかが今の彼女の台詞を聞き直すよりも早く、彼女はひょいひょいと道具を持ってきて、俺の目の前に置いた。
以下、目の前に陳列された道具一覧。
洗面器。
ボディソープ。

スポンジ。
ローション。
……。
何が起きるか大方の予想が付いて、ごくりと息を呑むと――彼女が、俺の両脚の間に入り込んで、たおやかに腰を下ろした。
膝立ちになって俺の内腿に手を添えると――そのまま、腰に巻いたタオルの中に手を滑り込ませて、がちがちに隆起した肉棒の竿と陰嚢を優しく手で包み込んだ。
「んぉ……っ」
たまらない快感に声を漏らすと、彼女が妖艶に目を細める。
「それでは……お身体、洗わせて頂きますね？」
「……っ、は、はい、お願いします……っ」
がちがちに緊張した声で答えると、彼女はにっこりと微笑んで、タオルの中で十本の指を妖しく蠢かせた。
ぞくぞくとした快感が背筋を駆け抜けて、鈴口からカウパーが滲んだのが分かった。
白い生地の裏側でゆらめく手指の動きをじっと見つめていると、すぐ隣で結衣が小さく、押し殺すように喉を鳴らす音が聞こえた。
続く。

（16）

由比ヶ浜マ――彼女の手が、椅子に座る俺の腰に巻かれたタオルの中で妖しく動く。

「うふふ……とっても大きいですね」

「……っ」

え、なに、今そういう設定なの？

「お顔も可愛いし……」

え、なに、リップサービスも充実してるの？

「なんだか……」

え、なに、顔が急に近付いて――

「……んむっ……」

俺の肉棒を手で弄りながら、彼女がゆっくりと唇を重ねてきた。

彼女の唇と双丘が帯びている湿り気が、浴室の湿り気と合わさって更に艶めかしいものになっている。

甘い吐息を漏らしながら、彼女は俺の口内に舌を侵入させて淫猥に舐り立てる。

ちゅぴちゅぴと舌を吸い立てる音が浴室に反響して、卑猥な音色に聴覚が犯される。

「んふぅっ……んっ、んっ、ちゅりゅっ、ちゅぷ、ちゅぱ、ちゅぱ、ちゅぱ……ちゅぷぷ、ちゅぴぴ……っ」

音が響くのが分かっているからなのか、敢えてやっているとしか思えないくらい音を立てて、口でのまぐわいをねちっこく続ける。

そうしている間も手のひらで亀頭と陰嚢をしゅるしゅると撫でられ、腰ががくがくと前後に揺れる。

目を開けて彼女を見ると、俺の反応をつぶさに観察しようとしているかのように、妖しく目を細めてこちらをじっと見ていた。安らぎとほんのわずかな恐れが同時に湧き起こる。

これ、このままだとタオルを巻いたまま一回出しちまうんじゃねぇか……？　と思っていると、隣から犬のような唸り声が聞こえた。

「う～……」

「……結衣……」
口を離して結衣に目を向けると、俺の太ももに手を添えた結衣が膨れっ面で見つめていた。や、そりゃそうだよね……。
どうしたもんかと困っていると、彼女が俺に軽く口付けして、結衣にくるりと顔を向けた。
「結衣、すっごくもどかしいし嫉妬してると思うけど……それは、ヒッキーくんがこんなに夢中になっているからでしょう？」
「う、うん……」
「そうよね。だからこそ、今わたしがやっていることを……結衣がすごく嫉妬してしまっていることを、今度は結衣がヒッキーくんにやってあげたら……それだけ、ヒッキーくんは今と同じように、いいえそれ以上に、夢中になってくれると思うの」
「……そ、そう、かな……う、うん、言われてみればたしかに……」
「だから、ね？　今は苦しいでしょうけど、後々……ううん、この後すぐにでも、結衣がヒッキーくんを幸せにしてあげられるから……我慢してちょうだい？」
「う、うん……わかった」
結衣が胸の前で手をぐっと握りしめて頷いた。
す、すげえ。丸め込み方が巧みにも程がある。流石っすガハママさん。
さて、と彼女が言うと、再び俺に顔を向けてにこりと微笑んだ。
「それじゃあ……キスの続きをしましょうか」
「え」
「だめ……ですか？」
言って、彼女が上目遣いで俺を覗き込み……唇で首をはむっと咥えた。
「あむっ、ちゅるるっ、ちゅっ、ちゅぴっ、ちゅりゅりゅ……っ」
「ちょ、ちょっと待ってください。します、しますから」
顎の下を襲うくすぐったさと悦楽に耐え兼ねて、ものの数秒で降伏してしまった。
俺の返事を聞いて、彼女がぱっと口を離し、にっこりと微笑む。

「本当？　じゃあ……」
タオルの下に手を潜り込ませて、唇をもう一度重ねてきた。
視界を彼女の可愛らしい顔に覆われる直前、一瞬だけ目に入った結衣の表情は、再びぷっくりと頬が膨らんでいた。
×　×　×
「……ぷはっ。うふふ～……それじゃ、今度こそお身体洗いますね」
「……」
口付けを終えた彼女が、さっと切り替えて次の行動に移ろうとするが、俺はそれどころじゃなかった。
キス、なっが。
しかも、キスしながら手で弄られて、イク寸前で何度も止める焦らしプレイをされたもんだから、なんかもう目が血走っている気がしてならない。
彼女が手を持ち上げてタオルを外す。分かってはいたが、欲情しきった肉茎は予想通り、いや予想以上に凶悪に反り返っていた。
「ふわ……っ」
結衣が可愛らしい声を上げて、肉槍に見惚れる。
その目は既に発情していて、鼻をすんすんと鳴らす度に上気した身体がぶるりと震えた。
いつもならこのまま、ぷるぷるの唇を割り開いて口でしてもらうところなんだけど……今はそうもいかない。
なんだか、俺も結衣もおあずけを食らっているような気分だ。……つくづく、今の状況は不思議でしょうがない。
「ふんふんふ～ん♪」
彼女が楽しさ全開と言った風に準備をするのを、俺と結衣がじっと見つめる。
結衣の視線は彼女と俺の脚の根本を行ったり来たりしていて、まるで落ち着かない。
「……結衣、その、なんだ……あんまり見られると……」
「う……ご、ごめん……」
なんだか変な時間が流れている。気まずい訳ではないんだけども。

彼女は、空の洗面器を自分の前に置くと、スポンジに熱いお湯を染み込ませた。
そしてそこにボディソープを４～５回程プッシュして、お湯を足しながらスポンジをわっしゅわっしゅと揉んで泡立てる。
ほんの僅かな間に、彼女の手が見えなくなる程大量の泡が出来上がった。
用意していた洗面器に作った泡を落とすと、手にローションを垂らし、５００円玉くらいの量が出たのを確認してそれを洗面器の泡に混ぜ込んだ。
ふわふわの泡にとろみが加わって、急に泡が艶を帯びた気がした。
とろとろぬるぬるでふわっふわの泡が出来上がると、彼女はシャワーヘッドを手に取り、お湯を自分の腕にかけた。
どうやらお湯の温度を確認していたようで、数秒浴びて小さく頷くと、俺に手を前に出すよう促して、そっとシャワーをかけてくれた。
「熱くないですか？」
「あ、はい。ちょうど良いです」
敬語を使われると、まるで本当にそういう人に相手をしてもらっているような気分になる。
妙にこそばゆいし隣からのジト目の圧がやばい。
首や肩にお湯をかける時、俺の顔に水しぶきがかからないようにとヘッド周りを手でガードしていた。
気遣いがすごいなと思ってちらりと隣に目をやると、結衣は俺にジト目を向けつつも彼女には勉強熱心で真剣な視線を注いでいた。
なんだこの状況……。
きゅっと蛇口をひねる音がして、シャワーが止まる。彼女の手が洗面器の泡の中にすっぽりと入り込むと、鼓動がどくんと早くなった。
両手いっぱいに泡を掬って、俺の目の前に持ってくる。自分で摘んできた花を見せる子供のような無邪気な笑顔を浮かべたかと思うと、ちゅっと俺の唇を塞いだ。
……結衣が目の前にいなかったら、これは本当にやばかったな……。

泡が俺の胸にふわりと着地して、彼女の両手でぬるりと広げられる。
温もりといやらしさが同居した不思議な泡の感触に陶然としていると、そのまま首から腕、腰から足にまで彼女の手が伝い、ゆっくりと身体全体が泡立てられていく。
「これ……すげぇ気持ち良いっす……」
温泉にでも浸かっているかのような声音に自分でも驚く。
彼女は俺の言葉を聞いて、あらあらと嬉しそうに笑った。
「それは良かったです……それでは、こんなのはどうでしょうか？」
「え？」
聞き返すと、彼女は俺の身体に塗っていた泡を、今度は彼女自身の身体の胸に塗り始めた。
「ん……っ」
艶めかしい吐息にごくりと喉が鳴る。
彼女の柔肉は手の動きに沿ってむにむにと形を変えて、徐々に白いヴェールに覆われていく。
双丘が雲に覆われてほとんど見えなくなると、お腹にも同様に塗りつけた。
……これって……まさか……。
「うふふ……失礼しますね」
「うぉ……っ」
女の人に洗ってもらうからこそ出来ることに想像が行き着いて胸を高鳴らせていると、彼女が俺の腹に手を添えて、滑るように背中に手を回した。
そして、妖艶に微笑むと、ゆっくりと豊満な身体を近付けてきた。
続く。

（17）

由比ヶ浜マ――彼女が、ローションを絡めたボディソープを豊満な肢体に塗り立てて、椅子に座る俺に膝立ちでゆっくりと身体を寄せてきた。

彼女の目は艶っぽく細められていて、その瞳を見つめただけでも心臓が高鳴る。

俺の背中に回した手で、そのまま肩を後ろから掴んだ。

「ん……っ」

甘い吐息と共に――極上の感触が身体を包み込む。

感嘆の吐息が、深く深く漏れた。

豊満な乳鞠の感触に、とろとろのボディソープの滑らかさが加わって、思考が残さず蕩けてしまいそうな程安らかな快感が訪れる。

彼女は俺の反応を見てにっこりと微笑み、むにゅむにゅとマシュマロを押し付けてくる。

「うふふ……気持ち良いですか？　それじゃあ、こんなのはどうでしょう」

言って、彼女が身体を密着させたまま下に滑ると、肩を掴んだ手に力を込めて、牡と牝の密着を強めながらゆっくりと上ってきた。

ぬるりとした感触と共に、同時に数ヶ所で湧き上がる快感に悶絶する。

「うあぁぁぁ……っ、こ、これ、やば、やばい、で、す……っ」

互いの乳頭が擦れ合い、楚々として茂った恥毛が反り返った肉棒の裏側をぐりぐりと撫でる。

彼女は俺の反応をうっとり顔で楽しみながら、その顔に見惚れてちょうど口が恋しくなるタイミングで口付けをしてくる。

ちゅるりと差し込まれた舌は、俺がもっともっと欲しくなる瞬間に引き抜かれて。

ああ、今俺は、心も身体もこの人に掌握されているんだな――と思い、奇妙な陶酔感が身体を包んだ。

「うふふ～、どうしますか？　一回出してすっきりしちゃいましょう

か？　お客様のおちんちん、と～っても逞しいですから……一度や二度出したくらいじゃとても収まらないですよね？」
　言いながら、彼女は腰を上下にスライドさせて、淫裂で肉棒の裏筋を咥え込んでにちゅにちゅとしごき始めた。
「あ、ちょ、待って、まだなんか……」
　勿体ない……などと、自分でよく分からない言葉が喉から出かかった瞬間、彼女の腰の動きが激しくなった。
　恥毛が裏筋をにゅるりと舐る快感に身震いすると同時に、彼女の悪戯心が分かって、ぞわりとした感覚が背筋を走る。
　にちゅっ、にちゃにちゃ、にゅちゅく、にゅちにゅち……。
「うふふ～。お客様、今なんとおっしゃいましたか～？　わたし、ご奉仕に夢中になってしまってよく聞こえませんでした。申し訳ありませんが、もう一度おっしゃって頂けませんか？」
「う……っ、ぐぅ……っ、あぁ……っ！」
　口では謝りながらも、腰の動きは益々激しくなっていて、いよいよ下半身の決壊が近付く。
　彼女の腰の動きに巻き込まれて、それに合わせるように腰ががくがくと前後してしまい、身体の奥底のマグマの対流を強く感じる。
「ちょ、ほんと、ほんに……っ」
　動きを何とか止めようと、彼女の腰に手を伸ばす。尻を掴んで動きを止めようと試みる。
　極上の柔肉を、がしりと掴んだ――その瞬間。
　にゅぷっ、と。
　未知の感覚が指を包み込んだ。
「はぁぁぁぁんっ！」
『っ!?』
　まるで予期しないタイミングで聞こえた甲高い嬌声に、俺と結衣の身体がびくりと跳ねる。
　彼女は腰の上下運動を止めて、代わりに腰が抜けたようにがくがくと前後に揺れている。
　彼女の妙な反応と、中指を強烈に締め付ける感覚。

……まさか、これって……。
「はぁっ、はぁっ、はぁっ……お、お客、様……？　もう、だめですよぉ……そこは。……後ろの、穴、は……っ」
「……っ」
やっぱり――と思った瞬間に力が入ってしまい、中指が尻穴の中に更に入り込んだ。
ローションが絡んでいるため、意外な程すんなりと指の根本まで挿入されると同時に、彼女の身体ががくがくと痙攣した。
「んはぁぁぁっ！　お、お客様、だめ、ほんとうに、だめですってばぁ……っ」
顔から脂汗を滲ませながら、彼女が俺にしな垂れかかる。
俺の行動を止めようと身体を密着させて右腕を掴んできたが、あまりにも艶っぽい反応に指が止まらなくなる。
にゅこにゅこと中指の挿入を繰り返すと、耳元で漏れる吐息に変化が見え始めた。
「あ、あぅ、んふぁぁっ、あっ、あっ、あっ……」
その声からは、年上女性の余裕ある態度が見る間に消え失せて――ただの、一人の牝の姿に変わっていく。
その変貌にぞくぞくして、身体がぶるりと震えた。
指を折り曲げて中の肉を抉ってやると、その度に彼女は言葉にならない声を上げて、抱き付く力を強める。
そろそろ限界かと判断して、もう一度中指を引き抜いてずぐんと突き立てる。
――と。
「はぁうぅぅぅぅぅぅぅっ！」
獣の遠吠えのような鳴き声を上げて全身を戦慄かせ、中指を食いちぎらんばかりに締め付けてきた。
肉裂から噴き出した熱い液体が、肉槍にびしゃびしゃとかけられる。
指をずるりと引き抜くと、彼女の身体が崩れ落ちて、内ももに手を添えて虚ろな瞳で剛直を見つめた。

「あっ、あはっ、お客様、鬼畜ですね……ほんと、すてき……っ」
『……っ』
痴態を惜しげもなく晒して、あまりにも妖艶に微笑む様に、俺だけでなく結衣までもがごくりと喉を鳴らした。
「でも、だめですよ……お客様？」
「え……」
「ボディソープが絡んでいるんですから、これでは穴の中が染みてしまいます」
「あ……」
言われて気付き、はっと右手を見る。
右手には、まだボディソープがたっぷりと付いていた。
まるで汚れていないことに内心どきどきしながら、慌てて謝る。
「ご、ごめんなさい。どう洗うと良いでしょうか」
言うと、彼女がくすりと笑った。
「ん、素直で良いですね。……こういうところも、結衣の女心をくすぐるのかしら。ねえ？」
彼女が結衣に首を向けると、結衣は顔を真っ赤にして背けた。
「い、今それどころじゃないでしょ……っ！　早く洗わないとっ！」
「うふふ、それもそうね～」
それどころじゃないというツッコミは、これ以上無い程的を射ていた。ほんとそう思う。
何気にすげぇ恥ずかしいくだりだったから、流れてくれて助かった……。
それでは――と彼女が言って、シャワーヘッドを掴む。先程と同じようにお湯の温度を確認すると、俺に右手を出すよう促して、大丈夫かと目で尋ねてきた。
こくりと頷くと、そのまま右手の泡を洗い流す。
右手に残る強烈な感覚が、水流に呑まれて流されてしまうのが名残惜しく思えた。
ついでに左手も洗い流すと、彼女はそのまま俺にシャワーヘッドを手渡した。

「それじゃあ、わたしのここ、洗い流して頂けますか……？」
「へ……うおぉぉっ!?」
彼女の行動に、間抜けな声を上げて目を見開く。
彼女は俺にくるりと背を向けると、四つん這いになってこちらに尻を突き出した。
泡の残る巨大な双丘の肉感に見惚れて。
淡い桃色の花びらがもの欲しそうに蠢く様に息を呑み。
ぬらぬらと濡れ光るセピア色のすぼまりが、絶頂の余韻を残して息づくように収縮している様に、言葉を忘れた。
「う……わ……ママ、すご……っ」
隣を見やると、結衣が口に手を当てて、顔を真っ赤にして感嘆の声を上げていた。
その反応を見て、妙に納得してしまう。
こんな状況下でも、結衣がただただ感動してしまう程、彼女の艶姿は官能的で、２人を絶句させる力があった。
目の前の双丘が、ゆらゆらと蠱惑的に揺れた。
「うふふ……早く洗ってくださいませ？　きちんと、奥まで……ね？」
言葉に連動するかのように、菊穴がひくひくと収縮する。
ごくりと息を呑んで、彼女の中を洗うのに使う右手をじっと見つめる。
不意に、背中に柔らかな圧力をかけられた。
「結衣……？」
振り返ると、結衣が切なげな表情を浮かべて俺に抱き付いている。
頬にそっと手を添えると、優しく握り返された。
「ごめん、なんか我慢出来なくなって……。邪魔しないから、このままでいい？」
「あ、ああ、わかった……っ」
子犬のような目で可愛らしく見つめられては、即座にオーケーする以外の選択肢が無い。
ますます訳が分からない状況になっていくことに、本当に思考を放棄してしまいそうになりながら。

結衣に抱きしめられたまま、シャワーヘッドをきゅっと握りしめた。

続く。

（１８）

あまりにも特殊な状況に、次の行動へすぐ移ることが出来ない。
浴室の中は、官能の湿り気を帯びていた。
目の前の豊満な臀丘に見惚れ、背中に押し付けられた双丘の柔らかさに陶然とする。
「ほら……、はやくぅ……」
「……っ」
由比ヶ浜マ――彼女が、自分を絶頂に追い立てた相手に、早くボディソープが付いた尻穴を洗うようおねだりしてくる。
蠱惑的に尻を振ると、ひくひくと蠢く淫裂と、収縮を繰り返す尻穴を目で追ってしまう。
「じゃ、じゃあ……」
息をごくりと呑みながら、シャワーでもう一度手を洗う。
美臀にそろりと手を伸ばし、片房ずつ鷲掴みにすると、白玉のような柔らかい肌に指が食い込んだ。
「はぁぁん……やぁん……っ」
両手で二つの牝穴を押し広げ、入り口が牡に向けて開かれる様を凝視していると、彼女は艶めかしい淫声を上げて腰をくねらせる。
どこを切り取っても牡を呼び寄せる仕草がたまらない。
「……っ」
今、俺の肩に顎を乗せて、小さく喉を鳴らしているこの子も、いずれこうなるのだろうか……？
そう思うと、下半身の奥底にたまらない愉悦が走った。
両手で豊満な丘を寄せると、花びらが擦れ合う音がぐちゅぐちゅといやらしく響く。
もう一度開いた所で、一層艶めかしく蠢く菊穴に中指を添えた。
くっと力を入れると、一瞬の抵抗の後ずるりと指が呑み込まれる。
「はぁぉぉぉぉぉぉ……っ」
豊満な牝の丘が、ぶるぶると戦慄く。
下半身に次々と血流が送り込まれるのを感じながら、ずぶずぶと牝

穴に侵入させていく。
「はぁぁぁん……うぅぅぅ……っ」
彼女は力無く肘を折り曲げ、床に額を付けた。美尻にじんわりと滲んだ汗はねっとりとしていて、ずっと見ていたくなるほど艶めかしい。
ぐりぐりと中を捏ねくりまわしながら指を引き抜き、それを一度シャワーで洗う。
中を洗うのだからと一応洗い流しはしたが、改めて全く汚れていないことに驚く。
「……」
ふと、彼女の脇にあったものに目が行く。
そして目の前の牝穴を見て、考える。
「え……ヒッキー？」
結衣の訝し気な声を聞いて初めて、考えるより先に「それ」を掴んでいたことに気付く。
「一応、な……？　これも使った方が、ちゃんと洗い流せる気がするし……」
自分の声が、これからの展開の為に道化じみたものになっているのを内心笑いながら。
「……そ、そうだね……その方が、良いかもね……」
結衣の声にもどこか道化が混じっていることに気付き、二人で目を合わせて力無く笑って、何も言わずキスをする。
これまでの興奮がよほど溜まっているのか、俺も結衣もぐちゅぐちゅと交尾をするかのように舌を絡める。
目の前の牝二人が放つ媚香が益々濃密になっているのを感じ、陶然としながら。
「それ」を手に取り、蓋を開けた。
×　×　×
「……ヒッキー、くん……？」
彼女が、不安げに声を漏らす。自分に何もしてこない上に、すぐ後ろで会話をする声と生々しい水音が聞こえたのだから、それも当然だ

ろう。
振り向かずにこちらに問い掛けて、微かに臀丘を震わせている。
「すみません。もうちょっときちんと綺麗にしようと思いまして」
これから訪れるであろう至福の時に心を躍らせながら、蓋を開けた容器からとろとろの液体を手に垂らす。
「え、それはどういう……っ!?」
両手でにちゃにちゃと混ぜ合わせる音を聞いて、彼女の声が上ずる。
何も言わずに彼女の尻に手を置き、緩慢な動作で撫で回しながら、
「だ、だめ、それを使ったら……はぅぅぅぅっ！」
中指をずるりとねじ込んだ。
潤滑液を纏った指はいとも簡単に彼女の排泄器官を犯し貫き、獣のような声が浴室に響く。
「す……げ……っ」
指を食いちぎらんばかりの刺激に陶然として、夢中で中指で掻き回す。
ぎちぎちと締め付けてくる粘膜を押し返しながら、抜き差しを繰り返す。
「んぐぅぅぅ……あひぃぃぃぃ……っ」
彼女はぶるぶると震え身を捩り、許しを乞うように尻を振り乱す。
逃さぬようにいじめ続け、官能がどこまでも高まっていく。
指が抜ける直前まで引くと、逃げたがる彼女の意思とは反対に、発情した肛肉が牡の身体を逃がすまいと吸い付いてくる。
――ふと、目の前でひくついている、肉花びらに目が行った。
僅かな逡巡を経て。
そこに、空いた親指をねじ込む。
「ひぃぃぃぃんっ!?」
彼女の声が、より濃密な官能の色を帯びる。
中指と親指で二つの牝穴を蹂躙すると、征服欲が一気に満たされて、更に欲望が深まっていく。
「こんなにぐっちょぐちょにして、恥ずかしくないんですか？」

挑発するように言いながら、手を握り込むようにしてそれぞれの肉襞を抉る。
リズム良くぎゅむぎゅむと繰り返すと、その度に背中を弓なりに反らせて狂ったように喘ぐ。
――なんて、気持ち良さそうな肉なんだ。
ここに挿入したら、一体どれだけ気持ち良いんだろう。
一度考え始めたら止まらない。
そうだ、何回かイカセて、全く抵抗出来なくなったら彼女に挿れよう。マットに身体を寝かせてたっぷりと。それか今この場でアナルに挿入するのも良いかもしれない。
再現なく欲望が湧いてきた所で――
「……うおっ!?」
不意に襲った感触に、思考が止まった。

× × ×

「……ゆ、結衣……っ!?」
いつの間にかローションを手に塗した結衣が、俺の肉棒をしっかりと握り込んでいた。
潤滑液により肉棒を掴む指が緩慢に動き、雁首に添えられた指の刺激に身体が戦慄く。
その瞳には情欲の炎が燃えたぎっていて、何を言い出すのかとびくびくしてしまう。
何事かと彼女も振り返って、俺たちを見ている。
「……ヒッキー、ちょっとやりすぎだよ?」
「……っ、す、すまん……」
幾分冷たい声音にびくついて、思わず目を逸らす。
でも、と結衣が言葉を続ける。
「……ママ、だいぶ好き放題やってるから、お仕置きとしてなら……ありかな」
『ゆ、結衣……?』
結衣から発せられた言葉に、俺と彼女は同時に声を上げる。
――今、この子は何て言った……？　あの結衣が、こんなことを

……？
「よし、ヒッキー。続けて良いよ。……ただし、容赦はしないでね」
「ゆ、結衣……あなた、何を……っ」
彼女が震えている。その口の端は、奇妙に吊り上がっている。
本当にいやがっているのか、甚だ疑問に思える表情だ。
「それと」
「うぐ……っ!?」
肉棒を握り締める手に急に力を込められ、潤滑液がぬちゃりと音を立てる。
「ヒッキーがママを責めてる間、あたしはこれ、いっぱい手でしてあげるね」
二人で散々楽しんでたんだから……と結衣がどこか子供っぽく口を尖らせた後、その面影を消し去って妖艶な笑みを浮かべる。
「これは……二人に対してのお仕置きだよ。……それじゃ、始めよ？
……んむっ」
「……っ」
俺も彼女も呆然としたままで、結衣が唇を重ねてきて、それと同時にゆっくりと肉茎がしごかれ始める。
何も選択肢が与えられていないこの状況に驚きながら。
俺は結衣と口付けをしながら彼女と一瞬目を合わせ、意思を交わす。
彼女がこくりと頷き顔を突っ伏したのを確認して……二本の指を再び動かし始めた。
続く。

（19）

由比ヶ浜マ――彼女が、浴室の床に額を押し付けて、淫猥な丸みを帯びた尻をこちらに突き出して震えている。俺は彼女の尻穴に右手の中指を、そして淫裂に親指を差し込んでいる。俺の背中には結衣が豊満な柔肉を押し付け、後ろから回した手で肉茎をしっかり握っている。彼女の二つの穴を犯す俺の手にも、肉棒をしごく結衣の手にも、ねっとりとしたローションがたっぷりと塗られている。シャワーを出しっぱなしにしている訳でもないのに、浴室の温度と湿度は上がるばかりで、気付けばじっとりと汗ばんでいた。

「それじゃ……行きます」

「んふぁぁぁぁ……っ」

二本の指をゆっくりと握り込むように動かすと、彼女が身体を戦慄かせて甘い嬌声を漏らす。親指は柔らかい肉襞にくにくにと締め付けられ、中指はどこか空洞のように思える肛肉が、一律に四方から強く締め付けてくる。

「うぐ……っ」

俺が手を動かすのに合わせて、結衣もゆっくりと肉茎をしごき始める。指を波打たせながら、亀頭を撫で回し、雁首をなぞる。その度にぞわぞわとした快感が駆け抜け、先走りの汁がローションに紛れ溶けていく。

「ママもヒッキーもすごい……っ」

耳元で囁く結衣の蠱惑的な声と、俺の指の動きに悶える彼女の甘美な喘ぎ声が、被虐的欲求と嗜虐心を同時に沸き立たせる。指を大きく速く動かせば、その分だけ彼女は遠慮なく喘ぎ狂って。そしてその分だけ、結衣が肉棒を強く速くしごいてくる。彼女と俺の腰が際限なくがくつき、意識が朦朧としてくる。

結衣が、俺の耳にちゅっと口付けをして、空いた手で俺の乳首を撫でてきた。

「あぐぁっ……」

悶絶して手の動きを止めると、結衣がくすりと笑った。隣を見やる

と、結衣の瞳が妖しく細められていてぞっとする。目の前で喘ぎよがる彼女と見比べて、恐ろしい程似ていると思った。
「もう……だめだよヒッキー。ちゃんと手を動かさなきゃ……ね？」
可愛らしい声に冷徹な響きが混じったかと思うと――俺の耳に舌を挿し込み、乳首を指の腹で撫で上げ、肉茎をしごく速度を急激に上げた。
「ぐあぁぁっ!?」
突然三方向から襲ってきた快楽の奔流が、身体の奥底でぶつかり合って悶絶する。必死で身体をよじらせるが、結衣はぴったりと俺の身体に張り付いたまま逃がしてくれない。
「ヒッキーがママのことちゃんといじめないから、あたしが煽らなきゃって思ったんだ。……ほら、早くしないと、ヒッキーおかしくなっちゃうよ？」
「……っ」
細められた瞳孔から、今までずっと見てきた筈の温もりが抜け落ちていることに気付いてぞっとする。肉棒をしごく手の動きは全く容赦が無い。ローションが塗られているからこそ許される、乱暴一歩手前の強いしごき方だ。恐らく、このまま俺が何もしなかったら、例え絶頂に達したとしても手の動きを止めてくれるとは限らない。
――と、ここで不意に、結衣が口を尖らせた。突然幼くなった表情に戸惑っていると、結衣が拗ねた声音で話し始める。
「……ヒッキーのばか。ママとばっかりして……」
「……っ」
ぽろりと零れた恋人の本音に、ほろりと相好が崩れる。
「……あー、その、なんだ……ほんと、わりぃな。この後、結衣としたいんだけど……良いか？」
尋ねると、結衣の顔がほぉっと明るくなる。頬にほんのりと赤みが差して、結衣の魅力的な笑みが一層輝いた。
「……うん、良いよ。……じゃあ、まずはいっぱい出してね」
「あ、そこは許してもらえないんだ」
「それはそれは、これはこれ。えへへ……」

「うぐ……」
にへらっと幸せそうに頬を緩めてるのに、手の動きが若干さっきより速くなった。会話に温もりは戻ったけど、状況自体はほとんど変わっていない。
これは、少し急いだ方が良さそうだ。
「それじゃ……とどめ、刺しますね」
彼女に呼びかけると、びくりと身体が跳ねた。何をされるのかと震えている豊満な肢体に、空いた左手を伸ばす。そして淫裂のすぐ上でぷっくりと膨らんだ肉芽を、にちりと掴んだ。
「ひぃぃぃぃぃぃぃんっ!? はぁっ、そ、それ、あがっ、ひぎっ、んくぅぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……っ！」
肉芽をしっかり摘まんだまま、中指と親指をわっしわっしと握り始める。肉を間に挟んで、二本の指が互いの感触を確かめられるくらいまで、念入りに揉みほぐす。
「んふぁぁぁ……はぁぁぁぁぁ……っ！」
彼女は快感の衝撃で再び顔を上げて、背筋を弓なりに反らせてまるで犬の遠吠えのような恰好で喘ぎ始めた。彼女を呑み込む肉悦の波に比例して、結衣が俺を責める強度も増していく。
「ヒッキーの責め方、すごい……。ヒッキーも、ほら、気持ち良くなって？　ね？」
「うぐぁぁぁ……っ！」
指を包み込むぬめりと熱が増すごとに、下半身の決壊が近付く。彼女はタイルに爪が食い込むのではないかと思う程強くしがみ付き、絶頂を我慢しているのかずっと絶頂が続いているのかさえ分からない声を上げている。
「あっ、もう、だめ、ヒッキーくん、これ、もう、わたし、あっ、あぁっ、あぁぁぁ……っ」
「ヒッキー、良いよ、出して、いっぱい出して……っ」
「うっ、うぐぐっ、うぐぁぁぁ……っ！」
扇情的な囁き声と喘ぎ声が耳朶を打ち、頭の中で混じり合う。尿道を粘性の高い液体が駆け抜けてきて、視界が白んだ。

――どぶっ、どびゅどびゅどびゅっ、ごぶぶぶ、どぶびゅるるる……っ。
「ひあぁぁぁぁぁぁぁ……っ！」
彼女が涙混じりの声で絹を裂くような悲鳴を上げると、俺の腹めがけて大量の潮を噴き出した。俺自身も、意識が一緒に抜け落ちそうな程の激しい射精をしたことにより、彼女の腹と陰部に夥しい量の白濁液を塗した。透明な牝の液と真っ白な牡の液がローションと混ざり合い、淫猥な沼が出来上がる。
「いっぱい出たね、ヒッキー。よしよし……」
「おい……」
凄まじい射精により強烈な眠気に襲われた所で、結衣が愛おしそうに俺を撫でてきた。恥ずかしいんだけど、それ以上に心地良くてうとうとしてしまう。
ここからどうしようか――と考えていると、彼女がゆっくり身体を起こし、こちらへ振り向いた。
× × ×
「うふふ……楽しかったわ～」
『……っ』
俺と結衣の目が、点になる。
「ヒッキーくんがあんなに獣みたいな責め方してくれるなんて、嬉しい想定外だわ～。それに結衣もあんなことをしちゃうなんて……これからが楽しみね～」
『……』
彼女が乙女さながらに両頬に手を当てて、頬を赤らめながらきゃーきゃーはしゃいでいるのを、俺と結衣が呆然と見つめている。
「……結衣」
「……なに？　ヒッキー」
「お前のお母さん、半端ねぇな」
「……まさかママがこんなにエッチだったなんて……」
「お前もしっかり受け継いでるみたいだけどな」
「え!?　な、何言ってんのヒッキー!?」

「や、だって、さっきのおま……え……っ!?」
結衣と話していると、不意に肉棒を掴まれた。ローションと白濁が入り混じった半勃ちの肉竿が、にちりといやらしい音を立てる。
「あらあら、妬けるわね～」
「や、ちょっと、あの、うぐぅ……っ!?」
彼女はにこにこしながら指を生き物のように蠢かせ、その動きのせいで勃起してくると今度は両手で掴んできた。満面の笑みなのに、その顔にはいたずらっぽさと冷たさが混じっている。
「ちょ、ちょっと、ママ！　ヒッキーはこれから……その、あ、あたしとするんだからっ！　邪魔しないでっ！」
結衣が可愛らしく怒る。すると彼女は結衣をじっと見つめ、それから肉棒を見つめた。釣られて俺も結衣も視線を下ろす。
「あら……でも、ヒッキーくんのここ、お掃除してあげたくない？」
「う……」
何それ……と思ったら、結衣が満更でもない顔をした。二人して口でするのが大好きらしい。そう思っただけで硬度が増してしまう男の性が恨めしい。
彼女が、俺と結衣を交互に見つめ、にっこり微笑んだ。
「今度はあそこで……二人でお掃除してあげましょう」
「え……」
彼女が指差したのは、初めに敷いたプレイ用マット。結衣を振り向くと、目がぱちりと合う。結衣は視線を泳がせて、まだ迷っている様子だ。
「どうやったらヒッキーくんをもっと気持ち良くしてあげられるか、勉強する良い機会になるわよ？」
彼女が蠱惑的に目を細める。この笑みを浮かべたまま咥えられたら……考えただけで、鈴口からカウパーが滲む。
結衣は、数秒程逡巡して、ゆっくり頷いた。
「……わかった。あたしと、ママで、ヒッキーの……こと、気持ち良くしたげる」
「……っ」

震える声でそう告げて、俺の腹を後ろから抱きしめる結衣の腕は想像以上に温かくて。
「それじゃあ、まずはシャワーを浴びましょうか。うふふ、楽しみだわ……」
うっとりと目を細めて俺に微笑みかける彼女の表情は、目を奪われる程淫靡だった。

続く。

（２０）

「お……っ、おおっ、おぉぉ……っ」

前後から押し寄せる肉悦に打ち震えて、言葉にならない声を上げる。

「んんっ、ふぅんっ、んふぁぁ……っ」

「はぁんっ、あふぅっ、ふぅぅ……っ」

前後から聞こえてくる悩ましい声が、浴室の中に染み渡り溶け合っていく。どの声が誰の声で、どこから聞こえてくるのかも分からなくなっていた。四本の手が俺の身体を妖しく撫でていき、一挙一動が牡と牝の官能を高めていく。

今俺は、由比ヶ浜マ――彼女に身体の前面を、そして背中は結衣に洗われていた。

……ボディソープをたっぷりと塗りたくった、艶めかしい身体で。

「マットの上で気持ち良くなってもらう前に、まずはヒッキーくんの身体をきちんと洗いましょうか。結衣、手伝ってくれる？」

彼女が胸の前で手を合わせ、にこやかに微笑んだ。

「え、あ、う、うん。でも……どうやって？」

結衣が戸惑いながら頷くと、手を合わせたままで彼女がゆっくり目を細める。ほんの僅かな変化にも関わらず、背中をぞわりと愉悦が走った。

それはねぇ……と彼女が呟き、ボディソープを自らの胸に塗りたくり始める。下乳や胸の谷間を丹念に揉み込むと、ぬちぬちといういやらしい音と共に、彼女の耽美な喘ぎ声が浴室に響いた。次々と形を変える豊満な乳鞠に見惚れて、ごくりと息を呑む。

一通り塗り終えると、彼女は腕を広げて、白い泡に塗れた扇情的な肢体を惜しげもなく晒した。その光景を見た結衣も小さく喉を鳴らした。

「さ、結衣。こうしてみて？」

「え……う、うん……っ」

結衣は一瞬戸惑ったようだったが、もうこれ以上は遅れを取れないとでも思ったのか、すぐに頷いてボディソープを手に取った。
「ヒッキー、見てて……？」
「お、おう……」
結衣が頬を赤らめて、上目遣いで俺を見つめながら、丹念にボディソープを身体に塗りたくっていく。彼女の真似をしつつ、時折自分で考えて乳房全体を揉みながら塗ると、「んふぁぁ……っ」と甘い声が漏れた。結衣の色っぽい肢体から、全く目が離せなくなる。
やがて一通り塗り終えると、結衣は後ろ手を組んで白い泡に染まった肢体を晒し、恥ずかしそうに俺に流し目を送った。極上の身体が二つ揃って白に包まれる。
彼女は結衣の姿を見て、満足そうに微笑んだ。
「さあ、それじゃあ始めましょうか。まずは……」
――こんな経緯だった。

彼女が俺の首に腕を回し、結衣が俺の内股に腕を絡める。凶悪なまでに豊満な四つの乳房が俺の身体を挟み込んで、二人の甘い吐息と悩ましげな声が耳朶を犯す。
彼女が双丘を上下に滑らせながら、艶っぽく微笑む。
「うふふ……どうかしら、気持ち良い？」
「……気持ち良すぎて、洒落になんないっす……」
「うふふ、良かったわ。それじゃあ……んむっ」
「んん……っ？」
彼女が楽しそうに俺と唇を重ね、口の中に舌を割り入れてしゃぶってくる。身体の外も内も犯されて、気が狂いそうだった。
「むー……ママ、ずるい……っ！」
朦朧として意識の中で、結衣の拗ねた声が聞こえた。彼女は結衣の声を聞くと、唇を離して俺の肩に顎を乗せた。結衣と目の前で顔を付き合わせる形になった。
「うふふ……なら、結衣。耳を貸してちょうだい」
「え、なに……？」

訝しげな様子で、結衣が彼女に耳を寄せる。
「うふふ……ごによごによ……」
何やら内緒話を始めたようだが、いかんせん距離が近すぎるので、微妙に聞こえてしまう。何やら不吉な単語が聞こえたような……。
二人の顔が離れると、結衣がシャワーで自分の手を洗い流して――不意に、俺が座る椅子の尻の下のくぼみにシャワーヘッドを持っていき、俺の尻を洗い始めた。
「うおぉぁっ!?」
変な声が出て身体が跳ねたが、彼女がすかさず肩を押さえ込んできたので逃げられない。
「ゆ、結衣？　何してんだ？」
「……その、一応、ね？　ボディソープも付いてたから……」
説明になってない。全然説明になってない。
この場で俺に説明する気は無いのか、結衣はシャワーを止めると何故かローションを手に取った。先程聞こえた不吉な言葉――「お尻の穴」というフレーズが、急に生々しい響きを纏う。
間もなくして、椅子の窪みに結衣の手がぬるりと侵入して――ローションでぬるぬるになった手のひらが、俺の尻穴の周りを撫で始めた。
「うおぉっ!?」
再び変な声が出た。ぞわぞわとした、快感なのか不快感なのかも分からない感覚に戸惑う。
「そうよ結衣。お尻の筋の中で凹んでる所があったら、そこがお尻の穴よ。そこを見付けたら、まずは指の腹で、こう……刺激するのよ」
彼女が俺の肩裏で指をぴとぴとと当てる。どうやら結衣がどう触ると良いかのレクチャーをしているようだ。
「こ、こう……？」
彼女の指の動かし方を見ながら、結衣が俺の尻穴を探り当てて――指の腹でくにくにと刺激してきた。未知の快感に身体が跳ねる。
「男の人でもお尻の穴は絶対だめって言う人と、結構イケるって人は分かれると思うんだけど……ヒッキーくんはどっちかしら？」

「……っ」
耳元で囁かれた言葉の冷たさと妖艶さにゾッとする。
直後、
「結衣。……入れちゃいなさい。まずは第一関節まで」
「……う、うん」
俺が何か声を上げる前に。
結衣の指――一際長いようだ。中指だろうか――が、俺の尻穴にずぶりと侵入してきた。初めこそ抵抗したが、ローションのぬめりによりあっさりと侵入を許してしまう。
「おぉぉぉぉぉぉ……っ」
鳥肌が立つような未知の感覚に慄き、ぶるぶると震える。結衣は俺の中に指を入れると興奮してきたのか、彼女が何も言わなくても尻の中で指を曲げ始めた。動きの度に得体の知れないくすぐったさに襲われ、身体を揺らすたびに勃起しきった肉棒がぶるぶると震える。
「あらあら……ヒッキーくんはどうやらお尻の穴で感じることが出来るタイプみたいね。良かったわ～」
彼女が俺の反応を見て、呑気なことを言っている。その間も結衣は指をくにくにと曲げ、「ヒッキー、気持ち良い……？」と囁きながら、柔肉を俺の背中に宛てがってくる。徐々に指が尻穴にめり込んでいき、耳元で聞こえる結衣の吐息も荒くなるばかりだ。二人の肢体に挟まれただけでも肉棒はぎちぎちに反り返っていたというのに、それに未知の快感まで加わってしまった。これでもし手でしごかれでもしたら、十秒と持たずに果ててしまいそうだ。
初めて自分の中を蹂躙されて悶絶しながら、ここから一体どうなるんだ……と思っていると、彼女が「結衣、そのくらいにしておきましょうか」と言った。結衣は名残惜しそうにしながらも指をずるりと引き抜く。ゆっくり入れていった為に分からなかったが、思ったより深く入っていたようで、いざ指を抜かれると腰ごと持っていかれそうな感覚に陥った。
「結衣、どうだったかしら？」
「うん……なんか、すごく締め付けてきて……すごく、エッチだった」

母娘が俺を挟んで、こんな可愛い顔をしていながらひどくいやらしい会話を交わしている。
彼女が俺を見つめて、ぺろりと舌なめずりをした。
「ヒッキーくん。今日はこれ以上わたしだけで楽しんだら、結衣に怒られちゃうからやらないけど……今度時間があったら、してあげたいことがあるの」
「な……何ですか？」
どきりとして、尋ねる声が上ずる。彼女はうっとりと目を細めた。
「うふふ……ヒッキーくんにベッドの上で四つん這いになってもらって、わたしがベッドの下の床で膝立ちになるの。それでヒッキーくんのお尻の穴を舐めながら、胸でヒッキーくんのおちんちんを挟んで……いーっぱい搾ってあげる」
「……っ」
この人、頭がおかしいんじゃないか。
エロすぎるだろう。
純粋に、そう思った。
「むー……ママ、それ、今度あたしにも教えて」
「え、おい、結衣？　お前何言って……」
「良いわよ～。二人でたっぷり搾り取ってあげましょう」
俺の意思は一切関係無しで、恐ろしい計画が立てられている。俺の身体、これから持つかなぁ……。
「さ、そろそろマットに移動しましょうか」
三人それぞれの身体を綺麗に洗い流して、彼女が言う。
ちらりとマットを見やる。
ビデオでしか見たことがないような、銀色の、イカダのような形状をしたマット。
結衣と彼女を交互に見やると、既に二人とも発情のスイッチが入っているようで、吐息が熱を帯びている。肉棒を見つめる目がぎらついて、獣性を帯びている。
二人に手を引かれて立ち上がると、肉槍はぎちぎちに反り返り、先走り汁を滴らせていた。

肉悦の宴は、まだまだ終わらない。

続く。

（２１）

「それじゃヒッキーくん、そこに頭を乗せて仰向けになってもらえるかしら」

由比ヶ浜マ――彼女が、マットの端を指差して言う。謎の膨らみはどうやら枕の役割を果たしているらしい。タオルが敷いてあるので、そこに頭を乗せれば良いようだ。二人に手を引かれているので、三人並んでマットの上に膝を乗せる。中々シュールな図だ。

「……っと。こんな感じですか」

タオルに頭を乗せて、だらりと身体を伸ばしながら聞く。

「そうね、大丈夫よ～。じゃあ結衣、こっち来てくれる？」

「う、うん」

彼女が結衣を手招きすると、二人は俺の膝を挟んで左右に座り込んだ。二人ともごく自然に女の子座りをしている。結衣は少しあどけない雰囲気が出てとても魅力的だ。しかし彼女は彼女で、本来そんな姿勢をとる年齢ではないということもあってか、そのギャップで破壊的に可愛くなっている。俺が動揺しているのに気付いたのか、彼女は俺をちらりと見てにんまりと目を細めた。心を見透かされた気がしてどきりとする。

「うーん……」

不意に。

彼女が顎に手を当てて、俺を見ながら唸り始めた。なんぞや。

「どうしましたか」

尋ねると、彼女は俺の爪先から頭までじっと眺めて、ほふっとため息を吐いた。なんでため息まで色っぽいんだこの人は……。

「ヒッキーくん……意外と良い身体してるわね～」

「……どうもです」

そういうことか。まあ、確かに身体をちゃんと見せるタイミングは無かったかもしれない。

「結衣、どう？　ヒッキーくん、良い身体してるでしょう？」

まさかの飛び火。

「え、ええ!?　……あ、や、うん……その……結構がっしりしてるよね。普段からは全然想像つかないけど」
「お前な……」
　頬を赤らめながら指先を合わせてもじもじしてるのはものすごく可愛いんだけど、何気に母娘揃って俺をひょろひょろ扱いしてたことが分かってちょっと悲しいです。
　彼女をちらりと見やると、今度はその視線を俺の股間に注いでいた。ちなみに今のやりとりをしている間に落ち着いたのか、ほぼ平常時の状態に戻っている。
「結衣、相談があるんだけど」
「な、なに？」
　彼女が急に表情をきりりと引き締めたことで、結衣は女の子座りをしたまましゃきんと背筋を伸ばした。
「今から、わたし達はヒッキーくんを喜ばせようとしているのよね」
「うん」
「ヒッキーくんをたっぷりと喜ばせてあげるために、ちょっとした準備がしたいのよ。いい？」
「……いいけど、何するの？」
　俺が寝そべっているすぐそばで、謎の母娘会議が繰り広げられる。
「まずは、膝立ちになってくれるかしら」
「え？　う、うん」
　彼女の指示通りに結衣が膝立ちになると同時に、彼女も同じ体勢を取った。二人の標高が急に高くなって、一体何が起きるのかと固唾を呑んで見守る。
「それじゃあ、結衣。言っておくけれど」
「な、なに？」
「これからわたしがすることは、ぜ～んぶヒッキーくんを喜ばせてあげる為の行動だからね？」
「……わかった」
「よし、それじゃあ、手を繋ぎましょう」
「え、え、え？　う、うん……？」

結衣も俺も盛大に首を傾げたまま、彼女と結衣が両手を繋ぐ。向かい合っているので、まるでキャットファイトでも始めるかのような体勢になっている。一体何が起きるんだろう……と全く予想が出来ないでいると。

「よし、それじゃあ――んむっ」

「んむ――っ!?」

「え……っ」

目の前で起きた光景に、思考が止まった。

× × ×

彼女と、結衣が、俺が見ている目の前で。

「んむっ……ちゅるっ、ちゅぴっ、ちゅるる、ちゅぴ、ちゅぴ……っ」

「んむふぅぅぅ……んふぅっ、ふぅっ、んっ、んっ、んん……っ！」

――唇を重ねていた。

彼女が結衣の手を握ったのは、逃げる事も抵抗する事も出来なくさせる為だったのだろう。結衣は目を瞬かせながら必死にもがいているが、彼女の責めにまるで逆らえていない。

結衣の頬がぼこぼこと膨らむ。彼女が舌をねじ込んで、内頬を舐め回しているんだろう。二人の荒い息遣いは悩ましくて艶っぽく、浴室に響く口付けの淫猥な音が耳朶を打つ。結衣の抵抗が弱まってくると、彼女は手を繋いだまま結衣を引き寄せて身体を密着させた。豊満な乳房がぐにゅりとひしゃげて、卑猥な形に変化する。いよいよ結衣に抵抗が無くなってくると、彼女は結衣から手を離し、今度は結衣の二の腕を挟む形でぎゅっと抱きしめた。口付けを続けたまま、結衣をぎちぎちに抱きしめる。結衣の身体がぶるぶると震えて、瞳が徐々に蕩けていく。目の焦点が定まらなくなってきて、腕がぶらりと垂れ下がった。

「……」

彼女が、不意に俺に視線を送ってきた。ぱちりと目が合うと、心臓がどくんと大きく波打つ。

――わたしと結衣がしてること、よぉく見ておいて？

蛇のように細められた瞳が、そう言っている気がした。

母娘同士のキス。それも互いに一糸纏わぬ姿で、身体を密着しながら行うだなんて、おかしいと思うのが普通だろう。
けれど。
「んふぅっ、ちゅる、ぢゅる、くちゅくちゅ、ちゅぴ……んはぁっ、んっ、んん……っ」
「ふーっ、ふーっ、んんん……んふぅっ、んっくぅぅ……んはぁっ、んっ、んん……っ」
姉と間違えそうな程若々しく、美しく、艶やかな母親が。
自身と同様に肉感的な娘の、身体と心を蹂躙する。
それを、娘は抵抗出来ずに徐々に受け入れていく。
あまりにも非常識で、あまりにも官能的な光景に、俺は呼吸さえ疎かになってしまった。
「……ぷはっ……はっ、はぁっ、はっ、はっ、はぁ……っ、な、なんで、こんな、こと……っ」
ようやく唇が離れると、結衣が涙目で必死になって言葉を紡ぐ。吐息混じりの声が色っぽく、湿り気を帯びた結衣の唇に見惚れる。
結衣の問いかけに、彼女はにっこりと微笑む。唇に指を当てて艶っぽく目を細めると、俺だけでなく結衣までどきりとしたようだった。
「二人でヒッキーくんのものを舐めるなら、キス出来るくらい吹っ切れていた方が良いかと思って。……だめだったかしら？」
「そ、そんなこと言われたって、いくらなんでも……」
彼女の言葉に結衣が戸惑う。顔を逸らした際に俺と目が合うと、眉根を寄せて泣きそうな表情を浮かべた。
「そうよね、突然すぎたわよね、ごめんなさい……でも、ヒッキーくんはちゃんと反応してくれているみたいよ？」
『え……っ』
彼女の言葉でハッと気付く。下に目をやると、ほんのついさっきまではすっかり落ち着いていた陰茎が、いつの間にかぎちぎちに反り返っていた。あれだけ淫猥なものを見せられたら、こうなるのも当然だろう。
「わたしたちが絡み合うのを見て、興奮してくれたのよ」

「え……ほ、ほんとなの？」
結衣が両手で口を覆って尋ねてくる。
「……まあ、な」
顔を逸らして答えると、彼女がくすりと笑った。
「ふふ……じゃあ、もう少しだけ楽しんでもらいましょうか。今度は、ヒッキーくんも気持ち良くしてあげる」
「え……うおっ!?」
「んむぅっ!?」
俺と結衣が同時に声を上げる。
彼女は、再び結衣を抱き寄せると同時に、左手は結衣の尻に伸ばし、右手で俺の肉棒に触れた。結衣の尻は手をいっぱいに広げて掴み、肉棒は亀頭をそろりと摘まむ。
「んむぅぅぅ……っ」
彼女が悩ましい声を上げて結衣の口内を舐り始めると、結衣の表情はあっと言う間に蕩けた。そして結衣の腕がだらりと垂れ下がったかと思うと――右手を彼女の尻に、左手を肉棒の竿に添えた。
「んふぅっ!?」
「うおっ!?」
驚きで彼女と同時に声を上げると、結衣が俺を見て艶っぽく目を細める。その目つきは母娘で恐ろしい程似ていて、それがまた興奮をかき立てた。
彼女が亀頭を撫でさすり、結衣が竿をゆっくりとしごく。
「くおぉぉ……っ」
予想もしていなかった快楽に歯を食いしばって耐えていると、互いの尻を揉み合っている二人の表情が益々扇情的なものになっていく。二人の身体に触れたくて、それでも二人の蠱惑的な交わりを邪魔したくなくて。どうしたものかと迷った末に、二人の膝裏に手を添えることにした。
『んふぁぁぁ……っ』
よほど敏感になっているのだろうか、俺が少し触っただけで、二人揃って甘美な嬌声を漏らした。

三人が三人とも、自分以外の二人の身体に触れている。官能の熱が互いに伝播し合い、身体が熱く火照っていく。
これはもうそろそろ限界か――と思っていると。
彼女が結衣に目配せをして、二人とも両腕を離した。互いが互いの身体から解放されて、安心したようなもの寂しいような気持ちになる。
彼女と結衣がとろんとした目で見つめ合う。
そして、二人揃って俺を見た。
ゆっくりと首を傾げて、微かに口角を上げて微笑む。
ぞっとする程淫靡な仕草に、ごくりと息を呑んだ。
「それじゃあ、結衣。そろそろ気持ち良くしてあげましょうか」
「そうだね。……いっぱい、気持ち良くしてあげる」
濃密な口付けを交わしたためなのかは分からないが、二人の息が妙に合っている。よく似た顔が揃って可愛らしく、艶っぽく微笑むのを見て、鈴口からはカウパーが滲み出た。肉竿は期待で静かに震えている。
二人が俺の方を向く。
二人が屈んで、顔を肉棒に近付ける。
二人が悩まし気な吐息を竿にかけると、身体がぶるりと震えた。その様子を見て、二人がふっと微笑む。
――やがて。
亀頭に唇が触れる寸前まで口を近付けると。
二人が、ゆっくりと口を開いた。
続く。

（２２）

結衣と、由比ヶ浜マ――彼女が、マットで仰向けになっている俺の横に腰を下ろし、肉棒にゆっくりと顔を近付ける。２人のうっとりとした横顔に見惚れていると、まるで獲物を呑み込もうとしている獣のように口が開かれた。微妙に違う温度の吐息が亀頭にかかり、期待感にぶるりと震える。

『……んむっ』

「あ……うぁ……っ！」

２人が、躊躇することなく亀頭に吸い付いた。そしてべろりと舌を出し、左右の雁首や鈴口をねっとりと舐り始める。

「んふぅぅん……ふぅっ、んふぅぅぅ……っ」

「はぅぅん……んふぅぅっ、ふぅぅぅぅ……っ」

とびきりのごちそうを口にしているような２人の顔は、下品なくらいいやらしいのに美しい。まるで打ち合わせたかのように、息の合った動きで互い違いに竿に舌を這わせ、亀頭を咥える。浴室の湿り気が２人の身体をいやらしく映えさせた。

「……ぷはっ、ねえ、結衣……」

「……ぷはっ、……ん、わかった……」

「え、２人とも何を……うぐぅっ!?」

彼女が具体的に何かを言った訳でもないのに、２人がもう一度口を開けると――今度は、口をぱっくりと開いて互い違いになるように首を傾け、亀頭を挟んで唇を重ねた。

「んむふぅぅ……ちゅぴっ、ちゅぱちゅぱ、れろれろっ、ちゅくちゅく……っ」

「はむっ、んむふぅっ、はぁんっ、ちゅぴ、ちゅぽちゅぽ、れろ、じゅるる、ぢゅぽぢゅぽ……っ」

「あっ、がっ、あぐぅぅ、うぐぁぁぁ……っ！」

２人の舌が、唇が、まるで１人の人間が操っているかのように自由自在に、けれど互いに邪魔をすることなく、徹底的に亀頭を舐り倒す。牡の紅い先端は、牝の紅くて柔らかい一対のものにたっぷりと弄られ

てぱんぱんに膨れ上がり、２人が垂れ流す唾液で恥毛が肌に貼り付いていた。
「んちゅ……れろっ、れろれろれろ、じゅぷぷぷ、じゅるっ、じゅぶぶぶぶ……っ」
「んじゅるっ、ぢゅぷっ、ぢゅぴっ、じゅぶぶ、じゅぼ、ぢゅぷぷぷぷ……っ」
２人の舌が雁首を集中的に舐め、互いの唾液と鈴口から湧き出た先走り汁を啜り始めた。雁首が余す所なく徹底的に舐られて、マットを掴んで腰を浮かしてぶるぶると震える。
「あっ、ぐぁっ、これっ、だめっ、だめだっ、出る、出る、出る……っ」
恐ろしい快感は、射精を我慢する男をあざ笑うかのように限界に導く。どう我慢するかではなくどう射精するかに瞬時に思考を切り替えて、俺は咄嗟に２人の頭を掴み――彼女の顔を引き離して、結衣の口に肉棒を呑み込ませた。
「んぶぅぅぅっ!?」
結衣が涙目になるのを見ながら、それでも一気に射精まで持って行こうと喉奥までねじ込む。
「んぶぐぅぅ……っ、おぶっ、んぶぅぅぅ……っ」
もう少し、もう少しで出る……と思っていると、彼女が俺の手に自分の手を重ねた。
「あらあら……妬けちゃうわねぇ。でも、女の子はもっと大切に扱わないとだめよ?」
彼女の言葉にハッとする。
「あ……結衣、ごめん。つい……」
結衣の口を解放して謝ると、
「ん……大丈夫。それにこういうのも意外と……あ」
『……』
「え、あ、その、ひ、ヒッキー、ママ、今のは何でも……」
慌てふためく結衣をよそに、俺と彼女が目を合わせて頷く。
「結衣。ヒッキーくんの足の間に来なさい」
「あ、え、え？　う、うん、わかった……んぶぐぅぅっ!?」

結衣が俺の股座に来るなり、今度は両手で頭を掴んで奥までしゃぶらせる。涙目になっているが、あんな言葉を聞いたらもうたまらない。
「それじゃわたしは、結衣の身体を弄ってみようかしら」
彼女がやけにうきうきした様子で、四つん這いになった結衣の後ろに行くと――
「んひぃぃぃんっ!? んぶぐっ、おぐっ、あぐぁぁぁぁ……っ」
肉竿をしゃぶったままで、結衣が獣のような声を上げた。
「あらぁ、結衣のここ、もうぐっしょぐしょですごく柔らかいわね。簡単に指が1本入って……あらあら、2本目も入っちゃったわよ? あん、中がすごい熱い……ヒッキーくんもこんな所にねじ込んだら、さぞ気持ち良いんでしょうね。ほら、結衣、口が止まってるわよ」
「う～～～～っ、うぅぅぅ……っ」
彼女の言葉に結衣が顔を真っ赤にして首を振る。気持ち良い以上に恥ずかしさで震えているようだ。ここまで恥ずかしがる結衣を見た事がなかったけど、こんな状況じゃしょうがないか……。
それに、恥ずかしがって目に涙を浮かべる結衣は……良い具合に、嗜虐心をそそられる。
「じゃ、結衣……行くぞ」
改めて結衣の頭を掴む手に力を込め、がちゅっと奥まで咥え込ませる。
「んふぉぉぉぉ……っ」
一番奥まで突っ込んだ所で、結衣の喉奥に亀頭を擦り付けるようにぐりぐりと結衣の首を左右に動かす。
がっちゅ、ぐっちゅ、ぐちゅぽっ、じゅぷじゅぷ、じゅぶりゅっ、じゅぼじゅぼ……っ。
「おぐっ、おぶぅっ、んぶぅぅぅ……えぶっ、あぶふぁぁっ、んぐぅぅぅ……っ」
結衣が虚ろな目になりながらも、抽送に合わせて口の中で亀頭を舐る。両手を陰嚢に添えると、柔らかく包み込んで刺激を加えてくれる。

頭が、真っ白になりかけていた。
「あぁ……すごいわね、ヒッキーくんったら鬼畜ね……。それに結衣も、これだけ激しくされてるのに抵抗しないどころかここを益々濡らしちゃってるわよ。……もっとイジメてあげる」
彼女の声の温度が下がったかと思うと――
じゅぶじゅぶびちゃぐじゅりじゅぼがっぽがちゅぐじゅぐじゅぐじゅぐじゅ……っ。
「んぶぅぅぅぅぅぅぅぅぅっ!?」
結衣と彼女との間から突如聞こえてきた、信じられない程卑猥な水音に慄然とする。彼女を見やると、とても楽しそうに、それでいてうっとりとした顔で頬に手を添えている。そしてもう片方の手は……結衣の淫裂を、出来るだけいやらしく音が立つようにかき回していた。
結衣が目を白黒させながら首を振ると、亀頭が内頬に擦れて違う種類の快感が訪れる。
「あっ、うっぐぅ……もう、だめだ、やばい、本当に出る……っ！」
「んぶぅぅ……あぐっ、んぐぅぅぅ……っ！」
「2人ともイクのね？　いいわ、沢山出して、出して、ほら、ほら、ほら……っ！」
彼女が興奮した声で煽り、結衣への責めを更に苛烈なものにする。結衣は虚ろな目で俺を見つめると、静かにこくりと頷いた。
「も、もう、で、出る、出る、出る……っ！」
――ごぶりゅっどぶっごぶごぶごぶっぶびゅるるるっ、……どぐっ、ごぶっ、ごぶごぶごぶ……っ。
「んぐふぅぅぅぅぅぅぅぅぅ……っ！」
結衣が俺の白濁を受け止めながら、彼女の愛撫により絶頂に導かれる。結衣の全身がぶるりと震えると、益々快感が増して射精が促された。
大量のゼリーのごとき粘液を余す事無く呑み込むと、結衣は力無く俺の脇に横たわり、俺と同じように仰向けになった。
「うふふ……2人ともすごいイキっぷりだったわぁ……」

彼女はうっとり顔のままそんなことを言ったかと思うと……何故か、仰向けになった結衣の元へ四つん這いで近付いた。そして俺と結衣が何か言うよりも先に――結衣の乳頭を口で咥え、淫裂に再び指を挿し込んだ。
「あふぁぁっ!? なんで、ママ、なんで……んひぃぃぃんっ！」
弱り切っている上に敏感になっている身体を再び責められて、結衣が狂いそうな程の喘ぎ声を上げる。敏感な場所を2ヶ所同時に責められて、結衣は息も絶え絶えに喘ぎ狂う。
「本当はさっき、結衣のお尻の穴にも指を入れたかったんだけど……それは後でヒッキーくんにやってもらおうと思って我慢したの。そしたらちょっと、責め足りなくなっちゃった。……だめかしら？」
「や、だめとかは、ないですけど……」
「やぁぁぁ……っ、ヒッキー、止めてよばかぁぁ……んはぁぁっ!?」
短い会話を交わす内に、結衣が腰を跳ねて愛液を吹き出した。
「あん、もう結衣ったら……可愛い反応しちゃって……もっとイジめたくなっちゃうじゃない」
「ちょ、ママ、うそ、あたしイって……ひぃぃぃんっ!?」
彼女の手の動きが止まらず、結衣の腰が跳ね上がったままがくがくと戦慄く。
「ほぅら、結衣、たっくさんイっちゃいなさい？ ほら、ほら、ほら……っ」
「や、やだぁっ、あたし、ヒッキーにイカせてもらいたい……っ」
結衣の切実な声に、彼女の動きがぴたりと止まる。くたりと尻をマットに付けた結衣は、四肢を投げ出して息を荒げている。
「……本当に可愛いわねぇ、結衣は……。ヒッキーくん、この子のこと、犯してくれるかしら？」
笑顔のまま彼女が発した言葉に驚く。
「お、犯すって……」
「親だから……いえ、同じ女だからかしらね、わかるの。この子は今、あなたとセックスがしたいんじゃないの。犯してほしいのよ。わたしとあなたの行為を目の当たりにして、ここに来てからもずっとわた

し優勢でことを進めてきて……この子が積極的になった時もあったけれど、きっともう、足りないのよ。あなたのその逞しいもので、めちゃくちゃにされたいのよ」
「……っ」
彼女の言葉に息を呑み、結衣を見つめる。結衣は目を見開いて驚き、顔を真っ赤にさせていた。
「……否定、しないんだな」
「あっ、ひ、ヒッキー……んあぁ……っ」
身体を起こし、仰向けになった結衣の二の腕を押さえ付け、膝でぐいぐいと結衣の足を広げる。
「……犯されたいのか？」
尋ねると、結衣が顔を逸らし、ちらりとこちらを流し見て――――小さく、頷いた。
「わかった、犯してやる」
そう言って、結衣の淫裂に亀頭を宛がうと……結衣の目が、牝の目に変わった。

続く。

（２３）

浴室の中は、まるでサウナのような熱気と湿気で満ちている。
俺も、結衣も、由比ヶ浜マ――彼女も。
それぞれがじっとりと汗をかき、牡と牝の部分には情欲の熱が宿っている。
「……きて……っ」
マットの上で仰向けになり、一番大事な場所に俺の肉棒を宛がわれた結衣が、不安と幸せの混ざり合った複雑な表情で願いを口にした。
「……わかった。いくぞ」
いつものような、穏やかで情熱的なまぐわいではない。
これから俺がやろうとしているのは――
屈服だ。
制圧だ。
蹂躙だ。
ぱんぱんに張り詰めた亀頭を、狙いを外さぬように肉襞をかき分けて押し当てる。
腰をぐっと押し出すと、熱くぬめった肉襞が淫茎を呑み込んだ。水中に投げ込まれたエサに食いつくピラニアのように、肉襞がざわめいて絡みついてくる。
「ひぐぅぅぅ……っ」
結衣が顔に手を当ててぶるぶると震えた。足がぴんと伸びてＶ字になり、俺の腰に絡み付いてきた。
「……俺が動かしづらいから」
言って、結衣の膝の裏を掴んで引き離す。そのまま、力任せに腰を突き出した。
「あぐぁぁぁぁっ！　あひっ！　ひぃっ!?　ひぁぁぁぁ……っ！」
ここまで散々我慢していたからだろうか。
結衣の表情から、挿入の直前まできちんと残っていたはずの理性が綺麗さっぱりと霧散していた。
腰を乱暴に打ち込むと、顔を覆っていた手を外してマットの上を所

在無げに這わせる。俺に顔をしっかり見せないといけないと思ったのかもしれない。目には涙が滲み、口は半開きになって涎を垂らし、だらしのない牝としての顔を晒け出している。
結衣の手首を掴む。支えを失った足はマットの上にだらりと落ちた。
結衣の手を手前に引くと同時に、腰を思い切り突き出す。
ずぐん、と子宮口に亀頭が直撃した音がすると。
「あが……っ」
結衣が口から舌を垂れて、全身を激しく戦慄かせた。結合部から溢れ出す愛液が、結衣の快感の度合いを示していた。
腰を引くと、結衣が虚ろな瞳を湛えて首を横に振った。
「ま、待って……今、イってる、イってるからぁ……っ」
甘えたような、子どもっぽい声。本心から言っているのだと、目を見れば分かった。
――何でわざわざ、俺を興奮させてくれるんだろうか。
「……そうか。わかった」
答えて、結衣がほっと安心した表情を浮かべた瞬間。
ずちゅり。
「あっ……かは……っ!? な、なんれ……っ!」
再び最奥を小突くと、驚きで目を見開いた結衣が俺を見つめてきた。
「ん? 俺はわかったって言っただけだぞ。やめるだなんて言ってない。イってるんだよな? 確かにすごい締め付けだ。……このまま、たっぷりと楽しませてもらうからな」
「あっ、はひっ……む、むり、そんなの……んくぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!?」
ずちゅっ、ぐちゅっ、ずちゅじゅくがちゅっ、じゅぶぶ、ぐりゅ、じゅくずりゅぐちゅちゅっ。
打ち込む速さと強さを不規則に変えながら、結衣の中をかき回す。結衣に与える快感に呼応して肉襞が包み込む具合も変えてきて、狂おしい程の快感を返してくれる。結合部から溢れ出した淫液がマット

を濡らし、むせかえるような牝の匂いが漂う。
「あぐっ、ひぎっ、あっ、かはっ、はぐぅぅぅ……っ」
普段はおバカだけど実はしっかりした由比ヶ浜結衣という人物が、今はどこにもいない。
今ここにいるのは、自分が好いた牡に蹂躙されるのを喘ぎ狂いながら喜ぶ、一匹の牝だけだ。
「あぁ……結衣、すごい乱れようね……っ」
……もう一匹の牝を忘れていた。
脇でじっと俺たちのまぐわいを見ていた彼女は、何を思ったのか結衣の頭の側に回り、俺と向かい合う形でぺたりと女の子座りをした。その間も俺は腰を振り続け、その度に結衣は背筋を弓なりに反り返らせて喘ぎ狂う。
「ひぐっ、あがっ、ぅぅぅ……んひぃっ！」
電流を流されているかのように繰り返し身体が跳ねる様は、一種の狂気さえ感じる。
「結衣、大丈夫？」
彼女が結衣の頭をそっと撫でる。蹂躙の快楽に打ちひしがれながらも、母親に撫でられた彼女は少しだけ安心した表情を浮かべて首を傾げると、
「……もっとすごいことをするんだけど、大丈夫？」
俺も驚くような、とんでもないことを言った。
「え、ま、ママ……っ？」
顔を引き攣らせる結衣の身体に手を伸ばした彼女は、
「――ひっ!?」
結衣の２つの乳頭を摘まむと、そのまま真上に持ち上げた。豊かな乳鞠の頂が持ち上げられて、形の良い乳房がもちの様に垂直に伸びる。
「いっ、あがっ、ひぐぅ……っ！」
何が起きているのかを未だ理解出来ていないと言った表情の結衣が、目の前で形を変えた自分の乳房を見つめている。
彼女は心底楽しそうに笑うと、結衣の２つの乳頭をこすり合わせ

た。
「うふふ……こっちとこっちを、こうして……っ」
「ひっ……あああぁぁぁあああぁぁぁぁぁぁっ！　だめだめだめだめだめぇ……っ！」
下腹部に致命的な快感を叩き込まれながら、敏感になった乳首を擦られる。
肉襞は狂ったように収縮して、牡の精を搾り取ろうと必死になっている。
「ほら、どう、結衣。気持ち良い？　どう？」
「どうだ結衣、こんな風にしてもらいたかったんだろ？」
「やぁぁっ、こんな、こんな……あぐぅあっ!?　だめ、なに、なにこれ、なんかすごいのくる、やっ、こわい、こわい、こわい……っ！」
結衣の顔が強張ったかと思うと、彼女は何かを察したのか結衣の乳房から手をぱっと離した。結衣はそれと入れ違いに上半身をがばりと起こし、俺に抱き付いて来た。
「やだっ、こわい、これどうなるの、こわい、こわいよ……っ！」
俺の腰に足を絡みつかせて、結衣の身体がぶるぶると震える。すると、彼女が結衣の背後からすり寄り、俺を見てにこりと微笑んだ。結衣の背中に抱き付き、俺と彼女で前後からサンドする形をとる。
「大丈夫よ、結衣。思いっきりイっちゃいなさい」
結衣の耳に唇を押し当てて囁くと、彼女は結衣の身体に手を滑らせ、乳頭と肉芽をにちりとつまんだ。
それとほぼ同時に、
「結衣、俺も出すぞ。思いっきりイってくれ」
結衣にもう片方の耳に唇を押し当てて囁いて、子宮口にとどめの一突きを加えた。
「かは……っ」
前後から逃げ場の無い快楽の波を与えられ、結衣の脳内で蓄積した官能が弾ける。結衣の足が攣ったかのように強張り、痛い程巻き付いてきた。膣肉の締め付けも急に増して、下腹部が限界を迎える。
――ごぶっ、どぶどぶどぶっ、ごぶりゅっ、どびゅるるるる……っ。

「あ――――」
結衣が短く音を発すると、
ちょろろろろろろろ……っ。
大量の小水が結合部から溢れ出して、急に締め付けが緩くなった。
大量に注いだ白濁がマットの上に垂れ流され、小水と混ざり合う。
「あらあら……気をやっちゃったみたい」
結衣を背中から抱いて頭を撫でながら、彼女がのほほんと言った。
彼女の言う通り、結衣は全身を脱力させて、目を閉じて失神していた。
結衣をマットの上に寝かせて、シャワーで身体を洗う。
「結衣、疲れて寝ちゃってるわね。すぐには起こさない方が良いかもしれない」
「そう……ですね」
「その間、どうしたい？」
「……」
「……あなたのそこ、まだ元気いっぱいよね？」
視線を下ろす。彼女の言う通り、結衣と彼女の肢体を目の前にしていると、まるで限界を感じないくらいにずっと勃起していた。
彼女が俺の頬に手を添える。唇をしっとりと重ねると、彼女の身体は想像以上に熱かった。
「……ねえ、わたしも……したいの」
「……っ」
艶っぽく目を細めた魅力的な笑顔で、強烈な言葉を浴びせられる。
「……良いんですか、本当に。多分俺、結衣の時以上に容赦出来ないですよ」
「あら……あれで全力じゃなかったの？　怖いわ……本当に、怖い」
言いながら、彼女が俺の前で犬のように四つん這いになり、むっちりとした臀部を向ける。２つの雌穴が淫猥にひくついて、牡の蹂躙を待ち望んでいた。
「……わたし、どうされちゃうのかしら」
そう言って振り向いた顔が、俺の劣情に火を点けた。

続く。

（２４）

「わたし、どうされちゃうのかしら」

由比ヶ浜マ――彼女がそう言って、四つん這いになって尻を突き出す。張りのある豊かな臀部は汗で妖しげな光を放ち、結衣よりも濃いめの恥毛は汗と愛液で肌にべたりと貼り付いている。湿った茂みの中に見える肉襞は妖しく蠢き、牡の蹂躙を待ち望んでいた。

「早く……はやく……っ」

娘の痴態を目の前で見ていたからか、彼女は頭をマットにこすり付けて、両手で陰部をぱっくりと広げて見せた。薄紅色の貝肉の割れ目が物欲しそうにひくつくのに目を奪われ、幾度と無く射精をしたことを忘れる程に肉棒が勃起している。

「……じゃあ、行きます……っ」

上ずった声で言うと、彼女は手を臀部から離して枕にする。ごくりと息を呑む音がこちらにまで聞こえた。

右手で尻肉を掴み、左手を竿に添えて淫裂に亀頭を宛がう。襞が亀頭を咥え込むと、早くねじ込んでくれと彼女の身体全体が欲しているように見えた。

僅かに腰を突き出すと、後は勝手に呑み込まれていく感触がする。極上の快楽の予感に身を打ち震わせる。すぐに奥まで行くのはもったいないと思い、両手で尻肉を掴んで焦らすように挿入する。

ずにゅ、ぬぐぐ、ぐにゅるる……っ。

「あっ、おぉおぉぉぉおおぉぉ……っ」

ぶるぶると震えて、獣じみた声を上げる彼女の姿態は恐ろしいくらいに美しい。性を知り、本能に忠実になった女というのはここまで魅力的なのかと瞠目する。

ぐねぐねと妖艶に蠢き締め付けて来る膣肉に酔いしれながら、肉竿を左右に動かし、時には腰を引いて、じっくりと焦らす。

「あっ、んくぅぅ……やん、早く、いっぱい動かして……我慢出来ないわ……っ」

振り向いた彼女の瞳は潤んでいて、上気した顔に見惚れる。

もう少しで一番奥に辿り着く――という所で、肉棒が膣から抜ける寸前まで腰を引いた。
「あっ、あんん……っ、どうして……っ」
彼女が口惜しそうに腰をくねらせた瞬間、尻肉を引き寄せるようにして、力いっぱい打ち込んだ。
ぐぽんっ、という音がすると同時に、僅かな時間差を挟んで淫孔が凄まじい収縮を起こした。
「ひっ……あああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……っ!!」
突然子宮口を突き上げられて、彼女が悲痛なまでの嬌声を上げる。背中を激しく波打たせ、結合部からは大量の愛液を噴き出し、腰を抜かして自らが噴き出した牝汁に浸かるようにマットにへたり込んだ。それを追いかけるように、膣肉に肉槍を突き立てたまま彼女の背中に密着する。互いの体液が混じり合って、浴室内に淫猥な匂いが立ち込めた。
「……あれだけ欲しがってたのに、一回突き入れただけで簡単にイって、腰まで抜かしちゃだめでしょう？　ほら、ほら、ほら……っ」
彼女の肩とマットの間に腕を差し込んで、手のひらを上にして両肩を押さえ込む。ねっとりと抽送すると、ぶじゅる、ぐじゅ……っと卑猥な水音がした。
「あぐぅぅ……ごめんなさい、ごめんなさいぃぃ……っ」
時折俺の身体を跳ね除けそうになる程腰をびくつかせて、情けない声で謝ってくる。しかし顎を指で上げて顔を覗いてみれば、笑えるくらいにだらしくなく恍惚としていた。口の端から垂れる唾液が顎を伝い首まで流れていて、顔を見るだけで射精したくなる程扇情的だ。
ぐじゅっ、ぱぢゅっ、ぢゅぱんっ、ぱちゅっ、じゅっぽ、がちゅっ……。
「あっ、あぉぉっ、ひっ、ひぐっ、うっぐ、あが、あぐぅぅ……っ」
濃密に身体を絡めたまま腰を打ち付ける速度を上げていく。予想など遥かに超えた極上の快楽に朦朧としながら彼女の顔を見ると、蠱惑的な瞳からは涙が流れ、口はだらしなく半開きになり、とても子供一人をきちんと育てている母親には見えない。今俺が犯しているの

は、どうしようも無いくらい性に焦がれた一人の女なのだ。
ゆっくりと近付いてくる射精欲求が胸の内を焦がし始めた時、不意に隣から声がした。
「ママ……？」
「あ……っ」
気を失っていた結衣が目を覚まし、まるで昼寝から目覚めて母親を探す幼子のようなあどけない声で彼女を呼んだ。その瞬間彼女の中の母親としての面が顔を出したのか、急に戸惑ったように足をばたつかせる。
「ママ……ヒッキーと、してるの？」
結衣はそう言いながら彼女と俺を見て、未だ惚けた顔で彼女の頬を撫でる。
「ゆ、結衣……っ」
あどけない結衣の声が、もしかしたら今日一番彼女に『効いた』かもしれない。これまでとは打って変わって恥ずかしそうに振る舞い始めて、却って膣肉の収縮を強めた。
「あっ、あんっ、だめっ、そんなに、腰、今、動かしちゃ……あぁぁぁ……っ」
彼女が顔を伏せて、マットを掴みながら小さく絶頂に達する。溢れ出す淫液の中に先走り汁が混じり、結合部からとろりと零れた。
結衣が徐に立ち上がり、彼女の顔の前にぺたりと女の子座りをする。先程彼女が結衣にした行動をなぞるような動きに身震いした。
「ママ……ヒッキーにされて、気持ち良いの？」
結衣はどこか温度の抜け落ちたような声で囁くと、彼女の両頬に手を添えて、くりんと首を傾げた。結衣が彼女の顔を覗き込もうとしたので、彼女はそれに合わせて再び四つん這いになった。
「あ、あぁ、結衣、あ、うぅぅ、うぅぅぅ……っ！」
四つん這いで覗きこまれている様は、淫乱な母が娘に調教されている図にしか見えない。アダルトビデオを見ながら夢中で肉棒をしごくように、母娘の卑猥な光景を凝視しながら夢中で腰を突き付ける。早く彼女の子宮に己の欲望を注ぎ込みたい――今抱いている欲求は、

ただそれだけだった。
「あぐっ、おっ、ひっ、あがっ、だ、だめ、結衣、見ないで、結衣、結衣……っ」
「だめ。見てるから。ママがイクところ、見てるから」
結衣はそう言って、彼女とキスをする寸前まで顔を近付ける。結衣に見られれば見られる程彼女の締め付けは増すばかりで、どこまで淫乱なのかと笑ってしまいそうになる。
ぐちゅっぱちゅっじゅくんっ、がちゅっ、じゅっぷ、じゅくくっ。
「あぁっ、ひんっ！　ひぐっ、あぐぅっ、あがっ、い、イく、また、い、イく、イぐぅぅ……っ」
「ママ……綺麗。イって？　イって？」
結衣は熱に浮かされた声音で囁くと、彼女の頬に添えていた手を離し、下に伸びたたわわな胸の実りをぎゅっと揉みしだいた。
「ひぃぃぃぃん……っ！」
結衣が乳を搾るように手を上下させると、彼女は激しく暴れて更に締め付けを強めた。
「うぐ……もう、出ます、思いっきり中に出しますから……っ」
「あっ、あひっ、だ、だめっ、今中に出されたら、だめ、ほんとうに……っ」
彼女が切実な声で訴えて、振り向いた泣き顔があまりにも嗜虐心をそそるもので――その表情を見たのをきっかけに、激しいマグマの奔流が身体の奥底から昇ってきた。
「イきます。イきますよ。思いっきり出しますからね。絶対逃がしませんから」
「ママ、いっぱいイって良いからね？　ほら、ほら、ほら……っ」
「ひっ、あがっ、だめ……んぎぃっ！　ひぐっ、おごっ、あっ、あっ、あっ、あぁあぁ……っ！」
高まりきった射精欲求に身震いして、おとがいを上げながら最後の一突きを入れると。
――ぶびゅぶびゅるっ、ごびゅぶりゅっ、びゅぶぐぶびゅるるるる……っ。

「あっあひっ!? ひぐっあがっひぎっあっあっあっあっあっあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……っ!!」
俺も彼女も激しく痙攣しながら、魂が抜けそうな程の絶頂に浸る。結衣は彼女の痴態を見つめながらも乳房をしごく動きを止めない。巨肉を容赦なく嬲られることで彼女の官能が益々高まり、肉棒を強烈に締め付けられて脈動が一向に止まらない。
「あっ、あひっ、ひっ、はひっ、はぐうっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あぁぁ……っ」
ようやく射精を終えると、彼女は結衣にすがりつくようにしてへたり込んだ。3人の体液が混ざったマットの上はひどく卑猥な匂いが立ち込めていて、この場にいるだけで頭がおかしくなりそうだ。
「はぁっ、はぁっ、はぁっ……」
息を荒げながら肉棒を抜こうとした時、ふとある場所に目が行く。
俺と彼女の結合部の、少しばかり上。
放射線上の皺の中心にある、小さな穴。
結合部から溢れた愛液や精液が塗されたその穴を見て、再び獣欲がふつふつと湧く。
「あっ、えっ、どうして大きくなっているの……っ?」
変化を感じ取った彼女が、今にも眠りに落ちそうな顔で尋ねてくる。俺はその問いに答えることなく、手を伸ばしてローションの容器を掴んだ。俺の挙動を見て意図を察したのか、彼女の顔がさっと青ざめた。
「……う、うそ、でしょう? 今そんなことされたら、だめ、死んじゃう、死んじゃう……っ」
「何言ってんですか。俺をあれだけ誘っておいて。……もう、引き返せませんよ」
冷たい声音で言うと、「ひ……っ」と怯えた声が漏れて、淫口がきゅっと締まった。
「ママ……嬉しそうじゃん」
そう言って、微笑みながら彼女を見つめる結衣の顔は、驚く程彼女に似ていた。

続く。

（２５）

由比ヶ浜マ――彼女が四つん這いになって、尻を突き出している。膣内射精により淫裂からごぷりと精液が溢れ出し、愛液と混じってマットに垂れ下がっている。

手に取ったローションの容器の蓋を開けると、彼女の尻穴を人差し指と親指で広げた。

「ひぃ……っ」

ぐにりとした生々しい感触と共に皺が伸びて、穴の周辺部の薄桃色をした部分がくっきりと見える。中心部は仄暗く、未知の魅力を秘めている。

ローション容器の先端を、彼女の菊穴に宛がう。彼女が「ひ……っ!?」と声を上ずらせたのに気付きながらも、躊躇することなく先端部分をずぶりと挿入した。

「んひぃぃぃ……っ！」

彼女が顔を伏せ、ぶるぶると打ち震える。排泄器官にローションの容器を挿し込んだまま、胴体部分を指で押した。特に何か音を立てるでもなく、容器内の潤滑液が彼女の中に流れ込む。

「ひぃぃぃぃ……っ!! や、冷たいっ、ひっ、だめ、だめ、だめぇぇ……っ!!」

振り向いて涙目で首を振るが、そんな顔をされたところで俺は更に興奮するだけだ。浣腸しているかのようだが、今回はあくまで滑りを良くするついでに彼女を嬲りたかっただけなので、容器を早めに抜く。先端をずるりと引き抜くと、尻穴が物欲しそうにひくひくと収縮した。さっき指を入れたこともあってか、穴は大きめに開いてこちらを待ち構えている。

もう、準備は十分だろう。

尻穴にいきり立った肉棒の先端を宛がうと、彼女はびくんと震えてマットに顔を擦り付けた。

「欲しいですか？」

俺の言葉に、彼女は振り向いて目を見開く。

「そ、そんな……こと……ひぃぃぃっ!?」
彼女が躊躇した瞬間、亀頭を下に滑らせて淫口に挿入した。突然の挿入に肉襞が激しくざわめき、波のようなうねりで締め付けてくる。
「ひっ、ひぐぅっ！　だ、だめ、これ以上……あ……っ？」
すぐに抜くと、彼女は安心以上にどこかもどかしさを感じさせる声を上げた。今度は膣口と尻穴の間に亀頭を当てて、くにくにと柔肌に押し込む。
「欲しいって言わないから、違う場所に挿れちゃいましたよ。それで、どうなんですか？　欲しいですか？」
「あ、うぐ……んはぁぁんっ!?」
迷ったらすぐに膣に挿入して、彼女がその気になりかけた所で抜く。俺としてももどかしいが、彼女を追い詰めるには必要な行為だ。
言葉で責めて、一瞬だけ膣に挿入するという流れを１０回近く繰り返したところで――彼女がゆっくりと振り返った。美しい彼女の顔を涙が蠱惑的に歪め、嗜虐心をかき立てる。
「……れ、て……っ」
「え？　なんですか？　聞こえないですよ」
震える彼女を煽り立てる。突き立てれば容易く挿入出来るであろう尻穴に、入らないように気を遣いながら雁首と裏筋を擦り付ける。
「……挿れて……っ」
「何を？　どこに挿れてほしいんですか？　こっちですか？」
膣穴にぐちゅりと挿入すると、彼女はくしゃくしゃに歪んだ顔を浮かべた。
「ち、ちがうのぉ……あなたの逞しいおちんちんを、わたしのお尻の穴に挿れてください……っ!!」
「わかりました。挿れます」
彼女の必死の哀願を受け入れて、膣から肉槍を引き抜いて一気にアナルに侵入する。
「あ――っ」
彼女は全身を激しく痙攣させて、マットの上に崩れ落ちた。

×　×　×

「あおぉぉぉぉ……っ」
彼女がマットにべったりとうつ伏せになって、喜悦の混じった喘ぎ声を漏らす。膣内のざわめくような締め付けとは違い、尻穴は内部全体が一枚のゴムのように思えた。一様に肉棒全体をぐむぐむと締め付けてきて、例え気持ち良いと感じなくても精を搾り取られそうな、侵入者を排斥するような収縮だ。
彼女の背中に覆いかぶさると、適度に肉の感触がある柔らかな心地良さに包まれた。彼女の肩とマットの間に腕を挿し入れて、下から彼女の肩を押さえ付ける。挿入した状態でこの押さえ方をすれば、何をしようと彼女は逃げることが出来ない。
「どうですか、気持ちいいですか」
「あっ、うっ、んぐぅっ、うぅぅぅ……っ」
俺が質問しても、彼女は脂汗を滲ませて呻くばかり。強烈な締め付けを堪能しながら腰を引くと、ばちゅんっ！　と音を立てて突き立てた。
「ひぎぃぃぃっ!?　ふ、太い……硬いのぉぉぉ……っ」
足をばたつかせて、苦しみの中にも恍惚が織り交ざった声で喘ぐ。肩を押さえる手を離して彼女の両手を握ると、不安を示すように握り返してきた。
「お、お願い、ゆっくり動いて……っ」
泣き声で懇願する彼女の言葉通り、丹念に嬲るように尻穴を牡の性器で蹂躙する。抽送の度に漏れる声は、徐々に獣性を帯びていく。
ぐちゅっ、ずぶり、じゅぶぶ……っ。
「んひぃぃぃ……んぐぅぅぅ……っ」
俺の体重に身体を圧されながら、彼女がしきりに呻く。
じゅくっ、ぐじゅりっ、じゅぷっ、じゅぱんっ、ばぢゅっ、じゅぴっ。
「あっ……んふぅぅぅ……っ!?　え、あ、そんな、速く……んはぁぁんっ!?」
抽送のペースを上げると、彼女の豊満な尻ががくがくと震えて上下した。少しでも楽になろうと身を捩っているが、身体を密着させて押さえ込むことでその行為を止める。

手を彼女の胸の下に滑り込ませ、ぴんと張り詰めた乳頭をにちりと摘む。更に抽送のペースを上げると、尻に打ち付ける度に卑猥な音が浴室に響く。潤滑液は腰を引くごとに掻き出されるが、それ以上に彼女の腸液が分泌されるからか、ぬめりは落ちるどころか増すばかりだ。
「あっ、あひぃっ、これ、すぐイっちゃ……うぅぅぅ……っ！」
彼女が跳ねるように頭を上げると、肛門が強烈に締め付けられた。射精欲求が膨れ上がるが、まだ止まる訳にはいかない。
がぢゅっ、じゅぷっ、ぱぢゅんっ！　じゅぱんっ、びぢゅっ、ぐぱんっ！
「あぁぁぁぁぁぁっ!?　だめ、だめ、もうわたしイって……ひぃんっ!?
乳首つままないでぇ……んひぃぃっ!!　息出来な……あぐぅぅ……っ」
激しく息を荒げながら、彼女が全身で打ち震える。肛門の締めつけは増すばかりで、下半身の決壊がすぐそこに見えた。
「俺もそろそろ出しますよ……中に思い切り注いであげますから」
「あぐぅぅ……いぎっ、あがっ、もう、だめ、これ以上……あぁぁ……っ」
言葉も途切れ途切れになった彼女が、俺の手を握る。俺は彼女の手首を握ってこちらへ引っ張り、最後の追い詰めにかかる。
ばぢゅ、がちゅ、じゅぶ、ばぢゅっ、ぐりり、ぢゅぶんっ。
「あぁぁぁぁぁぁ……もう、だめ、はやく、はやく……っ」
お願いだから――と消え入りそうな声で呟くと、彼女は甘えるような表情でこちらを見て。
「……はやく、壊して……っ」
「……っ」
思いも寄らぬ彼女の言葉と同時に、凶悪なまでの肛門の締めつけが肉棒を圧する。
――その瞬間。
「うぐ……っ、で、出る、出る、出る……っ！」
「出して、出して、出して……あっ――」

――ごぶびゅるっ、びゅぶりゅっ、びゅびゅるるっ、ごぶっ、びゅくんっ、ごぶごぶごぶ……っ。
「あ――んはぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!」
絶叫と嬌声が入り混じった声が、浴室に反響して耳朶を打つ。ぐにぐにと締め付けてくる肛門が射精をやめさせてくれず、気絶しそうな快楽の渦の中、天を仰いで彼女の尻穴に白濁を注ぎ込んだ。
「あっ……あくぅ……っ」
彼女がぐったりと倒れた。肉棒を引き抜くと、白濁やローション、腸液に塗れて卑猥な光沢を放っていた。
ふと隣に目をやると、結衣がびくりと身体を震わせる。怯えつつも期待しているような瞳の色に、あることを思いつく。
うつ伏せで倒れ込んだ彼女の身体を、ごろりと反転させて仰向けにした。
「結衣。上に乗ってくれるか。二人が重なるように」
「え……っ」
結衣がごくりと息を呑み、俺と彼女に視線を巡らせる。彼女は恍惚とした表情をしていて、目の焦点は定まっていない。
俺の言葉に戸惑う結衣の手を引き、乳房を揉みしだきながら唇を重ねる。
「んふぅぅ……っ、んちゅっ、くちゅりゅっ、れろっ、んふぅぅ……んふぅぅぅ……っ」
口を離すと、結衣は発情しきった顔で俺を見つめた。
「もう一回言うぞ。結衣。上に乗ってくれるか。……二人が、重なるように」
「……っ」
結衣はごくりと喉を鳴らすと、おずおずと視線をさまよわせ、俺の胸板に添えた手をきゅっと握って――小さく頷いた。
続く。

（２６）

由比ヶ浜マ――彼女が恍惚とした表情で力無く寝転がっている。結衣は俺の言葉に従って、仰向けで寝ている彼女の上に覆いかぶさった。四つん這いでこちらに突き出されたむっちりとした臀部と、淫裂から垂れ下がる白濁に息を呑む。このまま突き入れて中をかき回したい衝動に駆られたが、何とか抑えた。

「ん……っ」

結衣が熱っぽい吐息を漏らして、身体を沈めて彼女と重なる。４つの豊満な丘がいやらしくひしゃげて横に広がり、結衣の背中越しでも柔肉が見えることに驚く。

「あっ……んふぁぁ……っ」

「んんん……んんんん……っ」

互いの身体をこすり付けることで、２つの悩ましい声が溶け合うように重なる。もぞもぞと動く度に２人の下腹部から愛液と精液が零れ落ちて、見ているだけで肉棒がぎちぎちといきり立つ。

膝立ちになり、結衣の淫裂に亀頭を宛がった。

「んくぅ……っ、あっ、おっき……ひぐぅぅっ!?」

膣奥まで一気に突き入れて、乱暴なくらいに腰を振る。結衣の膣肉はきつく締め付けてくるが時折柔らかく蠢く。緩急を付けて牡の精を搾り取ろうという牝の意思を感じる。

ずちゅり、ぐちゅり、じゅくっ、がちゅっ、ばちゅっ。

「あっ、ひぃぃ……っ!!」

結衣が声を震わせながら喘ぐ。俺と彼女の身体に挟まれているためか、先程よりも締め付けが更にきつい。肉悦に浸りながら抽送を続けていると、結衣の首に腕が伸びてきた。

「ま、ママっ!? んっく、ふぅぅん……っ！」

「んくちゅっ、れろっ、ぴちゃぴちゃ……っ」

彼女が結衣の口内を蹂躙すると、膣肉のざわめきが増して射精欲を駆り立てられる。彼女は結衣の尻肉に手を伸ばすと、丘の谷間に指を這わせて、尻穴に躊躇無く指をねじ込んだ。

「んはぁぁぁっ!? ま、ママ、だめ、そこだめ……ひぐっ!? やっ、ヒッキーも、そんなに強く突かないで……んはぁぁぁっ!!」
彼女が結衣の尻穴を遠慮無しにかき回し、俺が結衣の膣肉を容赦なく抉ると、結衣はあっと言う間に全身を痙攣させて激しく達した。
結衣がぐったりとしても、彼女は尻穴を弄るのをやめない。今度は彼女の腰を掴み、愛液と白濁に塗れた肉槍を膣穴に突き入れた。
「ひぃぃぃんっ!? だめ、これだめ……くはぁぁっ!!」
何の抵抗も無く肉竿を受け入れる彼女の膣肉は、結衣よりも柔らかく包み込むようだ。竿をしごくざわめき方が多様で、一度呑み込んだら決して離さないという牝の本能を感じる。
何度か抽送を楽しむと、肉棒を引き抜いて尻穴にねじ入れた。
「んひぃぃぃ……っ!!」
彼女がおとがいを上げて喘ぐと、結衣がゆらりと顔を動かし、徐に彼女の唇を重ねた。結衣は彼女と艶めかしく唇でまぐわいながら、彼女の乳房を揉みしだく。
「んっ……んくちゅっ、ひっ、ひぃんっ、あっ、結衣、そこつまんじゃ……やんっ、そんなに激しく突かな……い、イクっ、だめ、もう……ひぐぅぅぅぅっ!!」
彼女が激しく達すると、透明な液体が俺の腹部に打ち付けられた。尻穴のきつい締め付けに恍惚としながら、絶頂に浸る彼女の菊壺をぐりぐりと抉る。
「はっ、はひっ、そんなに、動かさないで……あっ、うっく……っ」
「ママ、可愛い……ひぃんっ!?」
油断していた結衣の膣口に再びねじ込むと、身体を沈めて可愛らしく喘いだ。
「あら、結衣もとっても可愛い……んはぁっ!!」
すぐさま彼女の膣肉にねじ込み、尻穴にも挿入する。
結衣の膣で2回。
彼女の膣と尻穴で1回ずつ。
速度を上げながら、次々とねじ込んでいく。
「ひっ、ひぐぅっ、ひぃぃ……っ!!」

「あっ、あひっ、はぁぁぁ……っ!!」
２人の声がどろどろに溶け合う。唇を重ねて、互いの乳房を嬲る様はこの世のものとは思えない程いやらしくて美しい。
結衣の双丘をがっしりと掴むと、２人の肉丘で挟むようにして肉棒を挿し込んだ。
『ひぃんっ!?』
腹部の柔らかさと密度の違う恥毛のしょりしょりとした感触に溺れながら、ゆっくりと腰を押し引きする。肉棒の表と裏に２人の肉芽がこすれる度に、柔らかな肢体が肉棒を挟んで跳ね上がる。
「ひっ、ひぐっ、んひぃぃっ!!」
「あっ、あくぅっ、んくぁぁぁ……っ!!」
理性を削り取られた２人の声が、徐々に判別が付かなくなってくる。結衣の尻を下にぐいぐいと押し付けて、肉棒がより強い締め付けで圧迫されるようにする。
ぐちゅっ、ぐちっ、ぐちりっ、じゅぐ、ぐぢゅり……っ。
『はっ、はひっ、はっ、はぁっ、はぁぁぁ……っ』
２人の声が重なる。気付けば２人は手を重ねて、俺の動きに合わせて腰を振っていた。３人揃って絶頂に向かおうと、息を合わせて下腹部をこすり合わせる。
「はっ、はっ、はぁ……っ、そろそろ、出そうです。２人の腹に出します。良いですね？」
「きて、いっぱい出して、出して……っ」
「もう、限界よ……出して、たくさん出してちょうだい……っ」
２人の甘ったるいおねだりに嗜虐心をかき立てられて、脇に置いていたローションを手に取る。肉棒に垂らしながら抽送すると、結合部が見る間にいやらしい糸を引き始めた。腰の動きも射精に向けて一気に速める。
ぐちゅっ、がちゅがちゅじゅぐっ、じゅぶっ、ぐじゅぐじゅぐじゅっ。
「あふぁぁぁっ!?　すご……これやば……あぁぁあぁぁぁぁっ!!」
「ひぃぃんっ!!　ひぃぃんっ!!　もう、だめ、イ、イク、イっちゃうぅ

……っ!!」
卑猥な水音が、3人の交わっている部分から絶え間なく聞こえて来る。下腹部の奥底からマグマのごとき奔流が駆け上ってきた。
「俺ももう、出ます、出ます、出ます……っ!!」
『きて、きて、きて、きて……っ!!』
頭の中で、ぱきんっ、と栓が外れる音がした――その瞬間。
――どぶごびゅるっ、ぶびゅるるっ、びゅぶっ、ごぶびゅぶぶぶ……っ。
2人の下腹部から胸にかけて、大量の白濁を注ぎ込んだ。
『あぁぁぁ

なさそうだ。
今はリビングのソファに座っているんだけれど……。
何故か、２人に左右から挟まれて、
「あ、あの、ですね、そろそ、ろ、これ…うぐ……っ」
彼女は俺の上着を捲って乳首を指や舌で嬲り。
「なあ、結衣、あんま先っぽばっか舐められると……うぁ……っ」
結衣は、俺の肉棒を咥え、自分が話す時は手でしごいていた。
「ヒッキー、気持ち良い？　どう？」
「え、や、めっちゃ気持ち良いけど……や、そうじゃなくて」
「ヒッキーくん、ここ本当に敏感ね～。……可愛い」
「や、だからですね、その……うぐ……っ！」
「んん……っ、んぐっ、ごく、ごく、ごく……んっく、んんん……えへへ、いっぱい出たね」
「……そうですね……っ」
雑談をしながら、こんな感じで何度も抜かれている。俺もやり返してはいるんだけど、２人とも欠かさずお返しをしてくるし、そうすると今度は自分たちをいじめてと猛烈に嗜虐心を煽る仕草でおねだりしてくるのだ。無限快楽地獄である。字面がごつすぎるな。
「うふふ～、ヒッキーくん、どう？　今度温泉にでも行かない？」
「え、マジですかんむっ」
頬をつねられた。
「ママ、ヒッキー、何言ってんの！」
「あら、結衣も一緒のつもりだったんだけど～」
「んむ……ぷはっ、俺も、そういう流れかと思ったんだが……」
「え、そうなの？　それなら楽しそうかも……って、だめー！」
こんな会話をしながら、３人で過ごす夜は過ぎてゆく。
３人の関係を改めて整理すると、中々頭が痛い。
どこまでがセーフで、どこからがアウトという基準があやふやになったまま。
この奇妙な関係は、しばらく続きそうだ。
……取り敢えず、体力を付けよう。マジで。

お終い。

単発企画
比企谷八幡とヒロインたちとの各関係をひとまとめにしてしまうと、思いの外悲惨な事態になる。８月７日時点

「……」
周りの少女（と女性）を見渡し、碇ゲンドウモードで押し黙る。
時は、ある冬の休日。
場所は、サイゼ。家だと若干狭いので。
列席者は、比企谷八幡、比企谷小町、雪ノ下雪乃、由比ヶ浜結衣、一色いろは、川崎沙希、平塚静、城廻めぐりの８名。
……うん。
やべえ。
どうしてこうなった。
×　×　×
遡ること１日。物語の深み０だな。
放課後、いつも通り奉仕部でだるんだるんとしていると、一色が不意に立ち上がり、
「皆さんの進捗状況を確認しましょう」
と言い出した。
「……え」
いやな予感、というより確信を持っての、「……え」だった。
ちなみにだるんだるんとしていると書いたけれど、実際は直前まで一色が俺の唇を奪っていたし、由比ヶ浜が負けじと俺に自分の胸を揉ませていたし、雪ノ下は紅茶を注ぐついでに俺の耳に舌を入れていた。え、何これどこの未来の結城さん？
「……ええと、進捗って、何の……？」
そろりと聞く。ちなみに舌の感触と胸の感触で気もそぞろです。超そぞろ。
一色は妖しく微笑むと、俺の唇に指を当てた。なんだそれ超可愛い

なお前。
「決まってるじゃないですか。先輩が手を出した人たちとの関係について、ですよ」
「う」
　一色の言葉に、雪ノ下と由比ヶ浜の動きがぴたりと止まる。耳がひんやりするし手の指はばっちり胸にうずもれたまんまなんですけど……。
「比企谷くん……私たちに飽き足らず、他の人にまで……？」
「や、待て、ちが……わないんだけど、や、その……」
「ヒッキー……んっ、んあっ……」
「おい由比ヶ浜、お前だけ行為を続けてんじゃねえよ……あ～、柔らか――」
「もぐぞ」
「○×▲☆～～～～～!?」
「あ、先輩が何か懐かしいマンガみたいなリアクションになってる」
「はあ、はあ、はあ……って、なんで小町がここに!?」
　気付けば俺の横にちょこんと立っていた。座敷童なのん？　確かにうちに幸福をもたらしてるけど。
「やー、お兄ちゃんは今、このハーレム的状況で調子に乗ってるんだろうなー、もごうかなーと思って」
「説明になってないぞ!?」
　なんか、くらやみの簡易版みたい。えらい可愛いこの世の理も居たもんだ。
「ま、それは冗談として。お兄ちゃんに早く会いたいなー奉仕部なら来ちゃっても問題無いよな～もし他の皆さんが席を外すような事があればお兄ちゃんとこの教室でアレするのもありかな～なんて思ってね！」
「前半超可愛いし後半超えげつないなお前」
　兄妹で仲良く会話していると、一色が目を見開いていた。
「え、先輩……まさか兄妹で……？」
「う」

冷静に言われると……なんて思っていると、小町がふわりと抱き付いてきた。ほんのり甘い香りが鼻腔をくすぐり、一瞬目を合わせた時の目を細めた笑みが妙に艶っぽくて、心拍数が一気に跳ね上がる。
「そうでーす！　お兄ちゃんってば、小町と一つ屋根の下なのを良い事に夜毎にあんなことやこんなことを……♡♡♡」
「おいバカ待て今までハートマークは使ってなかっただろうが」
「ツッコむのそこなんですか……」
一色に引かれた。この子のどん引きって結構効くんだよね……。
一色がむむむと唸り、雪ノ下、由比ヶ浜、小町、俺と視線を巡らせる。
「先輩が手を出した人は他にも居るし、しかも人によって状況も異なる……むむむ……うん、よし」
手をぽんと叩き、首をくりっと傾げる。
「皆さんの進捗状況を確認しましょう」
とびきりキュートな笑顔で、さっきと同じ事を言った。本当に可愛かったので反射的に撫でたのだけど、他3人にも撫でる等の動き（「等」とぼかしておこう、うん）を強要されて大変でした。

×　×　×

そして冒頭のこの状況。
皆を集めた事もあってか、一色が司会進行を務める。なんだこれ？
「では、『先輩と皆さんの爛れた関係を確認する会』を始めます」
おい。
「イエ～イ、爛れ爛れ～！」
「おい小町、すげえノリノリになるんじゃねえよ。っておい由比ヶ浜、おいバカメロン。爛れって意味がわかんねえままにどんどんぱふぱふするな。お前の場合ぱふぱふの意味が……って雪ノ下、川崎、すんごい冷たい目で見ないで。辛いから、辛いから。ってちょっと、静さ……平塚先生、一色、さりげなく太腿撫でないで、ねえ！　え、ここでもちゃんと呼べ？　マジですか？　レベル上がってませんか？
仕方ないな……じゃあ、し、静さん……待て待て待て待て一色、太腿の更に根本はまずい。まずいから、な？　落ち着けって！　っだああ

あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
絶叫。
なんだこれ。
「比企谷くん……」
どこか寂しさが伴った声音で呼びかけられ、はっと顔を上げる。
めぐり先輩が、何とも言えない表情で今のやりとりを見ていた。死んでいいかなあ。
「やっぱり君って……ごめん、なんでもない」
「あのセリフさえ言えないと!?」
あのめぐり先輩に目を背けられた。辛い。
絶望していると、平塚先生がめぐり先輩に話しかけた。
「なあ城廻。お前もいずれこいつとこういう爛れた関係になるんだぞ？」
言って、先生が俺の首に手を回して、あっと言う間に吸い付く。
『～～～～～～っ！』
俺とめぐり先輩を中心に、一同が息を呑む。
あ、ちなみに確認しておくと、ここ、サイゼです。割と奥まった所にあって良かった。
先生が数秒後に唇を離した時には、すでにびんびんになっていた。吸い付かれた場所の外側は唾液が外気に冷やされひんやりしているものの、内側はひどく熱を持っているように感じられた。
一色がこほんと咳払いして、俺にもたれかかる。なんでだよ。
「ん～、先輩の匂いやっぱ好きだな～……。……あ、そうだ、確認です。先輩と最後まで行った人～？」
『!?』
一色がころころ甘えている光景に目を奪われていた面々（由比ヶ浜が小さい声で『ヒッキーの匂い……あたしも後で嗅ごうっと』とかほざいてたけど聞かなかった事にする。恥ずかし過ぎるから聞こえない様に言ってくれませんかねえ……）が、大小の差はあれど目をむく。
次の瞬間、雪ノ下と川崎が全力で顔を逸らし、先生が漢らしく親指を立ててにかっと笑い、小町がにゃはっと笑った。なんで後半２人は

こんなに堂々としてんの……。
ちなみに由比ヶ浜は反応を示した４人を見て「え、え、え!?　こんなに!?　あたしなんてまだ……」と言って自分の胸を見て、一色は俺の耳元で「良いもーん、これから先輩とどろどろになるまでするんだも～ん」と死ぬ程恥ずかしい事を言って息を吹きかけてきた為思い切り勃って、めぐり先輩はすごく静かに腕を抱いた。あれ、泣きそう……。
小町があごに指を当ててん～と首を傾げる。
「この中で更に変態的なプレイをした人は……雪乃さんを筆頭に、沙希さん、平塚先生、いろはさん、小町……辺りかな？　特に平塚先生はえぐいですね～。小町は夜の公園で途中までが限度ですよ！」
「ふ、皆まだまだのようだな」
平塚先生がふふんと笑う。だからなんでそんなに堂々としてんの？
――と。
直後、雪ノ下が顔を真っ赤にして立ち上がった。おお、珍しい……。
「こ、小町さん!?　わ、私を筆頭にって、どういう……」
「え～、だって雪乃さん、一番お兄ちゃんとしてますよね？　羨ましい！　エレベーターで触られるわ玄関先でするわうちのリビングでもするわ卓球場のベンチでもするわ……相当ですよ！」
「あ……う……」
顔から湯気を噴き出しながら、雪ノ下がゆっくり座った。後で撫でよっと。
「一色も中々だな。映画館でひたすらキスとは……よし比企谷、今度やろう」
「待ってください平……静、さ、……ん！　静さんとそんなことしたら絶対最後まで行っちゃうでしょう」
「？　そのつもりだが？」
「一応あんた教師ですよね……」
「沙希さんは今後加速度的に変態性を増したプレイをしていきたいんですよね？」

小町がにゃはっと笑う。何でこんなど変態な事を無邪気な笑顔で言えるのかしら……。
「は、はあ⁉　ばっかじゃないの⁉」
え、川崎さんエヴァ好きなのん？　あ、ツンデレの結晶体でしたねあなたは。
「え？　したくないんですか？」
「あ、や、その……」
小町、きょとんとした顔の可愛さと川崎にかける圧が異常だから。
川崎は小町の言葉にどもり、顔を真っ赤にしながらちらちらと俺を見る。
「あ、あたしは、別に……でも、あんたがその、したい、なら……」
「……っ」
やめろやめろ、急にしおらしくなるな、可愛いじゃねえか！
「あ、先輩、わたしもそういうのしてほしいかもです」
「急に⁉　アピールをこのタイミングで急に⁉」
一色の突然の責めに思考回路は嘔吐寸前。今すぐ帰りたい……。
うぐぐと唸っていると、一色が悩ましげに俺の胸に指を這わせ、上目遣いで見つめる。
「だめ……ですか？」
「あ、や、その……」
「だめーーーー！」
「わぷっ」
視界がブラックアウト。
どうやら2匹のキングスライムに挟まれたようだ。
「ヒッキー……あたしも……」
「……」
なんだお前、超可愛いな。
うん、絶対しようっと。
双丘にうずもれて全く喋ることが出来ないので、由比ヶ浜の肩をタップしたのだけれど、
「ほえ？　どしたの？」

阿呆極まりないリアクションをとられ、そのままゆらゆらと揺らされた。やだ、眠くなっちゃう……。
ようやく解放されて「ああ、もう、たっぷりしよう。お前がどれだけ恥ずかしがってもやめないからな？」と捲し立てると、由比ヶ浜が真っ赤になった。おやまあ、こういう責めもありなのですかな、ふぉっふぉっふぉっふぉ――
「もぐぞ」
「もはや天の裁きなのか!?」
急に空からめちゃくちゃ太い雷が落ちてきそう。
小町のもぐぞに戦々恐々としていると。
「……ん？」
つと、目の前にメモ書きが置かれた。
メモ書きを置いた手を辿ると、そこには川崎の姿が。
メモ書きをぱらりと開くと、
『今日、この後って空いてるか？』
「……っ」
やべえ。
すげえどきどきする。
結構な勢いで顔を上げて川崎を見つめると、川崎は恥ずかしそうに顔を逸らした後、もじもじと覗いてきた。え、ちょっと何この子。可愛すぎるでしょ。こりゃあもうこの後２人でアダルトショップに行って妖しいグッズを――とがっつり淫らな事を考えていると。
「……んん？」
携帯が震えた。
画面を見ると、雪ノ下の文字。
『今夜時間が空いてるのだけれど……』
うおおい。
なんだこれは。
雪ノ下を見つめると、遠慮がちに視線を伏せ、ほんの一瞬だけ上目遣い。
うん、死ぬ。

ちょっと待てこれは川崎をめちゃくちゃにしてから雪ノ下をめちゃくちゃにするコースかよ――！　とクレヨンしんちゃんばりに口を「うへへ……」と緩めていると。
「へ～、お兄ちゃん、へ～……」
「先輩、リアクションがキモい上にこんな、へ～……」
「ヒッキー、沙希ちゃんに加えてゆきのんとも、へ～……」
「比企谷、いいからうちに来なさい。ヤルぞ」
「なんか色々すごいことになってる!?」
気付いたらメモ書きと携帯を小町、一色、由比ヶ浜、先生にがっつり覗かれていた。なんだこれ。ていうか先生だけ押しの強さが半端ねえ。
ちなみに雪ノ下と川崎はお互い一瞬目を合わせた後、真っ赤になって俯いた。なんだお前ら、まとめて撫でるぞ。
にしてもなんだよこの状況……とわちゃわちゃ状態に呆れながらも若干楽しんでいると。
はたと、めぐり先輩と目が合った。
指を組んで、困ったように笑いながら首を傾げる。
「比企谷くん、やっぱり君って……ごめん、なんでもない」
「最後まで!?」
めぐり先輩にさらりとめこめこにされた。

お終い。

１１月１１日という日を意識してみると案外楽しい。雪ノ下雪乃の場合。

冬の気配を感じる、１１月１１日。
世は休日。
場所は、俺の自宅。
一緒に居るのは、氷の女王もといユキペディアもとい安心の胸元もとい、雪ノ下雪乃。冒頭から失礼すぎる。
今日は雪乃が家に遊びに来ていて、リビングで昼下がりの時間に２人でくつろいでいた。
今は大して喋るでもなく、ソファで並んで座って、互いに好きな本を読んでいる。
ちなみにほんのちょっと前まで雪乃は愛猫のカマクラを愛でに愛でていた。
うちに雪乃が来たのは少しばかり久しぶりだったのだけど、何お前生き別れの親子の再会か何かなのって勢いで雪乃が感動してるのが手に取るように分かった。
あんま顔に出さないけどね。
この子目がマジすぎるんだもの。
愛でられすぎてカマクラはずっとなーごなーご鳴いてた。
鳴いてるというより泣いてたのかしら、愛でられすぎて……。
今日は小町は友達とショッピングとのことで、帰りは夕飯前になるようだ。
雪乃と一緒にご飯を作るから、帰りに食材を買ってくる、とえらい気合が入っていた。
ちなみに、今日は友達と出かけるからと小町が言った時の俺と小町の会話。
「今日は用事あるのか」
「うん、友達と出かけてくる」
「ん、まさか毒虫も一緒じゃないだろうな……」

「お兄ちゃん、大志くんに大して厳しすぎでしょ……。何人かと行くんだけど、いるよ。大志くん」
「よし、今すぐ毒虫に予定をキャンセルさせろ。もしくはお前は家から出るな」
「それならまだ大志くんをキャンセルさせた方が良いな～」
意外と鬼だ、こいつ。
「しかしなんだ、お前あいつとなんやかんやでよく一緒にいないか」
言うと、小町が斜め上を向きながらくりっと首を傾げる。可愛い。
「んー、言われてみれば、かな。小町がいるグループ、よく皆で遊びに行くからね～」
「……なんだ、その、アレだ。今は何とも思ってなくとも、単純接触効果というのもあるだろ。だからほんの少しでも心配の芽を摘んでおきたいんだが……」
言うと、小町が目をぱちくりさせて、それからけらけらと笑った。うん、可愛い。
「あはは、大丈夫大丈夫。大志くんは良い人だから」
「……っ」
知ってる。八幡、この言葉知ってる。
男に、友人関係以上の領域に踏み込ませない壁を生じさせる言葉、良い人。
この言葉を直接又は友人伝いで聞いて、どれだけの男が心を打ちのめされたか。
ちなみに俺はこんなこと言われたことも無ければ、友達から聞いたこともない。
友達ってなんだっけ。
はがないはがない（≠「僕は友達が少ない」、＝「僕は友達がいない」）。
ネットで聞いていたに過ぎない知識だ。
しかしそれでも、この言葉に内包された優しさと絶対的拒絶の意志は生半可ではないことは分かる。
毒虫さんご愁傷様ですちーっす。

川崎大志、っべー、マジっべーわー。
そんな、(川崎大志が)悲しい会話をして、小町が雪乃に夕飯を一緒に作ろうというお誘いＬＩＮＥを打って、オーケーの返事を貰ってからウキウキとお出かけしたのが午前中の話。
その後、俺も少し外に出て昼ご飯を食べ、帰宅して間もなくしてから雪乃が家に来た。
「……静かだな」
「ええ、そうね」
カマクラもいなくなったリビングでは、２人がページを捲る音と時計の針の音以外にしない。２人の間に流れる静寂に気まずさは無く、心安らぐ安寧の空気がゆるりと流れている。
ふと、午前中出かけた際の買い物袋に目をやる。
……や、だって、小町が出かける前にあんな焚き付けてきたら、ねえ？
そんな阿呆みたいなリア充イベントになんざ興味無いと言ったら「散々イチャついておいて今更何言ってんの？」と雪乃以上の冷たい目を向けられた。妹に。
妹さえいればいいと思っていた頃にあの目を向けられたらマジで出家する勢いで衝撃的だった。
出家したら源氏物語の現代語訳に挑戦してみるかな。
話が逸れた。
「あー、こほん、おこぽーん」
「……病気？」
変な声で咳払いをしたら、雪乃が本を開いたまま、心配する気０の目を向けてきた。これから話題を切り出そうというタイミングでこれはちょっとつらい。
「……今の、心配する気０だろ」
少し拗ねたように言うと、雪乃がふぅっと息を吐いて読んでいた本をぱたんと閉じた。
俺に視線を向けて、ふっと優しく微笑む。
「……なぁに、心配してほしいの？」

「え……うぉ……っ!?」
妙に優しい声で言ったと思ったら、不意におでことおでこが触れ合った。雪乃の顔が目の前に来て、ほのかに甘い香りが鼻腔をくすぐる。
数秒程おでこを当てると、雪乃はすっと顔を離した。
「……ん、大丈夫そうね」
「え、あー、うん、や、その、なんだ、ご心配、感謝します」
最後にごちそうさまですと付け加えそうになって慌てて止めた。
何このスキンシップ恥ずかしすぎでしょこの子なんでこんな弄ぶ系女子のスキルを身に付けてんのと動揺していると、雪乃が口に手を当てて、くすりと笑った。
「熱もないし、その挙動不審な振る舞いはいつも通りの比企谷くんね。これなら頭も大丈夫そうだわ」
「大した名医ですこと……」
からかいついでに精神面も診断されたようです。何やこの子。
……しかし、雪乃からこういうことをしてくれると、これからの展開はかなり気が楽だ。
……別に俺がやりたい訳じゃないよ？　小町に煽られて、ちょっとどんな感じになるのかなーって気になっただけだよ？　ひとかけらも言い訳になってなかった。
頭をがしがしと掻いて、視線を宙空に彷徨わせる。
「あー……雪乃」
「なぁに？」
甘えるモードに入ったのか、俺の肩に体重を預けてころころとすり寄りながら雪乃が答える。死にそう。
「今日って、11月11日だよな」
「ええ、そうね」
日付の確認をしたところで、よっ、と腕を伸ばし、買い物袋を手に取る。そこから取りいだしたるは……。
てれれれってってー（何故かレベルが上がる音）。
はい、ポッキー。

「……今日って、11月11日だよな？」
「……ええ、そうね」
二人の間を漂う空気が、とてもふわっとした。
×　×　×
雪ノ下雪乃という人物は、世間の感覚とずれているところは多々あるけれど（人のことは言えないが）、俺が何を望んでいるのかは分かったようだ。訝しみ具合が半端じゃないもの。
「……今日は、11月11日ね」
「あ、ああ」
あ、あれ、なんか雪ノ下さんから確認してきたよ？　確認はこれで3回目だよ？　牽制なのん？
「ま、まあアレだ、たまにはこういう俗っぽいこともしておいた方が、世間の感覚とずれてる俺たちにとって良い勉強になると思うんだ」
「自覚はあるのね……」
雪乃がこめかみに手を当てて、はぁ、とため息を吐いた。
「それで？　比企谷くんは……それをしたい訳ね？」
「……まあ、うん」
「躊躇するくらいならやめなさいよ……」
またしてもため息。うーん、憂いの表情が似合うこと似合うこと。
や、そうじゃなくて。
「……たしかルールのようなものがあったと思うけど」
「ああ、先に口を離した方が負けってルールだな、一般的には」
こんなゲームをする一般があってたまるかって思ったのは内緒。
「……お互い最後まで離さなかったら？」
「……それは、まあ、ねえ？」
「にやけ顔が気持ち悪いわよ？　どうしたの？」
「気持ち悪い理由を説明しろって言うのか……」
俺の下手な笑い方に対する糾弾が半端無い。
……。
雪乃とのやりとりから、今の状況を考察する。
……雪乃は、なんやかんやでこのゲームをやるのは吝かではないら

しい。怪訝な表情はすれど、そこに拒絶の意思は見えない。優しくなったもんだ、ほんとに。俺のこの立ち位置なんだよって話だけど。

とはいえ、ここで「さあゲームを始めよう」なんて快活に言ったらドン引きされて帰られるまであるので、やり方はきちんと考えなければならない。

ここからどうゲームスタートにこぎつけようかと思案していると、雪乃が頬を微かに朱に染めて、身体をもじもじとさせた。

「……その、変な気を起こさないでね？　……あんまり頑張ると、明日動けなくなっちゃうから」

待って待って待って待って。

下半身がざわめいたよ、今。すーごいざわめいたよ。

「……お前、今の言葉こそ変な気になる起爆剤だってのは気付いてる？」

言うと、雪乃が顔が更に紅潮した。

「あ……」

小さく声を漏らして、俺の肩におでこをつけて顔を伏せてしまった。

内心悶え狂いながら艶のある黒い髪を撫でてやると、「んぁ……」と気持ち良さそうな声が聞こえた。まさかの追い打ち。

「雪乃……ほら」

「ん……？」

顔を上げさせて、勢いに任せてポッキーを薄く艶っぽい唇の隙間に差し込む。雪乃の方こそ既に変な気持ちになってるとしか思えないような陶然とした顔で、抵抗することもなくポッキーを咥えた。

よし、よし、よし。

何やってんだ俺、とは思いつつも。

ポッキーゲーム、スタート。

×　×　×

雪乃の二の腕を掴んで相対して、雪乃が咥えたポッキーのもう片方の端を咥えると、すぐにある結論に至った。

このゲーム、少なくとも俺たちには全然意味ねぇ。本当に。

や、他の意義ならある。
――そんな結論。
「ん……」
雪ノ下さん、目をうっすら開けてとてつもなく色っぽい表情で待ち構えてらっしゃる。
……この子、もう、キスする気満々じゃん。
これではポッキーゲームのどきどきも何もあったものではない。今の関係になっているからこそ楽しめる要素（初心な感じとか）もあるのではと淡い期待を抱いていたのだけれど、それは雪乃によって可愛く打ち砕かれた。
ここで、前述の他の意義についてもう一度考える。
今回の意義……それは、ポッキーを俺が食べ進む間、雪乃が緊張感を高めながら口付けを待つ顔を目の前で拝めるということ。
優しい表情や甘える表情を見せてくれるようになったけれど、それでも基本はクールなのは変わらない。それがまた良いんだけど。
そんな雪乃が、緊張で震えながら唇が触れ合う瞬間を待ちわびている……最高としか言いようが無い。
実際、雪乃のこの顔が拝めるならこのゲームを毎日でもやりたいまである。それくらい、魅力的な表情だった。
行くぞ、と目配せをして食べ進めていく。
かりかりかりかり。
かりかりかりかり。
じゃーがーり間違えた。
かりかりかりかり。
「……っ」
雪乃は微かに顔を震わせながらも、その手をゆっくりと俺の背中に回してきた。俺もそれに合わせて二の腕を掴んでいた手を雪乃の華奢な背中に回す。いよいよポッキーゲームの意味が無い。
ポッキーがあと3分の1程度になったところで、顔をゆっくりと斜めに傾けた。
食べ進む。

雪乃の腕に力が入る。
食べ進む。
俺の腕にも力が入る。
食べ進む。
雪乃の甘い吐息が、鼻腔を優しく癒した。
――ちゅっ。
「んふぅ……っ」
唇が触れ合うと、雪乃が一瞬だけ目を見開いて、すぐにうっとりと細目になった。

× × ×

唇を重ねるだけの時間はほんの数秒で。
唇の隙間を舌先でなぞり、何往復かすると、柔らかな上下の唇がゆっくり開いた。
心地良い興奮に包まれながら口内に舌を割り入れると、口腔粘膜を舐る前に、雪乃から積極的に迎え入れてきて、俺の舌を咥え込んできた。
「はぷっ、ちゅりゅっ、くちゅり、ちゅる、ちゅぷ、んふぅぅ……んっ、んっ、んんっ……」
……変な気を起こすなって方が無理だろう、これ。ていうかあなたの方が完全に変な気になってますやん。
雪乃の口の中にはポッキーの甘味が色濃く残っていて、味も匂いも雪乃本来の甘さと混じって、味覚も嗅覚も触覚も恍惚としてしまう程甘ったるい。
「んっ、んむちゅるっ、ちゅぷりゅ、はむっ、んむふぅっ、んふぅぁぁ……っ」
雪乃の表情はすっかり蕩けきっていて、可能な限り身体を密着させようと必死ですり寄って甘えてくる。
こうなった時の雪乃は本当に可愛く色っぽくて……例え気絶する程責めても、目を覚ましてすぐに甘えて行為を求めてくる。
それほど発情している状態というのは、経験的に見れば分かるようになっていた。

――今日って何の日だったっけ、と真面目に思い出せないまま、ふと思う。
……もう、最後までしちゃうか。
「んふぅん……っ！」
雪乃の背中に回していた手をそっと双丘に伸ばし、服の上からさわさわとまさぐる。
口付けで熱っぽく高まっている身体には刺激が強いようで、こんな序の口の愛撫でも達してしまいそうな程に身体を震わせている。
二の腕を掴んでソファに押し倒し、服のボタンに手を掛ける。
「んっ、ふぅんっ、ふぁっ、あっ、そ、それは……んふぁぁっ！」
この期に及んで抵抗する素振りを見せたので、少し強めに乳肉を下から掬うように揉んでやると、あごを反らせて可愛く鳴いた。
「あっ、あぁっ、あぁぁ……っ」
するとボタンを外して上着をはだけさせると……ほとんど中が透けてしまう、白のレースの下着を着けていた。
「お、お前、いくらなんでもこれは……」
極上のご馳走を目の前にしたように見とれて、ごくりと喉を鳴らす。
「や、こんなに早く……っ」
雪乃が腕を交差させて顔を覆い、口を恥ずかしそうにもにゅもにゅと動かした。
「……もう、我慢出来ねぇぞ……っ」
白磁の如き肌が紅潮しているのを見て益々欲情して、艶美な布に包まれた柔肉に手を伸ばす。
――すると。
――手のひらが着地する寸前に、とたとたと足音が聞こえた。
ばん、と。
突然、リビングのドアが開いた。
「やー、忘れ物しちゃって一旦帰ってきちゃったにゃーーーー!?」
はい、台無し。
ただの語尾が可愛い子になっちゃった。

「……」
俺、手を伸ばして、わきわきしたまま無言。
「……」
雪乃、はだけた上着で下着が見えないようにしつつ、無言。
「……てへっ☆」
小町ちゃん、すごいチャーミングにテヘペロを決めてくれました。
今この場で見なかったら、撫で回したいレベルで可愛かったんだけど。
今は往復ビンタしたい勢い。
やがて、雪乃がゆっくりと口を開いた。
「……小町さん、正座」
「……はい」
「……比企谷くんも」
「俺も!?」
この後、俺は野獣と化した罪を責められ（それはお前があんなエロいから……と反論したら、顔を真っ赤にしながらすごい冷たい目で睨むという器用なことをされて反駁を潰された）、小町はきちんとノックしなかったことを責められた（だってまさか昼間からリビングであんなイチャつくなんて……と小町がぼそっと呟いたことに対して、前例はあるだろうと俺が答えたらまた真っ赤な顔で絶対零度の瞳で睨まれた。理不尽だ、マジで）。
兄妹揃って正座させられた状態で、小町が話しかけてきた。
「……お兄ちゃん」
「……なんだ」
「この、バカップル」
「うぐ……」
「おだまり」
『はい……』
この後、小町はお出かけの途中だったため割とすぐ解放されたが、俺はもうしばらく正座させられた。
このままだと足が壊死すると思い、ポッキーを手に取って、

「本当にすまん。仕切り直させてくれ、すぐにでも」
と言うと、雪乃は顔を真っ赤にして、文句を言いつつもオーケーしてくれた。何だこの可愛い子。

お終い。

ハーレム状態でクリスマスを控えると戦乱の予感しかしない。（1）

「……」

周りの少女と女性を見渡し、碇ゲンドウモードで押し黙る。

時は、クリスマスを控えたある休日。

場所は、雪ノ下雪乃宅。

ぎゅうぎゅう詰めの感じは否めないけれど、それ以上に何が起きるか分からないという危惧から、ファミレスにはせず家にしておいた。雪乃の家だと何かと都合が良いという結果になり、使わせてもらうことになった。本当にありがたい。

大騒ぎにはならないだろうけど、ただただ怖い。

列席者は、比企谷八幡、比企谷小町、雪ノ下雪乃、由比ヶ浜結衣、一色いろは、川崎沙希、平塚静、城廻めぐり、雪ノ下陽乃、由比ヶ浜マ、鶴見留美の十一名。

前回よりも増えました。前回って言っちゃったよ。

……うん。

やべえ。

どうしてこうなった。

× × ×

「……はぁ……はぁ……皆さんの、進捗状況を……くひぃんっ、……確認、しましょう」

いつもの放課後。いつもの部室。

すっかり爛れた関係になり、部室で当然のようにいろはと行為に及んだ後のこと。

机の上で足を艶めかしく広げて淫裂から白濁を垂らしながら、いろはが息も絶え絶えに呟いた。

「……それ、何か前も聞いたような……」

「ひぁぁんっ!? やっ、も、せんぱい、ちゃんと話聞いてください……よぉぉぉ……だめ、だめだめ掻き回さないでぇぇ……っ！」

ぼんやりと以前のこと（夏くらいだった気がする）を思い出しながら、いつもの癖で、一度の射精で止まることなくくたくたになったいろはの肉壺目がけて腰を沈める。
いやよいやよも好きのうちと言うけども、この子の場合本当に毎回いやがりながらこの流れをねだるから、何かもうただただ可愛いごめんなさいなんでもないです。
いろはの腰を押さえてずぐにちゅと音を立てながら突き入れていると、両耳にふっと息が吹きかけられた。
「八幡、きちんと順番は守ってほしいのだけど。あと、一色さんの話を聞いてあげないと」
「ヒッキー、そうだよ。早くしてくれないと我慢でき……こほんこほん」
「……」
「んはぁっ!? やぁっ……おっきくなったぁ……っ」
身体は正直だった。
両側から美少女と呼べる二人に息を吹きかけられて、しかもまた違うタイプの美少女の奥深くに突き入れてるんだから、何これ天国じゃんそうか俺はこの世の覇者だったん――
「もぐぞ」
「○×▲☆～～～～～!?」
「あ、先輩が久しぶりに意味分かんない声を上げてる」
いろはが割と冷静な声で実況してくれた。
「……お前、いつの間に来てたんだ……」
気付くと、俺の真後ろに小町が立っていた。何この子神出鬼没キャラだったっけ？
居るのが当然と言うがごとく、平然と佇んでいる愛しの妹にジト目を向けると、てへっ☆と舌を出した。可愛くて何もかも許してしまうからとても困ったものである。
「なんかね、いろはさんが前に一回言い出したことを、そろそろまたしそうだなーって思って、来ちゃった☆」
「お前な……」

何その予感。第六感なのん？
にぱっと笑う小町に何も言えないでいると、小町の目がキラーンと光った。お久しぶりですヤマピカリャー。
後ろから急に手を伸ばして俺の制服のボタンを手際よく外し（手つきが妙にエロい）、Tシャツを捲り上げると……俺の両乳首を指の腹で撫で始めた。
「うぁっ!?」
「ひゃぁぁんっ！」
びくんと反応して身体が跳ねてしまい、それに伴っていろはも敏感に反応する。
「雪乃さん、結衣さん。耳、責めてもらえますか。取り敢えずいろはさんをめちゃく……めちゃくちゃにして、お話出来る状態にしちゃいましょう」
「言い直そうとして結局言うのかよ」
いろはも青ざめた顔で見てるぞ、おい。
「え、あ、わかったわ」
「う、うん」
雪乃と結衣はほんの一瞬戸惑ったものの、すぐに俺の耳に舌を差し入れてきた。何その迷いの無さ。
耳の中にそれぞれの舌がするりと入り込んでくると、ぞぞぞと寒気が走ると共に快感の靄が思考を包み込んだ。
「んふぅ……ちゅっ、くちゅぴっ、ちゅぽっ、ちゅっ、ちゅぷぷ……っ」
「はむぅんっ、んはぁっ、あぐっ、あぐっ、ちゅぷ、ちゅぽぽ……っ」
「……ぉ……あ……が……っ」
両耳を犯されてたまらなくなり思わず腰を引くと、乳首を刺激していた小町が腰をぐいと押し当てて――その勢いで、いろはの一番奥まで一気に突き立てた。
「ひぃぃぃんっ!?」
いろはは何が起きているのかすぐに理解したようで、不安と期待を滲ませた複雑な表情を浮かべて戦慄いている。
「お兄ちゃんだめだよー？　ちゃんといろはさんをいじめてあげない

と。あ、そうだ。雪乃さん、結衣さん。片手でいろはさんの胸を触って、もう片方の手でお兄ちゃんの玉を触ってみてもらえます？　どれくらい感じるのかなー」

背中から聞こえる小町の声が、ひどく蠱惑的で思考が霞んでしまう。

これは本当にまずいと思った矢先、いろはの乳房に二本の手がそろりと伸びて、細い指を柔肉に沈ませた。

それと同時にぞくりとした感覚がして下に視線を向けると、両脇から合計十本の指がさわさわと陰嚢を撫でていた。

「ひぐぅぅぅ……っ！　やだ、やだやだ、結衣先輩、雪ノ下先輩、だめだめだめ……せんぱいのおっきくなってるぅ……やぁっ、先っぽつままないれぇ……っ」

いろはが顔を手で覆い、涙を流しながら顔をいやいやと振っている。

しかしその仕草に反して、肉棒から精子をありったけ搾り取ってやろうと肉襞がくにゅくにゅと締め付けてくる。

俺も、耳と乳首と陰嚢を責められながらの抽送に気が狂いそうになっていた。

「ほーら、お兄ちゃん、がんばれがんばれー♡」

「お、お前……なぁ……っ!?」

腰をへこへこと緩慢に動かし、小町の為すがままになっていると、目一杯腰を引いたところで、小町が一気に腰を突き出してきた。

その勢いのままいろはの最奥に突き立てると、俺もいろはも全身を戦慄かせた。

「イっ……ひぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

「うぐぁぁぁぁぁっ！」

互いに情欲に染まった声を上げた瞬間、狙いすましたように小町と雪乃と結衣がそれぞれ責めていた場所をきゅっと強く摘まむ。

苛烈なとどめに、為す術もなく下半身が決壊した。

――どびゅるっ、ごぶっ、ごぶぶっ、ぶびゅるっ、ごぶぶぶぶっ、ぶびゅるっ――

直前に激しい突き入れをしていた訳ではないのに、信じられない量の白濁を放出する。
全身を心地良く包む脱力感と、やっと解放されるという安堵に包まれていると――雪乃と結衣が俺の腰を押さえて肉棒をずるりと抜いて、そのまま今度は小町と三人がかりで押し込んできた。
ずぐんっ、という鈍い感触と共に、一度緩んだ肉襞が再び強く収縮する。
いろはが顎を上げて「かは……っ」と声にならない鳴き声を上げた。
「お、お前ら、何して……っ!?」
三人の顔を見ると、明らかに嗜虐に燃えた目をしている。
このままではいろはもまずい事になるのではと、いろはに視線を向けると……いろはは自身の腰に回されていた俺の手を握り、逃げられないようにしていた。
俺も逃げられないし、いろはも逃げることが出来ない。
……前後左右から拘束されているという状況を認識して、その異常さに身体の奥底が疼いた。
「……八幡。せっかくだから一色さんのこと、もっと徹底的にいじめてあげたら?」
「そうだよヒッキー。女の子のことはきちんと満足させてあげないと」
二人が蠱惑的な笑みで話しかけて、雪乃は俺の竿の部分をにちゅにちゅとしごき、結衣は陰嚢を艶めかしい手つきで撫でる。
雪乃が手を引いたと思った瞬間、いろはがぐいと俺の腕を引っ張って、それに小町が合わせて腰を突き出して、ぐぽんっと言う音と共に強烈な陶酔感を伴う快感が脳を貫く。
「んひぁぁぁぁぁ……っ」
いろはが酩酊状態にさえ見えるうっとりとした笑みを浮かべて、もっともっとと求めてくる。
俺が全く動かずとも、前後左右から伸びる手が俺の腰を押して引く。夢見心地のまま、身体の奥底から射精衝動が湧き上がる。
何の抵抗も出来ないままに。

「――あ――」
最奥まで突き入れて、いろはの子宮に大量の精液を流し込む。
壊れた蛇口のようにとめどなく流し込まれる白濁に、いろははおとがいを上げて甘い声で呻く。左右と後ろからは悩ましい吐息が聞こえた。
結局この後、いろはのお腹がぷっくり膨れるまで連続で射精させられた。何これ死んじゃう。
いろはが復活したのは、完全下校時刻のほんの15分前だった。
こんな状態ではいろはの話は流れるかと思ったんだけど、言わんとしていた話の内容は前回と同じものだったので、その場で一気に話を進めることになった。俺の意思はもちろん無視です、はい。
変更点はメンバーが増えるという事だけだったので、早速召集の連絡が各方面に飛ぶ。
雪乃と結衣と小町の三人があっと言う間に手配してくれた。
ちなみにその間、俺はいろはに口でしてもらっていました。「先輩が手伝えることなんて何も無いですからー」とさらっとひどいことを言われながら。
腹立つとは思いつつも、俺の股間を撫でながらいやらしく目を細められたら……ねえ？　もう無理やないですか。誰だよこのキャラ。
「よし、連絡完了～。お兄ちゃん、楽しみだね～」
スマホをポケットにしまって、小町が手で口を覆って不敵に笑う。
うん。
超怖い。
いやな予感しかしない。
しかし、逃げるという選択肢は全くもって用意されていない。
最初から詰んでいるのだ、俺は。
だって、メンバーがメンバーですもの。
「……ああ、そうだな」
ふーとため息を吐いて、小町に生返事をする。
こうして、謎の進捗報告会議（四ヶ月ぶり二回目）が為されることになった。

続く。

ハーレム状態でクリスマスを控えると戦乱の予感しかしない。（2）

そんなこんなで、冒頭に戻る。
雪乃の家にも、流石に十一人で囲めるようなテーブルは無かったので（普通無いとは思うが）、輪になってるようなそうでないような不思議な形で座っていた。
普段リビングに置いてあるテーブルは脇にずらして、適宜何かを置くことにした。
さて。
『……』
……この地獄みたいな構図を、どうしようか。
はい、まずは列席者の情報整理。
奉仕部のメンバー（敏感少女）。
奉仕部のメンバー兼クラスメイト（巨乳忠犬）。
先生（発情期）。
後輩（とろとろキス魔）。
妹（オールマイティ）。
クラスメイト（泣き顔ドＭ）。
先輩（紅茶タンク）。
先輩（ド敏感魔王）。
中学生（照れ顔天使）。
奉仕部のメンバー兼クラスメイトの母親（エロ魔人）。
うん。
やべえ。
自分の所業（性的）に頭を抱えていると、左隣で借りてきた猫のように小さくなっている留美が俺の袖をちょこんとつまんだ。
可愛すぎて反射で撫でると、ほわんと頬が緩んだ。うん、可愛い。
「八幡……この人たち、八幡の何なの？」
『……』

留美が発した消え入りそうな声が、部屋の隅々まで染み渡ったような気がした。
そしてそれに上塗りするようなぴりりとした空気。
やだどうしよう、スパイシーにも程がある。
取り敢えず、右隣で恐ろしい程の冷気を放っている子を何とかしたい。
隣に座ってるだけで右半身が氷漬けになりそう。
これで左半身が燃えればフレイザードになれるんだろうか。フィンガーフレアボムズ撃ってみたいなぁ。
「えー……こほんこほん」
懐かしの悪役に思いを馳せていると、いろはが可愛らしく咳払いをして、俺をちらりと見た。そしてちろりと舌なめずりをして妖しく目を細める。
や、なんでだよ。
ほら、留美がめっちゃジト目を向けてんだろ、俺に。右隣はもう氷結地獄です。
俺の焦った様子を微笑ましい目で見て(腹立つ)、いろはがもう一度小さく咳払いをした。うん、可愛い。
「えーっとですね、冒頭からつい飛ばしちゃいましたが」
『？』
いろはの言葉の意味が分からないメンバーが、きょとんとした顔をする。
そしてさっきまで奉仕部の部室に居たメンバーが一瞬で顔を逸らす。
俺と雪乃は顔を逸らした先で目が合って、また更に顔を逸らした。何今の恥ずかしいくだり。
いろはが小町にちょいちょいと手招きをして、耳打ちで何やらこしょこしょ。この光景が既にちょっと和む。
間もなくして、二人が小さく『せぇの……』と声を合わせた。
『それでは！　《比企谷八幡と皆さんの爛れた関係を確認する会　第二弾》を始めたいと思いまーす！　どんどんぱふぱふ～♪』

入りからえぐかった。
全然和めない。
吐血するのを堪えていると、左手がぺちぺちと叩かれた。
何かしらと振り向くと、留美が膨れっ面をしている。
「八幡……爛れた関係ってなに？」
「うぐ……っ」
答えられる訳がねぇだろうと思って顔を逸らすと、川崎とばっちり目が合った。
川崎は口をあわあわとせわしなく動かし、顔を逸らしてちらりと流し目を送ってきた。
さりげなく色っぽいからたまらない。……や、そうじゃなくて。
「おい、小町、いろは。そのタイトルコールは洒落になんねぇぞ」
ジト目を向けて言うと、小町といろはが並んで同じ向きにくりっと首を傾げた。尋常でない可愛さに雪乃もぴくっと反応して、悔しそうに唇を引き結んだ。なんでだよ。
「お兄ちゃん、それなら何て言えばいいの？　香ばしい関係？」
「それちょっとベクトルが違う」
「おにいちゃん。きちく？」
「お前それただ真似したいだけだろ」
同じガガガだから許されると思ってるのか、ガンガン真似してきますねこの子。
言い方は真似てるけどセリフ自体はかなりやばいし。
「……」
……しかし。
この場の空気、どないせぇっちゅうねん。動揺しすぎてキャラがぶれぶれだ。
前回も参加したメンバーを見渡す。
変わったことがいくつかある。
まず、結衣といろはとは、行為の最後まで及んだ。
そしてこの二人と雪乃のことを名前で呼ぶようになった。
そして、めぐり先輩は前回から大躍進して（本人にこの言い方した

ら顔を真っ赤にして怒られそうだけど)、結構な所まで来ている。
何ていうかもう全裸の関係だ。
全裸って言っちゃったよ。
次に、今回初参加のメンバーを見渡す。
陽乃さんはもう今回マジで怖い。
怖いって言っちゃったけど、怖いもんは怖い。
何を言うか分からないっていうのもあるけど、この人が色仕掛けでもしてこようもんなら例えどんな状況であっても誘惑に乗ってしまいそうでまずい。
これただの俺の理性の問題だな。
由比ケ浜マ――彼女もやばい。今回は何気に爆弾魔……間違えた、ダークホースかもしれない。何についてのダークホースかも分からんけども。
そして留美。前回のめぐり先輩みたいな立場といえばそうだけど、年上と圧倒的年下とでは、この状況に慣れる時間にかなりの差がつくだろう。慣れてほしくもないんだけど。
うん、今日はなるべく留美を守るように動くといいか――
「先輩って、最近わたしのこと寝起きで犯すの好きですよねー」
「おぉぉぉい!? いろは!? 何でそれ今言ったの!?」
決意が一瞬で揺らいだ。
泣きそう。
留美の「え……?」という視線と他のメンバーの「うわぁ……」という視線がアイアンメイデンばりに身体を貫く。それもう死んでんな俺。
「あ、すいません。先輩がぬぼーっとした顔で考え込んでる間、小町ちゃんと色々話してまして。先輩、朝わたしが起きると大体身体を撫で回してますよね?」
「待って待って待って。土下座か。ジャンピング&スライディング土下座すれば良いのか」
射場さん的なね。
「そんなのいいですよー。その代わり単発で寝起きのいちゃいちゃ

シーンを書いてもらいますから」
「ちょっとメタすぎて何言ってるのか分かんない」
いろはと軽快な(?)やりとりをしていると、いつもならここでとっくに喋っていそうな人が腕を組んで押し黙っていることに気付いた。
「むぅ……」
先生に視線を向けると、難しそうな顔をして唸っている。
「静さん……どうしたんですか?」
俺の問い掛けに、先生はぴくりと反応してほんのり頬を赤らめた。
しかし女の顔はすぐに引っ込めて、先生としての顔に切り替わる。
「静さん、本当にどうしたんですか? いつもならもっと飛ばし」
「こら、やめろ、やめんか、やめてくれ」
怒るというより必死な制止を受けた。制止の三段活用を初めて見た。
本当に何事だろう。
捲し立てるようにして俺の言葉をかき消した先生が、恥ずかしそうにこほんと咳払いをして、視線を隣に滑らせる。
……ああ、そういうことか。
「その、なんだ、教師という立場に居るとな、流石に教え子の親御さんがいらっしゃると……色々と、な」
先生が苦笑いを浮かべる。
……確かに、そりゃそうだよなぁ。びっくりだよ、自分が。
ちなみにお互いの紹介もそれなりにしかしていないので、川崎なんかは先生の言葉に目をむいて、結衣と彼女を見比べて「え!? 似てるなって思ったけど……お姉さんじゃなくてお母さんなの!? え!? 比企谷何してんの!?」という戸惑い兼糾弾の視線を送ってきた。精神が摩耗してゆく……。
彼女は、先生の言葉で初めてぴんと来た顔をして(ほんわかとして可愛い)、胸の前でぽんと手を合わせた。
そして頬に手を添えて、にっこり笑って皆を見渡す。
「あらあら〜。今は保護者とか教師とか生徒とか、そんなこと気にしなくて良いですよ〜」

いつもののほほんとした口調で喋ったかと思うと……視線をつと俺に向けて、妖しく目を細めた。
空気感の落差を皆が敏感に感じ取って、誰かが喉を鳴らす音が聞こえた。
そして。
「ここにいる人はみ～んな……ヒッキーくんの牝なんでしょう？」
『ぶふぉあっ!?』
予想の斜め上にも程がある答えに。
全員が盛大に噴いた。
見渡すと、程度の差はあれど皆して、咳き込みながら「何だこいつ……」という目を向けている。
ちなみにその中に結衣も入ってます。母娘関係ないのねこういう時って。
この人マジでボマーだなと思っていると、先生がこほんと咳払いをした。
「……ま、まあ、それもそうですね。私も比企谷には日々身体の奥底まで貫かれている訳だし」
「静さん。待って待って待って」
「なんだ比企谷。いつもは私が待ってと懇願した所で更に強く腰を打ち付けてくるくせに」
「あんた開き直りすぎだろ!?　俺の性癖をばらすなよ！　ああ、先輩、物悲しい目で見ないで！」
先生が見ていて清々しいくらいに晴れやかな笑顔になっている。
いつも通りどころかここまで我慢してた分更にひどくなりそうなんだけど。
「城廻。注意しておけよ。比企谷は一度ハマったらとんでもない獣になるからな」
「え、え、え……!?」
相次ぐ飛び火と流れ弾。
白目になりかけていると、先生が点けた火に、満面の笑みでガソリンを注ぎにくるやつがいた。

「でも、めぐりさんも中々ですよね？　だって髪撫でられると他の人と明らかに違った反応をするじゃないですか？　あと公園の隅に行ってお口で……」
「わー！　わー！　わー！　こ、小町さん!?　なんで知ってるの!?」
「え、当てずっぽうだったんですけど……もしかして当たってたんですか？」
「……」
　めぐり先輩が両手で顔を覆ってやんやんと首を振っている。死ぬほど可愛い。
　小町はそんなめぐり先輩を見て「これで夜になると猫耳を生やして下着姿でうろつくようになれば完璧なんだけどなー……あ、でも胸をもっと大きくしないとだめか。お兄ちゃんに頑張って揉んでもらわないとなー」などというツッコミどころしかないセリフを呟いていた。マジこの子なんなの。妹ですよね分かってます超可愛いよ。
「……」
　それにしても。
　この時点で、既にかなり疲れている。俺はもちろんだが、女性陣も心持ちしんどそうだ。
　帰りたい……あ、ここで寝ればいいのか。やだ皆に襲われちゃうごめんなさい何でもないです。
「八幡……」
「ヒッキー」
「おぉ……」
　俺の表情から疲れを察したのか、雪乃が俺の手をにぎにぎして、結衣が俺の頭を撫でてくれた。
　幸せで死ぬという危険を今初めて実感している。
　……まあ、話は大体こんなもんだろう。帰ってゆっくりするとしよう。
　そう思って、ふっと吐息をこぼすと――不意に、背中をふわりとした柔らかい感触が包んだ。
　振り返ると、陽乃さんが怪しい笑みを浮かべている。

イヤな予感――を通り越した確信が、疲れた思考の靄を稲妻のごとく切り裂いた。
「比企谷くんはさぁ……クリスマスイブは、誰と過ごすのかな？」
『……っ！』
蠱惑的な笑みを浮かべた陽乃さんが、甘露のような声音で発した言葉に、その場にいた全員が目を見開く。
あかん。これ、マジであかん。
……わー、もう終わると思ったら……状態が悪化しちゃったよー。
逃げたい。しかし逃げられない。それは分かってる。分かってるけどそれでも逃げたい。
「……おぉぅ……」
リビングの中が、互いを牽制するような空気に染まっていながら、雪乃と結衣は俺を労わる手を止めないのがシュールすぎた。安らぐんだけどね。
何気に留美も左手をにぎにぎしてるのに気付いて超和んだ。どっちにしろこの空気はやばいんだけどね！
「……っ」
メンバーの一部が陽乃さんの言葉をきっかけに、明らかに顔つきを変えとぺろりと舌なめずりをした。
この後の展開を考えただけで、得体の知れない感覚がぞくりと背中を駆け抜けた。

続く。

ハーレム状態でクリスマスを控えると戦乱の予感しかしない。（3）

気まずい。

こんな言葉を一言目に持ってきてしまうくらい、抜群に気まずい。

あーどうしよう。

俺の背中に抱き付いた陽乃さんの発言により、この会の目的が「比企谷八幡との関係の進捗報告」から「クリスマスイブはこいつ誰と過ごすんじゃいこら、ケリつけたるさかい」になった。

後者の口調が荒いのは今この場の空気を察してのものです。流石にちょっと盛ってるとは思うけど。

「さーて、どうなるかなぁ……アピール合戦だね」

「んむっ」

陽乃さんが離れ際に俺の首の向きを変えて、軽く触れるだけのキスをして元居た位置に戻った。

おのれ……本編で覚えてろよ……あと唇柔らかいな……。

陽乃さんに向けてぐぬぬと唸っていると、留美が俺の左手を小さな両手できゅっと握った。

視線を向けると、頬を朱に染めて目を泳がせている。

「私は……別に……八幡となんて……」

これが。

ツンデレか。

ちらちらとこちらを見ては恥ずかしそうに目を逸らす留美があまりにも可愛くて、反射的にその頭をぽふぽふと撫でた。

留美は何も言葉を発することなく、とろんと気持ち良さそうに目を細めた。やだ癖になる……。

「ひゅおぉぉぉ……」

なんか変な声が聞こえると思って視線を巡らせると、小町がえびみたいな恰好で悶え狂っていた。えび反りというか本当の海老の方。

なんかこのまま後ろ向きにぴょんぴょん進んでいきそう。あれっ

て非常時限定の動きらしいな。超どうでもいいなこの情報。
「むふぁぁぁぁ……義妹かぁ……それもありなのかも……可愛いし」
すごい悩んでらっしゃる。
「お兄ちゃんの倫理観にはこの際目を瞑って……」
いらんこと言うな。こちとら常に通報の危機と闘ってるっつの。
通報の危機って言っちゃったよ。
純粋無垢な少女に兄妹揃って撃ち抜かれていると、留美が身体を近付けて、自分の頭に乗っている俺の手に小さな両手をぽふんと重ねた。
「……で、でも、八幡がどうしてもって言うなら……」
「がふぁっ」
「八幡!?」
頭の上で手を重ねての上目遣いというコンボは予想外の凶悪さで、思わず吐いた。砂糖を。
や、やべぇ、留美は結構どころかかなりアリなんじゃないかと思えてきた。
良いじゃん、クリスマスイブにささやかなパーティーを開いて、ささやかなプレゼントを交換し合って、ケーキ美味しいねと言い合って……どうしよう、幸せしか見えないぞ!?
それでパーティーが終わった後は……。
……パーティーが終わった後は……？
……。
自分を殴った。
「八幡!?」
頬に食らわせたのはビンタだったんだけど、煩悩を必死で振り払う俺を留美が血相変えて心配してくれた。
ちなみに雪乃と結衣は「引くわこいつ……」という目で見ている。付き合いが長いとそうなるよね。
「八幡……どうしたの？　大丈夫？」
いつになく優しい口調で頬をさすってくれる留美。
俺の属性って半分アンデッドみたいなもんだから、撫でられている

頬が癒える代わりにダメージが他の部位に来てる感じがする。足の先から灰になる感じ。
留美がさりげなく第一候補に躍り出た所で、視界の隅で先生と由比ヶ浜マ――彼女が何やらこそこそと相談しているのが見えた。
ざわり。
×　×　×
一段落して、身体にどの異性も触れていない状態になると（すごい表現だ）、先生と彼女がぱっと同時に俺を見て、にやりと目を細めた。
そしてすっくと立ち上がり、とととと足早に俺に迫ってくる。
留美も雪乃も結衣も、危険を察知したのか速やかに退避した。良い判断だ。
先生と彼女は俺の両脇にすとんと座り、不自然なくらいにこにこしている。正確に言えば彼女は割といつも通りで、先生はいつもよりエロ邪な笑みを浮かべている。
……「えろよこしま」って表現、超怖いなこれ。
「ヒッキーくん」
「比企谷」
「は、はいっ」
『目を閉じて』
「？　はい……っ？」
横から同時に呼びかけられてびくっと反応して、言われるがままに目を閉じる。
むにゅん。
「……んん……？」
手が、正確に言えば前腕の半分くらいまでが、何か柔らかいものに包まれた。
……これってまさか……。
カッと目を見開くと、案の定、先生と彼女が胸元を大きく開いて、その中に俺の手を収納していた。なんでそんなに優しい表情をしてるんでしょうか。
ツッコむべきことはたくさんある。それは分かっているんだけれ

ど。
「ほふぅ……」
思わず、温泉に浸かっているかのような声が漏れた。
極楽浄土を味わっていると、向かいからジト目の圧力を感じる。
「むぅ……」
いろはが嫉妬しているような、ごみを見ているような、複雑な感情（ただし全て負の感情）がこもった顔をしていた。
「いろは、その感じ久しぶりだな。最近デレてばっかりだもんな」
「なんですか先輩こういう目で見られるの好きなんですかやっぱりそうですよね先輩ってほんと変態ですえっちしてる時もわたしが『ばかぁ……っ』て言うと毎回物凄く興奮してますもんねほんと変態ですでもそんな所も大好きですずっとそばにいてください」
「性癖を暴露した上にプロポーズだと!?」
両手が年上爆乳の谷間に埋まった状態で。
後輩にどさくさまぎれのプロポーズをされた。
ＴＰＯがこれ以上合っていないプロポーズがこの世にあるだろうか。
事態の急展開具合に付いていけず白目になりかけていると、結衣と川崎が俺の近くまで来て、何やら話し合っている。
「沙希。あたしたちもやろう。腕は埋まってるから……足かな？」
「え、ええ!?　それは流石に……」
「待て待て待て待て。やるなら足じゃなくて顔にしてくれ」
巨乳に四肢を挟まれるって何の罰ゲームだよ。すげぇ気持ち良さそうだけど。
一応真っ当なツッコミをしたつもりだったんだけど、先生と彼女の後ろ側から、強烈な二つの冷気を感じた。
ぞっとして視線を向けると、雪乃と留美がそれはそれは恐ろしい表情で睨んでおった……。
思わず日本昔ばなしテイストになるくらい動揺している。留美、お前まで……！
『八幡……？』

あかん。
絶対零度の瞳が四つ。
雪女コンビの誕生である。
やめろ、そんな目で見るな！　あと自分の胸に手を添えて「私だって……」なんてセリフを呟くなよ！　しかも二人共全く同じことやってるし！　可愛いなぁもう！
あらゆる方向からあらゆる攻めと責めを受けていると、視界の端で陽乃さんとめぐり先輩が隣り合ってこちらを見ていることに気付いた。
陽乃さんはにやりと口の端を吊り上げていて、めぐり先輩は優し気な苦笑いを浮かべている。
「比企谷くん……。……」
「先輩、せめて何か言ってください……っ！」
切実な懇願だった。
×　×　×
ちょっと時間が経ったんだけど、未だに何も解決していない。
依然として二本のれいとうビームが飛んできているし（たぶん８０回くらい死んでる）、先生と彼女は胸をどう動かすと気持ち良いのかを勝手に話し合っている。
先生が「こうですか？」と言いながら互い違いにたわわな乳房を動かすと「そうですね～、ゆっくり動かしてヒッキーくんが気持ち良さそうな所を探すと良いですよ～」などとアドバイスをしている。
本当に何これ。今後が楽しみでしかない。
どうしたものかと途方に暮れていると、めぐり先輩がすっと立ち上がった。
「雪ノ下さん、紅茶でも淹れてひと息入れない？」
「あ……はい」
雪女モードを解除して（心持ち髪の毛が浮いていたのは気のせいだろうか）、雪乃が戸惑い気味に頷く。めぐり先輩は嬉しそうに頷くと、今度は留美に顔を向けた。
「えーっと……鶴見さん、だよね？　あなたも手伝ってもらっていい

？　雪ノ下さん、紅茶を淹れるのが上手だから、習ってみると良いよ」
「あ……はい」
雪乃と同じ流れで、留美も答える。
答える時に俺をちらちら見ては迷っていて、内心悶えたのは内緒。
三人で行こうかという運びになりかけた時、今度は陽乃さんが立ち上がった。
「めぐり。わたしも行くよ。雪乃ちゃんがちゃんと淹れることが出来るか見てみたいしね～」
「鬱陶しい……」
雪乃が物憂げにため息を吐くのを見て、陽乃さんが笑う。
そして俺と、何故かいろはをちらりと見て、にっこりと笑った。
笑みの意図が分からぬままに、陽乃さんはめぐり先輩、雪乃、留美の三人を促してキッチンへと消えて行った。
リビングのドアがぱたんと閉まり、束の間の静寂が訪れる。
……んん？
……これ、まずくない？
気付いたところで、後の祭りとでも言おうか。
自分に注がれる視線が、不意に獣性を帯びた。

続く。

ハーレム状態でクリスマスを控えると戦乱の予感しかしない。（４）

めぐり先輩が紅茶を淹れたいと言って、雪乃と留美を誘ってキッチンに行こうとしたところで、何故か陽乃さんも付いていった。

なんでわざわざと思ったけれど、リビングのドアが閉まった瞬間、その理由が分かった気がした。

ばたん、という音と共に、由比ケ浜――彼女と先生が俺からするりと離れる。さよなら極楽の感触……。

しかし、腕が柔肉に包まれている間、周りの視線などで奇妙な緊張をしていたのも事実なので、これはこれで解放感があるな……と思った。

ふひーと息を吐くと――安心したのも束の間、いろはが俺にするりと近付き、流れるような動作で俺を押し倒した。

「うぐぉっ……？」

カーペットの上で馬乗りされ、思考が真っ白になる。

俺の腰の上に乗ったいろはの表情は、ほんの十数秒前までとはまるで別人で、その瞳はどう見ても行為に及ぶ時の発情した牝の目をしている。

「先輩……それで、先輩は結局誰と過ごすんですか？」

「え、や、その……」

いろはのまだあどけなさが残る顔が目の前まで近付き、亜麻色の髪の毛が頬を撫でる。

ふわりと舞った甘い匂いが鼻腔から身体の奥まで染み込み、雪乃の家に居るという事実を一瞬忘れて、俺の部屋やいろはの部屋に居るかのような錯覚を覚える。

匂いは、場所や場面を印象付けるものなのだと気付いた。

俺が答えに詰まっていると、いろははくすりと笑い、スカートの裾をちょんと摘んで――中がぎりぎり見えるかどうかという所まで捲った。

蠱惑的な仕草に目を逸らすことも出来ずに魅入られていると、そのままショーツ越しに秘部をくにくにと押し付けてきた。
艶めかしい摩擦にジーンズ越しでもはっきりと分かるくらい勃起すると、いろはは口元に淫猥な笑みを浮かべた。
裏筋にじゅくじゅくとした熱を感じて、いろはが牝の液を分泌しているのだと気付く。
……留美という純真無垢な存在が退室して、更に直近の先輩である陽乃さんとめぐり先輩がいなくなったことで、いろはの行動の枷が外れたのかもしれない。
何の遠慮も無くなったいろはの行動は、あまりに分かりやすく、本能的で、純粋で、可愛らしいものだった。
いろはが扇情的なポーズのまま、にっこりと微笑んだ。
「わたし、話数的にもかなり優位に立ってると思うんです」
「ちょっとメタすぎて何言ってるのか分かんない」
ここに来てまさかのメタ発言だった。
「先輩……先輩はこのままだと結論をはぐらかしちゃいますよね。分かってます。先輩は優しいから」
だから――と、周りの女性陣を見渡して、にっこり微笑む。
「ちゃんと答えるまで、埋めちゃいますね」
「……は？」
何その怖すぎる発言……と思った矢先、いろはが次に行動に移った。
いろはは俺の足の間に腰を下ろし、俺に膝裏を見せる形で足を上げてゆっくりとショーツを脱いで行く。
突如として目の前で展開されるストリップショーに益々目が釘付けになっていると、いろはが脱ぎ捨てたショーツを俺の足の横にそっと置いた。
そして、立ち上がったかと思うと――突然、視界が肌色と桃色に染まった。
それと同時に鼻先に仄かにしょりしょりとした感触がして、濃厚な甘酸っぱい香りが脳を貫いた。

「むぐぅぅ……っ!?」
驚きはしたが、すぐに事態は把握した。
「あは……先輩、どうですかぁ？」
間延びした甘ったるい声が、限られた視界の外から降ってくる。
出来うる限り目を動かして状態を確認すると……案の定、いろはは俺の顔に乗って淫裂を押し付けていた。
試しにちろりと舌を出してみると、熱いぬめりが舌先にとろりと乗って、艶美な吐息混じりの声が漏れ聞こえた。
「先輩。わたしと過ごしてくれるなら、わたしの身体のどこでもいいんで二回叩いてください。そしたらわたしはここをどきますから。他の人を選ぶ場合は……タップも何もしないでください。わたしはずっとここにいます」
いろは　ｏｒ　Ｄｉｅ　？　どういうこと？
「むがむがー（何その選択肢の無さ）!?」
「あん……っ、せんぱい、だめ、ですよぉ……そんなに動いちゃ……んくふぅぅ……っ」
だめだ。
俺の囁かな抵抗も、いろはの快感に変換されて終わってしまう。
これは他のメンバーに助けを求めるしかない。
しかし……アダルト組は助けてくれる気がしない。
ていうか「んふぅ……っ」「ひき、がやぁ……んくぁぁ……っ」いつの間にか、俺の手の指が熱い滑りの中に入り混んでる。
この人ら、何どさくさ紛れで俺に愛撫させてんだよ。いつの間にやったのマジで？
……。
……あれ、これタップすら許されない状態なのん？
ここは残りのメンバーに賭けるしか……！
足をばたばたさせて小町、結衣、川崎に助けを求めると、三人が近付いてくる気配がした。
期待を込めて、見えないながらも視線を足元に向けると、ぽしょぽしょと話し合う声が聞こえた。

「わ、わ、ヒッキーの、ものすごくぱんぱんになってる……？」
「うーん、お兄ちゃんは毎日取っ替え引っ替えですからねぇ。絶倫に磨きがかかって、そこに来てこの異常なシチュエーション……これは、お兄ちゃんがいつも以上にぎんぎんになっていると見ました！」
「あんた何者なんだよ……。で、でも、ほんとにすごいな……」
「……」
鑑賞されてた。
そういうのいいから。
助けてー。
ぱたぱた。
「お兄ちゃんの足の動き、すっごい鬱陶しいですね。沙希さん、左足を取り押さえてもらっていいですか？　小町は右足を止めますので」
「え？　あ、ああ」
「せーの、ほいっ」
「……」
太ももを、こう、ぎゅっ、て感じで。
いともあっさり封じられた。
状況を整理しよう。
顔→いろはの淫部に埋まってる。
両手→先生と彼女の膣に指が入ってる。
両足→小町と川崎に取り押さえられてる。
ＪＩ☆ＧＯ☆ＫＵ☆！
途方に暮れていると、足の根元がむずむずした。
「すんすん……すんすん……」
……マジか。
「わ～、結衣さん……こういう時、本当にえっちですね～」
「だ、だって、すん、すん、ヒッキーのここ、本当にすごい匂いしてて、すんすん、頭くらくらしちゃう……」
犬系彼女に匂いを嗅がれていた。
あかん、結衣のこれ、匂いを嗅がれてると分かっただけで余計に……。

「あ、もっとおっきくなった」
死にたい。
ほんと助けてー。息を吸う度にいろはの卑猥な匂いが身体を満たして、もう頭がおかしくなりそうなんだよー。
「……あぐっ」
「んむ……っ？」
結衣が甘噛みをする時の声が聞こえたが、どこを噛まれたのか分からない。
何事かと思っていると――ちぃぃ、とチャックが下りる音がした。
ぞくりとした感覚が背筋を駆け抜けると、かちゃかちゃとベルトが外れる音がして、腰がぐいと浮く。
ずるりと衣服が剥ぎ取られる感触と共に、下半身が急に肌寒くなった。
……マジか。
「んむ……っ！」
「あっ、あん……せんぱい、どうしたんですかぁ……？　だめですよぉ……逃げようとしたって」
逃げようとしても、いろはが更に体重をかけることで簡単に封殺されてしまう。
いろはは簡単にお姫様だっこ出来るくらい軽いんだけれど（以前やらされた。きゃーきゃー言われてすげぇ恥ずかしかった）、流石に俺の頭にだけ体重をかけられると下手な抵抗が出来なくなる。
「うわぁ……ヒッキーの、ほんとに大きい……」
肉棒の目の前まで顔を寄せたのだろうか、三人娘の髪や吐息が内股や陰嚢に触れて、ぞわぞわとした慣れない快感が下半身を蝕む。
髪の毛や息の感触は、人によって違うのだということを知った。
「さてさて……それじゃ、いただきますか」
小町が場違いな程明るい声でそんなことを言う。おい、もはや目的が分からんぞ。
「そう……だね、うん。ヒッキーのこと、気持ち良くしたいな」
「……あんたたちに負けてられないし。……こうでもしないと、あん

たはあたしを選んでくれないだろうし……っ」
若干一名、無理心中じみた恐ろしいことを言っておりますけれども。
きっと今の川崎は顔を真っ赤にして可愛い顔をしているだろうということで、まあよしとする。若干怖いんだけどね、若干。
結衣と川崎が小町に続こうとする声を聞いて、未知の快感への期待で心がざわついた。

続く。

ハーレム状態でクリスマスを控えると戦乱の予感しかしない。（5）

視界をいろはに覆われたまま、成すすべもなく下半身の衣服を剥かれる。

微かに、けれどはっきりと聞こえる三つの艶かしい吐息は、微妙に違った熱を持って内ももをくすぐる。

「それじゃあ……ヒッキー……舐めるね？」

聞きなれた優しい声音がすると――肉棒の先端に、ぞわりと快感が走った。

「んむ……っ」

結衣が竿の付け根を押さえて、ちろちろと鈴口を舌先でつつく。

すんすんと匂いを嗅いでは舐めるのを繰り返されて、肉槍はその硬度を一気に増した。

「お兄ちゃん……もっと足広げて？」

小町の声音が、発情の熱を帯びている。

声がした直後、内ももをゆっくりと押される。

それに合わせて川崎も小町と同じ行動を取って、大の字に脚を開く形になった。

「んふぅ……っ」

とろとろに溶けた淫靡な吐息が混じり合い、誰の声かの判別がつかなくなる。

「んぐぅ……っ！」

結衣が亀頭にしゃぶりつき、小町と川崎はそれぞれ陰嚢と内ももをちろちろと舐め回す。

普段であれば決して同時に訪れることのない快楽の波に、足の指をぎちりと曲げて耐え忍ぶ。

序の口と分かる程度の責めでも、油断すればあっという間に果ててしまいそうだった。

『んふぅぅ……っ、んちゅっ、れるっ、ちゅぷぷ、あぐ、あぐ、ちゅぷ

ぷ……ちろちろ』
「〜〜〜〜っ」
ぴちゃぴちゃという淫らな水音が耳朶に染み渡り、三本の粘膜が牝の顔をして肉棒をしゃぶり立てる。
気付けば亀頭を舐める舌が二本に増えて、もう一本の舌は陰嚢の更に下……尻穴をつつき始めた。
「んぐぅぅ……っ、んぐっ!?」
耐え難い快感に身を捩ると、その動きを止めるようにいろはが体重をかけた。
いともあっさりと動きを封じられると同時に、鼻先が淫裂にめり込んで、濃厚な牝の匂いが鼻腔を満たした。
「せんぱぁい……だめですよぉ？　ちゃんと舐めてくれないと……」
「……っ」
そんなこと頼まれた覚えはないぞ……とは思いつつも、抵抗出来る状態ではないので素直に従うことにする。
割れ目から鼻を抜くと、それにより生じた空間がひくつきながらゆっくりと閉じていく。幻想的な程淫猥な収縮に、ごくりと息を呑んだ。
舌先を固めて、熱いゼリーを掻き分けて割れ目にずぶりと突き入れる。
「くひぃぃん……っ！」
嬉しそうな嬌声が聞こえて、頭をがしりと掴まれた。
「ひっく、くはぁぁ……っ、ひぇんぱい、もっと、もっとなめてくらひゃい……っ」
震える声は歓喜に染まっていて、呂律も回っていない。
いろはの艶姿は周りから見てもよほど扇情的なのか、どこからともなく喉を鳴らす音が聞こえた。
いろはに尻をぐりぐりと押し付けられていると、今度は両腕の前腕を掴まれた。
「ヒッキーくん……こっちも、ね？」
「比企谷……ほったらかしは感心しないぞ」

両脇から聞こえる甘ったるい声と凛とした声に応えて、元々挿入していた中指に加えて薬指も突き入れる。
熱く熟した淫肉は、歓迎するかのように二本目の指をずるりと容易く呑み込んだ。
『んはぁぁ……っ！』
二本の指を挿入してぐしゅりと曲げてやると、二人の身体がびくりと跳ねた。
そのままテンポ良く指を曲げ伸ばしすると、ぐっぽぐっぽと篭った水音が聞こえ、手首に熱い液が溢れて伝う。
「せんぱい……せんぱいぃ……」
両手での愛撫をしている間も、いろはは切ない甘え声で秘部を押し付けてくる。
朦朧とした意識の中で必死に三人を責めていると、下半身に痺れるような快感が走った。
「んふぅ……っ、ずっちゅ、じゅぷ、ぢゅりゅりゅ、じゅぽっ、じゅぽっ、ぐぽっ、くぷぷぷ……じゅりゅっ、ちゅぴぴ、ちゅぷ、ちゅぷ、じゅるるる……っ」
結衣もスイッチが入ったのだろうか、遠慮無しに卑猥な音を立てて、亀頭を舐り回している。
舌先や舌の腹、舌の背が亀頭を貪り、鈴口から絶え間なく溢れるカウパーも余すことなく啜り取られる。
「お兄ちゃん、いっぱい気持ち良くしてあげるから……たくさん出してね？」
小町が艶を帯びた声で囁くと、二本の指で竿を掴んで、ぎりぎりと締めつけながらしごき始めた。
それと同時に陰嚢にしゃぶりついてきて、目も眩む快感に一気に限界が近付く。
「んふぅぅ……っ、んふぅぅぅ……っ」
三人は一体どんな体勢になっているのか――川崎は、俺の膝を押さえて両足を押し広げて、尻穴に舌先をずぶずぶと侵入させてきた。
身体を強ばらせて抵抗しても、淫猥な粘膜に何度も何度も挿入を許

してしまう。
　自分の排泄器官がほぐされていく奇妙な感覚に身体が捩れ、肉棒の硬度が更に増していく。
「ほらぁ、せんぱい、だめですよぉ休んじゃ……っ」
「ヒッキーくん、もっと、して……？」
「比企谷……もっとかき回してくれ……っ」
「ヒッキー……んふぅっ、んちゅっ、れろれろ、ぢゅぷぷ、ちゅろろろ……っ」
「んふぁぁぁ……比企谷のここ、すご……ぃ……っ、れろ、れろ……っ」
「お兄ちゃん、イキそうなの？　イキそうなんだね？」
　四方から飛んでくる牝の声に、身体中が蝕まれ、犯される。
　下半身の決壊の予感に身体が震えると、結衣が肉棒を貪る唇を離して、指をウェーブさせて亀頭とカリ首を集中的にしごき始めた。
　小町も竿の部分をしごく強さを一層強め、川崎は尻穴にうずめた舌先をぐりぐりと動かす。
　――もう、ダメだ――。
　諦めると、ふっと身体が軽くなった。
　そして次の瞬間、睾丸から凄まじい速度でゼリー状の粘液が上ってきた。
　――ごびゅるるるっ、どぶっ、どぶどぶどぶっ、ごびゅびゅるっ、びゅびゅっ、びゅるる……っ。
　見えていなくても、きっと火山のような勢いで真上に射精しているんだろうと分かるくらいに、尿道を伝う白濁の感触がはっきりと分かる。
「わ、わわ……っ！　ヒッキーの、すっごい……っ」
「結衣さん、止めないで最後までしごいちゃいましょう」
「え？　い、いいのかな……っ？」
　小町の言葉に戦慄すると、射精を終えかけたタイミングで結衣と小町が再びしごき始めた。
「んぐぅぅぅぅ……っ！」
　舌と鼻がいろはの粘液に浸ったまま、更に襲い来る快感に悶え狂

う。
――その瞬間、ここまで積み重なった興奮や緊張で限界が来たのか、ふっと意識が遠のく。
「……お兄ちゃん？　あれ、お兄ちゃーん？」
「先輩？　……せんぱーい？」
徐々に遠のく意識の中、小町やいろはが呼びかける声が聞こえる。
そんな中、がちゃりとドアが開く音がして――
「紅茶持ってきましたよー……って!?　ちょ、ちょっと！　鶴見さん、見ちゃだめ！　雪ノ下さん、鶴見さんのことお願い！」
――めぐり先輩が大慌てする声が聞こえた。

× × ×

「……ん……」
重い瞼をゆっくりこじ開けると、ふわりとした柔らかい匂いに包まれていた。
安心感のある香りに心が安らいでいると、すぐ傍で声がした。
「目が覚めたようね」
声がする方向に視線を巡らせると、雪乃が穏やかな笑みを浮かべている。
自分の状態を確認すると、雪乃のベッドに寝ているようだった。
そして雪乃の方をよく見ると、その横には留美が心配そうに佇んでいた。
「八幡……大丈夫？」
留美が眉根を寄せて、今にも泣きそうな顔をする。
むずむずするような幸せに心が包まれて、愛おしさが湧いて留美の頭をくしゃくしゃと撫でた。
「ああ、大丈夫だ。疲れてたんだろうな。わりいな心配かけて」
極限状態（一対十）で精神が摩耗してる中、頭がおかしくなるくらいの責めを受けて射精したのだから……気絶くらいするのかもしれない。
記念すべき初失神だ。
全然めでたくねぇ。

俺と留美のやりとりを見て、雪乃がまるで母親のような笑みを浮かべる。
「もう少し休んでいても良いのよ。目がまだ腐ってるみたいだから」
「生憎だが、通常営業でも目は腐ってるんでな。来世を待つ程休む必要はねぇよ」
「それくらいの返しが出来るなら大丈夫そうね」
「なんつう荒い問診だよ……」
いつもの軽妙な（？）やりとりをしていると、留美が口を尖らせていた。なんで？
「八幡……」
「え……っ」
留美は俺に向かって手を伸ばすと、寝そべった俺の頭をくしゃくしゃと撫でた。
突然の事態に戸惑っていると、留美がにこりと微笑んだ。
「八幡。私、いつでも撫でてあげるから。前に八幡が泣いた時みたいに」
「ちょ、ばっ、おまっ」
予期せぬ飛び道具に言葉が飛びに飛ぶ。
これはやばいと思って視線を雪乃に向けると、雪乃は一瞬きょとんとした顔をして、やがてゆっくりと目を細めて、それはそれは分かりやすいジト目を向けてきた。や、ほんと、ＴＨＥジト目って感じ。
「八幡……中学生の前で泣いたの？　……流石ね」
「おい、流石って言葉を悪意で使うんじゃねぇよ」
製作者もびっくりの用途だぞ。
尚も続くジト目に耐え切れる気がせず、慌てて他の話題を探す。
「あ、えーっと、他の皆は？」
「私たちがキッチンに行った時に部屋に残っていた人たちは……今、城廻先輩にお説教を受けているわ」
「……」
うわぁ。
お説教の対象年齢、広いにも程があるだろ。

「……正座か」
「……正座ね」
うわぁ……。
一体どんな顔をしてお叱りを受けているんだろうか。特にアダルト組。
怒っためぐり先輩も可愛いよなぁ等と思っていると、留美がもう一度俺の頭を撫でた。
「私、そろそろ戻るね。八幡、ゆっくり休んでて」
「おう、ありがとな」
心遣いがなんとも嬉しくて、幸せいっぱいな気持ちで留美の頭を撫でる。
艶やかな黒髪を撫でていると、留美が心地良さそうに目を細めた。
うーん、良い撫で心地。
「……は、八幡……」
すべすべだなぁ。
「八幡……ねぇ、八幡……」
こりゃいつまでも撫でていられ――
「八幡ってば！」
怒られた。
ぱっと手を離すと、留美はさっきまで俺が撫でていた頭を両手で押さえて、顔を真っ赤にしていた。ちょっと可愛すぎて死にそう。
「……八幡の変態っ」
「待て待て待て」
捨て台詞のタチが悪すぎる。
呼び止めようとしたけれど、留美は俺の呼び掛けに反応せず、悪戯っぽく微笑んでぱたぱたと部屋を出て行った。
ぱたん、と部屋のドアが閉まると、涼やかな静寂が立ち込めた。
「……大変だったわね」
雪乃が心底労わる声音で言いながら、ベッド際に座った。
「……まぁ、たまには良いんじゃねぇか」
いつもの調子で答えはしたが、不意に近付いた距離に内心どぎまぎ

している。
「あ……」
布団に潜り込ませていた手が、ふと雪乃の手に触れる。
雪乃は微かに声を上げて、俺の手をそっと握った。
心地良い手のひらの感触に鼓動が高鳴り、欲求が懲りずに湧き上がる。
必死で自制するよう言い聞かせながら、雪乃の手に指を絡めていく。
雪乃も俺を見つめながら握り返してくる。
部屋の向こうでは、微かにめぐり先輩の声が聞こえてくる。お説教はまだ続いているらしい。
「八幡……」
雪乃の声が、急に近付いた。
気付けば雪乃の端正な顔立ちが目の前まで迫ってきていた。
甘い吐息が鼻腔に染みて、欲求に拍車がかかる。
「雪乃……」
ほんの、壁一枚二枚の向こう側には、皆がいるというのに。
雪乃の澄んだ美しい瞳に魅入られて、本能に逆らえなくなった。
続く。

ハーレム状態でクリスマスを控えると戦乱の予感しかしない。（6）

ベッドの縁に腰を下ろした雪乃が、身体を屈めてゆっくり顔を近付けてくる。
優しい光を帯びた瞳の中に、普段あまり見ない甘えた色が見えて妙に嬉しくなってしまう。
雪乃の手を握ったまま、そっと唇が重なった。
「ん……っ」
唇が触れるだけの優しい口付けをして、雪乃はすぐに離れてしまう。
もっとしたいという意思表示で雪乃の手を握ると、髪をかき上げて柔和に微笑んだ。
「ふふ……もう。そんな寂しそうな顔をしなくてもいいでしょう？」
「……っ」
お姉さんのような口調で言われて、顔から火が出そうな程の恥ずかしさを覚える。
雪乃はちらりとリビングの方を向いて、皆を気にする素振りを見せた。
「今は……その、声も出せないし、あまり時間もとれないから……その、これくらいで……ね？」
困ったような笑みを浮かべて首を傾げる仕草が妙に色っぽくて、さらりと流れた髪の毛を目で追ってしまった。
雪乃がゆっくりと身体を屈めて、今度は俺に身体を密着させて口付けしてきた。
小さな舌がちゅるりと口の中に入り込んでくる。
「んふぅ……っ、ちゅっ、ちゅく、ちゅりゅ、ちゅるる……っ」
発情するのを抑えるような、もどかしい動きをする舌に欲求不満が募る。
これはこれでずっと続けていたい心地良さもあるけれど、やはり物

足りない。
掛け布団を押しのけて雪乃の肩を掴むと、びくんと身体を震わせて瞳に僅かな情欲の炎が灯った。
こちらから舌を差し入れて、雪乃の口内を舐り回す。
舌を絡め、歯茎を丁寧になぞりながら、身体を正面にずらして俺に覆いかぶさるように誘導する。
「んふぅぅ……んっ、ふぅんっ、んくっ、ふぅぅぅ……っ」
雪乃は初めは抵抗する素振りを見せたが、すぐに大人しくされるがままになり、華奢な身体をゆっくり重ねてきた。
心地良い重みが身体にのしかかり、両頬に雪乃の手が添えられる。
「ん……っ、重くない？　大丈夫？」
唇を離して、二人の間に伸びた糸をはぷっと艶めかしく啄んでから、雪乃が尋ねる。
「全然。お前ほんと軽いな」
「お前じゃない。雪乃」
「……妬いてんのか？」
「……うるさい」
拗ねたように口を尖らせて、独占欲からか俺の首に口付けをする。
心持ち甘噛みされたのも、これまた嫉妬の表れだろうか。
「……ぷはっ。……ほんとは、もう少し重くなりたいのだけど……」
言って、雪乃が落ち込んだように視線を自らの胸元に落とす。
どうやら本当に落ち込んでいるらしい。
……どうしたら、言いたいことが伝わるだろうか。
思案して、雪乃の頭を撫でながら提案する。
「雪乃。胸、見せてくれ」
「え……？　で、でも……」
「良いから。見たいんだ」
俺の声音に含まれる意思を汲み取ってくれたのか、雪乃は視線を巡らせて声を潜ませた。
「その……脱ぐのは危ないから……」
言って身体を起こすと、そろりとセーターの中に手を入れ、背中に

手を回した。
かちっという音と共に白の清楚なブラがはらりと落ちて、雪乃はそれを恥ずかしげに布団の中に隠した。
俺に乳房をきちんと見せるようにセーターを捲くって、頬を朱に染めて顔を逸らすその姿は、呼吸を忘れる程美しかった。
「……ほら、こんなに綺麗だ」
「……っ。そ、そんなこと……っ」
自然と口をついた真摯な言葉に、雪乃の顔が更に赤らむ。
普段すました顔をしている分、こういう時の表情はギャップを感じて本当に愛おしくなる。
「あ……っ？」
雪乃の腰に手を回して引き寄せ、手を背中の方へと滑らせて、流れるように抱きしめた。
「お前はそのスタイルだから似合ってるんだって。だから俺も見惚れるんだよ」
言ってて死にたくなる程恥ずかしいんだけど（後で家の中で転げ回るとしよう）、今きちんと思いを伝えておかないと雪乃の今後に支障をきたしかねないので妥協しない。
「あ……私、そんな……良いの……っ？」
少し子供っぽい声音で、雪乃が不安げに問うてくる。
吐息が耳にかかってこそばゆく感じながら、背中をさするように撫でた。
「ああ。すげぇ可愛い」
「あ、うぁ……」
「本当可愛いし、綺麗だ。最高だって」
「あ、や、もう、いいから……っ」
「ほんと、可愛い」
「あ……ぅ……」
はい撃沈。
茹でノ下さんの出来上がり。
久々にやってみたけど、相変わらず……というか、更に可愛くなっ

てるな、雪乃のリアクション。
俺の胸に顔を埋めてうなっている茹でノ下さんの頭を撫でていると、セーターを捲ったままだったことに気付く。
……ちょっと、いや、かなりいやらしいことを、閃いた。
「雪乃……言葉でこうは言っても、伝わり切らない部分はあると思うんだ」
「え……何言って……？　もう、十分……なんだけど……」
「だから、きちんと行動で表そうと思う。俺がどれだけ雪乃の胸が好きかを」
「え……ちょっと、あなた何言っ……ひあぁぁんっ!?」
雪乃の肩を掴んで身体を引き離し、右の乳房の頂にいきなり吸い付くと――雪乃が驚いたように嬌声を上げて、咄嗟に口を手で覆った。
そのまま舌で乳頭を転がしてやると、あっという間にぴんと張り詰めると共に、頭上で甘ったるいうめき声が漏れた。
「んぅぅぅ……んくぅぅ……っ」
俺の舌から逃れようとしても、両手で自重を支えられない分、自然と身体の高度が下がる。
膝から下はベッドについているが、上半身は片手腕立て伏せのような体勢で、わざわざ自分から俺に身体を差し出す形になってしまう。
両手を伸ばし、ロングスカート越しに小ぶりな尻を鷲掴みにする。
割れ目を押し広げるように外側に揉みほぐすと、声に混じる糖度がいっそう増した。
「んふぅぅ……っ、んふぅぅぅ……っ」
懸命に快感に堪えながら首を振る。
その目にはうっすらと涙が溜まっていて、嗜虐心が益々そそられる。
声を出してはいけない。
長い時間を使うことも出来ない。
それらの制約が、互いの興奮をすこぶる高めていた。
口を離すと、乳頭はぴんと張り詰めて物欲しげにひくついている。
とどめに甘噛みしてやった後、もう片方に吸い付いた。

「だ、だめ、だめぇ……っ」
片手で支えきれないと判断したのか、口を覆う手を外して必死で自重を両手で支える。
俺の耳元で懇願しながら、声を上げそうになると俺の耳たぶを上下の唇で挟み込んで必死に堪える。
ロングスカートを捲り上げて直接尻を揉みしだき、湿り気を帯びたショーツを食い込ませてやると、もはや何も喋らずに荒い吐息を漏らすばかりになった。
「雪乃……入れていいか？」
二つの乳頭をたっぷり味わい尽くして、雪乃に問い掛ける。
雪乃の身体はじっとりと汗ばんでいて、驚く程色っぽく変貌していた。
「ダメと言ったって……どうせやるんでしょう？」
震える声で答えると、雪乃が力なく微笑んだ。
「雪乃、俺のをジーンズの中から出してくれ。そんでショーツをずらして自分で入れるんだ。両手でスカートを捲って、中が見えるようにして、な」
図々しいのを承知で言うと、雪乃が目を丸くして、恥ずかしそうに目を逸らした。
「あなた……私を責める時、本当に容赦が無いわね……」
言って、婀娜っぽい流し目を送る雪乃の顔には、微かな笑みが浮かんでいた。

× × ×

雪乃は戸惑いながらもチャックを開けて、いきり立った肉幹に息を呑みながらも、俺の指示通りショーツをずらした。
ロングスカートは脱いでいない為、このままでは結合が見えない。
そのため膝立ちになった雪乃に両手でスカートを捲ってもらう。
恥ずかしがりながらも自分の局部が犯される瞬間を晒そうと、震えながらも俺の指示に従う雪乃の姿は、息を呑むほど色っぽかった。
「それじゃ……下ろすわ……くはぁぁぁぁ……っ！」
肉幹がずぶずぶと割れ目の中に呑み込まれると、雪乃が甲高い喘ぎ

声を漏らした。
中の締めつけは明らかにいつもよりもきつく、何だかんだで相当高まっていたようで嬉しくなる。
「くふぁぁぁぁ……っ！」
最奥まで肉槍を迎え入れると、声が漏れそうだと思ったのか、雪乃はスカートから片手を離して口を押さえた。
目に涙を浮かべる雪乃にぞわぞわと背徳感が芽生えて、ますます意地悪なことを口走る。
「おいおい。片手じゃ繋がってるところがちゃんと見えないだろ？両手で捲くってもらわないと」
「……っ！」
首をぶんぶんと振って、スカートを捲る手を正面に持ってきて、片手でもきちんと見えるでしょうとアピールをしてくる。
しかし。
「……だめだ。やっぱり片手じゃちゃんと見えない」
ゆっくりと首を振ると、肉襞の締まりがきゅんと強まった。
羞恥心を煽る為に言った言葉ではあったけれど、実際片手だけで捲ると、スカートの丈が長いが故に影が生じてしまい、あまりきちんと見えなかった。
観念したのか、雪乃が口からゆっくりと手を離して、両手でスカートを捲る。卑猥な所作にも関わらずどこか気品を感じるその様は、却ってこの光景を淫靡なものにしていた。
口を一文字に引き結んで腰を上げていくのを、まるで名画を眺めるかのような気持ちで見つめる。
亀頭が抜ける寸前で止まると、またゆっくり腰を下ろし始めた。
――不意に、悪魔の誘惑が鎌首をもたげた。
口元がいやらしく歪めるのを必死で堪えながら――雪乃の尻を鷲掴みにして、一気に引き下ろした。
ごちゅん、と。
身体の奥の奥まで貫くと、亀頭が子宮の入口を力強くノックした。
「～～～～～～～～っ!!」

雪乃がかはっと息を吐いて、おとがいを上げて天井を仰いだ。
スカートを摘んだまま全身を戦慄かせると、淫裂から熱い液体が溢れ出た。
「……わりぃ、もう我慢出来ねぇわ。スカートはもう捲らなくて良いから、好きにやらせてくれ」
「……っ」
雪乃が涙を流しながらいやいやと首を振る中、腰を跳ね上げて結合を浅くし、もう一度最奥まで突き入れる。
「あぁぁ……っ、うぅぅぅ……っ！」
雪乃は口を抑えることはせず、代わりに両腕で自分の身体を抱いた。
背筋を真っ直ぐ伸ばしたまま、雪乃の肢体が上下に揺すられる。鈴口から溢れ出るカウパーは、その何倍も分泌される雪乃の淫液に紛れて秘裂から溢れ出た。
このまま射精するまで一気に、いや、そのままもう何回か射精するまで――となりふり構わず腰を振り立てていると。
部屋のドアが、音も立てずにゆっくりと開いた。
「……っ」
驚きに目を見開きながらも、どうするべきか考える。
急に動きを止めては雪乃に異変を勘付かれてしまう。
雪乃にばれないようにする理由もよく分からないのだけど、何故だか身体は自然とそう動いていた。
鍵をわざわざ閉めるような状況でもなかったが、それでも後悔せざるを得ない。
誰かが部屋に入ってくるほんの数瞬の間に、目まぐるしく幾多もの思考が脳内を駆け巡る。
「……っ」
入ってきた人物を見て、心臓が一気に冷え込む。
「（……陽乃、さん……っ）」
声に出来ないまま、雪乃にばれないように腰を動かし続ける。
雪乃は自分の身体を抱いたまま、来客に気付くこともなく必死で声

を抑えている。
かちゃり、と。
陽乃さんが俯いた状態で、後ろ手で鍵を閉める音が聞こえた。
ごくりと息を呑むと、顔を上げた陽乃さんと目が合う。
驚きと戸惑いに口をぱくぱくさせていると、陽乃さんは口の端をにやりと歪めた。
そして人差し指を艶やかな唇に押し当てて、静かにするよう可愛らしく促してきた。
訳も分からぬままに、陽乃さんが発する無言の圧に押されて頷いてしまう。
陽乃さんの視線が、雪乃に向けられる。雪乃は気付かない。
陽乃さんが艶と邪を孕んだ笑みを浮かべて、ゆっくりとこちらに歩を進めた。

続く。

ハーレム状態でクリスマスを控えると戦乱の予感しかしない。（7）

陽乃さんが妖しげな笑みを浮かべて、ゆっくりと近付いてくる。
なんでこのタイミングで？
なんで雪乃にバレないようにさせる？
疑問が次々と浮かぶ。
ついさっき雪乃から聞いた話を思い出す。
――部屋に元々残っていた人たちを、めぐり先輩が叱っている――。
その現況を聞かされた時、この寝室に居たのは俺と、雪乃と、留美。
……その間、陽乃さんは何処に居たんだ？
まさか、こうなることを最初から……。
「んくぁぁぁ……っ、は、八幡、少し、休ませて……っ」
背後に迫りくる陽乃さんに気付くことなく、雪乃が腰を上げて休もうとする。
くぽんと言う音と共に肉幹が抜けると、濡れそぼった襞が赤く充血した亀頭に物欲しげにキスをした。
重力に負けて亀頭がぬるりと半分だけ入ると、雪乃の口の端が微かに光った。
一体どうしたら――と思っていると、陽乃さんはベッド際でぴたりと立ち止まり、にやりと口元を歪めた。
ああ、この人は妹をイジめる時、いつもこんな表情をしてるのかな……と思った。
身体を屈めて、雪乃のすぐ後ろに手を付く。
「……っ？」
すぐ後ろでぎしっという音が聞こえたことで、初めて雪乃が異変に気付く。
しかしそれは危機感からは程遠く、惚けた顔で首を傾げながらゆっくり後ろを見る程度のもので――雪乃が来客に気付く前に、陽乃さん

がふわりと跳んだ。
飛んだという言い方の方がしっくりくるくらい、それはゆったりとしたモーションに見えた。
「もーう！　雪乃ちゃんダメでしょー？」
――言いながらベッドに着地して、陽乃さんは雪乃を背後から抱きしめて、二つの乳頭を指でぎちりと摘まみ――思い切り体重を掛けて、雪乃を下に引きずり下ろした。
亀頭が半分入った状態だったので、自動的に雪乃の身体は猛った肉槍に貫かれる。
ごりゅっ、と。
「あぁぁぁぁぁぁぁぁ……っ!?」
鈍い音がすると同時に、雪乃が目を見開いて甲高い喘ぎ声を上げ、その口を陽乃さんが凄まじい速さで塞いだ。
同時に肉茎を包む肉襞の収縮がとてつもなく強まり、不意を突かれたこともあり一気に限界が訪れる。
「うぐぁぁ……っ！」
どぶりゅっ、ぶびゅっ、びゅるるる……っ、どぶっ、ごぶぶっ、どぶぶぶぶ……っ。
俺も、雪乃も、全身を激しく戦慄かせて、互いの絶頂を貪る。
雪乃が締め付ける事で更に白濁を膣内に放出して、それにより雪乃が更に反応して……という循環が凄まじい濃度で発生して、腰が勝手に前後にへこへこと動いた。
陽乃さんが、雪乃の口と胸に手を当てたまま、雪乃の耳を犯そうとしているかのように妖艶な声で囁く。
「……だめじゃない、雪乃ちゃん。比企谷くんのこと、ちゃんと満足させないと。……ね、比企谷くん？」
狐のような瞳孔で見つめられ、動けなくなると同時にもう射精を終えた筈の肉棒が何度か脈打った。
「……」
雪乃を見ると、陽乃さんを咎めるどころか、自分を責めている人が陽乃さんだと認識しているかも怪しいくらいに目が虚ろになってい

る。
陽乃さんは雪乃の様子を見て満足気に微笑み、口を押さえる手を離した。
「……かっ、かはっ……ね、姉さ、ん……どうして、こんな……ひぁぁぁっ!?」
涙を流しながら振り向く雪乃の乳房を、容赦の無い十本の指が責め立てる。
人差し指でそれぞれの乳頭でぐりぐりと押しながら、残りの指でウェーブするように揉み続ける。
雪乃の言葉は、いとも簡単にかき消された。
「ん〜？　だって比企谷くんと雪乃ちゃんが二人きりになったら、ぜ〜ったいこういうことするでしょう？　だから……わたしも混ぜてもらいたくなったの」
最後の言葉だけ、異様な熱を帯びていた。
雪乃は陽乃さんの愛撫に為す術もなく身体を震わせるばかりで、陽乃さんはさりげなく雪乃を下に押し付けながら、乳房を揉みしだいている。
そのため、俺も肉棒を抜く事が出来ないまま雪乃の膣肉にしゃぶられて、射精したばかりの肉槍があっと言う間に硬度を取り戻した。
「ふふ、雪乃ちゃんったら、ほんとに敏感なんだから。……ほんと、こんなところまで似なくて良いのにね……」
「え、今なんて……っ!?」
陽乃さんの表情に陰りが見えたのが気になったのだけど。
陽乃さんの行動の衝撃で、呼吸が一瞬止まった。
「んむぅぅぅ……っ!?」
陽乃さんは雪乃の肩を抱き寄せ頬に手を添えると、横から雪乃の唇を奪った。
戸惑う雪乃がろくに抵抗出来ないのを良いことに、間髪入れずに唇の中に長い舌を挿し込む。
にゅるりと赤い粘膜が雪乃の中に入った瞬間、自分が今まで幾度と無くされた口付けや口淫の、理性を焼き尽くすような快感を思い出し

て身震いした。
「んむぅぅ……ちゅるる、じゅる、ぴちゃ、ちゅるる、じゅぴ、ぢゅるるる……っ」
「んふぅぅぅぅ……んむぅぅぅぅ……っ！」
陽乃さんは俺に見せつけるように、いやらしい水音を立てながら雪乃の口内を舐り回す。
歯列や内頬を舐める時、こちらから見てもはっきり分かるくらい、陽乃さんの舌が蠢くのに合わせて雪乃の頬が凹凸を作る。
雪乃がいやいやと身を捩ると、陽乃さんは右腕を伸ばして雪乃の右脇から乳房を揉みしだき、左手は抵抗したおしおきだと言わんばかりに、乳頭を強烈な強さでつまむ。
雪乃は目を瞬かせて、がくがくと全身を痙攣させては壊れたように腰を前後にグラインドさせる。
雪乃が助けを求めるように右手を伸ばしてきたので握り返すと、それを見た陽乃さんが舌と手による蹂躙を更に強めて、あっと言う間に雪乃を絶頂に追いやる。
俺の手に縋りつく美しくて細い指が、為す術もなく官能に打ち震えた。
「んふぁぁぁ……へぁぁぁ……っ」
陽乃さんに舌を吸い出され、舌の表も裏も入念に唇でしごかれると、雪乃は涙を流しながら喘いだ。
その顔は度重なる快感の波に打ちひしがれてとろとろに蕩けており、肉棒を締め付ける膣肉は絶えず痙攣していた。
天上の種族の戯れと見紛う程美しい光景に、ただただ息を呑みながら――一つの懸念を抱いた。
……雪乃、流石にそろそろやばいんじゃないだろうか……？
雪乃の身体が本気で心配になってきて陽乃さんに目配せをすると、陽乃さんは妖艶に目を細めて口を離した。
二人の間に伸びた濃厚な糸が、口付けという名の蹂躙の激しさを物語っている。
「ぷはぁ……っ、ふふ、比企谷くん、どうしたの？　そんな困ったよう

な顔して」
「や、その……雪乃、流石にやばいと思うんで、そろそろ止めた方が……」
「あぁっ、あっ、あっ、……っ」
話している間も、陽乃さんは雪乃の乳房を指で嬲るのを忘れない。
雪乃は口を半開きにして、魂が抜けたように虚ろな目で、壊れたように小さく喘ぎ続ける。
時折おとがいを上げてぶるると震えると、肉棒がきゅむむと締め付けられた。
陽乃さんは俺の言葉を聞くと、突然上着のボタンを外した。
前面を解放された衣服の内側から、豊満にも程がある二つの乳鞠が飛び出し、上気した美しい乳房とぴんと張り詰めた乳頭に目を奪われる。
ていうか、ブラ着けてないのかよ……!?
俺の反応に嬉しそうに頷くと、今度はミニスカートをぺらりと捲って……楚々として茂る恥毛が見えて目をむいた。
え、上下とも……？
「比企谷くん」
横並びになった美人姉妹の極上の身体から目を離せなくなった俺に、陽乃さんが挑発するような声音で語り掛ける。
「わたしのこと止めたいんだったら……わかるよね？」
わざとテンプレートな言葉を選んでいるのだろうか、ベタにも程がある台詞を言う。
しかしその言葉に伴う表情や仕草があまりにも色っぽくて、喉から声が出ず震えるように頷いた。
陽乃さんがおもむろに股を開いて、恥部を晒す。まだ何もしていないのに、内ももはぐっしょりと濡れていた。
陽乃さんが俺を見たまま、再び雪乃の唇を奪う。
口付けだけで陽乃さんと雪乃が二人とも達するのではと思う程の激しい口付けを見ながら、陽乃さんの淫裂にそろりと手を伸ばす。
陽乃さんのクレバスは、湯を張った浴槽に手のひらを付けたのかと

錯覚する程に熱く湿っている。
……これはこの場を収めるため、この場を収めるため……と言い聞かせながら、いきなり中指と薬指をねじ込む。
陽乃さんの肉襞がじゅぶりと指を呑み込んだ瞬間、得も言われぬ快感が湧き上がる。
今さっき自分で張り巡らせたくだらない予防線は、いとも簡単に頭の中から蒸発した。
「んくぅぅぅ……っ！」
陽乃さんが口付けをしたまま嬉しそうに目を細めて、全身を戦慄かせる。
今のこの状況は、体質で言えば雪乃よりよっぽど危険なんじゃないかとは思いながらも、目の前の艶姿の魅力に負けて指を激しく曲げて膣肉を抉る。
泉の水を手で掬い取るように淫液が溢れ出て、肘まで熱い粘液が滴った。
「んふぅぅぅ……んふぁぁぁ……っ」
陽乃さんが快感に戦慄きながら、見る見るうちに目の色を変えていく。
発情しきったその瞳は、陽乃さんがその口内を貪っている妹の瞳とひどく似ていた。
今の二人は、自分とそっくりな瞳の中に自分を映しているんだろう。
なんだか不思議な気持ちになった。
取り敢えず、陽乃さんを気絶させれば良いか……とあまりに自然に鬼畜なことを考えていると――雪乃が、思いもしない行動に出た。
「んむぅ……っ！」
雪乃が、陽乃さんの背中に左腕を伸ばし、脇を通して陽乃さんの乳房を掴んだ。
まるでケンカしているかのようにむんずと掴む様子は、普通に見れば痛そうなのだけど、陽乃さんはこれくらいならば全て余すことなく快感に変換してしまう。

あらん限りに手を広げて揉みしだくと、陽乃さんの身体がぶるぶると震えた。
流石の陽乃さんもこれには驚いたようで、目をむいて唇を離した。
「……ぷはぁっ、ちょ、ちょっと雪乃ちゃ――ふむぅっ!?」
乳房を揉みしだくだけで飽き足らず、今度は雪乃から陽乃さんの唇を奪う。
瞳の中に攻撃的な色を宿して、お返しと言わんばかりに陽乃さんの口内を蹂躙する。
「んむふぅぅっ！　んっ、んふぁっ、はぷっ、ぷはぁっ、こ、こら、やめ……んふぅぅぅ……っ！」
陽乃さんは身を捩るけれど、互いに互いを抱き寄せる形になっているため逃げることが出来ない。
陽乃さんは何で手を離さないのかと思ったけれど、単に負けず嫌いなだけなのだという結論に至る。姉妹揃ってそういう所があるらしい。
雪乃は何かのスイッチが入ったのか、陽乃さんの舌に乗った唾液を啜りながら、今度は俺を見つめた。
握り合った手にきゅっと力を込めて、腰をゆっくりと前後にグラインドし始める。
こんな状況下で雪乃自らが更なる快楽を求めてきたことに驚きながらも、油断するとまたすぐ射精してしまいそうになり、肉襞の淫らな締め付けに口を引き結んで耐える。
耐え忍ぶのに意識が向いて、陽乃さんの秘裂を抉る動きが緩むと、手首を掴まれやめちゃだめとせがまれる。
全身にくまなく意識を巡らせねばならず、一瞬も休む暇が無い。
しばらく雪乃優勢で責めていたものの、やがて陽乃さんも勢いを盛り返して、今は二人とも自分が優位に立とうと互いの唇を貪り、乳房を弄り合っている。
どれだけ互いに達しても、手も口も動きを止めないで、それぞれに俺の肉棒と指を絶えず求めて腰を振り続ける。
――こんな淫靡な光景が、この世にあったのか……。

『……』

感動に浸って惚けていると、陽乃さんと雪乃がふと同時に俺を見た。

そして舌を絡めたまま二人で目を合わせ、もう一度二人同時に俺を見る。

――何かが起きる。

予感を超えた確信に、ざわりと肌が粟立った。

続く。

ハーレム状態でクリスマスを控えると戦乱の予感しかしない。（８）

雪乃と陽乃さんの二人が、密着していた口をゆっくり離す。
その際に伸びた糸を、二人して舌をちろりと出して、艶めかしく掬い取った。
二人がそれぞれ俺の腕を掴む。
そしてそのまま倒れこんできた。
雪乃は俺の正面に、陽乃さんはそのすぐ右に。
「八幡……ごめんね、置いてきぼりにしてしまって」
「や、そんな……こと、別に……」
しどろもどろになっていると、隣でくすりと陽乃さんが笑った。
二人のいたずらっぽい笑顔は、驚く程似ていた。
「ふふ……比企谷くんにも、もっと気持ち良くなってもらわないとね」
「え、んむ……っ!?」
陽乃さんが俺の唇を奪い、舌を絡めて唾液を流し込むとすぐさま離れる。
そして間髪入れずに今度は雪乃が唇を重ねて、同じように唾液を流し込まれる。
発情しきった美人姉妹の唾液は、いつもより格段に甘く感じて、あっと言う間に思考が蕩けていく。
続けざまの口付けに惚けていると、雪乃が俺の右耳に、陽乃さんが俺の左耳に唇を寄せて、ちゅっと口付けをした。
そしてそのまま、それぞれの耳を犯し始める。
『ちゅっ、ちゅぴっ、ぴちゃ、ぴちゃ、ちゅっ、ちゅっ……はぁんっ、んふぅっ、んちゅっ、ちゅっ、ちゅっ、ちゅっ……』
「〜〜〜〜〜〜〜っ!?」
まるでどちらか一人の声をステレオで聞いているのかと思うくらい、息継ぎのタイミングまで一致した責めに、快楽中枢が凄まじい刺激を受ける。

普段あれだけ険悪だと言うのに、こんなに息が合うのか。
雪乃と陽乃さんの左手が俺の乳首に伸びて、こりこりと摘まみ始めた。
「うぐぅぅ……っ！」
連動するように、汽車のようにゆっくりと腰も動かし始めて動揺する。
雪乃の吐息が弾み、明らかに俺の反応を楽しんでいるのが分かった。
「んちゅっ、ちゅっ、ちゅっ、ちゅっ……ふふ、八幡、気持ち良い？もっと気持ち良くし――ふぁぁぁんっ!?」
「っ!?」
突然耳元で甘い嬌声を高らかに上げられて、びくんと身体が跳ねる。
見ると、雪乃が顔を上げて口を震わせている。
何事かと雪乃の身体に視線を巡らせると、陽乃さんの右手が雪乃の尻に伸びていた。
……まさか。
「ふふ、雪乃ちゃん、やっぱりお尻も敏感なんだね」
「やっ、姉さん、そこは……っ！」
左右から聞こえる声音がはっきりと分かれて、ついさっきまでのシンクロが霧散する。　陽乃さんが「ほれほれ～」と楽しそうに言うと、雪乃は「んはぁっ!?」と戸惑いながらも甘い嬌声を上げた。
「もう比企谷くんも出したいだろうし……雪乃ちゃん、ちょっとスパートかけちゃおっか」
「わ、わかったから……姉さん、せめて、指、抜いて……んくぁぁっ！」
陽乃さんの口が雪乃の耳元に寄る。
「だーめ。これは比企谷くんを気持ち良くするためでもあるんだから。大丈夫、腰の動き、手伝ってあげるから」
陽乃さんが囁いた直後……雪乃の腰がふわりと浮いて、雪乃の目が見開いた。
直後、ばちゅんと腰が叩き付けられ、俺と雪乃が二人して背筋を反

らせる。
『～～～～～～～～っ！』
「ほーら、こんな感じで、ね。雪乃ちゃんも一緒に動いて？　ほら、ほら、ほら」
陽乃さんが雪乃のアナルに指をねじ込んだまま、雪乃の腰を持ち上げてすとんと落とす。
体重をそのまま持ち上げている訳ではなく、持ち上げる際に内壁がこすれて、その快感に耐え兼ねて雪乃が腰を上げているようだ。
「くはぁっ！　くひっ、うぐぅっ、んくぅぅ……は、八幡……八幡……っ！」
自分で腰を動かさなければ、陽乃さんにアナルを蹂躙されて。
腰を動かせば積極的に肉棒を貪ることになる。
どこに行っても快楽の大きな波から逃れられない状態で、雪乃は俺の耳元に口を寄せて、切なげに俺の名前を呼んだ。
「んっ、んくぅっ！　……ふふ……はぁんっ！　……妬けちゃうなー。……ひ、き、が、や、くん……っ」
陽乃さんも俺の指に悶えながら、俺の耳元に口を寄せて俺を呼んだ。
そして。
「ふぅっ、ふぁぁんっ、んっ、ひぁ、八幡……八幡……好き……っ」
「比企谷くん……早く、お姉さんのこと、このぶっといおちんちんでめちゃくちゃにしてぇ……っ」
「～～～～～～っ！」
ステレオで流し込まれる愛と淫欲にまみれた言葉に、何かが切れた。
雪乃の手を離し、小ぶりの尻をいっぱいに広げた手のひらで掴む。
そして腰を力強く打ち付ける。
それと同時に、陽乃さんに入れた指の動きを一気に激しくした。
『んはぁぁぁっ！』
雪乃と陽乃さんが、嬉しそうに同時に喘いだ。
膝を曲げて踵でベッドを押し、雪乃に力強く腰を打ち付ける。

陽乃さんの弱い所を指の腹でごりごりと抉り、絶え間なく溢れ出す淫液をかきだす。
ベッドのシーツは、もうどれが誰の汗や愛液なのか判別がつかぬ程ぐしょぐしょになっていた。
「あっ、うっく、ひぃんっ、んはぁっ、八幡、もう、だ、め……っ」
「あ～っ、あっ、あっ、比企谷くん、わたし、もう……っ」
「うぐぅぅ……雪乃、陽乃……っ!!」
二人の名を呼ぶと、肉棒と指を締め付ける膣肉が一段と締まった。
その瞬間、下半身が決壊し、身体の奥底から白濁が上ってくる。
――どびゅるっ、びゅぶっ、びゅるるるっ、どぶっ、ごぶごぶっ、ぶりゅるるる……っ。
『あぁぁぁぁぁぁぁ……っ！』
二人の声が再びシンクロしたと同時に、肉棒と指が食いちぎられんばかりに締め付けられる。
視界が白んでいく。
天国っていうのは意外と体力が要る場所なんだな……なんて思いながら、凄まじい快感と疲労感に再び意識を手放した。

× × ×

目を開けると、ベッド横で雪乃と陽乃さんが正座していた。
そして仁王立ちで二人を叱るめぐり先輩。
「……」
なんだいこの光景。
直前のセクションまでとのギャップ大きすぎないかい。
口調がぶれぶれだ。
お叱りはそれなりに続いていたようで、二人ともげんなりとしている。
すげぇ、陽乃さんが苦笑してる……！
「あ……」
雪乃とぱちりと目が合うと、か細い声が漏れた。
それに気付いた陽乃さんとめぐり先輩も、俺に視線を向けた。
「あ、比企谷くん！　気が付いたんだ、良かった……。まったく、二人

して遠慮しないで比企谷くんと、その……えっちなこと、しちゃって……もう……っ」
めぐり先輩が頬を赤らめて、両頬に手を添えて俺をちら見してくる。
あ、あれ？　今お説教タイムだよね？
「わたしだって、比企谷くんと……っ」
視線がどんどん熱を帯びてくるぞ、あれ？　疲れ過ぎて身体が動かないぞ？
「めぐり。流石に今比企谷くんを襲うのはかわいそうだと思うよ」
「っ!?　や、やだなはるさん、そんなことする訳……っ」
言いながら、めぐり先輩がすすすと近寄ってベッドの縁に腰をおろし、俺の頭を優しく撫でた。
「と、取り敢えず……膝枕なんてどうかな？」
「え、マジっすか」
癒しの極みみたいなイベントが発生しそう。
「それで、その後は……」
「え、マジっすか」
俺これ以上搾られたら死んじゃう。
めぐり先輩が艶っぽく目を細めている。
やばい、これほんとに搾られる。
雪乃と陽乃さんは……わー、苦笑してるけど止めてくれないー。
自分たちでがっつりやっちゃってたもんね。
でも、俺という資源を大切にしてほしいなー。
めぐり先輩が俺の頬に手を添えて、柔らかく微笑む。
……あー、もう、あかん。
諦めかけた、その時。
「……八幡に何してるの」
寝室のドアを開けて、留美がめぐり先輩にジト目を向けていた。
時間が止まった。
ぴたりと。
めぐり先輩はどんな反応を見せるのか……と思いきや、一瞬で顔を

通常モードに戻し、いつもの天使の笑みを留美に向けた。
「ん？　鶴見さん、どうしたのかな？　何でもないよ？　さーて、比企谷くん、ゆっくり休んでてね？」
何事も無かったかのように、俺のおでこを優しく撫でて、めぐり先輩がすっと離れた。　それを女性陣三人が何とも言えない顔で見ている。
……女の人って……怖いよぉ……。
×　×　×
それからしばらく休んで、現在。
あの後も休んでいる俺の元を皆それぞれ訪ねてきてくれた。
一番癒されたのは留美で、お互い撫で合った。癒されすぎて死にそうだった。
めぐり先輩もたまにスイッチが入りそうになったけど、頑張ってこらえていた。偉いと思います。
由比ヶ浜マが一番凶悪で、すごい自然に俺の布団の中に入って添い寝してきた時は死ぬかと思った。興奮で。
そして現在に至る。あ、全然休めてないな俺。
「……」
俺の現在の姿勢：正座。
や。
なんでだよ。
俺を半円形で囲んで、女性陣が見つめている。
いろはがこほんと咳払いをした。
「で、誰を選びますか？」
やっぱりその話だったー。
忘れてくれてなかったー。
「や、もうクリスマス終わったし、その話はいいんじゃ……」
「お兄ちゃん、こういう真面目な話の時にメタい話しないで。体裁」
と小町が言う。
「じゃなくて最低」
「メタにパロを重ねるってレベル高すぎるだろ……」

どこぞのピーキーな妹が浮かんだ。
同じ中学生と言おうとしたが今は小町は高校生だった。
はいはいメタいメタい。
「それで、ヒッキー、誰を選ぶの？」
結衣がじーっと見てる。なんか押し倒したい気持ちになった。
はい体裁～。じゃなくて最低～。
……もう、キャラが限界だよぉ……。緊張感で崩壊寸前だ、色々と。
「あんた……真面目に聞いてる？」
川崎がすんごい勢いで睨んできた。
一瞬で姿勢を正す。
背すじをピン！　とね。
「クリスマスは終わりましたから、じゃあ初詣ですかね。初詣を誰と行きたいか決めてもらいましょう」
「いろはさん、それ良いですね。全員で行っても楽しそうですけど、絶対お兄ちゃんが発情しちゃいますし」
「おい。いろはめっちゃ頷いてるけど。お前らさっきの自分の所業を覚えてるか。なあ」
高速で目を逸らされた。
「……」
さて、どうしよう。
周りを見渡す。
皆、思い思いの表情で俺を見つめている。
真面目な顔、ふわふわした顔、不安げな顔。
先生だけぶつぶつと「取り敢えず今ここで誰が選ばれてもさっさと受け入れて、帰り際に拉致ってマンションで朝までするか……」と恐ろしいことを呟いていた。
この人正常位だと気絶しても足絡めたまま離さないんだよなぁ。なんで今言ったんだ俺。
「えーっと……」
思案顔で頭をがしがしと掻くと、視線がぎゅっと強まった。
十人分の圧力に身じろぎしながらも、姿勢を正してキリッと表情を

締める。
「俺は……」
『俺は？』
何人分もの声が重なる。こきゅっと小さく喉を鳴らす音も聞こえた。
「俺は……初詣には……」
固唾を呑んで見守られる中、自分なりに考えに考え抜いた結論を、誠意をもって伝える。
「戸塚とぐぇっ」
最後まで言い切ることも許されず。
腹部に強烈な衝撃が走った。
視線を横に滑らせると、先生がにっこり笑顔で俺にボディブローをかましていた。
いかん、意識が遠のく。俺何回気絶してんだ今回。
「さて、延長戦だな。次は初詣の際、誰が比企谷を独占して一晩中身体を貪るかを話し合おう。……穏便にな」
身体を貪るというべらぼうに直接的な表現で、めぐり先輩と留美が噴き出すのを視界に捉えながら。
次目を覚ましたら、今度はどんな状態になってんのかな……精力剤を飲まされて縛り付けられてたりしたらやだな……などと思いながら、ゆっくりと眠るように意識を闇に溶かした。
や。
なんだこの話。
お終い。

鶴見留美は寄り添う相手をしっかりと選び取る。

（1）

季節は春。

高校3年生になり、いつどこに居ても受験という言葉が視界にちらつく時期になった。

といっても今はまだ4月。どんなにその単語がちらついたところで、自分にしても周りにしても、それはどこか現実味を帯びていない。

今の段階から、或いはもっと前の段階から本当にスイッチが入って頑張っている人は相当大したものだと思う。頑張れ、見知らぬ人。

「ふぅ……」

放課後を迎え、一息つく。教師側も今年度になってから一段と気合が入っており、一つ一つの授業の密度がぐんと増している。

数学なんてあまりの密度にすぐ寝てしまう。

先生が教室に入って礼をして「では教科書～ページを開いてください」と言って指示通り教科書を開くとそこは魔法の世界。あっと言う間に夢の世界へ……。

今日は雪ノ下も由比ヶ浜も用事がある為奉仕部は休みである。

以前同じ状況になった際、気紛れで部室に一人で居たら、一色がやってきて当然のように居ついてしまい恥ずかしさで死にそうになった。俺をからかいながらも途中で急に無言になって俺をちらちら見て、頬を赤らめてえへへとか笑うのやめてほしい。死んでまう。

「ヒッキー」

「ん」

隣から声をかけられて、むくりと顔を上げる。こんな阿呆な呼び方をするヤツはここには一人しかいないし、それに……こんなに声を聞き慣れたヤツは、ほとんどいない。

「……なんか、失礼なこと考えてなかった？」

あれ、読まれた？

「失礼な。後半は失礼じゃないぞ」

「前半は何なんだっ!?」
「うにににに……」
ほっぺを伸ばされた。全然痛くない上に「このこのー!」って感じのことを言う由比ヶ浜の顔がやたら楽しそうでどうしようも無い程に可愛いから手に負えない。
手が離れると、由比ヶ浜はくいっと屈んで柔らかく微笑んだ。
「……また明日、ね？」
「……おう」
「うん、じゃね！」
向日葵のような笑顔を咲かせて、由比ヶ浜が小さく手を振って教室を出て行く。
由比ヶ浜とは、クラス替えを経て再び同じクラスになった。「また……一緒だね」と言われて袖を摘まれたときは心臓が爆発しかけた（というか爆発した）もんだ。
由比ヶ浜とのやりとりは、どきどきしながらも一応いつも通りなんだけど……。
『え、なに、あの二人付き合ってんの？』
『まっさかー、そんな訳ないだろ？』
『えー、でも結衣ちゃん超良い笑顔だったよ？　あんなの好きな人にしか向けないでしょ』
「……」
……ハチマン、ナニモキコエテナイ。ダイジョウブ。
1ヶ月前までなら気にしていなかった視線が気になる。
以前は1年かけて由比ヶ浜とのやりとりが醸成されていったから、周りもあまり気にしていなかったのだろう。
しかし今は周りからすれば「あまり知らないヤツら（しかも女子がめっちゃ可愛い）が何か仲良さそうにしてる」としか見えないだろう。つよくてニューゲームみたいな感じだ。違うか。
「……出るか」
席を立って、誰に挨拶をするでもなく教室の出口に向かう。
以前からの知り合いもいないことはないのだが、それでもわざわざ

挨拶する必要も無い。どんな感じで言ったら良いかも分からんし。っべーとか聞こえるけど俺には全く聞こえていない。
廊下を歩くと、日陰の部分はどこかひんやりした所もあるが日向はぽかぽか陽気と言った具合だ。
冬の名残と遠い夏の気配を湛えたこの時期は、訳も無く浮き足立つ。
そりゃあ新歓時期にウェイウェイ言ってる大学生もそうでない大学生も燃える訳だ。だってここで彼氏彼女をゲットすれば夏が来た時更にウェイウェイ出来るんだもんな。やだ鬱陶しい……。
もうじきGWがやってくる。引きこもり長期休暇としての今年度最初の戦いだ。外出することなく買い物を済ませるべく、密林で何を買おうかと夢を膨らませていると、昇降口の前で見慣れた艶やかな黒髪が見えた。
「うす」
「あら、比企谷くん」
雪ノ下が声に反応してくるりと振り返る。それと同時に髪がふわりと舞って、柔らかで上品な匂いが香った。
雪ノ下は俺を見た後、申し訳無さそうに俯いた。
「ごめんなさいね、比企谷くん。私も由比ヶ浜さんも用事だなんて……」
「え、あ、まあ良いって」
何、こんなことで謝るようなヤツだったっけ？
どうしたのかしらと思っていると、雪ノ下は手で口を覆い、わざとらしくよよよと泣いている演技を始めた。
「比企谷くんには……放課後、部活くらいしかすることが無いのに……」
「勝手に俺の生きがいを部活にするんじゃねえよ……」
部活っつってもほとんど読書とダベりなのに。家に居て本読んで小町とダベればやることは同じだぞ。
ていうか、わざわざクサい演技をしてまで罵倒するのかこいつ。いやな進化だ……。

俺の一言で雪ノ下はぴたりと演技をやめ、いつもの調子に戻った。急ハンドルすぎて八幡付いていけない……。
「あら、他に何かすることがあるのかしら？」
「あるだろ。本屋行くとか、勉強するとか、ゲームするとか、戸塚と遊ぶとか、小町と遊ぶとか」
「最後の２つは何なの……」
雪ノ下がこめかみに手を当ててため息を吐いた。そんなにおかしなことを言っただろうか。だって天使である妹と同じく天使である戸塚だぞ？　遊ぶことに価値しかないまである。
むしろ俺と小町と戸塚の３人で遊びたい。そしてその流れを作り次第戸塚を比企谷家に迎え入れたい。あ、変な意味じゃなくてね？
戸塚と何をして遊ぼうか。ひとまずは健全に人生ゲームをやって、その後はどこぞの蛇の神様になった中学生を見習ってあのゲームでもするか……などと妄想に耽っていると、雪ノ下がごみを見るような目で俺を見てきた。
「早く捨ててこないと……」
……手荒……。
「何だよ、何か捨てるもんでもあるのか」
「そうね。今私が捨てたいものの特徴としては、腐った目にアホ毛、絶望的な数学の成績に恐ろしいまでにねじ曲がった人格などが挙げられるわ」
「そこまで言うか……」
言葉の暴力がえげつない。
「あら、私は特徴を挙げただけで、あなたのこととは言ってないわよ？」
「お前な……」
得意気に髪を手で払うのがすげぇ腹立つ。お前はいつの時代の意地悪な女キャラだ。
何か反撃出来ないと思い雪ノ下を見た時、とある部位に目が言ったが、今日と言う日を俺の命日にはしたくなかったので言うのは控えた。

「……」
「何も考えてねぇぞ？　ほんとだぞ？」
この一瞬の逡巡だけでも雪ノ下に訝しみの目で見られた。鋭いし怖いよぉ！
いつも通りのやりとりをしていると、雪ノ下がふっと頬を緩ませた。
改めて、この1年で本当に表情が柔らかくなったなと思う。
「あなたは変わらないわね」
「人間、そうそう変わるもんかよ。ああでもお前は……」
「お前は……なに？」
雪ノ下がきょとんとした表情で、くりっと首を傾げる。
「……や、なんでもねえ」
「？　変な比企谷くん。変態ね」
「なんでもののついでで罵倒してんだお前」
「あら、ちゃんと罵倒してほしいの？　あと10分ちょうだい。あなたが今までの人生を泣きながら悔いるくらい滅多打ちにしてあげるわ」
「何その悪魔みたいな宣言……」
他愛も無いやりとりをして、雪ノ下とまた来週と言って別れた。
――お前は、綺麗になったよな、なんて言える訳も無かった。恥ずかしくて死んじゃうからね。
×　×　×
放課後、みっちり勉強に時間を使う気にもならず、買い物するでもなく店を眺めながら自転車を引いてぽてぽて歩く。
――雪ノ下も、由比ヶ浜も、一色も。
ここ最近……数ヶ月くらいだろうか。
俺が見ても分かるくらい、綺麗に、可愛くなった気がする。
何が理由になっているのかは分からない。
数ヶ月という時間を重ねたというだけでも綺麗になるのかもしれないし、他の何かが起因しているのかもしれない。
ちなみに小町も最近ぐっと大人びてきたんだけど、あいつの場合は

年を重ねた以外の理由は認めない。兄として認めない。
男子三日会わざれば括目して見よ。
これは鍛錬を重ねている男に対して言う言葉なんだろうけども、きっと女性にも当てはまるのだと思う。
鍛錬という言葉のベクトルも違えば、或いは鍛錬という言葉自体適していない可能性もあるけれど。
ほとんど毎日のように見ている子たちでさえ変化が分かるのだ。
きっと、久しぶりに会って、まして相手が成長期の子なら、その変化は尚更だろう。
「……ん？」
そんなことを考えていると、向こうから歩いてきた女の子と目が合った。
――ただの偶然というよりは、自然と視線が吸い寄せられた、という言い方の方が正しいのかもしれない。
俺の名を呼ぶ声がした。
「……八幡？」
年相応でない大人びた声音は、クリスマスイベント以来で聞く、どこか懐かしいもので。
憂いを帯びた顔つきと、どこか儚さを纏った瞳は、斜め後ろから差し込む夕日に照らされて見惚れる程に美しかった。

続く。

（２）

「……やっぱり。八幡だ」

驚きで目を見開いたままの少女が、もう一度確認するように呟く。

鶴見留美。

夏休みの千葉村で、彼女を取り巻く人間関係を破壊して。

海浜総合高校との合同クリスマスイベントで再会して、ほんのわずかばかり距離を縮めた気になって。

春を迎えた今、３度目の邂逅だった。

「……八幡、久しぶり」

「……お、おう」

留美の成長が見える、慣れないなりに気を遣ってくれた挨拶に、俺はまともに答えることが出来ない。

何故なら、彼女がたった数ヶ月であまりにも成長していたから。

別に、一気に身長が２０ｃｍ伸びたとかそんな成長期の男子みたいな話ではない。

雰囲気込み込みで、様々な変化が起きていた。

まず、彼女がこの近くでよく見かける中学のブレザーの制服を着ているのに驚く。

流れるような黒い艶髪は健在で、俺の拙い返事に対して首を傾げた時にさらりと揺蕩う様に、以前までとは違う艶っぽさを感じて陶然とする。

顔つきや表情は更に大人びたものになっていて、雑誌の表紙に写っていたとしても何ら違和感の無い程美しい。

あとは……。

……。

「……八幡？」

「うぼごろっぴぇ」

「何言ってんの？　キモい」

突然覗きこまれて、幻影旅団に襲われたマフィアばりの奇声を上げたら、突き放すような冷たい言葉を浴びせかけられた。留美の罵倒

……これ、冗談抜きでハマってしまう人がいるんでないだろうか。切れ味がえげつないんですもの。
まあ、ある部位の成長に目が行ってたなんて口が裂けても言えませんけどね！
「……八幡、今どこ見てたの？」
「なんでもなーいーなんでもなーいー」
「……何その歌」
世代の差か、誤魔化しで歌ったあずきちゃんのＯＰも冷たくあしらわれた。ごめんよあずきちゃん……。
何とか話題を逸らして（すげぇ睨まれてるけど。すげぇ睨まれてるけど）ふぃーと息を吐く。
改めて、留美をきちんと見る。話す時の視線の高さの差は、前よりも縮まっていた。
……綺麗な睫毛だなぁ。
や、そうじゃなくて。
「お、こほんこほんけぷこーん。……久しぶりだな、ルミルミ」
「だからルミルミ言うな。キモい。あとその咳払いなんなの？　人間？」
「……」
腹いせに材木座をぶん殴りたい。
千葉村で会った時から、ルミルミは（腹立つから地の文ではルミルミと言うことにする。地の文って言っちゃった）ミニ雪ノ下という印象があった。
そんなルミルミが美しく成長した事で、一層雪ノ下に近付く部分もあれば、そうでない部分も出てきた。
うん、特定の部位については雪ノ下が見たら泣きそうだから今度言ってやろうかしら。俺最低すぎて清々しいな。
ちなみに毒舌は雪ノ下のボキャブラリーを除いて刃先を鋭くした感じ。成長したら言い回しが増えそうで怖い……。
「……」
それにしても。

久しぶりにあって、この連続毒舌は中々しんどいものがある。材木座なら1週間くらい家に引きこもるまである。俺材木座を話に出しすぎだろ。好きかよ。嫌いだよ。
「まったく……久しぶりに会ったっていうのに……八幡、ひどすぎ」
留美（地の文でルミルミと言うのが飽きた）が眉根を寄せて、ため息を吐く。
「お前……な……っ」
追い打ちをかけすぎだろうと思い反論しようとしたら――さりげなく髪をかき上げる仕草に思わず見惚れてしまった。
え、あれ、この子中一ですやん？　なんでこんな綺麗……え？
まあ、娘が綺麗に成長したようなもんだ。嬉しい限り。ちなみに妹の座は小町が永久に確保しているので空きは無い。
髪をがしがしと掻いて、仕切り直し。
「わりいな、留美。久しぶりすぎてはしゃいじまった」
「なんではしゃぐの……まぁ、良いけど」
ついっと顔を逸らす彼女の顔は、不機嫌に見えて実際はどこか嬉しそうだ。
さて、ここからどうしたものか。
会って気ままに長いこと話す友達なんて俺には戸塚くらいしか居ないし（材木座は除外する）、かと言って立ち話をするにはこの時間帯は――
「くしゅんっ」
……寒いよなぁ。
両手で覆って口元を上品に隠した留美の頭を、何とはなしにぽんぽんと撫でる。
「……寒いよな。早めに家に帰っとけ。じゃあな」
「え……？」
留美が大きく目を見開いた。や、なんでって顔をされても……。
時刻を確認する。夕飯時にはまだ早いが、それでも用が無いなら早く帰るに越したことはないだろう。わざわざ親御さんを心配させる必要は無い。

「ちょ、ちょっと……」
何か言いたそうな留美を見て、もう一度ぽんぽんと頭を撫でる。ううん、撫で心地が良い……。
「なんか用事があったのか？　あるんなら早めに済ませとけよ。お前可愛いんだからすぐ絡まれるぞ。俺が手伝えるなら周りに怪しまれない程度に手伝うし」
「……」
「……え？」
なんか、留美が急に後ろを向いてぷるぷる震えだした。気に障ること言ったかしらん？
「……」
ルミルミ、引き続き無言。
「……」
小さな背中を見つめる俺も、無言。
「……」
「……」
「……」
「……」
……賑わう往来で、何をやってんだ俺たちは。
しばらく黙りこくっていた留美だったが、俺がじーっと観察しているの気配を感じたのか、振り向くと小さく「……変態」と呟いてこほんと咳払いをした。罵る言葉のチョイス……。
「……別に、大丈夫。用事はもう済んだし」
言いながら、留美がすいとスマホを取り出す。何か買い物のメモでも確認したんだろうか。
「あ、そうなのか」
「うん……今はもう、目的は果たしたから」
「……？　まあ、そっか。それなら家に」
「八幡、久しぶりに会う女の子とお店でじっくり話さないってどういうこと？」

「えええ……？」
絶望の吐息に陰鬱の声音が乗った。
あ、やべ、留美が怒ったっぽい。背後がちりちりしてる。
「や、お前、今からどっか行ったら俺と晩飯食うことになるぞ。流石に親御さんに」
「お母さんに連絡しといた。良いよって。ただしなるべく早く帰ってくるようにって」
「……」
いつの間に？　あ、さっきのスマホか。手が早いお嬢ちゃんですねぇ……。
外堀を手際良く埋められていることにぐぬぬと唸っていると、留美が何か迷うように俯いて、やがてゆっくり顔を上げた。
「……ずっと、話したかったことがあるから」
その言葉に、途端に気持ちが揺り動かされる。
「……っ。……しゃあねえな」
留美の表情は真剣そのもの。乗らない訳にはいかないらしい。生憎こっちは暇してるし（勉強のことは除く）。
スマホを取り出して、小町に電話をする。
ご飯は外で食べると言ったら「だれと!?　ねえ、だれと!?　☆☆☆」っていうハイにも程があるテンションで尋問された。超うぜえ……可愛い……。
留美の様子を見る限りあまり待たせたくはないし、話の内容によってこれからの雰囲気はだいぶ違うだろう。
中途半端な説明は避けて、小町には「後で説明してやるよ」とだけ言って切った。ううん、後が怖い……。
俺が電話を切って頷くと、留美が小さく顔を綻ばせた。感情をそのまま素直に表さない、表せないこの子の性格が見て取れていじらしい。
「八幡。ほら、行くよ」
「なんでペット扱いになってんだ俺は……。ていうか場所は」
「そんなの八幡が決めて」

「はいはい分かりましたよっと……」
俺の数歩先を歩く留美を見て、どこか楽しそうな様子に安心する。
俺がこの子にしたことは、今でも正しいかどうかは分からない。
けれど、今この子はこうして笑っている。
願わくば、いつもいつでもとは言わずとも、この子がこうして笑顔でいられますように。
「八幡、早く決めて」
「へいへい……」
……わがまま姫だけど、笑顔でいられますように。
サイゼで良いかなぁなどと考えながら、ぼんやりと空を見上げる。
もうすぐ沈みそうな夕陽を見上げて、過去から現在に渡ってぐるぐると渦巻き続けている思いを茜色の空にそっと溶かした。

続く。

（3）

自転車を駐輪場に停めて、留美と一緒に見慣れた街をぽてぽて歩く。

俺を急かすように数歩先を歩く留美の表情は明るく、なんだかご機嫌が良い様子。

うん、やっぱりこの子は可愛いし美人になる。引く手数多になるだろう。もうちょっととっつきやすい性格になれば言うこと無しだ。

……俺、何様なのん？

「ねえ、八まふっ」

「あ」

どこに行ったら良いもんかと辺りをちらちら見まわしていたら、急に立ち止まってくるりと振り返った留美に突っ込んでしまった。まふっ。

二人の体格差から、俺が留美に突っ込んだというよりも留美が俺に突撃してきたように見えてしまう。

「……痛い」

「わりぃ。大丈夫か？」

綺麗なおでこをさすさすと撫でながら、ぶすっとした声音で留美が呟く。なんで俺の胸元から離れないのかは分からないんだけど……。

留美が顔を上げると、綺麗な眉がくいっと寄せられていて、ご機嫌斜めになっているようだった。むーと頬を膨らませているのが年相応に可愛らしい。目つきはわる……怖いけど。言い直した意味あんまねぇな。

「ごめんって。な？」

もう一度謝って、いつの間にか俺の制服の裾を摘んでいる留美のおでこをそっと撫でる。つるつるの肌にこぶが出来ていないことを確認して、ほっと胸を撫で下ろした。

俺が撫でると留美は気持ちよさそうに目を細めた。妹接待スキルは今日も健在である。

しばらくとろんとしていた留美が、はっと我に返ってぽっと頬を赤

らめた。踵を返してててと数歩離れた所でゆっくりと振り返る。おでこをさすりながら、不機嫌なような、恥ずかしがっているような、嬉しがってるような――そんな、いくつもの感情が混ざった不思議な表情をしている。
「……仕方ないから許してあげる」
「や、お前、さっきのはお前が急に振り返るから――」
「お前じゃない、留美」
「……さっきのはルミルミが」
「だからキモいって」
留美が口ではきついこと（変にぞくぞくするんだけどこの気持ちは何だろう）を言いながらも、ふっと呆れ笑いを漏らした。
とことこと留美の下へ歩いていき、頭をぽんぽんと撫でる。
「サイゼが見えた。あそこにしよう」
「……」
その不満げな顔は、あなた様の頭に置いている手に対してのものでしょうか、それともサイゼに対してなんでしょうか……。
しばらく俺をじっと見ていたかと思うと、俺の手に留美がぽすりと手を重ねた。
「……しょうがないな。行ってあげる」
「お前な……」
何このわがまま全開のお姫様……？
呆れるように見ていると、俺の手を頭からぺいっと離して、てててと駆け出した。そして元気良くくるりと振り返ると、艶やかな黒髪がふわりと舞った。
「ほら、八幡。行くよ」
「だからなんでペット扱いなんだよ……」
俺のツッコミを聞きもせず、楽しげに微笑んで留美が駆け出す。
留美の笑顔を見る度に、心の奥底に沈殿して凝固していたものが少しずつ解けて、心が軽くなって行くような気がした。
× × ×
「いらっしゃいませ。何名様ですか？」

入口で元気の良い女性店員に人数を聞かれる。意味は特に無いが、ちらりと振り返って半歩後ろにいる留美を確認して、２人ですと答える。
「あっ、はい、かしこまり……ました。禁煙席でよろしいですか？」
んん……？
テンプレートの会話の中に、微かなノイズが混じる。店員に２人って伝えた時の反応は一体……？
もう一度振り返って、留美の顔を見る。
……ああ、そりゃそうか。
店員に案内されて、留美と向かい合って座る。夕飯時にはまだ早いからか店内は空いていて、近くのテーブルには誰も他の客はいなかった。仕切りもあるために入口側からも見えない。留美とちょっとした打ち合わせをすることに急遽相成ったので（自分の脳内で）、こういう状況になるのはありがたい。
留美はというと、外を歩いていた時と比べて今は幾分落ち着いている。店員や他の客という、他の人の目があったからだろうか。さっきはさっきで往来の人の目はあったんだけども。
「……留美、一つ決めておいて良いか？」
「なに？」
メニューをじっと見ていた留美がついと顔を上げる。何をそんな熱心にと思ったら間違い探しか……。後でこの子より先に全部見付けた上でルミルミって呼んでやろうかな。性格悪すぎるだろ俺。
テーブルの上で手を組んで顎を乗せ、ゲンドウモードになる。
「人前での設定として、留美は雪ノ下の妹で、俺は今日雪ノ下にお願いされて留美と遊んでる、ってことにしておいてくれ」
言うと、留美がぶすっと不機嫌そうに頬を膨らませた。さっきの不機嫌さの１５割増しくらい。要するに怒ってる。
「……なんで」
こわっ。ルミルミさんマジこえぇっす。
もうちょい怒ったら氷の城が作れるんじゃあるまいかと思うくらい、ピリッピリにピリついている留美を見て慎重に言葉を選ぶ。

「や、さっきの店員の反応見ただろ？　高３男子と中１女子が２人で飯食ってるって状況は周りから見たら中々奇妙だぞ。全然似てないから兄妹とも言えないし。だからそういう設定にしといてくれ」
　出来るだけ穏やかに、留美を宥めるように言う。
「……だからって、何であの人の妹なの？」
「それはアレだ、お前と雪ノ下ってなんか似てると思ってたからだ。数少ない共通の顔見知りだし」
「？　似てるって……友達が少ないこと以外に似てるとこある？」
「それ自分で言うと哀しくなるぞ……」
　悲しいではなく哀しいというのがポイントな。
「？　なんで？　私はそんなに友達はいらないからそうしてるだけだよ。八幡と違って」
　流れ弾が身体を透過して心を抉る。
　俺の心を抉っても留美自身はけろっとしたもので、「何をそんなにダメージを受けているの、この衆愚は？」くらいの表情で首を傾げている。末恐ろしいっていうか既に今ももう恐ろしい。
　精神的ダメージから回復を試みていると（回復法・戸塚のことを思い出す）、留美が眉をひそめて首を傾げた。
「他には？」
「他って……ああ、そのことか」
　相変わらず、ちょこちょこと言葉が足りない子だ。慣れない人の前だと、テンパって噛みまくりながらも何とかしようとしてしまい、思い付くままやたらめったらと喋って駄々スベりする俺とは大違いだ。これ俺の方が重症だな。
　ほんの一瞬だけ留美が置いたメニューに視線を逸らして、留美の目を見る。
「あとは……アレだ、留美は可愛いからな」
「……っ」
　言うと、留美は俺を見たまま耳まで真っ赤にして、素早い手つきでメニューを取って物凄い速度で読み始めた。ファミレスのメニューの速読って初めて見た……。

これでも尚ダメージが受け流せなかったのか、メニューをばふっとテーブルに置いてすっと立ち上がった。
「お、おい、留美。どうし――」
「み、水。ほら、八幡。水取ってきてあげる。水好きでしょ？」
「や、俺にそんな設定はな――」
俺の言葉を二連続で最後まで聞かぬまま、未だに茹でダコ状態の留美がぱたぱたと行ってしまった。忙しい子だなぁ。
……ていうか、あのリアクションは可愛すぎるだろ。なんだあの破壊力……。

× × ×

水を取りに行くにしては妙に時間が経った後、留美が戻ってきた。
「……」
席に着くと、留美がさも私は全くもっていつも通りですよと言わんばかりに冷静な顔をしていた。まあ、あまり追求したら本当にこの建物が氷の城になりそうだからやめておこう。
……って、あれ？
「なあ留美」
「……なに？」
ケンカ中の恋人に話しかけた時ってこんな感じなのかなと思う程、抜群に分かりやすいリアクションをされた。しかしこれは言わねばならぬ。
「……水は？」
「……」
物凄く滑らかな動作で立ち上がって、スタスタと足早に歩いていった。なんだろう、どっかで落ち着くまでずっと深呼吸でもしてたんだろうか……。

× × ×

「はい、水」
「あ、ああ、ありがと」
不機嫌な顔をしながらも、留美は水の入ったコップを丁寧にテーブルに置いた。話しかけづらい雰囲気に俺の返事も浮つく。

席に着いた後も、二人きりだというのに俯いて顔を上げもしない。
な、なんだろう、この倦怠期の夫婦みたいな空気感は……。実際はただの5つ下の知り合いなのに、こんな空気感が出せるものなのか俺たちは。やるな。何がだよ。
「……メニュー、決めたら」
すっとメニューが差し出される。ちっちっちとわざとらしく（&鬱陶しく）指を振ると、留美が眉根をきゅっと寄せた。いかん、火に油を注いだ感が。
「俺は頼むものは毎回決まってんだ」
「ふぅん」
すげぇサラリと流された。つら。
俺に渡そうしたメニューを、留美は二人の間に置いて両方から見えるようにした。
「私、あんまり来たことない。何かおすすめはある？」
言われて少し驚く。
ファミレスのメニューなら、色鮮やかな写真を見て決めればいいだろう。それをわざわざ聞こうと言うのは、大なり小なりコミュニケーションのきっかけを掴もうとしているように思える。
留美の成長に一人感動していると、留美がジト目で睨んでいることに気付いた。
「……早く教えて」
「お、おお、わりぃ」
ふえぇ……怖いよぉ……。
留美がメニューを覗き込もうと身体を前に乗り出したのに合わせて、俺も少々テンパりながら身体を前に乗り出す。
『……あ』
気付けば二人の顔が目の前まで近付いていて、二人同時に小さく声を上げた。
「わりぃぐぇっ」
謝りながら顔を離そうとしたら、それより先に留美がメニューをむんずと掴んで顔を隠した。留美がメニューを手元に引き寄せる軌道

に俺の顔が入っていて、ばっちりはたかれた。精神的な流れ弾に引き続き、今度は物理的な流れ弾だ。
「あ、ご、ごめん……大丈夫？」
メニューで顔を隠しながら、留美がちらっと目だけ覗かせる。何このフェアリー超可愛いんですけど。しかしやらかしたことは結構凶悪だ。
「あー、大丈夫。びっくりしたけどな」
凶悪なやり口（言い方が悪い）ではあったが、実際問題メニューが当たったくらいで傷が残る程人類は脆くない。無駄に話の範囲を広げてしまった。
留美は俺の言葉を目だけ覗かせたままで聞いて、やがてゆっくりとメニューを除けて顔を出した。
「……その、ごめん」
「や、だから気にすんなって。ほれ」
尚も反省する留美にちょいちょいと手招きをする。
「……？」
不思議そうに身を乗り出した留美の髪を、同じように身を乗り出してくしゃりと撫でた。そのまま梳くように撫でてやると、留美が気持ちよさそうに目尻を下げた。
「……八幡。これ……ずるい」
「ずるいって何が？」
「……何でもない」
何が言いたいのか分からぬまま、留美がすっかり身を委ねてきたのを良いことに結構な時間頭を撫でていた。最近小町を撫でていない分を全力で発散した形だ。
さらさらの髪と小さな頭の撫で心地は中々のもので、夢中になる余り店員が「あの……ご注文は……」とそろりとやってくるまでずっと撫でていた。店員が来た瞬間の二人の動作速度は尋常じゃなかった。

続く。

（４）

『いただきます』

注文した料理が一通り届くと、留美と二人で手を揃えて挨拶をした。

一人で食べる時はもっとさらっと挨拶するんだけど、こういう状況だと何か妙にかしこまった感じで言ってしまう。留美は育ちが良いようだから余計に。

留美がカルボナーラをフォークでくるくると巻く。

口に運ぶ前に細い指で髪を掻き上げる仕草が妙に様になっていて、妹みたいなものだと思っていても心臓が心地良くとくんと鳴った。

あ、そうか。妹みたいだからこそとくんと鳴るんだな。そうに違いない。妹可愛いし。

留美が小さな口をもぐもぐさせる様をじーっと見ていると、俺の視線に気付いたのか、こちらを見るなりむっと眉根を寄せた。

こくんと飲み込んでジト目を向けられると、微かにたじろいでしまった。

中一女子にたじろぐ高三男子って……。

「……なに見てんの」

中々低い声で言われた。

ＹＯＵもっと可愛い声で喋っちゃいなよ！　台無しだよ！

「……なに変なこと考えてんの」

地の文を読むのを止めてほしい。変な動悸がするんですけども。

しかしこのジト目、威力も持続時間も長い。このままでは寿命が縮む。

「えーっと、アレだ、美味いかなーって」

頭をがしがしと掻きながら、苦し紛れに聞く。

それでも多少なり気は逸らせたのか、留美は返事をすることなく二口目を食べた。

……なんで返事してくれないのん？

もくもく。

こくん。
小さな喉が嚥下で動くのを見ていると、留美が皿に目を落としたままほのかに目を細めて、口角を上げた。
「……ん」
短く答えた肯定の言葉が、あまりにも可愛かったもんで。
「……」
「……なんで撫でるの……」
気付いたら再び撫でていた。
それにしてもルミルミさん。言葉とは裏腹に声音は優しいし、ちゃっかり皿を横にずらしてがっつり撫でてもらおうとするから、なんかもう可愛すぎてタチが悪い。
カルボナーラが冷めると悪いと思ってすぐ撫でるのを止めたら、皿を元の位置に戻しながら小さな声で「サービスが悪い……」と言われた。
なんだろう、俺の頭撫では商売として成り立つレベルなんだろうか。グルーミングも覚えれば完璧かもしれない。よし、今日から小町で練習しよう。

× × ×

食事を終えて、飲み物を飲みながらのんのんびより。
留美は最初コップを両手で持とうとして、途中でハッと何かに気付いたような顔をして俺を見た。
そして一度片手持ちに変えて一口飲んだけど、結局飲みづらいと思ったのか両手持ちに戻していた。
やだ、ルミルミったら癒し成分抜群……。
「……」
……すげぇ睨まれた……。何で地の文を読むんだよぉ……癒された分が一瞬で帳消しだよぉ……。
ふひーと息を吐きながら、何とはなしに雑談を始める。
食事中は二人して黙々と食べていたので、ここからが本番である。
「あー、留美。学校はどうだ？」
「何そのお父さんみたいな聞き方……キモい」

ジャックナイフ？
……それは俺単体がキモいのか、それともお父さん諸共キモいのか。諸共キモいって生まれて初めて言ったぞ。
こんな悪態（切れ味鋭め）をついても質問には答えてくれるようで、留美はコップを両手でゆらゆら揺らしてそれを見つめて考え込む仕草をする。
手の動きを止めて水面がぴたりと止まると、ゆっくりと目線を上げた。
「……ん、大丈夫。前みたいなことはないし」
ぐぐっ、と胸の奥が締め付けられた。
苦い表情をしてしまっていたのか、留美は俺の表情を見てふっと微笑み、首を横に振る。
「……大丈夫だから。友達が多い訳じゃないけど、その……仲の良い子は出来たし」
「……そうか」
「……八幡、ほっとしてるでしょ。さっきから表情に出過ぎだって」
「……すまん」
「別に何も悪くないって」
留美が呆れたように笑う。
胸のつかえが微かに軽くなり、心がぽかぽかとする。
留美があの夏休みから今まで、どんなことを思いどんなことを考えてきたのか。
それに、きちんと向かい合おう。
留美がもう一度俯いて、決意を秘めた瞳で俺を見つめた。
「八幡」
「……なんだ」
ずんと身体が重くなる。
留美の瞳の奥底は、さっきまでとは色が違う。
留美自身の心を曝け出し、俺の心に深く踏み入らんとする、そんな決意の色。
膝に置いた握り拳を、自然とぎゅっと握り締めた。

留美は一度俺の名を呼んだものの、いざ喋り出そうとすると躊躇してしまうのか、目を逸らして口を引き結ぶ。
たっぷり１０秒程待つと、やがてもう一度俺を見つめてきた。
「……八幡、あの時のことなんだけど……あれって、八幡が考えたの？
……ううん、八幡が考えたんでしょ？」
「……っ」
一度質問をしてからの、何らかの確信を持った付加疑問文への切り替え。
恐らく一度目はストレートに言うのを躊躇していたが故に言ってしまったんだろう。
留美はきっと……ずっと前からそう思っていたに違いない。
「……なんで、そう思った？」
否定とも肯定とも取れない言い方で尋ねると、留美は呆れたようにふっと笑みをこぼした。
微かに軟化した態度に、情けないが安心を覚える。
「……だって、あんな性格悪そうなこと考えるの、八幡くらいしかいないでしょ。……それに、肝試しの前に、楽しいといいなって言ってた。あんなの、何もするつもりが無かったら言う訳ないし」
「……ああ、そうだったな……」
わざとおどけるように肩を竦めて、頭をがしがしと掻く。
しかし心はまるで平静を保てない。
俺が、この子の人間関係をぶっ壊した。
その事実を、一年近く前の事だからと何だかんだ都合良く頭の隅に追いやっていた事実を、目の前に突き出される。
しかし、こうやって留美を目の前にしている今でも、俺に謝る資格は無い。
あれは過失でやらかした訳では断じてなく、俺の意志で、やろうと思ってやったのだから。
謝っても互いの為にならない。
俺が表情を強張らせていると、留美がふっと微笑んだ。
今度は呆れを含まない、優しい笑みだった。

「……全く、ほんと最低。あの後大変だったんだから」
「……」
言葉自体は厳しいにも関わらず、その声音と表情はとても優しくて。
手汗の滲んだ握り拳が、微かに緩んだ。
「仁美と森ちゃんがすごく仲悪くなって、由香はメンバーの誰とも目を合わせなくなって……。卒業前には少しは良くなったけど、ほんと大変だった」
その言葉に、ふとした疑問が過ぎる。
「……大変だった人に、留美は入らねぇのか」
「私？　私は……」
聞くと、留美はきょとんとした顔で目をぱちくりさせた。
そして上を向くと目を閉じて数秒考える。
ゆっくり目を開けると、優しく頬を綻ばせた。
「何か、吹っ切れた気がして。あんまり気にしなかった。むしろあの子たちの関係を心配して、間を取り持ったりしてたし」
「……そう、か……」
手をテーブルの上に出して、指を重ねる。
じっとりとかいた手汗は、うっすらと乾いていた。
こうして留美の言葉を聞いたからと言って、俺がしたことが許される訳ではない。
必要だと思ってやったことではあるが、それでもあれは傍から見ればやり過ぎでしかない行為だ。
許されるべきではない。
けれど、それでも。
留美の言葉は。
留美の成長は。
泣きたくなるくらいに、嬉しかった。
目の奥がじんと熱くなるのを感じていると、留美がコップのジュースをこくりと一口飲んだ。
「……別に、あれがきっかけで何もかも解決したって訳ではないけど。

ほんと大変だったし、……私も、あの後きちんと上手くやれた訳じゃないし。やれることは一杯あった筈だけど……やれなかったことはたくさんあった」

でも、と留美が力強い瞳で俺を見つめる。

「それでも、前よりずっと毎日が楽しくなった。色んなことに立ち向かって向き合って、頑張ったから。……八幡のおかげ、ってそのまま言いたくはないけど、だけど、その……八幡はもう、そんなに考え込まなくて良いから……」

「……っ」

留美の言葉が、心の奥底に沈殿していた黒ずんだ感情を優しく掬い取って、霧散させてくれた。

あまりにもぽかぽかした感情が湧き上がって――不意に、視界が滲む。

「あ、え、八幡……っ？」

ぼやけた視界の中で、留美があたふたと慌てる。

子供らしくて可愛らしいその仕草を見つめていると、身を乗り出して「ん……」と声を漏らしながら手を伸ばしてきた。

何をしようとしているのか分からずきょとんとしていると、視界が徐々にはっきりしてくる。

留美は何か警戒するように周りをきょろきょろと見回すと、すっくと立ち上がり、とてとてと俺の側に歩いてきて、俺のすぐ隣に座った。

そして心配そうな表情を浮かべながら、俺の頭に小さな手をぽすりと手を乗せた。

「八幡……」

「え、ちょ、こら……っ」

今にも泣きそうな顔で「泣かないで？」と目で訴えながら、頭を撫でてくる。

やべぇ、何か色々と死にそう。

「……なーに心配してんだよ」

気丈に振る舞って（ただし涙声）、カウンターで留美の髪を撫でる。

「むぅ……」

留美は猫のように目を細めた後、何やら不服そうな顔で更に頭を撫でてきた。
お互いがお互いの頭を撫で合う。
なでなで。
なでなで。
なでなで。
……やだ気持ち良い……。
このままあと一時間くらいこうしていたいまでぁ――
『……あそこ、何してんの？』
『さぁ……？　女の子の方、すごい可愛いよね？　ていうか年の差やばくない？　あれ何？　通報した方良くない？』
あかん。
「よし、留美。出るぞ」
「え……」
「そんな残念そうな顔すんなって。これは俺とお前の将来のためだ」
「え……っ」
「違う違う間違えた。いや間違えてはないけど。顔真っ赤にすんなよ」
「全然残念じゃないし、真っ赤になんてなってない……」
「じゃあその膨れっ面をやめろって。ほら、行くぞ」
ばたばたと準備をして立ち上がる。あの会話の雰囲気から察するに、例の言い訳をしたら事態が悪化する気がした。

×　×　×

店を出て自転車を停めていた場所に戻る。
留美を家まで送りに行こうと、二人で日も暮れた街の中を歩いていた。
別に良いのに……とこちらをちらちら見ながら言われたので、頭を撫でて気にすんなと言ったらそれっきり何も文句を言わなくなった。
ルミルミさん、ちょっと俺の頭撫でに弱すぎない？
「ここが私の家」
「おお、そうか。じゃあここまでだな」

留美の自宅に辿り着いて、じゃあまたと手を上げて踵を返すと、手首をむんずと掴まれた。
「……どうした？」
俺の問いかけに対して反応を返さずに、留美はポケットをまさぐって新品のスマホを取り出した。
「買ってもらった」
「おう、良かったな」
中学生から持つパターンか。
これで少しは交友関係を広げたり濃くしたり出来たら良いのだけど。
小さな手の中の新品スマホをまじまじと見ていると、留美が不機嫌そうに眉をひそめた。
「……まだ分かんないの？」
……こいつ……。
「……留美は言葉が足らねぇな」
ぐしぐしと髪を撫でると、留美はうぅ～と小さく唸った。
……やばい、ちょっと癖になりそう……。そして捕まりそう。捕まっちゃうのかよ。
ひとしきり撫で回すと、留美は口を尖らせながらスマホの画面を見せてきた。
「……連絡先」
あ、そういうことですか。
「おう」
言葉が足りないと言いつつも、この場合ただの俺の経験不足な気もしたけどまあ言わないでおこう。
ふるふるで交換しようとしてみたら、見知らぬ人の名前（しかも奇天烈な名前）が出てきてくくっと笑った。
留美も笑ってるかと思って見てみると、何やら笑いを堪えているご様子。この子が思い切り笑う姿ってのも想像つかねぇな。見てみたい。
ＱＲコードを読み取らせることにして、留美に連絡先を送る。

留美は俺の連絡先を確認して、微かに頬を緩ませた。
「……これで、いつでも連絡は取れるから」
「ああ、そうだな。まあそのうち」
「取り敢えず明日のこと打ち合わせるから、後ですぐ送る」
ほーん？　何でそんなビジネスっぽく言ってるのーん？
「おいこら、ルミルミ」
「だからキモいって。……八幡、ちょっと屈んで」
「？　なんだよ……」
言いながらも身体を屈める。
別にラブコメでよく見るシーンを期待した訳じゃないけど。そんな訳ないけど。
「……おおう……？」
ん……と可愛く息を漏らす声が聞こえたかと思うと、頭がふわりと撫でられた。
「……よし。……じゃ」
「……おう」
５つ下の女の子に撫でられるという事態を、短時間で二度も体験してぽけっとしている俺を見て留美がくすりと笑う。
小さく手を振って家に駆けて行くのを眺めていると、ドアがばたんと閉まった直後に何やら興奮した調子の声が聞こえてきた。
『お帰りなさい、留美。あら、なんでそんな嬉しそうな顔……さては、やっと会えたのね。例の彼と！』
『ちょ、お母さん、声大きい……っ！　八幡、まだそこにいるから……っ！』
『あらごめんね？　でも良かったわ～。いくら彼と会いたいからって、これ以上夕方の時間帯に一人で歩かせるのは危ないなって思ってたところだったのよ。送ってくれたお礼にお菓子でもあげた方が良いかしら』
『いいから。お母さん、そういうのは後でいいから。ほんと、八幡に聞こえちゃう……！　八幡が盗み聞きしてるかもしれないんだから……っ！』

……。

黙って踵を返すことにした。

最後すげぇ失礼なことを言われてた気がするけど、まあ今の一連の流れは聞こえてないことにしたので大丈夫。

……うん、大丈夫。

スマホを開く。二人の会話が今尚聞こえてくるから、当然留美からの連絡はまだ来ていない。

あの可愛らしいおませさんが、一体どんな文を送ってくるのか……想像しただけで、自然と頬が緩んだ。

続く。

（5）

留美と久しぶりに会った日の夜。

家でいつも通り小町の愛妻料理を食べ、いつも通りに振る舞っているつもりが「お兄ちゃん、なんか顔ゆるゆるだよ？　気持ち悪いけど大丈夫？　病気？」と言われ（病気ではない）、自室である程度納得が行くまで勉強をして、今は寝る前のうだうだタイムを謳歌している。

途中の小町の罵りのダメージが地味にでかい……。

すいすいとスマホを弄っていると、ぽへーんとＬＩＮＥの通知が来た。

まどろんでいるから効果音もふにゃりとした感じで聞こえる。

アニメでファイヤーシスターズの参謀担当が鬼畜変態の兄に抱きしめられた時の声くらいゆるゆるだ。今の例え超どうでもいい。

画面を見ると、案の定そこには『鶴見留美』と表示されていた。

あの子以外に連絡が来る当ては無いし、予想通りだ。何それ泣いちゃう。

少しばかり緊張しながら、トーク画面を開く。ぱひょっとね。

『八幡』

らしい一言目だ。

『おう』

『（スタンプ）』

ディスティニーキャラがフランクに挨拶してきた。何この子可愛い……。

『（スタンプ返し）』

アルカがナニカになって返事をしているスタンプで返してみる。

『キモい』

えぐい。

『おい、泣くぞ』

ぱぱぱっと返信をすると、少し間を置いて返信が来た。

『じゃあ、また撫でてあげる』

「うぐっ」

……。
変な声を出して。
ベッドの上を転がった。
なんで忘れてたんだ俺。
そうじゃん。そうじゃん。
俺、年下の女の子の前で泣いて、しかも撫でて慰められてんじゃん。
はーん！　死にたいねぇ！　死にたいよ！　このキャラ何なんだろうねぇ！
ベッドでしばらくぎしぎしごろごろ言っていると、隣の小町の部屋から強烈な壁ドンをくらった。『どん』っていうか『がどんっ』って感じ。後ろ回し蹴りでもしたのかしらん。
「……」
何となく、今のメッセージを打った留美が幸せそうに微笑んでいる画が浮かんで、想像しただけで心がぽかぽかと温まった。
気を取り直して、すいすいと返信を打つ。
『うっせ。そしたら撫で返してやる』
大人げガン無視の返信である。マジクール。
少し間を空けてしまったけど、留美は待ってくれていたのか、すぐに既読がついて返信が来た。
『よろしく』
おうふ、この子文面だと強気なんですかね。
『言ったな？』
ちょっと、というかかなり変態仕様になったなとは思いつつも返信。
『変態』
ごもっともです。
『そんなことより』
『なに？　変態』
『待て待て、俺の呼び方を変態に改変するんじゃねえ。泣くぞ』
あ、勢いでまた書いてしまった。
『変態を撫でる趣味は無いんだけど』

『変態じゃなかったら撫でてくれるのか』
なんか更に変態性が増したぞおかしいな。
『八幡ならいくらでも撫でてあげる』
『よろしくお願いします』
『うん』
あれ、テンポ重視で会話してたら、いつの間にか俺が留美に撫でられるのを予約してたぞ？　なんでだ？
『なんか俺、変態にしか見えないんだけど』
『今頃気付いたんだ』
『待て待て待て』
画面の向こうの留美が悪い笑みを浮かべているのが手に取るように分かった。
『そんなことより』
『なに？　変態』
『戻ってる。戻ってるから』
いいように弄ばれている。
『明日のこと、決めなくていいのか』
変態トークから逃れる為にも、本題に切り替えることにする。
この会話が何気に楽しいから少しもったいない気もするけど、楽しいと引き換えに変態という悲しい烙印を押されたくはない。既に手遅れな気はするけど。
なるべく本題を引き伸ばして、変態云々を忘れさせよう。
変態って書き過ぎて余計に変態になってる気がするけどまあ良いや。
『明日は放課後に総武高近くの公園の噴水前に集合。以上』
『俺の意思は何処に行った』
『変態の意思？』
一瞬で本題を締められて、これまた一瞬で話題を引き戻された。
『おい。その言い方やばい匂いしかしねえだろうが。ていうか変態変態言うとお前も変な感じになるぞ』
『私は八幡と違って変態じゃないから大丈夫。あとお前じゃない、留

美』
もはや決定事項らしい。ちゃんと訂正も入れるという手際の良さ。
『なんかあれだな』
『なに』
『こうやって文字で会話すると、いつもより会話出来るな』
少しばかりの間が空く。
『そうかも』
『何だかんだ、留美と話した時間って今日以外はまだあんまり無いし、段々慣れると良いなお互い』
会話は少ないが、その一回一回がとても印象的ではあるんだけど。
それでも、まだ圧倒的に会話量は少ないのは確かだ。
そんなことを考えていると、返信が来た。
『私は、今まで八幡と話したこと、はっきり覚えてる』
「……」
留美も、同じことを思ってくれていたらしい。なんだか、妙にくすぐったい気持ちになった。
『俺もだ』
頭をがしがしと掻いて、次に打つ文を考える。
わがまま姫の指示で明日会う事には、いつの間にやらまるで抵抗が無くなってしまっていたけれど、それはそれでありなのかもしれない。
しばし考えて、文字を打つ。
『もっと仲良くなれたら良いな』
留美の既読がつく。
留美が返信を考えているであろうタイミングで、ふと思い出したことを打つ。
『あと、留美。綺麗になったな』
これがいけなかったのだろうか、既読がついた後、３０分程返信が来なかった。
今日は諦めて寝ようかと思った時、手短に、
『ばか』

『おやすみ』
と、二言が送られてきた。可愛いやつめ。
『留美、どうしたの？　お部屋から変な音とか声が聞こえたけど』
『何でもない。お母さん、何でも無いから』
『？　留美、顔赤いわよ？　熱でもあるの……あ』
『……なに』
『ははぁ～……さては……』
『……っ。もういい、もういいから。おやすみ、お母さん』
『うふふ、おやすみなさい』

×　×　×

翌日、朝起きると留美からディスティニーのキャラが英語で挨拶しているスタンプが送られてきていた。
ナニカのスタンプで返すとすかさず『キモい』と言われて満足すると（この言い方、誤解無くやばい）、軽やかな気持ちで出発の準備を始めた。
春特有の浮ついた空気感が漂う教室で授業を受けると、それはそれは心地良い眠気に誘われる。昨日は留美とＬＩＮＥをしていた時間帯も健全な時間だったのできちんと寝てはいるんだけど、春の眠気は別腹だ。眠気の別腹ってタチ悪いな。
「ヒッキー、もう昼休みだよ」
肩をとんとんと叩かれて顔を上げると、由比ヶ浜が苦笑いをして立っていた。
あれ、さっきの地の文は夢の中だったのだろうか。やだ斬新……。
「ヒッキー、いくら数学の授業だからって寝すぎだって。昨日あんま寝てないの？」
「や、いつも通りそれなりに寝た。あれだ、春の眠気は別腹だ」
言うと、由比ヶ浜がきょとんとした顔をして、それからくすりと呆れ笑いを浮かべた。
「あはは、何それ。でもそれわかるかも……くぁぁ……っ」
俺の眠そうな顔と言葉に釣られたのか、由比ヶ浜が両手で顔の下半分を隠してあくびをした。なんだそれ可愛いな。

目尻に浮かんだ涙をこしこしと拭って、由比ヶ浜がてへっと笑う。
「ヒッキーはいつものとこでご飯食べるの？」
「そうだな。お前は部室か」
予定調和の会話のつもりだったのだけど、俺がそう言った途端由比ヶ浜の目がどんよりと曇った、というかもはや腐った。
わ、すげぇ。小町もそうだったけど、どんな女の子でも目が腐ると可愛くなくなる……。
「……喧嘩でもしたのか」
一体どのタイミングでしたのか気になるところではあるが……と思いながら尋ねると、由比ヶ浜はぷるぷると首を横に振った。
「ううん、違うの。この間の小テストの結果をゆきのんに見せたら……すごい青ざめた顔しちゃって。『ゆきのん、大丈夫？　貧血？』って聞いたら『あなたのせいで貧血になりそうだわ……』って言われちゃって」
質問がバカすぎるだろ。なんだこのファンタジスタは。
それでね、と由比ヶ浜が益々目を腐らせて続ける。み、見たくない、この子のこんな瞳……！
「……ゆきのんが、つきっきりで勉強を見てあげる、って」
「……そ、そうか……」
追及が抜群にしづらい話題だった。
「じゃ、あたし行くね……」
「お、おう」
なんだか戦地に向かう人を見送るような気持ちで、内心敬礼しながら由比ヶ浜のいつもより小さく見える背中を見送った。
最後はいつも通りの目に戻ってたけど……雪ノ下さん、どんだけこってり絞る気なんでしょうか。わたし、気になります。うそ、知るのが恐いです。
由比ヶ浜のあくびを思い出したら、釣られて欠伸がしたくなってきた。
手で口を覆ってくあぁと小さく声を漏らすと、口をむにゃむにゃさせながらいつもの場所へ向かった。

続く。

（6）

昼休み、勉強でしごかれるのが分かっていながら部室へと向かう由比ヶ浜を哀しみの目で見送り、教室を出る。

冬の微かな名残がある廊下をぽてぽてと歩くと、小さなあくびが出た。

まださっきの居眠りの残滓が残っているようだ。語感だけで使ってみたけどやたらかっこ良いよね、残滓。

マッ缶を買いに向かっていると、ぴこんとスマホが鳴る。

見ると、留美からＬＩＮＥが来ていた。

あの子は雪ノ下に似ていると思っていたけれど、こういう所は雪ノ下よりよっぽど現代に順応しているなと思う。俺はまず社会に順応出来てないけど。なんで今言ったんだ俺。

『八幡。今何してるの』

なんか浮気を警戒した奥さんみたいだ。

見た感じ、昨日の最後のくだりの影響は特に無いようだ。良かった良かった。

『（スタンプ）』

癒し系のクマのスタンプが来た。何この子可愛い……。

さて、何と返信したものか。

文面でのやりとりならだいぶ砕けた感じで接することが出来るようになっている。

それならば……ちょっと試してみよう。

『別に』

仲が険悪になっている夫みたいな返信をしてみる。

既読がついて十数秒待つが、返信が来ない。

はてどうしたのかと思って一度画面を切り替えると、ぴこんという通知音がした。

『八幡、怒ってる？』

あ、やってしまった。絶対画面の向こうで留美がしゅんとなってるよなこれ。

慌てて弁解の返信を打つ。
『すまん。すまん。何かさっきの留美の質問が浮気を警戒した奥さんみたいだと思ってそれで冗談で送ってみたんだ本当にすめ？』
フリック入力を慌て過ぎた。「すまん」が「すめ？」になるという妙技。
『本当にすまん』
すぐ訂正すると、留美からすぐ返信が来た。
『ばっかみたい』
文面だけ見れば、つっけんどんにも程があるものなんだけど。
返信を打ちながら微笑んでいる留美が脳裏に浮かんで、気持ちがふわりと安らいだ。
『うっせ。今から昼飯だ』
『そっか。じゃ、また後で』
『おう』
『（スタンプ）』
ディスティニーキャラのスタンプがぺたり。だいぶお気に入りでらっしゃいますのね……。

× × ×

自販機に辿り着くと、見慣れた青みがかった黒髪ポニーテールがぴこぴこと揺れていた。
「……うす」
俺が声をかけると、川なんとかさんがくるりと振り返り、一瞬目を見開いて、平静を装うようにこほんこほんと咳払いした。
「……お疲れ」
残業で22時を回っているかののごとき声音で返事をしたが、その顔は紅潮している。
といってもそれを指摘したところで血を見るだけなので（実際はそんな恐くない）、短い挨拶を交わしてすぐに会話は終わる。これ会話って言えるんだろうか。
川なんとかさん、もとい川崎は何を買うか若干迷っているようで、後ろに控える俺を気にしながらもうんうん言っている。ちょっと可

愛いかも。
まあ大した待ち時間じゃないしなと思っていると、再びＬＩＮＥの通知音がする。
相手は留美だった。
『（スタンプ）』
『（スタンプ）』
『（スタンプ）』
癒し系のクマ三連発である。どれだけ俺を癒したいんだろう。そしてどれだけ俺が荒んでると思われたんだろう。心外だ。
返事を打ち込む。すいすい。
『なんだおい可愛いな。また褒めるぞ』
『ばか』
『おい』
ＬＩＮＥなのに食い気味かよってくらいの速度で返事をして、最後の俺の言葉には既読がつかなかった。恐らく高速でアプリを閉じたんだろう。
友達に不審がられるであろうきょどりっぷりが脳裏に浮かんで、ふふっと頬が緩むと同時に、今のからかい（といっても嘘ではない）のお詫びに放課後はお菓子でもおごるかなどと考えていると、目の前から何か圧力を感じた。
スマホから顔を上げると、既に飲み物を買い終えた川崎がジト目を向けていた。え、なに、俺なんかした？
「……あんた、何にやにやしてんの？」
「……」
……。
頬が緩むって……普通、もっと和やかに映るよねぇ……にやにやしてるように見えるのかぁ……。
凹んでいてもしょうがない。
こほんこほんけぷこーん。
「あんたじゃない。八幡」
「……それ、誰の真似？」

わがまま姫の真似をすると、川崎は更に目を細めた。迂闊なことはやるもんじゃない。
あとあなたは自分の視線の圧力をもう少し自覚してほしい。
「大体アレだ。あんたなんて言い方、俺にして良いのは俺の嫁になる人だけだ」
無難な線で行くと小町か戸塚である。
流石に個人名を明言するのは避けたんだけど、川崎には何か妙な聞こえ方をしたらしい。顔を真っ赤にして、缶を持っていない方の腕で顔を隠す。
「は、はぁ!? あんたばかじゃないの!? ……あ、う……っ！」
「あ、おい」
自分で再びあんたと言った事に気付いた瞬間、川崎は茹でダコになって駆け出していった。な、なんかごめんね……。

× × ×

そんなこんなで放課後。
昼休みの留美とのＬＩＮＥと川崎とのやりとりで癒されて（由比ヶ浜は哀しかった。ただただ哀しかった。部室から戻って来た時の疲弊の仕方が尋常じゃなかった）、午後はとても気持ち良く過ごした。
ちなみに部活は無しになっていた。
雪ノ下が本気を出して由比ヶ浜を調教もとい指導するらしく、その空気を察して帰ることにした。
帰る間際にちらりと振り返った時の、「行かないで」と訴えかける由比ヶ浜の瞳は一生忘れない気がする。
雪ノ下は素敵すぎる笑みで「依頼が来て人手が必要になったら呼ぶわ」と言ったんだけど、一旦帰っても呼び出されるってそれ俺社畜にも程がありません？
留美に指定された公園に行き、噴水前で待機する。
ゆうて水場なので、思ったより冷えた空気が身体に染み込んできてぶるりと震える。
そのため数メートル程そそくさと離れた。
温かいマッ缶（本日二本目）をちびちび飲んでいると、前方に昨日

会ったばかりのわがまま姫の姿が見えた。
小さく手を振ると、はっと目を見開いて頬を赤らめた。寒いんだろうか。まだ寒いよね。夕方前だし。
とてとてと歩いてくると、俺の袖をきゅっとつまんだ。
何で俺の周りの女子はこういうのが得意なんでしょうか……。と思ったんだけど、留美は俺の袖をつまむと更に顔が赤くなっていた。俺から熱が伝播したんだろうか。そんなに体温高かったっけ？
留美は俯いた状態から、視線だけ向けてきた。
天然ものの上目遣いは凶悪だ、マジで。
「……八幡。どこ行く？」
「え、どっか行くのか」
「寒いでしょ」
「や、そりゃ寒いけど。じゃあそれならせめて街中でも」
言うと、留美はふるふると首を振って、周りを見渡した。
釣られて視線を巡らせると、公園特有の整えられた並木道が見える。
「……その前に、こういうとこ、一緒に……歩いて、みたくて」
「……お、おう。そうか」
どうやら、わざわざ遠まわりをしたいらしい。
言葉に詰まって、目の前の少女を見つめる。
顔を赤らめて、途切れ途切れの言葉で告げる留美が、予想以上の破壊力を持っていて。
……妹的な可愛さだよな、うん、そうだよな？　と自分に言い聞かせた。
「……くしゅん」
直後、留美が可愛らしいくしゃみをした。
一瞬の逡巡。
……妹的な可愛さだよな、うん。
……あと、寒いんだよな、うん。
その二つを頭の中で繰り返して、何度も予防線を張り巡らせて――辺りを見回して、留美を胸元に抱き寄せた。

「え……っ」
留美が俺の胸元（正確には鳩尾辺り）で驚いたように声を漏らす。
「あー、その、なんだ、寒そうにしてたしな。……あと、その、なんだ」
さっきの留美の言葉と仕草を思い出して、頬をぽりぽりと掻く。
「……留美は可愛いな」
言った瞬間。
あ、やってしまったと気付く。
昨晩も、今日の昼も、これでやりとりが途切れたのに。
反応を窺おうと下を見ると、
「……〜〜〜〜っ」
「こらこらこらこら」
俺の服を摩擦で焼き切ろうとしてるのかと思うくらいの勢いで、高速でおでこをこすり付けてきた。無言で。
落ち着けようと、留美の頭をゆっくりと撫でる。
留美の髪はさらさらで、撫でる度にふわりと柔らかな香りが舞った。
結局この後、留美が俺の胸元から復帰するまで（すごい表現だ）十分ほどかかり、その間俺は草食獣ばりに周りに視線を巡らせていた。
続く。

（7）

留美とのぶらり並木道散歩と相成って、公園の中を二人並んでのんびり歩く。

隣にちらりと目をやると、留美はやや緊張した面持ちで表情を固くしていた。

「……留美、どうした？　なんか緊張してるように見えるけど」

何とは無しに聞くと、留美はぴたりと足を止め、複雑に感情が入り混じった表情を浮かべた。

俺の袖を忌々しげにぐいぐい引いて、ジト目を向けてくる。

「……別に、緊張なんか、して、ない」

「……そうか」

これ以上追求すると確実に怒られると判断して、早々に会話を切り上げる。

小町との会話で学んだ対女性術（特に年下）だ。

二人の間に沈黙が下りると、とあることに気が付いた。

本来、人と人との間に生じる沈黙というのは、得てして気まずいものだ。

時間と空気感それぞれの間隙を埋めようと、会話に慣れていないのにあれやこれやと喋りたて、盛大にミスを犯す。

具体的に言うとだだスベる。鬼のようにスベる。

自分で心の闇の扉を開けてしまった……。

しかし、今目の前にいるこの子との間に流れる沈黙は……存外心地良い。

二人の間を春の柔風が吹き抜ける。

夕方になって冷え込むはずなのに、さっきまで一人で居た時に比べて風の体温は幾分温く感じた。

いつもよりゆったりと流れゆく風が、木々の葉を揺らす音に耳を澄ませていると、留美が顔を上げて俺に視線を向けた。

その瞳に宿った穏やかな光に、心の内がむずがゆくなる。

「どうした」

「なんか……喋らなくても、結構楽しい、かも」
おお。
なんか妙に、嬉しい。
「……奇遇だな、俺もそう思ってた」
やや上ずった声音での返答に、留美はきょとんと目を見開いて。
そして穏やかな笑みを浮かべると、顔を前に向けた。
再び、柔風が吹く。
留美の艶やかな黒髪がふわりと靡くと、小さな左耳が見えた。
仄かに朱に染まった耳。
ちらりと留美を見ると、何とも幸せそうに頬を緩めている。
目が合った。
「……」
何も言わず、互いに目を逸らした。
……今、何で俺まで恥ずかしがったのか。
その理由が分かるような、けれど分からないような、曖昧な気持ちを胸に湛えたまま。
二人の公園散歩は、尚も続く。

× × ×

ぽてぽてと歩く。
二人の会話は途切れ途切れで、ふわりと話題が下りては、お湯にわたあめを入れるかのように声のやりとりが溶け消えていく。
コミュニケーションが苦手な者同士の、ぎこちない会話。
なのに。
俺と留美は、絶えず笑っている。
それは声を上げて笑うといった類ではなく。
穏やかに、柔らかに、微笑むものだった。
留美の口数が少ないのは、俺には殊更ちょうど良い。
多少どちらかのテンションが上がれば、もう片方も自然と口数が増える。
片方が飽きたら、もう片方も無理に話を掘り下げようとしない。
自由気ままに、まるで一人で居るときのように。

そんな、緩やかな時間が、二人の間には流れていた。
「……」
ふと、留美の視線を感じる。
「どうした」
少し掠れた声で応じる。
喋ってなさすぎなことによる弊害なのだろうか。
前に話したのは何分前だったっけな……。
「……」
俺の問い掛けに答えず、小さなお姫様は俺をじっと見つめる。
留美の足が止まった。
釣られて俺も止まる。
留美の視線が、俺の手に向けられる。
そしてその視線が、今度は留美自身の手に。
「……ああ」
うん、なるほど。
そうかそうか。
……。
……ええ～……？
や、うん、大丈夫。これは妹接待スキルを発動するに過ぎないから。
うん、大丈夫、大丈夫……。
留美の手がぴくりと動く。
微かに、手の標高が上がる。
留美の表情を見ると、緊張の渦に飲まれていた。
留美の手をそっと握って、渦の中から助け出す。
小さな手が、やっと来てくれたと言わんばかりに握り返してきた。
互いの体温を分け合うと、留美の喉が、こきゅっと小さく鳴った。
きっと、俺の喉も同時になっていただろう。
けれど、自身の心音にかき消されて、自分が他に発する音は耳に入らなかった。
「……行くか」
手汗が滲んでるのではと気にしながら、消え入りそうな声で呼びか

けると。
「……ん」
短く応えて、留美がもう一度手を握り返した。
× × ×
尚も散歩は続き、ぽてぽてと歩く。
……しかし……。
「……なあ、留美」
「なに？」
留美の方を向き、話しかける。
俺に向けた顔はまだ微かに緊張が残っているものの、何とも言えない程幸せな雰囲気を纏った笑みを浮かべていて、見ているだけで気持ちがふやけた。
「その……なんでこんなすぐに会おうとしたんだ？」
ずっと考えていたことを尋ねると、留美は驚きで目を見開いた。
その様子を見て、慌てて続きの言葉を紡ぐ。
「や、だって、な。今までは偶然会うばかりだったろ？　昨日だって偶然だった訳だし。それなのに急にこんなに連絡くれたり会ってくれたりするってのは何でなのかって思って。俺は別に悪い気はしないから良いんだけど」
昨日会ったのは偶然と言うことにしておいた。俺は留美の家の前で何も聞いたりしていない、うん。
しかし、まあ、うん。
留美が不快にならないようにと、必死で捲し立てるように喋ってしまった。
わたわたと繋ぎ合わせた言葉は、ポケットから取り出したイヤホンのようにしっちゃかめっちゃかなものになってしまった。
けれど、それでも効果はあったようで。
「……なに慌ててんの」
留美が呆れたように、けれど嬉しそうに、くすりと笑った。
ああ良かった、不快に済んだと安心していると――留美が頬を薄桃色に染めて、ふいと顔を逸らした。

「……それは、その……」
「？」
「……単純、接触、効果……って、やつ……？」
「え？」
「な、何でもない。ほら、行くよ、八幡」
もにょもにょと聞きなれないフレーズを口走ったかと思うと、俺と繋いだ手に力を込めてぐんぐんと進み出した。
「待て待て。今言った言葉ってどういう……っていうか犬扱いすんなよ」
つい律儀に挟んでしまったツッコミも相まって、このくだりはさらりと流れてしまった。
× × ×
なんだかさっきまでとは雰囲気が変わったなと思いながら歩いていると、不意に手の指と指の間に、留美の細い指がするりと入り込んでくる。
「……!? お、おい……っ!?」
不意に上がる心拍数にどぎまぎしていると、留美が上目遣いで見つめてきた。
「……別に、良いでしょ……？」
「……お、おう……」
ま、まあね。可愛い妹分ならばいくらでも……。
……可愛い、妹分……？
……妹……？
ずっと自分が張っていた予防線に、ふと違和感が走った。
× × ×
それからしばらく。
結局、二人でいわゆる恋人繋ぎをしたまま、留美が帰らなくてはならない時間までひたすら散歩してしまった。
「そ、そろそろだな」
言うと、留美が名残惜しそうに眉根を寄せて、子犬のような瞳で俺を見つめた。

や、やめろ、家に連れ帰りたくなるだろ……！
一瞬で社会的に消されてしまうけどな。
「……うん」
ｉｆルートの自分が辿る末路に戦々恐々としていると、留美は存外素直に受け入れてくれた。
繋いだ手を離すと、途端に夕方の薄ら寒さが増したように感じる。
「……八幡」
留美が俺を呼び、正面に回り込んで俺の両手を握った。
俺の手よりも一回りも二回りも小さい手は、何かを伝えようと俺の手をきゅっと握っている。
留美が顔を上げる。
その真剣な表情に、鼓動がどくんと高鳴った。
「八幡……今、彼女って、いる？」
儚げな声で問い掛けると俯いて、長い睫毛が憂いを帯びた瞳を覆い隠した。
夕焼けが照らす留美の顔は、絵画を思わせる程神秘的で美しい。
「……いない、けど……」
真剣な表情を浮かべる留美を見て、茶化すという発想は即座に霧散する。
代わりに漏れ出たしどろもどろの答えに、留美が握る手の力がふっと抜けた。
「……そっか」
言って、手を離して前にてくてくと歩いて行き、ぴたりと立ち止まる。
背中越しにも、まだ何か言いたいことがあるのだと伝えてきて、無言で続きを促す。
「……今私が中学一年で、八幡が高校三年。中学も、高校も、かぶることが絶対無い。大学に入ったって、八幡はきっともう働いてる」
「……そうだな」

「……私、もっと八幡と一緒に居たい。だめ？」
小さな背中が、夕暮れの中微かに震える。
「え、や、別にこうやってちょこちょこ遊ぶくらいなら……」
「だめ」
不意に。
留美の言葉の密度が増して、俺の尻すぼみの言葉を吹き飛ばした。
「……それじゃ、だめなの」
留美の声が、泣きそうになる。
背中を見つめて、彷徨うように腕を上げて留美に近付くと、留美がくるりと振り返った。
その顔は、少女ながらも驚く程大人びた女性のものになっていて。
「だ、だから……八幡。わ、私が、もらってあげようか？」

「……へ？」
伸ばした手もそのままに、素っ頓狂な声を上げる。
さっきまで二人を包んでいた風が、留美の言葉に呆然自失とする俺の寄る辺を奪うかのように去って行った気がした。
真空状態になって音が届かなくなった空間の中で、一人考える。
え、ええと、今、留美は何て……？
あ、そうか、俺をもらうのか。うん、もらってくれるんだな。
ええと……。
留美が、俺を、もらう。
……命とかだろうか。
わーやだ、留美は悪魔だったのかそうかー。
悪魔ってよりかは小悪魔かなーなどと必死で考えていると、留美が呆れたようにジト目を向けてきた。
「……何か言ってよ」
「あ、や、その、すまん。突然だから驚いて」
頭をがしがしと掻いて、うんうん唸りながら言葉を紡ぐ。
俺は、今目の前で真剣な表情を浮かべている、綺麗で生意気でとて

も可愛くて居心地が良い女の子――留美と、どうありたいか。
ここで、きちんと答えた方が良いのだろうか。
「……その、確かに留美は可愛いと思う。懐いてくれるところも、たまに見せる笑顔も、ツンツンしておいてその後ふっと声が柔らかくなるのも、みんな可愛い」
「……～～～～～～～っ」
今まで思っていたことを一つ一つ丁寧に、留美の目を見ながら届ける。
留美が目をぐるぐるさせるんじゃないかと思う程茹でダコになっているが、まあ今はご勘弁を。
「でも、まだ俺の中では妹みたいに見え――」
「『まだ』」
「……え？」
言葉を遮るように、留美が言った。その顔は真っ赤ながらも真剣そのもの。
年下の女の子ではあるけれど、その瞳には既にしなやかな強さを纏っていた。
「八幡。今、無意識かもしれないけど、『まだ』って言い方をしたよね？　ということは、八幡にとって私は、『まだ』……か、可愛い、妹みたいに見える……んでしょ？」
「あ、ああ……」
自分で可愛いと言おうとして耳まで真っ赤になるのは反則だと思うんです。
だから――と、留美は今にものぼせそうな顔をしながらも、真摯な表情で俺を見つめる。
「私、これから八幡に、全力で……あ、アプローチ、する、から……ちゃんと、見てて？」
「え、お、おい……っ」
「じゃ、じゃあ……っ!?」
「!?　あぶね……っ！」
留美が慌てて駆け出した直後、がつっと躓いて留美がよろける。

慌てて手を伸ばすと、留美を後ろから抱きかかえる形になった。
「だ、大丈夫か……っ」
「あ、ありが……っ」
留美が振り向いて、二人の視線が、ぱちりと合う。
わずか、数センチの距離で。
「……」
「……」
「……」
「……」
「……」
「……じゃ？」
「ま、また明日……っ！」
「あ、おい……っ」
俺の懐からするりと抜けて、留美が駆け出す。
風に靡く髪は、いつもと比較にならない程右に左にと揺らいでいた。
留美が去り、人通りが無く誰もいない並木道に一人佇む。
留美の真剣な表情と、言葉。
留美の小さな手の感触。
何より、ルミの笑顔。
並木道の木に背中を付けて、腕で目を覆って天を仰ぐ。
「……妹って思わねえと、持たねえと思ったのに……」
ふと独り言ちたこの言葉が。
俺と留美との関係に、特定の変化が訪れるのは時間の問題だ――ということを、簡潔に示していた。
続く。

（８）

恋愛に関する推論や方法論などは、とにかく世に溢れ返っている。

それは小学生の頃から聞いたことがあるようなベタなものから、裏をかいたひねくれたものまでごまんと転がっている。

学校の中にも。

街中にも。

ありとあらゆる場所に。

それを信じた人が、いたずらに試しては手痛い目を見て、けれどその一方で「私はこのやり方で上手くいった」などと嘯く輩が出てきて、ありとあらゆる噂が現実でもネットでも跋扈する。

その様は正に。

都市伝説。

街談巷説。

道聴塗説。

こういう具合に括ってやると、世の中のあらゆる青春ブタ野郎たちが噂に振り回されて「きゃー！　きゃー！　ぎゃー！」などと喚いていても、可愛らしく見えてくる。

けれど、こんな言い方はあくまで自分が蚊帳の外にいる状況だからこそ出来るのである。

ゆるふわな同級生や先輩後輩に囲まれて、部室で紅茶を飲んでまったりしたり。

自分に憧れて、愛している、抱いてほしいとまで言ってくる美少女天才小説家が毎日のように家に遊びに来たり。

グラウンドの真ん中で国民的美少女に愛を叫んだり。

そういった行為が、あくまで自分に関係の無い、別世界・異世界のことなのだと完全完璧に割り切ってしまえる状況だからこそ、涼やかな目で達観出来るのだ。

もし、自分がこういった色恋沙汰に巻き込まれたとしたら？

途端に、そういった噂話が身近なものに思える。馬鹿らしく思えなくなる。

そういうものなんだろう。
――こういった噂話の中に、「一度目の告白で失敗しても、それによって相手は告白してきた人を意識するから、その後のアプローチの効果が上がる」といった話がある。
すげぇ具体的な例を挙げちゃったよ、ウケる。……ウケねぇ……。
まあ、その、なんだ。
色々と前置きをして、ふわっとした話をしたり急に具体的な話をしたりと色々やったけれど。
今言いたいことはただ一つ。
どうしよう。

× × ×

「……」
留美と放課後に公園を散歩した、その日の夜。
帰るなり着の身着のままでリビングのソファに倒れ込むと、顔を突っ伏したまましばしぼーっとする。
眼鏡をかけてたら今の動作で鼻当てが耳にめり込んで悶絶してたな。超どうでもいい。
そこから、無言ですびっと立ち上がり、何も思考が纏まらないままに座り込み、碇ゲンドウモードに入る。けれど、思考は一向にまとまらない。
えーっと、留美が俺に「もらってあげようか」と言ってきて？
俺は留美のことが妹みたいに見えると言いかけたらそれを遮られて？
アプローチするからと言われて？
しかもそのアプローチは全力なんだとか？
……。
顔を上げて、天井を見ながらソファの背もたれにどかっと体重を預ける。
「……えぇぇぇ……？」
心の底からの本音が漏れて、肺から力の抜けた息がぼはっと抜け出た。

や、嬉しい。
あの言葉自体は素直に、純粋に嬉しい。
でも、それ以上に、まだ戸惑いがある。
あんなことを言われて、あんなに真っ直ぐに思いをぶつけられて、戸惑わない訳が無い。
俺はこれからどうするべきか、本当に分からない。
ある意味、今の留美は俺にとって由比ヶ浜より分かりやすく、陽乃さんより分からない。
男を例えに出すと分かりやすいヤツの例が材木座とかになるのでやめておいた。具体例挙げちゃったよ。
ぼへーっとした顔で、今日の留美とのやりとりを思い出す。
赤面しながらも、強い意志を滲ませて言葉を紡ぎ、立ち去っていくその後ろ姿。
「……綺麗に揺れてたなぁ……」
艶やかな黒髪が夕陽に染まりながら、右に左にと揺れる光景は、目に焼き付いていた。
「……あー、ほんとにどうしよう、どうしよう、年下かぁ……」
「年下がどうかしたの？」
「……」
絶句。
いつの間にか背後に小町がいて、ソファの背もたれに肘をつき、じっと俺を見つめていた。
こちらからは顔と腕しか見えないが、恐らく膝立ちになっていると思われるそのポーズの全貌を想像しただけできゅんとする。や、そうじゃなくて。
こう、なんていうか、うん。
心臓がきゅっ！　ってなったよね。きゅっ！　って。
予想外のタイミングでの小町の出現に、心臓が熱いビートを刻んでいると（言い方が鬱陶しい）、小町が首をくりんと傾げた。なんだそれ可愛いなお前。
「綺麗に揺れてたって、誰のこと？」

「なんでもねぇよ。気にすんな」
「結衣さん？」
「お前は何を想像してんだ」
まさかのぶっこみだった。
確かに体育の時間は何だかんだガン見するけどな。
たまに気付かれて、顔を真っ赤にして「うぅ……ヒッキーのばか……」と言われてひたすらに謝るんだけど、胸を隠すと却ってエロく見えるよねごめんなさい何でもないです。
小町が逆側に首をくりんと傾げる。ほんと可愛いなそれ。
「それか……揺れたのは雪乃さんの髪とか？」
「なんで結構良い線をつくんだお前は」
確かに、雪ノ下の髪がさらりと揺れただけでも、それは一枚の絵になる程美しい図になる。
つい反射的に返した言葉を聞いて、小町が「ほーん？　ほーん？」と意味ありげににやにやし始めた。
「良い線行ってるんだー。ほーん？」
「うぜぇ……」
それでいてスーパー可愛いから手に負えない。一生傍にいたい。やだ俺気持ち悪い……。
「年下って言ってたからいろはさんかなぁとか思ったけど、今の感じだとまた違うみたいだねぇ」
「いつの間に仲良くなってんだお前は……」
「ん？　お兄ちゃんと違って小町はコミュニケーションがばりばり出来るからね。あっと言う間に人気者になれるし。いろはさんみたいにお兄ちゃんの近くに居る人とは漏れなく仲良くなってるのです！」
がばっと立ち上がり、腰に手を当ててむふふと自慢げに胸（無い）を張った。
「何この子怖い……」
同性だからとは言え、すぐに名前呼びに持って行ける能力はもはや脅威でしかない。
正にコミュニケーションモンスター、略してＣＭだ。この略し方超

どうでもいい。
ちなみに小町は無事総武高に合格していて、本人が言うように既に学校の中で一際輝きを放っていた（妹補正を差し引いてもそう言える）。
正統派可愛い系世界の妹小町である。
なげぇし超薄っぺらいなこの肩書き。
俺が対人スキルを発揮出来るのは精々妹に対してのみだが、小町の場合はその範囲が異様に広い。
誰にでも優しく、それが故に勘違い男子によく告白されるようだ。
取り敢えず川崎大志は告白の有無を問わず小町に近付くな。
心の中で命令しておこう。
まあ、あいつが総武高に受かったのかどうかすら知らないけどな！
小町の周りをぶんぶん飛び回る羽虫どもを如何に撃ち落とすか考えを巡らせていると。
小町が目を細めて俺をじっと見つめ、目を閉じてうーんと唸った。
ぱちりと開けて、またしても首を傾げる。首傾げを推してるのん？
どこの有名アニメ制作会社さんだ。あれすげぇ可愛い。
「ていうかお兄ちゃん、いろはさんの名前を出しても全然動揺しなかったね。やっぱり違うんだ」
「待て待て待て。お前は何の追求をしてんの？　何を当てようとしてんの？」
慌てて聞くと、小町が腕を組んで「ほえ？」と首を傾げた。
「そりゃもう、今お兄ちゃんが気になってるけどどう接したら良いか分からなくなってるであろう女の人が誰なのかを当てようとしてるんだよ？」
「……」
二度目の。
絶句。
「うーん、年下で、それでいて黒髪ロング……お兄ちゃんと学年が同じかそれ以上なら、お義姉ちゃん候補はいっぱいいるんだけどなぁ……」

さり気なく年下と黒髪ロングが情報として確定されている。
「や、なんでそんなことが分かるんだお前」
「あ、ほんとにそうなんだ」
「……」
この子、職業なんだっけ？　高校生だよね？
言葉を紡げば、その声音や表情から色々な事が読み取られてしまう。
そんな、メンタリストと対峙したような謎のプレッシャーに見舞われていると、小町が小声でぶつぶつと「まさか、あの子……？　や、でも、そんなに会う機会も無いだろうし……でも小町が知らないだけで、これはもしかして……まさかそんな……」などと呟いている。
ほとんど特定されていそうでマジで恐い。
不意にスマホの通知音が鳴った。音の長さからして、メールではなく電話のようだ。
その音は明らかに俺の鞄の中から響いている。
電話を掛けて来る相手など、一人しか思い浮かばない。
小町の目つきが変わった。ヤマピカリャー。
「おやおやおや？　どなたでしょうなぁ？」
「背もたれから身を乗り出すのをやめろ」
腰を掴んで放り投げて一回転させたくなる。
小町を手で牽制しつつ、画面を確認する。
案の定、『鶴見留美』の文字が表示されていた。
視線も交えて小町を更に牽制しつつ、リビングを出る。
リビング以外の電気は点いておらず、廊下は薄暗がりになっている。
若干慌てている為に、電気を点けないまま画面をスライドさせ、電話に出た。
『……遅い』
『わりぃ。小町とリビングに居てな』
『小町……さん』
『ちょっと待て、なんで今『よし、覚えたぞ』って感じを出したんだ』

『なんでって、それは……』
『……』
『……』
『……』
『……』
『……それで、どうしたんだ？』
『……こほんこほん。うん、えぇっと……』
『大丈夫か？　風邪か？』
『ううん、ちょっと乾燥してただけ。……うそ。やっぱり風邪かも』
『なんで切り替えたんだ今』
『風邪引いたら、八幡が看病に来てくれるかなって』
『急にそこまで切り替わると戸惑いしか覚えねぇぞ』
『……いいの。八幡が家に来てくれたら、その、色々と……』
『……色々と？』
『……ゆ、……』
『……ゆ？』
『……誘惑出来るのに……』
『……』
『……』
『……』
『……』
『……』
『……なんか言ってよ』
『……例えば？』
『……あ、あーんさせてあげる』
『……思いの外可愛い誘惑だな……しかも俺がやるのかよ』
『いいでしょ。私が病人なんだから』
『お前、咳は？』
『……』
『そこで黙るのかよ……』
『八幡、脱線しすぎ。明日のこと早く話したいんだけど』

『え、あ、ええ？　わりい……んんん？』
『明日から連休でしょ』
『ああ、そうだな』
『私の退屈を紛らわせる為にどこかに連れていって』
『清々しいくらいの女王さまっぷりだな』
『……だめ？』
『……』
『……八幡？』
『……お前、今のはずるいぞ』
『……自覚はしてる』
『してんのかよ……わかったよ』
『え、いいの？』
『まあ、俺も暇だし』
『八幡の暇と私の退屈を一緒にしないで』
『まさかの変わり身だ』
『ほんとに良いの？』
『女王様の退屈と平民の暇は別らしいというくだりも含めて、問題ねぇよ』
『そういうの要らない』
『え、自分から言っておいてそれか。分かった。じゃあ留美にツッコむのやめるからな』
『え……』
『すげぇショック受けちゃった。わりぃ。続けるから、続けるから』
『……精進しなさい』
『変わり身が早すぎる……それで、行きたい所はあるのか』
『えぇっと……明日までに考えるから。明日の９時に駅前集合ね』
『おう、わかった。それまでに何かあったらまた連絡くれ。じゃあおやすみ』
『え、もう切るの？』
『さっきの脱線は理不尽に咎められたのに……』
『いいの。話すの』

『なんで急にすげぇ可愛くなってんだ……くしゅんっ』
『か、かわ……え、八幡？　大丈夫？　風邪？』
『あー、や、廊下でずっと喋ってたからな……って、あれ、小町がリビングで手招きしてる。寒いから中入るわ』
『小町さん……』
『だから何なのそのテンション。割と好きなんだけど』
『……』
『あ、や、その、今のは別に……』
『今のは別に……？』
『あ、や、違うんだって。な？　えぇっと……』
『……今、女の人の声で『お兄ちゃんクズだなぁ～』って声が聞こえたけど。今のが小町さん？』
『え、小町は入れ違いに出てったぞ？』
『……え、うそ。本当に？　だって今、はっきりと女の人の声が……』
『ああ、うそ』
『……次やったら許さないから』
『ご、ごめんなさい。今のは小町の声です』
『……まあ、いいや。じゃあ八幡、また明日ね』
『あれ、もう良いのか』
『風邪引かれても困るし。温かくして寝るんだよ？』
『なんでお姉さん気取りなんだお前は……』
『少しでも精神年齢を上げておこうかなって』
『何その健気な取り組み……可愛すぎるだろ』
『八幡……何回も言われたら、流石に慣れるから』
『声震えてるぞ』
『おやすみ』
『あ、おい、おやすみ』
通話終了。
ぷーっ、ぷーっという音を確認して、ふぃーと息を吐く。
生温い視線を感じて振り向くと、小町が目を細めてうんうん頷いている。どういうことなの……。

「お兄ちゃん、超楽しそうだぁ……」
「そんなでもねぇよ」
「今ので超楽しいんじゃなかったら、お兄ちゃんの人生は輝きに満ち満ちてるよもはや。輝きすぎて小町の視力が落ちちゃうよ」
「輝きに満ち満ちても視力が落ちる程度なのか……」
眩しいには眩しいらしい。
目が腐ってるから光も弱まっちゃうよね……ていうかそもそもそんなに輝いてないよね、とえげつない付け足しをして、小町はにこやかに微笑んだ。
「……うん、年下でも悪くないね」
「……ああ、そうだな……っておい」
「鶴見さん……留美ちゃんで良いのかな？　すごく良い子じゃん」
「待って、色々待って」
「何となく予想は付いてたし、漏れてくる声が聞き覚えあったから」
「……」
「そっか～小町より下か～」
お兄ちゃん半端じゃないね、と含みしかないことを言うと、小町はカマクラをもふもふ撫でてリビングを出ていった。「おやふみ～」とあくび混じりで言いながら。
「……」
なんか、外堀の一部、しかも結構大きい部分が埋められた気がするんだけど気のせいだろうか。
しかし、明日のことを考えると、どうにも心臓が高鳴る。
「……まあ、なるようにしかならねぇだろ」
独り言ちて、頭をがしがしと掻く。
廊下の冷えた空気が、意外と悪くないなと思いながら部屋へ向かう。
足取りは、自然と軽くなっていた。
続く。

（9）

『小町、気難しい年頃の子を遊びに連れていくとしたら例えばどんな候補が挙げられるだろう』
『お兄ちゃん、電話してまだ三十分くらいしか経ってないよ』
『いや待て、俺は誰も留美とは言っていない』
『言ってる言ってる。自分から超言ってる。引いた。すごい引いた』
『そんなにか』
『そんなにだ』
『口調が変わる程か』
『口調が変わる程だ』
『……調べてはいるんだが、いまいち良い所が分かんなくてな……小町、力を貸してくれ』
『……』
『どうした』
『お、お兄ちゃん……留美ちゃんの為に、くだらない意地を捨てて小町に助力を乞うなんて……大人になったね……』
『うるせぇ……恥ずかしいこと言うな……』
『まあ、でも』
『？』
『お兄ちゃんがそれだけ誠意を持ってるなら、何処に行ったって留美ちゃんは喜んでくれるよ』
『そんな……もんか？　や、俺は信じない』
『想像以上に性根が腐ってる……』
『知ってる』
『お兄ちゃん……』
『やめろ、哀れむ目で見るな。だってお前、その言い方は《ごはん何食べたい？》《何でも良いよ》《じゃあここにしよっか》《え……》と同じパターンだろ。泣くぞ』
『意外とそれっぽい所を突いてきた……鬱陶しい……』
『鬱陶しいって言うな……』

『それでも大丈夫』
『何がだ』
『お兄ちゃんが軽蔑してる世の中の女の人と、小町は違うでしょ？』
『違うな。全く違う。比べるのも甚だ馬鹿げてる。次元さえ異なる。世の女性は二次元で小町は四次元だ』
『お兄ちゃん、何言ってんの？』
『すまん』
『もぐぞ』
『謝ったのに!?』
『まあそれはいずれということで。お兄ちゃんの中で小町が他の人とは違う特別な存在に思えるなら、きっと留美ちゃんも同じように特別に見え始めてるはずだよ、きっと』
『む。……そう、なのか……？』
『だから、大丈夫。お兄ちゃん、やれることをやってみなよ。留美ちゃんを喜ばせて娶る為だと思って』
『後半おかしくない？』
『もぐぞ？』
『お前それ使い方強引だな!?』
『まあまあ。自分で頑張ってみんさい。頑張れ！　ビーアンカンシャス！』
『それまさか《大志を抱け》って言いたかったのか？　Ｂｅ　ｕｎｃｏｎｓｉｏｕｓ？　文法が不自然な気がするけど、ざっくり訳すと《意識を失え！》だぞ』
『もぐかー』
『言いたいことはしょりすぎだし超怖い』
『ま、頑張れ、お兄ちゃん』
『……おう』
そんな会話をしたのが、三時間程前のこと。
そして今、俺は。
「むぅ……」
部屋のＰＣにへばりつき、夜中と呼べる時間帯になってもまだネッ

トサーフィンを続けている。
「……大体、なんで俺はこんなに必死になってんだ……？」
いくつも並行して表示された様々なスポット（どんなスポットとは言わない）のページやそのレポートやレビューを見ながら、頭を抱えている。
大体、世の中にはそういうスポットが溢れすぎなんだ。もっとまとめろよ。
各都道府県に三ヶ所ずつくらいで良いだろ。
それで週末は大混雑になればいい。
……しかし、まあ。
「……笑った顔が見られるなら、それに越したことは無いよなぁ……」
独り言ちて、ふっと笑う。
疲労が蓄積されてきて、一度目的を見失いかけていたけれど。
何だかんだで、俺は、あのわがまま姫さまを喜ばせたいらしい。
「……もう少し、頑張るか」
リビングに行って、インスタントコーヒーを作る。
誰も居ない、半分は灯りが点いていないリビングを静かに見つめる。
夜はまだ、ホットコーヒーが心地良く感じるくらいには冷え込む。
自分の手を見つめて、繋いだ手の温もりを思い出す。
「……うっし、やるか」
どうした俺、熱血系になってるぞ。キャラじゃないぞ。
そんなツッコミを自分にしながら、けれどどこか、楽しんでいる自分に気付いた。
部屋に戻り、再びＰＣに張り付く。
「……あれ？」
ふとスマホを見ると、三時間程前、つまり小町と話していた時間帯に、留美からＬＩＮＥのメッセージが届いていた。
『（スタンプ）』
癒し系のクマさんのスタンプが送られていた。
「……ああもう、可愛いやつめ」

言って、身体の中が焼ける程恥ずかしくなるのを感じながら。
再び、ネットの海を泳ぎ始めた。
×　×　×
翌朝。
「……ねっむ……」
寝ぼけ眼をこすりながら、駅前の建物の壁にもたれかかる。
昨日は何だかんだで何も決めてなかったので、朝８時くらいに留美に連絡をした。
『おはよう』
『おはよう』
２秒で既読がついて２秒で返ってきた。
『今日なんだが』
『うん』
『駅前集合にしたら何時までに来られる？』
『もう準備は全部済ませてるから、何時でも良い』
予想の斜め上を行く答えだった。
『じゃあ、９時な』
『八幡、それ遅すぎ』
『お前が早いんだよ』
こんな会話だった。
ゴールデンウィーク初日とあって、駅前は大層な人だかりが出来ている。
こんな中では、駅の中を動き回るだけでも億劫になる。
実際、今日の行程を思えば、最悪留美に断られることも考えられる。
さてどうなることやら……と思っていると。
「八幡」
聞き慣れた、けれど少しばかり上ずった声が聞こえた。
振り返り、その姿を見付けると、
「……よう」
平静を装うのは、何とも大変だった。
留美の服装は、ふわふわのシフォンワンピースにショートジャケッ

トという、何ともお嬢様然とした格好だった。
留美の大人っぽさと品の良さがマッチして、信じられないくらいに似合っている。
ほけーっと見惚れていると、留美がとてとてと寄ってきて、俺の袖をちょんとつまんだ。
「……感想は」
「……え……」
「感想」
これ以上説明する気は無いらしい。
いつもの口調で言われても、上目遣いで見つめられては、ただただ頬が緩んでしまう。
留美の頭をくしゃりと撫でる。
「……可愛いっての。似合いすぎ」
「……ばか」
留美が俺の手に自分の手を重ねて、ふわりと微笑む。
通りがかった人の何人かが「がはぁっ！」と言って倒れたのは、もしかしたら俺が不慮の事故（エンカウンター）のスキルを身に付けたからかもしれない。
いつの間に目覚めたんだ、俺は……。
材木座病（中二病）が発症したところで。
「それで、どこに連れてってくれるの」
明らかに機嫌の良い顔で目を細め、留美が尋ねてきた。何この子可愛い……。
「ああ。それなんだけどな……ここなんだけど」
言って、スマホの画面を見せる。
「……結構遠い」
「そうだな」
俺が指定したのは、人が多いであろう都市圏を避けた、とあるカフェだった。
「ゴールデンウィークだと、どこもすげぇ混むからな。あちこち調べたけど、メジャーな娯楽どころはみんな止めといた方が良いと思っ

た」
　それで、と言葉を繋ぐ。
「カフェでのんびりするのも良いかなって思ったんだわ。それで、どうせカフェでくつろぐなら、店だけでなくてその周りも静かな場所に行ってみるかなって思って。移動で混むのは途中までだし、カフェまでの道程でも留美と色々話せるかなって考えたんだが……」
　実際、いくらカフェの雰囲気が良くても、店を一歩出れば車ががんがん通っている場所というのは、どうしても店から出てすぐに現実に引き戻される感じがしてしまう。
　そういったことも含めて考えて、色々調べて、俺なりに出した結論だった。
　留美は俺の言葉を一通り聞いて、目を丸くしている。
　そして、穏やかに目を細めた。
　小さな花が咲いたような可憐な笑みに、鼓動がとくんと高鳴る。
「……八幡。ありがとう」
「……っ」
「嬉しい。行こう」
「……そうか」
　ああ、本当だ。
　小町の言う通りだった。
　散々調べて悩みはしたが、決して点数の高い結論とは言えないなと思って、かなり悩んでいたけれど。
　留美が浮かべる何の屈託も無い笑みが、俺の小さな悩みを柔らかく包み込んでくれた。
「……よし。じゃあ、行くか」
「うん」
　駅に向かおうとすると、留美がすっと手を差し出す。
　……まあ、ね。はぐれたら困るし、うん。
　気恥ずかしさから、顔は前を向いたまま、留美と手を重ねる。
　すると、留美はすかさず指を絡めてきた。
　……ううん、最初から飛ばしてくるなぁ……。

二人でぽてぽて歩くと、駅の喧騒もまるで気にならない。
今日という一日は、中々長くなるような。
そんな予感がした。

続く。

（１０）

留美と手を繋いで（あくまではぐれないように）、駅の改札前まで来た。

足を止めて、留美をちらりと見やる。

「チャージするか。……あ、留美。お前の分も、ほれ」

手を差し出して、出来るだけさりげなくちょいちょいと促すと、留美がバッグの中に手を入れて、何かメモ書きのようなものを取り出した。

「これ、お母さんから」

「？　これは何だ……？」

手渡されたのは、四つ折りにされた紙だった。

「八幡がこういうことして来た時に渡してねって。私も中身は見てない」

「人聞きが悪すぎるだろ……」

今、通りがかった人が何人かちらちらとこっちを訝し気な目で見たぞ、おい。

一体何が書かれているのかと首を傾げながら、紙を開く。

かさかさと音を立てて開くと、そこには達筆な文字が書かれていた。

『八幡くんへ。今日のデートですが、留美にいくらか渡しておきます。何から何まで負担するのは大変だと思うので、八幡くんは要所要所で出してあげて留美のポイントを上げてください。と言っても、もはや上げる必要はないみたいだけど……。留美にも同様のことは伝えていますが、この手紙は見せないでくださいね。あの子、照れちゃうみたいだから。それでは、うちの娘を大事にしてください』

「……」

うわぁ……。

何これ、死ぬほど恥ずかしいんだけど。

何も言わずにそっと鞄にしまうと、留美がくりんと首を傾げた。

「何が書いてあったの？」

「ああ、まあ何てことない。留美には見せないようにって書かれてた」
「そ。何で顔が赤いの？」
「気にすんな。……まずはチャージするぞ」
「？　うん」
切符売り場に歩みを進めると、留美がするりと手を握ってくる。
目が合うと、目を細めて楽しそうに微笑む。自然に湧き出たのであろうその笑顔に、胸がとくんと高鳴る。
……外堀と本丸が同時攻撃を受けている……。

×　×　×

「うわぁ……」
留美の辟易とした声が聞こえる。
連休初日の朝。
ゴールデンウィークなんていう大層な名前のついた大型連休でも、その過ごし方は人によって様々なようで。
果敢に出勤しようとしているスーツ姿の人もいれば、いかにも今から遊びに行くぞという体の家族連れや男女入り乱れた若者のグループもいて、通常の休みとは明らかに空気感が違う。
留美は人の波に次ぐ波、大波小波を見つめて打ちひしがれたような顔をしている。ま、まずい、入りから最悪の印象を抱かせてしまった。
――と。
「留美、あぶねぇぞ」
「え……きゃ……っ」
後ろから体格の良い人が歩いてきたので、留美の肩を抱き寄せて避ける。
可愛らしい声を上げて俺の腕の中にすっぽりと収まった留美が、驚きで目を見開いている。
「わりぃ。ぶつかりそうだったんでな」
「う、ううん。……あり、がとう……」
「お、おう……」
「……」
「……」

しばし、無言。
ざわざわとした構内の中にいながら、目の前にいる留美の微かな吐息が何よりもはっきりと聞き取れる。
……人混み、悪くないかもね、うん！
留美の頭をぽんぽんと撫でて、声が裏返らないように意識しながら話しかける。
「と、取り敢えず行くか。な？」
「……ん」
俺の言葉に、留美は顔を上げて嬉しそうに微笑む。
なんか頭がくらくらするな、何でだろう。
抱き寄せた肩の感触を惜しみつつ、再び手を繋ぐ。
留美が何も言わずに指を絡めてきたダメージは、中々甚大だった。
×　×　×
「……え……っ」
辟易も疑問も通り越して、絶望じみた声が隣から聞こえる。
俺たちの目に飛び込んできたのは。
ホームに並ぶ、
人。
人。
人。
そしてホームに入ってきた、ちょうど俺たちが乗らんとしている電車の中にすし詰めになっている、
人。
入。
人。
動揺して似た漢字が混ざった。
「八幡……」
留美が、心の底から「え、これに乗るの？」という目をしてくる。
ちょっと泣きそうだな。何かぞくぞくして何でもないです。
頭をくしゃりと撫でて、留美を見つめる。
「心配すんな。守るから」

「……うん」
俺の言葉に、留美が頷く。
並んでいた人たちが二股に割れ、電車の中から鉄砲水のように人が流れ出てくる。
留美が既に泣きそうな顔をしているので、この時点で既に何度も頭を撫でているというシュールな状況だ。
出てくる人波が途絶えると、将棋倒しになりそうな勢いで人が吸い込まれていく。
多分、車両の真ん中に居ては留美をかばいきれない。
そう思い、留美の肩を抱いて、留美を壁際に誘導する。
留美の背中が壁についたところで、俺は留美を庇うように壁に手を付ける。
人口密度が増してぎゅうぎゅうと背中が締め付けられるが、留美が圧迫感を感じないように、背中と腕に力を込めて何とか体勢を保つ。
「八幡……ありがと」
「おう」
胸元から留美の声がする。
視線を下ろすと、目の前に端正な顔立ちが近付いていて、圧迫感とはまた違う意味で心臓が高鳴る。
しかしこの状態、降りる時まで腕が持つだろうか。記憶が正しければ、こういう時は結構ずっと混んでるよな……と途方に暮れていると。
「八幡……これって、壁ドンってやつ？」
「え」
予想もしない言葉が、俺の顎を小突いた。
見ると、俺は腕立て伏せを壁でしているかのような体勢になっていて、ちょうど留美の顔のすぐ横に手を付いている。
あ、うん。
これ、壁ドンですね、はい。
「……不可抗力だ」
「……わざとでも良いんだけど」

「え」
「……」
顔を伏せて、俺の胸元に顔をうずめた。おうおう、俺を殺す気ですかね。
電車がゆっくり動き出し、たたんたたんと車両が揺れる。それに合わせて人も揺れて、その度に留美に顔が近付いてしまい、艶やかな黒髪から香るふわりとした甘い匂いに頭がくらくらとしてしまう。
「八幡」
まあ、これなら何とか最後まで持つか……と思っていると。
「腕、疲れない？」
留美が気遣いの言葉を掛けてきてくれた。
「心配すんな。全く平気とは行かねえけど、これなら持つから」
「……こうしても、良いんだけど」
「え……っ!?」
危うく変な声を上げそうになった。
留美は俺の背中に腕を回し、きゅっと抱き付いてきた。
「……八幡も、こうしなよ」
「や、その……っ」
不意の密着に鼓動が跳ね上がり、留美に聞こえていやしないかと心配になる。
「良いから。腕、疲れるでしょ？　それにこれなら、私のこと守れるし」
「……っ」
確かに、硬い壁に背中を押し付けるよりは、抱きしめて腕をクッションにした方がよっぽど良いだろうけど。
それにしても、留美。
まさかここまでくるとは……と、驚いていると。
「……っ」
留美が小さく喉を鳴らすのが聞こえた。見ると、俯いている留美の顔は真っ赤になっている。
ああ、そうか。

留美、頑張ってんだな。
俺は何様だよとは思いつつ、壁に付いていた手を離す。
「あ……っ」
右手で留美の頭を、左手で留美の背中を守るように抱きしめると、留美が小さく声を上げた。
視線を下に向けると、無垢な瞳で俺をじっと見つめている。
「……その、まあ、なんだ。確かにこっちの方が疲れないな。留美も守れるし」
「……でしょ」
留美はどこか得意気に言って微笑むと、再び胸元に顔をうずめた。
視線を巡らせると、窓からは無機質なビル群が見える。
その手前、車両の中には色んな表情をした人、人、人。
俺の視界には色々なものが映っているけれど、この子には今、ビル群や人は全く見えていない。
少なくとも、今この瞬間は、視界には俺しか映っていない。
この気持ちが何なのか、まだ分からないまま。
電車は目的地の駅に向かい、ゆったりと進んでゆく。

続く。

（11）

留美を抱きしめたまま、電車は目的地に向かってたたんたたんとリズムよく揺れながら進み続ける。

「……」

留美は俺の胸元に顔をうずめてじっとしている。時折短い言葉を交わしたりはするけれど、それも二、三回の言葉の往復でゆるりと途切れる。会話の間隙を埋めるように車両音が聞こえてきて、それが意外と心地良い。

「……」

脈絡も無しにおでこをしゅるしゅるとこすりつけてきた。それが終わると背中がきゅっと抱きしめられる。

お返しに頭をくしくしと撫でてやると、留美が顔を上げてうっすらと目を細めた。そしてまた顔をうずめて、きゅっと抱き付いてくる。

うーん、何だかなー。

うん。

死ぬ。

乗り換えまではあと五駅程。長いんだか短いんだか分からない道程は、尚も続く。

× × ×

「おっ……とぉ」

電車が横に揺れて、腕の中の留美ごと横に身体がずれた。

すると、

「……あ……っ」

留美が少し吐息混じりの声を漏らして、どきりとする。何が起きたのかと思い下に目をやると、留美の頭を守っていた右手が電車の揺れでずれて、留美の耳を艶やかな髪の上から撫でる形になっていた。

「わ、わりぃ」

「……」

同じ体勢で固まったまま謝ると、留美が俺をじっと見つめてくる。俺の謝罪に対して否定も肯定もしない、それどころか何を思っている

のかまるで分からない曖昧模糊とした面持ち。表情をあまり大きく変えない子ではあるけど、最近それなりに感情が読めるようになってきたと思っていたので、見たことの無い新たな一面に緊張が過ぎる。

何となく。本当に、何となく――右手を添えたままの耳を、もう一度しゅるりと撫でる。

「ん……っ」

留美が俺を見上げたまま、目を閉じて口を引き結んだ。長い睫毛が儚げに揺れて、年齢からは考えられない程艶めいた吐息が漏れる。

「……っ」

こ、これは……。

だめだ。

本当に、だめだ。

「わりぃ」

手短に謝って、耳を撫でていた手を留美の頭に回す。さっきと同じ体勢になって、これで二人は元通り、めでたしめでたし……と思ったんだけれど。

「……八幡」

留美は俺を濡れた瞳で見つめると、自分の髪をふわりとかき上げた。甘い匂いで俺の鼻腔をくすぐると、小さく可愛らしい耳を露わにした。

「……へ……？」

留美の行動の理由が分からない。何で今ここにきて、俺に自分の耳が見えるようにしたんだ？　だってさっき俺が留美の耳を撫でちまって変な感……じ、に……。

「……っ」

留美の表情から、この子の望んでいることが分かった。分かってしまった。

……。

……。

……。

……。

……。

……いやいやいやいや、何考えてらっしゃるのん？　お兄さんびっくりだよ！　全くもうこの子はおませさんなんだか――

「八幡……」

「……っ」

変なテンションのモノローグが、俺を呼ぶ声一つにかき消された。

や、ほんとに、ええ？

なんで!?　どうして!?

留美は仄かに頬を朱に染めながら、顔を横に向けて耳を俺に向ける。流し目を送る様は妙に婀娜っぽくて、本当に年下なのかと疑ってしまう。

手に妙な力が入る。

留美はぴたりと動きを止めて、静かに息をしている。

駅の構内に居た時と同じように、周りのどんなに大きな音よりも、留美の微かな吐息がはっきりと聞き取れる。

「八幡……」

留美の声に、甘えているような成分が混じる。俺にしか聞こえないくらいの小さな声は、俺の身体中に隈なく染み渡って、指先まで甘美な痺れが走る。

ほんの数センチ横では、何食わぬ日常生活を送る人たちが沢山いるというのに。

俺と留美の間の、ほんの数十センチの空間だけが、まるで別世界のように思える。

俺に向けられた耳に触れるということ……きっとそれは、全く難しくない行為だ。ほんの少し手の位置をずらせば、簡単に出来る。

けれど、きっとそれを実行してしまったら、二人の関係に何か予期しない波が押し寄せてくる。それが二人にとって快い波だったら、恥ずかしくても受け入れよう。けれどもしも、どちらからが受け入れがたい変化をきたす波だったら、その時俺はどうすれば良いだろう。その時留美はどうすれば良いだろう。

「……八幡？」
迷い迷っていると、留美が顔をずいと近付けてきた。恐らく背伸びをしているのだろうその動きは、健気な心情が感じ取れて自然と頬が緩んでしまう。しかし留美が再び耳を俺に向けると、心臓がざわざわと波打って、どうしたら良いか分からなくなってしまう。
「留美……」
聞こえるかどうか分からない程の、震える声で留美を呼ぶ。消え入りそうだった声はどうやら届いたようで、留美は俺を潤んだ瞳で見つめてきた。
どうするのが、一番良いのだろう――
そう、思った時。
『間も無く～……』
駅員のアナウンスが車内に響き、電車がゆっくりと減速していく。降りる人が出入り口に近付こうとして、電車の密度が攪拌されていく。
「……そろそろ、降りる準備するか」
「……うん」
留美は名残惜しそうに眉根を寄せたが、すぐに頷いてくれた。髪を手で梳くと、外気に晒されていた小さな耳が、再び鴉の濡れ羽色をした髪に覆い隠される。残念だなと思った顔を見られていないか、少し心配になった。
電車が駅で止まる。
ドアが開くと、外へ流れ出る鉄砲水に、留美と手を繋ぎながら呑み込まれていった。
× × ×
「次の電車は？」
「五分後くらいに来るな」
「……ん」
駅に降り立った後、階段を登って、歩いて、別の階段を下った。今は別のホームで目的地へ向かう電車を待っている。
留美は俺と手を繋いだまま、俺をちらちらと見ては繋いでいない方

の手で髪をかき上げる。まさかの連続攻撃。実際俺が撫でたら色々まずいことになるだろ、分かってんのか。まずいことって何だろう自分でも分からない。
「八幡……」
「うぐ……」
俺の名前を呼んでるだけなのに。「……撫でてくれないの？」という感情がありありと伝わる。なんだよこの子表情豊か過ぎるでしょ。表情があまり大きく変わらないのに表情が豊かって器用すぎる……。誤魔化すように頭を撫でてやると、微かに眉根を寄せて上目遣いで俺を睨みつける。「そうじゃないでしょ、ばか」と言われてる気しかしない。
百面相を楽しむのも悪くないな――なんて思っていると、次の電車が来た。
電車の中にはそこまで人がおらず、ドアが開いてもさして人が降りてこない。乗り込むと、二人並んでは座れないくらいの空席がちらほら見受けられた。
空いた席の前まで来て、留美を促す。
「留美、座っとけよ」
「私はいい。八幡が座って」
案の定と言えば案の定な会話をしていると、留美が怪しい笑みを浮かべた。そこはかとなく邪悪な笑みだ。いやな予感しかしない。
「じゃあ、さっきみたいにして」
予感が1秒フラットで的中した。
「俺を殺す気か」
死因が羞恥心って哀しすぎるだろ。
俺のリアクションを見て楽しくなってきたのか、留美の声が少し大きくなる。
「どうして？　私を抱きしめるのがいやになったの？」
「それ絶対、言ってる留美自身が恥ずかしいだろ」
「……」
「図星じゃねぇか……」

「……だめ？」
「上目遣いはマジで反則だからな……」
留美がすげぇ楽しそうだ。楽しんでくれてるなら俺も嬉しいけど、心持ち声が大きくなったままなのは非常にまずい。
これ、下手したら周りの人に会話が聞こえるんじゃないか――と思った矢先。
「わぁ……」
と、何か妙にほわほわした声で感嘆している人がいた。
声の主を探すと、俺の真正面の席に座っている女の人が俺と留美をちらちらと見ていた。黒髪ストレートの、人の良さそうな美人さんだ。見た目は清楚で品の良い美人って感じなんだけど、その印象を大きな目が裏切っている。どこの古典部部長だってくらいに好奇心に溢れた目で俺と留美をちらちらと見ていて、雑誌で顔を隠してはちょこちょこ覗きこんでくる。そして「わぁ……年上彼氏だぁ……彼女は彼女ですごく綺麗なのに彼氏さんに対してはすごく良い笑顔を見せてるなにこの人たち素敵すぎる――！　きゃ――！」とかって小さい声で言ってる。なんだこの可愛い生き物。年上っぽいのに年上の感じがしない。取り敢えず女子大生のえる、略してＪＤＥと呼ぶことにする。……どこかで会ったことあるような……？
「八幡……」
ＪＤＥの強烈すぎる視線に留美も気付いたようで、あからさまに怪訝な顔をしている。さっきまでの楽しそうな顔がどこへやらだ。ＪＤＥは留美の表情に気付くと、話しかけるのは遠慮しようと思ったのか、ジェスチャーで手を顔の前に出して「ごめん」のポーズを取り、両手の平を上にして俺と留美に交互に突き出して満面の笑みを浮かべて「どうぞどうぞ！　後はお若い二人にお任せして！　ね！」みたいなジェスチャーをしてくる。腹は立つけど言いたいことはすげぇ伝わる。ちなみに留美は目の温度が更に下がっている。ＪＤＥも留美の様子を見て顔面蒼白になっていく。これ、この人が謝ってもどうにもならんのではないだろうか。
どうしたものか――と思っていると。

「……うお……っとぉ」
「あ……っ」
電車ががたんと大きく揺れて留美がよろめいたので、転ばないように優しくしっかりと肩を抱きしめた。留美は俺にぴたりとくっついたままで、うっとりとした顔で俺を見る。
留美と俺の視線が交錯した、その瞬間。
「がふぁ……っ！」
『!?』
ＪＤＥが小さく呻いて、面白い感じで吐血した。隣の人もぎょっとしているけど、なんでだろう、吐血しているのにシリアスなムードが一切無い。あるのはギャグテイストだけだ。
心配する隣の席の人を手で制しながら、ハンカチで口元を拭うＪＤＥ。シュールすぎるだろこれ。
「げほっ、ごほごほっ……お二人さん」
『？』
「……ぐっ☆」
満面の笑みで親指を立てられた。何だこの人、絶対阿呆だけど絶対良い人だ。絶対阿呆だけど。
「……ばっかみたい」
留美が俺の肩口におでこを付けて、ぽしょりと呟く。悪態をついているようでいて、その表情はついさっきまでと比べて随分と柔らかい。ＪＤＥもそれを見て安心したのか、再び吐血していた。安心して吐血するって……その体質、マジでサスペンスすぎるだろ。多分留美の「ばっかみたい」の破壊力がえげつなかったんだろう。分かるよ、うん。俺も吐血しそうだもん。
謎の女子大生（らしき人）は結局そこから二駅程で電車を降りた。何かすごい楽しそうだったので僕は満足です。
空いた席に、二人並んで腰を下ろす。
「……ん……」
留美が目をこしこしとこすり、うとうとし始めた。頭を撫でて抱き寄せると、間もなくすぅすぅと穏やかな寝息が聞こえてきた。

電車旅の時間は、緩やかに流れていく。

続く。

（１２）

ここは、どこだろう。

景色は白んでいて、どこかの公園にいるらしいことは分かるが、具体的な場所は分からない。空気は生温かくて、どことなく良い匂いが漂っている。睡眠不足のはずなのに、不思議と身体は軽い。

『八幡』

鈴の鳴るような声が聞こえて、辺りをきょろきょろと見回す。最近すっかり聞き慣れた安心する声の主を探していると、今の今まで何も無かった空間にふっと現れた。

『どこに行ってたの？』

『わりぃ、ちょっと寄り道してた』

問い掛けに曖昧に答える。

普段クールな彼女からは考えもつかない程、可愛らしく甘えた声。大人びた言動や振る舞いからほど遠いそれは、彼女の年相応の面に思えた。

彼女が手を伸ばす。身長差は結構なものなので、少し屈んで俺も手を伸ばす。きゅっと抱きしめあうと、柔らかな香りが鼻腔から身体を満たしていく。生の実感が湧く。改めて周りを見ると、どことなく白んでいた景色が徐々に明瞭になっていき、場所も公園から徐々に他の場所に移り変わっていく。

「……幡」

『八幡』

彼女が、俺の耳元で囁く。少しばかり湿り気を帯びた声は、何を望んでいるのかすぐに分かってしまう程色っぽい。正面に向き直る。

「は……幡」

『八幡……』

とろんと目を細めて、彼女が唇を近付ける。俺はこの柔らかさを――

「八……ん」

……はて、知っていただろうか？　というかさっきから続いている

「これ」は何なのだろう。景色は固定されていたものから、徐々に流動的になっていく。その速度はどんどん上がっていき、今座っている場所の硬さや、何かがたたんたたんと心地良く鳴る音がはっきりしてくる。俺が抱き合っていたはずの彼女が、ゆっくりと薄らいで消えていった。

そして、

「八幡」

「……んぁ？」

目を覚ますと、目の前に留美の顔があった。

ぱちりと目が合う。

『……』

互いに、ぱっと顔を逸らした。この気持ちは何だろう、顔が超熱い。すごい熱いんだけど、この気持ちは何だろう!? 留美を見る。横顔しか見えないが、耳まで真っ赤になっている。

周りを見渡した。見紛うことなく電車、電車だ。そうだそうだ、俺は今日留美とお出かけしているんだった。うっかり寝てしまったらしい。

「わりぃ、寝てた」

謝って、留美の頭をくしゃりと撫でると、猫のように気持ち良さそうに目を細めた。

「ん、大丈夫。私が先に寝ちゃったんだし」

「あ、そう言えばそうだったな」

「私が起きたら八幡が私に体重を預けてたからびっくりした」

「待て、それは逆だろう」

もし本当だったら留美の身体に中々の圧力がかかってしまう。

俺のツッコミに、留美がくすりと笑う。

「それで、八幡を寝かせてあげておいたのは良いんだけど……どこで降りるか聞いてなかったなって。ある程度長い時間乗るってだけは聞いてたけど」

「ああ……そうだったな。わりぃ」
目をこしこしとこすり、すぐ前に発った駅の名を聞く。
「あと……四十分てとこか」
そんなに乗るの？　という顔をされるのかと思ったのだけど。
「そ。じゃあもっと寝かせておいてあげれば良かった」
「……」
何この子、素敵。
結婚してぇ。
や、そうじゃなくて。
「や、もう大丈夫だ。わりいな、旅路も醍醐味だってのに」
「いいの。八幡の寝顔、可愛かったし」
今度はいたずらっぽく笑うお姫様。うぅん、胸の奥がむずむずする……。
ふいと顔を逸らして、車両から見える景色に目を向ける。街が徐々に町に、そしてその中に田畑が混じるようになってきていた。
「俺だってお前の寝顔見たし、おあいこだろ」
「え……見たの？」
「そりゃそうだ。すげぇ可愛かったぞ」
「……変態」
「俺は顔を見ただけだ……」
ゆるいやりとりに、自然と互いの頬が緩む。周りを見ると、俺たちの他には乗客は一組しかいなかった。車両にも依るのだろうけれど、それにしても穏やかな空間だ。
「静か……」
「ああ、お出かけってよりかは旅行って感じだな。それもお泊まり付きの……あ」
「え……」
両者、沈黙。
やってもうた。
「……今のは、なしで」
「……別に、良いんだけど」

「おませさんめ。お泊まりの意味は分かってんのか」
からかう調子で言うと、留美は顔を真っ赤にしてきっと睨み付けてきた。
「……八幡のばか、変態」
頬をぷっくり膨らませているその仕草が、たまらなく可愛らしくて。
「わりぃ。まあ、その内な」
頭をぽんと撫でる。
……あれ、俺今何て言った？
見ると、留美が俺の手に自分の手を重ねて、ほけっとした目で俺を見ている。
「……その内、良いの？」
「え、や、それは、その」
「……今は高校生と中学生だから、来年か再来年かな」
留美が目を細め、蠱惑的に笑う。
口が滑ったら。
お泊まり旅行@未来が決定してしまった。
「場所決めといてね。それとも……今から相談する？」
「うぐぉぉぉ……」
留美の追撃が止まない。
何これ、死ぬ程恥ずかしいんですけど……と思ったら、電車が次の駅に着いた。留美が手を離したので、俺も留美の頭を撫でるのを止める。ぷしゅーと音を立ててドアが開くと、俺たちの他に唯一いた乗客が降りて行く。仲睦まじそうな、昔から知り合っていたように見えるカップル。あの人たちに、俺たちはどんな風に見えていたんだろう。
ドアが閉まり、電車がゆっくりと走り出す。
「八幡……」
留美が、俺の手をきゅっと握った。
× × ×
「八幡、あそこ」
「え？」

留美が指差したのは、俺たちが座るシートからほんの数メートルの所にあるボックス席だった。普段は家族や人数多めのグループが乗り、知らない乗客と相乗りで斜向かいに座ろうものなら、抜群の気まずさと膝がぶつかる不快感が伴う、ボックス席。
「あそこ、座りたい」
「そうか、じゃ、行くか」
揃って席を立つ。十歩歩くかどうかという距離なのに、留美はしっかりと手を繋いだままだ。もうすっかり慣れてしまったので、特にツッコむこともなくボックス席へ。
「さ、座るか」
「うん」
「手、離さないのか？」
留美は手を繋いだままなので、このままでは座れない。お互い手をぴーんと伸ばし合う実にシュールな図になってしまう。アーチ的なね。
俺の質問に、留美がくりんと首を傾げる。
「なんで？」
なんで、ときたか。
「や、何でって。向かいに座ったら繋げないだろ？」
「向かいに座らない。隣に座るから」
さも当然であるかのように言ってきた。
「……さいですか」
頭をがしがしと掻いて、留美を二人分のシートの窓側に招く。二人で腰を下ろすと、留美がにこやかに微笑んだ。
「なんか、こっちの方が落ち着く」
「ああ……確かに」
普通の座席ももちろんきちんとしてはいるのだけど。ボックス席は、背もたれがあるから安心感が違う。まだまだ成長期である留美の小さな体躯からすれば、この背もたれがもたらす安心感は尚更大きいだろう。
そんなことを考えていると、留美が俺に肩を寄せて、体重を預けて

きた。
「……八幡」
「な、なんだ？　どうした？」
急に、まるで二人きりの密室にいるかのような声音になる留美に、どきりと心臓が高鳴る。
なんでこんな……と思って辺りを見渡して、ハッとする。
俺たちの他に誰もいない車両。
安心感、つまりは心地良い閉塞感をもたらすボックス席。
「……」
マジか。
もう、あのくだりは終わりだと思ってたのに。
留美が、艶やかな髪をかき上げて、小さく可愛らしい耳を見せる。
送ってくる流し目は婀娜っぽく、心臓が鷲掴みにされた。
まだこの電車には三十分以上居座る予定だ。しかも、進めば進む程車内が空いて来るような路線で、誰かが俺たちの視界に入る場所に座る確率はそう高くない。
「八幡……」
留美の声が、視界を妖しく歪める。今見える景色は、夢で見た景色よりもどこか幻想的で、蠱惑的だった。
続く。

（13）

電車のボックス席に、留美と並んで座る。

向かい合って座っても十分距離は近いというのに、留美は俺の隣に座った。

そして今、留美は髪をかき上げて、俺に自分の耳をさらけ出している。

……。

……や、何なんだよ、この状況？

「八幡……」

留美がぽそりと呟き、婀娜っぽい流し目を送る。いつもの大人びた態度とはまた違う、色香を纏った瞳に目を奪われる。

周りを見渡した。誰かが居るのを見逃していれば、それを口実にこの状況は回避出来る。

「……誰もいないって」

俺の心情を見透かしたのか、留美がくすりと笑って俺の手を握る。身体の末端に触れられただけなのに、まるで心臓を掴まれたような気分になる。

大人しく諦めて、前を向いたままゆっくり手を上げると、留美がぴくりと動いた。髪をかき上げたまま、俺と同様にじっと前を見ているようだが、さりげなくこちらをちらちらと窺っている。横を見やる視線が時折交錯する、奇妙な時間が流れた。

「んっ……」

留美の耳に手が触れると、小さな口から吐息が漏れた。本当に小さくて可愛らしい耳だ。留美の反応を見ると、人はこんなにも耳で反応するものなのかと思ってしまうが、自分で撫でても分からないから何とも言えない。それでも留美がこれだけの反応を示すというのは事実だ。

今は……自分の中の何かが決壊しないように、努力しよう。

しゅるしゅると留美の耳を撫で始めると、留美は手を下げて、膝の上に手を置いてきゅっと握り込んだ。

「んく……っ、んっ、んん……っ」
「……っ」
目をぎゅっと瞑って口を引き結ぶ姿が、あまりにも艶っぽくて。湿り気を帯びていく吐息が、ボックス席の狭い四方の空間を妖しく歪めていく。あくまで車両の中にいるはずなのに、まるで鍵を掛けた部屋にいるような感覚に見舞われた。
周りを一瞥する。車掌が来るとも限らないから、慎重にならなければならない。
留美の表情を見ると、俺の手が止まっているからか、微かに息を弾ませて俺をじっと見ている。続きをねだっているのが丸分かりだ。
ごくりと喉を鳴らして、留美のもう片方の耳にも手を伸ばす。
「あっ……」
自然と抱き寄せる形になると、留美は儚げに声を漏らして、抵抗することなく俺に寄り添った。両手でしゅるしゅると撫で始めると、留美が真正面を向いたまま弱々しく震える。
「あぁぁ……んふぅっ、あっ、あぁっ、んんん……っ」
とろとろに蕩けた瞳はまるで自制が利いていないようで、気付けば留美の手が俺の太ももに触れて、不安げに撫でさすっていた。その動きがまた官能的で、指の一本一本の動きを目で追ってしまう。留美を抱きしめたことにより甘い匂いが鼻腔を貫いて、益々陶然としていく。
「……びっくりして動くなよ。あぶねぇから」
「え……んはぁぁ……っ？」
しゅるり、と。
留美の両耳に人差し指を挿し込むと、留美が唇を戦慄かせた。
「んふぁぁぁ……な、に、これっ……音、音がぁ……っ」
「……音？　……ああ、そういうことか」
どうやら留美は、俺に指で耳の穴を塞がれたことにより、乾いた摩擦音がダイレクトに耳の奥に響いているようだ。触覚に加えて聴覚まで責められて、留美の目は焦点が定まらなくなってくる。視線こそ前に向けているものの、どこを見ているのか分からない。

しゅるり、しゅる、しゅるり。
ゆっくりと留美の耳の中を撫で擦り、耳たぶを指で挟み、反応を具に見つめる。
「んあぁぁ……んっく、んふぅあぁぁ……っ」
俺の太ももを掴む手に、徐々に力がこもっていく。
もっと、もっと、もっと……という、身体の奥底から湧き起こる情欲の炎を感じ取って、ふと冷静になった。
……これ以上は、やめておくか。
「……留美。この辺にしておくか」
指を離して自分の意思を告げると、留美はぼーっとした表情で俺を見つめる。いつもはきりりとした顔つきなのに、今は目尻が下がり、口も微かに開いている。普通の人であればだらしないの一言で片付けられるのに、顔立ちの整った留美の脱力した表情は、何でこうも扇情的に見えるのか。
「……やめ、るの……？」
「……っ、や、だって、それは流石に……っ」
劣情を煽る表情を浮かべたまま、留美がくりんと首を傾げる。俺の太ももをゆっくりと撫でさすっているのは、無意識か、それとも挑発しているのか。
留美がずいと顔を寄せる。甘い吐息が理性を掠め、巧みに揺らしてくる。
その時、
『間も無く～……』
車内にアナウンスが響いた。留美は俺が何も言わずとも手の動きを止め、身を隠す訳でも無いのに息を潜めた。
緩やかに電車が減速し、ぷしゅーという音が立つと共に一人乗り込んで来た。
「……人、入ってきたな」
独り言のような、留美に告げるような、そんな声音でぼそりと呟く。
乗り込んできた人は高校生くらい――俺と同じくらいだろうか――の女性で、どこに乗るかときょろきょろと視線を巡らせると、俺と

ぱちりと目が合った。するりと視線の交錯を解くと、俺と留美が座るボックス席と、電車の出入り口との間にある二人掛けのシートに腰を下ろす。動向を二人で見守っていると、その人はイヤホンを着けて俯き、ゆっくりと目を閉じた。
「……八幡」
「どうした」
二人の視線の先には、既に目を閉じてうとうとしている女性が居る。あまりじろじろ見てはならないとは思いつつも、留美の言葉がきっかけで思わず女性への視線を強めてしまう。
「あの人、寝ちゃったね」
留美の声音が、どこか柔らかい。
「……そうだな」
「イヤホン、着けたね」
留美が俺の手を握る。俺は視線を前方から動かせずにいる。
「……そう、だな」
「八幡……」
「……っ」
しな垂れかかるように、留美が俺に体重を預けてくる。俺の肩に留美の頭がこてんと当たると、微かな重みを感じた。
どうやら、人がいようがなんだろうが、逃げ場は無いらしい。
「……バレないように、そっとな」
「……うん」
短く言葉を交わして、留美の両耳に手を伸ばす。
「んはぁぁぁ……っ」
艶めいた吐息が漏れて、すぐ目の前にいる女性に視線を向ける。ボックス席の背もたれを挟んでいるとは言え、起きて少しばかり背筋を伸ばせば、俺たちが何をやっているかが丸見えになってしまう。奇妙な興奮が身体を包んだ。留美の身体が先程よりも密着しているから、余計にそう思うのかもしれない。
「あんまり、声出すなよ」
「んん……っ、うん、じゃあこうする」

「え……」
留美が片手を俺の太ももに添えたまま、もう片方の手で自分の口を塞ぎ、俺をじっと見つめた。
……この状態で、触るの？
無言で俺を見つめる留美と目を合わせて、恐る恐る再び指を這わせる。
「んんんん……っ」
留美のくぐもった声が耳朶を焼く。ぞくぞくとした感覚が足元から頭のてっぺんまで駆け抜け、下半身がざわつく。
これは、だめなんじゃないか……？
そう思っていると、また次の駅に着いた。しかし今度は誰も入ってこない。女性は寝たままだ。留美は尚も俺を見つめている。
留美の耳を嬲る俺の手が、いつの間にか震えている。それでも、止められない。もはや、止めさせてもらえないのか、止めたくないのか、分からなくなっていた。
「んふぅぅぅ……っ」
目を潤ませ、ふるふると震える留美を。
そこから三十分程、俺たちが電車から降りるまで、ひたすらに嬲り続けた。

× × ×

電車から降りると、すぐに歩き出すことはせずに、まずは駅のホームにあるベンチに二人並んで腰かけた。
「……大丈夫か？」
「……八幡の変態」
「否定は出来ねぇ……」
留美が頬を赤らめて俺を睨んでくる。全然怖くないし可愛いしでもう大変だ。
留美は熱でもあるかのように頭がふらふらと揺れている。もちろん、さっきまではこんな風には全くなっていなかった。
「八幡、あれ、今後も続けたいよね」
「え」

何その付加疑問文？
まさかの質問に面食らう。俺は恥ずかし過ぎて、この話題を口にすることは、少なくとも今日のところはもう無いなと思っていたんだけど。
「や、あれは流石に、ねえ？　恥ずかし過ぎるし」
「やりたくないの？」
「……」
俺の本能と倫理観が、ばっちばちのバトルを繰り広げている……。
「その、あれは本当に、な？　ましてや人目があるところでなんて……」
「人目が無ければいいの？」
「あ」
「……」
「……」
「……」
「……まあ」
「まあ？」
「前向きに……検討しとく」
「……なにその言い方」
留美が言葉とは裏腹に嬉しそうに笑い、すっくと立ち上がる。まだ座っている俺との目線があまり変わらなくて、改めて可愛らしいなと思った。
「うっし、じゃあそろそろ行くか」
「ん」
留美がひょいと手を出す。羞恥心から俺が視線をひゅんひゅん巡らせていると、留美の手が上下にぷいぷいと揺れた。早く繋げということらしい。手を握ると、留美がするりと指を絡めてくる。
「まずは駅を出るか」
「ん」
「それからなんだが――」
深く繋がった手と手に、心音がとくんと高鳴るのを感じる。

連休だと言うのに人があまり居ないホームが、程好い開放感をもたらしてくれる。
隣を見ると、留美がどこか楽し気に頬を緩ませていて。
幸せな気分で、ホームを歩き始めた。
二人のちょっとした旅は、まだまだこれからだ。

続く。

（１４）

留美と二人で駅の改札を抜ける。改札の先に立つと、四カ所以上のエスカレーターや階段が見えた。どれを上ってもさして変わらなそうなので、適当に奥の方の階段を選ぶ。

「わぁ……」

階段を上がって外に出ると、留美が強い日差しに目を細めながら、感嘆の声を小さく漏らした。そこには、適度な緑が広がる、東京などの都心部とはまた雰囲気の違う都会の景色が広がっていた。天気は非常に良くて、街路樹や近くの公園の緑は、これから夏に向かうという生気に満ち満ちている。移動した時間帯がたまたま人が少ないだけだったのか、外には休みでどこか浮かれた空気の人が沢山練り歩いている。それでいて歩道などのスペースは広いため、まるで混んでいる感じがしない。不思議な街だ。

「ここからバスに乗っていくんだけど……ああ、あそこがバスターミナルか」

交差点の向こう側に、円形のバスターミナルが見える。「1」「2」などの番号と、ここからではよく見えないがそれぞれの行き先と思われる文字が書かれている。横断歩道の前まで来て信号待ちをしていると、繋いだ手がくいくいと引かれた。

「バス、いっぱいある……どれに乗るの？」

留美がきょろきょろしながら尋ねてくる。若干不安が混じった声音に、苦笑しながら頭を撫でた。

「心配すんな。ルートは一通り調べてるし、時間に余裕は持たせてるから」

柔らかい声音を意識して答えると、留美の頬がほっと緩んだ。この子の安らいだ表情を見ると、身体の底からぽかぽかとした温かな感情が湧く。

「そっか……八幡、今日ってお昼はそのカフェで食べようとしてた？」

留美からの質問に、はてと首を傾げる。

「一応そのつもりだったけど……別に、昼は別の所で食べても良いぞ。

どこかで食べたいのか？」
聞くと、留美が小さくぷるぷると首を振った。
「ううん……その、お弁当、作ってきたから」
「なんだって」
驚いて、思わずサスペンス口調になってしまった。と、ここで信号が青になったので、二人でとっとことっとこ横断歩道を渡る。途中、上品な雰囲気を纏ったセレブな女性とすれ違った。近くに大きな国立大学があり、そこの研究員や職員が家族と住んだりするパターンも多いらしい。今の人もその類なのだろうか。
「……マジで？」
少しばかり時間差で聞き返す。人波を避けるようにして歩いたので、会話の流れが妙なずれを起こしてしまった。立ち止まって目当てのバス乗り場を探していると、留美は俺の問いにこくりと頷き、上目遣いで見つめてきた。
「だから、その、出来たら、どこかでお弁当を食べて、それからカフェに行きたいなって……だめ？」
ちょっとためて言われた。日射しの熱さとは別の熱が身体の内側に籠る。
「……何の問題も無いな」
頬をぽりぽりと掻きながら答えると、留美がくすりと笑った。
「素直に嬉しいって言えば良いのに」
「うるせ……」
向かい合わせになって頭をくしゃくしゃと撫でると、留美が気持ち良さそうに目を細めた。あんまり続けると俺も夢中になってしまいそうなので早めに離す。
「もっと撫でても良いのに」
「公衆の面前でそんなに長く撫でられるか……今のでもぎりぎりだぞ」
ぎりぎりセーフかもしれないし、ぎりぎりアウトかもしれない。
「誰も見てなかったら良いんだ」
「うぐ……」

ついさっきも同じようなくだりがあったな……と思いながら、留美から目を逸らす。「あ」逸らした矢先に目当てのバス乗り場を見付けた。
「俺も留美も初めて来たし、バスに乗って丁度良い場所があったら降りるか」
「うん、それで良い」
賛同を得られた所で、留美の手を引いて乗り場に向かうと、丁度バスがターミナル内に入ってきた所だった。
「うし、乗るか」
「うん」
思ったより行き当たりばったりな旅になりそうだが、それもまた楽しそうだ――と、普段に比べて数倍前向きになっている自分にむず痒さを覚えながら、二人でバスに乗り込んだ。

× × ×

「うぅ……」
「留美、大丈夫か、大丈夫じゃねぇよな……」
なんというか。
イエス、早速の計算外！
留美さん、バス酔いになりました。ものの１０分程で。
まあ、留美が酔うのも分かる。バス運転手がアレなのか、バス会社全体としてアレなのかは分からないが、とにかくバスががたがたと揺れる。路面の凹凸が大きい所はあるが、それにしてもバスの運転が荒いという状況に出くわしたことが無い身としては動揺が隠せない。
俺と留美は最後列に座った。窓際に座った留美が、初めこそ周りから見えないように俺と手を握っていたものの、その幸せな状態はアフリカかどこかのオフロードコースさながらの揺れによりあっという間に崩れてしまった。
まだしばらくの間乗っておいて、目的のカフェにある程度近い所でぶらつこうと思ったが……この状況ではしょうがない。
「留美、次の所で降りるぞ」
「うん……」

「……」
息がか細くなり、目を細めて俺に身体を預ける留美が妙に色っぽく見えて。それと、艶やかな黒髪が日の光を浴びて柔らかな香りを漂わせていて頭がくらくらする。うん、これは早くバスを降りた方が良い。電車でのくだりが相俟って、ちょっと今日は色々と怖い、色々と。
そこから数分で次のバス停に着いたので、留美の肩を抱きながら料金を払いに行く。周りの視線はこの際気にしていられなかった。降り際に運転手をちょっとだけ（ほんとにちょっとだけ）恨めし気に見て、何事も無かったかのようにバスが去るのを見届ける。他にも結構な人が乗ってたけど、皆平気なのか……？　慣れって怖いなぁ。
「留美……歩けるか？」
「うん、降りたら結構楽になった……ありがとう」
幸い、降りた場所は街路樹というか林に囲まれた場所で日陰になっていて、心地良い風が吹いている。大学が出来るのに伴って大学の敷地や住宅地用に一気に開拓したと言う話を読んではいたが、周りを見渡して納得した。
少しばかり歩くと、人が居ない上に日陰にベンチがある公園があった。正に今の二人にとってベストプレイスと呼べる場所だ。
ベンチに腰を下ろして、留美の様子を見る。バスに乗っている時よりは確かに大丈夫そうだが、それでもまだまだ弱っている。
「留美、何か飲むか」
「ん……ありがと」
留美が弱々しく目を細める。さて何か飲み物を……と思ったら、俺が半分程飲んだアフタヌーン的な紅茶が一本しかない。留美のバッグの中は見ない方が良いだろう。あれ、これどうしたもんでっしゃろ……。
「……」
や、俺くらいの年になってこんなことを気にすることもあるまいとは思うんだけど、出来れば自販機なりコンビニなりで新しいのを買いたい。しかし自販機もコンビニも、見た限り数十メートル以上離れた場所にしかない。留美が弱っている状態でほったらかしには出来な

い。
迷った末にキャップを開け、留美に差し出す。
「ほら、飲んでくれ」
「ん……」
留美が俺に顔を向ける。うん、ぷるぷるの唇だ。すげえ柔らかそう。や、そうじゃなくて。
「え、あの、留美？」
留美が手をぴくりとも動かさないことに疑問を覚えて呼び掛けるが、
「ん……」
留美はほけっとした顔で目を細めたまま、微動だにしない。思っていたより弱っているらしい。
留美の視線がペットボトルを捉え、ゆらりと動いて次に俺を捉える。ここで、留美が何を望んでいることに気付いた。気が付いてしまった。
……え、そう言う流れ？　ほんとに？
動揺を隠せぬままに、留美の顔を見つめる。留美は本当に余裕が無いのか、いたずら心でやっているのか、虚ろな表情からは判別出来ない。
ええい、ままよ。
……誰も通りかかりませんように……。
「じゃあ、飲ますからな……？」
恐る恐る聞くと、留美が頷いたかどうか判断しづらい程度に首を動かす。う、うおお、なんか色々と大丈夫か今の状況……!?
留美の背中に右腕を回し、回した手で留美の顎をくいと上げる。そして半開きになった留美の口に蓋を開けたペットボトルを近付ける。
「……んむっ」
留美がペットボトルの飲み口の縁を上下の唇で挟み込んだ。……うん、そうだね、これは子犬にミルクをやってるようなものだと思えば……いやいやいやいや無理だろこの考え方。傍から見た図なんて怖すぎて想像したくもない。

勇気を出して、慎重にゆっくりペットボトルを傾ける。茶色の液体がゆっくりと留美の口に向かって流れていく。
「んっく、んっ、んっく……」
留美が小さく喉を鳴らす度に、細い喉が艶っぽく動く。ぼうっと目を細めた留美の表情がやけに色っぽくて目を逸らしそうになるが、零れると悪いのでそれも出来ない。おっかなびっくり傾けているので液体の流れが断続的になりつつも、何とか飲ませることが出来た。
「んっく、んっく……んんっ？」
「あ」
安心して油断してしまったのか、少し多めに流し込んでしまった。留美の小さな唇から液体が零れ、顎を押さえていた俺の右手に伝う。留美の下唇のすぐ下に置いていた人差し指に沿って、液体がつつっと広がった。
「わりぃ、今拭いて……」
「……んむっ」
「っ!?」
目の前の光景を疑った。
留美は、顔の向きを僅かに下向きにして、紅茶が滴った俺の人差し指をぱくりと咥え込んだ。そしてそのまま、口の中で猫さながらに指を舐め始める。
「んむっ……ちゅっ、ぴちゃっ、ちゅっ……」
「（待て待て待て待てマジでちょっと待て待て待て待て……っ！）」
尋常でない程慌てるが、大声を出す訳にもいかず。押し殺した声で、必死で留美を止める。しかし頭を押さえた所で意味は無く、未だにぼうっとした留美を無理やり引き離すのも気が引けて実行出来ない。
留美は俺を挑発する時のように見つめてくる訳ではないが、弱りながら一心不乱に指を舐める光景は、あまりにも扇情的で。
目を逸らして周りを窺い、それでも時折留美の姿態を吸い寄せられるように見入るというのを繰り返す事、数分。

「……ぷはっ」
留美が唇を離したことで、思いの外長かった天国兼地獄の時間が終わった。心の底から深い息を吐くと、留美が俺の胸元に顔をうずめてきた。
「ん……っ」
まるで遊び疲れた猫のように、自由気ままに甘えてくる。
「……ったく、何なんだよ……」
呆れながらも、自分の声に愛情が満ちていることに気付いて、片眉を上げて笑みを浮かべてしまう。
やがて留美の口から小さな寝息が聞こえてきたので、そこからしばらくは俺もゆったりくつろぐことにした。

× × ×

三十分程経っただろうか、留美が目を覚ました。俺と目が合うと、明らかに動揺し始めた。
「……は、八幡……」
「おう、もう大丈夫か」
「う、うん、ありがとう。あと、その、えっと……」
留美が何やら顔を真っ赤にしている。何を言い出すのか分かっているから俺も既に顔が熱い。
「さ、さっきは、その、えっと……」
「……まあ、気にすんな。酔ってたんだからしゃあねえよ」
「勝手にお酒飲んだみたいな扱いしないで……」
「酔ってるって意味では同じだったろ」
「その……ごめん」
「や、まあ、うん、大丈夫だから、な？　だからこの話はあんまり……」
「……いやだった？」
「……それは、反則だっつうのに……」
俺の胸に顔をうずめたまま、潤んだ瞳で見上げてくる。これで拒絶の意を示す輩が居たら軽蔑を通り越してもはや拍手を送りたい。
「……別に、いやではなかったぞ」
「……良かった」

「心臓には悪かったけどな」
「……ごめん」
「や、別に悪い意味ではないんだぞ？　な？　どきどきしただけっていうか」
「……良かった」
「や、だから……」
フォローしてるのか何をしてるのかもよく分からぬまま。
本来ぶり返すべきでない、死ぬ程恥ずかしいイベントを、二人で心行くまで（力尽きるまで）反芻した。
……人差し指をじっと見つめてさっきの感触を思い出すと、ちょっと本気でまずいことになる。
……はい、深呼吸深呼吸。
むせた。

続く。

（１５）

バス酔いした留美から思わぬ不意打ちをくらった。自らの行い（こういうと悪いことをしたように聞こえるが実際は、まあ、うん、ね！）を全力で恥ずかしがった留美がようやく立ち直り、持って来たバッグをごそごそとし始めた。どことなく上品な、それでいて年相応な可愛らしいバッグだ。

中からは二つの弁当箱が出てきた。大きいものの上に小さいものが乗っている。どちらが誰の為のものかは一目瞭然だった。

「……何か、もう美味そうだわ」

開ける前に思わず呟くと、留美は「まだ早いって」と呆れ気味に笑った。見ていないのに感じた予感に我ながら呆れる。まずは大きい方の弁当箱の包みを解く。新緑を思わせる爽やかな色の箱だ。

蓋を開けると、出てきたのは海苔巻きおにぎりに唐揚げ、ウインナー、春巻き、ポテト、レタスやトマトのサラダなどなど。ＴＨＥ・男の子向けという感じだ。

「……すげぇな」

すごく美味しそうなんだけども、ぎっしりと密度高く詰め込まれたメニューにたじろいだ。俺のリアクションを見て、留美が少し慌てる。

「……もしかして、多かった？」

不安が滲む表情を和らげようと、頭をぽんぽんと撫でてぎこちないながらも微笑みかける。

「や、まあびっくしたけどな。すげぇ美味そうだし何の問題も無く全部食べられるぞ。むしろ食べたい」

俺の言葉に、留美の表情がほわっと綻ぶ。どうも俺は留美の表情の変化に弱いらしい。

「良かった……昨日お母さんに手伝ってもらいながら作ってもらったんだけど」

「おお、そうなのか」

「……お母さんには作り方を教わっただけで、ほとんど私が作ったか

ら」
拗ねたような誇らしげなような、複雑な表情を浮かべる。まだ何にも言っていないのに……と思ってふっと笑うと、頬をつねられた。しかも両頬。
むにー。
「らんれら（なんでだ）」
「別に……なんとなく」
ほっぺ、解放。
いかん、ほっぺが緩む。
頬って言うよりもほっぺと言う方が何か和むと気付いた。いいね、ほっぺ。語感が可愛すぎる。
留美の頬はほんのり赤くなっていたが、両手でぺちぺちと叩いて弁当を眺め出した。ちらちらとこちらを見る仕草に、予感を通り越した確信が湧く。やがて箸を持つと、ウインナーを取って俺の口元に差し出した。
「八幡。はい、あーん」
「うぐ……」
確信、的中。
どことなくいたずらっぽい笑みを浮かべた留美が、俺のことをじっと見つめている。
「……あーん」
逃げる術は無いと思い、すぐに観念した。程好く焼けたウインナーの肉汁が口の中に広がる。まだ昼にしては少し早い時間帯だけど、長旅である程度お腹が空いていたからちょうど良い。
「……美味い」
「……ん、そ。はい、あーん」
「うぐぉ……」
留美の目がさっきよりも細められている。俺への攻めが楽しくなってやがるな……。しかも何だか艶っぽい笑みになってるから、これじゃ口の中に入ったものの味なんて分からな唐揚げおいしい！
「……旨い」

いかん、ウインナーからの唐揚げで口が、身体が、完全にがっつり食うモードに入ってしまっている。留美は澄んだ瞳で俺を見つめて、弁当箱をじっと見つめる。迷い箸をしちゃわない辺り八幡的にポイント高いです、はい。
「……次は、はい」
差し出されたのは春巻き。しかも俺の顔をじっと見つめながら、さりげなくおにぎりを俺の手に乗せている。オーソドックスな海苔巻きおにぎりで中には何が入っているか分からないわくわく感があるし、春巻きと一緒に口の中でご飯を楽しむことも出来る。何だこれ、おい、至福かよ。
はむっ。
春巻きの表面のぱりぱり感を堪能して、中の豚挽き肉やたけのこ、人参やしいたけの食感と味を楽しむ。そしてそのまま海苔巻きおにぎりを口にする。シンプルに塩で味付けをしているようだ。ご飯を包んでしっとりとした海苔を口の中で気持ち良く咀嚼する。俺から留美にリクエストして、今度は唐揚げを食べながらおにぎりをもぐもぐ。口内で幸せな化学反応が起きる。
「……八幡、何か楽しそう」
留美の言葉にハッとする。留美は俺の表情の変化をずっと見つめていたようで、俺と目が合うとふっと頬を緩めた。
「……ああ、や、すまん。腹が減ってる上に弁当が美味いから、ついテンションが上がっちまった。正確に言えば食べ始めてからもっと食べたくなったわ」
俺の言葉に、留美が目をぱちくりとさせる。俺の感想に驚いた様子の留美が可愛くてしょうがなく、小さな頭をぽんぽんと撫でる。
「ありがとな」
テンションが変に上がっているせいか、思わずおでこをこつんと当ててお礼の言葉を言ってしまった。
「……あ」
気付いた時には、もう、後の祭り。
「……っ」

留美の顔が、一瞬で茹で上がる。今の状態でおでこをくっつけていたら、絶対熱があると思っただろうというくらいにおでこが熱い。
留美がぱっと顔を離した。口元がもにゅもにゅと動いてる。目線が泳がないのが精一杯という感じだ。
「……あー、その、なんだ、すまふっ」
両頬をつねられたａｇａｉｎ。全然痛くないけども。留美さん、俯いてらっしゃる。
「ふぁー、その、ふまん（あー、その、すまん）」
改めて謝る。ふぁーって何だよゴルフかよ。
「……別に、謝らなくていいけど」
留美は顔を上げたものの、そっぽを向いてしまった。顔は依然として真っ赤で、何故か手の動きが止まらない。
左右にむにー。
互い違いで上下にびよーん。
こねくり回してむにむにむに。
むにむにむに。
「……」
留美がちらりとこちらを見る。流し目を送ったまま、再びほっぺをむにむに。ううむ、弄ばれてるなぁ、俺。全然いやじゃないと思っちゃってるんだけど大丈夫かな俺。
「……柔らかい」
留美が顔もこちらに向けて、不思議そうな目で見てくる。瞳が純真過ぎて、「るみ、はちまん好きー！」とか言いそうだ。あれ、なんで心で思っただけなのにつねる力が強くなったんでしょうか。おかしいな。
「……ひはいんらが（痛いんだが）」
呟くと、ようやくほっぺが解放された。ほっぺ解放って語感良いな。超どうでもいい。
留美が次は何を仕掛けてくるのかとわくわく間違えたどきどき間違えたはらはらしていると、箸を持ってポテトを俺の口元に差し出した。

「あーん」
「……マジか」
まさかの続行だった。
「大丈夫、後は私も自分で食べるから。八幡、一人で食べられる？」
「俺は一般的な高校生だ……」
本当に一般的だっけかな俺、と思いつつポテトを口に入れると、宣言通り留美は自分で食べ始めた。一目で女の子用と分かるちんまりとした弁当箱に入っているおにぎりは、俺が食べているものより一回りも二回りも小さい。はくっ、と小さな口でかじりつく留美は、何だかリスなどの小動物のように見える。
俺も自分でおにぎりを掴み食べる。さっきまでのどきどき感が無いと食べ物のおいしさがより純粋に伝わる気がしたが、同時に少し寂しくもあった。隣を見やると、留美が足をぷらぷらさせながらおにぎりを両手で持ってはくはくと食べている。頭をぽんぽんとして、留美が振り向いた所でぷらぷらさせている足をちょいちょいと指差す。留美は素直に足の動きを止めてぴったりと閉じると、代わりなのかなんなのか、右手でおにぎりを持って食べながら、左手で俺の太ももをぺちぺちし始めた。これもお行儀が悪いだろうと思ったんだが、足のぷらぷら以上にやたらめったら可愛らしいもんで止めるに止められない。
俺はおにぎりをもぐもぐと食べ。
留美はおにぎりをはくはくと食べる。
馴染んだ土地から離れた場所で、一緒に居ると心安らぐ女の子と食べるご飯は、本当に美味しかった。
続く。

（16）

「ごちそう様でした」
「お粗末さまでした」
留美との昼食を終えて、ふぅ、とひと息つく。中々のボリュームだったので、食べ終えた満足感はかなりのものだった。美味かったし。美味かったし。大事なことだから二回言ってみた。
膝に手を置いて、ゆるりと立ち上がる。留美は俺の様子を見て、はてと首を傾げた。
「土下座するの？」
「なんでその発想に至ったの？」
膝の上で手を重ねて、背筋をぴしっと伸ばした上で首を傾げていらっしゃる。可愛いんだけど言ってることがえげつない。
頭をがしがしと掻いて、ちらりと遠くを見やる。歩いてすぐのコンビニを見たことに、留美はすぐに気付いたようだった。
「飲み物でも買おうと思ってな。待っててくれ」
「ん、私も行く」
「……そうか」
俺の返事を聞く前に立ち上がっていたので、良いから待ってろとも言えなかった。手早く弁当箱をバッグに入れて、俺の袖をちょこんと摘まむ。動作が滑らかすぎて反応が遅れた。
頬をぽりぽりと掻いて、辺りを見回す。
木々が沢山生えた空間は、都会と田舎がごちゃまぜになったような、境界線のような不思議な雰囲気を醸し出している。時間が昼時だからか、差し込む日射しもより暖かくなって、公園全体がぽかぽかしているような気がする。
「……んん？」
どうやら、ここにあるのは自然の暖かさだけじゃなかった。
何やら、生温い視線を感じる。
留美も気付いたようで、二人で顔を見合わせて、公園のすぐ横の歩道を行く人を眺める。二人の女子大生らしき人たち――俺の一つ二

つ上くらいの人だろうか――が、俺たちをちらちら見ながら歩いている。
耳を澄ますと、会話が聞こえてきた。
『あの子たち、仲良いよね……兄妹かな？』
『兄妹にしては何かこう……男女の関係っぽくない？』
『えー！　どうしてそう思うの？』
『だって兄妹にしては……ねえ。男の子が女の子を見る目が、優しいけどちょっとだけ獣っぽくなる時があるし、女の子は女の子で澄まし顔をしながらたまに【抱きしめてくれないかなぁ】って目をして男の子を見てるよ。男の子は気付いてないみたいだけど』
『わー、それは時間の問題だねぇ……年の差カップルだね』
『素敵だね。女の子は大人っぽいし、男の子はひねくれてそうだけど女の子を温かく見守る感じがするし。あ、でもアレなことをする時は男の子はすごそうだね』
『えー！　アレってなになに!?』
『えー？　そんなの決まってるじゃん。もちろん――』
耳を澄ますのを止めた。大丈夫、八幡は鳥のさえずりを聞いてるだけ。
……ていうかなに、その観察力……。
留美の方を見ることが出来ないまま、何とか言葉を紡ぐ。
「……あー、留美。その、ちょっと離れてた方がああいう風に言われなくて済むんじゃないかってうおお!?」
留美は俺から離れるどころか、腕を絡めてばっちり恋人繋ぎをしていた。
「え、あの、留美さん？」
「……これで、良い」
俯いていて、今どんな心境なのか分からない。左腕に留美がくっついているので、右手で留美の顔を上げようとしたのだけど。
「……留美」
「あ……っ」
何でか分からないけれど。

俺は、留美の顎に手を添えて、くいと上げていた。
や、これ、完全にアレじゃん。
口でするアレじゃん。
八幡、大混乱。
留美は耳まで真っ赤になっていて、俺が見つめるととろんと目を細めた。不意に留美の中に感じる女の面に、心臓がどくんと跳ねる。
あれ、これ本当にどうしよう――と思っていると。
「八幡って……その、すごいの？」
「え」
「だから、その、あの人たちが話してたこと」
「留美。耳を澄ますのをやめるんだ」
「でも……」
留美が潤んだ目を逸らして、女子大生二人に目をやる。俺も釣られて見ると、会話の続きが聞こえてきた。
『……で、彼氏の方が身体がずっとおっきぃから、彼氏が上になった時は彼女の全身を包み込むようにして抱きしめる訳。そうすると包容力にも繋がるし、激しくする時は全く逃げられないっていう意識を植え付けることが出来るから、彼女がＭだったら相当楽しいと思うよ』
『わー、わー、すごいね、その洞察力。彼女はＭなのかな……ってなんか二人が進展してるぅ!?』
『あー……あれはもう、本当に時間の問題だね』
いつの間にか、呼び方が「男の子」「女の子」から「彼氏」「彼女」になってた。
「なあ、留美……」
「か、彼氏、彼……じょ……」
うん。
耳から湯気が噴き出すのではってくらいに混乱していらっしゃる。
「よし」
「か、彼、し、彼……じょ……っ？」
留美を抱きしめると、腕の中で上ずった声が聞こえた。強張っていた身体から徐々に力が抜けていく。

「まあ落ち着け。な？」
「……うん」
頭をぽんぽんと撫でると、無言で俺の胸板におでこをこすりつけてきた。
――正直、あの人たちが言っていることはその通りだよなと思いつつも。
もう少し、この関係を楽しんでみたい。
そう思っている、自分がいた。
× × ×
留美が落ち着いてから（地味に十分くらい抱き合っていた）、二人でコンビニに向かう。極めて自然に恋人繋ぎをして腕をくっつけてるんですけども何かもう慣れるしかないんでしょうかね。留美が物凄く幸せそうなもんだから、もはや何も言えない。
「八幡。私たち、どう見えてるんだろ」
「……さてな」
えらい澄まし顔で聞いてくるなと思ったら、よく見たら口元にうっすら笑みを浮かべている。こいつ……吹っ切れたら今度は俺を恥ずかしい気持ちにさせようとしてるな……？
「八幡。……本当に、すごいの？」
「……恥ずかしいなら聞くなよ」
二つ目の質問で自爆して、留美が顔を真っ赤にして俯いていた。しかしせっかくなのでいじめてみようかと思う。
「……やったことねぇから分からんが、多分、気持ちが乗ったら相当激しくなると思う……って留美、手めっちゃ熱いけど大丈夫か」
俺が話している短い間に、繋いでいる留美の手の温度ががんがん上がっていた。見ると、留美は俺の二の腕にこめかみを擦り付けて唇を引き結んでいる。効果は抜群どころの話ではなかったようだ。
「……バカ」
「あー、その、すまん」
「ボケナス」
「ほんとすまん」

「体格差を利用していじめるっていうのはほんとなの？」
「あー、さっきの人たちの話か。そうだな、大いにありだな……ってこら」
思わずノリツッコミをしてしまった。留美はカウンターで自爆して、顔を真っ赤っ赤にしている。何だろう、さっきから留美の可愛さが十五割増しになってる。２．５倍じゃねえかそれ。
×　×　×
コンビニに着いて、カゴを持って二人でのんびり店内を回る。やはり大学生が多い様で、店員も大学生のアルバイトらしき人の割合が高いようだ。年が近めの大人が多くて少し萎縮しているのか、留美の動きが落ち着かない。頭をぽんぽんと撫でると、留美はほっと頬を緩めた。ほんわかしていると、周りの視線もほんわかしていることに気付いた。いかん、このままでは俺が死ぬ。
一通り飲み物やその他軽く食べたいものなどを買った所で、留美が俺の袖をくいくいと引っ張った。
「八幡。あれ」
「ん？　どうした……って、んん？　何だ？」
コンビニで見かけるようなものでは無いものに驚いた。
視界に入ったのは、コンビニでたまに見かける半額処分品のコーナーだった。こういうのは量的には大した量が入っていない筈だが、一斉点検でもしたのか今はやたらもりもりと商品が詰め込まれている。
その中に、青色の薄い円盤型の物が目に入った。留美が指差したのも、どうやらこれのことらしい。
「何故にフリスビーが……」
どうやら、フリスビーのようだった。
なんでだ。
この辺りではフリスビーを買う人が多いから商品に入れたのだろうか。それも妙な話だ。見たところ新品そのものでまともだし、値段も半額でえらい安くなっていた。
「留美、フリスビーやったことあるか？」

「ううん、ない」
首をぷるぷると横に振った後、フリスビーをじっと見つめた。
「……やってみたい」
「おお、そうか」
留美の意外な発言に驚いたが、じっと見つめる瞳は真剣そのものだ。よっぽど興味をそそられたらしい。
自分のバッグをちらりと見る。幸いフリスビーは小さめのサイズなので、入れて持ち帰ることはさして難しくない。
「じゃあ、買うか。さっきの公園で遊ぶか？　芝生も多いし」
「……うん」
留美の顔が嬉しそうに綻ぶ。コンビニに居るということも忘れて、抱きしめてしまいそうだった。
レジで会計をする間、周囲の人たちから尋常で無い程生温かい目で見られた。
顔が熱い……。

続く。

（１７）

右隣の、俺の頭から少し下の位置。

そこから、上機嫌な鼻唄がほんのりと聞こえてくる。

コンビニを出た俺と留美は、昼食をとった公園に戻っていた。行きは手を繋いでいたが、今は留美がフリスビーを両手で持ってまじまじと眺めているので繋いでいない。留美はフリスビーを初めて手にしたのか、くるりと回転させて物珍しそうに見ている。凝った絵が描かれているでも複雑な構造をしているでもないので、そんなにじっと見る意味も無いと思うんだけど……本人は至って楽しそうなので、まあ良しとする。

公園に着くと、留美が俺に手ぶりで「そこに居て」と伝えて、ててと離れる。なんだか自分が犬になって待てをされてる気分。

留美が両手でフリスビーを持ったまま、フリスビーと俺を交互に見つめる。そんなに似てるだろうか。俺そんな青くないと思うんだけど。あとそんなに丸くないぞ俺は。世の中に対して斜に構えてる感じは十分に尖っていると言えるだろう。しかし逆らえない人（例：母、小町）には抜群の丸さと言うか従順性を発揮するから、その意味では似ているかもしれない。

なんでこんなにがっつりと考察してんだ俺は。

留美が投げの姿勢に入った。野球のピッチャーのように振りかぶって……野球のように？

「待て、留美。それはやばい」

このままだと一切遊びの余地の無い回転で俺の身体にすっ飛んでくる。両腕を前に突き出して制止を要求すると、留美がぴたりと動きを止めた。真剣なのか何なのか、極めて澄まし顔。殺し屋に命乞いしてるみたいな図になってるんだけど。

「……なんで？」

留美が、振りかぶった体勢のままくりんと首を傾げた。器用なやつだ。しかし可愛い。

「や、その投げ方をしたら全然まともに飛ばねえぞ。ていうか受け取

る側が危ない。この場合俺が割れる」
「割れるの……」
留美が腕を下ろした。俺が割れる光景を想像したのか、俺を見てドン引きしている。ちょっと理不尽すぎやしませんかね。
「もっと、こう……」
ジェスチャーで、腰を落として右腕を腰の左側に持っていき、フリスビーを投げる動作をする。エアフリスビーという貴重すぎる機会だった。
「裏拳をかます感じで、こう、な」
言いながら、もう一度ぶんと腕を振る。俺の動作を見てふむふむと頷くと、留美がフリスビーと俺をまた交互に見つめた。だから俺は丸くないって。いや丸いって。どっちだよ。
「練習していい？」
「おう、こいこい」
両手でカモンカモンと手招きすると、留美がててててと寄ってきた。なんで？
「投げる練習じゃないのか？」
「まずうらけんの練習をしようと思って」
「俺を殴るのか？」
まさかすぎる行動だった。
俺の言葉を聞いて、留美がはてと首を傾げる。
「ていうか、うらけんって何？」
「あ、そこからか……」
だから漢字変換されずに「うらけん」って表記されてたのか。表記って言っちゃったよ。留美がフリスビーを投げずにこっちに来たのは、質問をする為だったらしい。何で質問する前に練習しようとしたのかは謎だけど。まあ、女の子は裏拳なんて言葉は聞き馴染みが無いよなぁと思う。男にとっては憧れの技なんだけど。そうでもねぇな。
「裏拳ってのはな……」
何故か今度は裏拳の説明をする。頭の中にはオーガの振り向き様

の凄まじい裏拳をイメージしつつ。留美はそれをふむふむと頷きながら見ている。
「こんな感じだ」
「分かった。じゃあ、練習していい？」
「投げる練習だよな？」
「ううん、裏拳の練習」
「なんでだ」
「八幡のしつけに必要かと思って……」
「今から俺を尻に敷くつもりなのか」
「え」
「あ」
事故発生。
責任で言ったら、俺が6で留美が4だろうか。あるいは7：3くらいか。何の話だ。
留美が表情をごまかそうと俯いているが、さらさらの髪の間から覗く耳が真っ赤だから意味を成していない。
留美が自分の頬をぺちぺちと叩いて気を取り直す。俺もそれに習って自分の頬をぺちぺちと叩いた。
留美がとててと駆けて俺から離れる。走り方可愛いな……。
留美が腰をぐっと落とし、フリスビーを持った腕を構える。目つきが真剣そのもので、まるで居合抜きをするかのような気迫を漂わせている。
「八幡。気を付けてね」
「え、そんな危ないことする気なの？」
声が真剣すぎてマジで怖い。
「心配してあげてるの。力加減が分からないから」
力が制御出来ていない幼い魔王かお前は。
「お前これ何のバトルシーンだ。力は全然入れなくていいぞ」
雑なアドバイスだが、これくらいの言い方で良いだろう。
「本気で投げたらどうなるの」
「俺の柔い腹筋に刺さる」

「刺さるんだ……」
留美が眉根をひそめて、心配そうに俺を見る。や、君次第だからね？　分かってるよね？
「じゃあ……んっ」
ふっと力を抜いた留美が、そろりとフリスビーを投げる。力無くぺるるると飛んだフリスビーは、存外適切な力加減だったのか、問題なくこちらへ飛んでくる。
「おお、上手いじゃねぇか……って、おお？」
俺が伸ばした手に到達する直前で、大きく右に曲がり始めた。無機物に嫌われるってもはや才能なんじゃないだろうか。
「よっとっ……とぉ」
数歩だけ走るようにして手を伸ばし、地面に落ちる直前でキャッチする。留美を見ると、何やらほけっとした顔で俺を見つめている。
「どうした」
「八幡……なんか、犬みたい」
「ほっとけ」
フリスビーを手渡して両手で髪をくしゃくしゃとすると、小さな声で「むぅぅ……」と聞こえてきた。草凪優の官能小説の喘ぎ声みたい。男女共によくこういう声を上げて何でもないですごめんなさい。
自分が読んだ本について勝手に思いを馳せていると、留美が俺の手をきゅっと握った。
「八幡。手本が見たい」
留美の言葉に、顎に手を当ててふむと考える。
「俺だって前やったのはいつか分からないくらいだしな……」
「小町さんと遊んだの？」
「なんで初めから小町を指定したんだ」
「じゃあお母さん？」
「何で第二候補が母親なんだ」
「お父さんとは遊ばなそうだから……」
「勝手に家族関係を気まずくするな」
「他に誰がいるの？」

「友達って言葉知ってるか？」
「八幡こそ、その言葉の使い方知ってる？」
「泣くぞお前……あ」
「……」
留美がいたずらっぽく目を細めて、俺の頭を撫でた。俺の頭を撫でる時の留美の表情が、本当に柔らかくて綺麗だから困る。
しゃくしゃくと撫でられることしばし。
留美の手が離れると、さっきと同じように自分の頬をぺちぺちと叩いた。留美は満足気に微笑んでいる。
「じゃあ、動画でも見るか」
「ん」
俺の提案に、留美がこくりと頷く。スマホをちゃっと取り出し、動画サイトを開く。適当なワードで検索すると、すぐに沢山の動画が出てきた。その中の一つを開くと、もふもふとした毛並みの大型犬と飼い主が映った。飼い主が「ヘクトパスカル！　ゴー！」と元気よく声を上げてフリスビーを投げ、それを大型犬が猛然と走っていきキャッチしている。
「すごい……足速い」
「や、それよりも名前だろ……」
二人の着眼点がだいぶずれていた。こういう映像は今まで何度か見た事があるので大して驚かないが、なんで犬の名前に圧力の単位を付けたんだろう。
動画は短かったので、すぐに再生が終わる。すると、留美が顔をスマホにずいと近付けた。
「八幡。もう一回見せて」
「おう。わかっ……」
た……と言いかけたところで、留美と目が合う。二人の間でスマホを持っていたのだけど、留美が身を乗り出したことで、顔が目と鼻の先まで近付いていた。
まず謝った方が……と慌てながらも考えていると、
「大丈夫」

と言われ、動くに動けなくなった。
「じゃ、じゃあ……」
視線を画面に戻し、再生画面を押す。画面を見ていても、互いの耳と耳が触れ合うくらいの距離の為、ずっと緊張している。こんな状態のため、動画の内容がまるで頭に入ってこない。
動画を見終えると、視線を感じた。
横を見ると、留美が俺をじっと見つめている。黒く澄んだ瞳に魅入られて、スマホを持った体勢のまま固まって見つめ合う。
数秒なのか、数十秒なのか、数分なのか。
どれくらいか分からない時間が経ったところで、留美がついと顔を離した。
「もう一回やってみる」
「お、おう」
今のやりとりの照れは無いのか……と内心驚いていると、留美が歩いて離れる途中で、ちらりと振り返って俺を見つめた。その瞳に宿る熱量は、明らかに今日一日の中でどんどん増しているように思えて。
気楽に遊んでいるだけのはずなのに。
今日これからのことを考えて、一体何が起きるのか……と、期待と緊張とで息を呑んだ。

続く。

（１８）

留美がとてとてと小走りで駆けていき、くるりと振り返ってフリスビーを構える。動画を見た時の距離感が心にまだ動揺を残していて、心臓の鳴りがおかしなことになっていた。

動画を二回見た効果があったからか、留美は一回目よりも幾分様になった構えからフリスビーを投げた。

「んっ」

少しばかり気合の入った声と、ぺるるると柔らかく飛ぶフリスビー。俺の右側に放たれたために初めは失敗かと思ったが、中間地点くらいから上手いこと弧を描いたために、ほとんど動くことなくキャッチすることが出来た。

「おお、すげぇな」

素直に感心を口にすると、留美は腰に両手を当ててえへんと胸を張った。お嬢様然としたシフォンワンピースでそのポーズを取るのは妙にギャップがあって、お嬢様が勉強の合間にはしゃいでいるような、そんな雰囲気があった。

俺も動画の見よう見まねで投げてみる。ぺるるると力無く飛んだフリスビーは、先程の留美が投げた際の軌道と同様に上手いこと弧を描いて留美の下へと届けられた。留美がやや緊張した面持ちでフリスビーをキャッチすると、ぽけっとした顔を俺に向ける。

「……なんで上手いの？」

低い声で呟いてややぶすっとした表情を浮かべる留美を見て、くすりと笑ってしまう。

「たまたまだよ。ビギナーズラックってやつだ」

「ふぅん……あ」

俺の言葉を聞いていた留美が、突然ぱたぱたと俺の下に駆けてきた。そして俺のすぐ横に来ると、俺が向いている方向に向き直る。何故か二人が同じ向きで並んでいる状況になった。

「留美、何してんだ」

尋ねると、留美がフリスビーで顔の下半分を隠して、目を僅かに細

めてにんまりと微笑んだ。今まで見たことのない種類の笑みにどきりとすると、フリスビーを片手で持ち、投げる体勢を取った。なんぞや……と思っていると。
「ほら、八幡、ゴー」
「え、ちょ、え？」
留美は俺に目配せをして、前方高めにフリスビーを投げた。先程見た動画と同じようなやりとりだが、あれは人と犬だったんだけども。今、人と人だよね？
留美の発想に呆れたが、明らかに手が届かない訳ではない絶妙なスピードでフリスビーを投げられた為に、つい反射で駆け出してしまう。上司からの無茶ぶりを脊髄反射で受けてしまう社畜精神というのはこういう場で培われるんだろうか。培われねぇよ。
「……っとと、っとぉ」
身体に急な負荷がかからない程度に駆け出して、ぎりぎりでキャッチした。振り返ると、留美がにっこりと微笑んでいる。腹が立つけど、その何倍もの勢いで「こいつ可愛いな」と思ってしまうから手に負えない。
「おいこら、留美。いくらなんでも」
「よくできました」
留美が「んっ」と背伸びをして、俺の頭に手を伸ばす。怒るのも忘れて身体を屈めると、頭をくしゃくしゃと撫でられた。……俺、いいようにやられてない？　しかし心地良いからどうしようもない。
「こんにゃろ」
「わ……っ」
フリスビーを芝生に置いて、お返しに抱きしめてやる。すると、留美が一瞬だけ慌てて、やがて俺の背中に腕を回して抱きしめ返してきた。公園の柔らかな陽気が二人を包み、心地良い静寂が流れる。
「……そろそろ移動するか」
「……ん」
抱きしめたまま語りかけると、留美は短く答えて俺の背中をぽんぽんと撫でた。お返しに俺も留美の背中をぽんぽんと撫でると、「んん

……っ」とまるで昼寝をしている猫のような、気持ち良さそうな声が聞こえてくる。お互いに撫でられる心地良さに気付いたのか、どちらから言うでもなくぽんぽんと撫で合う。

いかん、このままではいくらでも続けてしまう……と思い、名残惜しみながらも留美を離すと、寂しそうに口を尖らせた。

「……まあ、その、な、うん、また……」

頬をぽりぽりと掻きながら、自分でも何を言ってるか分からないようなことをぽそりと言う。すると、留美が嬉しそうに目を細めた。

「うん。また、すぐね」

「う……」

小っ恥ずかしい約束を取り付けてしまった。しまった、どんどん約束が増えていく……！

これはさっさとカフェに向かった方が良いか……と思いながらフリスビーをバッグにしまおうとした時。

「あ、さっきの……」

澄んだ声音が聞こえた。

× × ×

声のした方に顔を向けると、さっき電車で会った、黒髪で大きな目をした美人さんが立っていた。ＪＤＥという名付けをしたばかりでまた会うとは……。さっきは別の駅で降りた筈だけど、この辺に住んでいるんだろうか。取り敢えず都合上ここでは以後「彼女」と呼ぶことにしよう。都合上って言っちゃったよ。

「……ども」

取り敢えず会釈をすると、留美が俺の袖をちょんと摘まんだ。見ると、恥ずかし気に俯いている。

彼女がとてとてとこちらによってくると、留美が俺の陰に隠れた。こらこら。

「すいません、この子人見知りなんで」

留美の手を取って握りながら謝る。まあ、さっきのやりとりのこともあるしな……なんて思っていると、彼女は顔の前で手をぶんぶんと振った。

「ううん、良いの良いの。さっきは急に話しかけてごめんね？……って、今もか」
　自分のこめかみをこつんと叩いて、舌をぺろりと出す。テンプレすぎて実際見たらドン引きするであろう仕草の筆頭とも言えるこの行為が、驚く程自然で似合っていて、もはや感動してしまった。留美は彼女の仕草を見て悪い人ではないと判断したのか、幾分顔が緩む。
　彼女は俺たちをちらりと見やると、幸せいっぱいに微笑んだ。
「んふふー。わたしね、幸せな空気が出てる人を見てるのがすっごく好きなの。もっと言えばそういう人とお話したくて。それでさっきはあんな風に話しかけちゃったんだ」
「あ、そういうことですか」
　変な人には違いないが、底抜けに良い人だということが伝わってくる。変な人には違いないが。
「良いねー、何かさっき電車で見た時よりも二人の距離が縮まってるねー、ふぃー♪」
「ちょ、ちょっと……」
　掠れた口笛（びっくりするくらい下手だった）を交えながらの突然の煽りに、留美が完全に俺の背中に隠れて、おでこを背中にこすり付けた。
　不意に、彼女が俺の持っているフリスビーに視線を向けた。
「んにゃ？　これ、君たちが使ってたの？」
　何その可愛い言葉遣い？　顎に人差し指を当ててくりんと首を傾げるのが凶悪に可愛い。
「あ、はい。そこのコンビニで衝動的に買っちゃって」
「へー。それ、持ち帰るの？」
「そうですね。バッグにはぎりぎり入るんで」
　何気なく会話していると、彼女が唇に指を当ててフリスビーをじっと見つめ始めた。妙に色っぽい仕草にどきりとする。
「家に帰ってから使う予定はあるの？」
「や、無いですね。無用の長物になるとは思いますが、その辺に置いておく訳にもいかないので」

答えると、彼女がにっこり微笑んだ。
「じゃあ、わたしにくれない？」
「へ？　いいんですか？」
面食らっていると、彼女はにっこり笑顔のまま言葉を続ける。
「うん。ちょうどこの後友達とここらへんで遊ぼうとしてたから、ちょうど良いなーと思って」
「あ、そうなんですか」
大学生（と思われる）同士で遊ぶのにフリスビー……まあ、たまにそういうことをやりたくなることもあるんだろう。
「留美、いいか？」
背後の留美に確認を取ると、背中に顔をうずめたままこくこくと頷いた。まだ恥ずかしいのか……。留美が頷く度に背中がむず痒くなるんだけども。
彼女は身体を屈めて膝に手を置くと、留美に向けて優しく微笑んだ。そして背筋を伸ばして俺に向き直る。
「ありがとうね。いくらだった？」
「あ、いいですよ。かなり安かったですし」
財布を取り出そうとしていたのを止めて言うと、彼女は目をぱちくりとさせた。
「……そう？　じゃあ、お言葉に甘えて」
そう言うと、彼女は何故か、んー……と唸りながら俺を見つめてきた。好奇心の塊のような視線をぶつけられると、思わず目を逸らしてしまう。すると、彼女は俺にずいと近寄り、その拍子にふわりと甘い香りが鼻腔を擽った。
「きみ……とっても良い男だね」
「……へ？」
予想外の言葉に間抜けな声を漏らすと、彼女はにんまりと微笑みながら益々顔を寄せてきた。その分だけ背筋を仰け反らせると、背後の留美が「んん……」と唸った。しまった、おでこに俺の背中が思い切り当たったようだ。しかし今は謝る余裕さえない。
彼女の整った顔立ちと、吸い込まれるような澄んだ瞳に目が離せな

くなる。
「今みたいな言葉を自然と言えるって、すごく大事だと思うの。人に対する気遣いがしっかりしてるんだね……うんうん、とっても素敵だよ」
「あ、や、そ、そうでも……」
顎のすぐ下に彼女の顔があり、心臓がばくばくと高鳴る。なんだこの状況は？
早く離れてくれないと、俺の心臓が――と思っていると。
「……」
背中から、物凄い圧を感じる。
心臓に銃口を突き付けられているような、そんな感覚。
……俺、もう手遅れかもしれない。
「えーと、あの、留美さん？　何でもないからね？」
しどろもどろに答えると、普段よりも明らかに低い声が身体に響く。
「……言い訳は見苦しい」
「いで……っ」
脇腹をきゅっとつねられる。さほど痛くはないが、留美が怒っているのが分かる。
それを見ていた彼女は、あらあらと口に手を当てて微笑んだ。
「えーと……留美ちゃん、でいいのかな？」
留美の横に歩を進めて、身体を屈めて微笑みかける。留美は俺の背中をつねったまま彼女に顔を向けた。
「……ん」
肯定とも否定ともとりがたい声で返すと、彼女がにっこりと笑みを浮かべる。本当に優しい笑顔だなと思った。
「心配しなくても大丈夫だよ」
留美の頭をくしくしと撫でて、留美の耳元に顔を寄せた。囁き声の筈が、妙にはっきりと聞こえる声で話す。
「……彼は、君に夢中だからね」
『……っ』

留美も、声が漏れ聞こえた俺も、大きく喉を鳴らした。
彼女はぱっと身体を離すと、俺からフリスビーを受け取り、ぺこりとお辞儀をして駆けて行く。少し離れてから立ち止まるとくるりと振り返って、フリスビーを持った手をぶんぶんと振った。
「フリスビー、ありがとねー！　お幸せにー！」
『……』
俺も、留美も、言葉を返すことは出来ないままに。
ただただ、小さく手を振り返していた。

× × ×

「……じゃ、じゃあ、行くか」
「……うん」
恥ずかし過ぎて、顔を合わせられない。
手を繋ぐのも躊躇したまま歩き出すと、留美が俺の手を握った。驚いて留美の顔を見ると、恥ずかしそうに俯いている。
お互いの距離感が分かるような、分からないような。
そんな、もやもやとした、それでいてどこか幸せな気持ちを抱えながら。
二人で歩いて、公園を発った。

続く。

（19）

留美と手を繋いで公園を出る。歩きながらこの後の予定を話し合う。

「留美、これからどうする」

「これから……」

「待て、なんかおかしいぞ。違うぞ」

「違うの？」

「あ、や、ええと……」

今日、事故率高くない？

何だろう、ことあるごとに死ぬ程恥ずかしいことをしている気がする。

外堀を埋められて、本丸に攻め込まれて、眼前に刀の刃先を突きつけられてるとこまで行ってる気がするんだけども。

「カフェだよカフェ。この先にさっき降りたバス停があるから、ちょっと待てばすぐ行けるんだが」

少し上ずった俺の声を聞いて、留美が上機嫌に目を細める。口で何か言う訳ではないが、にぎにぎと握ってくる手がくすぐったくてもどかしい。

「んー……ちょっと歩きたいかも。遠い？」

留美が並木道を見回して尋ねる。俺はスマホでルートや距離を確認した。

「……多分、歩いても三十分くらいで着くと思う」

「そ。じゃあ、歩こう？」

提案をしてくるその表情は、どこかうきうきとしている。未知の土地に気分が昂揚しているのか、見ているだけで気持ちが和む表情だ。

「おう。しゃあねえな、付き合ってやるよ」

ふっと笑って言うと、留美が頬を赤らめて俯いた。

「付き合う……」

「うぐ……」

手を繋いでると、逃げられない上にお互いの気持ちが分かってしま

うからやたらと恥ずかしいな……なんてことを思った。

×　×　×

二人で並木道をぽてぽてと歩く。程好い木陰を歩いている時に吹く風は涼しいのに温かくて、これから訪れる夏という季節への期待感を高めてくれる。

並木道はかなりの長さで続いているようで、ちょこちょこと曲がりくねりつつ分岐しつつ、ずっと先まで伸びていた。

「八幡。この道、どれくらい続いてるの？」

「ん」

留美の問いも最もだなと思い、取り出したスマホをすいすいといじる。

「枝分かれもしてるけど……メインの道はぐるっと円を作ってて、全長が５ｋｍくらいあるらしい」

「そんなに……」

何故か留美がげんなりとする。別に一周する決まりがある訳じゃないんだから良いだろうに。

留美はげんなりしたかと思うと、今度は空を仰ぎながら考え込む素振りを見せた。ちらりと見やると、にっこりと目を細める。

「それくらいの長さを一人で歩いたら絶対大変だけど、八幡と一緒だったらすぐ終わっちゃいそう」

「……そうなのか」

留美の発言に、声が裏返りそうになる。目を逸らしながら答えると、留美がくすりと笑った。

「だって、八幡を見てると退屈しないし。風が吹く度に小さな声で『おぉ……』とか言うし、猫みたいに目を細めるし。分かりやすいなって」

「俺どんだけ見られてんだよ……」

何気なく返すと、留美が顔を逸らした。ちらりと流し目を送って、おずおずと尋ねてくる。

「……迷惑だった？」

「全然、全然、全然。もう超見て。ありったけ見て」

少し哀しげな目をされたために慌てて答えると、留美はきょとんとした表情を浮かべた。そして顎に手を当ててくすくすと笑う。
「……そんなに見ないって。だって、そんなに見つめちゃったら……」
「……見つめちゃったら？」
「……何でもない」
「言ってくれねぇのかよ……」
何その、『続きはＷｅｂで！』の感じ。
こんな談笑を続けながらも、カフェへと歩を進める。
歩きながら、ふと気付いたことがある。
並木道は整然と整えられていて、本当に見ていて気持ちが良い。けれど、何だかんだで気が付けばずっと留美を見て話してしまっていて、三十分程歩いた中で景色を楽しんでいた時間はほとんど無かった。
留美の手は小さく、柔らかく、温かい。
表情は、出会った頃の影を帯びた雰囲気が何だったのかと思えるくらいに明るく、豊かになった。
この子と居ることが、本当に楽しい。
この時間がいつまでも続いてほしい――なんていう、一体いつから言われているのかも分からない台詞が頭に浮かぶ。ほんの少し前までは、こんな言葉は使わないどころか頭に浮かぶことさえ無いだろうと思っていたのだけど。
留美と過ごす時間は、いつまでも続いてほしい――誇張することなしに、そう思えた。

× × ×

別にさっきの文が悲劇（事故とか病気とか事件とか）の前フリという訳でもなんでもなく。
「……お、あそこだな」
俺と留美は、特に何の問題もなくカフェに辿り着いた。
もし臨時休業していたらどうしよう……という不安はあったのだけど、店の入口のドアに「Ｏｐｅｎ」の文字が書かれたプレートが掛けられていて安心する。

入口のドアを開ける前に、留美と繋いでいた手をぱっと離すと、留美が眉根を寄せて口を尖らせた。
「……や、店に入る時まで繋いでたら、流石に恥ずかしいだろ？」
「……別にいいのに」
「俺が恥ずかしさで死んじまうんだよ……」
言うと、留美が三日月のように目を細めた。
あ、やばい。
これ、何か仕掛けてくる時の目だ。
「じゃあ……こうする？」
言って、留美が俺と腕を組んだ。不意に近付いた瞬間、艶やかな黒髪から漂う甘い香りが鼻腔を擽り、なるべく意識しないようにしていた留美の女性の部分が柔らかく押し付けられる。
「ばっ、ちょっ、おまっ……」
突然訪れた緊急事態に目が泳ぐ。縦横無尽に泳ぐ。しかし俺の目は泳ぎつつも徐々に留美の身体の一点に視線を集めてしまう。これが万乳引力……控えめでもきちんと働くんだな……。
そんなことを考えていると、留美が俺の腕を抱きしめる力を強めた。強く抱きしめたのにより柔らかくなる。はて、これいかに。
「……今、何か失礼なこと考えてなかった？」
バレてた。助けて。
「何でもない、柔らかなんでもない」
慌てすぎて失言が漏れた。
「柔らか……？」
留美が怪訝そうに目を細める。そして視線を自分の胸元に移すと、俺の腕に押し付けたものに気付き、耳まで赤くなる。よし、罵倒はされるだろうが、それでも腕は離すだろうから万々歳だ。このままだと俺の心臓がメトロノームで測れない速度で脈動してしまう。要は寿命が縮む。
さあ、その腕を離すんだ。名残惜しいが俺の寿命を縮めないためにもご協力ください……なんて考えていると。
「……別に、これくらい何でもないし」

「……へ？」
留美が、抱きしめる腕に一層力を込めた。ふにゅりとした柔らかなものが腕に当たる面積が増え、心臓が爆発しそうになる。そうか、今日は俺の命日なんだね！
留美をちらりと見やる。頬を紅潮させて顔を逸らしながら俺を上目遣いで見ていて、殺人的に魅力的だ。
綺麗な瞳に吸い寄せられてごくりと息を呑むと――
店の内側から、ドアが開いた。
「あの、いかがなさいました……か……失礼、しま、し、た……」
若い女性――恐らく大学生のアルバイトか何かだろうか、俺の二つ三つ上くらいに見える――が、柔らかな表情で俺たちの様子を確認しにきた。その途端に真っ赤になり、しどろもどろに言葉を紡ぎながらドアを閉めた。
『……』
俺と留美が、固まる。パントマイムのプロかよってくらいに、ぴたりと。
そうだよね、ここ、店の入口の真ん前だもんね。
留美の頭をぽんぽんと撫でる。
「……一旦、離れるか」
「……うん」
お互い、恥ずかしすぎて目を合わせられない。さっきのＪＤＥ以上の衝撃だった。
留美は腕を離したが、その代わりなのかなんなのか、俺の袖をちょんと摘んだ。心の奥がむずむずする感覚に包まれながら、ドアを開ける。
来店を歓迎してくれるドアベルが、心地良くからんと鳴った。
続く。

（２０）

「いらっしゃいませー！　何名様で……しょう、か……っ」

カフェに入るなり快活な女性の声が飛んできたが、俺と留美の顔を見るなり顔を真っ赤にして固まってしまった。よく見ると、さっき俺たちの様子を見にきた女性店員だった。さっきは気付かなかったが、制服と思われる柔和な緑色のエプロンを着けている。

「え、ええと、すす、すみません、二名様ですよね？　あ、いや待ってください、他の人と合流する前にイチャつくというパターンもありますよね！　ごめんなさい私ったら想定が甘くて……」

「あ、あの……？」

店員さんが、両頬に手を当てて一人できゃーきゃー騒いでいる。何この海老名さんタイプのターボのかけ方……？　昼時を過ぎた為か、たまたま俺たちの他には客がいないようだから良いものの……。留美を見ると、案の定俯いて俺の陰に隠れていた。耳が真っ赤になってるから相当恥ずかしいんだろう。

「えーと……さっきはすみませんでした。あんな所で」

「いいんですいいんです！　私としましてはもうほんとああいうのが大好きっていうか言い方を変えると大好物っていうか何と言いますかもううふふぃいたたたた！」

『!?』

俺と留美を置き去りにしてどんどんテンションを上げている店員さんの頭が、不意に後ろからがしりと掴まれた。アイアンクローばりにぎりぎりと力を込めて、店員さんがマンガみたいな声を上げている。

「あんたはお客様相手にな～にをやってんだ……」

凄みの利いた女性の声が聞こえたかと思うと、後ろから別の女性が顔を出した。足がうきかけている店員さん（特に誇張ではない）と同じくエプロンを着けていて、年齢は二十代後半に見える。綺麗な黒髪を後ろに束ねた、顔立ちの整った人だった。あと何気に胸が……。

「八幡、やらしい」

すぐ見抜かれすぎてつらい。店に入って最初に聞いた留美の声が罵声ってどういうことですのん……。

先輩と思われる女性は海老名さん似（テンション的な意味で）の店員さんを鬼神のごとき表情で睨みつける。額に青筋って本当に浮かぶんだ……。

「ごごごごごめんなさいいいい……」

店員さんがチワワみたいに目を潤ませて謝る。バイブかよってくらいに震えてる。先輩（勝手にそう呼ぶことにする。俺の先輩じゃねぇけど）が後輩（勝手にそう以下略）の顔をぐりんとこちらに向ける。何だろう。このチワワを飼えということだろうか。いくらチワワっぽい目になっているといっても完全に人間だよねこの人。いやしかし女性を飼うって言葉の響きのいやらしさはまたなんとも「八幡、やらしい」何でこの子俺の地の文をあっさり読むんでしょうね！「あたしじゃなくて、こちらのお客様に謝るんだよ。何勝手にテンション上げて、ご案内もせずに浮かれてんだい」

何とも男気溢れる喋り方だった。なんか「四十秒で支度しな」とか言い出しそう。ロブスター好きなのかなぁ。しかしこれだけさばさばした女の人なのに恋人の前で甘えてるとかってパターンだったら何だよもう最高だ「八幡、やらしい」「ごめんなさい」もはや声に出して謝っちゃったよ。

……いかん、後輩のテンションに釣られたのか、俺もテンションがおかしくなっている。ここに入る前の留美の押し当て（相撲の決まり手みたいな言い方だ）の影響も確実に出ているけど。

「ご、す、申し訳ありません、お客様……」

後輩がしゅんとした顔で謝る。一回目は「ごめん」で二回目は「すいません」と言おうとしたのだろうか。器用すぎるだろ。

「いえ、ほんと、俺らがあんなことしてたから悪いのであって……」

俺が焦り気味に答えると、先輩がきょとんとした顔になった。

「あんなこと……？」

「あのですね……」

先輩の疑問に対して、後輩が耳打ちをして説明する。俺らに許可を

取らないっていうスタンスがいっそ清々しい。
「ごによごによごによ……」
「ふむふむ、ふ……む……っ!?」
後輩の説明を受けていた先輩の顔が俺と留美を見つめて、あっと言う間に耳まで茹で上がった。え、なに、こんなさばさばしてんのに尋常でない程ピュアとかそういうギャップの持ち主なの……？
ついさっきまでのきりりとした顔つきがふにゃふにゃと緩み、乙女が恥じらうような表情で先輩が口を開いた。
「あ、そ、その、お、お席にご案内します……っ」
「あ、はい……」
結局人数を確認されぬままに、席に案内される。ちなみに先輩の豹変に後輩はときめいていて、俺と留美もまあまあ動揺していた。
× × ×
「こ、こちらへどうぞ……」
「はい」
先輩（ずっと言ってると、慣れるどころかより変な感じになる）が案内してくれたのは、カフェの中でも奥まった席だった。他に何組か客が来たとしても、恐らくこの場所まで案内されないのではないだろうか。
なんでこんな奥に……？　と思っていると。
「こちらは窓からの眺めが店内でも一際素敵でして。また奥まっている為、その、色々込み入った話も出来るかと。どど、どうぞしっぽりとお楽しみください……」
おい。
「や、しっぽりって、ちょっと……」
「お、おしぼりをもってきますぅぅ……っ！」
先輩、退散。
「……」
留美をちらりと見やる。
「……しっぽり……」
やっぱり食いついてた。

「あまり深く考えなくていいぞ」
「……しっぽり……」
「こら」
「ん……」
髪をくしゃくしゃと撫でると、猫のように目を細めた。うーん、ただ俺が撫でたかっただけかもしれない。
間もなくしてお冷が持ち込まれて（お盆に乗せたコップがかたかたと震えていた。絶対普段はあんな感じじゃないだろうに）、二人ともカフェオレを注文した。間もなくして二人分のカフェオレが届くと（今度は後輩が持ってきた。俺たちを見る目が輝きすぎててつらい）、やっとのことでゆっくりした時間が流れ始める。
「……」
留美は特に何を喋るでもなく、楽しげに窓の外を眺めては、時折俺を見てにこりと笑う。何の話題も口に出していないのに、全く退屈だとは思わない。不思議な時間だ。
「いてっ」
公園で昼食をとった時と同様に、留美が足をぷらぷらさせていたのだろうか。ふくらはぎの辺りに留美の足が当たる。
「あ、ごめん……」
留美が申し訳なさそうに謝ってくる。
「気にすんな」
頭をぽふぽふと撫でる。あーどうしよう、一日五時間くらいは留美の頭を撫でながら生活したい。何それ天国かよ。
「ん……あ」
留美が不意に声を上げて、俺を見る。にやりといたずらっぽい表情を浮かべると、急に靴を脱ぎ始めた。
「？　おい留美、何して……っ」
留美の足――ストッキングを履いた足が、俺の膝上に乗せられる。
留美は俺の質問に対して、にこりと微笑んだ。その瞳には蠱惑的な光が宿っていて、胸がざわつく。
留美が、テーブルに両肘をついて、手を組んで顎を乗せる。そして

首を傾けると、ゆっくりと口角を上げた。小さな口が開いた瞬間、中に見えた朱色の舌に目を奪われる。
「何、って……いたずら？」
留美の、湿度を纏った妖しい声に。
どくん、と心臓が大きく跳ねた。
続く。

（２１）

留美が靴を脱いで、俺の膝に足を乗せる。蠱惑的な笑みは心臓を高鳴らせ、この後の展開が一体どうなるのかまるで分からず不安になる。

「ふふ……」

大人びた表情を湛えて、留美が俺の膝を足裏ですりすりと撫でつける。ゆっくりと回すように撫でつけて……撫でつけて……撫でつけて……？

「……？」

留美の足の動きが、止まった。

それはもう、ぴたりと。

思い切り顔に疑問を浮かべるものの、「続きはどうしたの！」なんて完全完璧に変態な台詞は言えないので、迂闊に喋ることが出来ない。

留美は眉根を寄せて唇を尖らせて、俺をじっと見つめている。

ああ、そうか。

……言ったら絶対怒るから言えないけど。

留美さん、この後のことを何も考えてらっしゃらないですよね？

というか何をしたら良いか分からないんですよね？

背筋がぞわりとするいたずらが始まるかと思っていたが、拍子抜けした。ふっと息を吐いて頬を緩めると、留美が拗ねた表情で俺を見つめながら、漫然と俺の膝を撫でる。なんだこのシュールな光景。シュールな上にテーブルの下でのやりとりだから全く見えないし。

さて、この子は次にどんな手を打ってくるんだろう。

「……八幡、最近学校はどうなの？」

まさかの雑談スタート。しかも何故かオカン風味の喋り方。

「別に、いつも通りだって」

取り敢えず答えると、留美が途端に言葉に詰まる。ほ、ほら、俺ら普段あんま会話してないから、ね！　自分から切り出す会話って慣れてないんだよね！　フォローを入れれば入れただけ悲しくなるなこれ。共倒れにも程がある。

「……そっか。じゃあいつも通り一人ぼっちなんだ……あ」
何だその雑すぎる罵倒は……とツッコみかけたところで。
俺の膝に乗っていた留美の足が、つるりと滑って俺の内ももをつっとなぞった。
「……っ」
予想だにしない刺激に面食らって、思わず身体を震わせて反応してしまった。
しまった……と思い、恐る恐る顔を上げる。すると、留美はにっこりと笑みを湛えていた。あれ、なんかこれ、どこぞの魔王のお姉さんが浮かべる笑みとちょっとだけ似ているような……？
「……今日、この後はどうしよう」
留美がさりげなく次の話題を出してきた。しかしその足は、確実に俺の内ももを捉えて緩慢な動作ですりすりと撫で続けている。
まずい展開に動揺していると、
「……っ!?」
今度は、もう片方の膝に足が乗り、そのまま滑って内ももを撫でつけてきた。強制的に足を開かされた状況に戸惑いながらも、俺の足を開かせるために留美がとっている体勢を考えると、途端に背徳感が湧いてくる。留美は手に顎を乗せるポーズをやめて、今は両手をテーブルに付けている。恐らく安定を求めて体勢を変えたんだろう。
「八幡、どうしたの？」
震える手でカフェオレの入ったカップを持つと、留美が優しい声音で話しかけてきた。その笑みが今は小悪魔のものにしか見えない。両足の内ももをすりすりと執拗に撫でられ、情けないながら男の部分が反応してしまっている。これでまた何かの拍子に留美の足が滑ろうものなら、触覚だけで十分伝わる程の痴態を晒してしまう。
「……何でも、ねえよ」
上ずった声で答え、カップをテーブルに置く。留美の耳に手を伸ばしてそっと触れると、口を半開きにして「んふぁぁ……っ」と甘い息が漏れた。しかしいくら表情をうっとりと恍惚に染めていても、留美の足の動きは一向に止まらない。

留美が自分の頬に添えられていた俺の手を取り、もう片方の手も掴んだ。そして両手を繋いだ状態で、テーブルにぴたりとくっつける。
「……この期に及んで反撃なんて、生意気」
留美が浮かべた冷えた笑みにぞっとする。留美の両足が徐々に中心に迫ってくる。危険信号が頭の中でがんがんと鳴り響く。俺は留美の手を出来るだけ荒くならないように振りほどくと、テーブルの下に手を潜り込ませて留美の両足首を掴んだ。
「んぁ……っ」
留美が驚きに目を見開いて、艶っぽい声を上げる。その足はまだ中心部に向かおうともぞもぞ動くが、流石に俺がちゃんと力を込めたら止まらない訳が無い。
「……これ以上は、な？」
宥めるように言うと、留美は眉根を寄せて、まだ足を動かす。手に少しばかり力を込めて、一段低い声で告げる。
「これ以上悪ふざけをすると、おしおきするぞ」
「……っ」
こきゅっ、と。
留美の細い喉が、小さく鳴った。
のろのろと俺から顔を逸らすと、婀娜っぽい流し目を送り、また逸らし、もう一度視線を向けてくる。
「……したら、いいでしょ」
「え……っ」
留美の言葉が一瞬、耳に入ってこなかった。
「だから、したらいいでしょ、おしおき……。私、やめるつもりないから。おしおきして止めさせないと、止まらないから」
留美の言葉と表情に唖然とする。
一歩間違えれば、いや、間違えなくとも、これはおしおきをおねだりしているようにしか見えない。
お互いがお互いに、相手が紡ぐ言葉に全神経を集中させて、自分が紡ぐ言葉には危うさを孕ませて相手に放り投げる。肌がひりつくようなやりとりに、湧き上がるような昂奮を覚える。

「そうか。じゃあ……行くぞ」
俺の言葉に、留美がびくりと震える。顔を逸らしたまま静かに目を閉じて、事の成り行きを見守っているようだ。
掴んだ足首を、まずは自分の内ももから引き離す。そして宙ぶらりんになった細い足を、手始めにゆっくりと広げていく。
「あっ、えっ？　あっ、あっ、あっ……」
驚いたのか、留美は不安げな声を漏らしながら俯いて、身体をぶるぶると震わせる。テーブルの下だから全く見えないが、今、留美の足は目一杯広げられている。足がテーブルからはみ出さないように、手に持つ箇所を足首から膝の裏にずらして、留美の足を折りたたむ。M字で開脚した状態になり、留美は泣きそうな顔で俺を見つめた。
「留美。こっちに耳寄せてくれ」
「え、あ、う、うん……っ」
訳も分からぬままと言った様子で、留美が髪をかき上げて耳を見せる。俺が何をするのか確認するために、自然と流し目になる留美の不安を帯びた瞳にぞくぞくする。
唇を近付けて、
「どうだ、恥ずかしいだろ？」
と囁き、息をふっと吹きかけた。
「んふぁぁぁぁ……っ」
留美の全身がぶるぶると震え、湿った声が吐き出される。それでも止めない。膝の裏を持っていた手を少しだけ内ももに滑らせて、更に言葉で責める。
「どうした、恥ずかしいかそうじゃないのかを聞いてるんだぞ」
「ほら、恥ずかしいのか？　もういたずらはやめるか？」
「反省したのかどうかを聞いてるんだぞ。ほら、ほら、ほら……っ」
言葉の終わりごとに息を吹きかけて、その度にびくつく留美の反応を楽しむ。ストッキング越しに感じる留美の身体の柔らかさに陶酔して、ここがどこなのかも忘れてしまいそうになる。
「んふぁぁぁ……も、もう、やめ、やめ……て……っ」
留美が涙目で訴えかけてくるが、本当にやめてほしいなら顔を離せ

ば済む話だ。留美の耳に唇が触れる寸前まで近付けて、劣情を帯びた吐息を吹きかける。
「反省、したのか？」
囁きながら、留美の内ももを緩慢な動作で撫でると、留美が観念したように泣き声を漏らした。
「は、反省、した、からぁ……っ」
そこまで聞いた所で、ようやく留美の耳と足を解放する。身体が自由になった留美は椅子の背もたれに寄りかかって、ひどく息を弾ませている。妖しい色に染まった空間が、途端に元の静謐なカフェのものに戻った気がした。
「……八幡って、こんなに変態だったんだ」
留美が顔を逸らして眉根を寄せてジト目を向けてくるが、その顔に怒りの色がまるで見えない。この子の寛容さに驚くと同時に、俺の歯止めが利かなくなりそうで怖くなる。
「俺も、留美がこんなに変たみゅっ」
言葉を返そうとしたらほっぺをつままれた。
「……らりふんら（何すんだ）」
「変態へのおしおき」
留美がいたずらっぽく微笑んで、俺の頬をうにうにといじくり回す。楽しいし和むけど、さっきのやりとりとのギャップが激し過ぎて頭が付いていかない。
しばらくうにうにと弄ばれて、やがて頬がしゅぽんと解放されると、留美が俺の頬を労わるように撫でた。
「どう、反省した？」
「おう。今度からはもっと節度を持っていじめるとするわ」
「……」
留美が顔を背ける。艶やかな黒髪から覗く耳が真っ赤に染まっていて、俺が戸惑う。あ、あれ、否定しないんだ。え、この子、えええ……？
「……そろそろ、出るか」
「……うん」

伝票を持って二人同時に立ち上がると、すらりと伸びた留美の足に目を奪われる。俺の視線に気付いたのか、留美が頬を朱に染めて俺の袖を摘まんだ。
「……散々触られた。やっぱり八幡は変態」
「……その理屈だとな、留美も十分変たみゅっ」
また頬をむにむに。そこまでして言わせたくないのか……。
レジに向かう時に、ふと。
――も、もう、やめ、やめ……て……っ――
留美の声と表情を思い出して、身体がぶるりと震えた。
今はまだ昼過ぎ。まだ時間はたっぷりとある。
留美となら、どこへ行っても楽しいだろう。
留美となら、何をしても楽しいだろう。
カフェに入る前までなら、こういったことを考えても極めて健全な発想が浮かんでいた筈なのに。
今は、つい先程の留美とのやりとりが頭の中をぐるぐる回って、薄紅色の靄がずっと思考を覆い惑わせていた。

続く。

（２２）

カフェから出て、留美と並んでぽてぽて歩く。せっかくだからということで、さっき降りたバス停のもう一つ先の所まで歩いていくことにした。

「留美、この後どうしたい？」

視線をやや下に向け、艶やかな黒髪を見つめながら尋ねる。留美はさっきのカフェでのやりとりで気恥ずかしくなったのか、今は俺の袖をつまんで歩いている。

「ん……ここはもう結構楽しめたから、後は向こうでもうちょっと遊びたい」

「そうか。じゃあ、帰るとするか」

留美の言葉に賛同の意を示して視線を前方に戻すと、何やら視線が俺の頬にちくちく刺さった。なんだなんだ。

「……どうした」

尋ねながらちらりと見やると、留美が俺をじっと見つめている。瞳の奥の心まで読み取ろうとしているかのような、不思議な目。

「八幡は……良いの？　もっと遊びたい所は無いの？」

ああ、そういうことか――と、留美の視線の意図が分かって納得した。わざわざ俺の意思を慮ってくれた訳だ。この子は時を追うごとに、柔らかくて、ふわふわとした温かい心遣いが出来るようになっている。その成長を目の前で感じて、嬉しいと思うと同時に何だかむずがゆい。

「……まあ、カフェ以外はてんで調べてなかったしな。特に希望はねえよ」

言うと、留美が俺の袖から手を離して、俺の手を握った。

「今の、半分嘘でしょ」

「……え？」

驚いて歩を止めると、留美は淡々と喋り始めた。

「八幡、すごい調べてくれてたでしょ。そうじゃなきゃ、あんなスムーズに移動なんて出来ないし。ずっと頼れるなって思ってた。調べた

上で興味のある場所が無かったっていう意味では、さっきの言葉の後半は本音だと思った。ちがう？」
「……お前、すげえな」
頭をがしがしと掻いて、
「……正解、それも的のど真ん中を射抜いたみたいな、大正解」
と呟く。
ここまで見透かされたのはものすごく恥ずかしい。しかし、それ以上に、この子が俺をそこまで見てくれて、しかも頼ってくれていたことが嬉しくてしょうがない。
俺の言葉を聞いて、留美は目を細めてにっこりと微笑んだ。
「……ありがと」
言いながら、留美の手の指が俺の指に絡まり、大きさの違う2人の手がぴたりとくっつく。まるで、初めからこうなることが決められていたかのような収まりの良さだった。
留美を見つめて、それから視線を前に戻す。
「……お、おう」
裏返りそうになるのを抑えながら、しどろもどろに返事をした。

× × ×

移動に時間がかかるため、何だかんだで出発地点の駅に着くと既に夕方前だった。
電車では、留美はほとんどの間くぅくぅと可愛らしい寝息を立てていた。そんな留美の肩を抱いて、うつらうつらとまどろむ時間は心地良かった。たたんたたんと電車が揺れる音が心地良い子守唄に思えて、新緑の陽気が俺と留美を包み込んでくれているような気がした。
「八幡、晩ご飯はどうする？」
住み慣れた街に戻ってしばらくのんびりと散策した後、留美が俺に尋ねた。先程から、俺と繋いだ手をしきりにぷらぷらと前後に揺らしている。なんか、すごく楽しそうだ。俺たちは見慣れない土地で思う存分楽しむというよりは、慣れた場所で楽しむという方が合っているのかもしれない。今度は近場の良いスポットを探そうと決めた。遠出はたまにで良いだろう、うん。

時計をちらりと見る。時刻は１８時。結構いい時間だ。
しかし、どうもこの言葉を言うのは気が引ける。留美は今、本当に楽しそうだ。それが申し訳ない。それでも、俺には留美を守る義務がある。義務が無くたって守るけども。
ふっと息を吐いて、留美を見る。音が鳴らないように、静かに深く息を吸った。
「そろそろ帰った方が良いと思うぞ」
「え……」
留美が心底がっかりした瞳で俺を見つめる。がっかりというか絶望という表現の方がしっくりくる。
「そんな残念そうな顔すんなって……俺だってほんとはもっと一緒に……こほんこほん」
口が滑った。留美の目がいたずらっぽく光る。やめろ、そんな目で俺の顔を見るんじゃない！
「親御さんが心配するだろ。俺はもう高校三年で、放任主義の家庭にいる男だ。だけど留美は俺とは色々と状況が違う。だから、な？」
「……」
留美が拗ねて口を尖らせる。普段の澄まし顔とのギャップで、尋常で無い程可愛い。
おお、ほっぺたを膨らませた。眉根を寄せている。
すねている、すねているぞ！
思わず、本当に思わず……。
ほっぺたを人差し指で突っついた。
ぷにっ。
「んぷっ？」
不意打ちだったためか、留美の口からごくごく小さな声が聞こえた。ちょっと高めの、ふやけた声。
「……怒るよ」
「ろれんらはい（ごめんなさい）」
怒るよと言いながら両頬をつねるのはちょっと気が早すぎやしませんかね、留美さん。

頬を解放されて、さすりながら留美を見る。留美はまだ拗ねている。
「……ご飯だとつい楽しくなって長居しちまうからな、ご飯以外であと一ヶ所だけ回るか」
妥協案を提示すると、留美がぱっと顔を上げた。溢れ出す嬉しさをどう表現したら良いのかをまだ知らなくて、どこかぎこちない――幸せの顔。
「じゃあ……もう少しお話したいから、公園に行こ？」
まるでおねだりするように、すがるように眉根を寄せて上目遣いで見つめてくる。
「……あいよ」
そんな可愛すぎる表情をしなくたって、俺はオーケーしたというのに。
どうしてくれるんだ、この動悸を。
× × ×
「……あっ」
近くにある公園に向かっている途中、留美が何かを見付けて声を上げた。
「どうした」
留美に視線を落とし、次に留美が見ている先に目をやると。
「……ランジェリー……え？」
間抜けな声が漏れてしまった。
留美が見ていたのは、女性用下着の専門店だった。多少の距離があっても存在感を放つ、ウインドウ越しに見える様々な色をした女性用下着の数々。
留美が、俺の手を引っ張った。
「八幡、見てみよう」
「やめろ、無理だ、そんなことをしたら俺は死んでしまうぞ」
「なんで……」
俺の拒絶が予想を超えていたんだろう、留美がげんなりとした顔で俺を見ている。しかし留美には分かってほしい。俺があんな女子女

子しい（読み方：「じょしじょししい」見たまんまだった）空間に飛び込んだら、5分と持たずに死んでしまう。死因は店員の、訝し気に俺を監視する視線な。
「や……第一、今日はあとは公園に行くだけだろ」
「外から見るだけだからノーカウントなの。ほら」
「あ、おい……っ」
中途半端にそれっぽいことを言って俺を動揺させつつ、俺の手をぐいぐいと引っ張っていく。巧妙な手口だった。巧妙な手口って言っちゃったよ。
留美に手を引かれて、店のショーウインドーの前に立つ。
「わぁ……っ」
スタイルの良いマネキンが身に付けた下着を見つめて、留美がため息を吐いた。大人の女性に憧れる、普通の女の子なのだと改めて感じる。下着のお店の前っていうのがちょっと刺激的すぎるけど。
――と。
「……」
留美が、下着の中の一つをじっと見つめていることに気付く。見てみると、スレンダーな体型のマネキンが白い下着を身に付けていた。フリルが付いていてぱっと見可愛らしいデザインだなと思ったのだけど、よく見ると中の女体がうっすらと透けていた。
「お、おい、留美……？」
留美はいつの間にか窓に手を付けて、その下着をじっと見つめている。
俺の問いかけに対して、留美がゆっくり振り返った。スローモーションで再生しているかのように、留美の表情が徐々に見えてくる。
振り向いた留美の顔は仄かに上気していて、息も微かに荒い。何よりも、俺を見つめる瞳の中に、今まで見たことがないくらいの艶が渦巻いている。そんな状態の留美と見つめ合っただけで、身体の奥底で何かがどくんと胎動する音が聞こえた。
留美と見つめ合ったまま、しばし固まっていると。
「……行こ？」

留美が微笑んで、再び俺の手を引いて店から離れていく。絡み合った二人の指は先程よりも熱が籠っていて、2枚の肌の境界線が曖昧になっていた。

さっきの表情が意味することは分からぬままに。

俺と留美は、公園へ向かった。

続く。

（２３）

留美と一日遊んで、最後にぷらつこうということで公園に来た。
もう夕方ということもあり、ひと気がほとんど無い。
どこか物寂しさのある空間は、一人で居たらあっと言う間に心が飲まれて、これから訪れる宵闇の中に消えてしまいそうだ。留美も同じ不安を覚えたのか、手を繋いだ二人の距離がより近くなる。
「……もう、暗くなるな」
「……うん」
少なく言葉を交わして、ゆっくりと歩く。目的地も目的も無い、そんな散歩。目的地は確かに無いけれど、目的は……？　自分が今何をしたいのか、よく分からなかった。
会話をする代わりに、繋いだ手で心を交わす。風が吹けばきゅっと握り、街灯が少なく暗いところを見かければ、二の腕が触れる程密着する。
……。
会話はない。
けれど、二人の距離がどんどん縮まっていく。
身体も――心も。
根拠は無いのに、そう、確信していた。
公園に入ってから、誰ともすれ違っていない。
二人の間の空間が、徐々に変化していく。
長い間、一枚だけ張っている「なにか」が。
ゆっくり、少しずつ、溶けていく。
×　×　×
気が付けば公園をぐるりと一周して、入り口近くまで戻ってきていた。街灯が多くなったことで留美の手の力が緩み、緊張が解れたのが分かる。俺も安心していた。
……何に対しての、緊張なんだ……？
留美も。
俺も。

何に対して、緊張してるんだ……？
「……くすっ」
不意に、留美が小さく笑ってどきりとする。
「……どうした」
「さっきの……お店のとき」
留美がそれだけ言って、俺を見てにっこりと目を細める。心臓が鷲掴みにされたような感覚に陥りながら、視線で続きを促す。
「……八幡がどぎまぎしてるの、すごい可愛かったなって」
「……っ、こんにゃろ……っ！」
留美の言葉で顔が一気に熱くなり、たまりかねて留美を抱きしめる。頭をくしゃくしゃと撫でると、俺の胸にうずまった留美が熱く呼吸を荒げた。
「あ……うぅ……っ」
「……っ」
ただ抱きしめただけだよな……？　そう思いながら、もうしばらくくしゃくしゃと撫でる。すると、ずっと俯いていた留美が、上目遣いでいたずらっぽい笑みを浮かべた。
「……それだけ？　八幡って度胸ないんだ」
「……っ」
明らかな、それでいて浅はかな挑発のはずなのに。
「……言ったな」
つい、売り言葉に買い言葉で答えてしまう。
すると、留美は目を見開き、やがてゆらりと目を細めて、妖し気に眉根を寄せた。
笑っているのか、泣いているのか、或いは他の感情を表しているのか……それは、分からない。
留美の首に右腕を回して、後ろから留美の右耳を撫でつける。
「んぁ……っ」
留美がぶるりと震える。熱く湿った吐息が鼻腔を擽り、ぞわぞわとした快感が身体を駆け抜ける。
右耳を撫でながら、今度は左耳に顔を近付ける。唇が触れるすんで

の所で止まり――ふぅぅっ、と息を吹きかけた。
「あふぁぁぁぁ……っ」
留美の声が――まるで年齢が倍ほどの、たっぷりと男を知った女のように艶を帯びる。
こんな、可憐な少女が出して良い声じゃないはずだ。
何をやっているんだ、俺は。
そう思いながら、そんなことを思いながら。
もう一度、留美の首をしっかり固定して、息を吹きかける。
「あっ、はぁぁっ、んっく、ふぅぅぅ……っ」
口を細めて息を吹きかけ、続けて口を開いて熱い息を流し込むと、留美の膝ががくがくと揺れた。
――もっと、もっと、もっと。
絶え間のない、甘露のような欲望が、とろとろと溢れ出てくる。ハマってはいけないと頭では分かっていても、我慢しがたい愉悦が身体の中を渦巻く。
唇だけは付けずに、けれど留美の身体はがっちりと固定して、何度も息を流し込む。俺が吐いた息が留美の中に流れ込んで、留美が元々持っていた自分の息を吐き出す。留美の身体が俺と言う存在に少しずつ染まっていくような気がしてたまらなくなり、留美を抱きしめる腕に力を込めすぎないようにするのが難しくなる。
「あっ、あっ、あぁっ、あぁぁぁぁ……っ」
「あ……っ？」
口を半開きにして、俺の胸へ息を吐き出し続けていた留美の膝の痙攣が止まらなくなり――遂には崩れ落ちた。抱きしめてはいたものの上下の動きを想定してはいなかったので――慌てて、留美の両脇の下に手を差し込んで支えた。
「あふぁぁぁ……っ」
敏感になっているのか、それだけの行為で留美が艶めかしい声を漏らす。ずっと俺を見つめている瞳は虚ろで、簡単にどんな色にも染めてしまえそうだ。
留美の脇を支えていると、留美が俺の頬に手を添えた。

「八幡……」
「……っ」
切なげな声で囁かれて、動きが止まる。すると留美は俺の背中に腕を回してきた。俺もそれに合わせるように、留美の背中に腕を回す。
俺の背中を包んでいる腕が、二人の距離を縮める。
留美の背中を包んでいる腕も、二人の距離を縮める。
留美は、薄く目を開けている。恥ずかしくなって目を逸らすと、
「……逸らさないで……」
と囁かれて、やむを得ず見つめ返した。
お互い、目を閉じない。
二人の唇の距離は、数ｃｍというレベルで近付く。
人との間にずっと張っていた――どれほど近付こうとも、薄くはなれど決して破れなかった膜に、ゆっくりと穴が空いていく。

――――――――っ。

「ん……っ」
留美がうっとりとした声を漏らした。
唇が熱い。
気が付けば、俺と留美の唇は重なっていた。
頭が真っ白になり、次の瞬間波のように夥しい量の感情や言葉が押し寄せてきて、またすぐ次の瞬間に真っ白になる。
混乱して、安心して、動揺して、どきどきして。
何が起きているのか、はっきり分かっている。
なのに、何が起きているのかまるで分からない。
身体中の神経が、全て唇に集中している様な感覚。
「ん……っ」
留美の唇が僅かに動く度に、触れる場所が少し変わる度に、これでいいのだろうかという疑念が湧き、すぐさま溢れ出る幸福感が疑念を薙ぎ払っていく。
留美が、俺を抱きしめる腕に力を込める。

俺は今、生まれて初めて「唇に物が触れる」という感触を実感した。
何を食べたって、何を飲んだって、そんなことを実感したことは無かったのに。
今、それを明確に意識出来た。
『……ぷはっ』
鼻で呼吸しようとしたがお互いいまいち上手く行かなかったようで、息の限界を迎えて唇を離した。
たまらなく幸せなはずなのに。
本当に俺でいいのか――などという、留美に対しても失礼な疑念が湧いてしまう。
複雑な感情の奔流に呑まれていると、留美が俺の頭をくしゃりと撫でた。
「……八幡。……また、難しいこと考えてる」
そう言って、くすりと微笑んで首を傾げる姿は、まるで聖母のようだ。
「……私、後悔なんてしないから。八幡が良いの。……八幡じゃなきゃ、いやなの」
留美の目が潤む。

「私、八幡のことが……好き」
心に、幸せが咲く。
「……っ、留美……っ」
「八幡……っ」
留美と抱きしめあって、唇を重ねる。
留美の柔らかな感情が流れ込んできて、凝り固まった心が解れて、ほどけて、溶けていく。
頬に、熱い何かが伝った。
「……ぷはっ。……え？　八幡、どうしたの？　どうして泣いてるの？」
突然の出来事に、留美が眉根を寄せて真剣に心配してくれる。
「……わりぃ、大丈夫。俺も……何でだかわかんねぇ」

答えると、留美が俺の頬に指を這わせて、涙を拭った。
「……あっち、座ろ？」
留美がベンチを指差す。その声はとても繊細で優しい。俺は無言で頷いた。
並んで腰を下ろすなり、留美が俺を抱き寄せて頭を撫でてきた。
「……すげぇ恥ずかしいんだけど」
「そ。でも嬉しいでしょ？」
「……うっせ」
答えると、留美がくすりと笑う。
「八幡は泣き虫だね……」
留美の言葉に、どきりとする。
別に俺は、しょっちゅう泣いている訳ではない。
けれど、これからの人生に大きく関わるくらい重要な場面では――確かに、泣いたことがあった。
きっと、留美の前で泣いたのも……それくらい、重要なことなんだろう。
「……どうだかな」
軽い調子で答えて、留美を見つめる。留美の瞳は柔らかい光を湛えている。俺の心のもやもやを、綺麗に包み込んでくれそうな、そんな光。
「……留美」
顔を近付けると、留美が嬉しそうに目を細めた。
「……ん、素直でよろしい」
留美はお姉さんぶった口調で答えると、今度は目を閉じた。
そのまま動きを止めた留美の唇を――今度は俺が迎えに行った。
続く。

（２４）

穴があったら、入りたい。

そしてあわよくば、そこで８年くらい過ごして、ほとぼりが冷めるまで引きこもりたい。

それはもう、全力で。

「……」

留美と公園で初めて口付けをした、その帰り道。

俺は、脳内で大パニックを起こしていた。

別にキスがいやだったという訳ではない。むしろしたかった。実際やってみて初めて、俺はずっと留美とこういうことがしたかったんだと実感した。恥ずかしかったけれど、後悔など全くしていない。

それよりも、それよりもだ。

なんで俺、泣いてるのん？　なんなの？　ばかなの？

その一点が、俺の羞恥心を煽り続けている。間違いなく、俺の黒歴史に新たな１ページが刻まれた。

隣を歩く留美をちらりと見やる。俯いているが、繋いだ手はしっかり握っていて、時折にぎにぎとしてくる。留美は留美で恥ずかしいんだろう。

公園から留美の家までは、そこまで離れていなかった。その道程を二人並んでゆっくり歩いて行く。

寒ささえ感じていたはずの夜が、涼しいを通り越して今は少し暑くさえ感じる。

身体的にも、精神的にも。

「……八幡。手、汗かいてる。暑いの？」

いつぶりか分からないくらいに留美が発した言葉は、俺の身を案じてのものだった。

「あ、や、まあ、うん、暑い……な。さっきまでは寒いくらいだったんだけど」

「……そ」

留美がそっけなく答えて、また俯く。微かに見えた頬はうっすらと

赤い。
でも、まあ、なんだ。
年上、それも明らかに年上の俺が、気を遣わなくてどうするっていう話だよな。
穴があった場合の願望を冒頭に書いてどうする。冒頭って言っちゃったよ。
うん、そうだそうだ。年上の力の見せどころはここじゃないか。
別にここで俺が大人の振る舞い方をすることで、さっき泣いたアレな出来事を帳消しにしたいとかそんな浅ましいことを考えてる訳じゃないよ？　本当だよ？　誰に言ってんだろ俺。
よし。
やるぞ。
こほんこほん。
「あー、留美。あひたはどうする？」
噛んだ。
そうだ、京都で死のう。
語感重視で自殺宣言。
留美を見る。俺から顔を背けて、ふるふる震えてる。絶対笑ってるだろこいつ……。
「……あ、明日、は、うん、その、ふふ……予定が、ふふ、あるから、ごめん……ふふふふ……。明後日なら、ふふ、大丈夫なんだけど、八幡、明後日は会え……ふ、ふふ……会える……？」
「……」
どんだけツボってんだよ。
しかしなんだ、留美がこれだけ笑うのを見るのは初めてな気がする。すげぇ可愛い……いかん、また噛んでしまいそうだ。
留美が俺のセンス溢れるボケ（噛んだだけ）に打ち震えていると、留美の家が見えてきた。
家の前まで来て、留美と正面から向き直り、頭をぽんぽんと撫でる。
長い一日だった。
それでいて、刺激的な一日だった。

そして――忘れられない一日だった。
「……こほん」
まずは小さく咳払い。
「明後日は俺も空いてる。ていうか基本俺は暇だからな。いつでも良いぞ」
「ぼっちだから？」
「そう、ぼっちだからだ」
にやりと笑って答えると、留美が口元に手を当て、ふふっ……と笑った。
「八幡。私たち、基本的にぼっちだけど……二人なら、もう、違うよね」
そう言って、留美が俺の手を握る。小さな手なのに、包み込むような安心感があった。
「そうだな。あと、その、なんだ……これから、よろしくな」
ここは目を逸らしてはいけないと思い、照れながらも何とかして留美を見つめながら話す。
俺の言葉に、留美は目を細めて幸せそうに笑った。
「……ん。よろしく」
留美が柔らかな声音で答えると……顔を上げて、口を閉じて目を閉じた。
……え、ここで？
「えっと、あの、留美さん？」
思わずへりくだるが、へんじはない。ただのてんしのようだ。
周り、特に目の前の鶴見家のドアや窓に猛烈な勢いで視線を巡らせる。ああ、今こそ円の使いどころなのに！　周囲３０ｍくらいに念を張り巡らせたいのに！
誰の気配も無いことを確認して、留美の二の腕を掴むと、目を閉じたままぴくりと震えた。
「……んっ」
そっと唇を重ねる。特にそこから何かする訳ではないが、たったこれだけの行為が、幸せを身体のそこから溢れ出させてくれる。「触れるか触れないかの距離」と「０距離――つまり、触れている」とい

う状態は、何故ここまで違うのか。きっと、人の身体の表面には、互いの感情を伝播させる何かがあるんだろう。だから、何か意識した訳ではなくとも、留美と唇を合わせただけで色んなことが伝わる……ような気がする。
「……ぷはっ。……八幡……八幡……っ」
留美が俺の胸板におでこをこすりつけて、甘えた表情で上目遣いをする。今まで見てきた表情とはまた違う魅力に、場所も忘れてどうにかしてしまいそうになる。
「……いつどこで会うかは、またこの後連絡する。電話でいいか？」
「ん……わかった。……八幡、本当に今日は、これで終わり？」
とろんとした表情で、留美が首を傾げる。
「……っ！」
きゃー！　きゃー！　ぎゃー！
頭の中で、何かが最大音量で鳴っている。よく耳を凝らすと「あかんでー！　これ以上はあかんでー！」「いいや、チャンスや！　やってまえ！　更に踏み込んでまえ！」という、天使と悪魔の言い争いみたいな心の声であることに気付いた。なんでお前ら似非関西弁なんだよ。あとこの場合、どっちが天使なのか本当に分からない。
頭をぶんぶんと振って、欲望を振り切る。今したいことと、本当にしたいことは、きっと少しだけ違う。
「……『今日は』な。……ゆっくり、やってこう」
何とか我慢して、留美の肩を掴んで身体を離す。こんな小さな身体の少女が、俺を魅了して放さない強烈な魅力を備えていると思うと、不思議な気持ちだった。
「……うん、わかった。じゃあ、今日はありがとう、八幡」
「おう、こちらこ……っ!?」
留美が俺の首に腕を回すと、不意打ちのキスをした。
「お、お前、なぁ……っ」
「お前じゃない。留美」
留美が口からちろりと赤い舌を覗かせて、楽しそうに微笑む。
「じゃあね、八幡」

「お、おう、じゃあな」
固まっている俺を置いて、留美は小走りで駆けていった。
暗い道に一人残されるが、それでも不思議と寂しくはない。
「……この後、電話するんだしな。それもそうか、うん」
何のためなのかも分からない独り言を呟いて、帰り道を歩き出した。

× × ×

家のドアを開けて、閉めると同時に背中をドアに付ける。
ただいまを言うのも忘れて、胸を押さえる。
別れる間際のことが、その前の――今日一日のことが、頭の中をぐるぐると巡る。
そうだ、私は、八幡を選んだんだ。
そして八幡も――私を選んでくれた。
私の前で二度も涙を見せてくれたことが、何よりも嬉しい。少しずつ、彼の心を溶かしていきたい。
「……汗、かいてる……」
自分の身体が汗ばんでいることに驚き、笑う。心臓が、信じられない程の速さで鳴っていた。
ああ、そろそろただいまを言わなきゃ――と思っていると。
「留美、どうしたの？　ただいまも言わないで」
母がリビングから顔を出して、心配そうな表情を浮かべた。
「なんでもない。言うのが遅れてごめん……ただいま」
この動揺が知られたくなくて、胸に当てていた手を後ろに回す。
すると、母が私を見て――にっこりと笑った。
「……留美。あなた……今日、何か良いことあったでしょう」
「……～～～～っ」
母の言葉に、一気に身体が熱くなる。
「な、なんでもない……なんでもないからっ」
急いで靴を脱いで、母の横をすり抜ける。
「留美、手洗いうがいはきちんとしなさいね。ご飯出来てるから。どうする、私がいない方がいいかしら？　つい聞きたくなっちゃった

の。ごめんね」
「……」
母の言葉に、ぴたりと足を止める。
「……いい、一緒に食べる。せっかくお母さんが作ってくれたんだし。……でも、あんまり八幡とのことは追及しないで……」
振り返って言うと、母が優しい笑みを浮かべた。幼い頃から見慣れた、穏やかな顔。
「わかった。それじゃ、洗面所にいってらっしゃい」
「うん」
八幡と繋いでいた手を洗うことに少なからず抵抗を覚えながら、私は洗面所に向かった。

× × ×

食事が終わって、お風呂にも入って、部屋に戻る。
「……」
ベッドに力無く横たわって、枕に顔をうずめる。
「……追求しないって、言ったのに……」
思わず不満を独り言ちた。
母は食事中、直接的に八幡とのことを聞いてきた訳ではない。
けど、テレビを見ながら初めは遠回しに話を振って、それが結局今日のことについての質問になる……というパターンが何回もあって、何だかんだで根掘り葉掘り聞かれてしまった。キスのことこそ言ってはいないけど、あれはバレてる。絶対バレてる。
枕に顔をうずめながら、八幡の胸の温かさを思い出す。
どれだけ昂ぶっていても、私を抱きしめる腕は常に、私を壊さないように必死で力を抑えてくれていた。
別れ際も、私が名残惜しんだ時……何かしそうになるのを必死で我慢していた。
私のことを、大事にしてくれてるんだ。
もしかしたら、母に手紙で何か言われたのかもしれない。
けれど、それが無かったとしても、八幡は私に優しくしてくれる。
そう確信している。

だって今までも、ずっと優しかったから――。
「……～～～～～っ」
枕を抱きしめて、ベッドの上をごろごろ転がった。
――どすっ。
「……いっ……たぁ……っ」
転がり過ぎて、壁に肩をぶつけてしまった。
さすりながら、明日のことを考える。
明日は、八幡にも言った……中学で仲良くなった子とのお出かけだ。彼女から誘ってくれて、二人でのんびり遊んでみようということになった。今までそんな経験は無かったけれど、彼女と居ると本当に気が楽だから、何とでもなるだろう。
……もし、恋の話とか、そういう話になったら……私は、一体どんな顔をするんだろう。
頬に手を触れる。
自分でもびっくりするくらい、ゆるゆるになっていた。
「……八幡……」
つい発してしまった言葉が、枕の中に溶けて消える。
――もし、このベッドで、八幡をこんな風に呼ぶ日が来たら……？
「……～～～～～～～～っ！」
枕を抱いて、もう一度転がる。今度は壁にぶつからないように。
「……うぅ……っ」
私は……こんなことを考えてしまうなんて、エッチな子なのかな。それとも、これくらいが普通なのかな。
「……明日、あの子に聞いてみようかな」
ぽそりと呟いて、小さな決意をする。
寝る前に……スマホを手に取って、電話をかけた。
つい名前を呟いてしまった、優しい人に。
『もしもし……』
気だるげで眠そうな声が、可愛く感じてしまう。
『出るの遅いよ』
『や、だってもう割と遅いだろ……眠いんだよ』

そんな会話を交わしながら、明後日の話をする。
今日は、とても楽しかった。
もしかしたら、今までの人生で一番だったかもしれない。
明日も、きっと楽しい一日になる。
そして明後日は、きっとまた、どうしようもないくらい幸せな一日になる。
私はまだ幼くて、何も知らない。
けれど、今胸に抱いている気持ちが恋だということは、はっきりと実感している。
早く、八幡に会いたい。
「おやすみ、八幡」
電話でも言った言葉を、私以外誰もいない部屋で一人呟いて。
ひねくれ者の、優しいあの人の顔を思い浮かべながら、電気を消した。

続く。

（２５）

八幡とデートをした、次の日。

私は中学のクラスで仲良くなった子と遊びに出かけた。

といってもそんなに積極的に遠出する訳ではなく、よく知っている駅前をぷらぷらするような、気ままな流れ。

たくさん話す訳じゃないけれど、お互い気を許してるから黙ってても居心地が良い。この空気は八幡と居る時とどこか似ていて、自然と頬が緩んでしまった。

「留美ちゃんはさ」

お昼ご飯を食べようとマックに行き、対面で座ってコーヒーを飲んでいると、彼女――綾乃（あやの）が、ふと改まった表情で話を切り出してきた。ここまでは学校の話やお互いの趣味の話くらいしかしてなかったから、一体どんな話を振られるのかと身構えてしまう。

綾乃は胸に手を当ててすーはーと深呼吸をする。その拍子にショートカットの綺麗な黒髪がふわりと揺れて、私より少し大きいと思われる胸が上下した。……こんなこと、八幡と話す前だったら全然考えもしなかったのに。

綾乃が手を膝に置いて、私を見つめる。くりっとした大きな瞳が、純粋な好奇心を携えて私を捉えた。

「留美ちゃんは……好きな人、いるの？」

「……っ」

来たか。

この子は奥手そうだから、きっとこの話題を振るとしても、もっと遠回しに来るんじゃないかと思っていたけど……そんな予想に反して、直球も直球で来た。

動揺でむせそうになったけど何とか堪えて、落ち着いた素振りを保ちながらコーヒーをテーブルに置く。

こほんこほん、と咳払いをした。

「んー……どうだろ」

「留美ちゃん、顔真っ赤だよ？」

「……」
……この気持ちは何なんだろう。こんなことを言われては普通腹が立ちそうなものだけど、如何せん、綾乃があまりにも純粋な眼差しで見つめてくるから怒る気にもならない。
「……そういう綾乃はどうなの？」
動揺をこれ以上気取らせまいと、綾乃に話を振る。奥手だろうから、きっとそういう人がいたとしてもいなかったとしても、私以上に顔が真っ赤になるにちがいない。
私が質問すると、綾乃の頬が仄かに赤くなった。
「……えへへへ……う、うん、そういう人、いるよ。とっても好きな人」
「……へ……？」
するりと出てきた返事に、頭の中が真っ白になる。
「え、綾乃、ええ？　ど、どんな人？　どんな人なの？」
「る、留美ちゃん？　顔近いよ……っ」
「あ、ご、ごめん……」
あまりにもびっくりしすぎて、気付けばテーブルを掴んで身を乗り出していた。小さなテーブルでこんなことをすれば、綾乃との距離がほとんど無くなってしまうというのに。
「あうぅ……」
綾乃はよっぽどびっくりしたのか、胸に手を重ねてぷるぷると震えている。うーん、なるほど、女の私から見てもぞくぞくしちゃうし、男の人から見たら相当くるんだろうな。
……私、何分析してるんだろう。八幡のせいだな、うん。そういうことにしておこう。
席に座り直して、やや前傾で綾乃を見つめる。ようやく落ち着いた綾乃が、こほんと咳払いして、てへへと照れくさそうに笑いながら、人差し指で頬をぽりぽりと掻いた。
「えっとね……年上の人、なんだけど。……5つ上の人なんだ」
「え」
「る、留美ちゃん、近い、近いってば……」
「ご、ごめん……」

あまりの出来事に激しく動揺した。綾乃が好きな人も年上……？
しかも5つ上ってことは、八幡と同い年……？
「そ、その人とは……どこで知り合ったの？」
「う、うん……えっとね、近所の幼馴染みで、小さい時から遊んでくれてたの。ずっとお兄ちゃんみたいに思ってたんだけど……小学校の終わりくらいから、今までと違う感情を抱いてるのに気付いて、それが恋愛感情なんだって気付いたの。それで、この学校に入学するちょっと前に、わたしからデートに誘って……告白したの」
「え、え、え？」
ちょっと待って、情報量が多すぎる。
「そ、それ、は……成功、したの？」
声が上ずるのを直すのさえ忘れて、綾乃を質問攻めにする。いくらなんでも、5つ差では早々成就するものではないと思う。……私が言えたものではないんだけど。
私の質問に、綾乃は顔を手で隠してきゃーきゃーと可愛い声を上げながら首を振った。……恋する乙女っていうのは、こういう子のことを言うんじゃないんだろうか。八幡、こういう方が好きだったりするのかな……明日聞いてみよう。
「そ、それで、その人とは……」
「待った、留美ちゃんストップ。今度はわたしの番だよ」
綾乃が身を乗り出す私の目の前に手を付き出して、にやりと笑う。流石にこれだけ聞いておいて、私が逃げる訳にはいかない。座り直して、ゆっくりと目を閉じて彼の顔を浮かべた。緩む頬を抑えながら目を開けて、綾乃を見つめる。
「……そう、だよね。……本当に偶然なんだけど、私も、綾乃と同じ……5つ上の人」
最後の方はちゃんと声になっていたかどうかさえ分からない声で呟いた。
すると、
「へ……？」
綾乃が何とも間抜けな声を上げて、目をぱちくりさせた。きょとん

とした目をしたままコーラを口に含んで、「けふっ！　かふっ！」とむせている。何でこの子はむせている時まで可愛いんだろう。
「え、る、留美ちゃん、それは……片思い？　それとも、それとも……」
「……『それとも』の方……かな」
「きゃー！　きゃー！　きゃー！」
「っ!?」
　私が顔を背けて答えるなり、綾乃が私の両手を握ってぶんぶんと上下に振った。掴まれる寸前に、反射的にコーヒーを横にどけておいて良かった……。
「あ、綾乃、ちょっと、ここ、お店だよ……っ」
「あ、そ、そうだよね、ごめん！　コングラチュレーション！」
「なんで英語なの……」
　おめでとう、っていう意味だっけ。
　綾乃は両頬に手を当てて、幸せいっぱいな表情を浮かべている。普段は結構物静かでおっとりとしているのに、今はまるで別の女の子を見ているようだ。恋は女を変えるというのは本当なのかもしれない。
　綾乃も――私も。
　綾乃は胸に手を当ててすーはーと深く呼吸をすると、ぽっと頬を赤らめて私を見つめた。
「その……留美ちゃんは、そのお兄さんと……どこまでいったの？」
「えっ!?」
　予想していなかった質問にぎょっとする。
「あ、ご、ごめんね？　つい、気になって。だって、こんな偶然そうあることじゃないし……」
「そ、そうだね、うん……あ、綾乃は、どこまでいったの？」
　質問を質問で返すのは良くないとは思うんだけど、こんなこと恥ずかしくてすんなりと答えることなんて出来ない。
　私の問いに、綾乃の表情が変化する。恥ずかしがっていながらも、その表情はどこか大人びた……私の知らない、綾乃の顔が出てくる。
「えっとね……その、お、お口で……」
「お口……って、ああ、き、キスのこと？」

言葉にするのは恥ずかしいとは思うけど、お口で何ていう言い方があるんだと驚く。
あ、ち、ちがうの、ごめんね――と綾乃が首を振って、私はきょとんとしてしまった。
綾乃は話すのを躊躇した後、ぺろりと舌なめずりをした。私の知らない綾乃の顔がはっきりと見えて、どくんと心臓が跳ねる。
「キスじゃなくて……正確に言えば、それだけじゃなくて、その……彼のものを、お口で咥えてあげてるの」
「え」
一瞬、世界が静止したような気がした。
奥手そうな綾乃が、そんなことを……？
「あ、綾乃、その話、場所を移して、もっと詳しく聞かせて？」
「う、うん、いいよ？」
いてもたってもいられなくなり、立ち上がって綾乃を促す。
自分の行動に驚くけれど、それ以上に今は知りたいことが沢山あった。
この子は、私が知らなかっただけで、人生の先輩なんだ。教われることがいっぱいある。
お店を出て、私は急ぎ足で歩きながら、二人でじっくり話せる場所を探し始めた。
「る、留美ちゃん、速いよー！　待ってー！」
いつものおっとりとした調子で私を追いかける綾乃が、今までとは違うように見える。
いっぱい話を聞いて、勉強しよう。
八幡の笑顔が、もっと見られるように。

続く。

（２６）

中学校に入って初めて出来た友達、綾乃。
彼女は、どうやら私とすごく似た状況にあって、しかも私の先輩と言えるようなことをしているみたいだ。
だから、私は綾乃から色々と話を聞くことにした。
出来れば、人目につかない場所で。

×　×　×

「えーっと、ドリンクバー、ですか？　えっと、あ、はい、ありでお願いします。え、アイスかホットかですか？　えっと、じゃあ、留美ちゃん、アイスでいい？　あ、はい、じゃあ２人ともアイスで。あ、はい、マイクがこれ……はい、あ、はい、ありがとうございます……」
カウンターでほんわかとする問答を終えた綾乃が、半べそをかきながら戻ってきた。
「もう……留美ちゃん、助けてよぉ……」
「ご、ごめん、何か……綾乃が慌ててるのがすごく可愛くて……」
「ぐすっ……何それ……」
すっかり萎んでしまった綾乃の頭を撫でて、伝票に書かれた番号の部屋に移動する。
私と綾乃は、カラオケ店に来ていた。
何だかんだで、本当に人に話を聞かれずにいられる場所というのはそうあるものじゃない。マックを出た後しばらく彷徨って、結局カラオケの部屋で話そうということで落ち着いた。
「わたし、カラオケに来たことはあるけど、その時はリーダーっぽい子が全部やってくれたから……いざ自分でやるとなると、分かんないもんだね」
綾乃がてへへと笑いながら言う。……私もあるにはあるけど、あの頃を思い出すと少し複雑な気持ちになるからやめておこう。あの日々があったから、八幡と出会えたんだけれど。
飲み物をコップに入れて、指定された番号の部屋のドアを開ける。入口のすぐ横にテレビがあり、コの字に椅子が置かれた狭い空間が私

たちを待っていた。こういう場所は煙草の匂いが残っている印象が強いんだけど、この部屋は何の匂いもしない。たまたま煙草を吸う人がいなかったのか、掃除をきちんとしているかなんだろうと思う。
「わぁ……何だか……」
綾乃が部屋を見回しながら何かを言いかける。その顔には不満は浮かんでいないどころか、どこかわくわくした風でさえある。きっと、同じことを考えているんだろう。
「……秘密の話をするのにぴったりだなって、思ったんでしょ？」
そう囁くと、綾乃が嬉しそうに笑った。周りに光を分け与えてくれるような、向日葵みたいな笑顔。私はこの笑顔がとても好き。
「うん、そうそう。……えへへ、何か楽しくなってきたな……」
綾乃がうきうきした様子で椅子に座り、持ってきたコップや伝票、マイクを置く。楽しくなったからと言って歌い始める訳ではなく、マイクはかごに入れたままだった。どうやら本題はきちんと覚えてくれているみたい。
何となく、綾乃の対面ではなく隣に座る。会話を交わすことなく、しばらくの間同じ壁を見つめる。オードブルなどの食べ物のメニューが貼り出されていて、バカ騒ぎをする人がいたのか端の方がやぶけていた。
テレビの音量をミュートする。両膝を綾乃の方に傾けて、澄んだ目をじっと見つめた。
「その……あ、綾乃は、どんな風に、その……してる、の？」
私の問いかけに、綾乃がぽっと頬を赤らめる。
「え、えっと、それは……どこから話せばいいかな？」
両手で顔を覆って、ちらりと目だけ覗かせる。可愛い年下の女の子がこんな仕草を見せたら、本当にたまらないんじゃないかなと思う。……こういうのが好きなのか、明日、八幡に聞いてみよう。
「じゃあ、その……キスを、する所から……お口、で、する所までの、流れ、を、くわ、しく……っ」
言いながら、私も両手で顔を覆ってしまった。あまりにも恥ずかしくて。

「はわわ……留美ちゃん、可愛いよ……っ」
「……そういうの、いいから……っ」
綾乃からの思わぬ攻撃に、更に恥ずかしくなってしまう。おっとりしてるけどお世辞を知らない子なので、こういった言葉が純粋な本音であることが分かってしまい、大きな好意からの逃げ場がない。私はまだ、人から向けられる好意というものそのものに慣れていないのかもしれない。
ちらりと指の間から綾乃を覗き見ると、照れくさそうに頬をぽりぽりとかいて、前方の壁を見つめながら喋り始めた。
「えっとね、いつも週末にデートするんだ。平日は彼が忙しくて中々会えないから……」
綾乃が話す「彼」という言葉に、心臓が跳ね上がる。
「それでね、家が近いし昔から遊んでたから、お互いの家にも気兼ねなく行けるの。だから、なるべく朝早くからデートして、まだ明るいうちにどっちかの家に行って……部屋で、２人っきりになるの」
「そ、それで……？」
心臓がやかましく鳴り続ける。気心の知れた目の前の女の子が、私の知らない世界を知っていて、それを私に伝えようとしている。そう思うだけで、どきどきしすぎて心臓が爆発してしまいそうだ。
「それで……大抵、ベッドに横並びに座るの。最初はデートの延長で何でもない話を続けて、段々と、どちらからともなく近寄っていくの。それで、彼がわたしの肩を抱いて、一気に身体が密着するんだ。
男の人の身体って、がっしりしてるんだなって思う。わたし、二の腕を抱きしめられただけでもう、ぽーっとしちゃうの」
綾乃の言葉で、八幡に抱きしめられた時の感覚を思い出して身体が疼く。
それでね――と、綾乃が言葉を続ける。声がしっとりとしたものに変わったことに気付いた。
「初めは、唇を重ねるだけの優しいキスをするの。
でも、段々彼の舌がわたしの唇の合わせ目をなぞってこじ開けてきて、口の中に舌を入れてくるの。

そこからが大変で、頬の内側とかわたしの舌とか、色んな所を好き放題舐めてくるんだ。
しかもすごくねちっこくて、時間が経つごとに頭がくらくらしてくるの」
綾乃がオレンジジュースを口に運ぶ。彼女の喉がジュースをこくりと飲み込む姿に、思わず見入ってしまった。
「で、キスしてる内に彼がわたしをゆっくりベッドに押し倒すんだ。それでわたしの身体を包むように抱きしめて、絶対逃げられないようにするの。
心臓がばくばく言ってるのを感じてると、彼がわたしの口の中に唾液を流し込んでくるんだ。
いくら飲み込んでも流し込むのをやめてくれなくて、わたしが苦しくてぶるぶる震え出すとようやく解放してくれるの」
綾乃の目が、妖しい光を灯す。
この子はもう、自分の中に女の顔を見出してるんだ。知ってしまっているんだ。
「口が離れると2人の間に糸が引いてて、それが全部下にいるわたしの口に流れ込んでくるの。
それを頑張って全部舐めとると、彼はわたしの頭を優しく撫でてくれて……今度は彼があぐらをかいて、わたしをその上に座らせるの。
わたしは彼に足を絡ませて、身体をぎゅっとくっつけて、またキスをするんだ。今度はわたしからもいっぱい舌を絡めながら」
綾乃が、うっとりとした顔で頬に手を当てる。きっと、その「彼」との行為を生々しく思い出してるんだろう。私は、彼女の話を聞いただけで、八幡との行為を想像してしまって身体がおかしな熱を灯し始めていた。
「どれだけの間そうしてたかも忘れるくらいの間キスをしたら……彼がベッドの横に立って、チャックを開けて……その、あれを取り出すの」
「……っ」
綾乃の言葉に、ごくりと息を呑み込んだ。

「私はベッドの上に座って、彼のものを目の前で見つめるの。
最近温かくなってきたから、その……部屋に行く頃には、大抵彼のそこは蒸れてて、すごく濃い匂いがするんだけど……その、わたし、結構、その匂いが好きみたいで……」
「……へ？」
「……あ、ご、ごめん、その、わたし何言って……あぅ……で、でも、好きなの。分かんないけど……好き……なの」
顔を真っ赤にしながらも、はっきりと私にその意志を伝える綾乃。この子に対する認識が、どんどん変わっていく……いや、変わるというよりは、広がるという言い方の方が正しいのかもしれない。
「初めは手で恐る恐る触ってたんだけど……その、最近はいきなり咥え込むんだ」
「え、う、うそ、ほんとに？」
「う、うん……彼のものって、おっきくなった時でも、その、ちょっと被ってるから……それを、唇で締めてゆっくり剥いてあげるの。
口の中にしょっぱい味と男の人の匂いが広がって、わたし、もうこの辺りから意識が朦朧としちゃうんだ」
「うわ、わ、わ……っ」
頭の中で、八幡との行為をはっきりと想像してしまって、どうにかなってしまいそうだ。
「口がちっちゃいから、なるべく、その……先っぽの部分を唇で締めてあげたり、割れ目を舌でつついたり、カリ……っていうのかな？　そこをねっとりと舐めたりして……あ、こ、これは彼に言われてやるようになったんだからね!?
初めはわたしも全然分かんなかったんだけど……段々、彼が気持ち良くなってくれてるのが分かると楽しくなっちゃって、色々と勉強するようになって……」
綾乃が口を手で押さえた。身体がぶるぶると震えている。頬が紅潮していて、明らかに興奮しているのが分かった。
「彼が出そうになると、最後だけ彼がわたしの頭を掴んで、奥まで咥えさせるの。最初はすごく苦しかったんだけど、最近は苦しい中にも気

持ち良いって感情が芽生えちゃって……わ、わたし、やばいかな？
大丈夫かな？」
「う、ううん、大丈夫。いいと思う」
大丈夫じゃない気もしたけれど、今は話の続きが聞きたくてしょうがない。
「それで、喉奥に彼のものをぐりぐりこすりつけられた状態で、わたしの喉にいっぱい出されて……その瞬間、いつも頭が真っ白になっちゃうんだ。
全部飲み込むまで彼はわたしの顔を離してくれないの。ゼリーみたいに濃いのをごくごく飲み込む度に、わたしの身体が彼に染まっているような感覚に囚われるんだ。
それで全部飲み込むと、彼はわたしを解放して『よくやったね』って。『気持ち良かった、最高だった』って言ってくれるの。そしたら、気持ちがふわぁっと軽くなって、幸せな気持ちになって……彼のことを、もっと好きになっちゃう。……こんな、感じだよ」
綾乃がひと息つく。私は何も、感想が話せずにいた。
「あ、ありがとう……ん？」
「どうしたの、留美ちゃん？」
この部屋に入ってから、綾乃は私に話をして、私は綾乃の話を聞いていただけだ。
それだけのはずなのに、何だか部屋に妙な匂いが満ちている。
「ん、わかんないけど……何か匂いが……あ」
何が原因かが分かってしまい、口を噤んだ。
私だけなのか。
それとも、綾乃もなのか。
それは分からないけれど……とにかく、これは死ぬ程恥ずかしい。話には出さないでおこう。
「留美ちゃん、本当に大丈夫？」
「ん、大丈夫……。綾乃、お話ありがとうね。すごく……参考になった」
「えへへ……それなら良かった」

綾乃の笑顔は、よく見知ったいつもの素敵な笑顔だった。

×　×　×

その後、私たちは普通にカラオケをした。せっかく来たんだし歌わなきゃもったいない……なんて言い方を綾乃はしたんだけれど。

いざ始めてみると……2人ともこういったことに不慣れにも程があって、結局2人で一緒に歌ってばかりだった。

そうして一日中遊んで、綾乃と別れて家路につく。

リビングで母と軽く会話をして、部屋に行く。帰り道、着信が来ていたけど電車の中にいて返せずにいた人に電話をかけた。

『もしもし』

聞き慣れた気だるげな声に頬が緩む。

『もしもし、明日は7時集合だからね』

『や、なんで集合が2時間早まってんだよ。どこに行こうってんだ』

『うそうそ。ちゃんと八幡が集合時刻を覚えてるか試そうとしたの』

『俺、どんだけ信用されてないんだよ……』

『ふふ、それで明日なんだけど――』

……こんな、他愛も無いやりとりをしばらく続けて、八幡との電話を切った。

――ああ、だめだ。

綾乃の話が、頭の中をぐるぐる回る。

明日、八幡と楽しく話せるかな。

明日、八幡と沢山手を繋げるかな。

明日、八幡と……キス、出来るかな。

明日、八幡と――

「……う～～～～～～……っ」

うつ伏せで枕に顔をうずめて、ベッドの上で足をばたつかせる。

……先は、まだまだ長いみたいだ。

続く。

（２７）

ゴールデンウィークの３日目。

初日に留美と出かけて色々（以下略）あって、一日置いてもう一度会おうとしている。一昨日の出来事が出来事だった為に、正直すぐにでも会いたいと思っていたけれど昨日は会うことが出来なかった。留美は用事があったからしょうがない。

今日は近場をぷらぷらするつもりで、特に何もプランは決めていない。本当はもっと調べようとしていたけれど、留美と昨日電話した時に「何も調べなくて良いからね？　むしろ調べちゃだめ」と言われてしまった。あそこまで言われてしまっては、流石に調べることは出来ない。

時刻は午前８時半。待ち合わせ場所のショッピングモールの入口にもうすぐ着くところだ。

「……ん？」

どの辺りなら分かりやすいかな……と考えていると、ふと、道行く人がちらちらと何かを見ていることに気付いた。特に男が視線をよく向けている印象。

何事かと思い視線の先を辿ると、思わずにやけそうになってしまった。

道行く人の視線を吸い寄せていたのは、留美だった。

薄緑のカーディガンを羽織って、下は黒のロングスカート。時折そよぐ風がカーディガンとスカートをたなびかせて、集まる視線の密度が増す。太陽が眩しいのか、留美は時折目を細めて、不安げに口元をもにょもにょと動かして辺りに視線を巡らせていた。

物憂げに吐いたため息にさえ魅力を感じる。

美少女が佇む姿に、俺はただただ、俺は見惚れていた。本当に俺を待ってくれているのかと疑ってしまう程に、留美の存在は行き交う人の中で際立っていた。

雑踏の中で思わず足を止めて留美に魅入っていると、留美と目が合った。はっと目を見開いて俺を見つめる。

「おはよう。わりぃ、待ってたか」
慌てて小走りで近寄ると、留美がジト目を向けてきた。
「おはよう。私が早く来ちゃっただけだから、それは大丈夫。……それより、何ですぐに来てくれなかったの？　立ち止まってたでしょ」
言って、留美が通行人に視線を巡らせる。今なお集める注目は、留美にとって居心地の悪いもののようだ。すぐにでも傍に来て、無遠慮な目から守るべきだった。
「……それは本当にすまん。つい見惚れて……あ」
「え……」
ぽろりと、本音を溢してしまった。
「……」
「……」
見つめ合ったまま、2人とも黙る。時間差で、留美の顔が見る見る赤くなった。1人でいるときとはまるで違う魅力が顔を出して、心臓がとくんと脈打つ。俺はこっちの方が好きだな、なんて思いながら、がしがしと頭を掻く。
「……えっと、その、なんだ、……行くか」
「……うん」
留美が俯いて、俺の袖を摘まむ。こちらからはあまり表情は見えないが、どうやら機嫌は直してくれたようだ。
そっと手を握ると、留美はゆっくりと顔を上げて微笑んだ。
見慣れた街の雑踏に、綺麗な花がふわりと咲いた。

×　×　×

本当にぷらぷらと歩き回る。気紛れにウインドウショッピングをしたり、ゲーセンに行ってみたり、自由気ままに。
お互い外出に慣れていないからか、どこに行ってもその場所に合った楽しみ方というのがあまり出来ない。なんともぎこちない2人だ。
しかし、それでも。
どこへ行っても、留美は優し気に笑ってくれる。それが嬉しくてたまらない。どうやら俺にとって、留美に会えなかった1日の大きさは想像以上に大きかったようだ。

「あ、八幡。あれ食べたい」
留美が俺の手の甲をぺちぺちと叩いた。留美が指差す先にあるのはクレープ屋だ。
「ん、良いぞ。買うか」
俺の言葉に頷いて、留美が財布を取り出す。
「や、ここは、な？」
それとなく言うと、留美がむっと片頬を膨らませた。
「……そういうの、大丈夫。八幡は優しすぎ」
「む……」
留美の言葉に、どうしたものかと考える。
「……中1と高3では小遣いが違う。これでどうだ？　俺がちょっと多めに払うとかでもいいから。義務とかじゃなくて、俺がこうしたいんだよ。……どうだ？」
試しに言ってみると、留美は顎に手を当てて、ふむと頷いた。
「……それなら、まあ、納得は出来る」
留美の言葉に、ほっと息を吐いた。
クレープ屋に並んでいる間ずっとそんなやりとりをしていると、気が付けば一番前に来ていた。店員の女性2人がにこにことこちらを見ている。
「うふふ……初々しいですね～！」
「え、あ、はあ、ども」
あっさりと2人の関係を見透かされた。
正直、見た目から考えれば……良くて兄妹悪くて通報もの（語感は良い）だと思っていたんだけど。これが女の勘ってやつなんだろうか。
「ああ……可愛い……汚れを知らない純粋な瞳……ああ……っ」
すぐ隣のメガネをかけた女の人が、何やら妖しい目で留美を見ている。よだれ垂らしてるのは気のせい？　留美が俺の腕を強く抱いた。警戒心丸出しじゃん。
「トッピングは如何なさいますか？」
正常な方の店員（失礼）に聞かれて、メニューを眺める。

「えーっと、じゃあこのダブルクリームチョコで。留美はどうする」
「ん……私も同じので」
「はーい、かしこまりましたー」
俺たちが注文をすると、店員が元気よく返事をした。快活な笑顔は見ているだけで活力を貰える。
メガネをかけた危ない店員（失礼……でもないか）がスピーディーに作業をしながら、時折留美を見て怪しげな笑みを浮かべる。
「うふふ……クリーム……可愛い女の子の口に……白いクリームがはっ!?」
『!?』
聞くに堪えない下ネタを言いかけたメガネちゃん（今命名した）が、突然ごつい悲鳴を上げた。頭を押さえて「ふぉぉぉ……滾ってアドレナリンが出ているせいかあまり痛みを感じないんだけど叩かれた反射でつい屈んでしまうぅぅ……」とやたら丁寧な説明をしながら唸っている。
「ごめんなさいね、この子良い子なんだけど……ちょっと頭がアレなの。とってもアレなの」
まともな人（言い方がひどい）が俺たちに苦笑いを浮かべながら謝る。片手でメガネちゃんの頭をぎりぎりと掴んでいて、メガネちゃんが「あー！　割れる！　割れる！　あ、別にメガネが割れるって言ってる訳じゃないよ？　ぎゃー！　しょうもないこと言ってごめんなさーい！」などと叫んでいる。どうやら2人の仲はとても良いようだ。ていうかメガネちゃん、頭を割られそうになりながらもクレープを手早く作っている。作ってなかったらそれはそれで考えものだけど、それにしてもすごくないか？
「はい、ダブルクリームチョコお2人分で」
まともな人が俺たちに手渡して、お会計をする。留美をちらりと見ると、にっこりと微笑んだ。大人の女性の柔らかな笑みに、留美の頬が仄かに赤くなる。
個性的な2人に見送られて、俺たちはクレープ屋を後にした。

×　×　×

ここまでは、平和なデートであったと言えるだろう。
けれど、俺は油断していた。
ゴールデンウィークに入る前までと今とでは、２人の関係が決定的に違っている。
その事による影響が、今、色濃く出ていた。
「……はむっ」
面倒な言い回しを使った訳ですが。
要は、留美の食事をまともに見られなくなってます。
今までなら「あー、食べる時は結構年相応って感じで可愛いなぁ」くらいに思ってたんだけども。
クレープの生地に食い込む、瑞々しい唇が。
一昨日の出来事を色濃く思い出させてしまう。身体の芯から熱が染み出してくる。
「……八幡、どうしたの？」
公園のベンチで足をぷらぷらさせながら、留美が言う。
「あ、や、何でも無い」
「……本当にどうしたの？」
１回目の問いかけはきょとんと首を傾げながらだったが、２回目の問いかけは俺の反応を見て明らかに訝し気な視線を送ってきた。
「や、本当に、何でもないぞ？　クレープ美味しいよな」
「まだ一口も食べてないじゃん……」
自爆した。
あかん。
「……本当に、どうしたの？」
本格的に心配し始めた留美に対して申し訳無くなり、ふっと息を吐いて白状することにした。
「……あー、その、なんだ、すまん。留美の唇に見惚れてた」
「え……え……っ？」
留美の目が見る見る開いて、顔が真っ赤になっていく。白い肌が朱に染まり、表情が少女から女性に変貌を遂げる。
「……そっか」

留美が目を逸らして、黙々とクレープを食べ始める。俺も口を付けたが、ほとんど味が分からなかった。
ふと、留美が俺の手を握った。手の感触を味わうように指を波打たせてまさぐる。ぞくりとして留美に視線を向けると、口の端にチョコが付いていた。留美の上品な食べ方からすれば、どう考えても不自然な付き方だ。
留美と目が合う。艶っぽく細められた目は俺を捉えたままで、チョコを口の端に付けたまま留美は食べ続ける。
「……留美、チョコ付いてるぞ」
「……そ」
ぽそりと呟いて、留美は食べ続ける。どうやら、俺の行動に選択肢は与えられていないらしい。
視線を巡らせる。それほど人のいない公園だが、ちょうど今は人通りが途絶えていた。
「……チョコ、取るぞ」
「……ん」
留美が頷く。俺も留美も、気が付けばクレープを食べ終えていた。
留美がこちらを向いて、ゆっくりと目を閉じた。

続く。

（２８）

留美が静かに目を閉じる。身体をこちら側に向けて、俺を待っている。

もう一度視線を巡らせて、目を細めた。

留美の肩を掴むと、小さな肩がぴくりと揺れる。顔を近付けると、華奢な身体が震えているのが分かった。

「……んっ……」

唇を重ねると、チョコクリームの甘さが鼻腔をくすぐった。同じものを食べたのだから口の中の糖度は同じの筈なのに、まるで違う甘さに思える。女性そのものの甘味が加わっている気がした。

……ん？

……キスはまだ良いけど、チョコを取るのって……舐める必要がある？

……あれ？　大丈夫か、俺？

「……」

一旦やり直そう……と思って恐る恐る口を離すと、留美が眉根をひそめた。その目には不満がありありと投影されている。

「……チョコ、付いたままだよ？　私」

そう言って、俺の胸に手を添えて上目遣いをする留美の可愛さは強烈で。

改めて視線を巡らせる。自分の小心さにいやになるが、俺はまだしも留美が傷付くのは耐えられない。

「……八幡」

――俺の考えが見透かされたのだろうか、留美が俺の名を呼ぶ。その目には、ほんの少しばかりの不機嫌さと、その何倍もの優しさが見える。

「私は、例え知り合いに見られても平気だよ。私が八幡を選んで、八幡が私を選んでくれたんだから……気にしないで。ううん、気にしちゃだめ」

もちろん、人目は気にする必要はあるから、そこは適宜――なんて

ことを尻すぼみに言って、頬を赤らめた可愛らしい顔が俯く。少し前までなら、俯くという行為は相手の心が「益々」読み取れなくなる行為だったのに、今はまるで気にならない。留美が俯こうが、俺が目を閉じていようが、その声音で大体のことが分かる。人の心が全部分かるだなんて自惚れは一切無いが、それでも、留美と俺は共に嘘をつかない。その事実が、随分と心を安らげてくれる。

「……八幡。私、気にしないから。だから、その……」

……考え事をしすぎてしまった。待たせ過ぎは悪い。

「……行くぞ」

「ん……」

留美の髪をさらりと撫でると、留美がまるで眠るように目を閉じた。顎を上げて相手を待ち望む姿は、童話に出てきそうな程に美しい。

留美の顔の、今度は唇の端に口付けして――ぺろりと、チョコを舐め取った。

「んん……っ」

舌が留美の唇に微かに触れたためか、留美がぎゅっと目を瞑った。いやがってはおらず、未知の感覚に戸惑っているような、そんな表情。

留美の表情に艶を感じた瞬間、身体の奥底で何かがずくんと疼いた。

滑らかな黒髪をかき上げ、2つの小さな耳に手を触れる。留美が漏らした吐息に、ほんの僅かに色香が混じった。耳の中に人差し指をそっと挿し込んで、こしょこしょとくすぐる。

「ふぁ……っ、んんっ、あっ……八幡……っ？」

うっとりと目を細めて、俺を見つめながら首を傾げる留美を目の前でじっと見つめる。留美の吐息が震えているのに気付いて、ふつふつと欲情が湧き上がってくる。

さっきチョコが付いていた場所をもう一度舐める。今度は留美の唇に触れないようにする。頬を舌先でちろちろとなぞると、留美が不安げに俺の二の腕を掴んだ。

「あっ……うっく……んん……っ」

恋慕の情と、情欲が混じった声。少女の殻が破れかけた、過渡期とも言える声。自分がその殻を剥いでいるのだと思うと、この子の一生に関わることをしているのだと思うと、とんでもない責任感に苛まれると同時に震えるような興奮が身体の中を駆け巡る。

舌先を唇の端に付けると、留美が俺を掴む手にいっそう力を込めた。唇は固く引き結んでいて、明らかに緊張していた。

背中を抱きしめて頭も撫でる。張り詰めていた表情が僅かにほぐれるのを確認すると、上下の唇の合わせ目をゆっくりなぞり始めた。

「んっく……ふぅっ、んんん……ふっ、んんん……っ」

拒絶しているのではないが、留美は頑なに唇を開こうとしない。俺も、無理に押し開こうとはしない。互いに今のこの状況を楽しもうとしている。

つっ、つつっ、ぐりぐり、つつつ。

「ふぅっ、んんっ……んふぅぅっ？　んふぅぅ……っ」

唇の継ぎ目を何往復もして、時折押し破ろうと少しだけ力を入れる。留美もぎりぎり侵入を許さない程度に力を込める。気付けば、留美の両手は俺の背中を抱きしめていた。

舌と唇を一旦離す。

「はっ、んんっ、ふぅっ、ふぅぅ……っ、んっく……っ」

留美が陶酔した表情で口をぱくぱくとさせて、更なる唇のまぐわいをこいねがう。留美が口を開けた瞬間に舌をねじ込むか、なんてことも考えたが。今は穏やかに楽しみたいのでやめておく。

もう一度、留美と唇を重ねる。先程と同じように唇の合わせ目を舌でなぞるが、今度は口内への侵入の意思をより顕著にするため、舌先に込める力を一気に強める。

ちゅっ、ずっ、ずぐぐ……ずるっ、ずっ、ずず……っ。

「んっ、んくぅっ、んんんん……んふぅっ!?　んっ、んんん……っ」

一瞬、殆ど突破しかけたが、留美は何とか堪える。

留美を抱きしめる力を強め、焼け付くような視線を向けた。留美は俺の瞳を見つめると、目を見開いて唇の力を抜いた。

小さな唇の真ん中に、舌先を突き立てる。

今度は、何の抵抗もなく――
ずるり。
「んふぅぅぅ……っ」
留美の口内に、舌が入り込んだ。
自分の口と、留美の口。同じ人間の口なのに、こうも違うものなのか。
熱も、湿度も、感触も、まるで違う。
もしかしたら、口というのはその人の最もプライベートな空間なのかもしれない。
唇を割り開いて、口内をまさぐる。舌を這い回らせると、ざらりとした感触に行き当たった。「それ」に触れた瞬間、留美が目を見開き、やがて細める。
ああ、今、俺が動かしているものと同じものに触れたんだ。
そう気付いたら、もう我慢出来なかった。
留美を抱き寄せて、小さな私空間を赤い粘膜で蹂躙する。
「ふぅっ!? んっ、んちゅ、れる……っ、ちゅっ、ちゅるる……ふぅぅ……っ、んふぅ、ふぅぅぅ……っ」
悩ましく蠢く留美の舌と何度も交わると、留美の目から滴が伝った。息が苦しいのかと思ったが、俺を抱きしめる力を強めるのを見た限り、そうとも思えない。
舌を絡め合い、唇を啄み、見つめ合う。
テクニックなんてものは何もない。それはこれからいくらでも伴ってくる。
今は、ただひたすらに、互いの唇を、心を求め合っていたい。
夢中で留美を貪り続けて、やっとのことで身体を離す。互いに息を切らしていた。
「……留美、なんで泣いてたんだ……？」
問い掛けながら指で留美の涙を拭うと、穏やかな笑みが咲いた。
「……嬉しくて。ああ、私、八幡とこういうことが出来るようになったんだって……思った……ら……っ」
「る、留美？」

言葉を続けるごとに見る見る顔を赤くした留美が、俯いて両手で顔を覆った。どうやら急に恥ずかしくなったらしい。やがて、顔の下半分を隠して熱っぽい上目遣いで見つめてきた。

「……」

何を言うかと思ったら、もう一度目を閉じて、唇を軽くすぼめた。

微笑ましく思いながら、唇を重ねる。

どうやら、留美も、俺も。

口付けという行為に、完全にハマってしまったらしい。

その日のデートは、ぷらぷらと歩きながら、少しでも人目につかない所を見付けてはキスを繰り返した。

続く。

（２９）

生活を彩るものというのは、多かれ少なかれ、きっと誰にでもあるのだと思う。それがほんの些細な楽しみで、あってもなくても良いという人。あるいは辛い辛い一日の中でそれだけを頼りにしている人。様々だろう。

俺は長い間、生活の彩りを一人で過ごす時間の中に見出してきた。小説やマンガを読んで、頭の中に新たな物語を増やしたり。ゲームをして、やりこむことで得られる快感を楽しんだり。装丁のかっこいい参考書で勉強して、テンションと成績を上げたり。

ずっと、そうやって暮らしてきた。生きてきた。家族と過ごす時間はもちろん大事だが（特に小町）、コンスタントに確実に自分を幸せにしてくれるのは、やはり一人で過ごす時に浸る物事だったのだと思う。

一人で何かをやる楽しみというのは、これからも変わらない。きっと死ぬまで変わらないだろう。

けれど、そんな俺の価値観を一気に変えてしまう人が現れた。

その存在が、どうにもこうにも。

俺の頬を、緩ませっぱなしなのである。

×　×　×

ゴールデンウィークの間、俺と留美はなるべく毎日会うようにしていた。毎日会おうと決めた訳ではなく、一日一緒に過ごしていても互いに次の約束を中々提案出来なかった。それで別れ際になってやっとのことで、どちらかから「明日も会いたい」と言い出す……という、何とも恥ずかしいやりとりを繰り返していた。この場合俺の情けなさが際立つがそこはあまり追求しないでほしい。

そんなこんなで、ゴールデンウィーク明け。

連休が終わって一発目の授業は、まだ午前だと言うのにまるで昼食後の授業のような気だるさが教室に満ちていた。みんなの心がまだ、楽しかった連休に引っ張られているのが分かる。

俺は、眠い時は素直に寝ることが多いが、それでもスマホを見るということは滅多にしない。その違いは何なんだと聞かれたら俺も分からないのだけど、俺の中のどこかにそんな境界線があった。

しかし、最近はその境界線もちょっとばかし突破され気味だ。

「……」

机の下で、スマホの画面をちらりと見る。何かの通知が来ている訳ではない。それでも、俺は画面を食い入るように見ていた。

『今日の放課後、会うの楽しみにしてる』

ＬＩＮＥのトーク画面には、簡素なメッセージが打たれていた。昨日の夜、俺から明日も会いたいと言ってオーケーを貰えたが、学校が始まるので時間はあまりとれない。なので、放課後に少しだけ会うことにした。それだけでも十分だったのだけど、今朝学校に着いて、授業が始まる直前に来たこのメッセージによって、俺の眠気は吹き飛んでしまった。この一言が俺をどれだけ元気付けてくれるか、留美は分かっているのだろうか。伝える度胸が無いのがもどかしい。

「……」

机に突っ伏して、昨日まで留美と過ごした時間を反芻する。

あちこち遊びまわるような経済的余裕は無い。あとそもそも俺たちでは遊びまわるという習慣が無いから感覚が掴めない。遊びまわるって何だろう、虎に乗ってサーベルを振り回すとかだろうか。何を言ってるんだ俺は。

俺も留美もそんな感じなので（どんな感じだ）、あちこち適当にぷらぷらしては、人目につかない場所で何度も唇を重ねていた。留美はキスという行為が、満更じゃないどころかどっぷりとハマったようで、通りを歩いている最中に足を止め、路地裏に視線を送りながら俺の袖をつまむことが何度もあった。

短く濃厚な唇の交わりを続けていると、段々と「次はいつ、どこでしよう。どんな風にしたら喜ぶだろう」なんてことを考えるようになっていた。留美も同じことを考えていたのか、キスがしたくなるタイミングがよく被った。

「……」

いかん。
悶々としている。
俺は決して留美にやましい気持ちは……なんて言うつもりは無い。あらゆる面をひっくるめて留美に惚れているのだという自覚はある。
……早く、放課後にならねぇかなぁ。
口だけ動かして告げた願いは、強く願えば願うほど遠ざかるようだった。

× × ×

放課後。
今日は雪ノ下も由比ヶ浜も急な用事があるとのことで、奉仕部の活動は無しだった。平塚先生に雑用を押し付けられそうになったので、「俺に構ってる暇があったら早く結婚相手を見付けてください」と軽い調子で言ったら、雑用の代わりにおぞましいプレッシャーを叩き付けられた。睨まれただけで背中が壁にめり込むところだった。あの人なんなの？　念能力者なの？　ビッグバンパンチとか使えそう。
予想外に早く身が空いたので、留美に連絡をとる。会えることに舞い上がっていて、落ち合う場所さえ決めていなかったことに気付き、その件も含めてＬＩＮＥを送った。昇降口から一歩外に出た所でスマホをいじっていると、学校から解放された生徒の波が内から外へと激しく流れ出ていく。ダムの放流のような光景を眺めながら留美の返事を待っていると――ふと、校門の辺りで違和感のある光景が目に入った。
昇降口から校門までは、人波がとても濃い密度で一直線に伸びている。たまにそこから逸れる人がいると、まるで川の支流が出来たかのように見える。
校門まで続く人波は、一歩校外に出た瞬間、海のごとく広がる。
その一連の流れの中。校門から出るか否かという所で、僅かに人の流れが淀む。まるで川原の石を水が避けるかのような、そんな動き。川の水ほど人の動きは速くないから、流れが淀んで見えるのだ。
「……んん？」
違和感の元を探ろうと目を細めて見つめると、すぐに正体が分かっ

た。
川原の石というのは訂正する。
艶やかで長く伸びた黒髪。
澄ました表情が芸術的なまでに美しい、整った顔立ち。
実際の年齢には見えないような、大人びた雰囲気。
――石は石でも、宝石だった。
よくよく見てみれば、通る人通る人が男女問わず留美に視線を向けている。中学生が制服姿で校門前にいればその反応も当然だろうが、俺の贔屓目を抜きにしても、多くの人が見惚れていたと思う。
……ていうか、何でいるんだ？
随分と時間差で疑問を抱き、てぽてぽと歩いて校門に向かう。
俺が近付くと、留美は途端に目を輝かせた。大人びた少女が時折見せる、年相応の可愛らしい笑顔。頬が緩むと同時に、漠然とした危機感が頭を過ぎった。
――悪い予感というのは、いつだって当たるものだ。
「あ……八幡」
「う……っ」
鞄を両手で持った留美が、俺に身体を向け――つまり、他の下校する人にも顔を向ける形で、柔らかな笑みを浮かべて……俺の名を呼んだ。
途端に、辺りがざわめく。
留美の声がそんなに大きくなかったのに加えて、俺のリアクションも薄かったからだろうか、ざわめき自体はさして大きくはない。
……しかし、視線が痛い。ものすごく痛い。
留美はこの状況にすぐに気付いて、申し訳無さそうにしゅんとした。
「えーと、留美。取り敢えずどこか行くか」
「……うん。……ごめん」
「気にする必要無いっての。むしろ嬉しいぞ、すごく」
そう言って俺は――いつもの調子で、留美の頭をぽんぽんと撫でた。

「あ」
「あ」
撫でられた人と、撫でた人。
交互に間抜けな声を上げたと同時に、周りの好奇の視線が一層熱を帯びた。
……あかん。
「留美、一刻も早くここを離れるぞ」
「う、うん、わかった」
早足で歩き出して、留美の手を握りそうになって……慌てて手を止めた。残念そうな顔をした留美にとてつもない罪悪感を抱き、後できちんと埋め合わせをしようと決意を固める。
「さて……」
どこで留美と時間を過ごそうかと考え始めると、まだ周りには総武高生が沢山いるというのに、頬が緩みそうになった。

続く。

（３０）

総武高を出て、留美とひたすら歩く。気持ちが急いてどんどん歩調を速めそうになるが、留美を置いていかないよう必死でペースを抑える。急いてはブレーキするという流れを繰り返す内に、気付けば太ももが馴染みの無い疲れ方をしていた。

総武高生の姿が見えなくなったので、そろそろ手を繋ごうか……と思っていたら、先に俺の手がそっと握られた。突然の行動に慌てて視線を辺りに巡らせると、留美はくすりと笑った。

「八幡、焦りすぎ」

「や、そりゃあ慌てるだろ。まさか留美がこっちに来てるなんて思わなかったし。ていうか俺が部活無くなったのは本当に突然だったんだぞ。あんなに早く来てどうするつもりだったんだ？」

時間的に、留美は学校が終わってすぐこちらに向かわないと計算が合わない。元々は俺の部活が終わった後に会う予定だったから、２時間近く待ってしまう。

留美は前を向いたまま、ちらりと俺に視線を送った。長い睫毛が瞬く度に、視線を吸い寄せられる。

「ん……ちょっと、やってみたくて」

留美がぽそりと呟いた言葉は、続きを待ち焦がれる程の魅力を宿していた。

「……何をだ？」

努めて平静を装って尋ねると、留美はちらりと流し目を送った。少女らしからぬ婀娜っぽさにどきりとする。

留美はすっと息を吸って、

「……好きな人をずっと待つ、っていうのを……」

尻すぼみに言うと、頬を赤らめて俯いた。

……。

俺を殺す気らしい。

頭をがしがしと掻いて顔を逸らす。５月の空はまだまだ明るく、部活に入っていない中学生らしき女子が数人、俺たちとすれ違うように

歩いていった。
「……あれ、今の、留美と同じ中学か？」
振り向いて今しがたすれ違った女子生徒の制服をちらりと見て、留美の制服と見比べる。オーソドックスなタイプだが、この距離で見間違えるはずもなかった。
「……うん、そうみたい」
でも、言ったでしょ？　と、俺の手を優しく握りながら留美が言う。
「私は、例え学校の人に八幡といる所を見られたって、全然気にしないって」
「あ、や、まあ、うん、それは……覚えてるけど……」
「もし知り合いに見られて学校で聞かれたら、『うん、彼氏』って言っちゃうからね」
「あ、う、おお？　そうか、うん、ええ？」
「……彼氏、って言う前に『自慢の』って付けてもいい？」
「ちょっと待って、死ぬ、死ぬから」
「どうしたの八幡？　顔真っ赤だよ？」
穴があったら入りたい。
無いならば、掘って潜ろう穴の中。
この子、やはり俺を殺す気らしい。
留美にジト目を送るが、留美は俺の視線などどこ吹く風と言った様子で楽しそうに笑っている。夏の気配が混じるこの時期に、俺は妙な汗をかいていた。
「……あー、取り敢えず公園に行くか」
そこで頭を撫でまくって仕返ししてやろう……などと考えながら言うと、留美が頬を赤らめて俯いた。
「……八幡のエッチ」
「なんでだ……」
留美の頭の中の方がよっぽどピンクなようだ。留美の場合、ピンクはピンクでも、男が考えるよりはよっぽど健全なピンクなんだろうけども。健全なピンクって何だよ。
さて、どこに行こうか。何だかんだでさっきまで焦りに焦っていた

から、二人で過ごすのに丁度良い場所を考えながらの移動が出来なかった。
時計をちらりと見る。主婦たちが夕飯の買い出しを始めるのにも早い時間帯だ。
――この後に、俺がとある発言をするに至るまでの思考過程を鑑みたい。
――俺は、つい昨日までの、連日留美と過ごした日々の密度をもう一度味わいたくなっていた。たった一日学校生活を送って留美に会わないだけで、こんなにも会いたくなり、こんなにも焦がれるものかと自分で驚いた。さっきまでは焦りでその気持ちを忘れていたが、今は既にあとどれくらい一緒に居られるかということばかりを考えている。
――部活が無くなった分の、神の恵みのごとき2時間。
――そして何より……たまたま、俺の自宅近くまで来ている。
――ということは。
――そんな思考過程を経て、俺は。
「あー、留美」
「ん？　どうしたの、八幡？」
「公園じゃなくて……その、俺ん家来ないか？」
「え」
留美の表情が、ぴたりと止まった。身体の動きもぴたりと止まった。表情を見る限り、思考も止まっているようだ。
俺が勢い半分で言ってみた言葉で、留美の時間の流れがぴたりと止まってしまった。
×　×　×
放送事故のような光景で、たっぷり待つこと数十秒。人ってこんなにぴたりと止まれるもんなんだ……。
辛抱強く待っていると、留美の口がようやく開いた。金魚のようにぱくぱくとしている。
「え、は、はち、え？　わた、し、え？　はちまん、え？　家？　え？」
……。

再起動した留美が、中々面白いことになっていた。
「お、落ち着けって、な？」
留美の頭を撫でると、留美は俺の手に自分の手を重ねて、耳まで真っ赤にした。
「わ、わた、し……は、八幡……」
「落ち着け、お前は留美だ」
発する言葉の繋げ方が中々ファンキーだ。
このまましばらく見ていても面白そうだなぁ……と思ったけれど。流石にそれも気の毒だ。
「あー……もちろん、気が乗らなかったら他の場所でも良いからな？」
言うと、留美が目を見開き、悲しそうに眉根をひそめた。
「あ、ち、ちがうの。大丈夫、大丈夫っていうか、行きたい、私、八幡の家に行きたい、行きたい……っ」
「留美、留美。声がちょっと大きいぞ。周りの視線がやばい」
今すれ違った女子大生らしき２人組が『これは初々しいカップルのやりとりなのかな？』『もしくは通報すべき案件なのかな？』などとごしょごしょ言いながら、品定めするように俺を見ている。本当にあかん。すぐ近くに交番もある。
「ご、ごめん……」
留美がしゅんと謝るのを見て、頭をくしゃくしゃと撫でた。撫でられた時に気持ち良さそうに目を細める留美の仕草がとても好きだ。
「俺ん家、ここから歩いて１０分くらいだから。……じゃあ、行くか」
「うん、行く」
頬をぽりぽりと掻きながら言うと、留美が目を輝かせた。留美は表情豊かな方では無いが、その分瞳や眉の動きがこの子の感情を分かりやすく示してくれる。
「……八幡、の、家……八幡……の、い、え……はち、まん……のい、え……」
「……」
……うん、目がぐるぐる回ってるように見えるな。きっと混乱してるんだな。本当に分かりやすい。壊れかけのロボットみたいでとて

も面白いが、この調子で俺の家に辿り着けるんだろうか。「きゅう……」とか言いながら目を回して倒れたら……すげぇ可愛いけど、家に担ぎ込んだら即座に通報されそうだな、小町に。

留美と手を繋いで、空を見上げる。綿あめのような形の雲が、ぷかぷかのんびりといくつも浮かんでいる。動きを見るに上空の風の流れはさして速くないようだ。

視線を横に流すと、未だに顔を真っ赤にした留美がちらちらと俺を見ている。目が合うと高速で逸らされた。

可愛いやつめ。

愛い愛い。

続く。

（３１）

「通報します」

留美を連れて家に帰ると、予め連絡しておいた小町が出迎えてくれた。小町のこの言葉は、家に入ってほんの２分程で発せられた言葉である。

――ちなみに、この２分程で交わした会話はざっくり言うと以下の通りである。

『小町、ただいま』

『おかえり～お兄ちゃん。それと……留美ちゃん、こんにちは。覚えてるかな？』

『……はい、覚えてます、小町さん。……今はその、特によく、覚えてます』

『はえ？　なんで？』

『八幡が、しょっちゅう小町さんの話をするから……』

『お兄ちゃんお兄ちゃん』

『どうした小町』

『留美ちゃん、拗ねてるよ。ほっぺた膨らんでるよ。可愛いよ。小町死んじゃうよ』

『小町も可愛いから大丈夫だ。可愛い妹は死なん』

『それどういう原理なの……。あと、女の子の前であまり他の子の話をしない方が良いよ。小町の話をしてくれるのは嬉しいけど、他の女の子の前で話しちゃうとご機嫌斜めになっちゃうから』

『うぐ……そ、そうか。すまん、留美』

『……ううん、いいの。……ハーゲンダッツでいいの』

『あれ、さりげなく恐喝されてないか俺？』

『そんなことないよお兄ちゃん。小町もハーゲンダッツで手を打つよ』

『なんで便乗したの？』

……なんていう、やりとりをしていた。そんな中、突然小町が通報するだなんて言い始めたのである。

さて、通報とは何だろう。眼前で言い放たれたところで、もう一度この言葉の意味を考える必要があるのではないだろうか。
通報、即ち「お巡りさんに知らせる」という行為。どんな時にこの行動がなされるのか。可愛い犬がいたからと言ってそれを見せたくてお巡りさんを呼んだりはしないだろう。そんなことで業務を妨害されたら、仏のような人であっても半ギレになるにちがいない。女性が男性のお巡りさんを呼んで、初対面なのに「私とは遊びだったのね！　もういい、別れる！　……さようなら……」などと言って立ち去るドッキリをするために呼ぶということもあるまい。ただ呆気にとられるだけでネタにもならなそうだ。
では、どんな時にお巡りさんを呼ぶ？
それは、悪いやつを見付けた時だ。「こいつを野放しにしておくのは危険だ」と判断されて、お巡りさんが呼ばれる訳だ。
ここで現在の状況を振り返る。
場所は比企谷家の玄関。
俺と留美は靴を脱いで、玄関で出迎えてくれた小町と談笑している。
和やかで幸せな雰囲気の中、突如として小町がこの言葉を発したのだ。
誰も悪いことはしていない。それは確かだ。
即ち、小町の言葉は……ただ俺たちをびっくりさせるためだけの、唐突な言葉に違いない。
「はっはっは、どうした小町。急にそんな……」
小町が冷やかな目で俺を見ているのに気付き、口をつぐむ。
「お兄ちゃんが」
小町がスマホを取り出し、ロックを解除する。
「いかがわしいことをしたので」
通話の画面を開く。
「警察に」
電話番号を２つ押す。恐らくあと１つで、日本人なら誰もが知っている数字の並びになる。

「突き出します」
淡々と言うと、小町がにこっと笑った。顔は笑ってるのに目は笑ってないってどういうことなの？
「待て小町、俺が何をしたっていうんだ」
慌てて小町の手首を掴むと、小町が上目遣いで俺を見つめた。仕草自体は可愛いはずなのに、不審に満ちた目で見られているから全くときめかない。
「……お兄ちゃん。帰ってきてから、留美ちゃんと3人で何をしたか覚えてる？」
「覚えてるも何も、今さっきの話だろ？　軽い挨拶をして小町が感動して……それくらいだろ」
小町は俺の言葉を聞いて、ふんっと鼻で笑った。ものすごく腹が立つ。
「お兄ちゃん……それだけじゃないでしょ？　留美ちゃんのこと、ちらっと見たでしょ？」
「や、そりゃ会話してんだから見もするだろ……ん？」
小町の言葉により、ここ数分の記憶がより鮮明になる。
――会話の途中で、留美が俺の袖をくいと引いた。何だろうかと視線を下に向けると、留美はどうやら小町と話を出来たことが嬉しかったらしく、にっこりと微笑んでいた。無邪気な笑みに和みながらも、俺は――
「……あ」
思い出してしまった。
「そう、そうだよお兄ちゃん。お兄ちゃんってば、留美ちゃんの唇を見た瞬間に、一瞬目がやばい感じになってたんだよ！」
小町が「犯人はお前だ！」と言わんばかりの勢いで俺を指差す。
――確かに俺は、留美の唇に一瞬目を奪われた。最近キスを毎日していることもあってか、ふとした瞬間に留美に見惚れてしまうのだ。それを、どうやら小町にしっかりと見られてしまったらしい。
……ん？
……見惚れただけで、それがいかがわしいという判定を受けるのか

……？
　ひどくない？
「小町、お兄ちゃんは悲しいぞ」
「お兄ちゃんが悲しい以上に小町は悲しいよ」
　俺と小町でいつものしょうもないやりとりを繰り広げていると、留美がくいくいと俺の袖を引いた。視線を向けると、頬を赤らめて俺から顔を逸らし、流し目を送っている。
「八幡……私のこと、いかがわしい目で見てるの？」
「いやっ、はっ、そんなっ、ことっ、はっ、ないっ、ぞっ、うんっ」
　実際そんな気持ちは（ほとんど）なかったんだけど、留美に聞かれてはどうしても動揺してしまう。無駄にスタッカートをかけてしまった。
　俺が思い切り動揺していると、留美は俺の袖を引く手に力を込めた。俺を見つめる目は心なしか潤んでいる。
「私は……別に、良いけど……」
「え」
「え」
　留美の言葉に、俺と小町が同時に目を丸くする。留美は俯いてしまって、前髪で隠れて表情は窺いしれない。
「る、留美ちゃん……」
「はい、何でしょう小町さん」
「そ、その、お兄ちゃんとは、今後どういう感じで、その、お付き合いをしていきたいんでしょうか……？」
　小町がおずおずと留美に尋ねる。何その恥ずかしい質問。何で今、俺もいる場で聞くの？　照れるなら聞くなよ。俺も死にそうなんだけど。
　小町の問いに対して、留美はにっこりと柔らかな笑みを浮かべた。月夜に咲く花のように静謐な魅力を持った笑みに、俺も小町も思わず見惚れる。
「……この呼び方が正確かは分からないですけど、小町さんのことを『お義姉さん』って呼べるような関係になりたいです」

「……っ」
俺がびっくりして固まる中、小町は……何故か、しずしずと涙を流し始めた。
「お、お兄ちゃん……」
「お、おう、どうした妹よ」
小町の目を見ると、まるで少女マンガのようなはっきりとした涙の筋が見える。うちの妹は一体どうしたんだ？
「留美ちゃん……可愛い……妹にしたい……」
も、もう……と、小町が息も絶え絶えに呟く。
「……もう、小町には……妹さえいればいい……っ」
消え入るような声で呟くと、「がふぁ……っ」と静かに吐血して崩れ落ちた。
『……』
しかばねとなった小町を、俺と留美で眺める。
じー。
「小町ちゃん、生きてる？」
「……」
へんじがない。ただのしかばねのようだ。おお小町、死んでしまうとはなさけない……。
頬をぽりぽりと掻く。
「……あー、悪いな、留美。茶番に付き合わせて」
「ううん、大丈夫。……それに、これからこういう機会もいっぱいあるだろうし」
「お、おお、んん？　お、おう、おう」
「ふふ、八幡どうしたの？　オットセイみたい」
留美は楽し気に言うと、俺の脇腹をつんつんと突っついた。普段からは考えられない子供らしい行動に、心臓を鷲掴みにされる。
「がっ、がふぁっ……脇腹をつつかれるだけでときめくお兄ちゃん、マジチョロい……」
「うるせえよ……」
倒れたままくだらないことを言う小町を起こし、リビングに運ぶ。

ソファに寝かせると、留美を振り向いた。
「あー、留美……リビングで小町と3人で話すのと、俺の部屋で2人で話すのだとどっちが良い？」
俺の言葉に、留美が目を見開く。唇を震わせて顔を背けると、ちらちらとこちらに流し目を送る。
「……は、八幡の、部屋が良い」
「そ、そうか……」
なるべくさらりと言うのを心掛けたのだが、こうも可愛らしく反応されてはこっちまで照れてしまう。
さりげなく留美の手を握ると、震えながらもしっかり握り返してくれた。
続く。

（３２）

「お邪魔……しま……す」

留美を自室に招き入れると、かちこちに固まった様子で挨拶をした。ううん、これから会話が成り立つか心配……。

「取り敢えずここに座ってくれ」

クッションを２つ置いて、片方をぽんぽんと叩く。留美はスカートを押さえながら座ると、俺をじっと見つめた。

「どうした」

「八幡、ここに座る？」

にこやかに言って、留美が自分の太ももをぽんぽんと叩く。意外と余裕はあるらしい。

……ふむ……。

「そうだな、じゃあお邪魔するか」

「え、あ、う、その……っ」

試しに乗ってみたら、目に見えて慌てられた。反撃に弱いなぁ……。

「どうしたんだ留美。座っていいって言っただろ」

「あ、そ、その……」

慌てふためく留美が可愛くて、ついいじめてしまう。

それならせめて……と、留美が消え入りそうな声で呟き、すっくと立ち上がる。

「わ、私が、八幡の上に座る……っ」

おっと、強めの反撃だ。

留美は耳まで真っ赤にして俯いている。俺の袖をつまみ、俺の次の行動を待っているようだった。

……。

……応じるしかないじゃない……。

取り敢えず、クッションの上に腰を下ろしあぐらをかく。留美にこいこいと手招きすると、こちらにくるりと背を向けて、スカートを押さえた。尻を撫でるようなその動きに、まだまだ華奢な少女の肢体の

ラインが見えてどきりとする。
「お邪魔……します……っ」
留美が恐る恐る言って、そろりと腰を下ろす。股座の中にすっぽりと収まると、体育座りの格好をとった。俺は手の置場に困り、カーペットに両手をついている。
目の前にある留美の髪の毛からは、甘い匂いに混じって夏を感じさせる爽やかな香りもした。この時期に合わせてシャンプーを変えたりしているのだろうか。
留美の頭を撫でてみる。
なでなで。
「……」
撫でると良い匂いが更にする。心持ち顔を近付けてもう少し撫でてみる。
なでなで。
すべすべ。
「……」
留美は無言で、時折「ん……っ」と艶っぽい吐息を漏らすだけだ。
うーん、これはこれで楽しいかもしれない……なんて考え始めたところで、留美が俺の空いている手を掴んだ。何をするのかと思いきや、あろうことか自らの腹部に引き寄せた。片手で留美の頭を撫で、片腕で留美を抱きしめる体勢になり、自然と2人の密着度も増す。尚のこと良い匂いが鼻腔をくすぐり、頭がくらくらした。留美の素肌と制服がぴったりくっついたことで、淡い香りが漏れ出したかのようだ。
うん、これはこれで……。
これはこれ……で……。
「……なあ、留美」
「……なに？　八幡」
「……ちょっと、限界だ俺」
「……奇遇だね、私も」
互いに羞恥心の面で限界を迎えて、留美が徐に立ち上がった。君は

君で、なんで恥ずかしいのに俺を煽ったの……。
おとなしく隣に座った留美が、俺をちらりと見ては目を逸らす動きを繰り返す。恥ずかしさの余韻なのか、その挙動は妙に幼い。
愛おしさが湧いて、留美の耳を撫でて唇を重ねる。
「ん……っ」
繋がった唇から甘い声が漏れると、留美は目を細めて微笑んだ。
さて、ここからどうしようか……と考えながら、頬をぽりぽりと掻いた。

× × ×

「留美、ちょっとしたあるあるネタなんだが」
「なに？」
「道端でたまたま会った仲の良い友達と長話をして、『せっかくだからもっと話そうよ』なんて言って喫茶店とかに行くと、急に話が弾まなくなるんだとさ」
「なんで伝聞形なの？」
「俺にはそんな体験が出来る友達がいない……」
「八幡……私は？」
「や、留美は友達じゃなくて、恋……」
「あ……っ」
会話が続かないことを自虐的に活かそうと思ったら、思い切り事故った。
留美と部屋に入ってからしばし。
いつもは歩きながらとか、ちょっと立ち寄った公園で話すことが多いからあまり考えたことがなかったが……いざ自室に招いて「さあ話そう」となると、途端に何も話せなくなる。この間行ったカフェだと店の話をすることが出来たし、刺激的なことがあったもんだから会話どころじゃなくなっていたし……。
ううん、どうしよう。
留美が5つ下ということ、女の子であるということ、今はいずれも問題ではない。
この状況は純粋に、トークが不慣れな俺の不甲斐なさが原因だ。

ここで留美を困らせるのはいけない。
何とか出来ないかと必死で思考を巡らせていると、留美がそっと俺の膝に手を置いた。
「八幡、何か学校の話をして。私、聞きたい」
「留美……」
留美の気遣いに泣きそうになった。
「……愚痴でも良いか」
「他に無いの……」
留美が困ったように笑った。俺の膝をぽんぽんと撫でて、首を傾げて微笑む様は天使にしか見えない。
「や、まあ、正確に言えば俺がひねくれてるから何でも愚痴みたいに聞こえるだけって話なんだが」
「それ、結局愚痴でしょ」
「ああ、それもそうだな」
２人でくすりと笑う。話し下手な２人が紡ぐ、緩やかな空間。温かな雰囲気を感じ取ると安心出来て、自然と口が開いた。
「この間なんだけどな、平塚先生にまた雑用を頼まれて」
「平塚先生って、キャンプに来てた胸の大きい人？」
「着眼点はそこなのか……。まあその雑用自体は単に大量の本を運ぶだけの単純労働だったんだけど、何往復かしている内に由比ヶ浜が通りがかってな」
「由比ヶ浜さん……って、あの、私たちとは違って溌剌とした、胸の大きい人？」
「俺たちと違うのは確かだが……ていうか着眼点……。そんで『あたしも手伝うよ』って言ってくれたから、何冊か持ってもらったんだ。厚意を無碍には出来ないしな」
「うん」
「んで、由比ヶ浜と並んで歩いてたら、暑かったからなのか廊下の曲がり角の窓が全開になっててな」
「何かいやな予感がしてきた」
「まあ、うん……。由比ヶ浜が俺に話しかけて目が合った瞬間、思い切

り風が吹いてだな。……その、まあ、はっきりと……な」
「……それ、愚痴じゃなくない？」
「いててて、内ももをつねらないで。話は続きがあるんだって。由比ヶ浜は本当に良い子でな、顔を真っ赤にして『……ばか』って言った後は、すぐに切り替えて話をしてくれたんだ。しかしそれが昼休みの出来事で、放課後部活の時に、由比ヶ浜の様子がいつもと若干違うことに雪ノ下が気付いたんだ」
「雪ノ下さんって……私たちと同じ側で、もしかしたら私がもう勝ってるかもしれない人？」
「留美、それ絶対本人に言うなよ。多分死ぬぞ。……でだ。由比ヶ浜は最初こそはぐらかそうとしたが、嘘が下手でな。雪ノ下の追及に観念して耳打ちしたら……雪ノ下の目が、こう、青白く光ってな」
「……比喩、だよね？」
「……あれが幻だったらどんなに良いか……。で、その後はひたすら言葉でぼこぼこにされた。由比ヶ浜がフォローすると『あなたはこんな変態をかばう必要は無いわ』なんて言う始末で。攻撃された時間はかなり短かったんだが、久しぶりだったもんでかなりこたえた……」
話を終えてひと息吐く。留美を見ると、優しい笑みを浮かべていた。
「……そう」
短く言うと、留美が身を乗り出し、俺の頭をくしゃくしゃと撫でる。
「……大変だったね、八幡」
「……すげぇ恥ずかしいんだけど……」
「いいの、私がこうしたいんだから。八幡、お疲れ様……」
「……」
俺の正面に回り込み、俺に足を開くよう手で指示をする。言われた通りにすると俺の目の前で膝立ちになり、首に手を回して抱きしめながら頭を撫でてくれた。慎ましいながらもふくよかな胸に顔をうずめて身を委ねると、不思議と心の中にたまったものが洗い流されていくような気がした。
……い、色んなことをすっ飛ばして言ってしまうと。

け、結婚してぇ……!!

この後、俺はしばらくの間留美の胸にうずくまっていた。背中に腕を回して抱きしめると、留美は「ふふ……っ」とお姉さんのような声音で笑った。

留美との心の距離が日に日に近付いていく感覚が、たまらなく心地良かった。

続く。

（３３）

留美が俺の部屋に足を踏み入れてからしばし。
互いの緊張が徐々に解けてきて、自然とこぼれる笑みが増えていく。少し前に小町が持ってきてくれたココアを飲みながら、安寧の時を過ごす。
ああ、なんて心地良いん――
「八幡は胸の大きい人が好きなの？」
――なんか変なことになった。
留美が突然にも程があるタイミングで発した言葉に、俺の心の中で大音量の警報が鳴る。「ここから先、何を答えるかによっては下手をすれば地獄を見るぞ」という警報が。
留美を見ると、純粋無垢な瞳で首をこてんと傾げている。何でその表情でその質問が出来るんだ……。
「え、ええっと……何でそう思ったんだ？」
目を泳がせないように、声も上ずらないように意識しながら言葉を返す。
「八幡、目が泳ぎすぎ。あと声も裏返りそう」
理想と現実ってしばしばギャップがありますよね。
「……その発言の根拠を述べよ」
「何で問題文みたいに言ったの……」
平静を装って言える言葉を探したら、何故か試験チックになった。
留美はココアのカップをテーブルに置き、膝に手を添えてきゅっと縮こまった。とても幼く見える仕草に庇護欲をそそられる。
「だって……八幡、街中で胸の大きい人とすれ違うと、ちらちら見てるし」
「え、あ、ええ？　そ、そうか？　そうだったか？　え、あれ？」
留美の言葉に頭の中が大パニックになる。落ち着け、思考を辿れ、俺。確かに街中でそういう人（＝巨乳）を見かけると思わず視線を向ける時があるが、留美と一緒に居る時は正直留美のことしか考えていない。次に何を話したら留美が笑ってくれるのか、どうエスコートし

たら留美が安全に歩けるか、そういったことばかり考えている。
……即ち留美の認識は――
勘　違　い　。
額に手を当ててしばらく考えた後にこの結論に至ると、俺は精一杯誇らしげな表情を作った。
「はっはっは、留美、何を言ってるんだ。俺は留美のことばかり見てるからそんなことする余裕なんて無いぞ」
「カマをかけてみたんだけど……八幡、考える時間長すぎ」
「うぐ」
カマかけだったのかよ……何高度なテクを使ってんのこの子は……。
念の為本気で記憶を辿っていたが、留美にとっては相当長かったようだ。実際数十秒くらい考えていたと思われる。サシの会話で数十秒の沈黙ってただの放送事故だよね、うん。
「……ん？」
留美を見ると、何故だか頬を赤らめて俯いている。手の指をもにょもにょと絡めながら、しおらしく俺の顔をちらちらと見てくる。
「どうした」
聞くと、留美は顔を逸らし、艶っぽい流し目を送った。
「……その、私のことばっかり、考えてるって……」
おうふ。
よくよく考えたら、や、考えなくても。
俺、超恥ずかしいこと言ってるじゃん。
いかん、恥ずかしい、顔が超熱い。
そうだ、話題を変えよう。
「こほんこほん。あー、留美。胸の話をしよう」
「最低……」
「あっ」
焦って話題のハンドルを切ったら、思い切りガードレールにぶつかった。留美は両手で自分を抱き、身体の向きを９０度変えた。いかん、本気でショックだぞこれ。

「……わりぃ」
「……ん、許す」
素直に謝ると、留美はまだ恥ずかしそうにしながらも許してくれた。
「しかし……何で今この話をしたんだ？」
さっきは言い方が悪かっただけだと判断して、言い回しに気を付けつつ話題の発端に遡る。
「だって……私、そんなに大きくないし」
留美が上気した顔で俯いて、胸に手を当てる。
「ん、留美はまだ中1だから、まだまだこれからだろ。気長に待てば良い」
何言ってんだ俺……とは思いつつも、何とかフォローを入れる。
すると、留美が俺を真っ直ぐに見つめてきた。様々な感情が入り乱れた、複雑な光を宿した瞳に吸い込まれそうになる。
「……八幡は、そういうことに興味が無いの？」
留美の言葉に、どくんと胸が鳴る。
――それは、恐らく同年代の女の子とお付き合いでもしたら、恐らくかなり早い段階で思い浮かべていたであろうこと。
――けれど、高校生以上に中学生は、まして中学生になったばかりの女の子なら、身体は未成熟だろう。いくら留美が大人びていると言っても、身体まで大人びている訳ではない。
――だから、俺は無意識の内に、留美の言う『そういうこと』から目を逸らしていたのかもしれない。
「……興味が無いことはない。ていうか興味津々だ。だけど、俺は出来るだけ留美を大事にしたい。不慣れどころか全然経験が無い俺にはどうすれば優しく接することが出来るかも分からない。だから、慎重に行きたいんだ」
考えを正直に話すと、留美の瞳が揺れた。
「……私、八幡にだったら……良いよ」
留美の返答に目を見開く。留美をじっと見つめると、唇が微かに震えていることに気付いた。

「……ばか言うな。そんな魅力的な言葉ぐらいで俺が襲うだなんて思ってくれるなよ」
このまま勢いで何かしてしまうことが恐くて、肩を竦めて敢えておどけた口調で言った。
すると、留美も俺の調子に合わせようと言うのか、いつもより冗談交じりの声音で喋り始めた。
「……ふぅん。じゃあ、私が八幡をその気にさせるくらい誘えば良いんだ？」
「……そうだな。全く以てその通りだ。果たして留美にそんな高難度な事が出来るのかな」
表面上は、冗談の掛け合いだ。虚勢に虚勢を掛け合わせた、どこまでも密度の薄い、ガスのような言葉の応酬。
けれど、留美の瞳には。
好奇心と、膨れ上がる期待と、不安と。
――そして、年齢にまるでそぐわない、情欲の炎が灯っている。
他愛も無いやりとりを続けながら、留美が俺の手を握った。いつもより明らかに熱い。喉を鳴らしそうになって顔を逸らすと、留美の手に力がこもった。留美は、自分の変化に気付いているのだろうか。
これ以上進めば、本当に後戻りが出来なくなる道を歩もうとしていることに、気付いているのだろうか。
「もう一回言うけど」
思考をぐるぐる回していると……留美が凛とした、芯の一本通った声を発した。
「……私は、八幡にだったら……良いよ」
改めて言われて、この子にも覚悟があることを知る。
――けれど、俺は。
「……そうかそうか。じゃあ、頑張って俺を誘惑してくれ」
「……うん、そうする」
すぐに手を出すなんてことは、出来なかった。
いや、正確に言えば、この時はしたくなかった。
留美が、果たしてどんな手を使って俺を誘惑してくるのか――それ

が、どうしても見たくなってしまった。
ふとしたきっかけ、話の流れ、冗談の上塗り。
ちょっとしたことが積み重なって、なんだかとんでもない流れになった。
けれど、俺は。
後悔や反省をしていないどころか、わくわくしてさえいる。
留美の表情を見ると、思っていることは俺と同じのようだった。
時計を見ると、まだ二人でこの部屋に居られる時間は十分にある。
これから、何が起こるのか、何を仕掛けられるのか。
心中に抱く期待度は、そのまま鼓動の速さに繋がる。
「八幡のこと……誘惑してあげる」
「ああ、ぜひそうしてくれ」
互いの冗談のような声音は、さっきと同じなのに。
ガスのようだった言葉の密度が、明らかに濃くなった。言葉と視線を交わすごとに、妖しい色と匂いを纏ったねっとりとした空気が部屋を満たしていく。
軽口を交わしながら。
留美に聞こえるのも厭わずに、ごくりと喉を鳴らした。

続く。

（３４）

留美が俺のことを誘惑すると言ってから、しばらく時間が経った。あんなことを言った後だから、一体何をするのかと内心気が気でなかったが、今のところ和やかに話しているだけだ。

このまま平和に時が過ぎることを願う自分と。

大きな大きな変化を願う自分。

二つの矛盾した願いが折り重なって、頭の中はずっと混乱していた。

「……ちょっと、暑いかも……」

ココアを飲み干した留美が、カップをテーブルに置いてぽそりと呟く。

「ん、ああ、ならエアコン点けるか」

留美に向き直って答える。そこまで暑いとは思わなかったが、留美がそう言うのなら調整しよう――と思い立ち上がろうとすると、留美がふるふるとかぶりを振った。

「ん、大丈夫。……ちょっと、脱ぐから」

「え、脱ぐって……うぉっ!?」

留美が胸元のボタンに手を掛けた。

高速、いや、光速で目を手で覆った。

しゅるしゅると衣擦れの音がする。俺は歯を食いしばっている。

薄暗闇の中で、留美がくすりと笑う声が聞こえた。

「八幡……初心だね。上着を脱いだだけなのに」

「へ……っ？」

きょとんとしていると、留美が俺の手を外した。恐る恐る目を開けると、留美がワイシャツ姿になっていた。

……。

「……し、知ってたし……」

「へえ、知っててあの反応なんだ？」

「うぐ……」

留美が悪戯っぽく笑う。表情の変化は小さいのだけど、明らかに俺で遊んでるのが分かる。くそぉ……っ。
まあ、まあまあまあ。
落ち着け、比企谷八幡。
ワイシャツ姿自体は、全国どこの学校、あるいは職場でも見るものだ。今のは単に、もしかしたら留美がもっと脱いでしまうのではと思っていただけなので、一度ネタばらしされれば何てことはない。
よし、落ち着いた。これならば平常心を保てそうだ。
「……ふう。ところで留美ってうおぉぉぉっ!?」
留美が、ほんのり頬を赤らめながらシャツのボタンを上から外していた。
再び光速で目を手で覆った。
薄暗闇の中で、留美が再びくすりと笑う声が聞こえた。
「八幡……ほんと初心。よく見てみなって」
「へ……？」
今度は恐る恐る自分で手を外し、留美を見てみる。
結果としては、大丈夫なようで、全く大丈夫ではなかった。
留美は、ワイシャツのボタンを3つ程外していた。今は左右の生地が重なっているのでさほど影響はないが、ちょっとでも動けば途端に胸元が見えてしまう。
「べ、べべ別に平気だし……っ」
「……ふぅん」
留美が蠱惑的に笑う。しかし自身も恥ずかしいようで、よく見れば首まで赤い。
ワイシャツの胸元をつまんで悩まし気に扇いだかと思うと、ゆったりと立ち上がって俺の前に来た。
「八幡」
ぽそりと俺を呼んで、髪をかき上げたかと思うと、膝に手を付いて、屈んで俺に顔を近付けた。開いた胸元を見せつけるような行動に、心臓が爆発しそうになる。
「る、留美、こら……っ」

慌てて目を閉じると、唇を塞がれた。
「んふぅ……ちゅっ、くちゅっ、ちゅぴっ、ちゅくく……んちゅっ、んふぅぅぅ……っ」
「……っ」
目を見開くと、留美のうっとりとした顔に視線の自由を奪われた。とろんと垂れた目尻。上気した顔。顔の角度を変えて悩ましく侵入してくる舌。制服の下で、牡の欲望ががちがちに反応していた。
留美の顔に手を添えて、口内のまぐわいに積極的に応じる。留美は嬉しそうに目を細めると、腰を下ろして俺の股座に座った。体育座りのようにして俺の太ももを跨ぎ、身体を密着させる。ワイシャツ姿になったことで、二人の身体がより近付いているような気がした。
「んふぅぅ……んくちゅっ、ちゅぴっ、ちゅりゅ、……んはぁ……んんっ？　ごく、ごく、んっく、んくぅぅ……っ」
唾液を流し込むと、留美は美味しそうに飲み込んだ。留美も唾液を流し込んでくる。飲み込むと、信じられない程甘かった。ココアの甘味と、発情した女性の甘味。
留美の足が俺の腰に絡み付く。視線を下に落とすと、留美のスカートは俺の下腹部を覆っていて、淫らな行為を連想させた。
「んっ、ちゅく、んんん……んふぅっ!?」
留美が何かに対して驚き、華奢な身体を悩ましくくねらせる。何事かと思いもう一度視線を落とすと、原因が分かった。スカートに覆われて見えないが、俺の膨らんだ部分と留美の大事な部分が触れたようだ。一瞬柔らかい感触がしたのはこれだったのかと気付く。
「んっ、ふっ、んっく、んんん……っ」
留美が徐々に下腹部を密着させていくと、その声から見る見る余裕が消えていく。表情からあどけなさが消えていき、大人の女性の顔に変貌していく。
留美の頭と背中に腕を回して、きつく抱きしめた。それと同時に舌の絡みも一層ねちっこくする。
「んふぅぅぅ!?　んっ、んぐっ、んぐぅぅぅ……っ」
留美の声がどんどん弱々しく、艶を帯びていく。震える声が嗜虐心

をかき立てた。
頭に回した手で留美の耳を撫でながら、腰をぐいぐいと前後させる。スカートに覆われていて見えないが、その下では微かにくちゅりと言う水音がした。
唾液を一方的に流し込み、留美に思う存分飲ませる。
どれくらいそうしていたか分からないが、ようやく口を離すと留美と俺の口の間に透明な糸が引いていて、留美の顔は完全に出来上がっていた。
「……八幡、私の誘惑、どう？」
とろとろになった瞳で、そんなことを言ってくる留美がたまらなく愛おしい。
「ああ、すげぇ良かったぞ。だがこれくらいではまだまだだな。俺が留美を襲うまでには程遠い」
俺の言葉に対する留美の反応が鈍い。相当惚けているようだ。
ぽりぽりと頬を掻いて、とあることを思い付く。
「ちなみにだ。今後の参考にして欲しいんだが……」
言いながら、留美の脇を持って膝立ちにさせ、自身も膝立ちになる。俺は立ち上がり、留美には女の子座りをさせた。留美の後ろに、さっきまで使っていたものとは別のクッションを置く。
「俺が襲うと、こうなる」
「え……んむ――っ!?」
留美を押し倒して、置いておいたクッションに頭を乗せた。初めに唇を塞ぐと、先程よりも更に身体を密着させて腰をぐいぐいと押し付ける。
「んぐぅ……っ！　んんっ、んむふぅっ、んんんんっ!?　うんんん……んむふぅぅぅ……っ」
留美が身体を捩らせようとすると、力ずくで押さえ込む。留美は俺の背中に腕を回しきつく抱きしめて、身体をびくびくと跳ねさせると、俺の腰の動きに合わせ始めた。汗をかいたためなのか、留美から発せられる甘美な匂いに情欲をくすぐられ、下腹部にこすり付けている肉棒には先走りの汁が滲み出ている。

腰の動きと口内を嬲る舌の動きは連動させていた。
時に優しく、時に蹂躙するように。
緩急を付ける度に、留美の表情はどんどん淫靡なものに変わっていく。
たっぷりとお互いの身体を密着させると、ようやく唇と身体を離した。留美の腕が力なくカーペットの上に投げ出され、髪は振り乱れていて、ぱっと見は完全に「そういった行為」をした後にしか見えない。
「……本気で襲えばこれよりもっとすごいぞ。……本当に、良いのか」
留美の横に座って頭を撫でながら言うと、留美がにっこりと微笑んだ。
「……ん、望むところ。待ってて、八幡が本気で襲いたくなるくらい誘惑してあげるから」
留美がそう言って笑う。
その笑顔が、心をざわつかせて。
「お前な……っ」
もう一度押し倒して、襲う予行演習をした。
結局この日は、留美を送るぎりぎりまでそうしていた。
留美が帰った後、部屋に残る匂いに、少女としてのもの以外の香りが混じっていることに気付く。
今日、この場所で。
二人の関係が変わり始めたことを実感した。

続く。

（３５）

私はまだ、生まれてから１３年も経っていない。だから、初めて体験することが毎日のようにある。沢山ある。

けれど、こんな「初めて」は、今までに無かった。絶対に無かった。

身体が、熱い。

奥底から、燃え滾るように、熱い。

私の身体は、心は、一体どうしてしまったんだろう。

×　×　×

八幡の部屋に遊びに行った後、家の前まで送ってもらった。すっかり暗くなった道で、私と八幡は何度もキスをした。

あのキスが、情熱的なものだったのかは分からない。

けれど、「貪る」という表現なら、とてもしっくりくる。

私が八幡の手を、指で波打つように握ってじっと見つめると、八幡はきょろきょろと辺りを見回した。すっかり暗くなっていて、寂し気な街灯以外人影一つなかった。そんな帰り道で、私は八幡に何度も「襲う予行演習」をされた。

頭と背中を抱きかかえられて、何にも身動きが取れなくなった状態で、唇を奪われる。

「んっ……んぐっ、んちゅっ、んっく、ふぅん……んふぅっ、んふぅぅ……っ」

八幡は私の口の中をめちゃくちゃにしながら、私のスカートの中に自分の足を差し込んで、大事な所を太ももでこすってきた。身長差が大きいから、そんなことが簡単に出来てしまう。ぐりぐりと擦られると頭の中に火花が散って、腰ががくがくと震える。それで腰を落とせば快感が増して、腰を上げようとしてもままならない。意識が朦朧として、八幡に身を委ねてされるがままになると、八幡はようやく解放してくれる。時間にすれば数十秒、いや、数分くらいだろうか。一回につき一体どれだけそうしていたのかは分からない。けれど、私は何度でもその行為を求めてしまって、回を重ねるごとに意識が弾けるまでの時間が縮んでいく。途中で、八幡の膝の辺りがぐしょぐしょに濡

れているのに気付いた時は死ぬ程恥ずかしかったけれど、それでも求めることをやめることは出来なかった。
「じゃあ、また明日な」
「……ん、また明日」
別れ際、家の前でキスをする時は、八幡は最大限に周囲に気を払っていた。私はもう八幡とキスをすることしか考えることが出来なくて、周りを見る余裕なんてなかった。別れ際は私の耳をそっと撫でながら、優しくキスをしてくれた。私がせがむように舌を出すと、八幡はぱくりと咥えて私の舌を舐め回した。耳の中にも指を入れられて、膝ががくがくと笑った。八幡の腰に手を当てて、少しでも長い間キスを続けられるように耐えながら立っていた。
「んっ、ちゅくっ、んふぅぅ……っ、……ぷはっ。……明日も、キスしていい？」
「……っ」
正直な願いを告げたら、八幡は目を見開いて口をわなわなと震わせた。一瞬私の背中に手を伸ばしたけど、すんでのところで思い留まったみたいだった。もしかしたら、この台詞が一番八幡のことを誘惑出来ていたのかもしれない。
そんな風にして別れてから、しばらく経った。
ご飯を食べている時、母にしきりに心配された。「何だかぼーっとしてる」って。でも体調が悪そうというよりは、何だか夢見心地に見えるとも言われた。八幡とのことを追及されそうだったから、急いでご飯を食べた。無理して早く食べるとあまり良くないということが分かった。
そして、今。
歯磨きとお風呂を終えた私は、自室のベッドに横たわっている。
「うぅ……んっ、くぅっ、んんん……っ」
小さく蹲って、息を荒げる。
身体が、熱い。
奥底から、燃え滾るように、熱い。
私の身体は、心は、一体どうしてしまったんだろう。

「八幡……っ」
自分にしか聞こえない微かな声で、彼の名を呟く。それだけで、身体の芯からふわふわとしてきて、それと同時にどうしようも無い程のもどかしさに駆られた。
ベッドのシーツを握り締めて、彼の顔を思い浮かべる。
私って、こんなに八幡のことを好きだったんだ。
いつからこんな……なんていう事は分からない。
八幡のことが、好きなんだ。大好きなんだ。
だから、八幡にあんなことをして、あんなことをされて……。
そっと、自分の唇を撫でる。自分の指を八幡の唇だと思って撫でると、ぞくりとした何かが背中を駆け抜けた。
ああ、私ってこんなにエッチなことが好きだったんだ。知らなかった。
けれど、一人きりだったらこんな風にならなかった。
八幡と居るから、私はこんな身体になったんだ。こんな心になったんだ。
「熱い……っ」
身体の中を、燃え盛る炎が駆け巡っているようだ。私の身体を内側から焼き尽くして、外へと躍り出ようとしている。
止めなきゃ、この炎を、止めなきゃ……。
そんな風に思っていると、突然着信音が鳴った。驚いてびくりと身体が跳ねる。こんな風に電話をかけてくる人はほとんどいない。
綾乃か、もしくは――
画面を覗き見る。
「八幡……っ」
私の顔は、きっと今にも泣きそうだったと思う。
× × ×
『もしもし、わりぃな急に』
『ん、大丈夫』
耳元から聞こえる優しい声に、気持ちが安らぐ。けれど、身体の火照りは収まるどころか増すばかり。

『なんかな、さっきの別れ際の留美を見て、何となく心配になってな』
『心配って……どういう？』
『や、その……っ』
八幡が、急に恥ずかしそうに口ごもる。きっと電話の向こうでは頬をぽりぽりと掻いているんだろうな。
ふぅ、と八幡が息を吐いた。
『その、な。留美……寂しがってんじゃねぇかって思ってな』
『……っ』
その一言が、私の身体を芯から焼き焦がした。
携帯を枕元に置いて、仰向けに寝転がる。スピーカーモードにするか迷ったけど、八幡の優しい声を耳元で聞いていたいから、敢えて普通の通話モードのままにした。
『……ふぅん。どうしてそんな風に思ったの？』
『おい、声笑ってんぞ』
そう言う八幡の声も笑ってる。けれどきっと、私がこんな喋り方をした本当の理由を八幡はすぐには気付けないと思う。
これからすることへの緊張を和らげる為だなんて、きっと考えやしないと思う。
『……ありがと。嬉しい。すごく』
『お、おお、そうか、それなら良かった……』
電話してくれた割に、自信は無かったみたい。
くすりと笑いながら、私は――
自分の胸に、両手を伸ばした。
「ん……っ」
薄手のパジャマ越しに、指が僅かながらも胸の中に沈む。最近少しは大きくなったけど、まだまだ発展途上だ、きっと。
『？　どうした？』
『何でもない。それで、何話す？』
『その切り出し方でまともな話題を出せるヤツはこの世に存在しないと思うんだが……』
私が漏らした小さな小さな声にも八幡は気付いてくれたけど、知ら

ないフリをする。今日数えきれないくらい八幡に抱きしめられて、意外と逞しい八幡の胸板に私の胸がぎりぎりと押し付けられた時の感触を思い出す。
「んん……っ！」
手に力は加えていないのに、イメージ一つで途端に気持ち良さが増した。
『？　留美、大丈夫か？』
『ん……なに？　大丈夫だよ？』
自分の声が上ずっていることに気付く。
私は何をやってるんだろうか、と思う。
けれど、私がこんなことをする原因を作ったのは八幡だ。
だから、八幡にはその責任を取ってもらわないといけない。
――ただ、今は八幡のことを誘惑中だから、今回は間接的な協力を求める、ということで。
我ながらどうしようもない言い訳を心の中に並べ立てて、ゆっくりと手に力を込める。
『んーっとだな……そうだ、明日はどこで会う？　部活があるからあんまり長い時間は会えないけど……って、……留美？　本当に大丈夫か？　無理すんなよ？』
『んっく、んん……っ、だ、大丈夫、大丈夫だから……っ、ほら、話、続けよ？』
『……留美、まさか……っ』
八幡の声が低くなった。
あ、やばい。
この声、知ってる。
私を思い切り抱きしめて、私の耳元で恥ずかしい言葉を囁く時、こんな声だった。
『……一人で、してるのか？』
『あ……っ、うぁ……っ』
八幡に知られてしまった。
頭がおかしくなりそうなくらい羞恥が湧くけど、八幡は電話を切る

どころか呆れる様子もない。ただ静かに、私の言葉の続きを待っている。
『そ、そんな、こと、してない……っ』
『うそをつくなよ。うそをつくと、明日はしてやらないぞ』
『あ、うっ、うぅ……っ』
八幡の言葉に、泣きそうになる。
どうしよう、どうしようと思う反面。
私の手は、小さな胸を必死で弄っていた。
続く。

（３６）

留美との別れ際の表情が、家に帰るまでも帰ってからもずっと気にかかっていた。

単純に心配する、という感情ももちろんあるが、それ以上に、留美の中で何かが芽生えているような、そんな漠然とした予感があった。

だから電話をしてみた訳だが、正直、留美のあんな声を聞くとは思わなかった。

留美の艶めいた声に舞い上がってしまっていたとはいえ、

『……一人で、してるのか？』

留美に対してこの言葉を投げかけた時は、緊張で心臓が爆発しそうだった。

けれど、いざ口にしてみれば、状況はあっと言う間に動いた。

『あ……っ、うぁ……っ』

留美が困惑した声を漏らしたが、その中に混じる色香を見逃すことは無かった。

『そ、そんな、こと、してない……っ』

まるで子供がだだをこねるような幼い口調なのに、声音は大人の女性そのものだ。己の欲望がぎちぎちといきり立ち、ズボンの生地を無理やりに伸ばす。

『うそをつくなよ。うそをつくと、明日はしてやらないぞ』

『あ、うっ、うぅ……っ』

留美は今にも泣きそうだ。けれど、今まで留美を近くで見ていた経験から、確かに分かることがある。

留美は、いやがっていない。

いや、それどころか、むしろ――。

『一人でしてるんだろ？』

『あ、うぁ、う、うぅ……っ』

留美の声がより近くなる。きっと、画面に顔を押し付けるくらい近付けてるんだろう。何も言葉を発していなくとも、静かに息を荒げているのが手に取るように分かる。

『……て、る……』
『ん？　何だって？　わるい、聞こえなかった』
『……から、……てる……』
『はっきり言うんだ』
『だから……私、一人で、してる……してるの……っ』

留美が目の前にいなくて、本当に良かったと思う。
今の留美が浮かべている表情を見たら、俺はきっと、何の容赦もなくあの子をめちゃくちゃにしてしまっていただろうから。
『……そうか』
俺の返事の声も、上ずるのを必死で抑えている。留美の声も、俺の声も、震えていた。
『留美、俺たちは今、電話してる訳だよな』
『え……？　う、うん……』
『電話だと、留美が何をどうしてるのかさっぱり分からないんだ』
留美がひゅっと息を吸った。俺が次に何を言うのか容易に想像がついたのだろう。
『だから……留美。今、具体的に何をしてるのか、俺に教えてくれないか』
『……っ』
ほんの少し冷静になれば、洒落にならないことを言っているのは分かっている。
けれど、俺は今、２人の間に醸成された雰囲気に酔っていた。
互いの声のやりとりが、互いの音のやりとりが、俺と留美の感情をどこまでも昂ぶらせる。ひりつくような空間に心が搦めとられ、溺れていた。
『……教えて、くれるか？』
努めて優しい声で語り掛ける。
強制したくはないんだと。
無理はしなくていいんだと。

優しく、甘露のような言葉を留美の背後に垂らす。
今からでも戻れるように、何事も無かったかのごとく引き返せるように。
『……わ、私……っ』
けれど、留美は。
『……今、ベッドの上に寝て、胸を、さわっ、てる……の……っ』
――背後の甘露よりも、目の前の情欲の沼に足をそっと入れた。
ごくりと息を呑んだが、敢えてその音を留美に聞こえるようにする。俺も興奮しているのだと言外に知らせることで、留美の官能がより高まると思ったからだ。
『……服の上からか？』
『……うん。その、お風呂も入って、今、下着着けてないから……その……っ』
わざわざ興奮を煽ることを言ってくれる。
『その、なんだ？』
『……服が、こすれて……気持ち良い……っ』
自分の歯が、かちかちと鳴った。
留美が息を荒げる。切実な声が持つ熱が、電話越しに伝わりそうだ。
『両手で揉んでるのか』
『う、うん……』
『じゃあ、もっと激しく揉むんだ。特に、自分が一番気持ち良いと思うところを入念に』
『……っ、そ、それ……っ』
『いいから』
『あ……ぅあ……っ、……んっ、くぅっ、はっ、んくぅ……っ、んふぁぁっ!?』
突然留美の声が跳ね上がる。
『はぁっ、はぁっ、だ、だめ、八幡、私なんだか変、これ以上は無理、無理なの……っ』
『そうか。じゃあ続けてくれ』

『う、うそ……っ』
『いいから』
『んくぅ……っ、わかった……っ。……あっ、んっ、ひっ、あっ、あぁぁ……っ』
『自分が気持ち良いと思う所を、両手の人差し指と親指でつまむんだ』
『え……こ、こうすればいいの……んはぁぁっ!?』
『もっと強く、こするように』
『うそ、んくっ、こんな、んふぁぁっ、やだ、ひっ、あぁっ、あぁぁぁ……っ』
『止めちゃだめだぞ。もっと気持ち良くなるんだ』
『あっ、やっ、だめっ、これ、ほんとに、あっ、んくぅっ!?』
留美の声はどんどん艶を帯びて、聞いているだけで狂いそうな程に高まる。
『なに、これ、何なの……あふぁぁっ!?』
『っ……? 留美、大丈夫か……って、あれ?』
留美の声が激しく跳ねた瞬間――通話が途切れた。
留美との繋がりが途切れて一人に戻った瞬間。
言い得ぬ後悔が、身体中を包んだ。

× × ×

今のは、なに?
なんだか、すごい波が来そうだった……?
「そんな……うわ……っ」
半信半疑のまま視線を下ろすと、自分の身体に起きている変化に愕然とした。
お風呂に入ってパジャマを着ている私の足の間が……水でもこぼしたのかと思うくらいに濡れている。
……下着、履いてるのに?
うそでしょ?
顔が、火が出そうなくらい熱い。
私の身体、どうしちゃったの……?
混乱しながらも、汗ばんでる上に服をこんなにしては寝られないと

思い、お風呂に入り直すことにする。
脱衣所で服を脱いでいると、着信音が響いた。
画面を見て、すぐに電話に出る。
『もしもし』
『もしもし。……あー、その、さっきはなんだ、やりすぎたかもしれん。すまん』
『……別に良いのに』
八幡の声は、さっきまでと違っていつもの優しい声に戻っていて。安心すると同時に、少し寂しくもあった。
『それよりも』
『ん、なんだ？』
『私今、着替え中なんだけど』
『え、うおぉ!?　それはすまん……って、電話に出たのは留美だろ』
『八幡のエッチ』
『うぐぉぉ……っ』
八幡が悶絶してる。どうやらすっかりいつも通りの八幡になったみたい。とは言え、からかうように言ったのが伝わったみたいで、唸ってる八幡の声もどこかおどけてる。
さっきまで、あんなすごいことを私に囁いてたのに……。何だか急に初心になったみたいで、それがすごく可愛い。
『ねえ、八幡』
『どうした』
『私、明日も八幡とキスしたい』
『……大歓迎だ』
『もっと誘惑してあげるから。八幡が私を襲いたくなるように』
『……望むところだ』
『八幡』
『おう』
『大好き』
『おう……って、おぉ!?　急にそんな』
電話を切った。

ちょっとだけ、勝った気分。
浴室に入ると、自然と鼻唄を歌い出した自分に気付く。
なんでこんなに楽しい気分なんだろうと考えたけど、理由は単純だった。
電話を通して、八幡と一緒に居られたからだ。

明日会ったら何を話そう。
急にキスして困らせようかな。

「……八幡……」

今日も、明日も、これからずっと先も。
私は、八幡が、好き。
大好き。

続く。

（３７）

翌日。

「……こ、こんにちは」

放課後、部活も終わってから学校近くの公園で留美と会うと、顔を真っ赤にしてえらく他人行儀な挨拶をされた。

「おう。……どうしたんだその距離感は？」

並んで歩きながら尋ねると、留美は真っ赤になって俯いてしまった。

「……昨日のを思い出したら、ちょっと……っ」

「……ああ、そういうことか」

それは恥ずかしいだろう。

電話で年上の男に言葉で責められながら自分を慰めて……ん？

……んん？

「留美。気のせいかもしれないんだが」

「ん、なに？」

「俺が昨日やったのって、通報レベルか？」

「……そんなことする訳ないけど、しようと思えば多分今まで何十回も出来たと思う」

「おうふ……」

何十回もなんだ……。それもそうか、そうだよなぁ……。

意味もなく凹んでいると、留美がそっと手を握ってきた。指を絡めて握り返すとぴくりと手が震えた。

「……だから、する訳ないってば」

いつの間にかいつも通りの調子に戻って、優しく微笑んでいる。心がふわりと軽くなって、愛おしさが増す。

ベンチに並んで座って、ほっと一息つく。円状の空間を囲むようにベンチが並んでいて、夜遅くになるとカップル同士が見せつけるようにいちゃつくと有名な場所だ。この時間は俺たちの他に誰もおらず、近くを行き過ぎる人からは死角になっている。指定したのは留美なんだけど、この噂は高校生どころか小・中学生だって知っているはず

だ。一体何をするのかと、内心気が気でなかった。
「八幡……」
留美の声が湿り気を帯びる。横を向くと夕陽が留美の顔を横から照らし影を作っていて、明るい昼間の顔と妖艶な気を帯びた夜の顔が混在していた。
留美がぴとりと身体をくっつける。足と足がくっつくと、途端に2人の境目が分からなくなった。
「ん……っ」
留美が目を閉じると、長い睫毛が微かに震えた。見惚れる程美しい顔だけれど、あまり見ている時間的余裕は無い。顔を傾けて唇を重ねると、甘い吐息が鼻腔を擽った。
「ん……っ、ふぅっ、ちゅっ、ちゅく、んんん……っ」
舌を絡めて唾液の交換をしていると、留美が手を繋いできた。両手を握り返して、いやらしく音を立てながら口付けをする。
留美が繋いだ手を離すと、首に腕を回して抱きしめてきた。どきりとしつつも、留美の背中に腕を回して抱き寄せる。密着度が一層増して、自然と口でのまぐわいの激しさも増す。空いた左手をどこにやろうかと迷っていると、留美の手が俺の左手を掴み――自身の太ももへ導いた。
「ん……っ!?」
急に何を……と思ったが、そうだ、そもそも留美は俺を誘惑するのだと堂々と言っているのだ。第一俺はこの展開に戸惑いこそすれ、いやだと思ってはいない。むしろ大歓迎だ。
スカートの上から留美の太ももに手を触れる。生地越しに柔らかな感触が伝わり、心拍数が跳ね上がった。
「んふぅぅ……っ」
甘美な声が漏れて、理性をじわじわと焼かれる。恐る恐るさすっていると、留美がスカートをぺろりと捲り、透き通るような白さの太ももを露わにした。驚きながらも素肌に触れると、シルクのような滑らかさと、熟し切っていない果実のような柔らかさに息を呑んだ。
「んっ、ふっ、ふぅぅ……っ、んちゅくっ、ちゅくっ、ちゅぷ、ちゅぴ

……んふぅぅん……っ」
太ももを撫でられる度に悩ましく身体をくねらせる留美の仕草は、信じられない程妖艶だ。
「ちゅぷ、ちゅぴっ……んはぁっ。……どう？　私の誘惑は？」
口を離して微笑んだ留美の顔は、数分前とはまるで別人のものだった。少女の中の女としての面が顔を出し、僅かな挙動一つで心が揺さぶられる。
「……かなりやばい。でもまだ俺は耐えられるな」
「……そ」
あっさりとした返事をするや否や、留美が俺の喉元に口付けをした。
「ちゅっ、ちゅぴっ、ちゅくっ、んふぅぅっ、んっ、ちゅりゅ……っ」
「お、おぉぉぉ……っ」
固めた舌先でつつき、なぞり、舌の腹でたっぷりと舐る。留美の髪から汗混じりの甘い匂いが漂い、視界がぐらりぐらりと歪む。命と理性を一緒に握られている気がした。
留美は口を離すと、うっすらと口の端を上げた。その瞬間背中を何かがぞわりと駆け抜けて、留美の目を直視出来なくなり、抱き寄せて胸元に留美の顔をうずめる。
「……私の顔、見たくないの？」
顔をうずめたまま、優しい声で留美が尋ねてくる。
「や、そうじゃないんだけど、なんか、その……っ」
時間を追うごとに妖艶な笑みを纏ってゆく留美に、頭が付いてきていなかった。だから、一時退避として留美を抱きしめて顔を見ないでおいたのだ。
しかし、留美の攻めは止まらない。
「じゃあ、こうしてあげる」
「え――」
留美が突然立ち上がり、俺の手を引いた。為されるがままに立ち上がると、ベンチのすぐ横の芝生に連れて行かれた。「座って」と言われ腰を下ろすと、留美は胡坐を掻いた俺の正面に立ち、腰を下ろして抱

き付いてきた。俺の身体に正面から密着してきた瞬間、思わず言葉を失った。
「な……っ」
目の前に留美の顔がある。スカートの中に履いているショーツと、いきり立った股間がこすれていた。
「ん……っ、これ、で、どう……っ？」
留美が蠱惑的に微笑む。しかしよほど恥ずかしいのか、大人びた笑みを浮かべながらも顔は真っ赤で震えている。ひどくアンバランスなギャップにごくりと息を呑むと、俺の首に腕を回した留美に唇を塞がれた。
「ん……っ!?」
今までよりも舌が口の奥深くまで入り込んできて、入念に中を撫で回してくる。身体が密着して、胸の柔らかさと下半身の湿り気を帯びた肉感に酔いしれる。
「んふぅぅ……んっ、んんんん……っ」
留美は腰をひくつかせながら、前後に動かして互いの大事な部分を布越しに擦り合わせる。快感を求めるように、俺の腰も留美の動きに合わせて揺れる。留美の体重は冗談かと思う程軽いが、擦れ合っている部分に感じる重みは妙に生々しい。
このまま夜までこの格好を続けていれば、周りからは最後までしているカップルだと思われるだろう。服を着ているという自覚も薄れるくらい、この行為に夢中になっていた。溺れていた。
ああ、このままずっとこの時間が続けば良いのに――と思っていると。
留美が、不意に唇を離し、すっくと立ち上がった。
「あ……っ？」
思わず漏れた自分の情けない声に赤面すると、
「ふふ、もっとしたかった？」
留美が悪戯っぽく笑う。スカートの中は見えそうで見えない。
「八幡。もっとしたい？」
留美が続けざまに聞く。答えなんて一つしかないが、この流れで言

うのは憚られた。

「ほら、八幡、早く……あ――っ？」

――ここまでの行為で、足腰にきていたのだろうか。

留美の膝がかくんと崩れ落ちた。

咄嗟に腰に手を伸ばして支えたが、留美の身体はずるずると真下に落ちてゆく。

――くちゅり。

「あ……っ」

再び互いの下腹部が擦れた瞬間、いやらしい水音がした。留美の瞳が揺らぎ、目が合うと気まずそうに逸らした。

「……」

俺は、何も言わず、芝生に手を付いて身体を後傾させた。一人でやっていれば、星でも眺めているかのような体勢だ。

「……」

留美も何も言わず、ぺたりと女の子座りになると、俺の腰に手を添えた。

この場で、俺たちは、一体どこまでするんだろうか。

終わりのない攻防は、まだ収束の糸口さえ掴めない。

続く。

（３８）

もうじき日も暮れる時間。
そばに誰もいない、公園の芝生。
俺は両手を芝生に置いて、空を仰ぐように座っている。両足は伸ばしていた。
留美は、俺の足の根本に跨っている。俺の腰に手を添えて俯いていて、長い黒髪が表情を隠している。
くちゅり。
くちゅ。
くちゅ、くちゅり。
「あっ……あっ、あ……っ」
互いの下腹部が擦れ合う度に、留美の細い肢体が波打ち、スカートの中のショーツがくにくにと押し付けられる。いやらしい水音は、回数を重ねるごとに淫らに変質していく。
「……八幡、……いやらしいこと、したくてたまらないでしょ？」
今二人が行っている行為がいやらしいことと言えないなら、一体何が当てはまるのか――そんなツッコミも、今はしない方が良い気がした。
「……もう少しってところだな」
「……うそ。腰、動いてる」
「あー……これはアレだ。たまたま勝手に動いてるだけだ。そんな日もある」
何を言ってるんだ俺は……と思うような言葉に対して、留美は、
「……そっか、それならいっか」
と、ぽそりと呟いた。
……いいのかよ。
留美は女の子座りで俺に跨ったまま、静かに息を荒げている。視線は二人が重なっている所に向いていて、すっかり夢中になっているのだと気付く。
くちゅり。

くちゅっ、ちゅく。
くちゅくちゅ、くちゅ。
「はっ、はぁっ、あっ、あっ、あっ、あぁ……っ」
留美の腰が、前後に加えて左右にも動き始める。たまらず愉悦の声が漏れると、俺の声を聞いた留美の口の端が微かに上がった。二人の間の空気がぐにゃりぐにゃりと歪んで行く。
悪戯心で、留美が腰を後ろから前にずらした瞬間、それに合わせるようにぐいと腰を突き出した。
「んあぁぁ……っ!?」
留美がおとがいを上げて甘い嬌声を上げ、白い喉元をおしげもなく晒す。見惚れる程の美しさと、目を背けたくなる程のいやらしさを湛えていた。
「あっ、あっ、あぁ……っ」
留美がぺたりと俺に抱き付くようにへたり込んで来た。俺は寝転がって留美を抱きしめると、夕暮れの中巣に帰ろうとする鳥の群れをぼんやりと眺めた。
「……八幡」
「ん、なんだ」
「私の誘惑、どう？」
「興奮して死にそうだ」
「それでも襲ってくれないの？」
「馬鹿を言うな。俺の理性を舐めるなよ」
「じゃあ、もっと誘惑していい？」
「ああ、どんどんこい。俺の五感をフルに使わせるつもりでな」
言うと、留美が俺をじっと見つめて考え込んだ。まあ、いきなり案が浮かぶ訳も――
「……今、八幡の顔に跨るのは……どう？　視覚も触覚も嗅覚も満たせると思うけど」
やべぇのがきた。
「留美、流石にそれは、な？　俺が変態としての覇道を歩むことになるから」

「……あ、味覚と聴覚も……いけるかも」
「いけてないいけてない、全然いけてない」
この子、真面目な顔して何を言ってんの？　いや、よく見たら顔真っ赤だな。セルフ羞恥プレイとかレベル高いですね留美さん……。
留美は立ち上がると、俺を見下ろして優しく微笑んだ。
「じゃ、するから」
「待て待て待て待て」
芝生に手を付いて、身体を高速で後退させて。
留美の足の間から、すぽんと抜けた。
尻が芝生とこすれてしゅるるる……と変な音がした。若干青臭い匂いがする。
俺が息を荒げて慌てていると、留美は悪戯っぽく笑った。
「……冗談なのに」
「絶対うそだろそれ」
「ん、だから冗談って言った」
「や、俺が言ったのはそこに対してじゃなくて」
「ん、どこ？」
からかうように笑うと、留美は俺の下へ歩み寄り、身体を屈めて唇を重ねてきた。まるで年上のお姉さんに遊ばれているような気がした。
「……そろそろ、帰るか」
「ん」
立ち上がると、留美が何も言わずに抱き付いてきた。胸元に顔をうずめた留美の頭をぽんぽんと撫で、しばし立ち尽くす。
辺りが段々暗くなっていき、留美の表情もはっきりと見えなくなっていた。ぽつぽつと街灯が灯り始めるのを見て、留美の肩を抱いて身体を離し、二人並んで歩き始める。
手を繋いでいると、留美が腕を抱いてきた。
「すげぇ恥ずかしいんだけど、これ」
「私は恥ずかしくないから大丈夫」
「俺の意見は反映されないのか……」

そうは言いつつも、何だかんだでそこまで気にならない。
何故ならば、暗くなった途端にカップルがわらわらと増えたからだ。さっきまでいた場所にカップルが吸い込まれていく。きっとこれからあれやこれやとするのだろう。
「……あの人たち、いやらしいこと、するの？」
留美がきゅっと俺の腕を抱きしめて、上目遣いで尋ねて来る。
ふむ、と顎に手を当てて考えた。
「留美の方がいやらしいから大丈夫だ」
さっきまでの妖艶な仕草を思い出して至極真面目に答えたのだけど。
「八幡」
「ん」
「ほっぺた、こっちに寄せて」
「なんだ、キスでもしてくれんむっ」
つねられた。
うにうに。
うにー。
「……ならくらいか（長くないか）？」
罰にしては妙に長いつねられ時間（妙な言葉だ）に思わずツッコむと、思い出したかのようにパッと手を離された。
「楽しくなっちゃった」
自由か。
お返しに頭をくしゃりと撫でると、留美は猫の様に目を細めた。

× × ×

留美の家に向かってぽてぽて歩く。留美は途中から腕を抱くのをやめ、手を繋いでいた。恥ずかしくなったのかと聞いたら、「ずっとやってると背筋が曲がりそう」とえらく健康志向な返事をされた。やべぇ、また好きになっちまう。自分のツボが分からない……。
しばらく何も話さないで歩いていると、留美が顔をくりんと向けた。
「八幡はどういう誘惑をされたいの？」

真顔で言う質問か、それ？
「あー……その、なんだ。男が喜ぶようなことは、まあ、大抵クラっとくるぞ」
「……そ。じゃあ、勉強しておくから」
あっさりとした調子で言ったかと思えば、あごに手を当てて小声で「あのサイトで調べて……あ、本を買うのもありかも。雑誌にも載ってるかな……あ、まずは綾乃に聞いてみよう」などと呟いている。本気で研究する気ですやんこの子……。
これから一体何をされるやらと期待に胸を膨らませていると（雪ノ下には辛い言葉だ）、留美の家に着いた。
「ありがと」
留美ははにかむと、軽い口付けをしてきた。ここで軽くしかしないのは、わざとなのだろうか。単純に家の前だから抑えているんだろうか。どっちも有り得る。
「また明日な」
「ん」
留美は今度は目を閉じて、顎を上げた。あら、もう一回ですか。
仕方のないお姫様だこと……と内心微笑みながら唇を重ねると、今度は唇が中々離れない。
試しに舌で留美の上下の唇の境目をなぞると、小さな体がぶるりと震えた。
あ、まずい。
スイッチが入りそうだ。
この場合、俺も、留美も。
危機感を抱いて早めに唇を離す。すると留美が不満げに唇を尖らせた。
「……お忘れかもしれませんが、ここって貴方様のご自宅の前でございますよ」
俺の言葉遣いに、留美は目をぱちくりとさせて、
「……何その言い方」
――呆れたように、くすりと笑った。

留美はくるりと反転して家に向かって歩き出したが、途中でぴたりと止まって振り返った。
「八幡」
「ん」
「大好き。……また明日」
そう言う留美の顔は、ほんのりと朱に染まっていて。
「……おう」
最後の俺の返事は、留美が聞き取れたか分からない程小さな声だった。
留美を見送ると、頭をがしがしと掻く。
「あー……これは、本当に時間の問題だなぁ……」
こんなことを言いながらも、俺の顔はにやけているんだろう。
留美とのこのぎりぎりの距離感は、今でしか味わえないものだ。
今はこの時間を、目一杯楽しみたい。
それが終わったら、それはそれ。
今度は踏み込んでからの時間を楽しめば良い。
街灯が灯る夜道を一人で歩くが、まるで寂しくない。
それが、不思議で、むずがゆくて。
たまらなく、幸せに思えた。

続く。

（３９）

人の肌に触れるということは、楽しくて、怖い。

八幡と手を繋いで、キスをして、それ以上のこともして――そんな風に思った。

……それ以上については、直接肌が触れた訳じゃないけど。

肌が触れ合う度に、自分の知らない自分が湧き上がってくる。なすがままにしていたら、自分が自分でなくなってしまいそうで怖くなる。

けど、それ以上に。

自分の知らない自分を、八幡が受け入れてくれることが、たまらなく嬉しかった。

八幡もきっと知らない八幡自身のことを受け入れることが、泣きたい程嬉しかった。

……ていうか八幡、結構鬼畜だなぁ……。

……私が誘惑するのに成功したら、あれ以上のこと――

「……っ」

つい、街中を歩いていた足を止めてしまった。

「どうしたの？　留美ちゃん」

一緒に歩いていた綾乃が、きょとんと首を傾げた。何でもないと答えて、また歩き出す。

今日は金曜日。

昨日一昨日と八幡と短い時間を過ごしたけれど、今日は用事があるみたいで会えなかった。

『久々に家族サービスをする義務が発生したんだわ。マジでごめん』

と電話で言われて、くすりと笑ってしまった。寂しいけれど、八幡も同じくらいかそれ以上寂しそうだったから良しとする。ところでサービスって義務なんだっけ……。

明日は土曜日だし、八幡の家に行きたいな、それも朝からゆっくり過ごしたいな、なんて思っていたら。

『明日、俺ん家来るか？　別に、まあ、その、朝からでも俺は歓迎する

んだが……』
と言われて胸が高鳴った。
私も言おうと思ってた――と答えた時の自分の声が、ちょっと裏返りそうだったのは今思い出しても恥ずかしい。
「もー、留美ちゃん。またぼーっとしてる」
「え、ああ、ごめん」
綾乃が頬を膨らませて怒った。謝りながら綾乃の頭を撫でると、「子供扱いしないでー！」と言って何故か私の頭を撫で返してきた。街中で女の子が頭を撫で合うって中々不思議。
「……あ」
綾乃の頭から手を離した所で、今自分達が居る場所が見覚えのある店の前であることに気付いた。
「？　留美ちゃん、どうしたの？」
私の視線に気付いた綾乃が、同じ所を見る。
「……これ……前に見たの」
私の言葉に、綾乃がふむと頷く。
「……留美ちゃん、これ、買いたいんだ？」
「いや、でもその、きっと似合わないし……」
「そんなことないよ。留美ちゃん大人っぽいから絶対似合うよ。わわ、ここすごい、透けてるのかな？」
「え……うわ、こ、これは流石に……」
「えー？　良いじゃん良いじゃん。値段……あ、セール中だ。チャンスだよ。すごすぎて却って買う人がいないんだよ」
「……私、この間お母さんの手伝いをいっぱいして、お小遣い結構持ってる……」
「……お互いまだ子供だから、ここまで言っておいて難だけど強制はしないよ？　留美ちゃん。でもきっと、喜ぶと思うよ。すっごく」
「……うん、わかった。買ってみる。……サイズ、あるかな……」
「お店の人に聞いてみようよ。すいませーん――」
綾乃が意気揚々と店の中に入る後ろを、こそこそと付いていく。
八幡、喜んでくれるかな。

×　×　×

「お兄ちゃん、どうしたの？　朝早くからそわそわして。気持ち悪いとは思わないけど。……ごめん、やっぱり気持ち悪いかも」
「ねえ何で言い直したの？　余計傷付くんだけど」
小町が熟慮の末に気持ち悪いという判定を俺に下したのは、土曜の朝7時のこと。
今日は留美が家に来る。早く会いたいと互いに気が急いていたのか、留美が家に来るのが9時という妙に早い設定にしてしまった。部活かよ。
朝から部屋やリビングの掃除をそわそわとしている俺を見て、休日モード全開の小町がソファに寝転がりながら生温い視線を送っていた。ちなみにさっきの小町の言葉で、まあまあ傷付いている。早く留美に会って癒されねば……。
「いけない、お兄ちゃんの癒しとしてのポジションが留美ちゃんに取って代わられる……」
「地の文を読むんじゃねえよ。あとお前ってそんなポジションだったっけ」
小町はこんなことを言いながらもにこにこしている。上機嫌だ。小町は小町で留美に会うのが嬉しいらしい。
一通り掃除を終えた後で、小町とコーヒーを飲みながらだらだら過ごす。もう埃を立てるような掃除はしないが、それでも何かに気付く度にせかせかと片付けをする俺を見て、小町が「ふへぇ……」と脱力した声を漏らして目を細めた。
「お兄ちゃんってアレだね、子どもが生まれる時すごいそわそわしそうだよね」
すんごい恥ずかしいことを言ってきた。
「えっ、はっ、ちがっ、ばっ、おまっ」
「スタッカート入れすぎ」
小町がくすくすと笑う。ううむ、本当に幸せそうだ……。
早く来ないかな……と思いながら2人分のコーヒーカップを流しに持っていき、スポンジに洗剤を染み込ませたところで、ぴんぽーん

……と、家のチャイムが鳴った。
×　×　×
「お兄ちゃん、小町が出るからー」
「ん、すまん。頼んだ」
状況が状況だったので小町に出てもらう。
「こんに……おはようございます」
「あーもう留美ちゃん可愛いおはよう可愛い律儀に言い直す所が既に超可愛い！」
……。
挨拶するのか褒めるのか、どっちかにしろよ。
カップをもしゅもしゅと洗っていると、小町がきゃーきゃーはしゃぐ声が聞こえてくる。
「わー、留美ちゃん、それほんと似合ってる……きゃー！　きゃー！　ぎゃー！」
テンションがおかしなことになっている。２人の姿は位置的に見えないが、きっと留美の顔は真っ赤になっているんだろう。
……。
……超見たい。
早く洗わなければ。
高速でカップを洗い終えて玄関に向かって歩き始めると、トーンが落ち着いた会話が聞こえてきた。
「ん……留美ちゃん、今日は本当になんだか……」
「……は、はい……」
「ん、そか。これはお邪魔しない方が良さそうだね」
「あ、いや、そんなことは……」
「大丈夫大丈夫！　応援してるから！」
何のこっちゃと思いながら玄関に顔を出す。
「……おはよう」
「ん、おはよう」
留美の柔らかな笑みと、服装に目を奪われた。
真っ黒なワンピース。

それも、肩を露出したタイプのもの。
雪の妖精のような白い肌が純粋さを、黒のワンピースが蠱惑的な魅力を表しているようで、そのコントラストに頭がくらくらした。
今日一日家でくつろごうと言うのに、まるでお嬢様が遠出をするような……
――それか、まるで男を本気で誘惑するような……
そんな服装に、心臓が大きく跳ねた。
「お兄ちゃん。今から小町は支度して出かけるから」
「あれ、今日は家でだらだらしないのか？」
「んにゃ、予定変更。二人っきりでゆっくりして」
小町がにゃはっと笑い、留美に視線を向ける。留美は顔を逸らして髪をかき上げ、俺にそっと流し目を送った。
何となく、何となくではあるが。
小町の意図と、留美の意図。
そのどちらもが、ぼんやりとではあるが読み取れた。
「お邪魔、します……」
「お、おう、いらっしゃい」
留美のおずおずとした口調は、瞳に灯る炎の熱量とまるで噛み合っていない。
小町がぱたぱたと自室に戻って外出の準備を始めると、俺は留美を部屋に連れていった。
繋いだ手は、いつもより熱い。
夏が、近いからだろうか。
続く。

（４０）

留美を連れて部屋に入る。扉を閉めると、留美の身体がびくりと跳ねた。

「……どうした」

「……ん、なんでもない。鍵閉めるのかなって思った……だけ……っ」

「……」

自分で言っておいて、顔を真っ赤にして俯いてしまった。この自爆がすっかり気に入ってしまった……。

……特に理由は無いけれど。

――かちゃり。

そろりと手を伸ばして、鍵を閉めた。

「……っ」

留美が驚いた顔で振り返る。

「どうした、留美が望んでるからやっただけだぞ」

「……ん、うん、わかってる……っ」

声を震わせる留美の手をぎゅっと握ると、留美は目を見開いて俺を見つめた。期待と不安の入り混じった瞳は揺れていて、ぞくぞくと嗜虐心をそそる。

「取り敢えず……座るか。ほれ」

留美をクッションの上に座るよう促す。

「……ん」

留美がクッションのある所まで歩いてきて、黒のワンピース越しにお尻を手で押さえると、幼くも艶めかしい肢体のラインがくっきりと見えて思わず目を逸らした。

「八幡……」

「ん、どうし……って何で尻を押さえたままなんだよ」

留美は、座る直前の体勢で、お尻を押さえた体勢のまま俺を見ていた。俺に対してお尻を突き出しているようにしか見えない。というか確実に突き出している。

「すごく視線を感じたから、好きなのかなって。こういうの」

あっさりとそんなことを言う。
その通りだった。
「……じゃあ、遠慮なく見させてもらうぞ」
半ばやけになって、留美の後ろに腰を下ろして胡坐をかき、留美の尻を真正面で眺める。
絶。
景。
見つめることしばし。
『……』
……。
「……なあ、留美」
「なに？」
「今俺がやってるのって、完全に変態行為だよな？」
「……気付くの遅い」
「……もうちょっと見てていいか？」
「……変態」
呆れたように留美が言うと、顔をこちらに向けて柔らかく微笑んだ。
「でも、この体勢だと疲れるから……これでいい？」
「ああ、姿勢を崩すのはいくらでも……って、うおぉ!?」
留美は膝を付いたかと思うと、背の低いテーブルに手を付いて、四つん這いのような体勢でこちらに尻を突き出した。先程よりもはっきりと分かる双丘のラインに魅入られて、思わず手が伸びそうになる。
「……る、留美」
「なに、もっと見たいの？」
「……ぎ、ギブ……」
「……もう」
これ以上見ていたら取り返しの付かないことをしてしまいそうだと思い、何とか思い留まった。へたれと言われても反論は出来ません。

留美は困ったように眉根を寄せて、クッションの上にぺたりと座り込んだ。俺はその隣に座り、何とはなしに留美の頭を撫でる。
「八幡、今日は何かいつもよりも欲望に忠実」
「そりゃあな、留美がそんだけ凶悪に可愛い服を着てくればな」
「……」
抱き付かれた。
俺の胸に顔をうずめている。
なんか楽しくなってきた。
「どうした、可愛い顔を見せてくれって、ほら」
「……」
無言で首を振る。おでこが胸板にすりすりとこすられる。何だかむずがゆい。
「んぁ……っ」
留美の耳に手を触れると、留美は驚いたように顔を上げた。美しい顔は上気していて、既にスイッチが入っているように見える。
自然に、とてもスムーズに、唇を重ねる。
「ん……っ、ふぅっ、んっ、ふぅぅ……っ、ちゅく、ちゅくく、ちゅぷ、ちゅぷりゅ……ふぅん……っ」
綺麗な桜色の唇の間に舌を割り入れると、熱い口腔内で留美の舌が積極的に迎えてきた。
紅い愛情を交わらせながら、留美の身体を支えようとして、そっと留美の二の腕に手を添える。
――留美の服がノースリーブであることを、忘れたままに。
「んふぁぁ……っ!?」
留美の肌を直に触ると、留美は驚いて口を離した。
「あ……わりぃ、つい」
手を離そうとすると、留美がかぶりを振って微笑んだ。
「……もっと、触って？」
「……っ」
蠱惑的な表情を湛えて、甘えるように首を傾げる留美の表情が。
俺が幾層にも重ねた筈の理性の殻を、一枚一枚しっとりと剥いでい

く。
理性の逃げ場がなくなって、もうじき行き止まりの崖が見える気がした。

×　×　×

留美の腕は細い。掴めば尚更顕著に感じるその細さは、強く握れば折れてしまいそうで不安になる程だ。
なのに。
それなのに。
どうしてこうも、俺の指がその肉に沈み込むのか。
指を沈ませていった先には、骨が無いのではないか――そんな風に疑ってしまう程、留美の腕は柔らかい。
さらさらと滑らかな肌は、留美の腕を握った時に指を僅かに滑らせる。氷を握ろうとした時の様に。
氷のように滑らかなのに、内に湛えているのはしっとりとした熱で。
「……あっ、あっ、んぁっ、あ……っ」
――漏れ出でる吐息は湿り気を帯びて、甘い匂いに一瞬で魅了される。
留美の二の腕を掴んで、ゆっくりとさする。
「あっ、うっく、んふぅ……っ」
ただそれだけの行為なのに。
「あ……っ？　あっ、うぁっ、あ……っ」
なぜ、こんなにも。
「んあぁぁ……っ、あっ、ふぅっ、ふぅぅ……っ」
――気が狂いそうな程、興奮するのか。
留美は俺の手のひらが上下に滑る度に、うっとりとした顔で息を荒げている。時折強く握ると肩を竦めて、泣きそうな顔で俺を見つめる。拒絶の意を示しているのかと思えば全くもって違っていて、強く握ったまま揉みしだくと、おとがいを上げて甘ったるい嬌声を上げ

た。真っ白な首を惜しげも無く晒されて、まるで吸血鬼のような欲望が内から湧き出てきた。
「……んっ、ふぅぅん……あっ、あぁ……っ」
留美はじっとりと汗をかいていて、艶やかな黒髪が額に数本貼り付いている。艶っぽさと生々しさは増すばかりで、ズボンの中ははち切れんばかりに膨れ上がっていた。
ふと、留美のワンピースの――右肩の紐が、はだけていることに気付いた。
肩紐がはだける、という現象。
元々留美の肩にかかっていたのは一本の紐だけなのだから、それがはだけた所で露出度はさして変わらない。
けれど、1が0になるという変化は、１００あったものが９９になるのとはまるで意味が異なる。
うっすらと汗ばんだ肩が、無防備に目の前に晒されている。肩に僅かにかかっている黒髪が、ぎりぎりの所で、理性に踏み止まるよう訴えかけていた。
ごくりと息を呑んで見つめていると、留美が俺の顔を見てにこりと微笑んだ。
俺の手の力は緩んでいたようで、留美がすっと右手を上げる。
何をするかと思えば、首を左に傾けて――つまり、肩紐がはだけた側の首を俺によく見せるようにして、肩にかかった黒髪を、白魚のような指で払った。
何にも隠されることなく、白い肌が露になる。
「……留、美……っ」
声が震えている。
腕も震えている。
何より、心が震えている。
左腕を留美の背中に回し、留美の右腕を固定しながら左腕も手で掴み拘束する。
右手は留美の頭に回して、後ろから留美の右耳を掴んで首を向かって右側に更に倒す。

留美を見る。
一瞬目が合うと、何か言いかけるように口を開いて、やがて唇を引き結ぶと目を閉じた。
目の前には、透き通るような肩と首。
心臓が痛い程に鳴る。留美の肩から払われた黒髪が、俺の心臓を締め付けている気がした。
口を近付ける。
触れてもいないのに、留美の鼓動が聞こえるような気がした。
続く。

（41）

目の前の白い肌に、強烈に引き寄せられる。
自分を突き動かしているものは、愛情のようでも、性欲のようでも、食欲のようでもあって。
――何より、独占欲である気がした。
「……んむっ」
留美の首の付け根に唇を付けると、俺の腕に拘束された留美の身体がびくりと跳ねた。
微かな汗の塩味と、鼻腔を擽る甘い匂い。
本能の赴くままに、舌を這わせ始めた。
……ちゅく、くちゅり、ちゅぴ、ちゅうぅ……ちゅっ、ちゅく……っ。
「あっ、あっ、んぁ……あふぁっ、あっ、うぅ……っ」
腕の中で留美が悩まし気に身じろぎする。密着した身体の柔らかさとワンピースの生地の滑らかさに陶酔しながら、舌を滑らせ柔肌を丁寧に味わう。
吸い付いては離し、固めた舌先で肩から首にかけてなぞり、また吸い付く。
「……あ、跡、付いちゃう……良いの……っ？」
蕩けた声で留美が言う。「跡が付くからだめ」ではなく、俺に「それで良いのか」と聞いてくることに、この子の従順性を感じた。
「……良いんだ」
留美の目を見て言うと、留美は目を微かに見開いて、それから嬉しそうに目を細めた。
「……付けて、いっぱい、付けて……っ」
恋人どころか、従順な奴隷であることを望むかのような発言が、劣情の導火線に火を点ける。
「……留美……っ」
むしゃぶりつくように口付けをして、自分の所有物であることを示すために留美の身体に何度も吸い付く。
ちゅっ。

くちゅり。
ぢゅうぅぅ……っ。
「あっ、んぁ……あっ、あぁぁ……っ！」
留美の身体がびくびくと跳ねて、それでも抱き付いてきて決して離さない。
留美の首を右に傾けて、左側の首と肩に吸い付く。
「あぁぁ……っ、あっ、あっ、ぅあ……っ」
留美の声が緩慢に伸びて、耽美なものと化してゆく。吸血鬼に命を奪われることを悟り、人生を諦め、目の前の快楽に身を委ねているかのように。
どれだけの時間そうしていたか分からない。
ようやく口を離して、留美の表情を改めて見た時。
「……あっ、んぅぅ……っ、八、幡……八幡、八幡……っ」
苦悶に喘ぎながら快感に打ち震える留美の顔を見て、今の口付けが、留美の身体を一から作り変えてしまったような気がした。
留美の腕が首に回される。抱き付いてくるのかと思えば、腕は伸びたままだ。
留美の視線が動く。
俺の右手。
俺の左手。
そして――留美自身の胸元。
俯いて自分の胸を見た後、こちらを見つめてきた。
一連の動きで、何が言いたいのかが分かる。
その欲望に逆らう気は、もう起きなかった。
それでも、決して壊さぬように……と手を震わせながら。
留美の腰に手を添えて、ゆっくりと上に滑らせていった。
× × ×
留美の腰に添えた手を、艶めいた身体のラインに沿って滑らせていく。
肋骨をなぞり、脇の下まで来たら、今度は身体の前面に向かって、真横に滑らせる。

留美の胸の真下に両手を置いたところで――ゆっくりと、慎重に、留美の胸を下から掬い上げるように触った。
「……あ……っ」
留美は頬を朱に染めて恥ずかしそうにしながらも、嬉しそうに微笑んだ。
留美の腕も柔らかいと思ったが、乳房の柔らかさは別格だった。慎ましいサイズだと言うのに、男の心を掴んで離さない。ふに、ふに……と指が沈み込む度に瑞々しい弾力を感じ、留美の口からは甘美な吐息が漏れる。
「んふぅ……あっ、ふぁっ、あっ、あんっ、んっ、くぅぅ……っ」
俺の首筋を悩ましく手で撫でながら、留美が視線を彷徨わせる。目が合う度に口付けをせがんできて、胸に指が食い込む度に、跳ねるように口を離して喘いだ。
「留美、大丈夫か。痛くないか」
留美の反応を窺いながら触っていると、留美は幸せそうに微笑んだ。
「ん、大丈夫。……でも……」
「？　でも……？」
「八幡の触り方……優しいのに、すっごくやらしい……」
「……っ」
からかうように言った留美の笑みは、とてつもなく淫猥で。
「……っ！」
思わず手に力が篭ってしまった。
「んあぁっ!?」
留美が口をぱっくりと開け、今までとは比較にならない嬌声を上げる。
「大丈夫か!?」
「あっ、大丈夫……でも、ちょっと、触るの、やめて……っ」
そう言う留美の顔は真っ赤で、自分の腕で顔の下半分を覆ってしまっていた。
いやがっているのではないことは、手に取るように分かった。

いやがっていはいない。むしろ――
「なあ、留美」
「？　なに……んふぅぅっ!?」
留美の耳にぴったりと唇を付けて、吐息混じりの声で囁く。それと同時に胸をさっきまでよりも強く揉みしだくと、留美の反応が劇的に変わった。
「留美、強くするの、気持ち良いんだな？」
「……っ、そ、そんなこと……あっ、だめ、そこ、舐めちゃ……っ」
小さな耳の中に舌を挿し込み、双丘を丁寧に強く揉む。手のひらにすっぽり収まる乳房はどうとでも責めることが出来て、蹂躙という言葉がふと頭を過ぎった。
「ほんとのこと言えって。気持ち良いんだろ？」
「うっ、うぅぅ……っ、恥ずか……しい……っ」
留美の顔がぶるぶると震える。耳まで真っ赤にして羞恥に耐える姿が、たまらなく愛おしい。
「……正直に言ったら、もっと気持ち良くしてやるぞ」
留美の震えが止まる。
目が合うと、留美は迷いながらも真っ直ぐ見つめてきた。
「……気持ち、良い」
「ん、何が気持ち良いんだ？」
「意地悪……っ。その、八幡に、優しく触られるのも、強く触られるのも、気持ち良い……っ。強く触られると、何だか知らない自分に変わるみたいで怖いけど、八幡にしてもらってると思うと安心する……」
カウンターをくらってしまった。
真っ赤になった顔で本心を告げる留美の可愛らしさと愛おしさは、尋常ではなかった。
「よし、よく言ってくれた。……じゃあ、あそこに移動するか」
「え……っ」
俺が指差した場所に、留美が面食らう。
「も、もう？　その、いくら何でも早すぎじゃ……」
「今までのもよっぽどだったろ……。あそこの方が色々と都合が良

いってだけだ。……それに、まだそういう段階じゃねぇからな」
「……そ。まだ、ね」
「ああ、まだ、な」
くすりと笑い合う。立ち上がると、留美が俺を見上げたまま止まっている。どうした……と聞く前に、何となく事情は分かった。留美の手を掴んで引っ張れば良いかと思ったが、ふと悪戯心が湧いて留美の腋の下に手を滑り込ませて、ひょいと持ち上げた。
「きゃ……っ！」
可愛らしい声を上げて驚いた後、恨めし気な視線を向けてくる。頬を膨らませているのはわざとだろうか、死ぬ程可愛い。
「わりぃわりぃ。……」
ふと、留美の腋に目が行く。
留美の身体に手を添えたまま、見つめることしばし。
……。
……。
……。
「八幡」
「ん、どうした」
「変態」
「……ですよね」
言いながら、留美から手を離す。
「……別に、八幡が何かしたいならいいけど」
「……何でも許可するなよ。まじで何でもしちまうぞ」
「良いの。……だって、私……八幡のものでしょ」
留美はそう言うと、髪をかき上げて己の首を晒した。うっすらと残るキスマークが、己の所業を思い起こさせる。
「……ん、そうだな。……ただまあ、それでもやりすぎるとアレだから、善処するわ」
「八幡、ほんとに優しいね」
「うっせ、めちゃくちゃにするぞ」
「……」

頬を赤らめて俯いた。
うぅん、この子、中々にドＭなんじゃなかろうか……。
続く。

（４２）

ベッドに乗り、壁に背中を付ける。ゆったりと座ると、留美を手招きした。留美は俺が何をしようとしているのかすぐに分かったようで、恥ずかしそうにベッドに膝を乗せた。

「……う……っ」

ベッドに上がってこちらに近付く際に、四つん這いになったことで胸元の白い膨らみの一部が思い切り見えてしまった。顔を逸らすと、留美が俺の頬をむにりとつまんだ。

「……もっとすごいこと、してるでしょ」

「留美の言い方、なんかすげえやらしいな」

キスされた。

「なんで……」

恥ずかしさで顔が熱くなる。

「こっちの方が……効くでしょ」

言っている留美も顔が赤い。自爆攻撃が好きすぎませんかね。

頭をくしゃくしゃと撫でると、留美は不機嫌そうに片頬を膨らませて、俺の目の前でくるりと向きを変えた。足を開いた体育座りのような体勢の俺の股座にすっぽりと収まる。シャンプーと汗の入り混じった匂いに、一瞬で意識が耽溺してしまう。

互いに無言の時間が流れると、２人を包む空気がひりついてくる。何が起きるか分からないような緊張感が立ち込めていた。

留美の腹に手を回すと、小さな体がぴくりと震えた。優しく、壊さぬように抱きしめると、微かに呼吸が荒くなる。

留美の首と肩の境目に顔をうずめると、艶やかな黒髪に包み込まれた。目を閉じると瞼の上を数本の線が踊って、不思議と心が安らぐ。

「あん……っ」

留美が甘ったるい声を漏らして、髪をかき上げた。目の前に留美の白い素肌が露になり、濃厚で甘美な匂いにごくりと喉を鳴らす。

吸い付いて、舌を這わせると、留美が震えだした。

「あっ、あんっ、んぁっ、ふっ、んんん……っ」

年齢を忘れさせる艶やかな声に浸っていると、両手首を掴まれた。何事かと思っていたら、俺の手のひらをくるりと上に向けた。何をしてほしいかが実に分かりやすい動きに、微笑ましささえ感じる。
留美の導くままに、２つの柔らかな丘に手指を沈み込ませる。
「あぁぁぁ……っ」
留美がおとがいを上げて、天井を仰ぎながら悩ましい息を漏らした。痛い程に勃起した肉棒をズボン越しに留美の腰にぐいぐいと押し付けながら、痛みを感じない程度に抑えるよう調節しながらぐにりぐにりと柔肉を貪る。薄布２枚を隔てた先に素肌があるのだと思うと、緊張と興奮で手が震えた。
「あっ、んっく、ふぅぅぅ……っ、あっ、あぁっ、んっ、んんん……っ？」
腕の中で留美の動きが徐々に激しくなってきたと思ったら、留美が喘ぎ声に混じって唐突に疑問形の声を上げた。
「どうした」
聞きながらも揉みしだいていると、ちゃんと話したいのか俺の手首を掴んできた。
「んっ、その、あんっ、さっきから、んぁっ、なんだか……っ」
手首を掴まれた所で、俺の指の動きは止まらない。５本指を波立たせてたっぷりと揉んでいると、留美が振り向いた。思い切りジト目。怒られるかな……と思いきや、うっとりと目を細めて唇を寄せてきた。
「……んっ」
軽く口付けを交わすと、留美が満足げに息を漏らした。
「……で、どうしたんだって？」
引き続き胸を揉みながら聞くと、留美が呆れ気味に笑った。
「あっ、あん……っ、もう……。……さっきから、なんか変なの。身体がふわふわしてきて、何かが身体の奥から込み上げてくるような……そんな感じ」
「……へ？」
留美の言葉に唖然とする。

「……留美、お前まさか……イったことないのか？」
俺の問いかけに、留美が顔を真っ赤にして俯いた。やがてゆっくりと顔を上げ振り向くと、唇を震わせて婀娜っぽい流し目を送ってきた。
「……これが……そうなの？」
ぞわり。
身体の奥底から、得体の知れない感情が噴き出した。
「留美、それはまだイってないと思うぞ。……イクって言うのはどういうことか……今から、たっぷり味わわせてやる」
「え……んふぁあぁっ!?」
留美の耳に舌を挿し込んで、胸を強烈に揉み始める。さっきまでの愛撫で留美の許容範囲をだいぶ掴めてきたので、痛みではなくきちんと気持ち良くなってくれるぎりぎりのラインを突く。時折留美が苦悶に眉をひそめるが、適度な痛みを快感と捉えているのか、すぐに顔が蕩けた。嗜虐心をそそられて、行為はどんどんエスカレートしていく。
「あっ、んっく、んぁっ、あぁぁぁぁぁ……っ！」
俺の腕の中で華奢な身体が跳ねまわる。耳に息を吹きかけながら、人差し指で双丘の頂をぽちぽちとボタンを押すようにすると、今度は身体を丸めてがちがちに力を入れた。
「留美、気持ち良いか？」
「ふぁっ、あっ、気持ち、良い……これ、なに、こんなの知らない……っ」
縮こまったまま、留美が涙目で首を振る。嗜虐心に火と油を注いだようなものだ。
――ふと、留美の肩に目が行く。
ワンピースの両肩の紐が外れて、首周辺の真っ白な素肌が綺麗に全て晒されていた。
目を見開いて息を呑み込むと、留美が俺の手の上に自分の手を重ねた。服がずり落ちないようにしつつ、俺の動きを抑制しようとしているのだろうか。
くちゅっ、れろっ、ちゅくく、ちゅりゅ、くちゅる、ちゅぴぴ……っ。

「あっ、耳、だめ、なに、これ、だめ、あんっ、んんん……あっ、あっ？　あっ、あっ、あ……っ」
猫のように丸まって、ひたすらぶるぶると震えていた留美の様子が変わってきた。俺を不安げな顔で見つめるが、抵抗する素振りは見せない。
ぎゅっ……と、乳頭を人差し指で押し込みながら残りの指を乳房に食い込ませ、
「イクんだ」
耳元でそう、囁いた。
「……あっ」
留美の身体から、一瞬だけふっと力が抜ける。
――次の瞬間。
「……あぁぁあぁぁぁぁっ!?」
留美はおとがいを上げ、両足をぴんと伸ばし、全身を激しく痙攣させた。足元に広がった生温かい感触が、留美が味わったであろう凄絶なまでの快感を物語っている。
「あっ、あっ、あっ、あっ、あ……っ」
天を仰いだままぐったりと俺に寄りかかって、虚ろな瞳で惚けている留美に見惚れる。
「……イった……のか？」
「……ん、多分、そう、かも……」
留美が息を荒げながらも、おぼろげな意識の中で返事をする。
生まれて初めての絶頂の余韻に浸る艶姿に、ざわりと心が波打って――ほんの少しだけ、乳房に食い込ませていた指を動かすと。
「あんっ!?　だ、だめ、今、すごく、敏感、だから……っ」
声を震わせて、いやいやと首を振った。
「……ほんとに敏感なんだな」
「んあぁっ!?　だめ、こら、あっ、んんんん……っ、だめだめだめ……っ」
必死で首を振って抵抗する留美を見て、守りたい願望と壊したい願望が心の中でせめぎ合う。

「じゃあ……こっちは？」
「え……んぁっ!?」
ワンピースが捲れて露わになっている白い太ももに手を這わせる。
指でなぞりながら中心部に近付いていくと、留美に両手を掴まれた。
「……その、なんていうか……」
「……だめか？」
俺の声が、自分でも驚くくらい哀し気だったからだろうか。
「ち、ちがうの、その……」
留美は慌ててかぶりを振り、何か言いたげな顔をする。
「……どうした」
頭を撫でながら聞くと、留美は頬を朱に染めて、じっと俺を見つめた。
「……先に、八幡に見せたいものがあるの」
「……え？」
留美の言葉に、心が激しくざわめいた。
続く。

（４３）

留美の言葉に、心臓が跳ねる。

――見せたいものって、なんだ――？

留美は俺の腕を解くと、ベッドを這って降りた。くるりと振り向くと、恥ずかしそうに目を伏せた。肩紐をはだけ、ワンピースの前面に付いてあるボタンに手を掛けると、上から一つ一つ、焦らすように外していく。黒の生地がはだけて徐々に新雪のような肌が現れて、まるで蛹から蝶への羽化を見ているような気持ちになる。

最後のボタンを外すと、服が自身の重みで自然と落ちる。するりと落ちる黒の生地がスローで再生された。。

留美の足元に、ワンピースがはらりと落ちる。再生速度が戻った世界で顔を上げると、

「……う……お……っ」

視線がぴたりと固まる。

言葉が出ない。

呼吸もままならない。

それほどまでに、留美の艶姿は強烈な魅力を放っていた。

留美が着ていたのは、大人の女性であっても相当な勇気がいるであろう、過激な黒の下着だった。レース生地にフリルが付いていて柔和な印象があるが、よく見れば大事な所が透けていて、僅かに見えてしまっている。はっきりと見えそうで見えない絶妙なラインを突いていた。

留美はへそを両手で覆っていて、内股になっている。

「……あれ？　それって……」

見せたいものっていうのはこれか――と釘付けになっていると、あることに気付いた。

「……うん」

留美は小さく頷いて、顔を逸らした。

留美が着ている下着は、以前留美とのデートの終わり際に通りがかったランジェリーショップに置いてあったものだ。自分一人で見

ただけならすぐに忘れていただろうが、留美がこの下着をじっと見た後、俺をちらりと流し見た時の意味深な表情が印象的で、この下着のことをはっきりと覚えていた。
……わざわざ、買ってくれたのか……。
むずむずとした幸福感が、胸の内に温かい火を灯した。
「……どう……？」
戸惑いながらも尋ねてくる声は、息を呑む程艶っぽい身体とは対照的にとても幼い。歪なギャップが心を揺らして、我慢しないとすぐにでも飛びかかってしまいそうだ。
「……言葉に出来なくてすまん。似合い過ぎてるし、可愛すぎるし、……エロすぎ」
俺の言葉に留美は目を見開いた。
「……そ。……誘惑、出来てる？」
「ああ、もう出来過ぎててやばい。襲い掛からないのが精一杯だ」
思ったままのことを口にすると、留美が頬を緩ませた。
「……ばか」
ぽそりと呟いた言葉が、あまりにも可愛らしくて。
甘い水に吸い寄せられる蛍のように、壁から背中を離してふらふらと留美の傍に行く。ベッド際に座ってカーペットに足を付けると、再び留美の身体に見入った。
黒と白のコントラストがあまりにも見事で、言葉を失う。
淫靡な黒の生地と、純朴な白の肌。そしてその肌を、時折朱色が彩る。
網膜に焼き付けて生涯覚えていたくなる程の、可憐さと美貌と色香を備えていた。
「……そんなに、見られると……っ」
留美がもじもじと内ももをこすり合わせる。嗜虐心がぞわりと芽吹いて、下腹部が痛い程張り詰めた。
「……見られると、なんだ？」
「……っ、な、なんでも、ない……っ」
留美が慌てて顔を逸らす。首まで真っ赤になっていて、動揺を全く

隠せていない。
「足、開いてくれるか」
「え……っ」
俺の言葉に、留美は目を見開く。
「俺のこと、誘惑するんだろ？　足開いたら、それはもうくらくらすると思うんだけど」
「……っ」
留美の瞳が揺れる。けれど、そこに拒絶の色はない。留美の心には、戸惑いと、躊躇と、羞恥と……確かに燻る、誘惑という名目を借りた、俺に対する服従行為への好奇心が見えた。
留美の細い喉がこくりと鳴る。覚悟を決めたような、そんな音。
内股になっていた足が離れ、足をカーペットに滑らせるようにしてゆっくりと開いていく。数十センチ開いただけでも、淫靡な下着がはっきりと見えて興奮の度合いが桁違いに上がった。前屈みになって、留美の挙動を凝視する。
もっと、もっと――と思っていると。
「これ以上は……だめ……っ」
「……へ？」
立ったままでもまだまだ開く余力がある状態で、留美の足の動きが止まった。何が起きたのかと唖然としていると、留美が言葉を続ける。
「……これ以上は、見えちゃう……っ」
「……え……み、見えるって、まさか……っ」
言われて、留美の下腹部をもう一度見る。
黒の下着の隙間に、微かな肌色が見えた。身体中の毛が逆立つような感覚を覚えた直後、留美が足を閉じてしまう。
「あ……っ」
ついつい口惜しむ声を上げると、留美が茹だったように真っ赤になった。
「……ばか」
留美は呆れたように笑うと、上半身を屈めて顔を近付けた。髪をか

き上げる仕草がとても美しくて、一挙手一投足を目で追ってしまう。
「……ん……」
こちらの両耳に手が添えられて、瑞々しい唇に口を塞がれる。にゅるりと入り込んできた小さな舌と自分の舌をまぐわらせて、くちゅりくちゅりと唾液の交換を行う。
「んっ、んむっ、れるっ、ちゅぴ、ちゅく……っ」
うっとりとキスに興じる留美の表情は、年相応の少女っぽさと、聖母のような優しさと、淫魔のような艶を含んでいる。この子の新たな顔を知る度に、女性と言うのは皆百面相なのかと驚くと同時に、色鮮やかな魅力に強く強く惹かれる。
唇を重ねたまま、両手をそろりと留美の乳房に伸ばす。
下から掬うように揉むと、薄い下着の生地がくしゅりと歪んだ。
「んんん……っ」
留美の悩まし気な吐息が口内に流れ込み、行き過ぎた官能が思考を麻痺させる。
柔肉をむにむにと揉みしだき、指先で乳頭を軽く弾くと、留美が跳ねるように上半身を起こして唇を離した。
「んあぁぁっ!? あっ、あんっ、そこ、気持ちい……っ、やっ、恥ずかし……んんん……っ」
眉を八の字にして、留美が首をふるふると横に振る。両手をどこに置くのかと思ったら、恥ずかしそうに身悶えしながらも俺の両肩に置いた。自然と身体が屈み、足が生まれたての子羊のように震える。
「なんか、乳搾りしてるみたいだな」
「ば、ばか、何言って……んはぁぁっ!?」
下を向いた乳首を人差し指と親指できゅむきゅむと扱く。うっすら透けた乳頭は、小さいながらもきちんと摘まめる程張り詰めていた。
「んあぁぁ……あっ、あんっ、あっ、あっ、あっ、くぁ……っ、ひっ、うんん……っ」
吐息がかかる程の距離で、留美が切なげに身を捩らせ、こちらを見つめながら喘ぎ続ける。留美の頭を掴んで引き寄せ、首に吸い付いて

再び胸を揉みしだくと、肩にかかる体重が増した。
「あ、一緒にしたら、だめ、そんなの、おかしく……んぅぅぅ……っ！」
顔を伏せて、内股になったかと思ったら全身を激しく痙攣させた。シルクのような肌をした内ももが淫猥な汁に塗れ、牝の匂いをまき散らす。
「留美……今自分がどんだけエロいか分かってるか？」
「やぁっ、言わないでぇ……っ」
俺の肩に顎を乗せて、顔をこすりつけながら恥ずかしそうに身を捩る。庇護欲と嗜虐心をそそる挙動は、俺の次の行動に常に迷いを与える。慈しむか、めちゃくちゃにするか。常に欲望と理性を天秤にかけながら行動するのは、思いの外楽しい。
留美の下腹部に手を伸ばす。
さっきは手を出せなかった、留美の一番大事な所。
まずは表面をじっくりと……と思い、割れ目があると思われる場所に手のひらを伸ばした。
手が触れた瞬間、ねっとりとした湿度が肌に絡み付く。
肉丘の谷間をこすろうと、手を手前から奥に滑り込ませると。
――ぬちり。
「んはぁんっ!?」
留美が身体を跳ね上げて、下腹部を触っているこちらの手を両手で掴んできた。俺の手は留美の手により動きを止めたものの、位置そのものは変わっていない。
右手中指は下着をかき分けて、色っぽく開けられた部分から留美の膣内に入り込んでいた。熱いゼリーに指を浸しているようだ。
「……こんなあっさりと入るなんて、どんだけ濡れて……あ、でも、すげえ締め付けてくる……」
「……ばか、ばかばかばか……っ、そんなこと言わなくていい……っ」
要らないことを言ってしまったと思ったが、留美の反応が凶悪なまでに可愛いからやめるにやめられない。
「もう少し……挿れるぞ」

「あっ、やっ……んくぅぅっ!? だめ、んくっ、それ、そんなの……っ!」
留美の中にじゅぶじゅぶと中指を侵入させていき、第二関節まで侵入したところでくいと折り曲げる。
「あぁぁぁぁぁぁぁっ!」
留美は普段のクールな表情が霧散して、余裕の無い一匹の牝と化している。目尻に涙を浮かべながらいやいやと首を振る姿は、嗜虐心をそそるばかりだ。
続けて何回か折り曲げると、ある場所を押し込んだ瞬間、留美の身体からがくんと力が抜けた。
「あ――――っ」
魂が抜けたようにこちらに倒れ込んできて、慌てて指を引き抜いて留美を支えた。ズボン越しに肉棒が留美の下腹部と重なると、ぷしゃぁぁ……と温かい液体が大量に勢いよく噴き出してこちらの下半身を濡らした。
留美の腕がこちらの背中に回される。俺も留美を抱きしめると、耳元で囁いた。
「……なあ、留美」
「……ん、なに?」
「最後まで、していいか?」
「……」
奇妙な間に心がざわつく。
「ん……今日はまだ、だめ」
「……な……っ」
目の前の餌が逃げ水のように遠ざかった気がした。
驚きの余り言葉を失っていると、留美は顔を起こして、おでこ同士をこつんとぶつけた。
「八幡……誘惑に乗り過ぎ。ここまで上手く行くと思ってなかった」
「……いや、まあ、うん、辛抱が足らんかった、すまん」
「でも、誘惑に乗ってくれなかったら、それはそれで私にそんなに魅力が無いのかって落ち込んでた」

「何それめんどくさい……」
キスされた。
だから、なんでだよ。
「……もっと、じっくりしたいの。だめ？」
「……はいよ」
息を呑む程の艶を湛えた美少女の上目遣いに、一体全体どうやって勝てと言うのだろう。
時計をちらりと見る。朝早くから留美を招いていたから、まだ昼前だ。今日はもう、適当にだらだらするか……などと思っていると。
「……でも、このままだと八幡がかわいそう。私ばっかり気持ち良くなってる」
「いや、十分興奮させてもらったから……」
「……私が、してあげる」
「え……」
上気した顔で、留美が視線を落とす。ぱんぱんに張り詰めた肉竿は、留美の下着を捲って生の淫裂とこすれ合っていた。
留美の息が荒い。２つの瞳には、確かに情欲の炎が灯っている。
――どうやら、時間を持て余す心配など、全く必要無いようだ。
続く。

（４４）

留美は俺から身体を離すと、カーペットに女の子座りでぺたりと腰を下ろした。股座にすっぽりと収まり、目の前の膨らみをじっと見つめている。

「……苦しそう」

震えるのを堪えたような声で呟くと、留美の手がこちらに伸びてきた。痛い程に張り詰めた膨らみに妖精のような白く小さな手が添えられた途端、肉棒の先端に甘い痺れが走る。

「う……ぐ……っ」

俺の反応を見て、留美は少し驚いたように目を瞠り、小さく喉を鳴らした。そしてもう片方の手も肉棒に添えて、ジーンズ越しにさわさわと触ってくる。硬い生地越しではあまり刺激が加えられないと思ったのか、徐々に手に力が篭っていき、焦れったい快楽が肉竿の先端にたまっていく。

「留美……っ」

自分の声に、想像以上に余裕がなくなっていた。留美の頭を掴んで、肉棒の目の前に持っていく。

留美は目の前の膨らみをじっと見つめて、それから上目遣いでこちらを見つめた。

「……出すね」

「……ああ」

ほんの一言ずつの会話に、とてつもない量の熱量が篭っていた。言葉にこれだけの密度を帯びることなど、この長い人生で一体何度あるのだろう。

留美の手がジーンズのチャックの上のボタンを外し、次にチャック自体に伸びる。人差し指と親指がそろりと伸びるのを、息を呑んで見守る。

ちぃぃぃ……っ。

小さな音を立てて、慎重にチャックが下ろされる。まるで赤子を愛おしむ母のように、その手つきは繊細で優しい。一番下までチャック

が下りると、左右の生地を摘んでぺろりと広げた。ボクサーパンツの生地をちぎらんばかりに膨れ上がった男の欲望を目の前にして、留美の瞳が揺らいだ。
「え……っ、こ、こんなに、大きいの……っ」
その声には、動揺と、不安と、歓喜の色が混ざっている。純潔の少女の中に、まるで熟練の娼婦のような成熟した色香が見え隠れしている。
留美の両手が肉棒に伸びてきた。右手で亀頭から竿の上部を、左手で竿の下部から陰嚢を触られると、ジーンズ越しとは比べ物にならない痺れが走る。
「うぁ……っ」
俺の声を聞いた留美の目が、うっとりと細められる。両手に力が込められると、鈴口が接している部分にじわりと染みが浮かんだ。
「すごい……大きい、硬い……っ」
留美は興奮を押し殺した声で呟いている。この子が何の抑制も利かせられない程に乱れたら、一体どれほど淫らで美しいのだろうか――不意に、そんなことを考えてしまった。
留美の手が、パンツの縁を掴んだ。もう、見たくてたまらないという顔をしている。
留美と目が合う。こくりと頷いて、ベッドに手を付いて腰を少し上げると、留美はパンツを一気にずり下ろした。
ぶるん、と力強い反動を付けて、肉棒が腹にべちっと叩き付けられた。
青筋ばった牡の凶器は、今までの人生で見たこともない程硬く反り返っている。射精に限度など無いのではと思える程、全体にエネルギーが溢れていた。
「……っ」
留美の顔を見ると、完全に固まっている。俺の内ももに手を付いて、まじまじと目の前の肉竿を見つめている。
「……すごい……っ」
まるで熱に浮かされているかのような口調で呟くと、留美の両手が

伸びた。両手で竿を支えるように掴み、亀頭を自身の向きに倒す。
「お、おい……っ!?」
ぷっくりと汁の浮いた鈴口に顔を近づけると、まるで犬のように匂いを嗅ぎ始めた。緊張や興奮でかなり汗ばんでいたため、パンツの中身は相当蒸れていた筈だ。すんすんと小さな鼻が鳴る度に、耐え難い羞恥心が湧く。
「そ、そんな嗅がなくてもいいだろ」
頭を掴んで離そうとするが、留美はいやいやと首を振って顔を離そうとしてくれない。
「……嫌いじゃないから大丈夫。ていうか、この匂い、好き……かも。癖になりそう」
「……っ」
衝撃的なことをぽそりと呟いて、留美は再び匂いを嗅ぎ始める。
この子は、今言った事が一体どれだけ卑猥なことだったのかを自覚しているのだろうか。
きっと、自覚はしていないだろう。
二人の関係が牛歩のごとく進んでいく中で、この子の、そして俺自身の中の、常識的な感覚というのが少しずつ狂って行っている。
理性を剥いで、剥いで、剥ぎ続けて。
そうして訪れる、限界の見えない淫らな交わりが、少しばかり先に待っている。
ようやく自身の欲望に留美の手が触れて、匂いを嗅がれただけで既にこれだけ興奮しているのだ。
この先、一体どれだけ気が狂う程の快感が待っているのか……想像しただけで、身震いした。
留美の鼻は、ずっと鳴り続けている。犬だってここまで執拗には嗅がないだろう。鈴口の匂いを嗅いで、雁首、裏筋、竿の根元、陰嚢と整った鼻を寄せて鳴らし続ける。自身の鼻腔に俺の匂いを刻みつけているようだ。
ようやく留美の顔が離れる。匂いを嗅がれていただけと言えばそれまでだが、留美がうっとりとした表情でずっと鼻を鳴らしていると

いう光景は見ているだけでも恐ろしい程に淫靡だ。我慢汁を浮かび上がらせながら耐えるのは、かなり辛かった。
留美が再び鈴口を正面から見つめる。真横を向いた肉竿の先端からは、益々量の増えた我慢汁が今にも滴り落ちそうだった。
「ねえ、八幡」
「……どうした」
「……キス、していい？」
「……っ」
どくん、と心臓が鳴る。
そうなることなど、とうに分かっていた。
分かっていたはずなのに、今は恐怖さえ覚える。
今留美が言ったキスというのは、当然ながら唇同士のものではない。
留美の瑞々しくて形の整った薄い唇と、欲望の汁を浮かび上がらせている肉槍の先端とのキスだ。
――留美に口を付けられる前と、付けられた後の自分。
今までだって、淫猥な口付けはいくらでもやってきた。留美の下着姿だってみたし、互いの大事な部分をこすり合わせたりもした。
でも、それらの時は常に、己の欲望は衣服の内側に閉じ込めていた。
煮えたぎる牡の欲望を留美の素肌に触れさせようものなら、今までの我慢などあっという間に消し飛んで、目の前にいる少女の儚げな白い肌を更に真っ白に染め上げてしまいそうだったから。
けれど、今まで越えまいとしていた線が、もう目の前にある。それどころか既に片足を上げて、跨ぎかけている。
時間にすれば、ほんの数秒。
迷って迷って迷って、出した答え。
――ここからもきちんと己を抑制して、この子を壊さない。そうすれば良い。
シンプルな結論を下して、俺は留美の目を見て、こくりと頷いた。
留美は嬉しそうに目を細めると、瞳に淫靡な炎を灯して、ゆっくりと鈴口に顔を寄せた。

艶かしい吐息が亀頭を包んだ瞬間、人生を一変させる快楽の波が訪れる予感がした。

続く。

（４５）

留美の小ぶりで、瑞々しい唇。歳や身体の大きさのこともあってか肉感は少々足りない部分はあるが、その分柔らかみを求めようと唇を深く重ねるので、身体を交わらせる充足感とみっともない支配欲まで満たされる。

――そんな、留美の唇が。

目の前の滾りきった男の欲望の先端に迫っている。

四つん這いの、まるで犬のような姿勢で美しい顔を肉棒に近付けていく様は、目を逸らせない程卑猥で魅力的だ。

「……っ」

あと１センチあるかないかというすれすれで、留美の顔が動きを止めた。

どうした、と視線で投げかけると、上目遣いでこちらを見つめ、ゆっくりと視線を下ろして鈴口を見つめた。噴きこぼれた粘液は、目の前の留美の顔を今にも汚してしまいそうだ。

留美が目を細めて、髪をかき上げる。

普段キスをする時は目をぎりぎり開けている程度だが、今はキスの時より少しばかり大きく開けている。

いつもよりも、目の前のものを凝視しようとしているんだな――と、妙に呑気なことを考えていた次の瞬間。

「――んっ」

「あぐ……っ!?」

雷のような衝撃が走った。

柔らかいものと、柔らかいものが触れる。

たったそれだけの行為の筈なのに。

留美の唇が鈴口に押し当てられた瞬間、生まれてから今までおおよそ体験したことのない衝撃に貫かれ、身体の芯まで焼け焦げてしまった。

「……」

留美は唇を押し当てたまま動かない。ふるふると震える肉竿の反

応をじっと眺めている。
唇を離すと、艶を増した唇と鈴口との間に糸が引いていた。その光景一つで雄竿の硬度が更に増してしまう。
どうするのかと固唾を呑んで見守っていると、留美はこともなげにぺろりと舐め取ってしまった。細い喉がこくんと鳴ると、釣られるようにこちらも喉を鳴らした。
「……大丈夫か？」
「……ん、大丈夫」
そう答えると、留美はまだ何かを言葉にしようとしているようで、眉根を微かに寄せて考え込んでいる。
多分、だけど――と、独り言のように呟いて、留美が俺を見つめる。続く言葉の衝撃に備えたが、
「私、八幡のものだったら、何でも癖になっちゃうのかも。……これも、美味しいって思っちゃった」
「……っ」
――安っぽい防御など、まるで紙を貫くようにあっさり突破されてしまった。
「る、留美、な、何言って……っ」
動揺して声を震えさせていると、留美が首を傾げる。留美の言葉をすぐには理解出来ない俺が理解出来ないかのような表情だ。
「……ほんとなのに。……ちゅっ」
「うぁ……っ」
一度経験しただけで、一気に躊躇の壁が無くなったんだろうか。留美は事もなげに二度目の口付けをした。今度は短い時間で離したが、やはり唇と鈴口の間には粘液の糸が引いている。
「……八幡、これは気持ち良いから出てくるの？」
「ああ……そうだ。……留美と一緒だな」
どこか涼し気だった留美の顔が、一瞬で茹だる。
「……ばか。おしおき」
「え……うぉっ!?」
留美は両手で竿の根元を押さえると、亀頭の先端に吸い付いた。そ

してそのまま口をすぼめて、先走りの汁を吸い立てはじめた。
「ちゅっ、ちゅるる、ちゅぴっ、ずずず……ちゅっ、ちゅぷ、ちゅぴっ、ちゅぴ……っ」
「んぐぅぅ……っ!? や、やばい、それ、やばいって……っ」
興奮と快感から溢れ出す汁なのだから、こんな魅惑的なことをされて収まる訳が無い。泉のごとく溢れ出す粘液を絶え間なく吸い取って、留美の表情はどんどん蠱惑的になっていく。麻薬のごとき甘露を味わうかのように、うっとりとした顔で、もっともっととせがむように舌先でぐりぐりと鈴口をほじる。
――この子は、本当に、俺の知っている鶴見留美なのか――？
そんなことを疑ってしまうくらい、目の前の少女は美しくていやらしい。守ってやりたいという意思のすぐ横で、この子を身体の芯、心の芯から汚してしまいたいという欲望が鎌首をもたげる。
「る、留美、そろそろやばいから……っ」
まだ亀頭の先端にしか留美の唇は触れていないのに、この時点で射精してしまいそうだった。留美の顔をほんの数センチだけ引き離すと、留美は息を荒げながらねっとりとした上目遣いでこちらを見つめ、そして肉槍に視線を下ろした。
「……れろっ」
「っ!? お、おい、こら……っ」
小さく紅い舌をぺろりと出して、犬が水を飲むかのように鈴口を舐める。
「れろっ、れろっ、……ちゅっ、ちゅぴっ、ちゅるる……っ」
俺の手の力が抜けたのを良いことに、再び口付けを始めてしまう。腰ががくがくと震えても、留美は両手でしっかりと肉竿を掴んでいるため、ペースをまるで乱すことなく舐め続けている。
「ま、待て、本当に、やばい、から……っ」
「んふぅぅ……っ？」
留美の耳の中に中指をねじ込んで、無理やりに顔を引き離す。留美は口を半開きにしたまま、四つん這いで目の前の肉棒を恋い焦がれるように求めている。

「はぁっ、はぁっ、お前なぁ……あんまりやりすぎると、喉奥まで一気に突っ込んじまうぞ」
身体を起こした留美は、俺の言葉に目をぱちくりとさせた。そして天使のような笑みを浮かべて首を傾げる。
「ん、大丈夫……私、八幡になら何をされても良いから」
どくん、と心臓が強く脈打つ。
留美の肩を力強く掴んだ。
「お前な、そんなこと言ってると本当に……って、あれ？　……今日は最後まではしないんだよな？」
「うん、そう」
「何をされても良いっていう言葉と矛盾しないか？」
「最終的には何をされても良いっていう意味」
「紛らわしい……」
げんなりとする俺に、留美が抱き付く。下着の魅惑的な感触が脳を心地良く蝕んだ。
「……だから、今日は、私の口をいっぱい使って？」
「……っ」
身体ががちがちに硬直してしまう。
瞬間的に、頭の中に映像が浮かんだ。
――留美の頭を思い切り掴んで、小さな口を犯すように何度も肉棒を突き立てる。留美がやめてやめてと涙目で訴えかけてきても止めずに、喉奥に白濁をぶちまける。げほげほと咳き込みながら泣きじゃくる留美の口に、勃起したままの肉槍を休む間もなく突き入れる。留美の唾液と白濁が混じった口内からいやらしい水音が絶えず響いて、留美の目は虚ろに蕩けていく。その表情を見て俺は更に興奮して腰を突き立てて――。
――そんな画を思い浮かべて、ぶんぶんと頭を振った。
「……俺がやると、正直やばい。絶対やばい。だから、留美がやってくれ」
ふうとため息を吐きながら言うと、留美はきょとんとした顔をした後、ふっと頬を緩ませた。

「……多分、八幡が想像してることをそのままやっても私は大丈夫なんだけど……」
「やめてやめて、マジでやめて、想像しないようにしてんだから」
柔らかな笑みを浮かべて言う台詞じゃない。本当に。
頭をがしがしと掻いて蹂躙の映像を脳から振り払うと、代わりに留美の頭をくしゃりと撫でた。留美は気持ち良さそうに目を細めて俺の胸板に顔をうずめた。くしくしとおでこをこすり付けて甘える姿は年相応の可愛らしいもので、つい今しがたとのギャップが破壊的なまでの魅力を醸し出していた。
「八幡、私、まだ先っぽしかキスしてない」
「ああ、そうだな」
「だけど、八幡……すごく気持ち良さそうだった」
「……ああ、そうだな」
「……最後までしたら、どうなっちゃうんだろ」
「……最後までしたいのか？」
「ん、いずれ。……私、じっくりしたいの。そうした方が、きっと気持ち良いから」
「……ねちっこいんだな」
「そんなこと言いながら、私を押し倒さずに我慢してくれる八幡が好き」
「うぐ……」
カウンターを食らう。留美は留美で相変わらず耳まで真っ赤にしている。腹にダイナマイトを巻いて特攻するみたいなその姿勢、身を削るばかりだと思うんですが……。可愛いけどね。
留美が顔を上げて微笑む。年相応の可愛らしさと、大人びた艶っぽい表情が混じり合った表情になっている。
「八幡、全部脱いで仰向けになって」
「……おう」
留美が今しがた口にした「じっくりしたい」という言葉が頭の中で反芻される。
きっと留美は、俺が想像しているよりも遥かにねっとりとした行為

をしたがっているんだろう。
期待で滾る肉竿の先からは、先程あれだけ吸われたにも関わらず、まるでそのことを忘れたかのように粘液が新たに噴き出していた。
続く。

（46）

全部脱いで仰向けになってと言われて、座ったまま素直に服を脱ごうとしたら留美に止められた。
「私が、ぬ……脱がせ……る……から……っ」
「……あ、お、おう……」
こちらに手を翳して凛とした振る舞いをしようとしたようだが、言葉半ばにして赤面して俯いてしまった。激しく和む。
待つこと十数秒、沈黙の間に恥ずかしくなったので、一度イチモツをしまうことにする。赤面した女の子をじっと見つめる、アレを晒した高校生男子という構図がやばすぎる。
留美が顔を上げた。
「……」
何故か睨んでくる。君が自爆したんですやん……。
「八幡、お手。間違った、バンザイして」
「それ間違えるとこか？」
明確な悪意を感じながらバンザイをすると、Tシャツの裾を掴まれた。留美は目を閉じてすーはーと呼吸を2往復させると、Tシャツを一気にずり上げた。視界が一瞬白で覆われ、すぐさま留美の紅潮した顔が現れる。上半身裸になると、留美は驚いたように俺の裸体を見つめた。
「……」
「……留美？　どうした？　今お前が目にしてるのは極めて一般的な体格の野郎の裸だぞ」
「ちょっと静かにして」
「あ、はい」
俺が悪いことをしてるかのような扱いだ。
「……」
留美は尚もじっと俺の身体を見つめ続ける。一体この後どうするのかと思いながら見守っていると、俺の胸にそっと手を触れた。熱を纏った雪のような手にしゅるしゅると胸板を撫でられると、くすぐっ

たさとぞわぞわとした官能が身体の芯から湧き出てくる。
「……下も、脱がないと」
惚けた表情で俺の胸板を見つめたまま、留美が呟く。下は自分で脱げば良いかと思ったが、留美に仰向けになってと言われた。まだ全部脱いでないのになと思いながら仰向けになると、留美はベルトをかちゃかちゃと外してジーンズの腰の部分を掴んだ。意図を察して留美の動きに合わせて腰を浮かせると、ジーンズが一気に脱がされた。ボクサーパンツのみの姿になると、留美は今度は太ももを物珍しそうにすりすりと撫でてきた。くすぐったく感じつつも、留美の振る舞いを見て思ったことをそのまま口にする。
「なあ、留美」
「……なに？」
「俺の身体をそんだけ撫で回してると、なんか変態みたいだな」
「……」
耳に息を吹きかけられた。
びくっと反応してテントの硬度が増すと、留美は勝ち誇った顔で笑った。何なのこの子、可愛い……。
「んっ」
「んっ？」
和んでいたら更にキスもされた。……口封じの吐息とキスって何なの？
「……これも、脱がせるから」
パンツを留美が掴む。さっきも同じことをしたが、二度目でも若干緊張しているようだ。
腰を浮かせると、パンツが一気に引き下ろされた。
ぶるん、と肉棒が勢いよく、天を突くようにいきり立つ。
「……っ」
留美は肉竿を凝視したまま吸い寄せられるように顔を近付けてきたが、唇が触れる寸前のところでぴたりと止まり、いけないと自分に言い聞かせるように頭をぶんぶんと振った。じっくり責めるにはいきなりここを責める訳にはいかないと判断したのだろうか。かと思

えば顔を離す寸前に匂いだけは嗅いでいった。ううん、やっぱりこの子は変態かもしれない……。
「八幡……」
「え……っ」
蕩けるような甘さの声が耳朶を犯す。驚いて顔を上げると、留美の表情は色香に塗れていた。
今さっきまでの、和やかなやりとりの時間は終わったのだと知る。
留美が俺の腰を跨ぎ、腰の横に膝を付いて俺を見下ろす。透き通るような白さの肌に纏われた黒の下着は、留美の魅力を何倍にも跳ね上げていた。足を開くことで肉丘が見えそうになっていて慌てる。
「お、おい、留美、見えちまうぞ、良いのか……っ？」
さっきは見られるのを物凄く恥ずかしがっていたのに……と思いながら尋ねると、留美はくりんと首を傾げて、俺の言葉の意味を探ろうと視線を降ろした。
「……見ちゃ、だめ」
「え……うおっ!?」
てっきり顔を真っ赤にするのかと思っていたら、口を端を微かに上げて妖しく微笑んだ。身体を折り曲げて覆いかぶさってくると、恐ろしい程の昂揚感が湧く。俺の顔の横に手を付いて四つん這いになると、無垢で妖艶という矛盾した魅力を備えた留美の匂いに頭がくらくらとする。
「これなら、見えないでしょ？」
鼻先が触れ合う程の距離で、留美がうっとりと目を細める。余りの艶っぽさに目を見開き、シーツを強く掴んだ。このままこの子の柔らかい尻を掴んで、己の欲望をねじ込んでこの子の全てを自分のものにしたい、という欲求が湧いて出て来る。しかしそんな欲求も、己が律する前に留美が身体を重ねてきたことであやふやになってしまった。
「……んむっ」
留美の身体と唇が重なった瞬間、甘美な電流が全身を余すことなく貫いた。柔らかくて、汗によりしっとりと湿っていて、凶悪な程牝の匂いを漂わせる留美の身体は、触れ合っただけで射精してしまいそう

な程気持ち良かった。
「んっ、ふぅんっ、ちゅる、れろっ、ぴちゃぴちゃ、れるっ、んくぅ……んっ、んん……っ」
留美が淫猥に舌を絡め、唾液を流し込んでくる。俺の舌を咥え込むと唾液を蓄えた口内でじゅるじゅると扱き、俺の舌に己の体液を擦り付けた。留美の手は俺の耳を撫でさすり、耳に指が入ると、ぞくぞくとした異物感に襲われた。
留美が口を離す。口を半開きにして、可愛らしい舌を出したままだ。たまらなくなって唇に吸い付くと、今度は俺の首に腕を回して甘えてきた。
「ん……っ、んはぁっ、ちゅるっ、れろっ、はぁっ、はっ、はぁぁ……っ」
舌をしゃぶられながら、留美は恍惚とした表情で俺を見つめ続ける。留美の口の甘さが増している気がしてどんどん興奮していく。留美の舌に乗った唾液を万遍無く舐めとると、留美は口を離して俺の首にキスを始めた。
ちゅっ、ちゅるっ、と音を立てて、お返しと言わんばかりに吸い立ててくる。続いて耳に口付けして、舌先で耳の中を犯す。いやらしく立てた水音は大音量で脳内に染み込み、夢と現実の境が曖昧になる。
散々舐めしゃぶった後、ようやく耳から唇を離すかと思った時、
「私は八幡のもの。……八幡も、私のもの……」
ぽそりと強烈なことを呟かれて、益々官能が昂ぶった。
留美の舌が首より下に伸びてくる。胸はまるで汗を全て舐めとるが如く丁寧に舐め取ってきた。
「……れろっ」
「うぁっ!? そこは……っ」
乳首をぺろりと舐められて、思い切り反応してしまう。俺の表情を少し驚いた顔で見ていた留美は、悪戯っぽい笑みを浮かべて乳首を執拗に舐め始めた。もう片方の乳首を空いた手の指の腹でこねくり回されて、身体がびくびくと跳ねてしまう。
「こ、こら、やめ……っ」
俺の懇願も、留美の嗜虐心を煽るだけのようだ。留美は更にねっと

りと乳首を舐め回す。
これ以上されたらどうなるか分からない――と思い、抵抗の為に留美の下腹部に手を伸ばした。
――ずぬり。
「あっ――」
右手中指がいとも簡単に留美の淫裂に呑み込まれると、留美は糸が切れたように覆いかぶさってきた。俺の頭を掴んでびくびくと震えている。
「だめ、今、そこ、だめ、今したら、すぐ、イっちゃ、……っ」
留美の声が不安げに揺れている。中指の先にこつんと当たる存在に気付き胸が高鳴る。
「ん、どうした、今したらどうなるんだ？」
「いや、恥ずかし……あぁぁぁっ!?」
左腕で留美の背中を拘束して、中指を伸ばしたまま何度も抜き差しして留美の大事な入口を小突くと、留美はおとがいを上げて激しく喘いだ。
「だめだめだめだめイクイクイっちゃう……っ」
抱き付かれ耳元で甘ったるい嬌声を上げられ、嗜虐心が最高にくすぐられる。
指を折り曲げて膣肉をにゅぐりと抉ると、
「んんっ……うぅぅぅぅ……っ！」
俺の耳に唇を押し付けて、全身を激しく痙攣させた。手首まで温かい液体に浸される。
息を荒げた留美が、拗ねた顔で見つめてきた。
「……ばか」
「……留美が可愛い上にエロすぎるのが悪い」
「やっ、ちょ、今指動かしたらだめ、お願い、抜いて……っ」
「……しゃあねえなぁ」
ゆっくりと中指を引き抜くと、留美はおでこ同士をこつんとぶつけて、再び「……ばか」と呟いて唇を重ねてきた。
「……私も、八幡のこと、気持ちよくしてあげる……」

留美は力の抜けた笑みを浮かべると身体を離し、ずるずると身体を後退させ、俺の足の間に座った。
留美の手が足の付け根に添えられる。
留美が口を開けてゆっくり顔を下ろしてくると、ほんの数秒後に訪れる快感を思ってぶるりと震えた。

続く。

（４７）

留美の息が、熱い。

たまらなく熱い。

一歩間違えばこの子を全身くまなく汚してしまいそうな程いきり立った肉棒は、空気しか触れていなくとも期待で汁を滴らせている。

留美が目を細め、唇を細める。すぼめられた分少しだけ圧を増した息が、鈴口に乗っている滴を微かに震わせた。

「……ちゅっ、ちゅぴ……っ」

「お……うぉ……っ」

先程同様、鈴口に唇を付けて、キスをしながら滴を吸い取る。花の蜜を吸い取るような可憐さを備えていながら、その光景は信じられない程淫猥だ。

先走りの汁が溢れ出し、留美が吸い切れなかった分が裏筋に伝う。すると留美は、おずおずと手を伸ばして、肉竿の根元に指を添えた。すべすべの指の感触に息を呑むと、留美は竿を真っ直ぐ上向きにして、裏筋に口が届くようにした。

「……れろっ、ちゅっ、くちゅ……っ」

キスが、鈴口から亀頭の裏に伸び、ちろりと出た紅い舌が竿の裏側をなぞり始めた。接している部分はごくごくわずかだと言うのに、俺の心と体を蕩けさせる効果は十二分で。汁を舐めとるように動き始めた留美の行動が全くの無駄に思えるくらい、次から次へと先走りの汁が溢れ出してくる。

留美が舌をてろりとさらけ出し、顔を横向きにして裏筋を丹念に舐め始めた。

「……れろっ、ちゅっ、ちゅぴっ、ぴちゃ、ちゅっ、ちゅるっ、ちゅぽ、ちゅぽ、んんん……っ」

悩ましい声といやらしい音が全身に染み渡り、骨の髄まで犯していく。見上げれば見慣れた天井があるのに、まるで見知らぬ場所に思えた。

留美は俺の反応をしきりに窺う。意図することのない上目遣いの

可愛さに幾度となく撃ち抜かれて弱るばかりだ。留美自身は徐々に自信を付けて、口淫を滑らかなものにしていく。
竿の根元を右手の親指と人差し指で押さえて、留美の舌が肉棒のあらゆる場所を舐めていく。
鈴口、亀頭、雁首、裏筋、陰嚢、竿の表側……。
螺旋を描くように夢中で舐められ続けると、気付けば留美の唾液で竿全体がコーティングされてぬらぬらと光っていた。濡れた部分が留美の息でひんやりとしても、その直後に熱い液が新たに塗りたくられる。
「んちゅっ、れろっ、ちゅぴちゅぴ、ちゅっ、ちゅくちゅく、ちゅぷぷ……ちゅっ、ちゅくっ」
留美の舌と唇が、亀頭を集中的に責め始めた。赤くぱんぱんに膨れた亀頭は爆発寸前で、目の前の白い無垢を欲望で更に白く汚したくしょうがないと言っているようだ。
留美が口を離す。唇は亀頭の目の前だ。
口をぱくりと開けた。小さい口だが、めいっぱい開いたのか中の赤さがちらりと見える。
俺をちらりと見てきた。「いい？」と聞いているようで、俺はこくりと頷く。
留美が目を細めて、左手で髪をかき上げた。美しいこの仕草を、これから先一体何度見られるのだろうかと心が躍る。
「……あむっ」
小さくて、それでいてぷりぷりとした唇が亀頭をすっぽりと呑み込む。あまりに自然に凹凸が埋まって、まるで耳の穴にすっぽりと収まるイヤホンの気持ちになったようだ。
留美はねっとりと瞳を潤ませて、口内の牡の欲望を味わっている。舌が亀頭をまんべんなく舐め回し、歯磨きをするように内頬にこすりつける。
「る、留美、どこで、こんなこと……っ」
背中を突き抜ける快感に身悶えしながら尋ねる。すると留美は口を離し、愛おしそうに亀頭をぺろりと舐めた。

「……ん、勉強したの。少しでも八幡に気持ち良くなってもらいたいから……」
そう言って、頬をぽっと赤らめる留美の顔は――年端のいかない、恋をする乙女そのものだった。淫らな行為に及んでいようが、目の前の愛おしい少女の純粋さは変わるものではない。意地らしい発言に身悶えするほどの喜びを感じつつも、「そうか、ありがとな」とだけ言って留美の頭を撫でる。子猫のように目を細めた留美は、満足したのか再び亀頭に吸い付いた。
「んふぅぅ……ちゅぴっ、ぴちゃっ、れろ、ちゅぷぷ……ぷちゅ、ぴちゃ、れる、れろ……っ」
わざと音を立てようとしているのだろうか、俺の反応を健気に伺いながらいやらしく音を立てているが、その顔は欲情しているというよりは単純に照れているかのように赤らんでいる。
「……もっと、咥えてくれるか？」
頭をくしゃくしゃと撫でながら言うと、留美が雁首に吸い付いたまま嬉しそうに目を細めた。下がった目尻の可憐さに胸が締め付けられる。
留美がもう一度髪をかき上げる。
「ん……っ」
「お……おぉ……っ」
留美の顔の高度が少しずつ下がり、すぼめられた口内に吸い付かれながら肉竿が呑み込まれていく。根本まで呑み込むやや手前で、先端が何かにこつんと当たる感触がして慌てる。
「っ！　留美、いきなり奥までなんて無茶だって。無理すん……な……っ」
留美の顔を見て言葉を失う。
留美は目にたっぷりと涙を浮かべながらも、内股に手を添えて懸命に咥え込んでいた。俺の言葉に大丈夫だからと首を微かに横に振り、その動きで亀頭がざらりとした喉奥に更にこすり付けられる。
「んふぅぅ……ふぅっ、ふぅぅ……っ」
留美の鼻息が恥毛をそよがせる。恥毛の間から見える留美の瞳は、

涙を浮かべながらもまるで獲物を狙う獣のように強い光を宿していてぞくりとする。
留美が唇をめいっぱいすぼめると、ゆっくりと口を引き始めた。
「おぉぉぉ……っ」
せまい口内にみちみちと締め付けられると、まるで魂まで一緒に引き抜かれてしまうかのような感覚に陥る。恐ろしい程の吸引力に射精欲求が一気に高まる。
亀頭のみ咥えた状態まで顔を引くと、手でしゅるしゅると陰嚢を撫で回しながら雁首や鈴口を丁寧に啜る。高まりきった身体は快感に抗えずに何度も跳ね上がる。
留美の口が、先程よりも締め付けを増した状態で下りてくる。喉奥にこつんと当たると、留美は苦しそうに震えながらもしばらくその状態を維持して、再び強く締め付けながら顔を引いていく。
「留美、留美、やばい、それ、本当にやばい、もう、出る、我慢出来ない、やばい……っ」
「……っ」
留美が驚いた顔をして、ちゅぽんと口を引き抜く。
「……八幡、そんなに気持ち良いの？」
「あ、ああ、そうだよ。……なんだよ」
きょとんとした表情に顔が熱くなるのを感じていると、留美は心底嬉しそうに微笑んだ。
「嬉しい……いいよ、いっぱい出して」
「え……うおっ!?」
留美は喜色満面な笑みを湛えて、再び肉棒を咥えた。先程の強い吸引を維持したまま、速度を上げて一気に射精を促す。
いくらここまで二人でゆっくり心を通わせてきたとは言え、初めての口淫でここまで……と思うと、身震いした。これから先、一体どれほどの快感が待ち受けているのかと、今身体を打ち貫いている快感と共に、ほんの少し先への未来への期待が膨らむ。
「あっ、うぐっ、イク、出る、もうイクから……っ」
イクから口を離さないと――という意味で言ったのだが、留美は嬉

しそうに目を細めて、更に抽送の速度を速める。
「っ!? ばか、やめろ、口ん中で出したらどうなるか……っ」
その小さな口で受け止めたら大変なことに……と焦りの色を浮かべるが、留美の口を離したいという気持ち以上に、マグマのような射精欲求が込み上げてくる。限界は目の前だ。
「んぐっ、ぐぽっ、じゅっぷ、ぷぢゅっ、じゅぷじゅぷ……ぐぷぷ……じゅぽっ、じゅぽ……っ」
射精を促す、強烈に淫らな水音に目が眩む。
――受け入れてくれるなら、いいか――
そう思い、留美の小さな頭を両手でがしりと掴む。留美は少し驚いたが、それでも動きを止めない。懸命に俺の気持ち良いやり方を探り、俺の欲求を受け止めようとしてくれる。
留美の動きに手を貸すように、留美の頭をリズムよく上下に動かす。溢れた涎が恥毛を浸して、この行為の激しさを物語っている。
「出すぞ、留美の奥に出すからな、受け止めるんだ……っ」
「んっぐ、んぶ、じゅるっ、じゅっぷ、じゅぶ、ぢゅぷぷ……っ」
下半身にぐっと力が入る。
一瞬ベッドを軋ませながら腰を引いて……次の瞬間、腰を跳ね上げた。
――ぶびゅるるっ、びゅぶっ、びゅぶぶぶっ、ごぶっ、どぶどぶっ、どぶぶ……っ。
「んぶぅっ!? んっく、んぐっ、ごくっ、んぐっ、んんんん……ごく、ごく、ごく、んんんん……っ」
絶対溢れるだろうと思っていた白濁は、意外なことに全く零れることがなかった。
「んふぅぅぅ……っ」
悩ましい吐息を漏らしながら、留美が尿道に残った精液を吸い上げてくれる。どれだけ勉強したんだ……と驚くと共に、それだけ俺のことを考えていてくれたことが嬉しくてしょうがない。
留美が口をちゅぽんと離す。糸の一つも引いていないのを見て、綺麗に舐め取ったことを知った。

「……糸、引いてた方が良かった？」
すげえ恥ずかしいことを聞いてきた。ていうか第一声がそれなのか……。
「……それも演出としてはありだけど、その、なんだ、これだけ綺麗に舐め取ってくれたってのが、もう、すごすぎて、なんだろう、尊敬する」
「尊敬まで行っちゃうの……」
あまりにも普段通りのやりとりに、内心動揺する。
「苦しくなかったか？　ていうか苦かったろ？　大丈夫か？」
俺の質問に、留美はぽけっとした顔で首を傾げて考え込む。
「ん……苦しかったけど、それ以上に……八幡に気持ち良いと思ってもらえるのが嬉しかったから、何とも無い。あと……苦かったけど、これはこれで結構好き。八幡のだからだと思うけど」
「……そ、そうか」
聞いてるこっちが恥ずかしかった。よく見れば留美の頬も赤らんでいる。
「……あ」
留美が惚けた声を上げる。
「ん、なに、どうし……あー、……すまん」
生まれてから今までで一番の量を出したと言える射精を終えた後だと言うのに、留美の唾液で光った肉棒はいささかも硬度を失っていないどころか――更に力強くいきり立っていた。
「……これ、入るのかな……」
「え、なに、今なんて？」
「何でもない」
竿を人差し指でつんつんとつつきながら、留美が何かとんでもないことを言ったような気がしたが、ぷいと顔を逸らされた。いちいちとんでもなく可愛い。
さて、どうしたものだろう。
留美は流石に疲れてるだろう。顎が疲れるって聞くし――
「って、え、ちょっと、留美さん？」

留美が再び亀頭に口を近付けている。
「え？　だってまだ満足してないんでしょ？」
ぐうの音も出ない。
「いや、でもほら、顎とか疲れてるんじゃ……」
尋ねると、留美が自分の顎をくにくにと触って首を傾げる。
「……ん、大丈夫だけど」
大丈夫らしい。
そういう人もいるのね。
「それで、どうする？」
留美が悪戯っぽく笑う。何だか年上のお姉さんに遊ばれているみたいだ。留美の精神年齢が分からなくなる。
「……お願いします」
年下みたいな懇願の仕方をすると、
「……ん、わかった」
留美は優し気に微笑んで、口をゆっくり開けた。

続く。

（４８）

疲れ果てて眠る、という状況は経験したことが無かった。
普段寝る前に勉強や読書、ゲームをしている時なら、もう眠いと思った時点で布団を被る。何度目かの心地良い眠気の波が来たら、それに逆らうことなく眠りに就いていた。
けれど、今日は。
今日は違った。
疲労による眠気の波が来ようとも、それを上回る快楽に溺れて、どれだけ疲れていると分かっても眠ることがなかった。
そして、あるラインを越えた時、ふっと意識が途切れたのだ。
それは、俺だけでなく、
「……ん……っ」
隣で小さく縮こまっている、留美も同じだったようだ。俺の意識が飛ぶ寸前、留美も静かに目を閉じたのが見えたから。
――一度射精をした後、留美はどんどん貪欲になっていった。
硬いままだった肉棒をしゃぶり、俺も責めたいと言うと横向きの69の体勢で互いを責め合った。ショーツの割れ目から指は入れて良いのに、見るのはだめという留美の謎のこだわりにより、小ぶりなお尻をひたすら凝視しながら指で弄るという不思議なことをしていた。今の状況と同様で見ようと思えば見られたのだけれど、不思議とそういう気にはならなかった。
留美の舌遣いや唇の締め付けは回を追うごとに上達していき、こちらの射精体力が無くなっていくのと反比例して、肉棒に与えられる快感が増していった。互いの顔が見えない体勢でもどこが気持ち良いか、どんな風に舐めるのが気持ち良いのかと幾度となく聞かれて舐められ続けて、肉棒は意識を失う直前まで硬度を失うことは無かった。
お互い眠る直前は、一回目の時と同様に俺が仰向けになって、留美は四つん這いで口淫をしていた。俺の反応を窺いながらも頬をすぼめて顔を艶めかしくスライドさせる光景は目に焼き付いている。
俺は仰向けでそのまま寝ていたようだが、留美は俺にくっついて寝

ていた。寝る直前に移動したんだろうか。
「……」
状況を整理する。
今日は休日。
小町は気を遣って出かけている。
留美は現在勝負下着（可愛い）。
俺、全裸。
本番一歩手前の行為に溺れる。
ものすごく溺れる。
それはそれはもう、溺れる。
「……うわぁ……っ」
思い出したら、一気に恥ずかしくなった。
留美の誘惑に、いとも簡単に屈している。
もう少しすれば流石に小町も帰ってくるだろう。取り敢えず起きて片付けを――と思い、身体の向きを変えて留美を起こすことにする。
「おーい、留美、起きろー」
横向きで留美と向き合い、抱きしめながら頭をぽんぽんと撫でる。
「んん……っ」
留美が俺の胸におでこをくしくしとこすり付ける。激しく和むが、起きない。
「おーい、留美―、留美さーん」
今度は耳を撫でてみる。
「ん……っ、あっ、んぁ……ふっ、んんん……っ」
「……」
悩ましい声に、あっと言う間に勃ってしまった。留美のへそにぐりぐりと切っ先が押し付けられている。
「留美―、起きろー。俺もやばいー」
割と切実に訴えかけるが、留美は一向に起きない。よっぽど疲れているのか、寝起きが悪いのか。
「ん……っ」

「え……うぉっ!?」
不意に、留美の手が肉棒を掴んだ。
「んー……」
「お、おい、留美？」
留美は目を閉じたまま、機嫌を損ねた子供のような唸り声を上げて――肉棒を、自身の太ももで挟んだ。淫裂に触れそうで触れない、ぎりぎりの位置で。
「うぐぅ……っ！」
へそに当たるのは睡眠の邪魔になると判断したのはまだ分かるが、だからってなぜ太ももの間に……!? 何これ、癖なの？ 挟むのが癖なの？ 普段ぬいぐるみとか挟んじゃってるの？
留美の太ももはすべすべとしていて、女の子特有の柔らかさがある。留美が身を僅かに捩るだけでも肉竿がきゅむきゅむと締め付けられ、あっと言う間に硬度が増してゆく。
「ん……っ」
留美は気持ち良さそうに寝息を立てて俺に密着してくる。柔らかな肌とレースの下着の感触が興奮を高めて、鈴口から先走りの汁が滲み出るのを感じる。
「や……ばい……っ」
無理に引き離すのも……と思い、目を閉じて震えながら我慢していると。
「……八幡」
「……え？」
留美が目を覚まして、不思議そうにこちらを見ていた。
俺の顔を見て、そして自身の足に目をやる。
「……八幡、貪欲」
「いや、留美がやったんだぞ」
ナチュラルに罪を着せられた。
俺のツッコミを意に介さず、留美は仄かに頬を赤らめながら太ももの間の肉棒の感触を確かめている。もぞもぞと足が動く度に快感で腰が引けてしまう。

「……これ、気持ち良いの？」
「……ああ、正直かなりやばい」
俺の言葉に、留美は小さく笑みを浮かべる。そして徐に俺の乳首に吸い付いた。
「うぁ……っ！」
瑞々しい唇に乳首を挟まれ、留美の太ももがもぞもぞと動く。先走りの汁が溢れ出して潤滑油となり、一気に官能が高まる。
「お、おい、留美……っ！」
せめてもの抵抗で留美の尻を掴む。手をいっぱいに広げて揉みしだくが、留美は艶めかしい吐息を漏らすもののまるで止まらない。そもそもこの体勢を維持すること自体がきついので、中々頭が回らない。
「んふぅぅ……ちゅぴ、ちゅっ、ちゅぴっ、ちゅる、ちゅくく……っ」
水を飲む猫のように一心不乱に留美が乳首を舐め回す。行為に興奮しているのか、留美の下腹部がしとどに濡れてきた。横向きでも肉棒まで熱い淫液が伝わり、身体の内側が焼け付くような感覚を覚える。
ずちゅっ、ぐちゅっ、にちゅ、くちゅくちゅ。
「あっ、やっ、ば……留美、もう、……っ」
「……っ」
留美が小さく息を呑む音が聞こえると、留美は口を離して太ももをこすり合わせる速度を一気に上げた。加えて腰をぐりぐりと動かして締め付けを強める。
ぐちゅにちゅにちゃちゅくちゅくく……っ。
「うぁぁぁ……っ！　も、もう、出る出る出る出る……っ」
下半身が決壊する瞬間、留美の唇が乳首を強く吸い立てた。気をやられそうな快感に撃ち抜かれて、
――ごびゅっ、ぶびゅるっ、びゅぶぶっ、びゅっ、びゅる……っ。
「あっ、うぁっ、あっ、あっ、あっ、あ……っ」
留美を抱きしめたまま、太ももの間に大量の白濁をぶちまけた。
虚脱感に襲われていると、留美が頭を撫でてきた。

「……ん、よく頑張りました」
「……すげえ恥ずかしいんだけど」
元はと言えば君の寝相から始まったんだけどね？
留美の下半身が誇張無しで凄いことになったので、流石にもうシャワーを浴びないといけない。
「留美、身体洗った方が良いぞ。あ、でも下着……」
「大丈夫、替えは持ってきたから」
「え」
何その準備の良さ。
「……じゃ、じゃあ、その……一緒に入るか」
「それは今度のお楽しみ」
鼻の先をつんと突かれた。恥ずかしくて死にそう。あ、留美の顔も赤い。相変わらず自爆攻撃が得意ですこと……。
起き上がって、取り敢えず留美の太ももをティッシュで拭きとる。留美は起き上がって、足をV字に広げた。
「うわぁ……今日あんだけ出しといて、まだこんなに出すのか……」
留美の内ももを拭き取るという何とも背徳的な匂いのする行為にどきどきしながら呟くと、留美が舌をちろりと出した。
「八幡の、すごく濃くて……飲み込むの大変だった」
「……そ、そうか……」
そういやこの子、結局全部残さず飲んでたな……。よくもまあこれだけエロい台詞を平然と……と思ったが、顔を見るとやっぱり赤い。
「なあ、留美」
「ん」
「俺としては嬉しいけど、あんまり恥ずかしいなら、その、なんだ、あんまエロい台詞を頑張って言わなくてもいいぞ」
「……こういうのが好きかと思ったんだけど……」
俺ただのエロガッパじゃねえか。間違ってねえけど。
「いや、実際嬉しいけどな。もっと言うと頑張ってそういう言葉を言った後に後毎回恥ずかしがってる留美が可愛くて仕方ない」
「……っ、……次から、絶対赤くならないで言うから」

「……それは楽しみだ」
どうやら続ける方針のようだ。
耳まで真っ赤にしてそんな宣言をされても、こちらとしては和むばかりなんだけど。
この後は結局、留美の後に俺という順番で別々にシャワーを浴びた。留美がワンピースに着替えた時、今はどんな下着を……と変態丸出しの考察をしそうになって頭をぶんぶん振っていると、
「八幡」
「ん」
「私、今は普通の下着だから」
「お、おお、そうか」
「想像してたでしょ」
「してないしてない。何のことだ？　全然してない。まーったくしてないぞ」
「……変態」
「うぐ……」
見透かされて、えらく恥ずかしい目に遭った。

その後はしばらく取り留めも無い話をして、日も暮れたので家まで送った。
「八幡」
「ん」
「明日はどうする？」
言われて、改めて考える。
「……二日連続で今日みたいなことをすると、正直抑制が利かなくなりそうなんだよな……」
「……うん」
留美が俯いて頷く。どうやら今日一日を思い出しているようだ。
「明日はＬＩＮＥか電話くらいにしておいて、また明後日以降、放課後に会うか」
「……うん」

小さな声で答えて、留美が顔を上げる。俺の胸に手を置いて背伸びをすると、目を閉じて唇を向けた。
「……ん……っ」
数秒だけ唇を重ねると、眠りから覚めた姫のようにゆっくりと目を開けた。
「……送ってくれてありがと。じゃあ、また月曜日に」
「おう」
笑みを交わして、留美が家に入るのを見届ける。
踵を返して歩き始めると、ぶはっと大きく息を吐いた。
「……今日のは……反則だろう……」
口を右手で覆って呟く。顔がひどく熱い。きっと傍から見れば真っ赤なんだろう。
日に日に、目が眩む程増していく留美の魅力。
俺たちはこれから、一体どこまで行くのか――と、少し怖くなる。
けれど、それ以上に……二人の関係が確実に深まっていることが、嬉しくてしょうがなかった。

続く。

（４９）

家に帰ると、母への挨拶もそこそこに自室に入りベッドに飛び込んだ。

ずっとお世話になっているベッドが聞き慣れない軋んだ音を立てて、反動で私の身体をぐいと押し上げる。身体はこうして浮かび上がったのに、心はどこか深い所に沈んだままだった。

枕に顔をうずめて、毛布を足で挟んで、横向きに寝転がる。身体を目一杯縮こまらせて、今にも爆発してしまいそうな感情のやり場を必死で探す。

八幡と、あんなことが出来るなんて。

もちろん、そうするつもりで――誘惑するつもりで行ったのだけど。そのために、綾乃にだって協力してもらった。

それでも、本当にあそこまで行くなんて。

八幡の身体を、私の身体が。

私の身体が、八幡の身体に。

あんな風に触れ合って、熱を分かち合って、気持ちを分かち合えるだなんて。

思い出すだけで、身体の奥の、一番大事な部分がじんと熱くなる。

仰向けになって枕を離し、八幡が触れた部分を一つずつ触っていく。自分の手が触れる度に、八幡の指の感触がはっきりと蘇って唇が震える。

今日は最後までするつもりはなかった。単純にまだ怖いと言うこともあるけれど、それ以上に――いきなり八幡とそこまでしてしまったら、きっと今の生活が壊れるくらい夢中になってしまいそうだったから。その思いは、八幡との行為が進むにつれてより強いものになっていき、予感が確信に変わっていた。

現時点でも相当危ういところにはいるけれど、何とか自制心は保てている。きっと八幡も同じように考えていたから、明日は会わないでおこうと言ったんだと思う。

「……ん……っ」

身体をまさぐる手が下半身に伸びる。下着越しに割れ目に指を這わせた時、八幡の指がずぶりと入っていく感触を思い出して、それだけで身体が泣きそうな程に喜んだ。
今、自分でしても、きっと満足出来ない。
それでも、ちょっとだけ、ちょっとだけ……と思っていたら。
部屋のドアを、こんこんとノックされた。
「留美ー？　どうしたの、大丈夫ー？」
「え、お、お母さん……っ!?」
湿った中指を慌てて引っ込めて、毛布に包まる。まるでミノムシのように丸まったまま会話を続ける。
「すぐに引っ込んじゃったからどうしたのかと思ったんだけど、大丈夫？」
「う、うん、大丈夫。大丈夫だから。ご飯はもうすぐ？」
自分の声が洞窟の奥から聞こえるかのようにくぐもっているけれど、今は母のいるドアの方さえ恥ずかしくて見ることが出来なかった。
「そうね、もうすぐ出来るわ。待っててちょうだい」
「わかった、ありがとう」
短い会話を終えて、ふっとひと息つく。母にはとても今日のことは話せそうにない。
――それでも、いつかは、きっと。
ふっと息を吐いて、何気なく自分のバッグに目をやる。
「……あ」
……下着、自分で洗わなきゃ。
お母さんが見たら、多分気絶しちゃう。
熱の燻った身体をベッドから出して、頭の中がたった一人のことで埋まったまま、バッグの中を確かめて洗面所に向かった。
×　×　×
留美を送って部屋に戻った途端、すぐさま勃起してしまった。
「……何だこれ……」
換気や掃除はしたのに、部屋の中には生々しい男女の匂いが満ち満

ちていた。治療しても消えない後遺症のように、濃厚な気配が部屋のカーペットやベッドに染みついている。一旦落ち着こうと思っていたのに、この場所と匂いが一瞬でさっきまでの記憶を炙り出す。
ぼうっとしたまま、ふらふらと歩いてベッド際に座る。
さっきまでの行為のほんの一部を反芻することにした。
下着姿で、うっとりした表情を浮かべて肉棒をしゃぶる留美。
純朴な少女を淫猥な色に染め抜いたことに背徳感と罪悪感が湧くが、その何倍もの幸福感が波のように押し寄せている。
興奮で震えた両手を前に出す。
小さな頭を掴んで、がぼがぼと乱暴なくらいに喉奥を突く。
留美の人形のように綺麗な顔が苦悶に歪むが、虚ろな目はしっかりと俺を見つめている。
漏れる声は苦しそうなのに、どこか喜悦が混じっている。
口内を力ずくで犯しているのに、その最中も肉竿に舌を這わせてくる。
嗜虐心が波立って肌の上を撫でていき、全身で感じて溢れ出す快感が、肌の裏を撫でて下腹部に集まっていく。
白い欲望をぶちまけると、留美は顔を引くどころか俺の腰に腕を回して抱き付き、必死に飲み込んでくれる。
気持ち良くて、愛おしくて、気持ち良い。
狂いそうな程の多幸感に包まれながら、幾度となく繰り返される口淫。
栓の壊れた蛇口のように、白濁は溢れ出し続ける。
そのお返しに指で留美の身体を何度も嬲る。
触る度に感度を増していく留美の身体。
華奢な身体を立たせて後ろから抱きすくめ、下着越しに乳頭を執拗にいじると、留美の身体は生まれたての子羊のように震える。
敢えて身体を支えず乳頭だけいじっていると、留美は立ったまま何とか耐えようとして俺の腕を掴み、服従を示すかのように腕にキスの雨を降らせる。
留美が目に涙を浮かべて、牝の匂いを撒き散らしながら足元のカー

ペットの色を変える程の淫汁を滴らせる様は、きっと一生忘れることはない。

――匂いさえ漂う鮮明な記憶を辿っていると、気が付けばチャックを下ろして肉竿に手を添えていた。

それでも。

「……明後日まで、我慢するか……」

今は自分で処理するよりも、もっと楽しいことを知っている。

そう思い、自慰はやめておいた。

× × ×

日曜日を挟んだ、月曜日。

留美に会えると言っても、朝から会える訳ではない。お互い学校に通って、部活もして、その後にやっと会えるのだ。そんな当たり前の事実を当日の朝起きた瞬間に実感するくらいには、留美のことを恋い焦がれていた。

……そんな状態だったので。

「えー、では次の文を……比企谷、読んでみようか」

「え、あ、はい。『Ｊｏｈｎ ｓｔｏｏｄ ａｎｄ ｓａｉｄ……』」

「比企谷、私の担当科目を覚えているかね？」

「……英語ではないですね」

「よろしい、後で職員室に来なさい」

平塚先生はとても素敵な笑みを浮かべた。でも心の内の修羅が透けて見える。あかん、これ死ぬやつや。

「職員室までの廊下がゴルゴダの丘にならないですかね？」

教室と職員室の間の廊下が最後の旅路になんてなってほしくない……と恐怖に打ち震えながら尋ねると、平塚先生は細めていた目をゆっくりと開けた。瞳から人間らしい温かみが感じられない。あ、こめかみに青筋。火山みたいに怒りが漏れ出てる。

「それは君の反省文のクオリティに依るな」

「頑張ります……」

こんなやりとりをしていたり。

生半可なクオリティの反省文では本当にやられてしまいそうだっ

たので、他の授業中にきちんと反省文の内容を考えておいた。その授業の内容は当然頭に入らないので、見事な悪循環である。それでも死にたくはなかった。

――そんなこんなで迎えた放課後。

部活も終えて、よく留美と会っている公園に向かう。

走るのは必死な奴に見えてみっともない気がしたが、気が付けば随分と早歩きをしていた。見上げれば上空の風の流れは速いようで、雲が見慣れない速度で形を変えていく。空を仰いで、雲と競争するように大股で歩いた。

気持ちを落ち着けようとＭＡＸコーヒーを飲みながら歩いていると、ベンチに留美が座って待っていた。先に着いていたようだ。

「留……っ」

留美の姿を間近に捉えると、言葉半ばに自分の声が途絶えた。

ベンチに座って、静かに本を読む少女。

例え周りの景色が全て焼け野原になろうと、一つの絵画のように変わらず映えるであろう美しい姿に、こちらから干渉するのが躊躇われた。触れてはいけない世界が目の前に広がっている気がした。

近くまで寄って立ち止まって見惚れていると、留美がこちらに気付いて本を閉じた。留美の意識が本からこちらへ向けられた瞬間、一枚の絵画から天使が飛び出したような気がした。

「八幡、どうしたの？」

「……いや、なんでもない。待たせたな」

「ううん、待つのも楽しいから」

「……そうか」

絵の中から飛び出してきたらきたで、また別の魅力で俺を捉えてしまう。

うーん。

人目をはばからず抱き付いてしまいそうだ。

犬の散歩をしているジャージを着た主婦が通り過ぎたことで、降って湧いた衝動を何とか抑えることが出来た。

続く。

（５０）

留美とベンチに並んで座る。遠くも近くもない、絶妙な距離感。
「……遠い」
いきなりダメ出しを受けた。
尻を動かしてにじりにじりと詰め寄る。
すると、俺が動いた分と同じだけ留美が遠ざかった。
「……なんで？」
「……なんか、動きが……」
「……」
……気持ち悪かったですかね……。
少なからず自覚はあるけど、他の人に指摘されるとめこめこに凹むことって、あるよね。
虚ろな目でぼうっとしていると、留美がくすりと笑った。
「冗談だって。八幡のそういうとこ、もう見慣れてるし」
「それは冗談って言えるのか……」
気持ち悪さを感じないのではなくて、慣れたってことだよね？
俺が更に凹んでいると、留美が眉を八の字に曲げて心配そうに俺を見つめてきた。そしてベンチに手を添えたかと思うと、俺がしていたのと同じ動きでにじりにじりと詰め寄ってきた。若干恥ずかしそうに頬を赤らめて、お尻をくいくいと動かす様は……ただただ、可愛かった。
「何だそれ、可愛いな。もうちょっとやってみせてくれ」
そう言って腰を浮かせてベンチの端まで遠ざかると、留美が頬を赤らめたままぷるぷると震えた。睨んでいるようだが可愛げしか感じない。
「……せっかく慰めてあげようと思ったのに……」
「……」
無言で元の位置に戻り、更に近付いた。留美は俺の行動にぷっと小さく噴き出し、小さな手を俺の頭に乗せた。くしくしと撫でられて、柔らかな気持ち良さに自然と瞼が落ちて来る。

「……八幡、気持ち良い？」
「ん、やばい。今なら何でも言うことを聞いてしまいそうだ」
「撫でなくても、八幡は私のお願いごと何でも聞いてくれそうだけど」
「……」
……よっぽど無理なことでない限りは、確かに聞いてしまいそうだ。
留美の性格上、お願いごと自体あんまり無さそうだけど。
「こういうの何て言うんだろう……調教？」
「ちょっとその手を離そうか留美お嬢さん」
可愛く首を傾げながら言う台詞ではない。
俺が手を掴むと、留美は不機嫌そうに片頬を膨らませた。
すかさず膨らんだ頬を人差し指で突く。
ぷすり。
「……」
両手で頭を撫でられた。
「やめろやめろやめろ」
頭が鳥の巣にされる！
「蜂の巣にしないだけマシだと思って」
「こええよ！」
ていうか何で心の中の比喩が読まれたの今!?
ようやく解放されて、取り敢えずひと息つく。
ふぃー。
「八幡、それ……」
俺の手にあるＭＡＸコーヒーを指差した。興味津々のようだ。
「ん、俺が最も愛している飲み物だ。飲んだことないのか？」
「うん。ダイエット中の友達が『彼氏に勧められて１本飲んだらそのカロリーに絶望した。あれは女の敵。あまりにもびっくりして彼氏におしおきしちゃった』って言ってたから、何か恐くて……」
「……」
……そんなに？
ていうか彼氏さん、おしおきされたの……？　恐いよその子……。

缶の上部を指で摘まんでくりんと回し、成分表示を見る。
「……そこまで高くねえと思うんだが。カロリー」
「え、そうなの？」
二人の真ん中辺りに缶を持って行くと、留美が文字を読もうと顔をこちらに寄せた。自然と互いの頬がくっつきそうな程近付き、ぱちりと目が合った。
「……んっ」
留美が目を閉じて、唇を重ねるだけの軽い口付けをしてきた。目を僅かに細めたかと思うと、すぐに表情を元に戻して缶の文字を読み始める。何この辻斬りみたいなキス。
「……何で加糖練乳が初めに表示されてるの？」
「……『これは甘いですよ』っていう最大級の意思表示なんじゃねえかな」
思い付きの返事をしながら、辻斬りキスのお返しに留美の頬をぷにぷにと突く。どんな表情をするかと思ったら、成分表示を見たまま、突かれている頬をぷくりと膨らませて押し返してきた。俺を悶え死にさせるつもりだろうか。
このファンキーな飲み物がよっぽどツボにハマったのだろうか、留美は成分表示を事細かに読んで小さな声でツッコミ続けている。反撃されないのを良いことに、留美の頬をぷにぷにつつきながら横顔を眺める。
ぷにぷに。
ぷにぷに。
ぷにぷに。
ぷにぷ――
「んっ」
「んっ!?」
突然キスされた。
まるで黙れと言わんばかりのキスだった。
顔がものすごく熱い。俺ばっか動揺丸出しで恥ずかしい……と思ったら、留美の顔もやっぱりちょっと赤かった。

「私も飲んでみたい」
くりんと顔をこちらに向けて、留美がそんなことを言い出す。俺の太ももをさりげなくぺちぺちとしている。え、なんでこの子こんなあざとくなってんの……!? ぜひ今後も継続して頂きたい。
……ていうか今のセリフ、何か……。
……。
「八幡？」
「すみませんなんでもないですごめんなさい」
高速で謝った。
こほんこほんと咳払いして仕切り直す。
「そこの自販機にあるみたいだぞ。買うか？」
「ん、八幡ので良い」
おっと？
留美さん、俺の返事を聞く前に既に缶を掴んでいるぞ？
「だめ？」
「その聞き方をされて断る男はこの世にいないぞ」
俺の返事を聞いてくすりと笑い、留美がＭＡＸコーヒーを口にする。
くぴっ、と飲み込む音がした後、留美は何とも言えない顔をした。色んな表情がごちゃ混ぜになっている。
「……なんか、すごい……」
「……まあ、そうなるよな……」
明らかに無理という訳でもないようだが、あまりハマらなかったようだ。
しかし、この缶はどうしたものか。
いっそ留美にあげてしまうか……慣れてもらう意味でも……などと考えていると。
「八幡、飲んでみて」
「え、なんで？」
「だって八幡のでしょ」
「え、や、そうだけど、しかしＭＡＸコーヒーは全千葉民のものであっ

て俺のものという訳ではないから……」
「いいから」
「あ、はい、ごめんなさい」
言いくるめられて口に含む。
……留美が口にしたという事実が頭の中にちらついて味が分からん。
ＭＡＸコーヒーの甘味だけじゃない気がしたけど、それを確かめる術はもうない。
留美は一体何のつもりなんだ……と思っていると。
「もう一口飲ませて」
「え」
「ん……っ」
「え、ちょ、おい」
「ぷはっ。はい、八幡も飲んで」
「え、ターン制なの？」
「いいから」
「あ、はい、ごめんなさい」
この流れが繰り返されて、結果５往復した。その間、ずっと味は分からなかった。
「ちょっと好きになったかも」
げんなりした俺とは対照的に、留美は目を輝かせている。人をいじめながら飲んだら好きになるって、Ｓにも程があるだろ。
「……なんか、すげえ疲れた……」
留美の行動に心底驚いて疲れ果てていると。
「八幡、キスは大丈夫なのに間接キスはだめなんだ。可愛い」
そう言って、年下の女の子に頭を撫でられる。この流れが気に入り始めているのが何よりも恥ずかしい。
「……うるせえ、別腹なんだよ別腹」
「キスにそんなのあるんだ……」
自分で言って恥ずかしくなった。なんだよキスの別腹って。
――ああ、それにしても。

今日はとても和やかだ。
キスこそすれど、それも可愛らしいもので、純情そのものだった。
二日前の濃密な空間が、まるで嘘のようだ。
気付けば、辺りはとっぷりと日が暮れていた。行き交う人はぱったりと途絶え、昼から夜へと空の色合いが変わってゆく。日が沈むその上で、既に星が瞬いている。
今日はのんびり過ごすだけでも十分かな――なんて思っていると。
太ももに、留美の手が添えられた。
今留美がしたのは、手をほんの数センチ移動させるというだけの行為だ。
それなのに、たったそれだけの行為が。
空の移り変わりよりもはっきりと、突き付けるように、二人の空間をぐにゃりと歪める。
留美の瞳を見つめる。
街灯と街灯の間にいる為、留美の顔ははっきりとは見えないのに。
このまま終わらせはしない――と言っている気がした。

続く。

（５１）

留美の手がこちらの太ももに添えられる。
たったそれだけの行為が、恐ろしい程の期待をもたらす。
留美の顔を見る。
薄暗がりの中淡く見えた瞳の光が、不意に妖しさを帯びた。
留美の手が太ももの上をゆっくりと移動する。
下腹部に近付いて、遠ざかって、また近付く。じれったい手の動きが、身体の内を焼け焦がしていく。留美は俯いていて表情が窺い知れず、長い睫毛が艶っぽく揺れる。
焦らし続けていた留美の手のひらが、張り詰めた下腹部に添えられた。
「うぁ……っ」
愛おしむように撫でられてため息が漏れる。身体の奥底で爆発しそうなくらいに溜まった官能の炎を、少しでも口から逃がそうとしているかのようだ。
留美がこちらにすり寄り、ぴたりと寄り添った。こちらの右肩に顔をぴたりと当てて、至近距離で俺の反応を窺いながら、しゅるり、しゅるりと手を這わせる。穏やかに動いている中で、時折ぎゅむと肉竿全体を握られると、頭から腰まで電気が走り抜けて身体がびくりと跳ねた。
「あ……うぁ……っ」
息を荒げて、下腹部を襲う柔らかな快感に心も身体も浸る。目の前には留美の顔があって、甘い香りが馥郁と香る。男を安心させて、癒して、快感の虜にしてしまうような、魅惑の香り。
留美の右肩を抱き寄せると、留美の身体がびくりと跳ねた。少し力を入れると、不安げに身を寄せてくる。動揺している表情とは対照的に、手の動きは徐々に滑らかで力強くなっていく。
右手を胸に伸ばして、抱き寄せながら乳房の上に手を添える。
「ん……っ」
留美はうっとりとした声を漏らすと、制服の上着のボタンに手を掛

けた。俺の首に熱い吐息を吹きかけながらゆっくり外すとそれを脱ぎ、ベンチの背もたれに掛ける。
誘うように、ブラウスのボタンを2つ程外した。上からなら、はっきりと下着が見えるくらいに。ごくりと息を呑むと、留美は首にキスをしてきた。自分のものであることを示す、マーキングのようなキス。瑞々しい唇が首を吸い立てる悩ましい音を聞いて、もう一度息を呑む。
留美のブラウスの中に手を差し入れた。
「んぁ……っ」
下着に手が触れると、留美の声が一層悩ましくなる。柔らかな肉を余すことなく堪能しようと、下から掬い上げるように揉みしだく。
留美がズボンのチャックを開け手を滑り込ませると、唇を耳に押し当ててきた。
「あっ、うぁっ、んんっ、ふっ、んんん……っ」
媚熱を帯びた吐息が耳朶に流し込まれる度に、パンツ越しに触れている留美の手の中で肉槍がむくむくと膨張していく。顔を離して唇を重ねると、ほとんど躊躇することなく留美から舌を滑り込ませてきた。
「んむぅぅ……ちゅる、くちゅ、ちゅっ、ちゅるる……ちゅぴ、んふぅ……んふぅぅ……っ」
腕の中で、可愛らしい少女の肢体が淫猥にくねる。その動きは蠱惑的そのもので、鼻腔をくすぐる匂いはますます甘ったるくなっていく。
股間をまさぐる留美の手を掴んで、パンツの縁に指を引っかけさせた。留美は一瞬躊躇したものの、キスに耽溺しながらパンツをずり下ろす。チャックの間から凶悪な肉槍が顔を出すと、留美は唇を離して目を見開いた。乳房から手を離して、留美の頭を掴んで下腹部に近付けると、留美は泣きそうな顔で薄く微笑んだ。留美の表情一つでまた一段と硬度を増した肉槍を見つめながら、留美は立ち上がって俺の足の真ん中に腰を下ろし、ぱっくりと口を開けると肉竿をゆっくりと咥え込んだ。

「んふぅぅ……っ」
微かに顔を震わせながら、口内できゅむきゅむと締め付けてくる。沈み込んでいく度に甘美な快感が下腹部を包んで、感覚を麻痺させていく。
口内で舌が生き物のように蠢き、亀頭を舐め立てる。雁首をべろりと舐められると、思わず腰が跳ねた。
「うぁ……それ、やばい、すげぇ良い……っ」
雁首と裏筋を丁寧に舐められてため息混じりに絶賛すると、留美が上目遣いでこちらを見つめた。相変わらず暗いため表情はあまり分からないが、「ほんと？」と嬉しく思っているのだろうと思った。
留美が頬をすぼめながら顔を引き、またゆっくりと呑み込んでいく。たっぷりと咥え込んでぐりぐりと喉奥に亀頭が押し込められると、それだけであっと言う間に射精欲が込み上げてくる。たった一日自慰を我慢しただけだと言うのに、まるで何週間も禁欲していたかのように自制が利かない。一人であれば決して外れることが無かったであろう肉欲のタガを、目の前の少女が容易く外してしまっていた。
「んっく、んんっ、んぶっ、んふぅぅ……っ」
留美の唾液と先走りの汁が混ざったものが、ぐちゅぐちゅといやらしい音を立てて恥毛を浸していく。まだ濡れていない部分は留美の鼻息でざわりと揺れる。下半身の限界は、穏やかに、けれど決して逆らえない圧力を持って迫ってきた。
「留美、やば……俺、そろそろ、出る……っ」
俺の言葉に、留美がにこやかに目を細める。
留美の顔の動きが一気に速くなり、牡の精を残さず吸い出そうとしてくる。
「うぁっ、やば、だめだ、出る、出る、出る、出る……っ！」
身体をぶるぶると震わせ、留美の後頭部を抑える。顔を動かせなくなっても、留美は舌を妖しく蠢かせ、最後の最後まで口内愛撫をしてくる。身体中の血流が下腹部に集まり始めた。
「もう――うぁ……っ」
魂の抜けたような声を発して、留美の喉奥に大量の白濁を打ち込ん

だ。
「んぶ……んぐっ、んっく、ごくっ、んっく、んっ、んっ、んんん……っ」
夏場に清涼飲料水を一気飲みしているかのような勢いで、留美は精液を呑み込んでいく。喉が鳴る度に、自分の身体の一部が留美に取り込まれていくという感覚はひどくぞくぞくした。
「……ぷはっ。……まだ元気……もう一回する？」
口を離すなりそう言って、唾液と白濁で照り光る肉竿を猫のようにぴちゃぴちゃと舐める留美の表情は、あどけないのに底が見えない程淫猥だ。
「……やってほしいけど、俺も留美にしたい」
「……ん、そう、なの？」
留美が頬をぽっと赤らめる。あれだけ卑猥なことをした後にこんな純な反応を見せられてはたまらない。
今この状況で、互いに気持ち良くなるには……と考える。
「あ」
「ん、どうしたの？」
「留美、隣に座ってくれ。これなら一緒に出来るぞ」
俺がよっぽどわくわくした顔で言ったからだろうか。
「……八幡の変態」
留美は上目遣いで、困ったように眉を八の字にして呟いた。
続く。

（５２）

留美を隣に座らせて、互いの身体をぴたりと密着させる。外気のせいには出来ないねっとりとした熱気を肌と肌で交わらせると、目を合わせずとも官能が高まった。

「留美、一応周りには気を付けてくれ。さっきまでは取り敢えず大丈夫だったけど、いつ人が通るか分からねえからな。……っ」

「ん、わかった。……っ」

表面上はまだ理性的な会話をしているが、実際の二人の動きは言動とまるで一致していなかった。

俺は留美のスカートを捲って、すべすべとした太ももをまさぐって。

留美は、肉棒を愛おしそうにさすっている。

互いの目線は己の手先に集中しており、周りなどまるで見えていない。この状況が危ないのは分かっているのに、視線を外すことが出来ない。相手から与えられる興奮を何倍かにして送り返し、またそれを何倍かにして与えられる循環。時を追うごとに、二人の息が荒くなっていく。

留美の太ももに這わせた手を、ゆっくりと内側に滑らせていく。留美は肉竿をぎゅっと握り締めて、俺の手を見つめた。俺の挙動一つで留美の鼓動を操っているような征服感に包まれる。

内ももをゆっくり撫でる。時折指を曲げて揉みこめば、柔肌に食い込む深さに比例して留美の細い肢体が折れ曲がる。

「んぁ……はっ、んんん……っ」

まだ足を触っているだけなのにこの反応。期待せずにはいられない。

手を足の根元に近付けていくと、じんわりとした熱気と湿り気がまとわりついてきた。中心部に触れずとも、濡れているのが分かった。

「すげえな……」

ぽそりと呟くと、留美が俯いた。足を急にぴったり閉じて、俺の手の侵攻を拒む。

留美の耳にぴったりと唇を押し当てた。ふっと息を吹きかける。
「はぁぁぁ……っ」
留美がおとがいを上げて、身体を震わせる。汗ばんだ肌にブラウスが貼り付いて、頭がくらくらする程濃厚な牝の匂いが立ち込める。この匂いはこれからどんどん成熟していくのかと思うと、どうしようもない程の期待と幸福感が込み上げてくる。
「留美、足を開くんだ」
留美の喉が鳴った。その喉に吸い付いて、ぴちゃぴちゃと意図的に大きな音を立てる。出来るだけ大きく聞こえるように、出来るだけ、いやらしく聞こえるように。太ももに挟まれた手をぐいぐいと開くと、留美は観念したのか、戸惑いながらも足を開いていく。
――にちゅっ。
「ひ……っ」
指が中心部に辿り着いて、ショーツがいやらしい音を立てると……留美が小さな悲鳴を上げた。己がどれだけ快感に溺れているのかを、声に出さずとも俺に伝えてしまったのだから無理もない。
水音が公園に薄く響く度に、留美は小さな声で泣いて鳴く。
今だって十分に恥ずかしいだろう。このまま続けていても、十分に楽しめるだろう、興奮出来るだろう。
けれど、それでも。
この程度でやめることなど、出来はしない。
「……ぐしょぐしょだぞ」
「……っ、だめ……っ」
留美の脳内を犯すように囁くと、艶っぽい声が聞こえた。
今、街灯と街灯の間に居て、留美の表情がはっきりと伺えないという状況は却って良かったかもしれない。
目に涙を滲ませている留美の顔を見たら、どうしてしまっていたか分からないから。
留美は言葉ではだめなんて言いながらも、再び足を閉じようとはしない。秘丘に少しずつ中指を食い込ませていき、筋をゆっくりとなぞる。

「はぁぁぁ……っ、んっ、んぐ、んんんん……っ」
声が漏れると判断したのか、留美は肉竿からも手を離して両手で口を塞いだ。留美の行動によって、そう言えば俺も触られていたのだと思い出す。責めに転じると己に与えられている快感がどこか遠くへ飛んでしまうようだ。
「留美、立ってみるか」
俺の言葉に、留美がゆっくりと振り向く。俺の言葉の意味を呑み込めていないのだとすぐに分かった。
留美は躊躇しているのか腰が抜けているのか、いずれにせよすぐに立とうとしない。仕方ないので、留美の両肩を抱いて二人同時に立ち上がる。俺の前に留美を立たせ、半転させてこちらを向かせる。俺は座って、目の前で留美の身体を眺める形になる。
「……なに、するの……っ？」
留美の声が震える。不安の中に喜悦の色が見える声を聞いて、俺は遠慮することなく指示を出した。
「自分でスカートを捲るんだ」
「……っ!? だ、だめ、そんなの、無理……っ」
「どうしてだ？ 一昨日はあれだけ大胆だったのに」
「あ、あの時と、今じゃ、状況が違う……っ」
「いいから、捲るんだ」
「だめ、ほんとに、だめ……許して……っ」
留美が両手を伸ばして俺の頬に添え、唇を重ねてくる。懇願を示すようにそろりと伸ばされた舌が俺の唇を押し広げて口内に侵入してくる。
「んふぅぅ……っ、ちゅるっ、くちゅっ、ちゅぷぷ……んむふぅぅ……っ」
舌が艶かしく動いて、許して、許してと訴えかけてくる。
けれど、それでも。
「……ぷはっ、うん、やっぱ留美とするのは最高だな。で、いつ捲ってくれるんだ？」
「……っ」

留美の懇願をさらりと流して、話を続ける。
「うぅぅ……っ、うぅぅ……っ」
留美が子犬のような泣き声を上げて、スカートをぎゅっと握り締める。
流石にやりすぎかな……と、そろそろやめようかと思った所で。
「……っ」
留美が、小さく息を呑んで、ゆっくりとスカートを捲り上げた。美少女が躊躇いながらも自分でスカートを捲るという行為は想像以上に背徳的でいやらしく、時間の流れが何倍にも圧縮されてスローモーションで見えた気がした。
スカートを捲ると、閉じ込められていた熱気と甘酸っぱい匂いが、夏を感じる空気の中に溶けていく。
スカートを両手で捲り、俯いて俺の次の行動を待つ留美。
征服欲が、止めどなく溢れ出て来る。身体中の細胞という細胞が喜びで満ち溢れていく。
甘い水に吸い寄せられる蛍のように、留美の足の根元に手を伸ばした。
くちゅり。
「んん……っ」
留美が口元を引き結んで声を抑える。さっきと違って、今は留美の両手は塞がっている。果たしてどれほど我慢出来るのか……と思いながら、ぐっしょりと濡れたショーツに指を食い込ませていく。
「んく……っ、ふっ、あっ、んんん……っ」
淫裂に中指を食い込ませては引き抜き、指の腹でショーツをなぞってクリトリスをこする。ショーツは水に浸したようにぐっしょりと濡れて、吸水機能がまるで意味を成していない。留美の両足は不安定に揺れて、内ももには雫が伝い街灯に照らされて微かに光っていた。
親指をショーツに引っ掛けて、僅かにずらす。暗がりなのでよく見えないが、一番大事な部分が外気に晒された。
「だめ……っ、だめ……っ」
留美がゆるゆるとかぶりを振るが、もはやこの手の動きが止まる筈

もなく。
にゅくく……っ。
「あ……おぉぉ……っ」
中指の第二関節まで挿入すると、頭上から牝の鳴き声が聞こえた。熱い蜜壷は指を食いちぎらんばかりに締め付けてきて、自ら快感を貪りに来る。
指をぐにぐにと折り曲げると、肉洞の中の潤いが一気に増した。ぐちゅぐちゅといやらしい音を立てて蜜が溢れ出し、手首から腕へと淫液が伝う。留美の足は内股になり、生まれたての子鹿のようにがくがくと震える。
「んくぅぅ……っ！　だめ、これ、だめ、変になる、おかしくなる……っ」
留美が手を離して、俺の両肩を掴んだ。唇の塞ぎ手を求めて、再びキスをしてくる。俺自身ももっと興奮を高めたいと思い、留美の片手を肉棒に導いた。留美は唇を重ねながら、左手を俺の肩に置き、右手で俺の肉棒をしごき始めた。ぎちぎちに反り立っていた肉棒はたっぷりと先走りの汁を滴らせていて、留美の手の動きを極めて滑らかなものにする。雁首を入念にこする留美の手の動きによって簡単に限界に導かれて、決壊の予兆に腰ががくがくと震える。
「んぐっ、ちゅくっ、んちゅるる……んっ、ふぅんっ、んんんん……っ」
留美ももはや何の余裕も無く、唇でまぐわいながら肉竿をぐちゅぐちゅとしごき上げる。愛液は俺の肘にまで伝い、既に限界直前なのだと分かった。
にちゅぐちゅにゅちゅりにゅぐびちゃじゅぷじゅぷ……っ。
互いの淫部が漏らす音が混じり合い、静かな公園の夜の空気を妖しく染める。
もう出る――と思った瞬間、どういう訳か留美は俺から手を離し、思い切り腰を引いた。何事かと思いつつも留美の淫裂に指を食い込ませたままぐちゅぐちゅとかき回すと、留美は上体を折り曲げて肉竿をぐぷりと呑み込んだ。

「んんんんん……っ！」
留美のくぐもった嬌声を聞いた、次の瞬間。
――どぶっ、ごぶごぶごぶごぶっ、ごぶぶっ、びゅぶっ、ぶびゅるる……っ。
「おぉぉぉぉ……っ」
留美の蜜壷に指を浸したまま、小さな口に白濁をぶちまけた。
……あのまましごかれたら、留美の制服を汚してたもんな……。
留美の行動の意味を時間差で理解しながら、ぜぇはぁと息を切らす。
留美は精液を綺麗に呑み込んだだけでなく、頬をすぼめて尿道に残った白濁まで綺麗に舐め取ってくれた。留美自身、絶頂したことを示す大量の愛液が下のコンクリートをぐっしょりと濡らしている。疲れているはずなのに、肉竿を舐める動きはとても丁寧で慈しみさえ感じる。
「……ぷはっ。……八幡、どうしよう」
「……どうした」
半勃ちの肉棒から口を離した留美が、困ったような声で言う。
「……もっと、舐めたい」
「え……っ」
留美の言葉に、肉竿が一瞬で硬度を取り戻す。
ふと、雲が隠していた月が顔を出して、留美の顔を照らし出した。
妖しく目を細める留美の表情は、恐ろしい程に蠱惑的で。
いつか、近い内に訪れる、本当に交わる時には……一体、どれほど激しくまぐわってしまうのだろうかと、恐怖に似た期待を抱いた。
この後結局更に2回口で搾られ、まだ勃起が収まらなかったものの時間が時間だったので帰ることにした。留美は疲れきっていたのでおんぶしてやったが、あまりの軽さに驚いた。
帰ってから小町の質問攻めに遭ったが、そこはかとなく誤魔化しておいた。しかし俺と話した直後小町は留美に電話をかけて事実確認をしていた。俺の目の前で。
「お兄ちゃんも留美ちゃんも、ウソが下手だねえ……」

電話を切った後の小町の言葉が意味深すぎて、深く考えるのをやめた。

続く。

（５３）

留美とは毎日会う様になった。
平日は放課後、部活が終わった後の限られた時間を使って。
休日はうちに留美が来て、朝からたっぷりと。
行為が最後まで行くことはなく、その過程に二人で溺れる。
夢を見ているのではないだろうかと思うほど留美との交わりに溺れるが、指と肉棒を覆う淫猥な湿り気が、現実であるということを生々しく知らせてくる。
夢と現の間を行ったり来たりする日々。
何故最後まで行かないかと聞かれたら、正直よく分からない。
留美の誘惑がまだ足らないかと言われれば全くそんなことは無いし、毎日押し倒したいと思っている。
留美を大事にしたいという、臆病と隣合わせの気持ちも少なからずあるけども。
それ以上の理由を上げるとしたら、この焦れったい関係を楽しんでいたいという気持ちが挙げられる。
留美と再会して、かれこれ一ヶ月と半月程。
じめじめした湿気の中にも、確かな夏の気配を感じる時期。
今日も留美は、うちへ来る。
心と体を交わらせに。

× × ×

「こんにちは」
呼び鈴が鳴って玄関のドアを開けると、留美が柔和な笑みを浮かべていた。正直留美の顔を見ただけで抱き締めたくなるのだけど、毎回必死で我慢している。
「おう、中入ってく……れ……っ？」
頬を掻きながら中に招こうとした所で、ふと留美の服装に視線が行く。
ノースリーブで淡い水色のワンピースという、お嬢様然とした上品さを感じる服装。

けれど、いつもよりもスカート部分がほんの少し短い。
いつもだと膝をすっぽり隠すくらいのロングスカートであることが多いのだけど、今日は綺麗な膝がしっかり見えている。女性でこれくらいの長さのスカートを履く人はザラにいるし、むしろ今日の留美の服装は女性の中では身体を隠している方だ。
言ってしまえば、その中身だって見たことがあるのに。
それでも、その微妙な変化が心を躍らせる。
「……夏だな」
スカート部分をちらりと見て、ばれないようすぐ顔を逸らしながら言うと、
「……変態」
楽しそうに呟かれた。一瞬でバレてしまっていた。
頭をがしがしと掻いて振り向き、留美に手を伸ばす。靴を脱いだ留美は、嬉しそうに目を細めて俺の手を握った。
さてさて、今日は何をしようか。

× × ×

留美が家に来る日は、別に一日中アレなことをしている訳ではない。やって数時間程度だ。それでもかなりのもんだと思うけど。
どうやら俺も留美も、相当ねちっこいのが好きらしい。
競い合うように濃厚な責めをするものだから、楽しくてしょうがない時間が延々と続く。
留美を股座に座らせて俺が胸を揉み、留美が後ろに手を回してイチモツをしごくだけで1時間経過なんてパターンはよくある。
部屋に入っていきなり……ということはあまりない。大抵は軽くお茶をして、勉強なども挟んでから行為に及ぶ。これが終わったらまた二人で……という明確な期待を抱いているため、この時の勉強は尋常でない程捗る。勉強をする際、留美に教えることはよくある。留美は自分の分からない所を整理して伝えるのがとても上手いので、一つの質問に答えた時の効果がとても大きい。教え甲斐がとてもある。
俺と他愛も無い話をしている時や、勉強をしている時の留美の顔は年相応に可愛らしい。大人びているが、そうは言っても5つも下なの

だ。ませていると言った方がしっくりくる。
――けれど。
ひとたび留美の牝としてのスイッチが入ると、年齢差などまるで関係が無くなる。
目がうっすらと細められ、テーブルの上に置かれた手の指が妖しく蠢き、お茶を飲んで喉を潤す仕草さえ扇情的になる。
目の前の物を見て、自分の身体を動かし、自分の喉を潤す。
そんな単純極まる行為も、ただ単に自分のためと言うのではなくて目の前の異性を誘惑する為に行われると、途端にその意味合いが変わる。
大袈裟に聞こえるかもしれない。いや、実際にそう思われるだろう。
けれど、決して誇張などしていない。
すぐ隣に居て、微かに肩が触れるくらい傍にいるから分かる。
留美の雰囲気が変わった瞬間、呼吸音が艶めかしく変わり、身体から香る匂いさえ変わるのだ。その変化の程度も、日に日に大きくなっていく。平常時の雰囲気は変わらないから、切り替わった時のギャップがどんどん大きくなっていく訳だ。
端正な顔立ち、艶やかな黒髪、柔らかな物腰。
その全てが魅力的で、魅惑的で、蠱惑的だ。
人は一年で、いや、ほんの数ヶ月で、ここまで変わるものなのか。
そんなことを、日々感じている。
「取り敢えず座ってくれ」
「ん」
２つ置いてあるクッションの内の片方をぽふぽふと撫でる。留美専用に買ったクッションだ。柔和な青一色のクッションで、一緒に買いに行った時はもっと女の子っぽいのでも良いのではと聞いたのだけど、これで良いと言われた。なんだか留美らしいなと思いくすりと笑ったのを覚えている。
留美がクッションに座るのを見て、俺も座る。２つのクッションは元から近くに置いていたのだけど、俺が座るのと同時に一気に間合い

を詰めてきた。この子武術の達人か何かかしら。
留美の左肩が、右の二の腕に触れる。何も言うことなくしな垂れかかってこられては、最初からそういう気になってしまいそうだ。
①その気になって押し倒す。
②さらりと流して雑談を始める。
数秒悩んだ末――
妥協案として、留美の肩を抱いた。
涼し気な白い肌に指を僅かに食い込ませると、
「ん……っ」
すぐ横から、甘い声が漏れ出た。思わず押し倒しそうになるが、それでは妥協案の意味が無いので必死で気持ちを抑える。
「……お茶、持ってくるわ」
そう言って手を離すと――
「ん、ありがとう。……でも、今はいい」
「え……っ」
ぽそりと呟いた留美が、俺の正面に回り込んで俺の肩を押して覆いかぶさってきた。押し倒すのを我慢していたら押し倒された。
今日はいきなりか、まあそれもありだな……なんて思っていると、留美は俺の胸板に顔を押し付けて、くしくしとおでこをこすり付けてきた。なんだ、甘えたいのか……と冷静に考えたい所だが、生憎目の前の女の子の可愛さがカンストを起こしているもので、頭の中は大パニックだ。何でこの子すーはーすーはーとたっぷり呼吸してるんでしょう。俺の匂いが好きなんでしょうか。ちょっとこの子の将来が心配だから責任とるしかない。
「……可愛いやつめ」
きっと自分の頬は緩みきってるんだろうな……と思いながら、留美の髪の毛に顔をうずめる。柔らかな髪の香りに浸りながら留美の髪を手で梳くと、まるで上質の絹を触っているような滑らかさを感じた。宙を舞う埃なんて全て滑っていくのではないかとさえ思うような、滑らかな肌。
「……最近なんだけど」

留美が顔をうずめたまま話し出した。声がこもってて結構シュール。
「ラブレターを貰ったり、告白されたりすることが急に増えたの」
ほーん？
「ちょっとそいつのフルネームと連絡先と住所を教えてくれるか」
「落ち着いて八幡……私もそんなの知らない……」
あまりに衝撃的な近況報告に、思わず我を忘れてしまった。留美が顔を上げて冷静に宥めてくれる。
頭を撫でられた。
和んだ。
ふひー。
「……それは、なんだ、ここ最近急になのか」
「ん……そうみたい。小学校の時もまあ、たまにそういうことはあったんだけど……最近急に増えた」
「小学校の時もか……ちなみに小学校の時は、告られたら何て答えてたんだ？」
「『私、あなたのこと知らない』って率直に」
「鬼だ……」
まだよく知らないとかならまだしも、ただ知らないとだけ言われてしまってはもう救いが無い。これからも興味を持つことは無いと言っているようなものだ。
「増えたって言うのはどれくらいなんだ」
「小学校の時は2～3回あったくらいなんだけど、ここ1ヶ月は……ほぼ毎日」
「え」
「多い時には放課後に2件捌くこともあった」
「捌くって言うな」
お仕事か。
……って、あれ？　ここ1ヶ月ってことは……。
「留美、俺と放課後会ってた時って、まさか……」
「ん、大体告白されてから行ってた」

「マジか」
「うん。全部その場でフってから行ってた」
「怖い……女の子怖い……」
「……『ごめんなさい、大好きな人がいるから』って言って断ってたんだけど」
「よしどんとこい八幡お兄さんが何でも奢ってあげよう」
「単純すぎ……」
留美が楽しそうに笑って、再びおでこをこすり付けてくる。
ああ、楽しい。
こんなにシンプルに、何の憂いも無く幸せな時間があったなんて。
今日はこのままだらだらとイチャついてるのも良いな……と思ったところで。
「……ん？」
ふと、違和感に気付く。
俺は最近、家では専らTシャツ一枚だけ着ている。それは留美と居る時も同様だ。だから、留美と抱き合っている時の感覚も大体覚えている。
……なんだけども、今日はいくら留美が上から乗っているとは言え……妙に、二人の身体の密着度が高い。まるで俺がTシャツを着ずに裸で留美を抱き締めているような――
……裸？
留美の身体をよく見る。
いくらワンピースとは言え、留美の身体のラインがあまりにはっきり見えている。
……まさか、まさか、まさか。
「……なあ、留美。まさか、これ……っ」
留美の肩を掴んで恐る恐る尋ねる。
留美が少し驚いたように目を見開く。
そして、嬉しそうに目を細めると――
留美の身体から香る匂いが、変わった。

続く。

（５４）

カーペットの上で、仰向けになった俺に留美が覆いかぶさる。甘えるように抱き付いてきたけれど、今の留美の雰囲気は明らかにいつもとは違う。漂う香りは甘さを増して、身体を蛇のように絡みつかせてくる。しゅる、しゅると衣擦れの音がする度に、欠けていた穴が埋まっていくかのように身体の密着度が高まっていく。

留美が俺の頬を撫でた。そして、撫でた場所をぺろりと舐める。猫が水を飲むように小さな音を立てながら。

留美の舌は頬から首へと下りてきて、首の前面にキスの雨を降らせる。時折舌を尖らせてつつかれると、まるで媚薬を注射されているような気がした。

留美の背中を抱き締めると、華奢な身体は甘えるように身をくねらせた。背中を撫でさすって徐々に下に滑らせていくと、留美の動きが止まった。耳を澄ませると、緊張したような荒い吐息が聞こえる。ごくりと息を呑んで、手を尻の上に乗せた。

「うぁ……っ」

くぐもった甘ったるい声を漏らして、留美の身体がぶるりと震えた。

本来なら、俺の手と留美の素肌との間には、ワンピースとショーツの生地があるはず。

けれど今は、薄いワンピースの下に明らかに柔らかな肉の感触がある。

留美が身をくねらせると、胸板に留美の胸がこすれる。そちらもやはり、明らかに距離が近い。

ゆっくり、ゆっくりと、手を尻肉に食い込ませる。

「んはぁぁぁ……っ」

留美が俺の耳に唇を付けて、媚薬の如き嬌声を耳に流し込んでくる。まだ少女であることを知らせる弾力性と、成熟した牝へと変貌を遂げんとしている柔らかさが両掌の中で同居している。

ゆっくりと、壊してしまわぬように慎重に揉むと、留美の身体がが

くがくと震えだした。
「あっ、あぁっ、あっ、あっ、あ……っ」
浅く数回揉み、時折ぐにりと強く揉むと、留美の肢体が腕の中で跳ねた。不安を孕んだ声とは裏腹に、留美の身体はもっともっととすりついてくる。
右手は留美の尻肉を下に引っ張り、左手は上に引っ張る。今度はその逆に。そうして何往復もしていると、ふと、音が聞こえた。
それは、とても小さな音。
森の中で、木々の葉がそよ風で擦れ合うくらいの、ほんの僅かな音。
初めは気のせいだと思った。
けれど、同じ動きを繰り返していくと、聞こえていた音が気のせいではなかったことに気付く。
手の位置を少しずらして、陰部に近い部分の双丘を掴んで揉みしだく。
……ぬちゅ。
……くちゅ。
……にゅちゅく。
手の動きを変える。今度は両手同時に尻肉を外側へ引っ張り、内側へぎゅむと寄せる。
……くちゅり。
留美を見る。俺のTシャツを唇で挟んで、必死で声を抑えていた。どこまでが俺に対する誘惑で、どこまでが羞恥心が故の行動なのか、まるで読めない。それが、ひどく心をかき乱す。
留美の肩を掴んで起こす。俺は体育座りのようにして足を開き、内ももで留美を挟むような位置関係に持っていく。ぐったりと脱力した留美は、なされるがままに俺の目の前で膝立ちになった。俺の視線の先には留美の腰があり、淡い水色のワンピースには――不自然な場所に、染みが出来ていた。
「……なあ、留美」
俺の声に、留美がびくりと反応する。まるで叱られるのを怖がる子供のように瞳を揺らしたかと思えば、ちろりと舌を出して艶めかしい

表情を浮かべたりする。この子の未成熟で不安定な部分が、俺をどこまでも興奮させていく。
留美の胸に手を伸ばす。小さな丘に手を乗せると、手のひらの中に小さく尖ったものが2つあった。
「……自分がどれだけ恥ずかしいことをしてるのか、分かってるのか？」
「んあぁっ!?」
言いながら乳頭をワンピースの生地越しに摘まむと、留美は俺の両手首を持っておとがいを上げた。
「ほら、どうした。分かってるのか？　なあ？」
ねちっこく意地悪に聞きながら、留美の乳首を指で挟み、親指でぐにりと圧して、人差し指で軽く弾く。
「あっ、あぁぁぁ……っわ、分かってる……っ。恥ずかしい、けど、んぁ……っ、これならきっと、八幡が興奮して……んはぁっ!?　……くれる、って、思って……あぁぁぁ……っ！」
留美の健気な言葉に、思わず抱きしめたくなる。
けれど、今留美が求めてるのは、そんな甘々の優しさじゃない。
「……そうだな、確かにすげぇ興奮してる」
優しさを含んだ声で言うと、視線を下に移す。
留美の膝と膝の間に。
「……こんなにエロい汁を垂れ流してる留美を見たら……そりゃあ、な」
「……っ」
留美が視線を下げると、俺の言葉の意味を理解したのか一瞬で耳まで真っ赤になった。
ショーツを履いていないことで、何も守るものが無い状態だったからか――留美の陰部の下のカーペットは、びっしょりと濡れていた。留美の内ももを伝ったもの、淫裂からそのまま滴ったもの。様々な軌道が織り交ざって、淫猥な池を作っていた。
「あ……っ、や……っ、こ、こんなの……っ」
留美が俺の両肩を握って、泣きそうな顔で首を振る。その様がまた

嗜虐心をそそり、際限なくいじめてしまいそうになる。
ワンピースの中に手を入れて、ぐしょぐしょになっているであろう陰部をたっぷりと愛撫しよう……と思って手を伸ばすと、留美の手に止められた。
「……？」
ここまで来てなんで……？　と思っていると、留美が目の端に涙をためながら微笑んだ。
「……八幡、もっと、したい？」
「……そりゃ、もちろん」
「……ん、じゃあ……っ」
熱っぽい声で呟くと、留美が立ち上がった。どこに行くのかと思いきや、よたよたとした足取りで歩いて、ベッドの縁に腰掛けた。そして突然足を開いたので驚いたが、ワンピースの中の一番大事な部分が見える前に、留美の両手がベッドの縁を押さえることで綺麗に隠してしまった。それでもちらりと現れた真っ白な太ももに興奮を覚える。
「……続きは、こっちで……ね？」
――凶悪なまでの可愛さに撃ち抜かれると同時に。
――やられた、と思った。
どこまでが留美の計算かは分からないが、ここまで来たらもう、後には戻れない。留美は楽しそうに俺を見つめていて、いつ俺が白旗を上げるのかを待っている。
……焦れったい関係も、ここまでか。
思い出してみれば、最後まで行くのを一度先延ばしにして焦らしたのは留美だ。その留美が、今度は最後まで行くことを望んでいる。
きっと、今こそ一線を越えるときなのだ。
「……ああ、わかった」
頭をがしがしと掻いて腰を上げる。
留美の前に立つと、上体を屈めてキスをした。
「……んっ、ふぅんっ、ちゅくっ、ちゅるっ、ちゅぷぷ……んふぁぁ……っ」
俺の頬に手を添えて、うっとりとした留美が鳴く。

唇を離して、俺もベッドに上がる。
２人分の体重にベッドが軋むと、これからの行為の実感が湧いてくる。ここ最近何回も留美と２人でベッドに上がってはいたけれど、今日は特別だ。
留美が寝そべる。胸の上に両手を重ねて、心細そうに震える。頬に手を添えると、にこりと微笑んだ。
「……ここまで来たら、やめねぇからな」
「……ん、わかった」
短い言葉のやりとり。
それでも、心は交わし合えた。
俺は今から、目の前の愛しい女性を。
抱く。
続く。

（５５）

ベッドに横たわった留美に上から覆いかぶさる。留美の顔の両脇に手を付いて、留美の肢体をじっくりと眺めた。

淡い水色のワンピースは、じっとりと汗に濡れていてうっすらと透けている。ぴんと張り詰めた乳頭が薄い生地を盛り上げていて、まるでここを責めてほしいと言っているかのようだ。留美が恥ずかしそうに身体を捩る度に、ワンピースの一部がぴんと張り詰めて華奢ながらも色っぽい身体のラインを強調する。清楚な筈の少女の服は、どこまでも淫猥さをかき立てるアイテムと化していた。

「……八幡、目、やらしい……っ」

留美の頬がチークを差したように紅く染まる。ただでさえ美しいこの顔が、成熟と共に化粧を覚えたら一体どれだけ可憐になるのかと、想像しただけで胸が躍る。

何か言葉を発するのも煩わしくて、留美の身体に重なった。唇を重ねれば、どんな食べ物を食べた所で得られない極上の甘露が口内を支配する。この甘味を知ってしまったら他の全てが霞む。

「ふっ……うんん……っ」

俺が流し込む唾液を懸命に口内で味わって飲み込みながら、留美の手が俺のTシャツの裾へと伸びる。留美との身体の間に僅かに隙間を開けると、口付けに溺れながらもゆっくりとTシャツを捲り上げた。へその周りを撫でられ、脇腹をまさぐられ、胸板の上で閉じた十本の指をゆっくり開く。頭の中に温い靄が立ち込めて、理性が蕩けていく。

キスをして、留美が俺の上半身に触れているだけなのに、まるで触られた場所全てが性感帯になってしまったかのようだ。

ここ最近の交わりでも薄々感じてはいたが、どうやら俺と留美の身体の相性は恐ろしい程に良いらしい。一度まぐわいを覚えたら、どろどろに溶け合うまで身体を繋げ続けてしまいそうだ。

留美の胸に右手を置くと、それだけで留美の身体が跳ねた。柔肉の上で開いた指を閉じる度に、まるで壊れた人形のように留美の身体が

跳ねまわる。ベッドが軋む音は、留美が一人で奏で続けている。留美の唾液は一層甘くなり、牡の征服本能をかき立てていく。
唇を離すと、留美が寂しそうに眉をひそめた。愛おしく思い頬を撫でて、留美の腰を跨いで膝立ちになる。留美は俺に上から見下ろされると、一体何のつもりなのかと首を傾げた。
留美の双丘に両手を下ろす。今度は裾野から掬い上げるようにして、強めに揉んだ。
「んあぁぁっ!?」
留美の身体がロデオのように跳ねた直後、留美は自分の出した声に驚いて口を両手で覆った。耳まで真っ赤にして震えている。確かに今留美が上げた嬌声は、まるで違う誰かが乗り移ったかのように激しく艶っぽかった。だがそれはあくまでも、俺も留美もこの声を聞き慣れていないからそう感じただけで、この声を出したのはあくまでも留美だ。それは変わらない事実。
――もっと聞きたい。
そう思ったら、自然と手は蹂躙に向けて動き始めた。
「んあっ!? んっ、うぁっ!」
スポンジに泡を染み込ませるようにわしわしと揉む。
「あっ、あっあっあっあ……っ」
ぴんと張り詰めた乳頭を指でぴんと弾く。
「あぅんっ! ふっ……うぁぁっ!」
乳頭をつまんでぐいと上に持ち上げる。
俺の身体が圧をかけているため留美は逃げることが出来ない。それでも留美は許容量を超えた快楽を必死で逃がそうと、足をばたばたと動かしたり内股になったりする。どの動きも必死そのものなのに、快感に負けて力が出ない様子は更なる嗜虐心を駆り立てる。
十本の指をウェーブさせて、双丘の形をぐにぐにと変えていく。
「あぁっ、あっ、だめ、これ、もう、あぁぁぁ……っ」
留美の声が確かな熱を持ちながらもか細くなる。一度暴走すればもう快感の歯止めが利かないと分かっているかのようだ。
とどめを刺そうと留美の乳首を強くつまみ、それと同時に唇を奪っ

た。
「ん――っ！」
留美が目を見開いて身体の動きが止まった瞬間、口を離す。口付けにより声が抑えられると思っていたのであろう留美の目が驚きで見開かれる。
「――あぁぁぁぁぁぁっ！」
ぐん、と一瞬身体が浮き上がった。留美は身体を弓なりに反らせて、壊れたように全身を痙攣させた。卑猥な匂いが立ち込めて視線を後ろに向けると、シーツにおもらしをしたような染みが出来上がっていた。
くたりと脱力した留美の胸を優しく揉むと、虚ろな光を瞳に浮かべながら、口を小さく開けて微かに喘ぐ。
ワンピースの肩紐に手を掛けると、ぼうっとしていた留美の表情に驚きが差した。
「あ……っ」
留美が消え入りそうな声を漏らす。留美の過激な下着姿を見たことはあったが、その下の肉体を見るのはこれが初めてだ。緊張と興奮で自然と喉を鳴らした。
肩紐を指でつまみ、するすると下ろしていく。留美は俺の顔を見つめて、小さく震えていた。
――淡い水色のカーテンを開くと、新雪のような肌が視界いっぱいに飛び込んで来た。
首から一続きに広がる雪面は徐々に高度を増していき、やがて2つの丘が現れる。丘の頂には、ぴんと張り詰めて赤く色づいた膨らみが佇んでいた。
「……う……お……っ」
余りの絶景に目眩がした。
今までありったけ淫猥なことを2人でしてきた。同意の上で、どんどん気持ち良くなることを追求してきた。
それがここに来て、いざ留美の裸体を見たら……途端に、罪悪感が湧いた。

こんなに綺麗で、純粋無垢で、汚れを知らない身体を。
衣服や下着の上からとは言え、俺はずっと味わい続けてきたのだ。
俺も留美もどんどん幸せになっていると思っていた行為の数々が、真っ白なキャンバスに無作為にペンキをぶちまけるくらい無粋なことに感じられた。
「……八幡……？」
自分が感じている羞恥よりも俺への心配が勝ったのか、留美は俺の頬を撫でながら心配そうに眉を八の字に曲げた。
「……いや、すまん。あんまり綺麗だから、その……本当に、俺で良いのかなって痛い!?」
俺の頬を優しく撫でていた筈の両手に思い切り挟まれた。パチンって言ったぞ今。
留美を見ると、頬をぷっくり膨らませていた。今俺が死んだら死因は「凶悪なまでの可愛さ」と発表してほしい。
「……またそんなこと考えてる」
もう一度俺の頬を撫でると、留美は優しく微笑んだ。アメとムチの使い分けがすごく上手ですね。
「私は、八幡だから良いの。八幡じゃなきゃいやなの。……だから、私に、その、キス……したり、何て言うか……その、エッチなこと……するのも、八幡じゃなきゃ……いやなの」
「……そうか、ん、ありがとう」
俺の言葉に、留美がうんうんと頷いてにっこり目を細める。
あまりにも温かい言葉に、心が満たされてほぐれていく。本当に、俺はこの子に何度掬われただろう。
「……顔真っ赤にして言うなよ、可愛すぎるだろ。押し倒すぞ」
「もう押し倒されてる」
「あ、うん、たしかに」
うんうん頷くと、留美は呆れたように笑った。
「……だから、さっきの言葉の前半だけもう一回言って？」
「……あ、うん？」
「なんでそこを選んだの」

「……顔真っ赤にして言うなよ？」
「もっと前」
「……綺麗だ」
「……」
留美が顔を逸らした。首まで真っ赤になっている。
なんだろう。
ぞくぞくする。
すごくぞくぞくする。
留美の両肩を掴んで、留美の目をじっと見つめた。
「綺麗だ、すごく綺麗だ」
「……ちょ、ちょっと……」
「本当に綺麗だ。見惚れちまう。ずっと見ていたい」
「……あ、あの、だから……」
「留美」
「……なに？」
「綺麗だ」
「……もう、やだ……っ」
留美が両手で顔を覆ってふるふると首を振った。ふむふむ、褒め殺しはとても楽しい……と。良いことを覚えた。今後も継続しよう。
改めて留美の乳房を見つめる。
慎ましいながらもきちんと膨らみを持った双丘は、よく見れば白さの中にうっすらとした紅色を帯びている。その色合いが留美の、人形のように美しい身体に命を吹き込んでいた。
留美の乳房に顔を近付けて、乳頭にふっと息を吹きかける。
「んふぁぁっ!?」
留美の身体がびくりと跳ね、両手をゆっくりどかして顔を覗かせる。息を吹きかけられただけで自分がこんなに反応したということに、自分でも驚いているようだった。
「……留美」
「もう、綺麗だって言うのはなし。恥ずかしくて死んじゃう」
「思い切り責めて良いか」

「死んじゃう……っ」
どっちにしろ死んじゃうらしい。ＤＥＡＤ　ｏｒ　ＤＥＡＤって理不尽だね。
時間はまだたっぷりある。
焦らず、ゆっくりと。
留美の身体に、快感を染み込ませていこう。
続く。

（５６）

留美の身体は男を虜にする魔力があった。

柔肌に手を押し込むともちもちとした感触が楽しめて、指を横にずらせばすべすべとした感触が楽しめる。力加減と動かし方一つで、どんどん違う魅力が溢れ出す。まだまだ幼さの残る肉体に、惑わされ魅了されていく。

「う……ぁ……ふっ、うんんん……っ」

責め方を変える度に表情豊かに反応する留美の顔に見惚れながら、夢中で乳房を弄る。時折身体を動かして逃れようとするが、上から体重をかければすぐに抵抗を諦める。時折俺の顔をちらりと見ては恥ずかしそうに顔を逸らし、そのタイミングで乳房を責めると反応が良くなる。羞恥と快感が比例関係にある身体は、責めれば責める程悩ましい艶姿を見せつけてきて、もっとめちゃくちゃにしたくなる。

腰を上げると、留美の足元に座り込んだ。何が起きるのか分かったのか、留美は顔を上げて緊張した面持ちで見つめてきた。

「留美、足……開くぞ」

留美が目を見開く。

「……いやだって言ったら？」

「あと1時間くらい胸を責め続ける」

留美の顔が艶っぽく歪む。

「……それもいやだって言ったら？」

「もう1時間責め続ける」

留美が呆れたように笑う。

「話聞いてないでしょ……」

「俺なら本当にやりかねないぞ」

「……変態」

軽口を交わしながらも、留美の身体なら本当に何時間でも触り続けていたいと思った。こんな魅力的な身体、どうにかしない方がどうかしてる。

左右の膝の裏を掴むと、留美は目を見開いた。

「え、そ、そんな風に、広げるの？」
「じゃあどうする？　自分で広げるか？」
「……っ」
俺の問いに、留美は見る間に顔を真っ赤にする。会話中にさり気なく足を開こうとすると、留美もさり気なく抵抗してくる。
「……留美、見るぞ」
「……ぁ……っ」
「見るぞ、いいな」
「……う……ぁ……っ」
声をほんの少し低くした途端、留美は顔をくしゃりと歪ませた。今にも泣き出しそうだと言うのに、その顔には確かに悦びが混じっている。
留美は下着を上下とも着けておらず、ワンピース1枚という大胆極まる格好だ。いくらワンピースの丈があろうと、足を開いてほんの少しスカート部分を捲ってしまえばあられもない姿を晒すのだ。何度も触ってはいてもまだ見たことのなかった留美の大事な部分への期待は、留美の羞恥と抵抗によりどんどん上がっていく。
「……そんなに、恥ずかしいのか？」
このまま開いても良かったが、ずっと気になっていたことをふと尋ねた。
女性の方が、男よりも己の裸を晒すのを恥ずかしがることが圧倒的に多い。
これは現代女性のほとんどに当てはまることだろう。
きっと理由は色々あるのだ。人によっては「恥ずかしいものは恥ずかしい」とだけ言う人もいるだろう。それはそれで立派な理由・意見と言える。
この質問に、留美はどう答えるのだろうか。
「……よく、分かんない……。けど、八幡に……その、好き、な……人に……見られると思うと……何だか、すごく恥ずかしいの……っ」
途切れ途切れに言葉を紡ぐと、留美は両手で顔を覆ってしまった。
どうしようも無い程幸せな気持ちになり、同時に凄まじい嗜虐心が

湧く。
そうか、と答えて、ワンピースの上から留美の腹を擦る。その手を下に滑らせて、足と足の間まで持っていく。
「え、な、なに……ふぁぁん!?」
ワンピース越しに下腹部を軽くこすると、淡い水色のワンピースにじんわりと染みが広がった。水たまりにハンカチを落とすかのように、太陽が雲で隠れるかのように、一瞬で清楚な水色が陰る。
中指をぐっと押し込むと、割れ目の中にずぶずぶと沈み込んでいく。
「あっ、やっ、それ、だめ……あぁぁぁっ！」
留美は言葉に反して腰をくいくいと跳ね上げ、必死で指を求めてくる。谷に沿って指を這わせては食い込ませ、這わせては食い込ませと繰り返していると、服の染みはどんどん広がっていく。
「おね、がい……こんなの、むり、だめ、耐えられない……っ」
「……じゃあ、どうしてほしいんだ？」
留美が両手で顔を覆う。
「……もう、……して、ほしい……っ」
「ん？」
「……見て……しい……っ」
「……もう一回、ちゃんと言ってくれ」
「……見てほしいの……っ、私の……っ」
指の隙間から覗かせた瞳にぞくりとする。
具体的に何を、とまで聞こうとしたが、これ以上責めたら泣いてしまいそうだからやめておく。
留美の言葉に頷いて、膝裏を掴む。留美は恥ずかしそうだが、抵抗はしない。
細い足を開く。大事な部分はまだ隠れたままだ。
「……自分で、見せるから……っ」
俺が聞く前に、留美が唇を震わせながら言った。
留美の手がスカート部分の裾を掴むと、ゆっくりと秘部を晒した。
「……っ」

五感の機能が視覚に集中する。
呼吸を忘れる。
無意識にごくりと呑んだ息が、時間はいつも通り流れているのだと言う事を知らせてくれた。
細身の身体の割に肉厚な大陰唇。
しっとりと湿り気を帯びたスリット。
微かに生えている恥毛。
まだまだ幼さの残る身体には、今まで刻み込まれた快感の跡はほとんど見えない。
留美はスカートを捲りながら、顔を横に向けて目を瞑っている。
「……綺麗だ……。……触るぞ」
「……っ」
言うと、留美は頷く代わりに目をぎゅっと閉じて身体を縮こませることで答えた。
顔を近付けて、恐る恐るスリットに右手を近付ける。陰部に触れると、見えていた以上の湿り気を感じた。大陰唇を人差し指と親指で挟み、スリットを開く。
目の前の光景を認識した瞬間、心臓が強く波打った。
スリットを開いた中に、薄紅色の小陰唇と小さな膣口が見えた。その途端に、牝の匂いがもわっと解き放たれ鼻腔を貫く。ぴたりと閉じていた割れ目が、溢れ出す快感を閉じ込めていたのだ。
――今まで刻み込まれた快感の跡はほとんど見えないと思ったばかりだが、それは大きな間違いだった。考えてみればそれもそうで、ついさっきまで留美はあれだけ快感に喘いでいたのだ。その跡が残っていない筈はなかった。
頭がくらくらすると同時に、衝動的に肉棒を出して何も考えずに一気に奥まで貫いてしまいたくなった。それだけ、留美の淫裂が放つ魅力は強烈だった。
「……本当に、綺麗だ……っ」
夢見心地で呟いて、何度も何度も喉を鳴らす。留美がようやくこちらに顔を向けると、僅かに開けた唇の隙間から覗く口内がまるで第二

の性器のように見えてしまった。この子の身体中を今すぐめちゃくちゃに汚して犯したい――という欲望が、今にも溢れ出して理性を全て剥ぎ取ってしまいそうで恐ろしくなる。

小陰唇を右手のひらで撫でると、留美は小さな声で鳴いて身体を弓なりに反らせた。緊張と興奮で極限まで高まっている身体は、もはや何をしても快感に変わってしまうようだ。

右手のひらを上に向けて、中指を膣口に添える。今までは直接見ていない中で弄ってきたが、実際見るとこうも小さいものなのかと驚く。この場所を今から俺は蹂躙するのだという実感が、胸の内を妖しく侵食する。

「……指、入れるぞ」

留美に顔を近付けて言うと、

「……うん……っ」

留美は、消え入りそうな声で頷いた。

続く。

（５７）

幼さの残る魅惑的な身体の、一番大事な場所に手を伸ばす。手のひらを上にして中指をスリットに沿わせると、指の腹が心地良く沈み込んでいく。指の体積分だけ溢れ出した蜜が、幼い容姿と矛盾したいやらしい牝の匂いを漂わせる。

指先で小さな穴の入口を感じ取り、つぷりと挿入する。

「んぁ……っ」

留美の声音が妖しさを帯びた。

――今までも、指を挿入させるという行為は幾度となく行ってきたけれども。

目の前でひくつく性器を見ながらするのとそうでないのとでは、とてつもない隔たりがあることに気付いた。

じっくり責めるつもりでいたのに。優しくするつもりでいたのに。

気が付けば、中指を躊躇することなく折り曲げていた。

ぐにゅりぐちぐちゅじゅぽじゅぽじゅぽじゅぽ……っ。

下品なまでに激しく水音を立てると、留美が目を見開いて綺麗な顔をくしゃりと歪ませた。

「っ!?　やっ、そんないきなり激しく……あぁぁぁっ!!」

留美がシーツを掴みながら、あっと言う間に絶頂に達する。

「やっ、だめ、止めて、死んじゃう、死んじゃうって言ったのに……んはぁっ！」

留美が二度目の絶頂に達した時、一際反応が大きい場所を見つける。そこを入念に押し込むと、留美はまるで何かに憑りつかれたかのように身体を弓なりに反らせて痙攣する。

「あっ、うぁっ、あっ、あぁぁ……っ」

尚も敏感な場所を指の腹で抉り続けると、留美は涙を流しながら愛液を噴き出していく。あれほど恥じらっていた足がだらしなく開かれ、羞恥を感じる余裕さえないのだと分かった。

留美の耳元に唇を寄せる。

「留美、綺麗だ」

言いながら、中指で膣肉をめいっぱい押し込む。
「や……んあぁぁぁぁっ!!」
普段の凛としたお嬢様然としたイメージを吹き飛ばして、獣のような声で留美が喘ぐ。綺麗だと言ってから、膣肉の締め付けが明らかに増した。
「留美、綺麗だ。本当に綺麗だ。もっと見たい」
「やめっ、だめ、今それ、ほんとに……あぁぁぁっ!!」
絶頂に達する閾値がどんどん下がっているのか、イクまでの時間間隔がどんどん狭まっていく。心配になるくらいのイキように、指を離した。
「あっ、うぁっ、あっ、うぅっ、ばかぁ……っ」
度重なる絶頂の余韻で、断続的に身体を跳ねさせながら、留美が涙目で俺を睨む。可愛らしい顔で睨まれてもこちらは和むばかりなのだけど、それは言わないでおこう。
半開きになった留美の口を見て、ごくりと喉を鳴らす。
「留美、お互い脱ぐか。俺もしてもらいたい」
言うと、留美は気だるげに身体を起こして、俺の頬をぷにっと指で突いて「わかった」と答えた。仕返しがささやかすぎて和む。
留美に膝立ちしてもらい、汗と愛液ですっかり色合いが変わってしまったワンピースの裾を掴み、一気に剥ぎ取る。
「……」
全体像を露わにした留美の裸体を見て、ただただ見惚れる。
さっきまでの流れで唯一目にしていなかった、可愛らしいへそに目が行く。
……。
「……綺麗だな」
「変態」
視線がバレバレだったようで、顔を赤らめた留美に再び頬をつつかれた。念入りにぐりぐりしてくる。
「いや、今のは留美の顔も身体も綺麗だって意味で」
「おへそ見ながら言う言葉じゃないでしょ」

「へそも綺麗だぞ」
「……」
「いでででで」
両頬を指でぐりぐりされる。眉を八の字にして片頬を膨らませている留美の表情が強烈に可愛い。
「八幡の、脱がせるから」
ぷりぷり怒ったままの留美が、俺のTシャツの裾を掴む。「ほら、万歳して」とまるで母親の口調で言われて、思わず笑いながら両手を上げた。
ぺろんと捲られて、一瞬だけ視界が白く覆われた後、真っ白な留美の身体が再び目に飛び込む。
「……」
留美が真剣な表情で俺の身体を見ている。
「留美」
「なに」
「変態」
「……」
膝に手を付いて、留美が俯く。顔が真っ赤だ。
髪をくしゃくしゃと撫でると、上目遣いで睨まれた。更に撫でてやった。
「じゃあ、こっちも頼む」
言いながら、ベッドの上に立つ。寝転がって中身を晒すよりも、こちらの方が嗜虐心がそそると思っての行動だ。
「……っ、わ、わかった……っ」
留美が緊張しているのを見て、思惑通りだと内心笑う。
ベルトを緩め、ジーンズを脱がせ、パンツに手を掛ける。留美が下腹部に顔を近付けて、すんすんと鼻を鳴らしているのは見なかったことにした。
ひと息にパンツを下ろされると、滾った肉棒がぶるんと飛び跳ねた。留美の鼻先を掠めて上向きにそそり立ち、先走りの汁をぷっくりと滲ませている。

留美の細い喉が、小さく鳴った。
「……八幡、の……気持ち、良く、しないと……っ」
たどたどしい口調でうわ言のように呟き、口を開けて顔を震わせながら近付けてくる。慌てて留美の顔を押さえると、「なんで邪魔するの……？」と言わんばかりに首を傾げられた。
「お互いに、な？」
言うと、留美は更に首を傾げた。何だかシュール。
「……あれだけめちゃくちゃにしておいて、まだするの？」
正論だった。
「今度は口でするから、さっきよりも冷静に出来るぞ」
俺の言葉で、これから何をしようとしているのかが分かったのだろう、留美が顔を真っ赤にする。
「……変態。あと、口だから冷静に出来るって言う理由がわかんない」
「……」
それもそうだった。
さっきだって、指を挿れる直前まではじっくり責める気満々だったしな……と思い返す。
しかし。
「いいからするぞ。大丈夫、留美の口があまりにも気持ち良かったら俺は責める余裕が無くなるから。な？」
強引に押し切ろうとすると、留美は口を尖らせた。
「……それ、逆も有り得るんだけど……」
その通りだった。
どう論破したら良いか……と考えていると、留美の最後の言葉は抗議ではなく愚痴だったようで、諦めて仰向けに寝転がった。よしよし、これで69を存分に……って、んん？
「留美。俺が下になるつもりだったんだけど……」
俺の言葉に、留美がぴくりと反応する。しかしそっぽを向いて何も言ってこない。
「……なに、俺に一方的に責められたいのか？」
俺が上に乗れば、体重的に留美はかなり苦しくなる。留美の口をオ

ナホのように扱って腰を突き立てて、淫裂を口と指で好き放題するという図が目に浮かぶ。
「……鬼畜な八幡なら、これくらいしてくると思ったんだけど」
留美がそう言いながら起き上がる。この子の中で俺は一体どんな悪辣非道な男に……と思ったけど、ついさっきまで好き放題指で嬲ってたな俺。今日に至るまでを思い返しても、身に覚えしかない。
「流石に俺が上になるのは、留美が本気でやばいと思う。だからな、ほら」
言いながら、仰向けになって両手でちょいちょいと手招きをする。
「遠慮せず、俺の顔に跨れよ」
「……」
留美の目が、それはそれは細くなった。
微笑む時の目の細め方ではない。
何ていうか、殻が取れた蝸牛を見るような目だ。
出会ってから今までで、一番冷たい目だった。
ちょっとぞくぞくするけど、ここで新たな性癖に目覚めてもしょうがない。
仕切り直すように、起き上がってあぐらをかいて留美を抱き寄せる。間髪入れずに留美の唇を奪い、背中をぎちぎちと抱きしめて舌を絡める。
「んむっ、んぶっ、んちゅるっ、んっ、ぢゅるっ、んんん……っ、ごく、ごく、ごく……っ」
唾液を入念に流し込み、背中と尻をぐにぐにと揉みしだく。留美の表情は見る間に蕩けて従順になっていった。
数分間舌を絡め合うと、口を離す頃には留美の顔は完全に出来上がっていた。
「よし、跨れ」
「……」
さっきの態度とは一変して、惚けた表情で俺を見つめたままこくんと頷く。
留美の身体を離して、再び仰向けに寝転がると、留美は立ち上がっ

て恥ずかしそうに俺を見つめた。

続く。

（５８）

仰向けに寝転がった俺の顔に、留美が跨る。

その行為がどれほど恥ずかしいかと言うのは、俺の顔を跨いで立っている留美が、いつまでも陰部を手で隠して腰を下ろさないことから容易に見て取れる。

敢えて何も言わない。促さずに、ただ待つ。

留美が小さく喉を鳴らした。秘部を隠した小さな手の甲が近付いてくる。

留美が膝立ちになる。そこでまた止まる。俺はここでも何も言わない。

留美が足を広げた。俺の鼻先に留美の手の甲がこつんと当たる。漏れ出る甘酸っぱい匂いが、股間に更なる血流を送り込む。猛り狂った肉棒が反り返っているのが分かった。

留美がもう一度、小さく喉を鳴らした。

細く白い指が、目の前から消える。

代わりに顔を出したのは、極上の紅肉が垣間見えるスリットだった。微かに生えた恥毛は愛液で濡れ、ぺったりといやらしく貼り付いている。

ふっと息を吹きかけると、幼い下半身がびくりと震えた。俺の顔に下腹部が触れるぎりぎりの所で腰を止め、留美の顔が肉棒に近付く。亀頭にふっと息を吹きかけられると、微弱な快感が身体を突き付けて身体がびくりと震えた。

留美の手が、片方が竿に、もう片方が玉に添えられる。すん、すん……としきりに鼻を鳴らす音が聞こえて、留美が今どんな表情をしているのか手に取るように分かった。

「留美。俺をイカせるまで留美を舐めるのを止めないからな」

「……っ」

留美の全身がびくりと震え、目の前の淫裂がひくひくと疼いた。美味しそうだ……と心の底から思う。

「……いいな？」

「……うん……っ」
顔の見えない留美からは、表情が読み取れない。
けれど、この話をしてから分泌する愛液の量が増した淫裂を見れば、どんな感情が留美の心を支配しているのかが容易に分かった。
×　×　×
俺から言わずとも、留美は恐る恐る腰を下げてきた。淫裂に口が、小さな尻穴に鼻がめり込むと、留美の腰ががくがくと震えた。留美の身体は見た目よりも遥かに肉感的で、華奢な肢体はこんなにも柔らかいのかと驚く。
滾った肉竿が、一気に根本まで飲み込まれて腰が浮いた。
「んふぅぅぅ……っ」
留美の荒い鼻息が聞こえる。もう口での呼吸が出来ないのだ、この子は。俺自身、今のままではろくに呼吸は出来ない。口を開けば淫肉をしゃぶり愛液を啜って、鼻で呼吸をすればきちんと洗われた留美のアナルから漂うボディソープの香りにうっとりとする。生存活動に一番必要な呼吸という行為が、目の前の極上の肉体によって疎かになっていた。
「お……っぶ、んぶぅ……ちゅるっ、れるっ、んふぅぅぅ……っ」
留美の小さな舌が、亀頭を這い回る。いつもよりゆっくりで、陰湿で、ねちっこく――気持ち良い。両手は愛おしむように俺の睾丸を擦っている。俺を気持ち良くしようという気持ちもあるのだろうけれど、今はもしかしたら、俺と同じ欲求が湧いているのかもしれない。
――目の前の異性の性器を、しゃぶり、嗅ぎ、蹂躙する。
この欲求に、素早い動きは必要無い。じっくり味わう食事と同義なのだ。
だから、俺も。
留美の淫肉に舌を、ひくついたアナルに鼻を。
ぐり、ぐにゅり、ぐりり……と。
まるで拷問のように、極めてゆっくりと、めり込ませる。
「んふぅぅぅ……っ、ふっ、んんんん……っ」
留美が肉竿を根本まで咥え込んだまま、動きを止める。留美の唾液

はこちらの恥毛をぐしょぐしょに濡らし、べったりと貼り付いているのが分かる。留美の声はどんどん人間味が薄れ、動物に還っていくようだ。腰を引いて逃げようとするが、そんなことをさせる訳が無い。尻肉をにちりと掴んで、逃げようとする前より更に舌と鼻をめり込ませる。舌には甘酸っぱい味が広がりにちにちといやらしい音が響いて、アナルのほろ苦い香りが鼻腔を満たす。興奮で頭がおかしくなりかけて、留美の小さな口の中で肉槍が更にいきり立つ。それによって留美の呼吸が苦しくなり、身体の力が抜けて俺の舌と鼻が更に留美の身体に侵入する。留美が漏らす苦悶の声とは対照的に、ほとんど動かさない愛撫にも関わらず溢れ出した愛液は俺の顔をたっぷりと濡らしていた。

舌をぐにぐにと抜き挿しして、鼻で押し引きをする度に、留美の身体の力が抜けてゆく。留美はもはや何の抑制も利いていないのか、唾液も愛液もだらしなく溢れさせていて、俺の身体が留美の体液に浸されていく。亀頭が喉奥にこつこつと当たり、その度に留美の小さな呻き声が聞こえる。ここに射精したら、どれだけ気持ちが良いのだろう……と思うと、身震いがした。

少し責め方を変えようと思い、尻肉を掴んで顔を離す。留美は全身が弛緩していて、手の力を抜けばそのまま腰が落ちてきそうだ。性の快楽に溺れた牝の身体というものに、年齢は関係無いのだと知った。

「……ぷはっ、……あ……ぁ……っ」

留美も口を離して、浅く息を吐いた。留美の腰を浮かせて様子を見てみると、休憩するのかと思った留美は俺の亀頭に舌を伸ばし、まるでアイスを味わうかのように舐め始めた。ちろちろと舐めて、雁首をなぞるように舌を這わせ、亀頭全体をぱくりと咥え込み、じゅぞぞ……といやらしく音を立てて啜る。表情を見たいが、逆に見たくないとも思った。今の留美の表情を見てしまえば、きっと何の躊躇も無く、この子が泣き叫ぼうが関係無くめちゃくちゃに犯してしまいそうだったから。

淫裂に右手中指をねじ込み、くにゅくにゅと折り曲げた。

「ん……っ!? あっ、うぁっ、うんん……っ」

留美が口を離し、肉竿に頬ずりしながら喘ぐ。たっぷりと指に淫液を馴染ませると、すぐに抜いた。
いやらしい潤滑液を纏った右手中指を留美のアナルにぴとりと当てると、留美の身体がぎくりと強張った。可愛らしい肉芽を舐めると留美の身体が快感で跳ね上がって弛緩したので、その隙に中指をアナルにぐりぐりとねじ込み――同時に、親指を陰部にねじ込んだ。
「あ……かはっ、あ……え……うぁっ、うぅぅぅ……っ!?」
何が起きたのか分からないという声を上げて、留美の身体ががくがくと不規則に痙攣する。
「だ、だめ、そこ、汚いから……うぅぅ……っ」
「汚くない。留美に汚い所なんてない」
古びた常套句も、紛れも無い本音として言えば効果は出る。留美は俺の言葉を聞くと、抵抗をすんなりとやめた。
潤滑液が功を奏したのか、留美のアナルは思いの外あっさりと中指を受け入れてくれた。しかし一度受け入れた後は食いちぎらんばかりに締め付けてきて、進むのも引くのも難しくなる。親指で淫肉を抉ると尻の力が緩んだので、最終的に中指を根本まで入れることに成功した。
「ふーっ、ふーっ、ふー……っ、……あ、うぁ、うぅぅ……っ」
留美の身体には脂汗がじっとりと浮かんでいた。未知の異物感が今なお留美の身体を引っ掻き回しているのだ。肉棒から口を離してただただ震えているのも無理はない。
中指と親指を折り曲げて、体壁一枚越しに互いの指の感触を楽しむ。
ゆっくり、じっくり、ねっとり。
徐々にアナルから腸液が分泌され、中指の動きがスムーズになっていく。淫裂からは愛液がとめどなく溢れ出し、ゆっくり責めている為に飛び散ることもなく、太ももを伝って流れている。
「……ぅ……ぁ……だめ、これ、私、もう……っ」
「……イクのか？」
「……っ」

留美は頷く代わりに、猫のように背筋を弓なりに反らせて答えた。
ごくりと息を呑んで、親指と中指の動きを一気に速める。力強く握るようにして、留美の腸壁と膣壁をごりごりと抉る。
「んはぁぁぁんっ!? だめだめだめだめ気持ち良すぎる死んじゃうむりむりだめ本当に……っ」
留美の声がなりふり構わないものになる。目の前の肢体はしきりに身体を痙攣させ、今にも限界を迎えようとしている。
空いている左手の親指で、小さな肉芽をぎゅっと押し込んだ。
「ひ……っ」
留美が悲鳴混じりに息を吸い込んだ瞬間――声を抑えようとしたのか、留美は突然、肉棒を根本まで咥え込み、喉奥で亀頭を擦った。予期していなかった快感に思考が弾け、急激にマグマの奔流が身体の奥底から溢れ出してくる。
何の抑制も利かないまま、腰を浮かせて留美の喉を抉った。
『うぅぅぅ……っ!!』
2人のくぐもった声が揃った。
尿道を伝う感覚がはっきり分かる濃厚な白濁を留美の喉奥に叩き付けると同時に、俺の顔に透明な液体がシャワーの如く降り注いだ。絶頂による俺の脈動と留美の脈動は奇妙なくらいにシンクロしていて、自分の体液を相手に注ぎ、自らも相手の体液を浴びるという快感に溺れた。
うっすらと目を開けて、指を抜く。中指が全く汚れていないことに驚きつつ、留美を見やる。留美はまだ息を荒げつつも肉棒を咥えており、微かに顔を上下させている。射精したばかりで敏感な肉棒がびくびくと震えた。
「留美、一旦休もう」
俺の声も聞かず、留美は顔を上下させ、竿と亀頭に舌を這わせる。
「留美、俺を気持ち良くしてくれるのはありがたいけど……」
この後は……と、留美にはっきり聞き取れるように、ゆっくりと告げる。

「留美の中に出したい」

「……っ」

留美の動きが、ぴたりと止まる。ゆっくりと口を離して、身体を起こし俺の顔の横で女の子座りになった。目は潤んでいて、様々な感情がないまぜになった表情で顔がくしゃくしゃに歪んでいる。

留美が微笑んだ。

今まで見た中で、一番綺麗な笑みだと思った。

「……うん。しよう？　八幡。……私の、中に、出して……っ」

震える手が、仰向けのままの俺の頬に伸びる。母性を感じさせる優しさに目を細めると、俺はゆっくりと身体を起こした。

続く。

（５９）

留美と互い違いに身体を重ねて性器を貪り合った後、休憩がてら俺は一度部屋を出ていくつもの濡れタオルを用意した。小町は外出しているようで、家の中は静かそのものだった。

部屋に戻ると、留美は一糸纏わぬ姿のまま、身体を丸めてベッドに寝転がっていた。半目でうつらうつらとしていて、俺を見ると「あ……っ」と小さく呟いて起き上がった。何だか猫みたいだな、と思いながら濡れタオルを見せる。留美は手を伸ばして受け取ろうとしたが、手を遠ざけてそれを拒否した。俺の行為に留美は初め訝しみの視線を向けたが、俺の意図を察して顔を真っ赤にした。

「……変態」

頬を赤らめて呟いたが、俺に自身の身体を拭かれることに抵抗は見せなかった。

ベッドで女の子座りをする留美の正面に座り、綺麗な顔をこしこしと擦る。猫のように目を細める留美が可愛くてしょうがなく、何度も髪を撫でた。

顔を拭き、首を拭き、腋を拭く。腋を拭いた時はふるふると震えていたが、入念に拭いているとむ～と唸る声が聞こえたので早めに切り上げた。

乳房を拭き始めると、留美の表情が一変した。

「ん……っ、んん……っ」

頭上から悩ましい声が降ってくる。タオルを僅かに動かしただけで、艶めかしい少女の身体が色っぽくくねる。ごくりと息を呑んで、ぴんと可愛らしく張り詰めた乳頭をタオルの生地でこする。

「ふぅっ、んっ、んふぅ……っ」

留美が目を閉じて、唇を引き結んで震える。年不相応の艶っぽい声を抑える唇に吸い付いて舌を割り入れると、留美は薄く目を開けて舌を絡めてきた。

唾液を流し込みながら、２つの乳頭を入念にタオルでこする俺の肩に留美が手を置く。細かく流し込まれる快感の電流に徐々に身体が

言うことをきかなくなっているのか、俺に唇を押し付けて前傾になっていく。
タオルを乳房から離したが、左手は直接乳肉を弄んだまま右手に持ったタオルを下腹部へ滑らせていく。ふと悪戯心が湧いて、濡れタオルを脇に置いて乾拭き用のタオルを取り出した。
鮮やかな紅色をした肉目に、ざらざらしたタオル生地をさっと擦らせる。
「ん……んはぁっ!?」
唇を離して、おとがいを上げて留美が喘いだ。指よりも荒々しい快感を送り込んでくるタオル生地は新鮮だったようで、僅かに上下に往復させるだけで華奢な肢体がびくびくと上下に跳ねる。留美の淫裂に触れた部分を見るとぐっしょりと濡れていて、ちょっとした悪戯心がむくむくと膨れ上がり、明確な嗜虐心に育ってゆく。部屋を出る際に一度着た服を全て脱いで、留美を仰向けに寝かせる。留美の顔の横に膝立ちになり、小さな顔の目の前に青筋の走った肉槍を晒して、タオルを再び淫裂に添えた。
「ここ、中々乾かないな」
「こんなことされたら乾く訳……んあぁうぅっ!?」
留美の淫谷をなぞるタオル生地の部分を徐々にずらしていき、留美の愛液を満遍なくタオルに染み込ませていく。留美は息を荒げながらも目の前の肉槍の裏筋の匂いをすんすんと嗅いで、快感に喘ぎながらもぱくりと咥え込んだ。
「ふっ、くちゅるっ、れるっ……んふぅんっ！　ふっ、ちゅぷ、ちゅぷ、ちゅぷぷ……んふぅぅ……っ！」
俺の目を見つめながら、留美が一生懸命に肉槍をしゃぶる。時折快感で身体が跳ねると、内頬に竿がぐりぐりと擦れて気が遠くなる程の快感が下腹部を貫いた。タオルは際限なくぐしょぐしょになり、肉竿を小さな口から引き抜く頃には、まるで水を張ったバケツに放り投げたかのように満遍なく濡れそぼっていた。
「……身体拭いた意味、ない……っ」
「……すまん、あんまり反応が可愛いもんでつい……」

再び全身にじっとりと汗を浮かべた留美が不機嫌そうに眉をひそめて、俺は平謝りすることしか出来なかった。留美がベッドから起き上がると、バッグに入れていた飲み物を飲む。細い喉がこくりと言う音を立てる度に、下腹部にざわりと興奮が走った。

留美はベッドに上がると、胡座をかいた俺の股座に座り込んだ。小さな頭に顎を乗せて、しっとりと汗をかいた黒髪の甘い匂いに溺れながら、ぽつりと囁く。

「……そろそろ、するか」

言葉が返ってくるまでの僅かな時間をも埋める為に、留美の胸の上下に腕を回して抱きしめる。

「……ん」

俺の言葉に短く答えると、留美は俺の両手をそっと握り締めた。

× × ×

留美はシーツをしっかり掴んで、足を大きく開いている。羞恥により頬を赤く染めているが、それがいじらしく感じて愛おしさが増す。淫肉の発達は未熟にも関わらず既に十分すぎる程濡れていて、紅く膨れた亀頭を宛がうとぴくりと身体が跳ねた。

ここまで来たら、もう迷いは無い。

俺は、留美と、一つになる。

「……行くぞ」

「……ん、きて……っ」

緊張で強張る留美の頬を撫で、もう一度膣口の場所をしっかり確認して、慎重に腰を動かした。

ずにゅ……っと、熱く柔らかい粘膜の中に肉竿を挿入する。

「んんんん……っ」

シーツを掴む手にぎゅっと力を込めて、下唇を噛み締めて留美が堪える。膣の締め付けは気持ち良いと言う感覚を通り越して痛い程で、僅かに腰を進めるだけでも多大な覚悟と労苦を必要とする。

それでも大丈夫、こんなに濡れているんだし……と思いながら、慎重に、それでいて確実に腰を押し進める。

「うぅぅ……うぅぅぅ……っ」

「……え……っ？」
程なくして、異変に気付いた。
あれだけ濡れていた留美の淫裂が、すっかり乾いてしまっている。まるで散々行為に及んだ後、身体も拭かずに眠ってしまったかのように。
……挿入が、本当にただの苦痛になっている……？
結合部を覗く。肉竿はまだ雁首がうっすらと見えていて、亀頭さえ入りきっていない。このことから、破瓜による痛みで苦しんでいるという訳ではないことが分かる。
「うぁ……うっく、うぅ……っ」
小さな声ですすり泣く留美は、必死に俺に続きを促してくる。精一杯俺に愛情と信頼を示す行為は、俺の胸を却って締め付けた。
動きを止めて、考える。
――俺とて、覚悟はしていた。
年齢差がどうという話ではなく、留美の年齢を考えていた。心だけでなく、体格の成長も今が真っ盛りの時期だ。それは即ち今現在の留美の身体が未成熟であることを示している。普段どれだけ大人びていようが、どれだけその身体が色香を放っていようが……体格そのものはまだまだ大人にはなれていないのだ。まして高校生の俺が留美の相手として挿入しようと言うのだ。ある程度の苦労は想定していた。その苦労も俺が負うものではなく留美が負うものだと分かっていたからこそ、留美が少しでも気持ち良く、リラックスして事に臨めるよう考えていたつもりだった。
――しかし、それでも。
現実に、留美は今、苦しんでいる。
単純に言えば、想定の範囲外だった。
ほんの僅かでも留美と繋がれて嬉しい。これは紛れも無い本音だ。
けれど今は、これ以上は無理だ。事態を前に進める為に、例えどれだけ留美を気持ち良くしようとした所で焼け石に水だろう。
……よし。
留美の頬を撫でて、「留美、抜くぞ」と囁く。留美が「え……？」と

惚けているのにも構わず、華奢な腰を押さえて慎重に引き抜いた。苦痛に歪む声が漏れたが、それでも肉竿が抜けると留美の顔から一気に緊張がとれた。
「……留美、本当にすまない。今日はここまでにしよう」
「え……っ」
　留美の顔からすっと血の気が失せて、一気に青ざめる。俺は慌てて首を振った。
「違うぞ、別に諦めるって意味じゃないからな。あくまで今日は、ってことだ」
「でも、それじゃ明日だって……っ」
　見る間に目の端に涙をためる留美を見て更に慌てる。この子を泣かせたくない一心で、俺は留美の上に覆いかぶさって小さな身体を抱き締めた。
「……その、な。俺の身体に対して留美の身体はまだ小さい。これはしょうがない。ただの事実だ。冷静に受け止めよう。でも留美が言う通り、適当に先延ばしにして『取り敢えず次回頑張ろう』みたいなことを言ったって、きっと同じことを繰り返す。そうだな？」
「……うん」
　幾分落ち着いた留美が頷いて、俺を抱きしめ返した。起き上がって留美の腕を引っ張り起こし、胡坐をかいた股座に座らせてもう一度抱きしめる。留美の目が安心のためか柔らかく細められた。
「……明日から、ちょっとずつ練習していこう」
「……どういう風に？」
「……今色々考えてるけど……まあ、アレだ、うん。物凄くエロいことばっかする」
「……っ」
　留美が俺の肩を掴んで顔を離し、驚きやら呆れやら羞恥やら何やらがごちゃまぜになった表情になった。耳まで真っ赤で、パニックになっているのがありありと分かる。いかん、言い方がひどすぎた。
　こほんこほんと咳払いをして、まだ混乱の中にいる留美を抱き締める。

「それくらいしないと、多分俺たちはちゃんと繋がれない。だから、明日からめっちゃエロいことを沢山しよう。今までよりも、もっともっと」
言い方が他に思い付かなかった。開き直って大真面目に馬鹿なことを言うと、留美が俺の胸に顔をうずめた。おでこがやけに熱い。
「……い、今までだって、すごく、エッチ、だったのに……っ」
「……っ」
ちょっと待って。
「……八幡、急におっきくしないで……」
「……無理だって今のは……」
俺の下半身が、「ばっきーん!」と陳腐な効果音が飛び出しそうなくらい、見事な反応を見せた。
「……そういう方向で行っていいか……?」
「……やらないと、八幡と繋がれないんでしょ?」
「ん、多分な。……留美の成長を待つなんて言ったら何ヶ月とか何年単位になるしな」
「……じゃあ、頑張る……っ」
「……ありがとな。俺も頑張ってめっちゃエロいことするから」
「……」
「ろれんらはいろれんらはい（ごめんなさいごめんなさい）」
顔を真っ赤にして片頬を膨らませた留美に、両頬をみょーんと伸ばされた。可愛すぎてご褒美にしか思えない。

そんなこんなで。
俺と留美の、長い道のりがスタートした。

続く。

（６０）

「るるるる留美ちゃん？　い、今、何て？　何て……っ？」
「あ、いや、だから、ね？　その、この間、八幡と、その、最後まで……」
「くくくく詳しく聞かせて！　お願い！」
「う、うん、分かったから落ち着いて？　ね？」
小動物然とした顔立ちを興奮一色で染めて、テーブルに両手を付いて身を乗り出し捲し立ててくる。
目の前の友達の動揺っぷりは、いっそ面白いくらいだった。
――八幡と色々なことがあった日からしばらくした後。
私はクラスメイトの綾乃（あやの）――私と同じく、５つ上の恋仲の相手がいる可愛らしい女の子――と、久しぶりに２人で遊んでいた。久しぶりと言ってもそこまで時間は経っていない筈なんだけれど……それまで過ごした時間――主に八幡と過ごした時間――が濃すぎて、実際の時間よりもずっと時間が経っているような気がした。
前回２人でカラオケで話した時は、私はまだキスだけ、そして綾乃は口で……と、綾乃が私の先を行っている状況だったけれど。
「うぅぅ……留美ちゃんに先を越されたぁ……わたしだってまだ彼と最後までしてないのに……」
「綾乃、今午前中、あとここファミレスだから。気を付けて」
「うぅぅ……わたしが口でするのをのんびり研究してる間に……」
「綾乃、ねえ、聞いてる？」
……と、どうやら、私は意図せずして綾乃を追い越してしまったらしい。元々競うようなものでも無いんだから別に良いとも思うんだけど。
遊びに行くと決めた所で、綾乃が真っ先に「近況報告をしたい」と言ったので、こうして午前中からファミレスに来ていた。ドリンクバーでのんびりと過ごして、お昼になったらこのままご飯も食べようとしていた。幸い店内は空いていたので、店にそこまで迷惑はかからない……はず。
冷房が寒いからとホットにしたコーヒーにミルクを混ぜながら、未

だ興奮冷めやらぬ友人を見つめる。
「……綾乃、髪は切らないの？　前髪だけでも」
「え？　ああ……」
　私の報告に取り乱している綾乃を一旦落ち着けようと、別の話題を切り出す。綾乃の綺麗なショートカットの髪は少し伸びてきていて、彼女のチャームポイントとも言えるくりくりとした大きな瞳が隠れがちになっていたのが気になっていた。
　これはね……と綾乃が照れたように俯いて、毛先をくるくると指で遊ぶ。
「髪が伸びてることに気付いた彼がね？　『普段他の人にあんまり目を見せないでおいて、こうやって俺にだけ見せてくれる感じ、すごく、何ていうかこう、クる』って言ってくれたの。だから、本当に邪魔になるまで伸ばしておこうかなって……」
「……」
　八幡がたまに見せる、ちょっと鬱陶しい所（そこも含めて好きではあるんだけど）を凝縮したような台詞……。
「綾乃、今日中に前髪を切ろう」
「えっ!?　なんで!?」
「綾乃の彼氏、良い人だと思うけどその台詞はちょっと鬱陶しい」
「ひどい!?」
　こんなやりとりを経て、結局本当に綾乃は髪を切ることにした。最初は言い過ぎたか……と後悔したけれど、「うぅ……確かに彼、そう言う台詞よく言うかも……」と綾乃が呟いたことで罪悪感が吹き飛んだ。違和感の芽は早めに摘んだ方が良いと思う。
　席を立ってアイスコーヒーを注いできた綾乃が、ストローでくぴくぴとコーヒーを飲んだ後、おずおずと私に尋ねてきた。
「そ、それで……どうだったの？　やっぱり痛かった？」
「……」
　綾乃の質問に、さっきはきちんと結末まで説明しきれていなかったことに気付く。
「その……実は、最後までしようと思って、出来なかったの」

「え」
「えっと、実際そう言う所まで行ったんだけど。八幡……あ、彼のことね？　八幡の……その、あの、……もの、が……おっきくて……だから……その……って、なにニヤついてるの……っ？」
綾乃が見たこともないくらいにんまりと笑っていた。「んーん？　留美ちゃん、可愛いなーと思って」と目を弓なりにして言われる。顔は熱いし妙に腹が立ったけど、それでも何とか話を続ける。
「……本当に痛くなっちゃって、その……その日は、途中で止めたの」
最後は消え入りそうな声で呟くと、綾乃は今さっきまでとは打って変わって真剣な表情になった。
「……そうだったんだ。……それで、留美ちゃんたちはこれからどうするつもりなの？　日を改めれば大丈夫、って問題でもないでしょ？」
「……うん」
八幡が今日はもうやめようと言った時に、私が抱いた疑問と同じことを綾乃は考えていた。これに対する答えは決まっているんだけど。
決まっているんだけど。
……。
……。
「……留美ちゃん？」
俯く私を、綾乃が上目がちに覗き込んで来た。恥ずかしさで震える唇をきゅっと引き結んで覚悟を決める。
「……その、徐々に、広げて行こう、って……」
「……っ！」
綾乃が目を見開き、両手でコップを持ったまま固まる。
数秒の間完全に時間が停止していたかと思うと、さっき以上の勢いでテーブルに両手を付いて身を乗り出し捲し立ててくる。
「え、ど、どうやって!?　ていうか留美ちゃん分かってる!?　今すごくエッチなこと言ってるんだよ!?　きゃー！　きゃー！　え、うそ、そんなことになるんだ、じゃあわたしもこんな展開があるかも……きゃー！　それでそれで、詳細は!?」

「綾乃っ、今午前中っ、ここファミレスだから……っ」
近くを通ったウェイトレスの人が不思議そうにこっちを見ている。恋の話で盛り上がる女子中学生なんてきっといくらでもいるんだろうな……とお盆を持つ彼女の大して動揺しない様子から察する。幸い綾乃は声が小さいので他の人に聞かれることは無かった。
そこから綾乃には質問責めにあったが、肝心な部分には答えることが出来なかった。別に言うのが恥ずかしいとか秘密にしなきゃいけないなんて言う訳ではない。
具体的にどうするか――それを、明日八幡の家に行った時に聞くことになっていたからだ。

× × ×

「うっす。上がってくれ」
「……うん」
いつもの気だるい雰囲気を身に纏いながら、八幡が家に迎え入れてくれる。
綾乃と会った次の日、私は八幡の家を訪れていた。もう何回来たか分からないくらいで、八幡の妹さんの小町さんともすっかり仲良くなっていた。私から進んで話せる訳ではないけど、いつも小町さんが「ふへへぇ……留美ちゃんはかわえぇのぉ……っ」とか言いながら抱き付いて頬ずりしてくる。仲良くなるにつれてスキンシップが激しくなっている。
……。
……小町さん、明るいし可愛いしすごく良い人だけど……ちょっと変だ。あの可愛らしさが無かったら犯罪の匂いさえするくらいには。
八幡に招かれて部屋に入ると、背の低いテーブルの上に見慣れない紙袋が置いてあった。中身の見えない袋の中には何かが隙間なく詰まっているようで、ぱんぱんに膨らんでいる。
「取り敢えず座ってくれ」
八幡が言うので、先にクッションの上に腰を下ろし、八幡を見ながら自分の太ももをぽんぽんと叩いた。八幡は左手で顔を覆って「くっそ……何だこの可愛い生き物……」と呟いた。八幡は私のさりげない

悪戯に弱い。こういう悪戯は八幡がやけになって乗ってきた場合お互いが恥ずかし過ぎて大変なことになるんだけど。
嬉しいがまずは普通に話したいから……と真面目な理由で断られて、片頬を膨らませながら八幡をじっと見る。八幡は私の反応を見ると目を見開いて、今度は両手で顔を覆って「死ぬ……っ」と呟いてから、顔をぶんぶんと振って私の隣に座った。
「さて、早速本題なんだが……」
私が手を握ったせいかちょっと声を上ずらせた八幡が、「ちょっと待っててくれ」と言って繋いだ手を離した。離し際に優しく手を撫でられたものだから頬が熱い。
八幡が目の前にある袋を開けると、思わず目を見開いてしまった。
「俺自身色々努力はするつもりだけど、こういう物の力も借りようと思って」
唖然とする私の隣で、八幡は心持ち興奮した声で言った。私は八幡が言う「こういう物」を眺めて、口をぽかんと開けて言葉を失ってしまう。
……八幡って、やっぱり変態なんだろうか。

続く。

（６１）

袋を開けて、その中身をテーブルの上に転がす。
転がり出てきたのは、いくつものピンク色の器具。簡単なスイッチが付いた部分と、ピンクの楕円形の部分は線で繋がれている。
「これって……っ」
留美が目の前に転がるものをじっと見て、淡く頬を染めた。てっきりきょとんとすると思っていたので、意外な反応につい楽しくなってしまう。
「どうした、知ってるのか？」
つい、からかうように。
口を端を吊り上げて言ってしまった。
さぞや邪悪な顔になっていたのだろう。
その証拠に。
「……」
殻の取れた蝸牛を見るような、細く細くなった目。訝しみ、と言う言葉の最高潮とも言えるこの表情に晒されて、背中にじんわりと嫌な汗をかく。
「……す、すまん」
水分の抜け落ちた声で謝ると、留美は幾分嫌悪感を和らげた顔を向けた。
「……私、知らないもん、別に……」
「……へ？」
よく見ると、眉を八の字に曲げて、子供のようにむくれている。いつもならとてもからかい甲斐のある表情だと思うのだけれど、如何せん状況が状況なのでどうしたら良いか分からない。
「……そ、そうか、知らないか」
「……うん」
「……これは『ローター』と言ってだな……」
「……っ」
高速で顔を逸らした。

こいつ、知ってやがる……っ！
「……ふ、ふうん、そうなんだ。別に、興味無いけど」
自分から地雷を踏みに行くスタイル、嫌いじゃない。
段々調子を取り戻してきた。
「よく見ておいてくれ。このスイッチを入れると……」
言って、スイッチを回して「中」にする。すると、ローターの1つがテーブルの上で踊り出し、かかかかっと軽快な音を立てて跳ねた。
「……っ！」
留美はまるで生き物のように踊る道具に目を奪われ、瞬きも忘れて凝視している。
「試しに手で包んで持ってみてくれ」
「え、こ、こう……？　きゃ……っ！」
テーブルの上を震えながら移動する器具を、留美の小さい手が包み込んだ。その途端に振動音はくぐもったものになり、暴れ馬はすっかり鳴りを潜める。
「うわ、わ、わ……っ」
年相応の子供らしい声を上げて、留美が手の中の振動に驚いている。
――この時、俺の脳内であるシーンが過ぎった。
きっと誰もが見たことのある、または名前だけでも知っている、とある作品の1シーンだ。
あの光景を思い出し、そして今から俺が留美に対して起こそうとしている行動。
それは、あまりにも自然なことなのだ。
宇宙から星が生まれて、その中で生命が誕生し、育まれ、愛を知っていくように。
それくらい、自然なことなのだ。俺が今から起こす行動と言うものは。
器具のスイッチを止める。
留美が不思議そうな顔をした。
留美、手を開いてくれるか――と、優しく、愛おしむように言う。

留美は不思議がりながらも、そっと手を開いた。
そして、俺は留美にこう言った。
「留美、今から俺が言う台詞を繰り返してくれるか？」
「ん、なに？」
喉をごくりと鳴らす。
ここに来て迷いが生じる。
本当に良いのだろうか。
この子の純粋さを貶めているような気さえする。
しかし、言わずにはいられない。
一度考えてしまったら、ゴールするまで止まる訳にはいかないのだ。
留美と目が合う。留美が僅かに目を見開いた。もしかしたら、これから俺が何を言おうとしているか分かったのかもしれない。
言おう、今だ、言うしかない。
勇気を振り絞るんだ、比企谷八幡。
行くぞ、行くぞ、行くぞ――
「……『なんでホタルすぐ死んでしまうん？』って言ってほし「私あの映画好きだからそう言う冗談はだめ」ごめんなさい！」
覚悟の割に。
一瞬で終わった。
留美を見る。さっきよりも表情が怪訝だ。この世の最底辺を見下ろしているかのような目だ。端的に言って怖い。超怖い。
留美がこちらににじり寄る。俺は同じ分だけ遠ざかる。
留美が俺の袖を摘まんだ。「逃げないで」と言われた。もはや逃げ場は無い。
「八幡」
「は、はひっ」
「もう一度言うけど、私あの映画好きなの。小さい時に見て泣いちゃったの」

「そ、そうなのか」
「だから、笑いのタネにするのはだめ。人によっては良いかもしれないけど、少なくとも私はだめ」
「……ごめんなさい」
素で凹んでしまった。
女子中学生に叱られる男子高校生という構図は、傍から見れば地獄そのものだろう。
一時のテンションが原因で死にたい程の羞恥の炎に身を焼かれていると、いつもより猫背になった頭をそっと撫でられた。
「よしよし、慰めてあげる」
「……やめてくれ……」
留美の顔をよく見ると、明らかににんまりと笑っている。完璧にからかわれている。
結局この後、苦々しい茶を飲んだような顔をした俺と、そんな俺をにこにこしながら撫でる留美という奇妙な光景が続いた。

× × ×

２０分後。
「ごめんって。ね？」
「……」
「からかいすぎたって。ね？」
「……」
「もう……」
「……」
場所は部屋のベッドの上に移り、留美に散々からかわれた俺は、ベッドの隅で体育座りをして顔をうずめいじけ倒していた。留美は子供をあやすように謝りながら頭を撫でている。みっともなさが加速していた。
俺の機嫌を直そうとしているのか、留美は段々、撫でながら顔を近付けてきた。２人の間の空間が狭まり、徐々に身体が熱を帯びてくる。いじけてようが何だろうが、留美の甘い匂いに幼稚な意識は勝てなかった。

ふと顔を上げると、四つん這いで俺の目の前まで留美が迫っていた。俺の足の間に割って入って、吐息が混ざり合う程の距離で留美が微笑む。心臓がとくんと波打った。
ここで不意に、視線を下ろす。留美が今日着ていた服は胸元が緩く、四つん這いになっている為に控えめな胸の谷間と下着が見えてしまっていた。俺の視線に気付いた留美がくすっと笑うと、再び羞恥心で心がどよめく。
「ん……っ」
留美がうっとりと目を細めて、首を傾けた。抵抗する間も無く唇が重なり、痺れるような甘味が身体を包み込む。
留美が舌を絡めてくる。小さな舌が口内に侵入してきて、それを唇で挟んで啜ると、留美は綺麗な瞳を開いては閉じて陶酔してゆく。いつの間にか羞恥心やいじけた心は消え失せていて、今は少しでもこの身体を貪りたかった。
留美の双丘を両手で包み込み、指を波打たせて感触を味わう。
「ふっ、んん……っ、ちゅっ、くちゅっ、ちゅぷ……んふぅぅ……っ」
少女の瞳が徐々に情欲に染まり、口付けと言う行為にはまり込んでいく。乳房の先端に指を這わせると、衣服越しでもその反応は顕著になり、細い肢体が波打って悶える。唾液を流し込むと、細い喉がこくりと鳴った。
２人の唇が離れると、留美は幸せそうに目を細めた。
「……元気出た？」
「……すげぇ出た……けど、何だろう、今のは反則だと思う」
「……八幡を元気にするには、これが一番早いと思ったんだけど……だめだった？」
「だめじゃない、全然だめじゃない。全く以て正解だわ」
言いながら、ふっと呆れ笑いを浮かべて留美の髪を撫でる。
「……うし、だいぶ脱線しちまったけど……そろそろ始めるか」
「……これ、本当に使うの？」
横に置いていたローターをちらりと見やり、留美が頬を赤らめる。
「ああ、徹底的にほぐして柔らかくするからな」

「は、はっきり言わないで……っ」
留美の顔が一瞬で茹立ち、女の子座りになって両手で顔を覆った。
「……ゆっくりやるから、な？」
「……うん」
指の隙間からちらりと顔を覗かせる留美が、たまらなく愛おしい。
さあ、ここからが勝負だ。

続く。

（６２）

２人とも脱ぐことにした。

留美の前で堂々とＴシャツを脱ぐと、「なんか……そういうの、だめ」と頬を赤らめながら言われたため、ベッドの上で互いに背を向けて脱ぐことにした。しゅるしゅると鳴る衣擦れの音は、いつまで経っても慣れることは無いなと思った。

全て脱いでしばしぼーっとしていると、もう大丈夫と言われた。くるりと振り返ると、女の子座りをした留美が胸と下腹部を手で隠し、恥ずかしそうにもじもじとしていた。妖精と見紛うような裸体は、生きるのに必要な呼吸をしばし忘れさせた。

留美の横に置かれた、丁寧に畳まれた衣服と下着をじっと見る。

「……ピンクか」

おでこをはたかれた。

ぺこーん、って感じ。

「……脱ぐ過程もしっかり見ておいた方が良かったか」

おでこをぺこーんとはたかれて、両頬をつままれた。

みょいーん、って感じ。

「……俺のほっぺを引っ張ってる間、今さっき隠してた所が丸見えだった訳だが……」

「……っ」

両目を手で塞がれて、空いた手で胸板を叩かれた。

ぺちぺちぺち、って感じ。

「……ありがとう、堪能した」

「……何言ってんの……」

謎の満足感によりツヤツヤする俺と、ツッコミ疲れでげっそりする留美。

息を荒げていた留美がふっと息を吐いて、呆れたように笑った。

「……馬鹿みたい。……しよ？」

「……ああ」

優しく和やかな空気のまま、下腹部が強烈に反応する。

――しよ？

たった２文字の破壊力は、とてつもなかった。

×　×　×

「んっ、んちゅっ、はむっ、ん……んふぅぅ……っ」

「ちゅぴっ、れろっ……んはぁっ!?　……ん……あ……っ」

「あっ、あぐっ、ふぅっ、んっ、んふぁぁ……っ」

和やかな会話をしていたのは、ほんの１０分程前だろうか。

僅かな時間で部屋の空気は一変して、いやらしい牝の匂いが密閉された室内を満たしていた。

胡坐をかいた俺の股座に留美が座って、こちらに足を絡める。そして俺の首に腕を回して、後はひたすら口付けをして、乳房や尻肉を揉みしだき、綺麗なへそに勃起した肉槍を押し付ける。留美の表情は時間を追うごとに理性を失っていき、敏感になった肢体をまさぐられる度に唇を離して艶めいた喘ぎ声を漏らすようになっていた。

「八……幡……っ、なんで、下……さわって……くれないの……っ」

決して下腹部まで手を伸ばさず、焦らすように滑らかなお腹を撫でさすっていると……留美がついに耐えかねて、耳に唇を押し付けて囁いてきた。普段の留美だったら考えられない行動に興奮して、身体の奥からぞわぞわと嗜虐の蔦が生えてきて、身体中に根差していく。心に無理やりブレーキを掛けて、震えながら息を吐いた。

「……留美の大事な所が、もっともっと気持ち良くなるようにしてるんだ」

小さな耳に囁き返して、右手を留美の背中に回して尻穴を撫で、淫裂と尻穴の間を撫でさする。

「は……あぁぁぅんん……っ!?」

予想していない刺激だったからか、留美はとびきり色っぽい声を出して身体を捩る。２つの穴の間の肉をくにくにと押すと、それに合わせて腰が前後にがくつき、その度に小さなへそに肉槍が押し込められる。空いた左手で足の根本をさすると、「んあぁぁ……っ、ぅあぁぁ……っ」と天を仰ぎながら身体を痙攣させた。晒された処女雪のような肌に吸い付くと、吸血鬼に噛み付かれた女性のように全身を戦慄か

せる。肉竿は理性を失ったのかと思う程ぎちぎちに張り詰めて、目の前の少女を犯せとがなり立ててくる。それはまだ先だ……と自分自身を必死で言い包めて、留美の首に己の独占欲の証を刻み込む。
「……お願い、だめ、これ、もう、こんなの……耐えられない……っ」
留美が縋るように抱き付いて、背中に手を這わせながら泣き声で訴えかけてきた。お腹を動かして、肉棒の切っ先をへそで味わうようにぐりぐりと食い込ませては艶めかし声を上げるその様は、ひどくみっともなく、いやらしくて、美しかった。
「……今から、指を入れる。でも、俺が良いって言うまで絶対イっちゃダメだぞ」
「え……っ」
俺の声に、留美が息を呑む。
戸惑う留美をよそに、「良いな、行くぞ……」と呟き、躊躇うことなく中指を発情しきった牝穴に滑り込ませた。

× × ×

「あぅぁ……っ!?」
ちゅるん、と中指の第一関節までが膣穴に容易く埋まると、留美の目が激しく瞬いた。目の前で何十発も打ち上がる花火を見ているかのように、せわしなく瞬きを繰り返す。微かに歯が鳴る音も聞こえた。
「気持ち良いか」
俺の問いに、留美は唇を引き結んでこくこくと頷く。くい、と関節を曲げて膣肉を押し込むと、それだけでおとがいを上げて声にならない鳴き声を上げた。留美がじっとりとかいた汗が俺の身体に染み込んで、身体の境目が分からなくなる。もっともっと、2人でどろどろになりたい。もっと溺れたい。溢れ出す欲求に気が狂いそうだった。
「良いか、留美。この間はきっと、お互い緊張してた。俺も身体ががちがちだったし、俺以上に留美が緊張してたと思う。当たり前だよな、痛い思いを我慢するのは留美なんだから」
だから……と言葉を続ける。留美はぼんやりとしながらも、静かに相槌を打ってくれた。

「緊張してもしなくても関係無いっていうくらい、留美の中をほぐす。徹底的に」
強めに言い切ると、留美の身体がぶるりと震えた。
「……うん、わかった」
留美が頷くと同時に、中指を一気に根本まで入れる。瞬間的に指全体が万力のように締め付けられて、留美の顔から余裕の一切が消え失せた。
「うあぁぁ……っ」
不安げに瞳を揺らす留美と唇を重ね、左手で乳頭をつまみ、中指を少しずつ曲げる。
ぐちゅ、ちゅぶ、にちゅ……っ。
自身の身体から出るいやらしい音と、漂ってくる牝の匂いに、留美の顔が羞恥に歪む。
「ん……ちゅむっ、ちゅりゅ……んはぁ……んふぅぅん……っ」
留美の身体が不規則に波打つが、乳首と膣肉を拘束することで決して逃がさない。
「……ぷはっ……んはぁぁんっ!? だめ、なの? イっちゃ……んあぁうんっ! ……だめ、なの……っ?」
留美が首を傾げて尋ねる様は、少女と牝の表情が入り乱れていてひどくアンバランスだった。それがたまらなくそそり、嗜虐心が野火のごとく燃え広がっていく。
勿論、絶頂することで更に敏感になり、膣肉がほぐれるということは十分に考えられる。目の前の少女を失神させるまで絶頂させ続けるというのも、恐ろしい程に楽しそうだ。
けれど、今は焦らしに焦らした方が、留美の色々な表情や一面を見られる気がした。
――だから。
「……そうだ。絶対にイクなよ?」
きちんと釘を刺して、留美の心に枷を付ける。中毒にさえなりかねない、強力な官能の枷を。
中指をぐにりと曲げると、少女の口が戦慄いて開いた。

「んはぁぁぁっ!?　……ぅぁ……わ、わかった……うぁぁぁっ!?」
ゆっくりと中指を波打たせると、牝肉が自由自在に蠢いて指に吸い付いてくる。自身の身体の変化に気付いているのか、留美は快感に喘ぎながらも羞恥で耳まで真っ赤にしていた。
まだまだ責めは終わらない。
まだまだ。
まだまだ。
まだまだ。
続く。

（６３）

留美の淫裂を一本の指で嬲り続けて、どれくらい経ったのかも分からない程の時間が経つ。

「あっ、うんん……んあぁっ！　あっ、あっ、あぁぁ……っ」

絶頂を禁じた状態でひたすら自身の中を掻き回され、汗でぐっしょりと濡れた留美の身体はどこまでも淫靡だった。発情に発情を重ねた表情は、弱火で何時間も煮込まれたかのようにどろどろに蕩けている。普段の涼やかな表情は一体どこに消えたのかと驚く程の表情だった。

留美の身体を掴み、仰向けにする。ぼうっとした表情の留美はされるがままだった。

「今度はこれを使うぞ」

ローターを取り出して語り掛けると、留美はほんの少しだけ目を見開いたが、体力の限界なのかそれ以上の反応は見せない。足をＭ字に開かせて、細い２本の足の間に割って入る。再び中指で慎重に膣肉をかき分けて、ピンク色をして張り詰めたクリトリスにローターを押し当ててスイッチを入れた。

「うあぁぁぁぁぁ……っ！」

「イクなよ？　我慢だ、我慢」

幼い肢体が未知の快感に震える。ローターの振動を徐々に強めていくと、留美が泣きそうな表情を浮かべた。ベッドのシーツは、汗と愛液でもはや元の色が分からない程にぐっしょりと濡れている。

「次は挿れてみるからな」

中指を抜いて、新たにもう一つのローターを摘まむ。留美はローターを見つめて小さく息を呑んだ。

ピンク色の器具を膣口に押し当て、ぐ……っと押し込む。

「うんん……っ」

整った眉を八の字に曲げ、留美が辛そうな表情を見せる。若干ではあるがローターの一部分は中指よりも太く、その僅かな違いが留美を苦しめているのだと気付く。他の快感で和らげようと、肉芽に押し当

てたローターの振動を強めた。
「うあぁぁ……あぁっ!?」
クリトリスに与えられた快感に腰を跳ねさせた瞬間、一瞬緩んだ膣口にもうピンク色の器具がちゅるんと入り込む。綺麗に飲み込まれると、上気した膣口からはリモコンと器具を繋ぐ線が伸びていた。
「よしよし、頑張ったな」
手を一度離して留美を抱き締めると、不安げに唇を寄せてきた。怖かったのだと分かり、どうしようもなく愛おしくなる。唇をついばむようなキスをして、それから舌も絡めて愛情を交わし合った。
留美の顔の横に座り様子を見ることが出来るようにすると、淫裂に挿入したローターのスイッチを入れた。くぐもった振動音が聞こえると、留美の瞬きの頻度が増した。
「あっ……あっ？　んっ、うっく、ふぅん……っ」
どこか不思議そうにしながら、身体の内側から広がる快感を味わう美少女。瞳に徐々に情欲が宿っていき、初心な少女が淫猥な女性へと変貌していく。
まずはこの感覚に徹底的に慣れさせるか……と思い、留美の身体を起こす。不思議そうに首を傾げる留美を抱き締めて、俺が下で留美が上になるようにころんと寝転がる。出会った頃より成長したとは言え、留美の身体は羽のように軽い。俺が上になってはお腹が圧迫されて苦しいだろうと思ってこの体勢にした。
ローターの振動を少し強めてリモコンを置き、細い肢体を抱き締めて口付けを交わす。
「んっ、んむ……っ、ふっ、ちゅるっ、ぴちゅ、れろ、ちゅぴ……んむぅぅぅ……っ!?」
尻を押さえてこちらに寄せると、お腹が圧迫されたのか留美の声が艶を帯びる。リモコンを再度手にして振動を強めて、口付けもより激しく行う。
「んふぅぅ……れるっ、ちゅぴっ、んんっ、ふむぅぅぅ……ちゅっ、えぅっ、はむっ、んっく、ふぅぅ……ふぅぅぅ……っ」
目に涙を浮かべながら、留美も負けじと舌を絡めてくる。留美の唾

液はひどく甘く、天上の甘露を思わせた。
徐々にローターの振動を強めていき、小ぶりな尻の谷間に肉竿を強くこすり付けていく。振動を最大の一歩手前にする頃には、留美は自ら腰を動かして肉竿を淫裂で味わうようになっていた。
ぶぶぶぶぶぶ……と、留美のお腹の中から、牝の膣肉を抉る音がくぐもって聞こえる。
「あっ、あっ、あっ、あっ、あっ……」
唇を離すと、焦点の定まらない目で留美が俺を見る。乳首を弄るとこりこりに立っていて、指でつまむ度に華奢な肢体がぶるぶると震える。
「う、ぁ、ぅあ……っ」
へたり込んだ留美が、顔を俺の頬に寄せる。肩に液体がかかり、留美の口から唾液が垂れ流されているのだと気付く。
留美の唇が、耳元に寄せられる。
「……イっちゃ……だめ……っ？」
身体の奥底から欲求が込み上げ、射精しそうになった。
「……良いぞ。思いっきりイクんだ」
囁き返して、留美の腕をだらりと下げさせて気を付けの姿勢にして、左腕で抱きしめて拘束する。為す術の無くなった留美の唇を奪ってローターの振動を最大にして、右手で尻穴に中指をねじ込んだ。
「んぶぅぅぅぅぅぅ……っ!?」
がっちりと全身を固定された状態で、膣肉を蹂躙する振動が最大に達して、更に尻穴に中指がぐりぐりと侵入してくる。
留美の身体から、ふっと力が抜けて。
「んむぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ……っ!!」
――全身を激しく戦慄かせ、絶頂に達した。下腹部から無遠慮に愛液が撒き散らかされ、細い背中が幾度も脈打つ。痙攣が収まると、ちょろちょろと失禁して、生温かい液体がこちらの下腹部を浸した。
「よしよし、よく頑張ったな」
「……ぅ……ぁ……八幡……これ……止めて……っ」
「次は、俺をイカせるまで我慢だぞ。振動は最大のままにしておくか

ら、頑張って堪えるんだ」
「そん……な……っ」
驚きで見開かれる目も、力が無い。
絶頂の余韻でまたすぐにでも達してしまいそうな身体を仰向けにして、控えめな双丘の上に跨る。半開きになった口に肉竿を差し出すと、留美は戸惑いながらも亀頭を咥え込んだ。
「ん……んぐっ、んご……おぐぅ……ふっ、んんん……っ」
内股を擦り合わせて必死に快感に耐えながら、こちらの腰を両手で押さえて必死で口淫を続ける。じゅぶ、くちゅ……っと言う淫猥な水音と、ぶぶぶぶぶ……と言う無機質な振動音と、留美の荒い息遣いだけが部屋に響く。
これまでの興奮が積み重なり、留美の舌遣いもどんどん上手くなっているのも相俟って、限界はあっと言う間に訪れた。
「すげぇ気持ち良い……もうイクぞ。留美もイっていいからな」
「おぐ……んぐぅぅ……っ！」
留美の口に挿入したまま四つん這いになると、留美は腕をシーツの上にだらりと下げた。腰を沈め、喉奥に亀頭を押し付けると、心地良い締め付けが肉竿に訪れる。
「出る……っ！」
「んぶぐぅぅぅ……っ」
――どぶっ、ぶびゅるっ、ぶびゅるるる、どぶぶっ、どぶりゅりゅりゅ……っ。
「おごっ、あぐっ、んむぅぅ……んむふぅぅぅぅ……っ！」
魂まで引き抜かれそうな射精に浸りながら振り返ると、留美はシーツを両手両足でがっちりと掴んで、全身を激しく痙攣させていた。
肉竿を引き抜くと、精液と唾液がブレンドされた糸が何本も伸びていた。発情しきった少女の顔はひどく淫らで、勃起がまるで収まる気配が無かった。
「……ちょっと休憩して、あと3回くらい同じことをするか。繰り返し身体に覚え込ませないとな」
「……ばか、変態、ばか、ばか、ばか……っ」

力無い言葉を紡ぐ留美の顔は、批難する言葉とは対照的に緩みきっていた。

この日は、留美の牝の声を何時間にも渡って聞くことが出来た。

続く。

（６４）

「あ、あの、八幡、これ……んん……っ」
女の子座りをした留美が、頬を赤らめて上目遣いで見つめてくる。ぶぶぶぶ……と小さくくぐもった音が、華奢な肢体から漏れ聞こえていた。
「頑張れ頑張れ。少しずつ解れてるはずだから」
俺は震える留美の頭を撫でて、ふっと微笑んだ。

――初めて道具を使ってから数週間。
あの日から、留美の開発の日々が始まった。
行為に及んだ時に念入りに膣口を指で柔らかくするのは勿論だが、しばらくするとそれだけでは時間が足りないという結論に至った。休みの日ならばいざ知らず、平日ならば2時間も逢瀬が出来れば上等なのだ。１日の１０分の１さえも開発に利用出来ていない。
そんな理由をこじつけて留美をドン引きさせつつも、俺はついに説得に成功して……日常的に、留美の膣内にローターを入れておく約束を取り付けた。今日は試験日で、一緒にいる間、のんびりと過ごしながら留美がどうなるかを見守っている。
「あっ、んぁ……んんん……っ」
初めはまだ我慢出来ていた留美だが、徐々に発情して表情が蕩けていき牝の顔に変貌してゆく。俺の肩に身を寄せて、頬ずりをしながら荒く息を吐く。艶めかしく身体をくねらせる様は、既に淫猥そのものだった。
「ほら、いつも通り、いつも通り。これからもっと凄いことをしていくんだから」
「んぁ……も、もっと凄いことって……なに？」
「……あー……いや……その……」
「……言ってよ……っ」
「……いや、その、内容的に……言ったら、怒られる気がして」
「……」

「……いらいいらい（痛い痛い）、ふれらいれ（つねらないで）」
留美は俺の両頬をむにむにと摘まみながらも、どこか虚ろな表情をしている。あまり余裕は無いようだ。
「……これからしばらく俺ん家に来た時に練習して、慣れてきたら言うわ。そうだな、感じるのを我慢するのは無理だから、どんなに感じてても表情に出さないようにしてみてくれ」
「……わかった」
俺の言葉に、留美は渋々ながらも頷く。
留美の膣肉を解す日々は、こうして加速してゆく。
× × ×
ローターを入れる訓練を始めてからしばらく経った。
「留美、だいぶ慣れてきたみたいだな。ちょっと汗かいてるけど平気か？」
「……うん……今イってるところ」
「え……っ」
……留美のポーカーフェイスの進歩ぶりは半端ではないことになっていた。
日常会話をしながら、ちょっと暑そうかな……？　と思う程度の仕草を見せたかと思えば、下腹部がぐっしょり濡れていて……なんてことが数えきれない程あった。俺にバレることなく達する時は、微かに唇を引き結んでいると気付くまでも随分時間がかかった。
「これなら、八幡が私を責めてる時に自信を無くさせることも出来そう……」
「怖いことを言うなよ……」
「嘘だって。第一今みたいな状況ならとにかく、八幡に本気で責められたら私、我慢なんて出来ないから。絶対思いっきり鳴いちゃうし」
さらりと言われた言葉に、身体中がぞくぞくした。
「……お前、自分で何を言ってるか分かってるのか？」
「……うん」
しっとりと汗を吸った髪を掬い上げ、小さな唇を奪い取る。舌をねじ込むと、日に日に色っぽさが増している少女は縋るように俺に抱き

付いて、目尻をとろんと下げて、儚げに震えた。
……そろそろ、言っても良いか。
×　×　×
ばか。
ばかばか。
ばかばかばか。
悪口の中でも一番単純な言葉を、本人に対してはもちろん、自分の心の中でも何度も何度も呟いていた。
――八幡が提案したのは、とんでもない内容だった。
「これを入れたまま、学校へ行ってくれ」
「……へ？」
帰り支度をしていた私に、八幡が真剣な顔をして言ってきた。その言葉が冗談でもなければ、その場のノリで言ってる訳でもないことは、八幡の表情を見ればすぐに分かった。
「え、これ、でも、え、え……？」
「……あー、いや、その、すまん。説明が足りなかった。いきなり付けて行ったら勉強どころじゃないだろうからな。初めは昼休みだけとか、本当に短い時間で良い。それでもし我慢出来ないようなら言ってくれ、すぐ止めるから。こんなのは馬鹿げてるとは思うんだが、それでも少しでも留美を解す為に出来ることを考えると、学校でも挿れる、って言う考えに行き着いてな……」
頬をぽりぽりと掻きながら言う八幡の顔をじっと見る。八幡は申し訳無さそうにしながらも、どこか頑固な表情を浮かべていた。１０秒近く迷った私は、やがてふっとため息を吐いた。
「……本当に、ちょっとずつで、良いなら……」
「……ありがとな」
何で八幡がお礼を言うの、と笑うと、それもそうだな、と言って八幡が笑った。
――そんなことがあり、今は４時間目の授業が終わった直後の昼休み。綾乃とご飯を食べに行く前に、私はトイレに来ていた。
「……私、変態じゃない？」

八幡から受け取った小さなピンクの物体とリモコンを見つめて、ぽそりと呟く。試しにリモコンのスイッチを入れると、予想以上の振動に驚いて手を離しそうになる。おかしい、今までこれを自分の中に挿れても顔に出さずにいられたのに、今はその自信がまるで無い。これって今の心理状態が関係してるのかな。

どうしよう、やっぱりやめようかな。

怖くて無理だった、って言っちゃおうか。

八幡は優しいから、きっと許してくれて、また別の方法を考えてくれる。

それか、一応挿れてみたけどって嘘を吐いて、努力はしたことにして続けるのは無理そうって言っちゃおうか。

八幡は優しいから、きっと嘘だと分かっても指摘せずに許してくれる。

コードを持って道具をぷらぷらとさせながら、色んなことを考える。

「……」

……やっぱり、そんなことは出来ない。

八幡は優しいから、次にどうすれば良いかと考えに考えて、きっと抱え込んでしまう。

一つになれなかったあの日、私も悲しかった。そして私と一緒、或いはそれ以上に、八幡も悲しんでいた。なるべく顔に出さないようにしながら、私のことも気遣って、沢山考えてくれた。きっと今回のことも、本当に沢山考えてくれたんだと思う。

……まあ、発想が変態なのは否めないんだけど。

それでも、八幡をこれ以上悲しませたくない。

――そう思って、勇気を出して下着をずらして、ローターを足の根元に近付ける。

つぷ……っ。

「あ……っ？」

思いの外あっさりと入ってしまったことに驚くと同時に恥ずかしくなる。今、明らかにぬるって入った感触があった。私、まだ何もし

てないのに濡れてた……？　よく見ると、ずり下ろした下着に微かに糸が光って見えた。かあっと身体が熱くなると同時に、私の中がきゅっと締まる。
「うぁうん……っ！」
まだスイッチも入れていないのに、足ががくがくと震えた。き、今日はスイッチまで入れるのは無理みたい。でも一応、確認の為に少しだけ……一番弱くして……と、考えながらスイッチをゆっくり回そうとした、その時。
「留美ちゃーん、大丈夫？　具合悪い？」
「っ!?」
私がトイレに長居をしているのを心配して、綾乃がトイレに入ってきた。その拍子に、ほんの少しだけ回そうとしていたスイッチを、「弱」ではなく誤って「中」にしてしまう。
みぃぃぃ……と言うくぐもった音と共に、私の中が抉られた。
「んうぅぅ……っ！」
リモコンを止めれば良いのに、私は焦って両手で口を塞ぎ、立ったまま少しでも音を抑えようと内ももをこすり合わせた。音が小さくなり、代わりに頭が痺れるくらいの快感が私の頭を蝕む。
「る、留美ちゃん、本当に大丈夫？」
私の声が聞こえたのか、綾乃が個室のドアの向こう側に立ったのが気配で分かった。だめ、来ちゃだめ……っ！
「ご、ごめん、綾乃。ちょっと貧血っぽいかも……」
「えっ!?　だ、大丈夫？　保健室に連れてこうか？」
「ん、もう少し休めば自分で歩けるから大丈夫。ごめんね、お昼は食べる余裕無さそう」
「分かった。気にしなくていいよ。具合が悪くなったらすぐ連絡してね？」
「ん、ありがとう」
「うん、じゃあ、お大事に」
私の震える声を体調不良と受け取ったのか、綾乃はあっさりとトイレを出て行った。私はお尻を突き出したいやらしい格好で、身体を何

度もくねらせていた。
これで、お昼の残り時間はここで過ごしても怪しまれなくなった。
私は何をしてるんだろう。別に、ローターを止めるなり抜くなりして、綾乃とご飯を食べれば良かったのに。
でも、一度最大の振動で身体を抉られた私の身体は、もう疼いて疼いて止まらなくなっていた。お尻を突き出していたのは、溢れ出した液体が下着やニーソックスを濡らさないようにするためだ。
「う……うんんん……っ」
もう、だめ……。
八幡が見ても卒倒するんじゃないかってくらい、きっと今の私の表情はひどいものになっていると思う。
お尻を突き出した不格好な状態で足を上げて下着を脱いで、よろよろと後ろに下がる。
便座に腰を下ろして、足をぱかりと開ける。誰も見ていないのに、死ぬ程恥ずかしい。足を開いた途端、私の中の音が大きくなった。
ぼーっとしながら、リモコンを手にする。
左手で口を塞いで、徐に「中」から「強」に切り替えた。
「……んうううううううううんんん……っ！」
リモコンから右手を離して、両手で口を塞ぐ。くぐもった機械音よりも大きな声で鳴いて、身体の中からじんわりと、びりびりと広がってくる快感に抗いもせず――私は果てた。口から出る筈の声を押さえたことで、まるで出口を失った分の快感まで私の身体を食い荒らしているようだった。大事な部分から、暴走した熱が液体に変わって止めどなく飛び出した。
「うんんん……うんんん……っ！」
容易く達した後もスイッチを切らず、私は繰り返し繰り返し、身体を犯す快楽に身を浸し続けた。昼休みと言う短い時間が、いつもより濃密でやけに長く感じた。
昼休み終了の5分前、これ以上続けたら5時間目に間に合わなくなると思ってスイッチを切って、コードを引っ張ってローターを抜いた。ぽたぽたと滴る透明な液体を見て、顔がかあっと熱くなった。

……何でこんなことになったんだろ。自分の意思でこんなに溺れたなんて信じられない。
八幡に報告するの、恥ずかしいなあ……。
よくよく考えなくても、別に八幡に全てありのままに報告する必要は無いんだけど。
この時の私は、どう説明すれば少しでも羞恥心を減らせるかしか考えていなかった。
こんなの、言い訳のしようが無いのに。

続く。

（６５）

昼休みが終わる直前に、駆け込むように教室に戻る。席が後ろの綾乃は、私が戻るなり心配して声をかけてきた。

「留美ちゃん、大丈夫？」

「うん、もう大丈夫。心配かけてごめん」

「良かった。いいよいいよ……あれ？」

なるべくいつも通りの調子で返事をして安心したのも束の間、綾乃が私に顔を近付けてすんすんと鼻を鳴らした。

「あ、綾乃？　どうしたの？」

「ん、なんかね……何だろう、留美ちゃん、エッチな匂いがする……？」

「っ!?　そ、そんなこと……っ」

予想もしなかった指摘に慌てていると、チャイムが鳴って先生が入ってきた。窓際の席の私は、慌てたように窓を開ける。少しでも匂いが紛れるように。

……思った以上に大変みたいだ、このやり方は。

×　×　×

放課後。

いつものように留美と落ち合い、帰宅して今日の報告を聞く。大変だったか、今後も続けるのが可能かどうかをきちんと確認しなければいけないからだ。

そして、今日の留美の状況を一通り聞いた結果。

「……」

「……は、八幡……？」

俺は、鼻を押さえて悶絶していた。

シンプルに、鼻血が出そうだった。

「……留美」

「……なに？」

「……エロすぎ」

「……っ」

普段表情をあまり表に出さない留美の顔が真っ赤に染まった。

俯く留美に、ぐっと親指を立てる。
「だが、それが良い」
「変態」
「留美が言うか」
「うぅ……」
俯いた。
可愛い。
今日の自分を思い出したのか、膝の上の手をぎゅっと握り締めて耳まで赤くして震える留美の頭を、苦笑しながらずっと撫でていた。

× × ×

それから1ヶ月。
今も留美の特訓は続いている。
留美からの報告しか状況を知る術は無いのだけれど、留美が私情を挟まずになるべく客観的に伝えてくれて尚、彼女の頑張りの大きさは凄いと思えた。
初めは昼休みに試しに挿入するだけだったのが、徐々に授業中に挿入し、授業中にスイッチを入れるようになり、挿入して出席する授業数を増やして……今では、朝に俺の目の前で挿入してから、帰ってきて俺の目の前で外すまで、ずっと挿れっぱなしに出来るようにまでなっていた。
留美の膣を解すという目的ではあったが、副次的な効果――ある程度予想はしていた効果もあった。それも、かなり嬉しい効果が。
端的に言うと、留美の表情がとろとろに蕩けるようになった。
学校ではよほど気丈に振る舞っているのか、放課後俺が先に留美を見つけると、大人びていて涼やかな表情を保っているのに、俺を見付けた瞬間、ほんの一瞬だけだが……頬を緩め、口を微かに開けて瞳を潤ませ、顔がほんのりと上気する。その表情を見ただけでがちがちに勃起してしまう。
家に帰って互いに口で舐め合うと、留美が日に日に肉棒を貪るようになっていて、俺が舐めた時の感度も上がっている。周りの誰よりも大人びている少女が、裸で触れ合う時は幼い淫魔のような艶姿を見せ

る。そのギャップがたまらなく愛おしかった。
「……んぅぅぅ……っ。……行ってきます」
「おう、行ってらっしゃい」
留美が俺の目の前でスカートを捲ってショーツをずらし、ローターを挿入して、リモコンをニーソックスに挟んで学校に出かける。そんな留美を見て、ふと思う。
……5つ年上の俺から見てもあれだけ色っぽいんだから。
……同じ中学生男子が見たら、やばくないか？
……まあ、留美は俺と会ってる時以外は極力表情に出さないようにしてるって言ってたし、中学生男子なんて高校生男子に輪をかけて鈍感な生き物だ。留美の変化に気付きはしないだろう。
――これだけの人数の護衛が居るんだから、モンスターが襲ってくることは無いだろう。
……みたいなフラグにしか思えないが、気にしない。

× × ×

同じクラスの鶴見留美さんが、何だかエロい。
それは、僕のクラスの男子・女子共に皆が思っていることだと思う。
「それじゃあ、次のページの音読を……鶴見」
「はい」
窓際の後ろから2番目の席の彼女が立ち上がると、誰も声に出さず、静かに注目する。
涼し気な声だな、と、初めて聞いた時に思ったことはあったけれど、それでも普段無表情な彼女には僕を含めて男女共にあまり近寄らなかった。それよりも後ろの綾乃さんの方がよっぽど話しやすいという印象を持たれていた。たまに一人で妄想劇を始めるちょっと……と言うかかなり変な一面もあるけど。
「彼は私を見てこう言った。『君はどうしてこんな所にいる？　その美貌も、知性も、まるで今いるこの空間に噛み合っていない』私は彼の問いにこう答えた――」
彼女は淡々と言葉を紡ぐ。何ら目立つことの無いこの行為を、ある男子は寝たフリをしながらちらちらと、ある女子は思い切り振り返っ

て堂々と、じっと見つめている。
もうすぐ指定されたページが読み終わる。今日はまだ見れていない、あの仕草がそろそろ――と思った時。
「……んんっ」
――彼女が、音読を中断して……涼やかな表情を崩して顔を赤らめて、何とも色っぽい声を漏らした。音自体はすごく小さいのに、教室全体にじんわりと染み渡るような声。
「つ、鶴見、どうした？」
３０を超えた良い大人のはずの先生の声が、ちょっと震えている。
「……すみません、何でもないです。続けます」
「あ、ああ、分かった」
涼やかな表情に戻った彼女が、再び音読を始める。
教卓の横に立っていた先生がわざわざ教卓の後ろに立って、こちらから下半身が見えないようにした理由は手に取るように分かる。
何故なら、周りのクラスメイトも皆同じような反応をしているからだ。
女子は顔を真っ赤にして鶴見さんをぼーっと見ている人、口をぱくぱくさせている人、好きな男子でもいるのか、鶴見さんに見惚れた男子と鶴見さんの間を忌々し気に視線を往復させている人、と様々な反応をしていて。
男子は男子で、顔を真っ赤にして不自然なくらい前屈みになったり、自分の身体に起きた変化に「っ!?　っ!?」と混乱していたり、ぼーっと鶴見さんに見惚れている人なんかもいる。
――いつからかは覚えていないけれど、ほんの、つい最近からだと思う。
授業中や休み時間、たまに鶴見さんが一瞬だけ、こういった色っぽい仕草を見せるようになっていた。そうすると、その仕草を目の当たりにした人は皆、今のような様々な反応を示している。初めはクラスの一部だけが目撃していたけれど、あちこちで彼女が見せるその仕草に、このクラスは皆やられてしまった。僕は綺麗な上に家で平気で下着姿のままうろつく姉が２人居るのでまだ免疫があるが、中学生、ま

してや数ヶ月前まで小学生だった彼らには、鶴見さんの仕草はあまりにも強烈だった。
高校生や大学生だったらまた違うのかもしれないけど……まだ皆、性の話をするのにどこか躊躇があるようで。鶴見さんが居ない時に教室内の会話に耳を傾けても、彼女のことはほとんど話題に上がらない。触れられたとしても彼女の成績の良さについてだったり、踏み込んでも精々「鶴見さんって可愛いよねー」という女子の会話くらいだ。鶴見さんのことは、皆が口に出さない共通の秘密になっていた。唯一、鶴見さんの後ろの席の綾乃さんは彼女と仲が良いらしく、彼女が色っぽい仕草をする度に肩を揺さぶって「留美ちゃん、絶対何かしてるよね!?　ね!?」と必死で聞いている。僕も聞きたい、それ。ちなみに鶴見さんは揺さぶられている間、「あ、綾乃、だめ、今揺らしちゃ……うんん……っ」と更に色っぽくなっている。教室の何割かは会話をしながらも彼女たちのやりとりをガン見している。3人くらいの男子グループなんかは会話を中断して全員でガン見している。
一体何が、彼女をここまで変えたのか。
入学当初からも大人びていてとても綺麗で、喋らなくても目立つ彼女ではあったけれど。
ここ数ヶ月で、見違えるように可愛くなった。
その理由は知らないし、これからもきっと知る機会は無いのだろうけれど……。
「じゃあ、次からの3ページを……ええっと、田中を飛ばして、鶴見」
「先生、何で僕を飛ばした上に鶴見さんが読む範囲がそんなに長いんでしょうか……？」
「い、いいから、何となくだ、何となく。ほら、鶴見、読んで」
「……？　はい……」
先生が明らかに変態くさいことをしている――その内注意しよう――のを心配しながら。
今日も、綺麗で、頭が良くて、時々エッチな鶴見さんを。
クラスメイトの皆が、見守っている。

続く。

（６６）

留美の開発を進めて、初めての夏休みを迎えようとしていた。正直言って時間をかけすぎだろうと言われればそれまでなのだが、互いに段々と今の状態を楽しむようになってきていたので、これはこれでありなのだろう。

今日は、朝からうちに留美が遊びに来ていた。夏休み前の最後の週末。家で少しだらだらしてから外出する予定だ。先日、「デートするか」と留美に言った時、うっすらと頬を赤らめる彼女が可愛くて可愛くて。それから事ある毎にデートデートと連呼していたら、ムキになった留美が「うん、デートする。デートしよう」と同じように連呼してきて急にこっちが恥ずかしくなった。俺が俯くと留美も恥ずかしくなって俯いていた。見事な共倒れだった。

部屋でのんびりと飲み物を飲んで、それぞれが読書をする。胡坐をかいて座っていると、背中にとんと軽い感触がした。振り返れば、留美と背中合わせになっていた。留美は素知らぬ顔で読書をしている。口元がむずむずする幸せを感じながら、留美が本を持っていない方の手を握った。留美はこちらの手にしゅるりと指を絡めて、にぎにぎと返してくれる。

「……ページ、捲れない」

握った手をぴょこぴょこと動かして、そんなことを言ってきた。自分から手を離せば良いのに……と、またも幸せで口元がむずむずする。背中を離して後ろから留美の艶やかな黒髪をくしゃくしゃと撫でると、「むぅ……」と小さな声が聞こえた。顔を見てみると僅かに眉をひそめている。機嫌を損ねてしまったか……？　と思ったが、留美は普段から落ち着いていて、そこまで機嫌の上下はしない。はて、どうしたんだろう……と首を傾げていると、頭を撫でるこちらの手に留美の手が重ねられた。

「本を読むのには邪魔だけど、気持ち良いから困る」

さいですか。

可愛いなこの子は……と思いながら、引き続き髪をくしゃくしゃと

撫でる。背中から包み込むように抱きしめて、体育座りをしている留美の足の下にこちらの足を回して、ぴたりと密着した。成長期の為か最近徐々に大きくなってきた胸を支えるように腕を回すと、華奢な肢体がぴくりと動いた。

「ん……っ」

聞こえるか聞こえないかの、本当に微かな声。

けれどもそれは、よく聞き慣れた声。

顔を見ると、長い睫毛が静かに震えている。

発情のスイッチが入ったのだと気付く。

頭を撫でていた右手を離し、濡れ羽色の髪をかき上げて小さな耳に触れる。こしょこしょと耳をくすぐると、留美は同じページを開いたまま固まった。もう片方の耳に息を吹きかけると、諦めたように本に栞を挟んでローテーブルに置く。ぞわぞわとした興奮が身体中を駆け回り、耳から手を離した右手で胸を揉もうとすると、その手を留美に掴まれた。

「待って。……今の内に脱がないと、濡れちゃう……」

「……っ、……わかった」

これから自分がどうなるかを分かっていて、その上で、この後外に出かけることを見越しての発言。ぞくりとした。

元々大人びていた留美が、「女性」と言う言葉が似合う成長をしていく。綺麗になっていくのに可愛らしさも増して行くのだからたまらなかった。

留美が立ち上がり、こちらに背を向けてワンピースを脱いでゆく。フリルの付いた上下白の下着も脱いで、生まれたままの美しい姿を晒した。

留美がくるりと振り向く。ワンピースを着ている時は、街ですれ違う人が思わず足を止めるような美少女だった。それが服を脱いだだけで、まるで衣服の下に押し込めていた牝の気配を解き放ったかのように色っぽくなっている。まだ何もしていないと言うのに、２つの膨らみの頂はぴんと張り詰めていた。清楚なあどけなさと、娼婦のような艶っぽさが同居した、矛盾した官能的な身体。舐めるように見つめ

てごくりと息を呑むと、留美が恥ずかしそうに身を捩った。
手招きをして、胡坐をかいた俺の前に膝立ちさせる。留美はこちらの首に腕を回して抱きしめてきた。俺が下腹部に指を這わせると、留美は震えながらも徐々に足を開き、受け入れる体勢を作る。日に日に牝らしさを帯びていく陰部にまずは右手中指をつぷつぷと軽く押し込み、中を解す。今日はまだキスさえしていないと言うのに、スリットを捲ると柔らかな肉襞がじんわりと熱を帯びてぐっしょりと湿っている。膣口につぷりと中指を挿入すると、ざわざわと蠢く膣肉に心地良く締め付けられた。
「んはぁぁ…っ」
口を微かに開けて、息混じりの甘ったるい声を留美が漏らす。悩ましく上半身を屈め、息を荒くする様は呼吸を忘れる程美しい。指を折り曲げながら抜き挿しを繰り返していると、留美の秘部はあっと言う間にぐっしょりと濡れてしまい、愛撫していた右手は手首まで熱い淫液に浸された。
「じゃあ……2本入れるぞ」
「ん……。……あ……んふぁぁ……っ」
徐に薬指も挿入すると、留美は眉を八の字にひそめ、美しい顔立ちを悩ましく歪ませた。
――最近2本指での愛撫が可能となり、留美の膣内の開発は順調に進んでいた。
初めは苦しそうにしていた留美も、徐々に2本指の感触を楽しむようになっている。
「んっ、んっく、うぁ……あふぁぁぁぁっ！」
2本指を鉤の様に曲げて狭い膣肉を抉ると、じっとりと汗を浮かべた留美がびくびくと震えた。片方の乳頭に吸い付き、もう片方は空いた手でこねくり回す。ざらざらした感触のする場所を集中的にごりごりと押し込むと、留美はおとがいを上げて喘ぎ、足を更に開いた。
「あぁぁっ、あっ、うんん……イ……く……んあぁぁっ！」
身体がびくりと跳ねて、膣口から大量の愛液が漏れ出る。いやらしい匂いがもわりと立ち込め、留美の身体ががくんと折れ曲がった。華

奢な身体を抱きとめると、耳元で悩ましく荒い息遣いが聞こえる。髪をくしくしと撫でると、猫のように目を細めて気持ち良さそうにすり寄ってきた。
「ちょっと休憩したら出掛けるか」
「……ん」
短い返事をすると、こちらの首筋に何度もキスをしてくる。まるで外で出会う人に対して「こいつは私のものだ」と所有権を主張するかのような行為に、思わず頬が緩んだ。
ああ、そうだ。
一つ、留美に言うのを忘れていたことがあった。
「留美。提案なんだが……」
「ん、なに？」
「あのな。……、……、……」
耳元で、今日留美にやってもらいたかったことをぽしょぽしょと告げる。子供の頃に友達と行う秘密の共有のような行為は、妙にわくわく感があった。俺の場合は友達が居なかったので小町と共有してたんだけどってここで急にトラウマを掘り起こす必要は無いですよね読点が無いと読みづらいよね。
一通り話し終えると、留美はぶすっとした顔で俺を睨んだ。とは言え綺麗な顔が仄かに赤らんでいるので、怒っているようでいて全く恐くない顔だった。何とも愛らしい表情だ。
「……八幡」
「ん、どうした」
「変態」
「ええ、そうですとも」
「……変態」
「そうだぞ？　ど変態だぞ、俺は。もう十分知ってるだろう」
「……ばか」
「……何この可愛い生き物……」
「うるさい」
「ふいあへん（すいません）」

ゆるゆるのやりとりをしつつ、小休止を入れる。
留美は何だかんだで俺の提案を受け入れてくれた。今日は一体どれだけ楽しいことになるのか……と、留美を抱き締めて休んでいる間もわくわくが止まらなかった。

続く。

（６７）

「八幡……その……これ……っ」

準備を済ませて家を出ようとすると、留美が俯きながら袖を引いてきた。ワンピースの裾を掴んで頬を赤らめていて、明らかに恥ずかしがっているのが分かる。

「どうした、行くぞ」

「……ばか……っ」

震える声を搾り出して、留美は俺の手を握った。

――朝、家に来る時の留美の服装は、淡い水色のワンピースと、フリルの付いた白の下着だった。

それが今は、上下の下着を着けていない。薄手のワンピースに、留美の素肌がぴったりと張りついていた。

出かけるに当たって留美にやってもらったのは、これだけではない。

「……こんなこと……別にしなくても……ひぁっ!?」

かちりと音を鳴らすと、留美の上体がびくりと震えた。

――ワンピースの下には、合計７つのローターを着けている。

２つの乳頭を挟んだ分で４つ。

クリトリスを挟んだ分で２つ。

膣内に挿入した分で１つ。

本来であれば膣内の１つで十分ではあるのだけど、残りは興奮を助長させる為に着けた。

「それじゃ、行くか」

「……変態……っ」

顔を赤らめた留美に脇腹をつねられ、地味に痛いな……と思いながら家を出た。

×　×　×

まずは映画館に向かうことにした。

７月も半ばを迎えた今の季節は、上から降り注ぐ日射しとコンクリートが蓄えた輻射熱とで街中ではほとんど逃げ場が無い。道行く

人も皆、気が滅入っているようだ。羽織っている薄手のシャツを指で摘まんでぱたぱたと扇いで、容赦無い日差しに耐えながら歩いて行く。
「ん……うんん……っ」
「……」
隣を並んで歩く留美が、ひどく悩ましい声を漏らす。つばの広い真っ白な帽子をかぶっていてとてもよく似合うのだが、この帽子は日射しを防ぐと言うよりも、留美の火照った顔を道行く人から隠すと言うのが一番の役割になっていた。
「……大丈夫か」
「……大丈夫……っ」
ふわふわとした声音で留美が答える。具合が悪いのでは無いことは分かった。
「……大丈夫か、ルミルミ」
「……大丈夫……っ」
あれ、ツッコんでくれない。
大丈夫ではないらしい。
「もうじき着くから、暑いと思うけど辛抱してくれ」
「……大丈夫……っ」
いかん、Ｓｉｒｉの方がよっぽど会話のし甲斐があるぞ。
「……留美の得意教科って何なんだ？」
「……大丈夫……っ」
何が？
何が大丈夫なの？
「……全部いっぺんに動かして良いか？」
「……大丈……っ」
途中で留美がぴたりと止まる。
「……それは、だめ」
「大丈夫ではないか」
「……立ってられなくなるから……」
消え入るような声音で呟いて、留美が帽子のつばをつまみながら上

目遣いに見つめてくる。理知的な双眸はしっとりと潤んでいて、夏に似合う清楚な出で立ちの中に、明らかな違和感として浮き上がっている。ごくりと息を呑んだ時、ふと周りの視線に気が付いた。

「……ん？」

次々とすれ違う、年齢も性別も様々な人たちが俺と留美をちらちらと見てくる。年の離れた男女が歩いているだけならば、顔が全く似ていなくても親戚なり何なりどうとでも説明が付けられると思うが……。

「……」

熱を孕んだ瞳で俺をじっと見ている留美は、周りの視線などまるで気が付いていないようだ前を見るのも忘れ、俺だけを見つめている。

――留美のこの表情が、決して俺との関係が親戚や何かでは無いという事を何よりも証明している。

留美がしっとりと汗をかくにつれて、華奢な肢体に色艶が灯ってくる。下着を着けていないことでささやかな胸の膨らみがはっきりと浮き出ていて、その上よく見れば乳頭には計４つのバイブの形が浮かんでいる。すれ違うくらいではまず気付かれないであろうが、内心気が気では無かった。

あと数分もすれば映画館に着くのだが、それでも心配は続く。ちょっと攻め過ぎたと自省する。留美が益々ぽーっとしてきて危ないので手を繋いでいると、前から3人組の小学生男子のグループが歩いてきた。夏休み前にはしゃいでいるのか、会話の声がこちらにも聞こえてくる。

「今日俺ん家来る？　うちのお母さんが作るクッキー、絶品だぞ」

「お前、清々しいくらいにマザコンだな……」

「うちのママだって負けてねえぞ」

「あれ、２対１で俺がマイノリティ？」

小学生にしては良いツッコミだな……なんて思っていると、クッキー云々と言っていたマザコンＡ（村人Ａ的なノリ）が留美をちらりと見てぎょっとする。留美に視線を向けると、未だにぽーっと俺を見つめていた。微かに口を開けている様がやたらと色っぽい。

「？　どうしたんだ……よ……っ？」
マザコンBも続いて留美に視線を向け、ぴたりと固まる。そして残されたツッコミくんも留美を見る。3人とも口をぽっくりと開けてぽかーんとしている。
――次の瞬間。
『……～～～～っ!?』
ツッコミくんが唐突に顔を真っ赤にして俯き、両手で股間を隠した。続いてマザコンA・Bも赤面して同じように両手で股間を隠す。3人ともやや内股である。真正面から見ると抜群にシュールな光景だ。
「……？　八幡、どうしたの？」
俺が前屈み三人衆を見ていると、留美が俺と同様に前方に視線を向ける。留美は妙な体勢になっている3人を見て、くりんと小首を傾げた。
『～～～～っ!!』
留美の可愛らしい仕草がとどめとなったようで。
3人は両手で股間を隠して、前屈みのままで俺たちの横を疾風の如く駆け抜けていった。ツッコミくんが「年上のお姉さん……良い……っ！」と呟いていた。彼はツッコミくんから年上好きにジョブチェンジしようとしているのだろうか。
「……今の子たちみたいなポーズ、最近学校でよく見る……」
「え」
さらりと衝撃的な事を聞いた直後、俺たちは映画館に着いた。
×　×　×
ドアを潜ると、薄暗い空間の奥に受け付けがあり、左右に分かれた通路に各映画を上映している部屋の番号が見えた。開けた広い空間はひんやりと冷房が効いていて、汗が心地良く引いていくのが分かる。
「あー良かった、これ以上汗臭くなりたくはないからな」
俺の言葉に留美は小首を傾げ、後ろ手を組んでこちらの胸に顔を寄せ、すんすんと鼻を鳴らした。

「え、なに、何してんの急に」
顔が熱くなるのを感じながら仰け反ると、留美は「んー……」と可愛らしく唸った。
「八幡の汗の匂い、私は好きだけど」
「……お、おう、そうか」
背中にぞわりと背徳的な波が伝って、声が裏返りそうになった。
こほんと咳払いをして、映画一覧を見る。
「さて、どれを見るか……」
「私、あれが見たい」
楽しさを表情に浮かべた留美が指差したのは、今日本で一番流行っているであろう映画だった。
「あれだよな、淡水と海水が入れ替わる映画だよな」
「それ大変なことにならない？」
Ｔｗｉｔｔｅｒで回ってきたネタツイートをボケに使ったら、淡々とツッコまれた。留美のシンプルなツッコミが結構好きだったりする。
しかし……と、顎に手を当てて考える。
「他の映画にした方が良いな」
「え、なんで？」
「多分、まともに見る余裕は無いからな」
「……っ」
俺の言葉に、留美が目を見開く。
そして、細い腕で自分をぎゅっと抱きしめた。
薄い唇を戦慄かせ、視線を横に逸らす。
年相応に楽しんでいた少女の顔が、確かに艶めいた色を帯びる。
細い喉が、こくりと鳴った。
「……取り敢えず、あれにするか」
無難な作品を選ぶと、留美は上目遣いでこくりと頷いた。
続く。

（６８）

その場で決めた上映作品のチケットを購入すると、間も無く上映が始まる丁度良い時間帯だった。ふかふかの床を歩いて指定された番号の部屋へ進む。重い扉を押し開けると、目に入ったのは薄暗い空間と真っ暗なスクリーン、そしてまばらな客。上映期間も終わり際で、あまり世間の話題にも上らなかった映画の去り際は、何とも寂し気なものだった。

留美の手を取って、入り口から向かいの壁際、最後列に歩を進める。ぱらぱらと散っている客の分布も真ん中・前列に固まっていて、足を進めて行くにつれてまるで街から一歩出て田んぼ道を歩いているかのような気分になった。

席に座るまで、留美はずっと無言だった。俺が先に座ると、もふんと心地良く尻が沈み込む。久しぶりに座ったが、映画館の椅子と言うのはどうしてこうも重厚感があるのか。心地良さと同時に湧く非現実的な感覚に気持ちがむずむずする。

この映画館にはカップルシートなる物があって、試しにそれに座ることにした。調べると映画館によっては豪奢なソファなんかで二人っきりの空間を演出している所もあるようだが、この映画館のカップルシートは2人を隔てる肘掛を無くして座る部分の生地を繋げたような物だった。普通の座席と見比べても色や生地の質が変わっている訳では無い。安易な改装だな……とは思ったが、肘掛が無いのを実際に見てみると、思った以上に距離が近い。これからの時間を考えると、妙にどきどきした。

「？　留美、どうした、座らないのか」

俺の右隣り、壁際の席の前で、留美はすぐに座らずに何やらバッグの中に手を入れている。何事かと思っていると、やけに厚手のタオルが出てきた。留美は徐にタオルを椅子に敷くと、俺を軽く睨みながらワンピースの裾を捲り、真っ白な双丘を直接タオルに着地させた。睨んだのは「あんまりこっちを見るな」と言う意思表示だったらしい。

「……準備が良いな」

ぽそりと呟くと、留美がぷいと壁を向いた。
「……暑いし、汗かくなって思っただけ」
「……随分と汗をかく気だったんだな」
「……ぱっと取ったのがこれだったの」
「ふーん……」
にやけそうになるのを堪えていると、留美が壁を向いたまま手を伸ばしてきた。
ぐに。
「留美、そこ、あご、あごです、あご」
「……」
こちらを見ないでやったから狙いが外れたのか、いつもつねっている頬ではなく、何故かすぐ下の顎をつねってきた。肉が薄いからすごくやりづらそうだし、恥ずかしいのか訂正しようとしない留美がぐいぐいと顎を引っ張ってくる。あんまり無い経験だよね、顎を引っ張られるって。
しょうもないやりとりをしている内に、室内が真っ暗になり、スクリーンにお馴染みのキャラクターが映った。
「……ばか」
小さく呟いた留美の頭をくしくしと撫でて、俺たちは前を向いた。

× × ×

映画はごく普通のヒューマンドラマだった。平凡な家族が平凡に悩み、平凡に不和が生じ、平凡に幸せを掴み取っていく。時代設定が昭和のようで、出てくる子供や親が着ている服は自分の親世代も着たことが無いであろうぼろぼろのランニングや割烹着だ。ちゃぶ台ってひっくり返す為の物ってイメージしか無いな……と思いながら、ちらりと横の留美を見やる。
ぱちりと目が合った。
留美が慌てて目を逸らす。
……最初くらいは普通に映画を見ようと思っていたけれど。留美はもはや気が気でないらしい。
期待に胸を膨らませ、バッグから7つのリモコンを取り出した。

……。
「……留美」
「……なに？」
「一応リモコンに番号の付箋を貼ってたんだが、暗くて手元が見えない。どれがどれに対応してるか確認して良いか」
「……ばかじゃないの……？」
「うぐ……っ」
比較的本気の声音にたじろぐ。い、良いから良いから……と呟いて、まずは手に取っているリモコンのスイッチをオンにした。
「んん……っ」
ジト目で俺を睨んでいた留美の口から甘い声が漏れて、急いで口を噤む。ぶぶぶ……と微かな音が聞こえるが、映画のＢＧＭに紛れて音の出所が分からない。
「留美、今どれが動いてる？」
「い、言える訳無いでしょ、ばかぁ……っ」
留美が身を捩りながら涙声で訴える。余程恥ずかしいらしい。
留美との距離を詰め、二の腕が触れ合うまで接近する。留美の心拍数が上がったような気がした。　留美の華奢な背中に腕を回して、両手で乳房を包み込む。
「んんん……っ!?」
「ん、右の……右か」
「ばか、ばか、ばか……っ！」
右の乳頭を挟んでいる２つの内の、更に右側のローター。己で確かめてうんうんと頷いて、未だに俺をばかばかと罵る留美を尻目にリモコンを止める。脇に置くと、新たな一つを手に取る。
「うんんん……っ！」
今度は左の、右。
「んうぅぅ……っ！」
右の、左。
「うぅぅぅ……っ！」
左の、左。

適当に取り出したリモコンは、ちょうど留美の上半身を責め立てるものばかりだった。
次のリモコンのスイッチを入れると、留美の背中が弓なりに反り返り、整った顔が天を仰いだ。
「うぁ……っ！」
留美は咄嗟に手で口を覆った。艶めかしい姿にぞわりとして、ワンピースの裾を捲る。ぶるぶると震えていたのは、クリトリスを挟んでいる内の一つだった。
ごくりと息を呑んで――今度はリモコンのスイッチを切らないままもう一つにスイッチを入れる。
「んぐ……っ！」
留美の声に苦悶と喜悦が混じり、身体が不自然な程がくがくと揺れる。確認すると、クリトリスを挟むもう片方が振動していた。
２つのスイッチを入れたまま、最後の一つのスイッチを入れる。
「……っ」
留美は音も声も無く、俺の胸に抱き付いた。寄る辺を求めて、もしくは口を塞ぐ場所を求めて、或いはその両方か。淫裂を触ると、ぐっしょりと濡れた膣口の奥が微かに震えていた。
留美が不意に顔を上げて見つめてくる。瞬間的に明るくなったスクリーンに照らされた横顔は、上気して涙ぐんでいた。
「こんなの、だめ、だめ……っ」
留美の言葉に、股間が痛い程張る。これだけのことをされていても、留美は決してリモコンに手を出さない。その事実が、俺をどこまでも興奮させる。
「……留美。言っとくけど、今まで点けたやつ、全部『弱・中・強』がある内の『弱』だからな」
「……え……っ」
留美の表情が固まる。唖然としている留美を他所に、スイッチを一旦全て切った。
耳元に唇を寄せて囁く。
「楽しみだな」

「……う……あ……っ」
二人の会話は、周りの誰にも届かない。何列分も離れた他の客は、当たり前だが皆映画に集中している。
短くて捻りの無い言葉でも、他の誰とも共有せず目の前のたった一人に伝えることで、秘匿性が高まる。背徳的な行為に関わる言葉であれば、粘度と湿度が高まり、より淫靡なものとなる。
耳元で囁かれた留美は、口をぱくぱくとさせて、すがるようにキスをしてきた。柔らかな感触を堪能する暇も無くすぐに唇を離すと、俺に寄りかかって映画を観始める。
寄り添う留美と、脇に置いた7つのリモコンを見やって――俺は、ごくりと息を呑んだ。

続く。

（６９）

映画は続く。最初の方をちゃんと見ていなかったが、それとなく展開は掴みながら漫然と鑑賞を続ける。

「……ん……う……ぁ……っ」

右の乳房のローターを弱に設定してから５分程。留美は時折こちらをちらちらと見ては、悩ましい吐息を漏らしている。歳に比べて随分と大人びた顔つきは妖しさを帯びて、スクリーンの光を浴びた横顔は見惚れてしまう程艶めかしい。

右の乳房に付けたもう一つのローターを作動させて、留美の右肩に手を添えて抱き寄せる。右腕の下に腕を滑り込ませ、慎ましい胸を鷲掴みにした。

「……ぁ……っ!?　……う……ぁ……っ」

言葉にならない嬌声を上げて、留美が泣きそうな瞳をこちらに向ける。じっと見つめ返しながら、成長途中の乳房を揉みしだく。５本の指の動きに呼応して、華奢な肢体がびくびくと跳ね回る。

スイッチを止めると、「……え……ぁ……っ？」と留美が惚けた声を漏らし、とろんとした瞳で見つめてきた。嗜虐のざわめきが背中を駆け抜けて、溢れ出す本能を抑えるのに必死になる。

「しばらく休むか」

「……しばらく……って……どれくらい……？」

「さあてな、どれくらいだろう」

「……そんな……んうぅっ!?」

留美が綺麗に整えられた眉を不安げににひそませた瞬間、クリトリスを挟んだ２つのローターのスイッチを一気に入れた。しかも弱ではなく中に設定する。ぶぃぃぃ……と振動する音が、俺にだけ微かに聞こえてきた。静音設計なんて書かれていたけれど、思っていた以上に音が小さいらしい。映画は静かなシーンが続いているが、誰も怪しむ人は居なかった。

「だめ……だめ……だめ……っ」

留美が目に涙を溜めて首を振り、胸元に抱き付いてきた。こちらの

首に唇を押し付けて「うぅ……うぅぅ……っ」と涙混じりの甘美な嬌声を漏らす。前の座席から見れば、足を流した留美が俺にしっかり抱き付いているのが見えるだろう。留美の余裕が削り取られているのが明白だった。
「いいのか、タオルから腰を浮かせて。下、ぐしょぐしょになるぞ」
俺が放つ意地悪な言葉にも、留美は「だめ……だめ……っ」と首を振るばかりだ。留美が子供っぽい振る舞いをしながらも、牝の匂いをどんどん濃くしていく様に、悪戯心と嗜虐心が途方も無く増して行く。
「しょうがねえな……」
芝居がかった口調で言って、ローターのスイッチを切る。先程スイッチを切った時よりもぼうっとした表情で俺を見つめる留美の両肩を掴む。
「ここに座るんだ」
言って、股座をくいくいと指差す。カップルシートの仕様なのか、他の場所に比べて座席の奥行きがある。線の細い留美一人を座らせるくらいは何ともなかった。
留美は俺の指示に目を見開くも、特に抵抗することもせず腰を上げる。薄闇の中、留美が上げた腰とタオルの間に滴る何かが見えた。留美のタオルを持つと股座に置き、来い来いと手招きをする。留美は俺の前に来ると恐る恐る前を向いて、ワンピースの裾を捲ってそっと腰を下ろした。
留美のお腹に腕を回し、きゅっと抱きしめる。
「あ……っ」
ローターのスイッチは入れていないが、留美の身体がぶるりと震えた。艶やかな黒髪を横に流して、耳元に口を寄せる。
「映画、まだ30分くらいしか経ってないな」
「……さんじゅっ……ぷん……」
「ああ、まだまだ続くぞ」
「まだ……まだ……っ」
まるで催眠術にかけられたかのように、留美が俺の言葉を呆然と繰

り返す。
留美が俺の手をそっと握り返し、振り返った。期待、不安、興奮、恐れ、喜び、躊躇……様々な感情が入り混じった瞳は頼りなげに揺れている。
留美が唇を震わせ、何かを言おうとする。けれど、すぐに口を閉じて止めてしまった。
「……今、何て言おうとしたんだ？　『お好きなように』でも『もう出たい、こんなのやだ』でも、どっちでも良いんだぞ」
「……自分でも、何で言おうとしたのか分かんない……」
けど……、と少し逡巡した後、留美は振り向いた。
「やめてほしくは……ない、かも……」
「……っ、……ん、そうか」
興奮が頭の中を掻きむしり、目の前の愛しい女の子をどうにかしてしまいそうになる。手の震えを誤魔化そうとしたが、俺の手を握る留美にはすぐに伝わってしまった。俺の感情の機微が分かったのか、留美は俯いて俺の手を強く握り、小さく喉を鳴らした。
映画は、まだまだ続く。

×　×　×

映画館の情報では、この作品の上映時間は１００分とのことだった。留美を股座に座らせてからおよそ５０分の間――つまり映画が残り２０分になるまで――、留美の身体を抱き締めながら、様々なやり方で幼くも妖しい肢体を嬲った。
左の乳房に付いた２つのローターをずっと強にして、その間右の乳房を手でたっぷりと愛撫したり。
クリトリスを挟んだ２つのローターの内片方を弱、もう片方を強にして戸惑いながらも絶頂する留美を眺めたり。
膣内に入れたローターを弱にして、お腹の上から優しく撫で続けたり。
どの場所を動かしても、あまりの興奮により全身性感帯と化した留美は容易く絶頂した。どれだけ激しく達しても声を潜めることを覚えた留美の表情は途方も無くいやらしく、俺の手を握って指を絡める

時の動きまで艶めかしくなっていた。
ここまで、ローターを同時に作動させるのは多くても最大3つまでだった。
そろそろ、全てを同時に使ってみたい――。
留美が一体どうなってしまうか分からないが、それでも、この好奇心は止められなかった、止めたくなかった。
「留美、全部点けるぞ、いいか？」
「……っ」
振り返った留美が、はっきりと目を見開いた。やがて迷うように視線を彷徨わせて、どこか拗ねたような、それでいて甘えたような声を漏らす。
「……どうせ、だめって言ったってやるんでしょ」
「……ん、よく分かってらっしゃる」
「……ばか」
もう、好きにして……と言った留美が、その直後に「あ」と何か思い出したような声を上げた。
「口は八幡が塞いでて。……多分、我慢出来ないから」
「……わ、わかった」
留美の言葉に従い、右手でそっと留美の口を塞ぐ。留美が悪戯っぽく指にキスをしてきて、どうしようもなく興奮してしまう。
ぐっ、と口を塞ぐ手に力を込めると、腕の中で留美がびくりと震えた。
空いた左手で、次々とローターのスイッチを入れていく。スイッチは漏れなく強にして、7つ全てを点けていく。
「……んんんんんん……っ!!」
留美の身体が弾けるように震え出した。腕の中で華奢な肢体ががくがくと暴れまわり、まるで無理矢理襲っているかのように両腕で取り押さえる。口とお腹をがっちり手で押さえ付けた。
「うんんん……うんんん……っ!!」
留美の身体が不規則に痙攣して、電気でも流しているかのように跳ねまわる。全身の毛穴から溢れ出す汗とタオルを浸していく愛液に

匂いが入り混じり、発狂しそうな程いやらしい匂いになる。
「う……んんんっ!!」
留美がおとがいを上げて反り返り、前の座席の背に勢い良く透明な液体を噴きかけた。それでも痙攣は収まらず、留美の嬌声は苦悶と獣性が混じり、おぞましく卑猥なものになっていく。
このままでは周りの人に気付かれるか……と思い、2つ分の座席が繋がっていることを利用して、留美を下にして身を縮めたまま四つん這いになった。猛り切った股間が留美の尻肉に押し当てられ、ローターの振動が胸や腹にまで伝わってくる。
「う……ぅぅぅぅ……っ」
同じく四つん這いになった留美が、がちがちに拘束されたまま泣き声を上げる。うっすらと涙を流しながら痙攣を繰り返すが、それでも抵抗はしてこない。
何度も、何度も、何度も、華奢な肢体を反らせて。
何度も、何度も、何度も、熱い液体が噴き出して。
何度も、何度も、何度も、絶頂を迎える身体を。
俺は、ずっと押さえつけたまま、じっと見つめていた。

× × ×

映画が終わる寸前になって、ようやく全てのローターを止める。
「……ぁ……ぁ……っ」
「……全部、抜くぞ」
俺の言葉を理解する余裕さえ無いのか、留美は虚ろな目で不思議そうに小首を傾げる。ワンピースを捲って上半身から順にローターを外していくと、汗と愛液でぬらぬらといやらしく光っていた。ごくりと息を呑みながら、ローターの全てをビニール袋にしまい込んで行く。続いて、自分用として持ってきたがまだ使っていなかったタオルを取り出して、留美の全身を拭いていく。顔や首を拭いている時は心地よさそうに目を細め、ワンピースを捲って胸やお腹、更に足や下腹部まで丁寧に拭うと、その度に「……あ……んぁ……っ」と甘い声が漏れた。最後に前の椅子の背や下の床を拭き取り、ぐっしょりと濡れたタオルをビニール袋にしまい込む。留美をそっと抱き寄せると、甘

えるように頬を摺り寄せてきた。艶やかな黒髪を撫でると、シャンプーと汗が入り混じった匂いが鼻腔を擽り、未だに勃起が収まってくれない。
映画のエンドロールを眺めながら、ぽつりぽつりと会話をする。
「……次、どこに行くか。カフェにでも行って休むか」
俺の言葉に、留美は「……ん、もういい」と答えた。え、と驚いて視線を下ろすと、こちらを見上げていた留美とぱっちり視線が合う。
「八幡の家に行きたい。……もう、これ以上は……っ」
言葉は最後まで続かず、恥ずかし気に唇が閉じられる。
濡れた瞳と、艶っぽい声音。どくりと跳ねた心臓の音が、はっきりと聞こえる。
館内が明るくなる前に、唇を重ねた。くちゅりと舌を絡ませて、すぐに離す。
「……分かった。……行くか」
俺の言葉に、留美は言葉も無く、小さく頷いた。

続く。

（７０）

熱に浮かされたような表情の留美の手を引き、映画館を出て足早に帰途に就く。留美の艶っぽい視線を強烈に感じるが、振り向いて目を合わせたら何をしてしまうか分からないくらいには、俺の理性も追い詰められていた。

「ただいま。……んん……？」

家に帰ると、小町がリビングでくつろいでいた。ショートパンツ姿でソファに寝そべり、クセっ毛をぴょこぴょことさせている。気だるげにポッキーを咥えながら女性誌を読む様は、幼い頃から見守り続けた兄を何とも言えない気持ちにさせた。だらしないにも程があるが、それでも可愛くてしょうがない。

「およ、お兄ちゃん……と、留美ちゃん？　どうしたの、今日は一日外に出てるん……じゃ……っ」

俺の顔を見て、それから留美の顔を見た小町が、目を見開いてポッキーを落としそうになる。ちゃっかり空中でキャッチして、ぽりぽりと齧りながら留美の顔をまじまじと見つめる。ちらりと視線を落とすと、留美の顔は映画館で見た時よりも明らかに上気していて、目の焦点も定まっていなかった。何も知らない人からすれば、高熱を出しているように見えるかもしれない。察しの良い人……例えば今目の前にいる妹なんかは、そうではないことに気付くかもしれない。

「……お兄ちゃん。小町、家に居て大丈夫？」

察しが良い上に気遣いまで見せるうちの妹は、神がかってさえいるなと思った。

「……あー、その、なんだ、小町が大丈夫なら、って感じだな。ヘッドホンとかしておくとより問題無いと思われる」

俺の言葉に留美が「……ちょっと……っ」と小声で呟き、袖を引っ張ってくる。小町は俺の言葉に目をぱちくりとさせて、やがて可愛らしい顔がぽっと赤らんだ。かと思えば今度はげんなりとした顔をする。表情が豊かすぎて可愛い。

「……お兄ちゃん。今の言葉は妹への気遣いとしてはありだと思うけ

ど、留美ちゃんへの気遣いとしては０点どころかマイナスだよ……」
「……ごめんなさい」
留美の頭を撫でて謝ると、むぅと頬を膨らませた留美が渋々撫でられるがままになる。根気良く撫でると心地良くなってきたのか目を細めた。
「……あの、イチャつくのは部屋に戻ってからでよろしいですか……？」
『……ごめんなさい』
留美の顔が一気に赤くなり、俺の顔も熱くなる。
小町は手をひらひらと振り、「ま、何とかするよ……」と言った後、急にものすごく良い笑顔で「慎重にね！」とサムズアップしながら言ってきた。留美の顔が更に真っ赤になった。お前の方がひどいだろ、と言うツッコミは止めておいた。

× × ×

結局小町は「今日は外出する気０だったから」と、にへらっと笑いながら言って、ヘッドホンをリビングに持ち込んで動画鑑賞をすることにしたようだ。行動を縛って悪いなと謝ると、「大丈夫、いつものお兄ちゃんの方が１００倍めんどくさいから」と笑顔で言われた。ちょっと凹んだ。
小町とのやりとりで、俺と留美との間に醸成されていた空気は一旦霧散したように思えたけれど。
部屋に入ってドアを閉めると、
「……鍵、閉めて」
と留美がぽそりと呟いたことで、再び二人の間に妖しい空気が生じた。部屋中の粘性をかき集めたかのように、自分と留美との間の空間が密度を増す。もう後には引けないと、留美に、そして自分に言い聞かせるように鍵を閉める。かちりと乾いた音が聞こえると、留美はびくりと小さく震えた。
「……ちょっと休憩するか」
留美は俯いたまま、静かに首を振る。
「……じゃあ、もう脱ぐか」

数秒の間を置いて、小さく頷いた。身体の中で暴れまわる本能を必死で制しながら、上着とTシャツを手早く脱いでズボンのベルトに手を掛けた。すると留美がふっと顔を上げて、
「……私に、させて」
と言った。
「……っ、お、おう、いいけど……」
戸惑う俺を他所に、留美は静かに膝を下ろして、かちゃかちゃと音を立てる。ズボンと下着をひと息に下ろすと、勃起した肉竿が下着に引っかかった反動で下腹にぴたんと付いた。留美は青筋立った肉竿に小さく喉を鳴らすと、鈴口から溢れて糸さえ引いている先走り汁をじっと見つめた。
「……八幡も、興奮してたんだ」
と、顔を赤らめながらも嬉しそうに、そしてどこか悪戯っぽく笑う。留美が「興奮」と言う単語を使うだけでも妙にどきどきしてしまった。
「……そりゃあな、あんだけのもんを見て、興奮しない方がおかしい」
「……そうなんだ」
「そうなんだよ」
目を合わせて、どちらからともなくふっと笑う。留美が立ち上がり、くるりと半転して背を向けた。何をして欲しいかが一目瞭然の仕草だった。背中のファスナーを下ろすと、雪化粧を施したような白く美しい背中が露わになる。ワンピースがカーペットの上にはらりと落ちると、留美がゆっくりと振り向いた。
今までと明らかに違う雰囲気を纏った姿に、ごくりと生唾を飲み込んだ。
映画館での行為と、これから二人で及ぼうとしている行為の両方が影響しているのだろうか。無垢な肢体はほんのりと紅潮し、左手で右腕の肘を押さえ、もじもじと内股になっている姿はとても可愛らしいのに、醸し出される雰囲気と鼻腔を擽る匂いは、幼さを帯びた姿とはまるで不釣り合いな程妖しくて艶っぽい。性の倫理観がずっと緩かった時代、幼くして男を知った少女はこう言った雰囲気を纏っていたのだろうか……等と、取り留めも無いことを考えてしまう。

「……留美」
「……な、なに……？」
「綺麗だ」
「……っ」
俺の言葉に、留美は泣きそうな表情を浮かべる。薄い唇が震えた。
留美の肩を抱き、ベッドに導く。
留美はベッドに仰向けになって寝ると、胸を腕で隠しながら恥ずかしそうに身じろぎをした。
恥じらう美少女の仕草に見惚れながら、バッグからビニール袋を取り出す。袋の中身を見た留美の目が驚きで見開かれた。
「……っ、そ、それ、まだ使うの……？」
「ん？　ああ、映画館では声を抑えないといけなかったろ。あれだと留美も満足出来ないかもって思ってな」
「ま、満足って……っ」
何を馬鹿なことを、とでも言いたげな表情になったが、思い当たる節があったのか、留美は逡巡した末に、頬を紅潮させながら見つめてきた。
「……使っていいか？」
「……聞かなくて、いいから」
「……ん、そうか」
「……うん、そう」
再び、どちらからともなくふっと笑うと、俺は袋から７つのローターを取り出した。
続く。

（71）

取り出した7つのローターを見て、留美がごくりと息を呑む。仰向けになった留美がまじまじと見つめる中、映画を見に行った時と同様にローターを身体に取り付けていく。それぞれの乳頭を挟んだ4つと、クリトリスを挟んだ2つ、それと、膣内に挿入した1つ。薄暗がりの中で体験した苛烈なまでの快感を思い出しているのか、まだ1つも動かしていないのに留美の息は荒く、細い手は不安げにベッドのシーツを掴んでいる。

「もの凄く疲れるだろうから、ゴールを決めとこうと思う」

俺の言葉に、留美はぼんやりとした表情で首を傾げる。

「ゴール……？」

「そうだ」

言って、残りの衣服を全て脱ぎ捨てて、留美の横に膝を付く。幼くも美しい顔の目の前に猛った肉竿を突き出すと、留美は微かに目を見開いた。

「俺のことを1回イカせてくれたら、動かすのをやめる。どうだ？」

「……ん、わかった。……はぷ……っ」

「うお……っ」

横笛に口を付けるかのように、留美が肉竿の裏筋に薄い唇を這わせる。ぼうっとした表情のまま、小さい舌でゆっくりと舐ってきた。焦れったくも甘やかな快感に酔いしれながら、ローターのリモコンのスイッチを次々と入れる。

「んうぅぅん……っ！」

留美が肉竿から口を離し、おとがいを上げて身体を波打たせる。艶めかしい肢体からじわりと汗が浮かび、ベッドの上に牝の匂いが充満する。ゆっくりやっている余裕は無いと判断したのか、留美は顔を横に向けて肉竿を亀頭からぱくりと咥え込んだ。

「ふっ、うっく……ふぅんっ!?　……んむぅ……ちゅぴっ、ちゅろっ、ちゅぷ、ちゅぷ……っ」

「……っ」

7ヶ所を責める無機質な快感に喘ぎながら、頬を薄桜色に染めた留美が一生懸命肉竿をしゃぶる。時折乳頭やクリトリスのローターを中や強にすると、留美は涙目になってくぐもった嬌声を上げた。それでも口は離さず、頬をすぼませて青筋立った肉棒を必死で舐り続ける。白い肌にはじっとりと汗が浮かび、艶やかな黒髪は額に張り付いていた。

あまりにも健気で、あまりにも色っぽい留美の動きに、胸の内で嗜虐心が野火の如く燃え広がる。

「……ちゅっ、ふむ……ん……っ？　……え……っ？」

肉竿を小さな口から引き抜くと、留美は疑問と名残惜しさが同居した表情を浮かべた。黒髪をくしゃりと撫でると、留美の両肩を挟む様に膝をついて腰を沈め、小さな口に肉槍の切っ先をずいと近付けた。事態がもっと苛烈なことになっていると気付いた留美が、恐る恐る口を開けて紅い舌をちろりと覗かせる。不安と、諦念と、期待が混じった瞳の光はひどく歪で、同時にとても美しく見えた。

腰を進めて、留美の口に肉槍を侵入させながら四つん這いの体勢を取る。両手にはリモコンをそれぞれ4つと3つずつ持っている。

留美の顔がベッドから浮いて、目の前にある赤々と膨れた亀頭の先を咥え込んだ。淫靡な様にごくりと息を呑んで――ローターのスイッチを全て「中」にして、留美の口腔に肉竿を一気に挿入した。

「んむぅぅぅ……っ！」

小さな身体ががくがくと波打ち、熱く湿った口がきゅむきゅむと締め付けられる。留美は綺麗な双眸に涙の粒を浮かべながらも、決して抵抗はしてこない。

留美の身体の震えが、温かな口腔を通してびりびりと伝わる。呼吸さえままならない状況にも関わらず、留美は快感に喘ぎながら必死で肉竿に舌を這わせ、きゅむきゅむと締め付けてくる。喉奥を小突いて引くまでの動作で、容易く射精に達してしまいそうなほど強い吸引を受ける。

留美の表情を見て、あまり余裕は無いと考えた。

「……留美、頑張ったな。……一気に行くぞ」

俺の言葉に、小さな双眸が震える。肉竿を咥えながらこくりと頷くのを確認して、ローターのスイッチを全て強にした。
「うんんんん……っ!!」
まるで通電の拷問にかけられたかのように、留美の身体が激しく跳ねまわる。振り落とされそうになるが、留美の口は身体の動きとは裏腹に決して肉竿を離そうとしない。舌を這わせる余裕は無いようだが、一生懸命に頬をすぼませて吸い付いている。
「う……お……っ」
腰を自ら動かさずとも、留美の痙攣によって互いの位置がずれ、喉奥に亀頭が、内頬に雁首がこすれる。7つのローターの強い振動が、留美の艶を帯びた肢体を通して伝わってくるようだ。知らず知らずの内に、歯を強く食いしばっていた。
「留美、出るぞ、もう、出る……っ!!」
「んむぐ……んぐ……んんん……っ!」
留美がこくこくと頷くと、こちらの腰に手を回してぎゅっと頬をすぼめた。身体の奥底から欲求を引きずり出すような吸引に、下半身が決壊した。
「う……あ……っ!!」
――ごびゅっ、ぶびゅるるっ、ぶびゅっ、どぶりゅっ、びゅぶぶぶ……っ。
「おぐ……ん……んふぅぅ……ごくっ、んぐっ、んっく、んくぅぅ……っ」
尿道を伝う感覚がはっきりと分かる程粘度の高い白濁を、小さな口内に溢れんばかりに噴き出した。肉竿が大きく脈打つ度に、細い喉がごくりと鳴る。留美は快感が身体がよじれるのを必死で抑えて、白濁を飲み込み続けた。
魂が抜けそうな脈動が収まると、すぐさまローターのスイッチを全て切った。小さな口から肉竿を抜くと、唇と亀頭の間に幾筋もの唾液の糸が伸びた。放心状態の留美の髪を撫でながらも、ローターを全て外す。汗と愛液をたっぷりと纏ったローターは、思わず目を疑うほどいやらしい光を帯びていた。

「……八、幡……っ」
ベッドの上でくたっと身体を投げ出して、留美が力のない声を上げる。俺は留美の横に座ると、火照りがほとんど収まって薄桜色に染まった頬をそっと撫でた。緊張が解けたのか、子猫のように目を細める様はとても愛らしい。
「私、頑張った？」
「……ああ、すげえ頑張ってくれた。ありがとな」
「……うん。……私……八幡のこと、今度はちゃんと受け入れられる……？」
「……っ、ああ。きっと、いや、絶対に大丈夫だ」
留美の健気な言葉と表情に、胸が締め付けられる。
初めて繋がろうとして、繋がれなかった時の悲しさ、もどかしさは今でもはっきりと覚えている。
けれどそれは、留美だって同じなのだ。
だから、今度は。
今度こそは。
「……するか」
「……うん、きて」
留美が、笑った。
疲れ混じりでどこか艶のある、それでいて純真さと愛情も混ざった、今の彼女にしか浮かべることが出来ないであろう笑みだった。
続く。

（７２）

身に纏うものを全て脱ぎ捨てた留美が、仰向けになってそっと足を広げる。薄く恥毛が生えた陰部をじっと見つめると、頬を赤らめて内ももをこすり合わせた。これまでどれだけの行為に及んでいようと、恥ずかしいものは恥ずかしいのだ。思わず微笑み、しっとりと汗をかいた黒髪を撫でる。両膝に手を添えて、そっと開いた。もじもじとしているものの、下腹部は淫猥な熱気と湿り気を帯びていた。肉竿に手を添えて、そっと亀頭を淫裂に宛がう。にちりといやらしい音がすると、留美の喉が小さくこくりと鳴った。

「……いくぞ、留美」

「……うん、きて。八幡」

留美の笑顔を見て顔を綻ばせると、どんな陶器を扱うよりも慎重に腰を進める。

ずぐっ、と亀頭が膣内に埋まると、前回同様痛いくらいに締め付けてきた。

「んぅ……っ」

「留美、大丈夫か？　痛くないか？」

「うん……少し苦しいけど、前より平気。八幡、前よりも優しくなってる」

「あ……そ、そうか」

無意識の内にやっていたことを温かな声で褒められて、急に気恥ずかしくなる。留美の緊張を少しでもほぐそうとしていたのに、俺がほぐされてしまったようだ。留美はくすりと笑うと、ほんのりと頬を赤らめてじっと見つめてきた。

「うん、そう。……力入っちゃいそうだから、その……っ」

尻すぼみに言葉を紡いで、そっと両腕を伸ばす。温もりを求める腕は、微かに震えていた。

「……わかった」

答えて、留美とそっと抱き合う。間違っても急に腰を進めないように、あくまでも慎重に。細身の身体を抱きしめると、あえかに震えて

いることに気付く。本当は、怖くない訳がないのだ。前回だってきちんと準備をしていた上であの結果だったのだから。
「……今度は大丈夫だから、な？」
「……うん」
耳元で囁くと、留美が掠れた声で返事をした。少しだけ泣きそうで、少しだけ嬉しそうな声だった。
× × ×
まだまだ幼さの残る膣内を、徐々に進んでいく。以前のように途中で膣が乾いてしまうことはないが、まだ油断は出来ない。
「う……んん……っ」
留美はこちらの背中をきゅっと抱きしめながら、小さく震えている。胸板に当たるか細い息が、たまらなく愛おしい気持ちを溢れさせる。
途中で、これ以上は容易に進めないと思わせるつっかえが生じた。
「……留美、行くぞ」
「……うん……っ」
留美と見つめ合い、口付けをして、徐々に、けれど着実に腰を進める。
「ぅあ……八幡……八幡……っ」
留美の声は切実で、けれど力強かった。痛い程に締め付けられながらもぐっと腰を押し出すと――不意に、膣内の空間が一気に開けた。
「うっく……んんん……っ」
何が起きたかは、留美が苦しさに顔を歪めて涙をぽろぽろと流すのを見てすぐに分かった。視線を下ろすと、愛液に薄められた破瓜の証拠が滴っていた。
「留美、頑張ったな。頑張ったな……っ」
腰を動かさないようにしながら、留美を胸に抱き締める。小さな身体は雨に濡れた子猫のように震えていた。
「八幡……八幡……っ」
留美が嬉しそうに名を呼んでくれる。けれど、まだまだ痛みは抜けないようだ。どうにかしたいと思い、留美と唇を合わせて舌を絡ませ

る。いつも以上に、寄る辺を求めるようにこちらの舌遣いに応えてきた。控えめな乳房に手を這わせ、やわやわと触る。生まれたての赤子を抱くような手つきに、留美は控えめながらも反応を示した。
「ん……ふぅ……んん……っ」
挿入してから初めて聞く甘い声。もっとその声が聞きたくて、ゆっくり、ゆっくりと腰を進めていく。開放感を得た肉竿は慎重に進んでいき、亀頭がこつんという感触と共に最奥に到着した。
「留美、一番奥まで入ったぞ。大丈夫か？　どんな感じだ？」
「は、八幡……質問が、んんっ、なんか、やらしい……っ」
「……すまん」
口を手の甲で塞いだ留美が、俺の質問で頬を赤らめていた。労りのつもりで質問したのだが、言葉責めの一環のようになってしまった。
「……もっと楽になるように頑張るから」
「え……ん……あふぁぁ……っ？」
留美の乳房に吸い付き、左手でもう片方の乳房を愛撫する。更に右手親指でクリトリスをくにくにと押すと、途端に反応が現れ始めた。肉竿を包む膣肉の締め付けが、緊張による強張りに取って代わって、生きた洞窟のようなざわめきに変貌していく。肉竿を動かしていなくとも、中の潤みが増して結合部から滴っていた紅色が薄まっていくのが分かる。留美の身体が、牡の身体を受け入れ始めたのだと分かる。
「留美、段々慣れてきたんだな。良かった」
「やぁ……わざわざ言わないで……っ」
「……すまん」
またやってしまった……と気まずく思いつつも、俺の言葉を聞いた瞬間に膣内の熱がくっと上がったことに気付く。
……これはもしかして……。
「留美、どんどん感じるようになってきてるな。さっきから中がひくひくしてるぞ」
「……っ!?　……ぅ……ぁ……そ、そんなこと……っ」
留美が顔を真っ赤にして、両手で顔を覆ってしまう。俺は身体を起

こして、ぴんと張り詰めた2つの乳頭を指でくりくりとしごき始めた。
「あっ、ぅあっ、あ……っ」
「ほら、留美がいやらしい声を出す度に中が動いてるぞ。留美も分かるだろ」
「いやぁ……言わないでぇ……っ」
顔を見られたくないし俺の言葉も止めたいからか、留美は目尻に涙を溜めながら、細い腕を交差させてこちらに突き出してきた。可愛らしい抵抗に内心悶絶しながらも、愛撫と言葉責めは止めない。
「良かった、痛みはすっかり引いたみたいだな。それでもいきなり動いたらきついだろうから、ゆっくりやるぞ」
「あっ……ぅあっ、やぁっ、だめっ、恥ずかし……っ」
「顔を見られるのが恥ずかしいのか？　それとも俺に何か言われるのが恥ずかしいのか？」
「やっ、んぅっ、……ど、どっちも……っ」
留美が再び両手で顔を覆い、指の隙間から潤んだ双眸を覗かせる。あまりに可愛らしい表情に、ここまで理性で抑え込んできた嗜虐心に火が点いた。
留美と両手を繋げて、互いの顔を隠すものを取り払う。留美が耳まで真っ赤になるのを見つめながら、ゆっくりと腰を引き始めた。
「や……っ、んっ、くぅっ、んふぅぅ……っ」
「留美、痛くないか」
「ん……痛く、は、んぅっ、ない、んっ、けど……あふぁぁ……っ」
「そうか、じゃあ気持ち良いんだな」
「……っ、そ、そんな、はっきり言わな……んはぁぁ……っ」
半分程抜いた所で再び最奥まで腰を進めると、留美の顔が美しく歪んだ。表情に苦悶の色は見えず、慣れない快感に戸惑っている様子が見てとれた。膣内は更にざわめきを増して、肉竿の先端から根本まで余すことなく甘美な締め付けを加えてくる。初めての挿入体験でこの快感を味わうのはあまりに刺激的で、留美への言葉責めで気を紛らわしているという面も大いにあった。

ようやく、ここまで来ることが出来た。留美が恥ずかしがりながらも気持ち良さそうにしているのを見ると、こちらまで涙が出そうになる。

ここからは――。

「……もっと気持ち良くするからな」

「……っ」

留美は目を見開いて返事に迷っていたが……やがて、こくりと小さく頷いた。

続く。

（７３）

手を繋いで、身体を交わらせながら見つめ合う。ほんの数十秒の間だけでも、俺の脳と身体に凄まじい量の情報が注がれる。

力を込めれば簡単に傷付けてしまいそうな、とても細くて小さい手。

目尻に涙を溜め、不安でいっぱいになりながらも信頼の念を宿した澄んだ瞳。

苦悶が消え、徐々に沸き立つ快感に戸惑うように波打つ唇。

そして、僅かに腰を動かすだけで一斉にざわめいて、肉竿を愛おしそうに締め付けてくる膣肉。

「うあ……ぅぅ……っ」

じっとりと汗をかき、身を委ねる少女はあまりに美しく、儚げで、愛おしい。

気持ち良くすると言っても、迂闊に激しく動かせばきっと痛がらせてしまう。

だから、慎重に、慎重に――

ずじゅっ、じゅっ、じゅぐっ、ぐぐぐ……っ。

「あ……はっ、ぅんん……っ、ぅっく、んんん……っ」

小さな蜜壺の中をかき分けて進み、最奥の子宮口をこつこつとノックする。場所によって感度が違うのか、一番奥まで入るとまだ快感よりも苦しさの方が勝るようだ。ゆっくり腰を引いて、カリがどの部分をこすったときに良い反応が返ってくるのかを真剣に観察する。留美がほんの少しでも安心したような声を漏らす度に、その場所で前後に腰を動かして留美の反応を窺う。留美は頬を朱に染めて、恥ずかしそうにしながらも静かに結合部を見つめている。

「は、八幡……っ」

「どうした、苦しいか？」

「そ、そうじゃなくて……そんなに、見ないで……っ」

留美が泣きそうに目を細めて、羞恥に顔を歪める。壊れるくらいめちゃくちゃに突き回したい衝動に駆られながらも、必死で我慢する。

「……留美に気持ち良くなってもらうためだからな。やめないどころかもっとよく見るぞ。どこが気持ち良くて、どこか苦しくて、どの角度で突くと良いのか、どれくらいの速度で突くと声が漏れるのか、よく見てるからな」
「やぁぁぁ……言わないで……っ」
粘度たっぷりの声で意思を伝えると、腰を動かしていないのに小さな膣道が一斉にざわめいた。ぞくぞくしながらも再び最奥をこつこつと突き、ゆっくりと腰を引いて反応を探る。
亀頭が抜ける少し手前で、ざらざらした感触に行きつく。クリトリスの裏側に位置する部分は、指で愛撫する時によく責めている場所だった。
「あ……っ？」
留美の身体がぶるりと震え、本人が当惑する。自分の身体に今何が起きたのかと戸惑い、続いて俺の顔を見た瞬間に目を見開いた。どうやらよっぽどによっぽどな顔をしていたらしい。
「……ここ、気持ち良いんだな」
「え……あ、わかんない、けど……うぁ……っ!?」
留美と繋いでいた手をほどき、華奢な腰に両手を添える。細い肢体をくっと持ち上げ、斜め上に腰を突き出すと――留美の反応が目に見えて変わり始めた。
「あ……っ、あっ、うっく、ひぁっ、あっ、んぁ……っ？　あっ、あんっ、あっ、あっ、あぁ……あぁぁ……っ！」
ざらざらの感触を目指して慎重に何度も小突くと、動き自体は極めて小さいにも関わらず、こちらの動作の何倍もの大きさで留美の身体が跳ね、波打つ。このままでは声が漏れると思ったのか、留美は両手で口を塞ごうとする。
「声、聞きたい。だめか？」
「……う……ぁ……っ」
俺の言葉に、留美は顔をくしゃくしゃにしながら逡巡して、やがてゆっくりとシーツを掴んだ。再び抽送を開始して、丁寧に突いていく。

「あぁ……あっ、うぅっ、うあぁっ!?　あっ、あっ、んあっ、ひぁっ!?」
媚熱を持った快感が身体の奥底に積み重ねられて、留美の嬌声に糖度が増してゆく。表情から硬さが消えていき、引き結ばれていた唇がぱかりと開く頻度が上がっていく。指や道具で愛撫していたときと同じ、いや、それ以上に魅力的な表情に変貌していく様に、俺は腰を動かしながらごくりと息を呑んだ。
突く速度を徐々に上げていく。慎重に、けれど、確実に。
「あっ、うぁ……っ、はっ、はぁっ、んくっ、うぁあっ！　あっ、あぁっ、うあぁぁっ！」
一突きごとに留美の声から遠慮と羞恥の色が薄れ、妖艶な色香が溢れ出てくる。一瞬幸せそうな表情を浮かべては、次の瞬間に顔を真っ赤にして逸らしてしまう。けれどもう一度突けば再び甘い嬌声を漏らし、おとがいを上げて白い喉を露わにする。
留美の全身からじわりと汗が滲み、甘い匂いと混ざり合う。結合部から漏れ出る甘酸っぱい香りも混ざって、ベッドの上は甘美な地獄のようだ。
それにしても軽いな――と、留美の身体を支えながら思う。これなら、片手でも支えることが出来るんじゃないか……？　とふと思ったところで、一つの考えが浮かんだ。
右手を腰から離し、左手を留美の腰の真ん中に添える。夥しい快楽の波に疲れた留美が、俺の行動に虚ろな表情で首を傾げる。しかしその表情も、俺が右手を伸ばした場所に気付いた瞬間に驚愕に染まった。
「あっ、だめ、今そこは……うあぁぁぁっ!?」
右手の親指の腹で、ぐっしょりと愛液で濡れたクリトリスをくにりと押すと、留美の嬌声が一段階甲高くなった。理性が削れ、その代わりに獣性の色を帯びた声は、留美の快感が跳ね上がったことを克明に伝えてくる。過度な刺激を加えることはせず、包皮をかぶったクリトリスを親指の腹で円を描くようにこする。快感神経の束と化した肉芽をこすりながら、その裏側を亀頭でこつこつと突く。
「うあぁぁっ!?　だめっ、いっしょにやっちゃ……あぁぁっ！

あぁぁぁっ！」
　留美が泣きじゃくりながら、激しく何度も身体を波打たせる。まだ絶頂に達していないはずだが、今まで見てきたどの絶頂よりも艶っぽい反応に身体が震える。留美の全身から漂う匂いがより甘く、濃度を増していく。抽送の速度は依然としてゆっくりのままなのに、こうも留美の反応が劇的に変わるとは……と、女性の身体の神秘を感じる。結合部からは泉のように愛液が湧き出て、陰毛をびしょびしょに浸していた。
「だめ、だめ、だめ、だめ、だめ……っ！」
　留美が泣きじゃくり、クリトリスを弄る右手を両手で掴んできた。
「イキそうなのか？」
「……うぅ……っ」
　俺の質問に、留美は無言の肯定を返す。
　そっと右手を肉芽から離すと、留美が明らかにほっとした。しかし離した右手を留美の腰にまわし、両手で細い肢体を支えると、何が起こるのかを察したようで細い喉がごくりと鳴った。
「やっ……だめ……あぁぁぁぁっ!?」
　今までよりはほんの少し速く、はっきりと照準を定めて腰を突き上げる。どちゅっ、どちゅっと激しい水音が鳴り、留美の心と身体がどれだけ高まっていたかが分かる。
　ここまでずっと高まっていた快感は、留美をあっという間に限界に追い詰めた。
「だめっ、イクっ、イクから、イク、イク、イク、イク、イっちゃ……ぅあぁぁぁぁぁっ!!」
「うお……っ!?」
　膣肉が強烈に締め付けてきたかと思うと、細い肢体が鮮やかなアーチを描いて反り返り、腹部に大量の透明な液体を噴きかけてきた。夥しい熱量を孕んだ液体は何度かに分かれて勢い良く噴き出し、その間留美の全身は何度も痙攣を繰り返した。
　ようやく落ち着くと、留美は汗が染みたシーツにくたりと背中を付けた。額に前髪が何本か貼り付いていて、半開きになった口がひどく

悩ましい。
「……八幡の、ばかぁ……私の身体、こんな、エッチに……っ」
息も絶え絶えに、留美が可愛らしく糾弾してくる。しかし自分の言葉に恥ずかしくなってしまったのか、息混じりの声が最後まで続くことはなかった。
「……気持ち良かったようでなによりだ」
「……ばか……っ」
整った眉を八の字にひそめて、すねた表情をする仕草が可愛くてしょうがない。
けれど、留美は気付いているだろうか。
こうして他愛もないやりとりをしている間も、肉竿を包む膣がきゅむきゅむと締め付けていることを。
「……まだ満足してないようだな。それじゃ、続けるぞ」
「え……っ、な、……あ……っ」
俺の言葉に慌てた留美だが、自分の下腹部の蠢きに気付いたらしい。呼吸は落ち着いたのに、耳まで真っ赤になってしまった。
「まだまだ止めないからな」
「……っ、……ばか……っ」
再び可愛らしく罵倒してきたものの、留美は決して身体を離そうとはしなかった。
留美が再びシーツを握る。澄んだ瞳は、じっと俺を見つめていた。
続く。

（７４）

激しい絶頂を経て、留美の身体に確実な変化が起きていた。
痛みや不安が強く表れていた瞳はとろんと蕩けていて。
ベッドに肘をついて上体を起こし、結合部を見ながらひくひくと身体を揺らす様は淫猥そのもので。
そして何より、肉竿を根本まで飲み込んだ膣肉は、腰を動かしていない今も蠕動（ぜんどう）を繰り返して猛った肉槍を味わっている。
留美のあごを指で上げ、目を合わせる。純粋さの中にも妖艶な光を宿らせた瞳を見つめながら、肉竿をゆっくりを動かし始める。
ずちゅっ、にちゅっ、ぐちゅり……っ。
「あっ、んぁ……うぅぅぅ……っ」
幼さの残る膣肉が、手前では強く締め付け、奥では柔らかく包み込むように刺激してくる。愛液で溢れた蜜壺は痛みを伴うことなく肉竿を受け入れていて、留美の身体からも硬さが抜けていく。
肉竿を半分程挿入して引くと、雁首がざらざらした部分を擦る。留美は顔を真っ赤にして震え、熱の篭った声を上げる。
どこまで挿入するかの程度を毎回変えて、留美を焦らす。深くまで入り込んだ直後に浅い所で止まると「……？」と惚けた顔で首を傾げるのが愛おしい。
ごくごく浅い所で止まって引き抜き、留美が物欲しそうな顔をした瞬間――最奥まで突き上げた。
「あ……っ」
か細い断末魔の声を上げて、留美の身体が弾ける。小さな身体が壊れたように痙攣して、結合部からは熱を帯びた愛液がたっぷりと溢れ出た。膣肉が圧力を増して、うねり、肉竿を頬張る。心地良い締めつけに、天井を仰ぎながら小さく声を漏らした。
神経の糸が切れてしまったかのように四肢を投げ出した留美から肉槍を引き抜き、背中を抱える。くるりと回してうつ伏せにする間、留美は何の反応も示さなかった。無垢で純白な背中と双丘は、うっすらと上気して汗と愛液に彩られていて、視覚と嗅覚を艶めかしく蹂躙

してくる。投げ出された細い足は開いていて、その僅かな隙間が異様にいやらしい。
腰の上に跨り、尻肉の谷間に肉竿を擦りつける。呼吸音しか聞こえなかった留美の口から「……ぁ……っ？」と、上ずった声が聞こえた。
「挿れるぞ」
「……うん……挿れて」
留美があっさりと答えたことに驚いていると、だらりとシーツの上に転がっていた手がゆっくりと動き、自分の小さな尻を掴んだ。そして、自分を狂わせて壊すことが分かっているものを受け入れる為に、自分の手で膣口に導くように尻肉を開いた。
震えた。
自分が今、どれだけ淫らなことをしているのか――この子は、分かっているのだろうか。
狙いを定めて肉槍を突き刺そうと膣口に宛てがうと、役目を終えたと思ったのか、留美の手が離れてシーツを掴んだ。
腰を進めて、淫蜜に塗れた穴へと肉竿をねじ込む。
「あぁぁぁぁ……っ」
年端のいかぬ少女から、信じられないほど淫らな声が漏れる。シーツを握り締め、顔を白い生地にうずめ、足をバタつかせる。臀丘の肉感を味わいながらの挿入は、正常位とは違う楽しみがあった。
ずぶずぶと膣肉の中を穿っていくと、ざらざらした部分に行き着いた。斜め上から挿入しているため、正常位で挿入した時よりも留美の弱点を刺激しやすいと気付く。
柔らかな尻肉を両手でがしりと掴んで、徹底的にざらざらした部分を抉る。
「あ……あぁぁぁぁ……っ!?　あっ、うぁっ!?　うっく、ひっ、あくぅっ、うんん……っ！」
ハッとしたように顔を上げ、すぐに顔をうずめ、また顔を上げる。返ってくる反応が愛おしくて、もっとめちゃくちゃにしたくなる。
ずちゅっ、ぐちっ、ずりゅっ、じゅぶっ、ぢゅぐぐ……っ。
「あっ、あっ、あっ、あっ、あ……っ」

壊れた人形のように喘ぎ声を繰り返す留美の艶姿に、官能の波が高まっていく。シーツに顔をうずめた時の留美の声はくぐもっていて、悩ましいが焦れったい。小さな両手を掴んで、ぐいとこちらに引っ張って顔をシーツから浮かせた。それと同時に抽送の速度もねじ上げる。

ずぢゅっじゅぶっがじゅっじゅぼっじゅぐっじゅぶりゅっじゅぶっ。

「あっあっあっあっあっあっあっあぁぁぁぁ……うあぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!」

上半身がバネ仕掛けのように跳ね上がり、留美の嬌声が乱れ爆ぜた。膣肉は痛い程締め付けてきて、先走りの汁が全て流れ出てしまうほど大量の愛液が結合部から溢れ出す。ついさっきまで透明だった愛液は白く粘ついたものに代わり、発情の度合いが更に増したことを物語っていた。

両手を離すと、留美はごとりとベッドに横たわった。肉竿を抜くときは細かく痙攣して、名残惜しむように締め付けてきた。

うつ伏せから仰向けに戻して、留美の顔の横で胡座をかき、頭をくしくしと撫でる。留美は満足した猫のように目を細めたが、しばらく撫でていると、俺の手に小さな手が重なった。

「八幡……なんで出さないの？　八幡は気持ち良くなかった？」

不安げに問うてくる留美に、手の動きをぴたりと止める。

「……いや、正直死ぬ程気持ち良かった。我慢してなかったら既に3回は出してると思う」

留美が泣きそうな顔で「じゃあ、なんで……？」と聞いてきて、俺は顔を逸らして頬をぽりぽりと掻いた。

「それでも、俺が出すよりもまずは、留美をちゃんと気持ち良くしたいって思っててな。それどころじゃなかったって言うのが正解かもしれん」

言って、ちらりと視線を下に向ける。留美は目をぱちくりとさせて、やがてふっと笑った。

「……八幡って、優しいね。本当に」

「……ありがたく受け取っておく」
気恥かしさにまた顔を逸らすと、そっと手を握られた。
「もう、大丈夫、痛くないから。すごく……き、気持ち、良いから……っ」
手を握っておきながら、留美が全力で顔を逸らす。真っ赤な耳が、艶やかな黒髪の間から覗いていた。
だから……と、留美がこちらを向いて、優しい笑みを浮かべた。
「今度は……八幡も、我慢しないで？」
心臓を鷲掴みにされて、呼吸が止まる。
守りたいし、壊したい。
相反する2つの感情を宿した蛇が、同時に身体の中をけたたましく這い回った。視線を下ろすと、会話をしている間は大人しくなっていた肉竿が、暴発寸前まで張り詰めていた。
「……わかった。じゃあ……」
話しながら腰を上げると、留美の足を開いてその間に座った。留美は「？　……？」と無言で恥ずかしがり、下腹部を両手で隠した。無垢な少女の顔がひょっこり顔を出して、ついさっきまでとの強烈なギャップに余計に興奮してしまう。
「留美。跨ってくれるか」
胡座をかいて、天を突くように上を向いた肉竿をちょいちょいと指差すと、留美は目を見開いた。小さく喉が鳴る音が聞こえ、目が泳ぐ。
それでも拒否することはなく、おずおずと上体を起こして立ち上がった。
続く。

（７５）

留美がこちらの肩に右手を置き、腰を落としながら左手を肉竿に添えて狙いを定める。今まさに繋がろうとしている部分はもちろん、緊張に染まった留美の表情にも目が行き、視線が激しく泳いだ。

「ん……っ」

肉竿の先が膣肉に埋まると、留美の顔に苦悶が浮かぶ。一度冷静になると、まだまだきついのだと気付く。どうにか痛みを和らげたいと思い、腰をゆっくり落としていく留美の乳頭に吸い付いた。

「あ……っ？　八幡、やっ、んん……っ」

予期せぬ愛撫に慌てた留美が腰を一気に落としそうになり、肉竿に添えていた左手を慌ててこちらの肩に添える。気持ち良さに歪む表情を目の前で見られることに抵抗を覚えるのか、湧き上がる快感を抑えたぎこちない表情を浮かべる留美はとても可愛らしく、同時にいやらしい。乳頭の一つを吸いたてながら、もう片方を指で挟んでこする。

「あぁ……あぁぁ……っ」

眉をひそめて泣きそうな顔になりながら、留美は徐々に腰を落としていく。肉竿が幼い膣肉に食べられていく光景は扇情的で、桃色の膣肉が肉竿を頬張る感触に思わず息を吐く。

「はぁぁぁぁ……っ」

根元まで飲み込まれると、亀頭が子宮口をぐりぐりと圧迫していることに気付く。留美が上になることで体重がかかり、先程までよりも肉竿が奥まで埋まったのだと気付く。留美は苦しそうに、それでいて快感の色艶を交えた息を吐き出した。

「……八幡の、ばかぁ……っ。急に、こんなこと、されたらぁ……っ」

舌っ足らずの甘えた声で抗議してくる留美が愛おしくなり、両腕で細い肢体をきゅっと抱きしめる。すると留美も抱きしめ返してきて、背中を不安げにさすってきた。

唇を重ねると、留美から積極的に舌を絡めてくる。ずちゅ、くちゅ……と淫らな音が頭蓋骨に響く感覚に酔いしれいていると、細い足が

腰に巻きついてきた。驚いて、口付けをしたまま留美の目を見る。とろんと蕩けた目は俺の驚きに無頓着で、ほとんど無意識にやっているのではと思った。
「ん……ふぅぅ……んっく、ふぅ、んん……っ」
留美の甘い声が身体に染み渡るのをじっくり楽しむ。この体勢はお互いがじっくりと快感に浸ることが出来て良いな……と目を細めていると。
(あれ……なんかすげえ気持ち良い……ていうか待て、待て待て、下手すりゃ出ちまう……っ!?)
ゆっくりしているつもりだったのに、気付けば、今にも射精しそうなのをずっと堪えていることに気付いた。
留美の瞳を見ると、甘ったるい愛情に混じって、ほんの僅かに悪戯っぽい嗜虐の気配が感じ取れてぞくりとする。背中をさする留美の手がそっと爪を立て、うなじから腰へ下り、脇腹をくすぐるように撫でていく。俺の動揺をあざ笑うかのように、動きが止まった俺の舌を留美はぱくりと咥えこみ、フェラチオさながらに念入りに愛撫してくる。
「ふーっ、ふーっ、ふー……っ」
留美の息が荒くなり、獣性を帯びていく。背中を悪戯していた手が身体の前面に移り、乳首を爪でかりかりとこすり出した。鋭さを伴った快感に悶絶していると、留美は唇を離して、首筋に吸い付いてきた。
「お、おい、留美……うぁ……っ!?」
首筋をかぷりと甘噛みされ、あまりの豹変ぶりに驚く俺に――留美は、耳元で囁いた。
「八幡……我慢しないで、私の中に出して……?」
「……っ」
淫魔のごとき魅力を持った囁きをしたかと思うと、おでこ同士をこつんと当てて、頬を赤らめながら目を細めた。淫らな表情の中に、慈母のような優しさが見える。
留美の中に、子宮に。
亀頭を押し付けて、射精を。

留美の一番奥に、ありったけの精液を――。
――かちり。
スイッチが入った音が、脳内で明瞭に響いた。
「留美……っ！」
「あ……っ」
肩を押さえて、挿入したまま倒れこむ。正常位の体勢になると腰を引き、留美の両手を握り締めてこちらに引っ張ると、合わせて腰を力いっぱい押し出した。
ごちゅ――っと、激しい音がした。
「んあぁぁぁっ!?」
留美の身体が弓なりに反り返り、がくがくと痙攣する。けれどお構いなしに、腰を引いては叩きつけるのを何度も繰り返す。結合部からは洪水のように愛液が溢れ出し、留美の顔には僅かな苦しさと、溢れ出す喜悦が浮かんでいる。
「はぁぁっ！　んんっ、んくぅっ！　あっ、あぁぁっ！　あぁぁぁっ！」
留美が泣きながら喘ぎ、おとがいを上げ、背中を逸らす。一突きごとに射精への確信が湧き上がってきて、抽送の速度は更に上がっていく。膣内は愛液が溢れ出て滑りが増し、更に激しい抽送を促す。結合部からは、白く濁った愛液と先走り汁がどろどろに混ざり合ったものが溢れ出した。
「留美、俺、もう、出る、出る、出る……っ!!」
本当はもっと余裕を持った声にしたかったのに、情けないくらい涙声になってしまう。温もりを欲して、留美に覆いかぶさって抱きしめる。すると、留美は抱きしめ返して、腰に細い足を巻きつけてきた。
「我慢しないで？　いっぱい出して、お願い、八幡……っ」
「留美……っ」
幸せそうに笑う留美に、唇を重ねる。身体を強く密着させて愛情を交わし合うと――身体の奥底から、固体のごとき粘性を持った白濁が尿道を伝って鈴口から爆ぜた。
――ぶびゅるるっ、びゅぶっ、ごぶぶ、ごぶりゅっ、びゅぶぶっ、びゅ

るるる……っ。
「んふぅぅぅ……っ!? んっ、んん……ぷはっぅぁぁぁぁっ!? あつ……あふぁぁっ！ 熱い……あぁぁぁ……八、幡……あつ……あぁぁぁぁ……っ」
鉄砲水のごとく噴き出た白濁流に留美は目を瞬かせ、耐え切れなくなったのか唇を離して激しく喘いだ。肉竿がびくんと脈打つ度に大量の精液が噴きこぼれ、留美の幼い子宮に注がれていく。留美が魂の抜けたような顔で白濁を受け入れる表情を、俺は虚ろな意識の中で見つめていた。
射精をする。
脈動の度に、白濁が噴き出す。
留美の身体が仰け反り、肉竿を食いちぎらんばかりに締め付けてくる。
射精は止まらない。
まだ止まらない。
まだ止まらない。
「あっ、あっ、あぁっ、あぁぁ……っ」
留美が虚ろな表情で、精液に酔ったように口を半開きにして、焦点の合っていない目で見つめてくる。互いに気絶しそうになりながら、夥しい絶頂の波に身を委ねた。
『……はぁ……っ、はぁ……っ』
子宮も膣内も精液で満たされ、ようやく落ち着いて肉竿を引き抜き膝立ちになると、ぽっかりと開いた膣口からこぷりと白濁が溢れ出た。ひくひくと震える膣口がびくんと大きく痙攣する度に、中から白濁が溢れ出てくる。白濁は愛液と混ざり合ったのか、濃厚な白色がかなり薄くなって出てくることがあった。身体を投げ出して息を荒げる留美の姿はとても淫靡で、半勃ちになっていた肉竿が留美の艶姿を見ただけで再び勃起してしまう。
結合部をぼうっと見つめていると、留美が上体を起こしてきて、首に腕を絡めてきた。
「うお……っ？」

その体勢のまま留美がベッドの上に倒れこみ、俺が上になった状態で留美の顔の横に手をつく。留美は疲労の顔を浮かべながらも、至極幸せそうな表情をしていた。
「八幡……好き、大好き」
「……っ」
身体の一番奥の、一番大事な場所に男を受け入れて、心の底からの好意の言葉を口にする。留美の真っ直ぐで柔らかい思いに、顔と喉の奥がかぁっと熱くなり、どうしたら良いか分からなくなる。気の利いた返しを考えようとしても、目の前にある綺麗で可愛らしい顔を前にすると何も良い案が浮かばない。
目を合わせたまま逡巡していると、留美は、
「……八幡は……？」
と、どこか悪戯めいた顔で微笑み、俺の頬を撫でた。
今さら、この子の前で格好をつけても無駄だろう。
そう思い、口の端を上げて、少しばかりぎこちなく笑みを浮かべた。
「……ああ、俺もだ。……好きだ、留美。大好きだ」
「……八幡って、そういうストレートな台詞似合わないね」
ちょっとショック。
しかし留美の反応を見ると、額面通りに受け取らなくてもいいのだと気付く。
「……顔を真っ赤にして何言ってんだ」
「……っ」
バッと顔を逸らしてしまった。ここで照れ隠しとかなんなの、可愛すぎるだろう……と内心悶絶しながら、もう少しからかうことにする。
「なんなら毎日言ってやろうか」
俺の言葉に、留美は驚いたように振り向いた。
「……え、いいの？」
「え、いや、あれ？」
思わぬカウンターに慌てていると、
「約束ね」

「あー、いやー、その……」
やばい、この流れはやばい。どうしよう、どうし――
「……だめ？」
……。
……ずるいなあ。
「……はい、毎日言わせて頂きます……」
「……うん」
とんでもなく恥ずかしい約束を取り付けさせられたものの、この幸せそうな笑顔を見られるならそれでも良いかと思ってしまう。……やっぱりものすごく恥ずかしいけど。
留美が幸せそうに目を細めるのを見て、そっと唇を重ねる。抱き締めた身体はとても華奢で、心の底から守りたいと思った。
やがて強烈な眠気に襲われて、俺と留美は、後始末をする余裕も無く布団だけかぶって眠りに就いた。

続く。

（76）

留美と結ばれてから、初めて迎えた夏休み。
俺は大学受験を控えた身で、留美は遊びたい盛りであろう中学1年生。いくら恋人になったからといっても、どうしてもすれ違いは起きるだろうな……と心配していたのだけれども。
結論を言ってしまえば――その心配は杞憂に終わった。
俺は、5つも年下の女の子に。
癒され。
翻弄され。
そして――夢中になっていた。

× × ×

「おー、留美ちゃん、おはよー。今日も来てくれたんだねー」
「おはようございます、小町さん」
勉強に入る前の時間。朝ごはんを食べてリビングでくつろいでいると、玄関から可愛らしい会話が聞こえてきた。小町の声は安心しきった家族に向けられるようなものになっていて、それだけ留美がこの家に馴染んでいるという証拠に思える。
「八幡、おはよう」
「ん、おはよう」
アイスコーヒーを2人分淹れて盆に載せたところで、白のワンピースを着て艶やかな黒髪をなびかせた留美がひょいと顔を出した。涼やかな表情を湛えて、手には麦わら帽子を持っている。
「……かぶってきたのか」
「……ん。見たい？」
「……」
無言で頷いた。
留美が麦わら帽をかぶる。
小町が膝から崩れ落ちた。
「……どう？」
「……死にそう」

「もうちょっと頑張って褒めてくれると私も嬉しいんだけど」
「いいのか？　俺が本気で留美を褒め出したら、原稿用紙数十枚は軽くいっちまうぞ」
「そこはもう少し調整してよ……」
　留美が目を細めて呆れ笑いを浮かべる。いつものやりとりに頬を緩めていると――先程から留美の下でカシャカシャとシャッターを切っているアホ妹に視線を向けた。
「……小町ちゃん。可愛いのは分かるけど、下から撮ると犯罪臭がするからやめときなさい」
「……ごめん、留美ちゃん……写真撮りたいんだけど、留美ちゃんが可愛すぎて立ち上がれなくて……でも写真は撮りたくて……」
「……留美、通報してもいいぞ」
「家族の目の前で通報するのはちょっと……」
「え、あれ、留美ちゃん？　お兄ちゃんがいなかったら通報してたの？」
　何だこの会話……と思いながら、俺は小町を猫のように持ち上げてソファに移すと（セクハラだー！　と叫ばれたがそんなのは知ったこっちゃない）、留美に目配せをして自室へと向かう。留美はきゅっとスカート部分を押さえていた手を解いて、ゆっくりとついてきた。

×　×　×

　留美と部屋に入り、内鍵を締めるとお盆をローテーブルに置く。留美はついこの間まで家やこの部屋に入る時に「お邪魔します」と言っていたが、その挨拶はしなくていいと俺と小町が揃って言ったことで何も言わないようになった。それでもぺこりと礼儀正しく会釈はしているのがとても愛らしい。
「それじゃ、始めるか」
「ん、わかった」
　俺の言葉に応じて、留美が勉強道具を広げる。俺も予め用意していた問題集とノートを開いた。
　俺が予備校に行くときは留美は友達と遊んだり――学校で話す友達は結構増えたらしいが、休みの日に遊ぶ友達は、随分とませた女の

子一人だけらしい――、一人で図書館に行って本を読んでいるらしい。そして俺が家にいるとき（予備校に行くときと小町の買い物に付き合うとき以外は全部だ）は、こうして一緒に勉強をすることにしている。２人とも学校の課題はほぼ終えているので、俺は受験勉強を、留美は２学期以降の勉強をしている。

カリカリとシャーペンを走らせる音と、時折消しゴムで書いたものを消す音だけが聞こえる。２人とも集中して別のことに取り組むというのは互いの気性に合っていて、何も話さなくても気にならないどころか一人で勉強している時よりも集中出来るくらいだった。

「……ふう」

１時間ほど経ってキリの良いところまで進むと、一度シャーペンを置いた。留美は２学期に国語で扱う作品を図書館で借りて読んでいた。

「八幡、休憩する？」

本をぱたんと閉じた留美が、こちらを見つめてくる。「ん、そうする」と言ってぐっと伸びをして、そのまま後ろにぱたりと倒れ込んだ。

そして、手を伸ばした先にあったピンクのリモコンのスイッチを点ける。

「うんん……っ」

涼やかだった留美の表情が、ほんのりと朱に染まる。太ももに手を置いて、俯いて震えている。

「……よくバレないように出来たな」

「……スイッチが入ってたら、流石に無理だったけど」

そう言って、留美は下腹部を静かに撫でる。くぐもった電動音が留美の身体の内から響いていた。

リモコンのスイッチを、弱から中に変える。ウィィィ……と唸る音が一層大きくなり、「ん……んふぁぁ……っ」と留美の小さな口から甘い喘ぎが漏れ出た。太ももを押さえる手に力を込めると、ワンピースがぴんと引っ張られて――胸の小さな突起が２つ、はっきりと浮き出た。

「ここも……よくバレなかったな」

起き上がり、留美の身体を背中から腕で包み込んで、白い生地に浮き出た突起を指でつまむ。華奢な肢体が波打ち、身体から漂う甘やかな匂いが増した。
「すごくひやひやしたんだから……。八幡、エッチすぎ」
「ろれんらはい（ごめんなさい）」
眉を八の字にした留美が振り返り、頬をつねってきた。拗ねた顔まで可愛いのだからどうしようもない。
乳房をまさぐっていた手を下にすべらせていき、スカート部分の中に潜り込ませる。少し肉感の増した太ももをまさぐり、その中心部に行くと――もわりとした熱気を湛えた淫裂に直接触れた。
「中におもちゃを入れて、下着を着けないでワンピースで来るとか……すげえな、留美」
「……全部八幡が言ったことでしょ？」
「別に俺は強制はしてないぞ」
「……っ」
留美が耳まで赤らめて俯く。けれど、いくら声や表情を隠したところで、身体が示す反応は隠しようが無かった。
リモコンのスイッチを中から強にする。身体を断続的に波打たせる留美の乳房をこねくりまわし、愛蜜が溢れる割れ目に指を這わせて柔らかな女体の感触を楽しむ。留美の手がいつの間にか、ジャージの上から勃起した肉竿を撫でさすっていた。留美のワンピースをぐっと捲り、俺はズボンとパンツを下げて青筋立った肉棒を出し、背中に肉竿の裏筋をこすりつけた。留美が上気した顔で振り返り、肉竿を手でさすりながら悩ましく喉を鳴らす。
「……もう、するの？」
「……したい」
「……ばか。勉強どころじゃなくなるでしょ？」
「あー……それなら、1時間ごとに休憩がてら……ってのはどうだ」
「……1時間勉強して、1時間休憩を入れるつもり？」
「え、そんなにするつもりなのか？」
「……だって、ちょっとだけしてすぐ勉強なんて……私が我慢出来な

い」
「……ちょっとまって、今のはやばい……っ」
「え……あふぁぁ……っ」
　ローターを愛液溢れる膣内から抜いて、留美のお腹を抱いて身体を持ち上げ、子宮の入口まで一気に貫くまでの流れは一瞬だった。
　――こうして、今日も俺と留美は一緒にいる時間に安心して、身体を重ねる時間に溺れてゆく。留美は押しに弱いものの、本当に俺が勉強を投げ出しかけているとちゃんとたしなめてくれる。俺は俺で、留美が自身の体力を省みずにまぐわいに溺れそうになると、歯止めをかけて休むように促している。持ちつ持たれつ、といったところだろうか。
　留美と過ごす時間は、本当に幸せだ。５つも年下の女の子は、俺より大人びているときもあれば、年相応に可愛らしい面も見せてくれる。夕陽が差し込む道を一緒に散歩しているとき、幸せそうに目を細めた表情はもしかしたら一生忘れないかもしれない。
「あ……んん……八、幡……好き……大好き……っ」
「留美……留美……っ」
「……毎日好きって言ってくれるんじゃなかったの？」
「うぐ……る、留美」
「んっ、んふぁぁ……っ、……なに？」
「……好きだ、大好きだ」
「……あっ、んふぅぅ……っ！」
「……俺の言葉に反応しすぎだろ、留美の身体」
「んん……っ、そういうの、言わなくていい……っ」
　――こんなこっぱずかしいやりとりを挟みながらも。
　俺と留美の日常は、緩やかに続いていく。
×　×　×
「あー……留美ちゃん、今日も表情が何やらエッチだったなあ……」
「絶対お兄ちゃん、留美ちゃんになんか変なことしてるよね……」
「しかもあのワンピースの感じ……下着着けてないっぽかったなあ」
「小町が下から撮ってるとき、角度的に全然見えないのにずっともじ

もじしてたし……もしかして下も履いてなかった？」
「……お兄ちゃんのばか、やりすぎだっての」
「……まあ、留美ちゃんも満更でもない感じだったしな……見守るとしますか」
「……」
「……ふへへへ……留美ちゃんの照れた顔、かわええのう……待受けにしておこっと」
「おーい、小町ー」
「ぴやっ!?　おおおおお兄ちゃん!?　どどどどどうしたの!?」
「……いや、お菓子ってまだ残りがあったか聞こうとしたんだが……お前こそどうしたんだ」
「ななな何でもないって！　お兄ちゃんの変態！」
「なんで!?」
「八幡……と、小町さん？　どうしたの？」
「留美ちゃん、何でもないよごめんね！　お兄ちゃんが変態だなって噛みしめてただけだから！」
「普通にひどくないかそれ」
「……」
「おいやめろ留美、ぽっと頬を赤らめるな。可愛いじゃねえか」
「うわ、お兄ちゃん、ストレートに褒めると色々とアレだね」
「ぼかし方がひどいなお前」
「……八幡は、うん、変態」
「……可愛すぎるやろ……がふっ」
「小町、小町が倒れた！　誰か！　誰か！」
「え、え、え？　なんで？　なんで小町さんが倒れるの……？」

お終い。

一色いろはとの寝起きのまぐわい。

（1）

目が覚めると、身体を柔らかな空気が包んでいた。
頭をがしがしと掻いて枕元の時計を確認し、ごろりと寝転がってまどろみを楽しむ。
柔らかな空気の正体は、どうやら自身の幸せな気持ちなのだとおぼろげながらに気付く。
はて、この気持ちはどこから湧いてくるのだろう。何が原因なのだろう。
春と夏の間の曖昧な温もりか。
昨晩、というか数時間前までしっかり運動していたことに依る心地良い疲労か。
「ん……」
……それとも、隣で穏やかな寝息を立てている、この子か。
……。
「……全部だな」
というか、今の気持ちは全てこの子ありきだよな、うん。
自分で言っていて恥ずかしくなることではあるのだけど。
口に出して言わないと、悶え転がってしまいそうだった。

× × ×

ゴールデンウィーク前日。
明日からは連休ということで、教室全体がとてもとても浮かれた空気になっていた。
学校としては最終学年で受験モードに切り替えたい所ではあるんだろうが、こちら側としてはまだこの時期にそこまでスイッチは入らない。
教室の後ろでメンバーの違うウェイウェイ勢が高校生活最後の年の為か殊更はしゃぐ中、平常運行で部活に向かおうと教室を出る。
いくつか開けられている廊下の窓から、温もりのある風が流れてき

て何とも心地良い。
眠くなってくるなぁと思いながら歩き始めると、その二秒後に背中をどつかれた。
や、正確に言えば、抱き付かれた。
音にすると、がばっ、ぎゅーって感じ。半角にするとよりそれっぽくなる。
「……」
振り返らずとも何が起きているかなんて容易に分かるし、周りの白眼視の視線の圧力も半端ないし、何より背中から伝わってくる温もりがあっと言う間に冷静な思考を奪い取る。
あかん。
今この時にすべきことは、アレだ。
うん。
冷静な対応だ。
数秒の逡巡の末、余裕たっぷりな表情（ｆｅａｔ．だくだくの冷や汗）で振り返ると、いろはがジト目を向けていた。
「……先輩、リアクション悪くないですか？」
「や、待て、落ち着け、話せば分かる」
「それ死亡フラグじゃないですか……」
「あ、お前もこのくだり知ってんだな」
「わたしのことなんだと思ってるんですかね……」
「待て待て、あんまり押し付けるな。あんまり押し付けるな」
「えー？　何でですかー？」
「お、お前なぁ……」
いろはと行為に及ぶようになってから、この子は目に見えて大きくなった。
ちなみにそれは身長ではなく、精神的な話でもない。もちろんこの二つも成長はしてると思うけど。
要はまあ、うん。
メロン的なね。
まだ成長中であることを思わせる張りのあるメロンの感触は何で

もないですごめんなさい。
「うぐ……」
幸せいっぱいの表情でにやつくいろはに、どう対応したものかと唸り声を上げる。
いろはの、校内での俺に対する懐き方は中々恥ずかしいもので。
家での甘え方に比べたら糖度９５％控えめくらいではあるのだけど、それでも未だに恥ずかしい。
家での話は全部書いたら多分誰かに消されるまであるので控えておく。
いろはの度重なる恥ずかしスキンシップのおかげか分からないけれども。
周りの視線も、冷たい目・嫉妬の炎の目が２割くらい、それ以外の「わぁ……」という感じの生温い視線が８割くらいになっていた。
元々視線やら噂話には敏感だったのに、更に敏感になってしまった節がある。
多分今円を使ったら３００メートルくらい広げられそう。一日一殺を信条に掲げたりはしてないです。
俺がそれとなく引き離そうとしても、あまり力が入れられないことを良いことにいろははうりうりと身体を擦り付けてくる。
振り向くと亜麻色の髪から甘い匂いが香って頭がくらくらするから始末に負えない。
「いろは、そろそろ、な？　部活に行く前に死んじまうから」
恥ずかしさ的な意味で。
尚も身体を捩って抵抗していると、不意にいろはの動きがぴたりと止まった。
何ぞやと思って振り返ると、頬をあざとく膨らませて上目遣いをしていて、拗ねた感情を前面に押し出している。
ちなみに、こんな表情を家に居る時にされたらとっくに押し倒してます。
ソファの上にぽすっとね。
「……なに」

迂闊に直視すると身体の内の狼的なサムシングが目覚めそうなので、顔を逸らしながらぽそぽそと手短に聞く。
すると、いろはは眉根を寄せてしゅんとした表情を俺に向けた。
「先輩……まだ恥ずかしいんですか？　そろそろ慣れてくださいよ～。レベルアップの時期ですよ？」
「何その進研ゼミみてぇな煽り……。無理だって。こんな衆人環視の中で俺からもイチャついた日には、次の朝日を拝める自信すら湧かねえよ」
「え～……。……家ではあんな恥ずかしいことするくせに」
「ちょっと待て。何で今声大きくしたんだ」
しかもほんの少しだけ。近くにいる人に微かに聞こえるくらい。
「昨日だって二人でソファに座ってるとき、わたしが手を重ねただけであんな……」
「何でしょうねぇ！『あんな……』からどんな文が続くんでしょうねぇ！」
俺がテンパって音量を上げてしまったことで、微妙にギャラリーが集い出した。
本当にまずい。
瞬間移動したい。
メガンテしたい。
それ自爆じゃねえか。
既にしてるわ。
俺が慌てふためいているのを見て、いろはがにやりと目を細めた。
口が三日月形になり、悪だくみの気配しかしない。
「えー？　先輩、あの時わたしのこと押しまふっ」
最終手段で、いろはの口を手で塞いだ。
ギャラリーから「え、何、あいつ鬼畜趣味なの？　引くわー」だの「でも生徒会長、ちょっとうっとりしてない？　需要と供給がマッチしてるのかな。良いなぁ……」だのと色々な言葉が聞こえてくる。後者はどうしたんだ一体。
いろはの口を押さえながら、背中を押してその場を離脱する。

ひと気の無い階段下まで来て、ようやくいろはを解放した。
「はぁ、はぁ、ふぅ……」
「……ぷはっ、はぁ、はぁ、あぅ……うぅぅ……」
……あれ？
俺の息切れと、いろはさんの息切れのテイストが何か違いますよ？
手を離すと、いろはは俺の袖を摘まんで切なげに息を荒げていた。口が微かに戦慄いていて、濃厚な官能の気配に肌がちりちりと騒ぎ立つ。
「え、えぇと、いろはさん……？」
恐る恐る声を掛けると、いろはがたまりかねたように俺の胸に顔をうずめた。
「先輩……だめですよぉ……あんな、風に、わたしの口、力強く押さえちゃ……わかってるでしょ……っ？」
切なげな吐息を漏らして顔を上げると、その瞳はもはや牝のそれになっていて。
あー、しまったと気付く。
初めからその気はあったのだけど、いろははどうやら筋金入りのドMのようで。
俺がいろはを強く抱きしめながらすると、尋常でない程の頻度で絶頂に達するようになっていた。
他にどういうことをすると気持ち良くなってくれるのかを探っていたのだけど、その内の一つとして口を押さえるとかなりの効果があることが分かった。
別に声を漏らしてはいけないという状況ではなくとも、口を塞いだ瞬間いろはの目つきが変わる。快感がぞわりと背筋を駆け抜けると同時に、たまらない嗜虐心が湧くのだ。
それからそういったことをちょくちょく繰り返して……恐らく、いろはは俺に口を塞がれるという行為が発情のスイッチになっていたのだろう。
……どれだけ天井知らずなんだ、この子のエロさは……。
時計をちらりと見る。

部室に行った際に遅刻だと思われないまでの時間は、精々あと15分程しかない。
「……わりぃな、いろは。ちょっと時間は短いが……」
「ぁ……っ？」
いろはの肩を抱いて、目の前の空き教室に入る。
放課後誰も来る事は無いと分かっているが、それでも人目につきづらいようにと、廊下から見て手前側の壁にいろはの背中を付けた。
「せん……ぱい……っ」
いろはが期待したような、それでいてどこか恥ずかしそうな、何よりも心底嬉しそうな顔をして……口をぱっくりと開けた。
目の前の極上の御馳走にごくりと喉を鳴らして。
いろはの肩を、力強く掴んだ。
× × ×
小さくOの字に入口を開けた空間に、紅い粘膜を捩じ込む。
「ひゃぅぅぅ……っ」
ふやけた甘い声が漏れると同時に、いろはの華奢な身体を力いっぱい抱きしめる。
互いに制服を纏っていることも忘れるくらい、ぎりぎりと締め付けて密着する。
時間制限付きで、しかもいつイレギュラーに人が来るか分からない状況というのが、二人を燃え上がらせるスパイスになったのだろうか。
いろはの顔は、一瞬で行為をしているときのそれになった。
「んむぅぅ……ちゅっ、はふぅぁっ、ひゃぅぅっ、んふぅぅ……ちゅっ、ちゅくっ、ちゅるるる……」
二人の唾液が混ざり合い、吐息に濡れる。
強引に舌を引きずり出し、性器のごとく丹念に舐る。
いろはの奥に奥に侵入して、蹂躙する。
互いの息を呑み合って、肺に染み込ませる。
いろはが腰をくねらせ、膝をがくつかせる。
すがるように絡みついて、身体中をこすり付ける。

か弱い獲物と化したいろはを、肉食獣さながらに捕食する。
身を捩るいろはを更に強く抱きしめて、何度も舌をねじ込む。
何度も。何度も。何度も。
「あっ……あがぁ……っ」
いろはが涙を流しながら、ゆっくりと標高を下げていく。
膝を床に付けた体勢になると、震える手を俺の腰に添えた。
いろはの顔をがしりと掴み、身体を屈めて紅い欲望をねじ込む。
烈しさを増した蹂躙は、いろはの瞳から色を奪い取っていく。
俺の腰に添えられたいろはの手が、だらりと下げられた。
ゆらゆらと幽鬼のごとく揺れる手は、快感に完全に屈したことを示していた。
「ひゃっ……ひゃうぅ……もう、もう……んむぅ……っ」
いろはの様子を確認する為口を離すと、限界寸前のようだった。
すかさず可愛らしい口を犯して、一方的に唾液を流し込みながら口腔粘膜を舐る。
「うぅぅ……うぅぅ……うぅぅぅぅ……っ！」
いろはの手が俺の腰を掴んで、苦しそうに、嬉しそうに、ぶるぶると震える。
直後、いろはの全身が激しく戦慄いた。
「……」
口を離すと、俺の舌の先から伸びた糸が、いろはが惚けて開けっ放しにした口にてろりと吸い込まれていく。
流れ込む糸をはぷっと呑み込んだいろはが、うっとりとした表情でこくりと呑み込んだ。
「……いろは、収まったか？」
いろはの頬に優しくさすりながら問い掛けると、緩みきった頬にしあわせいっぱいの笑みを乗せて目を細めた。
「えへへ……大満足です」
「……っ、……そうか」
あんまりにも可愛いもんで、俺も膝立ちになってきゅっと抱きしめた。

「それじゃ……また、部活の後でな」
行って立ち上がると、くいと袖を引っ張られた。
「先輩。……ごめんなさい、あと少しだけ時間いいですか？」
先程までとは違って、その頬は初心で可憐な朱に染まっていた。
「どうした」
「今日……お泊まりして、良いですか？」
「……っ」
今まで幾度と無く聞いた言葉ではあったけれど。
性行為と呼んで差し支えない程濃厚な口付けをしたことで、聞き慣れたはずの言葉がひどく濃厚に耳朶から染み入った。
続く。

（2）

そんな訳で、ゴールデンウィーク前夜から先輩の家にお泊まりすることになった。

言い出したのはわたしだけど、わたしが言わなかったらほぼ確実に先輩から誘ってくれたと思う。

その自信はある。

すごくある。

ふふん。

今日。

先輩と放課後にキスした後（すごい言い方だ。でも事実だししょうがない）。

生徒会の仕事がその日は無かったので、先輩が奉仕部に行っている間にお泊まりの準備をする旨を伝えた。

といっても、既に準備は万全だったんだけど。

念の為荷物の最終チェックをして、それでも時間が余ったから街中をぷらぷらする。

先輩と出かけた時、どこに行ったら先輩が楽しめるかなーなんて考えながら、にやけるのを必死で抑えながら、ぽてぽてと歩く。

といっても、先輩が特定の場所に興味を示すことはほとんど無くて（こういうと動物みたいだ。おサルさんであるのには変わらないけど）、

「それならどういう所が良いんですかー」

とぷりぷり怒ると（これ、先輩に結構好評だったりする。ソースは先輩のリアクション）、

「や、お前が楽しいなら……ていうかどこでも正直、お前がいるな……何でもない」

なんて言われちゃったから何かもうどうしようもなくて先輩大好きですよもうまったく。

そろそろ程良い時間になってきたので、先輩の家に向かう。

歩きながら、自分の唇に人差し指を押し当てる。

ぷにぷに。
うん、ぷるぷるだ。
ぷにぷに。
「……」
先輩とついさっきしたキスを思い出して、あの情熱的な口付けを思い出しただけで膝から崩れ落ちそうになる。
先輩との相性は、あらゆる意味でどんどん良くなってる。
例えば、手。
初めて手を繋いだ時は、それはもうどきどきした。
今も手を繋ぐとどきどきする。
けれど、そのどきどきは初々しさとはかけ離れているもので。
それでいて、とても心地良いもの。
先輩とデートしている時に手を繋ぐと、先輩はとても優しく握ってくれる。
それでいて、人混みなんかでは力強く握ってくれて、絶対離れないようにしてくれる。
たまにその状態で間を人が通ろうとして、二人の腕がぴーんと張っちゃうこともあるけど、それはご愛嬌。
キスする時。
わたしを壁やベッドに押し付けて手を繋いだ時は、わたしを逃がさないという合図。
わたしの指と指の間にするりと忍び込んでくる先輩の指は、わたしに屈服を強制してくる。
それが、たまらなく、気持ち良い。
キスしている時にそれをやられると、もう頭の中が真っ白になる。
先輩と繋がっている時。
この時に繋ぐ手は本当に、洒落にならない。
先輩はキスの時よりも更にぎちぎちと握りしめて、わたしが痛みで顔を歪めそうになる寸前の強さで拘束してくる。
キスの時が屈服の強制なら、繋がっている時は絶対服従の強制だ。
もう何度もイっちゃって、息も絶え絶えになっている所で、先輩が

一際強く手を握り、腰をめいっぱい打ち付けて、わたしの中に愛情を注ぎ込む。
その瞬間、子宮の入り口が降りてきて先輩の先っぽとキスをするのが分かってしまう。
それが、たまらなく幸せだ。
……何で例その一だけでこんなになるんだ、わたし。
もっと喋りたい。
ちなみに、学校生活の話をしてみると。
先輩との仲を隠さないでいたら、クラスメイトに盛大にイジられるようになった。
何でも以前まではあざとさとか腹黒さとかが見え隠れしてて、周りの（特に）女子は警戒してる部分が大きかったらしい。失礼な話だなぁもう。
けれど、先輩とこういう仲になってからは、周りの男女共に「何この可愛い生き物」という認識になったらしい。更に失礼な話になってた。びっくりだ。
先輩は依然として謎が多い人物と見なされているようで、二人でどんな風に過ごしているのかと興味を持たれた。
話したいけど、話し出したら絶対止まらない。
そう思って最初ははぐらかしていたんだけど、やがて周りの空気に耐え兼ねて、つい漏らしてしまった。
最初に話したのは休日の女子会で、行きつけのカフェに行って仲良し女子グループで話していた時だったんだけど……何かみんなして、「砂糖を吐いた」「どうしてくれる、砂糖を吐いたぞ」「甘……砂糖……砂糖……」なんてことを言い始めた。阿鼻叫喚ってこういう状態を言うのかもしれない。
ちなみにその店はコーヒーがおかわり自由なんだけど、その日に限ってとんでもない勢いでおかわりされ続けた。
しかもみんなブラックで飲んじゃうから、途中で店員さんが心配して、「お客さん、飲み過ぎですよ」なんていう風に言ってくれた。
それに対して友達が「飲まなきゃやってらんないんですよぉ！」と

答えるっていう。
地獄絵図みたいだった。
絶対カフェでする会話じゃないよねあれ。
そんなこんなで、先輩との恋仲になったことで（遠回しに言ってた意味が無い）、わたしの立ち位置が結果としてより安定した。
別に不安定になっても全然構わないくらいだったんだけど、先輩が喜んでくれたから良しとする。
「……ふぅ」
先輩の家が近付いてきた。
お泊まりする気満々で準備はしてきたけど、実のところ荷物はそんなに多くない。少し大きめのバッグで事足りる。
というのも、先輩の部屋にちゃっかり私物を増やしているからだ。
最近のマイブームとしては、
「せんぱーい、わたしのあの服、先輩の部屋に置いてますよね？」
「ばっ、おまっ、こらっ、そういうことを公衆の面前で言うな……っ！」
というやりとり。
ちなみに先輩にしか聞こえない声で言ってるんだけど、それでも先輩は毎回大いに慌てる。
可愛いなぁもう。
それでも調子に乗りすぎると結構きつめのお仕置きをされちゃうんだけど。
あれが癖になったらいよいよわたしも変態の仲間入り（＝先輩の仲間入り）しちゃう可能性がある。
先輩の仲間入りと狐の嫁入りって何か似て……ないな、うん。
先輩の家にはもう数えきれないくらい泊まってるんだけど、先輩のご両親は忙しくて夜遅く帰ってこられたり、あるいは帰ってこなかったり、という日にしか行ったことがなかった。
まあ先輩が意図的に鉢合わせを避けていたんだろうなぁ。
恥ずかしかったんだと思う。
けれど少し前、たまたま早く帰れたというお母さまとばったり出くわして（先輩も把握してなかったらしい）、初めてお話した。

以下、その時の会話。
わたしがリビングでお茶を淹れようと先輩の部屋を出た際、偶然出くわした時。
「ただいまー……って、あら？　あらあら？」
お母さまは仕事帰りで疲れた顔をしていたのに、わたしを見てきょとんとすると、途端に目を輝かせてわたしに近付いてきた。
背筋を伸ばして、腰の前で手を重ねる。
「あ、こ、こんばんは……っ。は、初めまして、わ、わたし、一色いろはと申します。せ、せせ、先輩、あ、比企谷先輩、あ、え、ええっと、八幡先輩と、そ、その……っ」
「あはは、もっと気楽に話してくれて良いのよ～」
未知との遭遇（失礼）でがちがちに緊張しているわたしを見て、お母さまがにっこりと笑う。
小町ちゃんはお母さま似なんだなと、場違いながらそう思った。
「へー？　ふーん？　ほーん？」
お母さまはにこにこと微笑みながら、わたしをじっくり見つめる。
ちょっと戸惑ったけど、その視線はわたしに対する好意で満ち満ちていて、不思議と心地良かった。
ていうか唸り方が兄妹とそっくりだ。
この場合先輩と小町ちゃんがお母さまに似てる訳だけど。
「あなたのこと、小町から聞いてるわよ、いろはさん」
「え、そ、そうなんですか？」
驚……きはしたけれど、小町ちゃんなら確かにやりかねないと思った。先輩は絶対言わなそうだし。
しかし、前情報があるというのなら、完全な初対面よりも幾分楽だ。
「何でも、八幡とお互いとぞっこんなんですってね」
「……」
前言撤回。
死ぬほど恥ずかしい。
「あ、ええっと、その……」
顔が熱いなと思いながら言葉に詰まっていると、先輩がとてとと駆

け付けてきた。
「いろは、どうした？　さっきから話し声が……って、うおっ」
先輩が素っ頓狂な声を上げる。可愛い。
先輩はお母さまとわたしを交互に見て、目を泳がせた。
お母さまはにやーっと口の端を吊り上げて、ちょっと邪悪な笑みを浮かべた。邪悪って言っちゃった。
「八幡……まさか、あんたがこんなに可愛くて良い子を捕まえるなんてねぇ」
「い、いいだろ別に……」
「ほんと良くやった！　いろはさん、小町から聞いてる通り、いや、聞いてた以上に可愛くてもーお母さん嬉しいわ！　仕事の疲れも吹っ飛んじゃった。今日は久しぶりに夕飯を作ろうかな」
そう言って、お母さまが太陽みたいに笑う。
本当に嬉しいんだと分かって、それが照れくさくて、わたしも先輩も俯いてしまう。
あ、でも。
「あ、あの、お疲れですよね？　それでしたら、良ければわたしが作りますけど……」
言うと、お母さまがぴたりと止まった。
いけない、何か変なこと言っちゃったかな……と思っていると、どうやらそれは杞憂だということが分かった。
「い、いろはさん……あなた、どれだけ良い子なの……っ！　よし、それじゃあ一緒に作ろう！」
「え、ええ!?」
「いいからいいから。色々お話聞きたいし、ね？」
言って、お母さまがぱちっとウインクをする。あ、すごく可愛い。
「は、はい……それなら、お言葉に甘えて……」
言葉のチョイスがおかしい気もしたけど、取り敢えず頷く。
「……ま、まあ、頑張ってくれ」
置いてきぼりをくらった先輩が、頭をがしがし掻きながら見送ってくれる。

お母さまは一旦着替えると言って部屋に戻ろうとしたけど、くるりと踵を返してわたしの両肩に手を置いた。
突然のことにびっくりするわたしの身体を先輩のいる方に向けて、わたしの肩にあごを乗せる。
先輩にもわたしにも話しかける体勢になって、にひっと笑った。
「そうだねぇ……よし、いろはさん。わたしのこと、『お義母さん』って呼んでいいからね」
『っ!?』
「あ、『お義母さま』も良いわねぇ。いろはさん、どっちが良い？」
「あ……お、お義母さま、で……」
「おいぃ!?　いろはっ!?」
先輩が慌てて、珍しくハイテンションでツッコむ。
けれどわたしはそれをイジる余裕も全くない。
うぅぅ……反射で答えちゃった……。
「なんだい八幡。あんたそういう気は無いのかい」
お母さま改めお義母さまが、からかうように言ってくる。
その声音には真剣さも混じっていて、どきりとする。
先輩、どう答えてくれるんだろう……？
「……そんなの、あるに決まってんだろ……」
「お？」
「わわ……っ」
わたしとお義母様が感嘆の声を上げる中、先輩は部屋にダッシュで戻ってしまった。
多分この後ベッドで悶え転がるんだろうなぁ。
ちなみにこの後、わたしとお義母さまの話がすごく弾んだのは言うまでもない。
以上、お義母さまとの会話の回想でした。
この日の夜。
先輩は、今日はそういう気になれないと、まるで倦怠期の夫婦みたいなことを言ったんだけど（よっぽど恥ずかしかったんだろう）。
抱きしめ合って寝ていたら、結局先輩から仕掛けてきた。相も変わ

らずおサルさんだ。
声は出さない方が良いということで、声を押し殺しながらの行為はすごく燃えた。
わたしが手で口を押さえようとすると、先輩はわたしの手首を掴んで騎乗位を楽しんでいた。
ほんと鬼畜だ、先輩。
すごく気持ち良かったけど。
口を手で押さえて良いぞと言ってくれたから塞ぐと、今度はうつ伏せで布団をかぶせて、もの凄い勢いで突かれた。
まるで襲われてるみたいな気持ちになって、貫かれても引き抜かれても、身体に電流が走ったかと思うくらい痙攣して感じてしまった。
獣みたいな声で泣くように鳴いて、先輩をきゅうきゅうと締め付けると、先輩が熱いのを沢山出してくれた。
それと同時に激しく達してしまって、お漏らしまでしてしまった。
翌朝、お義母さまと小町さん（どうやら話を共有したらしい）と先輩とで食卓を囲ったんだけど、なんかもう向かいの二人があまりにも幸せそうににやにやするもんだから、わたしと先輩は終始顔を赤くしていた。
なんだか、先輩の空間にどんどん馴染んでいくのが嬉しい。
先輩と話して。
先輩と笑って。
先輩と繋がって。
もっともっと、先輩を知りたい。
そんな風に思った所で、先輩の家に着いた。
続く。

（3）

先輩の家に着いて、ドアの前ですーはーすーはーと深呼吸をする。
ちょっと前までこんなことはしなかったんだけど。
お義母さま（改めて言うと恥ずかし過ぎて死にそう）と先日、こんな会話をした。
「いろはさん、いや、いろはちゃん。今度からうちに来る時は、もうインターホンを鳴らさなくて良いからね。自分の家だと思って入りなさい。私が言うんだから家族全員オーケーということだからね」
お義父さま（初めて言った。照れる）の序列が気になる……。
「え、あ、ええ!?　……は、はい、そうさせて頂きます……」
「なんなら『ただいま』って言ってもいいからね」
「そ、それはまだちょっと難易度が……」
「お？　お？　『まだ』って言ったね？　良いねぇ、将来有望だねぇ。うりうり～」
「あぅぅ」
「何あなた、可愛すぎるでしょう……」
思い出したら余計に恥ずかしくなった。
お義母さまと小町ちゃんの組み合わせ、強烈なんだよなぁ……楽しいんだけどね。
そんな訳で。
インターホンを鳴らさないが為の緊張と闘いながら、わたしは先輩の家のドアを開けた。
「お邪魔しま～す……」「そんなの言わなくて良いぞ」「ひゃうっ!?」
寝起きドッキリみたいにそろりと入ると、唐突にその声を拾われて変な声を上げてしまった。
目の前で頭をがしがしと掻いているのは、ただの愛しの先輩。
「びびびびっくりしたぁ……家ゾンビって居るんですね……」
「何その身近なゾンビ……居てほしくねぇし、そもそも俺はゾンビじゃねぇよ。ていうかお前、最近そういう言い方全然してなかったのに、急にどうした？　緊張でもしてたのか」

「べべべべ別に……」
「図星だったのか……何かすまん」
むぅ。
なんか悔しい。
あざとく頬を膨らませてじぃっと見つめると、先輩は頬を赤らめて顔を逸らした。何この人可愛いキスしたい。
それにしても。
「先輩。どうして玄関に居たんですか？　リビングに飲み物を求めて彷徨い歩いてたんですか？　それとも街に仲間を増やすべく出かけようとしてたんですか？」
「ゾンビ設定を引っ張るなよ」
まったく……と先輩がふぃーと息を吐く。
先輩のこの「ふぃー」って感じ、好きだったりする。
だって、
「……そろそろ、お前が来る頃だよなって思ってな。三分もしないうちにお前が来たから、俺の予測能力を全力で褒めてやりたい」
「……っ」
……息を吐いた後に続く言葉は、大抵わたしにとって嬉しい言葉だから。
わたしのわがままを聞いてくれたり。
デートのお誘いをしてくれたり。
わたしにせがまれて好きだと言ったり。
大抵というか、全部かもしれない。
わたしにとって、あの吐息は幸せな気持ちになる前兆なんだって、最近気付いた。
「……ゆ……」
「……ゆ？」
嬉しくて口元がむずむずするのを感じながら、
「……優秀なゾンビですね……」
「お前、よっぽど照れてんだな……」
照れ隠しをすると、一瞬で見破られてしまった。

むぅ、やるなぁ。キスしちゃうぞ。
いけない、痴女みたいだわたし。
痴女の定義って何だろう。
少なくとも先輩としてる時のわたしって絶対やっぱりこの話はここで終了何か危ない気がする！
一歩近付いて、上目遣いでじっと見つめる。
「……っ」
あ、先輩、喉が鳴った。すごくぶっちゃければ「たまんねぇ抱き付きてぇ」とか思ってる目だなこれは。ふふん。
「先輩」
少し息の混じった声で囁く。
「……なんだ？」
わー、先輩、すごい期待してる声だ。
でもごめんなさい、今のはフェイントです。悔しかったさっきのお返し。
満面の笑みで両手を先輩に差し出す。
とても恥ずかしくて言えなかった言葉を、
「ただいま」
幸せいっぱいの声で言う。
先輩はわたしの言葉を聞くと、きょとんとした顔をしてからふっと目を細めて、頬をぽりぽりと掻いた。
そしてわたしが伸ばした腕の意味に気付き、ちょっと迷った後（目が泳いでる。可愛い）腕をゆっくりと広げた。
「……おかえり」
「……っ」
先輩の声が耳から入って身体中に響いて、奥からじんわりと温かい気持ちが込み上げてくる。
あ、やば。
なんかちょっと泣きそう。
恥ずかしい所を見せる前に、先輩に抱き付く。
まだわたしは靴を脱いでいなかったから、いつも以上に身長差を感

じる。
なんだかずっと小さい時から先輩に包まれていたような気がして、すごく安心する。
「えへへ～……」
すぐに照れ隠しの言葉を続けようとしたんだけど、あんまり幸せなもんだから何も言えない。
先輩はわたしを抱きしめて、ゆっくり頭を撫でてくれる。
わー、どうしよう。これ毎日やってもらいたい。
自分の家に帰る前にわざわざここに来て一度このくだりをやってから帰りたい。
おかえりを二回言うという複雑な家庭になるけど。
先輩の意外と頼もしい胸元におでこをこすりつけると、先輩がびくっとした。
あ、これ多分悶えてるな。
大丈夫です先輩、わたしも相当きてますから。
ほんと喋れないし。
しばらく幸せに浸かった所で、やっとのことで先輩の胸から顔を上げる。ぽふっ。
「……えへへ、仕事帰りのわたしをひもの先輩が迎えてくれる、の巻～……」
「……何で忍たまなんだよ」
あと何でそんな恥ずかしそうなんだ、と囁いて、先輩がわたしの頬を撫でる。
……さっき照れ隠しで言おうと思った言葉を、時間を置いてそのまま言っちゃったから何か却って恥ずかしくなった。
何だよ「の巻」って、もう。
「あとな、ひもって言うな、ひもって」
「え～、じゃあ家ゾンビ？」
「なんで引っ張るんだそれ」
あ、恥ずかしさが収まってきた。チャンス。
「それならハウスゾンビですか」

「訳し方もなんか拙いっつの」
「じゃあゾンビハウスですね」
「それただのゾンビの館だろ」
　ですねって何で自信満々なんだ。あとゾンビって何回言うんだ、ゲシュタルト崩壊するだろ……と言って、先輩はわたしの頭をくしゃりと撫でた。あったかい。
　いつも以上に軽快なやりとりで、わたしの恥ずかしさもすっかり無くなっている。
　……と思っていたら。
「……俺はひもじゃない。主夫になるんだ」
　わわ。
「……あ、そ、う、です、よ、ね……」
「あ……お、おう」
　あ、あれ？
　なんか、先輩もわたしもすごい熱くなってるぞ？　おかしいな？
　離れると自分が恥ずかしがっているとバレるとでもお互いに思ったのか、抱きしめる腕に力を込める。あ、やば、これ余計に恥ずかしい。
　小声で「ばか……」「お前こそ……」と囁き合っていると、とててと聞き慣れた足音がした。
「あれーいろはさんもう来てたんですねこんにち甘ぐはぁっ！」
『!?』
　小走りで来た小町ちゃんが、吐血しながら膝から崩れ落ちて突っ伏した。
　瞬間的にサスペンスみたいな空気になって、わたしも先輩も固まる。なんか今わたしに話しかけたり状況の説明をしたり悲鳴を上げたりしなかった!?
「がふぁ……っ、な、なんでこの人たち、玄関でイチャついてんの……うぐ……っ」
『……』
　小町ちゃんの言葉を聞いて、お互いに目を合わせて、ふいと逸らす。

……確かに、これはちょっと……。
「……でも、わたしとしては今後も続けたいんですけど……」
「……まあ、悪くねぇんじゃねぇかな……」
言って、目を合わせて、照れくさそうに二人してにへっと笑う。
先輩の笑顔は相変わらず下手だけど、それも含めて好きだったりする。
「うぐぅ……追い打ち……っ！」
小町ちゃんがうつ伏せのまま、びくびくと痙攣する。ご、ごめんなさい……。
小町ちゃんが痙攣していると（すごい表現だ。けど事実だ）、カマクラちゃんがリビングからのっそりとてとてと近付いてきて、わたしを一瞥した後小町ちゃんを前足でてしてしと叩いた。
なーごなーごと鳴きながらてしてし。エサやりの途中とかだったのかな。
抱き合うカップル（バカップルなんだろうか、わたしたち）と、天使のように可愛い妹（ただし瀕死）と、可愛い猫ちゃん（ただし恐らく空腹）。
比企谷家は、気が抜ける程平和であったかい空間みたいだ。

続く。

（4）

先輩の家に入って（今度からは「帰って」という言い方を強制されそう。主に小町ちゃんとお義母さまに）、まずは洗面所でうがい手洗いをする。人の家に行った時にこういうことってあんまりしないなーとふと思った。いつの間にか、わたしはどんどんこの家に溶け込んで行ってるみたいだ。その内隙を突いて先輩と一緒に朝ご飯を食べてやろうかな、ふふふ。……もうやってた。

先輩と手を繋いで来てしまったので、先輩はわたしが手洗いうがいをしている間、忠犬のごとく待ってくれている。や、そんなことなかった。全力で「ねえ、これ何の時間なの？　俺要らないよね？」って顔をしてる。なんかぞくぞくするからそのままにしておこう。

洗面所を出ると、さっきまでカマクラちゃんに無尽蔵にてしてしされていた小町ちゃんが、リビングからひょっこり顔を覗かせた。可愛い。でもわたしたちを見てまた死にそうになってる。ご、ごめんなさい……。

「お兄ちゃん、いろはさん、夕ご飯は小町が作るよ。なので二人は部屋でくつろいでいてくださいね～」

「あ、お、おう。いつもすまねぇな」

先輩がお礼を言うと、小町ちゃんがどこから持って来たのかハンカチを取り出して、目尻を拭った。

「おとっつぁん、それは言わない約束だよ」

「……」

何この子、ノリ良すぎるし可愛すぎるんですけど。

……？

……何だろう、二人の今のやりとりを見てたら、何か……何だろう？　この感じ……何て言うか……。

「どうしたいろは、そんなにほっぺたを膨らませて。あざといぞ」

「え……」

先輩の言葉で初めて、自分の行動に気付く。そしてこの感情の正体に気付いてしまって、急に恥ずかしくなってしまった。

顔が熱い。手をぶんぶんと振って、慌てて取り繕う。
「そ、そうですよ、うん。先輩にたまにはあざとサービスをしてあげようかなと思いまして」
「？　……なんで急に……？　まあ、別に可愛いから良いけど……」
先輩は訝し気にしていたけれど、何とか誤魔化せた。ていうかさらっと可愛いって言われるとすごいどきどきするからやめてほしい。うそ、もっと言ってほしい。
この流れはこれで終了、良かった良かったと胸を撫で下ろしていると、小町ちゃんの目が急にきゅぴーんと光った。先輩曰くこの状態になったら「ヤマピカリャー」と言えば良いらしい。どこで言えば良いの？　地の文で？
よし。
ヤマピカリャー。
……この気持ちは何だろう。
小町ちゃんは目の光が収まると（すごい表現だ。けれど事実だからしょうがない）、わたしを見てふっふっふと笑い始めた。あ、なんかやばい予感。
「いろはさん、もしかして……さっきの小町とお兄ちゃんのやりとりに、やきもち焼いたんですか？」
「っ!?」
わわ。
核心も核心、本音のど真ん中を射抜かれて、一気に顔が熱くなる。
「い、いろは、大丈夫か？」
「え……」
再び、先輩の言葉で気付く。
わたし、両頬に手を当てて首をぶんぶん振っていた。どうやらこの行動で比企谷兄妹に多大なるダメージを与えたようで、二人とも胸をぎちぎちと掴んでいる。
「ていうか小町、どういう意味だよ？　俺にゃ全く分からんかったが」
先輩がはてと首を傾げながら言うと、小町ちゃんがあごを上げて先輩を見下し、「けっ」と吐き捨てるように言った。おぉっと、この子の

闇が見えたぞ……？
「ごみいちゃんはこれだから……」
「待て小町。ナチュラルにごみとお兄ちゃんの二単語を混ぜるな」
　あれ、何か二人のやりとりが始まったぞ？
「じゃあ……ごみ？」
「まさかの取捨選択」
「しょうがないから譲歩しよう。ごみ（お兄ちゃん）」
「なあ、お兄ちゃんとの関係性は括弧で括られる程度なのか？」
「ごみいちゃん@鬼畜サド野郎」
「なんでＴｗｉｔｔｅｒのアカウント名みたいに!?」
「鬼畜サド野郎@二日目西な１５―ａ」
「コミケに出展するの？　俺が？」
「内容はいろはさんとのプレイの数々」
「何それちょっと燃える」
「引いた」
「ご、ごめんなさい……」
「言っとくけど小町が居る時、『今日は小町がいるから静かに……な？』とか言ってるの全部聞こえてるからね？」
「俺を殺してくれ」
「あれで結構小町も興奮してる節はあるのです」
「流石俺の妹だ」
「うるさい性欲の化身め」
「いくら俺だからって何でも言って良い訳じゃないからな？」
「え、なにお兄ちゃん、いろはさんだけで飽き足らず小町まで……？」
「待てこら、何で後ずさったんだ。あれ、なんでいろはも後ずさってんだ!?」
　……。
　何このテンポの良い会話……。
　ここで、小町ちゃんがわたしに視線を向けた。先輩は繰り返されるツッコミの強要で疲れ果てている。この後大丈夫かなぁ。
「ほら、お兄ちゃん。いろはさんを見てみなよ」

「え……あ」
「？　……あぅ……」
二人が視線を向けて、三度気付く。
わたし、ほっぺたを膨らませてた。それもぷっくりと。
「いろはさん、小町とお兄ちゃんのやりとりで疎外感を感じちゃってるんだよ。妬いてるんだよ」
「……いろは、そうなのか？」
「あぅぅ……」
何これ、何のいじめ？　恥ずかしくて死んじゃうよぉ！
顔を手で覆ってあうあう言うと、二方向から「がふぁっ！」と聞こえた。何このシンクロ具合……。
先輩が吐血を手で拭いながら（ちょっと光景が過激すぎるんだけど）、頬をぽりぽりと掻いてちらりとわたしを見た。
「まあ……その、なんだ、俺と小町は今まで十五年間の付き合いがあるからな。自然にこうなるって。だからまあ、お前とも、その、な、これから先過ごす時間で、まあ、なに、うん……」
「……」
「……」
「……」
三者、沈黙。
どうしたら良いか分からない。でも、この会話は終わらせないと死んじゃう。しかも全員。
先輩にとてとてと近付いて（さっき後ずさった分、変な距離が開いてた）、袖をちょんとつまむ。
どうしよう、何を言おう。
……よし、手短に行こう。
「先輩……その、これからも……よろしくお願いします」
恥ずかしさから、自然と上目遣いで言ってしまった。
『……っ』
先輩と小町ちゃんが、膝から崩れ落ちた。
二人が回復した後、わたしはやっぱり小町ちゃんのお料理を手伝う

ことにした。小町ちゃんにだけ働かせて、わたしと先輩だけ遊んでるなんて気が進まないし。今まで何回かそういうパターンがあったんだけど、流石に申し訳なさが溢れ出てきた。次からは毎回ちゃんとお手伝いしよう、うん。
「い、いろはさん……！」
手伝う旨を告げると、小町ちゃんが目に涙を滲ませて口元を押さえた。この子感情表現が豊か過ぎるよ……。
先輩がどうするかと言う話になったんだけど、先輩は勉強でわたしが苦手な所をどう教えるか計画を立てると言ってくれた。勉強も多少する気だったので、そう言ってもらえるのは嬉しい。
「先輩。わたし、数学が苦手です」
「奇遇だな、俺もだ」
「ベクトルが苦手なんですよね」
「あんなのただの矢印だろ」
「……これ、一緒に勉強した方が良くないですか？」
「……そうだな、あんまり選択肢を狭めるのも難だしな」
「そうですそうです、それで二人とも頑張って勉強して、先輩と同じ大学にわたしも入って……えへへへへ」
「おいばかやめろここでそんな風ににやけたら小町が」
小町ちゃんが吐血して倒れた。
そんな会話をしつつ、現在。
小町ちゃんと二人で、ひたすら料理に勤しんでいる。
「やー、いろはさんもすっかり比企谷家に馴染みましたねー」
「そ、そうかな……？」
「そうですそうです！　いろはさん、間違えた、比企谷さん」
「はぅ……」
「……」
「小町ちゃん……今日血を吐きすぎじゃない？　大丈夫？」
パッと見軽くホラーみたいな絵面になってる。
「何でしょう、いろはさんのこの凶悪な可愛さ……いっそここに住んでほしいくらいです」

「え、ええ!?　そんな……あ、でも先輩がここから大学に通うならありなのかな……いやでもそもそも正式な許可が取れてないし……ていうかちゃんと一緒にならない内にそんなことしたらもっと好きになっちゃうし……」
「いろはさん」
「なに？　小町ちゃん」
「小町を殺す気ですか」
「ご、ごめんなさい……」
こんな会話をしつつ、夕飯の準備を終えた。
そして夕ご飯も楽しく食べた。喋った内容としては大体さっきまでと同じ感じ。先輩も小町ちゃんも死に過ぎてもう訳が分かんなかった……。
ご飯を食べて、洗い物をして、歯を磨いて。
当たり前のように先輩とこういうことをすると、幸せで胸がむずむずする。わたしの部屋だったら枕を抱きしめてごろごろするんだけど、流石にまだそこまでは出来そうにない。本人がいるしね。
「いろは、行くか」
「あ、は、はい……っ」
先輩がわたしの手を掴んで、部屋に連れていく。手を握る力が少しだけ強い。我慢してたのかな、って思った。そう考えると、身体の奥底がずくんと疼く。
先輩が部屋のドアを開ける。
先輩も、小町ちゃんも、お義母さまも、自分の家だと思って良いと言ってくれるけど、まだしばらくの間はそう思えそうにない。
だって、先輩の部屋に入るとき、毎回どきどきしてしまうから。
今だってそうだ。
今日は先輩に何をしようかな。
今日は先輩に何をしてもらおうかな。
今日は、先輩と何をしようかな。
心地良く湧き上がる幸せに、口元がむずむずするのを感じながら、先輩に続いて部屋に入った。

続く。

（5）

いろはを連れて部屋の中に入る。気付けば、いろはの手をいつもより強く握っていた。いろはもそれを感じ取っているようで、頬を朱に染めている。小町と三人で交わす会話も本当に楽しいんだけど、やっぱり今日はどこか気持ちが急いている節があった。放課後にあれだけのことをしたのだから、尚更に。

「……」

部屋に入って、取り敢えず座ろうかと思ったら……いろはが何やらドアをじっと見ている。何をしているのかと思ったのだけど、数秒程でこの子の意図が読めた。

手を伸ばして、ドアの鍵をかちゃりと閉める。いろはが小さく喉を鳴らすのが聞こえた。

ドアを背にした状態で、いろはが俺をじっと見つめる。亜麻色のセミロングの髪がふわりと揺れて、甘い香りが鼻腔を擽る。普段こういう仕草をする時は、俺をからかおうと、魅了しようとしているのだと知っている。しかし今みたいな状況下では、少し意味合いが変わってくる。

……そのしっとりと濡れた目が、俺を誘っている。

そんな、単純で、複雑な意味。

「ひゃん……っ」

いろはの両耳の横を通り過ぎて、ドアに手を置く。いろはは胸の前で手を握り締めて、心細げに震えている。歯磨き粉の名残が微かに香って、いろはの唇がすぐ目の前にあることを認識させてくれる。

「いろは……今日は、どうしたい？」

「……え……？」

俺の質問に、いろはが湿った声で返す。

「今日からしばらくはその、な？　一緒に過ごせるから……なんかこう、色々試してみたいって気持ちはあってだな……」

予め考えていたことではあったのだけど。話すのも恥ずかしい内容だったので、妙にしどろもどろな調子になってしまう。いろはは俺

の話を聞いて、くすりと笑った。そして艶っぽく目を細める。
「そうですね、わたしは――」
×　×　×
――いろは……今日は、どうしたい？　――
先輩の言葉の意図が、最初は分からなかった。普段から先輩はわたしとする時に、マメにこんな感じで良いかどうかと尋ねてくれるし、そのタイミングも適度だから上手い具合に望みを叶えてくれてる。それが本当に嬉しいし、先輩優しいなって思うんだけど。
……。
……わたし、先輩のこと好きすぎでしょ……。
先輩がせっかく壁ドンをしてるのに頬をぽりぽりと掻き始めた時、締まらないな～と思いつつも「あ、これは照れてるな」という事が分かった。きっと先輩はわたしがにやけちゃうようなことを言ってくれるというサインだからだ。
――今日からしばらくはその、な？　――
案の定、先輩が紡いだ言葉はこっちがむずむずするくらい照れくさい言葉だった。先輩顔赤いよ、可愛いなぁもう。
でも、そっか、今まで試してないことか……。
試してないことは沢山あるけど、普段は本当に満足してるからなぁ。不満と言えば翌日も学校って日にたくさんしちゃって、遅刻しそうになるくらいなんだけど。間に合っても不自然な動きをしちゃってたら女友達に目ざとく見つけられて、「あのヘドバンの人と朝までしてたの？」とか死ぬほど恥ずかしい質問をされちゃうから大変なんだよね。
うーん、どうしよう。
せっかくだから、普段まずやらないことを提案してみたいんだけどな。
うーん……。
……。
……あ。
思いついた。

でもこれ……大丈夫かな？
何が大丈夫か心配してるかというと、わたしの頭なんだけど。
いけない、先輩としすぎてこんな発想が浮かぶようになっちゃった。
でもなぁ……すごくどきどきしそうだなぁ……。
……ま、いっか、うん。
言っちゃおう。
「先輩、思いついたことがあるんですけど……良いですか？」
「ああ、何でもござれだ」
先輩が器大きめの表情で頷く（前に「無駄に偉そうですね」って言ったらすごい凹まれたから、その後はツッコまないようにしてる。ひどくなってきたらまた言おう）。
……いいのかなぁ。
「ふふ、あのですね――」
先輩、絶対後悔すると思うんだけどなぁ。
……恥ずかしさで。

× × ×

「……いろは」
「……なんですか？」
「……お前、ばかだろ」
「先輩ほどではないです」
「だからって、こんな……」
「そんなこと言いながら、せんぱいのここ……すごいことになってますよ？」
「これはその……うん、お前がエロ可愛いのが悪い、うん」
「あぅ……」
俺の前に立っているいろはが、両頬に手を当てて恥ずかしそうに頬を赤らめた。
いろはの提案は、俺の予想の斜め上を行くものだった。
『世間にはどんなプレイがあるのか、調べてから決めたいんです』
『ああ、確かにそれは良いな。今調べるのか？』

『はい』
『そうか、じゃあ俺はお茶でも淹れてくるか』
『何でですかおサルさん』
『俺はまだおサルさんじゃない』
『まだ、なんですね……』
『こほんこほん、このくだりはいいとして。え、なに、いろはが一人で調べるんじゃないのか？』
『それじゃその間先輩は欲求不満をこじらせたおサルさんになっちゃうじゃないですか』
『まだ言うか』
『ずっと言い続けます』
『道は険しいな……』
『だから、その……一緒に調べたいんです』
『ふむ。じゃあテーブルにパソコン置くか』
『あ、その……勉強机で見たいんです』
『？　椅子は一つしかねえから、俺が立つことになるんだけど』
『そうやって自然とわたしを座らせるように考えちゃう先輩がすごく好きです』
『俺今ストレートの剛速球を心臓に食らって死にそうなんだけど』
『やーいやーい先輩の初心（うぶ）ザルさーん』
　海猿みたい。
『押し倒すぞ』
『望むところです』
『望まれた……』
『脱線しすぎですよ先輩、ほんとダメだなぁ』
『ぷりぷり怒んなよ。可愛いだろうが』
『あぅ……』
『お前も直球に弱いな……』
『そんなことより。その、椅子は一つで良いんです。あと、どっちも座ります』
『え、なに、俺がいろはの上に乗るのか』

『強めのビンタしますよ』
『ごめんなさい』
『えぇっとですね……やり方なんですけど……耳貸してくれますか』
『なんで二人きりなのに……あいよ』
『ごによごによごによ……』
『……いろは』
『……なんですか？』
『……お前、ばかだろ』
そんなやりとりを交わしていた。
今俺は、勉強机にノートＰＣを置いて椅子に座っている。
……肉棒を曝け出した状態で。
そしていろはは今、下着だけを脱いだ状態で俺の前に佇んでいる。
電気は薄明かりにしていて、目の前のパソコンが煌々と光を放って俺たちを照らしている。
いろはがしようとしているのは、「様々なプレイを二人で検索しながら交わる」というものだった。プレイを探す時点で既にかなり過激だと思うんですけどどうなんでしょうか。
「あうぅ……」
下着を着ない為にすーすーするのが気になるのか、いろはが頬を赤らめながらもじもじと内股をこすり合わせる様が何とも可愛らしい。ちなみにいろはのこの仕草を見て、俺はものの数秒でがちがちになってしまった。
「そ、そそそ、それじゃあ先輩、調べましょうか」
「お、おう」
二人とも妙に上ずった声で喋る。裏返りそう。
俺が足を閉じ気味にすると、いろははおずおずと俺の前に来て背を向けて、ゆっくりと足を広げた。動きの一つ一つに底知れぬ期待感が高まる。
「……いろは」
「……なんですか？」
「スカート、捲っていいか？」

「変態だーー！」
「今さらだろ⁉」
今さらだろうが何だろうが。
完全に変態の台詞だった。
流石にだめかーと悲しみに暮れていると、いろはがちらりとこちらを見やった。
「……でも、その……捲らないと、……入れづらいですよね？」
「……あ、ああ、そうだな」
「……捲りたいですか？　捲るの見たいですか？」
「贅沢すぎる悩みだから、今回選ばなかった方を後日やらせて頂きたい」
「……おサルさんだやっぱり」
「……否定できねぇわ」
盛ってます、盛ってます。
「それで……どっちが良いですか？」
「……捲って、見せてほしい」
「……っ」
いろはが小さく喉を鳴らした。机に手を付いて前屈みになり、俺に尻を突き出すようにすると、震える手をスカートの裾に添えた。
「……は、い……っ、どうぞ……っ」
掠れた声でいろはが囁くと、ミニスカートをゆっくりと捲り始める。
「……う……お……っ」
感嘆の声が漏れ出た。
徐々にその姿を見せる双丘が、とても新鮮に見える。見慣れて、けれどそれでも飽くことなく俺を興奮させてくれる桃尻が、今日は特に劣情を煽ってくれる。恥部は影になってあまり見えないが、内股を伝う発情の滴に気付くと、精巣がずくんと疼いた。
「……あぅ、あぅぅぅ……っ」
いろはが今にも泣き出しそうな声を出して、俺に流し目を送る。今すぐ突き入れて無茶苦茶にしたい本能を必死で抑えながら、いろはに

呼びかける。
「いろは。そのまま、自分で入れてくれるか？」
「……っ。……せんぱいの、えっち……っ」
いろはが振り返って、泣きそうな顔で笑う。
パソコンの光で影を帯びたその表情は、一目見ただけで陶酔してしまう程淫靡なものだった。

続く。

（6）

死ぬ程恥ずかしい。

それが、今の気持ちだった。

「あぅぅ……」

思わず漏らしてしまう声は、何にも取り繕うことが出来ない。それが、どうしようもない程に恥ずかしい。でも、そんな声が先輩をめいっぱい興奮させることを知っている。先輩の手を見ると、わきわきさせては止めるのを繰り返してる。あれは襲いたくてしょうがないけど必死で我慢してる動きだ。バレてないつもりなのが可愛いし、自分がやりたいままにしない優しさに胸がきゅんと鳴る。全くもう、自重してほしい。うそ、自重しなくていいや。

……。

「あぅぅ……」

だ、だめだ。

他のことを考えても、恥ずかしいものは恥ずかしい。

だって、自分でスカートを捲ってるんだよ？　しかも下着を着けてないんだよ？

しかも、先輩はわたしに、自分で入れてって……。

心臓がどうしようもないくらいに高鳴ってる。ばくばくばくばくと響く心臓は、一体何に対して緊張しているんだろう。

「ひ……っ」

変な声が出てしまった。　時折お尻に触れる、先輩のものが焼けるように熱い。きっとわたしの身体も、風邪を引いてるんじゃないかってくらい熱い。どうしよう、こんなの今入れたら、わたし、わたし……。

「ひぃんっ!?」

先輩の両手が、わたしの腰を掴んだ。あまり強く握ってる訳じゃないけど、逃がすつもりはないっていう意志が手のひらから伝わる。

恐る恐る振り返ると、先輩の目が獣みたいな目になってる。でも、必死で理性で抑え込もうとしてるみたいで、口を引き結んでる。

「せん……ぱい……っ」
震える声で先輩を呼んで、腰を掴んでいる手に自分の手を重ねる。どっちの手も熱くて、まるで溶け合うような感触。
「自分で入れますから……ちゃんと、見ててくださいね？」
ぎこちなく口角を上げると、先輩の逞しいものがびきっといきり立った。
×　×　×
先輩と手を重ねたまま、よたよたとした足取りで挿入すべき位置を探す。先輩が足を広げて、わたしは足を閉じた状態で入れようとしていた。
「この辺だな……」
先輩がぽそりと呟く。少し声が低くなってて、我慢も限界なんだと気付いた。
「んっ……くひぃ……っ」
自分の一番大事な穴に、先輩の先っぽを宛がっただけで……もう、歯がかちかちと鳴ってしまう。この状態でも、ものすごく気持ち良い。でも、ここから先の気持ち良さを、わたしは知っている。
怖い、でも入れたい。
恐い、でも挿れたい。
勇気を出して、腰をゆっくり下ろす。
一気に入れたら絶対やばい。慎重に、慎重に、慎重に……。
そう……思っていたのに。
「――あっ」
先輩の熱くて硬いものがほんの少し入っただけで、頭の中にばちばちと火花が散って。ゆっくり下ろすはずだった腰が、重力のままにすとんと落ちる。
「ひぐぅぅぅ……っ！」
身体の中を焼けた鉄の棒がごりごりと貫く感覚に恍惚としながら、わたしの意識は泡みたいに弾け飛んだ。
×　×　×
いろはが腰を下ろし始めた時、何となく予感はあった。

俺と手を重ねているが、その手は震えていてまるで力が入っていない。
亀頭に熱く湿った淫裂を宛がった時、いろはの声は上ずり、明らかにいつもより感度が増していることを知らせていた。
慎重に腰を下ろし始めた時も、これは絶対一気に行ってしまうやつだな、俺が支えておかないとな、なんて考えていたんだけども。
「――あっ」
「うぐ……っ!?」
――亀頭が埋まっただけなのに。まるで、いろはの身体の中に肉棒が溶けてしまったのかと思う程の、熱された蜜壺がもたらす極上の快感に、手の力がふっと抜けてしまった。
その瞬間。
「ひんっ」
「うぐぁぁぁ……っ!」
ずちゅんっ、といやらしい音を立てて。
いろはの発情しきった牝の穴が、俺の肉棒を根本まで呑み込んだ。反射的にいろはの身体を支えようと、いろはのお腹を抱きしめる。その瞬間を待ち構えていたのかと思う程の速度で、肉竿にざわざわと膣肉が絡みつき、収縮して締め上げてきた。予想を超えた肉悦に歯をかちかち鳴らしながら、腹をぶるぶると戦慄かせながらも何とか耐える。鈴口からカウパー液が噴きこぼれたが、いきなり射精するのは何とか避けることが出来た。
「……いろは?」
腕の中のいろははぐったりと脱力していて、くにゃりと首を傾げている。汗ばんだうなじの色香に更なる官能を覚えつつも、恐る恐るいろはの名を呼ぶ。
「……ふぇ?」
何度目かの呼びかけで、いろはの呆けた声が聞こえた。まるで寝起きのような声を聞いて、いろはの意識が飛んでしまったことを知る。
「大丈夫か?」
頭をくしゅくしゅと撫でながら尋ねる。いろは自身はほけっとし

たままだが、柔らかな膣がきゅむきゅむと締め付けてくる。
「せん……ぱい……」
いろはがゆっくり振り返り、にへっと淫蕩な笑みを浮かべる。その手がふらふらと机に伸びて――マウスを掴んだ。
「あぅ……」
前屈みになってマウスに手をかけたまま、尻を振るようにもぞもぞと動く。肉襞と肉竿がにゅくにゅくと触れ合う度に、俺もいろはもびくびくと震える。
「せんぱい、これ、不安定すぎます……」
いろはが眉根を寄せて、子犬のような顔で愚痴を言う。いろはの言うように、俺が支えていはいるものの足の置き場所が安定していないようで、身体がふにゃりふにゃりと曲がってしまっている。その度に快感が突き抜けて、正直気が気でない。
しかし……。
「や、この格好は本来不安定さを楽しむ為にあるんじゃないか？」
思ったことをそのまま口にする。
実際、長く楽しもうと言うならもっと他の体位があるし。
俺の言葉に、いろはは「おぉっ」と感嘆の声を漏らした。
「なるほど……一理ありますね。流石体位の達人だけあります」
「太鼓の達人みたいなイントネーションで言うな」
何て言ったか一瞬分かんなかったっての。字で見たら本来のイントネーションで再生されるだろ、これ。
しかし、実際この体勢では調べもののも何もあったものではないだろう。ていうかこの体勢で調べものしようとするって、俺らクレイジーにも程があるだろう。
「うーん……思ったより大変ですね、これ。やり方を変えましょう」
「序盤も序盤だぞ」
「いいんですー。あ、じゃあ、私が先輩に正面から抱き付いた状態でっていうのはどうですか？」
「それ、俺がただ調べるだけだろ。だったら俺が一人の時に調べるっての」

何か赤ん坊の子守りをしてるみたいになるし。
俺の言葉に、いろははうーんと唸って考え込む。左手で俺の手を、右手で俺の太ももをぺちぺちと叩いている。この子自由すぎない？
「じゃあ、テーブルにパソコンを置きましょう」
「お前……さっき、机にパソコンを置きたいって言っただろ」
「状況は刻一刻と変化するんだから、柔軟な対応が求められるんですよ？」
「現代社会に染まりきった言い方をするな……」
「あ、思い付きました。先輩先輩、耳貸してください」
「なんでこの距離で……」
「ごによごごによごによ……」
「……」
……。
二度目だけども。
まあ、うん。
耳元で囁かれるの、悪くないね、うん！
しかもやたら楽しそうに話すから、可愛くてしょうがない。
「……という訳です」
「お前可愛いな」
「ひゃうっ!?」
思ったことをそのまま垂れ流してしまったら、いろはが素っ頓狂な声を上げた。
「あ、わりぃ、本音がついうっか……ちょ、待って、締め付けるな、こら、こら……っ」
「あぅぅぅ……」
いろはさん、恥ずかしがりながら締め付けてくるのやめてほしい。
俺の口が滑ったことで話がブレたけども。
「まあ……良いか」
いろはが提案したアイディア（というか体位）は中々魅力的だった。
「まあ、やってみるか。準備するか……」
「はーい。……立てるかな……」

ぽしょりと呟いた言葉に、ふっと頬が緩む。
いろはの髪をくしくしと撫でて、腰を支えた。
――前言撤回、形勢逆転、急展開の雰囲気変更は当たり前。
二人で過ごす時間は、緩やかに続く。

続く。

（7）

「これ……気持ち良い……っ」

はふぅ、と息を吐いて、うっとり顔でいろはが呟く。距離があまりに近いので、何気なく吐いた吐息が耳朶をくすぐってもぞもぞとしてしまう。

いろはの要望通り、テーブルにパソコンを置いてその前に座ることにした。服は二人とも、何かもういいかーというラフなノリで全て脱いだ。俺が遠慮無しに脱ぐと未だに恥ずかしがるいろはの様子を楽しんでいる節はある。変態と言われたら一切否定出来ない。

そして今、俺はクッションの上で胡坐をかき、パソコンの正面に座っている。この体勢でいろはを横抱きして挿入し、いろはの右耳がパソコンに向いている状態になっていた。いろはの両腕は俺の首に回されて、俺のうなじや耳を楽しそうに撫で回している。この体位がよっぽど良かったのか、まるで温泉に浸かったような声を出すいろはの表情は、ふんにゃりとふやけている。頬がゆるゆるだ。

この体位は、いろはが希望したものだった。

「いろは……これ、どこで知ったんだ？」

体位としてはマニアックな気がして尋ねる。少なくとも俺は知らなかった。俺が質問をすると、いろはは無理矢理視線を逸らし、掠れた口笛を鳴らし始めた。可愛いけど全然誤魔化せてない。古書が好きなのだろうか。

「さ、さあ……女の勘ってやつですか」「調べるか」「ひゃうー！」

いろはの茶番をぶった切りググり始めると、止めたいのか何なのかぎゅっと抱き付いてきた。右耳にいろはの唇が押し当てられ、下半身に血流が集中する。

「はうぅ……やめてくださいよぅ、恥ずかしいですからぁ……あ、おっきくなった。せんぱい、わたしに抱きしめられて興奮しちゃったんですか？　えへへ」

「えーと『四十八手』は……と」

「やぁん！」

試しに出した名前にいろはが思い切り食いついた。俺に抱き付いていやいやと首を振る。亜麻色のセミロングの髪――少し伸びてきて、徐々に大人っぽくなってきている――が俺の頬にぺちぺち当たり、その度に甘い匂いがして思考がまとまらなくなる。
「ふむ、イラスト付きのがあるんだな……なになに」
「あうぅ……」
凶悪な可愛さにめげずに調べていくと、いろはは観念したのかぷしゅぅと萎んでしまった。右手でマウスを繰りながら、左手でいろはの頭をよしよしと撫でる。二の腕にいろはの膨らんできた果実が乗っかっているけど気にしない。
「せんぱい、なんで今おっきくなったんですか？」
……気にしない。
四十八手といっても様々なものがある。色々見ていきながらぶつぶつ呟く。
「こたつ隠れ……これ良いな。鴨の入り首……うおお、すげぇなこれ。いろは結構身体柔らかいし、やってみるか……。しぼり芙蓉は何か今の状態に近いな。……ってあれ？　今の体位が書かれてないな。なあ、いろは、これってどういう……って、え？」
思い付くままに呟いていたら、今の体位が書かれていないことに気付く。質問しようといろはの顔を見ると、何やら顔を真っ赤にしていた。膣もきゅんと締め付けてきて、びくびくと反応してしまう。
「……せんぱいは、ばかなんですが」
「え、あ、ええ？　何で？」
「せんぱいのが、その、入ってる状態で、一つ一つの体位をじっくり眺めて、それでどれがやりたいとかどれなら出来そうとか……そんなこと言われたら、恥ずかしいし、反応しちゃうに決まってるじゃないですか……っ」
「……っ、あ、す、すまん」
いろはは耳まで真っ赤にしたまま、唇を尖らせている。謝ると、眉根を寄せたまま不機嫌そうに俺に唇を重ねる。パッと見動いておらず穏やかに見えているだろうが、二人の身体は今繋がっている。互い

に燻らせている熱が唇から伝わり、肉棒が官能に震えた。
「……ぷはっ。……このサイトの次にあるやつを探してみてください」
「へ？　あ、ああ」
　言われた通り、検索で次にヒットしたサイトを探し始める。四十八手の中に「続」と書かれた括りがあり、座位の四十八手という書き方がされていた。
「そこにある……そう、それです」
　俺の頬にちゅっちゅっと口付けをしながら、いろはが誘導していく。
「……『虹の架け橋』……？　確かに、今の体位だな。またえらい洒落た名前だな……」
　というか、ここまですんなりと案内出来るということは……。
　いろはをちらりと見やると、唇を尖らせたまま、上目遣いで俺を見つめる。
「うぅ……バレたくなかったのに……」
「や、別に良いだろバレても。悪いことしてんじゃないんだから」
「だって……先輩を驚かせたかったし……喜ぶかなって……」
「……ちょっと可愛すぎて何言ってるのか分からん」
　両手で抱きしめて頭をくしくしと撫でると、どこか嬉しそうな声で「あうぅ」と唸るのが聞こえた。
「うぅ……」
　いろはが俯いたまま恥ずかしそうに唸るのが可愛くて。顔や耳、頬をひたすら撫でた。やっとのことで手を離して画面を見ると、既にスリープ状態に入っていた。スリープになるまでの時間は割と短く設定してるけど、それでもこれは……と、自分のいろはに対する入れ込み具合に呆れた。
「うし、じゃあ他のも調べるか」
　プレイ内容を探そうとしていたのに（それはそれで訳が分からない流れではあるが）、気付けば体位の勉強ばかりしていた。これはこれで今後の為にはなったが、もっと色々見てみよう。そう思って、マウ

スに触れてパスワードを入力した直後。
「……っ!?」
突然下腹部を襲った快感に目を瞠る。いろはを見ると、俺に抱き付いたまま陶然とした顔で俺を見つめて、腰をぬちゅぬちゅと前後にグラインドさせていた。足をぴっちり閉じている為に膣の締め付けが強く、その上左右に動かされるという普段味わうことの無い刺激に、一気に射精欲求が湧き起こる。
「ちょ、おい、いろは……っ」
「さっきはすごい恥ずかしかったから、お返しです。えへへぇ……こうすると、すごい気持ち良いですね……あんっ、あっ、あんっ……」
「〜〜〜〜〜〜〜〜」
俺の耳に吸い付いて、甘い喘ぎ声を直接脳に送り込んでくる。緩やかな腰の動きからは考えられないくらいの快感が湧き上がり、繋がった状態でずっと我慢していたのも相俟って、あっと言う間に限界が近付いていることを察知する。
それならいっそ――と、いろはの背中に腕を回し、そのまま右の乳房を掴んだ。
「はぁんっ!」
耳で囁かれる淫猥な嬌声が、一層艶を帯びる。ふくよかな乳房を揉みしだきながら、左手でいろはの両膝の裏を支えて、ゆっくりと腰を上下させる。いろはの前後の腰のグラインドと、俺の上下の動きが複雑に交わって、二人で同時に荒い息を吐いた。
「はふぁぁぁ……っ、んっ、これ、すごい、ひぃん、ひぇんぱい、ひぇんぱいぃ……」
甘ったるい声で猫のようにころころと甘えてくる。たまらず唇を重ねると、ゆっくりと差し出された舌が「わたしを嬲って」と伝えてきた。抽送と同様にねっとりと舐めしゃぶると、いろはの表情がとろとろになる。全く激しさの無い動きなのに、射精が全く我慢出来る気がしなかった。緩やかに上ってくる射精欲求がたまらなく心地良い。
いろはの目を、じっと見つめる。
うっとり目を細めて、いろはが頷く。

両手に力を込めて、しっかりと華奢な肢体を支える。
動きは速めずとも、二人は同時に限界が訪れた。
「はぷっ、ひぇんぱい、ひぇんぱいぃ……っ」
「いろは、いろは……っ」
互いの名を呼び、再び唇を重ねた瞬間。
ぶるりと身体が震えて、温かな膣内に大量の白濁を打ち注いだ。
「〜〜〜〜〜〜〜」
いろはの目が瞬き、唇が離れた。耳に口付けをして、ありったけの幸せな言葉を注ぎ込んでくる。
「はぁんっ、せんぱっ、いぃ……熱い、熱いよぉ……お腹の中、あったかくて、ぽかぽかして……ひぃんっ！　まだ止まらないのぉ？　やぁん……あっ、あっ、あっ……」
脳内に送り込まれるいろはの言葉が、あまりにも扇情的で。脈動が完全に収まるまでかなりかかった。
ようやく全てを注ぎ終わると、結合部からはこぽこぽと白濁が溢れ出していた。内ももを浸していく白濁に混じった透明な液は、いろはの愛液だろう。互いの肉悦の証が、ゆっくり零れ出て行く。
「はぁ、はぁ、はぁ……いろは、調べもの、続きするか？」
「……それは、今度にしましょう。もう、我慢出来ないです……」
いろはがはにかんで、俺の頬にキスをした。
「……しゃあねぇな」
俺も全く同じ気持ちだったが、敢えて言わない。俺の反応を見てくすくす笑っている所を見ると、どうやら見抜かれているようだ。心地良いむず痒さを覚えながら、ブラウザを閉じて電源を落とす。
「……明日、立てなくなっても良いか？」
「……だめですって言ってもするくせに」
「バレたか……」
二人でくすりと笑って、まずはいろはが立ち上がる。
「んしょ……」
可愛らしい声を上げる身体を支えて立ち上がらせると、いろはの真っ白な臀部が目の前にきた。結合部から僅かに滲んだ白濁に、ざわ

りと牡の欲求が波立つ。
「いろは……！」
「ひゃぁんっ!?」
すっくと立ち上がり、いろはの腰に手を添えて間髪入れずに挿入する。容易く牡の欲望を受け入れながら、中に入れば決して逃がすまいと締め付けてくる肉襞の感触に酔いしれながら。
「ひぃん……せんぱいのけだものぉ……っ」
口でそんなことを言いながらも、振り向くと嬉しそうな表情を浮かべるいろはがたまらなく愛おしくて。
そこから、ベッドに移るまで二回。ベッドに移ってからは数えきれないくらい。
いろはと繋がった。
いろはは途中から、まともな言葉を喋らなくなった。しかしどれだけ絶頂に達しても決して身体を離そうとせず、「もっと、もっとぉ……っ」とおねだりだけはしっかりして来たので、トイレに行く時間と水を飲む時間以外は全てセックスに宛てた。途中からはトイレに行く間やトイレの中でもいろはを犯し貫いた。完全に無言になると、俺と唇を重ねて、陰部を広げておねだりして、腰を振るという三つの挙動だけ行うようになった。何も言わないのに淫らな表情が劣情を煽って、勃起が収まることは無かった。
二人が力尽きて眠る頃には、空がうっすらと白んでいた。

続く。

（8）

そんなこんなで、冒頭に戻る。

何か一ヶ月以上経ってる気がするけど、まあ気のせいだろう。

「ん……」

微かに漏れる声の方に視線を向けると、いろはがこちらに背を向けて寝ている。寒いと思ったら毛布を根こそぎ持ってってやがった。全裸で毛布に包まるって、なんかこたつでぬくぬくしながらアイスを食べる贅沢と似てる気がする。超どうでもいいな。

取り敢えず、いろはがばっちり占領している毛布を取り返すことにする。「二人で入っても大丈夫なくらい大きい毛布を買う」と小町に言ったら、血を吐いて死にかけてたんだけど何でだろう。

「んむむ……」

寝ぼけているのか何なのか、いろはは毛布をがっちり腕で巻き込んで、まるで手放そうとしない。こんにゃろめ……。しかし唸り声も可愛いなこいつ。さて、どうしたもんだろう。

仰向けで、腕を組んで考える。ちなみに掛ける物が無くて全裸という抜群に頭の悪い状況だ。

「……北風と太陽理論で行くか」

まるで格好のつかない言葉で格好をつけて、いろはにじり寄る。いろはは寒いから毛布を手放そうとしないのだ。それは北風に吹かれてコートをがっちり掴んだ旅人と似ている。

ならば、俺はいろはの太陽になろう。

ごめんなさい。

気持ち悪いコメントに自分でドン引きしたところで、背中を向けて丸まっているいろは（茶色い毛布をがっつりかぶっているので、みのむしみたいになってる）にすり寄る。そして毛布をぺらりと捲って、いろはの背中にくっついた。

そう、これはいろはを温めて毛布（の俺の分）を取り戻す為の行為だ。

決して他意は無い。

「はぅ……」
いろはは身体をくっつけると、安心した声を漏らして毛布を掴む手の力を緩めた。心の中でガッツポーズを決めながら、するすると毛布を取り返していき――二人で包まった。二人羽織りってこんな感じなんだろうか。
「……」
さて、ここからどうしようか。
数時間前まで、散々二人で交わってシャワーまで浴びた（そこでも口でしてもらった）から、正直疲れ切ってる筈なんだけど。今の一連の流れで、すっかり目が覚めてしまった。それでも今の状況ならとても温かいから、もう少し包まっていればすぐに眠くなるだろう……なんて思っていると。
「んん……」
「おぉ……？」
いろはが俺に背を向けたまま、俺の右手をぱしりと取った。そしていろは自身の脇腹の上に二人の手を重ねると、満足したのかすやすやと寝息を立て始める。寝てるんだか起きてるんだか分からないような動きだった。寝ているのに俺の手をにぎにぎして「えへへ……」とか言われると俺死んでしまうんですけども。
「……」
身体の下で挟まれている左腕をいろはの頭に伸ばし、ベッドといろはの頭の間にぐりぐりとねじ込んでいく。いろはは「あぅぅ……」と唸りながらも頭をどかして、間もなく腕枕している状態になった。
「はぅぅ……」
俺の腕に左耳をこすりつけて、いろはが気持ち良さそうに声を漏らす。どうやら少し、というかだいぶ幼くなっているようだ。
腕枕している二の腕と、いろはの背中にくっついている身体の前面と、いろはと重ねた手から、いろはの柔らかな体温を感じる。二人の熱が混じり合って、徐々に鼓動が速まってくる。
ふと、フリーになっている自分の左手を見る。
あることを思い付いた瞬間、心臓が痛いくらいに跳ねた。既に下腹

部は興奮を硬度で示している。
数秒ばかり逡巡して、実行に移すことにした。
左手をそろりといろはの胸に伸ばして……豊満な乳房を優しく揉む。
「ん……っ」
いろはがぴくんと揺れて、俺の手をきゅっと握った。左手でゆっくりと柔肉を味わいながら、今度は右手をいろはの臀丘にずらしていく。いろはは手が離れかけると、俺の手首を掴んだ。手首を細い指で掴まれたまま、肉付きの良い丘にゆっくりと指の腹を着地させる。
「はぁん……あっ、んぅっ、んんん……」
いろはがもぞもぞと身悶えする。しかし、俺が腕枕した状態で胸を揉んでいる為に、まるで逃げることが出来ない。乳房と尻肉を徐々に強く揉んでいく。左手は可愛らしい乳首を摘まんでこねくり回し、右手は親指以外の四本指をまとめて、スポンジを持った時のように揉みしだく。双丘の谷間に指を近付けていくと、にちゅ、くっちゅ、にちゅ、といやらしい水音が立ってきた。
「はひっ、ひぃんっ、はっ、はっ、はひぃっ、へぁぁ……っ」
気の抜けた声に、徐々に色香が混じっていく様に鼓動が高鳴る。尻を揉む手をいよいよ足の根元に近付けると、くぐもっていた水音が明瞭になってくる。毛布を取り払うと、ベッドの上で裸で絡み合う二人の姿がはっきりと認識出来て、肉棒はつい数時間前までの行為をすっかり忘れているかのよう力強く勃起している。
「んんん……っ」
いろはが俺の腕枕に乗ったまま、くるりと身体の向きを変えた。俺に向かって転がってくる形で、俺の胸元に顔をうずめる。
俺の胸板にそっと指を這わせて、熱っぽい吐息で肌を撫でてくる。左手でいろはを抱きしめる。右手を尻から太ももに滑らせ、既に愛液で貼り付いた恥毛をしょりしょりと撫で上げ、淫裂に指を食い込ませた。
「はひぃん……っ、ひっ、ひぅぅ、ひぁっ、ひっ、ひぃん……」
泣きそうな声を漏らしながら、俺の胸板におでこをこすりつけてく

る。瑞々しい唇が俺の乳首を吸い上げ、震えている両手が肉茎をするりと掴んだ。負けじとクレバスを右手中指で撫でる。
「ひぃんっ！　ひっ、はっ、はぁっ、あぁぁ……ひぅぅぅ……っ」
じゅぶ、ぶちゅっと淫猥な音が響いて、指に熱い愛液が塗りたくられる度に、俺の腕の中でいろはの肢体が跳ねまわる。強めの愛撫をする時程強く強く抱きしめるようにして、逃げられないという意識を植え付ける。
気付けば、まどろみの中にいるいろはを嬲ることが、楽しくてしょうがなくなっていた。
「……足、開いてくれ」
まだ寝ぼけていたら開けてくれなかっただろうが、いろはは俺が声をかけてから数秒すると、ゆっくりと左足を開いた。左足がベッドと綺麗に垂直になり、俺の指を止めるものが何一つなくなった。
すかさず中指と薬指を一緒に膣口に入れる。入れる、というよりは勝手に入るという言い方が妥当に思えるくらい、容易くぬるりと二本の指が呑み込まれた。きゅむきゅむと心地良く締め付けて来る肉襞の感触に陶酔しながら、わざと音を立てるように指を折り曲げる。
ぐっぷ、じゅぷ、じゅぷじゅぷじゅぷ……。
「あっ、あっ、あっ、……んんっ！」
「え……っ？」
驚いたことに、指を入れてから十秒と経たない内に、いろはが激しく身体を痙攣させた。手首までびしょびしょにする程に噴き出した愛液が、いろはが絶頂に達したことを示している。
「……顔、上げてくれ」
そっと囁くと、返事が無いままにいろはが顔を上げる。
虚ろな瞳、汗で額に張り付いた亜麻色の髪、半開きになった口、荒い呼吸、甘ったるい牝の匂い。
思わず、呼吸を忘れてしまった。
目の前の極上の肢体をもっと味わいたくなって、淫液に浸した指を再び曲げ伸ばしし始める。
「あ、うそ……やんっ、ひっ、ひぅぅぅ……っ」

いろはが俺を見つめたまま、甘い嬌声をこぼす。首を僅かに横に振って、止めてほしいという意志表示をしているが、足はしっかりと開いたままだ。まるで一致しないいろはの身体と心に、尚の事興奮が高まる。指の腹でいろはの弱い場所をぐりぐりと抉りながら、出し入れの動きも加える。快感に耐えようとしていたのか唇を引き結んでいたが、やがて耐え兼ねて口を開き、ぶはっと大きく息を吐いた。

「だめだめだめだめそんなのすぐイっちゃ……んんんっ！」

細やかな抵抗も虚しく、いろはがもう一度絶頂に達した。半開きになった口からは僅かに涎が垂れていて、意識が飛ぶ直前だったのだと知る。膣口からはさっきよりも大量の愛液が溢れ出して、右手がいろはの体液に浸かっているかのようにぐしょぐしょになっている。ベッドの上の牝の匂いもぐっと増していて、匂いを嗅ぐだけで勃起してしまいそうなくらい濃厚な空間になっている。

――そろそろ、良いか。

「うつ伏せになって、枕に顎乗せてくれ」

言って、きゅっと抱きしめる。

「……は、い……っ」

いろはは力無い声で答えると、ゆっくりとぎこちなく頷いた。

続く。

（9）

夢の中でも先輩と重なっていた。

寝る直前まで先輩とずっとそういうことをしていて、お互い裸のままくっついて寝たら、まるでその続きをしているかのような夢を見た。体力の制限が無くなったかのように先輩が腰を振り続けて、わたしは何度も泣きながらイく。潮を吹いてもお漏らししても気絶しても、先輩は腰を振るのをやめない。先輩が切なそうに眉をひそめると、愛おしくなって唇を重ねる。お互いの汗と汗で身体がぴったりと貼り付いて、本当に気持ち良かった。先輩が射精すると、お腹の中が熱いどろどろしたもので満たされる。射精しても、まだ先輩の腰は止まらない。気持ち良すぎておかしくなってしまいそうで、首をぶんぶんと横に振ると、先輩はわたしをぎちぎちと抱きしめて逃げられなくした。身体の密着度が増して、逃げられないと分かった途端に更に感じやすくなって、もうまともな言葉なんか喋れなくなった。先輩がまた射精する。わたしの奥にたくさん熱いのを注いで、また腰を振る。わたしと唇を重ねる。舌を絡められて頭がぽーっとする。また射精される。もう、幸せすぎて何も考えられない。

ああ、ずっと続いたら良いな——そんな風に思ったとき。

「……ん……」

ふっと、目が覚めた。

なんだ、夢だったのか……と名残惜しく思ったけど、先輩がいつの間にか腕枕をしてくれていたから、またすぐに幸せな気持ちで心が満たされた。そう言えば前読んだ夢占いの本で、「恋人とエッチをする夢はもっと愛情が欲しいと感じている証！」なんていうのを読んだ気がするけど……何だろう、わたし、もっと先輩とエッチしたいのかな。体力の限界までしてるつもりなんだけど。この休みにまたいっぱいいじめてもらおっと。

一人ドM計画を立てていると（結構楽しい）、先輩の手がわたしの胸に触れた。優しく探るような手つきで、わたしの肌に先輩の指が食い込む度に吐息が漏れる。先輩の右手はいつの間にかわたしが握って

いたんだけど、その右手もゆっくりと動き始めた。するするとわたしのお尻に伸びていく。ふふん、おサルさんめ。朝から盛ってるな。でも、繋いだ手が離れるのが思いの外寂しかったので、名残惜しんで先輩の手首を掴む。先輩はぴくんと反応したけれど、そのままお尻に手を着地させた。

「はぁん……あっ、んぅっ、んんん……」

我ながら恥ずかしくなるくらい、朝からとろっとろの声を漏らしてしまう。先輩はきっとわたしが起きてるかどうか判断しかねてるはず。もう起きてることを伝えても良いだろうけど、この曖昧な状態を楽しんでみたい。何だか夜這いをかけられてるみたいですごくどきどきする。

先輩の手つきがどんどん荒々しくなっていく。身悶えすると、先輩が腕枕をした上でわたしの胸を揉んでいるから、前後から挟まれてまるで動けないことに気付いた。そっか、今わたしは先輩のなすがままなんだ……と思っただけで、身体の奥がきゅんと疼く。

先輩の吐息が荒い。先輩はわたしの身体をしょっちゅう「良い匂いがする」と褒めてくれるけど、先輩だって自分が気付かないだけで結構良い匂いがしてるんだけどな。男の子の匂い、って感じ。それを一番強く感じるのは先輩のあそこなんだけど、口でする時に匂いを嗅ぐとうっとりしちゃって、いつもそれを伝えるどころじゃなくなるんだよなぁ……って、今はそうじゃなくて。

先輩とわたしの間に、男と女じゃなくて牡と牝の空気感が作られていく。毛布を剥がされた。どうしたら良いか分からなくなって、腕枕をされたまま先輩に身体を向ける。先輩が一瞬びくりとしたけど、それ以上にわたしは先輩のあそこの硬さにびっくりした。目を伏せてバレないように目を開けた時、反り返った先輩のものがわたしのお腹に食い込んでいるのが見えてしまった。あー、だめだ、わたしもう、めちゃくちゃにされるんだ。される。されちゃう。してほしい。

もうわたしが起きてるのなんて分かってるとは思うけど、それでもこの夜這いの感覚をもう少し楽しみたい。先輩もそう思ってるのか、話しかけてこようとしない。わたしの背中に腕を回してぎゅっと抱

き寄せると、わたしの足の根元に手を滑り込ませた。ぬちゃりという生々しい音が聞こえて、恥ずかしさで身体が熱くなる。今わたしの顔が真っ赤なのが、先輩にバレませんように……。
「はひぃん……っ、ひっ、ひぅぅ、ひぁっ、ひっ、ひぃん……」
「ひぃんっ！　ひっ、はっ、はぁっ、あぁぁ……ひぅぅぅ……っ」
先輩がわたしのあそこを、いやらしい音を立てながらなぞり続ける。先輩の胸板におでこをこすりつけて、先輩の胸の先っぽを吸ってささやかな抵抗を試みるけど、まるで意味を成さない。先輩のあそこを両手で触ると、本当に熱くて、硬くて。触っただけで興奮して、また更に感じやすくなってしまった。
眠気とはまた違った意味で、意識が朦朧とする。気付けば先輩の腕の中で我慢することなく身体が跳ねて、吐息が漏れていた。
「……足、開いてくれ」
先輩の声が頭上から降ってくる。起きてるのがバレてた。そりゃそうだし、別にやましいことなんて何もしてないんだけど、なんだかすごくどきどきする。横向きで先輩とくっついたままだから……と考えて、左足だけベッドに垂直になるように立てる。どんな光景なのか見ていないから分からないけど、きっといやらしいんだろうなと思った。
先輩の指が入る。一本じゃない。二本だ。責め好きだけどいつだって優しくて、わたしのことを気遣ってくれる先輩。その先輩が、いきなり指を二本入れても痛くないだろうと判断するくらいわたしは濡れているんだと、先輩の行動で気付いて恥ずかしくなる。実際、わたしのあそこは、まるで抵抗することなく先輩の指を迎え入れていた。先輩がわたしの中に入ってきた瞬間、何も考えられなくなる程の幸福感が身体に押し寄せる。
先輩が指を動かし始めた瞬間、遠くで小さなさざ波が集まって、段々大きな波になっていくのが感じられた。そしてまとまった大きな波がこっちに迫ってきて、わたしの理性の皮をあっと言う間に剥ぎ取っていく。
「あっ、あっ、あっ、……んんんっ！」

全身を電気が駆け抜けて頭の中が真っ白になり、びくびくと痙攣した。先輩のあそこを握り締めたまま、そこに大事な部分をこすりつけるようにしてぶるぶると震える。先輩が戸惑う声が聞こえる。それもそうだよね、いつもよりもずっと、イクのが早いんだもの。

「……顔、上げてくれ」

先輩の声が、さっきよりもねっとりとしている。先輩もかなり興奮してるんだ。この後わたし、立てるかな……お手洗い行ってないんだけどな……。色々考えながらも、顔を上げる。口は開いているけど、言葉が出てこない。言葉を紡ぐ代わりに、先輩の唇に犯されたかった。

先輩がわたしを見て目を見開く。荒げていた呼吸が一瞬止まる。あ、先輩、今わたしに見惚れたな。やったー……なんて思っている余裕はない。きっとすぐに――

「あ、うそ……やんっ、ひっ、ひぅぅぅ……っ」

先輩が指でわたしの中を強烈にかき回し始める。いつもより感じやすくなっていて、正直怖さもある。だから少しでもその意思表示をしようと首を横に振るけれど、足を閉じることが出来ない。敏感になっていて怖くても、それ以上にわたしの身体が先輩を求めてるんだ。

ぴちゃぴちゃ、くちゅくちゅ、ぬちゅぬちゅ……。

先輩はわたしの羞恥を煽ろうとしているのか、わたしの中から溢れ出す水をかき出すようにして激しく音を立てる。その音を聞いてわたしは恥ずかしくなり、実際いつもより感じてしまう。興奮で頭がどうにかなりそうだった。

「だめだめだめだめそんなのすぐイっちゃ……んんんっ！」

波があっと言う間にわたしの心と身体を呑み込んで、先輩に抱きしめられたまま身体が跳ねた。先輩の熱とわたしの熱が混じり合って、もうどこが境界線なのか分からなくなっている。先輩の胸板に顔をうずめて、むせるような男の匂い――先輩の匂いを貪る。嗅いだだけで頭がくらくらして、またイっちゃいそうだ。

「うつ伏せになって、枕に顎乗せてくれ」

きゅっとわたしを抱きしめながら、先輩が囁く。声音はどこまでも優しいけど、この声のトーンはわたしに決して反対意見を許さない時の声だ。逆らうともっとめちゃくちゃにされて、何時間も泣きじゃくりながら何回も気絶させられるんだ。それも良いかもと思っちゃうけど、ここは素直に従っておこう。

「……は、い……っ」

頷いて、返事をする。声が思ったよりも掠れていて、身体からだいぶ水分が抜けているのだと気付く。汗でびっしょりだし、あそこももうぐしょぐしょだ。後で水を飲もう。でもその前に、先輩にとろっとろにしてもらうんだ。

うつ伏せで、枕に顎を乗せる。

……あー、そっか。これならいつでも、わたしは枕で声を押し殺せるな。さっきは先輩の胸に顔を押し付けてたけど、枕ならもっと激しいことをされても大丈夫か。

時計は見えないけど、きっと朝のそんなに遅くない時間帯なのかな。

よし、今日はここからスタートだ。

先輩に、いっぱいいじめてもらおう。

うっとりと先輩を見つめると、先輩がわたしを見つめ返しながら、ごくりと息を呑んだ。

続く。

（１０）

――うつ伏せになって、枕に顎乗せてくれ――

先輩の声が、耳の中にとろりと流れ込む。わたしに声をかけると、先輩はすぐに身体を起こした。わたしの身体を散々弄って、先輩の我慢も限界みたいだ。小さく頷いて身体の向きを変えようとしたら、あそこがこすれていやらしい水音がした。先輩をちらりと見ると、その視線はわたしのあそこに向けて一心に注がれている。

ほんとにもう。先輩も、わたしも、こういう行為に飽きるどころかどんどんハマっていく。

うつ伏せになって、枕を抱きしめて先輩に流し目を送る。ちょっとだけお尻をくいくいと突き出すと、先輩が夢遊病みたいにふらりと腕を伸ばして、わたしのお尻をがっしりと掴んだ。寝る前までにもう数えきれないくらい出したっていうのに、先輩のものはぎんぎんに立っていた。

知ってるんだ。

わたしは、これが自分の中に入ってきたら、先輩と繋がったら。

もう、何も考えられなくなるって。

知ってるんだ。

だから、心が震えるんだ。

先輩がわたしのお尻を力強く揉む。

「ひんっ……はっ、はぅっ、んひぃぃぃ……っ」

あそこに熱いものを宛がってにゅこにゅこと擦り、お尻の割れ目で挟んでこすり立てる。ああもう、先輩ってば。自分だけじゃなくて、わたしまできちんと我慢の限界に追い込むつもりなんだ。

「せ、せんぱい……せんぱいぃぃ……っ」

先輩の動きに合わせてお尻をへこへこと突き出しながら、懇願の声を上げる。呼吸がさっきからまるで整わなくてなっていて、もう、先輩にめちゃくちゃにされることしか考えられなくなっていた。

はやく、早く、速く。

きて、きて、きて……っ。

先輩の先っぽが、あそこにぴとりと宛がわれた。
手が、震える。
ああ、もう、逃げられない。逃げたくない。逃がさないでほしい。
先輩の腰が、一息に打ち付けられる。
「ひっ――」
快感に塗れた声を上げそうになって、わたしは枕に顔をうずめた――

×　×　×

いろはの中に肉槍を突き入れると、いろはが枕に顔をうずめた。焦らした甲斐があって、最初から既に小刻みに痙攣している。
「うっ……くぉぉ……っ」
……まあ、そんなことを言っても、俺は俺であっと言う間に射精してしまいそうなんだけど。
奥まで突き入れて子宮口に亀頭をぐりぐり押し付けていると、いろはが顔を枕にうずめながらも物欲しそうに腰を突き出してきた。ねっとりとした腰遣いは、速く動かさなくとも俺を射精に導けるほどに蠱惑的でいやらしい。
いろはを蕩けさせるまで我慢出来るかな……と心配したのだけど、ふとある考えが浮かぶ。
「いろは……」
囁くと、いろはの身体がぴくりと揺れた。返事をする代わりに、すっかりいやらしい肉付きになった尻を左右にゆっくり振る。なんでこんなに俺を興奮させる返事が出来るんだろう。
「一回、出すからな」
「……ふぇ……はぁうぅぅぅ……っ？」
少し腰を引いて、膣の半ば辺りで射精をする。最大限に高まってからの射精ではないので量はそれなりだが、それでもいろはの中を余す事無く白濁で満たしていく。
「はひっ、ひぃんっ？　なんれぇ……っ？」
いろはが驚きながらも腰を動かし、精を搾り取る。こちらに向けた顔はとろとろに蕩けていて、射精一発でいろはが牝になったことを示

していた。
ゆっくりと抽送をして、膣肉に白濁を塗り付け、染み込ませていく。今日は序盤からいろはを精液に酔わせてしまうことにした。これならば二回目以降はもっと長持ちするし、出したら出したでいろはは更に喜んでくれる。
「せんぱ……い……これ、やばいれすっ、あたまのなかぼーっとして……あぁぁ……っ」
いろはの声が猫撫で声になり、膣肉の収縮が増す。牡の精を全身を使って受け入れようとしているのが分かる。
「じっくりやるからな……」
言って、いろはの尻をベッドに押し付け、いろはの身体に密着する。じっとりと汗をかいたいろはの白い背中に胸板を押し付けると、酩酊しているかのような調子で「あうぅ……」と声が漏れた。
「せんぱい……きもい、いい、よぉ……っ、ひぃぃぃん……っ」
従順になりきっている恋人の甘える声を聞いて、狂ったように腰を振りたくなる欲求を必死で堪えながら。
再び、いろはを犯し始める。

× × ×

朝から全力で腰を振ったら、いくら枕に顔をうずめてもわたしの声が漏れてしまうと思ったのか、もしくは腰が打ち付けられる音が聞こえると思ったのか、それは分からないけれど。
先輩は、わたしの思考を丹念に一つ一つ溶かしていくかのように、ゆっくりと腰を動かし始めた。正直、これだけでも相当「効く」んだけど、初めに一回出されたのが予想外に効果が大きかった。
温かくてぬるぬるしたものが、わたしの中に満遍なくまぶされて、塗り込まれて、それが先輩が腰を動かすごとに益々わたしの中に染み込んでいく。
今までだって十二分に感じていた、「わたしの身体が先輩だけのものになる」という感覚が、輪をかけて強まっていく。身も心も先輩に浸って、溺れていく。
「ふっ、ふぐぅっ、ひぐっ、へぁぁぁ……っ」

口を枕に押し付けて、必死で声を抑える。本当は、泣きながら腰を振っておねだりして、力いっぱい声を上げたかった。でも、今は我慢しながらしているこの状況が、たまらなく焦れったくて興奮する。二つの欲求が頭の中でせめぎ合って、思考がくしゃくしゃになっていた。

「いろは……っ」

先輩がずっしりと体重をかけながら、わたしの名を呼ぶ。先輩、こういう時ちょっと泣きそうな声になるんだよなぁ。わたしが死ぬ程ときめいているのを分かってるんだろうか、まったくもう。

先輩が、枕を握り込んだわたしの手を取った。指を絡めてぎゅっと握り締めて、身体の密着度が益々高まる。先輩の腰遣いは依然として焦れったいほどゆっくりで、先輩の体重が心地良くかけられているからわたしは腰を動かすことも出来なくて、イキたくてしょうがなくなる。

「ひぐぅ……っ、せんぱい、わたし、もう……」

枕から口を離し、声を出さないよう我慢して先輩に囁きかける。

「……イキたいか？」

先輩の甘い誘惑の声に、こくこくと頷く。視界が滲んでるのは、幸せすぎるからかもしれない。

「……腰の音が朝から聞こえるのはどうかと思ってたんだが……ちょっとだけなら大丈夫だよな、うん」

先輩が張る予防線に、絶対ちょっとじゃ済まないでしょそれ……とは思いながらも、わたしも既に我慢の限界なので、先輩の言葉に同意の頷きを返す。

「じゃあ、行くぞ。口、押さえとけよ」

先輩に言われて、口をきちんと枕に押さえつける。今のわたしは絶対顔がにやけてると思う。

先輩が腰を引く。じっくりと時間をかけてためを作っているようで、たまらない昂揚が湧き起こる。

ああ、これでやっと――と思っていると。

――こんこん。

『え……』
予期せぬノックの音に、二人して間抜けな声を漏らした。
×　×　×
「八幡、もう起きてる？」
「え……な、なんだよ？」
部屋をノックしたのはお義母さまだった。やっぱりこの言い方恥ずかしい。
よほど予想外だったのか、先輩の声が上ずっている。
この状況……どうしよう。もし開けられたら……と、固まったまま心配していると。
「……鍵はかけてるから」
先輩がわたしの心を見透かしてそう言うと、わたしの頭をくしゃりと撫でた。あ、やば、今すごいときめいた。また惚れちゃった。
先輩の不意打ちに心臓をばくばく言わせていると、先輩がドア越しにお義母さまとの会話を続ける。
「いつ帰ってきてたんだ？」
「んー、昨日の夜遅く。すぐ寝ちゃったけどね」
お義母さまの言い方からして、わたしと先輩がしていた声は聞こえてない……のかな？　何にせよ、遅くまでお仕事お疲れ様です……。
「小町に聞いたんだけど、いろはちゃんが泊まりに来てるんですって？」
先輩の身体がぴくりと動く。繋がったままで敏感になってるからやめてぇ……っ！
「ま、まあ、うん」
「今、いるんでしょ？」
んん？　話の流れがまずいことになってきてる？
「……いる。けど、まだ寝てるわ」
「そっかそっか。おしゃべりしたかったんだけどまだ早いわね」
ほっと胸を撫で下ろす。どうやらこのくだりはここで終わるみたいだ。
それにしても……今の会話を聞いていて、思うことが一つある。

ドアの向こうから聞こえるお義母さまの声はとっても温かくて、心がぽわぽわとする。
あとでいっぱいお話しよう――そう思った。
「まあ、そうだな。後で行くわ」
「わかった。いやー、いろはちゃんはほんとに良い子よねぇ――」
あれ、会話がまだ続くの……？　と思った矢先。
「……っ」
先輩が、もう一度わたしの身体にのしかかって。
ゆっくりと腰を動かし始めた。
「……ぅぅぅ……っ」
ずぶずぶとわたしの身体を貫く逞しいものに、全身が悦びでぶるぶると震えてしまう。
うそ、でしょ……？
そんな風に思いながらも、枕に顔をうずめるわたしの顔は、きっとにやけてしまっている。
わざわざ鏡で見なくても、十分すぎる程にそれが分かった。

続く。

（１１）

先輩が、部屋のドア越しにお義母さまと話してる。
うつ伏せになったわたしの上に乗って、逞しい先輩のものをゆっくりと抜き差ししながら。
……先輩、何してるの……？
「いやー、いろはちゃんはほんとに良い子ねぇ」
「ああ、そうだと思う」
二人がまるで普段通りの会話をする。わたしは声を上げないことに全神経を集中させているから、会話の内容がきちんと入ってこない。
「ぱっと見た時は今どきの可愛い子っていう印象だったけど……それだけじゃなくて、受け答えもしっかりしてるし、家事だって手伝ってくれるし。あんた、正直可愛くてしょうがないでしょ？」
「……まあ、な」
「あっはっはっは！　良いわねぇ、若いって。まあ、あんたたちの場合は年取っても変わらなそうだけど」
「……ぅぅぅ……っ」
わたしが寝ていると思っているから、途切れ途切れでも頭に入ってくる会話の内容が、すごくむずむずすることばっかりだ。後でお礼を言いたくなったけど、起きてたのがバレちゃうよなぁ……。
先輩はわたしの両手をぎゅっと握る。愛情と束縛の念を同時に感じる行動に、身体の奥底がきゅんと反応してしまう。
ていうか……先輩、もしかしてわざとわたしのことを話してる？
普段なら人と話してわたしのことをのろけたりとか滅多にしないのに。……もしかして、や、もしかしなくても、遠回しにわたしのことを責めようとして――
「……ひゃぅっ」
耳に息を吹きかけられて、思わず声が出てしまった。慌てて横を見ると、先輩がにやりと笑っている。く、くそぉ……邪悪なおサルさんめぇ……！

「あら？　いろはちゃんどうしたの？」
　わたしの今の声が聞こえてしまったようだ。ピンチ。
「なんでもない。ただの寝言だよ」
「ならいいんだけど。寝言まで凶悪に可愛いわねぇ……」
　ピンチ回避。自分で言うのも恥ずかしいけど、お義母さま、わたしにメロメロじゃない？
　先輩をジト目で見ると、くすりと笑って口をわたしの耳元に近付けた。肌を撫でる先輩の吐息に恍惚を覚えてしまう。
「いろはは可愛いし……こんな状況でも責められるのが気持ち良くて仕方ない、淫乱な子だよな」
「……っ」
　わたしにしか聞こえない囁き声で言われた瞬間、ぞわりとした波が身体中に広がって、先輩を締め付けているあそこが急激に収縮し始める。先輩はどこか嬉しそうに「うぁ……っ」と呻くと、そのまま腰を動かし始めた。先輩の身体を迎え入れることにわたしの身体が悦びを覚えて、奥の奥まで突き入れられる度にわたしの思考が焼き切れていく。
「……うぅぅ……うぅぅ……ひぅぅぅ……っ」
「小町はどうしてる？」
「……うぅぅぅ……っ」
　わたしの奥の奥に押し付ける腰の動きがねちっこい。ぐりぐりされる度に頭がおかしくなる。
「ああ、小町なら今朝ごはんを作ってくれてるわよ。いやー本当に可愛いわねぇ小町は」
「ひぐっ、ひぃんっ、んぅぅぅ……っ」
　音を立てないように、小刻みに腰を振ってくる。お汁がびちゃびちゃとかき出されて、恥ずかしさでまた感じてしまう。先輩の枕に、わたしの涙や汗や……申し訳ないけど涎も染み込んでいく。
「息子に妹のノロケをするな……」
「はへぁぁ……っ」
　左右にぐりぐりと押し付けながら捻じり込んできて、涙を流しなが

ら震えてしまう。小さく焦れったく訪れる快楽の波に、足をばたつかせながら溺れる。
だめ、だめ、だめ、こんなの。
おかしくなる、おかしくなるから……。
「いろは、そろそろ一回イっとくか」
「へぁ……っ？」
意識が朦朧としていると、先輩が囁きかけてくる。わたしはもう汗だくだったけど、先輩もじっとりと汗をかいていた。
先輩は一度繋いでいた手を離してわたしたちの上に布団をかぶせると、もう一度手を繋いでゆっくりと腰を引いた。何かとんでもないことが起きそうで、唇がふるふると震える。
「今だったら、十秒もかからないか」
「……っ」
先輩の言葉に、何をせんとしているかが分かってしまう。慌てて枕に力いっぱい顔をうずめると、「わかってるな。えらいぞ」と頭を撫でられた。
「せぇ……のっ」
お義母さまがドアの向こうにいるのに。まだ会話しているのに。
先輩が、全力で腰を打ち付けた。
ばちゅんっ、という音と共に、遥か向こうで聞こえていた遠雷の音が急に近付いてくる。来てくれそうで来てくれなかった、大きな絶頂の波が物凄い速さで押し寄せてくる。
腰を打ち付ける音は、布団に包まると思いの他軽減されていた。ベッドがぎしぎしと言う音の方が目立つくらいだ。
先輩は腰を一度突き入れると、そのまま続けざまに……何回も腰を打ち付けてきた。
ばちゅんっ、ぱちゅっ、ぱんっ、じゅぷっ、ぐぱんっ、ずぱんっ、ずりゅりゅりゅ……。
「はへぁ、ひっ、ひぃぃっ、ひぐっ、もっ、らめ、いっ、いっ、ひぅぅぅ……んはぁっ！」
枕に顔を押し付けたまま、わたしはあっという間にイってしまっ

た。結合部からぷしゅぷしゅと液体を噴き出して、びくびくと身体を戦慄かせる。やっとイけた喜びと、全力で息を荒げる訳にはいかないもどかしさとで、頭の中がごちゃごちゃになっていた。
幸いお義母さまには気付かれなかったようだけど、うぅぅ、恥ずかしいよ、恥ずかしいよぉ……っ！
「あら、もしかしていろはちゃん、起きた？」
わたしの喘ぎ声が聞こえたのか、お義母さまの柔らかい声が聞こえる。わたしはう～とうなりながら先輩を睨んで（わたしの涙目の顔を見てときめくのやめてほしい。うそ、やっぱやめてほしくない）、絶頂の余韻に浸かったまま何とか口を開く。
「は、はい。今起きました。おはようございます」
「起こしちゃったかしら、ごめんね」
「い、いえ！　大丈夫です」
「じゃあついでに、わたしのことは何て呼ぶんだっけ？」
先輩のドS根性は、もしかしたらこの人のものを受け継いだのかもしれない。
「……お、お義母さま……」
「うはぁ……っ」
顔が熱くなるのを感じながら答えると、ドアの向こうで恍惚とした声が聞こえた。楽しい家族だなぁ……。
どうやら今度は、わたしとの会話が始まるようだ。
このタイミングで、わたしは仕掛けることにした。下手をすれば自爆しちゃうけど。
「先輩」
小声で話しかけると、先輩が首を傾げて「なんだ？」と無言で答える。先輩の脇腹をぺちぺちと叩くと、意図を察してくれたのか自分のものをずるりと引き抜いてくれる。しかし引き抜く直前で名残惜しくなったのか、お尻を掴まれてもう三回だけ入れられた。どれだけわたしが好きなんだこの人……。
先輩との繋がりが解けると、わたしはよろよろと起き上がって、くるりと半回転して先輩と向き直る。

「んむっ」
「んむ……っ!?」
飛びつくようにして先輩の唇を奪うと、そのまま押し倒した。もちろん音は聞こえないように。
「ちゅぷっ、れろ、ちゅりゅりゅ、んふぅぅ……んむふぅぅ……ちゅく、ちゅぷぷぷ……んむふぅぅぅっ！」
「!?」
キスをしながら腰を上げて先輩のものを掴んで、そのまま挿入する。先輩は驚きで目を見開いている。ずぶずぶとわたしの穴が埋まっていく感覚はそれだけで意識が飛びそうになるけど、わたしから責めていると不思議と我慢出来た。
先輩がわたしとドアの方にしきりに視線を泳がせる。
ここまで散々恥ずかしい目に遭わされたんだから、今度はわたしの番。
「い、いろは、お前……っ」
唇を離すと、先輩が上ずった声で話しかけてくる。にっこりと目を細めて笑いかけると、先輩のものがぐっと大きくなった。興奮してくれてるんだ。
「うふふ……せんぱい。おしおきですよ」
よぉし、ここから反撃だ。

続く。

（１２）

先輩の部屋で、先輩と繋がる。

さっきまでは先輩にめちゃくちゃにされてたから、今度はわたしがお返しする番。

ベッドのすぐ近くのドアの向こうには、今のわたしたちの状況を何も知らないお義母さまがいる。

「それにしても……あなたたち、二人で一緒に寝るとか……もう……うふふふ……」

……。

み、見える……ドアの向こうで頬に手を当ててうっとり顔をしているのが見える……！　本当に親子だなぁ……小町ちゃんと反応がそっくりだ。この場合は小町ちゃんが似てる訳だけど。

「お、おい、いろは……っ」

先輩が、わたしの身体の下から小声で話しかけてくる。わたしは先輩のお腹に手を添えて、じっくりと先輩のものを味わっていた。時折先っぽから熱い汁が零れてきて、さっき出したばかりだっていうのに先輩はまた出しそうになっているんだと知る。

さて、どうしようかな。

「二人は今日はどこかに出かけるの？　もしそうならお小遣いあげるよ」

お義母さまの言葉に反応して、先輩が顔をドアの方に向ける。

あ、チャンスだ。

「え、いいってそんなの。流石に悪い……し……っ!?」

「なーに言ってんの、そんな遠慮なんてするもんじゃ……って、八幡、どうしたの？　大丈夫？」

「な、なんでもない……っ」

先輩が喋っているのを良いことに、わたしは先輩と身体を重ねて、先輩の乳首を指でつまみながら耳に舌を挿し込んだ。

「んふぅっ……ちゅくっ、くちゅり、ちゅく、ちゅくちゅく……っ」

『ば、ばか……やめろ……っ』

先輩が囁きかけてくるけれど、気にせずに先輩の耳の中を味わう。敢えて大きな水音を立てて、先輩の身体に直接いやらしい音を響かせると、先輩のものがわたしの中でどんどん大きくなっていく。
「あんた具合悪いんじゃないでしょうね？　本当にきつかったら早く言うんだよ？」
「だ、大丈夫だか、ら……っ」
先輩が昂ぶっているのを見て楽しみながら、左の耳をたっぷり味わって……今度は右の耳をねっとりと舐め上げる。唇をぴったりと押し付けて、舌を口から出し入れする時にぴちゃぴちゃと音を立ててあげると、先輩が腰を仰け反らせて震えた。
「な、なあ……もうちょっと寝たいから、そろそろいいか？」
先輩が会話を切り上げようとしている。これはいけない。
私は先輩の耳から口を離し、湿った耳の中を今度は指で撫でながら、先輩の乳首に舌を這わせる。わたしが普段されているように、しっかり咥えて口の中で転がす。一度離して、今度は舌先を固めて入念につつく。先輩は面白い程に反応して、眉根を寄せて切なげな表情を浮かべる。あ、やば、子宮が降りてきちゃった……っ。
「あらそう。……あんまり夜更かしするんじゃないよ？」
「わ、わかってる……っ」
会話を切り上げられない内に、先輩の限界が近付いてくる。ただでさえ大きい先輩のものがむくむくと膨らんで、先っぽが子宮の入り口をぐりぐりと刺激する。先輩が感じてくれていることが嬉しくなって、ぴったりと密着させた腰をぐりぐりと回すように動かして、先輩の射精を促す。わたしももう限界だったけど、それ以上に先輩にイってほしかった。沢山出してほしかった。
「それじゃ、また後でね。いろはちゃんもね～」
「――っ!?　ぷはっ、は、はいっ！」
慌てて口を離して挨拶をした。いけない、先輩の身体を舐めることに夢中になってた。
『……ぷっ、くく……っ』
「……」

先輩が密かに笑っているのを見付けてじっと睨むと、先輩がしまったという顔をする。ようし、先輩……わたしにケンカを売ったなぁ……!?

「それじゃ、八幡、あんまりいろはちゃんに迷惑かけないようにね」

「わか……っ!? わかって、る、ぅあ……わかってるって……っ」

先輩に抱き付いて、腰をぐりぐりと動かしながら先輩に囁きかける。

『せんぱい、もうイきたいんですよね？　いいですよ？　いっぱい出して……ね……っ？』

「～～～～～～～っ！」

いつも先輩の理性の糸をぷっつりと切っている、とびきりの甘い声。先輩は身体をぶるぶると震わせて、わたしの身体を抱きしめた。あー、これ……わたし、声抑えられるかなぁ……。

「じゃ、私は行くとするわー。あ、そうだ忘れてた、今日は午後から出かけるから。今からまた寝るんならお話はまた今度だね」

「ああ、わかった……んむ……っ！」

会話が終わった瞬間。

わたしは声を抑える自信がなくて、先輩に思い切りキスをした。それと同時に先輩のものがむくむくと膨れ上がって、たまらなくなって腰を前後にがくがくと振り立てる。お腹に力を入れて、先輩のものをありったけ締め付けた。

次の瞬間――

わたしの身体の奥と、わたしの頭の中が、同時に白く爆ぜた。

「んふぅぅぅぅ……っ、んふぅぅぅぅ……っ」

まるで獣みたいに荒い息を吐いて、先輩を貪る。先輩のものが一度脈動する度に、ゼリーみたいな粘っこいものがわたしの身体に叩き付けられて、快感と幸福感に視界が白んでいく。

声を抑える必要が無くなるくらいには落ち着いたところで、先輩の耳に口を付ける。射精は終わってるけど、わたしが絶え間なく締め付けているからなのか……先輩のものはずっとびくびくと震えている。何だか可愛い。

「せんぱい……気持ち良いですか？　わたし、すごく気持ち良いです、ほんとにもう、はひっ、はぅぅ……んはぁっ、やぁん、またおっきくなって……はぁぁぁ……っ」
「お……ぁ……こ、こら、いろは、やめろ、今敏感になってて……うぐぅっ!?」
　首を静かに横に振って耐えていた先輩が、突然びくんと仰け反った。その瞬間、再びわたしの中に熱いものが打ち付けられた。
「あ……っ、ふぁぁっ!?　はぁんっ、んっく、はぅぅ……熱い、熱いよぉ……っ」
　溢れ出す幸せにびくびくと戦慄きながら、先輩の精を余す事無く受け止める。脈動を受け入れる度に、わたしの心も身体も全部先輩のものなんだと実感出来て嬉しくなる。入念に腰をこすりつけて、先輩が快感に耐えようとしてわたしの背中をぎりぎりと力強く抱きしめることさえ楽しみながら、先輩のものから一滴残らず搾り取った。

×　×　×

「や、確かに仕掛けたのは俺だよ。……ぅお……っ。……だけどその後のお前は流石に……うぐぅ……っ!?」
「ふぁい、ふいあへんえひは（はい、すいませんでした）。ふぁんふぇーひへまふ（反省してます）」
「ちょ、こら……咥えたまま喋るな……っ！」
　母が部屋の前から去って、ほんの数分後。
　俺にのしかかったまま続けざまに二度も射精させたいろはは、流石にやりすぎたからお詫びをさせてください……と言って、何故か俺のものを口で咥えていた。俺は仰向けになり、力無く喘ぎながら説教をする。当然、こんな状況でする説教などに身が入る訳もなく。
「ひぇんはい、ひもひいれふか（せんぱい、気持ち良いですか）？」
「……すげぇ良い」
　……流されるままに、流されていた。
　いろはの口は湿り気を帯びていてとても熱い。歯を当てることなく柔らかい部分だけで竿を包み込み、生き物のように自由に舌が這い回って、裏筋や雁首、亀頭や鈴口を丹念に舐めてくる。俺が状況に

よって舐めてほしい場所が変わると、何も言わずともいろはは俺の顔色から判断して的確に舐めてほしいところを舐めてくれる。それでいて、時折焦らすように陰嚢を口に咥えたりなんてされるからたまらない。

以前、これだけたっぷりと咥えていて、顎が疲れないのかと尋ねたら、

『うーん、普通だとおっきいのを咥えてると疲れちゃうらしいですけど……わたしは平気ですね、全然。なんでだろ？』

と、首を可愛く傾げられた。むらっと来て押し倒したことは内緒。

「……あ」

ふと思い付く。

「……いろは」

「ふぁい（はい）？」

咥えながら喋ることに抵抗が無さすぎるだろ。

「お袋は午後から出かけるし、小町も午後から出かけるらしいんだけど……」

「ふむふむ（ふむふむ）」

咥えたまま頷くな。ていうかその言葉はそのまま言えるのか。

「だから、その……今日一日、ずっと咥えててくれないか？」

俺からの突然の提案に、いろはの目が見開く。無理もない、こんなことを突然言われたら、そうなるだろう。

「ご飯を食べてる時とか……リビングでテレビを見てる時とか、ゲームをしてたり本を読んだりしてる時も。風呂に入った時も……ずっと」

「……」

俺の言葉を無言で聞いていたいろはが、妖しく目を細めた。

「ずちゅるるる……ぷはっ」

恐ろしい程の吸引力で俺の肉竿を吸いながら、いろはが口を離す。その顔には淫靡な笑みが貼り付いていて、得体の知れない期待感が湧き出てくる。

「……先輩、奇遇ですね」

「……へ？」
「わたしも……前から一度、やってみたかったんです」
「えっ」
一瞬、いろはが言ったことが認識出来ず。そして認識出来た後も、しばらくは認識出来なかった。
……なにこの痴女さん？　最高かよ。
ただし……と声を低めて言ったいろはが、舌をべろりと垂らす。たったそれだけの動作で、鈴口からカウパーが滲み出た。
「わたし、本当にずっと咥えてますからね？　結構大変だと思うけど……頑張ってくださいね」
「……っ、お、おう……っ」
何だかいつもと雰囲気が違ういろはにどきりとする。大変なのはいろはじゃないのかよ……とは思うのだけど、今の言葉には俺に対する気遣いしかなく、冗談とは思えない。いろはの顔を見て、ごくりと息を呑んだ。
何かやばいスイッチを押してしまったかな……と思いながらも。
俺といろはの休日が、こうして始まった。

続く。

（13）

……少し、後悔している。
かも、しれない。
いや、別にいやではない。むしろ気持ち良い。死ぬ程気持ち良い。
……ただ……。
「んちゅるっ、はむっ、くちゅるるっ、ちゅぽっ、んはぁっ、はむっ、れろれろれろ……っ」
「うっ、くぅっ……おぉぉ……っ」
――気持ち良すぎて、本当に死んでしまいそうだ。
× × ×
あの後のこと。
結局二度寝をして、俺といろはがリビングに行ったのは昼過ぎだった。テーブルには小町が作ってくれた朝兼昼ご飯と、
『いっぱい食べて精を付けてね！』
という、セクハラ紛いの置手紙があった。紛いというか完全なるセクハラだな。
いろはは俺と話しながらも、手早く自分の分を食べ終えて歯磨きしに行った。俺はいろはが急ぐのと反比例するようにもたもた食べる。期待に身体を戦慄かせながら待っていると、間もなくしていろはがリビングに戻ってきた。
「先輩、じゃあ、始めちゃいますね」
「……お、おう……っ」
妖艶に目を細めたいろはを見て、期待度が爆発的に跳ね上がった。
いろははテーブルで食事を続ける俺を見つめて、
「うふふふ……」
と妖しく笑い、俺の肩に手を置く。そして耳にふっと息を吹きかけたかと思うと、テーブルの下に潜り込んだ。そして俺の膝を掴んで足を開き、その間に顔をぴょこりと出す。何かと都合が良いということで、ジャージのズボンは股間の部分が開くタイプのものを履いた。そのチャックを開けながら、いろはが楽しそうに笑う。

「それじゃあ早速……あむっ」
「……っ」
期待感で既に勃起していた肉棒を温かいものが包み込むと、あっと言う間にびきびきに反り返った。
このまま、俺は平然と食事を続ける。なるべく平常通り過ごすというのが、二人で取り決めたことだった。
俺はいつも通り過ごして。
いろははいつも通りと言わんばかりに、自然に舐める。
今日一日、俺はいろはに溶かされ続ける。
考えただけで、頭がくらくらした。
「んふぅぅ……っ、ちゅる、ちゅく、ぴちゃ、ちゅぷちゅぷ……んふぅぅぅ……っ」
いろはが目を潤ませながら、美味しそうに肉竿をしゃぶる。足の間から覗くいろはの顔は既に牝の顔になっていて、ご飯を食べることを忘れて凝視してしまいそうになる。
「んっぷ、はむっ、ちゅるる……っ、……ぷはっ、そうだ、先輩。良いこと思い付いちゃいました」
「ん、どうし……た……っ」
悪戯っぽく微笑んで、俺の言葉を待たない内にまた肉棒を咥えたかと思うと、内頬で亀頭をぐしゅぐしゅと擦る。艶っぽく細められた目は、明らかに良からぬことを企んでいた。
「今はお昼の1時ですよね」
言われて時計を見る。
「ああ、そうだな。それがどうかしたのか」
「今から……そうですね、夜の9時くらいまでいいかな……」
「……？　何をしようってんだ？」
首を傾げる俺に、いろはは「えへへ……」と笑う。
「それまで、わたしはずーっと先輩のおちんちんを舐めます。だけど、イかないで我慢してみてください」
「俺に死ねと？」
「すごいストレートですね……」

いろはの言葉に仰天する。日に日に射精出来る回数が増えて、今だったら8時間あったら１０回じゃ済まない程射精出来るというのに。小町に「絶倫ゾンビ」という微妙なあだ名まで付けられているのに。

俺が絶望に沈んでいると、いろはが俺の内ももをぺちぺちと叩いた。ついでに舌を這わせると、くすぐったさと微かな媚電が走って下半身が震えた。

「わたし……先輩が感じてる時、特にもうすぐイきそうな時の表情がすごく好きなんです。……なんだか、すごく色気があって」

「え、お、え？　そうなのか？　んん？」

突然の褒め言葉に目を丸くする。俺の動揺する姿を見て、いろはは頬をぽっと赤らめた。

「あう……何か自分で言っておいて恥ずかしくなっちゃいました……」

照れ隠しか知らないが、俺の竿を左右からのデコピンでぺちぺち弾いて往復させるのは止めてほしい。痛気持ち良いなんて新たな境地は知りたくないんだけども。

「……ちなみに、断るとどうなるんだ？」

「真逆のコースにしてあげます。具体的に言うと先輩が漏らしちゃうまでイジメてあげます。先輩の潮吹きが見てみたいなとかねがね思ってたので」

「中間は無いのか……」

「せっかくこんなエッチなことをするんですから、たっぷり楽しみましょうよ」

「うぐ……」

にこにこと嬉しそうに笑みを浮かべるいろはに、逆らえるはずもなく。

頭をがしがしと掻いて、

「……じゃあ、焦らしコースで」

ぽそりと呟くと、

「かしこまりましたー」

いろはは、とても幸せそうに笑った。

×　×　×

自分で自分に快楽を与える自慰行為というのは、何だかんだですぐに射精まで行ってしまうと思う。お気に入りの動画やマンガを見ながらしていたとして、例えその後にどれだけたまらないシーンが待っていても、どれだけもっと我慢して快楽を蓄えたいと思っても、溢れ出す射精欲に勝てずに大して時間が経たない内に射精してしまう。そんなものだと思う。

けれど――絶頂、という言わばゴールが、自分以外の誰かに管理されたら？　それも、自分の心も身体もよく知る恋人に管理されたら？

身も、心も、果たして持つのだろうか。

×　×　×

食事の後、リビングのソファに寝転がってだらだらとテレビを見ることにした。

俺はソファに座って、後ろにもたれかかってぼーっとバラエティを眺める。

いろはは、女の子座りで俺の足の間に身を置いて、肉棒を深々と咥え込んでいた。

「んん……っ」

いつもとは違い、咥えはすれど激しく舌で舐ったりしない。ぼーっとした表情で静かに呼吸をして、時折上目遣いでちらりとこちらを見てくる。頭をくしゃりと撫でると気持ち良さそうに目を細めて、口をくりくりと動かして内頬で亀頭を擦る。俺が身悶えするのを見て満足気に微笑むと、また動きを止める。

鼻息が恥毛をそよがせるのを眺めながら、

――この子、本当にずっと咥えてるつもりなんだ――

と、内心で改めて驚いていた。別にいろはがうそをつくだなんて思っていた訳では無く、今までは単純に現実味が無かっただけだった。いつもの口淫もかなり時間をかけてじっくりとすることが多いが、それでも今日の計画は明らかに常軌を逸していると言わざるを得ない。

射精欲がふつふつと湧いて、いろはの頭を掴んで喉奥をぱんぱんに膨らんだ亀頭で小突いた。
「んぶ……っ」
小さく呻くと、いろはは顔を上げて困ったように眉根を寄せる。内ももをぺちぺちと叩かれて解放すると、竿をぎゅっと掴んできた。
「もう……だめですよ？　そんなことしたら、すぐに出しちゃうじゃないですか……っ」
子どもを諭すような優しい声音で言いながら、陰嚢をぱくりと咥え込んだ。口の中でころころと転がして、恍惚とした表情で俺を見ている。
「……いろは、ちょっと聞いてみたいことがあるんだけど」
「……ふぁい？　なんれふか？」
美味しそうに玉を咥え込みながら、いろはが俺を見上げる。発情の仕方がいつもと違って、妙にどきどきする。
「一番好きな食べ物は？　……その、飲み込まなくても、口に含むだけのものも含めて」
俺の言葉に、いろはがぱちくりと瞬きをして、口を離してにやりと笑った。
「……先輩、とんでもない変態さんですね。彼女にそんなこと言わせたいんですか？」
「……そんなに恥ずかしいことを言うつもりなのか？」
「分かってるくせに」
んー……そうだなぁ、といろははもったいぶったように微笑む。
「一番好きな食べ物は……ずっと味わえるのが特徴ですね」
竿をきゅっと握って、緩慢な動作でしごき始める。
「それで、熱くて、硬くて、太くて、逞しくて……」
鈴口に舌先をぐりぐりと当てて、漏れ出た先走り汁を美味しそうに舐めとる。
「匂いも濃くて、味わってるともう何だか何にも考えられなくなっちゃうんですよね……」
ごくり、と喉が鳴った。

「……ちなみに、それの名前は何て言うんだ」
「んー？」
答えようかな、どうしよっかな……と焦らして、いろはが陰嚢から裏筋、亀頭までねっとりと舌を這わせて微笑んだ。
「……おちんちん」
「……っ！」
我慢が限界を迎えて、両手でいろはの頭を掴もうとすると――手首をがしりと掴まれた。指が宙を泳ぐ。
「だめですよ？　もっと楽しみましょうよ」
指をわきわきと動かしていろはの耳に挿し込むと、艶っぽく口を開いた。
「あん……っ、もう、心配しなくたって後でたっぷりと飲んであげますから。こっちでも、……あそこでも」
言いながら、亀頭を舌でちょんちょんと突き、視線を下に向ける。手をスカートの中に挿し込んだかと思うと、くちゅりといやらしい水音がした。些細な動作一つで、射精に飢えた肉棒は激しく戦慄いた。
続く。

（１４）

いろはとだらだら過ごす時間は、とても気が楽だ。

俺の性格を把握しているこの子は、俺が何だかんだで反応して構いたくなる絶妙なラインを突いた絡みをしてくる。話しかけるタイミング、スキンシップのやり方、その他諸々。

以前いろはに「そんなに計算してると疲れないか？」と聞いたことがあった。しかしいろははこてんと首を傾げて、「他の人と話す時はそういう計算はしますけど……先輩といる時はほとんど何も考えてないですよ？」とあっさり答えた。そしてじっと天井を見上げて考え込んだかと思うと、「……あ、でも、先輩がどうしたら喜んでくれるかなー、っていうのはいつも考えてますね」なんて恥ずかしいことを言って、頬を赤らめて微笑んだことがあった。俺がその後どうしたのかは言うまでもない。事を済ませた後、衣服の乱れを直しながらいろはが「おサルさんエクストリーム……」と物凄くバカにした発言をしてきたのは忘れられない。全然強くない必殺技みたいだ。

――と、まあ、そんな風に、いろはは俺のことを考えてくれている訳で。

それは即ち、日頃から俺の扱い方を研究していることに他ならない。

俺の挙動、表情、言動。

俺が発するあらゆる信号を、いろはは丁寧且つ迅速に読み取る。

「う……くぁっ……」

――その能力が、正に今、如何なく発揮されていた。

× × ×

リビングのソファでだらだらした後、俺たちは部屋に戻った。ベッドに仰向けに寝そべって、まだ読んでいなかったマンガを読む。明るさがもう少し欲しいところだが、この影が差した感じも割と好きなので良しとする。

そんな俺のＴシャツを捲り……いろははずっと、俺の乳首に吸い付いていた。

「んちゅ……っ、ぴちゃ、ぴちゅ、ちゅぴぴ……えへへ……ちゅっ、んふぅっ、ちゅっ、ちゅく、ちゅくちゅく……っ」
「おっ、うおっ、くぁ……っ」
突起に柔らかな舌先がくりくりと押し当てられる度、天に向かって屹立した肉棒がびくりと跳ねる。肉棒は露出こそしているが、いろはの手は触れていなかった。
ページを捲ると、それに合わせていろはが乳首を念入りに舐め回す。
「ぷちゅ、ちゅぴちゅぴ、くちゅぷ、ちゅぷぷぷ……はぅん……んっ、ふぅっ、んっ、んっ、んん……っ」
「ちょ、ちょっと待て、いろは……これ、マンガ落としそうだから……っ」
見る見る失われていく握力に焦りを覚えると、いろはがにんまりと目を細めた。
「だめですよ？　ちゃーんといつも通りに過ごしてくれないと」
「や、これはちょっと、気持ち良すぎて流石に……」
「はーい言い訳しなーい」
ちゅぷちゅく、くちゅり、ぺろっ、ちゅっ、ちゅちゅっ、ちゅぷぷぷ……っ。
「おぉぉぉぉ……っ」
「あはぁ……っ、せんぱいの、びっきびきですね。おつゆがどんどん溢れて……ふぁぁ、すごくえっち……っ」
いろはが興奮した声音で喋ると、陰嚢にさわさわと指を這わせてきた。あとほんのひと押しで簡単に絶頂に達すると言うのに、最後の致命傷だけは絶対に与えてこない。本当に俺を8時間にも渡って焦らし続けるつもりのようだ。
いろはの顔を見たくなり、マンガを閉じて枕の横に置き、いろはの頭を撫でた。汗を含んだ美少女の髪はより艶やかに、より甘ったるい匂いを醸し出していて。亜麻色の海に顔をうずめると、それだけで眠ってしまいそうな程の心地良さを感じる。いろはの身体は俺に若干重なっていて、その重みまで気持ちが良い。

「んふぅぅ……ちゅぴっ、ぴちゃぴちゃ、せんぱい、ここを舐めてるだけでイったりしちゃだめですよ？」
いろはが蠱惑的に目を細め、俺に見せつけるようにべろりと舌を出して乳首を舐め回す。
「うっ、くぁぁ……っ、や、死ぬほど気持ち良いけど……流石にこれだけなら……っ」
息を荒げながら答えると、いろはの表情が一変する。勝負に挑むかのように視線を鋭くすると、俺の真上に重なって、背中に腕を回してがっちりと抱きしめてきた。
「……言いましたね？　じゃあ、いっぱい舐めてあげます」
「お、おい、待っ――!?」
いろはは口をぱっくりと開くと、頬張るように俺の胸に吸い付いた。
「れろれろれろ、んっ、んっく、んんっ、んちゅっ、ちゅっ、ちゅぴちゅぴっ、れるれるれる……はむっ、ちゅっ、くちゅっ、ぴちゃぴちゃぴちゃ……っ」
舌先で何度も左右にこねくり回され、唇に挟まれ、キスをされ、唾液を絡めて舐り回される。
「あっ……あが……っ」
直接肉棒を刺激される訳ではないのだから、いくら気持ち良くてもイクことなんて……と思っていたのだけれど、その想定は甘かった。甘いにも程があった。
いろはの丹念な愛撫に、身体の奥底が燃え上がるように熱くなる。今まで何百と経験してきた感覚に、とてつもない焦りを覚える。
「ま、待て、いろは、やっぱりこれはだめだ。マジで出そうに……っ」
いろはの頭を押さえながら言うと、いろはは唇を離して、悪戯っぽい笑みを浮かべた。
「え～？　せんぱい、イかないんじゃないんですかぁ？　……んむっ」
「ちょ、ほんとに……っ！」
再び湧き上がるマグマの感触に本気で焦り、いろはの頭を掴んで必死に引き離す。いろはは抵抗を続けながらも舌先で乳首をつつき、そ

の度に限界が一歩一歩確実に近付いてくる。
やっと完全に引き離すことに成功すると、いろはは俺に頭を掴まれたまま薄く笑みを浮かべた。
「あは……せんぱい、本当にやばそうでしたね……」
うっとりと目を細めながらも、いろはの指が俺の胸元に伸びて、指の腹で乳首をくにくにと押してくる。
「あっ、うぐっ、こら、やめろ……っ！」
いろはの両手首を掴んで引き離すと、入れ違いに唇で吸い付いてくる。手首を掴んだまま唇も離そうとするが上手く行かず、限界直前のまましばらくこのやりとりを続けた。
「はぁっ、はぁっ、はぁ……っ、いろは、お前なぁ……っ」
息を荒げて叱ろうとすると、いろはの目つきがいつもと違うことに気付いた。
――そう、簡単に言うなら。嗜虐心を煽るような、震える瞳とはまるで逆の雰囲気。
――つまり、いろは自身が嗜虐心に満ちている。
「せんぱい……せんぱい……かわいい……すっごくかわいい……っ」
「は、え？　ええ？」
いろはが俺の太ももにすりすりと手を這わせる。ズボンの上からでも指の動きの艶めかしさが見て取れて、股間の開いた部分から飛び出ている肉茎の先からは透明な汁が分泌された。
「せんぱい……もっと、もっと舐めていいですか……？」
興奮で身体を震わせながら、いろはが首を傾げる。怖いくらい官能的な仕草に、瞳をそらせなくなる。
「……もう既に、たんまり舐めてるだろ」
「……ちがうんです……っ、もっと、たくさんの場所を舐めたいんです……っ」
だから――と、いろはが唇を震わせて言葉を続ける。瞳の中で恐ろしい程に燃え滾る嗜虐の炎は、いろは自身にも制御出来ていないように思えた。
「せんぱい、全部脱いでください。……ぜんぶ、舐めますから」

「な……っ」
いろはは俺が戸惑うのをよそに、俺のTシャツの裾に手を掛ける。
今まで体験したことがない展開に、心と身体が打ち震えた。
続く。

（15）

いろはの提案に、俺は焦った。

……既に、めっちゃ汗かいてるじゃん、俺。

いろはは俺の身体を舐めたい、それも全部舐めたいと言った。

仮に、俺がいろはに対して同じことをしたいと言ったら、いろはが何と言おうがこの場でひん剥いて舐め回しただろう。女の人の匂いの甘さを知っている以上、シャワーを浴びない方が楽しめると言っても過言ではない。

しかし……俺がされる側となると、色々気にしてしまう。

――そんな訳で。

俺たちは、風呂に入ることにした。

「身体を洗わせてくれるか」

いろはにそう言った時、いろはは眉根を寄せて悲し気な顔をした。

「……先輩の匂い、好きなのに……」

変態としか思えないものの死ぬ程どきどきする言葉に、俺の決意はものすごく鈍ったが……それでも俺は浴室に行くことを頑として譲らなかった。何でかって言ったら恥ずかしいという理由以外は特に無い。

こういう時、一度移動を挟むと一気に興が醒めるのではと心配したのだけども。いろはは俺と浴室に移動するまでの間、ひたすら俺の身体をまさぐっていた。Tシャツやパンツの中に手を入れて滑らかな指で愛撫されると、興が醒めるどころか益々興奮が高まるばかりだった。

「えへへ……先輩とお風呂……」

いろはは移動しながら、頬をてろてろに緩めている。

……しかし、今考えると……風呂だと、落ち着いて寝転がることが出来ないよな。いろは、舐めづらくないだろうか。

……こんな心配、今までの人生で一回もしたことねぇ……。

身体中を舐められる為に身体を洗いに行くという、世にも奇妙な目的の為に浴室に向かった訳だが、いざ浴室に辿り着くと……思考が止

まった。
「先輩、これ……何ですか？」
「……ええっと……」
いろはの純粋な質問に、言葉を詰まらせる。
脱衣所に立てかけてあったのは、映像の中でしか見たことのないものだった。
銀色の、高級感は感じない色合い。
波打った表面。
イカダのような形状。
そして、空気の入ったぷにぷにしてそうな質感。
……どこからどう見ても、マットだった。
マットプレイに用いるという、あれだ。
「……ええっと……」
吐血しそうになりながら何と説明したものかと思い悩んでいると、
「あれ？」といろはが何かに気付いてマットに近付く。よく見ると、マットには小さなメモ紙が貼ってあった。
「何か書いてま……」
いろはが内容を見てぴたりと止まる。
「どうしたんだいろ……」
俺も内容を見て、ぴたりと止まった。
以下、メモの内容。
『お兄ちゃんといろはさん、きっとさぞかし爛れた生活、や、性活を送っていることでしょう。きっと勢い余ってここに来ちゃうこともあるでしょう。しかし浴室はベッドが無いし滑りやすいしで何かと危険です。そんな時の為に!?　このマット！　マットでございます☆一般家庭でも使いやすいやや小さめなサイズで、思う存分様々なプレイが楽しめます！　それともしかしたら浴室で長時間楽しみたいということもあるかもしれませんので、冷蔵庫にスポーツ飲料2リットル入りを2本用意してます。良かったら利用してください。それでは、レッツ爛れ～！』
「……」

「……こ、小町ちゃん、すごいですね……」
「……ああ」
もはや何もツッコめなかった。
２人とも無言で、徐にリビングに引き返す。冷蔵庫に向かったのは言うまでもない。俺と二人で居るときはいくらでも気分が盛り上がって何でもやれてしまういろはだが、小町という第三者にあんな風に冷静にメッセージを書かれては、流石に恥ずかしすぎたのだろう。今は頬を赤らめて俯いている。俯きながら俺の股間をまさぐってるけど、なに、それは本能なの？
リビングに付き、冷蔵庫を開ける。スポーツ飲料のペットボトルには、それぞれメモ紙が貼られていた。
『お兄ちゃんへ。いろはさんがとろっとろに甘えた声を出してる時、小町はいつも鼻血を出してます』
『いろはさんへ。いろはさんが気持ち良くなりすぎた時にお兄ちゃんのことを【ひぇんぱい……っ】って舌っ足らずに呼ぶの、死ぬほど可愛いです。いつも鼻血を出してます』
なんかラジオのリスナーからのお手紙みたいだ。
「これ、結局どっちもわたしのこと……っ」
いろはが耳まで真っ赤にして俺の胸におでこをこすりつけた。ううん、小町……遊んでやがるな……いろはで。気持ちは分かるけど。

× × ×

そんなこんなで。
かぽーん。
なんて音がする訳ではないが。
２人とも一糸纏わぬ姿になり、浴室に足を踏み入れていた。
足を滑らせないよう気を付けながらマットを敷いた所で、いろはが何かを思い付いたように目を見開いた。
「……先輩、その……」
「ん、どうした」
尋ねると、いろはが俺の手首をきゅっと握った。目を合わせると、えへへと照れくさそうに笑う。

「……マットの上で……洗いっこしませんか」
「え……っ」
いろはの言葉にびくりとする。
「あ……先輩の、おっきくなった……」
「や、お前、そりゃそうだろ……っ」
あんな魅力的な言葉で、反応しない訳が無かった。
いろはがしな垂れかかってきて、俺をマットの上に座らせる。俺の目の前に座ると、いろはは蠱惑的な笑みを浮かべた。
いろはがシャワーの蛇口をひねり、お湯を俺の手に当てて大丈夫かと目で問う。こくんと頷くと、俺の足先から徐々に心臓に向かってシャワーヘッドを動かしていく。優し気な瞳には母性さえ感じて、この子は良い母親になりそうだな……なんて場違いなことを考えた途端に、妙な興奮を覚えた。
いろは自身も同じようにお湯を浴びると、胡坐をかいた俺の股座に座り、柔らかな双丘を押し当ててきた。瑞々しい柔肌がこちらの肌に吸い付くようにくっついて、お湯の温もりも相俟って二人の身体の境界が曖昧になる。
「んふぅ……っ」
互いの乳首が当たるように身体を上下に動かして、艶めかしい吐息を漏らす。その瞳は完全にスイッチが入っていて、肉付きの良い肢体からはくらくらする程の牝の香りを漂わせている。
「身体……洗いますね？」
そう言って、いろはが楽しそうに笑う。
ボディソープを手の上に出して、白く泡立てる。そして自らの身体の前面に淫らな手つきで泡を塗り立てた。下腹部の恥毛まで綺麗に泡で包み、俺の身体に密着する。先程は上半身だけくっつけていたが、今度は俺の腰に足を絡めて、下半身まで密着した。
「うぁ……っ」
一層濃く感じるいろはの肢体の柔らかさに、たまらぬ愉悦を覚えて官能のため息が漏れる。
「先輩……かわいい……っ」

俺の耳元で囁くいろはの声が、しっとりとした熱を帯びている。いろはが身体を滑らせる度に、にゅっ、ぬりゅっ、といやらしい音が二人の間で悩ましく鳴る。互いの乳首がこすれ合い、ぎちぎちに勃起した肉棒の裏筋にいろはの恥毛がしょりしょりとこすれて、ゆっくりと射精欲が高まってくる。

いろはは足を俺の腰から離すと、俺の尻に手を回した。形状を楽しむかのように手のひらで尻を撫で回し、尻穴の周辺を特に入念に撫で回す。

「あっ、くぁっ、こっ、こら……あんまり、そこは……っ」

慣れない感覚にびくびくと悶えていると、いろはの身体がぶるると震えた。

「んぁ……っ、せんぱい、やんっ、本当に、可愛い……っ」

上ずった声で言ったかと思うと――細い十本の指が、突然俺の肉竿を包み込んだ。驚いて声を上げるのとほぼ同時に、息を荒げたいろはがそそり立った肉茎を強烈にしごき始める。

がちゅっ、ぐちゅぐちゅっ、ぐちゅりっ、じゅくじゅくじゅぐぐ……っ。

「うあぁぁっ!? お、おい、いろは、これは本当に……っ」

ボディソープと先走り汁が混ざったものに包まれた肉棒は、いろはの手のひらの滑りを良くして、おぞましい程の快楽を与えてくる。あっと言う間に限界直前に達して、焦っていろはの手首を掴むと、いろはははっと気付いたように動きを止めた。

「あ……ご、ごめんなさい。先輩があんまり可愛くて、つい……っ」

口では素直に謝りながらも、手の動きを止めない。

「……こら」

「んむっ?」

叱るような口調で言いながら、いろはの唇を奪う。そして更にシャワーヘッドを掴んで蛇口をひねり、2人の身体の泡を隅々まで洗い流した。口付けを交わす間、いろははシャワーを浴びている場所から逃げるように身体をよじらせていて、それが何とも色っぽかった。

「……ぷはっ。落ち着け、な?」

「……あぅぅ……ごめんなさい」
唇を離して優しく諭すと、ようやく正気(?)に戻ったいろはが、叱られた子犬のような表情を浮かべた。
いろはは胸の前で両手をぐっと握りしめ、ふんすっと息を吐いた。
「身体も洗えましたし、先輩の身体……落ち着いて舐めますね!」
「……」
顔を逸らしていろはの頭をくしゃくしゃと撫でると、「むぅ……」と拗ねた声が聞こえた。何て答えるのが正解なんだよ、今の……。「この服とこの服、どっちが似合う?」と同じくらいの難問だぞ。
……うーん、誰がこの子をこんな変態に仕立て上げてしまったんだろう。
……俺だった。

続く。

（16）

浴室で、いろはと一緒にマットの上に座っている。この空間内の温度と湿度は上がるばかりで、何もしなくてもじっとりを汗をかく。

いろはが俺の右手を掴んだ。そして引き寄せたかと思うと、俺の小指をぱくりと呑み込んだ。小指が熱いぬめりに呑み込まれて、まるで指一本だけ異世界に飛ばされたかのような錯覚を覚える。

「ん……っ、ちゅっ、ちゅくっ、ちゅっ、ちゅぴ……っ」

恍惚とした表情で俺の小指をしゃぶり、指の側面を舌先でなぞり、指と指の間を丁寧に舐め続ける。

「うっ……あぁ……っ」

いろはが舌を這わせる度に、悦楽で背筋が波打つ。今まで自分がどれほど目にして、どれほど触ったかも分からない身体の一部が、快楽を敏感に感じとる神経の塊と化した。

小指から親指まで全て満遍なく舐めると、今度は俺の手のひらにべろりと舌を這わせる。唾液でひんやりと冷えた部分が、いろはの艶めかしい吐息で温められる。俺の反応を逐一窺うような瞳は、好奇心と嗜虐心に満ちている。

手首まで己の唾液を塗り付けると、今度は左手の小指にしゃぶりついた。右手同様隅から隅まで丁寧に舐りながら、俺の右手を自らの乳房に導いた。右手の指が乳房にたっぷりと埋まると、いろははおとがいを上げて甘ったるい声を漏らした。

小指から、薬指。

薬指から、中指。

中指から、人差し指。

そして人差し指から、親指。

その後は、手のひら、手の甲、手首。

「んふぅぅ……っ、ぺちゅ、ちゅぴ、れろっ、んっ、ふぅぅ……っ」

一心不乱に俺の身体に唾液を塗りたくるいろはが、縄張りにマーキングをする犬の姿に重なった。今まさにいろはにマーキングされている俺の身体はどうしようもない程に反応してしまい、下半身の欲望

はぎちりと反り返っている。
　両手をたっぷりと舐め終えると、いろはは俺の胸に顔をうずめた。疲れたのかと思ったら、熱い吐息を俺の胸板にかけながらゆっくりと顔を上げていき、俺の首に舌を這わせてくる。
　顔を離したかと思うと、右手を俺の顔に近付けて、中指でついっと俺のあごを上げた。普段なら考えられない仕草にどきりと心臓が跳ねる。
　キスをするのかと思ったら――まるで、ヴァンパイアが美女の血を吸うかのように、首を傾げて俺の両肩を押さえ、首に吸い付いた。喉仏に瑞々しい唇を押し当てられ、ぴちゃぴちゃといういやらしい水音があごの下から響いてくる。己の命もあらゆる快楽も、いろはの手に握られているような気がした。
「……ぷはっ。……せんぱい、やっぱりかわいいです」
「……うるせえよ」
「えへへ……んっ」
　愛おし気に目を細めたいろはが、唇を重ねてくる。普段性感を覚えることのない場所をたっぷりと舐られた為か、いろはの舌に対しての反応が大きくなっている。いろはの舌先に舌の腹をくりくりと撫でられると、それだけで射精してしまいそうだ。
「んふぅっ、くちゅ、ちゅぴっ、はぷっ……ふぁっ、……せんぱい。仰向けで寝てくれますか？」
　甘えた声でおねだりするように言いながらも、俺の乳首を指の腹で撫でている。
「んっ、くっ……あ、ああ、わかった」
「ありがとうございます……んっ」
　いろははお礼を言うと、流れるように乳首に吸い付いてきた。
「んふぅっ、ちゅぴっ、くちゅぷっ、ちゅぴちゅぴ、ちゅぷりゅ、ぺろ、ちゅぷぷぷ……っ」
「うっ、あぐっ、こっ、こら……っ」
　乳飲み子のように吸い付いてこられて、下腹部が痛い程に反応する。こんなにも長時間、直接触れられもせずに勃起しているという状

況の異常さが身に染みてよく分かった。
　ようやくいろはが舌を離すと、舌先と乳首との間に透明な糸が伸びていた。ごくりと息を呑んでそれを凝視していると、いろはは今度は俺のもう片方の乳首に吸い付く。俺の肩を掴んで押し倒しながら、舌先で乳首をつつき、乳輪をなぞり、舌の腹でねろりと舐めてくる。仰向けになった身体にいろはの柔らかな肢体が重なると、いろはの尻のすぐ下で肉棒が絶頂を求めてひくついた。ようやく解放される頃には、頭の中にもやりとした濃度の高い霧が舞っていた。
「ぷはっ……。……ついやっちゃいました。それじゃせんぱい、今度こそうつ伏せになってくださいね」
　ついって何だよ……とは思いつつも。
「……あいよ」
　次は一体どんなことをされるのだろうかと思いながら、緩慢な動きで身体の向きを変えた。

×　×　×

　うつ伏せになり、マットの端にあるふくらみに顎と手を乗せた。足を真っ直ぐ伸ばしていたら、いろはが俺の膝の内側に手を当て、足を開かせた。不格好な体勢になると同時に、マットとの密着度が高まり肉棒の裏筋がマットにこすれる。いろはがくすりと笑う声がしたかと思うと、俺の尻をくいと押してきた。その拍子に裏筋がマットの上を滑り、たまらない愉悦が走る。
　いろはが俺の背中に身を重ねて、耳元で蠱惑的な声で囁いた。
「せんぱい……いっぱい、気持ちよくなってくださいね」
　魅惑的な声に対して喉を鳴らしたのが、いろはに聞かれるのが妙に気恥ずかしかった。
　いろはは俺の肩を押さえると、背中に舌先をちょんと付けた。
「おっ……うぉ……っ」
　いろはの舌が触れた場所に、小さな快楽の火花が咲く。
「んっ……ちゅっ、んん……っ」
「おっ、おぁっ？　あっ、うっく、くぁぁ……あっ、あぁぁ……っ」
「んふぅぅ……っ、せんぱい、せんぱぁい……っ、ちゅっ、ちゅぴっ、

ちゅっ、ちゅっ、ちゅっ……」
俺が声を漏らす度に、いろはは上気した声で俺を呼び、脇腹や乳首に手のひらを這わせる。
いろはが背中を舐めるごとに快楽の火花は咲いて咲いて咲き続けて、肩から腰にかけてたっぷりと舐られる頃には、咲いた火花同士が繋がって大きな炎の海になっていた。いろはの唾液をたっぷりと塗された背中は大きな性感帯と化していて、いろはが指で背中をなぞるだけでマットにこすれた肉棒からカウパーが滲んだ。
いろはが身体を離す。俺の腰とマットの間に手を差し込んで、くいと上げた。いろはに対して尻を突き出すような恰好に、火が出る程の羞恥を覚える。
「い、いろは、何する気だ……？」
マットに突っ伏したまま尋ねる自分の声が、震えていることに気付いた。
「んー？　……せんぱいが、もっと気持ち良くなれるところを舐めてあげるんです」
いろはは底冷えのする声音で囁いて屈み込むと、いきり立つ肉棒の裏筋に生温かい息を吹きかけた。
鈴口から滲んだカウパーが垂れ下がり、マットとの間にねっとりと糸を引いていた。

続く。

（17）

マットの上で四つん這いになり、いろはが次に何をするのかと、期待と不安で身体を戦慄かせる。

「先輩のお尻……白くて綺麗……」

尻を撫でながら、いろはがうっとりとした声で言う。完全にスイッチが入ったと思われる声に、ぞくぞくとした官能が高まる。熱の篭った吐息が肌に触れると、その度に声が漏れそうになった。

いろはの舌が伸びて、尾骨にちょんと触れる。

「んく……っ」

たまらず声が漏れると、いろはが愛おしむように尻を撫で回した。舌先をちろちろと尻に這わせて、外側から円を描いて徐々に中心に迫ってくる。

「んっ、ちゅくっ、れろっ、ぴちゃぴちゃ、ちゅぴっ、んっ、はむぅん……っ、んふぅっ、れろっ、れるっ、れちゅっ、くちゅるっ、ちゅぴっ、ちゅぴちゅぷちゅぷ……っ」

「おっ、おぉぉ、おぉぉぉぉ……っ」

俺の羞恥を煽る為か、わざとらしいくらい卑猥な音を立てて尻を舐め回してくる。円が小さくなり肛門に近付くにつれ、くすぐったさが快感に変化していく。

いろはの舌が肛門のすぐ上にまで近付くと、そこからは一層執拗に円を描いて周りを舐め解す。今度は円の半径を縮めも広げもせず、同じところを何周も何周もなぞる。

「おっ、んくぁ……っ？　あっ、うっく、くおぉ……っ」

「ちゅっ、ちゅぷっ、れろれろ……んはぁ……っ、せんぱい、かわいい……。女の子みたいな声出てる……」

いろはの言葉に、顔から火が出そうな程恥ずかしくなる。俺が突っ伏すと、いろはは益々楽し気に肛門周りに固めた舌先を這わせ、キスをし、べろりと舐る。

どれだけ焦らされたか分からないくらいの時間が経った時。

――つぷり。

「んくぅぅぅ……っ!?」
不意に、自分の排泄孔に強烈な異物感が生じた。
「んふぅぅ……っ」
いろはがしているのが鼻息だと分かり、この異物感の正体はいろはの舌なのだと気付く。舌先が、肛門にぐりりとめり込んでいた。
「んっく、ちゅく、くちゅ、くちゅ、ぢゅくぢゅく、じゅく、ぢゅくく……っ」
ぐにぐにぐに、と舌が一突きごとに肛門に侵入する深度を増していく。
「おっ、おごっ、くおぉ……っ？　あっ、うぐ……っ！」
脂汗を滲ませて、未知の感覚にひたすら耐える。今耐えた所でここからマシになるどころか更にきついことになるとは分かっていても、堪えるしかなかった。
ずに、ぐにぐに、ずぐぐぐ……。
「おっ、おぉっ、あが……っ」
半開きになった自分の口から唾液が垂れても、それを止める余裕さえない。
未知の違和感が、慣れ親しんだ紅くぬめった舌により未知なる快感へと変質していく。
「んふぅぅ……っ、んっ、んんっ、んんんん……っ」
いろはは夢中になって尻穴を舌で貪り、形の整った鼻が尻の割れ目をぐりぐりとこする。
いろはの手が、破裂寸前の肉竿にするりと伸びた。指先が軽く触れただけでおぞましい程の媚電が走り、咄嗟に身体を前に進めていろはから離れる。慌てて身体の向きを変えていろはに向き直ると、自分の息がひどく荒くなっていることに気付いた。
「……どうしたんですか？」
いろははぺたりと女の子座りをすると、挙動の一部始終を俺に見せるかのようにゆっくりと首を傾げる。艶っぽく微笑んだ口からはちろちろと舌が見え隠れして、捕食動物が「大人しく食われろ」と言っているかのようだ。

「……や、その、今、かなりやばかったから。直接触られたら、もう、我慢とか出来ないなって思って……」
いつもとは立場がまるで逆転していて戸惑っていると、いろはが四つん這いになって歩み寄ってきた。全身から発する蠱惑的な魅力により、期待感が身体を包んで離してくれない。
「そうですか。じゃあ、頑張って我慢してください」
「な……っ」
「今度は仰向けに寝て足を開いてください。お尻、もっと舐めてあげますから」
いろはの言葉に絶句する。
躊躇はすれど、笑顔の中から威圧感を放ついろはに逆らうことも出来ず、すごすごと仰向けに寝転がり、足を広げた。いろははうつ伏せで寝ると、俺の足の根元を掴み、自らの口元にぐっと引き寄せた。
ずに……っ。
「おぉぉぉ……っ」
容赦なく肛門にねじこまれる舌に悶絶すると、またしてもいろはの手が肉竿に伸び、逃げることも出来ずに掴まれた。緩慢に抽送を繰り返す舌と同じ速度で、ねっとりと肉竿がしごかれる。
「い、いろは、だめだ、これ、本当に、やばいから……っ」
腰を情けなくびくつかせて上ずった声で言うと、いろはが口を離して妖しく目を細めた。
「ゆっくり動かしてるから大丈夫ですよ。……先輩がどれくらい刺激したらイくかくらい、わたしには分かってますから」
いろはの言葉に戦慄した瞬間、肛門を再び舌で犯された。
× × ×
「んふぅっ、ちゅく、ちゅくくく、れろっ、ちゅっく、くちゅり、ぢゅくく……っ」
「おぉ……っ、あがっ、も、もう、やめ、あぐぅあぁぁぁ……っ」
嗜虐に目覚めた牝の恐ろしさを知った。
いろはは俺の膝の裏を掴み、みっともなく足を広げると、そこから何十分にも渡って飽くことなく俺の内股、陰嚢、肛門を舐り回した。

俺が刺激に慣れてくると、危機感を煽るように亀頭をぱっくりと呑み込んで射精直前まで蹂躙して、限界を迎える寸前で口を離す。二人ともたっぷりと汗をかいていたので、水分補給を言い訳に浴室から離れられるかと思ったが……小町が用意してくれた飲み物を脱衣所に置いていたため、俺が精神的余裕を取り戻す時間は設けられなかった。
「はぁ……先輩が可愛いなんて、とっくに十分知ってると思ってましたけど……まさか、ここまでとは思いませんでした……」
「んっ、んっく、うぐぅ……っ、やめ、もう……っ」
そして今。
いろははあぐらをかいた俺の後ろから抱き付き、足を俺の腰に絡めて動けなくすると、こちらの限界を試すかのように陰嚢をまさぐり、指をウェーブさせてしごいていた。
「あ、そうだ。先輩……男の潮吹きって、興味ありますか？」
いろはの発した言葉にぞっとする。
「え、な、何言ってんだ……っ？　うぐ……っ」
「先輩が好きそうな動画を探してたら、そういうのをたまたま見付けたんです。それで調べてみたんですけど……男の人も潮を吹くらしいですね」
いろはの言葉が、重い鉛のように一つ一つ心に沈み込む。
確かに、それの存在は知っている。調べたこともある。
けれど、怖くてとても試すことなど出来なかった。
「先輩はもう十分に我慢してくれたと思うので……予定を早めて、もう出しちゃいましょうか。ついでに潮も吹いてみましょう！」
やけに明るく言うのが、却って不気味に思えた。
「や、水分補給が大事だって書いてなかったか？　汗だくだから無理だと思うんだけど」
「やだ先輩、まだペットボトルの中身は半分以上残ってますよ？　ほら、飲んで飲んで……」
「んぐっ、ごくっ、んぐ……っ」
マットのすぐ横にペットボトルを置かれていたため、強制的に水分を補給させられる。

「……ぷはっ、はぁっ、はぁっ……うぐぅぅ……っ。あれ、かなりしごかないと無理だろ、多分。そこまで強くしごかれると流石に痛いと思うんだ」
「先輩が一度出しちゃえば十分ぐちょぐちょになると思いますけど……そう言えば、昨日からお風呂場にローションを忘れてましたね」
いろはの言葉にぎょっとして振り向くと、満面の笑みでローションを手に取っていた。
……ああ、もう。
どうやら、逃げられそうもない。
続く。

（１８）

逃げられそうもないとは思ったが、それでも一応抵抗を試みる。
「……絶対やんないとだめか？」
「……先輩がもっと可愛くなるとこ、見たいです。すっごく。……だめ、ですか……？」
「うぐ……っ」
だめだった。
切実な響きまで混ぜて懇願されては、もはや逆らいようがない。
「……わかったよ。好きにし……ってうおぉぉ!?」
俺の言葉を最後まで聞かずに、いろははローションを肉棒にたっぷりと垂らした。天を突くように屹立した肉棒に透明のぬめった液体が塗りたくられ、恥毛がぺしゃりと肌に貼り付く。
それじゃあ――と、いろはが興奮を抑えた声で良い、肉棒を力強く握った。
「行きます……っ」
震える声音でいろはが言うと――白く細い指が、高速で肉竿をしごき始めた。
ぐちゅがちゅじゅくじゅぷじゅぐぐぐぐちゅがちゅがじゅぐっ。
「あぁぁぁ

持ったマグマの奔流が身体の内から湧き上がる。
「もう、出――」
言葉を最後まで発することさえ叶わずに、弾けるように腰を跳ね上げた。
――ごぶりゅっ、どぶどぶどぶどぶっ、ごぶぶっ、ぶびゅるっ、ぶびゅっ、びゅぶりゅっ、びゅるるる……っ。
「あっあっあっあっあっあぐぅぅぅ……っ!! や、やめ、いろは、出た、出たから。手、とめ……っ!!」
「いっぱい出たぁ……っすごぉい……でもまだだめですよ？　これじゃいつもと同じですから。ほら、吹いてください、吹いてください……っ」
俺の耳を舌でぐちゅりぐちゅりと犯しながら、いろはの両手は尚も肉茎と肛門を蹂躙する。射精の脈動が終わっても止まらない手のしごきは、敏感になった肉棒にとって地獄に等しい。
「んぐぅぅぅ……っ!!」
顔をぶるぶると振って快楽地獄に耐えていると、いろはが肛門から指を抜いた。何事かと思えば、肉棒をしごく手を止めないままにローションを再びたっぷりと塗りたくった。濃厚な白濁と透明が混ざり合い、卑猥なぬめりが下腹部を包む。
これ以上しごかれた死んでしまう――と思った矢先。
突然、尿意に近いものが下腹部を襲う。
「あっあっあっ……!?　な、何か、うぁ、出る、出る、出る……っ!!」
「ほんとですか？　ほんとに？　出して出して出して……っ!!」
正気を失っているのではと思う程興奮した声でいろはがまくし立てて、肉棒をしごく手に一層力を込める。
にちゅぐちじゅぐじゅぽじゅぴじゅぐじゅぐじゅじゅぐぢゅぐぢゅ……っ。
「あっ……あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!?」
――ぷしゃぁぁぁっ、びゅるっ、ぷしゅるっ、ぷしゃぁぁぁぁぁぁぁぁ……っ。
強烈な排泄感に襲われた瞬間、鈴口から見覚えのない無色透明の液

体が大量に飛び散った。水分を取り過ぎた時の小水のような色合いの液体が、いろはがしごく度に大量に溢れ出す。
「すごい……これが、潮吹き？　うわぁぁ……っ」
いろはが感動したと言わんばかりの声が、すぐ耳元で聞こえている筈なのに急に遠のく。自分の意識が途切れる時の感覚だったのだと、後で気付いた。
「……あれ、先輩？　先輩……？　先輩、わわ、先輩！　大丈夫ですか!?」
いろはがパニック気味に呼びかける声を、どこか遠い異世界の出来事のように感じながら――
俺は、意識を手放した。

× × ×

やりすぎたなぁ……と、心の底から反省している。
「うーん……」
あの後。
浴室で気を失った先輩の身体を急いで洗い流して、バスタオルで身体を拭いて、肩を組んで必死でリビングまで運んだ。助けを呼ぶことも考えていたけど、いざソファに寝かせるとすぐに穏やかな寝息が聞こえたので安心した。自分がびしょ濡れの全裸だったことを思い出して、慌てて浴室のマットの掃除をして自分の身体を拭いて脱衣所や廊下やリビングも残すところなく拭いた。
今、先輩は、わたしに膝枕された状態ですやすやと寝ている。子供みたいな寝顔だなぁ……とくすりと笑いながらも、先輩を気絶させたことに罪悪感ばかりが湧いて出てくる。わたしは沢山気絶してる……というかほぼ毎日気絶してるけど――それはそれでどうなんだって話だけど――先輩がこんなに激しくイって気絶したのは今回が初めてだ。先輩が眠るように意識を失った時、本当に怖かった。先輩がどこか遠くに行ってしまう気がして、泣きそうだった。
ああもう、いっぱい謝りたい。何をして償えるかも分からない。
いくら楽しくなったからって、あんな……わたし、何やって……もう……っ。

自己嫌悪に陥っていると、「ん……っ」と幼い声を漏らして、先輩がゆっくりと目を開けた。
「あ、先輩……お、おはようございます」
「……」
「あぅ……」
先輩……じっと見てるだけで何も言ってくれないよぉ……そうだよね、怒ってるよね……。うぅ……どうしよう……。
「……いろは」
「はっ、はひゃいっ!?」
先輩に突然呼ばれて、完璧に声が裏返った。
「せ、せせせせ、先輩、あの、その、さっきは……っ」
「……わりぃな」
「……へ？」
「すまん。気絶するなんて……心配かけたな」
「……っ」
先輩の言葉に、他意は見えない。心の底から心配してくれている。
ああもう、わたしがはしゃぎすぎたんだから、わたしを責めるべきところなのに、この人は……この人は……っ。
目の奥がじんわりと熱くなって、身体を屈めて先輩の顔を抱きしめた。
「むぐっ!?　お、おい、いろは!?　お前どうし……く、苦し……っ」
「あうぅ……せんぱいぃ……っ。なんですか、なんなんですか、もう……好きです、大好きです……っ。んっ、んむっ、んむ……っ」
「急にどうしたんだお前は……んむっ。落ち着けって、んむっ、な？　まずは身体を離しむぐっ、や、おい、こら、いろは、呼吸が出来ないから、こらっ、今舌を入れられたらマジで呼吸出来なむぐっ、落ち着むぐぅ……っ」
この後わたしは、涙をぽろぽろ流しながら先輩に沢山キスをした。
ああもう、わたしはこの人が――比企谷八幡が、大好きだ。
こんなに優しくて……、
「あ、今日の分はしっかりおしおきとして返すからな。覚悟しとけよ

？」
「あぅ……。は、はいぃ……っ」
……たまに、というかすごく鬼畜な所があるけれど。
とってもとっても、素敵な先輩。
この人と、ずっと一緒にいたい。
変な癖のある髪の毛をくしゃくしゃと撫でながら、心の底からそう思った。

さて、今日はゆっくり休むとして、明日から先輩と何をしようかな。
あの手この手で、もっともっとわたしに惚れさせてやるんだ。
ふふん。
お終い。

雪ノ下雪乃が女王様ぶってもあまり上手く行かない。（1）

冬が徐々に眠りに就く、春休みのある日。
俺は、雪乃の家に泊まりに行くことにした。
三連休と言わず出来る限り長く……という方向で。
春休みに入る、少し前。
二人でどう過ごすかの相談を具体的に始める前は、二人とも妙にそわそわしていた。
互いにやりたいことは大体一致しているんだろうけれど、いざとなると恥ずかしいという気持ちが勝ってしまうのか、中々話を切り出せずにいた。
こういう面では未だに二人してチキンである。
だから、雪乃の家で晩御飯を食べていた時、春休みに長期的に泊まりたいと告げた時は……雪乃の反応がとても面白かった。
『……ちょ、ちょうど、良いわ……わ、私も、呼ぼうとしていたのよ』
目を見開いて動きを止めた後、箸を置きながら雪乃はそう言った。
声は震えるわ頬は赤らんでるわ顔を逸らしてちらちら流し目を送ってくるわでこっちとしては死にそうだった。
ほんと悶えて大変だったからもっとやってほしいです。
そんなこんなで。
本日から。
雪乃宅にて、期間を決めないお泊まり会のスタートである。
ちなみに昨日は雪乃がうちに来ていたのだけど、リビングで小町と三人でくつろいでいた時の小町の煽りが尋常じゃなかった。
以下、そのシーンの回想。
「雪乃さーん。明日からの同棲生活で、何か必要になったらいつでも言ってくださいねー」
「こ、小町さん!?　ちょっと……っ」
「おいこら小町。いくらなんでも……」

「えー？　でもこれ、予行演習みたいなもんでしょー？」
『……』
「はい、二人とも黙ったー」
以上、回想でした。
妹に二人して完全に沈黙させられるという、完全なるノックアウトだった。
けらけらにまにまと笑う小町に腹が立って、ほっぺたを物凄く引っ張ってやった。
その時の小町の「うにゃー！」という声が阿呆みたいに可愛かった。
雪乃も若干やってみたそうだったから、今度やらせてみよう。
妹をいじめる計画を立てるというド外道ぶり。
恥ずかしい煽り方をする小町が悪いな、うん。
「しかし……」
もはや何度足を運んだか分からない雪乃の家の前まで来て、今回の件を切り出した時の雪乃の顔を思い出す。
『――私も、呼ぼうとしていたのよ』
あの時浮かべた笑みに感じた違和感。
具体的に言えば、口の端の吊り上がり方が、今まで見たことのないものだった。
……なーんか、怪しいんだよなぁ。
妖しいってよりかは怪しいって感じ。
一体何を企んでいるのか。
その企みは可愛い程度のものなのか、笑えないレベルのものなのか。
不安は尽きないけれど。
何より、早く雪乃の顔を見たい。
毎日顔を合わせているのに、もう顔を見たいと思ってしまうくらいに惚れてしまっているんだから困ったものだ。言ってて死にたくなるからまた更に困ったものだ。
「……まあ、考えてても埒が明かねえか」
頭をがしがしと掻いて、インターホンを押す。

家の中に響く呼び鈴の音は、どこか遠雷を思わせた。
こちらの世界と、あちらの世界を繋ぐ、不思議な音。
雪乃が居る空間と、俺の居る空間を繋ぐ、不思議な音。
ドア越しに、聞き慣れたスリッパの音が聞こえた。
扉ががちゃりと開いて、二人の空間が繋がる。

×　×　×

「おかえりなさい」
「う……お……っ!?」
玄関のドアが開けられるなり、雪乃がふわりと抱きしめてきた。
ニットのセーター越しに感じる雪乃の身体の感触に安心を覚えると同時に、一体何事かと頭の中がワニワニパニックに陥る。
耳を撫でる甘い吐息。
視界を艶やかに覆う、鴉の濡れ羽色の髪。
未だに強く抱きしめるのに勇気が要る、華奢で色っぽい肢体。
本当にこんな子が俺と……なんて改めて思って、つい緊張して腕がぴんと下に伸びて固まってしまった。
「ふふ、どうしたの？　そんな初心な反応をして」
「や、そんなことな……っ!?」
子どもをからかうような声音で俺を挑発したかと思うと、俺の脇をすり抜けて伸ばした手でドアの鍵とチェーンを閉め、俺の両足の間にすらりと伸びた足を差し込んだ。
あまりにも滑らかに拘束されて、思考が止まる。
「えっ、ちょっ、はぁっ!?　お、おい……っ」
いよいよ頭の中が混迷を極めると、雪乃が正面から俺と向き合った。
透き通るような双眸が真っ直ぐに俺を見つめてきて、何も言えなくなる。
「さっきの、まだ返事してもらってないわ」
「え……」
「おかえり、と言ったでしょう？」
「え、あ、や、ええ……？」

返事した瞬間、同棲ごっこを飛び越えるやないかーい。
恥ずかしさから拒絶感を全開にすると、雪乃がしゅんと眉根を寄せた。
「返事は……してくれないのかしら？」
「ただいま。ただいま。超ただいま」
今にも泣きそうな声で聞かれて、襲い来る罪悪感から食い気味に答えた。勢いで三回も。
「……ん」
雪乃は言葉としても成立していないような短い声を発して、嬉しそうに微笑んだ。
この笑顔は反則だ。
普段の凛とした顔を知っている上で、こんな柔らかな、それこそ聖母のような表情をされてしまっては。
「一先ず及第点ね。明日から朝と夕方に同じパターンの練習をするから」
「え、出掛けてなくてもするの？」
一旦玄関から外に追い出されるのだろうか。シュール過ぎるだろう。
俺の問いかけに、雪乃は呆れたようにため息をついた。いつもこめかみに当てる手は、今回は俺の首に回されている。
うなじをさわさわと撫でられると恥ずかしさで死にそうになるからやめてほしい。
「練習すること自体は良いのね……冗談半分で言ったつもりだったのだけど」
雪乃の言葉に、またも違和感を覚えて。
「……お前、本当にどうしたんだ？　今日は」
募る疑念から、思わず聞いてしまった。
今のノリに近い状態は、何度も見たことがある。
しかしそれは、猫やパンさん関連で雪乃の気が緩んでいる時や、二人でべったりとしている時、またはその延長線上で、行為に夢中になっている時くらいだ。

言ってみたら結構あった。
なんかすげぇ恥ずかしい。
けれど、今日は違う。
会った瞬間から、フルブーストという感じだ。
いくら二人きりだと言っても、最初からこんなことをしたら、普段ならお互い恥ずかしさで黙りこくってしまう。
これは、いくら何でも……。
あ。
「……お前、まさか熱があるんじゃ……」
言って、自分の額を触ってから、雪乃の前髪をかき上げて可愛らしいおでこに手のひらを当てる。
もしかして、熱に浮かされているせいでこんなデレのんになっているのかもしれない。
季節の変わり目だし、もし本当にそうだったらまずは全力で看病することになる。
それ自体は全く厭わないけれど。
ただ、心配だ。
「うーん……熱は無いみたいだけどんむっ」
雪乃のおでこに手を触れたまま。
キスされた。
「……」
無言でおでこから手を離す。
素敵な触り心地でござんした。あと唇柔らかいよね、君。
や、そうじゃなくて。
「……えぇっと、今のは何のんむっ」
きゅっと抱きしめられて。
また、キスされた。
唇を啄むような、優しいキス。
「……」
……はぁん!?
はぁん!?

はぁーーーーん!?
何今の感じ!?
超可愛いんですけど!?
今の俺ならテンションが上がり過ぎて裏蓮華も使えそう。
八幡遁甲……二度と言いません。
空間を歪めるパワーと速度で飛び蹴りを放つ妄想をしていると、雪乃がくすりと笑った。
「……ふふ、どうしたの？　八幡。顔が真っ赤よ？」
「……」
今の言葉を聞いて思ったことを、正直に伝える。
「……お前もじゃん」
「……っ」
俺が言葉を発する前は、頬をほんのり朱に染めているくらいだったのに。
俺の指摘を聞いた途端、耳まで真っ赤になった。
雪乃が、俺から目を逸らす。
「……く……っ」
うわぁ。
ものすっごい、「不覚……っ！」って顔してる。
え、何、どこの敵キャラ？
一体何が何やらと思っていると、俺を包んでいた腕がするりと解かれて雪乃が離れる。
「……上がってちょうだい。……まだまだこれからよ……」
「お、おう……」
打ち切り漫画の最終回の台詞か。
ただいまと言ったんだから、その設定のままならわざわざ上がってなんて言い方しない方が良いのでは、などという他愛も無いツッコミを考えながら。
改めて、雪乃の家に、雪乃が居る空間に足を踏み入れる。
雪乃は俺の数歩前を歩き、腕を組んで顎に手を当てながら「まだまだ私の反応が甘いわね……もっと余裕な態度でいないと……」などと

ぶつぶつ呟いている。
……本当に、なんなんだろう。
でもまあ、うん。
取り敢えず、熱を計っている時及びその直後の二連続のキスは、そのうちもう一回やってもらいたいなと思いました。マジで。
続く。

（2）

雪乃の家のリビングに入り、荷物を下ろそうとした所でふと思い出す。

「あ、そうだ。雪乃」

「何かしら？　……え？」

バッグと一緒に持ってきていた物を、雪乃にひょいと手渡す。

雪乃が、きょとんとした表情で目をぱちぱちと瞬かせた。

雪乃の手には、可愛らしくラッピングされたものが乗っている。

「開けてみてくれ」

「え、ええ」

雪乃が袋を丁寧にテーブルに置いて座り、しゅるしゅると紐を解く。

「……あ……っ」

雪乃が、ほわっと息を吐いた。

中身は、可愛らしい猫のクッション。

三毛猫の愛嬌たっぷりで大きな顔が、気持ち良さそうに寝ている。

枕にも使えるような、そこまで大きくないサイズのものだ。

「これ……」

雪乃が嬉しさと驚きを同居させた視線を送ってくる。

恥ずかしさに頬をぽりぽりと掻きながら、説明を始める。

「この間、店でお前が欲しそうにぽーっと見てたろ。あの時買おうかと思ったんだけど、生憎あの時は時間が無かったからな……だから、ちょっと時間差だけど」

別に何かの記念日という訳ではないけど、まあプレゼントみてぇなもんかな……と、ぼそぼそ呟く。

しかし人間というものは、一度欲しいと思ったものも時間が経てばその気が無くなったりするものだ。いくら雪乃が猫好きだからと言っても、今もあの時ほど欲しがっているのかは分からない。

恐る恐る雪乃の表情を窺って……ほっとした。

雪乃は口元を猫のクッションにうずめて、目だけこちらに向けてい

る。
その瞳はとても嬉しそうで、けれど恥ずかしそうで……たまらなく、可憐なものだった。
「……その、とても……嬉しいわ。……ありが、とう……」
「お、おう……」
口が塞がっているため、妙にこもった声でお礼を言われる。
けれどそんな状況でも、赤面した頬は垣間見えてしまう。
お礼を言われただけなのに、物凄く悶えたくなった。
雪乃の隣に腰を下ろして、様子を見守る。
雪乃は俺を見て、「……いい？」と目で問い掛けてくる。
俺が頷くと、雪乃はクッションから顔を離し、腕を伸ばして愛嬌のある猫の顔の全貌をまじまじと見つめる。よほど気に入っていたんだろう。
抱き寄せて、猫と自分のおでこをすりすりと擦り合わせる。
耳をくいくいと引っ張る。その度に、猫の顔がみょいーんと伸びて奇妙な顔つきになった。
その顔もツボだったのか、雪乃は耳を引っ張ったまま、目を見開いてじっと見つめている。
今度は耳を引っ張ったまま、おでことおでこをくっつけた。
今度は胸元に抱き寄せ、母親のように頭をぽんぽんと撫でる。
そしてもう一度顔をまじまじと見つめ、おでこをぴとりとくっつける。
「……」
……なんか、もう、うん。
写真集にしたい。
そして部屋に金庫を設置して、そこにしまおう。最優先財産だ。家宝とも言う。
雪乃の様子に内心悶絶しながら、雪乃の頭にぽんと手を置く。
愛おしむように撫でていると、雪乃が俺の肩に体重を預けてきた。
愛情いっぱいの視線は尚も猫クッションに注がれているが、表情が一段と柔らかくなる。

「……にゃー」
「……っ」
猫と見つめ合っている雪乃が、目を細めて猫の鳴き声を上げた。
唐突な不意打ち（頭痛が痛いみたいになってる）に胸を撃ち抜かれ、姿勢を崩さないので精一杯になる。
「にゃー、にゃー？　にゃにゃー。……ふふ」
「……」
死にそうではあるんだけれど。
うん。
このまま、二時間は行ける。
その後もしばらくの間、猫クッションを愛でる雪乃を愛でるという幸せすぎるくだりを続けた。

×　×　×

およそ、三十分後。
「……あ」
雪乃が、突然何か思い出したかのような声を上げた。
俺を見て頬を赤らめると、頭を撫でている手に自分の手をぽんと重ねた。触れ慣れた温もりが、優しい安心感をもたらす。
「……あ、あなたにしては、気が、利く、じゃない……っ」
「……まあな」
や、もはや何について言ってるのか分からないんだけど。
多分、プレゼントのことだよね、うん。
返事をすると、雪乃は立ち上がってクッションをソファに置き（ちなみにソファの上には他の猫やパンさんのクッションが大量にある。並べればダイブも出来そうだが、以前提案してみたらこっぴどく叱られた）、俺の前に立つ。
「ど、どうした？」
さっきの玄関でのやりとりをふと思い出し、気持ちが落ち着かなくなる。
雪乃はふるふると首を振って、頬を両手でぱしんと叩いた。
「……よし」

「……」
……何が『よし』なのか全然分かんねぇ……。
本当に、今日の雪乃はどうしたんだろうと思っていると――突然、雪乃が腰を下ろし、膝立ちになって俺に抱き付いてきた。
そして戸惑う暇も無い内に、唇を奪われる。
「んっ……ちゅるっ、ちゅるるっ、ちゅっ、ちゅりゅっ、ちゅぴ……っ、……はい、お終い」
「え……」
唇を割り開いて雪乃の舌が口内に侵入して来たものの、ヒット&アウェイで俺が舌を絡める前に舌を抜いてしまい、それを数回繰り返したところで唇を離してしまった。
いつもならこのまま抱き寄せて、あわよくば胸も触って……という流れになる所なので、玄関でのやりとりも相俟って欲求不満が募る。
抱きしめて逃がすまいとする俺の腕をすり抜けて立ち上がり、雪乃はいたずらっぽく微笑んで俺の唇に人差し指を当てた。
「ふふ……もう少し待ちなさい。ね？」
蠱惑的に囁くと、人差し指を下唇にむにりと優しく押し込んで、ぱっと離して背を向けた。
「……」
唇に手を当てて、思案する。
何となく、雪乃の意図が読めてきた。
最終的な目的は分からないけど、どうやら雪乃は主導権を握って、且つ俺を焦らしたいらしい。
「お料理を作るから、少し待っていてちょうだい。……様子を見に来る分には、いくらでも構わないから」
エプロンを身に纏い、さりげなく俺に見せるようにふわりと振り向いて、小悪魔のような笑みを浮かべる。
……雪乃の目論見は、正直力押しで簡単に崩せそうなものではあるんだけど。
しかし、今日の雪乃は新鮮で、可愛いか超可愛いかで言ったら死ぬ程可愛くてもはや死ぬ。俺何言ってんだろう。

「……もう少し、様子見してみるか……」
キッチンへ向かう雪乃にひらひらと手を振った後、小さく独り言ちる。
雪乃の意図は分からないけれど。
乗ってみた方が、楽しそうだ。
それも、物凄く。
程なくして聞こえてきた、とんとんと小気味よく包丁で材料を切る音を聞きながら。
この後待受ける展開に、思いを馳せた。
× × ×
雪乃が料理を始めて、ほんの十分後。
「……気になる」
読んでいた文庫本をぱたりと閉じて、ぼそりと呟いた。
本を読んでいてもまるで内容が頭に入ってこないくらいには、雪乃のことが気になっていた。
さっきは何でわざわざ、様子を見に来て良いだなんて言い方をしたのか。
猛烈に気になる。
そろりと立ち上がり、キッチンの様子を見に行く。
扉を開けると、雪乃はいつも通りの様子で料理をしていた。
……何か、違うのか……？
疑問に思いながら、漫然と近付いていく。
俺に気付いた雪乃が、振り向いてにこりと微笑んだ。
「あら、本当に来たのね」
「なんとなく、な」
「そう。もう少しだから」
短く答えて、雪乃は再び料理に集中する。
何か仕掛けてくるのではと内心どきどきしていたから、何もなくて拍子抜けしてしまう。
何もされないことで、何かされた時よりも却って気になって。
ふらふらと、誘蛾灯に引き寄せられるかのように、近付いていく。

背後に立つと、雪乃は何も言わずに鍋の火を消した。
調理は半端な所で止まっている。
「……どうしたの？」
「……あ、や、その……」
鍋を見つめたまま問い掛けられて、しどろもどろになってしまう。
雪乃がこちらに顔を向けた。
婀娜っぽい流し目に、得も言われぬ期待感が高まる。
しかし、またすぐに前を向いてしまった。
その表情は窺い知れない。
俺の両手は所在無げに宙を彷徨っている。
雪乃の腰に手を添えたい。
細くて、しなやかで、それでいて艶っぽい腰に。
手を動かすと、震えていることに気付く。
腰に近付ける途中で、雪乃から尻を押し付けてきた。
「っ!?」
びくりと跳ねて、手が固まる。
雪乃の手が俺の手を掴み、腰に誘導した。
傍から見れば、結合しているようにしか見えない状況。
けれどこの状況は、雪乃から作り出したものだ。
何が起きているのか、何が起きようとしているのか、まるで分からない。
「……」
雪乃が無言のまま、俺の手に自分の手を重ねて固定して、ゆっくりと腰を回すように押し付けてくる。
ミニスカートの生地がぐりぐりと押し付けられて、臀丘の柔らかさと摩擦とであっと言う間にがちがちに欲情してしまう。
雪乃が振り向く。口は閉じたままで、艶っぽい視線を送る。
「うっ……くぁぁ……っ」
じっくりと尻を動かされ、たまらず腰を引く。
すると、雪乃は俺の手をぐいと引っ張って、強制的に尻を押し付けた。

そんな強引なことをしながらも、尻を動かす速度は変えない。
右に回って。
左に回って。
割れ目に挟んで左右に振って。
割れ目に沿って上下に振る。
「うぅ……あぁ……っ」
鈴口の先からカウパーが滲み出ているのが、手に取るように分かる。
好きなように翻弄されていると、雪乃の左手が俺の手から離れ、身体を捻じって俺の耳元に手を伸ばしてきた。
そして俺の顔の向きを変えて、ちゅっと口付けをする。
一度離して、もう一度。
今度は、舌を差し入れてきた。
口内をぬるりと舐め回されて陶然としていると、尻の動きが小刻みに変化する。
急に快感の種類が変わって、射精衝動が一気に湧く。
「んっ……んむ……っ！」
やばい、やばい、と目で伝えるが、雪乃は笑って意に介さない。
ぐりぐりと腰を妖艶に回す様は、まるでポールダンサーのようだ。
見ているだけでもぎちぎちに反り返ってしまうであろう艶姿だというのに、今はその動きで極めて肉感的に責められている。
こんなの、我慢出来る訳が無いだろう――。
いよいよ下半身の決壊が近付いた、その時。
不意に、雪乃の唇と手、尻が離れた。
「あ……っ？」
突然訪れた安寧に呆然としていると、雪乃が人差し指を俺の唇に押し当てた。
「もう……だから言ったでしょう？　もうすぐ出来るって。……待っててちょうだい」
唇から頬に手が伸びて、宥めるように撫でられる。
くすりと微笑むと、雪乃はキッチンに向き直り、鍋を火にかけた。

「……」
名残惜しんでしばし雪乃の姿をじっと見つめるが、用は済んだと言わんばかりに、何も反応が返ってこない。
無言のまま、ふらふらとリビングに戻る。
二人の空間を隔てるドアを閉めると、ドアに体重を預けてへなへなと座り込んだ。
「……本当に、何なんだ……」
今日は雪乃から責めてくると分かっていて、それなりの心構えをしているはずなのに。
想像を遥かに超えた攻撃力に、身も心ももはや陥落寸前だった。
続く。

（3）

攻守逆転という言葉がある。

世の中のあらゆる所で使われているこの言葉に抱く率直な印象は、「場を盛り上げるための方法」というものだ。

例えば野球。

あのスポーツはスリーアウトで攻守が交代して、それを何度も繰り返すというルールがあってこそ、様々なモチベーションや戦略、駆け引きやドラマが生まれる。

この言葉を人間関係、特に男女関係に当てはめると、また意味が変わってくる。

攻める側というのは、ざっくり言えば「優位に立って相手をかき乱したり、手の平の上で転がしたりする」側を指すのだと思う。

受ける側はそれに翻弄される側のこと。

ウケる側は折本。

埋めるべきは川崎大志。

そんな感じだ。

どんな感じだ。

俺で言えば、この言葉は雪乃との関係に当てはめることが出来る。

普段の雪乃は極めて優秀で頭の回転も速く、未だにみんなの前では彩り豊かな罵詈雑言罵倒暴言で俺を滅多打ちにしてくる。

打たれ過ぎてたまに気持ち良くなることがあるから余計にまずい。マジで。

そして二人きり……特に、行為に及ぶ時は、雪乃からの多少の抵抗はあれど、基本的には俺が攻めになる。攻めというか責めだ。

雪乃の反応が楽しく毎回ついやりすぎてしまうが、それを雪乃が何だかんだで嬉しがっているもんだからもう歯止めが利かない。

きっと、これが。

俺と雪乃の、攻守逆転というものだ。

どちらもあるからこそ、程好いバランスが保たれて、二人の間に流れる空気がいつも心地良くなっているのだと思う。

雪乃、ストレス溜まってる時は心持ち罵倒の圧が上がるしな。たまに由比ヶ浜がおろおろしてる時あるし。それで夜はお返しで三回くらい気絶させるから、お互いすっきりするっていうね。

ちなみにたっぷりお返しした翌朝、小町と顔を合わせたら「お兄ちゃん。今日からお兄ちゃんの名前は比企谷・ウェアウルフ・八幡ね」と勝手にミドルネームを付けられた。

略して比企谷・W・八幡にすればニコラス・D・ウルフウッドみたいな響きに……ならねえな。

攻められて、責める。

それが、俺と雪乃が培った、バランス。

「……そのはず、なんだけどなぁ……」

独り言ちて、ため息を吐く。

猫背な背中は、いつも以上に丸まっている。

場所は雪乃の家のリビング。

座っているのは俺用のふわふわクッション。

「あなたに下敷きにされてしまってはパンさんも猫も浮かばれないわ」

中々ひどいことを言われ、俺のクッションはシンプルな色合いのものになった。「パンさんがお前の尻に敷かれるのは良いんだな」とセクハラ紛い（というかアウト）の言葉を返したら、瞬間的に部屋の温度が三度くらい下がった。「なんか寒いな……」と言うと「温めてあげても良いわよ？」とにこやかに手を広げられたんだけど、多分抱きしめられたら氷漬けになるパターンのやつだからやめておいた。

クッションの話なげぇな、俺。

楽しかったし惚気たいだけですごめんなさい。

時計をちらりと見る。

夕飯にはちょうど良い時間帯だ。

ドアの向こうから聞こえてくる、包丁とまな板が織りなす心地良い音色は、雪乃の料理の手際を雄弁に物語っている。

雪乃の料理は完璧すぎて嫁っぽい感じがしない……なんてことを、一年近く前の家庭科室で雪乃の料理を食べた時（あの時は他にも色々

な人の料理を食べたが）思ったのだけど。
それを以前、雪乃にぽろっと漏らした所、それはそれは燃え盛って（頑張ればメドローアを使えそう）、「絶対あなたに家庭的と言わせてやるわ」と努力のベクトルが若干合ってない気がすることを言われた。
それからの雪乃の料理に対する力の入れっぷりは、それはそれは半端の無いもので。
俺に弁当を作っては反応を見たり、夕食を作っては反応を見たり、「美味いしこれは家庭的っぽい」と俺が言えば「明日までに具体的にどういった点が家庭的と思ったのかを三千字から五千字でまとめなさい」とえげつないことを言ったり。
どんだけ熱心なんだよ、と若干辟易することはあったけれど。
俺が喜んだ時の、あいつの幸せそうな顔が忘れられそうにないくらい綺麗で。
うん、ほんと健気だ。うちのよ……雪乃。
ご飯の話なげぇな、俺。
楽しかったし惚気たいだけですごめんなさい。
「お待たせ、八幡」
「……おう」
何だかんだで雪乃のことばっかり考えていたら本人が登場して、ちょっと声が上ずる。
雪乃は俺の様子を見てはてと首を傾げた。どうでも良いけど、きょとんとした顔がどんどんあどけない可愛さを醸し出すようになってきていて正直やばい。
俺の惚気の連射もやばい。
「そこに運ぶから、手伝ってくれるかしら」
「おう、わかった」
どきどきしながら膝に手を当て、腰を上げる。
心臓が、早鐘を打っている。
雪乃が俺に背を向けたタイミングで、たまらず自分の胸をぎゅっと掴んだ。

性的な興奮というより、これは本当に初心な緊張だ。
なんだろう、これは。
いつもとは違う雪乃に翻弄されて、さっきまで頭を抱えていたのに。
今だってその状況は変わっていないのに。
何と言うか、そんな経験は無いんだけども。
年上のお姉さんに弄ばれているような、そんな感覚。
次は、雪乃がどんなことを仕掛けてくるのか。
それが、怖くてしょうがない。
そして、楽しみでしょうがない。
そんな感情を抱いていることに気付いてしまった。
「……」
ぴたりと。
雪乃が俺に背を向けたまま、歩を進めるのを止めた。
「……どうした」
空気の質感の変化を肌で感じ取り、恐る恐る尋ねる。
雪乃が振り向いた。
その顔には、正の感情も負の感情も抱いていないような、不思議な表情を浮かべている。
雪乃が俺に一歩近づく。
思わず、一歩退く。
雪乃が首を傾げる。
その仕草に心臓が鷲掴みにされる。
雪乃がもう一歩近付く。
俺は動けない。
「八幡」
雪乃が俺を呼ぶ声が、緊張で張り詰めた空気に冷たい刃を走らせて、俺の心臓に直接突き刺さる。
俺は、まだ動けない。
息を呑むことも出来ない。
雪乃がもう一歩近付く。

「……何を、緊張しているのかしら」
穏やかな声音で発した筈の言葉が、俺の身体をがんじ絡めにする。
雪乃の手が、そっと俺の両頬に伸びた。
キッチンは寒かったんだろうか、その手は幾分冷たい。
手を重ねて温もりを分け合うと、雪乃が柔らかく微笑んだ。
「……ねえ、どうして？」
「……っ」
続けられる疑問に、何の言葉も出ない。
だって、答えようがない。
俺だって、何でこんなに気持ちが昂ぶっているのか分からないんだから。
怖いのに、期待してしまう。
何が何だか分からない。
つい今さっきまでは初心な緊張だなんて言っていたのに、今二人の間に流れる空気は薄紫色の妖しさしか放っていない。
雪乃が、おでこ同士をこつんとぶつけた。
「……ふふ。まるで借りてきた猫みたいじゃない」
「実際お前の家では借りてきた猫みたいなもんだけどな。食べ物ももらってるし」
「律儀に食費を払ってくれているのに何を言っているのよ。……それに、ずっと居れば借り猫じゃなくなるわ」
「……それもそうだな」
言うと、雪乃が目を細めて蠱惑的に微笑む。
文字通り目と鼻の先で見るその笑みの破壊力は著しく。
ごくりと息を呑むと、雪乃の口から紅い粘膜が顔を出した。
まるで別の生き物のように見える粘膜が、妖しく蠢いて俺の上唇と下唇の境目を何度もなぞる。
快感に耐え切れず、唇を開いて侵入を許す。
咄嗟に雪乃の肩を掴むと、雪乃は俺の背中に腕を回した。
「んふぅっ、んむふっ、んちゅるるっ、ちゅく、れろれろ、ぴちゃ、ちゅるるる……っ」

「……っ」
緩慢な動作で、雪乃の舌が俺の口腔粘膜を舐り回す。
背中に回された手にぎゅっと力が込められて、密着度が増す。
おぞましい程の期待に、身体が震える。
もっと雪乃に味わわれたい、そう思って、俺も手に力を込めたところで……雪乃の柔らかな肢体がひょいっと離れた。
「あ……っ？」
思わず声を上げると、雪乃が楽しそうに目で笑う。
温もりを欲する俺の感情に気付いたのか、おでこに再び触れてくすりと笑った。
「あら、本当に猫みたいね。ぜひ飼いたいところだわ」
「こんなお預けばっか食らってたら三日で死んじまうっつの」
「あら、三日も持つ気でいるの？」
「どんだけ責める気なんだよ……」
他愛の無い会話を続ける。
雪乃の小さな口から零れる吐息が、口付けを経て甘露のような匂いを発する。
心地良い香りに頭がくらくらしていると、雪乃がすっと離れて、くるりと背を向けた。
「それじゃ、お料理を運びましょう。せっかく作ったのに冷めてしまうわ」
「……ああ」
時間にすればほんの数分程度の出来事だったというのに。
まるで、何時間もそうしていたかのように感じた。
雪乃の背中を見つめながら、ひたすら考えてしまう。
……本当に、何なんだ……。
続く。

（4）

「おお……」

視界を彩る品の数々に、感嘆のため息が漏れた。

時間は夕方。

場所は雪乃宅のリビング。

テーブルに並べられたのは、ほかほかのご飯に若鶏の唐揚げ、肉じゃがなどなど。家庭的でありつつも、雪乃フィルターを通すことでそのクオリティは凄まじいことになっている。

俺がほへーと間抜けな声を漏らしていると、雪乃がふっと微笑んだ。柔らかな笑みが心音を心地良く高鳴らせる。

「デザートもあるわ。冷蔵庫にあるから、後で出すわね」

「マジか……」

感嘆のため息（十秒ぶり二回目）が漏れる。至れり尽くせりとはこういうことを言うんではあるまいか。胡坐をかいた膝に手を置き、テンションの上昇により意味も無く膝を上下に揺らす。

「ふふ、なぁに？　落ち着きがないわね」

お姉さんっぽい口調でくすくすと笑う雪乃が、心底楽しそうで。ちょっと幸せすぎて死にそうだったりする。

「や、だってな。こんな美味そうな料理を作ってもらったらテンション上がるって」

実際、本当に嬉しかった。冗談抜きで毎日作ってほしいと思ってしまう。しかしこれを願ったらその気にされてしまいそうで怖い。や、怖くはないんだけど。家族総出で俺を見送って、住所変更とかされてしまったら俺は泣くぞ、色んな意味で。

「それに、沢山食べた後のことを考えたら」

「え」

「あ」

「……」

「……」

はい。

失言。
二人して俯き、しばし黙る。
「……八幡」
「……何でございましょう」
「……ばか」
「……ちょっと可愛すぎて何言ってるのか分からない」
「いい加減になさい」
「ほめんまはい（ごめんなさい）……」
頬をつねられた。全然痛くないけど、何でこの子こんなに嬉しそうな顔をしてらっしゃるのでしょうか。女王さまのご機嫌を取るのも大変である。何様だよ俺。
雪乃は頬をつねる手を離して、自分がつねっていた場所を優しく撫でてくれた。くすりと微笑んで、穏やかに目を細める。
「ほら、食べましょう？」
「そうだな……いただきます」
この家での俺専用の箸を手に持って両手を合わせて。
二人で、きちんと挨拶をした。

× × ×

目で見ても楽しめる雪乃の料理だが、口にして改めて「ただでさえ美味しかった料理が更に進歩している」と実感した。
まず、若鶏の唐揚げ。
今まで生きてきた中で、数え切れない程の唐揚げを食べてきた訳だが。
この唐揚げを食べてしまうと、「今まで食べてきたものは何だったのか」と思わざるを得ないクオリティだった。
一口齧った瞬間に、中からじゅわりと幸せの肉汁が溢れ出てくる。さくっとした衣の歯応えと、中の肉の柔らかさのコントラストと言ったら。
一緒にかき込むご飯に、これがまたよく合う。唐揚げも好きになるし、白米も好きになる。何かもはや日本が好きになる。テンションが上がり過ぎて器が大きくなっている気がする。気のせいか。

続いて、肉じゃが。
お袋の味代表みたいな扱いだが、実際はどの程度の人が作っているのだろう。実際そこまで頻繁に食べていた記憶はない。何となく、「このおかずがあればご飯ががっつり食える！」という類ではないと思っていた。
けれど、その認識が今日で終わった。
いきなりじゃがいもを食べると熱そうなので、まず肉から食べてみる。これは牛肉か。あむっと口にすると、良い塩梅に出汁のきいた味わい深い肉の味が食道を伝い身体中に染みる。程好く汁気を帯びて濃厚な味わいになった肉は、自然とご飯が進む、進む。続いてじゃがいもを箸で割ると湯気が立ち、ほっくりとした温かさが伝わる。口に運び、はふはふとしながら味わうと、これまた出汁がきいていて美味い。続いて肉じゃがに彩りを咥えている人参や玉ねぎ、糸こんにゃくも味わう。どれも出汁が染み込んでいて、その中でもそれぞれの食感が楽しめて、どこまでも幸せな気分になる。
「あ……」
気付けば茶碗の中が空になっていて、ぽけっと口を開けてしまう。
「ふふ、そんなに美味しそうに食べてもらえると、作り甲斐があるわね。ほら、お茶碗を貸してちょうだい」
「あ、ああ、すまん、ありがとう。……や、マジで美味い。毎日でも……」
「え」
「あ」
「……」
「……」
「……はい、ご飯」
「……ありがとう」
いかん、どうにもテンションが天井知らずに上がってしまっている。
この後も舌鼓を打っては失言を繰り返し、幾度と無く互いに俯いて頬を赤らめた。

×　×　×

それからしばらくして。

「食った……」

気付けばご飯を三杯食べて、凄まじい満足感に包まれていた。本当はもっと食べることは出来たんだけど、この後のデザートがあるのでその辺は考慮した。

「大したものね……」

雪乃が素直な感想を述べている。

雪乃も食べてはいたが、一口食べては俺の食いっぷりを鑑賞するという流れを繰り返していたので、大して食べていない。元々小食だからその辺は良いんだけど、ずっと見られていたのはだいぶ気恥ずかしい。

「それじゃあ、デザートを持ってくるわね」

「後は頼んだ……」

満腹感と満足感でまるで動けず、手伝いを断念する。

「あなた……死ぬの？」

言い方がアレだったからか、雪乃がきょとんとした顔で俺を見つめる。ふっと笑って雪乃の質問に答える。

「俺はここでは死なない。死因は腹上死と決めている」

「……」

調子に乗ったら室温が下がった。

「ごめんなさい。何でもするから許してください」

「なら、この家に住みなさい」

「え」

「冗談よ。声、上ずってるわよ？」

言って、雪乃がひらひらと手を振ってリビングを出る。俺をからかうように言った割に、俺の反応を見て顔を赤くしてたのは気のせいじゃないよなぁ。

しかし、何だろう。

すごく幸せな時間だったんだけど、何だか妙だ。違和感がある。食べている時は夢中で気付かなかったけれど。

ああ、そうだ。
雪乃は、俺が料理を食べてる間に何も仕掛けてこなかったんだ。
ご飯を食べる前までの攻めに攻めてくる感じが、食事中はてんでなかった。
まあ、それはそれで良いか――と思っていたのだけど。
「お待たせ」
雪乃がリビングに戻って来た時の妖しい笑みを見て、一瞬で今の状況が何も解決・解消されていないことに気付いた。
× × ×
妖しい笑みに内心激しく動揺したが、その心の揺れも雪乃が運んできた皿の上の料理を見て鳴りを潜めた。
「これは……ティラミス、か……？」
「ええ、そうよ」
雪乃が運んできたのは、茶色と白で見事な断層を築いているティラミスだった。二人で食べるように切り分けられていて、その形や香りの良さ、確かに漂う美味しさの予感に胸が高鳴る。
「ていうかこれ、え、手作り？　え？」
パッと見、洒落たお店で売っているような、プロがこしらえたものにしか見えない。
「ええ、そうよ」
先程と同じ台詞だが、雪乃は髪を掻き上げて不敵に笑った。おうふ、相変わらず自信満々な仕草が似合う女王さまですこと……。
「すげぇな……。それじゃ、いただきま……？」
――す、と言い切る前に、目の前で起きた事態に戸惑いが隠せなくなる。
雪乃が俺の真横に座り、互いの二の腕ががっつり触れた状態でにっこり微笑んだ。
……ええ……？　そういう感じで来ますのん？
「はい、八幡、あーん」
蠱惑的に微笑んだ雪乃が、ティラミスをスプーンで掬ってそれはそれは楽しそうに俺の口元に持ってくる。

……これ、ただのあーんで終わるんでしょうか。
……終わらないですよね。今日の雪乃お嬢さま、明らかに一味違いますもんね。
本当にどうなるんだろうとどきどきしながら。
口を開けて、雪乃が作った極上ティラミスを口に迎え入れた。
続く。

（5）

俺のすぐ隣に座った雪乃が、ティラミスをスプーンで掬い取り、俺の口元に運ぶ。

「はい、八幡、あーん」

普段はまず聞けないような優しい声音で、穏やかに目を細めるその仕草に胸が心地良く高鳴る。しかしこれがただのあーんで終わる訳が無い。そんな気がする。

でもまあ、取り敢えず。

「……あむっ」

素直に口にする。

口の中でさっくりとした食感がして、直後に生地のしっとりとした柔らかみが口内を包み込む。程好く且つ味わい深い甘味が広がり、上下の歯を合わせる度に幸せが染み出す。喉を通り抜ける際、最後の最後に舌に触れた瞬間でさえ美味しかった。

つまり、要するに、つまるところ。

「……超うめぇ」

この感想に尽きる。

「ふふ、良かったわ。今回はティラミスタルトにしてみたの」

「ああ、だから最初はさくっとしたのか。ていうか何だこれ、感想を細かく言おうとしたらキリがなくなるから却って気の利いたことが言えねぇ」

「それじゃあ六十分あげるから、三六〇〇字程度で感想を書いてみる？」

「一秒一文字計算はきつくないですか……」

この子の場合、本当に俺を監視しながら六十分きっかり測るだろうから中々えぐい。

「冗談よ。あなたの嬉しそうな顔が見られただけで十分だわ」

……。

「……あの、な、その……」

歯に衣着せぬデレまくりな態度に、正直死んでしまいそう。

そろそろ訳を聞きたくて、しどろもどろに切り出す。
「その、なんだ、今日は本当に……どうしたん」「はい、あーん」
笑顔で遮られた。
どうにも雪乃のペースが続いてしまう。
「……あむっ」
ああもう、超美味い。何これ、思考が止まっちゃうんだけど。
その後も、いくら質問しようとしてもわんこそばばりのペースで口にティラミスを運ばれて何も出来なかった。ていうか地味にティラミスの量がすげぇ多い。タルトにしているのもあってか、軽くホールケーキみたいになってるんだけど。
……恥ずかしい目に遭う前に食べきってしまうっていう戦法が潰されている……。明らかに全部食べられる量ではないから、きっとこの後何かを仕掛ける為にわざと大きめに作ったんだろう。どうしよう、超楽しみだ。や、そうじゃなくて。
「はい、八幡、あーん……んむっ」
「おう、あーん……って、え？」
ぐるぐる思考を巡らせながら口を開けたが、何も口に入ってこない。不思議に思って前を見ると、雪乃がティラミスをスプーンに乗せずに、自身の口に運んでいた。フェイントで自分が食べるのかと思ったらそうではなく、瑞々しい上下の唇にティラミスを挟み込んで、目を閉じて俺に顔を近付けている。
……わー、こういう感じで攻めてきますのん？
「……」
喋ることが出来ないからか、雪乃は無言で待ち続ける。冷や汗を流していると、片目を開けてちらりとこちらを見やった。本人は意識していないんだろうけど、ウインクみたいになっててもはや心臓が痛い。
「……」
沈黙が痛い。これ、選択肢が全く無いやつだ。
覚悟を決めて、口を近付ける。唇を合わせたら絶対何かが起こるので、なるべく雪乃の口からはみ出た部分を咥えようと試みる。けれど

雪乃は俺の試みに気付いたのか、唇をあむあむと器用に動かして、ティラミスを口の中にしまいこんでしまう。それもはや自分で食べて良いやつじゃないの？　そんなに俺を死なせたいの？

「……んむっ」

諦めて、雪乃と唇を重ねる。

その瞬間。

「――っ!?」

雪乃が俺の正面に素早く回り込み、俺の股座に腰を下ろして首に細い両腕をしゅるりと回した。何が起きたか分からない内に舌を割り入れられ、ティラミスが押し込まれる。

「んむっ、ちゅくっ、ちゅぷぷ、んふぅぅ……ちゅりゅりゅ、ちゅぴ、ちゅぷぷ……っ」

「～～～～～～～っ」

口に入れてきたのはティラミス生地だけのようで、俺と雪乃の舌に混ぜかき回されて、どろどろに溶けていく。雪乃の舌の甘さと菓子の甘さとが組み合わさって、耽美な快感が身体中に染み渡る。

ちゅぽっ、と音がして、雪乃の口が離れる。

スプーンでティラミスを掬って自分の口に入れると、今度は一気に俺の唇を奪って、再び柔らかな甘みを流し込んできた。

「……っ！」

甘美な悦楽に耐え切れなくなって、雪乃の肩を掴む。しかしまるで力が入らず、その上半端な抵抗を試みたためか、口内の蹂躙が更に激しくなった。全く抗うことがことが出来ずに雪乃の顔を見やると、目をうっとりと細めて、俺の反応を楽しんでいる。

これは……しょうがない。

気は進まなかったけれど、こうするしかない――と考え、手を雪乃の胸元に伸ばし……いつもたまらない程敏感に反応してくれる乳房を揉みしだいた。

これでもう大丈夫だろう――と思った矢先。

「……っ、……んむっ、ちゅりゅっ、ちゅぴっ、んむふぅぅ……っ、んっ、あむっ、ちゅるるる……っ」

「〜〜〜〜っ!?」
雪乃は一瞬反応を示したものの、またすぐに口内を舐り始めた。おかしい、いつもなら口を離して甘い喘ぎ声を漏らすはずなのに。
続けて揉みしだくが、それでも雪乃は止まらない。むしろ俺の性的欲求ばかりが高まり、雪乃の香りを嗅いでますます意識が曖昧になる。
「ちゅるるっ、ちゅぴ、ちゅりゅりゅりゅ、ちゅくっ、ちゅるる、ちゅるるるる……っ」
俺に胸を揉まれたまま、雪乃がゆっくりと倒れ込んでくる。抵抗することなく仰向けになると、雪乃は俺に甘露のような唾液を流し込み、俺の舌に吸い付いて唾液を啜り取っていく。
もはや抵抗を諦めて、ただただ感触を楽しむためだけに雪乃の双丘を撫でさする。雪乃は俺の顔を見て、嬉しそうに目を細めた。

× × ×

どれくらい時間が経っただろうか。
半分夢の中にいるような心地で、しばらくの間ずっと、雪乃に口内を舐られ続けていた。
「……ぷはっ。……ふふ」
俺に馬乗りになっている雪乃がようやく唇を離すと、とろりと伸びた糸が半開きになった俺の唇に落ちて、口内へ流れ込んできた。雪乃は楽し気な声を漏らして、妖艶な笑みを浮かべている。
「やっぱり……思った通りだったわ」
「……え？」
雪乃の言葉に、意識が覚醒する。
なんだ、雪乃は何を言っている？
やはり、今日の雪乃の行動がどこかいつもと違ったのは、何か考えがあってのことだったのか？
「雪乃……」
俺が掠れた声で雪乃を呼ぶと、雪乃は俺に手を添えて、ちゅっと唇を重ねた。先程までとは違って、とても穏やかで優しいキスだった。
「……八幡。五分、待っていなさい」

「……へ？」
一体何を――と思ったら、俺が質問をする前にさっと立ち上がり、リビングから出て行ってしまった。脱衣所のドアが開く音が聞こえたので、シャワーでも浴びるのかと思ったが……それなら五分は短すぎる。どういうことかと思っていると、そのまま浴室のドアが開く音がした。脱衣所のドアと浴室のドア、それぞれが開けられたタイミングにほとんど時間差は無く、それは服を脱いでいないということを示している。程なくして、シャワーの水流の音が聞こえてきた。
「……本当に、何だってんだ……？」
ぼそりと呟き、ゆっくりと身体を起こす。すぐ目の前のソファに置いてあるパンさんのぬいぐるみをぬぼーっと見つめながら、雪乃の帰りを待つ。
きゅっ、と栓を締める音が聞こえてから、間もなくして雪乃が戻ってきた。
「……んん？」
雪乃の姿を見て感じた違和感に、思わず唸り声を上げる。
浴室から出てきた雪乃は、ロングスカートから覗かせた足だけが何故かほかほかとしている。見た限りでは、さっきは足だけ洗っていたのだと思われる。そしてよく見ると、スリッパがいつもと違うものに替わっていて、新品を思わせるものになっている。
俺が訝し気な視線を向けているのを気にもせず、雪乃は悠然と俺の前を通り過ぎ、目の前のソファに座った。
「八幡」
「お、おう、どうした」
雪乃の毅然とした声に、妙な緊張感が走る。何かとんでもないことを言われそうな、そんな予感がする。
「こっちに来なさい。私の足元に」
「え、ええ？　……ま、いいけど」
隣に座るならまだしも、足元に？
疑問が次々と湧き出しながらも言われた通り近付くと、雪乃が俺をじっと見下ろしているのに気付いた。

これじゃあ、まるで――

「八幡」

雪乃の声が、威厳めいたものを纏っていることに気付く。

雪乃の足がゆらりと上げられて、五本の白い指が目の前で止まる。微かなボディソープの香りに、少しばかりくらっときた。

「……？」

凄まじくいやな予感が胸に沈殿するのを感じながら、恐る恐る雪乃を見やると……それはそれは楽しそうに笑っていた。本当に楽しそう。

雪乃は、俺が一言一句聞き逃すことがないようにするかのごとく、ゆっくり口を開いた。

「私の足を、舐めなさい」

「……はい？」

あまりにも予想を超えた命令に、我ながらずいぶんと間抜けな、甲高い声が口の端からぷしゅっと漏れ出た。

続く。

（6）

予想を超える、という言葉がある。

何か物事についてある程度予想をしていても、それを上回る事態が起きた時、人は慌て、あるいは思考が止まる。

例えば天上世界を滑走する飛空艇を、家の近くから見ている時。そこから物が落ちて来るということは、可能性としては低いものの考えられなくはないだろう。しかしそれで実際に落ちてきたのが少女だったなんていう事態は、完全に予想の範疇を超えている。

例えば由比ヶ浜が先日実験（調理）にチャレンジした時。「家で何回も練習したから！　ママにも味見してもらったから！」とさんざっぱら安全であることを強調していたが、それでも心のどこかで「んなこと言っても、何だかんだでやべぇんだろ」という思いはあった。その後実際食べた瞬間のことは忘れられない。まさか自分の口から白い煙状の、うっすら自分の顔の形になっているものが出て行くのを見ることになるなんて思わなかった。ちなみに雪乃の料理を口に入れられて蘇生したので、その場に居合わせた材木座が、俺と話す時だけ雪乃の事を「ザオリク使い」と呼ぶようになった。俺はそれをアレンジして、たまに心の中で「絶壁僧侶」と呼んでいる。心の中で呼んでいるだけなのにたまにバレそうになる。マジで恐い。誰が悪いって全部俺が悪いんだけども。

そんな感じで、前置きが長くなりましたが。

「私の足を、舐めなさい」

「……はい？」

……この言葉、完全に俺の予想の範疇を超えてます。

×　×　×

元々、今日の雪乃の様子からして、いつか何かを仕掛けてくるとは思っていた。全力で甘えて俺を恥ずかしがらせるだけという可能性もあったが、やはり何かしてくるだろうと考えていた。

しかし、これは完全に想定の範囲外だった。
一体誰が、料理激ウマツンデレドM彼女が突然「足を舐めなさい」なんて言ってくると思うだろう。
「ほら、どうしたの？」
俺の前で雪乃の足がぴこぴこと動く。知ってるぞこれ、猫じゃらしでカマクラと遊んでる時の感じだぞ。すげぇ楽しそうに笑ってらっしゃいますけども。
「……えーと、説明を求む」
雪乃の足から一歩分遠ざかり、どっかりと胡坐をかく。このペースに巻き込まれると非常にまずい気がするから、全力で抵抗する。
雪乃は俺の言葉を聞いて、足を組んだままふんっと笑った。おおう、出会った頃ばりの偉そうな態度……。
「最近、あなたにしてやられてばかりだったから。どこかでお返ししようと思っていたのよ」
「……だから、俺に対してあんなに積極的だったのか？」
「そうよ。あなたの心を引っ掻き回しつつ、恩を売る為に」
「恩？」
「私があれだけ尽くしてくれたんだから、足を舐めるくらいしてくれたって良いでしょう？」
蠱惑的に微笑み、俺の前で足を艶めかしくくねらせる。ちょっとやめて欲しい。もうジーンズがぱんぱんなんです。
「……『思った通り』って言ったのは？」
足の動きから目を逸らし尋ねると、雪乃が得意気に笑った。
「あなた、いつも私の反応が大きいことを良いことに好き勝手やっているでしょう？　私、色々調べる中で興味深い記述を見付けたのよ。『自分から責めている時は、相手からの責めに対する反応に鈍く、強くなる』って」
「……ああ、なるほど」
確かに、雪乃が咥えてくれてる時に身体に触っても、いつもより反応が薄かったっけな。
雪乃の言葉から、今日の一連の行動の意味が、やっと全て分かり、繋

がった。
俺の動揺を誘い。
俺に対して恩（というか負い目）を売り。
そして、俺に対して攻めの姿勢を貫く。
「普段なら、俺がお前に命令されて足を舐めるなんてことはまずしない。それにもし舐めた所で、お前がすぐにギブアップして終わりだもんな」
「そう……よ。……だから、今回あなたにきついお灸を据えてあげようと思って」
さりげなくぶっこんでみたが、ぎりぎり平静を保たれた。言葉に詰まった所が死ぬ程可愛いかったけど。
……んん？　そう言えば……。
「雪乃。そんな調べものしてたのか？」
「……うるさい」
お、顔を背けた。
「……ていうか、普段なら舐められたらすぐギブアップするっていうのは認めるんだな」
「……うるさい」
耳まで赤くなってる。どうしよう、楽しくなってきた。
「大体、お前からしたら俺を攻めてるつもりなんだろうけど。そりゃ確かに俺の心臓はばくばくしてたぞ。でもそれはお前が死ぬ程可愛いからであっ――」
雪乃が一瞬俺をすごい目で睨んで。
俺の言葉を遮るように、ソファからするりと立ち上がって俺を押し倒してきた。
流れるような動きに、あっと言う間に唇を奪われて、
「んちゅるるるる……ちゅる、じゅぷ、ぢゅりゅ、ちゅりゅりゅ、ずぞぞぞ、ちゅぴちゅぴちゅぴ……っ」
「～～～～～～～っ」
頭を固定され、一気に口内と思考を蹂躙された。ちらりと目を開けると、雪乃が獰猛な猫のような目で俺を睨め付けていた。

カーペットに手を食い込ませて耐えること、数十秒。
「……少しは懲りたかしら？」
「……は……いぃっ!?」
唇が離れてやっと解放されたと思ったら、チャックとパンツを下ろされて肉棒がぶるりと飛び出た。ぎちぎちに反り返った肉棒が天を突くようにそびえ立っている。
雪乃は肉棒をすべすべの手でぎゅっと握ると、それだけしてすぐにソファに戻った。一分前と雪乃は同じ体勢に戻ったが、俺はあられもない姿（自主規制）で大の字に寝そべっている。地獄絵図だなこれ。
「これもあなたの羞恥を煽るためよ」
「……足でしてくれても、お前が優位に立てるんじゃないか？」
白磁のごとき美しい白色の足を見つめながら言うと、雪乃の顔にふっと赤みが差す。
「……あなた、まだ優位に立ちたいのかしら。……この、変態」
「……や、せっかくだからこの状況を楽しんでみようかと」
「あなた、どれだけ貪欲なの……」
足を組んだまま、こめかみに手を当てて儚げなため息を吐く。あまりにも絵になる光景に、思わず見惚れた。俺自身の今現在の格好は省みないでおく。
雪乃が俺に向かって顎でしゃくった。どうやら起き上がれということらしい。むくりと起き上がって胡坐に戻り、ついでにチャックを上げてしまおうとしたら女王様の眉根が寄った。どうやらこの恥ずかしい格好は維持しなければならないらしい。
「それで、どうするの？　舐めるの？　積極的に舐めるの？」
「なんで舐めるしか選択肢がねぇんだよ……」
すげぇ会話してんな、さっきから。
あれ、そう言えば。
「雪乃。なんでさっきシャワーに行ったんだ？　すぐに戻ってきてたけど。それにスリッパも替えてた……し……」
自分で喋りながら、雪乃の行動の意図に気付く。雪乃を見ると、恥ずかし気に俯いていた。

「……足を、一応洗ったのよ。洗った後でいつも使ってるスリッパを履いたら意味が無いから、足を拭いた後に新しいスリッパを出したのよ」
俺をちらりと見て、ふいと顔を背ける。言及されて答えたのがよほど恥ずかしかったのか、口を尖らせて拗ねたような顔をしている。目の前には、依然としてほかほかとした熱を帯びている、さらさらの肌をした美脚がある。
「……」
……何この、律儀で可愛すぎる女の子？
「……そこまでしてもらったら、しない訳にはいかないな」
頭をがしがしと掻きながら、承諾の言葉を紡ぐ。
「……そう。それじゃ、もう一度言うわね」
どこか安心したような顔をして、雪乃が艶っぽい笑みを浮かべる。
「八幡。私の足を、舐めなさい」
「……はい」
答えると、雪乃が両腕で自分を抱いてぶるりと震えた。あれ、何か変なのに目覚めさせちゃったか？
「胡坐では締まらないわ。そうね、両手で私の足を支えるようにして、膝立ちになりなさい」
「……はい」
ちょっと冷静になってしまったんだけど。
俺、なんで雪乃の足を舐めようとしてんだろう。
そんな風に思いながらも、雪乃のふくらはぎと踵に手を添えて、雪乃の表情を見た時。
両腕で自分を抱いたまま、雪乃が愉悦に震える様が恐ろしい程に艶美で。
下腹部に血流が一気に集まって、ごくりと息を呑んだ。
続く。

（7）

ソファに座っている雪乃が右足を伸ばし、俺はその踵とふくらはぎを手で支えて膝立ちになっている。雪乃は俺が足を舐めるという状況になって、よっぽどの嗜虐心が芽生えたのか、唇が微かに戦慄いて喜悦の表情を浮かべている。普段ならば、多少の攻防はあれど結局最後は俺が一方的に責めているので、こういう感情は雪乃自身初めてなのかもしれない。

「それじゃあ……」

ぽそりと呟いて口を開けると、想像以上の屈辱感が湧いてきた。身体の中をどろどろした感情が蠢くが、ここまで来たらもう後には引けない。

舌をちろりと出して、恐る恐る雪乃の足の裏を舐めた。綺麗にしたばかりだからか何も味はせず、代わりに僅かに甘い匂いがした。

「んっ……」

雪乃は小さく声を漏らしたが、どこか安心したような声音だ。「自分から責めている時は、相手からの責めに対する反応に鈍く、強くなる」という、雪乃が調べて実践した仮説は、ある程度は正しいようだ。

新雪のような色をした足裏にじっくりと舌を這わせる。舌先が雪乃の肌を撫でる度に、雪乃の身体の奥底で生じる震えが足まで伝わってくる。

「ふふ……どうやら、私の考えは本当に正しかったようね。今、とても良い気分よ」

涼しい顔で言いながらも、頬を紅潮させている様子は何とも色っぽい。

「ほんとかねぇ……」

舌を離してぽつりと呟くと、雪乃の目の色が変わった。今のは完全に失言だったことに気付く。

「……あら、この期に及んで私と勝負をしようと言うの？」

「や、そんなつもりでは、つい、その」

「つい？　ついと言うことは本音なんでしょう」

お、あれ、んん？　何か話が変な方向に……？
俺の動揺をよそに、雪乃は次々と言葉を紡ぐ。
「分かったわ、あなたはまだ形勢が逆転出来るだなんてことを夢見ているのね」
それなら――と、雪乃がほんのりと頬を朱に染め、毅然とした態度で言い放つ。
「あなたの好きなように舐めてごらんなさい。それで私がいつも通りならば、私の考えの正しさが完全に証明されるわ。そしたら私の勝ちになるわね」
「……」
す、すげぇ。
こんな頭良さそうなのに、ていうか本当に頭良いのに。
この子、ばかだ！
ふふんと勝ち誇った顔をしてるけど、自分で地雷を埋めた場所を優雅にサイクリングしているのだと気付かないのだろうか。
「……分かった。後悔するなよ？」
少しだけ、ほんの少しだけ、いつも雪乃を徹底的に責める時の目つきをすると。
「……っ。へ、平気よ。何とでもなるわ」
身体の奥底に刻まれた牝の本能がざわついたのか、雪乃の表情に動揺が走った。強がる声もどこか上ずっている。
さて、ここからどうしてくれようか……。
今日ここまでのお返しも兼ねて、たっぷりねっとりと責めてやろう。
先程の雪乃の嗜虐的な表情とは比べ物にならない、悪魔みたいな表情になるのを必死で抑えながら。
雪乃の踵とふくらはぎを、先程よりも心持ち強めに掴んだ。
×　×　×
雪乃の足の裏をじっと見つめ、今度はべったりと舌を貼り付ける。接触させる面積を大きくした状態で、踵から足先にかけてゆっくりと舐めていく。軽く舐めようとじっくり舐めようと、綺麗に洗われた雪

乃の足に何か味がする訳ではない。しかし、雪乃の足と俺の舌という、肌と粘膜の接触により、互いに燻らせている官能の炎が混じり合う感覚がする。目の前を白に覆われた状態で微かに聞こえる雪乃の息遣いに、自然と息が荒くなる。

「ふ、ふふ……そんなに一生懸命舐めたって、私は揺るがないわよ？」

雪乃が得意気に声を上げるが、その声音にはどこかはりぼてじみた響きを覚える。今度は指と指の間を一つ一つ丁寧に舐める。ここも味がする訳ではないが、狭い指の間を舌先で押し広げる時、まるで淫裂を口で割り開くかのような感覚を覚えた。外気に晒した肉竿は、痛い程に張り詰めていた。

「ほ、ほら、いくらあなたがそんなに、一生懸め、い、舐めたって……私、は、平気なの、よ……っ？」

……雪乃は、気付いているのだろうか。

舌を指の間から離し、踝を舐め、ふくらはぎに舌を這わせる。

「だ、だから、そんなことしたって、私は平、気、なの、よ……っ」

……まだ、気付いていないのかもしれない。

ふくらはぎを啜る様にして何度も往復し、内ももを舐る。

「そ、その、いい加減、に……っ」

……もうそろそろ、気付くだろうか。

鏡があれば、今の雪乃自身の顔を見せてやりたい。

――明らかに先程までに比べて反応が大きくなり、表情を淫らに緩めていること。

――そして、さっきまであれだけ嗜虐心で燃え盛っていた瞳が、今やほとんど、いつもの被虐的欲求に満ち満ちた色に染まっていることに。

「ふ、ふふ、どう？　もう限界でしょう？　あなたにもそれなりにプライドはあるでしょう？　だから、そろそろ……」

あくまで自分の勝ちを装って、雪乃がこの勝負を終わらせようとする。最初は余裕綽々で足を組んでいたのに、俺がふくらはぎを舐め始めた頃には組んだ足を解いて、ソファーを掴んで震えていた。今日一日、雪乃が積み上げてきた攻撃も、もう終わりのようだ。女王の住む

城の門が破壊され、衛兵が打ち倒され、一番奥の間に居た女王が蹂躙されようとしている。まあ、この子の新たな一面も可愛さも見ることが出来たから良しとしよう。
「雪乃」
「え……っ」
とどめに、一段低い声で雪乃を呼び、内ももを這わせながらじっと見つめる。いつも、正常位で雪乃の華奢な肢体をぎりぎりと抱きしめて、「一滴残らず子宮に注ぐからな」と目だけで伝える時と、同じ表情で。
「……あ……っ」
雪乃が声を漏らした。儚げで、今にも消え入りそうな、不安に満ち満ちた声。
次の瞬間、顔を泣きそうにくしゃっと歪めて、
「んんん……っ！」
唇を引き結んで、くぐもった喘ぎ声を上げた。今日はまだ一度も聞いていなかった、雪乃の嬌声。瞳が俺を捉えて、妖しく揺れた。
「……」
敢えて何も言わずに、舌先を固めて内ももを往復する。細いながらもしっとりとした質感の肉に舌を食い込ませて、ゆっくりとその感触を堪能する。
「あぁぁぁぁぁぁ……っ」
雪乃がおとがいを上げて、甘美な嬌声を上げる。ずっと抑圧されていた官能の蓋が、今にも弾け飛びそうになっている。
「んー、中々手強いな。雪乃、この勝負……別に時間制限は無かったよな？　こりゃじっくりと最初からやり直すしかないか……」
とぼけた道化の声音で言うと、
「……え、ちょ、ちょっと、八幡……？」
雪乃の声が、どこか泣きそうになっていることに心がざわめいた。試しにふくらはぎにちゅっと吸い付くと、「ひぁぁぁ……っ！」と可愛らしい声を出して身体を屈めた。口付け一つでこれだけ反応するということに驚く。身体の反応がいつも通りに戻ったと言うよりは、我

慢していた分余計に敏感になっているのかもしれない。
雪乃の家を訪ねてからの一連の流れも、いつもは無いどきどきがあって、それはそれでとても楽しかった。
しかし、ここからは。
いつも通りの。
いや、いつも通りでは済まないくらいの。
屈服だ。
制圧だ。
蹂躙だ。
「は、八幡、あなた……っ」
雪乃が震える声で呼びかけるが、言葉の続きは無い。ここで素直に負けを認めれば、少しは楽になれるかもしれないのだけど。そんなことが出来ない面倒な性格が、とても愛おしい。
「それでは、女王様へのご奉仕の続きといきましょうか」
「……っ」
俺の慇懃無礼な言葉に雪乃が目を瞠り、唇を戦慄かせる。何かを言いかけて僅かに開いた口が、ゆっくり閉じて固く引き結ばれた。
これから訪れるであろう極上の時間は、考えただけでたまらない愉悦が込み上げる。
気付けば、肉茎は凶悪なまでにいきり立っていた。先程よりも硬度が増していて、我ながら呆れた。
続く。

（8）

ここに来てからずっと続いていた雪乃の攻勢が、遂に止まった。

「自分から責めている時は、相手からの責めに対する反応に鈍く、強くなる」という、雪乃が色々調べる中で知って今回実践したやり方は、確かに効果があった。俺はずっと動揺していて雪乃にペースを掴まれ、俺が雪乃の身体に触れて抵抗を試みても、雪乃はあまり反応せずに済んでいた。

しかし今は、雪乃が慎重に積み上げてきたであろうものが崩れ去ってしまった。今や雪乃はいつも通り、いや、いつも以上に敏感になっている。雪乃の表情の変化を楽しむべく、雪乃の端正な顔立ちをじっと見つめた。

ソファに座っている雪乃の足の指を舐め、指の間を丹念に舐ると、綺麗な顔がくしゃりと歪んで、細い肢体が仰け反った。足の甲を舐めると、刺激が少ないのかほっと安心した素振りを見せる。油断したところを見計らって足裏を舐めると、手で口を塞いで身体をぶるぶると戦慄かせた。込み上げる愉悦で、心がぐつぐつと煮え滾る。

今日これまで受け続けてきた雪乃の責めは、何だかんだで楽しかったし、どきどきした。雪乃の新たな面を見る事が出来たことが、とても嬉しい。

でも、ここからはいつも通り、いや、それ以上に、俺がこの子をめちゃくちゃにする番だ。せっかく色々な責めを受けたんだから、それを参考にしてじっくり迂遠に、婉曲に、遠まわりに責めてみよう。

足の裏に舌を這わせ、ゆっくりと踝を舌で撫でていく。そこからふくらはぎを辿り、内ももを舐め上げた。

「はぁぅぅぅ……っ」

雪乃が悩ましい声を上げて、熱っぽい息を吐く。瞳は動揺に揺らいでいて、すっかり攻勢が逆転してしまったこの状況に、まだ頭が付いていけていないことが見てとれる。

雪乃の足の付け根と膝裏を掴んで、内ももに集中的に舌を這わせる。白磁のような肌が舌の動きに合わせて窪み、舌が離れればまたす

ぐに芸術的な形状に戻る。
「はぁぁぅぅぅ……っ！　あっ、んぁっ、あふぁっ、んんっ、くふぅぅ……」
雪乃は身を捩ろうとするが、俺に下半身を押さえられて思うように動けず、細い肢体がもどかしげに動き回る。足を舐める為にロングスカートを捲りつつも、敢えて足の根本は見ないでおく。楽しみはきちんと取っておく。しかしそれでも、舌を雪乃の大事な部分へと近付けていくと、濃厚な牝の匂いが漂ってきた。下着を着けているはずなのに、淫猥な香りと共にじっとりとした湿り気まで感じる。きっと今触れば、熱いぬめりが俺の指を歓迎してくれることだろう。
「片方だけ舐めないだなんて、とんだご無礼を。次はこちらを舐めさせて頂きます」
「あっ、ちょ、ちょっと……っ」
やたらとへりくだって言うと、雪乃が慌て始める。その様を楽しみながら、右足をカーペットの上に下ろして左足を持ち上げると、息も絶え絶えになっている雪乃が微かに抵抗してきた。左足がぱたぱたと動くが、膝裏と踵をがっしりと持ち、全く動けない状態にする。
そして、右足と同じように、足の指から舐めていく。
「あっ、あぁぁっ、あぁぁぁぁ……っ」
雪乃の目が虚ろになり、抵抗が無くなっていく。声が素直な牝の声になり、大人しくも妖艶な嬌声に変わっていく。内ももを舐め始めたところで右足の太ももを撫でさすると、「んはぁぁ……っ」とため息混じりの甘美な声が漏れ聞こえた。
「も、もう、やめて、やめて……っ」
両手で口を覆った雪乃が、目に涙を浮かべて首を振る。くぐもった声がいやらしさを助長した。
「んー、でもまだ勝負はついてないだろ？　手は抜きたくないからな……んっ」
言って、固めた舌先で内ももをぐりぐりと愛撫すると、
「んふぁぁぁ……っ！」
と、泣きそうな声が上がった。

「も、もう、いい……もういいから……っ」
「ん？　何がだ？」
「あ、あなたの、勝ちで、いいから……っ」
「……」
　雪乃の言葉を聞いて、はて、何の勝負をしていたっけなと考える。雪乃を嬲ることに夢中になりすぎて、何をしているかの意識が途中から完全に飛んでいた。
「……ん。そうか」
　じゃあ、俺の勝ちで――と呟いて、再び雪乃の内ももに舌を這わせる。
「ちょ、ちょっと、もう、いいでしょう……っ」
　雪乃が俺の頭を両手で押し返そうとするが、もはや力が入らないようで全く抵抗出来ていない。右足と左足の内ももを交互に舐めて、徐々に徐々に中心部に近付いていく。雪乃は俺を押し返すのは諦めたのか、俺の頬に手を添えるだけになっていた。
　淫靡な熱の篭った中心部を責めることにして、雪乃の両膝をスカートの上から掴むと、ゆっくりM字に広げた。雪乃は小さく首を横に振っているが、目立った抵抗はしてこない。ソファに雪乃が足を乗せたところでロングスカートを一気に捲る。
「あ……っ」
　雪乃の力無い声が頭上から聞こえたと同時に、息を呑んだ。
　雪乃は、いつも履いている白の下着とはまるで印象が異なる、黒のレース生地のショーツを履いていた。しかも見事に透けていて、生地の中にうっすらと恥毛が見えている。
「……ん？」
　ふと違和感を覚えて、ショーツの中心部に指を持って行く。
「あ、だめ……っ」
　雪乃の制止の声は一歩遅く、俺の指の先がぬちゃりと音を立てた。
　――雪乃の淫裂に、直接触れて。
　一瞬、何が起きたか分からずに呆然とする。
「……ゆき、の？　お前、これ、何だよ……っ？」

興奮で声が上ずるのを抑えることが出来ない。俺の指は、ショーツに着地するかと思いきや、ぐっしょりと濡れた雪乃の粘膜に直接触れていた。
「ち、違う、の……これ、はぁぁぁ……っ」
雪乃が必死で弁明しようとするが、俺がほんの少し力を入れただけで、指が蜜壺に呑み込まれていく。熱い締め付けが指を包み込み、肉棒を入れればさぞ極楽が待っているのだろうと胸が躍る。
「……あれだけ自分から責めておいて、最後は結局、いつも通りめちゃくちゃにしてほしかったのか？」
雪乃は耳まで真っ赤にして顔を背けている。時折漏れる吐息の艶やかさに思わず見惚れる。
雪乃の両膝の裏を掴んで、雪乃の身体を後ろに押す。そして空いた空間に膝を乗せて、ソファの背もたれと俺の身体で雪乃の身体を挟む形にする。雪乃は俺の膨張しきった肉棒を見て、口をぱくぱくとさせている。
「なあ、雪乃」
亀頭を淫裂に宛がう。雪乃が顔を伏せた。
「こういうこと、したかったんだろ？」
亀頭を黒のレースの中心部にずぶりと侵入させる。ショーツに開いている穴は中々大きいようで、挿入にも対応しているのだと気付く。雪乃は手で口を塞ぎ震えている。
「雪乃。俺と、こういうことしたかったんだろ、ずっと？」
体重を掛けて、ずぶずぶと肉茎を侵入させていく。雪乃が顔を上げると、羞恥と快感とでくしゃくしゃになった表情で俺を魅了してくる。先程までとは打って変わってあどけなくなった雪乃の表情とは対照的に、膣肉は貪欲に蠢き収縮して肉竿を搾り上げてくる。
「あっ、あぁっ、あぁぁぁ……っ」
雪乃が虚ろな声を上げて、俺の首に腕を回す。それにより腰が更に前に進み、雪乃の足が俺の腰に絡みついた。
「……気持ち、良いか？」
じっくりと牝肉を味わうように腰を引き、ぐりぐりと肉茎を左右に

動かして膣内を抉りながら押し込んでいく。雪乃は白い喉を惜しげもなく晒して戦慄き、切なげな目で俺を見つめる。
まあ、この子はこういうことはあまり言わないよな……と思っていると。
「……気持ち、良い……っ」
「え……」
雪乃が紡いだ言葉に驚き、思わず聞き返してしまう。すると雪乃はこれ以上は限界かと思ったのか、俺の胸板に顔を押し付けて、腰に絡めた足に力を込めた。それにより締め付けが急に増し、先走りの汁が僅かに滲む。
「お前、今、気持ち良いって……」
聞き返すと、雪乃は顔を上げずに強く抱きしめてくる。
じゅくじゅくと熱く湿った牝肉は、更なる蹂躙を望むかのように肉棒を締め付けた。

続く。

（9）

――気持ち、良い……っ――

今までずっと攻勢に回っていた雪乃を、ソファの上で抱いた時――半開きになった艶めかしい唇の間から、予想していなかった言葉が漏れた。

「……お前、今、気持ち良いって……」

雪乃は俺の言葉に対して、何も答えることなく足を絡めてくる。ソファにもたれかかった雪乃はロングスカートからすらりと伸びた足を俺の腰に絡め、決して離すまいと艶めかしく締め付けてくる。

ついさっきまで、勝負が云々と言っていて。

もう、私の負けでいいからと涙混じりの声を漏らして。

そして今――気持ち良い、という言葉をはっきりと告げた。

雪乃の感度は、ただでさえ敏感で――この関係に至ったのも、きっかけは肩揉みだった。

それでいて、今日はここまでずっと俺を攻め続けていて、言うなれば雪乃自身は我慢している状態だった。そんな中で俺が雪乃の両足を丹念に舐めて、焦れったい興奮を与え続けた。

もしかすると、いや、もしかしなくても。

雪乃の性欲は、いや、獣欲は――破裂寸前なのかもしれない。

雪乃は俺と行為をする時、中々素直に感じたままのことは言わない。それは普段でもそうだし、二人きりで甘えてきた時でも、ある程度の限度がある。垂れ流しのように本音を漏らしたことなんて、数えられるくらいしか無い。

「……」

ちらりと下を見やり、雪乃との結合部がどうなっているかを確認する。

上品な、黒のレースのショーツ。それでいて透けていて、履いていても大事な所がうっすらと見えるというのに……このショーツは、それに加えて淫裂の部分にぱっくりと穴が開いていて、履いたまま挿入が出来るようになっている。実際今も肉竿の周りはレース生地に覆

われていて、動いても擦れることは無いという絶妙なサイズの穴がぽっかりと開いている。
ここまで俺を攻めて、そして陥落した雪乃と。
これだけ俺を攻めるつもりでいながら、こんな扇情的な下着を履いていた雪乃。
正直、どれが本当の雪乃の意思なのかは分からない。
俺を一方的に攻めたかったのか。
俺に一方的に攻められたかったのか。
それとも――両方、楽しみたかったのか。
もしかしたら、雪乃自身も己を把握出来ないままに作戦を練って、今日と言う日を迎えたのかもしれない。
もしそうだったとしたら、俺も、雪乃も、ここから一体どうなってしまうのか分からないのではないだろうか。
俺が雪乃にどれだけ欲情するのか。
雪乃がどれだけ乱れるのか。
今まで数えきれないくらいまぐわってきたのに、まるで読むことが出来ない。
ぞくぞくとした、得体の知れない不安と期待が身体を撫で上げた。
「……雪乃。ここに寝てくれるか」
雪乃と繋がったまま、耳元で囁く。ソファは結構大きなタイプなので、二人重なって寝転がった状態で存分にまじわりたかった。
俺の言葉に対して、雪乃は黙って頷いた。
雪乃の膣は、蹂躙されることを望んでいるのか、ひどく熱い。

× × ×

彼と繋がったまま、私はソファに寝転んだ。彼の体重がかかり、ソファの柔らかな感触と板挟みになるのが何とも心地良い。彼には恥ずかしくて絶対言えないし、それどころか心の中で思っただけでも恥ずかしいのだけど……彼にこうして力強く抱きしめられたり体重をかけられたりするのは、なんだか彼に包み込まれているみたいで安心する。
私が今日のことを思い付いたのは、少し前のことだった。

確か、彼が急用が出来て部活に来られず、夜も会えなかった日のこと。
その日は、いつも通り授業を受けて、昼休みには由比ヶ浜さんと食事をして、また授業を受けて――本当に、いつも通りだった。
「あ……そ、そうなの。わかったわ。それは仕方ないことだから、気にしないで」
授業を終えて、部室に向かう途中で顔を見せた彼が私に告げたのは、何のことはない、「急に家の用事が入って」という話だった。
彼のいつもの行動からすれば、私と会う予定をキャンセルするというのはよっぽど急なことだったんだと思う。彼はいつもの癖で頭を掻きながら私に謝ってきた。その癖はみっともないわよと言いそうになったことはあるのだけど、意外と可愛いと思う自分もいたし、それを言ってしまうと彼は何だかんだで真面目なのできっちりやめてしまいそうだから、言わないでいる。
「や、本当すまん。……一緒に、いたかったんだけどな……」
最後の方はほとんど聞き取れないような声で彼が呟いた。彼がたまに見せる紅潮した顔は、見ていて何だか嬉しくなってしまう。
微笑みが顔に出るのを抑えていると、彼がちらちらと私を見てくる。何か言いたいのだとすぐに分かった。
「どうしたの？」
聞くと、彼は私から一度目を逸らし、またちらりと見てきた。
「や、……なんだ、その、すげぇ残念そうな顔してるから、本当に申し訳なくてな……」
「え……」
彼の言葉に、急に自分の身体が熱くなった。
彼は急な用事が入って会えなくなった。それをきちんと伝えて謝ってくれた。
それで納得していたはずなのに。彼に対しては努めて笑顔を向けるようにしたはずなのに。
それでも、一日彼に会えないというだけで、隠しきれない程の感情が顔に表れてしまったのだろうか。

彼が、私の顔を見て急に表情を変えた。私の身体は熱いままだ。私は彼のこの顔を知っている。色んな時に見たことのある表情で、確実に共通しているのは「彼が興奮している」ということだ。私を見て、何かが彼の琴線に触れて、劣情を催している時の表情だ。
「……お前……その表情は、反則だろ……っ」
息を荒げた彼が周りを見渡す。ここは階段の踊り場で、人があまり通ることがない場所だった。しまった――と気付いた時には、彼は私に抱き付き、唇を塞いでいた。
「んっ、んちゅっ、ふっ、くふぅっ……んふぅぅぅ……っ」
二の腕を彼の意外と逞しい腕にがっちりと固定されて、口内に舌を差し入れられると――ここが学校だということも、もうすぐ部活だということも忘れて、彼との肉体的接触に溺れそうになる。ぎりぎりと締め付けてくる彼の腕の力は、そのまま彼の発情の具合を示していた。
頭の中に痺れるような電流が緩やかに流れて、理性的な思考が解けていく。彼は絶対にそんなことはしないと思うけれど、もし今ここで彼が私の身体をまさぐって私の理性を完全に溶かしてしまったら、人目を気にせずに行為に及んでしまうかもしれない。そんなことはしないとは思いつつも――彼がその気になったら、私は拒めない、拒まない。そんな気がした。
今日ももちろん、彼はそこまでする気はないようで――しばらく私の口内を嬲り続けた後、ゆっくりと口を離した。私を見つめながら顔を上気させている様は、彼には自覚が無いだろうけれど……とても、色っぽい。
「……わりぃ、我慢出来なかった……」
私の肩を抑えながら、恥ずかしそうに彼が謝る。唇を離しても私の身体を離さないのは、寂しさもあるけれどそれ以上に、私が今まともに立てない程足腰にきていることを知っているからだ。こういったさりげない優しさも、褒めるきっかけが掴めないのだけどとても好きだ。
「気にしないでちょうだい、あなたのそういった獣のような行動には

すっかり慣れたから」
ふっと笑って囁くと、彼がむすっとした顔になった。
「や、お前だって何だかんだでいっつもノリノリじゃねぇか」
「え……っ」
彼の言葉に、また顔が熱くなる。
それを見て、彼がまた固まった。
「お前、なぁ……っ」
彼がもう一度抱き付くのを、私は止めなかった。
私を抱きしめる時の彼の息遣いは、身体中の細胞が目覚めるような期待をもたらしてくれる。
唇が重なると、私の心に幸福の薔薇が咲いた。
続く。

（１０）

由比ヶ浜さんと二人きりで部活を終えて、その日は一人で過ごした。

紅茶を一人分淹れて、リビングでくつろぎながら飲む。

私は一人暮らしだけれど、彼は他の人と同じように家族と暮らしている。そんなに頻繁に夜を共に過ごせる訳ではない。

それでも、ほんの少し前までは一人で居ることにすっかり慣れていたのに……最近は一人で過ごすと、何だかもの寂しい。四六時中一緒にいるというのは私も彼も望まないとは思うけれど、きっと寝室は一緒にして、書斎辺りを各々が使うように設けておけば……。

「……」

紅茶をソーサーの上に戻した。

何を考えているんだろう、私は。

「それにしても……」

もう一度カップを口に付けてから、ふと独り言ちる。独り言は極力言わないようにしているけれど、彼のことを考えていたら自然と口をついていた。

彼と今の関係に至ったきっかけは、私の体質だ。

こんな言い方をすると大袈裟だけれど、私が人よりも少し――他の人がどれくらいか分からないけれど――敏感ということが、きっかけだった。

そういった経緯もあってか、彼は私を一方的に責めることに幸福を覚えているような気がする。というよりは、確実に覚えている。

出会った頃ならば、そんなことをされようものならすぐさま社会的に消していた所だけれど。

一年近く彼と共に時間を過ごした上で、そこからも常に紳士的な心遣いを私に示しながら距離を詰められていくと、私にはもう拒絶するという考えが無くなっていた。

彼の責めは、激しいのに優しい。

だからいつも、何だかんだで受け入れてしまい――最終的には、溺

れてしまう。
ふと、自分の手を見つめる。
彼と初めて行為に及んだ、次の日の夜のことを思い出す。
彼がこの部屋に居たことを示す微かな匂いや乱れたシーツが、一人で過ごす私の心と体をおかしくしてしまった。
自分一人でなんてほとんどしたことが無かったし、したとしてもすぐにやめてしまっていたのに……その夜は、彼との行為を思い出して、何度も気をやって、疲れ果てて眠るまで自分の指で身体の中をかき回した。朝起きた時に、指に染み込んだ淫らな匂いと、心地良い疲労感がもたらした羞恥心は一生忘れないかもしれない。
紅茶を一口飲む。
喉を通る感触まで味わいながら、ふと思い出す。
そういえば彼は、私が食べ物や飲み物を呑み込む時によく私の首を見ている。こくんと喉が動くのが好きらしい。私の口の中に自分の欲望を吐き出した時などは、ゼリーのような白濁を呑み込んでいると、その様を彼は食い入るように見つめていて――その視線だけで、身体が牝としての反応を示してしまう。
……私は、彼のことをどれだけ考えれば済むんだろう。ちょっと考え過ぎかもしれない。
本当なら、今頃この部屋で……。
「……う……ぁ……っ」
――そう考えただけで、身体の芯から末端へと熱が籠った波が広がって、甘い痺れに包み込まれる。カップをソーサーの上に置いて、力無くテーブルに突っ伏す。胸がテーブルにより僅かに形を変えただけで、堪えがたい快感が湧き上がった。
「……はっ、はぁっ、はぁっ……」
いつから、私はこんなに彼を欲するようになったんだろう。いつから、私の頭の中を彼が占領するようになったんだろう。
私は、今、彼に会いたい。
彼は、私と同じようなことを考えているんだろうか、思っているんだろうか。

「……」
息を荒げてテーブルに突っ伏したまま、しばし考える。
顔を起こして、窓越しに外を見た。反射して微かに映っている私の顔は不機嫌そのものだ。
「……納得いかない……」
もはや独り言を抑えることも出来ない。
いつもいつも、私に対してやりたいようにやって。
それでいて、彼はどんどん私の上に立って嬲ることを覚えて。
そして、私の心も身体もこんな風にしてしまった。
「……納得いかない……」
もう一度呟く。
彼の優しさは十二分に知っている。
けれど、それでも。
たまには仕返しをしたい。
しかし、学校での彼ならいくらでもやりこめようはあるけども、行為に及ぶ時はどうもだめだ。この体質がある限り、簡単に屈服させられて――
「……あ」
ふと気付く。
この体質は、私が彼を責める時の絶対的な弱点だ。
ならば、それを抑えることが出来たら？
そう考えた私は、ノートＰＣの電源を点けた。
鏡では見てはいないけれど、私の顔はこの時、きっと意気揚々と浮かれていただろう。

× × ×

そして、現在。
結果を言えば、だめだった。
それに尽きる。
彼が本気で責める時の執拗なやり方と、視線だけで犯しそうな目に、私の覚悟も作戦も簡単に押しつぶされてしまった。途中までは上手くやれていると思ったのに。

何故こんないやらしい下着を着たのかは分からない。彼を誘惑する時の気分を高めようとでも思ったのか、それさえ思い出せない。ただ、気付けば着ていた。
「はぁぁぁぁぁ……っ」
彼に身体の奥底を貫かれて、理性も思考も溶けていく。彼の目は本気になっていた。私が迂闊な言葉を漏らしたから、余計に火を点けてしまったらしい。
でも、もう、限界だ――何も考えずに、好きなように喋って、好きなように甘えてしまってもいいんじゃないだろうか。
「雪乃……っ」
私の名を呼ぶ彼の声は、さっきまでに比べてかなり熱を持っている。よほど興奮しているんだろう。
「八幡……っ」
気が付けば、私も彼の名を呼んでいた。彼が唇を重ねると、せめてもの抵抗で唇を閉じる。しかしものの数秒で上下の唇を舌でこじ開けられ、彼の舌が私の口内に侵入してくる。
「んっ、くふぅっ、ちゅくっ、ちゅりゅっ、んふぅぅ……ごくっ、んっく、んぐっ、んっく、じゅるるる……んっ、ふぅぅ……っ」
彼が獣のような目つきで私を見つめながら、ひたすら唾液を流し込んでくる。余す事無く呑み込みながら、今自分がどんな表情をしているのかに想像を巡らせてみる。
きっと、とてもはしたなくて。
それでいて、彼が再際限無しに興奮するくらいに、いやらしい顔をしているんだろう。
口付けをしながら、彼がぐりぐりと先端を押し付けてくる。感覚が昂ぶっているため、それだけの行動で私の中から大量のいやらしい汁が溢れ出た。
もう、私の思考は止めてしまおう。
後はもう、好きなように、彼に甘えてしまおう。
微かに残っていた理性を取り払った時、私の心はふわりと軽くなった。

×　×

雪乃が震えている。

その顔は、未知の興奮に戸惑いを浮かべていて、けれどどこまでも溺れてしまいたいと思っているような――そんな、複雑な表情。

「雪乃……どうする？」

キスを止めて、二人の唇の間に伸びた糸を雪乃が咥えて呑み込むのを見届けてから、雪乃の頬に手を添えて尋ねる。

「ここから、本気でやって徹底的に屈服させても良いんだぞ？　別に今回みたいなことをこれからもする分には全然構わない。何だかんだで楽しめたし。だけど、その度に俺はお返しとして、お前が翌日も立てなくなるくらいめちゃくちゃにしてやるからな」

「んんっ、ふぅっ！　あっ、はぁぁ……んはぁぁぁ……っ」

腰をゆっくりと回しながら威圧するように言うと、雪乃が俺の腕の中で快感に身を捩る。腕に力を込めて拘束を強めると、それに呼応するかのように膣がいやらしく蠢く。

「どうする？」

子宮の入り口を亀頭で執拗にノックしながら、意地悪な質問をする。

「……っ」

雪乃は顔を真っ赤にして、目を背けている。けれど時折ちらりと俺を見る目は、完全に発情した牝のものになっていた。

「どうする、やめるか？」

「……っ」

雪乃が目を見開いて固まる。

「それとも、めちゃくちゃにされたいか？　愛液も小便も好き放題溢れさせて、子宮にたっぷりと注ぎ込まれたいか？」

「……あ……っ」

雪乃が泣きそうな顔で口をぱくぱくとさせて、俺をじっと見つめてくる。雪乃が何も言わずとも、膣の中の肉襞の動きは分かりやすく賛同の意を示していた。

「……なんだ、答えなくても分かりやすいな、雪乃は」

「あ……ち、ちが……んはぁぁぁぁぁっ!?」
腰を引いて力強く打ち込むと、ずどんという感触と共に雪乃の嬌声が部屋に響いた。
続く。

（11）

あれから何時間経っただろう。

ソファの上で幾度と無く雪乃の子宮に精子を注ぎ、汗だくの身体を清めようと2人で風呂に入ってそこでもまぐわい、眠りに就こうと2人でベッドに潜ってそこでも繋がって……気が付けば、疲れ果てて力尽きるように眠っていた。

そうして迎えた、遅めの朝。

「ん……」

目を覚ますと、とっくに日は高く昇っていた。カーテンが開けられているのを見るに、雪乃はもう起きているんだろう。

――本格的に受験に向かう立場なのだから、2人で居ても勉強はする。それは2人で取り決めたことだった。けれど、それ以外の時は出来るだけ繋がっていたいと俺が言うと、雪乃は顔を頬を赤らめて頷いた。

「……さて、今日はどこですっかな……」

昨日の感覚を反芻しながら、今日のことに思いを馳せていると……何やら、股間が生温かい感覚に包まれていることに気付いた。

視線を下に向ける。

布団が膨らんでいた。

「……」

布団に手を掛けて、ぺろりと捲る。

「んっ……ちゅく、れろっ、はぁ……っ、んっく、ふぅ……んぅっ……？　……あ……っ」

うっとり顔で肉棒を咥えていた雪乃が、俺の視線に気付いて耳まで真っ赤にした。

「おはよう」

「……おはよう」

髪をかき上げて、何故か澄まし顔で返された。何この腹の括り方……惚れちゃう……。

「朝ごはんにしてはだいぶ卑猥なのを食べてたな」

「セクハラよ八幡。身の程を弁えなさい」
「あれ!?」
何かすげぇ棚上げしたことを言われた気がする。
「まったく……」
俺が悪いことをしたのかと勘違いしてしまう程、極めて自然に眉根を寄せて俺を睨みつけてくる。そして布団を再びかぶったかと思うと、
「うっ……くぁ……っ」
見えなくなった下腹部に、濃厚な快楽の波が訪れる。
くちゅ、ちゅくちゅく、ぴちゃ、ちゅぷぷ、ちゅっ、ちゅぴ……っ。
人型に膨らんだ布団がもぞもぞと動き、その度に陶酔してしまいそうな愉悦が走る。
このまま一回射精しようか……と思っていると。
――ぐぅ、と腹が鳴った。
「……」
雪乃がぺろりと布団を捲る。竿から艶やかな唇を離し、子どものように純朴な目で俺を見つめる。なんか急に恥ずかしくなった。
「……わりぃ、腹減っちまった」
顔を逸らして頬を掻きながら言うと、くすりと笑う声がした。
「……仕方ないわね。朝ご飯はもう作ってあるから、まずは食べましょう」
「マジか。ありがたい」
布団から出て俺に微笑みかける雪乃の笑みは、学校でも見ることの出来る柔らかい笑みで。
「それじゃあ……」
だからこそ、雪乃がベッドを降りようとした時、反射的に「その表情を淫猥なものに塗り替えたい。ほんの1分前までと同じ顔にしてみたい」と思ったのは、致し方無いと思う。
そんな思考を経て、俺は雪乃がベッドから足を下ろして立ち上がった瞬間――
「え……っ」

――雪乃が着ていたパジャマのズボンを下ろすと、腰を抑えてこちらへ引っ張り込んだ。ベッド際に座って足を床に付けていた俺の上に跨らせて、屹立した肉棒を一気に根本までねじ込む。
「あ……っ」
熱いぬめりに包み込まれると、雪乃は小さな声を漏らして静かに全身を痙攣させた。声とは裏腹に膣肉は妖しく蠢き、結合部からは大量の愛液が溢れ出して俺の太ももをびしょびしょに濡らした。
「……気持ち良くしてもらったからな。お返し……ってことで、どうだ？」
「……そう」
俺の言葉に、雪乃は力無く答えて頷く。俺は雪乃の両手首を掴むと、ベッドを軋ませて反動で雪乃ごと立ち上がった。立ちバックで繋がった状態で、よたよたと歩き始める。
「あっ、うぐ……だ、だめ、それ、はぁぁぁ……っ」
妖精を思わせる美しい肢体をびくびくと戦慄かせながら、俺の動きに合わせてよろよろと前に進む。口でこそ抵抗の意を示しているが、内ももを伝う大量の淫液を見ると説得力がまるで無い。
「ドア、開けてくれるか」
「んくっ……あぁぁ……っ」
片手を解放すると、ゆるりと伸びた手がドアを開ける。手を使う必要がなくなると再び手首を掴んで、幾度となく小突きながら進む。
ぐちゅっ、じゅくじゅく、ぴちゃっ、じゅくくく……っ。
「はぁっ、んふぁぁ……っ、だめっ、床、濡れちゃう……っ」
雪乃が眉根を寄せて、懇願するように振り向く。嗜虐心をそそられて淫肉をぐりぐりと抉ると、止めどなく愛液が溢れた。
「それなら出ないようにすればいいだろ」
「そんなの……むり……っ」
さらりと返された言葉に、たまらない愉悦が走る。
ああそうか、雪乃は今自分で「あなたと繋がるのが気持ち良くて抑えられない」と言ったようなものだ。身体の芯から喜びの媚電が走った。

「……すぐにリビングに行けば大丈夫だろ、ほら」
言いながら、強めに手首を引っ張って腰を打ち付ける。
「ひぐっ!? あっ、んはぁっ！ だ、だめ、これ、だめ……っ！」
激しく身体を戦慄かせ上体を折り曲げるが、俺に手首を掴まれた状態で結合しているために倒れ込むことも出来ない。
新雪のような美しい背中に赤みが差して、ぽつぽつと汗が浮き出ている。押し倒したくなっても必死で我慢しながら、リビングに辿り着いた。
「お味噌汁、温めなきゃ……っ」
息も絶え絶えの雪乃が、消え入りそうな声で囁く。互いの体液を交わらせながら耳にした極めて日常的なワードに、背徳感がふつふつと湧く。
雪乃がちらりと振り向いた。
「その……入れたままで良いから、火を点けさせて？」
「あ、ああ、わかった」
雪乃が言った通りにして、繋がったままガス台の前に行く。流石に火の前で動く訳にはいかず、雪乃の腰に手を添えてじっとしていると、雪乃が手を重ねてきた。
「ごめんなさい……もっと動きたいと思っているでしょうけど……」
「や、いいって。作ってくれてること自体がありがたいんだし。ていうかこの感じ、新婚みたいでなんか……あ」
「え……」
「……」
「……」
事故発生。
２人とも、ものの見事に黙りこくった。
雪乃が火を止めて、お椀に味噌汁を入れた。鍋ごと持っていくのは危ないと考えたんだろう。
「……ばか。行くわよ」
「あ、ああ……わりぃ」
「別に、訂正したい訳では……」

「え、今何て……」
「行くわよ」
「あ、え、おお？　おう」
なんかオットセイみたいな返事をしてしまった。
雪乃が両手にお椀を持って、俺は繋がったまま一緒に歩を進める。何だかシュールな絵面だが、お互い味噌汁をこぼすまいと緊張している。雪乃の身体の強張りがそのまま膣肉の収縮に繋がっているようで、油断すると出してしまいそうだった。
テーブルの上には、シンプルながらも美味しそうな朝食が並んでいた。
豆腐とわかめの味噌汁に焼き鮭、ほうれん草のおひたしに、たった今よそったほかほかの白米。心まで満たされるような、温かみのあるご飯だった。
なんとか胡坐をかいて座り込むと、雪乃が俺に跨ったまま2人で味噌汁を飲んだ。
「……どう？」
「ん、美味い。ありがとな」
「……そう。なら良かった」
照れくさい会話を交わしながら、ふと思う。
正直、雪乃がここまで受け入れてくれるとは想定していなかった。
……この状態、すんごく食べづらい……。ミスったな……。
そんな風に思いながら味噌汁を飲み干すと、紅い焼き鮭が目の前にぽっと出された。
「はい、あーん」
「……あーん」
柔らかな笑顔に抵抗も出来ず、口にする。程好い塩味と、焼いた部分の僅かにかりっとした食感や中の柔らかな食感を楽しむ。
「……旨い」
「そう。はい、あーん」
続け様に、今度はほうれん草のおひたしを口に入れられる。鰹節と醤油がとてもよく合っていた。

こんな風に食べさせられること、しばし。
さぞ長く感じるだろうと思いきや、気付けば全てたいらげていた。雪乃も俺が噛んでいる間に上手いこと食べていて、2人が食事を終えたのはほぼ同時だった。
食器を重ねてシンクに運び、水に浸けておく。
その間も、ずっと繋がっていた。
最初は違和感しかなかったが、本当にずっと繋がっていると案外気にならなくなるということに気付いた。
「ソファ、座るか」
「ええ」
短いやりとりを交わして、ソファに座る。すると、雪乃がすっくりと立ち上がり、結合が解かれた。何をするのかと思ったら、くるりと振り返り、俺と正面から抱き合う形で腰を沈め、肉棒を呑み込んだ。
「ふっ、くぅぅ……っ」
快感と若干の苦しさに眉根を寄せる顔は、信じられない程美しくて。食い入るように見つめていると、頬を赤らめて汗ばんだ雪乃が微笑んだ。
「……こうしていると、本当に、一緒に暮らしているみたいね」
「……っ、そ、そう、だな……っ」
心臓がばくばくと鼓動して、下腹部に血流が集中する。
「あっ……大きくなった……ふふ……っ」
雪乃が嬉しそうに言って、お腹をさする。
――その仕草が、ある特定の時期を迎えた女性のように見えて、ごくりと息を呑んだ。
雪乃も自分の発言が想起させる状況に気付いたのだろうか、首まで朱色に染まる。
俺も恥ずかしくなり、ソファの後ろにもたれかかって雪乃を抱き寄せた。
「あ……っ」
か細い声を上げて、雪乃が俺を見つめる。ほんの数センチの距離で見つめ合うと、雪乃が楽しそうにくすりと笑った。

「ねえ、八幡。……私とあなたの子供が出来たら……一体どんな子になるのかしらね？」
「っ!? お、お前、急に何言って……っ」
心臓が痛いくらいに跳ねると同時に肉茎が反応し、肉襞が心地良く締め付けてくる。雪乃の足が俺の腰に巻き付いた。
「あなたが強い家族愛を持っていることは知っているわ。あなたは誰かに身内のような感覚で接し始めると、その人にどこまでも優しくしてくれる。それまで以上に……ね。私も結構似たような所があるようだわ。だからきっと……私もあなたも、親バカになりそうね」
「こ、こら……雪乃……っ」
俺の首筋に口付けをしながら、甘い言葉が囁かれる。雪乃が言葉を発する度に、腰は動いていないのに極上の快感が肉竿を貫いて、みるみる限界が近付いてくる。
「もちろん、今は無理だし、当分先になるでしょうけど……。……ふふ、私、変なことを言っているわね」
悪戯っぽい微笑みを浮かべて、雪乃がちゅっと唇を啄んだ。
雪乃を抱きしめる力を強めると、「んはぁ……っ」と艶めかしい嬌声が耳元で漏れた。
「俺だってな……お前のこと、いつか孕ませてぇよ……っ」
「っ！ ……あっ、あっ、あぁぁあぁぁ……っ！」
俺が絞り出した本音に、雪乃は目を見開いた。そして泣きそうな表情を浮かべると、唇を重ねて膣肉の締まりを一気に強めた。
腰が動かない代わりに、牡の精子を搾り取ろうと肉壺が波打ち、ざわめき、蠢いて肉竿を愛撫する。
「うぁ……っ、もう、出る、出すぞ……っ！」
絶頂の予感に震えると、雪乃が幸せそうに微笑んだ。
「きて……んっ」
唇が重なると同時に、媚溝の中で肉竿の切っ先が白く爆ぜる。
――どくっ、ぶびゅるる、びゅくく、びゅるるる……っ。
「んふぁぁあぁぁぁ……っ、あっ、んんんん……っ」
俺の射精に呼応して、雪乃も全身を痙攣させて絶頂に達する。口内

で唾液を混じり合わせながら、牡と牝の性器が互いの汁に塗れて絡まり合う。
多幸感に包まれながら、雪乃の背中を愛おしんで抱きしめた。
×　×　×
ちょっと、さっきまでのやりとりが恥ずかしすぎたようで。
「……」
雪乃さん、ソファの上で毛布に包まって出てきてくれません。
「……あー、雪乃。洗い物は終わったぞ。……一緒に勉強したいんだが……」
俺の声に毛布に包まったゆきのん、略してもふのんがびくりと跳ねた。もふのんが顔をぴょっこり出して、おどおどと俺を見つめる。
「……その……さっきのは……つい、ちょっと、楽しくなって、つい言ってしまっただけだから……その……つい……」
ついが多いな。
「つい、って事は……うそはついてないんだろ？」
意地悪な質問をすると、雪乃は目を見開いてまた毛布に包まってしまった。うーん、もふのんったらすっかり引きこもりになってしまわれて……。
「ほらほら、出てきなさい。出てこないとヒッキーって呼ぶぞ」
言った瞬間に、毛布が跳ね上がった。
「それは……いやね」
「お、おう……」
こうかはばつぐんだった。何か悲しいけど、まあいいか。
取り敢えず2人で歯を磨こうと洗面所に向かう。
「……ん」
歯磨きをしていると、雪乃がそっと手を握ってきた。にやけそうになるのを我慢しつつ握り返す。
来年以降、今よりも互いの家で多くの時間を過ごしたり、あるいは同棲なんて出来たら……。
それはそれで、油断すると爛れた生活になりそうで怖いな、なんて

思いながらも。
「……ん……っ」
歯磨きを終えて、優しく唇を重ねてくる雪乃を見つめていると――
やっぱり一緒に暮らしたいなぁ……なんて、気の早いことを思ってしまった。
受験でぴりつくであろうこの1年も、雪乃と一緒なら何とでもなりそうだな……と思いながら、今度は俺から口付けをした。
2人で過ごす時間が、柔らかく過ぎていく。
……勉強の前に、洗濯をしておかないと。

お終い。

いろいろあって川崎沙希は思いを寄せている。

（1）

季節は春。

高校三年生となった俺は、今日も今日とて、かれこれ丸二年も通っている総武高に向かって歩いていた。

今日はクラス替え後の初日ということで、周りを行く生徒もどこか浮足立っている。いつもは自転車に乗っているところだが、今日は何となく歩きたくなって、途中から自転車を押して歩いていた。

クラス替えで周りとの別れを惜しむという気持ちはこれといってない。そうは言っても去年一年は色々、本当に色々あった。それでも、教室での会話量が増えた訳でもなかったし、会おうと思えば廊下でもどこででも、いつでも会える。ちなみに俺から会いに行くことはまず無いので、会いたい場合は俺に会いに来る方式で。俺超偉そうだな。なんだろう、入院して見舞いに来てもらってる人もしくは動物園の動物みたいな抜群の受け身態勢だな、それ。

新しく文理選択で分かれたクラスのメンバーが発表されるのも今日なので、まだ誰と別れて誰と一緒になるかは把握していない。まあ、もし戸塚や戸塚や戸塚と別のクラスになっていたら、さぞ陰鬱な気持ちになることだろう。あゝ戸塚。

誰と一緒になったとしても、あまり変わらない。俺のような人種はいつだってそうだ。内面はだいぶ変わった気がするが、それでも根本は変わらない。俺が昼食で四～五人で楽しく談笑しながら話すなんて日は、きっと来世でぎり来るかどうかだ。

どうでもいいことをぼけっとしながら考えていると、

「……おお」

ゆるりと流れた春風が、少し長くなった前髪を揺らした。風は柔らかくて暖かく、どこからか花の匂いを運んできてくれる。

良いなぁ、春風。

どこかで一つ下の女子高生が春風にスカートをめくられて、くまさ

んパンツを見せてくれたりしないだろうか。あんな理想的なシチュエーション中々無いよなぁ。真剣に考えてみよう。一つ下の女子高生……俺の知り合いでは一色しかいねぇな。うん、声も同じだから可能性はあるかもしれない。声も同じって言っちゃったよ。

取り敢えず、ここから二週間ほどは一色とは外で話すことにしよう……と固く心に誓っていると。

「……おはよ」

「……おう」

別の道から、美人で目つきの怖い青みがかったポニーテールが特徴的で何気にある箇所が結構立派な女子生徒が姿を現した。回りくどいけど川崎です。最近やっと名前を覚えました。そういやこいつの家、うちからあまり離れてないんだったっけな。

進んで世間話をすることは今までまるで無かったけれど、目的地が同じで且つ並んでしまった為、自然と一緒に登校することになる。川崎はさっきから何やらちらちらとこちらを見ているが、恥ずかしいから止めてほしい。

「……今日、クラス発表だな」

視線が気になったので適当に話題を振ると、

「ああ、……別にどうなろうと関係ないけどね」

川崎の返答に少し驚いた。ああそうだ、タイプは違えどこいつ、俺と同じ人種だった。ちなみに同じ人種には他に雪ノ下や予備軍として留美が居るが、みんな細かな分類は違う。〇〇目までは同じで〇〇科が違うみたいなイメージ。ぼっち目腐り目科、ぼっち目グラマラス科、ぼっち目永遠の0科、的なね。これ口に出したら確実に命が無いな。

「ま、そうだな。誰と一緒だろうと勉強しなきゃならんことには変わりない」

前を向いて春の陽気にのほほんとしながら答えると、視界の隅で川崎がちらちらと俺を見た。

「……なに、どうした」

「べ、別に、なんでもない」

そっぽを向くようにして、川崎が顔を逸らす。しかしそれでもまだ俺をちらりちらりと見やってくる。一体何なんだ。
「言いたいことがあるならはっきり言えよ」
気持ちはのんびりとしているのだが、声音が思ったより強くなってしまった。川崎はびくっと身体を強張らせて、途端におどおどし始める。案外打たれ弱いというのをすっかり忘れていた。
「すまん、無駄に言葉が強くなった」
謝ると、川崎が慌てて首を振る。ポニーテールが揺れて顔に当たってるけど大丈夫だろうか。
「う、ううん。あたしこそごめん」
口早に、やけに素直に謝ったかと思うと、川崎はそれっきり俯いてしまった。落ち込んでいるのだろうかと思ったが、こちらから見える頬はほんのり赤く、何だか照れているように見える。
再び二人とも無言になり、ぽてぽてと歩く。見慣れた風景も自転車に乗って見るのと歩いて見るのとではだいぶ違うことに気付く。生命の息吹があちらこちらから感じる風景は、見ただけで何だか嬉しくなってしまう。
「結局、さっきのは何だったんだ」
しばらく歩いて、もうじき学校に着くという辺りでふと話しかける。川崎は髪をくりくりと摘まんでもじもじすると、しどろもどろに話し始めた。
「……いや、その……別に、新しいクラスで誰と一緒かなんて全然気にしてないんだけど……その、も、もし、あんたがいたら、結構……」
「え……」
川崎の発言に心が一気に引き寄せられる。突然降って湧いた展開に動揺して立ち止まると、川崎も慌てて立ち止まる。続きを言わなければならない状況に、川崎は頬を赤らめながら人差し指をつんつんと合わせて視線を泳がせる。
川崎が口を開いて、何か言いかけたその時。
風が吹いた。
「……あ……」

今日一番と言って良い程の強い風は、立ち止まってこちらを向いていた川崎のスカートを気持ち良い程鮮やかにめくって。
残念ながら、一つ下の子でもなければくまさんパンツでも無いけれど。
いつか見たのと同じ、黒のレース。
しかもあの時脳裏に焼き付いたものよりも、若干セクシー。
妄想していたシチュエーションを遥かに上回る衝撃だった。
あれ。
ていうかこの状況、やばくない？
待て待て待て、俺と川崎の出会いを、運命の黒のレースを思い出せ。あの時あいつのパンツを見た時、そしてその後教室で会った時。どちらの時も、川崎は「……バカじゃないの？」と冷たく言い放って終わっていただろう。そうだ、あの川崎なら、これくらいのこと何でも――と、思ったのだけど。
今の川崎は、どうやらもう、出会った時の「あの」川崎ではなくなっていたようで。
「……え、あ、ちょ、うそ……っ」
風でふわりと靡いたスカートを、両手で必死で押さえ込んだ。スカートと俺を交互に見やって、耳まで真っ赤にしている。あ、あれ？
おかしいな、これじゃまるでただの可愛い女の子なんだけど……？
「……心配すんな川崎。見事な黒のレースだったぞ」
試しに言葉をかけてみると、
「ば、バカじゃないの!?」
と、いつものクールさからは想像も付かない程上ずった声で叫ばれた。川崎は首を横にぶるんぶるんと振ると、俺を置いて早足でずんずんと進んでいく。その後ろ姿を見つめながら、俺は川崎の予想外の変化に戸惑っていた。
本来、性格の変化なんてものは曖昧だ。その日その時の気分だってあるし、良い変化かどうかなんてのは完全に見た人の主観でしか考えることが出来ない。
だからこそ、以前と似た状況というのは、川崎の変化をはっきりと

示す指標になった。
去年、まだ顔も知らない時の（同じクラスだったけど）川崎は、今のような状況に対して冷たくさらりとした反応を示した。
そして今年、今日この日のあいつの反応は、まるで可愛らしい乙女そのもので。
あまりにも変化がはっきりとしていて、思わず目を瞠った。
頭をがしがしと掻いて、自転車に跨る。ぼーっとしていたら結構時間が経っていたので、ここからだとあまり歩きと差は無いが一応乗ることにした。
きいこきいこと自転車を漕ぎながら、気付けばずっと川崎のさっきの反応を反芻していた。
……この一年で、あいつに一体何があったんだ……。

続く。

（2）

川崎が黒レース事変（風でスカートが捲れたトラブル）により顔を真っ赤にして離れた後、俺はゆっくりと校舎に足を踏み入れた。

校舎に入ると、昇降口を始めとしてあちらこちらに新しいクラスの一覧の紙が貼られていて、そこに新二・三年生が群がっている。どこもかしこも「うわー！　俺の担任マジかよ……」やら「きゃー！　また一緒だね！」やらと、何だかんだで楽しそうな声が聞こえてくる。どんなイベントもあっと言う間に青春風味に仕立て上げてしまう君たちに脱帽だよと思いながら、人混みを書き分けて紙を見る。あくまで俺がどのクラスに居るか知りさえすれば良いので、自分の名前を探すことに専念する。えーと、「赤城」や「新木」よりは確実に後ろで、「川岸」や「さがら」よりもずっと後ろ、かといって「渡」ほど後ろにはいないから……お、あったあった。

青い背表紙が並べられた自宅の本棚を思い浮かべながら、自分の名が書かれていたクラスに向かう。探してる途中は集中していたから気付かなかったが、遠ざかると後ろでまたしても先程と同様の喧騒が聞こえてきた。まあ、人生の楽しみ方は人それぞれだろう。

廊下に出て、多少は密度は減ったもののそれでも人の多い空間に目を細めながら、ぽてぽてと足を進めた。

×　×　×

のんびりと歩いていると、目的の教室に辿り着いた。あまりにも気持ちが呑気すぎて、このまま行けばすみっこぐらしのキャラの一員になれるのではないかと思う程だ。なれねえよ。

「……あ」

「……おう」

数歩先で同じ教室に入ろうとしていたのは、川崎・黒レース・沙希だった。

「……あんた、何か失礼なこと考えてない？」

慌てて目を逸らす。おかしいな、何でバレたんだろう。

「えーと、その、なんだ、また一緒だな。よろしく」

話題をずらさねば死ぬかもしれないという思いから、全くキャラでない言葉を口にする。しかしその効果は結構あったようで、黒レ……川崎が頬を赤らめて俯いた。

「……うん、よろしく……」

しどろもどろにそう言うと、川崎がちらりとこちらを上目遣いで見やった。

……え、本当にこの子どないしてん……？

気が動転して似非関西弁でモノローグをお届けしていると、川崎は足早に教室に入っていってしまった。

頭をがしがしと掻いて、俺も教室の中へと足を踏み入れる。

× × ×

皆さん、天使の存在は信じますか？

僕は、信じます。

違います、宗教のお誘いではありません。

これはただの事実報告なんです。

今僕の目の前にいる――

「八幡！」

――戸塚という、天使の存在を、皆さんにお知らせしているに過ぎません。

「……戸塚……っ！」

感動しすぎて無駄にドラマチックなテンションになってしまった。

教室に入るなり最初に目に飛び込んできたのは、可愛すぎて身内にしたい、いやもはや身内なんじゃなかろうかとさえ思っている戸塚だった。そう言えば朝ごはんを一緒に食べた気がする。うん、気のせいだな。

念の為教室のプレートを確認しようと、高速でバックステップをかます。身体を不自然に逸らすと身体が軋んだ。だが、戸塚と再び一緒に居られるということが夢でないことを確認するための行動なのだから、この程度の痛みは何でもない。何だよこのテンション。

「八幡、すごいね。やっぱ運動神経良いなぁ……」

テンションに任せた俺の愚行に、戸塚が目をキラキラとさせてい

る。いかん、浄化されて灰になりそう。灰を集めたら、どうか海風に流してください……。
「……戸塚も、このクラスなんだな……？」
恐る恐る尋ねると、戸塚は胸の前で両手をぐっと握ってお日さまのような笑みを浮かべた。
「うん、そうだよ！　……八幡、また一緒になれて嬉しいな……」
はじける笑顔から一転、頬を赤らめて顔を逸らし、髪の毛の先を指で摘まみながらこちらに流し目を送ってくる。
こらこら、そんな可愛い仕草を見せちゃったら危ないぞ？　主に俺の心臓が。
ばっくばっくと元気に鳴っている心臓を押さえながら、精一杯の返事をする。
「ああ、俺も嬉しい。ところで戸塚、今日は男子の制服なんだな」
嬉し過ぎて質問がおかしくなった。
テンションに任せた失言に固まっていると、戸塚はきょとんとした顔で首を傾げる。俺今ここで死んでもいい。うそ、ちゃんと生きてこの子のそばにいたい。
「もう……八幡ってば。僕、男の子だよ？　……忘れちゃったの？」
とてとてと寄ってきて俺の袖をちょんと摘まむと、拗ねたように上目遣いを向けてくる。
あかん。
死ぬ。
「そ、そそ、そうだよな、わりぃわりぃ、気が動転してた……」
何ら嘘はついていなかった。
戸塚は俺の言葉を聞いて、顔を上げてくすりと微笑む。
「ふふ……変な八幡」
変っていうよりはこれは恋かもしれなんでもないですごめんなさい。

×　×　×

天使とのびっくりハッピーエンカウントを終えて、教室を見回す。黒板には「ひとまず自由な席に座っておくように」と書かれていた。

見慣れた文字を見て、この後席がどう決まるのかが若干不安になる。
「あ、ヒッキー」
「おう」
適当な席に座ると、由比ヶ浜と目があった。嬉しそうにこちらに近寄る姿は飼い主を見付けた犬そのもので、思わずリードを着けたくなる。うそうそ、三浦さん殺さないで！
俺の前でぴたりと止まると、その拍子に豊満な胸元がぷるんと揺れた。ブラや制服でも固定しきれないその凶器……雪ノ下に分けてあげてほしい。あの子多分裸でも揺れないから。
「えへへ……また一緒だね」
「おう、そうだな」
ごく普通に受け答えしたつもりだが、由比ヶ浜がむーと唸って頬を膨らませる。なんだよフグかよ。外敵でもいんの？
「どうした」
「ヒッキー……さっきさいちゃんと話した時とテンション違いすぎない？」
見てたのかよ。まあ、教室の入口であんなやりとりをしていては、自然と目に付くとは思うが。
こほんと咳払いをして、落ち着き払った対応を心がける。
「ぼっ、おまっ、俺と戸塚はそんなんじゃねぇしっ」
努めてバカげたテンションで答えると、由比ヶ浜が怪訝な顔つきでごみを見るかのような目で見る。
「ヒッキー……新年一発目からそれはキモすぎるよ……」
ボケにボケをかぶせてきやがった。しかも天然もの。本当にフグなのかもしれない。胸の辺りがぷっくり膨らんでるし。その凶悪なまで豊満な膨らみは、男を惑わす毒とも言える。俺何言ってんだろう。
「今日って一月だっけ？　初詣行くか？」
「ちょ……ひ、ヒッキーのばか！」
やはり新年度と間違えていたようで、ツッコんだ途端に由比ヶ浜の顔が見る間に赤くなる。その様子自体は至極可愛らしいものではあ

るが、如何せんバカが過ぎて冷静になってしまう。
「結衣―」
聞き覚えのある女子の声が聞こえると、由比ヶ浜がはっと後ろを振り返る。
「ごめんね、今行く！　……ヒッキー、ごめんね？　また後でね」
「あいよ、気にすんな」
ひらひらと手を振って、由比ヶ浜を見送る。見ると葉山やら戸部やら三浦やら海老名さんやら、去年何だかんだで割と関わった上位カースト組が軒並み同じクラスだということに気付く。こんなこともあるんだなと少し驚いた。他の目立たないヤツらはいないようだ。ええと、童貞風見鶏と……もう思い出せない。まあいいか。また一緒になれた、っていう幸せに満ちた表情で三浦が葉山を見ていて、どんだけ乙女なんだよと感心する。あんな怖い見た目をしておきながら……。
ちらりと視線を巡らせると、既に席に着いた戸塚と目が合った。えへへと笑いながら手を振ってくれる。ＳＯＳを求める時くらいの勢いで愛情を示したいと思いながら、小さく手を振り返した。
さらに視線を巡らせると、川崎と目が合った。あわあわと視線を泳がせて、ちらりと流し目で俺を見て、やがて俯いてしまった。俺何かしたっけ、本当に……？
耳を澄ませば、廊下や昇降口で広がっていた喧騒が、徐々に各教室に押し込められて行っているのが分かる。俺はただ騒がしいなと思うだけだが、こういった状況をもっと楽しめるようになったら俺もタカコさんみたいになれるんだろうか。俺あんなに耳良くねぇけども。
つらつらと雑考に耽っていると、教室のドアががらりと開いた。見慣れたスーツと白衣姿で、スタイル抜群の黒髪美人（ただし行き遅れ気味）が教壇に上がる。
「さあ、ＨＲを始めるぞ。まずは適当で良いので席に着きたまえ」
平塚先生の言葉に、教室でやいやいと騒いでいた連中が席に座っていく。俺や戸塚や川崎のように既にソロで座っている人も多かった為、最後辺りは若干椅子取りゲームの様相を呈していた。実にシュー

ルだ。
平塚先生が教卓に両手を乗せ、凛とした表情で皆を見回す。
――ようこそ、実力至上主義の教室へ。
……とか言いそうな顔つきだなーなんて思いながら、周りの生徒と同様に、先生の言葉を待った。
続く。

（3）

平塚先生が教壇に手を付き、クラス内をを見回してにかっと笑う。やたらと男前な表情はよく見慣れたもので、笑顔一つで安心させてくれた。

「さて、諸君。このクラスが、君たちの貴重な高校生活最後の年の居場所だ。存分に交友を深め、勉学や部活に励んでほしい」

凛とした、それでいて優しい言葉が教室に響き渡る。生徒一人一人を思いやってくれるこの人だからこそ、この言葉にこれだけの説得力があるんだろう。

と、内心ベタ褒めしていると、先生が急に顔を逸らした。

「そう……青春、青春だよなぁ……私もあの頃にもう少し頑張っていたら、今頃もしかしたら……いや、そんなことを考えても駄目なのは分かってるんだが……」

最前列且つ教卓のすぐ近くに座っていたら、何故か俺にだけ内容が聞き取れる音量でぶつぶつと呟き始めた。何でこの人絶望に染まった瞳で俺を見てるんだ……。さては昨日辺り合コンで失敗したな？

後で応接室で進路指導とか言って雑談をして慰める必要があるだろうか。これ俺が成人してたら絶対飲みに連れて行かれるよなぁ。……再来年以降にその危険性が……!?

俺が再来年以降に思いを馳せていると、内容は聞き取れなくとも先生の様子のあまりの落差に周りがざわつく。

「（先生、闇が入ってますよ。落ち着いてください）」

囁くように言うと、先生がハッとして俺と目が合った。さっきまで俺を見てるようで俺を見てなかったのだと気付く。どこの誰に思いを馳せていたんでしょうか……。

目尻の涙を拭って（何でだよ）、先生が俺にふっと笑いかける。やだ素敵。これなら再来年以降飲みに連行された時にお持ち帰りされても……想像しただけで妙に興奮するからやめておこう。

「そんな訳で、席替えをしよう。せっかく最後の年なんだから、男女隣り合って、机をくっつけようか」

おい。
切り替えたなと思って安心したばかりだというのに。
この人、何か言ってる。
だめだこいつ、早くなんとかしないと……。
合コンの失敗（勝手に確定させてる）の八つ当たりを謎の形にして俺たちにやってやがる……。
『えー、それは流石に……』
『あ、でも意外とありかも……』
『は、隼人は……希望とかあるの？』
周りのモブ共がざわつく。それもそうだろう。平塚先生のキャラをまだいまいち知らない人もいるだろうから、尚のこと動揺するだろう。ていうか最後に聞こえたのって絶対三浦だろ。
このままだとどうなるかな……と思っていると、後ろで一人の男が手を上げた。「金髪イケメン誰も選ばなーい」こと葉山が、謙虚ながらも堂々と手を上げている。我ながらひどいあだ名を付けてしまったけど気にしない。イントネーションに注意して面白おかしく呼んで小ばかに出来るかが勝敗を握っている。何の勝敗だよ。
「平塚先生の案、賛成です。最後の年なんだし、男女間の距離感も縮められたらクラスの雰囲気も良くなるんじゃないかと思います」
おお、相変わらず気の利いたことを言う。しかしお前の台詞はここまでだ。葉山のすぐ横で三浦がうっとり顔で見つめているけどスルーする。反応したら烈火のごとく怒られるだろうし。超怖いよあのオカンみたいなお蝶夫人。
……どうしたんだ俺、口に出したら瞬時に死ぬようなことばかり考えてるぞ。
葉山の言葉の効果は抜群で、男女問わず賛同する流れになっている。モブ共の、人に流されやすいことといったら。そのまま卒業して人ごみに流されて変わっていって、時々「遠くで……叱って？」って上目遣いで言ってればいいんだ。
平塚先生はクラスを見渡して嬉しそうに頷くと、
「よしよし、楽しいことになってきたな。さて、それでは早速だが」

と言って、皆に紙を配り始めた。
「私に言う勇気があるなら、誰と隣になりたいかを書いてくれ。誰かを取り合うような状況になった場合、紙から感じる熱意によって振り分けようと思う。もちろん、視力の関係でなるべく前に、などと言った通常の要望もこの紙で伝えてくれて構わない」
なんかすごいこと言い出したぞこの人。
後ろに紙を配りながら、少し考える。
ううむ、隣か……。
何か後ろから犬っぽい視線を妙に感じる。あと腐った視線も感じる。それと、この視線は……何だろう？　覚えはあるけど誰か特定出来ない。俺視線にどんだけ敏感なんだよ。無意識に円を使ってるのかしらん。頑張って３００ｍくらい広げられるようになりたい。
何てことを考えていたら、思いの外みんな乗り気らしく、腕で紙を覆ってかりかりと書き始めた。なんだよこいつら高校生かよ。高校生でしたね。三浦さん、ちょっと一生懸命書きすぎじゃないでしょうか。
さて、どうしよう。
隣り合うのは男女だという。即ち俺の隣に座るのは女性だ。
さて、女性とはどんな生き物だろうか？
例えば、小町。
まず何よりも「妹」という属性が出てくる訳だが。性別は立派に、それはもう超立派に女性だ。
そして小町は可愛い。超可愛い。
即ち、女性とは小町で、小町とは可愛い。
ということは、「可愛い人は女性」なのだ。そう言える。間違いない。
えーと、可愛い人、可愛い人、可愛い人……。
×　×　×
十五分後。
「えー、それでは集計結果を基に席を決めようと思う。思いの外多くの人が隣になる人を希望していて、先生は嬉しいぞ」

先生がにやにやしている。楽しんでんなぁ……。
結果が楽しみだ。争奪戦になるのを心配していたが、俺が紙に名前と一緒に書いた熱意の文は、安心院さんの１００個のスキル名で埋め尽くされたページと互角とまで言える。要は文字でぎっちぎちになっている。これならば例え他の人とかぶっていても俺が勝てるに決まって――
「あー、それと。何故か同性の名前を書いている輩がいたが、それは却下だ」
先生が俺をじっと見る。すごい無表情です。
……めっちゃ見てる。
あれ、おかしいな、俺は「戸塚」って書いただけなんだけど……。
……だめ？
俺の懇願の視線を一瞥しただけで切り捨てると、先生は別の場所に視線を向けた。
「それと、男性同士……こほん、同性同士を隣り合わせてほしいという希望も書かれていたが。このクラスは男女同数なのでそれも却下させてもらうぞ」
高速で後ろを振り返った。腐海の女王が「ちぇー、残念だなー」と言いながら笑っている。こ、この人は……。
「さて、取り敢えず今の話の前者に該当する者は後で職員室へ来るように。では席順を書くぞー」
さりげなく呼び出された所で、先生が黒板に席順を書いていく。何で俺だけと思ったが、ちょうど良いと言えばちょうど良いので、お叱りを受けるついでに合コンの慰めもしてあげよう。
みんな机を持って移動を始めて、軽くお祭りのような騒ぎになる。こんなに騒いで大丈夫かと思ったが、新学期最初の日だからか周りのクラスも似たような喧騒に包まれている。なに、みんな席替えやってんの？
そんなこんなで、席移動中。
移動中。
移動中。

……。
はい、完了。
いやー、便利だ。数行で過程を表すことが出来るだなんて。まるでロケで芸能人が『それでは噂のお店に向かってみたいと思います！とう！』と言ってジャンプした所で映像が途切れて、目的地でジャンプから降りてくる瞬間を撮って瞬間移動のように見せるという、懐かしのシーンのようだ。例えの説明が長くなった。
ふむ、俺の席は窓際最後列か。数学の時間は寝られるし、涼しい風を浴びることも出来る。悪くない。
「……ん？」
椅子に座ると、隣の青みがかった黒髪と目が合った。
「……」
すんごい沈黙してる。
あ、目を背けた。
え、俺の隣、川崎ですのん？
「えー、今回の席の何が面白いかと言うと、全ての組み合わせが誰かの希望で成り立っている訳ではないという点だな。特に希望を出していない者同士を組み合わせている場合もあるし、倍率が高くてあぶれた者もいる」
平塚先生の言葉に周りを見渡して、あらゆる視線がクラス中で交錯していることに気付く。
まず、三浦は……葉山の隣か。良かったな。すんごい勝ち誇った顔を周りに向けてるけど、もしかしたら周りは怖くて葉山の名前を出せなかったのかもしれない。
そして戸塚の隣の女子は……『あ、あれ？　女子のわたしより明らかに可愛い……あ、あれ？』と首を傾げながら戸塚の髪やらほっぺをぺたぺた触っている。戸塚は真っ赤になって慌てている。やめろ！
戸塚に触れて良いのは俺だけだ！
そして、由比ヶ浜……の隣の男子。モブい。そしてめっちゃ周りに勝ち誇っている。その男子に周りが猛烈に嫉妬の視線を向けている。十人近くいるんじゃなかろうか。あいつがモテるという事実を改め

て認識する。
当の由比ヶ浜は、いつものようににこやかに隣の男子と話すのかと思いきや、何故か川崎に恨めし気な視線を向けている。なんかエサを目の前で取られた犬みたいだ。川崎は由比ヶ浜の視線に気付いているようで、珍しく冷や汗をかきながら前を向き、俺を見て、由比ヶ浜をチラ見するという流れを繰り返している。今この教室で一番挙動不審なのは、間違いなくあなたですよ川崎さん……。
「ふふふ、良いな、青春だな。……はぁ……青春……良いなぁ……」
先生がまた一人で沈んでいる。悲し過ぎる空気を漂わせるのはやめてよぉ！
「とにかく、悲喜こもごもあると思うが、この席でしばらくの間過ごしてもらう。何も無ければ来月には席替えをしようかと思うが、様子見をしようと思う」
先生はそう言うと、「それでは、早速授業に入るぞ」と言い、教科書を開いた。
周りも空気の切り替えに苦労しながら、各々教科書やノートを取り出す。
しかし、川崎と隣か。
別にいやではないけど、何で隣になったんだろう。
あれか、ぼっち同士を隣にした方が周りは楽とかいう配慮か。
……有り得る。
まあ、何とでもなるだろうと思い、頭をがしがしと掻く。
「あー、その、なんだ。取り敢えず、よろしく」
やや緊張しながら挨拶すると、川崎が前を見たままびくりと身体を跳ねた。あれ、ひょっとしてずっと固まってた？　授業の道具を何も取り出してないし。え、どういうこと？
川崎はぎぎぎと首を左に曲げて、俺に顔を向ける。耳まで真っ赤にした顔が、青みがかった黒髪とのコントラストを生み出す。
「よ、よろ、よろし、く……っ」
「お、おう……よろしく」
えらく小さな、消え入りそうな声で呟く川崎の表情は、妙に気弱な

印象を受けて。
普段の印象と違い、ちょっと可愛いかも……と思ったら。
不意に、心臓がどきりと跳ねた。

続く。

（4）

時間というものが、人に及ぼす影響はとてつもなく大きい。
一番に挙げられるとすれば、身体の成長と老化だろう。
何も無い所から命が生まれて、それが成長し、徐々に衰え、やがて何も無い所へと還ってゆく。その流れは、時間無くしては考えられない概念だ。
他にも沢山あるとは思うが、ここで敢えて挙げるとすれば――人間性の変化を挙げたい。
純粋だった人が何かの拍子に傷付いて薄汚れてしまったり。逆に、手の付けようがない程の不良が見事に更生したり。これも、時間の流れが無くては考えられないものだ。
俺も今まで――特に高校2年生の1年間で、少なからず性格や行動に変化が出たと思う。それが良いものなのか悪いものなのかは、この先何十年と経ってからでないと判断は出来ないと思う。もし病気で30歳で死ぬなどという事態になれば、もっと早く判断出来るかもしれないが……そういったことはなるべくごめんこうむりたいものだ。
そして、俺の隣にも一人――この1年で、だいぶ変わったように思えるやつがいる。
青みがかった黒髪ポニーテールを揺らしている――川崎沙希。
この子が、最近どうも様子がおかしい。
そんな気がしてならない――

× × ×

昨日のこと。
新学期早々、新しいクラスでも担任になった平塚先生の謎の提案により、結果的に俺と川崎が隣同士の席になった。ちなみに俺の席は窓際最後列で、川崎はその右隣だ。この子が隣にいるというのは同じぼっち同士で割と気楽で、それでいてすぐ横の窓を開ければ、春の匂いを乗せた風が味わえる。寝たい時はかなり寝やすいし、中々良い席だ。妙に上機嫌になっている自分に不思議な感覚を覚えながら、授業を受けている。

川崎が隣と言っても、今までのノリならば互いに会話をすることはあまり無いだろう。授業態度も互いに真面目だし（但し俺は数学の場合を除く）、隣同士である意味をそこまで感じることは無いだろうな……と思っていたのだけど。
「ね、ねぇ……比企谷」
「……？」
蚊の鳴くような細い声が聞こえた。まず、誰が喋ったのかも分からないし、そもそも俺に向けられた言葉なのかも分からない。きょろきょろと辺りを窺って、心霊現象ばりに気のせいだと思い込んで黒板を見直す。今は古文の時間で、先生が文法や時代背景的に文意を理解しづらい部分を解説していた。
「ね、ねぇ、ねぇってば……比企谷……」
「……んぁ？　俺？」
もう一度聞こえてきた声が、どうやら隣の川崎が発したものだと気付く。見ると、川崎が今にも泣きそうな表情で俺を見つめていた。
「さっきから呼んでるのに……」
「……お、おう、わりぃ、すまん……」
何故か2回謝ってしまった。
はて、これは何事か。
いつもの川崎なら、俺が呼びかけを無視しようもんなら「……あんたに言ってんだけど」とか言って冷たい目で睨め付けるのが定番じゃないんだろうか。定番って何だよ。
「どうした」
ひそひそ声は意外と遠くまで聞こえてしまうので、ぼそぼそと地声で話しかける。ちなみにひそひそ声は喉にも負担をかけるから、喉風邪で声が出なくなったときにこの話し方をすると更にダメージを与えちゃうから注意な。俺、誰に呼びかけてるのん？
俺の問いかけに、川崎が頬を赤らめて黒板・手元のノート・俺と3ヶ所を交互に見つめる。え、なに、あなたの心を読み取るクイズなの？
「……流石に難易度が高すぎるぞ、そこから読み取るのは」
ぽそりと言うと、川崎があわあわと慌て始めた。

「あ、ご、ごめん……その、さっきノートを取ってたら聞きそびれたとこがあって。ここ大事そうだし、今のうちに聞けないかなって……」
川崎の言葉に前を向く。古文の先生は難しい部分の解説を終えていて、俺もノートはその部分をきっちり取っていた。そして今は休憩がてらの雑談を始めていて、正直聞いても聞かなくても……というレベルだった。
「ん、分かった。どこだ？」
言うと、川崎がノートを2人の机の間にそろりと置いた。平塚先生の言いつけにより机をくっつけているため、妙に距離が近くてどきどきする。
「あ、あの、こ、ここ、ここここ、ここなんだけど……っ」
鶏かお前は。
川崎は顔を真っ赤にしてノートを指差しているが、その人差し指がぷるぷると震えていてどこを指しているのかまるで分からない。
「え、どこだよ……あ、ここか？」
さっき自分もノートを取っている時に「あ、ここテストに出そうだな」と思った所が、川崎の指の震えの範囲内に含まれていた。震えの範囲内って何だよ。誤差か、誤差なのか。
確認しようとして人差し指をそろりと伸ばすと――
「ひっ……！」
――互いの人差し指が触れて、川崎が髪を逆立てんばかりの勢いで驚く。なに、君はメイちゃんか何かなの？　そして俺はトトロか何か？
「……すまん、大丈夫か？」
指を離して聞くと、川崎は顔をぶんぶんと振って、深く息を吐いた。
「こ、こっちこそごめん……だ、大丈夫……」
落ち着いたフリをしている割に、顔は真っ赤だ。
すげぇ。
全然大丈夫そうじゃない。
「……じゃ、説明するぞ」
「あ、ああ、お願い」

そこから字も交えて川崎に小声で説明したけれど、川崎の頭から湯気が出っ放しで、理解してもらえた気が全くしなかった……。

×　×　×

その日の夜。

いつもの如く小町と2人で食卓を囲う。この時間がもしかしたら今の生活の中で一番幸せな時間かもしれない。突然どうしたんだ俺。

「お兄ちゃん、何か学校で変わったことあった？」

「お前は母ちゃんか」

総武高に合格して、晴れて新たな生活がスタートした小町に、まさか最上級生の俺がこんな質問をされるとは思わなかった。そんなに俺は心配されるような生活を……してたな。むしろ心配しかされない勢いの生活だった。

「別にまあ、そんなに変わったことは……ああ、そうだ」

「ほよ？　何かあったの？」

小町が箸を口に咥えたまま、くりんと首を傾げる。行儀が悪い上に危ないし、可愛すぎて俺の命も危ない。

「や、昨日な……」

せっかくのネタだし、話してみよう。そう思って、平塚先生考案の席替えをしたことや、川崎と隣になったことを告げる。

「ほうほう、ほほう？　ふむふむ。お？　おお？　おおおお……？」

小町が話の途中で、絶妙に気分を乗せてくれる相槌を打つ。何でこんなに人の話を聞くスキルが発達しているんだろう。

一通り話し終えると、小町が急ににやにやし始めた。や、正確に言えば、話の途中からだいぶにやにやしていた。

「……なんだよ？」

訝し気な視線を送ると、小町はにんまりと笑った。

「……お兄ちゃんは、特に希望を出してはないんだよね？」

「戸塚って書いたぞ」

「少し黙れ」

「急に厳しくなっただと!?」

「良いから話を逸らさないで。もいだ」

「何を!?　何を!?」
　しかもなんで過去形なの!?　今すぐトイレに行って確認したいんだけど!?
「お兄ちゃん……沙希さんと隣になったんだよね？」
「ああ」
「窓際の後ろの席っていうのはたまたまだと思うけど……むふふ、お兄ちゃん、それ、絶対沙希さんが希望を出してたんだと思うよ？」
「……『窓際最後尾の席の隣が良いです』って言う風にか？」
「どうしてここでそんな発想が出るの……」
　これだからごみいちゃんは――と、当然のように悪態をついて、小町がやれやれとアメリカンなリアクションをする。腹立つけど可愛いから許してしまう。
「これは……ちょっと楽しみかも。大志君とも連絡とってみよっかな」
「そうだな、毒虫はすぐに駆除しないといけないからな。小町がおびき寄せてくれたら手っ取り早い」
「お兄ちゃん、何言ってんの？　大志君は友達なんだから、あんま変なことしないでね」
「……友達か」
「うん、友達だよ？」
　……うん、今、永久に交わることのない平行線が見えたよ。さよなら毒虫！　毒虫フォーエバー！　お兄ちゃんは安心です。
「ところで、なんで毒志と連絡を取る必要があるんだ？」
「毒志って誰なのさ……。んー……お兄ちゃんの生活を、少しでも彩り豊かにするため……かな？　キラッ☆」
「おぐほぉぉぉ……っ」
「おおおお兄ちゃん!?　なんで灰になりかけてるの!?　お兄ちゃんはアンデッドだったの!?」
　小町の眩し過ぎるスマイルに、危うく身体が消滅するところだった……。
　結局、小町の行動の意味が全く分からぬままに、その日を終えた。

明日も明日とて学校がある。さて、どうなることやら。

続く。

（5）

何に魅力を感じるかというのは、人それぞれだと思うんです。
みんな違ってみんな良いと思うんです。
「ここがたまらない！」と思う、多種多様のつぼ、ツボ、壺。
みんなちがってみんないい。
それで良い、それが良いと思うんです。
何を言っているのかって？
僕にも分かりません。
まあ、強いて説明をするならば――
予防線です。
しかもだいぶ情けないやつ。

× × ×

川崎と隣同士になった翌日。
春眠暁を覚えずなんて言葉もあるが、この日はやけに目覚めが良かった。いつもより３０分程早く目覚めると、やけにすっきりしていた。カーテンを開けて差し込む陽の光が、僅かに残った眠気を容易く霧散させてくれる。
眠くはないがいつもの癖であくびをしながらリビングに入ると、既に小町が朝食の準備を終えていた。
「およ？　お兄ちゃんも早起きさんだね。おはよー」
「ん、おはよ。何でそんなに早く起きたんだ？」
俺の問いに、小町は人差し指を顎に当てて考え込む。考えるというよりは、ただただ俺に「やだ、この子すごく可愛い……！」と思わせる為だけの仕草に思える。実際可愛く思ってしまうのだから手に負えない。手に負えないくらい可愛い。
「んー……お兄ちゃんが楽しいことになりそうだなって思ったら、次の日がすごく楽しみになっちゃって！」
目を輝かせながら、小町はそんなことを言う。何のことやら。
「ん、そうか。俺もそんな感じだ」
「うへぇ……お兄ちゃんの面構えで棒読みすると、しっくりきすぎて

何かやだ」
「漠然と嫌悪感を示すなよ……」
軽口を交わしながら、対面に座って手を合わせ、いただきますの挨拶をする。
トーストと野菜サラダを食べながら、比企谷家の緩やかな朝が過ぎていった。

×　×　×

朝早く起きたと言っても、３０分という中途半端な時間だ。何かをやる気も起きなかったので、さっさと学校へ行くことにした。きいこきいこと自転車に乗っていると、ほんの少し登校の時間が違うだけで景色がまるで違って見える。
街行く人の顔つきや服装がまるで違ったり。
散歩している仲睦まじい老夫婦がいたり。
元気よく登校する、ランドセルを背負った小学生がいたり。
桜が咲いている場所も所々に見受けられて、春を実感する。じっとりと汗ばんでいることに気付いて、のろのろと運転しながら片手でワイシャツのボタンを１つ開け、ぱたぱたと扇いだ。
早起きも存外悪くない。けれど、明日以降続ける気はあるかと聞かれたらぶっちぎりでノーと言える。たまにやるからこそ良いと思うんだ、早起きは。
そんなことをつらつら考えている内に、気が付けば学校に着いていた。

×　×　×

「……ん？」
ひと気のない廊下を歩き、自分の教室に辿り着く。すると、誰かが既にいるのに気付いた。今まではそれなりに教室が人で埋まった頃にするりと入り込んでいたから気付かなかったが、普段から早く来ている人もいるんだろうか。
教室後ろの入口からちらりと覗くと、見覚えのある青みがかった黒髪のポニーテールが見えた。
「……おう」

「あっ、お、お……おは、よ」
近付いて挨拶してみると、川崎は机の上にノートを開いていた。こういう時席が離れていれば何の問題も無いのだけど、如何せん窓際最後列で隣同士だから中々気まずい。机もくっつけてあるし。
下手に机を離そうものなら余計に気まずくなると思い、そのまま座る事にする。
腰を下ろすと、ものの見事に静寂が訪れた。
漫画だったら「しーん」という効果音が付きそうだが、この場合は『……』という表現の方がしっくりくる。お互いが会話の糸口をたぐるような、冷や汗を流しそうな時間。
「……いつも、こんなに早く来てんのか」
尋ねて、ちらりと視線を向ける。俺の言葉に川崎はぴくりと肩を跳ねて、そろりと視線を向けた。
「……今日は何か、早く起きちゃって。だから、その……昨日済ませた予習の見直しをしようと思って……」
川崎が手元のノートにちらりと目線を落とす。古文のノートで、昨日の続きの部分の現代語訳や単語の意味のメモなどが丁寧にまとめられていた。
「予習の復習って斬新だな……」
何とはなしに言ってみたら、川崎がぼっと頬を赤らめた。
「べ、別に、いいでしょ……っ」
声を震わせて顔を背ける川崎。耳が真っ赤になっているのを見てやってしまったとため息を吐く。
「別に悪く言ってるつもりはねぇよ。むしろ褒めてる。俺も何故か早く起きちまったけど、何にもする気が起きないから何となく学校に来ただけだからな。その時間をそのまま勉強に充てようとするのはすげぇよ」
俺の言葉に、川崎がちらりと視線を送った。ぐずっている子供の機嫌が直ったような、大人の美女が流し目を送るような、様々な心情が混じった視線。
「……そ、そう」

ぽそりと呟いて俯いてしまう。今度は不機嫌ではなさそうだけど、もう少し喋ってほしい。俺も口数が多い方ではないから、このままではＴｗｉｔｔｅｒで仲が良い人が飛ばし合う素っ気ないリプライみたいなやりとりになってしまう。

「……暑い……」

俯いたまま、川崎が手で自分の顔をぱたぱたと扇いだ。

うーんと唸って、次の会話のネタを探す。川崎が食いつきそうなネタ……毒虫か。しかし川崎が話しやすくても、俺が聞きたくない。これだからブラコンは……。

……あ。

「……今日予習してきたとこで、訳しづらいとこあったと思うんだけど。あそこは訳せたか」

鞄から古文の教科書を取り出し、ぺらぺらとページを捲ってある一文を指差す。単語の意味は簡単でも、時代背景を理解していないとピンとくる訳が出来ない文だった。

川崎は俺が指差した所をじっと見つめて、目を見開く。

「……そこ、調べても分かんなかったとこだ。あんた分かったの？」

「ああ、一応。前にこの時代について書かれてる本を読んだことがあったから、こういうことを言いたいんだろうなっていう見当はついた」

「え……それ、教えてほしい」

よほど考えていたのだろうか。川崎の目に見慣れない光が宿る。テンションが上がったように見える様を見て、何故だか無性に嬉しくなった。

「ノート見せてくれるか」

「分かった」

川崎が問題の文についての訳を書いたページを開いて、ノートを２人の机の間に寄せたところで――あることに気付く。

今日は暑い。朝から、微かに夏の予感さえする程に。

俺も、登校する時に手で扇いでいた。

そして、川崎も今さっき手で扇いでいた。

衣替えはまだ先だが、川崎は暑かったからか上着を脱いで椅子に掛けている。つまり、今はワイシャツ姿だ。
俺が来るまで、川崎は一人で勉強していた。一人で勉強するということは、つまり、人目を気にする必要がない。誰か来てもすぐに切り替えればそれで済む話だったが、川崎は俺が声を掛けたらかなり驚いていて、恐らく服装を直す余裕は無かったんだろうと思う。
何よりも、普段から川崎は制服の着こなしが緩い。彼女に不良っぽいというかヤンキーっぽい印象を抱く理由としては、服装が大きな要素を占めていると思う。
と、まあ、長々と述べたけれど。
「えぇっと、あたしはこう訳したんだけど」
――川崎が俺に身体を寄せた拍子に、いつもよりボタンが多く開けられたワイシャツの胸元から、豊かな谷間が覗いていた。ノートを指差すことで結果的に胸を寄せて、ワイシャツの下のブラまで僅かに見えてしまっている。
素早く顔を逸らした。
「……どうしたの？」
訝し気な声を川崎が発する。
……あれ、何か前より大きくなってる気が……。
成長期ですかね？
「……や、その、すまん」
顔を戻して、視線を川崎の顔より下に落とさないようにして謝る。
「？　何言っ……て……っ」
視線を何気なく下に落とした川崎が、俺の言葉の意味を察したようで。
見る間に耳まで真っ赤になる。
「あっ、うっ、ご、ごご、ごめん……っ」
物凄い速度で椅子ごと廊下側を向いてボタンをかける。廊下側に人がいたら丸見えだと思うが、今の時間帯なら大丈夫だろう。
「……」
本当に、変わったなと思う。

1年前だったら、俺の反応に対して冷淡な言葉を投げかけるだけだったのに。
一体何が原因でここまで振る舞いが氷解して、柔らかな人間性を見せるようになったのか。
そんなことを思いながら、ふむと考え込む。
「……大きくなったな」
「あんた死にたいの？」
「ごめんなさい何でもないです許して」
光速で頭を下げた。

ちなみにこの日、川崎は一番上までボタンを留めていた。しかし豊満な胸元が却って強調されてしまい、廊下で海老名さんと川崎が出くわした際に「わ～……サキサキ、それすごくエロいよ？　エロスだよ？　どうしたの？」と言われて思い切り慌てていた。結局翌日はいつものスタイルに戻っていたけど……一回り大きいやつを着れば良いだけなのでは、と思った。しかしそれを俺が言うのも難だなと思ってやめておいた。

何に魅力を感じるかというのは、人それぞれだと思うんです。
みんな違ってみんな良いと思うんです。
「ここがたまらない！」と思う、多種多様のつぼ、ツボ、壺。
みんなちがってみんないい。
それで良い、それが良いと思うんです。
何が言いたいのかって？
僕は女の人の胸が大好きだということです。
わざわざ言う意味が分かりませんね。
なんでこんなことを言ったのか、自分でも分かりません。
春だからでしょうか。
春だからでしょうか。

続く。

（6）

「……なんで？」

箸と茶碗を持ったまま、手が止まる。

俺のこの問いは、小町が食事中に突然告げたことに対してのものだった。

テーブルの向かいに座る小町は、さっきからずっとにこにこと笑っている。肘をついて手に顎を乗せて、ご機嫌なことこの上ない。鼻唄とか歌い出しそう。

「……や、だから、なんで？」

もう一度同じ質問をぶつけると、小町は「はあ？」と言わんばかりに表情を曇らせた。瞳ってこんなに濁るものなんだ……。

「お兄ちゃんはもう決まった事柄に対して、その成立理由を尋ねるのが趣味なの？」

「……や、『なんで？』の中には『なんで俺抜きで話が決まったの？』って意味も含まれてるんだが」

「ん、それはお兄ちゃんが、休日は小町のために外出する以外は大抵フリーなのを知ってるからだよ」

「ねえねえ小町ちゃん、人権って知ってる？」

小町がくりんと首を傾げる。可愛いけど、今この場面でその仕草を見せるのはおかしくない？

「……小町は持ってて、お兄ちゃんは持ってないもの？」

目頭が熱くなった。なんでだろう。信じられるか？　日本にいてこの台詞が飛び出すんだぜ？

「うそうそ、冗談冗談。そんなこと思ってないよ。お兄ちゃんはちゃんとした人だよ。立派とは言えないけど。立派とは言えないけど。……立派、とは……言えないけど」

「なんで溜めながら3回言ったの？」

尚も不満を言い募る俺に、小町は肩を竦めてやれやれと首を振った。愛しの妹じゃなかったら一体どうしていたか分からない。

「いいからさ、お兄ちゃん」

文句を言うのは無しにして――と、まるで俺が悪いかのような言い方をする小町。
「諦めて……沙希さんたちとご飯を食べようよ」
「……だからなんで」
「次の土曜日の夕方４時に沙希さんのお家の前集合ね。それから買い出し」
「せめて現地集合で良いだろ」
「バカだなあお兄ちゃんは。こういうのは旅と一緒でその行程こそ楽しむべきなんだよ。バカだなあ。ほんと、バカだなあ」
「なんでまた３回言ったの？」
「お兄ちゃんが『うへぇ……』って表情を浮かべるのが割とツボでして」
「急にＳになるなよ。これから付き合いづらくなるわ」
こんなやりとりをしながらも。
「いいからいいから。楽しいよ？　きっと」
そう言って、小町がにゃはっと笑った。
結局俺は、小町のこの笑顔には勝てないようだ。

×　×　×

小町に新年度初日の話をした後、小町は本当に川崎大志、もとい毒虫に連絡をとっていた。もといの使い方が間違ってるって？　俺にとっては合ってるんです。
小町のプランは、俺・川崎・小町・大志・京華の５人で夕飯の買い出しをして、そのまま川崎の家で料理をして夕食会をしようというものだった。京華はまだ小さいので、自宅の方が何かと夜は都合が良いということで川崎の家にお願いしたらしい。俺が何か言う前に外堀を完全に埋めてやがる。
俺に対しては小町が話したように、川崎に対しては大志がお願いしたらしい。京華は自分が言うのも難だが懐いてくれている節はあるので、問題無いだろう。小町も可愛がってくれるだろうし。
ちなみにだが、大志は総武高に合格していた。ほんとこれ、すぐ忘れて良い程度の知識ではあるけれど。しかし去年の夏休みに話した

ことはきちんと覚えていたようで、小町情報ではヤツは高校に入ったからと言って「可愛い彼女をゲットするっす！」などといった悲しい情熱は抱いてはいないようなので、それだけは良しとする。俺としては小町から離れてくれればそれで良いので、可愛い彼女をゲットしても何も問題は無いんだけど。

そんな話をした数日後、金曜日の夜。

「んぐ……そろそろ休憩するか」

部屋で勉強に一区切りをつけ、ぐっと伸びをする。凝り固まった肩を叩いて解すと、もうひと頑張りする前にコーヒーでも飲もうと思い、リビングに行くことにした。

リビングの扉を開けた所で、ポケットの中から篭った着信音が聞こえた。

「……んん？」

取り出して画面を見てみるが、知らない番号だった。うん、出ないでおこう。こういう得体の知れない電話は出ないに限る。

インスタントコーヒーの粉を入れ、こぽこぽとお湯を注ぐ。すると、また電話が鳴った。十中八九さっきと同じやつだろう。出ないでおく。きっと相当おとぼけな人が連続して間違い電話をかけているんだろう。時刻は21時。何者だろう。

コーヒーにミルクを注ぎ、スプーンでかき混ぜる。一口飲んで出来に満足した所で部屋に戻る。部屋に入ってドアを閉めた所で、再び着信音が響いた。ここまでくると少し怖いが……しょうがないので、電話に出ることにした。

「もしもし」

「……あ、あたしだけど」

……詐欺にしては下手すぎない？

「そういうの要らないんで。じゃ」

個人情報がどこから漏れたのか調べる必要があるな……面倒だな……と思いながら、画面から耳を離す。すると、慌てた声が聞こえてきた。

「ま、待って、あたし、川崎沙希！」

その声に、ふっと力が抜けた。
「……お前かよ。ちゃんと名乗れって。いきなりあたしって呼ばれて分かる程俺はお前を知らねぇぞ」
「う……ご、ごめん」
いつものちょっと怖い声音から一転して、しおらしく謝られた。去年の文化祭でも案外打たれ弱いのだろうかと感じたことを思い出した。ちょっとぞくぞくす……何でもない。
「それとな、それなりに遅い時間だと思うんだが。何か用事でもあったのか」
俺の声音に険があったのだろうか、川崎が「あ……う……」と小さく唸る。
「ご、ごめ……」
その声が震え出した。え、ちょ、まさか、ええ？
「や、違うって、別に怒ってないから、な？　な？　単純に気になったんだよ。それだけだから」
大慌てでフォローを入れた。
実際、川崎の性格上、こういった礼儀の面はしっかりするように思える。初めての電話を唐突に夜9時過ぎにするというのは、本人だって適していないと思う筈だ。
電話の向こうで、くすんと鼻を鳴らす音が聞こえた。どんな顔をしているのか、猛烈に見たくなってしまう。
「……最初は、6時過ぎに1回かけようとして、その後も何回もかけようとしたんだけど……その、は、恥ずかしくて……」
「……へ？」
「大志から明日のことを言われてからずっと、『一言で良いから、明日はよろしくくらい言っておいたら』って言われてたんだけど、その、学校で中々言えなくて……」
川崎の言葉に、身体の力がふにゃふにゃと抜けていく。席が隣同士なのに言えないってどんだけ気が弱いんだ……。
「それを大志に話したら、それじゃあ電話したらって言われて。それで電話番号を聞いたんだけど、いざかけようとしたら……緊張、し

ちゃって……」
　こうしている今も、川崎の声は僅かに震えている。よほど不慣れなようだ。電話が苦手なのか、異性との会話が苦手なのか、何が苦手なのかは分からないが。
　しかし、なんだ。
　こいつ、中々。
「……川崎。お前結構、可愛いとこあるな」
　何気なく言うと、ひゅっと息を吸う音が聞こえた。
「ば、バカじゃないの!?　そんなこと……っ」
　ぶつり。
「……あ……」
　電話を切られた。
　と思ったら、すぐかかってきた。3秒も経っていない。
「もしもし、どなたでしょうか。フルネームで言って頂かないとすぐに切ります」
「あんた……怒るよ……」
　こんな風に言われても、その声にいつもの凄みは無く、にやけてしまいそうになるほど可愛らしい。
　ふー、とため息を吐いた音が聞こえる。
「……その、さっきは急に切ってごめん。明日……よろしく」
「お、おう、よろしく」
　急に素直に言われて戸惑ってしまう。
「……」
「……」
「……切らないの？」
「……や、お前が切るのを待ってたんだけど……」
「……先に切ってよ」
「なんかやだ」
「あんた、子どもみたいだね」
　くすりと笑う声が聞こえて、急に心が温もりに包まれた。
「しゃあねぇな。『せーの』で切るぞ」

「はいはい。……せーの」
『……』
「……切らないの？」
「……お前こそ」
会話下手は、電話の切り方のタイミング一つとっても下手らしい。
このやりとりが存外楽しいからまた困ったものだ。
結局この後、３分程は「電話を切りそうで切らないゲーム」を続けていた。故意ではない。
やがて互いにおやすみを言うと、どちらからともなく電話を切った。
「……」
勉強を再開しようとしたけれど。
川崎の、春の川原のような優しい声音を思い出したら、どうにも集中出来ない。
結局その晩は、眠りに就くまで悶々と過ごした。

続く。

（7）

小町の提案により、俺・小町・川崎・毒虫（＝大志）・京華の５人で夕食の買い出し及びご飯会を行うことになった。こんな家族ぐるみの付き合いをするのって、普通幼馴染とかじゃないんだろうか。俺に幼馴染の設定ってねぇなぁ。あ、違うか。幼い頃に一緒の幼稚園や小学校に居たやつは沢山いる。けどその後誰とも継続的な関係を築いてないだけだった。幼馴染って言うか幼馴染まないだな。何言ってるんだろう俺。

俺の隣を楽し気に歩く小町はホットパンツを穿いていて、健康的な脚線美をこれでもかと言う程見せつけてくれている。ファッションとしては素敵この上無いが、まだ夜は冷え込む時期だから心配だ。それとこの生足に釣られて大志のような羽虫どもが寄ってこないかも心配だ。小町から見えない位置で誘蛾灯でも仕掛けようかしら。

「やー、楽しみだねー」

小町がうきうきとした様子で言う。

小町の言葉に、俺は一体何を楽しみにすれば良いだろうかと考える。

うーん。

あ、これだ。

「……そうだな、小町の料理を食べるのが楽しみだ」

「今日の計画がまるで意味を成してないよごみいちゃん……」

俺がせっかく考えた返答に対して、げんなりとした目をして小町が言う。全く以てその通りだから反論出来ない。

駅から歩きながらスマホの画面を見る。今日の朝になって、大志伝いで川崎からＬＩＮＥのメッセージが送られてきて強制的にお友達になっていた。連絡先が増えることに喜びを覚えない人種なので何とも言えなかったが、川崎とならさばさばしたメッセージくらいしか交わさないと思うのでまあ良しとする。

ティコン、という音がしてメッセージが届く。

『今どこ？』

シンプルすぎるよ川崎さん。
約束の時刻まではまだ時間がある。どれ、ちょっとユーモアを見せてやろうか。
指をすいすい動かしてメッセージを送る。
『私メリーさん。今あなたの家の前にいるの』
『え、もう着いたの？』
『ボケ殺しにも程があるだろ』
何か泣きそうになったんだけど。
『着いてない。駅から向かってる途中』
そもそも細かい場所を知らないのに。
『初めからそう言いなって』
ちくしょう……。
そのうち、川崎の笑いのツボを見付けて腹筋が攣るまで笑かしてやろうと思った。
『で、どこ』
『私メリーさん、今どこにいると思う？』
『知らない。で、どこ？』
『ねえ俺恥ずかしくて死にそうなんだけど』
冷静に受け流される哀しみというものを知りました。こんな哀しみ、知りたくなかった……。
そんな会話をしている内に、進行方向の先によく見るコンビニのチェーン店を見付けた。
『今セブンまで来てる。向かいに薬局がある所』
『そこまで来たなら大丈夫。そのまま真っ直ぐ行けば１００ｍくらいであたしん家。道路に出て待ってるから』
『わかった』
俺の最後の言葉に既読がつかない。どうやら即座にトーク画面を閉じたようだ。気の早いことだ。
小町が後ろ手に組んで、俺の隣に並んでにひひと笑う。こんな可愛い悪代官がいたら思わず子分になってしまいそうだ。
「沙希さんと順調に仲良くなってるねぇ」

「どこがだよ……」
顔を近付けてきた小町をしっしっと手で払うと、あざとく片頬を膨らませた。膨らんだ頬を人差し指でぷすりと刺すと「はぷっ」と可愛い声が漏れた。そしてすんごく睨まれた。思いの外恐い……。
小町から逃げるように顔を逸らすと、歩いている方向の延長線上に見覚えのある青みがかった黒髪が見えた。小町も気付いたようで、「およ?」と言っておでこの上に手をかざす。いけない、可愛すぎて血を吐きそうだ。
「沙希さーん!」
小町が満面の笑みで、手を振りながら川崎の下へ駆けていく。川崎は小町のコミュ力全開モードでの接近に大いに全力で慌てている。まだ遠いので声は聞こえないが、顔を引き攣らせて辺りにせわしなく視線を巡らせている。ご近所への印象を大事にしているんだろうか。
小町が川崎の目の前まで行きテンション高く話し始めてから、遅れること数十秒。のらりくらりと歩いていくと、川崎と小町が立っていたのはマンションの前だった。どうやら川崎はこのマンションに住んでいるらしい。二人を見ると、小町がにこにこ笑顔なのに対して川崎は疲れ切っていた。どう見ても小町が川崎の元気をドレインしてるようにしか見えない……。
「あんた……この妹どうにかしてよ」
川崎が疲弊しきった瞳で俺を見る。俺はうんうんと頷いて、にこやかに笑った。
「可愛いだろ。やらんぞ」
「別にいい……」
川崎が何気なく言った言葉に、小町は「何ですとー!?」とやたらオーバーな反応をしていた。何かこの子、いつもよりはしゃいでるなぁ……と思ったら、小町がとてとてと俺の下へ寄り、そっと耳打ちをしてきた。
「沙希さん、きっと緊張してるだろうから、初めにほぐそうと思ったんだけど……ちょっと失敗しちゃったみたい。ごめんね」
言うと、小町は口から舌をぺろりと出した。可愛すぎて二日分くら

いの記憶が一瞬全部飛んだ。危うく学校に行くところだったぜ……。
「何話してんの？」
「ああ、や、何でもない」
　川崎が俺たちのやりとりを訝し気に見ているのに気付き、どうこの場を取り繕おうかと考えていると……マンションの玄関から見覚えのある顔が出てきた。
「お兄さん、お久しぶりっす！」
「はーちゃんだー！」
「よお、京華。久しぶり。見ない間に大きくなったな」
「うん、おっきくなったー！」
「お兄さん、お久しぶりっす！」
「いいぞいいぞ。どんどんおっきくなれよ」
「うん、おっきくなるー！」
「お兄さん、お久しぶりっす！」
「黙れ貴様はどこの村人Ａだ。ていうか誰だ。大体今の時代、Ｓｉｒｉの方がよっぽど気の利いた対応を出来るぞ。ていうか誰だ。いい加減お前も現実を見ろ。あと誰だ」
「な、泣きそうっす……っ！」
　久しぶりなので加減が分からないままぼこぼこにしたら、大志が目に見えて挫けた。ウケる。
　……や、これは流石にやり過ぎたか……。
「あー、すまん。ちょっと言い過ぎ……ん？」
　肩にずしんと重みがかかり、何事かと振り向くと川崎が物凄い形相で俺を睨んでいた。死相が見えるぜ！　俺にな！
「……あんた、死にたいの？」
「ごごごごごめんなさい」
　俺の肩を握り砕かんばかりに力を込める川崎から何とか逃れつつ、全力で謝る。ちなみにこういうどもった言い方の亜種は「どどどど童貞ちゃうわ」な。俺は実際童貞だけど。
　小町は一連のやりとりを見ると、肩を竦めて「これだからごみいちゃんは……」と呟いた。腹が立つけど可愛い。苛立ちは全て大志に

ぶつけよう。俺ひどいな。
「……お姉ちゃん、どなた？」
あどけない声が聞こえて視線を下に向けると、京華が顎に人差し指を当てて首をくりんと傾げている。おっと、川崎と小町のハートが撃ち抜かれたようです。
「かかかか可愛い……っ！」
どもり方は兄妹で似るらしい。
小町は屈んで手を膝に添えると、京華に満面の笑みを向けた。素敵で柔らかい笑みに、俺と大志の頬が緩む。なんか腹立つから大志には後でビンタしておこう。
「比企谷小町だよ。よろしくね」
京華は小町の自己紹介を聞いて、ぽわんとした表情を浮かべる。
「こまち……ちーちゃん？　ちーちゃん！」
「そ、そこをチョイスするんだ……」
小町は京華のネーミングセンスに若干顔を引き攣らせたものの、「ま、いいか」とあっさり切り替えて京華に手を差し出した。京華は小さな両手で小町の手を包むと、「かわさきけーかっ！」と元気よく自己紹介してにぱっと笑った。川崎が悶え苦しんでるけど反応しないでおく。このシスコンめ……。
「そろそろ行くか」
これで挨拶を交わしていない初対面の組み合わせはもういないことを確認して、ちらりと川崎を見やる。
「ん、そうだね。大志、けーちゃん、行くよ」
川崎の言葉に、大志と京華が頷く。
「それじゃあ沙希さん。ここからは小町と頑張りましょうねー！」
「あ、ああ……」
「ん？　何だ、仕切ってくれるのか？」
小町の言葉にはてと首を傾げる。小町はくるりと振り返ると楽しそうに笑った。
「うん。この中で料理がまともに出来るのは小町と沙希さんだけだから、どこに行くかとかをざっくり話し合ってたんだ」

「お、おう、そうなのか」
お兄ちゃんに全く知らせてくれない、こういうドライな面も実は結構好きですよ。
「それではー？　レッツゴーショッピーング！」
小町が握り拳をぶんと振り上げると、川崎はどん引いて、大志は両拳を握って気合を入れ、京華は小町を見てきゃーきゃーはしゃいでいる。
何だか、だいぶ賑やかな道中になりそうだなぁ……なんて思いながら、俺は小町の後ろをのそのそとついて行った。

続く。

（８）

俺、小町、川崎、大志、京華の５人で夕飯の買い出しに向かう。京華もいるからということで、川崎家がいつも利用する近場のスーパーに行くことになった。

「ふっふふ～ん♪」

小町が楽しそうに鼻唄を歌っている。随分と上機嫌だ。大志が小町を見て頬を赤らめた気がしたので、ひどく冷たい目で睨んでおいた。次、俺の目の届くところで小町に色目を使ったら、「テストの時に必ず消しゴムを無くす」呪いをかけてやろうと思う。

メンバーが多いので、心持ち後ろを歩きながら他の４人の様子を見ておく。ちょこちょことせわしなく歩いている京華が少しずつ遅れていることに気付いたと同時に、つぶらな瞳とぱっちり目が合った。

「ほれ」

迷子にならないか心配だったので、京華の半歩前を歩きながら左手を伸ばす。

と、それと同時に。

「けーちゃん、ほら」

俺と反対側から、川崎が京華に対して右手を伸ばした。

『……』

川崎と目が合う。

傍から見たら笑えるんじゃないかと思うくらい気まずい。

固まった俺たちを京華は交互に見やると、にぱっと笑って二人の手を取った。い、いかん、これは恥ずかしくて死ぬやつや……。

これは小町に見られたら本気でまずい――と思って視線を前に向けると、さっきまで先頭を歩いていた小町がいない。綺麗さっぱりいなくなっている。はてさてどこに……と思っていると、すぐ後ろからごにょごにょと内緒話をするのが聞こえてきた。

「見て、大志君……今小町たちが見てるのが、未来予想図ってやつだよ……」

「え、何のことっすか？」

「ほらほら、お兄ちゃんと沙希さんが小さい子供と手を繋いでるんだよ？　他の人が見たらどんな風に映る？」
「え、そりゃあ、二人の子供……って、ああ！」
「……あんたたち、さっきから何言ってんの……？」
川崎が顔を真っ赤にして、鬼のような形相で小町と大志を睨んだ。二人とも川崎から高速で顔を逸らす。小町は目を泳がせながら口笛を吹き始めた。なんで大きな古時計なんだよ……謎すぎるだろそのチョイス……そして何で結構上手いんだ……。
「あー、川崎が繋いでおけば大丈夫だな」
早めにこの状況を脱しないと羞恥心で討ち死にしてしまうと思い、京華からするりと手を離す。
「え、やだ。はーちゃんとつなぎたいー」
すかさず手を握られた。おっと、逃げ場が無いぞ？
「あ、じゃ、じゃあ、あたしが……」
今度は川崎が手を離す。
「やだ、さーちゃんともつなぎたいー」
すかさず握られてやんの。くすくす。
「あんた……」
鬼のような形相ａｇａｉｎ。超怖い。
しかしどうしたものか……。京華が手を繋ぎたがっているとあっては、このままでは打つ手がない。
頬をぽりぽりと掻いていると、後ろから何やらシャッター音が聞こえた。しかも記者会見ばりにカシャカシャ鳴りまくってる。
「ふへへへ……ええアングルやでぇ……家宝にしたるでぇ……」
「……」
何か変なやつがいる。
俺の妹だった。
「大志君！　大志君は前に回り込んで、正面から３人の写真を撮って！」
「え、ええ!?　む、無理っすよ！　絶対怒られるっていうか殴られるっす！」

「大丈夫、大丈夫だから！　……大丈夫だから！」
「なんで3回も言ったんすか!?　あと何が大丈夫なんすか!?」
「あんたたち……」
『すみません黙ります』
　こんな他愛も無いやりとりをしている間中、京華はきゃっきゃと笑っていた。おうふ、修羅場を楽しめるとは末恐ろしい子ですこと……。
「あ、ここ。いつもあたしたちが来てる店」
　小さな手をしっかり握って歩いていると、川崎が足を止めて前方を指差した。どうやら到着したようだ。

×　×　×

　俺たちが訪れたスーパーは、大きすぎず小さすぎず、それなりにこの町に馴染んでいるようなスーパーだった。本屋で例えるとブックオフくらいの馴染み具合。何で本屋で例えたのかは分からない。
　小さい頃こういうスーパーに家族で来て、「なんか好きなもの持ってきてごらん。買ってあげるから」と言われて意気揚々と飛び出したら見事に迷子になり、当時の小学校のクラス担任の女の先生にたまたま出くわして、安心するあまり「お母さん！」と叫んだのは良い思い出だ。良い思い出という名のトラウマだ。ついでに母がその場面を目撃してしまい、そこからしばらく「ほ～れ、お母さんだよ～？　実のお母さんだよ～？」とイジられまくったのは完全なるトラウマだ。
　京華は売り場を興味深げに見回している。
「けーちゃんは何が食べたい？」
　川崎が柔らかな声音で尋ねる。ほんとこいつ、家族にはメロメロだな。
　京華がぽけっとした顔で「んー」と唸った後、目をきらりと輝かせた。
「うなぎ」
「そ、そっか……」
　川崎が気まずそうに目を逸らす。そうかぁ……まだうなぎブームは去っていなかったかぁ……。

「今日は小町と沙希さんで家庭的な料理を作るから、うなぎはまた今度ねー」
小町が京華の頭をぽんぽんと撫でる。その表情はとても柔らかくて、思わず見入ってしまう。ああ、妹って最高だ……。川崎が京華にメロメロになるのもしょうがないかもしれない。え？　大志はどうなのかって？　大志って誰だっけ？
この話はこれで終わりかと思ったが、京華は小町の言葉を聞いて何やら思案顔。ううん、なんかいやな予感がする……。
「ちーちゃん……家庭的な料理って？」
ちーちゃんと呼ばれて、小町が一瞬のタイムラグを挟んで「あ、小町のことだったっけ……」と反応する。全然ぴんと来ないもんね、その呼び方……。
「家庭的な料理っていうのはね、家族で毎日食べてるようなもののことだよ。サイゼとか行ったことある？」「うん」「そっか、サイゼで食べるようなものは家庭的なのとはまた別なんだよ」
小町の丁寧な説明に、京華は腕を組んでむむむ……と考え込む。考える仕草がいちいちとてつもなく可愛い。
京華はそのまましばらく唸っていたが（その間俺たち４人は考え込む京華の写真を撮りまくっていた。可愛すぎて。ちなみに川崎だけ動画撮影をしていた）、やがて何かの結論に至ったのか、向日葵のような笑みを浮かべた。
「じゃあ、はーちゃんとちーちゃんもかぞく！」
『え……』
京華の導き出した解に、一同が唖然とする。川崎を見ると、耳まで真っ赤にして口をぱくぱくさせていた。エサを上げたら金魚みたいに食べそうだ。
誰もが言葉を失う中、小町が京華と同じようににっこりと笑った。
「そうだねー。はーちゃんもちーちゃんも家族だねー。これから８年以内にはそうなる可能性が濃厚だよー」
「おい待て小町妙に生々しい数字を出すな」
社会人になる前後くらいから付き合い始めた人が結婚しそうなり

アルな年齢じゃねぇか。
川崎を見る。小町の言葉により口のぱくぱくが悪化し、「……ぱっ、ぱっ、ぱっ……」と実際に音まで出ている。何この子超面白い……。
こんな話をしながら、のらりくらりとスーパーの中を巡る。京華が何にでも興味を示すので、普段なら面白味など感じることのない買い物が不思議ととても楽しくなった。
「……」
しかし、家庭料理か。
川崎、家庭料理……何か前にそんなくだりがあったような……。
あ、そうだ。
川崎、バレンタインイベントの前に雪ノ下に得意料理を聞かれた時、里芋のにっころがしって答えてたっけ。
あの時は地味だなんて思ったけど、今日のご飯会にはぴったりじゃなかろうか。良いじゃん、里芋のにっころがし。
川崎が作る、里芋のにっころがし。
……川崎が、里芋のにっころがし。
……川崎が、にっころがし。
……。
「……なあ、にっころが……っ」
ちょっと眠かったからだろうか。
あろうことか、川崎を「にっころがし」と言いかけた。
慌てて言葉を止めたし、ここだけ聞いても何が何やら分からないだろう。冷や汗をかきつつもふーと汗を拭っていると、川崎が怪訝な目をこちらに向けた。
「……ねえ、あんた今……あたしのこと、にっころがしって言いかけたでしょ……？」
バレた。
寿命が一気に縮む。
「……すまん、前言ってたのを思い出してな。今日作るならすげぇ相応しいだろうなーなんてぼんやり考えてたら、つい……。すまん」
思っていたことを口にすると、川崎は少し驚いたように目をぱちく

りさせ、ふいと顔を逸らした。
「……ばかじゃないの。いいよもう。で、なに、作って欲しいわけ？」
「え？」
「え？　じゃなくて。だから、その、作ってほしいわけ？　……さ、里芋のにっころがし」
「……」
顔を逸らしながら聞いてくる川崎が、やたらと可愛くて。
内心微笑みながら、
「ああ、頼む」
と言った。
「ったく……しょうがないから作ってあげる」
川崎は顔を逸らしたまま了承してくれたが、耳まで赤くなっていた。
夕方を前にして、俺たちの周りには緩やかな時間が流れていた。
続く。

（9）

比企谷家と川崎家の子供たちが、スーパーの中をのんびり歩く。この店の規模はそんなに大きくないが通路が広く、俺と川崎は京華と手を繋いだまま歩いていた。邪魔になるだろうと思ったが、まだ夕方のピークの手前だからかあまり客がおらず、その上向かいから人が来ても「あらあらまあまあ……うふふふ、どうぞどうぞ」と眩し過ぎる笑顔で道を譲ってくれるからやめるにやめられない。しかも歩を進めるごとに周囲の生温い視線が増えていく。なんで？　なんで皆赤の他人にそんな興味津々なの？

小町はカートを押して、せわしなく両サイドに視線を向けている。大志がその隣を歩いていて、やたらそわそわしていて鬱陶しい。折を見て鎖骨にチョップしようと思う。あ、こっち見た。俺の殺気が漏れたのか、物凄い怯えた顔をして真正面を向いた。なんかごめんね……。反省はしてないし、後悔もしてないけど。

「うーんと、これとこれと、後は……あ、キャベツも要るんだった。お兄ちゃん、そこのキャベツ取って」

「ん、これか」

「そうそう」

俺の前を歩いていた小町が、ちょうど俺が通りがかったキャベツの売り場を指差した。

「えーと、じゃあこれで良いか」

言いながらひょいと手前の一玉を手に取ると、

「や、お兄ちゃん、それよりもっと……」「こっちの方が良いでしょ」

小町の声に川崎がかぶせて、俺が取ったものの少し奥にあったキャベツを手に取った。京華と手を繋いだまま、いつの間にか回り込んでいたようだ。私服でも胸元が緩い為、豊かな谷間がちらりと見えてしまった。いけない、バレたら殺される。下着も見えた気がするけど言わないでおこう。

川崎は自分が手に取ったキャベツと俺の持っているキャベツ、そして他のキャベツを見比べる。

「……うん、これが一番鮮度が良い。これくらいの方が料理のし甲斐があるから」
川崎の言葉に、小町は目を輝かせて「さ、流石やでぇ……っ！」と目を輝かせている。喋ってはいない。目で言っている。
川崎の言葉を聞いて、改めてキャベツの群れに視線を巡らせる。
「……あー、たしかに。ってかすげぇなお前、一瞬で一番良いのを選んだのか。女子力ってか……嫁度がたけぇな」
俺が何気なく言った言葉で、川崎の顔が見る間に真っ赤に染まった。
「……っ!? な、んな、なな、何言ってんだあんたは!? 嫁!? はぁ、嫁!? あ、あたしが、その、なんで……よよ、嫁、嫁って……っ」
「落ち着け落ち着けいてっ、なんでそんないてっ、テンぱっていてっ」
川崎が高速で首を振っている為に、青みがかったロングの黒髪が物凄い速度で俺の頬に往復ビンタをかましてくる。京華は俺がいたぶられている姿を見て、ほけーっとした顔をしている。京華よ、これが大人の痴態ってやつだよ……。
俺と川崎のやりとりを見ていた小町が、目を細めてにやりと笑った。
「うわぁ……お兄ちゃん、たらしだ、捻デレだ、ジゴロだ……」
「最初と最後はマジでだめだろそれ」
俺にそんな高度なコミュニケーションスキルはねぇよ……とジト目を小町に送っていると、大志が俺を見て目を輝かせた。
「お兄さん、たらしなんすね！ ジゴロなんすね！ これからお兄さんのことをジゴロ―兄さんと呼ぶっす！」
「黙れあらぬ角度で投げ飛ばして重傷を負わせるぞ」
「柔道技っすか!?」
大志が調子に乗って俺をイジり始めたら、本当に容赦なく投げる気がする。素人が投げるのが一番危険だからな、良い子は真似しないように。被害者は大志だけで十分だ。
ふと、もう落ち着いたのだろうかと思い川崎の様子を見てみる。
「あ、ああ、あんた、あたし、嫁……っ」

外国の方？
片言どころじゃないぞ。
小町は川崎が未だに落ち着かない所を見て、きゅぴーんと目を光らせた。ヤマピカリャー。
「そうですよねー、沙希さん嫁度がとっても高いですもんねー。それにお兄ちゃんのことを『あんた』って呼ぶのもなんだか奥さんっぽくて素敵ですよねー」
「っ!?　は、ちょ、な、何言って、んだ、この妹……何、を……っ」
恥ずかしさのあまりまともに喋れなくなった川崎、と言うよりは。
ちょっとだけ言葉を覚えた林檎、と言った方が近いかもしれない。真っ赤っ赤な何かが懸命に喋ってます。
小町は川崎の言葉に、はてと首を傾げた。
「妹……いもうと……あ、義妹ですね☆」
「は、はぁ!?　違う、妹！」
「義妹？」
「い、も、う、と！」
「（義理の）い、も、う、と？」
「……もう、いい……」
おうふ……川崎が折れた……。うちの妹がごめんなさい。でも可愛いから許して。
このやりとりを終えると、川崎はしばらくの間耳まで真っ赤にして俯いていた。京華が「さーちゃん、なんであかいのー？」と聞いてきたので、面白おかしく説明してやろうと思ったら信じられないくらい恐ろしい形相で睨まれたので止めておいた。すごいよ川崎さん、視線だけで人の心臓を止めようとしたのかい？
×　×　×
買い物を終え、帰り道。
俺と川崎で買い物袋を持つと、後ろから小町が俺・京華・川崎の３ショットをめっちゃ撮っていた。何で連写にしたんだお前……。
「お兄さん、何かこの構図がどんどん板についてきてるっす！　姉ちゃんと手を繋いでみてはどうっすか？」

俺も川崎も何も言わないことで勢いづいたのか、大志がとっても鬱陶しいことを言い出した。
「おいこら、調子乗んなよ大志。っていうか何だお前。『っす』『っす』『っす』って。破擦音がうるさいっつの」
「うぐ……っ、く、癖なんでそこはなんとか……っ」
「いいや許さん。罰としてお前の『っす』の発音を『ｓｕ』じゃなくて『ｔｈ』にしろ」
「は、え、ええ？」
「いいから」
「……わ、わかった……っｔｈ」
やべえ。
笑って死にそうだ。
突然混ざってきたローマ字の異質さよ。
「な、お兄さん、そんなに笑わないでほしいっｔｈ！　ていうか姉ちゃんまで!?　比企谷さんもそんなに笑わないでくださいっｔｈ！」
「やめろ……俺を殺す気か……っ」
「お兄さんが言い出したんっｔｈよ!?」
くっそ……死ぬ……。英語の発音得意なキャラなのかよ……無駄にｔｈの発音がうめぇよ……死ぬ……。
川崎を見ると、顔を背けてぷるぷるしてる。ツボだったらしい。小町は腹を抱えて座り込んでしまった。腹痛で震えてるようにも見えるが、「ぷっ……くく……っ、無駄に発音上手い……」という声が漏れてきてるので大丈夫だろう。俺と同じ感想なのね、妹よ……。
「もう……俺はどうしたらいいんすか……」
「ちゃんと義務を果たせよ」
「これ義務だったんっｔｈか!?」
「やめろ、死ぬ……割れる……っ」
「何が!?　何が割れるんｔｈか!?　教えてくださいっｔｈ！」
大志が言葉を発する度に、俺と小町と川崎が瀕死の重傷を負う。京華は大志の面白さは分かっていないが、悶絶する３人を見てけらけらと笑っていた。

「た、大志……あんた、バカやってんじゃないよ……っ」
「お兄さんがやれって言ったんだって！　ねえ、お兄さん!?　お兄さんが言ったんっｔｈよね!?」
「た、大志……もうあたし、限界……」
「何で!?　何で!?」
「あ」
「？　どうしたんｔｈか？　お兄さん」
「腹……攣った……っ」
『わーっ!!』
この後、ぷち騒ぎになった。そうは言っても背中を反らすようにして腹を伸ばしていたら割とすぐ治ったんだけど。
そうか……大志にもこんな道があったのか……。これがあればきっとこいつも学校で人気者に「お兄さん、どうしたんｔｈか？」腹がやばい腹がやばい腹がやばい……！
ひどいやりとりをしている内に、川崎家に着いた。
明日は筋肉痛だな……。

続く。

（１０）

「ほら、けーちゃん、大志、手洗いうがいしてきな」
『はーい』
　家の中に入るなり、川崎が呼び掛けた。その手慣れた雰囲気からして、いつもこのやりとりをしているのだろう。とてとてと洗面所に駆けていく２人の背中を見て、ふと頬が緩んだ。
　川崎が首をこちらに向け、俺と小町を交互に見やった。何だか口をもにゅもにゅさせている。
「……あんたたちも、手洗いうがいしてきな」
「お、おう、そうだな」
　頬を朱に染めて顔を逸らして、流し目を送るようにこちらを見てくる様が何とも色っぽくて。思わずどもりながら返事をすると、小町がきゅぴーんと目を光らせた。最近大活躍ですね小町さん。
「お？　お？　おお？　沙希さん、それはあれですか？『あんたたちはもう家族同然なんだから、家に帰ったらちゃんと手洗いうがいしな』ってことですか？」
「は、はぁ!?　何言ってんだこの妹！　いい加減にしろって！」
「小町は全部善意で言ってるっｔｈ！　悪気なんてかけらもないっｔｈ！」
「ぶっ!?　くっ、くく……っ、……っ」
「待って待ってねえ何でこの流れで俺を睨んだの」
　川崎が腕で口元を覆いながら、射殺さんばかりの素敵な視線を送ってくる。心臓が貫かれそうだ。
　そんなやりとりを挟み、結局俺も小町も手洗いうがいをした。実際人の家に来て手洗いうがいをするという経験は中々稀有だと思う。俺は人の家に遊びに行ったことなんて無いから分からんけど。そういうことはあんまりないって小町が前言ってた。この話をしただけで涙が出そうになるのは何でだろう。
　川崎は大志と顔を合わせた瞬間噴き出しそうになり、大志が目を見開いて驚いていた。小町はそのやりとりを見ても知らんぷりで、何も

言わなかった。この子極悪やでぇ……。

×　×　×

リビングに入ると、テレビの前にテーブルが置かれ、２つのソファがＬ字に置かれていた。きちんと掃除が行き届いていて、所々に可愛らしいぬいぐるみが置かれている。居るだけで家族愛に触れて幸せになれるような空間だ。

「それじゃお兄ちゃん、小町は沙希さんとお料理するから。そこで大人しく待っててー」

「ん、分かった。お前を凝視してれば良いんだな？」

「シスコン……」

「うるせぇブラコン……」

川崎の場合、ブラコンに加えてシスコンでもあるからより重症だ。ん、シスコンということは仲間……？　もしかしたら、俺は川崎と仲良く出来るのかもしれない。普段はめっちゃ恐いけど。

「……大志とけーちゃんの相手してやって」

「ん、おお」

川崎がもじもじしながらお願いしてきた。どうにもこの子の優しい面を見ると気持ちがふわふわする。ギャップって大事なんだね。普段超恐いもんね。俺どんだけ恐れてんだよ。

「……今、なんか失礼なこと考えてた？」

「何でもないっｔｈ」

「んぐっ!?　……っ」

「恐い恐いその目マジで恐いから」

なんていうやりとりをしていると、大志が複雑そうな顔でこちらを見ていた。

「お兄さん……真似されるとやりづらいっす……」

「え、なに、もう自分の持ちネタとしての自覚が芽生えたのか」

「そ、そんなこと……ない……っｔｈ」

小町が膝から崩れ落ちた。

川崎が神速で顔を逸らした。

俺は「んぐふ……っ」という奇妙な音を漏らした。

京華はぽかんとしている。可愛い。
取り敢えず撫でた。
愛い愛い。
「……大志、くだらないこと言ってんじゃないよ」
「あんまりだ……」
大志が世の中に絶望した表情を浮かべた。すごいな、高1でその顔が出来るのか。
――ここで、ふと思ったことがある。
しかしこの思いは、今この場で突発的に浮かんだものではない。
以前から大志と川崎のやりとりを見ていて、何度も感じたことのある思いだ。
それは、大志とどれほど仲良くなろうとも、逆にどれだけ関係性が薄らいでも、決して解けない、呪いのようなわだかまり。
俺は、出来ることなら、今すぐこの場でこのわだかまりを解き放ちたかった。
だから、俺は。
勇気を出して、大志の心の内に踏み込む。
例えそれが、どれだけ取り返しのつかない事態になろうとも。
「……なあ、大志」
「え、あ、はい。……どうしたんすか？　お兄さん。そんな真剣な顔して……？」
大志の表情から不安が滲み出る。無理もない。俺の顔は今、ひどく強張っているだろうから。
「前々から思ってたんだが、お前……」
「え、な、何すか？　何なんすか……？」
俺の雰囲気の変化を小町と川崎も感じ取り、表情を強張らせた。
目を閉じて、すぅっと静かに息を吸う。
目を開いて、大志を見つめた。
「……お前、敬語じゃないとキャラ崩れるよな」

「……へ？」
大志の口から、気の抜けた声が漏れ出た。
気にせず話を続ける。
「だから、お前って川崎や京華にタメ口だろ？　そうすると、姉弟・兄妹間の会話の時にただでさえキャラ付けの甘いお前の存在感が更に希薄になるんだ」
「な……っ」
大志がのけぞって衝撃を受けている。ひと昔前のアニメなら背景で雷が落ちているところだ。
「薄いって……どれくらいっすか？」
「ぶっちゃけキャラの名前も要らないくらいだな。モブだモブ。『川崎の弟。ただし名前はない』みたいな感じだな」
「そんなに……」
大志が両手で顔を覆って俯く。かつて赤マルジャンプでムヒョとロージーの読み切りが掲載された時のめっちゃ怖い霊を思い出した。ピンポイント過ぎるので分かった人は挙手してほしい。
水場に好んで現れるのかしら……と大志を見て妄想を膨らませていると、小町がたははと苦笑いを浮かべた。
「あー……ちょっと分かるかも」
「比企谷さんまで!?　何でっすか!?」
「あ、今のは大志君だね」
「姉ちゃん、俺タメ口だとキャラ無いの？」
「おい、お前誰だ」
「川崎大志っすよ！」
大志は今にも泣き出しそうだ。
俺は大志に歩み寄ると、肩に手を置いてにこやかな――表情筋がひくひくしている気持ち悪い――笑顔を浮かべた。
「解決方法はあるぞ」
「え……ほ、本当っすか？」
ああ、あるとも――と朗らかに答える。
「いっそ相手を問わず、話す人全員に対して敬語を使えば良い」

「家族にもっすか!?」
「そうそう。敬え。崇め。跪いて靴を舐めろ」
「お兄さん、今何でも言っていいと思ってないっすか!?」
「思ってない思ってない。騙されたと思って、まずは川崎に敬語を使ってみろよ」
「うう……ね、姉さん、夕飯、楽しみにしてるっす」
「そうそう、その調子だ。次は京華に敬語だな」
「え、ええ!?　……よーし、一緒に遊んであげるっすからねー」
「ぶっ、くくっ……」
「笑ってるじゃないっすか！」
「何のことだ？　じゃあ次は小町を崇めて、最後は俺に跪け」
「うわーん！　お兄さんがひどすぎるー！」
「バカ言うな、これも親交を深めるため……の……っ」
背後に、おぞましい気配を感じた。
強烈な圧だ。ネフェルピトーだろうか。俺結構好きなんだよな。
や、そうじゃなくて。
「……」
そっと振り返る。
川崎が、笑顔だった。
首を若干傾げて、とても愛らしい。
しかし片頬が不自然に引き攣っている。
よく見れば目が笑ってない。
「……あんた、いい加減にしなよ……」
「ごめんなさい」
マジで謝った。
この世に生まれて１８年弱。
一番、マジで謝った。
「お兄ちゃん、茶番は終わったー？」
「お、おう……」
妹が一番ひどかった。途中で一回ノったたくせに……。
「それじゃ、改めまして。沙希さん、よろしくお願いしまーす！」

「あ、ああ。よ、よろしく……」
川崎の表情が引き攣っているのは、緊張のためだろうか。一緒に料理をして、少しでも仲良くなってくれると良いが。
ソファに腰を下ろす。ふかふかした感触の中に身体を沈めてひと息つくと、台所に向かう小町と川崎の背中を見つめた。
……うーん、何だかむずがゆい……。

続く。

（11）

「それでは調理を始める前に、エプロンを着ましょう！」
キッチンの前で小町がぽんと手を叩いて、にゃはっと笑った。写真を撮ろう。
「あ、あたしはいつもしてるけど……あんたは持って来てんの？」
「それはもうばっちりと！」
俺がスマホを取り出そうとポケットをもぞもぞやっていると、小町がどこから取り出したのか、するりとエプロンを取り出した。いつも家で見ているエプロンだ。
「さあさあ、エプロン姿でお兄ちゃんをたぶらかしてくださいなー！」
「んなっ!? は、はぁ!? あ、あんた何言って……っ！」
「もー、沙希さんたら。義妹って呼んで下さいよー」
「呼ぶ訳ないだろ!?」
川崎が大いに慌てている。もし仮にそういう関係になったとしても、「おーい、義妹―」なんて呼ぶ機会はまず無いと思うんだけど……。
川崎は小町に散々弄ばれた後（語弊しかない）、ぶつくさと愚痴を言いながらエプロンを取り出した。俺はソファの背もたれにだらりと身体を預けながら、ぼんやりとその光景を見ていた。
「……おお」
川崎がエプロンを付けて、髪をさらりとかき上げた時――思わず、感嘆のため息が漏れた。
川崎のエプロンは、柔和な暖色だった。特にこれと言った特徴がある訳ではない。
エプロン自体がどうという話ではなく、エプロンを着た川崎沙希という一人の女性の姿が、至極魅力的だった。
普段から着慣れているであろう、馴染んだ姿。
外着でエプロンを着るというギャップ。
そして、微かに染めた頬。
更に、何気なく目につくのは……。
「……な、なに？　何か文句でもある？」

ついじっと見てしまっていたら、川崎が恥ずかしそうに身を捩らせた。
「ああ、や、すげぇ似合ってるなーって」
「な、え、は、……なに、言って……っ!?」
するりと口から出た言葉に、川崎が一瞬で茹だってしまった。まずい、また林檎が喋り始めた……。
「出たー！　お兄ちゃんの『普段はひねくれ感満載だけど、ここぞと言う時ほとんど無意識にマジ褒めして相手をコロッといかせるギャルゲーみたいな戦術――！』」
「衝撃的になげぇよ」
略し方も分かんねぇし。
「お、お兄さん！　やっぱりジゴロっす！　ジゴロ―兄さんっす！」
「黙れ消し炭にするぞ」
「あ、熱いのはいやっす……」
調子に乗る毒虫は速やかに威嚇した。次に調子に乗ったら誘蛾灯のごとくバチッと感電させてやる。
そう言えば、川崎はどうなったんだろう。
ちらりと見やる。
「……」
両手で顔を覆って蹲っていた。かごめかごめでもしてるのかしらん。
小町がしゃがんで川崎に顔を近付けると、むふふといやらしい笑みを浮かべて何か囁き始めた。
「どうですかー？　お兄ちゃん、家族として認識するとあんな褒め言葉がぽんぽん飛び出しますよー？　学校でのお兄ちゃんからは考えられないくらい自然と褒めてくれますよー？　小町だってたまにクラッと来るんですよー？　どうですかー？　今なら可愛い義妹とふてぶてしい猫が付いてきますよー？」
すげぇ怪しい勧誘をしてる。
「……あたし、猫アレルギー……」
「あ、そうでした……すいません」

マジトーンで悲しい話をしないで……。
「あ、じゃあ発想の転換をしましょう！　沙希さんがお兄ちゃんの猫になるんです！　甘えまくって、お兄ちゃんに可愛い可愛いと連呼される！　どうですか⁉　どうです……ぴゃっ⁉」
川崎が小町の両頬を片手でぐわしと掴んだ。小町はぷるぷるしている。やだ可愛い……。
「……あんた、本気で何言ってんの？」
「ぴやぁぁぁ……っ」
小町が震えているが、川崎は川崎で顔を真っ赤にしてぷるぷるしている。何この地獄絵図……。
ったく……と呆れた声を上げて、川崎が立ち上がる。こちらに背を向けると、その後ろ姿に思わず見惚れた。
「……」
何気に目につく……スタイルの良さが、ね。特に今は結構ぱつぱつの7分袖ジーンズで、ね。何て言うかこう、例えるなら……何て言うか……。
「姉ちゃんって、何気に身体付きエロいんすよねー。肉感的って言うんすかね？」
俺が如何に婉曲的に言おうか考えていた部分を、大志があっさりとそのまま言いやがったので。
「いたたたた⁉　何でっすか⁉　何でっすか⁉」
さっき川崎が小町にしたのと同じように、大志の両頬を片手でぐわしと掴んだ。川崎と俺の違いは殺意の有無だと思う。
「大志、比企谷……」
ほらもう、川崎がめっちゃ睨んでる……だから言わないでおいたのに……ん？
んん？
「……」
恐くて見られなかった川崎に、恐る恐るちらりと視線を送る。
頬を朱に染めて、お尻を両手で隠しながら振り向いていた。婀娜っぽい流し目にごくりと息を呑む。

「大志くん……大丈夫だよ。これからもずっと、小町は友達だからね……」
温度の欠けた目で小町が言う。「お前との関係はずっと友達だからな」と改めて突き付けるえげつなさよ。ちなみに俺に対して、小町は一瞥して「これだからごみいちゃんは……」と言っただけだった。つらい。
大志を見る。
小町の言葉が効いたのか、若干涙目だ。
「大志、辛いか？」
「辛いっす……」
「女子にモテたいか？」
「モテたいっす……」
「ところで大志、異世界転生チーレム無双って知ってるか？」
「？　何すかそれ？」
「要は、一回死んで生まれ変わって、女の子に囲まれて最強の俺うはうはーっていうジャンルだ」
ざっくりすぎる説明だった。
「すごいジャンルっすね……」
ちなみにこの会話、大志の頬を掴んだままでやっていたりする。とてもシュールだ。
つまり……と、俺は大志ににこやかな笑み（自己評価）を浮かべる。
「モテたいなら、来世に賭けてみないかってことだ」
「何で俺をここで死なせようとしてるんすか!?」
「直接的な表現をあっさりしやがった罰だ。あと、これから生きていてもモテることが無いであろうお前を早めに来世に送ってあげようという俺の優しさだ」
「直接的な表現!?　ていうかお兄さんは俺に何の恨みがあるんすか!?」
大志は川崎に目配せをして助けを求めようとするが、川崎は涙目で俺と大志を睨むばかりだ。ちょっとぞくぞくする。この気持ちは何だろう。

さて、この地獄みたいな状況をどうしたものか――と思っていると。

何も状況を把握していない京華が、ぽけっとした顔でとてとてと川崎の下へ歩いて行き、川崎の肩をぺちぺちと叩いた。

「なに？　けーちゃん」

ふっと顔を綻ばせた川崎が語り掛けると、京華は俯いて、

「さーちゃん、おなかすいた……」

眉根をくにっと寄せて、上目遣いで呟いた。

全員崩れ落ちた。

続く。

（１２）

京華の無差別破壊（語弊しかない）により一度は全員が崩れ落ちたが、数分経って何とか持ち直した。

「じゃ、じゃあ、沙希さん……お料理、しま、しょう……っ、」

「あ、ああ……」

小町と川崎の足ががくがくと震えている。エプロンを着たバンビが２頭……。

２人が調理に取り掛かると、俺と大志と京華は途端に暇になった。京華は大志の股座にぽすりと収まると、ぽへーっと宙空を見つめ始めた。何か見えるのかしら……。

「大志、俺は暇だ」

「何すかそのタチの悪い殿様みたいな態度……」

呆れたように言いながら、大志は京華のほっぺたを指でつっついている。ツッコミが若干テクニカルで腹が立った。京華は何が楽しいのか分からないが、きゃっきゃとはしゃいでいる。うむ、これはこれで良いな……絵面的に大志が邪魔だけど……すげえ邪魔だけど……。

京華はしばらく大志にされるがまま（語弊しかない）になっていたが、やがて飽きたのか、頬をつつかれても目を細めるだけであまり反応を示さなくなった。大志がショックを受けている。ざまあ。

「はーちゃん……」

京華が俺を呼ぶと、ぽけっとした顔でじっと見つめてきた。

「ん、どうした」

幼い小町と接していた時と同じように優しく語り掛けると、京華以外の３人がぎょっとした。小町と川崎に至っては調理の手を止めて物凄い勢いで振り返った。失礼すぎない？

当の京華は俺の反応に気を良くしたのか、ソファを降りて大志の傍から離れると、とてとてと俺の方に寄って来た。くるりと身体の向きを変え、今度は俺の股座にすっぽりと収まる。やだぴったり……。

「と、取られたっす……やっぱりお兄さんはジゴロっす……」

「黙れ、これからの人生で受ける全てのテストで名前を書き忘れる呪

いをかけるぞ」
「そ、それかなりエグいっす……っ！」
学校の試験だけならまだしも、受験だの資格試験だのの時も書き忘れる。地獄だ。
「はーちゃん、はーちゃん」
まだ何をした訳でもないのに、京華が楽しそうにはしゃいでいる。明らかに大志と遊んでいる時よりもテンションが高い。大志が更に凹んでいる。可哀想だけど、まあ、何て言うか……ざまあ。
小町がくるりと振り返り、おたまを持ったまま目を細めて俺を見た。
「ロリいちゃん……」
「やめろ、ごみいちゃんの方がまだマシだ」
小町がくりんと首を傾げる。
「じゃあ……比企谷ペド幡？」
「すげえ気持ちわりい響きになったぞ」
語感が似てるのは……ベビメタヘドバン？　強引だった。しかもだいぶ。
気が付けば川崎も振り向いていて、白い目を向けている。小町は川崎をちらりと見て、むふふと笑った。
「お兄ちゃん、くれぐれも……手を出す相手は間違えないでね？」
小町の露骨な態度に、川崎の顔が一気に赤くなった。
「は、はあ!?　だからあんたは何言って……っ」
「はいはーい、そろそろ次に移りましょうかー」
「え、あ、うぅ……っ」
川崎が慌てた末に、情けない声を出して再びキッチンに向き直る。うーん、川崎の困った顔って結構そそるなあ……。
……。
……俺、何言ってるんだろう。
心を浄化すべく、京華のほっぺをむにむに。
むにむに。
むにに。

むにー。
京華はおうおうとオットセイみたいな妙な声を出している。ああ、癒し……。
「んむ？」
京華が顔を上げてこちらを向いたかと思うと、お返しと言わんばかりに俺の頬をつまんできた。面白い、ここからはむにり合いだ。何だむにり合いって。
むにむにむにむに。
むににむにに。
むにーむにー。
お互いオットセイみたいな声を出している。京華の声はすこぶる可愛いが、俺の声は我ながら誇らしいくらい気持ち悪い。
京華の両頬をつまむ。
「うにー」
目を細めて変な声を出した。お前はどこの青色サヴァンだ。アニメ化おめでとうございます。
幼子との癒し度２００％のやりとりをしていると、かしゃりと言う音が聞こえた。顔を上げると大志がスマホで俺と京華を撮っていた。
「事務所を通してください。それと死んでください」
「後半要るんすか!?」
「今夜は月が綺麗ですが、とりあえず死ね」
「あ、それ知ってます。面白いんすかね？」
「今度買ってみるつもりだが……あ、そうそう、死ぬか？」
「そんなついでみたいなノリで恐いこと言わないでほしいっすよ!?」
「話の本筋からそれちゃいけないだろう」
「本筋がそれなんすか？」
「あ、違ったっけ。何写真撮ってんだこら」
「ここに至るまで長かったっす……」
大志は撮った写真を眺めて頬を緩めた。
「これ、他の人に送っていいっすか？」
「そんなのを送られて誰が幸せになるんだ。ていうか普通にいやだ

ぞ。この場に居る人以外に送ったら亡き者にするからな」
「ええ……って、あれ？　姉ちゃんにも送って良いんすか？」
大志の視線が川崎に送られる。
「や、別に良いけど……要らねえだろ？」
確認のつもりで川崎を見ると、川崎とぱっちり目が合った。
高速で顔を逸らされた。
顔が真っ赤だったのは気のせいだろうか。
……なんでなのん？

×　×　×

まったりした時間は続く。
さびしさは鳴る。
間違えた。語感が良くてつい言ってしまった。ごめんなさい。どうでも良いけど「祇園精舎の鐘の声」ってつい言いたくなるよね。ならないね。
小町と川崎はどちらも料理慣れしている上に、親との共同作業などにも慣れているのだろうか、連携に淀みが無い。ソーマのサポートを見ているみたいだ。
ただ、聞こえてくる会話が所々おかしい。
「沙希さん、こっちの火はもう止めますね。あ、あと今それとなくお尻を振るとお兄ちゃんを誘惑出来ますよ」
「は、はあ!?　だから何言って……あ、火は止めて大丈夫。ありがと」
「真面目だ……沙希さん、すごく真面目だ……それでいて身体つきがエロい……」
「あんたね……」
「ぴやああ……」
小町が火を止めた途端に、川崎が小町のあごをぐわしと掴んだ。そのまま睨むかと思いきや、あごを掴んだ手でそのまま小町の頬をむにむにと触っている。どうやら柔らかさに驚いているらしい。仄かに笑みさえ浮かべている。あれ、怒りはどこへ？　そんなに気持ち良いのだろうか。
「小町のほっぺ、柔らかいよな」

何気なく口を挟むと、高速で手を離した。夢中になっていたことを時間差で自覚したらしい。
「はあああ……怖かった……けど沙希さんってアレですね、気を許すとどこまでも甘やかしてくれそうですね」
「え？　いや、何で急にそんなことを……」
「やー、だって、今さっきの沙希さんの表情、大志君や京華ちゃんと接してる時の表情に似てたなーって。何か今おねだりとかしたら何でも聞いてくれそうな雰囲気でしたもんで」
「あんたってやつは……」
「ぴやああ……」
はい、リピート。
「はあああ……怖かった……。ふう。……沙希さんのそういうとこ、お兄ちゃんと似てます。というかそっくりです」
「……どこが」
「お？　もう一度説明しますかー？　耐えられますかー？　きっと恥ずかしくなって死んじゃいますよー？　おおっとー！　今度はそう簡単に掴ませませんよ！　沙希さんの間合いは把握しましっ!?」
一歩踏み込んだ川崎に、今度は頭をがっしりと掴まれた僕の妹・小町ちゃん。
「ふおぉぉぉ……」
アイアンクローをくらっている小町が、何か変な声を上げている。
何だかなあ……と思っていると、頬を小さな手がつねってきた。
「はーちゃん、こっち見てくんなきゃだめー」
「はっはっは、わりいな。うりうり」
「うにー」
京華とじゃれていると、大志がスマホを構えながら切なげな表情を浮かべている。
「うぐ……なんかのけ者になってるような……寂しいっす……」
ひどい返しの言葉はいくつも浮かんだが、今は京華とじゃれあうのに忙しいので、大志を見てにやりと笑うだけにしておいた。ものすごいショックを受けていた。

最初はどうなることやらと思っていた集まりだけども。
思いの外、和やかに過ごせている。
ここには、緩い空気と時間が穏やかに流れていた。
――そう、思っていたのだけども。
――ごめん、特にそんな妙な急展開なんてないです。
続く。

（１３）

小町と川崎が料理に集中し出すと、俺と京華と……ええっと……あ、そうそう、大志が再び暇になった。京華は大志とじゃれ合っていた時と違い、飽きることなく俺と遊び続けている。ちなみに今はあっちむいてホイをかれこれ５分程やっている。ずっと連続で。まあまあストイックじゃないでしょうか。

「じゃんけんぽん」

俺が負ける。

「あっちむいてホイ。かったー！」

京華に負ける。

「お兄さん、弱いっすね……」

「うるせえ、お前なんか惚れた女子が皆『大志くん？　ああ、良い人だけどね……』って女友達と話すのをたまたま通りがかった時に聞いてしまえ」

「やめてー！　考えただけで死にそうっす……！」

大志が頭を抱える。ざまあ。

ちなみに京華との戦績としては、大体８割程俺が負けている。これにはちゃんとした理由がある。

あっちむいてホイをする。

この言葉を聞けば、「ああ、さっきまで京華が股座に座ってたけど、今はソファで横並びにでもなって顔を突き合わせて遊んでるのかな」と思うだろう。

しかし、実際は京華は俺の股座にすっぽり収まったままである。

あっちむいてホイをするということになって、京華を離そうとしたら「やっ」と一言で一蹴されてしまった。俺が「むっ……」と唸るのを、小町が微かに笑っていた気がするけどきっと気のせいだと思いたい。

そんな訳で、お互い同じ向きのままあっちむいてホイをする運びと相成った。

俺は京華の顔のすぐ前に手を出して、京華はそれをぽけっと見なが

ら自分の手を出す。俺が勝てばそのまま上下左右のどれかを指差すが、京華の場合は俺の顔の前に手を伸ばす。つまり、自分の手を真上に上げて、上下左右のどれかを指差すのだ。

この行動により何が起きるかと言うと、京華の人差し指がしょっちゅう俺の頬やら顎をどつくのだ。痛くはない。というか可愛い。どこを指差すのか考えあぐねて「うーん……こっち！」とルール無視の掛け声と共に左を差すと、俺の頬にぷにりと刺さる。抵抗して他の向きにすることは勿論出来るのだけど、可愛すぎてそんな抵抗は出来ない。今の所京華の意思に反して避けた時の「むぅ……」と眉を八の字にする表情よりも、俺に勝ってにこぱっと笑う表情の方が可愛いからひたすら負けてあげているのである。もし俺が勝った時の京華の表情を見たくなったら、それはもうみっともないくらい鬼となって勝ちまくる所存だ。

……。

「……」

……。

「お兄さん、どうしたんすか？」

「……いや、何でもない」

なんで俺、あっちむいてホイについてこんなに事細かに説明してるんだ……。

× × ×

「出来たー！」

小町の元気の良い声がリビングに響く。こちらでお腹を空かせて待っていた3人が振り向くと、小町と川崎がやり遂げたような爽やかな笑みを浮かべていた。

「ん、じゃあ並べるの手伝うわ」

言って、京華の脇に手を入れてひょいと持ち上げる。「ひゃー」とアトラクションにでも乗ったかのようにはしゃぐ京華が鬼のように可愛い。

「いや、早くして？　ごみいちゃん」

立ち上がった時の目的を忘れて京華を高い高いして遊んでいると、

小町がまあまあ冷ややかな声で言った。ご、ごめんなさい……。
鍋を運び、単品で既に皿に乗っているものはそのままテーブルに持っていく。運んでいる時妙に視線を感じたので、周りを見回したら川崎とばちっと視線が合った。川崎はすぐに顔を逸らしたが、頬を仄かに朱に染めていた。
「おお……」
テーブルに料理を並べ終えて、小町の隣、川崎の真向かいに座って改めて料理を並べると、思わず感嘆の声が漏れた。
ほうれん草のおひたし。
ねぎとかつお節を散らした豆腐。
なめこと豆腐のお味噌汁。
回鍋肉。
鶏の唐揚げ。
それと――里芋のにっころがし。
男2人がいるからなのか、回鍋肉と唐揚げはかなりの分量だった。あと、俺の前に置かれている里芋のにっころがしだけ明らかに量が多い。美味そうだけど、こんなに……？　と思ってちらりと正面に目をやると、川崎がぷいと顔を逸らした。
『頂きます』
5人で手を合わせる。
すっかり腹が減っていたこともあり、正直かなりテンションが上がっている。いきなり肉にがっつくとそればかり食べてしまいそうなので、まずは里芋のにっころがしを頂く。
「……あむっ」
口に入れると、何とも懐かしい味がする。みりんの柔らかな甘みと、里芋の優しい味わいが口腔を包み込む。懐かしさというのは、年齢がどれだけ若くても感じるものなのだと知った。日本人の遺伝子に刻まれているのかもしれない。
「ど、どう……？」
川崎が恐る恐る聞いてくる。じっくり噛んで呑み込むと、川崎と目を合わせた。

「ん、すげえ旨い。ありがとな」
「……っ、そ、そう、それなら、良かった……っ」
川崎は顔を真っ赤にして俯いた後、自分も箸を手に取った。どうやら俺が食べるのを見届けていたらしい。ううむ、恥ずかしい……。小町がぴゅーぴゅー口笛を鳴らして鬱陶しかったので、頭にぽすんとチョップをくれてやった。
ほうれん草のおひたし、豆腐、唐揚げ、なめこの味噌汁、回鍋肉と次々に口に運んでいく。変に気取らない家庭的な味わいに箸が止まらず、気付けば無言で食べまくっていた。
「さーちゃん、これなんていうの？」
京華が川崎の袖を引き、回鍋肉を指差す。川崎の頬が物凄く緩んだ。
「これはね、ホイコーローって言うんだよ」
「コイホーロー？」
恋放浪？　やだ、厨二チック……。
「ううん、ホイコーロー」
「ホイローコー！」
京華の中で最終判断がついたらしい。言い間違えたまま目を輝かせて、川崎が「う、うん、そうだね……」と諦めた顔で苦笑いを浮かべている。
「……後で訂正しとけよ。数年以内に訂正しとけば、京華も恥かかないで済むだろうから」
「ああ、そうだね……」
日常会話で回鍋肉なんて言葉はそうそう使わないだろう。小学校低学年くらいまでにきちんと訂正しておけば、後はどうとでもなるはずだ。
京華と川崎のやりとりにほっこりした所で、再び料理を堪能する。あっと言う間にご飯がなくなり、しまった……と思っていると、目の前にすっと手が伸びた。
「おかわりしたいんでしょ？」
「あ、ああ、わりい、頼む」

「ん」
川崎が柔らかな笑みを浮かべて、俺の茶碗を受け取って炊飯器を開ける。その様をぽけっと見ていると、小町がにっしっしと笑った。
「お兄ちゃん。お兄ちゃんの中で、沙希さんのポイントががんがん上がってるでしょ？　でしょ？」
「うるせえ……」
頭をぐりぐりと撫でる。「にゃー！」と可愛い声が上がった。また今度やってみよう。
結局この後もおかわりをして、合計3杯をぺろりとたいらげた。
食べ終わってみんなでごちそう様をすると、小町が脇腹を小突いてきた。
「お兄ちゃん、今日の料理、実は全部沙希さんが作ったんだよ？」
「え、マジで？　ほんとに？」
「そうそう。最初は小町も作ろうとしてたんだけど、ちょっと方針を変えて沙希さんのサポートに回ったの。って言っても小町のサポートが要らないくらい、沙希さんの料理の腕前はすごかったけどね」
ほえーと間抜けな声を漏らしながら川崎の背中を見つめると、川崎がちらりと振り向いた。
「……あんたの手伝いがあったから、いつもより捗ったよ」
「……っ！　さ、沙希さん……っ！」
「や、やめろ、今皿持ってるから近付くな……っ！」
「おおっと～？　その言い方からすると皿を置きさえすれば小町が抱き付いても良いということですかな～？　ほっほっほぴやっ!?」
川崎がシンクに皿を置いて、小町の顎をがしりと掴んだ。
「あんたね……」
「ぴやああ……」
懲りねえなあ……と思いながら2人のやりとりを眺めていると、川崎が小町から手を離し、こちらに視線を向けた。頬を赤らめていて妙に色っぽい流し目になっていて、心臓がどきりと跳ねる。
「……という訳なんだけど、その、どうだった……？」
「……あー、その、なんだ、毎日食いたいくらい旨かったぞ。ごちそう

様」
「……ま、毎日……っ！」
川崎が首まで真っ赤になり、両手で顔を覆った。
……やってしまった。
俺の横に来た大志が、呆れたように笑う。
「お兄さん、これでジゴロの自覚が無いんだったらよっぽどっすよ……」
「……」
この時ばかりは、ちょっと反撃出来なかった。
続く。

（１４）

川崎家での食事の後。

「皿洗いくらいは俺やるわ」

美味い料理のお返しには到底及ばないが……と思いながらシンクの前に立つと、

「あ、じゃあお兄さんと一緒に皿洗うっす……ひぃっ!?」

同じく名乗りを上げようとした大志を、小町が何故か鬼のような形相で睨んで止めた。大志が泣きそうだ。俺も泣きそうだ。川崎もまあまあびびっている。京華がたまたま別の方を向いていて本当に良かった。本当に良かった……。

突然、川崎が慌てながら俺の前に躍り出た。何事ですか。

「えっ、ちょっ、なんなのさっ!?」

「いいからいいから～、小町を信じて～」

小町が謎のメロディーを付けた言葉を歌いながら、川崎の背中を押しているようだ。どこかで聞いたことがあるけど、きっと世代が違う。扇風機に顔を近づけさせてコーヒーをぶちまけるなんてくだり知りません。

川崎が俺と横並びでシンクの前に立つ。一般家庭の台所なので、高校生が二人並ぶと中々窮屈だ。

「……えっと、その、よろしく……っ」

「お、おお、おうおう」

「……何それ、ばかみたい」

妙な緊張で上ずった声に川崎が笑う。胸の中に仄かな温もりを感じながら、スポンジに洗剤を染み込ませた。

× × ×

川崎と二人で並んで、洗い物をする。

わしゃわしゃ。

「……」

わしゃわしゃわしゃ。

「……」

わしゃわしゃわしゃわしゃ。
『……』
……。
……き。
気まずい。
俺と川崎はひたすら皿洗いに没頭している。恐らく小町は「仲良くお喋りしてね☆」という意図で川崎を送り込んだのだろうが（尖兵みたいだ）、そこはぼっち歴の長い俺と、クール系照れヤンキーの川崎（すごい肩書きだ）。ものの見事に会話が弾まない。
これは川崎もやりづらいだろうな……と思ってちらりと横を見ると、川崎とぱったり目が合った。交差点で事故ったような、唐突な視線のかち合い。
「……」
川崎が何か言いたそうに口をもにゅもにゅさせている。仲間になりたいんだろうか。あ、顔を逸らした。
川崎は川崎で、何とか会話を紡ごうと頑張ってくれている。そう思ったら、何だか気持ちがふわりと軽くなった。
「……あー、その、なんだ、いつもあいつらにご飯作ってんのか」
あくまでさりげなく会話を切り出すと（自己判定）、川崎は顔をくりんとこちらに向け、不思議そうに俺を見つめた。え、なに、俺って喋る機能が無いと思われてたの？　やだ、ぼっち道ここに極まれり……。
「……ん、そうだね」
川崎はちらりとリビングを振り向き、頬を緩めた。柔らかな笑みはどこまでも優しく、きっとあの二人が生まれた時から、連綿と愛情が続いているのだと思った。
「……あんたの妹も、いつもあんたにご飯作ってんの？」
「そうだな、俺にだけ作ってくれる。愛すべき妹だ」
「気持ち悪い……」
「泣くぞ」
川崎が俯いて笑いを堪えている。鼻に手を当てようとした拍子に、

すらりと通った鼻の先に泡が付いてしまった。
「おい、泡付いてるぞ」
「え、あ、うわ……っ」
慌てて手をぱたぱたさせると、シャボン玉がぽわぽわと浮かぶ。天井に向かっていく速度は緩やかで、この場所の時間までゆっくり流れているようだ。
川崎は恥ずかしそうに慌てながら、お湯で手の泡を洗い落として鼻を拭う。こちらに背を向けるように身体の向きを変えると、その背中はふるふると震えていた。
「……今の、見なかったことにしな」
「こええよ……」
振り返って最初の一言と目つきがやたら恐かった。川崎は俺がげんなりする様子を見て、またしてもくすりと笑う。そんなに俺のネガティブ顔が好きなんだろうか。その内「お前の顔を絶望に染めてやろうか！　あたしはお前の苦悶に歪んだ顔が見たいんだよ！」とか言って俺の故郷を燃やしたりするんだろうか。ないな。キャラがちょっと魔王すぎる。

「なあ、川崎」
「ん、なに？」
少しずつ二人の間の空気が解けていく。うっかりこの雰囲気を学校で出そうものなら、方々から怪しまれそうだ。誰からとは言わないが。
「小町のこと、そろそろ名前で呼んでやってくれよ。絶対あいつ喜ぶから」
「……やだよ」
「なんでだ？」
川崎が洗い物の手を止め、こちらをちらりと見る。そして視線を洗いものに落とすと、頬を仄かに朱に染めた。
「……だって、恥ずかしいし……」
「……お、おお、そうか、うん、そりゃしょうがないな」

胸が妙な動悸に襲われている。後ろでは小町が「がふぁっ！」などと言ってもがいている。聖水をかけられたアンデッドみたい。
「……しかし、本当に呼んでくれないのか？　あいつも寂しがってるぞきっと。良いじゃねえか、料理上手、可愛い、面倒見が良い、可愛い、明るい、可愛い、六拍子揃ってるぞ」
「キリ悪いし何回可愛いって言ってんの……。ていうかそれ、あたしがあんたの妹を名前で呼ぶ理由になんないでしょ」
「可愛いんだからしょうがない。あんまりにも可愛いもんだから、兄としてはあいつの笑顔を増やしたいと思う訳ですよ」
「……急に真面目になってる……シスコン」
「うるせえブラコン兼シスコン」
「あ？」
「ふひゅー（一切口笛の体を成していない口笛）」
「ぶっ……くく……っ」
「すげえ効いた……」
何とか川崎の眼力を切り抜けると、川崎はふうとため息を吐いた。呆れたように笑みを浮かべて、小町と俺を交互に見やる。
「……しょうがないね」
「お、呼んでくれるのか？」
期待で心持ち高くなった声で尋ねると、川崎はもう一度小町と俺を交互に見た。そしてこほんと咳払いをする。
「……まあ、また今度ね」
後ろで「ずこーっ！」という声が聞こえた。３０年くらい時代を間違えている気がする。大志までもが首を傾げて「図工……？」と言っているから余計につらい。
洗い物をしながら、尚も雑談は続く。
「あんたは料理はしないの？」
「んー、あんましねえな。絶対するとしたら、小町が風邪を引いた時だな。お兄ちゃんお手製のお粥を作る」
俺が自慢げに言った所で、川崎の手がぴたりと止まった。
「……そっか、風邪引いたら……ふうん……」

何やら一人でぶつぶつと呟いている。
「お、おい、どうした？」
恐る恐る聞くと、川崎は顔を上げてふっと微笑んだ。
「何でもない」
「……そ、そうか」
川崎から顔を逸らす。少し顔が熱い。
川崎の笑みが、回数を追うごとに柔らかくなっている気がする。柔らかな布で心臓を包まれたような感覚に陥っていると、後ろで「んにゃー！　青春や……青春やでえ……！」と叫ぶ声が聞こえた。誰だよ一体。俺の可愛い妹だった。
ちらりと後ろを振り返る。さっきまで俺が居た場所に小町が座り、その股座に京華が収まっている。
「や～、向こうではお姉ちゃんとお兄ちゃんが青春しているね～」
小町が楽しそうに、鼻唄でも歌い出しそうなくらいの陽気さでにこにこ笑っている。京華は何のことやらと首を傾げているが、そのやわっこい両頬を小町がむにむにとつまんでいる。
「はーい、けーちゃん、うにー」
「うにー」
何で青色サヴァンのセリフを教え込んでいるんだろうか。どっちも死ぬ程可愛いからいいけど。
……まあ、小町と京華は良いとして。
問題は、もう一人の方だ。
「なあ、大志」
「え、あ、な、何すかお兄さん」
「結婚適齢期ぎりぎりまであらゆる女性にとっての『良い人』であり続ける大志」
「何で付け足したんすか!?　リアルすぎていやっす！」
「お前、今写真撮ってるよな」
「え、あ、は、はい、撮って、るっす、よ？」
「その写真、俺と小町と川崎にも送ってくれ」
「え、あ、はい！　……ほっ。なんだ、それだけなら……」

「そんで、お前はデータを送ったら全てのデータを消せ」
「何で俺だけ見れないようにするんすか!?」
　こいつが小町の写真を眺めながらにやにやする様を想像しただけで腹が立つ。そんな未来を防ぐための予防線を張っているのだ。
「データを消さなかった場合、お前の両目に指を突き入れながら『バルス』と唱える」
「それ言う必要無くないっすか!?」
「非現実的な要素を持ち込むことで罪が曖昧になるかと思って」
「全部ここで言っちゃうんすね！　もはや何の意味もないっす！」
「おい大志、うるせえぞ。小町と京華のはしゃぐ声が聞こえねえだろうが。お前の皿だけ全部割るぞ。あと箸も折る」
「理不尽だし陰湿だー！」
　洗い物しているのを忘れて好き放題言っていると、隣から冷ややかな、それでいて刺すような視線を感じる。
「あんたね……」
「あー、えーと、ああ、うん、川崎のご飯、マジで美味かった。また食いたいわ。ありがとな」
「あっ、えっ!?　うぐ……ま、また……!?　そ、そっか、へえ、また……そ、そそ、そっか……」
　川崎が怒りと照れが混じったちぐはぐな表情を見せた。殺せんせーなら口と目の配置がめちゃくちゃになっている所だろう。
「そ、そういうのはいいから！　ほら、洗うよ」
「へいへい」
「あんたは……っ」
　顔を真っ赤にして俺を睨む川崎は、いつもと違ってまるで怖くない。それどころか、可愛いとしか思わなかった。
　真っ白な空間にお湯を流し込み、食器を一つ一つ丁寧に洗っていく。
　ふわふわとした泡と一緒に、二人の間のぎこちない空気が洗い流されていくような気がした。

続く。

（１５）

夕飯の片付けを終えた後は、リビングでしばらくくつろぐことにした。

大志、俺、小町――と数多の高校生の股座を渡り歩いた京華であったが（ものすごく苦情が来そうな言い方だ）、最終的には川崎の股座に収まった。川崎は京華のことが可愛くてしょうがないようで、きゃっきゃとはしゃぐ京華の頭を優しく撫でている。その表情はどこまでも穏やかで、あまり見ていると何だか胸の奥がむずむずとしてきたので慌てて顔を逸らした。

「けーちゃん、楽しそうだねー」

小町が俺の隣で微笑みながら言う。そんな小町の表情もまた穏やかだ。

小町の言葉に、京華は「ほえ？」と首を傾げた。川崎が口元を手で押さえて震えている。悶えているんだろう。

京華はしばらく考え込んだ後、にぱっと笑った。

「うん、さーちゃんやわらかくてすきー！」

にこにこしながら、後ろに体重を預けてニット姿の川崎の胸に後頭部を着地させた。

『……』

その場の空気が、何か、こう、変な感じになった。

京華の顔が半分埋まってるよ……ダンジョンの壁に吸収される冒険者みたいになってるよ……。

川崎をちらりと見る。京華に対してひくひくと不自然な苦笑いを浮かべた後、何故か俺を物凄い形相で睨んできた。眼光は家の壁を貫通する勢いで鋭いが、如何せん顔が真っ赤なので可愛げしかない。

「比企谷、あんたね……」

「いや、俺は何も悪くない」

「そうですねー、沙希さんの胸がけーちゃんを夢中にさせてるだけですもんねー」

「んなっ!?　あ、あんたは……！」

飄々と爆弾を放り投げた小町を川崎は必死で睨むが、引き続き顔は真っ赤だし京華を抱きしめているから動けないしでもう可愛いったらありゃしない。
「さーちゃんやわらかいー」
自分の頭のすぐ上で激しく恥ずかしいやりとりが繰り広げられているのも露知らず、京華が呑気に頭を前後に動かして川崎の胸の柔らかさを堪能している。
ここは敢えて本音を言うべきだろう。
超羨ましい。
「……」
「な、なに、俺何も言ってねえぞ」
すんごい睨まれた。地の文を読まれた……!?
京華がくりんと顔を真上に向けて川崎を見る。
「ん？　けーちゃん、どうしたの？」
動揺を抑えた声で川崎が優しく問いかけると、京華は「んー」と小さく唸った。何事かと見守っていると、京華はカーペットの上に足を下ろして立ち上がり、くるりと反転して川崎の方を向いた。そして川崎の股座に先程とは逆向きで座る。ソファの上に膝立ちになったので、川崎と頭の位置があまり変わらない。
「け、けーちゃん？　どうしたの？」
川崎の声が上ずる。明らかにここから何が起きるのかと不安がっている声だ。
「……」
京華が無言で川崎の胸を触った。
両手で。
むんずと。
小さな手が双丘の中に埋まる。
「んなっ!?」
川崎が聞いたことのない声を上げた。悲鳴だろうか。
固まった川崎の反応も気にせず、京華はむにむにと胸を触っている。

「さーちゃんのおむね、おっきい。……けーかもこんなにおっきくなるの？」
「けけけけけーちゃん!?」
何か怪談で出て来るお化けみたいな声を上げている。川崎の動揺はピークに達しているようだ。ギャグマンガなら目がぐるぐるになっているところだろう。
難しそうな顔をして、京華は川崎の胸をむにむにと揉み続ける。川崎は耳まで真っ赤になったまま止めることも出来ず慌てている。大志の様子をちらりと見ると、大して動揺していない。川崎をちらちらと見はするが、その後俺にも視線を向けて「姉ちゃんの身体どうっすか？　どうっすか？」みたいなゲスな目を向けてくる。後でぼこぼこにしよう。
これは俺が止めるしかないか……と思っていたら、隣で小町が胸に手を当てていた。何か罪の意識でもあるのかしらと思ったが、よく見ると両手を当てている。手ブラという単語が浮かんだ瞬間に頭をぶんぶんと振っていたら、小町が立ち上がった。
思い詰めた顔をしているので心配して見つめると、
「ご利益……」
とぼんやりした表情で呟いて、ふらふらと吸い寄せられるように川崎の下へ歩いていく。いかん、万乳引力がこんなところで発揮された……！
「うーん、さーちゃんの、おっきい……」
京華は川崎の胸を正面から、上から、下からとあらゆる角度から揉んでいる。何のマイスターを目指しているんだろうか。将来が楽しみだ。
そこへ、小町がふらりとやってきた。
「あ、ちょっとあんた、けーちゃんのこと止め……ひぁっ!?」
川崎が艶っぽい声を上げて、思わず俺と大志が視線を向ける。
見ると、小町が京華とは別の角度で川崎の胸を触っていた。
「こ、この沈み心地……これはあかん、人をダメにするやつや……」
うっとりとした表情且つ突然の似非関西弁を駆使しながら、川崎の

胸を揉みしだいている。京華の無邪気な手つきと違ってどこかいやらしく、川崎は口元を手で覆って声を抑えている。
「んっ……こら、んぁ……ふっ、んんんっ、だめ……っ！」
思わずその様子を凝視して、数秒後。
「……」
あれ。
これ、やばくない？
大志と目が合う。無言で頷き合う。
大志と同時に立ち上がると、俺は小町の下へ、大志は京華の下へと向かう。
「おいこら小町」
「あうっ」
頭にずびしっとチョップを食らわせると、小町は可愛らしい声を上げて元に戻った。メダパニ解除。チャーム解除。
「ほら、けーちゃん、姉ちゃんが困ってるから」
大志は京華の腋に手を滑り込ませ、高い高いをするかのようにひょいと持ち上げた。
小町を元の位置に戻し、京華は大志が自分の股座にすっぽりと収めた。川崎は顔を真っ赤にして両腕で胸を抱えて蹲っている。
「……さーちゃん、こまってるの？」
「そうだよ、謝りなさい」
大志が京華を頭を撫でながら促す。兄としての面が見えて、少し印象が変わった。少しな。
「さーちゃん、ごめんなさい」
京華が眉根を寄せて、心の底から申し訳無さそうに謝る。理由は分からなくとも、川崎が困っているのが伝わったのだろう。
「……ん、大丈夫だよ、けーちゃん」
川崎は顔を上げて、まだぎこちない笑みを浮かべながらそう言った。
さて次は……と思って小町に視線を向けると、既にカーペットの上で膝立ちになり、川崎に両手を合わせていた。謝る気満々だ。

「沙希さん、ごめんなさい！」
「い、いいってそんなにしてまで謝らなくても」
「乳神様のご利益が欲しくて、つい！」
　チョップした。
「おいこら小町、いくらなんでもひどすぎるだろ」
「うう……本音がつい……でも、ご利益が欲しいのはほんとなんだもん……」
　小町が涙目で川崎を見つめる。正確には川崎の胸を。
『……』
　川崎と目が合うと、互いにふっと呆れた笑みを漏らした。
「……別にいいよ。ただこれから「も触らせてくれますか!?」は控えなよって言おうとしたんだけど!?」
　川崎と小町の絶妙なやりとりに、俺と大志は声を上げて笑う。京華はぽけっとその様子を見て、やがてにっこりと笑った。
×　×　×
『それじゃ、お邪魔しました』
　それからしばらくして、俺と小町はお暇することにした。思っていたよりもずっと長く居てしまったのは、それだけこの場所の居心地が良かったからだろう。
「あ、比企谷」
　家を出ようとしたところで、川崎が呼び止めてきた。
「ん、どうした」
「あ、あのさ、その、良かったら……」
「良かったら？」
「……や、やっぱ、なんでもない」
　川崎は明らかに何か言いたそうにしている。なんでもないと言った後も、俺と家の中とを交互に見て頬を赤らめている。
……。
……何を言うべきかは分かっているけど……。
……あー、恥ずかしい。
　しかし川崎も長い時間は耐えられないだろう。腹を括る。

「……まあ、その、なんだ。また時間があったら遊びに来たいんだが……いいか？」
目を逸らして頭をかきながら言うと、川崎の目が柔らかく輝いた。
「……う、うん。気が向いた時で良いから」
「……ああ、気が向いた時な、うん」
妙にもじもじした会話に、互いの羞恥心が高まっていく。
俺と川崎が目を逸らすと、俺は小町と、川崎はどうやら大志と目が合ったようだ。
小町はにやにやとしていた。とっても幸せそうに。
『……なんだよ』
俺と川崎の声がユニゾンした直後、俺が小町の髪をわしゃわしゃとすると同時に後ろでもわしゃわしゃと同じような音がした。きっと川崎も大志の髪を撫でくり回しているんだろう。
「はーちゃん、ちーちゃん、またきてねー！」
京華が元気いっぱいに言う。俺と川崎とは大違いだな……と思って頬を緩めながら、京華の頭をぽんぽんと撫でた。
「それじゃ……また、学校で」
「ああ、学校で」
扉を閉める前に見た川崎の顔は、1年前と比べると考えられないくらい穏やかなもので。
そうか、明後日学校が始まれば、また川崎と会えるのか……なんて、初心にも程があるだろうと我ながら呆れるような楽しみが芽生えた。

続く。

（16）

川崎の家に行った2日後の、月曜日。
いつも通り学校に行くと、俺の隣の席に既に川崎が座っていた。
「うっす」
さりげない挨拶を心がけながら鞄を下ろすと、川崎がびくりと反応した。
「おおおはよう」
「……」
心の底から「どうしたの？」という目で見ていると、川崎は耳まで真っ赤にして俯いてしまった。会話のネタを多少考えていたのにまるで活かせない……。
机がくっついているので、俯いた女の子と目が腐った野郎が並んで座っているという状況の奇異さがより際立ってしまう。これはまずい。
「……あー、なんだ、机離した方が良いか？」
状況を打開しようとして提案してみると、川崎はちらりと俺を見た。涙目で上目遣い気味且つ流し目という凶悪すぎるコンボに変な気持ちが芽生えそうになる。
「……いい、大丈夫だから」
ぽそりと呟かれた言葉の可愛いこと可愛いこと。
「……んー、でも、やっぱ離した方が良くないか？　人には話しやすい距離ってあると思うし」
意地悪く言いながら机をずらそうとすると、その腕をがっと掴まれた。力は強くないが意思の強さを感じる。
「……だから、いいってば……大丈夫だから……っ」
「あ、ああ、そうか、わりいわりい」
本気で泣かんばかりに目を潤ませた川崎の表情に狼狽えて、慌てて手を引っ込める。
掴まれた部分を制服の上からさすりながら、窓の外を見る。
後頭部に視線を感じて振り向いたが、川崎は相変わらず俯いたまま

だった。

×　×　×

昼休みになると、俺の前方の空間が腐った。

意訳しすぎた。

昼休みになると、またしても同じクラスになった、腐り姫こと海老名姫菜さんが腐海から人間界に舞い降りた。それはもうオウムの如く。もしくはシシ神様のごとく。

「ヒキタニくん、はろはろ〜」

「……うっす」

俺の壮大な心の独り言とは無関係に、海老名さんは今日もゆるい。ぱっと見は大人しくてさりげなく可愛くて影で男子に人気があるタイプだ。実際結構告白されているらしいし。異性に興味を持たれるって何なの……そんな幻多分知らない……。

海老名さんは俺と挨拶をした後、何やら周りをきょろきょろとし始めた。何ぞやという目を向けると、海老名さんは「うーん……」と小声で唸って首を傾げた。

「ヒキタニくん、サキサキ知らない？」

「ん、あれ？　そういやどこ行ったんだ……？」

横を見ると、確かに川崎の席はもぬけの殻だった。海老名さんが来たのは昼休みになって数分しか経っていない時だったから、川崎はそれよりも早く教室を出たことになる。

俺の返事に、海老名さんは「そっかー」とさしてショックでもない風に呟く。

「ま、こんな日もあるよね。サキサキから聞きたい話があるから、お昼誘おうとしたんだけど」

「ん、何だそれ？　聞きたいこと？」

自分が思わず発した言葉に驚く。

俺は今、あまりにも自然に川崎の中に踏み込むようなことを尋ねた。ここで海老名さんがどう答えようと、俺が踏み込もうとした事実は変わりない。

俺が自分自身に驚くのと同じように、海老名さんも目をぱちくりと

させて俺を見た。そして数秒もすると、口の端を吊り上げてにやりと笑う。
「おやおや……ヒキタニくん、サキサキの内情に興味あり……？　おやおや……？」
「……やっぱ忘れてくれ」
「まあまあ、そう言わずに。……ヒキタニくん、もしかしたら他人事じゃないかもしれないし」
　そう言ってふっと微笑む海老名さんの表情は、驚く程純粋で優しいものだった。
「あれは、そう、サキサキを見かけた時に気付いたこと……」
「え、なに、そんな前置きから始まるの？」
　昼ご飯を食べる時間がなくなるんだけど。
「そう……それは、今朝のこと……」
「思いの外ついさっきのことだな……」
　肩の力が大いに抜けた。
「サキサキと朝の挨拶したの。サキサキはいつもなら、ちょっと笑顔にしようと頑張るけど何だかんだで不器用だから仏頂面で挨拶するんだけど」
「そこまで見抜いてるのを本人には言ってやるなよ。恥ずかしさで死ぬから」
「あはは、確かにそうかもね」
　この人がこういう冗談にさらりと乗っかると割と怖い。
「でもね、今朝は何か違ったの。何かすごく自然な微笑みを浮かべたの。私、思わず見惚れちゃった」
　海老名さんの言葉に、心が重みをふわりと失う。
「……直前に弟とメールしてたからとかじゃないのか」
「んーん、違うと思う。サキサキが弟さんとメールしてる時に笑顔になるのは見たことあるけど、今朝みたいな笑い方はしてなかったから。あれはそう……何て言うか……」
　海老名さんが、俺に意味深な表情を向ける。短い言葉を告げようと薄い唇の形が変わった瞬間――

「海老名―、早く来なってー」
三浦の声が、海老名さんの最後の言葉をかき消した。通常の話し声なら聞こえていただろうが、海老名さんは思わせぶりに言おうとしたのか、最後に言おうとした言葉だけは三浦の声にかき消されるくらいの音量だったようだ。誰に聞き取られるでもなく霧散した言葉の跡地に、言い知れぬしこりが残る。
「……ん、ヒキタニくん。この話はまた、その内にでもしよっか。じゃね～」
悪戯っぽく微笑むと、海老名さんは「今行く～」とゆるい口調で答えて足早に去って行った。
何を言いかけたのか、ほんの二文字程度だったような気もするが。
……それより、何よりも、海老名さんに対して強く感じたこと。
……男×男の話題じゃないと、あの人ほんと普通だなぁ……。
去年の修学旅行ではだいぶ話したが、それ以来は普段ほとんど話すことがないので、何だか久しぶりにまともな海老名さんを見た気がした。すげえ失礼だな俺。
「……パン買いに行くか……」
なんだかんだでそれなりに時間が経っていたので、急いで購買に向かう。今なら好きなパンが無くなっている代わりに、並ぶことなくストレスフリーで買うことが出来るだろう。
昼休みになってすぐにいなくなった川崎のことを頭の隅に留めながら、ポケットに手を突っ込んで教室を出た。

× × ×

購買でパンを買って、いつも通りベストプレイスに向かうか……と思ったところで、ふと気分の変化が起きた。
何となく、屋上に行きたくなったのだ。
これだけ聞けば「え、その日によって食べる場所を変えて気分転換をするのは良いことなんじゃないの？」と思う人もいるかもしれない。
しかし、俺はそんなタイプではない。
俺は同じ場所で同じ時間に同じことをやるということに安心感を

覚えるタチなのだ。よく行く店ならラーメンだろうが定食だろうが、基本同じメニュー。たまに違うものを食べると「なんか違う……俺にはやっぱりこいつしかいない」みたいに思って結局「いつもの」に戻る。

ましてや今俺が行こうとしていたのはベストプレイスだ。どれだけの愛着を持っているか分からない。戸塚が部活を引退したら俺の中で一気に価値を無くすかもしれないという危機は孕んでいるが、それでもやはり安寧の場所であることには変わりがない。

それが、今になって急に屋上に行きたいなどとこの心はおっしゃる。一体どういう了見だろう。

はて、屋上にはどんな思い出があったろう。

まずは……文化祭。

……思い出すのはやめておこう。

その前は……ああ、うん、そうか。

「……今日は風が強いな……」

何を言ってるんだ俺はと思いながら、頭をがしがしと掻いて屋上に向かう。

そういえば川崎は結局どこにいるんだろうな……とぼんやり考える。

思考はのんびりしているのに、足取りは妙に軽かった。

続く。

（17）

屋上の入口まで階段を上ると、既に誰かが入ったかのような形跡があった。先客がいるなら引き返そうかと思ったが、何故かこの時はそのまま行ってみようかという気になった。

扉を開けると、少し湿った風と強い日差しに包まれる。夏の香りが辺り一面に広がっていた。屋上まで来れば太陽を阻むものも少なく空が広い。

「……日陰、探すか」

要は暑いので、足早に日陰を求めていく。

給水塔の横に程好い影が出来ていたのでそこに滑り込むと、

「あんたも来てたんだ」

と、上から声が降ってきた。

懐かしい感覚に駆られて上を見ると、給水塔の梯子を上った先から、川崎がひょっこり顔を出していた。

「……お前もか」

「……あんたこそ」

何この下手にも程がある会話。

ていうか川崎さん、こっちに顔だけひょっこり顔を出してるということは……四つん這い若しくは突っ伏してる？　可愛いですこと。

「……あんた、何か変なこと考えてる？」

「え、あ、や、何でもねえです、何でもねえです」

「いつの時代の人なのさ……待ってて、今降りるから」

律儀にツッコみながら、川崎が降りる準備を始める。俺は梯子の横にまで日陰があるのを確認すると、素早く梯子脇に移動して腰を下ろした。

「……あんた、何してんの？」

梯子を掴んだ川崎がこちらを覗き込む。

「いや、こっちの方が涼しくてな」

「同じ日陰なのに？」

「ああ、ほんとほんと。不思議なもんだ」

「そっか……ってなる訳ないでしょ」
ノリツッコミを受けた。中々上出来だ。
「あんた、いかがわしいこと考えてるでしょ？」
川崎の言葉に、悪戯心が燃え上がる。
「ん、いかがわしいこと？　この状況で？　わりい、具体的にどんなことがいかがわしいとされるのか、この状況を見た限りではまるで想像出来ねえわ。良かったら教えてくれねえか」
「っ!?　あ、あんたね……」
からかいにからかいを上塗りしたところで、川崎の反応を窺う。
顔をちらりと上げると、顔をぴょこんと出した川崎が俺を睨み付けていた。しかし顔は真っ赤で、目には涙を浮かべている。
……しまった、やりすぎた。
と、思うと同時に。
……あ、何かそそる……。
とも、思ってしまった。
なんだろーなー、この気持ち。
しかし、何にせよ今は謝らなければ。
「わりい、悪ふざけが過ぎた。降りてきてくれ」
「ああ……って、どっちにしろあんたがどけないと降りられないって！」
またしても上出来なノリツッコミ。素晴らしい。
梯子を下り切るまで黒レースをじっくり鑑賞するという夢は潰えた。
まあ、本当にやってたら御用になるレベルの話だけども。

×　×　×

川崎が俺の隣に座っている。
……スカートを手でめっちゃ押さえながら。
「……そこまで警戒しなくても」
「あ、あんたがあんなことするからでしょ！」
顔を真っ赤にして抗議される。少し前までは恐いとばかり感じていた睨み顔が、今は可愛くて仕方ない。

川崎は弁当を持って来ていた。器用に持ったまま梯子の上り下りをしていたようだ。俺は行きも帰りも見てはいないが。
「なあ、さっき昼休みになってすぐ教室を出たろ？　どうしたんだ？」
海老名さんが昼ご飯誘おうとしてたぞ」
俺の言葉に、川崎は目をぱちくりとさせる。「そっか……」と呟いて、頬をぽりぽりと掻いた。
「悪いことしたな……」
「まあ、根掘り葉掘り聞かれそうな気配がしたけどな」
「え、何を……？」
「何か、朝挨拶した時の笑顔がどうたらって言ってた」
「……っ」
どちらにせよ海老名さんが聞こうとしてたんだから、ここまでは言っていいだろうと思い伝えたら……川崎は見る間に耳まで真っ赤になり、両手で顔を覆ってしまった。
「……どうした」
「なん、でも、ない……っ」
そうか、と短く答えて、パンを袋から開ける。
結局、昼休みに早く出た理由は聞けてないなと思いながら、ふと顔を上げる。
川崎の顔と対照的な、綺麗な青色をした空だった。

×　×　×

しばらくして落ち着いた川崎は、弁当を食べ始めた。
「……それ、自分で作ってるんだよな」
「ああ、そうだよ」
川崎は簡潔に答えて、顔をぷいと逸らしてしまう。とりつく島もないようだ。
川崎の弁当の中身は、先日の夕食でご馳走になったメニューと同じ温かみに溢れていた。冷めても美味しいものを選んで、弁当箱という小さなスペースを上手く利用して色とりどりに飾っている。
「……いいな、美味そうだ」
目の前の味気ないパンと見比べて、ぽそりと呟く。このパン自体は

好きだが、やはりちゃんとした弁当を見ると恋しくなるな……なんて思いながらの言葉だったんだが、この言葉には川崎が大いに反応した。
「……え、食べたい、の……？」
さっき顔を逸らした気まずさからか、小動物のようにおずおずとこちらの様子を慎重に窺ってくる。急に顔の温度が上がった。
「あー、まあ……うん、食べたいか食べたくないかで答えるなら、すげえ食べたい。絶対美味いし」
すらすらと出てくる本音に自分で驚きながら川崎の顔をちらりと見ると、何だかぽけっとした表情で俺を見つめている。
「……そっか。じゃあ今ちょっとだけ……って、あ、箸……」
川崎が自分の手元と俺のパンを交互に見比べる。
「……いきなりあーんとかはレベルが高すぎる気がするんだが……」
「え、あ、はあ!? そ、そんなこと、する訳……」
尻すぼみになって、最後の部分は聞き取れなかった。もしかしたら声になっていなかったのかもしれない。
「……」
徐にきんぴらごぼうをつまんで、こちらに差し出してくる。口が半開きになっているのは、もしかして口パクで「あーん」と言っているのだろうか。手も震えていて、あまり放っておくとこぼれてしまいそうだ。
しかし、ここできんぴらごぼうをチョイスするか……。美味しいのには違いないが、箸に歯も何も付けずに食べるのは難易度が高い……。
突如訪れた展開に狼狽しながらも、自分で蒔いた種だと腹を括る。
「……あーん」
一応言葉を口にして、口を開く。なるべく歯を付けないように……と思っていたら、川崎の手がぶるりと震えてこぼれそうになる。慌ててごぼう全体を包み込むようにぱくりと咥えると、箸の先までばっちり咥えてしまった。
「……っ」

川崎が固まった。変な笑みを浮かべたまま。
「……ん、うん、美味い。ありがとな」
この状況を口に出しては色々とまずいと思い、無かったことにしようと試みるが、
「……そ、そそそそ、そうか、よよよ、良かった……」
川崎は全然大丈夫ではなかった。
箸の先と、自分の弁当と、俺の顔を交互に見比べている。それも高速で。顔は引き続き真っ赤だ。今日は林檎日和。
「……ああ、もう……っ」
泣きそうな顔で悲壮な決意を固めて、川崎は勢いよく弁当を食べ始めた。心の中ですまんと謝りながら、きっと味なんて分からないだろうなと考える。
だって、俺も何を食べたか分からないくらい、味が分からなかったから。
空を見上げる。小さな2つの雲がゆっくり交わって一つになった。風が強いようで雲の流れが中々速い。
そう言えばまだパンをほとんど食べてないな、と思い、俺も無言でパンにかじりつく。
時折視線を感じて顔を横に向けると、川崎はひたすら弁当を食べている。3回に1回くらいはばったりと目が合い、箸を咥えたまま顔を真っ赤にした川崎は、更に勢いを増して弁当を食べていた。落ち着けとは言えない状況なので、黙って見守るしかない。
いつの間にこんな関係になったんだ俺たちは……と、あまりに自然に訪れた変化に驚いていた。
屋上に流れる空気は、とてもゆるかった。

続く。

（１８）

川崎との距離感の変化を戸惑いつつも楽しんでいたら、気付けば２週間程過ぎていた。

学校での会話も増え、どちらから言うでもなく昼休みに屋上で一緒に食べることも増えた。ベストプレイスで一人で昼ご飯を食べた後教室に戻ると、何故かむくれた顔の川崎に迎えられたこともあった。

ＬＩＮＥでのやりとりも、気が付けばずっと続いている。とは言えそんなにがっつりと話す訳ではなく、１日に１０往復もすれば多い方だ。

『明後日の数学の課題やった？』

『だめだった』

『だめだったって何？』

『解こうという気力はあったが、夢半ばで打ち破れた』

『ばか』

『ちがいない』

『しょうがないから、明日見てあげる』

『マジか。川崎さんマジ女神』

ここで返事が途切れたので、恐らく寝たのだろうと思い翌朝学校に行くと。

「……」

俺を見て、頬を赤らめてもじもじする川崎に遭遇した。何でですのん。よく分からんが可愛い。

そんな日がゆるゆると続いていた時、ある日の夕食で小町が話を切り出してきた。

「お兄ちゃんお兄ちゃん」

「ん、どうした」

小町が突然神妙な顔になる。

「実は……お兄ちゃんは本当はうちの子じゃないんだよ」

「それって普通親が言うか、もしくは『小町は本当はうちの子じゃないって言われた』とかって言うパターンじゃないのか？」

兄妹間で告げられるってあんま無いと思うんだけども。
「まあそれはさておき」
「その切り方だと若干マジっぽくて恐いんだが」
「……」
「無言はやめなさい、悲しくて死んじゃうから」
「冗談冗談！　お兄ちゃんは立派なうちの子だよ！」
ぺっかーと輝かんばかりに笑った。ウザいけど可愛いので何も言えない。
「そいでね、今週の土曜に沙希さんの家に行く話なんだけど」
「あれ、何か文が５行くらい抜け落ちてないか」
「ううん、飛んでないよ？　何言ってんのお兄ちゃん？」
「俺、そこまで理不尽さに慣れてねえぞ……」
「そうそう、そうだねー。そいでね？　今回は大志君は用事で居られないみたいだから、小町とお兄ちゃんで遊びに行くわけです」
「ふむふむ、俺の意思が一向に絡んでないけど、話は見えてきた」
「そんな訳で、土曜日は朝１０時に沙希さんのおうちに行くよー」
「え、あ、はい、んん？　そうか、おう」
「呑み込みの速いお兄ちゃん、嫌いじゃないよ」
「そこは素直に好きと言ってほしかった」
こんな会話をしまして。
気付いたら、土曜日に川崎家を再び訪れることになっていた。
人権ってなーに？
×　×　×
「……あいつ、バカじゃねえのか……」
リビングのテーブルにでかでかと置いてあった手紙を見て顔をしかめる。この手紙を読んでいて目に浮かぶ小町の笑顔が、抜群にウザ可愛くて腹が立った。
予定としては川崎の家に１０時までに着けば良いということで、朝ごはんを食べてうだうだしてから行こうと思い８時半に起きた。
うとうとしながら、小町はもう起きたのかなと思いながらリビングに行くと、テーブルに置き手紙があった。

『小町、今日は大の親友（♀）と遊びに行く予定なのを忘れてたよお兄ちゃん！　カラオケに遅れちゃうから８時に家を出ます。探さないでください！　沙希さんには連絡してるから！　小町は行けなくなっちゃったけど、だからといってお兄ちゃんは約束を破っちゃダメだよ！　ちなみに親友の名前は今日子って言うんだ！　置手紙だけに！　ごめん、ウソだよ！

じゃあ、検討を祈ります。かしこ』

「……」

この場にいたら８時間くらい説教したかった。やだ、説教だけで定時勤務が終わっちゃう勢い……。

よし。

全部ツッコもう。

まず、テンションがウザい。

あと、親友なのに何故（♀）表記にした。ポケモンかよ。

あと、８時に出かけてカラオケってストイックすぎるだろ。それとも単純にその後の予定が詰め詰めなのか。どちらにせよストイックすぎる。

あと、探さないでくださいってお前どこの家出少女だよ。王道フレーズだな。

あと、どたキャン自体がウサんくさい。お前のしっかり具合は誰よりも知ってんだぞ。悪意もしくはお節介の気配しか感じねえぞ。

あと、最近ドラマ見たからって原作を読んでもないのに引用するのもやめなさい。使い方下手すぎてびっくりしたわ。

あと、なんで最後だけ急にテンション落ち着けてんだよ。何かこえよ。

あと、かしこを使うのは目上の人に対してだからな。女性が使うって点は合ってるけど。

……。

……ツッコミすぎて疲れた。

「……ふう」

今のツッコミを全て小町にＬＩＮＥで送っておいた。これでばっ

ちりどん引きされるな。
頭をがしがしと掻いて、小さくため息を吐く。
「……取り敢えず、ご飯だな」
小さく呟いて、パンはまだ残ってたかなーとぼんやり考えながらキッチンを漁り始めた。

× × ×

「はーちゃんだー！」
川崎の家に入ると、京華がそれはそれは嬉しそうに抱き付いてきた。男心をくすぐる人懐っこさがありながら、抱き付いた拍子に小さな頭で鳩尾を的確に射抜くとは……。美人にもなるだろうし、これは暗殺者として将来有望だな。何だこの分析。
「おおおお、おは、お、おはよ、おはよう……い、いい、いいらっ、いらっしゃ……いらっしゃい」
「ん、お、おう」
川崎が会って早々限界である。見てる分には超面白い。
何でこんな……と一瞬思ったが、理由はすぐに分かった。気持ちは良く分かる。
「……わりいな、小町、急にキャンセルしちまって」
「……ん、いいよ別に」
「ん、そか」
学校で二人で話すのにはだいぶ慣れてきたが、かと言ってこうして家で話すのも平気かと言われればそれとこれでは話が別だ。間に爆弾元気娘（危険な称号だ）の小町がいるなら会話を取り持ってくれるだろうと思っていたのに……あんにゃろめ……。
それでも、予め連絡していた分覚悟が決まっていたのか、川崎は思った程取り乱してはいない。最初の挨拶だけ超面白かったけど。
「……取り敢えずうがい手洗いしなよ」
「……おう」
ちょっとだけ声が上ずっている川崎の言葉に思わずくすりと笑うと、川崎が頬を赤らめたまま睨んできた。
正直俺も緊張がやばいのだけれども。

間に京華もいるし、まあ何とでもなるか……と呑気に構えることにした。
「はーちゃん、はやくはやくー！」
「おうおう、ちょっと待ってろ」
姉とよく似た青みがかった黒髪をくしゃくしゃと撫でて、ふっと微笑んで洗面所に向かった。
× × ×
――今日の１８時まで――
その言葉を聞いた時、俺は愕然とした。
「……マジか……」
思わず独り言ちる。
１８時までというのは、川崎が今日俺（と小町）がここに来るからと確保してくれた時間だ。
今現在の時刻は、１０時１０分。川崎家に着いてから１０分しか経っていない。
つまり今日は、１０～１８時の勤務体制だ。何を言っているんだ俺は。
川崎はこのことを、３人でリビングのソファに座って割と早々に告げた。何故言ってしまったのか。俺が雰囲気を悪くして、それより前に帰るという事態を想像しなかったのだろうか。１８時までと言われたら、例えそれより前にこの場が限界を迎えても帰るに帰れない。何で帰るのを前提にしてるんだっていう話なんだけども、あらゆる事態を想定するに越したことはない。
……越したことはない、と言ったんだけども。
「……あ、その……１８時までっては言ったけど、それより前にお開きにしてもいいからね？　あんたが飽きたりしたら、無理してほしくないし……」
どうやら、川崎も同じ考えに至ったらしい。
しかし、川崎からこう言われてしまっては……、
「……別に、飽きるってこたあねえだろ。なに、一応勉強道具も持ってきてるし、本も持ってきてる。安心しろ」

こんな返しをせざるを得ない。
安心させるつもりで伝えた言葉に、川崎は目をぱちくりとさせ、手で口を押えて笑った。
「……勉強道具なら、一緒に勉強とか出来るかもしれないけど……本って、うちで黙々と読書するつもり？　ばかでしょ」
「うぐ……っ」
言葉の割に声音は柔らかく、川崎の温かな感情が俺の心の中にするすると入ってくるようでくすぐったい。
「……こほんこほん。あー、それに、昼ご飯も食べればそれなりに時間も経つしな。８時間なんて思ったより短く感じるだろ。昼はどっかに食べに行くか？」
「ん、けーちゃんもいるし、うちで良いよ」
そうか、と返事をすると、川崎が顔を逸らして身体をもじもじと動かす。不意に心臓がどくりと鳴った。
「……その、あたしの料理でも、良い？」
「あ、ああ、大丈夫、全然問題無い」
言わなくても、ここで食べるならばこの展開は予想出来たのに、というかその選択肢しかなかったのに。
わざわざ照れくさそうに言われたことで、急に俺まで恥ずかしくなってしまった。
「はーちゃん、かおまっか―」
「んな……っ」
「あれー？　さーちゃんもまっかー」
「ええ……っ!?」
京華がからからと笑う中、俺と川崎が俯く。
……ここからの８時間は、体力が持つかとても不安だ。
この言葉に他意は無い。
続く。

（１９）

川崎家で、川崎沙希・川崎京華・比企谷八幡の３人で何をするかという話になりまして。

協議の結果、午前中は川崎京華の教育を行うことになりました。

こう書くとなんか物凄く仰々しい又は犯罪の匂いがするけど、実際は京華に色々と教えてみるというだけの話だ。あまり弁解になってないなこれ。

といっても、まだ小学生に上がっていない京華に何を教えたら良いか分からない。中学生くらいだったら好奇心を刺激する意味で山月記でも読ませてみるのもありだと思うのだけど、そういった「ちょっと先の勉強内容」さえ何なのか分からない。

京華を見ると、既に「何を教えてくれるの？」と目をキラキラさせている。俺にこんな時代があったかは思い出せない。母親に後で聞いてみても良いが、鼻で笑われそうなのでやめておく。

実際どうするよと川崎にアイコンタクトで意思を窺うと、眉根を寄せて瞑目して考え込んだ。

数秒して何か思いついたように目をぱちりと開いて、京華に柔らかな笑みを浮かべる。

「じゃあ、けーちゃんが知りたいことを教えてあげる。何が知りたい？」

子供の好奇心をくすぐるやり方だな、と思った。

しかしこの質問、何だか嫌な予感がする。

爆弾のような危険性を孕んでいる……気がする。

うーむ……。

京華は川崎の言葉を聞いて、目をぱちくりさせながら辺りを見回す。何か質問することを探しているようだ。良いものが無かったのか、今度はぱたぱたとリビングを飛び出し、何かのノートを持ってきた。どうやら幼稚園で使っているノートのようで、雑多なことが沢山書かれている。ぺらぺらと捲り考えているが、うんうん唸るばかりで一向に出てこない。慣れていなくて質問が浮かばないというよりは、

普段幼稚園の先生に質問を沢山していてもはや新たな質問が出てこないのではないかと思った。元気に手を上げてあれこれと聞く京華の姿が浮かんで顔が綻ぶ。
しかし、何だかんだで好奇心旺盛なお子さまだ。しばらくすると、はっと何か閃いた顔をした。
そして何故か、俺と川崎を交互に見つめる。
あ、これあかん。
拷問の予感がするやつや。
川崎はまだ事態の深刻さに気付いていない。京華が可愛らしく動き回るのを見て和んでいるだけだ。時折カメラを探す素振りを見せているが、目の前の京華を見逃すことなく見つめるのが優先なようでひたすら笑顔で眺めている。
「さーちゃん」
「ん、なあに？」
川崎の声が間延びする。家ではこんな感じで京華と接しているのか……と和んでいると、川崎がしまったと言わんばかりに目を見開き、頬を赤らめてこちらを見た。何も聞いてませんよとアピールしようとして、顔を逸らしながら下手な口笛を吹いたら逆に笑われた。
京華がにぱっと笑った。
「けっこんて、どうやってするの？」
「え」
はい、爆弾投下。
川崎がびしっと固まった。時が止まっているかのようだ。
「け、けーちゃん、何を……？」
川崎が頬を赤らめて、ちらちらとこちらを見やる。やめろ、今このタイミングで見るんじゃねえ！
「パパとママはけっこんしてるんでしょ？」
「う、うん、そうだね」
「けっこんっていきなりするの？」
「ん、ち、ちがうよ？」
「じゃあどうやってするの？」

「え、えっとね、それは、あのね……」
川崎が大いに慌てる。京華の肩を優しく掴んだり髪をわしゃわしゃと撫でたりしている。京華は「わー」と楽しげに声を上げて川崎にされるがままになっている。京華をもみくちゃにしながら、川崎は俺を見て助けを求めている。どうしよう、逃げ出したい……。
「あー、うん、よし、京華」
覚悟を決めて、京華に教えることにする。出来るだけオブラートに包んで、コウノトリがどうのとかいう話をするつもりで。
「はーちゃん、なにー？」
「京華のパパとママは、どうして結婚したんだと思う？」
「ん……すき、だから？」
京華が首をくりんと傾げ、川崎が頬を赤らめた。逃げ出したいが踏ん張って話を続ける。
「そうだな。まずパパとママはお互いを好きになったら、恋人同士になるんだ」
「こいびと？」
「そうだ。お互い好きだからずっといっしょにいたいって思って、いつも一緒にいるようになる」
ケースバイケースではあるが、取り敢えずざっくりと説明する。
「そうなんだ」
「そうだ。そして、恋人になってからしばらくして、一生この人と一緒にいたいって思うようになったら結婚するんだぞ」
「そうなんだ！」
「そう。ちなみにお見合い結婚とか政略結婚とかもあるが、それは追い追い覚えていこうな」
「おみ……あい？　せい……？」
「それ今言う必要ある？」
「無いですごめんなさい」
川崎にツッコまれた。
「じゃあまずはこいびとになるんだ」
京華はお見合い云々のくだりは流して整理を始める。賢い選択だ。

「そうだな、その通りだ」
頭をくしゃくしゃと撫でると、京華は気持ち良さそうに目を細めた。
よし、この話はこれで終われそうだ。コウノトリ云々まで質問が派生しなくて良かっ――
「それじゃあ、はーちゃんとさーちゃんはこいびとなの？」
全然良くなかった。
「んな……っ」
川崎が耳も首も真っ赤にして口をぱくぱくさせている。金魚みたいだ。エサをあげたらぱくついてくれるだろうか。
俺は俺で、口を半開きにして固まっている。
すごく大きな爆弾が落ちた。
どうしよう。
帰りたい。
「川崎、やっぱ帰っていいか？」
「このタイミングで言わないで……」
川崎の声は切実だった。
「？　ちがうの？」
京華は不思議そうに首を傾げている。子供の純粋なる疑問に、大人と子供の狭間にいる僕らのライフはがりがり削られています。助けて。
「え、えっとね？　けーちゃん、あたしと比企谷はそういう関係じゃないよ？」
そうです友達ですただの……と心の中で訴えていると、京華は俺と川崎を交互に見つめ、納得したように頷いた。
「じゃあもうけっこんしてるんだ！」
事態が悪化した。
逃げたい。
どこでもドアがほしい。
マチュピチュ辺りに一回逃げて、リラックスしがてら軽く高山病になって帰ってきたい。

落ち着け俺。
川崎を見る。口をぱくぱくさせて、俺と京華を高速で交互に見やっている。頭から湯気が昇っているのが見える。温泉でも湧いてるのかしら。
「あっ、け、けーちゃん？　そうじゃなくてね？　比企谷とは、ね？　そうじゃなくて……」
「こいびとじゃなかったけっこんしてるんじゃないの？」
「あ、そのね、そのどっちでもなくて……ね？」
友達という言葉を何故か中々出さない川崎。動揺しすぎていることによるものなのか。
仕方ない……と思い、京華の頭にぽんと手を乗せる。
「俺と川崎は友達だぞ。恋人でもないし結婚もしてない」
俺の言葉に、京華は「そうなの？」と答えて、川崎は少しだけ悲しそうに俯いた。川崎の変化が気になり、何か声を掛けようと思っていると。
「じゃあ、もうすぐこいびと？」
と、京華が再び切り込んできた。
子供こわい。
「んな……っ」
落ち込んだ様子から一変して、川崎が顔を上げて、林檎のように赤い顔でぷるぷる震える。
「京華、何か他に聞きたいことあるか？」
この話をこれ以上続けるのは精神衛生上よろしくないと判断して切り上げる。
京華は1つ質問したことで思考回路の繋がりが広がったのか、そこからは次々と質問をしてきた。爆弾は最初の話題だけで、後は穏やかな質問ばかりだった。
気付けばお昼時。
川崎が料理の準備をするからとソファから立ち上がると、俺をちらっと見て、
「……ばか」

と、俺にぎりぎり聞こえる程度の声で囁いた。俺と川崎は友達と言った時の表情とどこか似ていて、胸の内がきゅっと締め付けられた。

何が何だかよく分からないが、取り敢えず川崎のエプロン姿をもう一度見られるので良しとしよう。

続く。

（２０）

お昼時ということで、川崎がご飯を作ってくれることになった。先日も見たエプロンを着た後、キッチンで準備をしながら何故か俺をちらちらと見てくる。

……なんだろう、ものすごく見てくる。

……あ、そういうことか。

この間も同じ空気になったし、同じセリフを言ったよな……と思いつつも。

「……似合ってる」

頬を掻きながら小声で言うと、川崎は顔を真っ赤にして俯いた。ちらりとこちらを見て口をもにょもにょと動かすと、身体を半転させて料理を始めた。口の動きは、『ありがとう』と言っているようだった。

俺と京華はキッチンに背を向けてソファに座っている。後ろから聞こえて来るとんとんと言うリズミカルな音と、徐々に漂ってくる良い匂いが何とも心地良い。

「……」

ふと後ろのキッチンを見やる。

川崎が何かを確認しようと右を見ながら、小皿に入れた味噌汁らしきものを啜った。右目にある泣き黒子が相俟って、家庭的な光景の筈なのに妙に艶っぽい。

「……ん、よし」

小さな声で呟いて、薄く目を細める姿があまりにも魅力的で。

気付けば、川崎が調理を再開して顔が見えなくなってからも、身体を完全にキッチンに向けて、背もたれに腕と顎を乗せて川崎の後ろ姿を見つめていた。

何をやっているんだとは思う。

それでも、あれだけ魅力的な顔を見てしまってはとても他のものなど見ていられない。ただの日常の光景が、俺を釘づけにしていた。

「……」

それとなく目についてしまう、肉付きの良いお尻。

目を逸らすが、それとなく目についてしまう。あくまで、それとなく。

うーん。

視線が……引き寄せられる……！

お尻を見ようが見まいが結局川崎をガン見しているのには変わらないのだが、それでも悶々としていると。

「はーちゃん、なにみてるの？」

俺の真似をして、背もたれに手を乗せてキッチンを見ながら京華が話しかけてきた。身体の大きさが随分違うからか、京華はソファに膝立ちになってやっと顔の上半分を覗かせている状態だ。これは多分川崎が振り向いたら可愛さで死ぬやつだ。

京華を構うのをすっかり忘れていた……と申し訳無く思い、京華の頭をくしくしと撫でる。

「まあ、うん、あれだ。ちょっと邪な気持ちを持ってる」

答えの体を成していない返事をすると、

「よこしま？」

と京華は首を傾げ、リビングの窓際にあるぬいぐるみをちらりと見た。何の生き物かは分からないが、確かによこしまだ。この場合横の縞模様な訳だけど。

「あー、それとはまた違うんだ。わりい、忘れてくれ」

口を滑らせてしょうもないことを言ってしまったので、早めに話を切り上げる。京華ははてと首を傾げたままだった。

「出来たよ……って、あんた何やって……けーちゃん!?」

振り返った川崎が、京華の凶悪なまでに可愛い姿を目にして崩れ落ちるのは、あまりにも自然な成り行きだった。

× × ×

『ごちそうさまでした』

「はい、お粗末さまでした」

テーブルの上のものを全て綺麗に平らげて、満足げに挨拶をする。

食卓に並んだのは極めて家庭的な料理だった。そのどれもが美味いこと旨いこと。

京華が好きなものをきちんと入れつつ、苦手な食材も上手に誤魔化して入れて。
且つ、俺も満足できるくらいの分量を作ってくれた。大志の食べる量を参考にしたらしい。不本意だが助かった。
前回同様皿洗いを申し出ると、川崎は一緒に洗うと言い出した。前回とは違い、やりたくて一緒にやるという状況が何とも気恥ずかしい。
「……ね、ねえ」
「ん、どうした」
「あんた、好きな食べ物とかって……ある？」
「……え？　あ、まあ、色々あるけど」
「そ、そっか……その、良ければ、教えてくんない？」
「……いいけど、な、なんで？」
「い、いや、その、別に……大したことじゃない、から……」
「そ、そうか。うん、まあ、後で教えるわ」
「う、うん。ありがと」
「いや、まあ、うん。こちらこそありがとう」
読点が多すぎてびっくりな会話をして、更に気恥ずかしくなった。
そして当然の如く歯磨きをする。人様の家の洗面所を何回も使うと段々馴染んできて、気持ちがふわふわとしてくる。あまり慣れていないが、きっとこれは幸福感というやつなのだろう。
歯磨きを終えてリビングに戻ると、京華がソファでころころと転がっていた。何この可愛い生き物？
「川崎は？」
「さーちゃんはねー、のみものとおかしをかいにいくって」
「ん、そうなのか」
川崎の為にソファでころころしている京華を動画で撮りながら返事をする。京華は飽きたのかすぐにその動きをやめたので、俺も撮影を止めた。
「ん？」
ＬＩＮＥに川崎からメッセージが届いていた。

『ごめん、お菓子と飲み物買って来るの忘れたから買ってくる。すぐ戻るから』
『分かった、ありがとう。待ってる』
『ばか』
……なんで？
俺、今の３つのフレーズで何か怒られるようなこと言ったか？
しかしまあ、取り敢えず。
あと１０分か１５分かは分からないが、京華と遊んでいるとしよう。
取り敢えず、今なら遠慮なく出来ることをするべきだ。
生きている時間は限られているんだから。
という訳で。
ぷに。
「おう」
ぷにぷに。
「おうおう」
ぷにぷにぷに。
「おうおうおう」
盛大に京華の頬を人差し指でつっつく。オットセイみたいな声をしながら京華が目を細める。どうやらお気に入りのようだ。
「えい」
お返しされた。
「ちょっと力入れ過ぎだぞー。これくらいでだな……」
お手本として更にぷにぷにとつつく。京華は「こう？」と言って力加減を加えたつっつきをしてくる。うむうむ、筋が良い。何の筋だって話だが。
「……」
京華の両頬をつまんでむにむにと形を変えながら、京華の顔をじっと見る。
見れば見る程、川崎に似ている。兄妹でも似る似ないはあるが、川崎と京華は確実に似ているだろう。

京華を股座に座らせて、頭をくしくしと撫でながら物思いに耽る。
考えるのは、川崎沙希という女性について。
初めこそ……というかついこの間までは、ヤンキーというイメージが先行していたが。
それでも、初めから美人だという認識は強く持っていた。
未だに何考えてるか分からんし怖い所も多々あるが、優しくて面倒見も良い。家族に対する愛は半端ではない。ということは、打ち解けたら俺にすごく優しくしてくれるのではないだろうか。ブラコン兼シスコンめ。
あと、明らかにスタイルが良い。
しかも、物凄く。
……。
ぶんぶんと頭を振って、思考を切り替えた。
京華の頬をぷにぷにと摘まむ。
食後の昼下がりの眠気が訪れて、玄関から聞こえた音がどこか遠くで鳴っているように思えた。そしてもう数秒で、ここに誰が来るかの認識も曖昧なまま、リビングのドアが開くと同時に呟く。
「ただいま。遅くなってごめ――」
「京華はお姉ちゃんに似て美人になるぞぉ……」
「んな……っ!?」
ドアの音と、自分が発した言葉と、驚いた声が混じり合って一瞬で目が覚めた。
「……お、おかえり」
苦し紛れに言った言葉に返事はない。
川崎はペットボトルやお菓子が入った袋を手に持ったまま、顔を真っ赤にして固まっている。急いでいたのか、微かに汗ばんでいて息が荒く、こんな状況であっても艶っぽく見える。
『……』
別に何かやましいことをした訳でも言った訳でもない。
ただただ、恥ずかしい。
俺と川崎が数十秒前と全く同じ体勢のまま固まっていると、京華が

俺の頬をぷにりとつついた。このタイミングでこれはちょっと……と思って京華に目をやると。
「さーちゃん、おかえりー。さーちゃんもやろうよ」
「え」
「え」
京華の言葉に、川崎と俺が順に間抜けな声を上げる。
「これ、楽しいよー」
京華はそう言いながら、俺の頬をぷにぷにとつっつく。俺も反射的に京華の頬をつっつき返す。
「け、けーちゃんは比企谷とやってれば十分楽しいでしょ？　だからあたしは大丈夫だよ」
川崎が戸惑いながら答える。なんでまたこのタイミングで……という疑問は確かにあった。
けれど、京華はそんな疑問を軽々と吹き飛ばす程の爆弾を投じてきた。
「ううん、さーちゃんとけーちゃんじゃなくて、さーちゃんとはーちゃんでやるの！」
『え』
今度は二人の声が重なった。

続く。

（２１）

目の前には、にこにこと笑いながら俺と川崎を交互に見やる京華。
横を見れば、唖然とした顔で京華を見つめる川崎。
どうしよう、何だこれ。
「け、けーちゃん？　それはどういう……？」
川崎が京華に尋ねる。すると京華は更に笑顔を光り輝かせて、両腕をＶの字にずばっと上げた。手を広げてなお小さい。可愛い。いや、そうじゃなくて。
「さーちゃんがはーちゃんのほっぺをこうしてー」
右手人差し指を立てて、くいくいと前後に動かす。
「はーちゃんも、さーちゃんのほっぺをこうするの！」
今度は左手人差し指を立てて、くいくいと前後に動かす。両手とも同じ動きをしているので相当シュールだ。可愛いけど。すんごく可愛いけど。
「け、けーちゃん、それは流石に……ね？」
川崎がしゃがみこみ、京華と目線を近付けて小さな両肩に手を置く。なるべく穏やかに、それでいて理由を告げず曖昧に事を済ませうという算段らしい。この解説をしている俺の汚れた大人感が甚だしくて泣ける。
「……だめ？」
京華が両手を下ろして、きょとんと首を傾げる。「う……」と苦しそうな声を川崎が上げて顔を背けたが、しっかりと顔の向きを戻して京華を見つめた。
「え、えっとね？　それはちょっと……うん……」
だめとはっきり言わないのは、優しさが故か、甘さが故か。
いずれにせよ、白とも黒ともつかないグレーゾーンで誤魔化すという手段は、この場には適していない気がする。何故ならその手段はある程度成長した、且つ日本人的な空気を読む力をしっかり養えた者同士で通用するものだからだ。だからこの解説何なんだよ。
困ったような笑みを浮かべる川崎に、京華はしゅん……と目に見え

て落ち込む。川崎はあわあわと慌てたが、京華はすぐに次の言葉を発した。

泣きそうな声で、上目遣いで、両手人差し指同士をつんつん合わせながら。

「……だめ？」

「やる」

「おい」

シスコンここに極まれり、だった。

川崎はだらしなく頬を緩ませた顔から一転、「しまった、あたしは今何て言った……!?」と無駄にシリアスな顔になって振り向いた。俺は君が笑い要員になってくれて嬉しいです。

ともあれ。

妹の上目遣いという必殺技一撃で、俺と川崎のぷにり合いが決定した。

帰りたい。

× × ×

「はーちゃん、帰るの……？」

「帰らない帰らない、ずっと居るからな」

「わーい！」

「ずっとはだめでしょ……」

帰れなかった。

試しに荷物をまとめて帰る準備をしてみたら、即座に京華が駆け寄り、俺の袖を掴み、上目遣いで前述のセリフを言われた。一色よりもあざとさの純度が高い。ていうかもはや将来は陽乃さんを凌ぐんじゃなかろうか。良いじゃん、なってみようぜ。たぶらかし系女子の頂点、傾国系女子に。何だその界隈、すげえヤなジャンルだな。

俺と川崎は京華に袖を引っ張られ、ソファに並んで座らされた。お互いなるべく距離をとろうと努力したが、京華がソファの上に立ち、川崎の肩を「うんしょ、うんしょ……」と言いながら押したことで、でれでれになった川崎があっと言う間に俺との距離を近付けてきた。俺は俺で京華の行動が可愛すぎて動くに動けなかった。

「……おい」
「……なに？」
　川崎に話しかけ、ひそひそ話を始める。ひそひそ話って意外と声が通るらしいが、京華には何か話してるのは聞こえても、何を話しているのか伝わらなければ大丈夫なので気にしない。
「（お前、何やらかしてんだよ……）」
「（……ごめんって）」
「（ちょっと待ってそんなしゅんとなるなよ。何か俺が凹むっての）」
「（あ、そっか。……でも、ごめん……）」
「（情緒不安定かお前は。実際どうすんだよ？）」
「（……うん、せっかくだから、けーちゃんを全力で楽しませてあげたい）」
「（恥ずかし過ぎて死ぬという事態が予測されるが大丈夫か？）」
「（そんな冷静に言わないで……。とにかく、何とかするから。あんたはあたしの演技にちゃんと乗って）」
「（お？　お、おう、分かった）」
　死ぬ程不安な結論を出して会議は終了した。京華はいつの間にか俺と川崎の正面に陣取ってしゃがみこんでいて、俺たちの内緒話にぽけっと首を傾げていた。俺が悶えている間に川崎がムツゴロウばりに京華を愛でていた。よーしよしよし……。
　京華を愛で終えた川崎が、胸に手を当ててすーはーと呼吸をする。何気に豊かな胸が上下するのが見えて、思わず目を逸らした。
「（……行くよ）」
「（……おう）」
　川崎の声に視線を戻す。川崎は深く息を吸い、極めて真剣な表情で俺を見つめると――
「よーし、じゃあさーちゃんがはーちゃんのほっぺをつっつくぞー！」
「んぶぐっ!?」
　予想の斜め上を行った川崎のテンションに、身体の奥底から噴き出

しそうになった。
唇を全力で引き結んだ為に、鼻から変な音が出てしまう。川崎は俺の反応を見て、笑顔のまま首まで真っ赤になった。
川崎は俺を見ているようで見ていない絶妙な目線を保ちながら、満面の笑みを浮かべている。普段からこんな笑みを浮かべていたら各クラスに１０人ずつくらいこいつのファンが出来そうだな……と思うくらい素敵な笑みだが、その数秒前までの真剣すぎる顔を知っているから今は正直面白さしか感じない。
「ぶっ……くくっ……お前、それはいくらなんでも……っ」
鼻が爆発するんじゃないかというくらいの面白味に耐えながら、震える声で川崎に言葉をかける。川崎は口だけ動かして、何かを俺に訴えかけている。顔は以前真っ赤なままだ。
「（わ・ら・う・な・！）」
俺にしか見えない角度で見せる表情は切実そのものなんだけど、涙目でぷるぷると震えながら言われても可愛いとしか思えない。
「い、行くぞー！　それー！」
川崎が奇妙な笑顔――色んな感情が混じり過ぎて、ちょっとゲルニカみたい――を浮かべたまま、俺のほっぺに人差し指を伸ばしてくる。仕方なく、渋々、嫌々ながらもこのテンションに乗っかることにした。
「よ、よーし、さあこーい！」
人差し指がぴたっと止まった。見ると川崎が俺から顔を背けて、手で口を押えてぷるぷるしている。こんにゃろう……。
「（……お前の方がよっぽど振り切ってるぞ、さーちゃん）」
ぽそりと呟いて喧嘩を売ると、川崎の震えがぴたりと止まった。
あれ、なんだろう。
超恐い。超怖いよぉ！
こほんこほんと咳払いをして、川崎が改めて奇妙な笑顔――さっきよりは自然な、脱キュビズム出来た感じ――を浮かべて、人差し指を伸ばしてきた。
ぷにり。

「わーい！」
川崎の人差し指が俺の頬に到達すると、京華はまるで人類初の月面着陸を喜ぶ人のごとく、ぴょんぴょんと嬉しそうに飛び跳ねた。やだ、この子ったらずっと見てたいくらい可愛い……。
俺は川崎から目を逸らしているが、何だか頬にやたらちりちりとした視線を感じる。
ぷに。
ぷにぷに。
ぐに。
ぐりぐり。
ぐりゅり。
「（ちょ……っ!?）」
何か効果音がおかしくなってない!?　なんだよぐりゅりって!?
何の器具を使って抉ってんの!?
川崎に顔を向けようとするが、その分川崎の指が食い込んで中々向けない。超痛い。何この事態!?
顔を引きながら少しずつ顔の向きを変えていくと、ようやく川崎の顔を見る事が出来た。
笑ってる。
超笑ってる。
にっこにこだ。
けれど、目が笑ってない。
サーモグラフィーで見たら絶対目だけ超青いぞ、マジで。
「（いでででで……っ！）」
川崎の指が更にめり込む。頬をこんなにぐりぐりやられることって今後の人生でもまず無いんでなかろうか。超痛い。泣く。
川崎に「やめろ……っ！」とアイコンタクトで伝えようとしたら、川崎がゆっくり口を動かした。
「（わ・ら・え）」
「……っ」
――あれは、ロードショーか何かだっただろうか。

ふと好奇心で見た伝説的なホラー映画で、白い服を着た長い黒髪の女がテレビの中の井戸からこちらに歩いてきて、そのままテレビから出てきた時の、あのおぞましいまでの恐怖を――何故か今、思い出した。

……というのは言い過ぎにしても。

洒落にならないくらい怖い。

大人しく従うことにして、川崎に頬をつつかれ……というかどつかれたまま、京華に顔を向けた。

そして笑う。

引き攣った笑みを浮かべる。

少女よ、いや、幼女よ。

これが大人だ。

辛くて笑みを浮かべる余裕など全く無い中でも、自分が守りたいと思う何かの為に必死で笑顔を繕う。

これが、大人だ。

「……ごめん、やりすぎた」

無駄にかっこつけたモノローグを考えていたら、川崎が急に冷静になって指を離した。猛烈に恥ずかしい。

「(……お前俺を殺す気か……)」

「(ごめんって。ついイラッとして……)」

「(……すまん)」

「(……あたしも、ごめん。でもこれでけーちゃんも喜んで……)」

二人同時に、京華を見る。

これだけ恥を忍んでやり切ったんだ。きっと京華は喜んでくれるはず。にこにこと笑ってくれているはず。

――けれど。

『……え……？』

――京華は笑っていなかった。

それどころか、きょとんと首を傾げていた。

「さーちゃんもはーちゃんも、なんかへん。どうしたの？」

二人揃ってソファにへたり込んだ。ソファいっぱいに脱力した2

人分の身体が広がる。
俺と川崎の大根すぎる演技は、幼女に一切通じていなかった。ていうか「何か変」の一言で片付けられた。
「ほら、次はあんたの番だよ……」
疲れ切った笑みを浮かべて、川崎が言った。バーで飲んだくれる哀愁たっぷりのＯＬみたいだった。

続く。

（２２）

次はあんたの番だよ――と言って、川崎が目を閉じる。仄かに頬を赤らめて震えられると、予定とは違うことをしそうになってしまう。

「……じゃあ……行くぞ」

ごくりと息を呑んで、川崎の頬に人差し指を伸ばす。

――ぷに。

「おぉ……っ」

思わず感嘆の声が漏れる。

それくらい、川崎の頬は柔らかかった。

「ん……っ」

川崎は微かに眉をひそめて、何とも色っぽい吐息を漏らす。どう考えても、この反応と実際やってることとのギャップが大きすぎる。

京華を見るときゃっきゃとはしゃいでいた。取り敢えず満足してくれているようで良かった。

しかし……。

「おぉ……っ」

人の、もっと言えば女性の頬とは、こんなに柔らかいものなのかと驚く。京華の頬も柔らかいが、それとはまた違う……一定の成熟を経た、女性の柔らかさを感じる。人差し指を押し込む度にやんわりと沈み込み、瑞々しい弾力に跳ね返される。気が付けば夢中でつついてしまっていた。

「おトイレ行ってくるー」

京華がぽんと呟いて、ぱたぱたとリビングを出て行った。

「トイレ、行ったみたいだな……」

「そう、だね……」

素人が台本を読んでいるかのような棒読みで言葉を交わす。川崎が片目だけ開けて、ちらりとリビングの入口を窺う様子は妙に色っぽかった。

本来であれば京華が戻ってくるまでこの行為をやめて休憩していれば良いのに、俺も川崎もやめようとしなかった。

無言で川崎の頬を撫でると、川崎はうっとりと目を細め、両目を閉じた。
京華は今いないのか……とぼんやり考えながら、右手だけでなく左手も伸ばす。夢と現の境目が曖昧になったまま、川崎の両頬を撫でさする。
「……え……ちょっと……っ？」
川崎が不安げに目を開ける。一挙手一挙動が色っぽくて、ほんの一つの仕草だけでも俺の中で劣情がむくむくと膨れ上がる。
本来であれば、これは予定に無い行為だ。謝罪をして早々にやめるべきなのだけど。
「……いいから、目、閉じてくれ」
喉奥から出てきたのは、何とも強引な言葉だった。
けれど、それでも川崎は、
「え……う、うん……っ」
おどおどしながらも、再び目を閉じた。どうしてこんなに抵抗しないのだろうと思ったが、もしかしたらさっきやりすぎたという負い目があるのかもしれない。何にせよ、今はその従順な態度が何より嬉しい。
目を閉じた川崎に見惚れ、頬を撫でながら自然と顔が近付いていく。青みがかった黒髪からは甘い匂いが香って、夢の世界へ誘われているかのように意識が蕩けていく。
川崎の頬を撫でて、指を沈み込ませて、また撫でる。
両手の指が、瑞々しい唇の横で止まる。
ぷるんと弾力のある、少し薄い唇。
――美味しそうだな――
そんな感想を抱いたことに自分で驚き、慌ててかぶりを振った。
けれど、好奇心と欲望は止まらない。川崎は目を閉じて、俺の行為を震えながら受け入れている。何もしないで我慢することは出来そうにない。何か妥協案を探らないと、おかしくなってしまいそうだ。
時間にすればほんの数秒、考えに考えた結果。
「ん……っ？」

――川崎の唇を、指で弄ぶことにした。
唇の合わせ目を指でなぞると、川崎はくすぐったそうに身悶える。眉を微かにひそめるが、それでもいやとは言わない。
指で上下の唇をつまみ、合わせ目をなぞり、時々、ほんの少しだけ指を唇の間に侵入させる。
「んっ、んん……っ」
指を侵入させた時、一際大きく川崎の身体が震えた。けれど反応はそこまでで、やはり止めようとしてこない。
理性を焼き焦がす川崎の反応に、気が付けば下腹部がいきり立っていた。
我慢出来ずに、右手人差し指で入念に唇の合わせ目をなぞった後――ゆっくりと、綺麗な唇に割り入れた。
「ん……っ!?」
川崎が驚いて目を見開く。俺は川崎の反応にびくりとしながらも、指を入れていくのを止めない。ずぬぬと第一関節、第二関節まで埋まったところでようやく動きを止めた。
「うわ……っ」
自分で入れたにも関わらず、今は「呑み込まれた」という感覚が強い。
口内の熱く湿った独特のぬめり気に包まれて、まるで違う生き物のような気さえする。
指を引くと、ぬらぬらと光った人差し指が顔を出す。爪の部分を引き抜けばもう指は抜ける――というところで、川崎が頬をすぼめているのに気が付いた。微かに、指に吸い付いている。
湧き上がる衝動に、身体が震えた。
左手を川崎の頬に添え、右手人差し指を再び口内に埋め込んでいく。今度は止めることなく、ゆっくりと抜き差しをする。
「んふぅぅ……んっ、んんんっ、んんん……っ」
微かに指に舌が絡む。出し入れする度に濃厚に絡みついてきて、蛇に巻き付かれて食べられるかのような錯覚に陥る。川崎の目はうっとりと細められていて、もしかしたら今自分が何をしているのかも分

からないのかもしれない。
目の前で川崎と見つめ合いながら、何度も指を出し入れする。この行為が他の何を想起させるかなんて、お互い言わなくても分かるだろう。川崎の身体は芯まで火照っているようだった。
このままでは何をしてしまうか分からない――と思っていると。
リビングのドアが大きな音を立てて開いた。
「おトイレにわすれてたえほんよんじゃった！　……さーちゃん、はーちゃん、どうしたの？」
ドアが開く音がした瞬間、指を口から引き抜いて高速で身体を離した。そのため、ベッドの両端でぜいぜいと息を切らす高校生男女が出来上がっていた。
絵本読んでたのか……道理で長い訳だ。
川崎を見ると、つい先程までとは打って変わっていつも通りの表情で慌てていた。
「な、何でもないよけーちゃん」
努めて明るく振る舞いながらも俺に近付き、京華に顔を向けながらも自分の唾液で濡れそぼった人差し指をティッシュで拭く。もったいない……と思った俺は変態なのだろうか。
京華がトイレに置いていたという絵本をぱたぱたとリビングのテーブルに置いている間に、川崎がそっと顔を近付けた。
「……やりすぎたか」
「……やりすぎだって、ばか」
拗ねた顔で言う仕草は、どうしようもない程に可愛い。
「……だよな、すまん。今後はもうしないわ」
「あ、いや、その、別にいやって訳じゃ……」
「……え？」
「あ、ううん、その、な、何でもない！」
とんでもないことを聞いた気がした所で、会話は強制終了された。
京華が笑顔でこちらに戻ってくる。
時間にすれば、ほんの１０分程度。
京華がリビングを出て、戻ってくるまでの時間。

その時間が、俺と川崎の距離を、確かに変えた気がした。

続く。

（２３）

川崎家でのゆるやかな時間は続く。

王様ゲーム。

ツイスター。

サバゲー。

色々やった。

ごめん、全部ウソ。

なんか本当にごめん。

と、まあ、こんなどうでも良い冗談を言ってしまうくらいには上機嫌だったりする。

何かをしている時にあまり楽しめていないと、「ああ、この時間を他の事に充てていたらもっと色々出来たのに……」などと考えてしまうのはよくあることだ。一人で何かをする分には全て自分の責任に出来るから良いが、誰かと一緒の時にそういったことを考えてしまうと、途端にやるせなくなる。

けれど、この場所で過ごしている間は、全くそういうことを感じない。３人で和気あいあいと過ごす時間が楽しくてしょうがない。ぽかぽかとした春の陽気のような柔らかい空気が流れている。

気付けば昼ご飯の後も２時間程遊んでいた。

時計を見れば１５時。

俺とあっち向いてホイをしていた京華（超可愛い）が、俺の視線に釣られて時計を見ると、ぱっと笑顔を咲かせた。

「おやつ持ってくる！」

ソファからぴょんと降りると、とてとてと川崎の下へ寄っていく。

川崎が「はいはい、一緒に取りに行こうねー」と言って立ち上がり、京華の頭をくしゃくしゃと撫でた。

ぱたぱたとキッチンに向かう２人を見送ると、不意に眠気が襲ってきた。健康的に遊び疲れたようだった。今なら目を閉じれば一瞬で寝られそうだが、２人はあと１分もしない内に戻ってくるだろう。ちゃんと我慢しな……い……と――

目を覚ますと、１５時１５分だった。
俺はのび太か。
「あ、起きた」
目を覚ますと、隣で川崎が柔和に微笑んだ。
「……すまん」
頭をがしがしと掻いて辺りを見回す。川崎は俺と同じソファに座り、京華はもう一つのソファでおいしそうにドーナツを食べていた。足をぱたぱたと動かしながら、両手でドーナツを持って、目をきらきらさせながらもふもふ言っている。
「あ、写真と動画ならもう撮ったから大丈夫」
京華を見て反射的にスマホを取り出すと、川崎がさらりとすごいことを言ってのけた。何が大丈夫なのかは分からないが、まあ、あの凶悪なまでに可愛すぎる生き物の生態を記録に収めることが出来たのなら良しとしよう。
すまん、と改めて謝ると、川崎はふっと目を細めた。
「いいって。あんたの意外と可愛い寝顔も見れたし」
そう言って微笑む川崎の表情は信じられない程魅力的で、思わず言葉に詰まった。顔を逸らし、何とか応戦せねばと言葉を探る。
「……お前が顔真っ赤にしてる時の方がよっぽど可愛いだろ」
「え」
「え」
言葉のチョイス、ミス。
「あー、その、なんだ、川崎」
「え、な、なに？　どど、どうしたの？」
「今のはあれだ、寝言だ。そうだ俺は今寝てるんだ」
「……」
「やめろやめろ、顔を真っ赤にしながら俺の頭をわしゃわしゃするのをやめろ」
ツッコミで頭をわしゃわしゃするって斬新だとおもいましたまる。
「けーちゃんとはーちゃん、なかよしー」

ドーナツを食べて満足気にお腹をぽんぽん撫でながら京華が発した言葉により、俺と川崎は弾けるように身体を離した。

× × ×

京華はドーナツを食べ終えると、ぽてぽてと歩いてきて川崎の隣に座った。川崎に抱き付いてしばらく猫のようにじゃれついていたが、やがてくぅくぅと寝息を立て始めた。

「何この可愛い生き物……」

呟くと、川崎がにこりと微笑んだ。本当に可愛くてしょうがないのだろう。

川崎は京華の肩を抱いていたが、そこから膝枕することにしたようだ。京華を自身の太ももの上に寝かせると、頭を優しく撫でる。

「……何か、ほんと母親って感じだな」

「ん……まあ、この子が生まれた時からずっと面倒見てるから。両親が忙しいから、あたしが面倒を見ることが多かったし。だから、可愛くて可愛くて……」

そう言って京華を見つめる川崎の顔は、どこまでも慈愛に満ちている。心の中にぽかぽかとした幸せが満ちていく。

「……お前は良いお母さんになるな」

「っ!? んな……っ!? な、何言って……」

途端に顔が真っ赤になった川崎が、身体を動かさない代わりに京華の頭を高速で撫でた。京華がちょっと苦しそう。

川崎の動揺はものの数秒で収まったが、頬はまだ赤い。

「……あの、さ」

「ん、どうした」

「さっきの、その……あたしが買い物から帰ってきた時の、その……」

「……あー」

何をそんなもじもじと……と思ったら、俺が京華に「将来は京華はお姉ちゃんに似て美人になるぞ」と言ったことを聞きたいようだ。

「……別に、言ったままだって。京華の顔立ちを見てそう思ったんだよ」

「……あ、あんた、あたしのこと、そんな風に、その……」

川崎が耳まで赤くなる。俯いて俺に流し目を送る仕草が妙に色っぽい。どうやら、隠すことなく本音を話さなければならない流れのようだ。
……って、あれ？
もしかして、いや、もしかしなくても。
これって、立派な公開処刑なのではあるまいか？
「……ねえ、なんで何も言わないの？」
切なげに眉をひそめた川崎が、唇を震わせて婀娜っぽい流し目を送る。思わず見惚れてしまい、慌てて顔を逸らした。
「……別に隠したい訳じゃねえって。あんな本音、直接言ったら恥ずかしいだけだし」
「そ、そっか……」
川崎が何か言いたそうにしながらも言葉を切る。いくら俺みたいな朴念仁でも、川崎が俺に何を言ってほしいかは分かる。
でも、恥ずかしい。
死ぬ程恥ずかしい。
――なので。
「……交換条件だ」
「……へ？」
俺の言葉に、川崎が素っ頓狂な声を漏らす。京華を撫でる手の動きはぴたりと止まっていた。
「さっき、京華がトイレに行ってた間のこと。あんときお前がどう思ってあそこまで受け入れたのかを話すなら、俺もいくらでも本音を話すぞ」
「……な……っ、そ、そんなの……っ」
川崎が首まで真っ赤になる。部屋の温度まで上がったのかと思う程、川崎のすぐそばにいる俺も暑い。
川崎が俯く。長い睫毛が儚げに揺れて、あまりの美しさに吸い寄せられるように距離を詰める。
「あ……っ」
川崎が顔を上げる。俺と川崎の顔は目と鼻の先まで近付いていた。

「……言えないのか？」
「……そん、なの、無理……恥ずかしくて、言えない……っ」
――学校で見る、クールで恐い印象が強い川崎。
――家で見る、家族愛に満ちた優しい川崎。
そのどちらとも違う――瞳の中に確かに艶を纏った川崎の顔を知った。
「……そうか」
「うん……その、ごめん……」
川崎が目を逸らす。けれど、顔を離しはしない。
二人の目は合っていない。けれど、僅かに、ほんの少しずつ、距離が縮まっていく。
川崎が微かに口を開いて呼吸をすると、艶っぽい唇の隙間から甘い匂いが漏れた。
川崎と目が合う。
ごくりと息を呑む。
川崎が、目を細めた。
俺も目を細める。
上瞼と下瞼の距離が縮むのと同じように、二人の唇が近付く。
川崎が目を閉じた。
俺はうっすらと、それでも確かに川崎の表情を捉えながら。
二人の唇が――
「さーちゃんとはーちゃん、何してるのー？」
ソファから転がり落ちた。
「け、けーちゃん!?　何でもない、何でもないよ!?」
川崎が京華に必死で弁明しているのを横目に、俺はカーペットの上で頭を抱えて転がる。
転がり落ちたのは痛いには痛かったが、それ自体は割と平気だ。
それ以上に、俺が今やりかけていたことを思い出して、頭を抱えていた。
……俺、今、え、何、俺、え？
頭の中がバグったのか、まともな思考が出来ない。

え、俺今、川崎と、え、俺、え？　何、俺、え？　あれ？
ダメだ、語彙が回復しない。
しばらくの間うんうんと唸ってようやく顔を上げると、京華はもう一つのソファに移って、大きなくまのぬいぐるみに抱き付いて寝ていた。この子可愛さで人を殺せると思います。
川崎を見ると、ソファの上で正座して、身体を本来座る時の逆の向きにして、背もたれに顔をうずめてうんうん唸っていた。こっちはこっちですげぇ可愛かった。
「……川崎？」
「ひっ!?　な、なに!?　どうしたの!?」
まるで背中を鞭で打たれたかのように飛び跳ねて、高速で半回転して俺と目を合わせる。平静を装っているつもりなんだろうが、表情は恐ろしい程ぎこちない。
さて、ここで何と言う言葉をかけるべきか。
――きっと、今日あったことをリセットすることは出来る。
「俺たちは今日、何もしていない。いいな？」そんな言葉一つで、多少の遺恨はあれど話は終わるのだ。
けれど、俺は――そうはしたくなかった。
何故かは分からない。いや、理由は分かっている。けれど、心のどこかでまだ整理が付いていない。
だから、俺は。
「……まあ、その、ゆっくり……な」
――こんな曖昧な言葉を、頬をぽりぽりと掻いて、顔を背けながら言った。
川崎をちらりと見ると、予想外の言葉だったからなのか、ぽかんとしていた。
やがて頬を緩めて柔らかい笑みを浮かべると、
「……うん、わかった」
今までで一番温かい声音で、川崎が答えた。
このやりとりが何を意味するかというのは、正直二人ともよく分かっていないだろう。

それでも、今日一日を通して、俺と川崎の距離感は明確に変わった。

この後、京華が起きるとまた同じように遊んで、気付けば１８時を迎えていた。

帰る時に京華に抱き付かれて和み、川崎が名残惜しむように微笑んで手を振ってくれたことに、どうしようもない程の幸せを感じた。

この日の夜。

川崎からＬＩＮＥで電話がかかってきた。

『今日はありがとう』

『おう、こちらこそ』

『けーちゃんも喜んでた』

『可愛すぎたな』

『くすっ、ほんとにね……。あ、そ、それで、なんだけど……』

『ん、どうした』

『……』

『川崎？　おーい、川崎―？』

『……』

『放送事故か。なんだ、どうしたんだマジで』

『……お……』

『お？』

『お、お礼を、したいん、だけど……こ、今度、どこか出かけない？』

『……それは……他に誰と行く？』

『あ、いや、その……ふ、二人で……い、いや！　やっぱいい！　何でもない、ごめん、忘れて！』

『待て待て待て。いやなんて一言も言ってないぞ』

『え……い、いいの？』

『……まあ、うん、歓迎しよう』

『何で偉そうなの……』

俺の言葉に川崎が呆れるように笑うと、その後はつらつらと雑談しながら、出かけるに当たっての打ち合わせを行った。

電話を切ると、ベッドの上に転がった。
そして変な声を上げた。
案の定、小町に壁ドンされた。下手したら踵で蹴りつけたんじゃなかろうか。
――何だこのラブコメ展開、とか。
――俺から誘った方が良かったのかな、とか。
――ていうか、いやいや、何だこのラブコメ展開、とか。
川崎のことで頭がいっぱいになってしばらくの間悶えに悶えた所で、疲れて眠りに就いた。

続く。

（２４）

川崎家に二度目の訪問をした日から、２週間程経った土曜日。

俺は、家から最寄りの駅前に来ていた。

春が足早に去っていって、早くも夏の匂いがするのがこの時期だ。日にもよるが、今日は中々日射しが強い。雲に邪魔されることなく陽光が降り注ぎ、コンクリートが照り返す熱は時間を追うごとに強まっている。しかし幸いにも湿度は低いので、汗をかいてもそこまで不快には思わない。もう少し経てば梅雨がやってくるが、そこまでは束の間の夏気分を味わえる訳だ。

街行く人を眺めれば、この季節の複雑さが分かる。冬の気配が色濃く残る厚手の服を着る人、夏を一刻も早く味わいたいのかＴシャツ１枚の人、或いはすぐに調整出来そうな重ね着をしている人など、様々な人がいる。

集合時間は９時。妙に早いなとは思いながらも、何だかんだで３０分前には着いていた。丁度ベンチがあったので座ってのほほんとしていると、陽の光にふっと影が差したので顔を上げた。

「……うっす」

「……おはよ」

気だるげな声の主は、声音にそぐわない可愛らしい赤面顔を浮かべていた。

「……」

「……なに？」

「あ、いや……」

言葉が出てこない。

早起きした為に眠気の靄がかかった脳内が、瞬時に晴れ上がっていく。

川崎は黒のキャミソールにブラウスを羽織り、小さなバッグを手に持っていた。すらりと伸びた身長と豊かな身体のラインが引き立っていて、あっと言う間に視線が固定されてしまう。

何より驚いたのは、ミニスカートを履いていたことだった。何とな

く私服ではパンツスタイルを想像していたのだけど、シンプルながら膝上の短めのスカートを履いている。涼やかさを損なわず、それでいて可愛げが足されていて、頬が緩むのを堪えるのが大変だ。
「……だから、なに？」
川崎が俺の視線に訝し気な目を向ける。微かに頬を赤らめているから、不機嫌という訳ではないようだ。
「……いや、うん、なんだ、その、良いな、その格好」
「……あ、そ、そう……っ」
川崎の口元がもにゅもにゅと動いたかと思うと、右腕でばっと口元を覆った。かっこいいんだか可愛いんだか分からない仕草だ。
「……ん？」
川崎の右手をよく見ると、缶ジュースを２本持っていた。
ああ、これ？　と、違う話題を見付けてほっとしたように息を吐いた川崎が説明を始める。
「結構暑くなるって思って。今日はお礼で来てもらってるんだし、これくらいはしないと」
「別にいいのに……」
言いつつも、差し出されたのがＭＡＸコーヒーだったので反射的に受け取ってしまう。やだ、餌付けされてる……。
「他はなるべくこういうことはしないから。気にしないで」
どちらかが奢るということに抵抗がある（体験は無い）ので、こうもはっきり言ってもらえるというのはありがたかった。
「ん、わりいな、ありがと」
礼を言うと、川崎は俺の隣に座って、缶のプルタブを開けて先に飲み始めた。同じＭＡＸコーヒーであることに気付いて、思わず頬が緩む。
「……あっま……っ」
川崎が缶から口を離すなり発した第一声は、何とも苦々し気だった。甘いのに。
「慣れたら病みつきになるぞ。俺は最初から病みつきだったがな」
そう言いながら、俺もプルタブを開けて糖の塊（すごい言い方だ）を

身体に流し込む。例えばインドのチャイは日本で飲むと甘すぎると感じるが、現地では物凄い暑さが故にその甘さがとても合っているのだそうだ。恐らくチャイと同じ感覚で、ＭＡＸコーヒーも勉強で脳に糖分が不足した時にとても効くのだが、今日みたいにシンプルに暑い時もまたたまらなく身に染みる。

俺が気持ち良く3分の1程を一気に飲むと、川崎はちびちびと飲んで、流し目を送ってきた。

「……ほんとに？」

舌をちろりと出してコーヒーの液を舐めながら向けられた瞳には、川崎が意図していないであろう色気がたっぷりと乗っていて。

「……あ、ああ、うん、絶対そうだぞ、うん」

動揺がバレないようにしようとしたら、余計バレバレになってしまった。

川崎は俺の言葉にふっと優しく呆れ笑いを浮かべると、一気に残りを飲み干した。そして片眉を下げて再び舌をちろりと出すと、俺に手を伸ばした。何のことやらと思ったが、どうやらお前もさっさと飲み干せということらしい。川崎の視線の先にはゴミ箱があった。歩きながら飲むのは締まらないしな、と思い急いで飲み干すと、川崎に缶を手渡す。

「じゃ、行こ」

ゴミ箱に缶を捨てて戻ってきた川崎が柔らかに微笑む。ああ、と返事をして立ち上がると、ちょうど風が吹き抜けた。

「涼しい……」

川崎は風が吹く方向に顔を向けると、目を細めて髪を耳にかけた。

川崎からすれば、ごくごくありふれた日常の一瞬だったのだろうけれど。

俺からすれば、川崎がふとした瞬間に見せた美しい横顔は、しばらく忘れることはないだろうと思えるくらい脳裏に強く焼き付いた。

身体の熱を拭って、心をも軽くしてくれる風に向けた川崎の微笑み。

その微笑みが自分に向けられたら、一体どれほど嬉しいだろう――

と、何とはなしに、そんなことを考えた。

×　×　×

行く場所は移動しながら説明する、と川崎は言って、俺の半歩前を歩きながら駅に入っていく。平日ならスーツ姿の人で溢れる空間だが、今日は土曜日なので私服姿の人がサラリーマンやＯＬに取って替わってこの場所の主役になる。流れている空気も、平日よりもかなり弛緩していた。楽し気な学生が醸し出す雰囲気というのも大きいだろうが、普段は気が張り詰めた社会人が休日にのんびり出かけようとしているのもこの空気を醸成する大きな原因となっているのだろう。

「東京に行くのか」

２人が乗り込もうとしている電車を見て尋ねると、川崎は頷いた。何とも楽しそうに微笑む川崎は、何の文句も付けられない程可愛い。学校でこんな笑みを振りまかれるとそれはそれで困るから、こういった時にだけ見る事が出来れば良いかなと思った。

間も無くしてホームに電車がやってきたので、ドアの左側に寄った。電車からどかどかと人が吐き出されると、俺と川崎はするりと入り込む。

――一番前に並んでいたので、どれくらい混みそうなのかを予想してはいなかった。

実際は、俺と川崎が車両の壁に寄ってからものの数秒で、通勤ラッシュとはまではいかないまでもかなりの人口密度になってしまった。

「結構混んでるな……ん？」

ふと、目の前に川崎のうなじがあってどきりとする。あれ、今川崎の首筋が見えるということは……。

「……思ったより、きついかも……っ」

川崎の少しばかり苦しそうな声が聞こえる。

川崎は俺に背を向けた状態で、壁に押し付けられていた。まるで俺が川崎を背中から押さえ付けているかのようだ。

「……ここ、どれくらい乗るんだ？」

「……３０分くらい」

「……ここから空く見込みは？」

「……空くどころか、もうちょっと混む、かも」
川崎の言葉を聞いて天を仰ぐ。
……何も、過ちを起こしませんように……。
続く。

（２５）

過ちを犯しませんようにとは願いましたけども。

数分おきにドアが開き、一瞬人口密度が緩んだかと思いきや次の瞬間一気に圧力が増すのを数回繰り返すと、ついさっき自分が願った内容は、どんどん現実味の無い絵空事と化して行った。

現在の状況はと言いますと。

「川崎……大丈夫か？」

「んっ、うぅ……っ、だ、大丈夫……じゃ、ない、かも……っ」

「……だよな……」

――川崎の身体の前面が車両の壁に思い切り押し付けられ、俺は川崎の顔の両脇に手を付けて必死で圧力を逃している。初めは吊り革を掴んでいたのだが、途中からその場所からも更に押しのけられて、今の壁ドンもどきの状態になってしまっていた。

「うぅ……っ」

「……っ」

顔が川崎の耳元に必然的に近付いてしまい、川崎が悩ましく呻くのをかなりの近距離で聞いてしまう。

車両全体ががたんと揺れた。

「うぁ……っ、これ、だめ……っ」

窮屈に感じたのか、足を揃えていた川崎がおずおずと足を開く。可愛らしいミニスカートを履いた状態で俺と密着した状態で足を開き、内股になった。俺は川崎の腰にぐりぐりと自分の身体を押し付ける形になっていて、傍から見れば一つの行為しか想起出来るものが無い。天国と地獄がないまぜになっている状況は、思考能力を地の底まで落としてしまう。

車両が揺れる度に腰を突き出してしまい、川崎の尻にぐりぐりと圧がかかる。衣服越しでも川崎の尻は柔らかいのに弾力があり、今のような状況でなかったら全力で楽しんでしまいそうだ。気のせいか、川崎が漏らす声が徐々に艶っぽくなってきて、それが興奮に拍車をかけた。

「……ひ、比企谷……？」
「……どうした？」
「なんか、さっきから硬いのが、あたしの、その後ろに……っ」
「……っ」
視線をちらりと下にやる。
当たり前だけど。
めっちゃ勃ってた。
「……何だろうな、不思議だ」
「とぼけんな変態……っ」
バレてた。
俺の人生はここで終わりなのかにゃー。頭が真っ白すぎて語尾がおかしくなってしまったでごんす。
「……わりい、わざとではな――っ!?」
このタイミングで、乗り込んでから一番の揺れが来る。車両の中心に居る人から始まる揺れの波は、俺たちのいる端に伝わる時点で最大級のものになり、弁明途中の俺の腰を容易く前に突き出させた。
「あっ、や……っ！」
川崎の肩に一瞬顎を乗せて、衣服越しだろうと挿入しようとしているかのように腰を打ち込んでしまう。川崎の声が耳朶を打ち、無理やりするのも悪くないんじゃないか……などという邪な考えが頭を過ぎった。
川崎がちらりと真横にいる俺を見やる。目に涙を浮かべながらも、不思議と嫌悪感は無いように思えた。
「……あんたが悪くないのは分かってるけど……変態」
「……すまん」
「……はあ、あたしがあんたに背を向けてるからこんなことになったのかな……」
ふむ、と思考を巡らせる。
川崎が後ろを向くことで、確かに俺は立ちバッ……あられもない行為（言い直す意味の無さよ）を想起してしまった上に、川崎の尻の柔らかさを堪能……味わってしまった（言い直す意味の無さよａｇａｉ

ｎ)。この体勢が招いた結果は甘美……惨憺たるものと言えるだろう。
この密着状態はあと１５分は続く。それなら一体どうしたら良いかと考えるが、一向に良い案が浮かばない。
うんうん唸る俺に、川崎は一つの案を提示した。
「あたしの顔を見てれば、あんたも緊張感を保てるんじゃない？」
「え」
それってまさか……という嫌な予感はすぐに当たり、駅に着いて車両の密度が薄まった瞬間に川崎がくるりと身体の向きを変えた。頬を赤らめながらもどこか得意気な様子を見る限り、どうやら本気でこの策が状況を改善出来ると思っているようだ。
俺、知ってる。今の川崎の行動を何て言うか、知ってる。
自殺行為ってやつだ。
「どう？　これならあんたはずっとあたしの反応が見える訳だから、少しは……ひぁっ!?」
川崎が幾分得意気に――何気にこんな表情を初めて見た――喋り出した直後、発車と同時に大きく揺れた。俺は川崎の身体に突っ込まないように、川崎の顔の両脇に見事に壁ドンを決めた。俺みたいな人種はキザなことを意識的にやろうとした所で一生かかっても出来ないけれど、追い詰められた状況でなら結果論的に可能なのだということを覚えた。何これ今後一切役に立たない経験則。
「あ、え？　ちょっと、これ、え、え……？」
川崎が大パニックだ。やばい、何か今までの俺の生き方とかキャラとかを全無視してキスしたい。いや、いかんだろ俺。落ち着け。
「いや、これ自体はさっきもやってたけど……」
呟くように言うと、川崎との距離の近さに驚く。川崎はすらりと身長が高いため、顔の位置が異常に近いのだ。具体的に言うとおでこにキスが簡単に出来る。いかん、思考回路がショート寸前というかもはや完全にバグっている。
「……もしかして、さっきよりやばい？」
川崎はここに来てやっと、この危機的状況を認識したようだ。

「……いくらお前の顔を見て緊張感を保とうとしてもな、物理的に……うおっ!?」
「ひぁっ!?」
大きな揺れに、俺は川崎に思い切り体重を掛けそうになる。この時、川崎の後頭部と壁に僅かな空間があったこと、川崎が慌てていてその状況を認識していないことに気付いた。
――だから、反射的に。
右手を川崎の頭に回して、川崎の頭が壁にぶつかるのを防いだ。
顔がついさっきまでと比較にならない程近い。川崎の瞳孔まで良く見えて、さっきＭＡＸコーヒーを飲んだ為か口からは甘い匂いがする。
「……あり、がと……っ」
「お、おう、無事で良かった」
川崎が俯いて返事をする。たどたどしく答えながらも、俺は川崎の頭から手を離せない。それどころか愛おしむように撫でてしまう。川崎は俺の行為を嫌がることもなく、それどころか頬を緩ませた。
またしても揺れる。
今度は左手を川崎の背中に回す。
またしても揺れる。
川崎を守るという大義名分の下、ぎゅっと抱き寄せる。
またしても揺れる。
川崎の身体の柔らかさと甘い匂いに、下腹部が加速度的に反応する。
「比企谷……っ」
苦しさや羞恥の色が無い、どこか甘えたような蕩けた声音だった。
「……どうした」
「あたし……汗、大丈夫？　その、匂わない……？」
川崎の言葉に力が抜けると同時に、ふと視線を下ろす。
――黒のキャミソールは川崎の白い肌に妖しく吸い付き、豊かな双丘が俺の身体と密着することでいやらしく歪んでいる。見事な谷間にはじっとりと汗が滲んでいた。

ごくりと息を呑んで、顔を逸らす。
「正直に言っていいか」
「……ん、いいよ」
「良い匂いしかしない。何でこんな超良い匂いなの？」
「……ばかじゃないの」
そう言って川崎が目を細めると、車両が揺れると同時に俺の腰に手を添え、胸元に顔をうずめた。俺は川崎の青みがかった黒髪に口元をうずめて、鼻腔を包む甘い匂いに酔いしれた。
電車が揺れる度に、硬くなった股間が川崎の腹に押し付けられる。その度に、川崎は俺の胸で小さく喘いだ。
抱きしめる力を強くしても、川崎はいやがらなかった。

× × ×

駅のホームにベンチがあります。
そこに、２人の男女がいます。
年頃は……見た所、高校生でしょうか。
２人とも、顔を両手で覆っています。
いないいないばあをしているんでしょうか？
いいえ、目の前に子供はいません。そもそも２人同時にいないいないばあをするのも斬新すぎます。両方いっぺんには見れません。
では、何をしてるのでしょう。
ホラーごっこでしょうか。
手を離したら実は化物の顔が……とか、そういうパターンでしょうか。
そんなことはありません。手をどければそこにいるのは美人＆目以外はまあまあという男女です。
では、何でしょうか。一体、何をしてるんでしょうか。
正解は――
「電車の中で熱に浮かされるままにやらかした自分たちの行為を死ぬ程恥じて、何か場を取り繕う言葉を発しようにも何を言ったら良いかも分からず、取り敢えず視界を閉ざして落ち着こうとしている」です。
ウケますね。

ていうか、うん。
これ、俺と川崎です。

「……」
「……」
「……」
「……」
駅の喧騒の中、2人の間にだけ地獄のような沈黙が流れる。周りの喧騒を全て吸い取ってしまって、ここだけものの見事に無音の空間が出来上がっている。
「……なあ、さっきのこと「ちょっと待ってもう少し」お、おう、すまん」
まだ回復していないらしい。
3分後。
「……さっきのは、その……っ」
川崎のくぐもった声がする。何を言わんとしているかは分かる。さっきの記憶を無かったことにしようと言うのだろう。確かに、2人の間でそう取り決めれば、無かったことには出来る。
けれど――
「……なんか、もったいねえなぁ……」
手をどけて、ぼんやり駅を眺めながら呟くと、
「……もったいないって言うな……っ」
同じく手をどけた川崎と目が合った。
しばしの沈黙。
「……取り敢えず、行くか。目的地はここから近いのか？」
「え、ああ、うん、歩いて5分くらいだけど」
「じゃあ行くか。風でも浴びて頭を冷やさないとな」
「……うん」
今しがたの羞恥プレイ（羞恥プレイって言っちゃった）のことはうやむやにして歩き出す。
並んで歩く川崎の顔を見ると、電車の中で見た艶めかしい肢体を思

い出してごくりと喉が鳴る。
煩悩を振り払うようにぶんぶんと首を振ると、川崎はきょとんとした目で俺を見つめ、それから呆れるようにくすりと笑った。
たったの３０分間でいきなり濃すぎる展開になったが、今日という一日はまだ始まったばかりだ。

続く。

（２６）

駅を出て、川崎に付いて歩く事５分。
辿り着いたのは、初めて見る映画館だった。
「……映画か」
ぽそりと呟くと、川崎が振り向いてバッグから封筒を取り出す。
「親が知り合いからもらったのをくれたの」
「へえ。何の映画なんだ？」
「……ペアチケット、ってことしか分かってない。親には『中は現地に着いてから見て』って言われて……」
いつものはっきりとした喋り方と違う、もごもごした言い方に首を傾げる。
「……何でそんな怪しすぎるのを受け取ったんだ？」
「い、いや、その……スマホいじってるとこ、親に見られて……」
「んん？　それが何でチケットを貰う流れになるんだ？」
「……そ、その、あたしがにやついてるとか言われて……」
「ん、んん？」
「……『あんたもそういう年頃なんだね』って、その……」
「……あー、そうか、うん、分かった」
追及したら死ぬ程恥ずかしくなることが分かったので、早めに手を引くことにした。取り敢えず、チケットをくれたというのは川崎の父ではなく母だろうなと思った。
「じゃ、取り敢えず中身を確認だな」
「うん」
ぶんぶんと頭を振った後、いつもの調子に戻った川崎が封筒からチケットを取り出す。
そこには、如何にも怖そうな映画のタイトルと。
「カップルシート」という文言が書かれていた。
『……』
色んな意味で大丈夫か……と、川崎と目を見合わせる。川崎は顔が半分青ざめて、半分真っ赤になっていた。

フレイザードかしら。
フィンガーフレアボムズとか使えるんだろうか。
×　×　×
カップルシートの存在は知っていたが、実物は見たことがない。ネット上で何かの拍子に見ることはあったが、場所によってまちまちのようだった。
まあ、いくらそんな露骨な名前でも、お互い節度を守っていれば何とかなるかと思ったんだけれども。
『……』
映画館の中に入って、席番号を確認した俺と川崎は絶句した。
そこにあったのは、大きなソファと2つのクッション、そして薄い仕切りだった。
2人して無言で座る。
やっべ、超柔らかい。
前後左右を見渡すとどこも同じような構造をしているようで、スクリーンはちゃんと見えるが周りの客が一切見えない。映画館の迫力をそのままに、2人きりの部屋で見ているような気分にさせてくれるようだ。
ソファを見る。川崎は若干の距離を置いているが、それでもソファの両端までは十分な余裕がある。というかこれ、よく考えたらごく普通に寝ることが出来る。
カップルシート。
仕切り。
寝ることも出来るソファの広さ。
……。
……これ、絶対上映中に変な声が聞こえるだろ……。
川崎をちらりと見やる。
膝に手を乗せ、ふるふると震えている。恐らく顔は真っ赤だろう。
「……まあ、気楽に楽しもう。な？」
「う、うん……」
川崎はおずおずと返事をしたが、他のホラー映画の予告に死ぬ程び

びっていた。そういやこいつすげえ怖がりだったな……。あ、ちょっと涙目だ。

……。

……目覚めてくれるなよ、封印されし下半身の欲望……。

厨二病っぽい言い方をしても、気は紛れなかった。

× × ×

カップルシートに腰を下ろしてしばらくすると、映画が始まった。

ついさっきまでの見えやすい画質が一変し、画面がじじ……と嫌な音を立てて荒くなる。まるで何十年も前のビデオで撮ったかのようだ。

突然、画面中央に女性の遺影が映る。何とも物憂げな顔が白黒で大きく出て、川崎が「ひ……っ！」と声を上げる。

落ち着いた、というよりはどこか冷めた女性のナレーションが入る。

『私の姉が、仕事場で死んだ。

急病などではない。建設現場のような危険が伴う場所でも何でもない、ごく普通の事務仕事をやっているのに、事故死と言われた。

そんな筈は無かった。姉の同僚と仲が良かったのだけど、その人によれば姉は給湯室で死んでいたらしい。まるで何十階もあるビルの屋上から飛び降りたように、全身がぐしゃりと潰れていたという。それなのに、警察はまるで詳しい捜査を避けるかのように事故死と断じた。その理由は今でも分からない。私に姉の死に様を教えてくれた姉の同僚も、私と話した3日後に失踪した。これは何てことのない勘なんだけど、きっと彼女はもう生きていないと思う』

恐らくナレーションをしている人の姉と思われる遺影に、カメラが微妙に近寄ったり離れたりしながら、淡々と言葉が続く。

「……うぅぅ……っ」

川崎が、気付いたら密着していた。よほど余裕が無いのか、俺の腕に自分の胸を押し付けている。俺自身もかなりビビっていて、川崎の胸の柔らかさを感じる余裕があまり無かった。

映画は、主人公と思われる女性が姉の死の真相を探るというものの

ようだ。ジャンルは恐らくサイコホラーというものに含まれるのだろう。突然驚かせるようなことはあまりしないのだが、この作品の空気が何だか常に恐ろしい。呼吸をするのと同じくらい自然に、ふとした瞬間に人が死ぬのだ。主人公にとって大切な人も、そうでない人も。見ているだけで冷や汗が止まらない。

これは正直、ホラー大好きな人でなければ最後まで見るのも辛いぞ……と思っていると、川崎がスクリーンを凝視しながらずっとぶるぶる震えている。

「お、おい、大丈夫か？　……大丈夫じゃねえよな」

川崎に話しかけると、ぎぎぎとこちらに振り返る。微かに歯がカチカチと鳴っていた。

「ご、ごめん、これ、ほんとに無理……ほんとにごめん、……出ていい？」

「ああ、これは流石に俺もきつい。出るか……」

多くの人が俺たちと同じように感じているようで、普通の映画館ならいざ知らず、カップルとなると多くの女性が「ねえ、帰ろうよ……」と言っているのがそこかしこから聞こえる。間もなくして、最初の離脱者2人の足音が映画館の出口に向かった。

――その直後。

「きゃあぁぁぁぁぁぁ!!」

「うわぁぁぁぁぁぁぁ!!」

『!?』

おぞましい悲鳴が映画館中に響いた直後、どたどたどたと慌ただしい足音がして、つい今しがたここを出ようとしていたであろうカップルが元の席に戻るのが分かった。

ざわめきが広がる中、映画が突然ぴたりと止まり、文字だけで説明が流れた。

『今回はとっても怖い映画とカップルシートのコラボということで、せっかくの機会を逃されるのは勿体無いと思いました。そのため、出口にはちょっと逃げづらくなる仕掛けをしています。それを見たらもっと怖くなれますので、もし現時点で何ともないと言う方がいらっ

しゃいましたらぜひこの部屋を出ようとしてみてください。……逃げられれば、ですが』
『……っ』
俺たちだけでなく、部屋中で息を呑む音がする。
『なお、本当に具合が悪くなられましたら、遠慮なく座席の下の緊急呼び出しボタンを押してください。通常スタッフが迎えに上がります。そこまでする必要が無い状況なら、これに便乗してどうぞたっぷりといちゃついてくださいね』
……このお知らせが、何で全て不気味に歪んだ白色の字だったのかは分からないが。
取り敢えず、逃げられないということは分かった。
川崎を見ると、固まっている。
どうすれば……と考えている内に、再び映画が始まった。
「……なあ、川崎」
「……な、なに？　……あ……っ」
頭を撫でると、気持ち良さそうに目を細めた。しかし次の瞬間またしても恐怖シーンに突入して、川崎の余裕が削り取られる。
「取り敢えず、目を瞑って耳を塞いどけよ」
「う、うん……っ」
しおらしくなった川崎が、俺にぴたりと寄り添って目を瞑って耳を塞ぐ。しかしこれでもやはり音は微かに聞こえてしまうようで、川崎は「うぅぅ……っ」と小さく唸っている。
川崎の背中に腕を回して、左肩を抱いた。そして川崎の左手に自分の手を重ねる。こうすれば音がもっと聞こえなくなるだろうと思ったのだけども、川崎はどういう訳か目を見開いて俺を見つめてきた。目の前で恐怖シーンが流れているのに、俺も川崎も互いに見つめ合って映画をまるで気にしていない。
川崎が両手を耳から離し、俺の腕を抱き締めた。
「お、おい、俺の手だけじゃ聞こえちまうだろ。良いのか？」
「うん、多分、もう大丈夫……」
何が大丈夫なのか、とも思うが、川崎は本当に平気そうだ。それで

も両耳を塞いだ方が……と思い右手を伸ばすが、どうも体勢が不自然になって塞ぎづらい。
「……あー、川崎。お前の耳を塞いどきたいから、身体ごとこっち向けてくれるか」
「？　……あ、うん……っ」
初め首を傾げた川崎だが、数秒の時間差でぽっと頬を赤らめた。身体をこちらに向けてもらって、右手で川崎の左耳を、左手で右耳を塞ごうと思ったのだけども。
――川崎はどういう訳か、靴を脱いでソファに上がり、四つん這いでこちらを向いた。
「え、ちょ、川崎、えっ？」
「え、違った？　こ、こうじゃない？　ご、ごめん、やり直す」
「い、いや、いい、すまん、大丈夫だ、これで問題無い」
「う、うん、わかった」
お互いテンパった末、結局四つん這いでうっとり顔を俺に向ける川崎という構図が出来上がった。
よし、落ち着け俺。
じっとりと汗で湿った艶めかしい胸の谷間に手を突っ込みたい。
あれ、全然落ち着いてないぞ。おかしいな。
ていうか何で、耳の塞ぎ方一つでこんなことになってんだ？
「よ、よし、じゃあ耳を塞ぐぞ」
「う、うん……きゃあっ!?」
映画で女性の悲鳴が響くと川崎が跳び上がって驚いて、俺に飛びついてきた。
『あ……っ』
仰向けに寝転がった俺の胸元に、川崎が顔をうずめていた。
『……』
そろりと顔を上げた川崎と目が合う。
互いに無言。
映画の内容はまるで頭に入らない。
「……比企谷？」

「……どうした」
「……その、もう少し、このままでも良い？」
「おう、いいぞ」
「ありがと」
平静を装っているが、興奮しすぎて頭が爆発しそうだった。
何も起こらない訳が無い。
というか、何もしない訳が無い。
ついさっきの電車よりも、遥かに危険な状況になっていた。
続く。

（２７）

映画は続く。普通に見れば身の毛もよだつ、最後まで見ることさえ厳しい程恐い映画が。

しかし今は、その映画の内容もほとんど頭に入ってこない。

カップルシートとして用意された、人一人横になれるソファ。そこに俺が仰向けになり、川崎が覆いかぶさっている。

川崎は身長が高い割にとても軽く、そして上から下まで柔らかい。男と女でこうも違うものなのかと驚く。

川崎を見るとどこか惚けていて、時折聞こえて来るホラーシーンの悲鳴にびくりと反応するが、すぐにまたぽーっとした表情に戻る。このソファの内と外で、時間の流れさえ違う気がした。

「か、川崎」

「……ん、なに？」

「その、なんだ、いつまでこの体勢を維持すると良いでありましょうか」

いつの時代の人なのかも分からない言葉を使ってしまった。川崎はくすりと笑ったが、映画にびくついて身体を密着させてきた。

「……この映画が終わるまでは、離れるのは無理かも」

生殺し宣告を受けた。

「……その、良いのか？」

色々な意味を込めて言う。柔らかい女体と重なって既に下腹部は全力で反応してしまっていて、正直言えばこの状態がバレる前に一刻も早く離れてほしかった。肩を抱くとかでも十分ではと思ったが、

「……ん、大丈夫」

と言って、あろうことか甘えるように抱き付いてきた。そうか、行為の時は甘えるタイプか……などと考えた瞬間、下半身に更に血流が集まってしまう。このタイミングでいかがわしい想像をするのは不可抗力だと思う。

居心地の良い場所を探しているのか、川崎がもぞもぞと腰を動かす。まずいと思い止めようとしたが、間に合わなかった。

「……ん？　比企谷、これ……って……っ」
「……」
　無言の肯定をすると、川崎は俺の胸板に顔をうずめてぷるぷると震えた。しばらくすると、上目遣いで俺を見た。
「……変態……っ」
　スクリーンの光に照らされた顔は真っ赤に染まっていて。申し訳無いという気持ち以上に、悪戯心が湧いてしまった。こほんと咳払いをして、川崎の顔を真っ直ぐ見つめる。
「……いや、この状況でこうならない方が男としてまずいと思う」
「え……っ、そ、そうなの？」
「だって川崎とこんな風に抱き合ってるんだぞ。めっちゃ柔らかいし、良い匂いするし、正直俺に襲われないのを感謝してほしいくらいだな」
　言い過ぎたか……と思ったのだけど、川崎は無言で抱きしめてきた。川崎の背中にそろりと両腕を回して抱きしめると、思ったより細い川崎の身体がびくりと跳ねる。
「……ぁ……っ」
　消えそうな程小さい声を漏らして、川崎は身を委ねてくる。
　これは、一体どういうことなんだろうか。どこまで許してもらえるのだろうか。
　周りの音に耳を澄ますと、あちらこちらからあられもない声が聞こえてくる。肉と肉がぶつかり合うような音も聞こえて、この部屋の中が完全にピンクな空間と化しているのが分かる。俺も川崎の、この空気の影響を多分に受けていることが分かる。
　ごくりと喉を鳴らして、右腕を川崎の背中から脇腹へと滑らせる。川崎はぴくりと反応したが何も言ってこない。静かな息遣いが微かに聞こえるだけだ。
　川崎を背中から尻にかけてじっくりと撫でる。
「うあ……っ、あっ、んっ、んんん……っ」
　顔を俺の胸にうずめたまま、悩ましい声を漏らす。Tシャツ越しにでも温度が伝わりそうな程熱い息が、ゆっくりと官能をかき立ててく

る。
　両膝を立てて、川崎を強く抱きしめると同時に股間を押し付ける。スカートよりも柔らかい感触がすると同時に、川崎が急に顔を上げた。泣きそうな顔で口元を歪め、自分の頬を俺の頬にくっつけるように抱き付いてくる。
「だめ、何やってんのばか、だめだって……っ」
　言葉では力強く止めてくるが、声は弱々しく震えていて、嗜虐心を煽ってくる。川崎の肌は汗でしっとりと湿っていて、素肌が微かにでも触れ合うと甘い痺れが走った。
　抱きしめる腕に力を込めて、下腹部を押し付ける。柔らかい生地をぐにぐにと押し込む度に、川崎は俺の腕の中で豊満な身体をくねらせ、艶っぽい息を漏らした。
「あっ、んんっ、だめ、ほんと、だめ……だめだから……っ」
　耳元で熱っぽい声で何度も囁かれて、止めるどころか更に腰を動かしてしまう。川崎は身体をよじって逃げようとするが、本気で抵抗しているようには思えなかった。
「……本当にだめなのか？」
　耳元で囁くと、川崎は可愛らしく眉を八の字にして睨んで来た。
「……ばか……っ、信じらんない……っ」
　身体の奥底がざわりと波打つ。行為を止めるという選択肢が頭の中から消え去った。両手で川崎の尻を掴むと、指が容易く沈み込んだ。
「っ!?　ちょっと、何触って……んぁぅぅっ！」
　スカートの上からでも豊満な尻の感触が分かり陶然とする。沈み込む時はどこまでも柔らかいのに、きちんと跳ね返す弾力を備えている。むにむにと触りながら、尻をこちらの下腹部に近付けて、隆起した部分に川崎の大事な部分を押し付けた。
　……にちっ、にゅちっ、にゅちゅ……っ。
「あっ、やっ、うそ……っ」
　微かな、けれどはっきりとした水音が聞こえて、川崎の顔が急に熱くなる。何の音であるかは互いに分かっていて、俺は更に興奮し、川

崎は羞恥のあまり動かなくなってしまった。
そこからは、互いに無言だった。
俺は聞こえてくる水音が少しでも大きくなるように身体を押し付け、川崎は俺の耳元で荒い呼吸を繰り返す。
甘い匂いに包まれて、心が惚けたまま映画は終わりへと近付いていく。
川崎は、もう怖がっていなかった。
「……ぁ……ぅあ……っ、……んぁ……っ」
微かに漏れる声が、映画の終わりまで興奮をかき立て続け、勃起が収まることはなかった。
× × ×
映画が終わった後。
「……何か言いたいことはある？」
「ここで土下座するとよろしいでしょうか」
「そんな恥ずかしいことしなくていいから」
「はい……」
会話だけ聞けば、尻に敷かれているように見えるだろう。
しかし実際は、映画館の中のベンチに川崎が座り、俺は川崎の前に立ってぽりぽりと頬を掻いていた。川崎は頬を赤らめて、上目遣いで俺を睨んでいる。俺を説教したいようだが、恥ずかしさで声が上ずっているため可愛いとしか思えない。
隣に座ると、すかさず川崎が距離をとった。
……。
無言で距離を詰めると、同じ分だけ川崎が遠ざかる。磁石が反発してるのかってくらい自然に遠ざかる。
……。
それでも距離を詰めると、川崎は俺から遠ざかろうとした直後に壁に右肩がぶつかり、逃げ場が無いことに気付いた。あわあわと慌てている間に俺が密着寸前まで近付くと、川崎は顔を真っ赤にして口をぱくぱくさせた。
「あ、ちょ、こら、ほんと、今はだめ、だめだから……っ」

たどたどしく喋ると、膝に手を置いて背筋を伸ばしたまま俯いた。じっと様子を見る俺と目が合うと、目を泳がせてまたすぐ俯いてしまう。

……。

……何この可愛い生き物？

しかし、川崎と接すれば接する程思う。

この子、絶対Ｍですやん。

邪なことを考えて頬がひくつきかけたが、そんな光景を見られたら本気で引かれるので必死で抑えた。

「……映画、その内また行きたいんだけど、どうだ」

「よく言えたねそれ……」

「お前は行きたくないのか？」

「……っ、……普通の映画になら行きたい」

「普通か。それも良いけど、今回みたいなのはいやか？」

「……し、心臓に悪い……っ」

「それは映画が？　それとも俺たちの……」

「ほ、ほら、もう行くよ。混んできたし」

首まで赤くしながら、川崎が無理やりに言葉を切って立ち上がる。振り返りもせずに歩き出したので、俺は慌てて付いていった。

この後は２人で適当に行きたい場所を考えて巡った。手が触れるだけでも内心動揺したが、川崎の方が何倍も大袈裟な反応をしていた。

川崎の胸や尻に視線が行くと、その度に手の甲を優しくつねられた。

最近特に色々見る事が出来るようになった川崎の表情を思い浮かべて、ふと思う。

多くの女性は笑顔が素敵で魅力的なのだと思う。

川崎の控えめな笑顔もとても素敵なのだけど、性格上満面の笑みを浮かべるようなタイプではない。

俺は川崎の笑みも好きだけど、顔を真っ赤にして目に涙をためて、眉をひそめて上目遣いで俺を睨む表情が一番好きかもしれない。

……どんだけピンポイントなんだ、俺のツボは。

続く。

（２８）

「３８度５分。完全なる風邪ですね」

自室のベッドで寝ている俺の横に小町が座り、医者のような口調で言った。手に持った体温計は今さっきまで俺が身体に当てていたものだ。そこに表示された数字は、俺が明らかに普段の体調と違うことを示していた。

思えば昨晩から少し体調がおかしかった。特に何があった訳でもないが、最近勉強やその他諸々のことで疲れていたのかもしれない。朝目覚めた時の視界がいつもよりも朧げで、リビングに行って小町と顔を合わせるなり即座に自室に戻らされ、今に至る。

小町は体温計をまじまじと見つめ、顎に手を当ててうーむと唸った。

「こりゃ学校は休まないとだね。今日は金曜日だし、３連休だと思ってゆっくりしなよ」

「……そうする。まずは学校に連絡するわ……」

意識が朦朧としながらも身体を起こすと、小町に両肩を掴まれてゆっくりと寝かされた。

「だめだめ、病人は大人しくしてなきゃ。取り敢えず小町が学校と……雪乃さんと結衣さんに連絡しとくね。あと連絡すべき人はいる？」

出来た妹だ……と感動しながらも、小町の問いにぼんやりと思考を紡ぐ。処理能力がいつもの何割かにまで落ちた頭で考えるのは骨が折れた。

「まずは、戸塚……」

「真っ先になんだ……。分かった、戸塚さんにも連絡しとくね」

戸塚さん可愛いしね……と誤解しか招かないことを呟いた後、小町は「他には誰かいる？」と聞いてきた。その時、頭の中に青みがかった黒髪の少女の顔が浮かんだ。少女と呼ぶには大人びていて、それでいてとても初心な少女が。

「……後は、思いついたら俺が連絡する。大丈夫、少し寝てから連絡す

るから」
「ん、そっか。分かった」
小町が柔らかく微笑むと、枕元の時計に目をやった。現在時刻は朝7時。小町も俺も、いつもよりリビングに顔を出すのが早かったのが幸いしたのか、色々と手を回す時間はある。最も俺に行動する元気は無いので、小町に動き回ってもらうことになるのだが。本当に頭が上がらない。
まずはぱっとコンビニに行って必要なものを買って、それから学校に電話して……とぶつぶつ呟きながら小町が計画を立てる。俺は布団に包まりながら、頼りになる妹の背中をぼんやりと眺めていた。今はお世話になるしか無い分、後でちゃんとお礼をしないとな……今度どこか連れてくか……などと考えていると、額に小さな手が当てられた。
「お兄ちゃん。小町、今日はすぐ帰るからね。それまで寂しいと思うけど頑張って」
「子供扱いするな……」
ゆるいやりとりをした後、小町はコンビニに向かい、俺は目を閉じた。
それから間もなくして小町がコンビニから戻り、市販の薬やスポーツドリンク、その他諸々を置いて学校や奉仕部のメンバーへの連絡も手早く済ませて、最後に俺の頭をよしよしと撫でて学校へ行った。彼女だったら死ぬ程惚れてるな……妹で良かったなどと思いながら、ゆっくりと目を閉じる。
自分で思い浮かべた彼女という単語から、泣き顔が可愛らしい人の顔がぼんやりと頭を過ぎった。
× × ×
「あなたも風邪を引くことがあるのね」
「ヒッキー、着替えは大丈夫？」
「お兄ちゃんやばいよ、これ世の男子が見たら焼き討ちされかねないよ」
ぬぼーっと過ごした日中が終わり夕方になると、自室がやたらと賑

やかになった。雪ノ下と由比ヶ浜が見舞いに行きたいと言い（由比ヶ浜が雪ノ下を言いくるめたんだと思う）、小町が２人を家に連れてきたのだ。雪ノ下は軽めの悪態をついてはいるが、一瞬だけ帰宅して風邪を引いた身体に適した料理を作ってきてくれて、由比ヶ浜はおしぼりを替えたり何だりと甲斐甲斐しく世話を焼いてくれる。着替えに関しては正直恥ずかしくてしょうがないのであまり触れないでほしいが、それ以外はありがたいし照れくさいしで何だか大変だ。小町はそんな２人の様子を見て、にまにまと笑いながら俺に絡んでくる。可愛いし鬱陶しいし俺をからかいながらも世話を焼いてくれるからもう何か抱きしめたい。

……。

しかし、なんだ。

確かにこれは小町の言う通り、世の男が見たら圧倒的な嫉妬の対象になるだろう。

すれ違った誰もが一度は振り返るような、タイプの違う美少女２人。

そして、世界に誇れる美妹（びもうと）小町ちゃん。

３人それぞれが、俺の身体を気遣ってくれているのだ。日中ゆっくり休んでいたらだいぶ回復していて、正直明日にはもう元気になっていそうだったのだけど。こんな幸せを享受出来るのなら、これはこれで悪くない。

スポーツドリンクの替えを持ってきた小町が、雪ノ下と由比ヶ浜をじっと見てにやりと笑みを浮かべた。

「それにしても……お二人さん、どうしたんですか？　さっきから部屋を舐めるように見回して」

『っ!?　そ、そんなこと……っ』

トーンの違うそれぞれの声が上ずって綺麗に重なった。雪ノ下の頬は仄かに、由比ヶ浜の頬は真っ赤になり、それぞれ目を泳がせる。小町が言うには、俺が気付いていなかっただけで２人は部屋に入った時からずっと視線が落ち着かなかったらしい。

「お兄ちゃんの部屋、そんなに気になります～？」

小町がペットボトルを若干ぞんざいに置いて(ひどい)、悪い笑みを浮かべて2人にすり寄る。
「わ、私は、その、比企谷くんの癖に意外と落ち着きのある部屋だと思っただけで……っ」
「ふむふむ、雪乃さんにとってポイントが高かったと」
「そ、そんなこと……っ」
「結衣さんはどうですか？」
「え!?　い、いや、別にそんな、本がいっぱいあってすごいなーとか思っただけで……っ」
「ふむふむ、結衣さんにとってもポイントが高かったと」
「……っ」
2人が俯く。小町は2冊のメモ帳に今聞いたことをメモしていた。表紙に「雪乃さん観察ノート」「結衣さん観察ノート」とそれぞれ書かれていたのは気のせいだと思いたい。
「こら、小町。折角来てくれたんだからあんまりいじめるんじゃない」
はしゃぐ妹の頭をくしゃくしゃと撫でると、小町が「はう……」と呟いて振り向いた。その頬はうっすらと赤らんでいて、目は潤んでいてどことなく色っぽい。
「お兄ちゃん……そうやって、妹を攻略ルートに入れるのは良くないと思う。禁忌だよ禁忌。軍に逆らうこと、人体錬成に並ぶ三大禁忌だよ、妹との恋は」
「物騒すぎる話を急にするな」
ラインナップが絶妙すぎる。ていうか何、妹と恋をしたら極刑に処されるの？
寝ながらも右手で入念に小町の頭を撫で回すと、「ふわぁぁ……乱暴なようでいてこの天に導かんとする繊細なタッチ……いやだぁ……篭絡されるぅ……っ」と訳の分からないことを言っていた。雪ノ下と由比ヶ浜を見るとまだ俯いていた。目が合うと高速で顔を逸らされた。何ですのん一体。
×　×　×
雪ノ下と由比ヶ浜が帰ると、ふっと一息吐いた。

ＬＩＮＥのトーク画面を開く。
『風邪引いたから休むわ』
『そっか、分かった。お大事に』
『ああ』
短いやりとりを見返す。朝、ＨＲが始まる直前に交わした会話だった。このやりとりを、今日だけで何度見返しただろう。
連絡をするか迷っていると、リビングにいるはずの小町から連絡が来た。
「お兄ちゃん、今日はもう一人来訪者がいるようです。迎えに行ってくるね♡　かしこ」
最後の要る？　と思いながらも、はてと首を傾げる。もしや戸塚かとも思ったが、小町のメッセージのテンションからするに恐らく女性だと考えられる。誰だろう、裏の裏の裏をかいて海老名さん辺りだろうか等と考えていたら、１５分程で玄関が開く音と２人分の足音が聞こえ、部屋のドアをノックされた。
「比企谷。あたしだけど……入っていい？」
落ち着いた声を聞いた瞬間、心臓が跳ね上がった。
「……お、おう」
裏返りそうな声で返事をすると、扉が僅かに開き、その隙間から青みがかった黒髪ポニーテールの少女がひょっこり顔を出す。照れくさそうにしている表情には、色々な感情が込められている気がした。
――最も望んでいると同時に、最も有り得ないだろうと考えていた状況が訪れた。
続く。

（２９）

川崎が来たと分かった途端、一気に意識が覚醒した。まだ元気が無いから出来ないが、普段の体調だったら思わず飛び起きて川崎をびっくりさせてしまっていただろう。気だるげに起き上がると、川崎が俺以上にゆっくりと、それでいて物凄く静かに入ってきた。早朝ドッキリのリポーターなんだろうか。

「お邪魔します……」

消え入りそうな声で川崎が呟く。川崎は両手で、風呂敷に包まれた長方形の箱のようなものを持っていた。目は泳ぎ、身体は縮こまっていて、何だか借りてきた猫のように落ち着かない。川崎の動揺がうつって俺も何を話せば良いか分からなくなっていると、川崎に続いて小町がぴょこんと顔を出した。

「沙希さん、ごゆっくり……と言いたいですけど、まずはアレですよね、アレ」

「あ、ああ……」

アレとは？　と首を傾げていると、川崎が風呂敷を顔の前にくいと持ち上げて、目だけぴょこんと覗かせた。

「ちょ、ちょっとだけ、キッチン借りるから」

「ん？　おう、そうか」

「さっき沙希さんに頼まれたんだー。先に顔見せだけ済ませてからキッチンに行こうって話し合ったの！　じゃ、お兄ちゃん、ちょっとばかし待っててね～」

「ん、よく分からんが分かった」

小町と川崎にひらひらと手を振り、再びベッドに身体を沈み込ませる。

川崎がドアを閉める時、顔をぴょこんと出して、ほとんど口パクで「待ってて」と言った。

……。

布団に包まって、ごろごろとベッドの上を転がった。

×　×　×

１０分もしない内に川崎が戻ってきた。小町が居ないのでどうしたのかと思ったが、どうやら小町はリビングに居ることにしたらしい。身体を起こし、小町は何か言ってたかと聞くと、川崎は顔を真っ赤にして俯いた。
「……と、『隣の部屋に居たら聞こえちゃいけない声が聞こえちゃうかもしれないから、小町はここにいまーす』って……」
「……そ、そうか」
言う小町も小町だが、聞いたことをそのまま伝える川崎も川崎だった。２人揃って静かに俯く。恥ずかしくてしょうがなかった。
川崎はさっきとは違いお盆を持っていた。そこに乗っていたのは大きめのどんぶり……いつも俺が使っているどんぶりだった。
川崎がテーブルの前に膝立ちして、お盆をテーブルに乗せる。乗せられていた蓋を取った瞬間に、煙がほわんと広がった。
「……お粥か」
川崎が用意してくれたのは、とても美味しそうなお粥だった。水分を含んだ米が柔らかく炊き上がり、昔懐かしい柔らかな匂いが身体に染み込んでいくようだ。身体が喜んでいるのが分かって、自然と頬が緩む。小さい頃風邪を引くと、母親がよくお粥を作ってくれたことを思い出した。
「具合良くなってたみたいだから、食欲も戻ってくるかなって。こっちにはタッパーで持ってきたんだけど、温めた方が良いかなって思ってあんたの妹に相談してたんだ」
事情をひとしきり話すと、川崎が頬を赤らめて、ちらりとこちらに流し目を送る。何だか妙に照れくさい。
「そっか。これはすげえ嬉しい……って、んん？　何で俺の具合のことを知ってんだ？　今日は朝しか連絡取らなかっただろ」
「あ、いや、それは、その……っ」
俺の言葉に、川崎が目に見えて慌てる。すらりと伸びた長い腕をわたわたと振り回すと、どんぶりをひっくり返してしまいそうでハラハラした。
あ、その、いや、えっと……と、意味を成していない声をひとしき

り上げた後、川崎はしおしおと元気が無くなり、カーペットの上に正座して膝に手を置いた。
「……あんたの妹と、夕方に連絡取ってた」
急に犯人が自供したシーンみたいになってる。何だこれ。
「あ、そうなのか。俺に直接連絡くれれば良かったのに」
何気なく言うと、川崎は唇を尖らせて俺を睨み、ぷいと顔を逸らしてしまった。いまいち分からないが、やってしまったということだけは分かった。あと川崎の仕草がいちいち可愛い。
「何にせよ、ありがとうな」
頬をぽりぽりと掻いて、どんぶりの中で湯気を立てるお粥を見つめる。視覚と嗅覚を心地良く刺激されたら、きゅうぅ……と、大人げなく腹が鳴った。川崎はその音に一瞬きょとんとした後、口元に手を当てくすりと笑った。
「お腹空いてるみたいで良かった。じゃ、召し上がれ」
「ああ、頂きます」
言って、足をベッドから出そうとする。
「……あれ？」
――下半身に、鉛が絡みついているような感覚を覚えた。
「……」
「……どうしたの？」
「……思った以上に、身体が重い」
寝ている間や話している間は気付かなかったが、足を掛布団から解放する作業でさえ今の体力では難しかった。川崎は俺の言葉に心配そうに眉を八の字に曲げて、立ち上がってベッドの横に立った。
「足出すの手伝うよ」
「え？　い、いや、いいって……うおっ!?」
俺が断るのも聞かず、川崎は掛布団をぺろりと捲った。こういう行動はきっと大志にやり慣れてるんだろうな……と何となく思った。
川崎は俺の姿を見ると、物凄い速さで顔を逸らした。
「……ぱ、パジャマなんだ」
「……風邪っぴきだしな」

俺の服装は、上はTシャツで下はバリバリのパジャマだった。川崎が顔を赤らめるのを見て何でだろうと首を傾げたが、俺がもし逆の立場で川崎のパジャマ姿を見たら、きっと同じように顔を赤らめていただろうと納得する。友人の生活感丸出しの格好というのは中々見ないだろうし。もっとも、俺が川崎の掛布団を捲る場合は、俺よりも川崎の方が顔を真っ赤にするだろうし、そもそもその行為自体が絵面的にぶっちぎりでアウトなんだけども。完全に襲おうとしているようにしか見えないだろう。

何にせよ、掛布団の重量が無くなったことで、幾分動きやすくなった。のろのろと足をベッドから出し、ベッドの縁に座る。テーブルで食べようと立ち上がろうとしたら、川崎に両肩を押さえられた。

「そんな状態じゃ歩くのも大変でしょ。いいよ、持ってくるから」

俺が何か言うよりも先に、川崎がどんぶりとレンゲを持ってくる。どうやらどんぶり自体はさして熱くないらしい。

しかし、正直今はどんぶりを手に持つことさえ耐えられるとは思えない。さてどうしようとぼんやり考えていると、川崎がお粥と俺を交互に見ていることに気付いた。

「どうした」

「いや、その……比企谷、これ持つのも辛いよね」

「ん、そうだな。正直いつ落とすか分かったもんじゃない」

俺の言葉を聞くと、川崎は「だよね……」と呟いて俯いた。ドアの方をちらちらと気にしたかと思うと、顔を上げて俺を見つめる。何だか嫌な予感がした。嫌な、と言っていいのか分からないが、そんな予感がした。

「そ、それなら、あ、あたし、が、食べ、させ、てあ、げる……っ」

「……へ？」

顔を真っ赤にして。

唇を震わせて。

それでも、俺を真っ直ぐに見つめたまま。

川崎が、とんでもないことを言ってきた。

続く。

（３０）

川崎があーんしてくれると言う。

はて、この子は冗談を言うような子だったかな……と思ったけれど、目の前の茹で上がった顔を見たらすぐに思い直した。この子はそんな小悪魔めいたことを言うような子ではない。

お粥の入ったどんぶりを持って、川崎がベッドの縁に並んで座る。普段よりも大きく軋んだベッドが、自分以外の誰かが隣にいるという実感を強めた。

川崎は俺をじっと見つめていたが、俺が固まっているのを見てしびれを切らしたのか、レンゲでお粥を掬い上げた。お粥を食べさせるという単純明快な行為にも関わらず、川崎はまるで戦地にでも赴くような、よく分からない決意を秘めた顔をしている。レンゲを持った手が震えていて、信じられない程緊張しているのが目に見えて分かる。

俺は、そんな川崎の行動を見て、

「……ほんとに？」

お前は女の子か――と言わんばかりのしおらしさで尋ねた。すると川崎は目をぎゅっと瞑り、再び強い瞳で俺を見つめて頷く。

きっと、この照れくさい行為を回避する方法はいくらでもあると思う。

茶化すことだって出来るし、適当な理由付けだって本気で考えれば何でも思い付く。

けれど、それをしたら川崎を泣かせてしまうような、そんな気がして――俺は観念して口を開け、川崎が差し出すレンゲを迎えた。

互いの顔が、手が震えて、ひどくみっともない様だったと思う。

それでも、川崎が差し出したお粥を口に入れた瞬間。

心も、体も、重くて凝り固まった枷が取れたようにふっと軽くなった。

「……旨い」

身体の中にじんわりと広がる温かみを噛みしめて、ちらりと川崎の顔を見て呟いた。恥ずかしさが尾を引いてしまい、素直に感想を伝え

ることが出来ない。
「……ん、ありがと」
川崎の、どこか張り詰めた表情が僅かに緩んだ。その柔らかな笑みが俺を一体どれだけ幸せにしてくれるのかを伝える手段は無いのか――と、真面目に考えてしまう。
風邪を引いて。
女の子に。
あーんをしてもらう。
こんな、今までの人生では考えられないようなこっ恥ずかしい行為も、慣れてしまえばどうということはない。2口目からは、互いの動きもスムーズになる。
途中からは何も言わずに黙々と食べていたのだけれど。
「……あんた、美味しそうに食べるね」
思わぬ言葉に振り向くと、川崎が年上のお姉さんのような温かな笑みを浮かべていた。何だか気恥ずかしくなり、顔を逸らして平静を装う。
「……まあ、俺は口下手だからな。一口一口感想を言うなんて出来ねえから丁度良いかもな」
「毎回感想を言われたらこっちも大変だって。あたしは美味しそうに食べてくれるあんたの顔を見てればそれで充ぶ……っ」
川崎の言葉が、中途半端な所でぴたりと止まる。
「……え……」
「……」
「……あんたの顔を見てればそれで……なんだ？」
「言うな……っ」
川崎の顔が、熟れたトマトのように真っ赤になる。ちょっと前までは、川崎の睨み顔がこんなに可愛いだなんて気付きもしなかった。
恥ずかしいやりとりの後も川崎は律儀にあーんをし続けて、気が付けば――初めは多いのではと思っていたお粥が、あっという間に無くなっていた。

× × ×

食事を終えて、川崎は俺をベッドに寝かせたまま食器を洗いに行った。戻ってくると何故か顔が真っ赤で、理由を聞くと「あんたの妹がいたから……」と、何とも間接的且つ直接的な説明をされた。色々つかれたのか……お疲れ様です……。

川崎がどこに座るか迷っていたので、俺は起き上がってベッドの縁に座った。わざわざ手招きせずとも川崎は俺の意図を察したようで、頬を赤らめてきょろきょろと辺りを見回した後、戸惑いながらも俺の横に座った。

『……』

不意に訪れた沈黙。

いつもなら心地良く流れるはずの2人の間の空気が――何故だか、急に気恥ずかしいものになった。先程までの気恥ずかしさとも違う何かが、この場の空気に満ちている。

――今日と言う日が、これで終わる筈がない。

――そんな、正体の分からない、予感のようなものが胸の中に芽生えていた。

「……今日は助かった。ありがとな」

「……ん」

短いやりとりが終わると、2人の距離が少しだけ縮む。どちらから近付いたのかは分からない。

「まだ油断出来ないんだから、ちゃんと休みなよ」

「ん、そうだな」

2人の距離が、もう少しだけ縮む。見えない力が2人の間の空間を押し縮めているかのようだ。

「明日は土曜日か……」

「……ん」

互いにベッドに付いた手の小指が触れる。今までならきっと飛び跳ねるように離れていた筈なのに、今はまるで何事も無いかのように離れない。それでも、心臓は今にも爆発しそうな程激しく脈打っている。

次は、何も言葉を交わさないまま、互いの二の腕が触れた。服を隔

てているのに、川崎の体温がそのまま伝わるような気さえする。震えているのは俺の手か、川崎の手か、或いは両方か。それさえも判別が付かない。

２人の身体がぴとりとくっついたまま、時間がゆっくりと過ぎてゆく。川崎が時折もじもじと動くが、それでも離れようとはしない。川崎は今一体どんな顔をしてるのかと気にもなったが、互いに俯いていて顔を見る余裕など無かった。

家の前を車が通り過ぎて、静かな路地の空気を仰々しく揺らす。

数秒ばかりのせわしない音の波が去ると、再び訪れた静寂が更に静かなものに感じる。

川崎の呼吸する音が聞こえた。

吐いた息が、微かに震えている。

川崎を振り向く。

川崎もちょうど振り向いたのか、目が合った。

青みがかった黒髪が、出会った頃は冷たく感じた瞳が、薄めの唇が。

震えている、揺れている、何か言いたそうにしている。

どちらも言葉を発さない。沈黙の時間はそれほど長く無い筈なのに、まるで何時間も黙っているかのように思える。

――俺は、目の前にいる女性と、どうなりたいんだろう。どうしたいんだろう。

一人で居れば悶々と考えるような事も、目の前の川崎の表情を見ればすぐに答えが出た。

ほんの僅かに顔を近づける。川崎は少しばかり目を見開いて驚いたが、やがてゆっくりと目を細めた。

川崎の吐息を感じる。

鼻先がこつんと当たった。

触れていなくとも、俺の鼓動が川崎に、川崎の鼓動が俺に伝わっている気がした。

俺が、川崎が、ほとんど同時に息を呑む。

首を少しだけ傾けると、川崎もそれに合わせて首を傾けた。鼻先が離れたら、後はどうなるか目に見えている。

ほんの数センチ、或いは数ミリの身体の動きに、こんなに気を張った事があっただろうか。
そんなことを考えながら、ほんの少しだけ顔を前に進める。
そして――
「……っ」
――唇が、重なった。
柔らかな感触が、じんわりと身体の奥底まで広がっていく。
初めての口付けは、劇的でありながらも、とても自然な行為に思えた。行為と言うよりは結果とも言えるかもしれない。水が川上から川下へ流れるように、散った花火が虚空へ消えるように、夕暮れの後に宵闇が世界を眠りに就かせるように――あまりにも自然な、2人の結末。
唇がそっと離れる。触れている間、互いに呼吸は止めていた。或いは止まっていたのかもしれない。口が解放されて、2人とも震えながら息を吸って見つめ合う。川崎の瞳は潤んでいて、どうしようもなく愛おしい。
今この瞬間に、言葉は要らなかった。
「ん……っ」
「……っ」
余韻に浸って体を震わせていると、川崎が――今度は自分から、震えながら唇を重ねてきた。今度は先程よりもほんの少しだけ、強く、押し付けるように。川崎の緊張が、不安が、愛おしく思ってくれる気持ちが伝わる。まるで一度目のキスの存在を証明したいかのような、確認の意味も込めた口付け。
唇が離れると、どうしようもなく寂しさが残った。
――この行為は、心から望んだものだ。
けれど、いざ唇を重ねてみると――これではとても足りないと思ってしまった。
もっと、もっと、もっと……。
川崎を知りたい。
川崎に触れたい。

川崎を――愛したい。
「川崎……っ！」
「あ……っ？」
溢れ出す愛おしさが、普段なら考えられないような行動に駆り立てた。
続く。

（31）

「あ……っ？」

川崎の肩を掴むと、驚いたような、戸惑ったような声が漏れた。

唇を近付けると、川崎もそれに応じて再び唇が触れ合う。

「ふっ、んん……っ、ふぅっ、んんん……っ」

川崎の声の熱っぽさが増す。細く長い足がもじもじと動いてとてもしおらしい。愛おしさが溢れて止まらなくなり、唇の割れ目を舌でなぞった。川崎は目を見開いて驚いたが、舌を何往復もさせると徐々に瞼が下りてきて――やがて、こちらの舌を受け入れた。

ずぬり、と舌が川崎の口内へ侵入すると、とても熱くて湿っぽい空間が待ち受けていた。

「んふぅぅぅ……っ」

川崎のくぐもった声が、口内を伝って頭蓋に染み渡る。甘露のような声は何物にも代えがたい麻薬のように思えた。じっくりと内頬を舐め、歯列をなぞっていると、川崎の舌が迎え出てきた。勝手の分からない牡と牝の舌が、不器用ながらも懸命に愛情を与え合って混ぜ合う。俺も川崎も夢見心地で、互いに目はほとんど閉じかけていた。

「ふぅっ、んっ、ちゅくっ、ちゅるっ、ふぅんっ、んふぁぁ……っ」

川崎の声がどんどん艶を帯びて、身体に染み渡る度に官能が高まってゆく。背中に回していた腕を離して川崎の両手を握ると、寄る辺を求めるかのように指を絡めてきた。気付けば互いに身体をこすり合わせて密着していて、互いの熱を移し合っている。

口を離すと、川崎の紅い舌がてろりと口から垂れていた。極上のご馳走を目の前にして、反射的にその舌を咥え込み、いやらしい音を立てて啜る。

「んん……っ!?　んっ、ふぅん、んんん……っ！」

川崎が目を白黒させながら、俺の腕を掴んだ。掴んできた腕にさして力が入っていないことを確認すると、徐々に徐々に後ろに押し倒してゆく。ベッドの縁に横並びで座っているので、押し倒しながら川崎の身体に跨り、覆いかぶさる。片手をベッドに付いて、片手で川崎の

首の後ろを押さえながら、ゆっくり、ゆっくりと倒れて行く。
「ん……っ、ふぅっ、んふぅぅ……っ」
唇の交わる角度を変えると、紅い肉がむにゅむにゅと柔らかくうねる。川崎は目をうっとりと細めては時折見開いていて、せわしなく感情が揺れ動いているのが分かる。
川崎の背中がベッドに付く直前、不意に両頬に手を添えられ口が離れた。何事かと思っていると、川崎は恥じらいながら頭の後ろにまとめたポニーテールを解いた。そのまま川崎が寝転がると、青みがかった黒髪が白いシーツの上にはらりと広がり、幻想的な美しさを醸し出している。川崎の女性らしさがぐっと増して、益々気持ちが昂ぶった。
再び口付けをして唾液を川崎の口内に垂らすと、川崎はたっぷりと舌で味わった後にこくりと飲み込んだ。流し込む度に細く白い喉がごくりと鳴り、淫靡な仕草と音が官能を掻き立てる。
「んっ、んんっ、ごく……んふぅぅ……ぷはっ、はぁっ、はぁっ、はぁ……っ」
どれだけの時間口付けを交わしていただろうか。口を離した頃にはもはや身体のだるさなど完全に忘れてしまっていて、目の前の川崎をもっと愛することしか考えられなくなっていた。
川崎の背中に腕を回してぎゅっと抱きしめる。身体を密着させると、抱き締めた強さに応じるかのように豊満な肢体から甘い匂いが溢れた。
身体を離して、川崎の上に馬乗りになる。豊かな2つの山をじっと見つめると、川崎は顔を真っ赤にして、手の甲で口を押さえた。
本当に良いんだな――？　と言う意思を込めて川崎の瞳を見ると、川崎は恥ずかしそうにぷいと顔を逸らし、空いた手でシーツを握りしめた。肯定のサインと捉えて覚悟を決める。
「……っ」
無言でもう一度喉を鳴らし、川崎の胸に手を置いた。
「んん……っ」
川崎がきつく目を瞑り、声を抑える。豊満な乳房は服と下着を挟ん

でいても十二分に柔らかさが伝わり、一度触っただけで虜になってしまった。
赤ん坊を抱くように、優しく優しく力を入れて揉んでいく。
「ふっ、んんっ、んっく……んんん……っ」
首まで真っ赤にして、川崎が身体を捩る。スカートを履いた足が内ももを擦り合わせてもじもじと動いていて、少なくとも痛くは無いのだと安心する。
優しく下から掬うように揉み、外側から内側へ、そしてまた外側へと繰り返し動いていく。川崎の熱っぽい喘ぎ声は益々艶を増して、明らかに快感を覚えているのが分かった。
乳房の中心部、恐らく乳頭があるであろうところを親指でぐっと押し込むと――
「んはぁんっ！」
「え……っ」
川崎が思わず手を離して、今日初めて、いや、出会ってから初めてではないかと思える程、抑制から解放された大きな声――それも、喘ぎ声が漏れた。声の響きには鮮やかに快感の火が乗っていて、俺と目が合うなり涙目になり、シーツを掴んでいた手の甲で目を覆った。
あまりにも可愛らしい仕草に、愛おしさとは別に嗜虐心がむくむくと湧き上がり、今さっき川崎が大きく反応した部分を、痛くないように意識しながら親指で押し込む。
「んっ、んんん……んふぅぅっ！　……ふっ、ふっ、くふぅん……んんんん……っ！」
手の甲で口を押さえていても、徐々に声が大きく漏れ出してきた。湧き上がる快感の奔流が、川崎を確実に蝕んでいる。
ぎゅっ、むにゅっ、ぐっ、くにゅ……っ。
敢えてリズミカルに一定の間隔で押すことで、「あと何秒もすればまた快感を与えられる」という感覚を植え付ける。何度も何度も繰り返して、川崎が刺激に慣れてきた頃に唐突に手を止めた。
「……っ？　んあぁんっ!?」
川崎が油断してそろりと手を外して俺を見つめた瞬間、今までで一

番の強さで乳頭を押し込んだ。再び大きな喘ぎ声が漏れて、川崎が涙目になって顔を隠す。そんな顔をしたって、余計にいじめたくなるだけだと言うのに。
川崎の身体から離れると、ふとスカートに目が行った。
この中に、川崎の……っ。
底知れぬ期待に身体をぶるりと震わせて手を伸ばすと――川崎がこれまでとは打って変わって物凄い勢いで身体を起こし、俺の腕を掴んだ。
「……だめか？」
自分で思っていたよりもしゅんとした声が出てしまった。俺の声を聞いた川崎があわあわと慌てて困り果てた後、人差し指を立てて俺の唇にぴとりと当てた。
「……そ、その、あんたはまだ風邪引いてるし、……そ、それに、あんたの妹もいるんだから……その、今は、これ以上は……っ」
俺から何度も顔を逸らしながら、精一杯言葉を紡ぐ川崎の優しさと恥じらいに、どうしようも無い程頬が緩んだ。
「……そうか、それもそうだな。……ちなみに今の言い方だと、俺の風邪が治って小町も近くにいなかったらこれ以上のことをしても良いってことになるけど……いいのか？」
言うと、川崎が目を見開いて顔を真っ赤にして、目の端に涙をためて俺の胸に額を付けた。ぽすん、と言うよりはどすん、と言う音がしそうな、ほぼほぼ頭突きと定義して差し支えの無いものだった。
「ぐぇっ」とみっともない声を漏らして後ろに倒れると、いつもベッドで寝ている時と同じ体勢になった。
「……ば、ばか……わざわざそんなこと言うな……っ」
ここで「今俺を押し倒してんの気付いてる？」と言ったらキャパオーバーしそうだな……と思いながら、青みがかった黒髪を梳くように撫でる。すると今度は川崎が上になって口付けをして唾液を流し込んできた。甘ったるい唾液は飲み込む度にこちらを陶酔させて、気が付けば温もりに溢れた肢体をきゅっと抱きしめて、流し込まれる唾液をずっと味わっていた。

ぼうっとした表情の川崎が口を離すと、2人の間に透明な糸が伸びた。俺がひょいと糸を咥えて飲み込むと、川崎は我に返ったのかまた赤面した。夢中になると恥ずかしさも忘れるらしい。
時計を見ると、1時間近く経っていた。
「……あ……もうこんな時間。……そろそろ帰んないと、大志とけーちゃんを心配させちゃう……」
「ん、そっか。ならそろそろ帰った方が良いな」
「……」
俺の言葉に、川崎はどこか納得のいっていないような、それでいて子供が拗ねたような顔をする。
もしかして、名残惜しんでいるんだろうか。引き止めて欲しいんだろうか。
だとしたら、どうしようも無い程に嬉しい。
「どうした。これ以上居るとマジで襲うぞ。今度は止めても無駄だぞ」
からかうように言うと、川崎は「な……っ」と声にならない声を漏らしてたじろいだ。
「……ば、ばかっ。もう帰るから。お大事に……っ」
ぷんすかと怒っていても労わる気持ちは忘れない、この子の優しさがいじらしい。
せめて玄関まで見送りに行くと言って一緒にベッドから立ち上がり、川崎が先に部屋を出ようとした瞬間――細腕を掴んで振り向かせ、有無を言わせず唇を奪った。
「んむぅっ!? んっ、ふぅんっ、ちゅっ、くちゅっ、んふぅんっ……はっ、んんんっ、ふむぅぅん……っ」
抱きしめ返してきた川崎の身体ががくがくと震えて、瞼が徐々に下りてくる。耳の中に指を入れて中を撫でると、豊満な肢体が愛らしく跳ねた。
唇を離すと、川崎は惚けた表情で首を傾げた。真っ白な首にどきりとして、吸い込まれるように口付けをする。

「んぁっ!?　あっ、やっ、そん……な……うぁ……ぅ……っ」
唇を離すと、所有権を示す証がはっきりと残っていた。川崎は涙目で可愛らしく俺を睨む。
「……その、なんだ、一時の気の迷いじゃないって証拠をだな、うん……」
我ながら面倒くさい言い回しを……とは思ったが、口にしたのは紛れもない本音だ。俺の言葉に、川崎は困ったように、それでいて恥ずかしそうに眉を八の字にして、上目遣いで俺を見つめた。
「……他にやり方あるでしょ、ばか……っ」
「……そうだな、わりい」
「……ばか……っ」
そこからは何も話さずに、ひたすら抱きしめ合った。妙なタイミングで緊張してしまい、「……ちょっと痛い」と何度か言われた。川崎の言葉に別のシーンを想像してしまって顔をぶんぶん振ると、物凄く訝し気な目で見られた。
川崎が帰った後――ベッドに寝転んだ俺が、恥ずかしさと川崎の可愛さに小一時間悶え続けたのは言うまでもない。
続く。

（３２）

翌日、土曜日。

「……」

目を覚ますと、時刻は１２時を回っていた。恥ずかしさで悶えたために中々寝付けず、その分随分と遅くまで寝てしまったようだ。首を傾け、腕をぐるぐると回し、ベッドの上に座ったまま目一杯背伸びをする。目覚ましを使わずにじっくり寝たお陰で、身体は随分と軽くなっていた。体温を測るとほぼ平熱で、昨日までの症状が嘘のようだった。かなりの汗をかいた服に不快感を覚えて、さっさとシャワーを浴びに行った。小町はどうやら既に家を出たようだ。平日休日関係無く元気な弾丸娘は、今日も超可愛い。会ってないけど。

「……ん」

シャワーを浴びてすっきりした所で部屋に戻ると、川崎からＬＩＮＥで連絡が入っていた。どうしたのかとトーク画面を開くと、シンプルなメッセージが届いている。

『風邪引いた』

「……」

罪悪感がえげつない速度で心に募る。募りすぎて口から出てきそうだった。

『すまん、大丈夫か』

『ん、多分』

『見舞いに行くか』

俺自身はすっかり元気になっていたから、病み上がりとは言え多少の外出なら問題無いだろう。何を買いに行くか……と考えていたが、既読が付いた後、１０秒程返事が来なかった。ＬＩＮＥだと応酬が秒単位で進む分、この待ち時間は妙な緊張感をもたらした。

「うお……っ？」

突然鳴った着信音に驚く。相手は言わずもがな、川崎だった。

『もしもし。どうした』

『……変なことする気でしょ』
意思の強さを窺わせる普段の声からは考えられないくらいの、恥じらいを含んだ吐息混じりの弱々しい声。しかも喋った内容が内容だ。電話の向こうではきっと頬を赤らめているんだろう。こんなことをわざわざ言う為に……と思い、失礼とは分かっていながらもくすりと笑ってしまった。
『……何笑ってんの』
『わりい、こっちの都合でな。……お前がよっぽど元気になったら、そういうことも考えてたかもな。今は何を持って行けば良いかって事くらいしか考えてなかったぞ』
率直な俺の言葉に、川崎がひゅっと息を吸った音が聞こえた。
『え……？　あ……その……』
泣きそうな声で困り果てた声をぽろぽろと漏らした後。川崎はしおらしくなった声で『……ごめん』と呟いた。電話越しだと言うのにとんでもない可愛さだった。
『まあ、今お前がわざわざ口にしたお陰で、俺は【そういうこと】を意識しちまったけどな』
『え』
『風邪なんだからあんま無理して喋るなよ？　今から色々準備してから行くから、1時間半後くらいには着くと思う。それで良いか？』
『え、あ、良いけど……その、さっきのは……』
『こらこら、大人しく寝てろって。な？』
『え、あ、うん……』
『うし、じゃ、また後でな』
『……うん……』
通話を切ると、空いた手で口を押えた。
「……死ぬ……」
可愛すぎだろう。今しがたの会話の余韻に浸りながら、顔をぷるぷるさせた。
ちょっと悪戯心で煽ってみたら、予想以上の慌てっぷりを見せてくれた。この後会った時、一体どんな顔をするんだろう。

何にせよ、川崎の看病をしっかりしなければならない。腕をぐるぐる回して気合を入れていると、ＬＩＮＥのトーク画面がティコンと音を立てた。

見ると、川崎から3件のメッセージが届いていた。

『変態』

『ありがと』

『変態』

「……うし、準備するか」

変態のサンドイッチ……と怪しすぎるフレーズを思い浮かべながら、諸々の準備を始めた。

× × ×

川崎の家の最寄り駅で降りて、ぽてぽてと歩く。家から持っていくものはバッグに詰め込んで、他に必要なものは以前この道を通った際に見付けた薬局で買うことにした。日によってはぎらつく太陽も、今日は随分と柔らかい日差しを浴びせてくれる。道路に面した家の庭に生える植物は、機嫌が良さそうに葉を揺らしていた。

のほほんと街並みを眺めながら、もうじき着く旨を知らせると、川崎から『家の前に迎えがいるから』と言われた。誰がいるかはほぼほぼ分かっているが、なんでわざわざ……と思いながらも、川崎の住むマンションへ向かって引き続きぽてぽて歩く。休日のためか、仲睦まじく歩く親子の姿が目立つ。川崎が大志や京華をあんな風に可愛がっている光景を想像して、ふっと頬を緩めた。

マンションが見えた所で、よく見知った2人が見えた。

「はーちゃん！」

「お兄さーん！」

迎えの候補が両方ともそこにいた。2人が元気いっぱいに手を振るが、俺はここで「おーっす！　元気かー！」なんて言って手を振りながら走ることなんてしない。やらかした瞬間それは今までの人生で最大級の黒歴史になる。そんな光属性に溢れた真似なぞ出来っこない。Ｆａｃｅｂｏｏｋで「1年ぶりに会う友人〇〇と、学生時代よく通った飯屋でご飯！　お互い変わった所もあれば、全く変わらない

所もあって。これからもこいつとはずっと親友でいれそうだなって思いました！」とか書きながら自撮りで２人の写真を撮れる奴の気が知れない。あとその投稿に対してタグ付けされた友人が「あれ、俺らって親友だったっけ？　笑」なんてコメントをして、それに対して投稿主が「ちょっと！　ひどくね!?　笑」とか言えば一連のウェイ勢のテンプレ（社会人ｖｅｒ．）が完成である。やべえ、火炎瓶を投げつけたくなる。

いや。

どうしたんだ俺。

ちなみに今の思考は、大志と京華を見付けてから合流するまでの十数秒で巡らせたものである。無駄にすごいなと我ながら呆れる。

「はーちゃん！」

「おふぅっ」

ＳＮＳにおける光と闇に思いを馳せていたら、京華にハグ兼体当たりを思い切り腹に食らわされて、強制的に思考が中断した。妙な思考を断ち切ってくれてありがとう京華。でもちょっと痛いぞ。

「はーちゃん、はーちゃんだー！」

「おう、おう、どうしたどうした」

俺の腹をぎゅっと抱きしめて、おでこをすりすりとこすり付けてくる。ううむ、前よりも更に懐いてらっしゃる……。川崎同様青みがかった黒髪をくしくしと撫でていると、生温い視線を感じた。訝しみながら顔を上げると、大志が視線以上に生温い表情で俺たちを見ていた。

「お義兄さん……」

「次に同じ言葉を吐いたら、お前のＴｗｉｔｔｅｒアカウントを乗っ取ってアカウント名を『大志@早漏大使』にしてやる」

「ひどすぎるっすよ!?　ていうか何すか早漏大使って!?」

「大声ではしゃぐなよ、嫌いだぞ？」

「『嫌われるぞ』じゃなくて既に嫌いなんすか!?」

「……」

「目を逸らさないでほしいっす！　マジ感が出て辛いっす……！」

「俺のことをお義兄さんなどと呼ぶお前が悪い。小町に近付いたら許さんぞ」
「いえ、正直俺が比企谷さんとどうにかなろうがなるまいが、お兄さんはお義兄さんになりそうで……」
「あん？」
「こ、怖いっす……。……いや、ほら、何かうちの姉と妹を見る限り……ねえ？」
「……」
視線を下ろす。
京華は俺と大志が茶番を繰り広げている間もずっと俺の腹に顔をこすっていたようだ。俺が視線を下ろしたのとほぼ同時にぴたりと止まると、ゆっくりと顔を上げて「はーちゃんだぁ……」と満開の笑みを咲かせて、再び顔をこすり出した。
……う、うん、大丈夫。
これは懐かれているだけ。懐かれているだけ……！
でも、何だろう。取り敢えずベルゼブブ嬢のマンガが読みたくなった。
「姉ちゃんもこれくらい素直だったら良かったんすけどね……」
「こんな川崎を見たら死ぬわ、色んな意味で」
「でも、デレ度で言ったら姉ちゃんは京華の遥か上を行きますよ？」
大志の言葉に、俺は依然として懐きっぱなしの幼女を見つめる。
「……京華の遥か上？　こんなことしてくる京華の？　そんな訳……」
無い、と言いかけた所で、昨日の俺の部屋でのやりとりを思い出した。
……。
「……お義兄さん、思い当たる節があるんすか？」
「お前はこれから出会う女性が全員、初対面に関わらずお前の股間を見てクスッと笑われるようになる」
「悪夢でしかないっすよ!?」
「もう掛けたから。呪いは掛けたから」

「辛い……でも比企谷さんみたいに既に出会ってる女性は関係無いっすよね。比企谷さんは総武高に来ても尚、一際輝いていて可愛いんすよね……」
「お前がこれから行う女性への告白は全て、1回目は絶対聞き取ってもらえなくて『え？　ごめん、もう一回言って？』と言われるようになる。しかも聞き返す時はどんなに大人しそうな子も半笑いというオプション付き」
「初対面で既に一度笑われてるのに、告白でも笑われるんすか!?」
　と、こんな茶番をすることしばし。
　大志を言葉でぼこぼこにして、京華の頭を撫でて盛大に癒された所で、気になっていたことを尋ねる。
「何でわざわざ2人で迎えに出たんだ？　別に俺は家の位置を忘れてねえぞ」
「ああ、そのことですか。今から俺と京華と出かけようと思ってるんす。だから言い方はアレですけど、そのついでにお兄さんとちょっとお話しようと思いまして。姉ちゃんに頼んでこうして迎えに出ることにしたんす」
　え。
「……お、おお、そうか」
「両親は仲良くお泊まりに行きました。なので今家には姉ちゃんしかいません。京華もたまには外食を食べたいってごねてるんで、2人で遊んだ後、夜ご飯も食べて来ます」
「お、おお。おお？」
「あ、ちなみにうちの冷蔵庫には姉ちゃんとお兄さんの分のご飯がありますんで。良かったら食べてって下さい」
「え、ああ。おお？　わりいな、……おお？」
「それじゃ、姉ちゃんのこと、よろしくお願いします。行ってきまーす！」
「はーちゃん、いってきまーす！」
「お、おお、行ってらっしゃ、おお？　行ってらっしゃい」
　満面の笑みを浮かべて手を振る京華と、意味深な笑みを浮かべる大

志。
そうかそうか、夜まで俺と川崎は２人きりか。
……。
目の前のマンションを見上げて、知らず知らずの内にごくりと息を呑む。
……あくまで看病、川崎は弱ってる、弱ってるから……！
何度も頭を振って自分に言い聞かせて、マンションへと足を踏み入れた。
続く。

（３３）

川崎が住むマンションに足を踏み入れ、エレベーターに乗り込む。以前は大所帯で乗り込んだエレベーターだが、今乗っているのは俺一人。ごうん……と無機質な音と共に僅かな無重力感が身体を包み込むと、仄かに緊張していた身体が余計に強張る気がした。

部屋の前まで行き、インターホンを鳴らす。しばらくすると、弱々しい声が聞こえてきた。

「……本当に来た……っ」

「なんで嘘つかなきゃなんねえんだ。色々持ってきたぞ」

紙袋を持ち上げて、画面に映るようにぷらぷらとさせる。

「ありがと……。……ちょっと待って、着替えるの忘れてた。待ってもらっていい？」

「いいって、無理すんな」

「……でも……」

「風邪っぴきであんまり動いてほしくねえんだ。いいから入れてくれ」

「……うん……」

なんだかやけに渋ってるな……と思っていると、目の前のドアがゆっくりと開いたので身体をどかす。

「……いらっしゃい」

「……お、おう」

恰好を見て、川崎の態度の理由が分かった気がした。

川崎が着ていたのは、ピンクを基調として、花の模様がちりばめられたとても女の子らしいパジャマだった。身体をもじもじと捩らせているのがとてもいじらしく可愛らしい。

「……その、なんだ、別に気にすることないと思うぞ。可愛いし」

「……そういうの、今、いいから……っ」

口では俺の言葉を軽く躱しているようだが、泳いでいる目線が本心を物語っていた。

――しかし、こういった会話をしながらも、俺の内心は気が気でな

かった。
川崎のパジャマ姿がとても可愛らしい。それは間違いない。
けれど、それ以上に……熱があるのか、うっすらと汗をかいた身体、常に朱に染まっている頬、どこか虚ろな目。それでいて、胸から盛り上がったラインは妙に生々しく、ただ立っているだけでもひどく扇情的だ。いつものポニーテール姿ではなく、青みがかった黒髪を真っ直ぐに流していることも相俟って、とても大人びて見える。可愛さと美しさと色気が共存するその姿につい喉を鳴らしてしまったが、川崎は俺の反応に気付く余裕は無いようだった。
「取り敢えず入って……」
少し掠れた川崎の声に、俺は頷いた。
× × ×
「洗面所借りていいか」
リビングのテーブルに買ってきた物を置いてそう言うと、川崎はふっと笑みをこぼした。
「あんた、律儀だね……」
以前訪れた時のことを思い出したのか、川崎が浮かべる笑みは具合が悪いながらも慈しみに満ちていて、とても優しい。何だか照れくさく思いながら、手洗いとうがいを済ませる。
リビングに戻って諸々の準備をしている間、川崎はリビングのソファでぼーっとしていた。いつになく力の抜けたその様は、とても貴重な光景に思えた。
「準備出来たぞ。部屋で休めよ」
「え、……あ、あんた、あたしの部屋に……来るの？」
川崎の言葉に、俺は目を細めて呆れた視線を向ける。
「リビングで看病する奴がどこにいるんだっつの。いや、いるかもしれねえけど。別に散らかってようが恥ずかしいものが転がってようが気にしねえよ」
俺の言葉に、川崎は顔を真っ赤にして立ち上がった。
「ち、散らかってないし、恥ずかしいものなんて……っ！　……あ……っ？」

「おい……っ？」
急に立ったせいか、川崎が額を手で押さえ、ふらりとバランスを崩す。慌てて駆け寄り肩を抱き寄せると、しっとりとして熱っぽい感触が手のひらを包んだ。
「……ご、ごめん……っ」
「……ほら、こうなるだろ。良いから行くぞ」
「あ、え、ちょ……っ!?」
肩を抱き寄せたまま歩き出すと、川崎が目に見えて慌て出した。口元をもにょもにょと動かし、小動物のような目で見上げてくる。ちょっとした悪戯心が湧いて、口の端を吊り上げた。
「ん、どうした。おんぶの方が良いか？」
「……」
「いや、ちょっと本気で考え込むのはやめてくれ。こっちが恥ずかしくなるから」
「……」
「マジで考え込むなっての。……俺の理性が飛ぶぞ、多分。それも結構簡単に」
「……それは……ちょっと……」
「お前可愛いな」
思わず漏れた本音に川崎が口をぱくぱくさせていた。妥協案で手を繋ぎ、川崎の部屋まで並んで歩く。川崎はちらちらと俺を見てくるが、俺が見ると高速で目を逸らした。何だろうこの扱いに困る野生動物みたいな仕草は。
「……ほ、本当に入るの……？」
部屋の前に来た時、まるで決意を試すかのように川崎が聞いてきた。
「ここまで来て何言ってんだ。早く休んでくれ」
「……うぅ……」
情けない声を漏らして、川崎が自室のドアをゆっくり開けた。
× × ×
川崎がドアを開けて目に飛び込んで来た光景に、少し目を見開く。

……何て言うか……。
「……」
「……ちょ、ちょっと。何か言ってよ……」
「……川崎……」
「……なに？」
「……お前、可愛いな」
「……だから、そういうこと言うなぁ……っ」
部屋を呆然と眺めながら独り言のように呟く俺の言葉に、川崎は赤面して俯いた。
川崎の部屋は、ごくごく真っ当な……可愛らしい部屋だった。
部屋のそこかしこにぬいぐるみが置いてあり、ピンク色のインテリア諸々が見受けられる。程好く女の子らしくしているという印象を受けた。
「最近急にこんな感じにしたから……大志にも色々からかわれた。もうやだ……恥ずかしい……」
パジャマの裾を掴み、眉を八の字に曲げて涙目になる川崎を見て、口元がむずむずした。もしかしたら今の部屋の雰囲気になるまでは、もっとさばさばした部屋だったのかもしれない。部屋の趣味が変わるとは、よっぽどなことがあったんだろうなぁと思う。これだけ女の子っぽさが溢れる部屋への変化。さぞや良い恋を……と思い至った所で思考が止まる。
「……お邪魔します」
脳内で至った結論に自分まで恥ずかしくなって、そそくさと部屋に足を踏み込んだ。
続く。

（３４）

とくん、とくん、とくん。
少女の心臓が小気味よく揺れ動く。
汗でしっとりと湿り気を帯びた黒髪は、いつにない色艶を彼女に与えていた。
この胸の高鳴りは、風邪を引いているから？
それだけではないことを、既に彼女は知っている。知ってしまっている。
目の前に佇む、今も自分を気遣わし気に見つめている少年の存在が。
彼女を包み、癒し、更なる熱を生んでいるのだ。
少女は思う。
今日、この場所で、もっと彼に甘えることが出来たなら。
２人の関係も、もっと進むのかもしれない。
捻くれながらも優しい彼の、もっと柔らかい部分を、見ることが出来るかもしれない。
思考がぼやけ、身体はふらつき、だるさが体力を奪い取る。
そんな中でも、そうした中でも、目の前の彼を見ると。
少女の心は、どうしようも無い程に躍ってしまうのだ。

×　×　×

部屋に入ると、何故か川崎が歩いてきた道を逆戻りしようとしていた。
「どうした」
「お茶淹れる……」
「ばか……だから無理すんなっての。寝てろ」
ふらつく川崎の肩を掴むと、「きゃ……っ」と力無い悲鳴が聞こえた。くるりと半転させて背中を押し、ベッドへと連れて行く。ほら、と言って手を離すと、渋々と言った様子でベッドの上に転がった。
「ん……っ」
右腕を投げ出し、左腕で額と目を覆う川崎。吐息が何とも悩まし

く、こういった仕草は本人が至って無自覚なのでタチが悪い。その目は先程よりもぼんやりとしていて、恐らく俺を迎える為に動いたことで具合が悪くなったのだと判断した。それでも、ここで謝ればきっと川崎はそんな事無いと力強く否定してくるのだろう。これ以上無理はしてほしくないので、敢えて謝るのを止めておいた。

ベッドの縁に座り、振り向いて川崎の目を見る。

「水、飲みたくなったらいつでも言ってくれ。取り敢えず寝とけよ」

「ん……あ、あの、えっと……っ」

「？　どうした」

川崎が、熱とは別に頬を仄かに赤らめて、何か言いたそうにしている。何をそんなに照れてるんだ……と思ったが、俺の右手のすぐ横で、投げ出された手がぴょこぴょこと動いているのに気付いて苦笑した。熱を帯びた手を何も言わずに握ると、川崎は腕を顔からどかし、微かに目を細めた。

「ほれ、おやすみ」

「……ん、おやすみ」

温もりに満ちた声で俺の言葉に応じた川崎から、間もなくして安らかな寝息が聞こえてきた。ちょっと捲れていたパジャマの上着の裾を、視線は逸らしながら直した。小さな掛布団でお腹を覆い、冷えないようにしておく。

川崎の寝顔は思っていたよりも幼く、楽しい夢でも見ているのか表情がころころ変わる。普段とは違う一面はとても面白く、見ていて飽きることが無かった。

×　×　×

「……きっつ……っ」

川崎が寝てから、15分後。

俺の中の色々なものが、限界に達しようとしていた。

紳士的に、出来るだけ優しく、労わるように。

風邪を引いた川崎に対して限界まで優しくしてきた訳だが。ここに来て本能が理性に揺さぶりを掛けてきた。

脳内で何かを受信する。

『Ｆｒｏｍ　本能　ｔｏ　理性。
件名：そろそろさ
本文：Ｙｏｕ，襲っちゃいなよ！』
「やめろ、俺の本能……っ！」
何故かメール形式で囁かれる悪魔の誘惑。こういうのって脳内で天使と悪魔が戦うのがテンプレートじゃないのか。何でメールなんだ。事務的だな随分と。
脳内でメールをまた受信する。
『Ｆｒｏｍ　溢れ出す本能　ｔｏ　徐々に弱りゆく理性
件名：そこに２つの丘があるじゃろ？
本文：ボタンを２つ外すじゃろ？　手を突っ込むじゃろ？　Ｙｅｓ！』
何が!?　何がＹｅｓなの!?　ていうか送信元が強くなって受信先が弱くなってる！
「うぅ……ん……っ」
「っ！」
川崎がこちらに寝返りを打つ。手はしっかりと繋いだままだった。
あ、また脳内メール。
『Ｆｒｏｍ　逆るどころか既に先走っている本能　ｔｏ　理性って何だっけ？
件名：寝返りを打った訳ですが
本文：まずは手を離します。それで川崎さんが残念そうな顔をしたらもうオッケーです。高感度はカンストしてます。ばっちりです。ＧＯです。まずは汗をじっとりかいたお尻を触ります。触り心地が良いですね。これを３０分。こちらが３０分揉まれ続けて出来上がったお尻です。見た目は変わりませんね。しかし匂いはきっとそれはもうたまらないものになっていますよ。楽しいですね。次は右手でお尻を触ったまま、胸を揉みましょう。勿論上着のボタンを外して手を突っ込むんですよ？　私の予想では恐らくブラはしておらずショーツだけ履いているでしょう。たまらないですね。両手でたっぷり嬲ること３０分。こちらが計６０分間男の手に蹂躙され続けた

豊満な肢体です。いやらしさは倍増どころか２乗する勢いです。やばいです。ここで川崎さんが目を覚まします。けれどまだ熱に浮かされて、何が起きているのか把握出来ていません。にこにこして誤魔化しましょう。何もやましいことはしていない体を装いながら御胸と御尻を引き続き揉みましょう。え、なに、バレるだろうって？　いいえ、バレませんよ、多分。そんなこと言ってても、バレたらどうするって？　そんなもんキスで黙らせれば良いんです。むちむちは良いぞ。平仮名で書くとまた生々しくなるぞ、むちむち。むちむち、むちむち、むちむち……』

「なげえ！」

思わず小さく口に出した。

脳内メールの量が格段に増えている。いかん。ツッコミどころが多すぎる。しかも何がやばいってこれが全部漏れなく俺の本音だと言うことだ。口調が最後急に変わるのも俺の心がブレブレである証拠だ。何を冷静に分析してるんだ俺は。

しかし、どうしよう。もうかれこれ２０分近く手を繋いでいるだけだ。何もしていなくても楽しくはあるんだが、それと同時にフラストレーションと言う名のリビドーが溜まる一方だ。

どうする、どうする？

そうだ、こんな時は俺が好きなラノベや漫画の主人公たちがどうするかを考えれば良いんだ！

……。

……。

……。

……。

……皆、ヘタレだった。

漏れなく女の子に何かしたいとは思っているけれども。

その後結局何も出来ない、ヘタレの巣窟だった。

「う……ん……っ」

不意に、川崎がゆっくりと目を開けた。生まれたての雛のように不安げに視線を巡らせ、右手の温もりに気付いたのか２人が繋いだ手を

見やり、そこからゆっくりと視線を上げる。俺とぱちりと目が合うと、ほっとしたように目を細めた。
「水……っ」
「あ、ああ、分かった」
消え入りそうな声で呟かれ、慌てて手を伸ばす。すぐ手が届く位置に置いていたスポーツ飲料のペットボトルを掴み、川崎の背中を押さえてゆっくりと起こす。すっかり俺に身を委ねて脱力している身体は、思っていたよりも重かった。
「ほら、ストローで飲めるから」
「ん……っ」
手をだらりと下げたまま、俺が差し出したストローをぱくりと咥え込む。
「ん……んっく、んっ、んっ、ん……ぷはっ。……んっ、んっく……んっく、ん……っく、んん……っ」
「……っ」
虚ろな目で、弱々しく断続的にストローで飲み物を吸い上げ続ける様は……他の物を見る余裕が一切無くなる程色っぽい。時折目が合うが、いつもなら恥ずかしがってすぐ逸らされる筈なのに今は違っていて、ぽけっとしたまま俺を見つめて飲み続ける。
この光景が何の行為を想起するのか……なんていうことは分かりきっていて。
「勘弁してくれ……」
飲み終えて満足したように再び眠りに就いた川崎と手を繋ぎながら、空いた手で額を押さえて呻いた。

続く。

（３５）

手を繋いだまま眠りに就いていた川崎が、徐に目を覚ました。よっぽど疲れていたのかその表情はぼんやりとしていて、視線を巡らせるための首の動きも緩慢だ。そして糸よりも細い拠り所に縋るかのように繋いでいる手に力を込め、軽く目を細めた。やっと親と再会出来た迷子のようだと思った。

「お腹……空いたかも」

川崎がむくりと起き上がり、手を繋いだまま仄かに顔を赤らめてお腹を押さえる。可愛らしさににやけそうになりながら、ベッドから立ち上がって持ってきたバッグからタッパーを取り出した。

「それは……お粥？」

ぼうっとした表情の川崎が、こてんと首を傾げる。俺はこほんと咳払いをして頷いた。

「ああ、昨日のお礼にな。味は保証しかねるが」

頬をぽりぽりと掻きながら顔を逸らすと、くすりと笑う声がした。

「……なんだよ」と聞いても、「別に？」と笑ってはぐらかされてしまう。

「もう冷めただろうから、温め直すわ」

「え……いいって、別に」

「レンジ借りていいか？　場所は覚えてるんだが」

「え、あ、うん、でも……」

「いいから寝てろ、まだ熱あんだろ」

川崎の髪をくしくしと撫でて、おでこ同士をくっつける。「んな……っ!?」と川崎が驚きの声を上げたが、そこまで熱を感じなかったので安心した。

「ほれ、寝てなさい、ほれほれ」

「あっ、や……っ」

川崎の両肩をぐいぐいと押して倒すと、何とも艶っぽい声が聞こえた。こちらが気を抜けばすぐ無理しそうな性格だから、ちゃんと寝かせようとした訳だが……。結果的に、仰向けになる川崎の上に俺が四

つん這いで覆いかぶさると言う、誤解しか生まない状況になってしまった。
「……」
「……」
「……」
「……」
川崎の耳をそっと撫でると、目をきつく閉じて「んん……っ」と湿っぽい声が漏れる。
「……」
「……」
あかん。
「……お粥、温めてくる」
「え……？　あ、うん……」
努めて平静を装って言うと、川崎が拍子抜けしたような声を漏らした。
今のは、絶対期待されてたよな……と思いながら立ち上がる。
名残惜しそうな視線を背中に感じながら、タッパー片手に部屋を出た。

×　×　×

温め直したお粥をいざ食べようとした所で、まるで当然の流れであるかのように俺が川崎にあーんをすることになった。ベッドの縁に2人で並んで座り、食事が始まる。
「ん……っ」
恥ずかしげに目を閉じて、長い睫毛を頼りなげに揺らしながら、俺が差し出したレンゲに盛られたお粥を咥えてもぐもぐと噛み、こくりと飲み込む。熱がある為か川崎の何気ない挙動は一つ一つがどこか艶めかしく、動作の始まりから終わりまで見惚れてしまう。俺と視線が合った川崎はその度に顔を真っ赤にしていた。食欲はだいぶ回復していたらしく、用意していたお粥はぺろりとたいらげられた。
「ごちそうさま……ありがとう。美味しかった」
「ん、それなら良かった」

タッパーをテーブルに置いて、川崎がふっと息を吐いた。満足げな少女が浮かべた柔らかな笑みに心地良い昂揚感を覚えていると、何やら太ももに両手を挟んでもじもじとし始めた。俺のことをしきりにちらちらと見やり、何か言いたそうにしている。
「どうした」
俺の言葉にびくりと震えると、川崎が口元をもにゅもにゅと動かした。俺と何度も視線を絡めては離すのを繰り返していると、ゆっくりと口を開く。
「そ、その……ちょっと、やって、みて、ほしいことが……あるんだけど……」
「ん？　何だ」
「えっと、その、だから、えっと……」
未だに口元をもにゅもにゅさせているもにゅ崎が俺の手をきゅっとつまみ、２人の後ろの壁を指差した。
「あそこ、座って……？　体育座りみたいな感じで」
「？　いいけど……」
一体何事……？　と思いながらも言われた通りにする。ベッドの片側は壁にくっつけている為、ベッドに座りながら壁に背を付ける形になった。
この後どうすれば良いんだと川崎に視線を向けると、川崎はベッドに上がって四つん這いになりこちらに近付いてきた。突然の行動に目を白黒させながらも、視線はしっかりとパジャマから覗く豊かな谷間に固定されている。まだぼうっとしている川崎は俺の視線にも気付かないのか何も言わず、俺の目の前まで来ると身体の向きを変え、俺の足と足の間にすっぽりと収まった。硬い壁と川崎の柔らかな背中にサンドされる。
「……ええっと……？」
「……そ、その、後ろから、その、だ、だ、抱き……っ」
川崎はいよいよ緊張がピークに達しているようで、口がまるで回っていない。しかしここまでされれば何を望んでいるかは朴念仁の俺でも流石に分かる。未だに最後まで言葉を紡げないでいる川崎の髪

をそっと撫でると、後ろから腕を回して包み込むように川崎を抱きしめた。汗でしっとりと湿った肌はほんのりと熱く、腕に力を込めた瞬間に汗と甘い匂いの混じったたまらない匂いが鼻腔を包み込んだ。
「あ……っ」
「……これでいいのか」
　ため息を漏らす川崎に尋ねると、前を向いたままこくりと頷いた。青みがかった黒髪をまとめて横に流し、真っ白なうなじに顔をうずめる。
「ひゃんっ!?」
「すげえ良い匂いする……」
「ば、ばかぁ……っ」
　恥ずかしそうにもぞもぞしながらも、川崎は決して拒否しようとはしない。大なり小なりこんな状況を望んでいたんだなと感じ、ぞくぞくとした欲求が身体の奥底から湧き出て来るが……必死に抑える。
　さて、理性が持つかな……と遠くを見やっていると、川崎がぽそりと呟いた。
「あの、さ……」
「ん、どうした？」
「比企谷……我慢してるでしょ？」
　ぎくり。
「……っ、いや、そんなことは……まあ、あるけど」
　嘘を吐いてもしょうがないと思って正直に白状すると、川崎がこちらを振り向き、にこやかに微笑んだ。
「ふふ……別に良いんだよ？　我慢しなくて」
「いや、それだとお前の身体が……」
「具合はだいぶ良くなってるから大丈夫。……それともなに、比企谷は一度始めたら全く手加減出来なくなるの？」
　この子にしては珍しい挑発的な言葉と笑みに、俺はむっとする。
「舐めんなよ。きっちり見極めながらいじめてやる」
「え、ちょ、いじめるって……っ!?」
　川崎が余裕のある笑みを崩し、俺の腕の中でぱたぱたと慌てる。し

かしそんな抵抗もすぐに終わって、俺の手をそっと握ってきた。
「……いいよ、難しく考えなくて。……好きにして？」
「……っ、……わかった」
言いながら、目の前の魅惑的な肢体を目にしてごくりと息を呑む。
川崎の挑発には強気に返したが……果たして本当に手加減出来るだろうか？　と言う疑念を抱く。好意を持った女性、魅力的な身体に更なる魅力を追加した状態で好きにしてと言うのだ。経験の無い自分にブレーキ等付いているのかと疑ってしまう。
それでも川崎が許してくれたのだ。素直に甘えることにしよう。
「……行くぞ？」
「……うん」
短い会話はすぐに空気中に霧散して、２人の間にひりついた空気が充満する。
手のひらに汗をかきながら、一体どうやってこの身体を味わおうか……と考え始めた。

続く。

（３６）

壁に背を付けて座り、広げた足の間に川崎が座っている。熱のせいか可愛らしいパジャマは汗でしっとりと湿っていて、鼻腔を擽る匂いは甘くてどこかいやらしい。

緊張で強張る少女の左肩に顎をとんと乗せると、ほんのりと紅潮したうなじがびくりと震えた。下を見ればパジャマの隙間から豊満な乳肉が作る谷間が見える。一滴の汗の粒が谷間に流れて行くのを見付けて、ごくりと息を呑んだ。

両手を川崎の腋の下から伸ばして乳房を支えると、予想を超えるボリュームが手のひらにのしかかってきた。

「あ……っ」

コンクリートに落ちる初雪のように、すぐさま消えてしまいそうな吐息を漏らして、川崎がベッドのシーツを握りしめる。興奮で頭がどうにかなりそうで、不意に荒っぽく吐いた息が白いうなじを撫でると、シーツを握りしめる手には更に力が篭った。

汗のせいもあってか、パジャマ越しにも関わらず乳肉の感触は妙に生々しい。指に力を入れて慎重に揉みほぐすと、込めた力と同じだけ柔肉が沈み込み形を変える。

「あ……ぅあ……っ、んっ、ふぅ……っ」

顔を真っ赤にしながら悩ましい声を漏らす川崎を見ていると、愛おしいと思うと同時に嗜虐心が加速度的に湧いていく。首筋に口付けをすると、口内に汗の塩味がうっすらと広がる。自分の汗は不快なのに、目の前にいる少女の汗は不思議と拒否感は無く、むしろ愛おしさえ湧いた。舌先を尖らせて首筋をなぞると、びくりと全身を戦慄かせておとがいを上げる。シーツから手を離してこちらの両膝を掴み、振り向いて不安げに瞳を揺らす。パジャマに押し付けられた肉棒は、ズボン越しとは言え欲望を丸出しにして目の前の背中の一部を圧迫していた。

「……暑いだろ。ボタン、緩めるぞ」

俺の言葉に川崎は何も答えない。横顔を覗くとうっすらと開いた

目はベッド際をじっと見つめていて、長い睫毛がふるふると震えていた。無言の肯定と捉えて盛り上がった丘の上に手を伸ばし、ボタンを2つ緩める。露わになった白い柔肉はほんのり紅潮していてとても柔らかそうだ。目の前の極上の光景に心臓が爆発しそうな程の興奮を覚えていると、あることに気付いた。

「……お前、下着……」

俺の言葉にぴくりと反応した川崎が、ため息混じりに振り返って、恥ずかしそうに俺を見やった。

「……その、着けるとくつろげる感じがしないから、部屋ではいつも外してるの……」

「……そうか」

思わぬ情報にどきどきしていると、川崎はぷいっと前を向いてしまった。

改めて柔肉を下から掬い上げる。耳に染み入る熱っぽい声と、ボタンを緩めたことで今にも零れ落ちそうな乳房に際限無く興奮する。

「ふっ……うんん……っ」

右手の甲で口を押さえて、川崎がきつく目を瞑っている。豊満な双丘の頂に愛撫する手を昇らせていき、先端を両手で摘まんだ。

「んあぁぅんっ！」

口を押さえていた手が跳ね上がり、身を反らせて甘い悲鳴を上げた川崎は、次の瞬間に高速で振り返り、再び前を向いて両手で顔を覆った。一挙手一投足がたまらない程興奮させているということを、彼女は気付いているのだろうか。

人差し指で乳頭を押し込み、残りの指でたわわな膨らみを味わう。

「はぁぁぁ……っ、はぁぁぁ……っ」

川崎は再び俺の足に手を添えて、こちらが刺激を加える度に深く呼吸をして落ち着こうとする。そんな健気な努力も、不意打ちで乳頭を強く摘まめば容易く瓦解した。

まだ外していないパジャマのボタンに手をかけると、川崎がびくりと震えた。けれど何も言ってこない。たっぷりと汗の染み込んだパジャマのボタンを全て外すと、豊満な双丘に布一枚引っかかっている

だけの状態になる。すぐに脱がせずにしばし眺めると、「恥ずかしい……っ」とどこか幼い声が少女の口から漏れ出た。
両手で一息にパジャマを剥く。ひゅっと息を吸う音が聞こえた。
ごくりと息を呑んだ。
つるりとしてうっすら紅潮した肌に、視界の大部分が塞がる程の双丘。その頂きには2つの小さな膨らみが痛い程に張り詰めていて、全身が頼りなげに震えている。
「……綺麗だ」
「……う……うぅ……っ」
俺の言葉に、川崎は両手で顔を覆って震えるばかり。可愛いなこの子は……と思っていると、あることに気付いた。
「……？　……あれ、足……」
「え……？　わっ、うそ……っ!?」
俺の言葉で自分に起きていることに気付いた川崎は、跳ねるように足を閉じた。
川崎の足の根本に、じんわりと染みが広がっていた。まるでスポイトで水を垂らしたような染みは、水を溢したと言うにはとても不自然な位置で、何が起きたかということが容易く分かるものだった。
この体勢だと、いまいち川崎の染みを見ることが出来ない。となると体勢を変えて……且つ川崎が恥ずかしがるような……と考えた所で。
燃えかかっていた嗜虐心が、野火の如く燃え広がった。
「ちょっと体勢を変えるか」
「え……っ？」
川崎の肩を掴み、まず自分が壁から枕の方に移動する。同じく身体の向きを変えた川崎を前に押した。訳も分からぬまま四つん這いで移動した川崎の動きを早々に止め、仰向けでこちらに寝転がした。俺は胡坐をかいて川崎の頭と背中を迎える。混乱している川崎は、寝転がった所で自分の状況に気付いた。
「ちょ、ちょっと、これ……っ！」
川崎が顔を真っ赤にして見上げてくる。

正面からの膝枕のような体勢で、俺は川崎の頭を自らの股間の上に乗せている。ズボンの中は既にいきり立っているため川崎の頭は屹立した塔から逸れていて、川崎から見れば自分の顔のすぐ横に牡の象徴が己の存在を主張している訳だ。恥ずかしがる川崎に対して、俺は飄々と言葉を紡ぐ。
「じゃ、行くぞ」
「え……んあぁんっ!?」
躊躇うことなく2つの乳頭を摘まみ、上に持ち上げる。柔らかな乳肉が持ち上げられた分だけ伸びると、川崎は腰を浮かせて艶っぽい声で鳴いた。
「顔を隠すのは無しだぞ」
「そん、な……んぅぅぅ……っ」
乳首をこねくり回し、乳房全体をこね回す。川崎は手をさまよわせた後、俺の両膝に添えた。
この体勢なら川崎の恥ずかしがる顔をいくらでも眺められるし、足の付け根の染みの変化も分かる。案の定川崎は愛撫の度に悩ましく足をくねらせてわざわざ染みを大きくしていた。
「うぁっ、ひぃんっ、うんん……ひっ!? ひぁぁっ! あぅ……うぁぁ……っ」
「……」
反応を具に観察しながら、思っていたことを口にする。
「なあ、お前って声の出し方がなんだか泣いてるみたいだよな。すげぇエロい」
「っ!? な、なにを……っ」
「あと、いくら俺が好き放題やっても『だめ』とか『いや』って言わないのな。すげぇそそる」
「……っ!」
「あと、足くねらせるとパジャマがこすれて染みが広がるぞ? もうさっきまでと比べ物にならないくらい広がってるけど」
「……う……うぅ……っ」
一気に畳み掛けると、川崎は反論するでもなく、ただ目に涙を浮か

べて俺を見つめた。力無く眉を八の字にして、「言うな……ばかぁ……っ」と呟かれ、股間が痛い程に張り詰めた。
「どうする？　顔と染みを見られて恥ずかしいなら、いっそうつ伏せになるか？」
俺が笑いながら冗談のつもりで言うと……川崎が目の前にある肉棒を見てごくりと喉を鳴らした。え？　と俺が間抜けな声を漏らすと、青みがかった黒髪を指でくるくると巻きながら、興味ありげに視線を向けてきた。
「……別に、良いけど……」
「……お、おう」
マジか……と内心ものすごく驚きながら、川崎の肩を掴んで起こした。

続く。

（３７）

胡座をかいた状態で、仰向けになっている川崎の頭を自身の股間に乗せる。正面から迎え入れての膝枕という体勢で、川崎の身体をじっくりと愛撫していた。冗談半分でうつ伏せになるかと提案すると、川崎はあっさりと了承してくれた。内心動揺しながら川崎の肩を支えて起こしてやると、くるりと身体の向きを変えて青みがかった黒髪が舞う。膝立ちになって惚けた表情を浮かべる川崎がこちらの両肩に手を置き、口を微かに開けたまま顔を寄せて来た。

「ん……っ」

川崎から舌を絡めてきて、遠慮無しに互いの口内を貪り合う。熱と湿り気と情欲を交換して、理性を備えた思考がどろどろに溶けていく。手を伸ばして豊かな双丘を下から掬うように揉むと、整えられた眉が悩ましげにひそめられた。

「うんん……んふぅぅ……っ」

乳搾りをするかのように柔肉を揉みしだくと、目の前の少女の唇の合わせ目から唾液がこぼれ落ちる。唇と胸に注意が分散されて、少女の意識は混濁していた。

唇が離れると、川崎は首へのキスを始める。己の所有権を夢中で主張して、可愛らしい舌をぴちゃぴちゃといやらしく鳴らしながら、何度も何度もキスをする。何度も押し付けられる柔らかい感触に肉竿が痛い程軋んで、先走りの汁が止めどなく溢れているのが分かった。やがて重力に負けるように、蕩けた表情を纏った顔の高度が落ちていく。顔を擦りつけたままずるずると胸、腹と落ちていき、やがて下腹部へと辿り付いた。

「はぁぁぁ……うんん……ふぅぅぅ……っ」

こちらから何を言うでもなく、川崎は夢中になってズボンの膨らみに鼻を鳴らす。俺が見ていることを忘れているのでは……？　と思う程の有様だ。完全に火が付いているのだろう。

「匂いを嗅ぎながらでいい。うつ伏せになるんだ」

命令の成分を交えた言葉に、川崎は言葉も仕草も返すことなく従

う。内ももに手を付いて、肉竿の隣に顔を起き、うつ伏せになる。火照った柔肉がベッドの上でぐにゃりとたわみ、いやらしく形を変えた。
「触ってみるか」
俺の言葉に、川崎が目を見開く。数秒だけ迷っていたが、やがて恐る恐る手を伸ばした。ジーンズの上から、まるで宝物を触る子どものような手つきで、細い指を這わせる。
「すご……い……っ」
震える声が耳朶を打つ。この先の反応を楽しみにしながら、川崎の顔を一度離してチャックを開ける。ボクサーパンツの生地を一杯に伸ばした山を見た瞬間、川崎の目は驚きで見開かれた。興味津々の顔で生地越しに肉竿を掴むと、綺麗な瞳が興奮で揺れる。
「硬い……それに、匂いも……っ」
川崎の言葉に喜色がはっきりと見てとれて、匂いの強さを嫌悪するどころか好ましく思っているのだと気付く。後頭部に手を添えて肉竿に顔を押し付けると、「んふぅぅ……んんんん……っ」と、苦悶と悦楽に満ちた声が響く。裏筋に顔を押し付けられたまま、空いた手は玉や亀頭をしきりに撫でている。
「それじゃ、直接見るか」
俺の言葉に、今度は迷うことなく顔を離して、頷く代わりに物欲しそうな顔で俺を見つめる。風邪による熱と、行為による熱が合わさった顔は、扇情的でどこまでも情欲をかき立ててくる。
「腰、浮かせるから。脱がせてくれ」
「……っ!? な……っ」
悪戯っぽく言った俺の言葉に川崎は首まで真っ赤にして慌てるが、もうひと押しするまでもなく、間もなくして頷いた。
ベッドに手を付けて、腰を浮かせる。川崎は起き上がると、律儀にズボンを先に脱がせ、それからパンツに手を掛けた。
ぶるん、と大きく反動を付けて、肉棒が姿を現す。
「あ……ぅ……ぁ……っ」
視線の全てを目の前の肉竿に注いで、川崎がごくりと息を呑む。耳

まで真っ赤にしながらも、その瞳には好奇心が満ち満ちていて。顔を徐々に寄せて行っているのは、無意識なのだろうと思った。
「これを、お前の中に入れるんだぞ」
「……っ!?　……ぁ……っ」
囁いた言葉に、大人びた顔立ちが悩ましげに歪む。こんな言葉、ほんの5分前までに言えばどれだけ怒られたか分からない。けれど今の川崎にとっては発火剤にしかならないようだ。
青みがかった黒髪越しに後頭部を掴み、反り返った肉棒の切っ先に寄せる。
「……ほら、好きにして良いぞ」
「……っ、……うぅ……ぅんん……っ」
涙目になって逡巡した川崎は、やがて目をきつく閉じてゆっくりと開き、
「……ちゅっ……」
――唇を寄せて、鈴口にキスをした。瞬間的に、肉棒の先端から根本まで痺れるような電流が走る。
「……ちゅっ、ちゅっ、んん……ちゅぴっ、ちゅっ……はぷっ、……んっ、ちゅるっ、れろっ、ちゅぷっ、んふぅぅ……っ」
「……うおっ、あぁ……っ」
鈴口に何度も吸い付き、滲み出ていた先走りの汁を舌で舐め取り、こくりこくりと飲み込む。亀頭をほんの少しだけ咥え込むと、温かな口内の中でちろちろと舌を這わせる。もどかしいのに、自分でする時とは比べ物にならない快感が走る。気の強さを滲ませている普段の目つきは面影さえ残さず、今は目尻を下げてうっとりとしながらひたすらに牡の欲望をしゃぶっている。頬を窄めると端正な顔立ちが歪んで、とてもそそる。歪んだ表情自体も美しかった。
川崎の頭を押し込み、徐々に深く咥え込ませていく。
「うんんん……んふぅぅん……っ」
亀頭を丸ごと咥え込んだ川崎が苦しそうに呻く。けれどその両手は竿の部分や玉を愛おしそうに撫でさすっていて、苦しささえも楽しんでいるようだ。

「口の中でぴちゃぴちゃ舐めながら、ゆっくり咥え込んで……そう、そんな感じで……うっく、うぁ……っ」
こちらの指示に従順な川崎は、顔にじわりと汗を滲ませながら、上目遣いでこちらの反応を窺ってくる。強烈な快感を伴いながら身体の一部を飲み込まれて行く様は、片時も目を離せない程の魅力を持っていた。川崎が頬をすぼめる度に内頬が竿をしごき上げて、顔を動かしている訳でも無いのに何度も射精しそうになる。川崎の表情はとろとろに蕩けていて、本来持ち合わせている羞恥心や理性はとっくに元の形を失っていた。
川崎の口と舌と喉を嬲り、こちらの亀頭と竿が嬲られる。
互いを犯し犯される関係をゆっくり続けていくと……やがて、肉竿が根本まで飲み込まれ、川崎の喉奥に亀頭がこつんと当たった。
「おごぉぉ……っ」
内股に手を這わせて、川崎が苦しそうに呻く。荒い鼻息が恥毛をそよがせ滴る汗が睾丸を濡らす。ひくひくと身体を震わせる川崎の身体からは、むせ返る程の牝の香りがした。
「ゆっくり抜いてくぞ。ちゃんと頬を窄めておくんだ。いいな。よし、抜くぞ……うっ、あぁぁぁ……っ」
言われた通りに川崎が頬をきゅっと窄める中、喉から肉竿を引き抜いていく。強烈な吸い付きによる快感と抵抗は半端ではなく、魂ごと引き抜かれてしまいそうだ。
雁首に紅い唇が引っかかった所で一度止まると、上目遣いをした川崎と目が合う。川崎は意識が朦朧としていて、今自分が口にしているものを味わうことしか考えていなかった。
もう一度ゆっくりと根本まで押し込む。
悩ましい声と共に、亀頭がぴちゃぴちゃと音を立てて舐られる。
ゆっくりと引き抜く。
頬を窄める力が増し、身体の奥底から精液が引きずり出されそうになる。
もう一度ゆっくりと根本まで押し込む。
そろそろやばいな……と思っていると——川崎が、不意に、顔を左

右に揺らして喉奥で亀頭をしごき、内頬で竿の横筋をしごき上げた。
「うぁっ!?　お、おい、今そんなことしたら……っ」
完璧な不意打ちを食らって、川崎の頭を押さえ付ける手に力を籠める前に――限界が訪れた。
――ごぶっ、ぶびゅるるっ、びゅぶっ、ごぶごぶごぶっ、どびゅりゅるるる……っ。
「おごぉっ!?　おぐっ、ごくっ、ごくっ、あぐっ、ごくごくっ、うぇっ、ごくっ、うっく、うんんん……っ！」
喉奥に叩き付けられる精液を、川崎は驚きながらも、涙目で必死に飲み込む。今まで出したことの無い量の精液を温かな口内にありったけ吐き出したが、川崎は唇で竿をきつく締めて、一滴も零すことなく飲み干した。
「……全部飲んだのか。えらいぞ。じゃあ、窄めたまま口から抜いて……そうだ、尿道から残った分を吸い出して……うっく、そう、そうだ……うぅ……っ」
尿道に残った絶頂の残滓を、瞳を潤ませた川崎が余すことなく吸い取る。鈴口にキスをしてちゅるちゅると吸い取る様は、あまりにも淫靡だった。
「……ぷはっ」
ようやく唇を離した川崎が、ぼうっとした表情で俺を見つめる。半開きになった口から覗く紅い舌が、今さっきまでの淫猥な口淫を思い起こさせる。あれだけ射精しておきながら、勃起はまるで収まる気配が無かった。
「……川崎」
「ん……なに？」
「……エロすぎ」
「……っ！　……ぁ……うぅ……っ」
自分の行いを思い返してぐうの音も出ないのか、川崎は顔を真っ赤にして、目尻に涙を溜めて黙り込んだ。
さて、下はどうなっているかな……と、うつ伏せになっていることで今は見えていない川崎の下腹部に視線を這わせる。俺の視線に気

付いたのか、川崎は恥ずかし気に腰をくねらせた。

続く。

（３８）

「川崎、次は……」

精液を余す事無く飲み干してぼうっとしている川崎の髪を梳くように撫でて、仰向けに寝かせる。上半身が裸で、下はぐっしょりと濡れたパジャマのズボンとショーツだけ。濃厚な牝の匂いを漂わせている川崎の頬は赤く、扇情的な艶姿に暴走してしまいそうな程の興奮を覚えていた。

整った顔立ちの頬を撫で、そこから首、鎖骨、乳房と縁を指でなぞる。

「あぁ……あぁぁ……っ」

こちらの僅かな動きにも敏感に反応して、牝の匂いを溢れさせた川崎の身体がくねくねとよじれる。張り詰めた乳頭を２つ同時に摘むと、「うあぁぁっ!?」と悲鳴混じりの嬌声を上げて、ロデオのように暴れた。そこから手を流れるように滑らせ、へそをほじくり、ズボンの上から下腹部に触れた。右手の指をいっぱいに使って擦ると、ぐじゅりと言う音がした。

「んはぁぁっ!?　あっ、うっく、ひぐっ、んくあぁぁっ！」

手のひらを前後させるごとに、パジャマを浸す池が広がって行く。川崎は小さな絶頂を何度も迎えているようで、豊満な肢体がしきりに跳ねた。

ぐったりとする川崎のズボンの裾を掴み、ずるりと引き下ろして脱がせる。

「……うあぁっ!?」

呆然としていた川崎は、急に下半身が涼しくなったことで今の状況に気付いたのか、下を見て真っ赤になった。

やはりと言うか、何と言うか。

川崎が履いていたのは、黒のレースのショーツだった。

何度見ても飽きないどころか、もっと見ていたくなるような不思議な気分だ。

ぐっしょりと濡れた下着は、中に濃厚な匂いを閉じ込めているのが

ありありと分かった。
「……すげぇエロいけど、本来ならもっと見てたいんだけど……今はこの下が見たいから。脱がすぞ」
「……っ」
川崎は目に涙を浮かべて、両腕で顔を覆った。嗜虐心を煽る仕草にごくりと喉を鳴らして、ショーツに手を掛ける。湿り気を帯びたショーツを脱がすと――目の前が霞む程の、濃厚な匂いが鼻腔を直撃した。
「……っ」
顔を腕で覆っている川崎が、息を呑む音が聞こえる。
魅惑的なピンク色をした陰唇。
こんもりと盛り上がった恥丘。
ふさふさと少し濃い目に生えていて、愛液で肌にぺったりと張り付いた恥毛。
指でつまめそうなサイズに勃起したクリトリス。
身体の一つ一つが男を誘惑する為に作られたかのような、極上の女性器が目の前にあった。
「うぅ……っ」
川崎が泣きそうな声を上げて、腕の隙間からちらりとこちらを見た。
「綺麗だ」
「……っ！　……そ、そんなこと……えっ、あっ、ちょっ、うあぁぁんっ!?」
目を見開いて恥ずかしそうにする川崎の下腹部へと手を伸ばすと、しっとりとした熱に触れた瞬間に川崎が身体を反らした。肉感的な淫部は触り心地が良く、指を沈ませるとぐじゅりと言う淫猥な音と川崎の嬌声が心地良く耳朶を打った。
肉厚のスリットを右手の指の腹でずりずりとこすり、膣口と思われる場所をぐにぐにと押す。
「ひあぁっ!?　うんんっ、んっく、うあぁんっ！」
涙混じりの嬌声に嗜虐心を煽られて、膣口にずぶりと中指を挿入さ

せる。あっさりと中指を迎え入れた膣肉が、心地良く締め付けてきた。川崎がひゅっと息を吸った瞬間に、左手で充血したクリトリスをにちりと摘んだ。
「……〜〜〜〜ぅあぁぁぁぁっ!?　それっ、だめっ、う……うぁあんぐぅぅ……っ！」
　強烈すぎる快楽に耐え兼ねて、川崎が必死の形相で抵抗する。こちらの両腕を掴んで抵抗しようとするがろくに力が入っておらず、か細い抵抗を楽しみながら肉芽を摘み、中指を抜き差ししながら折り曲げて反応が良い部分を探す。川崎の行動とは裏腹に、淫裂からは大量の愛液が溢れ出して手首を濡らした。
「出し入れするのと指を曲げるの、どっちが良い？」
「うっ、んはぁっ！　こん、な、とき、にぃっ、はぁんっ！　なに、聞いてんの……うあぁぁんっ!?」
「そっか、曲げた方が気持ち良いんだな」
「だっ、誰がそんなこと言っ……んはぁぁぁっ!?」
　指を曲げて膣肉を抉っていると、ざらざらとした感触がする場所を見付けた。その場所を重点的に責めると、艶めかしい腰がひくひくと動き、淫液の量が急に増えた。
「ここ、気持ち良いんだな？　ほら、どうだ、どうだ」
「聞かないで……んはぁぁっ！　……分かってるくせにぃ……っ！」
「言ってくれないと分からんって。ほら、ほら、ほら」
「んぐぅぅ……も、もう……え？」
　指の動きを止めると、川崎がきょとんとした。自分を追い立てていた快感の波が途絶えて、迷子のように不安げな瞳でこちらを見つめてくる。
「気持ち良いって言ったら、好きなだけイカせてやるぞ」
「……っ、あ、あんたって、ヤツは……っ」
　川崎は首まで真っ赤にして俺を睨みつけるが、弱りきっている為目に力が無い。それに……。
「今、締めつけが強くなったぞ。俺の言葉で興奮したのか」
「っ!?　そ、そんなこと……っ」

俺の指摘に川崎が震える。目に見えて声がしおらしくなり、嗜虐の炎に油が注がれた。
「言わないのか？　気持ち良い、って。言わないと指も抜くぞ」
「あ、え、その……っ」
「ああ、残念だな。また日を改めて……」
「ま、待って！　……い、言う、から……っ」
涙目の川崎に、歓喜の怖気が走った。川崎は両手で顔を覆って、指の隙間からこちらを覗いている。
「……あ、あんたの指、すごく、気持ち、良いの……っ。……だ、だから、お願い……い、イカせて……いっぱい……イカせて……っ」
「……っ！」
予想を遥かに超えたおねだりに、ごくりと喉を鳴らして。
「わかった」
頭の中で、かちんとスイッチが入った。
「え……ちょ、ちょっと!?」
恥ずかしがって顔を覆ったままだった川崎の両手を左手で掴み、頭の上で押さえつける。中指で淫肉のざらざらした部分をごりごりと抉ると、極上の牝の肢体が弾けた。
「うあああぁぁぁっ!?　ひっ、うあぁっ!!　こ、こんなの、すぐ……っ!!」
身体をぶるぶると痙攣させる川崎の顔を、目の前で覗き込む。いっそキスでもされた方が川崎としては気が楽だったかもしれないが……。
「ほら、こうして見ててやるから。イケよ。みっともなく。あ、また締め付けてきたな。お前は本当に、責められるのが好きにも程があるドMだな」
「〜〜っ!?　〜〜っ！　〜〜っ!!」
俺の言葉に川崎が口をぱくぱくさせる。俺の言葉で羞恥心が溢れ出すものの、下腹部から全身を痺れさせる快感に意識の大半を割かれて、完全に頭がパンクしているようだった。
「ほら、イけ、イけ、イけ……っ！」

「うあぁぁぁ！　ひぐっ、ひぃんっ！　……ひっく……っ」
「……？」
川崎の反応に、不意に変化が見受けられる。指での愛撫を続けながらもじっと見ていると、川崎が子供のようにしゃくり上げた。
「……ひっく、うぇ……や……や、だぁ……っ、恥ずかしいのぉ……っ」
「……っ」
綺麗な顔をぐしゃぐしゃにして泣きじゃくる川崎にごくりと喉を鳴らした瞬間――大きな波が、川崎の身体の最後の堤防を破壊した。
「あああぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!　うあぁぁぁうぅぅっ!!　止め、止めてぇっ!!　んぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!」
獣のような声を上げて絶頂に身を灼かれる川崎に瞠目する。天国とも地獄とも言える快感に包まれた顔を目の前で凝視しながらも、指の動きは決して止めない。びしゃびしゃと溢れ出す愛液は愛撫する腕の肘まで浸した。
「あっ、はへっ、ひぃっ、うっく、んんっ、あっ、あっ、あ……っ」
全身を襲う悦楽の奔流が去ると、川崎は呆然と鳴き続けた。涙は止まらず、泣きながら俺を見ている。川崎を解放すると、両脇に手を差し込んで上体を起こした。死んだように力の抜けた身体は急に重みを増していた。
上体だけ起こした川崎の前に仁王立ちして、狂ったように勃起した肉竿を、艶っぽい唇の中にねじ込む。目の前でこれだけ喘がれて、我慢など出来る筈も無かった。
「んぶ……っ」
目に光の灯っていない川崎は、腕をだらりと下げたまま抵抗もせずに口淫を受け入れた。頭を押さえつけて抽送を始めると、口の中だけがもごもごと蠢き出す。舌で雁首や竿を舐り、内頬で亀頭を擦り付けてきた。我慢していた時間が長かった為、1分としない内に限界を迎えた。
「出すぞ……っ」
「……んぶっ、んぐっ、んっく、んっく、んっく……っ」
唇から喉奥まで灼熱の白濁で犯すと、川崎はこちらから何を言うで

もなく口内で竿を綺麗に舐め、尿道から残り汁を吸い出した。肉竿を口から離すと、綺麗な唾液の糸がてろりと伸びた。
口から抜いた肉棒を、川崎はぼうっと見つめていたかと思うと――やがて、裏筋に舌を這わせてきた。
「……ちゅっ、ぴちゃ、ちゅるっ、んふぅぅ……っ」
「……っ」
もはや口以外の全身が全く動いていない中で、まるで本能として刷り込まれているかのようにフェラを続ける川崎を見てぶるりと震える。
結局この後も温かな口内に挿入して、もう2回射精した。
青筋立った肉竿をしゃぶり、精液を飲み込む間……ずっと、川崎の目がうっとりと細められていたのは、恐らく気のせいでは無いだろう。

× × ×

ようやく落ち着いた後は、後片付けが大変だった。
ぐしょぐしょになったベッドのシーツと川崎の衣類を漏れなく洗濯して、汗とその他諸々で濡れていた川崎はもちろんだが、俺もシャワーを使わせてもらった。一緒に入るかと試しに聞いたが、「恥ずかしいし、キリが無くなるから良い」と言われた。是非とも今度お泊りをして、キリが無くても色々としたい所だ。
今は別のパジャマを着た川崎と一緒の布団に入っている。添い寝を希望したら呆れながらもオーケーを貰った次第だ。立場が良く分からないことになっているがまあそこは気にしないでおく。
「……その、良かったの？」
横向きで向かい合って寝ていると、川崎がふと尋ねてきた。
「え？　すげえ良かったぞ。怒られるのを覚悟で目一杯Ｓっぽく責めたら泣きながら感じまくってた所とか、脱力したままずっと口でしてくれた所とか」
「っ!?　そ、そういう意味じゃなくて！　……その、最後まで……しなくて、良かったの？」
からかい甲斐があるなあと思っていると、川崎がもじもじとしなが

ら聞いてきた。
「あー……まあ、そりゃしたかったけどな。さっきの時点で相当やりすぎて、お前の体力を考えても絶対やばかっただろうから」
「……そっか……ごめん」
「気にすんなって。そもそも風邪のお見舞いに来たのにあんなことをした俺が悪いしな」
「全くだね、鬼畜にも程があるでしょあんた」
「お前が泣きながら喜ぶからついつい」
「……」
「こう言う時に睨まれても可愛いばっかりなんで怖くないです」
「……っ、この……っ」
「んむ……っ？」
顔を真っ赤にした川崎が、唇を重ねてきた。
「……ぷはっ、これで少しは静かに……っ」
「……何その可愛い口封じ。今のは恥ずかしくないのか？」
「……あ……っ」
呆けた声を漏らす川崎が可愛すぎて抱きしめると、「やめっ、こらっ、やめ……、……」とあっさり抵抗を止めた。身体をぴっとりとくっつけると、間もなくして俺の胸元で川崎が小さな寝息を立て始めた。
……出会った時はあれだけ冷たい印象だった女の子が、こうも可愛くなるものか。
当事者である自分が言うのは大いに難があるけれど、恋と言うものの凄さを思い知った。
一眠りして、後はのんびり看病するとしよう。
――この後、川崎の髪を撫でたりしている内に再び勃起してしまい、眠い目をこすって呆れ笑いを浮かべた川崎にもう一度口で抜いてもらうと言う恥ずかしい出来事もあったが。
この日は、何だかとても幸せだった。

続く。

（３９）

翌週の月曜日。

いつもよりも早めに学校へ行くと、川崎が既に登校していた。教室を見渡すとまだ誰も来ていない。示し合わせたかのように２人きりになっているこの状況に、何だか笑いそうになってしまった。

ちなみに昨日は川崎と連絡を取っていなかった。土曜日に自宅へ帰った時に川崎からメッセージが届いて、「思い出したら恥ずかしくて死にそうだから、明日は連絡出来ないかも、ごめん」と言われたのだ。連絡が取れないのは残念だったが、一人で悶えている川崎の姿を想像したらとても楽しかった。

川崎が俺に気付いて、仄かに頬を緩ませる。

「おはよう」

「うっす。もう大丈夫か」

「ああ、おかげさま……で……っ」

挨拶を交わすと、一昨日の土曜日のことを思い出したのか、小さく手を上げた川崎の頬が見る見る内に朱に染まる。そんな反応をされると、こっちもどうしたら良いか分からなくなってしまうんだけど……。

川崎の隣、窓際の席に座る。他に誰も居ない教室の端っこに２人隣り合って座るのは、何だか妙な気分だった。

勉強する程集中出来る気分でも無いので、軽く楽しめる本を鞄から取り出す。ぱらぱらと読み始めると、隣の川崎が何もしていないことに気付く。膝の上に手を乗せて、もじもじとしている。机の上には何も乗っていなかった。

「どうした」

尋ねると、川崎がぴくりと反応して、小動物のような目でこちらをちらりと見る。土曜の雰囲気を思い出して、心臓がどくんと跳ねた。

「……な、なんであんたは……そんな、いつも通りに出来るの……？」

こちらの耳に届くのが精一杯の、あまりにもか細い声で川崎が聞く。声よりも、目で訴えかける力の方が強かった。本当に、本当に小

さな声だったにも関わらず、まるで神経毒のように身体に染み渡り、川崎の艶めかしい肢体のラインに急に注意が行ってしまう。
「……別に、俺だって平気なフリしているだけだって」
さらりと答えたつもりの自分の声が震えていることに気付く。2人の間の空間が、ぐにゃりと歪んだ。窓から外を見て、まだ誰も登校してきていないことを確認する。教室の前後のドアを見て、廊下にも誰も居ないことを確認する。
「……そ、そっか……ひゃっ!?」
川崎の左手を握ると、可愛らしい悲鳴が上がった。どうしたら良いのかがまるで分からないのか、俺が華奢な指の感触を楽しんでいる間、ずっとおろおろとしている。
ちょっとだけ……と自分に言い聞かせて、繋いでいた手を離して川崎の肩を抱き寄せ、唇を奪った。
「んむ……っ!? ……んっ、ちゅるっ……んふぅぅ……っ」
舌を絡めると、緊張で固まっていた川崎の表情筋があっと言う間に蕩けた。力無く差し出された舌をぱくりと咥えて啜ると、目に涙を浮かべてくぐもった喘ぎ声を漏らす。
川崎の口内を舐りながら辺りの様子を窺う。これくらいが限度だな……と判断して、唇を離した。何事の無かったかのように読書を再開すると、未だに呆けた様子の川崎が「あ……え……?」と戸惑いを見せた。
「あ、え? その……」
不安に怯える子供のように手を震わせて、川崎が俺の手を握る。こちらの右手に両手を添える仕草に、嗜虐心が身体を駆け抜けてぞわりと背中が粟立った。
「……なんだ、もっとしたいのか」
本を閉じて尋ねると、川崎は途端に慌て始めた。
「あ、い、いや、そんなこと……は……っ!?」
右手を伸ばして柔らかな太ももに触れると、川崎は耳まで真っ赤にして固まった。スカートの裾に触れるか触れないかの位置でゆっくりと手を往復させ、内ももまで丁寧に撫でて感触を楽しむ。

「あ、え、え……っ？　あ、あの、ちょっと……っ」
　いつもの気の強い表情や喋りは鳴りを潜め、身体をふるふると震わせながら、弱々しい視線がこちらの手と顔の間をせわしなく往復する。本当にどうしたら良いのかが分からないようで、俺にされるがままになっていた。
「……嫌なのか？」
「それ……は……っ!?」
　言いながら、スカートの中に手を入れていく。川崎は目を見開いて、口をぱくぱくとさせた。ここからどうするのだろうと思ったが、川崎は目をきょろきょろとさせて、誰かが来ないかどうか心配している。やはり止める気は無いらしい。
「んあぁんっ！」
　恥丘を中指でぐにりと押し込むと、発情のスイッチが入った悩ましい声が響いた。爽やかな空気が漂う朝の教室に不似合いな、艶っぽい声が周りに染み渡る。
「足、開いてくれるか」
「んっ、んっく、ふぅ……っ、……そ、そんな……っ」
「いいから」
「……っ、……ぅ……ぁ……っ」
　語調を強めると、目にうっすらと涙を浮かべてきつく目を瞑り、椅子に手を置いてゆっくりと足を開いていく。ひとりでに開くかのような足の動きにひどく興奮した。ショーツの上からクリトリスをかりかりと擦ると、川崎の背中が小刻みに脈打った。
「あっ、うぁっ、んっ、ふぅんっ、ぅぅっ、ひっ、うぁぁぁ……っ！」
　うっすらと目を開けて、おとがいを上げてなされるがままになっている。
「思った以上に言うことを聞いてくれるな……。じゃあ、上半身裸になるか」
「っ!?　な、何言って……ひあぁぁっ!?」
　ショーツの中に手を突っ込んで中指を膣口にねじ込むと、川崎の中は既に煮え滾った蜜壺と化していた。愛液をじゅぶじゅぶとかき分

けながら、川崎の心を言葉で蹂躙していく。
「冗談だって。まあ、本気で押したらお前は本当に脱ぎそうだけどな。……変態だな、お前は」
「うううう……そんなこと、ない……うあぁんっ!?」
大きな声で喘いでしまった自分が恥ずかしくなり、川崎は両手で口を覆う。口では俺の言葉を否定しながらも、直接指で愛撫を始めるとすらりと伸びた足がぱっくりと開いた。
膣内のざらざらとした部分を中指の腹で擦り上げると、川崎は腰をがくがくと揺らして淫蜜を溢れ出させた。椅子に溢れた愛液は雨漏りのように床に滴っている。
「今、お前、自分は変態じゃないって言ったか?」
蜜壺をぐちゅぐちゅと掻き回しながら、川崎の耳元で囁く。吐息がかかった瞬間、淫肉がぎゅっと締め付けてきた。
「……い、言った……っ、あたし、は、変態、なんかじゃ……な、い……っ!」
そう言って、川崎がこちらに顔を向ける。もしかしたら本人は、こちらに屈していないと言う気丈な意思表示をしようとしていたのかもしれないが――現実は、汗を滲ませて瞳は涙ぐんで蕩けていて、口は半開きになっている、発情しきった牝の顔をしていた。
「そうか、そうか、変態じゃないのか」
言いながら、川崎の耳に唇をぴとりと付ける。細い喉がこくりと鳴った音がした。
「朝からキスをしただけで物足りなくて、太ももを触られても止めようとせず、大事な所をいやらしい音を立ててかき回されてとろっとろに蕩けた顔をしているけど、変態じゃあないんだな?」
「……っ!!」
川崎が目を見開いた瞬間、川崎の両手を左手一本で押さえて、右手中指を抜き挿ししながらも折り曲げて、膣肉を一気にかき回した。川崎の膣肉と思考をごりごりと抉る。
「うあぁぁぁぁっ!? いっ、ひぐっ、うぐぅぅ……っ!!」
「ほら、イけよ、朝の教室で、もうすぐ誰かが来るかもしれない教室で、

みっともなくエロい声で叫んで下半身ぐっしょぐしょにしてイけよ、ほら、ほら、ほら」
「ひぃぃぃっ!?　言わないで……んはぁっ!!　それ以上言わないで……お願い……んあぁうぅっ!!」
「どんだけ濡らしてんだよお前は。下見たか？　お前が出した汁でぐっしょぐしょだぞ、恥ずかしいと思わないのか？」
「やぁぁぁ……言わないでぇ……っ」
　ぐすぐすと泣きながらも、合間合間に牝の声でたっぷりと泣く。膣口からは断続的にぶしゅっ、ぶしゅっと淫液が溢れ出ていて、ショーツはまるで水に浸したかのように全体がぐしょぐしょになっていた。
「ほら、もうじき人が来るぞ、どうするんだ？　イクのか？　それとも我慢するのか？」
　俺の問いに、子どものような泣き顔を浮かべた川崎は口を小さく小さく開いた。
「イ……き、たい……っ」
「……っ、この、変態が……っ!!」
「んぅあぁぁぁっ!?」
　指の動きを強めると、川崎の声が獣性を纏った。互いにスイッチが入った状態と言うのは恐いもので、川崎は首を横に振りながらも腰を突き出して俺の指を味わい、俺は手首を駆使してなるべく卑猥な音を立てながら淫肉を蹂躙した。互いに協力して、意識を刈り取る程の強烈な絶頂へと導いていく。
「ほら、イけ、イけ、イ……むぐっ!?」
　川崎が突然振り向いて俺の唇を奪った瞬間、匂い立つ肢体が激しく痙攣した。
「んむぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ……っ!!」
　悲鳴混じりの嬌声が口内から直接体内に染み渡り、川崎の声と唇の感触だけで射精しそうになる。陰部からは火傷しそうな程熱い淫蜜が噴き出した。
「んふぅぅ……んっ、んっく、ちゅるるっ、ちゅぷりゅっ、んふぁぁぁ……っ」

絶頂の直前までの羞恥心はどこへ行ったのか、川崎は虚ろな瞳で夢中で舌を絡めてくる。熱く茹だった膣肉をゆっくりとほじくる、ちょっとした動きにも反応して艶めかしい肢体が震えた。口付けをしながら下を見ると、失禁したかのような惨状が広がっていた。川崎の身体からも牝の匂いがもわもわと煙っていて、この匂いを嗅いでいる限り勃起は収まりそうになかった。

本人はきっと後で死ぬ程恥ずかしがると思うのだけれど。

川崎沙希という女性は、思っていた以上にマゾで。

思っていた以上に、これから更にマゾになっていくかもしれない。

続く。

（４０）

早朝から川崎に対して盛大なイタズラをしでかした後。

川崎は一度教室を出ると、５分程で戻ってきた。手にはビニール袋とタオルが握られていて、はてと首を傾げる。川崎は俺の視線を躱すようにしてビニール袋をロッカーにしまい、タオルを椅子の上に敷いた。

「どうしたんだ」

尋ねると、川崎は顔を真っ赤にして睨んできた。可愛げがあるが、いつもよりちょっとだけ怖い。

「……あんたがびしょ濡れにしたから、履けなくなったの……っ！」

２人きりの教室でわざわざひそひそ声で川崎が喋る。秘密であることを強調するような声音はひどく興奮してしまった。

「……あー、悪い。反応があまりにも可愛くてな、つい」

頬をぽりぽりと掻きながら言うと、川崎は耳まで赤くして口をぱくぱくとさせた。

「んな……っ!?　……ほんと、バカ……っ」

最後の方は消え入るような声でぽしょぽしょと呟き、静かに俯く。俺が再び読書を始めると、川崎はちらちらとこちらを窺うのが分かった。俺がこれ以上ちょっかいを出してこないと思ったのか、勉強道具を取り出した。数学の予習を始めたようで、今日の授業でやる範囲の問題を解いている。さして苦労することも無く解いて行く姿に、数学を切り離していた俺は感動さえ覚えた。

「……すげえな」

「えあっ!?　い、いや、別に、そんなこと……っ」

俺がぽそりと言った言葉に対して、川崎は過剰に反応した。足をもじもじとくねらせ、困ったように俺をちらりちらりと何度も見てくる。

……どんだけ可愛いんだ、お前は。

青みがかった黒髪をくしゃりと撫でると、「な、なに、なに……？」とあわあわした反応が返ってきた。

校門を見ると、徐々に人の通りが増してくる。見慣れた学校の風景を、上から見下ろすと何だか新鮮に見えた。

×　×　×

「……それでね。鬱陶しく絡んでくるおっさんの酔っ払いに私は言ってやったわけ。『すごく偉そうですけど、あなたみたいな人って大体短小包茎だし女性のことを全く考えないエッチをしそうですよね』って。相手の沈みっぷりったら無かったわねー」

『……』

２限目。

日本史の先生（２６歳、美人、恋人有り。なんかムチムチしてる。平塚先生の愚痴に時折出てくる）の下ネタ丸出しの雑談が随分と長いこと続いている。今回の授業で進めたかった範囲がするすると終わった為に、時間を持て余した先生は「話したくてしょうがなかった」と言う先日起きた出来事を語っていた。話し方はおっとりしているのに内容が極めてエグい。そんなことを女性に面と向かって言われたら生きていける自信が無い……。

「……」

授業が終わるまであと１５分ある。受験生なんだから自習にすれば良いのに……と思いつつも、先生の話に顔を赤らめている川崎を見てふと悪戯心が湧いた。

「……っ？」

川崎の太ももにそっと手を触れると、声は出さないまでも僅かに表情が揺れた。すべすべした太ももを撫でながら、川崎の左手を掴み、こちらの股間の上に乗せる。川崎は目を見開いて驚いたが、声を出す訳にもいかないので視線だけで咎めてくる。俺が平然と前を見ていると、川崎は抵抗するのを諦めてなされるがままになった。左手をやわやわと動かして股間を揉まれると、あっと言う間に膨らんでくる。隣で小さく喉が鳴る音がした。

「みんな、いーい？　酔ってる時にやると引かれる行為を男女別で説明してあげるわ。受験が終わったらそこからまた新しい生活が待ってるんだから、この学校を卒業した後の予習もきちんとしておきなさ

い」
先生が微妙に説得力のあることを話しているのを聞きながら、太ももを撫でていた手を滑らせて豊満な尻肉に触れる。この動きは予想していなかったのか、川崎は「んん……っ!?」と悩ましい声を小さく小さく漏らした。椅子と尻肉の間に手を滑り込ませ、むにゅむにゅと揉みしだく。川崎は下半身だけ絶妙にくねらせて回避しようとするが、俺はもちもちした肌から手を離しはしない。
「うんん……っ!?」
手を更に移動させて、豊満な尻肉の谷間に手を埋める。指を慎重にずらしていくと、菊穴のすぼまりを発見した。中指の先でくにくにと押してやると、川崎は目に見えて狼狽えだした。
「(だめ……だめ……っ!)」
小声で必死に懇願してくる川崎に応じず、ゆっくりと中指を挿入させてゆく。膣肉のうねる締め付けとは違って、穴の中全体が一様に万力のように締め付けてくる。それでいて挿入を決して拒むことも無く、ゆっくり奥に受け入れてくれる。川崎の顔を見ると、艶めかしい唇が震えて、口がぱくぱくと開け閉めされていた。
中指の第一関節、第二関節と埋まり、根本まで埋まる。
「……う……ぁ……っ」
上下の唇がだらしなく開きっぱなしになり、口の端には唾液が光って見えた。気付いた川崎は慌てて口を拭き取るが、またすぐ口の端が濡れてしまう。アナルの中は徐々にぬめりが増して、中指が動かしやすくなっていく。指を折り曲げながら残りの4本指で尻肉全体をぐにぐにと揉み解していくと、川崎の表情もどんどん蕩けていく。普通の授業中なら絶対気付かれるであろう反応も、先生の熱い雑談によりクラス中の注目が教壇に集まっているため、まるで気付かれる気配が無い。
「(……だ、め……おかしくなる……っ)」
消え入りそうな声で川崎が呟く。菊壺に埋まった指を締め付ける強さはどんどん増していき、愛液が溢れ出してタオルがぐっしょりと濡れていく。こちらの股間を触る手はいつの間にかズボンのチャッ

クを開けてパンツをかき分け、肉竿を直にまさぐっていた。
時計を見る。あと1分もすればチャイムが鳴るだろう。
中指で積極的にアナルを掻き乱す。中指を折り曲げて少しでも反応が良い所を徹底的にぐにぐにと押す。
「……ぁ……ぁ……あぁぁ……っ」
川崎が顔を真っ赤にして、僅かに前屈みになりながら小さく喘ぐ。確実に限界が近付いていた。
俺は先生に見えないように机の下でスマホを取り出す。今しか使わないので許して……と心の中で呟きながら、慣れない左手で操作をしながらＬＩＮＥを起動して、川崎とのトーク画面を開き、メッセージを作成する。送信し終えると、川崎が確認する余裕は無いので自分のスマホの画面を見せた。
『授業中に尻に指を挿れられてイクのか。とんだ変態だな』
「〜〜〜〜っ!?」
俺のメッセージを見た瞬間、川崎はくしゃりと泣きそうに表情を歪めた。その瞬間にチャイムが鳴り、先生が残念そうな顔をして――俺が悪戯し続けた少女は、前屈みになって小さく、けれど激しく痙攣した。
「あー、もっと話したかったのになー。あ、やば！　ちょっと移動がぎりぎりだから、号令はいいや！　それじゃお疲れー」
自由極まりない先生の指示により、最後に立つ事も無く授業が終わった。雑談とは言え授業は授業だったので、先生が教室を去ると一気に空気が弛緩する。素早く中指を抜くと、俯いた川崎が「んん……っ」と艶めかしい声を漏らした。
「……大丈夫か」
尋ねると、川崎は上気した顔をこちらに向けた。あれだけのことをされたにも関わらず、表情に怒りは無く、どこか疲れたような顔をしている。
「……タオル替えてくる。あんたも手は洗いなよ」
「あ、ああ、分かった」
思いの外冷静な言葉に、俺が面食らう。

川崎は立ち上がると、教室の出入り口に向かってよろよろと歩き出す。手にしたタオルはぐっしょりと濡れていた。俺も後に続き、トイレの前で別れた。まるで汚れていない中指を洗っていると、ＬＩＮＥの新着メッセージ通知が届く。

『ばか』

『変態』

「……」

このメッセージを打っている時、川崎は一体どんな表情をしていたのか……。

考えるだけで、口元がふっと緩んだ。

続く。

（41）

４限の授業を終えてぐっと身体を伸ばす。開け放した窓からは他の教室からの喧騒が穏やかに流れ込んできていた。日々夏が近付いている中でも、今日は小休止とも言えるような涼しげな日。あっと言う間に過ぎ去った春を、太陽が名残惜しんでいるような気がした。

「あの、お弁当……」

袖をくいくいと引っ張られて振り向くと、川崎が俯いて呟いた。川崎の太ももの上に弁当包みが２つ置いてあり、あまりにも分かりやすい沈黙にふっと頬が緩む。

「作ってくれたのか」

「……うん」

頬に赤みが差し、耳まで赤くなるのが見える。幸せで口元がむずむずした。

「どこが良い？」

「……屋上だと、落ち着く」

「ん、わかった」

「……先に行くから、一分くらい経ったら来て」

こちらの返事を待たずに、机の下で俺に弁当包みを渡すと、川崎はそそくさと教室を出て行った。席を立った時点で完全にいつも通りの表情に戻っていて、女性は皆役者なのだなと場違いな感動を覚えた。

ばらばらに教室を出て、後で合流。

まるでスキャンダルを恐れる芸能人のような真似ではあるが……顔見知りが多い学校で、２人並んで歩くと言う行為は……恥ずかしいなんてものじゃない。川崎の選択は正解だな……と思いながら、そろそろ一分経ったかと小さく独り言ちて席を立った。

× × ×

「眩し……っ」

壊れた南京錠の付いたドアを開けると、夏の気配を帯びた日差しが肌を叩く。屋上に吹き抜ける風は涼しいのだが、遥か天上から降り注

ぐ光は容赦が無く、思わず手を翳して日射しを防いだ。
「すご……っ」
俺と同じく手を翳した川崎が、目を細めながら呟く。きょろきょろと辺りを窺った後、給水塔の梯子を指差した。
「あそこの上なら日陰があるから。行こう」
ふむふむ。梯子。
ちなみに川崎は今、ショーツを履いていない。
……。
うむうむ。
「ああ、良いな。じゃあお先にどうぞ」
梯子を親指でくいくいと差すと、
「……は？」
「……」
ごく自然な流れのつもりで言ったんだが、物凄く冷たい声が返ってきた。怖くなって思わず顔を逸らしたが、恐る恐る視線を戻すと整った顔が耳まで真っ赤になっている。
「……あ、あんた……自分で何を言ってるか分かってる？」
「もちろん」
「急に男らしくなるな……っ」
きりっとした顔で返してみたら、顔を逸らされてしまった。
「だめか？」
近頃すっかり押しに弱くなった川崎に、弱々し気に問いながらもじりじりと近付く。
「だ、だめに決まって……っ」
「ほんとに？」
川崎の背中が壁に付き、２人の距離が限りなく近づく。壁に手を付き、すらりと伸びた足の間にこちらの足を滑り込ませる。少し前の自分が見たら卒倒するような行為も、川崎の前では自然と出来てしまう。
「だ、だって、あたしが先に登ったら、その……っ」
声を震わせておろおろとする川崎の反応が、嗜虐心をざわざわと駆

り立てる。
『その』、なんだ？　どうなるんだ？」
「だ、だから……っ」
顔をずいと近付ける。額が接触する直前まで近付いて、視線で川崎を捕らえる。逃げ場を無くした川崎は、艶やかな唇を震わせ、瞳が潤む。
「……っ」
「……ほら、どうした。言ってみろよ」
楽しくてしょうがないと思いながら、川崎を煽っていると。
「……う……っ」
「……？」
「……う、うぅ……っ」
「……え……っ」
川崎の目から、ぽろりぽろりと涙が零れ落ちた。
何てことだ。
やっちまった。
やってもうた。
「うっ……ひっく、うぅ……っ」
「えーっと、その、ごめん、マジでごめん。いや、ほんとごめん、やり過ぎた」
目の前で手を合わせ、平身低頭の本気の平謝りをかます。
川崎が泣き止むまで、およそ5分。
凄まじい罪悪感に駆られながら、必死で謝った。

×　×　×

「本当にごめんなさい」
「もういいって……」
「申し訳ありません」
「いいから、そんなに謝んなくて……」
「本当に申し訳ありません。僕は虫けらです」
「どうしちゃったんだよあんたは……」

お手製の弁当を食べながら、すっかり平静を取り戻した川崎が呆れた声を漏らした。
――川崎を泣かせてしまった後。
泣き止んだ川崎が給水塔の上を指差して「……ごはん、食べる……」と妙に子供っぽい声で言ったので、2人で上に登った。勿論俺が先に登った。スカートをしっかり押さえて顔を赤らめながら梯子を登る川崎は無性に可愛かった。
川崎がどこかのポケットから取り出した小さなレジャーシートに座り、涼しい日陰の中で弁当箱の蓋を開ける。川崎が作ってくれた弁当は頗る家庭的だった。里芋のにっころがしも入っていてくすりと笑うと、川崎に「いいから早く食べなよ」と照れながら怒られた。
そして今、弁当を食べながら改めて謝罪行動に打って出ている訳である。今朝の事も含めた、今まで川崎にしてきた行為を思い起こして、「やりすぎだったんだ」と、今も尚凄まじい罪悪感が湧き続けている。
川崎は困ったように――実際困っているんだろうが――眉をひそませた。
「さっきのはあたしも悪かったって。……まさか泣いちゃうなんて、って自分でも驚いてんだから」
「いやでもな、お前が泣いちまうくらい、俺は今まで……」
「だからいいって。……別に、さっきのも今までのも、全然いやだった訳じゃ……あ」
「え」
「……っ」
川崎が腕で顔を隠して横を向いた。
「……いやじゃなかったのか。全然？　全く？」
「……う、うるさい」
「……へえ……っ」
「……な、なに……なんなの……っ」
川崎が目に涙を浮かべて、じっと睨んでくる。顔が真っ赤なものだから可愛くしか見えない。

本当に、どうしてここまで可愛くなったんだろう。
初対面ではあれだけ冷然だった彼女が、今では何もかも愛おしく思える。
――ああ。
ふっ、と距離を詰めて、川崎の唇を奪う。
「ん……っ？」
川崎が目を白黒させている間に唇を離す。
――もう、我慢出来ない。
「え、あの……っ？」と戸惑っている川崎を今度はぎゅっと抱きしめると、「きゃっ!?　え、ちょ、なに、えぇ……っ？」と更に混乱してしまった。
――言ってしまおう。踏み込んでしまおう。
「ちょ、ちょっと、さっきから何なの……？」
困惑しきっている川崎を正面から見つめる。
「川崎、もう身体は大丈夫だよな？」
「え？　うん、今はすっかり元気だけど……」
「じゃあ、今日俺ん家に来るか」
今日一番の驚きを顔に浮かべて、川崎が固まる。
「……っ、……あ……えっと、その……」
「……だめか？」
「ち、ちがう、だめじゃない。だめじゃないんだけど……その……金曜日まで、待ってくれる？」
「……なんでまた？」
予想外の返答に疑問符を浮かべると、川崎は髪をかき上げ、恥ずかしそうに視線を逸らし、もう一度見つめてきた。
「……だって、多分、次の日はまともに立てなくなりそうだから……っ」
視界がぐらりと揺らぐ。
目の前の女性の魅力が、一気に跳ね上がる。
ここに来て、何て事を言ってくれるんだ。
「……そ、そうだな。じゃあ、金曜に泊まりに来てくれるか」

「え、と、泊まり!?」
「だって、帰る体力も残らないくらいするんだろ？」
「するとか言うなばかっ！　で、でもそうか、泊まり……泊まりか……」
　川崎が両手で口元を覆い、せわしなく視線を動かす。
「じゃあ決まりな。金曜は俺ん家に泊まりに来てもらう。それまでは今日みたいなことをしまくるぞ」
「え、今何て言った？」
「今日みたいなことをしまくる、って言った。家でも学校でもな」
「……は、はぁ!?　あんたねえ、あんなこと毎日してたら絶対やばいか」
「だめか？」
「……っ、……ばか、ばか、ばか、知らない……っ」
　そっぽを向いてしまったが、肯定と取ることにする。自分から提案しておいて難だが、川崎の今後が心配になってしまった。
　きちんと守らないと……とよく分からない使命感を胸に抱えながら、未だに混乱している川崎の身体をぎゅっと抱きしめた。
　予鈴のチャイムが聞こえ、身体を離す。
「……ばか」
　弁当を風呂敷に包みながら、川崎はもう一度可愛らしく罵倒の言葉を呟いた。

　続く。

（４２）

翌日の火曜日。
梅雨に入り掛けているのか、しとしとと陰鬱な雨が降っている。
しかし雨と言うものは、考えように依っていくらでも印象が変わるものだと思う。
外出する時は天敵と言える雨も、休日に家でくつろぐ時は、まるで自分が居る密閉空間を優しく包んでくれるように感じる。
状況によって、どちらにも印象は転び得ると思う。
そして今日は、後者の印象が強い。
放課後に川崎の家に行って、一緒に勉強をすることになったのだ。
それも、川崎の誘いで。
雨がしっとりと降る中、川崎の部屋で二人きり――なんとベタで、なんと舞い上がる時間なのだろうか。
柄にも無く浮かれる俺にとって、この雨は何ら陰鬱なものではなかった。

× × ×

「……まさかお前から誘ってくれるなんてな」
「……別に、いいでしょ」
「……お前から誘ってくれるなんてな」
「……何で２回言ったの？」
「……まさか、お前か「怒るよ？」ごめんなさい」
声音こそ恐いが、顔は真っ赤な川崎を見て頬を緩めた。
今は放課後。
俺たちは川崎家に向かっていた。
昼休みに２人でご飯を食べていた所、川崎から誘われた。多少驚いたけれど、嬉しいお誘いだったのですぐさまオーケーした。雨が降っているから相合傘を期待していたが、生憎お互いばっちり傘を持って来ていた上に、どちらも空気を読めず自分の傘をさっさと出してしまったものだから忘れたフリもし損ねた。おかげで今はそれぞれに傘を差してごく平凡に並んで歩いている。

「でも、本当に何で誘ってくれたんだ」
「……こうでもしないと、あんたは所かまわずやらしいことしてくるでしょ」
「ん？　でもいやじゃないんだろ？」
「あ、あんたは……っ」
　子犬のような唸り声を上げて睨み付けてくる川崎の視線を躱して、前方に見えた水溜りを大股で跨ぐ。
　半歩後ろを振り返り、未だに頬を朱に染めて納得の行っていなさそうな川崎を見て、にやりと口の端を吊り上げる。
「しかしアレだな。今の言い方だと、まるで家でならいくらでもそう言うことをして良いからって言ってるようにしか聞こえないな」
「……っ」
　俺の言葉に、川崎は歩を止めて口をぱくぱくとさせる。どうしようもなく愛おしくなり、頭をくしゃくしゃと撫でた。
「こ、こら、こんなとこで、恥ずかしいから……っ」
「……」
　もっと恥ずかしいことをいっぱいしてるだろ……なんて言ったら、脳がキャパオーバーを起こして泣き出すか烈火の如く怒るかのどっちかだよな……と思って、余計なコメントは控えておいた。
「しかし、川崎の部屋で勉強か……」
　我ながら驚く程楽し気に呟いて、心の中で「何をしてやろうか……」等と考えていると。
「……あれ？」
　ふと、重要なことを忘れていた事に気付く。
　それは少し前までだったらまるで気にしなかったことだが、今の俺にとってはとても重要なことだ。
「川崎、今日お前ん家って……うおっ」
「きゃ……っ」
　カッパを着て自転車に乗った人がふらふらと近付いてきて、川崎にぶつかりそうになったので肩を抱き寄せた。こちらが避けたのも気付かず、自転車はのろのろと走り去った。

ふぅ、と息を吐いていると、川崎が腕の中で「え、あ、その、あの……っ」と、ものの見事にテンパっていた。視線を泳がせる度に青みがかった黒髪がふわりと揺れて、夏の気配がする雨とシャンプーの香りが鼻腔を擽る。
「……あ、ありがと……っ」
「……ん、気にすんな」
こちらの胸元に顔をうずめたまま、上目遣いで礼を言われたものだから。
今聞いておくべきだった重要なことを、すっかり聞きそびれてしまった。

× × ×

俺が川崎に確認しておきたかったことの答えは、川崎が住んでいるマンションの一室のドアを開けた瞬間に明らかになった。
「さーちゃんおかえりー！　あ、はーちゃんだー！」
「けーちゃん、ただいま」
「……おう、京華」
……そりゃそうだよね。
川崎は俺が明らかに落胆しているのを見て、少し勝ち誇って、それでいて少し申し訳無さそうな顔をした。
――いくら部屋で好き勝手出来ると言っても、声が出ないようにするのは大変だ。それでいて、すぐ近くに居るのがこの愛くるしい天使ときたもんだ。これでは俺が思い描いていたような責めはほとんど出来そうにない。責めって言っちゃった。
「大志だけだったらヘッドフォンを着けさせて『お前はこれで大人の動画の音声でも楽しんでろ』って言えるんだけどなぁ……」
「あんた、うちの弟を何だと思ってんの……？」
「ごめんなさい、ほんとごめんなさい」
心の声がだだ漏れていた。
「はーちゃんだー、はーちゃんだー！」
「うむうむ、よしよし」
そこまで久しぶりでもない筈だが、京華はきゃっきゃとはしゃいで

俺の膝をぺちぺちと叩いてくる。両手で頭をわしわしと撫でていると、リビングからもう1つの足音が聞こえてきた。
「あ、姉ちゃんお帰りー……って、お兄さん!? え、姉ちゃん、ちょ、お兄さん、2人で帰ってくるとか、え、これってアレっすか、世に言うお持ちかえ」
「ちょっと黙ってな……」
「もご……っ」
信じられない速度で踏み出した川崎が、大志の口を塞いで壁に押さえつけた。音もしないくらい優しく押し付ける辺り、恐いんだか優しいんだからよく分からなくない。川崎が何もしなくても、俺は大志をどつくつもりだったが……こうも川崎が恥ずかしそうにしていると、無性にからかいたくなる。
「お持ち帰り……」
小声で呟くと、川崎は大志を押さえ付けたまま振り向き、涙ぐんだ目で睨んできた。色んな感情が混じりすぎていて何だかとても楽しそうですね。
さて、この地獄のような状況をどうしたものか……と思っていると。
京華が人差し指を顎に当てて、くりっと小首を傾げた。
「おもちかえり……おもち？」
そしてにぱっと笑う。
「……おもちたべたい！」
天使か。
俺と川崎は四つん這いで悶絶して、大志は川崎が急に手を離した事により床に両膝を強打して別の意味で悶絶している。京華はその地獄絵図をきょとんとした顔で眺めていた。
しばらくしてやっとのことで顔を上げた川崎が、力の抜けた笑みを浮かべる。
「……それじゃ、晩ご飯はお餅にしよっか」
川崎の言葉に、そう言えばもう夕飯の準備をする時間帯だと気付く。

「おう、それなら俺が買ってくるか」
「いえ、俺と京華が買ってくるっす！　お兄さんは姉ちゃんに楽しくお持ち帰りされちゃってくだもごっ」
　くだもご？
　数分前の映像を巻き戻したかのように、大志が川崎に押さえ付けられていた。
「……ついでに海苔も買ってきて」
「もごぉ……っ」
　口を塞いだ状態で買い物のリクエストをする川崎さん、マジでクール。カツアゲにしか見えない。
「わりぃな」
「……ぷはっ、いえいえ！　じゃあ行ってくるっす！　ほら京華、行くぞ。傘も持って行くんだぞ」
「うん、いってきまーす！　おもちー！」
　玄関のドアが閉まると、外から楽し気な鼻唄が聞こえてくる。どうやら京華が即興でおもちの歌を作っているようだ。大志が「声でかいから！」と注意する声が聞こえる中、微妙にスイングしたジャズっぽい曲調の歌が聞こえてくる。この家で普段流している音楽が無性に気になった。
「……どれくらいで戻ると思う？」
「……近くのスーパーに行くだろうから……３０分くらいかな」
「そうか。勉強するには半端な時間だな」
「そうだね。……じゃあ、リビングでゆっくりする？」
「……ん、お邪魔します。まずは手洗いうがいだな」
　俺の言葉に、川崎はくすりと笑った。
「……ん、あたしも行く」
　そう言って川崎が浮かべた笑みは、母性と深い愛情を纏った紫陽花のようだった。

　続く。

（４３）

大志と京華が買い物に行っている間、川崎と俺はリビングでくつろぐことにした。川崎は２人がちゃんと無事に帰ってくるかと過保護なまでに心配しながら、お茶を淹れると言ってキッチンへと向かった。青みがかった黒髪が心配げにせわしなく揺れていて、弟と妹を本当に大事にしているんだなと微笑ましく思う。

テレビを点ける気分でも無いので、怪しくない程度に視線を巡らせながらソファの上で縮こまる。ふと写真立てらしきものを視界に捉えて、ちらりと見やった。家族で旅行に行った写真だろうか、川崎の両親と思われる２人が後ろに立ち、川崎と大志に手を握られた京華が楽しそうに笑っている。川崎だけカメラ目線でなく、京華に対して優しい眼差しを送っていてなんとも彼女らしい。

「それ、１年前に撮ったものなんだ」

背後からした声に、くるりと振り返る。和風な盆の上に湯呑みが２つ乗せて、川崎が静かに歩いてきた。

「そうなのか。ああ、どうりで３人とも少し幼い訳だ」

湯呑みを受け取りながら、再び写真をじっと見る。両親はまだ会ったことが無いので判断のしようもないが、川崎も大志も顔つきが今よりも幾分幼く、京華に至っては明らかに今よりも身長が小さい。１年という歳月が子供にもたらす影響を改めて実感した。

「すごく楽しかったんだ。うちの親は忙しいから、中々家族でどこかに行くことが出来なくて。ご飯を食べに行くくらいは出来ても、この写真の時みたいにじっくりと旅行に行くなんて言うのは……ここ１年くらいはご無沙汰してる」

自分の湯呑みを持ってお盆を置いた川崎が、俺の隣にすっと座る。ソファが心地良く沈み込んで、２人の距離が自然と縮まった。２人でくつろぐ空間を、お茶の湯気が優しく包み込む。

「うちの親も揃って社畜だから、似たようなもんかもしれん。生活リズムが違いすぎて、父親の顔なんて１ヶ月に数回も見ないからな」

「それはうちよりも大変だね……親御さん、大丈夫？」

「ああ、いやまあ、それなりに楽しんでるみたいだから大丈夫……だと思う。……その、なんだ、ありがとな」
真摯に心配されて、こそばゆく思いながらも礼を言うと、
「……うん……」
綺麗な顔立ちが、髪の色とは対照的にぽっと赤く染まる。妙に気恥ずかしくなって、湯呑みに口を付けた。口の中に甘味とコクのある味わいが広がり、感嘆混じりの息をほうっと吐く。
「……美味いな」
「……そ、そう？　あ、ありがと……」
「……おう、緑茶に詳しい訳じゃないが、これははっきりと美味いなって思う。すげえな」
「そ、そんなに褒めなくても……」
思い付くままに褒め言葉を紡ぐと、川崎は耳まで赤くして慌てた。俺をちらりと見て視線を逸らすと、気を取り直すように足を流して背筋を伸ばし、両手で湯呑みを持ってゆっくりと傾ける。細い喉がこくりと鳴ると、ほうっと安らいだ声を出した。お茶を飲んで息を吐くと言うだけの動作が、どうしてこうも絵になるのか。見た目ももちろんだが、今までの人生で培われた性格や所作が大いに関係しているんだろう。今まで学校で見てきたイメージとのギャップに思わず見惚れた。
「……お前って、本当にこういう和風なのが似合うんだな」
「え、ちょ、ちょっと、何なのもう……っ」
ここまで言ったところで俺自身も恥ずかしくなり、2人して無言でお茶を飲む。飲み干すと、俺が何かを言う前に川崎がお盆を差し出してくれて、礼を言って乗せた。
「洗うのくらい俺がやるぞ。淹れてもらったんだし」
「あ、だ、大丈夫」
「遠慮すんなって」
「そ、その、今は何か恥ずかしいから、ほんとに大丈夫。ご飯の後に手伝ってもらえれば十分だから……っ」
所々甘噛みしながら捲し立てると、頬に手を当てながら、ぱたぱた

とキッチンへ行ってしまった。
……何だあの可愛い生き物は。
しばしぬぼーっとしていると、片付けを終えた川崎が戻ってきた。再び俺の隣に座ると、膝の上に手を置いてもじもじとしている。今度はさっきよりも距離が近く、今にも肩と肩が触れ合いそうだ。恥ずかしがりながらもこの距離で座ると言う矛盾した行為に妙にどきどきしてしまう。
「……」
「……」
沈黙が続けば続く程、時計の音と自分の鼓動が大きく聞こえてくる。川崎が時折向ける視線は熱っぽく、振り向かなくともこめかみの辺りにじわりと染み込むような圧を感じる。
そっと手を握ると、びくりとしたものの数秒後にそっと握り返してきた。
「……2人が戻ってくるには、まだちょっと早いよな」
「……う、うん、そ、そうだと、思う……っ」
つっかえつっかえ話す川崎の手に、じわりと汗が滲み出る。指を絡めると、「あ……っ」と小さな声が漏れた。
2人の視線が交差する。
2人の視線が逸れる。
視線がすれ違ったまま、顔が近付く。
2人の視線が、もう一度交差する。
川崎の目が、そっと閉じられる。
「……ん……っ」
自然に、とてもスムーズに、2人の唇が交わる。甘い吐息を漏らしながら、川崎が身を寄せてくる。肩を抱き寄せると、思っていたよりもずっと華奢だった。肩を抱く手に力をくっと込めて、唇の割れ目を舌先でそっとなぞる。川崎は震えながらも舌を受け入れて、互いの粘膜が絡み合う。
「……ふっ、うんん……ちゅっ、ちゅぴっ、はむっ、んっ、んふぅぅ……っ」

川崎の声がどんどん情熱的になって行き、閉じていた目もうっすらと開いて、しっとりとした視線を送ってくる。ソファに押し倒してもっと堪能しようか……と思っていると。
「んむ……っ？」
俺が川崎の肩を押すより先に、川崎の方から俺を押し倒してきた。ソファの上にそっと仰向けにされ、四つん這いになった川崎が柔らかな肢体を乗せてくる。豊満な双丘がむにゅりとひしゃげて、心地良い圧を加えてきた。同時に甘い匂いが鼻腔を擽り、思考が曖昧に蕩ける。
川崎の目が潤み、口付けを交わすとこちらの頬を愛おしそうに撫でさすってくる。流れてくる唾液は熱く、飲み込めば甘露のような味わいがあった。
「……ぷはっ、……比企谷……比企谷……っ」
「……お、おい、良いのか？　そろそろ帰ってくる頃じゃないのか」
「まだ大丈夫だから……っ」
つい先程までの恥じらいはどこへやら、顔を上気させた川崎が切なげに言葉を紡ぎ、ゆっくりと唇を寄せてくる。川崎の肩を押さえると、必死で捲し立てた。
「急にスイッチを入れんなって。今続きをしたら絶対見られるぞ、いいのか」
「大丈夫だって、見られないから……ねえ、早く……っ」
「……っ」
まずい、まずい、まずい。
この顔はすごく可愛いし色っぽいが、今ここでまじまじと見てしまっては……本当に、色々と、まずい。
「待て待て待て待て……っ」
もう一度唇が重なったら、多分俺も落ちる……！　と直感的に思い、必死で川崎の肩を押さえていると――不意に、玄関のドアが開いた。
「さーちゃん、はーちゃん、ただいまー！」
『……～～っ!?　～～っ！　～～っ!!』

「ただいまっすー……姉ちゃん、お兄さん、どうしたんすか？」
玄関からリビングへ直行してきた京華がドアを開ける寸前に、２人でソファに並んで座って一瞬で息を整えた。口の端をひくつかせた怪しさ全開の笑みを浮かべる俺と、自分の弟と妹に対して不自然極まりない笑みを浮かべながらやたらと優雅に手を振る川崎。眉をひそめて首を傾げる大志と、不思議そうに首をこてんと傾げる京華。
……何だこの時間は。
「た、大志、けーちゃん、ありがとね。冷蔵庫に入れるから、こっちに持ってきてくれる？」
「ねえ、さーちゃん」
「ん、なあに？　けーちゃん」
「さーちゃんははーちゃんとキスしたことある？」
「なっ、あっ、えええっ!?　け、けけ、けーちゃん、急にどうしたの!?」
「んー？　……なんとなく！」
そう言ってにこぱっと笑う京華を、引き攣った笑みを浮かべて見つめる川崎。大志、やめろ、こっち見んな！　にやにやすんな！
三者三様の反応を、京華はぽけーっと見ている。爆弾発言をしただなんて露ほども思っていないんだろう。
ていうか何でこの子、このタイミングで急にぶっこんでくるの……。
末恐ろしい……と思いながらも、ぽけーっとした顔も可愛くてしょうがなく、小さな頭をくしくしと撫でた。京華は気持ち良さそうに目を細めたかと思うと、
「えいっ」
「うぐっ」
何故か俺の頬を人差し指でどついてきた。撫でに対してどつきで返すって、それどこの部族の風習ですのん？
川崎は顔を真っ赤にしながらも、袋の中身をてきぱきと冷蔵庫に入れ始めた。俺も落ち着くまで京華の頭をひたすら撫で、きゃっきゃとはしゃぐ京華に頬をどつかれ続けた。結構痛かった。
「お兄さん。俺たちが帰ってくる前に、その……アレっすか？　アレ

をしちゃってたんすか？」
「黙れひねり潰すぞ」
「手荒っすよ!?」
幼子に頬をどつかれながら、後輩に容赦の無い口撃を加える。
実に楽しい時間だった。

続く。

（４４）

川崎家での夕食は、準備から片付けまで至極穏やかに進んだ。

川崎が料理をする様を、京華がテーブルで頬杖をついてにこにこと見ていたかと思うと、「けーちゃんもてつだうー！」と可愛らしく宣言して、川崎が膝から崩れ落ちたり。

「お兄さん、比企谷さんと一緒に来て頂いてもいつでも歓迎しますよ？」と大志が勇気を振り絞った感丸出しで言ってきたので「おう、比企谷さんを連れてくればいいんだな、じゃあ母親を連れて行こう」と返したら大志が「お、お兄さん、鬼っす……！」と絶望した表情になったり。ちなみに川崎は「は、母親!?　比企谷の……お母さん……っ」と妙にテンパっていた。恥ずかしくなるからやめてほしい。

海苔で巻いて醤油を付けた餅を食べた京華が「おもひおいひー（おもちおいしー）！」とはしゃいでいるのを見て、俺と川崎が椅子から転げ落ちたりもした。そろそろ俺と川崎の膝の皿が危ない気がする。

俺と川崎が並んで皿洗いをしている現場を大志が後ろから激写して、「たーちゃん、なにしてるの？」「これはね、家族写真を撮ってるんだぞー」などとほざいたものだから川崎が真っ赤になり、俺は黙って大志の脇腹をつねった。「やり口が陰湿っすよお兄さん……」とか言われたけど気にしない。

そんなこんなで夕食後。

俺は川崎の部屋に居る。

歯磨きも終えて（歯ブラシは川崎がいつの間にか用意していた。顔が真っ赤だったので追及は避けておいた）、２人で勉強していた。再び淹れてもらった緑茶でリラックスしながら、川崎は俺に数学を、俺は川崎に古文を教え合っている。得意科目や苦手科目が綺麗に分かれていて、思いの外勉強は捗った。

「……ん……っ、そろそろ休憩しよっか」

「そうだな。……」

ふぅっと息を吐いて、隣に座っている川崎を見やる。

ここまでは勉強の為になるべく意識しないようにしていたのだけ

れど、一度落ち着いてしまうとどうしても気にせずにはいられない。
川崎の今の服装は、紐掛けの白のノースリーブとデニムのショートパンツだった。ノースリーブは胸元が妙に緩く、ショートパンツはやけに丈が短い。油断すればすぐに下着が見えてしまいそうで、川崎の性格を考えると外ではまず着ないであろう服装だ。ギャルらしい服装で川崎の性格には合わないだろうが、気の強そうな顔と豊かな肢体という組み合わせには強烈なくらいに合っている。豊満な膨らみが制服姿の時よりも生々しく、紺色のデニムから覗くすらりと伸びた足が悩ましい。川崎は俺の反応を気にしているのか、ちらちらとこちらの様子を窺っている。
『……』
休憩がてら交わしていた何の気なしの会話が、ふと途絶える。凪のような沈黙が、これまでの勉強一色だった雰囲気を一気に塗り替える。清涼な空気が取り払われて、代わりに湿度の伴った粘っこい熱気が2人の間を塗りつぶしていく。
「……」
俺から何かをする前に、川崎がそろりと距離を詰めてきた。顔を逸らしたまま、けれど明らかに意識をこちらに向けたまま、静かににじり寄る。肩が触れると、川崎が小さく震えた。
背中に手を回して、右肩を抱く。柔らかな肌に指を食い込ませて、少しだけ強く。
「あ……っ」
甘く、上ずった声がする。腕に更に力を込めると、豊満な肢体の震えが増した。
川崎の左肩も掴んで、するりと背後に回り込む。体育座りの体勢で川崎の身体を挟み込んで背中に密着すると、川崎がこくりと喉を鳴らした。密着した身体は濃密な甘い匂いが香っていて、うなじに顔をうずめるとそれだけで下腹部が痛い程に膨れ上がる。
豊満な双丘に両手を這わせると、明らかにノースリーブの感触しかしない柔らかさがあった。
「あ……んん……っ」

川崎はとっさに口を覆って俯く。指を食い込ませるとどこまでも沈んでいき、薄手のノースリーブに2つの突起が透けて見えた。
「……お前、下着着けてなかったのか」
どうりで肉感的だった訳だ……と納得する。川崎は俺の言葉に、頬を朱に染めて俯いた。
「……そ、その、この方が、しやすいかな……って……っ」
「……っ、……しやすいって、何をだ？」
「……っ!?　い、言わなくても、分かるでしょ……っ」
「それはこういうことか？」
言って、2つの乳頭をにちりとつまむ。
「う……んんんん……っ!?」
両手で口を押えて、おとがいを上げた川崎が激しく震える。密着した背中にじわりと汗が滲んで、身体から漂う甘い匂いが一層濃厚になる。
「口を塞ぐな」
「え……っ」
「いいから」
「そんな……うぁっ!?」
少しだけ圧を掛けると、川崎は恐る恐る手を下ろした。その瞬間に乳頭を人差し指でかりかりと引っ掻く。川崎は所在の無くなった手を俺の膝に置き、途絶えない快感の波に耐えている。
「うぅぅ……うぅぅ……っ！」
何度も小さく痙攣しながらも、川崎は唇を引き結んで必死で声を出すのを耐えている。嗜虐心が際限なく煽られて、今度はノースリーブの中に手を突っ込み、しっとりと汗ばんだ双丘を直接触る。吸い付くような肌の触感に陶然としながら、人差し指で乳頭をぐっと押し込んだ。
「あ……んんんん……っ!!」
「うお……っ」
川崎の身体が後ろに跳ねてぐらりと傾き、俺が下になって寝転がる。限界だと思ったのか、川崎は両手で必死に口を押さえている。の

しかかっている割に川崎の身体は軽いが、密着度が増したことにより鼻腔を貫く匂いは更に濃度を増していて、甘酸っぱさを帯びた媚香は強烈に興奮を煽る。
「なんだ、もう限界か。手で押さえてて良いから、もっと強めにやるぞ」
「ん……うぅぅぅ……っ!?」
ショートパンツ越しに下腹部に手を押し込むと、まるで水の入ったバケツにタオルを押し込んだような感覚がした。ショートパンツの下はぐっしょりと濡れていて生々しく、ついさっきノースリーブ越しに乳房を揉んだ時と同じ感覚を覚える。
「……お前、下も履いてなかったのか」
「……っ」
川崎は黙って、恥ずかしそうに、それでいてどこか期待を込めた瞳で俺を覗き込んだ。
その濡れた瞳を見た瞬間。
ぶちっ、と。
やけに鮮明で、粗雑な音が脳内に響いた。
「この、ドM女が……っ!!」
強烈な嗜虐の色を帯びた声を耳元で囁いて、ショートパンツのチャックを下ろして手を突っ込み、右手中指を躊躇うことなく蜜壺にぐじゅりと侵入させる。それと同時に左手で直接乳房を鷲掴みにして、乱暴なくらいの手つきで揉みしだいた。
「うぅぅぅ……っ!! ううっ、んぐっ、うぐぅぅぅ……っ!」
悲鳴を無理やり押さえ込んだような嬌声が、川崎自身の手で無理やり殺される。くぐもった声は背徳感を煽るのに十分で、膣肉を抉る中指の動きは更に激しさを増す。くちゅくちゅと響いていた水音は間も無くぐちゅぐちゅと言う卑猥な音に変貌していき、デニムは色が変わるであろう程に愛液で浸されていく。
「お前、感じすぎだぞ。乱暴にされた方が好きなのか」
「うぅぅぅ……うぅぅぅ……っ」
「そうだよな、これだけ力任せに触られてんのにさっきよりも感じて

るもんな。お前は本当に変態だな。目も当てられないくらいの変態だよ」
「うぅ……っ!? うぅぅぅ……っ！」
言葉で耳朶を舐ると、川崎の目にはじわりと涙が浮かぶ。しかしそんな反応とは対照的に膣肉の締め付けは増していき、艶やかな肢体は何度も波打っている。
「イきたいか？」
「……っ」
愛撫の手を止めて、優し気な声で問う。川崎は目を見開いて、そっと口から手を離した。
「……たい……っ」
「ん？」
「……き、たい……っ」
「はっきり言うんだ」
「……イき、たい……っ！」
「よし、よく言えたな」
「え……うあぁぁぁっ!?」
左手で川崎の細い両手首をぐっと掴み、へその上に縫い付けたまま膣肉を強烈な勢いで抉る。中指を折り曲げる度に愛液が噴き出す程感じやすい場所を、ピンポイントで何度も何度も押し込み、一気に絶頂へと導く。
「だめ、声、だめ……っ！」
川崎はぶるぶると首を振って、涙声で懇願してくる。俺はその顔が絶頂によって美しく歪むまでの様を静かに見つめる。
「あっ、だめ、イク、きちゃう、だめ、出る、あっ、あっ、あぁぁ……っ!!」
「んむ……っ？」
川崎の声音が焦りと快感で満たされた瞬間、咄嗟に振り向いて唇を重ねてきた。柔らかな唇の感触に浸る間も無く、川崎がきつく目を瞑る。
「んむぅぅぅ……っ!!」

両手をV字で拘束されたまま、汗と愛液でぐっしょりと濡れた肢体が弓なりに反り返った。痙攣が収まってから下を覗き込むと、愛液か、或いは潮を噴き出したのか、デニムのパンツはもはや水に浸したかのように濡れていた。両手を離して解放すると、川崎は腕をだらりと投げ出して、俺の上で激しく息を吐いた。
「あ……あぁぁ……っ」
「……お前、すげえ満足気だな」
「……っ!? そ、そんな、こと……っ！」
「ん？ なんだ、もっとしてほしいのか？」
「っ!? そういう意味じゃなくて……！ あ、いや、そういう意味じゃない訳でも……なくて……っ」
仰向けで重なったままからかって、川崎のお腹に手を回して、そっと抱きしめる。
「……本当に、もっとしたいか？」
「……っ」
川崎の喉が、またこくりと鳴る。
数秒の間逡巡すると、川崎はちらりとこちらを見て、天井に視線を戻し、こくりと頷いた。

続く。

（４５）

仰向けで重なった状態から、川崎がよろよろと身体を起こす。続いて俺も身体を起こすと、川崎はぺたりと女の子座りになって、絶頂の余韻が続いているのかぼうっとした表情で俺を見つめた。

見慣れた気だるげな表情が、可愛らしい乙女の顔を経て、淫猥な艶を帯びて再び気だるげな表情に戻る。見慣れているのに見慣れていない、複雑でひどく興奮する表情。

「……どうしたい？」

紅潮した頬を撫でながら、川崎に問う。川崎は俺の手が触れた瞬間ぴくりと反応して、おずおずと自分の手を重ねた。そして空いた右手でそろりとベッドを指差す。

「……最後までしたいのか？」

「っ!?　あ、ち、ちがう、いや、ちがわないけど……っ」

「ん、本当に最後までしたいのか、俺は構わないってか大歓迎だが」

「あ、いや、そうじゃなくて！　その、最後までするのは、もうちょっと我慢するから……って、ああもう、我慢するとか何言ってんだあたし……っ」

耳まで真っ赤にしてあわあわと混乱している川崎は、端的に言って死ぬほど可愛かった。なにこの可愛すぎる生き物……。

顔がにやけるのを抑えながら川崎が落ち着くのを待っていると、不意に細い指がこちらの股間を撫でてきた。

「うお……っ!?」

「……そ、その……っ、あんたも、苦しいかなって。あたしだけ気持ちよくなっちゃってて……だから、その、ベッドで、あたしが、あんたに、しようかなって……っ」

「……そ、そうか……っ」

川崎は顔を真っ赤にしながらも健気なことを言ってくれた。しかしその手つきはいやらしく、俺がされるがままになっていると身体を屈めて両手で触りだした。うっとりと目を細め、男の膨らみをジーンズ越しに味わっている。ゆっくりと立ち上がっても１０本の指は付

いてきて、ぎちぎちに張り詰めた竿の根本から先端まで白い指が這っている。もどかしいがそれがまたたまらない愉悦となって喉奥に溜まっていく。
　無言のまま、川崎の頭を掴んで下腹部に押し付けた。
「んん……っ、んっ、ふぅぅ……っ」
　苦しそうにしながらも抵抗はせず、必死で鼻を鳴らしている。呼吸のためというよりは匂いを嗅ぐためにしか見えない行為に、更に興奮は膨らんでいく。
「……俺が苦しそうだからって言ってたけど、本当はお前が舐めたいだけなんじゃないのか」
「……っ、……そんな、こと……っ」
「本当か？」
　意地悪な声音で問うて、ジーンズとパンツをずるりと下ろす。川崎は目の前に跳ね上がった肉竿に小さな悲鳴を上げた。俺は川崎の顔を掴むと、反り返った肉竿からぐっと距離を開けた。川崎は驚きながらも小さく鼻を鳴らしている。
「あ……ぅあ……っ」
「本当か？」
　改めて問うと、川崎は鼻を鳴らすのをやめて、顔を逸らして逡巡する。やがてゆっくりと口を開いた。
「……その、あんたが苦しそうだから楽にしてあげたいっていうのは本当。……あと、あたしがしたいっていうのも、本当。……あの、……これじゃ、だめ？」
　許しを乞うように上目遣いでこちらを窺う川崎の声は、少し掠れていた。ほんのささやかな仕草一つで、綺麗な顔の目の前で肉竿が更に硬度を増す。川崎は「な、なんで……？」と可愛らしく戸惑っていた。
「ん、正直に言ってくれたし、川崎がどエロだってわかったから許す」
「ど、どエ……っ!?」
「そうだろ？　愛おしそうに撫でさすって、顔を押し付けられたら必死で匂いを嗅いで、そんで今はずっとガン見してるじゃねえか」
「……そ、それ、は……っ」

反論出来ないのか、川崎は恥ずかしそうに俯いてしまった。川崎がもっと可愛く、もっと色っぽくなる様を見たいと思い、青みがかった黒髪をくしゃりと撫でる。
「髪、ほどいてくれるか。あとは上も脱いでくれ」
「……う、うん……っ」
言われるがままに髪からシュシュを外し、ポニーテールをほどく。青みがかった黒髪がはらりとなびき、しっとりと汗の混じったたまらなく甘い香りが鼻腔をくすぐった。更に大人びた雰囲気を纏った川崎が、ノースリーブの裾に手をかけてぺらりと捲る。服を脱いだ瞬間に豊かな乳丘がぶるりと上下に揺れた。薄布を剥いだ肢体はほんのりと上気していて、張りのある乳房の先端には桜色の突起がぴんと張り詰めている。
「……下も脱いでくれ」
「……ん」
もじもじとしながらも、川崎が立ち上がってショートパンツに手をかける。足の根本はぐっしょりと濡れそぼって色を変えており、腰の部分の生地を見ることで、かろうじて元がどんな色だったかが分かる。するりとショートパンツを下ろすと、ぺしゃりと生々しい水音がした。それと同時にもわりと甘酸っぱい香りが立ち込めて、肉竿がひくひくと反応すると同時に川崎がぼっと顔を赤らめた。どうやら自分の匂いに気付いたようだ。
「……やらしいな」
「……言うな……っ」
両手で顔を覆って俯く川崎に内心悶えながら、俺は手早くTシャツを脱いで、そっと細い腕を掴む。女の子の身体はどうしてこんなにも華奢で、触れた瞬間に愛おしさが増すのか。川崎が何事かとこちらを見返すと、俺はベッドに視線を向けた。川崎が、小さく頷いた。
× × ×
川崎が先にベッドに上がり、足を流してなんとも悩ましい姿で座っている。俺も続いてベッドに上がると、途端に甘い香りに包み込まれた。

「……すげえ良い匂いがする」
風邪っぴきの川崎を看病しに来たときは、川崎が発する汗まじりの甘い匂いの記憶が強烈だった。そのためベッドに対しての印象はあまりなかったのだが、今はこのベッドから香る匂いに、頭がくらくらするほど魅了されている自分がいる。
俺の言葉に、川崎は面食らったように目をぱちくりとさせた。そして時間差で頬をほんのりと朱に染める。
「え……そ、そう？」
「ああ、甘くてしかも香水を付けすぎたみたいなきつさはなくて……何て言ったら良いんだろうか……安心するって言うか……」
「ちょ、ちょっと、あんま匂い嗅がないで、恥ずかしい」
「その言葉、さっきのお前にそのまま贈ってあげたいわ」
「……っ」
両手を内ももに挟んだ川崎に涙目で睨まれた。かわいい。
「しかし、この匂いの中に俺が入り込むってなんか不思議な感じがするな」
この甘い匂いは、一人の女の子がずっとこの空間で生活してきた証だ。その場所に入り込むというのは、その子の生活に深く入り込むことなのだと不意に実感が湧いた。少しの不安と、それ以上の幸せが込み上げる。
しみじみとしていると、川崎が顔を真っ赤にして口をぱくぱくとしていることに気付いた。エサをあげたら金魚みたいに食べそう。
「どうした」
「え、あ、いや、なんでもない」
目に見えて狼狽する川崎を見て悪戯心が湧く。
「うそつけ、絶対なんか考えてたろ。なんだ、卑猥なことか」
「え、あ、いや、えっと、その、えっと……っ」
「……」
当たってしまった。
「……」
川崎の両腕を掴んで押し倒した。

「きゃあっ!?」
「何考えてた？」
　上から覆いかぶさった状態で、羞恥に染まった美しい顔をじっくりと見つめる。首まで赤くなった川崎は、俺の言葉に顔を逸らして必死で逃げようとするが、やがて諦めたのか泣きそうな表情で婀娜っぽい流し目を送ってきた。
「……そ、その、この前あんたがここに来てくれたとき、……べ、ベッドで色々したでしょ？」
「ああ、そうだな」
「……そ、その後、ベッドに入る度にあの時のことを思い出して、中々寝られなくて……」
「……それは、なんか、すまん」
「あ、ち、ちがうんだって、あたしは気にしてないから。その、それでどうしようか迷って、寝られないのは家事にも学校にも差し支えがあるって思って、最初はリビングで寝ようかって思ったんだけど……その、疲れれば寝られるかなって」
「……ほう？」
「やらしい顔するなぁ……っ」
　予想していなかった展開に、思わずひどい顔をしていたらしい。川崎は顔を背けて涙声で抗議してきたが、声音から察するにどうも俺のS丸出しの顔を見るのは嫌いではないらしい。この子本当にドMなのね……。
「それで？　疲れれば寝られるんじゃないかという結論に達した川崎さんがとった行動は？」
「うぅ……そ、その、一人で、寝る前にすることにした」
「……」
「おっきくなるなぁ……っ」
「いや、不可抗力だろ……え、なに、俺が見舞いに来た日からお前は毎晩自分を慰めてたわけ？」
「……っ、……うぅ……うぅぅ……っ」
　許容量を超えた羞恥に、目に涙を浮かべた川崎が泣きそうな表情で

頷いた。
　ふむ、なるほど。
「つまりお前は、今回もエロいことをしたら更に自慰の欲求が高まるんじゃないだろうか、でもそれはそれでありかもなんて考えてたわけか」
「ちょ、ちょっと、そんな直接的に言うな……っ！」
「え、なに、当たりなの？」
「……っ」
　これ以上責めたら本気で泣きそうなので、腕を離して身体を重ね、きゅっと抱きしめた。
「……たっぷりと匂いを染み付かせてもらうわ。覚悟しとけよ」
「……っ、うん……っ」
　堂々と卑猥な宣言をしたにも関わらず、川崎は恥ずかしそうに、それでいてどこか嬉しそうに返事をした。

　続く。

（４６）

俺と川崎、互いに一糸まとわぬ姿になって、ベッドの上で見つめ合う。ベッドから仄かに香る安心感のある香り、川崎の身体からもわりと漂う淫靡な香り。２つがとろりと混ざりあって、鼻腔をくすぐり、理性を揺らし、情欲をかき立ててくる。

「ん……っ」

気が付いたら、川崎の唇に吸い付いていた。青みがかった黒髪がはらりと揺れ、普段は気の強そうな目がうっとりと細められる。川崎が少し苦しそうに、恥ずかしそうに顔を歪める様はひどく嗜虐心をそそる。もっと気持ち良くさせて、淫らな声を出した自分自身に顔を赤らめる様を見たくなる。

互いにベッドのシーツに手を乗せたまま、川崎の身体を真っ白なシーツに沈めていく。完全に倒れ込むと、川崎が背中に腕を回して抱き締めてきた。意外な程華奢な腕は、それだけで愛おしさが増す。

「ん……ふぅっ、んむっ、ちゅるっ、ちゅっ、んふぅ……っ、んっく、ふぅ……んんん……っ」

舌を交尾のように交わらせ、互いの官能を高めていく。川崎の手が悩ましく気に背中をさすり、舌を咥えて啜ると美しい肢体がびくびくと震える。ほんの数センチにも満たない幅の挙動が、どこまでも興奮を駆り立ててくる。

「んっく、ふぅっ、んふぅぅ……へぁ……？」

唇を離すと、舌のまぐわいで顔を真っ赤にした川崎が気の抜けた声を漏らした。半開きにした口から名残惜しそうに舌をちろりと出し、自分が今何をしているかに気付いてすぐに引っ込めた。唇をきゅっと真一文字に引き結んで我慢しようとするが、やはりキスをし足りないのか再び口をちょっぴり開けてしまう。川崎の一連の仕草を見て、思わず頬を撫でて呟いた。

「……エロ……っ」

「……っ!?　……そんな、こと、……っ」

自覚はあるようで、反論しようと発した言葉は尻すぼみになって消

えてしまった。
豊満な肉体に身体を重ねて、白い首筋に口付けをする。ついばむようなキスをして、舌先でなぞり、またついばむ。少しずつ場所を移動しながら、しっとりと汗をかいた柔肌の感触を味わう。
「あっ、んんっ、んふぅっ、はっ、んんん……っ、んっく、やぁっ、んんんん……っ」
舌の動き一つ一つに敏感に反応する声は湿り気を帯びていて、耳元で囁かれると脳まで妖しく侵食されていくような感覚に陥る。細腕がこちらの背中を抱き締め、両足はもどかしそうにもじもじと動き、内股をこすり合わせている。
「んっ、ふぅっ、……ね、ねえ、あっ、んん……いつ、まで、うんん……する、の……？　……ねえ、ねえってば、はっ、あっ、あっ、だめっ、あっ、あんっ、うぁっ、うんんん……っ」
耳元で話しかけてくる声が甘ったるくなっていく。糖度を増した声に益々情欲を掻き立てられて、嗜虐の炎に薪がくべられていく。
川崎の背中に左腕を回し、右手を頭とシーツの間に滑り込ませる。両腕にぎゅっと力を込めて、首筋に更に強く吸い付いた。
「あっ、うあぁっ!?　やっ、だめ、そんなつよく……んくぅぅっ！」
格段に反応を強めた川崎が、抱き締める腕に力を込めて、耳に唇を寄せた。
「……だめ……跡、ついちゃう……っ」
耳に流れ込んできたのは、今にも泣き出しそうな、掠れた可愛らしい声。なのに、その声音にはどこか、秘め事がバレるかバレないかの瀬戸際を楽しむような、悪戯っぽさが含まれている気がする。今2人で堪能している行為の濃厚さを実感して、背筋がぞわりとした。
「……跡が付いちゃだめなのか？」
「だ、だって、そんな、はずかし……あっ、んんん……っ」
「俺とのことが知られたくないのか？」
「そ、そういう意味じゃ、あっ、んぅっ、んくぅ……っ」
俺の意地悪な質問に、喘ぎながらも健気に答える川崎が可愛くてしょうがない。

「……なあ、やっぱり最後までしていいか？」
「っ!?　あ……だ、だめ、だめだって……っ」
「一晩中はしないから、ちゃんと自制するから」
「だめ、だめだから、絶対我慢出来ないから……っ」
俺も川崎も、初めての行為に対して抱く不安が他の人とまるでずれていることに内心で笑ってしまう。
痛いのでは、痛がらせてしまうのでは、怖いのでは、怖がらせてしまうのでは。
そういった不安は、もちろんある。
けれど、俺と川崎なら、きっと大丈夫だと思えてしまう。きっと、繋がる前も後も、どろどろに溶け合うくらいお互いを気持ち良くしてしまうから。
だから、むしろ不安なのはその後だ。
きっと、痛みが薄れて積極的に交わるようになったら、俺も川崎も止まらない。もっと相手を気持ち良くしようと口付けをし、敏感な部分を愛撫して、腰を振って互いの弱い所を刺激して、それをひたすらに繰り返す。繰り返してしまう。俺は川崎が気持ち良いと泣きながら鳴く姿を見てしまったら、きっと獣になってしまう。川崎が疲れ果てて責め返してくる気力が無くなっても、一方的に口内を舌で蹂躙して、乳頭を指でしごき、皮を剥いたクリトリスをゆっくりと指の腹でこすり、Gスポットと膣奥を肉竿でごりごりと抉る。川崎はきっと、口を半開きにして、涎が垂れるのも我慢出来ずに、泣きながら枕に顔をうずめて獣のような声で鳴いて喘ぎ続ける。淫靡な姿態に更に興奮して、止まることなくめちゃくちゃにするだろう。あまりにも具体的なイメージが、もはや現実と言えるのではないかと思える程濃厚なイメージが、目の前の川崎に重なる。
「……ね、ねえ、今なんかいやらしいこと考えてなかった……？」
「……この状況で爽やかなことを考えるやつもいないだろ」
よっぽど獣じみた顔でもしていたのか、川崎が顔を逸らして横目でちらちらとこちらを窺っていた。本人を前に妄想に花を咲かせてしまっていたようだ。

「……その、あ、あんたも我慢出来ないでしょ？　あたしも、多分、無理だから……だから、ほんとごめん、金曜日までは……ね？」
眉を八の字にして、川崎が申し訳無さそうに謝ってくる。数日の我慢さえ出来ずに迫ってしまったことが急に恥ずかしくなる。
だから、その……と、川崎が頬を朱に染めて、婀娜っぽい流し目を送ってきた。
「最後までは出来ない分、他のことなら好きなこと、好きなだけしていいから……」
「……」
……。
「……すごいこと言ったの、分かってるか？」
「……わざわざ言うな……っ」
顔を真っ赤にして睨まれた。とても可愛い。
うーん。
好きなことか。
いかん、瞬時に浮かんだ3～4つのアイディアが悉く鬼畜だ。どうしよう。
あまり声を出せない分、やることは限られている。どうしたものか……と考えていると。
「あ」
「ん、どうしたの？」
「静かに、且つ長い時間楽しめることを思いついた」
「……そ、そう」
「ああ、しかもお互い気持ち良いぞ」
「……あんまりそういうの、はっきり言わないで……」
俺のやたらと溌剌とした態度に、川崎がげんなりとしながらも、それでも優しい呆れ笑いを浮かべてくれた。
続く。

（４７）

本番はしない代わりに、好きなことを好きなだけ……という川崎の言葉に甘えて、俺は布団に横向きで寝転がった。川崎は女の子座りをして、目をぱちくりとさせて俺を見ている。

「一緒に寝てくれるか」

「……？　そ、添い寝ってこと？」

「いや、上下逆で向かい合ってくれ」

「じょ……上下逆って……っ！」

平然と発した言葉に、川崎の顔が一気に茹だる。俺の顔と、横向きに張り詰めた肉竿にちらちらと視線を巡らせて狼狽しているが、これ以上言葉をかけることはせずに敢えて待つことにする。

「……わ、わかった……っ」

やがて、声を震わせて川崎が頷いた。四つん這いになってベッドの上を移動し、言った通り上下逆の状態で横向きに寝転がる。

「や……っ、おっきい……っ」

いつもと違う角度で見ると新鮮なのか、川崎は恥じらった声で囁いた。熱い吐息が肉棒の裏筋にかかり、興奮でぶるりと震える。

「……お前のだって、死ぬほどエロいけどな」

「ちょ……そんなこと言わないで……っ」

思わず呟いた言葉に可愛らしく抵抗してくるが、その言葉も今はほとんど耳に入ってこなかった。ぴったりと閉じた脚の根本には三角の形をした茂みがあり、絶頂の余韻が残っているのかもわりといやらしい匂いが立ち込めている。くつろいだ体勢になって、目の前でこういった淫らな女性器を見ると、格別だということを知った。

閉じた脚の膝と膝の間に、右手を貫手の形にして手を差し込む。川崎はびくりと震えたが、抵抗はしてこない。差し込んだ手をゆっくりと脚の根本まで滑らせていくと、緊張からか柔らかな太ももが震えていた。右手の小指が楚々とした恥毛に当たったところで、右手を更に奥に滑り込ませて尻肉を掴み、こちらに引き寄せる。左手を川崎の背中側にまわして後ろから左足を持ち上げ、更に右手は川崎の右足を引

き寄せて、柔らかな太ももに頭を乗せた。顔が川崎の脚に挟まれた形になり、ほんの少し舌を伸ばせば淫裂に届く距離に近付いた。濃厚な牝の香りが鼻腔を刺激して、肉茎が脈打っているのが分かる。

「……これ……恥ずかしい……っ」

耳が川崎の太ももに埋もれているため、少し掠れた可愛らしい声がくぐもって聞こえた。俺は何も言わず、下半身を川崎の顔にずいと近付ける。「きゃ……っ」と驚く声に構わず、美しい顔に肉槍の切っ先をぐいぐいと突き付けて――唇の割れ目を見つけると、そこに亀頭を宛がった。

「んむ……っ」

鈴口とキスをした川崎が、悩まし気な吐息を漏らす。無理やりねじ込むことはせずにしばらく待っていると、川崎は鈴口をちろちろと舐めだした。微弱な快感に震えながら、目の前でひくつく淫裂にちゅっと口付けをする。

「ん……ふぅ……んむっ……ふぅん……ふぅぅ……っ」

割れ目を何度も舌でなぞっていると、川崎の左足が物欲しそうに絡まってきた。両足の柔肉に顔を挟まれて、陶然とした心地で淫裂から溢れ出る愛液を啜る。

亀頭を咥えられた。鈴口を固めた舌先で何度も小突き、雁首をぷるんとした瑞々しい唇で締め上げてくる。

肉芽を舌先で何度もなぞる。川崎はびくんびくんと小刻みに震えて、悩ましい喘ぎ声と共に愛液がとぷりと溢れでてくる。

瑞々しい唇できゅむきゅむと締め付けながら、熱くぬめった口内が肉竿を飲み込んでいく。川崎の呼吸が荒くなり、興奮が高まっていることを伝えてくる。

舐めても舐めても愛液が止まらない。果物を一気に食べるようにして紅い果肉にむしゃぶりつくと、膣口にずぶりと舌を挿し込んだ。

呼吸が苦しい。口も鼻も川崎でいっぱいになっていて、その上肉感たっぷりの太ももに挟まれている。

川崎も苦しそうだ。時折身体を捩りながら鼻で必死に息を吸い込んでいるが、肉竿を喉奥に押し込むことで更に追い詰める。

意識が心地良く朦朧としてくる。意識がどろりと溶けだすと、興奮が増して肉竿がびきびきと張り詰めた。川崎の愛液は透明なものから白くどろりとしたものに変化して、この状況に心底興奮しているのだと気付く。

唇を果肉から離して、再び肉芽をしゃぶる。川崎の口も連動するかのように離れて、鈴口へのキスと亀頭への愛撫に夢中になる。

川崎の身体がぶるぶると戦慄いている。限界が近いんだな……と思い、クリトリスを咥えて強烈に吸い上げた。川崎はくぐもった喘ぎ声を上げて、肉竿を根本まで咥え込んだ。

愛液が噴き出し、顔がびしょびしょになった。

精液が噴き出し、川崎の口内と、喉奥と、食道と、胃袋を犯した。

絶頂を経ても、互いの口は相手の性器から離れない。舌で緩やかな刺激を加え続け、ある程度時間が経つと再び夢中になってしゃぶり出した。

艶めかしい肢体を、目を虚ろにした状態で味わい、貪り続ける。川崎の口からは肉竿を舐めしゃぶるいやらしい水音しか聞こえてこない。精液は残り汁まで全て飲み込まれていた。

緩やかに、けれど決して止まることのない愛撫に、２人は再び絶頂した。互いに相手の性液を丹念に舐め取り、また舌を這わせる。愛液は壊れた蛇口のように止まらず、肉竿もまるで硬度が衰えない。

川崎の左足を手前にぐいと引っ張ると、川崎は肉竿を咥えこんだまま俺の真上にきた。俺が仰向けになり、川崎がうつ伏せになった状態で互いをしゃぶり合う。川崎は喉奥で亀頭をぐりぐりと擦り、苦しそうに呻きながらもしゃぶり続ける。青みがかった黒髪が股間をくすぐった。汗ばんでいるのか、一本一本の感触がひどく生々しい。尻肉を両手で掴み、ぐにぐにと揉みしだきながら膣肉を舌で抉る。尻穴を両手で広げ、右手人差し指をずぬりと挿し込んだ。川崎が苦しそうに喘ぐのがひどく興奮して、ぐりぐりと押し込む。人差し指が全部埋まると、ぐにぐにと肛内の肉を抉った。川崎はまた絶頂した。絶頂の余韻でぶるぶると震えながらも丹念にしゃぶられて、間もなく射精した。射精しても衰えないどころか、むしろ硬度を増している。肉棒は

一体どうなってしまったのか、壊れてしまったのか。鼻腔を包み込む濃密な甘酸っぱい香りもすっかり嗅ぎ慣れて、当たり前のものと化しつつある。

もう一度横向きに戻って、お互いをしゃぶった。喘ぎ声と呻き声以外上げることなく、夢中で相手の性器を刺激して、蜜を搾り取る。しばらくすると、俺が先に射精して、その少し後に川崎が絶頂した。口元の愛液が乾いても、新しく湧き出した愛液が洗い流してしまう。

今度は俺が上になった。川崎の口内に肉竿を深くねじ込み、緩慢な動作で腰を打ち込む。喉を穿つ度に川崎が苦しそうに喘ぎ、膣口から愛液が溢れ出した。クリトリスを舐めながら、川崎の太ももとベッドの間に腕を差し込み、左手人差し指を膣内に挿入し、右手人差し指をアナルにねじ込む。性器と排泄孔を不規則な指の動きで蹂躙すると、川崎はこちらの腰に不安げに手を回して、激しく痙攣した。愛おしくなって、激しく腰を打ち付ける。喉奥に亀頭をこすりつけた状態で射精した。川崎は苦悶の声を漏らしながら、全て飲み込んでくれた。

どれくらいの時間が経ったのか、2人の身体は汗まみれになっていた。

身体を離し、仰向きになっている川崎の顔の横に座る。汗だくで天井を呆然と見つめる川崎の額には、髪の毛が何本か貼り付けていた。指で髪の毛を払うと、川崎はゆっくりとこちらを向いた。何も言葉を発しない少女は、肉竿がまだ硬度を保っていることに驚いたのか、少し目を見開いた。そろりと右手を伸ばし、肉竿を掴む。あぐらをかいた状態で肉竿をさわさわと撫でられると、とても心地良かった。川崎は手でしごくのに夢中になり始めた。ゆっくりと亀頭をなで、手のひらで鈴口をこすり、睾丸をやわやわと撫でてくる。川崎の両肩の横に膝をつき、四つん這いになって整った顔だちの目の前に肉竿を突き付ける。川崎はひたすら肉竿を手で愛でて、先走りの汁がたっぷり溢れるようになると、やがてくちゅくちゅとしごき始めた。

小さく呻き、「出る……っ」と呟く。てっきり、咥え込んで口内で白濁を受け止めるのかと思いきや、川崎はそのまま手でしごき続けた。

精液が迸り、川崎の顔が真っ白に染まる。ベッドの上に、牡の匂い

が撒き散らされた。
顔のあちこちに精液がまとわりついた状態で、川崎は肉竿を咥え、残り汁を搾り取る。その様があまりにも淫靡で、また勃起した。川崎はしばらく亀頭を咥えた後、またゆっくりと手でしごき始めた。
もう一度、手でしごかれる。
射精するまでに、さほど時間は要らなかった。
二度の射精で川崎の顔はほとんど白濁に埋まっている。そんな状態でも、川崎は肉竿を咥えて残り汁を吸い取った。瑞々しい唇から肉竿が抜け落ちると、もう半勃ちしかしていなかった。
ベッドを降りてティッシュを取る。足が信じられないくらいにふらついていた。
顔を拭いている間、川崎は四肢をだらんと投げ出していた。まるで何十時間も強姦されたような、淫惨な状態。極上のご馳走を目にしたかのように、喉がごくりと鳴った。
ティッシュで川崎の顔を綺麗に拭き取り、自分の顔も軽く拭くと、だらりと開いた脚の根本に指を挿し入れた。壊れた人形のように震えた。活動機能を失ったように見える外見とは裏腹に膣内は熱く湿っていて、愛液を掻き出すように指を折り曲げて抉っていると、間もなくして川崎は身体を弓なりに反らせて絶頂した。
力尽きて川崎の隣に寝そべり、天井を見上げる。
「……川崎……」
「……なに……？」
久しぶりに声を聞くな……と思いながら、ぼんやりと思考を巡らせる。
「……明日と明後日も同じことしていいか」
言いながら、淫裂に左手中指を挿し込む。艶っぽい肢体が緩やかに波打った。
「……どうせ、だめって言ってもやるんでしょ？」
「ん、それはそうなんだが、川崎はやりたいのかなって」
くちゅくちゅと水音を立てながら愛撫していると、川崎の手が肉竿を握ってきた。緩慢な手つきでしごかれると、むくむくと肉竿が勃起

してくる。
「……あたしも……したい」
「……そうか」
２人の言葉はそれきりで、後は互いの性器から鳴る水音だけが響く。漏れきこえてくる川崎の吐息は上気していて、たまらなかった。
程なくして、精液と愛液がごぷりと噴き出した。
続く。

（４８）

川崎と濃厚な時間を過ごした、次の日。

――川崎と繋がるまで、あと２日。

「……いやいやいや……」

朝起きるなり、自分の身体に起きている異変に驚いた。

まず一つ目は、身体が軽いこと。昨日川崎と散々卑猥な交わり方をしたからさぞや疲れているだろう……と思ったのだけど、あらゆるストレスが吹き飛んだ上でぐっすりと寝たからか、いつもと同じくらいの睡眠時間にも関わらずすこぶる調子が良い。

そして二つ目は……男の生理現象でよく見られる朝勃ちが、いつもよりもかなり露骨であること。目覚める直前に川崎の夢を見ていたためか、夢精こそしていないものの限界まで張り詰めた肉竿が、寝巻のズボンをぎりぎりと引っ張っていた。

今すぐここで２回くらい自慰をしないと収まらないんじゃないか……？　と思っていたのだけれど。部屋の前を小町がとてとてと歩いていく足音が聞こえて、ふと冷静になった。ドアをしばしじっと見つめて視線を下ろすと、もう膨らみは収まっていた。それでも、部屋でじっとしていればまたムラムラしてしまう気がする。

なので、いつもよりもだいぶ早く学校へ行くことにした。

小町に「あれー？　お兄ちゃん早いね。沙希さんと朝から学校でイチャつく気？　健全なんだか不健全なんだにゃー！　やめてやめて！　髪くしゃくしゃにしないで！　セットに時間かかるんだから！」などと言われながら朝ごはんを食べて、早々と身支度を整える。小町はご飯を食べるとテレビを点けてソファでくつろぎ始めた。学校が始まるぎりぎりまでゆっくりするとのことだ。タンクトップにショートパンツという健康的な格好だが、ちらりと覗いた白い太ももを見た瞬間に、脳裏には別の女性の肢体が鮮明に浮かんで、慌てて顔を逸らしてごくりと喉を鳴らした。小町は俺の反応にきょとんとしていたが、「どうしたのお兄ちゃん？　……まあいっか、行ってらっしゃい」と言ってにひっと笑った。うむうむ、今日も我が妹は可愛い。

半袖のシャツを着て外に出ると、ふわりと夏の匂いがした。まだ朝だから、これから気温がぐんと上がっていくのだろう。雲は春の頃よりもぐっと白く濃くなり、楽し気に空を揺蕩っている。

今日も学校で勉強をして、帰るだけ。

それだけのはずなのに、妙に心が弾んだ。

× × ×

そういや前に早く来すぎたとき、あいつはもう教室にいたよな……と思い出しながら、総武高の廊下を歩いていく。自転車でここまで来るときにじっとりと汗をかいていたが、屋内はひんやりとしているため汗は引いていた。誰ともすれ違うことのない廊下は、大きくもない足音を心地良く響かせる。リノリウムの床と学校指定のシューズというのは、狙い澄ましたかのように相性が良いな……なんてことを考えている内に、自分のクラスの教室に着いた。誰がいるかを確認もせず、まあ誰もいないだろうと高を括ってドアを開けると……自分の席の隣に、昨日ずっと一緒に過ごしていた、青みがかった黒髪の少女が座っていた。

「……おはよ」

「……うす」

川崎の挨拶は、まるで昨日までの関係がリセットされたかのように聞こえるが、実際は今の短い挨拶の言葉さえ上ずっていた。俺の声も、多分震えていた。

鞄を置き、椅子に腰を下ろすと、川崎がぴくりと反応した。川崎が俯いているのを見てから、俺は左手で頬杖をつき、左側にある窓の外を見つめる。川崎がどんな表情をしているか分からないし、2人とも間違いなく緊張している。なのに、不思議と居心地が良い。この子となら、きっと部屋で何も喋らずに各々が好きなことをやっていても安らげるんだろうなと思った。

机に載せていた右肘にそっと手が添えられた。振り返ると、川崎は俯いたまま、左手で俺の右腕に触れていた。もう一度窓の方を向いて、右手で川崎の左手を握る。川崎はびくりと反応したが、手をきゅっと握ると動かなくなった。しっとりとかいた汗で互いの手の

ひらが密着して、仄かな興奮を覚える。指を絡めて握ると、隣から甘い吐息が漏れた。ちらりと覗き見ると、空いた右手は太ももに置いて、耳まで赤くして俯いている。肩は上がって、だいぶ強張っていた。時計を見る。登校が早い生徒でも、まだまだ来ることはないだろう。時間の余裕を認識した途端に、官能の波がざわりと肌を撫でた。

絹糸のような指と交わりながら、ぽつぽつと会話を始める。

「……今日の1限って、古文だったか」

「……うん」

「予習、やったか？」

「……あんたはやれたの？」

「ん……正直めちゃくちゃ眠かったけどな。寝る前になんとか」

「……そ。あたしはあの後は……もう疲れすぎて無理だったから、朝やった」

「……そうか」

取り留めのない会話が、ゆらりと現れてすぐに消えた。

視線を、川崎の胸元に移す。

ワイシャツの生地は薄く、汗をかけば中の下着が見えてしまいそうになる。川崎はどういう訳か以前よりもボタンをきちんと留めるようになり、悩ましい谷間が見えなくなってしまったのだが……それが却っていやらしく感じられる。

「あ……や……っ」

俺の露骨な視線を感じ取った川崎は、もじもじと身体を揺らす。羞恥から起こした行動は、豊満な肉体を却って艶っぽく見せてしまう。ちょっとだけ泣きそうになりながら俺の視線を恥ずかしがる川崎は、今すぐ押し倒したくなるほど可愛くて色っぽい。

繋いでいた手をほどいて、柔らかな太ももを撫でた。

「きゃ……っ!? ……ぁ……うあ……っ」

膝から脚の根本まで、短いスカートを押しのけながらゆっくりと撫でていく。ショーツが見えそうで見えないように加減しながら、川崎の甘やかな表情を堪能する。川崎は目を泳がせ、途中である一点をじっと見つめてはすぐに目を逸らしていた。川崎とのやりとりでパ

ンパンに膨れ上がったスラックスが、川崎の熱っぽい視線に何度も撫でられる。
川崎の左手首を右手でがしりと掴むと、何も言わずにこちらの股間の上まで引き寄せた。
「あ……っ」
川崎はごくりと息を呑み、流し目でこちらを見た。微かに開いた唇を見ただけで、心臓がどくんと波打つ。
しばらくじっとしていると、川崎は観念したかのように股間の膨らみに触れた。
「……や……っ、おっきい……っ」
昨日も聞いた言葉ではあるが、こうも可愛らしく色っぽい声で言われたら何度聞こうとも興奮する。おずおずと触れる川崎の手のひらに包まれた肉竿がむくむくと大きくなると、「え、うそ、まだ……っ？」と、これまた愛らしい反応を返してくれる。
「昨日あれだけ出したんだけどな。何か今日は昨日よりも溜まってるみたいだ」
「そう……なの……？」
下腹部への甘ったるい愛撫に身体を震わせながらも川崎に説明する。
普通ならば、昨日はあれだけ出したんだから、今日はもう沢山だ……と思うのかもしれない。
けれど、エネルギーは使わなければ最大量が減っていくもので、使えば使うほど湯水のように湧き出るものだ、という言葉も聞いたことがある。
その理屈で言えば……俺の性欲は、昨日の行為を機に、ぐんと跳ね上がったのかもしれない。
俺の言葉を聞いた川崎が、声を震わせた。
「……あ、あたしも……なんか、変なの……」
「……どんな風に？」
再び太ももを撫でて、スカートの中をまさぐりながら尋ねる。
「な、なんていうか……今日起きてからも、ずっと身体が熱くて……。

最初熱があるのかと思ったけど、計ってもいつも通りだし、むしろ身体の調子は良くて……。それで、ずっと身体が熱いまま教室に来て、比企谷の顔を見た途端に、もっと……っ」
「……そうか」
川崎は気付いているのだろうか。
言葉を紡ぐ度に、肉竿をまさぐる手の動きがいやらしくなり、自分の足を徐々に開いていっていることを。
川崎の顔を見る。
２人の目が合った。
いつもは気が強くてちょっと怖い瞳が、かよわくも色っぽく揺らいでいる。
ああ、これはちょっと、だめかもしれない。
夜まで、我慢出来ないかもしれない。
「……川崎、すまん」
「……なにが？」
「……他の人が来る前に、２～３回しないか。お互いに」
「……っ」
俺の言葉に、川崎は目を見開いて首まで赤くする。俺の声音が切実だったからか、川崎は「何をバカなことを」なんてことは言わず、唇を引き結んで逡巡した。
「……ちゃんと、場所、考えられる？　……それなら、いいけど」
「大丈夫、……人目にはつかないはずだ」
俺の言葉を聞くと、川崎は肉竿から手を離し、すっと立ち上がった。柔らかな手触りにずっと溺れていたい気もしたが、今は場所の確保が優先だ。
廊下を見渡して、まだ誰もいないことを確認する。
「こっちに行くか」
「ん、わかった」
平静を装っているつもりでも。
２人の声は、興奮で上ずっていた。

続く。

（４９）

廊下に出ると、２人とも無言で歩き出した。教室に入るまでの足取りに比べて、歩幅は少し小さく、せわしなくなっている。川崎は半歩後ろをついてきていて、右耳の後ろに時折視線を感じたが、振り向く余裕はなかった。

心の奥底がちりつくような焦燥感に駆られながら向かったのは、特別棟の中の更に外れにある職員用トイレだった。男子用トイレのドアの前で川崎に待つように言って中を覗く。ここが使われるとしたら、せいぜい文化祭や体育祭などの特別行事のときぐらいだ。ましてやこんな早朝では、誰もいるはずもなかった。廊下に出て川崎と目を合わせると、トイレを指さして頷いた。川崎は頬を赤らめて戸惑っていたが、一刻も早く行為を始めたくて、反射的に川崎の手首を掴んでトイレに引っ張り込んだ。川崎は抵抗することなく、「あ……っ」と小さな声を漏らしただけだった。視線を逸らし、震える唇を引き結ぶ様は息を呑むほど色っぽかった。

トイレのドアが閉まる。少し広めの密室に、俺と川崎は２人きりになった。

× × ×

「あ……んむ……っ!?」

トイレに入るなり、俺は強引に川崎の唇を奪った。川崎は目を細めて俺の胸板に手を当てたが、押し返してはこない。目的を見付けられない１０本の指が、胸板をさわさわと撫でてくる。これから訪れるであろう濃密な時間に心を躍らせながら、胸板に添えられた細い腕を除けて強く抱きしめ、熱く湿った口内に舌をねじ込んだ。

「ふっ、んむっ、ちゅるっ、んむふぅぅ……っ、ちゅるっ、れろっ、ちゅぴっ、んん……んんん……っ」

キスの時間に対して、加速度的な勢いで川崎の表情が蕩けていく。前に進むと、その勢いの分だけ川崎はよろよろと後ろによろめき、個室のドアの前に辿り着いた。ドアに手を伸ばして開けると、そのまま中に２人で入る。

「んっ、んふぅ……っ！　んぁっ、あっ、そんな、いきなり……っ！」
後ろでで鍵を閉めるなり川崎の胸を揉みしだくと、川崎は慌てて唇を離して甘い声を漏らした。これまでの経験から、川崎は優しく触られるのも好きだが、強めにされる方がもっと好きだと感じていた。川崎の目をじっと見ながら、豊満な乳房の形が変わるくらいぐにゅりと揉みこむ。
「あ……っ、はぁぁぁ……っ」
川崎の足が生まれたての子鹿のようにがくがくと震え、崩れ落ちそうになる。川崎は俺の首に2本の腕をするりと巻き付けて、息を切らしながら必死で自分の身体を支えた。
「あっ、あんっ、だめっ、ふっ、んうぅ……んぅぅっ！」
強く、強く、時に優しく。
瑞々しい弾力に溢れた乳房の感触をワイシャツ越しに楽しみながら、顔を真っ赤にして喘いでいる川崎の表情をじっと見つめる。
「あっ、やっ、そこ……っ」
ワイシャツのボタンを外していくと、川崎は恥ずかしそうに身体をよじらせる。今までもっと恥ずかしいことをいくらでもしてきたというのに、未だにこういったことに羞恥心を覚える川崎が愛おしくてしょうがない。
ワイシャツの前面を開くと、黒のレース生地のブラが顔を出した。何度見ても昂奮するけど、これを学校に着てくるってどうなんだろうか……などと冷静に思っていると。
「……んん……？」
ふとあることに気付いて、思わず気難しい声が漏れた。
「え……なに……？」
こちらの首に両腕を回した川崎が、不安げに尋ねてくる。俺はすぐに返事をせずに、薄暗いトイレの中で川崎の下着を凝視した。
「……お前、この下着……いつものより薄くねえか？　すげえエロ……む？」
視界を塞がれた。1秒前まで見えていたのは、たわわに実った乳房を覆う黒のブラと……うっすらどころかはっきりと透けていた乳頭。

「み、見るな……っ」
柔らかな手のひらの感触に、どうやら川崎の手で両目を覆われたようだと気付く。
「……恥ずかしがるリアクションは可愛くてしょうがないんだが。これ、見てほしくて着てきたんじゃ……む？」
今度は口を塞がれた。なんか監禁された人みたいになってる。
「い、言うな……っ」
今にも泣き出しそうな声で囁かれた。なんだこの可愛い生き物は……。
「あっ、んぁっ！　はぁっ、んんんん……っ」
目と口を封じられたまま、胸を揉みしだく。ブラは見た目以上に薄く、生々しかった。柔肌を直接触るのとはまた違う色気を感じて、昂奮は更に高まっていく。
「はぁぁぁ……っ、んんんん……っ」
川崎の手から力が抜け、再び首に腕が回される。どうやら立っていられなくなったようだ。指が乳肉に埋まる感触に耽溺しながら、親指で乳頭をくにくにと押し込む。まるで身体に電気を流すスイッチになっているかのように、乳頭を刺激する度に川崎の身体が艶めかしく跳ねた。
「ん……あ……っ」
「う……っ？」
うっとりと目を細めた川崎が、右手でそっとこちらの股間を撫でてきた。首に回していた左手でそっと俺の髪を撫で、首筋を撫で、喉仏を撫で、腹を撫で、両手で肉竿に触れてくる。大切な玩具を扱う子どものようでもあり、食べたくて食べたくてたまらなかった餌にありついた獣のようでもある手つきは、ひどく艶めかしくて美しい。
川崎の顔の標高が、ゆっくりと下がっていく。足を蹲踞のようにぱっくりと開いて、発情しきった上目遣いをしてきた。
「……ちょっと待った」
「……え……？」
チャックを下ろそうとした川崎の手を取り、動きを止める。物欲し

そうな顔で見つめる川崎の視線の熱量にぞくぞくとしながら、俺は自分の唇を指さした。
「……っ」
俺が言わんとしていることに気付いた川崎が、羞恥と戸惑いで眉をひそめる。それでもやはり、抵抗はしなかった。
「ん……っ」
両手を繋いだまま、ゆっくりと川崎が口を開く。口の中に微かな唾液の糸が見て取れた。チャックを歯でかちりと挟み、ゆっくりと下ろしていく。ちぃぃ……っと小さく響く金属音も、神経が研ぎ澄まされているのかひどく大きく聞こえた。チャックを下ろすと、顔を傾けて、スラックスの隙間に口を入れた。まるで木の隙間にいる餌を捕らえる鳥のように、ボクサーパンツ越しに肉竿の先端を咥えて外に引っ張り出す。先走り汁と唾液でしっとりと濡れた肉竿に、川崎はすんすんと鼻を鳴らして妖しく目を細めた。ボクサーパンツの生地を咥えてずらし、隙間から肉竿を取り出す。川崎は睾丸以外の部分が晒け出されても満足せず、粘った末に睾丸までパンツから引きずり出した。
「んふぅぅ……っ」
「うぁ……っ」
完全にスイッチが入っているのか、川崎は泣きそうな顔で躊躇することなく肉竿を咥えこんだ。熱くぬめった口内に根本まで飲み込まれて、快感の奔流に飲み込まれる。
「んふぅぅ……じゅぷっ、んむっ、ちゅぶっ、んふぅっ、んぐっ、じゅぷっ、じゅろろっ、ぢゅぷりゅ……っ」
「う……お……っ」
無我夢中で肉竿に舌が絡みつき、雁首をぷりぷりした唇で締め付けられ、鈴口を舐め取られる。繋いだ手は初心な恋人同士のように優しく指が絡み合っているのに、そのすぐ下で行われている行為はどこまでも卑猥だ。猛りきった牡の欲望と、精子を絞り出す行為に溺れる牝の肉穴が、他に誰もいないトイレに淫らな音を紡いでいく。この先、きっとこのトイレに近付いただけでもこの行為を思い出して、静かに勃起するのだろう。妄想しただけでも、余計に興奮が高まった。

「ぢゅぶっれるっちゅぷちゅぷ……んむぅっ、ちゅぴっ、れるっ、ちゅぷりゅ……っ」
「う……ぐぁ……うぅぅ……っ」
口淫は激しさを増し、川崎の口からは下品に思えるほど卑猥な音が響く。ここが学校のトイレであることも忘れて、夢中で、必死で、肉竿をしゃぶる。上目遣いで「気持ち良い？　気持ち良い？」と健気に聞いてこられているようで、愛おしさも底なしに湧き出てくる。あまりの快感に後ろによろけると、川崎は口惜しそうに眉をひそめて、すぐさま前に乗り出して根本まで飲み込んでくる。自分がどれほどエロいことをしてるのか、この子は分かっているんだろうか。ドアに背中が付いた。淫乱を体言したような口から逃れることが出来ない。気持ち良い、気持ち良い、気持ち良い。腰が抜けてずり下がりそうになると、繋いだ手によって支えられた。逃がしてはくれないらしい。天井を仰ぐと綺麗で汚れ一つなかった。視界の外から漏れ出る水音はどんどん激しくいやらしくなっていく。
「川崎……っ」
「んぐ……っ!?」
繋いでいた手を離し、川崎の後頭部をがしりと掴む。亀頭が喉奥にごつりと当たり、そのまま激しく前後に動かし始めた。
「んぐっ、ぐぶっ、ふぐぅぅ……っ、んっ、じゅぶっ、んぐぅぅ……っ」
オナホールのような扱いにも関わらず、川崎は目に涙を溜ながらも、腰に抱きついて必死で舌を絡めてくる。苦しそうにえづく度に、射精欲求はぐんぐんとこみ上げてきた。
「んぐっ、おぐっ、じゅぶっ、ふぐぅっ、あぐっ、んふぅぅぅぅ……っ」
「出る、出るぞ、思いっきり出すぞ……っ」
ごちゅんっ、と鈍い音を立てて、喉奥に張りつめた亀頭を突き入れた瞬間。
――びゅぶっ、びゅぶりゅっ、びゅるるるっ、ごぶっ、ごぶごぶごぶっ、ぶびゅびゅるっ、びゅぶぶぶ……っ。
「おご……っ」
下半身が爆発して、亀頭を喉にぐりりと押しつけた。ゼリーのよう

な粘度を持った白濁が川崎の喉奥に叩きつけられ、食道を犯し、胃の中を蹂躙する。涙をぽろぽろとこぼしながら、川崎は必死で精液を飲み込み、咀嚼し、また飲み込んだ。下腹部の脈動は止まらない。緩慢な動作で腰をみっともなく前後に揺らし、魂が抜けそうな射精に意識が削り取られる。川崎は無心で喉を鳴らし続けた。清涼飲料水を一気飲みしているような、ごくりごくりという音が聞こえてくる。川崎の身体を内側まで汚す感覚がたまらなかった。

「……」

ようやく脈動が収まった後も、川崎は人形のように生気のない表情を浮かべながら、機械的に肉竿をしゃぶる。顔をゆっくりと前後させ、残り汁を吸い出して嚥下すると……少しだけ、嬉しそうに目を細めた。俺はその表情にまた興奮して、もう一度肉竿が脈動した。川崎が目を見開いてびっくりしたものの、ゆっくりと目を細めて飲み込んでくれた。

川崎が口をゆっくりと離す。赤々とした亀頭と唇の間には、白濁の後が全く見えない唾液の糸が伸びた。

「……すげえ気持ち良かった」

「……そっか、良かった」

「……川崎、そこに座ってくれ」

「……え……？　……あ、ああ……わかった」

弱々しい声をかけて、川崎を便器に座らせる。ふらつきながらも前に踏み出すと、発情しきった細身を左腕で抱きしめ、ぐっしょりと濡れたショーツに右手で触れた。

「んあぁぁっ!?　あっ、うっく、うぁぁんっ！」

「……やっぱ、下もすげえエロい下着だな……」

川崎の反応と指の感触に、呆れながらも激しく興奮した。

川崎が履いていた黒のショーツは、割れ目の部分がはっきりと露出していた。そのためショーツ越しに愛撫するつもりだった中指が、熱くぬめった蜜壺に直接入り込んだ。これじゃ席に座ったときやばいだろ……と思ったが、羞恥に身を焦がして、何もしていないのに椅子を濡らしてしまう川崎を思い浮かべて、ふっと笑みがこぼれた。

「……お返しに、たっぷりいじめてやるからな」
耳元で囁くと、首まで赤くした川崎がぶるりと震えた。
この後、クリトリスの裏側を徹底的に責めて失禁するまでいじめ抜き、疲弊しきって半開きになった口に挿入して、もう2回射精した。更にその後は予鈴が鳴るぎりぎりまでクリトリスを親指でこすりながら膣肉を抉り続け、川崎は汗と愛液にまみれながら、泣き叫ぶように喘いで潮を噴いた。
午前中は2人してずっと眠そうだった。ちょっと、というかだいぶ申し訳ないことをした。眠そうにしている川崎の太ももをさすって起こすと、顔を真っ赤にした川崎に太ももをつねられた。可愛らしさと痛さで目は覚めた。
この日の夜は、前日以上に淡々と、激しく交じり合った。散々お互いをいじめ抜いても、部屋で一人になるとまだ抜き足りなくてもう一度自慰をした。
次の日、木曜日は朝、昼休み、夜と徹底的に川崎と卑猥な行為をした。何度絶頂しても、お互いの身体を貪り続けた。それでも満足出来ないのはきっと、まだ本当の意味で繋がっていないからなのだろう。
待ち焦がれた金曜日は、朝も昼休みも世間話をするだけに留めておいた。川崎の視線が時折こちらの下半身をじっと見つめていたが、何とか流した。俺が川崎の胸や下半身を焼け付くような視線で見ても、川崎は顔を真っ赤にしながらも何とか流していた。
授業が終わる。けれどまだ帰ることは出来ない。
帰りのＨＲが、いつもの何倍も長く感じた。
最後に礼をすると、俺と川崎はざわめく教室の中をすり抜けるようにして出て行った。
川崎と繋がる。
意識も身体の境界線もぐちゃぐちゃに溶け合うまで。
濃密に、ねちっこく、淫猥に――繋がる。

続く。

（５０）

今日これからのことを楽しみにしすぎていたのか、川崎を連れて家に帰る間のことはよく憶えていない。焦っていたのか、落ち着いていたのか、川崎と手を繋いでいたのか、繋いでいなかったのか、途中で抱きしめたりしていないか……全部曖昧なまま、気が付けば家の前にいた。

「およ、おかえりお兄ちゃん……と、沙希さん！　こんにちはー！　ようこそ！」

「お、お邪魔します……」

「……ただいま。早いな」

家に入ると、小町がひょっこりと顔を出した。あれ、真っ直ぐ帰ってきたはずなのに……何故に小町は既に着替えてくつろいでいるんだろう？

「んー？　真っ直ぐ帰ってきただけだけどねー。お兄ちゃんと沙希さんは寄り道したんじゃないの？　もう帰りのＨＲから結構経ってると思うけど」

「ん、あれ？　そうなのか？」

小町の言葉に首を傾げて時計を見る。言われて見れば確かに中々の時間が経過していた。おかしいな、何が起きた……？　と思っていると、手がちょいちょいと引っ張られた。振り返ると川崎が顔を真っ赤にして首をぶんぶんと振っている。視線を下ろすと内股でもじもじとしていた。

……俺は一体何をしたんだ。

「小町、俺と川崎はすぐ部屋に行くから」

「んー、わかったー……んん？」

小町がのほほんと返事をしてリビングに戻りかけたところで振り返ると、改めて俺と川崎の顔をまじまじと見つめてきた。その顔はどこか心配そうで、特に川崎をじっと見ている。川崎は目をぱちくりとさせて小町と見つめ合っている。どっちも可愛い。

「どうした」

「んー……お兄ちゃん」
小町は俺にだけ手招きをしてリビングに入っていった。川崎とアイコンタクトをしてリビングに入ると、小町は奥の方で手招きをしていた。どうやら川崎に聞かれたくないらしい。
「なんだ急に」
俺の言葉に、小町は眉をひそめてむぅ……と小さな呆れ声を漏らし、リビングの入口をちらりと見るとぽしょぽしょと喋り出した。
「えっとね……これはほんとお節介でしかないと思うんだけど……あんまり、沙希さんにがっつきすぎないようにね？」
「え……？」
小町の言葉で、心臓に直接水を掛けられたような感覚に陥る。小町は俺の反応をつぶさに見つめているようだった。
「お兄ちゃんと沙希さんが今までどんな時間を過ごしてきたかは分からないよ？　まあある程度想像つくことはあるけど……あ、鼻血が……」
「出てない出てない、大丈夫だから」
頬を赤らめて鼻を押さえるのをやめてほしい。どの辺まで察しがついているのかがすごく怖いんですけど。
それでもね……と、咳払いをした小町が優しい笑みを浮かべる。
「お兄ちゃんは、沙希さんが好きなんでしょ？」
「……っ、お、おう、まあ、な、うん」
「え、そこはっきり言ってくんないの？」
「……いや、今のは単に恥ずかしかっただけだ。……好き、だぞ……」
「……お兄ちゃん、あんまり恥ずかしいこと言わないで？　小町まで顔熱くなってきちゃった」
「お前が言わせたんだろうが……」
お兄ちゃんのせいで話が逸れたけど……と理不尽なことを言って、小町はにひっと笑った。今まで沢山見てきた小町の笑顔の中でも、とびきりの笑顔だった。
「だったら、大事にしてね？」
「……おう」

小町の言葉で、今日の帰り道のことをぼんやりと思い出してきた。
ひと気の無い場所で川崎を抱きしめ、キスをして、胸を触って、またキスをして……それを何度も何度も繰り返していた。一回一回の時間は長くないけれど、まるで燃料を補給するかのように何度も川崎の身体を味わっていた。川崎は頬を赤らめて戸惑いながらも、嫌がることなく全て受け入れてくれていた。
――これまでの時間を思い出して、すぅっと波が引いたように冷静になっていく。自己嫌悪をした訳ではなかった。ただ勢いに任せた情欲が薄れていって、川崎への愛情が濃度を増して残ったような感覚だった。
「……ありがとな、小町」
「ん、お兄ちゃんが冷静になってくれたようでなにより」
小町は嬉しそうに笑って、俺の胸板にぺちぺちとパンチをしてきた。思ったよりも痛い。ちょっと力ついてきたなこいつ……。
さて、せっかくだから今のうちに頼んでおこう。
「あー、小町」
「ん、なに？　あんまり沙希さんを待たせても悪いから……」
「今日は川崎に泊まってもらうつもりだから」
「え」
「急にすまん。言ってなかったのが悪かった。……それと、これはもっと申し訳ないんだが」
「な、なに、なに？」
「部屋にいるときは極力イヤホンなり耳栓なりを着けていてもらいたい」
「……その理由は？」
「……小町の精神衛生上、その方が良いと思う」
「……お兄ちゃん」
「……おう」
「……沙希さんのこと、ちゃんと大事にしてくれるんだよね？」
「……するぞ。めっちゃ大事にした上での、その、まあ、なんだ、行為だからな」

「行為って言った！　お兄ちゃんが行為って言った！　生々しい！　お兄ちゃんなんかキモい！」
「はっきりと言うな！　ちょっと悲しくなっただろうが！」
ひそひそ話の体も忘れて兄妹でぎゃーぎゃー言っていると、川崎がひょっこりと顔を出した。何やら顔を真っ赤にしている。
「……あの、今の……だいぶ聞こえてるから……」
『ごめんなさい』
２人揃って高速で頭を下げた。

×　×　×

なんだか気まずい感じになりながらも俺と川崎は部屋に移った。
「あー、なんだ、その……なんか飲むか」
「え、あ、うん……」
一度冷静になると、良いムードを作ってあれやこれやするイメージがまったく出来ていないために物凄くヘタレになる。リビングに戻って飲み物をコップに注ぐ間、俺の表情を見て諸々察した小町がぷーくすくすと笑ってきたので両頬を引っ張ってやった。変な声が出て面白かった。やはりうちの妹は可愛い。
部屋に戻り、川崎に飲み物を渡す。どこに座るか迷っている川崎に、俺はベッドの縁を指差した。川崎はぎょっとしながらもベッドに腰掛け、俺も並んで腰を下ろす。
２人揃って無言で麦茶を飲む。
なんだこれ。
気まずさが故か、俺も川崎も一気飲みしてしまった。何かのＣＭみたいになった。
なんだこれ。
川崎のコップを受け取り、盆に載せてリビングに戻る。リビングを出てから戻ってくるまでの早さに小町がぎょっとしていた。「いいよいいよ、小町が洗っておくから……お兄ちゃん、大事にするっているのとヘタレなのは別問だいひゃいいひゃいいひゃい！」などと、からかってくる妹の頬をつねりつつ礼を言い再び部屋に戻る。
もう一度ベッドで２人並んで座る。

沈黙。
沈黙。
沈黙。
いかん、本当にどうしたら良いか分からない……。完全にタイミングを計りかねて視線を泳がせていると――
「……ぷっ」
「……え？」
何やら、間の抜けた声が漏れ聞こえた。
「……ぷっ、くく……っ」
「お、おい、どうした」
いつの間にか、川崎は笑っていた。それもすごく楽しそうに。
「いや……なんであたしたち、こんな固くなってんのかと思っちゃって……だって、帰り道までは……、……っ」
「……無理して言わなくていいぞ」
明るく言葉を続けようとして、川崎が顔を真っ赤にして固まった。
「……俺はやっぱり、今日お前としたい」
「……ん、あたしも」
「ただまあ、この状態でいきなり及んでも絶対不自然になる」
「今までも不自然なときはだいぶあったけどね」
「うぐ……まあ、その、なんだ。もうちょっと自然な流れで行きたい」
「……それは、うん、あたしも思った」
たどたどしく会話を紡いで、気が付けば川崎と手を重ねていた。
「川崎は……普段部屋では何してんだ？　勉強とか、大志と京華の面倒を見るとかは除いた上でだぞ」
俺の問いに、川崎はしゅるしゅると手の指を絡めながら考え込む。ぞくりとした。
「ん……割とごろごろしてるよ。ベッドで寝そべって本を読んだりとかしてる」
「……それだ」
「……何が？」
何気ない言葉で天恵を得たかのようにドヤ顔を決めると、川崎は絵

に描いたような渋面を浮かべた。
「今聞いたことをそのままやっててくれないか。俺もだらけるから、な？」
「いや、『な？』って言われても、あたしには何がなんだか分かんないんだけど……」
「まあまあ、やってみればわかるから、な？」
「いやだから、その『な？』ってなんなの……？」
全力で怪訝な表情を浮かべる川崎を無理くり宥めつつ。
俺は、いや、俺たちは。ちょっと遠まわりをすることにした。
川崎を大事にしながら、それでいてきちんとお互いが楽しめるように。

続く。

（51）

金曜日の放課後、川崎を俺の家に連れ帰った。

ずっと焦がれて待ち望んでいた行為にすぐにでも溺れたくて気が急いていたが、小町の優しい言葉によって焦る気持ちが柔らかく解けた。

いきなりがっつくよりも、もう少し自然体で臨みたい。

俺の言葉を川崎はきちんと受け止めてくれて、その結果俺たちはしばしの間思い思いに時間を過ごすことにした。

――日常の穏やかな空間が、自然に、妖しく溶け崩れるのを待ち望みながら。

× × ×

「読む本はあるか」

「ん、持ってきてるから大丈夫」

川崎が鞄から文庫本を取り出して、ひらひらと振って見せる。カバーが付けてあり中身は分からないが、川崎が読むのならきっと良い本なんだろうな、などと漠然としたことを思った。

俺も読みかけの本を取り出して、所在無げにしている川崎に目配せをする。ベッドをちょいちょいと指差すと、整った綺麗な顔に薄い朱色が刷かれた。

「ええっと……いいの？　ベッド使って」

「ああ。それと靴下も脱いでいいぞ。後で制服と一緒に洗濯しとくから」

「……っ、わ、わかった……」

今現在制服を着ている川崎に、敢えてあけすけな言葉をぶつける。それが何を意味するか分からないはずもなく、川崎は顔を真っ赤にして、少し恨めし気に俺を睨んで頷いた。

川崎がベッドに上がり、ポニーテールをほどく。青みがかった黒髪がふわりと舞うと、甘い匂いが鼻腔を穿ち――少しだけ、勃起してしまった。俺の些細な欲情に気付くことなく、川崎はうつ伏せで本を読み始めた。俺はベッドの縁に座り、同じように本を読み始める。

お互いに目の前の物語に没入し始めると、柔らかな空気が部屋中を満たした気がした。

何の会話の無い、ただただ静かな空間。晴れの日の夕方は、時折子どもがはしゃぐ声が外から聞こえてくるだけのとても穏やかな時間だった。

一人でいるのが気楽な者同士だからと思い試してみたが、これが思いの外上手く行った。

互いに喋らず、干渉せず、けれど手を伸ばせば触れ合う距離感で共に過ごす。

ページを捲る音が交互に聞こえて、それがとても心地良い。時折、中々ページを捲らないな……と思って川崎をちらりと見ると、よほど印象的なシーンなのか何度か読み直している。綺麗な頬が仄かに赤らんでいるのでどんな内容かすごく気になったが、質問したら叱られそうだ。追及せずにおいて、再び目の前の物語に没入していく。今度は俺が文章を読み直してページを捲るのが遅れると、横顔に視線を感じた。ちらりと流し目を送ると、川崎は慌てたように視線を戻す。同じことを考えているんだろうか……と思うと、なんだかおかしかった。

しばしの間読書に耽っていると――2人の間の空気に小さな変化が起こった。

「……？」

背中に何かがぺちっと当たったので振り向くと、川崎が左足を折り曲げて、足の裏で俺の背中を軽く撫でていた。むずむずして身体を捩ると、それ以上は追ってこなかった。最初は偶然かと思ったが、川崎は俺をちらりと見ただけで何も言ってこない。今の行為がわざとだと気付いた瞬間――穏やかな日常に紫色の亀裂が走って、心臓がぞくりと波打った。

川崎は一度俺の背中を撫でた後は何もしなかった。しかし左足は時折折り曲げられて膝から下をぷらぷらとさせていて、スカートの中が見えそうで見えない危うげな状態を維持している。普段の川崎からは考えられない悪戯っぽい仕草はギャップがあってかなり効く。

時折俺と目が合うと、川崎の瞳はほんの少しだけ熱を帯びていた。
本を読みながら、後ろに手を伸ばす。ぷらぷらと空中をさまよっていた川崎の足に手が触れた。
「ん……っ」
すべすべの肌を撫でると、川崎は枕に口をうずめてくぐもった声を漏らした。川崎の足先を撫で回し、根本に向かってゆっくりと滑らせていく。膝の裏を集中的に撫でると、川崎は身体を悩ましくくねらせた。
「んふぅぅ……ぅぅぅぅ……っ」
内ももを何度もさすっていると、いつの間にか川崎は文庫本を手放し、枕に顔をうずめていた。川崎の身体の奥底に、確実に官能の澱が溜まっていくのを見ているのがたまらない。いつの間にか俺自身も本を手放していることに気付き、自分の本と川崎の本をまとめて持ってローテーブルに移す。本が回収される様子を、川崎は不安と興奮が織り交ざった表情で見ていた。ほんのついさっきまでの穏やかな時間は、しばらくお預けになるということをよく分かっているようだった。
ベッドに上がり、川崎の腰の横に胡坐をかいて座る。真っ白な内ももを両脚とも何度も撫で回し、川崎の反応が徐々に大きくなっていくのを楽しむ。
すらりと伸びた両足を開いてその間に膝を付くと、「ひ……っ」というくぐもった悲鳴と共に、川崎の身体がぶるりと震えた。スカートがかろうじて中身を隠しているが、ほんの僅かに捲るだけで簡単に見えてしまう。両脚の膝裏に手を付き、足の根本へと徐々に滑らせていく。
「う……あ……あぁ……っ」
川崎の声に媚熱が混じり、くぐもった声がどんどんいやらしくなっていく。腰をくねらせて逃げようとする素振りを見せるが、この程度で逃げられる訳が無いなんて川崎自身が一番よく分かっているはずだ。快感と羞恥心の折り合いが付いていない仕草が愛おしくてしょうがない。

「あ……っ？」
スカートをぺらりと捲ると、急に風通しが良くなったためか川崎が惚けた声を出した。そして自分が置かれている状況に気付いたのか、「ひぁ……っ」と可愛らしい声を上げる。
やはり、と言っては難だろうが。
履いていたショーツは、黒のレース生地のものだった。それもかなり薄くて、量感ある尻肉が殊更いやらしく映えるデザインだ。思わずごくりと喉を鳴らすと、その音が聞こえたのか川崎がぴくりと震えた。
両手を足の根本に添えて、肌とショーツの境目にぐっと指を沈み込ませる。
「ふ……っ、んん……んっく……っ」
マッサージするように丁寧に下腹部を揉み解していく。ちょっとやりづらいなと思い、スカートのホックを外した。何も言わずとも川崎は腰を浮かせて、脱がされるがままになっている。下半身が淫靡な黒ショーツ1枚だけになった様を眺めて、下腹部をぱんぱんに膨らませながら再び揉みほぐしにかかる。
「あっ、あっ、あぁっ、はぁぁぁぁ……っ」
徐々に快感が羞恥を勝り始めたのか、川崎は枕から顔を浮かせて卑猥な声を漏らし始めた。連動するかのように、ベッドにぴたりと付いていた腰が持ち上がり、こちらに尻を突き出してくる。下着越しでもいやらしい匂いと熱が伝わってきて、これからの行為が死ぬほど楽しみになった。
川崎の足とベッドの間に手を滑り込ませ、ぐいと持ち上げる。川崎の顔がこちらに引き寄せられ、発情した尻肉が目の前に突き出された。胡坐をかき、じっくりと愛撫を始める。
「あっ、んくぅっ!?　んふぅっ、はぁっ、んうぅっ！」
割れ目を広げるようになぞるだけで、じっとりと汗をかいた肢体がびくびくと艶めかしく跳ね回る。少しずつショーツを割れ目に食い込ませて、はみ出た大陰唇を指でくにくにと押し込む。ショーツは染みが出来るのを通り越して吸水限界を超えてきたのか、細く絞られた

生地から甘酸っぱい愛液がこぷこぷと零れてきた。
ショーツに手を引っかけずるりと引き下ろすと、むせ返るような牝の性臭が鼻腔を穿った。楚々として生える恥毛は余すことなく愛液でぺたりと貼り付き、小陰唇がひくひくと物欲しそうに疼いている。
「んはぁぁっ!? うっ、ひぐ……うぅぅぅ……っ!」
卑猥な牝性器に口付けると、川崎はとびきり艶めいた声で鳴いた。甘酸っぱい匂いは膣内を舌でかき回すと更に濃厚になり、たっぷりとした熱と粘度を持った愛液が絶え間なく溢れ出すため呼吸がままならなくなる。息継ぎのために何度も口を離しては、膣肉を舌で抉り、淫核を唇で挟み、思いつくままに淫猥な牝の口を味わう。川崎は何度も鳴いては身体を痙攣させ、その度に熱い愛液のシャワーを俺の顔に浴びせかけた。
「ひ、きがやぁ……あたしも、したい……っ」
何度目かの絶頂を迎えた後、川崎がこちらに向き直った。汗でワイシャツが肌に張り付き、中の黒のブラが透けて見えている。蕩けきった顔をした川崎が膨らみきった股間を愛おしそうに撫でてきて、あの川崎がここまでエロくなるとは……と感動さえ覚えた。
「……わかった」
川崎の言葉に頷くと、川崎が俺の制服のボタンに手をかけた。為されるがままに上半身を裸にされると、今度はスラックスのベルトに手をかけてきた。腰を浮かせると、スラックスとパンツを同時に脱がされる。そそり立つ肉棒に川崎はごくりと喉を鳴らした。お返しとばかりに川崎の上半身を剥く。汗でぐっしょりと濡れたワイシャツはかなり恥ずかしいらしくやたらと抵抗されたが、舌を絡めるキスをして乳房を揉みしだくと、可愛らしい抵抗もあっさりと止んだ。
お互いに全裸になった状態で、川崎が四つん這いで肉竿に顔を寄せる。
「ん……っ」
鼻を鳴らしてうっとりと瞳を細める川崎はどこまでもいやらしくて――愛おしかった。

続く。

（５２）

川崎の息が、肉竿を前にして静かに荒くなっていく。吐息の一つ一つが強烈な熱を持っていて、尿道まで染み込んでいくようだ。俺は足を開いて手を後ろにつきながら、川崎の淫靡な表情をじっと見つめていた。

「ん……っ」

青みがかった黒髪をかき上げて、頬を朱に染めながら鈴口に口付けをしてくる。紅い舌先が先端に触れた瞬間、甘い媚電がぴりりと流れて背筋がびくりと震えた。川崎は上目遣いで俺の反応を見ながら、竿に両手を添えてねっとりと口付けをし始める。

「んっ、ちゅっ、ちゅっ、ちゅっ、ちゅるる……っ、ふっ、んんっ、んふぅぅ……っ」

「……ぁ……ぐぅ……っ」

抱きしめ合って唇を重ねている時のように、川崎の唇が何度も愛おし気に亀頭に触れて、押し付けて、舌を絡めてくる。鈴口を割り開いてほじくられて、透明な先走り汁がこぷりこぷりと溢れ出す。泉のように湧き出す性液を川崎は恍惚とした表情で吸い取り、こくりと喉を鳴らす。嚥下する度に目を細める様はあまりにも妖艶で、肉竿の硬度は増すばかりだ。

「ちゅぷっ、ちゅぽっ、ちゅくりゅっ、んっ、ふっ、んふぅぅん……っ」

ねっとりと、丹念に、ねちっこく。

牡の性器をたっぷりと味わう川崎は、信じられないほどいやらしい。

少しでも俺を気持ちよくしようとしてくれているのがありありと伝わってきて、気持ち良いと同時に照れくさくもなる。

「うぁ……っ？」

竿の根本を持っていた川崎の両手が、やわやわと２つの玉を撫で始めた。たっぷりと垂れてくるひんやりとした唾液が、熱い手のひらによって睾丸に塗りたくられていく。性器全体が川崎の成分に塗れて、包まれていく。俺が身体をひくつかせる回数が増えると、その分だけ

川崎の表情に喜びが浮かび、澄んだ瞳に発情の炎が燃え盛っていく。
「んじゅる……じゅぶっ、ぢゅぶぶぶ……っ」
「……お……あぁ……っ！」
亀頭を舐めしゃぶっていた川崎が、頬をすぼめて肉竿を喉奥まで咥えこんでいく。少し苦しそうだが、それさえ喜悦に変換しているような表情。卑猥な快楽回路が川崎の脳に仕込まれているようで、際限なく卑猥な牝に変貌していく様にごくりと息を呑んだ。
「……お……ご……っ」
肉竿が根本まで飲み込まれると、川崎は苦悶の声を漏らし、目尻に涙を浮かべてこちらを覗き見た。生気が抜け落ちた虚ろな目には代わりに牝としての本能がはっきりと灯っていて、羞恥の感情がほとんど消え去っているように思える。その証拠に――川崎の右手は肉竿の玉を依然として撫でているが、左手はいつの間にか濡れそぼった己の秘花を慰めていた。ぱっくりと飲み込まれた肉竿が極上のお菓子のように貪られ、俺からは見えない位置でくちゅくちゅと卑猥な水音が鳴り続けている。ぎゅぶ、じゅぶぶ……といやらしい音と共に肉竿が締め上げられ、今にも射精してしまいそうになる。ベッドの上には牝の性臭が立ち込めて、目の前の行為にもっと深く溺れろとせかしてくるようだった。
川崎の右手を掴むと、豊満な乳房の頂に移した。
「……？」
俺の意図を図りかねたのか、川崎は肉竿を深く咥え込んだまま小首を傾げる。内頬にこすれて俺が小さく呻くと、嬉しそうに目を細めて竿に舌を這わせた。
「……俺が動かすから、自分でもっと弄るんだ。こっちの手は指を入れろ。いいな？」
「……っ」
川崎の左手にとんとんと触れて命令すると、川崎は目を瞬いた。しかしそれでも、数秒と経たない内に右手で乳房を揉みしだき、左手の指を膣に挿入して自慰をより深めていく。あまりにも従順で、可愛らしくて、淫靡な行為に目が離せない。

……ここまでエロい姿を見せられて、もう我慢出来なかった。
腰を下ろしていた体勢からベッドの上で立ち上がり、川崎が膝立ちで咥えている体勢にする。
続けて、川崎の頭を両手で掴んで、一度抜ける寸前まで引き抜く。
そして、一気に根本まで押し込んだ。
「おご……っ!?」
喉奥に亀頭がごちゅりと当たり、悲鳴じみた声が川崎の口から漏れた。
「行くぞ……っ」
躊躇うことなく、もう一度引き抜いて、鐘のように突く。
「おぐ……っ！」
止まらない。
「おごっ、おぐっ」
止まらない。止まらない。
「うぐっ、んんっ、んぐぅっ」
止まらない。止まらない。止まらない。
「うぐっ、おっ、ぐぅっ、あぐっ、あがっ、うぐぅぅ……っ」
川崎の頭を好き放題に動かして、ぷりぷりの唇がカリ首を締め上げ、熱く湿った口内が竿に吸い付き、ざりざりした喉奥が亀頭を愛撫するのを楽しみながらたっぷりと犯す。川崎が本当にいやがるならすぐにでもやめるつもりだったが、川崎は両手を俺の内ももに添えて、涙を流しながらも目を細めて嬉しそうにされるがままになっている。今自分がどれだけいやらしい顔をしているのか、この子は分かっているのだろうか。
「おぐっ、じゅぶっ、えぶっ、じゅぶりゅっ、はぶっ、じゅぶぶぶっ、んぶぅっ、ぢゅりゅりゅりゅ……っ」
このまま射精までされるがままになっているかと思っていたら、激しい抽送の中でも徐々に舌を絡めて肉竿をしゃぶり始めた。喉奥まで突くと竿を舐め回し、引くときは精一杯頬を窄めてこすり立て、抜ける寸前で止まると柔らかな唇で精一杯カリ首を締めつけてくる。涎と先走りの汁が混じり合った液体が川崎の口から漏れでて、ぽろぽ

ろと零れ出る涙と混じり合う。川崎と目が合うと、心底嬉しそうに目を細めてとびきり淫らに舌を絡めてきた。
「うっ、ぐぅ……っ、川崎、出すぞ、出すぞ……っ！」
「ごぶっ、おぶっ、ふぶぅっ、んふぅぅ……っ！」
極上の口性器をたっぷりと味わって、限界を目前にした亀頭はぱんぱんに膨れ上がっていた。乳房と秘部をいじる手の動きも激しさを増して、豊満な肢体が快楽にぶるぶると震えている。美味しそうにしゃぶる川崎の顔を根本まで押し付けると――視界が白み、全身が快楽に喜んで震え、下腹部が爆ぜた。
「――んぶぅっ⁉　んぐっ、ごくっ、うぇっ、おごっ、ぐぶっ、んぶふぅぅ……っ！」
肉竿を根本まで咥え込んだ川崎が、必死で喉を鳴らして濃厚な白濁を嚥下する。しかし鉄砲水を狭い水路では制御しきれないように、恐ろしいほどの興奮の末射出した精液は到底飲み込みきれるものではなく――口から、逆流した白濁が溢れ出した。川崎は涙を流しながらも、出来る範囲で懸命に白濁を飲み下し、両手で乳房を寄せて零れ落ちた白濁を受け止めた。
「……ん……はぁっ、ちゅっ、んふぅっ、ふぅぅん……っ」
意識を身体から引き剥がしそうになるほど激しい射精の脈動を終えると、川崎は肉竿に舌を這わせて白濁の名残を舐め取り、鈴口に口付けをしてちゅるちゅると残り汁を吸い取った。そして豊満な谷間に溜まった白濁を見ると、「こぼしてごめんなさい」とでも謝るかのように、申し訳なさそうに上目遣いで俺を見て、小さな池を作っていた白濁を舐め啜った。
「……う……お……っ」
汗だくになって、青みがかった黒髪を解いた川崎が、一生懸命に残り汁を吸い取っている。
腰を下ろし、目の前で起こっているあまりにも淫靡な光景に時間も忘れて見入っていると、精液を全て綺麗に舐め取った川崎がぐったりと体重を預けてきた。抱きしめると、するりと首に腕を回して密着してきて、肉竿の裏筋が淫裂にこすりつけられた。

「比企谷……っ」
少し掠れた声で、川崎が耳元で囁く。言葉足らずで、情熱的で、可愛らしいにもほどがあるおねだりの言葉は、身体の奥底でまだ燻っていた情欲の炎にあらん限りの油を注いだ。
「……おう」
待ち焦がれてひくついた淫裂に指を這わせると、川崎は身体をぶるりと震わせた。中指をつぷりと挿入すると、しとどに濡れそぼった膣内は媚薬の原液がたっぷりと詰まった蜜壺のようで、膣肉を抉る度に膣道がざわざわと蠢いて心地良く締め付けてくる。締め付けと連動するように「あっ……あん……っ」と可愛らしく喘ぐ声が耳朶に染み渡り、準備万端だから早く挿れてくれと訴えかけているかのようだ。
川崎の両肩を抱いて、二人の位置をくるりと入れ替えて川崎を仰向けに倒す。枕に頭を乗せた川崎が、シーツをぎゅっと掴んで潤んだ瞳で見つめてきた。
「……行くぞ」
「……うん」
俺の言葉に、川崎は幸せそうに、それでいて少しだけ恥ずかしそうに、目を細めて頷いた。

続く。

（５３）

仰向けになった川崎に覆いかぶさり、ぐっしょりと濡れそぼった淫裂に肉槍の切っ先を宛がう。

「うあ……っ」

柔らかな割れ目の肉に裏筋を擦り付けると、川崎は上気した色っぽい顔をして喘いだ。

「……入れるぞ。言って簡単に出来るとは思わないが……それでも、力は抜いてくれ」

「……ん、わかった」

川崎が不安げながらも頷くのを見届けて、肉竿の根本を持って、ゆっくりと亀頭を埋め込んでいく。

「うあぁ……っ」

赤い亀頭が朱い媚肉に食べられると、俺と川崎の呻きが混ざり合った。極上の柔らかさと心地よい締め付けに、これからの行為に対する恐ろしいほどの期待が湧く。

川崎の反応を窺いながら、ゆっくり、ゆっくりと腰を進めていく。

「はぁぁ……あぁぁぁ……っ」

川崎が頭の横のシーツを掴み、顔を真っ赤にして悩ましい息を吐き出す。俺は深度を増すに連れて苛烈に強まる快感に打ち震えていた。一方川崎は、予想していたよりも痛がることなく、それどころか……静かに、けれど確かに、快感を覚えているようだった。

「川崎……大丈夫か？」

「ん、うんん……っ、ま、まだ、大丈夫……っ」

全身にじっとりと汗を浮かべ、苦悶と喜悦の混じった表情を浮かべる川崎がひどく色っぽくて。思わずこの子の身を省みずに欲望のまま突き入れてしまいそうになる。必死で本能を自制しながら、ゆっくりと腰を進めた。

途中で、腰の進みが止まる場所があった。ここがもしかして……と思っていると、川崎の顔が不安で塗りつぶされていることに気が付いた。少しでも憂いを和らげようと青みがかった黒髪をくしゃくしゃと撫で

ると、川崎は小さく息を吐いて猫のように愛らしく目を細めた。
「……行くぞ」
「……うん……っ」
ぐっ、と腰を押し進めて、強い抵抗に構わず腰を突き出すと――不意に、中の狭い空間が急速に開けた。
「うあぁぁぁ……っ!?」
川崎の身体がびくりと跳ね、すらりと伸びた足がぎゅっと閉じられた。先程までの快感の伴ったきつさとは別の、純粋な強張りによる万力のような締め付けが肉竿を襲う。川崎はきつく目を瞑り、長い睫毛を震わせて涙をぽろぽろとこぼしている。
「川崎、痛いよな？　抜くか？　大丈夫か？」
我ながら情けない声だと自覚していても、何か言葉を掛けずにはいられなかった。今、俺が味わっているきつい締め付けは、そのまま川崎の痛みの度合いを示している気がする。川崎の痛みを分けてもらえるなら、本当にそうしてほしかった。
「だい……じょうぶ……抜かないで……いいから……っ」
掠れた声で、汗だくになった顔で川崎が無理に微笑む。肉竿がなるべく動かぬように前屈みになり顔を近づけると、川崎が救いを求めるように目を細めて唇を近づけてきた。
「ん……んむっ、ふぅっ、ちゅるっ、んふぅぅ……っ」
唇をついばむような口付けをして舌を絡めると、川崎の顔と身体から少しだけ強張りが抜けた。もっと楽になってもらいたくて、慎重に、けれど濃厚に何度も舌を絡める。そっと乳房に手をやると、川崎の目がとろんと細められた。
「んっ、ふぅっ、んっく、ふぅぅっ、んぅっ、んふぅん……っ」
「ん……んむ……っ？」
しばらくの間ゆったりと互いの身体を交わらせていると、川崎の様子に変化が生じてきた。舌を積極的に交わらせ、俺の首に両腕を回し、足を悩ましげにくねらせている。肉竿の深度が変わらぬように慎重に腰の位置を調整していたが、川崎の淫猥な腰つきによって徐々に肉槍が蜜壷の中に埋もれていく。不安の黒に塗りつぶされていた二

人の空気が、妖しく淫らな薄桜色に変化し始めた。
それでも心配なものは心配だ。大丈夫なのか……と聞こうとして唇を離そうとしたが、
「ん……っ、やぁっ、んっ、んむぅぅ……んふぅぅん……っ」
「……っ」
一瞬唇が離れただけで、川崎は今まで見たことがないくらい可愛らしく甘えた声を出して、更に情熱的に舌を絡めてきた。あまりにも淫靡な豹変に思考が混線するが、歯列の上下表裏や内頬、上顎を余すことなく舐られることで、こんがらがった思考が快楽の波に呑み込まれて行く。
あまりに情熱的な口づけに酸素が不足し始めたところで――肉槍の亀頭が、最奥にこつりと当たった。
「んふぅぅぅ……っ！」
長い睫毛が儚げに揺れて、くぐもった喘ぎ声が頭蓋に直接響く。幾百もの襞が蠢いて肉竿を締めつけてきて、気が狂いそうなほどの快感をもたらした。思わず腰を引こうとしたが、すらりとした脚が腰に巻き付いてぎゅっと締め付けてくる。更に増した快楽に悶絶し、身動き一つ取れなくなった。
「ん……うぅ……ちゅるっ、ちゅぴっ、ちゅぷりゅ……んふぅぅ……っ」
俺が全く動いていないのとは対照的に、川崎の手は愛おしげに俺の背中を撫で、絡まった脚は妖艶に蠢く。一挙手一投足が男の情欲を駆り立てる、淫らそのものの動きだった。
「んぐ……っ？」
ふと下腹部に意識を集中させると、柔らかな膣内がゆっくりと波打ち、肉竿にぴったりと合うように形を変えていくのに気付いた。二人の身体の相性がぐいぐいと良くなっていき、川崎も激しく感じているのか身体をくねくねとよじらせる。
「……ぷはっ。川崎、お前の中、なんでこんな……っ」
「わかん、ない……あぁっ、あぁぁぁぁ……っ」
ようやく唇を離すと、川崎は泣きそうな顔をして蕩けた嬌声を漏ら

した。身体を起こしてゆっくりと腰を引くと、雁首が膣肉をぐりぐりと抉る。艶めかしい肢体が何度も跳ねて、その度に膣肉がきゅむきゅむと締め付けてきた。
「川崎……っ」
ほっそりとした腰を両手でくいと持ち上げて、抜けかかっていた肉竿を再び挿入する。
「んはぁぁぁっ!?」
クリトリスの裏側、隘路のざらざらとした部分に亀頭がこすれると、川崎は悲鳴じみた嬌声を上げた。
「……ここ、気持ち良いのか？」
腰を持ち上げたまま、角度を探るようにして何度も亀頭で小突く。
「あっ、だめ、そこ、うぁっ、んはぁぁっ!!」
殊更反応が大きい角度を探り当てて集中的に何度も突くと、川崎は両手で顔を覆い、獣性を帯びた声で幾度となく喘いだ。透明な液体がぷしゅっぷしゅっと断続的に噴き出し、こちらの下腹部がぐしょぐしょになる。
もっと他の部分を触りたいが、腕で支えていないとこの角度で責めるのは難しいな……と思っていると、川崎の頭の下にある枕がふと目に入った。
「川崎、わりい。使うぞ」
「え、あ、あぁ……っ？」
川崎の頭を持ち上げ枕を取り外すと、腰を持ち上げてベッドと腰との間に枕を滑り込ませた。角度がつきすぎたら意味がないので少し心配だったが、枕を挟んだ状態で肉槍を突き入れると、ざらついた弱点を綺麗に突くことが出来た。
「んくぅぅぅ……っ！」
たった一突きで、川崎の身体がぶるぶると痙攣して硬直した。一瞬射精しそうになったが、もう少し我慢してこの時間を楽しみたい。括約筋にきゅっと力を込めて、込み上がる射精衝動を堪えた。
枕のおかげで腰に回していた両手が空いたので、左手で豊満な乳房に指を沈み込ませ、右手はぷっくりと膨れた肉芽をくりくりとこすり

ながらゆっくりと抽送を始めた。
「あふぁぁっ!? だめっ、こんな……あぁぁぁっ!! だめ……だめ、だめ、イ……っ、あぁぁぁぁぁぁぁっ!!」
タガが外れたように川崎が泣き叫ぶ。苦悶に満ちた声からは同時に深い快感も滲み出ていて、くしゃくしゃに歪んだ顔はどこまでも嗜虐心を高めてくれる。
「あぐっ、だめ、そこ、何回も突かないで……んはぁぁっ!?」
ざらついた部分や子宮口を小突く度に、乳頭を摘む度に、肉芽を親指で擦る度に、川崎は下弦の月のような美しい曲線を描いて絶頂に達する。
「はぁ……はぁ……ひぐっ、うぐぅっ、もう、だめ、息、出来な……あぁぁぁっ！」
結合部には白く濁った愛液が大量に溢れ、生々しい牝の匂いがベッドの上に溢れて更なる官能の波を作っていた。
「川崎……川崎……っ！」
熱に浮かされたように、夢見心地で、俺は川崎の名を呼びながら一心不乱に腰を突き立てる。膣肉は一様に締め付けてきたり波打つように締め付けてきたりして、自身が何度も絶頂に達しながらも確実に俺を限界へと追い込んでいく。
「う……ぐぅ……っ、川崎、もう、出る……うぐっ、だ、出すぞ……っ！」
尿道をせり上がろうとするマグマの奔流に身体が疼き、一気に抽送の速度を上げる。川崎の両の乳房を掴んで、ぐにゅぐにゅと形を変えながら勃起しきった肉槍を突き立てた。
「いっ、あぐっ、比企谷……比企谷ぁ……うあぁぁっ！」
川崎の腕がこちらに伸びてきて、首筋に腕を巻き付けてくる。背筋を弓なりに反らせたまま腕を伸ばす様は川崎のスタイルの良さと艶を一層引き立てて、愛おしさと情欲が限界の天井を突き破った。
「イクぞ、もう、出る……っ」
「あっ、うぁっ、あぁ――――」
白濁が尿道を伝う感触がした瞬間、ぴんと張りつめた桜色の乳頭を

天井に向かってきゅっと引っ張り上げた。射精をすると同時に膣肉が最大限に締まり、下腹部が砕けるように爆ぜて決壊する。
「――――あぁぁぁぁっ⁉　あつっ、うっ、あぁぁぁっ！　ぅあぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!」
川崎の理性の壁が砕け散って、快楽に染まりきった牝の喘ぎ声が耳朶に叩き付けられた。ゼリーのように濃厚な白濁が、命を削るような脈動の度に川崎の子宮へと叩きつけられ注がれる。射精の衝撃が膣肉のざわめきを強め、それが更なる射精を促す。天国と地獄が混ざり合ったような濃厚な時間は、実際は数秒程度のはずなのにまるで永遠のように思われた。
「……はぁ……はぁ……はぁ……っ」
繋がったまま、二人とも激しく息を荒げる。俺は川崎がM字に広げた脚とベッドとの間に自分の脚を滑り込ませ、両手を後ろについて天を仰いでいた。凄まじい絶頂を経て二人の身体はひどく敏感になっているにも関わらず、二人して結合を解こうとはしなかった。
気だるい身体を起こして、川崎の腰の下にある枕を取り除く。そしてほっそりした腰に手を回して川崎の身体を起こし、長い脚をこちらの腰に巻き付けるように促した。
「あ……ひき、がや……っ？　なんで……んん……っ」
されるがままになっていた川崎も、密着度を思い切り高められた状態ではたまらなかったのか、か細い声で疑問を投げかけてきた。
「……川崎、お前はどうしたい？」
「……え？」
「休むか、それとも続けるか。俺は正直続けたい。お前はどうだ？　無理ならちゃんと休むから」
俺の言葉に川崎は逡巡する。視線を泳がせ、時折ちらりとこちらを流し見る仕草がとても可愛らしい。しばらく待っていると、頬がほんのりと桜色に染まった。返事の言葉を紡ごうとしたのだろうが、唇が震えて言葉が上手く出ないようだった。
「……たい」
「ん、なんて？」

「……したい」
「もっとはっきりと」
顔を逸らしてぽしょぽしょと呟く川崎を追い込むように、柔らかな頬を押さえて向かい合わせ、おでこ同士をこつんとぶつける。目と鼻の先で整った顔立ちが羞恥でくしゃりと歪んでいた。
「……続き、したい……っ」
甘やかな吐息と共に囁かれた言葉が、耳朶を心地良く犯した。
「……わかった。……じゃあ、続けるぞ」
「う、うん……んっ、んぅっ、はぁぁぁ……っ」
尻肉を掴んで揺すり始めると、川崎は眉を艶めかしくひそめた。
ふと視線を下ろすと、二人の身体が深く、生々しく繋がっている。望んでいた関係に辿り着けたのは、心底嬉しかった。
「ひきがやぁ……んんん……っ」
きっと川崎は、朝になったら顔を真っ赤にして自分が口にしていた言葉や行為を恥ずかしがるのだろう。今の姿も可愛いし、朝になって悶える姿もきっと可愛い。今までも色々な場面で見てきたこの子の振り幅のある一面が、俺を魅了し続けてきたんだな……と気付き、何だか妙に嬉しくなる。
ほっそりした腰を抱き寄せると、俺の腰に巻き付いた両脚が愛おし気に締めつけてくる。これから、もっとこの子を乱れさせよう。どうしようもないほど可愛らしくて、いやらしい顔を沢山見よう。
溢れ出す期待に身体がぶるりと震えて思わず腰を突き上げると、川崎がおとがいを上げて甘い声で鳴いた。
この夜は、お互いに汗だくになりながら、一晩中繋がっていた。

続く。

（５４）

朝が訪れたことは、何となく分かった。
薄明かりを点けていても、カーテンの向こうが明るくなったのに気付いたからだ。
「ん……くぅ……あぁ……っ」
汗ばんだ身体が快楽を貪る音の間にも、人が往来する音が混ざり始めた。
「あ……あふぁぁ……あぁぁ……あっ、はぁぁぁ……っ」
身体はひどくだるい。理由は単純だ。ずっと寝ずに動いていたのだから。
「あぐっ、ひっ、あふぁぁっ!?　……イ、イク……また……あぁぁ……っ」
――まさか、川崎がここまでとは思わなかった。
「あ……あぁぁ……んあぁぁ……っ！」
「うぐ……っ」
仰向けになった俺に背を向ける形で跨った川崎と、両手を繋いだ状態で思い切り腰を突き上げると――川崎が何度目か分からない絶頂に達して、俺も川崎の子宮に大量の精子を注いだ。天を仰いでぶるぶる震えていた川崎がくたりと前に倒れ込み、繋がったままの結合部といやらしくひくついたアナルが丸見えになる。
「あ……やぁっ、そこ、弄る、なぁぁ……っ」
「……今さらだろ」
放射状の皺の中心部にあるいやらしい排泄孔を両手で弄ると、絶頂の余韻に浸っている川崎が甘ったるく呻いた。淫靡な仕草と声にまた勃起してしまい、まだ行為が終わりそうにない。川崎も自分の中で肉茎が大きくなったことに気付いたのか、気だるげに振り向いて頬を仄かに赤らめ、身体を起こすと再びゆっくりと腰を前後させ始めた。
――本当に一晩中繋がっていたことで、川崎は恐ろしいほど卑猥な生き物と化していた。
度重なる絶頂による疲労で身体がほとんど動かないにも関わらず

必死で腰を動かし、可愛らしさをまるで自覚していないような仕草で色っぽくおねだりをしてきて、組み伏せて犯せば嗜虐心を煽る言葉を何度も投げてくる。数えきれないほど口や膣に注いでも、髪をかき上げて虚ろな目で肉竿を舐めしゃぶられ、徐々に上手くなっていく口淫による快感と必死で気持ち良くさせようとする健気な様にたまらなく興奮してしまい行為は止まらなかった。

正常位の時は、両手首を押さえ付けて激しく腰を打ち付け、射精の時は腰をぴったりと密着させた。整った顔立ちをくしゃりと歪ませて、首を振りながら達する様は恐ろしいほどいやらしい。汗だくの肌は密着度が高く、子宮は亀頭に吸い付いて美味しそうに白濁を飲み込んでくれた。

後背位の時は両手首を掴んで引っ張りながら腰を打ち付け、獣じみた声を上げる川崎にたっぷりと白濁を注いだ。絶頂で激しく痙攣するとき、アナルが美味しそうに引くついて更に劣情を煽ってきた。

対面座位では口付けで丹念に舌を絡め、物欲しそうに腰を振る川崎の動きに合わせて腰を揺すり、二人で静かに絶頂に達した。射精の脈動の度にぎゅっときつく抱きしめてくるのがあまりにも可愛くて、何十分も抱きしめ合っていた。

横向きで寝転がる川崎を後ろから貫き、腋をたっぷりと舐めながら抽送すると、羞恥で可愛らしく喘ぐ川崎の締めつけがたまらなかった。絶頂に達しているときにクリトリスを弄ると、くしゃくしゃになった泣き声を上げて透明な液体を噴き出した。不自然なほど痙攣している身体をもう何度か肉槍で貫くと、泣きじゃくりながらキスを求めてきた。

俺がトイレに行った時に同行させて、用を足す様を目の前で見せた後、その場で綺麗にさせた。初めはいやがっていたが、丁寧に舐めしゃぶっている内にスイッチが入ったのか、上目遣いでこちらを見る目が次第に蕩けてきた。2回目からは何も言わずに付いてきて、頬を赤らめながらも毎回綺麗にしてくれた。

川崎がトイレに行く時も同行して、クリトリスを愛撫しながら用を足させた。用を足した直後に挿入すると、よほど油断していたのか声

も上げずに一瞬で絶頂に達していた。柔乳をたっぷりと揉みしだくと、おとがいを上げて白い喉を見せながらもう一度達した。
何度も、何度も、何度も。
どれほどの時間が経って、どれほどの汗をかいても。
俺と川崎は、ひたすらに、獣のように交わっていた。
「もう……だめ、腰、動かない……っ」
こちらを向いて足をM字に開き、息を荒げながら腰を上下・前後に動かしていた川崎がこてんと倒れ込んできた。こちらの首に腕を回して、愛おしそうに撫でさすってくる。当たり前のように口付けをして、豊満な尻肉を揉みながら舌を絡めた。
「体勢、変えるか」
「……うん」
川崎の返事を合図に、俺は肉竿を抜くと川崎をベッドに四つん這いにさせ、後ろで膝立ちになり一気に貫いた。
「はぁぁぁ……っ」
肘をベッドについた状態で川崎が俯き、ぶるぶると震えた。一番奥を貫いた状態でしばし止まっていると、膣内がぐねぐねとうねり、肉竿にぴたりとフィットした。交わるごとに膣肉が肉竿の形にフィットしていき、相性がぐんぐんと良くなっていることが分かる。川崎は本当に限界のようで、俺の抽送を促すように腰を振るが、その動きが妙にぎこちない。震えながらもゆっくりと尻を突き出してくる様がとても淫靡だ。俺自身、もはや激しい動きは出来なかった。互いが互いの弱い所を探るように腰を動かし、にちゅっ、じゅぽっといういやらしい結合音が閉ざされた部屋の中に静かに響く。
「あぁ……うぁっ、だめ、もう……っ」
川崎が身体を小刻みに震わせ、へなへなと倒れ込む。繋がったまま川崎に合わせて倒れ込み、うつ伏せになった川崎の肢体に重なった。
「あ……うぅ……はぁっ、んっ、ふぅぅ……っ」
何人かの子どもが外ではしゃぐ声が聞こえる。カーテンの隙間から差し込む光は木漏れ日のように柔らかい。川崎の乳房とベッドの間に手を滑り込ませ、飽きるどころかどんどんハマってしまいそうな

ほど柔らかい乳房を緩慢な手つきで揉みしだく。体力が尽きた者同士の性行為は、気怠く、費やす時間も長く、ずっと気持ちが良い。
「あ……っ？　あっ、んっ、んっく、ふぅぅ……っ」
首筋に口付けをすると、膣肉の締めつけが増した。川崎は甘ったるい声を上げて尻を突き出してきて、腰が柔らかな臀丘にぴったりと密着した。
川崎が振り向き、物欲しそうに唇を突き出してくる。応じて唇を重ねると、どちらからともなくぴちゃぴちゃと音を鳴らして舌を絡めた。動物のような求愛行動は、瞼が重くなった状態で漫然と、終わることなく続けられる。
クリトリスの裏側を入念に小突いていると、川崎がくしゃりと顔を歪めた。
「ひき、がやぁ……っ、あたし、もう……っ」
「……わかった。俺もそろそろ……出すぞ……っ」
互いの限界を吐露すると、緩慢な動作は速度をそのままに大きさを増す。互いの気持ち良いところを出来る限り責めて絶頂に導いていくと、視界が静かに白く爆ぜた。
「あぁぁぁ……んはぁぁぁぁ……っ」
おとがいを上げて遠吠えのように、か細い声で川崎が鳴く。疲れきった顔とは対照的に膣肉が妖艶にざわめき、肉茎から白濁を余すことなく吸い取った。
肉茎を抜いて二人とも仰向けになると、今度は俺から口付けをした。川崎は目を細めてこちらを向き、どこか楽しそうな表情で舌を絡めてきた。
互いの舌を漫然と、惰性ながらも楽しく絡めていると――いつの間にか、意識が柔らかな水面の下に沈んでいた。

×　×　×

「……ん……っ？」
目を覚ますと、昼間なのか随分と明るくなっていた。川崎がベッドの縁に座っているのが見えて、どうやら先に起きていたようだと気付く。

「……んん……？」
背中越しに見ても川崎の様子がおかしいことに気付き、ゆっくりと身体を起こす。川崎はベッドの縁に座り、膝に手を置いて、かちこちに固まっていた。
「おい、どうした」
「ひぁっ!?」
俺の声に川崎が跳び跳ねる。顔は涙目で真っ赤になっていた。
……。
……まさか、な。
「なあ川崎、もしかして今さら恥ずかしくなったのか。あれだけのことをしておいて、今さら」
「……わざわざ言うなぁ……っ」
川崎の顔が更に真っ赤になり、唇が引き結ばれてもにゅもにゅと動く。あれだけ乱れておいて、まさか本当に恥ずかしがるとは。何この子、無限に可愛い。
川崎と並んで座ると、びくりと身体を震わせた。小動物のような振る舞いはひどくぞくぞくとする。
「んむ……っ？　ふっ、んぅっ、……ちゅるっ、ちゅぴっ、ふぅん……んふぅぅ……っ」
肩を抱き寄せて唇を重ね、舌を挿し入れると川崎は顔を真っ赤にしながらもあっさりと応じた。柔らかな太ももを撫でさすり、行き場に迷っている手を掴んで肉竿に導くと、目を見開いて戸惑いながらもやわやわと握ってくれた。絹糸のような細指の感触がたまらず、むくむくと硬度を増す肉茎に川崎の視線が集中する。
「んむっ、ふぅぅ……っ、……あ……っ？」
唇を離すと、二枚の口内粘膜の間に銀の糸が伸びる。よほど夢中になっていたのか、川崎はついさっきまであれだけ恥ずかしがっていたことを忘れて口惜しそうに眉をひそめた。俺が視線を肉茎に移すと、川崎は俺の意図を察したもののちょっとだけ逡巡する。やがて腰を上げて俺の前に立つと、女の子座りをして汗で貼り付いた髪をかき上げ、青筋立った肉竿の鈴口にちゅっと口付けをした。

「んむ……っ」
亀頭を包むように咥え込まれ、雁首を柔らかな唇でぴっちりと絞め付けられる。たまらない感触に呻くと、川崎は上目遣いで俺を見上げて――――嬉しそうに目を細めた。
この後、二人がもう一度寝るまで二時間ほどかかった。
夕方に起きた後、部屋の匂いやら何やらをちゃんと処理するのに30分ほどかかった。リビングに顔を出した俺と川崎を、小町が交互に見やってにやにやしていたので(でも可愛い)、柔らかなほっぺを荷台ジャンケンで負けた後の駄女神ばりに伸ばしてやった。恐ろしいほど可愛かった。その後、丸一日帰っていない川崎が弟と妹を心配して、その後何だかんだで比企谷兄妹が揃って川崎家にお邪魔して、土曜の夕方は非常に賑やかなものになった。
京華が俺と川崎を交互に見やって、「さーちゃんとはーちゃん、なんかいつもとちがうー」と言った時は本当に焦った。大志が「？　何のことっすか？」と呆けた面で言っていた。男女の鋭さの差を見せつけられた気分だった。

×　×　×

それから数週間が経ち、夏休みが訪れた。
「ほいじゃあ行ってきまーす」
俺の部屋にひょいと顔を出した小町が、満面の笑みを浮かべてこちらに手を振る。２本の手がひらひらと揺れると、その様子を見て満足気に頷いた小町が部屋を出てそのまま出かけていった。今日は友達とプールに行くと言っていた。悪い虫がつかないか心配だから付いていくと食い下がったら、心底軽蔑した目で「これ以上しょうもないこと言ったら、お兄ちゃんのこと今年いっぱい『羽虫』って呼ぶから」と言われた。半年は長くないですかね……。
「……うっし」
小町が出ていったあと、進めている途中だった問題集に再び取り掛かる。紙の上をシャーペンが軽快に走る音は、俺が長文問題で悩んでいる間も止まらない。
窓の外を見れば、拷問か何かと思えるくらい強烈な日差しが降り注

いでいる。暑ければ暑いほど、遠くを揺蕩っている分厚くて白い雲は綺麗に見えるというのは何だか不思議だ。
一時間ほど経っただろうか、かたんという音がして、俺もシャーペンを置いて伸びをした。左頬に熱を感じて、思わず頬を緩めそうになる。
……そろそろ、我慢も限界だろうか。
左を見やると――黒のタンクトップに白の薄いブラウスを羽織った川崎が、もじもじと内股をこすり合わせながらこちらに悩まし気な流し目を送っていた。
ちなみにここまで、俺がさも一人でいるかのように振る舞っていたのは特に意味は無い。
川崎の右手を掴み、膨らみかけている股間に持っていく。
「あ……っ」
熱くなった部分に触れた川崎が、初めこそ小動物のような反応を見せたものの、ジーンズ越しに肉茎をまさぐる内に徐々に息を荒げ、やがてチャックを下ろしてパンツの上から触り始めた。じわりと浮かんだ先走り汁に気付くと嬉しそうに目を細め、肉槍をぶるんと外気に晒す。重力を忘れたかのように上に向いた肉竿に、川崎はこくりと喉を鳴らした。
「俺の前に立ってくれるか」
どうするか少し考えたが、結局最後まですることにした。川崎は俺の言葉に戸惑いながらも従い、俺の前に立つ。すらりと足の長い川崎の下腹部が目の前に来ると、衣服の下にある陰部を想像して勃起が更に増した。
川崎が真っ赤になった顔を逸らしながら、デニムのミニスカートをそっと捲る。いつもの黒レースのショーツだが、普段よりも明らかに薄手のものだ。よく見れば、脱がなくとも指や肉棒が挿入出来るいやらしい仕様だった。まだ俺からは何もしていないのに、じっと見ているとまるで蜂蜜のようなとろりとした淫液が零れ出てきた。
「……あくまで休憩を兼ねてるんだからな？　ほどほどにしとけよ？」

M字に足を開いて、ゆっくりと腰を下ろして肉槍を咥えこもうとしていた川崎が、俺の言葉に耳まで真っ赤になる。
「……な……あ、あんたがいつも、激しくするから……っ」
「……お前も大概だろ。泣きながら腰振ってる時の自分のエロさを自覚した方が良いぞ」
「な……っ!? あ、あんたねえ――――」
川崎の言葉を途中で遮る形で、膝裏を掴んで足を浮かせて一気に貫くと、潤んだ瞳を白黒させて壊れたように身体をがくつかせた。狂おしいほどの締めつけにたまらなくなり、思わず中に射精する。
「あぁぁぁ……あぐっ、はぁっ、うそっ、もう……ぅあぁぁぁ……っ」
亀頭が子宮口に押し付けられた状態で白濁が大量に溢れ出ると、川崎の声はあっと言う間に甘く蕩けた。ほっそりとした両腕はいつのまにか俺の首に回されていて、身体をぴったりと密着させている。
「ばか、ばか、いきなりこんな……っ」
「わりいわりい。……お詫びに、もう1回するから」
「……ほどほどにするんじゃなかったの?」
俺の言葉に、川崎が拗ねたように上目遣いで見つめてくる。未だに熱量が減る気配さえ見えない恋心と情欲が、心地良く燃え上がった。
「……ほどほどに……そうだな、ほどほど……まあ、3回くらいでやめとけば、多分、まあ……」
「っ!? ちょ、ちょっとあんた、それ、絶対やばいで……ぅあぁぁ……っ!?」
露わになった白くて柔らかな尻肉を掴んで揺すると、川崎の表情が泣くようにくしゃりと歪んだ。膣肉がざわめいて強烈に締め付けてきて、一瞬意識が遠のくほどの快感に思わず呻く。
「もう……んぁ……っ、あんたはいつも……うんん……っ、こうなん、だからぁ……んあぁぁぁ……っ」
「いや、やりたがるのは大体お前な気がするんだが……」
「程度の問題……だからぁ……うんん……っ!」
これがいわゆる痴話喧嘩なのか……? と思うような会話をしながら、ゆっくりと互いの身体を貪り、絶頂を共有する。

――隣にいて、何もせず過ごす時間が気持ち良い。
身体を重ねて、一心不乱に心を交わらせるのも楽しい。
「うぁ……比企谷……比企谷ぁ……っ」
「……あー、その、なんだ、……沙希」
「……え？　今、なんて……っ」
「……うん、まあ、えっと、その、好きだぞ……沙希」
「……っ!?　ちょ、ちょっと、こんな時に何言って……っ!?」
「うぐぁ……っ、……こら、急にそんな締め付けるな……っ！」
「んあぁぁ……っ!?　あ、あんたが急にそんなこと言うから……んくうぅぅ……っ！」
――もっと、色々な表情を見たい。
ずっと、見ていたい。
「はぁ、はぁ、……ばか……っ」
「……ウソは言ってないんだがな……」
「……っ！　……ばか、ばか、ばか……っ」
「……お前は可愛いな」
「……っ!?　……っ！　……っ！」
「……声になってないぞ」
これからこの子と過ごす時間は、一体どれだけ穏やかで、どれだけ情熱的で、どれだけ楽しいものなのだろう。ちょっと考えただけであっと言う間に思考が広がり、まるで子供のようにわくわくしてしまう。
「……これが終わったら、ちょっと休んで勉強するか」
「……長い休憩時間になるね、誰かのせいで」
「お互い様だろうが」
「……ふふっ」
「……何がおかしい」
「あんたも笑ってるよ？」
「む……」
「……ん……っ」
「んむ……っ？」

一矢報いたと思ったのか、唇を重ねてすぐにするりと離れた沙希の顔は、悪戯っぽい笑みを浮かべていた。またしても新たな表情を発見して悶えると同時に、ちょっとだけ悔しくて反撃したくなる。
「……全力で責めてやる……っ」
「ちょ、ちょっと、そんなことしたら本当に勉強どころじゃなくなるでしょ……うんん……っ！」
この後、たっぷりと楽しんで休憩で小一時間寝てから、ようやく勉強を再開した。なんだかんだでどちらも望んで及んでいる行為なので、部屋の中には何だか幸せな空気が満ちていた。
――こうして、今日も、これからも、ずっと、ずっと。
俺と、川崎沙希は。
思いを寄せ合って、寄り添って、暮らしていく。

お終い。

比企谷小町は夏に向けてくびれボディを作ろうと頑張っている。

（1）

今日は小町とサイゼに来ている。

小町はサラダを美味しそうに食べていて、俺と目が合う度ににこにこと微笑んでくる。

人目も気にせずでれでれしていると、小町がフォークでレタスを刺して、俺に差し出してきた。

ぱくり。

うん、美味しい。

しかし、美味しいと思う割に、その言葉通りの実感が湧かないのは何故なんだろう。

『……ちゃん』

小町は俺が咀嚼して飲み込むのを確認すると、更に追加を差し出してくる。よく見ると周りの景色がどこか白くぼんやりとしていて、他の客や店員がいるのかもよく分からない。

『……お兄ちゃん』

状況がいまいち掴めないが、愛する妹がくれたものを食べない訳にはいかないので再びぱくり。

うん、美味い。

『……お兄ちゃん！』

あれ、小町がにこにこしながらも手を止めないぞ？　なんかわんこそばみたいになってるけど。え、ちょっと待って、ペース上がってる。いくら野菜でも、そんなには……ちょっと、もう……。

「…これ以上、食べられないぞぉ……」

「お兄ちゃんってば！」

「……んぉ？」

ぱっと目が覚めると、仰向けで寝ている俺の腹の上に小町が乗っていた。その軽さにびっくりすると同時に、今の今まで見ていたものが夢だと気付く。
「お兄ちゃん、やーっと起きた。もー、休みだからってだらだらしすぎ！」
「だらだらっていうか、でれでれはしてるんだけどな」
「そういうのいらないから」
「んむむむ……」
両頬を伸ばされた。
みょーん。
意外と自分のほっぺが柔らかいことを知る。やるな、俺。
まだ季節としては寒いのだけど、ばっちり暖房を利かせていたせいか（エアコンが点けっぱなしだった）、部屋の中はとても暖かい。
そのためなのか何なのかは知らないが、小町の服装はえらく薄着だった。
ぶかぶかの俺のTシャツに、下はショーツを履いているだけ。視線をカーペットに移すと、脱ぎ捨てたと思われるスカートが置いてあった。何で当然のように脱いでんのこの子？　やだ、将来は飲み会で「実は小町……家に帰るとすぐ脱いじゃうんだよね☆」とか言って男を惑わすつもりだろうか。やめろ、惑わせるのは俺だけで十分だ、他の輩などどうでも良い……！
「休みだからって、人間失格レベルでだらけてるお兄ちゃんには、小町がおしおきしちゃうのです」
「んもももも」
小町がそれはそれは楽しそうに俺のほっぺたをみょんみょん伸ばす。おかげで変な、というかだいぶ気持ち悪い声が出た。
小町の服装をよく見ると、どうやらブラは着けていないようで、小さいながらも以前より着実に成長している二つの丘の頂がうっすらと透けて見える。ショーツは布地の少ないフリルの付いた白で、恥丘の膨らみと一本のくっきりとした筋が見える。
……あ、やべ。

「……あれれ？　お兄ちゃん……？」
小町が後ろに目をやると、俺の頬から手を離した。声音に急に艶っぽさが混じり、ベッドの上の空気がしっとりと湿り気を帯びる。
濡れた瞳で俺を見つめる小町にごくりと息を呑んで、ゆっくりとした手つきで小町の尻を掴んだ。ショーツの布地が少ないため、張りのある白い臀部に直に触れる。
「はわ……あぅぅ……」
抵抗することなく、俺の腹に両手を置いて、悩まし気に身体をくねらせる。年相応でない色香を漂わせるその様子は、見ているだけで股間が痛くなる程に滾る。ぐにゅぐにゅと尻の形が変わる程に揉みしだくと、小町は唇を震わせておとがいを上げた。
「はにゃぁぁぁぁ……っ」
蕩けるような猫撫で声を漏らして、俺にしなだれかかってくる。その顔にいつもの快活さはなく、代わりに発情した牝の表情を浮かべていた。
小町は俺の身体に自分の胸をこすりつけるように身体を前後に動かして、乳頭が擦れる度に「にゃぁぁぁ……っ」と甘ったるい声を漏らす。服が捲れて直接俺の腹に触れている小町のショーツは、既ににっちりと濡れていた。
徐にズボンとパンツをずらし、肉棒を取り出す。小町の尻を掴んで淫裂に亀頭を宛がうと、小町は泣きそうな顔で笑った。
互いに何も言うことなく、小町のショーツを最低限ずらして、ずるりと挿入する。小町の熱い蜜壺は、ねっとりとした締め付けで肉茎を迎えてくれた。
「はひゃぁん……ひゃう、にゃ、にゃぁぁぁ……っ」
物欲しそうに開く小町の口の中に、唾液の柱が見えてどきりとする。抽送の速さは極めて緩慢にも関わらず、小町の表情を見ているだけで何回でも射精出来そうだった。
「小町……一回、出すぞ」
「にゃぁぁぁ……いいよ、お兄ちゃん、出して、出して……っ」
小町の尻を掴んで、ずんっと強く腰を突き入れると。

「にゃあぁぁぁぁぁぁ……っ！」
おとがいを上げてびくんとのけぞり、小町が絶頂を迎えた。限界寸前だった肉棒は、膣肉の急激な収縮に耐えることなく白濁を噴き出すと、小町の中をあっと言う間に満たしていった。

× × ×

「朝から3回って……お兄ちゃん、けだものだよ、けだもの」
「いや、2回目と3回目はお前から腰振ってきたんだろ……」
俺が腕枕した状態で、小町とだらだら語り合う。ついさっきまで、特に脱いだりする訳でもなくたっぷりと交わっていた。ちなみに小町はさっきからずっと俺の竿をにぎにぎと触っているため、ずっと勃起状態だったりする。
高校生活最後の年を迎える直前の、春休み。その初日。
特に目新しく何かをするでもなく、俺は家でごろごろしていた。
正確に言えば、小町と一緒にごろごろしていた。
小町とこういう関係になってからは、俺が元々出不精なのもあって外で何かをするということはあまりしていない。その分家でいちゃついていた。
まあ、家で健康な若い男女がいちゃつくとなると、自然とやることは限られてくる訳で……。
「お兄ちゃんの、ずっとおっきいままだよ？　ほんとに変態なんだから……」
「お、おい……っ」
並んで寝ていた小町が起き上がり、俺の足の間に身体を滑り込ませ、肉竿に手を添えてうっとり顔で俺を見つめる。朝から散々しているというのに、ものの20分程でまた小町のスイッチが入ってしまった。
俺は一人でしていた頃と比べ物にならない回数の射精を繰り返すことで、いつの間にか一日に数えきれない程の数の射精が出来るようになっていた。
小町は小町で、何度イっても涙目で更なる蹂躙を求めてくる程に淫猥になっていた。

よく、「好きな人に揉まれると女の子の胸は大きくなる」なんてことを聞くけども。それはどうやら人によるようだ。「効果には個人差があります」というやつだろうか。小町の胸は以前に比べて多少なり大きくなったが、別に俺が揉んでいるから効果があるという訳ではなく、単純に時間を経て身体の成長と共に大きくなっているという気がする。

しかし、胸が大きくならないからと言って、何も変わらないという訳ではない。

「へぁぁ……お兄ちゃんの、おっきぃよぉ……っ」

「……っ」

とろんと垂れた目で肉棒を見つめ、入念に裏筋に舌を這わせてくる。雁首に舌を絡め、陰嚢を吸い上げ、玉を口の中でころころと転がす。まるで自分の舌が舐めていない場所が全く無い状態にしようとしているかのように、丹念に丹念に舐め上げる。

もちろん、口淫によって与えられる快感も尋常ではない。ゆっくり責められていても、油断すれば果ててしまう程に気持ちが良い。それは紛れもない事実だ。

しかし俺は、

「ひゃぷっ、んちゅっ、ちゅりゅりゅ、んくっ、んぷぁぁ……れろ、れろ、れろ……お兄ちゃん、んむぅぅ……ぷはっ、お兄ちゃん、お兄ちゃん……っ」

――淫行に耽る小町の表情を見ているのが、何よりも『クる』のだ。

小町の身体つきの変化よりも、この、内面の変化が滲み出るような……これがいわゆるフェロモンというやつなのだろうか？　それがかなりの興奮をかき立てている。

『なんか小町、最近女の子たちと弁当を食べてる時に、ウインナーとか春巻きとか食べてると周りの子が顔を赤くするんだよね。小町はいつも通り食べてるだけなんだけど』

ほんの1週間ほど前。小町がこんなことを言って、頭を抱えた記憶がある。その女の子たちの反応の理由はよく分かる。俺も小町のそ

ういったシーンを何度も目撃しているからだ。
『あむ……んっく、んっく……ごくん』
小町は気付いてないのかもしれないが、行為に及ぶようになってから、ウインナーなどの少し長い食べ物を食べる時、ちろりと舌を出して迎え入れるようになっていた。そして咀嚼する時、他の食べ物を食べる時に比べて明らかにうっとりとした表情を浮かべるものだから手に負えない。試しにと、以前「今日は俺が作るから」と言って細長いものばかりを作って出して、更に恥ずかしさを拭い去って小町にあーんをしまくった時は……興奮しすぎて、皿洗いしてくれている小町の手を止めて、立ったままヤってしまった。ちなみに小町が学校での話をした際に、小町の最近のエロポイント（すごい言い方だ、けど事実だから仕方ない）と俺の悪行を正直に話した所、顔を真っ赤にして罵倒され、その後こってり搾られた。文字通り搾られた。

「うっく……うぉ……っ」
回想していたら、いつの間にか小町が肉棒を根本まで咥え込んで、口内で竿に舌を這わせてたっぷりと味わっていた。
「んふぅぅっ、んふぅぅ……んちゅる、れろ、ちゅぷ、んくく……はむっ、んくぅ……っ」
口を前後させてピストン運動をする訳でもないのに、ねっとりとした舌遣いで着実に限界が近付く。腰ががくがくと震え、下半身の決壊が見えてくる。
「小町……もう……やばい……っ」
震える声で伝えて、小町の頭を押さえて喉奥に突き立てる。
「んぶぅぅ……おごっ、んむふぅぅ……っ」
荒い鼻息を漏らしながら、俺の腰に腕を回し、亀頭を喉奥でこすり立てて射精を促す。
「うぐ……出る、出すぞ……っ！」
……ごぶっ、ぶびゅるっ、どぶどぶどぶ、びゅるるる……っ。
尿道を濃密な液体が駆け上がり、小町の喉奥に白濁を叩き付ける。命を削るような激しい射精ではないが、それでも休むことなくゼリー

のような粘度の高い液体が小町の喉を犯し続ける。
「んぶごぉ……んぐっ、ごくっ、ごくっ、んふぅぅぅ……っ」
小町は目に涙を溜めながら、漏らす鼻息で俺の恥毛をそよがせる。叩き込まれた大量の精子を一滴も漏らすことなく呑み込むと、鈴口にキスをして丹念に吸い付き、竿や玉ももう一度丁寧に舐め上げた。小町の唾液にコーティングされた肉棒は、あれだけの射精をしておきながらまるで萎えることなく天を目がけてそそり立っている。
「お兄ちゃんの、あんなに出したのに……まだおっきぃ……すごい、すごいよぉ……っ」
熱に浮かされたような表情で、小町がにへらっと笑う。あどけなさと淫猥さが入り混じった表情を見て、肉棒がびくんと跳ねた。
小町が立ち上がり、ショーツをずらして陰部を晒すと、まだまだ薄い毛並みがうっすらと見える。
「あー、小町、正気保てるか自信ないやぁ……」
ぽけーっとした表情のまま、小町がにへっと笑い、ゆっくり腰を下ろしてM字を作る。二本指で亀頭を挟んで淫裂に宛がうと、味わうようにずぶずぶと呑み込んでいく。
たまらなくなって、あと少しで肉竿が全て呑み込まれるという段階で、小町の腰を押さえて思い切り肉槍を突き入れた。
「んにゃぁぁぁぁぁ……っ！」
白い喉を晒して、小町の身体が激しく痙攣し、膣肉がぎちぎちに締め付けてくる。あっと言う間に限界が訪れて小町の最奥に白濁を注ぎ込むと、突然の絶頂に口をぱくぱくとさせて放心状態になっている小町を抱きしめ、ゆっくりと突き上げ始めた。
春休みの初日は、午前中から既に淫欲に爛れた生活を送っている。

続く。

（2）

春休み、2日目。

俺と小町はリビングにいた。俺は課題をしていて、小町は高校入学直前ということで盛大にだらけている。中学生として最後のひと時を全力で怠惰に過ごしたいらしい。この辺りは俺と兄妹だなぁと実感が湧いたりする。ちらりと見やると、カマクラをもみくちゃにするのに夢中になっていた。おうふ、カマクラが天に召されそうなくらい気持ち良さそうな顔を……。

「ほれほれ～、ええのんか～、ええのんか～」

「にゃー」

「……」

何この光景、すごくバカっぽくてすごく和むんですけど……。

小町はしばらくカマクラと戯れていたが、カマクラが勘弁してくれと言わんばかりにリビングから退散してしまうと、口を尖らせてソファに寝転がった。

「はー……お兄ちゃん」

「ん、どうした」

ソファでごろごろと自堕落の極みな体勢で小町が話しかけてくる。俺は視線をノートに向けたまま答えた。学校では抜群の人気者で、家でも良い立ち回りをしてくれるのに、俺の前ではこうやっていつもだらけている。ギャップで死にそう。

「小町さー……こんな風に今はくつろいでるけどさー……」

「ああ」

「夏に向けて、くびれボディになりたいんだよねー」

「……は？」

心の底から湧いた声だった。小町を振り向くと、クッションを抱きしめたままだらしなく表情筋を緩めている。

……こいつは、なに寝言を言ってるんだ……？

「そうかそうか、素敵な夢だな。頑張れよ。お兄ちゃん応援してるから」

「うへぇ……１ｍｍも心がこもってない……」
小町は辟易とした声で言いながらソファを降りた。そして俺と背中合わせで座り込む。小さな背中が寄りかかってきて、猫背が少しだけしゃっきりと伸びた。
「お前、同じことを去年も言ってたな。去年は夏休みに入ってから言ってたから今年はまだマシだが、そんなだらだらと過ごしてたら説得力皆無だぞ。応援する気が湧く訳が無い」
ちなみに去年は夏休みに入ってから「プールで水着になるから」と腹筋を始めていた。その行動のあまりの遅さに驚いたが、それよりも何よりも、小町が腹筋の際に掛け声で「ふんすっ、ふんすっ」と言っているのが凶悪なまでに可愛かったのを覚えている。あれ本当に可愛かった。
「むぅ……それはそうだけど……」
不満げな声で答えながら、小町が振り返って俺の肩に顎を乗せる。俺はシャーペンを走らせる手を止めずに、空いた手で小町の頭をくしゃりと撫でた。猫のように目を細めて気持ち良さそうにしているのを見て、勉強で張り詰めていた神経がいとも容易く解れる。
「まあ、あれだ。俺もずっと勉強してると疲れるからな。午後にでもジョギングしてみるか、一緒に」
試しに提案してみると、小町の目がきゅぴーんと光った。ヤマピカリャー。
「いいね！　わーい！　それじゃ小町、愛するお兄ちゃんのためにお昼ご飯を作っておくね！　ちゅっ！」
「えっ、ちょっ!?　お、おい……っ」
俺の頬にキスをすると、小町が勢いよく立ち上がってキッチンへと駆けていった。小町と行為に及ぶ時は全然羞恥心は感じないのだけど、普段小町が見せるこういった面には未だに弱い。小町は俺が恥ずかしがっているのを楽しんでいる節がある。おのれ……。
俺は熱くなった頬をさすると、あと３０分だけ頑張るという目標を設定して再び課題を解き始めた。
×　×　×

「おいっちにーさんっしー」
昼食後。
歯磨きをして、食休みがてらちょっとした（自主規制）をして、今は家の前で二人で準備体操をしている。
俺と小町は二人で震脚をしていた。間違えた、伸脚をしていた。武術の心得とかないです、ぼく。
「いっちにーさんっしー」
小町が元気よく、にっこにっこにーな笑顔で声を上げる。
うんうん、和むなぁ――
「わんっとぅっ、すりっ、ふぉー」
「何で英語になったんだ」
「いー、あー、さー、すー」
「少林寺の関係者か何かですか」
「壱、弐―、参っ、肆―」
「声に出したら違いが分かんねえだろ」
小ボケのラッシュだった。
こんなやりとりをしながら、準備体操を終える。小町は爽やかな青を基調としたジャージを着ていて、長袖長ズボンのためいつもとと雰囲気が違う。これはこれで良い、素敵だ。
ちなみにさっき、小町が俺にジャージ姿を見せた時は、くるっと一回転して見せた。
「どう？　小町はジャージ姿も？」
「超可愛い」
「よし」
屈託の無い笑顔でにぱっと笑うもんだから、思わず抱きしめた。
「ぎにゃー！」などと叫び声を上げている割に全くいやがっていないのがまた可愛いかった。
腕をぐいぐいと伸ばしていた小町が、腰に両手を当ててふんすっと胸を張る。
「お兄ちゃん、小町はなるべく爽やかなジャージを選びました」
「ああ、可愛いぞ」

「うへへ……や、そうじゃなくて。これは目的があるのです」
「可愛いぞ。目的ってなんだ？」
「うへへ……は！　しまった、お兄ちゃんに籠絡されかかっている……」
　小町が自分の頬を両手でぺちぺちと叩く。そして何故か頬をむにーっと伸ばして、もう一度叩いた。新手のゆるキャラだろうか。グッズ全部買い占めてやるぜぇ……それどころか本人を買い取って家で養ってやるぜぇ……既に家にいたわ。
　小町が俺をびしっと指差した。掴めということだろうか。
「この色にしたのは、お兄ちゃんの気持ちも爽やかにしてなるべく運動中に変な気を起こさないようにってぎにゃー!?」
　人差し指を掴んでにぎにぎしたら、変な声を上げられた。小町はしゅばっと手を引いて、猫のように「ふーっ、ふーっ」と息を荒げる。
「なんだ、どうした。俺は指を掴んだだけだぞ」
　アメリカンコメディーばりにお手上げのポーズを取る。
「や、だってお兄ちゃん……自分から仕掛ける時、こういうちょっとした動作から入るじゃん。ちょっと油断してる内に気付いたらとろとろにされる身にもなっ……こ、この話は終わり！　終わりです！」
　小町が急に頬を赤らめて両手を振った。レフェリーストップらしい。今までのことを思い出して恥ずかしくなったのか……うむうむ、愛いやつめ。
　二人で並んで、スタートの構えをとる。なんでジョギングをしようとしてるのに、マラソン大会みたいな雰囲気を醸し出してるんだろう。
「さて、行くよ！」
「おう、どこがゴールか知らんが、負けねぇぞ」
「負けないからね、ごみいちゃん@寝ている小町の身体をまさぐりがち」
「なんでＴｗｉｔｔｅｒのアカウント名みたいに!?　しかも俺の所業がバレてた！」
「隙ありっ」

「うぬあっ!?」
動揺した隙をつかれて、またしてもほっぺにキスをされた。小町は走り出してから後ろを振り返ると、固まっている俺に向けて舌をちろりと出した。可愛すぎて更に思考と動きが止まってしまった。
３０ｍくらいの差をつけられたけど、信号待ちでごく普通に追い付いた。や、まあ、街中ですしね……。
「あっさり追い付かれた……」
眉根を寄せて不満げに呟く小町に悶えながら、視線より幾分下にある頭をくしゃくしゃと撫でた。
×　×　×
３０分程走っただろうか。
「はぁっ、はぁっ、はぁっ……も、もう、小町は限界～……」
通ったことの無い公園に入った所で、小町が音を上げた。
「そうか、じゃあ休むか」
言って、近くの木陰へと移動する。歩きながら、小町が何故か俺をじっと俺を見つめてきた。
「……お兄ちゃん、なんでそんなに平気なの？」
「ふっ……小町。甘い、甘い、甘すぎるぞ」
小町に対してずびしっと指を差す。
「これが、二人乗りを妹に日々強制されたものが身に付けた体力だ！
そして俺が鍛えている間、お前はくつろいでいたことで停滞どころか後退さえしている！　その差なのだよ！」
「な、なんだってー!?」
小町がサスペンス顔で驚く。３秒程そのままで制止すると、極めて冷静にいつものテンションに戻った。
「そっかー、その差は大きいなぁ……」
二人で茶番を繰り広げた後のこの落差は、いつものことだったりする。由比ヶ浜なんかは俺たちのやりとりを見て、「なんか心臓に悪い……」などと言っていた。失礼なやつだ。事実ではあるけども。
「小町も自転車に乗ろうかなぁ……でもお兄ちゃんと二人乗りするの楽しいんだよなぁ……」

なんですと。
「来年度一年は俺が毎日送ってやろう」
「チョロすぎるよお兄ちゃん……」
小町は俺の言葉に呆れながら、「でも、そんなとこも好きだけどねー」とさらりと言う。身体が芯から熱くなった。
「……ん？」
ふと、目の前に立っている小町の首筋に目が行く。スタート前は寒さを感じていたが、昼時にしっかり走ったのが功を奏したのか、しっとりと汗をかいている。微かに香ってくる小町の甘い香りと汗の匂いが混じり合ったものが鼻腔を擽り、途端にいかがわしい気持ちが湧いてきた。
周りを見渡す。あまり通る人が居ない公園のようだ。
リラックスした様子で周囲を見回している小町のうなじに、そっと顔を近付け――ちゅっ、と口付けをした。
「ひゃぁんっ!? や、ちょ、お兄ちゃん、何すんのさ!?」
俺がキスした所を手で押さえながら、小町が顔を真っ赤にして抗議してくる。
「や、まあ、何となく……な」
言って、首を押さえている小町の手首を掴んでゆっくり引き離す。小町は戸惑ってこそいるものの、飛び退こうともしない。
もう一度口を近付け、わずかにしょっぱさを感じる肌に唇を着地させると、今度は舌を出して表面を舐め上げる。
「はっ、ひゃぁぁ……やっ、やぁん……っ」
小町の声が見る見る内に甘ったるいものに変容していく。
たまらなくなって、小町のうなじに吸い付いたまま細い二の腕を掴み、通行人から見えないであろう林の奥に移動する。
「やっ、だめっ、お兄ちゃん、こんな、とこ、ろで、あっ、あふぁぁぁ……っ」
俺の舌の動きに敏感に反応する小町の身体は、言葉とは裏腹に何の抵抗も示さずに俺のなすがままになっていた。

続く。

（3）

ひと気の無い所まで小町を連れてきた所で、小町の首筋に再び口付けをする。

「ひゃぁぁ……あっ、あんっ、お、おにい、ちゃん……っ」

小町の声の糖度が増して、俺の胸に添える手に熱が籠る。うなじから首の側面まで丹念に舐め回すと、小町の膝ががくついた。

「はっ、はひっ、だっ、だめ、これ以上は、だめぇぇ……っ」

俺の胸に顔をうずめて、すがるような視線を向けてくる。今まで小町がそういう表情を浮かべた時は、決まって俺は更に責め立てていたことを忘れているんだろうか。忘れるはずはないだろう、毎度あれだけ全身ぐしょぐしょにしているのだから。

小町の後ろに回り込み、右腕を小町の背中に蛇のように這わせて、右腕の脇を潜って乳房を掴む。

「はひゃぅぅぅ……っ」

五本の指で柔らかな肉を貪ると、小町が全身を小刻みに震わせる。もはや何をしても抵抗する素振りさえ見せない。

左手も同様に後ろから回して、両手で小ぶりな乳房を入念に揉みしだく。手の中にすっぽりと納まる柔肉が、服の上からの愛撫でくにゅくにゅと形を変える。

「はっ、はへぇぁっ、あっ、あっ、あっ……」

小町の身体がだらりと脱力して、両腕にずしりと重みがかかる。普段なら小町の身体を重いと思うことなどまずない。本当に力が抜けた人間の身体は重いのだということを実感する。俺が腕を離せば、そのまま崩れ落ちる程に脱力していた。

小町の上着のジャージのチャックに手をかけ、ゆっくりとずり下ろす。下ろし終えると、中から汗の滲んだTシャツが出てきた。うっすらと透けて見える中の布にごくりと息を呑んで、Tシャツをめくる。

「……これは、スポーツブラってやつか？」

「わ、わざわざ、言わないでよぉ……っ」

小町が恥ずかしそうに呟く。爽やかで質素な下着に新鮮な気持ち

になった。ジャージ同様、これはこれで小町に似合っている。そんな風には思いつつも、何も躊躇することなくブラの下の縁を持ち上げ、ずるりと上へずらす。
「ひゃぁっ！　……あぁ……っ」
外気に晒された乳頭は既にぴんと張り詰めている。俺の行動に小町は驚いて声を上げたが、自分の身体がどんな状態なのかに気付くと顔を赤くして大人しくなった。
小町の肩を掴み、くるりと向きを変える。
「お、お兄ちゃん……？」
俺と正面から向かい合い、小町が不安げに上目遣いを送ってくる。込み上げてくる劣情に対して心の中で「待て」と唱えながら、小町の乳頭をぱくりと口に含んだ。
「はぁぁぅぅっ！　だ、だめ、おにいちゃ、今そこやったら……ひっ、ひぅっ、あひぁぁぁぁ……っ」
しょっぱさとこりこりとした感触を楽しみながら、固めた舌先で幾度と無く乳首をつつく。もはや身体を支える力を完全に失った小町を支えるために、ぷりっと引き締まった尻を手で掴む。
「んはぁぁぁ……っ、あ、あはっ、うそでしょ、お兄ちゃん、変態だぁぁぁ……っ」
責められ過ぎてテンションがおかしくなったのか、小町が笑いながら身体を痙攣させる。語調とは裏腹に、表情を見ると口の端から涎を垂らし、目尻に涙を浮かべて焦点の定まらない目をしている。尻を無造作に揉みしだくと、よほど敏感になっているのか一度揉むごとに激しく反応する。汗を噴き出した小町の身体からは濃厚な牝の匂いが立ち込めていて、パンツの中で牡の欲望が痛い程に勃起していた。
だらりと腕を垂れ下げた小町の身体を嬲り続ける。尻を掴んだまま、胸を舐っていた口をゆっくり下に移動させる。
「やっ、くすぐった……はひぃんっ、にゃぁぁぁぁ……っ」
脇腹を舐め、へそを舐り、へその下を丹念に舐りながら真下へゆっくり下りていく。牝の匂いが益々濃くなってきて興奮が高まりきったところで、不意に頭を小町に掴まれた。

「お、お兄ちゃん、だめ、そこ今すごく汗かいてるからぁ……っ」
汗だけじゃないだろう、といやらしいことを考えながら、小町の顔を見つめる。顔を羞恥に染めながらいやいやと首を振る仕草がたまらなく愛おしい。じりじりとした視線を小町の瞳から外さぬままに、ジャージに手を掛けずるりと下げる。膝上まで下ろした所で、これもジョギング用に着替えたのであろう質素なショーツを凝視した。
一際濃厚な匂いを放つ中心部に、ずむっと顔をうずめる。
「ひゃあぁぁ!? う、うそでしょ、だめ、だめだめだめだめ、恥ずかしいよぉ、だめ、だめ、あぁっ、あぁぁ……っ！」
小町が頭を押さえ付けているのを気にせず、ショーツ越しに舌を這わせる。固めた舌先を突き入れると、一層扇情的な香りが鼻腔を擽った。小町の発情具合がよく分かる湿り気を帯びている。
「う～っ、う～っ、だめ、だめ、だめなのぉ……っ」
生地から漏れ出る甘酸っぱい牝の液が口内を満たす。小町は相変わらず口では抵抗するが、その手にはもはやほとんど力が入っていない。
ぱっと離し、自分のズボンに手をかけた。ずるりとパンツごと剥くと、凶暴なまでに勃起した肉棒が露出する。
「はっ……ひゃあっ、おっきぃ……っ」
小町は肉棒を見つめてうっとりと声を上げると、自分の羞恥心をどこへ置き去りにしたのか、細い指を肉竿に這わせる。ぞくりとした快感が身体を巡り、顔がぶるりと震えた。
「小町、お前がやりたいようにしてみてくれるか」
頬に手を添えて伝えると、小町の頬がふわりと朱に染まる。ちらりと覗きこむようにした瞳は、発情した牝の色が宿っていた。
小町がくるりと反転して、俺に尻を突き出した。身体を折り曲げて自分の膝に手を付き、内股になって不安げに俺を振り向く。
竿を掴んで小町の割れ目に宛がったところで、周りの気配に神経を張り巡らせた。鳥が木々の間を羽ばたく音が聞こえただけで、後はずっと遠くで電車の通る音が微かに聞こえるだけだ。
亀頭が肉襞にめり込んだ所で、両手を小町の腰に添える。小町がご

くりと息を呑む音が聞こえた。俺が手に力を込めると、小町の身体がぶるりと震える。
腰を力強く突き出して、小町の牝の穴を貫いた。
……ぐちゅり。
「んはぁぁぁぁぁっ！」
「っ⁉　こ、こら……っ」
何の遠慮もなく、おとがいを上げてまるで犬の遠吠えのように響かせた嬌声に驚く。焦って小町の口を塞ぐと、小町がすがるような目つきで見つめてきた。劣情を煽られ、小さな口を手で塞いだまま叩き付けるように抽送を始める。
「ふぐぅっ、んふぅっ、ふーっ、んふぅっ、んぐふぅぅぅぅ……っ」
獣のような声を漏らして小町が喘ぎ狂う。傍から見れば襲っているようにしか見えないだろう。小町の手は俺の両手首を掴んでいる。口を塞いだ手の指の隙間から、小町の乱れようを示す大量の唾液が零れ出た。
外で、真昼間から、愛しの女性をめちゃくちゃに犯している。
その事実が胸の内を焦がして、恐ろしい程の快感が湧き出てきた。
あっと言う間に射精欲が限界を迎えて、腰の動きを速める。
「いいか、このままお前の中にたっぷりと出すからな。覚悟しろよ……っ」
「んふぅぅっ！　ふぅぅっ！」
耳元で囁くと、柔らかな膣肉が牡の性器を限界に追い立てようと収縮し、ぐにゅぐにゅと締め付けてくる。打ち付ける度にびちゃびちゃと愛液が弾ける音が、俺と小町の官能をどこまでも高めていく。
「そろそ、ろ……イクぞ、出すぞ、出すぞ……っ」
「ふぅぅぅっ、ふぅぅっ、んふぅぅぅ……っ」
心地良い限界が訪れて、腰をめちゃくちゃに打ち付ける。規則性を失ったリズムで小町の牝穴を穿ち続けると、結合部がいやらしい音を立てて白く泡立った。
「イっ……うぐぅぅぅっ！」
最後にばちゅんっ！　と音を立てて力強く腰を叩き付けると、亀頭

を擦り付けた子宮の入り口に大量の白濁を注いだ。
「んふぅぅぅぅぅ……っ」
肉棒の脈動に合わせて、小町の背中がぐにゃりぐにゃりと波打つ。さざ波のような膣肉の収縮が肉茎から余す事無く精を搾り取り、天を仰いで快楽に酔いしれた。
射精を終えて小町の口から手をを離すと、がくりと下を向いて全く動かなくなってしまった。
「こ、小町……大丈夫か？」
今さらにも程があるが、心配で声をかける。すると、小町がゆらりと顔を上げた。涙目で口を尖らせている表情はとても可愛らしいが、明らかに拗ねている。
「お兄ちゃんのばか……やりすぎだよ……」
「うぐ……す、すまん……」
謝って、ゆっくりと腰を引いていく。
「んはぁ……っ」
じゅぽんという音と共に肉棒が淫裂から抜けると、牡と牝の液が混じり合っていて、表面がいやらしくぬめっていた。
「……」
自分のものをじっと見つめる。次に、まだ下を向いている小町に視線を向けると、それに気付いたのか小町が振り返った。
「……え、本気で言ってるの？」
まだ何も言ってないのだけど、何をしてほしいか見透かされていた。小町は怪訝な顔を向けたが、すぐに諦めたように目を閉じた。
小町の身体をこちらに向けて、頭に両手を添える。陰部を晒したままの小町をしゃがませて、顔の目の前に硬度を失っていない肉棒を晒す。小町は飽きれたように嘆息して、ふっと笑った。
「……はぁ、変態なお兄ちゃんを持つと苦労するなぁ……しょうがないから、綺麗にしんむふぅぅぅ……っ」
我慢が出来ずに、柔らかな唇の間に肉棒を割り入れた。呆れ顔がうっとりとした牝の顔に一瞬で変貌して、生き物のように蠢く舌が竿や雁首、亀頭を舐る。陰部を晒してしゃがんでいるから、まるで用を

足しているような恰好になっているというのに。そんな状況であることも忘れて、目を細めて夢中で肉棒をしゃぶっている。つくづく女性という生き物は不思議だと思った。
結局、その後小町の口に一度出してもまだ止められず、小町の口に入れたまま三度も出してしまった。

× × ×

「はぁ……極楽極楽……」
「俺は結構しんどいぞ……」
「あれー、小町が立てないくらいめちゃくちゃにしておきながら、お口に三回も出したおサルさんはどこの誰だったかなー？」
「ぐうの音も出ねぇ……」
「まったくもう……うへへぇ……」
怒ってるんだか機嫌が良いんだか分からないセリフだが、恐らく後者なんだろう。
俺は今、白昼堂々と小町をおんぶして帰っている。三十分丸々家から遠ざかる方向に走って行った上に、小町を戦闘不能状態にしてしまったため、当然の成り行きだった。いざだっこすると改めて軽いなと感じるものの、三十分たっぷりと走って稼いだ距離を今度は歩いて、しかも女の子一人おぶって移動するというのは正直かなりしんどい。今度は俺の膝が笑っていた。
のらりくらりとした会話がやんで黙々と歩を進めていると、首の後ろから楽しそうな鼻唄が聞こえてきた。散々あんなことをした割には機嫌が良い。
「なあ小町、なんでそんな嬉しそうなんだ」
聞くと、小町がにぱっと笑う。
「うん。なんかねー、こうしてると、小町がちっちゃい時にお兄ちゃんにおぶってもらったことを思い出すなーって。そしたら何か、心がぽかぽかしてきたんだー」
うへへ、と女の子としてはどうなのかと心配してしまうような声を漏らして、俺のうなじに顔を押し付けて「んー……」と気持ち良さそうにこすりつけてくる。本当に楽しいらしい。

小町の言葉に、二人が今まで一緒に過ごした時間の長さを実感する。
まさかこんな関係になっているとは思わなかったけれど、二人の距離がより縮まったのだから良しとしよう。
小町が優しい声で囁いた。
「すごいねお兄ちゃん……」
「どうした」
「こんなに終わりっぽい雰囲気の会話をしてるのに、この後もう一話あるんだよ」
「お前のそのメタい台詞で全てが台無しになったぞ……」
びっくりした。なんだこの妹。うん、超可愛い。
一応言っておかないと紛らわしいかなと思ってー、とこれまたメタい発言をしたかと思うと、ふぁぁとあくびをした。何も聞こえなくなってちらりと後ろを見やると、くぅくぅと寝息を立てていた。まあ、盛大に運動した後だし仕方ないだろう。
お互いの変わった部分と変わらない部分、そして二人の関係の変わった部分と変わらない部分。
それぞれに思いを馳せていると、気が付けば家に着いていた。
「……さっきの小町の言葉、確かに言っておいて良かったな……」
俺までメタい台詞を呟きながら、家のドアを開けた。

続く。

（４）

「くびれボディを作るには、腹筋をするのが良いと思う！」

小町があまり無い胸を張って、やる気に満ち満ちた顔をした。

春休み、３日目。

昨日はジョギングの後に公園で控えめな運動をした。帰った後も結局何回もしてたんだけども。最近は何かもう、日常会話のレベルでああいうことを自然に始めてしまっている。最後まで行く時も沢山あるけど、テレビを見ながら小町の下半身を弄ったり、俺が寝転がっている時に小町がすり寄ってきてパンツごとズボンをずり下ろして口でしたりする時もある。勉強で集中している時などを除くと、本当にあらゆる時にこういった事をしている。

そんな中で小町が打ち出した、夏までにくびれボディを作る宣言。時期としては十分間に合うだろうし、昨日もジョギングは実際にやった。まだ続ける気なのは良いことだ。

「そうか、じゃあ早速やってみるか」

読んでいたマンガを閉じて、カーペットに置いてあるテーブルを端に寄せる。普段の行為の方がよっぽど良い運動になってると思うけど、そんなことを言っても女の子は納得しないのだとこの１５年間で学んだ。なので小町の案に素直に乗っかることにする。

「んにゃ？　お兄ちゃん、手伝ってくれるの？」

小町が顎に人差し指を添えて、こてんと首を傾げる。おっといけない、つい押し倒してしまいそうだ。我ながらひどいなこの言動。

「ああ、体力測定の時みたいに足を押さえようと思ってな」

腹筋のやり方は数多とあるだろうが、捻ることなくオーソドックスな腹筋をやるのであれば、足を支えた方がやりやすいだろう。体力測定の上体起こしで初めて支えてもらいながらやった時は、その安定感に驚いたものだ。

極めて真面目な発言をしたつもりなんだけども、何故か小町は風で捲れるスカートを押さえるような仕草をする。頬がほんのり赤い。なんでなのん？

「お、お兄ちゃん……いやらしいこと考えてるでしょ」
……。
「今の小町の言動が無かったら、そもそもそんな発想自体無かったんだけど」
「しまったー！」
小町が両手で頭を押さえて悶える。外国の人なら「ッツマイガッ！」とか言いそうな動きだ。ちなみに今の台詞はオーマイゴッドを実際のテンションに合わせて表記してみた。超どうでもいいなこの説明。
今現在の小町は、またしても俺のTシャツを羽織って、下にホットパンツを履いている。格好的に、このまま腹筋を始めても問題無いだろう。
「うぐぐ……でも、お兄ちゃんが押さえたら……」
まだ悩んでいるようだ。往生際が悪い。
「そんなこと言ってるとどんどんお前のやる気が下がってくし、俺もムラムラしてくるぞ。やる気は水物だ、早くここに来なさい」
あぐらをかいて、ちょいちょいと手招きをする。
「う～……こ、これも、くびれボディのため……っ！」
妙に切実な決意を固めて、小町が俺の前に座った。失礼なやつだ。少なくともついさっきまでは、いやらしいことをする気などこれっぽっちも無かったというのに。今は別です。
「よし、じゃあ寝そべって膝を曲げて、腕は交差させるか」
「う、うん」
俺の言う通りに小町が寝そべり、くりっと膝を曲げて、自分を抱くように腕を交差させる。体育館で見る光景と全く同じ状態にした所で、俺は小町の踵とお尻の間に足を通して胡坐をかき、ふくらはぎをがっちりと固定した。
「んにゃっ!?　な、なんでお兄ちゃん、足を絡めてきたの!?」
「や、だってこれが普通だろ。他の体勢だと不安定だし。お前も学校でこういう感じでやってるだろ？」
「う……そ、そうだけど、いつもならクラスの女の子に押さえてもらっ

てたんだもん……」
「あんまりごねてると……」
　両手を離してこれ見よがしにわきわきと指を動かすと、小町が目を見開いてぶるりと震えた。
「や、やる、やるから！」
　よし、説き伏せたぞ。だいぶ強引だったけど。
「じゃあまずは、１５回４セットくらいか。様子を見て休憩を入れつつやるぞ」
「へ？」
「へ？」
「お兄ちゃん」
「なんだ」
「正気？」
「失礼な、俺はいつだって正気だ」
　小町の寝こみを襲ってる時だって、至って冷静だ。冷静に変態だ。
「そんなにしたら、小町お腹割れちゃうよ」
「筋トレを舐めるな。この程度で割れてたまるか。女の人は割れづらいから要らん心配はしなくていい」
　ちなみに男性の腹筋は内側の筋肉から割れるんだけど、女性の腹筋は表層しか割れないらしい。女性の方が脂肪が付きやすいのと関係がありそう。何この豆知識。
「ほれ、頑張れ頑張れ。お兄ちゃんが応援してやるから」
「うう……こうなったら、とことんやってやるわいな！」
　お前何キャラだよというツッコミは胸にしまいつつ。
　腹筋、スタート。

×　×　×

「……１３、……１４、……１５。よし、終了～」
「ぷはー！　もう無理――！」
　結構な時間をかけて、ようやく１セット目が終了する。小町は俺に足を固定されたまま、カーペットの上にばたんと寝転んだ。
「よし、しばらく休憩して次のセット行くぞー」

「うぅ、お腹がぁ……って、あれ？　なんでお兄ちゃんは小町を捕縛したままなの？」
捕縛て。
「ああ、逃げられないようにな」
「ほ、捕縛だー！」
また言われた。
まあ、言われてみれば確かに捕縛だった。だって手を離したらそのまま家の外に避難しそうなんだもんこの子。
「ちなみに小町ちゃんが次のセットを頑張ろうとしない場合、お兄ちゃんは小町にいたずらを開始します」
小町がぎょっと目を見開く。
「え……この状態で？」
「ああ、この状態で」
「……いたずらするの？」
「ああ、いたずらするぞ」
「……性的な？」
「……」
目を背けた。
「……う、うぅ……どうしよう、お兄ちゃんがマジだよぉ……でもこれ以上は無理だよぉ……」
小町が気弱になりすぎて、若干涙声になっている。どれだけ筋トレに免疫が無いんだこいつ……そんなにいやなのか。自分から提案したのに。
俺が手伝っているのにここでやめられては甲斐が無いので、がっつり煽ることにする。
「じゃあ、あと３０秒待ってやる。３０秒経ったら腹筋２セット目行くぞ」
「え!?　ちょ、ちょっと待って、そんなの無理……っ！」
小町はそんなことを言いながらも、どうにかしようとして自分のお腹をむにむにと摘まむ。マッサージのつもりだろうか。やっても無駄だと思うが、わざわざＴシャツを捲ってむにむにする様がやたらと

可愛いので放っておくことにする。
「ほれほれ、どうする、もう３０秒経つぞ。２４、２５、２６……」
適当ではあるがカウントをすると、小町が何故か両手で顔を塞いだ。
「……何してんだ？」
「小町はこんなすぐに２セット目は出来ないから、お兄ちゃんのいたずらを受ける覚悟を決めるためにこうしてるのです」
両手で顔を隠したまま、「むむむむ……」という謎の唸り声が聞こえる。
「よし、来い！」
両手を外すと、何故か開き直った表情になっていた。
「ふむ、そうかそうか……」
筋トレを手伝った甲斐はほとんどないが、折角小町が俺の悪戯を受け入れてくれたことだし、ばっちり悪戯をしようと思う。しかしいざやろうとすると何をやったら良いか悩む。うんうん唸りながら小町の身体を眺めていると、小町が若干気後れした表情を見せた。ふむ、あまり小町が不安に思う時間を長くするのも申し訳ないから、早く決めてしまわねば。
「……あ」
一つの案が頭に浮かんだ。
うわぁ、俺。
これ、実際にやったらだいぶひどいな。
まあ良いか、やってしまおう。
小町の両足首を掴み、むんずと持ち上げる。
「きゃうっ!?」
ぱっくりと足を開脚させられて、小町が股間を両手で覆う。
「手、どけてくれ」
俺の表情は、既にスイッチが入っていたかもしれない。小町は俺の顔を見るなりびくっと震えて、するすると手を下げた。
小町の足と足の間の中心部に、そろりと自分の右足を伸ばす。そのまま足の裏を宛がうと、生地越しに柔らさを感じた。微かな熱も感じ

る。
「ひやうっ!?　え、お兄ちゃん、うそでしょ……っ？」
小町の顔が引きつる。まあ、無理もないだろう。
今から俺がやろうとしているのは、所謂「電気アンマ」というやつなのだ。
「……我慢しなくて良いからな」
何に対しての我慢なのかは明言しないまま。
小町の股間に添えた足に、ぐっと力を込めた。
続く。

（5）

子供の頃なら、多くの人がやったことがあるか、やられたことがあるか、あるいはその光景を見たことがあるのではないだろうか。

電気アンマ、という代物。

今思えば何が楽しかったのだろうと思う。見ていた感じでは相手の股間を責めるとあって、しかもやっているのが男子同士ということがあって、力はそこまで入れていなかった気がする。力を入れた場合の悲惨な事態をみんな知っているからだろう。強いて言うならば抵抗出来ない体勢にして相手をいたぶると言う、征服欲を満たす行為と言えるかもしれない。

しかし。

そんな電気アンマも、行う年齢や性別によってはかなり意味合いが変わってくる。

例えば今。

俺と、小町のような関係で、俺が責めるという状況。

これは、征服欲というのも確かに大きな要素を占める。

しかしそれ以上に、何よりも大きく要素を占めるものがある。

――快感だ。

× × ×

「ひあぁぁぁぁぁぁ……っ!?」

ホットパンツの上から小町の股間に足を乗せて力を込めると、戸惑いの混じった甘い嬌声が部屋に響いた。小町は不安げにカーペットを掴んでいる。

「取り敢えず、最初は弱めにいくぞ」

言って、小町の足首を掴む手に力を込めてこちらに引っ張り、股間に押し付けた足をホットパンツの生地にめり込ませる。そこからゆっくりと前後運動を始めた。

「あっ、ひぁっ？　あっ、ふっく、んぅぅぅ……っ」

焦れったい興奮が、小町の羞恥心と理性をゆっくりと溶かしていく。小町の表情の移ろいを楽しみながら、今度は足を押し付けたまま

振動させる。
「ふぁぁぁ……っ!? あっ、あんっ、ちょっ、それっ、んはぁぁぁぁ……っ」
振動に合わせて、ほっそりとした体躯がびくびくと波打つ。扇情的な仕草にぞくぞくしながら、足の動きを更に速める。
「あふぁぁっ! やっ、やぁんっ、はぁぁぁっ!」
ぐりぐりと足を左右に揺らして、徐々に押し付ける強さも増していく。
すると。
――くちゅっ。
「……っ」
微かな水音が聞こえた途端に、小町の顔が真っ赤になる。
「そうか、小町は電気アンマをされると感じる変態なんだな」
意地悪に言うと、小町が涙目で顔をぶんぶんと振る。
「ち、ちが、ちがうのぉ……っ」
そんな表情をされては、こっちだってたまらない。益々イジメたくなる。
水音がもっと鳴るように、入念に左右に捏ねくりまわし、液体が多く溜まっていると感じる場所を踏みつける。
ずちゅっ、ぐちゅ、ぶちゅっ、じゅちゅっ……。
「やぁぁぁ……っ、音立てないでぇ……っ」
恥ずかしさの限界を迎えたのか、小町が両手で顔を覆っていやいやと首を振る。最近はかなり性に対してオープンになっていたけれど、流石にここまでされると相当恥ずかしいようだ。新たな一面を知れたようで、更に興奮してしまう。
「……お?」
足裏に感じる湿り気が急に増したので何かと思い見てみると、ホットパンツに大きな染みが出来ていた。
「すごいな小町。ぐしょぐしょだぞ」
俺の言葉に、小町が耳まで赤くする。
「うぅぅ〜……やめてよぉ……恥ずかしいからぁ……っ」

涙で目を潤ませて、俺に抗議の目を向けてくる。我慢の限界を迎えた俺は、小町の足首をがっちりと掴み、踏みつけるピッチを上げた。
「にゃぁぁぁぁぁっ⁉　やっ、お兄ちゃん、今そんなにしたら……ひゃぁんっ！　やっ、やばっ、やばいからぁ……っ」
小町が目を見開いて驚き、腹筋をしていた時と同じように自分を腕で抱く。未知の快感に不安を抱いているのが分かった。足裏に感じていた湿り気は更に増え、カーペットにも零れ出している。
自分を抱きながら、小町がいやいやと首を振る。身体が不規則に痙攣していて、限界が近いことを知らせている。
「だ、だめだめだめ、こんなのすぐ……イっ……はぁんっ！」
「うお……っ⁉」
小町の背筋が弓なりに、ブリッジをしようとしているのかと思うくらいに反り返った。その途端に小町の股間から大量の愛液が溢れ出して、カーペットを濡らすと同時にいやらしい匂いを漂わせた。
「はっ、はへっ、はひっ、ひぃっ、ひん、ひぃん……っ？」
涙を流しながら、小町が口をぱっくりと開けて息を荒げる。寒い時と同じように二の腕をさすっていて、覗いている腕には鳥肌が立っている。
流石にやりすぎただろうか……と反省すると同時に、小町への労りを越えてしまう程に、もっとやってみたいと思ってしまった。
「小町、ごめんな。お兄ちゃん我慢出来ないから、もう一回させてくれ」
言って、小町の返事を待たずに再び足を動かし始める。水たまりの下の肉丘をぐにゅぐにゅと踏みつけると、中から次々と泉の様に淫液が溢れ出してきた。
「やぁぁぁぁぁっ⁉　お、お兄ちゃん、だめ、今、ほんとにだめなのぉ……っ」
小町がこちらに手を伸ばしていやいやと首を振るが、俺はそれを意に介さずに小町を見つめながら足を動かす。このままではだめだと思ったのか、小町が必死で上体を起こして俺の顔に手を伸ばし、頬に手を添えた。

「だめだよ、お兄ちゃん、ね？　これ以上はぁぁぁ……んあぁぁっ！
だめだめだめぇ……っ！」
身体を起こしたことで、俺の足との密着度が更に増してしまっていた。俺を止めるための行動が仇となったことに気付いた小町はすぐに上体を寝かせたが、そうした所でもはや抵抗する術はない。
「もう一回だけ、な？　イってみてくれ」
息を荒げながら言うと、小町の顔がくしゃりと歪んだ。
「い、一回って……今もずっと軽くイってるんだよ……っ？」
小町が涙声で発した言葉で、火が点いた。
ほぼ全力のスピードで、足をぐりぐりと押し付ける。
「ひぎぃぃぃぃ……っ」
小町が自分を抱きながら、俺の足から逃れようと必死で身を捩る。しかし俺に両足首を固定されているために、刺激される場所を少しずらすだけに終わってしまう。
「やっ、も、もう、イってるのぉ……もっと大きいのが来るのは怖いのぉ……っ」
ひっくひっくとしゃくり上げる小町が、どうしようも無い程に愛おしく思えて。
それでも、足の動きを止めない。
「ほら、いっぱい出してみろ、な？」
「んにゃぁぁぁ……っ」
焦点の定まらなくなった目が、部屋の中を茫然と見回す。汗で貼り付いたTシャツに二つの突起がはっきりと見えて、ブラを着けていなかったことに気付く。ホットパンツは元の色を忘れてしまうくらいにぐしょぐしょになっていた。
「も、もう、はひっ、へひぁぁ……らめ、らめ、らめ……っ」
呂律が回らなくなってきた小町の股間を、踏みつけると同時に上下に滑らせて肉芽を刺激した。
「あっ」
小町が聞こえるかどうかの小さな声を上げると。
先程よりも更に大胆に背筋を反らせて、

「あおおおおお……っ」
全身を激しく痙攣させて、大量の液体を漏らした。愛液とはまた違う液がホットパンツから染み出し、じょわじょわとカーペットを濡らして行く。足裏が感じる熱さに驚いた。
「はっ、はひっ、はへっ……」
まともな言葉を発することが出来なくなった小町の身体から、手と足を離して解放すると、虚ろな視線を彷徨わせながら力無く四肢を投げ出した。足がカーペットについた時、ぴちゃっと水音がした。
「……」
女性が狂おしい程の絶頂に襲われた時の、目を瞠るような美しさに魅入られてしまった。もちろんこんなことを毎日やっていたら、小町はおかしくなってしまう。
けれど、出来ることならまた見たい。それも、何度でも。
そう思ってしまう程、可愛くて、美しくて、艶やかだった。
力無い瞳が俺を見つめている。見慣れた筈のその瞳は絶頂に次ぐ更なる絶頂で疲弊しきっていて、感情を読み取ることは出来ない。
小町の下半身に手を伸ばし、ホットパンツのチャックを下ろして、中のパンツごと脱がす。腰を上げてもらおうと思ったが無理そうなので、ぐいぐいと腰を押し上げながらなんとか脱がせた。二枚の生地を剥いだ途端、汗と愛液と小水の混じったむせ返るような匂いが立ち込め、たまらなくなってずるりと肉棒を取り出す。あぐらをかいて、小町の腰を押さえてこちらに引っ張り、俺の腰に両足を絡ませるようにして肉茎をずるりと挿入する。
「はひっ……」
小町の表情にほとんど変化が無い。気を失ってはいないが、体力の限界なのか反応出来ないようだ。表情とは対照的に膣内は貪欲に蠢き、ここまで自分を嬲った牡にお返ししようとしているかの如く、ぐにぐにと収縮して締め付けてくる。
「はっ、はっ、はっ……」
全力で走っているかのように息が荒くなる。いつもなら小町の敏感な反応を楽しんでいるのに。小町の表情がほとんど変化しないに

も関わらず、牝穴だけ反応するという今の状況もとてつもなく興奮して、恐ろしくなる程に楽しい。
ほとんどオナホ同然の扱いをしてしまっていることに罪悪感を覚えながら、後でお返しに何かしないとな……と考えつつ、抽送を続ける。
「……あっ、……あっ……」
小町が微かに声を上げ始めると、肉襞の収縮が強まった。まだ挿入して間もないが、これまでに募った興奮があまりに大きかったためか、あっと言う間に限界が訪れた。
「小町……出す、ぞ……っ！」
余裕が無くなり、宣言している途中で下半身が決壊した。
――どびゅっ、ぶびゅるっ、ごぶごぶ、どぶどぶどぶどぶ……っ。
ゆっくりと、それでいて大量の濃厚な白濁を小町の中に注ぐ。
「はひっ……あった、かいぃぃ……っ」
小町が表情を和らげ、微かな笑みを浮かべる。力無く投げ出されていた手がぴくぴくと動いたので握ってやると、嬉しそうに握り返してきた。

× × ×

それから小一時間後。
行為を終えてからは忙しかった。
カーペットを替えたり、小町の着替えを用意して汚れた服は洗濯したりと、ありとあらゆる片付けを終わらせて。
「……」
今俺は、あぐらをかいて小町を股座に座らせていた。
正座で説教でもされるつもりでいたので、思ったより怒ってないのかなと思ったんだけど。
「……あの、小町さん」
「んー？　なあに？　お兄ちゃん」
ものすごくにこやかに振り返られた。可愛いのに今は超怖い。
「なんでさっきから……『男　潮吹き』で検索してらっしゃるんでしょうか……」

そう。
小町はここ15分程、ずっとそのキーワードで出てきたページを漁っていた。具体的なプランまで練ろうとしているようで、紙にメモ書きまでしている。
俺の質問に、小町は人差し指を顎に当てながら、可愛らしく考える仕草をする。
「んー……お兄ちゃんにせっかく気持ち良くしてもらったんだから、……そのお返しをしてあげようと思って」
「……っ」
うっすらと細められた目に、ぞくっとする。
それと同時に、
「……あ、お兄ちゃんの……おっきくなった」
「……」
……反応もしてしまった。
どうやら、俺はこれからえげつない目に遭うらしい。
男の潮吹きって、動画を見た感じだと中々しんどそうなんだけど……大丈夫なんだろうか。
まあ、俺が小町にやったことがやったことなので、拒否する権利は無いのだけど。
「お兄ちゃん、さっきのやつ、またやりたかったらやってもいいよ」
「え、マジで？」
上ずった声で答えると、
「ただし、その後お兄ちゃんが潮を吹くのはセットだからね」
「ハードな応酬だな……」
当然と言えば当然の返答をされた。
しかし、魅力的な提案ではある。
体力は付くし、小町の肌艶はいくらでも良くなっていくだろうから……これはこれでありとしよう。
俺と小町の、ちょっと……と言うか、かなり変わった生活は。
これからも、ゆるゆると続いてゆく。

お終い。

1周年だからと言って調子に乗ると、色々と訳の分からないことになる。

（1）

「どぅるるるるるる……」

すぐ隣から、可愛らしいドラムロールが聞こえてくる。テレビで結果発表とかの前によく聞くあれだ。

「とぅるるすっ、とぅるっ、とぅるるぅぅりぃぃ……とぅるすっ」

やたらと長く続けているためか、ミスが目立って来た。途中でちょっとジョジョが入ったのは気のせいか？

「とぅるるるるる……って、お兄ちゃん！　ちゃんと『ジャーン！』って効果音を入れてくれないとタイトルコール出来ないでしょ！」

「え、そんな流れだったの？」

まさかの俺待ちだった。

――そうです。

小町が、口でドラムロールの音を真似していたんです。

や、何が「そうです」なんだって話なんだけども。

可愛いでしょう、この子。俺の妹なんです。知ってましたか？

「はい、じゃあ行くよお兄ちゃん。ちゃんとテンション高めで言わないと嫌いになっちゃうからね」

「じゃあ俺はそこからまたお前に好かれる努力をする」

「そんなにテンション上げるのいやなの……」

小町に引かれてしまった。

小町がこほんこほんと咳払いをする。ちなみに、小町は何故か９０年代のバラエティの司会者みたいなぴっかぴかに光ったジャケットを着て蝶ネクタイを着けている。下はホットパンツだから色々と残念なことになっていて、なんだか見ていられない。

「良いから言って！　じゃあ行くよ？　どぅるるるるるる……」

ここで、周りの視線に気付く。「早くしなさい」だったり「無茶ぶり

だけど大丈夫かな……」だったり「いつ押し倒そうかなぁ……」などといった色々な感情が篭った視線が……って、あれ？　俺襲われそうになってる？

「とうるるとうすっ、とうするるるっ、とうすっ、とうるるるる……っ」

あ、小町がまたバテて面白い音を出し始めた。俺を睨みながら口を尖らせている。ううん、もっと見ていたいけどこれ以上は本当に愛する妹の機嫌を損ねてしまいそうだ。

「……こほんこほん、おこぽーん……」

よし、行くぞ。

「ジャーンげほごほっ！」

「え、ちょ、お兄ちゃん!?　大丈夫!?」

大きめに声を出したらむせた。慣れないことをするとこうなるんだな……。

「げほっ、だ、大丈夫だ、小町。それよりもタイトルコールを……」

「お、お兄ちゃん……」

瀕死で親指を立てる俺を見て、小町が口を手で押さえて涙ぐむ。うむうむ、素敵な茶番だ。わざわざ2ページ分ものスペースを使って、俺と小町と時々ドラムロールなくだりを延々と続けているという事実に戦慄したわ、今。

「それじゃあ……」

小町が咳払いをして、すっくと立ち上がる。左手を腰に当て、右手を高々と上げると、にっこりと笑った。

「1周年記念企画！　何でもラン、キン、グ～～～～～～～！」

『イエーイ！』

「うおぉあっ!?」

小町がタイトルコールをした途端、結衣と一色がやたらと楽しそうにクラッカーを鳴らした。あ、よく見たら雪乃も鳴らしてた。俯いて顔真っ赤にしてるのは襲ってほしいからだろうか――

「獲物を狙うチャンスとして、その獲物が別の獲物を襲っている時が挙げられるんだが……」

平塚先生の言葉で、一瞬で身体中に冷や汗をかいた。この人純粋に何言ってるんだろう。
俺が戦々恐々としている中、小町が司会者のような大きなマイクを持って意気揚々と語り始める。
「さて、今回の企画なんですけども。まず初めに言っておきますが……メタいです」
「おう、のっけからすげぇこと言ったな」
「あと、行き当たりばったりです。どんな展開になるかあんまり分からないです」
「おう、のっけからすげぇこと言ったな」
「基本的に楽しくおしゃべりするだけの筈ですが、展開やテンションによってはややエロシーンも入ります。だってこの作品のタイトルがね」
「おう、のっけからすげぇこと言ったな」
「お兄ちゃん、村人Ａか何か？」
「おう、のっけからすげぇこと言ったな」
「もぐぞ？」
「お願いしますやめてください」
「よし、お兄ちゃんが村人を脱却した」
村人を脱却ってどういうことだろう。
「……」
ふと、周りを見渡す。
本日、この場に居合わせている者――。
雪ノ下雪乃。
由比ヶ浜結衣。
比企谷小町。
平塚静。
川崎沙希。
一色いろは。
城廻めぐり。
雪ノ下陽乃。

由比ヶ浜マ。
鶴見留美。
折本かおり。
そして、俺――比企谷八幡。
以上、１２名。
過疎化した小学校の卒業式とかではないです、念のため。
場所は雪ノ下の家。広いとは言え、流石に１２人も居ては狭く感じる。様々な年代の女性の甘い匂いが混じり合って、もう少し温度が上がると変な気分になってしまいそうな、そんな湿り気を帯びた空気になっている。
この、どう振る舞ったら良いか全くと言って分からない程気まずい空間に、俺は男一人でぽつんと置かれていた。
……何で、こうなったのん？
×　×　×
少し前――小町から謎の召集がかかり、俺たちは急遽集合することになった。ある人は電話で、ある人はＬＩＮＥで、またある人は直接、またある人は友人を介してなどなど……その連絡の仕方は多岐に渡ったようだ。
「ふー、暑い暑い。なんでこんなの着なきゃいけないんだっていう話だよねー」
説明の途中で、小町があっさりとジャケットを脱ぐ。そんな雑な扱いなんだ。
小町はハイテンションのまま、俺たちをぐるりと見渡す。
「小町さん……あなた、どうしてこんなに沢山の人を集めたの？」
雪乃がくりっと首を傾げる。それに対して小町は、雪乃を見つめてにへっと笑って返した。
「ふふふ……雪乃さん。このメンバーにはですね、ある共通点があるのです」
言って、小町が女性陣を順々に見つめていく。各々がまるで違う反応を示すのが可愛い……って、や、そうじゃなくて。
小町が最後に俺を見て、にやりと笑って言葉をためる。ため長い

なー……と思いながら、雪乃が淹れてくれた紅茶を口にした――その瞬間。
「ここにいる全員が、既にお兄ちゃんのものになった、もしくはなろうとしているんです！」
「ぶほぁっ!?」
ほぼ全員が小町の言葉に変な言葉を上げると同時に、俺は盛大にむせた。それはもう盛大に。
この言葉に、川崎が顔を真っ赤にして立ち上がる。
「は、はぁっ!? あ、あんた、何言って……っ！」
川崎の様子を見て、俺と小町は目を合わせて首を傾げる。
「ほーん？　沙希さんは……あ、そっか」
「そうだな、今は複雑な立場だもんな」
「そうだね、一度ばっちり本番までしておきながら、今はクラスでお兄ちゃんと席が隣同士になって指が触れただけで顔を真っ赤にしてるような状態だもんね」
「お前はっきり言い過ぎだろ」
「てへっ☆」
「可愛いなお前……」
「まああれだよお兄ちゃん、今流行りの転生ものだと思えば」
「転生ものって言うか、ただのリトライとかニューゲームだろこの場合。しかも強くなってない」
「たしかにー！」
「な」
「……あんたたち、結局何が言いたい訳？」
『あっ、はい、すみません』
川崎がまあまあマジの怒気を孕ませて呟いたので、俺と小町は急いで茶番を切り上げた。いかんいかん、ついつい楽しくなってしまう。
こんなやりとりをしていると、折本が俺たちを見て、はてと首を傾げた。
「え、なに、あたしこれから比企谷の彼女になるの？　ウケるんだけど」

「や、ウケねーけど……」
折本がけらけらと快活に笑うのを見て、どう反応したら良いか分からなくなる。
ていうか、何であなたがここにいますのん……？
「ねえねえ小町ちゃん、これはどういうこと？」
尋ねると、小町は俺と折本を順々に見て、びしっと親指を立てた。
「かおりさんはこの後参入予定だし、せっかくだから出席してもらっちゃいました☆」
「う、うぜぇ……でも可愛い……」
「まあかおりさんはクリスマス会の後の帰り道で『比企谷と付き合うのは無理かなー』と改めて言ってるからね。かなり長い道のりになると思うけど。そこはまあ、それとない偶然やハプニング、ゆったりと2人で過ごす時間、ボディータッチやエロスで何とかなるでしょう！」
さり気なく、本当にさりげなく、名前呼びしてやがる。ていうかどうやって折本を呼んだのこの子……俺聞いてないんだけど……。
「偶然とハプニングは別なのか」
「うん、何か響き的に」
一応聞いてみたら、ざっくりとした答えが返ってきた。まあ、分からんでもない。
あと、後半が生々しいからやめてほしい。ボディータッチはまだしもエロスって言っちゃった……。
俺と小町の会話を聞いて、折本が目を見開いた。
「え……なに、もしかして比企谷、ここにいる女の人全員と……？」
ドン引きというよりは興味津々という顔で折本が俺を見つめる。
や、やめろ、そんな目で俺を見るな……！
「え、えっとな、やー、その……」
「かおりさん、最後まで行ったのはまだ全員ではないんですよー」
「おいこらちょっと待て小町」
「へぇ……」
折本が妖し気に微笑んで、視線を巡らせる。きっと誰と最後まで

行っているかを推し量ってるんだろう。
　ああもう、これだけ人数がいると会話を抑えきれな――
「そうなのよねえ、わたしもまだヒッキーくんとしてないのよねえ……」
「ちょっと!?」
　不意に雪乃の部屋の隅のソファからした声に、俺は仰天する。
　ソファには、由比ヶ浜マ――彼女と、平塚先生、そして陽乃さんが座っていた。
「ふふ、何だかこの感じ、大学の宅呑みみたいで楽しいねー」
　陽乃さんが楽しそうに話す。何で日本酒の瓶を片手に持ってるんでしょうか。あ、もう片方にはコップを持ってる。完全にクロですねこれは。
「こら、陽乃。未成年が沢山いるんだからあまりみだりに飲んでは……む、すまんな。……ぷはっ、こ、これは……八海山か……!?」
「さっすが静ちゃん、分かってるね～」
「あらあら、美味しそうですね。わたしも頂いて良いですか～?」
「はーい、どうぞどうぞー」
　ソファの上でアダルトな3人が飲み会を始めてしまった。
　謎の宴をぼけっと眺めていると、肩をとんとんと叩かれた。ははぁ、これはアレだな、振り向くとほっぺを指で突かれるという古典的ないたずらだな。きっと相手は小町だろう。分かってはいるが、したり顔で笑う小町は絶対に可愛い。しょうがない、妹の可愛い顔を見る為に振り向いて――
　唇に、柔らかなものが覆いかぶさった。
　使い慣れたシャーペンのようにすっかり馴染んで、まるで重なるのが当たり前であるかのような感触。
　キスだった。
　しかもちょっと長めの。
　あと、ちょっと舌が入った。
「……ぷはっ」
　――唇を離したいろはが、にっこりと目を細める。

「先輩……そろそろ小町ちゃんに、具体的に何をしようとしてるのか聞いた方が良くないですか？」
「あ……そ、そう、だな……」
突然すぎる不意打ち（なんだか頭痛が痛いみたいな表現だ）に呆然としていると、場が俄かに殺気立った。
「ちょ、ちょっといろはちゃん!?　ヒッキーに何してんの!?」
「あ、あんた、生徒会長だろ!?　そんなことして良いのかよ！」
結衣と川崎が同時に立ち上がり、顔を真っ赤にしていろはを指差す。
「えー……こういうのは早い者勝ちじゃないですか？　……ね、せんぱい？」
「お……ぁ……っ」
耳元で蠱惑的な台詞を囁かれて、身体がぶるりと震える。
「おー、一色やるなぁ」
「やれやれー」
「結衣も負けちゃだめよ～。あ、すみません、もう1杯頂けますか？」
ソファの上のアダルト軍団が、明らかに酔った様子でこちらを眺めている。
ああ、どうしたもんだ……と思っていると、袖をくいくいと引かれた。何ぞやと振り返ると、そこには留美、めぐり先輩、雪乃の3人が……って、え、なんで？
3人がどこか拗ねた顔で眉根を寄せ、口を尖らせる。3人とも上目遣いをしていて、殺人的に可愛くて頭がくらくらしてしまう。
「八幡の……ばか」
「……比企谷くん、君って最低だね」
「……バカ、ボケナス、八幡」
「なんで!?」
なんでも何も無いんだけれど。
3人があまりにも可愛すぎて動揺して、つい立場に合っていないツッコミを口走ってしまった。
小町がこほんこほんと咳払いをして、視線を集める。

「あ、企画の詳細発表は次話に持ち込みまーす。字数が結構行っちゃったので」
「お前メタいことに対してもうちょっと躊躇しろよ」
本当に何なんだ、今日は……と思いながら。
よく分からない宴が、始まる。
いつ終わるのかは、本当に終わらない。
いかん、俺もメタくなっている……。

続く。

（2）

小町が立ち上がり、腰に手を当てた。今回の企画の詳しい説明をしてくれるようだ。ノリノリのようで何よりです。

「こほん。今回は、全エピソードの中で最も登場率の高い小町が、『何でもランキング』を作成しちゃいます！　本当に何でもやっちゃいます！」

「本当にメタいな」

式神童女もびっくりだ。

「一応、今までお兄ちゃんが開発……調教してきたヒロインの皆々様との距離感が分かるように、地の文では各ヒロインのエピソードで最終的にしていた呼び名を使ってもらいます」

「地の文とか言うんじゃねぇよ。あと言い直した意味なくないか？」

いかん、妹のメタさが止まらない。

「お兄ちゃん、いくら恥ずかしいくてもちゃんと呼ばないとだめだからね。結衣さんのことを『雌犬』と呼ぶのを躊躇っちゃだめだよ？」

「その捏造は何なんだ!?」

1回も呼んだことねぇよ！　……多分。

「え、ヒッキー、そんな風に呼んでたの……？」

いかん、結衣がドン引き……って、あれ？

結衣の違和感に気付いたのか、いろはが結衣をじろじろと見つめた。

「あれ……結衣先輩、ひょっとしてまんざらじゃないんですかね……？」

「ちょ、ちょっと、いろはちゃん!?　何言って……！」

結衣が顔を真っ赤にして、手を前に突き出してぶんぶんと振っている。

「お～、M同士が闘っているな」

「こちらはMが入っていても肉食のMって感じですものね～」

ソファで平塚先生と由比ヶ浜マ――彼女が好き放題言っている。

如何せん全く間違いじゃないから困ったものだ。あそこの3人はM

にしてもすげぇ攻撃的だもの。
「まあ、そんな冗談はさておき。それじゃあまずは無難なものから行きたいと思います。それは……ずばり、『登場話数ランキング！』」
『おお……』
　周りが意味もなく歓声を上げる。この空気は何なのん？
「これはシンプルに『メインヒロインとして』何回登場したかという話数で競います。怪談噺やメタネタハーレムなど、多数――厳密に言えば２人以上のヒロインが登場する前提のものはカウント致しません」
　みんなが真剣に頷いている。これってそんな重要なランキングなの……？
「全員の順位を付けるのは中々骨が折れるので、ベスト３を発表しますね！」
　どぅるるる……と小町がドラムロールの音を始める。結構気に入っているようだ。
　今度は俺を介入させず、セルフで「ジャン！」と言った。一人でやると空虚さが目立つな……。
「まずは第３位……雪乃さん！　全４８話でした！」
「え……？　あ、そ、そう……」
　雪乃が驚いた同時に、嬉しいような納得の行かないような、複雑な表情を浮かべている。
「雪乃さんは登場回数はとても多いです。最初期からですしね。しかし今回のカウントのやり方では結衣さんと２人で出た回や結衣さん・いろはさんと３人で出た回などを除いたので、思ったよりも順位が低くなったと思われます」
　小町の大真面目な解説で、雪乃はあごに手を当ててふむと頷く。
「そう……私単体での登場が少なかったのね……」
　負けず嫌いが前面に出ている。あと、雪乃までメタくなっている。大丈夫かこの企画？
「続いて第２位は……めぐりさん！　全５４話です！」
　おお～……という歓声が湧く。この歓声は本当に何なんだろう。
「めぐりさんはシンプルに、本編の長さが最長だったことが理由です

ね。原作では出番がそこまで多くなく、且つお兄ちゃんがどきどきする描写はあれど恋愛に絡んだ交流をしていた訳ではなかったので、ゆっくりと愛情を育むための話数が必要だったことが大きいです」
「お前遂に原作って言葉を出しちゃったな」
　これもう日常会話だろ。
「そ、そっか……えへへ、嬉しいな……」
　めぐり先輩がおさげの先をくりくりと摘まんで、嬉しそうにはにかむ。……ううむ、反則だ。
「ちなみにめぐりさんの場合、めぐりさんが大学に行ってから――お兄ちゃんが高校3年生になってからですね。その後にめぐりさんが住むマンションにお兄ちゃんが行って……といった甘々のエピソードが構想されています。そちらは糖度もエロさもは本編以上に跳ね上がりますのでお楽しみに☆」
「え、ええ!?　小町さん、それはどういう……!?」
「おいこら小町、これ以上メタ発言をして場を引っ掻き回してくれるな」
　何でもありになってるぞ、マジで。遂に予告までしちゃったよ。
「さてさて、お待ちかねの第1位は……い・ろ・は・さんです！」
　またしても湧く歓声。みんなすっかりこの場の空気に慣れたようだ。
「その話数はなんと……全７０話！　いろはさん単体のエピソードでこの作品の全話数のおよそ5分の1を占めています！」
「そ、そうなんだ……へ、へぇ……」
　いろはが平然を装おうとしながらも、頬を赤らめてどこか照れた表情で俺をちらちらと見やる。ちょっと恥ずかしいし可愛すぎるしでどうしよう。
「またいろはさんは、初めてヒロイン視点を導入した革命児でもあります。その冒頭はまさかのお兄ちゃんとのいちゃいちゃエロス生活の独白と言うもがっ!?」
「ちょ、ちょっと小町ちゃん、それは流石に……っ！」
　いろはが血相を変えて小町の口を押さえ込んだ。うんうん、今日の

小町にはそれくらいの対処が必要だ。油断すると色々と手遅れになる。
「もがもが……ふぅ、危うく意識が飛ぶ所でした。以上、登場話数ランキングでした。そして、今回1位だったいろはさんには称号をお送りしたいと思います」
「え？　小町ちゃん、それって……」
　戸惑ういろはに、小町が歯を見せた爽やかスマイルを向ける。うん、不吉な予感しかしないぞ。
「はい。自分からお兄ちゃんを煽って、更に自分を責めさせるその姿勢はとても尊敬しています。なのでいろはさんには『ドMキス魔』の称号をお送りします！」
「それ絶対尊敬してないでしょ!?」
　恐ろしい称号にいろはが全力でツッコむ。す、すげぇ……いろはがマジでツッコんだ……！
　いろはが猛烈に抗議するのを小町は「あんまり騒ぐとお兄ちゃんに縛ってもらいますよ。その後、おもちゃをいろはさんの身体に固定して1日中イジメてもらいますよ」という鬼みたいな提案をして止めていた。いろはが「……それは……抗議をやめるべきかちょっと迷っちゃうんだけど……」と称号通りの反応を示していた。うん、今度やってあげよう。
　小町が一仕事終えたような顔をして、満足げに微笑む。
「登場回数が多い程、エロくない日常シーンの描写が多いという特徴が結構見受けられました。次はそんなランキング……『初心(うぶ)度ランキング』を発表します！」
　小町がそう言うなり、ソファからため息が漏れた。まあ、うん、アダルト組はね……。何だかんだで平塚先生は初めは初心だった気がするんだけど。今？　淫獣だよ淫獣。騎乗位の時の先生は洒落にならないんだって、マジで。表情見るだけでイキそうになるくらいエロいし、腰の前後のグラインドが……いかん、これ以上思い出したらまずいことになる。
「これは特に数値に出せる訳ではありませんので、キスに至るまでの

経緯やエロシーンでのあどけなさなどが指標になります。ぶっちゃけ小町の主観です」
小町の言い方が清々しい。
「それでは……おっと、続きはまた次回ですね。どうもまだ尺の調整が難しいようです」
こいつのメタさは無尽蔵だな……と、半ば感心しながら。
まだまだまだ、この宴は――

続く。

（3）

「はい、次の初心（うぶ）度ランキングですが……こちらは今回、2名のみのランクインとさせて頂きます」

小町の言葉に、はてと首を傾げる。

「あれ、そんなに少ないのか？」

「うん。何やかんやでお兄ちゃん、大体の女の子とすぐキスしてるか、身体を触ってるか、股間をまさぐられるかしてるからね」

小町の言葉に、大体の人がすっと目を逸らした。ああ、ランクインする人が大体分かったぞ……。

それでは、と小町が言って、楽しそうに微笑む。

「第2位の発表からです！」

言って、またしてもドラムロールの音を始める……が、今度は「ジャン！」というまでの時間がやたら短い。明らかに飽きてきてるだろ、お前。

「第2位は……めぐりさん！」

周囲からほんわかとした拍手が起きる。本人は「え、ええ？　そ、そうなの……？」と両頬に手を当てて困惑している。頬がほんのり紅潮していて……あー、だめだ、今日は話題も話題だから、色々とやばい。留美や折本や川崎もいるから我慢しないと……って、3人がいなくても我慢しないといけないだろ俺。ううむ、頭の中がすっかりピンク色に……。

「めぐりさんはなんと、キスしたのが第19話だったんですね。それまでのピュアなことピュアなこと。しかしその分、その後のエッチシーンはピュアさとのギャップが相俟ってたまらなかったですね！」

「ちょ、ちょっと小町さん……っ!?」

めぐり先輩が目を見開いて慌てる。あれ、これってもしかして、ランキング発表にかこつけた、ただのイジり大会なんじゃあ……？

「ちなみにあまり発揮されるシーンはありませんでしたが、めぐりさんは髪を撫でられるととろっとろになっていましたね。次のアフターではぜひとも、お兄ちゃんに抱かれながら延々と頭を撫でられて

何時間も繋がる……といったラブラブなエッチをしてもらいたいものです」
「……」
　めぐり先輩が両手で顔を覆って、頭から湯気を出しながら俯いてしまった。こ、こいつ鬼だ……！
「それでは、そんなめぐり先輩に称号を授けたいと思います」
　あ、めぐり先輩が顔を上げた。顔面蒼白にも程がある。
「めぐりさんには……『純情おでこ』の称号を授けましょう！　きっとお兄ちゃんは目を閉じているめぐりさんの綺麗なおでこに、まあ、アレをですね、たっぷりとまぶしたいなーと思ってるはずです！」
「急におでこ……」
　めぐり先輩が儚げにツッコんで（激レア）、舞い落ちる木の葉のごとくはらりと倒れ込んだ。近くにいた雪乃、結衣、いろはが慌てて介抱する。パッと見だと貧血にしか見えない。
　いやあ楽しいなー、と小町が楽しそうに笑う。妹が楽しそうでお兄ちゃん嬉しいよ……でも加減はしてあげてね……。あと俺の性癖をさりげなく加えるのをやめてほしい。予想なのにばっちり当たってるから余計にいやだ。
「それでは第1位の発表です！」
　完全に飽きたのか、ドラムロールを一切せずにただためただけで「ん～～～～……ジャンっ！」と言った。もはやジャンの意味も分からない。
「第1位は……留美ちゃんです！」
　めぐり先輩＆介抱している3人が抜けたため、若干まばらになった拍手が湧く。みんな律儀だな……。
「留美ちゃんがキスをしたのは、なんと第２３話！　２人はＬＩＮＥでのやりとりも含めてピュアな交流をかなりしてきましたね」
　留美の解説に、留美が女の子座りをしたまま膝に手を置いて俯いている。一瞬覗いた耳が真っ赤になっていたけれど、これは言わないでおこう。
「そんな留美ちゃんに称号を授けたいと思」

「それって拒否は出来ない……ですか……？」
留美が食い気味に、しかも慣れない敬語で小町の話をカットした。うんうん、今までの流れ的にね、きついよね。
留美の必死な形相を見て、小町がうんうんと頷く。
「そうだね、いやなら言わない方が良いかなぁ。それでは、『耳プレイ』ちゃんに称号を授けるのはまた今度ということで……」
「……～～～～っ！」
「うおぅっ!?　お、おい、留美、大丈夫か!?」
小町がさり気なく（さり気なくないけど）混ぜ込んだ辱めの称号に留美は耐え切れなくなったようで、俺に駆け寄って飛び込み気味に抱き付き、胸板におでこをこすりつけた。
抱きながら、耳元で囁いたり舐めたりするのがこの子には効果覿面だと思うから是非――という信じられないくらいエロ丸出しのアドバイスを、小町が俺の耳元で囁く。留美が何かを聞く余裕が無いのを良いことに行った、大胆な行為だった。ううむ、後でおしおきしなければいけないな、うん。

×　×　×

「ねえねえ、比企谷くん」
小町が次のランキング発表をする前に、ちょっと休憩させてと言って唐突にティータイムを始めた、その矢先のこと。
ソファに座っていた陽乃さんが、日本酒（八海山とか言ったか。俺も名前くらいは知っている）を掲げて、珍しく芯から楽しそうに話しかけてきた。
「……どうしました」
頬が紅潮して何とも色っぽい陽乃さんを直視出来ずに目を背けると、くすくすと楽しそうに笑う声が聞こえた。
「ふふ、比企谷くんは今日も可愛いねぇ。どう、お姉さんたちと一緒に呑まない？」
何かと思えば、未成年飲酒の誘いだった。
「何言ってんすか、そんなのするわ……け……っ」
視線をソファに移した瞬間、言葉を失う。

陽乃さんは俺に話しかけながら、ちらりとミニスカートの裾を捲り。
平塚先生は暑そうな振る舞いを大袈裟にして、豊かな双丘の谷間をちらちらとこちらに見せ。
由比ヶ浜マ――彼女は、俺を見て蠱惑的に目を細め、ぺろりと舌なめずりをしている。
う、うおぉぉぉ……。
酒は飲まないけど、あそこに行ってみてぇぇ……！
男としての嘘偽りない欲望が迸った。
あそこに行ったら、極楽が待っている。確信出来る。
しかし、もしかしたら今日ここで、俺は赤玉を出してしまうかもしれない。打ち止めになるかもしれない。
強烈な誘惑と、それに伴う危機感。
「や、まあ、酒は絶対飲みませんけど……」
言いながら、何とはなしに立ち上がる。
そのままソファの方にふらりと歩を進めそうになったところで――自分に注がれる、痛いくらいの視線に気付いた。痛いくらいと言ったけど、本当に痛い。
「八幡……」
「ヒッキー……」
「八幡……」
「比企谷くん……」
「比企谷、あんた……」
「え、なに、比企谷ってそんなスケベだったの？」
怨嗟さえ混じった声に、身体の動きをぴたりとと止める。
ちなみに前から順に雪乃、結衣、留美、めぐり先輩、川崎、折本です。呼び名が一部かぶっちゃうね！
どうしよう、このままソファに向かったら俺は死んじゃうかもしれない。
「ほえ？お兄ちゃん、なんで立ってんの？」
紅茶を飲んで気を緩めまくっていた小町が、今頃気付いたのかこち

らを見る。
「や、その、ああ……うん。ちょっとトイレに行くわ。途中で悪いな」
「うんにゃ～、もうちょい休むつもりだったから良いよ～。行ってらっしゃ～い」
日常系４コマ漫画のキャラばりにゆるゆるした表情で、小町が俺を見送る。行動を無理やり変えるのに、何ともタイミングの良い助け船だった。感謝するぞ妹よ。視線が痛いけど、まあこの後ランキング発表が再開されればうやむやになるだろう。
リビングのドアを閉める時、視界の隅で誰かが立ち上がるのが見えた気がした。

続く。

（4）

雪乃の部屋のリビングを出て、トイレの前に来たところで一息つく。

「……想像以上にやべぇな……」

トイレのドアを見つめながら、腰に手を付いて独り言ちる。

あれだけ可愛い女の子（一部は女性）に囲まれて、小町にあんなにも堂々と猥談をされては、正直たまったものではない。

視線を下にやり、「……収まったか」と、ぽつりと呟く。正直、所々でジーンズの中が痛い程に張っていたが、何とか誤魔化していた。もしかしたらバレていたかもしれないが、それはもう過ぎたことだから考えないようにしよう。

別に用を足す必要は無かったが、トイレに行くと言った手前一応行っておくか――と思い、ドアノブに手を掛けた。

「先輩」

「え……？」

背後から声がすると同時に、ドアノブを握る手に柔らかな感触が重なる。

ドアが開くと、空いていた手を引っ張られて、中に連れ込まれた。

× × ×

がちゃり、とドアの鍵が閉められる音がする。俺はドアに背を付けた状態で、呆然としながら目の前の女の子を見つめていた。

「……いろは……？　お前、なんで……っ!?」

言葉を口付けで遮られ、首に細い腕がしゅるりと巻き付く。空いた手は俺の股間をまさぐり、俺が壁に追い詰められていることを良いことに出来る限り熱を帯びた身体を密着させていた。

「んんっ、ふぅんっ、ちゅく、ちゅりゅ、れろっ、れちゅっ、んふぁぁ……っ、んはぁうん……っ」

「んっ、んぶ……っ！　んっ、んんん……っ！」

口の中がいろはの淫猥な舌遣いに犯され、たっぷりと流し込まれる唾液は処理しきれずに2人の顎を伝う。股間をまさぐる手はチャッ

クを下ろし、躊躇なくパンツの中に手を入れ、汗と先走りでぬめった亀頭を手の平でぐりぐりと刺激してきた。
時間間隔が麻痺する程濃厚に口内を犯され、ありとあらゆる思考がごちゃ混ぜになって纏まらない。互いの唇が離れる頃には、剥き出しになった肉棒が雌穴を欲してひくついていた。
「……はぁっ、はっ、はっ……」
息を荒げながら、いろはは何も喋ろうとしない。何も言わないが――その瞳の中に宿る色は、これから何をしようとしているのかをはっきりと示していた。
俺を責める気満々の、攻撃的な色と。
淫猥な行為に及ぶこと以外考えていない、発情した牝の色。
いろはが口を開く。舌をでろりと出して、顔を近付けてきた。普段の可愛らしさからは想像もつかない卑猥な表情に、この表情は自分しか見ることは出来ないのだという喜びさえ湧く。
甘い水に吸い寄せられる蛍のように、口を近付ける。
いろはの舌を食べるようにして、２人の唇が重なる。
互いの体温が薄紅色の粘膜を境に混じり合い、溶け合い、どろどろと均一化してゆく。
２人の身体は今、１つの穴を通して確かに繋がっていた。
「んふぅぅぅ……っ」
今度はこちらから唾液を流し込むと、いろはが目を潤ませて震えた。たまらなくなり、いろはの胸に手を伸ばす。上着越しに、自分の手が柔肉に沈み込む感触に陶酔していると、いろはの両手がゆらりと肉竿に伸びた。雁首に沿って指を巻き付け、陰嚢を揉み、１０本の指が規則的にも不規則にも思える動きで波打ち、官能を昂ぶらせる。いろはの柔肉を乱暴に揉みしだきながら、柔らかな臀部へと手を伸ばした。
「んむふぅぅ……っ!?」
ミニスカート越しに触ると、いろはは驚きながらもうっとりとした声を上げた。ぐにゅぐにゅと揉みながら徐々にスカートを捲り上げ、やがて触れたショーツをずらして食い込ませ、もっちりとした牝尻に

直接触れる。
「んっ……んふぅぅ……んはぁっ！　あっ、あんっ、あふぁぁ……あぁぁ……っ」
　自分から責めていた時の勢いはどこへやら、いろはは逃げるように唇を離すと、瑞々しい唇の端から2人分の唾液を垂らしながら、とろけた目をして首を横に振った。
　顔が再び寄せられるが、今度はキスを望んでいる訳ではないというのが目で分かる。見守っていると、俺の耳元に唇を寄せた。耳朶に染み込む吐息がひどく熱い。
「だめ、先輩、やらっ、気持ち良い、先輩の、太くておっきぃ……お願い、舐めさせて、食べさせて……っ」
「……お……ぁ……っ」
　予想を超えた直球すぎるおねだりに、牡の器官が猛り震える。
　いろはは視線を落とすと、「もっと硬くなった……すごいよぉ……欲しいよぉ……っ」と、うっとり顔のままで呟き、上目遣いで俺に媚薬の如き視線を送る。俺に許しを乞うように眉根を寄せながら、足をM字にぱっくりと開いて、ゆっくりと頭の位置を下げていく。
「……っ」
　そもそも、何でいきなりこんなことをしたのかと言うことも聞けていないのだけれど。
　ここまで来て、我慢出来る筈が無かった。
「……舐めるんだ」
　いろはの頭を両手で掴んでそう言うと、エサを前に我慢させられていた犬が主人の許しをもらったかのように、嬉々として口を開いた。
×　×　×
「ふーっ、んむふぅんっ、んちゅ、れるっ、じゅぞぞぞ……じゅぶ、ぢゅぶりゅっ、じゅぐじゅぐじゅぐじゅぐ……っ」
「ぁ……あが……っ」
　肉棒の根本から先が、熱い口内に綺麗に呑まれてからは――すぐに射精してしまいそうな欲求とひたすら闘っていた。淫靡に湿った息が亀頭を包み込んで、蛇のようにうねる舌が裏筋や雁首を、丁寧を通

り越して執拗に舐り回す。両手のひらで陰嚢を包み込み、惚けた表情で俺の反応を具に探る。ただただ牡の精を搾り取ることにのみ特化したような、巧みで淫らな挙動。

いろはの舌技は確かにすごいが、それでもしゃぶられる行為自体は今まで数えきれない程経験している。にも関わらず、異常な状況で興奮していたこともあってか、咥えられた直後から我慢していた射精欲求も、ものの2〜3分で限界を迎えた。

「い、いろ、は……っ、出るっ、出すぞ……っ」

壁に背を付けたままずるずると腰の位置が下がっていき、快楽の波に呑まれた腰がかくかくと前後に揺れる。いろはの喉奥に亀頭を突き立てると、いろはは苦しそうな顔をしながらもいやらしく、それでいてどこか優し気に目を細めた。

唇をOの字にすぼめたかと思うと、

「ぢゅりゅるるるる……っ」

一滴も残すことなく搾り取ろうとするように啜られて、下半身が決壊した。

——ごぼぶっ、ぶりゅりゅっ、ぶびゅるっ、びゅぶっ、びゅるるっ、びゅぶっ、ぶびゅっ、ぶびゅぶっ……。

「んふぅぅぅ……んふぅぅぅぅぅ……っ」

いろはは俺を見つめたまま、栓が壊れた蛇口の水のように溢れ出す白濁を難なく飲み込んでいく。まるで一気飲みをするかのように細い喉がごくごくと鳴り、その後も丹念に竿を舐め取られ、淫猥すぎる唇が離れる頃には、もはや射精したことを示すものは匂いしか残っていなかった。

「……ごめんなさい、先輩が色んな女の人に目移りしてるのを見て、つい……」

しゅんとして謝りながらも、竿を握って鈴口に舌を押し当てている。えっと、言動と挙動を一致させてほしいんですけど……。

「……まあ、それ、は、良い、から……っ、そろそろ戻らない、とぉ……っ!?」

謝りながらもやはり我慢出来なくなったのか、硬度を失っていない

肉竿が再びいろはの口内に収まった。
「……あんまり、味わう余裕は無いからな、ほんとに。やるなら早め……うぐぁぁぁ……っ！」
いろはが俺の言葉を聞くなり、強烈に口を前後に動かし始めて。
俺は、1度目の射精をした直後、3分もしない内に、もう一度いろはの口内に欲望を注ぎ込んだ。
× × ×
「あ、お兄ちゃんおかえりー」
「お、おう」
いろはは友達と電話をするというウソをついてリビングを出ていたらしいので、先に俺が帰った。
しかし、俺が部屋に入るなり……部屋中の女性陣が俺にジト目を向けた。
「な……なんだよ？」
誰を見たら良いかも分からぬまま、疑問を宙空に投げかける。
「比企谷……これ、何の匂い？」
初めに口を開いたのは、折本だった。留美と川崎も同じことを思っているのか、俺を注視している。純粋に何の匂いなのか分かっていない、純粋な視線だ。
「や、えっと、その……っ」
言葉に詰まって周りを見渡すと、雪乃や結衣、めぐり先輩は頬を赤らめながらこちらを見つめていて、ソファの上の3人はそれはもうにこにこと俺を見つめている。超怖い。小町はにこにこと言うかにやにやしていた。
……絶対に、バレてる。
それはそうか、別に音を隠そうとなんてほとんど意識してないしな……なんて思っていると、リビングのドアががちゃりと開いた。
「すみませーん、やっと電話が終わりました……って、あれ？　何ですかこの空……気……っ」
いろはは入るなり敏感に空気を察知したようで、俺を見て「やっちゃった……」と舌をぺろりと出した。可愛いけど、今この状況でそ

んなことをやると寿命が縮むんだ、俺の！
「いろはさん、おかえりなさーい！　それじゃランキングの続きを発表をしますねー」
「え……？」
　何を言われるやらとどきどきしていたら、小町は何事も無かったかのように企画を続けようとした。俺の呆けた声を聞いて、小町がにやりと口角を上げた。
「もー、なに変な声出してんのお兄ちゃん！　あ、でもですね。本当はまだまだランキングをご用意していたんですが、ちょっとしたハプニングにより予定を変更しようと思います。次のランキングが終わったら、ルール変更のお知らせをしますね」
　小町の言葉に、はてと首を傾げる。
「ルールってなんだ、小町」
「ん……今日ここに皆さんが集まってから、暗黙のうちにずっと守られていた約束だよ」
　小町がにっこり微笑んで言うと、可愛らしい八重歯が覗く。しかしその瞳はどこか艶を帯びていて、下半身がずくんと疼いた。

　続く。

（5）

「ほい、それじゃあ、次のランキング発表に行きたいと思いまーす！」

小町が元気よく言ったかと思うと、俺をちらりと見て艶っぽく目を細める。あー、この後がいやな予感しかしない……。

「次は『え、この人……口でするの好きすぎじゃない？』ランキングでーす！」

複数名が顔を逸らした。ソファのアダルト組は腕を組んで真剣に自分の行いを思い出している。見てるだけで恥ずかしいからやめてくれないかなぁ。

「……ん？」

視線を巡らせると、留美が片手を口に当て、恥ずかしそうに俯いているのに気付いた。

……うわぁ、どうしよう、すんごいイジりたいんだけど。でもイジったら絶対怒られるよな「お兄ちゃん、留美ちゃんの口元見すぎだねー」「おいぃ!?」……ああ、留美が俺を睨んでしまった……。でも上目遣いだから睨んでても死ぬほど可愛い。

小町がこほんと咳払いをする。

「これは完全に小町の主観で決めます！　きちんと全話チェックしましたので☆」

誰かこいつのメタっぷりを止めてくれないだろうか。

「お兄ちゃんはねちっこいのが好きなので、皆さん全体的に積極的にお兄ちゃんとあれやこれやしてきたようですが」

川崎がごみを見る目で俺を睨んでる。視線が脇腹に鋭利に刺さる。

「そんな中でも、『この人、口でするのほんとに好きだなぁー！』と思った人を上げたいと思います！」

この時点で俺含めてほぼ全員の反応がえらいことになっている。俯いたり口をぱくぱくさせたり目が泳いでいたり。誰も叫ばないのが不思議なほどだ。無言の阿鼻叫喚、って感じ。一人一人の照れてる顔を写真に収めたいと思えるくらい、みんな可愛いんだが（地の文でしかこんな恥ずかしいことは言えない）、アダルト組の顔の赤さはア

ルコールによるものなんだよなぁ……。
「はい、それでは第3位！　ん～～～～～～～……結衣さんです！」
結衣の名前を呼ぶ前に「ぱんぱかぱーん！」と、小町が高い声で急に叫んだために、単純にびっくりして身体が跳ねてしまった。
「え、あ、あたし……？」
結衣が口に手を当てて、頬を赤らめて俺をちらちらと見る。まんざらでもない感じを出されると俺が余計に恥ずかしいんですが……。
「結衣さんは何といっても、2時間に渡ってお兄ちゃんのものを舐め続けましたからね。本当に犬としか言いようがないです」
「こ、小町ちゃん……っ!?」
結衣が固まった。無理もない。
「ちなみにお兄ちゃんはこの間、『その内、結衣の頭に犬耳を、そして尻にしっぽを入れた上で舐めさせたい』という信じられない程変態丸出しの願望を小町に漏らしてました」
「おいこら待てそんなの言った覚えがねぇぞ!?」
俺は激昂した。無理もない。
「ひ、ヒッキー……？」
「結衣、これは小町が勝手に言ったことだからな？　信じるなよ？」
「そ、そっか……」
俺の言葉に結衣は、安心したような、それでいてどこか残念なような、複雑な表情を浮かべている。
……言ってないのは本当だけど、小町の予想が完全に当たってたからすげぇ複雑な気分だ……。
「はいはい、お兄ちゃんの性的欲求は小町に筒抜けですからねー。それじゃ第2位を発表します！」
ん～～～～～～～～……と小町がやたらと長く唸る。色々考えるのも大変だね。
「第2位！　めぐりさん！」
ぱんぱかぱーん！　と小町が再び叫ぶ。さっきほどではないが、やはりみんな飛び跳ねた。
「え、あ、わ、わたし……？　どうして？　わたしそんなに……その

……？」
　めぐり先輩が頬に手を当てて俺をちらちらと見てくる。結衣もまだ俺を見ているので、照れくさい視線がダブルで俺に向けられている。死にそう。
「めぐりさんは結衣さんほど犬っぽいねちっこさは無かったんですが、初めてキスするまでが長かった反動なのか、あちこちでキスをするわ咥えるわですごいことになってましたね！　早朝のお外でするとか中々の変態さんです！」
　めぐり先輩が固まった。無理もない。
「ちなみにお兄ちゃんは『ソファに座った状態でめぐりに咥えさせて、よしよしと頭を撫でながらじっくりたっぷりと舐めさせたい。それで最後はおでこを真っ白に染め上げたい』と言っていました。変態の鑑ですね！　変態カップルやで～！」
「またおでこ……」
　俺がツッコミを入れる前に、めぐり先輩がはらりと倒れ伏した。急に病弱キャラが出来てしまった……。
　……と思ったら、顔だけ上げて俺を見つめてきた。なんぞや。
「……比企谷くん、わたしのこと呼び捨てにしてたの？」
「え……あ、や、今のは小町の勝手な想像であって、俺はそんなこと全然……」
「……そっか」
　めぐり先輩が、どこか残念そうに眉をひそめる。困ったように笑う顔は、俺に何かを求めていた。
　２人で見つめ合う。めぐり先輩は俺の行動を待って、何も言わず、潤んだ瞳で俺を見つめる。
　頭をがしがしと掻く。どうやら俺はこの場で、この人のために死ぬ程恥ずかしいことをやらなければいけないようだ。
「……あ～、そ、その……め、め……めぐ「は～いそういうのは本編でやってくださいね～」お前全然容赦ねぇな!?」
　小町の鬼カットが入った。折角勇気を出して呼び捨てにしようとしたのに。

めぐり先輩は驚きを通り越して、暗殺教室第5巻の表紙みたいな顔になっている。雑でいいなら4秒くらいで描ける顔だ。でもあれ意外と難しいらしいんだよな、色合いとか。急にどうしたんだ俺。
「そんな純白おでこさんは脇に置いておきまして」
めぐり先輩がおでこをさすりながら、小さな声で「純白……？　純情じゃなくて……？　わたしそんなに白かったっけ……」と真剣にぶつぶつと言っている。和むから放っておくことにした。小町の今の言葉は絶対下ネタの意味で言ったと思うけど触れないでおこう。
「それでは第1位の発表……の前に、今回はランク外だったものの期待できる人を紹介したいと思います」
小町の言葉に、はてと首を傾げる。
「それはどういう基準で選んだんだ？」
「え～っとね、留美ちゃんはね……あ」
「口が滑りすぎだろ……」
隠し事が生涯出来ないくらいの滑りぶりだった。
小町は俺を見て「やっちゃった～」と苦笑いを浮かべた後、留美を見てにへっと笑った。舌を出して許しを乞うのは止めてほしい。
「な、なんで私が……」
留美が正座して（年上しかいないせいか緊張しているようだ）、膝に手を置いて拳を握って俯いている。まんざらでもなさそうだが、耳まで真っ赤になっていた。
「留美ちゃんはねー、まだお兄ちゃんとキスをしたのが1回だけだけど、それまでが長かったし、友達からエッチな話も聞いちゃったから、これから一体どんな風に、その見た目から想像出来ないような淫乱なプレイをしてくれるかが楽しみでしょうがないです！」
「あ……え……あ……」
留美が絶句していると、小町が留美の下へ歩み寄り、肩に手を置いてうんうんと頷いた。
「留美ちゃん、大丈夫だよ。……今日ここで見聞きしたことは全部、本編では忘れるから」
「お前ちょっと自由すぎるだろ」

留美が「本編……？」と呟いて首を傾げている。まあ、その疑問さえも本編では忘れるから大丈夫……って、ああ、しまった、俺までメタくなっている……。
「さて、番外編の発表も終えた所で、そろそろ第1位の発表を行いたいと思います！」
と言いながら、小町は明らかにいろはを見ている。いろはは顔を真っ赤にして目を泳がせて、「え、え、え……？」と戸惑っている。ここまで露骨なフリだと却っていろはではないんじゃないかと思うんだが――
「第1位は……いろはさんです！」
フェイント無しだった。逆にびっくりだ。ミステリーの序盤で「お前が犯人だろ！」と言われた人がやっぱり犯人だったってくらいびっくりだ。
いろはは名前を呼ばれると、何故かすすすと俺の隣に寄ってきて、袖をつまんできた。鼻血出そう。「比企谷くん、もしかして鼻血出そうなの？」何故か陽乃さんにバレた。あの人俺の鼻血を見過ぎて高感度の鼻血センサーを身に付けたんじゃなかろうか。この世で最も要らない機能だなそれ。
「いろはさんは言わずと知れた口プレイの達人ですね。キスに始まりキスに終わる。上の口でお兄ちゃんの唇もあれもたっぷりと味わい尽くし、喉奥まで突っ込まれるとうっとりとした顔で更にねっとりと舐め回すんですよ。どう思います、奥さん？」
小町はしばらく床に転がしていたマイクを持って（ぞんざいな扱いだ）、何故か由比ヶ浜マ――彼女にマイクを向けた。
「あらま～……そんなにエッチなのね～。わたしも見習わなきゃ～」
彼女が感心した様子でいろはを見て、そして何故か俺を見ると、にこやかな笑顔のままでぺろりと舌なめずりをした。あ、これあかんやつや。勃った。
「おい小町、なんであの人に話を振ってんだ。エロ魔人にそういう話をするな。発情されたら俺がミイラになるんだぞ」
「そんなになんだ……」

小町が今日初めてたじろいだ。恐るべしエロ乳牛さん。
ちなみにこのやりとりをしている間、いろははずっと俺の袖をくいくい引っ張りながら「あうぅ……あうぅ……」と言ってました。ギャグパートじゃなかったらとっくに押し倒してます。
「さっきは友達と電話するとか言ってて結局何をやっていたかは分かりませんが、お兄ちゃんと最後までしてたら絶対声を我慢出来ないと思うので……大方キスやらお口でアレやらをしてたんでしょう」
小町の言葉に、他の面々の一部がうんうんと頷いた。「あうぅ……」といろはがうなりながら、俺の二の腕におでこをこすりつけてくる。頭をぽんぽんと撫でると、潤んだ瞳が俺を見上げた。おかしい、さっき2回出したはずなのに。もうやばいぞ。
さて、ランキングはここまでにして――と小町が言い、川崎・折本・留美を順番に見やった。
「ここからなんですが、ぶっちゃけますと大変なことになります。主にお兄ちゃんが」
『え』
その3人と俺の声が重なる。折本だけ好奇心いっぱいの表情を浮かべてるのは何でだろう。
「なので、お三方は雪乃さんの寝室でおくつろぎになっていた方が良いかもしれません。本当に大変なことになりますので」
小町が俺の都合をがん無視で話を進めて行く。
「そっか、じゃあ仕方ない。比企谷がどんな目に遭うのか見てみたい気もしたけど……」
折本が悪戯っぽい笑みを俺に向ける。その後、反応は違えど3人とも小町の言葉に割と素直に従い、立ち上がってリビングを出ていこうとする。
――と、ここで、留美が立ち止まって振り返り、不意に顔を寄せてきた。
おでこをこつんと当てて、目の前で澄んだ瞳が心配そうに俺を見つめる。
「八幡……無理しないでね？」

「お……おう、わりぃな……っ」
「……ん、よし」
留美が嬉しそうに目を細め、唇を近付けてきたが……途中で止めて身体をくるりと反転させると、リビングのドアに向かって歩き始めた。どうやら恥ずかしかったらしい。ああいういじらしさを見せられてはたまらない。
3人とも部屋を出たところで、小町がにやりと笑った。そして周りの皆とアイコンタクトをしたかと思うと、出て行った3人以外の全員が俺に近付いてきた。アダルト組は横着してソファから降りようとはしないが、それでも身を寄せると8人分の女性の匂いがむわっと香り、途端に頭の中が薄紫色に染まる。
「お兄ちゃんはさっき、いろはさんと何かしらしちゃったんだと思います。それが悪いとは言いません。けれど、今は状況が状況なので、いろはさんだけじゃなく小町たちも相手にしてもらいます」
「え、お、おい……？」
小町の言葉に目をむく。気付けば部屋の湿度が増し、発情した視線が粘糸となってねっとりと絡み付いていた。
「ここからも、表向きはあくまでも雑談ね。お兄ちゃんは小町たちとおしゃべりしながら、色々したりされたりするんだよ。楽しそうでしょ？」
「こ、小町……お前さっきから、本当に何言って……っ」
思わずごくりと鳴らした喉の音に、全員が反応した。
雪乃の寝室に行った3人は、今頃どうしているだろうか。川崎も留美も人見知りだから、きっと折本が上手く繋いでくれているんだろう。
――そんな想像をしていないと、まともに気が保てない程に。
俺の鼻を掠める複数の甘い吐息に、牡の部分ががちがちに勃起してしまっていた。
続く。

（6）

「お兄ちゃん、最近学校はどう？　３年生になってクラス替えもしたし、何か変わったことはある？」

留美、川崎、折本がリビングを出てから、小町が何気ない会話を始める。家でもあまりしないような他愛も無い会話に、戸惑いつつも返事を考える。

「ん……まあ、特に変わったことは無いな。新しく話をする相手が出来た訳じゃない……し……っ」

小町とやりとりをしていると、不意に――右側から雪乃、左側から結衣が寄ってきた。それもただ近付くだけではなく、明らかに俺に何かをする雰囲気を湛えている。

「まったく……お兄ちゃんは相変わらずですなぁ。まあお兄ちゃんらしいっちゃらしいんだけど」

「あはは……小町ちゃん、ヒッキーはマイペースで良いと思うよ」

結衣の手が、あぐらをかいた俺の太ももをゆっくりと這う。関節一つ一つを悩ましく曲げて、生地越しに淫靡な緊張を与えてくる。

「や、マイペースって言葉に括られるのも癪なんだけど。大体だな……っ」

喋りながら反論を考えていたら、雪乃の手も太ももを撫で始めて思考が止まる。気付けば、２人とも空いた手で俺の腕を抱きしめていた。慌てて視線を巡らせると、「何で急にこっちを見たの？」と言わんばかりの、きょとんとした顔をしてくる。まるで俺だけが間違っているかのような、違う世界線に紛れ込んでしまったような感覚に陥る。

「小町さん。比企谷くんにまともなコミュニケーション能力を求めても無駄というものよ。あなたはずっと見てきたのだから分かっていると思うけれど」

「そうなんですけどねぇ……」

何気ない会話を続けながら、雪乃と結衣が身体の密着度を高める。豊かな柔肉の感触と甘ったるい匂いが左側から、ほんのりと柔らかな双丘の感触と、涼やかでいて甘美な香りが右側から俺の感覚器官を侵

食してくる。温度の違う吐息が耳朶を犯して、あれやこれやと話しながらも焦らすように唇を近付けてくる。２人の手は、まるで１人の人が両手を使って行っているかのように息を合わせて股間に近付いていき、ズボンの上から愛おしむように肉棒をさする。

魅惑的な２人の身体の感触にたまらなくなり、俺も２人の太ももに手を乗せる。華奢な柔らかさと、沈み込む柔らかさ。

「んはぁぁ……っ」

「やぁ……っ」

「……っ」

両耳から流れ込んだ２つの艶声が、頭の中心で混ざり合って媚薬のごとく官能を高める。

「小町も総武高に入ったとは言え……（ちゅく、ちゅく）……基本的に１年生と３年（ちゅく）ってほとんど交流する機会（ちゅく）ないですもんね～。小町と（ちゅく）はもっと雪乃さんや結衣さん、あとついでにお兄ちゃんと遊びたいんですが」

小町が喋っている間、２人の舌がずっと俺の耳を舐り回している。両側の太ももに指を這わせながら、意識朦朧とした状態で耳と肉棒に注がれる快楽に身を委ねる。

ぼーっとして下を見やると、結衣の指がチャックを開け、雪乃の白魚のような指がするりとズボンの中に入り込んだ。ぎちぎちにそそり立った肉棒を掴まれると、まるで心臓を掴まれたような気がした。男にとっての肉棒は命も同然と思えば、この感覚もあながち間違いではないのかもしれない。

雪乃が喋っている間は、結衣が。

結衣が喋っている間は、雪乃が。

小町が喋っている間は、雪乃と結衣が。

俺の耳を犯し続け、尚且つ手の動きは一切止まることがない。

淫猥な行為をよそに、一切滞ることなく続く日常会話に、俺は乗るしかなかった。

２人の指がパンツの上から肉棒を撫で回す。ボクサーパンツの生地は伸びきっていて、どちらかが竿をぎゅっと掴むと、先端にじわり

と先走りの汁が滲んだ。
「そうそう、お兄ちゃん。この間お母さんがね……」
小町が急に、家に2人でいるときのような話題を出した。瞬間的に、雪乃と結衣に喋らせるのを止めたのが分かった。
ということは――と、あることに気付いた瞬間。
2人の手がパンツの縁を掴み、肉棒を外気の下へと引きずり出す。反動の付いた肉竿は、俺の腹にびたりと当たった後、尚も青筋を立てて反り返っていた。
「すごい……」
両側から、消え入るような微かで、それでいて昂揚した声が聞こえた。2人の紅潮した頬を見てごくりと喉を鳴らすと、雪乃が艶っぽい手つきで髪をかき上げ、足を横に流して顔を肉棒に近付けた。
「ね、ヒッキー。あたしの背中に、腕回して？」
亀頭に感じる雪乃の吐息に腰をひくつかせていると、耳元で結衣が囁いた。顔を見るとどこか楽しそうで、この状況を心底楽しんでいるように思える。言われた通り左腕を背中に回すと、結衣は俺の手を掴み、そのまま自分の柔肉へと導いた。服の上からでも指がむにゅりと沈み込み、それと同時に発せられる結衣の甘美な喘ぎ声がたまらない。
「ん……っ」
雪乃は肉棒の匂いを嗅いでうっとりと目を細めると、そのまま小さな口を開けて亀頭を咥え込んだ。横になって俺に密着した身体は温かく、さっき嗅いだ匂いを確認するかのように鼻を引くつかせ、雁首に舌を這わせると、甘美な悦楽が下腹部を包み込んだ。何時間でも咥えていてほしいと思う程の、緩やかな快楽の波。
「ヒッキー……ん……っ」
結衣が幸せそうに目を細め、俺と唇を重ねる。互いの舌を味わうように絡め合っていると、結衣の手が陰嚢に伸びた。亀頭を雪乃の舌が緩やかに舐り回し、口と陰嚢を結衣に愛撫される。多方向から官能の波が押し寄せて、身体の中心にどんどん欲情の念がたまっていく。
気付けば会話はやんでいた。

会話はやんだけれど、ずっと視線は感じている。
ずっと会話をしていた小町はもちろん、俺の身体に触れている2人以外からも、熱のこもった視線が送られ続けている。何も声を発しないのは、自分たちがする時に他の人に邪魔をさせないためだろうか。
「んふぅ……っ、れろ、くちゅ、じゅるっ……じゅぷぷぷ……っ」
雪乃が一気に顔を沈め込んで、淫靡な熱と湿り気を帯びた空間に肉棒が丸呑みにされる。
「お……おぉぉ……っ」
快楽に圧倒される俺の声は結衣の口内で反響し、消化され、口内粘膜に溶けていく。俺が声を上げれば上げるほど、結衣は嬉しそうに目を細め、陰嚢をまさぐる手つきをより一層いやらしいものにした。
ふと、雪乃の顔が上がって、亀頭だけ咥えた状態に戻る。そして結衣が陰嚢を撫でていた手を竿に添えたかと思うと、強烈にしごき始めた。
「んぶぅぅぅ……っ!?」
人差し指と親指で輪を作り、力強くしごき上げてくる。くぐもった声を漏らしてしまう。雪乃は髪をかき上げて、「じゅろろろ……じゅぷ、じゅぷりゅ、ぢゅるるる……」と卑猥な音を立てながら亀頭を吸い上げている。
ついさっきまでの静かな責めであっても、もう間もなく絶頂に達していたのに。
ここに来てこれほどまでの強烈な責めを受けては……もはや1分とて耐えられるものではなかった。
死なばもろとも――と思い、結衣の開いた胸元から手を滑り込ませ、柔肉を直接手で包み込み、乳頭を強めに摘まむ。そして雪乃のロングスカートを捲り上げ、後ろ側からショーツに手を侵入させ、既にぐっしょりと濡れた淫裂に中指と薬指を躊躇なく挿入して抽送を始めた。
『んふぅぅんっ!?』
2人がくぐもった喘ぎ声を上げて、手と口それぞれの動きを加速させる。負けじと牝肉を手で貪ると――間も無く下半身に限界が訪れ

た。２人の身体を強く抱き寄せて、下腹部から湧き上がる絶頂の奔流に身を委ねる。
――どくんっ、びくっ、びゅくるるっ、びゅるっ、びゅくびゅく……っ。
幾度と無く肉棒が脈打ち、粘度の高い精の飛沫が雪乃の喉奥に叩き付けられる。
「んふぅぅぅ……っ、んっ、ごくっ、んっく、んぅぅぅ……っ」
自身も絶頂に達したのか、身体全体をびくつかせながら、雪乃が俺の白濁を呑み込んで行く。
「んふぅぅ……ふぁっ、んはぁっ、んふぅぅぅ……っ」
結衣も限界を迎えたようで、唇を啄むような優しいキスを繰り返しながら竿をしごき上げ、余す事無く精液を雪乃の口内へと送り込む。がっしり掴んだ乳房はじっとりと汗ばんでいて、しっとりと指に貼り付く。２人の汗と淫液の匂いで、部屋の空気はがらりと変わっていた。
ようやく絡み合った粘膜を離すと、それぞれの結合部からは糸が垂れ下がっていた。
息を荒げて、周りを見やる。
皆の視線は、先程よりも熱を帯びている。ひりつくような緊張感に、肉棒は硬度を失うことなく天を仰いだままだった。
続く。

（7）

周りに視線を巡らせると、ぱちりと目が合ったのは小町だった。

「お兄ちゃん、ちょっと立ってみて」

人差し指を上に向け、どこか楽し気な様子でそんなことを言う。たっぷりと射精した直後に立つっていうのは中々しんどいのだけど、この表情を曇らせるのは少し勿体ない。

言われた通り素直に立つと、小町も立ち上がり、いろはの肩をとんとんと叩いた。いろはが少し驚いた顔で小町を見上げると、小町は俺をちらりと見やって楽しそうに笑う。いろははこくりと頷くと立ち上がり、年下2人の女の子が俺の下へ近付いてくる。気が付くと、雪乃と結衣は俺から離れていた。どうやら彼女たちの番は終わったということらしい。

小町といろはが俺の目の前に立ち、アイコンタクトを交わす。すると2人は何も言葉を交わさずともきっちりと意思が通い合ったのか、同時に腰を下ろして膝立ちになった。上目遣いを送る2人の表情は艶っぽくもどこかあどけなく、大人と子供の境にいるようだ。強烈な可愛さに、頭がくらくらした。

開いたチャックからは、半勃ちになった肉棒が重力に逆らおうと必死でその切っ先の角度を保っていた。

いろはがそろりと手を伸ばす。どこか機嫌を窺うようなその表情は、一人だけ抜け駆けしたことによる負い目からだろうか。

少女の指がベルトにかけられ、かちゃかちゃと音を立てる。自分が脱ぐときは何の感情も無く一瞬で終える作業なのに、どうして人にやってもらうとこんなにわくわくするのか。いろはの微かな息遣いが恥毛をそよがせると、肉棒はあっと言う間に硬度を取り戻した。

いろはがベルトを外すと、小町も手を伸ばしてきた。2人でズボンを支えて、ずるりと下ろしてしまう。

「先輩、足上げてください」

一連の行動の中でちょっとずついつもの調子を取り戻してきたいろはが、小町同様どこか楽しそうに言う。言われた通りにすると、2

人は俺をじっと見つめながらズボンを脱がせた。
緊張と興奮でぴんと張り詰めた肉棒を、２つの可憐な顔が挟む形になる。２人は腰を下ろすと、左右対称になるように足を横に流した。２人の中心にある肉棒に顔を寄せるようにして、うっとりとした表情を浮かべている。
２人の頭をくしゃりと撫でると、種類の違う甘い匂いがふわりと香った。俺の行動に、初めは２人揃ってきょとんとした表情を浮かべたが、すぐににっこりと目を細めた。俺が置いた手に２人が手を重ねてぽんぽんと撫でる。どうやら、このままで良いらしい。
左側にいるいろはが右手を、右側にいる小町が左手を俺の腰に添え、ゆっくりと肉棒に唇を近付ける。竿に当たる２つの吐息が、得も言われぬ期待感を醸し出す。
『……んんっ』
２人が悩ましい声を漏らして、亀頭を咥えたのは同時だった。亀頭を挟んでキスしているようにも見える。互い違いに首を傾けて、２人の唇と舌が柔らかく押し付けられた。
「くぁ……っ」
官能的な熱と湿り気が亀頭を襲い、２人が僅かに舌を動かすだけで腰がびくりと跳ねる。１人でもたまらない愉悦が、今は倍の勢いで襲ってくるのだ。もしかしたら俺は、踏み入れてはならない領域に足を踏み入れたのかもしれない。一度足を浸せば二度と戻れないような、快楽の沼に。
『れろ……っ、くちゅ、ちゅぴ、ちゅるちゅる、ちゅくく……っ』
牡の象徴を、自分が好いている２人の女の子がうっとりとした表情で舐めている。その事実だけでもたまらないのに、２人の息の揃い方は尋常ではなかった。見つめ合いながら亀頭の雁首を丹念に舐め上げ、竿の横筋をなぞって根本へと向かい、空いていた手は陰嚢に添えて、１つの玉につき１人が嬲っている。
「お……あぁ……っ」
絶えず送り込まれる２つの悦楽の波は、時に緩やかで時に激しい。徐々に２人の動きは多彩さを増して行き、小町が鈴口を啜ればいろは

が裏筋をれろれろと舐め上げ、２人が陰嚢をぱくりと咥え込むと、小町は竿を手でしごいていろはは亀頭を手のひらで撫でる。先走りの汁と２人の唾液とで、気付けばいやらしい水音が部屋に反響していた。
「んちゅっ、ちゅく、れろ……っ、んはぁっ、お兄ちゃん、お兄ちゃん……っ」
「はむっ、んふぅっ、れろ、れるれる……んぷぁっ、せんぱい、せんぱい……っ」
ぼうっとした表情で、熱に浮かされたように俺を呼びつつける小町といろは。一心不乱に雄の象徴をしゃぶる姿は、この上なくいやらしくて、この上なく美しい。
「う……っ、くぁっ、やっ、やばい、これ、立ってるの、無理だ……っ」
２人に見惚れていると、自分の足腰の限界に気付くのが遅れた。２人が腰に手を添えているとは言え、もはや腰ががくがくと震えて今にも崩れ落ちそうになっていた。
２人は俺の言葉を聞くと、目をぱちくりとした。口を離して俺を見つめ、その後少女同士でぱちりと視線を交わす。２人が口の端をにやりと吊り上げると、いやな予感が脳裏を過ぎった。
「え～……どうしよっかなぁ、お兄ちゃんがびくついてるの、滑稽だけど結構可愛いんだよなぁ……」
「や、お前何言って……ちょ、こら、待て待て待て……っ！」
小町がにやにや笑いながら竿を扱き上げると、込み上げる悦楽に耐えられず腰ががくがくと前後する。
「せんぱい……そんなに気持ち良いんですか……？」
「や、１人でも十分すぎるくらいに気持ち良いのに、それが息ぴったりの２人にやられたら……って、こら、いろは。お前……っ！」
いろはが嬉しそうに微笑みながら、手のひらでぐりぐりと亀頭を撫でる。腰の前後動が激しくなるが、２人の手の動きは一向に緩まない。
「こ、こら、小町、いろは。いい加減に……っ」
俺がいくら言っても、２人は楽しそうに微笑みながら手を動かし続

ける。
先程の雪乃と結衣の行為に続き、あまりにも女の子たちに優位な状態が続いたことで――ふと、俺の中で何かの糸がぷつんと切れた。
「小町」
「ふぇ……っ？」
一段低い声で小町を呼び、両手で頭を掴む。掴まれた小町も、手を離されたいろはも、驚きで目を見開いている。
「お前たちは俺で遊び過ぎたな。……おしおきだ」
俺の言葉に、小町が引き攣った笑みを浮かべる。
「お、お兄ちゃん……？　それって……がぼっ!?」
小町の言葉の終わりを待たず、一気に喉奥まで肉槍を咥え込ませる。小町の口内は、肉槍の侵入に対して反射的に大量の唾液を発生させた。熱いぬめりに包み込まれ、肉楔の硬度が更に増す。
「ぐぼっ……がぼっ!?　んぐぅ……えぐっ！　ふぐぅっ！　うぶぅぅぅ……っ」
無理矢理口内を乱暴に犯し、内頬に亀頭を擦り付ける。小町は鼻呼吸で必死に酸素を確保しようとするが、俺はそれさえまともにさせないようにひたすら腰を打ち付ける。
「おぐぉぉ……えぅっ、ぐぶっ、あぐっ、うぅっ、うぅぅ……っ」
小町が涙を流し、顎には大量の涎が伝う。俺の腰に添えられた両手はぶるぶると震えていた。
これだけ急に責められて、実際涙まで流しているというのに……小町は目を細めて、うっすらと笑みさえ浮かべていた。その事実にごくりと息を呑み、益々強烈に腰を打ち付ける。
「ほら、ほら、ほら……っ、出すぞ？　お前の喉の奥の奥に出してやるからな？」
「おごっ、ぐぶっ、うぶぅぅぅ……っ」
小町は全身を戦慄かせながら、微かに頷く。
間もなく限界が訪れて、小町の口内に一際深く突き入れた。
「ほら、飲め。一滴残らず飲み干すんだぞ……っ」
快感の濁流を余す事無く小町の喉奥に流し込む。

「あぐぅぅ……っ」
欲望を吐き出す解放感に包まれる中、貪るように小町の瞳を見つめる。すると、小町も虚ろな瞳ながらしっかりと俺を見つめ返した。２人の視線が濃密に絡み合ったまま、下半身の脈動と小町の嚥下が続く。
やがて脈動が収まり、小町の口内からずるりと肉槍を引き抜いた。
「えぅぅ……っ」
小町の口と肉棒の間に複数本の糸がでろりと伸び、濃さと色合いの違うそれぞれの糸が重力に負けて垂れ下がっていく。小町の口からは、牡の欲望の残滓が混じった熱い息が吐き出された。
小町が力無く仰向けに倒れ込む。開いた足を見やると、ショートパンツ越しでもはっきりと分かる程淫部が濡れていた。
――ぞくり。
何を考えているんだと、自分を律する。
けれど、だめだ、これは……止められそうにない。
息を荒げて横たわる淫猥な姿を眺めて、俺は小町に再び手を伸ばした。
続く。

（8）

口を半開きにして天を仰いでいる小町の両足を掴むと、小町がびくりと顔を上げた。
「お、お兄ちゃん、まさか……ウソでしょ？　流石に……ね？　ね？」
小町の口元が引き攣る。
「まああれだ、ノリだよノリ。気にすんな」
「や、お兄ちゃん、気にすんなって言ったって……」
我ながらよく分からないことを言って――小町の股の間に右足をねじ込み、足の裏でショートパンツ越しに圧を加える。
「や……っ」
小町が儚い声を上げた瞬間、腕と足を総動員して、小町の股間をぐりぐりといじめ始めた。以前もやったことがあった、電気アンマというやつだ。
「ひぐ……っ、あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
小町が両手で顔を覆い、背筋を弓なりに反り返らせて快感に喘ぐ。遠吠えのような嬌声には、周りの女性たちもごくりと息を呑むのが聞こえた。
「ほら、小町はこれが好きだもんな？　いつも俺におねだりするけど、毎回下がびしゃびしゃになるから大変なんだぞ？」
「んにぃぃぃ……ち、ちがうよぉ……小町、そんなことお兄ちゃんに言ってないよぉぉ……前だってお兄ちゃんが無理やり……んにゃあぁぁぁ……っ」
小町が手で顔を覆ったまま、びくんと大きく跳ねる。ブリッジのごとく反り返った体勢で激しく痙攣すると、足の裏にたっぷりとした湿り気が伝わってきた。
「うわ……っ、小町ちゃん、すご……っ」
結衣の惚けた声が聞こえて、その言葉に反応した小町がびくりと震える。
「あ、や、結衣さん、それに……他の方も……み、見ないでください……っ」

急に、自分たち以外の人たちの存在を意識し始めたのだろう。小町は手で顔を覆ったまま、身体をよじって俺の足から逃れようとする。しかし俺が解放する訳もなく、小町の意思とは関係無しに股から大量の淫液が漏れ出てくる。明らかに、感度が増していた。
「たくさんおもらししたな。なんだ、みんなに見られてると思って余計に感じてるのか？　お前はいやらしいな、小町」
「やぁぁぁ……っ、やぁぁぁ……っ」
小町が涙声で首を振る。嗜虐心がぞくぞくと煽られてたまらない。
「俺としては、お前の可愛い顔が見られるまで足の動きを止めたくないんだけど……」
言いながら、足をぐりぐりとねじる。
「ひぐぅぅ……お兄ちゃんのばかぁっ、きちくぅぅ……っ」
小町がひっくひっくとしゃくりあげながら、ゆっくりと手を顔から離す。涙でぐしょぐしょになった顔は、想像以上に可愛くて……いやらしかった。
「……あー、わりぃ、小町。お前のその顔を見たら、もっといじめたくなった」
「っ!?　う、うそ、そんなのもう……ひぐぅぅぅぅっ!?」
小町が両手でカーペットにしがみついて泣きじゃくる姿に欲情して、陰部を嬲る足の動きをより一層激しくする。
「だめだめだめだめ、小町今イってる。イって……んにぃぃぃっ！やめてやめてやめてやめてもうおかひくなるから、らめ、らめらからぁ……っ！」
小町が泣きわめきながらいやいやと首を振るが、俺は動きを一切止めない。小町が壊れた機械のように激しく不規則に背筋を反り返らせる。
「へひっ、ひぐっ、息れきない……ひぎっ、んにゃぁっ、いっ、いひぁぁっ、はひっ、ひっ、ひっ、ひぐぅぅ……っ」
痙攣が徐々に歪で小刻みになってきたところで、足を濡らす小町の2つの淫液が大変なことになっていることに気付いた。
ようやく足を離すと、

「あっ、あぁっ、あっ、あっ……」
虚ろな表情で俺を見上げながら、小刻みに震えている。ショートパンツは元の色が思い出せないくらいぐしょぐしょに濡れそぼって、小町の口からはだらしなく唾液が垂れ落ちている。何よりも背筋に震えが走ったのは、これだけめちゃくちゃに責められた後も、小町の口の端が僅かに吊り上がっていることだった。かすかに、ほんのかすかに、笑っている。
俺は俺で、小町を言葉で責めながらひたすら足腰を小刻みに震わせていたのでかなり疲れていた。息を何とか整えていると、俺の肉棒に不意に手が添えられた。
見慣れた綺麗な手から、その身体へと視線を滑らせる。
いろはが小町の凄絶な姿を見ながら、俺にちらちらと視線を向けていた。
「……どうした」
「せんぱい……わたしも、小町ちゃんみたいに、おしおきされちゃうんですか？　あんな風にお口の中かき回されて、お股もめちゃくちゃにされちゃうんですか？」
「……っ」
いろはが期待を滲ませた表情で聞いてくる。ぞわぞわと身体を這い上ってくる嗜虐の誘惑に心が打ち震える。俺の頭の中では今、目の前にいる女の子をどうめちゃくちゃにしようかという思考が物凄い速度で駆け巡っていた。
何かこの場で出来ないかと視線を巡らせていると。
「……ん？　……ふむ、私の出番か」
ふと、平塚先生と目が合った。先生は俺と目が合うなり立ち上がり、先生のバッグが置いてある所へと俺を手招きする。
「比企谷。これを使うといい」
先生が取り出したものに、顔が引き攣る。
「あんた、何やってんですか……」
呆れたように言うと、先生が妖しく目を細めた。先生は俺の肉棒（そういえば出したままだ）に手を添えると、愛おしそうになでさす

る。
「私が無理やりこれで蹂躙されるのも良いし、君に使っても楽しそうだと思っていた。……それに、これだけの人数が揃うんだ。他の子にも使う機会はあると思って……な」
先生が舌なめずりをすると、思わずごくりと喉を鳴らした。ああ、この人とこの後するのが、楽しみでしょうがない。
皆に背を向けて先生と会話をしていると、俺と先生の肩がとんとんと指で叩かれた。何ぞやと思って振り返ると、由比ヶ浜マ――彼女がにこやかに笑っている。
「平塚先生、奇遇ですね。わたしも……はい、こんなに」
言って、彼女がバッグの中を俺たちに見せる。
「……お見それしました」
平塚先生が尊敬の念を込めた声を上げる。
俺はというと、
「……もうやだ、この大人たち……」
と、諦念に満ちた声を上げていた。
「あの、先輩……？」
背後から、いろはが不安げに呼びかけてくる。俺と一対一でなら、いろはは今まで数えきれない程おしおきを受けてきた。しかし今回は、先生や彼女が介入するとあって流石に不安になったんだろう。
俺は振り返ると、にこやかな笑顔をいろはに向けた。
「大丈夫、心配するな。たっぷりおしおきしてやるからな」
にかっと笑って歯を見せて親指を立てると、いろはが自分を抱いて後ずさった。物凄いしかめ面だ。
「先輩、今のは流石にキモいです……」
「……。
……。
俺の視線の温度が下がると、いろはが「ひゃうっ!? あ、やば……」と可愛い声を上げた。俺の逆鱗に触れたと思ったようだ。実際、今のいろはの罵りにより、おしおきのモチベーションは凄まじく上がっていた。ドン引きに傷付いて腹が立った訳ではないよ、ほんとだよ。

「……えーっと、じゃあ先生のこれを借りて、あとはこれも……あ、こんなのもあるんですね。よし、この辺をお借りします」
俺がてきぱきと準備を整えているのを見て、いろはが益々不安げな声を上げる。
「あうぅ……やばいよぉ……」
……その通りだと思う。
この後、不安に呻いているこの少女が一体どれだけ乱れるのかと思うと……期待で、身体が震えた。

続く。

（9）

「いろは。ソファに座ってくれ。そんで、目を閉じてくれるか」

「……？　は、はい……」

先輩の言葉に、わたしは尋常じゃない程の不安を覚えながらも従う。周りから感じていた視線は、目を閉じるとより一層強く感じた。視覚が封じられて、他の感覚が鋭敏になったんだと思う。

「じゃあ、まずは……」

先輩の声が近くで聞こえて、ほっと安心する。右手が持ち上げられると、それは先輩の手だとすぐに分かった。

不意に、右手の甲に柔らかい感触がした。先輩がキスしたんだと分かるまでには、数秒もかからなかった。

「はぅ……っ」

目を閉じたまま、思わず頬を緩めてしまう。目を閉じて先輩に触れられると、まるで今この場所にわたしたちしかいないように思えた。……まあ、実際は他に7人ほどいるんだけど。冷静になったら負けだぞ、わたし。

「こら、比企谷。見せつけるんじゃない。吸うぞ」

「何を!?」

平塚先生の脅し文句に、先輩が激しくツッコんだ。やだ、吸うんだ……。

「では、今度こそ……」

先輩の声で、今のキスは寄り道だったのだと知る。何だか嬉しくなった。

「んふぅぅ……っ？」

両胸を大きな手で包み込まれて、甘い声が漏れてしまった。わたしの身体は、結衣先輩と雪乃先輩のご奉仕を見て、そして自分でもたっぷりと先輩のものを舐めたことですっかり過敏になっていた。その上で、小町ちゃんがめちゃくちゃにされるのを目の前で見ていたから……もう、先輩にめちゃくちゃにされる以外の選択肢なんて残されていない。

「ふぁ……っ？」
服をたくし上げられ、下着もずらされる。完全に脱がせる訳でも無い、不思議な感じ。
スカートにも手が伸びて、こっちはショーツを完全に脱がされた。うう……恥ずかしいよぉ……っ。下半身がすーすーしてもぞもぞと足をすり合わせていると――
「……ひゃっ!?」
――突然、胸の先端に何かが取り付けられた。そしてすぐさまもう片方にも何かが取り付けられる。感触的に、恐らく同じもの。
なに？　なに？　なんなの？
混乱していると、先輩がわたしの唇を奪った。優しく舌を絡めながら、わたしの胸を下から掬い上げるようにして揉んでくれる。
「んふぅん……っ」
柔らかな快感が身体の中を巡って、幸せのため息が漏れ出た。
「あら～……ヒッキーくんったら、あれだけ激しく責めることも出来るのに、こんなに優しくも出来るのね～……これはみんな、とろとろに蕩けちゃうわね～」
結衣先輩のお母さんの言葉で、一気に顔が熱くなった。部屋の温度が上がった気がしたから、多分顔を真っ赤にした人は沢山いるんだろうな。うん、すごく恥ずかしい。
唇を離すと、先輩はわたしの両腕を持ち上げて、頭のすぐ後ろで重ねさせた。いやな予感がした直後、重なった手首がロープのようなもので縛られる。
続けざまに、今度は足を開かれた。恥ずかしいところが丸見えになって声が出そうになったら、先輩に口を塞がれた。先輩の竿があそこをぐりぐりとこすって、それだけで軽くイキそうになる。口付けを終えると、今度は足を曲げた状態で膝の部分を縛られた。足はしっかりとソファの上に上がっていて――今のわたしは、脇を見せるようにして腕を縛られ、M字に足を開いた状態で足を縛られているということに気付く。火が出る程の羞恥を覚えた。
「せ、せんぱい、まだ……目、開けちゃだめですか……っ？」

目を開けるのは恐いけど、何も見えない状態でおしおきされるよりはまだ安心出来る気がした。
わたしの問いかけに対して先輩は、
「ちょっと待っててくれるか。えーっと……」
何かをごそごそと持ち出して、わたしにかぶせてくる。
「もう開けて大丈夫だぞ」
なんかさっきよりも暗くなったな、と思いながらも、
「あ……はい」
許可を貰えたからと、やっとのことで目を開けると――
「……へ？」
真っ暗のままだった。
× × ×
「……せ、せんぱい……？　これは……」
目の前で、身体を縛られあられもない格好をしたいろはが不安げな声を漏らす。上半身も下半身も恥ずかしい所を綺麗に晒して、目にはアイマスクが着けられている。
由比ヶ浜マ――彼女に目配せをして、手元の桃色の小さなリモコンのスイッチを入れる。
「ひぃんっ!?　やぁっ、これ、なんなのぉ……っ」
いろはの乳頭に固定されたローターがぶぶぶぶと小刻みに振動し、それに合わせていろはの身体ががくがくと震える。ローターの強弱をゆっくり弱め、かと思えば急に強める
。
「ひぃんっ!?　やっ、せんぱい、これっ、何なんですかぁっ!?　ひぁぁんっ！」
慣れない快感に身悶えしながら、細身ながらも女らしい肉付きになりつつある身体を悩ましく捩らせる。ソファには既に、淫裂から零れ落ちた愛液が水溜りを作っていた。
さて、ここからが本番だ。
「先生。これ、ありがたく使わせてもらいます」
「ああ。……あまり、やりすぎるなよ」

先生が若干心配したトーンで話す。
彼女には拘束用のバンドとアイマスク、そしてローターを。
そして平塚先生には――電マを借りていた。
いろはの耳元に電マを寄せて、手始めに「弱」のスイッチを入れる。ローターよりも凶悪な振動音に、いろはは「ひ……っ!?」と怯えた声を出した。
「せんぱい、それ、何ですか？　何なんですか？　絶対やばいやつじゃないですかぁ……っ」
いろはが涙声を漏らして、口元を不安で歪める。
「そうだな、たしかにやばいだろうな……ほら」
手始めに、振動させたままでいろはの柔肉に着地させた。振動が下乳から全体に伝わり、乳房全体がぶるぶると卑猥に波打つ。
「ひぃぃんっ!?　やっ、何これ……んはぁぁっ！」
乳頭を刺激している訳では無いが、それでもいろははびくびくと震え続ける。空いた手でいろはの腰を抱いて後ろにずらし、ソファの背もたれに身体を密着させた。もちろん、快楽の波から逃げられないようにするためだ。
電マをずらして、乳房と乳房の間に置く。快感が和らいでほっとした様子を見せたいろはだったが、ゆっくりと下半身に向けて滑らせていくと、途端に全身が強張った。
「や、うそ、うそ、うそ……っ！」
「なあ、いろは。何でお前を縛ったか、分かるか？　……これの快感から、逃げられないようにするためだよ」
「……っ」
いろはの口元が緊張で固く引き結ばれて――やがて、ほんの微かに、口の端が吊り上がった。歪で、心底被虐的な笑みに心が震える。
電マを滑らせる途中で「中」にして、続けざまにローターの振動を最大にした。
「ひ……っ」
電マが局部に触れる直前、いろはがひゅっと息を吸い込んだ。
――ぐじゅっ。

「んはぁぁあぁぁぁぁあぁぁぁぁぁっ！」
一瞬で絶頂に達したいろはが、全身を狂ったように痙攣させて身体が跳ねる。全身から生々しい汗が噴き出すと、扇情的な牝の匂いが立ち込めた。
「あが……いっ……んぎ……っ」
いろはが歯をかちかちと鳴らしている。大量に噴き出した液体はソファから零れ落ちて、小さな川を作っていた。
「ほら、どうだいろは。これはおしおきだぞ。ちゃんと反省してるんだろうな？」
時折「強」に切り替えながら、柔らかな淫肉に灰色の球体をぐりぐりと押し付ける。
「ひっ、ひぎっ、……おひお、き……あっ、うぁっ、ひぃん、はい、反省、ひてます……っ」
歯をしきりに鳴らしながら、ひどく卑猥な笑みを浮かべる。嗜虐心を煽られて、身体の位置を変えていろはの顔に肉棒を近付けた。いろはは匂いに気付き、顔を横に向けて肉棒と正面から向かい合う。
「反省してるんなら、その証に俺のを……っ!?」
俺が言葉を言い終えるより先に、亀頭がいろはの口の中に呑み込まれた。淡い薄紅色の唇が卑猥に歪み、美味しそうに肉竿を咥え込む。
「おぶっ、ごぶっ、おごぉぉ……っ」
まだ何も言っていないのに、自分から喉奥まで咥え込んで苦しそうに喘ぐ。あまりの淫猥さに、本当にこの子は俺の知っているいろはなのだろうかと疑ってしまう。
「こら、俺が指示を出す前に咥えるんじゃない……っ！」
電マを「強」に固定して、いろはの肉芽に押し付ける。まるでお湯をためた洗面器に突っ込んでいるかのような、ぶじゅぶじゅという卑猥な水音。いろはの身体が痙攣を重ねてがちがちに強張るのを見ながら、空いた手でいろはの頭を押さえ込んだ。
「俺をイカせるまで、これは離してやらないからな。ほれ、頑張れ」
言いながら、いろはのアイマスクを外す。
虚ろな瞳からは、幾筋もの涙が流れていた。

「おご……おぶぅっ、んちゅっ、れろっ、れるれる……んむちゅぅぅ……っ」
焦点の定まらない目で俺を見つめながら、喉奥まで咥え込み、内頬で歯磨きのようにこすり、意思を持った生き物のようにうねる舌が雁首と裏筋を淫靡に舐り回す。
異常な程に昂ぶっていた下半身に、間もなくして限界が訪れる。
「いろは、出る、出るぞ……っ」
「んむぅぅぅ……っ」
射精の瞬間、力いっぱいいろはの喉奥に突き入れる。
いろはの身体に大量の白濁を流し込むと、脱力感が一気に込み上げる。それと同時に、理性がどうにかなってしまいそうな程の征服感に満たされた。
「……んっ……んっ、んっ……」
いろははほとんど表情を動かさぬまま、丹念に白濁を呑み込む。汗と愛液を噴き出し続けて不足した水分を補っているかのようだった。
電マを離し、ローターも外す。
縛られたままのいろはを見て、まだ肉欲が治まらない。
ソファにもたれかかったいろはの正面に立ち、いろはの頭を掴んで肉棒を口内に挿入した。
「……っ」
いろはは何も言わず、ただ目を細めた。喜んでいるようにしか見えないその表情は、どこまでも淫猥で、どこまでも美しい。
夢中で腰を打ち付けて、何度目か分からない射精をした。
「……はっ、はぁっ、はっ……」
拘束用のバンドを外すと、いろはがうっとりとした目で俺を見つめているのに気付いた。髪の毛をくしゃりと撫でる。髪の毛先から汗が滴る程、いろはは汗だくになっていた。女の人の汗は何故こうも甘い匂いが立ち込めるのか。タオルで身体を拭くと、くすぐったそうに身を捩る。おでこにキスすると、いろはは口元を緩めてあどけなく笑った。
――あと、４人。

続く。

（１０）

小町といろはを散々責めた所で、ふっと息を吐く。２人はそれぞれ雪乃と結衣が介抱してくれていた。俺よりも遥かに疲れ果てて、ぽけっとしている２人の頭をくしゃりと撫でて、ソファに浅く腰掛けた――その瞬間。

「……ふーーっ」

「うひゃういぇおっ!?」

首筋に吐息をかけられ、上げたことの無い奇声を上げてしまった。

「今のは奇声どころか規制ものだよお兄ちゃん……」

仰向けに寝転がった小町が、地の文を平気で読んできた。何でそんな状態で言葉遊びが出来るんだろう。

「……気持ち悪い……」

雪乃が低い声で俺をなじる。ちょっとシンプルすぎやしませんかね。シンプルが故にダメージが大きい。

……なんて思ったが、雪乃の視線をきちんと辿ると俺を見ていないことに気付く。

「ひーきがーやくんっ」

子どものような調子で俺を呼びかける声がした途端、背中が柔らかな感触に包み込まれた。身体の前面に絡められた腕が、俺の顎をそっと撫でる。

「……陽乃さん、何やってんですか」

鼻腔を擽る甘い香りの正体は、陽乃さんの匂いだった。雪乃、自分のお姉さんに気持ち悪いだなんて言わないで……。

陽乃さんは俺の身体に絡み付いたまま、ゆらゆらと揺れた。

「んふふふー……」

「……」

あ、この雰囲気はやばい。

機嫌が良い。

機嫌が良いのにやばいと俺が思う辺りが、この人のやばいたる所以だと思っている。やばいを連呼すると抜群に頭が悪い感じがするな。

俺やばい。
この人、機嫌が良いと俺へのいたずらがそれはもうひどくなるんだよなぁ……。一緒にご飯を食べに行った時なんて、公然猥褻未遂及びぶっちぎりの公然猥褻を平然と仕掛けてくるし。
あー……どうしよう。
「……はぁ」
「……比企谷くん。君はなんで、綺麗なお姉さんに抱きしめられてるのにそんな中年サラリーマンみたいなため息を吐いてるのかな？」
悪戯っぽい口調に、ほんのわずかだけ……希釈された怒気が混じる。あ、これは本当にやばい。この人を怒らせると後の生活に支障が出る（物理的・精神的・経済的・勉学的その他諸々の意味で）。
「や、陽乃さんが綺麗なお姉さんってのは何の文句も無いんですけどね」
「……」
「いたいいたいいたいいたい、頬をぐりぐりしないでくむむむ」
さりげなく褒め言葉――という名の、ただの事実報告――を告げると、陽乃さんは数秒の間を置いて、俺の頬に指をぐりぐり押し付けてきた。どうやら照れているようだ。顔を見なくても、こういうあまり痛くない攻めをしてくる時は、照れ隠ししようとしているのだと経験で知っている。
――なんていう風に、内心調子に乗っているのが顔に出てしまったからだろうか。
「……君のような勘のいい子は嫌いだよ」
「いだだだ!?　ちょっと陽乃さん、爪が！　爪が食い込んで……っ！」
なんでそんな懐かしい台詞（若干変えてるけど）と共に攻めを強めてんのこの人!?　実写化されるから!?　関係無いな、うん。
俺の頬をしばらくごりごりと抉った後（穴を開けるつもりなんじゃなかろうかと、途中本気で思った。本当に痛かった）、陽乃さんは俺の頬――もはや患部と呼んで良いのではと思う程ひりひりする――を優しく撫でた。
「比企谷くん。そろそろ服、脱いで良いんじゃない？」

「え？　……あ」
ふと、自分の服を見やる。
俺は相変わらず肉棒だけ晒した状態だが、服はこの家に来た時のままだった。汗をじっとりとかいていて、冷静になるとべたべたしていてちょっと気持ち悪い。
「それじゃあ……」
脱ぎます――と言いかけて、女性の集団の前で堂々と服を脱ぐことに抵抗を覚える。
「この場の全員とやることやっておいて何を躊躇している。早く脱ぎたまえ、比企谷」
「は、はい……っ」
平塚先生の凛とした声に背筋が伸び、いそいそと服を脱ぐ。くそぉ……この人が先生モードになるとつい言うことを聞いてしまう……！
服を最低限折り畳み、くるりと振り返る。
「陽乃さん、脱ぎましたよぉ……っ!?」
驚きで声が裏返った。
「よしよし、良い子だね」
陽乃さんは、俺の姿を見て満足気に頷いていた。
――上下ばっちり、下着姿になった状態で。
……や、この人、何やってんの？
そんなツッコミが頭に浮かぶが、目の前の美しい肢体に見惚れて、その言葉も喉の中でかき消えてしまう。
赤と黒のランジェリー姿。黒の布は透けていて、肉感たっぷりの乳房の先端がうっすらと見えるのが悩ましい。下のTバックも同じく透けていて、陰部を覆う赤い布地の下に生えた恥毛が微かに見える。見えているのにもどかしい、絶妙な見え具合。
本当に俺は、この人を数え切れない程抱いているのか――？
自分の記憶は捏造されたものなのではないかと疑う程、目の前の女性は信じがたい美貌を放っていた。本当の美しさというものは、飽きというものとは無縁なのかもしれない。

「……ん、良い具合に反応してくれてるね。お姉さんは嬉しいぞ」
陽乃さんが得意気に笑って、視線を下に移す。
「……あ……っ」
陽乃さんを見ているだけで、気付けば肉棒がぎちぎちに反り立ち、その切っ先を陽乃さんに向けていた。
さて、それじゃあ――と陽乃さんが言って、ソファにもたれかかって俺に手招きする。
「ほれほれ、ここに座って」
「え、あ、はい……」
無邪気に笑う顔と蠱惑的な肉体のギャップに撃ち抜かれながら、言う通りにする。
素肌が陽乃さんの薄い下着に触れ、洒落にならない程の緊張が走る。薄布一枚の下の突起が、背中にこりこりと擦れていた。
「よし。それじゃあ、めぐりー」
「え……」
陽乃さんの言葉に驚くと、めぐり先輩が徐に俺の正面に立った。
「……こ、こんにちは……」
「……あ、ど、どうも……」
あれ、今日初めて会話を交わすんだっけ？　ていうかこれもはや初対面の挨拶だろ。何この空気……めぐり先輩は何でこんなに照れてるんだ？
「いけ～……お兄ちゃん、めぐりさんのおでこを真っ白に染め上げてしまえ～……」
「お前のせいか！」
雪乃の膝枕でうたた寝しながら、小町が爆弾を放り込んできた。くそ、そこ気持ち良さそうだな……。
「ひ、比企谷くん……っ」
めぐり先輩の声に顔を上げると、両頬に手を当てて耳まで真っ赤にしてもじもじしていた。これ以上無い程保護欲を誘う仕草に、思わず見惚れる。
「そ、その……もし、もしね？　本当にそういうことをしたいんだった

ら……わたしは、その、いいよ？　でも、ちょっとここだと恥ずかしいから……今度、２人で、ね？」
「しましょうしましょうぜひしましょう後で予定を組みましょう」
「そんなに!?」
思わず食い気味で言ったら、めぐり先輩が驚きながらもツッコミを入れてくれた。俺の性癖をずばり言い当てた妹が恐ろしい。
「うぅ……っ!?」
和やかな会話をしていると、不意に背中を指でなぞられた。振り向くと陽乃さんが蠱惑的に笑っている。
「ほら、めぐり。そろそろでしょ」
陽乃さんの言葉に、はてと首を傾げる。
そろそろって……何が？
その疑問も、めぐり先輩の行動によりすぐに答えが明らかになった。
「う、うん……」
陽乃さんの言葉に頷いて、めぐり先輩が服のボタンに手をかけ、１つ１つ外し始める。
「え、ちょ、ええ……っ!?」
陽乃さんは俺に脱ぐ姿を見せなかったが、めぐり先輩は今こうして、俺に一部始終を見せるようにして脱ぎ始めている。ボタンを１つ外すごとに足をもじもじとくねらせ、恥ずかしそうに俺をちらちら見やるのが却ってこちらの官能をかき立てる。
「比企谷くん……わたし、ね？　おでこにかけるのは２人きりの時にしてほしいけど……他のことは、その、今やってみたいなって思ったんだ。……みんなのを見てて、あんまり我慢出来そうにないから……」
「……っ」
めぐり先輩の言葉に、ごくりと息を呑む。
めぐり先輩の着替えに見惚れながら、陽乃さんの手を握り返すと、
「あん……っ」
耳元に、悩ましい喘ぎ声が淡く滲んだ。

続く。

（１１）

めぐり先輩が白のブラウスをゆっくりと脱ぎ、カーペットの上にふわりと落とす。視界の隅にその光景を捉えながらも、

「うわ……っ」

俺の視線は、めぐり先輩の肢体に釘付けになっていた。

淡いピンク色の、フリルを纏った上下の下着。

陽乃さんの下着のような扇情的なものではないにしても、めぐり先輩の普段の振る舞いや服装から考えればその姿はとても大胆に思える。陽乃さんにも負けず劣らずの魅力を放つその姿に、思わず見惚れた。

「あ、あんまり見ないで……っ」

下着を腕で隠して、めぐり先輩がもじもじと身を捩る。まるで初めて下着姿を見せているかのような初心な反応だ。そんな可愛らしい仕草に心臓を高鳴らせていると、めぐり先輩が小さな声で「……よしっ」と呟いた。

俺の目の前まで歩み寄ると、ソファに膝を乗せる。めぐり先輩の温度をほんのり感じる距離まで近付いた。

自身を隠していた手をほどいて、俺の頬にそろりと両手を伸ばしてくる。触れた手はしっとりとしていて、肌によく馴染んだ。

「比企谷くん……」

うっとりとした声と共に、めぐり先輩は目を細めて身体を近付けてくる。

むにゅり、と柔らかな感触が胸に押し当てられる。それと同時に、背中に当たっていた陽乃さんの豊乳がひしゃげて、まるでウォーターベッドのように沈み込んだ。

ふっと視界が暗くなったかと思うと、めぐり先輩の唇が俺の口を塞いだ。それとほぼ同時に、陽乃さんの唇が首筋に添えられ、ちゅうぅと吸い立てる音がする。

「んっ……んふぅっ、んんん……っ」

徐に舌を絡めると、徐々にめぐり先輩のスイッチが入り始める。ほ

んのついさっきまでは周りの視線をしきりに気にしていたのに、今は俺のことしか見ていない。前後から甘い香りと柔らかな感触に挟まれ、呼吸が疎かになり意識が朦朧とする。

「んむ……っ!?」

めぐり先輩の手が自身の乳房を持ち上げ、己の乳頭とこちらの乳頭をこすり合わせた。

めぐり先輩は俺の口内を舐り回しながら、熱に浮かされたような表情で己の敏感な部分をこすり付けてくる。慎ましい胸が悩ましく形を変え、どこまでもいやらしいものに変貌していく。

上半身を襲う快感に恍惚としていると、下腹部にぞわぞわとした快感の波が訪れた。

視線だけ下に向けると、陽乃さんの手が俺とめぐり先輩の身体の間に伸びて、肉竿を器用にまさぐっていた。左手を陰嚢に、右手を雁首に巻き付けて、5本指でウェーブを起こすように愛撫してくる。

「お……ごっ……んむ……っ!」

予想もしていなかった責めに、ちょっと待ってくれ……という哀願の視線をめぐり先輩に送る。しかし、めぐり先輩は俺と身体を重ねるのに夢中になっていて、まるで気付かない。このままでは、あまりの快感ですぐに暴発してしまう。

……仕方ない、ちょっとやりづらくはあるけど――と、ある決断をした。

鼻で何とか落ち着く程度の呼吸をすると。

左手をめぐり先輩、右手を陽乃さんの身体に伸ばし、

『んふぅぅんっ!?』

――それぞれの淫裂に、躊躇なく指を沈み込ませた。めぐり先輩は目の前で堂々と足を開いているし、陽乃さんも俺の後ろにいるが足は開いている。僅かに手を伸ばせば、こちらからも責めることが出来る状況だった。

めぐり先輩の下着を僅かにどかすと既にとろとろにぬめっていた。一方陽乃さんの下着は、驚いたことに指先を付けたらそのままぬぷぬぷと侵入していった。どうやら履いたままそういった行為が出来る

ようになっていたようで、まるでこの状況を想定していたかのように思えた。
身体が超の付く敏感体質の陽乃さんにとって、この責めは強烈すぎる効果を発揮したようで。
「んふぅぅぅ……っ」
俺が中指で膣肉をぐりぐりといじくると、蛇口を緩く捻ったかのごとく次々と愛液が溢れ出す。手首まで愛液に浸されたところで薬指もねじ込むと、俺の首筋に吸い付いたままぶるぶると身体を戦慄かせた。
「んふぅぅ……はぁんっ！　あっ、あっ、あぁ……っ」
めぐり先輩は快感に耐え兼ねて、唇を離して虚ろな目で俺を見つめた。身体は離れたが今度はその指の腹でこちらの乳首をこねくりまわしてくる。陽乃さんも俺の背後で艶っぽく喘ぎながらも肉竿をいじくる手の動きを止めないため、妨害しようとした効果が全く出なかったことになる。
まずい、このままではカーペットに撒き散らしてしまう……と思っていると。
めぐり先輩が身体を離し、俺の目の前にちょこんと正座をした。陽乃さんと泥仕合のような愛撫をしあいながらも、何か猛烈な危機感を覚える。
めぐり先輩の口がくぱっと開いた。口の中の鮮烈な赤さにごくりと息を呑むと、俺の肉棒をまさぐっていた両手が離れて、代わりにめぐり先輩の頭を掴んだ。まるで自分の腕の数が倍になったかのような錯覚を覚える。
「え、は、はるさん……っ？」
流石にめぐり先輩も戸惑っているが、陽乃さんは俺の肩に顎を乗せてにっこり微笑んだ。
「めぐり、……比企谷くんのこと、沢山味わってね」
笑顔のまま、そんな恐ろしいことを呟いたかと思うと。
「……おぶぅっ!?」
めぐり先輩の頭を掴んで、俺の肉棒を一気に奥まで咥えさせた。

「んぶぅぅぅ……っ」
まるで膣に挿入した時のように、めぐり先輩が焦点の定まらない目でがくがくと身体を震わせる。亀頭の先に感じるざりざりとした感触で、めぐり先輩の喉の奥をこすっているのだと気付く。
「うわぁ……傍から見るとすごいね、これって」
陽乃さんが呑気な調子で言うと、めぐり先輩の顔が途端に真っ赤になった。しかし陽乃さんはそんなめぐり先輩の様子を気にすることもなく――正確に言えば、敢えて気にしていないんだろうが――掴んだ顔をリズムよく前後に動かし始めた。
「おごっ……んぶぅっ、んぶっ、ぇうぅ……っ」
がっちゅがっちゅと乱暴なくらいに顔を前後させられて、めぐり先輩の口からは大量の唾液が溢れ出て、恥毛が彼女の唾液でひたひたに貼り付く。
「陽乃さん、これはいくらなんでも……っ！」
たまらず陽乃さんの手首を掴んで制止すると、誰もが振り向く美貌を持つ彼女が蠱惑的に笑った。己のわがままをその美貌と知性で押し通そうとするような、強烈な力に溢れた笑み。
「流石にわたしも、大事な後輩のめぐりがいやがることはしないよ。……あくまで、『いやがることは』……ね？」
「え……っ」
陽乃さんの言葉に驚いて、視線をめぐり先輩に向ける。すると、めぐり先輩は上目遣いで俺を見つめた。そして、俺と陽乃さんの手が止まっているにも関わらず、わざわざ自分でゆっくりと顔を前後に動かし始めた。口の中が規則的に熱いぬめりに包まれて、柔らかな快感に腰がひくつく。
「んふぅぅ……んふぅぅ……っ」
……どう、気持ち良い？　気持ち良い？
そう尋ねるかのような表情に、凄まじい程の多幸感と征服欲が湧き上がる。
「ほら……ね？　比企谷くん」
心を操る魅惑的な声と、肉棒を懸命に咥える健気な表情に、何かの

糸がぷつりと切れた。
陽乃さんの手に、自分の手を重ねた。手に力を込めて、めぐり先輩の顔を前後に激しく動かし始める。
「うごっ……んぶっ、んぶぐっ、うんぅぅ……っ、んぶっ、じゅぶっ、じゅる、ぢゅるるる……っ」
俺と陽乃さんのなすがままに顔を動かされながらも、めぐり先輩は懸命に口内で亀頭や竿を丁寧に舐めしゃぶる。ただでさえ限界間近だった下半身は、あっと言う間に射精寸前に追い込まれた。
「は、陽乃さん、俺もう出そうです。だからもう動きは止めて……っ!?」
ください、と言おうとしたら、陽乃さんの手の動きが益々速くなった。鳥肌が立ちそうな程の快感に心身が粟立つ。
「ま、待って、本当にこれはやばいですから」
慌てて言うと、陽乃さんの手が止まる。
「……今のめぐりのお口はね、比企谷くんにとってのオナホールと同じなの。比企谷くんとめぐりだけでやったら、射精が始まったら絶対動きが止まるでしょ？　だから、わたしがその続きを見せてあげる」
ぞっとすることを囁いて、再び陽乃さんが手を動かす。陽乃さんが言うように、めぐり先輩は虚ろな表情でなすがままになっている。それでもその瞳は変わらず俺を捉え続けていて、汗で前髪が額に貼り付いた扇情的な様は快感をかき立てた。
頬を窄ませて内頬で竿を撫でる感触に陶酔しながら。
「あがっ……イっ、イクっ、イクっ、イク……っ！」
腰を突き出し、意識ごと刈り取りそうな快感の奔流に呑まれる。
――ごぶごぶごぶっ、ごびゅるっ、どぶぶっ、ごぶごぶっ……。
「おぶぅぅぅ……っ」
目に涙を滲ませためぐり先輩が、噴火のような射精の勢いに負けずに白濁を呑み込んでいく。噴射の快感に打ち震えながらも、陽乃さんの手が本当に止まっていないことに気付いて戦く。
「わー、すごいね比企谷くん。あれだけ出してもまだ硬いままだよ？」
「や、ちょっと、もう止めて、今敏感だから……っ」

上ずった声で情けなく言うと、陽乃さんが横から俺を見つめる。三日月のように細められた目と、凍てつくような視線に心臓が縮んだ。
「……だから、だよ。普段比企谷くんにいじめられてる時の気持ち、少しでも分かってくれたら嬉しいなぁ……」
「なっ……うぐぅぅぅぅぅぅっ!?」
めぐり先輩が何も抵抗しないことを良いことに、陽乃さんの手の動きが更に速くなる。敏感になりすぎて、自分の身体とは思えぬ程に跳ねまわる。
「……ぎっ……」
間も無く。
「……んぶっ、ごくっ、ごくっ、ごく……っ」
歯を食いしばって、足が攣りそうな程身体を強張らせながら。
2度目の白濁を、めぐり先輩の口中に注いだ。
陽乃さんは満足したのか、やっと手の動きを止めた。
「……めぐり先輩、大丈夫ですか……？」
息も絶え絶えに聞くと、めぐり先輩はけほけほと咳き込みながら頷く。
「うん……ありがとう」
そう言ってにっこり微笑むと、口をぱっくり開けて舌を晒した。
「な……何ですか？」
突然の行動に驚いていると、めぐり先輩が口を閉じてにっこり微笑む。
「ちゃんと、全部飲んだよっていう報告。……気持ち良かった？」
あれだけ鬼畜な行為をされていながら、なんて健気な……！　と感動しながら、めぐり先輩の質問にこくこくと頷く。めぐり先輩の頭をくしゃりと撫でると、少し照れながらも嬉しそうに受け入れてくれた。
くるりと振り向く。陽乃さんは俺を後ろから抱きしめている時の体勢のまま、こちらを誘うように胸と陰部を手で隠した。
「さて、あんたは一体どうしてくれましょうかねぇ……」
恨めし気な声で言うと、陽乃さんはふふっと意地悪く笑った。

「さてさて、比企谷くんは一体わたしをどうしてくれるのかな……って、え？」
陽乃さんの肩に置かれた手を見て唖然とする。陽乃さんも同じ反応をしていた。
「ふっふっふ……」
手の主は平塚先生で……その横で、由比ヶ浜マがにこにこと佇んでいる。
「どうやら、私たちの出番のようだな」
うわぁ……。
最後の最後に、ラスボスみたいな登場の仕方をしちゃったよ、この人たち……。
「し、静ちゃん……？」
陽乃さんの顔が引き攣るのを、俺は初めて見た。

続く。

（１２）

自分がよく知る人の、違う一面を見るというのはとても新鮮だ。
ましてやそれが女性ならば、そんな場面を見ただけでも胸がときめき、心が躍る。
「ちょっと、静ちゃん、やめ……っ」
「はっはっは。よいではないかよいではないか」
――陽乃さんが慌てている所なんて、早々見られやしないようなぁ……と、頬を緩めながら考える。平塚先生は悪代官にしか見えない。
ソファの上で取っ組み合う２人の美人を眺めながら、あぐらをかいて緑茶を啜る。どうせこの後はとんでもないことになるだろうから、今だけはのんびりしておきたい。ちなみにお茶は留美が淹れてくれたもので、お盆に載せて持ってきてくれた。リビングに入れると恐らくトラウマになるのではという判断により、雪乃がリビングのドアを僅かに開けてお盆を受け取った。きちんとお礼を言いたかったが、如何せん俺は全裸なので声だけでお礼をした。ドアを閉める時、「……八幡の変態」とぽそりと呟いたのが、たまらなく可愛いと思ってしまった。
あぐらをかいてお茶を啜る。ただし全裸で。
そんなシュールな状況の中、何故か俺の大事な部分がさっきから指で弾かれている。
「えいっ、えいっ」
「……何してんの？」
いろはが、足を流して俺にもたれかかり、俺のアレを興味深げにぺちぺちと指で弾いている。「ほえ～……」なんて唸りながら感心してるけど、やってることは完璧に変態だからね？　あと、まあまあ痛いからね？
「こら、あんまりやりすぎるなよ」
どきどきして勃とうもんなら死ぬ程恥ずかしい。頭をぽふぽふと叩くと、いろはは猫のように目を細めて俺の手に自分の手を重ねた。
「普段はこんななのに、どうして興奮するとあそこまで太く硬く長く

なるのかなぁ……って思って」
「お、おう……そうか」
えらくストレートな物言いに、こちらが恥ずかしくなって目を逸らしてしまう。いけない、このままでは興奮して大きくなってしまう。平常心平常心……。
「あ、おっきくなった」
……一切堪えられなかった……。
もう一度状況を整理する。
陽乃さんが平塚先生に襲われ、先生が由比ヶ浜マからそれとなく受け取った凶悪な道具で陽乃さんに悪戯をしようとしている。陽乃さんは結構本気で抵抗しているようだが、どうやら先生は本当に身体能力が高いらしく、次々と陽乃さんの身体をあれこれ（曖昧）していく。
そんな光景を見ながら、俺はあぐらをかいて緑茶を啜り、大事な部分をいろはにぺちぺちと指で弾かれている。
「お兄ちゃん、傍から見るとこの光景は頭おかしいよ」
「言うな、分かってるから」
雪乃の膝枕に「うへへ……」とキモ可愛い声を漏らしながら、小町がぽろりと冷静なことを言った。君は自由ですねぇ。
いろはを構いながら小町と会話をしていると、「よしっ」という凛とした声が聞こえた。
「比企谷、整ったぞ。さあ見るが良い」
「あ、はい」
先生の声に振り返る。
「……へ？」
ソファの上の光景に、思わず間抜けな声を漏らして。
危うく、湯呑を落としそうになった。
× × ×
「ふーっ、ふーっ、ふーっ……」
陽乃さんが、まるで獰猛な獣のような吐息を漏らしている。
陽乃さんは扇情的な下着を着けたまま、腕を縛られていた。後ろ手にしてがちがちに固められている。そんな体勢のためか、豊満で重力

に負けない張りのある乳房が、これでもかという程に強調されている。足は横に流していて、何だか囚われのお姫様のようにも見えた。いろはとは違いアイマスクこそ付けられていないが、代わりにその瑞々しい唇は小さな赤い玉を咥え込んでいた。所謂ボールギャグというやつだ。陽乃さんはこれにより口を開けるのを強制されている。

「ヒッキーくん、わたしも協力したのよ～」

由比ヶ浜マ――彼女が嬉しそうに手を合わせて笑う。その言葉を聞いて陽乃さんの身体を良く見ると、艶めかしく透けた下着の奥に、ピンク色のローターらしきものが見えた。乳頭に1つずつ、下腹部では恐らく肉芽の上に付けていると思われる。

「うふふ～……いきなり最大にして楽しむのも良いんだけど……」

陽乃さんがびくりと跳ねる。

「せっかくだから、『弱』よりも更に弱い『微弱』というモードにしてあげるわ～」

彼女が嬉しそうに笑い、リモコンのスイッチを入れる。

……ぶぃぃぃぃぃ……と、微かな振動音が部屋にこっそりと響くと。

「んふぅぅぅ……っ！」

陽乃さんが身体を屈めて快感に耐える。

「うふふ～、『弱』でもすぐにイっちゃいそうだなって思ったから、それよりも弱くしてみたけど……正解だったみたいね～」

彼女が楽しそうに笑う。普段はおっとりとした表情だが、今はその目が三日月のように細められていて、身に纏う印象をがらりと変えていた。

「比企谷。今の陽乃をどうするかは君次第だ。好きにしたまえ」

先生がそう言って、にやりと口の端を吊り上げる。こ、この人極悪だ……！

「ふーっ、ふーっ、……んんんっ、んんんん……っ！」

焦れったい刺激では達することも出来ず、もどかしげに内ももをこすり合わせる陽乃さんの仕草は見惚れてしまうほど扇情的だ。視線を巡らせると、他の皆も顔を赤らめながら陽乃さんの痴態を見つめて

いた。
陽乃さんをじっと見て、ふとある考えが浮かんだ。
ソファに膝を上げる。「背中、後ろに付けてください」と伝えて言う通りにさせた。陽乃さんはどこか怯えたような、それでいてどこか嬉しそうな表情を浮かべる。
陽乃さんの耳のすぐ横、ソファの背もたれに両手を付いた。ソファに手が沈み込むと、その分だけ陽乃さんの身体も沈み込む。小さな小さな、2人だけの空間が出来上がった。
「……」
何も言わず、一切触れず、ただ陽乃さんの瞳を見つめる。陽乃さんは何かしてほしいと訴えかけるように眉根を寄せて、潤んだ瞳で俺を見つめる。そんな哀願もするりと躱して、ただただ陽乃さんを見つめる。陽乃さんの瞳に映る自分さえもよく見える程に。
「……ふぅっ、んっ……くふぅぅ……ふぅっ、んんん……っ」
俺と目を合わせたまま、陽乃さんが泣きそうな顔でふるふると首を横に振る。美しい肢体から滲み出た汗が濃厚な牝の匂いを醸し出して、勃起した肉棒は陽乃さんのへそに刺さりそうな程突き出ている。けれど、きっとこの人は俺が僅かにでも触れた瞬間に達してしまうだろう。だから、触れそうでも決して触れない。
どれくらいの時間そうしていたか分からない。それでも、俺と陽乃さんが見つめ合っている間、陽乃さんは一度も達することなく、一度も目を逸らすことなく、ただただ静かに震えていた。
「陽乃さん。うつ伏せで寝転がって、俺に向けて尻を突き出してください」
俺の声に陽乃さんがびくりと跳ねて目を瞠る。何を言ってるんだという意志を表情に滲ませながらも、身体を震わせながら俺の言う通りにして、肉付きの良い形の整った双丘をこちらに突き出した。シースルーの下着がぐっしょりと濡れていて、濃厚な牝の匂いが鼻腔を侵食して、蹂躙への欲求を駆り立てる。
ローターが肉芽に付けられているということは、このまま俺が腰を突き出せば、目の前の女性と簡単に繋がる事が出来る。物欲し気にひ

くつく、艶めいた双丘の肉に息を呑んだ。
「陽乃さん。俺、今から陽乃さんに挿れます。１回出すまで絶対やめません。……行きます」
「んんんん……っ！」
陽乃さんが後ろを振り向いて、何か訴えかけようとする。それが、どんな願いだったのかは分からない。
けれど、俺は決意を鈍らせることなく、目の前の熱くぬめった牝穴に躊躇なく己の欲望をねじ込んだ。

続く。

（13）

ずちゅり。

淫猥にひくつく陽乃さんの雌穴に肉棒をねじ込むと、卑猥な音を立てて呑み込まれた。

「うぅ……んぐぅぅぅぅぅぅぅ……っ！」

後ろ手に縛られた陽乃さんが、塞がれた口の中で激しく喘ぐ。絶頂させないように我慢させていたことで殊更敏感になっていた陽乃さんの身体は、たった一度の挿入で容易く陥落した。

じっとりと湿った双丘を掴む。陰部を晒すように尻肉を広げると、美しい背中が波打った。ぷしゅっ、ぷしゅっと溢れ出す愛液が、高まりきった官能を示している。

焦らすように腰を引いて、思い切り突き入れる。ばちゅんっという水音が結合部から響き、掻き出された愛液は部屋の中に淫らな匂いを撒き散らした。

二度目の挿入と同時に体重をかけて、身体を密着させる。緩慢な動きを繰り返しながら、獣のような喘ぎ声を漏らす陽乃さんの顔に見入る。

「ふーっ、ふーっ、ふぅぅ……んぐっ、んんんん……っ」

顎を上げると、ほとんど抵抗の色が無くなった瞳が、許容量を容易く超えた快感に染まっていた。溢れた大量のよだれが顎を伝い、たまらなくなってそれを舐めとると、陽乃さんは驚きで目を瞠りながらも膣肉の締め付けを強めた。

声が聞きたくなり、腕は縛ったままボールギャグだけ外す。

「……ぷはっ、はぁっ、うっ、うぅん……っ」

陽乃さんは何も喋らず、代わりに唇を必死に寄せてくる。涎が垂れたままなのも気にせず子供のような表情でキスをせがむ様子は、まるで一人の人に思えない程ちぐはぐで、奇妙な魅力を放っていた。愛おしさに唇を重ね、舌を絡める。その間も抽送を続けて、時折激しく突き入れると、陽乃さんの目が明滅するように瞬いた。ソファは美女の淫液で水たまりが出来ていて、陽乃さんの太ももが跳ねる度にびしゃ

びしゃと音が鳴る。剛直を包み込む肉襞の締め付けは最高なのだけど、それ以上に陽乃さんの反応がもっと見たくて、自身の射精欲は二の次になっていた。
唇を離して、両手を陽乃さんの乳房に持っていく。ソファによりひしゃげたマシュマロのように形を変えた乳房の先端を、ローター越しにつまむ。「ひぐ……っ」と可愛らしい声が漏れて、美しい顔が歪んだ。この動作一つでも、陽乃さんの身体は激しく震え、栓の壊れた蛇口のように愛液が溢れ出す。
指で陽乃さんの乳頭を好き放題にいじりながら、3回に1回のペースで思い切り突き入れる。途中から法則性に気付いたのか、陽乃さんは初めの2回は緊張で息を潜ませ、3回目で「あぐぅあぁ……っ」と獣じみた声を上げて肉棒を締め付けてきた。
2人の汗と、先走り汁と、愛液。
それらが混ざり合い、境界線が分からなくなっていく。
「ね、ねぇ、比企谷くん……」
陽乃さんが何度目か分からない絶頂を迎えた所で、眉根を寄せた悩ましい表情で語り掛けてきた。
「なんですか」
言葉を返しながら、腰を左右に振りながらねじ込む。
「ひぁ……っ、あっ、あふぁっ、も、もう、人の話は落ち着いて聞いてよ……っ」
困り顔で、お姉さんのような口調で俺を諭しながらも、この人は絶頂し続けている。
「俺が動きながらでも、陽乃さんは話せるみたいですから。気にしないでください。何ですか？」
心持ち抽送のペースを上げる。
「あぐっ、おぐぅ……よ、余裕がどんどんなくなってるの気付いてるくせにぃ……、比企谷くん、鬼畜だぁ……んはぁぁっ!? やっ、そんな連続で……ひぃぃんっ!?」
自身の言葉通り、余裕を失っている陽乃さんの表情があまりにも愛おしくて。言葉の途中にも関わらず、ほんの5回程本気で突き入れ

た。溢れ出す愛液は、何回分の小水に相当するのかと思う程の量になっている。
「んっ、んひっ、はへぁ……っ」
「ほら、何ですか？　早く言わないと、もっとひどいことになりますよ」
「いっ、ひぎっ、言う、言うからぁ……っ」
陽乃さんが目尻に涙を浮かべて、いやいやと首を振る。あまりに嗜虐心をそそられて、膣内をかき回すのを我慢するのが大変だ。
「比企谷、くん……っ、い、一体、いつになったら出してくれるの……？　わたし、もう、んはぁぁぁぁっ!?　だめだめだめだめ……っ！」
牡としての本能に抗えなくなり、射精一歩手前に上り詰めるまで腰を振った。肉壺は男の精を搾りとろうと激しくざわついている。
「……本当に、もう、流石に、やばいから……っ」
焦点の定まらない目がぼんやりと見つめてくる。
さて、実際問題ここからどうしようか。
このまま射精するまで激しく突いても良いし、じっくり嬲りながら射精するのも良い。
どのやり方が、目の前の女体を味わうのに最適な方法だろう……と考えていると。
「……お？」
押し広げていた結合部の、すぐ上。
放射線状の皺の真ん中にある、小さな窄まりに目が行った。
陽乃さんの腰を持ち上げ、尻を突き出させる。
ぴとり、とその窄まりの上に指を置いた。
「ひっ!?」
陽乃さんの怯えた声がする。その声音とは対照的に、膣肉は心地良く締め付けてきた。
「陽乃さん、ここ……」
言葉を続けることなく、独り言のように呟いて、ぴとぴとと指を付けては離す。
「はっ、ひぁっ、やっ、比企谷くん、そこは、その……っ」

慌てた様子でしどろもどろに言葉を紡ぐ陽乃さんの様子を見て、悪戯心がむくむくと膨れ上がる。
「ここも弄ったら、俺もすぐ射精するかもしれません」
「そ、そんなの、むり……んぐぅぅぅ……っ！」
陽乃さんの言葉を聞き入れることなく、右手人差し指をアナルにねじ込んだ。花蜜を塗り込んだ指はするりと穴に呑み込まれ、深い暗闇に自分の身体の一部が消えてしまったような気がした。
「うぐ……っ!?」
陽乃さんのアナルの感触に感動する間もなく。
膣肉の締め付けが倍増して、一気に射精欲が高まった。
「は、陽乃さん、何ですかこれ、信じられない。指を入れただけでこんなに感じるなんて……っ」
興奮した声音で言いながら、ぐぷぐぷと尻穴に指を抜き差しする。膣のように愛液が溢れ出す訳ではないが、奥にねじ込む度に指を引きちぎらんばかりに締め付けてくる感触は病みつきになりそうだ。陽乃さんの痴肉の締め付けは増す一方で、腰は動かさずともアナルを嬲っているだけで射精してしまいそうだった。
「い……ぎ……っ」
声にならない声を漏らして、陽乃さんはぶるぶると震えている。背中にはじっとりと脂汗が浮かんでいて、陽乃さんにとっても未知の感覚であるのだと分かる。
「すごい……これなら俺もすぐイケますよ」
そう言いながら、そろそろ腰を動かそうとしたところで――ふと、陽乃さんの身体に取り付けられたままの3つのおもちゃの存在を思い出した。『微弱』のモードになったままで、ずっと絶頂し続けている陽乃さんにとってはもはやあまり意味の無い代物だ。
視線を平塚先生と由比ヶ浜マに向ける。この時、俺は一体どんな表情をしていたんだろうか。
「あの、このローター……3つとも最大にしてくれませんか？」
俺の言葉に、陽乃さんがびくりと跳ねる。先生と由比ヶ浜マはきょとんとした顔になり、周りからはごくりと息を呑む音が聞こえた。

「比企谷……君は、陽乃を壊す気かね？」
先生が心配した顔で見てくる。
「ああ、大丈夫ですよ。今まで色々してきましたから、引き際くらいは分かります。今日のはかなりやばいとは思いますけど、きっと終わった後すぐに俺のを舐めてくれるくらいの元気は残ってますから」
激しいまぐわいの後、いつも虚ろな目で肉棒をしゃぶる陽乃さんの顔を思い浮かべた。
「そ、そうか……ううむ、比企谷がそう言うなら……」
と、先生が由比ヶ浜マと目を合わせて頷き合う。「君がやりたまえ」と言って、リモコンを手渡された。
「陽乃さん。これ、今から最大にしますから。それと同時に思い切り突きます。ありったけ気持ち良くなってくださいね」
陽乃さんの目の前にリモコンをちらつかせる間も、腰と指の抽送を止めない。陽乃さんは顔を引き攣らせて、静かに首を横に振った。
「し、死んじゃう、死んじゃう……っ」
「大丈夫です、大丈夫。……じゃ、行きますよ」
俺の声が低くなるのを敏感に感じ取り、陽乃さんが諦めたように目を瞑った。
ひゅっ、と陽乃さんが息を吸い込む。
３つが連動しているというリモコンで、ローターの振動を最大にする。
それと同時に、素早く腰を引いて最奥まで肉槍を突き入れた。
「あが……っ！」
――本当は、もっと犬のように腰を振って、陽乃さんの悲鳴のような喘ぎ声を楽しみながら射精するつもりだった。
けれど、陽乃さんが小さな声を上げた瞬間――陽乃さんの全身が攣ったかのように強張り、それに伴って肉棒が信じられない強さで締め付けられた。
「うぐぁ……っ！」
我慢する時間さえなく、ここまで我慢してきた射精欲が一気に解き放たれる。

ぶびゅるびゅびびゅくびゅるるる……。
「あっ、あぐっ、おっ、おぉぉぉ……っ」
俺が達したからと言って、陽乃さんを責めるローターの動きが止まる訳では無い。それどころか子宮口に精液を叩き付けられて益々高まった陽乃さんの身体は、男の精を余すことなく搾り取ろうと締め付けてくる。肉棒が脈打つ度に、灼熱の溶岩が子宮の中に注がれ、膣を浸し、結合部から溢れ出た。
射精を終えると、ローターのスイッチを切った。部屋の中には陽乃さんの荒い呼吸音と、絶頂の余韻で腰が痙攣してばちゃりと水が跳ねる音以外聞こえない。
ずるりと肉茎を引き抜いて、陽乃さんの拘束を解く。そして仰向けにすると、極上の肢体を携えた美女は両足を開いたあられもない体勢でひくついていた。陽乃さんはぼうっとした表情で俺を見つめている。結合部からは、彼女の身体が脈打つ度にごぼっ、ごぼっと精液が溢れ出てきた。
陽乃さんの頭を撫でて、口付けをする。これだけのことをされた後でも、陽乃さんは口内に侵入した舌を快く受け入れてくれた。
さて、陽乃さんの口でもう1回くらい出そうかな……と思っていると。
がしり、と両肩を掴まれた。
いやな予感がする、むしろ、いやな予感しかしない。
恐る恐る振り返ると、先生と由比ヶ浜マがにこにこと笑っていた。
こわっ。
「比企谷。いくらなんでもやりすぎだぞ」
「あ、えっとですね？　陽乃さん、いつもこれくらいの激しさを求めてくるんですが……」
毎日とまではいかないが、言った言葉に嘘偽りはなかった。しかし俺の言葉を聞いた由比ヶ浜マが、頬に手を当てて首を傾げ、困ったように笑う。
「あら～、それはそれで心配ね～。女の子の身体はきちんと労わらないと～。……例え、本人が望んだことでもね？」

「うぐっ……そ、その通りです……」
正論にも程がある言葉に、ぐうの音も出ない。
先生がうんうんと頷いて、にっこりと笑う。
「まずは陽乃の介抱だな。それから……比企谷、君には私たちがおしおきをしてあげよう」
「え」
「介抱と、おしおきだ」
何その、アメとムチみたいなフレーズ？
「……あの、キャンセルとかは……」
「逃れられると思っているのかね？」
先生が肩を掴む手に力を込める。うん、全然逃げられそうにない。
「……はい……」
力無く頷くと、先生が艶っぽく目を細めた。
「安心したまえ。痛いことはしない。気持ち良いことをするだけだ。……気持ち良すぎる、かもしれんがな」
先生の言葉に、背筋がぞくりと粟立った。

続く。

（１４）

人が目を見開いて驚く、という光景を見たことはあるだろうか。
この光景、よく見るようで実際はあまり見ない……と、思わないだろうか。
何故なら、目を見開くという行為だけに意識が向くことがあまり無いからだ。
目の動きだけに注意が行くということは、即ち驚く人が目以外で反応をほとんど示さないからだと思うのだ。
人によっては声を上げ。
人によってはびくりと飛び跳ね。
人によっては両手で口を塞ぐ。
そういった動きに注意が向いて、目が見開くというポイントだけに注目することはあまり無いように思える。
「……っ」
しかし、俺は見た。
雪ノ下雪乃が、息を呑んで、はっきりと。
目を、見開く所を。

× × ×

「さて、まずは陽乃を介抱せねばな。比企谷は横で休んでいたまえ。……これから、大変な目に遭うのだからな」
「……っ」
平塚先生がさりげなく呟いた言葉に、息を呑む。
「あらあら～、ソファがもうぐしょぐしょね～。拭くだけ拭いて、後はカーペットの上でしちゃえばいいかしらね～」
由比ヶ浜ママ――彼女が呑気な口調で言うと、周りの女性陣もわらわらと手伝い始めた。俺も手伝おうとすると、「鬼畜先輩は休んでてください。鬼畜なんだし」「鬼いちゃんは休んでなよ。鬼畜なんだし」「比企谷くん、君って……」「比企谷菌……」「ヒッ鬼―は休んでなよ」などと畳み掛けられた。一回ツッコみ始めたら身が持たないからやめておこう。君って……比企谷菌？　それ何のコンボ？

「……」
ふと雪乃に目をやると、陽乃さんを抱きかかえて身体を拭いていた。何だかんだで姉妹だなぁ……なんて微笑ましく思っていたのだが、何だか雪乃の様子がおかしいことに気付く。
……ああ、そういうことか。
どうしよう、言うべきか言わずにおくべきか。
……言って、おくか。
こほん、と咳払いをする。
「ええと、その、なんだ、雪乃。あまりその、見ない方が……」
「……っ、な、何のことを言っているのかしら？」
明らかに陽乃さんの豊かな胸部に視線をちらちらと送りながら、雪乃が悔し気に眉をひそめる。
「雪乃さん、雪乃さん！」
小町が雪乃の肩に手を置いた。雪乃が振り返ると、小町が舌をぺろりと出して親指を上げている。すげぇ可愛いけどすげぇ腹立つ。
「大丈夫ですよ、雪乃さん。小町も自分の胸の小ささを気にしてますけど、今は毎日お兄ちゃんに揉まれてるおかげでちょっとずつ大きくなってますから！」
「!?　おい、小町!?」
妹が何かほざき出したと思って慌てると、今度は他の人まで身を乗り出した。
「そうですよ、雪ノ下先輩！　わたしもおっきくなってますし！」
「そうだよゆきのん！　あたしも、……おっきく、なってるんだよ？」
なんで俺を見ながら言ったの!?　恥ずかしくて死にそうなんだけど!?
この流れに乗るか迷っている様子だっためぐり先輩が、おずおずと雪乃に話しかける。
「ゆ、雪ノ下さん……わたしも、ね？　その、おっきくなってるから、大丈夫だと、思うよ……」
「……」
雪乃の顔が、皆が畳み掛けるごとに虚無の表情になっていく。表情

筋ってこんなに死ぬことがあるんだ。勉強になるなぁ。
雪乃は陽乃さんの髪の毛を手櫛で梳くと、皆から目を背けた。
「……私は、まるで大きくなっていないのだけど……っ」
『……』
震える声に、答える者はいない。
なんていうか、地獄みたいな静寂だった。
このくだりはここで終わりにしよう、これ以上雪乃の心の傷に塩を塗る意味はない……と思っていたら。
ソファを拭いていた先生と彼女がふーっと息を吐き、額の汗を拭った。
「よし、綺麗になったな。それでは比企谷、早速おしおきを始めようか」
「うふふ～……」
２人は俺を見て蠱惑的に微笑むと――上着の裾に両手をかけ、腕をクロスさせてがばっと豪快に脱いだ。
「……っ」
俺は、目の前で４つの巨大な鞠が跳ねる絶景よりも、反射的に雪乃に目をやってしまった。雪乃の表情の変化はまるでスローモーションのように見えたし、雪乃もきっと、乳鞠の揺れはスローモーションのように見えていただろう。
雪乃の目が驚きで見開いた。
声も上げず、目以外の表情の変化も無く、ただただ、その瞳が驚愕を表している。
人類史における『不公平』という言葉の代名詞とも言えるであろう、女性の胸の大きさの差。
気にしさえしなければ楽に生きられるのに、雪乃はそうしなかった。あるいは、そうすることが出来なかった。
「ふぅ、やはり脱ぐとやはり涼しいな……ん？　どうした、雪ノ下？」
「あら、このブラもきつくなってきたわ～、太っちゃったかしら……あら、どうしたの結衣？　ゆきのんちゃんを覆い隠しちゃって～」
「……うぅ……っ」

結衣が悲痛な顔で雪乃を抱きしめている。
雪乃は、静かに嗚咽を漏らしていた。
俺は、何も言葉をかけることが出来なかった。
……。
「お兄ちゃん、何で急にシリアスっぽくなってるの？」
「すまん、やってみたかっただけだ」
無駄に大袈裟にしてみた。
「もう、ヒッキーに小町ちゃん！　ゆきのん落ち込んでるんだからからかわないで！」
結衣がぷんすかと頬を膨らませて怒り、俺と小町がへこっと頭を下げる。
雪乃が結衣の腕を掴んだ。
「由比ヶ浜さん、あなた、柔らかいのね……柔らかい、のね……っ」
「ゆきのん!?　何で2回言ったの!?」
由比ヶ浜（母）がダメージを与えた後、由比ヶ浜（娘）が追い打ちをかけてしまったようだ。
――雪ノ下雪乃にとって、世の中は生きづらかろう。いつか、先生がそんなことを言っていた。
「……なんで、みんな柔らかいの……っ」
「ゆ、ゆきのん……なんか、ごめんね……？」
「謝らないで……」
……こういった意味でも、生きづらいんだな……。
しばらくの間、リビングの中はシリアスなんだかギャグ調なんだか分からない空気を醸し出していた。小町が「あれ？　これふざけて良いの？　どうなんだろ？」と俺にしきりに目配せをしていたが、俺は目を逸らし続けた。兄妹揃ってスベったら目も当てられないからだ。
ちなみに、こんな会話をしている間も。
俺はずっと、全裸でした。
×　×　×
「さて比企谷、こっちに来たまえ」
身に纏うものを全て脱ぎ捨てた先生が、舌なめずりをして俺に手招

きをする。その横では彼女が足を横に流して楽しそうに微笑んでいた。
今、このリビングには俺と先生、そして彼女の3人しかいない。
ほんの数分前のこと。
雪乃の精神状態があまりに悲惨な状態だったため、小町が見かねて、
「そ、そうだ、どうやったら胸が大きくなるかを皆で調べましょう！お兄ちゃんはここに残ってお2人にめちゃくちゃにされてね！」
なんてことを言い出したのだ。
それで、留美と川崎、そして折本がずっと待機している雪乃の寝室に他の女性陣がみんな押しかけて、ノートパソコンで胸を大きくする方法を調べるという謎の会を開くことになった。
ちなみに、その移動時のこと。
リビングのドア越しに、こんな会話が聞こえてきた。
『なんで⁉　なんであたしは入れないの⁉』
『結衣さん。これは持たざるも会です。【豊穣の女神】とかって二つ名が付きそうな立派なものを持ってるんですから、自信を持って廊下で正座しててください』
『何それ⁉』
『ちょ、ちょっと！　何であたしも追い出すんだよ⁉』
『沙希さん。あなたもちゃっかり立派なものをお持ちですよね？　去年の夏休み、私服でさりげなく胸の谷間が出来ていたのを見逃す小町じゃないですよ？　あなたも結衣さんと同罪です。一人称が【あたし】の人同士、仲良く正座しててください』
『何言ってんだあんたは⁉』
小町の言葉を聞いて、女って怖い……としみじみ思った。このままでは本当に2人が正座しかねないので、リビングを出て寝室のドアを開けて小町のおでこにチョップして黙らせて、結衣と川崎を寝室に入れた。本当に何だったんだ……。
「比企谷、どうした？　早く来たまえ」
「……っ」

回想していたら、もう一度先生に呼ばれた。
女って怖い、とはさっきも思ったけども。
今は何より、目の前にいる2人が怖い。
「うふふ～……どうやって、気持ち良くしてあげようかしら……」
彼女の目が妖しく細められる。彼女も、先生も、既にその顔に普段の面影は無い。目の前にいるのは、発情した2人の牝だった。
ちらりとリビングのドアを見る。他の皆が寝室に行ってしまったのは失敗だったなと思う。この状態では、とても助けを呼べそうにない。
……干からびませんように。
これがフリにならないよう祈りながら、俺は2人にそっと近づいた。

続く。

（１５）

男ならみな生唾を呑み込むような、極上のプロポーションを誇る年上美女が２人。

俺の前で、一糸纏わぬ姿で微笑んでいる。

平塚先生が、クッションの上でぺたりと女の子座りになった。

「それでは……比企谷。こっちに来て座りたまえ」

いつもの凛とした態度と、あどけない姿勢のギャップにどきどきしながらも、先生の手招きに応じる。

先生の前に腰を下ろして、あぐらをかく。

「仰向けになってくれるか」

先生の言葉に漠然とした不安を抱きながら、言われた通り寝転がる。高めの天井が目に入った所で、先生が俺の足首を掴んだ。

「え、ちょ、え……っ!?」

俺が慌てている間に、先生が俺の足を持ち上げ、腰を浮かせた。このままでは背中がカーペットに擦れる……と思いきや、由比ヶ浜――彼女が、器用に俺の背中とカーペットの間に手を差し込んで守ってくれた。

「うぉ……っ」

俺の足が先生の背中に絡まるような体勢になると、肉棒が先生の豊満な胸肉にとっぷりと呑み込まれた。先生は流れるような動作で、自身の背中側で俺の足首を重ね、拘束用のバンドで結び上げてしまった。

――今、俺の下半身は先生に密着している。足首を拘束されたため、全く動くことが出来ない。

「……これで、逃げられないな」

先生が舌なめずりをして微笑む。それに続いて、彼女が俺の頭を柔らかな太ももで挟みこみ、俺の頭をそっと撫でた。その顔はひどく優しく、その微笑みが却って不安にかき立てた。

× × ×

「比企谷、よーく見ていなさい。君のそそり立つ逞しいものが、私の中

に呑まれる様を」
先生はそう言うと、自らの乳房を手で離し、肉棒を解放した。期待でひくつく亀頭はぱんぱんに充血していて、先走りの汁がぷっくりと浮いていた。
先生が口を開ける。真っ赤な口内に見惚れていると、れろれろと舌を出しては引き始めた。舌が口内から垂れ下がる度に、先端に唾液が滲み、白く泡立つ。泡というものが、こんなにも淫猥になり得るのだということを知った。
悩まし気に息を吐いて、先生が舌先を亀頭に近付ける。唾液が舌先にたっぷりと溜まると、重力に負けてゆっくりと垂れ下がり、膜を張る様にして亀頭を包み込んだ。先走り汁と唾液がねっとりと混ざり合う。牡と牝の体液の混じり合いというのは、こんなにも官能的なのか。
「さあ、いくぞ……っ」
先生が熱の篭った瞳で俺を見て微笑む。その顔からは大人の余裕などというものは失われていて、自分の好いた牡を貪ることしか考えていない表情をしている。
巨峰のごとき柔肉を手で寄せて、俺に見せつけながらゆっくり、ゆっくりと呑み込んでいく。
「あっ……あぁぁ……っ」
ため息のような声が漏れた。
淫猥な乳鞠が亀頭を、雁首を、竿を包み込み、唾液でぬめることで不規則にぐにゅぐにゅと蠢く。先生は包み込む間も唾液を垂らし続けて、時折俺の目を見てくる。角度的に自然と上目遣いになって、それがたまらない程可愛くて色っぽい。見つめられただけでびくんと震えると、先生は嬉しそうに笑った。
「どうだ？　気持ち良いか？」
先生が艶っぽく、それでいて優し気に笑う。これだけ卑猥なことをしておきながら、可愛くもお姉さんっぽくもなるのだから、女性という生き物はつくづく百面相だなと思う。もちろん、良い意味で。
先生は首を傾げて、愛おしそうに亀頭を見つめながら乳肉をくにゅ

くにゅと動かす。緩慢な快楽の波に陶然としていると、ぴんと立った乳首が時折亀頭に当たり、下腹部に媚電が走り抜けた。
「気持ち、良い、です……っ、やばい……っ」
肉乳の中で何度も腰を跳ねながら、掠れる声で答える。決して激しい動きではないが、柔らかく且つ弾力のある乳肉の心地良い圧迫は凄まじく、既に限界間近だった。
「そうか、嬉しいぞ。1回出して楽になると良い」
先生がそう言って、ちゅっと亀頭にキスをする。キツネのように細めた目で俺を見つめて、鈴口をちゅるると吸い上げた。
「うぅ……っ、そ、それじゃあ、もう、出します……っ」
睾丸で生まれた精子が、尿道を伝ってゆったりと上ってくる。腰を跳ね上げると、先生は俺がもう射精するのだと気付き、剛直を柔肉ですっぽりと包みこんだ。
――ごぶっ、どぶぶ……っ、ぶびゅるるるる……っ。
「うぁ……っ、熱い、あぁ……っ」
豊満な谷間から白濁が噴き出し、淫らな水たまりが出来ていく。先生はその様を恍惚とした表情で眺めている。
脈動を終えてようやうひと息吐く。白い美肌を牡の欲望が彩って、部屋には卑猥な匂いが満ちている。
「はぁ、はぁ……っ、先生、すげぇ気持ち良かっ……!?」
――たです、と言葉が続く前に。
先生の手が、今度は乱暴に自分の乳房を揉みしだき始めた。射精直後の敏感な肉竿に、こりこりに硬化した乳頭が入り組んだ軌道を描いて押し付けられる。
「うぁぁ……!? ちょ、ちょっと、せんせ……何やって……っ」
先生の顔を見て、ぞっとする。
微笑んでいる瞳の中に、冷たい炎が灯っていた。
「さっき言ったろう？　おしおきだと」
「……それ、は……っ、……うぐぁぁぁっ！」
ぱちゅっ、ぐちゅっ、ぱむっ、じゅぱんっ、じゅくくっ。
許容量を超えた快楽が、頭の中をめちゃくちゃにかき乱す。

精液が混じったことで、２人の身体が更に密着して滑りが良くなる。肉山の中から時折顔を出す亀頭は、白く粘ついた糸をいくつも纏っていた。
「ま、待って、これはほんとにやばい……っ！」
過剰な快楽に耐え兼ねて、上半身を起こし先生を止めようとすると。
「あら、だめよ？　たっぷり楽しまきゃ……」
呑気な声が頭上から降ってきたかと思うと、彼女が俺の顔のすぐ横に移動し、俺の両手を押さえつけながら唇を重ねてきた。人工呼吸をするかのような体勢だが、目的はまるで違う。彼女は、俺の口を犯すことだけを考えている。
「んちゅっ、ちゅりゅっ、ちゅぴっ、んはぁんっ、んふぅぅ……ぴちゃ、ちゅぷちゅぷ……っ」
「んんん……っ、んんんん……っ！」
先生に対して抵抗を試みれば口内を侵食されて力が抜けて。
彼女を振り払おうとすれば、下半身を突き抜ける快楽の波に呑み込まれる。
どうしようも無かった。
何の抵抗のしようも無かった。
彼女の唇が離れると、痙攣し続けている下腹部に限界が訪れた。
「もう無理、出る、出る、出る……っ」
歯を食いしばって強く目を瞑ると、耳の中に熱くぬめった舌が侵入してきた。
「あふぁ……っ、あんっ、もう、可愛い反応するんだから。もっといじめたくなっちゃう」
彼女が俺の耳に楽しそうに舌を挿し入れて、両手で乳首をこねくり回す。執拗に這い回る舌が、卑猥な音を直接脳に流し込んできた。
「比企谷、お前の精子で私の胸がこんなに泡立っているぞ。もっと出してくれ、ほら、ほら、ほら……っ」
先生が上気した顔で言う。上ずった声は、そのまま先生の興奮の度合いを表していた。

一緒に動いていた双丘が、互い違いで動き始めた。
ぬちゅるぐちゅぐぱっ、ずちゅじゅるじゅくじゅぱ……っ。
1回目の射精が何だったのかと思う程の、地獄のような快楽。カーペットを必死で握り込む手には力が入り過ぎて、ぶるぶると戦慄いている。
「あぁぁもうだめだでるでるでるでるっ！」
叫びながらぎゅっと背を縮めると、彼女が俺の乳首を指の腹できゅっと摘まみ、耳元で「いっぱい出しなさい？」と囁いた。弾けるように腰を跳ねると、今度は亀頭が露出した状態で白濁を噴出した。
ぶびゅるる、どぶ、ごぶごぶごぶごぶっ、ごびゅるるっ、ぶびゅびゅるるるる……っ。
「あぁぁ……すごい、すごいぞ。さっきよりも沢山出ているじゃないか。こんな熱くて、あっ、あっ、あぁ……っ」
先生が嬉しそうに喋っているが、行き過ぎた快楽の波に俺は朦朧としていてほとんど聞き取れなかった。意識とは無関係に、張り詰めた亀頭から噴水のごとく白濁が噴射していく。自分の肌が白濁に塗れていくのを、先生は嬉々として見つめていた。
脈動を終えると、先生が谷間に出来た湖に顔を寄せた。すんすんと匂いを嗅いで、口を開けて半目でため息を漏らす。
「ふぅっ……くはぁっ、なんて、いやらしい匂いなんだ……っ」
うっとり顔で言うと、酔ったかのようにふわふわとした動きで幾度も鼻を鳴らす。時折動きを止めて、唇を戦慄かせて吐息を漏らしている。俺はその様子を呆然とした表情で眺めていた。
「……美味しそうねぇ」
耳元で聞こえた言葉にぞっとする。
俺の頭を撫でながらずっと乳首をこねくり回していた彼女が、ゆっくりと立ち上がった。
続く。

（16）

由比ヶ浜マ――彼女が立ち上がり、平塚先生の方を向いて俺の上に跨る。

その拍子に、頬に何かがぽたりと落ちた。

「え……」

戸惑いながら見上げると、楚々として生えた恥毛の中でひくついた淫裂から、ねっとりとした愛蜜が垂れていた。

「あら……ごめんね、わたしもすっかり火照っちゃって……」

彼女が照れたように話しているが、その表情はこちらからは見えない。見えるのは、むちむちと熟した太ももと、ひくついた牝の穴だけだ。

牝穴が、不意に降りてきた。

「わたしのも……舐めてくれるかしら？」

頼む言い方とは裏腹に、俺が返事をしていないにも関わらず腰の降下が止まることはない。

「んむ……っ」

彼女が膝を付くと、柔らかく、それでいて濃厚な甘酸っぱさを湛えた肉が覆いかぶさってきた。鼻に彼女の尻穴が当たり、石鹸の匂いがする。口は淫核に濃密なキスをしていた。

「あふぁぁ……っ、気持ち、良い……っ」

豊満な尻肉に視界が埋まった状態で、彼女のうっとりとした声が聞こえる。言葉通り、彼女の膨らみからは次々と愛蜜が溢れ出して、かぐわしい牝の匂いが鼻腔を支配する。

んちゅっ、れるれる、ごくっ、ぢゅぴ、ちゅろろ、ぴちゃぴちゃ、ちゅくちゅく……。

巨大な尻肉を掴んで淫肉を貪ると、白い肌がぶるぶると波打った。

「はぁぁんっ！　あっ、そこ、すごい……はぁぁ……っ」

肉襞が舌をくにゅくにゅと締め付け、鼻先がめり込んだアナルが快感にひくつく。問答無用で送り込まれる官能の渦に、否応なしに下腹部が反応する。

「ははっ、比企谷、更に大きくなったぞ？　すごいな……っ」
先生が興奮を押し殺した声で呟くと、２つの乳頭を雁首に擦り始めた。なぞりながらぐりぐりと擦られる度に、牝の肉と汁に塗れた身体から意識を手放しそうになる。
「んぐ……っ、じゅぷじゅぷ……あがっ、く、苦し……むぐっ、うぐぅ……っ」
苦しさと気持ち良さが織り交ざって、どこまでが快感でどこからが苦痛なのかの境界線が徐々に曖昧になってくる。精液に塗れた肉幹からは、精液がびゅるびゅると溢れ出ていた。もはやいつ達したのかも分からないまま、小便のように噴き出した白濁が先生の谷間を浸していく。
「あぁっ、ふぁっ……あっ、すごい、こんなに出してるのに、まだまだ元気なのね……わたしも、頂いていいですか？」
「……っ」
顔を埋める尻肉の主の言葉にぞっとする。
「いくらでもどうぞ。舐め甲斐がありますよ」
先生は蠱惑的な声で囁きながらも、どこか楽しそうだ。乳頭は今は互い違いに竿をこすっていて、亀頭が外気に晒されていた。
それじゃあ……と彼女が呟いて、俺の身体にしな垂れ掛かる。火照った大人の牝の身体が柔らかく密着すると、間髪入れずに鈴口にキスをされた。
「ちゅっ、ちゅぴっ……あんっ、とっても濃い……っ。やだ、もう我慢出来ない……っ」
震えた声が官能に染まり、ぴちゃぴちゃと水音がし始める。牝犬が舐めているのは、もう一人の牝犬の谷間に溜まった牡の精子だ。
「はぁっ……じゅるっ、んっく、ふぁぁっ、こんなに出してたのね……あんっ、すごい、もっと、もっと、もっと……っ」
「～～～～～～～っ」
竿と亀頭を愛おしそうに撫でさすりながら、犬が水を飲むかのようにごくごくと飲んでいく。乳房も舐められているのか、先生が「ん……っ、はぁ……っ」と慎ましい嬌声を上げた。

悩ましい声を漏らしながら、次々に愛液を噴き出す彼女の痴態に頭がおかしくなりそうだ。それでも身体はがちがちに拘束されていて逃げることは叶わず、今は呼吸をきちんとすることで精一杯だ。
「はぁ……っ、たくさん頂きました、ごちそう様。それじゃあ……もっと新鮮なのを、頂きます」
背筋が粟立つ。しかし、逃げる術は無かった。
「……あむっ」
彼女の熱く湿った口内が、あっと言う間に肉槍を呑み込む。
「んじゅるるっ、じゅっ、じゅっぷじゅっぷ、ぐちゅぽっ、ちゅぷりゅっ、ぢゅりゅりゅ、ぢゅくくくく……っ」
咥えた瞬間から何の容赦もない口淫が始まる。亀頭が発情した牝舌に舐り回され、固めた舌先が裏筋を撫で伝い、その間も先生の乳肉が竿の下半分と陰嚢を包み込んで揉みくちゃにする。
「うぐぅぅ……ぷはっ、はぁっ、はぁぁっ……んぶっ!?」
目も眩む程の快感に耐え切れず、尻肉を鷲掴みにして顔を離したが――すぐさま、追いかけてきた淫肉が口を塞いだ。豊満な臀部をぐりぐりと押し付け、愛撫をねだってくる。
「だめよぉ、ちゃんと舐めてくれなきゃ。んじゅるっ、ぢゅぷぷ、ぐじゅるるる……っ」
「うぅぅ……っ、うぅぅ……っ」
逃げ場も無い興奮の衝撃が頭の中をがんがんとぶつかり転げ回る。行き場を失った官能は、どこかに溜まっていずれは爆発する。このままでは本当におかしくなってしまう。
ぼやけた視界の中で、不意に足首が楽になった。
「……？」
見えないから確認は出来ないが、ずっと拘束されていた足が重力に任せてカーペットに落ちたのが分かった。そして先生がこちらの内ももを掴み、身体を引き離す。
今俺は、彼女と69の体勢になっていた。
「流石に苦しかろうと思ってな」
先生が手短に伝えてくる。嬉しいけど、何でこのタイミングで――

？　と思っていたら、
「それに、縛ったままでは挿れづらいからな……ほら」
続いた言葉に、大きな不安が過ぎった。
先生が俺の内ももを掴んで足を開き、陰嚢の裏をさすったかと思うと――
ずむり。
「う……うぐぅぅぅ……っ!?」
尻穴に、先生の指が躊躇無く挿入された。未知の感覚に不安が広がり、解放されたばかりの両足をみっともなくばたつかせた。
「はは、動揺しているな。なぁに、慣れれば病みつきになるだろう。そぉら……第一関節まで入れていくぞ。力を抜きなさい」
ずに、ずぐぐ、ずるるる……っ。
「おっ、おぉぉぉ……っ」
強烈な異物感が襲い、脂汗が滲み出てくる。その間も彼女は俺の口に割れ目を擦り付け、喉奥まで肉棒を咥えて夢中で貪っている。
「比企谷。おしおきをそろそろお終いにしようと思う」
先生が、ふっと緊張を解いた声で言う。
直後、竿の根本が強烈に締め付けられた。先生が2本の指、恐らく人差し指と親指で、ぎちっと締め付けている。
尻穴を犯している先生の指がくにくにと曲がり始め、身体に媚電が走る。先生は俺の反応を見て大丈夫と判断したのか、尻穴を嬲りながら肉竿を強烈に扱き始めた。竿をぎちぎちと扱き上げられる一方、何の打ち合わせもしていないというのに彼女は先生の意図を汲んで、竿から離れて亀頭をいやらしく舐め始める。
「ぐちゅじゅぽじゅるっ、じゅぷぷぷ……っ、じゅくぢゅりゅっじゅぽっ、じゅぷぢゅぷぢゅぷ……っ」
「うぅぅぅ……っ、うぅぅぅ……っ」
為す術もなく、ただただ限界が訪れるのを待つ。全身が痙攣して、呼吸が不規則になり、身体中から脂汗が噴き出ていた。
「ひくついているな、比企谷。思う存分出したまえ」
「ずじゅっ、ずろろ、ぢゅろろろろ……っ」

「おご……っ」
朦朧とした意識の中で、先生の指がアナルの更なる奥に侵入して、扱く指にぎりりと力を込め、彼女の唇が亀頭を強烈に吸い上げる。
――びくん、と身体が大きく跳ねると、下半身が決壊した。
「んぶぅぅっ！　おぶっ、ごくっ、んっく、おぐっ、んむふぅぅ……ごく、ごく、じゅるる、ごくっ……ふぅぅん……っ」
「まだだ、まだだぞ比企谷。ありったけ出しなさい」
彼女の舌は亀頭から噴き出す白濁を搾り取ろうと鈴口や雁首を舐り続け、先生の指はまるで乳搾りのように竿を扱き、尻穴に挿入した指もぐにぐにと内壁を抉り続ける。
下半身では恐ろしいことが起きているのに、視界が火照った牝肉で埋まっていて何も見えない。
「う……ぐ……っ」
呼吸が苦しかったのもあるかもしれないが、単純に疲労だったのだと思う。
不意に、視界がぐらりと揺らいだ。
「……む、比企谷、大丈夫か？」
「ぷはっ、あら、大丈夫？」
２人の心配する声が、まるで対岸のもののように遠のいていって……。
そのまま、俺の意識は暗転した。

×　×　×

「ん……っ」
目を覚ますと、頭が柔らかい感触に包まれていた。視線の先には、俺を心配そうに見つめている留美がいて、ぱちりと目が合った。
「八幡……良かった」
留美が聖母のように微笑み、俺の頭をくしゃりと撫でる。なんだろう、何か泣きそう。
「いやー、すまんな比企谷。まさかあそこまで疲れ果ててしまうとは」
「ごめんね～」
凶悪なアダルト組が謝ると、留美が目を細めてジト目で２人を睨

む。
「や、留美。うん、まあ、俺もその、な？」
「八幡は休んでて」
「ふぁい（はい）」
俺の鼻を摘まんで一睨み。うーん、尻に敷かれるかもしれない……。
「お兄ちゃん、さっき物理的に尻に敷かれてたよね？」
「俺の地の文をナチュラルに読むのをやめろ。ていうか、見たのか……」
小町の説明によると、俺が気絶した直後に他の皆が駆け付けたが、小町がこちらの様子を見るなり川崎・留美・折本の入室を止めた。俺を心配する留美や興味津々な折本、漂って来る匂いに顔を真っ赤にする川崎を廊下に置いて、残りの全員で大掃除をしたのだという。真っ先に窓が開けられたというから、笑うしかない。
「あ……」
さっき先生にされた行為を不意に思い出した。陰嚢の裏に、まだ違和感が残っている。
「お嫁に行けない……」
しくしくとすすり泣くように言うと、
「比企谷くん。わたしにも同じようなことをやったよね？　しかもたっぷりと」
冷たいツッコミが飛んできた。
「や、陽乃さんは何だかんだでドMなんで大丈夫かなって「何か言った？」何でもないですごめんなさい腹を切ると良いですかね」
怖い怖い怖い！　全部自業自得だけど！
身体を疲労感がどっと襲っていると、そっとおでこを撫でられた。見え上げると、留美が頬を赤らめている。
「八幡……死なないでいいよ。あと……私が、その、もらってあげるから……大丈夫」
たどたどしく告げられる言葉に、部屋がお花畑のような雰囲気になる。

「こんな純粋さ……私には……っ」
先生が打ちひしがれた顔をする。
「お兄ちゃん、今すぐ留美ちゃんをうちの一員にしよう。大丈夫、細かい手続きは後からどうとでもなるから」
小町が目をぴかぴかと光らせて息を荒げている。可愛かったもんね、今の留美。
「……私より、大きい……？」
雪乃が呟いて……って、あれ？　今そこに触れるの？
リビングの中がぎゃーぎゃーと大騒ぎになり、後で苦情が来ないかと心配する。
こんな可愛くて綺麗な女の子と、そういう関係になっているだなんて夢のようだ。まあ、全員が全員ではないんだけど。
気だるげに過ごしていた以前までの生活が思い出せないくらい騒がしい日々、というのも悪くはないのかもしれない。
「留美ちゃん。取り敢えず帰って荷物まとめようか。それで明日こっちにおいで！」
「え、え、え……八幡、良いの……？」
「一つ屋根の下だよ？　キスし放題だよ？」
「え、あ……っ」
「小町、あんまり留美を困らせるな」
「でれでれして頬が緩みっぱなしのくせに」
「うぐ……」
まあ、大変なことも多いけど。取り敢えず突然の同棲イベントは流石に回避しないといけない気がする。社会的にね。
――こんな感じで。
俺たちの日々は、緩やかに続く。
お終い。

折本かおりとの再会は、図らずも心根のわだかまりを溶かし行く。

（1）

高校2年生の春休み。

来年度からは受験の本番ということで、この休みは笑えるくらい大量の課題が出た。と言ってもそれらの質はきちんとしているので、自分の足りないところを見つける良い材料になる。修了式の後に奉仕部で軽く集まった際に課題の話が出ると、雪ノ下は「量は多いけどすぐ終わるわね」と平然と言ってのけ、由比ヶ浜は「一年くらいかかるかも……」などと言っていた。それ課題じゃなくて大学の卒業研究とかのレベルだぞ……。

修了式から数日経った、とある日のこと。時間帯は真昼間を少し過ぎた辺り。

朝から勉強していて、身体がばきばきに固まっていた為に身体のあちこちを伸ばす。

ぐいぐい。

こきっ。

ぱきぱき。

ぐいーん。

「んぐぐ……ふぅ」

伸ばしている間も呼吸を忘れず行いながら、上半身のあらゆる場所を伸ばす。何か飲もうかと思い立ち上がると、その瞬間膝や腰からぱきぱきぽきぽきと節が鳴る音が聞こえた。そういえば最近家の中以外の活動範囲を広げていないことに気付く。ＭＡＸコーヒーを買いだめしちゃったからなぁ……出掛ける理由が激減したんだよなぁ……。

同じ場所で勉強を続けるのが基本スタンスではあるが、それでも限度はある。同じ場所にいると同じ思考に陥りがちだし。

仕方ないか……と浅く息を吐きながら、外出用の服装にぱぱっと着

替える。近くのコンビニに行くだけの気の抜けた外出着なら小町は何も言わないのだが、こういう「軽く出かけます」感のある服だと目を細めてじっと見つめてきて、「……３５点。行ってらっしゃい」などと言う査定込みで送り出してくれる。つらい。出かける前に心をくじくのはちょっと止めてほしい。

鞄に勉強道具と癒し（ＭＡＸコーヒー）と夢（戸塚とのトーク履歴が入っているスマホ）を詰めて家を出る。近くの市立図書館で勉強してリフレッシュすることにした。

勉強するのにリフレッシュって何だそれと思うかもしれないが、受験生のように勉強が日常生活の一部と化している者にとって、こなすのにちょっとわくわくする参考書とかがあったりする。この感覚で「どこそこで勉強する」ということ自体に曖昧模糊とした楽しみを抱くことがあるのだ。

人によってはその場所に向かうまでに音楽を聴いたり、景色を眺めることに楽しみを抱くこともあるだろう。勉強する内容、勉強する場所、場所に向かう道中。あらゆる「ちょっとした変化」が、長く続く受験生活のストレスやモチベーションの低下を和らげるのだ。仕事塗れの中で何とか取った休暇で旅行に行くのと同じ感覚かもしれない。例えが生々しいのは社畜の両親のせいだきっと。

そんなことを考えている内に、近くの市立図書館へ着いた。

３階建ての建物で、俺が小学生の頃に初めて来た頃より若干建物が古びていて、時間の流れを感じた。

図書館とは言っても他の施設も合わさっており、１階は小さめの図書館、カフェ、婦人会などが利用する講堂がある。入口すぐのホワイトボードには今月の予定表が書かれており、何日の何時からどの団体が使用するかどうかが書かれている。昔ながらの、地域に馴染んだ図書館という感じだ。

春を前にしてもまだ寒い日が続いていてコートを羽織ってきたが、図書館の中は満遍なく暖房が効いていて、入って間もなくしてコートを脱いだ。

２階に上がり、学習室に向かう。俺と同じく勉強に励む高校生に混

じって、ちらほらと中　学生も勉強していた。
同じ中学だった連中と顔を合わせるかもと思ったが、学習室の中はカリカリとシャーペンをノートの上に走らせる音と、ページを捲る音しか聞こえない。皆集中していて、例え顔を覚えている人がいても互いに気付かなそうだった。
まずは1時間くらい集中してやるか……と意気込んで、奥まった席の一つに腰を下ろすと。
「……あれ、比企谷？」
「……おお」
――折本かおりとの再会に、驚きで反応の遅れた声を漏らした。
×　×　×
折本と顔を合わせて、挨拶のみでそのまま勉強を始めることも出来ず、かと言って席を替えるだなんて気まずい選択肢も取れなかった。鞄を机の横に置いてさてどうするかと悩む素振りを見せると、折本は周りに視線を巡らせ、学習室の出口を人差し指でちょいちょいと差した。
2階の、階段のすぐ前にベンチが置いてある休憩スペースに座る。なるべく距離を空けて座ろうとしたが、折本はごく自然に距離を縮めてきた。俺が遠ざかっても同様に距離を縮められて、最終的に俺がベンチからずり落ちるのが目に見えていたので、変な手汗をかきながらも最初に座った位置に留まった。
隣の折本をちらりと見る。ライトグレーのトップスに、活発な印象を受けるジーンズ。薄着なのを見ると、コートを羽織ってここまで来たのだろう。パーマでくしゅくしゅっとした黒髪は春に合わせてなのか、以前会った時より短く切られていた。
「久しぶりー。バレンタインイベント以来だっけ？」
「……そうだな」
「なに緊張してんの？　ウケるんだけど」
「……いや、別にウケねーけど」
俺の緊張を見透かした折本が、何の悪意もない笑みを浮かべる。その笑顔の表裏の無さに、不意の再会に対する緊張が和らいだ。

……しかし、それにしても……。
「……ねえ、比企谷。なんか本当に緊張してない？　大丈夫？」
以前会った時よりも妙な強張り方をしている俺を見て、折本が本当に心配し始めている。俺も俺で何でここまで緊張しているのかと、過去と現在の状況を照合して原因を探る。
「……あー、ほら、クリスマスイベントの時は一時期毎日顔を合わせてただろ。そんでバレンタインイベントの時も、基本的に同じ空間に誰かいた訳だ。サシで話した時も自転車で移動中だったしな。だからこうやって、久しぶりに会う上にサシで面と向かって話すって状況が、その、アレなんだ」
考えを一気に捲し立てると、折本はきょとんした表情で目をぱちくりさせ、やがてけらけらと笑った。
「なにそれ、分析半端ないじゃん。ウケるんだけど」
「いや、ウケねーよ……必死なんだよこっちは……」
俺の言葉に、折本は笑うのをやめ、じっとこちらを見つめる。まるで品定めでも行うような目に、居心地の悪さを感じて身を捩らせた。
「……なんだよ」
「ん、もうちょっと気楽に話してもらいたいとこなんだけど」
「……それは難易度が高いってほぅんっ!?」
唐突に。
折本が、俺の脇腹を人差し指でつんとつついた。
抜群に気持ち悪い声を上げると、折本は身体を折り曲げて悶絶した。身体をぷるぷる震わせながら、ベンチをぺちぺちと叩いている。
「くっ……ふふっ……あー、やばい、比企谷、良い、今のマジで良い。超ウケる」
「ウケねぇよ……恥ずかし過ぎて死にそうだっつの……」
顔が熱くなっているのを感じて俯いていると、折本がゆっくりと身体を起こした。目元の涙を拭っている。どんだけ笑ったんだよ……。
「ごめんごめん。比企谷の緊張を解せるかなって思ってやってみたんだけど……あー、何その声。もうおかしくておかしくて……ぷっ、くく……っ」

「お前な……」
笑って顔を背け、尚も身体を震わせる折本を見て、呆れの嘆息を漏らした。
――とは言え、折本の今の行為が何の意味も無かったかと言えば、意外とそうでもない。
何とも締まらないやりとりを経て、折本に対する緊張がかなり解れた気がした。
まあ、今日別れたら次はいつ会うかも分からない程度の関係だ。旅の恥はかき捨てとも言うし、あまり気にしないようにしよう。近くの図書館まで行くのを旅と呼ぶのは中々ひどいが。
……そんな風に、思っていたんだけども。
意外と、そうはならなかった。

続く。

（2）

折本かおりと久しぶりに出会ったのは、近所にある市立図書館だった。何てことの無い場所に、何てことの無い思い出しかない、自分にとって平凡な場所。

高校生にもなって、新たな思い出が刻まれるような場所ではない。精々「ああ、あの夏休みはちょこちょこ勉強しに通ってたな。あの休憩所でよくＭＡＸコーヒーを飲んでたっけ」などと思える程度だろう。カフェに通うなんていう小洒落た発想は無い俺である。

しかし、そんな場所で、折本と再会した。それも、会って会釈してはい終わりという展開ではなく、こんな風にベンチに並んで喋るだなんて。中学の時の俺が今の俺を見たら何て言うだろう。今の俺よりも卑屈かつ純情な中学生八幡（ひどい言い方だ）なので、「取り敢えず逃げろ！」などと言うかもしれない。

実際、俺は折本とサシで会って、「さあ話そう」と言う状況になった瞬間に思い切り緊張してしまった。がちがちに強張ってしまった。

けれど、折本はしょうもない悪戯をすることで、それを解いてくれた。

何てことは無い、それだけの話。

心の距離が近付いたような、錯覚と呼ぶにも馬鹿馬鹿しい錯覚。

それだけの話。

……に、なると思ったんだけども。

×　×　×

「比企谷、じゃ、戻ろっか」

「おお、じゃあな」

「え、今来たとこでしょ？　帰るの？」

「んー、あー、まあ、そんな感じか」

「なんで？　ウケるんだけど」

「いや、ウケねーよ……」

さりげなく帰ろうとしたら、ウケるの一言で一蹴されてしまった。汎用性広すぎませんかねぇ……。

折本はすっくと立ち上がると、スカートをぱたぱたと軽くはたき、とことこと歩き出した。
「ほら、行こうよ」
「お、おお、おう」
オットセイみたいな返事をしたら、折本は口に手を当ててくすりと微笑み、「ウケるんだけど」と小声で呟いた。柔らかな表情に心臓がとくんと跳ねた気がするが、こんなものは超短期的なものに過ぎないだろう。だって目の前で日岡なつみを見たら絶対同じ気持ちになるもの。やべえ、考えたらどきどきしてきた……。
妄想を膨らませて折本を待たせていては元も子も無いので、そそくさと立ち上がり折本に付いていく。
中学の時、折本とこんな風に話したことはあったかとふと思う。
――全く思い出せなかった。ずっと、遠くから、近くから、見ているばかりだった。
今は誰にも抱いていないはずの、恋慕の情。
あの時の気持ちがどれだけ安易なものであったとしても、彼女の表情や言葉があの時の自分の心根に確かに息づいていた。
それを恋と呼んでも良いのかは、今でも分からない。きっとこの先も分からないかもしれない。全ては終わったことなのだから。
――心の中にあの時の自分を思い浮かべてぐるぐる考え込んでいられたのは、学習室に再び入るまでだった。

× × ×

人目を気にする時というのは、大抵の場合今の自分にプラスなりマイナスの面なりで出っ張った部分があり、且つそれを跳ね除けるだけの気概が無い場合だと思う。
どれだけ奇抜な髪型やファッションをしていようと、どれだけ異性の目を惹く整った顔立ちをしていようと、自分は自分だと自信を持っている人。こういう人はまるで人目を気にせず堂々と振る舞える。しかし、そういった自信が無い人はちょっとでも見た目で冒険すると「笑われてないかな……」なんて思ってしまうし、あるいは何の冒険もしていなくても「こんなにおどおどしてたら馬鹿にされるよな……」

などと卑屈に考えてしまう人もいるだろう。
これ以外で人目を気にしない場合というのは、プラスにもマイナスにも何の出っ張りもない、平々凡々であるということを自覚している時であろう。
見た目も、雰囲気も、表情も。
どこの街にも、どこの町にもいるような、平凡な人。
ゲームなら村人Ａなどと名前を付けられて「この道の先に村長の家があるぞ」などと決められた台詞しか言わないようなキャラクター。
俺は、一人で居る時は後者として振る舞っている。目立ちたくないし、そもそも目立てない。俺くらいの身長のやつも、俺くらい猫背の奴も、どこにだっている。俺くらい目が腐っているやつは見たことはないが（嗜好が腐っている女子なら見たことがある）、すれ違った人の目をよく見て「うわ、あいつ目が腐ってる。写メってツイートして拡散だ！　炎上だ！」なんてアグレッシブなことをするやつはそうそういないだろう。そういった笑えるくらいアレなやつは世の中に一定数いるが、短い一生を生きている中でエンカウントする率は高くない。経験値のないはぐれメタルくらいに思えば良い。やだ、出くわす意味無い……。
――と、まあ。
長々と語った訳ですけども。
これはあくまで、「一人で」動いている時の話だ。
これが、一緒に居る人という外的要因があると、途端にそうもいかなくなる。
小町と歩いている時は「どうだ、俺の妹は世界一可愛いだろう。見ろ、けどあまり近付くな。特に男子、特に大志は近付くな」と堂々とした態度でいられるのだけれど、奉仕部の面々なんかと歩くことがあるとまあ緊張する。本当に緊張する。「なんでお前なんかと……」と俺を射殺さんばかりの視線を沢山プレゼントしてもらえる。嬉しくて胃に穴が空きそうだ。
――と、またしても長々と前置きをしてしまったが。
要するに。

『……』

周りの視線が、痛い。

「……」

……。

学習室の端にいて、左側と後ろは壁なのだが、右側と正面からちりちりとした視線の圧力を感じる。熱い、痛い……。

そもそも、俺は久しぶりに折本と会ったということで気持ちが浮ついていたのかもしれない。

だから、学習室に一緒に入った時、周りから「可愛い女子と一緒に入ってきた腐り目のアンデッドくん」と思われかねないという懸念がすっかり抜けていた。

もしも室内にいる中高生がみんな集中していたら、そんなことは無かったのかもしれない。

けれど、さっき俺が一人で入った時とは違い、今はちょうど大多数の生徒が休憩をしようとしているのか背伸びをしたりスマホをいじったりと、気を緩めている所だった。

入った瞬間、数多の視線を感じて「しまった」とは思った。けれど、この時点でならまだ「たまたま同じタイミングでこの部屋に入ってきた赤の他人」という演出も出来ただろう。

しかし折本はそんなことは気にする訳もなく、室内に入って学習机の間を歩く時、一瞬だけ俺と横並びになった。しかも小声で「比企谷、勉強教えてよ」と囁いて、ぱちんとウインクしたのだ。その僅かな挙動が、俺に微かな動揺と、周りの飢えた男子どもに嫉妬の炎を付けたようだ。

おかげで今は、おでこと右脇腹の辺りが焼けて穴が空きそうだ。機械を使わずに火を起こす時のやり方で、きりきりと抉られるような、そんな感覚。

「……」

ちらりと隣を見る。

……奉仕部という環境で、雪ノ下雪乃・由比ヶ浜結衣という、タイプの違う魅力的な二人とずっと接していて、すっかり感覚が麻痺して

いたのかもしれないが、折本は折本であの２人とは違う確かな魅力がある。
気取らない距離感を持ち、誰とでも分け隔てなく接する人柄と。
「この人に近付きたい」と思わせる、さばさばしつつも人懐こい顔立ちと表情。
ああ、そりゃあ惚れるわ、当時の俺……と、気が付けばしばらくの間、折本の横顔を見ていた。
「……比企谷」
「あ、え、おう？　どうした？」
真剣な表情で視線をノートに落としてシャーペンを走らせたまま、折本が話しかけてきた。昼寝から覚めたような素っ頓狂な声を出してしまう。
「……見すぎ」
「え、あ……うひゃえおぅっ!?」
脇腹を突かれた。
人生でワーストと言っても差し支えないくらいの気持ち悪い声が出た。しかも、静か極まりない学習室内で。
『……』
周りからの視線に、今度は女子の「何あいつ気持ち悪い」という素敵すぎる嫌悪の情が乗っかった。視線が脇腹を貫通しそう。
ふと横を見る。
折本が、ノートに顔を突っ伏してお腹を抱えてぷるぷるしていた。
こんにゃろう……。
「……おい」
「……ぷっ、くく、ごめん……。でもなに今の声……超ウケる……ぷくく、やば……っ」
悶絶していらっしゃる。ノートの上でパーマのかかった黒髪がわしゃわしゃと揺れている。何かワカメみたいだ。
頭をがしがしと掻いて、ふと思う。
……帰って、布団の中に籠りてぇ……。

続く。

（3）

市立図書館で折本と出くわし、成り行きのままに隣同士で勉強を始める。

ここまでは動揺しっぱなしだったが、何だかんだで勉強を始めれば、すぐに関係なくなるだろう。

「比企谷、何を勉強すんの？」

折本がぽそりと囁く。小声で話しているため自然と顔が近付き、甘さと清涼感の混じった香りがした。折本の性格をよく表しているような、そんな匂い。

「……まあ、ちょっと、古文をな」

顔を逸らしながら答えると、折本が自分の鞄をごそごそとし始めた。

「そっか。じゃああたしも古文やろっと」

「……え？」

思わず素になって発した言葉に、折本はきょとんとした。

「教えてもらおうかと思ったんだけど……だめ？」

小首を傾げる様が可愛い。媚を売る気など毛ほども無い、純粋な疑問を浮かべた顔。

……しかし。

「……や、わざわざ俺に教わらなくても良いだろ」

本音を口にすると、折本は更に首を傾げる。疑問のレベルが上がったんだろうか。

「だって、比企谷総武高でしょ？　絶対うちの高校の人より頭良いじゃん」

「ぬぐ……っ」

お世辞でも何でもない、もしかしたら褒め言葉でさえない、純粋無垢なる事実報告。受け流しも出来ない言葉をもろに受けて、顔が仄かに熱くなる。

折本は俺の反応に気付くことなく言葉を続ける。

「だからさ、ちょっとだけでも良いから教えてほしいんだけど」

「……まあ、良いけど」
「やった！　ありがと」
「お、おい……」
　折本の声が微かに大きくなり、周りの視線が刺さる。嫌悪の視線が全て俺に刺さってるのは気のせいなんですかね。
「あ……ごめん」
　周りの様子に気付き、折本が口元を手で覆う。目だけ動かして辺りを窺い、元の空気に戻ると口を覆っていた手で拝むようなポーズをとり、片目を瞑りながら「ごめんごめん」と無言で謝ってきた。愛嬌のある仕草に顔を背けると、折本がくすりと笑う声がした。
「……なんだよ」
「別に？　なんでも」
　そう言ってにこやかに微笑まれては、もはや何も追求しようがない。
　むずむずする気持ちを抱えたまま、古文の問題集を開いた。

×　×　×

　しばらく集中して問題を解き終わると、答え合わせに入る。解説を読みながら分からなかった所を潰していると、左の二の腕をつんつんとつつかれた。心の奥にぽっと火が点いたのを感じながら顔を向けると、折本がさっきと同じように、片目を瞑りながら右手で拝むポーズをとっていた。
「どうした」
「比企谷、ここなんだけどさ……」
　言って、折本が自分の教科書とノートを2人の机の間に滑らせる。俺も覗き込んだため、2人の顔が一気に寄ってしまった。
「ここの文なんだけど、授業の解説聞いてもいまいち分かんなかったんだよね。……比企谷？　おーい？」
「お、おう、どうしたどうした」
「どうしたのは比企谷でしょ。ウケるんだけど」
「今のは……ああ、ウケるな……」
　横顔にちょっと見惚れてたなんて絶対言えない。

折本の横顔に固定されていた視線を下ろすと、白く細い指はまだ、折本が分からないと言っている文を指差していた。視界を広げて文全体を眺めると、あることに気付く。
「あー、教科書同じなんだな」
「あ、そうなんだ」
「うちの方がもうちょっと進んでるだけだな。この作品も授業でやったわ」
「あ、それなら話が早い」
折本が嬉しそうに笑みを浮かべる。段々と周りの視線が気にならなくなってきた。
「これは確か……あー、この文だけというかこの作品自体、時代背景が分かってないと直訳してもぴんとこないやつだな」
「え、そうなの？」
「ああ、英文でもたまにあるだろ。文法とか単語が分かってて訳しても、いまいちしっくりこないやつ」
「あ、うんうん、あるある」
「そういうのは大抵、時代背景だったり文化的背景だったりってのを知らないとぴんと来ないことがある」
「ふんふん」
「ちょっと脱線して例を挙げても良いか？」
「ああ、うん。全然良いよ。ありがと」
「うし。例えば英文だったら、たまに会話の中にジョークとかが混じるよな」
「うん」
「そういう時、それをそのまま訳すと『……はい？』となってしまうことがよくある」
「あー、分かるかも」
「そんな時は、そこは飛ばして良い。日本人の『あー、死にたい……』って言葉が外国人にはいまいちピンとこないように、そもそも気質が違っているからその冗談を理解出来ない場合が多いからな。問題に関係しない所がほとんどだろうから、『あ、これはジョークだな。適当

に流そう』くらいに思っていい」
「ふんふん」
「だけど、古文とか漢文に関してはそうもいかない。作品が描写してる時代ごとの時代背景・文化・恋愛観なんてのをざっくりとでも知ってるだけで、知らない人とかなりの差がつく」
「へえー。……恋愛……」
「……まあ、あれだ。平安時代の恋愛なんて、今の時代からは考えられないだろう。顔も見ないうちに歌を詠んで手紙を送って、それに返事の歌を詠んだりするんだぞ」
「ネットで知り合った、顔を見たこと無い人と文通する感じ？」
「あれ、近い例があった……まあいいか。とにかく、当時の雰囲気を掴んでおくだけでもかなり違う。現代文なら普通に読むだけで情景が大体イメージ出来るけど、古文や漢文は中々イメージしづらいからな。風呂は三日に一回しか入らないのもあって香水がどぎつかったりとか、化粧で顔が真っ白になってて夜に廊下で女性とすれ違うと真っ白な顔が浮かんで見えるとか、そんなことを知ってるだけでも勝手が違う」
「なんで具体例がそれなの？」
「……面白かったから……」
「あ、うん、何かごめん」
「謝るなっての。取り敢えず、こんなとこだな。この文の意味をピンポイントで教えるだけならこの場でも出来るけど、もっときちんと意味を理解しようとするなら結構時間が必要だぞ」
「そうなんだ……うーん、どうしよっかな……あ」
　折本が何か閃いた顔をした。あれ、なんか心臓に悪いことが起きそう。
「……比企谷、お願いがあるんだけど」
「な、なに」
　期待に目を輝かせた折本から全力で顔を逸らす。
「あたし、今日はもう少ししたら用事で帰んなきゃなんないんだ。……だから、明日もさ、ここで教え――」

「断る」
「……そっか」
「うぐ……」
即座に断ったものの、しゅん……と落ち込む折本の様子に、何も言えなくなる。
どうしよう、どうする、俺。
ここで断るのは簡単だ。別に明日以降会う訳でもないし。
しかし、それでも、どうしても。
心にしこりが残る気がする。
何をそんなに気にする必要がある、と訴えかける自分がいる。
いやいや、ここは気にして然るべきだろう、と訴えかける自分がいる。
時間にすればほんの数秒。
ありったけ、迷うだけ迷った。
――その結果。
「……まあ、明日だけなら、良いぞ」
受け入れることにした。
俺の言葉に折本は目をぱちくりさせ、頬を緩めた。柔らかな笑みを見ると、中学の頃と同じ感情を醸成してしまいそうで怖くなる。
「ありがと。じゃ、ＬＩＮＥ交換しよ？」
「え」
「あたしの連絡先知らないでしょ？」
言われて、記憶の中を探る。
「……そう言えば」
「なんでそこ曖昧なの？　ウケるんだけど」
「いや、ウケねーから」
折本が笑いながらスマホを取り出す。同じようにスマホを取り出そうとしてポケットに突っ込んだ手が、僅かに震えている気がした。
別に、なんてことはない。
かつて自分が恋をした相手と、たまたま出くわして。
その人と一緒に勉強をして。

連絡先を交換して、次の日も会うことになって。
――こんなイベント、中学の時の俺だったらさぞや浮かれたことだろう。
けれどあれからもう3年近く経つ。俺だって色々経験した。だから、こんなことで浮かれたりしない。
まだどこで教えるかも決まっていないけど、きっとそれを終えれば、またいつも通りの生活に戻るだろう。
それだけの話。
ただ、それだけの話だ。
――それだけの話、のはずなんだけども。
「ふるふるでいっか。えーっと……あれ、何か知らない人が出てきた。ウケるんだけど」
「これはまあまあウケるな……」
目の前で無邪気に笑う折本は、あの頃のままで、どうしても心が揺らいでしまう。
変わらなく見えるのは、きちんと成長して変わっているからそう見えるらしい。成長しないで本当に変わらないでいた人は、傍から見れば変わり果てて見えてしまうそうだ。
ならば、目の前にいる、この折本かおりという女性は――変わったのだろうか。高校生活という目まぐるしい日々の中で、少しずつ成長してきたのだろうか。
もう少し、話してみるのも悪くない――そんな風に思いながら、お互いのＩＤを交換した。
難しくは考えなくていいだろう。
縁が無ければ、明日で終わる。
もう少し縁があっても、もう数回会う程度だろう。
だから、気楽に行こう。
「比企谷、何笑ってんの？」
「あれ、笑ってたか。わりいな、気持ち悪かったろ」
「別に？　気持ち悪くなんてないって。ただちょっと意外だったなーって」

「……そうか」
「うん、そうそう」
２人の間に流れる空気が、あの頃とは少し違うことに、折本は気付いているだろうか。それともこの変化は、俺が一方的に感じているだけなんだろうか。
なんだかおかしなことになったな……と思いながらも、俺と折本は連絡先を無事に交換し終えた。
目の前の折本から、さっそくメッセージが届く。
『よろしくー』
さっぱりしているにも程があるメッセージにくすりと笑う。
適当なスタンプを返すと、折本がくくっと笑った。
気が付けば、周りの視線など全く気にならなくなっていた。
続く。

（４）

連絡先を交換してから３０分もすると、折本は用事がある為に帰り支度を始めた。

「じゃ、また明日ね」

耳元でぽそりと囁かれて、微かに耳をくすぐる吐息にそわそわした。耳をさすりながら折本が学習室を出て行くのを見送ると、再び視線をノートに落として勉強を始めた。

そこから、実際の時間にすれば――１時間。いや、３０分。いや、１５分くらい経っただろうか。

思いの外、集中出来ていないことに気付いた。

気分を変えようと英語の長文問題を解いていたが、まるで頭に入ってこない。目だけは長文をするすると追っていくが、全く解釈出来ていない。思考を伴わない視線が文字の上を滑っていくばかりだ。

左をちらりと見れば、誰もいない。新たに学習室に入ってくる人はいるが、俺の隣は空いたままだ。

――自分に話しかける人がいない方が集中出来る。

そんな、当たり前を通り越して空気同然に自分の身体に染み込んでいるはずの常識が、今だけはどうしたことか全く通用しない。

……帰るか。

ふっ、と小さく息を吐いて、勉強道具をしまう。

集中出来ないなら、場所を変えれば良い。

ただそれだけの話だ。

×　×　×

市立図書館からの帰り道。

のろのろと歩いていると、目の前を猫が横切った。黒くて小柄な、どことなく芯の強さを感じるような目をした猫。

「なー」

細い声で鳴いたかと思うと、俺の足の横にぴったりと付いてきた。踝の辺りでさわさわとくすぐったい感触がする。足を止めて、ポケットに手を突っ込んだままじっと見つめていると、俺の足にすりすりと

顔をこすり付けて、気持ち良さそうに目を細めた。
「……ほれほれ」
身体を屈めて顎の下を撫でてみると、まるで温泉にでも入ったかのような表情になる。猫にしては随分人間くさいな……と思いながら微笑ましく思っていると、やがて飽きたのか俺の下からするりと離れて、振り向いて俺を一瞥すると何事もなかったかのように去ってしまった。
懐っこく近付いて、飄々とさっていく黒猫。
その後ろ姿に、どことなく、さっきまで一緒にいた人を重ねた。
「……まだ寒いな」
まだまだ明るいが、時折吹く風はまだ冬の気配が微かに残っている。
ぶるっと震えて肩を竦めながら、少しばかり歩を速めた。

× × ×

「ただいま」
家に戻って声を発してみたものの、何の反応もない。両親は社畜っているので（社畜るという動詞はぜひ今後も使っていきたいところだ。誰も幸せにならないけど）、いるとした小町だけなんだけど……出掛けたのだろうか。
誰もいないよな……と思ってリビングに行くと、一人と一匹がじゃれあっていた。
「にゃははー！　どうだ、ほーらほら、ええのんかー？　こういうのがええのんかー？」
「なー」
「ほれほれ～、どうじゃどうじゃ～、大人しく小町の言うことを聞くのじゃ～」
「なー」
「どうじゃー、眠くなってきたじゃろう？　起きた時には完全に堕ちておるからな……ほっほっほ～」
「なー」
「……何やってんだ」

小町が愛猫のカマクラをもふもふわしゃわしゃと愛でまくって、ふてぶてしい態度と図体のカマクラが目を細めてうっとりとしていた。うちの妹ったらテクニシャンなんですね。

呆れ果てた俺の声にぴくりと反応して、仰向けになってカマクラを上に掲げたまま小町がくりんと顔を向けた。

「ありゃ、お兄ちゃん早かったね。あとなんで逆さなの？」

「さあ、重力の向きが急に逆転したんじゃねえか」

「あー、それは一大事だ―」

実があるかどうか聞かれたら一切無いと自信を持って言える会話をしながら、何とはなしにリビングのソファに腰を下ろす。小町は時期的にもうじき片すであろう炬燵から下半身を出して脱こたつむりになると、カマクラを抱えたまま俺の隣に腰を下ろした。

小町はカマクラの前足を掴んでぶんぶん振り回して「いけー！　悪を滅ぼせー！」と小声で呟いている。こたつの上には勉強道具が広がっているので、休憩がてら思い切りばかなことをやっているんだろう。思い切りばかなことを。……思い切り、ばかなことを。

小町がこちらを向いて、くりんと首を傾げた。茶番の気配。

「お兄ちゃんお兄ちゃん、世界で一番可愛い猫はどの子？」

「え、何このおとぎ話みたいな質問？　……まあ、カマクラでいいんじゃねえの」

「うーん、惜しい！　そこは『カマクラ【が】良い』って言わなきゃ！」

「心にもないことを言うのは大変なんだよ」

「じゃあじゃあ、世界で一番可愛い妹はだー「小町」早すぎて引くよお兄ちゃん……」

カマクラの前足が小町の手により交差する。「アウトー！」と言いたいらしい。カマクラは何をされても「なー」しか言っていない。眠たくてしょうがないようだ。

小町は会話に一瞬で飽きたのか、「そうだねー、お兄ちゃんには小町しかいないもんねー」と若干怖くて悲しいことを呟きながらカマクラのお腹を揉んでいる。やだ、もみくちゃにされてるわこの子……とっても気持ち良さそう……。

勉強するまで後５～１０分だけぽけっとしておこうと思っていたら、小町が俺の顔をじっと覗き込んで来た。
「どうした」
「んや……お兄ちゃん、何かあったのかなーって」
「……別に、いつも通りだって」
誤魔化すように小町の頭をくしゃりと撫でる。こういう時の妹の鋭さは尋常ではない。小町は気持ち良さそうに目を細めながら柔らかく微笑んだ。
「お兄ちゃんのちょっとした変化にも気付けるのが小町だからね！」
「おお、すげえ、流石世界一可愛い妹」
「特に女の気配には敏感だよ！」
「前言撤回していい？」
急に怖いことを言い始めたよこの子。元気に喋る度にカマクラの前足をぶん回すのはやめてくれないでしょうか。
小町はやれやれと、こちらを馬鹿にする気全開の呆れ顔で肩を竦めた。
「お兄ちゃんは攻略難易度ＭＡＸのヒロインだからねー。せっかく周りに素敵な人が沢山いるのにもったいない……」
「難易度ＭＡＸな上にヒロインなのか、俺」
「うん、だって主人公って感じじゃないでしょ？」
「でも、基本俺の一人称で物語は進むんだぞ」
「お兄ちゃん、それアウトだよ。もしもう一度、今みたいにメタいことを言ったら……」
「……言ったら？」
「もいだ」
「もいだ!?」
もいだの!?　完了形!?　あれ、付いてるけど!?
「いつからもがれていないと錯覚していた？」
「え、なに、今の俺のアレって幻なの？」
「あれだよ。遠くの星が発する光を地球で目にするのに何百年もかかる場合があるから、もうその星が実際は無くなっていたとしても、

こっちから見てる分には元気に光ってるみたいなパターンだよ」
「俺のアレを超新星爆発と一緒にするのは何か申し訳ないんだけど」
「だから、触ってみたらお兄ちゃんのアレはもうないんだよ」
「マジで？　どれ……」
「通報した」
「え、ちょっと待ってそんな躊躇無しで兄を法の下に裁こうとしてるの？」
「いつから小町は通報していないと錯覚していた？」
「気に入りすぎだろその言い方」
　最近になって友達からマンガを借りて読んでハマったパターンだろうか。俺も詠唱無しで川崎大志に黒棺を使ってみたい。
　兄妹で抜群にくだらないやりとりをしていると、スマホの通知音が鳴った。
「お、迷惑メール？」
「その前提おかしくない？　まずＬＩＮＥだし」
「そっかー、ＬＩＮＥのＩＤがネット掲示板に晒されるって大変だねお兄ちゃん。でもそんな惨めなお兄ちゃんでも小町は応援してるよ！」
「勝手に俺を加速度的に可哀想な奴に仕立て上げるのをやめろ……」
　げんなりしながらアプリを開くと、そこには「折本かおり」の文字が表示されていた。
「……そろそろ部屋に戻るわ」
「……ほほう？」
　愛しの妹が随分とゲスい反応をしたので、両手で髪の毛がぼさぼさになるくらいわしゃわしゃと頭を撫でてリビングを出た。「にゃー！　頭が爆発したー！」と小町が悲痛な叫びを上げているが、まあ自業自得だろう。
　どんなメッセージが来ているのかと妙に興奮しながら、自室に入って念の為鍵を閉めた。

　続く。

（5）

自室に入って、意味もなくドアの鍵を閉める。何でかは分からないが、ほとんど無意識に指が動いていた。

開きっぱなしのＬＩＮＥの画面には、折本かおりの文字が表示されている。メッセージが1件入っていた。

ごくりと息を呑んで、トーク画面を開く。

『うっす』

全身の力が抜けた。

危うく膝から崩れ落ちる所だった。

何この女っ気のない挨拶……俺の緊張を返せよ……。

そうは思いながらも、

『うっす』

何となく、そのまま返す。

俺の返信は数分遅れだったが、すぐに既読が付いた。

『この挨拶、比企谷っぽいと思ったんだけど、違った？』

なんでこいつ俺の真似をしようとしたの。

『すげえ、俺が俺自身を見るとこんなにも力が抜けるのか』

『何それウケる』

『ウケねえよ』

『あのさ』

『なに』

『電話していい？』

はい？

『け』

『け？』

『間違えた』

『何と間違えたの』

『何でもない』

「え」と入力しようとしたが、動揺しすぎてフリック入力でおかしなミスをしてしまった。

こほんこほんと咳払いをして気を落ち着かせる。面と向かって話す時と違って、ＬＩＮＥのトークをする分には俺の動揺も悟られな……悟られるか。訳分からん誤字もやらかしてるし。
『それじゃ、電話していい？』
『え、ちょっと』
俺の返信に既読が付いた直後、聞き慣れないＬＩＮＥの着信音が鳴り始めた。わたわたと慌てたが、ここで出ないのもどうかと思い、迷った末にベッドに座って電話に出た。
「出ないかと思った。うっす」
「迷ったけどな。うっす」
なんか定例の挨拶になってしまっている。
「あはは、まさか比企谷と電話する日が来るとはねー」
「……本当にまさかだっての。何で電話なんだ？」
俺の問いに、受話器の奥が一瞬静まる。
互いの部屋の無音を数秒だけ交わし合ったところで、
「ん、何となく」
と、折本のどこか含みのある明るい声が聞こえた。今の間は何だったんだとか、今の声音が少し不自然だったとか、色々思う所はあったけれど。それを追求してもお互い楽しくなさそうなのでやめておいた。
「ん、そか。で、何の用事なんだ？」
「あ、そうそう。明日のこと」
「何時に市立図書館で落ち合うか決めようって話か」
「ん。それなんだけど、他の場所でもよくない？」
「え……」
「あ、ごめん。いやだった？」
渋る俺の声から心情を察したにしては、妙にあっさりとした声音で聞かれた。
さらりとこんなことを言えるやつだったな……と、ふと中学の時のことを思い出した。
「あー、いやってことはないんだけど。変に洒落た場所に連れて行か

れたら疲れそうっていうか……」
「あはは。何、そんなこと考えてたの？　ちょっと行ってみたいなって思ってたカフェがあるから、そこでどうかなって思って。そんな敷居高くないから大丈夫だって」
「一般の高校生女子と俺の感覚を同列に考えるなよ……絶対敷居高いって……お前みたいにきらきら系のＪＫがうろうろしてんだろ……」
　どんよりとした曇り空を想起させる暗い声で言うと、電話の向こうでからからと明るい笑い声がした。俺が作った曇り空をさらりと霧散させてしまう明るさが、胸の奥の懐かしい感情をくすぐった。
「あはははは……ぷっ、くく、あー……もう、比企谷最高だわ。どんだけひねくれてんの」
「いや、俺がひねくれてる訳じゃない。この世界がそもそも間違ってるんだ」
「あー、そうかもね。じゃあ明日９時半に駅前で良い？」
「なあ話聞いてた？」
「ぶっ……くくく……っ」
　またしても笑い声。腹を抱えて笑い声を堪えているのが目に浮かぶ。
「いいからいいから。気楽にやろ？」
「いや、本当に気楽にやるんなら市立図書館で……」
「それじゃ、明日もよろしくね。おやすみ！」
「あ、おい」
　電話が切れた。
「……なんなんだ……」
　あいつってこんな強引な誘い方をするやつだったっけ……と思ったが、そもそも中学の時はそんな誘いを受ける関係ではなかった。
　それが今日の再会で、一気に変わった気がする。
　何が起きるか分かんないもんだな……と思いながら、明日教えるのに必要な準備を始めた。

×　×　×

約束の時刻より少し前の、９時１０分。
予定より幾分早く着いてしまったのは、まるでデートか何かと勘違いしてしまいそうな状況に緊張していたが故だろう。折本が来るまでまだ時間はあるし、緊張を解す目的も兼ねて立ったまま読書をすることにする。こういう時文庫本は軽くて重宝する。ブックカバーを付けているので、何を読んでいても行き交う人の視線を気にすることもない。書店でブックカバーを付ける人は若者、特にラノベを買う人に多いと聞いたことがあるが、今の自分の状況を鑑みると妙に納得してしまった。
これならあと２０分は余裕で時間を潰せるだろう……と思い、数ページ程読んで本の世界に没入しかかったところで。
「うっす」
「んぼほぁっ!?」
後ろから脇腹を突かれて、抜群に気持ち悪い声を上げてしまった。さっきまで気にならなかった他人の視線が一気に突き刺さる。「何だろうあのキモい人？」って感じで小さな女の子が首を傾げてるのがつらい。その子を守ろうと抱きしめるお母さんの視線がまたきつい。
脇腹をさすりながら後ろを振り返ると、
「……うっす」
今しがた自分がされたことに対する恨みも忘れて、普通の挨拶をしてしまった。
折本は、青みがかったブラウスとジーンズというシンプルな格好だった。女の子らしさはあまり無く、それが彼女の魅力を引き立てているように思える。ごてごてしたのは似合わないということを自分で分かっているようで、こういったさばさばした格好が折本にはよく合うのだと分かった。
「……見すぎだって」
「あ、え？　あ、おお、すまん」
気付いたらじっくり見てしまっていたようで、慌てて謝る。最初から最悪の印象でスタートか……と落ち込んでいると、折本がにこりと笑った。

「ま、そんなに見てくれるってことは、あたしの格好も悪くないってことかな？」
そう言って、からかうように、それでいてどこか照れたように笑う。
「……ん、まあ、そうだな。似合ってる」
顔を逸らしながら言ったが、返事が返ってこない。何事かと思い折本を見ると、目をぱちくりさせて、まるで初めて見る生き物であるかのように俺を見ていた。どうも珍獣です。
「……なに、そんな変な事言ったか」
「……いや、そんなことないけど……ただ、意外だなーって」
そう言うと、折本は悪戯っぽい笑みを浮かべて、こちらにぐいと近付いてきた。上目遣いで見られる程の距離になり、身体中から緊張で汗が噴き出す。
「なんだ、どうした、よせ。死ぬぞ、俺が」
「……こんなに女の子慣れしてないのに、似合ってるって結構さらりと言えたよね。どういう生活してきたの？」
自由研究の対象を見るような好奇心旺盛な目で見られる。慣れない視線の温度に頬を焼かれて、気を落ち着かせようと頭をがしがしと掻いた。
「俺だってどうして言えたのか分かんねえよ。んなことより早く行くぞ。俺は目的地さえ知らねえんだが……」
「あ、そうだね。じゃ、行こっか」
折本はあっさりと追及をやめ、くるりと方向転換する。2、3歩ばかりとててと歩いた所で、不意に歩を止めてこちらを振り返った。
「今日はよろしく」
「……おう」
にかって笑われて、ぐるぐると頭の中を巡っていた考えがまとめて吹き飛んだ。
どうにも、毒気の無い笑顔はこちらの調子を狂わせる。……毒気を抜かれて調子が狂うって、普段どんだけ毒々しいんだ俺は……。フグか、フグなのか。美味しくないフグなのか。何それ良いところない。
まあ、そんなことはどうでもいいとして。

目の前を歩く、かつて一方的に恋をした女性の背中を見つめる。
あの頃は、何も知らないまま惚れていた。
男女問わず仲良く接する彼女の後姿や横顔を、ぼんやりと眺めているばかりだった。
たまに話しかけられれば挙動不審になり、会話が終わった後いつも後悔していた。
自分勝手で、身勝手で、まるで届くことのない思いではあったけれど。
あの恋慕の情を忘れることは、きっと一生無いだろう。
それくらい、拙いながらも恋をしていた。
今は、好きという感情こそ無くなっているものの、あの頃よりは見えたものがある。
あの頃のことを思い出すと恥ずかしくなるが、それと同時に懐かしくもなる。
あの頃は、少しばかりの楽しさと、その何倍もの寂しさが心に同居していた。
つくづく恋愛っていうのは面倒なもんだな……と思いながら、楽しそうに歩いていく折本の後を付いていった。

続く。

（6）

カフェに行く道すがら、折本とぽつぽつと話をした。

最近のこと、特に受験。

今までの高校生活。

折本自身はもっと喋ることが出来るのだろうが、俺に合わせてかペースを抑えてくれていたので、会話は緩やかに始まって静かに終わるのを繰り返していた。会話が途切れると互いに街並みを眺めていたが、どちらもスマホを取り出すことはしなかった。互いの存在は常に意識していたんだと思う。

俺は車道側で、折本よりほんの少し後ろを歩いている。付かず離れずの距離感は存外心地良く、少なくとも今の二人の関係とぴったり合った距離なのだと思った。

人波に溢れる都会（と胸を張って言っておく）からしばらく歩くと、落ち着いた雰囲気の住宅街が現れた。店なんてあるのか……と思っていると、折本がここに来て初めてスマホを取り出す。どうやら目的地を確認しているらしい。

やや危なげな足取りに付いて行くと、やがて、開けた所にぽつんと建っている店が見えた。

「あ、あそこあそこ」折本が安心した表情で店を指差す。

「良かったー、あんま目印無いから不安でさー」

「確かにこれだと分かりづらいな……」

折本の言葉に頷く。

近くにコンビニの一つでもあれば全く事情は違うのだろうが、生憎周りは判で押したように同じ形のマンションが並んでいて、目印らしい場所が何一つない。

不思議な場所だった。

これだけ同じ形のマンションが立ち並んでいる中、この店が建っている場所だけエアポケットのように浮いている。上空から見れば落とし穴のようにさえ見えるだろう。

一体どういう経緯でこの場所だけマンションになるのを避けてこ

られたのだろうか……と不思議に思った。カフェが物凄い老舗というのなら分かるが、外装は至極おしゃれで今っぽく、いかにも若者向けという雰囲気なので尚のこと不思議に思う。
「最近Ｔｗｉｔｔｅｒで話題になってて。友達で行ったって子も多いんだけど、中々予定が合わなくてさー」
よほど行きたかったのだろうか、折本は嬉しそうに言う。折本の口から出た友達という言葉に、ふと疑問を抱いて立ち止まる。折本もこちらの変化に気付いてすぐに立ち止まった。
「……俺で良かったのか」
洒落た外装のカフェには、今この瞬間もキラキラした女子大生らしき2人組が入っていった。俺の場違い感が募るばかりで、正直言えば今すぐ帰りたい。
俺の質問に、折本はふっと目を細めた。今まで知らなかった穏やかな笑みに、胸の奥が仄かな熱を帯びた。
「大丈夫だって。比企谷だって友達だし。それにウケるし」
「いや、ウケね……って、んん？」
さらりと言われたことに、去年のクリスマスイベントの帰り道での会話を思い出す。
『友達としてはちょっとありかな』
――あれはつまり、あの時点では俺と折本は友人関係ではない、と言っていたのではなかったのか。
俺が首を傾げると、折本は俺の様子に気付いて――何故か同じ向きに首を傾げた。後ろから見るとすんごくシュールな光景だからやめてほしい。
「？　あたしたちって、友達じゃないの？」
「いや、だってお前、クリスマスの時の言い方からするに……」
俺の言葉に、折本は更に首を傾げる。腕を組んで瞑目して小さく唸ると、何か思い出したのか目をぱちっと開いた。
「ああ、そんなこと言った言った。でももう友達で良くない？」
「え、なに、そんな手続き要らずで友達って出来るもんなの？」
俺の言葉に、折本はからからと笑う。

「それこそ何言ってんの。そんな難しく考えて作るもんじゃないでしょ友達は」
折本の言葉に、クリスマスイベントの帰り道で折本が言った言葉の続きを思いだす。
『……まぁ、何でもいいけどね』
――あの言葉には、今の折本の態度に繋がる、余裕のような、クッションのような役割があったのだろう。グレーゾーンをアウトとせずに、それで良いだろうとアバウトにセーフにしてしまえる寛容さがあったのだろう。
友達なんて、元々曖昧なものだと。
そんな、「今日から僕とあなたは友達です！」なんていう、仰々しいやりとりは必要無いんだと。
固く考える必要は無いんだと。
――と、まあ、こんな風に考える時点でだいぶ固いのだろうけども。
少なくとも、折本はそれくらい余裕を持って考えている。俺とはえらい違いだ。
「……じゃあ、まあ、よろしく」
後頭部をぽりぽりと掻きながら頭を下げると、折本はからっと笑う。もうじき訪れる梅雨の時期をあっさり跳ね除けてしまうような、裏表の無い爽やかな笑みだった。
「だから固いって。ウケるんだけど。ま、よろしくね」
「……おう」
ウケねーよと心の中でツッコんだ後。
……やっぱり、それなりにウケるかなと思い直した。
「つーかあたしら、外で話しすぎじゃない？」
「……それもそうだな。行くか」
「うっす！」
またしてもこの言葉。すっかり気に入っているようで、俺が戸惑う様子まで楽しんでいるようだ。悪戯っ子にも程があるだろう。
社会人カップルと思われる大人びた男女が俺たちを追い越して店に入ったところで、俺たちも後に続いた。

×　×　×

からん、とドアベルが鳴る。

「いらっしゃいませー」

女性店員の声が2つ重なって飛んでくるのと、店を包むコーヒーの香りが鼻腔を擽ったのはほぼ同時だった。

店内は狭くもなく、広くもない程好い広さという印象。

木の内壁は安心感を与えてくれて、テーブルや椅子一つとってもこだわりが感じられる。

耳を澄ませば、どこかで聴いたことのある洋楽がボサノバアレンジで流れている。音量は料理を食べて会話をしながらも微かに耳に入るような、絶妙な塩梅。

4人掛けのテーブルが入口近くに5つほど置いてあり、その内の3つは女性の2～3人組が埋めていた。さっき見かけた女子大生らしき2人組も座って楽しそうにメニューを眺めている。

「いらっしゃいませ、お2人様でしょうか？」

髪を明るく染めたセミロングの女性がエプロン姿でこちらにやってきた。こういうカフェにはそもそも綺麗な人しか採用しないのか、それともカフェという補正がかかるから皆綺麗に見えるのか、ふと疑問が湧いた。

女性店員を見て反応が遅れている俺に気付いたのか、折本は「2人です」と手早く答えた。すまんとアイコンタクトで謝罪すると、折本は呆れたように笑った。

女性店員は俺たちをちらりと見た後、手前の4人掛けテーブルを見て、更に奥を見やった。

「個室もございますが……如何なさいますか？」

この言葉を聞いて奥に目をやると、簡素なドアで外から見えないようにしている個室が4つ程見えた。恐らくあのどれか一つに、店に入る直前に俺たちより先に入った社会人カップルらしき2人がいるのだろう。

個室は恥ずかしいが、それ以上に女性に囲まれて勉強なんて出来る訳が無いな……と思っていると。

「じゃあ個室でお願いします」
これまた折本が先に答えて、店員が笑顔で「かしこまりました」と頷く。またしてもすまんとアイコンタクトで答えると、脇腹を軽くつんと突かれた。危うく声を出しそうになって恨めし気に見つめると、折本は口元を手で覆ってぷるぷると震えていた。
「それではご案内しますね」
「あ、はい」
ようやく言葉を発して、店員の後ろを付いて行く。
一人で来たら店員が来るより先に出てしまうのではないかというくらい洒落た空間なのだけども。
折本と居ると、不思議とそこまで気にならなかった。

続く。

（7）

個室に案内してくれた店員が去るなり、折本はずっと呼吸を止めていたかのようにぶはっと息を吐き出した。
「さっきの比企谷、声抑えてんの面白すぎ……っ」
「お前な……」
この悪戯っ子め……と思いながらも、少し安心する。
カフェと言う馴染みの無い空間にテンパっている俺をさり気なくリードして、それでいてバカにすることもしない、ということに。
きっと折本は、俺がそんな心配をしていることを夢にも思っていないのだろう。「なんでバカにするの？」とでも言うかのように。
「個室っつっても声は聞こえるだろうから、あんま笑い過ぎるなよ」
「ぷっ……くく……っ、うん、ごめんごめん……っ」
どんだけツボにハマってんだ。箸が転んでもおかしい年頃とはこういう子のことを言うのか……。
お腹を押さえて息を整えている折本から視線を逸らして、メニューを広げる。
「ん……色々洒落てるやつが多いな」
「あー、いっぱいあるね。まあ無難なやつで良いんじゃない？　外れ引くのもやだし」
「そうだな……って、そっちにもメニューあるだろ」
声が裏返りそうになる。
折本さん、何故かこっちのメニューを覗き込んできなすった。
どこまで本気なのか、折本は自分の目の前にあるメニューをちらりと見ると、何ともわざとらしく頭を掻いた。
「あ、ごめんごめん。近すぎて気付かなかった」
「それ何のＪ—ＰＯＰの歌詞だよ……」
「ぶっ!?　……くく……ちょっと……急にやめて……っ」
ジャブくらいのつもりで放った例えツッコミがクリーンヒットした。これはこれで恥ずかしい。
「ぷっ、くく……っ、そうだよね、近すぎて気付かないこともあるし、

失ってから気付くものとかあるもんね……」
「何で歌の続きを考えてんの？　今日中に1番のサビまで書き終えたいの？」
「……っ！」
「声にならない叫びとなってるけど大丈夫か？」
「……～～～～っ！」
「この気持ちは何だろう……」
「やめ……死ぬ……っ」
　折本がテーブルに突っ伏して瀕死状態に陥った。
　……どうしよう。
　超楽しい。
　ありがとうございます、谷川先生。
　この状態で折本の脇腹をつついたら絶対可愛い声が聞けると思うが、一発でお縄だと思われるのでやめておく。超やりたいけど。
「ああもう……比企谷のせいで腹筋割れる……」
「俺にそんなバイブレーション機能はねえよ」
「……バイブって……」
「ん、どうした？」
「ううん、何でもない」
　一瞬変な雰囲気になりかけたのは気のせいか。
「流石にメニューを決めた方が良くないか」
「そうだね、じゃああたしはアイスカフェオレで」
「俺もそれで良いか……って、だから何で俺のメニューを見るんだっての」
「遠くにあるものにこそ手を伸ばし続けたいじゃん？」
「2曲目の作詞に入ったのか。おめでとう」
「ラブソングの次は前向きな曲……っ」
　またしても突っ伏して震えだした。今のは完全に自爆ですやん……。
　この後も似たようなやりとりを繰り返し、店員を呼んだ時折本は上気した顔で息を荒げていて、店員は物凄い勢いで俺と折本を交互に見

ていた。そうだよね、絶対何かしてたろあんたらって思うよね……。
届いたアイスカフェオレをくぴくぴと飲みながら、ふと個室内を見回す。
「……まあ、なんだ」
「ん、なに？」
「ここ、すげえ雰囲気良いな」
「今頃……っ？」
折本のツボにまたしても入ってしまった。というかこの子、全身ツボしかないんじゃなかろうか。
今度は早めに立て直した折本が、こほんこほんと咳払いをする。
「ん、良かった。気に入ってもらえて」
そう言って笑みを浮かべる折本の表情はとても柔らかく、思わず顔を逸らす。
「……折本は、いつもあそこで勉強してるのか？」
取り敢えずのつもりで話題転換をしたのだが、折本は俺の質問に対して暗い笑みを浮かべた。
「ん……ちょっとね」
あ、何か重い話の匂いがする。
どうしようかと迷ったが、避けようと言う気には不思議とならなかった。
「話したくなかったらいいけど、何となくでも話したくなったら聞くぞ」
俺の言葉に、折本はきょとんとした顔になる。そしてふっと頬を緩めて、「……何それ、ウケるんだけど」と力無い声で呟いて。
「ちょっと暗くなるけどごめん。……あそこで勉強を始めたのは最近なんだ」
ストローでカフェオレの氷をからからと回して、折本が目を伏せる。
「海浜行ってから、それなりに勉強は頑張ってた。それでも最近……2年生の3学期くらいからかな、皆一気に受験モードになって。2年生の期末であたしもそれなりに頑張ってみたんだけど……急に順位

が落ちてさ。模試の結果なんて見るに堪えないって感じだった。それで、今までは学校で勉強してたんだけど、ちょっと居づらくなって……」
折本の声が微かに震える。この子が抱えるものを垣間見た気がした。
空気が重くなるのを察してか、折本は無理矢理笑って手をぱたぱたと振った。
「ごめんね、こんなどこにでも転がってるような悩みの話しちゃって。忘れていいよ」
「……どうでも良くなんかないって」
このままで終わってはいけないと思い、話を流そうとする折本を止める。
「……え？」
「成績が伸びなくてしんどいとか、友達関係が上手くいかないとか、先生でやたら強く当たってくるやつがいるとか……どんな悩みも、その人がきつく思ってるのは変わらないだろ」
「……そんなもんかな」
「そんなもんだよ。例え目の前で救急車が通り過ぎても、その中で生死を彷徨ってる人のことは気にしないだろ。それよりも自分が軽く転んで擦りむいた膝のことを考えちまうもんだ」
「そう……かも」
「人間そんなもんだ。だから今折本が抱えてる悩みだって、他の誰かに評価されて良いもんじゃない。軽く扱ったって、自分が苦しいだけだぞ」
「……うん。……でも、比企谷は総武高でしょ？　なんか、勉強の悩みを言うと……余計にちっぽけに見えて……」
「きっと大学もそうだと思うけど、実際はどこに行こうが、そこで何をするかが重要だろ。レベルの高い高校だの大学だのに行っても、その後だらけたらそこに行った甲斐が無い。そこで頑張って、何をするかが重要だと思う。折本は海浜で勉強を頑張って、友達付き合いもしっかりやって、色んな人に影響を与えてるんだろ。十分すげえって」

……と、ここまで言った所で、急に恥ずかしくなってきた。
いかん、笑われる。
青春かよって笑われる……！
これから押し寄せるであろう羞恥の波に戦々恐々としていると。
「……そ、そっか……うん、ありがと……」
折本は俺を笑うどころか、頬を赤らめて顔を背けた。
「……？　どうした？」
「……何でもない。……比企谷って、こんなクサいこと言えたんだ」
「……うるせえよ。まあ、総武高に入ってから色々あったからな」
「ふうん……そっか……」
そう言って、折本はカフェオレの氷をからからと混ぜながら俺を見つめる。
その瞳は、俺の思い違いでなければ、だけれど。
ほんの少し、熱を帯びているような気がした。

続く。

（8）

折本との雑談がつらつらと続く。勉強会という当初の目的を果たしていないが、ちょっと楽しくなってきている感が否めないのでこれはこれで良しとする。

「あー、飲み物もうなくなったね」

「だな、何か頼むか」

「ん、確かここってアイスカフェオレならおかわり出来るらしいよ」

「え、マジか」

「そうそう、ウソウソ」

「おい……」

「ぶっ、くく……っ」

こういった感じで、既に数えきれないからかわれている。カフェオレがおかわり出来るって結構胸熱だと思ったのに……。

「ねえ、比企谷」

話と話の谷間、何をするでもなく店内を眺めていると、窓から外の景色を見ている折本がぽつりと呟いた。

「ん、どうした」

「比企谷って、あの部活の二人とまだ付き合ってないの？」

「……ねえよ。ていうかその言い方だとハーレムみたいだからやめろっての」

「あはは、確かにそうだね。そっか、まだか……意固地だなぁ」

折本が両肘をテーブルに乗せ、両掌に顎を乗せる。その表情はどこか大人びていて、俺を見て困ったように笑っている。実際に姉がいたら、こんな表情をされることがあるのだろうかと思った。

「意固地も何も……まあ、なんだ、うん、取り敢えず付き合ってねえよ」

俺のまごついた返しに、折本は目をぱちくりとした後にやっと唇の端を上げ、同じ体勢のままずいと顔を近付けてきた。

「何か色々あったって顔してる。……まあ、聞かないでおくけど」

「そうしてもらえると助かる……って、近い近い近い」

俺は俺でテーブルに肘を乗せていたので、気付けば二人の距離がか

なり近くなっていた。
　てっきりこのタイミングでまたからかわれるのかと思ったけれど。
「……あ、ごめん……っ」
　さっきまでとは打って変わって、折本は頬をほんのり朱に染めて、しおしおと元の位置に戻った。想定したものとまるでリズムが違う反応に、こちらの調子が狂ってしまう。
「あ、いや、別にいやって訳じゃないぞ。ただ家族以外の人間との、こういう近さの距離感ってのに慣れてないだけだ」
「それどんな人生なの……っ」
　顔を突っ伏して笑ってらっしゃる。何にせよ、ついさっきの妙な空気をうやむやに出来て良かった。
　折本が顔を上げて目の端の涙を拭った。この子明日にはお腹が筋肉痛になるのではないかという危惧さえある。
「……そっか、付き合ってないんだ。ということは彼女はいないんだ？」
「俺の全女性交友範囲をあの二人に限定するな」
「でも大体はそうじゃない？」
「……まあ、言われてみれば……」
「７０％くらい？」
「いや、３０％くらいだな」
「ご家族は含めてないよね」
「あー、含めないと９０％くらいだな」
「めっちゃ上がった……っ」
　またしてもテーブルに突っ伏してぷるぷる震える。今日はテーブルの上でよくワカメが踊る日ですなあ……。
　ちなみに残りの５％は平塚先生で、その他が最後の５％くらいだ。部活以外でそもそもまとまった時間一緒にいることが無いとこうなる。
「……まあ、どっちにしろ彼女はいねえけどな」
　妹を嫁にしたいという願望を晒せば、折本が盛大に微妙な顔をするのは目に見えているので控えておく。

「そっか。じゃあ、好きな人は？」
「すげえ追求してくるな……女子かよ」
「女子だって」
「そうだった、立派な女子だった。すまん」
「あ、うん……」
顔を逸らされた。何ぞや。
好きな人……即ち会って話したいなと思う人……と考えて、真っ先に戸塚を思い浮かべた俺を責める人はいないと思う。
「好きな人……まあ、いねえな、うん」
まるで好意を持つ女性がいないという訳では全く無いので、何ともやっとした返事をしてしまった。折本も俺の空気を察して、「そっか」と短く答えた。
さて、ここで考える。
会話のキャッチボールとは、基本的に同じ質問を相手にも投げかけることだ。相手がしてくる質問というのは、往々にして自分もされたい質問という場合が多い。
ちなみに「可愛いね」「良い声だね」「優しいね」といった褒め言葉も、普段から自分が意識していて「こういう風に褒めてもらいたい」と意識している事が多いから、相手のそういった面に気付く確率が上がるが故に出てくるんだそうだ。何この豆知識。
なので。
「……折本は？」
「ん？」
それとなく返してみると、折本は再びさっきと同じく肘をテーブルに乗せて、悪戯っぽい笑みを浮かべた。「何のこと？」と言わんばかりの表情は、俺に具体的な発言を求めている。絶対分かっていながらこの返しをする悪戯っ子にいつか仕返しをしたい。
「……彼氏とか、好きな人とか、いねえのかって話だよ」
「……んー、どうだろ？」
恥ずかしさで顔が熱くなるのを感じながら発した言葉に、折本は意味深な言葉で返す。

「いや、それじゃ全然分かんねえっての」
「ふふ……っ、ごめんごめん。比企谷って反応が良いからついね」
この場面でもからかってきなさる。
「彼氏はいないなー。好きな人も……別にいないかも」
「お、おう、そうか……」
「……うん……」
さらりと返された言葉に、気の利いた返答が消失する。
妙な空気に困り果ててメニューに視線を巡らせると、ふと考えが浮かんだ。
「あ、ここのカフェオレ、本当におかわり出来るぞ。お一人様一回までだってよ」
「え、ほんとに？」
「ああ、うそうそ」
「……」
折本が高速で顔を逸らす。頬がほんのり赤い。恨み気のある視線を流し目で送られた。
そうか、攻めるのは得意でも、攻められるのには弱いのか。
……。
語弊しかなかった。
「……あー、それならアレだ、こういう所に一緒に来るような男友達はいるのか。一般女子の感覚が分からんもんでな」
雪ノ下はあんなだし(失礼)、由比ヶ浜に以前この質問をしたら頬を膨らませて拗ねてしまい、平塚先生は俺の襟を引っ掴んで「皮肉か？皮肉なのか？」と涙目になってたもんで。ちなみに一色は小間使いとして男どもを利用しているがあれは例外なので除いておく。小町が誰か男と一緒にいようもんなら俺はショットガンを持ってうきうき気分で散歩に出かけてしまうだろう。どうでも良いけど、出来ちゃった婚って英語でショットガンマリッジと言うらしい。妊娠した女性の父親がショットガンを持って娘の恋人である男性に迫り、「責任を取って娘と結婚しろ！」と言ったのが由来だそうだ。だから何なんだよこの豆知識。

「んー、大人数で来ることはあっても、二人では行かないかなー。比企谷は？」
「大人数で来るっていう発想が無かった」
「日本ってもっと自由に生きて良いと思うんだけど。……そうじゃなくて、二人でってこと」
「ああ……まあ、うん、滅多にない」
俺の返答にまたしても色々と察してくれた折本が、「ああ……」と意味深に笑う。
「たまにはあるよね、うん」
「まあ……な」
「……」
「……」
会話が不自然に途切れ、視線を個室内に巡らせていると、折本とぱちりと目が合った。何とは無しに目を逸らすと、頬に熱のある視線を感じた。
何だろう、会話中は何とも無いんだが……会話と会話の谷間に感じる折本の視線の熱量が、やはりほんの数十分前までと違う。
どうしたものかと思っている内にお昼時になり、このままここで食べていくことにした。幸いそこまで混んでいなかったので、長居しても良いだろうという判断だ。
まだ正午を回った程度。
この後はまあ、ご飯を食べたら勉強するだけ……勉強するだけ……と、二人の間に流れる奇妙な空気を振り払うように考え続けていた。

続く。

（9）

追加メニューをどうするか色々迷ったが、俺も折本もコーヒーを頼むことにした。これは正真正銘おかわり自由だった。

「さて、じゃあまずは1時間くらい勉強してからご飯に……ん？」

「ん、どうかしたの……ん？」

俺が眉をひそめた直後、折本も訝し気に視線を巡らせる。２人の視線は、俺の後ろに位置する個室に向けられた。

『しかし、こうして2人でゆっくりするのも久しぶりだな』

『そうだね、本当に久しぶり……』

どうやら俺たちより先に入った社会人カップルが会話しているようだ。本当に声が聞こえてしまうらしい。別にこの2人の会話の声が急に大きくなって迷惑しているなどという訳ではない。俺と折本が訝しんだのは、この2人の雰囲気が何だか妖しくなってきたからだ。声音一つで伝わる空気感に、俺と折本の注目は自然と集まる。

『中々休みが合わなかったけど、今日明日と久しぶりに2日間一緒に居られるな』

『そうだね。……ねえ、そっち行っていい？』

『……ああ、どうぞ』

女性が立ち上がる音がすると、椅子に座る小さな音がした。……すぐ、背後で。どうやら俺から見て手前側の席に2人が横並びで座ったらしい。折本を見ると、何にも関心を持っていない風に店内を見回しているが、明らかに視線が俺の背後の個室にちらちらと向けられている。すこぶる分かりやすい。

『……そんなに近寄るなよ、何するか分かんないぞ？』

『えぇ……？　もう、……何しても良いんだよ？』

良いのかよ。

ここはカフェですから、お茶のみと雑談以外はお控えください。

カフェで壁ドンしたらそれはそれで斬新かなぁ……と考えていたが、関心が無い風に装っている折本がテーブルに両肘を乗せて、思い切り前のめりになった上で窓を眺めて口笛を吹いている。どんだけ

興味津々なんだよ。壁ドンしたら俺が怒られそうだな……。
しかしこのカップル、一体どこまでやるつもりなんだろうか。個室自体はしっかりした作りで天井まで仕切りの壁はあるが、ドアに鍵が付いている訳ではない。音はだだ漏れでセキュリティなど皆無なんだけども。
『……私の今日の服、どう？』
『すごく可愛いよ』
『ありがと……その、ね？　すごく恥ずかしいこと言うよ？』
『え、なになに？』
言わんでいい。
何かなー、恥ずかしいことって何かなー。『私、音姫が世に出回り始めた頃、使い方が分からなくてずっと、実際流したのと同じタイミングでスイッチを押してたの』とかかなー。
折本を見ると、もはや関心の無いフリがどうでも良くなったのか、俺の肩の上辺りをガン見していた。何だろう、何か見えてはいけないものが見えるのかしら。
『私ね……今日、君にこういうことしてほしくて……ミニスカートを履いてるんだよ？　ほら……』
想像の斜め上を行っていた。
『おいおい、ほんとかよ……触っていいのか？』
『うん、良いよ……ほら』
大丈夫大丈夫、まだＲ―１５にもなっていない、はず。まだＴｏＬＯＶＥるよりエロいことにはなっていないもの。じょうろとか使っていないもの。
折本ってこういう話も平気そうだな、と思いながら顔を正面に向けると。
「ちょ……ちょっと、これ、やばくない……？」
折本が椅子の背もたれにぴったりと背中を付けて俯き、両耳を手で押さえながらもじもじしていた。
え、何その可愛すぎる反応……？
思いもよらぬギャップに心が跳ねる。

「ん、確かにそうだな……」
「え、なんて？」
「手を外しなさい」
「あ、ごめん。なんて？」
「確かに、って言ったんだ」
「あ、そうなんだ。うーん、どうしよ『スカート、ちょっと捲ってあげようか？』やばいやばいやばい！」
折本が再び耳を塞ぐ。大パニックだ。
……どうしよう。
背後のバカップルにとっては俺たちの心配など全く関係ない。どんどん行為が進んでいく。
『……お前の太もも、やっぱすごく綺麗だ』
『ほんと？　例えば例えば？』
『え、えーっと……うどん、くらい？』
いや、白いけど。
彼女さんのフリも無茶ブリだが、彼氏のセンスが壊滅的だった。ちなみに折本には今の悲劇的なやりとりは聞こえていない。
どんな反応を返すのか……と思っていると、パコンと叩く音が聞こえた。どうやら彼女さんは若干バイオレンス。
『もう……そんなダメな所も好き』
『お前……』
何だお前ら。
催涙弾を放り込みたくなった。
折本を見るがやっぱり聞こえていない。ツッコミの人手が足りない……。
「ねえ、もう大丈夫？」
折本が耳を塞いだまま尋ねてくる。バカップルの会話を聞く限り、これはエロ展開にはなりそうにないな……と思い、人差し指と親指で丸を作ってオーケーサインを出した。
折本がホッと息を吐いて手を外した瞬間。
『あん……っ!?　だめ、いきなりそこ触ったら……っ！』

『濡れてる……期待してたんだ？』
どれだけ急ハンドルを切ったのか、いきなりピンクな展開になった。
「ちょっと……っ!?」
折本が高速で耳を手で塞ぎ、顔を真っ赤にして俺を睨み付ける。目に涙を滲ませているものだからまるで怖くない。
やばい。
後ろのバカップルのイチャイチャにはまるで興味が無いけど、折本のこの反応は可愛すぎる。
本当にどうしよう。
迷っている間にも、背後ではどんどん行為がエスカレートしていく。
『あ、だめ、そんな、こすらないで……声、出ちゃう……っ』
『ちゃんと口押さえとけよ？　うっわ、椅子がびしょびしょだ……っ』
『あ……っ、んっ、んんんっ、んんんん……っ！』
恐らく口を塞いでいるのに、漏れる声はさっきまでの２人の話し声より明らかに大きい。折本は耳を塞いでも聞こえてしまっているのか、蹲って震えている。
……流石にこれは行き過ぎだな。
バカップルを止めるかどうか考えたが、それよりも平和的な案を提示することにした。
鞄を漁って、取り出したｉＰｏｄのイヤホンの絡まりを解く。
「折本、ほれ」
「え……？」
テーブルに置かれたｉＰｏｄに、折本は手を耳から外してきょとんした顔を向ける。
「これで適当に音楽を聞いてしのいでくれ。今から場所移動すんのも勿体ねえしな」
「比企谷……ありがと」
折本がにこりと笑い、イヤホンを右耳にはめた。そしてもう一つをじっと見つめて――

「……比企谷は、いいの？」
なんてことを聞いてきた。
「ん、俺は平気だ。全く気にならないって言ったらウソになるけど、それでも折本よりはダメージは少ないから」
俺の言葉を聞いて、折本は無言で音楽を聴き始める。イヤホンから漏れる音が大きくなったので、恐らく音量を上げたのだろう。折本は片耳に着けたイヤホンから流れる音楽を聴いて、視線を俺の背後にずらす。
「……片耳でも、向こうの声はほとんど聞こえなくなるみたい。……だから、比企谷も、どう？」
「え……」
折本が妙にしおらしく、女の子の武器を全開にしてくる。俺は慌てて首を振った。
「い、いや、対面だと着けづらいだろ」
咄嗟に言った言い訳に対して、折本は、
「じゃあ……こっち、来る？　向こうの個室から遠い方が良いだろうし……」
そう言って、もじもじとしながら顔を逸らし、恥じらいを纏った流し目を送ってきた。
……なんだ、この子は誰だ。
本当に、俺が知っている折本なのか。
かつて好いていた女の子の急激な変化に思考がこんがらがっているのに、後ろから聞こえる嬌声が更なる混乱をもたらす。なんだこの混沌とした状況は。
「……じゃ、まあ、うん、お邪魔します……」
思考が纏まらぬ内に、気が付いたら提案に乗って立ち上がっていた。
……大丈夫、距離をとれば大丈夫、イヤホンの長さ分だけ離れれば大丈夫……！
頭の中で必死で唱えている保険の言葉は、一体誰の為なんだろう――と、ふと思った。

続く。

（１０）

折本の提案で、背後の個室から聞こえてくるピンクな展開から耳を遠ざける為に２人でイヤホンを着けることにした。

立ち上がって折本の側に行くと、折本がびくりとして俺から遠ざかった。あれ、地味にショックだぞ？

「……なんかすまん」

「あ、その、ごめん、悪気は無いから」

悪気が無い方が辛いんだけどな……と思いつつ座席に腰を下ろす。すると折本はもじもじとしながら俺に流し目を送った。

「……その、遠くない？」

「いや、これくらいで良いんじゃねえか？　これでもイヤホンは届くだろ、ほら」

言ってイヤホンを実際耳に着けると、思っていた以上に余裕だった。うん、これなら変に近い距離感を味わわなくて済むな……と安堵していると。

「……」

折本が、無言ですりすりとこちらに近付いてきた。物凄く静かに。暗殺者志望なのかしら。

「……近くないか？」

「さっきのは遠すぎて話しづらいし」

「いや、これはこれで話しづらいんだけど……」

イヤホンが容易くたるみ、油断すれば頬さえくっついてしまいそうな距離。気が付けば向こうの個室の声もイヤホンから流れてくる音楽もどこか遠くのもののようにに聞こえて、代わりに自分の心臓の音がよく聞こえた。

俺が目を逸らすと、視界の端で折本がにやりと笑ったのが見えた。

「なに比企谷、意識してんの？」

「冷静に考えろ。中学の時告った子とこの距離にいるんだぞ。自分の可愛さってものをもっと自覚しろ」

「……」

「痛い痛い痛い、顔を離すな、イヤホンが！　耳が！　いって！」
「あ、ごめん……」
感情のままに発した言葉に、折本は何故だか真っ赤になった。おかげで耳がおかしなことになりそうだった。
互いに不自然な咳払いをして、２人ともテーブルに肘を乗せる。何この圧迫面接的雰囲気。ただし面接官しかいない。隣にウケる人はいるけど。
「……そろそろ大丈夫かな？」
「……ちょっと俺が確認する」
イヤホンを外して、耳を澄ます。
『あっ、やん、そこ、こすっちゃ……うんんん……っ』
『声、エロい……すごく可愛い……』
『やぁんん……んぅぅぅ……っ！』
待て待て待て待て。
瞬時にイヤホンを着け直した。
「イヤホン作戦継続だ」
「え、あ、うん。続いてたの？」
「悪化してた」
「……」
折本が俯いた。ウェーブのかかった髪の隙間から覗く耳がすっかり真っ赤になっている。思わず頭を撫でそうになって、慌てて自分の手を押さえた。
気持ちを落ち着けようと飲み物に手を伸ばすと、同じ飲み物に手を伸ばした折本に触れてしまった。
『あ……ごめん』
同時に謝って、同時に手を引っ込める。さっき向かい側に居た時の感覚で飲み物を取ろうとしたが故の事故だった。
話題に困り、さっきから思っていたことを口にする。
「……しかしアレだな、折本は意外と初心だな」
「……そんなこと、ないけど……」
折本が顔を逸らす。

……。
そっと、音楽の音量を落とす。
「いやいや、こんな可愛い反応すること自体初心すぎるだろ。確かに実際聞いて戸惑うのは分かるけどな」
「……そんなこと、ない、けど……」
……ふむふむ。
「普段のイメージとだいぶかけ離れててびっくりしたけどな。でもこれはこれで、まあ、うん、……うん」
「……そんな、こと、ない、けど……」
……おやおや。
最後の攻めは明らかに中途半端だったにも関わらず、折本は見る見る内に村人Ａモードになっていく。それも話しかけるごとに口が回らなくなる機能付き。やだ、その内村長の家の位置も分からなくなっちゃう……。
「……本当に、初心じゃないのか」
「……そんなこと、な……あるけど」
流れで答えかけた。いかん、笑ったら流石に怒られる。
じゃあ、と言って、俺は自分のイヤホンをとんとんと指差す。折本はしばし悩んだ後、初心ではないことを証明するためにイヤホンを外した。俺も試しに外してみる。
まあ流石に、あれ以上のことはしていないだろう……と思ったら。
『あっ、あんっ、だめ、入っちゃう、これ入っちゃう……』
『ちゃんと堪えろよ。じゃないと勝手にずぶずぶ入ってっちゃうぞ？
ほら、ほら、ほら……』
『あふぁぁぁぁ……だめ、ほんとに声漏れちゃうぅ……っ』
悪化してた。
それもすごく。
折本を見ると、目を見開いて口をぱくぱくさせていた。どこの金魚だろう。ポッキーとかあげたら食べるだろうか。
「折本、俺が悪かった。無理はしないでくれ。ほれ、イヤホン」
「……」

折本はぎぎぎぎ、と油の足りないロボットのようにこちらに振り向くと、ぎこちない動きのまま俺からイヤホンを受け取って着けた。

×　×　×

結局この後３０分程ピンクな時間が続き、ここでの勉強は無理だと判断してカフェを出ることにした。帰り際に折本がさり気なく「また今度行こっか」と言ってきたので、「まあ、気が向いたらな」と返事をした。その言葉を言った時折本は空を見上げてたので俺も釣られて空を見た。大きな雲が１つぷかぷかと浮いていて、きっと今自分は折本と同じ雲を見ているのだと思った。何でもない出来事が、妙にこそばゆかった。

同じ中学だっただけあって、帰り道はぎりぎりまで一緒だった。別れ際、折本はぴたりと足を止めた。半歩前を行っていた俺は少し遅れて立ち止まって振り返ると、そこには寂しさを孕んだ笑みを浮かべる折本がいた。

「……比企谷」

「ん、どうした」

「さっきのカフェさ、また今度行こっかなんて言ったけど……また、会っても……いいの？」

一度俯いてから、ゆっくり顔を上げて発した言葉。

この短い言葉の中に、一体どれだけの感情が篭っているんだろう。

中学の時。

別々の高校になってから再会した時。

クリスマスイベントやバレンタインイベントでも会った時。

そして、昨日から今日にかけての時間。

それぞれのタイミングで、きっと俺と折本それぞれの感情は大きく揺れ動いていただろう。きっと、良くも悪くも。

だからきっと、折本はまだ距離を測りかねているのだ。折本かおりと、比企谷八幡との間の距離を。

確かに、ここでただ別れていたら、連絡先こそ交換していても、下手をすれば一生会わないことだって有り得た。「中学の時のクラスメイトと２日連続で会った」というだけの話で済んだだろう。人に言う

程の話でさえないのだ、こんな出来事は。
それでも、折本はこうして踏み込んできてくれた。
嬉しいかと聞かれたら正直分からない。かつて恋心を抱いた相手の意外な一面を沢山見る事が出来たのだ。ああ楽しかったと思うだけで終わりにすることだって出来る。
――けれど、それは何だかいやだった。
何故いやなのかなど分からない。
理由は分からないのだから、きっと頭の中の理性ではなく本能が訴えているんだろう。
――だから。
「……ん、まあ、良いんじゃねえの」
俺の返事に、折本は優しく目を細める。
「……何その曖昧な感じ。ウケるんだけど」
胸の奥がむずむずする。こんな純真な笑みを見せられてはたまらない。
「いや、ウケねえよ……まあ、俺から連絡することもあるかもしれんから、そん時はよろしくな」
「……うん、分かった。楽しみにしてる。今日はありがと。また勉強教えてくれる？」
「おう、タイミングが合えばな」
折本は嬉しそうに笑って、家に帰っていった。
一度途絶えて、もう二度と交わることは無いと思っていた2人が不意に繋がり、またすぐに切れそうだった糸が徐々に太くなり、繋がりが強まっていく。
心地良いような、むずがゆいような、そんな気持ち。
この気持ちの正体を、俺はまだ知らない。
続く。

（11）

折本と再会した日から、3週間程経った。

何だかんだ迷いながらも一度俺から連絡すると、メッセージ越しにも折本が喜んでくれているのが分かって妙にむずがゆかった。

それからしばらくの間は、俺から連絡したり折本から連絡してきたりで、2人はぽつぽつと繋がっていた。しかしそれも時間が経つと次第に頻度が減っていった。どちらかが急に連絡を渋った訳ではない。気付いたらそうなっていた、というくらいに、徐々に徐々に変わっていった。気を遣っていたのかもしれないし、そうでないのかもしれない。

正直、折本とカフェに行った日の気持ちの高まりを考えれば、もっと俺から会いたがるものだと自分で予想していた。

けれど俺はこんな性格だから、いざ誘おうと思っても中々重い腰が上がらなかった。そうしている内に徐々に会いたいという気持ち自体が密度を失い薄れていった。

そうやって、人と人は会わなくなって、長いこと会っていないことさえ忘れ、いずれ相手のことさえ忘れてしまうのかもしれない。

そう、思った。そう、思っていた。

――けれど、学校帰りの街中でふと折本に似た人を見付けて思わず振り返った時、ああ、やっぱり会った方が良いなと思った。何だか、会わなければいけない気がした。

ひとたび焦燥感に駆られると、周りの景色が面白い程に色褪せた。自転車を立ち乗りで飛ばすと、気に入っていた場所の景色も路傍の石のように思えた。その間、ずっと頭の中に折本の顔が浮かんでいた。

それが、金曜日の夕方のこと。

連絡がめっきり減っていたのに、突然会いたいなんて言ったら、折本は一体どんな反応をするのだろうか……と、不安に塗れた心を抱えて、俺は家に帰った。

× × ×

その日の夕食後。

「電話とか久しぶりじゃん。どうしたの？」
「あー、いや、まあ、その……」
　小町が部屋に戻ってから、俺はリビングで折本に電話をかけていた。緊張を紛らわそうとテレビを点けて、意味もなくチャンネルを回しながら。
「……その、なんだ、元気か」
　下手にも程がある話の切り出しに、折本はくすりと笑った。
「何その言い方。うちのお父さんみたい」
「え、そうなのか」
「そうそう。忙しくて一緒に夜食べることがあんまり無いんだけど、その度に聞いてくるんだ。何その聞き方～って、あたしもお母さんも毎回笑っちゃうんだけど」
「……そんなお父さんに、俺は似てると」
「うん。……そう、だけど……」
　――人は、男性なら自分の母親に、女性なら自分の父親に似た人を好きになる事が多いという。
　そんな話が、俺と折本の脳裏に同時に過ぎったからだろうか。
『……』
　２人とも、急に黙った。
　どうしようもない２人の静寂に、バラエティの笑い声が割って入る。すると、折本が小さな声で「あれ？」と言った。
「比企谷もその番組見てるんだ」
「ああ、たまたまチャンネルをここに合わせてた」
「奇遇だね、あたしも何となくこの番組見てた」
「そうか」
「うん」
「……」
「……」
　再び訪れる静寂。
　不思議と気まずいとは思わなかった。
　それ以上に、折本が今どんな顔をしているのかというのを、見たく

て見たくてしょうがなかった。
誘ったら、会ってくれるだろうか。
カフェに行った日に誘っていたら、きっとオーケーを貰えていただろう。あの時の2人は、どこか感傷的だったから。
けれど、今は？
分からない。
だから、言葉に詰まる。
迷いは言葉を詰まらせる。
それは分かっている。
それも、言葉に詰まる原因の一部なのだ。
けれど、今はもう少し違う理由があるかもしれない。
折本と話している内に気付いたこと。
俺は、自分が思っていた以上に、折本に会いたい。
会って何をしたいかなんて言うのは、ほとんど考えていない。
ただ、会いたいのだ。
会って話して、笑わせたいのか、優しさを見せてほしいのか、触れたいのか、どれもこれも分からない。
ただただ、会いたい。
その感情が溢れ出てきて、小さな口から外に出る時に詰まってしまう。蛇口から出せる水の量が限られているように、この感情を一気に表す術が無かった。
「……折本」
普通の会話でならまずあり得ないくらいの静寂を経て、言葉を紡ぐ。
「ん、なに？」
俺の声音を察したのか、折本の声は少し柔らかい。それだけで、会いたいという気持ちが強くなる。
「……会いたくなった。いつ会える？」
「……っ」
何のひねりもない俺の言葉に、折本が息を呑んだのが分かった。恋人同士だってもう少し気の利いた言い方をするだろう。一体何を

言っているんだ俺は……と思っていると。
「……あ、はは、どうしたの急に。そんなストレートに……っ」
折本の声が上ずって震えているのに気付く。いつものはっきりとした喋り方は影を潜めて、どこかしおらしくなっている。
頭をがしがしと掻いて、ソファの背もたれに寄りかかって天井を仰いだ。電灯の明るさに目を閉じて、瞼の裏に折本の表情を浮かび上がらせる。
「……すまん、俺も何でこんな言い方をしたのか分からん。……だめか？」
「……あたしは別に、今からでもいいけど」
「今？　今って……」
折本の返答に驚き、身体を起こしてリビングの時計を見る。時刻は２０時を回っていた。
いくらなんでもそれは申し訳無い……と俺が言うよりも先に、折本が口を開いた。
「……会えない？」
先程の上ずった声から一変して、今度はしゅんと寂しそうに言う。
一日を終えた気だるさが、いとも容易く消し飛んだ。
「会える。いや、会いたい。どこでなら会いやすい？　どこにでも行くぞ」
「えっとね……」
折本と電話をして、場所を決める。
電話を終えて跳ねるようにソファから立ち上がると、着替える為部屋に向かった。
気持ちの迷いも、持て余す程の感情の昂ぶりも。
行動に移せば、それは全て足を前に進める力になるのだと気付いた。

×　×　×

折本が指定した公園に着くと、まだ折本は来ていなかった。唯一置いてあるベンチで会うことにしていたのだけれど、辺りを見回すとすぐにそれは見つかった。

腰を下ろして、俺は一体何をやってるんだ……と、ほんの１０分前の自分の行動を恥じる。
この時期はまだ、夜は冷えることが多い。それでも、Ｔシャツの上に１枚羽織っただけの身体は既に火照ってじっとりと汗をかいていた。
呼吸と心を静めた頃、小さな足音が聞こえた。振り向くと、折本が息を切らしながら走ってきた。
「ごめん、待った？」
「いや、今来たばっかり……って、何だこのデートの待ち合わせみたいな……」
「……」
折本が顔を逸らした。
「……取り敢えず、座ってくれ」
「……うん」
のっけから気まずさ全開でスタートしてしまった。
やってしまったな……と思ったが、折本が存外俺の近くに座ったことで、後悔の気持ちはあっと言う間に吹き飛んでしまった。
しばし何も話さない時間が流れると、肌寒い風が２人の間を吹き抜けた。どちらから言うでもなく、まるで温もりを求めるように、２人揃って距離を詰める。２人を隔てる空間は、あっと言う間に半分になった。
「……あたしも……」
「……？　あたしも……なんだ？」
「……あたしも、何でか分かんないけど、比企谷に会いたいかも……って思ってた」
「……そうか」
カフェの時と比べるとひどく緩慢なペースで進む会話は、妙に緊張する。互いの一言一句がこの場の空気を醸成しているのが分かった。
おかしいな……と折本が呟き、小さく笑う。
折本の声が、急に小さくなった。
「こういうのって……もうちょっと、何回かデートに行って……って

いう段階を踏んでからの展開だと思ってたんだけどな……」
折本の声は、申し訳程度に生えている木が風でざわめく音にかき消された。
「え？　わりい、今何て言ったんだ？」
「何でもない。訳分かんないなーって」
「？　そうか……」
何のことやら……と思っていると、折本が俺の顔をじっと見つめた。
「どうした」
「……比企谷って、そうやって深追いせずにやめるとこない？」
言われて、身体の奥底を強く掴まれたような感覚に陥る。
「……あー、そうかもな」
頭をがしがしと掻くと、折本は正面に向き直って、どこか恥ずかし気に流し目を送った。
折本の声がまた小さくなる。
「……別に、深追いしてくれても良いんだけど」
「え……いいのか？」
「何で今のは聞こえてんの……っ」
街灯に照らされた折本の頬が真っ赤に染まる。風が吹かなかったからな、と言うと、折本は恥ずかしさで眉をひそめたまま俺を可愛く睨んだ。
「……今のはちょっと、無しで」
「分かった。じゃあその代わり、さっき聞こえなかったのをもう少し聞いてもいいか？」
「ちょ、ちょっと、そこ掘り返すの？」
折本が戸惑い出して笑ってしまう。自由気ままな猫を彷彿とさせる彼女が慌てふためくのは、普段とのギャップを感じてとても可愛らしい。
風が吹く。２人が距離を詰める。
折本の手が、俺の手のすぐ横に置かれている。
小指をそっと近付けたが、そこで手を止めた。

今はまだ、早い気がした。
「……学校が違うと、思った以上に会わないもんだな」
「自然と会うことが無いしね」
折本の言葉がすとんと腑に落ちる。
そうだ、俺はどこか、同じ学校に居る人との仲を縮めるような感覚でいたのかもしれない。
そうではない。俺と折本の物理的な距離はもっと遠い。
会おうとしなければ、今こうしているように、折本と会うことは出来ない。
それなら――
「……もう少し、今日みたいに短い時間でも良いから、会えないか？手間を取らせる訳だし、嫌だったら言ってくれ」
折本は目を見開き、それから悪戯っぽく笑う。
「……嫌だ、って言ったら？」
「すげえ凹む」
「正直だ……っ」
折本が蹲ってぷるぷると震えている。
顔を上げた折本が目尻の涙を拭く。相当面白かったらしい。
「手間、とか言わなくて良いよ。あたしにとっては手間でもなんでもないし」
「……いいのか？」
「ん、いいよ。比企谷があたしの興味を引くような話をしてくれるなら、毎日でも会ってあげる」
「……怖い話のストック、何個あったっけな……」
「ちょっとやめて、帰れなくなる」
「何だ苦手なのか、可愛いな」
「……」
「……」
「……帰り、送ってくれるなら、別にいいけど」
「……真剣に考えとく」
「……怖いのは一回きりね？　」

「……反応が可愛かったら、忘れた頃にまた話すかも」
「……」
「やめてやめて、睨まないで」
こんな雑談をして、結局その日は別れた。
時間も時間だからと折本を家まで送ったんだけど、今日のような平日夜に会おうすると、待ち合わせ場所に来る時も折本は一人で夜道を歩くということに気付く。だから平日夜は迎えに行くと言うと、折本は「何それ、至れり尽くせりじゃん……」と照れ笑いを浮かべていた。
俺が折本とどうなりたいのか、折本に何を求めているのかは、まだ分からない。
それもきっと、これから折本と顔を合わせる日々を繰り返せば、見えてくるのかもしれない。

続く。

（12）

折本と約束をしてからは、本当に毎日会いに行っていた。俺が「今から行く」と言って折本の家に迎えに行き、どこか恥ずかしそうな顔をした折本が家から出てきて、公園まで歩く。そして他愛も無い話をして、すぐに家まで送る。休日は話す時間が少し長くなるが、それでも以前一緒に出掛けた程の時間を共に過ごすことはなかった。どちらからともなく切り上げることで、常に「もっと、もっと」という気持ちが湧く。そのもどかしさが、明日も会いたいと思わせる要因になったかもしれない。迎えに行って話し、送り届けるという一連の流れは本当に短いが、それでも今までにない満ち足りた感情を覚えていた。折本はこの時間をどう思っているんだろうか……と何度も思ったが、いつでも屈託なく笑って話をしてくれるという事実が嬉しくて、何も聞けずにいた。

3週間程経った頃、いつものように折本を迎えに行った。折本は今日もどこか恥ずかしそうな顔をして、目を一度きゅっと瞑った後に明るく笑う。俺にどこまでの感情を見せたら良いか、折本自身がまだ迷っているように思えた。

「今日はねー、仲町がー……」

毎日話しているから、あまり大した話はしない。お互いその日にあったことをつらつらと話す。歩きながら、或いは座りながら、交換日記を書いているような気分だった。たまに人生観や恋愛観のような話もする。恋愛観について話す時は下手に踏み込むことのないようにするのが大変で、いつも綱渡りのようだった。話の内容自体はそこまで重くないし、折本自身極めて当たり障りの無い話を選んでいるようだった。ちなみに怖い話を一度してみたら、泣きそうな顔でぷるぷると震えながら睨まれた。こんな顔もするんだ……とにやけそうになった。今度また怖い話をしてみよう。

折本の隣を歩く時は、一人で歩く時より少しだけ遅く歩く。折本の話は割とテンポが速いので、初めの頃は話を聞いているとつい足を速めてしまい、2人の距離感がちぐはぐになってよく笑われた。

ふと、折本の顔を見る。毎日同じように、からからと楽しそうに笑っている。その笑顔を毎日見ることで、どうしようもなく惹かれている自身の気持ちに気付いていた。
今はきっと、中学の頃よりも折本のことが好きで。
そしてきっと、中学の頃よりも苦しい。
何で折本が毎日会うなんていう行為に付き合ってくれるのか、分からない。
大体、折本が俺に何を言って、何をしてくれたら俺自身が安心出来るかも分からない。
俺はこの先どうなりたいんだろう。
折本と、どうしたいんだろう。
折本は、この先どうなりたいんだろう。
俺と、どうしたいんだろう。
頭の中で濁った思考の渦がぐるぐる回っていると、折本が俺の顔の前でぶんぶんと手を振っていることに気付いた。
「おーい、どうしたー？」
「……すまん、ぼーっとしてた」
俺の答えに、折本はからからと笑う。
「あはは、疲れてるのかもねー。毎日送り迎えご苦労さま」
「何その幼稚園に通う子供がいる感じ」
「……っ」
折本が顔を背けてぷるぷるしている。こうして折本のツボを突くのが最近やたら得意になったのは確かだ。
折本が向き直った。まだ面白いのか、唇がひくひくしている。うむ、ダメージは甚大だ。
「……どっちにしろ、疲れてはいるみたいだよね。どうする、手でも繋ぐ？」
「……へ？」
折本の言葉に、ぴたりと歩を止める。折本は俺の静止に気付かず数歩先まで歩いて、
「あれ？」と足を止めた。

……え、どういうこと？
俺が疲れているのは事実だ。それ程ひどくは無いが、確かに眠気はある。この状況に対して折本が何か考えてくれるのも分かる。しかしここで折本が何かしらするとしたら、持っているお菓子をくれて「甘いもんでも食べなよ」などと言うか、「明日は土曜だし、ゆっくりしなよ」などと言う辺りの行動が妥当だろう。しかし折本は「手でも繋ぐか」と言った。仮に実行したらどうなる。折本の手？　柔らかいに決まっている。小町と手を繋いだ以来そんな行為に及んだことは無いから、俺は恐らく歩きながらふらつくだろう。そしてその拍子にちょっと二の腕が触れる。折本の二の腕？　柔らかいに決まっている。ふにっとするぞ、ふにっと。そんな状態が１０分や２０分と続けばどうなる？　そんなの、激しく癒されるに決まっている。激しく癒すっていう表現が妙だけども。
……と、高速で思考を巡らせた結果、顎に手を付けて深く頷き、
「……ぜひとも採用したいな、その案」
と至極真面目に言った。
「そんな難しく考えることなの……っ」
折本が俺の顔を見て蹲り、ぷるぷる震えている。今の俺の何がツボだったのだろうか。分からん。
てっきりこちらに手を伸ばしてくれるのかと思ったが、折本は俺を見てくすりと笑い、そのまま歩き出した。数歩前にいたので慌てて追いかけ、隣に追い付く。
「……」
「……」
何も言ってこない。折本の左手は俺の右手のすぐ横で気ままに揺れている。
これはどうしたら良いのか。俺か。俺が掴み取るしかないのか。
一世一代の勇気を振り絞って、恐る恐る手を伸ばしたその瞬間。
「あ、猫」
折本が左手で前方を指差した。猫が道路をとことこと渡っている。うん、上品そうな猫だ。

ところで。
「折本って左利きか？」
「え？　右利きだけど」
「あ、そうか」
「うん」
……。
シット！
折本が手を下ろした。そのままゆっくり歩き出す。
今度は二度目だ。さっき程の勇気は要るまい。
呼吸を整えて、右手を横に伸ばした。
「あ、カフェだ」
左手で、交差点の向こうのカフェを指差した。左手で。俺の右手はまたしても空を切った。
……。
……いや、カフェだけども。
カフェだけども！
「今度行こっか」
「ん、おう」
……約束が増えたので良しとしよう。
……って、あれ？
何か俺、良いようにあしらわれてない？
気が付けば右手がわきわきと動いている。傍から見れば紛う事無き変態だ。どうしよう。
折本は一体どうしたいんだろうか。俺の手を避けたのも、わざとなのか偶然の重なりなのかさえ確かめることが出来ない。
うんうん唸っていると、折本と目が合った。
「……」
口の端が、微かに、ほんの微かに。
くい、と上がった。
そしてまた、前に向き直る。
……。

……わざとだ……。
あれ、俺、今、からかわれてる？
不安の中でも、関係を進めようと勇気を出したのに、からかわれてる？
右手をよろよろと折本の左手に向けて伸ばす。折本は俺の手をひょいと避けて、また楽しそうに笑った。
え、あれ。
なに、なに、なんだこれ。
折本は、俺が笑ってツッコむと思ったんだろうか。
振り絞った勇気をあっさり受け流されて、俺が笑うと思ったんだろうか。
心が、くしゃりと歪む音がする。
――我ながら大人げないな、と思ったけれど。
心が暗褐色の靄に覆われると、身体が弾けるように動き出すのを止められなかった。
「……もう少し急ぐか」
「え、比企谷、どうしたの……比企谷？　ねえ！」
早足でずんずん進むと、折本が小走りで追いかけてきた。それも気にせず、むしろ更に引き離すように、どんどん前に進む。。
からかわれた――という事実が、心の中をぐしゃぐしゃにかき回す。これまでの会話で折本がからかったきた時とは、何かが決定的に違っている気がした。
俺は馬鹿にされていたのか――と思った瞬間、今まで折本が見せていた笑顔や何もかもが急に嘘っぽく思えてきてしまった。
「比企谷、ねえ、比企谷ってば！」
益々歩調を速める。両手をポケットに突っ込んだ。折本の声が遠く聞こえるのは、物理的に離れているからだけなのか、それとも心も俺が距離を置いたからなのか。
ああ、そうか。
俺は何も変わっていなかった。
折本からすれば、どの時点からかは分からないけれど。

「比企谷……ねえ……」
俺を、こうしておちょくる気だったんだろう。
こんなの、何でもない。ただ小馬鹿にされただけだ。
そう思えば良いのに。
中学の頃の、折本に告白をした翌日にクラス中に馬鹿にされたトラウマを思い出して、胸がぎしぎしと軋む。もう何でもない、笑い話として話せると思っていたあの頃の記憶が、折本の冗談一つで心の中に一気に噴き出した。
「……ねえ……っ」
ああ、俺は何でこんなことをしてるんだろう。帰って勉強した方がよっぽど将来のためになるじゃないか。今からでも体調が悪いとか適当なことを言って今すぐ送り返そう。そしてもう二度と連絡を取るのはやめよう。学校が違うんだ、もう二度と会うこともあるまい。
そうだ、そうしよう――
「ねえってば！」
「……っ？」
右手がポケットから飛び出た。
折本の左手が、俺の手を引っ張り出したのだと気付く。
「……どうした」
自分の声が恐ろしく低くて暗いことに驚く。折本は俺の声を聞いて目を瞠り、顔を歪めて泣きそうな表情になった。
「……あの、比企谷……怒ってる？」
「……別に」
俺の言葉に折本は俯く。何だ、今更何を言おうとしてるんだろうか、この人は。もう関係無いというのに。
「折本、悪い。何か今日は体調が――」
「……から」
「……へ？」
今すぐにでも帰ろうと話を切り出したが、折本の消えそうな声に遮られた。
「……恥ずか……から、……なの」

「……ちゃんと言ってくれ、何を言いたいのか分からん」
早くこの会話を切り上げて、人間関係も切り上げてしまおう、だから人を信じるのは嫌なんだ……と自分の春休みから浮かれていた時間に心底嫌悪していると、折本が顔を上げた。
顔を真っ赤にして、目には涙を浮かべていた。
俺の手を握る折本の手が、確かな熱を帯びる。
「……自分から言ったのに恥ずかしくなって、でも正直に言うのはもっと恥ずかしいから、からかうフリして避けてたの……ごめん……ほんとにごめん……」
折本が整った顔立ちを歪めて、ぽろりぽろりと涙をこぼす。折本の言葉に、俺の澱んだ思考の悪循環はぴたりと止まった。
「え……あ……その……」
言葉に詰まる。どうすれば良いか分からない。
――折本の言葉と表情が、猜疑感と絶望感でがちがちに固まった心を解していく。零れた涙が心のヒビに染み渡っていく気がした。
折本の手を握り返す。
「きゃ――っ!?」
折本は、泣いていたにも関わらずびっくりして手を離した。「あ、ごめん……」と申し訳無さそうに言って、そろりと手を伸ばす。
……。
手をわきわきさせてみた。
「……」
涙目で、上目遣いで、睨まれた。
折本が俺の手を握る。
離す前よりも、手が熱かった。
「……本当に恥ずかしいんだな」
「……っ」
折本が俯く。どうしようもなく可愛く思えた瞬間――ああ、関係を切るなんて絶対駄目だと思った。
「……悪い。なんか中学の時のこととか思い出したら……もう、一気に何もかもどうでもよくなっちまって……」

ごめん……と言うと、折本が俯いたままふるふると首を振り、俺の手をぎゅっと握った。
「あたしこそ、本当にごめん……もう、こんなことしないから……っ」
ちらりとこちらを見やり、またシュンと頷く。
そうかそうか、もうこんなことをしないのか……。俺はもうからかわれることは無い訳か……。
……うん？
「それは困る」
俺の言葉に、折本は顔を上げてきょとんとした。
「え？　でも……」
「折本が俺をからかう時な、言っておくがすげえ可愛いんだぞ。それをやめるなんて勿体ないにも程がある」
「……っ!?　な、なん、うぇ……っ!?」
折本がびっくりしすぎて、顔を真っ赤にして変な声を漏らした。
「さっきのは俺も悪かった。……その、まあ、冗談の加減とかは、お互い譲歩し合ってゆっくり見付けていこう。……これじゃ、だめか？」
俺の言葉に、折本はゆっくりと首を振った。優しい笑みを浮かべて俺を見つめる。
「ううん、だめじゃない。……そっか、そうだよね、うん……」
「まあ、その、なんだ。ゆっくり……な」
「うん……」
妙にしっとりした雰囲気のまま、気付けば公園に着いていた。
結局この日は公園のベンチでほとんど会話を交わすことはなく、代わりにずっと手を握っていた。言葉の無い時間の間隙を、優しい温もりが埋めてくれた。
手に力を少し入れる度に、折本がぴくりと反応するのが可愛くて。けれどやりすぎると涙目で睨まれて。
気が付けば、俺は折本の頬を赤らめた横顔をずっと見つめていた。街灯に照らされた横顔はどこか神秘的で、いつもとは違った雰囲気にどきりとした。
さっき俺は何であんなに怒ったんだっけな……と思いながら——

ぼんやりと、けれどはっきりと思うことがあった。

折本と、キスがしたい。

続く。

（13）

折本かおりは快活な人物だ。
さばさばとした性格。
誰とでもすぐ仲良くなって会話を盛り上げるノリの良さ。
そして何より表裏が無い所。
中学の頃は特に言葉して考えることは無かったが、敢えて今言葉にするなら「見ていて気持ちの良い人」と言う言い方に尽きる。分かりやすい眩しさを備えているため、慕う人はその光に吸い寄せられるように集まり、光を嫌う人は明確に離れるのだ。雪ノ下や葉山とはまた違う種の魅力で、由比ヶ浜と三浦の間をとったような魅力だと思っている。
そんな折本を、俺は近付かないフリをしながらずっと近くで見ていた。当時の俺に会えるならば教えてやりたい。あの頃は想像さえ出来なかった事態が起きているぞと。
――あの折本と、こんな距離に近付くだなんて、どうやって想像出来ただろうか。

× × ×

初めて手を繋いでからも、折本とは毎日のように会っていた。長時間会う訳ではなく、決まって夜の短い時間、折本の家から一番近い公園のベンチで話す。その行為自体は手を繋ぐ前と変わらないのだけれど……あの日を境に、話す時は手を繋ぐようになった。折本から手を繋ぐ時はこちらが驚く程自然に握ってくるのだが、俺から繋ぐ時はどうしてか毎回笑われる。
「だって比企谷、自分から手を繋ぐ時毎回『今から手を繋ぎます』って言わんばかりに変な咳払いするんだもん。あと急にあたしのことちらちら見始めるし。超ウケる」
「……」
もろバレな俺の仕草を綺麗に見透かされていた。めっちゃウケてた。死にそう……。
そんなこんなで、今日も折本に会いにゆく。すっかり習慣化された

行為が、どうしようも無く心地良かった。

×　×　×

今日の折本は、何だか少しおかしい。

手を繋ぐ前からちらちらと不自然に俺を見て、俺の言葉に対して急に生返事になって、しまいには不自然な咳払いをする。完全に手を繋ぐ前の俺だぞ……と思っていると、折本が意を決したように手を繋いできた。てっきり手を繋ぐことに緊張しているのかと思ったけれど、今の行為は至極スムーズなものだった。折本を見るとまだ挙動不審は続いている、と言うか悪化している。どうやら、手を繋いだ後にまだ何か仕掛けようとしているようだ。

のらりくらりと会話をしてしばらく経った所で、折本が空いた右手で口を押さえてあくびをした。

「そろそろ帰るか」

存外おとなしめのあくびに内心ときめきながら話しかけると――不意に、右肩に軽い重みを感じた。見ると、俺の右肩に折本が寄りかかっていた。ウェーブのかかった黒髪が優し気に揺れている。

――さっきから狙ってたのって、これか……っ！

一瞬で確信する。折本はこの行為を仕掛ける為にずっと緊張していたのだ。さっきから仕掛けるという言い方に違和感しか覚えないが、まあ恋愛って駆け引きが柔らかいどうしよう重要とか言うのを小町が読んでる雑誌でめっちゃ良い匂いするどうしよう読んだことがありますし、こう言った表現も頭すりすりしてきた超可愛いどうしようアリなのではないでしょうか。

動揺しすぎてすんごく読みづらい文になった。

「ん……大丈夫。ちょっと、こうしてて良い？」

どう考えても断る事が出来ない状況で、完全なる事後承諾を求められた。この子怖い。このわかめの海に顔をうずめて甘い匂いに溺れたい。落ち着け俺。

「お、おう、イエス、マム」

「……なにそれぇ……ウケるんだけどぉ……っ」

間延びした声で笑われた。仕掛けはしてきたが、眠いのは本当らし

い。少し子供っぽくなり、目がとろんとして話すのも遅くなった折本は、あろうことか繋いだ手を自らのスカートの上に乗せた。俺の手が下だったため、手の甲にスカート越しとは言え折本の太ももの感触を感じて心臓がばくばくと跳ねる。緊張で死ねると思った。

まだ夜は肌寒い。冬と春をないまぜにした冷たい風が吹き抜けると、俺と折本の距離は自然と縮んだ。

ごくりと息を呑む。あまりに距離が近いから、今の音を聞かれていたかもしれない。

繋いでいた手を離す。折本の左手は急に寂しくなったのか、わきわきと動いて俺の太ももに置かれた。繋いでいた右手の代わりに左手を繋いで、右腕を折本の背中に回して肩を抱き寄せた。

「ん……っ」

一瞬ぴくりと反応した折本だったが、すぐに落ち着いた。聞こえてくる呼吸音が若干不規則になったのは気のせいだろうか。少しだけ抱き寄せる力を強くすると、折本は繋いだ手に力を込めて、小さく小さく震えた。時折もぞもぞと身じろぎするが、抱き寄せる度にその動きは止まる。

「あったかい……」

半分目を瞑りながら、折本が子供っぽい笑みを浮かべる。柔和な笑みを見て、折本が子供の頃はこんな表情をしていたのかな……などと考えた。

この後は会話をするでもなく、折本の肩をずっと抱きしめていた。

× × ×

翌日。

公園に向かう時点で、折本が手を繋いできた。しかも距離がやたらと近い。腕がほぼ全てくっついていて、顔も自然と近くなる。顔が熱くなるのを感じながら、一体どんな悪戯心を働かせているのやら……と折本の顔を見ると、心底幸せそうに微笑んでいた。見るんじゃなかった、心臓に悪い……顔が見れない……。

まだ公園に着いていないのに、何故か手が離れた。しかし腕が接する距離感は変えない。一体どうしたのかと見ると、俺のことをちらち

らちらと見ていた。ツンデレな猫がエサを欲しがる時ってこんな仕草をするんだろうか。少なくともうちのカマクラはこんな可愛い仕草はしない。さてどうしたものか……と思い、試しに肩を抱き寄せる。

「……っ」

折本が息を呑んで足を止めた。目が合うと見る見る内に真っ赤になり、肩を抱き寄せている右手を引き離して再び手を繋いで歩き出した。何かしらキャパオーバーだったらしい。

初めはつらつら話すだけだった日々が少しずつ変化する。

どちらからでもなく手を繋ぐようになり、その次は折本が肩にもたれかかってくるのを合図に肩を抱き寄せるようになった。

焦れったい程ゆっくりと進んでいく関係性が、たまらなく心地良い。

月明かりの下、今日も折本は俺の腕の中でうつらうつらと気持ち良さそうにしている。眠りそうで眠らない状態が気に入っているようで毎回粘っているのだが、程なくして結局寝てしまう頻度も結構なものだった。１０分くらい経って起こしてやると毎回頬が仄かに赤くなる。その表情がまた愛おしかった。

明日は金曜日。４月ももうじき終わろうとしている。

続く。

（１４）

翌日、金曜日。

いつも通りの一日を過ごして、いつも通り折本に会いに行き、それが自然な行為であるかのように手を繋ぐ。この手の温もりがゆっくりと日常の一部に化していることが嬉しい。折本と目が合った時、穏やかに目を細めてくれる仕草がとても好きになっていた。

「壁ドンってあるじゃん」

「……ん？」

公園で話した帰り道、折本がふとそんなことを言う。

「……あるな、隣室がうるさい時によくあるやつ。俺も妹によくやられる」

「ぶっ……くく……っ、……からの？」

「……ああ、あるな……いや、無いっての。急に追加でネタが浮かぶ程笑いのセンスはねえよ」

「ぶふっ!?　くく……っ」

折本が震えている。俺の顔のすぐ横でワカメがゆらゆら揺れている。完全に足を止めてぷるぷる震える元クラスメートに呆れ笑いを浮かべつつ、頭をぽんぽんと撫でる。笑いで震えながらも俺の手に自分の手を重ねてきて、心臓が心地良くとくんと跳ねた。

「まあ、比企谷はそんな柄じゃないよねー」

ようやく顔を上げた折本が、悪戯っぽい笑みを浮かべながら言った。

「そんなのに適合した人種でありたいとは思わんぞ」

「大げさ……っ」

またツボっている。よしよし。

空いた左手で小さくガッツポーズをとっていると、ふと折本が俺を見つめた。温度の変わった表情にどきりとする。

折本がこほんこほんと咳払いをする。

「まあ、向き不向きはあると思うけど。それとやるやらないは別だと思う」

「お前は子供に挑戦をさせようと息巻く先生か」
「……っ、……こほん、……別に、比企谷が、まあその、したくなったら、試してみても良いと思うんだけど？」
「分かった。今度妹に試すわ」
「シスコンすぎるでしょ……」
　こんな会話で躱してはいたが、折本は明らかに「やってみて、ほら、今すぐやってみて」と言う意思を丸出しにしている。ヒーローショーに行った子供くらい目がキラキラしている。これだけ言われると段々その気になってきて、空いた左手がわきわきし始めた。
「……比企谷、何か左手が変態みたいな動きしてるんだけど」
「……すまん」
　すぐバレた。
　しかも変態みたいって言われた。
「……試す？」
「……まあ、うん、気が向いたらな」
　上目遣いで覗き込むようにこちらを見る折本から、火照った顔を逸らす。こんなことを言いつつも、折本の家に着いた。
「……じゃあ、また明日ね」
　未だに仄かな期待を乗せた声音で囁くと、折本は繋いだ手を離す。
　――多分、ここで何もせずに終わったら、本当にただの冗談に終わってしまう。それだけは避けたい。
「折本」
　跳ねるように上げた声が、やけに上ずっていた。
×　×　×
「あ、え、どうしたの？　……っ」
　再び繋がれた手に動揺を隠せない折本を、何も言わず家の前の壁に引っ張っていく。
「え、あれ、まさか、ほんとに……っ？」
　目に見えて折本が慌てだす。
「……」
「……ひ、比企谷？　何か言って――ひゃっ!?」

躊躇してはいけないと思い、ひと思いに両手を折本の横に置いた。片手で良かっただろ……と思ったが、もはや後には戻れない。
今まで経験したことの無い、顔と顔の距離。俺が吐いた息が折本の額を撫でると、折本がびくりと震えた。折本の吐息は甘く、鼻腔を擽ると身体がぞくりとする。
「……か、顔、近い……っ」
借りてきた猫のように大人しくなった折本が、上目遣いで恥ずかしそうにこちらを見る。俺自身はもっと緊張すると思っていたのだけれど、折本があまりにも緊張している為却って冷静になっていた。
建物の灯りでうっすらと見える折本の顔は、紅潮の色こそ分からないもののきっと真っ赤なのだろうと思う。逃げ出すでも抵抗するでもなく、ただただ腕の檻の中で大人しくしている折本は――何だか別の女の子のように見えた。
「折本」
「……っ」
華奢な肩が跳ね上がり、こくりと息を呑む音がする。
人も車も見当たらない通りはとても静かで、互いの息遣いがはっきりと聞こえる。心音の高鳴りまで分かった。
限りなく0に近付いた距離が、鼻腔を擽る甘い匂いが、静かに荒げる息遣いが。
少しずつ、いつもの自分というものを崩壊させていく。
いつもの俺ならこんなことはしない、しようともしない、或いはしたくても出来ない。
まして、これからしようとしていることなんて、イメージさえ出来ない。イメージさえ出来なかった。
けれど、今ならやれる。
何の根拠も無く、そう思えた。
「……っ」
もう一度息を呑む音が聞こえたかと思うと、折本がゆっくりと顔を上げた。
雲に隠れていた月が顔を出し、折本の顔を映し出す。

潤んだ瞳、震える睫毛、艶っぽく光る唇。
折本かおりという女性の、全く知らない面が見えた。
折本が顎を上げる。それと同時に、ゆっくりと目を伏せた。
さぁっ、と風が吹き抜ける。寒さの粒が色濃く残る風は、折本の身体を震えさせた。
壁に付いていた手を離し、右手は折本の頭に、左手は背中に回す。
折本は何も言わない。
折本を抱き寄せると、こんなに華奢だったのかと驚く。
折本が抱きしめ返してきた。温かくて、微かに震えている。
一層増した甘い匂いに包まれながら、徐々に近付いて行く折本の顔を見て――。

――――――――――っ。

「……ん……っ」
口を離すと、折本がゆっくり目を開いた。
「……あ、あはは……しちゃった。……そっか、あたしたち……ん……っ？」
たまらなくなって、俺から更にもう一度口付けをする。あまりにも一瞬の夢のように過ぎてしまった時間を、忘れて手放す前にもう一度味わいたかった。
「ん……ふむ……っ」
一度目よりも唇をぎゅっと強く押し付けて、抱きしめる力を強くする。抱きしめ返す折本の手が震えていた。
一度目の何倍もの時間、唇を交わらせた。
「……ん……っ、もう……力入れすぎ」
「……わりい」
軽口を交わしながらも、きっと今は互いに真っ赤なのだろう。
腕を離すと、折本はくすりと笑った。
「あーあ、あたしのファーストキスが奪われちゃったー」
「え」

「ん？　そうだよ？　比企谷は？」
「あ、はい、俺も初めてです」
「何で敬語なの……っ」
　腹を抱える折本を見て、ようやくいつもの空気に戻ったと実感出来て息を吐く。
「まさかねー、比企谷と再会したと思ったら、手を繋いで、抱き寄せ……られて、壁ドン……され、て、……き、キ、キ……っ」
　俺をからかうように喋っていた折本の言葉が、目に見えて減速する。オイルの切れたロボのようなぎこちなさに、思わず苦笑した。
「……無理な回想で自爆しなくて良いと思うぞ」
「……うん、やめとく……」
　正直可愛くてしょうがなかったので最後まで見守るのも手かと思ったが、流石にやめておいた。
　風が吹き、折本の顔を照らしていた月灯りに陰りが差す。夢のような時間は、ひとまず終わりなのだと告げているようだった。
「……そろそろ帰らなきゃ」
「……おう」
　折本が名残惜しそうに言う。折本ともっと居るにはどうすれば……と考えた瞬間、言葉がつかえることなく喉からこぼれ出た。
「……折本、明日うち来るか」
「……え……っ」
　折本が目を見開く。唇が微かに震えている。何とも言えない反応に、勢いで言ったことを後悔してしまう。
「……だめか？」
「え、あ、その、え？　や、その、だめではないけど、その、なんかいろいろと、その、あれ、なんていうか、その……」
「大丈夫だ、下手なことはしない」
「へ、下手なことってなに……っ!?」
　折本が両頬に手を当てて顔を真っ赤にする。思っていた以上に乙女な彼女を見て頬が緩むばかりだ。
「その、まあ、なんだ、俺の部屋でだらだら喋ったりするだけでも……

どうだ？」
俺の言葉に、折本は髪先を指でくるくると巻きながら、こちらをちらちらと窺う。
「……う、うーん……それくらいなら、多分、うーん……わ、分かった、……行く……っ」
「……っ」
袖をちょんと摘まれて、お淑やかな声でぽそりと言われて心臓が早鐘を打つ。
「……お、おう、取り敢えず、後でまた連絡するから」
「……うん……っ。じゃあね、おやすみ」
「おう、おやすみ」
折本がたっと走り出して家に駆け込む。折本の温もりの残滓は、冷たい風がすぐにさらっていってしまった。
「……マジか、俺……っ」
月を見上げながら、ほんの5分間程に起きたことを何度も何度も反芻する。
折本の表情、匂い、柔らかさ。
その全てが、今の自分にとっては劇的なものだった。
この5分間を過ごす前と後では、まるで人生が違うものに思える。
折本の言動を思い返す。
初めてだったのか、という驚きと、喜び。
これは今日寝られそうにないな……と思いながら、折本の家をちらりと見て、家路についた。

続く。

（15）

「……取り敢えず、お茶どうぞ」
「あ、あり、ありがと……」
「……」
折本の家の前で初めてキスをした翌日。
勢いで自宅に誘ってみた所、オーケーを貰ってしまった。そんなに展開を急ぐつもりは無く、単純に自分が安心出来る場所で折本と過ごしたいという気持ちで誘ったのだけど……当の折本はと言えば、それはもうがっちがちに緊張していた。多分学校の上位カーストの女子グループに俺が突然放り込まれたらこんな感じになる。借りてきた猫って感じだ。
「……」
お茶に手を付けることもなく、せわしなく辺りに視線を巡らせる折本を見て、何気なくその髪をくしくしと撫でる。
「あ、ちょ、なに……？　んん……っ」
「……」
顔を赤らめながら、俺の手を引き離すか迷っている。
何だ、この子。
意外に……と言えば失礼に値する訳だが。
折本かおりは、とても可愛いと言うことが分かった。
「……まあ、なんだ、のんびりしてくれ」
視線を逸らしながらぽそりと呟くと、折本がくすりと笑う。
「フォロー下手……っ。でも、ありがと。何しよっか？」
柔らかく微笑まれて、心臓が鈴のように鳴る。
「あー、まずはその、何だ、無難にこういうのはどうだろう」
言って、今日折本が来るまでに借りた映画を3本程テーブルの上に並べる。どれも比較的新しいもので、人気のあった恋愛映画だ。これなら女子も無難に興味を持ってくれるのでは……と思っていると。
「へー！　あ、これとこれ見てみたかった。これは初めて見るかも……面白いのかな。うーん、どれにしようかな……」

折本が思いの外良い反応を見せてくれて、ほっと一息を吐く。
「うーん……一番見たいのはこれかなぁ……」
楽しそうに迷いながら、折本が視線を巡らせる。
不意に、折本が隣にいる俺の側に身を乗り出してＤＶＤを眺め始めた。その瞬間、ふわりと甘い匂いがして、２人の距離がとても近くなっていることに気付く。
「あ……ご、ごめん」
顔が熱くなっていると、折本も距離感に気付いて頬を赤らめる。しかし彼女が離れようとする寸前、反射的に右肩を掴んで抱き寄せた。
「え……んん……っ！」
勢いのまま唇を重ねる。昨日は重ねるだけの口付けだったが、昨晩はずっとそれ以上の感触を求めていた。折本が抵抗をしないのを確認して、舌で唇の割れ目をなぞる。
「ん……ふぅ……っ？　んんん……っ！」
折本が目を白黒させ、こちらの太ももに不安げに手を重ね置く。震える手に自分の手を重ねると、徐々に舌を温かな口内へ侵入させていく。
「ん……ちゅくっ、ちゅろっ、んふぅぅ……ふっ、んんん……っ」
口内を舌で丹念に舐め回し、恐る恐る出てきた折本の舌を咥え込んで啜る。ずじゅる……と音を立てて啜ると、折本の目が見開かれ、そこからうっとりと細められていく。
窓を閉め切った部屋には何の音も入ってこない。ちゅぴ、ちゅぴ……と２人の舌が絡まる音だけが妖しく響いて、今までの日常を新たな日常が侵食していく。家に招いたとは言ってもあまり関係を急ぐ気は無かったが……これだけは絶対にしたかった。まさかこんなに早くやってしまうとは思わなかったが。
「……んぅ……っ」
唇を離すと、２人の間にうっすらと透明な糸が引く。指で掬うと折本は真っ赤になった。どうするか数瞬迷って、唾液を掬った指を折本の唇に割り入れる。
「んっ、ふぅ……っ？　んっ、ちゅっ、はむっ……んんん……っ」

「……っ」
うっとりとした顔で指を舐められて、鼓動が爆発的に高まる。どんどん入り込んで行く人差し指を理性が弾ける前に引き抜くと、折本はハッとして顔を赤らめた。
「あっ、あはは……ちょっと、もう……早いって……っ」
言いながら、俺の肩にとん、と身を預ける。
「……キスって……こんなにドキドキするの……っ？」
折本が囁いた言葉に、ぐっと身体が固まる。
「……そう、だな……。……映画、見るか」
「……うん……」
押し倒すのを我慢して何とか予定通りの流れに持って行ったが、折本がどこか残念そうにしていたのは気のせいだろうか。

× × ×

ついさっきはどれにしようかと意気揚々と選んでいた折本だったが、キスにより興味が完全に逸れたらしい。折本が一番良い反応を示していたものを選んで観始めたものの、ずっと顔に視線を感じる。折本を振り向くとふいと顔を逸らされ、テレビ画面を観ているフリをされる。冒頭の15分くらいを全く観ていないのを知ってるんだぞ、こっちは……。試しに折本が映画を観ている間、今度は俺が折本をじっと見つめてみる。すると折本は視線をテレビ画面に向けながらもそわそわとし初めて、俺の手をきゅっと握った。力強く握り返すと折本はびくりと震えて、恐る恐るこちらを振り返る。
目が合った。
テレビの音量を落とす。
顔が近付いた。
折本の睫毛が長いことに気付く。
綺麗な顔をしているな……と思っていたら、唇が重なった。
「ふ……っ、うんん……っ」
悩ましい声を漏らして、折本が舌と腕を絡めてくる。じゃれつくように抱き付かれ、身体が徐々に倒されて行く。伸ばした手でリモコンを掴んでテレビを消すと、映画を観る為にカーテンを閉め切った部屋

は暗闇に包まれた。
「うんんん……うんんん……っ」
折本の声に、いつものさばさばとした明るさが全く見受けられない。仰向けに倒れた俺の首に腕を絡め、身体を擦り付けてくる。猫がじゃれついているような、そんな甘え方。流れ込んでくる唾液は甘露のようで、ごくりと飲み込む度に恍惚として、折本を抱き締める腕に力が入る。
「あ……っ？」
背中を抱き締めていた手を、我慢出来ずに尻に滑らせていくと、折本がどこか惚けたような声を出す。
……と、ここでふと思うことがあった。
「……電気、点けて良いか？　顔が見たい」
「……下手なこと、しないんじゃなかったの？」
耳元で、悪戯っぽい声で囁かれる。その声に批難の色は無かった。
「それはまあ、あれだ……下手って言われないように頑張るっつうことで」
頬をぽりぽりと掻いて呟くと、折本がくすくすと笑った。
「ぷっ、くく……っ。うん、分かった」
折本が身体を離し、電気を点ける。折本は顔をほんのりと赤らめていて、まだ寝転がっている俺に身体を屈めて微笑んだ。
でも、ちょっと怖いから……と呟き、俺の上に覆いかぶさって、耳元で囁く。
「……優しくして？」
「――――っ」
身体中にざわざわとした欲望が走り抜けた。危うく暴走しかけるが何とか踏み留まる。
「……善処する」
「硬いって……っ」
また笑われてしまった。
けれど、折本が笑うのを見るのは本当に心地が良い。
どこまで出来るかは分からないけれど、事を終えた後も折本の笑顔

が見られるように……目一杯頑張ろうと思った。
「……気張んなくて良いからね？」
「……おう」
おうふ。
折本の方が一枚上手だった。
続く。

（16）

電気を点けて、折本がベッドの上で仰向けになる。胸の上で手を重ね、足をもじもじとくねらせて、頬を赤らめてちらちらとこちらの様子を伺う様はとても可愛らしい。口付けの為か、普段は気の強さが滲み出ている瞳はとろんと蕩けていて、服を着たままでも十二分に色っぽかった。

ごくりと喉を鳴らして、膝立ちで折本の身体に跨る。震えながら上下する2つの膨らみに手を伸ばすと、折本が横を向いてきゅっと目を閉じた。

「……あ……っ」

手を添えると、折本が消え入りそうな声を漏らす。こちらをちらりと見て、またすぐに視線を逸らした。

これが……女の人の……っ。

初めて触る女性の乳房の感触は、下着や服の上からでも確かに柔らかい。感動混じりにむにむにと揉んでいると、折本は「あ……っ、んん……っ」と熱の篭った息を漏らしながら、恥ずかしそうにこちらを見た。

「……あんまりおっきくなくてごめん」

「……？　……そうか？」

折本の質問にきょとんとして答えながらも、胸を揉む手は止めない。

「んん……っ、はぁ……っ、……気に、しないの？」

「ん、全然気にならんどころか、なんで謝るんだ？　ってさえ思ってる。柔らかいし、手ですっぽり収まるこのサイズ感がたまらん。いつまでも触ってられる」

思ったままを口にすると、折本がぶふっと噴き出した。

「ぶっ、くく……っ、何なのさ、もう。悩んでたのがバカみたい。良かった、比企谷が変態で」

「……変態であることを喜ばれるのもどうかと……というか待て、俺は変態じゃない」

「変態じゃなかったら、真面目に喋ってる間は手を止めると思うんだけど？」
「……あー、たしかに」
くすくす笑う折本を見てぽりぽりと頬を掻く。ちなみに空いた手は今も尚目の前の程好いサイズの乳房を揉んでいる。
「……比企谷、胸、好きすぎじゃない？」
「言ったろ、いつまででも揉んでられるって」
「……またまた。あたしの胸だよ？　絶対飽きるって」
折本の言葉にむっとなる。
「……言ったな？」
「……え？」
「なら証明してやる。俺が折本の胸をいくら揉んでも飽きないことを」
俺がドヤ顔で言うと、折本は小さい声で「え、ええ……？」と、戸惑いの声を漏らしていた。

× × ×

「うっ、くっ、んんっ、はぁぁ……っ」
後ろから胸を揉まれる折本が、悩ましい声を漏らす。足をくねらせて内股をこすり合わせる仕草はとても色っぽくて、汗の混じった身体からはとても甘い匂いがした。
――証明してやる、と言った後。
まず俺がベッドの上で壁に背を付けて座り、折本は俺の股座に座ってもらった。そして後ろから抱きしめながらＤＶＤを見始めた。そこからひたすら折本の胸を揉み続けている。
「あ、んん……ひ、比企谷ぁ……っ、どんだけ、揉む、つもりなの……んふぁぁ……っ」
「ＤＶＤ１本分はこうしてられるぞ」
「っ!?　う、うそ、そんな……んっく、うんん……っ」
俺の言葉に応じる言葉も、徐々に弱々しくなっていく。耳まで真っ赤にした折本が、腕の中で力なく身を捩る様はたまらない程淫靡だった。

ＤＶＤは流してこそいるが、音量は極小にしてある。あくまで時間の目安にしているだけだ。折本はしきりに視線を泳がせ、俺は折本の身体をじっと見ていて、互いにテレビ画面は全く見ていなかった。

――２０分程味わった頃。

「……上、脱がせて良いか？」

「……っ、あ、う、うん……っ」

俯いて頷く折本の髪を撫でて、上着のボタンに手を掛ける。１つ１つのボタンを外す度に、腕の中で折本が小さく震えた。

やがてボタンを外し終えて、折本がするすると上着を脱ぐ。

ピンクの可愛らしいブラを、折本は腕で隠した。

「隠すなよ」

「だって……恥ずかしい……っ」

「可愛いし綺麗なんだから、恥ずかしいことなんて無いって」

「ひ、比企谷……あんたそんな感じだったっけ……？」

「折本こそ。随分としおらしいな」

「……ばか……っ」

折本のお腹を抱きしめながら言葉を交わすと、折本は諦めたのかふっと腕を胸元から外した。小さな谷間に見惚れながら、徐に下着の上から乳房を揉むと、格段に素肌との距離が近付いたことに驚く。

「……本当に、どうやって飽きれば良いか分からん」

「ばか言わないで……っ」

真面目な声で言う俺に、折本は震える声でツッコんだ。

× × ×

「……うんん……んぁぁ……っ、あっ、ふぅっ、んっく、んんん……っ」

下着姿になった折本の胸を揉み始めてから、かなりの時間が経った。映画が中盤と思われる所に差し掛かっていて、時計を見れば折本が上着を脱いでから４０分程経過していた。

「そろそろ下着も脱ぐか」

俺の言葉に折本がびくりと震える。躊躇するかと思ったが、折本は頷く訳でも返事をする訳でもなく、俺の腕を掴んで離し、背中も離した。どうしたのかと思ったが、ブラのホックが見えるようにしたのだ

とすぐに気付く。ホックに手を掛ける際に緊張はしたが、背中越しに折本の身体が震えているのを見て、俺がそんなことは言ってられないなと気付く。

何とかホックを外すと、ぱさりと乾いた音を立てて下着が落ちた。

適度なサイズの双丘が、張りを持って揺れている。可愛らしいピンク色の先端は、度重なる愛撫でぴんと張り詰めていた。

「……っ」

「……綺麗だ」

「……そ、そんなこと……ああ……っ？」

戸惑う折本の乳房を下から掬うようにして、再び愛撫を始める。もちもちとした肌が指の腹に吸い付いて、一度掴むと手を離したくなくなる程心地良い。

「も、もう……ほんとに、どんだけ揉めば気がすむの……っ」

「飽きないことの証明だよ。……ここも、硬くなってるな」

「んはぁぁっ!?」

人差指で乳首を軽く弾くと、細い肢体がびくりと跳ねた。人差指と親指で2つの乳頭をにちりとつまむと、腕の中で折本が繰り返し跳ねて、悩ましい声で喘ぐ。折本の身体から漂う甘い香りは更に濃度が増していた。

「あぁ……うっく……んあぁんっ！　あっ、あぁっ、あっ、あ……っ」

少しずつ刺激を強めて行って、1時間に渡って責められた折本は、快感の濁流に飲み込まれてほとんど喋る事が出来なくなっていた。スカートのホックに手を伸ばして外す間も、何もしてこない。それどころか脱がせる行為そのものに気付いてさえいないようだった。

スカートを外すと、中に篭っていた熱気がむっと解放された。それと同時に折本の尻の下がどうなっていたかにも気付く。

「……びしょ濡れじゃねえか」

「……っ」

まるでコップの水を零したかのように濡れたシーツを見て呟くと、折本が首まで真っ赤になった。

体勢を変えて、仰向けになって寝転がり、その上に折本を同じく仰

向けにして寝かせる。乳首を摘んで上に伸ばすと、じっとりと汗をかいた身体が弓なりに反り返った。
「うあぁっ!? あっ、うっ、ひっ、うぅぅ……うあぅんっ！」
――ここから、様々な体勢で折本の胸を愛で始める。
仰向けに寝転がったまま、折本の身体を半転させて四つん這いにして、キスをしながら乳首を摘む。虚ろな目をした折本がだらしなく垂らした唾液を飲み下しながら、牛の乳搾りのように入念に乳首を弄った。
横並びに寝て向かい合い、額をくっつけ合いながら胸を弄る。折本は空いた手をどうしたら良いか分からなかったようで、迷った末に俺の腹を縋るようにさすっていた。
ぱんぱんに張り詰めた肉棒が、ジーンズを突き破りそうなくらいに膨らんでいる。中を見なくとも、先走りの汁が溢れ出しているであろうことが分かった。
折本が仰向けになっているその顔の真上で、ぶるんと肉棒を外気に晒す。
「きゃっ!?」
急に意識が覚醒した折本が悲鳴を上げる。いきなり見せたんだから当たり前だよな、と思いながら、ベッドの上で胡座をかいた。手招きをして股座に座らせ、体育座りの格好をとらせて両足をこちらの背中に絡めさせる。
「あ、あの、これ……んむっ!?」
折本が恥ずかしそうに呟く。ぐっしょりと濡れた折本のピンク色のショーツに、ぎちぎちと反り返った肉棒をこすり付けていた。恥ずかしがる折本の唇を奪い、右手で乳頭を弄り、左手で背中を抱きしめる。腰をゆっくりと動かして淫裂に肉竿の裏筋を擦りつけると、折本の身体がぶるぶると震えた。
「あ……んちゅ……んん……んはっ、ま、待って、このままじゃ……うあぁぁ……だめ、だめ、だめ……っ」
「何がだめなんだ？」
尋ねると、虚ろな表情の折本が唇を震わせた。

「うんん……だめ、で、出ちゃう……っ」
「……っ」
瞳を潤ませて訴え掛ける折本に、背筋がざわりと粟立つ。折本の肩を掴んで一気に押し倒し、何かを言う隙さえ与えずに覆いかぶさり、2つの乳頭を指でしごきながら、ショーツの上から張り詰めた亀頭を淫裂に押し付けた。
「うあぁぁぁぁっ!? やっ、だめ、今そんなの……うあぁんっ！ だめっ、そんな……あぁぁぁっ！ あぁぁぁっ!! うあぁぁぁぁぁぁっ!!」
泣きそうな声に獣性が混じり、両手でシーツを握りながら泣きじゃくる。亀頭を押し込む度にショーツはぐじゅりといやらしい水音を立て、中から愛液が滲み出す。腰を引いて打ち込む度に、折本の悲鳴混じりの嬌声が濃密になってゆく。
「うぐぅぅ……これ以上、これ以上は……うぅぅぅ……っ！」
折本が涙を流しながら首を振るのを見た瞬間――頭の中で理性が弾けて、一際力強く乳頭を摘み、力一杯亀頭を肉丘に押し込んだ。
「あ――っ」
折本の身体が夕凪のように静まった――次の瞬間。
細い肢体が、綺麗な弧を描いた。
「う……うあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!! うあんっ!! ひぃっ!! んぐぅぅっ!! 死ぬ、死んじゃう、止めて、イクの止めて……うあぁぁんっ!? だめ、止まらな……あふぁぁぁっ!!」
絶頂の波が折本の身体を連続的に蝕み、折本自身が混乱する程何度も達している。ぶしゅっ、ぶしゅっと淫液が噴き出して、ショーツと肉竿をぐっしょりと浸す。その間も折本は弓なりに反り返っては戻るのを繰り返し、俺は壮絶な光景を目の前で呆然と見ていた。
「……死、ぬ……死んじゃう……っ」
ようやく絶頂が収まった折本が、足をあられもなく開いてぜえぜえと喘ぐ。まさかこれほどまでの絶頂を見ることになるとは思わず、俺は尚も固まっていた。
折本のショーツはバケツの水に浸したかのごとく全体が濡れてい

て、もはや下着の意味を成していなかった。
顔を近付けると、甘酸っぱい牝の匂いがむっと鼻に付く。鼻腔を犯して、更なる興奮を煽る卑猥な匂いは、折本への更なる蹂躙欲求を駆り立てた。
ショーツに手を掛けてずるりと下ろし始めると、折本が首だけくいと上げてこちらを見た。
「だめ、だってば……これ以上したら……もう……っ」
口では抵抗しながらも、折本の身体はどこも力が入っていなかった。

続く。

（１７）

度重なる絶頂でぐったりとした折本のショーツに指を引っかけ、ずるりと引き下ろす。水に浸したように濡れそぼったショーツを苦労しながらも脱がすと、折本は一糸纏わぬ姿で内股をこすり合わせ、もじもじと恥じらった。色っぽくも可愛らしい仕草に思わず見惚れる。

そっと太ももに触れると、折本は顔を逸らし、両手で顔を覆った。抵抗する意思が無いのだと確認して、ゆっくりと足を開いていく。

足をぱっくりと広げると、押し込められていた淫靡な熱気が一気に解放された。

控えめに盛り上がった恥丘。

うっすらと生えた恥毛。

薄桃色のひだをいやらしくちらつかせる陰唇。

そして、これらを卑猥な熱気で彩る大量の愛液。

「……っ」

生々しい牝の恥部と、頭がくらくらするような濃厚な匂いにごくりと息を呑むと、折本は「……ぅあ……っ」と泣きそうな声を漏らした。目の前の淫裂に見惚れる俺を、指の隙間から潤んだ瞳で見つめている。

「そんなに、見ないで……っ」

「……わりい、無理だわ。エロすぎ」

「……っ!? そ、そんなこと……うあぁんっ!?」

オアシスの水に吸い寄せられるかのように陰唇に口付けをすると、折本の身体がびくりと跳ねて、太ももで顔をがちりと挟んできた。

「だ、だめ、だめ、うんんん……っ！」

言葉でこそ抵抗しているが、足にはまるで力が入っておらず、頭を掴んできた手もわしゃわしゃと髪を撫でているだけだ。足を閉じたことで増した熱気に陶然としながら、顔を押し付けた淫部に舌を這わせる。

「んはぁぁっ!? あっ、やめっ、うんん……ふあぁんっ！」

鼻腔を強烈に包み込む、甘酸っぱさと微かなアンモニアの匂い。ひ

だの端から端まで舌を這わせて、牝の味を堪能する。スリットに沿って舌を這わせて媚肉をほぐし、クリトリスを丁寧に舌で転がす。
「い……っ、あぐぅ……だめ、だめ、だめだから……これ以上……うあぁぁぁあぁぁぁあっ!?」
折本の足がV字にびんと張って、細い肢体が弓なりに反り返り激しく痙攣を起こす。愛液が鉄砲水のごとく噴出して、前髪まで濡れてしまう。構わずに目をうっすらと開け、ぐっしょりと濡れた淫裂を綺麗に舐めとり、新たに湧き出した淫液も一滴残らず舐り取る。折本の嬌声が激しくなるのと同調するかのように、透明な愛液が白く変化していき、舐めとる時の興奮も倍加していった。
「あぁぁぁっ！　いっ、うぐぅぅっ！」
「ひっ、はぁぁっ、んくぅぅっ！」
「も、もう、許して……許して……んあぁぁ……っ」
衰弱しきった声で懇願しながら、何度目とも知れない絶頂を迎える。気付けば折本の四肢はだらしなく放り出され、顔は涙と汗でぐっしょりと濡れ、下腹部からの快感の波に力なく屈していた。
「……」
折本の痴態を目の前で見続けて、興奮はとうに限界を突き破っている。肉棒を見ると、ぎちぎちに反り返った先端からは先走りの汁が溢れ出し、ベッドとの間に透明な糸を作っていた。
……もっと、折本が喘ぐ姿を見たい。
嗜虐の炎が身の内を焼き焦がして、淫裂へと手が伸びてゆく。
中指をスリットに這わせ、手の平を上に向けてずぬりと挿入する。関節を曲げて膣肉をぐにりと折り曲げると、折本の身体が再び鳴いた。
「あ……あぁぁぁあぁぁぁっ!?　だめ、ほんと死んじゃ……うあぁぁぁあっ!!」
中指を曲げて淫肉を抉り、緩急を付けて抽送を繰り返す。淫猥な白汁をとぷとぷとこぼして、汗まみれの牝の肢体が壊れたように跳ね回る。
「……」

ふと気付いたことがあり、指の動きを止める。折本が力なく顔を上げて、不思議そうに見てきた。
「なんか……いくら濡れてたにしても、やけにすんなり入ったな。もしかして普段からこういうことし慣れてるのか？」
「……っ!?　そ、そんなこと……っ！」
折本が首まで真っ赤になり、顔を逸らす。
「言わないと、気絶するまで指を動かし続けるぞ」
「……うぅ……っ」
観念したのか、折本は泣きそうな声で呻いた。
「……そ、その、ちょこちょこと、一人で、してる……」
「……ちょこちょこって、どれくらいだ？」
「……しゅ、週一……くらい」
「ほんとに？」
「……っ、……ちょっと前まではほんとに週一だったけど……最近は、ほとんど毎日……っ」
「……どうやって？」
「……指、とか、バイブとか……。最近はバイブですることが多いかも……」
「……っ」
腕で口を覆いながら、震える声で己の自慰の習慣を吐露する折本。たまらない程劣情を掻き立てられて、ぶるりと全身が震えた。
「……お前、エロすぎだろ」
中指をぐにりと押し曲げて、蛇口の栓をひねるように愛液を噴き出させる。
「んふぁぁぁっ!?　やっ、なんで……んむっ!?」
以前、カフェでバイブという単語に反応していたのはこう言う理由だったんだな……と冷静に考えつつも、指は本能のままに折本の膣内をぐちゃぐちゃにかき回す。多少乱暴にしても、それを喜ぶかのように折本の身体は痙攣し、跳ね回った。
「んむぅぅ……っ！　んちゅ……ふんん……んふぅんっ!?　んぐ……んぐぅぅぅ……っ！」

口内を舐り回され、舌を啜られた折本がくぐもった声で鳴き声を上げる。いつ絶頂して、いつ絶頂していないのか。あるいはずっと絶頂しているのか。それさえ分からぬまま、折本は断続的に身体を弓なりに反らして、快楽の波に打ちひしがれていた。

手を離して膝立ちになり、四肢をぐったりと投げ打った折本を見下ろす。夥しい愛液に濡れそぼった中指を折本の唇に押し付けると、折本は力なく上下の唇を開いて受け入れた。

「んむ……うんん……っ」

自身の膣に浸っていた指であることも気にせずに、悩ましげに眉をひそませ、中指を丹念に舐め回す。指先から送られる快感の触手は、益々肉竿の勃起を促した。

折本の両肩の横に膝を付き、腰を下ろす。尻が折本の胸に触れる寸前で止めて、陶然としている顔の目の前に肉竿を差し出す。折本の瞳が揺れ、すんすんと鼻を鳴らしたかと思うとぶるりと顔を震わせた。亀頭を唇に押し当てると、歓迎するかのようにゆっくりと上下の唇を開いた。

「んふぅぅ……っ」

「お……おぉ……っ」

肉棒が食べられたかと錯覚する程、折本の口内は別世界だった。熱くぬめった内頬、亀頭や雁首を舐めまわす舌、喉奥のざらついた感触。まるで別の生き物のように蠢く折本の口内がもたらす甘い痺れに、ぶるぶると身体を震わせる。折本は虚ろな目をしたまま、丹念に口淫を続ける。初めてなのにこれだけ上手いのは、普段からこう言った事を考え続けているからだろうか。

「んむぅ……ちゅるっ、ちゅぴっ、ちゅぷりゅっ、ちゅぷちゅぷ、じゅぷぷ……んふぅぅ……っ」

「う……あ……やば、折本、もう出そうだから一旦……うおっ!?」

限界が近いことを訴えると、折本が顔を起こし、俺の尻を後ろから掴んで引き寄せた。肉竿が根元まで口内に埋まり、あまりの気持ち良さに腰が不自然に痙攣する。

「待て待て待て、これはほんとにやば……全然我慢出来な……っ!?」

ふと折本の顔を見て、ぎくりとする。
恥毛を荒い鼻息で揺らす折本の目が、妖しく細められている。
――さっきまでの、お返し――
「……っ」
言外のメッセージを受け取ると、背筋に冷たい汗が流れる。
「じゅぷっ、じゅぷぷっ、ぢゅりゅっ、じゅぐっ、じゅぽっ、ぢゅるる……っ」
「あぁぁぁぁぁぁ……っ！」
激しく舐られる肉竿だけでなく、いやらしく立てられる音、内頬をすぼめて可愛らしい顔を歪める折本の表情により、興奮が天井知らずに膨らんでいく。
「で、出る、出る、出る……っ！」
ぶるぶると震えて泣きそうな声で言うと、折本は嬉しそうに目を細めた。
その直後。
――ぶびゅるっ、ごぶっ、どぶぶっ、ごぶごぶりゅっ、どぶぶぶ……っ。
「お……おぉぉぉ……おぉぉぉ……っ」
「んふぅぅ……んぐっ、ごくっ、んっく、んくぅぅ……っ」
涙を浮かべながら、大量に吐き出される白濁を折本は飲み込んでゆく。長い脈動を終えてようやく肉竿を引き抜くと、唾液と白濁がブレンドされたいやらしい糸が亀頭と唇を繋いでいた。
「はぁ……はぁ……気持ち良すぎるだろ……」
「……それは良かった。でもさ、比企谷」
「……なんだ？」
「あれだけあたしのことをめちゃくちゃにしといて、まさか今の1回でお返しが終わったなんて思ってないよね？」
「……っ」
妖しく光る双眸に、ごくりと息を呑む。
「今度は比企谷が動かして良いよ。気持ち良すぎて怖いんだったら、ゆっくりで良いからさ」

それじゃ、ほら……と艶かしく囁いて、折本は両手の人差し指で口を左右に広げる。中で紅い舌がちろちろと覗く口内は、まるで天国への扉のように見えた。
「……っ」
喉を鳴らして、ゆっくりと唇に肉竿を挿入していく。一度喉奥を小突いて、今度は自分でゆっくりと腰を引いて、押し込む。
「う……ぁ……っ」
喉を犯されている折本は楽しげに目を細め、喉を犯している俺は泣きそうになりながら腰を動かす。完全に立場が逆転している状況に悔しさを覚えつつも、敏感になった肉竿はあっと言う間に限界に近付いていく。
「う……あ……折本、また、出る……っ!?」
掠れた声で呟いた瞬間、折本が唇をぎゅっと窄めた。
「んぐぁぁ……っ」
あっと言う間に訪れる、２度目の射精。
折本が精液を綺麗に飲み干すと、なんとか肉竿を口壷から抜いた。後ろによろめいて折本の足の間に尻餅を付くと、折本が緩慢な動きで起き上がり、俺の前で女の子座りになった。半勃ちの肉竿を見て、俺の顔を見て、獲物に狙いを定めた獣のように瞳を光らせる。
「もう一回したら、お返しも終わりにしてあげる」
「え、ちょっ、それは流石に……うあぁっ!?」
折本が覆いかぶさってきて、肉棒がくぷりと呑み込まれる。
続けざまの射精により敏感になった肉竿が、苦しい程の快感により３度目の射精を迎えたのは、それからほんの数分後のことだった。

×　×　×

互いに幾度となく絶頂に導き合った後。
顔や口を洗った俺と折本は、添い寝の形でベッドの上でくつろいでいた。いくらなんでもハードすぎた。
「うんん……っ」
折本はいつものさばさばした雰囲気とは一転して、猫のようにころころと甘えてくる。腕に頬ずりをして、目がとろんと蕩けている。心

と身体を許すと思い切り甘えてくると言う、鼻血が出そうなデータを手に入れた。
「……なあ、折本」
「……ん、なに？」
「……するか」
俺の言葉に、小さく喉が鳴る音がした。
顔を見やると、折本は緊張した面持ちを浮かべた後……ゆっくりと、笑みを浮かべた。
「……うん。……しよっか」
折本の短い返事と柔らかな笑みに、ごくりと息を呑んだ。
続く。

（１８）

折本と、最後まで、する。

そう、２人で決めた瞬間、俺はとあることを思い出した。

「あー、えっとだな、折本、その……」

「？　どうしたの、そんなキョドって」

目を泳がせて頬を掻く俺を、折本がきょとんとした顔で見つめる。

俺はベッドから降りて、ベッド下に潜ませていたとある物を引っ張り出した。それを後ろ手に持って、折本の横に腰を下ろす。

「本当は、な、一気にこんなに関係が進むとは思っていなかった訳でして。初めて、その、なんだ、キスをしたのが昨日だし。家に呼べたからと言っていくら何でも……とは思ったんだわ。それでも、な？　何が起こるか分からない世の中と言うか、男女の仲と言うか、まあ、その、何事も用心するに越したことは無いと言うか、備えはいつ、いくらしていてもやりすぎることは無いと言うか」

こんなに下手な言い訳がだらだらと止め処無く溢れ出てくる自分に呆れる。

「これは、な。あくまで念の為用意してたと言うか。本当に、その、やる気満々だった訳じゃないんだと言うことを予め伝えておきたかったんだわ」

冷や汗をだらだらとかきながら、折本に隠していた物を見せる。

「さっきから何なの？　ん、これって……」

――目の前に出されたコンドームの箱を見た折本は。

「……ぶっ、あはははははっ!?　なに、ゴムを用意してたのが恥ずかしくあんな長々と……あはははははっ！　ウソでしょ、冷や汗までかいて……ぶっ、くく……っ、やばっ、超ウケる……あはははは……っ！　やだ、お腹痛い……ふふふ……っ！」

「……」

全裸で胡坐をかいて。

コンドームの箱を手に持ち。

昨日キスをしたばかりの、かつて、そして今の想い人に。

大爆笑をされる。
うむうむ。
穴が無くても掘って入りたい。
自分で言った言葉に違わず腹を抱えて笑い転げる折本を、耳まで熱くなりながら眺めることしばし。
「ふー……あー、面白かった。全くもう、そんなこと気にしてたの？」
目に浮かべた涙をこしこしとこすりながら、呆れたように、けれど優しい笑みを浮かべた折本が見つめてきた。
「いや……だって、『実は、こんな時の為に用意しておきました！　これがあればいつでも安心！　ゴム！』なんて言ってどや顔で出したら絶対引いただろ」
「ぶっ!?　何でそんな両極端なの……くっ、ふふっ、やば、死ぬ……っ」
めっちゃウケた。
引き続き恥ずかしい。
身体を丸めて笑い転げる折本の背中を撫でることしばし。ようやく顔を上げた折本は、笑い過ぎてもはや若干疲れていた。そんなに面白かったんですか……。
「あーもう、比企谷最高。大好きだ……わ……」
「……お、おう……」
ノリで口走った自身の言葉に折本が固まり、俺は俺では気恥ずかしくなる。
「……」
「……」
「……今、あたし顔真っ赤だと思うけど」
「……お、おう」
「……気にしないでいいから。あと、別に、今のは、嘘じゃ……ないから」
「……お、おう」
「……ばか」
「……なんで……？」
耳まで真っ赤にして、女の子座りで俯く折本は……びっくりするく

らいに、可愛かった。

×　×　×

「それじゃ、おっきくしなくちゃね」

折本がぽそりと呟いた言葉にびくりとする。折本が顔を上げると、まだほんのりと顔を赤らめているが、表情は明らかに艶っぽいものになっていた。

何回も出しちゃったから、大変かもだけど……と折本が心配そうに言いながら、四つん這いでこちらに顔を寄せる。ぺたりと腰を下ろし、折本の声と表情で既に半勃ちになっている肉竿の先を舌でひょいと掬い上げると、躊躇すること無く亀頭をぱくりと咥え込んだ。

「んむ……ふぅ……うんん……っ」

「……お……あ……っ」

温かな口内で蠢く舌に愛撫されて、肉竿が見る見る内に硬度を取り戻していく。口の中で凶暴さを増した肉棒の感触に、折本は一瞬驚いた。けれどすぐ、嬉しそうに目を細めて、うっとりとした表情で肉棒を味わい始める。雁首で唇をきゅっと窄めて、鈴口を固めた舌先でつつかれると、甘美な快感に身体ががくがくと戦慄いた。

「ちょ、おい、折本……もう十分だから……これ以上やったらまた……っ？」

出ちまう、と言おうとしたところで、折本の口から漏れ出る卑猥な音以外の音に気付く。少しだけ遠くから聞こえる、淫靡な水音。

「ん……ふぅっ、んっ、んふぅ……んっく、ふぅ……っ」

くちゅくちゅと言う水音が大きくなるのに合わせて、肉棒を咥える折本の表情が切なげに歪む。

――気が付けば、折本は口淫に浸りながら右手で自分を慰めていた。

左手をこちらの腰に回して抱きしめて、右手を淫裂に這わせてくちくちと愛撫する。

口と右手を夢中で動かす折本は、信じられないくらい淫猥だった。

「……お前、ちょっと……エロすぎだろ……っ」

俺の言葉にぴたりと動きを止めた折本が、顔を仄かに赤くして口を

離す。身体を起こすと、口に付いた陰毛をちょいちょいと取って、恥ずかしそうに頬を掻いた。
「……いや、その、あたしも準備しといた方が良いかなって……」
「……ん、そうか……んん？」
納得したようなしてないような……と首を傾げて、更に疑問をぶつける。
「て言うか本当に、何でこんなに口でするのが上手いんだ」
経験が無い筈なのに……と首を傾げると、折本は両手を太ももに挟み込んで、もじもじと身体を捩った。
「……えっと、その、あたし、よく、動画を見るから……さっきみたいに、口でしながら自分で触ったりとかって言うのも……そこで……う、うん、そんな感じ。……こ、こんなにおっきくて硬いとは思わなかったけど……」
「……」
「……ちょ、ちょっと、何でまたおっきくなったの!?　……やだ、もう……っ」
あまりにもあけすけな告白に肉竿が全力で反応してしまった。折本は耳まで赤くして顔を逸らすが、ちらちらと視線を下腹部に向けてくる。
「……自分の発言のエロさをもっと自覚した方が良いぞ」
「え……だ、ダメだった？　もしかしてさっき自分で触ってたのも、引いてたりする……？」
「いや、大歓迎だ。今後もぜひ継続してほしい」
「え、あ、そう……比企谷ってどスケベだね」
「……」
どスケベって言われた。
否定のしようも無い。
「……お前も大概だろ」
「……あー……うん……まあ、興味は……すごくある、かな」
「……」
「……だから何でおっきくなるの……っ」

「自然な反応だろ……。……あー、なんだ、その……ハマりすぎないようにしなきゃな」
「？　別にハマってもよくない？　何がだめなの？」
「え……いや、ほら、俺らまだ高校生だし、ましてや受験生だし」
「？　高校生だからこそいっぱいしたいんじゃないの？　それに、こっちも勉強も沢山すれば問題無くない？　すっごく良いストレス解消になると思うんだけど」
「あ、いや、うん、あれ？　そうか？」
「そうだと思う」
「……あー、よし、なら毎日めっちゃするか」
「……ちょ、ちょっと、そんなはっきりと……」
「……。……沢山、ヤるか」
「……や……っ、そんなはっきり……っ」
「……毎日、俺のを、お前の中に」
「ち、調子に乗るなっ」
「おぶっ」
　左手のビンタ……と言うかほぼ掌底を右頬に食らった。頭がくわんくわんする。
「あっ!?　ご、ごめん、つい……っ」
「いや、今のは俺が悪かった……すまん。しかし痛いのは事実なので、抱き締めて労わってくれると助かる」
「比企谷……なんか遠慮無くなってきたね」
「お前が猫みたいに甘える女の子だと分かったからな。俺も遠慮無く甘えてみようかと」
「……っ」
「わ、悪かった、だからその掌底の構えを解いてくれ。歯が抜けるから、歯が」
　イジりすぎたようで、折本は手で胸元を隠して、涙目でぷるぷるしている。普段の折本の姿から、こんな可愛らしい姿を誰が想像出来るだろうか。
「もう……比企谷がこんなSだと思わなかった」

「俺も、折本がこんなにいじめたくなる女の子だと思わなかった」
「……っ」
「とうっ」
「っ!?」
掌底を食らう前に、両腕を掴んで押し倒した。
「……え……あ……っ、その、もう、する、の？　……このまま？　……あたしは、別に、良いけど……っ」
……。
「……お前……っ」
両腕を押さえられたまま、折本が恥じらいながらもしおらしい声でぽしょぽしょと呟く。多分、初めてじゃなかったらこのままめちゃくちゃにしていただろう。
「……先に、ゴムをつけなきゃな」
俺の言葉に折本が目をぱちくりとさせる。腕を離すと、「あはは、そうだった」と苦笑いをして、俺の頬にちゅっと口付けをした。驚いて口付けの犯人を見ると、自分からやっておきながら折本の顔は真っ赤だった。
「……散々イジメられたから、そのお返し」
「……お、おう」
何この可愛い生き物……。
本番前のじゃれつきはこのくらいにして……と自分に言い聞かせて、コンドームの入った箱を開けた。
続く。

（１９）

折本と一通りじゃれ合うと、俺はコンドームの箱を開けにかかった。初めて手にするものだから、自然と手に力が入ってしまい中々開かない。

「ねえ、比企谷」

「ん」

ようやく蓋をこじ開けて、個包装を取り出す。どう開けると破けないんだっけ……と予習したことを反芻しながらまじまじと見ていると、折本が何気なく尋ねてきた。

「それ、いつ買ったの？」

袋にかけていた指をぴたりと止める。

「……昨日の夜」

「……そっか」

折本はさらりと返事をすると、うつ伏せになって両手のひらにあごを乗せて、楽しそうに俺が格闘する姿を眺め始めた。明らかににんまりと、からかうように笑っている。可愛らしい視線に耐えながらも何とか包装を破き、今度は表裏を確認する。

「昨日の夜買ったんだー、そっかー」

「おいやめろ、手元が狂うだろ」

実に楽しそうに笑いながら、俺の太ももをつんつんと突いて爪先でつつつとなぞってくる。くすぐったさにもぞもぞしながらも向きを確認して、いよいよ装着に取り掛かる。

「む……っ」

ぐっ、と亀頭を包もうとすると、想像以上に抵抗がある。動画だと雑な模型でやっていたから、この辺の機微がいまいち分からない。むむむ……と唸りながら奮闘するが、亀頭を包んだところで止まってしまい、それ以上は中々進まない。こんなに手こずっていても折本はしらけることなく見てくれているが、それがまた申し訳なく思えて、しばらくすると半勃ちになってしまった。

「あれ、元気なくなっちゃった」

「……すまん、中々上手くいかん」
「ん、しょうがないっしょ。初めてなんだし」
からりとした声音に、沈んだ心がふわりと軽くなる。ああもう、俺はこの子をとことん好きになってしまったんだな……と実感して、身体が優しい熱を帯びる。
「……あたしも手伝ってみる」
「……え」
思わぬ言葉にきょとんとしていると、すっくと起き上がった折本が俺の正面に回り込み、足を押し広げて元気のなくなった肉竿にずいと顔を寄せた。そして一瞬の躊躇いを見せたあと、亀頭を包んでいるゴムごとぱくりと咥える。
「うお……っ」
ゴム越しに感じる折本の唇は、独特の感触だった。ゴムの縁を唇で押しやるようにして、くにくにと亀頭を刺激してくる。咥えられること自体も気持ち良いが、それ以上に、目を細めて愛おしそうに肉竿を咥える折本の顔がとても色っぽくて……肉竿がむくむくと硬度を取り戻す。折本は上目遣いで嬉しそうにこちらを見つめ、再びゴムを押し込んでいく。
折本が頑張ってくれているという安心感から、これは行けるのでは……？　と一抹の期待を抱いた。
しかし……。
「んっ、んむっ、んんん……っ？」
「うっ、うおっ、うっ、くぁ……っ？」
焦れったい刺激はずっと加わっているが、ゴムは亀頭を包んだ後はほとんど進まない。一体何が悪いんだと悩んでいると、折本が「……んむっ？」と小さく呻いた。
「……破けちゃった」
「……そうか」
折本が口を離すと、ストッキングの伝線のようにゴムが破けてしまっていた。折本が眉を八の字にしてシュンとしながら、ゴムをつまんで取り外した。

「ごめん、上手くいかなかった」
「いや、ありがとな。多分サイズが小さかったんだろ」
折本からゴムを受け取り、ごみ箱にぽすりと捨てる。初めての挑戦は寂し気に終わった。
俺の言葉に折本は「あー、たしかに」と納得した。
「比企谷のっておっきいもんね」
「お、おう、そうなのか」
「え？　あ、いや、その……」
「……動画と見比べての統計学的見地なのか？」
「ここでそんな真面目に聞かないで……恥ずかしくなるから」
でもまあ……と折本は顔を逸らし、恥ずかしそうに頬をぽりぽりと掻く。
「色々見てはきたけど……たしかに比企谷のは、その中でも特におっきいなって思う」
「……マジか」
「……うん、マジ」
ぽそりと答えると、折本が肉竿に熱っぽい視線を送り、口元をもにゅもにゅと動かしてまた顔を逸らした。押し倒したい。
「……まあ、その、なんだ、ありがとう？」
「疑問形にするくらいなら言わなくていいから……っ」
顔を逸らしたまま、折本が俺の頭に軽くチョップをしてきた。こっちを見ないでチョップしたせいか耳寄りのおでこにヒットする。恥ずかしさで繰り出す仕草の可愛いこと可愛いこと。
「……しかし、本当にすまん。買い直さないと無理だよなこれだと」
「……今日、しないの？」
「え、あ、いや、その……」
薬局に行ってる間待っていてほしいとも、一緒に行こうとも言いづらい。前者は折本が確実に冷めるだろうし、後者は「カップルでコンドームを買う」というレベルの高すぎる挑戦をすることになる。２人とも耐えられるとは思えない。
俺が答えあぐねていると、折本は言いにくそうに切り出してきた。

「あの……あたし、大丈夫だよ？　……その、比企谷が、着けなくても……」
「……え、いや、それは流石に……」
「……だ、だから、大丈夫。その、別に精神的にどうこうじゃなくって……」
　その、あたし……と、折本は頬を赤らめて顔を逸らし、婀娜っぽい流し目を送ってきた。
「……の、飲んでるから……」
「……え、何を……」
「……そ、その、ピルを……」
　折本が発した言葉に、目をぱちくりとさせる。しかし何かのネット記事で見た記憶だと、たしかそういう薬って……。
「それ、昨日今日に飲んだからって効くものじゃないだろ？　昨日飲んでたら俺とお揃いな訳だが」
「……う……いや、その……一週間前、くらいから……もう、飲んでた……」
「え」
　折本の言葉に脳が混乱を起こす。折本を呆然と見つめながら、必死で情報を整理する。
　一週間前と言えば、折本とキスさえしていない。しかしその頃から既に、折本はピルを飲んでいた。
　――要は、俺よりもよっぽど早い内から、今の展開に備えていたのか。
「……折本」
「……きゃっ!?」
　抱きしめてベッドに倒れ込むと、折本は可愛らしい悲鳴を上げた。2人分の体重を抱えたベッドのスプリングがぎしぎしと軋み、目を白黒させた折本が混乱しながらも抱きしめ返してくる。
「……ひ、比企谷？　どうしたの？　大丈夫？」
　心配そうに言いながら、折本が俺の背中をさすってくる。気遣わし気な言葉と優しい手つき、そして鼻腔を擽る甘い匂いに目を細めた。

「……すまん、色んな感情が溢れてな、つい」
「……そっか」
「折本、ナイスだ」
「え、あ、うん、ありがと」
「それと、やっぱお前もスケベだと思う」
「……あー、や、その、ね？　備えは必要かなって……」
「それ、俺と台詞がかぶってるぞ」
「……そうだったね……」
　観念したように折本が苦笑いをする。
「折本。……このまま、するか」
「……うん。しよ？」
「すげえ嬉しいけど……その前に」
　折本を下にした状態で腰を上げ四つん這いになると、細い両腕を掴んで拘束する。
「え……ひ、比企谷？」
　折本が引きつった笑みを浮かべる。今の俺はどんな表情をしているのだろう。
「さっき折本が爆笑してたとき、実は内心結構恥ずかしかったんだわ。なので、たっぷり仕返ししてから挿れます。大丈夫、濡れてれば濡れてるほど痛くなくなるはずだから」
「……え、あ、ちょっと、それ、本気で？」
「ああ、くったくたになってから挿れるからな、覚悟しろよ」
「……へ、変態……っ」
　折本は口では悪態をつきながらも、拘束を振りほどこうとはしてこない。その表情は今にも泣きそうで、けれどその中にもどこか期待を滲ませている。
　折本と、隔たりなく直接繋がれることが嬉しくて。
　そして、今からまたたっぷりといじめることが出来るということが、また更に嬉しくて。
　気が付けば、肉竿は青筋立っていきり立ち、鈴口からは先走りの汁が滲んでいた。

続く。

（２０）

コンドームを使うことなく、生で折本に挿入すると決めたあと。一連のやりとりの中で落ち着いてしまった互いの身体の準備を、再び整えることにした。それも、なるべく入念に、ねちっこく。

「あ、あの、さ……比企谷」

「ん、どうした」

「こ、この格好は、流石に……っ」

――折本はうつ伏せになり、枕に顔をうずめている。ベッドに腰を下ろした俺の前で、膝を立てて尻を掲げ、張りのある臀部と艶めかしい陰部を晒していた。くぐもった声は羞恥で震えていて、たまらなく愛おしい。

「ん、思った通り恥ずかしがってくれてよかった。じゃあ始めるぞ」

「ちょ……っ、比企谷、何言って……ひゃうんっ!?」

尻肉をぐっと掴んで引き寄せると、しっとりと湿った陰部に口を付けた。鼻をくすぐる陰毛は汗と愛液で濡れていて、舌を割れ目に這わせると新たな愛液がこぷりとこぼれ出た。

「あっ、んんっ、やぁっ、はぁぁ……っ」

枕をつかみ、臀部をいやらしくくねらせながら折本が喘ぐ。互いにある程度安定している体勢なので、落ち着いてたっぷりと愛撫することが出来る。

「……たっぷりするからな。覚悟しろよ」

「あ……あぁぁぁ……っ」

言葉の代わりに、甘ったるい喘ぎ声が返ってきた。

固めた舌先で割れ目を繰り返しなぞり、肉芽を吸い立て、膣口につぷりと赤肉を挿入する。

「ひぐぅぅ……あぐぅぅ……っ」

俺の舌の動き一つ一つに折本は敏感に反応し、汗ばんだ肢体を波打たせる。溢れ出た愛液は、白い肌から噴き出した汗ごと全て舐めとっていく。

「いっ、そこ、ひんっ、あぁぁ……っ」

――一体誰が想像出来る？　あの、さばさばとして明るい社交的な折本が。
「うくぅぅっ、やっ、吸わないで、吸わないでぇ……あふぁぁっ！」
――子猫が甘えるような声で、何度も何度も鳴いて、泣いて、鳴いて。
「いっ、だめっ、も、もう、イク、イク、イク、イク、だめ、やぁっ、イク、イク、イクイクイク……あふぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!」
――俺の顔いっぱいに、愛液を噴きかける痴態を。
「あぁぁぁ……あぁぁぁ……っ」
動物的な声で喘ぎ、汗ばんだ肢体をぶるぶると震わせる折本の艶姿にぞくりとした。
「ひっ……やっ、まだ、するの……？　あぁぁ……っ」
顔にいくら愛液がかかろうと、舌での愛撫はやめない。
折本の秘所を、舐め続ける。
５分、１０分、１５分。
「あっ、あくっ、ひあぁぁぁっ！　あぁぁぁぁっ!!」
絶頂までの感覚が、どんどん短くなっていく。
２０分、３０分、４０分。
「ひっ、ひぐっ、いっ、イク、またイク、イク、イクぅぅ……っ」
絶頂が当たり前のように折本を蝕み、声が消え入りそうなほど儚げなものに変わっていく。
５０分、７０分、９０分。
「ね、ねえ……ひき、がやぁ……っ、いつまで、なめるの……？　あた、し……もう、イってんのかイってないのか……わかんないんだけどぉ……っ」
折本の身体は、壊れたように絶頂を繰り返し、膣に舌を差し込むと常にきつすぎるくらいに締めつけてくる。聞こえてくる声は蕩けきっていて、肉襞は常に美味しそうにひくついて牡の蹂躙を待ち望んでいる。
「ん……もう少し続けていいか。折本の反応が可愛すぎるし、すげえ楽しい」

「……ん……っ」
俺の言葉に対して、肯定とも否定とも判断出来ない短い言葉が返ってきたが、こちらに腰をずいと突き出してきたので受け入れてくれたのだと判断する。
ふと、目の前でひくつく、放射状の皺があるアナルに目がいく。淫裂に舌を這わせる度にいやらしくひくつく排泄孔に、ごくりと喉を鳴らす。
たまらなくなり、陰部から口を離すとアナルに口づけをした。
「ひっ!? ちょ、ちょっと、ひきがや、何して……うあうぅぅぅ……っ!?」
舌で菊門の周りの皺をなぞると、驚いた折本が腰をくねらせて逃れようとする。太ももを掴んで持ち上げることで、可愛らしい抵抗を気にすることなく肛門を舌でほじくる。
「ひぐ……っ!? やっ、ひきがや、なにして……なにしてんだってばぁ……ひぃっ!? ひんっ、ひゃあんっ! あふあぁぁっ!」
舌をアナルにぬぷぬぷと挿入しながら、左手で尻肉を掴み、右手人差し指を膣に挿入する。ざらざらした部分をこすると、膣と肛門がぎゅっと締めつけてきた。
「ば、ばか……ばか……ひきがや、へんたいにもほどがあるでしょ……あっ、あぁぁっ!?」
左手親指でクリトリスをこすりながら、膣とアナルを同時に嬲る。肛門内部のほろ苦い味はひどくいやらしくて癖になり、気が付けば夢中で舐めしゃぶっていた。
「あっ、うそっ、やっ、あたし、お尻なめられて、こんなっ、気持ちよく……ひっ、やっ、イクっ、イク、だめ、だめ、こんなの、あぁっ、あぁぁっ、あぁぁぁぁぁぁ……っ!!」
膣口とアナルをひくつかせて、折本が激しく絶頂に達した。折本が分泌する液体が、全て愛おしくていやらしいものに思える。媚熱に浮かされた状態で、折本の汗も、愛液も、腸液も、全て舐めとっていく。
肛門に指を挿入しながら、膣を舐り続けた。折本は鳴きながらイった。

折本の足の付け根を両腕でがっちりと固定して、肛門をひたすら舐めしゃぶった。折本は泣きながらイった。
折本は途中から、手の甲を下にして両腕をベッドに投げだしていた。自分の恋人が物言わぬラブドールのようになってしまっているのに、狂いそうなほど興奮してしまう。
舐めて、咥えて、吸い付いて。
掴んで、揉みしだいて、抉って。
折本の身体を、ぐちゃぐちゃにしていく、めちゃくちゃにしていく。純粋な牝へと変貌させていく。
「あぁぁぁ……あっ、うあぁぁ……っ」
腰をくねらせなくなってからも、折本は壊れたレコードのような一本調子の喘ぎ声を漏らし続けた。どこにも触れていない肉竿は、夥しい興奮でずっと張り詰めていた。
2時間に及ぶ愛撫で、折本は四肢の糸が切れた操り人形のようになっていた。そんな状態になっても、「あたしだって、比企谷のこと気持ち良くしたい」と言ってくれた。腰を下ろして折本の身体を起こすと、女の子座りになった折本はこちらにくたりと寄りかかり、俺の首や胸板に吸いつき、汗を舐めとった。自力でまともに動けない折本の頭を掴み、肉竿を咥えさせた。虚ろな目をした折本の喉奥に、粘度たっぷりの精液を吐き出した。折本は苦悶に顔を歪めながらも全ての白濁を飲み込んだ。
天国と地獄が入り混じったような時間が過ぎていく。ベッドの上は、牡と牝の匂いが混じり合ったむせ返るような濃厚な匂いが立ちこめていた。
折本は両手両足をはしたなく広げている。折本の両膝の裏に触れて細い足を押し広げると、ぷっくりと我慢汁が浮き出た亀頭を、ぐっしょりと濡れた膣口にあてがった。
「折本……挿れるぞ」
「……うん」
折本は光を失いかけた瞳で俺を見つめ、薄く微笑み、優しく頷いた。
肉竿に右手を添えて、狙いを定める。

ぐっ、と腰を進めると、ぐっしょりと濡れた膣穴は、牝を犯す欲求に餓えた肉槍を美味しそうに咥えこんだ。

続く。

（２１）

折本の膣内に、我慢汁が溢れた亀頭を埋める。愛液でたっぷりと満たされたぷりぷりの膣肉がぱんぱんに膨れ上がった亀頭を締めつけて、背筋がぶるりと震える。異次元のような気持ち良さに全身の肌がぞくぞくと粟立った。

「あ……あぁぁ……っ」

折本がベッドのシーツをぎゅっと掴み、結合部をじっと見つめながら悩ましい声を漏らす。苦しさと少しの快感が入り混じったこの声は、きっと今しか聞くことが出来ない。何時間にも及んだ愛撫でたっぷりほぐされた身体も、今は初めて男性器を迎え入れるために緊張している。この身体の強張りも、泣きそうな表情も、きっと今しか見ることが出来ない。それがたまらなく切なくて、嬉しい。

「ひきが……やぁ……っ」

「うっ……ぐぁっ、折本……っ」

折本は涙目で俺の名を呼び、俺は掠れた声で折本の名を呼ぶ。色んな感情が混ざってくしゃくしゃになった折本の顔は普段とはかけ離れたものになっていて、それがたまらなく愛おしい。

ずぐ、ずぐぐ……っ。

「はぁぁ……んぅっ、はぁぁぁ……っ」

ゆっくりと腰を押し進めていくと、折本の悩ましい声が耳朶を犯してきて、魂が抜けてしまいそうなほどの快楽が下腹部を貫き焼き焦がす。膣内は灼熱を帯びていて、肉竿を痛いくらいの快感で締め上げて淫液漬けにしてくる。命を削るような初めての性行為は、油断をすれば一瞬で射精してしまいそうで緊張しっぱなしだ。しかし同時に、折本への愛おしさが加速度的に増していく。折本の腰に触れると優しい肌の温もりが伝わって、折本の中も外も愛せている気になる。

「う……あ……うぁぁぁぁ……っ！」

たった十数センチの旅が、不意に終わった。亀頭がこつんと最奥に当たり、折本の全身がぶるぶると震えた。最初のゴールに辿り着けて安心すると同時に、もっと苦労するものだと思っていたがために

ちょっと呆気にとられてしまう。
「……折本、大丈夫か？　痛くないか？」
「ん……このままじっとしてくれてれば大丈夫。……あれ、血は出てない？」
「……みたいだな」
　折本が口にしてくれたことで、俺も気を楽にして同意することが出来た。先入観で、初めてのときは必ず血が出ると思っていた。そう覚悟していたものの折本の膣からは現実として血は滲んでいない。２人揃って釈然としない顔をしていると、折本が迷った表情を浮かべ、気まずそうに見つめてきた。
「……比企谷、念のために言っとくけど……あたし、本当に初め……っ？」
　覆いかぶさって、折本の唇を塞いだ。
　折本は必死で気を遣ってくれたのだろうが、今の言葉は口にしない方が良かった。
　穏やかに舌を絡めってから唇を離すと、折本はとろんとした顔で俺を見上げた。
「……そこを疑うわけねえだろ」
「……ごめん」
　頭をくしくしと撫でながら言うと、折本は目を細めながらシュンとした。なんだか子どもを叱ったときの反応のようでとても可愛らしい。
「……バイブ使いすぎたかな……」
「そういうのも言わんでいいっての」
「ごめ……ん……んぅ……っ？」
　今度は両手で髪をわしわしと撫でて、悪戯で耳に触れる。耳たぶを撫で、人差し指で耳の中をこしょこしょとまさぐる。折本はくすぐったそうにしながら、汗がたっぷりと滲んだ身体をひくひくと揺らした。
「あっ……やっ……こら……っ」
「……」

なんだか楽しくなってきて、思わず抱きつく。耳に舌を挿し込みちゅぷちゅぷと音を立てて愛撫をして、両手で耳や首筋、乳房をやわやわと撫でていく。折本はもぞもぞと身体を動かすが、逃げ出そうとはしない。猫同士がじゃれついているような、単純で幼くて、けれどとても淫猥な遊び。

「あっ、あっ、あ……っ？　んっ、ふぅんっ、んっ、うぅぅ……っ」

乳房に口付けしてこりこりに張り詰めた乳首をゆっくりと舐めると、人差し指を唇で挟んだ折本が頬を赤らめながら艶っぽい声を漏らした。声を抑えていても、快感を覚える度に膣肉が正直に締め付けてくる。

「ひきがや……ひきがやぁ……っ」

幼子のように甘えた声音で俺を呼び、ぎゅっと抱きしめてくる。首筋に顔をうずめると、すんすんと鼻を鳴らし、ちろちろと舌を這わせ始めた。呼応して俺も折本を抱きしめて首筋に顔をうずめ、甘ったるくて瑞々しい汗の匂いに溺れながら柔肌に舌先を這わせる。折本は「はぁんっ、やっ、うんん……うんんん……っ」と淫靡な嬌声を漏らして、こちらの腰に両足を巻き付けてきた。

ふと顔を上げる。折本と目が合った。ごく自然に唇を重ねる。二人同時に舌を出したら舌先同士がてしっと当たって、お互い目をぱちくりとさせた後くすりと笑った。互いの口内を行き来しながら、時間を追うごとに益々きつく抱きしめ合う。折本の身体を余すことなく愛することが出来て、信じられないほどの幸福感に包まれている。

「うぁ……っ？」

膣内にふと変化が起きて、反射的に唇を離して呻いた。

「あっ、えっ、うそっ、あたしの中……あっ、うんん……っ」

２人とも全く動いていないのに、膣肉がゆっくりと、けれど確実に蠢いていた。それもランダムなうねりではなく、まるで膣が肉竿に形を合わせるために意思を持って動いているかのようだ。

「あっ、うぐっ、折本、これ、やば……っ」

「うぁっ、はぁっ、あたし、も、これ……うぅぅ……っ」

静かに自分を追いつめてくる快楽に耐え兼ねて身をよじると、摩擦

が生じた膣内は更に活発に蠢く。きゅむきゅむと心地良く締めつけられ、膣内には愛液が洪水のように氾濫している。今にも精液が暴発しそうで、必死で括約筋に力を入れて耐えた。
「ね、比企谷……」
「ん、どうした」
　両手両足を余すことなく俺の身体に絡めた折本が、悪戯っぽく笑って頬を赤らめる。
「ちょっとだけ恥ずかしいこと言ってもいい？」
「……ん」
　突然の質問にろくに言葉を発することも出来ず、何とか首肯で同意を示す。すると折本は俺の耳に唇を近付け、たっぷりと息が混じった声で囁いた。
「比企谷とするの、気持ち良い……っ」
　ごくごく短い言葉が、全身の産毛が逆立つような昂揚を運んできた。目を見開いて折本を見ると、恥ずかしそうに顔を逸らしてこちらに流し目を送ってくる。悪戯をした子どものようでいて、たまらない艶を含んだ瞳。喉が大きく鳴った。
「……お前な……っ」
　可愛すぎるだろう、とか。
　エロすぎるだろう、とか。
　言いたい言葉が一度に浮かびすぎて、何も言えなかった。溢れ返った思いを一遍に吐き出すには、この口は狭すぎる。
　もう、我慢出来ない。
　劣情の赴くままに折本の手を掴んで、ベッドに押し付けた。
「きゃ……うあぁぁっ!?　あっ、んはぁっ！　んっく、ひっ、んあぁっ！」
　ぐちゅっ、どちゅっ、ばちゅっ、じゅぶじゅぐっ。
　一気に抽送の速度を上げると、折本の背筋が反り返った。雁首が襞を抉る感触に歯を食いしばるほどの快感を覚えながら、手加減無しで折本の膣を蹂躙する。
「だっ、だめっ、いっ、うぁぁっ!?　いっ、うぐっ、はぁぁあっ！」

ろくな言葉も口に出来ないままに、折本の身体が壊れたように跳ねまわる。結合部から溢れた愛液と先走りの汁が、腰を打ち付ける度にひどく淫猥な音を鳴らす。
気持ち良い。
気持ち良い。
気持ち良い。
愛おしく思う女の子と繋がって、泣きながら喘ぐ姿を見ながら一心不乱に腰を振る。繋いで手に指を絡めると、ぎゅっと握り返してきた。それが嬉しくなって、腰を打ち付ける速度が更に上がる。
じゅっ、じゅぶっ、じゅぶぐっ。
ぐじゅっじゅばっじゅぶりゅっ。
じゅぶぢゅぶじゅぐじゅぼじゅぼじゅぼじゅぼじゅぼ……っ。
「いっ、ひぅっ、うぁっ、やっ、うあっ、うあぁっ、うあぁぁぁぁっ!!」
折本が悲鳴のような嬌声と共におとがいを上げて、竿全体を強烈に締め上げてきた。結合部から大量の愛液が溢れて、白くて細いお腹がぶるぶると戦慄く。痙攣が終わると、折本の全身から力が抜けた。
「折本……イったのか？」
「聞かないでよ……ばか……っ」
涙声で言われては、可愛いとしか思えなかった。繋いでいた手を離すと、折本は両腕を広げた。無言のリクエストに応えて抱きしめると、再び両足が腰に絡み付いてきた。
「……気持ち良かったけど、ちょっと痛い」
「……マジか。すまん、夢中になりすぎた。気を付ける。……今日はもうやめとくか？」
「……ん、いいよ、続けて。まだ比企谷が楽になってないでしょ？……ゆっくりなら大丈夫だから」
「……そうか」
折本の言葉に、それなら……と呟いて、一度肉竿を抜く。折本が小刻みに震える様子に息を呑みながら胡坐をかくと、自分の太ももをぺちぺちと叩いて誘いかけた。
「……自分から、出来るか？」

「……ん」

俺が何を望んでいるかに気付くと、折本は頬を赤らめた。

続く。

（２２）

折本が緩慢な動作で起き上がり、胡坐をかいた俺の下へと四つん這いで近寄ってくる。夥しい快感により疲労の色が強く現れた瞳が、ひどくそそる光を放っている。ぎちりと張り詰めた肉竿をぼうっと見つめながらこちらに近寄る様は、腹ペコの猫が餌に近寄る様とよく似ていた。

「ん……っ」

折本が俺の両脚を挟む形で膝を付き、左手をこちらの肩に置いた。悩ましい声を漏らして、右手をそろりと肉槍に伸ばす。人差し指と中指が肉槍の幹を挟むと、微かな圧迫感と甘やかな快感が下腹部に染み渡った。

折本の細い喉がこくりと鳴る。緊張しているのか、呼吸が少し不自然だ。

「は……あぁぁぁ……っ」

亀頭が割れ目に押し当てられると、折本の口から媚熱を帯びた吐息が漏れた。折本はそこから、止まることなく腰を沈めていく。

「う……お……っ」

折本が少し後傾して肉竿を挿入しようとしているため、射精したくてうずうずしている肉槍が淡い桜色の肉襞に飲み込まれていく様がはっきりと見える。あんなにも小さな膣口が、牡の性器を受け入れる為に蜜液を溢れさせ、ゆっくりと亀頭から飲み込んでいく。

「う……んっ、く、ふぅぅ……んふぁぁぁ……っ」

おとがいを上げて、折本が声を震わせる。俺は肉竿が牝の口に飲み込まれていく様に目が釘付けになっていた。肉竿が根本まで埋まる頃には、陰毛が溢れ出した愛液でぐっしょりと濡れていた。

「あ……ふぁぁぁ……っ」

亀頭が膣奥にぐりりと押し付けられると、細かいつぶつぶが一斉にざわめいて、肉竿に幾重にも快感を刷いていく。じっとりと汗をかいた折本の身体が密着すると、甘ったるくてどうしようもないくらいいやらしい匂いが鼻腔と思考を侵食した。

「痛くないか？　大丈夫か？」
「ん……大丈夫。……ちょっと、このままでもいい？」
「わかった」
　ぎゅっと抱き付いてきた折本が、耳元で荒くて長い息を吐く。全く動いていないのに肉襞はざわめき、肉竿をよりじっくりと味わいたいと主張するように形を変えていく。驚いて折本の顔を見るとぱっちりと目が合い、細められていた目がぱっと開いて頬が赤らんだ。
　――さっきよりも、折本の身体が俺の身体に、俺の身体が折本の身体に、馴染んできている。そう実感すると同時に、場違いにも思えるワクワク感が背筋を駆け抜けた。
「ん……ふっ、うくぅ……はぁぁぁ……っ」
　言葉にこそしていないが、折本はきっと俺と同じことを考えていると思う。だって、今だって抱き合っているだけで微動だにしていないのに、肉竿はどんどん硬くなって、淫裂から溢れ出す愛液は増えるばかりなのだから。
　互いにぴたりと動きを止める。折本の息遣いと自分の息遣いが混じり合うのが妙に心地良い。たまらない幸福感に浸っていると――不意に、肉襞が蠢いた。
「うお……っ？」
「や……比企谷、動かないで……っ」
「いや、お前の中が動いたから……くぁ……っ」
「ん……んぁぁぁ……っ」
　お互いに相手が先に動いたと主張するが、もはやそれはどちらでも良かった。お互いが与えられた快感に腰を僅かに動かし、それが相手の性器を刺激する。肉竿は大きくなって肉襞を抉り、膣肉は蜜液を溢れさせて肉竿を締めつける。快感が快感を生む連鎖に、俺も折本も抗うことが出来ずに静かに溺れていく。
「ひき……がや……っ」
「んむ……っ」
　折本が切なげに眉をひそめて、唇を重ねてきた。舌を絡ませながら、手を繋いで指を絡めてくる。１０本の指ともう１０本の指、１枚

の舌ともう1枚の舌、そして1本の肉槍と幾百もの襞で絡み合う。どろどろになって境界線が分からなくなるまで、とろとろに、ぐちょぐちょに。視界が霞む。折本の瞳はすっかり蕩けている。自分が腰を動かしているのか、折本が腰を動かしているのかさえ分からない。結合部から白い愛液がたっぷりと溢れ出し、生々しい匂いが余計にクる。折本が震えると、俺も震える。俺が震えると、折本も震える。折本が目を細めた。ほんの少し前までは想像さえ出来なかった淫猥な表情が、俺をどこまでもどこまでも興奮させる。

「……ぷは……っ、……んっ、んっく、ふぅんっ、ふっ……んぁ……はぁぁぁ……っ」

唇を離した折本が、淫靡な笑みを浮かべながらゆっくりと腰を前後にグラインドさせ始めた。繋いだ手に急に力がこもって、逃がすまいという意思がはっきりと伝わってくる。まるで蛇が獲物を締めつけてゆっくりと弱らせようとしているかのようだ。

「うっ、くぁっ、お、折本、これ、やば……っ」

ずちゅっ、ぐちゅりと卑猥な音が結合部で幾度となく鳴り、淫肉に貪られ続ける。折本の身体から初めて故の動きの硬さが徐々に抜けていき、男を手玉にとる娼婦のような膣肉愛撫で魅了してくる。

「比企谷、気持ち良い？　イキそう？　イキそう？」

顔をずいと近付けられて、劣情をたっぷりと浮かべた表情で囁いてくる。目の前で俺の表情をまじまじと見て、耳に息を吹きかけ、クチクチと耳を舐め回し、幸せいっぱいの笑みを浮かべてくる。

もう、無理だった。

我慢出来なかった。

「……あああもう、イキそうだよ……っ！」

「あ……あふぁぁっ!?　ひっ、んはぁぁっ！」

射精を長引かせてこの行為を楽しむ余裕はもはや無かったため、折本と一緒に登りつめようと自分から腰を振り始めた。折本の小ぶりで柔らかな尻肉を掴んで、折本が腰を前に出した瞬間に俺も思い切り腰を前に突き出す。折本は俺の首に両腕を巻き付けると、喜悦に歪んだ表情で一心不乱に腰を振り始めた。

腰が密着する度に、思考が消し飛ぶような快感に襲われて。
腰がずるりと離れる度に、魂が抜けるような快感に縛りつけられる。
「折本、うっ、うぁ、うぐ……っ」
「比企谷、比企谷ぁ……っ」
腰が一往復するだけで、あまりの快感に身体のあらゆる機能がバカになってしまう。
あまりにも気持ち良くて、あまりにも苦しい。
気持ち良い。
気持ち良い。
苦しい。
苦しい。
にちにちと結合部が鳴る。
折本が可愛らしい声で鳴く。
鈴口がパクパクと開閉する。
子宮の入口が物欲しそうに吸い付いてくる。
「うっ、ぐぁっ、もう、イク、イク、出る、出る……っ」
「イクの？　あたしも、もう、イ……っ」
全身に汗粒が浮かんだ折本が一際大きく痙攣すると同時に、両足を俺の腰に巻き付けてきた。とどめの締めつけに限界を迎えると、肉先披裂がぱっくりと口を開けて、大量の白濁が噴き出した。
「うあぁぁぁっ!?　あつっ、熱い……んはぁぁぁ……うあっ、ひっ、うくっ、うぁぁぁぁ……うぁぁぁぁ……っ!!」
自分の中を蹂躙するゼリーのよう濃厚な白濁の熱と勢いに、折本が身も世もなく喘ぎ狂う。脈動の度にぶんぶんとかぶりを振り、涙目で俺を見つめ、俯き、天を仰ぎ、絶頂に次ぐ絶頂に深く深く入り込んでいく。膣肉は肉竿をちぎらんばかりに締め付けてきて、射精を止めさせてくれない。歯を食いしばって、命を削るような射精にただただ身を任せた。
「あ……あ……あ……っ」
ようやく絶頂の波が去った後も、折本は俺と密着したまま動けずに

いた。今迂闊に動けばまたすぐにでも狂ったように絶頂してしまうと感じているのか、細い肢体は絶頂の余韻と緊張で小さく震えている。時折折本の身体が大きく脈打つと、結合部から白濁がごぽりと零れ落ちた。
「……ひき、がやぁ……どうしよう、これ、気持ち良すぎる……死んじゃう……っ」
「……じゃあ、なるべく控えるようにするか？」
「そんなの……むり……っ、絶対我慢出来なくなる……っ、毎日したい……っ」
「お、お前、自分が何言ってるか分かって……って、お、おい、こら、腰動かすな、また出ちまうから……っ」
「あぁぁ……ひきがやの、硬い、熱いぃ……っ」
「……しゃあねえな」
蕩けきった表情の折本がゆっくりと腰を振り始めると、俺は折本の背中を抱きしめて、折本に合わせてゆっくりと腰を振り始めた。
この後、俺が何回射精して、折本が何回絶頂したかはもはや覚えていない。
気が付けば、今までの人生で経験したことが無いくらい壮絶で心地良い疲労感に包まれて――深い深い眠りに落ちていた。

続く。

（２３）

折本と初めて交わってから、しばらく経った。

「あっつ……」

春休みに再会した頃はまだコートを羽織っていたのに――今は衣替えをとうに終えて、半袖姿で日に日に理不尽さを増す日射しに喘いでいる。

高校生活最後の夏は、去年までと、一昨年までと、同じようにやってくる。

――それでも、隣に誰かがいると、今までとは明らかに違う感覚がした。

明日何をしようか、とか。

どこのラーメンを食べに行こうか、とか。

いっそ一日中家でだらだらしてしまおうか、とか。

こういったことは、ほんの少し前までなら１人でするのが当たり前だった。そこには沢山の楽しみがあり、既知のものも未知のものも、一定の割合を持って確かに存在していた。誰かと関わらずとも、人生は少なからず楽しいと思っていた。

今でもその考えが間違っているとは思わない。

それでも。

１人で楽しめる、という選択肢に、２人でも楽しめる、という選択肢が加わると――

なんだか、むずむずするような、わくわくするような、青臭い期待感が胸の中で花開く。

今まで抱いたことの無かった感情が、何だかとても扱いづらくて、愛おしい。

×　×　×

「あ、お疲れー」

「うっす」

１学期の終業式を終えて、帰り道からやや逸れたところにあるカフェに足を踏み入れた。既に席をとっていた折本が、文庫本に栞を挟

んでぱたんと閉じる。
「……本当に読むとは……」
「借りといて読まない訳にはいかないでしょ」
思わず呟いた言葉に、折本は呆れたように笑った。
折本が持っていた本は、先日俺が貸したラノベだった。
『比企谷がどんな本を読んでるか気になる』
さらりと言われた一言に2時間以上悩み、小町に縋りついて罵倒され(すげえイジられた)、女子が読んでも割と行けるはず……と思えるタイトルを何とか絞り出した。今まであまり読書はしていないとのことだったので、てっきり1ヶ月くらいは貸しっぱなしになるかと思っていたが……僅か数日の間に随分読み進めていたらしく、栞の位置は全体の7割くらいまで進んでいた。
「読み終わったら感想言うね」
「……おう」
女子に本を勧めるなんていう体験が初めのため、「楽しみにしてる」なんて返しをする度胸も無い。いざ読み終わったと言われたら、テンパって「読み終わったんだね、すごーい！」とか返してしまいそうだ。きょとんとされて死にたくなる未来が透けて見える。
数日先に待っているであろう事態に今から緊張していると、折本が手際よく店員さんを呼び止める。
「あたしはアイスカフェオレで。比企谷は？」
「え、ああ、じゃあ、俺も同じので」
咄嗟にメニューを開いたものの瞬時に飲みたいものも浮かばず、慌てて折本と同じものを頼んだ。
「ちょっとは待ち時間をくれよ……」
店員の姿がなくなると、恨みがましい目を折本に向けた。当の本人は涼しい顔をして軽く笑っていなす。
「別にいいじゃん、あたしたちいつもこれでしょ？　それで、今日さー……」
盆に載った2つのカフェオレが届くまでの少しの時間、折本は今日あったことを話し始める。久しぶりに会えば多少の話もストックさ

れるだろうが、折本とは最近ずっと毎日会っているため、まるで音声で綴った日記に触れているような気になる。毎日沢山の人たちと関わっている折本は、よくこれだけネタが出てくるなと感心するほど色々なことを話す。それも、俺が聞いていて心地良いように話の内容や展開を調整しながら。本人がどれくらい意識しているのかは分からないが、日に日に聞きやすくなっていく折本の話に、俺は気が付けば授業の疲れも忘れて聞き入っていた。

カフェオレが運ばれてきて口にすると、心地良い甘さと冷たさが喉を癒してくれる。折本はカフェオレを半分ほど飲むと、グラスを脇にどかして身を乗り出し、更に楽しそうに喋り続ける。

時間の流れが、とても穏やかだ。

カフェの静かな喧騒と、折本の滑らかな声と、飲み干したグラスでたまに氷がからんと鳴る音。冷房が効きすぎていて少々寒いが、目の前で楽しそうに喋る折本を見ていると静かに身体が熱くなっていくからちょうど良い。

折本の話をたっぷりと聞いて、俺も少し話をして、今度は勉強を始める。折本は自然と席を立って俺の隣に座り、2人で並んで勉強し始めた。

「んー、この英文の意味が分かんない……」

「ああ、これは文法的に……」

英語の長文問題を教えている時、ふと折本がふと髪をかき上げた。ふわりと漂う甘い匂いは汗の匂いも含んでいて、夏は特別官能的な匂いになる。折本の横顔から慌てて視線を逸らすと、今度は白いうなじが目に入った。太ももが触れ合うくらいの距離感で不意に折本の女性としての部分を強く感じてしまい、思わずごくりと息を呑む。

「……比企谷、見すぎ」

「……すまん」

俺の視線に気付いた折本が、仄かに顔を赤らめた。

俺の右手の小指と、折本の左手の小指が、ちょんと触れる。

一度離れて、そろりそろりと近付いて、もう一度触れる。

すりすりとこすり合わせて、小指だけ絡めてじゃれ合う。

「……」
俺はテーブルをじっと見たまま、指先の神経に集中していた。折本の顔は見えないが、視線は感じないから恐らく別のどこかを見ているんだろう。
むずがゆい幸せと焦れったい興奮が押し寄せ、たまらなくなって折本の手に自分の手を重ねた。
「……折本」
「……ん、なに？」
「……その、なんだ……今日、うち来るか？」
「……っ、……うん、行く……」
折本の声が震えて、思わずごくりと喉を鳴らす。細い指に自分の指を絡めて、互いの熱を交換する。
「……ひ、比企谷……」
「ん、どうした」
「比企谷ってさ、エッチする気満々の時、結構強く手握ってるのって気付いてる？」
んぐぁっ。喉の奥で変な音が鳴った。
「……マジか、すまん」
呟いた懺悔の声は、いつもより滑舌が悪くて低い声だった。折本は苦笑して、自分から指を絡めてくる。
「……ん、大丈夫。分かりやすくてすごいドキドキするし、……比企谷の手、意外とごつごつしてるから……その、結構、好きだし……」
折本の言葉に振り返ると、真っ赤な顔が俺から逃げるように横を向いた。
「……そろそろ出るか」
「ちょ、ちょっと、比企谷……目、マジすぎ……」
「……すまん」
消え入りそうな声で呟いた折本から、指を絡めてきた。
この後の行為を想起させるような、妖艶な指の動きだった。
×　×　×
数時間後。

「あふぁぁぁ……あぁぁぁ……っ」
――俺は、足を揃えてうつ伏せに寝そべった折本の腰に跨り、尻肉を掴みながらゆっくりと抽送を繰り返す行為に溺れていた。
部屋に入って、最初だけ勉強の続きをして、休憩と銘打ってキスに浸った。
制服の上から折本の胸を揉みしだき、息を荒げる折本の首筋に吸い付いた。
折本が俺の股間を指でこすりながら泣きそうな顔で笑い、互いに服を脱いだ。
唾液があごを伝うほどたっぷりと口付けをして、互いのあらゆる場所に吸い付いた。
割れ目を人差し指でこすると既にぐしょぐしょで、折本は俺に抱き付きながらイった。
蜜壺に指を挿し入れてゆっくり抜き挿ししながらこすると、折本の声がどんどん可愛くなった。
汗をたっぷりとかいた淫裂から湧き出る匂いはひどくいやらしくて、何度も鼻を鳴らすとちょっと怒られた。けれどそれ以上は咎めてこなかった。
折本が四つん這いになって肉竿にキスをしてきたので、俺は手を伸ばして折本の陰部を弄った。
折本は時折小首を傾げるようにして角度を変え、内頬と舌で肉竿をいっぱいに頬ばっていた。
顔を押さえ付けて射精すると、涙ぐんでえずきながらも恍惚とした表情で精液を飲み込んだ。
射精が終わってから立ち上がり、折本の顔を押さえたまま腰を打ち付けた。
折本は俺の腰に手を添えて、虚ろな目で俺をじっと見上げていた。
２度目の射精で折本の喉に白濁を大量に流し込むと、ようやく口を離した。
折本は魂が抜けたようにぺたりと女の子座りになり、口から溢れた精液を指で掬って舐め取った。

折本の両腋に手を入れて立ち上がらせると、ようやくベッドに行った。
仰向けに寝させた折本の淫肉を指でゆっくりと抉り、クリトリスをじっくりとこすった。
とろとろに蕩けた表情で、折本は小さな絶頂と大きな絶頂を繰り返した。
折本の顔の横に腰を下ろして愛撫を楽しんでいると、折本が物欲しそうな目で手を伸ばして肉竿に触れてきた。
お互いに手でこすり合うが、折本が一方的にイっていた。
折本の頭を跨いで逆向きで四つん這いになり、目の前に肉槍を晒した。
折本は顔を浮かせて亀頭にぱくついて、そのまま引っ張り下ろして舐め始めた。
腰を下ろして折本の喉奥まで貫くと、目の前でひくつく薄桜色の肉襞に吸い付いた。
内ももを掴んで開き、官能で震える陰部に舌を挿し入れた。
竿に這わせてくる舌の感触に陶然となりながら、溢れ出す愛液を吸い取った。
折本が3回ほどイったところで、俺も射精した。
折本は苦悶の声を漏らしていたが、肉棒が脈動している間は愛液の量が増していた。
3度も射精すれば流石に大人しくなるか……と思っていたが、腰を上げて折本の足の間に座ったとき、四肢を投げ出して快感の余韻に浸る折本を見てまたすぐに勃起した。
足を限界まで開かせて一気に奥まで貫くと、折本の身体が電気を流されたカエルのように跳ねた。
何度も、何度も、何度も、鐘を突くように、膣の最奥――子宮口をゆっくりと、力強く突いた。
折本はぐしゃぐしゃの笑みを浮かべた顔を両手で覆って、指の隙間から俺を見ながら歯を食いしばり、何度もイった。
イキすぎたのか、漏れてくる喘ぎ声は掠れてほとんど聞き取れなく

なっていた。
腰を動かしながら乳房を揉むと、折本が俺の両手首を押さえてイヤイヤと首を振った。
力の入っていない手に構わず乳首を弄ると、折本はおとがいを上げて膣をぎゅうぅっと締め付けてきた。
それからもう何度か腰を打ち付けると、折本の両足が腰に絡み付いてきた。
膣肉の締めつけが最大限になり、大量の白濁を注ぎ込んだ。
子宮と膣肉が精液に浸り、折本は背筋を反らし激しく痙攣した。
全身から力の抜けた折本と、今度は対面座位で交わった。
折本は四肢を絡ませて密着し、泣きながら何度もイった。
射精している間、耳元で喘ぐ声は尋常でないほど可愛かった。

――そして今、うつ伏せの折本とゆっくりとセックスをしている。
「うあぁぁぁ……んっく、ひっ、うくぅぅぅ……っ」
抽送そのものはゆっくりでも、高まりに高まった神経が敏感に反応して、折本の身体を確実に蝕んでいく。シーツを掴んで甘ったるい声で可愛らしく喘ぐ姿は、数時間前まで見ていた彼女とはまるで異なる強烈な魅力が溢れ出していた。
身体を倒して、汗でびっしょりと濡れた背中に密着する。次々とあふれ出る汗は2人の身体の境界線を曖昧にして、漏れ出す匂いを更に甘くしてくれる。
「ん……っ？　ふぅ……っ、ちゅっ、くちゅっ、ちゅぴっ、ふぅん……んむふぅぅ……っ」
横を向かせて唇を交わらせると、折本は虚ろな瞳をしたまま舌を絡めてきた。条件反射で行われる行為は機械的なのに情熱的で、動いていなくとも射精が近付いてくるほどの快感をもたらしてくれる。
唇を離し、密着した体勢は解かぬまま再び腰を振る。
「はぁぁぁ……はぁぁぁ……っ」
折本は細い肢体を震わせながら、俺が腰を突き出す時は同じように腰を突き出し、腰を引くと同じように腰を引く。何百もの肉襞が風の

強い日の森のようにざわめいて、怖いくらい静かに射精を促してくる。
「折本……そろそろ、出すぞ……っ」
耳元で囁きかけたが、折本から返答は無かった。ただただ繋がった部分に神経を集中させていて、他のことを考える余裕がまるで無いようだった。
両手を折本の身体とベッドの間に滑り込ませて、こりこりに隆起した乳頭をきゅっと摘まむ。
「ひぁ……っ」
折本の身体に強烈な電流が流れて、バネ仕掛けのように腰が跳ね上がった。一気にこみ上げた射精感に陶然として、折本から突き上げられたことで腰が引けた状態で歯を食いしばり、とどめとばかりに腰をずどんと突き出す。
「ひぐ……っ」
強烈な力でベッドに密着させられた折本の身体が激しく痙攣して、肉竿を食いちぎらんばかりに締めつけてきた。もう一度乳首を摘んで、肉槍の切っ先を子宮入口に押し込んだ。
視界が揺らぎ、呼吸が止まる。
「ぐぁ……っ」
苦悶の声が漏れた次の瞬間――下腹部が、弾けた。
「あぁぁぁぁ……っ？　あっ、はぁぁぁっ、ひっ、うぁっ、ひっ、んくぅぅっ、あぁぁぁ……あぁぁぁ……っ」
膣内に大量の白濁を注ぎ込むと、肉棒が脈打つ度に折本は甘ったるい声を上げ、掠れた声で何度も何度も、可愛らしく鳴いた。結合部から白濁と愛液が混じりあった卑猥な液体が溢れ出しても、互いの絶頂はやまなかった。
夥しい絶頂の波がようやく立ち去ると、重なり合ったまま自然と手を繋いだ。どちらから言った訳でもなく、手をこうやって手を繋ぐのは、行為の終わりを意味するようになっていた。
互いの呼吸が凪いでくると、窓の外から音が聞こえる――正確に言えば、ずっと聞こえていたことに気付く。

数日前から聞こえ始めていた、蝉の声だった。

×　×　×

「んっ……んん……っ」

「……」

耳元で聞こえる心地良い声に、心臓がずっと高鳴りっぱなしで落ち着かない。

行為がひと段落して、夕食も一緒に食べた後。

泊まりこそしないものの、帰るまでは2人でだらけることにした。行為に及ぶでもなく、ベッドで添い寝するだけの怠惰な時間。

折本は俺の部屋に置いていた部屋着を着ている。ふわりと漂う甘い匂いに頭がくらくらしてしまう。

外で接する時はさばさばとした可愛さだというのに、こうして誰の目にも触れない時の折本は……とびきり懐いた猫のように甘えてくる。首に腕を絡め、俺の首もとでしきりに鼻を鳴らしては嬉しそうに目を細めて微笑むのだからたまらない。この笑顔単体でも破壊的に可愛いというのに、普段とのギャップも相俟ってもう手が付けられない。

「……なあ、折本」

「……ん、なに？」

「夏休み、どっか行くか」

少し前から考えていたことを結構な覚悟で口にしたのだが、折本は目をぱちくりとさせて異星人でも見るかのような目で俺を見た。心が折れそう。

「……どうしたの？」

「……」

小町だったら「あの引きこもりのお兄ちゃんがそんなことを……やだ、小町涙が出ちゃう……！　泣いてないけど」とか言いそうな表情だった。泣けてくる。

「……折本は、言い方が合ってるかわからんが、俺のことを知ろうとして本を借りただろ。それで、俺も、その、なんだ……、……もっと、お前のことを知りたいって思ってな」

死ぬほど顔が熱くて、喋っている途中は折本の顔を見ることが出来ず、天井を凝視していた。反応が無いので恐る恐る顔を覗き見てみると――折本の頬に、薄桜色が滲み出ていた。
「……そ、そっか……うん、わかった。……考えてみるから、ちょっと待ってくれる？　……いっぱい、考えとくから」
「……受験本番だから、候補は複数ある分には何の問題も無いけど絞りはするからな？」
「別に、受験が終わってから行ってもいいじゃん？　行こうよ、全部」
「あ……」
折本の言葉に、ふわふわしていた心がすとんと落ち着く。
そうだ、俺たちには高校生活が終わった後もまた違う生活が待っているんだ。
受験が終わって、２人の進路がどうなろうと、隣にはこの子がいてくれる。
「どうしたの、比企谷？」
「……なんでもない」
そう思ったら、無性に嬉しくなって、頬が緩んで、気持ち悪い顔になってしまう。
「……そうだな、全部行くか」
「ん。比企谷もいっぱいおすすめの本とか漫画とか教えてね」
「ああ、わかった」
ウェーブのかかった黒髪をくしくしと撫でると、折本は幸せいっぱいの笑みを浮かべて俺の肩に頬をすり寄せた。
……そういえば、中学の頃から折本に対して抱いていたわだかまりは、一体どこに行ったのだろう。悩みは怪我と同じで、消えた事にすぐ気付かず、そう言えばもう何ともないなと随分後で気付くものなのかもしれない。
「夜でも暑いよね……帰りたくない……」
「親御さんが心配するだろうが。ちゃんと送るから」
「……比企谷って律儀だよね」
「……おう」

ニュースでは、これから更に暑くなると言っていた。
もうじき、灼熱の真夏がやってくる。やっと終わったと思っても、またすぐに次の夏はやってくる。
この夏は何をしようか。
次の夏は何をしようか。
この子と、何をしようか――
「比企谷、またにやけてる。どうしたの？　ウケるんだけど」
「いや、ウケね……ん、いや、今のはウケるか」
独り言を呟いて納得していると、折本は顔を手で隠して、くぁ……と可愛らしい欠伸をした。
「……んん……っ、比企谷……ちょっとだけ寝ていい？」
「……おう、おやすみ」
折本かおりと寄り添って歩いて行く生活が。
これからも――さばさばと、ゆらゆらと、続いていく。

お終い。

雪ノ下雪乃をマッサージしてみると、楽しい。それも、すごく。

（1）

季節は春。高校3年生になって間もなくの休日のこと。

俺は雪乃の家に遊びに来ていた。

休日は何か用事でも無い限り、必ずどちらかの家で会っている。別に取り決めをした訳でも何でもなくて、自然と今の状況になっていた。

平日は雪乃の家だとお泊まりが容易いのでよく行っている。高校生だろと言われる所だろうけども。驚くなかれ、うちの母は「早く可愛いお嫁さんとの食事会を設定しろ」という段階の飛び過ぎた命令をしてくるし、父は「早く家から出て行って俺がもっと小町と話せるようにしろ」と言ってくるばかりで、お泊まりのことをまるで気にしていないのである。俺が家を出たとしても小町は父と大して話さないと思うけども。

そんな状況だし、俺も雪乃も一緒に夜を越えたからと言って勉強を疎かには決してしない（睡眠時間は削れるが）ので、すっかり比企谷家公認の仲になっていた。

ちなみに以前雪乃の家に泊まった時、陽乃さんが気紛れで強襲をかけてきて、全裸で毛布に包まった俺が押し入れに隠れるという間男ぶりを発揮したことがあった。

『雪乃ちゃん、おひさー』

『姉さん、何で急に……っ』

『おや、何だか雪乃ちゃん、雰囲気がとってもセクシー……それにこの匂い……』

『な、何でもないわ。今ここに居るのは私一人よ。誰もいないわ』

『雪乃ちゃん、わざわざ墓穴掘るのとっても可愛いね。ところで、もし本当に一人だったら何で玄関に男物の靴が置いてあるの？』

『そ、それは……』
押入れ越しに、二人の声を聞く。一枚の壁越しに聴く2人の会話は妙に遠く思えた。
しかし。
『んー……ことか？』
陽乃さんが少し悩む声を上げたかと思うと、真っ暗だった空間に一気に光が差し込んだ。俺を見た陽乃さんがきょとんとした顔をしている。
「……どうも」
「……ほんとに居た……」
「……」
静止画みたいな空間では、気まずそうに動く目もよく見える。
陽乃さんがあんなに複雑な顔をするのを見るのも。
陽乃さんが小さな声で「……なんか、ごめんね」と謝るを聞くのも。
あの時が初めてだった。

そんなこんなで、今日はのんびりと過ごしている。
俺も雪乃もリビングのソファに座って、互いに好きな本を読んでいる。雪乃は俺にぴったりと密着していて、内心気が気でなかった。初めて会った頃の雪乃が今の自分を見たら卒倒するんじゃなかろうか。
心臓がバクバクしている俺をよそに雪乃は、
「伏線の張り方が甘い……」
「……」
読んでいる小説に厳しめのダメ出しをしていた。雪乃は本を読みながらこうして独り言を言うことがたまにあるが、一人で居る時はそれが無いらしい。俺と居る時だけ独り言を言うってなんなの俺に聞いてほしいのと言ったら、頬を赤らめた雪乃に何故か説教された。長引く前にキスをして強制的に中断させた。お互い顔が真っ赤になった。
今はこうして読書に興じている訳だが、俺は今日、とある目的を持って雪乃の家に来ている。

集中出来ないなりにキリの良い所まで読み終わると、雪乃も丁度本を読み終えた所だった。
「どうだった」
「まあまあね。所々作りの甘い所はあったけれど、瑞々しい人物描写はとても良かったわ」
「さいですか」
いつも通りの会話をしていると、雪乃が俺をじっと見つめた。
「どうした」
俺の言葉に答えず、雪乃が立ち上がって俺の前に来る。
「八幡、足を開いて」
「え、あ、おう」
言われるがままに足を開くと、雪乃は身振り手振りで俺に後ろに下がるように伝えてきた。ソファの背もたれに背中をぺたりと貼り付けると、雪乃は身体を半回転させて、俺の股座にすっぽりと収まった。見事なフィット感である。
「えーと、雪乃さん？」
「何か文句でもあるのかしら？」
「ないです……」
なんなの、強がらないとこの状態に持っていけないの？
可愛すぎて死ぬ。
背もたれから身体を離して、雪乃のお腹に両腕を回して抱き付く。小さな肩にあごを乗せると、柔らかくて甘い匂いが鼻腔を包み込んだ。伝わる感触も、匂いも、何もかもが優しい。
雪乃は俺の手に自分の手を重ねて、俺の頬に自分の頬をぴとりとくっつけた。言葉では平静を装っていても、頬の熱さで動揺がバレバレだ。にやけそうになるのを堪えながら、蜂蜜のような時間を堪能する。
もう少し続けていたいなと思ったが、先程も言ったように俺には目的がある。やりたいことがあるのだ。
だから、勇気を持って切り出すことにした。
「なあ、雪乃」

「お小遣いは増やせないわよ」
「なにこの夫婦みたいなやりとり」
「え」
「え？」
「……あ……」
「……」
　自分のセリフで自爆する雪乃が可愛くてしょうがない。ていうか俺、小遣い増やしてもらえないんだ……。これは最初の金額交渉が重要だな。
　いや、何の話だこれ。
「雪乃、この後なんだけど」
「……何かしら？」
「最近疲れてたりはしないか？」
「……どうしたの急に？　まあ、勉強疲れは多少あるけれど……」
「そうか、そうだよな、よし。それなら「マッサージは無しよ？」俺まだ何も言ってないんだけど？」
　先手を打たれた。
　しかも当たってる。
「そんなこと言わずに、な？」
「……口では優しく言っておきながら、抱き締める力を強めるのは反則よ……？」
　雪乃の声が震える。首筋に息を吹きかけると、微かな音で歯が鳴った。
「……な？」
「……変態」
「それはオーケーということか？」
「変態」
「どっちだ？」
「……別に、あなたがやりたいのなら、許してあげなくも、ないわ……っ」
「……じゃあ、ぜひ」

これ以上いじめると泣いてしまいそうだったので、ぎりぎりで抑えておいた。
雪乃の頭をくしゃくしゃと撫でて、寝室に向かった。
×　×　×
突然だが、雪ノ下雪乃という人物の魅力とはどう言った点にあるだろうか。
何度身体を重ねようと、まるで処女のような純白さを保ち続ける容姿。
触れた埃が全て滑って流されそうな程流麗な黒髪。
凍てつくような雰囲気を纏わせていながら、時折ふっと優しくなって強烈なギャップを醸し出す瞳。
上げようと思えばいくらでも挙げられる。以前試しにＷｏｒｄで打ち出してみたら物凄い字数になった。雪乃に覗かれそうになったので押し倒して誤魔化した。誤魔化し方が野蛮すぎるけどやむをえまい。あんなの見られたら責任をとるしかなくなる。とるけど。
本当に好きな人のことはもはや「何となく好き」と言ってしまえるらしいのだが、俺には当てはまらないらしい。
……と、まあ、こんな風に沢山ある雪乃の魅力の中の一つに、「溢れ出す語彙による罵倒」が挙げられると思う。これを魅力と言うとなんだこいつドＭかよと思われるかもしれないが、大丈夫、あいつの方がＭだ。たまに攻守交替するのも楽しいけども。
そんな、いつもなら俺が思い付きもしない言葉を組み合わせて罵倒してくる雪ノ下雪乃が。
「ばか、変態、ばか」
「色情魔、ばか、ばか」
「ばか、ばか、ばか」
ご覧の通り、とってもボキャ貧になっているのだ。
恐ろしいくらい可愛い。
現在２人がいる場所は雪乃の寝室。
俺はベッドの縁に座って、雪乃はうつ伏せになって寝ている。
――下着姿の上に、薄いバスタオルを掛けただけの状態で。

俺は子供のような罵倒を繰り返す雪乃（色情魔という言葉だけ妙に難易度が高いが）の背中を眺めている。
「早く、するならしなさい……っ」
俺にとっては短い時間でも、雪乃にとっては果てしなく長い時間だったらしい。わりいと一言謝り、雪乃の腰を跨いで膝立ちになる。
「じゃ、行くぞ。ここをもっと揉んでほしいって所があったら言ってくれ。いくらでも揉むから」
「変態」
「ああ、そうだな。逆にここは本当に痛いって思ったらそれも言ってくれ。他の所をたっぷり揉むから」
「変態」
「違いない違いない。よし、じゃあ行くぞ」
「変態」
「……」
言ってることは同じなのに、毎回声音や仕草が違う。最後なんかは腰をくねくねと揺らしたし。
何この可愛い生き物……と思いながら、俺は身体を屈めて雪乃の背中に両手を伸ばした。

続く。

（2）

うつ伏せになった雪乃に手を伸ばす。雪乃の背中を覆っているバスタオルの白は生まれてからずっと見慣れてきた色合いだが、雪乃の肌の白さに比べると妙に興醒めに思えた。

手始めに、雪乃の両肩に手の指を静かに沈み込ませる。

「うぁ……っ」

雪乃がベッドに顔を突っ伏して、小さく唸った。いくら音量を抑えた所で、その声が纏った色香は決して剥がれ落ちることはない。

背中をゆっくりと揉みほぐして、雪乃の身体を堪能する。

「あっ、んんっ、ふっ、んんん……っ」

絶え間なく漏れ出る妖精の媚声に耳朶が蕩ける。もうどれほど深く交わったかも分からないのに、未だに飽きることがないどころか、どんどん深みにはまっていく。

思えば雪乃と今の関係になる大きなきっかけになったのは肩揉みだったな……なんて懐かしいことを思い出す。あそこから全てが始まったんだな……などと考えながら、雪乃の背中を下から上へ押し込みながら撫でていく。

「うぁぁぁ……っ」

雪乃の手がシーツを掴み、儚げに震える。時折腰が浮くと、今すぐにでもバスタオルとショーツを剥いで犯してしまいたくなる。けれど、勿体ないから今は我慢、我慢。

ただでさえ日頃から敏感な雪乃は、特に学校で俺と会う時は注意をしている。その行動は最近特に顕著で、傍から見ればまるで俺を避けているようにさえ見えるかもしれない。雪乃が実際に気にしているのは「俺と話している時に不意にでも身体が触れてしまい、あらぬ声を上げてしまうこと」だというのに。２人きりの時ならそこまで気にしないのだが、どうやら敏感であることを気にすれば気にする程、感度が高まってしまうようだ。

つまり、敏感に反応して声を上げることを必死で堪えているという、今の状況は――

「雪乃……」
「え……あふぁぁっ!?」
　両耳をそっと撫でつけると、まるで陰部を触ったかのように雪乃の身体全体がびくりと跳ねる。全身性感帯――という言葉がこうもしっくりくる状況は中々無いだろう。目の前で小さく震える極上の肢体に、ごくりと息を呑んだ。
「もう少し、下も揉むぞ」
「……っ」
　雪乃が両腕で顔を覆って突っ伏す。両手を下へスライドさせていけば、小ぶりながらも確かな艶を纏った臀丘に行き着くが、いきなり本丸を責めるよりも周りからじわじわと責めたい。そんな考えから、一度腰を上げて後ろにずりさがり、雪乃のふくらはぎを揉んだ。
「んはぁっ!?　あっ、うっ……あぁぁ……っ、あぅぁあぁぁ……っ」
　予想していないところに刺激を加えられたからか、ほとんど我慢の利いていない嬌声が漏れ出た。両手で右足のふくらはぎを揉み、今度は左足のふくらはぎを揉む。汗ばんだ足は馥郁とした香りを醸し出して、狂ったように下腹部が反応してしまう。
　すべすべの足に見惚れる内に、気付けば雪乃の右足を持ち上げていた。
　そうして目の前まで近付けたふくらはぎにキスをすると、
「あんっ！　あ……っ、やっ、だめ、揉むだけじゃ……あぁぁぁ……っ」
　焦って振り返り手を伸ばしてきたが、ふくらはぎに舌を這わせるとすぐさま抵抗は弱まった。伸ばした手を握り返して指と指の間をこちらの指の腹で撫でつけると、雪乃は顔をシーツにうずめてくぐもった声を漏らした。
　続けて左足のふくらはぎも味わって、再び揉んでいく。足の裏も揉むと、雪乃は腰をがくつかせて必死で耐えた。くすぐったいという感覚も全て快感に変わっているのか、バスタオルの下から漂う牝の香りがどんどん濃さを増していく。
　両足を解放すると、手を上に滑らせて太ももを揉む。大事な部分に近付くにつれ、雪乃の身体の戦慄きは大きくなっていく。

尻の縁を両手でぎゅっと揉むと、
「うあぁぁっ！」
と甲高い嬌声を上げた雪乃が、バスタオルを跳ね飛ばさんばかりの勢いで腰を突き上げた。
「どうした、まだまだこれからだぞ」
「あっ、あぁっ、んあぁ……っ」
とろとろに蕩けた雪乃の声に陶酔しながら、尻を揉みほぐす。バスタオルの下にショーツの感触があり、それを尻に食い込ませると、雪乃はおとがいを上げて喘ぎ声を上げた。ぞくぞくとした感情を楽しみながら、徐々に指を陰部に近付けていく。
「そろそろ、バスタオルを取るか」
「……だ、だめ……っ、今取ったら……っ」
雪乃の声を聞いて、迷わずバスタオルを取り払った。フリルの付いた上品ながらもセクシーな上下の下着。ブラについては特に変わった所は見られないが、ショーツはいやらしく尻に食い込み、溢れ出した愛液がシーツをしとどに濡らしていた。
「……どんだけ感じてんだよ……」
思わず漏らした本音に、雪乃は顔をうずめて羞恥に喘いだ。
食い込んだショーツと肌の間に、左手の人差し指と中指を通す。雪乃がびくりと反応すると同時に、ぐいと一気に持ち上げた。
「うぁぁぁ!?」
突然淫裂に強烈な刺激を加えられ、腰を跳ね上げながらショーツを更なる淫液で染め上げて行く。腰を上げなければ陰部にショーツが更に食い込んでいたから、この反射行動は至極真っ当なものだろう。しかしながら、その反応が俺の欲情を更に駆り立てた。
「雪乃、お前の身体、綺麗だしエロすぎだろ……どうなってんだよ、本当に」
言いながら、左手でくいくいとショーツを持ち上げ、右手で尻を揉みくちゃにする。
「あっ、ひっ、あっ、うぁっ！　だめっ、これ、もう、イっ、イ……っ」
イク――と言いかけた所で、すかさず左手を離した。

「……っ？　……なん、で……っ」
疑念を顔に浮かべて振り返った雪乃の顔は淫欲に染まっていて、普段の理知的な顔とはかけ離れている。そのギャップが雪ノ下雪乃という女性の魅力を恐ろしい程に跳ね上げる。
「仰向けになるんだ。顔、隠すなよ」
「……は、い……っ」
わざわざ敬語にしなくても良いのに……と、思わず心の中でにやけてしまった。
雪乃は俺の命令通りに仰向けになると、両手でシーツを握って不安げに俺を見上げた。
もじもじと内股をこすり合わせているのを見て、「足を開くんだ」と命令する。
雪乃は羞恥に頬を染めながらも、足を伸ばしたままゆっくりと足を広げた。まるでおねしょをしたかのようにシーツが濡れているが、部屋を満たす匂いはどこまでもいやらしい。
雪乃の秘部にはショーツが食い込んでいて、楚々として生えた恥毛が生地からはみ出して、淫液で肌に張り付いている。下着の中で肉竿の先から先走りの汁が溢れ出た。
雪乃の両足の付け根に手のひらを付けて、ぎゅっと下に押し込む。
「あぁあぁぁぁ……っ」
虚ろな目で雪乃が喘ぐ。もはや抵抗する僅かな気力も消えているようだった。
ぎゅっ、ぎゅっ、ぎゅっ。
押し込む度に雪乃の細い肢体が波打ち、直接秘部に触れている訳でもないのに、清楚な白のショーツがぐしょぐしょに濡れて行く。水を大量に含んだスポンジを押し込んでいるようだ。何度かイキたそうにしているのを見たが、決してイカさぬよう生殺しの状態をしばらく続ける。
さて、ここからどうしようかと考える。
胸をたっぷり嬲って、それからショーツ越しに淫裂をたっぷり弄って……なんて考えていると。

「……れ、て……っ」
「？　どうした」
雪乃がうわ言の様に何かを呟いている。瞳の焦点は定まっておらず、俺を見ているのか、別の何かを見ているのかも分からない。
「……い、……て……っ」
「……」
雪乃の頬を撫でると、雪乃が自分の手を重ねた。
「……どうしてほしいんだ？」
「……もう、いれて……っ、我慢、出来ない……っ」
「……っ、……そうか」
心が歓喜で震えた。
まるで余裕の無い素振りでTシャツを脱いで、ジーンズとパンツを脱ぎ捨てる。
雪乃のショーツを脱がす時間ももどかしくて、食い込ませていた部分を横にずらした。
「……いきなり挿れたらかなりやばいぞ。それでも良いんだな」
「……ん、いい、大丈夫、はやく、はやく……っ」
余裕の無い声で、雪乃が懇願する。その声はどこか幼く、まるで親に甘えているかのようでもあった。
挿入したら、壊してしまうかもしれない。
けれど、壊したい。
誰よりも大切に思っているからこそ、壊したい。
「……行くぞ」
だから、多少の迷いを振り払って、思い切って腰を進めた。
続く。

（3）

ショーツをずらして雪乃の淫裂をさらけ出し、そこに亀頭を押し付ける。もう何十回、何百回と行っている行為だ。いつもと趣向は違えど、今日も滑らかに俺を受け入れてくれるだろう――と思ったのだけれど。

亀頭を挿入した瞬間、雪乃の膣が亀頭のスペースのみを残して急激に締め付けてきた。まるでここから先の侵入を拒むかのように、小刻みに震えながら。

「……え……っ」

犯しているのか犯されているのかさえ分からず倒錯していると、雪乃の顔が目に入った。

２人の結合部を凝視して、唇を戦慄かせ、今にも泣き出しそうになっている。よく見れば、ぎちぎちに締め付けた膣口からはとめどなく愛液が溢れ出し、肉竿の先を蜜まみれにしていた。

何か言葉にするのさえもどかしくて煩わしくて、雪乃の腰を押さえてじっくりと肉槍を侵入させていく。一見侵入を拒んでいるかのような締め付けは、正確にはそうではないことに気付く。肉棒を迎え入れる瞬間は肉襞の収縮を弱めて優しく受け入れて、進めた瞬間に狂おしい程に締め付けてくるのだ。まるで罠に誘い込んだ餌を食い散らかすかのように。

「……う……ぁ……っ」

ため息よりも小さくて、悲鳴よりも濃密な声が漏れ出る。聞こえた声は本当に微かで儚げで、自分の声なのか雪乃の声なのか分からない。

腰を進める。信じられない程の快感が、窮屈さによる苦しさと一緒に訪れる。

気持ち良い。

苦しい。

苦しい。

気持ち良い。

互いに言葉も交わせず、手も繋げず、互いの快感を高め合う行為など当然のように出来ない。
結合した部分に、２人の全神経が集中していた。
もう少しで最奥、子宮の入り口に到達する……と言う所で、射精欲求が限界を迎えた。
「あ……っ」
自分の中で肉竿が波打った事に気付いたのだろう、射精直前に雪乃が目を見開いて儚い声を漏らし、その直後に子宮へ注がれた大量の白濁を受け入れた。
「……ぁ……おぉぉぉ……っ」
さぞや美しい嬌声が漏れるのだろうと思いきや、雪乃は猿ぐつわでも咥えさせられているかのようなくぐもった声を漏らした。もしかしたらここまでずっと小さな絶頂を迎えていて、声がろくに出せなくなっているのかもしれない。
射精の脈動に酔いしれながらも腰を進めると、天国と地獄がないまぜになった感覚に襲われる。恐怖を覚える程の快感は、強烈な依存をもたらすようだ。他のあらゆる行為を差し置いてでも、雪乃の中を楽しみたい。単純極まる欲求が、俺の身体を突き動かしている。
子宮の入り口をノックすると、雪乃が口をぱくぱくと動かした。瞳の焦点は合っておらず、どこを見ているのかも分からない。膣肉の収縮はこれ以上無いくらい生の実感を与えてくれるのに、今の雪乃の見た目は世界で一番美しいラブドールのようだ。
腰を引く。「抜くの？　抜いてしまうの？」と淫肉が締め付けてきて、中程まで抜いた所でまた射精してしまった。三擦り半という言葉があるが、そんな揶揄の言葉よりも今の俺は遥かに早漏になってしまっている。壊れた蛇口が注ぐ精液は、雪乃の膣道に満遍なく塗りたくられている。
抜ける寸前まで腰を引いたところで、今度は一気に最奥まで突き入れることにした。これなら雪乃もたまらず声を上げるだろう……と思ったのが間違いだった。
ずん、と一気に突き入れると、雪乃がおとがいを上げて背筋が弓な

りに反り返った。
その瞬間、肉竿全体が万力の如く締め付けられて、頭の中が激しく明滅した。
「あが……っ」
声を上げたのは俺の方だった。壊れた蛇口と言った所で、元の水が無ければ噴き出すことはない。けれど今の雪乃の肉襞の締め付けは、強制的に水を引っ張り出して無理やり噴き出させる程の圧を有している。何の覚悟も無いままに、3度目の射精をした。
これ以上溺れたら一体どうなってしまうんだ……と思っていると、雪乃と目が合った。
笑っていた。
ひどく微かで、分かりづらく、けれど確かに――笑っていた。
それが、どんな感情が故なのかは分からない。
けれど、あまりにも美しく蠱惑的な笑みを、俺はもっと見たくなった。見たくなってしまった。
肉棒を引き抜くと、結合部からは泡立った白濁がごぷりと溢れ出した。雪乃の腰に手を添えてゆっくり起こすと、雪乃はどこか幼く見える女の子座りをして、唇のまぐわいを求めてきた。舌を絡め、唇をついばみ、また舌を絡める。艶っぽい息遣いをしながら、雪乃は小さく果てていた。
休憩のつもりで仰向けに寝転がると、雪乃は俺の上に覆いかぶさり、身体をぺろぺろと舐め始めた。表情を見れば飼い主にじゃれつく猫のように可愛くて、なのに俯瞰して見ればひどく淫らだ。
「雪乃、上から乗ってくれるか」
俺の言葉に、雪乃は動きをぴたりと止めた。逡巡する様子を見せていたが、やがて上目遣いで俺の乳首を舐め始めた。2つの乳首に口付けをすると、ようやく小さく頷いた。
雪乃がよろよろと立ち上がり、俺の上に跨る。足をM字に開いて亀頭を淫裂に宛がうと、細い喉が鳴った。両手を繋ぐと、雪乃はもう一度喉を鳴らして、ゆっくり腰を沈めていく。
「……あぁ……っ」

聞こえるか聞こえないかぎりぎりの声で鳴く声はどこまでも扇情的で、一気に最奥まで貫いてしまいたくなる。しかし今は我慢する。
予想通り雪乃の腰はがくついていて、油断すれば一気に貫いてしまいそうだ。なので手を下から支えて、挿入のスピードをコントロールする。
「ふっ……うぁっ、んんん……っ」
挿入の深さを変えられないもどかしさからか、雪乃は腰を前後左右にくいくいと動かす。先程同様の凄まじい締め付けにまた違った感触が加わり、腰が浮きかける。結合部から漏れ出る愛液が恥毛を浸し、淫猥な匂いがベッドを浸していく。
ずず、ずぐ、ずにゅり。
ぐにゅ、ずちゅり、じゅくく。
じゅぷ、ぐぢゅり、じゅぐぐ。
「……お……ぁ……っ」
牛歩の如き挿入に、雪乃の身体は打ち震える。そもそも今の体勢だって、本来ならこんな速度の遅い抽送は想定していない。快感に加えて筋力的にも限界は近い筈だ。
俺の予想は当たったようで、肉竿の上半分を咥え込んだ所で、雪乃が切なげな瞳で俺を見つめた。
「……もう、だめ、これ以上ゆっくりは……っ」
その言葉を聞いた瞬間、俺は雪乃と繋いでいた手を離して、細い腰に両手を添えて一気に落とした。
鈍い音と感触が、２人の身体を貫いた。
「……あ……っ」
雪乃の声は小さかった。しかし、その声の大きさに反比例するように、雪乃の身体は絶大な反応を示した。
「うぐ……っ」
子宮口と鈴口が濃厚な口付けをしながら、みちみちと肉竿全体を締め付けられたことで、再び膣肉を白濁で浸した。雪乃はほとんど表情を変えないまま涙を流し、背筋を幾度も波打たせながら失禁した。本来みっともない失態である筈の行為が、神秘的にまでに美しく見え

た。
雪乃はM字を解くと、膝立ちになってシーツに手を添えた。もう腰を上下する余裕は無いからか、静かに前後のグラインドを始める。緩慢な動きでもその行為がもたらす快感は絶大で、俺はこの後も数えきれないくらいの射精をした。
もっと乱れて、長い髪を振り乱して、まるで舞踏のように悶える雪乃が見られると思っていたけれど。
実際は、最初から最後まで、声も動きも、静かそのものだった。
けれど、満足度は凄まじく高くて。
しばらくして、疲れたのか雪乃が幸せそうに眠るのを見て、俺も安らかに目を閉じた。

× × ×

「なあ、雪乃」
「なあに？」
「これはその、あの、何なんでしょうか？」
「え？　そんなの決まってるじゃない、お返しよ」
素敵すぎる笑顔で雪乃が言う。

先日のマッサージの件は、完全に俺の意思でやったことだ。途中から雪乃も乗り気だったとは言え、悪いのが誰かと言われたら間違いなく俺であると言える。
雪乃はお返しと言っているが、実際は仕返しに他ならない。
しかしここで問う。
雪ノ下雪乃が恋人に仕返しをする場合、一体何を以て仕返しとするだろうか。
罵詈雑言を並べ立てる？
これは普段からされているので（最近はめっぽう減ったが）、あまり仕返しにはならない。友人関係で留まっているならばこれもありだと思うが。
どつく？
これは雪乃のキャラではない。ヴァイオレンスをキャラの一部と

して考えられるのは、精々初期の由比ヶ浜くらいだ。初期って言っちゃったよ。
そんな訳で、雪乃が恋人である俺に仕返しとして選んだ方法は……何とも身を削ったやり方だった。
「……こうかはばつぐんだ……」
独り言ちると、右腕に抱き付いた雪乃がにやりと笑う。
端的に言うと、雪乃が選んだ方法は「人前でイチャつく」という方法だった。俺たちの生活圏から少し離れた街でデートをするのである。その時間、雪乃は満面の笑みで俺に抱き付き、クレープを買ったらあーんしてきて、不意打ちでハグをしてくる。
――普段なら俺も雪乃も公衆の面前ではそう言った行為を自制しているのだけども、それを逆手にとって雪乃が好き放題甘えてくるのだ。
人を責める方法には様々なものがあるが、羞恥責めでくるとは予想していなかった。
「ふふ、普段なら私も恥ずかしくてこんなことは出来ないけれど……自分から攻める分には恥ずかしさが薄れるわね」
「似たようなこと、前もあったな……」
と、雪乃が女王様ぶった時のことを思い出す。
……しかし、雪乃は気付いているんだろうか。

「なあ、雪乃」
「ん、なあに？」
「これ、俺が恥ずかしさに慣れたら、ただただお前が死ぬ程可愛くて俺が得するだけだよな」
「……」
雪乃が目をぱちくりとする。
「実際、そろそろ慣れてきたし。あ、恥ずかしさはって意味だぞ？　途中からはもうお前が可愛くてしょうがなかった」
「……」
雪乃の目が泳ぎ出す。

「ていうか何だよ、今日はずっとその感じでいてくれるのか？　俺幸せで死んじまうぞ」
「……」
顔に徐々に赤みが差してくる。
「何なんだお前はさっきから。どんだけ可愛いと俺に思わせれば気が済むんだ。超可愛いな」
「……」
俯いてふるふる震えている雪乃が、俺の胸に顔をうずめた。これはさっきまでと違い、素でやっているようだ。
うんうん。
攻めている間は恥ずかしくない。これは、どうやら本当のようだ。
家に帰ったら一体何をされるやら……と思いながら、雪乃を抱き締めて頭をぽんぽんと撫でる。
今日も今日とて、雪ノ下雪乃と過ごす時間は穏やかで、楽しくて、幸せだ。
「覚えてなさい……」
「……」
サスペンスの予感がする台詞が聞こえたけれど。
まあ、うん。
とても、幸せだ。
お終い。

雪ノ下陽乃に道具を用いると、とてもぞくぞくする。

（1）

高校3年生になって少し経った頃。

年度の初めこそ、受験生であるという自覚をほとんどの人が持っていなかったものの、教師達の度重なる焚き付けにより少しずつではあるが教室の空気が変わってきていた。

俺自身、ここからは受験勉強を本格化させねば――とは思っているのだけども。

それでも俺は、この空気をどこか対岸の火事のように感じていた。

理由は至ってシンプル。

――今はそれどころじゃない、からだ。

「比企谷くん、何をため息なんて吐いてるの？　こんな美人のお姉さんを前にして」

「いや、美人なのは認めますけど……そりゃため息も出ますって」

――この、今俺の目の前にいる、未だに自分の恋人であることが信じられないくらいの美貌を持つ女性が発した言葉によって……俺の脳は今、とてつもない混乱をきたしている。

……まさか、本当にやってしまうとは……。

×　×　×

とある3連休初日の朝。

最近はゼミなどで忙しい陽乃さんと久しぶりに会い、珍しく用事も何も無い3日間を一緒に過ごせることになった、その日の朝のこと。

我が家のリビングで陽乃さんが淹れてくれた紅茶を飲んでいると、陽乃さんはテーブルに肘をついて両手のひらに顔を乗せ、素敵な女性を絵に描いたような仕草で俺を見つめていた。この人が女性らしい仕草をすると、まるで陽乃さんが考え出したオリジナルの行為であるかのように思える。模倣が本物を軽々と越える程の魅力を放つのだ。

「比企谷くん」

「ん、なんですか」

聞き返すと、陽乃さんはにこやかに目を細めた。
「部屋を借りたの」
「え」
カップを持ち上げた手が止まる。
「比企谷くんと好き放題するために」
「え」
危うく落としそうになり、ゆっくりテーブルにカップを置く。
「もう荷ほどきも全部終えたから、今日にでも来て良いよ」
「え」
確定事項なの？
ツッコミどころが多すぎる展開に目眩がする。
「え、いや、あれ？　今まで実家暮らしだったんじゃ……」
俺の質問を笑顔で聞きながら、陽乃さんが紅茶を注ぐ。
「そうなんだけどね。いやー、苦労したんだよ？　母親にこのタイミングで一人暮らしをするメリットをプレゼンするのは大変だったなー」
家族にプレゼンするって……自分の家に当てはめると只の罰ゲームにしか思えない。
「ごめんね？　引っ越しも忙しくて中々会えなかったの」
「あ、その忙しさもあったんですね」
道理でこんなに会えなかった訳だ……と納得する。
「……で、その結果一人暮らしを実現したと」
「そうそう。わたし言ってたでしょ？『比企谷くんと好き放題する為だけの部屋を借りようかなー……』って」
「言ったのははっきり覚えてますけど……」
いや、え、ええ？　本当にやるんだ？　早くない？　いや、陽乃さんの残りの大学生活の長さを考えたら、今躊躇してたらもう間に合わないんだろうけど……。
細かいことは良いから……と、２つの紅茶のカップを片付けて、陽乃さんがにこにこと上機嫌で微笑む。
「今から行こう？　……と言う訳で、お兄さんを借りてくね、小町ちゃ

ん」
「……は、はい……」
——実はこの場に同席していた小町が、頬を赤らめて俺と陽乃さんを交互に見やる。
「大丈夫だよ？　お兄ちゃんが喜ぶことしかしないから。あ、わたしが喜ぶこともいっぱいされちゃうかな？」
「小町、ティッシュを進呈しよう。予防だ」
「予防は間に合わなかったよお兄ちゃん……」
「すまん、ティッシュめっちゃやるから。めっちゃやるから！」
ティッシュで鼻を拭くと、小町が呆然としながらも手をひらひらと振った。
「お兄ちゃん、赤玉を出したりしないようにね？」
「お前それ知っててもいわない方が良い知識だと思うぞ」
「うん、小町も今思った……」
小町が頬を赤らめる。やだ可愛い……と思っていると、陽乃さんが「きゃー小町ちゃん可愛いー！」と小町の顔を豊満な胸で包み込んだ。陽乃さんは自分が抱き付いた時の小町の反応も気に入っているようで、しょっちゅう抱き付いてはうちの妹を昇天させている。
「ほふぁぁ……」と気の抜けきった声を漏らす小町の頭を撫でて、出掛ける準備をする。
——ちなみにさっき、陽乃さんがおかわりを注いだのは小町のカップで、片付けた2つのカップというのは俺と小町の分だったりする。
俺と陽乃さんの2人しかいない状況と錯覚させておいて、実は小町もいたのでしたというネタばらし。
こういうのを叙述トリックと言ったりするのだろうか。
言わねえな。そもそも隠す意味も無かったし。
兎にも角にも、俺と陽乃さんは家を発った。
×　×　×
「うおぉ……っ」
首が痛くなるくらい上を見やり、ありきたりな驚きの声を漏らす。
陽乃さんが引っ越したマンションは、この辺りでも最上級の高級マ

ンションだった。一介の学生が使うには値段的にも雰囲気的にもまるで釣り合わないが、陽乃さんが住んでいると思うとまるで違和感が無い。むしろこれくらいのマンションでやっと陽乃さんが「まあ、これくらいなら住んでもいいか」と思っていそうなくらいだ。付き合ってみて分かるが、この人にはそれだけの品格や知性、それに加えて将来性が備わっている。嫉妬の感情を覚えることさえ馬鹿馬鹿しかったりする。

「迷ったんだけどねー。こういうマンションを借りてきちんと住むか、こっそり安アパートを借りて比企谷くんと卑猥なことをする時だけ使うか」

「……」

いかにも築何十年というアパートの、狭い6畳間。

使い古した布団に包まって、裸で抱き合う俺と陽乃さん。

布団に匂いが染み付いて取れなくなるまで、ぐちょぐちょに交わって――

「ティッシュを持ってきておいて良かったです」

「君は想像力豊かだねえ……」

お姉さんの余裕たっぷりな笑みを向けられた。ていうか想像した内容が一瞬でバレてる。

「どうする、本当にアパートも借りようか？　敢えて安い所を」

陽乃さんの提案は至極魅力的だったのだけれど。

「いえ、やめときます。お金もかかるし、俺は陽乃さんと居られるならどこでも構わないんで」

「……そう」

陽乃さんが顔を逸らす。ほんのりと耳が赤い。普段は97％くらいやられっぱなしなのだけど、たまにこういう直球で反撃する。ドラマに出て来る人物よりも美しい陽乃さんだけど、芝居じみているとも言える直球でクサい言葉にはすこぶる弱いのだ。

「……後でめちゃくちゃにされてやる……」

「すごい宣言だ……」

めちゃくちゃSなのにめちゃくちゃMという、色情の化身のような

陽乃さんの言葉と艶っぽい横顔に一瞬で勃起してしまう。
ていうか、マンションの入口でする会話ではないだろう、これ。
「じゃ、案内するね。必要な道具と物資は揃ってるから」
「道具……？　物資……？」
不吉な予感しかしない言葉を並べると、陽乃さんは俺の手を取ってマンションの入口でパスワードを打った。うん……と低くうなりを上げた自動ドアが開くと、２人で一緒に足を踏み入れる。
取り敢えず、この３連休で本当に赤玉が出ないことを心の中で祈った。

続く。

（2）

陽乃さんのマンションにあるエレベーターに乗り込むと、陽乃さんの雰囲気が一変した。

階層指定のボタンの前でエレベーターガールのように佇んで、半歩後ろにいる俺に何も話しかけてこない。なのに、背中から発する空気が確かに変わっている。ふと陽乃さんが後ろ髪をかき上げると、美しさの象徴であるかのような真っ白なうなじが覗く。俺が陽乃さんに襲いかかる映像と、陽乃さんが俺の肉竿を貪る映像――矛盾した２つの光景が、頭の中を同時に過ぎった。

エレベーターが動いていないことに気付く。よく見ると、陽乃さんは階層を指定していなかった。声を掛けようとすると、陽乃さんがゆっくり振り向いた。体中の毛がちりちりと逆立つような興奮と同時に、得も言われぬ恐怖が湧く。まぐわっている時のこの人の瞳は時折、俺の性を絞り尽くして殺そうとしているのではないか――とさえ思ってしまう程妖しく光るのだ。この人の艶姿を目の当たりにする度に、本当に同じ人間なのかと疑うと同時に、狂おしい程に官能が高まってしまう。

「どうする、ちょっとここでしてく？」

「……ちょっと、って言うのは、どれくらいの時間ですか」

「うーん、１０分もあれば床がぐっしょぐしょになるかな。それくらい」

事も無げに言う陽乃さんの表情に目を瞠る。この人は別に話を誇張したりしていない。やろうと思えば、俺と陽乃さんの体液でこのエレベーターはあっという間にぐしょぐしょになってしまうだろう。

「……やめときましょう。公共の場ですから」

「そっか、ざーんねん」

ふっと息を吐いた陽乃さんが、顔を前に向けて最上階のボタンを押す。これだけ高級そうなマンションの最上階に……と改めて驚いていると、不意に股間を掴まれた。

「……っ」

陽乃さんは何も言わず、振り返りもしない。けれど、ジーンズの上からでも的確に敏感な所を揉みしだいて、抵抗しなければ簡単に射精させられそうになる。

負けじと陽乃さんの尻に手を伸ばす。タイトスカートの上から尻を揉むと、極上の柔らかい媚肉ががくがくと震えた。

「……ぅ……ぁ……っ」

消え入りそうな声を上げて、エレベーターのドアに両手を付いて内股でがくがくと全身を痙攣させる。この人は超が付く敏感体質なのに、人を散々弄ってその分強烈な仕返しを望むのだ。このやりとりで、陽乃さんとの性行為は何倍にも興奮が跳ね上がる。毎回理性の皮を剥かれ本能の化身となって陽乃さんを蹂躙する度に、俺はこのままでは人生を台無しにしてしまうのではないかと思ってしまう。根拠は無いが、この人との交わりは常に背徳性を伴うのだ。

「……ぅぁ……っ、ふふ、この中……見てみる？」

陽乃さんがこちらに張りのある尻を突き出し、緩慢な動作で尻を揺らしながら僅かにスカートを捲る。ほんの数センチ捲っただけの行為が獣欲を爆発的に高めて、今すぐこの肢体を犯したくなる。

「……今見たら確実にここで襲っちまうんで、やめときます」

「ん、ざーんねん。流石比企谷くん。ガードが硬……っ!?」

陽乃さんの尻を両手で揉みしだくと、陽乃さんの声が思い切り上ずり、俺の股間から手を離して膝から崩れ落ちそうになった。右手で尻を揉んだまま左手を陽乃さんの腹に回して抱きしめると、陽乃さんは俺の腕を支点にしてがくんと身体を折り曲げた。

「……あはは、やばいなぁ……。久しぶりだし、これから3日間楽しめるって思うと……いつも以上に感じちゃう。……わたし、イキすぎて死んじゃうかもよ？」

「大丈夫ですよ。きちんと生かしたまま壊しますから」

最近覚えたSっ気たっぷりの言葉を囁くと、陽乃さんがゆっくりと振り向き、ひどく歪な笑みを浮かべた。

エレベーターのドアがうん……と静かな音を立てて開くと、陽乃さんの肩を抱いて廊下に出た。陽乃さんの顔は高熱にやられたかのよ

うに上気していて、視線はおぼろげに俺を捉えていた。

×　×　×

陽乃さんの部屋は最上階の角部屋だった。重厚なドアを開けて中に入ると、豪奢な作りに目が行く前に、突然振り向いた陽乃さんに口を塞がれた。

「んむ……ふぅっ、んっ、ちゅるっ、くちゅちゅ……っ、んふぅぅ……んふぅぅ……っ」

俺の首に腕を回して、まるで喉が乾ききった人が必死で水を呑むかのように俺の口内を舐り、じゅるじゅると唾液を啜る。まだ俺は何もしていないのに、陽乃さんは自分から責めておきながらその快感に身を焼かれていた。足ががくがくと震え、玄関にぼたぼたと淫靡な雫が滴る。上等であろうハイヒールはあっという間に淫液に塗れて、卑猥さをかき立てるアイテムと化していた。

俺が背中と尻に手を回して舌を絡めると、陽乃さんは目を白黒させて快感に喘いだ。まともに息も出来ず苦しんでいるのに、それでも必死で口付けを求める。どこまでもみっともなくて、どこまでも卑猥で……堕天した天使を見ているような、そんな気がした。

「あっ……うぁ……っ」

唇を離すとねっとりとした糸が引いた。目尻にうっすらと涙を浮かべて、顔を真っ赤にした陽乃さんを目の前でじっくり観察する。既に溢れ出した先走りの汁が下着をぐっしょりと濡らしているのが、見ていなくとも水音で分かった。

「わ、わたしたち、まだ、靴、脱いでさえ、ないのに……っ」

陽乃さんがいやらしい笑みを浮かべる。陽乃さんの腰を押さえてゆっくり下ろすと、廊下の床に弾力のある尻を着地させた。

陽乃さんの両膝に手を添えると、陽乃さんはびくりとしながらも仰向けになって俺の行動を見守る。

ゆっくりと焦らすように美しい足を開くと、タイトスカートの中からむわっと濃厚な牝の匂いが立ち込めた。

「……っ」

陽乃さんの履いていた下着に息を呑む。

艶かしい黒のレースの下着だが、下着本来の役目を全く果たしていない。
楚々として生えた恥毛の中で妖しく蠢く淫裂も、更なる快感を求めてひくつくアナルも、全く隠せていない。秘部を隠す下着本来の役割ではなく、絵画を飾り立てる額縁のような機能を果たしていた。
「……この、変態が……っ」
ぞわぞわと嗜虐心が溢れ出し、陽乃さんの後頭部に左手を添え、右手は中指をアナルに、親指を淫裂にねじ込んだ。
「う……あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!」
陽乃さんは我慢の栓が弾け飛んだかのように背筋を弓なりに反らせて、大量の潮を俺の腕に撒き散らした。シャワーを浴びたのかと見紛う程大量に快楽の証をぶちまけて、2つの牝穴が指を食いちぎらんばかりに締め付けてくる。
「……ここだと危ないですね。頭打つとこでしたよ」
陽乃さんの後頭部をかばっていた左手は、陽乃さんの絶頂の際にその甲をしこたま床にぶつけていた。
「……そう、だね……っ、比企谷くんも濡れちゃったし、部屋、行こっか……んぁぁんっ!」
指を引き抜くと、陽乃さんはそれだけで再び愛液を溢れ出して痙攣した。
後で拭き取らなきゃな……と思いながら、陽乃さんの身体をお姫様だっこで持ち上げる。脱力したままにへらっと笑う陽乃さんの顔は、いつもは感じない幼さがあってどきりとする。
「……この3日間で、玄関含めて全部の場所に比企谷くんとわたしの匂いを染み込ませるの……っ」
陽乃さんが虚ろな瞳で発した言葉にぶるりと震える。背中を抱えていた右手で陽乃さんの胸を乱暴に揉むと、「ひぐ……っ」と小さな声を漏らして、おとがいを上げて極上の女体が絶頂に達した。左腕の肘周辺が噴き出した愛液で濡れて、また興奮が跳ね上がる。
「まずは……寝室に行こう？　必要な道具はそこに置いてるから……あー、楽しみ……っ」

限界寸前の顔でよく言う……と思いながら、頷いて寝室のドアを開けた。

続く。

（3）

陽乃さんを抱えたまま寝室に入る。数多くある部屋の1つとは思えない程広々としていて驚いたが、まだ引っ越したばかりの為かほとんど家具が置かれていない。しかしベッドだけはしっかりと準備されていて、一流ホテルのスタッフがベッドメイキングしたような完璧な出来……ではなく、そこから一歩崩したような、適度に生活感のある皺や乱れ方があった。この人なら「生活感がある方が興奮するでしょ？」と言って意図的にやりかねない。

「……ん？」

寝室を見渡していると、2つのものが目に入った。

1つは、ベッドの脇の小さな台にたっぷりと重ねられたシーツ。

……これ、3日間で使い切るつもりだろうか。

「ベッドはだめにしたくないしね。……あむっ」

俺の心をさらりと読んで陽乃さんが言う。何でその台詞のついでに俺の耳たぶを咥えたんでしょうか。咥えたままむぐむぐ言うのはやめてほしい。死ぬ程可愛い。

目に入ったもう1つのものは、大きな大きなスーツケース。

「……？　陽乃さん、あれは一体……」

荷ほどきは終えたと聞いていたのに、何故かこのスーツケースだけがベッドの横に堂々と鎮座している。まるでこれから旅行に行こうとしているかのようだ。

陽乃さんに顔を向けると、悪戯っぽい笑みを浮かべて、ついでとばかりに俺の唇の割れ目を舌でなぞった。この人やっぱり淫魔だと思う。

陽乃さんが「下ろしていいよ、ありがと」と言ったので下ろす。肉感的な身体をしているが、陽乃さんの身体は冗談かと思うくらいに軽かった。

「説明する前に、先にお互い脱ごっか。比企谷くんもつらいでしょ？……ここが」

陽乃さんが俺の耳に唇を寄せ、吐息混じりの声で囁く。俺の腰に手

を添えて股間を焦らすように撫で回すと、為す術もなく腰ががくがくと震えた。たまらず吐き出した息が恐ろしい程荒いことに気付く。
「ふふ……やろうと思えばわたしのこと一方的に壊せるのに……比企谷くんは責めるのも、責められるのも大好きなんだね」
「……そんな、こと……っ」
甘い快楽に脳を犯され、言葉が続かない。陽乃さんは俺の身体に絡み付くように抱き付くと、俺の耳に唇をぴたりと付けた。
「大丈夫だよ。……わたしもだから。いっぱいいじめてね？」
「……ぅ……ぁ……っ」
この人を今すぐ犯したい。全身くまなく真っ白に汚して、だらしなく緩んだ口に肉棒をねじ込みたい。涙を流してもうやめてと懇願される中ぐちょぐちょにしてやりたい。
欲望に塗れた妄想が現実の光景を容易く追い抜いて、夢よりもはっきりとした質感で陽乃さんを脳内でめちゃくちゃにする。
陽乃さんは俺が微かに歯を鳴らすのを見て嬉しそうに微笑むと、俺の上着のボタンを手にかけた。俺の顔をじっと見ながらボタンを外し、袖から腕を抜く時はわざと俺に豊満な肉体を押し当てる。一挙手一投足が牡を狂わせる、蠱惑的な仕草。Tシャツは裾を掴んで脱がしてくれた。
上半身裸になった俺の身体を舐めるように見ると、
「……ん、ちょっと逞しくなったね」
「……そう、なんですか？　普段運動なんてろくにしてないですけど」
「やだなぁ、とっても激しいのをしてるじゃん」
「……それもそうですね」
なんていう恥ずかしい会話をする。陽乃さんは結構無茶な体位を要求することも多いので、腕力は付いたかもしれない。だからさっき抱っこしても軽かったのだろうか。
「……男の子が成長する姿を見ると、嬉しくなっちゃうな」
青春ど真ん中のラブコメのようなことを言われて、心臓が容易く射抜かれる。「自分が何を言えば男が喜ぶ」ということを陽乃さんは十二分に分かっている。それでも、この好意は俺だけに向けられてい

る。それがたまらなく嬉しい。
「……ちゅっ」
「うぁ……っ？」
陽乃さんが乳首に吸い付いて、ちゅうちゅうと音を立てて吸い始めた。舌先でつつき、れろれろといやらしく舐め、唾液でいやらしい水音を立てる。唾液は温度を失いながら胸と腹を下り、下腹部の恥毛を濡らした。
陽乃さんは乳首を舐めながら上目遣いで見つめ、そのままジーンズのベルトを緩めてチャックを下ろす。人より明らかに長い舌をいやらしく見せつけながら、俺の下半身を丸出しにした。
外気に晒された肉槍はその切っ先をぴんと上に向けて、鈴口から先走りの汁を噴きこぼしていた。早く何とかしてくれと言わんばかりに、ひくひくと震えている。
「……うわぁ……っ、すっごく美味しそう」
腰を屈めて蹲踞の姿勢になった陽乃さんが、俺の腰に手を添えて亀頭の匂いを嗅いでうっとりする。上品な笑みなのにその瞳はどこまでも淫猥に輝いていて、陽乃さんの瞳を見つめて、陽乃さんに見つめられるだけでどんどん射精に近付いていく。
「どうする？　一回食べちゃおっか？」
いやらしい言い方をして、陽乃さんが舌をちらつかせる。舌先がぐりぐりと尿道の入口を舐る光景が目に浮かんで、ごくりと息を呑んだ。
「……っ、いや、今はまだ我慢しときます」
「……いいの？　多分わたし、この後何回も気絶しちゃって、それから舐めようとしてもあんまりしっかりと出来ないかもよ？」
「大丈夫ですよ、もちろん元気な時の方がすげえテクで気持ち良くしてくれますけど、半分気を失ってるような状態でしゃぶってくれる時も死ぬ程気持ち良いんで」
答えると、陽乃さんは顔を逸らし、流し目を送って「……変態」と言った。
実際弱り切った状態で陽乃さんに咥えさせると、虚ろな目でゆっく

りと竿全体を舐め回してくれるのだ。以前それで一体どれくらい舐めてくれるのかと思い、仰向けで惚けている陽乃さんの淫裂を指で嬲りながらひたすらしゃぶってもらうと、一度も口を離すことなく1時間以上舐めてくれた。途中で何度射精してもごくごくと美味しそうに呑み込んで、またすぐに舌を這いずり回らせるのだ。内頬を窄めながらひたすら肉竿を舐めしゃぶる陽乃さんの横顔は、その次に陽乃さんを抱くまで頭の中から片時も離れなかった。

陽乃さんは「ま、そういうことならいっか」と言って後ろ手を組み、にっこりと笑った。

「じゃあ、わたしの服も脱がしてもらおうっかな」

陽乃さんの言葉にごくりと息を呑む。胸元のぱっくりと開いたノースリーブは強烈な魅力を放っていて、脱がすのも脱がさないのも惜しい。数秒の逡巡の末に「……はい」と短く答えて、陽乃さんの服の裾を掴んだ。陽乃さんが楽し気に万歳をすると、綺麗に手入れがされた腋が目に入った。

「……」

陽乃さんの腋をじっと見つめる俺を、陽乃さんがじっと見つめてくる。物凄く視線が刺さる。ジト目の究極系とも言えるかもしれない。見えないけど。これだけ見られていても、俺の視線は揺るがない。

「比企谷くん。わたし、早く脱がしてもらいたいなー」

視線を腋から外さない。

「そうですね、参院選の結果を細かく分析すると色々と見えてくるものがありますね」

「話が噛み合ってないよ？　お姉さんの服、早く脱がせてほしいなー」

白い。それに何だか良い匂いがする。顔が近付いて行く。

「そうですね。何だか甘い匂いがします」

「比企谷くん」

「何でしょう」

「肘、振り下ろすよ？」

「ごめんなさい死にたくないです」

生きてても入院まっしぐらだろう。陽乃さんがにっこり笑顔で肘

を振り下ろす様を想像すると、死神が鎌を振り下ろす様に綺麗に重なった。
それでも懲りずに、すんすんと鼻を鳴らす。
「ちょ、ちょっと、匂い嗅がないで……っ」
恐いことを言いながらも、陽乃さんは腕を下ろさない。万歳をしたまま肘を曲げて、頭の上で腕を重ねる。モデルのようなポーズでもじもじとしたことで、可愛さと色っぽさが綺麗に混ざり合った。
滑らかな腋のラインを見て、ぽつりと欲求を漏らす。
「……すいません、舐めさせてください」
ちらりと陽乃さんの顔を見ると、ぷいと逸らされた。耳が仄かに赤い。
「……変態」
「嫌ではないんですね？　じゃあ行きますよ」
言うと、一度だけこちらをちらりと見て、口をもにゅもにゅさせてまた逸らす。耳がさっきよりも赤い。
「変態」
「……マジで良い匂いしかしない……」
追い打ちをかけると、陽乃さんは顔を逸らしたまま、自分の肩に顔をうずめた。
「変態……っ」
鼻が腋にくっつく寸前まで近付けると、陽乃さんが身体を震わせた。ボディソープと汗の入り混じった甘い匂いが鼻腔をくすぐり、頭がくらくらする。普段あれだけ性にオープンな陽乃さんがこれだけ恥ずかしがるというのは珍しい。見ていて何だか得した気分にさえなった。
後でどんな仕返しをされても良いや……と思い、陽乃さんのすべすべの腋に舌を伸ばした。
続く。

（4）

陽乃さんが両腕を上げて、肘を曲げて頭の上で重ねる。色気を伴った美しさを存分に発揮するポーズに惚れ惚れするが、今はそれよりも、目の前に晒された真っ白な腋に目を奪われていた。

ごくりと喉を鳴らして、舌を出す。

陽乃さんの左側の腋に舌を付けると、甘さとしょっぱさの混じった味がした。

「ひゃあっ！　あ、あはは、くすぐったいって……っ」

陽乃さんがおどけた様子で言う。けれど、顔を一目見れば、ただくすぐったいだけでは無いことが見てとれる。舌先を固めて、ぐりぐりと腋に押し付ける。そこから上下になぞり往復させると、陽乃さんの身体ががくがくと震えだした。

「あっ、はっ、んんんっ、やぁんっ、こら、くすぐったいって……あっ、うっ、うくっ、ほんと、だめ、こら、もう……あっ、うっ、うぅぅ……っ」

おかしくてしょうがないと言う印象を受ける声が、どんどん艶を帯びていく。

「こ、こらっ、やめ……っ、んんんっ！　ひっ、うぁっ、だめ、だめ、だめ、だめ、だめ……っ」

膝が崩れ落ちそうになったので、腕を伸ばして陽乃さんの身体を支える。タイトスカートを捲ると、卑猥なショーツを履いている為に顕になった尻肉を直接揉むことが出来た。左手は乳房に伸ばし、豊満な身体をもみくちゃにする。極上の女体を指で嬲りながら、入念に腋を舐め続ける。

「あっ、うくっ、あっ、あっ、あっ、あっ……あぁぁぁぁぁぁっ！」

陽乃さんの膝ががくがくと震えると、フローリングの床に透明な液体が勢いよく降り注いだ。ショーツは淫部を何一つ隠していないので、噴き出した液体が遮蔽されることがなかったのだろう。

じっとりと汗をかいた肢体から舌と手を離し、脱線していたのを軌道修正する。陽乃さんのノースリーブの裾を掴んで一気に脱がすと、大きな絶頂の波に呆けていた陽乃さんは「きゃっ!?」と可愛らしい声

を上げて驚いた。
――ぶるんと勢いよく弾んだ目の前の双丘に、呼吸を忘れて見惚れた。
陽乃さんが着けていたブラは、黒のレース生地が乳首を避けるように枝分かれして、上端と下端で一本の線に戻るという構造をしていた。大事な所を隠さないどころか、更に強調させている――卑猥にも程がある下着。
「……綺麗だ……っ」
反射的に漏らした感想に、陽乃さんはそっぽを向いた。かと思えばちらりと流し目を送ってきて、目が合うとまた逸らす。あまりの可愛さに頭を撫で回すと、物凄く怖い目で睨まれた。撫でた時のリアクションがまちまち過ぎて未だに適切なタイミングが把握出来ない。
「……陽乃さん、ベッドに横向きで寝てください」
「……え？　う、うん……っ」
しおらしくなった陽乃さんが、俺の言葉に首を傾げつつも従う。よろよろと歩く女体の尻を両手で鷲掴みにすると、身体を折り曲げ、ベッドの縁に手を付けて愛液を撒き散らした。
ベッドに横たわった陽乃さんを、身体の右側が上になるように寝かせる。何をされるのか分かったのか、陽乃さんは「……変態」と呟いて、目を瞑って右腕を上げた。
晒された右腋に口付けをして、ぴちゃぴちゃといやらしく水音を立てながら舐る。今度は他の部分にも触れずに、ただひたすらにしゃぶる。淫裂のように割れ目に指を挿しこむことが出来ないもどかしさはあるが、それでも陽乃さんの体は極めて敏感な反応を示す。
「うっ、あぁぁ……あふぁぁっ！　んっ、くひぃっ、いっ、またっ、いっ、うぁぁぁあぁぁっ!!」
美しい横顔がくすぐったさを伴う快楽に打ちのめされるのを、何度も何度も見届ける。
「イっ、あっ、また、もう、イっ……クぅぅぅ……っ！」
「やだ、わたし何でこんな……ひっ、うあぁぁぁんっ!!」
「やっ、だめ、もう……うくぅぅ……っ」

「あっ、あぅっ、うぅぅぅ……っ」
「……あっ、イっ……、……っ」
繰り返される絶頂の声が、互いの身体に、ベッドのシーツに、寝室全体に染み渡っていく。引っ越して間もない生活感の無い空間が、瞬く間に2人の為の空間に塗り替わっていく。
「……ぁ……っ」
陽乃さんがほとんど声を発しないまま絶頂するようになった所で、ようやく陽乃さんの身体を仰向けにした。
陽乃さんは四肢をだらしなく大の字に広げて、虚ろな目で俺を見つめる。割れ目はバケツをぶちまけたように濡れ果てて、ピンクのひだがいやらしくひくついている。
大事な部分を何も隠すことなく晒されているという事実が、たまらない程興奮を掻き立てた。
陽乃さんの上に覆いかぶさり、乳房に吸い付き、両手で空いた乳房と淫裂を同時に嬲る。手に力を込めた瞬間陽乃さんは目を見開き、その直後に身体を跳ねるようにして弓なりに反らせた。
「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!! だめ、今そんなのやったら……ひっ、ひぃっ! イク、イク、イぐぅぅぅ……っ!! だめ、止めて、死ぬ、ひんじゃうぅぅ……っ!!」
栓の壊れた蛇口のように、淫裂から面白い程大量の淫液が噴き出す。淫裂を嬲る手は肘までびしょ濡れになり、尚も濡れ続ける。
「ひっ、ひぃっ、ひぃぃぃ……っ!!」
陽乃さんの美しい顔がくしゃくしゃに歪む。普段の堂々とした態度など面影さえ残さず消し飛んで、一匹の牝として鳴き続けている。だめと言いながらも、乳頭を咥えた俺の頭を強く抱きしめて、内部に入り込んだ中指を気持ち良いところに当てようと腰をくねらせているのだから手に負えない。
俺にとっては天国のような、陽乃さんにとっては天国であり地獄のようである時間が流れて、ようやく身体を離す。陽乃さんは全身から汗を噴き出していて、愛液と混ざり合った淫猥で甘酸っぱい匂いを漂わせている。いつも見惚れる艶めかしい唇も、今はだらしなくぱくぱ

くさせていて、口の端からは涎を垂らしている。これだけひどい状態になっても、この人は変わらず――それどころか、益々、美しい。
陽乃さんの髪を撫でると、今度は甘えるようにすり寄ってきた。今のはオーケーらしい。
ひとしきり甘えると、よろよろと腕を上げた。そしてベッドの横を指差したので何ぞやと思い視線を移すと、さっき見付けたスーツケースがあった。
「開けろってことですか？」
尋ねると、陽乃さんは小さく頷いた。
「ベッドの上で開けて……」
半分寝ているような声で言われて、何なんだかと思いつつも言われた通りにする。スーツケースは思った程は重くなかった。
ベッドの上でロックを解除し、ケースを開ける。
「……」
絶句。
この一言に尽きた。
本来の用途を考えれば着替えなど旅行に必要なものが入っていそうだが、実際問題そんな訳はないだろうと思っていた。
それでも、それにしても、いくらなんでも。
これは、予想出来なかった。
「3日間で全部使おうね……」
正気か……と、さっきまで自分がぼろぼろになるまで責め立てていた女性に戦慄する。
スーツケースの中に入っていたのは、道具の山だった。
ピンク色の丸みを帯びたものが、コードのあるものないものを合わせて10個以上。
恐らく一つ一つ機能が違うであろう、男性の象徴を模した禍々しい張り型がこれまた10個程。
電動マッサージ機。
目隠し。
猿轡。ボールギャグもありタイプが違うものが複数個。

筆。
ローション。
その他、注射器のようなものと謎の液体。
小さな球体がいくつも連なった串のようなもの。これってまさか……？
その他諸々、諸々、諸々。
全部が全部、言ってしまえば性的だった。
「……死んじゃいますよ？」
これだけの道具を使ったら、俺自身一体どれだけ興奮するか分からないが……それでも限度というものがある。純粋に陽乃さんの身体を心配して言ったのだが、当の陽乃さんはにっこり笑顔で「大丈夫」と答えた。
「わたしのこと、ちゃんと生かしたまま壊してくれるんでしょ？」
「うぐ……っ」
ついさっき自分が言ったことを盾にとられて言葉に詰まる。いやしかし……と、あぐらをかいて唸っていると、陽乃さんがむくりと起き上がった。猫のように四つん這いで俺の下にすり寄って、餌に食いつくように肉棒をぱくりと咥えた。
「くぁ……っ」
「んふぅぅ……っ、ちゅく、れるれる、ちゅぽっ、あむっ、ふぅん……っ、んふぅぅん……っ」
内頬で亀頭をこすって、うっとりと目を細める姿は淫靡としか言い様がなく、下腹部を貫く甘美な快感は一生病みつきになってしまいそうだ。両手で耳に触れると、悩ましい上目遣いで見つめてくる。
「……ちゅぽっ、ふふ……っ。全部使うって約束してくれるまで、もう口離さないからね」
そう言って、まるで息継ぎをして水中に潜るように、再びぱくりと肉棒を咥え込む。
さっきまで手持無沙汰にしていた肉棒をすっぽりと包み込まれて、口を離してもらえないという状況を考えてみる。
……。

「……それはそれで……ありですね」
正直に言ったのだが、陽乃さんは眉をひそめて口を離した。
「……だったら、咥える代わりにずっとこうするから」
言って、陽乃さんが肉竿の根元を掴み、手のひらで亀頭をぐちゅぐちゅとこすり立てる。数秒前までの甘い刺激が、一気に怖いくらいの快感に様変わりする。
「うぐぅぅっ!? ちょ、陽乃さんそれやば、死ぬ……っ！」
「わたしはさっき何度だめって言ってもイカされ続けたんだけどなー」
可愛らしく頬を膨らませているが、生憎褒める余裕はない。腰が前後にがくついても、陽乃さんは一切逃がしてくれない。
「それは陽乃さんが全然嫌がってなかったから……ってやばいやばいやばい！ ごめんなさい、使います！ 全部綺麗に使います！ むしろ2周するくらい使います！」
あと10秒も持ちそうにないと危機感を抱いてギブアップすると、陽乃さんが手の動きをぴたりと止めた。そして道具をじっと眺め始める。何でその間も指で輪を作って、雁首をこすってるんでしょうか。ギブアップした意味が無いんですけど。
陽乃さんは気難しい顔をして、うむと頷いた。
「……2周は本当に危ないかも」
「それを検討してたんですか……」
真面目なんだか何なんだか……と呆れ笑いを浮かべた。
とにかく、この3日間に打ち込むことは決まったようだ。
「よーし、引きこもるぞー！」
俺の横で楽しそうに腕を上げている陽乃さんを見て、頬を緩める。
艶やかな髪を撫でると、今度は抱きつかれた。そしてそのまま押し倒されて、太ももで肉棒を挟んでこすられた。限界寸前で身体を離されて、鈴口からは先走りの汁がぷっくりと滲んでいる。
陽乃さんを責め続ける3日間になると予想されるが、この人はやろうと思えば1分とかからずに俺を射精に追いやることが出来る。そういった面では安心出来ない。どういった面だよって話だけど。

赤玉を出す危険性は依然として残ってるな……と思いながら、まずは目の前に溢れている道具の何から使うかについて吟味を始めた。

続く。

（5）

ベッドの上に広げた道具を眺めて、まずはどの道具で責めるかを考える。あぐらを掻いて唸っていると、陽乃さんが俺の背中にぴたりと抱き付いてきた。骨が無いのではと疑ってしまう程の柔らかさに思考を放棄してしまいそうになるが、気を取り直して吟味を続ける。すると今度は抱き付いたまま頬を指でつついてきた。子供が大人にちょっかいを出しているような、優しい力加減でぷにぷにとつつかれる。背中に意識を集中させると、今さっきまで見惚れていた筈の下着の感触が無い。この人いつの間に脱いだの？　陽乃さんは相変わらず俺の頬をつついてくる。今度は両頬だ。頑張れ俺。今陽乃さんの顔を見たら、即座に襲いたくなるくらい可愛い顔をしているに決まっている。大丈夫、俺は大丈夫。平静を保つことが何でこの人耳に息を吹きかけてきたの？　大丈夫、俺は大丈夫。俺なら出来る何でこの人の耳たぶ噛んでんの？　しかも何で可愛らしくあむあむ言ってるの？　大丈夫、俺は大丈夫。俺ならペースを貫ける何でこの人俺の乳首を指で撫で――

「……ちょっと」

「およ？」

両腕をがっしり掴んで陽乃さんの動きを止める、すっとぼけた声が聞こえた。何だろうこのシュールな体勢は。

「どうしたの比企谷くん、ちゃんと選んでくれないと」

「むぐ……っ」

陽乃さんは楽し気に言いながら、俺の鼻に今しがた脱いだばかりの、卑猥にも程があるブラを押し付けてきた。しかもちゃんと内側を押し付けられた。しっとりしている。良い匂い。いや、そうじゃなくて。

「ほれほれ、選んで選んでー」

続けざまに、じっとり湿ったショーツを肉棒に巻かれた。それだけでいやらしい匂いが分かって、肉棒が更に滾ってしまう。何でこの人、ショーツを巻いたままゆっくりしごき始めたんだろう。

それにしても、陽乃さんが本当に楽しそうだ。３日間一緒に居られるからこれだけ楽しそうにしてくれているのだろうか。そう言えば陽乃さんは俺の部屋に泊まりに来る時は決まってテンションがやたら高い。そうか、俺と居るのが嬉しいのか……。

……。

……何だこの可愛い生き物……。

「……陽乃さん」

「ん、なに？」

呑気な声で返してくるが、手の動きは明らかに速くなっている。

「このままだと出てしまうので、この辺にしてください」

「嫌だって言ったら？」

「ん、うーん……あ」

ふと、目隠しが目に入った。アイマスクの形をした目隠しは摘まんでみると肌触りがしっかりしていて、かなりの遮光性を備えていると予想出来る。

「これを最初に着けてもらって、徹底的にいじめます」

「え……」

陽乃さんが身体を離し、一気に後ずさった。足の隙間から時々見えてはいけないところが見えてしまっているけれど、そこは敢えて見な……やっぱり見たいから見る。

「変態」

本能に従ったら一瞬でバレた。しかもちょっと頬を赤らめて言われた。

それにしても。

「陽乃さん、これ自分で用意したんですよね？　何で躊躇うんですか」

俺の言葉に、陽乃さんは珍しく「うっ」と苦しそうな声を上げた。

「あー、いや、うん、準備した時はさぞ楽しくなるだろうってくらいに考えてたんだけど……いざ、比企谷くんがハァハァしながら迫ってくると……ちょっと恥ずかしくなったと言いますか……」

え。

「……俺そんなハァハァしてました？」

地味に物凄くショックを受けながら聞くと、陽乃さんは顎に人差し指を当てて上を向き、んーと唸った。
「ん、それは嘘だけど、ちょっと恥ずかしくなったのは本当」
嘘かい。
「その嘘いらないでしょう……っていうか、ん？　恥ずかしくなったのは本当ってことは……」
目隠しを持ったまま、陽乃さんににじり寄る。
「……」
陽乃さんが俺と距離をとった。ぎこちない笑みを浮かべて、足をしっかり閉じながら。
もう一度にじり寄る。
「……っ」
陽乃さんが再び俺と距離をとった。頬を赤らめ肩を竦ませて、胸も隠しながら。
……。
なんだろう。
何かこれ、楽しい。
いつもは陽乃さんが欲求全開で飛び込んでくる（語弊あり）から、こういう恥じらいや拒絶を見せられると妙に燃える。
もう一度、にじり寄る。今陽乃さんはベッドの端にいるから、これ以上は逃げられない。さあ、どうする……？
陽乃さんは困ったように笑って、そして美しい顔をくしゃりと歪めて泣きそうな表情を浮かべた。
「だめ、恥ずかしいの……っ」
「……っ」
陽乃さんの言葉と仕草に、目を見開いて固まってしまった。
陽乃さんは口元に手を当てて、普段は意志力に漲った瞳を潤ませている。
適度な肉付きのすらりと伸びた足はしっかりと閉じて、もじもじと内股をこすっている。
弱々しい乙女を体現したようなこの姿は、陽乃さんの普段をよく

知っている俺からすれば演技としか思えなかった。
しかし、それでも。
その表情はあまりに可憐で、色っぽく、嗜虐心をそそって――
「……陽乃さん」
「……なに？」
「ティッシュありますか」
「久しぶりだね……」
鼻血が出た。
シーツを汚す前に手早く拭いた。
ティッシュを俺にくれる陽乃さんも、それを受け取る俺も、一連の流れに慣れてきている感があり動きがとても滑らかだ。
綺麗に拭き取った所で、こほんと咳払いをする。
「まあ、目隠しはもうちょっと後でやることにしましょう」
「ん、わかった」
「陽乃さんが寝てる隙に着けます」
「……」
「それ以上逃げたらベッドから落ちますよ」
機嫌を直してもらおうと陽乃さんの頭を撫でると、不機嫌そうな顔で睨まれた。しかし拒絶はされない。未だに撫でるのに適切なタイミングが掴めない。
さて、と改めて道具を見渡す。
「……初めはこれですかね」
じっくり責めるなら……という基準で、とあるものを選んだ。

× × ×

筆。
書道で用いるような、世間一般でよく見られる毛筆だ。
この毛触りは、陽乃さんをじっくり責めるのにはぴったりと言えるだろう。くすぐったさをほとんど全て快感に変換させてしまう陽乃さんが一体どんな反応をするのか、楽しみでならない。
「陽乃さん、これで責めますね」
「……うん、わかった」

小さく頷くと、俯いて上目遣いで俺を見つめてきた。潤んだ瞳は艶を帯びていて、ついさっきまでとはまるで雰囲気が違う。今なら何を命令しても言うことを聞くんだろうな、と思った。
まずは軽い所から責めることにする。
「それじゃ、手を上げてください」
「ビンタすれば良いの？」
「暴力的な意味じゃなくて」
一瞬調子が狂ったが、俺が左手を差し出すと、陽乃さんはおずおずと右手を差し出した。
――綺麗な手だ、と思った。
人間のどんな黒い部分をも飲み込んで、それでも尚色が全く濁らなさそうな程白い肌。
全ての指輪はこの人の為にあるのではないかとさえ思える程、すらりと細く長く伸びた指。
この美しさは、今だけのものではない。これから先何十年経って、この指にどれだけの年輪が刻まれようとも、いやむしろ刻まれば刻まれる程、更に美しくなりそうだ。
そんな陽乃さんの手首に左手を添えて、右手に持った筆を近付ける。指輪を着ける動作みたいだな……と思ったら、少し顔が熱くなった。
陽乃さんの手の甲を、筆先が柔らかに撫でる。
「んぅ……っ」
陽乃さんが目をきつく閉じて、声を震わせる。緊張感も相俟って、かなり反応が良い。心根の奥をどす黒い感情がぞわりぞわりと侵食してくると、とあるアイディアが浮かんだ。
「陽乃さん、一つ指示を出します」
「……なに？」
「今から陽乃さんの全身を筆でなぞります。その間、陽乃さんは絶対イカないでください」
「……っ」
陽乃さんの瞳が見開き、唇が震える。

陽乃さんの体質からしてみれば、地獄のような命令の筈だ。
なのに、それでも。
「……うん、がんばる……っ」
震える声で返事をした陽乃さんの口の端が、微かに上がった気がした。
続く。

（6）

陽乃さんは超が付く程の敏感体質で、彼女自身の強い心根と体力が無ければ、ありふれた性行為であっても精神がおかしくなってしまうであろう程感じやすい。

これから陽乃さんの部屋で、何者の邪魔も無くたっぷりといかがわしい行為が出来るという期待で、いつも以上に身体が高まっているであろう状況で。

絶対に、イカないように――と命令をする。

それが陽乃さんにとってどれほど過酷なことか、自分なりに十分に理解したつもりで、敢えてその命令を口にした。

陽乃さんは俺に綺麗な手の甲を晒したまま、顔を逸らしてあどけない流し目を送る。いつものように俺をからかう色気たっぷりの視線ではなく、不安に身体を強ばらせた、目の前の男に全てを委ねることに期待と恐怖を孕ませた視線。一体これからどれだけの痴態が見られるのかと、考えただけで頭がおかしくなりそうになる。

陽乃さんの手の甲を、筆で撫でた。そしてそのまま腕の表側を滑らせていく。

「んあぁぁぁ……っ」

筆が肘に到達する時点で、陽乃さんは固く目を瞑り唇を強く引き結んで快感を耐え忍んでいる。肘の内側をなぞると、陽乃さんはおとがいを上げて嬌声を上げた。

「んはぁぁんっ!? ひっ、うぐ、んんんん……っ」

くりくりと執拗に撫でると、それだけで陽乃さんの身体が面白いように跳ね上がる。

――イってはならないという制約がフックとなって、快感が更に跳ね上がる。

陽乃さんにとっては地獄でしかないような状況が出来上がっていた。

筆をベッドに置いて、陽乃さんの両手を掴む。手のひらを上に向けさせて、両腕をぴたりとくっつける。窮屈な姿勢になったことで、陽

乃さんの暴力的なまでの魅力を備えた乳房が寄せられ、柔らかな谷間にじっとりと浮かんだ汗の粒がたまらない艶を醸し出している。何をするつもりなのか――と陽乃さんは陶然とした顔でくりんと首を傾げたが、俺の意図に気付いた途端に顔を青ざめさせた。

陽乃さんの肘の内側――今は両腕が揃った状態のものを、筆の毛をいっぱいに広げて撫で回す。

「うぅぅぅ……っ！」

陽乃さんが、泣くのを我慢する子供のような声を、真一文字に引き結んだ唇から漏らす。目尻には涙がうっすらと浮かんでいて、嗜虐心を煽ってくれる。ぐりぐりと撫で回すと、一筋の雫が陽乃さんの頬を伝った。

肘裏をひとしきり撫で終えて、筆を肩に向けて滑らせていく。陽乃さんは時折俺を見つめては、また目を強く瞑っていた。

肩を包み込むように撫で回した後、両腕を上げるよう指示をする。そして腕を折りたたみ、頭の上で重ねるように言った。

「……これ、やばい……っ」

ついさっきの行為を思い出したのであろう、陽乃さんが微かな抵抗の言葉を口にする。けれど腋にぴとりと筆を密着させた瞬間、抵抗の言葉はすぐに掻き消えて、代わりに獣じみた悲鳴が響いた。

「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……っ!? あっ、うっく、ひっ、あっ、あぁぁ……っ」

女神のような美しいポーズをとった極上の牝の身体が、たった一本の筆に好き放題嬲り回される。この人の素晴らしい所をキリが無い程知っている分尚更に、この状況は征服欲をたまらない程駆り立ててくれる。

陽乃さんとふと目が合う。吸い寄せられるように顔を近付けると、初心な乙女のような愛らしいキスをされた。唇を啄むようなキスでは物足りなくてもう一度口付けをすると、陽乃さんの瞳が甘ったるい色を帯びる。心底甘えてくる時はこんな目になるのだと気付いたのはつい最近のことだ。

もっと唇を触れ合わせたくて、もう一度口付けをする。舌を入れよ

うとすると唇を固く閉じて拒まれた。恐らく、今俺の舌が口内に侵入したら限りなく危険だと判断したのだろう。それでも陽乃さんのぬめった口内を蹂躙したくて、腋を嬲っていた筆を離し両腕を下ろさせ、右手に持った筆で陽乃さんの左耳を、左手の指で陽乃さんの右耳をほじくり回す。

「んっ、んふっ、んっく、んん……っ？　んんっ、んっ、んんん……っ」

抵抗は続けるが、両耳を嬲られながらでは長続きはしない。固めた舌先が陽乃さんの口内にずにゅりと入り込むと、陽乃さんは目を白黒させて両腕を俺の背中に回し、強く抱きついてきた。触れ合った身体は汗で湿っていて、身体の密着度が高まっている気がした。

俺の舌を味わいながらも、決して絶頂に達することの無いよう必死で気を張る陽乃さんの背中を、首から腰に掛けて一直線に筆で撫でる。その瞬間陽乃さんの舌を咥えて一気に吸い立てた。

「んふぅぅんっ!?　んぉぅぅぅ……んふぅぅぅ……っ」

陽乃さんの嬌声が口内を伝ってこちらの脳内にじわりじわりと染み込んでくる。陽乃さんは身体を不自然に痙攣させながらも決して身体を離そうとしない。筆が嬲る場所全てが性感帯になっているかのような反応を示しているにも関わらず、きちんと命令の通り絶頂に達していない。

口を離すと、互いの唇の間に情欲の残滓とも言える唾液の糸がぬるりと伸びた。陽乃さんはその糸をぱくりと咥え込み飲み込んで、うっとりとした顔で飲み干す。この表情一つで何回でも自慰が出来る程の、極上の艶を秘めた顔だった。

「うつ伏せになってください」

囁くと、陽乃さんは俺の耳元で「うん」と囁き返した。

×　×　×

陽乃さんが一糸纏わぬ姿で、自分の腕を枕にしてうつ伏せに寝転がる姿はあまりにも美しくて淫靡だった。真っ白な肌は浮き出た汗で輝きを増し、腰から足に掛けて盛り上がった双丘は瑞々しく弾力性に富んでいる。太ももはぴったりと閉じているが、そこから微かに漏れ出る甘酸っぱい匂いは隠しきれていない。

ごくりと唾を飲み込んで、うなじに筆を付けてそこから双丘の割れ目まで筆を走らせる。
「あふぁぁぁ……っ」
微かに美尻を持ち上げて、ベッドに顔をうずめたまま陽乃さんが喘ぐ。双丘の表面を丁寧になぞると、言葉にならない呻き声がしきりに漏れた。
「うぅぅ……うぅぅ……っ」
陽乃さんの鳴き声はどこまでも情欲を煽る。太ももをなぞって膝の裏で執拗に筆を遊ばせ、ふくらはぎ、足の裏に至った。
「ひゃあんっ!? あっ、あはっ、ひぁっ、あははっ、ちょっ、比企谷くん、そこはくすぐった……あはははっ！ あっ、あは……っ？ ひっ、あっ、んはっ、ふぁっ、ひっ、んぁっ、うっく、ひんっ!? あれ、なんでこんな……ひっ、うっく、うぅっ、だめ、だめ、だめ……っ！」
陽乃さんの足首をがっちりと掴んで逃げられないようにして、反応が明らかに変化していく様を楽しむ。くすぐったいのを我慢しているだけだったのに徐々に快感に侵食され、全身から汗を噴き出し、双丘を撫でている時と同じように顔をうずめてか細い声で鳴く。
右足と左足を揃えて、両足の裏を同時に嬲る。陽乃さんは苦しみに喘ぐ人魚のように、一本に束ねられた肢体をびくびくと跳ねさせる。ひとしきりたっぷりと嬲ると、今度は足をぱっくり開かせて双丘の割れ目を集中的に撫でた。淫裂よりも後ろ側、尻穴の周辺を入念に嬲る。
「あふぁぁぁっ!? 急にそこ……だめだめだめだめ……っ！」
陽乃さんが腰をがくがくと痙攣させる。このままでは陽乃さんの我慢も利かずにあっと言う間に絶頂に達してしまいそうだったので、ここはすぐに筆を離した。
「じゃあ最後、仰向けになってください。ここを乗り切れば無事クリアですよ」
陽乃さんは俺の言葉に頷きや言葉を返すこともせず、力なく仰向けになる。腕はだらりと投げ出され、すらりと伸びた足はだらしなく開かれていた。恥毛は汗と愛液でべったりと張り付き、いやらしい匂い

がベッドの上を満たしている。夥しい我慢を経た女体は、極上のものに仕上がっていた。
陽乃さんの身体に覆いかぶさるように四つん這いになると、豊かに実った乳房の縁に筆を付けて、くるくると縁をなぞっていく。陽乃さんは唇を引き結んで、筆の動きを凝視している。
「ん、んっく、んぅぅっ、んぅぅぅ……っ」
つつ、つつ……とじっくりなぞっていき、円の半径を狭めていく。一定の速度で徐々に中心へ迫ってくる筆は、一体どれほど陽乃さんの神経を削り、心を蝕むのだろう。
あと少しで乳頭に触れる、という所で、陽乃さんが小さく喉を鳴らした。一度緊張感を弛緩させるように、筆を豊かな乳房の裾野まで下ろすと、陽乃さんの身体の緊張が緩んだのが分かった。
――その瞬間、油断した陽乃さんの尖りきった乳頭をさっと撫でた。
「ぁ……っ」
きっと悲鳴のような嬌声を上げて激しく絶頂するんだろう――と思っていたら、陽乃さんは俺の首に両腕を回し、抵抗出来ない程の力で抱き寄せてきた。慌てて筆を手放して上気した身体と密着すると、陽乃さんは俺の耳に唇をぴったりと押し付けた。甘えるような仕草はどこか子供っぽく、普段の彼女とのギャップがまた恐ろしい程の興奮を煽り立てる。
陽乃さんは涙混じりの幼い声で囁いた。
「ねえ、イキたいの……ねえ、だめ？　だめ？　もうむり、イっちゃうの、お願い、イカせて、もうがまんできないの……っ」
「……っ」
脳髄を痺れさせる甘ったるい声が、思考を容易く犯す。陽乃さんは囁いた後、俺の耳に舌を挿し入れてくちゅくちゅと卑猥な水音を立てて、更に俺の口に舌をねじ込んでたっぷりと舌を絡ませてきた。子供が親の腕を引っ張っておねだりするような感覚だったが、行為そのものは気が狂いそうになる程卑猥だ。
「……そうですね。よく我慢出来ましたね、偉いですよ」

こんなことを言われたら、耐えてくれた分きちんとイカせたくなる。
目を潤ませる陽乃さんを愛おしく思い、汗でしっとりした黒髪を撫でる。すると陽乃さんは猫のように気持ちよさげに目を細めた。ここまで気を許して甘えているということがたまらなく嬉しい。
どうするか考え、乳首や下腹部を弄ってイカせるか……と考えて再び筆を手に取ったが、止めた。
ベッド脇の台に一時的に置いた他の道具を眺めて考える。そうして浮かんだ案は、我ながらひどいとしか言いようがなかった。
「……ご褒美に、全力でイカせてあげます。遠慮なくみっともない姿を晒してください」
俺の言葉に、陽乃さんは目を見開いて、視線を台の上に転がっている数々の道具に移した。そして、不安げに、けれど嬉しそうに、小さく頷く。
陽乃さんが口の端を微かに釣り上げて笑うと、端正な顔立ちが淫猥に歪んだ。

続く。

（7）

陽乃さんを全力で絶頂に追い込む為の道具を物色する。陽乃さんは息を荒げながらも、俺が何を手にするのかをじっと見つめている。

一つ手にとり、ベッドに置いて。

また一つ手にとり、ベッドに置く。

何度も、何度も、何度も。

「……え……ちょ、ちょっと、比企谷くん？　そんなに使うの……？」

陽乃さんの顔がひくつく。綺麗な瞳には不安が色濃くにじみ出ていた。

「せっかくなんだから出し惜しみはしたくないですしね」

言いながら、陽乃さんの身体のどこの部分に何を使うかを考える。

一通り取り終えて、陽乃さんの顔の横にずらりと並べた。

ローターを５つ。

粘着テープ。

クリトリスの刺激も同時に出来る、禍々しいバイブ。

「……し、死んじゃう……っ」

陽乃さんの唇が震え、静かに首を振る。しかし俺はいやらしい笑みを浮かべて陽乃さんの頬に手を添えると、

「うるさい、いいからみっともない姿を晒して壊れろ。動物みたいに声を上げて、身体をがくがく震わせて、愛液も小便も撒き散らして、好き放題イってしまえ」

「……ぅ……ぁ……っ」

俺の言葉に、陽乃さんは目を見開いて今まで見たことの無い表情を浮かべて――失禁した。もわりと湯気が上がり、陽乃さんの顔が羞恥に染まる。量こそ少なかったが、陽乃さんが俺の言葉に恐怖さえ覚えたのだ。その事実に、狂いそうな程感情が昂ぶる。

「……ごめんなさい、今のは怖かったですか？」

陽乃さんの頬を撫でてそっと尋ねると、陽乃さんは子供のように目に涙を浮かべてこくこくと頷く。

「……こ、怖……かった……っ。でも、でも、すごく……わくわく、し

ちゃった……っ。あは、わたし、もう壊れちゃってるかも……っ」
そう言って、陽乃さんが俺の両頬に手を添えてキスを求める。唇だけ重ねる優しいキスをしたまま二人で見つめ合う。唇を離すと、陽乃さんは名残惜しそうに俺の顔をじっと見つめていた。
「……じゃあ、使いますよ。覚悟してください」
「……はい……っ」
陽乃さんが頷くのを見て、俺は道具を手に取った。

× × ×

「やばい、死ぬ、死んじゃう……っ」
ぷっくり膨らんだ2つの乳頭をそれぞれ2つのローターで挟んでテープで固定すると、陽乃さんはまたしても弱気になった。
「大丈夫ですよ、大丈夫」
弱気な陽乃さんの発言を適当に流しながら、バイブを手に取る。陽乃さんは「うぅ……っ」と唸りながら俺の身体をぺちぺちと叩いてくる。何だこの人超可愛い。
「はい、じゃあこれを挿れますよ。頑張ってイカないようにしてください」
「……っ」
禍々しい形のバイブを持って陽乃さんの足を開くと、大きく喉を鳴らす音が聞こえた。
躊躇う事も無く、ずぶりと挿入する。
「い……ぅぅあぅぅぅんんんんん……っ」
ぐっしょりと濡れていても、凄まじい膣圧で押し返してくる。しかしそれでもぐいぐいと押し込んで、一番奥にごつんと当たる感触がする所で止めた。肉芽を刺激する部分がきちんと当たっているか確認する為にくいくいと動かすと、陽乃さんの腰が跳ね上がった。両手で口を覆って必死で耐えている。いつもなら何回も達していると思われるのに、本当に耐えている。すごいな……と素直に感心してしまった。
「よく耐えましたね、エラいですよ。最後はもう一つローターを使いますが……」

言いながら、陽乃さんの綺麗な尻穴をくにくにと触る。
「慣れてないと思いますが、まあ気楽に行きましょう」
さらりと話して、陽乃さんのぐっしょりと濡れた淫裂にローターをこすり付ける。陽乃さんがぶるぶると震えると再び愛液が溢れ出し、ローターがあっと言う間にびしょ濡れになった。潤滑液を纏ったローターを陽乃さんの菊穴にぴとりとくっけて――一気に押し込む。
「……んぐぅぅぅぅぅぅぅぅぅ……っ！」
陽乃さんのくぐもった悲鳴が寝室を犯していく。未知の快感に陽乃さんも混乱しているのだろう。それでも全て入り込むまでずぬずぬと侵食していき……ある場所を境に、きゅぽんと全てが陽乃さんの尻穴に飲み込まれた。
「はぁぁぁぁぁぁぁ……っ」
陽乃さんが口から手を離し、長い息を吐く。かなりぎりぎりだったが、それでも何とか絶頂しなかったのだ。この精神力は本当にすごい。
「よく頑張りましたね」
言って陽乃さんの頭を撫でると、ぶすっとした表情を浮かべながらも撫でられるがままになっている。ううむ、今度は失敗か……？　と思ったが、「……もっと優しく」と言われたので要求通りに優しく撫でると少し頬が緩んだ。まだまだ改善の余地があるらしい。
改めて、陽乃さんの身体を眺める。
誰もが振り向く極上の美貌とスタイルを持った陽乃さんが、涙と汗と愛液に塗れて仰向けに寝転がっている。
豊かな乳房は重力により僅かに外側に傾いていて柔らかさをこれでもかとアピールしていて、そんな中で乳首はぴんと張り詰めている。そして４つのローターが張り詰めた乳首を挟み込んで、卑猥さをかき立てている。
膣には拷問器具を思わせる程禍々しいバイブ。クリトリスを刺激する機能まで付いていて、女を壊すまで逃がしはしないのだと主張している。
尻穴にはローター。これがまたどういった効果をもたらすのか

……楽しみでならない。
ローターは全て有線で、陽乃さんの乳房や尻穴からはピンク色のケーブルが俺の手元まで伸びている。５つのリモコンとバイブのスイッチ。これが、陽乃さんを壊すキーだ。
「それじゃ……行きますよ」
焦らすのも忍びないと思って言うと、陽乃さんは一瞬天を仰いでゆっくりと頷いた。
全てを同時に点けることは出来ないので、素早く起動してゆく。
「んぃ……っ！」
陽乃さんが目を見開いて歯を食いしばる。
両手でローターのリモコンを２つずつ、それを２回。
「あが……っ！」
そして３回目には、左手でローターのリモコンを、右手でバイブのスイッチを点ける。
「うあぁぁ……っ！」
狙い澄ましての行為は、僅か１秒足らずで済んだ。
陽乃さんの腰が、壊れたように跳ね上がる。
「うっ……あぁぁあぁぁぁぁぁっ!?　うっく、ひぐっ、あが、うぅぅぅ……んぐあうぅぅっ！　ひっ、はぐぅっ、だめ、これ、あうぅぅぅぅぅ……っ!!」
断末魔のような嬌声が、寝室をあっと言う間に満たした。
陽乃さんは両手でシーツをこれでもかと言う程強く握り、歯をかちかちと鳴らして目をぎゅっと閉じている。しかし身体のあらゆる方向から来る快感に耐えられる筈も無く、身体を捩らせては何度も痙攣して、陰部からは栓の壊れた蛇口の様に愛液が溢れ出している。
「いっ、ひぐっ、これ、だめ、死ぬ、死ぬ、ほんとに死んじゃうぅ……っ」
陽乃さんが涙を流しながら俺に懇願する。
「駄目ですよ、陽乃さん。ちゃんと味わってくれないと」
言って、陽乃さんのお腹をそっと押さえつける。身体を捻じることも出来ず、発狂する程の快感が全てダイレクトに陽乃さんの脳へ叩き付けられる。

「んぐぅ……っ、ひっ、あがっ、やだっ、これじゃ……あぁぁあぁぁぁぁぁっ!?」
陽乃さんが俺に押さえつけられたまま、足をびんと伸ばして全身を痙攣させる。何回も絶頂しているというよりは、絶頂しっぱなしの状況の中で断続的に更に深く絶頂しているという状況だった。
ローターとバイブのスイッチを切った。陽乃さんが不思議そうに俺を見る。度重なる絶頂で疲弊しきった身体を、胡坐をかいた状態で抱き寄せると、陽乃さんは自然と俺の背中に腕を回して抱きしめてきた。
「……やめるの？」
陽乃さんがぽそりと呟く。死んでしまうとあれだけ言っておきながら……。
「……やめませんよ。今度はこうするんです」
陽乃さんの耳元で囁くと、乳房にくくりつけたローターの内２つだけ起動する。陽乃さんの右乳房の先端だけぶるぶると震えて、「んひぃんっ!?」と可愛らしい嬌声が聞こえた。
「はっ、はひっ、あぁぁぁ……あぁぁぁ……っ、あっ、うぅっ、いっ、イク……っ！」
片方の乳頭を責められただけで、１０秒ともたずに陽乃さんが絶頂する。ごくりと息を呑みながら右乳房のローターを止めて左乳房のローターを点ける。
「あんっ!?　今度はこっち……っ？　あっ、いっ、良い……すごい、ふっ、んっく……あふぅあぁぁ……んあぁぅんっ！」
またしても絶頂に達する。俺の耳元で「やらしい……変態……ばか……っ」と可愛らしい罵倒が飛んできた。陽乃さんの頭をくしゃりと撫でると、今度は満足そうに目を細めた。
左乳房を嬲るローターを止めて、今度はアナルに挿入したローターを起動する。
「んふぁぁぁん……っ？　はっ、うっく、ひっ、あふぅぅぅあぁぁ……っ」
陽乃さんは何が起きているか分からないとでも言うように、不思議

そうに悶える。どうやらさっきは全て同時に起動していたから気にする余裕が無かったようだが、尻穴単体の刺激はまだまだ慣れないようだ。
「こっちはこれから開発しないとですね……。今の責めが終わったら、たっぷり調教してあげますからね」
「……っ」
さらりと言うと、陽乃さんの顔が不自然にひくついた。この美しい顔がどんな風に歪むのか……楽しみでしょうがない。
アナルに入れたローターを止めて、最後は淫裂にずっぷりと咥え込まれたバイブを起動する。今度は手を添えて、人力で抽送をしながら。
がっちゅ、ぐちゅぶぶぶっ、ぶぃぃぃぐちゅぶちゅっ、ぶぃぃがちゅぶちゅくく……っ。
「んはぁぁんっ!? はっ、ひぃんっ！ あふぁぁぁぁっ！」
バイブの振動音と抽送による音が混じり合って卑猥な音が響く中、陽乃さんが背筋を反らせて何度も絶頂する。抱きしめている状態で感じる陽乃さんの絶頂はまた格別だった。
最後に――バイブを一番奥までねじ込み、全てのローターを起動する。そして陽乃さんを押し倒して、逃げ場の無い状態でぎちぎちに抱きしめた。
「ひぃぃぃんっ!? あぐっ、ひっ、あぐっ、比企谷く……んはぁぅぅんっ！ イってる、イってる、イってるからぁ……っ。あふぁぁぁんっ、だめ、ゆるして、死んじゃう、死んじゃう、死んじゃうよぉ……っ」
涙と涎に塗れた顔が、キスをせがんできた。こんなにみっともない顔が、こんなにも美しいなんて。唇を舐め回して舌を絡め、発情しきった牝の口を味わう。
陽乃さんが繰り返し絶頂に達する中、お腹の上に跨った。４つのローターが付いた乳房に肉棒を挟み込み、亀頭を陽乃さんの口の前に突き出す。陽乃さんはぼうっとした表情のまま、ほとんど反射的に長い舌を伸ばして亀頭を咥え込んだ。

「はむっ、ちゅっ、くちゅっ、ふぅぅん……んふぅぅん……っ！　んっく、ふっ、んんんっ、んふぅぅぅん……っ」
　無我夢中で肉竿を舐めしゃぶる陽乃さんに更に官能をかき立てられ、豊満な乳房をぐにゅぐにゅと揉みしだく。どこまでも柔らかいのに弾力がある乳房に挟まれながら、絶頂に喘ぐ絶世の美女の口にしゃぶられる。一度知ったら逃れられない絶景だった。
　陽乃さんの痴態を散々見て高まりきった身体に、すぐに限界が来た。
「陽乃さん、もう、出る、出る、出る……っ」
「ふっ、んくっ、ふぅんっ、んっ、んぐっ、んんんん……っ！」
　陽乃さんがしゃぶりながらも懸命に頷くと、亀頭が内頬にこすれて更なる刺激を受けた。身体の奥底からマグマの奔流が込み上げてきて、目をぎゅっと瞑って歯を食いしばる。
「出る……っ！」
　――びゅっ、ごぶりゅっ、ぶびゅるるるっ、びゅっ、ぶびゅっ、びゅくくくく……っ。
「んふぅぅんっ、ごっく、ごく、ふぅんっ、ごくっ、ごくっ、んっく、んふぅぅん……っ」
　陽乃さんは大量に放たれた白濁を溢すことなく受け止めて、嚥下を繰り返す。脈動が収まると鈴口に吸い付き、尿道に残った僅かな精も吸い取ってくれた。
「……んはっ、……はぁ、はぁ、はぁ……いっぱい出たね……んあぁぁぁんっ!?」
　陽乃さんが再び喘ぎ声を上げたことで、そう言えば諸々の道具がまだ起動していたことを思い出す。
「比企谷くん、そろそろ止めて……んはぁんっ！」
「……」
「……あの、比企谷くん……？　あぅんっ！　あふぁぁっ！」
「……」
「ちょっと、なんで動いてくれないの……やぁんっ！」
「……」

「ねぇってばぁ……ひぐっ、ひぃんっ！」
「……すいません、上から見る陽乃さんのイキ姿って可愛すぎるなぁと思いまして」
「……怒るよ？」
「すみません、すぐにどきます、止めます、すみません」
結構な冷たさで睨まれた。
この後すぐに道具を止めて陽乃さんの身体から離した。休憩で抱き合って寝転がっている間中、陽乃さんはずっと俺の胸元で「変態、色情魔、変態、変態、ばか、変態……」と呟き続けていた。

続く。

（8）

「しかし、本当に大量にあるな……」

疲れて寝てしまったのか、可愛らしい寝息を立てる陽乃さんの髪を撫でながら、ふと独り言ちる。時計が見当たらないが、ここに来たのはまだ午前中だった。あまりにも濃密な時間だったのですっかり感覚が狂っているが、恐らく昼間を迎えたくらいだろう。

自分のすぐ横に広がった、陽乃さんの用意した大量の道具。これから使う、或いは既に使ったものを見ながら、この3連休で一体どう使おうかと考えていた。同じものを一度しか使っていけないルールなんていうものは無いから、取り敢えずローターとバイブはこの先何回も使うとして……と、俺の胸に顔をうずめる陽乃さんを抱き締めながら、何とも鬼畜なことを考える。

「……ん、あれ、わたし寝ちゃってた？」

「おはようございます」

陽乃さんが目を覚ますと、いつもより幾分子供っぽい顔つきで俺を見上げた。汗で湿り気を帯びた前髪をかき分けると、真っ白な額に視線が吸い込まれる。陽乃さんの頭を抱きながら、ちゅっと口付けをした。陽乃さんは俺の行動に少し驚いたのか、目をぱちくりとさせている。生まれて初めて水族館に来た子供のような瞳だった。

「……比企谷くん。今すっごく恥ずかしくなってるでしょ」

「……はい」

陽乃さんがにやりと笑って言った台詞に、身体の芯から熱くなった。勢いでやったことはそのまま見逃してほしかった。「さっきスベってたけどどうしたの？　熱でもあるの？」とでも聞かれているかのようだ気分だ。何それ死んじゃう。

寝室の壁をぼうっと見つめて羞恥に浸っていると、陽乃さんがくすくすと笑った。

「ん、じゃあわたしも同じことしてあげる。それでおあいこだね」

「え……」

言っている意味が分からない、と陽乃さんの瞳を見つめると、陽乃

さんはベッドの上でずりずりと身体の位置を動かし、先程とは逆で俺の顔をその豊満な胸にうずめる形をとった。どんな枕にも代えられない温もりと柔らかさに包まれて、意識がとろりと緩んでいく。ついさっきまでは陽乃さんを見守るようにずっと起きていたため、本当に寝てしまいそうだ……と思っていたが、前髪をさらりとかき上げられ、額に熱を感じた瞬間――一気に意識が覚醒した。

「……ええっと……っ」

陽乃さんにキスをされたのだと気付くと、身体中に熱が伝播した。羞恥のあまりどんな表情をして良いか分からない。陽乃さんを見ると、てっきり悪戯っぽい顔をしているのかと思いきや……意外にも、恥ずかしそうな顔をしていた。

「……あ、あはは、これ、思ったより恥ずかしいね……」

「……」

何だこの可愛い生き物。

「……陽乃さんって、自分の娘が寝ている間にこういうことしそうですよね。寝てるから気付かれないと思ってたら『お母様、またいつもみたくおでこにチューしてください』とか言われて顔を真っ赤にする未来まで見えます」

陽乃さんの顔が茹だった。よし、この顔が見ることが出来たならもう後はどうなっても良い。この人に「どうにでもしてください」と言う場合の恐怖は異常だけど。

陽乃さんは視線を泳がせた後、頬に赤みを残したまま俺を見てにやりと笑った。

「……そういう比企谷くんだって、寝るとき娘に腕枕をするのが楽しみだったけど段々そんな歳でも無いかと思って迷いながらやめそうだよね。それである日娘に『お父様、ちゃんと前みたいに毎日腕枕してくれないと寝られません』とか言われて顔を真っ赤にしながら腕枕する未来まで見えるよ」

顔、あっつ。

２人の言葉がピンポイントすぎて、いとも容易く情景を想像してしまった。

――俺と陽乃さんに挟まれて、陽乃さんによく似た美しさを持つ娘がすやすやと寝ていて。
俺が腕枕をして、時折陽乃さんの居る側に寝返りを打った娘のおでこに、陽乃さんが瞳に愛情を湛えながらキスをして。
俺が驚きで目を見開いていると、俺と目が合った陽乃さんがぴんと立てた人差し指で唇を押さえてウインクをする。

……。

……。

『……』

陽乃さんも同じことを妄想していたんだろうか、唇をもにゅもにゅと動かして、俺を見ては苦笑いを浮かべ、また唇をもにゅもにゅと動かす。
「ひ、比企谷くん、子供は何人欲しい？」
「俺を巻き込んで自爆しないでください……」
「……ごめん……」
有り余る羞恥の結果、俺の顔を柔肉に限界までうずめる陽乃さん。
雪ノ下陽乃は、意外とこういう話に弱いらしい。とんでもなく可愛くなるらしい。
うし、覚えた。

× × ×

「すっごくだらだらしてみよう」
２人で未来予想図を描いて死ぬ程羞恥に悶えてからしばらく経った頃。
ようやく落ち着いた所で、陽乃さんが突然提案してきた。俺の返事を聞くまもなくうつ伏せになり、肘をついて両手のひらに顎を乗せる。何気ない一挙動に見惚れていると、陽乃さんは目で「早く早く」とせかしてきた。のろのろとうつ伏せになり、２人が寝てまだ余る程大きな枕に顎をぼふんと乗せる。
「比企谷くんはしょっちゅうわたしに見惚れるねえ。写真でも撮る

？」
「そうですね、ぜひ撮って待受けにしたいです」
「良いよ良いよ。いくらでも写真を撮らせてあげる。どのポーズが良い？」
「まずはうつ伏せの身体を足元から撮りたいですね」
「下半身目当てだ……」
「言い方……。だって陽乃さんのお尻、エロすぎていつも……いって」
「？　どうしたの？　クラスメイトに足をひっかけられて転んだ時の身体と心のダブルの痛みを抱えたような顔をして」
「例えがエグすぎる……。いや、バックでしてる時の陽乃さんのことを思い出したら思いっきり立っちゃいました」
「あー、だから芋虫みたいな体勢になってるんだねー」
「……今ので落ち着きました……ありがとうございます……」
げんなりして言うと、陽乃さんは「どういたしまして」と楽しそうに笑った。
しかし――と、陽乃さんの顔を改めて見つめる。
カーテンを閉め切って、枕元の小さなライトで照らされる陽乃さんの顔はどこまでも綺麗で、色っぽくて、柔らかい。互いの肉欲をぶつけ合う時はこの端正な顔立ちがあらん限りに歪んで、征服欲と嗜虐心をどこまでも掻き立ててくる。かと思えばこんな、聖母のような表情も浮かべるのだ。俺はこの人の表情のまだほんの一部しか見れていないのでは……と悔しく思うと同時に、まだまだ沢山の表情を見ることが出来るんだ、と嬉しくもなる。手を伸ばして頬を撫でると、陽乃さんは猫のように目を細めた。陽乃さんとこんな関係になっているにも関わらず、気を抜けば誰かに奪われそうな気がしてひどく焦ってしまう。それこそ本当に陽乃さんが孕むまで、気が狂う程まぐわりたい……なんていう衝動が鐘突きのごとく心を揺らしてくるが、今はだらだらしたいと言ったのは陽乃さんだ。そこは守らなければと思い、気分を替えようと話題を切り出す。
「そう言えば陽乃さん、大学のミスコンとかって出たことないんですか」

「んー？　あー、出たことないなー」
「え、そうなんですか。意外です。陽乃さんなら『友達が勝手に応募しててー』とかさえ言わずに自分で応募しちゃいそうですけど」
「……君はわたしをどんな目で見てるのかな？」
「ごごごごごめんなさい」
「けど、一回冗談交じりで本当に応募しようとしたことはあったなー」
　あったのかよ。何で今怒られたの？
「マジですか」
「うん、マジマジ。そしたら周りの友達が『陽乃は何て言うかあれだから！　絶対王者って言うか殿堂入りって感じだから！』『レベル高すぎて周りが萎えちゃうっていうか！』『ミスコンはあくまでランキング1位を競う大会であって、雪ノ下さんは既にチャンピオンだから！　ランキング1位を後で迎え撃てば良いと思う！』とか言われてね。最後のはよく分かんなかったけど」
「何故にボクシングネタを挟んできたんですかねその人は……」
　取り敢えず陽乃さんにはじめの一歩を進めてみようかしら。
　しかし、周りの友人の言うことは一理ある。
　普段から街中を歩いただけで、道行く人が男女問わず陽乃さんに振り向くのだ。女慣れした軟派男が振り向くのならまだ分かるが、スーツをきっちり着こなした大人の男性でさえ陽乃さんを二度見するのだ。それでいて最近また更に綺麗に色っぽくなっているのだから、もはや中高生の男子からしてみれば目に毒な存在にまでなっているかもしれない。フレイヤという渾名を付けたくなる勢い。
　陽乃さんをちらりと見ると、頬を緩めて笑みの花を咲かせた。うつ伏せをやめてこちらを向くと、俺ににじり寄ってきた。同じく横向きになるように促され言う通りにすると、おでこ同士がこつんと当たった。
「よーし、次はこの状態でだらだらしよう」
「死ぬ……」
　陽乃さんが喋ろうが喋るまいが、甘い吐息が意識せずとも鼻腔に送り込まれる。身体の隅々まで陽乃さんの息遣いが染み込んでくるの

が心地良く、それでいてどこまでも溺れて行ってしまいそうで怖かった。

鼻先をこすり合わせて、陽乃さんが微笑んだ。

もっと、目の前で笑うこの人のことを知りたい。

続く。

（9）

「陽乃さん。次はこっちで行ってみましょう」
「……え……っ」
2人でしばらくだらけた後。
枕を抱いてごろごろ寝転がる陽乃さんをよそに、俺は次に何をするかをひたすらに考えていた。その中で一つの道具に目が行き、今これを使えば今後の行為の幅が大いに広がるということ思い、陽乃さんに提案してみた。
陽乃さんは俺が手に持った道具を見るなり、顔を引き攣らせてぎこちない笑みを浮かべた。
「……陽乃さんが用意したんですよね？」
「……そうだけど……あの時はテンション上がってて、勢いで色々用意しちゃったから……今見ても『何でこんなのを入れたんだろう』って言うのが混ざってて……」
陽乃さんは気まずげに顔を逸らし、苦笑いを浮かべている。
俺はそんな陽乃さんに、にこりと爽やかな笑みを浮かべた。
「せっかくあるんですし、やりましょうよ。楽しいですよきっと」
「比企谷くん、笑顔が気持ち悪い……」
ベッドに突っ伏して、泣くのを堪えた。

× × ×

「ひ、比企谷くん、これ、恥ずかしい……っ」
陽乃さんの震えた声が聞こえる。
肉感溢れる身体は四つん這いになりこちらに尻を突き出していて、羞恥に染まった陽乃さんは顔を枕にうずめていた。楚々として煙った恥毛は溢れ出した愛液でぺったりと貼り付いており、その上ではアナルが物欲しそうにひくついている。ご馳走を前にして、心は躍っていた。
「大丈夫ですよ陽乃さん、リラックスしといてください。えーと、なになに……？」
俺は陽乃さんの豊満な尻の前で膝立ちになり、スマホでとあるサイ

トを見ていた。
タイトルは「浣腸の方法」
――陽乃さんと、アナルセックスというものをしてみたい。
幾度となく陽乃さんのひくつく尻穴を見ながらも、指を入れる程度のことしかしていなかったことから、ずっとこの願望を胸の内に燻らせていた。今回のチャンスは渡りに船と言える状況だった。
一時のテンションに身を任せていたとはいえ、必要な道具は陽乃さんが全て用意してくれていた。これを活かさない手は無い。きちんと順序を踏んで、陽乃さんのアナルを開発せんと息巻いている。調べているサイトの情報を基に、洗面器にぬるま湯をたっぷりと入れて、１００ｍｌ入る注射器の中に入れた。
「それじゃ入れますね。注射器が痛いかもしれないんで、ちょっとローションを……」
「ひゃあんっ!? あっ、うっ、あぁ……っ」
ローションの冷たさと指の異物感に、中指を挿れられた陽乃さんが可愛らしい声を上げる。
「それじゃ、行きますよ」
丸い注射器の先端をアナルに宛がうと、艶めかしい肢体がぶるりと震えた。
ゆっくりと、ぬるま湯を押し込んでいく。
「お……おぉぉぉ……っ」
獣じみた声が漏れて、白い肌にじんわりと脂汗が浮かんでくる。いつにない汗の匂いはいやらしさを倍増させて、空気にしか触れていない肉棒がぎちぎちとそそり立った。
「１００ｍｌだと大体３０秒かけるのが目安か……ゆっくりやんないとな」
独り言を呟くと、陽乃さんの身体がびくりと震えた。
「え、そ、そんなに時間……うぁぁ……か、かけるの……っ？　うぅぅ……っ」
「動かないでください危ないから。……そうですね、浣腸だけで３分かかる計算ですもんね」

「んあぁ……え、ちょ、６００ｍｌも入れる気なの……っ!?」
陽乃さんが振り返り、驚きで目を見開く。汗で前髪が額に貼り付いていて何とも生々しい。この状況でよくさらりと計算出来たな……と思いつつも、やっと1回目の注射が終わる。
「それじゃ抜きますよ」
「あ……うあぅぅぅ……っ!?」
注射器を引き抜くと内壁が食いついてきて、尻穴がいやらしく伸びた。ごくりと喉を鳴らして淫靡な光景を凝視しつつ、何とか引っこ抜く。先端が綺麗なままの注射器に再びぬるま湯を入れて、陽乃さんのアナルに宛がう。何も言わずとも陽乃さんは枕に顔をうずめて覚悟を決めていたので、躊躇うことなく注射器を挿入する。
「お、おぉぉぉ……っ」
本人の声なのかと疑ってしまう程の獣じみた声に興奮しながら、ゆっくり、ゆっくりと液体を注入する。腸壁を傷付けるのを避ける為、俺も陽乃さんも他の行動を一切起こさない。浣腸する側とされる側。互いに緊張で息を呑みながら、長いようで長い時間を共に味わう。

「あぁ……っ、うあぁ……っ」
３本目。
「うぐ……く、苦し……っ」
４本目。
「んぎ……ひ、比企谷くん、比企谷くん……っ」
５本目。
「死ぬ、死んじゃうぅ……っ」
……６本目。

目標の量を全て注入し終えると、目の前で息も絶え絶えな極上の牝が心細そうに震えていた。
「……」
徐に――中指の第一関節までを、たっぷりのぬるま湯を泳がせてい

るアナルにずぬりと挿入する。
「ひぐぅっ!?　やっ、今そんなことしたら……っ！」
「トイレに行くまで耐えられるか分かりませんからね。念の為栓をしてるんです」
「やぁぁ……っ」
尻穴に中指を挿入したまま、陽乃さんに立ち上がるよう促す。
陽乃さんは初めは震えながら首を振るばかりだったが、やがてよろめきながら上体を起こして膝立ちになり、両腕をだらりと下げた。中指をくにくにと曲げると、「あっ、うぁっ、あぁ……っ」と力無く声を上げて、極上の肢体がひくひくと震える。
陽乃さんが、背中を見せたまま首だけ振り向いた。
「……っ」
びっしょりとかいた汗で毛先が波打った黒髪。
中指の動きに合わせて揺れる、虚ろな目。
半開きになって、常人よりも明らかに長い舌をちらつかせる口。
誰もが振り向く美人のあられもない痴態を、目の前で見続けても耐えていた心が、常識はずれの艶姿を前にしてぐらぐらと心許なく揺らいだ。
「……中指の代わりに、これ突っ込んだら……抵抗しますか？」
乾いた声で自嘲気味に言って、みっともない程先走りの汁を滴らせた肉槍を摘まんで揺らす。
虚ろな瞳で俺の言葉を聞いていた陽乃さんは、にへっと力無く笑った。
「……あー、挿れられても良いかも。その代わり、人格ごと壊れちゃいそうだけどね」
歪な笑みを浮かべたまま、自らの尻肉を両手で広げる。その拍子に中指が第二関節までずぶずぶと沈み込んで呆気に取られていると、陽乃さんは淫靡な笑みを浮かべて艶めいた流し目を送った。
「どうする？　たっぷたぷのお腹に白くてゼリーみたいなのをいっぱい注ぎ込んじゃう？　良いんだよ？　将来養ってくれるなら、今ここで私の頭の中ごと壊しちゃっても」

「……お……あ……っ」
あまりにも甘美で、破壊的な誘惑。
陽乃さんの手で更に広げられ、中指がほとんど根本まで入った尻穴を凝視して、もし今すぐ獣欲のままに陽乃さんのアナルを掻き回したらどうなるだろうかと想像する。それは想像するだけで射精してしまいそうな程魅力的で、暴力的で、破滅的な光景だった。
陽乃さんと目が合ったまま、数秒固まる。
ふっ、と息を吐いて、ゆっくりとかぶりを振った。
「……陽乃さんとの知的なやりとりは結構気に入ってるんで、やっぱり止めておきます
」
言うと、陽乃さんの目に良識ある光が戻った。
「……そっかー、これはこれでありだと思ったんだけどね。2人ともなーんにも考えないで、犯して犯されることしか考えなくなって、馬鹿みたいにセックスに溺れるの。……すっごく反応してくれたね」
陽乃さんが目を細めて楽しそうに笑う。
「いや……今のは耐えられる訳無いです……っ」
陽乃さんが喋るごとに興奮で肉竿がひくつき、それがものの見事にバレてしまっていた。
「さて、何気に今のやりとりの内にかなりやばくなってきたから……そろそろ行こっか」
「あ……はい」
俺が中指を挿入している為陽乃さんはひどく動きづらそうで、体勢を次々と変えてやっとのことでベッドから降りた。中指を奥まで挿れすぎだと文句を言われたが、あんたが促したんでしょうとしか返しようが無かった。
僅かに背を屈めながら、陽乃さんがよろよろと歩を進める。
「あー……今度こんな感じで、痴漢プレイしてみよっか。電車に乗って」
「え、マジですか」
「うん、マジマジ。途中で比企谷くんが他の人に捕まったら負けね。

その時はわたしは白を切って泣き真似するから」
「過酷すぎる……」
しかし、別にバレなきゃ良いんだよな……と真剣に考え込んでいる内に、陽乃さんがトイレの扉を開けた。
続く。

（１０）

陽乃さんの家のトイレは、マンションのトイレだけあって個室とは言え空間にかなりのゆとりがある場所だった。なるほどなるほど、これなら簡単に２人入れるな……と思いながら陽乃さんの後に続いてトイレに入ろうとすると、突如動きを止めた雪のような白い背中に身体をぶつけてしまった。

「どうしたんですか」

「比企谷くん、まさか一緒に入ろうとしてる？」

前を向いたままの陽乃さんの言葉に、うーんと頭を捻る。

「……それはまあ、見届けた方が良いかなと」

「指を曲げながら言わないで……っ」

アナルに挿入している中指を何とは無しに曲げると、陽乃さんは俺の手首を掴んでぶるぶると震えた。艶めかしいうなじがほんのりと紅潮して、些細な色の変化に激しく心が揺れる。

いいから……と、陽乃さんは頬を染めながら振り返り、睨み付けてきた。

「流石にこんなとこ見られたらお嫁に行けないから……付いてこないで」

「え？　俺のとこに来れば……あ」

「……」

「……」

反射的に答えてみたら。

変な空気になった。

これ、もっと素敵なデートとかしてる時に言いたかった。

今の状況を考えると、シュールにも程がある。

「……まず指を抜いて。それで今言った台詞は後日もう一度言うように。さっきのは無し」

「は、はい、すみません」

「うんんん……っ！」

慌てて謝りながら指を引き抜くと、陽乃さんは艶っぽい声を漏らし

て膝から崩れ落ちそうになった。慌てて肩を押さえると、敏感過ぎる体質により身体がびくびくと痙攣する。
「もう、限界……っ！」
いつになく余裕の無い声で呟くと、俺の肩を押してトイレに入り、ドアの鍵を閉めた。聴き慣れない電子音を聞いて、ああ、そう言えば音姫ってこんな音だったなと思い出す。普段音姫の音を聞く機会など中々無いのだ、男というものは。音姫の音から数秒後、今度は実際に流す音まで聞こえた。念入りに音が聞こえないようにしている。余程恥ずかしいんだな――
「寝室で待ってなさい！」
「は、はい」
凛とした声で叱り飛ばされて、慌てて寝室に引き返した。
ちなみにこの後手を洗ってから調べ物を再開すると、浣腸は2～3度すると尚良いと言うことを知った。その為トイレから若干疲弊した様子で帰ってきた陽乃さんに2度目の浣腸を提案すると、心底げんなりした顔をされた。しかし交渉してみると渋々ながらも従ってくれた。陽乃さんは何だかんだで押しに弱いですねと笑いながら言ったら、物凄い目で睨まれた。生まれてきたことを後悔するレベルの恐怖を味わった。

× × ×

「つ、疲れた……っ」
2度目のトイレから帰還した陽乃さんは、幾分げっそりしていた。
「疲れてても陽乃さんは綺麗ですよ」
「うん、知ってる……」
疲れた様子でベッドに寝転がる陽乃さんの言動に、ぶれないなこの人は……と尊敬の念さえ覚える。しばらくの間、横向きで枕を抱きしめてころころとベッドの上を転がっていた陽乃さん――愛くるしいにも程があって、普段とのギャップも相俟って死ぬ程可愛い――が、枕を抱いたままうつ伏せになり、それで……と、身体をもじもじとくねらせながら呟いた。
「続き……するんでしょ？」

枕に顔が埋もれている為くぐもった声になっているが、熱の篭った声ははっきりと聞き取る事が出来た。極めて扇情的な肉付きをした尻肉を目の前でふりふりと揺らされ、一気に気持ちが昂ぶる。
「……そうですね。次は、これを使います」
俺が取り出した道具を、枕から顔を上げた陽乃さんが見て顔を引き攣らせる。
「……まあ、そんな流れだよね……」
納得したような、諦めたような表情をして陽乃さんは――俺が手に持った、アナルパールとローションを見つめた。
× × ×
表情が見たいと思い、陽乃さんには仰向けになってもらった。
足をぱっくりと開いて、膝をM字に曲げてもらう。
「……死ぬ程恥ずかしいんだけど……」
目を逸らしてぽそぽそと呟く陽乃さんがやたら可愛らしい。
「大丈夫です、綺麗ですよ」
「どこを見て言ってるのかな……？」
怖い顔で睨んでくるが、羞恥で赤く染まった顔だと幾分怖さも薄れている。
「道具は見せたものの、まずはほぐさないといけませんね。だから、まず初めは指から……っと」
言って、右手中指にローションを垂らす。そして尻穴の入口にもローションを付けると、「つめた……っ」と熱っぽい声で陽乃さんが呟いた。
ぬるり、と中指を排泄孔に侵入させる。
「うぁ……っ」
陽乃さんがシーツを握りしめて、虚ろな目になってぶるりと震える。
「リラックスしてください。ゆっくり入れていきますから、無理だと思ったら言ってください」
「うん……っ」
不安感の為かいつもより子供っぽい声で返事をすると、陽乃さんは

己の中に入り込む指を凝視しながら唇を引き結んだ。ずに、ずに……と中指が入っていく度に、陽乃さんの腰が不規則に前後する。時折陽乃さんの腰の動きにより不意に指が進むと、綺麗な瞳が大きく見開かれて、おとがいを上げて艶めいた声が漏れた。

第一関節まで入り込み、第二関節まで入り込み、最後には根本まで。

手の中で最も長い指が根本まで埋まり、感動さえ覚えた。

「すごいですよ陽乃さん、全部入りましたよ」

「……う、ん……っ」

俺の喜びようとは対照的に、陽乃さんは全身にねちっこい汗をじっとりとかき、自身の下腹部を見つめながら口を半開きにして喘いでいる。口の端に涎がきらりと光るのが見えてごくりと息を呑む。余裕が全く無いのは明白だった。

ゆっくりと引き抜いていく。途中で軽く指を曲げながら、探るように。

「お……おぉぉぉ……おぉぉぉ……っ」

虚ろな目で天を仰ぎながら、獣のような声が漏れてくる。

「気持ち良いですか？　苦しいですか？」

指のほとんどを抜いた段階で尋ねると、陽乃さんはぼうっとした表情のまま、首をくりんと傾げた。

「わかん……ない、どっちも……かも」

陽乃さんの返答に、ふむ、と考える。未知の部分に戸惑うのは当然だから、そこに既知の快感を混ぜれば……と考え始めた瞬間、すぐに策が浮かんだ。

「じゃあ、両方挿れちゃいましょう」

「え……うあぁんっ!?」

念の為ローションを右手全体に垂らし、中指はそのままアナルに、そして親指を膣口に挿入する。膣穴は触り慣れた湿り気に満ちていて、どこか安心するものがあった。ローションを塗っていることも相俟って、2本の指はそれぞれに違う締め付けを楽しみながらずるずると入り込んでいく。

「あぐ……なに、これ、わけ、わかんな……い、イク、イク、イク……っ

！」
陽乃さんがはしたなく口を開けながら、全身をぶるぶると震わせる。２本の指が根本まで入り込んだ所でぐにりと指を曲げると、美しい肢体が弓なりに反り返った。
「うあぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!?」
悲鳴と嬌声が混ざり溶け合った声を上げて、陽乃さんが全身を激しく痙攣させる。
「前にも挿れるとちゃんとイケるんですね。よし、これで尻も気持ち良いんだって身体に覚え込ませて……と」
「えっ!? ちょ、なんでまだ動かして……うあぁぁっ、うあぁぁぁぁっ!?」
絶頂で打ち震える極上の牝の身体の中で指を折り曲げ、抜き挿しして、止めどなく蹂躙する。膣口からは止めどなく愛液が溢れ出てローションが流れて行った。持ち上げるように中を抉ると、陽乃さんは腰を跳ね上げて打ち震える。シーツが汗と愛液とローションでどろどろに汚れていく。その様はひどく扇情的だった。
中指と親指を引き抜くと、陽乃さんは息も絶え絶えに、足をM字に開いたまま仰向けで寝転がった。はしたない格好も陽乃さんがやれば極上の絵になるな、と思い息を呑む。
「じゃあ、次はアナルだけでイってみましょう」
「え……んはぁぁんっ!?」
再び中指にローションを塗り、休憩無しで尻穴にだけ指を挿入する。陽乃さんは動揺を顔に滲ませていたが、自身の身体に湧き起こる快感の波に気付いたのか、綺麗な瞳が驚きで見開かれた。
「え……うそ、さっきより……うあぁぅんっ!?」
「前と一緒に挿れることで、『後ろも気持ち良い』って身体に覚え込ませられないかなって思ったんですけど……上手く行ったみたいですね、良かった」
「あっ、そんな……んふあぁぁっ!?」
呑気に解説する俺をよそに、陽乃さんは未知の快感に大量の汗を撒き散らしながら打ち震える。

「あ、いっぱい愛液も出てますよ。本当に感じてくれてるんですね」
「い、言わなくていいから……っ！」
端正な顔立ちが羞恥で茹だった瞬間、尻穴が心地良く指を締め付けてくる。最初に挿れた時よりも指が入りやすくなり、代わりに入った後に隈なく締め付けてくるようになっていた。
ずみゅっ、にぐっ、ぐにゅ……っ。
「お、おぉぉぉ……おぉぉぉ……っ」
陽乃さんが仰向けで背中を弓なりに反らせたまま、顔の横のシーツを手で掴んで打ち震える。一切の余裕を無くした美女は、今や全神経を自らの尻穴に集中させていた。
「そろそろイケそうですか」
「わかん……ない、よぉ……なにこれぇ……っ」
「小刻みに震えてきましたよ。イケそうですね」
「そう……なの……？　やっ、こわい……っ」
「……可愛いですね、本当に」
「……っ!?　や、今、そんなこと――っ」
陽乃さんが再び羞恥で顔を染めて、上体を起こした瞬間に指をぐにりと曲げる。
「あ――っ」
陽乃さんの表情が止まった、次の瞬間。
上体を下ろして寝転がる、というよりは……腰が跳ね上がることで強制的に仰向けになる、という言い方が正しいと言えるような――そんな反応を見せた。
「――うあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!?」
こちらの腕に透明な液体が大量に噴きかけられ、陽乃さんの身体が綺麗に反り返った。
幾度となく痙攣して鳴き声を撒き散らして、陽乃さんの腰がすとんとベッドに落ちる。ベッドのスプリングが軋む音が止まると、陽乃さんの荒々しく息をする音だけが室内を満たした。
「……イケましたね、お尻で。ちょっと休憩しましょうか」
言いながら立ち上がり、小さな冷蔵庫を開けてみる。案の定大量の

飲み物が入っていた。その内の一つをよろよろと起き上がった陽乃さんに手渡すと、ぶすっとした顔で受け取った。
「……なんか、悔しいんだけど……」
「反撃は後でいくらでもどうぞ。まずは慣れてもらわないといけないんで」
「……本当にいくらでも反撃するからね？」
「こわ……っ」
そんなことを言いながらも、こちらにしな垂れかかってくる陽乃さんはとても可愛らしい。
先にシーツを替えるか……と思いながら、陽乃さんを抱き寄せて艶やかな黒髪を撫でると、存外素直にされるがままになっていた。

続く。

（11）

シーツを替えて、陽乃さんに仰向けで寝てもらう。
「足をM字に開いて、太ももを押さえていて下さい」
「……っ」
遠慮の無い俺の言葉に、陽乃さんは頬を赤らめて眉をひそませながらも従う。陰部を手で覆ってすらりと伸びた足をゆっくり開き、膝を立ててしばらく迷った後、そっと手を陰部から離して、内ももを両手で押さえた。ピンク色の襞と窄まった尻穴がはっきりと見える。身体を起こして恥ずかしそうにこちらを見る陽乃さんの表情が、たまらなくそそった。
「……何て言うか……美味しそうですね」
「……」
何の感情も読み取れない表情で、完全完璧な沈黙をかまされた。
「沈黙が痛い……」
「蔑むよりこっちの方が効くと思ったんだけど、どう？」
無表情から一転して、天使のような笑みを浮かべる陽乃さん。この人の表情筋はどうなってるのでしょうか。
「何すかその輝く笑顔。超可愛いですね。あとその格好で俺をからかうって何かシュールですね」
「……」
褒められたのとイジり返されたのとで、陽乃さんの表情が何だか変な感じになった。色んな感情が混ざりすぎて眉やら口やらの形がちぐはぐになっている。可愛い。
多分もう数秒も経つと陽乃さんの目から殺人光線という名の視線が放たれるので（あながち誇張でもない）、いそいそと道具を用意する。
持ち手の付いたアナルパールとローション。
この2つを使って、今から陽乃さんをめちゃくちゃにする。
「じゃ、行きますよ」
さらりと告げると、陽乃さんは小さく息を呑んだ。アナルパールの

先端を上に向け、ローションを天辺からたらりと垂らす。陽乃さんはローションが玉を伝っていく様子を食い入るように見ている。いくつもの玉が連なったこのパールは、全ての玉の大きさが均等だ。即ち、最初の1個さえクリアすれば、後は陽乃さんの慣れの問題となる訳だ。とは言っても、玉一つの大きさは中々のもので、最初の1個を乗り越えるのもかなり骨が折れそうなのだが。
「念の為にこっちにも入れときますね」
「え……うぁぁんっ!?」
陽乃さんのアナルにローションの口をぷすりと差し込み、潤滑液を染み込ませる。陽乃さんは足を蠱惑的に開いたまま、ローションが自身の身体を犯していく感覚に溺れていた。
「挿れますよ……。身体を起こして、入る所を見ててくださいね」
「……き、鬼畜……っ」
「良いから、見ててください」
「……ぅ……ぁ……っ」
恥ずかし気に抵抗する陽乃さんを静かに一喝すると、驚きで目を見開いて抵抗を止めた。長い睫毛を不安げに震わせて、アナルパールの先端を見つめている。
玉の一部を、陽乃さんの窄まった尻穴に押し当てる。冷たかったのか、可愛らしく喘ぐ声が微かに聞こえた。
ぐっ、と力を入れると、陽乃さんがまだ微かに持っていた余裕が霧散して消え去った。転んだ子供のように苦悶で顔を歪ませ、庇護欲をそそる瞳で見つめてくる。
「うぅ……ぅあ……っ」
「力抜いてください。大丈夫ですから、大丈夫ですから」
陽乃さんは俺の言葉に小さく頷いて、強く目を瞑って俯いた。力みが取れてきたのか、きつく閉じられていた尻穴が徐々に広がっていき、陽乃さんの呼吸が荒く艶めかしいものに変質していく。
「あ……あぁっ、あ……っ」
身体をひくつかせて、玉が徐々に入り込んでいく様を虚ろな瞳で見つめる。口はだらしなく開けられていて、もはやされるがままになっ

ていた。
ぬるっ、ぐっ、ぬぐっ。
ぐっ、ぐぐっ、ぐぐぐ……っ。
……ぐぽんっ。
「んはあぁあぁぁんっ!?」
玉の最も太い部分を越えた瞬間、広がり切っていた尻穴が一気に収縮して、1つの玉を丸々飲み込んだ。
「あっ、んぁっ、ふぅっ、んん……っ」
「頑張りましたね、陽乃さん。大丈夫ですか？」
「う、うん……思ったよりは大丈――」
陽乃さんの様子を確かめた直後、陽乃さんが喋っている途中に、パールの持ち手を手のひらで押さえて、一気にもう3つねじ込んだ。
「あぐっ」
陽乃さんは気のせいかとさえ思うような短い悲鳴を上げて、ピンク色の襞からちょろちょろと尿を噴き出した。放心状態の陽乃さんの肛肉に、全部で7つあるパールの残りをゆっくりねじ込んでいくと、その度に尿と愛液がブレンドされたものが艶めかしい下腹部から壊れた蛇口のように垂れ流された。
「あっ、えっ？　あっ、比企谷、くんっ？　あっ、うぁっ、あっ、あっ、あっ……」
驚きのあまり事態が呑み込めていない陽乃さんを置き去りにして、尻穴に全てのパールをねじ込んだ。全てを飲み込んで尚、仄暗い肉穴は更なる蹂躙を望む様にひくひくと収縮を繰り返している。
「頑張りましたね、陽乃さん。全部入りましたよ」
「き、きみってやつは……っ」
脂汗を滲ませながら、快感と苦悶に満ちた表情を浮かべる陽乃さんは、ひどくみっともなくて、それでいてこれ以上無い程に美しい。興奮の為か豊満な柔肉の頂の膨らみは、ぴんと張り詰めて震えていた。こちらの愚行を窘めるような目をしていながらも、どこか嗜虐心をそそる表情。喜びで身体が震えた。
陽乃さんのお腹をぐっと押さえ込む。

「あー、本当に入ってますね。どんな感じですか？」
「うぁ……っ。……う、うん、何か……不思議な感じ。あんなおっきぃのがお腹の中に入ってるんだって思うと、不思議な感じがする」
「そうですか。それじゃ、抜く時はどんな感じですか？」
　言いながら、玉をずるずると引き抜いて行く。
「んあぁぁっ!?　ちょ、ちょっと、そんないきなり……おぉぉぉ……っ、……わ、わかんない、何これ、内臓が引きずり出されるみたいな、怖い感じ……が……あおぉぉぉ……っ」
　ふむふむ、と頷きながら、残り1つの所まで玉を引き抜いた所で、乳首と同じくらい張り詰めていたクリトリスを指で強く摘まみ、それと同時に再びパールを挿入していく。
「うあぁぁぁぁっ!?　そん、な……うぐぅぅ……ひぃぃんっ!!」
　意思とは関係無く、強制的に絶頂へと導く。腰が跳ね上がり、狂ったように痙攣した。腰が落下してベッドが軋む。今までとは違い、陽乃さんの顔には慣れない穴への刺激に対する戸惑いと苦しみがはっきりと見て取れて、それがまた興奮させた。
　奥まで入れて、ぐりぐりと回しながら抜く。陽乃さんが鳴いた。
　パールを3つだけ挿入して、素早く抽送を繰り返す。目の前の女性が喘いだ。
　時折奥まで押し込んで、ゆっくり焦らすように引き抜きながら、途中で一気に奥まで突き入れる。目の前の牝が、理性を剥ぎ取られて本能のままに悶え狂う。
「ひぃんっ！　あぐっ、うぐっ、うあぁぁっ！　ひっ、うぁっ!?　んくぅぅぅ……っ」
　こちらの僅かな動き一つにも敏感に反応する陽乃さんは、汗と愛液と腸液を体内から滲みだし、狂ったように喘ぎ続ける。クリトリスを弄るまでもなく、陽乃さんの身体は数えきれない程の絶頂をその身に刻んでいた。
「あ～っ、あ～っ、あ～……っ」
　アナルパールを引き抜くと、陽乃さんは内ももを押さえたまま壊れたように間延びした声で鳴いた。

ああ、もっと。
もっと、もっと。
もっと、もっと、もっと。
この人を、壊したい。
アナルパールにもう一度ローションを垂らし、躊躇無く一息で尻穴にねじ込む。陽乃さんがひゅっと息を吸って鳴き声を上げる寸前に、破裂寸前だった肉竿でぐちょぐちょの膣肉を最奥まで抉った。
「あ――――っ」
２つの穴を同時に犯された陽乃さんは。
音も無く鳴いて、泣いて、歪な笑みを浮かべた。
続く。

（１２）

陽乃さんの尻穴にアナルパールをねじ込むと同時に、血管の浮き出た肉槍を膣に突き入れる。亀頭が鮮やかなピンク色の襞に飲み込まれる瞬間、陽乃さんがひゅっと息を吸った音がした。

――雪ノ下陽乃の膣は、極上の肉壺。

世界で誰よりも、否、世界で唯一自分だけがこのことを知っているのは、何物にも代えがたい喜びだ。

――それなのに、まるで騙されていたかのような感覚に襲われた。

「うぐ……っ!?」

今まで、手加減していたのだとでも言うような、恐ろしいまでの膣肉の収縮に、肉竿の半分程を埋没させた所で腰を止めざるを得なかった。

亀頭が膣内へぬるりと侵入した瞬間、まるで何千何万もの触手や襞が絡みついてくるかのように、膣内全体が蠢き、締め付けて、肉竿を愛撫してきた。待ち望んでいた獲物を一切の手加減無く狩り殺すような、恐怖さえ覚える程の快感。

あとほんの数ミリでも動けば射精してしまいそうで、ましてや今射精すれば発狂するまで射精させられそうで。

陽乃さんの腰を押さえてぴたりと止まると、俺は気が付けば目を見開いて静かに息を荒げていた。心臓は未知の恐怖に怯えるかのように早鐘を打っている。

怖い。

目の前の、俺が今さっきまで嬲っていた女性は、本当に俺の知っている雪ノ下陽乃なのか。

そんな疑問が心の内にふつふつと湧いていると――

「……ん？」

陽乃さんの艶めかしく上気した白いお腹が、こちらにせり出していることに気付いた。よく見れば、俺が押さえている陽乃さんの腰も明らかに浮いている。よく見ると、陽乃さんはブリッジをするかのごとく仰け反っていた。

「……ぁ……か……っ」
まるで首を絞められて窒息しているかのような、今にも消え入りそうな声が耳に入る。視線を白い肌に滑らせると、陽乃さんはヒステリーでも起こしたかのごとく髪をぐしゃぐしゃにしていた。セミロングの艶やかな黒髪が見るも無残に乱れ、じっとりと汗をかいた肌に貼り付いて天女の如き美貌を妨げている。わなわなと震える口はぱっくりと開いていて、折り曲げた手の指が顔を覆っていた。
これ以上無い程、みっともなくて、人目に晒すべきでない姿。
――その、筈なのに。
「……ぁ……ぁ……っ」
身に着けた知性が全て削ぎ落されたかのような、獣の如き声を漏らすばかりのその顔は、ひどく淫らで、扇情的で、嗜虐心をそそる。
極上の痴態を目にして肉棒がむくむくと膨らみ、それに陽乃さんの膣肉が自動で反応する。歯を食いしばって射精欲求を堪えていると、陽乃さんは息混じりの声で小さく喘いだ。
「……ひ、き、がや、くん……っ」
泣いているかのように顔をくしゃくしゃにした陽乃さんが、耳を凝らさないと聞こえないような声で話しかけてきた。
「どうしました」
「き……み……わかって、る？　わたしの、おしりに、あんなおっきい玉がいっぱい付いたのをつっこんで、それで、わたしの、だいじなところに、かたいおちんちんいれてるんだよ？　わたし、死んじゃうよ？　いいの？　死んじゃうよ？」
「……っ」
吹き抜ける風に揺れる稲畑のように、心地良いぞくぞくとした感覚が背中を何往復もする。
この人は今、泣いているのか、笑っているのか。
端正な美貌を乱れ貼り付いた黒髪が歪め、両頬を手で覆っているため、表情は窺えない。もしかしたら陽乃さん自身も、自分がどういうつもりで今の言葉を喋ったのか分かっていないのかもしれない。
「……大丈夫ですよ、陽乃さん。死なせなんかしません」

一段低くした声で、不自然な程優しく語り掛ける。
陽乃さんの腰から手を離し、上から覆いかぶさる。陽乃さんの首に両腕を回すと、驚きで目を見開いた陽乃さんと目が合った。
「ちゃんと、生きたまま壊してあげます」
「……っ」
陽乃さんが手を顔から離し、引き攣った笑みを浮かべた。
目の前の愛おしい女性を壊したい。
単純で純粋な欲求が芽生えると、射精への恐怖は自然と薄れた。
身体をぴたりと密着させ、煮え滾った蜜壺を犯し貫いてゆく。
「あ〜っ、あーっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あぁぁぁ……あぁぁぁ……っ」
陽乃さんはこちらの背中に腕を回してきつく抱きしめ返すと、壊れた人形のような声を上げて、すらりと伸びた足を動かし始める。おもちゃを買ってくれと泣きわめきながらねだる子供のように足をばたつかせたかと思えば、寄る辺を求めるかのようにこちらの腰に絡み付いてきて、その直後にびんっと指の先まで伸ばして硬直した。
腰をゆっくり進めるだけの行為が、陽乃さんの身体によって極上の旅路と化す。亀頭が子宮口に予想外に早く到達すると、陽乃さんが口をぱくぱくとさせた。
「……だ……め……っ」
「？　何がだめなんですか。こんなに子宮口が下りてきちゃって。どれだけ欲しがってるんですか」
言いながら腰をぐりぐりと押し付けると、陽乃さんは「うぁぁぁ……うぁぁぁ……っ」と怪我をして助けてを求める獣のように唸る。
「……待って、お願い、これ以上ぐりぐりされたら……っ」
「されたら？　されたらどうなるんですか？　ほら、ほら、ほら」
「んあぅぅぅ……っ」
「ほら、ほら、……ん？」
膨らんだ亀頭で子宮口をぐりぐりと嬲っていると、不意に下腹部に生温かさを感じた。愛液が噴き出したのかと思ったが、一度溢れ出した液体はまるで堤防が決壊したかのようにこぽこぽと溢れ出し、嗅ぎ

覚えのある匂いを放ちながらシーツを汚していく。そう言うことか……と納得していると、陽乃さんが両手で顔を覆って震えた。
「お漏らし……可愛いですね」
「……言わないで……っ」
いつになく弱気で、しおらしさを見せる彼女が無性に愛おしくなって……もっと虐めたくなる。陽乃さんを抱き締める腕に力を籠めて、小さい身体をめきめきと軋ませる。
「……あぁ……っ!? ……あ……ぅ……あ……やめ、お尻まで、おかしくなる……っ」
陽乃さんの言葉により、自分が今体重を思い切り陽乃さんにかけていることでアナルパールの入った尻穴まで刺激されていることに気付く。成る程と頷いて、陽乃さんを拘束する力を強めた。発情しきった牝の肢体をぎちぎちと締め上げて、とびきりの鳴き声を絞り出させる。
「……ぁ……え……ぁ……っ」
腕の中で豊満な肉体がぶるぶると震え、こちらの胸板に熱い吐息が吹きかけられる。ちょろろろ……と新たに漏れだした小水が、2人の恥毛をたっぷりと湿らせる。
「……こわ、れる……ばかに、なる……おかひくなる……っ」
顔をくしゃくしゃにした陽乃さんが、徐に口を開いて顔を寄せてきた。キスをねだるでもない動きに疑問を覚えていると、陽乃さんの顔が正面から逸れた。
「……っ?」
「……あぐっ、はぷっ、んむ……ふぅぅぅ……あぐっ、あぐ……っ」
首と肩の間に微かな痛みを覚えて振り向くと、陽乃さんがこちらの肌に齧りついていた。齧るとは言っても甘噛みで、顔を見ると綺麗な瞳からぽろぽろと涙をこぼしている。主に甘える子犬のような行為が、嗜虐心を天井知らずに燃え上がらせる。
こちらの肌を噛むために首を曲げている陽乃さんは、俺の目の前に真っ白な首筋を晒している。陽乃さんを抱き締める腕に力を籠めると、目の前の白い肌に噛み付いた。

「あぐ……っ!?」
やり返されると思っていなかったのか、陽乃さんは口を離して呻き声を上げた。俺は気にせずに顎に力を込めていき、白く柔らかい牝の肌に歯を食い込ませていく。
「あああ……いやぁ……っ、痛い……痛い……っ!!」
足をばたつかせて悲痛な声を上げる陽乃さん。けれど、彼女の声とは裏腹に、膣肉は強烈に締め付けてきて、今にも射精しそうになる。
もっとこの人をめちゃくちゃに――!!
ぎりぎりと力を込めて、陽乃さんの首筋を齧る。吸血鬼が己の眷属を作らんとするがごとく、丁寧に、慈しむように、愛撫するように。
「いっ、ひぎぃ……いたっ、痛いのぉ……やぁぁぁ……っ」
「……っ」
――陽乃さんが子供のように泣きじゃくる声を聞いて、はっと我に返る。弾けるように口を離すと、幸い肌から血が滲んではおらず、跡も残っていなかった。
「……あ……俺……っ」
一体何をやっていたんだと恥じ入りながら、許しを乞うように陽乃さんの頬をそっと撫でると――陽乃さんが、こちらの手に自分の手をそっと重ねた。その顔は何故だか少し拗ねたようで、何がどうなればこんな顔になるのかと疑問を抱く。
「……本当にやめちゃった。もったいないなぁ……」
あざとく片頬を膨らませて、本当にもったいなさそうに眉を八の字に曲げる陽乃さん。
「……っ」
……ぷちっ、と。
身体の中のどこかで、何かが切れる音がした。
「……それなら、こういうのはどうですか」
「え……うぐっ!?」
にっこりと微笑みかけ、両手で陽乃さんの細い首を絞める。
「……っ!?　……っ!?」と陽乃さんが混乱している内に腰を引き抜くと、鐘のごとく打ち付けて一気に抽送の速度を上げた。

「んぐぅぅっ!?　あぐぅぅぅっ!?」
　呼吸が苦しくなると同時に下腹部に強烈な快感を叩き付けられ、陽乃さんは発狂したように暴れ出す。腰を打ち付ける度に豊満な肉体が跳ね、絶頂に達して痙攣しては大量の潮を噴く。置き場を失った両手はシーツを掴み、ぶるぶると震えていた。
「首絞められて締め付けが増すとか、どんだけ変態なんですか……って、聞いてる余裕も無いようですね。あー、一回出しますね」
「あがっ、うぐ……うあぁぁぁぁぁぁっ!?」
　亀頭を子宮口にこすり付けて、大量の白濁を吐き出す。陽乃さんは目を瞬かせて、壊れた人形のように痙攣した。射精しながら腰を動かして子宮口を小突くと、敏感になった竿を淫肉が容赦なく責め立てる。命が削られるような快感に、気が付けば夢中になっていた。
「ちゃんと跡は残らないようにしますからね。それとも残してほしいですか？」
「……ぁ……ぁ……っ」
「……一応、手加減しときますね。その分下はたっぷりと……っ！」
　こちらを虚ろな瞳で見つめたまま何も喋らなくなった陽乃さんを見て心配になりつつも、更に腰を打ち付け続ける。気絶しているのかとも思ったが、相変わらず媚肉はきゅむきゅむと肉槍に食いついてきて、快感は増すばかりだ。
「もう一回出しますよ……っ！」
　言っても聞こえないだろうなと思いながら抽送の速度を上げると、陽乃さんが微かに口角を吊り上げた。まるで初めて笑う事を覚えたかのような、歪でぎこちなくて、けれどどこまでも美しい笑み。
　陽乃さんの笑顔に見惚れた瞬間、身体がどくんと大きく脈打った。
　――どぶどぶどぶっ、ごびゅるっ、ぶびゅっ、ぶびゅるるっ、びゅぶるっ、ごぶりゅりゅりゅ……っ。
「……ぁ……へ……ぁ……っ」
　すれ違う人が男女問わず振り返り見惚れるような絶世の美貌を持った、雪ノ下陽乃が。
　アナルにおもちゃをねじ込まれ、首を絞められながら、好き放題詰

られて中出しされて、絶頂に達している。
いっそ夢と言われた方が信じてしまいそうな程の非現実的な光景を、俺は当事者でありながらまるでテレビの外から見ているような気になって呆然と眺めていた。固体の如き粘度を持つ精液が尿道を伝う感覚が、唯一今この瞬間が夢でないのだと知らせてくれる。
長い長い脈動を終えて肉竿を抜くと、愛液と白濁がブレンドされた液体がこぷこぷと膣口から溢れ出た。
「……」
陽乃さんの首をそっと撫でる。跡が付いていないことに安心した。陽乃さんは全身をだらりと弛緩させて、四肢を投げ打った状態で天井を呆然と眺めている。
「陽乃さん、まだ続きますよ」
俺の言葉に、脱力しきった陽乃さんの身体がぴくりと反応する。俺は陽乃さんの肩を掴み、ころんと転がしてうつ伏せにさせた。顎をくいと上げて呼吸出来る状態にすると、依然として弛緩している肢体を眺め、豊満な臀丘をそっと撫でた。アナルパールの埋まった尻穴の周りを丁寧に撫で回す。
「おねだりしてください。『お尻の穴に挿れてください』って。出来るだけいやらしく」
「……っ」
うつ伏せの身体がぶるりと震えて、微かな声で「……へんたい」と呟く声が聞こえた。
続く。

（13）

おぞましい程の絶頂を経て、身体中汗でどろどろになった陽乃さんが身体を起こす。こちらを向いて女の子座りをすると、腕をだらりと下げた。

涙の滲んだ瞳。

額に張りついた髪の毛。

焦点の定まらない瞳。

普段の彼女からは想像も付かない程乱れた状態にも関わらず、全身から醸し出される匂いはどこまでもいやらしい。陽乃さんの身体は未だに発情したままだった。

対面して胡坐をかき、ぴんと張り詰めた乳頭をにちりとつまむ。

「んぁ……っ」

消え入りそうな声で喘ぐと、そっと手を上げた。こちらの胸を両手で撫でて、爪で乳首をこすってくる。

「……お……おぉ……っ」

互いにびくびくと震えるが、異常なまでの敏感体質である陽乃さんはこの間も小さな絶頂を何度も迎えて、膣穴からむわりと愛液の匂いが立ち込めた。虚ろな表情のまま喘ぐ陽乃さんがたまらなくて、優しくしごいていた乳頭を潰さんばかりに強くつまむ。

「ひぐ……っ」

一瞬で霧散してしまう程のささやかな声で鳴いて、陽乃さんはこちらに寄りかかってきた。既に乾いた汗と新しくかいた汗が混じり合い、極上の肢体は卑猥な甘露で覆われている。

「……取り敢えず、抜かなきゃ……」

普段の凛とした喋りが鳴りを潜め、弱々しくも艶めいた声で陽乃さんが呟く。一瞬何のことか分からなかったが、アナルパールのことだとすぐに気付いた。

陽乃さんは密着させていた身体を離し、こちらに背を向けて四つん這いになると、豊満な臀丘をこちらにぐいと突き出した。目の前に晒された美味しそうな尻穴には、陽乃さんを犯し続けているアナルパー

ルの取っ手が見えた。
左手で尻肉をがっちりと掴み、右手で取っ手を掴む。
慎重に引くと、パールの大きさの分だけ尻穴がゆっくりと広がる。
「……ん……ぐ……あぁぁ……っ」
穴が最大まで広がると、陽乃さんは全身にねっとりとした汗をかいて不安げに震える。卑猥な反応をじっくりと視線で舐り、1つ目を抜く。ぐぽん、と言う感触と共に尻穴が元の大きさに戻り、陽乃さんの身体が跳ねた。
1つ抜く。
もう1つ抜く。
計3つ抜いたところで、陽乃さんが掠れた声で喘ぐのを聞きながら、3つ抜いた内の2つを再度ねじ込む。
「あ……うあぁっ!? はぐぅぅ……っ！」
陽乃さんが激しく鳴いて、遠吠えをする狼のようにおとがいを逸らして絶頂する。
同じようにして、4つ目まで抜いたら2つ分ねじ込み、5つ目まで抜いたら2つ分ねじ込む。
やがて全部で7つあるパールの最後の1つを抜きかけた所で、陽乃さんの横に座る。陽乃さんは不思議そうにこちらを見て、これから起こる「何か」に気付いてさっと顔を青ざめさせた。
陽乃さんのお腹を、左腕で横から抱えて動けないようにする。アナルパールの取っ手を逆手に握ると――全ての玉を一気にねじ込んだ。陽乃さんがひゅっと息を吸い込む音を聞きつつ、筒の中をブラシで磨くように何往復もさせる。
「あぁぁぁっ!? いっ、あがぁっ!! ひぃぃぃっ!? ひぐっ、あぁぁぁっ!!」
凄絶な絶頂の波に、陽乃さんは獣性を帯びた声を上げて泣く、鳴く、啼く。腸液が淫らに掻き出されて、膣からはあれだけ注いだ精液が全て愛液によって追い出され、透明な液体が幾度と無く噴き出す。一度全部抜いて束の間の安心を与えて、またすぐに捻じり込む。発狂しそうな横顔を淡々と眺めながら、道具を使った蹂躙を繰り返す。

時間にすれば、さして長くなかったと思う。
それでも、陽乃さんからすれば地獄のように長かったのではなかろうか。
アナルパールを抜いてようやく責めを終わらせると、7つの玉はぬらぬらといやらしい光を発していた。女神の如き肢体は夥しい快楽の波に打ちひしがれ、ぜえぜえと荒げた息は艶めかしさを帯びている。
「はい、よく頑張りましたね、陽乃さん。さあ、これからが本番ですよ」
「……き、きみって、ヤツ……は……っ」
理性が崩壊してもおかしくない蹂躙の後でも、どろどろになった顔で陽乃さんは微かに笑う。「いいよ、聞いてて……」と言われて、俺はうつ伏せになった陽乃さんのすらりと伸びた足の間に座った。
ぶるぶると震えながら足を広げ、両手で自分の尻肉を掴んで広げ、アナルの皺を目一杯伸ばした。
出来るだけいやらしくですからね……と言いかけた矢先、耳朶に染み込んできた言葉に呼吸が止まった。
「……わたしのお尻の穴に、あなたのぶっといおちんちんを突っ込んでください。お尻の中をごりごり抉って、白いのをいっぱい出してください。1回でやめないでください。わたしが気絶しようがおしっこを漏らそうが、何回でも出してください」
「……っ」
想像の遥か上を行く卑猥なおねだりに目を瞠る。分かりました、と言おうとした矢先、「お願いです……」と言葉が続き、声を出すのを押し留めた。
「わたしを……壊してください」
ぱきん、と。
心の中で、亀裂が入ってはいけないものに大きな罅が入り、粉々に砕け散った。
下を見やると、肉槍が狂ったように猛っている。
陽乃さんの手をどかして、代わりに自分の手で豊満な双丘を押し広げ、仄暗い快感の穴に肉槍を突き立てた。

×　×　×

「あぐ……っ！」

亀頭を尻穴に押し当てると、陽乃さんが苦しそうに呻いた。アナルパールよりも一回り太い肉竿の侵入を拒もうと、尻穴がぎちぎちと力を入れてくる。

力を抜いてください、何て言っても無理だろう。そう思い、慎重に腰を進めながら手を伸ばし、身体を丸めている陽乃さんの柔らかな乳房を揉みしだいた。

「あ……んふぁぁ……っ、んっく、ふぅぅぅ……っ！」

つきたての餅のような感触の柔肉に指をうずめると、陽乃さんは苦しさの中に喜悦が混じった声を漏らした。尻穴の収縮が僅かに緩んだ所を、ゆっくりと、けれど確実に侵入していく。

「あ……っ、あぁぁぁ……っ」

陽乃さんの緊張が高まれば、乳頭を摘まんで快感で苦しみを和らげる。

少しずつ、少しずつ進んで行くと、やがて変化が訪れた。入口こそ狭いものの、そこを乗り越えると中は空洞の様にぽっかりと開いていた。膣内のようにざわざわと波立つうねりは無く、今自分が犯している穴が排泄器官であると言うことを改めて実感する。

かと言って挿入が楽になったかと言えば、そうとは言えなかった。痛烈なまでの締め付けこそ無くなったものの、侵入していく肉竿の根本は常にめちめちと強烈に締め付けられて、肉竿を進めて行くとゴムの膜に圧迫されるかのような感覚で一様に締め付けられる。慣れない特殊な快感と背徳感が混ざり合って、あっと言う間に射精してしまいそうだった。

根本まで肉槍が埋まると、陽乃さんの上にどさりと倒れ込んだ。

「全部、入りましたよ、陽乃さん……っ」

耳元で囁いた俺の言葉に、陽乃さんは顔を横に向けて虚ろな瞳を向けてきた。

「……入った……の……っ？　そっか、そっか……っ」

言いながら、俺の両手をそっと握り、指を絡めてきた。

「……これで……っ、わたしの身体は、全部君のものだね……」
「……っ」
疲弊しきった中で浮かべた、あまりにも美しい笑みに身体中がざわめく。
そして、互いに全く動いていないと言うのに、不意に限界が訪れた。
射精欲求が爆ぜて、ぽっかりと開いた空洞に鉄砲水の如く白濁が注がれる。
「あふぁぁぁっ!?　熱い……っ、あっ、あんっ、んあぁぁぁぁ……っ！」
「うぐ……止まらな……い……っ」
熱い白濁の感触に陽乃さんが全身を戦慄かせ、それにより更に肉竿が搾られる。己の意思と関係無しに小便のように白濁が噴出した。膣でするセックスとはまるで異なる、命を削られるような絶頂と射精。汗ばむ身体を重ねたまま、互いに打ち震えた。
「すいません……陽乃さんの笑顔を見たら、何か急に……」
脈動を終え、脱力した声で正直に告白すると、陽乃さんがくすりと笑った。
「いいよ、大丈夫。可愛いね君は」
そう言って、陽乃さんが頬にキスをしてきた。何だか急に恥ずかしくなって、顔が仄かに熱くなる。
それに……と、瞳に獰猛な獣の色を走らせて、陽乃さんが妖艶な笑みを浮かべる。
「ちょうど良い潤滑液になったでしょ？　……良いよ、動いて。わたしもこの感覚に慣れてきたから」
「……分かりました」
腰をずらすと、確かに精液が摩擦を和らげてくれていた。
唇を重ねると、陽乃さんは人懐っこい猫の様に舌を出してきた。
「……んむ……ちゅるっ、ぴちゃっ、れる……っ」
天性の美貌に凶悪なまでの色気を孕ませて、常人よりも明らかに長い舌が口内を侵食してくる。これだけでもまたイってしまいそうだな……と思いながらキスを堪能して唇を離すと、命を削るような行為に備えて、膝立ちになって肉付きの良い尻肉を掴んだ。

続く。

（１４）

四つん這いになった陽乃さんの尻をがっしりと掴み、仄暗い尻穴に亀頭を宛がう。ひくひくと収縮する度に零れ出る白濁が、穴を囲んでいる皺を生々しく染め上げている。

ひゅっと息を吸って、尻肉を手前に引くと同時に力強く腰を打ち付けた。

「うあぁんっ⁉　いっ、ひぐぅっ!!」

白濁の生温かい感触に肉竿が包まれるのを感じながら、何度も腰を打ち付ける。膣と違って奥行きに際限が無く、ゴムのように締め付けてくる尻穴の感触は強烈で、暴力的に思える程強引に射精を促してくる。腰を打ち付ける度に結合部から白濁が零れ落ち、豊満な尻肉が淫猥に波打つ。

「あがっ……ひぁ……あぁぁぁ……っ!!」

へその辺りを中心にして陽乃さんの身体が痙攣して、何度も波打つように揺れる。立てていた肘が崩れて四つん這いが崩れ、尻を突き出したままへなへなとベッドに突っ伏してしまう。

「ほら、まだまだ続けますよ、頑張ってください」

「あぁぁ……うんん……がんばる……へぁぁ……っ」

枕に顔をうずめて、気の抜けた声が返ってくる。

「情けない声出してないで、実況でもしてみてくださいよ、ほら」

意地悪く言って、両手で力いっぱい尻肉に平手打ちをする。衝動的にやってしまったが、陽乃さんは身体を跳ねて悦びの反応を示した。

「あくぅぅっ⁉　ひっ、は、はい、言います……ひぃぃんっ⁉」

「早く喋らないとやめませんよ、ほら、ほら」

ばちん、ばちんと尻肉を叩く度に真っ白な尻が朱に染まる。興奮による紅潮とは別の色味は、見ただけで鼓動が跳ね上がる。

「ひぐっ、んぐぅぅ……っ！　い、言う、言いますからぁ……あふぁぁぁぁっ⁉」

平手打ちをする度に強くなる締め付けに思わず射精をすると、ちょうど顔を上げていた陽乃さんは甘ったるい声を上げて、まるで犬が遠

吠えをするかのようにおとがいを上げて獣性を帯びた嬌声を上げた。
「ひっ、はひっ、……お、お尻の感覚って、何か不思議で……んはぁぁっ!? ……比企谷くんの、おちん、ちんが入ってくる度に……んひぃんっ！ ……すごい異物感がするんだけど、でもそれが妙に気持ち良くて……んぐぅぅっ！ ……抜かれる時は、まるで内臓ごと持って行かれるような気がして……一回一回が怖いくらいどきどきするの……はぁぁんっ!!」
途切れ途切れの実況を終えた所で、陽乃さんが再び絶頂に達する。びっしょりと汗をかいた極上の肢体は淫魔のようにいやらしく、結合部から漂う牡と牝が混じり合った匂いは鼻腔を犯し、際限の無い勃起を促してくる。
「よく出来ましたね。ご褒美に、もっと気持ち良くしてあげます」
耳元で囁くと、陽乃さんのお腹を抱き、ゆっくりと起き上がらせる。卑猥な結合をしたまま、2人とも膝立ちになった。左手を陽乃さんの汗ばんだ乳房に、右手をぐっしょりと濡れそぼった淫裂に伸ばす。左手で2つの乳頭を同時に引っ張り、右手の中指と薬指を解れ切った膣口にねじ込んで曲げると、陽乃さんがひゅっと息を吸った。
陽乃さんが悲鳴のような嬌声を上げる直前に、腰を引いて一気に尻穴を犯す。
「あ……んあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!」
4ヶ所を同時に犯されて、陽乃さんの口から壊れたかのような大音声が溢れ、同じく壊れたように身体ががくがくと痙攣して折れ曲がる。四つん這いの時とは違う角度で肉槍に抉られた尻穴も最大級に締め付けられ、深い洞の穴に3度目の射精をする。ほとんど動きの無いまま、俺と陽乃さんは気絶寸前まで追いやられた。
「あぁぁ……あぁぁぁぁ……っ」
陽乃さんが天を仰いだかと思うと、股間に生温かい感触が広がる。視線を下ろすと、陽乃さんの股からは大量の小水が流れ出て、シーツにじんわりと染みが広がっていた。
「……尻の穴に挿れられて、失禁までしちゃいましたか。とんだ変態ですね、陽乃さんは」

「……やめ、て……今、言わないで……ひっ、うぁ……っ」
失禁が続く間も肉棒でぐりぐりと中を抉り、柔らかくなった膣肉をぐちゅぐちゅとかき混ぜる。首筋に顔を付けると、甘ったるい牝の匂いが鼻腔を浸していく。たっぷりとかいたお互いの汗が混ざり合う感覚も、今はただただ気持ちが良かった。
どさりと倒れ込んで、うつ伏せで震える陽乃さんにのしかかる。
「……もう2回くらい、出すまでやっていいですか」
「……あ……ぁ……っ」
「……返事が無いので、遠慮なく」
「あぁぁ……ぅあぁぁ……っ」
目尻に涙を浮かべた陽乃さんの歪んだ美貌を目の前で見つめながら、ゆっくりと尻穴を犯す。緩慢に腰を前後させながら、そう言えば今は何時頃なんだろうかと疑問に思う。カーテンを閉めた部屋では、まるで感覚が分からない。この家に来たのは午前中だったが、今はひょっとしたら夕方かもしれない。
「……あぐっ、ひっ、ぅあ……んあぁぁ……っ」
――やっぱり、今は何時頃なのかなんてどうでもいい。
目の前のこの人を、気の済むまで犯す。
俺が今したいのは、するべきなのは、ただそれだけだ。
そう結論付けて目の前の女性に意識を集中させると、首筋や耳に念入りに舌を這わせ始めた。

× × ×

「いやー、楽しかった楽しかった」
「これ、まだ1日目なんですよね……なんかすいません」
「そうだねー、最初はご飯を食べるのも惜しんで色々やっちゃおうと思ってたけど、比企谷くんの鬼畜っぷりが予想以上だったから……お姉さんも体力が尽きちゃった」
「すいませんねけだもので」
「ほんとほんと、全く以て喜ばしいことだよ」
「いやだからさっきから謝ってるじゃ……って、あれ？　褒められた？」

初めてアナルセックスからしばらくしてからのこと。
部屋の掃除をしてシャワーを浴びた俺たちは、ベッドの上で並んで寝そべってくつろいでいた。陽乃さんは口調こそ軽いものの本気で足腰にキているらしく、料理の腕を振るう余裕さえ無いとのことだった。そんな訳で備えていたものでさっと食事を済ませると、再びベッドに戻った。ちなみに、行為を終えてから今まで、2人とも全裸のままだった。ずっと見てれば見慣れるよーと言う陽乃さんの仮説は、俺がずっと勃ちっぱなしだったことにより見事に否定された。
「比企谷くんは年中発情期だね……」
「いや、陽乃さんが挑発するようにちょくちょく流し目とか舌なめずりとかを繰り出すからでしょ」
俺の反論に「どうだかねー」と軽く流すように答えて、陽乃さんがぴたりと寄り添ってくる。
「比企谷くん、今日はもう寝よっか」
「あれ、早いっすね。良いんですか」
「うん、その分明日は朝早くからするから」
「ストイックだ……」
こんなやりとりをしていると、陽乃さんがくるりと背を向けた。そして豊満な尻をくいくいと押し付けてくる。
「それじゃ、挿れながら寝ようね」
「え」
「だから、挿れて？　それで一晩中繋がったままにするの」
「……明日の朝早くからするのでは？」
「それはそれ、これはこれ」
「……はぁ、そうですか」
俺が辟易としているのもどこ吹く風で、陽乃さんは左足を身体の前にずらしてスペースを作る。俺は陽乃さんの伸びた右足の上に左足を乗せて、艶めかしい背中に自分の身体をぴったりと密着させた。いきなり挿れてと言われてもこの体位は分からないぞと思ったが、陽乃さんのリードが上手いのと、既に数えきれない程身体を重ねている経験から何となく上手くいった。

ずぬり、と淫猥な感触が肉竿を包み込むと、
「はぁぁぁ……っ」
まるで温泉に浸かったような声を上げて、陽乃さんが心地良さそうに震えた。
「どう、良いでしょこれ」
「……確かに、びっくりしました」
感嘆のため息と共に返事をする。激しく動くことは出来ない体位ではあるが、横向きになっていることで膣圧に体重が加わり、動いていなくとも心地良く締め付けられる。それに加えて、陽乃さんがほんの少し身じろぎするだけでもいつもとは違う締め付けに包まれるのだ。安心感と優しい快感が同居した、とても嬉しい状態と言える。
「でしょー？　やってみたかったんだー。じゃ、おやすみー」
「え……」
楽しそうに言うや否や、陽乃さんは左手を伸ばして俺の左手を掴み、俺が陽乃さんを抱き締める形に持って行った。そしてほんの数分で、本当にすぅすぅと穏やかな寝息が聞こえ始めた。
「……本当に寝た……」
超の付く敏感体質の人がこんな状態で寝るって、どんだけ安らいでるんだよ……と驚きつつも、俺も尋常じゃない肉体疲労が眠気を誘ってきた。くぁ、と小さな欠伸をして、陽乃さんの首筋に顔をうずめる。シャンプーの甘い匂いの海に浸ると、益々眠気の波が押し寄せてきた。そう言えば右腕の所在をどうしたものだろうと思って、試しに陽乃さんの右耳と枕の間に手をねじ込んでみる。すると陽乃さんが「んん……っ」と可愛らしく呻いて顔を上げた。右腕で腕枕をして、左手は陽乃さんの身体を抱いている体勢で落ち着く。密着がもたらす安心感は思いの外大きく、俺はそっと目を閉じた。
陽乃さんと過ごす濃密すぎる時間は、まだまだ終わらない。
続く。

（15）

「ん……っ」

ふと、目が覚めた。目の前に何があるかさえ分からない程暗い部屋の中で、自分は今どこで何をしていたのだろうかと考える。その疑問は、身体――特に下腹部を包む温もりに気付いた所ですぐに氷解した。

俺は今、陽乃さんと繋がっているのだ。

「……？」

しかし、一つの疑問が解けた所で、また新たな疑問が湧く。

何でまた今になって目が覚めたのだろう。眠りは思いの外深かったようで、眠りに就いてから恐らく数時間は経っている。時計を見ることは出来ないが、すっかり夜も更けている筈だ。夜中に尿意で目が覚めるなんて経験も滅多にないので、はてどうしたことかと思う。

「ん……うん……っ」

「……っ、ああ、そういうこと……っ」

――不意に目覚めた理由が、すぐに分かった。

ぴったり密着している陽乃さんが、寝相でもぞもぞと動いている。その為、挿入したままの肉竿が柔らかに締め付けられていた。何てことは無い、気持ち良さで起きたのだ。

「ふ……っ、うんん……っ」

陽乃さんは、まるで淫夢でも見ているかのように悩まし気な声を漏らして、腰をもぞもぞと動かす。その度に肉竿がきゅむきゅむと締め付けられ、声が出てしまいそうになる。甘やかな刺激により肉竿が硬度を増していき、それに反応した陽乃さんの膣が更に締め付けてくる。

「……やば……っ」

密着した状態だと、陽乃さんの身体が淫熱を帯びていく様子もはっきりと分かってしまう。徐々に夜目が利いてきて、目の前にある白いうなじが見えてくる。ふわりと香る甘い匂いが、心と体を捉えて離さない。

気を紛らわそうと、腕枕に使っている右腕の位置をずらし、陽乃さんの口に中指を滑り込ませてみる。
「ん……ふぅ……っ、ちゅぷっ、ちゅぷりゅ……ふっ、ちゅぴっ、んふぅぅ……っ」
「……悪化した……っ」
夢の世界に浸っている陽乃さんは、俺の指を何の抵抗も無く口内に受け入れたかと思うと、先端から根本まで丁寧に舌を這わせて行く。気を紛らわせる方法としては悪手にも程があった。人よりも明らかに長い舌が指を撫でていく度に、ぞわぞわとした快感が身体を包む。まるで指だけでなく、全身にあの紅い舌が艶めかしく這っているような感覚に陥った。まだ遠くにあった筈の限界が一気に近付いてしまう。下半身の決壊はすぐそこだった。
「ちゅっ、ちゅぴ……んっ、……比企谷くん……っ」
「……っ、あ、やば……っ」
指を離すと、陽乃さんが甘えるような声でぽそりと俺の名前を呼んだ。安心しているようにも、それでいて子供のように不安げにも聞こえる声音は、ぐっと俺の心を掴んだ。
――その瞬間。
「……で、出る……っ」
――ぶびゅっ、ごびゅるるるっ、びゅぶっ、ぶびゅるるるる……っ。
「……っ!? んはぁぁんっ!? やっ、ちょっと……あぁぁぁぁ……っ!」
突然の射精で、陽乃さんが驚きながら目を覚ます。ぴったりと密着したまま、熱く柔らかな膣肉を白濁で浸していく。上気した肉体がびくびくと痙攣して、肉竿から精を搾り取っていく。
ようやく脈動が収まると、陽乃さんは呆れたような声音で話しかけてきた。
「はぁぁぁ……あっ、あんっ、……もう、急にどうしたの？　発情期？」
「いや、この状況で言われましても……。陽乃さんがもぞもぞ動くから目が覚めて、無意識の責めをくらい続けてこの有様です」

「さっき、ぼんやりとだけど何かが口の中に入ってた気がするんだけど？」
「それは何て言うかごめんなさい気を紛らわそうとしたらめっちゃ気持ち良かったです」
「……君は可愛いなぁ」
　恥ずかしさでいっぱいになっていると、ずっと繋いでいる左手をぽんぽんと撫でられた。
「……ほら、寝よっか」
「一回抜かなくて良いんですか？」
「ん、比企谷くんの精子が零れないように栓をするってことで。……こら、また硬くなってるぞ」
「今のは不可抗力です……っ」
　陽乃さんの発言の破壊力に頭がくらくらしながらも。
　やはり疲れていたようで、俺も陽乃さんも、数分としない内にもう一度眠りに就いた。

×　×　×

　陽乃さんに頬をつねられて起きた。どうやら電灯を点けたようで、閉じている瞼の裏にもうっすらと光が見える。「朝だよ、起きて」と言う声に反応して気だるげに目を開けると、頬を膨らませて分かりやすく怒った顔をした美しい顔が目の前にあった。いつのまにか結合は解けて、二人で向かい合っている。
「痛いです……」
「大丈夫だよ、手加減したから。本気でやったら比企谷くん泣いて引き籠っちゃうよ」
「……ヒッキーだけに、ですか」
「今何か言った？」
「何でも無いですごめんなさい」
「ヒッキーだけに、なに？」
「え、続きを求めるの」
「よくバラエティで聞くじゃない、『かーらーのー？』ってやつ。ほら、せっかくスベったんだからもっとスベり倒してよ」

「鬼にも程がある……て言うかそもそも、何で俺は今つねられたんですか」
「3回」
「え」
「比企谷くん、寝てる間に結局3回出したでしょ」
「え、あれ？　2回目を出した記憶はありますけど……3回？」
「3回目は、君は寝たまま出しました。わたしだけ跳び起きました。寝たまま出すって何なの、おねしょの代わり？　夢精？　なんなの？」
「……陽乃さんの中が気持ち良すぎて、つい……」
「……まあ許してあげる。3回目に出した後、寝言で『陽乃さん……愛してます……』って呟くのを聞けたし」
「え、ウソ」
「え、ウソなの？」
「いや、それに対しての『え、ウソ』じゃなくて」
「比企谷くん、わたしのこと愛してないの？」
「いや、そんな、急に目を潤ませなくても……何であなたはそんなに演技が上手いの……可愛いなもう……」
「……」
「……顔、赤いですよ」
「本気でつねろうと思います」
「やめてください、泣きますよ」
「開き直った……」
「開き直ると何でも出来ますね。勢いで何でも出来そうです」
「わたしのこと、愛してる？」
「愛してます」
「……」
「……」
「……」
「……」
「……」

「……死にそう……」
「……わたしもだよ、ばか」
こんな会話を、おでこをくっつけながらしてました。本当に死にそう。
照れ隠しなのか何なのか、陽乃さんがちゅっと口付けをしてくる。差し出された紅く長い舌に応じて、互いの粘膜をねっとりと絡め合う。陽乃さんとのキスは、もう1つの性交と錯覚する程濃厚だ。今のようにゆったりと口付けするだけでも、射精してしまいそうな程の濃密な快感が得られる。まぐわいながらキスをすると、2人の身体の境界線が曖昧になる程どろどろに溶け合うことが出来る。それが、たまらなく気持ち良くて、嬉しい。
「……んっ、今日はね……」
口を離すと、陽乃さんが唾液の糸をぺろりと舐め取って、艶やかに微笑んだ。一体何を言われるのかとどきどきしていると。
「ちょっとした設定を考えて楽しんでみようと思います」
「……設定？」
陽乃さんの言葉に、片眉をぴくっと上げる。陽乃さんは俺の反応を見て嬉しそうにふふんと笑うと、ついばむようなキスをしてきた。
「そう、設定。上手く行ったらすごーく楽しめると思うよ。……お互いに、ね」
「……はぁ、そうですか」
「んっふっふ、訝しげだねぇ、少年」
「取り敢えず説明を聞かないことには何とも……」
俺の言葉に、「それはそうだね」と言ってこほんと咳払いをする。
「わたし、今から拗ねるね」
「……はい？」
陽乃さんの言葉は、若干身構えていた俺にとっては予想外に過ぎていて。我ながらずいぶんと間抜けな、甲高い声が口の端からぷしゅっと漏れ出ていた。

続く。

（１６）

「わたし、今から拗ねるね」
　陽乃さんがにこりと笑って言った言葉に、俺はかこんと首を傾げた。
「おお、比企谷くん、今の鹿威し（ししおどし）みたいで気持ち悪いよ。良いね」
「褒めてんのかけなしてんのかどっちなんですか」
「比企谷くん、話を逸らさないでくれるかな」
「理不尽だ……」
　ひどい目に遭ったところで、陽乃さんの言葉の意味を改めて考える。
　拗ねる……。
　……。
「……それ、自分から言うことじゃないですよね」
「そうだね。だからあくまで『設定』ってことで」
「……設定、とは」
「んー、イメージプレイってやつ？」
「露骨な言葉にしちゃったよこの人」
　顔が仄かに熱くなると、俺の顔を見た陽乃さんがけらけらと笑う。子供っぽい表情は普段とのギャップがあっていちいち可愛く、破壊力がとんでもない。心臓に悪いレベルだ。
　えっとね……と、陽乃さんが自身が発した言葉について説明を始める。
「とある土曜日の晩、比企谷くんは用事があると言って帰りが遅くなると告げてきます。わたしは起きて待ってると健気に言ったにも関わらず、比企谷くんはいや良いから寝てろよと無碍に断ります。ひどいです」
「本当にひどい……」
「そして比企谷くんのそわそわした気持ち悪い挙動を怪しんだわたしは、比企谷くんが夕方出かけたところで後をつけます」

「あなた何やってるんですか」
「そしてわたしは見てしまったのです。比企谷くんが、長い黒髪の女性と楽し気に買い物をしているところを……。わたしの愛しの比企谷くんは、猫好きで毒舌がしょっちゅう飛び出る美人なわたしの妹と一緒にいたのです……」
「最初ぼかした意味全く無いじゃないですか」
　よよよ……と口元を手で押さえ、わざとらしい嗚咽を漏らす陽乃さん。中途半端にリアルな演技が妙に生々しいからやめてほしい。あと俺のツッコミをさらりと流すのもやめてほしい。
「それでわたしは不貞寝して、浮気が原因で遅くに帰ってきたにも関わらず堂々と同じ布団に潜ってきた比企谷くんのお尻を、寝ているフリをしながら15回ほどつねります」
「多い多い、俺かわいそう」
「そして翌日、拗ねます」
「ああ……そういう流れですか。俺は何故雪ノ下と買い物に行ってたんでしょう」
「後で知ることですが、わたしへのプレゼント選びだったようです」
「ああ、誕生日がもうすぐでしたね。そう考えると結構自然な設定かも」
「……」
「？　どうしました」
「いや、ちゃんと覚えてるんだなーって……」
「そんくらい覚えてますって」
「……そ。で、比企谷くんはわたしが誤解していることにも気付かず、『いつもならこの時間帯からエッチなことするよなー、そろそろ押し倒すかー』とか思ってます」
「俺すげえクズっぽいですね……。あと、どうしたんですか、すごい上機嫌ですけど」
「……」
「あっぶね！　なんで首にチョップしようとしたんすか。……普通こういう時ってつねったりするんじゃあ……」

「……まあいいや。それでね、比企谷くんがわたしに手を伸ばすと、わたしはその手をぺちっと可愛くはたくの。可愛く」
「ああはいはい、可愛くてしょうがない仕草が目に浮かびますよ。片頬を膨らませたりするんでしょ」
「そういうのを先に言わないで。やりづらくなるんだから」
「ご、ごめんなさい……」
「そんなわたしに対して、比企谷くんは急に嗜虐心が芽生える訳。得意でしょ？　女の子をいじめるの」
「語弊しか無いんだよなぁ……」
　で、まあ、要約すると……と言って、陽乃さんが至極楽しそうに笑う。
「エッチに大して全く乗り気じゃないわたしを、比企谷くんが無理やりどうにかしちゃうって設定」
　……。
　……うわぁ……。
　……ん、待てよ。
　いやがる陽乃さんを無理やり……。
　……。
「……」
「今ちょっと、『あ、それ良いかも』って思ったでしょ」
「……べ、べべ、べつに、そんな、ことは」
「良かったー、乗り気で」
「俺の意見が一向に反映されない陽乃政権に異議を唱えます」
「え？　却下します」
「当然の如く……」
　比企谷くんはつべこべ言うなあ、そこが可愛いんだけど……とひどいことと小っ恥ずかしいことを言った後、陽乃さんはいそいそと服を着始めた。上下とも下着を着けず、胸元がたっぷり開いたU字のカットソーと部屋着用のキュロットスカートという凶悪な組み合わせだ。
「襲われる気満々じゃないですか……」
「女の子はいつだって矛盾してるものなの」

「ここでそんな格言っぽいことを言われても……」
「いいからいいから。はい、スタート」
色々と納得がいっていないまま。
謎のゲームがスタートした。
×　×　×
ソファに並んで座り、陽乃さんは女性誌を読んでいる。ただ雑誌を読んでいるだけでも絵になるなと感嘆の息が漏れるが、陽乃さんの顔は不機嫌そのもの。控えめに言ってめっちゃ恐い。
「……」
「……」
「……」
「……」
……。
いつもなら心地良い沈黙も、今は針のムシロにしか思えない。
陽乃さんはつい数分前までからからと笑っていたのに、一瞬でスイッチを切り替えていた。２人の間の空気も綺麗に塗り替わっていて、居心地が悪いことこの上無い。まさかここまで綺麗に切り替わるとは思わず、ただ戸惑うばかりだ。
けれど、陽乃さんはただ拗ねているだけではない。
時折俺に見えるように艶やかな黒髪を耳にかけたり、足を悩ましく流したり、「……ん……っ」と色っぽい吐息を漏らして、カットソーの胸元を暑そうにぱたぱたと扇いだり。扇情的な仕草を絶妙なタイミングで、着実にこちらの理性を削り取るように仕掛けてくる。おかげで俺は陽乃さんの拗ね具合にびびりつつも、本当に手を出したくなってきた。
陽乃さんが雑誌をテーブルに置いて、ソファにもたれかかる。どこか少女のように拗ねた顔を見せて、俺とぱちりと目が合うとぷいっと逸らしてしまう。何だこの可愛い生き物は……。
たまらず、そっと右手を伸ばす。
「……なに」
「……っ」

ぺちっと手を叩かれて、軽くショックを受ける。本当に乗り気じゃないのか……。
身体を寄せて、陽乃さんの右肩を抱く。陽乃さんはぴくりと反応したが、顔には依然として不機嫌さを滲ませている。
「……なんでそんなに怒ってるのか分かんないですけど、機嫌直してくださいよ」
俺の言葉に、陽乃さんは僅かに目を見開く。俺がこの設定に乗った事にだいぶ驚いているようだ。
「……もう、知らないから」
すぐに演技モードに戻った陽乃さんが、再び顔を逸らしてしまう。お構いなしに豊満な肢体を抱き寄せて、左手を陽乃さんの頬に添えてこちらを向かせた。
「んん……っ」
無理やり唇を重ねると、いつもなら濃厚な歓迎を受ける所なのに冷たく拒絶されてしまう。目は固く閉じていて、唇も一切の侵入を許さないかのようにかちりと合わさっている。
けれど、陽乃さんが例え拒絶していても、高まりに高まった感度までは抑えることは出来ない。現に、唇を重ねているだけの今この瞬間も、陽乃さんの身体は小刻みに震えている。
艶やかな唇の合わせ目を、舌先で丁寧になぞる。いつもはすぐに侵入出来る分、こういった時間は新鮮だ。その感覚が行為に対する情熱を却って燃やしてくれる。
「ん……んん……っ」
陽乃さんは切なげな声を漏らしながらも、両手をこちらの胸板に当ててぐいぐいと押し返し、必死で抵抗してくる。思っていたよりも力が強かったけれど、それでも徐々に快感で力が抜けていき、唇の合わせ目も解けてきた。陽乃さんの両肩を掴み、身体ごとこちらを向かせる。両手に力を込めると、陽乃さんの抵抗は更に弱まっていく。
「んむぅ……んんん……っ」
瞳にはまだ僅かに抵抗の光を宿しているが、胸板に当てられた手にもはや力は入っておらず、頼りなげに胸をさすってくるだけだ。これ

ならもうじき舌を口内に入れられるだろう。陽乃さんの感度を考えればそこから陥落させるのは容易いな……などと思っていると。
「ん……っ」
「んむ……っ？」
陽乃さんが突然俺の首の後ろに両腕を回し、きゅっと抱きしめてきた。素直になるのが早いなと驚いたが、冷静になって考えてみると陽乃さんの唇は閉じられたままだ。
違和感に気付き、まさか――と思ったのも束の間、陽乃さんは油断して力を抜いていた俺の胸に手を当てると、とんと突き放してしまった。腕の中の柔らかくて甘い感触が消えてしまい、何とも寂しい気持ちでいると、陽乃さんはほんのりと頬を赤らめながら、眉をひそめて不機嫌そうな表情を浮かべた。
「……変態」
「……っ」
俺の反応も待たぬまま身体の向きを変え、また女性誌を読み始める。
……つ、つれない……。
あと、一筋縄ではいかないにも程がある……。
「……」
でも、何だろう。
この感じ、結構ぞくぞくする。
冷たくされるのがツボだったのか、ここからどうしてやろうかと燃える思いが強いのか、或いはその両方か、自分の気持ちが分からない。
SとM同時に目覚めたような奇妙な感覚は、今の陽乃さんを見れば見る程強まっていく。
この気持ちは何だろう……と、悶々としながら陽乃さんを観察していると。
「……さっきからじろじろ見てるけど、何なの？　気持ち悪いんだけど」
「……っ」
猛毒を吐きながらも、ちょっと恥ずかしがっている……。

どこまでが演技でどこからが本気なのか分からないけれど、その割合がどうでもよくなるくらいには可愛い。

「……」

何だこのゲーム。

結構、というかかなり、楽しいぞ。

続く。

（17）

依然として拗ねている――という設定の――陽乃さんを引き続き陥落しにかかる。今度はもう少し慎重に攻めていくことにした。

陽乃さんは女性誌を読むのに飽きたのか、すらりと伸びた足を組み、腕を組んだ状態で毛先をくりくりと弄っている。うちのクラスの女王様のような態度だ。ただし目の前にいる女王様は名演技も相俟って、どこぞの本物の女王様のように思える。

今の俺が下手に声を掛けても逆効果だと判断して、そっと距離を詰める。陽乃さんはぴくりと反応して横目でこちらを睨んだが、特に避けたりすることはしない。不機嫌な背中に右手を伸ばし、そっと右肩を抱き寄せる。

「ん……っ」

微かに甘い吐息が漏れたのも束の間、抱き寄せられてもなお、不機嫌な女王様は態度を崩さない。しかし横目で睨みつけてはきても、それ以上の抵抗はしてこない。どうやら徐々に距離を詰めていけば拒絶はされないらしい。

腰を上げて、陽乃さんとソファの背もたれの間にすっぽりと収まる。陽乃さんは目をきょとんとさせていたが、抵抗や拒絶をする暇も無かったようで、この場の雰囲気に合わせて神妙な顔をしている俺に何も言ってこない。けれど、俺が陽乃さんの両肩に手を置いた瞬間、振り向いた顔が仄かに赤らんだのを見逃さなかった。

陽乃さんの様子を窺いながら、そっと肩を揉み始める。

「ん……そんな、こと、んぅ……っ、したって、許さないんだから……っ」

「それでもやりますよ。少しでもご機嫌をとっとかないと」

「ん……うんんっ、君ってそういうのはっきり言っちゃうよね……んっ、んっく……っ」

「そういう男は嫌いですか？」

「……んっ、んん……っ」

顔を覗き込んで尋ねると、陽乃さんは俯いて黙りこくってしまっ

た。言葉の代わりに返ってくるのは、徐々に糖度を増してきた吐息。少し凝り気味の肩を入念に揉み解す度に、陽乃さんの言葉から棘が抜けていく。これだけのものを抱えていたら、それは凝るようなぁ……と、カットソーからくっきりと見える悩ましい谷間を覗きながら思う。わざわざゆるめのものを着ているのか、陽乃さんがぴくりと反応する度にカットソーから覗く柔肌の面積が広がってきていた。もう少しで薄桃色の先端が見えてしまいそうで、さっきから気が気でない。

「……さっきからちょっと見すぎだと思うんだけど」

「すいません、あまりに魅力的なもんで」

「……ふーん。それはご機嫌とりのためのお世辞？」

「俺がお世辞を言わないのは知ってるでしょう。ご機嫌とりが目的ではありますが、言ってることはただの本音ですよ」

「……ふーん」

声音に少しばかりの喜色を滲ませて、陽乃さんが俺の腿をそっと撫でてくる。態度がゆっくりと、けれど着実に軟化していた。

「陽乃さん……」

左側から顔を覗き込み、そっと唇を近付ける。陽乃さんは乗り気でない表情を装いながらも、ついさっきと比べると随分と穏やかに目を閉じて、唇を委ねた。

「ん……っ」

柔らかな唇に己の唇を沈み込ませる。肩に置いておいた手を陽乃さんの細指に絡ませると、渋々と応えてくれた。いつもよりも受け入れてくれるまでの過程が随分と長くて苦労するが、それ故に僅かにでも好意的な反応が返ってくるのは本当に嬉しい。

「ん……うんん……っ」

唇の合わせ目に舌を這わせると、綺麗に整った眉が悩ましく歪む。依然として舌の侵入を拒んでいるが、それでもそこまで強く拒絶はしていない。唇の端から端まで丁寧に何往復もすると、拒絶に綻びが見えた。ぬるりと舌を侵入させると、陽乃さんの身体がびくりと震えた。

「んふぅぅ……っ！」
身体の内側に粘膜を侵入させると、陽乃さんは劇的な反応を見せた。受け入れてしまいたい欲求と、やっぱり受け入れたくないという欲求がぐちゃぐちゃに混ざり合っている。人よりも長い舌に己の舌を絡ませると喜んで応えてくるが、繋いでいた手は解かれて必死で俺の身体を押しのけようとする。本能と理性が混線を起こしたような反応は、理性を保ちながらも本能に忠実な、いつもの陽乃さんのものとは明らかに違う。身体中の産毛がちりつくような、静かな興奮が心をざわつかせた。俺は陽乃さんのお腹に両腕を回すと、ぎゅっと抱きしめて身体を密着させた。
「ん……ふぅんっ、ちゅぴっ、ちゅむ……んふぅ……んぁっ、こ、こら……んむっ!?　ふぅぅ……んふぅぅ……ぷはっ、ちょ、ちょうしに、んっ、のるなぁ……っ」
目に力のない抵抗の色を浮かべて、可愛らしく眉をひそませてくる陽乃さんに嗜虐心が際限なく溢れ出てくる。舌ったらずで子どもっぽい口調になっているのが可愛くてしょうがない。長い舌をぱくりと咥え込んで、強烈に吸い立てた。
「んふぅぅ……っ!?　へぁ……ひっ、んひぅぅ……ひゃめへったらぁ……っ」
やめてったら、と言おうとしたのだろうか。そんな微かな抵抗の声も、湿度を増した空気中に投げ出された瞬間に溶けて消えてしまう。美しい双眸は絶えず明滅を繰り返して、唇を離す頃には女神のような顔立ちが淫猥に崩れていた。
「……ば、かぁ……機嫌とる気ないでしょ……っ」
「すいません、あまりにも可愛いもんで、つい」
「……こ、のぉ……っ」
力の抜けきった陽乃さんが、お腹に回してある俺の腕を何とか振りほどこうとする。まるで握力を感じない手に微笑ましささえ感じて、余計にイジメたくなる。
『得意でしょ？　女の子をいじめるの』
ほんのつい先程の陽乃さんの言葉を思い出す。

……うん、たしかに好きだわ。
心の内ではっきりと結論を下すと――お腹に回していた腕を解き、右腕をカットソーの谷間に突っ込んで、左の乳房の乳頭を人差し指でみちりと押し込んだ。
「う……んあぁぁっ!?」
敏感な身体の中でも殊更感じやすい部位を刺激されて、陽乃さんの身体は感電したかのように飛び跳ねる。暴れる身体を押さえ込もうと、今度は左手を谷間に突っ込み、右腕と交差させる形で右の乳房をぐにりと揉みしだいた。
「あぁぁぁっ!? んぃぃぃ……ひっ、うぐっ、ひぎっ!? んくぅぅぅ……っ！」
人差し指と親指で乳頭を丹念にこねると、交差した腕の中で豊満な肉体が跳ね回った。おとがいを上げて硬直したかと思えば、背中を丸めて恐いくらいに震える。身体の寄る辺を求めて、けれどどこにも安らげる場所が見付からないような、そんな不安定な動き。
「い……んはぁぁぁっ!!」
大きな絶頂の波を迎えて、すらりと伸びた足がV字にびんと伸びて硬直する。足がへなりと投げ出された後も、上半身は壊れたように痙攣を繰り返していた。快感の波がまるで落ち着いていないことを如実に物語っている。
「やめ……やめてったらぁ……んっ、い、いいかげんにしないとぉ……うあぁぁぁっ!?」
可愛らしい抵抗の言葉を、鉄砲水のような快感の波で押しつぶす。俺はよっぽど嗜虐心に塗れた顔をしていたのか、陽乃さんが振り返って俺の顔を見ると、更に感度が良くなった。全身性感帯と化した陽乃さんのうなじに口付けをして、ぴんと張り詰めた乳頭を指でごしごしとしごきたてる。
「機嫌、直りませんか？　まだだめですか？」
「だ、だれが、気持ち良くなったら機嫌が直るなんていって……んはぁぁっ!?　やめっ、いっ、んぐぅっ、だめ、だめ、だめ、い……ぅあぁぁぁあぁぁぁぁぁっ!!」

獣のような声を上げて、内股を擦り合わせて絶頂に達する。可愛らしい色をしたキュロットスカートが内側からじわりと染みが広がり、潮を噴いたか、或いは失禁したのだと気付く。ようやく手を離すと、陽乃さんは力なく後ろに寄りかかってきた。お腹に両腕を回して、今度は優しく抱きしめる。

「……この、へんたい……っ」

荒く息を弾ませながら、陽乃さんが俺の手の甲をつねってくる。ほとんど力の入っていないつねりは、まるでペットに甘噛みされているような気分だった。

よろよろと立ち上がった陽乃さんが、目の前でキュロットスカートを脱ぐ。水に浸したかのように重みを帯びたスカートを洗濯機に入れると、こちらをちらりと一瞥した後にタオルを持って浴室に行ってしまった。どうやら軽く身体を洗うようだ。

程なくして戻ってきた陽乃さんは、再び不機嫌そのものの顔になっていた。今度はTシャツとミニスカートという格好だが、Tシャツの盛り上がりの先端にはうっすらと2つの点が見えていて、ミニスカートの裾をしきりに気にしている。またしても上下の下着を着けていないらしい。俺の隣に座ると、再び髪の毛を弄り始めた。どうやらこの仕草がお気に召したようだ。

……ええっと……。

……まだ続くんだ、このゲーム……。

続く。

（１８）

陽乃さんが不機嫌な顔で戻ってきて、俺の隣に座る。ラフなＴシャツとミニスカートという格好だが、どうやら上下共に下着を着けていないらしく、胸から腰にかけてのラインが恐ろしい程に艶めかしい。

「……陽乃さん、まだ機嫌は直らないんですか」

「君は、機嫌を直してと言われて直す人間がこの世にいると思う？」

「……思いませんね。宿題をやれと言われてやる人間と同じくらいいないと思います」

「不機嫌な人に冗談を言うなんて、比企谷くんってば可愛いなー」

「いたいれふ（痛いです）……」

人差し指で頬をぐりぐりとされる。結構本気で痛い。あと陽乃さんが器用に声音でだけ笑っているのがやたらと怖い。陽乃さんはしばらく俺の頬を弄ぶと、やがて飽きたのか指を離し、またぶすっとした顔に戻った。ちなみにどついている間はずっと無表情だった。この人表情豊かすぎないでしょうか。

「……マッサージでもしましょうか」

「この体質を分かっていてそんな提案をする君の獣っぷりに、お姉さんはドン引きです」

「そこはほら、敏感かどうかとは関係なく、身体に疲れは溜まるでしょうから」

俺の言葉に陽乃さんは顔を背け、指で毛先を弄りながらこちらを試すような流し目を送ってくる。

「……変態。本心を言ってみなよ」

「陽乃さんのことが好きなので、身体を労わりつついやらしいことが出来るマッサージがしたいです。さっきは上半身を責めたので今度は下半身を重点的に責めたいです」

「……っ」

食い気味で本音攻撃に打って出てみたところ、陽乃さんがものすごい速度で顔を逸らした。一瞬だけ見えた顔は、まるで焼き石を入れた水のように茹だっていた。陽乃さんのツボを考えるに、多分、卑猥な

本音よりもどあたまの「好き」という言葉に反応したんだと思う。なんだこの可愛い生き物は……と、手で口を覆いながら悶える。今の俺は多分、口元が気持ち悪いくらいににやけてしまっている。
「……陽乃さんは本当に可愛いですね」
更に煽るように――けれど本音で――言ってみると、陽乃さんが手で口を覆いながら振り向いた。同じ仕草をしていることにくすりと笑うと、陽乃さんはジト目で俺の顔を指差した。
「……比企谷くん、顔真っ赤だけど」
「……っ」
陽乃さんの言葉に、今度は俺が高速で顔を逸らした。
食い気味で、勢いで言えば何とかなるんじゃないか……と思ったのだけど。
「好き」なんていう言葉を堂々と言う行為は、俺にとって捨て身にも程があった。陽乃さんの指摘で羞恥心に火が点いてしまい、表情が福笑いのようにちぐはぐになってしまう。両手で顔を覆ってパーツの位置を整えている間、陽乃さんはずっと俺の脇腹をつんつんとつつきながら「……ばか、……ばか」とぽそぽそ呟いていた。おかげで顔のパーツが戻るまでだいぶ時間がかかった。
ようやく元の顔を取り戻したところで、ソファから立ち上がる。陽乃さんの前にひざまずくと同時に、陽乃さんは足を組んだ。ミニスカートの中をあっさりと見せてはくれないらしい。
「足、マッサージしますね」
「なんでわたしが了承してないのに話が進んでるのかな？」
一度茹だったせいもあってか、陽乃さんは不機嫌という設定を忘れているのかというくらい穏やかな表情になっている。今の言葉だって、俺をからかうのを楽しんでいるいつもの声音だった。
そっと、陽乃さんの両足の裏に手を滑り込ませて、がしりと掴む。陽乃さんの身体がびくりと震えた。大きな震えはすぐになくなったが、陽乃さんを見つめている間、すらりと伸びた足はずっと微かに震えている。
「じゃあ、一気に一番奥を責めますか？」

この場合、俺がやることは簡単だ。このまま真っ白な美しい足を開いて、露わになった大事な部分に口付けをするだけで良い。それだけで、この人の理性はとろりと溶け落ちて、あっと言う間に快感に溺れる牝に成り果てる。この人を前にこんなことを考えること自体傲慢に思えるが、陽乃さんが乱れ、壊れ、狂う様は何度も何度も見てきた。何度も魅入られてきた。

俺の言葉に、陽乃さんは歪に唇を震わせた。瞳が妖しく揺れて、二人の間の空気が歪む。

「君は……わたしに、ゆっくり堕とされるか、一瞬で堕とされるかを選べって言ってるわけ？」

「……んー、まあ、そうなりますね」

「……変態」

「褒め言葉ですか」

「……鬼畜」

「陽乃さんをいじめるのは楽しいですからね。鬼畜にもなりますよ」

「……ばか」

「……陽乃さんは可愛いですね」

言いながら、人差し指で足の裏を軽くくすぐる。ほんの数センチの動作で、陽乃さんの全身が電流を通されたかのように跳ねた。陽乃さんが身体をこちらに屈めて、滑らかな手が頬を撫でてくる。愛おしそうに撫でてくる手は、小さく震えていた。

「……どうします？　ゆっくり行きますか？　それとも一気に行きますか？」

「……っ、これ……もう、主旨がわかんなくなってるよ……っ」

「ん……えーっと、陽乃さんが不機嫌になって、女王様の機嫌をとるために俺が一生懸命気持ち良くするって設定……ってことで良いんじゃないですかね」

「……もういいや、それで……。いいよ、ゆっくりやって。その方が比企谷くんとしても楽しいんでしょ、どうせ？」

「流石、よく分かっていらっしゃる」

道化じみた返答に、陽乃さんはふっと笑う。そして諦めたように背

もたれに寄りかかって、俺に身体を預けた。
不機嫌なフリをする時間が短すぎるだろ、とか。
この遊びのゴールは一体何なのか全く分からないだろう、とか。
色々思うことはあるけれど。
取り敢えず楽しいから、まあ良いとしよう。
「じゃあ、まずは足の裏から入念に揉み解しますね」
「よろしくお願いね、変態さん」
「はい」
「鮮やかに開き直ったね……」
美人なお姉さんの呆れ笑いって、どうしてこうも魅力的なのか……
と真剣に考えながら、俺も釣られて笑った。

続く。

（19）

目の前にすらりと伸びた、2本の脚。

タイツで覆うこともせず、生身のまま眼前に晒された双脚は、女神と見紛うほどに美しい。

テレビや雑誌で見る脚だって、こんな風に美しい脚はきっとあるだろう。

けれど、今俺が見ているのは、何の加工もされていない、生々しさを纏った脚だ。手を伸ばせば触れられるし、生きた反応が返ってくる。現実離れした美しさと生々しさが同居していて、心が混線を起こしそうになる。

ずっと苦手だった食べ物も、とても美味しいものを食べた瞬間に好きになるという現象に少し似ているかもしれない。

今目にしている足を見つめて、見つめて、見惚れてしまうことで、今まで自分に無かった好みが、性癖が開発されていくような、そんな気持ちになる。

そう、今俺は、陽乃さんの美しい脚によって、脚フェチに目覚めつつ――

「比企谷くん、何考えてるのかわかんないけど……多分、気持ち悪いよ」

「あ、はい、すみません」

漠然と罵られた。

多分と言っている割にはドン引きしている。

陽乃さんの左足のかかとを持ってじっと見惚れていた俺に、陽乃さんはふっとため息を吐いた。

「ほら、早く早くー」

「……はいはい」

――この人は、今から自分がゆっくりとめちゃくちゃにされるということを分かっていながらも、可愛らしく急かしてきているのだ。平然と沼に足を踏み入れて溺れるような行為に、ごくりと喉を鳴らした。

陽乃さんの左足のかかとを、まずは左手で支える。そして足の裏を右手親指でぎゅっと押し込むと、陽乃さんの表情が一変した。
「んん……っ」
陽乃さんの顔が、美しく歪む。心の内側を決して見せず、けれどこちらの心はどこまでも見透かすような瞳は、今は焼けつくような熱量を持ってこちらをじっと見つめている。口の端を微かに吊り上げながら、さあ、ここからどうするの？　と問うてくる。けれど俺はどうもしない、正確に言えば、大してひねったことはしない。
ゆっくり、陽乃さんを癒して、壊すだけだ。
足裏に沈めていた親指をぱっと離し、僅かに場所をずらしてもう一度親指をめり込ませる。
「うぁ……っ」
くすぐったさと、少しばかりの痛みを堪えた表情を浮かべる。こちらを見つめてくる陽乃さんを、俺はじっと見つめ返す。心を読むのならどうぞお好きに。けれど、俺の心を見透かせば見透かすほど、俺の中にくすぶっている嗜虐の欲に気付いてしまうと思いますけれど。それでもいいのなら、お好きなように。
ぐっ、ぐっ、と。少しずつ押す場所を変えて、押し込む強さを変えて、陽乃さんの足をマッサージしていく。気持ち良さそうにする場所があればそこを浅めに何度も押し込み、くすぐったそうにしているところがあれば数本の指先でくすぐり悶える様を楽しむ。
そして、
「いっ、いたた……っ」
――痛がる場所があれば、静かに、けれどしっかりと力を込めて押し込む。
「いっ、いたたっ、痛い、痛いって、比企谷くん……っ」
陽乃さんが笑いながら足をよじるが、俺は決して足を離さない。陽乃さんの澄んだ瞳を見つめながら、ぐりぐりと親指を押し込む。急激に痛みを与えるようなことはせず、一定の痛みを保つように調整しながら、ぐりぐりと押し込む。ぐりぐりと。ぐりぐりと。
「いた、いた……い……よぉ……っ」

陽乃さんは、怪我で弱った動物のように声が小さくなり、じわりと目に涙を浮かべた。唇を震わせながら不安げにこちらを見つめ、ほろりと涙を流すさまは時を忘れるほどにきれいで……指に込めていた力がふわりと抜け落ちた。痛みは叫びとなって現れるものと思っていたから、こんなに美しくて、可愛らしく、魅力的で、妖艶な痛がりかたがあるのかと目を瞠った。

「……やめちゃうの？」

耳朶に妖しく染み渡るような声音にびくりとする。いつの間にか自分の両手は、陽乃さんの左足を支えるだけになっていた。陽乃さんは目尻に涙を溜めたまま、残念そうに眉をひそませている。

「……続けますよ。きっと健康にも良いですから」

「……そんな建前いらないよ？　いいんだよ？『陽乃さんの痛がる姿に見惚れちゃいました』って言っても」

今すぐ足を押し開いて、ぐっしょりと濡れそぼっているであろう蜜壺に肉槍を突き立てたくなった。この人は俺の劣情を掻き立てるのが上手すぎる。心と身体の奥底の、絶妙に手が届かない場所を掻きむしりたい衝動に駆られる。

「……陽乃さんがその気なら、俺も遠慮なくいきますよ」

声が少し低くなっていたのか、俺がぽそりと呟くと陽乃さんの身体が戦慄いた。右足を持ち上げて、今度は右手でかかとを支え、左親指で足裏を揉んでいく。気持ち良さそうにする場所、くすぐったそうな場所を通り過ぎて……再び、陽乃さんの顔が苦悶に歪んだ。

「あ……あぁぁ……いっ、んくっ、うぅぅ……っ」

ぐりぐりと足裏を押し込むと、陽乃さんが息を止めて呻く。苦悶と喜悦に歪んだ表情は、瞬間ごとに色合いを変えていく。痛いけど気持ち良い、という感情自体は分かるが、この人の反応は明らかに性的に偏っている。艶っぽい反応を見るだけで肉竿が更に勃起して、この人を際限なくいじめてみたいと思ってしまう。

おとがいを上げて、白い喉を晒して全身を波打たせる極上の美女の痴態にしばし見惚れると、俺はようやく手を離した。

「……あれ……？　……もう、やめちゃうの……？」

「……これ以上やると、なんかハマっちゃいけない深みにハマりそうなんで」
俺の言葉に、陽乃さんは目をぱちくりとさせて、やがてふっと笑った。身体をこちらに屈めてこちらの両頬に手を添えると、ゆるいTシャツの胸元からはしっとりと湿った胸の谷間が見えた。
「……そんなの今更でしょ？　道具でわたしのことめちゃくちゃにして、お尻の穴まで自分のものにしちゃったくせに」
「……それ、は……っ」
反論することが出来ずに視線を彷徨わせていると、不意に唇を奪われた。人よりも長い舌が口内ににゅるりと入り込み、思考を根こそぎ奪い取り、空っぽになった頭に劣情を流し込んでいく。
「んちゅるっ、ちゅっ、ちゅぷっ、んふぅっ、ちゅっ、れろっ、んふぅぅ……っ」
「……ん……ぐ……うぅ……っ」
陽乃さんは俺の頬に手を添えているだけなのに、身体が勝手に動いてキスをしたまま魅入られるようにソファに上がってしまう。陽乃さんの耳をさわさわと撫でると、嬉しそうに目を細めた。熱くぬめった口内に唾液を流し込むと、精液を飲み込むときと同じように熱心に喉奥へと収めていく。ごくっ、ごくっと嚥下の音がする度に、薄布1枚に包まれただけの身体が艶めかしく揺れる。双丘の頂にうっすらと見えていた突起が、今は汗に濡れた布からはっきりと浮き出ていた。
陽乃さんの手がするりとこちらに伸びる。ジーンズのチャックを開け、パンツの上からいきり立った肉竿をやわやわと撫で、流れるようにパンツの中に手を入れて竿を握る。手をねじって撫で回す動きは甘美そのもので、キスをしながら快感に呻く俺を陽乃さんは楽しそうに見つめた。
「……どうする？」
「……どうするって、何がですか」
「まだ、ゆっくり責める余裕はある？」
くすりと笑って、陽乃さんが自ら足を広げる。スカートが辛うじて

足の根本を隠しているが、それでも僅かに漏れ出る濃厚な牝の匂いはひどく興奮した。
「このまま挿れても、もちろん気持ち良いと思うよ。わたしは何回もイっちゃう。ぜーったい声なんか抑えらんない。比企谷くんって何度も呼んで、泣きながらキスするの。きっとおしっこだって漏れちゃうし、気絶もするだろうね」
「ちょ……ちょっと……待って……っ」
陽乃さんが発する一言一言が、肉竿を撫でさする指の一本一本が、気を狂わせる程の興奮を誘う。
でも、それでも……と陽乃さんが呟き、唇を重ねてくる。少しだけ舌を絡めてすぐに離すと、仄かに頬を赤らめて、悪戯っぽく舌をちろりと出した。
「わたしは、比企谷くんがゆーっくりとわたしを壊してくれるのを楽しみにしてるんだけどな。さっき言った言葉よりもずーっとエッチな言葉を言わされて、泣きわめきながらおねだりさせられて、比企谷くんの熱くて太いのを中に挿れられて……きっと、すごく気持ち良いと思う」
恥ずかし気に話し、照れたように小首を傾げる陽乃さんの表情はどこまでも可愛らしくて、どこまでもいやらしい。ひねくれた言葉も、不意打ちの直球も口から出てくることはなく、被虐欲に満ちた目の前の女性の言葉にただただ身体が打ち震える。
「……ねえ、比企谷くん。どうしたい？」
陽乃さんが肉竿から手を離し、するりと抱きしめてきた。そして耳元で、悪魔のように甘く囁いてくる。
「今ここで、わたしを力任せに壊すのと」
ふぅっ、と息を吹きかけられる。
「もっとじっくり嬲って、わたしがどろどろに蕩けるまで壊すのと」
はぁっ、と熱い息を吹きかけられる。
「どっちが良い？」
長い舌が耳に入り込み、思考を、理性を犯してくる。
陽乃さんはそれ以上は何も囁かず、ゆっくり、ちろちろと耳の中に

舌を這わせ続ける。急かしこそしないが、答えを出すまで逃さないつもりでいることは明らかだった。
２つの欲望に頭の中をかき回されながら、やがて結論にたどりつく。陽乃さんの頭をぽんぽんと撫でると、耳に挿し込まれていた舌がするりと離れて、少しだけひんやりとした。
「……引き続き、ゆっくりやります。陽乃さんがどろどろになるのを見てみたいので」
俺の言葉に、陽乃さんは笑う。この状況にひどく不釣り合いな、向日葵が咲いたような笑みだった。
「ん、わかった。がんばれ少年」
「なんで急にお姉さんぶったんですか……」
「んふふー」
陽乃さんはやけに機嫌よく笑い、俺に抱きついて頬ずりをしてきた。おおう、なんだかすごく利口なペットを飼った気分……。しばらくされるがままになっていると、豊満な温もりがするりと離れた。柔らかな笑みは、いつの間にか妖艶な笑みに取り換えられていた。
「じゃあ……再開しますね」
「……ん」
ソファから降りて陽乃さんの足元に腰を下ろすと、陽乃さんは少しだけ不安を滲ませながらも、とても楽しそうに笑った。

続く。

（２０）

陽乃さんへのマッサージを再開する。こちらにすらりと差し出された両足を、踵を持って揃える。両手でそれぞれの足裏に親指を当てて、丁寧に揉みこんでいく。

「あ……はぁぁ……っ」

親指の腹で丁寧に足裏をなぞると、陽乃さんは甘美なため息を漏らす。期待を滲ませた瞳は子どもっぽくもあり、妖艶な大人の女性のようでもあった。足裏をひとしきり揉むと、腰を前に進めて陽乃さんの足をこちらの胸板に押しつけた。自分の胸を支えにして陽乃さんの足を支えると、両手をふくらはぎに伸ばす。きちんと手入れされているであろう脚はすべすべとしていて、陶然とした心地で撫でていく。

「あっ、あん……あふぁぁ……んむ……っ」

陽乃さんが甘ったるい嬌声を漏らして、人差し指をぱくりと咥える。声を我慢する理由がないのにそんなことをするのは、きっと俺が陽乃さんの仕草を見て興奮するだろうという計算と、声を我慢することで己の中の快楽の種火を育てたいという意思からだろう。羞恥による行動でないのは、指を咥えて顔を逸らしながらも、流し目でこちらを見る瞳がぎらついていることから判断出来た。

ふくらはぎをひとしきり撫でさすると、白くすらりと伸びた脚を開き、腰を更に前に進めた。身体の柔らかい陽乃さんの脚をぱっくりと広げると、ミニスカートがめくれていやらしい女陰が顔を覗かせた。

「……あ……っ」

陽乃さんが小さく声を上げる。俺はただひたすら見惚れていた。

信じられないくらいいやらしい性器だった。何度も見ているのに、決して見飽きることがない。それどころかもっと見ていたくなる。薄桃色の小陰唇は物欲しそうに疼き、膣口は陽乃さんの呼吸に合わせて静かに収縮している。

「あ、あぁぁ……比企谷くんが、わたしのあそこ、じっと見て……っ」

陽乃さんの震えた声が聞こえた直後、目の前で凝視していた膣口から、こぷりと愛液がこぼれ出た。濃厚な牝汁の香りに、肉竿が静かに

いきり立つ。
「……見られただけで汁が出てきましたよ？」
「……っ」
流石に恥ずかしかったのか、陽乃さんは耳まで赤くして顔を逸らした。膝を押さえていた手でゆっくりと陽乃さんの内ももを撫でながら、官能に波打つ秘所をじっと見つめ続ける。焼けつくような視線で、陽乃さんの膣を犯す。
「あ、あぁ、そんなに、見られると……っ」
陽乃さんは恥ずかしそうに言葉を紡ぐが、決して抵抗してこない。俺の顔に伸ばされた手は、少しばかり頬をさすって、あとは所在なげに頭を撫でている。
内ももをじっくり撫でていた手を、脚の根本で固定する。目の前の秘部をあらん限りに押し広げて、妖しく蠢く女陰をじっと見つめ続ける。
「ね、ねえ、比企谷くん……そろそろ、舐めてくれないの？　わたし、あんまり見られすぎて、おかしく、なりそう……っ」
陽乃さんが泣きそうな声で囁き、俺の頬を撫でさする。見られているだけの膣口からは、断続的に愛液がこぼれ出ていた。
「だめです、じっくりするって言ったでしょう？」
「そ、そうだけど、う、うぅぅ……っ」
陽乃さんの声音がどんどん切実で、子どもっぽくなっていく。今にも泣き出しそうな陽乃さんがたまらなく可愛くて、もっといじめたくなってしまう。
「それじゃあ、今はこれで我慢してください」
「え、何を……んはぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!?」
こりこりに隆起したクリトリスにふっと息を吹きかけると――陽乃さんの肢体が弾けた。
「え……っ」
「あっ、あぁっ、ひっ、あぁぁぁ……っ」
予想を超えた反応に呆然とする。もっと焦れったい快感を与えるつもりだったのに、陽乃さんは軽く絶頂したようだった。膣口からは

淫液がたっぷりと溢れ出し、汗ばんだ肢体は何度も波打っている。薄いTシャツに豊満な乳房が張り付き、男性器のように勃起した乳首が透けていた。
「うそ、うそ、うそ、わたし、比企谷くんの息だけで……あふあぁぁぁっ!?」
陽乃さんの身体が今、どれだけ昂ぶっているのかを調べたい。そう思い、内ももをちろりと舐めた。固めた舌先を柔らかなもも肉に埋めて、膝から脚の根本へとゆっくりとなぞっていく。
「だめぇぇ……っ、今そんなことしたら、ひんっ、また……あぁぁぁっ!?」
おとがいを上げ、真っ白な喉を晒し、年上の恋人が再び絶頂に達する。元々過度なまでの敏感体質である彼女が、更に敏感になっている。嗜虐心が強烈に燃え上がった。
「陽乃さん。着ている服、全部脱ぎましょうか。万歳してください」
言って、陽乃さんの着ているTシャツの裾に手をかける。惚けた表情をした陽乃さんが何事か掴めていないまま腕を両腕を上げるのを確認すると、ぐっしょりと濡れた生地を一気に脱がした。
「やぁぁぁんっ!?」
尖りきった乳頭にTシャツがこすれて、脱衣しただけで陽乃さんが果てる。汗で重量感のあるTシャツをソファに置くと、スカートに手をかけた。こちらはホックなのでさらりと脱ぐ。陽乃さんは惚けた顔をして、何の抵抗もしなかった。
一糸纏わぬ姿になった陽乃さんに見惚れながら、尖りきった乳頭にふっと息を吹きかける。
「んぐぅぅ……だめ、だめ、これ、やばいぃ……んはぁぁっ！」
陽乃さんは涙目で震えて堪えたが、間もなくして軽い絶頂に達した。
とろけた瞳に見つめられながら、ゆっくりと服を脱ぐ。最後にパンツを脱いで牡の凶器を目の前に突きつけると、道行く人誰もが振り向く美貌を持つ恋人が、むせかえるような牡の匂いにごくりと唾を飲み込んだ。

「これ、欲しいですか？」
「……あ……うぁ……っ」
「……欲しそうですね。でもまだあげません。もっとじっくりといじめてあげますからね」
努めて優しい声で囁くと、陽乃さんは口の端をひくつかせて、不自然な笑みを浮かべた。
無理やり作った歪な笑みでさえも、とても美しかった。

続く。

（２１）

陽乃さんがソファの背もたれに身体を預けて、俺を不安げに見つめている。俺が陽乃さんの正面に膝立ちで座り手を伸ばすと、陽乃さんはびくりとして怯えた表情を見せた。場の空気を支配することに長けていて、いつ如何なるときも己の優位を崩さない……そんな、普段の陽乃さんとのあまりのギャップにぞくぞくとする。

「陽乃さん、ここはどうですか」

尋ねながら、陽乃さんの柔らかな二の腕に触れる。陽乃さんは目をきつく瞑ってぶるりと震えたが、すぐに目をうっすらと開けた。続きを促していると解釈して、ゆっくりと二の腕をさする。

「あ……う、うぅん……ふっ、んんん……っ」

陽乃さんが悩まし気に身をよじらせ、眉をひそませる。陽乃さんの下腹部に目をやると、じわりと愛液が零れ出ていた。大抵の人なら何も感じない、もしくはくすぐったく感じる程度の行為が、今の陽乃さんにとっては明確な愛撫として成り立っている。

この人の身体は……今、どれほど高まっているんだろう。

知りたい。知りたい。もっと知りたい。

「じゃあ……ここはどうですか」

人差し指の爪を陽乃さんの柔肌に当てて、肩口から手首までつつつと撫でる。陽乃さんの美しい顔がくしゃりと歪んだ。

「あ、あぁっ、やっ、これ、すごいぃ……っ」

唇を震わせて、ほうっと息を吐きながら陽乃さんが淫靡な声を漏らす。内ももをもじもじとこすり合わせ、必死で何かを堪えているようだ。

「じゃあ、これはどうですか。……」

「ひん……っ!?」

左手の中指をぱくりと咥え込むと、陽乃さんが右手人差し指を口に含み、ぶんぶんと勢いようかぶりを振った。ほっそりとした指の腹に舌を這わせると、陽乃さんは指で口を塞いだまま天を仰ぐ。陽乃さんの指を丁寧に舐りながら、陽乃さんの両耳に手を伸ばし、耳の中に指

をずぐりと入れた。
「あ……あぁっ、あっ、あっ、ひぁっ、あぁぁぁ……っ」
熱を帯びた声を漏らして、陽乃さんが壊れた機械のような声を上げる。舌で陽乃さんの指を愛撫して、耳をくりくりと嬲りながら、じっと陽乃さんの瞳を見つめる。陽乃さんの瞳は既に焦点が合っておらず、目が合っているのかどうかも分からない。蕩けた瞳でどこかを見つめたまま、陽乃さんは陰部から愛液を噴き出して果てた。自分の指をはむはむと咥えながら、少しばかり恥ずかしそうに。
「ね……比企谷くん。……キスしよ……？」
陽乃さんは俺の耳に唇を寄せて、蜂蜜を練りこんだような甘い声で囁いた。淫靡な声音は液体よりも柔らかく耳朶に染み入り、頭の中に溢れ返る。淫魔のような恋人の囁きに身体がぶるりと震えると、何にも触れていない肉竿の先から先走りの汁がこぷりと溢れ出た。陽乃さんは透明な汁がこぼれた鈴口をじっと見つめて、「……あはっ」と笑った。今すぐ壊したくなったが、今はまだ我慢、我慢。
「それなら……入れ替わりましょうか」
言って、陽乃さんの反応を待たずに腰を浮かせて隣に座る。自分の膝をぽんぽんと叩いて陽乃さんを見つめると、仄かに顔を赤らめながら膝立ちで跨ってきた。
「……まだ挿れちゃだめですよ？」
「……バレたか」
亀頭に淫裂が触れる寸前のところで声を掛けると、陽乃さんは舌をぺろりと出していたずらがバレた子どものような笑みを浮かべた。淫猥な行為の中でこんな笑みを見ると、不意に背徳感を覚えて余計に興奮する。
「それじゃ陽乃さん、舌を出してください」
俺の言葉に、陽乃さんは目を見開く。しかし俺がじっと見つめると、逃げ場は無いのだと観念したのか、一度目を閉じた後、薄く目を開けてそろりと舌をさらけ出した。目の前に差し出され薄桃色の粘膜をじっと見つめる。
人よりも少しだけ長い舌。あくまで「少しだけ」ではあるが、限界

まで伸ばした状態を見れば、恐らく誰もが「あ、長い」と思うだろう。ずっと目の前で見ていてもまだ見慣れないほどの美貌を持つ陽乃さんが、淫靡な表情を浮かべながら長い舌を晒すのだ。そんなの、興奮するに決まってる。……めちゃくちゃにしたくなるに決まってる。

陽乃さんが物欲しそうに眉を八の字にひそめて、舌をずいと突き出してくる。舌の先が少し乾くくらい焦らすと、陽乃さんは悲しくて拗ねたような色を瞳に浮かべる。本当にこの人は可愛いな……と思いながら、薄桃色の粘膜をぱくりと咥え込んだ。

「ひぅぅぅ……っ！」

陽乃さんが目を瞬かせて、豊満な肢体が盛大に波打つ。唇と唇をたっぷりと交わらせながら、俺は陽乃さんの背中をぎゅっと抱きよせた。少し痛みを感じるくらいに、力強く。

「んくぅぅぅぅぅぅっ!?　ひぅっ、ひっ、ひゃぅぅぅ……っ！」

乳頭やクリトリスに息を吹きかけられただけで絶頂して。

腕をさすられ、指を舐められただけでも愛液を溢れさせ果ててしまう、今の陽乃さんを。

柔らかな乳肉と胸板がこすれ合い、肉竿がぐっしょりと濡れた割れ目に押し当てられることもいとわず、強烈に抱き締める。

それも、敏感な口内粘膜をたっぷりと舐りながら。

「んくぅぅぅ……っ！　んっ、んふぅっ、ひぃんっ、ひぅぅぅぅ……っ!!」

電流を流されているかのように打ち震える陽乃さんの身体を、ぎちぎちと力を込めて抱きしめる。陽乃さんは自由を失えば失うほど腕の中で狂ったように暴れ、肉竿の裏筋にとめどなく愛液を浴びせ掛ける。お湯のような熱を持った淫液に己の性器が浸されるのは、ひどく心地が良かった。

「……ぷは……っ。ひ、比企谷くんっ、んあぁんっ！　……比企谷くんの、ばかぁ……あふあぁっ！　じっくりいじめるって……言ったのにぃ……っ」

唇を解放すると、陽乃さんは今なお己の身を焼き焦がす快感電流に震えながら、恨みがましい目で見つめてくる。とは言っても、眼力が

普段よりも遥かに弱々しくなった彼女は、もっといじめたくなるくらい可愛らしい。
「ちょっと飛ばし気味ではありますけど、宣言したことは守ってるつもりですよ。挿れるまでたっぷりと焦らしますからね」
「……へ、へんたい……っ」
「嬉しい褒め言葉、ありがとうございます」
飄々と呟いて、たっぷりと汗をかいた陽乃さんを抱き締める。ピンと張り詰めた乳頭を咥えると、陽乃さんは悲鳴混じりの嬌声を上げた。

× × ×

「あ……っ、はぁっ、あぁぁぁ……っ」
「ね……いつまで……するの……ねえったら……っ」
「い……っ、ひぐぅ……またイク、また……イク……っ」
陽乃さんの身体が小刻みに痙攣したかと思うと、大きく後ろに反り返った。
――どれくらいの時間が経ったのかは分からないが、陽乃さんの美しい声が掠れてきていることから考えると相当の時間が経っているのだろう。あれだけ絶え間なく喘いでいれば無理もない。俺はひたすらに、陽乃さんの尻肉を両手で鷲掴みにして、肉槍の裏筋で割れ目をぐりぐりとこすりながら、母乳を搾らんばかりに乳頭を吸い続けていた。右の乳房と左の乳房を交互に吸って、尻肉を揉みしだく手は時折肛門周りの皺を伸ばすように動かす。陽乃さんの感度は一向に下がることがなく、何度も何度も絶頂を繰り返していた。愛液が溢れ出て、潮を噴き、時には失禁する。ソファが水溜りと化しても、卑猥な行為は続いて、続いて、続く。陽乃さんの肌は火傷しそうな熱を持っていて、汗腺から噴き出す汗はしょっぱくていやらしく、何度舐めても飽きることがない。
「ね、ほんとに……いつまで……うあぁぁ……っ」
陽乃さんが白い喉を覗かせて、ぶるぶると震えた。しょわぁぁ……と生温かい感覚が下半身を包み、また失禁したのだと気付く。
陽乃さんは数えきれないほど達している。緩やかに責めているか

らか、弱り切った声でずっと喘いでいる。
何度もイった。
何度も、何度もイった。
けれど陽乃さんは、満足しない、満足出来ない。
何故なら――
「ねえ……早く、挿れてよぉ……っ、身体の奥が疼いて、もう、だめ……っ」
――身体の奥底を、子宮を蹂躙されていないから。
陽乃さんは涙混じりの声でおねだりしながら、再び軽く達した。絶頂してなお、肉竿の雁首を割れ目に押し当てて、懸命にこすって更なる快感を得ようとする。俺はその行為を止めることはしない。俺の身体を借りて自慰をしたところで、本当の快楽への焦がれが増すだけだからだ。
陽乃さんがおでこ同士をこつんとぶつけて、潤んだ瞳で見つめてきた。
「比企谷くん……ねえ、しよ？」
ぽそりと囁いた言葉は、恐ろしい程蠱惑的で、肉竿が更なる興奮でいきり立つ。
「……お願い……ねえ、お願い……っ」
頬をすり寄せて、子猫のように甘えてくる。甘やかな髪の匂い、濃厚な汗の匂い、淫靡な愛液の匂い。全ての匂いが入り混じり、俺を誘惑してくる。
「……したいですか？」
「……うん、したい……っ」
声を震わせながら何度も頷いて、愛おしそうに唇を重ねてくる。交わるときは普段と比べて甘えることが多い陽乃さんだが、それにしても今日は特にすごい。この人が何をしても、俺は毎日惚れ直しているみたいだ。
……そろそろ、いいか。
「分かりました。しましょうか、セックス」
「……ぁ……っ」

敢えてはっきりと言葉にすると、陽乃さんは頬を仄かに朱に染めて、こくりと喉を鳴らした。肉襞は妖しくひくつき、目の前の牡の槍を咥えたがっている。
「……うん、する……っ。わたし、比企谷くんと、セックスする……っ」
「……っ」
聡明な彼女が――安易で、下品とさえとられかねない言葉を幼子のような口調で囁いた。
もう我慢はしない。
ここからは、愛おしい女性をたっぷりと蹂躙して、目の前で壊れていく様を見届けるとしよう。
「挿れます」
「え？」
陽乃さんの尻を掴み、照準を合わせる。俺の急な行動に陽乃さんが戸惑うのに構わず、一気に最奥まで貫いた。
結合部から、どちゅ……っと生々しい音がした。

続く。

（２２）

ソファに座った俺に跨がっている陽乃さんの淫裂に亀頭を宛がうと、媚熱で煮え滾った膣穴を一気に貫いた。たっぷりと熱を帯びた愛液で濡れそぼっていた淫裂は、青筋立った肉竿をあっさりと受け入れ、精子を欲して降りてきていた子宮口に亀頭がごちゅんとノックした。

「あ……っ」

陽乃さんの目が瞬き、掠れた声が漏れる。

――吐息が触れて、指に撫でられただけでも果ててしまうほど高まった陽乃さんの身体は、全身が導火線のようなものだ。燐寸で点けた些細な火でも一瞬で全身に燃え広がって弾け、極上の肢体を焼き尽くしてしまう。

そんな、もはや危険な域に達しているかもしれない陽乃さんの身体の、一番奥を躊躇いなく貫いたのだ。一体どれだけ苛烈な事態が待ち受けているか、想像さえつかない。

「あ……ぁ……っ」

陽乃さんがおとがいを上げ、天井を見上げる。ぴんと伸びた背筋は鉄の棒を無理やり差し込んだような、不自然なくらいの真っ直ぐさだった。牡の生殖器を求め続けていた膣肉が嵐の日の麦畑のようにざわめき、一斉に肉槍を締め付けてくる。一瞬で射精してしまいそうなほどの快楽に、括約筋を咄嗟に締めてなんとか堪えた。自らの身体が自動的に起こした反応に追い立てられ、陽乃さんは全身を激しく痙攣させていた。

「……し……っ」

「……し……？」

「……し、ぬ……死んじゃう……っ」

綺麗な瞳に涙を浮かべて、俺の首に腕を絡めながら……陽乃さんは、とても美しくて歪な笑みを浮かべた。

ああ、やっぱり。

俺は――この人を、壊したい。

愛でて、愛でて、愛で続けて。
丁寧に、丹念に、ねちっこく。
壊したい、壊したい、壊したい。
嗜虐心の熱が静かに増して、赤く燃えていた炎が青色に変わったような錯覚を覚える。
陽乃さんのよくほぐれたアナルを、右手中指で遠慮なく貫いた。
「あぐ……っ！」
脂汗を滲ませて苦悶と喜悦に顔を歪ませた陽乃さんの身体を、排泄孔に指を挿入した右手を支えにして無理矢理持ち上げる。陽乃さんの顔が自然と近付き、火傷しそうなほどの熱を持った唇が軽く触れた。肉竿が抜ける寸前まで陽乃さんの腰を持ち上げると、右手にありったけ込めていた力を抜いた。唇が離れ、今度は肉竿の切っ先が子宮口に口づけをした。
「ひ……っ」
陽乃さんの口からは、ほとんど声になっていない短い吐息が漏れた。再び訪れた恐ろしいまでの快楽に歯を食いしばっていると、陽乃さんは排泄機能が壊れたかのように小水を漏らし、美しい瞳から光が消えた。上下の唇は緩慢にぱくぱくと開閉していて、壊れた人形のようだった。
アナルから指を抜き、両手で陽乃さんの腰を支えて身体の向きを変え、繋がったまま陽乃さんを下にしてソファに寝そべった。普通の汗と脂汗の混じった身体を、ぎゅっと抱きしめただけで軽く絶頂に達しているのにも構わず腰を引き、ゆっくりと肉槍を挿入する。
「うぁ……あぁぁ……っ！」
一度突き入れただけで、腕の中で陽乃さんの身体が何度か波打った。愛液は白く濁り、結合部でいやらしく泡立っている。陽乃さんの全身から匂い立つ甘酸っぱさはクセを増して、中毒性があるのではと思うほど興奮を駆り立てられる。
「あ……ひぁ……っ」
耳元で聞こえる、今にも消え入りそうな声にどこまでも興奮しながらゆっくりと腰を振り始める。恐る恐る肉竿を味わうような膣肉の

うねりは極上で、急に早く動けばすぐにでも射精してしまいそうで油断出来ない。
「いっ、ひぁっ、あぐっ、ひっ、ふっ、んくぅぅ……っ」
「ひ、きがや、くん……っ、いき、できな……んはぁぁぁ……っ」
「だめ、もう、わたし、ずっと、イって、あっ……あぁぁぁぁ……っ」
甘ったるい嬌声を聞きながら、何度も何度も腰を打ち付ける。一度抜いて肉竿の裏筋で割れ目をこすってから挿れ、へその裏のざらざらした部分を入念にこすり、子宮口に亀頭が辿り着くと腰を回してぐりぐりと押し付ける。俺の責めに対して、陽乃さんは予想の何倍も激しく、いやらしく、そして可愛らしく反応してくれる。
「ひぁぁ……ひき、がや、くんん……っ」
「陽乃さん、まだ満足出来てませんよね？　もっと激しくしますから」
「へ……？　何言って……んはぁぁんっ!?」
密着していた身体を離し、陽乃さんの両手を握り、思い切り引っ張りながら肉槍を突き入れた。子宮口にごちゅりと当たった瞬間、陽乃さんの身体が壊れたように反り返り、かは……っと息を吐き出す音が聞こえた。
「ひき、がや、くん……っ？　なに、してる、の……？　そんなことされたら、わたし、わたし……っ」
涙を流しながら、陽乃さんは口の端を不自然に吊り上げて笑っている。最奥を貫いたままの肉竿を貪るように膣肉がざわめき、朱に染まった美しい肢体がびくりびくりと跳ね上がる。食いちぎらんばかりに締め付けられると、自分の限界も近付いていることに気付く。
――それならば。
「……行きますよ」
――一気に、２人一緒に快楽の地獄に落ちるまでだ。
「ま、待って、ほんと、ほんとに……うあぁぁぁぁぁぁぁぁっ!?」
手を繋いだまま、一気に抽送のスピードを上げた。ゆっくり動いていた時の倍以上の速度で、ただただ牝の性器を犯して蹂躙するためだけの抽送。テクニックも何もない、獣欲のままの生殖行為。女性器を玩具のように扱い、一歩間違えればただの自慰と化すような拙い行為

だ。
普通こんなことをすれば、女性は痛いだけだろう。
けれど、陽乃さんは違う。
「あぐっ、ひっ、うぁぁぁっ！　ひっ、ひぐっ!?　はぐぅぅぅ……んはぁぁっ！」
絶え間なく溢れ出す愛液が常に摩擦を打ち消して、いやらしい水音を生み出し続けている。無間地獄のような快楽は陽乃さんの膣口から底なしに愛液を生み出し、抽送を繰り返せば繰り返すほど滑りが良くなり、うねりの強い肉奥が肉竿から子種を搾り取ろうと激しく蠢いて締めつけてくる。
「むり、しぬ、しんじゃう……うぁぁぁぁぁぁっ!!」
陽乃さんの身体が反り返り、腹に透明な液体が勢い良く吹きかけられた。陽乃さんは苦悶に満ちた顔で歯を食いしばり、限界許容量を超えた快感に必死に耐えている。
活火山の噴火のような射精の予感に身を震わせた。
「陽乃さん……そろそろ、出します……っ！」
「あぐっ、ひぁっ、だし、て……出して、出して、出し……あふぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!?」
亀頭を子宮口にぴったりと押し付けて、灼熱の白濁を注ぎ込む。肉竿が脈動する度に尿道を伝う感覚が分かるほど粘度の濃い精液が噴き出して、陽乃さんの秘所を浸していく。
「あぁぁぁ……あぁぁぁ……っ」
普段の理知的で、俺に対してはやたらと悪戯好きなお姉さんの顔はどこにもなく――目の前にいるのは、性欲に理性を限界まで削り取られたただの牝だった。
肉竿を引き抜くと、硬度を失っていない肉槍がビンと反り返る。陽乃さんの身体が二度三度と震えると、精液と本気汁が混じったいやらしい汁がごぷりと溢れ出た。
陽乃さんは口を開けて、魂を失ったかのようにぼうっと天井を見上げている。俺は陽乃さんの身体を起こして、うつ伏せにしてソファに寝かせた。おぞましいほどの連続絶頂で止まり方を忘れてしまった

かのように震え続ける尻を持ち上げて――白濁溢れる恥肉の割れ目をもう一度貫いた。
「え……っ？」
陽乃さんは疑問の声を漏らしながら、いとも簡単に絶頂した。俺は持ち上げた陽乃さんの尻を掴み、無言で腰を振り始める。ばちゅっ、がちゅっと腰を打ち付ける度に、白く濁った愛液が溢れ出してくる。
壊れた身体を更に壊しにかかると――陽乃さんは、笑った。
「あは……っ、わたしの中、比企谷くんの、おもちゃにされてる……っ。……あぐっ、ひっ、んぐぅぅ……っ」
ソファに突っ伏したまま、陽乃さんは泣き笑いしながら何度も鳴き続ける。お互い大きな絶頂の後で更に敏感になっているため動きはゆっくりだが、それでもゆっくりと、確実に2度目の射精へと向かっていた。
「陽乃さん、また、出します……っ」
「あっ、あふぁぁ……んふぁぁぁぁぁ……っ」
一際強く腰を打ち付けたとき、俺の限界がいつ訪れるかを読んでいたかのように陽乃さんも尻を強く突き出してきた。ばちゅっと腰と腰が打ち付けられる音がした瞬間、2度目とは思えない濃厚な精液を中に注いだ。
「……あった、かい……っ」
陽乃さんは疲弊しきっているのか、静かに絶頂しながら小さく呟いた。
肉槍を引き抜くと、淫裂からたっぷりと精液が溢れ出し、すぐ上のアナルが陽乃さんの呼吸に合わせていやらしくひくついていた。美味しそうな排泄孔に視線を吸い込まれ、ごくりと息を呑む。ほんの数秒だけ迷って、まだ硬度を失っていない肉槍の切っ先をアナルに宛がった。
「……お尻でもするの？」
「……はい、したいです。いけますか？」
「……ん、大丈夫。好きにしていいよ……」
陽乃さんの声は蕩けきっていて、疲れきっていて、何だか優しかっ

た。
陽乃さんの言葉に頷くと、仄暗い穴に肉楔をずぶりと打ち込んだ。
陽乃さんの優し気な声が溶けて、甘ったるい牝の声に豹変した。
気が狂いそうなほどの興奮を覚えて、また夢中になって腰を振った。
陽乃さんは艶っぽく鳴き続けて、どこか嬉しそうだった。
この後、外が暗くなるまで陽乃さんの2つの穴を代わる代わる犯し続けた。休憩しようとしたら不意に腹が鳴り、疲弊しきってぐったりしていた陽乃さんが俺を見てくすりと笑った。すると今度は陽乃さんのお腹がくぅと鳴って、2人でくすくすと笑った。用意していた食べ物で食事をする間は、ごく普通の雑談を交わした。
シャワーを浴びている間も、寝る前も、寝てからも。
陽乃さんと繋がり続けて、子宮が精子で溺れるくらいに注ぎ続けた。
尋常でないほど体力のいる時間だったが、それでも、どうしようもないほど楽しかった。
陽乃さんの家でのお泊まりの2日目が終わる。
明日は――最終日。
一体何をするのか、何が起きるのか……期待や不安が複雑に絡み合った感情を胸に抱きながら、陽乃さんと抱きしめ合って眠りに就いた。
続く。

（２３）

朝起きると、何も見えなかった。

目を開けたつもりだったのに、真っ暗闇の中にいた。

「……んん？」

自分が思った通りの呻き声が聞こえて、どうやらこれは夢ではないことに気付く。視界が真っ暗な夢って夢だと認識しづらいか……などとどうでもいいことを考えたが、そもそも何で視界が真っ暗なのかという疑問の波が勢いよく押し寄せてくる。

うーむ。

何これ？

可能性はいくつかある。

①やっぱり夢だった。この場合は明晰夢というやつだろうか。

②陽乃さんが何かやらかした。

③俺が寝てる途中で盲目になった。ホラーだなこれ。

④陽乃さん。

⑤どう考えても、

⑥陽乃さん。

「……だよなあ、やっぱり」

他の原因の何百倍もの説得力を持つ犯人が思い浮かんで、最終的に④～⑥で川柳（意味は全く無い）を作ってしまうくらいには、あの人がやったとしか考えられない。

「……むう」

しかも、何故なのか四肢が全く動かない。

見えないから何とも言えないが、恐らくムササビのような恰好になっている。両手首と両足首が柔らかな布で縛られているようだ。ベッドの感触は昨日感じたもののままだから、恐らくベッドの上で俺はムササビになっている。ムササビにはなってねえな。何回ムササビって言うんだ俺は。

目覚めたら、目隠しをされていて？

四肢ががっちり縛られている？

……陽乃さんが、それをやっている？
「……やばい」
思わず独り言ちる。
陽乃さんがこんなことを仕掛けてくる時点で、「えへへ、びっくりしたー？　はい、イタズラおしまーい！」とはならないだろう。ていうか誰だこのキャラは。
試しに身体をもぞもぞと動かしてみるが、俺が多少暴れても手首や足首に痛みが走らないくらいには優しく、けれどがっちりとホールドされている。やだ、安心設計……。
今ので不安が倍増した。
つまりこの状態は、「比企谷くんがいくら暴れても大丈夫だよ」と言われているようなものだからだ。あの人がやっておいて、偶然柔らかい布で縛ったなんてことは有り得ない。意図的に決まっている。そして今、こうして俺が悶々としている時間も、もしかしたら自ら説明することなく俺に全てを悟らせるための時間なのでは――と、思った瞬間。
肌に、視線が突き刺さった。
外気に晒された肌に、ねっとりとした視線の矛がずぶりと刺さったような気がして……ここでようやく、温かい部屋で全裸になっているのだと気付く。
足音はしない。
けれど、視線が刺さる面積が広がってきたことで、視線の主が近付いてきたことがわかる。
ベッドがぎしりと鳴った。心臓が冗談のように跳ねる。
「比企谷くん、おはよ」
「……っ」
胸板に温かな手を当てられ、まるで心臓に直接針を突き付けられたような気がして――咄嗟に出そうとした挨拶の言葉が、全て形を成さず空気となって吐き出された。
「あはは、もう一通り状況は把握したでしょ？　じゃなきゃそんなに恐がらないもんね」

「……ええ、まあ」
陽乃さんの声は明るい。けれど、目が笑っていないであろうことは見ないでもわかる。柔らかな声音にそぐわぬ艶めかしい手つきで、胸から腹にかけてゆっくりと撫でられる。
「……もう、おっきくなってるよ？　わたしが触るとすぐこうなっちゃうよね？　まるでパブロフの犬だね」
楽し気に笑う陽乃さんの言葉でようやく、いつの間にか肉竿が反り返っていたことに気付く。得体の知れない恐怖を感じていたというのに勃起してしまう自分に心底呆れていると、「ああ、でも……」と陽乃さんがくすりと笑った。
「わたしも似たようなもんかな、ていうか君よりひどいよね」
濃密な色香を何回も刷毛で塗り付けたような声で囁き、陽乃さんが肉竿の手前側に跨る。心地良い軽さと生々しい重さが身体にのしかかり、命を握られたように気持ちになった。
陽乃さんが前屈みになって、豊満な双丘の割れ目を肉竿に押し当てるような体勢にすると、互いの陰毛が絡まった。　君よりひどい……と陽乃さんが言った言葉の意味は、わざわざ聞き直さずとも分かる。陽乃さんの秘部からは、既に淫蜜がたっぷりと溢れ返っていた。
「わたしから一方的に触っただけでこうなっちゃうんだから……呆れるよね」
俺の返事が無くとも、独白を楽しむかのように陽乃さんはくすくすと笑う。
やがて、身体の前面に何度味わっても信じられない柔らかな感触がした。
「ねえ、比企谷くん」
ぎゅっと抱きしめられ、耳に唇が付くほどの距離で囁かれる。ねっとりと粘液を纏った細い触手が耳に入り込んで、脳を作り変えられてしまいそうな気がした。
「わたしね？　多分、君が思ってる以上に……君のこと、好きだよ。大好き」
思慕と恋慕と、執着に近い愛情がたっぷりと染み込んだ言葉に――

ぐらり、と世界が揺れる。
伸びていた触手が、脳をぐるりと囲ってぎちりと締め付けてきた気がした。あまりにも恍惚として、今なら何でも聞いてしまいそうな、そんな危うげな幸福感。今この距離で囁かれたら、「お願い、死んで？」と言われても思わず従ってしまいそうな――それほどの酩酊感を伴った、危険な幸福感が脳内を支配していた。
「すごく、好き。君と会ってる日はまだ良いの。会えない日は一人でするのが大変なんだよ？　お風呂でしないとどこもかしこもぐしょぐしょになっちゃうんだよ？」
それは俺といる時でも同じでは……なんて無粋なことは、まかり間違っても言えなかった。
「わたし、多分だけどね。だいぶ歪んでると思うの」
はい！
とは言えない。まかり間違っても。
「……今、何回も頷いたの自分で気付いてる？」
「いでででですみませんすみません！」
頷いていたらしい。
乳首をつねられた。しかも両方。
マジで痛いからやめて頂きたい。いやほんとに。
はあ……と可愛らしいため息を吐いて、陽乃さんの身体が再び密着する。何も囁いてこないのでどうしたのかと思っていると、耳に息を吹きかけられた。吐息にほんの少しだけ混ぜられた声がたまらなく艶っぽくて、鈴口から先走りの汁がこぷりと零れ、隆起した竿を静かに伝った。
「わたしの愛情表現って、ノーマルからは程遠いなーって思うの。……」
やばい、頷かないか監視されてる気がする。思い切り頷いてしまいそうなので必死で首の筋肉に呼びかけて動きを制止させる。しばらく我慢していると、ちょっと残念そうな声で「……惜しい」と言う声が聞こえた。何が惜しいのか、怖くて聞けない。
わたしね……と囁くのが聞こえた直後、不意に唇が塞がれた。甘い

吐息が口内を満たし恍惚としていると、長い舌が絡められることもなく唇が離れた。
「好きだから、比企谷くんに壊されたいし、比企谷くんを壊したいの」
燃える氷の槍で心臓を貫かれたような、矛盾した感覚。
「比企谷くんの意見は聞いてあげない。反論は聞くけど……何一つ採用してあげない」
底冷えのする恐怖と、抗いがたい快感への期待。
「昨日まではわたしのこと、いっぱい可愛がってくれたでしょ？　壊してくれたでしょ？　ほんとに気持ち良くて幸せだったよ。だから……わたしにも、比企谷くんのこと、壊させて？」
気持ちよくなりすぎて苦しくなる恐怖と、陽乃さんの本音を味わえる幸福。
「……いいよね？」
有無を言わさぬ質問の仕方。反論は採用しないなんて言っておきながら、随分と可愛くしおらしい声で意思確認をしてくる。どうしようもないほど可愛いと思えてしまうのだから手に負えない。
「……いいですよ。どうぞお好きなように」
「……好きにしていいの？　ほんとに？」
「ここまで準備しておいて何言ってんですか……どうぞどうぞ」
「……ん、わかった」
陽乃さんが幸せそうに呟くのを聞いて、やってしまったな……と少しだけ後悔する。
陽乃さんが身体を起こし、俺の身体に跨ったままゆっくりと両手でまさぐり始めた。
どうやら俺は今から――大変な目に遭うらしい。
続く。

（２４）

朝目覚めたら、目隠しをされて四肢をベッドの四隅に縛り付けられていた。

全裸で。

目の前にいるのは、恐らく裸体であろう陽乃さん。

やばい。

「さ、比企谷くん」

悪戯っぽい声一つで鼓動が跳ね上がる。心の臓がこの人の手のひらの上で転がされている気がした。

「いっぱい、気持ち良くなってね」

吐息混じりの声が耳朶を打ち、絹糸のような指がそっと首筋に添えられる。

死ぬほど気持ちが良い、という体験は陽乃さんとの行為の中で数えきれないほど味わってきたけれど。

今日は――もしかしたら、気持ち良すぎて死ぬかもしれない。

× × ×

ベッドが軋み、陽乃さんが移動する。俺の身体の左側が軋んだかと思うと、身体の左側面に極上の柔らかさが押し当てられた。柔らかさと張りを湛えた乳房に顔を包まれ、まるで赤子のように抱きしめられている。

「よしよし」

「……」

頭を撫でられた。

ちょっと恥ずかしい。

「よしよし」

まだ撫でられている。

ちょっと冷静になってきた。

「よしよし」

陽乃さんの声がものすごく楽しそう。何よりです……。

頭を撫でる陽乃さんの手つきはとても優しく、こんな異常な状況下

であっても安心してしまう。暗闇の中でうとうととし始めたところで、不意に陽乃さんの身体が離れた。
「う……っ？」
耳たぶをぱくりと咥えられ、身体がびくりと跳ねる。
「あはは、比企谷くんったら分かりやすいんだからー」
頭を撫でられている間半勃ちになっていた肉竿が、一瞬で勃起したことを指摘され一気に顔が熱くなる。「君はかわいいなー……」とやけに優しい声で言われて頭をまた撫でられた。
「ん……ちゅっ、ふぅっ、んんん……っ」
「う……ぉ……っ」
陽乃さんの魅力的な唇が耳たぶの上を滑っていき、耳の中に口付けをしてくる。人よりも長い舌をするりと差し込み、悩ましい息遣いが耳から脳まで浸透してくる。
「んっ……ちゅぴっ、ちゅるっ、ちゅぷりゅ……ふふ、ねえ、先っぽから何か出てるよ？」
「う……っ」
既に先走りの汁が零れ出たことを指摘されて身体が熱くなる。しかしここで一つのことに気付いた。
陽乃さん、もしかしてギリギリまで焦らすつもりか……？
今の場面も、指摘ついでに肉竿を撫で回しそうなものだけれど、今日の陽乃さんは言葉でこそ指摘はすれど決して触れてこない。
……これは……きつい……。
「ちゅぷっ、ちゅぴっ……あはは、ぴくぴくしてる」
俺の意思が勝手に伝わったのか、肉竿が揺れた。
「……ちゅぴっ、ちゅるっ、ちゅるる、ちゅぷっ、ちゅぴっ、ちゅぷ……っ」
「う……ぅっく、うぐ……うぅぅ……っ」
左の耳を丹念に、執拗なまでに愛撫され、今度は右耳を愛撫される。身体ごと俺の右側に移動すればいいものを、わざわざ俺の胸板に豊満な乳房を乗せて、右手を俺の後頭部に回して抱きしめながら右耳を愛撫してきた。

緩慢な動きで耳の外側を撫でていたかと思えば、急に激しい動きで耳の中を固めた舌先で蹂躙してくる。決して安心させない愛撫は同時に全く飽きることがなく、陽乃さんの唇が再び左耳を舐り始め、更に右耳に移っても快感は増し続ける一方だった。

左耳から、右耳。

右耳から、左耳。

「んっ、ふぅっ、ちゅぴっ、ちゅるるっ、比企谷くんのおっきいの、ぴくぴくしてるよ……？　かわいいね……んっ、ちゅくっ、ちゅるるっ、ちゅぴっ、ちゅぽっ、ちゅぷりゅ……っ」

「うぐ……あっ、うぐぅぅ……っ」

淫猥な音と共に悩ましい快感が耳から伝わってくるが、刺激はどこまでいっても焦れったく、決して身体の中心まで届くことがない。

艶めかしい言葉で責めながら、陽乃さんは耳だけを何十分にも渡って舐り続ける。

射精欲求に焦がれ続けた肉竿は、暗闇の中で何度も先走り汁を噴きこぼしていた。

×　×　×

「……ぷはっ。比企谷くん、目隠しとってもいい？」

「……あ、はい、どうぞ……」

満足気で、疲れていないどころか余計に元気になったような陽乃さんの声に驚く。俺は既にぐったりとしていた。

目隠しも良いんだけど、やっぱり君の顔をみながらしたくなっちゃった――とさりげなく呟かれて心臓がどきんと跳ねながら、視界を覆っていた目隠しを外される。

目に入ったのは、まだ見慣れない天井と電灯、そしてその間に――興奮によりすっかり蕩けて、にっこりと微笑む極上の美人の笑顔。

何万の言葉を交わしても、何千回と身体を重ねても、自分の隣にいることが時折信じられなくなるくらい魅力的な陽乃さんがくすりと笑うと――身体の中心から末端に向かって、煮えたぎるような幸福感が湧いた。

「……比企谷くん、目隠し外した方がおっきくなってるよ？」

「え……っ」
視線を下に向けると、今にも腹に当たりそうなほど反り返った肉竿がびくりと脈打っている。
「お姉さんの顔を見た方が興奮しちゃうんだ、比企谷くんは」
くすくすと笑う陽乃さんを無性に抱きしめたくなるが、今は四肢が拘束されているのでどうすることも出来ない。
陽乃さんはころころと楽しそうに笑っていたかと思うと、不意に妖しく目を細めた。
こちらに覆いかぶさるように四つん這いになり、天井灯の光を遮る。影を帯びた淫魔のごとき肢体は何倍も淫猥に映り、長い睫毛が瞬きの度に揺れる様子に魅入られた。
「ん……っ」
髪を耳の上にかき上げ、陽乃さんがゆっくりと顔を下げてくる。視界が陽乃さんに覆われて、柔らかな唇がそっと重ねられた。たわわに実った乳房が胸板に当たるとむにゅりと形を変えて、互いの乳首が擦れ合う。こちらの口内に悩まし気な吐息を漏らすと、長い舌がにゅるりと伸びて口内を蹂躙し始めた。
「ん……ちゅっ、ちゅぷっ、ふぅっ、んっ、んふぅ……ちゅっ、ちゅる、ちゅぴ、ちゅろろろ……ちゅっ、ちゅく、ちゅぷりゅっ、ちゅっ、ぢゅるっ、ぢゅるるる……っ」
「……お……ご……っ!?」
両耳に手を添えて俺の顔の向きを自由に変えながら、紅い粘膜が上下の歯の裏表を丁寧に舐め上げ、舌先を擦り合わせ、俺の舌をぱくりと咥えて卑猥な音を立てて啜る。脳内に直接響く淫靡な音と思考を痺れさせる性感に背筋が反り返るが、陽乃さんは器用に体重をかけて俺の動きを封じる。
「……ぷはっ。次は……こっち」
「うぐ……っ！」
ようやく唇が解放されたかと思うと、陽乃さんの舌は俺の口周りを丁寧に舐め取り、次に首筋を舐め始めた。顔を横に向けて喉仏に吸い付き、鎖骨を舐めていく。

「うぐあ……っ!?」
乳首に吸い付かれると、反射的に跳ね上がってしまった。陽乃さんは俺の反応を見るとにっこりと笑い、胸板に唇をくっつけて一定のリズムで乳首を舌先で突いてくる。もう片方の乳首にも陽乃さんの手が伸び、人差し指と親指の腹がこしこしとこすってくる。
悩ましい快感に身体が丸まり、自然と腹筋に力が入る。陽乃さんは楽し気に目を細め、口と指で乳首を愛撫しながら空いた手で俺の腹を愛でるようにさすった。
何分経ったのか、何十分経ったのか分からないほどの時間が過ぎていく。いつもなら互いへの愛撫をたっぷりとした上で、とうに交わって何度も絶頂に達しているころだ。
射精出来ないことはもちろんもどかしいが、俺から手を出すことが出来ないために陽乃さんの興奮も高まる一方で、静かに荒げていく互いの呼吸が2人の限界を知らせていた。
「……責めっぱなしも楽しいけど、比企谷くんの反撃が無いのはつまんないな」
陽乃さんが独り言のように震えた声で呟き、女神のように美しくて、悪魔のように恐ろしい笑みを浮かべる。ゆっくりと腰を上げたかと思うと、俺の顔を跨いだ。
脚を開いているためにはっきりと見えた恥裂はぐちょぐちょに濡れそぼっていて、濃密な愛液が顔にぽたりと滴る。美しい笑みとは対照的な、卑猥そのものの匂い鼻腔を貫いた。
陽乃さんがくるりと身体の向きを変え、俺の肩を挟むようにして膝を付く。そしてゆっくりと寝そべり、上下逆さまの状態で身体が密着した。
「んむ……っ」
陽乃さんの淫裂が鼻と口に押し当てられると、熱を伴った甘酸っぱい匂いが強烈に快楽中枢を刺激する。嗅いだだけで射精してしまいそうな濃厚な匂いを篭らせた、鮮やかな桃色をした牝肉が嬉しそうに震えた。
これだけ密着していても、四肢が縛られていると自由に舐る場所も

変えることが出来ずもどかしい。
「んん……っ、比企谷くんの、やらしい匂いしてる……っ」
陽乃さんの熱っぽい吐息が亀頭にかかり、限界寸前の肉竿が細かに痙攣する。
「それじゃ、気持ちよくなろっか」
まるで行き慣れた場所へ遊びに行くような気軽さで陽乃さんが言うと、亀頭がくぷりと飲み込まれた。

続く。

（２５）

陽乃さんが亀頭を咥え込むと同時に、淫裂がぎゅっと押し付けられ愛撫を求めてきた。

「んふぅぅぅ……っ！」

舌をちろりと差し出すと、予想の何倍も大きい反応が返ってきた。顔を浸すほどの愛液が新たに溢れ出し、濃密さを増した牝の匂いに頭がくらくらとする。

「ん……ちゅっ、ちゅぷっ、んふぅぅ……んっく、ふぅんっ、んふぅん……っ」

陽乃さんの腰が悩ましくくねり、卑猥に濡れそぼった淫裂が口と鼻に押し付けられる。何度嚥下してもきりがない愛液の奔流に意識が呑み込まれそうになる上に、陽乃さんは自身の腰の動きに連動するようにいやらしい音を立てて肉茎を味わう。

竿にぴったりと貼り付いた内頬の感触がたまらず、陽乃さんが腰をくねらせる度に俺の身体もびくびくと震えてしまう。

このままでは窒息してしまう――そう思った瞬間に身体が動いた。

「ん……あっ、あふぁぁっ!? ひぐっ、あくぅぅぅ……んはぁぁっ!!」

ぷっくりと膨れてひくついていたクリトリスに吸い付くと、陽乃さんは肉竿から口を離し、獣のような嬌声を上げた。細い指を肉竿に絡ませながら、荒い息遣いをしている。腰がびくりと痙攣する度に溢れる愛液を淡々と飲み込んだ。

「はぁ……はぁっ、……」

陽乃さんが無言で立ち上がり、俺に覆いかぶさるようにして顔をじっと見つめてくる。発情して潤んだ瞳は天井灯の影の中で妖しく光り、絶世の美貌から滴る汗が頬に当たった。

四肢を拘束していたタオルに陽乃さんの手が伸びて、一つ一つ解かれていく。

「……比企谷くんは、どんな格好で続きをしたい？」

耳元で囁かれた言葉は、ぞっとするほどの艶を含んでいた。

ここまで散々弄ばれた。それ自体は割と楽しんでしまっている自

分がいるが、そろそろ反撃もしたい。
「……俺が上になりたいです」
俺の言葉に、陽乃さんが目を見開いてぱちくりとする。数秒経つと、頬を緩めて妖しく微笑んだ。
「……うん、わかった。……どっちも気絶するまでやろうね」
陽乃さんの囁きで、肉茎がびんと反り返る。硬度を増した肉茎に陽乃さんは少し驚いて、嬉しそうに亀頭を指でつついた。
× × ×
体勢を逆転させて、今度は陽乃さんが下になって俺が上から跨る。両膝をついて陽乃さんの眼前に肉茎を晒すと、俺が腰を沈める前に陽乃さんが動いた。
「ん……ちゅっ、んふぅぅ……っ」
「う……お……っ？」
陽乃さんが首を上げ、ぱんぱんに膨れた亀頭にちゅっと吸い付く。俺が驚いて腰を僅かに下げたことをいいことに、今度は亀頭をぱくりと咥えて引っ張り始めた。
「んっ、ちゅるっ、ちゅぴっ、ちゅぽっ、ちゅぷ、ちゅぷ、んふぅぅ……っ」
首を上げて亀頭を丸々飲み込み、長い舌で鈴口をほじくり亀頭全体を貪っていく。身体がぶるりと震えて先走りの汁が噴きこぼれる度に、陽乃さんは美味しそうに喉を鳴らした。
「こ……の……っ」
震えながら腰を下ろすと、陽乃さんは下品なほどの水音を立てながら肉茎を貪る。根本まで入れると、まるで膣肉に入れたかのように肉茎全体がきゅむきゅむと締めつけられ――
「うぐ……やばっ、出る……っ！」
――我慢に我慢を重ねていた下腹部が、爆ぜた。
「んぶっ!?　んっく、ふぅっ、ごくっ、ごくっ、おぐっ、んっく、んぶふぅぅ……っ！」
視界が白むような射精の脈動の最中、肉槍を陽乃さんの口にぐりぐりと押し込み、喉奥に直接濃厚な白濁を流し込む。陽乃さんはえずき

ながらも全てを飲み込み、目の前の淫裂から大量の愛液を噴き出させた。
濃厚な牝の奔流に見惚れながら、数えきれないほどの脈動ともに大量の精液を陽乃さんの胃に流し込んいく。
「……うっ、うっく、ちゅぴっ、ちゅる……んくぅぅっ!? ふっ、んふぅぅっ!」
絶頂の余韻に浸りながらも肉竿を味わっている陽乃さんの脚を開いて、淫裂に右手人差し指を挿入すると、悲鳴のような嬌声が上がった。
「散々してやられましたからね。陽乃さんの頭がおかしくなるくらい弄ってあげますから」
「……っ」
俺の言葉を聞いた瞬間、ぐっしょりと濡れた膣口から更に愛液が溢れ出た。
溢れ出した愛液をかき出すように、右手人差し指を折り曲げて膣肉を抉る。
「んふぅぅっ!? うぶぐっ、んぐっ、んぐぅぅ……っ」
陽乃さんが苦悶混じりの声を上げ、顔をぶんぶんと振る。熱く湿った口内に肉槍で楔を打って固定させて、どれだけ快感に悶えようと決して逃がさない。陽乃さんが首を動かす度に内頬がこすれて、射精したばかりの肉竿が遠慮無しに刺激される。
「……う……ぐぁ……っ。……こっちも弄りますからね」
「んくぅぅっ!?」
滑らかな太ももを開かせ、左手の人差し指を快楽にひくついたアナルにねじ込む。僅かばかりの抵抗はあったものの、あっと言う間に第一関節、第二関節と埋まり、根本まで埋まった。ねじ切れそうな締め付けに興奮しながら、膣肉と菊孔を同時に嬲る。
「んぐぅぅっ!! うぐぅぅぅっ!!」
本能を剥き出しにしたような、悲鳴混じりの嬌声が肉竿に直接染み渡る。汗をぐっしょりとかいた極上の肢体は際限なく痙攣し、膣口からは愛液がはしたなく噴き出す。

「ほら、どっちも気絶するまでやるんでしょう？　このままじゃ俺は気絶なんてとても……うおっ!?」
優勢に立って油断していたら、陽乃さんが俺の太ももを掴み同じように脚を開かせ、肉茎を根本まで咥えた状態で舌を絡ませ始めた。
「じゅぶっぢゅぷっじゅぐっぢゅぷぢゅぷぷぢゅりゅ……っ」
「うぐ……っ!?」
睾丸をやわやわと揉み、卑猥な音を立てながら首を傾げて舐る角度を変えてしゃぶってくる。一瞬で限界目前までできてしまい、何とかしようと目の前でひくついたクリトリスに吸い付いた。
「んぐ――――――」
陽乃さんの身体が一瞬、凪いだように静まる。
「――――――んぐぅぅぅっ!!　んぶっ、じゅるっ、んんんんっ!!　んぐぅっ、んぐぅぅぅ……っ!!」
――次の瞬間、陽乃さんの全身が痙攣すると同時に緩めた頬が限界まですぼめられ、身体の奥底にある精子を無理やり吸い取られた。
「お……おぉぉぉぉ……っ」
意識がもぎ取られそうな射精の脈動の中、緩慢な動作で膣とアナルを指で蹂躙し、クリトリスを舐めていく。陽乃さんは脚をばたつかせ、時にビンと伸ばし、凄絶なまでの絶頂に達し続けた。
『……』
気の狂うような絶頂の後、俺は両手の指を陽乃さんの穴から抜いた。全身が脱力したまま、互いの性器をちろちろと舐める。肉茎に伝わってくる甘やかな快感と、膣口を舌先でほじくる度にぴくぴくと震える可愛らしさがたまらない。
「……んむっ？」
陽乃さんが俺の腰をぺちぺちと叩く。腰を浮かせなさいということなのかと思ったが、腰を上げようとすると吸い付かれる。
何を言わんとしているのかしばらく推測を重ねた後、
（……あ、そういうことか）
とようやく結論に至り、上下逆さまで交わったまま、ころんと横向きに寝転がった。

「んふぅぅ……っ、ちゅっ、ちゅぴっ、ちゅろろっ、ちゅっ、んふぅぅ……っ」

どうやらご満足頂けたようで、陽乃さんは肉竿を愛おしむように丁寧に嬲り、艶っぽくも可愛らしい吐息を漏らしている。俺もまだまだ濡れている膣口に吸い付き、互いの身体を貪り合った。

この後、横向きで繋がったままもう2回射精した。その間に陽乃さんは10回以上達していた。

お互い気絶するまで……とは言ったが、実際は疲れ果ててどちらも眠りに就くまで、というのが正しかった。陽乃さんが先に眠ったが、寝ながらも舐められたときはかなり慌てた。

散々焦らされて、今度は気が狂うくらい互いをイかせあって、その後はたっぷりとだらけながら互いを愛撫する。

陽乃さんとだからこそ過ごせる時間に、気が付けばたっぷりと溺れていた。

続く。

（２６）

目を覚ますと、部屋の中の温度がすっかり上がっていた。恐らくもう昼時なのだろう。

「ん……？」

「ん……っ」

……昼時にしてもやけに暑いと思ったら、いつの間にか陽乃さんが俺の胸板におでこをこすり付けてすやすやと寝息を立てていた。

俺が寝ている間に諸々の処理をしてくれたのか、２人の身体は多少汗ばんでいるものの不快感はない。タオルケット1枚を頼りに、後は２人の体温で温め合っていた。

陽乃さんの顔がもぞもぞと動く度に、艶やかな黒髪がさらりと揺れる。甘い匂いと汗の匂いが混じり合って、同じ生き物とは思えないくらい良い匂いがした。

ふとこれまでを振り返る。濃密にも程がある三連休も、残り半日だ。

「どうしたもんか……」

天井を見上げ、自分よりも小さな頭をくしくしと撫でて独り言ちる。

「おっ、んんっ？」

妙な快感が走って視線を巡らせると、陽乃さんが乳首を指の腹で撫でていた。

「おはよ、比企谷くん」

「挨拶代わりにそこ弄るのやめてくれます？」

「え～？　だめ？」

「いや、ちょ、ほんとに、ってなんで両方……こら……っ」

「……おっきくなったね」

「……そりゃそうでしょう」

タオルケットの一部に山が出来た。

陽乃さんは起き抜けからとても楽しそうに笑い、俺の頬をつっついて「気持ち良かったんだ？」と囁きながらもう片方の手で肉竿を撫で

てくる。和むし興奮するしでもはや心臓に悪い。
「今日の残りはどうします？」
弄られている肉竿からにちゅ、くちゅと音が聞こえ始めて危機感を覚え、それとなく話題を逸らす。
陽乃さんは顎に人差し指を当てて視線を逸らした。それでも肉竿を弄る手は止めてくれない。俺の意図を綺麗に読んで鮮やかに裏切るのはほんとやめてほしい。
えーっとね、と呟き、陽乃さんがにっこりと笑った。
「ずっとイチャイチャしよっか」
「え」
「イチャイチャしたいの。だめ？」
「いや、別に構わないですけど……具体的に何をするんですか？」
「んー？　……こんな風に、かな」
陽乃さんは悪戯っぽく微笑むと、俺の肉竿を掴んだまま身体をこちらに向けて横向きで寝転んだ。やむを得ず俺も横を向き、向かい合う体勢になる。引っ張る場所は考えてほしい、ほんとに。
「こうやって、だらだらして……ん……っ」
「う……く……っ」
陽乃さんの瞳に妖しさが灯り、肉竿を愛撫する手はより巧妙になる。睾丸を撫で、輪を作った指で雁首をしごき、亀頭を手のひらで撫でる。
反撃を望むように陽乃さんが俺の手首を掴み、豊満な胸元に導いた。柔肉に指が触れると、張りがありながらもどこまでも柔らかい肉に指が沈む。
額同士をこつんと当てて目が合うと、２人してちょっとひねくれた笑みを浮かべた。
「どう、こういうのも良いでしょ？　お互いイカないようにするんだよ」
「ん……となると、俺は調整がかなり大変ですね」
俺の言葉に、陽乃さんはむっと片頬を膨らませる。あまりにも可愛らしいためつい膨らました頬を指で突っついた。

「む」
空気が抜けた。
「むぅ……」
もう片方の頬を膨らませた。
可愛すぎて鼻血が出そう。
「……わたしだって、君のことイカせようと思えばいつでも出来るんだよ？」
底冷えのする声で囁かれ、肉竿を強めに握られた。
「知ってます存じておりますよーく存じ上げておりますごめんなさい！」
よく分からない言葉遣いで全力で謝り、何とか事無きを得た。
「よろしい」と楽しそうに笑うと、陽乃さんがそっと唇を重ねてきた。
「ん……ちゅっ、ちゅる……んっ、ふぅぅ……っ」
横向きのためあまり熱烈なキスは出来ない。けれどそのもどかしさがたまらず、互いに何度も唇を押し当てては啄むようなキスをして、舌を伸ばして絡め合う。人より長い陽乃さんの舌と自分の舌が絡み合う様は、交尾の一種にしか見えなかった。
「んっ、んっ、くぅんっ！　ふぅっ、んっ、んふぅぅっ、ふぅぅぅ……っ」
陽乃さんが身体を艶めかしくくねらせ、肉竿を握る手に力が篭る。豊満な乳房を揉んでいる俺の手を掴んで、もっと激しくしてと無言でねだってくる。
……これ以上やったら、絶対イクだろ。
一歩引いて冷静に判断をして、唇と手を同時に離した。陽乃さんは目をぱちくりと開いて驚き、やがてちょっと不機嫌な顔をして、その後自分が何をしようとしていたかに気付いたのか少し顔を赤らめた。
今の表情の変化を目の前で見ている身としては、悶えすぎて死ななかったのが本当に奇跡としか言いようがない……。
「……これは……思ったより難易度が高いね」
「そうですね。陽乃さんが発情すると大変ですいって!?」
乳首をつねられた。
×　×　×

お互いをイカせることなくイチャつくという陽乃さんの希望に従い、ひたすら焦らしプレイに興じる。精々数十分もやれば十分だろう……と思っていたが、一向に終わることがない。恐らく数時間はこの行為に耽っていた。
「あっ、あぅっ、あっ、ひっ、ふぅぅぅ……ふぅぅぅ……っ」
「うっ、ぐぅっ、ぅぅっ、くっ、うぁ……っ」
今は体勢を変え、対面座位のような格好で互いにベッドに腰を下ろしている。2人の下腹部がほとんど触れ合った状態で、俺は陽乃さんの量感たっぷりの乳房を下から掬い上げるようにやわやわと揉み、陽乃さんは両手で肉茎を艶めかしくしごいている。
先走りが幾度と無く溢れ出て、陽乃さんの指で塗り広げられていく。その上陽乃さんは時折己の淫裂に指を這わせ、たっぷりと愛液を指に塗りたくって肉竿をしごくための潤滑液にしていた。
熱くて甘酸っぱい愛液が、目の前でとろりと垂らされる様子は視線を縫い付けられるほどに淫靡な光景で、俺は何度も射精の波を堪えていた。
むせ返るような性臭がベッドの上を支配していて、互いの目は合っているのに合っていないような、夢見心地の中でひたすら濃厚な愛撫に溺れていた。
「はぁっ、うんっ、ふぅぅぅ……ねえ、ひきがや、くん……っ」
「んむ……っ」
汗で前髪がおでこに貼り付いた陽乃さんが、発情しきった顔でキスをねだる。互いの愛撫の手を緩め、顔を傾けてたっぷりと唇を重ね合わせる。
陽乃さんのキスは時を追うごとに淫らではしたなくなり、口から溢れた2人の唾液が陽乃さんの顎を伝い、豊かな胸の谷間を伝うようになっていた。その唾液も、あと数分もすれば汗で分からなくなってしまう。
唇を離すと、陽乃さんがちらりと視線を落とし、また俺を見つめる。
「比企谷くん……そろそろ、挿れていいかな？　わたしもう限界……」
「……俺は3時間前には限界でしたからね。いくらでもどうぞ」

「あは……っ」
力無い笑みを浮かべ、陽乃さんが自分の手の指を舐め上げ、それから俺の首に両腕を回す。俺の両脇に脚を伸ばして腰を上げようとしたが、もはや力が入らないのか可愛らしく唸っているだけで立つことが出来ない。真っ白で張りのある尻肉を掴んで陽乃さんの腰を上げるのを手伝うと――膣口に亀頭を宛がい、両手の力を抜いた。
「あ――――っ」
ごちゅん、と。
亀頭と子宮口がぶつかった音がした瞬間、陽乃さんが、あっけない最期を迎えたような声を上げた。反射的に陽乃さんの両脚が俺の背中に巻き付き、がっちりと身体を拘束される。
膣肉が竿の根本から亀頭まで余すことなく柔らかく締め付けてきた瞬間、俺も我慢することなく陽乃さんの子宮に白濁を注いだ。
「あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっあっあっあっあっあっあっあっあっあっあっ……あぁぁぁぁ……っ」
陽乃さんは獣のような嬌声を上げることはなかった。それでも膣内は荒れ狂う嵐のようにうねり、射精の脈動に耐えている肉竿を締めつけて強烈に愛撫し、限界を超えて精液を搾り取ってくる。互いの肩に顎を乗せた状態で、俺は静かに陽乃さんに子種を注ぎ続けた。
激しい絶頂とその余韻に数分ほど耽溺していると、ようやく大きな波が去った。それでもどちらかが少しでも身体を動かせば相手が反応して、それがまた激しい絶頂の波にまで膨らんでいくのは目に見えている。ぼうっとした状態でも身体を動かさぬように必死で堪えた。
絶頂への閾値が限りなく低い状態をなんとか乗り越えると、虚脱感とともに、その何倍もの安心感に包まれた。
「……あ～……気持ち良い～……幸せぇ……っ」
耳元で聞こえた、随分と気の抜けた声に思わずくすりと笑ってしまう。
「どうしたんですか急に」
「え～？　だって、比企谷くんとこうしてるとね……気持ち良いし安心するしで、なんかもう……あ～……」

陽乃さんの語彙がなんかアレなことになっている。
レア！
「……そりゃ良かったです」
何だこの可愛い生き物……とからかいたくなるが、命の危険性があるのでやめておく。代わりにしっとりと汗ばんだ黒髪をくしくしと撫でると、陽乃さんの顔から一層力が抜けるのが分かった。
「はぁ……毎日比企谷くんとエッチしたいなぁ……」
「……っ」
んぐっ、と喉の奥で変な音が鳴った。
「んん……っ？　やだ比企谷くん、おっきくなってる……」
「いや、そんなこと言われたら……っ」
慌てて言い訳する俺を、陽乃さんは楽しそうにじっと見つめてくる。
「比企谷くん。来年君が大学生になったら一緒に住もっか」
「え」
「はい決定ねー」
「え、いや、ちょっと」
「なに、落ちる気？　そんなの絶対許さないから」
「急に睨むのやめてくださいマジで恐い」
「ちっちゃくなっちゃった」
「そりゃそうでしょう」
「えい」
「いや、胸を揉ませたくらいでこの状態は……あ」
「おっきくなったね」
「ですね」
脱線した話を慌てて修正する。
「え、いや、それって同棲……えええ？」
「……比企谷くんは、いやなの？」
「いや、そういうのって俺から言いたいっていうか……あ」
「……ふぅん？」
陽乃さんが顔を逸らした。耳まで赤い。

こほんこほんと咳払い。
「……えーとですね、陽乃さん」
「……なぁに？」
「来年から、よろしければ一緒に住んで頂けないでしょうか」
「……わたし、一人暮らしになるのも大変だったんだよ？　一昨日話したでしょ？」
「今度は俺もプレゼンに参加しますので」
「……ふぅん……？」
繋がったままだというのに、俺が言葉を重ねるごとに陽乃さんはどんどん乙女のような反応を見せてくれる。
「……陽乃さんは可愛いですね」
ほとんど独り言のように呟いた言葉が、珍しく陽乃さんにクリティカルヒットした。首まで赤くなった陽乃さんが、瞬きを忘れて俺を見ている。
「……楽しみにしてるから」
やがて、俺の肩に顎を乗せた陽乃さんが、ちょっとだけ嬉しそうな声で囁いた。
「……はい、頑張ります」
「うん。じゃあ、取り敢えず今日の残りの時間を目一杯楽しもっか」
「はい」
おでこ同士をこつんと合わせ、微笑み合う。
受験を乗り越えれば、来年度からは大学生。
高校までと大学は、まるで違うと聞く。いくらネットで調べようと、陽乃さんから話を聞こうと、実感は一向に湧かない。楽しみもあれば不安もある。むしろ不安しかない。
けれど、そんな未知しかない場所の中でも、隣に陽乃さんがいてくれるのなら。
なんだか、何とでもなるような気がした。
「んっ、んっく、ふぅぅ……っ」
……まあ、下手なことをやらかしてこの人の鬼の面を見ることはなるべく避けるように努力しよう。

「……」
「え、どうしました」
「……」
「んぐっ」
失礼なことを考えていたら見透かされたようで、頬をつねられた。
「……比企谷くん、分かりやすすぎ」
「ごめんなさい」
「……ほら、こっち集中して？」
「は、はい……っ」
恐いお姉さんから一瞬で可愛らしい恋人の顔に変貌する陽乃さんに、初めて出会った頃の強化外骨格の面影はない。少なくとも、俺と接している時は。
「……はぁうぅぅ……っ」
目の前で可愛らしく喘ぐ愛おしい人を見つめながら。
俺は、来年の生活を思い描いた。

お終い。

一日でヒロイン全員を攻略するのは中々大変である。

（1）

高校3年の、1学期終わり頃。

季節はいよいよ灼熱の夏を迎えようとしていて、日差しを吸い込んだコンクリートが、道行く人を燻製にする気かと言う勢いで焼いてくる。雲は分厚く高くなり、うだるような暑さの中にも微かな清涼感を感じる。

そんな時期の、とある木曜日の夜。

俺は、寝床に臥して眠りに就く前に、唐突に――妙な予感を抱いた。

何だろう、何と言ったら良いんだろう。

何だか、胸騒ぎがする。

例えば、朝起きた時から夜寝る時まで、今まで関わった女の子及び女性と悉く関係を持つような、そんな卑猥な一日になるような……妙な肉感の篭った予感。

……。

具体的すぎた。

これ、俺が欲求不満なだけだな。

何考えてんだか俺は……と思いながら、くぁとあくびをして眠りに就く。

明日もきっと、穏やかな一日になるはずだ。

× × ×

翌朝。

「……」

何だか身体に柔らかいものが当たっている。

……。

ははーん、さては、俺のろくでもない予感が当たったな。

よーしよしよし、受け止めてやろう、この現実を。

朝からスタートするということは、まずは小町か。一緒に住んでいるんだし、それも当然だろう。

よかろうよかろう、愛しの妹を存分に攻略して――

「……あれ」

かろうじて自分に聞こえるくらいの、小さな声が漏れた。

「んん……っ」

隣で気持ち良さそうに寝ていたのは、陽乃さんだった。

しかも全裸で。

俺と顔を突き合わせる形で寝ている。

え、寝顔超可愛い。

唇をむにゃむにゃさせて、俺の胸元におでこをこすり付けてくる。

寝ている時は甘えん坊なんだろうか。

ふむふむ。

……。

……。

……。

「……なんで？」

ホタルすぐ死んでしまうん？　という伝説の台詞と同じくらいの切実さで、魂の篭った3文字を口からぼへっと漏らした。俺の声が聞こえたのか、陽乃さんは「んん……っ？」と小さな声を漏らして、普段よりも随分と幼く見える顔を上げた。

「あ、比企谷くん。おはよー」

「おはようございます。ところで「昨日は激しかったね」記憶が改竄されている!?」

あれ、どういうこと？

俺は寝相で陽乃さんを部屋に招き入れて抱いたのか。それどこの外道だよと混乱していると、陽乃さんがまぶたをこしこしとこすり、にへらっと笑った。妹成分を感じさせる幼さに動悸が止まらない。

「うそうそ。比企谷くんが寝てから小町ちゃんに家に入れてもらって、後は全裸で一緒に寝てたの」

「なんで全裸になる必要があるんですか」

「ほら、夏にクーラー全開にして毛布に包まる贅沢があるじゃない？あの感じ」

「そんな地球に優しくない贅沢に共感したくない……」
何なのこの人……実際全裸は大歓迎だけど……柔らかすぎて極楽だし……と呆れたりにやけたりを繰り返していると、一瞬視界が塞がり、唇に柔らかいものが当たった。ぽかんとしていると、陽乃さんが聖母のような柔らかい笑みを浮かべた。
「比企谷くんが卒業したら、これからずっと……朝起きる度に隣にわたしが居るんだよ。早く慣れてね」
「何ですかそれ遠回しにプロポーズしてるんですかそういうのはもうちょっと俺が社会的経済的に落ち着いてから改めて俺からというか何て言うんでしょう取り敢えずこれからもよろしくお願いします」
「比企谷くん、キャラがブレてるよ……」
陽乃さんに呆れられた。いかん、本家に後で謝らねば。何となくこの後すぐ会う気がするし。
そういう物真似は本人の前でやってぷんすか怒るのを楽しむもんだよ……とドSなアドバイスをくれながら、よしよしと俺の頭を撫でてくる。ついでに豊満すぎる胸に抱きしめられた。
むぎゅー。
……。
盛り上がった股間を、陽乃さんの下半身に押し付ける。和やかな空気が急に歪み、妖しい色を帯びた。
「……比企谷くん、すっごくおっきくなってるよ？　あっ、んんっ、やんっ、こすり、つけないで……っ。……もう……しょうがないなあ。お姉さんとスッキリしよっか」
陽乃さんが、子供をあやすような口調で俺に囁く。しっとり吸い付く肌に顔をうずめながら、俺は小さく頷いた。
×　×　×
服を脱ぎ捨て、陽乃さんをうつ伏せにする。足をぴったり揃えさせると、肉厚の尻肉がこれでもかという程目の前に晒される。
陽乃さんは枕に顔を埋め、両手で枕を掴んで無言で震えている。尻肉をつまんでこじ開けると、いやらしいピンクの割れ目から濃厚な牝の匂いと愛液が溢れ出した。

陽乃さんの太ももの上に跨り、いきり立つ肉槍をずぶずぶと差し入れる。
「あふぅぁぁぁぁぁ……っ」
陽乃さんが腰をこちらに突き出して積極的に肉棒を受け入れ、一番奥まで達する前に絶頂に達した。柔らかくもきゅむきゅむと締め付けてくる肉襞の動きは、牡の子種を一刻も早く搾り取りたいという強い欲求を感じさせる。艶やかなセミロングの黒髪と透き通るような白い背中に見惚れながら、子宮の入口をぐりぐりと擦る。
「あっ、ひっ、んぁっ、はぁん……うぁぁぁぁ……っ」
静かに、それでいて何度も絶頂に達しながら、陽乃さんは懸命に豊満な尻を擦り付けてくる。ゆったりとした身体の動きとは裏腹に、淫裂から溢れ出す愛液は下品なくらい大量にシーツを濡らす。声がとろとろに甘ったるくなり、おねだりするように尻で円を描く。
「陽乃さん……一回出しますよ」
「あ、今日は早いね……ぅあぁんっ!?」
膣の半ばほどで、一回目の射精をする。一回で収まる気が全くしないが故の、早めの射精だった。陽乃さんは完全に不意を突かれたようで、膣道を浸す白濁の感触に全身を震わせて溺れている。
「取り敢えずもう1回は出さないと満足出来そうにないんで、すぐ動きますね」
「やぁぁん……比企谷くんの、硬いままだよぉ……っ」
陽乃さんが喜びの喘ぎ声を漏らして、両手をこちらに伸ばしてくる。うつ伏せになったまま伸ばされた両の手は、不安げに温もりを求めていた。優しく握り返して再び抽送を始めると、陽乃さんは蕩けた声で気持ち良さそうに鳴いた。

× × ×

結局3回中出しして、陽乃さんとの寝起きのまぐわいは終わった。
「一緒に暮らしたら、取り敢えず1日10回ね」と言われた。あんたどこのビッチ先生だと思いながら、取り敢えず休んでて下さいと言って、中指と薬指で膣肉をぐりぐりと擦り上げて休んで(=気絶して)もらった。

気絶した陽乃さんの唇を見ているとムラッとしたので、そっと口に肉棒を入れると、まるで自動機能のように長い舌が肉棒を綺麗に舐め取ってくれた。1日10回というのはもしかしたら足りないかもしれないな……と思いながら、服を着て陽乃さんの汗やその他諸々を拭き取って毛布を掛けてから部屋を出る。

リビングに行くと、少し冷めた朝ご飯と、椅子に体育座りをしてこれ以上無い程分かりやすく拗ねている小町がいた。

……なんで？

小町は俺に気付くと、両膝に顔を埋めて恨めしげに俺を睨んだ。顔の上半分だけ覗いている上に上目遣いなもんだからとんでもなく可愛い。この顔を見る為に怒らせるのもありかもしれない。

「先手を取られた……」

小町が恨みたっぷりに呟く。ああ、そういうことね……。

「妹というアカウンタビリティを活かして寝起きのお兄ちゃんから搾りとろうと思ったのに……」

「それを言うならアドバンテージだろうな……」

何で説明責任が発生してんの……とげんなりしつつ、小町がさらりと言った搾りとるというフレーズにぞくりとする。朝からどんなことをさせられる所だったのか……。

とにかく、ここは小町を慰めねば。

小町の前に立ち、頭をくしくしと撫でて胸元に抱き寄せる。

「悪いな。お詫びに電気アンマするから」

「お兄ちゃん、死にたいの？」

やべえ。

心臓が物凄く冷たくなった。

本音がポロリしてしまった。つい。

「すまない。それじゃあ日頃の感謝を込めて電気アンマをしていいか？」

「死にたいんだね」

やべえ、本当に死ぬ。

小町の声が今まで聞いたことが無いレベルで冷たい。

次に発する言葉のチョイスをミスったら俺は死ぬな……と思ったが、ふと、抱きしめている小町の身体が微かに震えていることに気付く。

薄いタンクトップの中に手を差し入れて背中をさすると、小町が「やぁん……っ」とくぐもった声を漏らした。声とは裏腹に身体はまるで抵抗しない。

「……小町」

「……な、なに？」

「今、俺がお前のアソコをぱっと触って、もし濡れてたら……強制的に電気アンマを施します」

「ちょ、何言って……んはぁんっ!?」

ホックの外れた際どいホットパンツの中に手を差し込むと、既にショーツがぐっしょりと濡れていた。

「はい、決定」

俺の決定に、小町は小声で「ばか……信じらんない……」と呟いたものの、結局最後まで抵抗しなかった。

× × ×

小町のホットパンツを脱がすと、ぬち……といやらしい糸が引いた。脱がすのを途中で止めて糸に見入っていると、顔を真っ赤にした小町におでこチョップをくらった。すまんと謝りながら脱がせるというシュールな光景。

小町はブラをしていなかった。タンクトップとショーツのみの格好でソファに寝転がると、ぴんと天を向いた乳頭がタンクトップ越しにはっきりと浮き出ていて、即座に押し倒したくなる程の魅力を漂わせていた。

小町の横に座り、細い両足首を掴んでゆっくりと開く。小町は顔を真っ赤にして、足をV字に開いたまま両手で股間を隠したが、手がぐしょぐしょになるぞと告げると涙目で手をどかした。

右足を伸ばして、ショーツに触れる。足裏に、生暖かい液体を感じる。

ぎゅっ、と力を入れると、

「んぐぅぅぅ……っ！」
弓なりに反り返って、両手で口を覆った。
「口を覆うのは無しだ」
そう告げると、小町は目に涙を浮かべながら手を離し、ソファの生地を掴む。
足をリズミ良くぎゅっ、ぎゅっと押し込むと、ぷぢゅっ、ぐちゅっ、と卑猥な水音がリビングに響く。たっぷりと濡らしたバスタオルを踏みつけているようだ。
ぐちゅっ、にちゅっ、くちゅっ。
ぐちゅっにちゅっくちゅっ。
ぐちゅにちゅくちゅ。
ぐちゅにゅちにちゃくちゅにちゃにゅちくちゅくちゅくちゅくちゅ……。
「んにいいいいい……っ!!」
リズムを速めていくと、小町が歯を食いしばってもがき出した。許容量を超えた快感を逃がそうと必死で華奢な肢体をくねらせるが、責めを緩めず続けているので小町の表情は歪むばかりだ。小町の腰が跳ねる度に、水たまりの出来たソファがばちゃばちゃと音を立てる。
「お兄ちゃ……だめ、これ、死ぬ、死んじゃうぅ……っ!!」
小町が上体を起こして、必死で俺の頬に両手を伸ばしてくる。懇願に応じることなく責め続け、指裏に感じた小さな豆の親指でぐにりと押し込んでやると、小町は曲げていた背中を一気に反り返らせた。
「んぎぃぃぃ……っ!!」
獣のような声を上げ、おもらしのように大量の液体がショーツから溢れ出る。足を離すと、小町ははしたなく足を開いたまま荒い呼吸を繰り返した。
「……」
チャックを下ろし、先走り汁がぷっくりと玉を作った肉竿を取り出す。息も絶え絶えの小町のショーツをずらし、躊躇することなく挿入する。
「あぇ……っ？　熱っ……硬っ……あっ、うぁ……っ」

呆然とした表情で小町が喘ぐ。蜜壷の中は沸騰しているかのように熱く、小町自身は全身が脱力しているのに膣肉は強烈に締め付けてくる。腰を押さえて持ち上げると敏感な所を肉竿が擦ったのか、小町はにへらっと力なく笑ったまま全身を痙攣させた。

「うぁ……っ」

ごぶっ、ぶびゅるっ、どくっ、どくどくどく……っ。

小さく呻いて膣内を溢れ出す白濁で浸すと、小町は「あぁぁ……っ、あぁぁ……っ」と間延びした声を漏らして、顔を両手で覆ってびくびくと震えた。

ぬぽん、と肉棒を抜くと、数秒遅れて白濁が溢れ出し、ソファを浸している愛液と混ざって薄まる。

……うん。

我ながら、物凄く鬼畜だった。

× × ×

朝起きたのが何気に早かったのもあり、小町とシャワーに入った。小町はずっと半泣きだったので優しくシャンプーしてやると、思いの外すぐ機嫌を直してくれた。小町の幼い頃を思い出して微笑ましく思った。この後小町は俺の身体を洗おうとしてくれたが、そこでまさかの陽乃さんの乱入で大変なことになった。まず、2人に身体を入念に洗われた。4つの膨らみに身体中を洗われて、興奮でおかしくなりそうだった。そして身体を洗うついでに3回抜かれた。なんで？小町がボディソープで泡立てた手で俺の背後から肉竿をしごき、陽乃さんは俺とキスをしながら乳首を指でこねくりまわしてきた。1分と経たずに射精すると、もっと粘ってーと言われそのまま責められ続けた。今敏感になってるから……と言うと、更にねちっこく責められた。自業自得である。

卑猥すぎるシャワーを終えて登校の準備を済ませると、小町はもうちょっと準備があるから先に行くように言われた。陽乃さんは自主休講するからもうちょい寝るそうだ。俺の部屋なのを忘れてるんだろうかあの人。帰るのが怖い……。

結局家を出たのは、いつも登校する時間より1時間半も前だった。

朝起きた時刻が本来余裕で二度寝する時間だったんだけども、あんなことを立て続けにやってはとても家で落ち着いていられない。学校はかなり早い時間帯から開いているらしいので、教室で勉強でもするとしよう。

まあ、学校に行けばいつも通りの生活が……等という安易なフラグを心の中に立てながら靴を履く。

学校に行けばいつも通りの生活が待っている？

そんなの、「押すなよ、絶対押すなよ！」のフリと同義でしかないというのに。

……。

何だかんだで、何かが起こるのを期待している自分がいる。

ズボンの中を膨らませながら、寝不足の割に元気いっぱいで玄関を出た。

続く。

（2）

いつもなら自転車で行く道を、のんびりとした足取りで歩いて行く。それなりに距離はあるけれど、今日は何となく歩きたい気分だった。日射しは歩を進めるごとに増していき輻射熱もえげつないことになっているが、今の俺の昂揚した気分にはよく合っていて心地良くさえ感じた。

そんな陽気な気分でも、日射しをずっと浴びているのは中々にきついものがある。途中で通りかかった公園で、日陰にベンチを見かけたので少しばかり涼んでいると、目の前をランニングしている女性が通りかかった。軽快なテンポで走る姿がとても様になっている。

なんだ、えらくスタイルの良い身体だな……と思っていると。

「あら、ヒッキーくん？」

「……へ？」

ランニングしている女性が立ち止まり、聞き慣れた声を発した。こんな呼び方をするのは一人しかいないが、まさかそんな……と思いながら女性をよく見ると、最近よく会うようになった人だった。

「……何してんですか」

俺の問いにふっと優しい笑みを浮かべたのは、結衣のお母さん、略して由比ヶ浜マ――以後彼女と呼ぶことにする――だった。

「何って、見ての通りよ～」

そう言って彼女は、元気良く走る動作をする。年齢をまるで感じさせない軽い身のこなしに驚きつつも、俺の意識は彼女の服装に向いていた。

窮屈そうなタンクトップ。

爽やかなショートパンツ。

そして腰にはランニングポーチ。

完全にランナーの格好だった。しかも妙にこなれた感じの。

……全っ然イメージに無いけれど。

めっちゃ似合ってる。

何だこの人。

ていうか爽やかなのに、身体付きが艶めかしいせいで物凄くエロく見える。汗ばんだ身体がもう凶器にしか見えない。

……股間が……痛いです……。

悶々としていると、彼女は楽し気に笑いながら歩いてきて、俺の隣に座った。何で最初から二の腕が触れるくらい近いのか分からないです。

「昨日ね～、結衣と一緒にお風呂入ったんだけど～」

「その話、２万字程度のレポートにして頂けますか」

「それはちょっと大変ね～」

エッチな気持ちに正直なのは良いことよ～、とのんびりした口調で言いつつ、彼女が視線を落とした。俺の下半身が見られたことに気付きぎくりとすると、彼女が妖しく微笑む。

あれ、大丈夫……だよな？　朝だし、公園だし……。

……。

……結構、色んな人と色んなタイミングで色々やってた気がする……。

「お互いお腹を触ってたらね、結衣に『ママ、ちょっと太った？』って言われたのよ～」

「ああ、それで……」

「そんなことないわよ～って言って結衣のことを５回くらいイカせたんだけどね～」

「……」

こわっ！

それでも、体脂肪も図れる体重計に乗ったら数字として出ちゃってね～、と彼女は頬に手を当てて物憂げな表情になる。主婦のような――実際主婦の筈だけど――表情でありながら、妙に美しくて色っぽい。彼女の性欲を鑑みれば当然な気もした。

「ヒッキーくんがもっと頻繁に家に来てくれたら痩せるんだけど～」

「んなことしたら、あなたが痩せる３倍くらいの勢いで俺が痩せます……」

以前、結衣とする気満々で家を訪ねたことがあった。その日は結衣

が急用で帰るのが遅れ、それを知った彼女がその口と豊満な乳房で自身の身体が真っ白になるくらいに奉仕をしてきたもんだから、結衣が帰ってきたらそれはもう絵に描いたような修羅場になった。土下座する俺と、真っ白になりながらあらあらと呑気な様子の彼女と、涙目の結衣という地獄絵図。ちなみにその後は「母娘で強制的に射精させる」と言う流れに落ち着いた。何であの流れに落ち着いたのか全く分からんしあの日は本当に尿道が痛かった。流される俺が悪いんだけども。

「それで昨日の夜に昔着てたものを引っ張り出して、雰囲気だけでも作って走ってみようと思ったのよ～」

「あ、そういうことだったんですね」

「そうなのよ～。このタンクトップなんかぱっつぱつでしょ？　昔よりきつくなっちゃって～」

「いや、それは……」

太った云々ではなく、胸が物凄く大きくなっているとしか思えない。双丘で盛り上がり過ぎて、若干へそ出し気味になってるし。ていうか先端に浮き出てるのって……まさか……。

俺の視線に気付いた彼女が、胸の谷間を両手で隠してぷりぷりと怒った。

「もう、ヒッキーくんったら見過ぎよ～」

「あ、すみません……」

「もっと見たい？」

「え、良いんですか」

「ちょっと付き合ってくれるなら良いわよ～」

「そんなのお安い御用で……って、え？」

「はい、交渉成立ね～」

そう言った彼女が、俺の右手小指に自身の左手小指を絡める。その仕草一つで心臓が大きく跳ね上がり、下腹部に血流が集まる。恐る恐る彼女に視線を向けると、彼女はゆっくりと目を細め、ぺろりと舌なめずりをした。

あ。

食べられる。

×　×　×

ベンチの周りには、どうしてなのかと思う程人が居なかった。時間帯が早いにしてももう少し人がいてもおかしくないのに……とは思うが、居ないものはどうしようもない。

彼女が腰を上げ俺の前に立つと、蹲踞のような姿勢で腰を下ろした。そして可愛らしい顔を俺の股間に近付けて、にこりと微笑む。

「こういうのはお好きかしら……？」

甘ったるい声で囁いて、口でチャックを開ける。上目遣いでしっかり目を見ながら開けられると、優しくも淫猥な瞳に吸い込まれそうになる。彼女は開いたチャックに手を滑り込ませ、手際よくパンツを下ろして肉棒を外気にさらけ出した。灼熱の様相を呈している外気が涼しいと思えたのは、それだけ肉竿が熱を持っているからなのだろうか。

「いつ見てもおっきぃわぁ……」

彼女がうっとりした声で言い、裏筋の匂いをすんすんと嗅ぐ。亀頭にふっと息を吹きかけると、鈴口にキスをした。先端に吸い付いたままちゅるちゅると音を立てると、先走りの汁が残らず吸い取られた。

彼女がタンクトップの裾を捲る。まさかここで脱ぐのか……と思ったが、流石にそこまではしなかった。

――けれど。

「下から入れてあげるわね～」

「え……うおぉっ!?」

タンクトップできつく寄せられた乳房が肉棒の上からかぶさってきて、下側からまるで挿入させるかのように挟んできた。今まで走っていた為か、いつもの極上の柔らかさに熱が加わっていて、更にじっとりとかいた汗が卑猥なぬめりを与えている。

「どうかしら？」

「……熱くて、柔らかくて、ぬめぬめしてて……やばいです……っ」

そう、良かった……と彼女が妖しく目を細めて――自分の両乳を掴むと、ぐいと上に持ち上げて一気に下ろした。

「うあ……っ!?」
だぱん、と肉の弾ける音がして、全身を甘い電流が貫く。淫裂に挿入していた肉棒を抜いて、もう一度思い切り腰を突き立てた時と同種の快感が走ったのだ。
彼女は俺をじっと見つめながら、凶悪な程熱くて柔らかい乳房で肉棒を嬲る。汗は程良い潤滑油になり、いきなり全力で動いても何の抵抗も無かった。
ぐちゅっ、ぱぢゅっ、じゅぷっ、じゅぱん……っ。
「うふふ、何だかエッチしてる時みたいな音がするわね……」
「待って、くださ……これ、こんなの、無理……っ」
ベンチを掴んで歯を食いしばっていると、彼女が意地悪な笑みを浮かべた。
「あらあら、女の子みたいな声を出しちゃって。……可愛いわねえ」
「……っ!」
顔が一気に熱くなったのと同時に、彼女が乳房への抽送を再開する。先走り汁と彼女の汗が混じり合って、肉の中で響く音がどんどん卑猥なものになっていく。
ぐじゅぶっ、ぱじゅぶっ、ぶじゅっ、じゅぱぶ……っ。
「あぁぁぁ……っ、あぁぁぁ……っ」
腰を浮かせてがくがく震える俺を、彼女が熱を帯びた瞳で見つめる。
「うふふ……本当に可愛いわねぇ……。ああ、喉が乾いちゃったわ……」
だからね……と言って、彼女がぱっくりと口を開け、紅い舌をてろりと垂らす。女性の舌は年齢を重ねるごとにいやらしくなるのだろうかと思う程、彼女の舌は夏の日射しを卑猥な色合いに変換させていた。
豊満な乳房から亀頭をつるりと出して、ぱくりと咥える。鈴口を舌先でほじり雁首を舐め回し、更に乳圧を高めて肉竿をしごき上げて来る。太ももががくがくと震え、歯がかちかちと鳴り、あっと言う間に限界が訪れた。

「むり、もうむり、むりむりむり、もう、出る、出る出る、出る……っ!!」
彼女の頭を反射的に押さえ込んで、喉奥まで突っ込む。
――ごびゅっ、ぶびゅぶっ、ごぶぶりゅびゅぶぶ……っ。
「んぶぅぅ……っ、んっぐ、んぐ、んぐ、んふぅぅん……っ」
蛇口を捻りすぎたかのような勢いで噴き出した白濁を、彼女はうっとりとした顔で残さず飲み込む。幾度もの脈動を終えた後も、彼女は入念に亀頭を舐め取り、乳房でしごき上げ、残った白濁を残さず搾り取った。
彼女が口を離すと、唾液の糸以外何も見えなかった。俺が射精したことは、匂い以外では分からない程に。それだけ、綺麗に飲み込んだのだ。
「……ぷはぁ……っ。うん、ぷりっぷりで最高だったわ～」
「……あなたは何ですか、サキュバスか何かなんですか」
「ん～……どうなんでしょうね～」
否定しないのかよ……と驚いていたら、再び下半身に電流が走った。見ると彼女が再び亀頭をぱっくりと咥えている。
「……あの、何してんですか？」
「……んふぅ？　……ぷはっ。……今のだけだと、ちょっと飲み足りなくって～」
何その二次会に行きたそうな台詞……等と言うツッコミも、再び始まったパイズリとフェラによってあっと言う間にかき消された。
結局この後もう2回射精させられて、大量に噴き出した精液は彼女が全て綺麗に飲み込んだ。更にショートパンツとショーツをまとめてずり下ろした彼女が俺に跨ってきて、えらく卑猥な体勢でまぐわった。
家で調子に乗った罰かな、と思うくらいにたっぷりたっぷりと搾り取られると、彼女はつやっつやの表情でお礼を言い、「またしましょうね」と耳元で囁いてきた。次誘われた時も俺は絶対断れないだろうな……と思いつつ、遠くで手を振る彼女に手を振り返す。
……まだ、学校に着いてないのに……。

もう既に、３人としてしまった……。

続く。

（3）

いつもより1時間半早く家を出て学校へ向かった訳ですけれども。

途中で淫魔（比喩とも誇張とも言えない）と出会って、それはもう体力と精力を派手に削られまして。その上のんびり歩きたいなんて気取って自転車も持ってこなかったもんだから、学校までの残りの道はそれはもう辛かった。灼熱の日射しが心地良いとか言ってたついさっきの自分を呪いたい。何だよ夏、超鬱陶しいな。人はこれを手のひら返しと呼ぶ。

――で、ふらふらの状態で歩いて行けばどうなるかと言うと……

「先輩、ちゃんと反省してますか？」

「はい……」

遅刻して、校門で待ち構えていたいろはに見事に捕らえられ、そのまま生徒会室に連行され説教されるという展開になる。

俺はいろはの前で座らされていた。

しかも正座。

いろはは椅子で足を組んでいる。時折スカートの中身が見えそうになるが、その度に「良いですか、大体先輩はそうやっていつもいつ……へんたいだー！」と叫ばれる。簡単に誤解されて警察沙汰になるから、大声でのツッコミは本気で勘弁してほしい。

それにしても。

……。

……俺が遅刻してからの流れ、おかしくないか？

なんでも、いろはは風紀委員の仕事をこうしてたまに生徒会のメンバーでやっているらしい。登校してくる生徒に挨拶をして、生徒の乱れた服装を指摘し、遅刻した人をとっつかまえる。普段自分たちがやらない仕事をすることで、他の委員がどんなことを頑張ってくれているのかを把握するという目的らしい。その心意気は立派だし、遅刻したのは俺が悪いので何も言えないのだが。

俺がぎりぎり遅刻で校門をくぐった時のこと。

俺を見つけるなりいろはは、

「はい、遅刻者一名発見しましたー。皆さん、後は戻って良いですよ。お疲れ様でした」
「え？　あ、ああ、分かった。お疲れ、会長……」
何故か生徒会の他のメンバーを解散させ、いろはは俺を生徒会室に連れてきた。そして即座に正座命令である。夏場でも生徒会室の床はひんやりしていて、ズボン越しでも気持ちが良い。いや、そうじゃなくて。
「……何でここに連れてきたんだ？　それにお前、このままじゃ１限が……」
と言った直後、１限開始のチャイムが鳴る。ちなみにＨＲは既にサボっていた。何で遅刻にサボりを上塗りしているんだろうか。
俺の言葉に、いろはは組んでいた足を解いて、俺の顔の前に手を出して人差し指をくいくいと折り曲げた。立てと言うことか……？と思い、恐る恐る立ち上がる。するといろはも続けて立ち上がり、いきなり俺の胸元に顔を近付けた。すんすんと一心不乱に鼻を鳴らす。何だか様子がいつもと違う。
「お、おい、どうしたんだ」
動揺して後ろに下がるが、いろははぴったりと付いてくる。やがて壁まで追い詰められると、いろははゆっくり目を細めた。獲物を追い詰めるような表情にぞっとして、壁に両手を付いた。
「……先輩から、いろーんな女の人の匂いがするんですよねぇ……」
こわっ。
全身から一気に血の気が引いた。下腹部が面白い程萎む。とぼけるのは到底無理だと思い、けれどいろはの表情を見るのも憚られ、顔を背けて無言を貫く。
するといろはは、俺の胸元に手を当て、愛おしそうに撫でた。
「……別に怒ってはないですよ？　ただちょっと、上書きはしておかなきゃなって」
「……え……んむ……っ？」
いろはが俺の首に腕を巻き付けて抱き寄せ、あっと言う間に唇を奪った。すぐさま唇が離れ、まるで夢の中に居たような気になる。

「……ここでキスするの、久しぶりですね」
「……そうだな、２０１５年の５月１９日ぶりだ」
「……何ですかその日付……？」
「すまん、何でもない」
　いかんいかん、ついメタってしまった。
「お前がまさかこんな素敵なキスキャラになるとはな」
「キャラ……？」
「すまん、マジで何でもない」
　感慨に耽って更にメタくなってしまった。
　俺にジト目を送って来るいろはの気を紛らわせようと、華奢な肢体を抱き寄せて唇を奪う。
「んっ……ふっ、んふぅんっ、ふっ、ちゅる、んむふぅぅ……っ」
　舌を絡ませ唾液の交換をすると、いろはの表情はあっと言う間に蕩けてしまう。俺の二の腕を色っぽくさすってきた。手を繋ぎたい合図だと察して、両手を繋ぐ。指を艶めかしく絡ませ、更に互いの粘膜を味わう。いろはが興奮するにつれて、美少女が口から溢れ出させる唾液はどんどん甘くなっていく。
　キスをしている時のいろはの表情は忙しい。
　うっとりと目を細めたかと思えば、舌をねじ込むと目をぱちくりさせて驚き、唾液を流し込むと眉をひそめて一生懸命に飲み込む。一つ一つの表情が、キスを繰り返す毎に魅力を増してゆく。この行為に生涯飽きることはあるのだろうかとさえ思う。
　口を離すと、２人の間に糸が伸びた。糸を舐め取ろうと互いに顔を近付けると、また自然と唇が触れ合う。
　食事をするよりも、水を飲むよりも――もしかしたら、呼吸をするのと同じくらいに。
　２人のキスは、自然と始まり自然に終わる。
「ぷはっ……せんぱい……せんぱいぃ……っ」
　キスにより足をがくつかせたいろはが、俺が曲げた膝にスカートの中をこすり付けてくる。ちょっと足を前に出せば、目に涙を浮かべて喜びの声を上げた。

再び俺を抱き締めて、首にキスの雨を降らせてとろとろに蕩けた声で囁く。
「んあぁ……っ、せんぱい……せんぱい、せんぱい、好き、好き、好き、大好き……っ」
震えた。
真っ直ぐな愛情が、何一つ偽ることなくぶつけられる。今すぐ目の前の女性を犯せ、自分のものにしろ、そして生涯離すな――と、頭の奥でもう一人の自分が叫ぶ。
いろはの手を掴み、ズボンのチャックに添えさせる。俺の耳元で熱い息を吐きながら、いろはがチャックを下ろす。
パンツを下ろして外気に晒した肉棒は、あれだけ射精した事を綺麗に忘れたかのようにいきり立っていた。青い筋が浮かび、蹂躙する相手を求めて小刻みに震えている。
「あっ、は……っ、おっきい、やぁん、硬い……もう、もう……っ」
肉棒を手でさすりながら、いろはが何度も息を呑む。空腹に飢えた獣が、餌を目の前に我慢しているかのようだ。スカートの中に手を差し入れると、くちゅりといやらしい音がした。ショーツをずらして挿入する場所が見えるようにすると、いろはがもう一度息を呑んだ。ふらふらとした足取りで壁に身体を向けて、そのまま両手を壁に付けて腰を突き出す。ここまで来て、欲求に逆らう訳がなかった。
「……声、漏らさないようにしなきゃな」
言って、いろはの膣口に亀頭を宛がって固定し、いろはの口を手で塞ぐと同時に――一番奥まで一気に貫いた。
「んふぅぅぅ……っ!!」
いろはの背中が波打ち、不規則な痙攣をする。抽送を始めると細い足は内股になり、がくがくと震え出した。太ももを伝った愛液は遠慮なくいろはの足を濡らし、すぐ下の床にも滴る。いろはの口を塞いだ手の指の間から大量の唾液が漏れて、人差し指をいろはの口に挿し込むと美味しそうに舐めしゃぶった。
「はむっ、ふぅん……っ、ひぇんぱい……おっきいれす……おくまで、とどいてます……きもひいぃ……っ」

子供のような声で、それでいてあまりにも卑猥な言葉を吐きながら、いろはが何度も達する。学校の中でも最も真面目な印象のある生徒会室に、腰を打ち付ける音や淫猥な水音が染み込む度に、俺自身も馴染みのある空間を汚していくような背徳感が湧き上がる。
「お前、普段ここで仕事してるのにこんなことして良いのか？」
「やぁ……っ、言わないでぇ……っ」
「お前がここに俺を連れてきたんだろう？　しかも俺から他の女の人の匂いがするからなんて言う理由で。最初からこういうことをしたかったんだろ」
「やぁ……っ、やぁぁ……っ」
子供がいじけたように顔をぶんぶんと振りながらも、華奢な肢体は小さな絶頂を何度も繰り返す。足元には温かな水溜りが出来ていた。
「全くお前は……本当に悪い子だな」
言って、ばちゅんっ、と一際力強く腰を打ち付けると、「ひぃぃんっ!?」とか細い声で鳴いた。
「……はい、わたし、悪い子です、だから、おしおき……んはぁぁんっ!?　ひぐっ、おひっ、おひおきっ、ひぐっ、ひて、ひぃん……くりゃひゃい……んあぁぁぁあぁぁぁぁっ!?」
抑えることなく嬌声を上げるいろはの口を押さえ、精一杯腰を打ち付ける。いろはの口を押さえても、互いの身体がぶつかり合う音はひどく大きく卑猥に響いた。
下半身の決壊が近付き、いろはの耳元で呟く。
「……出すぞ」
いろははこくりと頷き、膣肉をきゅむきゅむと締め付けた。
腰を打ち付けるスピードを上げる。射精の欲求を込み上げてくると肉棒はむくむくと硬さを増し、それがいろはを更なる絶頂に追い込み、膣肉の締まりは更に増した。
「出る、出る、出すぞ……っ！」
「んふぅぅっ、ふぅぅぅぅ……っ!!」
最後に腰を突き入れると、亀頭でノックした子宮口に大量の精液を注いだ。

「んふぅぅぅん……んふぅぅぅぅ……っ!!」
いろはは立っているのもやっとな程足をがくつかせ、漏らしたのかと見紛う程の愛液を噴き出した。濃厚な牝の匂いにまるで勃起が治まらないが、流石にこれ以上はまずい。早く掃除をしなければ……と思いながら肉竿を抜くと、いろはが緩慢な動きで振り向いた。
「せんぱぁい……おっきくてたくましいおちんちん、きれいにしてあげましゅね……っ」
「えっ、ちょっ、うぁ……っ!?」
床に卑猥な水たまりを作ったままお掃除フェラをされて、結局すぐにもう一度射精をして、その為のお掃除フェラでもう一度抜かれた。最後は中指と人差し指で膣肉の敏感な所を何度も抉って（強制的に）休んでもらうことにした。
時計を見る。
２限が始まっていた。
……俺、駄目人間にも程があるだろう……。
一先ずいろはの身体を拭いて、それから床もちゃんとモップで拭いて……と頭の中で何をするかぐるぐる考えていると、いろはが寂しそうな表情をしていることに気付く。頭をくしくしと撫でてやるといろはは嬉しそうに目を細めた。しっとりと汗ばんだ亜麻色の髪はとても甘くて良い匂いがした。
……この後は、流石に何も起きないだろう。
これは決してフリではない。
押すなよ的なフリではない。
続く。

（4）

いろはとさんざっぱら卑猥なことをした後の授業では盛大に寝てしまった。朝起きてからの流れを考えれば当然と言えたが、いかんせん寝た授業が悪かった。平塚先生の現文の授業で寝てしまったのだ。周りの生徒に見えないようにまあまあの強さ（≒致命傷）でどつかれた。隣の席の川崎だけ平塚先生の攻撃が見えていて、心底怯えているようだった。平塚先生には「放課後生徒指導室に来なさい」とまで言われた。……あれ？　これまでの流れを考えると……まいいや。

そんなこんなで昼休み。

くぁ……とあくびをしながら身体を伸ばす。さっさと昼ご飯を食べてもうひと眠りするか……とぼんやり考えていたら、隣からやけに視線を感じた。

「……どうした」

見ると、川崎が、を赤らめながら高速で俺をチラ見していた。性別が逆だったら紛う事無き変態認定をされていたと思う。

「……あの、これ……っ」

川崎が恐る恐る取り出したるは、妙に古めかしいデザインの風呂敷に包まれたお弁当箱。

「……」

「……」

「……俺に？」

「……うん……」

「……いいのか？」

「……お……」

「お……？」

「屋上……っ」

「屋上……って、おい、どこに……っ？」

あまりにも煮え切らない態度の川崎に首を傾げていると、俺の机に弁当箱をぽすりと置いて高速で教室を去ってしまった。走っていった方向と、川崎自身も弁当を持っていたことから、どうやら屋上で一

緒に弁当を食べたいらしいと言うことが伝わった。どんだけ可愛いんだあいつは。
頭をがしがしと掻いて、ふっと頬を緩める。
空を見上げると、少しばかり太陽を隠した雲が、日射しを程好く調節してくれていた。
何だかむずむずする気持ちを抑えながら、俺は川崎の後を追った。
× × ×
鍵の壊れた屋上への入口を抜けると、誰もいなかった。俺の勘違いだったかときょろきょろした後、そう言えば川崎はよく給水塔の上に居たな……と思い、視線を上げる。
目の前に、黒のレースの下着が見えた。
正確に言えば、梯子を使って降りようとする川崎のスカートの中のショーツが、ちょうど強めの風に捲れてこれ以上無い程綺麗に見えた。
息を呑んで凝視する。
前より、ちょっと際どい下着だった。
わお。
「んな……っ!?」
宝石を見るような目つきで俺がガン見していることに数秒遅れて気付いた川崎が、高速で給水塔に登り直した。本当に速かった。しかしその間もスカートの中は丸見えだった。
やっぱり、前より際どかった。
わお。
「……あ、あんたね……っ」
川崎が上から顔だけひょっこりと出して、涙目で睨みつけてくる。自分の可愛さをもう少し認識してほしい。まだこちらを警戒してるペットの小動物みたいだ。
この状況をどうしたものか……と思っていると、川崎がこちらに向かって手を伸ばした。
「……ん、どうした？」
「弁当持って来たでしょ？　梯子登るの大変だろうから、持ってて上

げる」
「おお、すまん」
そう言う川崎は一体どんな風にして登ったんだろう……と思いながら弁当を手渡して、のほほんと梯子を登った。

給水塔はほんの数メートル登っただけの場所にあるが、それでもそこから見える景色は別世界だった。見える角度が少し広がるだけで、街全体の印象がまるで違う。よく見知っている街と、目の前にいる感情表現が不器用な女の子。新たな面を見付けた時、好奇心が湧いて愛おしく思えるという意味では似ている気がした。
「……すげえ良い眺めだな……」
「良いでしょ。あたしも気に入ってんだ」
「ここで強い風が吹く度に、川崎は一人で恥じらってる訳だな……」
「……あんた死にたいの？」
「ごめんなさい、ごめんなさい、弁当頂きます」
調子に乗ってすぐに謝罪をする、お調子者の鑑である。そんな設定無かったけど。川崎は俺を見て呆れたように笑うと、「……どうぞ召し上がれ」と照れくさそうに言った。
一緒に弁当を食べるなんて言うと、あーんするイベントが発生するかもと思ったけれど。教室と屋上を往復する時間を考えるとゆっくりする時間も無く、後は2人で街の景色を眺めながら弁当を食べるだけだった。日陰は存外涼しく、座り込んだアスファルトはひんやりと冷たい。時折吹く強い風が心地良く、何より、川崎の家庭的な弁当がとても美味い。思わずかきこんでいると、川崎が母親のような笑みを浮かべて俺を見た。妙に気恥ずかしくなって、ひたすら食べ続けた。俺が目を逸らした後も、きっと川崎は俺を見ていた気がする。
こうして、俺と川崎ののんびりした昼休みが終わった。
本編でキスをした所で止まっていると、何とも平和だなと思った。
本編って言っちゃったよ。
× × ×
ほんわかとした幸福感に包まれて迎えた5限目。

５限目は体育で、体育館内で好きなことをやって良いというゆるゆるのお達しが出た。ぼっちの身には辛い流れだが、生憎俺には愛しの戸塚がいる。そうだ、俺には戸塚がいる。ぼっちじゃない。戸塚だ。何を言ってるんだろう俺は。

教師の話が終わった瞬間、戸塚の下へと急いだ。戸塚はきらきらした瞳で俺を出迎えてくれた。

やばい、どうしよう。

抱きたい。

今俺は何て言った。

両頬をばちんと叩いて煩悩を振り払うと、「八幡、大丈夫!?」と戸塚が心配してくれた。綺麗な瞳が潤んでいる。どうしよう、責任を取るべきだろうか。取るべきだろう。取ります。

「……」

冷やかな視線を背中に感じて振り向くと、結衣がバレーボールを手にして半端ではないジト目を送っていた。結衣のキャラが違ったら「何だこのごみ虫は……」とか言いそうなレベル。

急いで戸塚に向き直り、２人で遊ぼうと提案する。戸塚は二つ返事でオーケーしてくれた。やっぱり抱きたい。やばい、背中に視線が突き刺さった。視線の数多くない？　と思って振り向いたら、川崎にも睨まれていた。あ、あれ、昼休みの柔らかな表情はどこへ……？

逃げるように戸塚の手を引いて、体育館の隅へ移動した。手を握ったのに他意は無い。純粋なる愛情である。

×　×　×

授業の終わりまで戸塚と延々とバレーボールのトスをし合っていた。きゃっきゃうふふ感が半端無かった。更にきゃっきゃうふふすべく、今度は海に誘おうと思う。戸塚とするなら例え石を積んで戻すだけの作業でもきっと楽しい。何でこの例えを出したのかは分からない。

「えーっと……ああ、丁度良い。比企谷と由比ヶ浜はボールを片付けてくれるか」

『げ』

体育教師がきょろきょろと辺りを見渡し、偶然体育倉庫の近くにいた俺と結衣を指名してきた。その瞬間クラス中のボールが俺と結衣の下へ殺到する。結衣の前にあるかごには皆丁寧に自分で入れにくるのに、俺の前のかごに対しては皆してぞんざいに投げてきた。調子に乗ってバスケのシュートみたいに投げて外した戸部のダサさが異常。はにかみながら手伝ってくれる戸塚の優しさは至上。

他の生徒がぞろぞろと体育館を出ていき、教師も「すまん、俺も次の準備があるから任せて良いか」と軽く謝って出ていく。戸塚は気にしてくれていたが、気を遣わないで帰って良いぞと言って帰した。

扉を半開きにした状態で、結衣と片付けをする。

「あはは、外れクジ引いちゃったね」

「おお、偉いぞ結衣。よくそんな言葉知ってたな」

「誰がバカだっ!?」

こんな会話をしながらも、ゆるゆると片付けをする。

こんな雑務を押し付けられては、着替えの時間も考えれば確実に6限に遅刻する。後で体育教師にきちんと責任をなすり付けないといけない。

「……」

結衣をちらりと見やる。

体育でじっとりと汗をかいたTシャツは肌に張り付き、豊満な肢体のラインがはっきりと浮き出ている。よく見れば内側の下着がうっすらと透けて見えた。

……何を考えてるんだ俺は……っ。

頭をぶんぶんと振って煩悩を払おうとするが、湿度の高い倉庫の中ではますます汗をかいてしまい、脳が熱に浮かされて正常に機能してくれない。

「……ひ、ヒッキー……見すぎだし……っ」

結衣の言葉にハッとする。どうやら俺はぼんやりと考えている間もずっと結衣を凝視していたらしい。

「……すまん、つい」

「ついってなんだし……もう……っ」

結衣が頬を赤らめて、もじもじと身体をくねらせる。
あと、その……と、結衣が俺から遠ざかりながら、いつになく歯切れの悪い言葉を口にする。
「どうした」
「……そ、その、汗、すごくかいてるから……あんまりあたしに近付かない方が良いかも……っ」
そう言って、結衣が艶っぽい唇を震わせて、胸と下腹部を手で覆う。
――カチッ、と。
頭の中で、何かのスイッチが入った音がした。
「……そうか、汗をかいてるのか」
「う、うん……って、ちょっとヒッキー、何してるの……っ？」
話しながら体育倉庫のドアを閉めると、結衣の声が震えた。
「ドアの内側からも鍵をかけられるんだな。あと、どうやら次の時間はどのクラスもここを使わないらしい」
「……ば、ばか、ヒッキー、何言ってんの、こんな所で出来る訳……っ」
「ん、何のことだ？　俺はまだ何も言ってないぞ？」
俺の言葉に、結衣は顔を真っ赤にして俯く。
結衣に近付く。
結衣が遠ざかる。
また、結衣に近付く。
また、結衣が遠ざかる。
じっくりと、結衣に近付く。
泣きそうになりながら、結衣が遠ざかる。
結衣の背中が壁に付いた。
逃げ場の無くなった結衣に、俺が一歩近付く。
目と鼻の先に、結衣の蒸れた肉体がある。結衣が汗をかいているというのは本当だったが、匂いは甘いばかりで……興奮が更に高まるだけだった。
結衣の肩を掴むと、肉感的な身体がびくりと震える。結衣が俯いた状態から顔を上げると、その瞳は潤んでいた。
「……ばか……っ」

小さく小さく呟いて、結衣が顎を上げて目を閉じる。
倉庫のドアをちやりと見やって、改めて息を呑んだ。
続く。

（5）

「んっ、んっく、んふぅん……っ、ふぅんっ、はっ、んんんっ、んふぅぅん……っ」

結衣の舌を口いっぱいに頬張って啜ると、結衣の身体ががくがくと震えた。豊満な乳房を揉みしだいて堪能する。手をいっぱいに広げた所で収まらない乳鞠は、下着とTシャツ越しでも十分すぎるくらいに柔らかい。

「ん……ぷはぁっ、あっ、あんっ、やぁっ、んくぅぅ……っ」

口を離して、乳房を嬲られる結衣の反応を存分に楽しむ。弾力のある乳肉は揉んだ手を緩める度に元の形に戻ろうとぷるんと膨らむ。結衣の表情はだらしなく蕩けて、足は既に立っているのが精一杯だと主張するように震えていた。

「……結衣。脱いでくれるか」

「……うん……っ」

「あ、下着だけな」

「変態だっ!?」

こんなやりとりをしながらも、結衣の背中をさすり、耳に指を入れ、首を撫で、乳肉を揉みほぐす。変態だ何だと言いながらも、結衣には既に逆らう意思は全く無くなっていた。

恥ずかしそうにTシャツをめくり上げると、暴力的なまでの乳肉がぶるんと姿を現し、重力により上下に揺れた。見蕩れていると今度はブラのホックに手を付けて、ブラを外す。

重力の中でも張りを保った乳鞠が、先端に綺麗なピンクの突起を携えていた。

ごくりと唾を飲み込むと、音が聞こえたのか結衣が頬を赤らめる。すぐさまTシャツを着直してきょろきょろと辺りを見回すと、ボール籠の縁にブラを置いた。

「……下も脱「下も脱いでくれ」早い!?」

結衣の質問に食い気味に答えると、「うぅ……ばかぁ……っ」と涙目で俺を睨みながら短パンに手を掛けた。ずるりと引き下ろすと、フリ

ルの付いた可愛らしいピンクのショーツが顔を出す。結衣と目が合って頷くと、恥じらいながらもショーツを脱いだ。下腹部とショーツの間にうっすらと引いた糸に、結衣は気付いているのだろうか。俺の視線に耐え兼ねたのかすぐに短パンを履き直すと、ブラと同じようにショーツを籠の縁に置いた。

改めて結衣の身体を見ると、汗でぴっちり張り付いた胸の先端に桃色の突起がはっきりと浮き出ていた。乳房がつんと前に張っている分、突起の存在が際立つ。

誘われるように結衣の乳房に手を伸ばし、２つの乳頭をぐにりと摘む。

「んはぁっ!?」

全身に電流が走ったかのように結衣の身体が痙攣し、崩れ落ちそうになった結衣が俺の肩を掴んで何とか持ちこたえる。

「あっ、うっく、やぁっ、だめ、本当に、うんん……っ」

Ｔシャツ越しに張り詰めた乳首をこしこしとしごくと、悩ましく身体をくねらせながら可愛い声で喘ぐ。緩みきった口の端にうっすらと涎が見えた。

「う……っ？」

結衣の手が、いつの間にかこちらの股間に伸びていた。愛おしそうに撫でさすり、柔らかな快感の電流が下腹部を侵食する。空いた腕をこちらの首に回して、まるで縄張りを主張するかのように口付けをしてくる。結衣のスイッチも完全に入っているようだった。

結衣の手が、こちらの短パンをずり下ろす。パンツ越しに勃起した肉棒の裏筋を愛おしそうに撫でて、パンツもずり下ろした。

「ふっ、んんっ、ちゅっ、んふぅんっ、はぁんっ！　んっ、んっく、うんん……んうぅぅ……っ」

結衣がこちらの首や肩を犬のように舐め回し、吸い付き、舌先でつつく。肉棒をしごかれると先走りの汁がこぼれてにちにちといやらしい音を立てて、骨が抜け落ちてしまったかのようにがくがくと震える。情けない声が漏れるのを防ぐのが精一杯だった。

「結衣……着たままで、出来るか……？」

「……」
俺の言葉に、結衣はぼうっとした表情のままこくりと頷く。身体を離すと、俺は段数の少ない跳び箱に腰掛けた。結衣は髪を耳の上にかき上げると、舌をてろりと出して躊躇うことなく肉竿を咥え込んだ。
「ふっ、んくちゅっ、ちゅくりゅっ、ちゅぷっ、ふぅん……はぅんっ、んふぅ……っ」
最初の恥じらいはどこへ行ったのか、完全な牝の顔になった結衣が美味しそうに肉竿を舐めしゃぶる。社交的で明るさ溢れる普段の彼女の姿を知っていると、今の姿とのあまりの差に頭がくらくらする。
結衣は肉竿から口を離すと、口の中にむぐむぐと唾液を溜め、てろりと亀頭に垂らす。通常の口淫よりも念入りに肉竿を唾液で浸すと、自らのTシャツを捲った。重量感のある乳房の下半分が見える程度まで捲った所で止めると――
ぬぷん。
天を突こうと反り返る肉棒を、柔肉の谷間に呑み込んだ。
「うぁ……っ」
いきり立った欲望の塊がいともたやすく飲み込まれ、信じがたい柔らかさと熱、そして汗による湿り気に悶絶する。たっぷりの汗とよだれが潤滑液になり、結衣がTシャツの上から自らの乳房を揉みほぐすと、第二の膣肉と化した谷間からぐちゅぐちゅといやらしい音が響いた。互いの汗と、牡と牝の体液の匂いと、倉庫の埃っぽい空気の匂いが交わり合うと、独特の匂いが立ち込めた。この空間の本来の用途とは全く違う行為による背徳感は、更なる官能の波を呼び起こすだけだ。
「ヒッキー……気持ち良い？」
結衣が首を傾げて、嬉しそうに柔らかく微笑む。聖母のような表情とは対照的に両手の動きはいやらしく、自分の乳肉にどう圧をかければ俺が気持ち良くなるのかと言うのを匠に探っている。左右互い違いに手を動かすと、慣れない快感の媚電が身体を貫き悶絶する。どうやらTシャツにより外側が固定されていることで、いつもよりも擦りやすいようだった。この状態を期待してのリクエストだったのだが、

まさかこんなに余裕が無くなる程気持ちが良いとは思わなかった。
「……っ、すげぇ、気持ち、良い……っ」
押し寄せる快楽の奔流に身悶えしながら答えると、「そっか、嬉しい」と小さく呟いて、谷間から顔を出した亀頭にちゅっとキスをする。乳肉で肉竿を貪りながら、自らの乳頭をこちらに突き出してくるので摘んでやると、おとがいを上げて声を抑えることもなく喜びの嬌声を上げた。
ああ、これは――だめだ。
俺から誘いはした訳だけど。
多分、6限の間中はこうして搾り取り続けられることになるだろう。
結衣の表情はいつも以上に優しい。けれど、この表情が問題なのだ。
今まで結衣がこの表情を浮かべた時、俺はいつも一晩かけて搾り取られていた。
そう言った夜は、俺が一方的に絶頂に追い立てられると言う訳ではない。結衣自身も俺と同じかそれ以上の数の絶頂に達する。それでも止まらないのだ。好奇心と愛情に満ちた瞳が、俺から根こそぎ子種を搾り取る。幸せなのに怖いという複雑な感情を覚えたのは、きっと結衣が初めてだろう。
「ヒッキー、もっと気持ち良くなって？　んっ、ふぅんっ、ちゅっ、くちゅるっ、ちゅぴ、ちゅぷりゅ……っ」
にゅぷっ、ぐちっ、にゅく、にゅくく、じゅっぷ、じゅぷじゅぷ、ぷぢゅるっ、じゅぷぷ……っ。
「うっ、ぐっ、うぐぅぅ……うぐぅぅ……っ」
母のような、悪魔のような、柔らかな快楽に飲み込まれて、情けなく足をばたつかせる。結衣は俺が悶える様子を楽しみながら、更に卑猥な音を立てようと手と口を駆使して愛撫を続ける。
ゆっくりと、けれど確実に限界が近付いてくる。結衣は急激に絶頂に追い立てようとはしないが、乳愛撫の手を緩めることも決してしない。恐怖と幸せがないまぜになった感情が頭の中をがんがんと打ち

鳴らして、徐々に意識がぼやけていく。無理をせず早く壊れてしまえと、俺の身体を包み込む牝の肢体が声にならない声で語り掛けてきた気がした。
「うっ、んぐっ、もう、だめだ、結衣……出る、出る、出る、出る……出る……っ」
「んっ、出していいよ。熱いのいっぱいちょうだい……っ」
熱っぽい声で囁いて、結衣が乳肉を揉む動きを少しだけ加速させる。たったそれだけの動きで一気に絶頂に追い立てられ、抑えようの無い不安で身体を屈め込むと、結衣の頭を抱きしめて両足を結衣の背中に回した。結衣は俺の情けない行動さえも暖かく受け止めて、肉竿を優しく絶頂に導く。
もう、だめだ。
溺れる。
柔らかさに、優しさに、気持ち良さに。
溺れる。
溺れる。
溺れ死ぬ。
――呼吸の仕方を忘れて、視界がばちばちと弾けると、あっけなく下半身が爆ぜた。
「んぐぅぅ……っ!!」
噴き出す直前に、結衣が肉竿の向きを変えて、亀頭を乳肉に完全に飲み込んだ。
――ぐびゅるっ、どぶっ、ぶびゅぶぶっ、ぶびゅるるっ、ごぶっ、ごびゅりゅる……っ。
「はぁぁぁぁ……っ、あったかいよぉ……っ」
結衣がうっとりとしながら、綺麗に肉竿を呑み込んだ乳肉を更に揉みしだく。
「うあぁぁっ!? 結衣、やめてくれ、今やられたら……うぐぅぅ……っ」
精液により更に滑りを増した乳肉の中で、脈動の収まらない敏感な肉棒が嬲られる。蛇口の捻り方を間違えたかのように溢れ出した白

濁は、艶めかしい谷間から溢れ出し結衣の紅潮した身体を真っ白に汚していく。そんな中でも結衣は悶絶する俺の表情を見つめるばかりで、己の身体が汚れていくのを気にも留めない。
　ようやく脈動が収まると、息を荒げている俺に結衣が優しく微笑みかけた。
「ん、まだおっきいね。ちゃんと出しておかないと」
「え、いや、もう十分……っ」
「だーめ。誘ったのはヒッキーだよ？　……もっと気持ちよくしてあげる」
　結衣が最後に囁いた言葉は、木々のざわめきのように静かでありながら、確かな熱を持って耳朶を打った。こんなに優しく人を縛り付ける言葉があるのかと戦慄した。
　結衣が乳肉を大きく持ち上げ、肉竿の根元から半分以上が見える所まで上がった所で、一気に下ろす。
　――じゅぱんっ。
「うんんん……っ！」
　騎乗位で肉竿を一気に呑み込まれたような感覚にくぐもった声を漏らすと、結衣の口の端がいやらしくつ吊り上がった。よく知っている筈の女の子が、まるで知らない別人に見えた。
「ヒッキー、可愛い……女の子みたい……っ。もっと聞かせて？」
「そんなの恥ずかし……うあぁぁっ!?」
　先程とは打って変わって、容赦なく乳肉を持ち上げては下ろして肉竿を蹂躙する。着ている服が全て精液漬けになろうと構わないとでも言うかのように、一心不乱に牡肉を貪る。
「もう無理、もう無理だから……っ」
「そんなの言われたら、止めらんないよぉ……っ」
　瞳を爛々と輝かせて、結衣が乳肉を変幻自在に動かし続ける。
　俺は涙で顔をぐしゃぐしゃにするのをひたすら観察されながら、何度も何度も繰り返し射精させられた。

　6限終了のチャイムが鳴ると、結衣の瞳から妖しい暗さがようやく

消えた。
「あ、すぐ更衣室行かなきゃ……一緒にタオル持ってくるね。ヒッキーは休んでて」
「え、ああ……うぁっ!?」
　ぐぽんと肉竿を根元まで飲み込まれて、度重なる絶頂により肉竿にまとわりついた精液を綺麗に舐め取られた。結衣は下着を持って軽やかな足取りで倉庫を出ると、５分程で制服に着替えて戻ってきた。どこから調達したのか濡れタオルを何枚も持っていて、俺の汗を拭いてくれた後に肉棒を優しく拭き上げ、残りのタオルで床を綺麗に拭き取る。
「……今、下着は着けてないのか」
　独り言のように呟くと、濡れタオルで未だに収まらない肉竿をぺちんとはたかれた。
「ばか。……今日は部活無いからまだ良かったけど、すぐ帰らないといけないじゃん……」
　結衣の言葉に首を傾げてちらりと見やると、夏服のシャツの中にうっすらと乳頭が透けて見えていた。あと少しでも汗をかいたら完全に透けて見えてしまうだろう。
「……気持ち良かった？」
　床を吹く手を止めて、結衣がちらりと流し目を送る。
「……最高だった。どんどん上手くなってる」
「……そっか」
　結衣が頬を赤らめ、嬉しそうにはにかむ。その表情にまた我慢出来なくなって、最後のダメ押しとして結衣にシャツのボタンを開けてもらい、生の乳肉と乳首を弄びながらフェラをしてもらった。おかげで帰りのＨＲも余裕で間に合わなかった。

　続く。

（6）

放課後。

俺は、平塚先生に指示された生徒指導室に向かっていた。放課後の静かな廊下を歩いていると、開いた窓からは野球部やサッカー部の威勢の良い掛け声が聞こえてくる。夏を迎えた運動部の熱量は、ずっと遠くの自分にも分かりやすい程届いていた。爽やかな青春模様を見せる彼らとは、俺は対極の位置にいるな……と自分で笑ってしまう。何だかんだで楽しんでいるから良いのだけれど。

ただで済む訳が無いよな……と思いながら、生徒指導室のドアの前に立つ。

「……」

何だか、ドアの隙間から薄紅色の瘴気が漏れている気がする。

うーん。

本当にただでは済まなそうだ。

手が微かに震えていることに苦笑しながら、控えめのノックを二度打つ。乾いた音が放課後の廊下に小さく響くと、部屋の中から「はい」と言う凛とした声が聞こえた。

「比企谷です」

「入りたまえ」

先生の声に従い、ドアをからりと開けた。

× × ×

生徒指導室には向かい合って話せる机と2つの椅子、そして背の低いテーブルを挟んだ2つのソファがある。入るのは初めてだったが、どうやら状況に応じて使い分けているようだ。平塚先生はその手前のソファに座り、足を組んでいた。俺を見るなりすっと目を細め、優雅に微笑む。

「よし、脱ぎたまえ」

「帰ります」

まさかすぎる展開に急いで部屋から逃げようとしたが、身体を半転させようとした瞬間に先生がぺろりと舌なめずりをするのが見えた。

ほんの僅かな一挙動を見ただけで、全身がいとも容易く固まる。
「こらこら……焦るんじゃない」
「いや、いきなり脱ぎたまえとか言う人にそんなこと言われても……」
声が上ずるのを必死で抑えながら言葉を紡ぐと、先生は組んでいた足を解いて立ち上がり、俺の元へ歩み寄ってきた。俺と「そういう」関係になってから履くようになったタイトスカートからは、美しい生足がすらりと伸びている。授業で見た時はタイツを履いていたので、ここに来る前に脱いだのかもしれない。最近益々色っぽくなった先生の身体にごくりと喉を鳴らすと、先生は嬉しそうに目を細めた。
先生が近寄り、同じ分だけ反射的に一歩遠ざかる。ドアに背中が付くと、先生は自身の豊満な肢体を俺の身体に押し付けた。胸の前面をむにゅりと柔らかい感触が包んで、同時に背後でかちゃんと鍵を掛ける音が聞こえた。
「ふふ……なんだ、もう硬くなっているじゃないか」
耳元で囁かれる成熟した艶声にぞくりと鳥肌が立ち、自分の意思と関係無くいきり立っている下腹部に目をやって情けなくなる。先生は俺の首と腰に腕を回すと、ごく当たり前の行為であるかのように俺の首に口付けをして舌先でつつき、すんすんと鼻を鳴らし始めた。うなじや胸元まで入念に匂いを嗅がれ、その間中、先生の身体から香る澄んだ甘い匂いに陶然とする。
「5……いや、一緒に過ごしたのもカウントすれば6人か」
「……っ」
こわっ！
どっかで見たことあるよ、この特技！
この後一体どんな糾弾を受けるのかとヒヤヒヤしていたが、しかし先生は特に怒る素振りを見せるでもなく、考え込む表情を見せてこちらの膨らんだ部分を撫で始めた。
「う……く……っ」
「これだけの人数を相手にしながら、未だにこれだけ大きくなるとは……君の身体は一体どうなっているんだ？」
興味深そうに、それでいてどこか悪戯っぽい口調で言いながら、先

生が微笑む。柔らかな笑みとは対照的に、ズボン越しに肉棒をさすっていた手はいつの間にかチャックを開け手を突っ込み、パンツも下ろして躊躇することなく肉竿を外気に晒した。
「君に選ばせてあげよう」
「……な、何を、ですか……っ？」
すべすべの手の平で肉竿を撫でながら、耳にぴたりと唇を押し当てて囁いてくる。
「私にめちゃくちゃにされるか、私をめちゃくちゃにするか、だ」
「……っ、いや、そんなの……っ」
一切の抑制が外れて只の獣に成り下がりそうな程魅力的な提案だが、これだけ攻勢に回られて今更俺からなんて……と思う。
――しかし、俺の思考は先生のたった一つの行動でいとも簡単に塗り替えられた。
先生が俺から身体を離し、俺の両手を握る。何事かと疑問に思っていると、先生は自らのスカートの裾を俺に掴ませた。瞠目する俺の表情を楽しむように微笑み、こくりと頷いて行為の続きを促してくる。
期待による甘い痺れが指先から肩まで伝うのを感じながら、恐る恐るスカートを捲る。
「……っ」
先生は、スカートの下に何も履いていなかった。楚々として煙る恥毛の内のいくらかが、既に淫裂にぺたりと貼り付いている。むわっとした牝の匂いが鼻腔を擽ると、部屋の湿度が途端に増した気がした。
先生が俺に抱きつく。
「私にめちゃくちゃにされたいか？　それとも……私を、好き放題に蹂躙したいか？　どっちにしたい？」
ちなみに私のおすすめは……と言って、先生が俺の右手を自らの淫裂に持っていく。意図せずとも中指の先端が、ずぬりと谷間に吸い込まれた。
「んぁ……っ、……後者だ」
「……っ！」
言葉で答える代わりに右手中指の根元まで淫裂に挿入すると、先生

はおとがいを上げて鳴いた。
「後悔しないでくださいね、静さん」
「……ぅあ……っ」
俺の言葉に、先生――静さんは微かに呻き、頷いた。
× × ×
静さんを、ソファの背もたれに手を付かせ、膝立ちにさせる。美しい脚がゆっくりとソファに沈み込んだ。
目の前に晒された、真っ白な臀部。床に膝立ちになり、菊穴の皺まではっきり見える状態の尻肉を両手で掴むと、静さんの恥部にふっと息を吹きかけた。
「うぁ……っ」
静さんの身体がぶるりと震えると、目の前の尻穴がひくひくと蠢き、恥毛から愛液が伝い、ソファに滴り落ちた。
右手中指を淫裂に宛てがい僅かに力を入れると、魅惑的な蜜壷に容易く呑み込まれた。
「おぉぉぉ……っ」
身体を弓なりに折り曲げて静さんが呻く。粘性の高い白色の粘液は、牝として身体の底から喜んでいることを示していた。
ぐちゅ、じゅぐ、ぐっち、ぐちゅ……っ。
「あっ、あぐっ、あがっ、おぉぉぉぉ……っ」
目の前の尻がはしたなく愛液を撒き散らしながら、牝の匂いを益々強めていく。腰をくねらせてこちらの指の動きに合わせる様は、淫猥と言う他無かった。
中指で膣肉をほじりながら、薬指も挿入する。
「んふぉぁぁぁ……っ!?」
2本の指をずぶずぶと貪欲に咥え込むと、紅潮した臀丘が狂ったように踊りだした。逃がさぬように左手で尻肉をしっかりと掴んで、牝の身体をじっくりと蹂躙する。指が第2関節まで入るすれすれの所にある、心持ちざらざらとした部分を丁寧に指先で抉る。
「ひっ!? あふぅあっ! ふぐっ、んぐっ、うぁぁぁ……っ!」
益々勢い良く淫液を撒き散らして、静さんの背筋が縮んでは伸びる

のを繰り返す。壊れた機械のように同じ動きを繰り返して、身体中の水分を吐き出そうとしているかの如く快楽に溺れ続ける。
指を引き抜くと、ぐぽん、と言ういやらしい感触がした。静さんの全身はじっとりと汗ばんでいて、立ち上る牝の匂いは既に部屋中を満たしている。甘酸っぱい匂いは余すことなく全身を犯して、狂おしい程に勃起した肉槍は早く目の前の牝を貫けと訴えかけている。
立ち上がると、身体が興奮で震えていた。
目の前の静さんの身体は、信じられない程無防備で、信じられない程美しくて、信じられない程――壊したくなる。
亀頭をひくつく膣口に宛てがい、ソファの背もたれを握りしめていた静さんの両手を掴む。

「え……んはぁぁぁぁぁっ!?」
静さんの両腕を遠慮無く引っ張るのと同時に、力いっぱい腰を打ち付けた。熟した肉襞は肉槍の侵入をあっさり許し、どちゅんと言う音を立てて亀頭が子宮の入口を押し付けられると同時に、肉竿全体を万力のごとく締め付けてきた。
「うぐ……っ！」
期待の余りまるで踏ん張りが利かなくなり、いとも簡単にマグマの如き白濁が尿道を伝い静さんの秘部を犯した。
「はぁぁぁぁぁ……っ！」
全身を激しく痙攣させて、静さんも絶頂に達する。あまりにも美しい後ろ姿に恍惚として、絶頂により敏感になっていることも忘れて再び腰を打ち付ける。
「ひっ、あがっ！　やめっ、熱……うあぁぁぁっ！」
静さんが首を振り懇願してくる。涙声に益々興奮して抽送を繰り返すと、結合部がぐちゅぐちゅと白く泡立つ。腰と美尻が激しくぶつかり合う度に白い汁が飛び散り、新たに分泌された汁が結合部を絶え間なく染め上げる。
「また出る……うぁ……っ」
「ひぃぃぃんっ!?」

程なくして2度目の射精をすると、静さんの身体はがくがくと痙攣しながら肉竿から子種を搾り取る。結合部から精液がどろりと溢れ出し、部屋の中を牡と牝の混ざり合ったいやらしい匂いが包み込む。
「あ……うぁ……っ」
静さんの両手を離すと、力なくソファの背もたれに倒れこみ、こちらに顔を向ける向きに倒れ込んだ。虚ろな目で息を荒げる女性教師の痴態に、肉槍は2度に渡る射精を忘れて勃起が収まらない。
「……？　比企谷、なに……を……っ!?」
静さんの右足を掴んで持ち上げると、静さんは驚愕に目を見開いた。静さんの身体は柔らかく、ほとんど垂直になるまで足は開き、俺はソファの上に伸びた左足に跨った。持ち上げた右足の膝裏を両手で支えて、躊躇うことなく挿入する。
「ひぐぅぅ……っ！　あっ、なに……いつもと違うとこがこすられて……んはぁっ！　だめ、これ以上は……うあぁぁぁっ！　だめだ、許して、許してくれ……ひぁぁっ！」
度重なる絶頂に加えて、いつもとは違う快感に静さんは悶え苦しむ。後背位に比べて勢いでは劣るものの、見慣れない角度から見る静さんの艶姿は見惚れる程美しく、ワイシャツに包まれた豊満な乳房が揺れる様は極上だった。抽送をしばらく繰り返すと、再び絶頂の気配が訪れる。
「……そろそろ、出ます……っ」
「……だめだ……っ、これ以上出すな……おかしくなってしまう……お願いだ……っ」
静さんの言葉が、嗜虐心を爆発的に燃え上がらせた。
艶かしく伸びた右足をきつく抱きしめて、抽送を力強くしてスピードも上げる。
ばちゅっぐちゅっじゅぶっがちゅっじゅびっじゅぶっじゅぐっ。
結合部でひどく下品な音を立てると、静さんは耳まで真っ赤にして首を振った。
「あぁぁぁぁぁぁぁぁっ!?　だめだ壊れる許して出る出る出てしまうあぁぁぁぁぁっ!!」

なりふり構わず嬌声と悲鳴の混ざった音を喉から絞り出して、静さんが必死でこちらに手を伸ばす。しかし俺は懇願の意図が込められた手を一瞥だけして、静さんにとどめを指すべく更に腰の速度を上げる。

「出る、出る、出す、出すぞ、出すぞ……っ！」

「だめ、イク、イク、出る、出る……っ!!」

静さんがこちらに伸ばしていた手を引っ込め、両手でソファを掴んだ瞬間。

――ぶびゅるっぶびゅびゅるっびゅぶぶぶっごぶっびゅびっぶびゅるるる……っ。

「うあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!　……あっ、あっ、あ……っ」

「……え？」

魂ごと引き抜かれるような射精の衝撃に浸っていると、肉竿に生暖かい温度を感じた。何事かと結合部に目をやると、ちょろちょろちょろ……と言う音を立てて、静さんが失禁していた。静さんは両手で顔を覆い、ぐすぐすと嗚咽を漏らしている。

……。

……やりすぎた……。

この後は、ソファの掃除と静さんへの謝罪に追われた。子供かと言わんばかりにぐずる静さんは普段とのギャップでとんでもなく可愛かったが、俺が表情筋を緩めていると頬をつねられた。誠意を見せなさいと言うことでキス責めをしたところ、「また疼いてきたじゃないか……」と艶っぽく言われたので全力で逃げた。多分あのままだったらマンションに連れ込まれて一晩中絞られていた。いつもなら望む所なんだけども、今日は何だかこの後もエンカウントがありそうなので逃げた。

エンカウントって言っちゃったよ。

続く。

（7）

平塚先生との一戦を終えて、昇降口まで辿り着く。先生を撒いてからは（ひどい言い草だ）走りもしていなかったのだけれど、明らかに足腰……と言うか腰にキていた。自分で言うのも難だが、ああいった行為には慣れている筈なんだけどな……と思いながら、今日一日を振り返る。

……。

……よく生きて立ってるな、俺。

美しくも可愛い面々の艶っぽい表情を思い出すと、一気に頬が熱くなった。ぶんぶんと顔を振って息を吐いていると、ＬＩＮＥでメッセージを受信した。

送り主は折本かおり。トーク画面を開いた。

『放課後会えない？』

『会える。どこにいる？』

『比企谷の高校の最寄りの公園』

『おう、分かった。行くわ』

『待ってるー』

『（スタンプ）』

『（スタンプ）』

「……」

さっきまでのげんなりした自分はどこへやら、すっかりその気になっている自分に呆れながら――俺は折本がいる公園に向かった。

×　×　×

暴力的な日射しも少しずつ収まってきた夕方の道をのんびり歩いていると、ほんの5分程で待ち合わせ場所の公園に着いた。さてどこにいるかな……ときょろきょろしていると、同じようにきょろきょろしている女の子と目が合った。

「うっす」

「……おう」

俺っぽい挨拶と言って勝手に定着させてしまった挨拶をして、折本

はどこか照れくさそうに笑う。恥じらいを浮かべながら俺を見つめる瞳に頬が熱くなって顔を逸らし、遠くにある雲を見ながら何とはなしに尋ねた。
「何か用事でもあったのか」
「……」
折本の顔を見られないまま聞いたが、返事がこない。どうしたことかと視線を下ろすと、いつの間にか3メートル程開いていた筈の2人の距離がほとんど無くなり、視線のすぐ下にウェーブのかかった髪がふわりと揺れていた。
「……別に？　何となくだけど」
いつもの快活な声音とは違い、雨の中咲く花のようなしっとりとした声で呟かれて、心臓が静かに波打った。
折本の手が俺の手の指先をちょんと摘まむ。まるで己の縄張りをこっそりと主張するかのような仕草に、思わず頬が緩んでしまう。赤子の手を握るような愛おしみを持って握り返すと、折本は一瞬だけ目を見開いて、そして優し気に目を細めた。
「……こういう何でもない所を散歩するって言うのも良いんじゃない？」
「……そうだな」
囁くような声に、短く短く答えて、何とはなしに歩き始める。
梅雨が明けて一気に夏の勢いが街を包み、沢山の木が植えてあるこの公園では既に沢山の蝉が鳴いている。夏の産声は蝉の鳴き声なのではなかろうかと思った。
夏だね、ああ、なんていう中身の無い会話がやけに新鮮で楽しい。きっと普段から友人のことを沢山考えながら話しているだろう折本と、人の発する言葉一つ一つに深く考え込んでしまう自分。そんな2人が交わす会話は、妙にのんきで優しい。
歩いたのは30分くらいだろうか。
公園の入口まで来た所で、繋いでいた手をどちらからともなく離す。人肌の温もりが夏の空気に溶けていって、少し寂しい。その寂しさを紛らわすかのように、折本は柔らかく微笑んだ。

「じゃ、またね」
「……おう」
また綺麗になったな……などと思いながら、公園を離れていく折本に手を振る。
折本と歩いている時は遠くに聞こえていた蝉の声が、やけに近く感じた。
× × ×
折本が見えなくなって、手を振るのをやめてふと思った。
……超癒された……。
ここまでが嬉しくもハード極まりない流れがほとんどだったためか、折本の清涼剤っぷりが半端では無かった。何かの賞を上げたいくらいだ。何を言ってるんだ俺は。
ふにゃっと頬が緩まるのを引き締めて、そろそろ帰ろうかと思っていると……不意に着信音が鳴った。画面を見ると、表示された名は鶴見留美だった。
『もしもし』
『もしもし。八幡、もう帰っちゃった？』
『ん、総武高近くの公園にいるぞ』
『そ。分かった。ちょっと待ってて』
『え、おい？　留美は今どこに……』
「……」
切られた……。
何なんだと思いつつも公園の入口で待っていると、ほんの5分程で艶やかな黒髪を纏った少女が姿を現した。
「ん、こっち来てたのか」
「うん、八幡をびっくりさせようかと思って」
「……そうか」
何この可愛い生き物……と内心悶えていると、俺の顔をじっと見た留美が不思議そうに首を傾げた。何ぞやと思っていると、つぶらな瞳を湛えた顔がずいと近寄ってきた。
「……八幡、疲れてる？」

「……ん、まあな」
一目で見抜かれて驚くと同時に、何だか嬉しくもあった。留美はちょこんと背伸びをして俺の前髪をかき上げておでこを触り、両頬を撫で、何故か最後に頬をむにっと摘まんだ。
「なんれ（なんで）？」
「最後のは何となく」
妙に満足気な留美が踵を下ろして、ふっと息を吐く。辺りをきょろきょろ見回していたかと思うと、ちょうど今の時間帯は日陰になっている芝生に目が留まった。何も言わずに俺の手を取り、とことこと歩いて行く。芝生に辿り着くと留美が腰を下ろして女の子座りになり、自分の太ももをぽんぽんと叩いた。え、と喉の奥から妙な音を漏らして辺りを見回したが、狙い澄ましたかのように誰もいない。頭をがしがしと掻いて観念すると、留美の隣に腰を下ろしてされるがままになった。制服姿でミニスカートの為、タイツを履いた太ももに頭を乗せる。
「……」
「……どう？」
「……超柔らかい」
「……」
頬をむにむにと摘ままれた。この子俺の頬が好きすぎじゃなかろうか。
優し気に俺を見つめる留美と目が合う。大人と少女の狭間で揺れる瞳に魅入られていると、夕暮れ時の涼やかな風が靡いて、艶やかな黒髪を柔らかく撫でた。まるで映画のワンシーンを見たような気分になり昂揚していると、細い指が額をそっと撫でた。
「ちょっと寝ていいよ」
「ん……わかった。ありがとな」
「……ん」
留美の言葉に我ながらやけにすんなりと返事したなと思っていると、留美がもう一度額を撫でて、それと一緒に涼風がさっきよりも少しだけ長い時間をかけて通り過ぎた。身を包む心地良さに身を委ね

ると、あっと言う間に瞼が重くなる。
顔を覗き込んでいる慈しみに満ちた視線に心を包まれて、心地良く意識を手放した。
×　×　×
「ん……」
ゆっくりと目を開けると、外の状況はほとんど変わっていないようだった。
「どれくらい寝てた……？」
目をこしこしと擦る俺をくすくすと微笑みながら見ていた留美は、近くにある公園の時計を見た。
「ん、15分くらい。気持ち良さそうに寝てた」
「……そうか」
随分と寝た気がするな……と今の睡眠の密度に驚いていると。
「人が3回くらい通ったけど気付かなかったし」
「え」
眠気が吹き飛んだ。
「夫婦みたいな人たちが1回、八幡くらいの年のカップルが2回かな」
「なんでまた全員そういう感じなんだ……」
「なんか皆すごくにこにこしながらこっち見てた」
「追い打ちだ……」
「あとは八幡が寝返りを打ってびっくりした」
「え」
「私の側に」
「え」
「ちょっと……スカートも捲れたし」
「え」
「スカートが捲れてから、八幡がすごくもぞもぞするから……大変だった」
「土下座すると良いでしょうか」
「いいって別に」
あんまりにもあんまりな自身の所業に罪悪感を抱いていると、留美

はふっと笑って許してくれた。のそりと起き上がると、留美が俺の背中の芝生を払った後立ち上がった。
「そろそろ私行くね。元々予定があったから」
「え、そうなのか。わりいなわざわざ来てもらったのに」
「ん、いいの。私も楽しかったし」
「……そうか」
「うん。……じゃ」
胡坐をかいた俺の肩に留美は両手を置いて屈み、触れ合うだけの優しい口付けをした。
「またね」
「……おう」
あっさりと離れる留美に手を振る。もっと色々したかったが、今日はこれくらいで止めた方が良いような気もした。
誰もいなくなった公園で、一人涼風に吹かれる。西の空が鮮やかな赤に染まり、通りかかった人も感嘆のため息を漏らしていた。
「……」
……なんだろう、女神2連続、って感じだった。
……二度あることは……？

続く。

（8）

公園を出て、帰り道をぽてぽてと歩く。立て続けに癒されたため足取りは軽く、道行く人の表情もいつもより明るく見えた。

正直今日は出来すぎだった。

朝から美女・美少女と立て続けに接触して、あれやこれやあれやこれや。こんなに幸せで良いのだろうか。人生における運に総量があるなら、俺はこれからどれだけ不幸な人生を歩むことになるんだろう。今の寿命をお金にしても1年につき1万円くらいにしかならなそうだ。

そんな危惧を抱きつつも、今日これまでのことを反芻して頬を緩めていると――

「あれ、比企谷くん？」

聞き慣れた穏やかな声が聞こえて、反射的に振り向いた。

全身から余すことなく漂う、ほわほわとした空気感。

服装はもう制服ではなく、夏によく合うノースリーブにカーディガンを羽織った姿。

シンボルマークであるおさげを最近やめて真っ直ぐに髪を流した姿は、すれ違う人が皆二度見するような大人びた可憐さを湛えている。

我らが女神こと、めぐり先輩だ。

多分、地の文では一番扱いが良いと思う。地の文って言っちゃったよ。

「やっぱり比企谷くんだ。どうしたの、こんなところで？」

めぐり先輩が耳の上に髪をかき上げて、にこやかに微笑む。大学の帰りだろうか、トートバッグからは分厚い教科書がちらりと覗いている。俺は女神に対して後ろめたさを持ってしまい、何気ない質問に対して不自然に言い淀んだ。

「……ちょ、ちょっと寄り道してまして」

「ふうん……？」

どこか納得していない様子でめぐり先輩が呟き、俺にするりと歩み

寄って、上目遣いで俺の瞳をまじまじと見つめる。うぐ……と変な声を漏らして顔を逸らすと、顎のすぐ下でくすりと笑う声がした。
「比企谷くんはモテモテだね」
「え……」
「一緒に帰ろう？」
「あ、はい、えっと……今のは……」
「ん？」
「な、何でもないです……」
何だろう、この気持ちは何だろう。
何て言うか、めぐり先輩の笑顔が怖い。
女神そのものな笑顔はそのままに、背中から黒い翼が生えているような気さえする。
何でその曲を選んだの？　と毎回疑問に思うような鼻歌を口ずさみながら歩いてゆくめぐり先輩の後を、俺は慌てて付いていった。

×　×　×

めぐり先輩の横に並んで、ゆっくりと歩を進める。美少女然としていた彼女だが、大学生になって大人の女性の魅力も纏うようになった。会う頻度は減っているが、会う度に素敵になってゆく彼女を見ていると、毎回鼓動が落ち着かなくてしんどいくらいだ。
めぐり先輩が歩きながら、何気なく後ろの髪を横に流した。その瞬間に垣間見えたうなじの白さにどきりとして、つい大きな音で喉を鳴らしてしまう。
「……ふふ、どうしたの？」
めぐり先輩がからかうように言って、恥ずかしさの余り視線を逸らす。すると以前より膨らみの増した胸に視線が吸い寄せられてしまい、俺の挙動に気が付いためぐり先輩は恥ずかしそうに胸の上で両手を重ねた。
「……その、最近おっきくなってるから、そんなにまじまじと見られるのは、ちょっと……っ」
「ご、ごめんなさい、マジでごめんなさい」
嫌がる訳でもなく、ただただ恥じらいながら、俺のことをちらちら

見る様は……一生見飽きることが無いだろうと思う程に素敵だった。
しかし、これだけ可憐な彼女を見ていても、俺は満足出来ずにいた。良いじゃないか、癒しの3連続だぞ、これ以上何を望む……と頭の中で声が響くが、俺はさっきから漂う甘い匂いと白いうなじ、そしてめぐり先輩が色っぽく恥ずかしがる様子に、確実にむらむらとしていた。
「あ……」
そんな時、通りかかった別の公園の、入口近くにある多目的トイレが目に入る。人けの無いトイレを目にして間抜けな声を漏らして立ち止まった俺を、めぐり先輩は不思議そうに見つめた。
「比企谷くん、どうしたの……あ」
俺との付き合いがすっかり長くなったせいだろうか。
めぐり先輩は俺の意図を察して、整った顔立ちを一気に朱に染めた。
「ひ、比企谷くん、君は……もう……っ」
俺の手をきゅっと握り、林檎のように頬を染めたまま上目遣いで呟く。
戸惑いはしても、嫌がらないし断らないこの先輩は、優しいのだけどそれ以上に性欲が旺盛なのではなかろうか……と最近思うようになっていた。
× × ×
「ふっ、んん……っ、ちゅぴ、ぴちゃ、ちゅく、ちゅぷちゅぷ……ふぅん……っ」
腰が言う事を聞かない。
めぐり先輩は口と舌と両手を目一杯使った奉仕に夢中になっていて、どこまでが自分の身体なのかが分からなくなる程どろどろに溶かされていた。油断すればあっと言う間に射精してししまいそうな舌遣いを続けながらも、めぐり先輩はドアをちらちらと見ては顔を真っ赤にしている。凶悪なまでのギャップが、たまらない程快感をかき立てていた。
俺はトイレの手すりに背を向けて腰を付け、両手を手すりに乗せて

快感に溺れていた。横を見ると、めぐり先輩が服を着たまま外した上下の下着が銀色の手すりに乗せられている。ライトグリーンの下着が何だか生々しかった。めぐり先輩は猛った肉棒を唾液で浸しながら、足はぱっくりと開いてつま先立ちになっている。時折喉奥まで咥えこむ時は、俺の太ももに両手を置いて、頬をすぼめたいやらしい顔で味わっている。この人に似つかわしくない筈の下品な表情は、目が釘付けになる程の魅力を溢れさせていた。

「んちゅっ……れろっ、ぴちゃ……んっ、んふぅ……っ、気持ち、良い……っ？」

「めちゃくちゃ……気持ち、良いです……っ」

俺の言葉に、めぐり先輩は肉棒を咥えたまま嬉しそうに目を細める。再び喉奥まで咥え込まれると、身体の奥底から白濁が強烈な引力で吸い寄せられそうになった。

「先輩……そろそろ俺が……っ」

「ん……っ」

艶やかな黒髪を撫でながら囁くと、めぐり先輩は少し残念そうに口を離して立ち上がった。俺と入れ替わり、手すりを掴んでこちらに尻を突き出してくる。

「じゃあ、触りますよ」

「ん……その、多分、大丈夫……だと思う」

めぐり先輩の掠れた声に、ごくりと息を呑む。

薄手のロングスカートを捲ると、小ぶりな双丘の谷間は既にびっしょりと濡れていて、透明な淫液が内股を伝って膝まで達していた。舐めていただけでこんなになったのか……と思うと、身体の奥底から官能がざわめいた。

「エロ……っ」

「やぁん……っ」

俺の呟きに、めぐり先輩は顔を伏せてしまう。しかし俯いた分だけ腰が突き出され、牝の下腹部から零れ出す熱気が肉竿を浸した。そこからは無言になり、淡々とめぐり先輩の尻肉を掴み、濡れそぼった淫裂に肉槍を突き刺した。

続く。

（9）

手すりに掴まってこちらに尻を突き出すめぐり先輩の尻を鷲掴みにして、一気に奥まで挿入する。膣口はとても熱くぬめっていて、あっさりと肉竿を迎え入れた後は心地良く締め付けてきた。

「んうぅぅぅ……っ」

汗でしっとりした髪の毛が妖しく揺れ、小ぶりな尻肉が悩ましく揺れる。

「うぁ……何かいつもより……きつ……っ。め、めぐり先輩、もしかして、いつもより興奮して……？」

「やぁぁぁ……言わないで……っ」

俺の言葉にびくりと反応しためぐり先輩の全身が恥じらいで揺れて、膣肉がぐねぐねとうねっていきり立った肉槍を締め付ける。いつもだって十分に気持ち良いというのに、今日は更に締め付けが凄い。一瞬でも油断すれば射精してしまいそうだ。

具合を確かめるように奥に突き立て、ゆっくりと引き抜き、突き入れる角度を微妙に変えてもう一度突き入れ、めぐり先輩の尻を手で揺らしてくねらせながら引き抜く。

「あぁぁ……すご……っ、うんん……うぁぁぁ……っ」

初めはこちらが揺らしていた尻も、気付けばめぐり先輩が進んで振っている。肉竿を引き抜けば白い臀丘がこちらを迎え入れていた。

試しに、腰を掴むだけにして動かないでめぐり先輩の様子を観察する。

「やぁ……すごいの、比企谷くん、すごいのぉ……っ」

「……」

めぐり先輩は、俺が全く動かなくとも、まるで張型を使った自慰行為をするかのように自らいやらしく腰を振っていた。あまりにも夢中になっていて、自分しか動いていないということにも気付いていない。

「……めぐり先輩、さっきから自分しか動いてないの、気付いてます？」

「え……？　う、うそ……んはぁぁぁんっ!?」
羞恥で顔が真っ赤に染まり、淫肉の締め付けが一段と増した瞬間――鐘を打つように目一杯強く腰を打ち付けた。
ぱぢゅっ、ばちゅっ、ぱんっ、ぱんっ、じゅぶぶ……っ。
「ほら、めぐり先輩もさっきまでみたいに腰振ってください」
「あっ、うんんっ！　ひっ、やぁんっ、そんなの……うあぁんっ!?　んはぁぁっ！」
一突きごとに、今にも手すりから手を離してしまいそうな程に身体をがくがくと痙攣させてめぐり先輩が可愛らしい声で鳴く。お淑やかな声に反して、結合部が鳴らす音は卑猥そのものだった。
「ほら、このまま一気にイクまで……ん？」
ふと、何かの音が聞こえて、腰をぴたりと止める。めぐり先輩がくるりと振り返って不思議そうに俺を見つめ、ゆっくりと腰をくねらせる。壊れるまで突きまくりたい欲求を抑えて耳を凝らした。
『ねー、さやちゃん。なんかへんな音がしなかったー？』
『えー？　かずくん、なんにも聞こえないよー？』
「……っ」
小学生くらいの男女の無邪気な声が、トイレの目の前で聞こえる。公園で遊んだ帰りだろうか、多目的トイレの中で無遠慮に立てられる音に興味を持ってしまったようだ。
めぐり先輩は話し声を聞いてごくりと喉を鳴らし、両手で口を塞いだ。
そうだよな、これは流石に音を潜めていた方が……と思っていると、
「う……っ」
――めぐり先輩の淫肉が、きゅっと締まった。自身の身体の動きにめぐり先輩も顔を真っ赤にした途端……かちん、と嗜虐のスイッチが入った。
「（比企谷くん……今は静かに……）んはぁぁっ!?」
めぐり先輩の両手を掴んで引き寄せ、全力で腰を打ち付ける。不意を突かれてめぐり先輩が遠慮の無い声を上げてしまったため、子供た

ちの関心が一気に集まる。
『えっ!?　なに今の声!?』
『かずくん、わたしも聞こえた！』
「……～～～～っ！　……～～～～っ！」
　めぐり先輩は涙目になって首を振るが、声を隠しても腰を打ち付ける音は隠せない。
『なんだろ、なんの音だろ？』
『なんだろうね～』
　無邪気な声がドアのすぐ向こう側から聞こえる。もしかしたらドアに耳を付けているのかもしれない。距離にすれば２～３ｍという至近距離で、俺とめぐり先輩の身体は緊張に包まれる。
「声、出さなければきっとバレませんよ。頑張ってください」
「そんな、む、むり……うぅぅんっ!?」
　強烈に腰を打ち付けると、結合部から透明な液体が弾け飛ぶ。そこから一切止まることなく、どんどん抽送の速度を上げていく。
　ばちゅっ、じゅぱっ、じゅぷっ。
　ばじゅっじゅぷっぱじゅっ。
　ばじゅじゅぶじゅびじゅぐがじゅじゅぐ……っ。
「うぅぅぅ……あっ!?　うぅぅぅぅぅ……っ！」
　両腕を引っ張られためぐり先輩が、押し寄せる快感の波に身体を焼かれて幾度となく背中を波打たせる。不規則に痙攣しては愛液が溢れ出し、肉棒の滑りを良くして結合部で卑猥な音が響いてゆく。めぐり先輩は必死で声が漏れるのを我慢していて、それが却って快感を助長しているようであった。
『……中で、何してるんだろう……？　なんかへんなかんじ……』
『……か、かずくん……っ！　もう行こう！　ね！』
『え～、なんで～？』
『い、いいからっ！』
　どうやら女の子の方が状況を察したらしい。腰の動きを止めて辺りの音を聞くが、どうやらもう誰もいないようだ。ませているなあ……と思いつつも、何だかんだでかなりスリリングだったのでほっと

一息つく。
「もう行ったみたいですね。からかい過ぎてすいませ……ん……っ？」
「あ……っ、んぁ……あ……っ」
――めぐり先輩が、俺に両手首を掴まれたまま、緩慢な動作で腰を前後させていた。
「……あ、あれ？　もう行ったって……さっきの、子どもたちのこと……？」
可愛らしい顔立ちにたっぷりと汗を滲ませて、虚ろな瞳で俺を見やってくる。
……この人は、２人が去ったことにまるで気付いていなかった。
何だよ、どれだけ夢中になってたんだよ。
あれだけ恥ずかしがっておきながら……！
身体中の毛が逆立つような感覚がした瞬間。
――ぷつん、と。
引き絞られていた糸が、あっさりと切れた。
「手すりに掴まってください」
「え……うあぁぁっ!?」
めぐり先輩の体勢を安定させた瞬間、尻肉を力一杯掴んで一気に腰を打ち出す。突然肉槍に蹂躙された膣道は、それでも肉竿を余すことなく締め付けてきた。
「どんだけ自分がエロいことしてるか分かってるんですか？　ねえ、ねえ!?」
「いっ、ひぐっ、うんん……んはぁぁっ！」
「俺が腰を止めたら、自分から動かしてましたよね。それも二度も。信じられないですよ」
「ひぐぅっ!?　言わな……言わないで……あふぁぁっ!?」
「ほら、もう誰もいませんよ。好きなだけみっともない声出してイってくださいよ。ほら、ほら、ほら！」
「やっ……うあぁぁんっ!?　ひぐっ、イっ、イっ、イクぅぅあぁぁぁぁぁっ!?」

罵倒の言葉を重ねるごとに蜜壺が締め上げてきて、あっと言う間に絶頂に達する。足が生まれたての子鹿のように震えて、びしゃびしゃと透明な液体が床に撒き散らされる。もわっと立ち込める牝の香りが勃起を益々強めた。
「ほら、俺が出すまでちゃんと腰振ってくださいよ。ほら、ほら、ほら」
「うぁぁぁ……うあぁぁぁ……イっ、あぐっ、ひぐっ……うあぁぁぁっ!?」
絶頂の余韻が去っていない内にもう一度イカせる。
あの、天使のごとき可憐さを持っためぐり先輩が。
尻を突き出して、好き放題突き虐められ、言葉でも責め立てられて……凄まじいまでの快感を覚えている。
その事実が、下半身を燃やし尽くさんばかりの興奮を呼び起こす。
「俺も、そろそ、ろ、出しますよ……っ」
「あっ、うぐっ、ひっ、出るの？　出るの……？　ひぐっ、ひんっ、いいよ、出して、出して、出して……っ！」
めぐり先輩が上ずった声で誘い、こちらを振り向く。目にたっぷりと涙を溜めた表情は呼吸を忘れる程綺麗でいやらしく、その表情に撃ち抜かれた。
「もう……出る……っ！」
「あっ……あふぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!?」
降りてきていた子宮口に亀頭をぴったりと押し付け、たっぷりと中に注ぎ込む。ごぶ……どぶ……ごぶぶぶ……っと、腰が抜けそうな程の大量の射精。こちらの脈動に合わせて、すっかり牝に変貌した肢体はびくびくと痙攣した。
肉竿を引き抜くと、精液と愛液がブレンドされた液体がぼたぼたと床に落ちる。
……やりすぎたか……？
急に冷静になって冷や汗をだらだらとかいていると、めぐり先輩が手すりに掴まったままゆっくりと振り向いた。
「……ひっ……うっく……ばかぁ……っ」
「――っ」

本気で謝るという選択肢以外に、「もう一回がっつり襲う」という選択肢が浮上してしまう。慌ててぶんぶんとかぶりを振って耐えた。
「ごめんなさい、ちょっとやりすぎ……って、え、あれ、ちょっと？」
めぐり先輩がよたよたと俺に歩み寄り、俺の肩を押してくる。混乱したまま便座に腰を下ろすと、依然としていきり立った肉槍の上にめぐり先輩が躊躇うことなく跨り――ずぶりと、己の中に迎え入れた。
「ちょ、ちょっと……っ!?」
「ばかぁ……っ」
ぽろぽろと泣きながら、俺の首に腕を回してぎゅっと密着し、耳元で何度も涙声で囁かれる。
甘えながら腰を軽く前後するだけの動きで、この後俺はたっぷりと搾り取られた。

× × ×

……癒されたけど、すげえ癒されたけど。
それ以上に、めっちゃ搾り取られた。
癒されたんだけどね。それは間違いないんだけどね。何か干物になりそうだった。物理的に。
俺がめちゃくちゃに責め立てた後、お返しとばかりに自分が上になって俺から2回搾り取ったためぐり先輩は、つやつやとした顔で手を振って去っていった。最後に手を振る時の2人の元気の違いが実に分かりやすかった。
「……もう、流石に……」
今日は無いだろう……と、最後まで言葉を口にする元気さえ無い状態でふらふらと家に向かっていると、ＬＩＮＥのメッセージを受信した。何ぞやとトーク画面を開いてみる。
『今日、泊まれるかしら』
「……」
……己の体力と欲求を天秤にかけた結果。
『問題ない』
と、既読を付けてから僅か１０秒後にはこの返事をしていた。
後悔はしていない。

続く。

（１０）

「あら、早かったわね。疲れたでしょう？　上がってちょうだい」
すっかり通い慣れた家に足を運ぶと、俺を迎え入れてくれた雪乃が柔らかく微笑む。雪解けのような微笑に心が解れるが、「疲れたでしょう？」の所だけ若干声音に険があったのは気のせいだろうか。
リビングに入ると、エアコンの効いた涼しい空気が身体を包み込んだ。
「沢山汗をかいたでしょうから、すぐにシャワーを浴びたいでしょうけど……その前に、これを書いてもらって良いかしら」
またもや険のある言い回しをしながら、足の低いテーブルの前に座った雪乃がちょいちょいと手招きをして、テーブルの上にある紙を指差す。何ぞやと思い座って見てみると、どうやらＥｘｃｅｌで作ったファイルを印刷したもののようだった。
縦軸の一番上に「人名」と書かれていて、横軸に「内容」「総合計数」と書いてある。
……。
……あれ、これ、尋問ですのん？
血の気がさざ波のように失せていく。俺の体内が今マジで夕凪。超静か。島唄が歌えそう。動揺しすぎてテンションがおかしくなっている。
雪乃を見る。テーブルに肘を付いて、両手のひらに顎を乗せて天使のような微笑みを見せている。可愛いのと怖いのとで心臓がおかしなことになっている。
「なんかアレだな、こう言う時のお前の笑顔って、ちょっと陽乃さんに似てるな」
「……」
「……ご、ごめんなさい……」
一見、変化は無いのだけど、何て言うか。
恐いのと可愛いのと怖いのと超恐い。
「あの、この、総合計数というのは……まさか……」

「ご想像にお任せするわ。さ、書いてちょうだい」
「あの、これを書いた後、僕はどうなるのでしょうか……」
「別に？　どうもしないわ。それを参考にするだけよ」
参考って何だよ。
参考って何だよぉ！
恐いよぉ！
冷や汗をだらだらと流しながら、富山市議会議員の生霊を憑依させて如何に虚偽報告をするかを頭の中で練りこんでいると、不意にポケットの中のスマホが鳴った。取り出して見ると小町からの電話だった。救いの女神現る。
「あの、電話……」
恐妻家に「あの、今度友達と旅行行きたいんだけど……お小遣いをちょっと、ほんのちょーっとで良いから増やしてほしいんだけど……なーんてね！　うそうそ、ごめん、ぶたないで、やめて！　お願いです、止めてください！　あああ！」と言った懇願をする時のような声音で雪乃に電話に出て良いかどうかの可否を尋ねる。妄想の後半がおかしかったのは俺の動揺が故だ。
俺の質問に、雪乃は輝くような笑顔を見せた。
「出て良いわよ」
雪乃の返事で安心する。これで上手いことこの場を切り抜ける用意を……！
と、思っていたら。
「あ、ありがとうございます、それじゃあ」
「ただし、スピーカーモードにしてちょうだい」
逃げ道が☆
無い☆
「……はい」
音楽記号で言ったらｐ（ピアノ）が８個くらい付きそうな弱々しさで答えて、震える手でスピーカーモードにする。
「お兄ちゃん、ご飯どうするー？」
「あ、す、すまん、今日の夜ご飯は俺の分は作らなくていいから」

「えー、そうなの？　折角小町渾身の出来の……って、あれ、お兄ちゃん？　今って一人？」
小町がそれとなく尋ねてくる。
何で分かるの。
女の人怖い。
女の人怖い！
これ以上状況を混乱させたくないので、嘘を吐くことにする。
「一人だぞ、独りだ、独り。俺はずっと独りだぞ」
「何でテンパってる上に自分を追い込んでんの……。……じゃあ、ファミレスかどっかにいるの？」
「ああ、そうだ。俺には独りファミレスがお似合いだからな。頃合いを見計らって独り焼肉も行くつもりだぞ」
「どうしたのホントに……？　面白いから良いけど」
電話の向こうで、妹がカラカラと愛くるしい声で笑う。このスマホにテレポート機能付いてねえかなあ……今すぐ電話の向こうの君に会いに行きたい……何かＪ―ＰＯＰの歌詞みたいになってる……。
そうそう、と小町が思い出したように言う。
「お兄ちゃんの電気アンマのせいで、腰がっくがくだったんだからね。学校で心配されないようにするの大変だったんだから！」
「あっ」
電気アンマという単語が聞こえた瞬間、雪乃の瞳が蒼色に変化した。サヴァンや！　サヴァンやでぇ！　恐怖のあまりキャラが崩壊しとるでぇ！
「あの後のシャワーも凄かったよね。まさか……って、あれ、お兄ちゃん、聞いてる？」
「聞いてる聞いてる。今生で最期になるかもしれない妹との会話を目一杯楽しんでる」
「お兄ちゃん死ぬの!?　なんで!?」
小町のマジッッコミを聞けた。こうしている間も部屋は冷房要らずの冷え込みを見せている。
「小町、ちょっとファミレス出るから一旦切るわ。わりいな」

「んん……お兄ちゃん、本当に大丈夫？　取り敢えず切るけど。じゃね」
ぷつっ、と通話が切れる。
小町の声が聞こえなくなった部屋は、とても静かだった。
俺の心臓の音が聞こえないのは、もう止まっているからだろうか。
雪乃が突然手を伸ばし、人差し指で俺を差した。アバダケダブラとか唱えるのかしら……クルーシオも有り得るかな……と数秒後に訪れるであろう地獄を覚悟していると、細い指がそのままゆっくりと下りていき、Ｅｘｃｅｌのシートを指差した。何だかコックリさんを生で見ているような気分だ。
「小町さんとの朝の出来事を書きなさい。今すぐ」
「はい、書きます」
嘘を書ける雰囲気ではなかった。
震える手で内容を書こうとして……陽乃さんとのことも書かないと、これは正直に書けなくないか？　と気付く。しかし今から陽乃さんのことを打ち明けるのも怖いな……と逡巡していると、スマホが鳴った。
画面を見ると、案の定陽乃さんだ。
「出なさい。スピーカーモードで」
「はい……」
全てを見透かされているのでは……？　という疑念を抱きながら、ｐ（ピアノ）９個分の弱々しさで答える。
しかし陽乃さんか……小町は騙せても、この人はどうなんだろうか、と思っていると。
「ハァーイ、比企谷くんと雪乃ちゃーん」
『……っ!?』
予想の斜め上を行く挨拶をかまされた。
「え、なん、陽乃さん、ええ……っ!?」
「ありゃ、本当に当たったの？　やだなー比企谷くん、絶倫なんだから！」
電話の向こうでカラカラと笑う声がする。俺の口の中でカタカタ

と歯が鳴っている。度の過ぎた恐怖は口の中にカスタネットを作ってくれるらしい。
「あの、陽乃さん、何の用で……」
「やだなー、用事が無かったらかけちゃダメなの？　……朝は、あんなに激しく愛し合ったのに……」
色気のある、それでいて甘ったるい声で囁かれた。普段なら理性が飛ぶ所だけど、物理的に首が飛びそうな今現在は、極上美人の声に酔いしれている場合ではない。
「陽乃さん、あの、その、ちょっと恐怖で死にそうなんで、あの、その」
「分かっててやってるんだよー？　比企谷くんって一回スイッチが入ったらとことん鬼畜だよねー。流れるようにわたしの事を気絶させちゃうんだもん。ねー、雪乃ちゃん？」
「……姉さん、私はこれから比企谷くんに聞きたいことがあるから、切るわね」
「ありゃ？　雪乃ちゃんったらつれないなー。わかった、わかった。おやすみ、朝はうつ伏せのわたしに3回も出して、その後にわたしと小町ちゃんと3人でお風呂を楽しんだ比企谷くん」
「ちょ……っ」
通話が切れた。
画面から恐る恐る視線を上げると、雪乃が笑みを浮かべたまま紙を指差していた。
「書きなさい？　今すぐ」
「はいぃぃ……っ」
有無を言わせぬ迫力に、一切の抵抗も叶うことなく必死でペンを走らせる。
何だろう、俺は遺書を書いているのだろうか。
恥の多い生涯を送って来ました……。
続く。

（１１）

雪乃の指示、と言うか命令により、今朝の陽乃さんと小町とのあれこれについて事細かに報告させられる。今後社会に出て万が一始末書を書くことがあっても、今程絶望した気持ちにはならないだろう。

「……なるほどね。まあ良いわ」

緊張しながらも記入した内容を見せると、雪乃は何とも言えない表情で一通り読み、意外にもあっさりとした反応を見せた。

「……良いのか？」

「ええ、良いわよ？　この後のことも全て正直に書いてくれるのだろうし」

助けて！

助けて！

助けて！

頭の中で限界音量で警告音が鳴り響く。これ本当にあかんやつ。あかん、あかん！

「……何でもしますから、許してください……」

「何でもするのね？　じゃあこの紙できちんと報告してちょうだい」

助けて！

助けて！

助けて！

心の中で泣き叫んでいると、スマホが再び鳴った。画面を確認すると、相手は由比ヶ浜マだった。

「スピーカーモード」

もはや単語一つで俺を支配する雪乃さん、マジクール。

泣きそうになりながら電話に応じる。

「もしもし～、ヒッキーくん？」

「……どうも……」

「あら、どうしたの～？　……あら、うふふふ、そう言うこと。うふふふ～」

え、何で全部察してる雰囲気を出してるのこの人？　待て待て、

きっとカマを掛けてるんだ……！
「ヒッキーくんはモテモテね～。今朝は楽しかったわ～。朝からぷりぷりのものを飲めて美味しかったわ。また飲ませてね？　……それじゃあね～」
「え、あっ、ちょ……っ」
最後だけ妙に艶めかしい声で囁いて、有無を言わさず切ってしまった。
通話が終わると、地獄のような沈黙が訪れる。
いや、違うな。
今の、この場所は。
紛れもなく、地獄そのものだ。
「……あ、あの、雪乃、さん……？」
さん付けで媚びへつらうように様子を窺うと、雪乃は顎に手を当てて何やらぶつぶつと独り言を呟いていた。
「……人妻……」
何の要素を抽出してんだお前は。
×　×　×
由比ヶ浜マとの内容を一通り記入させられげっそりしていると、雪乃が紅茶を淹れてくれた。ふっと緊張を緩めて紅茶を口にすると、味わい深い香りが身体中に染み渡る。
「……相変わらず美味いな」
「頑張ってもらわないといけないから。気合を入れたわ」
「お、おう……」
笑顔でプレッシャーを掛けられた。
今から全力で逃げたらどうなるかな、空気投げをされて身体がぼろぼろになるだけだな、等と絶望的なシミュレーションをしていると、再び着信が。
相手はいろはだった。
「もしもし？」
「おう」
「先輩、こんばんはー」

「こんばんは、一色さん」
『っ!?』
まさかの先制攻撃。電話の向こうで、いろはが息を呑む音がはっきりと聞こえた。なんだなんだ、一色に威嚇攻撃でもする気なのか。
「え、せ、先輩、まさか……」
「そうね、あなたが予想している通りよ」
「いや、おい、ちょっと……」
何修羅場を演出してくれちゃってるんだと言いかけた所で、いろはが予想外の言葉を言ってのけた。
「先輩、わたしの中にあれだけ出しておいて、まだ襲う気ですか？　へんたいだー！」
「え、ちょっと」
「あ、でも……生徒会室でするのはちょっとハマっちゃいました。先輩が卒業する前に、もう何回かしたいなー、なんて……」
「ちょっと、あの、君が知ってる通り、ここにはね、ここにはね」
「雪ノ下先輩が居るんですよね。も～、雪ノ下先輩ったら焼き餅焼きなんですから！」
おっと、この子は死にたいんでしょうか。しかもこの場合真っ先に死ぬ（死因は凍死）のは俺なんですけれど。
いろはの言葉に、雪乃は目を見開いた後に俯いてふるふると震える。艶やかな黒髪から覗く耳が赤くなっていた。
「……一色さん？　今度、じっくりとお話しましょうね」
「ぴゃーっ!?　し、失礼しましたっ！　おやすみなさいっ！」
「え、ずるくない？」
俺の最後の言葉が言い切られるより先に電話が切られる。
「……モテモテね？」
「……ど、どうもです……」
間抜けな返事の後は、怖くて顔を見られなかった。
×　×　×
いろはとの行為を事細かに書き終えて、再びひと息吐く。ちょっと報告に慣れてきたのが我ながら嫌だ。

「慣れてきたのは分かるけれど、段々『艶っぽい』だの『淫靡な』だのと官能小説みたいな表現を書き始めたのは何とかならないかしら？」
雪乃がレポートを読み終え、こめかみに手を当てながらため息を吐く。おお、真顔でそんなことを言うとは。でもツッコんだら今度こそ命は無いだろうから言えない。
ここからどうしようかと迷っていると、再び着信が。
相手は川崎。
ああ、何で皆わざわざこのタイミングで電話を……と思いながら、通話ボタンを押した。

×　×　×

それからも、ひと悶着では済まないくらい沢山のことがあった。
川崎に対して雪乃が話しかけた事で笑えるくらい険悪なムードになったので、お前の下着色っぽかったなと言って川崎が羞恥心で何も言えなくなる代わりに、雪乃からごみを見る目で見られたり。
戸塚の笑顔を見て抱きたいと思ったことを書いたら雪乃が激しく動揺していたり。あなたの知らない世界を見せてしまって申し訳無い……。
結衣が凶暴なまでの豊乳を使っていたことを知り、自分の胸を両手で押さえてショックを受ける雪乃が可愛くてしょうがなかったり。
「入れ替わってる!?」って言ってほしかった。
平塚先生と生徒指導室で致したことを報告して、「あなたは学校中の部屋を制覇したいの？」と雪乃に真顔で聞かれたり。その願望が無いとは言い切れなかった。
折本と留美に2連続で癒されたことを報告して、何もやらかしてないぞと自慢げに言ったら「女性と続けざまに会っていながらよくそんな事が言えたわね？」と氷よりも冷たい声で返されたり。
めぐり先輩と多目的トイレでした時のことを話し、「その男の子が将来あなたのような色欲魔人にならないことを祈るばかりね……」と呆れながら言われたり。色欲魔人ってひどすぎない？　否定は出来ないけど。
「そんなこんながあって、今ここに居ます」

最後は口頭で締めくくると、雪乃が深く深くため息を吐いた。
さてさて。
俺もいよいよ、最期の刻を迎える訳か。
辛いこともあったけれどまあまあ悪くない人生だったな……と今までの歩みを振り返っていると、雪乃が俺をじっと見つめ、ふっと呆れ笑いを浮かべた。
「あなた、よく生きてるわね……それだけのことをしておきながら、見た所元気そのものよ？」
「え？　ああ、まあ……鍛えられてるからかな……」
「……モテモテね？」
「ご、ごめんなさい……」
冷や汗をだらだら流していると、雪乃がそっと立ち上がる。
「少し休むと良いわ。ソファに座ってちょうだい」
「え？　いや、大丈夫だって。取り敢えずシャワーに……」
「ソファに座ってちょうだい？」
「は、はい……」
命令のままに座ると、雪乃が俺の足を広げてその間に腰を下ろし、膝立ちになった。
「え、な、何？　何すんの？」
生かされたとは言え、予想していなかった展開に面食らっていると。
「あなたはゆっくりしていて良いわよ。……ゆっくり、ね」
そう言って、雪乃が笑みを浮かべる。
今まで見てきたどんな素敵な笑みとも違う、淫靡な微笑み。
くらくらする程の美貌と淫靡な声音に、俺はもう、目の前の女性のことしか目に入らなくなっていた。
続く。

（１２）

ゆっくりしていて良い――と言う雪乃の言葉に従い、ソファに深くもたれかかる。雪乃はこちらの足元にゆったりと膝を付き、両膝を掴んでかぱりと広げた。雪乃の顔が近付くだけで股間がむくむくと膨らみ、こちらの変化に気付いた雪乃がふっと笑みを漏らす。

濡れ羽色の美しい髪をそっと掻き上げ、猫の様に目を細める。

そして、ぺろりと舌なめずり。

連続した僅かな挙動の組み合わせが、まるでこちらの鼓動を操っているかのように一気に心臓の動きを速める。

雪乃がこちらの下腹部に顔を寄せ、薄い唇を上下に割り開いた。雪乃がチャックを噛むと、かちりと金属音がした。白い歯を覗かせながら、上目遣いをしてチャックを下ろして行く。チャックを一番下まで下ろすと、今度はその隙間に顔を割り込ませた。ボクサーパンツの生地をみちみちと引き伸ばした勃起の先端をぱくりと咥え込み、ジーンズの中から引きずり出す。かぱりと開いた唇に膨らみをもごもごと味わわれ、張り詰めた先端が当たっている生地は先走りの汁と唾液でべとべとになった。

「ふー……っ、ふー……っ」

まるで三日ぶりの食料にありついた猫のように息を荒げて、ボクサーパンツごと肉棒を咥えた雪乃が赤らめた頬を左右に振る。生地が擦れるだけで痺れるような甘い快感が身体に染み渡った。

雪乃が口を離し、こちらに晒すようにてろりと紅い舌を出す。舌の先から垂らされた唾液は細い糸となり、肉竿の先端と繋がっていた。

ジーンズのチャックと同様に、ボクサーパンツに付いている割れ目を雪乃がこじ開けると、焦れったい快感でいきり立った肉竿が血管を浮き上がらせて震えている。

「ふふ……なあに、これ……。まるで何日も我慢してたみたいじゃないの……とんだ変態ね、あなたは」

「……っ」

雪乃は悪戯っぽい笑みを浮かべて、赤く膨らんだ亀頭をぺろぺろと

美味しそうに舐める。言葉を紡ぐごとに、自分自身が興奮して行っているように見えた。
雪乃が喉奥まで晒すように口を開ける。上品な美しさを湛える彼女から信じれられない程淫らな匂いが醸し出され、口から沸き立つ蒸気さえ見えた気がした。
「……んふぅぅぅ……っ」
「うあ……っ」
艶かしい口がずぶりと肉竿を咥え込むと、先走りの汁がとぷりと溢れ出た。
× × ×
「……お、おい、そろそろ……っ」
「んふぅぅ……っ」
俺の懇願の声に対して、雪乃は妖しく目を細めるばかり。
――雪乃が肉竿を咥え込んでから、1時間以上経過していた。
初めはてっきり、お仕置きだと言って何回も搾り取られるものかと思っていたが……予想が外れた。初めは亀頭に触れるざらついた喉奥の感触を堪能していて、ちろちろと竿を撫でる舌の愛撫に陶然としていたが……この口淫が、射精に達しないように絶妙にコントロールされている事に途中で気付いた。どれだけ艶かしい口淫に及んでいても、射精に達する寸前まで追い込むと唇の窄まりを緩め、舌の愛撫も止めてこちらの反応をじっと窺うのだ。
これはこれでお仕置きとしてはきついな……と思うと同時に、ねっとりとした口内愛撫を延々と味わうことも出来るのだから、ご褒美でもあるよなぁ……とも思った。雪乃の口内は熱くぬめっていて気持ちが良く、下手をしたら何時間でも入れていられる。
雪乃の顔を見ると、口淫に一向に飽きた様子が無い。このままでは何時間でも続きそうだ。
……どうしよう。
× × ×
「ゆ、雪乃、もう……っ」
「んふぅぅ……んっ、仕方無いわね」

更に1時間後、合計2時間も射精しないままましゃぶられ続けてようやく解放された肉竿は、雪乃の唾液が亀頭から玉までぬらぬらといやらしく塗りたくられていた。
雪乃の顔をそっと撫でて囁く。
「……お前の中に、挿れたい」
「……っ」
ストレートな俺の言葉に雪乃は目を見開いて、間もなく、小さく頷いた。
「ここで良いか？」
「……寝室の方が良いわ。……私も我慢してたから……」
「……っ」
続きを呑み込んだ言葉に、ごくりと喉を鳴らした。
雪乃が立ち上がり、その後に続いて肉竿を晒したまま立ち上がると、まるで犬のリードを握るかのように、雪乃が勃起した肉竿を掴んだ。びくりと身体を震わせると、雪乃が妖艶な微笑みを浮かべた。
「この方が、興奮を維持出来るでしょう？」
「……っ、おま、え……っ」
耳元で囁かれて、出尽くしたと思っていた先走りの汁が再び噴き出た。
「それじゃ行くか……って、……ん？」
「どうしたの？」
「いや、……何でもない」
「？　分かったわ。……早く、行きましょう」
しっかり防音されていて、俺と雪乃が発する音以外は冷蔵庫の音くらいしか聞こえない筈なのに、今何か音が聞こえたような気がした。しかし耳を凝らしても既に音は聞こえず、雪乃もすぐにでも交わりたいのか袖をくいくいと引っ張ってきた。
「……まあいいか」
小さく独り言ちて、先程聞こえた音は気のせいだと思ってリビングを出た。

×　×　×

寝室に入ってドアを閉めた瞬間、雪乃が抱き付いてきた。
「ふぅぅ……っ、んっ、ちゅるっ、ちゅぴっ、れるっ、んんんん……っ」
首に腕を絡めて身体を密着させて、艶めかしい肢体をこすりつけてくる。いきり立った肉槍が雪乃の腹にぐいぐいと押し付けられて、雪乃は苦しそうに、けれどどこか嬉しそうに呻いた。
互いの舌を交わらせながら、雪乃の乳房を揉む。
「んふぅぅぅ……っ！」
掬い上げるようにして軽く揉んだだけで、雪乃の身体がぶるぶると震える。膝ががくんと崩れ落ち、首に絡めた腕だけで身体を支える体勢になる。
「んふぁぁ……んん……っ、脱がせてあげる……んむぅぅん……っ」
とろとろになった表情で優しい笑みを浮かべて、雪乃がこちらの上着のボタンを外し始める。ボタンを全て外されてその後は自分で脱ぐと、雪乃がTシャツの裾に手を掛けた。万歳をすると、雪乃にひと息にTシャツをたくし上げられ脱がされた。上半身裸になると雪乃はうっとりとした顔を胸板に近付けて、乳首に吸い付いてくる。ぴりぴりとした甘い快感電流に身体を震わせていると、雪乃は乳首に吸い付きながらジーンズのベルトを外してずり下ろし、パンツも同様に下ろした。
お返しに全く同じことをしてやることにする。キスだけでも足をがくつかせていた雪乃の上着を脱がせてブラを外す。何度見ても見飽きるどころかもっと見ていたくなる身体に見惚れながら、乳首に吸い付いてスカートを脱がし、ショーツをずり下ろす。淫裂とショーツの間に透明な糸が伸びていて、ごくりと息を呑んだ。
寝室のフローリングの上に互いの衣服を乱雑に脱ぎ散らかして、相手の身体を懸命に貪る。
「んふぅぅ……んんっ！　ちゅるっ、ちゅぴ……はぁぁぁ……っ」
雪乃は肉棒を両手で掴んで、さすり、しごき上げる。
俺は妖精のごとき美しい形をした乳房の頂を指で摘まむ。
雪乃は立っているのが厳しい程に身体をがくつかせるが、肉棒を強く掴むことで何とか支えにしていた。細い指に強く握りしめられた

ことで強烈な快感が下腹部を貫いて、俺自身立っているのがやっとだった。
「……ベッド、行くか」
「……ええ、……うんあぁぁ……っ」
触り心地の良い尻を揉みながらベッドに進むと、雪乃は震えながら付いてきた。
『ちょっ～！　いろ～さん、～～ないでくださ～～っ！　バレ～～っ！』
「……っ!?」
何だか聞き慣れた声が、ひどくくぐもった音で聞こえた気がした。驚いて振り向いたが、当然ながら部屋には誰もいない。
「……どうしたの？　……はやく……っ」
「……あ、ああ、そうだな。わるい」
発情した牝の顔をした雪乃に急かされて、その表情に益々勃起しながらベッドに上がる。さっき聞こえた声は気のせいだと思うことにした。
雪乃がベッドの上にころりと寝転がる。耳の横に手を置いてシーツを掴み、足は僅かに開いた扇情的なポーズ。どうにでもしてくれと言っているようなものだった。
ここはいきなり挿入して、たっぷりといじめ抜いてやろう……と、雪乃の上に覆いかぶさる。
雪乃と目が合い、細い喉がこくりと鳴るのを聞いた――その時。
『ちょっ、ほんとにやば――』
どこかで何かが開いた音がして。
『わーーっ!!』
『っ!?』
部屋のクローゼットが突然開き、俺と雪乃が高速で顔を向けた。
そこには、尻もちをついて痛そうにしている小町といろはの姿。
『……』
地獄のような沈黙が流れる。
「ええっと……」

いろはが気まずげに顔を逸らし、小町がたははと苦笑いしながら俺と雪乃を交互に見ている。雪乃をちらりと見てみると、ものの見事に固まっている。本当にぴたりと時が止まっている。
『失礼しました』
小町といろはがぺこりとお辞儀をして、何事も無かったかのようにクローゼットに戻った。
「待てこら」
すかさず開けた。
「にゃーっ!! お兄ちゃん、この状況下でも勃ってるなんて変態!」
「そうですよ先輩! 大変いかがわしいですとても良いと思います!」
「ひ、ヒッキー……っ」
「お前らに変態呼ばわりされたくないしいろはの台詞よく聞いたらおかし……って結衣もいる!? あれ!?」
クローゼットの中に、結衣もいた。3人も入っていると中々きついようで、3人ともよく見ればじっとりと汗ばんでいる。
うんうん。
エロいエロい。
いや、そうじゃなくて。
「一から説明しなさい。じゃないと怒るぞ」
「お、お兄ちゃんが怒ると本気でエゲツないから勘弁してほしいです……」
3人が引き攣り、何故か部屋のあちらこちらにそれぞれが視線を巡らせる。
「? どうした? まるで他にも隠れてる人がいるみたいに見えるが」
「あ〜、いや〜、その……」
結衣が気まずそうに笑い。
「せ、先輩……すごいですね! 超能力者みたいです!」
いろはが恐らく彼女の人生史上最も下手な褒め文句を言って、胸の前で両手をぐっと握った。

……え、なに。
他にも居んの？
部屋を見回すと、未だに綺麗に時が止まっている雪乃が目に入った。
続く。

（１３）

クローゼットの中に居た小町、いろは、結衣の反応により、どうやら他にも侵入者が居るらしいことを知る。一体何処に居るんだ……と辺りを窺うが、気配を読む能力がある訳でもないので全く分からない。円を使えたらなーと生まれて初めて思った。ところで３４巻が出るのは東京オリンピックが終わってからだろうか。３３巻が４年半ぶりの刊行だったし。

しばらくきょろきょろして、どうしたものかと考えていると。

『そろそろ良いかー』

と言う呑気な声が、すぐ近くから聞こえた。直後、もう１つのクローゼットがかちゃりと開く。

「……陽乃さん……と、めぐり先輩!?」

「比企谷くん、ひゃっはろー」

「ひ、比企谷くん、こんばんは……」

クローゼットから飄々とした様子で陽乃さんが出てきて、その後に続いて何だか気まずそうな顔でめぐり先輩が出てきた。気まずそうな顔も可愛い。

『ふむ、頃合いか』

『そうみたいですね～』

続いて、ベッドの下から平塚先生と由比ヶ浜マが。何だこれ、登場の仕方は完全にホラーだけど何だかすごく馬鹿っぽい。あと二人ともすげえ楽しそうで何か腹立つ。

『……あたしは、別に……っ』

『八幡、裸のままなのはちょっと……』

『何この状況、超ウケるんですけど』

続いて寝室のドアから川崎、留美、折本が入ってきた。ここに入ってくる前に３人がどんな会話をしていたかすげえ気になる。絶対変な空気になってるって。

『……』

そして訪れる。

沈黙。
楽しそうに笑っている人（訳･陽乃さん、平塚先生、由比ヶ浜マ）や気まずそうにしている人（訳･結衣、めぐり先輩、）と何かウキウキしてる人（訳･小町、いろは）と生娘組（訳･失礼。川崎、留美、折本）と……。
「……」
止まっていた時が動き出し、流れるように布団に包まり、小さな山を作って引き籠っている人（訳：雪乃）。
うむうむ。
よし、落ち着こう。
「これはアレだな、タグ付けされた人物総出演、ってとこだな」
「先輩、落ち着いてください」
「て言うか、あれ？　戸塚は？　タグ付けされてたよな？」
「お兄ちゃん落ち着いて、その道に行くにはまだ修行が足りないよ。あと戸塚さんはそもそもタグ付けされてないよ」
２連続でツッコミを受けて、少し落ち着いた。
ふぃー。
落ち着け、落ち着け、状況を整理しろ……！
「……誰が首謀者ですか」
「わたしだよ、わたし。皆を呼んでみちゃった」
陽乃さんがそれはもう素晴らしい笑みを浮かべて手を振ってくる。陽乃さんの仕業と聞いて一発で納得してしまうのがこの人の恐ろしい所だ。確かにこのメンバーなら、陽乃さんの知り合いもしくは知り合いの知り合いだから、連絡は容易いのだろう。
「……陽乃さんなら、雪乃の家の鍵を持ってるのも頷けますね」
「……私、姉さんに鍵なんて渡してない……」
布団の中から悲痛な声が聞こえた。陽乃さんに視線を向けると、適当な方向を見ながら口笛を吹いている。こう言う時の口笛って下手なのが相場だと思うんだけど、鬱陶しいくらいに上手い。なんなのこの人。
「どうやって入手したかは……乙女の秘密、ってことで」

そう言って、陽乃さんが人差し指を唇に当て、片目をぱちりと閉じた。強烈に可愛いが、言いたいことは言っておく。
「乙女って……」
「比企谷くん、何か言った？」
「ごごごごめんなさい……」
急に蛇のような目つきで睨まれた。死んじゃいそう。
動きが止まりかけた心臓を懸命にマッサージして何とか持ち直し、改めて尋ねる。
「……こんなことになってますけど。何がしたいんですか？」
「……それはね？　……」
陽乃さんがもったいぶりつつもやって話してくれそうになったが、急に動きを止める。何ぞやと思っていると下腹部に小さな痛みが。
「お兄ちゃんの、流石にちっちゃくなりましたねー」
「この状況でも勃ったままだったら、流石にわたしでも引くよ小町ちゃん……」
「……」
流石にしんなりしていた俺の分身を、しゃがみこんだ小町といろはが興味深げにデコピンしていた。
デコピンて。
「……」
無言で２人の頭をチョップした。
「ふおぉ……」
「あうぅ……」
小町の痛がる声が何だか変だが、まあ気にしない。
「それで……どうしたいんですか？」
チョップした２人の頭を撫でながら真面目に尋ねるが、陽乃さんは今のやりとりを見て腹を抱えて悶絶していた。
「……で、デコピン……っ、しかも左右から……ぷらぷらしてる……っ」
「……」
美人がひいひい言って笑ってるのを見るのも、結構良いものだと

知った。
　それは良いとして。
「陽乃さん、そろそろ本題を……」
「ああ、ごめんごめん……」
　別にめんどくさい事は考えてないよ……と、既に盛大にめんどくさいことをしでかした陽乃さんが笑い、俺と雪乃を交互に見つめた。
「2人がエッチするのを、わたし達も手伝ってあげる」
『!!??』
　陽乃さんの言葉に、部屋中の皆――アダルト組とデコピン組を除く――が目を向いて驚く。雪乃は包まった布団ごとびくりと揺れた。
　差し当たって……と、陽乃さんが獲物を見る目で雪乃を見る。雪乃は亀のようにそろりと首を出して(可愛い)、恐る恐る陽乃さんと目を合わせた。
「雪乃ちゃん、そこから出ようか」
「姉さん、帰って」
「やーだ。こんな楽しい状況、見過ごせる訳無いじゃない」
「姉さんがこんな状況にしたんでしょ……っ！」
　やばい、喧嘩が……！　と思った直後、陽乃さんがベッドに足を向けた。

×　×　×

　陽乃さんがベッドに近付き、縁に腰掛けると、雪乃は再び頭まで布団にすっぽりと包まった。うつ伏せになって丸まっている。
「雪乃ちゃーん、出ておいでー」
「……」
「出ておいでー？　……出てこないと……」
「……っ」
「……こうだっ！」
「きゃあっ!?」
　陽乃さんが突然布団の上から雪乃の背中に抱き付く。雪乃は悲鳴を上げて振り払おうとするが、いくら雪乃が身体を揺さぶったところで陽乃さんはまるで離れない。

「んー、ここかなー？」
「……あぁっ!?」
陽乃さんが布団に手を突っ込んだ直後、甘い声が寝室に響いた。ドアの方を見ると川崎と留美と折本は顔を真っ赤にして顔を両手で覆っている……が、皆指の隙間から覗いている。むっつりめ。俺の腰の辺りから「おっきくなった！」「おっきくなった！」とはしゃいでいる2人にチョップしながら、事の成り行きを見守る。
陽乃さんは「ん、当たり」と嬉しそうに呟く。陽乃さんの腕の位置や雪乃の反応から察するに、雪乃の乳頭が摘まれたのかもしれない。布団越しに一発で触れる陽乃さんの勘が怖い。
「よーし、お邪魔しまーす！」
「ちょ……うあぁっ!?」
雪乃の力が緩んだ一瞬の隙に陽乃さんが布団の中に潜り込み、取っ組み合いが始まる。一体何が起きているのか分からないが、決着はすぐについた。
布団が陽乃さんにより払われると――雪乃は真っ赤な顔をして仰向けになり、陽乃さんは雪乃の上に跨り、マウントポジションを取っていた。
「ふー……ようやく顔を出してくれたね、雪乃ちゃん」
「……離し……て……っ」
雪乃が必死で身体を捩るが、陽乃さんはロデオに跨るが如く巧みに腰をくねらせて、全ての抵抗を無効化している。腰つきが色っぽいな……と思っていると、またしても俺の腰の辺りから「硬くなった！」「硬くなった！」と聞こえてきた。取り敢えずもう一度チョップ。
陽乃さんは雪乃に跨ったまま、妖しい流し目を俺に送った。
「比企谷くん、良いものを見せてあげる」
「え……っ」
長く紅い舌でぺろりと唇を舐めた陽乃さんが、徐に着ていたワイシャツのボタンを外していき、あっと言う間に脱いでしまう。露わになった黒のシースルーの下着を外すと、暴力的なまでに艶やかな双丘が顔を出した。

陽乃さんが腰の位置をずらし、雪乃の両足の間に座る。戸惑う雪乃の背中に腕を回すと、するりと抱き寄せた。
「雪乃ちゃん……んむ……っ」
「……っ!?」
『っ!!??』
目の前で起きた光景に息を呑む。
上半身裸になって、女神のような肢体を露わにした陽乃さんと。
一糸纏わぬ姿のまま、妖精のような肢体を曝け出している雪乃が。
互いの身体を密着させて、口付けをした。
「んむふぅ……んちゅるっ、んっ、ふぅん……んんんん……っ」
「んーっ！　んーっ！　ん……んぅん……んんんん……っ！」
雪乃は必死で口を離そうとするが、背中をぴったりと拘束する陽乃さんの腕が離してくれない。豊満な乳鞠がひしゃげて雪乃の乳房を飲み込んでいた。
こちらにも見えるように、陽乃さんが紅く長い舌をちらつかせて雪乃の口内を犯し続ける。ぴちゃぴちゃといやらしい音を幾度となく反芻させると、雪乃の身体から力がぐったりと抜けた。
陽乃さんが雪乃の両手を握る。雪乃は抵抗することなく、陽乃さんにされるがままになる。陽乃さんは嬉しそうに目を細めると、互いの陰部を擦り合わせ始める。陽乃さんが腰をもぞもぞと動かす度にくちゅくちゅといやらしい音が漏れ、雪乃の細い肢体ががくがくと震えた。
呼吸さえ疎かにして食い入るように見つめていると、ごくりと息を呑む音がすぐ近くで聞こえた。見ると、結衣が雪ノ下姉妹に見入ったまま細い喉を鳴らしていた。
「ん……ふぅ……んん……はむっ、ふむぅん……っ」
「んふぅ……んちゅるっ、れろっ、ちゅぴ、ちゅぷ……っ」
「うぁ……っ？」
下腹部を貫く甘い痺れに腰が震える。見下ろすと、さっきまでは楽しそうにはしゃいでいた小町といろはが、俺の足元に跪いて必死で肉竿をしゃぶっていた。小町は竿と玉を懸命に舐めて、いろはは亀頭に

舌を艶めかしく這わせている。雪ノ下姉妹に当てられたことは明白だった。
雪乃の舌が陽乃さんの唇に引きずり出されて、まるで剥き出しの性器を愛撫するかの如く啜られる。
「んふぅぅ……んふぅぅ……っ！」
ぶるぶると断続的に身体を震わせながら、雪乃が目から一筋の涙を流す。絶頂が近いのは明らかだった。陽乃さんを見ると、瞳には獰猛な嗜虐の炎が灯っているが、雪乃以上に敏感な身体は雪乃と身体を密着させているだけで絶頂に達そうとしていた。
『……』
不意に。
手の指まで絡め合った雪乃と陽乃さんが、同時にこちらを見た。
あまりにも艶やかで、あまりにも背徳的で、あまりにも官能的な流し目にごくりと喉を鳴らすと――
『……んふぅぅぅぅ……っ!!』
雪乃と陽乃さんの身体が同時に痙攣して、美人姉妹の全身から汗が噴き出した。身体をぴったりとくっつけたままの絶頂は息を呑む程凄絶で、部屋中に甘ったるい牝の匂いが撒き散らされる。
「う……っ!?」
突然下腹部を襲う快感が増して視線を下ろすと、小町が玉を咥えて、いろはは肉竿を亀頭からぱっくりと咥え込み、頬を窄めてぬめった口内でぐちゅぐちゅとしごき上げていた。
「うぁ……っ！　これ、やば……っ！」
本来絶対見ることの無かったであろう美人姉妹の淫猥な行為を、目の前で一部始終見届けた上で、小町といろはがうっとりとした顔で口淫をしてくる。もはや我慢出来る訳が無かった。
「出る……っ!!」
「んぐぅぅ……っ!?」
小町といろはの頭を押さえ、いろはに喉奥まで咥えさせて一気に身体の奥から欲望を解き放つ。
――ごぶっ、ぶびゅるるっ、びゅぶるるる……っ。

「んぐっ、おごっ、んぶ……んふぅぅん……っ」
いろはが涙目で、大量の白濁を喉奥で受け止める。脈動が収まって肉竿を口内から引き抜こうとすると、頬を窄められて尿道から残った精液が搾り取られた。
いろははうっとりとした顔で口の中の精液を咀嚼し、飲み込む。そして力なくにへらっと笑みを浮かべると、床の上にこてんと転がってしまった。
「お兄ちゃん、小町も……っ」
唾液と精液で濡れ光る肉竿の前で、小町が跪いて物欲しそうに口を開ける。あまりの興奮に足腰ががくついてろくに立っていられなかったので、俺は小町の口に挿入しながら、そのまま正面に倒れ込んだ。小町は抵抗することなく従い、仰向けになった小町の口に肉竿をねじ込んだまま、四つん這いの体勢をとる。
「んむぅん……んちゅるっ、れろっ、れるれる……っ」
「お……おぉぉ……っ」
小町のいやらしい口淫の様子と、横に倒れ伏すいろはと、正面のベッドで未だに身体を擦り合わせている雪乃と陽乃さんを見ながら、あっと言う間にもう一度射精をする。
うっとりしている小町といろはの頭をくしゃりと撫でて、よろりと立ち上がる。
「……雪乃ちゃんもすっかり出来上がったし……じゃあ、比企谷くん。雪乃ちゃんと、してみよっか」
「……はい……っ」
心地良い空間に揺蕩っているような気持ちのまま、淫魔の如き甘い声で囁く陽乃さんの言葉に従い、俺はベッドへ歩み寄った。

続く。

（１４）

陽乃さんの手によって、全く抵抗出来ない状況にされた雪乃を呆然と見つめながらベッドに上がる。

しゅるしゅる……と言う衣擦れの音が辺りから妖しく響いて首を巡らせると、川崎・留美・折本を除く女性陣が一斉に服を脱いでいた。非現実的にも程がある事態も、興奮で思考が回らない今の時点では何とも思わなくなっていた。

「ほら、来て……」

いつの間にかスカートとショーツを脱いで一糸纏わぬ姿になった陽乃さんが、女の子座りをして股座に雪乃の頭をすっぽりと収めて、蠱惑的な笑みを浮かべて手招きをしてくる。仰向けになった雪乃の乳頭をかりかりと爪で引っ掻き、その度に雪乃の口から「あっ、うぁ……あっ、あぁ……っ」と悩ましい声が漏れ出でた。

雪乃が力無く広げた足を持ち上げ、更にぱっくりと広げる。雪乃は恥ずかしそうに顔を両手で覆ったが、抵抗しようとはしなかった。

亀頭を淫裂に宛がい、さあ挿れるぞ――と思った瞬間。

二人で寝るにも大きすぎるベッドに、何重にも軋む音が響いた。

「えっ、ちょ、なんで……っ？」

生まれたままの姿になった魅力的な少女と女性が、瞳をぎらつかせてベッドに上がってきた。陽乃さんはにこにことしながら、俺と雪乃が戸惑うのを見ている。

「皆、君たちを気持ち良くしたいんだよ」

楽しそうな声音は、同時にどこまでも冷え込んでいて。ぞわりとした次の瞬間、後ろから複数の手に腰を押されて、躊躇する間も無く一気に子宮口を亀頭がノックする。

『あぁぁぁ……っ!!』

雪乃の痙攣により膣肉が激しく収縮して、危うく一瞬で射精しそうになる。何とか堪えたと思って視線を上げると、陽乃さんが何とも残念そうな表情を浮かべていた。

「なーんだ、我慢しちゃったんだねー。……どうせ、気を失うまで出し

てもらうから、今出そうが出すまいが関係無いんだけど」
『……っ』
蛇の様に目を細めた陽乃さんの言葉にぞっとする。
次の瞬間、俺と雪乃に幾重もの手が伸びてきた。
×　×　×
ぐちゅ、ちゅりゅりゅ。
きゅっ、きゅっ。
にちっ、みちちっ。
「……あっ、うぁ……っ」
雪乃の口から力無い嬌声が漏れ出るが、今はその表情を窺うことさえ叶わない。
――ベッドの上は、淫靡な地獄と化していた。
陽乃さんが雪乃の両耳を指で嬲る。快感をじっくりと助長させるように、じっくりと。
結衣と静さんがそれぞれに雪乃の腕を押さえ、乳頭を一つずつ弄ぶ。抵抗は決してさせず、しかしどこか優しい手つきで。
小町といろはが両脇から俺の耳に舌を入れ、指で乳首をつまみ、更に空いた手で雪乃のクリトリスを弄る。悪戯っぽく微笑み、耳元で双方向から熱っぽい声で囁きながら。
めぐり先輩が正面で膝立ちして、俺と両手を繋いで舌を絡ませる。泣きそうな表情の俺を慈しみの表情でめぐり先輩が包み込み、表情と裏腹に淫らな舌遣いで唾液を流し込んでくる。
誰一人として、過激な快感を流し込んでくる人はいない。
しかし、極上の女体が幾重にも重なり、交わり、どろどろに溶け合って、甘い匂いを漂わせ、うっとりとした嬌声を漏らすこの状況で、長く我慢出来る訳も無く。
「んむ……ぅあっ、出る、出る……っ」
穏やかで、けれど決して逆らえぬ快感の波に揉まれて、一度目の射精をした。
「あぁぁぁぁぁ……っ」
細かい絶頂を何度も迎えていた雪乃の全身が激しく痙攣して、ほっ

そりとした肢体を弓なりに反り返らせる。けれどその動きも、めぐり先輩が体重をかけることにより思うように行かない。
気持ち良いけれど、怖い。
間断無く送られてくる快感の波は、一切止む気配が無い。
いつまで？
――さっき陽乃さんが言っていたように、俺が気絶するまで？
気絶って、どうやって？
気持ち良すぎて、ってことか？
雪乃や他の女性が気絶するのは、まだ分かる。
けれど、男である俺が気絶するって、よっぽどの事が無い限り――
「うふふ～、わたしもまぜてちょうだい～」
「……っ」
背後から聞こえた声に、背筋がざわりと波打つ。直後、背中に２つの極上の柔肉が押し当てられて、更にするりと伸びた指が尻を撫でてきたかと思うと――躊躇う事無く、尻穴にずぶりと入ってきた。
「うぐ……っ!?」
異物感に悶絶して振り返ると、楽しそうに微笑む由比ヶ浜マが居た。
「わたしは皆がやらなそうなことをしてあげるわね……」
アナルの中で指をくにくにと曲げながら、耳元で妖しく囁いてくる。ぞわりとした瞬間、
「んあぁぁっ!?」
雪乃の悲鳴じみた嬌声が寝室に響いた。目を凝らすと、由比ヶ浜マの指が雪乃の尻穴をも貫いている。
「うふふ、初めは戸惑うでしょうけど……慣れたら病みつきになるわよ」
淫魔の如き甘い声で囁いて耳に息を吹きかけると、２人を貫く指が次々と蠢き始めた。
『んむ……っ!?』
悶絶する雪乃の口を、結衣が口付けで塞いだのを見た直後。めぐり先輩が蠱惑的な笑みを浮かべて、俺と唇を重ねた。

ちゅっ、くちゅっ。
ぐちゅりゅっ、にちゅっ。
ぎゅっ、みちっ。
「んぐ……おぐ……っ!!」
穴と言う穴を塞がれ、乳首やクリトリスを弄ばれる。
めぐり先輩が口を離して立ち上がると、結衣が雪乃の腕を押さえながら舌を絡め合っているのが見えた。流し込まれる唾液を雪乃が呆然としながら呑み込み、結衣と静さんに乳頭を強くつままれると身体に電気が走ったように跳ねる。
めぐり先輩の唇の感触と唾液の味をはっきり覚えている状態で、いつの間にか一糸纏わぬ姿になった川崎が雪乃の腰の上に跨り、頬を赤らめながら俺に抱き付いて来た。抵抗する筈も無く柔らかな唇と豊満な身体を迎え入れる。小町といろはは耳元で「お兄ちゃん、あと何回イこうか？」「せんぱい、まだまだ出せますよね……？」などとひたすら淫らな言葉を囁き、舌を挿し込んで犯してくる。かりかりと乳首を爪で引っ掻かれる度に、何も出来ず身体が何度も跳ねた。キスをするのが川崎から留美に替わると、留美は心配そうにしながらも俺を抱き締め、控えめに舌を絡めてきた。たまらなくなって留美の口内に舌を侵入させると、左右の耳元で同時に「ロリコン」「変態」などと呟かれ、乳首を強くつねられた。キスをする相手が折本に替わる。「なんかすごいねこの状況……まあ、楽しんだ方が得かな」と頬を掻きながら折本が言って笑い、同じように唇を重ねた。鬱憤が溜まっていたのか、４人の中で一番激しく舌を絡めてきたのは折本だった。
――こうやっている間中、ずっと。
「んちゅ……う……んぅぅぅ……っ」
「ん……うぐ……んぐぅぅ……っ！」
雪乃と俺は、幾度と無く絶頂を繰り返していた。雪乃の膣内には並々と精液が注がれ、もう少ししたらお腹が膨れそうな気配さえある。俺の何倍もの頻度で達している雪乃の意識は朦朧としていて、今は静さんがねじ込んだ指を舐めしゃぶっていた。
絶え間ない快感の波と、動かなくとも射精させられ続けた疲労感。

膣肉の中で勃起が収まっても、由比ヶ浜マがアナルにねじ込んだ指により強制的に勃起させられ、時間がさほど経たぬ内に絶頂に追い込まれる。
本当に気が失いそうだ……と思いかけた、その時。
「……あれ？」
目の前で俺とキスをする人が、誰も居なくなっていることに気付く。自然と視線を前方に向けると、結衣と静さんは居るが陽乃さんが居なくなっている。直後、陽乃さんが居た位置にめぐり先輩が座り、雪乃の頭を撫で始めた。
ぞわりとした瞬間、目の前に陽乃さんが来た。一瞬で首の後ろに腕を回し、至極楽しそうに笑う。
「良いね、良いね。もう限界って感じだね」
声音とは対照的な優しい手つきで俺の頭を撫でる陽乃さん。そうですよ全く、もう勘弁してください……と言おうとしたが。
「だから、わたしがとどめを刺してあげる」
顔の筋肉が、不自然に引き攣った。
陽乃さんの瞳が、妖しく嗜虐的な光を帯びた瞬間。ぐっと引き寄せられ、極上の肢体が身体に押し当てられる。
「んむ……ちゅるっ、じゅるじゅるじゅるっ、ぢゅぷりゅっ、ぢゅろろろ……ちゅぷっ、ちゅぷりゅっ、んちゅるるる……っ」
「……っ!!」
常人よりも長い舌がこちらの口内に容易く入り込み、余すところなく蹂躙してくる。意識が遠のく口内愛撫に両腕がだらりと下がると、すかさず二の腕をがっちりと抱き締められ、全く抵抗出来ない状態にされた。そしてまるで打ち合わせをしていたかの如く小町といろはが徹底的に耳を舐め始め、頭蓋にまで響く卑猥な水音が三つの穴から間断なく流し込まれる。
「うぅぅ……うぅぅぅ……っ!!」
くぐもった嬌声が聞こえて視線の焦点を合わせると、今度はめぐり先輩が雪乃の唇を奪っていた。結衣と静さんはぴんと立った乳房をぐりぐりと擦り、強くしごき上げている。気が狂う程の快感に腰を引

くと、アナルに挿入された指が容赦無く責め立ててきた。
下半身が、絶頂で爆ぜる。
今俺は、射精してるんだろうか。
多分、そうだ。
尿道をマグマのようなものが伝っている感触があるし、下腹部が脈打つごとに雪乃の身体が跳ねているから。
ああ、イっているのに、まだイクのが止まらない。
まるで、その先があるかのような――
その、先、先、先。
穴という穴から流し込まれる快感が、絶頂を一度で終わらせてくれない。
身体の末端から中心に流れ込んでくるあらゆる快感が、捌け口を求めて暴れまわる。唯一の捌け口である肉竿はずっと射精していて、大渋滞を起こしている。
早く自分達を外に出せ、出せ、出せ。
身体の内側から悦楽の大軍勢がかんかんと警鐘を鳴らす。
射精が止まらない。
俺を抱き締める腕に、怖いくらいに力が込められる。
身体がぶるぶる震える。
射精が止まらない。
雪乃の動きが止まり、生温かい液体が下腹部を包んだ。
そうか、気を失ったのか。
確かに締め付けも弱まった。
なのに、射精が止まらない。俺の穴は犯されたままだから。
射精しているのに、もっと射精をしそうだ。
イっている上で、イク。
イク、出る、壊れる――
「――――――っ」
視界が明転して、暗転して、明転して……ふっ、と、暗転した。
「ありゃ、本当に気絶しちゃった」
「陽乃、すぐ介抱しよう。流石にやり過ぎた」

陽乃さんと静さんの会話に「いや、ケアするの遅くね？」と心の中でツッコミながら。

俺は多大なる疲労感と脱力感と共に、意識を手放した。

続く。

（15）

目を覚ますと、何だか変なことになっていた。

「雪乃ちゃーん、出ておいでー」

「ゆきのん、出てきてー……」

「雪乃さーん、……雪乃さーん……」

「……???」

目を覚ますと、仰向けで毛布を掛けられていた。そして聞こえてくる謎の言葉。

激しい疲労感を覚えながらむくりと身体を起こすと、皆が俺と雪乃の前にぞろぞろと現れた時と同様に、雪乃が布団に丸まって引き籠っていた。服を着て平静に戻った皆が、布団の前で細々と呼び掛けている。結衣や小町は布団をぽふぽふと叩いている。可愛い。

「あ、先輩。起きましたね」

後頭部が妙に柔らかいな……と思ってたら、いろはが膝枕をしてくれていたらしい。いろはは柔らかな笑みを浮かべて、俺の頭をくしくしと撫でた。

「ええっと……どういう状況？　何で天岩戸みたいなことになってんの？」

俺が発した疑問に、すぐそばに居た由比ヶ浜マが答えた。

「ゆきのんちゃんはね～、ヒッキーくんが気を失った後もしばらく皆に悪戯……色々されてたのよ。そしたら急に立ち上がってふらふらとシャワーに行っちゃって。あまりにもあっと言う間だったから皆呆然と見てたのよね～。それでしばらく待ってたら着替えた雪乃ちゃんがベッドに戻ってきて、今の状態になっちゃったって訳」

「成る程……成る程？」

納得したようなそうでないような。

俺が気絶した後に雪乃を引き続き責めるとか鬼畜過ぎる。あと悪戯って言い切ってから訂正しても意味無い。そして雪乃はわざわざ寝室に戻らなくても良いと思うんだが……まあ、他の部屋に籠ったら皆がどうしたら良いか分からなくなるっていう配慮か。身体を洗い

ながらそんなことを考えてたのか。何それ可愛い。
しかし……あまりにも微動だにせずに引き籠っているから、何だか皆の呼び掛け方が変なことになってきている。
「雪乃さーん、早く出てこないと、カマクラと遊べなくなっちゃいますよー」
「雪ノ下。お前が先日校舎裏で野良猫と戯れていたことを皆に言うぞ」
「あ、わたしも見たことあります。雪ノ下先輩がにゃーにゃー言ってるとこ」
「雪乃ちゃーん、あんまり出てこないと、雪乃ちゃんが猫を抱き締めてにゃーにゃー言ってる動画を上げちゃうよー」
「……!?　……っ！」
ね、猫責めや……。
一人一人が猫絡みの話を出す度に、丸まった布団がびくりと揺れる。多分顔は真っ赤になっているんだろう。ていうか陽乃さん、その動画をどこに上げちゃうの？　ＹｏｕＴｕｂｅ？　ニコ動？
しかし、これだけ羞恥責めをしても未だに天岩戸は開かない。
雪ノ下はずっと引き籠っている。
引き籠り……。
ひきこもり……。
ヒキコモリ……。
「このままじゃ、ゆきのんがヒッキーになっちゃう……」
『ぶっ!?』
皆同じワードを連想しかけていたのだろうか、結衣がぽそっと言った一言で一斉に噴き出す。布団は何かぷるぷるしてる。笑ってるのか、恥ずかしいのか。
陽乃さんが徐に腕を上げ、結衣に対して会心のサムズアップをする。物凄く良い笑顔だ。栄養ドリンクのＣＭに出られそう。
「（ナイスだよ）」
小声で陽乃さんが言うと、会心の笑顔は見る見る内に邪な笑みに変貌を遂げた。周りにちらちらと目配せをして、芝居がかった口調で話

し始める。
「そっかー、雪乃ちゃん、引き籠りすぎてヒッキーになっちゃったかー」
「……っ!?」
　布団が激しく揺れる。それを見た小町の目がビカリと光った。お久しぶりですヤマピカリャー。
「残念です雪乃さん。まさか雪乃さんがヒッキーになるとは……」
「ゆきのん、ヒッキーになっちゃったの……？」
「ゆきのんちゃん、ヒッキーなのね～」
「雪ノ下先輩、ヒッキーになったんですねー」
「雪ノ下、お前、ヒッキーになったのか……」
「雪ノ下さん、君ってヒッキーだったんだね……」
「雪乃って、ヒッキーなの……？」
「あんた、ヒッキーって……」
「雪ノ下さんってヒッキーなんだねー」
「……っ!?　……っ!!」
　地獄である。
　まさかの全員掛りでのヒッキー責め。ヒッキー責めって何だ。
　由比ヶ浜母娘は普段から使っている呼称だが、他の人も皆して使うものだから何だか俺まで恥ずかしい。顔が熱い。やめろいろは、こっち見んな。にやにやすんな！
　当の雪ノ下は甚大ではすまないダメージを受けたようで、うつ伏せで丸まっていた背中が萎んだように見える。
「お……っ？」
　やがて、丸まった布団がもぞもぞと動き始め、ベッドの端へと向かっていく。すごくシュールだ。
　ベッドの端に行き着くと、丸まったまま起き上がり……真っ赤になった顔が、しゅぽっと出てきた。
「……ヒッキー呼ばわりは、恥ずかしいから……やめて……っ」
　もじもじとしながら、布団から顔だけ出して上目遣いで言った言葉の破壊力は凄まじく。

『かはっ』
俺含め複数名が、妙な声を上げて倒れた。倒れない人も顔を真っ赤にして雪乃を見つめたり（主に留美）、顔を手で覆ってぷるぷるしたり（主にめぐり先輩）、反応が追い付かなくて口をぱくぱくさせたり（主に結衣）している。ちなみに小町は「さ、最高やでぇ……」と呟きながら痙攣している。いかん、瀕死だ……。
たっぷり１０秒程経った後、結衣が「ゆきのん可愛い！」と言って抱き付き、「えっ、ちょっと、由比ヶ浜さん……こ、こら、やめなさい……っ！」などと言う百合百合しい展開になった所で俺は服を着ることにした。
一通り着た所で、小町がふと俺を見た。
「お兄ちゃんお兄ちゃん」
「おう、どうした妹よ」
「これってそもそも何のお話だっけ」
「……何だったっけ……」
「あ、思い出した。お兄ちゃんの誕生日企画だ」
「……って言うと、始まったのは８月８日か……？」
「……そうだね……」
「……寒くなったな……」
「みんなコートを着て外出するようになったね……」
比企谷兄妹のメタい会話を聞いていためぐり先輩が、苦笑いをしながら頬を掻く。
「と、とにかく……随分遅れたけど……比企谷くん、ハッピーバースデー」
「……っ、あ、ありがとう……ございます……っ」
そうだ、肝心の言葉を言ってもらってなかった。
やばい、どうしよう。
物凄くどきどきする――
胸倉を掴まれた。
「先輩、ハッピーバースデー」
「比企谷、ハッピーバースデー」

「あ、ありがとうございやす……」
めぐり先輩にときめいていたら、いろはと静さんが洒落にならない圧を湛えた笑みを向けてきた。祝われてる筈なのに何だか死にそう。
めぐり先輩に対する反応を見ていたのか、皆むっとした顔で寄ってくる。由比ヶ浜マと陽乃さんは楽しそうだけど。雪乃も最後尾で顔を赤らめながらむっとしている。可愛い。
「よし、じゃあ今日はこのままこの家で比企谷くんの誕生日パーティーをしちゃおうか！　皆で買い出しに行こう！」
「え」
「うむ、それは良い考えだ」
陽乃さんの唐突な提案に、静さんが極めて自然に乗る。
おいおい良いのかよ、と雪乃をちらりと見ると、こめかみに手を当てて息を吐いた。
「勝手にしてちょうだい……」
雪乃の言葉に、皆がどう動くかを楽し気に打ち合わせ始める。その光景を見ながら、俺は頭をがしがしと掻いて隣を見やった。
「わりいな」
「……別に、これくらい構わないわ。……あと……」
「……あと？」
「……た、誕生日おめでとう、八幡」
「……っ、お、おう……ありがとう」
「先輩先輩、ハッピーバースデー」
「比企谷、ハッピーバースデー」
「恐い恐い恐い！　いろは、静さん、首締まってる！　首が！」
「比企谷くん、君って……最低だね」
「なんかごめんなさい！」
――こうして。
俺の誕生日は和やかに過ぎてゆく。
……和やかではないな。物凄く賑やかだ。
お終い。

流されるがままに皆でこたつを囲んだりすると、何かと大変なことになる。

（1）

ああ、寒い、寒い。

なんでこんなに寒いんだろう。

地球はなんでまた、太陽という強烈な暖房から俺たちを遠ざけている。かと思えば夏は俺たちを近付けすぎて尋常でないほど暑くなる。もっと中庸であってほしいのだけど、何とかならんものなのか。

季節は冬。

二十四節気で言えば大寒（だいかん）と言うらしい。

普段は雪が積もることもない千葉の街にも、スニーカーでは出歩くのが憂鬱になるほどの雪が積もっている。

ニュースを見れば全国のあちこちで豪雪、豪雪、豪雪の文字が躍っている。積もるところでは何メートルという高さになり、除雪作業に追われる人が後を絶たないらしい。地域によっては自衛隊まで派遣されることもあるようだ。千葉を含む関東圏は除雪という言葉とは限りなく無縁ではあるが、ツルツルの路面で痛い目を見る人や電車の遅延で小さくガッツポーズを決めている人は沢山いる。

ああ、寒い、寒い。

こんな日は、家でだらだら過ごすに限る。地球に優しく？　節電してエコに？　それを優先させるあまり健康を害しては本末転倒だろう。だから俺は容赦なく暖房を点ける。といっても自動運転なのだけれど。

「うへぇ……すごい雪だねぇ……」

「ん……そうだな」

妹の小町が、リビングのソファで座る俺の太ももにうつ伏せになってお腹を乗せて、窓を見やって気だるげな声を漏らした。格好が格好なので、窓を覗くために顔を上げる様はアザラシのようにしか見えない。魚を愛らしく食べてくれたりするんだろうか。

「ところで、なんでお前はそんな体勢なんだ？　あったかくて良いけどちょっと恥ずかしいんだが」
「んー、なんとなくー。……はあ、すごい雪だねぇ……」
まるでＲＰＧのＮＰＣのような台詞を繰り返して（豪雪で陸の孤島と化した村辺りにいそうだ）、小町は意味もなく足をパタパタとさせて、また「うへぇー」と唸る。自堕落極まりない格好だが、如何せん可愛いからどうしようもない。
ふと視線を下ろすと、小ぶりながらも魅惑的なお尻が目に入った。ルームウェアとして愛用しているモコモコ生地の淡いピンク色のパンツは、最近太ったみたいできつくなってきたと本人が嘆いていた。歳の頃を考えれば、太った訳でもなんでもなく単純に成長したんじゃないかと言ってみたものの、納得はしてくれなかった。女の子に適切な言葉を掛けるようになるには、一体何人のしっかりした女性に話を聞いて、何冊の本を読めば事足りるのだろう。
外を見ると、深々と降り続ける雪が風で斜めの軌道を描いていた。
なんとはなしに、カマクラを愛でるような感覚で、小町の尻に左手で触れた。
「ん……っ」
小町がぴくりと反応する。けれど、何も言ってこない。顔は上げているが、目線は窓の外の冷たい景色に向けられたままだ。目の前にある瑞々しい双丘をゆるりと撫でる。腰から足の付け根まで、ゆっくり、ゆっくりと。
「んん……っ」
小町がソファに突っ伏した。身体がひくひくと震えている。左手に感じる生々しい感触から、どうやらショーツを履いていないようだと気付く。尻肉の谷間に中指を滑り込ませると、腰が少しだけ浮いた。
「んっ、あぁっ、ふっ、んくっ、ふぅぅ……っ」
小町の声に徐々に熱が灯り、いつも見ている快活な姿とはかけ離れた艶めかしい腰のくねらせ方をする。谷間に滑り込ませた中指に、微かな湿り気を感じた。仄かな甘い匂いが鼻腔をくすぐり、下腹部がず

くんと反応する。
「……雪、止まないな」
「……ん……そうだね……っ」
天気のことにしか触れない取り留めのない会話は、まるで大平原を走る電車の窓から見る景色のように、どこを切り取っても同じようにしか聞こえない。けれど、そんな普通で何の面白味もない会話が、現在行っている行為とのギャップを作り出し、とてつもない興奮の呼び水となっていた。
右手を伸ばして、小町の身体とソファの間に滑り込ませる。張りのある乳房に触れると、やはり下着を着けていないようで、柔らかな肉の中に五本指がふにゅりと沈み込んだ。
「あっ、んっく、うんん……っ」
モコモコの生地の上から触れる小町の乳房は、心がざわめくくらい可愛らしくていやらしい。窓がカタカタと鳴る音と、エアコンがごうごうと温風を吐き出す音に混じる、淫靡な声とくちゅくちゅという水音。人差し指でボタンを押すように乳頭を押し込むと、汗ばんだ肢体を猫のようにくねらせて可愛く喘いだ。
右手でルームウェアの上着のチャックを下ろし、その間に左手をパンツの中に滑り込ませる。続いて右手も上着の中に突っ込んで、淫裂と乳頭を直にまさぐり出した。
「あ……んっく、へぁぁ……っ、はっ、はひっ、ひぐっ、んくぅぅぅ……っ」
惚けた声を出して、気持ち良さそうに小町が身体をよじる。蜜壺の中は火傷しそうなほどに熱く、乳首はぴんと張り詰めていて爪で軽く引っ掻くと楽しくなるくらい大きな反応が返ってくる。
窓を見る。風が止んだようで、雪は真っ直ぐに、空から地面へと吸い込まれていた。
「んにいいいい……っ」
小町の手がソファの生地を固く握りしめ、ぶるぶると激しく震えた。肉襞のスリットから大量の愛液が溢れ出して、手とパンツを濡らしていく。痙攣している間、ずっと割れ目をなぞりながら乳首をしご

き上げていた。愛液は断続的に噴き出し続けて、最終的にはまるで失禁したかのようにパンツがぐっしょりと濡れていた。
「……ふぁぁ……っ」
　両手を離すと、小町は惚けた声を漏らして、もぞもぞと前に進んで俺の足をまたいだ。可愛らしい猫がいたものだ。俺の身体から離れると、ゆっくりと起き上がって緩慢な動作でパンツを脱ぐ。チャックを下ろして胸がはだけた状態で、下半身が露出しているという姿はひどくだらしがなくて、下腹部から匂う甘酸っぱい香りにひどく興奮してしまう。
「……お兄ちゃん、硬くなってる」
「そりゃあ、あんだけエロいとこを見ればな」
　小町が下腹部の膨らみをスリスリと撫でて、時折五本指で雁首をつまんで引っ張ってくる。むずがゆくて、こそばゆくて、気持ち良い。小町の淫裂を右手で撫でると、とろんと力無く目尻を下げて可愛らしく喘いだ。
「ちょっとだけしよっか」
「ん」
「そしたらお風呂入ろ？」
「沸かしてる間はどうする気だ？」
「続き、やってればよくない？」
「それもそうだな」
　互いの性器をまさぐりながら、唇を重ねる。舌を絡めると、小町の目がうっとりと細められた。小町の手が下着の中に滑り込んで、直接肉竿をまさぐり始める。腰をびくびくと震えさせると、小町は嬉しそうに笑った。
　雪の軌道は、また斜めを描き始めていた。
　今はまだ１５時前。明日も休みだし、これからたっぷりだらけた時間を過ごすか……と思っていると。
「……あれ、お兄ちゃん、電話？」
「……みたいだな」
　右手で小町の下腹部を愛撫しながら、左手をローテーブルに伸ばし

てスマホを手に取る。画面を見ると、極めて自然な動作でローテーブルに戻した。
「……誰だったの？」
「……迷惑電話だった」
「……ずっと鳴ってるよ？」
「迷惑電話も日々迷惑な方向へ進歩してるんだろうよ」
『ありゃ、留守電になっちゃった。おーい、比企谷くーん。出ないとお姉さんが悪戯しちゃうぞー？』
「……お兄ちゃん、出た方が良くない？」
「……また鳴り始めたな」
「出た方が良いと思うよお兄ちゃん。なんか怖くなってきたよ……」
「……だな……」
渋々右手を陰部から離すとき、中指の腹でクリトリスをぎゅっと押した。通話ボタンを押す直前に、小町は背筋を反らして絶頂に達した。不意を突かれたからか、小町は涙目で悔しそうにウゥ～と唸っている。可愛い。
さて、ろくなことにならない予感しかしないけれども。
取り敢えず電話に出るとするか。
「もしもし――」

続く。

（2）

『比企谷くん、お姉さん鍋パがしたいなー』
『そうですか、ぜひ楽しんでください』
『やだなー比企谷くん、分かっててそういうこと言うんだからー』
『怖い怖い、なんか寒気が……』
『それで、誰呼ぼっか？』
『俺にそんな、Ｆａｃｅｂｏｏｋの投稿が目的みたいなイベントに呼べる友達なんて……あ、そうか、俺には戸つ』
『わたしもよく話す子がいいなー』
『初対面でもきっと仲良くなれますよ、なんてったって天使ですから、戸つ』
『わたしもよく話す子がいいなー』
『待ってください、会えばわかります、天使なんですよ戸つ』
『あんまりしつこいと、……一晩中お仕置きしちゃうぞ？』
『こわっ！』
『いっぱいいるでしょ？　比企谷くんが呼べる子。最近の君ってもうハーレムものの主人公じゃん』
『いや、何を根拠にそんな……』
『ふーん、具体的な根拠を言ってほしいの？　長くなるけど大丈夫？』
『ご、ごめんなさい……』
『それで、誰呼ぼっか？』
『ええとですね……』

――こんな会話から、たった3時間後の18時。

比企谷家で鍋パーティーを開催することになった。

メンバーは俺、小町、陽乃さん、いろは、雪乃、結衣の計6人。急にも程がある呼び出しのため、一部のメンバーには時間の制約があるものの、それでもこれだけ集まれたのはすごいと思う。陽乃さんの指示のままにみんなをＬＩＮＥグループに誘って（生まれて初めてグループを作った）今回の概要を説明したところ、雪乃が無言でグループを退会して焦った。慌てて陽乃さんに電話したら爆笑していた。

この人ほんといい性格してる。雪乃は電話して15分くらいかけて説得をした。人質をとって立てこもった犯人を説得するような気の長さで頑張った。最終的に、カマクラを優先的にモフモフさせる権利を与えることで落ちた。チョロい。本人には絶対言えないけど。

『こんばんはー、お邪魔しまーす』

小町とリビングの片づけをしていると、ちょうど終わり掛けに4人の声が聞こえてきた。小町と一緒に玄関まで迎えに行くと、よっぽど寒いのかみんな若干疲れた顔をしていた。陽乃さんだけツヤツヤなのはなんでだろう、こっちに来る途中で雪乃をからかっていたんだろうか。

「雪乃さん、結衣さん、いろはさん、陽乃さん、こんばんはー！　寒い中ありがとうございます。ささ、どうぞどうぞー！」

小町が極めて滑らかにみんなを家に招き入れる。各々が具材を持ち寄ろうということで、それぞれの手に買い物袋を提げていた。

「それじゃ、ちゃっちゃと調理しちゃいますね！」

小町が腕まくりをして、ふんすっと息を吐く。普段から沢山料理をしている小町は、人が多いほど燃えるタチらしい。

「私も手伝うわ、小町さん」

「雪乃さん！　ありがとうございますー！」

微笑んで手伝いを申し出た雪乃に、小町が満面の笑みを浮かべながら抱き付いた。何故か胸元で頬をスリスリしている。あ、めっちゃ匂い嗅いでる。雪乃の顔が真っ赤だ。敢えて止めないで傍観しておく。陽乃さんはニヤニヤしてるし、結衣は「うわぁ……」って顔してるし、いろはは……って、おい。

「なんで君は俺の手をにぎにぎしてんの？」

「いえ、なんか他の女の人の匂いがするなーと」

「……はて、何のことだろう」

「……先輩の発情魔」

「うぐ……っ」

色々と察せられて死にそうになった。

「それじゃあ、頑張りましょう雪乃さん！」

「ええ、よろしく」
「あ、ゆきのん、小町ちゃん、あたしも手伝おっか？」
「やめとけ結衣。せっかくのパーティーをトラウマに変えてくれるな」
「そんなにひどいことしないし!?」
「あの、結衣さん。みんなの買ってきたものをざっと見てみたんですが……なんでチョコが入ってるんですか？　しかもトリュフチョコ……」
「え、あれ？　だめだった？」
「あとはマシュマロも入っているわね……」
「え、あれ、ふわっと溶けたら美味しいかなって思ったんだけど……」
「結衣、おい、結衣」
「え、な、なに？　ヒッキー」
「いろはと陽乃さんの顔を見てみろ」
「え……、……ちょ、ちょっと、なんでそんなに引いてるんですか!?
いろはちゃんまで！」
「結衣先輩……ごめんなさい、何でもないです」
「最後までちゃんと言って!?　すごい気になるんだけど！」

×　×　×

そんなこんなで数十分後。
具材の調理その他諸々を終えて（多分卑猥なことはしていないはず）、みんなでこたつを囲んで鍋をつつく。こたつの四面には、俺の向かいに陽乃さん、俺から見て右に雪乃と結衣、左に小町といろはの組み合わせで座っている。1面に2人いてはかなり狭いだろうと思ったが、こたつがある程度大きいのに加えて、女子同士くっついても楽しいらしいので良しとした。小町といろはが肩を寄せ合ってきゃーきゃー言っているのは何だかとても和むし、雪乃と結衣がちょっと照れながら肩を寄せ合っているのは何だかとても百合姫コミックの匂いがする。俺が両サイドの光景をぽけっと見ている様を陽乃さんはガン見していた。恥ずかしいのでやめてほしい。
「はい比企谷くん、あーん」

「待って、ちょっと待って、豆腐はダメでしょう豆腐は……あっつ！あっつ！」
「比企谷くん、うるさいわよ」
「ひふひんは（理不尽だ）……」
「雪乃ちゃんも比企谷くんにあーんしてあげたら？　いつもしてあげてるでしょ？」
「な!?　そ、そんなこと、いつもはしないわ……」
「……ふーん、たまにやってるんだ？」
「ち、ちが、今のはそういう意味じゃ……」
「はい先輩、あーん」
「むぐ……っ」
「……雪ノ下先輩、いくら不意打ちだったからってそんな目で睨まなくても……」
「え、あ、その、今のはそんなつもりじゃあ……」
「ゆきのん可愛い……」
「今日も百合百合しいなお前ら……」
「あー、白菜美味しいなー。……さてお兄ちゃん、今のは誰のセリフでしょうか？」
「メタい上にバレバレじゃねえか」
「ねー比企谷くーん、面白いことやってー」
「それこの世で一番やっちゃいけない無茶ブリですからね？　それ言われて面白いこと出来る人って多分この世に片手で数えられるくらいしかいませんよ？」
「じゃあ比企谷くんが6番目に入ればいいじゃない。ほらほら、頑張れー」
「なんでスマホいじりながら煽ってんですか。途中で飽きたなら言ってくださいよ」
「やだなー比企谷くん、君をイジメ……イジるのに飽きる訳ないじゃない」
「今イジメって言った、確かに言った」
「ね、ね、ヒッキー。具も減ってきたし、そろそろ……」

「チョコなら入れんぞ」
「え、あ、なら」
「マシュマロもだめだ」
「あ、うぅ……そ、それなら……」
「認めません」
「まだ何も言ってないし!? うぅ……ゆきのーん、ヒッキーがイジメるぅ……っ」
「由比ヶ浜さん……ごめんなさい、今回ばかりはあなたを庇えないわ……」
「あれ!? ゆきのんまで敵になった!?」
「大体普通の鍋に甘いものを入れてどうすんだ、地獄しか待ってねえぞ」
「う、うーん……」
「……まあ、初めからそういう趣向でするのはありだと思うけれど」
「! ゆきのん!」
「あー、そういうのありますねー。チョコ鍋もあるし、あと鍋ではなくなっちゃいますけど、たこ焼き器でチョコとかマシュマロを焼くとすっごい美味しいみたいですよ」
「い、いろはちゃん!」
「……まあ、今度そういうのをやるのもありかもな」
「え、ヒッキー……いいの？」
「ああ、いいぞ。俺はちゃんと家で寝てるから」
「参加する気ゼロだ!?」
わいわいきゃーきゃーと騒ぎながら、鍋パーティーは楽しく進む。2時間ほど楽しんでいたが、その間に色々な方向から足で股間をまさぐられていた。毎回とっつかまえる前に逃げられて、結局いつ誰にやられたか分からなかった。何が怖いって「今の足は恐らく……」と予想をつけた人を見ると必ず楽しそうに喋っていたこと。なんでみんな表情一つ変えずにこんな卑猥なことを出来るんでしょうか……。

× × ×

一通り遊んで、時刻は21時を迎えた。

「あ、そろそろ雪乃さんと結衣さんはお帰りになられるんでしたっけ？」
満腹のためか目がとろんとしている小町が(可愛い)、目をこしこしとこすって対面の2人に言葉を掛けた。今日は雪乃と結衣が元々の用事があるため早く帰ると言っていたが、その用事が何なのかは聞いていなかった。
「あ、うん……今日はゆきのんの家にお泊まりに行こうとしてて……」
思いの外百合百合しかった。
頬を赤らめてもじもじとしながら言うのはやめてほしい。
「ごめんね、ヒッキー？」
「ああ、気にすんな。というかむしろ、わざわざ2人の時間を邪魔しちまってこっちが申し訳ないくらいだ。もっと2人でイチャつきたかったよな？　すまん」
「あたしとゆきのんをどんな目で見てんの!?　もう……でも、楽しかった。ありがと」
「私も……ありがとう、小町さん」
「あの、企画したのは陽乃さんで、直接誘ったのは俺なんですけど……」
「……ありがとう、小町さん」
「……強情すぎるだろ……」
げんなりとしていると、小町が照れ照れとしながら頬を掻いた。
「いえいえ、こちらこそありがとうございました！　鍋とかは片付けておくので！」
「……そう、お言葉に甘えさせて頂くわ、ありがとう」
「それじゃあ、お邪魔しました！」
「お邪魔しました」
雪乃と結衣がそれぞれにお辞儀をして家を出る。玄関まで見送りに行き、ドアが閉まるまで2人の顔を見ていた。ドアが閉まった瞬間に手を繋いでやしないかという根拠の無いドキドキを抱きながらリビングに戻る。小町が調理をしてくれたということで、俺が皿洗いをしようとしたら陽乃さんといろはも手伝ってくれた。何とも言えな

い空気感だった。
片付けも終わり、小町が用意したみかんを剥きながら４人でのほほんとする。俺から見て右側にいろはが移り、後は同じ位置のままだ。
ううむ、のんびりしている……。
このままだとちょっと眠くなってくるな……と思っていると。
「……ん？」
右ひざを撫でられて、視線をいろはに向ける。
顔を逸らされた。
「……んん？」
左ひざを撫でられて、視線を小町に向ける。
顔を逸らされた。
「……んんん？」
あぐらをかいた右足のすねを足でまさぐられて、視線を陽乃さんに向ける。
めっちゃ笑顔でこっち見てる。
なんでなのん？
一体なんなんだ……と訝しみながらも、視線をみかんに落として黙々と口に運ぶ。
顔に視線を感じた。
恐らく、視線の数は３つ。
ついさっきまでの和気藹々とした雰囲気からは想像も付かないような、ねっとりとして、湿度に満ちて、艶っぽい熱を孕んだ――そんな視線。
「……」
３人の視線を、強く感じる。徐々に密度を増す視線は、顔をどこに向けても肌の表面を満遍なく刷いて、ずぶりとめり込んできて脳内を犯す。常に誰かが俺の下半身に触れている。手を触れると逃げられ、時折２人３人と同時に触れてきて、その触れ方も徐々にいやらしく変わっていく。
何かが始まる。
確固たる予感を胸に抱き、反射的にごくりと大きく喉を鳴らすと―

―こちらに向けられている視線の熱量が、一気に増した気がした。

続く。

（3）

場の空気が妖しく変わったところで、それはあくまで表立って見えない、水面下での話。

「皆さん、みかん食べますかー？」

「わー、ありがとう小町ちゃん」

表立って見える雰囲気は至極和やかで、小町といろはが和気藹々と話し、俺と陽乃さんが微笑ましく見守るような状態。

……と思ったら、皆みかんの皮を剥き始めた途端に黙り込み、ちらちらと俺を見始めた。

なんで？

……。

①小町……コミュ力の塊。その場にいる人の老若男女を問わず話が出来る。全世代から愛される妹。

②いろは……コミュ力小悪魔。割と好きなように振る舞っておいて、決して場の空気を悪くするようなことをしない、絶妙なバランス感覚の持ち主。

③陽乃さん……コミュ力大魔王。「取り敢えず雪ノ下さんがいれば何とかなるよね！」という雰囲気を、陽乃さんが存在するありとあらゆる場所で感じる。空気の作り方も醸成のさせ方もお手の物。

こんな3人が、自分から一切話題を切り出さずに俺をじっと見ている。

……ええっと。

……。

……。

……ええっと。

『……』

見られてる。

すっげえ見られてる。

沈黙が痛い。視線の圧が段々増してきた。段々肌に刺さってきた。

これは、アレか。

俺から話題を切り出せっていう無茶振りか。
しかもよく見たら、３人は時折互いに目を合わせてほんのちょっとだけ笑ってる。
『ほら、なんか面白い話してよ』
そんな空気をびんびんと感じる。
しまった、今この場には場を取り繕う神様である（失礼）結衣がいない。即ち逃げ場が無い。というよりもこの３人は結衣がいないからこそこの状況に持っていったのではなかろうか。やだ極悪。
……。
……なんか、無難な話……。
……。
「……ま……」
『……ま？』
「……真冬の、怖い話をしようと思います……」
『……は？』
おっと。
多分、一回心臓が止まった。
笑いが起こるような話はまず出来ないので、せめて面白味のある話をしようとしたのだが……それにしても、今のチョイスは我ながらひどかった。……に、しても、この反応は辛すぎる。小町といろはは心底蔑んだ目で俺を睨めつけ、陽乃さんに至ってはこっちを見てさえいない。というかあなたは何処を見てるんでしょう。何処かを見ているというよりは俺を見ていないという感じでちょっと泣きたいです。
「……はあ、ま、比企谷くんに面白さを求めてもしょうがないか」
視線を戻した陽乃さんが流れるように俺を罵倒して、全てをうやむやにするような優しい笑みを浮かべた。釣られて小町といろはも呆れた笑みを浮かべる。
ほっと息を吐いた――直後。
「……っ？」
足に、何かが触れた。

誰かの足が偶然触れたのかと思ったが、違った。
1本だけでなく、2本の足が胡坐をかいた俺のすねや膝、内ももを撫でてくる。ぞわりぞわりと快感が押し寄せて、喉が瞬時に干上がった。
ちらりと視線を巡らせる。
小町もいろはも、俺と目が合うときょとんとした。
陽乃さんと目が合う。
「……別に、無理に喋らなくたって面白いことはあるもんね」
言って、陽乃さんは天使のような笑みを浮かべ――俺にしか見えないタイミングを見計らって、ちろりと舌なめずりをした。人よりも長い舌は、外気に晒すだけで見ている側に異様な緊張感と官能を呼び込む。紅い粘膜に目を奪われていると、2本のほっそりとした足が俺の内ももを撫でた。
引き際の波が砂浜に落ちていたサンダルを海に引きずりこむように、緩やかな日常が淫猥な空気に飲み込まれた。
× × ×
「はるさん先輩って、普段どんなやり方で勉強してるんですかー？」
「う……くぁ……っ」
「えー？　別に普通だよー」
「……ぐ……ぅ……っ」
「予備校には行ってたんですか？　陽乃さん」
「うっ、うぁっ、んく……っ」
「あー、わたしは行かなかったなー。参考書で良さそうなのを見繕って、それで集中的に勉強してたね。あんまり多くのものに手を出しても、却って良くないと思ってね」
『なるほど……』
「うっ、くっ、うぅ……っ」
――歪な時間が、一見正常に見せかけたまま進んでいく。パッと見は何ともないぬいぐるみが、中の綿を全て抜かれて代わりに砂鉄を詰め込まれたかのような、そんな、ハリボテの日常。
陽乃さんの両足は、今は膨らんだ下腹部を集中的にこすり立ててい

た。互い違いにこすり、時折同時にしごき立て、亀頭と睾丸をぐりぐりと撫で回す。俺の弱点を的確に突いておきながら、決して射精はさせない焦れったい快感。

小町といろはも、自分たちを挟んで水面下で行われている淫猥な行為に早々と気付いたらしい。こたつに深く身体を入れたと思ったら、2人して俺の手を握り、艶めかしく指を絡めてきた。手と手が触れ合うだけなのに、それぞれと秘密の関係を持ったような背徳感が相俟ってたまらなく気持ちが良い。3人は俺が小さく呻くのも気にせず、和気藹々と話している。

「あ……っ」

「？　どうしました、はるさん先輩？」

「ごめんごめん、何でもないよ」

繋いでいた手を離して陽乃さんの両足を掴むと、極上の美人の澄まし顔に僅かばかりのひずみが生じた。2人きりの時であれば今の比じゃないくらいの反応を見せるのだが、綺麗に自分の反応を隠している。小町といろはは手を繋ぐ代わりに俺の膝や内ももを撫でてくる。出来る限り興奮を煽るような撫で方は、肉竿に更に血液を集めて膨張させる。こたつの中に、ひどく卑猥な匂いが満ちている気がした。

「……え……？」

艶めかしく揺らぐ陽乃さんの足と格闘していると――股間を這う足が更に4本増えた。こたつの上では皆ごく平然と話しておきながら、目に見えないところでは3人がかりで下腹部を嬲りに来ている。慌てて小町やいろはの足を片足ずつ押さえてももう片方の足が襲ってきて、その上で俺の手から解放された陽乃さんの足が再び肉竿をまさぐってくる。

「っ……の……っ」

防御だけする状況に耐え兼ねて反撃に転じる。右側から伸びる2本の足を押さえて無理矢理開かせると、いろはが目を見開いて頬を朱に染めた。可愛らしい反応に心臓が脈打つのを感じながら、割り開いた両足の根本に右足を近付けて、生温かいタイツの上から淫裂に足を這わせた。

「ひん……っ」
思わず漏れ出た嬌声に、誰よりも驚いていたのはいろは自身だった。俺を含む3人から向けられた視線に顔を真っ赤にすると、口を手で押さえて顔をこたつの台に突っ伏した。小町と陽乃さんを見ると、いろはの様子を気にしながらも、まだ日常を演じた会話を続けている。いろはは突っ伏したまま動かない。
さして広くないこたつの中で、指先をぐりぐりと動かしていろはの下腹部を愛撫すると、指先に淫靡な震えを感じた。
「ひん……んっく、ひぅっ、んふぅぅ……っ」
若干の幼さの残る声音で艶めかしく喘ぎ、こたつの台の上で亜麻色の髪がさわさわと踊る。時折顔を上げた時に目が合うと、ほんの数分前までとは比較にならないくらい、顔が欲情でとろとろに蕩けていた。
ぐりぐり、ぐに、にゅぷ、こしこし、にゅくにゅく、くちゅ、ちゅくく……っ。
「んぅぅぅ……ひぅぅぅ……っ」
割れ目に沿って指を這わせ、蜜壺の谷間に指を押し込み、溢れ出してくる蜜がいやらしい音を立てるように指を動かす。いろはは両手で俺の右足を掴んできたが、すがるように撫でてくるだけで決して止めはしない。
指の動きを速める。
いろはのくぐもった声が、少し大きくなった。
指でこする力を強くする。
いろはの様子を見ていた小町の喉が小さく鳴った。
指で割れ目を深く穿つ。
悶絶するいろはを見つめていた陽乃さんの瞳が艶を帯びて、強い興味の光を宿した。
こする、こする、押し込む。
押し込む、こする、こする。
無我夢中でいろはの大事な場所を嬲って、嬲って、嬲って――
「……あぅぅぅぅ……っ!!」

いろはが再び口を手で覆ってこたつの台に突っ伏す。４回、いや５回ほど大きく身体が脈打つと、まるで射精したかのように蜜液が溢れ出て、タイツをぐっしょりと濡らした。ゆらりと上げた顔は汗ばんでいて、既に一度事を済ませたかのような虚ろな目をしている。

こたつに足を入れたままこちら側にくたりと寝転ぶと、片頬を膨らませて恨めし気に睨んでくる。全く圧の無い可愛らしい顔に和んで頭を撫でると、亜麻色の髪はしっとりと汗を含んで蠱惑的な匂いを香らせた。

「ん……ちゅぷ……ふぅん……んむふぅ……っ」

頭を撫でていた手を掴んだいろはが、人差し指をぱくりと咥え込んだ。根本まで飲み込んで舌を這わせてきて、手が性感帯になったかのような錯覚を覚える。

ぞくぞくとしていると――つんつん、と下腹部を可愛らしく足でつつかれた。そういえば、いろはを責めているときは小町も陽乃さんも動きを止めていたな、と思いながらちらりと小町を見る。

「……」

無言で、年不相応の婀娜っぽい流し目を送ってくる。生まれてきてからずっと寄り添ってきた快活な妹の顔ではなく、まるっきり牝の顔をした小町に――たまらなく、欲情した。

続く。

（4）

「あー、ちょっと眠くなってきちゃったなー」

小町がわざとらしく眠気を訴え、腕を枕にしてころんと仰向けになる。のんびりとした上半身とは裏腹に、こたつに隠れた足は俺の下腹部をつんつんと突いてくる。時折目が合った時に目を細めてくる仕草はひどく艶っぽい。

「……ん、寝とけ寝とけ。休日はだらだらするためにあるもんだ」

「ん～……っ、……それもそうだね～……」

右手で小町の足首を掴み、左手で太ももをまさぐる。やる気の無い会話を続けながら、すべすべの肌の感触を楽しむ。ぞくぞくとするやりとりに楽しんでいると、いろはがこたつを抜け出し、俺の肩に身体を預けて頬をすり寄せてきた。ぞくぞくするわドキドキするわでちょっと死にそう。向かいの陽乃さんを見ると、嗜虐的な笑みを浮かべただけで何もしてこなかった。嵐の前の静けさにしか思えない。

「ん……ふぅ……っ」

目を閉じた小町が艶めかしい吐息を漏らす。太ももをさすっていた手を内ももへ滑らせ、入念に何度もさすり、足の根本へと手を移動させる。柔らかなショーツの布地の感触に行き着くと、既にしっとりと濡れていた。小町の両足はいつの間にかぱっくりと開いていて、抵抗することなく俺の手を受け入れている。薄い布地越しに割れ目をこすると、細い肢体が淫猥にくねった。

「マジで雪すげえな……。これって、明日もしかして雪かきしないといけないのか……？スコップなんてあったっけ……」

「ひっ、んん……っ、……はにゃ？　スコップ……？　雪かき……あんっ、あ、そっか、雪かき、雪かきね……はひゃんっ、んくっ……スコップ、どこにあったっけ……後で聞いてみよっか……くひぃん……っ」

日常会話を振って反応を見てみたが、既に蕩けきった表情になっていた小町は軽い会話で精一杯といった状態だった。会話をしながらも顔はぼうっと天井を見つめるばかりで、手はこたつの毛布を掴んで

小さく震えている。
「あっ、あぁぁ……っ、あぁぁぁぁ……っ」
ショーツの布地を淫裂にぐにぐにとめり込ませると、小町の喘ぎ声に徐々に抑制が利かなくなり、獣性が混じってきた。指を押し込む度に、より気持ちの良い場所を探すように腰をくねらせる様は淫らそのもので、こたつを僅かにめくるだけで、むっとするほどの牝の匂いが立ち込めてくる。既に2人分の性臭が混じった匂いは、思考がどろどろに溶けてしまうほどいやらしい。
ショーツを捲って直接指を挿入すると、小町は「んにぃぃ……っ！」と可愛らしくうねり、僅かに身を反らせた。
「先輩……っ」
「ん、いろは、どうし……っ」
左手の愛撫に集中していると、不意に耳元で甘ったるい声がした。振り向くと、既に完全にスイッチの入ったいろはがふやけた笑みを浮かべていて、俺の反応を待つことなく唇を重ねてきた。
滑らかに俺の口内に舌を挿し込んできたかと思うと、いろはの瞳の中に、強い淫欲の炎が灯った。
「んむぅ……ちゅっ、ふぅんっ、ちゅるっ、れるっ、ちゅぴっ、ちゅぐっ、ちゅぷりゅっ、はむぅ……んふぅっ、ふっく、んふぅぅ……ちゅるっ、れろっ、んくぅっ、ふむぅっ、ちゅぷちゅぷ、ちゅろろろ……ごくっ、ごくっ、ごくっ、ぢゅぷ、ぢゅぷりゅっ、ちゅくくく……っ」
「……お……ご……っ」
あまりに情熱的で激しいキスに、酸素と理性が一気に削り取られる。散々身体を重ねてきたのに、キスだけで射精してしまいそうなほどの激しい舌遣い。歯列を上下表裏くまなく何往復もされ、舌を吸われ、唾液を美味しそうに飲み込まれ、甘ったるい唾液を流し込んでくる。お互いの気持ち良いところを知り尽くした口付けは、もはや挿入行為と大差ないように思えた。
キスに溺れるいろはが、俺の股間を撫でて嬉しそうに目を細める。すりすりとこすった後、チャックを開けてパンツを下ろし、こたつの中に勃起した肉棒を晒した。てっきりしごいてくるかと思ったが、玉

や根元を撫でるだけでそれ以上のことはしてこない。左手に感じる膣肉の感触と、脳内まで犯すようなキスの感触に溺れていると――快楽の刷け口を求めている肉棒を、2つの足が挟んできた。驚いて顔を上げると、陽乃さんが楽しそうに笑っている。

視線を巡らせると、3人それぞれと目が合った。

陰部への愛撫で蕩けた顔。

口付けに溺れた顔。

嗜虐の笑みを浮かべた顔。

まるで違う3つの表情の中に共通して、どこか悪戯心があるような気がした。

そう思った瞬間、あれ、これってやばいんじゃ……？　と気付く。

次の瞬間――

「んぐぅぅ……っ!?」

いろはの舌のうねりが更に激しくなり、小町は愛撫している俺の手を掴んで遠慮なく嬌声を上げながら淫靡に腰をくねらせ、陽乃さんは生足で器用に肉竿をしごきたててきた。

口を犯され、責めているつもりだった行為が更なる興奮を呼び込み、全ての快感が集約する場所を遠慮なくしごかれる。

「んぐ……んぐぅ……っ!!」

身を捩るが、陽乃さんの足はさり気なく俺の下半身を器用に押さえこみ、いろははねっとりと口付けをしながら右腕を拘束し、小町も左腕をがっちり掴んで離してくれない。何もせずとも気が狂いそうなほどの快感が全身に染み渡ってくる上に、それから逃れようと抵抗すればあらゆる場所がこすれて更に気持ち良くなってしまう。

「比企谷くん……苦しそうだね？」

「……ぐ……ぅぅ……っ」

陽乃さんの極上の美貌が喜悦で歪む。何か言葉を発したくても口が塞がっているし、思い付く言葉の悉くがいろはの唾液の中に溶けていってしまう。

「しかたないなぁ。……楽にしてあげる」

陽乃さんの言葉は、前半分が優しいお姉さんのような口調で、もう

半分は……声こそ優しいものの、底冷えのする怖さを纏っていた。身構えようにも、左手の指は常に蜜壺の熱さとぬめりに溢れていて、口の中は甘ったるい口内粘膜に蹂躙されている。心身共に完全なる無防備だった。

陽乃さんが俺に見えるようにしてこたつのスイッチを切る。何のつもりかと思ったら、陽乃さんは悪戯っぽく微笑むと、頭からこたつの中に入った。

次に何が起こるかが頭の中を過ぎった瞬間――肉竿が、根本まで飲み込まれた。

「んぐぅぅぅ……っ!?」

食べられた。食べられた。食べられた。

飲み込まれた瞬間、肉棒が溶けて消えてしまった。

そんな錯覚に陥るほどの熱とぬめり。気が狂うほどの快感。

今、自分の両手が塞がっているのは幸いだった。

だって、どちらか片方でも手が空いていたら、きっとこたつを捲ってしまう。自分の一部を貪っている顔をきっと見てしまう。どれだけ淫らな表情をしているのかなんて、想像さえ出来ない。見たらきっと、何かが終わってしまう。

不幸中の更に不幸中に辛うじて見付けたような幸いに、僅かながら安心していると――いろはが俺の右腕を掴んだまま、空いた右手をこたつに伸ばした。やめてくれ、と言いたくても、口は依然としてまぐわいを続けたままだ。いろはが何をするつもりかなんて分かっていた。それでも、キスをしていて顔は右側を向いていても、俺の両眼はこたつの中――己の下腹部を貪る人に釘づけになっていた。

いろはが、こたつを捲る。

「……っ」

陽乃さんが、俺の内ももを両手で押さえ、淫らに、みっともなく頬を窄めて肉竿をしゃぶり、上目遣いで俺を見つめていた。どこまでも嬉しそうな表情で。本当に、嬉しそうな表情で。

なんでこの人は、はしたない表情がこんなにも美しいんだ――？

ごくりと喉を鳴らすと、いろはの甘い唾液が喉に絡まった。俺の視

線は陽乃さんの顔に固定されている。
陽乃さんが俺に見せつけるように根本まで肉竿を咥え、荒い鼻息で陰毛を揺らす。顔を引いていくとぷりぷりとした唇が竿をきゅむきゅむと締め付け、鈴口に何度も口付けをして、また根本まで咥える。一つ一つの動作は焦れったいほどに緩慢で、けれどそのどれもが脳神経を引きちぎらんばかりの快感をもたらす。
気が付くと、舌と左手の指が勝手に動いていた。
「んふぅぅ……ひぇんぱい……ちゅぷっ、んふぅぅ……っ」
「おにい、ひゃん……ひゃぅぅ……ひぐぅぅ……っ」
――自分が射精に至るまで、恐らく1分も持たない。下手をすれば数秒後には白濁をぶちまけているかもしれない。それなら、みんな道連れにしたかった。右手でいろはの肩を抱き寄せ、ぎゅっと身体を密着させて小さな口内を貪る。口の中が第二の性感帯と化しているいろはは、積極的に責められるとあっと言う間に全身を戦慄かせ始めた。左手の中指で小町の隘路のざらついた部分を徹底的にこする。びくりびくりと身体を跳ねさせて悶える2人の反応が嬉しくて、口内愛撫と指による愛撫を一気に加速させる。
「んふぅっ、じゅぷっ、ぢゅぷりゅっ、ちゅぷぷ……ぐぽっ、がっぽ、がっぽ、じゅぶじゅぶじゅぶ……っ」
陽乃さんの口淫も激しさを増す。この中の誰よりも嗜虐的でありながら誰よりも敏感な陽乃さんは、俺を絶頂に追いやる口淫が自らをも絶頂に追い込むと分かっている。それでも、俺を限界に追い詰めるのに躊躇しない。顔に喜悦をいっぱいに浮かべて、はしたなく頬をすぼめて肉竿をしゃぶり続ける。
「ひゃうぅぅ……っ」
いろはが可愛らしく震えた。
「ひゃあぁぁ……っ」
小町が力無く喘いだ。
「んっ、じゅぶっ、んふぅぅぅ……っ」
陽乃さんが切なげに目を細めた。
「イ……っ」

――俺が、言葉にならない声を上げた、次の瞬間。

『んくぅぅぅ……っっっ!!!!!』

下半身が爆ぜて、陽乃さんの口の中に白濁をぶちまけて。
いろはが目を剥いて、涙ぐみながら愛液を噴き出して。
小町が口を半開きにして、背筋を弓なりに反り返らせて。
そして、陽乃さんがうっとりとした顔で、静かに絶頂に達した。

「……ぁ……ぁぁ……っ」

漏れ出た呻き声が誰のものなのかさえ分からない状態で、ぐったりと仰向けになる。いろはは俺の右隣りにぴったりと添い寝をしてきて、小町もこたつから抜け出して左隣に添い寝をしてくる。陽乃さんは身体をぶるぶると震わせながらも、白濁の残り汁を余すことなく嚥下していた。

……。

……死ぬ……。

このままちょっと、出来れば一晩くらい休ませてくれないかな……と思っていると。

「……誰から行きます？」

「……いろはさんからどうぞ。小町はお兄ちゃんの耳を責めますので」

「……ぷはっ。じゃあわたしは比企谷くんのお尻を責めちゃおっかな」

……。

……休憩ゼロで、２回戦に突入するようです。

そんなことする元気ないですと言おうにも、陽乃さんが雁首に優しく舌を這わせてるせいで全く勃起が収まらないし。詰んでる。

「比企谷くん、頑張ってわたしたちを満足させてね」

「……はい……」

なんて言うか、うん。

くっ、殺せ……！

って感じだ。
陽乃さんがこたつから這い出てきて、仰向けの俺に覆いかぶさる。服の上から乳首を楽しそうにしばらく弄ったかと思うと、「じゃあ、さっき話し合った通りにね」と職場の上司みたいな口調で小町といろはに指示を出した。
ああ……あゝ……。
比喩抜きで、冗談抜きで、誇張抜きで。
搾り取られる……。

× × ×

翌朝。
すっかり干からびた俺は、キッチンでかしましく朝食を作る3人を眺めながらこたつに入っていた。一晩中3人を相手取って精力的にも睡眠時間的にも死にかけの俺に対し、同じく睡眠不足のはずの3人はやたらとツヤツヤしている。
「はるさん先輩、ただでさえ綺麗なのに今日は一段と綺麗です……」
「えー、そうかなー？　比企谷くんのおかげかな？」
「いろはさんもですよー！」
「え、そ、そう？　……小町ちゃんもすっごく可愛いよ？」
「そ、そうですか？　えへへへ……」
……会話は可愛らしいけど……人身御供になった俺のこともちょっと労わってください……。
右耳を下にしてこたつに突っ伏していると、スマホが着信を告げた。何ぞやと思って画面を見ると、画面には「由比ヶ浜結衣」の文字が。スマホを持つ気力さえ無いので、通話ボタンを押してスピーカーモードに切り替える。
『ヒッキー、やっはろー！』
『おぅ……やっはろー……』
『……昨日は大丈夫だったか聞こうとしたんだけど……大変だったみたいだね……』
え、なにこの子、優しい。
あかん、ちょっと涙が出そう。

『……結衣さんマジ女神……』
『ひ、ヒッキー？　何かいつもとキャラ違うよ？　ほんとに大丈夫？　今からそっち行こっか？』
甘い誘惑に、思わず「それなら俺の気が済むまで膝枕させてくれ」と言いそうになったが、流石にキモいと言われそうで止めた。
『ん……大丈夫だ、ありがとな。そっちは楽しかったか？』
『あ、お泊まり会のこと？　うん、楽しかったよ！　ゆきのんはまだ寝てるけど』
『隣でか？』
『うん』
『え』
『あ』
冗談で聞いたのに、何か変なことになった。
『お前らって本当にそういう関係だったの……？』
『ち、ちがうし！　ただ昨日は本当に寒かったし、ゆきのんの身体、あったたかったから……その、一緒に寝てもらっただけだし……』
『後半どもるのやめろ、マジ感が出るから』
『……うぅ……』
『……まあ、その、なんだ。元気出たわ、ありがとな』
『え、ほんと？　よかったー』
『ああ、ほんのちょっとだけだけどな』
『ほんのちょっとなんだ!?』
『バカ言うなよ、搾り切られて引きちぎれる寸前まで行った雑巾みたいな状態なんだぞ今は、そう簡単に回復するかっての』
『す、すごい例えだ……』
『……そんでも、ちょっと癒されたわ』
『あ、そ、そう？　えへへへ……』
……あかん、やっぱり涙が出そう。
『あ、ゆきのんが起きたみたい。じゃ、またね？』
『なんか浮気相手との電話みたいだな』
『変な冗談言うなし！　……ん、じゃね』

『……おう』
　最後の優し気な声にまたしても癒されながら通話を切る。俺が指を動かす気力が無いため、結衣がタイミングに迷いながら通話を切るのを辛抱強く待った。たっぷり１０秒ほど待ってようやく通話が切れると、不意に目の前にスプーンが差し出された。
「はい、先輩。あーん」
「……あーん」
　逆らう気力もないため、緩慢な動作でスプーンに乗せられたものを確かめもせずに口を開ける。「なんだか餌づけしてるみたい」といういろはの失礼な言葉をスルーしてもぐもぐと咀嚼すると、どうやら玉子焼きのようだった。俺好みの甘い味付けに頬が緩む。
「ん、旨い」
「よかった。それじゃあ、今日もよろしくお願いしますね？」
　はい？
「何をどう繋いだら『それじゃあ』になるんだ？」
「比企谷くん。今日も明日も休みなんだから固いこと言わないでよ～」
「いや、俺が死ぬんですが」
「お兄ちゃん、諦めが肝心だよ？」
「なんで俺が駄々こねてるみたいになってんの？　おかしくない？」
「先輩、空気読みましょう？」
「やめて、ちょっと過去のトラウマを思い出してしんどいから」
「……」
「やめてやめて、涙目で俺の頭を撫でるのやめて」
「比企谷くん。付き合ってもらう代わりに一つだけ要求を呑んであげる。何がいい？」
「……めぐり先輩と結衣と留美を呼んでもらえますか。癒し要員が欲しいです」
『ほほう……？』
「あ、ウソです、ごめんなさい、殺さないで」
「わたしは静ちゃんを呼ぶねー」

「小町、結衣先輩のお母さんの連絡先知ってますよー」
「小町ちゃんナイス！　じゃあお２人を呼んじゃいましょう！」
「待って待って待って、本格的に死ぬから、マジで」
――こうして、本来なら寒さに震えるはずの大寒の時期が、それどころじゃない事態に翻弄されながら過ぎてゆく。

「あ、ゆきのん、起きた？」
「おはよう、由比ヶ浜さん。……」
「？　ゆきのん、どうしたの？」
「なんで私の服がはだけているのかしら？　まさか……」
「それただの寝相だから！　うぅ……なんでヒッキーだけじゃなくてゆきのんまで……」

お終い。

勇気を持って一歩を踏み出した三浦優美子は、強く可憐で美しい。

（1）

涙には、様々なものがある。

寂しさの涙。

前に進めない涙。

悲しみの涙。

そして、嬉しさの涙。

正も負もひっくるめて、高まった感情の結露として溢れ出す涙は、流す者を癒して見るものに感情の共有を促す。そのどれもが、きっと純粋で美しい。

そんな、沢山の種類がある涙を、一人の女の子が流すなんて考えたこともなかった。

一つ一つの場面を思い出すと、本人には言えないが……俺はその都度、美しい涙に見惚れていたのかもしれない。

× × ×

クリスマス、バレンタインデーと、今までなら家族（主に小町）との思い出くらいしかなかったにも関わらず、昨年度は妙に濃い時間を過ごした。そういった時間とは対照的に、春休みは至極穏やかに過ぎていった。家で勉強し、小町と雑談をして、カマクラを愛でて、図書館で勉強し、帰ってきたら小町を愛でて、抜群にキモがられる日々。小町にウザがられるのが意外と癖になると気付いて絶望したこともあった。

そんな春休みを終えて、新年度――高校生活最後の年を迎えた。元々一組しかない雪ノ下のクラスを除いて、文系・理系にクラスが分けられる。普段一人で生息している身としては、戸塚と一緒のクラスであるかどうかだけが重要だったのだが……。

「隼人―。消しゴム貸してくんない？　あーし、さっきどっかで落としたみたい」

「ん、わかった」
すぐ目の前で繰り返されるやりとりを、今までの経緯を一部ながら知っているがために何だか妙な気分で眺める日々。
……なんだか、妙なことになった。
×　×　×
戸塚とはクラスが別だった。
死のう。
と思ったのは、最後のクラス替えが発表された当日のことだった。教室の中に視線を巡らせればいつだって戸塚が視界に入っていた日々が終わりを告げるのだ。会える時間が限られた者が出来ることは一つ。会っていた時間を脳内の記憶が擦り切れる直前まで再生することだけだ。
唯一の救いなのは、クラス替えで絶望していた俺に戸塚から歩み寄ってきて、
「八幡……クラス、別になっちゃったね……」
「と、戸塚……っ」
「……毎日、会いに行くから！」
と頬を赤らめて上目遣いでにっこり微笑まれたのが強烈すぎて、あの素晴らしき笑顔を毎日再生出来ていることだ。そうです、彼は天使です（中一英語レベルの和訳）。
戸塚との別離を経て少し強くなった訳だが、昨年度同じクラスだった面々もだいぶ様変わりした。といっても大体の人は顔を見たことがある程度の関係だったが。
スクールカースト最上位と言える、葉山、三浦、由比ヶ浜、海老名、戸部、その他童貞風見鶏等がいるグループ。彼らの中で、葉山と三浦が俺と同じクラスになった。
しかもどういうわけか、窓際最後列の俺の目の前に葉山が、そして葉山の右隣に三浦が座っている。男女で隣り合う席にして、且つ出席番号順にしたがためにこんな事態になったのだが……居づらいことこの上ない。三浦が自分の席を確認した瞬間に、葉山に対してはいつも通り振る舞いつつも小さくガッツポーズをしたのを見てしまって

何この人ちょっと可愛いとか思ったりもした。その後俺を見て「あー……ヒキオもいるんだ」と何とも言えない表情をされて俺も何とも言えなくなった。

通常は新しいクラスが出来た場合、その中で仲の良いグループを作るものだと思うのだが（俺にとってはほとんど異星での出来事のようなものなので、その生態は詳しく知らない）、グループの中心にいた2人がこのクラスにいるということで、残りのメンバーが休み時間になる度に訪れるようになった。戸部その他童貞風見鶏たちは昼休み以外の休み時間にも足しげく通い詰め、俺の目の前で「っべー、っべー」と繰り返している。少しは流行を取り入れて「へー！　隼人くんそれマジですごーい！　たのしー！」とか言ったらどうだと思ったこともあったが、想像したら寒気が走ったのですぐに想像を打ち消した。俺が一方的に想像しただけで難なのだがサーバルちゃんに謝ってほしい。由比ヶ浜と海老名は同じクラスになったらしく、2人とも可愛いから周りの男が仲睦まじく話す2人をちらちら見ている……というのは童貞風見鶏の談。そこに混ざる勇気の無いお前のダサさよ……と思ったが、まかり間違っても俺はそんなことを言えた立場ではない。

昼休みはともかくとして、通常の休み時間の短い間にいちいち他の場所に移動するのも中々大変だ。必然的にヤツらの会話をすぐ目の前で聞く日々が続いていた。葉山や由比ヶ浜がちょこちょこと話しかけてきたりもしたが、何人もの前で喋る気力も湧かないのでそれなりの返しで留めておいた。葉山と由比ヶ浜は俺の言葉を聞く度に、毎回苦笑いして2人で目を合わせていた。なんなの君ら俺の保護者かなんかなのという気分だった。まことに遺憾である。

4月の半ば頃。

それぞれ用事でもあるのか、珍しく昼休みに誰も来ない。静かで良いな……と思っていると、斜め前の三浦が何やら葉山をちらちらと見やりながらもじもじしているのが見えた。奉仕部に葉山絡みのことで相談しにきたときや、バレンタインイベントで葉山にチョコを食べてもらおうとした時に見た覚えのある仕草に、ふと懐かしさを覚え

る。
「は、隼人……さっきやった古文のとこ、教えてくんない？　全然ついてけなくて……」
　三浦の言葉に、ああ、確かになあ……と内心で頷いた。今日やった内容は文法や単語の難しさ以外の厄介な要素があり、授業中に多くの人がうんうん唸っているのが聞こえたからだ。
　葉山は三浦の頼みに、困ったような笑みを浮かべる。
「ああ、ここね。どうしようかな……正直、俺もいまいち呑み込めなかったんだ……」
「え……そうなの？」
　葉山の言葉に、三浦が目をぱちくりとさせる。多分俺も同じような反応をしていた。完璧超人ではないと知っていても、なんだか意外だな……と思っていると、いつもとちょっと違った苦笑いを浮かべていた葉山が、視線を三浦から俺にくるりと向けた。
「比企谷。今の話を聞いてたらでいいんだけど、さっき古文でやったところの意味は分かった？」
「うぇっ？　俺？」
　唐突に矛先が向いて、変な声が出る。普段から話す準備をしていないとこういうことになるのだと実感する。俺が言葉を発する前提なのは家（小町と過ごすリラックスタイム）、教室（戸塚に日頃のストレスを洗い流してもらう至福のとき）、職員室（平塚先生の呼び出し）、部室（由比ヶ浜の話に相槌を打ち、雪ノ下の毒舌にやんわりとツッコミを入れる）の４ヶ所のみなので、他の場合は大抵滑舌の筋肉がだるんだるんに緩んでいる。
　何だこの話。
　長めのモノローグを入れている間に、いつの間にか三浦まで俺のことをじっと見ていた。なんでそんなに眉をひそめてるんでしょうか。
「ああ、えっと……」
　頭を整理する時間を稼ぐために、一度しまった古文の教科書を取り出してぱらぱらと捲る。葉山が今言った言葉を思い出すと、俺が話を聞いていたであろうことは分かっている状態で「聞いてたらでいいん

だけど」と前置きする辺りが本当に紳士で手際が良くてそりゃ慕われるよなと改めて納得してしまった。
「……三浦はどういう風に難しいって感じた？」
話題に挙がっている部分を読みつつ、視線を下げたまま質問する。だって恐いんだもの。
「え？　いや、どういう風にって……正直、全然訳わかんなかった」
「ん、そうか。葉山は？」
珍しく（失礼）ごく普通に受け答えしてくれたことにほっとしつつ葉山に話を振ると、腕を組んで考え始めた。
「そうだな……文法や単語がある程度難しかったのはあるけど……それ以上に、もっと根本的な部分から分かっていないって気がしたな。それ以上言葉にしようもないんだけど……すごくモヤモヤしてる」
「ん、今葉山が言ったことに尽きると思う。要はこの作品の背景が分かりづらいってことなんだが……このままだと、昼飯を食う時間が無いな」
1～2ヶ所説明すれば事足りるという状況でもないため、どうしたものかと思っていると、
「比企谷。放課後時間あるか？」
葉山が唐突に質問してきた。流れからして唐突でも何でもないんだが、俺からすれば残業を命じられているようなものなので十分に唐突だ。サービス残業は勘弁して頂きたい。
「……部活は休みだが」
休み「だが」何もしたくないよ！　と全力でアピールしたつもりだったが、葉山は俺の意図を綺麗に流して三浦を向いた。あんだけ気の利いたことを普段しておいて今のアピールに気付かないわけないよね？　極悪だね！
「優美子はどう？」
「え？　あ、あーしは、うん、大丈夫、だけど……」
葉山から誘われたことによほどびっくりしたのか、目を大きく開けて一瞬ぽかんとした顔をした。視線を逸らし頬を赤らめ、縦ロールを指でくるくると巻く様は妙にいじらしくて可愛い。この人色んな要

素持ちすぎてギャップが半端ないですね……。
「というわけで、比企谷。俺たちがよく放課後に寄ってるカフェがあるんだけど、そこで教えてくれないか？」
カフェで！
勉強を！
教える！
ははーん、何その青春イベント!?
光度が強すぎて目が潰れるわ！
あとなんだよ「というわけで」って。ぜんぜん「というわけで」じゃねえよ。「比企谷、君に命令だ」とか言われた方がまだしっくりくるわ。それもすげえいやだけど。
「……えええ……？　いや……えええええ……？」
メムメムちゃんを見習って、下手な言葉を使わずただただ怪訝な顔をして拒否の意思を示すが、葉山が苦笑いを浮かべる前に獄炎の女王が鋭く尖った視線を向けてきた。
「は？　あんた、隼人の誘い断る気？」
こわっ。
さっきの恥じらいのある乙女はどこへ？　ねえどこへ？
「比企谷。……受験もあるし、不安なところはきちんと潰しておきたいんだ。どうだ？　他の人は呼ばないから」
いや、それはそれで人波に紛れることが出来ないからきついんだけどね。ただまあ、戸部がいたらうるさくて勉強にならないだろうし、由比ヶ浜がいたらそっちにかかりっきりになりそうだ。
「……分かった。場所は？　何時に集合するんだ」
「え？　ＨＲが終わったら３人で一緒に行けばいいんじゃないか？」
気まずっ。
これだから「ウェイ勢」「リア充」「ＦＢに休日のＢＢＱについて投稿するのが命」「社会人になってフットサルを始めるヤツら」「キラキラネーム」「星組」の連中はいやなんだ。後半は語感がそれっぽくて挙げてみたんだが何か違うな。
「……あいよ」

何この気まずいイベント……と辟易しながらも、受け入れてしまったのはしょうがないのでさらっと返事をして席を立つ。ベストプレイスでのんびりする時間も無いので、購買のパンを買ったら教室でさっさと食べてしまおう。

教室を出る直前に振り向くと、葉山と話す三浦が明らかにいつもよりも上機嫌で少し笑ってしまった。あそこまで分かりやすい乙女にはもはや好感しか抱けない。

もうちょっとね、そのね、他の人にも優しいとありがたいんですけどね……。

廊下を歩くと、開けてある窓から心地良い風が吹き込んでくる。昼間はとても暖かくて気持ちが良いが、朝夕はまだ寒い。カフェに行くときはまだいいかもしれないが、帰りは確実にコートが要るな……と考えながら、購買に向かう。

「さて……んん……？」

購買に着いてラインナップを眺めてみると、兵どもが夢の跡とでも言うかのように、昼休みにででんと出される大きな大きな灰色のトレイは9割5分ほど空いていた。こんなパンあったっけ？　と思うようなパンしか残っていない。

「えぇぇ……？」

思わず、さっきと同じような怪訝な顔をしてしまった。

つら。

続く。

（２）

放課後。

ＨＲを終えると、俺はさっさとコートを着込んで教室を出ようとした。

「比企谷、もう準備が出来たのか。廊下で待っててくれ」

「……おう」

約束を忘れていたりしてくれないかなーと期待したけどやっぱりだめでした。

廊下から教室の奥をちらちら見ながら待っていると、すぐに準備を終えた葉山に対し三浦の準備が驚くほど遅い。一つ一つ何をやっているのかはいまいち分からないが、とにかくやることが多い。そして遅い。その割に葉山とにこやかに話している。俺が混ざる前に葉山と２人で過ごす時間を出来るだけ延ばそうとしているように見える。国会の牛歩戦術を思い出しながら、既に温度が下がり始めている廊下の空気にぶるりと震える。いやほんと少女マンガみたいな空気を作るのは勝手なんだが、俺の健康も気遣ってほしい。

仕方ないので今期のアニメを脳内再生して「カンナかわいい……」と思っていると、やっと２人が登場した。葉山が待たせてすまないと片手でジェスチャーをしてきて、三浦はごく平然としている。あまりに予想通りの反応だ。

「それじゃあ行くか」

「おう」

案の定、と言えば案の定だが。葉山と三浦が並んで歩き、その３歩分後ろに俺がついていく。俺は同行者なのか純然たる不審者なのかの区別がいまいちつかない。

開いている廊下の窓からは、威勢の良い部活の掛け声や吹奏楽の楽器の音が響いてくる。サッカー部の掛け声も聞こえてくるが、葉山は同じ部活仲間を一体どんな目で見ているのだろうと思った。そんな質問をぶつけたところで綺麗に飾られた言葉しか返ってこないと分かっているので、わざわざ尋ねたりはしないが。

昇降口で靴を履き替えて外に出ると、思ったよりも寒かった。昼は春の暖かさを、夕方から夜にかけては冬の名残を色濃く残すこの時期に多くの人の気持ちが浮つくのも分かる気がする。
「ねー隼人、あーし帰りに寄りたいとこあんだけど」
「はは、勉強会にどれくらい時間がかかるか次第だな」
ちなみにここまで、まるで1人で帰っているかのような言い方をしていたけれど。2人の会話に参加していないので1人で帰っているも同然だったりする。許されるならばこのままそっと別れたいところだ。校門を出たら君たちは右へ、僕は左へ……。
「ところで比企谷」
「はぇあっ？」
「……ヒキオ、今のなに？」
「……なんでもない」
会話の準備をしていないとこうなる。喉も口も全く準備してませんでした……。

× × ×

てっきりスタバやドトールといった街中の全国チェーン店に行くのかと思っていたが、2人に付いていった先は総武高生が登下校に使う道からやや逸れた場所にあるカフェだった。どうやら個人でやっている店のようで、内装が小洒落ていながらも所々に子どもが好きそうなものを置いてあったりして、なんだかくすりと笑ってしまうような暖かい雰囲気がある。ここにあのメンバーで来ているのか……戸部その他モブは雰囲気に合わないから出禁にならんかな……と思いながら店員に案内されて付いていく。
窓際のテーブルに案内されると、葉山と三浦は向かい合う位置に座った。俺が座るのは葉山側か……海老名さんに見られませんようにと思っていると、葉山がちょいちょいと指差して場所を指定してきた。2人のいる面の間、俗にお誕生日席と呼ばれる場所を指される。
「……ここ？」
椅子はあるけどなんでまた……と思っていると。
「俺の隣だと、優美子に教えづらいだろ」

葉山の答えに納得すると同時に、この女王様にも教えるんだということを改めて実感する。難易度高いなぁ……。
メニューを注文すると、早速葉山が勉強道具を取り出した。まずは雑談を、などという雰囲気になれば、俺は2人のやりとりをテニスの審判さながらに眺めていなければならないので非常に助かる。
「比企谷は今日やったところは分かったのか？」
「ああ、まあ大体な。この前読んだ小説がたまたまこの時代の生活をモデルにしてたから何とかなった」
三浦が少しばかり目を見開く。ちょっとは興味を持ってもらえないと話している身としては辛いので助かる。
今日の古文で扱ったのは、ある時代の恋愛ものだ。現代のＬＩＮＥでのやりとりが当たり前になった自分たちからするとあまりにも時代背景が違いすぎて、ほとんど違う星の生活のように思えてしまう。昔の人の恋愛観に当時の死生観も相俟って、とにかく考え方が分かりづらいのだ。それでも教科書に出てくるような作品は、文法や単語が分かれば大抵はなんとかなる。しかし今日やったところは背景が分からないと首を傾げてしまうことだらけだったと思う。
３人で教科書を開きながら、まずは大雑把に今日で扱った部分について時代背景も交えて説明していく。三浦も、よほど真面目に悩んでいたのか絡み合っていた疑問の糸がするすると解けていったような顔をして聞いてくれた。背景が頭に入っているだけで随分と理解度が変わるものだ。
「……ヒキオ、やるじゃん」
「……どうも」
一通り説明を終えると、女王様からお褒めの言葉を頂いた。三浦は見え透いたお世辞を言わないということは知っているので、割と素直に嬉しくて少し困る。
「でも、今回ヒキオが背景を知ったのって偶然でしょ？　他に同じようなのが来たときどうすんの？」
「そん時はまた勉強するまでだろ。頭に入れておくべき背景は別に何百個もある訳じゃない。受験でよく出るところと余裕があればたま

にしか出ないところをひたすら勉強して、その都度時代ごとの考え方をぼんやりとで良いから頭に入れときゃいい」
「……へえ……」
　三浦が心底感心したような声を漏らす。ううむ、なんだかやりづらい。ちらりと葉山を見やると何だか腹の立つ微笑みを浮かべている。陽乃さんを隣に置いて全力で苦笑いさせたい。しかしあの人がいるとこの場が凍り付くのが目に見えているのでやめておく。
「ありがとう、助かったよ比企谷。それじゃあ、個別で気になるところを質問していいか？」
「おう」
　頷くと、葉山は俺の説明を聞きながら既に疑問点をまとめていたのか、手際よく聞いてくる。質問内容もまとまっていて、打てば響く反応は教えていて楽しい。葉山に教える機会などそうあるものではないから貴重といえば貴重だ。ほんと海老名さんに見つからないでほしい。いないよな……いないよね？　大丈夫だよね？
　三浦は葉山が質問している間、熱心に教科書とノートとの間で視線を往復させている。眉をひそめて小さな声で唸り、時折ぱっと表情を明るくしたりまた唸ったりと忙しい。今まで見たことのない三浦の表情は万華鏡のようにくるくると変わり、そのどれもが瑞々しい。見惚れそうになって顔を逸らすと、俺たちの前を通りすぎた男が三浦をちらりと見ていった。それもそうだよな……と納得していると、葉山から次の質問が飛んでくる。三浦の素敵な百面相に、葉山がまるで反応しないのは少し……というかかなり気になった。
「ヒキオ、ここなんだけど」
「ん、ああ、ここは……」
　三浦が教科書を見たままずいと顔を寄せる。その途端にふわりと甘い香りが漂い、頭がくらりとした。ほんのりと鼻腔をくすぐる程度の香りが思考と理性を容易く削り取る。
「……ヒキオ？　聞いてる？」
「……すまん、もう1回頼む」
　てっきり顔をしかめられるかと思いきや、三浦は呆れたようにクス

リと笑った。
「話聞いてろし。あのね……」
随分と柔らかい笑みに、心臓が鷲掴みにされる。顔が近付いたわけでもないのに、甘くて良い匂いが更に脳内に染み渡っていく気がした。
この後、結局2時間ほど勉強会を続けた。古文や英語、日本史など割と自由に手を広げた勉強は、存外に楽しかった。
一緒にいるだけでも胃が縮む思いをするかと思っていた女王様は、少なからず気を許したのかちょこちょこと話しかけてきた。中学の頃なら何も考えず惚れてしまいそうだな、と考えて少しだけ目を細める。葉山の顔をちらりと見てから三浦の顔を見ると、三浦はきょとんと首を傾げた。長い金髪がふわりと揺れて、カフェの空気が柔らかさを増す。中々懐かない猫のような表情だった。
「今日はこんくらいにしとくか」
静かに、少しだけ長く息を吸って閉会を告げると、葉山と三浦がいくらか充実した顔つきで頷いた。

続く。

（3）

先日のカフェでの勉強会以来、なんだか妙なことになった。

「隼人、今日空いてる？　教えてほしいとこあんだけど」

「ん、わかった。比企谷は空いてるか？」

「え、あ、ええ……あー、まあ、その、なんだ、うん、まあ」

勉強で三浦が分からないところを葉山に聞き、その場でサッと教えることが出来ないものと葉山が判断したら、ごく自然に俺にまで話を振るようになった。三浦は三浦で何故か俺の参加に対して渋面を浮かべることもなく、「いいからさっさと来いし」と言わんばかりの顔で睨んでくる。睨む必要は全く無いと思うんですけども。

最初の勉強会の時以外は、葉山に対して「お前も教えることが出来るだろ何考えてんだ」と思ったものだが、俺も分からないところをちょこちょこ教えてもらえるのはありがたい。三浦は三浦で得意な部分もあるらしく、時折俺も教えてもらったりしていた。

放課後の教室、図書室、最初に行ったカフェや市立図書館などなど、あらゆる場所に行くようになった。三人で行くことも多かったが、そこに葉山グループの他のメンバーが参加することも増えた。戸部はどこでもうるさくて漏れなく注意を受けるし、由比ヶ浜は空気を読みつつも勉強面ではお馬鹿すぎて世話が大変だし、海老名さんは俺と葉山を見て涎を垂らしながらハアハア言ってるし、他のはもはや名前も忘れたしで何かと疲れる。後半の説明がアレな気もしたがまあ別にいいか。

傍から見れば、俺も葉山グループの一員のように見えるのかと思ったこともあるが、一瞬浮かんだ自分の考えは一笑に付した。こんな異物が混じっている今の状況が特殊すぎるだけだ。番組に一時期妙に出演する準レギュラーのような存在だと思えば良い。この例えがよく分からない。

葉山や由比ヶ浜が俺にちょこちょこ話を振ってくるのは分かる。戸部が話を振ってくるのも分かる（流せる時は流すが、「ちょー、ヒキタニくんひどくねー？」と言われるのが鬱陶しいのでさらりと言葉を

返すようにしている)。海老名さんがハアハアするのも分かる、いや、分かりたくはないが、まあ、分かる。

そんな、俺に話しかけてくるヤツらの中に、三浦が含まれるようになったのは驚きだった。

勉強以外の雑談で、素っ気ないながらも話を振ってくるのだ。俺がどんな返しをしようが、さして興味を持った顔をするでもなく髪をくるくると指に巻いているだけだが(文字に起こしてみるとだいぶひどい反応だ)、それでも今ではほとんど毎日俺に話しかけてくる。これには葉山と由比ヶ浜も驚いていた。何だろう、珍獣が気に入ったんだろうか。自分で珍獣って言っといて難だがすごく悲しくなった。

何だか妙なことになったな……とは思いつつも、奉仕部にいる時とはまた違った安心感が少しずつ芽生えていることに気付き、正直驚いている。積極的に会話に参加している訳ではないし、むしろ強制的に参加させられていると言っても過言ではないが、それでも無理矢理にでも逃げ出そうなどとは思わない。

気にしている事を挙げるとすれば、二つだけ。

三浦が葉山のことを、以前にも増して切なそうに見つめるようになったことと。

三浦の視線に気付いていながらも、葉山が三浦の思いを汲むような素振りをまるで見せないこと。

二人の思いはすれ違うどころかねじれの位置にあるように思える。どれだけ思いの丈を伸ばそうが、決して交わることがない。

陽の光の温もりが熱さに変わっていく中、二人の関係が常に頭を過ぎるようになってきた。

外を見上げると、しとしとと雨が降っている。

もうじき梅雨が明けるとニュースでは言っていた。

雨が上がれば、夏が来る。

焼け付くような陽の光に晒される頃、二人の心は一体どうなっているのだろう。

× × ×

七月初旬。

うだるような暑さは学校を蒸し焼きにする。エアコンが利いている教室内ならまだしも、一歩廊下に出れば灼熱地獄だ。苦し紛れに窓を開けても温い風しか入ってこない。

涼のとれる教室も、放課後になればいつまでもいる訳にはいかない。帰りのＨＲを終えるといそいそと帰り支度をする。三浦と葉山は既に席を立っていて教室からいなくなっていた。海老名さん辺りに会いに行っているだろうと当たりを付けていたが、廊下に出ると葉山が戸部に話しかけられ、そのまま戸部のいるクラスに連れ込まれているのを見つけた。

「ん……？」

それなら三浦は……？　と辺りを見回すと、廊下を曲がっていく長い金髪が見えた。さっさと帰ろうと思っていたのに、一瞬だけ見えた背中が妙に気になって後を追う。

「あれは……屋上に行く気か」

三浦のどこか魂の抜けたような足取りを心配しながら後を追っていると、階段を上っていった末に鍵の壊れたドアを開ける音が聞こえた。あまり良い思い出の無い場所だが、今はそれよりも三浦のことが気掛りだ。気付かれないように階段を登り、ドアを慎重に開ける。

三浦は、屋上のフェンスに指をかけて、街並みを静かに眺めていた。その背中は少し寂しくも見えるし、そうでないようにも見える。何も見えず、何も分からない背中に――俺はまだ、三浦のことを何も知らないのだなと不意に気付いた。

「……おう」

「……!?　……なんだ、ヒキオか」

忍び足で近付いたせいか、声を掛けるとえらくびっくりされてしまった。三浦の表情は驚愕から警戒、そして安心と移り変わり……最後に少しだけ、落胆の色が浮かんだ。一瞬だけ脳内に浮かんだ言葉は無粋に過ぎて、とても口には出来なかった。

「なんでここに？」

ブーメランも甚だしい質問を投げかけると、三浦は少しばかり目を見開き、視線を泳がせる。

「ん……なんでだろ」
浅くため息を吐き、苦笑いを浮かべる。今にも泣きだしそうに見えたが、三浦の顔が再び街並みに向けられたことでそれ以上は確かめられなかった。
三浦の横に並び、同じようにフェンスに指をかけて街並みを眺める。
街を見ていると、一人で歩いている人が多く目に留まる。複数人で歩いている人だって沢山いるのに一人でいる人が目に留まりやすいのは、俺が普段一人で行動しているからだろう。心理学ではこの現象に名前が付けられているらしい。現象の名前は忘れてしまったが、何となく思い出した。
何の感情も浮かべずに街中を見ている三浦には、今、どんな人が目に留まっているのだろう。横目で表情を窺って、またすぐに視線を街に戻した。
昼間の暴力的な日射しはまだ勢力を強く残していて、こうしている間も二人の身体をじりじりと焼いていく。三浦をちらりと見て日焼けは大丈夫かと心配したが、三浦なら日焼け止めくらいちゃんと塗っているだろう。
「……このままじゃ、だめだってのは分かってんだけど」
ぽつりと呟いた声は、俺に向けられたものなのか、或いはただの独り言なのか分からないくらいか細かった。ふと太陽の光が雲で遮られて、憂いを帯びた横顔に影が差す。
「……そうか」
ひどくざっくりとした相槌を打つと、くすりと笑う声がした。そんなにおかしなことを言ったかと思ったが、三浦を見ると妙に楽しそうにくすくすと笑っている。
「……何も聞かないとこ、ヒキオらしい」
「そうか？　自分らしさなんてもの、俺には分からんが」
首を傾げる俺を見て、三浦はなおも笑う。箸が転がってもおかしい年頃とはよく言ったものだ。
しばらく楽し気に笑う声に耳を澄ませていると、はぁ……と笑い疲

れたような声が聞こえた。
「……そろそろ行ってみる」
「……そうか」
三浦がまた噴き出した。この子のツボ　ｉｓ　どこ？　ここで俺が意図的に笑わせようとすれば駄々スベりするのは目に見えているので見守ることにする。
しかしまあ、こうして楽しそうに笑っている三浦はいつもの怖さはどこへやら、心底可愛らしい女の子にしか見えない。あまり凝視するのもアレなのでちらちらと様子を窺っていると、三浦がようやく落ち着いたのか目尻の涙を拭った。
三浦が再びフェンスに指をかけ、街並みを見つめる。緑色の格子に細い指がかかるとかしゃんと無機質な音がして、そっと吹き抜ける風が金の髪を揺らした。
「……もうすぐ夏休みだな」
「……うん」
会話が止まる。俺と三浦の間は、綺麗に人一人分開いたままだった。
三浦が小さな、本当に小さな声で「その前には……」と呟いた。独り言だと判断して、俺は返事をしなかった。
それから、およそ３０分ほど――何も喋らないまま、ずっと街並みを眺めていた。
一人でいる時よりも一人のような、一人でいる時よりも寂しくないような、一人でいる時よりも――黙っているのが心地良いような。
柔らかな空気の中を揺蕩っているような、不思議な時間だった。
続く。

（4）

三浦と屋上で言葉を交わしてから、変化は少しずつ訪れていった。

「隼人―、あーし今日もあそこ行きたい。暑いし」

「ああ、いいよ。今日はアイスを食べてから勉強するか」

「あはは、優美子ってあの店ほんと好きだよね」

「比企谷も来るだろう？」

「なんで俺をナチュラルに仲間に入れるんだお前は……」

「？　仲間じゃないのか？」

「ぐあ……後光が……っ」

「？　ごこうって何？」

「お前のおバカキャラを最近すっかり忘れてたわ」

「おバカキャラってなんだし!?」

夏が近づき、受験勉強の山場とも言われる夏休みが迫ってくる。受験期特有のピリついた空気が3年生の教室に満ちているものの、それでも俺たちは比較的穏やかに過ごしている。

誰かが何か、今までと違う言葉を発した訳ではない。

それぞれの仕草にも、変化らしい変化はない。

それでも、変化は、小さくとも確かな変化はあった。

「……」

――三浦が葉山を見つめるときの視線が、時折泣いてしまいそうなほど切ない色を帯びるようになった。

そのたった一つの変化に、グループメンバーの一部は気付いているようだった。葉山は気付きながらも上手いこと会話を繋ぎ、由比ヶ浜と海老名さんは以前にも増して話題を振るようになった。他の男子共は単純にこの2人がよく喋るようになったためテンションが上がり、会話自体は以前よりも賑やかになっている。

俺は半歩引いた状態で、三浦たちの様子を見ていた。

腐るほどの情報や物語がネットや本や漫画に溢れている今、恋が綺麗で美しいものばかりではないなんてことは、自分の身体がまだずっと小さい頃から知っている。人に誇れないような恋だって沢山ある

ことを知っている。
それでも、三浦の視線に灯った熱は気にかかってしょうがなかった。
女子高生の恋、まして三浦は見た目こそ恐くても中身は純粋な乙女だ。
そんな女の子の恋が、こんなに悲痛なものであっていいのか。
なんで、葉山を見る度に嬉しさと悲しさが混じったような顔をしてしまうんだ。
理由は分かっている。分かっていても、心の中で三浦に問わずにはいられない。
本人には言えない。由比ヶ浜や海老名さんにも相談したところで解決は出来ないだろう。
三浦の視線に込められた愛おしさと痛みが静かに膨らんでいくのを、俺はただ、黙って見ていた。

× × ×

１０日ほど経った頃。
梅雨も上がり、湿度を拭い去った熱気が千葉の街を包む。いよいよ夏休みが迫ってきたことで、学校の雰囲気は自然と浮き立っていた。
「隼人、ちょっといい？」
放課後を迎えるなり、三浦が葉山に話しかけた。いつもの勉強会や寄り道の誘いではないだろうということは、真剣な声音を聞いただけで分かる。
「……ああ」
葉山も同様だったようで、言葉少なに応じる。二人は立ち上がると、どこか強張った歩調で教室から出ていく。いつもなら挨拶を交わすところだが、今はそれどころではないことが流石に分かる。英語長文を読んで我関せずの姿勢を貫いていると、不意に右のこめかみに視線を感じた。
葉山から一歩遅れて教室を出ようとする三浦が、ほんの一瞬だけこちらを見ていた。感情を読み取るにはあまりに時間が足りなかった。
２人の静かな足音が遠ざかっていく。

願わくば、三浦が幸せになれますように。
幸せな夫婦のコミカルな日常を描いた長文を読んでいた手が、ページの端をくしゃりと歪めた。
×　×　×
三浦が葉山を連れ出した日は、俺は足早に帰路についた。
心配はすれど、俺が踏み込むべきことではない。
そう分かっていても、勉強は遅々として進まなかった。
×　×　×
翌日、三浦と葉山はいつも通りだった。
正確に言えば、より強い緊張を持って今までの日常を演じていた。
戸部と海老名さんの一件の時もグループ内はぎくしゃくしていたが、中心にいる葉山と三浦に異変が生じると、以前とは比べ物にならないほどの違和感が生じる。
誰かが不機嫌になったり、悪口を言い合ったりするわけではない。けれど、いつもなら盛り上がるような話題でも自然と立ち消えて、グループの中心に笑顔を吸い取る黒い渦が出来てしまったようにさえ思えた。
誰もが気付いているこの状況に、誰かが苦言を呈することはなかった。
それでも、由比ヶ浜とよく目が合うようになり、海老名さんと疲れた笑みを交わすことが増えた。
葉山を見つめる三浦の瞳を時折見つめる。
三浦の視線からは、恋焦がれる優しい温もりが抜け落ちていて、悲しみだけが残っていた。
俺は色恋沙汰にとかく疎い。だから、三浦が葉山に何という返事を言われたかは分からない。
けれど、良い返事は貰えなかったことは間違いない。
そして、はっきりと断られたら、悲しみこそあれどもっと表情ははっきりしている気がする。
告白に対して「はい」「いいえ」のどちらかで答えたのなら、三浦はきっとこんな顔はしない。

どうするのが良いのか、そもそも自分が何か行動を起こそうと考えること自体間違いではないのか。
悩み抜いている内に、日射しは灼熱を帯びて、暴力的なまでの暑さが街を包み始めていた。

×　×　×

高校生活最後の終業式の前日。
葉山のグループで集まっての勉強会をすることがすっかりなくなってしまった放課後、早めに席を立った葉山の背中を見送った三浦が、ふらりと教室を出ていった。幽鬼のような足取りに背筋が粟立ち、慌てて後を追う。
三浦が向かったのは、少し前に言葉を交わした屋上だった。
「あっつ……っ」
焼け付く日射しは遮るものがない場所には本当に容赦が無い。こんな場所で一体何を……と訝しんでいると、三浦は給水塔の日陰に座り込み、膝に顔をこすりつけていた。
「三浦……っ？」
そっと掛けようとした言葉が一瞬でかき消える。
「う……うぅ……っ」
三浦は、今にも消え入りそうな声で嗚咽を漏らしていた。普段の彼女と比べて明らかに小さく見える姿は、心に鈍くて鋭い痛みを植え付ける。
声をかけるか迷った。
今までならきっと、見なかったことにしてそっと屋上を出ていっただろう。三浦は学校でとはいえ、人目につかないことを前提に泣いているのだろう。俺が見たことを誰にも、三浦にも言わなければそれでいい。それがいい。
――今までなら、そう思っていた。
「……おう」
「……っ!?　……なんだ、ヒキオか……」
ぼそりとかけた声に三浦は心底驚いたようで、綺麗な目をめいっぱい見開いて俺を見た。しかし潤んだ瞳がひとたび俺を捉えると、途端

に表情から気が抜けた。泣いている顔を見るよりはマシだが、思いの外緩んだ顔をされてなんだか複雑だったりする。
「……なんでここにいんの？」
目尻をこしこしとこすった三浦が、「最悪、メイクとれちゃうし……」と恨みがましい台詞を吐いて俺を軽く睨みながら言う。それ俺は悪くないですやん……。
「いやなに、ちょっと日陰を求めてな。日陰者にとっちゃ太陽は敵なんだ」
「……ふうん……」
ツッコミでも軽蔑でもないリアクションをされて、心が限界までふわついた。ふうんって何ですかふうんって。
きっちり人一人分の空間を開けて、三浦の隣の隣辺りに腰を下ろす。数歩先のアスファルトはじりじりと焼けていて、肉を置いたら良い感じに汚れて食べられなくなりそうだ。俺は何を言ってるんだろう。
三浦は空を仰いでぬぼーっとしている俺をちらちらと見ていたが、やがて同じように空を仰ぎ始めた。
「……ヒキオ、何見てんの？」
「ん、何も見てない」
「……何それ」
三浦がちらりと顔を向けて、くすりと笑う。久しぶりに見た気がした三浦の笑みは、年相応の澄んだ可愛らしい表情だった。

続く。

（5）

校舎の屋上の、給水塔の日陰。

俺と三浦は、人一人分のスペースをきっちり開けて空を見上げていた。

放課後を迎えたとはいえ、まだまだ日差しは暴力的だ。日が沈んだところで、この熱はコンクリートにたっぷりと染み込んで夜を過ごす人たちを苦しめるんだろう。

「……」

静かに空を見上げる三浦の横顔を、ほんの一瞬だけ見つめた。憂いを帯びた整った顔立ちは、その瞬間だけ暑さを忘れさせてくれる。

夏は極端だ、と物心ついた頃から思っていた。

春の内に幸せを掴んだ人は、夏にその幸せを爆発させる。うだるような暑さだって、分かち合って笑える人がいたらどこまでも幸せになれるだろう。

けれど、きっと多くの人は、そんな幸せを享受出来る仲間に入ることが出来ない。そして、誰かから何かを言われた訳でなくとも、「お前は夏を謳歌する資格なんて無いんだよ」と突きつけられたような気持ちになり、ただただ天から降り注ぐ灼熱の熱視線に身と心を焼かれ、大して望んでもいない秋や冬を待ち焦がれる。

――三浦は今、どんな気持ちでこの夏空を見つめているんだろう。

不安をまとった糸に胸が締め付けられるような気持ちになっていると、三浦がふと口を開いた。

「こないだ、隼人に告った」

掠れた声が耳朶を打った瞬間、涼やかな風が吹く。虚しさに塗れた言葉を一刻も早く拭おうとしているかのようだった。

「……そうか」

風になびいた三浦の金の髪の毛先を目で追った後、視線を少しだけ落とす。夕暮れはまだまだ訪れる気配が無かった。

三浦が何か言いかけて、唇を震わせた。綺麗にグロスが塗られた唇から漏れ出たのは、今にも泣き出しそうな吐息だった。

首が疲れて視線を正面に戻す。色あせたフェンスが風で軋んでいた。
続きを話してくれるのなら、それはなんだか嬉しい。
けれど、無理をして話して壊れるものがあるのなら、心に留めていたっていい。
話した方が楽になる、という言葉をよく聞く。けれどそれは場合によると思う。
話したことで心が整理されることもあるが、口にすることで余計に心を締め付けられることもある。それに何か辛いことを相手が口にするときは、聞く側も注意しなければいけない。
野球部の掛け声が聞こえて、吹奏楽の音も聞こえて、それからサッカー部の掛け声が聞こえる。
風が二度吹いた。時折聞こえる嗚咽を、その都度涼やかな風がうやむやにしていく。
横顔に三度ほど視線を感じた後、三浦が再び口を開いた。
「……返事、してくれなかった」
声は、さっきよりも掠れていた。
「……そうか」
三浦をちらりと見ると目が合った。三浦は少しだけ目を見開き、すぐに細めた。
「その場で返事が欲しいって言おうとしたけど、話題を変えられてうやむやになって……。……ああ、あーしじゃだめなんだ、なって……はっきり、と……返事も、くれ、ないんだって、思ったら……っ、なんだか……っ」
懸命に最後まで話そうとしていた三浦の声が、嗚咽に呑まれてかき消える。涙が目尻からこぼれ落ちそうになると、三浦は膝に顔をうずめた。くぐもって聞こえる三浦の泣き声は、普段の彼女からは想像もつかないくらい幼かった。
何も言えなかった。
何か言える訳がなかった。
三浦が今まで抱えてきた思いの総量を知らない。それでも、今の憔

悴した三浦を見れば、一途に一人の男を思ってきた時間がありありと感じられる。胸が詰まった。
「……そうか」
辛うじて発した俺の相づちに、三浦がふと笑う。
「……ヒキオ、あんたさっきからそればっかじゃん」
「ん……」
振り向くと、三浦が膝におでこをつけた状態で、くりんとこちらを向いて笑っていた。泣き腫らした目が湛えた小さな笑いに、僅かばかりの安心を覚える。
「……そうだな」
「それも、ほとんどおんなじ」
三浦がまたしてもクスクスと笑い、はぁ……と楽しそうに息を吐いて、再びうずくまった。
「これからどうしよっかな……」
くぐもって聞こえた言葉に、頭をがしがしと掻く。空を見上げる。
「好きに生きるしかねえだろ」
三浦が顔を上げて振り向き、ぱちくりと目を瞬かせた。珍しい動物を見たような反応はやめていただきたい。
「……ヒキオって、変」
「褒め言葉として受け取っておく」
「……なんでだし」
三浦が呆れたように笑い、再びうずくまった。
それから、俺たちは日が暮れるまで特に言葉を交わすことなくぼんやりと過ごした。
受験期に、きちんと休むでもなく無為に過ごす時間は、他のどんな時間よりも無駄に思える。
けれど、隣に、人一人分空いた隣に三浦がいる状態で過ごす無為な時間は、そんなに悪くなかった。

× × ×

帰宅して、小町と話しながら夕飯を食べ、勉強をしてから床につく。
明日が終業式。明後日には、高校生活最後の夏休みが始まる。

脳裏に三浦の顔が浮かんだ。
三浦の気持ちが今日の放課後に少しでも晴れたのなら、それは嬉しい。
けれど、あのグループの歪さはきっと変わらない。
夏休みになって、積極的に集まる機会は一気に減るだろう。
そしたら、夏休み明けの二学期は一体どうなっているだろうか。
想像したくもなかった。
「……ああ、もう」
寝返りを打ち、枕に向かって独りごちる。
何もしないで見過ごすには、少しばかり近付きすぎた。

×　×　×

翌日。
「三浦……と葉山。ちょっといいか」
終業式を終え、ＨＲも終わって言葉少なに教室を去ろうとしていた二人に呼びかける。二人ともきょとんとして、ちらりと互いに見合い、同時に俺を見た。意外に息が合っている。
今から実行しようとしているのは、昨晩の寝る前と、終業式の校長のつまらないスピーチの間に練った策だ。それにどうせ、練りに練ったところで人の機微に聡い二人なら俺の浅い計略なんて簡単に見過ごすだろう。
「ちょっと分からんところがある。葉山と三浦どっちにも聞きたいことがあるから、悪いが放課後付き合ってくれるか」
だから、辿々しくてもいいから、あからさまな口実付けをする。
俺の提案に、二人は目をぱちくりとさせ、僅かに視線を泳がせる。
ためらい、戸惑い、そして思考を表情に浮かべて、
「……わかった。付き合うよ。優美子は？」
「あーしも大丈夫。ヒキオってほんと世話焼けるんだけど」
ぎこちないながらも、それぞれに笑みを浮かべた。
「……助かる」
ほっと肩を撫で下ろすのが二人に見えてしまい、揃って呆れたように笑った。

もうちょっと芝居らしくした方が良かったかな、と思った。
三人で教室を出て、廊下を歩いていく。
「ヒキオ、あーし新作のアイスね」
「え、なにこれ急に有償になったの？」
パーマをかけた髪を指でくるくると巻きながら、三浦が楽しげに笑う。冗談なのか本当なのか分からない言葉に俺はしばらく迷い続け、葉山は俺を見て楽しそうに笑っていた。二人して俺を珍獣扱いをしている疑惑が浮上する。
廊下の窓から見えた空は、昨日と同じくよく晴れている。
それでも、昨日よりも幾分優しく見えるのは、同じく空を見てから俺と目が合った三浦が浮かべた笑みが、とても穏やかだったからかもしれない。
続く。

（6）

今の俺は、本当に俺なのだろうか。

そんな、中二病ど直球なことを考えてしまうほどには、俺は奇特な行動をとっていた。

具体的に言えば。

俺が、比企谷八幡が。

スクールカースト最上位の、葉山隼人を。

そして、三浦優美子を。

積極的に。

誘っている。

あくまで健全に。

告白をはぐらかされた三浦とはぐらかした葉山の関係を考えて気が気でなかった俺は、終業式の日に教えてほしいところがあるからと二人を誘った。

そしてその日の夜。俺は何故か、次はいつ集まるかと二人に連絡をしていた。

俺はメッセージを送った自分の指を疑った。

指を疑うという経験は人生であまり無いだろう。

しかし俺がいくら自分の指に「お前何してくれてんの？　ねえ？」と問い掛けたところで、誘いを受けた三浦と葉山にはそんなことを知る由も無い。２人とも３０分と待たずに返信が来た。

そして気が付けば、週２ほどのペースで二人を勉強会やらラーメンやらに連れ出していた。誘いの連絡をして２人からオーケーの返事が来るたびに「なんでそんなに予定空いてんの？　暇なの？」と返しそうになっていた。俺ならまだしも、あの２人はもっと予定が詰まっていそうなものなのだが。俺ならまだしも。２回言ったらすごく悲しくなった。

そんなこんなで、気を揉みつつ受験勉強も続けている内に８月を迎えた。

×　×　×

家のソファにだらんと寝転がって、今にもソファと同化しかかっている生き物がいる。
どうも、僕です。
「うへぇぇ……っ」
何だこれはとツッコみたくなるような声が自分の口から漏れ出ている。疲れすぎて、自分の吐息の中に空也上人像ばりのミニ八幡の幻覚が見える。小さくても可愛くない辺りが流石だ。幻覚でも可愛くないとかまるで容赦が無い。
疲れていた。とても。
一応高校生なので、金曜日の夜に見る父や母のように心底疲れ果てた状態にはなっていない。それでも、慣れないことをしながらも受験勉強に没入しているので、確実に疲労はたまっていた。
「うへぇぇ……っ」
もう一度情けない息を漏らす。１８割増し（ほぼ３倍）の死んだ目で視線を床に這わせていると、我が家の愛猫であるカマクラがとてとてと歩いてきた。
「ナーゴ」
「……ぬぁぁぁご……っ」
ふてぶてしい鳴き方をするカマクラに対して地を這うような声で鳴き真似をしてみると、表情筋が少ないにも関わらず明らかに「は？」と言わんばかりの顔をされた。家の猫に心底軽蔑される俺、マジでクール。
カマクラがこちらを一瞥して離れるのを見送ると、今度はてとてと愛らしい足音が聞こえた。
「……どしたのお兄ちゃん、こんなゴミみたいに寝転がって」
愛しの妹がのっけから容赦ない言葉をかけてきた。しかしひどい言葉をかけてきた割には心配してくれているようで、しゃがみこんで俺と目線を合わせながらじっと見つめてくる。
「……慣れんことはするもんじゃないな」
説明になっていないことを言って身体を起こし、背もたれによりかかる。「ふはぁぁ……っ」と息を吐きながら天井を見上げていると、す

ぐ隣に小町が座った。ソファが沈み込む感触がしただけで、何だか安心感を覚える。
「今度は何をしてんの？　奉仕部に関係してること？」
「ん……いや、俺が勝手にやってることだ」
俺の返答に、小町はあごに人差し指を当てて「んー」と唸った。考えながら足をぷらぷらさせる仕草が可愛い。
「詳しい詳細を聞いてもいい？」
「頭痛が痛いみたいなこと言うな」
「こういうのよくあるよね、『まだ未定です』とか」
「たしかによくあるな……って、話が逸れてるぞ」
「あ、そうだったそうだった。で、誰絡みなの？」
これは二人のプライベートな話だ。本来であれば話さない方が良いだろう。
しかし小町は優しげに微笑みかけつつも、静かに心配してくれている。それに小町はこういった話を不要に口外したりしないだろう。
こほんこほんと咳払いをして、頬をぽりぽりと掻いた。
「まあ、小町の知ってるヤツらだ」
「えーっと、中二の人？」
「なんでそこをチョイスした？」
「奉仕部ではないとすると……いろは先輩も除かれる？」
いつの間にか仲良くなって名前呼びしていることに驚きつつもかぶりを振る。
「あいつは奉仕部に入り浸ってるだけで奉仕部ではないぞ」
「じゃあ、葉山先輩とか」
「うぐっ」
的から大きく外れて刺さっていた矢が、急に心臓を貫いてきた。思わず変な声が漏れた俺に、小町は少し驚いたような顔をする。
「当たったんだ……。えーっと、『ヤツら』ってことは……」
小町が大体見当をつけたところで、俺は頭をがしがしと掻き、小町に向き直った。
「小町、ちょっと時間いいか」

「ん、いいよ」
小町が向日葵のような笑みを浮かべ、「じゃあ先に飲み物とってくるね」と言ってソファから立ち上がった。
× × ×
ひとしきり説明を終えると、小町は透明なグラスに注いだサイダーを両手で持ちながら天井を見上げた。
「そっか……」
しみじみと呟く姿は、どこか他の高校1年生よりも大人びて見える。身体こそ小さいが、俺よりもよっぽど気遣いの出来る我が妹は精神年齢が結構高い。
氷の浮いたサイダーをくぴりと飲み込み、ローテーブルにグラスを置く。
そして振り向くと、俺の頭を唐突に撫でた。
くしくし。
「なんだいきなり……」
「お兄ちゃん、頑張ってるんだね」
「恥ずかしいんだが……」
「お兄ちゃんのそういうとこ、小町は好きだよ?」
「よし、もっと撫でてください」
「現金だなあ……」
小町が苦笑いしながらも撫で続けてくれる。なんだか眠くなってきた。
うとうとしていると、小町がぽそりと何かを呟いた。
「それにしても、お兄ちゃんの話を聞いた感じだと……三浦先輩、何だかお兄ちゃんのこと……」
小町の独白のような呟きも、朦朧とした意識ではろくに脳に浸透してくれない。
「何か言ったか」
「あ、いや……って、あれ? お兄ちゃん? お兄ちゃーん?」
小町の呼び掛ける声がなんだか遠くに聞こえる。
細い指が髪の毛をかき分ける感触に心地良さを感じながら、気付け

ば意識を手放していた。

×　×　×

しばらくして目が覚めると、小町が膝枕してくれて……なんてことは特になかった。小町が来る直前と同じように寝転がっていて、ぼんやりした頭で意識が飛ぶ前の記憶を辿っていると、いつの間にかリビングに戻ってきていたカマクラがじっとこちらを見つめていた。俺と目が合った途端ぷいっとそっぽを向いて出て行ってしまう。ツンデレなのかしらん？

「あ、起きた？」

声の方向に視線を向けると、小町がもう一つのソファに寝そべりながら足をパタパタとさせていた。ショートパンツでその動きをやるものだから少し際どい。

のろのろと起き上がり、頭をがしがしと掻く。

「……で、だ。俺としてはもう何回か誘っておきたい訳なんだが……」

「……よく寝起きですぐ相談を再開できるね、お兄ちゃん……」

小町がちょっとげんなりしている。何かごめんね。

「お兄ちゃんはさ、葉山先輩と三浦先輩にどうなってほしいの？」

起き上がって小町が発した質問に、ここ1ヶ月弱の間に繰り返してきた自分の行動を振り返る。

俺は、葉山と三浦にどうなってほしい？

「……わからん」

自分に問うてみても、これといった答えは出なかった。

「けど、まあ、なんだ、ギスギスしてるのはそれなりに近くにいる身としてはやりづらいんでな……最低限のケアをするくらいのつもりでやってる、と、思う」

曖昧な俺の言葉に、小町はくすりと微笑む。妹なのにまるで姉のような安心感があった。

「ほんとにそれだけなのー？」

「どういう意味だ」

「さーねー」

あとは自分で考えなよと言って、小町が両足をぴったりと揃えて斜

め上に伸ばす。そして「ほっ！」と軽快な掛け声と共に足を振り下ろし、その反動で手を使うことなくソファから立ちあが……ろうとして、勢いが足らなかったのか再びソファに尻もちを付いた。
なんだか変な空気が流れる。
「……別に、太ったとかじゃないからね？」
「誰もそんなことは言ってねえっての。あ、でもお前最近ほっぺたが何だか……」
「お兄ちゃん」
「はい」
「デリカシー」
「申し訳ありませんでした」
流れるように謝ると、小町は両手を使ってごく普通に立ち上がった。再チャレンジはリスクが高いと判断したらしい。
「お兄ちゃん。小町が手伝えることがあったらいつでも言ってね？」
「……助かる。多分すぐに助けを求めると思う」
「あはは、いいよいいよ」
楽しげに手を振って、小町がリビングから離れる。俺は再びソファに寝転がると、今後どうするかについて思いを巡らせた。
夏は受験の天王山と言う。
しかし、だからと言ってその夏をひたすら、修験者のごとく勉強にのみ励むというのは、おそらくほとんどの高校生にとっては苦行でしかないだろう。
大事なのはメリハリやリズムだ、とも思う。
「受験勉強……疲れ……息抜き……」
思いつくままにキーワードを呟いていく。
そして、今までの夏を思い返して――
「……あ」
1つのアイディアが浮かんだ。
去年の夏休みの例があるので、何となく流れがイメージしやすい。
しかしこれは、俺から提案すると絶対みんな「何でお前が？」感を出してくるよなぁ……でもなぁ……。

「……まあいいか」
どうせなるようにしかならない。
そう決断を下すと、俺は早速連絡をすることにした。
まずは葉山と三浦。
その後は……ちょっと人数が多くなるから、グループを作ってトークした方がいいかもしれない。
今の俺は、本当に俺なのだろうか。
改めて自分の思考と行動に驚きながら、指をせっせと動かし始めた。

続く。

（7）

俺が起こした行動に対して、幸いにも多くの人が反応してくれた。
しかし、勇気となけなしのコミュ力を振り絞っての行動は皆の目によほど奇特に映ったようで。
「比企谷くん、熱でもあるの？」
いつも痛烈な言葉を放つ雪ノ下に真面目に心配され。
「ヒッキー……相談ならいつでも乗るからね？」
由比ヶ浜には慈母のような優しさを向けられ。
「普段からこれくらいやってれば先輩ももっとモテると思うんですけどねー、あ、それはそれで困るか……」
一色からは何だか反応に困る言葉をかけられ。
「いくらでも手伝うとは言ったけど、まさかこんなことするなんて……お兄ちゃんも成長したねえ」
小町にはお前は俺の母親かとツッコみたくなる言葉をかけられ。
「比企谷……君は私が思いもよらぬ方向に成長したな。嬉しいぞ」
平塚先生にはニヤニヤしながら褒め言葉を贈られ。
「比企谷……ありがとう、苦労をかける」
葉山にはなんだか鬱陶しい感じの礼を言われ。
そして――
「……取り敢えず、楽しみにしとくから」
三浦には、つっけんどんながらもどこか温かい言葉を掛けられた。
「……どうしてこうなった……」
「お兄ちゃんが言い出したことでしょ……」
平塚先生が運転する八人乗りのワゴンの窓から空を見上げ、回想シーンの始まりを告げるような台詞をこぼすと――小町に食い気味にツッコまれた。
× × ×
お盆の前に、２泊３日の勉強合宿なんてどうでしょう。
みっちり勉強して、休憩時間には海に行ったりもして。
メリハリもついて良いと思うんです。

学年と言うか年齢を問わず誘いをかけてみました。
どうでしょう。
「ヒッキーから最初にＬＩＮＥ来たときさ、ほんと訳わかんなかったよ」
「……そりゃそうだわな」
ワゴンに揺られながら、俺の誘い文句を振り返った由比ヶ浜が呆れたように笑った。シートベルトと由比ヶ浜の身体のコンボで凶悪な光景が展開されているため、迂闊に視線を向けられないでいる。
――前述のお誘いメッセージを、俺は奉仕部関係者及び葉山グループに送った。去年の千葉村を思い出すような面子の方がイメージしやすかったからだ。
結果としてほとんどのメンバーが誘いに乗ってくれた。葉山グループは葉山と三浦と由比ヶ浜以外のメンバーの都合がつかず、奉仕部関係者は軒並み参戦する流れとなった。
「８人ならばワゴンを借りるか」
皆で一緒に移動した方が楽しいだろうという平塚先生の提案で、レンタカーで８人乗りのワゴンを借りた。
運転を平塚先生が担当して、平塚先生の小話に付き合うために助手席に雪ノ下が座っている。
ちなみに初めは俺が助手席に乗ろうとしたのだが、平塚先生に「たまには別の生徒とじっくり話したい」と言われたため断念した。切ない。
そして二列目に小町・俺・由比ヶ浜が座り、三列目に一色・葉山・三浦が座っている。後ろの雰囲気がまめに剣呑になって気が気でないです。
何だか妙なことになったなとは思っているが、この面倒な状況を一から作ったのは俺なので何とも言えない。
しかしまあ、人格のバランスがほどよくとれたメンバー（だと思われる）なので、道中は中々和やかな雰囲気が保たれている。
「わー、すっごい良い景色ですよ結衣さん！」
小町が窓から見える山並みを指差し、楽しそうにこちらを振り返

る。待て、俺が間にいるんだぞ。そんな風に由比ヶ浜に呼びかけたら――

「ほんと？　わ、すご……ってちょっとヒッキー！　どこ見てんの!?」
「俺は悪くないだろ」
　案の定。
　窓の景色をもっとちゃんと見ようとして由比ヶ浜がシートベルトを緩めて身を乗り出し、俺は目の前に現れた二つのバレーボールに魅入られてしまった。由比ヶ浜が顔を真っ赤にして非難してきたが、これは不可抗力だろう。
　しかしこの状況を不可抗力と見なして流してくれる優しい人は、この車内に存在しないらしい。
「わーお兄ちゃんがスケベだー」
「おい小町、にやにやしながら煽るのはやめろ」
「先輩って結構そういうとこありますよねー」
「あれ、後門に狼がいるぞ？」
「わたしの太ももとかちらちら見てますもんねー」
「いやそれは不可抗力で……っておい、雪ノ下、やめろ、顔を左半分だけ出して怖い顔で睨むのをやめろ、完全にホラーだぞ」
「ねえヒッキー」
「なんだ、どうした」
「こうもんの狼って……」
「ちょっと顔を赤くすんのやめてお願いだから。漢字違うからな第一」
　車内のど真ん中に座っているためかリズム良く集中砲火をくらっていると――斜め後ろに座っている三浦が、金髪の毛先をくりくりと巻きながら何とも言えない視線を向けてきた。
「ふうん……ヒキオ、あんたそんな感じなんだ」
「いやちょっと待て、三浦、え、なにその反応？」
　小町や一色のノリに続くような三浦の反応が意外だったのか、由比ヶ浜や小町、一色が目をぱちくりとさせる。前を見ると雪ノ下も目をぱちくりさせていた。顔を左半分だけ出して可愛い表情をすると

すごくシュールです。
「優美子……なんか変わったね」
「……なに、結衣。からかってんの？」
「ううん、褒めてるの。なんか嬉しいなって」
「……ふうん」
　穏やかな笑みを浮かべる由比ヶ浜の言葉に、三浦がふいと顔を逸らす。窓に顔を向ける直前にちらりと目が合ったが、その瞬間の表情は思いの外柔らかかった。
「ところで葉山」
「なんだ？　比企谷」
「お前全然喋ってないぞ、大丈夫か」
「……今の流れには乗れないだろ」
「そうですよー、葉山先輩は先輩がめこめこにされるのを高みから見物してるくらいが丁度良いんです」
「その言い方だと葉山が極悪人にしか思えないんだが」
　俺と一色のやりとりに葉山が困ったように笑い、窓を向いていた三浦が小さく震えていた。割とツボだったらしい。
　そう言えば平塚先生が何も喋ってないなと思い、ふと前を向く。
「うむうむ、青春だな……うん、良いな、青春、うん……。……聞いてくれ雪ノ下、私も十年前はな……」
「……」
　先生が泥酔しているかのようなノリで愚痴をこぼし、雪ノ下が本気で対応に困っていた。ばっさり斬り捨てるのは可哀想と踏んだようだ。結構優しいところもあるんだな――と頬を緩めていると、俺の視線を感じたのか雪ノ下がくるりと振り向いた。
「比企谷くん、どうしたの？　そんなに顔をだらしなく緩めていると とても気持ち悪いわよ？」
「出会った頃並の罵詈雑言をどうもありがとう」
　ギブ。と心の中で悲鳴を上げたあの頃を思い出した。
×　×　×
　2時間ほどの車の旅を終えて、ようやく目的地に着いた。

平塚先生のつてで予約をとってもらった民宿で、瓦屋根と玄関横の松の木が印象的だ。夏の民宿とは何故こうも素朴で魅力的に見えるのか。海の家で食べる焼きそばと同じくらい魅力的だ。比較の仕方が下手すぎないか俺。

「わー！　良い感じの宿だね、お兄ちゃん」

「そうだな、思わず帰りたくなるほどだ」

道中で既にくたくたになっていたために、ついこんなことをぽろりと呟いてしまう。しまった……と今しがたの発言を後悔していると、小町がごみを見るような目を向けてきた。まずい、結構本気の目だ。

「……それ、絶対宿の人の前で言わないでよ？」

正論も正論だった。

「……すまん。しかし俺にだってそれくらいの常識はあるぞ」

流石に弁えてるぞそれくらい……と言いながら、小町の頭をくしくしと撫でて一方的に和んでいると、一色がやけに悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「でもわたしの太ももちらちら見てますよねー？　最近は夏だから特にですけど。今日も既に何回か……」

「いやもうほんとごめんなさい許してください」

車内同様めこめこにされていると、民宿のオーナーらしき男性とその子どもが玄関から出てきた。

平塚先生が先頭に立って無難な挨拶をしていると、子どもが持っている玩具がふと気にかかった。なんだかどこかで見たことがあるような気がするが思い出せない。見たところやけに年季を感じる。お腹の中にビー玉を仕込んでいる不思議なフォルムだ。何だっけな、俺の世代ではない気がする。

「平塚先生、あの子が持ってるのって何か分かりますか」

オーナーとの雑談を終えた平塚先生にこっそり耳打ちして尋ねると、先生の視線が子どもの手元に向けられた――その瞬間。

「……な……っ」

先生が目を見開いた。

「ビ、ビーダマンだと……っ!?　き、貴様、何故今になって……っ!?」
厨二全開で先生が悶えていると、子どもが楽し気に発射したビー玉が砂利の上をころころと転がっていった。
「うぐぁぁ……懐かしい……懐かしい……ちょっとやらせてくれないだろうか……っ！」
両腕で自分を抱きながら、平塚先生がちょっとギリギリな言葉を呟いている。
そんな先生を置いて、他の面々は淡々と荷物を運んでいた。
極めて正しい対応だなと思った。

続く。

（8）

部屋は俺と葉山の2人、そして残りの女性陣という分かれ方をした。女性陣は6人ということでかなり広々とした部屋のようだが、俺と葉山の部屋は2人用のこじんまりとした広さだった。ふとした時に葉山との距離が妙に近くてなんだか落ち着かない。

……海老名さんが見ていなくてよかった。……ほんとにいないよな？　見てないよな？

野郎2人で部屋に荷物を置くだけなので、特に楽しいイベントもない。黙々と荷物を置いて部屋の中をざっと確認し、さっさと出ようとしたが、

「比企谷。外が綺麗だぞ」

葉山の爽やか且つ強制的に外を見ざるを得ない圧を発する声に足を止めた。

「ん……おお」

ほんの数mの距離を歩いて窓を覗き込むと――防砂と防風を兼ねているであろう松林と、その先に蒼く光り輝く海と真っ白な砂浜が見えた。波打ち際が泡立ち、そこで母娘連れが楽しげに遊んでいる。海の家ででも買い物してきたのか、父親が食べ物を持ってくると母娘の顔に幸せいっぱいの笑みが咲いた。

「確かに、息抜きには丁度良いな」

葉山が楽しげに笑い、眩すぎてこっちの目が潰れそうなくらいの笑みを浮かべてくる。思わず目を細めてしまった。こいつの光度、スマホの明るさみたいに調整出来ないものか……。調整出来るなら迷わず真っ暗にするんだけど。それはそれで恐いな。

何とはなしに窓を開けると、むわっとした熱気と同時に心地良い風が流れ込んできた。

そこからしばし、何を言うでもなく海を見つめる。

「……」

――葉山と二人きりになると、三浦のことについて触れたくなる。

しかし今、俺が聞いたところで葉山ははぐらかすだけだろう。それ

かもしかしたら、俺が聞きたくないことを言うかもしれない。
だから、何も聞かなかった。聞けなかった。
葉山も俺の心中を大なり小なり察しているのかもしれない。何も言うことなく、夏の海を至近距離で眺め続けていた。
……海老名さんがいなくて本当に良かった。こんな状況を見たらあの人は死んでしまうかもしれない。
そういや海老名さんは去年の千葉村の時、水着がスク水だったよな……と無限大にどうでもいいことを思い出していると、部屋のドアが軽くノックされた。
「せんぱーい、葉山せんぱーい。もうこっちは準備出来ましたよー？」
「ああ、ごめん、いろは。俺たちもすぐ行く」
「はーい。先輩も早くしてくださいねー」
「あいよ」
先輩、葉山先輩と呼ばれると、俺と葉山が呼ばれてるのか葉山の呼称を1回目と2回目で変えてるのか分からんな……と思いながら部屋を出る準備をする。こんなどうでも良い質問をすれば、一色にとてつもなく冷めた目をされるのは目に見えているのでとても聞けなかった。

× × ×

平塚先生の指示で、俺たちは広間へとやってきた。今日明日と使う予定も無いからと民宿の主人が使用を許可してくれたらしい。
だだっ広い空間に畳という畳が緻密に敷き詰められている。
「わー、広いですねー！」
小町が楽しそうに声を上げ（可愛い）、行儀が悪くならない程度に広間の中を小走りで駆け抜けていく（可愛い）。広間はまだエアコンを点けたばかりのようでムッした熱気に包まれていて、それが却ってテンションを上げてくれる。
「わ、すごーい！」
何枚も取り付けられた窓へと向かったかと思うと、自慢の妹はテンション8割増しといった声を上げた。大体の女子がテンションを上げた声というのは俺にとってかしましいというよりは至極騒がしく

不快なものでしかないのだが、小町の声はもはや可愛いとしか思えない。
「え、なになにー？　……わ、ほんとだー！」
「すごーい！」
はしゃいでいる小町に続いて一色が窓の方へ駆けていき、続いて由比ヶ浜まで駆けていく。窓から見える景色によっぽど感動したのか、三人娘がきゃっきゃと騒いでいてとっても楽しそうで何よりです。
「……おお」
俺を含む残り5人も空気を読んで窓の景色を見ると――部屋から見た時に比べて、明らかに視界いっぱいに広がった海と砂浜と松林に一瞬で魅入られた。部屋で見た時は一枚の絵画を観ているような感覚だったが、今はその絵画の中に飛び込んだような感覚だ。薄い窓一枚越しに、海の息遣いや遊んでいる人達の幸せな感情を感じて、何だか心躍ってしまう。
「……」
ふと隣を見やると、三浦も同じように窓の外の景色を見ていた。しかしその視線は色鮮やかな海と、すぐ隣にいる葉山の間を何度も往復している。葉山は三浦の視線を知ってか知らずか、海を見て「すごいな……」とどこか空々しい感嘆の声を上げていた。
「さて諸君、こうして我々は宿に着いてひとまず落ち着いた訳だが……まずすべきことがあるな？」
平塚先生がこほんと咳払いをして、意味深な笑みを浮かべる。ちらりと目の前の海を見やることで、小町と一色と由比ヶ浜の三人娘の目が輝いた。
「まずすべきこととは何か……分かるな？」
平塚先生がにやりと笑い、三人娘に視線を投げかける。三人がちらりと海を見て、嬉しそうに言葉を発しようとした瞬間――
「勉強ね」
まずは雪ノ下が。
「ああ、勉強だな」
続いて俺が。

「そうだな、まずは目的をきちんと果たさないと」
更に葉山が。
とんとんとん、とリズム良く畳み掛けた。
「うへぇ……」
「マジですか……」
「あはは、そりゃそうだよね……」
小町がげんなりし、一色がどんよりと瞳を曇らせ、由比ヶ浜がぽりぽりと気まずそうに頬を掻いた。
「……ん？」
そういえば三浦が何も喋ってないな……と思って隣を見てみると。
「……」
パーマのかかった毛先をくりくりと弄りながら、
「……」
ちょっとだけ名残押しそうに、
「……」
海をちらちらと見ていた。
なにこの可愛い子。
「……あ。……」
目が合うとぷいっと顔を逸らされた。
……なにこの可愛い子。

×　×　×

各々の部屋から勉強道具を持って来る頃には、程よくエアコンが効いていた。大きな台を囲うように座り、それぞれ磨きたい教科の教科書や問題集を広げた。
「私は総監督の立場をとる。各々好きにやりたまえ。質問があれば随時受け付けるぞ」
平塚先生はお誕生日席でそんな風にのたまうと、徐にノートＰＣを広げた。そしてあっと言う間に真剣な顔つきになり、ひたすらキーボードに文字を打ち込んでいく。ここに来ても仕事ですと……先生って怖い……。

「さあ、由比ヶ浜さん、一色さん、小町さん。まずは目標を決めましょうか」
「え、ゆ、ゆきのん？　そんなに本格的にやるの？」
「……由比ヶ浜さん。一色さんや小町さんはともかく、私たちは今年度に受験するのよ？」
「そ、そうだよね！　う、うん、頑張る！」
「はあ、葉山先輩に教えてもらいたかったなぁ……」
「……一色さん、なにか？」
「ぴゃいっ!?　ななな何でもありません！」
「雪乃さん……ちょっとここを教えて頂いてもよいでしょうか……」
「ええ、いくらでもどうぞ。そうね、ここは……」
　向かいでは雪ノ下、由比ヶ浜、一色、小町の４人がかしましく勉強している。ブーブー言っている一色も含めみんな雪ノ下を信頼しているためか、雪ノ下が最初から先生モードになっている。平塚先生はこの状況になることを予想していたのか、特に動じる様子は無い。
　一方こちら側は――
「ねえ、ヒキオ。ここなんだけど……」
「葉山、ここってどう解くんだったっけ？」
「比企谷。ここなんだけど……」
　俺を真ん中にして、右隣に三浦、左隣に葉山という配置になっていた。
　初めは三浦と葉山を隣り合わせにした方が良いかと思ったが、でもそれだと気まずいか……いやでも……などと逡巡している内に、二人して極めてナチュラルに俺の隣を陣取った。
　それは良い。別にそれ自体は良い。今までの勉強会で似たような状況は度々あったので。
　しかし――
「……ねえ隼人、ここなんだけど……」
「……っ！　……っ！」
　三浦さん、ちょくちょくと葉山にも質問をするんですが。その時に俺がいることを忘れているかのように身を乗り出してくるんですが。

緩めのブラウスが危なげに揺れて、見てはいけないものが見えてしまいそうになるし何だかとっても甘い匂いまでする。
動揺していることがバレないように……と、精一杯平静を装いつつも首を後ろに引っ込めていると。
「じー……」
何だか視線を感じた。
ていうか「じー」って効果音を口に出している妹がいた。
小町さん、めっちゃ目を細めてこっち見てます。生温かい目をやめてほしい。
「じー……」
一色さんもでした。それなりにマジで引くのはやめていただけますか……？
「むむむ……」
由比ヶ浜さんも片頬を膨らましてこっちを見てらっしゃる。可愛いけどもとっても居心地が悪い。
「……」
雪ノ下は興味の無いフリをしつつもちらちらとこっちを見ている。そんな雪ノ下を小町がにこにこと笑いながら見ている。何だこの図は。ティッシュ配りのバイトを監視するバイトを監視するバイトってこんな感じなんだろうか。何を言ってるんだ俺は。
「……ふむ」
平塚先生が俺を見ながらにこやかに微笑んでいる。この状態でそんな優しい笑みを浮かべられても恥ずかしいだけなんですが……。
５つの視線に身をよじっていると――右の手の甲を、コンコン、とシャーペンの持ち手でノックされた。
「ヒキオ、なにボーッとしてんの？　ここ教えてほしいんだけど」
「あ、ああ、すまん。ええっとだな……」
何とか動揺を抑えようとするが、一度意識してしまった甘やかな匂いは、鼻腔に強い記憶を残していて中々消えてくれない。
依然として５つの視線を感じる中、何故か途中から左隣からの視線も感じながら、三浦に聞かれた部分を教える。

早く休憩時間にならないのだろうか……と思いながら、俺はふと思う。

――戸塚に会いたいな――。

海を見て
去年の君を
思い出す
なんでパーカー
羽織っていたの？

「……はぁ……」
「比企谷くん、どうしたの？　顔が気持ち悪いわよ？」
「……」
千葉村での戸塚を思い出して心の一句を読んだだけで、とんだ罵詈雑言が飛んできた。

続く。

（9）

勉強会はその後もゆるゆると続いた。

いつの間にかこちら側に来ていた一色が葉山の隣を陣取ったことで、三浦が俺を押しのけて葉山を2人で取りあったり。

除け者にされて一人静かに勉強している俺を由比ヶ浜が心配そうにちらちらと見て、由比ヶ浜の仕草に気付いた小町が目をキュピーンと光らせて俺を自分たちが座っている側へ招いたり。

俺が座ろうとすると小町が由比ヶ浜の隣を空け、自動的に隣り合わせになり、更に雪ノ下が俺の隣になるように無理やり雪ノ下を連れてきたり。

気が付けば向こうでは三浦と一色に葉山が囲まれ、こちらでは由比ヶ浜と雪ノ下に両隣を、そして後ろを小町に囲まれた俺がいるという状況になったり。

これ、小町勉強する気ないよね？　と思ったり。

わちゃわちゃした中でも何とか勉強しようとしていると、誕生日席にいた平塚先生が俺たちを見て静かに「許容量オーバーだ……」と呟いて笑顔のまま血を吐いていたり。

こうして、一部では負傷者の出る騒ぎもあったりしたが、全体的にはまあまあ有意義な時間を過ごすことが出来た。

葉山の隣にいる割には、やけに三浦と目が合うのは少し気になったが。

×　×　×

民宿の食堂で昼食をとると、午後はみんなで海へ行くことになった。

「じゃあ、俺は部屋で休んでるから。気の済むまで遊んでくれ」

「は？　お兄ちゃん何言ってんの？」

「え？　ヒッキー、来ないの……？」

「はい？　先輩、何言ってるんですか？」

「私は比企谷くんに来てほしい理由は無いけれど、由比ヶ浜さんのことを考慮するならあなたも来るべきだと思うのだけど」

「ちょ、ちょっとゆきのん!?」
冗談半分（もう半分は本気）で言ってみると、案の定というか予想よりも遥かに強い勢いでぼこぼこにされた。葉山は困ったように笑っていて、平塚先生はニヤニヤしている。三浦は興味無さげにそっぽを向いて……あ、目が合った。
「分かった分かった。行く、行くから」
「先輩、その言い方だとなんか上から目線な気がしてすごく腹が立ちます」
「俺にどうしろと」
げんなりしながら、一旦部屋に戻った。
× × ×
『先にパラソルを差すなど諸々の用意をしておくように』
「ええ……」
俺と葉山が玄関に行くと、海で使うのであろう諸々の道具と、明らかに平塚先生が書いたであろうメモが置いてあった。ていうかなに、なんでこんな重そうなバッグがあるの……？　中から明らかに水鉄砲が覗いてるし……しかも結構ガチのやつ……。
「まあ、これは男の役目だろうな。歩いて数分だし、これくらいはやろう」
「……しゃあねえな」
一人ならばどうサボってやろうか真剣に考えるところだが、生憎今この場には出来た人間の極みである葉山がいる。ため息を吐き、頭をがしがしと掻き、もう一度深くため息を吐いた。
「比企谷。行かないのか？」
「いや、行く。すまんすまん」
一人で面倒事に取り掛かる前によくやっている、「これやんの面倒だなー、でもやんないとだよなー、でもなーめんどいなー」とひたすら躊躇うルーティンをこなしていると、先に重いバッグを担いだ葉山に声をかけられた。完全に無意識でやってしまっていた。人に見られると地味に恥ずかしい。葉山はこういう場で人をイジるようなタイプではないのがせめてもの救いか。

「……妙に手馴れてる気がしたが、あれはいつもやってるのか？」
「そこは触れてくれるな……」
イジってきた。
マジか。
葉山との関係もちょっとずつ変わってきたんだなぁ……海老名さんに見られなくて本当に良かった……としみじみ思いながら、飲み物が入っているクーラーボックスとパラソルを担いだ。
めっちゃ重い。
肩にすげえ食い込む。
×　×　×
「きつつ……」
松林の間を抜けて砂浜に辿り着くと、葉山が広げたシートにクーラーボックスとパラソルを下ろした。肩が痛い。拷問にかけられたかのようだ。
肩が痛い。
改まって言ってしまうくらいには肩が痛い。大事なことなので三回言いました。
「比企谷、大丈夫か？」
サッカー部で鍛えている葉山はごく平然としている。俺よりも重いバッグを持っていたのに……。基礎体力の差というものをまざまざと見せつけられた気がした。
「この後遊ぶ気になんて到底なれないんだが……」
よろめく身体をこき使い、パラソルを設置する。周りを見渡すと何組か観光客らしき人が海で戯れているが、場所の問題なのか家族で来ている人がほとんで、若い人はほとんどいない。
俺と葉山は、松林の通路から出てきてすぐの、営業する意味があるのかを疑うような海の家の奥に陣取っていた。この位置だと女性陣が来た時、海の家の陰から出てくるのを見ることになる。
「比企谷、なんでニヤけてるんだ？」
「戸塚のことを思い出してただけだ」
葉山の指摘に声を上ずらせながら咄嗟にウソをつくと、

「それでなんでニヤけるんだ……？」
中々本気で訝し気な目を向けられた。
それもそうだな、と思った。
しかし戸塚は天使なので、戸塚との思い出を記憶から引っ張り出すだけで幸せな気持ちになるのは否定出来ない。
「あ、お兄ちゃーん！」
聞き馴染んだ声がして振り向くと、小町が海の家の陰からぴょこっと飛び出していた。
ふちがフリルで彩られたオレンジのビキニを着ていて、元気いっぱいな小町のイメージとよく会っている。去年は確かイエローだったかな……と思い出していると、後頭部と腰に手を当てバチコーンとウインクをしてきた。
「はい、どう？」
「ん、ああ。そうだな。去年に引き続き世界一可愛いよ」
「わぁー、やっぱり適当だなぁー」
見せ甲斐が無いったらありゃしない……とあからさまにがっかりされた。家でタンクトップとショートパンツ姿でいる時と露出度がほとんど変わらないのでね、ごめんね。
あれ、そういえば葉山は……？　と振り向くと、どうやら風で飛んできたらしい麦わら帽子を拾って若い女性グループの下へ返しに行っていた。向こうではきゃーきゃーと歓声が上がっている。いかん、三浦や一色に見せられない光景だ……！
「あ」
げんなりしていた小町が横に視線をやったかと思うと、俺を見てムフフと怪しげに笑った。
「じゃあ、こちらの皆さんは!?」
いやな予感がする……と思った次の瞬間、小町が海の家の陰に引っ込んだ。そして何やらかしましい悲鳴が聞こえたかと思うと、「まあまあまあ、どうぞどうぞ！」と小町が楽しげに声を上げ、１人目がひょっこりと顔を出した。
「せ、先輩、どうでしょう？」

最初に目に飛び込んだのは、フリルとスカートが付いた白ビキニを着ている一色の姿だった。瑞々しい肌艶に可愛らしい水着が映え、いつもは見ることが無いもじもじと恥じらう姿が庇護欲をそそる。
「え、あ、まあ……すげえ良い、と、思うぞ……」
「そ、そうですか……」
一色が目を泳がせ、俺をちらりと見ると……柔らかくはにかんだ。
おっと、心拍数がおかしなことになってるぞ？
一色がちょこちょことこちらに近付いて来ると、２人目が顔を出した。
「うぅ……まだ心の準備が……」
続いて現れたのは、目にも鮮やかな赤ビキニを着た由比ヶ浜だった。去年は確かブルーの水着だったが、去年の可愛らしさとは対照的にこの水着は色も攻めていれば布面積でも攻めている。
ただでさえ暴力的な魅力を備えている豊満な肢体を頼りない広さの布が覆っていて、思わず喉を鳴らしてしまう。過激とも言える水着を着ていながら、一色よりも恥ずかしそうに、顔を真っ赤にして腕で上下の水着を隠すのが却って蠱惑的に映る。
「ああっと、なんだ、ほんと似合ってる……と、思う、ぞ……」
「ほ、ほんと？　えへへ、良かった……」
照れくさそうに頬をぽりぽりと掻くと、下半身のガードが解き放たれた。むっちりとした太ももと、ぴっちりと食い込んだ布に視線が縫い付けられてしまい、俺の視線に気付いた由比ヶ浜が耳まで真っ赤に茹だる。
「わわっ!?　ど、どこ見てんの！　バカ！」
「す、すまん」
高速で顔を逸らした。
ええっと、あと何人いたんだっけ……と一向に落ち着きを見せない心臓を押さえつけながら、「ささっ、どうぞどうぞ！」と小町が次の女性を連れてくる声を聞いていた。
ていうか、何で順番に顔を出す流れになっているんだろうか。
何のファッションショーなの？

続く。

（１０）

唐突に始まったファッションショーはまだ続く。

「さて、次は……お兄ちゃん、果たして耐えられるかな～？」

小町がにやりと笑い、片方の口の端をにやりと上げてニシシと笑う。

なんのこっちゃ。

「……ん？」

小町が引っ張ってきて最初に覗いた腕は、驚くほど白くて細かった。

「はあ……あなたたちは全く、何をやっているの」

「いや、これは小町が勝手に……っ」

見えていた腕と呆れるような声に、次に現れるのが誰なのかが既に分かっていたにも関わらず――呼吸の仕方を数瞬だけ忘れてしまった。

一色と同じく白のビキニを着ていて、意外と言うのも変かもしれないがフリルなどが何も付いていない。去年のようにパレオを着ていることもなく、今が夏真っ盛りであることを忘れるほどの肌理細かくて白い肌に目を奪われる。

形の良いふくらはぎから腰まで続くため息の出るような脚線美、美しさと女性らしい艶を兼ね備えたくびれ、控えめながらも形の美しい胸元。

「……」

以上の感想を、呼吸の仕方を忘れて凝視している間に心の中に浮かべていました。

「……あ」

今の自分の変態にしか見えない行動にハッと気付く。視線が雪ノ下の首から下を何度も往復していた。いかん、これは人生初の砂浜でのジャンピング土下座か――別に砂浜以外でならジャンピング土下座をしたことがある訳ではない――と思っていると、雪ノ下がもじもじと身じろぎをした。腕で胸元と下半身を隠し、脚を頼りなげにこす

り合わせている。
「ひ、比企谷くん……？　その……そんなに見られると……こちらとしても反応に困るのだけれど……」
「……っ」
ぐらりと視界が揺らいだ。
去年同じことをしていたら、きっと「私が美しいのは分かるけど、あまり下衆な視線を向けないでくれるかしら。半日くらい海に向かって土下座してみる？」くらいのことを言われていただろう。
それが、もじもじとしながら顔を逸らし、婀娜っぽい流し目を送られてしまっては――鼻血を出して膝から崩れ落ちてしまうじゃないか。
「ぐふっ」
……俺の妹が。
「え、こ、小町さん……!?」
「きゃー！　小町ちゃん、大丈夫!?」
小町の周りに雪ノ下、由比ヶ浜、一色が一斉に集まる。俺も呆れながらそばに寄った。
「ぐ、ぐふぅ……っ、両手でも余る花が咲き誇ってますよ～い……っ」
誰に呼びかけているのか分からない台詞を吐いて、由比ヶ浜の腕の中で小町がかくっと意識を失う。ちゃっかり由比ヶ浜の母性さえ感じる豊満な胸に顔をうずめていた。首を傾ける向きを一回変えて、わざと柔らかな丘に埋もれたのを俺はちゃんと見ていたぞ妹よ。
司会（？）の小町がいなくなってはファッションショーはもう無理だろう。いずれにせよ、雪ノ下の時点でかなり心臓にきていたので助かった……と思いながら、妹と妹を囲む女性陣を眺めていると。
「比企谷妹は大丈夫そうかね？」
ふと後ろから声がかけられた。俺にしか聞こえていなかったようで、俺だけくるりと振り返る。
「んぐっ」
頭をがつんと殴られたような衝撃を受けた。
声の主は平塚先生。

ただし服装は当然ながら学校で見ているスーツに白衣姿ではなく、先程まで着ていたTシャツにジーンズ姿というラフな姿でもない。
先生の豊満な身体を包んでいるのは、ワインレッドのビキニだった。白い肌と対照的な水着は野性味を感じる肢体に怖いくらい似合っていて、きつめの生地からこぼれる肉が生々しい。
雪ノ下が夏を忘れさせる涼やかな妖精なら、先生は真冬の山にさえ夏の陽気を持ち込める破壊的な魅力を持った女神だ。
「ふむ、少しきつかったな……」
俺の視線が自分に縫い付けられていることに気分を良くしたのか、先生が身体を横に向ける。よく見たら腰の脇の部分に金色のリングがあり、前と後ろの生地を繋げていた。色っぽさが格段に跳ね上がっている。
「ん……っ」
艶っぽい声と共に、臀部を包むぴっちりとした水着と尻肉の間に指を挟み込み、くいっと引っ張って縁の位置を変えた。柔肉が生地から解放されて元の膨らみを取り戻し、布が再び蠱惑的に食い込む様を見て、思わず。
「……」
前かがみになった。
「……あ……っ」
俺の仕草の意味を察した先生が、悪戯っぽい笑みから頬を赤らめたあどけない表情に変わる。
「そ、その……すまない。まさか君がそんなに反応してくれるとは……」
「いいです、言わなくていいです……すいません……」
視線を泳がせながら謝ると、先生は「ほ、本当にすまない……」と言いながら俺の横を通り過ぎる。すれ違いざまに身体の下の方に視線を感じたのは気のせいでしょうかどうなんでしょう。
平塚先生も加わって合計４人になった女性陣に見守られていた小町が、ハッと目を覚ました。視線を高速で巡らせて、悟りを開いたような笑みを浮かべている。なんかちょっと腹立つ。

「みんなちがって、みんないい……」
消え入りそうな声で呟いて、また意識を失った。今度は躊躇なく由比ヶ浜の胸に顔をダイブさせていた。小町のセリフが、何について言及したものなのかは分からない、ことにしておく。雪ノ下だけが胸を両腕で覆って顔を赤くしていた。
先生が「ほれ、比企谷妹。そろそろ起きなさい」と優しい声をかけながら小町の頭を撫でると、小町は「ふぇ……？」と妙に幼い声を漏らして起きた。
まさかこいつ、この短時間の間に眠りに就いてたのか……？　由比ヶ浜の胸は一体どれだけ心地良いんだ……？
小町を含めた5人がパラソルの下へ向かい始める。
「ん……？」
まだ来ていないメンバーがいる、と思いきょろきょろとしていると、由比ヶ浜が俺の仕草に気付いた。
「優美子ならちょっと遅れるって言ってたよ」
「ん、そうか」
いつも通りの口調で答えたはずだったが、由比ヶ浜はくすりと笑って「……もう」と呟いた。
パラソルの方に目を向けると、初対面の女性グループからようやく解放されたらしい葉山が戻ってきていた。女性陣に当たり障りのないほどほどの褒め言葉を並べていて、雪ノ下の時だけはお互い妙な空気感になっていた。
雪ノ下が初めから「私に感想を言うターンはパスするわ」とか言ってあげればいいのにとも思ったが、それはそれで気まずいだろう。
パラソルの下でまず何をして遊ぶかを打ち合わせし始めている面々をよそに、どうにも落ち着かなくて視線をきょろきょろと動かす。
打ち合わせはしばらく時間がかかりそうだと判断して、俺は一行から離れて、民宿への道を逆戻りすることにした。
海の家の前を過ぎ、パラソルの下にいる一行が見えない位置に来たところで――

「……とと……っ？」
「あ……っ」
誰かとぶつかりそうになり、慌てて歩を止めた。
「あ、すいませ……ん……っ」
あぶねー、結構な勢いで走ってたから危うく怪我をさせるところだった……と心臓をばくばくさせながら顔を上げると――
「……ヒキオ、何してんの？」
「あー、いや、なんだ、その……」
聞き慣れた声と見慣れない姿に、心臓が違う意味でどくんと大きく脈打った。
三浦は日焼け防止のためか麦わら帽子をかぶっていて、白いビキニを着ていた。シンプルなデザインは引き締まった三浦の肢体の美しさを引き立たせている。
去年よりも水着の派手さは欠けるが、その分彼女本来の魅力を存分に見せられているような気がする。くびれの鮮やかさと、ビキニを押しのけんばかりの胸の膨らみに目を奪われた。
「ちょっと遅いから、その、な、どうしたんだろうかって、な、うん……」
別にやましいことをしていた訳ではないのに、目の前の瑞々しい魅力に動揺してしまって上手く言葉が喉から出てこない。
よく見れば白い肌はしっとりと汗ばんでいて、金色の髪が胸の谷間に流れている。健康的ながらも悩ましい色気に、心臓が馬鹿みたいに暴れている。
「……そ。……あと、さっきから見すぎだから」
三浦がさらりと言った言葉に、大量の冷や水を頭からかけられたような気持ちになった。
「え、あ、……すまん、本当に……」
これはドン引きされるやつだ……と本気で謝り、ちらりと表情を窺う。
てっきり、さぞ怒りを滲ませた顔になっているのだろうと思いきや――
「……まあ、別にいいけど」

ぽそりと、喜色と羞恥が混じったような複雑な声を漏らして、麦わら帽子を目深にかぶってしまった。
……何この可愛い子。
「……すまん」
念の為もう一度謝ると、三浦は帽子を更に深くかぶって「だ、だからもういいって……」と余裕のない声を絞りだした。
……。
ふと、砂浜にいる俺たち以外の観光客はどれくらいいたか、記憶を辿ってみた。
葉山が帽子を届けに行っていた女性のグループと……。
「……うん、あとは親子連れくらいしかいないな」
「……何言ってんの？」
「なんでもない、独り言だ」
「ヒキオって独り言多いタイプ？」
「うぐっ」
ぐさりとくる言葉に胸を痛めて顔をしかめながら三浦を見ると、まるで悪戯が成功した子どものように無邪気な笑みを浮かべていた。教室での女王様ぶりはどこへやら、柔らかく微笑む表情はどこまでも可愛らしい。
なんとなく、なんとなくではあるけれど。
男がいるグループがいつ砂浜に来るのかも分からないので。
三浦にタオルを羽織らせて、周囲の目に触れないようにしたくなった。
続く。

（11）

「あ、優美子――！」

三浦と並んでパラソルへ向かうと、由比ヶ浜が嬉しそうに手を振った。三浦は麦わら帽子のつばを上げ、にこやかに微笑んで答える。今まで積み上げてきた時間が見えるようなやりとりだ。

「あ、隼人……」

各々が遊び道具を吟味している中、同じように準備をしている葉山の下へ三浦が近付いた。一歩を踏み出したくて、それでも踏み出せないでいるような、そんな距離感。

三浦が見せた、頬を赤らめた横顔は――心がずくんと疼いた。

「優美子。うん、似合ってる」

「そ、そっか、ありがと……」

葉山の対応は完璧だった。

眩しい笑顔を向けて、きちんと褒める。

そして――それ以上、三浦の心が自分に寄り添うことがないようにしていた。

葉山と三浦の間にある数十センチの距離が、途方もなく遠く思える。三浦の表情は僅かな嬉しさと、それ以上の切なさで埋め尽くされているような気がした。

三浦はぎこちない笑みを浮かべたまま後ろへ下がり、由比ヶ浜のそばへ寄る。由比ヶ浜は少しだけ哀しそうな表情を浮かべ、すぐにいつもの向日葵のような笑みを咲かせた。それを見た三浦の表情が仄かに明るくなる。こういった関係って良いな……と思わせてくれた。

「よーし、諸君。それぞれ遊ぶ道具は持ったな？」

「え」

気がつくと、平塚先生がウキウキした表情で水鉄砲を持っていた。

え、なに、最近の水鉄砲ってこんなに進化してんの？

死傷者が出るのではと疑念を抱いてしまうほどごついフォルムを湛えた水鉄砲を男らしく肩に下ろした先生が、えらくダンディーなスマイルを浮かべる。

「さあ、行くぞ！」
『おー！』
「え」
いつの間にか各々道具――という名の水鉄砲――を持った女性陣が、まるで戦の前に上げる鬨の声のようなものを上げる。何だか勇ましくて妙にどきどきしてしまう。
「……」
ちらりと横を見ると、雪ノ下と三浦が明らかに恥ずかしがっていて、水鉄砲を小さく持ち上げて俯いていた。雪ノ下は消え入りそうな声で「お、おー……」と辛うじて言っていて、三浦はこれまた消え入りそうな声で「む、むり、恥ずかしいし……」と呟いていた。
２人を見てほわっと頬を緩めていたが、ふと重要な事実に気付く。
「……俺の武器なくないか……？」
武器が詰まっていた巨大なバッグを見るとそれらしいものが全くなく、女性陣が持っている水鉄砲で全部のようだった。
「葉山、お前はどうするんだ」
「俺は……ほら、荷物番で」
「このヤロウ……」
流石に混じりづらいと判断したのか、苦笑いで葉山が言う。
しかし、このままいけば俺以外全員女性のハーレム状態で俺がハチの巣にされてしまう。それなら俺も荷物番で難を逃れよう……と思っていると。
「ああ、比企谷はそれを使いたまえ」
平塚先生がにこやかにバッグの奥を指差す。
霧吹きの空容器だった。
「……なんすか、これで肌の保湿でもしろってことですか」
「そうだな、女性は肌が大事だからぜひケアしてやってくれ」
ええ……。
俺の冗談に快く乗っかり、尚且つ反論させない空気感を出される。俺、平塚先生が上司だったら簡単に小間使いにされそうなんだけど……。

平塚先生が「気を取り直して、今度こそ行くぞ！」と言い、女性陣が再び鬨の声を上げる。雪ノ下と三浦は先程同様の反応だった。さっきよりちょっとだけ水鉄砲を高く掲げている。
「……俺が一方的にイジめられる未来しか見えないんだが……」
「大変だな、比企谷」
「お前……」
一人だけさらりと難を逃れた葉山を恨めしげに睨みながら、俺は戦地（数十メートル先）に旅立った。

〈ステータス〉
名前：比企谷八幡
クラス：ヒキニート（引きこもりでもないしれっきとした学生だが、周りの偏見により）
武器：霧吹き。近接専用。チャージに時間がかかる。正直素手の方がよほどなんとかなる。
スキル：①ステルスヒッキー――後ろに回り込んで不意打ちが可能。ただし実行すると犯罪者扱いされることがある。
②懐柔：口八丁で敵を丸め込む。ただし雪ノ下・平塚先生・一色・小町は共に頭が回るので、唯一効果があると思われるのは由比ヶ浜のみ。三浦はなんか丸め込める気がしない。

「……うん、負ける未来しか見えない」
青い空と海に絶望しか見いだせないまま、俺は女性陣の後を追った。

× × ×

海の中と、砂浜の上に、花々が咲き乱れる。
そんな光景が、目の前に広がっていた。
「それー！」
「きゃー！」
「はははは！　私を倒してみろ！」
瑞々しい声を上げて遊ぶ女性陣の声がなんとも夏に似合い、思わず

見蕩れてしまう。一人魔王みたいな人がいるが、プロポーションが反則なのであまり直視も出来ない。
　小町と由比ヶ浜、一色と平塚先生は海に浸かり、水鉄砲に海水をチャージしてはかけあっている。雪ノ下も遅れて海に浸かり、どう遊んだらいいものか分からないのか、恐る恐る由比ヶ浜に近付いていく。なんでちょっと屈んで歩いているのあの子。暗殺者かなにかだろうか。
「きゃっ!?」
「わぷ……っ」
　由比ヶ浜が驚いて振り向きざまに雪ノ下の顔面を撃った。わぁ……とってもシュール……。
「ご、ごめんゆきのん！　大丈夫！」
「え、ええ……問題ないわ……」
　言いつつも、思ったよりも海水がしょっぱいらしく顔をこしこしとこすっている。猫みたい。
「ぷっ、くく……あ」
　その様子を見ていた小町が腹を抱えて笑うのを必死で我慢していると、雪ノ下がゆらりと小町の方を向いた。
「小町さん……良い度胸をしているわね？」
「ぴゃー!?　ゆ、許してくださいー！」
　雪ノ下がこれ以上ないほど冷ややかな笑みを浮かべて、満タンまでチャージした銃口を小町に向ける。容赦なく浴びせられる水に我が妹は可愛らしい悲鳴を上げて逃げ惑う。
「小町ちゃん！　助けるよ！」
「む……っ」
　やけにノリノリで一色が割って入り、雪ノ下に海水を発射する。雪ノ下は鋭い眼光を浮かべると、一色が発射した水をスウェーバックで躱した。艶やかな黒髪が華麗に空を舞い、なんかただのバトルものみたいなシーンになっている。
「一色さんも加わるのなら……容赦はしないわ」
　こわっ。

雪ノ下が完全なる戦闘モードになり、小町と一色に近寄る。あの、2人とも涙目になってますので……。
「ゆ、ゆきのん！　あたしもかせ……火星？　するよ！」
音でしか覚えていなかったらしい由比ヶ浜が雪ノ下側に加わる。加勢な、加勢。あと、この場合小町・一色組に参加した方がまだ戦力的に釣り合いがとれていた気がする。水鉄砲をスウェーバックで避けるってどういう運動神経なの……？
「うぅぅ……いろはさん！　小町の骨を拾ってくださいね！　いくぞぷぁぁぁぁっ!?」
「小町ちゃん!?」
1歩前に出た小町の顔面に雪ノ下・由比ヶ浜が発射した海水がヒットする。え、えげつねえ……。一瞬でチームメイトがへろへろにされて動揺している一色に雪ノ下が銃口を向ける。やだ、この子笑ってる……！
「一色さん……ごきげんよう」
「なんでここでその台詞を言うんですかわぷぅっ!?」
一色があざとくなる暇もない。鬼だ。由比ヶ浜はへろへろになった小町と撃ち合いをしている。
4人のバトルをぼへ～と見つめていると、不意に俺の横からえらく射程距離の長い水が飛んできて、雪ノ下が咄嗟に避けたことにより一色にぶち当たった。い、一色さん、不憫……。
「はははは！　ここで第三勢力の登場だ！　決して仲間はずれにされたのを悲しんでいる訳ではないぞ！」
フラストレーションがたまっていたらしい平塚先生が乱入し、不意打ちをくらった一色の顔がひきつる。雪ノ下も危険と判断したのか、平塚先生に銃口を向けた。一瞬で平塚先生対4人の構図が出来上がる。おお……バトルものっぽい……。
「……あれ」
さっきは自分のステータス分析までしてたのに、結局実況中継（心の中のみ）しかしてねえな……。
これはどうしたものだろう、あの戦地に突っ込むのも怖いなぁ……

と思っていると、背中にちょろろろと控えめに水が当てられた。
「……んん？」
振り向くと、俺に銃口を向けた三浦がもじもじとしている。頬を仄かに朱に染めて、視線をせわしなく泳がせていた。
「あ、あーし、ヒマなんだけど……」
なにこの可愛い子？
「……そうだな」
にやりと笑い、三浦に霧吹きを発射する。
「わぷ……っ」
目の前にいたため顔に直撃し、顔をぶんぶんと振ることで金の髪がふわりふわりと宙に舞う。猫が水気を払っているようだ。
「この……っ」
「ぶぇっ」
容赦なく顔に反撃をくらい、鼻腔からしょっぱさが染み渡る。海水って毎回想定していたよりもしょっぱいから困る。顔を拭うと、三浦が楽しそうに笑っていた。

「……手加減しねえぞ」
念のため霧吹きの中身をチャージして、ゆっくりと三浦ににじり寄る。俺がよほどやばい顔をしていたのか、三浦が怯んで後ろに下がった瞬間――
「いって……っ!?」
背中に物凄い水圧を感じた。明らかに一人二人じゃない。
振り返ると、バトル中のはずの５人が全員俺に銃口を向けていた。
「ヒッキーの変態！」
「お兄ちゃんの変態！」
「先輩の鬼畜生！」
「比企谷くん、海に還る？」
「なんだ、青春か、青春なのか！」
色んな言葉で詰られた。一人だけ涙目なのは何ででしょうか。
「いや、俺はただあぶぶぶぶ」

顔に大量の水がぶち当たる。多分５人同時に発射してる。
「ヒキオ、隙だらけだし」
後ろから楽しげな声が聞こえたかと思うと、背中にも水が当たり始めた。
……あの……息があんまり出来ないんですが……。
この後、俺対女性陣全員という鬼のような構図で戦い続けた。もちろん一方的に蹂躙された。
鉄砲６丁対霧吹きっておかしくない？　ねえ？
続く。

（１２）

ひどい目にあった。

６丁の水鉄砲にひたすら狙い撃ちされて、すっかり疲れ果てていた。水鉄砲遊びに飽きたのか、女性陣は思い思いの遊びに興じている。

「あっつ……」

炎天下の下で塩水を浴び続けたものだから、ひどく喉が渇く。カバンに入れたペットボトルを取ろうと砂浜をよろよろと歩いていると、後ろから足音が聞こえた。

「お兄ちゃんお兄ちゃん」

「せーんぱい」

「……」

振り向いたらやられる。ジャコッて音したもん。絶対撃つ気満々だもん。

ぴたりと止まって固まっていると、「む？」「む？」と唸る声が聞こえた。どっちも可愛いからちょっと腹立つ。

「そこは振り向くとこじゃない？」

「せんぱーい、空気読んでくださいよー」

「……」

手だけ後ろに伸ばして、霧吹きを後方に乱射した。

「わっぷ！　お兄ちゃんが抵抗しましたよいろはさん！」

「先輩のくせに生意気です！　やっちゃおう小町ちゃん！」

「……っ！」

パラソルの周りをぐるぐると回りながら、５分ほど撃ち合いをした。もちろんめった撃ちにされた。中途半端な抵抗が良くなかったんでしょうか……。

ちなみに、パラソルの下にいた葉山は追いかけ回される俺を苦笑しながら見ていた。許さん。

×　×　×

「沁みる……」

清涼飲料水が乾いた身体に染み渡る。カバンから取り出したペットボトルを傾けながら、砂浜の周辺を散歩してみることにした。ついさっきまで慣れない多人数プレイをしていたので、一度一人になりたかったからだ。
「ん……？」
民宿から来る時に使った松林の通り道とはまた別の道を見つける。同じく松林に囲まれた道ではあるが、観光客が使うルートではないのか、秘密基地のようなひっそりとした空気だった。見ればベンチが置いてあり、そこから海を眺められるようになっている。
「中々気が利くな……ん？」
せっかくなので利用させてもらおうと近付くと、先客がいることに気付く。これは休めそうにないな……と踵を返そうとしたが、
「……三浦か？」
「……ヒキオじゃん」
日影になったベンチに座っていたのは、三浦だった。

× × ×

「どうした」
「ん、ちょっと疲れたから休憩」
三浦が答えて、僅かばかり横に移動する。ちょっと迷った末に腰を下ろすと、先程まで見ていた砂浜が道を囲んでいる松林に切り取られて、見事な一枚絵になっていた。
「……」
ちらりと横を見る。
三浦は、今はTシャツを羽織っていた。しかし下はビキニ姿のままなので、なんだかちょっと危うい。ここが人の少ない場所で良かったなと思う。
「……ヒキオ」
「ん、なんだ」
「……み、見すぎだから……」
「……すまん」
例によって見すぎていた。三浦が仄かに顔を赤らめているが、特に

隠そうとしたりしていない。
２人で前を向き、ぼーっとする。潮風が吹き抜けて松林が小さくざわめいた。時折隣でペットボトルを傾けてはくぴりと飲み込む音がする。俺も同様の行動をとる。
時に交替で飲んで、時に同時に飲んで。当たり前のように何百何千と無意識にやっていた行動が、ちょっとだけ楽しい。
「ヒキオといると、喋んなくても楽」
ぽそりと三浦が呟く。話す前兆が全く無かったので反応が少し遅れてしまった。
「そうか。……それは褒め言葉なのか？」
「さあ？　でもほんと楽だから。下手したら一人でいる時より喋んないかも」
「それおかしくないか？」
「一人だとたまにひとりごと言っちゃうじゃん。それがないから」
「ああ、なるほ……ど？」
依然として褒め言葉として受け取っていいか分からないでいるが、三浦が楽しそうに笑うので良しとする。
もう一度風が吹き抜ける。今度は少し強めの風だった。三浦の長い髪が風でそよぎ、ふわりとした弾力を一瞬だけ含んだかと思うとすぐに萎む。
俺がじっと見ていたことに気付いたのか、三浦がちらりとこちらを見てきた。一瞬だけ視線が噛み合い、すぐに離れる。
お互い、一度ずつペットボトルを傾けたところで――三浦がぽそりと呟いた。
「あーし……もう一回、隼人に告ってみる。返事を聞きたい」
「……そうか」
少し前も聞いた言葉が、今はまるで違うように聞こえる。心臓が錆びたナイフで抉り出されるような、鈍く鋭い痛みがあった。
ちらりと隣を見やる。三浦は真っ直ぐ海を見ていた。先程までのぽけっとした表情とは明らかに違っていた。
「いいのか」

俺が発した質問は、俺自身明確な意図が分からなかった。そんな質問に、三浦は柔らかな笑みを浮かべた。抉れた心臓が動きを取り戻したような気がした。
「このままだとさ……前に進めないじゃん」
一人の女の子が、しなやかに美しくなる瞬間を見た気がした。
「……それもそうか」
三浦の穏やかな笑みに対して、自分がどういう表情をしていたかは分からない。
「そうそう。……今夜かな」
三浦が呟く。横顔に視線を感じないから、きっと三浦も海を見ているのだろう。
そこからしばらくの間、俺と三浦は時折聞こえてくる女性陣の楽しげな声を聞きながら、海と風と松林が鳴らす音に耳を澄ませていた。
× × ×
晩ご飯は民宿の食堂でとった。みんなで食卓を囲んでわいわいした後は自由時間。勉強する者、遊ぶ者と分かれる中で――
「隼人。ちょっといい？」
みんなが食堂を去り、さて俺も……と出口に向かったところで、三浦の声が聞こえた。
「わかった。……、……、……」
葉山の返事の後の詳しい会話までは聞こえないが、２人が玄関に向かったのが分かる。
ふらりと廊下へ出て、壁にもたれかかった。
天井を見上げ、ゆっくりと息を吸い、吸った時以上にゆっくりと吐く。吐息が震えていた。過剰に息を吐きすぎて、慌てて吸い直した。
今はただ、三浦の幸せを祈るばかり。
× × ×
待っていてもしょうがないとは思いつつも、待たずにはいられない。
俺は食堂で一人、時間を潰していた。勉強をしてもまず身にならないだろうから、漫然とスマホでゲームをして過ごした。

しばらくすると、玄関の扉が開く音がした。足音は一つしか聞こえず、そのまま部屋のある方へと廊下を歩いていく。
なんだか心配になって、玄関をそっと覗くと――一つ目の足音からは少し遅れて、三浦が帰ってきた。
「ヒキオ……？」
三浦の顔は、晴れやかとは言えなかった。
憔悴しているようにも見えた。
玄関の明かりは少し暗くて、三浦の表情の機微が分からない。
「……部屋に戻るか？」
やっとのことで搾り出した言葉は、何とも情けないものだった。
三浦は少しだけ迷い、ふるふると首を振る。
「このままだと、結衣に心配かけるし」
思いのままに話せる仲でもあるし、却って気を遣う関係でもあるのか。
「……じゃあ、ちょっとだけこっちにいるか」
ちらりと向く。食堂の手前に談話室のような開けた空間があり、ソファが並べて置いてあった。角度的に、食堂に行こうとしない限り誰かに見られることもない。
「……うん」
三浦がこくりと頷く。なんだか子どもみたいな仕草だった。
２人でソファへと向かう。三浦の足音はやけに小さく、今にも消えてしまいそうだった。

× × ×

自販機で飲み物を買って差し出すと、三浦は少し驚き、僅かに戸惑った後受け取った。「ありがと」と呟く声は掠れていた。
プルタブを開け、缶を傾けると細い喉がこくりと鳴った。三浦の表情から少しだけ強張りが抜けた気がする。
「ダメだった」
躊躇することなく三浦がぽそりと呟いた。まるで近所のコンビニに買い物に行くような気軽さで、恐らく今の生活の中で最も大きな比重を占めているであろうことを。

「……そうか」
短く答えてプルタブを開ける。飲み慣れたコーヒーの味がほとんど分からなかった。
古めかしい時計台の針の音が響く。遠くの部屋ではしゃぐ声が聞こえた。女性陣が盛り上がっているのだろう。まるで別世界のように遠く思えた。
「……ありがと、ヒキオ」
「……何がだ」
予想していなかった言葉に、二口目を飲む手を止める。隣を見やると、三浦がどこか疲れた笑みを向けていた。
「一回目に告った後さ、あーしと隼人が気まずくなってた時にヒキオがよく動いてくれてたでしょ？　あれのおかげもあってさ、さっきはっきりと答えをもらった後も、冷静に『これからもよろしく』って言えた。きっとこれからもいつも通りに出来ると思う。……ありがと」
「……そうか」
三浦がローテーブルに缶を置き、両手をぐいと伸ばす。「ん～……」と気持ち良さそうに伸びをして、ふっと力を緩めた。
「ほんと、ヒキオのおかげ」
三浦の声音が変わった。
「……三浦」
「ほんとよかった。中途半端な状態から抜け出せたから。やっと次に行ける、って気がすんの」
「三浦、もう……」
「よかった。ほんとよかった」
「……三浦、もういい」
「なんで？　あーしはさ、やっと、隼人から、返事、聞けて、向き合ってもらえて、それで、それで、それで……」
三浦は気付いていないのか。
それとも、気付いていないフリをしているのか。
明るい言葉を重ねるごとに、声が潤み、掠れて、悲痛なものになっ

ていることを。
隣を見た。
三浦と目が合った。
泣いていた。
俺は、どんな顔をしていいか分からなかった。
「……っく、ひっ、ひっく、うぅ……うぅぅ……うぅぅぅぅ……っ」
――人の恋が終わる瞬間なんて、初めて見たから。
三浦は両手を膝に置き、俯いて、静かに静かに嗚咽を漏らしている。こぼれ落ちた雫が、ショートのデニムパンツの色を変えていく。
――こんな時、どんな言葉をかければいいんだろう。
分からないまま、それでも何とか言葉を練り上げる。
「……頑張ったな」
呟くと、三浦の身体がぴくりと震えた。
「……あっ、うっく、ひっ、うぅぅぅぅ……っ」
足をソファに上げて、額を膝に当ててうずくまった。悲痛な泣き声はより大きく、よりくぐもったものになっていた。
今は、時計の音は聞こえない。部屋で楽しくお喋りする音も聞こえない。
ただ、ほんの数十センチ横にいる女の子のか細い泣き声が、何度も何度も耳朶を打ち、心臓を締めつけていた。
× × ×
泣き疲れたのか、三浦はいつの間にかソファで小さな寝息を立てていた。
「ん……っ」
時折身体がぐらりと傾いて、こちらに寄ってくる。そっと肩に触れて元の位置に戻すという単純極まりない仕事をひたすら繰り返していた。
３０分ほどしたところで三浦が目を覚まし、缶の中身をちびちびと飲み干して、「……ありがと」と掠れた声で囁いた。
「あの……さ」
後は部屋に戻るのを見送るだけ、と思っていると。三浦がぴたりと

歩を止めて、背中を向けたまま話しかけてきた。
「どうした」
聞き返すが返事はない。何やらもじもじと動いているのが分かる。先程までとは何やら違う雰囲気を感じた。
「……明日も、その、今日みたいに……話していい？」
心に小さな花が咲いた気がした。
「ああ、全く問題ない。面白い話は出来ないけどそれでもいいか」
「大丈夫、そういうのは期待してないから」
振り向いた三浦が悪戯っぽい笑みを浮かべる。
「ひどくない？」
「さあ、どうだろ」
不意に見せられた可愛らしい表情に心臓がばくばく言うのを感じながら、軽口を交わし合う。
「……ほんとにありがと。おやすみ」
「おう、おやすみ」
三浦が笑みを浮かべて小さく手を振る。俺もぎこちなく振り返すと、三浦は先程までよりも幾分元気な足取りで部屋に戻った。ドアを開けるなり「優美子――！　どこ行ってたの!?」と由比ヶ浜が本心から心配を滲ませた声を掛けていた。
部屋に戻ると、葉山の書き置きがローテーブルに置いてあった。温泉に浸かってくるから先に寝ててくれ、とのこと。
要望通り寝床に入ると、小一時間後に葉山が戻ってきた。葉山からすれば俺は寝ていることになっているので、言葉を交わすこともなく男子部屋は就寝時間を迎える。
長年想っていた人にフラれた人と、長年一緒にいた人をフった人。どちらも近くにいる分、二人の気持ちを考えただけで心がずきずきと痛んだ。
開けた窓から流れ込んでくる風と虫の音は、千葉で聞くものよりも優しく感じた。

（13）

三浦の涙を見た翌日。

三浦は、いつも通りに振る舞っていた。

こういう時、女の子は強いなと思う。俺ならきっと、フラれた翌日にいつも通り人と話すなど出来ない。

それでも、全くもっていつも通り……とはいかないようだった。ふとした時に葉山の背中を見つめ、泣きそうな顔になるのを見る度に俺も泣きそうになった。

葉山をじっと見た後、いつも決まってふるふると首を横に振って俯き、憔悴した顔を上げた時に俺と目が合う。俺の目の前で泣いたからなのかどうかは分からないが、三浦は俺と目が合っても逸らすことはせず、代わりに苦しそうにはにかんだ。無理をした表情が俺の胸をきゅっと締めつけた。

由比ヶ浜は三浦から話を聞いたのか、あるいは雰囲気で察したのか、憔悴しているのを隠しきれていない三浦にずっと気を遣っていた。いつも以上に明るく振る舞い、周りのメンバーと三浦の間をごく自然に繋ぐ。その甲斐あってか、勉強会の時も、休憩時間に海で遊ぶ時も終始和やかだった。

1日目の夜に別れる間際に三浦が言った通り、2日目以降もちょこちょこと三浦と話していた。偶然の場合もあれば、気が付くと一人で虚ろな顔をしている三浦に俺から話しかけることもあったし、俺が一人でぬぼーっとしている時に三浦から話しかけてくることもあった。

いずれの時も2人で話す時間はさほど長くはなかったが、それでも一緒にいる間は妙に心が安らいだ。三浦も、一人でいる時よりは穏やかな顔をしている……ような気がした。

そんなこんなで、2泊3日の勉強合宿が終わりを告げた。随分と高密度な時間だったな……と思いながら、俺たちは再び8人乗りのワゴンに乗り込んだ。

× × ×

「比企谷。帰りは君と話したいのだが助手席に座ってくれるか」

平塚先生の男気溢れる誘いによって俺が席替えすることになり、それに伴って他のメンバーも席替えをすることになった。
運転席に平塚先生、助手席に俺。
２列目は三浦、由比ヶ浜、雪ノ下。
３列目は葉山、一色、小町。
行きとは違う人間模様が垣間見えて、胃がきりきりと痛んだ。
２列目の真ん中が由比ヶ浜で、３列目の真ん中が一色というのが、なんだか２人の気の回しようを感じた。案の定、列ごとの会話は由比ヶ浜と一色がメインで回していた。
由比ヶ浜は三浦に気を遣い、一色は一色で葉山に気を遣っていた。葉山も全くもって平静通りとはいかないようで、２日目以降はどこか疲れた様子だった。由比ヶ浜は努めて楽しい話題を振り、一色は一色で程好く盛り上がる話題を振っていた。
それでも帰り道は疲れが出てくるようで、いつの間にか車内はすっかり静かになっていた。バックミラーを見ると由比ヶ浜がうとうととして三浦にしなだれかかっていて、かと思えばカーブで重力がかかると今度は雪ノ下にしなだれかかっている。
三浦も雪ノ下もくすりと呆れたように笑い、誰よりも気を遣って振る舞っている友人の身体を温かく受け止めていた。後ろでは小町と一色が寄り添い合ってくーくーと寝息を立てていて、葉山は肘を付けて窓の外の景色をじっと見ている。
ふと、ミラー越しに三浦と目が合った。
「……」
何か言葉を発するでもなく、三浦がふっと微笑んだ。とても穏やかな笑みは今まで見た事のないもので、心に温かな花がほんのりと咲いた気がした。
「ああそうだ、比企谷。今急に思い出したんだが」
三浦と鏡越しに目を合わせていると、不意に平塚先生が喋り出した。先程までの会話の時と比べてかなり声を小さくしている。
「今ハマっているラーメン屋があってな。どうだ、行ってみないか」
「え……」

恐らく平塚先生は、車内が静かになったことで後ろの６人ともがすっかり寝ていると思い込んだのだろう。内緒話をするように潜められている声は、秘め事のような背徳感を覚えてしまう。
一度視線を逸らし、もう一度ミラーを見る。
三浦と思い切り目が合った。
あれ、さっきの穏やかな笑みはどこへ？
「がっつりとした豚骨でな、君とぜひ……って、ん？　どうした？」
「あー、いや、その……」
「はっはっは、どうしたんだ。君と私の仲だろう。どうせみんな寝て……い……る……」
ミラーを見た平塚先生の声が見る見る内に萎んでいく。何か怖いものでも見たんでしょうか。
「……」
「……」
「……」
地獄のような沈黙が流れる。
平塚先生はしっかり前を見ながらも、その顔にはありありと動揺が浮かんでいる。
ミラーから他のメンバーの様子を窺う。雪ノ下はいつの間にか由比ヶ浜と寄り添って静かな寝息を立てていて、葉山は依然として物憂げな表情を浮かべて窓の外を見ている。
ちらりと振り返ってみた。
三浦と目が合った。
なんかすげえ機嫌が悪い。
なんかすげえ機嫌が悪い！
『……』
恐らく、もう少ししたら眠くなるだろうな……と思っていた帰り道だが。
予期せぬ緊張感に包まれて、まるで眠る余裕の無いまま千葉に辿り着いた。

×　×　×

無事に解散・帰宅して片付けを終えた後、俺は三浦にＬＩＮＥを送った。
『お疲れ』
３秒ほどで既読がついた。
そわそわしながら待つが、返事はない。
１時間が経った。
『お疲れ』
この時間差がなんか恐いよぉ……。
多分だけど、三浦は誤解している。しかし具体的に「何に対して」「どんな風に」誤解しているのかが俺でもいまいちもやもやしていて分からない。それでも今のこの状況は正直しんどい。
帰りのワゴンの地獄のような沈黙を思い出し、思わずメッセージをつらつらと書き連ねる。
『あのですね、さっきのワゴンでの会話についてなんですが』
『言い訳させてもらいますと、いや、何に対しての言い訳なのかも分からないんですけどね？　ははは』
『（ポプテピピックのスタンプ）』
ここまで数十秒の間に一気に送り、文字を打つ手が止まる。内容の無さに驚いた。
「……この後、何て書けばいいんだ……？」
ここで仮に取り敢えず謝ったとしても、何について謝っているのかが自分でも分からない。
どうしたものか……と悩んでいると、突然ＬＩＮＥで電話が来た。
名前の表示は三浦優美子。
とるしかないよな……と覚悟を決め、通話ボタンを押す。
『……今のなに？　イライラすんだけど』
こわっ！
獄炎の女王が氷点下の声を投げかけてきました。多分今の三浦ならメドローアを使えると思います。
『……ええっと、さっきの、その、先生としてた話なんだが……』
『……それがなに？』

声の温度が一段階下がりました。
死にそう。
しかし今の反応で、どうやら三浦の不機嫌さは俺と平塚先生の会話に起因しているのだと確信出来た。
『別にあーしには関係ないし。じゃ、切るから』
『待て待て待て、ちょっと話を聞いてくれ』
通話を強制的に切られそうになり、慌てて呼び止める。三浦からは何も返事が無かったが、通話を切られることはなかった。
静かに深く息を吸って、
『あのな、確かに平塚先生と前にラーメンを食べたことはある』
以前、俺と平塚先生が成り行きでラーメンを食べに行った時の説明を始めた。

× × ×

『……と、いう訳だ』
数分で事情を説明し終えて三浦の反応を待つ。
数秒の沈黙を経て、
『……ふーん』
そっけない反応が返ってきた。しかし言葉の割にその声音はどこか弾んでいるように聞こえた。
『言いたかったのはそれだけだ。それじゃ』
三浦の気分が上向きになったことに安心して通話を切ろうとしたが、
『ちょっと、なに勝手に切ろうとしてんの？』
予想外の言葉に止められた。
『え、あ、わるい。なんか話すことあったか？』
『いや、別に……そういう訳じゃないけど』
んん？
妙にもじもじとして可愛げのある声に、思わず頬が緩む。しかし今の声についてイジろうものならどんな怒られ方をするか分かったものではない。
『……そうか。そういえば、夏休みの課題ってあとどれくらい残って

る？』

『え、課題？　それなら……』

取り敢えず話題を提供しようと思い、極めて無難な学校の課題について触れる。

そこから３０分ほど、俺と三浦はとりとめのない話を続けた。三浦の声が次第に弾んでいくのを聞いて、とても安心していた。

それから夏休みの終わり頃まで、俺と三浦が直接会うことはなかった。一番積極的に勉強会をしていた俺・三浦・葉山という組み合わせが成り立たなくなったので、当然と言えば当然だった。

しかし、ＬＩＮＥや電話でのやりとりは毎日のようにしていた。三浦から何の用事もなくメッセージや電話がくるので、俺からもとりとめのないメッセージを送ったり電話をかけたりもしていた。

なんだか妙な関係だな……と思いながら、ゆるりと時間は流れていく。

気が付けば、高校生活最後の夏休みがあと数日で終わろうとしていた。

（１４）

８月が終われば、夏が終わる。

なんとなく、こんな印象をずっと抱いている。

もちろん、９月でもまだまだ暑い日は続く。残暑というには暑すぎないか……？　と思うくらいには、学校が始まってもまだまだ熱量を保った日差しが、千葉の街をじりじりと灼くのは十分すぎるほど知っている。

それでも、夏休みは８月で終わるし、イベントなどがほとんど７・８月に集中している。気温としての夏は９月になっても続くが、記憶としての夏は８月で終わるのだ。

高校生活最後の夏が、もういくつも寝れば終わる――そんな日のこと。

勉強の合間にリビングのソファでだらけていると、スマホの通知音がした。

×　×　×

『ヒッキー』

『やっはろー！』

ＬＩＮＥのトーク画面を開くと、由比ヶ浜からのメッセージが届いていた。取り敢えず挨拶を返そうとすると、

『ってか既読つくの早くない？』

『ヒッキーにしては』

「……」

ちょっとイラっとした。

『現在、このトークルームは使われておりません』

『なんで電話みたいに!?　てか使ってるじゃん、今！』

どんな顔で文字を打ち込んでいるのかが手に取るように分かる。

『でさ、今ちょっと時間ある？』

『時間はあるかないかで語るものじゃない。作るものなんだ』

『へー』

社畜っぽい言葉で返したが、由比ヶ浜にとっては毒にも薬にもなら

ない駄菓子のごとき言葉だったらしい。心底どうでもよさそうだ。
そうこうしている内に、トーク画面が突然電話の着信画面に切り替わった。ここで出ないと頬を膨らませて怒られそうなので、４コールほど聞こえたところで通話ボタンを押す。
「ヒッキー、今大丈夫だった？」
「心配すんな、大丈夫だから出てるんだっての」
「そっか。えへへ……」
耳元で聞こえる愛らしい声に、ちょっとどきっとした。ほんのりと顔が熱くなり、万が一にも家族に見られてやしないかと心配になる。両親は今日も今日とて仕事だ。それなら大丈夫か……と思ったら、小町がリビングのドアを開けて、顔を半分だけ覗かせてニヤニヤしていた。ものすごくこっちを見てる。可愛いけど腹が立つ。
「それで、用ってのは？」
「あ、うん……えっとね、ヒッキーって明後日はヒマ……だよね？」
「なんで付加疑問文で聞いた？」
「付加疑問文？」
「え、そこ？」
まずい、予想していなかった小ボケに翻弄されてしまっている。
ちらりとカレンダーを見る。今日は木曜日だ。この時期の週末となると、考えられるのは……。
「あー、明後日はなー、ちょっとなー、忙しいかもしれないんだがなー」
「ヒマなんだ、やった！」
「話聞いてる？」
「えっとね、その……お祭り、どうかなって」
「ああ、祭りな。祭りについてどう思うかってことか？　世界中で催されているイベントだもんな。単調な生活を彩る数少ないイベントだし、とても良いと思うぞ」
「そんなこと聞いてないし！　ていうかなんでそんなひねくれてんの!?」
電話の向こうで由比ヶ浜が「むがー！」と怒っている。可愛いと思ってしまうのは仕方がないと思うんだ、うん。

「えっとね、去年みたいな感じじゃなくてね？　ゆきのんとかいろはちゃんとかも誘って、その、……どうかなって」
直接顔を合わせていたら、人差し指の先をもじもじと合わせていそうな声が耳をくすぐる。
「……勉強の息抜きに、っていうことか？」
「うん、そんな感じ。……高校生活最後の夏休みでしょ？　思い出作りって言っちゃうとなんかベタな感じするけどさ……せっかくだし、どうかな……？」
言葉が進むにつれて、はつらつとしていた声が湿っぽくなっていく。
……こんな声で誘われて断れるほど、無神経な人間ではない。
「……何時にどこ集合にするんだ？」
「え、来てくれるの？　やった！　よっし！　えへへ……」
電話の向こうで、何輪もの向日葵が咲いたような気がした。
「細かいことはまだ決めてないから、後でまた連絡するね！」
「くれぐれも嘘の日時と場所を教えたりするなよ？　泣くぞ？」
「そんなことしないし！　何そのひどいイジメ!?」
中学の頃の昏い記憶がちょっとだけ顔を出した。
この後もつらつらといつも通りのくだらないやりとりをして、気がつけば３０分ほど電話をしていた。
通話を終えた後、ソファに寝転がって天井を見上げる。祭りとなると、祭りに行っている時間に加えて行き帰りの時間も考慮しないといけないし、場合によっては誰かしらを送ることも有り得る。祭りから帰って勉強したところで大して実にならないだろうから、出かける準備は大方済ませた上で、出かける直前まで勉強をしておくのが吉だろう。
頭の中でスケジュールを練っていると、小町がリビングに入ってきた。電話をしていたようで、「ほんと楽しみにしてますー！　ではではー！」などと楽しげに喋って通話を終えた。
「お兄ちゃん、小町も夏祭り行くよー」
「……おう、そうか」

手を回すの早いなー。
元々するつもりはなかったが、俺が急に気が向かなくなりドタキャンをする……などという可能性も、住処を共にしている小町が同行するとなれば一瞬で潰えてしまう。元々そんなことをするつもりはなかったが。ほんとに。
「俺ってアレなんだよな」
「違うんじゃない？」
「話を聞かずに食い気味に否定するのはやめてくれ、心が折れる」
「おやすみー」
「待て待て待て、第一いまはまだ昼の2時だぞ」
「で、なに？」
「心底興味無さそうに聞くなよ」
「だってお兄ちゃん、今にもどうでもいい話しそうなんだもん。上司だったら絶対嫌われてるよ？」
「上司になったらこんな話はしねえよ。しょうもない話をするのは家族だけだ」
「ふーん……家族ねえ……」
何やらによによしている。腹立たしいが可愛い。
で、結局なに？　と話を促されたので、やっとこさ本題（？）に移る。
「俺ってアレなんだよ、いざ約束事をすると、その日が近付くにつれてどんどん憂鬱になるんだよ。例えその約束事の内容がどんなに楽しみだったとしても」
「ふーん。で？」
「それだけだ」
「それだけ」
「ああ、それだけ」
小町の目が限界まで細められた。ものすごく怪訝な目である。やだ、キャラが変わってる……。
「ほんじゃ、小町はお昼寝しまーす。おやすみー」
「お、おう、おやすみ」

有無を言わさぬ口調で会話を切られた。
約束事の日にちが近付くにつれて憂鬱になる傾向がある、だから当日も頑張って行こうとする俺はそれだけですでに結構頑張ってるんだぞ……というささやかすぎるアピールは、小町には伝わらなかったようだ。いや、むしろ伝わってるからこそのあの態度か。流石我が妹、斬り捨てるときの目つきが水風呂より冷たい。
しかし、由比ヶ浜が企画して夏祭りに行くとなると……誰が行くんだろうか。由比ヶ浜と俺以外だと、既に名前が出ている雪ノ下と一色、それと小町。
あとは……と考えたところで、今日も由比ヶ浜から連絡が来る前にとりとめのない電話をしていた相手を思い出す。
由比ヶ浜はあいつを誘ってるんだろうか……？　聞いてもいいものなのか……？　と逡巡していると、ＬＩＮＥにメッセージが届いた。
『ヒキオ、あんたも夏祭り行くんだって？』
『あーしも行くから』
「……」
メッセージを読んで、自分でも驚くほど安心していた。頬が少しばかり緩んでしまう。
『おう』
短く返すと、可愛らしいうさぎのスタンプが返ってきた。最近三浦はスタンプを使い始めたのだが、これがまたいちいち可愛い。会話はここで終了のようなので、俺からもスタンプを返してトーク画面を閉じた。
８月が終われば、夏が終わる。
だからその前に、あと少しだけ――由比ヶ浜が言うように、思い出作りをしてもいいのかもしれない。

（15）

最終的に、夏祭りに行くメンバーは由比ヶ浜、雪ノ下、一色、三浦、小町、俺の6人に決まった。

俺、いらなくないか？

まあ、かしましい女性陣の後ろをのろのろ付いて回って、時折小町に何かを買って貢いでいればそれで時間は潰せるだろう。

いや、なんで貢ごうとしてるんだ俺は。

由比ヶ浜から提示された集合場所は、何故か夏祭り会場から数駅隣の場所で、集合時刻も夕方と呼ぶには早い時間帯だった。理由は聞かされなかったが、取り敢えず従う以外の選択肢がなかったので大人しく向かうことにする。

高校生活最後の夏休みの、最後のイベントが始まろうとしていた。

× × ×

集合場所まで小町と一緒に行こうとしたのだが、小町は他の友達と遊んでから集合場所に行くとのことだった。一日で2つのコミュニティに顔を出すなんてアクティブすぎません？

電車に乗っていると、浴衣姿のカップルや女の子のペアをちらほらと見かける。夏祭りがある日はこういった光景をよく見るので、実にわかりやすい。

ぬぼーっと窓の外を眺めているうちに集合場所に着いた。

「あ、ヒッキー！　こっちこっち！」

「バッ……」

俺を見つけた由比ヶ浜が、公衆の面前で堂々とあだ名で呼んできた。思わず「バカ」と言いそうになり口をつぐむ。ここで俺が反応すれば「やだ、あいつヒッキーって呼ばれてる……」「イジめられてるのかな？」なんて思われかねない。

由比ヶ浜の呼び掛けには一切応じていないフリをしつつ早足・忍び足で合流すると、俺以外のメンバー全員が揃っていた。

「？　ヒッキー、なんでいまちょっと遠まわりしたの？」

「……あのまま真っ直ぐ歩いて合流したら、俺がヒッキーだと思われ

るだろ」
「あー……あはは、なんかごめんね？」
「いや、いい。……他の人に聞こえないところで呼んでくれ」
「あ……う、うん、わかった……」
「……」
なんだろう、いまの俺の言い方。
とりようによっては、「これは俺とお前だけの秘密だぞ」ってニュアンスにも思えるか……？
ちらりと由比ヶ浜を見る。おい待て、なんで照れてるんだ。「えへへ……」なんて言いながら照れてるんじゃない。かわいいだろ。
ふと視線を感じて周りを見る。
雪ノ下が半目でこっちを見ている。
一色が同じく半目でこっちを見ている。
小町がにやにやしながらこっちを見ている。
三浦が――あれ？　なんかものすごく不機嫌じゃありませんか？
あれ？
「……」
「あ、あの……三浦さん……？」
「……なに？」
こわっ！
沈黙が1秒続くごとに心臓がキュッとなる。キュッて。
「そ、そういえば小町ちゃん！　あのこと、まだあんまり詳しく聞いてなかったよね！」
場の空気を読んだ由比ヶ浜が、苦笑いを浮かべながら明るく声を上げる。ナイス！　ナイスフォロー！
……ん？　あのこと？
俺が首を傾げて小町を見ると、愛しの妹が「むふふ……」と不敵に笑った。よくわからんが腹が立つ。
「小町。あのことって何のことだ」
「お兄ちゃん。『これくらいは持ってきて』って金額を指定してたよね？」

「ああ、元々持ってくるつもりだった資金に加えて、小町に言われた分を持ってきてる」
　同様の話が伝わっているのか、女性陣もみなこくりと頷く。
「小町さんは『私服でお願いします』とも言っていたわね」
　雪ノ下の言葉に小町が頷く。
「むふふ……小町、こんなものを持ってきてみました！」
　ジャーン！　と自分で効果音を付けそうな勢いで（実際は付けていない）、小町が財布から何かの券を取り出した。
「……浴衣レンタルの、クーポン券……？」
「わ！　すごいね、かなり安くなってる！」
　俺が目を細めて券の正体を探っていると、由比ヶ浜が嬉しそうな声を上げた。たしかに、クーポン券に書かれた通常時の値段は高校生にはかなり厳しい値段だが、割引されたあとだと一気に手が届きやすくなっている。
「友達のツテでゲットできたんです。せっかくですから、みんな浴衣を着てみたいなーって思いまして！」
　小町がにこぱーと笑う。由比ヶ浜と一色が目に見えて喜んでいる。
「値段はいいのだけれど……着付けには時間がかかるでしょう？　この人数がいて大丈夫なのかしら？　それに祭りの直前なら混んでいそうだけれど……」
　雪ノ下がもっともな疑問を口にする。たしかに、仮に一人につき２０分かかるとしたら、６人で２時間かかってしまう。
「それも大丈夫です！　予約をとってますし、着付けしてくれる人は複数人いますから！　１回で全員の着付けは無理っぽいんですけど、多くても２回で全員の着付けはできるみたいです」
　小町の説明に雪ノ下が頷く。なるほど、そういうシステムなのか。
「駅から歩いて３分の場所にあるんです。もうすぐ予約の時間になるので行きましょう！」
　小町の声に、由比ヶ浜と一色が「おー！」と元気よく返事をする。雪ノ下と三浦はどう反応したらいいか迷って、結局何もせずに終わっ

た。安定の恥ずかしがり屋さんたちだ。
「ヒキオ」
「ん、どうした」
駅から出ようと歩いている途中、最後尾を歩いていた三浦がぽつりと話しかけてきた。
「ヒキオって、どんな浴衣が好きなの？」
思わぬ質問に面食らう。
「え、あー……すまん、浴衣の好みはないな。正直あんまよく知らんし」
「……そう」
「ただ、まあ……その人に似合ってれば、いいと思うぞ」
「……ん」
三浦の返事はなんとも言えない曖昧なものだったが、ふとこぼれた笑みは木漏れ日のように優しかった。

× × ×

着付けレンタルをしている店の中は広々としていて、冷房がよく効いていた。でかでかとした垂れ幕があり、「着付けレンタルフェア開催中！」と書かれている。着付けスタッフが複数人いると小町が言っていたが、このフェアに合わせて増員しているのかもしれない。
「いらっしゃいませ。予約されていたお客様ですね。ただいま対応できるスタッフが４人までなので、多少時間差が生じてしまいますがよろしいですか？」
店員の言葉にふむと頷く。
「俺は後でいい。お先にどうぞ」
野郎は後回しで……と先に譲る。しかしどちらにしろもう１人も後にならざるを得ない。残りの５人がちらちらとお互いに視線を巡らせたかと思うと、
「あーしも後でいい」
三浦がぽつりとつぶやいた。
「優美子、いいの？」

「早く決めたほうがいいでしょ？　ほら、行った行った」
「う、うん……ありがと」
三浦が由比ヶ浜の背中をぺしぺしと押す。なんだかおかんみたいだ。残りの４人も俺と三浦に軽くお礼を言って先に入っていく。
４人がスタッフに案内されるのを見届けると、三浦との間に落ち着かない沈黙が訪れた。
どうしたものか……と思って視線を巡らせると、茶屋にあるような長椅子を見つける。三浦に目配せをして、２人で腰を下ろした。
「……元気だった？」
三浦の質問に少しおどろく。ちらりと見れば、なんだか恥ずかしそうに視線を巡らせている。どうやら自分の話題のチョイスに恥ずかしくなったらしい。
「……昨日も電話しただろ」
「……顔見たのは久しぶりじゃん」
横目で隣を見やる。顔を逸らしているが、瑞々しい肌がほんのりと朱に染まっていた。
「……」
「……」
いつもは心地良いと感じるはずの沈黙が、何故か今日は不安になる。
２人の空気が、なんだか落ち着かない。
本当は、聞きたいことはあった。
三浦は今、誰にどんな気持ちを向けているのか。
ほんの少し前まで、ひたすら、純粋に、純朴に、気持ちを向け続けていた相手のことを、今はどう思っているのか。
そうは思ったところで、こんなタイミングで聞けるはずもない。
待ち時間は２０～３０分と聞いている。ううむ、長いな……と思っていると。
「お客様。お待ちの間にこちらをご覧になっていてくださいますか？
浴衣の種類を載せております」
柔和で上品な笑みを浮かべた女性店員がやってきて、俺と三浦それ

ぞれに薄いカタログを渡してきた。三浦が手に持つカタログには女性用浴衣の文字があり、俺の方には男性用浴衣と書かれている。
読みながら話すのなら、いくぶん気も紛れる。このカタログは2人の良い緩衝材になってくれる気がした。
俺も三浦もカタログを開き、黙々と読み始める。
かすれ十字。お、なんかの技の名前みたいだ。
亀甲。亀甲!? あ、別にこの言葉自体が卑猥な意味というわけではないか。
吉原つなぎ。妙な名前だなと思ったら、説明文に由来が書いてある。「鎖の連続文様で、吉原の遊郭に入ったらその場所に縛られて、なかなか解放されないことにちなんだ名前といわれている」……重くない？
なにげに種類があって面白い。昔ながら、それこそ何百年単位での昔からあるであろう柄もあれば、ここ10年くらいで出来たと思われる今風の柄もある。
気が付けば熟読していて……ふと、隣から視線を感じた。
「……んん？」
カタログをひたすら読んでいる俺の顔を、三浦が妙に柔らかい笑みを浮かべて見ていた。
「……どうした」
「別に？　なんか楽しそうだなって思って」
ちょっと恥ずかしいんですが。
「三浦は見なくていいのか？」

顔が熱くなってきたので、苦し紛れに話題を振る。
「？　……あ」
俺の質問に三浦がぽけっとした反応を返し、自分の手に持っているカタログをちらりと見た。
「……まだ全然読んでなかった」
三浦にしては珍しく、ぽわんとした声音でつぶやく。
「なんだ、ずっと俺の顔を見てたのか」

振り向いたら俺の顔を見ていて、且つ自分のカタログを全く見ていない――その状況から導き出された結論を、よく考えもせず口にしてしまった。

「……っ」

――自分の言葉に対して、三浦がどんな反応をするかを考えもせずに。

「……そんなわけ、ないし……っ」

消え入りそうな声で呟いた三浦が、膝の向きを俺から遠ざかるように変えて、食い入るようにカタログを見始める。さらりと流れた髪から覗く耳が真っ赤になっていた。

……なんだこの可愛い生き物は？

続く。

（16）

三浦が思いきり照れてしまった後は、まともな会話をすることがなかった。三浦はひたすらカタログを読み耽り、時折視線を感じて隣を見やると、何事もなかったかのように高速で顔を逸らされた。

「お待たせいたしましたー」

女性店員の柔和な声とともに、広めの試着室のカーテンがシャッと開く。

「ジャーン！　お兄ちゃん、どう？」

小町がこちらにとてとてと歩みより、くるりと回ってみせる。宵闇のような濃い生地に鮮やかな花火が咲いている柄で、ミニスカートの丈にしているためとても活発な印象を受ける。元気娘の小町にとても似合っていた。なんか時代劇の町娘みたいだ。

「あー、世界一可愛いぞ」

ちゃんと思ったことを述べたのだが、小町は顔をしかめて「うへぇ……」とげんなりした声を漏らした。

「あーはいはい、お兄ちゃんってばまーた棒読み……ほんとごみいちゃんだなぁ」

路傍の石にだってもっとまともな視線を注ぐよな……？　と思うくらいひどい目をしている。心外だ。

「先輩先輩。どうですかー？」

聞き慣れたあざとい声の方を見やると、もう一つ開いた試着室から一色が顔を出した。薄桃色の生地に青い金魚が優雅に泳いでいる柄で、小町と同じくミニスカートの丈にしている。

自分に似合う柄がよくわかっているようで、実際ぴったりだ。目の前であざとくくるりと一回転すると、瑞々しくて白い太ももに思わず視線が行ってしまった。なんか隣からものすごく圧を感じるんですけど。

「あー、町娘みたいで良いと思うぞ」

「それ、褒めてるつもりですか……？」

本気で萎えているようで、信じられないくらい猫背になった一色が

心底げんなりした顔で呟いた。いいじゃん、町娘。小町と並ぶとかなりそれっぽいぞ。
「一色さん、うちの兄がすみません……。お兄ちゃん、ちょっとアレがアレなもんで」
「そうだよね……」
「え、今ので通じ合えたの？」
げんなりした町娘たちの意思疎通は、俺からしたら外国人同士のコミュニケーションにさえ見えた。
「ヒ、ヒッキー……どう、かな？」
町娘２人のかしましいやりとりを眺めていると、消え入りそうな声が聞こえた。
「……お、おう、良いと思うぞ」
目を通して脳に入り込んできた情報に打ちのめされ、喉から褒め言葉の奔流が一気に溢れ出そうになって思いきり詰まってしまった。つまりろくな言葉が出てこない。
由比ヶ浜の浴衣は、白と朱の牡丹が咲き乱れていた。派手な模様だが、由比ヶ浜の健康的な可愛らしさによく似合っている。似合っているのにほんのりと顔を赤らめて照れているので、なおさら強烈な魅力を醸し出していた。
そして、浴衣を着てもはっきりとわかる身体のライン。思わず喉を鳴らしそうになって、慌てて顔を逸らしてごまかした。
「えへへ……そっか」
俺の下手すぎる言葉に、由比ヶ浜が頬をぽりぽりと掻いて嬉しそうに笑う。おいやめろよ、可愛いだろ。
「結衣さん、結衣さん」
小町が由比ヶ浜に何やら耳打ちをしたかと思うと、
「え、ええ!?　そ、それはちょっと……」
「絶対いけますよ！　小町が保証します！」
何やら不穏な会話が聞こえた。
「ヒ、ヒッキー……」
「お、おう、どうした」

由比ヶ浜が俺の正面に立ち、視線を右、左と揺らす。妙な緊張感が走り、思わず背を伸ばしてしまった。
「……えいっ」
くるり。
小町と一色がごく自然にやっていた、一回転。それを由比ヶ浜は、尋常でないほど照れながら、ぎこちなく行った。
可愛い女の子×照れ×ぎこちない仕草＝死。
中学までの俺なら、勢い余ってプロポーズまでしていたかもしれない。
「……ど、どう？」
「……お、おう」
耳まで赤くなった由比ヶ浜に感想を求められた。外国に帰化して２０年ぶりに母国語を喋ったのかというほどぎこちない調子で返事をする。死にたい。
『……淡い、淡いよ！』
『淡すぎて！　恥ずかしすぎて！　萌える！　燃える！　炭化する！』
近くにいた女性店員２人が恥ずかしいにもほどがある会話をしている。もう少し小声で話してくれないでしょうか。俺にも由比ヶ浜にも聞こえてます。あと炭になるのは流石にやばいと思います。
「……」
由比ヶ浜が自分の腰の辺りをちらちらと見て、それから小町と一色の腰まわりをちらちらと見た。
「どうした」
「ん……なんでもない」
俺の問いかけを、由比ヶ浜は苦笑を浮かべてかわした。
「……あたしもミニにすればよかったかも」
「……っ」
独り言のつもりだったのか、店の床を見ながらぽつりと呟いた言葉に思わず目を見開いた。聞こえていないフリをするのに苦労した。
「あ、雪乃さん！」

小町の活発な声に顔を上げる。
「わぁ……ゆきのん、きれい……」
俺の感想は、由比ヶ浜が率直に代弁してくれた。
「こういう風に見せ合うのは、なんだか慣れないわね……」
雪ノ下が艶やかな黒髪をかき上げて、照れくさそうに小さな笑みを浮かべる。
雪ノ下の浴衣は、上品な濃紺の生地に百合の花が凛と咲いていた。清純さや高尚さを控えめに主張しながらも、白磁のような肌をうっすらと朱に染めて視線を泳がせる仕草がギャップを生み出してくらりときてしまう。
「……」
雪ノ下が横目でちらちらと俺を見てくる。本人は何気なくやっているつもりなのかもしれないが、こっちからすれば上品な浴衣姿で婀娜っぽい流し目を送られているようにしか見えない。間抜けなほどに顔が熱くなった。
「……良いんじゃねえか」
どれだけ脳内で賞賛する言葉が溢れても、ひねくれた心と褒め言葉を発するのに慣れていない口ではこんなものだ。呆れられるだろうな……と思ったが。
「……そう」
雪ノ下は、少しだけ上ずった声でぽそりと呟き、うっすらと柔らかい笑みを浮かべた。表情をほんの少し動かすだけで、こちらの心をその何十倍も、何百倍も揺り動かしてくる。たまったもんじゃない。コスパが良すぎるだろう。何を言ってるんだ俺は。
「雪乃さん、雪乃さん」
小町が雪ノ下に何やら耳打ちをする。いやな予感しかしない。
「こ、小町さん？　それはちょっと……っ」
「いいですから、大丈夫ですから。一回やってしまえば楽になりますから」
危ない勧誘をしているようにしか見えなかったが、しばらく問答した末に雪ノ下が諦めたような顔をして俺の正面に立った。

「……」
くるり。
極めてぎこちない動作で、雪ノ下が一回転する。止まって俺と目が合うと、急にまばたきが増えて長いまつ毛がせわしなく揺れた。目が頼りなげに泳ぎ、艶めいた唇がもにょもにょと動く。
何か言おうとして、全く何の言葉も出てこないような……そんな仕草。顔が急に熱くなった。なんだこれ、なんだこれ！
『なにあれ、ほんと淡い！』
『青春すぎるよ！　炭化する！　炭化する！』
またしても女性店員の声が聞こえる。雪ノ下にも聞こえていたようで、２人して余計に恥ずかしくなった。
「……ずるいなぁ」
俯いていると、少し哀しげな声が聞こえた。声がした方に顔を上げると、一色が慌てて顔を逸らした。俺が首をかしげても何も言ってこないが、小町が一色の腕を肘でてしてしと小突いている。なんなんだ。
「お次のお客様ー。お待たせいたしました！」
「お、次は俺らだな。……どうした？」
「……別に」
小町、一色、由比ヶ浜、雪ノ下をちらりと見た三浦が、すねたような表情をして顔を逸らした。よくわからんが可愛い。しかし可愛いと言ったら絶対怒られるやつだこれ。
どうしたものか……と思いながら、店員に案内されるまま試着室に入った。

×　×　×

「お待たせしましたー」
女性店員が声を上げ、俺が入っていた試着室のカーテンをシャッと開ける。女性同士ならともかく、野郎の浴衣姿を見たところで大した反応なんて望めないだろう。
――と、思ったんだが。
「わぁ……」

由比ヶ浜が口をぽかんと開け、
「……」
雪ノ下が目をぱちくりとさせ、
「せ、先輩のくせに……」
一色が何やら悔しそうな表情を浮かべ、
「ふへへ……」
小町が女性陣の反応を眺めてにやけている。
小町だけおかしくないか？
俺が着たのは刺子縞という柄で、女性陣の浴衣のような華やかな主張をするものではない。極めて無難なセレクトをしたつもりだったが、雪ノ下と由比ヶ浜と一色がこちらをまじまじと見つめ、小町が後ろからその3人をにやにやと眺めている。いや、小町だけやっぱりおかしいだろ。
さらし者にされているようで気が気でない。顔を逸らして隣の試着室に目が行った瞬間――目の前のカーテンが開いて、三浦が出てきた。
「わぁ……優美子、すっごくきれい！」
由比ヶ浜が喜色満面の笑みを浮かべて三浦に駆け寄る。
三浦が着ている浴衣は、薄桃色の生地に、桜に似た可愛らしい大振りの花と、竹のように細やかな茎や葉があしらわれた柄だった。三浦のイメージ的にもっと派手な柄を着るのではと思っていたが、意外にもおしとやかな印象だ。
「優美子、これって何ていう柄なの？」
「え、えっと……撫子っていうんだけど……似合わないでしょ？」
三浦が自信なさげにつぶやき、ちらりと雪ノ下を見る。おしとやかを体現したような雪ノ下に向ける視線は、嫉妬と諦めの色が滲んでいた。
「そんなことない！　すっごく似合ってる！」
由比ヶ浜がぶんぶんとかぶりを振り、心の底から賞賛の声を浴びせる。由比ヶ浜の言葉通り、実際似合っていた。撫子という柄の名前になんら恥じることもない。

口をぽかんと開けて三浦を見つめていると、ぱちりと視線が噛み合った。
『……』
何も言葉が出てこない。三浦は三浦で俺の浴衣姿をじっと見ているようだった。
「お兄ちゃん、ほらほら、お会計だよ」
「あ、ああ、すまん」
小町に声をかけられて我に返る。三浦は三浦で由比ヶ浜に声をかけられてハッとしていた。
会計を済ませ、6人でぞろぞろと店を出ようとすると――袖をくいと引っ張られて足を止めた。振り返ると三浦が何か言いたそうに俯いている。他の4人は俺たちに気付かずに店の出口に歩いていった。
「……どうした」
「……どう？」
コミュニケーションとしては、到底成り立っているとは思えないようなやりとり。それでも、三浦が何を問いかけているのかは流石に分かった。
「あー……その、なんだ、似合ってると思うぞ。……かなり」
「……っ」
盛大に目を泳がせながら答えると、三浦の顔に喜びが咲いた気がした。目を見開き、頬を朱に染め、爛々と輝いた瞳で俺を見つめてくる。正直、洒落にならないくらい可愛い。
「……あ、ありがと。……ヒキオも、浴衣、似合ってる……」
「お、おう、そうか」
思わぬカウンターに面食らう。上目遣いで言うのは反則だろう。
茹だった顔を冷まそうと、店員からサービスでもらったうちわで顔を扇いでいると――三浦が何やらもじもじとしていることに気が付いた。
「どうした」
「あ、いや、その……」
歯切れ悪く答えながら、何故か俺から数歩遠ざかった。なんだ、何

がしたいんだ……と首を傾げていると。
くるり。
「え……っ」
目の前で、三浦が顔を真っ赤にしながら一回転した。
元の位置に戻った三浦と目が合う。
『……』
互いの口がもぞもぞと動くものの、真空空間に放り込まれたかのように全く声が出ない。
え、なに、今の？
他のみんながやってたから？
それを、え、俺だけが見ているこの状況で？
「……ほ、ほら、早く行かないと……っ」
「お、おう」
泣きそうな顔をした三浦が、俺の横をすり抜けて早足で店の出口に向かう。
「……」
呆然とする。
「可愛い」と思うたびに、容量が決まっている器に正の感情が水のようにたまっていくとするならば――今の三浦の行為で、正の感情が器から完全に溢れ返ってしまった。可愛さが俺の許容量を超えている。
「……どうすればいいんだ……」
慣れない感情の奔流の発散の方法が分からないまま、慌てて三浦の後を付いていった。
ふと後ろに目をやると、さっきまでこそこそ話していた女性店員２人が倒れていた。ぎょっとしたが、「尊い……」と呟いているのを聞いて無視することにした。
盗み聞き、だめ、ぜったい。
続く。

（17）

目的地の駅から歩いて数分で、祭りの会場に着いた。

……着いたは着いたが……。

「わー、すっごいねー……」

由比ヶ浜が漏らした呆けた声にうなずく。俺も含めみんなちょっと呆気にとられていた。

会場は河川敷を利用していて、川に沿って数えきれないほどの出店が並んでいた。俺たちはその群衆を橋の上から眺めているのだが、とにかく人の密度がすごい。意思を持ったとんでもなく大きな蟲が這い回っているようにさえ見える。

なんでみんな、わざわざ人口密度を上げにくるの？　なんなの？

子供に満員電車の苦労を体感させて「お父さんは普段こんな大変な状況の中会社に行ってるんだぞ」と苦労自慢をして奥さんと子どもに白眼視されたいの？　そして若くて綺麗な女の子に目をとられた隙に子どもが迷子になって奥さんにマジ説教をくらいたいの？　なんなの？

「あー……よし、帰るか」

冗談3割くらいのつもりでぽつりとつぶやくと、

「はーい、お兄ちゃんお疲れー」

「先輩の分も楽しみますねー」

「比企谷くん……あなたって人は……」

「え……ヒキオ？」

「……ヒキオ？」

みんな丁寧に反応を返してくれた。小町と一色が極めてつれない口調で流し、雪ノ下は額に手を当てて呆れて見せ、由比ヶ浜は飼い主に置いていかれる子犬のような目で見てきて、三浦は……声音こそやたらと尖っているが、表情は由比ヶ浜に近い。

「あー、なんだ、その……すまん」

特に由比ヶ浜と三浦に対してどうしたらいいか分からなくなり、消え入るような声で呟いた。

「えー？　先輩、よく聞こえませんでしたー」
「お兄ちゃん、もう一回言ってー」
「……お前ら……」
雑踏の中で俺が小声で謝ったのをいいことに、小町と一色がにやりと笑って迫ってきた。やめろ、可愛いだろうが。
そうこうしているうちに橋を渡り終わり、河川敷へ下りる太い階段が見えた。
致し方ない、ここまで来たら覚悟を決めるしかない。
×　×　×
河川敷の雑踏に紛れて歩き始めると、１０分も経たないうちに通りを歩く人の密度が少なくなっていった。どうやら今しがた開放されたエリアがあるようで、出口を見つけた水が流れていくように人波が和らいでいく。
「わ、わ、ゆきのん！　あれ美味しそう！　あ、でもあっちも食べたいかも！」
「ゆ、由比ヶ浜さん、あまり引っ張らないでちょうだい……」
大型犬に引っ張られる飼い主のごとく、目を爛々と輝かせた由比ヶ浜に雪ノ下が浴衣の袖をちょいちょいと引かれている。うんうん、今日も百合百合しいな。
「結衣さん、どうせなら全部行っちゃいましょう！　手分けして買えば所要時間半減ですよ！」
「小町ちゃん、あったま良い！　よーし！」
祭りの陽気に当てられたのか、いつも明るい２人のテンションが更に変なことになっている。なんで２人ともサムズアップして粋な笑みを交わしてんの？
人通りの邪魔にならない程度に立ち止まって小町と由比ヶ浜を見送ると、雪ノ下が由
比ヶ浜の背中をじっと見つめていた。小さな唇が何やらぽしょぽしょと動いている。
「そんなに食べて、栄養は一体どこに行くのかしら……」
誰に投げかけるでもない質問を呟いて、そっと自分の胸に手を当て

る。質問を口にしておきながら、その答えを既に知っているかのようだった。
胸に手を添えて切なそうな顔をしている雪ノ下と目が合った。
やばい。
「……比企谷くん。あなたは何も見ていないわね？」
こわっ！
「は、はい、見ていないです、何も見ていないです」
顔を逸らしているのに、首筋に視線の剣がズブリと刺さってくる。
控えめに言って超怖い。
「せんぱーい、わたしもお腹減りましたー」
「よかったな、よりどりみどりだぞ」
「先輩、こういう時にこそ先輩としての威厳を示すべきだと思うんですよー」
「都合の良いこと言ってたかるのやめようね？」
一色の相手をしていると、首筋に感じていた痛みが消える。ちらりと隣を見やると、雪ノ下が胸に手を添えたままうつむいていた。落ち込んでいらっしゃる……。
俺がつっぱねたことでブーブー言っている一色に呆れていると、袖をくいくいと引っ張られた。振り向くと、三浦が俺の袖を引っ張りながらも恥ずかしそうに顔を逸らしている。
「……ヒキオ、あーしも……お、お腹……」
「え、なんだ？　どうした？」
「な、なんでもない」
慌てて顔を逸らしてしまった。ちらりと一色の方を見て、再び顔を逸らす。横顔がほんのりと朱に染まっていた。
……まさか、一色と同じことをやろうとしたのか？　しかも恥ずかしくて断念した？
……なんだこの可愛すぎる生き物は。
三浦をじっと見ていると、俺の視線に気付いているのかいつまで経ってもこっちを向こうとしない。
そうこうしている内に小町と由比ヶ浜が戻ってきた。

……買いすぎじゃねえか？

×　×　×

小町と由比ヶ浜は案の定買いすぎたようで、残りの４人で余りを食べた。「うう……買いすぎた……」と嘆いている由比ヶ浜の胸を雪ノ下が凝視していたが、とても追及する気にはなれなかった。

「あ、次はあれなんてどうですか！」

食べすぎたためか、若干動きが鈍くなっている小町が元気よく指差した先に「射的」の文字が見えた。

「あー、いいんじゃねえか」

言いながら、のろのろと射的の屋台に立つ。どうやら２人いっぺんにチャレンジできるようで、俺たちの前には小学生のグループや大学生のカップルが並んでいた。なるほど、２人ずつ挑戦させて客の回転率を上げているのか……大変だな、これだけ人がいると。

「２人ずつのようだが、どうする？」

問いかけた瞬間――小町、由比ヶ浜、一色の目が細められ、視線がすさまじい速度で各メンバーを撫でていった。気を遣うのに慣れている３人の思考速度に驚く。由比ヶ浜はなにやら俺と三浦を見る時間が長かった。

「雪乃さん！　小町と一緒でいいですか？」

「え、ええ、構わないわ。よろしく、小町さん」

小町が勢い良く雪ノ下の腕に抱きついた直後、「え、柔らか……白っ、さらさら……」とまるで柔軟剤のＣＭのようなフレーズを呟きながら雪ノ下の腕を真剣に撫ではじめた。やめろ、やってることが完全に変態だぞ。

「いろはちゃん、一緒でもいい？」

「はい！　ぜひぜひ！」

由比ヶ浜と一色が笑顔を交わし合う。気を遣っていた同士が組んでいるので、なんだか色々な思惑が絡まっている気がした。

「ヒキオは……あーしと？」

「……そうみたいだな」

「……そ」

自動的に残りものとなった俺と三浦がペアになる。三浦はそっけない返事をしつつ、横目でちらちらとこちらを見ていた。
並びながらペアを決めていると、前の大学生カップルが撃ち終えた。
「それじゃ、次のお客さんどうぞー」
この道何十年、なんてキャリアがありそうなおっちゃんが頭にタオルを巻いて立っている。先に3ペア分の料金をまとめて払うことにする。小町・雪ノ下、由比ヶ浜・一色、俺・三浦の順で挑戦することにした。
「1人につき3発までだよー」
おっちゃんの言葉にふむと頷く。
景品を見たところ、やたらと小さいものや、当てても重くて倒れなさそうなものもある。
さて、どれを狙うか……と考えていると。
「……」
雪ノ下が一点をじっと見つめていた。
ねこのぬいぐるみだ。
……わかりやすいですね……。

続く。

（１８）

まずは小町・雪ノ下が挑戦する。銃を両手で構え、前のめりになった。

１発目。小町が外し、雪ノ下が明らかに大きな猫のぬいぐるみの左腕に当てるも、身体が奥に傾くのみで倒せず。雪ノ下さん、好みがほんとわかりやすいですね……。

「ひゃー！　これ難しいよお兄ちゃん」

「みたいだな」

普段慣れようもない銃を持ってぶっつけ本番で挑むのだから、考えてみればなかなか難易度が高い。

……それにしても、雪ノ下が狙っている猫のぬいぐるみ……大きすぎないか？　頭に当てて倒れるような代物には見えないんだが……。まあ、雪ノ下は至極真剣に狙ってるようだし……って、目がマジすぎない？　狩人の目だよ？

２発目。小町がまたも外し、雪ノ下が先程と同じぬいぐるみの左腕に再び命中させる。身体がますます奥に傾いた。

……まさか……狙ってやってるのか？

３発目。小町がやっとお菓子の箱に当てたものの、傾いただけで倒すには至らなかった。

雪ノ下は――同じぬいぐるみの、全く同じ場所に３発目を当てた。ぐらりと傾いたぬいぐるみが、足場の板からずるりと落下する。

「マジか……っ」

思わず驚愕の声が漏れる。おっちゃんも唖然としていた。

雪ノ下がくるりと振り返り、渾身のドヤ顔を浮かべた。

うん、顔が整ってるだけに余計腹が立つ。

「ゆきのん、すっごーい！」

「雪乃さん、流石です！」

女性陣がきゃーきゃーと騒ぐ。見物していた他の人も拍手を送る。軽く騒ぎになったことで雪ノ下は照れて俯いてしまったが、猫のぬいぐるみを受け取るとふわりと優しい表情を浮かべて抱きしめた。

「尊い……」
後ろにいた女性客がよく分からないことを言って膝から崩れ落ちた。同行者と思しき女性が「あんたを介抱する身として恥ずかしくてしょうがない」とぼやいている。何も見なかったことにした。
続いて由比ヶ浜・一色の挑戦。
「よーし、当てるぞー」
「うーん、どれも倒れづらそう……」
意気揚々と銃を構える由比ヶ浜の横で、一色がぶつぶつと小言を呟く。おいやめろ、おっちゃんの頬がひくついてるぞ。そういう本音は祭りで言っちゃだめ！
２人が揃って銃を構え、台に肘をついてこちらに尻を突き出す体勢になった瞬間――
「……っ」
反射的に目を逸らしたが、それでも目に飛び込んできた情報の奔流に脳を焼かれる。

――聞いたことがある。若者は女性の胸に執心しがちで、年を重ねると尻に関心が向くのだと。
その説を初めて聞いたときは「そんなものなのか」という程度の感想しか抱かなかった。しかし、自分の視線が街中の女性や、ＰＣの画像・動画の中の女性のどういった部位に自然に向くのかを改めて意識すると、関心のほとんどが女性の胸部に向いていることに気付いた。
すれ違った時に、女性の胸の大きさをチラ見する。
身体のラインが浮き出ている服は、をかし。
谷間が見えているのは「あざとい」だの「ビッチなのでは」だの諸々考えてしまえど、結局は――いとをかし。
俺の興味関心はそこでストップして、すれ違った女性の後ろ姿、あるいは自分の前を歩く女性の後ろ姿に関心を寄せたことは、ほとんどと言っていいほどになかった。
思うに、何かに興味を持つことは、身近にいる人の影響が大きいのでなかろうか。

「父親がハマっていた戦隊もの」
「兄がよく観ていたアニメ」
「最近急に女らしくなった姉のタンクトップ姿からちらりと見えた胸の谷間」
「親戚のお姉さんが遊びにきたとき、落ちた紙を拾おうとしたときに見えた胸の谷間」
「クラスメイトの女子が暑い暑いと胸元に下敷きで風を送りこむときに見えた胸の谷間」
こういった例はいくらでも挙げられるだろう。途中から例が偏ったのは気にしない。
こういったきっかけにより、それまでまるで気にも留めていなかったものが急に視界に留まり意識するようになるだろう。つまり胸に興味が湧くわけだ。
つまり、胸に興味が湧く。
胸に、興味が、湧く。
大事なので3回言った。
――胸に対して、尻というものはそういったチャンスが幾分少ないように思われる。
同年代の女子であれば、そもそも尻がある程度の大きさになるまで成長するのに時間がかかるが、例え尻が未発達であっても、胸チラする機会があれば一気に興味が胸に傾くだろう。
尻に興味を示す例として、パンチラはどうだろうか？　これはそもそも遭遇機会がそうそうない上に、例え中の下着が見えたとしても「下着が見えた！」とは思っても「うお、良い尻！」という感想を抱くには至らないことが多いのではないだろうか。
こういったことを鑑みても、若者が尻よりも胸に関心が向きやすいという説は納得がいきやすい。
――信じられないほど長くなったが、尻に関心が向くようになるには「身近な家族や友人などの尻を見て、性を意識する」というハプニング、いやライフイベントとも言うべき事態に遭遇することが肝要と思われる。

つまり、つまりだ。
「……」
俺は今、目の前で突き出された、由比ヶ浜と一色の、意外にむっちりとした尻をほんの一瞬見ただけで――新たな性癖に目覚めた。
簡潔に言うと、今この瞬間に尻も好きになった。
由比ヶ浜の尻は胸同様に強烈な主張をしており、色気と同時に安産型ともいうべき安心感を備えている。予想通りでいて予想以上の双丘が俺を追い詰める。
対して一色の尻は由比ヶ浜ほどの大きさこそないものの、ほっそりした身体からは想像もできないほど意外なまでの肉感があった。思いもよらぬギャップが俺を追い詰める。
なんで俺は追い詰められているんだ。

「あー、だめだったー」
「難しいですねー」
……顔を逸らしたまま思考を重ねているうちに、由比ヶ浜と一色が撃ち終えていた。
「……」
ずっと顔を逸らしていたのは恐ろしいほど不自然だし不審者にしか見えないだろうが、今は祭りの真っ最中だ。俺の奇行になど誰も興味を示さないだろう……とタカをくくっていると。
「……」
「……」
雪ノ下と三浦が信じられないくらい冷たい目を向けていて。
「お兄ちゃん、ひねくれてるくせにそういうとこは分かりやすいよねえ……男の子だねえ」
小町は呆れたように笑いながら俺の肩をぽんと叩き、なにやら親戚のお姉さんみたいなことを言ってきた。
いたたまれない。
なんだか、とっても、いたたまれない。
× × ×

「次は俺らだな。……なあ、流石にそろそろ……」
「なんか言った？」
「いえ、なんでも……」
機嫌直せよ、などとは口が裂けても言えなかった。
俺が尻を見ていたことに対して存分に遺憾の意を示している（と思われる）三浦さんが超怖いです。助けてください。
銃を受け取って並んで立つものの、隣から感じるオーラの圧が洒落にならない。なんか左肩がヒリヒリする。助けてください。
「……ん？」
どうやったらこの地獄から抜け出せるんだ……と悩み抜いていると、三浦の視線がある一点に縫い付けられていることに気付く。
「何か欲しいものでもあるのか」
「……っ、別に、なんもないし」
俺の言葉にハッとした三浦が、なぜかつかなくていいウソをつく。
「別に気にする必要ないだろ。俺は欲しいものはないから、協力するぞ」
空気感を元に戻したい思いもかなり強いが、それ以上に単純に――三浦が欲しいと思うものなら、協力を惜しむという発想自体が湧かなかった。
俺の言葉に三浦が顔を逸らす。出店の古びた味のある電球に照らされた三浦の頬がほんんのりと朱に染まっていて、思わず見惚れた。
ロールの巻かれた髪の毛先をくりくりといじったかと思うと、
「……あれ」
後ろにいる小町たちにも聞こえないほどの消え入るような声で呟いて、景品の中に混じっていた少し大きめのウサギのぬいぐるみを指差した。
「わかった。一緒に狙うか」
「……うん」
更に小さくなった声で頷く。よほど恥ずかしいらしい。俺は銃を構えながら、さり気なく狙いをウサギのぬいぐるみに定めた。
1発目。俺の弾はウサギの隣のお菓子の箱に当たったものの倒れ

ず、三浦の弾は屋台の壁にパチッと虚しく当たった。
２発目。三浦の弾がウサギのぬいぐるみの肩に当たったものの倒れず、俺の弾は空を切った。
そして３発目。真剣に狙いを定めている三浦の横顔を一瞥して引き金を引くと――俺と三浦の弾が同時にウサギのぬいぐるみの頭に当たり、まるでスロー再生しているかのようにゆっくりと倒れた。
「いよっしゃ……っ！」
予想以上にテンションが上がってしまい、慣れない声を上げて左隣を向く。三浦も興奮で顔を上気させていて、自分のテンションに心が付いていっていないようだった。
目が合ったまま、２人の距離がわずかに近付く。時間感覚が圧縮されて、ゆっくり動く身体をどこか他人事のように眺めながら、高速で思考が巡ってゆく。
まずい。このままだと舞い上がってハグしてしまいそうだ。三浦も何が何だかわからないといった顔をしている。たぶん、このまま身体を慣性に任せてしまえばコンマ何秒後かには三浦と抱き合っているだろう。
ただしそのイベントの直後、俺は死ぬ。社会的にも、肉体的にも。ちなみに肉体的死とは凍死のことを指しています。雪女さんがすぐ後ろにいるので。
どうしよう、身体の動きをぴたりと止めることはできそうにない。しかしこのままでは――！
焦りに焦った俺は、咄嗟に右手を高く上げた。三浦が目を見開き、釣られて右手を上げる。
次の瞬間――パァン、と小気味の良い音が鳴り。
俺と三浦は、ハイタッチを交わしていた。
『……』
射的の屋台の前のごく限定的な空間に、奇妙な沈黙が流れる。
今日この祭りに来ているメンバーの中で、ハイタッチを自然にできそうなのは小町、由比ヶ浜、一色だろう。雪ノ下と三浦と俺はとても自然にはできない側だ。それは普段のテンションや振る舞いの違い

であって、どちらが優れているなどといった話ではない。
俺と三浦、ともにハイタッチをしそうにないキャラの２人が、ハイタッチをする。
テンションに任せて、柄にもないことをする。
それすなわち――死ぬほど恥ずかしい。
『……っ』
相手のリアクションを見る余裕さえなく、俺と三浦は全力で顔を逸らした。顔が熱い。なんだこれ、なんだこれ、なんだこれ！
「おめでとう！　やるねえお二人さん。はいよ、景品だ」
「あ、ありがと、う、ござい、ま、す……」
死角ギリギリのところで、おっちゃんが三浦にウサギのぬいぐるみを渡している。三浦がゼンマイが切れかけた人形のような声で答えて受け取った。
「そ、それじゃ、次に行きましょうか！」
三浦も絡むと流石に対処に困ったのか、小町が不自然に高いテンションで促してくる。由比ヶ浜と一色も小町同様にテンションを上げ、雪ノ下は何やら複雑な表情でこちらを見ている。なんだ、同族としては己も辿るかもしれない悲惨な末路を見てしまった気分なのか？
「ヒキオ」
４人がするすると祭りの喧騒の中を進むなか、俺の半歩後ろにいた三浦がか細い声で呼びかけてきた。振り向くと、ウサギのぬいぐるみを片手で抱きしめながら恥ずかしそうに目を泳がせた三浦が、上目遣いでじっと見つめてきている。
「……ありがと」
「……あー、まあ、２人でやったからな、大したことねえよ」
頭をがしがしと掻いて答えると三浦が目をぱちくりとさせ、やがてふっと柔らかい笑みを浮かべた。
「……ふふ、素直にどういたしましてって言えばいいのに」
「うるせえな……」
心臓が鷲掴みされたかのように鼓動が高まるなか、喉から這い上

がってきた言葉は情けないくらい素っ気ない言葉だった。
そんな俺の言葉に対しても、三浦はまるで年上のお姉さんのような柔らかい笑みを浮かべた。
続く。

（19）

賑わいを増す祭りの雑踏の中を、俺を含め6人が進んでいく。小町と由比ヶ浜がはしゃぎ、一色がちょこちょことこちらにちょっかいをかけながらも同じようにはしゃぎ、雪ノ下が3人を温かく見守る――そんな光景を、一番後ろにいる俺と三浦が眺めていた。

「あ……っ」

不意に、隣から消え入りそうな声が聞こえた。

振り向くと、三浦が困った表情を浮かべて屈んでいる。

「どうした」

「切れた……」

見ると、浴衣の着付けをしてくれた店で貸してもらった下駄の鼻緒が切れていた。

これはまず、小町たちに言わないと……と前を振り向く。

「うお……っ」

砂浜に波が押し寄せるように人の密度が増していて、ほんの数秒の間に前の4人がすっかり見えなくなっていた。

幸いにも出店のすぐ前を歩いていたため、店の裏側の暗がりにあるベンチがすぐに目が付いた。

「取り敢えずあそこに座るか。歩けるか？」

「ん、片足なら、なんとか……」

三浦に尋ねると、鼻緒の切れた下駄を持ってひょこひょこと片足で歩きだした。

「ほれ」

「え……」

歩きづらそうだなと思った瞬間――つい、小町に対してするのと同じように、そっと手を差し出していた。三浦は俺の伸ばした手をまじまじと見つめている。なに、そんなに珍しい手相なの？　などと思ったが、よくよく考えなくてもこの状況はとてつもなく恥ずかしい。

肩に掴まってもらおうとも考えたが、身長差を考えると幾分やりづらい。それならばいっそ、と思って手を差し出したものの……2人の

動きがぴたりと綺麗に止まってしまった。石のように固まった俺たちを避けて人波が流れていくのに気付いて、三浦が恐る恐る手を差し出した。
そっと手が触れる。
三浦の手は、驚くほど細くて、柔らかくて、温かかった。
「……行くか」
「う、うん……」
俺はベンチの方をひたすらに見ていて、三浦の顔を見ていなかった。見ることなんてできなかった。きっと、三浦も俯いている気がする。
顔が、何の冗談かと思うほどに熱かった。

× × ×

「座っててくれ」
三浦をベンチに座らせ、スマホで小町に連絡をとる。俺たちが祭りの喧騒から一歩離れたところにいるとはいえ、小町たちは未だに雑踏の中だろう。メッセージで軽い状況説明をして、わかりやすい場所で待っててくれと伝えておいた。小町の返事がくるのを待っている間に、三浦の下駄の修理を済ませることにする。
三浦は足をぷらぷらさせて、所在なげに俺を見つめてきた。座っているため自然と上目遣いになり、慌てて顔を逸らす。
「……あーし、直し方わかんない……」
「心配すんな、調べるから」
言いながらスマホをすいすいと動かして、鼻緒の直し方を調べる。おうおう、いくらでも出てくるぞ。
「ふむ、手ぬぐいかひも状のものが必要……あ」
浴衣をレンタルしてもらった店で、手ぬぐいをサービスでもらったことを思い出す。なんとタイミングのいいことか。
財布をちらりと見て五円玉を探す。あった。
「三浦、貸してくれ」
「ん」

隣に座り、鼻緒の切れた下駄を借りる。
まず、手ぬぐいを縦に裂いて、細い布地を用意する。
そして、五円玉の穴に裂いた手ぬぐいを通す。
五円玉に通した手ぬぐいの両端を、下駄の底の穴に通す。
下駄の上側に通した手ぬぐいをねじる。
ねじっていない部分を結んで前ツボ（親指と人差し指で挟むところ）を作る。
俺がスマホを見ながら必死で格闘する様を、三浦はじっと見つめていた。ぶっつけ本番で、しかも女の子が見ている目の前でやるってのはいささかハードルが高くないか……？　とは思いつつも、この後の三浦の移動の快適さが俺の修繕にかかっていると思うと手は抜けない。
額に汗を滲ませて慎重に作業をしていると、手ぬぐいが顔に伸びてきて、俺の汗をそっと拭ってくれた。
「え……」
「あ、大丈夫。これ使ってないやつだから」
俺と同じく着付けの店でもらった手ぬぐいをもった三浦が、俺の反応に対して見当違いの心配をしていた。三浦が汗を拭ってくれたという事実に固まっていると、ようやく俺の反応の意味を理解したのか慌てだした。
「……ごめん、迷惑だった？」
形の整った眉をひそませて悲しそうな表情をされ、大いに慌てる。
「いや、なんだ、その、助かる。続けてくれていい。いくらでも拭いてくれていいから」
「そんなに汗かいてないでしょ」
テンパりにテンパった俺の反応を見て、今度はおかしそうに笑った。
「ほら、汗拭いたげるから」
「お、おう……」
何が楽しいのか、三浦は柔らかく目を細めて俺の顔を丁寧に拭いてくれる。先程までとは違った原因で汗が出てきた。こしこし、くしく

し、と慈しむように汗を拭き取られ、作業を再開する。顔は熱いままだった。
「……こんなもんか」
なんだかんだで作業を終えると、再び顔に汗が滲んでいた。
「ありがと」
礼を言いながら、再び汗を拭ってくれる。なんだかクセになりそうで怖い。
「ちゃんと履けるかどうかわからんから、一回試してくれ。ダメだったら調整するから」
「ん、わかった」
三浦の足元に下駄を置く。流石に跪いて足を持って下駄を履かせる……などという大正ロマンな真似はできなかった。
三浦が座ったままで下駄を履き、そっと立ち上がる。ちょこちょこと歩いて見せると、振り返って微かに笑った。
「大丈夫みたい。ありがと。ヒキオ、意外に器用なんだ」
「意外にとはなんだ」
「冗談だって」
三浦がからからと笑う。この子がこんな風に笑うのは珍しい。祭りの雰囲気によって浮かれているのだろうか。
「じゃ、行くか。小町から連絡が来たから」
「ん、わかった」
残った手ぬぐいをしまって立ち上がり、祭りの喧騒に戻ろうとした瞬間。
「あ……っ」
日陰で土が湿っていたのか、三浦がずるりと足を滑らせる。咄嗟に腕を伸ばすと、驚くほど軽い身体が腕の中に収まった。
目の前で流れる祭りの喧騒が、遠い対岸の別の国であるかのように遠く思えた。
「んぁ……っ」
固まった俺の腕の中で、三浦がくぐもった声を漏らす。呆気にとられて漏らした声だろうとは思うものの、ひどく悩ましい声に聞こえて

動悸が収まらない。目の前で揺らめく金髪から甘やかな匂いがして、くらりと目眩がする。
「だ、大丈夫か？」
「う、うん……」
最低限の会話を済ませると、綿雲のような沈黙が降りてくる。決して重苦しい沈黙ではなかった。三浦は俺の胸板におでこをこすり付けたまま、同じく胸板に添えた手をきゅっと握る。
今までの「これくらいな３０秒は経っている」「もう１時間は経っただろう」といった時間経過の大まかな感覚が全く通用しないくらい、完全に感覚が麻痺していた。
１分が１時間にも思えるし、１時間が１分にも思えるような、めちゃくちゃな時間感覚。ありとあらゆる感情が脳内で目まぐるしく渦巻いて、思考が止まっては暴走するのを繰り返した。
「……行くか」
搾り出した声は掠れていて、三浦の身体を離すために両肩を掴んだ手は震えていた。理性と本能が熾烈に争った結果、短時間で尋常でないほどの疲労感を味わった。
「……」
三浦が上目遣いで俺を見つめた表情は、自惚れでなければ、何か期待しているようにも見えた。
けれど、それと同時に何か恐れているようにも見えて、安易な行動をしてはこの子の心をばらばらに引き裂いてしまうような気がした。
俺は、三浦の良い匂いのする髪をくしゃりと撫でるのに留めた。
三浦は俺が撫でた頭をぺたりと触って目をぱちくりとさせると――やがて、くすりと笑った。
「……ヒキオらしい」
「……うるせえ」
妙に楽しそうに笑っている姿が、どうしようもない程に腹立たしく、それと同時にどうしようもないほど可愛らしい。
俺は何をしたかったのか。
三浦は何を望んでいたのか。

少なくとも前者は自分でよくわかっていて、後者も薄々勘付いてはいた。

それでも、俺は何もしなかった。千載一遇のチャンスを逃してはそうそう同じことができるチャンスは来ないだろう。

三浦を見ると、やけに楽しそうに笑っている。「あーあ、ほんとヒキオらしい」と、まるで年上のお姉さんがからかうかのような口調で囁いてくる。

祭りで賑わう音の波よりも、三浦の言葉と自分の心臓の音の方がよっぽどはっきりと聞こえていた。

続く。

（２０）

三浦の下駄を直したあと、二人で祭りの喧騒に横から飛び込んだ。

「む……」

行き交う人波の密度が、下駄を直す前と比べて明らかに増していた。先程までを早朝の電車とするなら、今は通勤ラッシュのピークといったところだろうか。流石に満員電車ほどの不快感はないが、それでも道行く人が思った通りに進めないことに若干の苛立ちを覚えているのが見てとれた。

うわー、入りたくない。

真っ正直な本音だった。

小町が指定した場所はついさっき射的をした店で、普通に歩けば5分とかからない場所だ。しかしこの密度の人波をかいくぐりながらではもっと時間がかかるだろうし、その間に三浦とはぐれる可能性だって十分にありそうだ。

「……」

ちらりと三浦を見やる。三浦は「行かないの？」と無言で小首を傾げて尋ねてきた。思いの外可愛くて思わず目を逸らす。

数秒の間逡巡すると、俺は帯に挟んでいたうちわを手にとり、扇ぐ部分を掴んで取っ手を三浦に差し出した。

「……すげえ混んでるから」

言葉足らずにも程がある声掛けだったが、三浦は色々と察してくれたようだった。本文よりも隠れた文脈の方が多いのではと思うほど厄介な問題の解答がわかった上で、こてんと首を傾げる。

「……なんでうちわなの？」

答えづらい。

「察してくれ」

今できる精一杯の言葉を呟くと、三浦がくすりと笑った。

「そ」

素っ気ない返事が気になったが、これで三浦がうちわを持ってくれれば、はぐれる心配は幾分減るだろう。

うちわが引っ張られる感触がするのを待っていると――
「……え？」
うちわがひょいと奪われて、代わりに柔らかな感触が手を包み込んだ。
「別に、こっちでいいし」
さっぱりとした声音とは裏腹に、三浦は顔を逸らして隣の屋台を眺めている。俺の右手を包み込む三浦の左手はとても温かくて、細くて、柔らかくて、少し震えていた。もしかしたら震えているのは俺の手かもしれないが、考えれば考えるほど恥ずかしくなるのは目に見えている。深い思考は止めた。
「……あいよ。じゃあ行くか」
今にも裏返りそうになりながらなんとか平静を保って答えると、三浦は目をぱちくりとさせ、拗ねたように顔を逸らした。俺からさらりと奪ったうちわで口元を隠す。
「……もうちょっと、動揺しろし」
がんがん動揺してますがな。
独り言にしては若干声が大きいんじゃないですかねえ……というツッコミは心の中に留めておいた。

× × ×

人ごみの間をひたすら進む間は、三浦と話す余裕はなかった。それでも、時折俺の存在を確かめるように、細い指にきゅっと力を入れる仕草は強く記憶に刻み込まれた。
「あ、いたいた！　お兄ちゃーん！」
鬼のような人波が幾分緩んだ頃、小町が元気よく手を振るのが見えた。他のメンバーも全員いる。
しまった、まだ手を繋いでいた……と焦りを覚えた瞬間、三浦からするりと手を離した。ちらりと隣を見やると、三浦が少し寂しそうな表情を浮かべている……気がした。真偽はわからない。
「わりいな」
合流するなり謝ると、由比ヶ浜が「ううん、全然」と心底安心した

といった様子で微笑みかけてきた。三浦と目を合わせて「よかった」と頬を緩める様に、俺や雪ノ下はまた違った温かい関係性を感じる。
「そっちは大丈夫だったか」
何かトラブルはなかったかという意味で聞いたのだが、由比ヶ浜は若干違う意味で捉えたようだった。
「大丈夫だよ、ヒッキーがいなくても全然困んなかったから」
「お前それ俺が誹謗中傷に対する耐性がなかったら泣いてるぞ？」
トラブルがなかったのは何よりだが、俺の心が不意にキュッてあった。キュッて。
由比ヶ浜が「え、あれ？　ちがった？」とわたわたしていると、雪ノ下がふっと優しい笑みを浮かべた。
「あら、由比ヶ浜さんはありのままの事実を告げただけよ？」
笑みを浮かべて刺しにきた。
「こういう時にこそ『あー、先輩ってほんと存在感ないんだなー』って思いますねー」
一色がにっこにこの笑顔でもう一本刺しにきた。俺は黒髭じゃねえぞ。当たりの穴にナイフを刺したら飛び出したりしねえぞ。
「あれ？　何これイジメ？」
冗談と分かっていながらも泣きそうになっていると、小町がとてとてと寄ってきてにこぱーと笑いかけてきた。天使か。
「お兄ちゃんお兄ちゃん。大丈夫、これも皆さんの愛情表現だから」
「そんな歪んだ愛情はいらねえよ」
心の底から願いだった。小町の言葉が聞こえたからか、由比ヶ浜、雪ノ下、一色があらぬ方向を向いている。何これ、会話もしたくないの？
この後、俺が修理した下駄を三浦がみんなに見せて各々感心して（からかいがかなり混じったが）、再び全員で行動を開始した。

×　×　×

祭りの最後の花火は、規模こそそれほど大きくはないものの、高校生活最後の夏休みに見る花火ということで、思っていた以上にしんみりと見てしまった。

花火を見るという行為は、切なくなったり、夏も終わりだなと思ったりと、なんだか負の側面を見てしまいがちになる。
ふと周りを見やると、雪ノ下と由比ヶ浜が寄り添って静かに見上げていて、小町と一色が楽しそうにはしゃいでいて、三浦は――どこまでも寂しそうで、それでいてどこまでも澄んだ表情を浮かべていた。
「……？」
俺の視線に気付いたのか、三浦と目が合った。俺が目で「すまん」と謝ると、三浦が柔らかく微笑んだ。その瞬間、一際大きな花火が空に咲いて、目の前で浮かべられた笑みが鮮やかに照らされた。
三浦の笑みが照らされた時間は、ほんの1秒にも満たない程度だった。
それでも、俺の脳裏には、まるで一枚絵のように強烈に残った。
もしかしたら、何週間、何ヶ月、何年と経っても忘れられないような――そんな気さえした。

× × ×

祭りが終わり、浴衣レンタルの返却も終えて、さてこの後はどうしようかという話になった。時間はそこそこ遅いが、軽くどこかに寄る程度の時間ならある。
「あのー、皆さんがよろしければ、ちょっと寄りたいところがあるんですが……」
小町がもじもじとしながら（可愛い）尋ねてくる。雪ノ下と由比ヶ浜、一色が快く受け入れたところで、三浦が「ごめん」と気まずそうに笑った。
「ちょっとあーし疲れてるみたい。もう帰るわ」
「そっか。すっごく混んでたもんね。優美子……帰りは一人で大丈夫？」
「大丈夫、ほんとにちょっと疲れただけだから」
由比ヶ浜が気遣わしげに話しかけ、三浦が困ったように笑ってひらひらと手を振る。さて俺はこの場合どうするのが正解なのかと悩んでいると、いつの間にか隣に忍び寄ってきていた小町に小突かれた。
「お兄ちゃん。送ってあげなよ」

「え……」
小町が悪代官ばりに悪い笑顔で「にひひ」と笑っている。腹立つけど可愛い。
「どうせ『寄り道すんのもだるいなー、どっかで落ち着いてお茶でもしようもんなら、益々俺が浮くし』とか考えてるんでしょ？　お兄ちゃんしか男子いないもんね」
「お前すげえな、流石は俺の妹だ」
「えっへん。それじゃよろしくね！」
「え、いや、あれ？」
俺の言葉をどう曲解したのか、俺が三浦を送るという流れを快諾したことにされてしまった。見れば雪ノ下、由比ヶ浜、一色もその流れを受け入れているようで、俺に「よろしく」とアイコンタクトをしてくる。
流石に頭が付いていかなくて「いやちょっと待て……」と言いかけたところで、三浦がふらりとよろめいた。一瞬の出来事だったため、他のメンバーは気付いていない。
……ああ、これは……確かに心配だ。
ゆらゆらと迷っていた心が、いとも簡単に定まった。
三浦の隣に歩み寄る。
「……大丈夫、じゃないよな」
「ん……平気だし、こんくらい」
「いや、送る」
「え……？　い、いいよ別に……」
「いいから」
「う、うん……あ、ありがとう」
本当にいやなら、少し距離を置いた場所で護衛しながら歩かせてくれ。
それくらいの気持ちで語調を強めて言うと、三浦はもじもじとしながらも受け入れてくれた。
続く。

（２１）

小町たちと別れると、俺と三浦はちらりと目を合わせ、何を言うでもなくうなずいた。祭り会場から駅まで一つの川のように連なる人混みの中を、三浦と一緒にゆらりゆらりと流れていく。

祭りのときほどではないが、人波の密度はかなりのものだった。いつもならしゃきしゃきと歩くイメージのある三浦が、よほど疲れているのか油断するとすぐ視界から消えそうになる。

「大丈夫か」

「うん……大丈夫」

一度完全に見失い、ゆらゆら揺れる金の髪を目印になんとか三浦を見つけると、驚くほど力なく笑った。これは早く電車に乗った方が良さそうだ。座れる可能性が低いのがきついところだが。

駅の改札を抜けてホームに行きつくと、ちょうど目の前で電車が行ってしまった。しかし最前列に並ぶことができた上に、次の電車も数分後に来た。

電車のドアが開き、スーツと私服がごちゃ混ぜになった集団がダムの放水のように流れ出るのを見送って中に滑りこむと、ちょうど２人分の席が空いていた。

三浦を先に座らせて、俺は俺でそれなりに疲れていたので遠慮なく隣に座ることにする。幸い俺たちの後ろに並んでいた人は祭り帰りと思われる若い人だけだったので安心した。

一人のときなら遠慮なく座ったり遠慮なく譲ったりできるが、他の人といると途端にそういった決意が揺らぐからな。他の人といるときって言っても、俺の場合統計学的に全く意味がないくらいサンプルが少ないんだけどね！

ようやく人心地ついてふひーと息を吐き、何とはなしに中吊り広告を見ていると、隣に座った疲弊せし獄炎の女王（失礼）がぽしょりと呟いた。

「ありがと」

「ん、どういたしまして。……何に対して？」

反射的に感謝の言葉を受け止めたものの、何に対しての言葉かまるでわからない。俺がはてと首を傾げると、三浦は珍奇なものを見るような視線を向けてきた。
「……何の礼かわからないのにどういたしましてって……」
「や、違う、俺はアレだ、感謝とか褒め言葉とかを言った人に対して『いえわたくしは……』なんて謙遜する日本人特有の受け答えをあまり好ましく思ってないだけだ。だからまずは感謝の言葉をきちんと受け止めた。それだけのことだ。だから俺は悪くない。むしろ世間の風潮が悪い」
至極真っ当な反応をされて何だか恥ずかしくなり、思わずゆきのん・いろはすと並ぶ勢いで捲し立ててしまった。膝の上では高速でろくろを回してしまい、向かいの席に座る同年代と思われる女子から「は？」という視線を向けられた。恥ずかしすぎて生まれ変わりたい。
向かいの見ず知らずの女子にさえこんな反応をされるんだから、隣の女王様にはさぞどん引かれるんだろうな……とびくびくしていると――三浦は目をぱちくりとさせただけで、いつもの、それも最近よく見るようになった穏やかな笑みを浮かべた。
「なにそれ、気持ち悪い」
直截な言葉の割に、とても温かい声音だった。不意打ちをくらったことで顔が熱くなっていると、三浦がぷいと顔を逸らしてしまう。なに、顔を見るのもＮＧになったの？
「……送ってくれるのもそうだし、ここまで結構庇ったり守ってくれたりしたでしょ。……だから、そのお礼」
「お、おう、そうか」
照れ隠しなのか金髪をさらりと梳く仕草をすると、真っ赤になった耳がちらりと見えてしまった。上ずった声と可愛らしく照れた表情によって、ろくろを回してあれこれひねっていた思考が一瞬で真っ白になる。
やけに文字数の少ない２人の会話を区切るように電車のドアが無機質に閉まり、ゆらりと電車が動き出す。ホームからまだ流れ込んできていた祭りの喧騒が、ぷつんと途切れた気がした。

発車したあとは2人の会話が綺麗に途切れた。それでも2人の間に流れる空気は意外と悪くない。

祭りの帰り道という、寂しさの象徴のような状況にいるにも関わらず。

不思議と、心は温かかった。

×　×　×

酒を飲むことができる年齢ではないので、俺自身が酔っ払うという経験はない。それでも、両親（主に父親）が酔っ払うのを見たり、夜の街を千鳥足で歩く普段大人しそうなサラリーマンなんかを見て、「ああ、人は酔うとこうなるんだな」という認識をおぼろげながら持っている。

もちろん、程好い酔い方、可愛らしい酔い方をする人もいるのだろう。アルコールを摂取すると普段抑圧したものが出るというから、酔って饒舌になる人は本当ならもっと喋りたいと思っているし、酔ってけらけら笑う人は本当ならもっと笑いたいと思っているし、酔って服を脱ぐ人は普段から服を着たくないのだろう。最後のケースは本当にそうなのかはわからない。

こうした「酔う」という状態と、若干のベクトルは違えど似た状態がある。

それが「眠い」という状態だ。

アルコールが入っていないとはいえ、眠くなると人の本音が出やすくなると思っている。疲れているからこそ余裕がなくなり、その本性が明らかになる。眠くなってもいつも通りの人もいれば、眠くなったら露骨に不機嫌になる人もいる。ちなみに低血圧で朝は死にかけているという人は除いた方が良いだろう。

――と、ここまで長々と前置きをしましたが。

端的に、何が言いたいかと言いますと。

「……祭り、楽しかった……」

「ん、そうだな」

たどたどしい口調で、幼ささえ湛えた声音で話す、ウトウトした三浦優美子という女の子が。

ちょっと本気で戸惑うくらい、可愛い。

×　×　×

お互い乗り換えがないので、あとは最寄り駅までのんびりするだけだ。そのことに安心したのか、三浦は電車が動き出して間もなく、ウトウトし始めた。電車の揺れがまるで母の胎内にいるかのごとく心地良いのか、タタン、タタンと揺れるたびに三浦の表情がとろんと心地良さそうに和らぐ。

「寝ていいぞ、起こすから」

「ん、だいじょうぶ……ありがと」

言うと、三浦は目をこしこしとこすり、こくんとうなずいた。まるでリビングで寝ていた子どもを寝室に連れていこうとしているかのような気分だ。最寄り駅を聞いていたから本当に寝てもいいんだが……と思いつつも、ぽわぽわした表情で窓の外を眺める三浦がいつにない可愛さを醸し出していて、この様子をちょっとというかなんならずっと見ていたくなってしまった。

「特に何が楽しかった？」

何の面白味もない質問だが、三浦は「んー」と小さくうなって真面目に考えはじめた。あごに人差し指を当てて……なんてあざとい真似はしないが、無意識になのか足をぱたぱたさせている。和む。

「……花火と射的。あとは……下駄」

「ふむふむ……ん、下駄？」

下駄飛ばしとか？　いや、そんなことをやった覚えはない。

俺が首を傾げると、三浦がこくんとうなずいた。

「うん、下駄」

うーん、答えになってませんねー。しかし可愛いからもはや何でも良い。

寂れたテーマパークに置かれた不気味なマスコットをイメージしながら首をカッコンカッコンと揺らしていると、三浦がちらりと俺を見た。

「鼻緒」

「……あー、そういうことか」

一言で十分だった。それなら下駄って単語で気付けよという話だが。

正直、あのときはだいぶ気恥ずかしいやりとりをしたので、意識的に記憶の隅に追いやっている節はあった。

顔がほのかに熱くなり、顔を逸らして頬をぽりぽりと掻いていると、頬になんだか視線が刺さっていることに気付いた。隣をちらっと見やると、三浦が妙に楽しそうに笑っている。何ぞやと視線を返すが、三浦はにこにこするばかりで何も言ってこなかった。

そのまま会話が途切れて、電車の揺れる音と、祭りの熱が冷めやらない同年代の男女グループがこそこそと話す音だけが耳に聞こえてくる。電車が橋を渡ってゆく。暗い川を船が渡っているのか、蛍のような儚い光が黒い水面にぽつぽつと映っていた。

「……ん？」

ふと隣を見ると、三浦が目を閉じていた。寝たんだな……と思っていると。

（……んんんん？）

右肩に、柔らかな重みがかかる。何が起きたかは確認するまでもなく、眠った三浦がしなだれかかってきていた。長い金髪がさらりと流れ、俺の腕を蠱惑的に撫でていく。

ふわりと香る匂いは甘やかさと涼やかさの両方をまとっていて、鼻腔をそっと撫でられただけで冷静な思考があっさりと消し飛びそうになった。こういうときってどうするといいんだっけ、般若心経を唱えればいいんだっけ？

がちがちに固まり、両膝の上で拳を固めてぴんと背を伸ばしていると、ふと視線を感じた。ちらりと視線を向けると、はす向かいにいる女性と目が合った。

女子大生だろうか、背はすらりと高く、唇が薄く線が細い。格好こそ今時の若い女性といった風だが、どことなく古風な雰囲気を感じた。しかしそれら全体の印象から離れて瞳が大きく、それだけが清楚から離れて活発な印象を残していた。

なんだろう、どこかで見たことがある気がする。わたし、気になり

ます！

女性は俺と目が合うなり焦ったように目を逸らした。そしてもう一度ちらりと俺を見て、それから隣で眠る三浦に目をやった。

そして何故か、座った状態で極めて礼儀正しくお辞儀をされた。

薄い唇が微かに動く。口パクで何かを伝えようとしているようだ。

「（ごちそうさまです）」

「……」

なんだこの人。

溢れ出す思いを抑えこみ、口パクで「どういたしまして」と返した。

女性はにこやかに微笑むと、次の駅で去っていった。

「ん……っ」

三浦が艶めかしい声を漏らしてもぞもぞと動く。

太ももに、白く細い手がそっと乗せられた。

「……っ」

両膝に乗せた拳を更に強く握り、視線を窓の外へ固定したまま、三浦が降りる駅までひたすらがちがちに固まっていた。

安らかな寝息が聞こえるたびに、俺の気持ちは三浦の安らぎと反比例するかのように荒ぶっていた。

続く。

（２２）

夏休みが終わり、二学期が始まった。街を歩けば太陽とアスファルトの熱で挟み撃ちに遭うのは相変わらずだが、それでも夏休みという期間が終わるのは精神的に夏の終わりを思わせる。夏の熱波を盛り立てるような蝉の鳴き声も、今では徐々に終わりゆく夏を惜しんでいるように聞こえた。

二学期の初日。俺の席の前に座る三浦と葉山の様子を見ていた。２人は、一度目の告白のときと比べるとずいぶんと自然に会話していた。時折俺の名前が聞こえたかと思うとこちらをちらりと見て笑うというケースがずいぶん増えたが、まあ俺が陰口を叩かれてイジメられているんだろうと思えば気が楽に……ならねえな。会話の内容がものすごく気になるんだが。

三浦の二度目の告白以降、気まずさはほとんどないものの、以前のように三人で勉強会をするということはなくなった。誰が何を言うでもなく、あまりにも自然にその流れができあがっていた。

流石にこの状況で勉強会をやったら、目の前の問題よりも人間関係で胃がやられそうだ。それはしょうがないよな……と思っていた矢先。

席替えで、三人の位置関係ががらりと変わった。

葉山が教室のど真ん中になり、俺と三浦が窓際最後列で隣同士。

これはこれで、何だか心臓に悪くないですか？

×　×　×

席替えをした日の、初めての休み時間。

多くのクラスメイト（ほとんどは名も知らない）は、このごく短い時間でも話し相手を求めて教室のあちこちにグループを作る。グループ内の誰の下に集う、というのを予め決めているかのように、一切の相談なくスムーズに集まる。なんなの、ＬＩＮＥグループで授業中に打ち合わせでもしてんの？

視線を斜め前に向けると、葉山は複数の男女に囲まれていた。同じサッカー部と思われる男子やら、きゃーきゃー騒ぐ類の女子（失礼）数

名ずつに見事に囲まれている。
他のクラスからも来ているようだった。なんで急に……？　と思ったが、今まで葉山は基本的に三浦と話していたから、その雰囲気に気おされていたのかもしれない。三浦さん、縄張り意識強そうですもんね……。
当の三浦はどうするのかしらと隣を見やると、既に次の授業の教科書とノートを机に出し終えた彼女と目が合った。
「……」
互いに何の言葉も発さぬまま、瞬きを二度、三度。
三浦は俺を見たまま、ふむ……とまるで品定めでもするかのようにあごに手を当てた。何かのオーディションでしょうか。
「ヒキオ、飲み物買いに行こ」
「え」
予想もしなかった言葉に間抜けな声が漏れる。三浦は俺の戸惑いをまるで気にせず（少しは気にしてほしい）、勢い良く立ち上がった。
「ほら、早く」
「え、あ、ああ」
シャキシャキと教室の後ろを横断する三浦の背中を慌てて追う。傍から見れば姐御と舎弟にしか見えないだろう。周りからの視線もいくつか感じたが、今はそれ以上気にしている余裕がなかった。
教室を出ると、クラスを跨いで雑談に花を咲かせる男女があちこちにいた。人ごみの間をぬって歩いていると、数日前の祭りを思い出す。三浦の隣に並んで歩調を合わせると、わざと気だるげな声を上げた。
「話が読めないんだが」
三浦はちらりと俺を見ると、何やら楽しそうに微笑んだ。
「あーしの好きな飲み物を把握しといてほしいの。今後買いに行ってもらうから」
おっと、中々の女王様ぶりですね。
「え、なに、俺はパシリ認定されたの？」
確かに、下駄の鼻緒を直したりとか帰り道の安全を確保するとか、

パシリと言えなくもないけども。面と向かって宣言されるとちょっと泣いちゃいそう。
仲良くなったんだが遠ざかったんだかわからない状況に困惑していると、三浦は俺をちらりと見やり、頬を仄かに赤らめた。
「……言っとくけど、あーし、こんなの誰にでも頼むわけじゃないからね？」
思わぬツンデレ発言に戸惑う。よくよく考えなくても理不尽なはずなんだが、理性とは対照的に、心臓はわかりやすいほどに高鳴っていた。
「……そうなのか？」
「そうだし。適当な人に頼んで、毒でも盛られたらやじゃん」
「どこの戦国時代だよ」
「あ、あの自販機がいい」
さらりとツッコミを流された。
三浦が指定したのは、校舎の端も端にある、特別教室がある棟の自販機だった。今は話しながら来たからまだいいが、一人でふらっと来るような場所ではない。
「え、なに、ここまで買いに行かされるの？」
思わず本音を漏らすと、三浦が金髪の毛先をくりくりといじり、ぷいと顔を逸らした。
「……いやなら、別にいいし」
可愛らしく拗ねていて、それでいてちょっと悲しげな表情を見て一気に慌てる。よくよく考えなくても理不尽なことを言われているのには変わりない――信頼してる人をパシらせるってどんな思想だよとか思わないでもない――んだが、いかんせん可愛さが俺の思考判断能力を極めて低下させている。
「いや、行かないとは行ってないんだが、その、うん、なんていうか」
いかん、軽口さえ出てこない。高速でろくろを回して意識高い言葉を繰り出そうとしても何も出てこない。ところでスタバのハイチェアーに座ってＭａｃを使ってる人って未だにいるんだろうか。
俺が慌てる様子をしばしじーっと見ていた三浦が、ぽつりと呟い

た。
「……じゃあ、あーしが一緒ならいいの？」
「え」
思わぬ発言に戸惑う。
なんだこの子は。休み時間という貴重な交流時間を、俺とこんな寂れた場所まで飲み物を買いに行くのに費やそうと言うのか。
「……いいのか」
様々な意味を込めて言うと、三浦は視線をせわしなく泳がせたあと、上目遣いで見つめてきた。
「……別に、ヒキオとなら、……い、いいし」
「……そ、そうか。まあ、それなら……俺も、構わんけど」
気だるげな自分の声が、面白いほど上ずっている。三浦は三浦で、顔を逸らして無言になってしまった。
とはいえ、短い休み時間に往復でそれなりに時間がかかる場所に来ている。妙な気恥ずかしさを拭えないまま、三浦から「あーしがさっぱりしたいときはこれ、疲れたときはこれを飲んでるから」などと説明を受けた。
どこか上の空で説明を聞いていると、「……どうせ一緒に来るから、そのうち覚えて」と頬を赤らめて言われたものだから、余計に説明されたことが頭から飛んだ。

夏に高まった熱は、秋が訪れて冬が舞い降りればいずれ冷めるのではないか。ましてや受験生という立場では、とにかく心の余裕が削られる。「あの時の良い雰囲気は何だったんだろう」などと数ヶ月、あるいは一年以上後に思い返すことになるのが関の山なのではないか。
――そんな風に思っていたけれど。
まだ、この熱は。
もやもやして、正体が逃げ水のように掴めなくて、それでいて心地良い温もりを宿した、この熱は。
まだまだ、冷めそうにない。

続く。

（２３）

夏休みが終わっても、三浦との距離感が離れることはなかった。自惚れでないとするならば、むしろ近付いているのではないかとさえ思っている。

夏祭りの際に近付いた気がしたのは、なんとなくわかる。

しかしそれはあくまで、

『夏の終わりの』

『花火大会で』

『２人きりになったから』

という、奇跡としか言いようがない要素の組合せがあってのことだ。顔見知りもある程度いる学校でとなると、あのときの距離感を再現しようなどとは中々思えない。

俺が小学四年生くらいのとき。珍しく両親がリビングで揃って晩酌をしていた。父親が真っ赤な顔でテンション高めに手招きしたので「怖いな～、怖いな～」と稲川淳二の語りを脳内再生しながら近付くと、俺を呼んだこと自体忘れたのかそのまま母親と話し始めた。大人に対して向ける怪訝な顔――今は主に平塚先生に使用している――は、このときに覚えたのだと思う。

父親は母親に尋ねた。至極真剣な顔で。

『なぜ女性は、飲み会でかなり親密になって、なんなら積極的にボディータッチまでしてきたのに、次に会ったときは完全に元の距離感に戻っているのか。あれは俺が見ていた夢だったのか。その辺どうなんですか』

と。

母親は答えた。

『だまらっしゃい』

と。

母親が満面の笑みで斬り捨てたにも関わらず、父親はまるで意に介さずに「なんでなんだ――！　大学生のときも、あの会社のときも、……

なんでなんだー！」と言いながらビールをぐいぐいあおっていた。ダメな大人ってこういう人を言うんだな……と、テーブルの端に手を付いて父親を眺めながら思ったものだ。

ちなみにこのとき、母親が『八幡、ごめんね。これ食べて歯磨きして寝なさい』と言ってチョコを3つほどくれたのを覚えている。今まで食べたことのない味のチョコで、ウイスキーボンボンというのだと教えてくれた。

それ以後、ラブコメで未成年の女の子が酔っ払うシーンに多用されるのを見るたびに、あの不思議な味を思い出している。

……。

……なんの話だ、これは。

とにかく。この話によって、父親に呆れながらもなんとなく学んだのは、「男子が一度高まった熱を持ち続けていても、女子はそうとは限らない」ということ。

これを今の俺と三浦に当てはめるなら、夏休み明けに三浦が思いの外親しげにしてくれたからといって、調子に乗った真似はできない、と言えるだろう。

――けれど。

こんなことを言いながらも、心のどこかで。

何年もかけて培われた面倒極まりない心の障壁が、波打ち際の岩場のように、ゆっくりと削られていっている実感も、これから更に削られて、いずれなくなるのではという予感も、確かに胸に抱いていた。

× × ×

昼休みに三浦と一緒に校舎の端にある自販機に飲み物を買いに行き、そのまま教室で隣り合って食べるという謎の流れができた。席が隣合わせで、お互いどこかへ遊びに行くこともないから自然とそうなるのだが、どうにも落ち着かない。時折由比ヶ浜や海老名さんが遊びに来たり、葉山のところへ遊びに来た戸部がついでに話しかけてきたりもした。戸部だけは三浦がいつも通りそっけなくあしらっていて、

笑いをこらえるのにちょっと苦労した。
ここにいていいのか、とか。
遊びに行かないのか、とか。
何度か聞いてみたくはなった。けれど、三浦が語数の少なさ極まる俺との会話でもころころと笑う姿を見ると、こんな質問をするのは野暮か、とも思えた。
それでも、何日も一緒に隣り合っていると、流石に周りの目が気になる。
ある日の昼休み、財布を持って立ち上がると、三浦がきょとんとした顔で見つめてきた。
「ヒキオ、どっか行くの？」
純真極まる目をして、くりんと首を傾げる。長く伸ばした金髪がさらりと流れた。最近はこの子が元来持っていたであろう素直さがどんどん滲み出てきていて、内心気が気でない。
「あー、いや、ちょっといつもの場所で食おうと思ってな」
テニス部の練習を眺めながら食べることのできる、いつもの場所。2学期はまだ三浦との距離感に戸惑っていて、昼休みに教室以外で食べていなかった。そこに行って一人で昼食をとれば、落ち着くし人目も気にしないで済む。
三浦は俺の言葉に「へー」とそっけなく答えた。そういうことで……と教室を出ようとしたところで、三浦がごく普通に、それこそ由比ヶ浜や海老名さんと話しているときのような気さくさで呟いた。
「あーしも行っていい？」
なんですと。

×　×　×

夏の暑さというよりは秋のぽかぽか陽気と言える程好い気温だった。三浦の提案にテンパりすぎて「あー、いや、まあ、うん……いいけど」と押しに弱い女子なみにたどたどしくオーケーしてしまったため、校舎の端の自販機で飲み物を買っていつもの場所へ向かう。
「ここ？」
「ああ」

マッ缶と購買で買ったパンを持って腰を下ろし、三浦が座るであろう隣をぱっぱと手で払う。三浦は目をぱちくりとさせて、ぽしょりと「……ありがと」と呟き、スカートを手で押さえながらそっと腰を下ろした。

暑いと言えば暑いと言える気温ではあるが、その辺に生えている雑草や土から香る匂いは真夏のような力強さを感じない。まだまだ汗ばむ日は続くけれど、季節は確実に進んでいる。

ランチパックをもそもそと食べながらテニスコートを眺めると、戸塚が所属している男子テニス部が昼練に精を出していた。パコン、パコンとリズム良く鳴る軽やかな音と、昼休みを彩る元気の良い掛け声。戸塚はコートに出ていないが、後輩たちに元気よく声をかけている。

そういえば、昔こいつと対戦したことがあったな……と思い出す。ちらりと隣を見やると、三浦とぱっちり目が合った。

「……懐かしい」

「つってもたかだか1年ちょい前の話だがな」

主語がばっちり抜けた会話だが、流石にすれ違いは起きないだろうと思い話に乗る。いや、ほんとに懐かしい。1年数ヶ月前の出来事なのに、なんだか6年半くらい経ってる気がする。同じ部活の女子の下着姿を見てしまうトラブルなんて今では考えられない。至近距離で話すとか、手を繋ぐだけでも一大イベントだというのに。

俺がしみじみと（？）感慨に浸っていると、三浦の目が優しく細められた。何かを思い出したのか、くすりと笑みをこぼす。

「あんときと今のあんたじゃ、全然印象がちがうんだけど」

「それはお互い様だろ。お前だって全然印象がちがうぞ」

前を向いたまま言い合い、ふっと目を合わせる。ぱちくりと瞬きをして、同時にふっと笑った。

本当に、変わった。

三浦も、そして、きっと俺も。

根本的なひねくれ気質は恐らく一生変わらないのだろうが、それでもこの1年数ヶ月は、俺にとって劇的な密度を持った時間だった。

ならば、この期間は、三浦にとってどんな時間だったのだろうか。
聞くだけ無駄かもしれない。あるいは、仮に尋ねて真面目に考えてもらったところで、きちんと言葉にできないかもしれない。
２人の間を風が吹き抜ける。柔らかな陽気に水を差すような冷たさを帯びた風に、三浦がぶるりと震えた。
「大丈夫か」
ここで格好良く上着でも貸せたらいいのだろうが、そういったキザなことをするとまず間違いなく引かれるし、何より自分の匂いが大丈夫か気にしてしまう。毛布を錬成できたりしないかしら……と妄想して、三浦にバレないようにさり気なく手を合わせた。右手は左手の、左手は右手の感触を確かめただけで終わった。
「ん……大丈夫、もうじき戻るし」
三浦は太ももをさすりながら答えた。そんなに短いスカートを穿いてたらそりゃ寒いですよねぇ……と、ちらりと三浦の脚を見た瞬間――思いきり目が合った。
「……」
「あー、いや、その……」
いかん、思いきり太ももを見た後に目が合った。言い逃れできない。
三浦と目を合わせたまま遠い目をしていると、てっきり刃物のような言葉を向けてくるかと思った三浦が、ぽっと頬を赤らめて俯いた。膝を抱えてしまっていて、なんだか拗ねた子どもみたいになっている。
「……ばかじゃないの」
言葉の割に声音は優しく、何より可愛らしいと思ってしまう。
「あー、その、すまん」
頭をがしがしと掻いて謝ると、三浦は消え入りそうな声で「……別にいいし」と呟いた。いかん、なんだこの可愛い生き物は。
そうこうしている内に昼休みが終わりに近付いていた。そろそろ戻るかと言おうとした矢先、三浦が不意に顔を上げ、じっと見つめてきた。

見慣れた瞳が、静かに揺れている。
何か重大なことを言おうとしているかのような、今まで何度か見たことがあるような、そんな表情。
「ヒキオ、あんたって……その、……」
「……？」
何かを言いかけて、視線を泳がせ、もう一度見つめてきて、また逸らす。誰かが急に話しかけてきたりもしなければ、急にチャイムが鳴ったりもしない。誰の、何の邪魔も入ることなく、俺は三浦が何か言うのをじっと待っていた。
「……ごめん、やっぱ今はいい」
「……そうか」
たっぷり1分近く待った末の言葉にどっと力を抜く。知らず知らずの内に、俺も肩にがちがちと力が入っていた。
三浦が何を聞こうとしていたかは分からない。それでも、『今は』という言い方をしたのだから、いずれ話してくれるだろう。
「そろそろ行くか」
「ん」
三浦の表情は、いつも通りの柔らかい笑みに戻っていた。

続く。

（２４）

休み時間に三浦と２人で話し、昼食を一緒にとる機会が格段に増えた。休み時間の会話は二言三言交わすだけに留まっているし、昼食の席を共にしたところでがんがん喋っているわけでもない。

俺を基準にすると誰でもお喋りになってしまうので最近まで気付かなかったが、三浦はそこまで口数が多いタイプではなかった。

去年の修学旅行の際、コンビニで出会ったときはそれはもう一つ一つの言葉の重みが凄かったもんね！　総武の母とかミウラ・デラックスとか名乗れるまである。

そんな、傍から見れば「なんで隣り合って座ってんのに全然喋らないの？」と言われそうな関係だが。

俺も、そしてどうやら三浦も。

それが存外、心地良いらしい。

×　×　×

２学期が始まって２週間ほど経った、金曜日の放課後。

「ヒキオ」

ＨＲを終えて早々に帰ろうとしていた俺を、三浦が引き止めた。

「どうした」

尋ねると、三浦は金の髪のロールを指でくるくると巻き、何やらもじもじとしている。数ラリーで終わる会話ではなさそうだと判断して、ちらりと周りを見渡すともう一度腰を下ろした。三浦さん、こういう「取り敢えず引き止めるパターン」が結構あります。大人しくなっても女王様は女王様なのか……？　と訝しんでしまう。飲み物を買うときは結局毎回２人で行ってるんだけども。

「あの、さ……明日、暇でしょ？」

「なんで俺の予定が空いてること前提なの？」

恥じらいながら攻撃するのやめてほしい。

俺の切実なツッコミをさらりと流して（結構ひどい）、三浦は俺をちらりと見ては視線を逸らす仕草を何度も繰り返す。エサをねだろうとして躊躇うツンデレの犬みたいだ。そんな厄介なヒロイン気質の

犬なんているのだろうか。
ちゃんと自分で言葉にするのを気長に待っていると、三浦がもじもじしている間に最近名前を覚えはじめたクラスメイトが３人出ていき、俺と三浦以外誰もいなくなった。
静かに深く息を吸う音が聞こえた。
「明日一緒に勉強しない？」
「ん、他に誰か誘うのか？」
ごく普通の質問を反射的に返すと、三浦が目に見えて慌てた。可愛らしい顔にほんのりと赤みが差し、急に幼く見える。
「あ、いや、その……く、空気読めし」
理不尽だ。
意趣返しをしてみる。
「ふむ、既に由比ヶ浜とか海老名さんを呼んでるってことか」
「よ、呼んでない！　そういう空気じゃないって！」
予想よりも慌てている。なんだかちょっと申し訳ない。
ああ、もう……と隣の俺が辛うじて聞こえる声で呟いた後、膝に置いた手をきゅっと握って、俺を真っ直ぐに見つめてきた。
「ふ、２人で、勉強、しないかって、言ってんの……っ」
ぐらり、と世界が揺れた。
もどかしそうにもにゅもにゅと動く唇、ちょっとばかり拗ねたような瞳、微かに覗いている赤くなった細い首。
ありきたりな言葉の組み合わせが、三浦の表情と声音によって目にも鮮やかに彩られた。つい数秒前までは窓の外や教室の様子を眺めていたのに、今は三浦にしか意識が向かない。
「……あ、ああ、わかった……」
へどもどしながら、肯定の言葉を返した。自分の視線が一体どこに向いているのかも分からない。
「う、うん……」
三浦の視線を顔に感じないので、恐らく三浦もどこか妙な方向を見ているんだろう。
願わくば、教室の前を通りがかった人が、この間抜けにも程がある

光景を目撃しませんように。

×　×　×

翌日土曜日、午前９時。

「俺は何をやってるんだ……」

市立図書館の開館時刻と同じ１０時に現地集合ということにしていたんだが、何を思ったのか1時間前に来てしまった。

『お兄ちゃん、そんなに急いでどこ行くの？』

『ちょっとな』

『ほほう？』

『やめろ、目を輝かせるな』

『相手は異性ですか？　同性ですか？　異性ですか？　異性ですね？』

『決めつけてんじゃねえか』

『まあまあ怒らんといてくださいな。で、で、で？　どなたですか？　なんなら小町が候補を挙げてみましょうか？』

『候補？　何のことでしょうか。身に覚えがございません』

『それじゃあお兄ちゃんの気持ちを忖度して何人かに絞りますねー』

『行ってきます』

『にゃー！　待って待って！　ごめんって！』

「……」

ほんの３０分前のやりとりを思い出してげんなりする。結局あの後、小町が「祭りのメンバーなのは確かだよね？　その中で最有力候補を挙げるとすれば……」と呟いたところで、言葉の続きを待たずに全力で家を出た。というか逃げた。

図書館前の広場のベンチに腰かける。ここなら図書館に入る人が一目でわかるし、向こうからもこちらが見えやすい。

……つってもあと1時間あるんだよな……。

９月に入って2週間ほど過ぎたとはいえ、まだまだ暑さは街に居座っている。今日はまだ夏日だそうだ。そろそろ秋の心地良い空気と交代していただきたいところなんだけども。

「……コンビニ行くか……」

漫画の単行本を漁ってみよう。店舗ごとにラインナップが違って地味に楽しいしな。最新の漫画だと「あ、この店はこの作品を置いてるのか」などと作品の選択センスを脳内で偉そうに批評できる。

膝に手をついてよっこいせと立ち上がると、季節の移り変わりを示す涼しい風が図書館前の広場を吹き抜けた。

「あれ、ヒキオ？」

聞き慣れた声に顔を上げる。

朝の日射しを受けてきょとんとした表情を浮かべる三浦は、フリルカットソーにデニムのショートパンツ姿だった。滑らかな肌が目立つ肩が露わになっていて、色白の長い脚がショートパンツからすらりと伸びている。過ぎゆく夏が凝縮されたような姿に、思わず見惚れた。

「……なに？」

数ヶ月前までなら縮み上がるような凄みのある声音だが、ほんのりと朱に染まった頬が素直じゃない照れを表しているのが今ならわかる。

「あー、いや、その、なんだ……いいんじゃねえか」

「……当たり前だし」

ざっくりとした褒め言葉を受け止めて、三浦が俺の隣にすとんと腰を下ろす。脚を組むかと思いきや組まなかった。そういえば最近、この子が脚を組むのを見ていない。

「早いな」

「ヒキオこそ。なに、暇なの？」

「ちがうっつの。なんとなくそわそわ……」

しまった、と思って隣をちらりと見やると、三浦が落ち着かない様子で髪の毛をくるくると指に巻き付けて、俺と同じようにこちらをちらりと見ていた。

「あー、いや、うん、まあ……そんな感じだ。三浦は？」

「え？　あーしは……に、似たような、感じ……？」

「なんで疑問形なんだ」

「……」

身体ごと俺から逸らした。ものすごい拒否のされ方だ。
しかし、どうしよう。開館まであと５５分あるぞ。
未だにこちらに向き直らない三浦を覗き見て途方に暮れていると、どこから来たのか、小さな女の子がこちらにやってきた。とっとことっとこ歩いてきて、俺と三浦の前で立ち止まる。なにやらポケーッとこちらを見てらっしゃる。
「ん？　この子どうしたの？」
女の子の存在に気付いた三浦が俺に尋ねる。知らんですと首を振って答えると、三浦が辺りを見渡した。親を探しているのだろう。俺も一緒に見回すが、親らしき人はいない。
うーん、どうしたものか……と唸っていると、女の子が俺と三浦を交互に見て、にこぱーっと笑った。
「かっぷる！」
『……っ』
俺たちの反応を意に介することもなく、両手をいっぱいに伸ばして俺たちを指差し、足早に去って行った。視界から消える直前に親らしき人と合流したのが見えて安心したものの。
『……』
いたたまれなくなり、２人して身体ごと逸らす。スキーのジャンプで跳んだときのような角度になった。
この後、雑談が再開されるまでにおよそ２０分ほどかかった。
言葉の辻斬り、だめ、ぜったい。

続く。

（２５）

図書館が開く前に、三浦との気まずい空気はなんとか解消できた。時間があればどんな問題もうやむやにできると実感しました。

「……どこで勉強する？」

図書館に入ってすぐのところで立ち止まり、三浦に尋ねた。この図書館は１階と２階に図書を置いていて、３階に学習室や様々な団体が使える貸し部屋などがある。

「んー……２階にする」

「ん、２階？」

学生が使うなら、迷うことなく３階を利用する。学習室の席数は多く、適度にピリッとした静けさが立ちこめているからだ。受験勉強にはもってこいのはずだが……。

「……まあ、そうだな。２階にするか」

「うん」

――３階には総武高の生徒も来るし、地理的に海浜の生徒も来る。学校の中でならともかく、外で見られるとなると色々とややこしいのだろう。さっき図書館前で並んで座っていたときは……ほら、どっちもあらぬ方向を見ていたからセーフってことで。

ちらりと自販機のラインナップを確認する。

マッ缶の存在を確認して、三浦にバレないように手をぐっと握りしめたところで、２階へ続く階段に向かった。

× × ×

図書館が開いて間もなくということもあってか、利用客はまだ数人しかいなかった。のろのろと勉強する場所を探して、端の方のテーブルに座ることにする。６人がけのテーブルのうちの２席を陣取った。

「さて、やるか。三浦は何からやる？」

「あーしは数学。ヒキオは？」

「俺もだ。午前中に理数科目をこなした方が良いと聞くし、何より俺は『好きなものを先に食べるｏｒ後に残す』論争に対して『嫌いなものを先に食べて、心の平穏を真っ先に手に入れる』というやり方を提

唱するほどの男だからな」
「何言ってんの？」
「ごめんなさい」
　心に軽い傷を負って、勉強道具をごそごそと取り出す。結構自信のある論なんだけどなぁ……。こういう論争って決して終わりが見えないよな。それこそきのこ・たけのこ論争なんて永久に終わらないだろ。
「んじゃ、聞きたいことがあったらお互い遠慮なく聞くってことで」
「ん。数学は頼りになんないの知ってるから大丈夫」
「うっせ」
　思わぬ攻撃にそっけない口調で返すと、三浦が楽しげにクスリと笑った。
「冗談だって。前よりはよっぽどできるようになったでしょ」
「……まあな」
　春先、勉強会を始めたときはひどかった。文系科目とのあまりの落差に「え、本当に？」という目を向けられて、とびきりの腫れ物扱いされた感覚は未だに忘れられない。
　私立文系志望とは言いつつも、主に三浦・葉山にちょこちょこと教えてもらっている内に案外楽しくなってきて、息抜き（失礼）のような感覚で勉強するようになった。このペースならもし私立文系以外を受けたくなったとしても、センターの結果で極端に足を引っ張ることはなくなるだろう。
「でしょ？　もっと自信持てばいいのに」
「あ、ああ……そうだな」
　金の髪をそっと耳にかけて浮かべた柔らかい笑みに、思わず顔を逸らしてしまう。オカン気質で怖いところは相変わらず見えているものの、以前は知らなかった優しい部分や魅力的な部分を日に日に発見している。
　……それに今日は……。
　フリルカットソーを着て、さりげなく露出した肩を見る。夏をくぐり抜けたとは思えない白さと滑らかさに思わず見惚れた。

「……ヒキオ」
「え、あ、は、はい、何でしょうか」
「……見すぎだから」
自分の肩を抱いて身を捩り、ほんのりと頬を赤らめて見つめてくる。三浦にそのつもりは無いだろうが、自然と流し目になって妙に色っぽい。
「あー、その、……本当にすまん」
「……別に、いいんだけど」
「え？」
「ほら、早く始めろし」
「あ、ああ」
ぽそりと呟かれた言葉ははっきりと聞こえていたんだが、それ以上追及することはできなかった。

× × ×

小休止も挟みつつ、勉強は順調に進んだ。
時計をちらりと見ると１２時を回っていた。
「昼はどうする」
隣をちらりと見やって尋ねると、三浦はテーブルに両手をついてぐぐ……っと伸びをしていた。なんだか猫みたいだ。目をきゅっと閉じているのがなんだか可愛らしい。そして声をかけるタイミングを完全に間違えた。
「……ふぅ。……聞くタイミング悪いって」
ようやく伸びを終えた三浦が、呆れたようにこちらを見てくる。ぐうの音も出なかった。
「す、すまん」
俺の謝罪に対し、まったく……とため息を吐いたものの、それ以上追及されることはなかった。
「何でもいい」
出た。
出たよ。
出ちゃったよ。

大事なので3回言いました。しかも三段活用。
女子の厄介な台詞で長年頂点に立っている（と勝手に思っている）台詞が、今ここで聞けるとは。三浦さん、この関係性で伝家の宝刀を繰り出してくる辺りとてもロックだと思います。
脳内で夜神月ばりに恰好つけたポーズを付けて考える（実際にやったら地獄のような雰囲気になるのが目に見えているのでやらない）。
――以前ネットでこの質問に対する答え方が書かれているのを見た。普段ならそんな記事は見ないのだが、あまりにも有名な問いかけだったのでついチェックしていたのが功を奏した。
その記事曰く、
『何でもいいと言われたからと言って空気を読まずに男性が行きたいところに行けば、当然の如く引かれてしまいます。ならばどうするか。
美味しいパスタが食べられる店と、女子に人気のデザートがある店、どっちが良い？
などと聞いてみることです』
ふざけるな、と思った。
予め周辺の女子に人気のスイーツな（笑）お店を洗いざらい調べ上げて、そのときの状況に応じて質問を使い分けろということだろうか。
予習で朽ち果てるわ。
しかしこの記事は求められるレベルこそ結局まるで下がっていないことは突き付けているとはいえ、「AとB、どちらがいい？」という質問で返すのがいいというところは参考にし得る。
俺に対して当てはめるなら、
小町と戸塚、どっちがいい？　→どっちも！
材木座と戸部、どっちがいい？　→どっちも（いらない）！
といった具合だろうか。後者を実際本人（中二の方）に言ったらマジで凹みそうだが。戸部は「そーりゃないっしょー」とか言ってくるんだろうな。
――と、まあ。

ここまでをものの数秒で考えたところで、三浦に向き直る。危なかった。恐らくあと数秒待たせれば、不機嫌丸出しで眉をひそめて「何ちんたら迷ってんだ？　あん？」とか言われてたに違いない。ひどいな、俺の三浦に対するイメージ。

深く呼吸をして、得意気に笑いかける。

「ファミマとミニストップ、どっちのイートインコーナーがいい？」

「は？」

呼吸が止まった。

いかん、数秒とは言え思案に思案を重ねたアイディアが、怪訝な顔一発で吹き飛ばされた。冗談抜きで泣きそう。

どうする、どうする、どうする。

俯くでもなく、かといって三浦の顔を見るでもなく、斜め下を向いてひたすら考えていると――三浦が「あー、そうじゃなくって……」と、何やら歯切れの悪い言葉を呟いた。何ぞやと顔を上げると、怪訝な顔から一転、何やらもじもじとしていらっしゃる。

「別に……その辺を適当に歩いて、見つけた店でいいってこと」

全身から力が抜ける思いがした。というか実際に崩れ落ちそうになった。

「説明が足りなすぎるだろ……」

「なに、何か文句あんの？」

「い、いえ、なんでも……」

呆れ気味に俺が言うと、顔を真っ赤にした三浦に睨み付けられた。こ、こわ……っ。可愛いけど恐いってすごいな。

「そんじゃま……取り敢えず外に出るか」

「ん」

未だにちょっと顔が赤い三浦に声を掛けて、俺たちは図書館を出た。

続く。

（２６）

三浦と図書館を出ると、食事処を探しにぷらぷらと歩きだした。どちらが先を行くでもなく、どちらが道を決めるでもなく、ふらりふらりと、まるで分かれ道に出くわす度に傘を倒して道を決めているような歩き方をする。自分一人で散歩してもここまでランダムに歩かないだろう。なんだか不思議な気分だった。

気が付けば大通りから随分と逸れた道を歩いていて、コンビニがなくなる代わりに昔ながらの個人商店が多く見えるようになってくる。

色のくすんだ外壁に、いつから貼ってあるかわからないポスター。道行く人の年齢層と服装。

今も残る昭和の匂いがした。

しかし、ここまで来るといつも無難に行っているようなファミレスだなんだといったところが皆無だな……。

どうしたものかしらと、すれ違う散歩中の柴犬をちらりと見ながら考えていると、三浦が左肩をちょんちょんとつついてきた。ちょっとドキッとする。

「あそこでいい」

「ん？」

三浦の視線を辿ると、営業開始から何十年と経っていそうな定食屋が見えた。見た目はいかにも地元の人が通いそうな場所といった風情で、よれたスーツを着たサラリーマンが慣れた足取りで入っていくのが見える。

店名が書かれた看板の横に、でかでかと「営業２０周年」と書かれた紙が貼られているが、今にも風化して吹き飛んでしまいそうになっている。もしかしたらあの数字の倍くらい経っているのかもしれない。

「あそこでいいのか」

「ん、あんま探すのも疲れるでしょ」

「まあそうだな」

三浦がさらりと言って髪を手で梳いた。何その潔さ、かっこいいな

……と思いながら歩き出すと、今まで隣を歩いていたのに急に一歩後ろを付いてくるようになった。視線は定食屋の入口に縫い付けられている。どうやらちょっと緊張しているらしい。

何この可愛い子？

×　×　×

立て付けの悪い引き戸を開けると、がらら……と懐かしい音がした。

「いらっしゃいませー」

還暦を迎えるかどうかといった年齢の店主らしき人が、厨房から威勢の良い声を上げる。店内はＬＥＤライトを使っているのか見慣れた明るさで、店の外観とのギャップを感じた。左手側に厨房と５つのカウンター席があり、右手側に４人掛けのテーブルが３台ある、こじんまりとした店だった。

他の客は、カウンター席の一番手前に先ほど店に入っていくのが見えたサラリーマン、そして奥のカウンター席に若い女性が座っていた。なんだか見覚えのある女性な気がしたが、黒髪ロングの若い女性なんて世の中に恐ろしいほどいる。そして大体モテる。つまりほぼ確実に彼氏がいる。急にどうしたんだ俺は。

特に席の案内も無いようなので、一番奥のテーブル席に座った。天井近くの壁に貼られたメニューが昔ながらのスタイルを感じさせる。

「はい、ヒキオ。メニュー」

「ん、おう」

普通のメニュー表もあるらしい。

三浦が先に開いて、結果の外れた競馬新聞を見ている人のように眉をひそめている。ちょっと恐い。たぶん、普段はファミレスやファーストフードの店でのメニューくらいしか見ないから戸惑っているんだろう。

「俺は油淋鶏にするわ」

「ゆーりんちー？」

「ああ、ゆーりんちー」

「……」

「……」
なんか、変な間が生じた。一昔前のアニメなら2人の頭の上に「……。」って文字が浮かんで、アホっぽい鳥が通り過ぎるやつだ。この町の昭和丸出しの雰囲気に思考が呑まれている感はある。
三浦が何やら複雑な表情をしている。「こいつ何言ってんの？」と「いや、自分が知らないだけか」という感情が混ざり合ったような表情。顔立ちが整っている女性が混乱するとこうなるのか。ちょっとというか結構面白い。
メニュー表を見ると、写真は一部の王道のものだけだった。
「ほら、これだ」
スマホ画面をすいすいと遷移させて、油淋鶏の写真を見せる。三浦は大して驚くこともなく、「ああ」とうなずいた。
「あーしもこれにする」
「いいのか」
「うん」
まあ、大学近くにあるがっつり食べる類の料理屋でもないだろうから問題ないだろう。
すみません、とさして大きくない声で呼びかけると、店主の奥さんらしき人がメモを持って来た。
「はいはい、なんにしますか？」
笑みを浮かべると、目が猫のように細められた。顔がくしゃりとなるのがなんとも愛嬌がある。良い年のとりかたをしているんだなと、偉そうながら思った。
「油淋鶏2つで」
メニューを指差して、チョキの形を作って示す。
「はい、少々お待ち下さいね」
店員の女性がとことこと厨房に戻る。てっきり大声でメニューと数量を言うと思っていたが、女性が「あなた」とぽそりと呟き、調理中の店主の肩を人差し指でとんとんと叩く。どうやら夫婦という予想は合っていたらしい。
「油淋鶏2つ。お願いね」

「あいよ」
奥さんが店主の二の腕をぽんぽんと撫でて注文内容を告げると、店主はちょっとぶっきらぼうに答えて調理に戻った。奥さんはにこにことしながら別の作業に戻り、店主はよく見るとちょっと照れてるように見える。え、なに、何十年もこんな感じなの？　見てるこっちが照れるんですけど。
「……ん？」
ふと前を見ると、三浦も同じように今のやりとりを見ていたようで、ほんのりと頬を赤らめていた。やめろ、こっちまで恥ずかしくなるから！
カウンター席から妙な視線を感じて振り向くが、黒髪ロングの女性が黙々とご飯を食べていた。若干鼻息が荒い気がするのは気のせいだろうか。
「はい、お待たせしました」
間もなくして、奥さんが2人前の油淋鶏を運んでくる。
『いただきます』
しずしずと挨拶をして食事を始める。初めはスープから云々といった話はよく聞くが、初めに好きなものに食いついて何が悪い。甘い酢醤油に包まれた大振りのから揚げを割りばしで挟み込み、半分ほど一気にガシュッと噛んだ。
「……んん……っ」
じゅわじゅわと口内に広がる肉汁と酢醤油の旨み。から揚げだけだと重くなりがちなのを酢醤油が和らげ、適度な塩気がご飯への欲求をかき立てる。残り半分になったから揚げを茶碗の端に一時退避させて、ご飯をかかかっとかきこんだ。
「……んん……っ」
美味い、うまい、旨い。
とにかく旨い。
酢醤油をまとったから揚げとご飯の熱と食感が絡み合い、無限に食べてしまいそうになる。一緒に皿に乗っているキャベツは酢醤油が絡まって適度にしんなりとしていて、から揚げ、ご飯、から揚げ、ご

飯、キャベツといったローテーションを組むととても丁度良い。
油淋鶏はどの店でも基本的に旨いと思っているが、この店は格別だ。通りすがりで見つけたと言う幸運も伴って余計に嬉しく感じる。
一緒に置かれているスープを思い出したように時々啜りながら、一心不乱に食べ進めていると――ふいに、おでこの辺りに視線を感じた。
「……どうした、食べないのか」
見ると、三浦が目をぱちくりとさせてこちらを見ている。
「いや……美味しそうに食べるなって思って」
「……そうか」
三浦には珍しい、ぽけーっとした顔で言われてなんだか恥ずかしくなる。
三浦が時間差でから揚げを箸でつまんだ。
「ん……っ」
控えめに3分の1ほど齧って、もぐもぐと咀嚼する。口のなかでカリ、カシュ、と心地良い音が聞こえる。俺のようにいきなり白飯をかきこんだりはせずに、から揚げを丁寧に噛んで、こくりと飲み込んだ。
「ん……おいし」
唇についた酢醤油をちろりと舐めて、ほわりと目を細めて囁く。口元に手を当てていたが、紅い舌がちろりと覗いてどきりとした。
こくりと嚥下した三浦が、ぱっと俺の方を見る。思わず見入っていた俺と思いきり目が合った。
「……ヒキオ、見すぎだってば」
「あ、す、すまん」
お前だって見てたのでは……とちょっとだけ言い訳したくなったが、それを言うと余計に気恥ずかしくなるだけなので黙っておいた。

× × ×

『ごちそうさまでした』
綺麗に食べ終わり、5分ほど食休みをする。このあと何を勉強するかなどの話をしてから、会計をしようと立ち上がると、カウンター席にいた黒髪の女性がくるりと振り向いた。

「あ」
「？　ヒキオ、どうしたの？」
「いや、なんでもない」
　三浦の質問をさらりと躱してレジの方に歩みを進めつつも、目の前にいる女性をちらりと見る。
　女子大生だろうか、背はすらりと高く、唇が薄く線が細い。格好こそ今時の若い女性といった風だが、どことなく古風な雰囲気を感じた。しかしそれら全体の印象から離れて瞳が大きく、それだけが清楚から離れて活発な印象を残していた。
　明らかに、夏祭りの帰りの電車で見た人じゃないですか。なんでここで再会するんでしょうか。わたし、気になります！
　顔見知りともいえない関係だが、一応会釈だけはする。すると、女性は俺と三浦を交互に見つめて、仏でも拝むかのように厳かに目を閉じた。
「（引き続きごちそうさまです、ありがたや）」
「……」
「ヒキオ？」
「ああ、今行く」
　レジ前で訝しげに俺を呼ぶ三浦の下へ急ぐ。女性は舌をぺろりと出して親指を立てていた。太陽かってくらい眩しい笑みを浮かべている。
　……本当に、なんだこの人。
　続く。

（２７）

市立図書館に戻って勉強を再開する。人が増えても静かなのは変わらず、引き続き集中することができた。

好きな本を探そうと棚を物色する人の足音や、隣のテーブルで勉強をする中学生のページを捲る音、本好きの夫婦がおすすめの本の情報を控えめな声で交わし合う音。

どれもがこの空間を静かに楽しんでいて心地良い。隣に座っている三浦もかなり集中しているようで、勉強はかなり捗った。

気が付けば１時間半ほど経過していた。時計を見ると１４時半を回っている。

「ん……っ」

三浦が両手をテーブルについてぐぐぐ……っと伸びをしている。さっきも見た仕草だが、やはり猫みたいだ。肩口が露出しているため滑らかな白い肌が目に飛び込み、反射的に顔を逸らした。

「ちょっと休憩するか」

「うん」

ちょっと眠そうに、目の下をこしこしとこする。三浦が幼いときは、親にベッドへ連れられていくときにこんな仕草をしていたのかな……と微笑ましく感じていると、「あ、やば、化粧とれる……」とやけにリアルな言葉が聞こえた。

別にスッピンでもいいのに……とは思うが、男がそう言ったところで女性からしたら知ったこっちゃないのだろう。性別特有のこだわりや悩みに口は出すまい。

今いる２階には談話スペースのようなものがあり、２つのローテーブルを２人掛けソファが囲んでいて、すぐ横の壁際に自販機が３台設置されている。本格的に眠いのか、ちょっとふらついている三浦を気遣いながら自販機の前にたどり着く。

「……」

いつも使っている学校の自販機とは勝手が違うが……ふむ。

「これか？」

カフェラテをしゅぴっと指差して尋ねる。三浦は「ん……？」とやけにゆっくりとした動作で顔を上げた。縁側で寝てる猫みたいだ。
「ん……それでいい……」
他の飲み物をまるで見ることなく、財布からお金を取り出して俺に渡す。もはや自分で買う気力もないらしい。今の三浦なら、俺がおしるこやカップヌードルを指差してもそれでいいっていいそうだが……果てしなく怒られそうなので絶対にそんな真似はできない。ちなみにどちらもここの自販機にはないんだけども。
カフェラテを買って渡し、俺は安定のマッ缶を買う。ソファに座ると、三浦は何の躊躇もなく隣に座った。あれ、別のソファに座ると思ってたんですけど……なんか急に恥ずかしくなってきた。
２人掛けのソファだからかなり距離が近い。ふわりと漂う甘い匂いにくらりときて、座った位置は変えないまま首だけ水平移動して遠ざける。奇妙な妖怪の誕生である。
「み、三浦、その、なんだ、えっとだな」
「んぅ……？」
いかん、本格的におねむだ、この子。さっきはメイクを気にして目の下をこするのをやめていたのに、またこすりだしてる。化粧がとれているわけではないので大丈夫だとは思うが、それにしても可愛い。何ですのん、この子？
仕方ない、俺が移動するか。
ソファから立ち上がると、三浦がぽけっと見上げてきた。
「ヒキオ……どっか行くの？」
ちょっと寂しげに見つめられる。こんな感じで将来娘に「お父さん、お仕事行っちゃうの？　やだやだやだ……」などとごねられたら、一切の躊躇なく一ヶ月間の有休をとってそれが原因で居場所が無くなって辞めるまである。
即座に元の位置に戻った。おねむな三浦さんは、俺の行動にこてっと首を傾げるだけだった。
三浦はまるで何かの義務を課されているかのように、カフェラテのペットボトルをくぴりと飲み、こぼさないようにふたを閉めて一度

ローテーブルに置き、しばらくすると再び同じ動作を繰り返している。全ての動きがのろのろとしていて、正直訳が分からないくらい可愛い。何だこの子。
「三浦。ちょっと寝てもいいぞ」
「ん……ありがと」
礼を言うや否や、三浦はソファの背にもたれかかってこっくりこっくりとし始めた。
さて、俺ものんびりするか……と思っていると。
「んん……っ!?」
ニャンちゅうみたいな声が出た。
三浦が俺の左肩にしなだれかかってきた。夏祭りの帰り道を思い出すが、今は肩出しのフリルカットソーを着ている。すなわち俺のＴシャツ越しに三浦の肌が直に当たっている。
この実況なんか変態みたいなんだけど混乱してるだけですごめんなさいそうだロジカルシンキングで論理的にいこう俺本当に何言ってんだいつの間にか俺の手はろくろを回しているぞどういうことだろう。
漫画やアニメを見ていると、キャラの脳内で天使と悪魔が争うというくだりを見かけることがある。最近はすっかり見なくなったが。
この状況に当てはめると、「寝てる間に抱きしめちまえよ！」「そんなことしちゃダメだよ！」みたいなやりとりがあるのだろうが、あいにくと俺の中の天使と悪魔は、普段から人とのコミュニケーションが不足しているために（１００％俺の影響だ）、こういうときの免疫がまるでない。
天使と悪魔が揃いも揃って「このレベルの幸せを知りません。キャパオーバーです。何もアドバイスは差し上げられません」とそっけないＡＩみたいなことを言っている。つまり俺は今全力で固まっている。
しかしまあ、この状況を誰かに見られたりしなければ何てことはない。俺が今胸に抱いた恥ずかしさを墓にまで持っていけば済む話だ。
――と、思っていた矢先。

「おかあさーん、どこー？」
「え……」
聞き覚えのある幼い声に振り向くと、朝に図書館前で見かけた小さな女の子がこっちにとっとことっとこと歩いてきた。なんで？　お母さんはこっちにいないよ？
なんかいやな予感がする。
なんかいやな予感がする！
女の子は俺と三浦が座っているソファとローテーブルの間に立って、こちらをじっと見つめてきた。
ジーー。
ジーーーー。
ジーーーーーー……。
何でも鑑定団の人でもここまで見ないだろって勢いで見つめてくる。ファッションだの健康状態だのまで判定してるのかしら。視線自体は純粋そのものなんだが、何も言わずきょとんとした顔でじっと見つめられるのはいかんせん耐えがたい。
女の子による長い長い審査時間（？）が終わると、小さな顔いっぱいに花が咲いたような笑みを浮かべた。
「やっぱりかっぷる！」
やっぱりってなに？
女の子は俺たちの関係に（極めて一方的に）決断を下して満足したのか、足早に去っていった。階段近くで「あ、おかあさんみつけた！」と元気に叫んだので、ほっと胸をなで下ろす。
しかしまあ、今のは三浦が寝てたからまだ良かったな……と不幸中の幸いに安心していると。
「……」
三浦が目を閉じたまま、顔を真っ赤にしてぷるぷると震えていた。
……そりゃまあ、あれだけ元気に通る声で騒がれたら起きますよねぇ……。しかも俺の肩にしなだれかかってるのにも気付いただろうし。ダブルで恥ずかしいんだろう。
「……」

三浦は俺に気付かれていないと思ったのか、俺にしなだれかかったまま再び寝始めた。マジか。思った以上に強心臓。

俺も気付かずに寝たフリをすることにしたが、眠気は吹き飛んでしまっていた。三浦も同様だったのか、先ほどのような寝息が聞こえてこない。二人揃って寝たフリをするという奇妙な構図ができ上がった。

言葉の辻斬り、だめ、ぜったい。

再犯は尚のこと、だめ、ぜったい。

続く。

（２８）

日が傾きはじめた頃、勉強に一区切りをつけた。

「そろそろ出るか」

「ん……」

返事がてら、三浦が再び猫のような伸びをする。猫じゃらしをフリフリ振ったら怒られるだろうか。うん、地獄が待ってるね！

勉強道具の片付けをしながら辺りを見回すと、いつの間にか人がぐっと減っていた。学習室のある３階には依然として沢山の学生がいるのだろうが、この階にいた人たちはみんな家に帰ったりカフェに寄ったりして、思い思いに読書を楽しんでいるのかもしれない。

人がいなくなった分、図書館の中が広々と見渡せる。本棚に寄って深く息を吸うと、何年何十年とここに住み続けている本の匂いがはっきりと感じ取れる気がした。

「ヒキオ、どうしたの？」

「ん、いや、なんでも」

きょとんと首を傾げる三浦に軽く首を振り、図書館を出た。

×　×　×

外に出たところで、まるで大雨で街が水浸しになっている光景を目の当たりにして、２人並んでげんなりしているかのように立ち止まる。よく晴れているにも関わらず、あまり話さない同士だとこういう時間が簡単にできてしまう。俺は再びあの辻斬りの女の子と出会わないか若干警戒しつつ、この後のことを考えていた。

解散時間をきちんと決めていないので、率直に言ってびっくりするほど気まずい。

いやほんと、こういう曖昧な集まりってみんなどうやって解散してんの？

グループだったら空気を読んだ司会ポジションのヤツが『はい！というわけで今回はここまで！』と大御所ＭＣのような台詞を言って締めてくれるんだろうが、今は俺と三浦しかいない。

ここで三浦が『じゃ』と言ってくれれば俺も輝かんばかりの笑顔で

『じゃ』と言えるんだろうが（輝いていると思うかどうかは個人差があります）、三浦は何を考えているのか遠くのビルを眺めるように見上げていて、何も言ってこない。
いっそさっきの辻斬り少女（物騒だ）が俺たちの前に来て両手をパンと叩き『かいさん！』と言ってくれたら気楽なんだが。
どこかのファミレスに行って勉強の続きをするという空気でもないが、かといってこのまま解散する空気でもない。
「まあ、その、なんだ、……歩くか」
決断すべきことを全力で後回しにした提案をしてみると、三浦は意外にもというか予想通りというか、あっさりとうなずいた。
「うん」という少女のような幼げな声と、綺麗な顔立ちが妙なギャップを生む。返事一つで心臓がたやすく掴まれてしまうのだからどうしようもない。
ポケーっと空を見上げながら、のんびりと歩き出した。

× × ×

スマホを見ると、夕方になっても気温は２０度台の前半を示していた。昼間の熱をたっぷり吸いこんだアスファルトからは熱気がこぼれ出てくるが、街路樹を揺らす風は秋を感じさせる。夏と秋の狭間を思わせる季節のなかで、更に夏と秋の狭間を思わせる時間帯に、俺と三浦は目的もなくぽてぽてと歩く。
会話はぽつりぽつりと生じるが、まるで遠くの国道を走っている車のライトのようにあっという間に消えてしまう。元々ペラペラと喋る間柄ではないが――というか俺がペラペラと喋ることができる相手なんていない。
減らず口を叩ける相手なら何人か心当たりがあるが――それでも、今こうして隣を歩いている三浦はなんだかいつもより、というか図書館を出る前までよりも喋らない。
一体何事かと考えていると、自然と歩くスピードが一人でいるときと同じくらいになってしまい、気が付くと三浦の一歩前を歩いていた。
「ん？」

Ｔシャツの袖をくいと引っ張られて振り返る。
「その、ちょっと……そこの公園に寄ってかない？」
「……別にいいけど」
三浦は俯いていて、街路樹の日陰になっていることもあって表情が読み取れない。それでも声は微かに上ずっていていた。違和感を気取られたくないのか、三浦は続けざまに何か言葉を発しようと顔を上げた。けれどすぐ横の車道を車が数台通り過ぎたことでタイミングを失ったのか、糸の切れた操り人形のように俯いた。
×　×　×
公園に入る頃には陽が落ちかけていた。夏に比べて高く遠くに見えるようになった雲を見つめる。昼間は悠々と空を泳いでいたうろこ雲が夕陽に照らされて、舞台の照明を浴びたかのように鮮やかな橙色に染まっている。
「ちょっと座るか」
既に２０分ほど歩いていたので、なんとはなしに提案する。すると三浦は急に目の前を塞がれた小動物のようにビクリと震えた。
「う、うん」何故か顔を逸らす。「あ、あーしも、休みたいって思ってたから……」
芝居じみた口調で喋るあいだも声が上ずっていた。本当にどうしたんでしょうか。
ベンチに座って、何を話すでもなく景色を眺める。雲の流れはゆるやかで、近くを散歩する壮年の男性ものんびりと歩いていた。
三浦はただ話さないわけではなく、何かを話そうとしてはやめるのを静かに繰り返している。なにか重要なことを話そうとしているのはわかるので、俺もかなり緊張していた。けれどここで『どうした、何か話でもあるのか？』などと聞ける柄でもない。公園の景色を眺めながら待つしかなかった。
しばらくの間もどかしい時間を耐えていると、三浦が意を決したように顔を上げた。
「ヒキオ……」
「……ん、どうした」

俺が顔を向けると、三浦は途端に目を泳がせて顔を逸らしてしまう。目に見えない空気の飴を口に含むかのように可愛らしい唇を開いて閉じると、肘を真っ直ぐ伸ばしてベンチを掴んでいた手にグッと力がこもる。

「ヒ、ヒキオは……好きな人、いる？」

「……っ」

真剣な表情で尋ねてくる三浦の横顔を、茜色の夕陽が彩った。

三浦の言葉を合図にして、脳内で何人かの顔が浮かんでは消える。三浦の切実な視線を感じながらたっぷりと考えて、ゆるゆるとかぶりを振った。

「いや、その、……まあ、いない……な」

俺の返答に、三浦はあまりにもわかりやすく顔を綻ばせた。まるで迷子になっていた子どもが親に見付けてもらったかのような安心しきった表情に、心臓が柔らかく波打つ。

「そっか……良かっ……あ、ううん、なんでもない、なんでもないから」

安堵のため息を吐いて何か言いかけたところで、慌ててかぶりを振って顔を逸らしてしまう。妙に可愛げのある仕草にくすりと笑うと、「……なに？」と若干怖い顔で睨まれた。しかしその恐い顔も赤面していてはあまり意味がない。

またしてもくすりと笑ってしまうと、プイと顔を逸らしてしまった。「ヒキオのくせに……」とぽそりと呟いて、足をプラプラさせる仕草はまるで子どものようだった。

この後しばらく経ってようやく三浦の機嫌が戻ったときに聞いた話だが、三浦はどうやらこの質問を以前学校の昼休みにしようとしていたらしい。あのとき躊躇してやめていたのはそういうことかと納得した。

× × ×

好きな人はいるかと聞かれたとき、俺はあの場にいない人物を思い浮かべてかぶりを振った。

けれどあのとき、俺の目の前にいた人物については除外していた。

三浦がもう少し違う聞き方を――もっと直接的な質問をしてきた

ら、俺はどう答えていたのだろう。
三浦との距離感は、まだまだ掴めていない。
続く。

（２９）

三浦と勉強会をした日の夕方、好きな人はいるのかと尋ねられた。

このことについて、帰り道も、帰ってからも、寝ようとして布団に潜りこんでからも、ひたすら考えていた。食事中、小町に「どうしたのお兄ちゃん？　いつになくボケーッとしてるよ？　小町のこと覚えてる？」などと言われるくらいには考え込んでいた。

女子に安易な期待はしない。

これはもう、過去（＝中学生の頃まで）の経験から痛いほど学んでいる。思わせぶりな女子の言動はあくまで思わせ『ぶり』なのだ。実際に思っているわけではない。『〇〇風味』の食品が決して〇〇そのものではないように。

安易に考えれば、三浦の「好きな人はいるか」質問事件――もはや俺のなかでは事件扱いだ――は、「やっべ、この子俺のことが好きなんじゃね？」と戸部ばりに浮かれてしまいそうな案件だ。

ここで「いやこれくらいで期待しちゃダメだろう」と切り捨てれば安心だろう。総武高に入ってからはずっとこのスタンスを保っていたし、これからもこのスタンスから変える必要はないと思っている。慎重さは大事。石橋を叩いて叩いて、渡る前に壊すまである。

しかし、しかしだ。

あの三浦が。獄炎の女王で知られる（俺の中でだけど）三浦優美子が。

いつの間にかごく自然に二人きりでいることが増えても何も文句を言わず、自分から勉強会に誘ってきて、その帰り道にあのような質問をぶつけてくる。

これは――これは、少なからず浮かれてもいいのではなかろうか。

小市民を目指すとまでは言わないまでも、俺は基本的にごく平凡に生きたいと思っている。その『ごく平凡』な生活には、当然ながら恋愛ごとも含まれる。

総武高に入ってから抑制に抑制を重ねた生活を送ってきたが、気が付けば三浦の存在によって、ずいぶんと俺の心の抑制というかブレー

キがなくなってきた気がする。
この気持ちはなんだろう。
目に見えないエネルギーの流れを感じる。これ以上書くのはまずい気がするからやめておこう。
この事態を、この気持ちを、どう整理すればいいのだろうか。
誰かに相談する？
いったい誰に？
①母親→なんでだ。高校生になって親に色恋沙汰を相談する男子なんて絵面だけでも地獄だろう。却下。
②小町→結構アリなので困る。ある意味一番頼りになるが、一番ニヤニヤしてきそうなので腹が立つ。保留。
③戸塚→な、なんだろう。相談するのは大いにありなんだが、戸塚に相談する光景を想像しただけでどうしたわけか心が痛む。俺の心のタフネスの問題により却下。
④材木座→却下。
⑤戸部→却下。
⑥平塚先生→小町同様頼りになりそうだが、「ふふ、いいなぁ……青春だなぁ……ああ、私もあの頃にもっと積極的に動いていれば……」などと言いかねないというか確実に言う。惜しいけど却下。
「……」
どうしよう、誰にも相談したくない。
どれだけ考えようが答えは出ないし、色恋沙汰は受験勉強をサボる免罪符にはできない。
頭のなかでぐるぐる回る思考を静かに押さえ込みながら勉強して週末を過ごす。休憩時間には決まってスマホで連絡が来ないか確認していたが、メッセージを送ってきたのは材木座と平塚先生だけだった。

× × ×

週明けの月曜日。
どうにも落ち着かず、いつもより早めに家を出たのだが――
「うっす」

「ん、はよ」
――自分のクラスの教室にいるのが三浦のみというまさかの展開だった。
このまま隣に座ると、2人しかいない教室内で非常に気まずいことになる。かといって逃げるように他の席に座ろうものなら、却って俺が動揺していると悟られる結果になってしまう。悩んだ末に、結局平静を装いながら教室の後ろを横切り、窓際の自分の席に座った。
普段自分がどんな風に歩いて、席に座ったらどこを見ているのか、ふと意識した瞬間に全てわからなくなってしまった。何もかもがちぐはぐな動作を見て、三浦が片眉を上げて呆れたようにクスリと笑う。
「ヒキオ、何してんの？　キモいんだけど」
「そうかよ……」
言葉だけ拾えばいままで通りの罵倒なのだが、その声音は驚くほど柔らかい。罵倒されて頬がゆるむっていうのはなかなかの性癖持ちということになるだろうが、俺にそんな性癖はない。なかったはずだ。
こういった状況で二人きりになると、俺たちの場合話しても話さなくてもいい、と勝手に思っている。予期せぬ二人きり、且つ先週の出来事が出来事なので、俺は迷わず話さないで勉強するという選択肢を取る。
英語の単語帳を開いて、例文のなかに書かれた単語と熟語を覚えにかかると――三浦が膝に手を乗せて、もじもじとし始めた。この時点で頭に入れようとしていた熟語が綺麗に吹き飛んだ。
「ヒ、ヒキオ……」
「……ん、どうした」
朝イチで、他に誰もいない状況で三浦が緊張した様子で話しかけてくる。返事をする声が上ずらないのが精一杯だった。
三浦は金髪の毛先をくるくると指に巻きつけ、もじもじと恥じらっている。他の何かについて考えて気を紛らわすこともできず、目の前にいるクラスメイトが発する言葉を待つことしかできない。

「あ、あの、こないだの質問は……あ、あんま、深く考えなくていいから。べつに、大した意味ないし」
「お、おう、そ、そうか」
わざわざ言わなくてもいいのに。
わざわざ言わなくてもいいのに！
なるべく意識すまいとしていたのに、頬をほんのりと赤らめた三浦に言及されたことで脳内では『あのとき』の三浦が幾度となく再生されてしまう。なんでわざわざ言っちゃったのこの子は！
人をリラックスさせようとするとき、『緊張しなくていいよ』と言うと、言われた方の脳が勝手に『緊張』という単語を拾って緊張してしまうらしい。だからこの場合なら『落ち着きなよ』などと言った方が効果はあるそうだ。いまの場合で言えば、三浦はわざわざ言及してしまったことにより、俺だけでなく三浦自身まで気持ちが落ち着かなくなるのだ。地獄としか言いようがない。
この後は何を話すでもなくお互い勉強を始めたが、会話はなくとも明らかにお互いがお互いを意識していた。ちらりと隣を見やったときに目が合ってしまったときは目も当てられなかった。

× × ×

不幸中の幸いというべきか、この日の昼休みは久しぶりに葉山グループが集まった。由比ヶ浜と海老名さんが三浦の下へ遊びに来て、葉山の下へ遊びに来ていた戸部がそれを見つけて葉山を連れて遊びに来て……という具合で。俺はなんとなく退避しようとしたが、三浦の「ヒキオ、どこ行くの？」の一言により逃げられなかった。
久しぶりに集まったといっても、夏休み中に会っていた人もいるのでそこまで久しぶりという感覚はない。戸部は前にいつ会ったか覚えていないが、まあどうでもいい。
由比ヶ浜が積極的に話題を出して笑顔を振りまき、葉山が大人な返しをして、戸部がスベる。
うんうん、ちょっと懐かしいがいつも通りの光景だ。なんで俺がここにいるんだろうという違和感がすごく強いが、いまさらな話しではある。

ぬぼーっとした表情でみんなのやりとりを見ていると、不意に戸部が芝居がかった声で喋りだした。
「やーっぱ女の子は手料理でしょー！　な？　葉山くんもそう思うべ？」
「ああ、まあそういう面もあるが……俺は別に料理ができなくてもいいけどな」
「まーたまたー！」
三浦が微妙に反応しているのがいたたまれない。いますぐ戸部の太ももを強めに蹴りたいところだが、ここで俺が動けば思いきり怪しまれるので我慢する。
戸部の意見に対し、由比ヶ浜は「あはは……」と苦笑いを浮かべてから何故か俺をチラリと見て、海老名さんは虚空を見つめて「そっかー、じゃあ私は女の子とは呼べないかなー」と空々しい笑みを浮かべて言う。あれ、バレンタインイベントのときごく普通に作ってなかったっけ？　と思っていると、戸部が「またまたー！　海老名さんも料理上手いっしょー！」と軽い調子で言うと、海老名さんが抜群の愛想笑いで返した。明確な返事を全くしていない。戸部、お疲れさま。
夕空のグラデーションのようにごく自然と話題が移り変わる。三浦をチラリと見ると、何か考え込んでいるようで会話に全く参加していなかった。

×　×　×

昼休みを終えて俺と三浦以外のメンバーが散り散りになる。５限の授業の準備をしていると、三浦が髪の毛先をくるくると指に巻きつけながら、ぽそりと呟いた。
「ヒキオも……そういうの、好きなの？」
「あ？」
そういうのって、どういうの？　さっきまでの会話のことを言っているのなら、あまりにも話題が節操なく変化していたためにどれのことを指しているのかまるでわからない。
俺が首を傾げていると、三浦が「だ、だから……」ともどかしそう

に口元をもにゅもにゅと動かした。
「て、手料理のことだって……っ」
「あ、ああ、そういうことか」
顔を真っ赤にして言われては、俺も声が裏返らざるを得ない。
「まあ、そりゃあ嬉しいぞ。手料理なんて妹の小町のもの以外そうそう食わないからな」
目を泳がせながら答えると、三浦が目をパチクリとさせている。
「どうした」
「……ヒキオの妹、料理できるんだ」
「ああ、小町は何でもできるぞ。世界一の妹だからな」
「なにそれ」
三浦は呆れ笑いを浮かべたものの、どこか心ここにあらずといった様子だった。

× × ×

その日の夜。
いつものように両親は忙しすぎて帰ってきておらず、小町と2人で夕食をとっていた。
「んん……」
小町の手料理を食べながら、ふと三浦の言葉を思い出す。
「お兄ちゃん、どうしたの？　人様に見せられない顔になってるよ？」
「お前けなし方ひどくないか……いつも通りだろ、いつも通り」
「そうかなー、なんか考え事をしてるように見えたけど」
「んなことないっつの」
「恋の悩みとか？」
「……」
お椀を持つ手を、一瞬、ほんの一瞬だけ止めてしまった。
達人同士の闘いでは一瞬の隙が命取りになるように、コミュニケーションモンスターである小町に見せる一瞬の綻びは即、尋問とも呼べる質問攻めに繋がる。
「お？　お？　なに、なになに？　お兄ちゃん、何に悩んでんの？　小町にどーんと相談してみなさい！」

「いや、いい、そういうのいいから、いいから」
宝石店の一番奥のショーウインドウにありそうなダイヤモンドかというくらい目をキラキラとさせて迫ってくる小町を、必死に手で追い払う。
しかし、数分ともたずに口を割らされた。先週の三浦の質問のことなど、肝心な――というか恥ずかしい部分は隠して話をした。
× × ×
「ふーん、へー、ほーん……」
「うぜぇ……」
一通り話し終えると、小町が両肘をテーブルに付けて両手のひらにあごを乗せ、嬉しそうに首を左右に傾げてニヤけていた。心底楽しそうで心底腹が立つ。
「そっかそっか……手料理をお兄ちゃんに作りたがってるのかぁ……」
「待て待て、そんなこと一言も言ってねえだろ」
「どう考えてもこの結論に行き着くでしょ。お兄ちゃん、本当に自覚なしで言ってる？　自覚ありで言ってるならただのヘタレだし、自覚なしで言ってるならもう色々とアレだよ！」
「色々とアレってなんだ……」
取り敢えずろくでもないものであることだけは分かる。
小町の言葉に、頭をがしがしと掻いて「あー……」と唸った。
「……まあ、薄々勘付いてはいる」
「ならよろしい」
小町がふんすと鼻を鳴らした。何故鼻高々なのか。
腕組みをしたかと思うと、顎に手を当てて「ふむふむ……」と考えはじめた。いかん、ろくな予感がしない！
俺が何か言うよりも早く、小町の目がキュピーンと光った。お久しぶりですヤマピカリャー。
「お兄ちゃん、小町に良いアイディアがあるよ」
「まあ！　素敵だわ小町。これなら汚れた台所の掃除もあっと言う間ね。それじゃあ次の商品を……」

「アメリカのテレビショッピングの真似をしてもごまかせないからね？　ていうかなんで急にそんなよくわかんないことすんの？」
「ぐ……」
逃げられなかった。そしてツッコミというよりは正論で固めた糾弾を受けた。つらい。
「それじゃあ、まずはね……」
誰に聞かれるでもない作戦内容を、何故か耳打ちで説明してくる。何をしょうもないことを……と呆れたが、本当に楽しそうに笑っているのを見ると何も言えなかった。

続く。

（３０）

小町にとある作戦を吹き込まれた翌日。

昼休みの教室で三浦と隣り合って食事をとりながら、俺は悩みに悩んでいた。

小町に命じられたのはシンプルな指令たった一つ。

それを三浦に伝えればいいのだが、いかんせんハードルが高すぎる。ちょっと瞬きの仕方を忘れかけるくらいにはハードルが高い。

俺が購買のパンを食べながらうんうん唸っていると、三浦が怪訝な顔をして首を傾げた。

「ヒキオ、さっきからあーしのことチラチラ見てるけど……なに、なんか言いたいことでもあんの？」

こわっ！

これでも、数ヶ月前までに比べたら言い方はかなり優しい。優しいが、いかんせん字面が怖すぎる。その道の人が刀を持ってニコニコしながら「怖いことはせんから。な？」と言って肩を叩いてきたら絶対怖いだろう。それと同じだ。いや、同じと言い切ったら三浦にかなり失礼なんだけども。

あー、うー、とゾンビのように唸ったあと、こほんこほんげほがふっとむせた。咳払いのつもりが本気でむせた。三浦が「ちょ、だいじょうぶ!?」と心配そうに背中をさすってくれたのだが、手のひらの感触にドギマギしてしまって落ち着くまでにエラく時間がかかってしまった。

「すまん、助かった。……えーとだな、その……」

「なに？　言いたいことがあるなら早く言いなって」

「今日の放課後、空いてるか？」

「……へ？」

三浦の頬が一瞬で可愛らしく朱色に染まった。

「え、あ、うん、別に、空いてるけど……なに？」

さっきまでの俺とは比べ物にならないほど慌てふためき、何度も金髪の毛先をいじって目を泳がせる。

いかん、言葉が足りなすぎた。
この言い方だと、デートに誘っているようにしか見えない。
このあとの説明をしたら絶対不機嫌になる……！
すまん、ちゃんと説明するとだな……と頬を掻き、キョトンとした顔で首を傾げる三浦に小町との計画についての説明をはじめた。

×　×　×

その日の放課後。
総武高の昇降口に三浦と2人で向かうと、今年から同じ総武高に通うことになった、元気いっぱい弾丸娘の我が妹小町が俺たちに気付くなり嬉しそうに手を振った。
自然と手を振れる人ってほんとコミュ力の塊だなーと思う。奉仕部で言えば由比ヶ浜と一色（半分奉仕部みたいなものだ）がコミュ力強者で、俺と雪ノ下が圧倒的弱者だ。
雪ノ下なんてどこぞのロイヤルファミリーかってくらい控えめな手の振り方しかできないからな。俺に至っては手を上げるだけで限界まである。
「こんにちはー！　お疲れ様でーす！」
気怠い授業を乗り越えてのテンションとは思えない、笑点の自己紹介かってくらい明るい挨拶を小町がしてくる。由比ヶ浜と一色を足して2を掛けたようなテンション（しかも可愛い）に、三浦が静かに一歩引いたのが見えた。
「あー……うん、お疲れ」
言葉選びに悩んだ三浦が力なく答えた。今年の初詣のときに小町と三浦は会っているが、あくまで最低限の会話しか交わしていない。意外と人見知りなのかしら……？　と全力で自分を棚に上げて考えていると、三浦の反応を見た小町が即座にテンションを調整してきた。
「今日は小町とお兄ちゃんにお付き合いいただきありがとうございます！」
明るい声音は保ちながらも落ち着いている。元気でいて尚且つ礼儀もわきまえた絶妙な話し方だ。なにこのコミュニケーションモン

スター。
「べ、別にいいけど……。それより、今日のこと、もうちょっと詳しく聞きたいんだけど」
「はい！　お兄ちゃん、ちょっと説明する時間をとっていい？　いいよね！　じゃあこっちにお願いします！」
「え、あ、うん……」
俺に確認した意味なくない？
小町は三浦に手招きをして、俺から数ｍ離れたところでごにょごにょと説明を始めた。
――小町が俺に提案したのは、自宅に三浦を招き、小町が三浦に料理を教えるというものだった。
放課後に合流して、一緒に買い物をして、料理をする。
細かい流れは小町が調整するから！　と言われ、俺は三浦を誘う任務を託された。
ちなみに、三浦には小町がこういった企画をするに至った経緯を一切説明していない。誘う以上俺が説明すべきだろうと言ったが、小町曰く「仲良くなるにはこの説明からしておきたいから」とのことだった。
さて、大丈夫かな……と思っていると、２人の会話の断片が聞こえてきた。
『……なんであんたがそれを……』
『昨日の夜にですね、……』
『そ、それを聞いてなんでこんなことになんの？』
『だって、お兄ちゃんのこと……なんですよね？』
『は、はぁ!?　べ、べべ、別に、そんなこと……！』
『声をおっきくすると聞こえちゃいますよ！　はぁ……うちの兄は面倒ですよね、ほんとお手数おかけします……』
『べ、別に……いいところもあるし』
『ほぁぁぁ……！　ぜ、ぜひともうちの……に来てもらえませんか！』
『は、はぁぁ!?　い、いきなり何言ってんの！』
『はぁ……こーんな素敵な人に……のに……お兄ちゃんはほーんとも

う、アレです……』
『アレってなんなの……』
『お兄ちゃん、ほんと鈍いですよね？』
『え？　いや、その……』
『正直、部分麻酔でも打たれてるのかってくらい鈍いですよね』
『ぶっ!?　……くく……っ、ちょっと、変なこと言わないで……』
『か、可愛い……っ！　優美子さんって呼んでいいですか？』
『へ？　別にいいけど……』
『やった！　ありがとうございます！　優美子さんも小町って呼んでください！』
『え、い、いいよそんなの』
『遠慮せずに！　ほら！　ほら！』
『……こ、小町……』
『最高かよぅ！　ありがとうございます！　全力でサポートしちゃいますね』
『だ、だから、サポートとかいいから……！』
『優美子さん……ふへへ……かわええ……』
『ちょっとキモいよ』
『うぐ……ごめんなさい』
兄妹揃って斬り捨てられてしまった。
最初はひそひそ話になっていたんだが、途中から声が大きくなり、スマホをいじっていても何を話しているかが大方聞こえてしまった。
俺は何も聞いていなかった、うん。
「お待たせ！　それじゃ行こっか！」
「おう」
小町がルンルンと歩き出し、俺と三浦がそれに続く。
「……」
三浦が、まるで未確認生物でも見るかのような目で小町の後ろ姿を見ていた。
「どうした」
「……あの子、ほんとにあんたの妹なの？」

もっともな質問だった。
「そうだな、普段はまるで似てないが、色々と追い詰められて目が腐ると俺そっくりになるぞ。つまり小町から限界まで心の余裕を奪うと俺になるわけだ」
「どんだけ自虐してんの……」
三浦がクスリと笑う。よく見れば、小町を見る目もずいぶんと柔らかくて優しい。
いきなりにも程があるイベントでどうなることかと思ったが……意外と、なんとかなりそうだ。
俺と小町はどちらも自転車で来ていたが、三浦は電車だったので3人でポテポテと歩く。買い物袋は俺と小町の自転車カゴに入れれば問題ないだろう。俺たちの自宅近くのスーパーで買い物をすることにした。
「優美子さん、どんなのを作りたいですか？　一般的な家庭料理なら大体いけますから！　どーんと頼っちゃってください！」
小町がニコパーッと笑う。はいはい、太陽太陽。
妹の問いに、三浦は何故か俺をチラリと見て「えっと……」と消え入りそうにぽしょぽしょと呟く。なんぞや。
三浦の様子を見た小町は「ほほう？」とあごに手を当てて鬱陶しい笑みを浮かべ、三浦の隣りに並んで耳を近付けた。三浦が俺のことをちらちらと見ながら、小町に耳打ちをする。
「これは……気合を入れないといけませんね！　頑張りましょう、優美子さん！」
「う、うん、よろしく……」
やる気みなぎる小町とは対照的に、三浦は風が吹いただけでかき消されそうなほど小さい声で呟いて俯いてしまった。元気がないというよりは恥ずかしがっているようだった。なんぞや。
三浦がチラリと、まるでリスがひょっこり顔を出すかのように可愛らしく見つめてきた。
「どうした」
「な、なんでもないし……っ」

プイと顔を逸らされてしまった。
なんぞや。
事情を尋ねる意図を込めて小町をちらりと見る。
ものっすごくニヤニヤしていた。
……なんぞや。

続く。

（31）

スーパーに行ったあとは、小町と三浦のやりとりを後ろから犯罪の匂いがしない程度に見守っていた。小町は三浦に、「〜を作るならこれがいいですよ」などと逐一丁寧に説明していて、ものすごく楽しそうだった。対して三浦は真剣にうなずきながら何やらスマホをいじっていた。どうやら熱心にメモをとっていたようだ。

たっぷりと時間をかけてスーパーを回って家に帰る。広い道を歩くときは徒歩の三浦を挟んで、自転車を引いた俺と小町がその横を歩いた。慣れない光景だが、いざやってみると意外と馴染んだので少し驚いた。

家に着くと、三浦の表情が途端に強張った。家を見上げる様はまるで魔王城か何かを見上げているようだ。うちにそんな恐い人はいないんだけどなぁ……。

「そんじゃ上がってくれ」

「え？　あ、うん、お、お邪魔、します……」

女子に話しかけられたときの俺のキョドり具合と並ぶのではと思うほどに、俺が声をかけたときの三浦は挙動不審になっていた。俺は猫を借りてきたのだろうか。

いつもよりサイズ感が一回り小さくなった三浦が、大人しく敷居をまたいだ。

×　×　×

リビングに入ると、三浦がそろそろと辺りを見回す。特に珍しいものがあるわけでもないだろうに。しかし他人の家というのは匂いから何からまったく違うだろう。いつも毅然としている印象の強い三浦がしゅんと丸まっているのはいっそ可愛らしくすらあった。

「……ヒキオ、なに笑ってんの？」

「ご、ごめんなさい……」

調子に乗った瞬間に撃墜された。

小町はメモ紙をまとめて置いてある箱からその内の1枚をサッと取り出すと、テーブルに置いたビニール袋の中身を確かめてものすご

い速度で何事かを書きはじめた。恐らくこの後、三浦にどのように教えるかを考えているんだろう。料理の適切な順番もあるだろうし。

主婦というのは、最も効率を重視した労働者であると聞いたことがある。家政婦などをしない限り対価はないためそういった認識は薄いと思われるが、確かに朝から家族の朝ごはん、弁当作り、掃除、洗濯等々を次々と並行してこなしているのだ。自分がそれらの作業を同じ時間でこなせるかと言ったらまずできないだろう。小町も長年家事をこなしてきたことにより、すっかり主婦の域に達しているようだ。

何が言いたいかと言うと、小町すごい。世界一の妹なだけはある。

「……え、え、なに？」

「ん？　ああ、カマクラか」

三浦が戸惑う声に振り返ると、ずんぐりむっくりしたうちの愛猫であるカマクラがナーゴと鳴きながら三浦にすり寄ってきていた。やだ、甘え上手！

三浦は初めこそ戸惑ったものの、

「へえ……可愛いじゃん」

と、まるでラブコメ漫画の第2話辺りの最後のコマで、ヒロインを陰から見つめて意味深なことを呟く怪しい新キャラのような言葉を言い、そっとしゃがみこんだ。三浦の脚はぴったりと閉じていたが、それでも反射的に横にスライドした。

「ナーゴ」

ドラクエに出てくる街の名前みたいな鳴き声を上げているカマクラを、三浦がうりうりと撫でる。手つきは至極優しく、瞳も優しく細められていた。いつの間にか顔から緊張の色が抜けている。俺もしゃがみこみ、三浦の手が及んでいない部分をうにうにと撫でる。2つの手に撫でまわされて、カマクラは気持ち良いんだか鬱陶しいんだかわからない顔をした。

「ふふ……」

隣から漏れた楽しそうな声に驚き、反射的に振り向く。俺が見たことで三浦もいましがた自分が発した声に気付いたのか、一瞬で顔を

真っ赤にして慌てて逸らした。
「あー、その、なんだ、うん。気に入ってくれたんなら、またカマクラと遊びに来てくれていいぞ。こいつも嬉しそうだし」
「え、い、いいの？」
三浦が目を瞬かせる。素直に喜んでいいのかわからないといった表情をしていた。
「……また来ていい？」
カマクラのあご周りをわしわしと撫でながら、三浦がエラく可愛い質問をカマクラに投げかけた。カマクラは喉をごろごろ言わせて三浦をちらりと見ると、「ナー」と鳴いてそのまま撫でられるがままになった。
「……来ていいってことなのかな」
「いいんじゃねえか」
俺の返事に三浦がクスリと笑う。
「わかった、また可愛がりに来てあげる」
「なんかその言い方、ちょっと恐いんだけど……」
「なんか言った？」
「い、いえ、なにも……」
冷や汗をかきながら顔を逸らすと、三浦がクスリと笑う。本気で怒ってるわけじゃなくてなによりです……。
しばしのあいだ、三浦と2人でひたすらカマクラをごろにゃーごろにゃー言わせていると、小町がメモ書きをやめ、複数のビニール袋を指差してブツブツ呟きだした。「これやって、これやって、ここでちょっと休憩入れて、これやって……よし」とキリリとした表情で呟くと、まるでテレビカメラが回ったタレントのように、にこぱーっと太陽のような笑みを浮かべた。
「それじゃ優美子さん、始めましょうか！」
「う、うん。よろしく」
三浦がおずおずと返事をして、最後にカマクラの背中を優しく撫でて立ち上がった。
「取り敢えず手を洗っていただいて、それからそこに今日作るものを

メモしたので眺めておいてもらえますか。手を洗うのはキッチンでやってもらって大丈夫ですので！」
「わかった」
　小町の指示に従って三浦がとてとてとキッチンに向かう。入れ違いに小町がこちらに来て、ついさっきまで三浦がいた場所にしゃがみこんできた。
「何か手伝うことはあるか？」
「うんにゃ、リビングでテレビでも見てて。優美子さんから見える位置にいるのが良いと思う」
　小町の言葉にはてと首を傾げる。
「そんなもんか」
「うん、そんなもんなの」
　小町がニコリと笑う。深くは聞かないでおこう。
　それよりも……と呟くなり、小町が急にニヤニヤとしだした。
「お兄ちゃん、やるじゃん。カマクラをダシに優美子さんを誘うとか……うりうり」
「やめろやめろ」
　肘で脇腹をぐりぐりと突いてくる。ニヤけ方が半端じゃない。
「俺はただ、三浦がカマクラをすげえ気に入ったっぽいから言っただけでだな」
「ほんとにー？」
「……ほんとだし」
「なんかいまの言い方、優美子さんっぽいね」
「……べらんめえ、うるせえやい」
「なんで急に江戸っ子になってんの……」
　生温かい呆れ笑いをされた。悲しい。
「小町、準備できたけど」
　手を洗ってメモの確認を終えた三浦が小町に声をかけた瞬間、妹の両目がクワッと見開いた。
「ぐふっ！」
『っ!?』

小町が上げた悲鳴に俺と三浦が同時にビクリと跳ねる。カマクラは知らん顔をしていた。
「おい小町、どうした」
「……名前呼びは……ほんとに、ええのう……」
「早く行きなさい」
「あ、うん」
素に戻るまでが早すぎる。
「それじゃ優美子さん、始めましょう！　オー！」
「え、あ、うん……」
元気よく握りこぶしを上げた小町に、三浦はおずおずと返事をするだけだった。
「優美子さん。オー！」
「……」
もう一度握りこぶしを振り上げる。三浦は戸惑ったままだ。
「……オー！」
「……オ、オー……っ」
根負けした三浦が、俺をちらりと見た後、消え入りそうな声で掛け声を上げ、肩くらいの高さまで握りこぶしを上げた。あまりにも不憫だが、可愛いと思ってしまったので小町を叱るに叱れなかった。

×　×　×

小町と三浦が調理にとりかかったところで、俺は手洗いうがいをしてからソファに腰掛けて、料理ができるまで何をするか考えていた。テレビを見ると行っても、夕方の時間帯のテレビであまり見たいと思うものはない。仕方ないのでカバンから参考書を取り出し、何か書くことなく勉強できるものを選んだ。カマクラをちらりと見やると、三浦がキッチンに行ったことであっさりとリビングを出ていった。ヤツめ、三浦を気に入りおったな……。
『優美子さん、これを切るときは……こんな風にやってみてください』
『わかった。……こ、こう？』
『うんうん、良い感じです！　どんどんやっていけば慣れますよ！』
小町の指導が褒めて伸ばすタイプのもので、そのうえ三浦はかなり

真面目に取り組んでいる。きっと上手くいくんだろうな、となんとはなしに思った。
しばしのんびり待つとしよう。
×　×　×
英単語を自分にしか聞こえない声でブツブツ読んでいると、キッチンから控えめに呼ぶ声がした。
「ヒキオ、ちょっと……食べてみてくれる？」
「お、おう、わかった」
明らかに緊張した様子の三浦に、俺まで釣られて緊張してしまう。
テーブルに座るように促されると、三浦が両手に料理の乗った皿を持ってやってきた。
「こっちは出汁巻き卵で、こっちがつくねハンバーグの照り焼き……です」
初めて聞いた三浦の敬語に面食らう。どうやら本当に緊張しているらしい。一瞬ツッコもうかと思ったが、あまりに限界寸前という顔をしていたのでやめておいた。
「わかった。じゃあまずは出汁巻き卵から……いただきます」
手を合わせて挨拶をすると、目の前に置かれた出し巻き卵を箸で割る。ふんわりと焼けた卵焼きは箸の圧力でほろりと割けた。
口に運ぶと、咀嚼するたびに砂糖や醤油、それから出汁の味が心地良く広がっていく。小町が俺の好みを知っているためか、少し甘めなのがまた嬉しい。ほふほふと言いながら噛んで呑み込む。幸せな味と熱が喉を満たしていった。
「うん、美味いな」
ちょっと偉そうになってしまったか……？　と悔やんでいると、俺の悩みなどまるで関係ないと言わんばかりに、三浦が花の咲いたような笑みを浮かべた。
「こ、こっちは？」
俄然勢いに乗った三浦がつくねハンバーグの照り焼きを差し出してくる。三浦の笑顔を見ると何だか俺まで嬉しくなってしまった。
ばくりと半分ほど一気に口に運び、たっぷりと味わう。

鶏肉と豆腐の混ざった柔らかな食感にねぎのシャキシャキとした食感が加わり、噛むごとにしょうゆやタレの旨みが溢れだしてくる。ほんのりと感じる生姜やニンニクがまたたまらない。これは強烈だ。ご飯が進む。
「……すげえ旨いな。ご飯が欲しくなる」
素で呟くと、三浦がなんだか泣きそうな表情を浮かべた。
「よかったぁ……」
心から安堵する表情に、胸がとくんと高鳴った。
「どう？　優美子さん、筋いいでしょ？」
小町が三浦の両肩に手を乗せてひょっこりと顔を出してくる。いつの間にそんなに仲良くなったんだ……。
よく見れば、出し巻き卵もつくねハンバーグも形はちょっと歪で、三浦が初心者であることを物語っている。それでも丁寧に作られた2品はどちらも本当に美味かった。
「ああ、すごいと思うぞ」
「よかったですね優美子さん！」
「う、うん……」
三浦がもじもじと俯く。小町、ハァハァするのはやめなさい。
「料理はこれで全部なのか？」
ビニール袋で買い込んだ食材は、覚えがあるだけでもまだまだあったはずだ。俺の問いに小町は笑いながら首を振る。
「うんにゃ、まだまだあるよ。でもね、ここからはお兄ちゃんは見なくていいよ！」
「え」
「というか見ちゃだめ！　明日以降のためにね！」
「ちょ、ちょっと小町、それ言うなし……！」
慌てて振り返った三浦が、小町の口を手で塞ぐ。小町は目を白黒させながらも、三浦と仲良くできているのが心底嬉しそうだった。ただ口を塞がれて喜ぶとなんだか危ない人に見えるのでやめた方が良いと思う。
「取り敢えず、俺は部屋に戻ってればいいんだな。終わったら呼んで

くれ。三浦を送るから」
「え、いや、そんなのいいから」
「いいっていいって、じゃ、続き頑張ってくれ」
「うん。お兄ちゃん、ご協力感謝します！」
「うい」
小町がシュピッと敬礼をした。俺も力の抜けた敬礼で返す。三浦は俺と小町を見て、そろりと手を上げかけたがすぐに下げた。もう少しで3人とも敬礼をしているシュールな光景を見れるところだったんだが……。
俺がリビングを出ると、小町がふたたび「それじゃ、残りも頑張りましょー！　オー！」と言っているのが聞こえた。さて、今度は何回目で観念して一緒に握りこぶしを上げるんだろうか……と思いながら、俺は部屋に戻った。

続く。

（３２）

小部屋に戻ってからは静かに勉強していた。小町に「お兄ちゃん、もういいよー」とＬＩＮＥで呼びかけられたのは数十分後のことだった。

駅まで送るあいだ、三浦はなんだか妙にぎこちなかった。まるで何か隠し事をしているような気配。けれど隠し事は隠し事でも、悪いことのようには見えなかった。

何なんだろうなぁ、と思いながらゆるゆると駅までの道のりを歩く。

「あ……ここまでで大丈夫。ありがと」

駅の前に着くと、三浦がぽそりと呟いた。

「ん、そうか。じゃあまた明日」

「あ、ヒキオ。その……」

「ん？　どうした？」

「……な、なんでもない。また明日」

「……おう」

奥歯に限界まで物が挟まったかのごとき振る舞いだった。こういうときに余裕のある振る舞いをして「どうしたんだい？　何か言いたいことがあるんじゃないかい？」と言える男に……はなりたくねえな。何のキャラだこいつは。

三浦が駅に入っていくのを見送ると、明日は何が起こるのだろう……？　と考えながら帰路についた。家に帰ると、小町が「あ、お兄ちゃんおかえりー……って、あー！」と突然叫んだ。

「どうした」

「英語の予習し忘れてた……あの先生超怖いんだよね……。ああもう、後はお風呂入って寝るだけだと思ってたのに……」

「……まあその、なんだ、頑張れ」

「うん……」

頭をぽんぽんと撫でると、小町がなにか不服そうな顔をしている。

「どうした、撫で方が下手だったか」

「年頃の妹の頭を撫でて、妹が不満そうな顔をして、それに対して自分が撫でたこと自体を悪手と思わないお兄ちゃんの神経に乾杯」
「うぐ」
鈍い刃物が心臓にぐさりと刺さる。そ、そっかぁ……小町ももう、そんなお年頃なのね……。
まあ、それは別にいいんだけど……とケロっとした顔で言い、「それはこっちに置いておいて」のジェスチャーをする我が妹。不用意に人を傷付けるのはやめてほしい。正論なんだけども。
「今みたいなのを、優美子さんにもちゃんとやってほしいなーって可愛い妹は思うのです」
にこぱーっと笑いながらそんなことを言ってくる。
「可愛い妹なのは間違いないが……そんなことしたらドン引きされるだろ」
「うーん……慣れ親しんだ人には平気でそんな歯の浮くことを言えるくせに、そうじゃない人との隔たりがちょっと大きすぎるなぁ……」
なんかマジのダメ出しをされた。
「三浦にねぇ、うーむ……」
自分の手のひらをじっと見つめて考える。ここで「まだ……力が足りないか……」などと呟けば立派な中二病の完成だが、今はそういうわけではない。そういう時期もあったけど。
「おや？　おやおや？」
俺の様子に気付いた小町が、後ろ手に組んでやけに楽しそうに笑いながら顔を近付けてきた。ウザい！　可愛い！　でもウザい！
「お兄ちゃん、優美子さんの反応をひたすら気にしてるようだけど……撫でること自体は抵抗ないんだ？」
「え」
「だって、全然嫌がってないでしょ？　あくまで『三浦がどう思うか心配だ～』って思ってるだけじゃん」
小町のキラキラした目が急に澱み、覇気のない声が瘴気のごとく溢れ出た。
「お前、１６年近くにいた兄の物真似がそこまで下手って……もはや

悪意を感じるぞ」
「そりゃもう、悪意と皮肉を込めてるからね！」
　両手を腰に当てて太陽みたいな笑みを浮かべられた。ここまで開き直られるともはや何も言えない。
　力技である。
「しかしまあ、うん、別に俺が三浦の頭を撫でるのはまあ……うん」
「お兄ちゃん、言い淀み方が比較的マジでキモいよ」
「平坦な顔で言うのやめてくれる？　今悲しみで死にそう」
　今度は鈍くない刃物が心臓を貫いてきた。つらい。
「とにかく！」と、小町がシュピッと俺の顔を指差した。距離が近かった上に指を差されたものだから、指が本当に目の前にある。さりげなく失明させる気なのかしらん？
「優美子さんにそういう積極的なことをしても、きっと大丈夫だよ。２人は今そんなフェーズに差し掛かっています」
「お前には今何が見えているの？」
「神様みたいな俯瞰の視点で２人の関係性が見えています」
　予想していない答えが返ってきた。まともな返しなど思い浮かぶわけもない。
　頭をがしがしと掻き、ふうと息を吐く。深い吐息だったが、ため息ではなかった。
「……まあ、検討する。それよりいいのか、予習しなくて」
「あー！　そうだよもう、お兄ちゃんと話してる場合じゃ……いやでも、未来のお義姉さん獲得のためには必要な時間だよね……」
　難聴系主人公のスキルを瞬間的に使わせてもらい、聞こえなかったフリをした。
「それじゃおやすみ、お兄ちゃん！」
「あいよ、おやすみ」
　とてとてと急ぎ足で小町が階段を上っていく。
「そういやあいつ、ちょっと背が伸びたか……？」
　年齢を考えれば成長していても全くおかしくないのだが、それでも小学校や中学校に比べれば成長の幅は落ちる。不意に感じた妹の成

長は、なんだか感慨深かった。
　そんなことを思いつつ、ふと手のひらを見る。
「まだ……力が足りないか……」
「ナーゴ」
「!?」
　なんとなく中二病丸出しのセリフを呟いた瞬間、足元で聞き慣れた鳴き声がした。宇崎ちゃんばりに急激に腰を回して振り返り、下を向く。幸い腰は痛めなかった。
「ナーゴ」
　カマクラは、俺の台詞を心底あざ笑うかのようにもう一度鳴くと、エサをねだるでもなくとてとてと去ってしまった。猫とはいえあの台詞を聞かれてしまったのは本当に恥ずかしい。ちなみにこういった台詞を聞かれて一番まずいのは材木座だ。仲間だと思われてはたまったもんではない。
　もう少し勉強して、風呂に入ったら寝よう。
　問題集をどこまで進めていたかをぼんやりと思い出しながら、部屋に戻った。

×　×　×

　翌日の朝。
「あ、そうだお兄ちゃん」
「なんだ」
　２人並んでゆるゆると自転車で学校に向かっていると、小町が何か思い出したように声を上げた。
「今日は購買に行かなくていいよ」
「……なに、遠回しのイジメ？　俺には昼飯はいらないってこと？」
「なんで妹がそんなことすんのさ……まったく」
　まあ、実際どうなったかわかんないしなー、と小町は何やら意味のわからぬことをぽそぽそと呟くが、細かいところは涼しい風に吹かれて掻き消されてしまった。
「ま、もし何のイベントも起こんないようだったら、購買に行っていいよ。昼休みになったら5分だけ待ってみて」

「え、何のギャルゲーの話だそれ」
待機時間が条件のイベントって中々無いのでは。
俺の返しに対して小町がジト目を向けてくる。まあまあ本気で軽蔑しているときの目だ。心臓が石化しそう。
「いいから待っといて。わかった？」
「お、おう……」
有無を言わさぬ口調に素直に頷くと、「よろしい」と鷹揚に言ってにゃはっと笑った。アメとムチの使い分けが上手すぎて将来が心配である。

×　×　×

教室に着くと、三浦がなんだか妙にそわそわしていた。それでも会話はいつも通りしていたのだけれど、昼休みになるとふたたびそわそわが再発した。
うん、なるほど。
これは……購買に行きづらいね！
三浦さん、ずっとそわそわしてるのに、目線は俺に固定されている。おどおどしているようにも、「行くなよ？　絶対行くなよ？」とおどしかけているようにも見える。ものすごく動きづらい。助けて！　なんなの！
得体の知れない汗をかいていると、三浦がゆっくりとこちらに顔を向けた。
「あ、あの、ヒキオ……ちょっと、付いてきてくんない？」
「……ああ、いいけど」
上目遣いなんだけど、緊張しているのか何なのかやたらと眼光が鋭く、その上言葉のチョイスが明らかに怖い。気弱な女の子が釘バットを持ってカツアゲしている映像が浮かぶような、ちぐはぐな仕草と言葉だった。
人間ってこんなにぎこちなかったっけ？　という動きをしながら教室を出ていく三浦の後ろをすごすごと付いていく。傍から見れば、一緒に行動しているようにさえ見えないだろう。
何が起こるのかはなんとなく予想していたのだけれど、なんだかよ

く分からなくなってきた。

続く。

（３３）

三浦に連れられて屋上に向かう。三浦は何やら大きな袋を持っているのだけど、時折俺をちらりと見てくるときの顔がやけに険しい。

今朝は「もしかして三浦が弁当を作ってきてくれるのかも？」と一抹の期待を抱いていたが、今は先輩にしめられる後輩のような気分だ。何が待っているのか本当に予測がつかない。

こっそりと階段を上って屋上に出ると、柔らかな風が三浦の髪を揺らした。夏の気配が色濃く残る日だと暑くてとても外に出られたもんじゃないが、今日はとても心地良い涼しさだ。外に出るのもやぶさかではない。俺は何様なんだろう。

「ええっと、それで俺はどうすれば……」

しどろもどろに三浦へ問いかける。

昔父から聞いたことがある。昔はカツアゲされた人が本当にもうお金を持っていないか確かめるために、ぴょんぴょんとジャンプさせたのだと。そしてチャリンチャリンと音がしたらまだ小銭が残ってんじゃねえかおらぁと言って脅しかけるのだと。持ってるのがお札だったらバレないよね？　そんなこと本当にしてたの？　と父に尋ねると、「俺もドラマでしか見たことがない」と言われた。真偽やいかに。

何の話だ。

俺の問いかけに対して、三浦は何だかそわそわとしながら眉根を寄せた。

「い、いいから。ほら、こっち座って」

「お、おう、はい」

立ち位置が定まらない返事をして、三浦に指示されるがままに三浦の隣へと腰を下ろす。

手に持っていた袋から、何やら弁当箱のようなものが出てきた。

というか、どこからどう見ても弁当箱である。

そうか、弁当を食べさせた上で金銭を要求するぼったくり方式か。

落ち着け、俺。

いくら三浦が顔を真っ赤にしているからって、動揺しすぎだろう。
「あ、あの……これ、昨日、小町に教わったんだけど……」
妹本人がいない状態で名前で呼んでくれることを嬉しく思いつつも、三浦がしおらしく目を泳がせながら弁当箱を渡してくる様にこちらまで緊張してしまう。
「お、おう、そうか。ありがとな」
両手で差し出された弁当箱を、きっちり身体を正面に向けた状態で同じく両手で受け取る。弁当童貞の卒業である。なんだ弁当童貞って。
三浦がジッと見つめてくる。早く開けろと言うことらしい。
「……おお」
蓋を開けると、思わずため息を漏らした。
中には昨日も作ってくれたつくねハンバーグと出し巻き卵、それに加えてポテトサラダ、きんぴらごぼうが入っていて、ご飯にはふりかけがかけられていた。
三浦は俺のリアクションに取り敢えず安心したようにフゥと息を吐いたものの、またすぐに俺をジッと見つめてきた。緊張で口元をむずむずさせながら、早く食べてとせかしているようだ。何だこの可愛い生き物は。
箸を持っていただきますの挨拶をして、まずは昨日も作ってくれた出汁巻き卵をぱくりと口にする。少し甘めにした優しい味わいに思わず頬が緩む。
「うん……すげえ美味い」
するりと本音を述べると、三浦の表情がパァッと明るくなった。
「よかったぁ……。一人でちゃんとできるか不安だったから……。味見はしてたんだけど自信なくて……」
「……っ」
心の底から安心したように微笑む三浦の表情に、五感の一部が麻痺してしまった。
この後、つくねハンバーグ、ポテトサラダ、きんぴらごぼうと続け様に食べながらひたすら褒めていたが、申し訳ないことに味はわかっ

ていなかった。俺が食べる様子を三浦がずっと嬉しそうに見ていたからだ。
きっと俺が今食べている料理は美味いんだろうなと思いながら食べるという、奇妙な時間になっていた。
三浦に食べないのかと聞くと、慌てて自分の分を取り出して食べ始めた。その仕草がまた可愛らしくて、三浦にバレないようにくすりと笑った。
「……なんかおかしい？」
「いえ、なんでもないですすみません」
バレてた。

× × ×

弁当を食べ終えて礼を言うと、三浦は照れたように首を振って、そそくさと弁当箱を片付けた。すっかり可愛い生き物と化した三浦を見ながら、残りの時間はどうしようかと考える。昼休みの時間はまだそれなりに残っていて、教室に戻って何かやるにも中途半端な時間だ。
三浦が良いのであれば、このまま昼休みの終わりギリギリまでここにいるのもアリか……？　などと考えていると。
「ん……っ」
三浦が首をこっくりこっくりと傾げて、目元をこしこしとこする。なんだか妙に幼く見えた。
「眠いのか」
昼ご飯を食べた後に眠くなるのはごく自然なことではあるが、それにしても今の三浦はどう考えても寝不足にしか見えなかった。
「……昨日、頑張りすぎた……」
うとうととしながら、ちらりと弁当箱を見やる。この言葉と視線を目の当たりにして、三浦の寝不足の原因に思い至らない訳がなかった。
「……美味かった。ありがとう」
「……ん」
眠気により表情筋の動きが鈍くなっているのか、俺の言葉にうっす

らと目を細めて返事をする様がちょっと色っぽい。
三浦はスマホでちらりと時刻を確認すると、少し戸惑った様子で尋ねてきた。
「ヒキオ……ちょっと寝ていい？」
三浦の言葉に、思わず目をぱちくりさせてしまった。三浦は俺の反応が不思議だったのか、目をぱちくりさせている俺を見て目をぱちくりさせている。ぱちくりというフレーズがゲシュタルト崩壊を起こしそうなほどお互い目をぱちくりさせている。
「あー……まあ、うん、俺は問題ない」
「何その言い方……ありがと、ちょっと寝るね」
「おう」
俺が躊躇する素振りをあまり見せると、三浦の眠気が飛んでしまうだろう。いちいち躊躇う理性という名のチキンハートを押さえ込み、顔をそむけながらも了承することに成功した。
三浦は俺の言葉にクスリと笑うと、膝を抱えて小さく丸まり、膝におでこを預けて目を閉じた。よほど眠かったのか、すぐさま静かな寝息が聞こえ出す。空を見上げると、白い雲が呑気に泳いでいた。空もこちらも、吹いている風は優しいらしい。
「……んん？」
右肩に柔らかな重みがかかる。何が起きたかは確認するまでもなく、眠った三浦がしなだれかかってきていた。長い金髪がさらりと流れ、俺の腕を蠱惑的に撫でていく。
電車でのドキドキイベント、ふたたび！
うん、これはアレだな。三浦が心地良く眠れるように、俺は石となってきっちり三浦の身体を支えないとな――と必死に言い聞かせていると、ふと昨日の夜に小町から言われた言葉を思い出した。
『優美子さんにそういう積極的なことをしても、きっと大丈夫だよ。2人は今そんなフェーズに差し掛かっています』
あの時は「そんなバカな」と思っていた。けれど、今こうして三浦が寝る間を惜しんで弁当を作ってきてくれたことや、二人きりの状態で自分から寝ていいかと聞いてきたことを考えると――我が妹の言

葉を、ちょっとくらい信じてもいいのではないかと思ってしまう。
かと言って、寝てるときにするのはまた違うよな……？　と思っていると。
「ん……っ」
三浦がどこか色っぽい声を漏らし、俺の肩に心地良さそうに頬をすり寄せた。丸まっていた姿勢がほどけて、すらりと伸びた脚を流し、ますます俺にしなだれかかってくる。三浦の身体は驚くほど軽く、冗談かと思うほど柔らかい。
「……っ」
髪の毛からふわりと甘やかな匂いがする。目の前に見えるつむじが可愛らしい。
ごく自然に、まるで自分の行動が予めプログラムとして組み込まれているかのように、三浦の頭に右手を伸ばして静かに撫でた。
「ん……っ」
三浦の声に一瞬驚いたものの、もぞもぞと身じろぎするだけで避けようとはしない。そもそも寝てるんだしな……と思いながらも、滑らかな髪を何度も撫でる。撫でるたびに三浦は気持ち良さそうに身じろぎして、ますます俺に身体を密着させてきた。
え、あれ？　本当に近くない？
寝相でちょっとばかり俺に近付くのは、まあわかる。丸まっていた姿勢が変わるのも、人間は寝返りを打つ生き物なのだから別に不自然ではないだろう。
しかし今の三浦は、顔から肩、上半身全体、そして柔らかな太ももまで限りなく密着してきている。三浦がわずかに身体をよじるだけで、自分とは違う女性特有の柔らかさがガツンと頭に叩き付けられる。俺を抱き枕か何かと勘違いしているのではないだろうか。
これで三浦が起きたら、真っ赤な顔をした女王様にゴルゴダの丘にでも連れて行かれそうな気がする。
どうしよう……と冷や汗を流すものの、これで俺が離れようものなら三浦が倒れてしまうし、それを支えようとしたらほっそりした身体を思いきり手で支えることになってしまう。

今からＡｍａｚｏｎでマジックハンドを購入した方がいいかしら、ドローンなら屋上に運んでくれるかもなどと本格的に混乱しながらも、ちゃっかり俺の手は三浦の頭を引き続き撫でていた。
「ん……っ」
三浦が目覚めた。
終わりの始まりである。
「お、おっす」
今まで一度も口にした事が無い野澤雅子ボイスの国民的ヒーローの挨拶をする俺を見ても、三浦はポケーッとしていた。
続いて、自分の頭に俺の手が乗っていることを確認。
そして、身体がぴったりとくっついていることを確認。
眠気が漂っていた三浦の顔が、一瞬で茹だった。
「な……っ」
溢れ出した思考が喉で詰まって、言葉にならなかったようだ。
「ええと、その、すまん」
社会的＆肉体的な死を覚悟しながら謝ると、三浦は長い髪の毛からちらりと覗かせた耳まで真っ赤にしながらも、口元をもにょもにょとさせて何とか言葉を紡いだ。
「べ、別に、ヒキオが謝ることじゃないし……あ、あーしからくっついちゃったんでしょ？　その……ごめん」
「え、あ、いや、それは別に、全然構わないというか……」
予想よりも遥かにしおらしい様子の三浦に戸惑い、思いつくままに言葉を発してしまった。三浦の顔がさらに赤くなる。
で、でも……と、三浦がもじもじと動く。視線は頭の上の俺の手に向けられていた。
「あ、す、すまん」
慌てて手を離すと、三浦は――俺の自惚れでないとするならば――ちょっとだけ、残念そうな顔をしたように見えた。
「……別に、やめろなんて言ってないし……」
ちょっと恨みがましさの混じった言葉を呟き、上目遣いで見つめてくる。視界がぐらりと歪んだ気がした。

この後三浦が何を言うのかも、俺が何を言うのが適切なのかもまるでわからない。ものの見事に固まっていると、三浦がぽそりと囁く。
「……ね、寝てるときにされたってわかんないから……明日からは、その、あーしが、起きてるときに、……し、して……っ」
「……っ」
予想だにしなかった言葉に反射的にごくりと喉を鳴らすと、三浦がビクリと跳ねた。上目遣いで恐る恐る俺の瞳を覗き込む姿は、森にいる小動物を思わせた。
三浦の顔は真っ赤だ。俺の顔も多分、真っ赤だ。
「……あー、まあ、うん、その、なんだ……了解した」
俺の言葉に三浦はきょとんとして、それから嬉しそうに、ふわりと花が咲いたように笑った。ずっと見ていたくなるほど綺麗な笑みだった。
「……変なの」
ずいぶんな返事だったが、言葉の割にその表情がどこまでも幸せそうだったので何も言えなかった。昼休みがあと数分で終わるというタイミングだったため、少し急ぎ足で教室に戻った。
――明日からは、ということはこれからも弁当を作ってくれるのか、とか。
――俺はそのたびに、三浦が見守る中で頭を撫でることになるのか、とか。
具体的に聞きたいことはあったのだけれど、この雰囲気を壊すのがいやだったので何も言わずにいた。
柄にも無く、と言っていいのだろうか。
三浦と教室に戻るとき、どうしようもないほどの幸せが胸に満ちていた。
続く。

（３４）

三浦が初めて弁当を作ってくれた日から、毎日ではないもののちょこちょこと作ってきてくれるようになった。２日連続で作ってくれるときもあれば、月曜日と金曜日に作ってくれる場合もある。定期的ではないため、俺は昼休み前になるといつもそわそわしていた。

「ヒキオ。……ん」

「……おう」

弁当を作ってくれた日の三浦は殺人的な可愛さで、４限が終わると制服の袖をくいと引っ張ってくる。そしていつの間に入れていたのか、机から弁当箱をちらりと見せてくる。その一連の仕草を見るたびに窓を開け放して叫びたい気持ちになった。

４限の終わりを告げるチャイムが鳴ると、俺は隣の三浦に視線は向けずとも全力で神経を張り巡らせた。

どっちだ、どっちだ……と、心臓がノックされているのかと思うほど昂ぶらせていると――普段の態度からはおよそ見当もつかないほど控えめに、袖をくいくいと引かれた。

「ヒキオ。……ん」

「……おう」

声は小さくて、少し掠れていて、何よりも優しい。

口元をむずむずさせながら、そっと教室を出て屋上に向かった。

× × ×

「ごちそうさまでした」

「ん、……お粗末さま」

三浦が照れながら言葉を返してくれた。お粗末さまと言ってくれるようになったのはここ数日のことだ。

「美味かった。……いつも助かる」

「……うん」

三浦が頬を朱に染めて頷く。頷いたきり、顔を上げてこない。何事かと見やると、上目遣いで俺を見つめていた。しっとりとした瞳に心臓が高鳴る。

今日もこの時間が来てしまった。来て『しまった』と言うのは三浦に失礼なんだが、心臓に悪いのだ。良い意味で。良い意味で心臓に悪いってなんだ。

三浦が上目遣いで見つめてくるのは、俺をからかいたいなどと言った意図からではない。三浦はあくまで純情おかんヤンキーなのだ。ものすごいフレーズができてしまった。本人には絶対に言えない。

三浦が上目遣いなのは――俺が、頭を撫でやすくするためなのだろう。

「……」

夏の気配が少しずつ溶けて消えていく空を眺めながら、金色の髪をくしりと撫でる。

「ん……っ」

華奢な肢体がぴくりと動く。僅かな振動は何十倍にもなって俺を動揺させる。

ちらりと視線を隣に移すと、綺麗なつむじが見える。根本がちょっと黒くなっていた。三浦のことだからこの週末にでも染め直すのだろう。

「ん……っ、……」

気が付けば、三浦の僅かな反応を見逃すまいとジッと見つめながら頭を撫でていた。三浦の髪はとても触り心地が良く、男である自分とのあまりの違いに驚く。性別の隔たりは身体のちょっとした部分にもはっきりと表れるのだという、あまりにも当たり前なことを今さらながらに実感した。

「ヒキオ……その、見すぎだから……」

「あ、ああ、すまん」

慌てて視線と手を離す。すると三浦は眉根を寄せて拗ねた表情を浮かべた。

「……手まで離せとは言ってないし」

「……お、おう」

難問にも程があるだろう。

三浦の髪をふたたび撫でつつ、視線は空とつむじを行ったり来たり

する。
ふとした瞬間に、甘やかな匂いがふわりと香ってくる。反射的に湧き上がる衝動に従い、肩を抱き寄せたくなる。本能とのバトルを静かに繰り広げながら、昼休みの残りの時間を過ごした。
× × ×
弁当を作ってもらう以外でも、三浦は少しずつ俺に対する態度が変化していた。
ある日の昼休みのこと。４限終わりのチャイムが鳴ると、教室に由比ヶ浜と海老名さんが現れた。三浦に用があるとのことだった。
「ヒキオ」
三浦が席を立って教室を出る直前、手に小さなメモ紙を渡された。
『今日は作ってない。ごめん』
三浦の厚意でやってくれていることなのだし、弁当が無いと分かった日でも購買に行けば腹を空かすこともない。わざわざ謝らなくてもいいのに……と、思わず頬をゆるめた。
三浦と一緒のときは屋上に行くのが定番になっていたが、今日は久しぶりにテニスコートが見える『いつもの場所』に行くことにした。
× × ×
購買で買ったパンをもっふもっふと食べ終えて、ポケーッとする。ここ最近は弁当の有無を問わず三浦といることが当たり前になっていたことを思い出し、自分の変化に驚いた。
気晴らしに、最近あまりログインできていないソシャゲを進めようとスマホを取り出す。いつものログインボーナスに加えて新しく始まったイベントのボーナスももらった。
青空の下でやるソシャゲも中々おつなもんだな……などと思っていると、「あ」という声が聞こえた。
「ヒキオ、ここにいたんだ」
「おう」
用事を終えたのか、三浦がパンと紅茶の紙パックを持ってこちらへやってきた。当然のように隣に腰を下ろしたが、少し前までのように戸惑うことがなくなった自分に気付く。

「一回屋上に行っちゃったし」
「おう、すまん？」
疑問形で謝ってしまった。別に俺、悪くないよね？　あれ？
俺が盛大に戸惑っている間に三浦の中ではこの話題は終わったことになったらしく、テニスコートを眺めながらパンの袋をピッと開けた。改めて、細い指だなと思った。
「何してんの？」
三浦の視線が俺のスマホに向けられる。
「ああ、ソシャゲだ」
「ソシャゲ？」
三浦が首を傾げながらパンにぱくついた。
「ああ、ＴＬにしょっちゅう絵が流れてくるような流行りのタイプではないやつだけどな。無課金でも結構楽しめるからちょこちょことやってる」
「ＴＬ……？　無課金……？」
三浦の顔がどんどん訝し気になってきたところでハッと気付く。以前材木座と最近のラノベの話をしたとき、由比ヶ浜や一色が同じような顔をしていたことに。
あのときはまだ材木座と話していたからいいが（いや、よくはないんだが）、今は三浦しかいない。なのに三浦にとっては未知な言葉を説明もなしに並べ立てるというのはよろしくない。非常によろしくない。
これは引かれるぞ……とビクビクしていると、三浦が小さな口をくもくもと動かし、細喉をこくりと鳴らした。
「ヒキオ、全然意味わかんない。ちゃんと教えて」
極めてフラットな表情で俺をジッと見ながら、２人の距離を一気に半分にまで詰めてきた。甘やかな匂いがふわりと香る。一昔前のアニメなら手が千手観音のように動いて慌てふためくところではなかろうか。
しかし、これは一体どういう風の吹き回しなんだろうか……？
俺がつっかえながらも一つ一つの単語を説明していくと、三浦はス

トローで紅茶を飲みながらふむふむと頷く。あまりピンとこないときは生まれたてのパグのようにくりんと首を傾げるので、その都度追加で説明をした。首の傾げ方が可愛すぎるんですけども。
一通り説明を終えると、三浦はちゅるるっと紅茶を飲んで、ストローから唇を離した。
「……あーしもやってみよっかな」
「え」
思わぬ言葉に素っ頓狂な声を上げてしまう。俺の反応を見て、三浦は片眉を上げた。
「なに？　そんなおかしい？」
「いや、別にそういうわけじゃないんだが……ビックリした」
ぼそぼそと呟くと、三浦がぴったりと脚を閉じて膝におでこをくっつけた。
「……もっとヒキオのこと、知ろうと思ったっていいじゃん……」
「……っ」
きゅうっ、と心臓が締めつけられた。その声は切なげで、切実で、少しだけ泣きそうだった。
「……あー、それなら漫画とかはどうだ？　そっちの方がとっつきやすいかもしれない」
何か言わなくては……と苦し紛れに言った言葉だったが、三浦はぴょこっと顔を上げて食いついた。
「ヒキオってそんなに漫画持ってんの？」
「ああ、まあ……漫画と小説だな。本棚に結構ぎっしりと入ってる」
「へえ。じゃあ今度見に行っていい？」
「別にいいけど……って、え？」
「え？　……あ」
三浦の言葉に驚いた俺を見て、三浦は今自分が何を言ったかに気付いたようだった。見る間に顔が赤くなっていく。俺は俺であっさり了承してしまったために耳まで熱くなっていた。
「……あ、そ、その……いつか時期を見て、……行く」
「……お、おう」

曖昧極まりない言葉ではあるが、エラくハードルの高いイベントが予約されてしまった。

続く。

（３５）

「ヒキオ。今日の放課後空いてる？」

帰りのＨＲが終わった直後、ボーッとした顔でどこを見てるかわからない隣の席のクラスメイトに声を掛けた。

「……ん、空いてる」

こっちをチラリと見て、まるで興味が無いかのように答える。ちょっと目が泳いでるから、少なからず動揺してるのは丸わかりだった。

話しかける直前のボーッとした顔。知り合った頃はなんでこんな間抜けな顔をできるんだろうと思っていたけど、今ならその表情の意味がわかる。何か小面倒なことを考えているんだ。あの顔はカモフラージュなんだろう。ほんとにボーッとしてるときも結構多いけど。

今ならきっと、あーしが話しかけるのを待っていてくれた。これ見よがしに待とうとせずに、ちょっと間抜けな顔で、待っていることがバレないように待っていてくれた。バレてるんだけど。ヒキオのくせにちょっと可愛い。

「外か？」

「ん」

２人合わせて４文字の会話。どこの老夫婦なんだろうと思った瞬間、顔が熱くなって慌てて顔を振った。ヒキオは首を傾げながらも席を立ち、「んじゃ、行くか」と呟いた。

人がたくさんいる場所だと、ヒキオの声はいつにも増して小さくなる。気を遣ってくれているのはわかるけど、これじゃ会話をしてるのか、独り言に対して返事をしてるのかわからなくなるときがある。

ヒキオの数歩後ろを歩いて教室を出る。廊下に出たところで左隣に並ぶ。最近できあがった『いつもの光景』だ。

「……」

ふと、ヒキオの手を見る。左手はポケットに突っ込んでいるから、鞄を持って揺れてる右手を、ちらりと。

思ったよりも大きくて、思ったよりもごつごつした手。

今までもヒキオの手に偶然触れるようなことはあったけれど、最近はどういうわけか週２回ペースで頭を撫でられているから、その感触がよくわかる。

ポケットに突っ込まれた左手を見る。もちろん見えないけど、もぞもぞと動いてるのがなんだか可愛くておかしい。そのことを本人に言ったらムスッとしそうだけど。

――このポケットに手を入れたら、ヒキオはどんな反応をするんだろう？

湧き出した疑問は、ふっと浮かべた呆れ笑いと一緒に消えた。

空気を読まなかったり、急にわけわかんないことを言い出したりするくせに、妙に空気を読んでたり、優しくしてほしいところで優しくしてくれたりする。

すぐ隣を歩く、一見冴えなくて、２年生の最初の頃の自分なら興味も持たなかったクラスメイトとの距離が。

近付いている気はするけど、思ったよりも遠くにいる気がして。

なんだかずっと、掴めないでいる。

×　×　×

市立図書館で勉強するという、もう何度やったかわからないお決まりのコース。図書館に行くと言うと、ヒキオは驚きもしなかった。当たり前だけど。

いつものように、学習室のある3階ではなく2階の端に座る。どこに座っても一緒だと思っていたけど、ヒキオに先を行かせると毎度のように端っこに行くから、いつからかあーしが選ぶときも端の席を選ぶようになった。

端の席に座るのもいつも通りだし、あーしが隣に座るとちょっとビクッとして挙動不審になるのもいつも通り。ヒキオはいつになったら慣れるんだろう、この数十センチの距離に。

……人のことは言えないけど。

×　×　×

閉館時間の２０時まであと３０分を切ったところで、いつの間にか周りには誰もいなくなっていた。見えない位置に司書の人はいるは

ずだけど、それでも目に見える場所には誰もいない。
「ヒキオ、ここなんだけど……」
残り時間を考えると、これが今日聞ける最後の質問だ。ヒキオは優しいから、きっとこの後帰ってから電話で聞いても答えてくれると思う。けれど、あまり負担はかけたくなかった。だからこの質問で今日はおしまい。
問題集ごと身体を右に寄せると、ヒキオはビクリとしたものの何とか踏みとどまった。最初の頃はあーしが動いたのと同じ分だけスライドして逃げていたことを考えると、すごく変わったなと思う。
問題集の手前にノートを置いて、わからない部分をあれこれと説明する。ヒキオは一通り聞くと、あごに指を当てて考え込んだ。あーしは返事待ち。暇を紛らわすという言い訳を作って、ヒキオがあごに当てている右手を眺めていた。
「……ん。この場合は……」
一つ頷いたヒキオが、右手で問題集を指差した。あーしの意識はヒキオの指先と問題文へ。自分の右手をどこに置いてたか、とか。ヒキオの左手の位置はどこなのか、とか。そんなこと、わざわざ考えたりしなかった。
考えたりしなかったから、ヒキオの左手とあーしの右手が触れ合ったときは、心臓がはじけ飛ぶかと思った。
――ヒキオはすぐに離れると思った。声をひっくり返らせながら手を離して、そしてすぐさま謝ってくるんだろうと。
――あーしも、すぐに離れると思った。なるべく動揺を顔に出さないようにしながら、ヒキオとほぼ同時に謝るんだろうと。
――けれど。
（……あれ？）
事故のように触れ合った小指は、数秒経っても触れたままだった。
「……三浦？」
「……あ、ご、ごめん。聞いてなかった」
大して気にしていないのか、ヒキオは小さく頷いて、すぐに説明をし直してくれた。

ちらりと視線をずらす。小指は触れ合ったままだ。
どうせならとしばらくそのままにしていると、段々、細い指の側面が触れているだけでは寂しくなってきた。ちょっとずつ、ちょっとずつ小指をよじ登らせて、ヒキオの小指を跨ぐ。ほんの数センチ移動するだけで、心臓がおかしくなるくらい高鳴っていた。
ヒキオはピクッと動いただけで、構わず説明を続けていた。
あーしがこんなにドキドキしてるのに、なんでヒキオはそんなに平気なの……？
疑問が湧いて、ちょっと悔しくなって、怒りたい気持ちになった。
めんどくさいヤツだと自分でわかっていても、目の前で平然と説明を続けているヒキオをどうにか動揺させたくなった。
「……でだ。ここで……」
ヒキオの説明を聞きながらも、あーしの小指はヒキオの小指に続いて薬指、中指、人差し指を跨ぐ。ヒキオの左手の上に、あーしの右手が丸々重なった。ヒキオの手の方がずっと大きくて、なんだか妙に頼もしい。
ヒキオは動揺してる……？
ちらりと顔を見ると。
「……ええと、すまん。どこまで説明したか忘れた。……ああ、そこか。うん……ええと……ちょっと待った、すまん、なんか頭の調子が悪い」
明らかに動揺していた。それで動揺が隠せていると思っているんだろうか。
何をしても平気なように見えたヒキオが動揺するのを見れて満足していると――あーしの手の下にあったヒキオの左手が、急にひっくり返った。
「……っ!?」
思わず声を出しそうになって、すんでのところで抑えた。
ヒキオの右手は手のひらが上になっていて、あーしの右手に指を絡めてきていた。すぐ下に感じていたたくましさを手のひら全体に感じて、身体の奥底から熱くなる。

「三浦、どうした？」
「え、あ、うん……なんでも、ない……」
あーしが動揺したからなのかはわからないけど、ヒキオはまた冷静になっていた。手は汗をかいてるから緊張してるみたいだけど、あーしに比べるとまるで平気なように見える。
なんだか悔しいけど、それ以上に幸せで。
閉館ギリギリまで、あーしとヒキオは手を繋いでいた。
――帰りはいつものように送ってくれたけど、まともに顔を見ることができなかった。ヒキオはやっぱりいつも通りで、それが悔しかった。手をもう一度握ってみようかと思ったけど、恥ずかしくてできなかった。
「ヒキオのくせに……」
自分の部屋に入るなり制服のままベッドに飛び込み、うつ伏せで枕に顔をうずめて呟く。たった3文字の呼び名を口にするだけで、身体中が熱くなって、どうしたらいいかわからなかった。

× × ×

部屋に戻ると、制服のままベッドに飛び込んだ。うつ伏せで枕に顔をうずめて、深く息を吸う。
「え、なに？　あれはどういうこと？　俺は知らんぞ、あんな難易度の高いイベントは知らんぞ。え？　え？　びっくりしすぎて声出なかったんですけど。そんでびっくりしすぎて発狂したとしか思えないことやっちゃったんですけど。なに？　どういうこと？　なんなの？　Ｗｈｙ　Ｊａｐａｎｅｓｅ　ｐｅｏｐｌｅ　!?」
「お兄ちゃんうっさい！」
「ご、ごめんなさい」
食い気味に壁ドンされた。

続く。

（３６）

ひと昔前、それこそ親の世代がまれに言っていた言葉がある。

「アイドルの〇〇と握手できた。もう一生この手を洗わない」

こんな言葉だ。

言わんとしていることはわかる。ずっとテレビの中で見ていた憧れのアイドルに会えたのだから、それは嬉しいだろう。今は発信者とファンの双方向のやりとりも増えて、会いに行けるアイドルもいれば、会いに来る芸人なんて人もいる。それでも、自分が憧れ、焦がれていた存在に会えるという喜びは変わらないと思う。

そんな風に思っていても、それでもなお、先ほどのフレーズは言い過ぎではないか、と思っていた。仮に手を洗わなくても、ドアノブは掴むし電車のつり革も掴む。雨に打たれることもあれば風に晒されることもあるだろう。仮に自分が何もしなくても、いずれ憧れの存在の成分は完全に消えてなくなるだろう、と。

このフレーズを本気で言っている人もいれば、人によっては「このフレーズをいつか言ってみたかった」という、アイドルに抱くものとはまた別種の憧れを抱いていた場合もある。憧れのアイドルに会えて、そのことを友人に報告するとき、思わずこのセリフを口にするのだ。いずれにせよ、本気でそんなことを思っているのか？　と疑ってしまっていた。

――けれど、あの日。

と言うか、昨日。

市立図書館で三浦と手をつないだときの熱が、未だに左手の奥に残っている。もしかしたら、憧れのアイドルと握手をした人もこんな風に手の奥に残る熱を大事にしたかったのかもしれないな、と思う。

けれど、俺の場合はそういった人たちと事情が違う。手を繋いだのは2年のときから同じクラスの、そして今は隣の席で、いつの間にかずいぶんと距離が近付いた女の子だ。手の熱がまったく引かないうちに、また顔を合わせることになる。

一度あまりに美味しい食べ物を食べてしまったら、次の日にはまた

食べたくなるように。
俺はもう一度――あの熱を味わいたくなってしまっている。
×　×　×
市立図書館で手を繋いだ、翌日。
「……うっす」
「……お、は、よう……」
教室が朝の喧騒に包まれる中、最後列の窓際の席に座る。努めて平静を保って挨拶をしたつもりだったが、俺の動揺が可愛く思えるくらい、三浦の声は上ずって動揺しきっていた。ペッパーくんの方が遥かに滑らかに喋っているぞ。彼は俺よりも饒舌だなぁ……とたまに見かけるたびに思っている。
「……」
「……」
「……」
「……」
アニメで、自然の音のＢＧＭを流しながら同じカットを延々と流しているかのような沈黙。１０秒ごと２人の写真を取ってコピー＆ペーストをしてもまったく問題がないまである。
「……昨日はよく眠れたか？」
話題に困った父親か、と自分にツッコむ。目を逸らしながら尋ねたため、新聞を読みながら小町に話をふる父親と重なってしまった。ちなみにこういうときの小町の返答は超がつくほどそっけない。Ｓｉｒｉに話しかけた方がよっぽど会話が弾む。小町にさらりと流されたときの父親は新聞の向こうでちょっとプルプルしている。打ちひしがれる父親ってあんまり見たくないんだけどなぁ……。
俺の拙い言葉に、三浦はぎぎぎとこちらに顔を向けた。今朝は首に油を差し忘れたのかしら？
「……その、あ、あんまり、寝れてない……」
「そ、そうか」
「うん。……」
……。

俺たちってこんなにぎこちなかったっけ？
お互い黙っている時間も多いが、それはあくまで心地良い時間だったはずだ。三浦の表情からしても同じ気持ちだったはず。
それが今はどうだ。
なんか、変な感じになっている。
しばらく黙り込んでしまう。周りは依然として騒がしいが、２人並んだこの空間だけが、見えない膜が何重にも張られているかのように思える。
「……あ、で、でも」
三浦がぽそりと呟いた言葉に振り向く。三浦はまるで机に視線を縫い止められる呪いをかけられているかのように、じっと自分の席を見つめていた。
「お弁当は作ってきたから……」
「お、そ、そうか、うん、すまん、助かる」
寝不足だったというのは、十中八九昨日のことが原因だろう。それでもなお弁当を作ってくれるというのか……。
「勉強も、その、ちゃんとしたし……」
偉いとしか言いようがなかった。
「……すげえな。俺はもう全然寝れなかったし、勉強もできなかった」
「え……」
迂闊に発した言葉に後悔した。
俺は昨日、努めて動揺を表に出さないようにしていた。正直心臓が爆発しそうだったが、それでもなんとか、なんとか平静を保っていた。しかし今の俺の発言は、「実はめちゃくちゃ動揺してました」と告白しているようなものだ。
もしかしたらそんな風に受け取らない可能性もあるかと思ったが、三浦は驚きながらも頬を赤らめてこちらをじっと見ている。
どうこの場を切り抜けるか、いやそもそも切り抜ける必要があるのかなどと煩悶していると、先生が教室に入ってきた。会話は一旦中止されたが、顔は熱いままだった。
×　×　×

「はい、お弁当」
「ありがとな」
昼休み。
授業と授業の合間もろくに会話ができないままだったが、この時間に屋上に来るのはもはやルーティンと化していた。ほとんど会話のないままスムーズに屋上に向かい、今に至る。
三浦がもじもじとしながら俺の反応を窺ってくるので、さっそく弁当をいただく。見た目も味も日に日に磨きがかかっていた。
「今日のも美味かった。ごちそうさま」
「お粗末さま」
三浦がほっと息を吐く。自分の弁当を食べる間も俺の食べる様子を見ているので、なんだかマナー研修を受けている気分になる。
「最初はすごく時間がかかってたけど……段々コツがわかってきたかもしんない。練習もしたいから、その、……毎日作ってもいい？」
「え」
思わぬ言葉に目を見開く。今の時点でも週２の至福となっているのに、この上さらなる至福を味わえと言うのか。
しかし今は受験生の身だ。いくらなんでも……と言おうとすると。
「……だめ？」
膝を抱き、顔をうずめた状態でちらりと横を向き、小動物のような瞳と親にねだるのに慣れた女の子のような声で問いかけてくる。
反則だ、これは反則だ。
三浦にこんなことを言われて、ぐらりと揺れないわけがない。由比ヶ浜や海老名さんと喋っているときは今まで通りの振る舞いをしているのに、２人でいるときに時折見せるのはこんな風にしおらしい仕草。
しかも最近は毎日この仕草を目の当たりにしている。昨日の熱がまだ冷めやらぬなか、恐らく本人は極めて無自覚に言っているであろう破壊力たっぷりの二文字を叩きつけられる。
これで「だめ」と返す輩はいるだろうか、いや、いない。思わず反語を使ってしまうほど動揺している。ぐらぐらだ。俺の心の足場を

抜き去り、柔らかなゼリー状のもので包み込まれしまったかのような何を言ってるんだ俺は。
「……三浦がいいなら、ぜひとも頼みたい」
以上の思考をコンマ数秒で回し、噛みそうになりながら答える。三浦はエサを持った主人に気付いたパグのように顔をぴこんと上げ、花が咲いたような笑みを浮かべた。
「……うん、わかった」
どうしてそんなに嬉しそうなんだ、と尋ねたくなるくらい嬉しそうに返事をする。そして、恐る恐る2人のあいだの距離を詰める。ふわりと香る甘やかな香り。この匂いを嗅ぐと条件反射で心が安らぎ、同時にドキドキしてしまう。後者が勝っているため心拍数で言えばかなり上がっているだろう。
「……ん」
三浦が何も言うことなく、すっと頭を近付ける。綺麗なつむじだな……と思いながら、根本まで綺麗に染め直された髪をくしくしと撫でる。日なたの縁側で昼寝する猫のように、三浦の瞳が細められた。
数分のあいだゆっくりと頭を撫でて元に戻る。あとは昼休みが終わる間際までのんびりと過ごすだけだろう。弁当をもらい、頭をなでるという流れはもちろん緊張するが、それでも最近は2人の習慣になりかけている。朝ほどの緊張は2人の間に流れていなかった。
『あ……っ』
頭を撫で終えると――予想外にも、それでいてある意味予想通りのようにも思える出来事が起こった。
距離を詰めて座っていた俺と三浦の手が、それぞれ何かしらの目的があったのか、膝に乗せていた手を同時に下ろした。三浦は右手で、俺は左手。昨日の図書館での行動をなぞるように、自然に、とてもスムーズに、2人の小指が触れる。まるで一時停止のボタンを押されたかのように、2人の手がぴたりと動きを止めた。
どこに置くでもなく、極めて不自然な位置で止まる。俺はどうしたいのか、三浦とどうなりたいのか。わかっているような、わからないような。微かに震えながらも動けないでいて、どうしたものかとちら

りと横を見ると――三浦と目が合った。俺と同じ気持ちでいるのか、どうしたらいいのかわからないと言うような、まるで迷子になってしまっているかのような表情。

そんな顔を見たくない、と思った。

さっきみたいに花のように笑ってほしい、と思った。

そう考えたら、自然と身体の強張りが解けた。

三浦の目を見たまま、かすかに触れていただけの小指をそっと左にずらす。昨日の三浦のように、細い小指をまたぎ、薬指をまたぎ、中指をまたぎ、人差し指をまたぎ、親指をまたぐ。触れ合って初めて気付く。三浦は傍から見ていたときよりもずっと華奢で、繊細なのだと。３年生になってから三浦のそういった面はたくさん気付いていたが、それでも、今こうして触れると改めて三浦優美子という存在が繊細で、か細げで――愛おしく思える。

「……っ」

俺の手が重なると、三浦の瞳に映る光が揺らいだ。綺麗な唇がほんの少しだけ震える。昨日三浦がしたことを、今度は俺がした。だからなのか、三浦は昨日の俺がしたように、右手をくるりと回して手のひらを重ね合わせた。

２人の指が絡み合う。相手の感触を、自分とは違う性を持つ相手の指を確かめるように、そろりそろりとまさぐり合う。自分の手に通っている神経が、今この瞬間に１０倍に増やされたような感覚。三浦の緊張が、昂ぶりが、息遣いが、手のひらを通して全て余すことなく透けて見えるような気がした。

生まれたときからそうであったかのようにぴったりと指を絡め合うと、つないだ手にほんの少しだけ力を込めた。たったそれだけで、三浦の身体がぴくりと跳ねる。繊細な手が、指が、焚き火でじりじりと熱したように熱い。多分俺の手も熱くなっている。

「……っ」

三浦の細い喉がこくりと鳴る。それとほぼ同時に、脚をぴったりと閉じて座っていた三浦がひざにおでこを当てて顔を隠した。それでも、手は繋いだままだった。真っ暗闇の中で手をつないで歩いて、俺

の存在を確かめるかのように時折にぎにぎと可愛らしく握ってくる。ここにいるぞと応えるように、そっと握り返した。

尋常でないほどの緊張で手のひらがたっぷりと汗ばんでも、三浦の手を離すことはなかった。三浦の手も汗をかいているかもしれないが、確かめる術はない。

そうして、昼休みが終わるぎりぎりまで、俺は俯いた三浦と手をつないでいた。

続く。

（３７）

昼休みが終わるぎりぎりまで三浦と手をつないでいた。昨日つないでいた時間よりもずっと長かったためか、手の奥に残る熱の密度も尋常ではない。教室に戻る間も、５限と６限の授業を受けているあいだも、ちらりと自分の手を見れば、華奢な指が絡まったことを思い出すことができる。

三浦は三浦で、屋上から戻るときも授業中も、ちらちらと自分の手を見たり、俺のことを見たりしているのには気付いていた。俺も同じことをしていたからだ。目が合うとお互い残像が生じるのではと思うほどの速度で顔を逸らしていた。首を痛めそうだった。

× × ×

迎えた放課後。

「あー、……三浦」

「ん、なに？」

さりげなく俺を見ているつもりなのかもしれないが、目が盛大に泳いでいた。スーパーボールを箱の中に投げつけて、２分の１倍速再生をしたかのようだ。

俺も目を泳がせる。自分から行動を起こすというのはいつだって力が要る。エアコンは点けたときよりも点けっぱなしにしているときの方が電気代は安いのと似ているのかもしれない。

「その……今日、空いてるか」

「え？　あ、うん、空いてる、けど、え、な、なに……？」

俺が発した数文字の情報で、三浦が目に見えて慌てる。前髪をちょんちょんとつまみ、髪を手櫛で梳き、膝に置いた手をきゅっと握りしめる。まるで落ち着かない動作のさなかでも、両の瞳は爛々と輝いていた。こんな三浦の可愛らしい姿は、２年のときどころか数ヶ月前までだって想像できなかった。

「その……勉強会、しないかと思ってな」

「……あー、うん、大丈夫、行く」

１００から０へ……とまでは言わなくとも、１７くらいまではテン

ションが下がったようだった。俺が必要以上に緊張していたから、きっと三浦はもっと大事な用事だと思ったんだろう。

俺にとっては、この勉強会も大事な大事な用事だが。三浦にとってもそうであってほしいな……と思いつつ、鞄を持っていつもの市立図書館へ向かった。

× × ×

勉強はいつも通り集中して取り組むことができた。昼休みのこともあってか、昨日のように手をつなぐことはなかった。今は2人で、夜の帳が落ちた街をぽてぽてと歩いている。会話はできそこないの間欠泉のように、ふっと湧いてはすぐに途絶える。

いつもはお互いもう少し喋るんだけどな……と思ったが、こんなことになっている理由はごく単純だ。俺の右手と三浦の左手の距離が極めて近く、時折互いの手の甲がちょんと触れているからだろう。

すべすべとした手が触れるたびに、動揺が表情に出るのを抑えようとして不自然に言葉が止まってしまっていた。三浦は三浦で、自分が話している途中であっても急に言葉が止まっていたので、きっと同じような状況なのだろう。

触れては、離れる。
触れては、離れる。
触れては、離れる。
ごくりと喉を鳴らす。視線は不自然なくらい、正面に縫い付けられていた。
触れては、離れる。
触れては、離れる。
触れたら――離れぬように、掴んだ。
「……っ」

三浦がこくりと息を呑んだ音が聞こえた。風が吹いているし車も通っているのに、自分の鼓動がまるで聴診器で聴いているかのようにはっきりと聞こえた。つないだ三浦の手がもぞもぞと動く。強く握りすぎていたことに気付き、慌てて手の力をゆるめた。

するとわずかな自由を手に入れたなめらかな指が嬉しそうに動き、

するすると絡み付いて三浦からきゅっと握ってきた。宮大工が木と木の合わせ目を精巧に削って調整したかのように、同じ人間なのかと疑ってしまうほど感触が違う三浦の手がぴたりとはまった。

――ここからだ。

昨日手をつないでいたときは、そのこと自体がなかったかのように振る舞っていた。昼休みは一言も喋らなかった。2人の身体は、もっと言えば手は、確実に親密度が増しているのに、俺と三浦の言葉が、心が、自分の5本指に置いてきぼりにされているような感覚。今こうして手のひらで感じるぬくもりに、自分の言葉を、心を、追いつかせたい。

「……弁当、日に日におかずの種類が増えてるけど……何を見て勉強してるんだ？」

……追いつかせたいが、急にアクセルを踏み込むような真似はしない。ビビっているわけでは決してない。

「え？　あ、えっと……あ、弁当か、ええっと……」

ニュースで見るテレビ中継のように、三浦が時間差で質問を把握する。数十センチの距離にいるのに、俺の声がわざわざ静止衛星に届けられて、それが三浦に届いたかのようだ。

細指がキュッと絡み、視線がちらりと上を向く。何かを思い出すときの仕草だ。

「えっと……最初は自分で調べようとしたんだけど、1つの料理でも何個も何個もレシピがあってよくわかんなくなっちゃって。それで、小町にちょこちょこと聞いてる。おすすめのサイトも紹介してくれたから、そこは自分で調べて試してるとこ」

「そうなのか。……ありがたい」

わりいな、と言いそうになって慌てて止めた。さりげない小町の暗躍が気になるが、この場合はグッジョブだ。

俺がぽそりとつぶやいた礼の言葉に、三浦がくすりと笑った。手はつないだままなのに、手をつなぐ前よりもリラックスしているようだ。

「ヒキオ、すっごい美味しそうにがつがつ食べるんだもん。今まで料

理なんて何が楽しいかわかんないって思ってたけど、最近は結構面白くなってきた」
「……そうなのか」
「そう。餌づけって感じ」
「餌づけ」
思わぬ言葉に衝撃を受けていると、俺の呆けた顔を見て三浦が――
「ん。小町にも、『しっかりお兄ちゃんを餌づけして胃袋を掴んでくださいね』って言われ……」
――楽しそうに笑って、口をすべらせた。まるで喋っている途中に言葉という概念を身体から抜き去られたかのように、三浦の口だけがぱくぱくと動いている。
夜なので顔色まではしっかり見えないが、つないでいた手が明らかに熱くなった。俺の手もたぶん熱い。
なんか、こう、変な感じになった。
ふたたび訪れる無言。圧倒的無言。
三浦の手がもぞもぞと動く。もしかしたら手を離してこの場からも離脱しようとしているのではなかろうか。それを許すと明日以降またロクに話せない状況に陥るのが目に見えている。というわけで絶対に離さない。
――今から切り出そうとしている言葉のためにも、手を離すわけにはいかない。
噴水のある広場を通りかかる。他の場所よりも一際明るく照らされていて、今は周りに誰もいなかった。三浦の顔がしっかりと見えるのを確認して、ぴたりと足を止める。
「どうしたの？」
三浦がもじもじと動き、目を右へ左へとさまよわせる。知らない人にさえ、手をつないでいるところを見られるのは恥ずかしいのだろうか。俺も似たようなものだけれど。
けれど今は、俺が発する言葉に三浦がどんな反応をするのかを、ちゃんと見ておきたかった。
「あー、その……なんだ、今度の週末、うちに来ないか」

「え？　あ、……小町と料理をするってこと？」
「ああ、いや、そうじゃなくて……」
しまった、さっきの話の流れからすれば、しかも今の言葉足らずにも程がある言葉では、三浦がそう思うのも無理はなかった。
左手でぽりぽりと頬を掻く。やけにぎこちない指の動きに、いつもは右手で頬や頭を掻いていたんだなと気付く。
「ええと……俺の部屋に、漫画を見に来ないか？　小説でもいいんだが」
「……へ？」
三浦がきょとんとして、無垢な少女のように首を傾げる。それからゆっくりと首を戻し、俺の目を見ながら徐々に、徐々にその顔を赤らめていく。
「……あ……えっと、その……あ、あーしが、ヒキオの、部屋に……？」
たどたどしい言葉と、まるで小動物のような雰囲気に反して――その瞳だけは、爛々と輝いている。放課後、空いてるかどうかと聞いたときに見せた反応だ。あのときは勉強会と言ったことでがっかりさせてしまったが、今度は良い反応をもらえたようだ。
三浦の問いかけにこくりと頷いて答えると、三浦が俯き、ちらりとこちらを見た。
「……うん、行く」
「……わかった。準備しとく」
顔を上げ、見つめ合って笑い合う。三浦の笑みはぎこちなかった。俺はたぶん、その何十倍もぎこちないだろう。
「……ヒキオ、笑い方、変」
「……」
はっきりと言われてちょっと凹んだ。しかし、三浦が「ま、それはそれで結構気に入ってるけど」と独り言なのか何なのかわからない声の大きさで呟いたことによって、残りの帰り道は静かに浮かれていた。
続く。

（３８）

三浦を家に招くことが決まった。

誘ったときは日にちが曖昧だったので、翌日にお互いひどくぎこちない動きをしながらも話し合い、土曜日に来てもらうことになった。家に誘ってからの三浦はやけに反応が過敏になっていて、何気ない会話の中に『家』『部屋』『漫画』などのワードが出てきただけで顔を真っ赤にしてしまう。黒ひげ危機一髪なら穴を３つくらい残してあとは全てアウトのような状態だった。可愛いのだけれども、俺もひたすら緊張していた。

金曜日の夜。

小町が作ってくれた夕食を食べながら、明日のことについて切り出すことにした。

「……小町、話があるんだが」

「ほぇ？」

切り出したタイミングが悪く、小町はエビフライをもきゅもきゅと食べていた。俺を咎めることもせず、「ひょっほまっへへ（ちょっと待ってて）」と言ってエビフライをよく噛んで飲み込む。

「どしたのお兄ちゃん？」

早く残りのエビフライを食べたいんだけどなーという気持ちを一切隠すことなく尋ねてくる。というかものすごくエビフライを見ている。エビフライに尋ねているようにしか見えない。俺の存在をもう少し上位に持っていってくれませんかね……。

しかし。

「その、なんだ……三浦が、明日、ここに、来る」

「……詳しく話を聞かせてもらおうか」

俺が告げるなり、小町は流れるように箸をテーブルに置き、両肘を付いて手の指を組んだ。俺の言い方も悪かったけど、小町のポーズも相俟って完全に三浦が使徒扱いになっている。

「それは、この間みたいに小町と何かするってわけじゃないんだよね

？　小町、今初めて知ったし」
「ああ、俺の部屋で漫画や小説を見せるだけだ」
「ほう、見せる『だけ』と言いましたね。まるでそれ以外の意図があることを無理やりに隠すような言い回しですな？」
「その鬱陶しいキャラを今すぐセーヌ川にでも投げ捨ててこい」
「お兄ちゃんもおかしくなってるよ」
緊張した兄と、舞い上がっている妹。
どちらもテンションがおかしなことになっていた。セーヌ川ってフレーズを生まれて初めて口にしたぞ、俺。
こほんこほんと咳払いをする。
「まあ、それだけのことだ。迎え入れる準備は多少必要だと思ってる。取り敢えず今からレッドカーペットを買ってくるから、廊下に敷くのを手伝ってくれるか」
「お兄ちゃん、ほんとに落ち着いて？」
すでに冷静になった小町にたしなめられた。
こほんこほんと咳払いをふたたび。
「……女子はアレなのか、やっぱりなんか良い匂いがするのが好きなのか？　あの、ルーム……なんだっけ、揚げパスタみたいなやつ」
いつか由比ヶ浜の部屋で見た、瓶に刺さっていた数本の細い棒を思い出す。俺の比喩に雪ノ下が笑いをこらえていたことしか思い出せず、肝心の名称が出てこない。俺の言葉に我が妹は、雪ノ下や由比ヶ浜と違って「はぁ？」と優しさのかけらもない反応を返してきた。
「何それ、良い匂いがして、揚げパスタみたいなやつ？　……ルーム……まさか、ルームフレグランスのこと？」
「そうそう、それそれ」
妹が発したワードに「Ｔｈａｔ☒ｓ　ｒｉｇｈｔ　!!」と言わんばかりに親指を上げると、小町がこめかみに手を当てて「はぁ……」と嘆息した。おいやめろ、雪ノ下の真似が上手いじゃねえか。
「お兄ちゃんはほんと、そういうところが……アレだね」
「そこははっきり言ってくれた方が優しさを感じるんだが」
「いいの？　結構キツいよ？」

「やっぱやめとくわ」
「豆腐メンタルめ……」
小町の罵りを一区切りとして、話を元に戻す。
「なんかそういうやつを置いてた方がいいのかなと思ったんだが」
女子を部屋に招くという難易度の高すぎるイベントに、戸惑いしか覚えていない。誘いたかった気持ちに偽りはないのだが、如何せん自分の経験値が足りなさすぎる。
小町は俺の言葉に、「ふむ……」と腕を組み、あごを親指でぐりぐりしながら思案顔になった。なんかマフラーをぐるぐる巻きにしてそう。
「んー、そういうのも手だとは思うんだけど……小町はあんまりおすすめしないかなー」
「と言うと？」
小町が人差し指をピッと上げる。
「お兄ちゃんは、優美子さんと話してるときに『良い匂いだなー』って思ったことはある？」
「……あー、いや、まあ、その、ないこともない」
「結構あるんだね」
そのエキサイト翻訳はなんなのん？　語尾に『ん』を足すだけで国を陰で操る傾国の美女が浮かぶ。
「それならいいんだよ。あとは優美子さんがどう思ってるかなんだけど……」
「どう思ってるかってのは、俺の匂いをってことか」
「そうそう。相手の匂いが良い匂いかそうでないかってかなり重要だと思うんだー。だから小町としてはお兄ちゃんが気取った策をとるよりも、ありのままでいておいてもらって優美子さんがどんな反応をするか見た方が良いと思うんだよ」
「……俺の部屋に来ただけでわかるもんなのか」
「ん、結構わかるもんだよ。それは別に女の人の部屋でも同じことが言えるんだけどねー。お兄ちゃんの部屋、たまに顔を出したりするとそれとなく匂いがするもん」

「え、ほんとに？」
やだ、あたしったらそんな匂いを……と己の腕の匂いを嗅ぐが、どうにもわからん。
「お兄ちゃんの部屋はそんなに気にならないけど、お父さんの部屋は近付くのもきついかな」
さらっと辛すぎる情報が告げられた。親父、気を強く持てよ……。
そういうわけで……と言葉を繋げると、小町はふたたび箸を手に取った。
「今さら気取ったってどうにもなんないんだから、いつも通りでいるしかないよ」
「お、おう、そうか……そんなもんなのか」
「そうそう、そんなもんだよ」
言って、この話はこれで終わりとばかりにエビフライをかじる。俺もこれ以上何かを聞きたいわけではないので、大人しく食事を再開した。

× × ×

金曜日の夜。
学校から帰って、ご飯を食べて、シャワーを浴びて、部屋に戻る。本当は寝る前に勉強をする時間なんだけど、今はとてもそんな気分になれずベッドに飛び込んだ。
「……明日、ヒキオの家に……」
ちょっとした火種で燃える導火線が身体中に巻き付いてるみたいに、ここ数日はちょっとでも『例の件』を考えるたびに身体がぶわっと熱くなってしまう。まさかヒキオから誘ってくるなんて……と初めは思ったけど、考えてみれば、その前の勉強会だってヒキオからの誘いだった。
もしかしたらあれも、帰りに誘うために……？　と思うと、表情筋が言うことを聞いてくれなくなる。枕に顔を埋めて脚をバタつかせるとベッドが軋む。普段そんなことをしないからか、聞き覚えのない音だった。
いつから？

いつからあーしはヒキオのことを……？
隼人をずっと追いかけてきた。けどその途中から、いつの間にかヒキオが近くに見えるようになって。初めはほんとに小さい、居るのか居ないのかわからないくらいの存在だったのに、だんだんあーしの中で大きくなっていって。
気が付けば、隼人とのことを、ヒキオが応援してくれて。
もう届かないってわかったときも、ヒキオはそばにいてくれて。本人に自覚があるかはわからないけど、あーしの隣にいてくれたヒキオは、今にも泣きそうな顔をしてた。男の人でもこんな表情を浮かべるんだ……って、悲しい中でもちょっとビックリしてた。
それから、夏の終わりくらいから、どんどん、どんどん、ヒキオの存在が大きくなって……。
もう、今では、油断したら一日中ヒキオのことを考えるようになってしまった。
そう思ってるのはあーしだけなのかと思ってたけど、最近二人でいるときのヒキオを見てるとどうもそうではないみたい。
手も、繋いだし……。
「……っ！」
もう一度、脚をバタバタ。枕をこんなに強く抱きしめたのは初めてかもしれない。
「……はぁ」
バタつかせる脚をぴたりと止め、ふと思う。
ヒキオの気持ちが知りたい。
でも、前のように――隼人のときのようになることが、恐い。恐くてしょうがない。
けど、それでもあーしは……。
「……ヒキオ……っ」
もう一度、枕に顔を押し付けて名前を呟く。もう何十回、何百回呼んだのかもわからない名前。
あの、無気力そうでぶっきらぼうに見えて……それでいて、おっかなびっくりとしながらも気遣ってくれる、不器用にもほどがあるクラ

スメイトの顔を思い浮かべて、決断する。
――ヒキオの気持ちを、確かめたい。もちろん、自分の気持ちも伝える。
「……うぅ……っ」
決意を固めた瞬間、身体が内側から燃えそうになって、もう一度バタバタとベッドの上で暴れた。
× × ×
部屋のベッドに横になり、電気を消した状態で真っ暗な天井を仰ぐ。
「……まあ、そろそろ……だよなぁ……」
経験豊富な大人なら、俺にも想像がつかないような高度な駆け引きを楽しんだり、はっきりと言葉にしない曖昧な関係を楽しんだりもするのだろう。
けれど、俺も三浦もまだ高校生だ。三浦が手慣れていたらまた話は違っていたかもしれないが、失礼ながら三浦はかなり初心だ。それがまた可愛いのだけども。
――明日、はっきりと、この気持ちを言葉にする。
「……ぐぉぉぉ……っ」
決意した瞬間、両手で頭を覆ってベッドの上を転がった。小町にまた壁ドンをされないように、音を立てずに悶えるという我ながら器用な行為に及ぶ。
明日……緊張しないわけがないよなぁ……。前夜でさえこの有様だもんなぁ……。
イメージトレーニングをしようにも何も映像が浮かばず、ただただごろごろと転がる。
それから小一時間に渡って悶々とすると、疲れ果てていつの間にか眠りに就いていた。
続く。

（３９）

決戦の土曜日、来たる。

三浦は１４時に来る予定だ。駅まで迎えに行くと言ったが、「一度行ったから大丈夫」と断られたので、大人しく家で待つことにする。

小町は気を利かせて外出していた。「お兄ちゃん、頑張ってね」とやけに優しい口調で言い、友達と遊びに出かけた。総武高の1年生の中でまばゆい存在感を放っている妹は、学校の中でいつも友達に囲まれている。俺とすれ違うたびに「あ、お兄ちゃーん！」と言うのはやめてほしいのだけれども。毎回小町の友達が「え、あれが……お兄さん？」と言いたげな顔をするから。

つい１０分ほど前、三浦から「駅に着いた」と端的なメッセージが届いた。俺は忠犬かと自分にツッコみたくなるほど、リビングのソファで三浦の到着をそわそわそわそわしながら待っている。

もうじき約束の１４時だな……と思っていると、家のチャイムが鳴った。全力で駆け出しそうになるが、家の中でどったんばったん大騒ぎする音が聞こえては三浦も落ち着かないだろう。意味もなく咳払いをして立ち上がり、いつも通りの歩幅を意識して玄関に向かった。右手と右足が同時に出そうになった。

ドアを開けると、三浦がすぐ目の前に立っていた。

「ういっす」

「……こんにちは？」

なんで疑問形？　と思ったが、普段三浦と挨拶を交わす場合は朝と夜に限られていた。「おはよう」「じゃ」くらいの挨拶しかしていない。だからこそのこの挨拶なのだろうが、それにしても不器用すぎるだろう。俺も人のことは言えないが。

デニムジャケットを羽織ってミニスカートを穿いた三浦は、サバサバした印象と可愛らしい印象を同時に与えてくる。頬をほんのりと赤く染めて顔を逸らし、金髪を指にくるくると巻き付けている姿は――正直に言えば、目眩がしそうなほどに可愛い。

「……お邪魔、します」

まるで初めて友達の家に来た小学生の女の子のようなか細い声。テレビの字幕だったら字が薄くなっていそうだ。
玄関で立ち話をすることもなく、早々に家の中へ入ってもらう。三浦は三和土で靴を脱ぐと、きょろきょろと不安げに視線を巡らせた。借りてきた猫の意味を外国人に説明するときにちょうど良さそうな仕草だ。
「あの……小町は？」
「ん、今日は出かけてる」
俺の言葉に、両手でバッグを持った三浦がびくりと震える。目をぱっちりと見開き、それからゆっくりと視線を泳がせた。
「そ、そっか……」
上ずった声が、あまりにも強烈な緊張を物語っていた。なんだか申し訳なくなってくる。
「……とりあえずリビングで落ち着くか？」
本当に緊張してもう無理！　となったら、本当に惜しいが今日は帰ってもらった方がいいかもな……と考えていると、三浦はぶんぶんと首を左右に振った。
「だ、大丈夫。あーし、ヒキオの部屋、行く」
「お、おう、そうか」
気合を入れた声音で片言になる三浦にたじろぐ。なんだか「オレ、ニンゲン、クウ。ニンゲンノチカラ、ホシイ」とか言い出しそうだ。
階段を上がり、自室のドアを開ける。俺も急に緊張してきた。
「ど、どうぞ」
「う、うん」
よどみなく喋る術を忘れてしまったような2人が、部屋に足を踏み入れた。

×　×　×

「へえ……綺麗にしてんだね」
三浦は俺の部屋を見渡して、さらりと嬉しいことを言ってくれた。ちょこちょこと掃除はしているが、今日は午前中いっぱいを使って鬼

のように掃除をした。テーブルの上の積ん読本が本棚に入りきらず、一部は段ボールに詰められ押入れの中に眠っている。読む優先度が高い本なので、後で忘れずに戻さないといけない。

ちなみに、掃除をするときは消臭剤の類を使いまくろうかと思っていたが、昨夜の小町の意見を参考にして極力使っていない。

「まあ、せっかく招待したんだし、これくらいはな」

消え入りそうな声で呟くと、三浦の頬にほんのりと朱色が刷かれた。もじもじと身体を揺すり、じっとこちらを見つめてくる。すぐ隣に並んだ三浦の髪の毛から甘やかな香りがして、可愛らしい仕草と凶悪なまでの相乗効果を生む。

「普段はもっと散らかってるってこと？」

「……まあな」

ここで「ありがとう」や「嬉しい」などと言われようものなら悶絶も必至だったのだけど。

「ふーん」

髪の毛を指に巻きながら、なんとも反応しづらい言葉をぽつりと呟いた。情報量が少なすぎでしょその返答。現代文の問題でここに傍線が引かれていたら、絶対にわからん自信があるぞ。

「バッグはそこに置いてくれていいから」

「……ん、ありがと」

このまま黙ると妙な沈黙が生まれると思い、ありきたりでも必要なことを何とか口に出す。場が気まずくなりそうだからととりあえず話すだなんて、俺も成長したものだ。

その勢いでクッションに座るように勧めた。三浦も依然として落ち着かないのか、俺の言葉にこくこくと大きく頷いて従っている。可愛い。

クッションの上で女の子座りをした三浦が、スカートの裾をちょいちょいとつまんで捲れていないかを確認すると、ゆっくりと視線を部屋中に巡らせ始めた。

「ふーん……」

女王様、やっぱり情報量が少なすぎます。

三浦は手を太ももの上で重ねてこちょこちょと動かしながらしばらく部屋を見回していたかと思うと、細いあごをちょっとだけ上げてくんくんと鼻を鳴らした。
くんくん。
くんくん。
しばらくすると、何故かは知らないが気持ち良さそうにほわんと目を細めた。
「ふーん……」
ふーんってフレーズ、そんなに汎用性が広いのん？
座るタイミングを逃してだらだらと冷や汗を流していると、三浦がふたたびくんくん、すんすんと鼻を鳴らす。そのたびにほわんと目を細める。時折目を閉じて鼻を鳴らし、ゆっくりと目を開け、やっぱりほわんと目を細める。こういう犬、探したらいそう。
「……あの、三浦さん？」
たまりかねておずおずと尋ねると、三浦はもう一度くんくんと鼻を鳴らし、やはりほわんと目を細めた。ちょっとクセになりそうな可愛い仕草ですけども。
「……なんか、気に入ったかも」
「……そ、そうか」
「……うん」
情報量があまりにも少ない三浦の言葉の意味を考える。
恐らく今の言葉は、部屋の雰囲気がどうかと言うよりは……匂いについての言及なのだろう。たまに目を閉じてたし。
『相手の匂いが良い匂いかそうでないかってかなり重要だと思うんだー。だから小町としてはお兄ちゃんが気取った策をとるよりも、ありのままでいておいてもらって優美子さんがどんな反応をするか見た方が良いと思うんだよ』
昨夜の小町の言葉を思い出す。どうやら三浦は俺の匂いを気に入ってくれたらしい。
――胸の奥で、心地良い熱がポッと生まれた。
「……ヒキオ、顔赤いよ？　大丈夫？」

「え、あ、いや、うん、すまん、大丈夫、うん、そう、大丈夫」
ぜんぜん大丈夫じゃなかった。
この後、飲み物を持ってくるために一度部屋を出た。戻ってくると、三浦の身体の向きが若干変わっている。相変わらずすんすんと鼻を鳴らしていた。この子は灯台の生まれ変わりなんだろうか。
ローテーブルを挟んで向かい合う形で座り、飲み物を飲みながらぽつぽつと話す。大半は受験勉強のことだったが、それでもだいぶ緊張がほぐれた。

× × ×

「ヒキオ、本棚見ていい？」
「ん、いいぞ」
三浦の言葉に若干の緊張を覚えながら頷く。
今回、俺は元の本棚をほとんどいじっていない。ちょっと流石にこれは恥ずかしすぎる……というものだけ整理したものの、大体のものはそのままにしてある。
本棚はその人の趣味嗜好がたっぷりと詰まっている。だから、人の本棚を見るとその人の性格がよく見えるらしい。友達の家に行って本棚を見たり、逆に自分の本棚を見られたりという経験が皆無なので、俺にとってこの説は都市伝説でしかないのだが。
――なんとなく、ではあるけれど。
三浦なら、俺の趣味嗜好を受け入れてくれるのでは……という、根拠がありそうでない自信を持っていた。
三浦は後ろ手を組んで本棚を眺め、ちょいちょいと本を手に取ってはぱらぱらとページをめくっていく。漫画、ライトノベル、文芸書などとジャンルごとにきっちりと分けているが、三浦からしてみればそんな区切りは関係ないのだろう。
ゆったりとした手つきでページをぱらぱらとめくり、たまに本棚に戻さずにローテーブルに置いていく。仮置きされているのはみんな漫画だった。比較的中性的な、男女ともに楽しめる類の作品だ。後で読むのだろう。
「……ヒキオ」

「ん」
三浦がぽつりと呼んできたかと思うと、視線を巡らせて「えっと……」と呟きながら本を数冊手にとる。漫画とライトノベルを数冊ずつ手に持つと、ちらりとこちらに目を向けた。
「ヒキオは……こういうのが好きなの？」
「こういうのって……っ」
どういうのだよ、と聞こうとした声が、んぐっと鈍く濁って止まる。
三浦が見せてきたのは、表紙がことごとく金髪ロングの美少女がにこやかに微笑んだり、艶やかな流し目を向けている作品の数々だった。それぞれまったくキャラは違うが、金髪ロングという点は共通している。
三浦は両手に持った本で顔の下半分を隠し、上目遣いで見つめてくる。待て、どこで覚えたんだその凶悪な仕草は。鼓動が速まりすぎて危険域に入りそう。
「……好きなの？」
ダメ押しでもう一度聞いてきた。なんかもう目的語を省いて「好きです」と言いたくなってきた。落ち着け俺。
「……好きかどうかと聞かれたら、その、まあ、うん、好きだな」
顔を逸らして、木の葉がこすれる音よりもささやかな音量で呟く。
ちらりと横目で三浦の反応を窺うと、顔を隠していた漫画とライトノベルを下ろした。
「……ふーん」
先ほどまでと同じ言葉。
それなのに、頬は淡く朱に染まり、口元は照れているのかもにょもにょと忙しなく動いている。
……なんだこの可愛い生き物は？
俺への質問を終えると満足したのか、三浦はふたたび本棚の物色を始めた。予想……というよりは願望通りで、俺の趣味嗜好に興味こそ示すものの、馬鹿にしたりということは一切ない。今日一番の不安材料が取り除かれたことで緊張が柔らいだ瞬間――三浦が俺のいる側に手を伸ばした拍子に、甘やかな匂いが鼻腔をくすぐった。

「ヒキオ、どうしたの？」
猛烈に顔が熱くなっている俺に三浦が尋ねる。三浦から見れば俺の顔は真っ赤なのだろう。漫画のページをぱらぱらとめくりながらも、なかなか熱が引かない俺の顔をちらちらと見てくる。
「……いや、なんでもない」
「……ふーん」
またしても気の無い返事をしながら、気に入ったのか手に取っていた漫画をローテーブルに置く。その頬はほんのりと赤くなっていた。
……さては、いま近付いたとき、三浦もちょっと緊張してたな？
なんだか俺だけが緊張したことになっているのがちょっと納得いかなかったが、とても言及はできなかった。恥ずかしがりながら睨んでくる顔を見てみたい気もするが、嫌われたくない。そんなことで三浦は俺のことを嫌いになったりはしない、という根拠のあるようでない自信もあるけれども。
うーん。
三浦が家に来てからは、緊張したり、安心したり、内心悶えたりと忙しい。
つまるところ、要は、結局のところ。
三浦といる時間が、とても楽しい。

続く。

（４０）

三浦は一通り漫画のチョイスを終えると、初めに座ってもらったクッションに腰を下ろした。何故か正座だ。ローテーブルの上に置いていた５冊程度の漫画を手元に引き寄せ、何やらそわそわしている。

「……」

まだ立っている俺を、何やらちらちらと見てくる。俺を見たと思いきや、今度は漫画本をちらちら、ちらちら。『待て』の指示を出された犬のようにしか見えない。可愛いけども。

「……どうぞ」

「……ん」

俺がぽそりと呟くと、こほんと小さな咳払いをして、ぎりぎり聞こえるかどうかの小さな声で返事をしてきた。声音は必死に平静を装っているが、いかんせん目がキラキラとしている。俺の棚にも意外と三浦のツボに入る漫画があったらしい。

「脚は崩してもらっていいぞ」

「……わかってるし」

正座で読み始めた三浦に言葉をかけると、ぷいと顔を逸らされた。逸らしながら脚を横に流している。なんだこの可愛い生き物は。

……さて、どうしたものか。

三浦がローテーブルで目をキラキラさせながら漫画本を読み始めたが、俺はどこに座るといいのだろう。

隣だろうか。

調子に乗るな、俺。

外で勉強会をしているときならまだしも、ここは俺の部屋。距離が近付いたときの緊張感は、学校や図書館の比ではない。というわけでギブ。

となると、真向かいが無難だろうか。俺も漫画やラノベを読みつつ、三浦の顔をちらちらと正面から……見るのはハードルが高い。なんなんだ、場所が変わっただけでこんなに緊張するものなのか。

「……」
三浦にバレないように、静かに視線を部屋中に巡らせる。何年も住んでいる部屋だと言うのに、まるで物件探しで初めて訪れたかのように見ていてしまう。どうしたものか。
迷い迷って、ベッドの縁に座ることにした。買ったばかりのラノベの新刊を手に、ベッドに腰を下ろす。ギッ、とスプリングの音が鳴ると、三浦が横目でチラリとこちらを見た。
「ヒキオ、なんでそこなの？」
「気にしなくて大丈夫だ、うん」
「ふーん……？」
俺の言葉にくりっと小首を傾げた三浦が、またすぐに漫画に視線を落とす……かと思いきや、何やら突然こちらをじっと見つめ出した。なんぞやと思ったが、どうやら俺が読み始めたラノベの表紙を見ているらしい。
「……あー」
ちらりと表紙を確認して、しまったと後悔する。
表紙には、金髪ロングの美少女が腰に手を当てて堂々と立っているイラストが描かれていた。しかも三浦と同じように縦ロールだ。なんだか変な汗が出てきた。
わずかに視線を上げた三浦と目が合う。
『……』
控えめに言って。
地獄のような間が生じた。
目を逸らすこともできずにいること、数秒。
「……やっぱり好きなんだ」
独り言のようにぽそりと呟き、漫画をふたたび読み始めた。三浦の言葉に心臓がどくどくと脈打ち、思わずごくりと喉を鳴らす。
「え……お、おい……？」
俺の言葉に、三浦は漫画を持ったまま身体ごと逸らした。ちらりと覗いた耳まで真っ赤になっている。これ以上の会話に応じる余裕は無いらしい。

……本当になんなんだ、この可愛い生き物は……。
集中できる気はまったくしないものの、これ以上会話をする空気でもない。とりあえず、手に持っているラノベを読み始めることにした。

×　×　×

10分ほど経った頃。
「ねえ、ヒキオ。これってどういう意味？」
「ん」
三浦が漫画の1コマを指差して質問をしてきた。ベッドから立ち上がり、ふわりと香る甘い匂いに動揺しながらも三浦の隣に腰を下ろす。
「ここなんだけど」
「ふむ」
三浦が尋ねてきたのは、主人公が放った言葉の意味についてだった。いわゆるネットスラングの類で、ここ数年見かけるようになった言葉。一部の層にとっては馴染みの深い言葉でも、三浦からすれば未知の言葉なのだろう。
「これはだな……」
用例を交えて軽く説明してみると、三浦はふむふむと頷いて「ありがと」と礼を言ってきた。こちらの領域に飛び込んでくれて、そして馴染もうとしてくれるのは嬉しい。俺なら三浦に本気でファッションの話をされたら、光速で心が折れる自信がある。三浦のことをもっと知っていく上で、俺からも踏み込む必要はきっとあるんだろうな……と思いながら、ベッドに座ってふたたびラノベを読み始めた。
2分後、また呼ばれた。
「ええっと……」
同様に説明して、ふたたびベッドに戻る。
3分後、また呼ばれた。
「えっとだな……」
教えるのは別に何の苦でもないが、いかんせん三浦の隣とベッドの間の往復を繰り返す絵面が間抜けすぎる。しかし隣に座るのは色々

と心が持たなそうだしなぁ……と思いながらふたたび立ち上がると――くい、と手首を引かれた。自分と違って、驚くほど細い指が絡められる。

「え……」

「ヒキオ、別に、隣でいいでしょ……」

顔を逸らし、ほんのりと頬を朱に染めて、ぽそぽそと呟く。ちょっとだけ拗ねたような声に、バクバクと脈打っている心臓が鷲掴みにされた。

「あ、ああ、ま、まあ、そうだな、うん」

盛大に目を泳がせながらクッションを引っ張ってきて、三浦の隣に腰を下ろす。ラノベをふたたび読み始めたのだが、内容がまったく頭に入ってこない。そして3ページほど読んだところで、さっきまで読んでいたシーンだと気付く。緊張しすぎて頭がとってもアレ。

隣を見やると、三浦は集中して漫画を読んでいた。邪魔をすると悪いと思い、集中できないながらもラノベのページに目を落とした。

× × ×

高校3年にもなれば、なんとなくでも自分が集中できる体調管理のやり方がわかってくる。しかしそんな中でも時折、様々な要因が組み合わさって「あ、今なら集中できるな」と思えるときがあったりする。そのタイミングは元気なときに訪れることもあれば、疲れているときにほんの30分だけ訪れることもあって、まだまだ読みきれていないところがある。

そして、そういったポジティブな偶然と同様に、「あ、今は絶対集中できないな」と思うときがある。周りの環境が原因のときもあれば、勉強する直前に気分を害することがあって引きずっているときもある。こういうときは教科書や参考書を開いた時点でわかるものだ。

今こうして三浦の隣にいる状況では、もちろん集中できるわけがなかった。すごい、すごいぞ。人間ってここまで集中できないものなのかと驚く。字を読み進めても読み進めても、目に飛び込んできた文字がページからぺりぺりと剥がれて、大空に飛び立っていくような幻さえ見える。「今日からお前の名前は『八』だ！」と言われそうな世界観

だ。
序盤の山場である白熱したバトルシーンを読んでいるのに、2行前のくだりさえ頭に入っていないものだから、「あれ、なんで敵がいつの間にか主人公の後ろに回りこんで不敵な笑みを浮かべてるんだ？」などという質問が出てくるほどの大惨事が起きている。
「ヒキオ、ここなんだけど……」
「お、おお、どうした？」
動揺している俺をよそに、三浦は静かに漫画を読み進め、ちょこちょこと俺に尋ねてくる。サブカル色が強い作品のためか、三浦からすれば難関私大の英語長文問題並にわからない単語が多いようだ。
答えること自体はなんら手間に思わないが、至近距離で三浦の匂いに触れ続けるのは非常に危険だ。時折ちょっとだけ指が触れると、なんだかもう心臓と触れた指が同時に爆発してしまいそうになる。いかん、三浦がボマーになってしまう。三浦にもう一度触れて「ボマー捕まえた」と言わないと。いや、本当に落ち着け俺。
「……ヒキオ」
「ん、今度はどこだ」
俺の質問に、三浦は綺麗に整えられた眉を八の字に曲げた表情を浮かべた。怒っているというよりは、可愛らしく拗ねているような、そんな表情。
「……ちがう。……さっきから、見すぎだし」
無意識って恐い。
「……ほんとすまん」
ボマーがどうのなどと考えている間、俺はいつの間にか三浦の綺麗な顔やほっそりした指を存分に眺めていたらしい。控えめに言って完全にギルティである。
ジャンピング土下座に挑戦しようかしら……と思っていると。
「別に……謝んなくていいし」
「……へ？」
三浦の口からこぼれ落ちた思わぬ言葉に、間抜けな言葉が口から漏れた。三浦はぷいと顔を逸らしたが、俺は一体どうしたら良いのかわ

からず、ただただ慌ててしまう。
「……ん」
俺の狼狽ぶりを見た三浦が、ほんのわずかににじり寄ってきた。そして身体を傾けて、綺麗なつむじを見せてくる。ここまでされて、さすがに何を望んでいるかわからない……などと言うことはできなかった。
綺麗に染められた金色の髪を、くしりと撫でる。
「ん……」
三浦が気持ち良さそうに目を細め、漫画のページをめくる手を止めた。縁側で日なたぼっこをする猫を思わせる仕草はとても可愛らしく、思わず頬がゆるむ。距離が格段に近くなったにも関わらず、却って緊張が和らいだ気がした。
「うお……っ」
――その直後、三浦がこてんとしな垂れかかってきたことで、ほぐれてきた身体が一気に強張った。身体の右側にかけられる体重は驚くほど軽く、自分の服と三浦の服が間にあるというのに信じられないほど柔らかい。まるでスポンジを握って洗剤が滲み出すかのように、三浦の身体から香る甘やかな匂いが、密度を増して魅了してくる。頭は撫でたままだったので、まるで俺が抱き寄せたかのような形になっている。
三浦が手に持っていた漫画をローテーブルに置く。俺も手に持っていたラノベを同様に置いた。緊張と、三浦に対して溢れる気持ちで頭がおかしくなりそうになる。
いかん、どうしたら――!?
がちがちに固まっていると、三浦が不意に身体を起こした。
「暑い……」
「え？　あ、そうか？　冷房強めるか？」
９月に入ってからはエアコンを点ける日も点けない日もあったが、今日はいつも一人しかいない部屋にもう一人来る上に、主に俺が緊張で熱を発すると思って軽く冷房を点けていた。それでも三浦はデニムのジャケットを羽織っているし、今の今までやっていたことを考え

れば暑くなってもなんら不思議ではない。
俺の提案に三浦は、
「ん、……だいじょうぶ」
ぽそりと呟くと、デニムジャケットを脱ぎ出した。
「んな……っ」
ありとあらゆる感情がごった煮になって、大きく膨らみすぎた言葉が喉で詰まる。三浦はさらりとジャケットを脱いでバッグにしまった。肩口の露出した白のフリルカットソー。大人びた美しさとあどけない可愛らしさが混ざり合った、今の三浦をよく表していると言える恰好だ。
見惚れながらも、三浦の行動にただただ驚く。口を半開きにして固まっている俺の様子を、三浦は顔を真っ赤にしながらちらちらと見てくる。
エアコンで暑さを調節することなく、服を脱ぐ。しかも俺の前で堂々と。それでいて、爽やかながらもしっかり腕を見せている服装。
目まぐるしく変化する状況にまるで心が追い付けないでいると、三浦がふたたびしな垂れかかってきた。一枚脱いだだけだというのに、やわらかさも甘やかな匂いも、格段に増した気がした。反射的に変な声が出そうになって、かろうじて堪える。
「ん……」
頭を撫でると、三浦はまたうっとりと目を細めた。なんだかこのまま眠りに就いてしまいそうだな……と思っていると、露出した滑らかな二の腕が見えた。思わずごくりと喉を鳴らすと、三浦の身体がぴくりと揺れる。目の前で息を呑んで、三浦に聞こえないわけがない。
迂闊な行動を後悔していると、三浦がクッと顔を上げた。至近距離で見つめ合っていると、滑らかな髪を撫でていた手が自然とすべり、そっと二の腕に触れた。自分でもそんな大胆なことができたことに驚くが、三浦は頬を紅潮させるだけで、何も言ってこない。
「……ぁ……っ」
そっと抱き寄せると、三浦が切なげな声を漏らした。初心な仕草と、大胆な行動と、ぞくりとするほど色っぽい吐息と表情。その全て

に魅了されて、身体が小さく小さく震える。
――今、だよな……。
三浦に気持ちを告げるなら、今しかないだろう。このタイミングを逃したら、次は一体いつ言えるかわからない。
「……っ」
――けれど、言葉を発しようとしても喉から思い通りの言葉が出ない。腕の中にすっぽり収まっている三浦と見つめ合いながら、数秒か、数十秒か、あるいはそれ以上か……時間感覚が完全に麻痺したまま、無言の時間が続く。
今言うしかないだろ。行けよ、行け、行け――
必死に己を奮い立たせていると。
「ヒキオ……」
「……ん、どうした」
三浦が、しっとりと湿った声で呼びかけてきた。覗き込んだ瞳はとても綺麗で、なにか強い決意を秘めているように見えた。
三浦が美しい唇を震わせながら言葉を紡ぐ。
「……あーしのこと、どう思ってる？」
「え……っ」
三浦の声音は、切なげで、苦しそうで――今にも泣きそうだった。
続く。

（41）

――あーしのこと、どう思ってる？

細い肩を抱き寄せて、今にも唇が触れそうなほどの距離。それなのに、三浦がこの言葉を囁いたときの表情は、切なげ、苦しそうで、今にも泣きそうだった。

「どう……って……」

俺がいま発した言葉は、本来ならば今すぐにでも告げたいと思っている三浦への気持ちをいったん脇にどかしてしまって、「取り敢えず、三浦の言葉を一度受け止めよう」という安直な発想から湧き出た言葉だ。三浦がこんな表情をする理由に薄々気付いているのに、その不安をすぐに拭うことができない自分がつくづく情けない。

三浦がそっと手を伸ばしてきて、肩を抱き寄せている俺の手に重ねてきた。温かくて小さな手は、微かに震えていた。

「……聞かせて」

三浦の言葉はとても短かった。なのに、たった四文字の中にたくさんの思いが込められている。耳朶からするりと入り込んだ言葉が脳の中で弾けて、三浦の思いが溢れ出すような感覚。

「……その、なんだ……。一緒にいるのが、当たり前っていうか……」

「友達止まりってこと？」

俺のたどたどしい、言い訳じみた言葉に三浦が食い気味で疑問を投げかけてきた。そんなわけないだろうと言いたい。一刻も早く三浦への思いを口にしたい。それなのに――まるで蜘蛛の糸に絡めとられたかのように、喉から言葉が出てきてくれない。

三浦が重ねている手にキュッと力を込める。まるで子どもが寂しがって親に抱き付くかのような、寄る辺を求めるような、そんな切ない力加減。綺麗に整った顔がくしゃりと歪んだ。

「……はっきりして。はぐらかされるのは、もういや……」

三浦の掠れた、消え入りそうな言葉にハッとする。

今、至近距離で俺の瞳を覗き込む三浦には、俺と、もう一人が見えているのかもしれない。今年の夏、三浦の心が、温め続けていた思い

が、くしゃりと潰れたとき――もうこんな顔をしてほしくないと思った。なのに、今度は俺が悲しませてしまっている。気付いた瞬間、胸がズキリと痛んだ。

３年生になってから三浦と話すことが多くなり、徐々に惹かれて、俺も三浦も様々な出来事を経験して――それらは全て、期間にすれば半年弱の間に起きたことだ。

それが短いのか長いのかはわからない。

けれど、この期間で確かに大きく変わったものがあった。

――三浦に対する、俺の気持ちだ。

「……わかった」

俺の言葉に、三浦がびくりと震える。三浦の細い両肩を掴んで身体を離し、俺はあぐら、三浦は女の子座りになって正面から向き合う。

「俺は……」

――初めて会ったときは、自分と全く触れ合うことのない人種だと思っていた。きっと俺のような人間をバカにするタイプだろうと。

――けれど、修学旅行やマラソン大会、バレンタインイベントを経て、三浦の人間的な魅力に少なからず気付くことができた。

――そして春から接する機会が増えると、どんどん新しい魅力に気付き、それまで見たことのなかった面を見ることができるようになった。

近付けば近付くほど、もっと知りたくなる。

それはきっと、今後も変わらない。そんな気がする。

「俺は……」

口がからからに渇く。ごくりと喉を鳴らすと必要以上に大きな音が出てしまった。心臓がバカになってしまったのではと思うほどにうるさい。それでも止まる訳にはいかない。

三浦の顔を、笑みで満たしたい。

堂々とした言葉で、きちんと、この思いを告げる――

「三浦が、その、えーと、なんだ、うん。……す、好きだ。もしよかったら、その、えー、あー、……付き合ってほしい」

教訓：プレッシャーに弱いと大惨事を起こします。
「……」
俺が真剣な表情をしながら紡いだあまりにもたどたどしい告白に、三浦は目をきょとんとさせている。一昔前のアニメならキャラの頭上に巨大な『……。』という文字が表示される雰囲気。間抜けな顔をしたカラスもセットで付いてるよ！
俺が三浦の両肩を掴んだままなのでなおさらシュールだ。猛烈に手を離したいが、離したら離したできっと恥ずかしいし気まずいと思われるので動けない。
やってしまった。
これから先何十年と経っても、たぶん今この瞬間の気まずさを思い出せる自信がある。
タイムリープしてやり直せないかしら……と真剣に悩んでいると。
「……ぷっ、くくっ……っ」
「うぐ……っ」
三浦が俯いて、静かに笑い始めた。
「くっ、くくっ……あはははは！」
恥ずかしさやらなんやらで地味にショックを受けて唸っていると、三浦はお腹を抱えて笑い始めた。予想外の反応に呆然としていると、ひとしきり笑った三浦が「あー、もう……」と笑いながら顔を上げ、目尻に浮かんだ涙を拭った。え、そんなに面白かった？
「はー、……ヒキオらしいね」
「……そりゃどうも。で、その、なんだ、さっきの返事をだな……」
顔が熱くなっていてついそっけない返事をしてしまったが、今は何よりも、告白の返事を聞かないといけない。
俺の言葉を聞くなり、楽しげに笑みを浮かべていた三浦の顔にほんのりと赤みが差した。表情の変化としては本当に微かなものだというのに、心の底から可愛いと思った。
「うお……っ」
三浦の両腕が首に絡まる。整った綺麗な顔が目の前にまで近付く

と、耳まで熱くなった。三浦は三浦で顔を真っ赤にしている。なんで？　なんで自分も恥ずかしいのにこんなことしたの!?

三浦が互いの鼻先が触れそうになるほど顔を近づけ、目を逸らす。右、左、右……とまるで横断歩道を渡るときのように。しばしのあいだ待っていると、やがて、意を決したように真っ直ぐ見つめてきた。

「あーしも、その……ヒキオのこと……す、好き」

「……っ」

俺ほどではないにしろ、中々たどたどしい告白。けれど、茶化す余裕などまったくなかった。恥じらいながら思いを告げる三浦の表情が、あまりに素敵で、魅力的で、可憐で、可愛かったからだ。今までだってたくさん三浦の可愛いところを見てきたはずなのに、その全てが霞むほど。俺が固まっていると、三浦は口元をもにょもにょと動かしながら、続きの言葉を綴った。

「だ、だから、その……つ、付き合う、から……。よ、よろしく、お願い……します？」

突然の敬語、からの疑問形だった。

「んぶふっ」

口をギュッと閉じていたら、代わりに鼻から声が漏れてしまった。

「ちょ、ちょっと、笑うなし……」

耳まで真っ赤にした三浦が拗ねたような目で見つめてくる。本人は怒っているつもりでも、この表情を見て怒っていると思う人はこの世にいないのではないだろうか。ただただ可愛らしい。

ふっと息を吐き、ゆっくりと深く吸って、未だに口をとがらせている三浦をじっと見つめた。背中に両腕を回すと三浦がびくりと震えたが、抵抗はしなかった。出会った頃はあんなに恐れていたのに、三浦の身体は驚くほど華奢で、やわらかくて、良い匂いがする。

「ありがとう。よろしく」

「……う、うん、よろしく」

「……」

「……」

「……」

「……」
アレですやん。
ゲームとか漫画だと、ここで一旦区切って「そして数年後――」とか言うやつですやん。
結婚式とかね。
そんな感じですやん。
しまった、頭が真っ白だ。
目の前には、というかお互いに両腕で抱きしめ合った状態で、全く動けずにいる。なんだこれ、行動の選択肢が脳内に出てこないぞ。何をしたらいいか分からないのに、離れる雰囲気ではまったくないという奇妙極まりない状況。なんなの、なんなの!?
「……っ」
盛大に迷っていると、三浦が目を泳がせながらもゆっくりと顔を近づけてきた。恥じらいが浮かんだ可愛らしい表情で俺を見つめ、ゆっくりと目を閉じてゆく。
迷っている時間はなかった。
目を少しだけ開けて、ヘマをしないように気を付けながら、俺からも慎重に顔を近づけると――柔らかな唇がふにゅりと触れた。この感触も極上のものだが、何よりも「三浦優美子という素敵な女の子とキスをしている」という事実が、身体を内側から燃やすような感覚に陥らせた。
唇を重ねていた時間はそれほど長くなかった。2人とも口付けしながら息をする余裕もなかったからだ。三浦は唇を離すと、顔を逸らしてちらりと横目に見てきた。
「……言っとくけど、あーし、今のが初めてだから」
三浦の言葉と、婀娜っぽい流し目にぞくりとする。
「……そうか。奇遇だな、俺も初めてだ」
「ん、だろうね」
「それひどすぎない？　んむ……っ」
三浦のさりげなくひどい言葉に抗議したが、返事の代わりに再び唇が重ねられた。今度はお互いに不慣れながらも呼吸をして、相手の感

触や息遣いまでたっぷりと味わうように。三浦のまつ毛は驚くほど長く、切なげに揺れるのが愛おしい。
「……ん……っ」
唇を離すと、三浦がうっとりと目を細めた。心底幸せそうな表情に、どうしようもなく頬がゆるむ。
しかし、これ以上キスを続けると冷静でいられなくなりそうだ。一旦離れて落ち着くか……と思っていると。
「……あの、三浦さん？」
三浦は俺の首に腕を回したまま、全く離そうとしない。俺の顔をじっと見つめたままだ。初めて見る表情だが、これは恐らく物欲しげな表情なのではないかと気付く。
……冷静でいられますように。
ふたたび顔を近付けてくる三浦を見て、心の中で必死に自制するように言い聞かせた。

続く。

（４２）

三浦と続けざまに二度のキスをして、理性が尋常でない勢いで削られていた。これ以上は本当に押し倒しかねないと思っていたが、三浦はどこか甘えるような表情で三度目のキスをねだってくる。言葉で何か言うわけではない。けれど、表情がはっきりと「もっとしたい」と語りかけてくる。整った眉をかすかに曲げ、綺麗な瞳を細め、しなだれかかるように密着してきた。

「んん……っ」

三度目ともなると余裕が出てくるのか、三浦は唇を重ねながらも細い手ですがるように背中をなでてくる。背すじに感じる甘い疼きにぞくぞくしていると、ぴたりと閉じた唇の割れ目に何かが当たった。

「んっ……んふぅぅ……っ」

悩ましい吐息を漏らす三浦の、小さな舌が俺の唇の割れ目をなぞっていた。あけてよと懇願するように、可愛らしくおねだりするように。まずい、ここで唇を開いたら確実に理性を保てなくなる……！と危機感を抱き、なんとしても唇を開けまいとしていると。

うっすらとまぶたを開いた三浦と目が合った。

（あけてくれないの？）

そう尋ねてくるような表情。今にも泣きそうな顔に、なんとか戒めようとしていた心が簡単に溶解してしまった。唇を引き結ぶ力をふっと緩めると、小さな舌がにゅるりと入りこんできた。

「んふぅぅ……ちゅっ、ちゅぴっ、はぁぁっ、んっく、ふぅぅぅ……っ」

「……っ」

唇を開放するなり、三浦は顔を傾け、さらにピッタリと密着してきた。上下の唇をはむっと咥えてなぞり、口内に滑り込ませた舌を俺の舌にねっとりと絡ませ、上下の歯列をくまなく舐めていく。

「あむっ、ふぅぅっ……んっく、はぷっ、ヒキオ……んっ、ちゅっ、ちゅる……っ」

「んむ……ぐ……っ」

三浦の積極性が加速度的に増していく。舌を絡めながらうっとり

と目を閉じ、時折うっすらと目を開けると幸せそうに見つめてくる。三浦が迫ってきたことで自然と後ずさり、あぐらの姿勢がほどけた。そこで三浦がすかさず身体をぴたりと密着させてきた。衣服越しに当たる胸の感触が信じられないほど柔らかい。胸越しにも高鳴った鼓動が三浦に聞こえてしまいそうだ。三浦は自分の胸が俺に触れていることにまったく注意を向けていない。ひたすら、キスに夢中になっている。

「……ぷはっ。はっ、はぁっ、はっ、はっ……ヒキオ……っ」

唇を離した三浦が、口を半開きにして朱い舌をてろりと垂らし、悩ましく息を荒げている。首や背中をさする腕も、密着した胸もそのまま。唇が触れていないだけで、互いの鼻先がこつんとぶつかっている。

待て、待て、待て、待て。

なんだこの可愛い生き物は？

俺の股座にすっぽりと収まり、もっともっとと口付けをねだってくる。一秒ごとに可愛く色っぽくなっていく乙女の姿に、心臓が痛いほど高鳴っていく。

「んむ……っ」

三浦がふたたび顔を傾け、唇を重ねてきた。軽い身体がゆっくりと体重をかけてきて、俺は自然とカーペットの上に仰向けになった。三浦は俺の両頬を柔らかな手で挟んで、にゅむにゅむと舌を絡めてくる。

「ん……むぅ……っ」

意識が徐々に霞んでくる。鼻で息をすることはできるが、そのたびに三浦の甘やかな匂いをいっぱいに吸い込むことになる。三浦の吐息や香りが肺に流れ込むような感覚に溺れる。

少しでも口で息をしようと思っていると、上に覆いかぶさっている三浦の口から唾液が流れこんできた。同じ人間なのに何故こうも違うのかと思うほどに、三浦の唾液は甘ったるい。

細指が頬から耳に移り、耳の中を艶めかしく触ってくる。ここまでされて男として反応しないわけがない。三浦のミニスカートに膨ら

んだジーンズがぐりぐりと押し当てられる。三浦はぴくりと反応したが、今はなによりもキスを優先したいのか、それ以上気に留めることはなくひたすら舌を絡め、俺の舌を啜り、唾液を流し込んでくる。

現実なのか夢なのかわからなくなるほど、甘い香りとやわらかな感触に包まれていた。

「……ぷはっ」

一体何度のキスをしたのかわからないくらい時間が経つと、ようやく三浦が身体を離した。しばらく俺を見つめてポーッとしていたが、何かに気づいたかのようにハッとした。おお、ようやく正気に――

「ごめん……頭、痛かったよね？」

「……ああ、まあ、うん、だいじょうぶ」

戻ったかと思いきや、カーペットに寝そべっていた俺の後頭部をさすってくれた。心配してくれるのは嬉しいけど、超がつくほど積極的なキスをしていたことに対しては何も触れないんでしょうか……。

取り敢えず、現時点で分かったこと。

もしかしなくても、三浦は相当の甘えたがりらしい。

頭を撫でたり手をつないでいるときももしかしたら……と思っていたが、この短い時間で確信に至った。

「……」

そんなことを考えていると、三浦は俺の胸に顔をうずめた。そのまま何も言わなくなったが、すんすん、すんすん、と鼻を鳴らす音が聞こえる。

ゆっくりと顔を上げると、幸せそうに目を細めた。

可愛すぎて鼻血が出そう。

三浦が金色の髪をかけ分けて薄く微笑むと、一瞬で艶っぽい大人の女性に変貌した。こころころと変わる表情はどれも魅力的で、どんどん好きになっていく。

さて、どうしたものか。

仰向けになったままで考える。

三浦はまだまだキスがしたりないのか、おでこ同士をこつんとぶつけてしきりに唇を重ねてくる。心を許した人にここまで甘えてくる

さまは、普段教室で見ている時とのギャップも相まって洒落にならないほど魅力的だ。できることなら俺もまだまだキスに溺れてみたい。
しかしながら、三浦の心配は的を射ていた。それなりに後頭部が痛い。あと背中も。三浦の体重がいくら軽くても、カーペットだけではいかんせん諸々の衝撃を吸収しきれない。
「……ベッドに行くか」
キスの続きならベッドの方がやりやすいだろうという意図を込めて提案してみたが、よくよく考えるとどう考えても違う意味にとられるよな……とコンマ５秒後に気づいた。案の定、三浦の顔が一瞬で茹だる。
「え、あ、そ、その、えっと、ま、まだ、心の準備が……っ」
三浦が頬に手を当てて慌てる。積極的にキスをしてきた様子からは考えられない初心さだ。ベクトルの違う可愛さを次々とぶつけてくるものだから、心の防御がまるで追いつかない。俺のライフはとっくにゼロになっている。オーバーキルもいいところだ。
「だいじょうぶ、その、アレだ、キスをするだけだから」
恥ずかしがって言ったものだから、余計に妙な空気になった。三浦は目をぱちくりとさせて、それからクスリと笑った。
「うん。……ん……っ」
ベッドの上で……と言ったのに、三浦はそのままの体勢でもう一度キスをしてきた。

× × ×

ベッドに三浦が乗る。スプリングが軋む音がいつもより小さく、三浦がどれだけ華奢で繊細な存在であるかが分かる気がした。
俺が膝立ちになると、女の子座をしていた三浦はスッとおとがいを上げて目を閉じた。整った顔立ちに見とれながら唇を重ね、今度は俺から舌を絡める。
「んふぅぅ……っ？　んっ、ちゅっ、ちゅぴっ、こくっ、こくっ、はむっ、んふぅぅ……んっ、こくっ、ちゅるっ、んんん……っ」
唾液を流し込むと、三浦はためらうことなく飲み込み、細喉を何度も鳴らした。その表情はまるで、渇ききった喉に水を流しこんでいる

かのようだ。俺が体重をかけると、三浦はゆっくりと後ろに倒れ込み、仰向けに倒れこんだ。
「……はぁっ、はっ、ん……っ、ヒキオ、なんか、やらしい……っ」
口を腕で覆った三浦が、顔を真っ赤にしてつぶやく。空いた手はシーツの上に投げだされていた。見下ろす形で目にした艶姿にぞくぞくして、かすかな嗜虐心が芽生える。
「お互いさまだろ」
つぶやき、三浦の両手を握る。驚きに目を見開く瞳の両脇に小さな手を固定して、上から覆いかぶさる。
「うあ……んっ、あんっ、んんっ、やっ、んくぅぅ……っ」
体重をかけて押さえつけられるのが苦しいのか、あるいは恥ずかしいのか、三浦は舌を絡ませながらも時折唇を離し、顔を逸らす。目の前に現れた白い首筋にごくりと喉を鳴らし反射的に吸いつくと、三浦が悩ましく身体をくねらせ、長い髪を乱れさせた。
「やぁっ、あっ、そんな、とこ……んん……っ」
拒絶の言葉すら弱々しく、扇情的に身体をよじらせるだけの三浦にぞくぞくする。三浦の首筋は、まだ誰も足を踏み入れていない処女雪のように白く、同じ人間かと疑ってしまうほどにやわらかい。固めた舌先を肌に押しつけるたびに、三浦は艶っぽい声で悶えた。
いったん唇を首筋から離すと、驚くほど華奢な肢体に体重をかけて、三浦の口内に舌を侵入させてじっくりと舌同士を絡ませる。唾液を絶えず流し込み、時折唇を離してふたたび首筋に吸いつく。
「はぁぁ……あっ、んくぅ……ヒキオ……うあ……っ」
つないでいた手を離すと、三浦が背中に腕をまわして抱きしめてきた。愛おしむように何度もさすり、泣きそうな表情を浮かべて唇を密着させてくる。触れ合えば触れ合うほど、膨らんだ股間をぐりぐりと押し付けてしまう。それでも三浦は、仄かに顔を赤らめただけで特に何も言ってこなかった。
俺が上になり、互いに横向きになり、三浦が上になり、また俺が上になる。
互いの位置を次々と変えて、互いの名を呼び合いながら、ただただ

唇を重ね続けた。
「……ぷはっ。……今、何時だ……？」
これまでの人生で体験したことがないほどに時間を忘れていた。
俺の言葉に、三浦が枕元に置いていた自分のスマホに手を伸ばした。
「……2時間くらい経ってる」
「マジか……」
初めてキスをしたときは、2時間のあいだずっとキスしてました！
などと人に発表することはまずないだろうが、とんでもないことをしたんだなと実感する。
いくら三浦が可愛くて色っぽかったとはいえ、俺も盛りすぎだろう……でも襲ったりしなくてよかった……いやでもこれって半分襲ってるようなもんじゃねえか？　などと己の心の中で問答していると――三浦が俺の首にするりと腕を回してきた。目をぱちくりとさせる俺に、三浦はいたずらっぽい笑みを浮かべた。
「ヒキオとこんな関係になるなんて、思わなかった」
「奇遇だな、俺もだ」
俺の返しに三浦がくすくすと楽しそうに笑う。本当に魅力的な女の子だな、と思った。
「あとは……ヒキオがこんなにやらしいなんて思わなかった」
「……さっきも言ったけど、それはお互いさまじゃねえか？」
頬を赤らめながら告げてくる三浦にカウンターを食らわせると、色白の頬が一瞬で朱に染まった。さっきはキスに夢中になっていたから反応がそこまで大きくなかったが、今回は効果大のようだ。
「……ち、ちがうし。あーしはただ、夢中になってただけで……」
「……夢中になってやらしいことをするってことはんぐっ!?」
最後まで話すことができなかった。何が起きたのか一瞬分からなかったが、三浦が俺をやわらかな胸に抱き寄せたのだと気付く。
「……それ以上言うなし。恥ずかしいんだから……」
「お、おう、すまん……」
胸に思い切り顔が埋まってるのは恥ずかしくないのか……？　とは言えなかった。とても良い匂いがします。

「今日はこの後、どうする？」
やわらかな胸から解放されて――別にそのままでもよかったのだが――尋ねると、三浦は質問の返事を考えながら自分の胸を見つめてポッと頬を赤らめた。今ごろ恥ずかしくなったんですかね？
「ん、夜までには帰るって言ってあるから……」
言いながら、三浦がちらりとスマホの時計を見る。あと2時間の猶予があった。
「漫画の続き、読むか？」
「ん……たぶん、集中できないからいいや。また今度読ませて」
「……それもそうだな、わかった」
集中できない理由には思い当たる節しかなかったので、素直に応じた。
三浦の頬にそっと手を添えると、ほわっと幸せそうに瞳を細めた。
「続き……するか」
「……うん」
今にも消え入りそうな掠れた声で返事をした三浦が目を閉じる。
華奢な肢体を優しく抱きしめると、もう一度あの濃密な時間を味わうべく、やわらかな唇に自分の唇を重ねた。

続く。

（４３）

結局、三浦とは合計して４時間ほどキスをしていた。

途中途中で唇を離してベッドに寝転がっていると、どちらからともなく唇を重ねていた。あまりにも濃密で甘露のような時間だった。

お互いがファーストキスだったにも関わらず、まるでこれがごく当たり前に、朝起きたら顔を洗うかのような日常的行為になった気がした。夕方になっても、まだまだ俺にぴったりと密着して唇を重ねていた三浦に「そろそろ……」と言った時の、可愛らしく真っ赤に染まった顔はしばらく忘れられそうにない。俺が止めなかったら、下手をすれば小町が帰ってくるまで続けていたのではないだろうか。

気を利かせて外出してくれていた世界の妹・小町だが、三浦を送ろうと家を出ようとしたところでちょうど帰ってきた。

「あ、優美子さん！　いらっしゃいませー！」

「あ、こ、小町……こんばんは……」

何も事情を知らないですよーと主張するかのような純真無垢な笑顔。うむうむ、ますます嫁にやれなくなったな。可愛すぎて。

三浦はさっきまでやっていたことがやっていたことだからか、別にやましいことはしていないのに小町への対応がやけに不自然になっている。というよりむしろ恥ずかしがっている。それもかなり。

「えー、もう帰っちゃうんですか？　せっかくだからご飯食べてってくださいよー」

俺と三浦と交互に見た小町が、極めて清涼感のあるおねだり――清涼感のあるおねだりってなんだ――を三浦に繰り出す。顔を赤らめていた三浦はそれはもう盛大に戸惑っていた。

「お、親に、夜には帰るって言ってるから……」

「ん、分かりました。じゃあ、また今度食べに来てくださいね！」

「う、うん……」

あ、いいんだ。

あっさりと約束を取り付ける光景を目の当たりにして、小町はすごいなぁ……と月並みの感想を抱いた。

「それじゃ、三浦を送ってくるから」
「はいさー。行ってらっしゃい。それでは優美子さん、気を付けて帰ってくださいね！」
「うん、じゃあね」
　三浦は別れ際になってようやく緊張がほぐれてきたのか、小町の挨拶には柔らかな笑みを浮かべた。自然に浮かべた笑顔はとても可愛らしく、思わず見惚れてしまう。
「……ヒキオ？　どうしたの？」
「あ、ああ、すまん。なんでもない」
　三浦が気遣わしげに、無意識になのか上目遣いで見つめてくる。もう感触を知ってしまっている唇から慌てて目を逸らすと、小町がなにやらニヤニヤと笑っていた。なんですのん。
「んじゃ、行ってくる」
「はーい。晩ご飯の用意しとくね」
「いつもすまんねえ」
「それは言わない約束ですよ」
　比企谷兄妹恒例の中身のないやりとりをしていると、三浦がくすりと楽しそうに笑った。小町がなぜかビックリしていたが、詳しい話はまた後で聞けばいいだろう。三浦を連れて、駅へとのんびり歩き出した。

×　×　×

　三浦の家の前に着いた。あとは挨拶をして別れるだけ……と思ったら、三浦が何か言いたそうにもじもじとしている。
「どうした」
　俺の言葉に、三浦はまるで小動物のようにびくりと跳ねる。目線を右、左と泳がせ、一歩だけ近付いてきた。近付いたために身長差が如実になり、三浦は自然と上目遣いになる。
「その……これから……よろしく」
「……お、おう、よろしく」
　直接街灯が当たっている場所ではないので、三浦が顔を真っ赤にしているのを見ることができないのは非常に残念だった。俺も顔が熱

いので、見られずに済んだのはよかったのかもしれないが。
それじゃあおやすみ……と言おうとしたが、三浦がまだ何か言いたそうにしているのに気付く。
「ん、どうした」
尋ねると、三浦が口をもにょもにょと動かし、数秒ばかり逡巡して、やがて意を決したように両腕を伸ばしてきた。俺は動揺しつつも素早く周りを見渡し、誰もいないことを確認する。
「ん……っ」
ほっそりした身体に俺が両腕を巻きつけると同時に、柔らかな唇が押し当てられた。いつ人が来てもおかしくないので注意しないといけないのに、つい数十分前まで耽っていた部屋での行為を思い出してしまう。理性が削られてしまう前に唇を離さないと……と思っていると、三浦の舌がちろりと伸びてきた。一瞬で諦めの境地に至る俺。
「ん……ふっ、んんっ……ちゅっ、ちゅぴっ、ふぅぅぅ……っ」
直前までの恥じらいはどこへやら、三浦は口付けを深めるごとに身体をぴとりと密着させてくる。何時間もキスをしてもまだ飽きないらしく、まるで俺の口内に蜂蜜が塗りたくられていて、それを舐め尽くそうとしているかのように丹念に舌を這わせてくる。
熱くぬめった舌と唾液が絡まって生じる淫靡な音が、心地よく頭蓋を満たしていく。
下半身が反応してしまうが、三浦はまるで気にせず、もっともっとせがむように身体を寄せてくる。三浦の肌は、まるで俺の身体に馴染むかのようにふにゅりと柔らかく形を変えぴったりと寄り添ってくる。安心と興奮が同時に湧きあがり、庇護欲と嗜虐心という矛盾した思いがせめぎ合う。
「んっ、はぁぁ……っ、ヒキオ……んむふぅぅ……っ。……ぁ……っ」
何かに気付いたかのようなか細い声を漏らすと、三浦がパッと身体を離した。
「……ご、ごめん……また夢中に……って、あの、そうじゃなくて……」
我に返ってよほど恥ずかしくなったのだろう。盛大に慌てている。なんだこの可愛い生き物は……。

「別にいいって。俺はいっこうに構わねえよ」
どこぞの中国武術の天才みたいなことを言ってしまった。靴と靴下を脱いだら足先が凶器になるよ！　黒曜石の打岩とか作っちゃう。
俺のどうでもいい雑考をよそに、三浦は両頬に手を当てて口元をもにょもにょと動かしている。数分おきに可愛くなっていく気がするんですが……。
「……じゃ、じゃあね」
取り敢えずこの場を脱しないと恥ずかしさに耐えられないと思ったのか、三浦が焦ったように数歩ばかり離れ、くすりと笑ってしまいそうになるほど上ずった声で別れの挨拶をつぶやいた。
「おう、おやすみ」
「……ん、おやすみ」
最後は柔らかな笑みを浮かべてくれた。
「……ふぅ」
帰り道、一人になると自然と深い息を吐いた。ネガティブな吐息ではない。集中して勉強をしていて、一息ついたときのような感覚。しかし勉強の時とは比べ物にならないほど吐いた息は深かった。
濃い。
あまりにも濃い。
三浦と付き合うことが決まった、今日という日が――今までの人生で、一番濃密な一日に思えた。

×　×　×

「ただいま」
「おかえりー。あ、お兄ちゃん」
「ん、どうした」
家に帰ってリビングに顔を出すと、調理を進めていた小町がとてとと寄ってきた。俺の顔を見てにんまりと、可愛らしくもちょっとワルい笑みを浮かべる。
「おめでとう」
「受験は来年だぞ」
「おめでとう」

「お兄ちゃんのボケを流さないで……」
トボけようとしてみたが、通じるはずもなかった。小町の言葉は情報が足りないにも程があるが、それでもこの状況で何を言わんとしてるのかはさすがに分かる。
「……なぜ気付いた」
探偵に証拠を突き付けられた犯人のようなセリフを呟くと、小町は「んふふー」と楽しげに笑った。
「お兄ちゃんと優美子さんが並んでるのを見た時ね、なんかすっごく距離が近くなってたの」
「……え、ほんとに？」
「うん、ほんとに」
これは俺も三浦も気付かなかっただろう。第三者の目で、しかも小町のように人を見る力がある人が見ていないと気付かなかったに違いない。
俺が驚いていると、小町は「まだあるよー」と得意げに笑った。
「それとね、なんだか優美子さんの笑い方、すっごく可愛くなったなって」
「それは俺も思う」
「はい、お惚気いただきましたー」
反射的に答えてしまい、妹に盛大に煽られる兄。顔がものすごく熱い。
小町は俺から得たい情報はもう全て得たと思ったのか、「そっかー、ついにくっついたかー」と恥ずかしい言葉を呟きながら、満足げにうんうんと頷いてとてとてと元いた場所に戻った。そして手早く調理を再開する。
「お兄ちゃん」
「ん」
小町がぴたりと動きを止めた。くるりと振り向き、にひっと笑みを浮かべる。過ぎ去った真夏の向日葵を思い起こさせるような、人の気持ちを明るくしてくれる笑顔だ。
「よかったね。おめでとう」

「……あいよ、ありがとな」
ご協力、感謝いたす……と敬礼をしてみると、小町は片手にボールを持った状態でシュピッと敬礼をし返した。
「なんか手伝えることあるか」
「んー？　それじゃあねー……」
ご機嫌な小町の支度を手伝っていると、胸の中がぽかぽかと温かい気持ちに満たされていることに気付いた。
嬉しい、だとか。
楽しい、だとか。
幸せ、だとか。
そういった言葉に分類される気持ちには違いないのだが、それでもなにか――今までの人生で味わったことのない温もりの火が、心に灯っているような気がした。

続く。

（４４）

家に帰って、ご飯を食べて、お風呂に入った。
いつも通りの流れ。
でも、親と話をしていてもほとんど頭に言葉が入ってこなかったし、お風呂に入る時も、いつの間にか髪や身体を洗い終えていた。
パジャマを着て布団に潜り込む。
頭の中で、ヒキオとの時間を何回も何回も再生する。
等倍再生、スロー再生、早送り、停止、等倍再生……。
ヒキオの何気ない仕草、キスをしすぎてちょっと苦しそうに息をするところ、あーしを優しく抱きしめてくれる、意外とがっしりした腕。
一つ一つ、一つ一つ。
思い出すたびに、心が、身体が、熱くなっていく。
「……ヒキオが……あーしの、彼氏……」
誰にでもなく、自分に行なう確認。
「……で、あーしが……ヒキオの……彼女……」
頭の中が沸騰するかと思った。うつ伏せになって足をバタつかせる。
これ以上考えると考えると寝れなくなる……と思っても、あーしの頭は今日の出来事の再生をやめてくれない。
ヒキオの唇はちょっとかさついてた。男の人の唇ってこんな感じなんだと驚いた。
けど、何度も何度もキスをする内に、自分とヒキオとの境界線がドロドロに溶けていくような感覚がして、よく分からなくなった。ただ心地よくて、気持ちよくて、安心して、好きという気持ちがあふれて、止まらなくなってしまった。
キスをやめないなんてわがままだなと思ったけど、ヒキオはきちんと受け止めてくれた。あーしに気を遣ったのか自分も乗り気だったのかは分からないけれど、ヒキオからも積極的にしてくれた。……いや、あれはノリノリだった。途中ちょっと目がギラついてたし。イヤじゃないけど、ぜんぜん。

「……あーしって、あんな風になるんだ……」
ヒキオの感触をひとしきり思い出したところで、今度は自分の素振りを思い出す。小さい頃に母親に甘えていた時とさえ比べ物にならないような甘え方。ヒキオと接する身体の面積をほんの少しでも増やそうとしていたかのような、そんな切実な感覚。もっとヒキオに自分の身体を押し当てて、ヒキオのごつごつした身体の感触を味わって、ヒキオの腕にぎゅっとしてもらいたい。
――恋人に、あんな風に甘えるんだ、あーしは。
なんとも思ってなかった男子に、何度も励ましてもらって、一緒にいたいと思うようになって、弁当まで作るようになって――好きになるなんて。
また頭の中が沸騰しそうになった。もう爆発しそう。
枕に顔をうずめて、ひとしきり足をバタつかせた。こういうのは可愛い女子がやった方が似合うんだろうな……と思いつつも止められない。
「……はぁ……」
仰向けになっても、天井の灯りを遮るように覆いかぶさってくるヒキオの姿を思い浮かべてしまう。ヒキオは見た目よりも身体が重かった。ぎゅうっと抱きしめられるとベッドが軋んだ。苦しいのに、ヒキオにされてると思うといやじゃなかった。むしろ……いや、これ以上考えるとなんだか変態みたいだからやめとく。
ヒキオが覆いかぶさって、口の中をめちゃくちゃにしてきた時の感覚を思い出していると――ふと、へその下がキュンと疼いた。疼いた場所は、ヒキオの感触の中でひときわ強烈な印象が残っているものが押し当てられていた場所。
「あれって……アレだよね……」
自分でも何を言ってるんだろうとは思ったけれど、そうとしか言いようがなかった。ヒキオはちょこちょこと気にする素振りを見せていたけど、あーしが反応する余裕もなかったからか、途中から気にせずぐりぐりしてきた。いや、わざとぐりぐりしてきたのかは分からないけど。無意識でぐりぐりしてたとしたらヒキオもかなり変態なの

では……って、ヒキオ『も』ってなんだし。
ああもう。
ヒキオが穿いていたのはジーンズだった。あんな硬い生地を内側から押し上げて、はっきりと伝わるんだからよっぽど大き……。
「……っ」
ダメだダメだダメだダメだ。
ものすごい速度で変態になってる気がする。
掛け布団で目の下まで覆う。見慣れた部屋の天井しか見えないのに、頭の中は相変わらずヒキオを映し出してる。
「……これから……ヒキオと付き合うんだから……キスだけじゃ、終わんないよね……」
自分に確認するようにつぶやく。マンガで見たことがあるような、『高校を卒業するまでは手をつなぐだけ』なんていうカップルには……あのキスの時間を考えると、とてもなれそうにない。あーしも、ヒキオも、あれ以上のことをしそうになるのを必死でガマンしてたような気がする。
ヒキオと……あれ以上のこと……？
考えた瞬間、身体の芯が燃え上がるように熱くなった。ヒキオの手の感触を、へその下に当たっていた硬い感触を、もっともっと味わうことになると――そう思っただけで、もうこれ以上熱くならないだろうと思っていた身体がもっともっと熱くなる。なんだか汗まで出てきた。お風呂に入ったのに。
「……」
本当に暑くなってきたから掛け布団を取り払う。そして自分の胸をそっと触った。
「うあ……っ」
ブラはつけていないけれど、それでも今までと比べものにならないくらい甘い感覚が突き抜けた。自分の手じゃなくて、ヒキオの手を……あの、自分よりもずっと大きくて、ごつごつした手を思い出す。あの手に胸を触られているつもりで、自分の手をゆっくりと動かす。
「ん……ふぁっ、はぁぁ……っ」

そっと撫でてるだけなのに、腰がくねくね動いてしまう。知らない、あーしはこんな自分を知らない。一人でしたことはあるけど、もっと淡白だった。なのに、今はちょっとした感触一つで身体に電気が走り抜ける。

怖い。

怖いけど、やめられない。

「んくっ……あっ、んぁっ、はぁぁ……んふぅぅ……っ」

唇を引き結んで悶える。優しく揉んでも、ちょっと指を沈ませても、ぜんぶ気持ちよくなってしまう。ヒキオがあーしの今の反応を見たらいったいどうなるんだろう。獣みたいになりかけて、でも結局なんとかこらえて優しくしてくれそう。考えただけで嬉しくなってしまって――身体の奥に、さらに熱がたまっていく。

パジャマのボタンを外した。

「やだ……っ」

２つとも、ピンと立ってしまっている。自分の身体がこんなやらしい反応をする日が来るなんて、想像もつかなかった。ヒキオとするのを想像してるだけでもこんなことになってるのに、本当にヒキオに触られたら……と思った瞬間、身体がビクリと跳ねて、ピンと立っていた２つがさらにむくむくと張りつめた。耳まで熱くなる。あーしは、ヒキオのことを想像するだけでどんどんエッチになっているんだ。恥ずかしいのに嬉しくて、嬉しいのに恥ずかしい。

「んくぅぅ……っ!? はっ、はぁぁっ、あっ、んくっ……はぁぁぁ……っ」

膨らみをキュッとつまむと、甘い電流みたいなものが背すじを突き抜けた。キュッ、キュッ、とリズムよくつまむと、身体が勝手に動いてしまう。腰が揺れる。背中が反り返る。へその下が熱くなる。ヒキオのことを考えて……なんだか泣きそうになる。

「ヒキオ……ヒキオ……っ」

こんなに情けない声が出るんだな……って驚いた。ほんの少し前まで目の前にいたのに、もう寂しい。もっと抱きしめてもらいたい。もっとキスがしたい。

「んっ、ひっ、んくぅっ、はっ、んはぁぁ……っ」
泣きそうになりながら、右手を下着の中にすべり込ませる。脚をこすり合わせてる時から薄々気づいていたけど、下着の中はとんでもないことになっていた。ぬるぬるになってぐっしょりと濡れていて、自分の身体とは思えないくらい熱い。
パジャマの下と下着を一緒に脱ぐ。湯気が見えそうなくらい熱かった場所が、途端にスースーとした。
くちゅ……っ。
「んくぅぅ……っ！」
右手の中指を割れ目に沿わせただけで、もう声がガマンできないと分かった。左腕を口に押し当てて、右手をそっと前後に動かす。割れ目に指がほんの少し沈むだけで、熱い液体がどぷ、ごぷっと溢れ出す。自分の身体がどんどんエッチになっていく。怖い。けれど、止められない。
「はっ、はぁぁっ、あっ、んくぅっ、んふぅぅ……うぅぅぅ……っ」
ぐちゅ、ぐちゅっとエッチな音がする。割れ目をこすりながら考える。ヒキオの指はもっとごつごつしてる。ということは、いま自分がしていることと同じことをしてくれたら、きっと今よりもっと気持ちいい。いや、そもそも、ヒキオが触ってくれるだけでもきっとあーしはおかしくなってしまう。
「あっ、ふぁっ、あっ、あぁぁ……っ」
想像が止まらない。指でこする動きが速くなる。にちゅ、ちゅぐ……っとエッチな音が鳴るたびに恥ずかしくなって、身体の奥が熱くなって、もっと気持ちよくなってしまう。
「ふっ、ふぅっ、ふぅぅ……っ」
左手を下半身に伸ばして、そっと皮を剥く。これだけ興奮している状態で触ってしまったら、一体どれほど気持ちよくなってしまうんだろう……という、恐怖と期待が入り混じった感覚。
ガマンできるわけがなかった。
薄ピンク色をした豆を、たっぷりと濡れた右手で撫でる。
「あ……んぅぅぅ……っ!!」

気が狂いそうなくらいの波が頭をガンと叩いた。とっさに左手で口を塞ぐ。今まで体験したことのない甘い電流が身体中を暴れ回り、重力を忘れたみたいに腰がふわりと浮く。頭の中が真っ白になる。漏らしてしまったのかと思うほど、たくさんの熱い液体があふれ出してくる。

「はっ、はぁっ……うっく、うぅぅ……っ」

身体に力が入らない。とんでもないことをしてしまった気がする。それなのに、豆をこする指が止まらない。壊れちゃったのかと思うほどに腰がヒクヒクと浮く。なんで、なんで止まらないんだろう。ヒキオが、あーしがイっても止めてくれない……とイメージしたからだ、きっと。

あーしがぐったりとしてるのに、ヒキオが熱っぽい目でじっと見つめながらあーしを責めてくる。あーしがなんだかんだでそんな風に、強引にしてもらいたがってると思ってるのかもしれない。やめて、だめ……と言いながら腰を揺らしてるあーしを、ヒキオは責め続ける。

「あっ、あっ、あっ、ぅあぁぁ……っ！」

さっきほどではないにしろ、大きな波が二度、三度と押し寄せる。ここでようやく限界が来て、右手の動きも止まった。台風が過ぎ去ったような静寂。部屋の中はこんなに静かだったんだと思い出す。ぐしょぐしょに濡れたシーツと信じられないくらい甘酸っぱい匂いが、今の時間が夢でなかったことを教えてくる。

「……全部着替えて、シーツも替えて……もっかいシャワー浴びなきゃ……」

着替えもシーツの替えも全てあったからよかった。あとはジュースをこぼしたとでも言って、いまの内に洗濯機を回してしまおう。

「……ヒキオのバカ、変態……」

我ながら、さすがにそれは理不尽では……と思いつつも。

自分の心と身体を占領したんだから、これくらい理不尽なことは言わせてほしいな……などと考えながら、一時的に着替えて、窓を開けて換気して、片付けを始めた。

明日は用事があって、ヒキオと会えない。

こんなにも明後日が――月曜日が待ち遠しくなるなんて、思わなかった。

続く。

（４５）

三浦と付き合うことになった次の日。日曜だったが、三浦に用事があったため会うことはできなかった。それでもなんだろう、アレだ、大なり小なり「俺ら、付き合ってますやん？」という雰囲気がそこはかとなく漂っている連絡を取り合うことができるのではないか……と思ったが、そこは安定の俺＆三浦である。

試しに何度かやりとりしてみたが、見事に付き合う前と何も変わらない。文面だけ見たら「ともだち……なの、かな？」と城廻先輩があごに手を当てて首をこてんと傾げるまである。城廻先輩がイメージにピッタリだったので急遽登場してもらった。

唐突だが、普段は夜に自分で処理をする時は漫画や動画にお世話になる。けれど、土曜と日曜の夜は想像だけで抜いた。三浦とのキスの感覚を思い出すと一向に興奮が収まらず、３回連続で抜いてげっそりした。男子高校生なので性欲はそれなりにあるつもりだが、それでも今までは日に１～２回程度だったので驚いた。生身の女の子ってすごい。

そして迎えた月曜日。いつもより早めに学校に向かうと、教室には三浦だけ座っていた。勉強道具を広げているが、明らかに集中できていない。三浦と同じ状況だったら俺も間違いなくあんな状態になっているだろう。

「うっす」

教室の後ろのドアを開け、一文字目で声が裏返りそうになりながら挨拶すると、三浦がぐりんとこちらを向いて背をシャキッと伸ばした。

「お……おはよう」

んんん？

俺を見た三浦の目が、誇張抜きに輝いているように見える。犬ならしっぽをぶんぶんと振ってそうだ。どれだけ後ろ向きな想像をしようとしても、三浦は俺に会えて嬉しいと思ってくれていると分かる表

情だ。
え、なに。
三浦さん、こんな分かりやすく可愛くなりますのん？
獄炎の女王と呼ばれていた(俺にだけ)、あの三浦優美子はいずこへ？
驚きながら隣の席に座る。三浦は浮かれすぎたと思ったのか、ほんのりと頬を赤らめて顔を逸らしている。金の髪の毛先をくりくりと指でいじり、太ももに置いた手をもじもじとしながら。仕草だけを切り取って見ればあざといかもしれないが、三浦の場合はどう考えても天然だろう。信じられないくらい可愛い。ここが教室でよかった。こんな可愛らしいところを見てなにかしそうになっても堪えることができる。
「……昨日はごめん」
三浦の言葉にはてと首を傾げる。別に会う約束をすっぽかされた訳でもないよな……と考えたところで、三浦に用事があったことを思い出す。
「別にしょうがねえって。今日から、まあ、うん、その……毎日、会える、し、まあ、うん……だいじょうぶだろ、うん」
しどろもどろ、ここに極まれり。
ここはかっこいい男が口にするような言葉をサラリと言えればよかったのだろうが、そこは安定の俺である。「つまりは？」と半ギレで問いただされそうなどもりっぷりである。
しかし、俺の言葉でも三浦は耳まで赤くして、薄い唇をもにょもにょとさせてうつむいた。
「……それもそっか……」
ぽそりと言葉を紡ぐ唇を思わず見つめてしまう。一昨日の行為を脳内で高速再生して、三浦の甘い匂いと柔らかな感触を思い出す。思い出すだけで血液が下半身に集まりそうになり、慌てて意識を別のことに逸らそうとする。それでも、三浦の綺麗な唇から目を離すことができない。
「ヒキオ、見すぎだし……」

「え……あ、わりい」
三浦が掠れた声でつぶやいた。慌てて謝ると、三浦はそっと手で口元を覆って顔を逸らし、横目で俺をちらりと見た。本人は意識していないのだろうが、口元を隠して流し目を送る一連の仕草がひどく婀娜っぽい。
目を見開き、思わずごくりと喉を鳴らす。
二人の他に誰もいない教室で、その小さな音ははっきりと響いた。
「……っ」
三浦に瞳が揺れた。ゆらりと、風に吹かれた炎のように。
いつ誰が来てもおかしくない、朝の教室。
ほんの十数秒前まで、この状況は理性をとどめる楔として機能していた。それなのに、どんどん視界が、世界が狭まっていく。三浦のことしか見えなくなっていく。
三浦が口元を覆う手を外した。いや、違う。俺がそっと手を伸ばし、三浦の手首を掴んでどかしていた。三浦は戸惑っているが、抵抗はしてこない。なんだか泣きそうな顔をしている。一昨日、何度も何度も見た顔だ。俺の嗜虐心を燃え上がらせる表情だと三浦は気づいているのだろうか。
「ぁ……っ」
三浦と手をつなぎ、指を絡ませる。三浦がぴくりと震えた。悩ましい瞳で見つめながら、そろりそろりと探るように俺の指に自分の指を絡ませてくる。指と指が触れているだけなのに、まるで互いの神経の束が触れ合っているように思える。ほんのわずかに動いて指同士がこすれるだけで、甘い痺れが身体の隅々にまで行き渡る。
「ヒ、ヒキオ……だめ、今は、だめ……っ」
三浦が身を逸らす。いつのまにか俺が三浦にずいと顔を寄せていた。三浦の言葉は半分が本音で、半分が迷っているような、そんな複雑な心情を覗かせる。
「……だめか？」
ここまで来たら、せめて一回くらい……と思っていると、三浦がそっと俺の唇に手を押し当ててきた。

「後で、ちゃんとしたげるから……」
「……っ」
濡れた瞳で囁かれ、口を塞いでいる指がそっと唇を撫でてくる。三浦の言う『後で』とは、昼休みのことだろうか。最低でも放課後だろう。
「……分かった。わるい、つい……」
ぞくぞくとした興奮を覚えながら下がると、三浦がくすりと笑った。
「ヒキオ、朝からサカりすぎ……だし……っ」
自分で言った言葉に恥ずかしくなったらしく、一瞬で耳まで赤くなってしまった。真っ赤になった小さくて可愛らしい耳を無性に触りたくなったが、廊下で生徒同士が挨拶する声が聞こえたので、慌ててカバンから教科書を取り出した。

× × ×

昼休み。
いつものように三浦が弁当を作ってくれていた。用意していることを告げられた時点で、毎回欠かさず感謝の言葉を伝えている。
誰にもバレないように、こっそりと移動して屋上へ向かった。
壊れた南京錠のついたドアを開けると、仄かに秋の匂いを感じた。夏を名残惜しむようにまだじんわりと暑さが残っていて、季節の狭間の複雑な空気感を感じる。
いつもの場所に移動して腰を下ろそうとすると、三浦が弁当包みを下に置き、唇を重ねてきた。
「んむ……っ」
昼ごはんを食べる前の方がキスするにはいいかな……などと考えていたが、三浦から積極的に唇を重ねてくるのは予想外だった。
「ん……ちゅっ、んんっ、んふぅぅ……っ」
細い腕が俺の首に巻きつき、柔らかな身体があますことなく絡みついてくる。ブラウス越しに感じるふにゅりとした柔らかい感触。甘い匂いが触れ合った部分から染み込んでくるような気がする。一、二歩よろめいたところでなんとか踏みとどまり、三浦の腰にそっと手を

伸ばす。
「んっ、ちゅるっ、はむっ……ヒキオ……んっ、んふぅぅ……っ」
うっとりと細めている三浦の瞳は、日陰の中で濡れ光っていた。今朝、キス寸前で止まって欲求不満になっていたのは俺だけではなかったらしい。というよりも、この様子を見た限りでは三浦の方がよっぽど我慢していたのだろう。そう気づいた瞬間、煮詰められた嗜虐心がぞくぞくと背骨を駆け抜けて、柳腰を抱きしめる手にぎゅっと力がこもった。
「ん……じゅるっ、はぁぁ……んくっ、こくっ、こくっ、ちゅぴっ、んふぅぅ……っ」
三浦の背を反らし、上から覆いかぶさるようにして薄い唇を貪る。唾液を流しこむと三浦は戸惑いながらもこくこくと飲みこみ、嚥下のたびに身体をぶるりと震わせた。
何分間か分からないが、とにかく互いの唇を貪り合った。唇を離すと三浦がとても名残惜しそうな顔をしたので、試しに上唇を咥えて端から端へとなぞると、膝がかくかくと笑って今にも倒れそうになってしまった。
「……あーしが……ったの……の……だし……」
「ん？　なんだって？」
胸に顔をうずめて荒く呼吸をしていた三浦がぽそぽそとつぶやく。熱く湿った声は秘め事めいていて、ちゃんと聞き取ることができなかった。頭をくしくしとなでながら尋ねると、三浦が上目遣いで見つめてきた。
「……あーしがこんなことになったの……ヒキオのせいだし……っ」
ぐらり、と。
強烈な魅力がこめられた言葉に、視界が、世界が揺らいだ。
「……お前なぁ……っ」
それは反則だろう、と喋る余裕さえもなかった。三浦の背中と腰をぎちりと抱きしめ、唇を奪い、咥え、貪る。
「んむ……んっ、んむふぅぅ……っ！　ふっ、んんんん……っ」
三浦は目を白黒させながらも俺の舌を迎え入れる。互いの口内粘

膜がねっとりと絡み合い、華奢な肢体がぶるぶると震える。三浦の手が伸びてくる。先ほどと同じように首に巻きつけてくるのかと思ったら、俺の耳をそっと撫でてきた。さわさわ、さわさわとまるで羽が触れるように柔らかく触れてくる。ぞくぞくとした感触に、いつの間にか下腹部ががちがちに張り詰めていた。構うことなく三浦を抱きしめると、へその下に硬い膨らみがぐりぐりと押しつけられる。

「うんん……あっ、はぁぁっ、やっ、これ……っ」

一昨日は最後まで下半身の膨らみに明確な反応は示さなかったが、今日はちがった。唇を離すと、三浦が自らに押しつけられた硬い突起の感触に泣きそうな表情を浮かべる。いやがっているのかと思ったが、それならば自分から腰を悩ましくくねらせて柔らかな腹に突起を食いこませたりしないだろう。普段の三浦の振る舞いからはまるで想像がつかないほど、今の三浦は一挙手一投足が興奮を、そして嗜虐心を煽ってくる。

じっと見つめたまま、ぐりぐりと膨らみを押しつける。三浦は唇を震わせて、自らの腹に押し付けられる牡の感触に腰をわななかせる。

またキスをして、もっともっと念入りにこすりつけて……などとこの後のことを考えていると。

「ヒキオ……そろそろ、お弁当……」

「……あ」

いま俺たちがいるのが学校の屋上で、しかも時間の限られた昼休みであることを思い出した。いま三浦に呼びかけられなかったら、冗談抜きで放課後までここにいたかもしれない。

「……そうだな、うん、ありがたくいただく」

「うん……」

劣情の気配を色濃く残したまま腰を下ろす。なんだか視線を感じるな……と思い隣をちらりと見やると、三浦が俺をじっと見ていた。正確に言えば俺の下半身を。三浦の視線を辿ると、未だに勃起が収まっていなかった。三浦の細喉がこくりと鳴る。

「……興味、あるのか？」

なんて質問をしてるんだ……と我ながら呆れたが、三浦にとっては

効果抜群だったようだ。俺の質問にびくりと身体を震わせ、ひざに顔を埋めて丸まってしまった。からかうというよりは純粋に疑問をぶつけてみたつもりだったのだが、悪いことをしてしまった気がする。謝らないとな……と思っていると。

「……うん」

「え」

思わぬ返答に驚く。三浦は顔をひざにうずめたままだった。そっと髪に触れると、ぴくりと震えたが抵抗はしてこない。髪の毛をくしくしと何度も撫でて、そこから指をゆっくりと滑らせて小さな耳に触れる。耳たぶをふにふにと触り、耳の中にするりと指をすべりこませる。三浦は表情を隠したまま、くぐもった声を漏らして泣いているかのように震えた。

「……今日も、うち来るか」

独り言のようにぽそりと提案すると、三浦がそっと顔を上げた。しっとりと濡れた瞳だけを覗かせる、艶っぽい仕草。

「……うん、行く」

「分かった」

無邪気さと微かな女の気配が混ざった笑みを浮かべる三浦に軽く口づけをすると、ようやく弁当を食べ始めた。

いつもの倍のペースで食べながら、きちんと「これ美味い」「これもすげー好き」などと褒めちぎった。高速で褒めるというあまりない体験ができた。

続く。

（４６）

放課後に三浦を家に連れて行くことになったので、小町に連絡した。

『うっす』

『ちーっす』

『（女の子が「あたい……ゆるせへん！」と言っているスタンプ）』

『なんでだ』

『なんとなくー。で、本題は？』

『放課後、三浦を家に連れていきます』

『ちらしずしでいい？』

『お前、毎日三浦を連れていこうもんなら連日パーティーを開きそうだな』

『その可能性は否めない』

『否めよ』

『絶妙な日本語。どうする？　食べてくならほんとに作るけど。お兄ちゃんは納豆でいいよね？』

『明確なイジメやめてくれない？　ちょっと待った、聞いてみる』

『隣にいる状態で小町に連絡するとは！　ラブラブかよぉ！』

『小町がよかったら、ぜひとのこと』

『華麗にスルーしたのはとっても腹立たしいけど、優美子さんが可愛いからよしとします。絶対照れながら言ってたでしょ』

『当たり』

『可愛すぎかよぉ！』

『それな』

『ほんじゃ、夕ご飯まで部屋でまあ、うん、ガンバ！』

『言葉の濁し方下手すぎない？』

『ほんじゃねー』

『（女の子が「うぁぁぁぁっ！」と泣き叫んでダッシュし、壁に体当たりして破壊しているスタンプ）』

『だからなんでだ』

こんな具合。ちなみに最後は既読スルーだったが、兄妹のやりとりはいつもこんな温度感である。小町の機嫌が悪いうえに俺がつまらん話題を振ると、ジャンプで言うと3話くらいの尺で話が打ち切りになる。この例え超怖いな。単行本も出せないし。

あれだな、次回作とかで人気が出たら『○○（作者名）短編集』とかってタイトルでその中に収録すれば……って、なんでこんなに現実的なプランを考えてるんだ俺は。

そんなこんなで放課後を迎え、三浦を部屋に連れてきた。小町はもう少ししたら帰ってくるようだが、挨拶はごはんを食べる時にするようだ。どこまでも気の利いた妹である。

「お邪魔します……」

ぽしょぽしょと呟き、俺の部屋に三浦が入る。自分の部屋に女の子がいるという、夢のような状況。前回三浦が来たのがつい一昨日だと言うのに、会えずにいた時間も会ってからの時間も濃密すぎて、やけに遠い日のことのように感じた。それに今の三浦は制服姿なので、前回とはまた違ったドキドキがある。

「……」

そろりそろりと辺りを見回して、鼻をすんすんと控えめに鳴らしたかと思うと。

「……」

とろん、と気持ちよさそうに目を細めた。可愛すぎて失神しそう。特にツッコまずに眺めているに限る。

普段ならまず勉強するところだが、今日は誘った流れが流れなので……座る場所をどうするか大いに悩む。三浦が鼻をすんすん鳴らしている間に覚悟を決めると、華奢な肩をぽんぽんと撫でてベッドに促した。

「あ……っ」

三浦の瞳が揺れ、唇が微かに震える。目が一瞬泳いだが、それでも俺に促されるままにカバンをカーペットの上に置き、ベッドに上がった。

「……」

ぺたんと女の子座りになった三浦の向かいにあぐらをかいて座る。三浦の雰囲気が一瞬で濡れたものに変わっていた。目の下が薄い朱色に染まり、頬もほんのりと紅潮している。整った綺麗な顔が俺をじっと見つめ、何かを期待している目をする。昼休みに蓄えていた興奮をスイッチ一つで丸々呼び戻したような、そんな雰囲気。

三浦の小さな手をそっと握る。自分の指よりもずっとすべすべして細い指が、すがるようにしゅるしゅると絡まってくる。きゅっと握ってはほどき、ほどいてはきゅっと握る。握るのもほどくのも、どちらからともなく行なわれる。

手を見つめ、目を見つめ、2人の喉が何度も鳴る。三浦はこくりと、俺がごくりと。2人の距離は数十センチ程度だろうか。そのわずかな空間が、粘度を帯びた湿った空間に変貌していく。訳が分からないほどに興奮していた。

「ヒキオ……」

三浦が俺を呼ぶ。今の三浦の声は聞いただけで幸せになったが、それ以上になにか質量をまとっているように感じた。呼ばれただけでその場から動けなくなり、目を離せなくなり、虜になるような。肌に傷を残さないが決して逃がしてくれない鎖が巻きついてくるような、そんな感覚。

手を伸ばし、三浦の髪を撫でた。いつもよりもずっと優しく、すべすべした金の髪の厚みを確かめるように、そっと。

「ん……っ」

三浦の唇から甘い声が漏れる。細指が俺の膝にそっと置かれ、もじもじともどかしそうに動いている。髪の毛にそっと手の重みをかけ、するすると、しゅるしゅると、上等な織物を触るかのように慎重に、丁寧に撫でていく。

「ぁ……んん……っ」

いつもならば気持ちよさそうに目を細めるところだが、三浦の反応はなんだかいつもと違う。目を細めているのに変わりはないが、まるでねっとりとキスをした時のような表情をしている。

髪の毛を撫でるだけでも、感じるものなのか……？

女性の身体は全身性感帯――というフレーズが書かれた記事をいつかどこかで聞いたことを思い出す。女性が縁遠い存在であった頃でも、その言葉はやけに記憶に残っていた。
男が感じやすい場所は下腹部に集中しているが、女性は全身が性的快感を覚えることができるのだという。詳しく調べたりはしなかったが、今の三浦の反応を見ているとやけにすんなりと納得することができる。
その記事の内容はほとんど覚えていないが、他にもう一つだけ覚えていることがあった。
『女の子に触れる時は、徹底して優しく。そちらの方が女の子は気持ちいいんです』
といった言葉だ。たしかに、ここで劣情のままに三浦を押し倒しても、三浦の気持ちも身体も強ばって気持ちよさを感じるどころではないだろう。
慎重に、優しく、丁寧に……。
目の前で絶えず溢れ出る三浦の艶めかしい吐息に劣情を催しながらも、脳内で何度も何度もブレーキをかけながらさらさらの髪を撫で、すべすべの頬にそっと触れる。
「ん……っ、ぁ……っ、ぅんん……っ」
普通に撫でるよりも、触れるか触れないかという程度で撫でた方が三浦の表情が艶っぽくなる。同じ人間なのかと疑ってしまうほどなめらかで弾力のある頬を、微妙に力加減を変えながら何度も撫でていると。
「……？」
俺の行為に疑問を抱いたのか、三浦がこてんと首を傾げる。とろとろに蕩けた表情でちょっとだけ口を開き、俺の膝をきゅっとつかみながら。あまりの可愛さに脳がぐらりと揺れた。下半身に血液の流れが集中していく。
「……三浦。ボタン、一つだけいいか？」
頬を撫で、耳を撫でていた手を首にまで移動させようとしていた。俺の言葉に三浦はほんのりと頬を赤らめたが、こくんと頷いてくれ

た。ほんの一部とはいえ、生まれて初めて女性の服を脱がすため激しく緊張する。三浦のブラウスのボタンを一つだけ外し、その中にするりと指を滑りこませた。
「うんん……っ、あっ、うぁっ、んんんん……っ」
自分の服の内側に男の手が入ってきたからだろうか、三浦の反応は羞恥も混ざり合って格段と艶めかしいものになった。白くほっそりとした首をそっと撫で、あごの下をしゅるしゅると撫でていく。
「う……っ？」
俺の膝に添えられていた三浦の手が、ゆっくりと太ももへと滑っていく。どこかで止まるかと思いきやどんどん内側へ入りこんでいき、鼠径部にまで達したところでようやく止まった。１０本の細指のほんの数センチ先では、スラックスを突き破らんばかりに下腹部が膨らんでいた。三浦の視線もいつの間にか肉茎に釘付けになっている。
三浦の首を撫でていた指を離し、三浦の手首を掴む。
「え……あ、やぁ……っ」
その手を徐々に内側に滑りこませていく。三浦は耳まで真っ赤にしているが、抵抗してこようとはしてこない。あと少しで肉幹に触れるというところで手をパッと離した。
女の子座りをしている三浦が前屈みになる。猫背の姿がやけに可愛らしい。けれどその表情は好奇心と劣情に染まっていて、ぞくりとするほど艶っぽい。
上目遣いで俺を見つめ、膨らんだ股間を見つめ、もう一度俺を見つめ、また視線を下ろすと――
「うぉ……っ」
三浦の右手が、膨らんだ肉幹をそっと掴んだ。
「うわ……っ、えっ、おっきい……それに、硬い……っ」
熱情に浮かされたかのようなふわふわした声で三浦が次々と感想を漏らす。普段自慰をする際の自分とはまるで違う、繊細で優しい手つき。焦れったいにも程があるのに、ぞくぞくと下腹部を駆け抜ける快感が身体の奥底へ澱のようにたまっていく。
三浦はよほど興奮しているのか、膨らんだ股間をじっと見つめなが

らふにふに、くにくにと揉んでいく。柔らかな細指に触られて反応しないわけもなく、何度もぴくりぴくりと震えてしまう。そのたびに三浦は俺以上に身体をびくつかせ、それまで以上に熱心に触ってくる。
「三浦……うっ、くぁ……っ」
三浦が両手で肉幹を触り出す。痛いほどに張りつめた股間を、先から根本まで何度も丁寧になぞってくる。徐々に加速していく快感に、腰ががくがくと震えてしまう。
「ヒキオ……気持ちいいの？」
俺の反応をじっと見つめていた三浦が尋ねてくる。俺が震えながらこくりとうなずくと、瞳を細めてふわりと笑みを浮かべた。
「ん……っ」
顔を寄せると、ごく自然に唇が重なった。唇を重ねるだけの軽いキスをして、互いの上唇、下唇、唇の端を咥えてなぞり、もう一度深く唇を重ね、ちろちろと舌を絡ませる。三浦の唾液が甘ったるい。発情して匂いもなにもかも甘くなったかのようだ。
唇を離して下を見る。三浦は１０本の細指で絶え間なく股間を撫で続けていた。
「……チャック、開けるか？」
その手つきがなんだかもどかしそうに見えたのと、俺自身焦れったいにも程がある快感に身悶えしていたので試しに提案してみた。三浦は目を見開いて驚いたものの、
「……うん」
短く答えてうなずいた。チャックを開け、三浦の手をスラックスの中へすべり込ませる。
「うぁ……っ」
三浦の声が上ずる。ボクサーパンツ越しだと指に伝わる熱量や硬さも違うだろう。細指がしゅるしゅると這うと、つい先程までとは比べ物にならないほどぞくぞくする。三浦は片手でしばらく撫でていたが、肉幹を掴んでチャックの外側へと引きずり出し、両手でさすり始めた。
「う……お……っ」

三浦が夢中で肉幹をさする。跳ね上がった快感に悶絶していると、三浦が前屈みになってすんすんと鼻を鳴らし、身体をぶるりと震わせた。
「ここ、すっごく濃い匂いがする……」
「……っ!?」
三浦はいま、自分がどれだけいやらしいことを言っているか分かっているのだろうか。きっと分かっていないだろう。三浦の言葉によりビクンと跳ねた肉幹に驚いているくらいだから、おそらく無意識に言ったにちがいない。
背すじをぞくぞくとさせながら、三浦のあごに指を添えて顔を上げ、唇を重ねる。
「ふっ、んんっ……ちゅっ、ちゅぴっ、んふぅぅぅ……っ」
とろっとろに蕩けた瞳を細め、うっとりと俺を見つめてくる様がたまらない。両手は相変わらずがちがちに張りつめた肉幹を撫でている。
たまらなくなり、三浦の胸にそっと両手を伸ばした。
指先に極上の柔らかな感触を感じた瞬間――
「や……っ」
三浦が弾けるように身体を離した。
「……わるい」
予想よりも大きな、それもネガティブな反応に呆然としながら謝ると、三浦が慌てて首をぶんぶんと横に振った。
「こ、こっちこそごめん、びっくりしちゃったから……」
謝りながらも身体を寄せ、俺の首にそっと両腕を回す。俺を少しでも安心させようとする仕草に心が癒される。
「それじゃあ……改めて、いいか？」
「ん……」
三浦がうなずくのを確認して、改めて両手をそっと伸ばした。
続く。

（４７）

三浦の許可を得て、ブラウスの上からそっと乳房に手を触れる。
「ぅあ……っ」
微かに触れただけで、三浦の唇から甘い吐息が漏れる。まだほとんど圧力をかけていないし、触っているのは服の上からだ。それなのに、本当に同じ人間なのかと疑ってしまうほど柔らかい。三浦が俺に触れた時に驚いたように、俺も驚いていた。
そろり、そろりと、なるべく優しく、慎重に、愛でるように撫でていく。思いのほか大きい乳房の縁をなぞり、徐々に内側へ、円を描くように指を這わせていく。
「あ……んん……あんっ……」
艶めかしい声がとろりと漏れると、三浦が一気に耳まで真っ赤にした。自分の声に恥ずかしくなったらしい。どれだけ可愛いのだろう。
「遠慮しなくていいぞ」
「そ、んなこと、言われ、たって……ぅあ……はぁぁ……っ」
三浦が左手をそっと口に当て、人差指を唇で挟み込んだ。じっくりと触られている己の乳房を見つめ、時折すがるように俺を見つめてくる。庇護欲と嗜虐心を同時に育てるような視線が全て天然だと思うと、ある意味恐ろしい。
「んっ、あっ、んぁっ、はぁぁぁ……っ」
三浦の声の糖度が増していく。瞳がとろとろになり、女の子座りをしている太ももがもじもじと動く。何度も胸に指を這わせていると、三浦の身体からへなへなと力が抜けていった。
「あっ、おい、大丈夫か……？」
後ろに倒れかかったので慌てて胸から手を離し、背中を支える。三浦の身体は脱力していて、起き上がる気配が見えない。仕方ないのでそのまま仰向けに倒れこませた。
「……少し休むか？　それとも今日はこれくらいに……っ」
言葉が途切れた。
三浦は、仰向けになって左手で口を覆い、右手を頭の横に投げ出し

ていた。綺麗に染められた金の髪がシーツの上に海のように広がり、ブラウスのボタンをひとつ開けているためひどく悩ましい姿をさらしている。脚は内股になりこすり合わされていて、ミニスカートが際どいところまでめくれていた。

一つ一つが理性の皮を剥ぐほど魅力的ななかで――一番主張をしているのはその瞳だった。

戸惑いも、羞恥も、困惑も伺える瞳のなかで、俺を見つめる視線にたしかな熱量を感じる。

大丈夫だから、もっと来て――。

言葉で聞いたわけでなくとも、そう言っている気がした。

「……いいんだな」

囁くと、三浦がぴくりと震えた。ゆっくりと、戸惑いながらもうなずく。

三浦の柳腰を膝立ちで跨り、前屈みになって胸に触れた。

「う……あっ、はぁぁぁぁ……っ」

仰向けになった方が反応は表れやすいようで、ほっそりとした身体をうねうねと悩ましくくねらせる。快感の逃がし方を必死で探っているのだろうが、かえって蠱惑的に映り興奮で手に力が入ってしまいそうになる。

「ヒキオ……いいよ、乗って」

腰を浮かせた状態で触っていた俺に三浦が優しい声音で囁く。うなずくと、三浦の腰に静かに跨った。体重をかけただけで三浦が瞳を細め、小さく喘ぐ。初めて生で見る女性の艶やかな反応は、一つ一つが信じられないほどに興奮する。

「三浦、気持ちいいか？」

「うぁっ、ふっ、んっく、やっ……そんなの、見て、わかる、でしょ……あっ、うんん……っ」

「ちゃんと言葉にして聞きたい」

「……変態」

ぽしょりと囁かれた言葉は辛辣だが、その声音はどこまでも可愛らしい。乳房をそっと撫でながらじっと顔を見つめると、ぷいと顔を逸

らした。
「……いい」
「ん？」
「……気持ち、いいって言ってるの……あっ、んっく、ふぅぅ……っ」
首まで朱くして震えるさまにぞくりとしてしまう。
「……そうか、ならよかった。わるいな、なんか」
「謝るならわざわざ言うなし……んはぁぁっ!?」
震える乳丘の頂に指が触れると、三浦の身体がビクンと大きく跳ねた。下着とブラウスが間にあるというのに、恐ろしいほど色っぽい反応をする。
「ヒ、ヒキオ、そこ、だめ、やばいからぁ……あっ、んっく、ふっ、んくぅぅ……っ！」
俺の手つきはそのままに、三浦の反応が徐々に苛烈になっていく。乳頭にそっと指を這わせるたびに三浦の華奢な身体がぐりぐりと動き、赤みが増した顔を斜め上に逸らして綺麗な首筋を晒す。
「やっ、なに、これぇ……こんな、気持ちいいの、知らない……あーし、知らない……っ」
今にも泣きそうな声を上げる三浦にぞくぞくとする。
「んっ、くぅ……っ、あっ、うんん……っ」
「うお……っ？」
熱を帯びた嬌声を漏らす三浦の手がそっと伸びてきて、ボクサーパンツ越しに肉幹に触れてきた。余裕のない表情とは対照的に、５本の細指がしゅるしゅると蛇のように絡みついて肉竿を愛撫してくる。
「ヒキオだって、こんなにしてるくせに……あっ、うんん……っ」
三浦が一瞬だけ得意げに笑ったが、すぐに自身が漏らした悩ましい声に遮られた。
「……三浦のエロい声を聞いてたら、こうなるって」
「な……っ、やっ、なに言って……んはぁぁぁ……っ！」
乳頭を爪でかりかりとこすると三浦の腰が跳ねた。三浦は涙ぐみながら俺を見つめ、口を覆っていた右手を離し、両手で肉幹をまさぐってくる。声はいいのか……などと言うのはやめておくことにす

る。くぐもった声も色っぽくていいが、もっとちゃんと三浦の喘ぎ声を聞きたい。
「あっ、んぁっ、ヒキオ、かたくしすぎ……すっごいおっきいし……あっ、ぅあ……あんっ！　あっ、やっ、んはぁぁ……っ！」
綺麗な顔を真っ赤に染めながらも、三浦が徐々に積極的になっていく。大きく喘いでしまっても、戸惑いこそすれ股間をまさぐる１０本の指を離そうとはしない。
「直接触るか？」
細指に際限なくまさぐられ、ボクサーパンツの膨らみの頂にはたっぷりと染みができていた。三浦はそれさえも興奮材料にしているのか、柔らかな手のひらで濡れた亀頭部分を夢中でまさぐっている。
俺の言葉に、三浦は迷っているようだった。
「……その、今見たら、なんかおかしくなっちゃいそう……」
「……おかしくなった三浦も見てみたいけどな」
「ばか言わないで……今だって、ほんと恥ずかしいんだから……」
「……」
可愛らしく顔を赤らめて恥ずかしいとつぶやいている割に、両手が未だに股間を揉んでいるんですけども……。
「……本当にいいのか？」
問いかけながら、そっと乳頭をこする。
「あっ、んくぅっ!?　やっ、そんな、の……っ」
色っぽく喘ぎ、口では拒否しながらも、三浦の視線は膨らんだ股間に縫いつけられている。
「ほんとに……だめだってば……」
俺が手を離すと、三浦は独り言のようにぽそぽそとつぶやきながら、ゆっくりと上体を起こした。女の子座りをして、膝立ちになった俺の下腹部に顔を寄せる。
「……」
試しに、三浦の手を掴んでボクサーパンツの縁を掴ませた。
「あっ、やぁ……っ」
俺の行動に三浦は顔を赤らめるが、明らかにまんざらでもない顔を

している。
「ヒキオ……苦しそうだし、うん……」
なにやら言い訳をしはじめた。己に言い聞かせるようにぽしょぽしょと喋るさまがとても可愛い。
しばらく待っていると、三浦の手が唐突にボクサーパンツをずるりと引き下げた。
「きゃっ……」
露わになった肉幹がぶるんと勢いよく下腹を叩いた。たっぷりと滴らせていた先走りの汁が三浦の顔にかかってしまう。
「わ、わるい。大丈夫か？」
こんなに大きくなったことも、こんなに先走りが垂れ流しになっていたこともなかった。三浦との行為に一体どれだけ興奮していたのか……と驚くと同時に呆れてしまう。
俺の言葉が耳に届いているのかいないのか、三浦は陶然とした表情で顔についた透明な汁を指で掬った。
「……ちゅぴっ」
「え……っ」
三浦が指についたカウパー液を舐めたことに驚き固まる。
「……しょっぱい」
「み、三浦……」
さらりと感想を述べた三浦に唖然とする。三浦は夢見心地のような表情をしたまま、顔についた残りの汁を少しずつ舐めとっていった。
「……ヒキオの、本当におっきい……っ」
「うお……っ」
三浦の細指が肉幹に絡みつく。生で触られる感触は格別で、思わず腰をびくりと震わせてしまう。糖度たっぷりの声音で褒められると、ぞくぞくとした官能が湧き上がる。三浦はとろんと蕩けた表情のまま、俺をじっと見つめた。
「ね、ヒキオ……」
「ん、なんだ」

「このままだと苦しいんでしょ？」
「え、あ、ああ、まあ、そうだな……うん」
そっか……とつぶやいた三浦の指が、するすると上下に動く。細くてすべすべした指に優しくしごかれて小さく呻いた。三浦が嬉しそうに目を細める。
「あーしにできることあったら、言って。……ヒキオにも、気持ちよくなってほしいし」
「……っ」
優しい笑みをうかべる三浦の言葉に撃ち抜かれる。ついさっきまで顔を真っ赤にして恥ずかしがっていたのだから、今だって内心頭が爆発しそうなくらいの羞恥に苛まれていてもおかしくないのに。その健気さにたまらない幸福感が湧き上がる。
「……お願いしていいか」
「……ん」
目を細めてうなずく三浦と唇を交わす。
「んっ……ちゅっ、んふぅぅ……ちゅぷ……っ」
やはりキスが好きなようで、舌を絡ませていくと三浦の身体にまだ色濃く残っていた強張りが抜けていき、肉竿に絡めている指も積極的に動きだした。５本の指がうねうねと波打つと、俺は目を細めて身体をがくがくと震わせた。
「……ヒキオ、可愛い」
「……からかうなよ」
俺の反応に三浦が嬉しそうに笑う。なにか目覚めてはいけないものに目覚めた感があるけど大丈夫だろうか……。
恥ずかしくなってと視線を下に逸らすと、ブラウスのボタンを一つ外しているために悩ましい谷間が覗いていた。しっとりと汗ばんで淫靡な肉感を醸し出しており、思わず喉を鳴らしてしまう。
「……変態」
「なんでだ……」
艶めかしい手つきで肉竿をまさぐっておきながら、谷間を見られただけで顔を真っ赤にして拗ねる三浦が可愛くてしょうがなかった。

続く。

（４８）

互いに膝立ちになり、三浦と正面から向かい合う。三浦はブラウスのボタンを外して胸元を緩め、俺はチャックを開けた隙間から肉竿を晒している。

三浦がうっすらと目を細めた。羞じらいと興奮が混じった朱色が白い頬を染めている。

「ん……んむぅ……っ」

唇を重ね、舌を絡める。三浦は少しだけ苦しそうな、それでいて悩ましくくぐもった声を漏らす。服を着ていてもしっかりと主張している胸を下から支えるように揉むと、胸元が緩んでいるために谷間がよりいっそう強調される。キスをしながらじっと谷間を見ていると、三浦が唇を離して拗ねたような顔をした。

「……変態」

ぽそりとつぶやき、上目遣いで俺を見つめながら肉竿をそっと握ってくる。可愛らしいわエロいわで、頭の中が爆発してしまいそうだ。

「いや、三浦の身体が魅力的すぎるのが悪い」

「……っ!?」

率直な気持ちを伝えると、三浦の顔が一瞬で茹だった。恥ずかしがるタイミングが分かるようで分からない。それがまた可愛いのだけれど。

「あっ、んっ、んん……っ」

指が柔らかな乳房にふにふにと食い込む。服の上からとは思えないほどに柔らかい。

……本当に柔らかいな。

……。

「……下着の上から、もしくは直接触りたいんですがいかがでしょうか」

どうだ！

「……それはちょっと、恥ずかしすぎるから今日はダメ」

ものすごく落ち込んだ。

「ちょ、ちょっと、そんながっかりすんなし……。……そ、そのうち、絶対見せるし触らせるから」
「……今の、もう一回言ってもらっていいか？」
「……調子乗んなし」
「うぐ……っ」
　指で作った輪で、カリのくびれをきゅっと絞められた。絞める力自体は優しかったが、それが却って快感につながり思いきり呻いてしまった。
「……今日は、ちゃんとヒキオを気持ちよくしたげるから……我慢して？」
「あ、ああ、わかった……」
　上目遣いで、まるで年上のお姉さんのような優しい声音でなだめられる。わかったと言っておきながら押し倒したくなってしまった。
　肉竿をまさぐる手がもう一本増えて、十本のすべすべした指で愛撫を始める。うねうねと蠢く細指の感触に、柔らかな胸を揉む手の動きを止めて、腰をかくかくと前後に揺らしてしまう。
「ヒキオ……気持ちいい？」
「ああ……すげえいい」
「ん、よかった……」
　三浦が嬉しそうに目を細める。三浦の手つきは探るようでぎこちないが、一生懸命気持ちよくしようと考えてくれているのが表情と手つきからきちんと伝わってくるのが嬉しい。指を波打たせてくすぐられたり、竿の根本を少し強めににゅこにゅことしごかれるとたまらず腰を引いてしまう。三浦は俺の反応をつぶさに見て、少しでも気持ちのいいところを探ってくれていた。
「ヒキオ……可愛い……」
「か、からかう……なよ……？」
　先ほども言われた言葉に顔が熱くなったが、先ほどと今とでは三浦の表情が違った。なんだか夢を見ているかのような表情をして、徐々に頭の位置を下げていく。戸惑いながらも釣られてしまい、同じように頭の位置を下げてあぐらを崩したような姿勢になった。三浦は女

の子座りになって俺の股座に顔を寄せ、ひくひくと震える肉竿をじっと見つめながら両手でくにくにと触っている。
「男の人って、こんな匂いがするんだ……」
三浦が独り言のようにぽそりとつぶやき、すんすんと鼻を鳴らす。小さくて形の整った鼻が、先走りの噴きこぼれている亀頭に徐々に近付いていく。
「ずっとヒクヒクしてる……可愛い」
「み、三浦、ちょっと待て……っ」
左手で睾丸をふにふにと触り、竿の根本をにゅくにゅくとしごきながら、うっとりとした表情で囁くのがたまらない。三浦の声が少しずつ媚熱をまとい、吐息が混じり、色っぽくなっていく。信じられない速度で女の顔になっていく三浦に、俺の思考が追いつかない。
「ヒキオ、どうしたらもっと気持ちよくなるの？」
まるで子どもが大人に質問するかのような声音。その瞳は純粋なのにしっとりと濡れていて、微かに開いた口がひどく艶っぽい。
――この口で咥えてもらったら――
そんな考えがよぎり、慌てて振り払おうとして――けれど、今の三浦なら受け入れてくれるのではないかと思いとどまった。
綺麗に染められた金色の髪をくしくしと撫でる。指の隙間で細い髪の毛が揺れる。汗でしっとりしていて、柔らかな香りに色っぽい匂いが混じっていた。
「……口でしてくれるか」
恐る恐る尋ねてみると、三浦が微かに目を見開いた。がちがちに張りつめた肉幹に視線を落とし、竿を軽くしごいてくる。「うぐ……っ」と小さく呻き、鈴口から透明な我慢汁が噴き出すと、三浦が妖しく目を細めた。
「……ん、わかった」
三浦の短い返事にごくりと息を飲む。三浦は華奢な身体を縮こまらせ、顔を肉幹に寄せた。片手で前髪をかき上げ、もう片方の手で肉竿の根本をそっと掴む。
「……」

亀頭にあとほんの少しで唇が触れる――というタイミングで、三浦は上目遣いで見つめてきた。艶っぽい仕草にごくりと喉を鳴らすと、三浦が視線を亀頭に下ろした。まつげがとても長いな……と今さらながらに気づく。
「……ん……っ」
「うぁ……っ」
三浦の唇が鈴口に触れた瞬間、尿道を甘い電流が走り抜けた。三浦が一度唇を離すと、鈴口と唇との間に銀の糸が伸びた。ちろりと舐め、悩ましげに眉をひそませる。
「しょっぱい……」
言葉では先ほどと同じことを言いながらも、やはりいやそうな素振りを見せない。そのちぐはぐな反応に官能が昂る。
今度は両手で竿の根本を押さえながら、もう一度鈴口にキスをする。
「くぁ……っ」
唇を重ねている時に感じるのとはまた違った柔らかさに悶絶して、鈴口からぴゅるっとカウパー液が噴き出した。三浦は可愛らしく目を見開くと、唇を押し当てたままそっと舌を突き出し、啜りはじめた。
「ん……ちゅっ、ちゅるっ、ちゅぴっ、んん……っ」
「お……あぁ……っ？　くっ、うぁ……っ」
両手で肉竿を押さえながら、初めての口淫の快感にぴくぴくと震える亀頭の先を夢中で舐め、啜り上げていく。舌遣いが徐々に大胆になっていき、鈴口だけでなく亀頭の表側や裏側にれろれろと舌を這わせていく。
「ちゅむ……れるっ、んくっ、んっく……はぷ……っ、ヒキオ、気持ちいい……？」
「あ……ぐぅ……あ、ああ、すげえ、きもち、いい……ぐぅぅ……っ」
潤んだ瞳で見つめながら、丁寧に、執拗なほど丹念に舐めてくる。亀頭が溶けるはずもないのに、三浦に熱心に舐められ続けると、やがて甘ったるい快感が積み重なってどろどろに溶けてしまうのではないかと思った。焦れったい快感に何度も腰がわななく。溢れた先走

り汁を三浦が静かに啜り、こくこくと飲み込んでいく。
「う……ぁ……っ」
身体に力が入らなくなって後ろに手をつく。三浦は俺の表情を見て心底嬉しそうに目を細めた。奉仕するのが好きなのか……と思うと、さらにぞくぞくして官能が澱のように下腹部にたまっていく。
「んっ、んむぅ……っ」
三浦の上下の唇が、ぬむぬむと亀頭を飲み込んでいく。口の中に取り込んだ亀頭にねっとりと舌を這わせる感触に悶絶していると、先ほどまでと同じように片手で睾丸を揉み、もう片方の手で竿の部分をやわやわとしごき始めた。
「うぁ……三浦、ちょっと待て、それはやばい……っ！」
三点を同時に責められて声が上ずる。ただでさえこれまでの時間で恐ろしいほどの快感を積み上げているのに、こんな淫猥な責めをされたら確実に暴発してしまう。俺の慌てた制止の声を聞いた三浦は、両手で牡性器を愛撫したまま顔を上げ、いたずらっぽく微笑んだ。
「だめ。ヒキオがぴくぴくしてるの、可愛いから。やめてあげない」
「……っ、お、おい……それは……ぐぅぅ……っ」
切羽詰まった俺の反応を見て、口と手による愛撫を弱めるどころかさらに激しくしていく。上下の柔らかな唇でカリのくびれをぴっちりと絞めつけ、固めた舌先で鈴口を何度も何度もつついてくる。睾丸は爪でさわさわとくすぐってきて、竿をしごく指はよりいっそう力をこめ、先走りと唾液の滴る勃起肉をにゅこにゅことしごいていく。
「だ、だめだ、三浦、本当にやばい、出る、出るから……っ！」
三浦は俺の声が聞こえていないのか、夢中で肉竿をしゃぶっている。手でまさぐっている時に俺の反応が大きかった場所を唇と舌と指でねちっこく責めてくるために、射精欲求を抑えることがまるでできない。
「三浦、だめだ、出る、出る、出る、出る……っ！」
視界が明滅する。腰ががくんがくんと揺れ動く。やがて我慢の限界が訪れて――白濁のマグマが身体の奥底から引きずり出され、狭い尿道を一気に駆け上がる感触がはっきりとわかるほど粘度の高い精

子が、三浦の口の中に大量に噴き出した。
「――――んふぅぅっ!? きゃっ、あっ、あつっ、あっ、あっ、うぁ……あっ、はっ、はぁぁぁ……んはぁぁぁ……っ」
俺の声が本当に聞こえていなかったのだろう。三浦は突然鈴口から噴き出した精液に驚き、慌てて口を離した。一度射精が始まれば、刺激がなくとも止まることはない。驚き呆然とする三浦の綺麗な顔を、ぶびゅっ、びゅるるっと勢いよく噴き出す精液が汚していく。口にかかり、鼻を包みこみ、片目を覆い、おでこを汚し、前髪にまでまとわりつく。三浦は自分の顔が汚されていくのを呆然と見つめていた。十本の細指の動きは止まっていたが、肉竿から離れることはなかった。
「……わりい、大丈夫か」
慌ててティッシュを取ろうとするが、三浦が肉竿を握る手にキュッと力をこめてきたことで動けなくなった。不快な思いをさせてしまったと思ったのだけれど、三浦はなにやらポケッと呆けている。
「……すごい。ヒキオ、気持ちよかった？」
「あ、ああ、気持ちよかった。ほんとに。……今まで、こんな勢いで出したことなんて一回もねえな」
壮絶なまでの射精だった。えげつない勢いで白濁が噴き出し、三浦の顔を汚していく様に見惚れ、さらに興奮して牡性器が大きく脈打っていた。
「そっか」
俺の言葉にさらりと答えると、三浦は片目を閉じた状態で唇にまとわりついた精液をぺろりと舐めた。
「……変な味」
ぽそりとつぶやき、俺をちらりと見て可愛らしく笑う。淫靡さと可憐さが混じりあった仕草に目を見開き、ごくりと息を飲む。
「……待ってろ、いま拭くから……っ!?」
冷静であろうとした声が裏返りそうになる。三浦は片目を閉じたまま、亀頭にちゅっと口づけをしていた。
「んっ……んっ、ちゅっ、んむ……っ」

「うっ、くぁ……み、三浦、そこまでしなくても……うっ、ぐぅぅ……っ」
射精しているあいだは特になにも愛撫はされていなかったためか、三浦が唇をくっつけて舌をちろちろと這わせただけで、尿道に残っていた白濁がびゅるっ、びゅるるっと噴き出す。
「んっ……んっく、んん……っ」
「え……」
三浦は口の中に噴き出した精液を、微かに眉をひそめながらもこくこくと嚥下した。俺が驚きに固まっていると、唇を離してしっとりした目で俺を見つめてきた。
「……やっぱり変な味」
「そりゃそうだ。無理して飲んでくれなくても……」
「……変な味だけど、きらいじゃないし」
「え」
「……なんでもない」
二度は言わぬと主張せんばかりに顔を逸らした。可愛らしい仕草にくすりと笑い、ティッシュで顔を拭いていく。
「わりい、前髪にまで付いた……」
綺麗な肌にまとわりついた精液は量も濃度も尋常ではなかった。まるで三浦の顔をパックしているかのように見えた。呆れ半分申し訳なさ半分に俺が話しかけると、三浦は思いのほか平然としていた。
「ん、これくらい大丈夫。顔、洗わせてもらっていい？　その時一緒に前髪も洗うし、家でちゃんと洗い直すから」
「……そうか、わかった」
それから、三浦を洗面所に案内した。その間に俺はシーツの交換や洗濯をしておいた。三浦には小町が使っている洗顔料を貸した。小町には後で全力で謝ろう。
一通り後処理を終えると部屋に戻り、ベッドの縁に並んで座った。
「……男の人って、一度出したらスッキリするの？」
「大抵はそうだな」
「そっか。……えっと、その……」

三浦が言いよどみ、口をもにょもにょと動かす。なにか言いたいことがあるのはわかるが、あとは三浦の仕草がものすごく可愛らしいということ以外わからない。
「どうした」
聞いてみると、三浦は耳まで真っ赤にして、ちらりと流し目を送ってきた。
「こ、これからも……二人でいる時は、あーしが、その、してあげるから……我慢しないで言って？」
空調の音にまぎれてしまいそうなほど小さな声で囁かれた言葉に、視界がくらりと揺らぐ。
「……っ、お、おう、そ、そうですか、それはありがたいです……」
「……ふふ、なんで敬語使ってんの？」
「み、三浦だって声が裏返りそうじゃねえか」
「……っ！」
二人して動揺する。俺の反撃に三浦は目を見開き、ぷいと顔を逸らしてしまった。
この後、何度か謝って三浦に機嫌を戻してもらうと、ごく自然に口付けをして、そのまま３０分ほど舌を絡みわせていた。当然ながら股間がまた大きくなり、三浦がうっとりと膨らみをさすってきてさらに勃起してしまった。もう一度舐めてもらうか迷ったが、さすがに時間が時間だったため諦めた。
三浦の家の前まで送った時、人目につかないように注意しながらキスをした。唇を重ねながら三浦がギュッと抱きしめてきたので流石に焦った。
時期が時期のため、頭の隅には常に受験がチラついているのだけれど。
――三浦優美子という女の子が、日に日に可愛く、美しく、色っぽくなっていくのを一番近くで見つめ続ける生活が……楽しくて仕方がない。
続く。

（４９）

三浦と付き合いはじめてから、２人でいる頻度は格段に増えた。三浦は由比ヶ浜や海老名さんと一緒にいる時間をきちんと確保しつつも、平日・休日問わず俺と行動をなるべく共にしてくれている。俺は元から一人なので特に人間関係で気を遣う必要はない。言ってて泣きそうになった。

三浦が彼女という立場になって改めてわかったのは、俺との距離感のとりかたが絶妙であるということ。

一緒にいる時も、ベタベタすることもあればほどよく離れてお互いが好きなことをやっていることもある。純粋に一人でいる時間は減ったのだが、そのことによるストレスがほとんどないことに気づいて驚いた。もうちょっと一人でいたいかも……という気持ちは、三浦と一緒にいることによる幸福度が軽々と上回るのである。俺のチョロさに自分で驚いている。

ちなみに三浦が甘えてくる時は、無言でススと近寄ってくる。素知らぬ顔をして。それだけでも鼻血ものだが、エロいことをする際は瞳を潤ませてしなだれかかってくる。何度めまいがしたことか。

エロいこととは言っても、三浦の下着姿を見たこともないのだけれど。それでも毎回口でたっぷりとしてくれているので文句を言うつもりもなかった。

１０月に入り、夏の気配が完全に消えて秋の気配が漂ってくる。受験が刻一刻と近づいてきて、周りでは焦る人と呑気極まりない人が出てくる。材木座は今もラノベを書いていると言って実際はプロットしか書いていないし、戸塚はいつも通り可愛い。前文の前半はいらなかった。

そんなこんなで、今日は休日。もう何回目かわからないが、俺は三浦と市立図書館に勉強に来ていた。

×　×　×

昼休憩ということで、図書館の外のベンチで食べる。寝る頃になるとだいぶ寒くなってきたが、昼間はまだポカポカとしていて温かい。

念のため着てきたコートは太ももに掛けていた。周りを見ると、コートを着て出歩く人と薄着で出歩く人が半々といったところだ。
「美味かった。ごちそうさま」
「ん、お粗末さま」
三浦が作ってくれた弁当を食べて挨拶をすると、いつも通りにこやかに微笑んで返事をしてくれる。
三浦は少し前まではほとんど料理の経験がなかったようだが、この数ヶ月で凄まじいほど腕前を上げていた。定期的にコーチをしている（変な立場だ）小町から言わせると「伸びしろが等速直線運動どころか二次関数的。末恐ろしい」とのことだった。
等速直線運動ってグラフにしたら上がり下がりが一切ないと思うんだけど……とはツッコマずに置いた。小町、ちょっと物理に触れて玉砕したタイプだな。俺もだ。位置エネルギーの式をポンと出された時の首の傾げようったらなかった。等速直線運動はそもそも中学で習うんだったか。もはやアレ系は全て記憶の彼方だ。アレ系って言っちゃった。
俺の食べる量を考慮した大きな弁当箱を回収し、自分用の小さな弁当箱と一緒に手慣れた仕草でカバンにしまい込む。初めは洗って返そうとしたが、「あーしが好きで作ってるんだから気にしないで」と断られた。今度なにかお礼をしないと……ゆるキャンのＤＶＤ全巻プレゼントしようかしら……。カレーヌードルを食べながら２人で観るのもいいかもしれない。
「……どんどん腕前が上がってるな」
「そう？　ありがと。最近やっと、あーしが台所にいてもお母さんが驚かなくなった」
俺の言葉に嬉しそうに微笑み、家での出来事を楽しそうに話す三浦が可愛らしい。本当に、柔らかな表情になったと思う。
最近三浦が眉間にしわを寄せているのを見た時といえば、せいぜい勉強中に難問にぶつかった時と弁当のメニューを考えている時と突然雨が降った時くらいだ。挙げてみたら意外とあった。
いつもはここからちょっとばかりのんびりして、お互い少し昼寝し

てから午後の勉強に臨む。昨日買った漫画を読むか……と思ってカバンから取り出すと、三浦が身を寄せてジッと見つめてきた。だいぶ距離が近い。ふわりと甘い匂いがする。
「読みたいのか？」
俺が手に持っているのは、個人的にいつアニメ化してもおかしくないと思っている作品の第５巻だ。三浦は読んだことがないはずなので、初めから読みたいということなのだろうか……と思っていたが、三浦はふるふると首を横に振る。ちがうらしい。
「あーしも漫画買おうかなって。ヒキオ、それどこで買ったの？」
質問しながら三浦がさらに近寄る。俺をいたずらっぽく惑わす……という意思もないらしく、ごく自然に二の腕が触れる。それ以上のことなど幾度となくしているというのに、女性の柔らかさといい匂いにはまったく慣れることがない。
「えーっと……あそこだあそこ、例のアレ」
「……ぜんぜんわかんないんだけど」
大型書店で買ったことを伝えようとしたのだが、テンパっているおかげでなに一つ具体性のない言葉しか出てこなかった。これが進むとテレビに出てきた人をことごとく「名前なんだったっけ……」となるわけだな恐ろしい。テレビを見る頻度自体激減してるんだけどね。最近は勉強のためにアニメをリアルタイムで観ずにネット配信で見るケースが増えたし。
三浦が怪訝そうに眉間にしわを寄せている。俺のせいでまた事例が増えてしまった……。密着度が増したことでふにふにと触れてくる柔らかな感触に気が動転しながらも、なんとかかんとか書店名と場所を思い出して伝えることができた。
「……あーしも行きたいかも」
三浦がようやく納得いった様子で身体を離すと、以前よりも高くなった雲を眺めながらぽつりと呟いた。
「ん、じゃあ今日行くか。勉強が終わった後にでも」
温もりが離れて少し寂しくなった右腕をさすりながら言うと、三浦がパッと目を輝かせた。行こうと思えばいつでも行けるのに、どうし

てこうも嬉しそうなのかと不思議に思う。
「うん、行きたい。ヒキオ、あーしでも好きそうな漫画教えて」
「また難易度の高いお題を……」
「いいでしょ別に。よろしく」
有無を言わせぬお願いである。それって命令じゃないのん？　と思いながらも、三浦のワクワクした顔を見ると断る気など簡単に失せてしまう。
勉強を少しだけ早く切り上げて、夕方ごろに目当ての大型書店に向かうことにした。

×　×　×

キリのいいところまで勉強をして、三浦と大型書店に向かう。郊外のだだっ広い敷地を使った書店で、２階以上が無い代わりにとにかく広い。エレベーターを使いようがないので、代わりに歩く歩道があった方がいいのではと思うほどだ。
「それ、歩く歩道じゃなくて動く歩道じゃない？」
自分の考えを三浦に話すと、真顔で訂正された。死ぬほど恥ずかしかった。羞恥心に焼かれて恥ずかしすぎて頭痛が痛い。いつか会議で「詳しい詳細はまだ未定です」と言ってみたいものだ。以上、重複シリーズでした。
「うわ……広……っ」
店内に入るなり三浦がぽろりとつぶやく。ほら、必要でしょ？　歩く歩道。
家電量販店だとまっさらな白い床に煌々と照りつけるＬＥＤライトが……といった内装になっているが、ここは書店なので内装も雰囲気も落ち着いている。といってもレジは常に４人体勢で、常に客が並んでいるのだけれど。万引きＧメンが私服で数人勤務しているという噂を聞いたことがあるが真偽は定かではない。
「漫画はこっちだな」
さっそく女性雑誌の立ち読みを始めた三浦の肩をぽんぽんと撫でると、三浦がちょっと名残惜しそうにした。うん、後でこっちにも寄ろう。漫画コーナーに向かう途中、三浦は料理系の雑誌もちらりと見

ていた。本当に、この数ヶ月でこの子は変わったなと思う。俺もなにか始めようかな……ドローンとか……。

「男性向け、女性向け、中性的なところとあるけどどれがいい？」

「ん……とりあえず、女性向けと中性的なのを見たい」

「ほいよ、女性向けはあんまり知らないが……」

言いながら、何度か通っている漫画コーナーの物色を始める。女性向けでも割と男子が読みやすいところであれば俺もチェックしているので、白泉社の花とゆめコミックスのコーナーを見てみることにする。面陳や平積みにしている作品で自分が読んだことのあるもの、あるいは評判がいいものの試し読み冊子を三浦に見せる。「うーん、全部は買えないし……」と悩んでいるところを見ると、全体的に好評のようだ。

マーガレットやフラワーなどの女性向けど真ん中なコーナーも見ていく。雑誌によって明確に狙っている年齢層が分かれているが、あまり詳しいことは知らなくとも各作品の絵柄を見るとなんとなく想像がついたりもする。

りぼん、ちゃお、なかよしなんかはその典型だし、大人の女性向けだと作品タイトルだけでも狙っている層がわかる。以前流行ってから未だに根強い人気があるのか、面陳されている『深夜のダメ恋図鑑』を見てもらうと「……こんな男、いるんだ……いや、いるか……」とぶつぶつつぶやいていた。あまり踏みこみたくない領域である。

「ええと、中性的なのは……」

具体的な男女比率はわからないが、アニメの反応を見ていると男女ともに反応を示しているスクエニ系を覗く。読んだことのあるガンガン作品がマッグガーデンでふたたび連載されているのを見た時は「!!??」となったものだ。

詳しい事情は知らないが、結構な作品がマッグガーデンに引越しして連載されている。マッグガーデンといえば『魔法使いの嫁』だ。俺もアニメでしか見たことがなかったので、三浦と一緒に試し読みをする。アニメはもちろんだが原作も面白く、ぴったりと肩を寄せ合って立ち読みしている状況に気づく頃には一通り読み終わっていた。

「どれか気に入ったものはあるか」
「んー……いっぱいあって迷ってる」
思っていた以上の好反応を三浦が見せる。試し読みしている時の顔を見てもいまいち分からなかったが、まあ、漫画を読んでいる時にそこまで分かりやすく目を輝かせる人もいないだろう。しかし各務原なでしこ並に目を輝かせて読んでいる人がいたらその漫画をきっと読んでみたくなる気がする。
俺もソロキャン行ってみようかな……と他の作品（色々な意味で）とかぶるようなことを考えていると、三浦が上の棚に手を伸ばした。この店の棚はかなり高いところまであり、そこかしこに小さな脚立が置いてある。女性向け漫画のコーナーに脚立が多めに配置されていた。三浦がなかなか目当ての作品を取れずにいたので、ひょいと取って渡す。なるべくさりげなく渡すように心がけた。
「ほいよ」
「……ごめん、その隣の本なんだけど……」
恥ずかしっ。
ドヤ顔にはさすがになっていなかったと思うが、痛恨のミスだった。三浦がめいっぱい伸ばした手がフラフラしていたのを失念していたぜ……。
「……今度こそ。ほいよ」
「ありがと……あ」
三浦のお目当ての本を渡すと、細い指がぴとりと触れた。
『……』
三浦がなにも言わず、触れ合っていた面積を徐々に増やして俺の手をにぎにぎとしはじめる。急に顔が熱くなり、慌てて周りを見渡した。
「えーと、三浦さん？」
ひそひそ声で呼びかけると、漫画本ごと俺の手をにぎにぎしていた三浦がチラリと上目遣いで見つめてきた。え、なにこの可愛い生き物？
俺の呼びかけを華麗にスルーした三浦は、ひとしきり触ったり揉ん

だりを繰り返すと満足したのか、あっさりと俺の手を解放した。終始無言だった。ちょっと満足げにしている。

（解せぬ）

そういえば今日はまだスキンシップをあまりとってないな……と思いながら、他になにか勧められる作品はあるかと探し始めた。

1時間ほど滞在して、三浦は最終的に3作品の第1巻を買った。

「ぜんぶハマったらどうしよう……」とつぶやいていて笑ってしまった。たしかに、どの作品も10巻以上出ていて、全てにハマって買おうとしたら万札が飛ぶ。高校生には厳しい領域だ。

三浦の選んだ本のなかに、俺の手をにぎにぎしてきた時の作品がまじっていたが、なんだか恥ずかしくてそこには触れないでおいた。

続く。

（５０）

それぞれが購入した漫画本を持って書店を出る。昨日も買ったばかりなのに、本屋と

いう空間はどうも購買意欲をそそられる。こうやってお金が空也上人像のように財布から出ていくんだなぁ……。

外はもう夕方。まだ日が沈むまでには時間があるが、１０月に入り気温も下がっていて日中よりもいくぶん肌寒い。

「……寒い」

まるで俺を糾弾するかのように三浦がつぶやき、ミニスカートの裾をキュッと引っ張った。理不尽じゃないです？　とは思うが、すねたような顔をしてさりげなく二の腕を当ててくるのが尋常でないほどに可愛らしい。

「この後はどうする」

夕方前まで勉強して、その後に書店に行くという予定以外は特になにも決めていなかった。紙袋をカバンに入れながら尋ねると、三浦は自分が買った漫画３冊が入った紙袋をちらりと見た。

「帰る前に漫画読んでく」

「おう、そうか。お疲れ」

「……なんでだし」

試しに額面通りに言葉を受け取って返事をしてみると、ちょっと冷たい声でつぶやかれた。腰骨をぺちぺちと叩かれる。

「……その、一緒に、って意味なんだけど……」

消え入るような声で囁き、どんどん尻すぼみになり、やがてまた拗ねた顔をして俺の腰骨をぺちぺちと叩いた。俺の腰骨を狙うのがブームなんだろうか。可愛いから一向に構わないけど。

「わかってるわかってる。じゃあ、向こうの公園でいいか」

「……わかってんなら初めからそう言えし」

また腰骨を叩かれた。ぺちぺち。

×　×　×

先ほど訪れた郊外の大型書店の近くに、散歩にぴったりといった風

情のある公園があった。ここ数年で作られたというものではなく、２０年以上前に作られたという。郊外の住宅地として開発される前から残っているものとしてはなかなか広く、季節によって桜や紅葉が楽しめるとネットの小さな記事で見かけたことがあった。

公園に入る時に楽しそうに帰っていく母娘を見かけた以外、人はいなかった。これからの時間に見かけるとすれば、夜ランニングをする人くらいだろう。

「ええっと、ベンチは……」

歩きながらきょろきょろと辺りを見渡していると、三浦の手の甲がコツンと当たった。

ふむ。

「ええと、ベンチ……」

もう一度、手の甲がコツンと当たった。

ふむふむ。

「ええと、ベンチベンチ……」

もう一度、手の甲がコツンと当たった。これ以上からかうのはまずいなと思い、すかさず手を握った。からかい半分、恥ずかしくて躊躇っていたのがもう半分といったところ。三浦の手は少し冷たくなっていた。指を絡ませて温まるようにキュッと握り締めると、三浦がぴくりと震えた。にぎにぎと優しく握ると、三浦も握り返してきた。自分の手の熱が華奢な手にゆっくりと伝播して、ぴったりと吸いつくように馴染んでいく。

「あ、ヒキオ。あそこがいい」

「ん？」

俺を振り向かせる時になぜか頬をぷにぷにとつつかれた。三浦さん、こういったスキンシップが好きな節がありますよね。可愛くて死にそうです。

三浦の指差した先には小さな丘があり、綺麗に手入れされた芝生が広がっていた。三浦のミニスカート姿をちらりと確認する。あの芝生なら汚れないかな……大丈夫かな……と考えていると、柔らかな手

のひらで頬をぐにっと押された。なんぞや。
「……ヒキオ、見すぎだから」
「……すまん」
考え事をしている最中も三浦のミニスカートをガン見していた。ちらりと見えた三浦の顔が赤い。ここでからかおうものなら本気で怒られそうなので全力でやめておいた。
手を繋いだまま小さな丘をのんびりと登る。一番上まで登ると、空が色鮮やかに燃えている。綺麗な夕焼け空が広がっていた。ここで日が暮れるまで漫画を読むのも悪くない。
腰を下ろしていざ漫画を読もうとカバンから紙袋を引っ張り出すと、三浦に手を握られた。
「ん」
どうした……という意味で問いかけたのだが（熟年夫婦みたいだ）、三浦は俺の手をじっと見つめながらにぎにぎとしている。手相を見るというよりはマッサージしているように見える。ふにふに。ふにふに。
「……」
待つこと1分。
「……ん」
満足したのか、俺の手を解放して何事もなかったかのように漫画を読み始めた。お尻の下に手を滑り込ませてスカートの位置をちょいちょいと調整しつつ、優雅に脚を流した体勢で黙々と読み進めていく。綺麗に染められた金の髪を指でそっとかき上げる様にどきりとした。
……この子は手フェチかなにかなんだろうか。
なんとはなしに頭を撫でてみると、初めはいかにも「邪魔するなよ」といった表情をされてちょっとショックを受けた。しかし途中から諦めたのかなされるがままになり、だんだんと気持ちよさそうに目を細め、やがて俺にぴったりとくっついて漫画を読み始めた。この子はマメに俺を可愛さで殺そうとしてくる。
× × ×

「くぁ……っ」
勉強をみっちりこなした上にけっこうな距離を歩いたからか、漫画を読み出してものの１０分ほど経った頃にあくびが出た。手で口と鼻を覆って下を向き、溢れてきた涙をこしこしとこする。
「眠い？」
三浦が漫画を読みつつも、チラチラと横目をこちらに向けながら尋ねてくる。こくりと頷くと、三浦は漫画を閉じてなにやら考えこみ始めた。
「どうした」
「……はい、ここ」
脚を流して座っていた三浦が、自分の太ももをてしてしと叩いた。
ほーん。
うん、なるほど。
「その部分の名前は太ももです」
「……ナメてんの？」
「ご、ごめんなさい」
可愛い声音でめちゃくちゃ怖い言葉をつぶやかれた。こわ可愛いというジャンルを発見する。すごく可愛いけど本気で怖かった。
「……そこに、寝ろってことか」
念のため尋ねると、三浦はふいと顔を逸らした。耳まで真っ赤に見えるのが夕焼けのせいなのかどうかは分からない。
「……二度は、言わない」
なにそのスパルタ上官みたいな台詞。そもそも一度目も聞いてないんですけど。
しかしまあ、三浦をからかいつつも怒られて、その間になんとか照れの気持ちを抑えこむことができた。
「……それでは、失礼します」
敬語を使うと三浦がくすりと笑った。漫画本を教科書の横にするりと滑りこませ、内心緊張でがちがちになりながら三浦の太ももに頭を乗せる。
「……おふ……っ」

思わず気持ち悪い声が漏れた。え、人の身体ってこんなに柔らかいの……？

後頭部に感じるふよんとした心地の良い包容力。三浦とのやりとりで一度遠のいていた眠気が一瞬で復活する。

「ヒキオ、気持ち良さそう」

三浦が上から覗き込み、くすくすと微笑む。その笑みがたまらなく可憐で、それでいてブラウスを押し上げる豊かな胸も見えてしまう。一瞬で復活した眠気が一瞬で蒸発した。

「む……？」

三浦が左手で俺の頭を、そして右手で腹を撫ではじめる。俺を犬かなにかだと思っているのだろうか。三浦の手つきはどこまでも優しいのだが、太ももに頭を乗せることでたっぷりと香ってくる甘やかな匂いも相まって、安らぎとは別の感情がむくむくと湧いてくる。

（まずい）

三浦が目を細めて覗きこみながら、ひたすらすりすりと撫でてくれる。本当に心が安らぐが、段々と血流が下半身に集まってきた。これは本当にまずい。なにかタオルでもかけてごまかせないか……いや却って目立つだろう……などと煩悶としていると。

「……あ」

三浦がぽつりとつぶやいた。これは引かれたな……と遠い目をしていると。

「……ヒキオ、おっきくなってる」

三浦は引くどころか、その声音を好奇心に満ちた嬉しそうなものに変えていた。つい数秒前まではまるで聖母のような表情だったのに、夕焼けに照らされた瞳は淫蕩に歪んでいた。

今日一日、２人の間に満ちていた穏やかな空気が、明らかに切り替わった。静かに静かにねじ曲がり、妖しく歪んだ。

腹を撫でていた三浦の手が、すすすと下へすべっていく。

「くぁ……っ」

スラックスを押し上げる膨らみに細指が絡みついてきて、思わず声を上げた。

「ヒキオ……」
上から見つめてくる三浦の瞳が濡れている。ついさっきまでと違い、口をかすかに開けて静かに荒げた呼吸をしている。柔らかな感触と甘い匂いに加えて、視覚でも刺激してくる。
「み、三浦、ちょっと、待て……ぐぅ……っ」
頭を撫でていた手で耳をしゅりしゅりと撫でながら、5本のつま先で竿をさわさわと撫でてくる。腰が情けないくらいに浮き、がくがくと腰を震わせるたびに三浦が嬉しそうに瞳を細める。
いくら夜も間近とはいえ、ここは公園で、しかも通りを見渡しやすい丘の上にいる。通りかかった人に見られる危険性が高すぎる。
「三浦、人が来たらまずいだろ……うっ、んん……っ」
たしなめようとしているとチャックを開けられ、するりと細指が入りこんできた。ボクサーパンツ越しにさわさわと女性の繊細な指が這っていく。先走り汁が噴きこぼれて濡れた部分を撫でられるとかぁっと顔が熱くなった。
「ん、来たらこっちからちゃんと見えるからだいじょうぶ。不安なら……はい」
三浦がカバンを持ち、俺の腰の横に置いた。通りからはたしかに見えなくなったが……そもそも、三浦がこんなに積極的になっていることに驚きを隠せない。
「ヒキオ……気持ちいい？」
「うぉ……っ」
三浦が屈みこむと、豊満な胸が顔にふよんと寄せられた。かすかに香る汗の匂いがひどくいやらしく、股間の膨らみがさらに硬くなる。
「三浦……これは、ちょっと、ぐぅ……っ、だ、大胆、すぎるだろ……っ」
ブラウス越しに瑞々しい弾力に顔を包まれて、自分の声がくぐもっている。俺の顔の動きに三浦が微かに反応し、艶めかしい吐息の音が聞こえた。
「……うん、そうかも」
三浦がぽそりとつぶやいて動きを止める。ふっと顔面が極上の肉圧から解放されると、三浦が覗きこんで微笑みかけてきた。

「……あーし、なんかどんどんエッチになってる」
「……っ」
三浦の言葉にごくりと息を飲むと、綺麗に整えられた眉が可愛らしく曲げられた。
「……ヒキオのせいだし」
さらりと責任転嫁をして、反論する隙さえ与えずにふたたび胸を顔に押しつけてくる。視界が柔らかな甘さに包まれたまま、ジーンズの中に入り込んだ細指がざわざわと波打ち、肉幹をいやらしく刺激してくる。このままではパンツの中に思いきりぶちまけてしまいそうだ。
「ぐ……ぁ……っ、み、三浦……っ、出る……っ、ここじゃまずい……っ」
三浦の腰をタップして途切れ途切れにつぶやくと、肉幹を愛撫する動きがぴたりと止まった。
「……ん、それじゃあ……移動する？」
三浦のなかには、行為自体をやめるという選択肢はないようだった。今日一日手をつなぐくらいしかしていないためか、たしかに俺も欲求は募っている。とはいえ時間も時間なのでどちらかの部屋に行くというのも厳しいし、かといって公園では……と思っていると。
「……あそこなら……たぶん、だいじょうぶじゃねえか」
公園の通りからほど近いところにある林を見つけた。細い木が何十本も生えていて、多少奥まで踏み入れば誰にも見つからなさそうだ。
「ん、わかった」
三浦の声が弾んでいる。普段の三浦ならあんな場所でだいじょうぶなのかと言ってきそうなものだが、今は欲求や好奇心が羞恥や不安を上回っているようだ。肉竿から手を離し、慎重にチャックを閉め、俺の身体をそっと起こした。
「わ……っ、な、なに……っ？」
２人とも立ち上がったタイミングで抱きしめると、三浦が可愛らしい声を上げた。
「……別に、なんとなくだ」

「なにそれ」
くすくすと笑い合いながら丘を下り、小さな林へ向かう。
手を繋ぐ代わりに三浦の腰に手を回すと、華奢な身体がびくりと震えた。歩きながら三浦の手がそろりと伸びてきて、もこりと膨らんだ股間に添えられる。こくりと細喉が鳴る音がした。かりかりと膨らみをこすってくる。三浦の腰を掴む手に力をこめた。
もうじき辺りは真っ暗になる。向かう林は街灯の光からも遠い。
誰の目も届かないところで、発情に染まった三浦がどんなことをしてくれるのか、三浦とどんなことができるのか……楽しみで仕方がなかった。
続く。

（５１）

日が暮れて宵闇が辺りを包みこみ、公園内の街灯がぽつりぽつりと灯っていく。俺は三浦の腰を抱きしめ、三浦は俺の股間をすがるようにこすりながら歩いていた。急げるような体勢ではないのだけれど、それでも自然と２人の足取りは速まる。

公園の通りに面している林に着いた。街灯の光も届かない、一人でなら絶対に行く気にもならないような不気味な雰囲気。けれど今は、誰の目も届かない安心できる場所としか思わなかった。

「奥まで行くか」

「……ん」

三浦の腰をきゅっと抱き寄せると、華奢な身体がぶるりと震えた。吐息が首にかかる。ぞくりとして振り向くと、三浦が唇を重ねてきた。まだ林に入ってさえいないのに、まるでごく自然な挨拶であるかのように舌を挿しこんでくる。じゃれつくように舌先を絡み合わせた。

「ん……んむ……んふぅぅ……っ」

うっすらと届く街灯が、とろりと蕩けた三浦の表情を映しこむ。溢れる発情を抑えきれないような、そんな表情。甘ったるい猫撫で声に背すじが痺れる。このまま何時間でもキスをしていたくなるが、今はそうもいかない。

「……三浦、まずは奥に行くぞ。ここじゃ色々と……まずいだろ」

「……うん」

ちょっと拗ねた子どものような顔をして頷く。頭をくしくしと撫でると、金の髪はしっとりと汗ばんでいた。上目遣いで見つめてくる三浦の瞳が濡れている。下腹部がぞわぞわとする。今すぐ、この瑞々しい唇を肉竿で割って開いてねじ込みたい……という欲求を必死に押さえこみながら、林の奥へと入っていく。

林の規模はさほど広くないようで、目を凝らすと向こうの通りの街灯が見える。それでも一歩一歩進むごとに、微かな光や音が遠のき、俗世から離れていくような感覚を覚える。若々しい葉を踏む音がす

る。どこからか虫が鳴く声がする。月の光が申し訳程度に木々を染めている。心安らぐ森の匂いに混じって、三浦の甘やかな匂いが香ってくる。この場には俺と三浦しかいないのだという事実が、身体の奥底まで染み渡ってゆく。

「……よし、この辺で」

唇が塞がれた。

「んっ……ふっ、んっく、んふぅぅ……っ」

首に細腕が巻きつき、柔らかな身体がきゅっと吸いついてくる。舌がにゅるりと口内に入りこみ、俺の舌を探すようにうねうねと動き回る。舌と舌が触れ合うと、昼間の三浦からは考えられないほど大胆に、卑猥に、貪るように舌を這わせてくる。まるで蛇のように、舌先も、舌の腹も、根本近くまでねっとりと重ねてくる。絡まる唾液が熱い。三浦が顔を傾け、唇と唇がむにりと重なった柔らかくひしゃげる。

「ん……ぐ……っ」

三浦は股間をさする代わりに、自分の腰を艶めかしく揺らして押しつけてきた。膨らんで反り返った勃起肉の裏スジが柔肉に触れあい、ますます硬度を増していく。お返しに、三浦の脚と脚の間にひざをすべりこませた。同時に後ろからスカートの中に手を突っ込み、瑞々しい尻たぶを揉みしだく。

「んふぅぅ……っ!? んっ、んむっ、やっ、そこ、はぁぁぁ……んっ、ちゅっ、あむっ、れるっ、ふっ、くぅぅ……っ」

唇を離した三浦が身をよじり逃げようとする。唇を塞ぎ、尻をぐっと引き寄せて決して逃がさぬようにする。俺から舌を積極的に絡め、唇を咥え、唾液を流しこむ。ショーツのさらさらした感触の上から尻をそっと撫で、時に強く揉む。三浦は可愛らしく内股になってかくかくと震えるが、腰の位置が低くなると俺の太ももに淫部がこすれる。スラックスの膝頭がしっとりと温かく湿っていた。

「はっ、んふぁぁ……っ、ふっ、んっ、んくぅっ、んふぁぁぁ……っ」

三浦の声が発情していく。俺の太ももに陰部がこすられることもいとわず、ぐいぐいと身体を密着させてくる。尻たぶの部分のショー

ツをTバックのように食い込ませると三浦は背すじを反り返らせてくぐもった声で喘いだ。
引き絞られたショーツをぐいぐいと引っ張り、前にせり出してきた三浦の下腹部に太ももをこすりつける。スラックスの染みが広がっていく。三浦は泣きそうな表情を浮かべているのに、首に回した腕に力を込めたままでキスをやめようとしない。
暗い林の中で、時間感覚も忘れて三浦の柔らかさを味わった。味わい続けた。貪り続けた。
「……はっ、はぁっ、はっ、んっ、はぁぁ……っ」
唇を離すと、2人の間に伸びた糸がかすかに光った。たらりと垂れ落ち、足元の葉にぽとりと滴る音がする。
三浦の手首を掴む。膨らんだ股間に引っ張っていくと、細指がそっと肉竿を舐めていく。微かに震えているのは、あまりに興奮しているためなのだろうか。
三浦の肩をぐっと下に押しこむと、蹲踞のようにして脚を開いた。ミニスカートを穿いているのに躊躇しないことに驚いていると、月の光が差して朱色が刷かれた頬が見えた。
「硬い……」
ぽそりとつぶやかれた声が下腹部に染み渡る。三浦の手がチャックを開け、中のパンツを下げた。肉幹と玉袋をチャックの中から引きずり出すと、惚けたように口を開けた。
「んっ、はぁっ、匂い、すごい……っ」
「……そりゃ、一日外にいたんだしな」
夏が過ぎたとはいえ、それなりに歩き回りもしたり、股間は蒸れているだろう。しかし三浦のこの言葉はなじるための言葉でないことも充分知っている。
「ぐ……っ」
両手がそっと肉幹を撫でてくる。腰を引くと、細指がきゅっと竿を握って止めてきた。
さわさわ、そろりそろりと撫でながら、三浦が熱に浮かされたような表情で見つめてくる。指の腹や爪で、亀頭を、カリのくびれを、竿

を、裏スジを、根本を、玉袋を、会陰を、しゅるしゅる、かりかりと舐るように撫でていく。
「お……ぁ……っ」
とぷっ、ぴゅるっ、とカウパー液が溢れでてくる。三浦は指に透明な液体を絡ませ、片方の手は玉袋に先走り汁を塗りたくり、もう片方の手で竿をしごき始めた。
卑猥極まる手の愛撫に腰が抜けそうになっていると――不意に、月が雲に隠れて、辺りが真っ暗になった。
「ぐぅ……っ」
三浦の表情も手の動きも何も見えなくなると、亀頭がぬむりと生温かい感触に包まれた。睾丸を撫で、竿の根本をにちゅにちゅとしごきながら、カリのくびれを瑞々しい唇できゅっと締めつけて、べろりと出した舌の腹でえぐるかのように亀頭を舐めていく。
三浦が何をしているかは暗くてまったく見えないのに、三浦の唇が、舌が、内頬が、細指が、いま俺にどんな愛撫をしているのかを強烈に伝えてくる。
「んふぅぅ……ちゅっ、れるっ、はぷっ、んっ、ふぅぅぅ……っ」
三浦が発する声が、先走りの滴る肉竿をしごく音が、決して大きくないはずなのに脳内で反芻されて苛烈に響き渡る。
亀頭の裏側にべったりと舌の腹を当てられ、左右に揺すられる。腰を引くと竿の根本をしごく細指に力が入り、決して逃がしてくれない。敏感な場所を舐めしゃぶられ、根本をしごかれ、玉袋をやわやわと優しく揉まれる。触感と圧の異なる快感が同時に下腹部を包みこみ、脳を焼く。
「み、三浦、それ、やば、出る……っ」
自分の発する声が情けないくらい上ずり、震えている。内ももがつりそうなくらい力が入り、下半身全体がぶるぶると震える。今日一日たっぷりと精子を蓄えてきた睾丸がせり上がってくる。もう少し楽しみたいという意図を込めた俺の言葉に、三浦は手をゆるめるどころかさらに愛撫を強めてきた。
「んふぅぅ……ちゅっ、んむ

っ、ちゅむ……っ」
「う……ぁぁぁ……っ」
頬と唇をきゅっとすぼめてカリ首を締めつけ、首をぐりぐりと回してくる。その上で固めた舌先を鈴口に押し込み、尿道口をほじくる。敏感な部分を苛烈に責められて悶絶しているところで、竿をにぎる手に力が入り、強烈にしごき始めた。
にちゅにちゅにゅこねりゅぐちゅにゅくにゅこにゅこ……っ。
真っ暗な中で、卑猥な音が耳朶を焼いた。
「――――ぐぅぅぅ……っ!!」
強烈な快感に抗うすべもなく、小さな頭をがしりと掴み絶頂の感覚に目をきつく瞑る。精巣にたまった大量の白濁が、尿道を突き破らんばかりの勢いで駆け抜ける。何十人もの手にぐいと押されたかのように腰が跳ね、三浦のざらついた喉奥に亀頭が当たる。鈍い感触がすると同時に苦しそうに呻いた三浦の喉に、大量の精液を噴き出した。
「んっ、ぐっ、んくっ、んっ、んぶ……ふっ、んふぅぅ……ふっ、んっ、んっ、んっ……」
くぐもった、それでいて蕩けた声を漏らしながら三浦が精液を飲みこんでいく。魂が抜け落ちていくような怠惰な感覚。直前までの激しい愛撫とは対照的に、三浦の唇と舌がにゅるにゅると緩慢に動き、優しく精子を搾りとっていく。小さな脈動を何度かすると、ようやく最後の一滴まで出しきった。
「……んっく、ぷはっ」
三浦が口を離すと、月の光がふたたび差し込んだ。三浦はとろんと夢見心地の表情で、精液をたっぷりと呑みこんだ自分の喉をさすり、唇に付いていた精液をぺろりと舐めとった。艶美な仕草にぞくりとして、下半身に血液が流れこむ。
「……ヒキオ、濃すぎだってば」
硬度がまるで衰えない肉竿に目を見開き、いたずらっぽく笑いながら髪をかき上げる仕草が可愛らしくも色っぽい。愛らしい声音で囁き、亀頭にちろちろと舌を這わせ、上目遣いで見つめてくる。一挙一動が余すことなく俺の興奮を煽り立ててくる。いったいどこまでが

素で、どこからが計算なのか……決してわかることはないだろうし、わからなくていいだろうとは思う。
「……めちゃくちゃ気持ち良かった。ありがとうな」
頭をくしくしと撫でると、ちょっと拗ねた顔になった。なんでですのん？　頬がほんのりと赤いけれど、そこに触れると怒られそうなのでやめておく。
「……ヒキオ、あと何回してほしい？」
亀頭をつんつんと指でつっつきながら尋ねてくる。三浦がここまでエロく可愛くなるのは嬉しい想定外だ。ちょっと脳内処理が追いついておらず、質問をガン無視して「抱きしめていいか」などと言いたくなる。
脳内の混乱を収めて、今の状況を考えてみる。もう1回出せば……収まるか……？
……。
「……できれば、あと2回ほど……」
俺の言葉に三浦が目をぱちくりとさせ、くすくすと笑った。
「ヒキオってほんと、ドスケベだよね。……なんで反応したし」
三浦の罵りに下腹部がちょっと反応してしまい、ジト目で見られてしまった。
この後、俺も三浦の胸を愛撫しながら舐めてもらい、お願いした通りもう2回、三浦の口の中にたっぷりと出した。全て律儀に呑みこんだ三浦が、帰り道に「なんか水飲みすぎた時みたいなんだけど……」と恨みがましい目を向けてきた。１００％俺が原因なので「その、なんだ……すまん」としか言いようがなかった。

続く。

（５２）

三浦と過ごす季節がゆっくりと流れ、１１月を迎えた。日中は２０℃を超える温かな陽気が続いているが、夜になると1桁にまで下がる。一日部屋で過ごす日はエアコンを冷房と暖房で使い分けるなんていう日もざらにあった。朝に家を出るときは着ていたコートを日中は持って歩くのがなんとも手間だが、こういう季節なのだからしょうがない。

これから冬を迎えると、いよいよ受験本番だ。３年生はいよいよ受験本番という雰囲気になっていて、３年生の教室のある階全体にどこか緊張感が漂っていた。

× × ×

朝、まだほとんど人のいない校舎を歩く。コートを着てなお身体がぶるりと震える寒さだ。リノリウムの床を踏む音が、以前よりも少し乾いて聞こえた。三浦と一緒に勉強する予定で早めに起きたのはいいが、早く着きすぎた。

自分の教室をドアの窓からチラリと覗くとまだ誰もいない。そりゃそうだわな……と思いながらドアの取っ手に指を引っ掛けると、

「ありゃ？　ヒキタニくんじゃん」

「……え」

ゆるゆるとした声で挨拶をされて振り向く。肩までの黒髪に赤いフレームの眼鏡。薄いレンズの奥にある瞳は澄んでいる。顔の造作も身体のパーツも小作りな印象を受ける。図書室のカウンターでも座っていたらそれはもう見事に絵になるだろう。

「はろはろ～」

ゆるやかに手を振ってきたのは、腐海の女王――海老名姫菜だった。ひどい称号だ。

クラスが別になったので、話すのはずいぶん久しぶりだった。

「ヒキタニくんは朝から勉強？　偉いね～」

「いや、まあ、うん、別に」

この子、人との接し方を忘れてしまったのん？　と言わんばかりの

どもりっぷりである。我ながらひどい。仕方ないだろうとは思う。この人とふたりで話したのは、もう1年以上前の修学旅行で行った京都駅以来なのだから。

海老名さんは俺の緊張など露知らずといった様子で、呑気にとてとてと近寄ってきた。

「寒いから教室に入らない？」

「え？　あ、ああ」

言われるがままに自分の教室のドアを開く。海老名さんはニコニコとしながら後ろを付いてきて、俺は首をかしげながら自分の席に座った。

海老名さんはごく自然に俺のすぐ前の席に座り、くるりと振り返った。

「私も勉強するつもりだったんだけど、せっかくだからお話がしたいなーって」

言って、海老名さんがにこりと笑う。普通にしていればやっぱり綺麗だなぁと――

「最近、隼人くんと仲良くしてる？　クラスが別になっちゃったから、はやはちの進展をきちんと掴めなくてさー」

……思うんだけどなー。普通にしてればなー……。

海老名さんはげんなりしている俺のことなどさっぱり気にせず、自分が口にしたはやはちという言葉に興奮してむはーと変態じみた息をついている。受験シーズンだろうがなんだろうが、腐海の女王は相変わらず全てを腐らせていく……。

「……別になんもねえよ。いつも通りポツポツと話すだけだ。１００％葉山から話しかけてくるパターンでな」

「相変わらずだねぇ。……ヒキタニくんはひねくれ者だけど、一度攻められたらなされるがままになり、従順に、しおらしく……むはー！」

「……」

空がとても青い。天が高いわー。馬が肥ゆるわー。

まあ、はやはちの話はこのあとに取っておくとして……と海老名さんがさらりとつぶやく。置いておいてそのまま忘れてほしいんです

が……。
「ヒキタニくん。優美子とはどう？」
「んぐっ」
予想外の弾が飛んできて、喉の奥で変な音が鳴った。むせそうになったが手元に飲み物がない。この会話で色んなライフが削られること確実なので、あとでホットのＭＡＸコーヒーを飲んで癒されるとしよう。可能ならば今すぐにでも買いに行きたいところだ。
「……聞いてたのか」
「そりゃあねー。それなりに経つでしょ？」
「んー……まあ、な、うん、そうかもしれない」
「あはは、優美子に聞いた時もそんな感じだったよ。意外と似てるのかもね、ふたりは」
海老名さんの言葉に少し驚いた。たしかに口数の少なさでは似てるのかもしれないが……。
「似てるというよりは、似てきた……のかな？　まあ、よく分かんないけど」
関西人のような締め方をして、気になる話題があっさり終わってしまった。
「優美子、面白いよ。普段みんなといる時は絶対ヒキタニくんのことを話そうとしないの。ふたりが付き合う前の方がよっぽど話してたなってくらい。それなのに、私とふたりでいる時にそれとなーく聞いてみると、まあノロケが止まらない止まらない」
「……それ、本当に三浦なのか？　そっくりさんとかじゃなくて？」
俺が見ている三浦もかなり可愛いと思うが、海老名さんが話す三浦の様子はまた異次元だ。え、ノロケ？　ノロウイルスが止まんないんじゃなくて？　それただのパンデミックだな。
「あはは、そう思うのも無理ないよねー。私も最初はびっくりしたもん。途切れ途切れにヒキタニくんの優しい所とか呆れた所とか、かっこ悪かった所とか、意外と男らしい所とか、ずーっと優しい顔で話すんだよ？　超可愛いでしょ？」

「……まあ、うん、そうかもな」
「ヒキタニくん、顔真っ赤だよ」
「そこに触れないでくれ……」
　顔を逸らす。火傷するのではと思うほど顔が熱い。
「えっと、なに、今日は俺を辱めにきたの？　もう目的は達せられてると思うけど？」
「ううん、これはついでだよ」
　海老名さんがニコリと微笑む。
「優美子とどこまでいったのかなーって、ちょっと気になって」
「……言うとでも？」
「うん、そう言うと思ってた。優美子もそんな感じだし」
　俺の答えに海老名さんがからからと笑う。そういうとこも似てるねーと呟き、柔らかな笑みを浮かべた。
「優美子ね、ヒキタニくんの話をする時、本当に幸せそうなの。恋する乙女―って感じで、隼人くんのこと追いかけてた時でもあんな表情になったことなかった。ヒキタニくん、すごいなって思ったの」
　でも、優美子は繊細だから……と、どこか影を帯びた声でつぶやく。
「とっても傷つきやすいんだ、優美子は。それに、隼人くんのことだってまだ、心のどこかには残ってると思う。……こんなこと私が言うのも難だけど、優美子のこと、大事にしてあげてね？　今、あの子の傷を癒せるのはヒキタニくんだけだと思うから。……優美子のこと、よろしくお願いします」
　正面に向き直り、ぴったりと閉じた脚に両手を乗せ、礼儀正しく頭を下げられる。海老名さんがこれまで三浦と過ごしてきた時間が見えた気がして、胸がグッと締めつけられた。
「……わかった。大事にします」
　がしがしと頭を掻いて頭を下げる。同時に顔を上げて目が合うと、どちらからともなくくすりと笑った。
「じゃ、私は教室に戻るから。このあとは優美子と勉強かな？　頑張ってね～」
「ああ」

はやはちの話題を忘れてくれているようなのでありがたい。まあ冗談だったのだろうが。海老名さんがひらひらと手を振って教室を出ようとすると、廊下側から誰かが来てドアを開けた。
「あれ、姫菜？」
「あら、優美子。はろはろ～」
三浦が目をぱちくりとさせ、海老名さんと俺との間に視線を往復させる。
「それじゃね～」
説明もなしにひらひらと手を振り、海老名さんが教室を出ていく。三浦は「あ、うん……」とつぶやき、ほけっとしながら海老名さんの後ろ姿を見守っている。
「ヒキオ、なに話してたの？」
海老名さんが教室に入る音が聞こえると、三浦がとてとてとやってきた。くりんと首を傾げるさまがやたらと可愛いので猛烈に撫でたくなったが、雰囲気を読まずにそういうことをすると三浦はちょっと拗ねる。しかしなんだかんだでしたいようにやらせてくれる。そういった時の三浦が可愛くてしょうがない。獄炎の女王は女神にクラスチェンジできるらしい。すでにめぐり先輩がいる役職なのでかぶってしまった。ちなみに戸塚の役職は大天使。材木座は中二ワナビである。
三浦の質問にどう答えるといいか数秒悩む。
「……まあ、うん、世間話だよ」
なんのごまかしもできていないが、ウソはついていない。うん、ほんと。ぜんぜんついてないよ、ウソ。
三浦は俺の隣に座ると、ちょっと怖い表情を浮かべてずいと顔を寄せた。阿修羅像ばりに女神モードと獄炎の女王モードが入れ替わる仕様なのかしら？
「……姫菜、なんか変なこと言ってなかった？」
怖い表情を浮かべているが、その頬にはぽっと朱色が刷かれている。まずい、可愛い可愛いなどと呑気なことを考えていたけど、思いきり見抜かれている節がある。

「……変なことってなんだよ。大丈夫だって」
曖昧にぼかして頭を撫でる。ほんの少し前の俺が見たら卒倒するようなパワープレイだ。
「……そ」
柔らかな金の髪を梳くように撫でていると、三浦はどこか拗ねた、それでいて安らいだような声音で素っ気ない返事をした。愛い愛い。今日も可愛いぞ、この生き物は。
……大事に、か。
海老名さんの言葉を反芻していると、三浦が「ちょ、ちょっと……」と抗議の声を上げた。
「どうした」
「ど、どうしたじゃなくて……撫ですぎだって」
「……すまん」
俺の手の定位置はここ！　と言わんばかりに延々と撫でてしまっていた。

× × ×

その日の昼休み。
いつもと同じように屋上で三浦が作ってくれた弁当を食べる。三浦が厚意で作ってくれているのだからと毎日あれやこれや感想や褒め言葉を工夫しているうちに、俺はずいぶんと褒め慣れ、三浦もずいぶんと褒められ慣れた。
「ヒキオ、よく飽きずに褒めれるね」
弁当箱を片付けながら、三浦が感心半分呆れ半分といった調子でつぶやいた。
「せっかく作ってくれてるんだからな。実際美味いし」
「……そ」
そっけない返事をして、三浦がごく自然に、こうすることがルーティンであるかのようにしなだれかかってくる。二の腕にかかる心地よい重みと柔らかさ。ふわりと香る甘い匂い。綺麗な金の髪に鼻先をうずめると心地よい眠気に襲われる。
最近はとっさにタイマーをセットして、ふたり寄り添った状態で1

5分ほど眠ることもある。受験勉強の疲れもあるのだから寝た方がいいよなと思う。ましてや三浦は早起きして弁当を作ってくれているのだ。
今日も今日とてとろん……と眠気が襲ってくる。身体から重力が剥ぎ取られ、ふわふわとしていく。視界に入る空が青いからか、まるで雲のように空をたゆたっている気持ちになる。
寝る前にタイマーを……とポケットのスマホを取ろうとすると。
「ヒキオ、その、今日なんだけど……」
三浦がぽそぽそとつぶやき、顔をそっと上げた。
「どうした」
髪をくしくしと撫でると猫のように目を細めるのが可愛らしい。三浦は何か言いたそうに口を開き、閉じて、また開くのを繰り返すと、深く大きく息を吸った。
「……その、ヒキオの家に行っていい？」
「え？　ああ、いいけど……」
三浦の提案は特に珍しくない話だった。放課後に三浦が俺の家に来る流れは今まで何十回とあった。小町もすっかり慣れていて、最近では三浦が来ると「優美子さん、お帰りなさい！　これどうぞ！」と三浦が好きな種類のチョコをあげたりしている。
三浦も小町の気の利きようにかなり惚れ込んでいるようだ。さりげなくおかえりなさいと言われて毎回照れてはいるが。小町の協力もあって、三浦は順当に比企谷家に引き込まれ……これ以上は考えないようにしよう。
三浦と部屋にいると、受験生であることを忘れてしばしば色々なことに溺れがちだ。なので最近は予め勉強時間を区切ってきちんと選別している。今日は何時まで勉強を頑張るかな……と考えていると、三浦がまだ何か言いたそうに口をもにょもにょと動かしている。なんぞや。
「どうした」
「え、えっと、その……」
細い指が俺の袖をキュッと握る。くっと近寄ると、綺麗な顔立ちが

目の前に来てどきりとする。
「……その、ヒキオ、今まで、色々……我慢してたでしょ？」
「え？　……あー……」
何のことかと思ったが、三浦が俺の内ももをそっと撫でてきたことで察する。顔にかかる湿った吐息も相まって、下半身に急速に血液が集まっていく。
――三浦にはほとんど毎日たっぷりと口でしてもらっているが、未だに下着姿さえ見たことがなかった。単に三浦が恥ずかしがっているだけで、胸を触ったりスカートのなかに手を入れたりといったことはしているのでそこまで気にしてはいなかったが……やはり、その先に進みたいという思いはある。
「……まあ、うん、多少は」
ウソをついても仕方ないので、ぽそぽそと、けれどはっきりと答える。
「……そう、だよね……。……だから、ね？　その……今までずっと我慢してもらってたから……」
さ、最後までは難しいと思うけど……と前置きをして、三浦が潤んだ瞳で見つめてくる。
「……ヒキオと、もっと先のこと……したい」
「……っ」
三浦の言葉に視界がぐらりと揺れた。あまりに儚げな表情で、切実な声音で告げた言葉の破壊力はすさまじかった。思わずごくりと喉を鳴らすと三浦がびくりと震え、俺の胸に顔をうずめた。
無理しなくていいぞ、と言うかどうか迷ったが、三浦の決意は固いようで、顔は真っ赤にしているのでその瞳には頑固にさえ思えるほど強い光が宿っていた。
――優美子のこと、大事にしてあげてね？
今朝、海老名さんに言われた言葉を思い出しながら、
「……ん、分かった」
こくりと頷き、華奢な身体をそっと抱きしめた。

続く。

（５３）

――ヒキオと、もっと先のこと……したい――

昼休みに三浦から告げられた言葉が、５限、６限、ＨＲのあいだとずっと頭の中を反芻していた。時期も時期なので勉強に集中しなければならない。そう思っていても、三浦の言葉が、表情が、頭から離れない。瑞々しい唇から、控えめに、薄紙のように頼りなく紡がれた言葉。ほんのりと朱が刷かれた頬。ふわりと吹いた風に揺れる金の髪。三浦の言葉だけでなく、そのとき目で見て、聞いて感じた全てが、曖昧さもなく、どこまでも生々しく、映像よりも高密度な情報を伴って、何度も何度も脳内で繰り返し再生される。三浦と目が合うたびに、彼女は照れくさそうに顔を逸らした。俺も顔が熱くなって同じように逸らしていた。

先生の話す速度はこんなに遅かったっけ……と思うほど、放課後が待ち遠しかった。

×　×　×

放課後。

三浦とともにする帰り道は静かだった。人目のないところでは手を繋ぎ、仲良くはしゃいでいる女子中学生の集団と出くわすなり慌てて手を離し、かしましい声が遠のくとまた手を繋いだ。口数は少ないどころか、言葉を発した記憶がほとんどなかった。三浦はほとんど俯いていた。この状況はネガティブなものではなく、これから訪れる時間へのたしかな確かな期待によるものだと痛いほど分かっていた。心臓が高鳴りすぎて痛かった。家に近づくほど周りの喧騒が遠ざかり、最後にはミュートしているかのように聞こえなくなっていた。

家に着くと鍵がかかっていた。そういえば小町は帰りが遅いらしく、夕飯は自由に食べてと言われていた。しまった、何も買ってない……適当に作るか……などと考えながら鍵を開ける。

「家……誰もいないんだ」

靴を脱いだところで三浦がぽつりとつぶやいた。湿った声音がぽとりと床に落ち、蒸発して、生々しく香りたち、空気が妖しく染まる。

「……そうだな」
三浦の髪を撫でると、まるで警戒心むき出しの子猫のようにびくりと震えた。怯えたのかと思ったが、ゆっくりと手で梳いていくと安心したのかとろんと目を細める。見上げてくるうっとりとした目の下が、ほんのりと朱くなっていた。
「……部屋、行くか」
「……うん」
このままでは玄関で抱きしめてしまいそうだ。平静を装いながら三浦の手を引いた。小さくてか細い手は震えていた。

× × ×

部屋に入り、鍵を閉めた。
「……っ」
無意識にやったことだったが、三浦は目を見開き、そろりと、まるで幽霊でも見るかのようにドアノブを振り返った。何か言うでもなく、そのまま部屋の中をふらふらと歩いていく。
「コートはここにかけてくれ」
エアコンで暖房を点けつつ、壁にかけてあるハンガーを三浦に渡す。三浦はコートだけでなくブレザーも脱ぎ、ブラウス姿になった。衣替えの前は何度も見ていた姿なのに、改めて見る薄着にごくりと息を呑む。
「……あんまり、こっち見んなし」
拗ねたような声音で三浦がぽしょりとつぶやき、手のひらで頬をぺしっと叩いてくる。力はまったく込められていないが、今のって掌底ですよね……？
クッションを並べて隣同士で座る。三浦は膝を抱えるようにして猫のように背中を丸めていた。この空気感で勉強ができるはずもなく、それぞれが何かを自由にするでもなく、ただただ黙って座る。
「……小町、帰り遅いの？」
「みたいだな。でもまあ、帰ってきてても問題はねえよ。気が利くからな」
「なんだっけ、世界一の妹、だっけ？」

「ああそうだ」
「バカみたい」
「うっせ」
ぽそぽそと言葉を交わし、微笑みあう。三浦の柔らかな笑みに鼓動が高鳴る。もっと一緒にいたい、色んな顔が見てみたいと思うような、そんな表情。
他愛のない話を続ける。ぽつ、ぽつと、途切れ途切れに、自由気ままに。
どちらから近付いたのか、徐々にふたりの距離が縮まっていく。二の腕が触れ合うと、まるで火傷したように熱く感じた。互いの服を超えて熱量が伝わるような、そんな感覚。三浦が小さく震えたのが腕越しに伝わる。
「……今年もあと1ヶ月と少し……」
「……だな」
そっと手を重ねると、三浦が何気なく発する言葉に質量が増した気がした。他愛ない会話を続け、指をゆっくりと絡めあう。ひりひりとした興奮の糸が全身を這い回っていく。会話の内容だけはそのままに、互いの声音と挙動が徐々に淫靡なものに変わっていく。
三浦がそっとしなだれかかってきた。ちらりと横を見やると、三浦と目があう。
「……ん……っ」
吸い寄せられるように唇を重ねる。三浦から舌を出してきた。いたずら心で唇を離してみると、綺麗に整えられた眉が拗ねたように曲がる。わるいわるいと苦笑しながらもういちど唇を重ね、舌先をちろちろと重ねる。ピリピリとした甘い痺れが走った。三浦の瞳がうっとりと細められる。
「んっ……ふっ、んふぅぅ……あっ、んんっ、ふぁ……っ、はっ、んくぅぅ……っ」
三浦の肩を抱き寄せ、正面から向き合う。小さなくるぶしをトントンと叩くと、三浦は恥ずかしそうにスカートを押さえながら両脚を上げ、あぐらをかいているの腰にするりと巻きつけた。

「ちゅっ、ちゅるっ、れるっ、はっ、んむ……んっく、ふぅぅぅ……っ」
身体がぴったりと密着すると、三浦の口づけの熱量が上がった。上下の唇を順に咥えてなぞり、歯列の表裏を舐め、まるで交尾するかのように舌を根本からねろねろと絡めてくる。くぐもった声が頭蓋を焼き、甘ったるい匂いに鼻腔が犯される。下半身に血液が行き渡り、スラックスがむくむくと膨らむ。三浦は股間に押し付けられている感触に目を細めると、挑発するように自分の腰を悩ましくこすりつけてきた。三浦のスカートの内側と股間の膨らみがこすれる。女性の柔らかな部分にくにくにくにと勃起が押し付けられる感覚にぞくぞくする。
「……ぷはっ。……あっ、んっ、はぁっ、んんん……っ」
唇を離しても、互いに息を荒げながら見つめあい、ゆっくりと腰をくねらせる。相手の性感を、そして自分の性感を高めるように、静かに、ねっとりと。三浦が脚を巻きつけた状態で密着しているため、ふたりとも服を着ているのにまるでこういった体位で身体の奥底まで繋がっているかのようだ。
「……これ、めちゃくちゃエロいな……」
「……ヒキオ、おっきくしすぎだし」
三浦が顔を赤らめながらつぶやく。股間の膨らみはミニスカートに覆われて見えない。ふにふにと柔らかな部分に勃起を押しこむと三浦の目の光が霞み、劣情で上気した音が唇から漏れ出る。腰をぐいぐいと押し込むとスカートの下の柔らかさが増し、三浦はますます蠱惑的に身体をくねらせる。鼻腔をくすぐる吐息がどんどん熱くなり、頭がおかしくなりそうだった。
「……ねえ、脱いでいい？」
三浦の言葉に目を見開く。『もっと先のこと』と三浦が言っていたが、いざこの場面が来ると俺まで緊張してしまう。
「ああ、どうぞ」
声が上ずりそうになりながら返事をすると、三浦はスカートの中を隠しながらもぞもぞと両脚を戻す。これから脱ぐのにわざわざそんなことをしなくても……とは思うが、雰囲気が大事なのだろう、きっ

と。
　ぺたりと女の子座りになった三浦が、ブラウスのボタンに手をかける。俺の顔をちらちらと上目遣いで見つめ、ぷいと顔を逸らし、徐々に外れていくボタンをちらりと見て、また俺の顔を見て……と、せわしなく動くさまが可愛らしくてしょうがない。
　ようやくブラウスのボタンを全て外し、静かに脱ぎ捨てた。
「……っ」
　三浦のブラは、可愛らしいピンクのフリルがついたものだった。教室で見る彼女の印象とは程遠いが、ふたりきりでいる時の可愛らしく甘えてくる態度を知っているとこの下着が破壊的なまでに似合っていると思える。
「……すげえ、似合ってる。可愛い」
　耳まで真っ赤にして、上目遣いで何かコメントしろと言わんばかりに見つめてくる三浦に、つっかえながら思ったままのことをつぶやく。
「……変じゃ、ない？」
　普段から見た目にも気を遣っている三浦とはかけ離れているような、まるで自信のない声音。こんな一面を見るとこの子のことがまた好きになる。
「ぜんぜん変じゃないぞ。すげえ良い」
　顔を左右に振って全力で肯定すると、
「……ばか」
　顔を逸らしてぽつりとつぶやかれた。なんで？　なんの照れ隠しなのか、ブラウスを投げつけられた。ぼふっと顔に当たるとともに信じられないほど良い匂いがしたが、これ以上嗅ぐと確実に変態認定されるのでやめておいた。どちらにせよもう手遅れだとは思うが。
　三浦は腕で胸を覆ったまま立ち上がり、俺のことをじっと見つめてきた。え、なに、見下したいの……？　と思ったが、なにやら泣きそうな顔をしている。
「ヒキオ。その位置だと……その、すっごい恥ずかしいんだけど」
「え？　……ああ、なるほど」

俺があぐらをかいて座り、三浦が立っている。この状況では、三浦の大事な部分が俺の目の前にきてしまう。
「そうだな」
「い、いや、そうじゃなくて……っ」
三浦が羞じらうのは分かるが、それがまた可愛いので譲れない。俺が頑として動こうとしないことに諦めたのか、「ほんとにばか、ドスケベ……」と罵りの言葉を可愛らしくつぶやきながらスカートのホックに手をかける。
金属のかみ合わせがほどける控えめな音とともに、スカートが床に落ちて乾いた音を立てた。
――ブラと同様の、可愛らしいフリルがあしらわれたピンクのショーツ。可愛らしいと同時に、しっとりと濡れた生地が下腹部にぴったりと貼りついているのが妙に生々しい。鼻腔を包む匂いに濃厚な牝の気配が混じった。
「……綺麗だ」
ぽそりとつぶやくと、三浦が瑞々しい身体をぶるりと震わせた。
「……ありがと」
消え入りそうな声で返事をすると、三浦がぺたりと座った。
「ね。……寒いんだけど」
「……はいはい」
おねだりをする子どものような声音が可愛らしい。にじり寄って抱きしめると、先ほどと同様にしゅるりと両脚を巻きつけてきた。キュッと抱きしめると、耳元で安心したような吐息が漏れる。
「よかった……変とか、似合ってないとか言われたらどうしようと思ってた」
「そうなのか。三浦なら何を着ても似合うと思うんだが」
三浦が目をぱちくりとさせ、チュッと口づけしてきた。流れがいまいち分からないがとにかく可愛い。
「似合ってる？」
「ああ、ほんと似合ってる」
「可愛い？」

「ああ、めちゃくちゃ可愛いぞ」
おでこ同士をくっつけた状態で三浦がぽつりぽつりと尋ねてくる。なんだこの可愛い生き物は……とテンションが上がってしまい、舞い上がったまま褒めちぎる。なんだか顔が熱くなってきた。
「……興奮する？」
「……それは、もう……」
三浦の声がいたずらっぽくなる。腰がくんっと寄せられて、硬い膨らみに柔らかな部分がふにゅりと押しつけられた。三浦の口から漏れ出た湿った吐息が唇を濡らす。
「……ヒキオ、さっきよりおっきくなってる」
いたずらっぽくて、少し子供っぽさもある声音。なのに言葉は淫猥そのもので、自分が感じるのもいとわずにもぞもぞと腰を揺らす。くにくにと下腹部がこすり合わされてぞくぞくとする。
「うあ……っ」
ブラ越しに乳房にそっと触れると金の髪が揺れた。１０本の指を波打たせて、指の腹をそっと這わせていく。
「んっ、あっ、やぁっ……ヒキオ、手つき、やらし……んふぅう……っ」
可愛らしいフリル越しにたっぷりと撫で、乳房の上の部分で露出しているところをそっと指を這わせていく。三浦は指を咥え、おとがいを上げて背すじを弓なりに反らした。ぞっとするほど艶めいた仕草に、知らず知らずのうちに生唾を嚥下する。
「ん……あっ、はぁぁぁ……んくぅぅっ!?」
左手は乳房に這わせたまま右手でそっとショーツに触れると、甘ったるい嬌声が一段跳ね上がった。ショーツをくにくにと押すと卑猥な湿り気を感じる。
「はっ、はぁぁ……っ、ヒキオ、だめ、それ、待って、あっ、あぁぁ……っ」
三浦が指を咥えたまま、へなへなと左手を後ろについて傾く。女性としての魅力に溢れたスタイルを惜しげもなく晒しているさまは、まるでなにかの淫猥なショーを見ているような気持ちにさせられる。
柔らかな谷間に顔をうずめると、ほんのりと汗の混じった甘ったるい匂いに包まれた。左手でふにふにと乳房をまさぐり、右手でショー

ツの湿った部分をくにくにと何度も押しこむ。土の下から水が染み出すように、下腹部の湿り気と濃密な牝の匂いがじわりじわりと増していく。
「あっ、うぁっ、だ、め、ほんとに、これ……あっ、あふぁぁ……っ」
三浦が咥えていた指を離し、両手を後ろにつく。だめと言いながらなにも抵抗せず、艶めかしく身体をくねらせるのがたまらない。下着越しだとより感じやすいのか、胸も下腹部も羽が触れるようになぞるだけでびくびくと戦慄く。寒いと言っていた肌からはじっとりと汗が噴き出し、ショーツの染みが徐々に広がっていき、にゅく、ちゅく……と卑猥な感触が指から伝わってくる。あまりの興奮に、亀頭の先から先走り液が断続的に溢れ出してパンツを濡らしていく。
「はぁぁ……んっく、はっ、あっ、はぁぁ……ね、ヒキオ……んんん……っ、ヒキオってば……あっ、はぁぁぁ……っ」
「ん……ああ、わるい。どうした？」
初めて見ることができた恋人の下着姿を夢中で貪っていて、つい反応が遅れてしまった。愛おしげにすりすりと頭を撫でられて初めて返事をすることができた。三浦は俺の反応の遅さに困ったように笑い、しっとりと潤んだ瞳で見つめてきた。
「……これも、脱いでいい？」
「……っ」
今までずっと見ることができなかった下着姿を見られただけでも充分で、今日は、いや、しばらくはひたすら下着姿を堪能しよう……と思っていたのだけれど。
三浦は、さらにその先も望んでいたらしい。
切実な、それでいて耳に届く前に消えてしまいそうなほどか細い言葉に、下腹部がぶるりと戦慄き、鈴口からカウパー液がこぷりと溢れ出る。
こくりと頷くと、三浦は綺麗な顔をくしゃりと歪めて、泣いているような笑みを浮かべた。
続く。

（５４）

下着を脱ごうとすると、ヒキオの視線が気になった。

（……見すぎだし……）

ヒキオは先に服を全部脱いであぐらをかいてる。あーしのことを見ている目が、なんだか少年のようにキラキラしているのに……アソコががちがちに硬くなってる。今まで何回どころか何十回も口に入れたモノ。シャワーでちゃんと洗ったあとに舐めたこともあれば、たくさん汗をかいた状態で舐めたこともあった。口のなかに広がる、今までに嗅いだことのなかった香り。これが男の人なんだと強く実感するたびに、身体の奥底が疼いてしまっていた。

（……ヒキオ、苦しそうだし、先に舐めてあげても……）

思いかけてぶんぶんと首を振る。あーしは何を考えてるんだ。数ヶ月前までならこんなことを考えること事態あり得なかったのに。ヒキオがあーしの行動を見てはてと首をかしげてる。ちょっと可愛いと思ってしまった。悔しい。

「……じゃ、脱ぐ、から……っ」

自分の声ってこんなに掠れてたっけ……？　と恥ずかしくなった。ヒキオはこくりと頷き、ごくりと喉を鳴らす。自分の喉にはあまり見えない、大きな喉仏が上下するのが見えてドキリとする。

手を背中に回してブラのホックを掴む。ドキドキしすぎて、肘から先がまるで自分じゃないみたいに震えて言うことを聞いてくれない。カチッとホックが外れると、ヒキオがまた喉を鳴らした。楽しみにしすぎだし……と呆れたように笑おうとしたけど、できなかった。

「……っ」

床にブラを落とすと、ヒキオの視線の圧力が増した気がした。あーしはまだ手で胸を覆っているけど、ヒキオはまるあーしの手を透かして見ようとしているかのよう。目を泳がせ、ヒキオの顔をちらりと見て、また目を泳がせる。自分から脱ぐと言っておいて、ここで手をどけない選択肢はなかった。

手をほんの数センチ動かすことに、こんなに緊張したことなんてな

かった。
「……っ」
ヒキオが目を見開いた。あーしからすれば何の変哲もない、綺麗な形が崩れないようにそれなりに気を遣ってきた胸。じっとりと汗をかいていて、夏場にお風呂から上がった時のように火照ってる。
胸の先端を見て、びくりと固まった。
胸の先端――乳首が、ぷっくりと膨らんでいた。ヒキオをよく見ると、先っぽをじっと見つめているようだった。
（待って、だめ、見ないで、そんなに見ないで……っ）
自分から脱いでおいて言えるはずもない。けれど、たまらなく恥ずかしい。ヒキオの視線が先っぽに突き刺さって、身体の隅々までじわじわと広がっていくような感覚。見られているだけで震えてしまう。寒さとか、緊張が原因ではない震え。頭がおかしくなりそう。
「あ……っ」
ヒキオが呆けた声を出した。視線を向ける先は変わっていない。なんだろうと思ってもう一度膨らみの先端を見て固まった。
ヒキオが見ている目の前で、まるで植物の芽吹きを高速再生しているかのように――乳首がさらにぷっくりと膨れた。
（やだ……っ）
ウソだ、と思った。恥ずかしすぎて死んでしまいそうだ、とも。
だって、『あなたの視線で興奮しました』と言っているようなものじゃないか。いや、『ようなもの』ではない。言っている。あなたに見られて興奮してしまいました、って。
ショーツのなかで、熱いものが溢れた。
「うぅぅ……っ」
泣きそうになって顔を両手で覆う。ヒキオの視線が顔に、胸に突き刺さる。身体が震えている。緊張でも、寒さでもないなにかで。ヒキオは無理やり続きを促してきたりはしないけど、「やっぱりやめよう」とも言わない。あーしが引かないことをきっと分かってるから。
そっと手を離すと、ヒキオが気遣わしげに見つめてくれていた。あ、ちょっと胸を見た。慌てて視線を上にずらしてる。ちょっとだけ

可愛い。
「……スケベ」
「うぐ……っ」
　ヒキオをからかう自分の声に思ったよりも余裕があって驚く。
「……じゃ、下も脱ぐから。感想はその時にまとめて言って」
「お、おう、そうか」
　てきぱきと言葉を口にするけど、ショーツに引っ掛けた手は震えている。ヒキオと正面から向き合ったままショーツをずり下げ、片足ずつ脱いでいった。下着一枚のはずなのに今日はいつも以上に重い。自分がどれだけ興奮していたかを示す分かりやすい証になってしまっていてひどく恥ずかしい。床に置くとぺしゃりという音がして、ひどく恥ずかしかった。
「……ど、どう？」
　顔を上げると、ヒキオはなにやら固まっていた。ぽかんとしていてちょっと間抜けだ。鳩が豆鉄砲をくらったような……というのは、こういう顔を言うんだろうか。
「……だ」
「え？」
「……綺麗だ」
「……っ」
　消え入るような声で囁かれ、顔が、耳が、首が、身体が一気に熱くなる。思わず一歩二歩と後ろに下がると、太もものあいだでくちゅりといやらしい音が鳴ってしまった。
　ヒキオがあーしの目を見つめる。視線がゆっくりとすべっていって、あーしの髪、顔、首、肩、胸、お腹、腰、脚、足……とじっと見つめていって、最後に脚の付け根をじっくりと見てくる。
「ま、待って、そんな、見んなし……」
　なんとか言葉で抵抗するけれど、意図していた声の何分の一の大きさでしか聞こえない。ヒキオは大人しく聞くわけもなく、じっと、ただじっと見つめてくる。いやらしさもあるけど、それ以上に純粋な目。見惚れてくれているのだと分かってどうしようもなく嬉しくて、

恥ずかしくて、立っていられなくなるほど身体が疼く。
「三浦。……本当に、綺麗だ」
「うあ……っ」
ヒキオが立ち上がって、真剣に見つめてくる。普段制服を着ている時はあまりイメージがないけれど、思ったよりもがっしりしている身体にドキリとする。耳に入ってくる言葉がとろりと脳に染み込んで、顔がくしゃりと歪んでしまう。
「きゃ……っ」
ヒキオの手が二の腕を掴んできた。
恥ずかしくて、嬉しくて、立っていられなくて、幸せで。
あーしはもう、わけが分からなくなっていた。

× × ×

ちょっと可愛すぎて死にそう。
三浦の二の腕を掴んだ時、ふと思った。
一糸まとわぬ姿になった三浦は、羞じらう仕草も相まって、小学生の時に美術館で見惚れた絵画のように綺麗だった。絵画のように綺麗だが、可愛げと色っぽさが伴っていてもっと生々しい魅力をまとっている。畏敬と劣情が入り混じった複雑な感情が胸に渦巻いていた。
「うあ……やぁ……っ」
三浦がちらりと下を見て、泣きそうになりながら顔を逸らす。肉槍からは先走りの汁が滲んで竿の根本まで垂れ落ちていた。
三浦の背中に腕を回してギュッと抱きしめ、互いの肌を密着させる。濃密な牝の匂いが鼻腔を貫いて、ぐらりと視界が揺らいだ。
「う……あ……っ」
耳元でか細い声が漏れた。
初めて見る三浦の一糸まとわぬ姿は見るだけでも極上だったけれど、触れてみるとさらに陶然とした。瑞々しい肌は柔らかいのに弾力があり、自分と同じ人間であることが信じられないほどだ。ふわりと漂う甘やかな匂い、儚げな吐息、そっと背中に添えられる細指。感覚が一つ、また一つと三浦に包み込まれていく。
「ま、待って、ヒキオ、だめ、待って、なんか、変、あーし、変なの……っ」

三浦の声は今にも泣きそうだった。
「どうした」
「わ、わかんない、わかんないけど……ぅあぁ……っ」
腕のなかで三浦が身じろぎする。ふにりと柔らかなへそには勃起した肉槍の裏スジが押し付けられていて、まるで三浦は性感帯を責められているかのようにもじもじと身体をくねらせる。抱きしめているあいだに三浦の体温が仄かに上がった気がした。
「うあぁぁ……っ!? ちょ、ヒキオ、だめ、そんなに、触んないで……はあぁぁぁぁ……っ」
すべすべの背中やくびれた腰、弾力のある尻をそっとまさぐると、三浦は全身をがくがくと戦慄かせ、ずるりと崩れ落ちそうになった。
「気持ちいいのか？」
倒れないように両手で尻をしっかりと掴み、ふにふにと揉みながら尋ねる。三浦は顔を真っ赤にしながらも、整った眉を時折切なげに歪めて唇を引き結ぶ。裸で肌を重ね合っているためか、今まで見たことがないくらい敏感になっているようだ。
「ば、ばか、変態、ドスケベ……んくぅぅ……あっ、ふぁっ、さ、触りかた、やらしいんだって……あっ、あっ、ぅあっ、だめ、だめ、だめ、だめぇ……っ」
顔を上げて涙目で可愛らしく睨んできたが、尻を開いて閉じるのを繰り返すとくびれた腰ががくがくと前後に揺れた。俺の胸板に顔を押し付け、熱い吐息を吹きかけ、瞳をぼうっと蕩けさせている。
「んむ……っ」
あごをくいと上げて唇を奪い、首から尻にかけてゆっくりとまさぐっていく。
「んむふぅぅ……んっ、ちゅるっ、へぁっ、やっ、だめ、だって……んふぅぅ……れるっ、ふっ、んふぅぅぅ……っ」
だめ、と言いながらも瞳はたっぷりと糖度をまとっていて、俺の首に両腕を回して甘えるように抱きついてくる。俺の手が背中を行き来するたびに悩ましく身体をくねらせ、くねらせるたびに劣情を舌にうつしたかのようにねっとりと絡めてくる。

「んふぁぁ……ヒキオ、おっきくなりすぎだし……んふぅぅ……っ」
抵抗の言葉さえなくなり、嬉しそうに目を細める。がちがちに張りつめた肉茎の感触にいたずらっぽく笑い、柔らかな腹でふにふにと刺激してくる。肌と肌に挟まれる興奮と快感でカウパー液が次々と溢れ、たっぷりと陰毛を浸していく。
触れ合う肌が焼けるように熱い。冬も間近だというのに、暖房を点けているとはいえ全裸になっているのに、じっとりとかいた汗の粒が重なり合って交わっていく。
「んちゅ……れるっ、はぷっ、んふぅぅ……っ」
三浦の瞳から羞恥の色が薄れ、代わりに濃厚な劣情の色が塗りこまれていく。自覚があるのかは分からないが、腰を前後左右にくねらせるさまは恐ろしく淫靡で、一秒ごとに牡の劣情を煽るような妖艶さが醸し出されている。
「……ぷはっ。……おっきい……っ」
唇を離した三浦が、青筋立った肉槍を見てとろんと目を細める。
「う……お……っ」
細指を肉槍にそっと絡め、空いた手で乳首をまさぐってくる。
「……ちゅっ」
「くぁ……っ!?」
発情のスイッチが完全に入っているのか、三浦はもう片方の乳首に吸い付いてきた。指の腹と固めた舌先で乳首を愛撫して、先走り液がたっぷりと溢れた肉幹をねっとりとまさぐってくる。腰を引こうとすると、カリのくびれを指で作った輪で締めつけて止められた。
「こ……の……っ」
これまでに恐ろしいほどの興奮を積み重ねていたため、このままでは数分と持たずに果ててしまいそうだ。反撃を……と思い、じっとりと汗ばんだ乳房を下から掬うようにそっと触る。
「ひぁっ!?」
手の指がふにりと柔らかな肉の中に沈むと、三浦が可愛らしい悲鳴を上げて口を離した。三浦の乳房はどこまでも指が沈むが、力を抜くとぷるんと元の形に戻る瑞々しい弾力を備えている。

「ふっ、くぅっ、んふぅぅ……っ、こ、この……っ、ちゅっ、ちゅぴ……っ」
痛くはしないように注意しながらも夢中でまさぐっていると、三浦が喘ぎながらも唇を重ねてきた。両手でふたたび肉茎と乳首をまさぐってくる。にゅるり、にゅるりと舌を絡ませ、互いに腰をがくがくと揺らす。三浦の下腹部から漂う甘酸っぱい匂いが濃度を増して鼻腔を犯す。
「……ぷはっ、はっ、はっ、はぁぁ……んっ、あんっ、あっ、あっ、あ……っ」
唇を離し、見つめ合いながら互いに愛撫を続ける。にちゅにちゅと肉幹をしごかれて俺が眉をひそめると三浦は泣きそうな笑みを浮かべ、三浦が淫靡に腰をくねらせて嬌声を漏らすと細指の中で肉竿がビンと跳ねる。螺旋のように興奮を巡らせていく。
――もっと。
「……そろそろ、ベッドに行くか」
――もっと、もっと。
「……うん」
――もっと、もっと、もっと。
三浦の身体を、心を、貪りたい。貪り合いたい。
潤んだ瞳で俺を見つめながら、三浦はこくりと頷いた。
続く。

（５５）

ベッドに上がると、三浦はすらりと伸びた脚を流して座った。互いの身体を愛撫しあってからほんの１０秒も経っていないというのに、まるで淫靡な時間の記憶がすっぽりと抜け落ちたかのように胸と下腹部を隠して羞じらっている。

三浦がしっとりと潤んだ目で見つめてくる。こくりと頷くと、枕に頭が乗るように仰向けになった。

さあ、丁寧に、優しくするぞ……と意気込みながら三浦に覆いかぶさろうとすると。

「ヒキオの匂い……」

「……」

三浦さん、なにやら横を向いて枕の匂いを嗅いでらっしゃる。やめてやめて、小町が「お父さんと洗濯物を一緒にしてほしくない」と小学2年生で言った時の父親の顔を思い出しちゃう！

「……変な匂いはしないか？」

「ん、だいじょうぶ」

だいじょうぶってなんですのん？

すんすん、すんすんと可愛らしく鼻を鳴らして目をとろんと細めている三浦が、いつの間にか腕で身体を隠すのをやめている。思わぬ方法でリラックスしてもらえたようだ。いつも俺の部屋に来るとどこかしらの匂いを嗅いでますね、あなた。

そっと太ももに触れると、三浦のしなやかな身体が震えた。

「……ぁ……っ」

太ももをすりすりと撫でると、三浦が悩ましく身体をくねらせた。すがるように枕を掴んだことで露わになった、すべすべの腋に見惚れる。

「三浦……」

太ももを撫でていた手を徐々に内ももにすべらせていき、脚を開くように促す。三浦がショーツを脱いだ時は立ったまままさぐりあっていたので、まだきちんと女性器を見ていない。油断すると溢れ出し

て暴走しそうになるほどの興奮が身体の中を暴れ回っていた。
「う……っ、ちょ、ちょっと待って、ヒキオ……っ」
三浦がか細い声で囁くが、俺の頭をくしゃくしゃと撫でてくるだけでそれ以上の抵抗はしてこない。内ももに添えた手で少しずつ脚を開いていく。
「だ、だめ、だめだって、待って、待って、もうちょっと……っ」
可愛らしく羞じらう声がたまらない。かえって俺の興奮を助長しているのだと気付いてほしい。ぐぐっ、ぐぐっと開いていき、甘酸っぱい匂いが少しずつ鼻腔を満たしていくと――
「だめ、だってば……っ」
――脚をぱっくりと開いた瞬間、三浦が両手で綺麗に隠してしまった。濃厚な甘酸っぱさと湯気のような熱気は感じるものの、肝心の女性器が見えない。
「……そんなに恥ずかしいのか？」
「……恥ずかしいから隠してんでしょ。ばか、ドスケベ、変態……っ」
「……」
……頓死しろ、とか言われそうな勢いだ。
無理やり手をどかすのもよくないと思い、上体を起こす。
ふむ。
――全身を度重なる興奮でたっぷりと上気させ、しっとりと汗ばみ、瞳は潤み、綺麗な唇をきゅっと引き結んだ恋人が……すらりと伸びた脚を開いて己の秘部を両手で隠し、乳頭がぷっくりと膨らんだ乳房を晒している。
「……」
……。
……エロ漫画だったら一瞬で押し倒してる状況だな、これ。たぶん4ページくらい後でフィニッシュしてる。長くて8ページくらい。
「……そうか、恥ずかしいのか……」
「え、あ、なに……ひゃんっ!?」
陰部を隠す手を無理やりどかすのではなく、三浦が手をどけざるを得ない状況を作ることにした。乳房にそっと手を伸ばし、羽根が触れ

るようにさわさわと撫ではじめる。
「あっ、やっ、こらっ、んっく、ぅあっ、はぁぁ……っ」
とっさに片手を離して俺の手を掴んでくるが、愛撫する2本の手を同時に止めることはできない。俺の左手を止めているあいだに右手で乳輪をすりすりと爪でなぞり、右手を止めてくれれば左手でこよりを作るように乳頭をつまむ。双丘を腕で隠せば下から掬い上げるように揉んで悶絶させる。
挿入まで至っていないものの、かれこれ2ヶ月は三浦の身体をたっぷりと愛撫してきた。感じやすい場所、感じやすい触り方はそれなりに把握している。下乳を掬い上げるようにして触っても感じるようになったのは最近のことだが、いずれにせよ三浦が片腕では俺の愛撫をまったく止めることができないことは明白だ。
「やっ、あんっ、くぅ……っ、はっ、はぁぁ……っ、……あっ、えっ!?
やっ、そっち、触るなぁ……っ!」
左手を乳房の愛撫のために残し、右手は陰部を隠している三浦の手の上にかぶせた。三浦の手ごと淫裂を愛撫するように、細指をくにくにと押し込んでやる。とろとろに熱くほぐれているであろう花びらに三浦の指が食い込む。
「んくぅぅ……あっ、あっ、だめ、あっ、ぅあっ、はぁぁぁ……っ」
三浦が耳まで赤くして、白い首に筋を浮かべてよがる。まるで三浦の自慰を手伝っているかのような状況だ。陰部を隠す三浦の指が時折開いて、微かに薄紅色の女性器が見える。
「はぁぁ……はぁぁぁ……っ」
三浦の表情から理性が薄れていく。乳房を愛撫する俺の手をそっと掴むだけになり、陰部を隠す手は俺にされるがままに波打ち、にゅちにゅちと卑猥な音を立てていた。
「ま、待って、本当に、ちょっと……っ」
三浦が切実な声で訴えてきたので手を離す。陰部を隠す手だけはそのままに、三浦は空いた腕で目を覆って艶っぽく息を荒げた。
「……その、ごめん……」
「……どうした、急に」

てっきりもっとなじられるのかと思ったので、三浦が口にした言葉にきょとんとする。目を隠していた腕をどかし、ちらりと俺を見つめてくる。
「……今まで散々待たせたのに、ここまで来たらまた恐くなっちゃって……」
三浦の言葉に胸がキュッと締め付けられる。
「ペースなんて人それぞれだから気にしなくていいぞ。口でなら数えきれないくらいしてもらってるしな」
「な……っ!? わ、わざわざ言うなし……っ」
三浦が慌てて起き上がる。陰部を隠す手をどかしてしまいそうになり慌てるさまが可愛らしい。
「あ……っ」
脚をぴったりと閉じて女の子座りになった三浦が、鈴口から我慢汁がこんこんと溢れ出している肉幹に目を奪われた。こくりと細喉を鳴らす音に身体が熱くなる。
「……やり慣れたことをして、ちょっとリラックスするか」
「……ばか」
三浦が可愛らしく罵ってくるが、その視線は目の前でひくつく肉槍に縫い付けられていた。

× × ×

三浦がベッド際で女の子座りになり、俺はベッドのすぐ横に立って勃起した肉茎を三浦の眼前に差し出していた。みちみちと張りつめた剛直に、三浦はとろんと目を細めている。三浦の脚は開いているのだが三浦が下腹部の前に両手をついているため見ることはできない。まるで物心のついていない少女のような可愛らしいポーズをしながら、眼前につき立つ肉幹の匂いをしきりに嗅ぐさまがぞくぞくとするようなギャップを生み出している。
「ヒキオの……すっごくおっきぃ……。今まで一番おっきい気がする」
「そりゃ、三浦の裸を見たらでかくもなるって」
「……っ」

目の下をほんのりと染めていた朱色が頬にまで広がる。
「……ばか。……ん……っ」
「くぁ……っ」
綺麗な唇が鈴口に吸い付く。ついばむようなキスをして唇を離すと、鈴口と唇のあいだに透明なカウパー液の糸が伸びた。
「興奮しすぎだし……ちゅっ、ちゅぴっ、ちゅるっ、ちゅるる……っ」
「おっ、あぁっ、くっ、うぉ……っ」
両手を脚のあいだについたままで、反り返った肉槍の切っ先に何度も口づけしてくる。先走りを美味しそうに啜り、亀頭の裏側を舌の腹でねっとりと舐めあげていく。顔を傾け、カリのくびれに舌を這わせていく。身体をぶるぶると震わせると、三浦が嬉しそうに目を細め、亀頭をぱくりと咥えた。
「んふぅぅ……あむっ、ふっ、んふぅぅ……っ」
カリ首を唇でぴっちりと締めつけ、固めた舌先で鈴口を丁寧に、入念に、執拗なほどつついてくる。
「お……あ……っ」
尿道口をほじくられる快感に思わず腰を引こうとするが、三浦が唇でぎゅむっとカリのくびれを締めつけて逃がしてくれない。尿道を突き抜ける快感にがくついていると、熱をまとった口内粘膜が亀頭全体を舐め溶かすかのようにねっとりと舐めあげていく。
ねろっ、ねろりと舌が這い回り、時折不意を突くように鈴口をほじくる。先走り汁がびゅるっ、ぷびゅるっ、と溢れ出し、そのつど三浦の細喉がこくりこくりと鳴る。
……今の三浦なら、もっと大胆になれるんじゃないか……？
愛撫されながらも陰部を晒せなかった三浦だが、今は慣れ親しんだ口淫に耽ってどんどん大胆で淫らになっている。
それならば……と、綺麗な金の髪をくしくしと撫でた。
「三浦。……まだ見せなくてもいいから、自分でいじってみてくれるか。上と下を」
俺の言葉に三浦がぴたりと動きを止める。亀頭をぬむりと咥え込んだままでどこか恨めしげな視線を上目遣いで向け、亀頭をねろりと

舐めあげて口を離す。不意打ちの快感でこぼれでたカウパー液をちろりと舐めとると、三浦が恥ずかしそうに視線を逸らした。
「……それ、余計に恥ずかしくない？」
「んー……俺に直接見せるよりは恥ずかしくない気がしたんだが……。今までも舐めながら自分でいじることあったぐおっ!?」
肉茎の根本をぎゅっと握られて変な声が出た。
「わざわざ言うなし……っ」
「す、すまん……くぁ……っ？」
ぷるぷると震えながらまるで恐くない顔で睨んできたかと思うと、肉幹を掴んでいた手を離してふたたび亀頭を咥え込んだ。赤く膨らんだ切っ先ににゆるにゆると舌を這わせながら、徐々に奥まで呑み込んでいく。
「お……おぉぉぉ……っ」
三浦の羞恥心を少しでも取り除くためになにかできないか……と考えていた思考が、下腹部を包み込む生温かい快感の波であっという間に削られていく。
「ん……ふっ、んふぅ……んっ、ん……っ」
「……？」
三浦の吐息が急に荒くなっている。
視線を下に向けると、いつの間にか三浦の手が自分の乳房と淫部に添えられていた。
「ふぅぅ……っ、ぢゅるっ、れるっ、はぷっ、んっ、んふぅぅ……んむふぅぅ……っ」
「お……あぁ……っ」
三浦のなかで、俺に直接見せるよりは恥ずかしくないという判断がくだされたのだろうか。耳を澄ますと、くちゅ、にちゅ……と卑猥な音がかすかに聞こえる。三浦の指が踊るようにして淫裂に食い込み、もう片方の手で乳頭をにちにちとつまんでいる。俺が触っている時よりも荒々しい触り方だ。
「……三浦。めちゃくちゃエロいぞ」
「んふぅぅ……んふぁぁっ!? あっ、あっ、んっく、ひぁ……ちゅっ、

れるっ、ちゅぷっ、ぢゅろ……っ」
右手で三浦の頭を撫でながら、左手で三浦の空いている乳首をキュッとつまむ。三浦の手と同じくらいの強さでにちにちとつまむと、三浦の唇から艶めかしい嬌声が漏れでた。
「三浦、めちゃくちゃいやらしい音が鳴ってるぞ」
「……ぷはっ。……ヒキオだって、すっごい興奮してるくせに……っ」
俺の言葉に耳まで真っ赤にした三浦が、拗ねたように尖らせた唇で鈴口を強く吸う。三浦の身体が徐々に汗ばみ、にちにちと卑猥な音がなる下腹部から甘酸っぱい牝の匂いが立ちのぼってくる。
三浦の自慰の手つきが激しくなるにつれて口淫に耽る動きが激しくなり、内頬をぴったりと竿にくっつけたままで顔を前後に動かされると、射精欲求がむくむくと湧き上がってきた。三浦の顔の動きに合わせて腰をかくかくと揺らしてしまう。
「三浦……そろそろ出そうだ……っ」
「んふぅぅ……ちゅっ、ぢゅるっ、じゅろろっ、じゅぷっ、んむふぅぅ……っ」
唇と舌と頬と唾液が立てる音と、艶めかしい嬌声と、くちゅくちゅと鳴る淫靡な自慰の音が重なりあう。指でつまんだ乳頭は痛いほどに張り詰め、三浦自身が限界寸前まで高まっていることは身体の震えで分かった。
「出る、出る、出る、出る……っ」
睾丸がせり上がり、竿の根本が激しく疼く。薄桜色の唇にカリのくびれをぴっちりと挟まれた瞬間――下半身が決壊した。
「――んふっ、んっぐ、んっ、んっ、んふぅぅ……んぁっ、はぁぁぁ……じゅるっ、じゅるるる……っ、ぢゅろっ、じゅるるる……っ」
「お……ぁ……ぅ……おぉぉぉぉ……っ」
壊れた蛇口のようにどぶっ、ごびゅるるっ、と大量の白濁が鈴口から噴き出す。三浦は自慰の手つきを速めながら肉幹を貪り、ごくごくと細喉を鳴らして呑み込んでいく。
「んくぅぅぅ……っ」
射精の脈動が終わったかと思ったタイミングで、三浦が肉幹を唇で

締めつけてぴたりと止まった。何事かと思っていると、目をきつくつむってぶるぶると震えている。三浦自身もイったのだと気付いた瞬間、もう2、3度下腹部が脈動して精液が噴き出した。
「……はっ、はぁっ、はっ、はっ、はぁぁぁ……っ」
尿道に残った精子を余すことなく啜りとると、ようやく唇を離した。射精しているなかでもねっとりと舐められ続けたため、唾液でぬらぬらと光る肉幹はいまだに硬度を失っていない。三浦は愛おしむように亀頭にちゅっ、ちゅぴっ……と何度か口づけをした。
「……エロすぎるだろ……っ」
汗ばんだ金の髪をくしくしと撫でると、我に返った三浦が赤面した。
「……ヒキオがわるい」
なんでですのん？
ここで反論すると拗ねられそうなのでやめておいた。
よろよろとベッドに寝転がると、三浦が肉幹をさすりながら乳首にキスをしてきた。ごく自然にエロいことをしてくることに驚く。
「ちゅっ、ちゅぴ……っ。……ヒキオ」
「ん、どうした」
「……今なら、だいじょうぶかも」
三浦がぽつりとつぶやき、己の下腹部をちらりと見つめる。
「無理はしなくていいんだぞ」
「ん、わかってる。……なんていうか、その……」
「……ん？」
「……ヒキオに、ぜんぶ見せたい」
「……っ」
掠れた声で囁かれた言葉に、心臓が静かに大きく跳ねた。
続く。

（５６）

三浦が仰向けに寝転がる。俺がひざにそっと手を添えると、下腹部を手で隠しながらもゆっくりと脚を開いた。

「……っ」

顔を真っ赤にした三浦が片手で淫部を隠す光景にぞくりとする。空いた手はすがるように俺の手に重ねていた。むずがゆいような愛おしさが湧く。

「三浦。いいんだな？」

下腹部を隠す三浦の手を撫でながら問いかけると、かすかに震えながらうなずいた。無理はさせたくないが、ここは思いきりの良さも必要だろう。

三浦の手を掴んで、下腹部からそっと離した瞬間――これまでの興奮をありありと示すような、甘酸っぱくて濃厚な牝の匂いが鼻腔を貫き、頭蓋をぐらりと揺らした。脚を開いていることで小陰唇が開き、綺麗な薄桜色の粘膜が見えている。クリトリスは包皮をかぶっていて、恥丘には綺麗に整えられた陰毛が控えめに生えていた。

「へ、変じゃ、ない……？」

生で初めて見る女性器に見惚れていると、三浦が掠れた声で尋ねてきた。腕で目元を覆い、身体をかすかに震わせている。

「綺麗だ」

「……っ」

思ったままの言葉を口にすると、引き結ばれていた唇が震えた。

「三浦、顔が見たいんだが……」

未だに顔を隠しているので、ちょっと会話がしづらい。控えめに呼びかけると、顔を覆っていた腕をそっと外した。目尻に涙をためた今にも泣き出しそうな顔。庇護欲と同時に嗜虐心まで湧いてしまい、暴走しないように懸命にこらえる。

「触っていいか」

「……うん」

静かな部屋の中でぎりぎり聞き取れるような、今にも消え入りそう

な声。目を合わせながらうなずくと、三浦の股座で上体をかがめ、恥毛の生えている部分をそっと撫でた。
「ん……っ」
三浦の反応をつぶさに観察する。なるべく痛い思いをさせたくないし、俺が触っているから……と遠慮して意思表示をしないという事態も起こしたくない。慎重に、慎重に、そっと指を這わせていく。
「ん……はぁっ、んっく、んん……っ、……ヒキオ、さわり方、やらし……っ」
「……」
親の心子知らず、ではないけれど。
俺の意図が違う方向に解釈されていた。
だからといって雑に触るという方針に変えるわけにもいかないので、恥丘、大陰唇、小陰唇とゆっくりと指の腹をすべらせていく。三浦の反応は淫部の中心に近づくほど大きくなり、発情臭がむわっと立ち込めてくる。
「んっ、ふぅぅ……あっ、はぁっ、はぁぁぁ……っ」
三浦の身体から徐々に強張りが抜けていき、代わりに艶めかしく腰をくねらせはじめる。普段からケアを怠っていないであろう美しいくびれが、俺の手の動きに合わせて色っぽく揺れるさまがたまらない。興奮で手つきが荒くなるのを必死でこらえつつ、何度も何度も淫部をまさぐる。
「……三浦、ちょっと恥ずかしいことを聞くんだが、いいか？」
「……それ、断りようないでしょ……。なに？」
「ひとりでする時、どこを触ってる」
頭をぺちっとはたかれた。ぜんぜん痛くない。
「……ヒキオ、あんたってばかなの……？」
頭をぐしぐしと撫でながら尋ねてくる。恥ずかしいやら怒っているやらで、なんだか複雑な表情をしていた。
「ええと、俺もこんなこと聞かれた絶対いやなんだがな。ただ、三浦が普段からいじってる場所を知っておいたほうが三浦がリラックスできるかなと」

「……それを聞いてどうすんの？」
「優しく集中的に責める」
俺の言葉に、三浦の顔が一瞬で茹だる。俺の頬をむにりとつまみ、ぐにぐにと引っ張ってきた。うにー。
「……信じらんない、ばか、変態、ドスケベ、ムッツリスケベ、スケベ、えっと……ド変態」
類語のオンパレードである。
さすがにこれは答えてもらえないかな……と思っていると、俺の頬をピザの生地ばりにこね回していた三浦の手がそっと離れた。
「……リ」
「へ？」
「……ク、クリ……っ」
ククリ？
ククリナイフのことかしら。それともグルグルのヒロインのほう？
俺が首をかしげていると、三浦が怒っているような泣いているような複雑な表情を浮かべた。
「……クリを触ってんの……っ」
「……なるほど」
なにがなるほどだよ、俺。と思いつつ、皮をかむった小さな膨らみにそっと手を伸ばした。
「あ……そ、そこ、優しくして……っ」
「……ん」
今までこういったことを言ったことがなかった三浦が、切実な声音で訴えかけてきた。こくりと頷き、皮をかむった場所を見つめる。どうやるのがいいのか……と思っていると、三浦がそろりと手を伸ばしてきた。
「こ、こうしてるから……っ」
人差指と中指を包皮の両脇に置き、ほんの数ミリだけ動かした。たったそれだけで、薄桜色の真珠のような膨らみが顔を出す。
「つ、次からは、ヒキオがして……っ」

羞恥の限界だったのか、消え入りそうな声でつぶやいて顔を覆ってしまう。三浦の繊細な指の動かし方を思い出しながら、色鮮やかな肉芽にそっと顔を寄せた。
「そこ、ほんとに敏感だし、ちょっとでも力入れると痛くなっちゃうから……」
頭上から降る声に頷く。
ふっ、と軽く息を吹きかけると、しっとりと汗ばんだ肢体がびくりと波打った。
「んんんっ！　……あっ、はっ、はぁっ、はぁぁぁ……っ」
たった一度の吐息の余韻を味わうかのように、柳腰を悩ましくくねらせるさまがひどく生々しい。
「……本当に敏感なんだな」
「だ、だからそう言ってんでしょ……あっ、ひぁっ!?　あっ、んんん……っ！」
ふっ、ふっ、ふーー……っと、息の強弱と長さを変えながら吹きかける。三浦は引き結んだ唇の隙間からぞくぞくとするような声を漏らした。真っ白な内ももがひくひくと揺れる。俺の頭を両手で掴み、ぐしぐしと撫でてくる。行き場のない感覚の逃げ場を求めているかのような仕草が際限なく興奮を高め、下腹部へ次々と血液が送り込まれていく。
「息、気持ちいいか？」
「はっ、んっ、んん……っ、い、言わなくても、見ればわかるでしょ……ひぁっ!?　あっ、ぅあっ、はぁぁぁぁ……っ」
片手でクリトリスの皮を押さえ、空いた手で鼠径部をすりすりと撫でながら何度も肉芽に息を送り込む。ぷっくりと膨らんだクリトリスがひくひくと震え、すぐ下の淫裂からは甘酸っぱい匂いがむわりと立ち込めてくる。今まで下着越しでしか嗅いだことのなかった三浦の匂いが直に鼻腔を犯し、たまらない幸福感と興奮に包まれる。
三浦の目を見つめ、息を吹きかけ、また見つめる。
気持ちいいか？　という質問に答えるまで続けるぞ、と目で伝える。

「あっ、ぅあっ、ふっ、んっく、んんんん……っ、き、気持ち、いい、から……気持ちいい、からぁ……っ！」
綺麗な顔をくしゃりと歪め、息も絶え絶えといった様子で囁いた。いったん顔を離すと、三浦の身体全体が上気していることに気づく。汗をじっとりとかき、金の髪が額や頬にほつれた糸のように貼り付いている。脚は開いていることに抵抗がなくなったのか、あるいは閉じる余裕さえないのか、ぱっくりと開いたままだった。
「うぁ……っ！」
クリトリスにそっと指を触れると、三浦の身体がばね仕掛けのように跳ね上がった。慌てて手を離すと、三浦は目をつむりながら息を荒げ、腰を蠱惑的に揺らした。
「大丈夫か、痛くないか」
「はぁぁぁ……だい、じょうぶ……痛くはない、ない、けど……」
「……けど？」
首を傾げると、三浦が腕で口元を覆い顔を逸らした。
「……気持ちよすぎてやばい。あーし、一人でしたときにこんなになったことないし……」
「……っ」
理性を炙りたてるような扇情的な言葉。三浦は無意識にやっているのだろうが、羞じらいながらそんなことを言われてグッとこないわけがなかった。
「……優しくするからな」
「ひんっ!?　あっ、いっ、ひぁっ、はぁぁ……んはぁぁぁ……っ！」
人差指の腹でそっとこすると、ほんの数ミリの往復運動にも関わらず、三浦は通電したかのように身体が跳ねた。一度目に触れたときほど激しくはないが、代わりに少しでも快感の逃げ場を求めるようにくねくねと悩ましく腰を揺らすさまが色っぽくてしょうがない。どこまでも生々しく淫靡な状況だというのに、芸術的な美しささえ感じた。
「はぁぁ……だ、だめ、だめ、これ、すご……いつもより、あっ、あっ、あっ、あぁぁ……あぁぁぁ……っ」

三浦の声が熱を帯び、身体が小刻みに痙攣しはじめる。
「あっ、だっ、だめ、だめ、だめ、これ、イ、イク、イク、イク、イク……っ」
淫猥に開いていた脚が俺の腰を挟むように閉じ、また開き、がくがくがく……とわななきはじめる。興奮で乱暴になりそうになる愛撫を必死で丁寧に続けると、今にも泣きそうな顔をしていた三浦のおとがいが跳ね上がった。
「――――っっはあぁぁぁぁっ!! あっ、はぁぁっ、あっ、あっ、あっ、あぁっ、あっ、あぁぁ……あぁぁぁぁぁぁ……っ」
掠れた声がグッと高くなり、湿った吐息と混ざり合った嬌声が部屋に響いた。小陰唇の内側からごぷりと愛液が溢れ出てきて、甘酸っぱい発情臭がむっと立ち込める。ベッドのスプリングが軋むほどの大きな痙攣を起こし、大きな波の余韻を味わうかのような小刻みの痙攣を断続的に繰り返す。呼吸さえ忘れて見惚れてしまうほどの絶頂だった。一糸まとわぬ姿の絶頂を初めて見ることができて、感動さえ覚えていた。
「……身体は平気か？」
「んっ、んん……っ、はっ、はぁっ、はぁぁ……っ、……ヒキオの、ばか……なんでこんな上手いんだし……」
色っぽく息を切らしながらさりげなく褒めてくれた。罵りまじりの褒め言葉って高度だなぁ……。
「慎重にやってるだけだぞ」
「……それ、けっこう嬉しいんだけど」
ぽそりとつぶやかれた言葉に目をぱちくりとさせていると、三浦が「ん」と両手を伸ばしてきた。上から覆いかぶさって抱きしめ、唇を重ねる。
「んっ、ふぅっ、んっ、ちゅるっ、ちゅぴっ、んふぅぅ……っ」
三浦の瞳がとろりと蕩けて、両腕だけでなく両脚までもが艶めかしく絡みついてくる。すらりと伸びた四肢は汗ばんでいて、抱きしめられるとふたりの身体の境界線が曖昧になる。唇をねっとりと密着させ、差し出された舌をぬむりと咥えてたっぷりと啜る。三浦の身体か

らは強張りがすっかり抜けていて、優しく甘えるように、それでいてどこまでも官能を高めるかのように蠱惑的に腰をくねらせ、肌をぴったりと寄せてくる。
「……三浦。指、入れてもいいか？　今ならだいぶほぐれてるだろうから……」
「……ん……大丈夫」
「……優しくするからな」
「……ん、信用してる」
さりげなく嬉しい言葉を囁かれて心臓が高鳴る。三浦は恥ずかしくなったのか、俺がなにか口にする前にふたたび唇を重ねてきた。
濃密な性臭が立ちこめるベッドが、静かにきしむ。

続く。

（５７）

三浦から身体を離し、すらりと伸びた脚に手を添える。恥ずかしそうにもぞもぞと腰を揺らす仕草にぞくぞくしながら、ゆっくりと開いた。

「んん……っ」

頭上から艶っぽい声が聞こえる。三浦の陰部は絶頂の余韻が色濃く残っていて、控えめに生えた陰毛がくしゃりと沈み込み、小陰唇のなかに見える薄桜色の粘膜がひくついていた。濃厚な愛液の匂いが、何十本も伸びる細い糸のように鼻腔をくすぐり犯していく。下腹部に血液が集まり、肉幹がみちみちと張りつめた。

右手をそっと、薄桜色の粘膜に添える。

「うあ……っ」

緊張したのか、小さな膣口がきゅっとすぼまった。充分に濡れているとは思うけれど、それでもまだまだ不安だな……と思う。さてどうするかと考え、左手の指をクリトリスに添えることにした。

「ひぁっ!? あっ、ヒ、ヒキオ、そっちはべつに今は……あっ、あっ、あぁぁ……っ」

クリトリスへの愛撫はついさっき経験したからか、俺の指遣いに緊張することなく気持ち良くなってくれているようだ。腕で口元を隠し、空いた手でシーツを掴み、柳腰をもぞもぞと艶めかしく揺らす。膣口の周辺に触れていた右手に温かいうるみがかかった。新たに愛液が溢れ出し、三浦の腰から力みが抜ける。手のひらを上に向け、右手の中指を小さな膣口につぷりと埋め込んだ。

「あ……んぁっ、あっ、んくぅぅ……っ、はっ、はぁぁぁ……っ」

自分の中に入ってくる未知の感触に戸惑いながらも、肉芽への愛撫にがくがくと腰を揺らすさまにぞくりとする。

「痛かったら言ってくれ」

「ん……わかっ、た……んっ、んぅぅぅ……っ」

中指をじっくりと挿入していく。自分の指が女性器に呑み込まれるさまは恐ろしく淫らに映る。クリトリスへの愛撫で三浦の腰は常

にひくひくとわななき、己のなかに入ってくる指をきゅむきゅむと締めつけてくる。思ったよりも強張りはなくするすると入っていくが、これはあくまで俺の主観でしかない。急にずぶりと挿れて三浦が痛がったら、一生後悔するかもしれない。慎重に、慎重に……。

肉芽を指の腹で優しく撫でながら右手中指の挿入を続け、やがて根本まで埋まった。

「あっ、あぁっ、ヒ、ヒキオ、これ、やば……はぁあっ、あっ、あぁっ、あぁぁぁ……っ」

三浦が口元を隠す腕をどかし、頭の横のシーツを掴んだ。興奮に上気した瑞々しい肢体をなんら隠すことなく見せるさまにぞくぞくする。熱く潤んだ膣道から徐々に強張りが抜けていき、にちゅ、にゅく……と甘えるように絡みついてくる。そろそろ大丈夫か……？　と思い、クリトリスから指を離した。

「三浦、根本まで入ったぞ。痛くないか」

「ん……だいじょうぶ……だと、思う……」

初めての感覚に自分自身よく分かっていないのか、少し幼い声音で答える。庇護欲をそそる表情に胸が締めつけられた。

「……ん？」

三浦の手がそろりと伸びて、膣内に指を挿入している右手首を掴んだ。

「どうした」

「……ヒキオの指、ごつごつしてる」

「……そりゃまあ、男だからな」

「ん……そっか」

愛おしげに、まるで母が子を愛でるかのように右手をすりすりと撫でてくる。しっとりと上気した表情には緊張の色は見えなかった。

「ちょっとずつ動かすぞ。気持ち良いところがあったら言ってくれ」

「……言ったらどうすんの？」

「優しく集中的に責める」

「……ド変態」

ですよねー。

頬をほんのりと赤らめ、ぷいと顔を逸らすさまがあまりにも可愛らしい。や、もう、この子ほんとに可愛すぎると思うんですよ……。
「あ……っ」
膣内に挿入している中指を根本から折り曲げると、三浦が甘い声を漏らした。ふたたび両手でシーツを掴み、唇をキュッと引き結んでこちらを見つめてくる。大丈夫だ、と言い聞かせるようにこくりと頷き、膣肉を押しこむようにくにくにと指の腹で刺激していく。
「あっ、ぅあっ、はぁっ、んっ、んんん……っ」
三浦の身体が熱を帯び、白い肌にじっとりと汗が浮かび上がる。背中が波打つように揺れ、膣肉の締まりも増してくる。根本から折り曲げていた指を今度は第二関節から折り曲げると、三浦の反応が跳ね上がった。
「うあぁぁ……っ!? あっ、そ、そこ、すご……はぁぁっ、んっく、んんんっ！」
「ここか……」
溢れ出しそうになる興奮を必死で抑え込みながら、リズムよくグッ、グッと膣肉に指を押し込む。
「あっ、やっ、はぁっ、んっく、んんっ、あっ、はぁぁっ、はぁぁぁ……っ」
俺の指の動きに合わせて三浦が瑞々しい肢体を跳ねさせる。色白の肌にうっすらと朱色が浮かび、下腹部がひくひくと痙攣する。膣内からぐっぷぐっぷと愛液が攪拌される卑猥な音が聞こえてきた。
「あっ、あっ、あっ……んくぅぅっ!? あっ、ヒ、ヒキオ、だめ、今そこは、ほんとだめ……っ！」
左手の指をそっとクリトリスに添えると、三浦がくしゃりと顔を歪めてぶんぶんと首を振った。三浦が喋っているあいだも右手中指を折り曲げているため、三浦は言葉では拒絶しているのに、まるで誘うように腰を揺らしてしまう。
「いいから。……気持ち良くなってくれ」
「……っ、……ばか、信じらんない……っ」
ここからは俺のただの自己満足だとは分かっている。三浦がもっともっと乱れる姿を見たい。ただそれだけのことだ。三浦は恨めし

げに可愛らしく睨んできたが、それ以上は何も言ってこない。
「あっ、はぁっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あぁぁ……っ！」
膣肉をくにくにと指の腹で押し込みながら、クリトリスを優しく何度もこすり立てる。三浦は唇を引き結んでぶるぶると震えては、時折我慢の限界を迎えて大きく口を開き息を吐き出す。キュッと引き締まった尻が小刻みに震える。ぱっくりと開いた脚の内ももまでもがひくつく。もわりと立ち込める愛液の匂いはどんどん濃厚になっていく。
「だめ、これ、だめ、ヒキオ、ほんと、おかしくなる、おかしくなるからぁ……っ」
三浦が懇願するように俺の手に両手を添え、ぶんぶんと首を横に振る。いつになく弱々しい声で、目尻にうっすらと涙をためるさまにごくりと喉を鳴らした。
「わかった。……じゃあ、あと少しだけ」
「え……ぁあぁぁっ!? だめ、だめ、だめだって、ばか、だめ、おかしくなる、おかしくなるから、おかしくな……あっ、あぁぁっ、ああぁぁぁぁ」
不意に、可愛らしい嬌声のなかに獣性が混じる。膣肉を押しこむ力を強め、クリトリスは息を吹きかけながら指の腹でこすりたてる。膣口からぐちゅぐちゅと卑猥な音が響き、俺と三浦の耳朶を焼き焦がし、官能を炙りたてる。三浦が泣きじゃくりながら首を振り、腰が狂ったように踊る。
「だめ、だめ、イク、イク、だめ、恐い、イク、イク、イク、イク……あぁぁあぁぁぁっ!!」
三浦の喉から嬌声が弾けた。柳腰がバネ仕掛けのように跳ね上がり、ぶしゅっと噴き出した大量の熱いうるみが腕まで飛び散る。三浦はおとがいを反らし、言葉を忘れてしまったかのように悲鳴じみた嬌声を上げ、まるでさらなる快感をねだるかのようにぐいぐいと恥骨をせり出してくる。膣内に挿入した指もクリトリスに添えた指もそのままに、凄絶なまでの絶頂にただただ見惚れた。
「はっ、はっ、はっ、はぁぁ……はぁぁぁ……っ」

長い絶頂を終えて三浦の痙攣が止まる。ゆっくりと指を引き抜くと、まるで長風呂でもしたかのように指がふやけていた。ベッドシーツがおもらしをしたかのように濡れ、濃厚な発情臭がベッドをむわりと包み込んでいる。三浦は目元を腕で覆い、口を半分開けてぜぇぜぇと息を切らしていた。
「……ばか、やりすぎだし」
「……あー、その、すまん。三浦が感じるところをもっと見たかったんでな」
俺の言葉に三浦がびくりとする。ちらりと目を覗かせ、またすぐに隠してぷいと顔を逸らした。うーん、無限に可愛い。
じっとりと汗の滲んだ腹を愛でるようにすりすりと撫でると、三浦は唇を引き結んで艶めかしい声を漏らしながら腰を揺らした。
「あー、その、なんだ、三浦」
「……ん、なに？」
顔から腕をどかして三浦が尋ねてくる。よほど疲れているのか、少し眠そうだ。
「ちょっと……というかかなりやりすぎたのはホント申し訳ない。……無理はさせたくないから、今日はここまでにするか。かなりがんばってもらったし。えーと、なんだ、その……最後までするのは、三浦の心の準備ができてからでいいから」
頬をぽりぽりと掻きながら告げると、三浦が目をぱちくりとさせ、困ったように笑った。
「あー、うん……わかった、ありがと。……正直、あーし、まだちょっと恐かったから……そのほうがありがたいかも」
言いながら、よろよろと身体を起こす。あぐらをかいた俺の股座に腰を下ろし、すらりと伸びた脚を腰に巻きつけてきた。甘えるように抱きつき、おでこ同士をこつんとぶつける。
「……その、ほんと……ごめん。……もうちょっとだけ待ってて？」
「……っ」
シュンとした声で、まるで子犬のようなか弱い表情を浮かべる。
柔らかくて温かな糸に、心臓がキュッと締めつけられた。

「……ヒキオ？　どうしたの？」
「……すまん、可愛すぎて固まってた」
「……っ、な、なに言って……っ」
　三浦のおでこが一瞬で熱くなる。慌てて顔を離し、目を泳がせ、やがて俺の肩にあごを乗せた。なんだかんだで引き続き甘えてくれるらしい。
「……ヒキオじゃなきゃ、こんなに待ってくれないと思う。……ありがと」
「おう、俺はいくらでも待つぞ。なんせ普通どれくらいでするもんなのかなんてことを聞ける友達もいないからな」
「それ自慢することじゃないし……でも、ほんとありがと」
　俺の自虐にくすりと困ったように笑い、耳元でそっと囁きかける。その声音はどこまでも優しく、抱きしめてくる身体も心地良い温もりを与えてくれる。
「……まだおっきいんだ……」
「……まあ、うん、その、こんな風に抱きつかれたら、そりゃな？」
「……また、口でする？」
「……ぜひともお願いします」
　こくこくと頷くと、三浦がくすりと笑い、もう一度おでこ同士をこつんとぶつけ――ゆっくりと唇を重ねた。

続く。

（５８）

行為がひと段落すると、まずはシャワーを浴びることにした。「一緒に入るか」と冗談半分で言ってみたところ、三浦がまんざらでもない反応を見せた。なんだか変な空気になった。慌てて「やっぱ別々でいいよな、恥ずかしいし」と言うと、三浦がぽそりと「……別にいいんだけど……」とつぶやくのがはっきりと聞こえてしまった。恥ずかしくて死にそう。今度俺から勇気を出して誘ってみようと思った。

それぞれがシャワーを浴びて部屋でのんびりしていると、もう夜になっていた。放課後に俺の家に三浦を連れてきてからけっこうな時間が経っている。あまりにも濃密な時間に、今日学校でどんな時間を過ごしたのか根こそぎ忘れてしまったような気がする。

ちらりと三浦を振り向く。髪までは洗っていないが、それでもほこほこと上気している身体がなんだか妙に色っぽい。あとクッションを抱きしめているのが強烈に可愛い。

「三浦、帰り送っ」

くぅ、と。

できるだけ自然に……慣れた感じで……と心の中で唱えながら『帰り送ってくから』と提案をしようした瞬間、ものの見事に、漫画かアニメかと勘違いするほど見事に腹が鳴った。

気まずさ全開の俺を見て、三浦が目をぱちくり、ぱちくり。

「……ぷっ、くくっ、ふっ……ご、ごめ……」

顔の筋肉が不自然にヒクつき、お腹を抱えて背中を向けてしまった。クッションをぼすぼすと叩いている。どうしたんでしょうね！

「……えっと……小町はまだ帰ってきてないの？」

謎の腹痛から回復した三浦が上目遣いで尋ねてくる。無意識にやっているとしたら天才だなー、押し倒しそうだなーなどと心の声を間延びさせて必死で理性を保っています。

「あー、まだ帰ってないな。さっき連絡が来てたんだが、もうちょいかかるみたいだ」

「そっか」

さきほど三浦がシャワーを浴びている時に小町からメッセージが届いていた。内容は『もうだいじょうぶ？』という簡潔な言葉。ちょっとあけすけにもほどがあると思うんですけどねえ！　ちなみに俺の回答は『まあだいじょうぶ』だった。極めて曖昧模糊な返答だったが、小町からは『はいよー』と軽いノリの返答が来た。『もうちょいしたら帰るねー』と続けてメッセージが来て、最後に顔の付いた人参が馬鹿でかい鍋で煮られて苦悶の表情を浮かべているスタンプが送られてきた。お前こんなのどこで見つけたんだ……。

「えっと……」

ぺたりと女の子座りをした三浦が、視線をきょろきょろと巡らせて金の髪の毛先をくりくりといじる。髪を洗っていないがそれでもしぶきは飛んだのか、ちょっとだけ湿っているのが生々しい。

「どうした」

先ほどから何か言いあぐねているような態度に首を傾げると、三浦の視線がまた泳ぐ。毛先をいじる。泳ぐ、いじる。泳ぐ、いじる……。

「……えっと……」

振り出しに戻った。

三浦からすると話すのによほど決断力がいることなのか、次第に顔が赤くなっていく。途中から俺を若干恨めしげに睨んできた。え、なんで？

根気強く待っていると、盛大に落ち着かなかった視線と手の動きがぴたりと止まった。俺と正面から向かい合い、上目遣いで、しかし依然として恨めしげな視線を向けてくる。納得がいかぬ。

「……その、よかったら、……ご飯、作ろっか」

「え」

×　×　×

「それは大歓迎なんだが……いいのか？」

「だ、大歓迎って……」

戸惑いつつも即答した俺の反応に今度は三浦が戸惑う。それでも、勇気を出して提案した内容を俺が受け入れたことに安心は覚えたらしい。表情が和らぎ、恨めしげな気配もなくなっていた。ていうかな

んで恨めしげだったのか未だに分からぬ。
「ほ、本当に、いいの……？」
「いいもなにも、まあ、うん、小町とならたまに作ってくれてたろ」
「それは……そうだけど……」
弁当を作ってくれる以外にも、何度かこの家で小町とご飯を作ってくれていた。両親がいない休日はお昼ご飯を作ってもらったりもしている。ちなみに俺も何度か手伝おうとしたが、「お兄ちゃんは優美子さんの花嫁修業を邪魔しちゃだめ」と追い払われた。耳まで真っ赤になる三浦を見ながらソファでくつろがざるを得なかった。その時は俺も顔がやたらと熱かったが。
けれど、こんな風に三浦がためらうのも分かる気がする。今回は俺と三浦のふたりきりだ。小町がもうすぐ帰ってくるとはいえ、ふたりきりの夕食となると……しかも家で、三浦が作ってくれるとなると……なんかこう、ね！
「あー、その、三浦はいいのか？　親御さんがご飯を作って待ってたりとかは……」
「ああ、うちはだいじょうぶ。今日は帰りが遅いから、帰ったらひとりで作るつもりだったし」
「お、おう、そうか」
「うん……」
「……」
「……」
「……」
「……その、冷蔵庫に食材って、ある？」
「え？　あ、ああ、そうだな、何日か前に小町とがっつり買ってきたけど……見てみるか」
「う、うん」
「……」
「……」
初対面？
つい先ほどまでの行為どころか、今まで築き上げた時間さえ吹っ飛

ばしたかのようなたどたどしい会話。ふたりきりでご飯を作ってもらうという時間がどれだけ気恥ずかしいかということが三浦自身もよく分かっているのだろう。だからこそ提案するまでにさんざん躊躇したし、今も顔が赤い。ものすごく赤い。

「うぐ……っ」

「見すぎだし……」

りんごのようになった綺麗な顔をまじまじと見ていると、ほっぺを掌底でぐりぐりされた。三浦の長い髪から覗いた耳が真っ赤になっていた。

とりあえずふたりでリビングに向かうことにする。家の中でふたりの足音がぎっ、ぎっ……と鳴ると、ふたりきりでの生活というものを妄想してしまってどうにも落ち着かない。

冷蔵庫を開けてふたりで覗く。顔がやたらと近い。顔の前面に冷気が当たるのに、身体の奥がひどく熱かった。

三浦が残っている食材を眺め、なにやら指折り数えている。「……ん」と小さくつぶやくと、俺の手にそっと触れた。思いきり動揺してしまい、冷蔵庫を閉めていいよという意思表示だと気付くまでに数秒かかった。

「ご飯はパックに入ってるのを使ってだいじょうぶ？」

「ああ、問題ない」

「ん、じゃあちゃちゃっと作ってみる」

三浦が微笑み、キッチンの隅の棚を開ける。いつの間にか小町が用意していた三浦専用のエプロンだ。

「……」

制服のブラウスとスカートに、エプロン……。

ふむ。

調理実習でなら見ることはあるが、最後に見たのはいつだったかも思い出せない。三浦が放課後に小町と料理をしたことはあったが、その時はまだエプロンを着けていなかった。

なにより――この家で、ふたりきりで、制服姿の三浦がエプロンを着ているという事実が胸に深く深く突き刺さる。

……。
「神話になるな……」
「？　なんか言った？」
「いや、なんでもない」
ＪＳ研の次の神話は制服エプロンに決まった。俺の中での話だが。
×　×　×
なにか手伝えることはないかと聞いたが、普段小町と調理している時と同じように断られた。そのうち俺が勝手に料理するくらいのことをして信頼を築いておかないとまずい気がする。
「……むぅ……」
リビングのソファに座ってくつろいでいるが、落ち着かないしまったくくつろげていない。
「ナーゴ」
愛猫（あいびょう）のカマクラがのっしのっしとリビングに現れた。手際よく調理していた三浦が手を止め、控えめながらも嬉しそうにカマクラに近付く。調理中なので撫でたりはしないものの、カマクラが嬉しそうに三浦の足にすりすりと身を寄せ、三浦の表情がふにゃりと和らぐ。
「……見んなし……」
「なんで……」
一部始終を眺めていると、顔を真っ赤にした三浦に怒られた。納得がいかぬ。
「ナーゴ」
「む」
調理を再開した三浦の背中を眺めていると、愛猫カマクラ（なんか妖刀村正みたいな語呂だ）が俺のもとへやってきた。ふはは、俺は調理してないからな、撫でほうだいだぜぇ……と心の中でうっとうしいテンションで喋りながらも無表情でちょいちょいと手招きする。
「ナーゴ」
俺の手招きを華麗にスルーしてこたつに潜り込んだ。
納得がいかぬ（本日3度目）。

ソシャゲをしてもまったく頭に入ってこないので、キッチンに冷やかしに行くことにした。俺が同じことをやられたら舌打ちするまであるが、本当に暇なのでしょうがない。大人になってからだと本気でドン引きされそうな行為なので、今のうちにやって痛い目を見ておくことにする。三浦には迷惑でしかないが。
「おお……美味そうだな……ていうか、美味くなりそうだな」
「まだこれからだし」
制服エプロン姿の三浦の隣に立ってつぶやくと、三浦がくすりと笑った。調理しているのが楽しいのか、なんだか鼻歌でも歌いだしそうだ。一通り野菜と肉を切ってあとは鍋に投下するだけ……という段階だったが、これから熱を通されかき混ぜられ、調味料を入れられて、どれほど美味しい料理が出来上がるのだろう。普段調理途中の場面を覗くことがないだけに、不思議なワクワク感がある。
「……」
包丁をまな板に置いた三浦がちらりと俺を見やり、半歩にも満たないほど近付いた。
互いの二の腕が触れる。ちょん、と。控えめに。
右手をそろりと伸ばして三浦の肩を抱き寄せると、かすかな吐息が聞こえた。三浦が俺の肩にこてんと寄りかかる。小休憩だろうか、少し汗の混じった甘い匂いが鼻腔をくすぐる。
「……休憩するのか？」
「……ん」
焼いたり煮たりといったことをしていないので、三浦が手を止めれば調理全体が止まる。俺の質問にしっとりとした声音で答えると、まるで猫が甘えるように俺の胸へすりすりと頬ずりをしてくる。表情筋が溶け落ちてしまいそうなほど可愛らしい。金の髪をくしくしと撫でると気持ち良さそうに目を細めた。
「……ねえ」
「ん」
振り向いた瞳がしっとりと濡れている。俺の腕の中で身体の向きを変え、正面から抱きついてきた。恥ずかしそうに、けれど自分の欲

求を果たすために大胆に、ほんのりと朱に染まった顔を上げ、切なげに見つめてくる。柳腰にそっと腕を回すとぴくりと震え、さらに甘えるように身体を寄せた。ふにゅりと柔らかな感触が胸板に当たって陶然とする。

「三浦……」

「ん……っ」

三浦がうっとりと目を閉じる。俺も目を細めた。

吸い寄せられるように唇を近付けると――

「ただいま―！　お兄ちゃん、まだ優美子さんいるん……わーお」

『……』

地獄みたいなタイミングで妹が帰還した。ほんと地獄。

リビングのドアを開けた小町がにやりとした笑みを浮かべた止まっている。「ナーゴ」と泣き声を上げたカマクラが妹の足元にとてとと近寄り、三浦に甘えた時と同じようにすりすりと身を寄せた。小町は動かない。表情筋だけはニヤニヤとしている。頬がちょっと赤い。俺と三浦は小町を見たままピタリと固まっている。映画「フローズンタイム」でもこんなシーンがあったなと思う。ＡＶでこういうジャンルがあるが見たことはない。あまりの出来事にどうでもいい思考が際限なく巡る。腕の中の三浦が発火しているのか三浦と抱き合っているのがちょうど良いくらいだ。熱い……!!

「……小町」

「へひゃいっ!?」

信じられないほど熱い身体から信じられないほど冷たい声がこぼれ出た。三浦はわなわなと震えている。小町はニヤついた顔から一転して、まるで軍の上官に命令されたかのようにピシッと気をつけをした。突然の素早い行動にカマクラが驚いて「ナー―！」と鳴いて妹のもとを離れた。

三浦が俺の胸を押してそっと離れる。自分から離れた割にちょっと寂しそうだ。

「……あんたは何も見てない。わかった？」

「……は、はいぃぃ……何も見て……見て……うーん……」
「あんたねぇ……」
「ひゃー！」
小町にとって忘れたことにするには惜しい出来事だったらしい。軍の上官（あくまでイメージ）の命令であっても忘れることを躊躇していると、三浦が小町のもとへとどすどすと足音を立てながら向かう。めっちゃ恐い。殺気をまとう恋人の進軍に小町が可愛らしい悲鳴を上げて逃げ出すと、なぜかカマクラを捕まえて抱きしめた。なんでだ。
「う、動かないでください！　この子がどうなってもいいんですか！」
リビングの壁際に追い詰められた小町がカマクラを前に突き出す。まるで慌てる様子のない愛猫カマクラ（やっぱり妖刀村正みたいだ）が「ナーゴ」といつものように鳴いた。
「……その子は関係なくない？」
「うぐ……っ」
三浦が口にした極めて当たり前の正論に妹がうめく。素晴らしい茶番だ。
まるで意味のない抵抗に思えたが、小町の行動とカマクラのふてぶてしい可愛さに毒気を抜かれたのか、三浦がフッと力を抜く。どうやら落ちついたらしい。
「ゆ、優美子さん……ごめんなさい……悪ノリしちゃいました。怒ってます？」
シュンと落ち込んだ様子の小町がお詫びとばかりにカマクラを差し出す。なぜカマクラをそこまで活用する……。
三浦は差し出された愛猫カマクラ（やっぱり妖刀以下略）の首をころころと撫でると、穏やかな笑みを浮かべた。
「別にいいよ。あんたがもうじき帰ってくるって分かってたのに、……その、あーしとヒキオが調子に乗っただけだし……」
「おお!?　優美子さんも分かってたのにあんな大胆なことをってごめんなさいごめんなさいカマクラに免じて許してください！」
小町がふたたび調子に乗るも、獄炎の女王がリビングを破壊せんば

かりの圧を放ったことで妹が瞬時に涙目になった。「神よ静まりたまえー！」と言いながらシャーマンが棒かなにかを振るようにカマクラを掲げている。カマクラを活用しすぎじゃない？

結局このあと、三浦が怒りを鎮めては小町に煽られてふたたび怒り、カマクラを盾にされてまた鎮まる……というひどい流れを数度繰り返した。終わった頃には三浦も小町も疲れきっていた。あとカマクラもげんなりしていた。

三浦が料理していたと知り、小町ははじめ「じゃあふたりきりでの夕食を楽しんで」と言って部屋に帰ろうとした。しかしにこやかに微笑んで手を振ったタイミングでくぅ、と可愛らしくお腹が鳴った。三浦が珍しく涙が出るほど笑っていた。「兄妹でこんなとこまで似るんだ……」と言われて俺も小町も顔を真っ赤にした。

お腹を空かせた小町をそのまま寝かすわけにもいかないので、結局いつも通り三浦と小町で料理を作り、俺は引き続きカマクラと戯れることになった。

なんだかんだでこの時間はすごく落ちつく。三浦と小町のやりとりは遠目に眺めているだけでも和むのだ。

しかしそれでも、いつかは三浦にご飯を作ってもらい、ふたりきりで夕飯を楽しんでみたいな……と、ひっくり返ったカマクラのお腹をワシャワシャと撫でながら思った。

続く。

（５９）

１２月に入ると、３年生の教室の雰囲気がいっそう張りつめた。センター試験までは残り１ヶ月ほど。センターまで残り何日という掲示を敢えて見ないようにしているが、それでもクラスメイトや他のクラスの連中は「やべー、あと〇〇日しかねえよー」などと毎日のように言い合っている。耳を塞いで歩きでもしない限り、常に残り時間を意識させられるような状況にあった。

そんな張りつめた状況であっても、いや、張りつめた状況だからこそ、息抜きは必要なのだと思う。１ヶ月あまり緊張しっぱなし……などというのは、人間が踏み込むことのできる領域では決してない。どうせみんな尻に火がついて頑張らざるを得ないので、むしろ休息をこそ重視すべきなのだ。そうだろうハム太郎。

迫り来るプレッシャーで受験生が重苦しい雰囲気に包まれる中でも――俺と三浦は、努めて変わらない日々を送るようにしていた。

× × ×

「……んっ、ちゅっ、ちゅぴ……んっ、ふぅぅぅ……っ」

１２月のとある土曜日。

いつものように三浦を部屋に連れて来ると、コートを脱いだ三浦から抱きついてきた。ほっそりとした腰を抱きしめて舌を絡めると、普段は凛としている三浦の表情が一転して女の顔になる。ブラウス越しに感じる柔らかな双丘の感触を堪能していると、三浦が俺の胸板をとんとんと押した。

キスをしながら、とっ、とっ、とっ、とよろめくように後ろに進み、ベッドの縁に座る。脚を開くと、三浦はまるでルーティンをこなすかのように、ごく自然に俺の股座にぺたりと座り込んだ。チャックを開け、ボクサーパンツを引き下げ、半勃起している肉幹をずるりと取り出す。

「ん……ふぅっ、んっ、んっ、ん……っ」

目の前にだらりと垂れ下がった肉幹を目にして、三浦の表情がいっそう蕩けた。四つん這いになり、肉竿に顔を寄せてすんすんと匂いを

嗅ぎ、キュッと引き締まった身体を艶めかしく震わせる。その仕草だけで興奮してみちみちと勃起すると、三浦は可愛らしく目をぱちくりさせ、とろんと瞳を細めた。
「あむっ、……んっ、んっく、んふぅぅ……っ」
亀頭の上半分を咥え、鈴口をちろちろと小突く。悩ましい快感に先走りの汁がこぷこぷとこぼれる。そこから徐々に朱い膨らみを呑み込んでいき、まだ少しかぶっている皮を瑞々しい唇で剥いていく。つるりと剥き終えると、カリ首と皮の境界線をあむあむとどこか楽しげに咥え、綺麗な朱色の舌をねっとりと這わせてくる。
「んっ、ふぅぅ……っ、……ここ、匂い、すごい……っ」
カリ首に鼻を近づけ、すんすんと鳴らしてはうっとりと目を細める。信じられないほど卑猥な姿に、胸がギュッと締めつけられるほどに興奮する。
金色の髪をくしりと撫でて引き寄せると、三浦は素直に従ってくぷぷ……と肉幹を呑み込んでいく。
「ん……ふぅぅ……んっ、ん……っ」
竿を半分ほど呑み込んだところでゆっくりと唇を前後にすべらせる。以前よりもずっと積極的になった舌遣いで、口内に収まった亀頭と竿の上半分をねろねろと舐めあげていく。亀頭の裏を舐めた時に俺がことさら大きく反応するのを見て、三浦は集中的にそこを責めるようになった。あくまで俺を喜ばせるための舌遣いで、決して責めすぎたりはせず、優しく丹念に舐ってくれるのがたまらない。
「……ぷはっ。……」
10分ほど丁寧に舐めてもらったところで、三浦が口を離した。肉竿には三浦の唾液がたっぷりとまとわりついていて、丹念な口愛撫により凶悪なまでにそそり立っている。
「……その……今日も、あれ、するの……？」
四つん這いから女の子座りになった三浦が、肉幹をゆるゆるとしごきながら尋ねてくる。表情は羞じらいを浮かべる可憐な乙女そのものなのに、下半身をもじもじとさせながら肉竿の根本をしごいてくる仕草は淫らそのもの。強烈なギャップにくらりとくる。

「ああ、もちろん」
三浦の頭をくしくしと撫でると、気持ちよさそうに目を細めた。頭から頬へと手を滑らせると、甘えるように頬をこすりつけてくる。
「……恥ずかしいんだけど、あれ……」
三浦がぽしょぽしょとつぶやく。小声なのが可愛らしい。
「じゃあやめるか？」
少し意地悪く尋ねると、三浦が目を泳がせ、少し拗ねたような表情で上目遣いをした。
「……それは、やだ。……する」
「……おう」
危うく押し倒しそうになった。
うちのお姫様が可愛すぎる……。

× × ×

最後までするのはまだ怖い……と言っていた三浦だが、それならばどこまでの行為ならば可能なのかと話し合った。三浦としても羞恥や戸惑いがあるので、実際に試しながら「これは無理」「これならだいじょうぶ」などと検討を重ねた。
その結果、三浦の羞恥の限界は６９ということが分かった。そこまで行けるなら最後まで行っても……という気はしないでもないが、基準というものは人それぞれだ。なにより、最後まで行為が及ぶことで恐い思いと闘うのは俺ではなく三浦だ。勇気が出るまで見守るしかないと思っている。
６９までならできる……ということならば、本番行為への戸惑いを払拭する勇気を身につけるためにもできるかぎり回数を重ねようということになった。というか俺から提案した。三浦は顔を真っ赤にして戸惑いながらも受け入れ、今まで１０回ほど６９を行なっている。
そんなこんなで、センター直前であってもきちんとした休憩を……という大義名分の下、俺は今日も自室で三浦と卑猥な行為に及んでいる。
「……」

早々に全裸になった俺の裸をちらちらと見ながら、三浦が服を脱いでいく。ピンクの可愛らしいブラとショーツ姿だった。以前聞いた話では、俺とふたりきりになる時間がある日は毎回下着にこだわっているらしい。なので急遽時間が空いた日は一回家に帰ってから俺の家に来る、もしくは頑なに脱衣を見せないようにしていた。女性特有のこだわりだなと思う。一度、脱衣をこっそり見ようとしたらけっこうマジで叱られた。頬を両手で挟まれてぐりぐりしながらめちゃくちゃ睨んできた。怖かった。

「……すまん、ちょっと……」

「え……んん……っ」

三浦の下着姿に我慢できず、ベッドの縁に座ったまま三浦を抱き寄せて柔らかな乳の谷間に顔をうずめる。ブラのワイヤー部分があごに当たるのも気にせずもぞもぞと顔を動かし、しっとりと汗をかいた乳肉の感触と匂いを堪能する。

「……さんざん見てるんだから、そろそろ飽きないの？」

頭上から呆れたような、それでいて優しい声が降ってくる。くしくしと頭を撫でられると、心地よさにとろんと眠くなった。

「……無理だな、飽きようがない」

「はいはい」

ぽんぽんと頭を撫でられてしばし。「ごちそうさまでした」と挨拶をして顔を離すと、三浦は「言わなくていいから……」と顔を赤くした。可愛い。

三浦が手早く下着を脱ぎ、一糸纏わぬ姿になる。先に仰向けになった俺の下腹部を見て、呆れたようなため息をついた。

「ずっと勃ちっぱなしって……どんだけ元気なの？」

三浦の胸に顔をうずめているあいだも勃起しっぱなしだった肉竿を、三浦がむぅ……と可愛らしく唸って眉をひそめながら、人差指でぴこぴこと弾く。がちがちに張りつめた肉竿がぴこぴこと左右に揺れた。

「三浦、こっちに来てくれるか」

「……うん……」

しおらしい返事をして、三浦が俺の顔を跨ぐ。下腹部を手で隠していた。そのまま、和式トイレのように腰をかがめてくる。手で隠していても、もわりと漂ってくる牝の匂いに興奮が高まる。
「……恥ずかしい……っ」
消え入るような声で囁く。まだこの行為に慣れていないというのがたまらない。
敢えて何も言わずに待っていると、三浦は意を決して手を股間から外した。
濃密な甘酸っぱさが鼻腔を焼く。露わになった薄紅色の粘膜がとろりと濡れている。まだキスとフェラしかしていないというのに、今にも液体が垂れ落ちてきそうだ。
「すげえ濡れてる」
「言わなくていいから……っ」
俺の腹の両脇に手をついた三浦が恨めしそうにつぶやく。俺の肩の両脇に膝をつくと、牝の匂いを嗅いでさらに張りつめた肉幹に顔を寄せた。
「ばか……おっきくしすぎだし」
拗ねた声で囁きながら、肉棒を手で横に倒し、裏スジをねっとりと舐めてくる。ぞくぞくとした快感が走るとともに、艶めかしい肢体がぶるりと震えた。目の前に晒された陰部からこぷりと透明な液体がにじみ出てくる。
「舐めてるだけで濡れるんだな」
「だから……言うなし……っ」
今にも泣きそうな声で囁き、うねうねと腰をくねらせる仕草にぞくぞくする。左手で尻たぶを掴み、右手で小陰唇をふにふにと揉み込む。
「あっ、あぁっ、はぁっ、んっ、んっく……ふぅぅ……ちゅっ、ちゅぴ……れる……っ」
淫裂への愛撫に色っぽい声を漏らしながら、玉袋をふにふにと揉んで亀頭にキスをしてくる。
「ヒキオだって、興奮しまくってるくせに」

「そりゃまあ、彼女のこんなエロ可愛いとこを見てればな」
「……っ!? ば、ばか……っ」
せいいっぱいの反撃にさらりとカウンターの一撃を加える。三浦とのやりとりを繰り返すうちに、すっかりこういったクサい台詞にも慣れてしまった。ちょっと恥ずかしいけど、言われた三浦のほうが恥ずかしそうなのであまり気にしていない。
小陰唇をむにむにと揉み込むと、ぴったりと閉じた縦筋からつつっ、つつ……っと愛液がこぼれ出てくる。指を離すと薄桃色の粘膜の奥にある膣口が物欲しげにひくついていた。小さな膣穴に中指を押し当てると、ぬるんとたやすく呑み込まれる。
「あっ……はぁぁぁ……っ」
かすかに身体を浮かせていた三浦が、くたりと密着してくる。しっとりと上気した身体がぴたりと貼りつくと、安心感とともにさらなる興奮が湧いて出てくる。俺が手で愛撫しやすいように尻だけは一生懸命上げているのがまたいじらしい。
中指がぐぷぐぷと押し進められていく。初めの頃はきつきつだったが、この頃はすっかり柔らかくなった。たやすく根本まで入り込むと、指先にこつんと当たるものがあった。
「……三浦、言ったらたぶん三浦が死ぬほど恥ずかしくなると思うんだけど、言っていいか？」
「……言わなくていいから。あーしも感覚で分かるし……っ」
「子宮、下りてきてるぞ」
「……っ！ だ、だから、言わなくて……んくぅぅぅっ!?」
羞恥にまみれた三浦の声を遮るように、中指を第二関節から曲げて膣肉をぐにゅりと押し込む。怒られる前に逃げたようにしか見えないがそれで合っている。
「はぁっ、はっ、あっ、そこっ、いいっ、あっ、はぁぁぁ……っ」
溢れ出す快感で羞恥も蕩けたのか、甘ったるい声を漏らして腰をうねうねとくねらせる。恥骨に指の腹を押し込むようにすると、膣内でぐっぷぐっぷと愛液が攪拌される卑猥な音が鳴った。
「俺のも頼む」

先ほどから俺の肉竿に手はふれているもののまったく舐めることができていない三浦に呼びかける。亀頭にキスをされる感触に身体を震わせると、たっぷりと潤った膣口に人差指をずぶりとねじ込んだ。
「んふぅぅ……っ！　んっ、んっく、んんっ、んんん……っ！」
三浦のくぐもった嬌声が一段跳ね上がる。恥骨の裏をぐにぐにと、丹念に、決して乱暴にしないように丁寧に押し込むと、だらだらと溢れた愛液が白い太ももを伝い、小さなしぶきが俺の顔に跳ねる。
「んぶ……じゅるっ、んっ、ふぅぅ……んふぅぅぅ……っ」
ぐぷぐぷと愛液が攪拌される音に混じって、三浦の喜悦混じりの口淫の音が卑猥に響く。鼻息を荒げて肉竿をしゃぶる姿は目に見えないが、目尻に涙を浮かべて口淫に耽る姿を想像すると恐ろしいほどに興奮する。
指を抜き、右手で尻たぶを掴んで引き寄せ、左手でしなやかな腰を抱き寄せた。どろどろに発情した淫裂が落ちてきて、べちゃりという卑猥な感触がするとともに濃密な発情臭が鼻腔を犯す。
「んふぅぅぅ……っ!!」
俺が抱き寄せたことで肉竿を根本まで咥え込むことになった三浦が獣性混じりの声を漏らす。鼻先を三浦のひくついたアナルに押しつけた状態でねっとりと舐めると、舌がぴりぴりするほど濃厚な愛液が溢れ出した。縦筋をなぞり、膣口をほじくり、固めた舌先をぐりぐりと挿入する。
「ふぅぅぅ……んふぅぅぅ……っ」
上下逆さまになって俺とぴったりと密着した三浦が、まるで手負いの獣のような切羽詰まった声を漏らす。三浦は肉竿を咥えたまま顔を横に倒し、唾液の溢れる口内で肉竿をぐりぐりと舐め始めた。
「ん……ぐ……っ!?」
亀頭裏を中心に遠慮のない圧を口内粘膜にかけられて悶絶し、思わず身をよじらせる。逃がすかと言わんばかりに三浦が淫部を俺の顔にぐりぐりと押しつけてきた。にぢ、にぢゅ……と女性器から卑猥な音が鳴り、ぱっくりと咥え込まれた肉竿に遠慮のない舌愛撫をされ、

むくむくと射精欲求が湧き上がってくる。
「んぐ……ぐぅぅ……っ！」
もう出る……と言おうとしても叶わない。それでも肉竿の反応から射精の気配を察したのか、三浦が自らぐりぐりと腰を押しつけながら、睾丸をふにふにと揉んで竿の根本をぐりぐりとしごき、カリ首をいじめ抜くかのようにニヤニヤと舐めていく。
「お……ご……っ」
意識が飛ぶような絶頂の気配がするなか、目の前でひくつく肛門に目が行く。
吸い込まれるように右手の人差指を放射状の皺の中心にあてがい、ずぶりと挿入した。
「んふぅぅぅ……っ!?　んっ、ふっく、んふぅぅ……っ!!」
三浦の声が跳ね上がり、舌を包み込む膣肉と肉幹を愛撫する口内がぎゅっとすぼめられた。愛液でぬらついた人差指が肛門に根本まで入り込むと――ふたり同時に絶頂に達した。
「……んっ、ぐっ、んふぅ……ふぅぅぅ……っ!!」
膣とアナルを同時に責められている三浦が、じっとりと汗ばんだ肢体をぶるぶるとわななかせる。下半身が脈動するたびに尿道を伝う感覚がはっきりと分かるほど濃厚な精液を三浦の口内に注ぎ込む。三浦は射精を促すように、精液をごくりごくりと嚥下しながらも舌を這わせ続けた。互いの痙攣が重なり、汗ばんだ肌の境界線も曖昧になる。絶対に病みつきになるであろう快感の波にたっぷりと浸った。
『……ぷはっ、はぁっ、はぁぁぁ……っ』
命を削るような絶頂が終わると、ふたり同時に相手の性器から口を離して荒々しく息をついた。三浦がころんと横に転がり、よろよろと起き上がって俺の隣に寝る。
「……指挿れんなし……」
アナルへの指挿れを咎める言葉を弱々しく囁き、俺の乳首を指の腹でぐりぐりといじってくる。「エロ……っ」と呟くと「うるさい……」とつぶやき、俺の乳首をいじったまま肉竿をゆるゆるとしごき始めた。どんどんエロくなっていくなぁ、この女王様は……。

「……まあ、すまん。なんかひくひくしてたから、つい」
「……指を挿れるって分かってんなら、ちゃんと準備したのに……」
「え？」
「聞こえてるくせに聞き直すな……っ」
「んむむむ」
頬をつねられた。聞こえてはいたけど、予想外すぎたんです。
「ん……っ」
肉竿をしごきながら乳首にちゅっと口付けをしてきたかと思うと、ちろちろと舌を這わせはじめた。甘やかな快感で半勃起状態だった肉幹がむくむくと膨らんでくる。
「……何回出す気だし。ヒキオの変態」
変態、と耳元でいたずらっぽく囁かれてぞくりとする。
「……なんでおっきくなんの？　意味わかんないんだけど」
耳にぴったりと唇を押しつけて囁いてくる。ものすごく楽しそう。
三浦は言葉を止めるとふたたび乳首に口をつけ、ちろちろと舌を這わせはじめた。金色の髪をくしくしと撫でて抱き寄せると、うっとりと気持ち良さそうに目を細める。
このままもう一度射精するまでしごいてくれるのか……と思っていると、不意に肉竿から細指が離れた。乳首からも唇を離し、そっと抱きついてくる。
「ヒキオ……その、クリスマスは、どうする？」
「あー……そうか、もうすぐか」
もう3週間もしないうちにクリスマスを迎える。今年はイヴが土曜日で当日が日曜日。街がいったいどれほど混み合うのか想像もしたくない。
「……その、ヒキオは……土日空いてる？」
胸板に頬を寄せて、上目遣いで尋ねてくる。勃起したままの肉竿をふにふにと触られて気持ちいいやら可愛いやらで頭の中が大変なことになっている。
「そりゃもちろん」
曲がりなりにもこの子の恋人という立ち位置なので、予定を入れる

つもりなど初めからなかった。入れる用事もないんだけどね！
「そっか」
　三浦が安心したようにつぶやき、俺の腰をぺちぺちと叩いてくる。横を向いて腕を差し出すと、俺の二の腕に機嫌良く頭を乗せた三浦が胸板におでこをこすりつけてきた。普段学校で見ている姿とはあまりにもかけ離れた可愛らしい仕草。こんなことをされてくらりとこないわけがなかった。
「……あーし、さ……」
「ん」
　三浦がぽつりとつぶやく。胸板にかかる吐息が熱い。
「……イヴまでに、心と身体の準備、しとくから……えっと、その……ヒキオと、最後まで……したい」
「……っ」
　思わず喉を鳴らすと、目の前でその音を聞いた三浦がびくりと震えた。恐る恐る顔を上げ、可愛らしく見つめてくる。
「……いいのか？」
「……うん。もうかなり待たせてるし」
「……そうか。ありがとな」
「……うん」
　三浦が嬉しそうに微笑み、俺も微笑み返す。
「ん……っ」
　唇を重ねると、三浦が瞳を蕩けさせた。
「もう一回するか？　さっきの」
「……指挿れてきたお返ししたいから、あーしに舐めさせて」
「……指、挿れたりしませんよね？」
「さあ、どうだろ？」
　笑い方がちょっと恐い。
　一体何をされるんだろう……とちょっとビビリながら、三浦がいそいそと俺の股座に座る様子を眺める。
　三浦は日に日に可愛くエロくなっていく。イヴまで我慢するのもけっこう大変かもなと思いつつ金の髪をくしくしと撫でると、劣情を

浮かべていた瞳が可愛らしく細められた。

続く。

（６０）

数週間後の土曜日。

クリスマスを前日に迎えた休日とあって、ふだん家にこもっている人がのきなみ街中へとはじき出されたのではと思うほど、駅前は人波でごった返していた。

三浦と会う予定の時刻は朝の１０時。早めに落ち合って、一日たっぷりとかけて遊ぶ予定だ。慣れないことをして疲れきってしまいそうなものだが、今回のデートは夜に一番重要なイベントが待っている。テンションでどうとでもなる気がした。

ちょっとは早めに……と思っていると、待ち合わせ場所の駅前に９時半に着いてしまった。スマホを点けては消し、点けては消しを繰り返し、暇つぶしにいつもプレイしているソシャゲをやろうとしてまったく集中できずすぐに断念して……と、正直に言えば１ｍｍも落ち着かない。

周りを見渡せば、同じようにデートの待ち合わせをしていると思われる男女の片割れがたくさんいる。みんなそわそわとしていて、その中でも俺自身は特にそわそわしてしまっている気がした。

キラキラした連中の中に混じる、シスコンの引きこもり。

わざわざ自分のダメなところを抽出して自虐していると――不意に、コートの袖をくいくいと引かれた。

「……お待たせ」

「……ういっす」

振り返り、掠れた声で挨拶を返す。

――三浦は襟にファーの付いたＰコートにミニスカート、それに黒のストッキングとブーツという格好をしていた。ＴＨＥ女子高生と言わんばかりの格好で、スタイルの良い三浦には尋常でないほどに似合っている。

思わず、見惚れた。

見惚れずにはいられなかった。

「……ヒキオ、見すぎだから……」

三浦が恥ずかしそうにぽしょぽしょとつぶやき、ファーで口元を隠してうつむく。周りの連中が「え、なにあの子、可愛くない？」「モデルの人？」などとベタな言葉をつぶやくほど美しい三浦が見せる初心なリアクション。ついさっきまでぐるぐると考え込んでいた自虐がいともあっさりと吹き飛んでしまった。
「……ええと、その、なんだ……すまん。あんまり似合ってたもんでな」
頭をがしがしと掻いて、伝えるべきことをきちんと伝える。三浦はファーで口元を隠したまま、なにやら目をギューっとつむり、それからおそるおそる上目遣いを向けてきた。
「……ありがと」
「……おう」
消え入るような声で囁かれた言葉が心臓を貫く。あやうく声が裏返るところだった。
「……それじゃ、行くか」
「あ、ちょっと待って……」
歩き出すと、三浦が俺の袖をくいくいと引っ張り、なにやらきょろきょろとする。会話を聞かれないようにするためか、駅前でもひと気のないところへと連れていかれた。突然の連行である。
「どうした」
三浦のいつにない行動に慌てる。三浦はほんのりと顔を赤らめたまましばらく黙りこんでいたかと思うと、眉をひそめてなぜかにらんできた。やけに可愛いにらみ方だ。
「耳、こっち」
電報かよ、と思うほどぶつぎりの言葉を囁き、俺にちょいちょいと手招きをする。言われた通り耳を寄せると、三浦は周りから俺たちの会話を遮るように手を口に添え、俺の耳元でぽしょぽしょと囁いた。
「……その、……ピ、ピル、飲んで準備してたから……ゴム、用意しなくていいから」
「……っ!?」
んん!?

まるで予想していなかった言葉の弾丸に撃ち抜かれる。俺がぴしりと固まるなか、三浦はサッと顔を離し、まるでケンカでもしているかのように顔を逸らしてしまった。金の髪から覗く耳が真っ赤になっている。こんな衝撃的な告白をして恥ずかしくないわけがないのだろう。三浦が今日という日に備えて積み重ねてきた準備を思い、身体が猛烈に熱くなる。
「……ええっと……今のは……マジなのか？」
「……うん、マジ」
顔を逸らしたまま俺の前で手をふらふらとさまよわせ、俺の手をそっと握る。スイカ割りを見ているようで可愛かった。
「ん……っ」
色っぽい吐息をついて、俺の胸板におでこをとんとくっつける。なんだこの可愛い生き物は……と思っていると。
「……ピルは飲んでるし……あと、危ない日でもないから……中で出していいから」
「んぐ……っ!?」
言葉の弾丸のさらなる追撃に撃ち抜かれ、変なむせ方をした。
「ちょ、ヒキオ、だいじょうぶ？」
「うぐっ、げほっ、すまん……っ」
いつもすまんねえ、それは言わない約束だよ……と字幕が付きそうなやりとりをする。三浦はなんでこんな爆弾発言をして平気そうなんだ……と思ったが、ちらりと見ると盛大に顔を逸らしていた。そりゃそうですよね。
「げほっ、けほっ……はぁ。……三浦。一応聞いとくけど……いま自分がどんだけすごいことを言ってるのか、分かってるよな？」
真剣に尋ねると、三浦は静かにうなずいた。
「……ん、分かってる。……ヒキオと、何も気にせずにしたいから」
「……そうか。ありがとな」
いじらしい気持ちと行動が心底嬉しい。頬がゆるゆるになるのをこらえながら頭をぽんぽんと撫でると、三浦は猫のように目を細め、おでこをくしくしとこすりつけてきた。

家にいたら即座に押し倒しそうなやりとりだが、いかんせん今は公衆の面前だ。いくらひと気が少ないとはいえ、朝からイチャついているようにしか見えない（というか実際イチャついている）バカップルのやりとりは通りかかる何人もの人に目撃されている。
「……行くか」
「……うん」
俺がつぶやくと、三浦が俺の手をキュッと握った。
今晩は、三浦とゴムを着けることなく生で繋がって、しかも中出しをする。
それを、午前１０時の時点で三浦本人の口から約束される。
もちろん、心の底から嬉しい。嬉しいんだが……。
……これから一日健全なデートをしようとしている時に聞くには、少々刺激が強すぎる情報だった……。
×　×　×
今日の行程はふたりであらかじめ決めていた。ふたりとも、ノープランでのびのびと楽しめるような柄ではないからだ。
三浦が集合場所である駅前に来たのは午前９時５５分だった。狙いすましたかのように５分前に現れた。もしかしたら俺と同じくずいぶんと早めに来てしまい、どこかで時間を潰していた……のだとしたらとても嬉しい。勝手な想像でしかないのだが。
「けっこうあったかいね」
「だな」
空を仰ぐと気持ちのいい晴天で、ぽかぽかと暖かい。目的地まで歩いているだけで、コートを脱いでも良いかもしれないと思うほど身体が温かくなった。
「……着いたな」
「……うん」
駅からほど近いところにあるショッピングモールの中にある映画館にたどり着いた。
午前は映画鑑賞をする予定で、観る作品も決めていた。予定通りに駅から淡々と移動してチケットを買い、ごく普通の席に座る。

「……」
「……」
……。
会話が少ない。
いつも以上に。
けれど、別に気まずいという訳ではない。
理由は単純明快で、三浦がついさきほど告白した内容が原因だ。
このあとのデートで楽しめるのかどうかはいまいち予想がつかないが、そのあとの――夜に待ち受けている時間はきっと、いや、確実に濃密なものになる。
最後までするということへの不安はあるが、三浦とはほぼ毎日のように『直前』の行為に及んでいた。三浦は行為に及ぶ際、日に日に強張りが抜け、どんどん身体の中が柔らかくなり、加速度的に淫らになっていった。
クラスメイトとしての女王様気質の三浦、ふたりきりでいる時の可愛らしい三浦、そして淫らな行為に及ぶ時の『女』としての三浦。それぞれの空気の変わり目がはっきりと分かるようになり、その兆候が読み取れた時はたまらないほどドキドキするようになっていた。
「んむ……？」
不意に頬をつままれて雑考から目を覚ます。スクリーンには他の映画の宣伝映像が流れていた。ちらりと横を観ると、スクリーンの光に照らされた三浦がどこか咎めるような、それでいてなんだか妙に可愛らしい表情を浮かべている。
「ヒキオ、なんか変なこと考えてるでしょ」
「うぐ……っ」
あなたのことを考えてました☆
と勢いで言いそうになり、慌ててやめた。
俺が言いよどんだことを肯定と捉えたのか、三浦が俺の耳をつまみ、耳元にそっと唇を寄せる。甘い香りがふわりと鼻腔をくすぐった。
「スケベ」

「……っ」
どこかいたずらっぽい声で囁かれ、心臓が甘やかに跳ねる。
何も言い返せずに固まっていると、三浦が耳元でくすりと笑い、するりと離れてしまった。
一方的に弄ばれているなぁ……とは思うが、その感覚がなんとも心地良いとも思ってしまう俺がいる。決してMなわけではないとは思うが……いやしかしこれもMに入るのか……？　などと考えているうちに、映画が始まった。
×　×　×
今回観ることにしたのは、それなりに話題になっているほどよいラブロマンスだった。
デート当日に上映している作品を三浦と調べ、いくつか気になるものをピックアップして作品内容を調べた。ベッドでふたりとも裸になってうつ伏せになり、ひとつのスマホを覗き込んで調べるという光景は――これこそ映画のワンシーンでありそうだよな……などと思ったが、恥ずかしくて三浦には言えなかった。
この作品はストーリーとしてのしんどい波風はなく、ふたりの男女が結ばれていくさまを穏やかに、それでいて時々コミカルに映している。見ていると自然と頬が緩むような、そんな作品。作品の中の時期は夏だった。ヒロインが白のワンピースを着て、麦わら帽子にひらりと落ちた木の葉をつまんで微笑むさまが印象的だ。
「……」
ふと、隣の三浦の手と俺の手がこつんと当たる。小指同士でこつ、こつ、こつ、とまるで親密度をたしかめる合図のように、何度も何度も当たる。やがてじゃれつくように小指を絡めあい、薬指、中指、人差指、親指と重なっていく。下になっていた俺の手をひっくり返し、手のひらを重ね合う。
ちらりと隣を見やると、三浦も俺のことを見ていた。スクリーンに映る夏の日差しに三浦の顔が照らされる。ほんのりと目を細めるさまはどこまでも穏やかで、つないでいる手からじわりと安心感が広がった。

しっかりと指を絡ませたまま、映画の中の時間と映画の外の時間がゆったりと流れていく。
作中のふたりが結ばれ、気だるげな朝を迎えた。裸になったふたりが布団の中でじゃれついている。どの映画を観るかを決めていた時の俺と三浦の姿と重なって顔が熱くなった。
作中のふたりがじゃれつき、ヒロインがいたずらするようにキスをしてすぐに唇を離す。主人公の男性がキスしようとすると顔を逸らし、なんだよ……と諦めたところでふたたびヒロインから唇を重ねてくる。焦れったくなった主人公がヒロインに覆いかぶさり、唇を重ねてねっとりと舌を絡め合う。ヒロインの控えめで形の整った美乳が露わになった。ぷっくりと膨らんだ乳頭を指でくりくりとつまむと、ヒロインが悩ましげに眉をひそませ、布団の中の裸体が妖しくくねる。
「……」
思ったより過激なベッドシーンに動揺しつつも、なるべく顔に出さないようにしていると――つないでいた三浦の手が熱くなった。ちらりと隣を見やる。三浦は平然とした顔をしているが、スクリーンに照らされた耳が仄かに赤い。
微笑ましく思っていると、三浦の手がさほど熱いと思わなくなった。俺の手も熱くなっているのかもしれない。
ベッドシーンが終わる頃には、俺と三浦はじっとりとかいた手汗をたっぷりと混じりあわせていた。
× × ×
「……はぁ」
映画館から移動して昼食をとるために入ったカフェで、三浦が物憂げなため息をついた。無理はないよな、と思う。
映画はクオリティ自体は極めてすばらしいものだったが、カップルで見るには刺激が強すぎた。あけすけなことを言ってしまえば、夜にこの映画を観てすぐに家やホテルに行き、すぐに行為に及ぶ……という前提で見るのなら良いかもしれない。
男女が結ばれて濃厚な営みをするに至るまでの過程が、あまりにも

生々しく、それでいてとても穏やかに映し出されていた。
「……すごかったな」
カフェにしては驚くようなボリュームのサンドイッチを食べながらつぶやく。お互い、映画を観終えてから今に至るまで、作品の感想を言い合うことをあえて避けていた。
俺がぽつりとつぶやいた言葉に、カフェオレを飲んでいた三浦がほんのりと顔を赤くする。
「……あんなの、聞いてないんだけど……」
あんなの、というのはもちろんベッドシーンのことだろう。俺たちは作品内容を調べこそしたが、ネタバレを避けるためにあまり突っ込んだリサーチはしなかった。ベッドシーンについて触れた内容紹介を見かけていなかったので、完全に油断していた。ベッドシーンがあること自体は不思議に思わなかったが、まさかベッドシーンがあそこまで濃厚で生々しいとは……。俺はいったい何回ベッドシーンと言ってるんだろう。
「……まあな、真っ昼間から変な気分になったのは否めない」
ぽつりとつぶやくと、三浦が恨めしげな視線で見つめてきて、それからうつむいてカフェオレのカップを両手でキュッと握った。
「……言わなくていいから……バカ」
可愛らしい声音でぽしょりと囁き、長い髪の毛先をくりくりといじる。本当に可愛くなったな、と思う。元々存在していた可愛いところに気付けるようになったのか、それとも新たな魅力として形作られたのかまでは分からない。いずれにせよ、三浦はその表情も、仕草も、言葉も、まとう雰囲気も、日に日に魅力的になっている。
若干気まずい感じもするので、そろそろ出るか……と思っていると。
「ヒキオも……」
「ん？」
三浦の唇からぽとりとこぼれた言葉に首を傾げる。三浦はほんのりと朱い唇をもぞもぞと動かし、探るように上目遣いを向けてきた。
「ヒキオも……あんなふうに、したいの？」

「……っ」
思わぬ質問に言葉が詰まる。三浦が言っている『あんなふうに』というのは、先ほどのベッドシーンのことだろう。朝のイチャつきから徐々に発展して、最終的にふたりは向かい合って抱きしめながら繋がり、ヒロインが全身をビクビクと痙攣させたところでうつ伏せにさせ、休むことなく後ろから貫いていた。
布団で覆っているので細部こそ見えないものの、見ている人は誰もが同じ行為を思い描いていたに違いない。ふたりの荒い息遣いも、ヒロインの気だるげで甘い喘ぎ声も、ベッドが軋む音も、何もかもが生々しかった。
あんなに怠惰で、濃密で、愛情と劣情を重ね合わせるような行為をしたいのかと問われれば……。
「……まあ、そりゃあな、したいとは思うけど」
「変態」
「あれ!?」
自分から聞いておいて!?
三浦はぷいと顔を逸らし、ちらりと流し目を送ると――くすりといたずらっぽく笑った。
「……別にいいけどね」
「え」
「そろそろ出よ」
「あ、おい……」
別にいい、という言葉をどうとっていいものか分からないままに三浦が立ち上がり、さっさとレジに向かう。
猛烈に問いただしたい気持ちが込み上げるが、たぶん笑ってはぐらかされるよな……と思いながら、慌ててバッグの中の財布を探しながら立ち上がった。
続く。

（６１）

昼食後はショッピングモールをブラついた。俺から手をつなぐと三浦の目が泳ぎ、会話が急によそよそしくなって思わず笑ってしまった。可愛らしく睨みながらつないだ手をにぎにぎとされ、なんだこの可愛い生き物は……と激しく動揺した。

ショッピングモールに行くということは決めていても、具体的にどうするかは決めていなかった。なので目に入った店に適当に入る流れを繰り返した。ひとりでいる時ならば絶対にやらないことだが、三浦と一緒にいるとなんとなくなんでも楽しめる。

よくわからないアジア雑貨屋で民族色が強すぎるネックレスを試着させられ、三浦がめずらしく大笑いしたり。

ゲーセンのエアホッケーで三浦が予想外にやる気を出して熱戦を繰り広げ、暑い……とコートを脱ぐ仕草に思わず見惚れていたら三浦が恥ずかしがって脱ぐをやめてしまったり。申し訳ないことをした。

店員の「どういったものをお探しですか？」トークに巻き込まれるのがいやで普段なら絶対入らない服屋で、三浦が俺に何度も試着をさせて満足げにうなずいたかと思うと「今度プレゼントするから」とさらりと言われてどきりとしたり。なんでそんなに男前ですのん？

今度は俺が三浦に似合う服を選んで、これが似合うと思うと言ったら「……そう？　あんまり……」と濁されてものすごくショックを受けたり。三浦が「うそうそ、冗談だから。……ありがと、すっごい嬉しい」と言われてテンションが上がりすぎて心臓が爆発しそうになったり。

つれづれなるままに、ふらりふらりと過ごす時間。

徐々に日がかたむき、気温が下がってきたことにも気付かないほどに、俺も三浦もふたりきりの時間を楽しんだ。

×　×　×

楽しい。

とても楽しい。

しかしそれでも、身体は正直なものだ。薄い本的な展開のことを

いっているのではない。
「……疲れた……」
夕方5時をまわった頃、思わず本音をつぶやいてしまった。タタン、タタンと揺れる電車の音にため息が溶けてまぎれる。
「まあ、ヒキオにしてはがんばったんじゃない？」
三浦はせっかくのデートでため息をつくなどという愚行を咎めることもなく、それどころかくすりと笑って賞賛までしてくれた。いや、まあ、賞賛といっていいのか微妙なところではあるんだが。
俺と三浦は外出デートの最後の目的地に向かっていた。そこで夕方のひとときを過ごして、夕食は家でとる予定になっている。
休日の電車は混み合っている。遊園地帰りと思われる親子連れ、デートをひとしきり楽しんだのであろう中学生カップル、男友達3人組、イヤホンで動画を見ている人……様々な人が狭い空間で一緒に揺られている。
俺はつり革を掴んでいて、三浦は入口横のバーを掴み、空いた手で俺のコートをちょんとつまんでいる。控えめにいって死ぬほど可愛い。
「三浦は、なんだ、その……前から行きたかったのか？」
いま向かっている目的地は三浦が見たいと言い出した場所だった。尋ねると、くい、と上目遣いで見つめてくる仕草が可愛すぎて変な声が出そうになった。「おはよー!!　起きてー!!」とか言ってしまいそうだ。
「……うん、興味はあった」
三浦の返答はやけに短く切られてしまった。他の話題と比べて会話が膨らむ感覚が薄い。
――興味があったのがいつからなのか、その時は誰と見たいと思っていたのか――
三浦の歯切れの悪い回答に心が揺れ、しなくてもいい邪推をしてしまう。
「……そうか」
平静を装ったつもりの声が、ひどく沈んでいた。三浦がハッとして

顔を上げる。今にも泣いてしまいそうな表情で、申し訳なさが胸にあふれた。
「……その、あーし……今は、ヒキオとすっごい行きたいから。……ていうか、もう、ヒキオとしか行きたくないし……」
「……そうか」
三浦の優しい言葉で胸に温かな火が灯る。電車が揺れ、三浦の顔が俺の胸板にぽすんと押しつけられた。
「……今さら気にすんなし……ヒキオのバカ」
ぽしょぽしょと、ちょっとだけ恨みがましい声でつぶやく。ついでに可愛らしいボディブローを何発か。いや、ボディブローは可愛らしくねえか。胸をぽすぽすと叩くとかなら可愛いんだけど、わりと強めに腹にパンチを入れてくる。あれ、怒ってる？
「……わかった。もう気にしない」
「……ん」
綺麗なつむじの見える金の髪をぽんぽんと撫でると、三浦が安心したように吐息をもらした。言葉にこそしていないが、「許す」といってくれていたのがわかる。
間もなく、電車が目的地に着いた。
× × ×
生ぬるい空気が漂う地下鉄の駅から地上に上がると、真冬の凍てつく空気が肌をなでた。しっかりと手をつないで数分歩くと、目的地が見えた。
「わぁ……っ」
三浦がいつになく興奮した声を上げた。
――俺たちが見に来たのは、都内で毎年冬の名物になっているイルミネーションだった。この場所は辺り一帯が落ちついた青白い光に包まれていて、その中を散歩することができる。考えることはみな同じなのか、周りはカップルだらけだった。
「きれい……」
うっとりとつぶやく三浦の横顔を見る。青白い光に照らされた恋人の横顔。ただただ見惚れてしまう。俺がイルミネーション以外の

ものを見ていることに気付いた三浦が、つないだ手を可愛らしくにぎにぎして咎めてくる。
「あーしばっか見てどうすんの……バカ」
「……わるい」
「べつにわるくはないから、謝んなくていいし」
「俺にどうしろと」
「さあ、自分で考えれば？」
言葉こそつっけんどんだが、その表情は心底楽しそうだ。俺も自然と頬がゆるんだ。青白い光の中へとゆっくり歩き出す。
道の両端をなぞるようにライトが置かれ、昼間ならば芝生や小さな丘が見えるだろう場所に幻想的な光の花が咲いている。イルミネーションは場所によっては色とりどりの光を発している場所もあるが、この場所は青白い色で統一されていて、雰囲気がとても落ちついている。この辺りを歩いているカップルも年齢が俺たちよりもずっと高い。みんな会話をほとんどせずに辺りを見回しているが、しっかりと手をつないでいるカップルが多かった。
「ね、ヒキオ。あそこ……」
三浦が指差した先では、一際大きなツリーが光に包まれていた。青白色以外の色も使っているが、それでも全体的に落ちついた色合いを保っている。大きなツリーをベンチに座って見ているカップルが何組かいた。この場所にいるカップルは、なんというか他の場所を歩いていたカップルよりも熱量が高い気がする。具体的に言うと明らかにイチャついている。
なんだか変な気分になりかけていたので、これは立ったままちょっと見てすぐに引き返したほうがいいか……と思っていると、タイミングが良いのか悪いのか、ちょうどベンチがひとつ空いた。ちらりと三浦を見ると、「あそこ、座るよね？」と実に分かりやすく表情で訴えかけてくる。うん、これは拒否する選択肢はないね！
「おお……」
どうしたもんかな……と思っていたにも関わらず、いざベンチに座るとそういった不安が一瞬で吹き飛んだ。俺たちが座ったベンチは

クリスマスツリーの真正面で、見上げるほど大きなツリーをまるで映画のスクリーンを見ているかのように楽しむことができる。三浦は声にならないといった様子でぽーっと見つめていた。
「あーし……今日、ここに来れてよかった」
三浦がぽつりとつぶやき、俺の太もものうえでキュッと手を握ってきた。指を絡めて握り返すと、三浦がちらりと俺を見た。なんだか泣きそうな表情に見えた。
「ヒキオは？」
三浦の質問は、さまざまな含みがあるように思えた。
俺たちが恋人になるまでの経緯を考える。俺もそれなりに色々思うことはあったが……三浦は俺よりもずっと悩んで、ずっと苦しんで、前に進もうと努力して、心を折られて、ゆっくりと立ち上がって、今こうやってふたたび前を向いて歩いている。その隣にいつの間にか俺がいたかのような、そんな感覚。
「……俺も、ここに来れてよかった。本当に」
「……そ」
俺の言葉に三浦はそっけなく答えるが、その声音は嬉しくてたまらないのを必死でこらえているかのように思えた。この推測が慢心でないことを祈る。
おそるおそる腕を伸ばし、肩をそっと抱き寄せると、三浦は目をパチクリとさせ、それから嬉しそうに目を細めた。俺の肩にしなだれかかり、俺の存在をたしかめるように絡めた指にキュッと力を込める。
「……きれい」
「……そうだな」
ふたりの会話はここで終わる。
真冬の屋外で座っているだけなんてあっという間に風を引いてしまいそうなものだが……俺の手も、三浦の手も、いつもより熱い気がする。身体も柔らかな温もりに包まれていた。
それからしばらくのあいだ、俺と三浦は目の前で静かに光を放つツリーをただただ眺めつづけた。

続く。

（６２）

イルミネーションとクリスマスツリーを眺めた帰り道は、ふたりともほとんど何もしゃべらなかった。

しゃべることが見つからないという訳ではない。

ただ、ふたりで眺めた景色の余韻に浸りたかった。三浦も同じ気持ちだったら良いなと思う。

言葉を交わす代わりに手をつなぎ、指を絡めあい、視線を交わした。何度も、何度も。三浦が白い息を吐きながら見上げた空は曇っていたが、ときおり隙間から綺麗な月が覗いていた。

「ただいま」

「……ただ、いま……でいいの？　お邪魔します？」

俺の家に着くと、三浦が首をかしげた。可愛い。

「ただいまでいいだろ」

「……ん、わかった」

三浦が薄く微笑んだ。

――夕食は三浦のリクエストで、俺の家で食べることになっていた。小町が気を利かせて友達の家に泊まり、さらに両親にも根回しをしてくれていた。両親が帰るのは深夜、もしくは泊まりになるそうだ。本当によくできた妹である。三浦に小町の動きを話したら死ぬほど恥ずかしがると思われるので言っていない。あくまで『小町も両親も家にいない』としか伝えていなかった。

三浦は小町と会うたびににこやかにイジられていて、遠目に見ているととても面白いし可愛い。調子に乗って俺もイジろうとするとものすごく怖い目で睨まれるけど。あの眼力、寿命が縮むからほんとやめてほしい……。

ひとまずリビングに荷物を置き、ふたりで料理をする。材料はふたりで話し合い、俺が買ったことにしているが……実際は三浦と話し合ったあと、小町と買いに行った。三浦に指定された食材やら調味料やらでちんぷんかんぷんなものがあり、なんでもできる妹に助力を乞うたわけだ。

当然ながら呆れられたが、「ま、未来のお義姉ちゃんのためにがんばりますか」と恥ずかしいセリフとともに手伝ってくれた。「優美子さんに小町が手伝ったこと言っちゃだめだよ？　ぜったい恥ずかしがるから」「奇遇だな、俺もそう思ってた」なんて会話を挟んでいたため、この件についても三浦には伝えていないの。比企谷兄妹は三浦の羞恥心をすっかり把握している。

三浦がソファにバッグを置き、Ｐコートを脱いだ。目にも鮮やかな赤のニットは、三浦の整った身体のラインをくっきりと浮かび上がらせている。

――食事が終わったら、『そういうこと』をする。

とっくにわかっているはずのこと。けれど、今日のデート中はずっと、なるべく意識の外に追いやっていたこと。三浦に対する思いはたしかだ。愛情だってある。けれど、それでも、性欲が煮えたぎってしまう。

我慢に我慢を重ねていた思いが、三浦のニット姿を見ただけでいとも簡単に噴き出しそうになる。

俺の視線に気付いた三浦が、顔を真っ赤にしてそらした。

「……ばか、見すぎだから……」

「……すまん」

三浦が口をもにょもにょと可愛らしく動かし、右手で左のひじを押さえる。ただでさえ強調されていた胸がさらに強調される。ごくりと喉を鳴らすと、三浦がハッと顔を上げた。気付けば三浦の目の前にいる。三浦は泣きそうな顔をしていた。

「……サカりすぎだって」

「……ふまん（すまん）」

三浦が優しく頬をつねる。じゃれつくような仕草に胸が高鳴る。細い肩を掴むと三浦の瞳が揺れた。俺を見上げ、目を閉じる。

「ん……っ」

やわらかな唇の感触に浸る。ちろちろと舌を絡ませ、腰を抱く。同じ人間だとは信じられないほどに細く、繊細な腰つき。三浦も抱きしめ返してきた。身体をぴったりと密着させ、互いの体温を感じ合う。

リビングの時計は少し前に壊れてまだ直していない。俺と三浦しかいない家は本当に無音で、家の前を車が通る音さえしない。三浦の甘やかな息遣いが、舌で唾液を弾く音が、三浦が艶めかしく身体をよじらせることで生じる衣擦れの音が、耳朶を静かに打つ。
「……ぷはっ。……硬くすんなし」
「いや、それはムリだろ……」
唇を離すと、三浦がいたずらっぽくささやき、膨らんだ股間をさする。お返しとばかりに尻をミニスカート越しになでると、色っぽく身体を揺らした。
興奮の熱が、ぞわぞわと糸のように伸びて背すじを駆け上がる。
もう少しだけ、もう少しだけ……と心の中で言い聞かせながら、三浦のスカートをめくりあげようとすると――
「いてっ」
おでこにてしっとチョップをされた。三浦が顔を赤らめながらも、まるで年上のお姉さんのような呆れた笑みを浮かべている。
「先にご飯でしょ？　……ったく、なんかヒキオ、どんどん遠慮がなくなってない？」
「うぐ……すまん」
「ま、べつにいいけどね。本音を隠しておさえてるよりは」
さらりとつぶやき、にこっと笑う。優しく包み込むような笑みに撃ち抜かれ、ああ、俺は本当にこの子が好きなんだな……と思っていると。
「んむっ？」
「……ぷはっ。ほら、ご飯作るよ？」
ほんの一瞬だけ、風が吹いたかのように唇を重ねられ、さらに股間をさらりとなでられた。押し倒したくなるような色っぽい挑発だが、こうもあっさりと切り替えられてはどうしようもない。
「……おう」
手のひらで転がされてるなぁ……と思いつつ、俺もキッチンに向かう。
転がされているとは思いつつも……その感覚がどうしようもない

ほど心地いいと思う俺がいた。

×　×　×

ふたりで夕食を作るという行為は、思っていた以上に楽しかった。三浦は俺がいない時もしょっちゅう小町に料理を教わっていたらしく、初めて小町に料理を教えてもらった時とは比べ物にならないほどの腕前になっていた。『優美子さんはもはや免許皆伝だね』と小町が言っていたことを思い出す。三浦さん、っべー。そりゃあ、俺が首をかしげるようなものを買い出しリストに入れるわけだと納得する。

三浦は優しくもきびきびと俺に指示をして、俺は数えきれないほど「あ、はい」という間の抜けた返事をした。三浦を手伝うというよりは、もはや教えてもらっていた。料理中の三浦は本当に楽しそうで、ときおり無意識に鼻唄を歌っては顔を真っ赤にしていた。可愛い。もしかしたら、家ではいつもこんな感じなのだろうか。可愛い。

食卓にはカットしたローストチキン、ロールキャベツ、野菜たっぷりのサラダ（盛り付けもばっちり）、ポテトサラダ、その他「本当にふたりで食べきれるのか？」と思うような料理がずらりと並んだ。三浦が普段から健康を意識しているためか、サラダが妙にたくさんあった。途中から草食動物になった気さえした。

どう座るか迷ったが、ふたり並んで食べることにした。三浦が美味しそうに食べる仕草に見惚れたり、俺の頬についたポテトサラダを三浦がひょいとつまんで無意識に食べ、お互い顔を真っ赤にしたりと、淡い時間が過ぎていく。三浦と過ごす時間が、どんどん『日常』になっている気がして、それがたまらなく嬉しかった。

大量の料理をたいらげたあとは、冷蔵庫からケーキを出した。これは小町にも相談せず、俺が選んでみた。ブッシュ・ド・ノエルという可愛らしいケーキ。三浦にも好評でよかったが、「これ、ヒキオが選んだんだ……」とちょっと笑いをこらえていて腹が立った。俺がすねると、まるで赤ん坊をあやすかのようにあーんをされた。羞恥で怒りが吹き飛んだ。ふたりして顔を真っ赤にしていた。俺たちは少々自爆が多すぎる。

×　×　×

片付けを済ませると、ソファで少し休むことにした。シンプルな食べ過ぎである。丸一日デートした疲れもあり、三浦がうとうとととしなだれかかってきたのが強烈に可愛かった。今日だけで何回押し倒したくなったかわからない。
「あ、そうだ」
しばらくぽけーっとしていると、三浦がバッグの中をごそごそとしはじめた。中から袋を取り出す。俺もハッとして、三浦に見えない位置に置いていた袋を取り出す。
「はい、プレゼント。……え、あーしにも？」
「そりゃそうだろ」
プレゼントを渡しあい、ドキドキしながら袋を開ける。
ふたり同時に中身を取り出し、思わず笑ってしまった。
俺からのプレゼントも、三浦からのプレゼントも、どちらもマフラーだった。しかもどちらも落ちついた色合いのチェックのマフラー。まるであらかじめ打ち合わせしたか、あるいはいっしょに買いにいったかのようなペアルック。三浦は目をぱちくりとさせ、けらけらと笑った。みんなの前にいるときは決して見せないような無邪気な笑み。ずっと見ていたくなる。
「どうする、巻いてみる？」
「いや、室内で巻くのは変だろ……。暑いし」
「いいからいいから」
「むぐ……」
三浦が無理やり俺の首にマフラーを巻く。コートも着ていないうえに、暖かい室内で巻くのは極めて違和感がある。しかしはしゃぐ三浦が可愛いので俺は無抵抗を貫いた。なにこの男前な心意気。完璧なる自画自賛である。
「ん、いいんじゃない？」
さいですか。
バリバリの部屋着にマフラーという妙ちきりんな格好だが、三浦は満足げだ。
「じゃあ今度は……」

「え、あーしはいいって」
「や、なんでだよ」
自分だけ逃げようとした三浦をとっつかまえる。ふたりきりという状況を考慮しても、三浦はいつも以上にはしゃいでいる。どういうことだ、気絶するくらい可愛いぞ。これがクリスマスなのか……（錯乱）？
観念した三浦にマフラーを巻く。
「あー……良い感じだな」
コートを着ていないとはいえ、ごく普通に似合っていた。俺の素の言葉に、三浦がぷいとそっぽを向く。
「……そ」
そっけない声音が可愛らしい。
このあと、お互いのマフラーを袋に戻し、あらためて渡しあった。なんだか変な時間だったが、和んだのでよしとする。

× × ×

「そろそろ、部屋に行くか」
「……っ」
プレゼント交換でひとしきりはしゃいで落ちついた頃を見計らって声をかけると、三浦の肩がぴくりと震えた。腰に腕をまわすと、細喉がこくりと鳴る。
「……うん」
震える唇からこぼれでた声は、おどろくほど頼りなかった。
三浦は何度も俺の部屋に来ているのに、今日はまるで借りてきた猫のようになっている。今日は今までくり返してきた行為からさらに一歩踏み出す。俺よりも三浦が緊張しているのは当たり前だった。
部屋に入り、電気を点ける。三浦がかなり緊張しているから、ワンクッション入れることにした。のんびり外でも眺めようかとカーテンを開けると――
「あ……」
三浦の声が、不意に緊張から解き放たれた。窓にそっと手を置き、外を眺める。恋人の横顔に見惚れつつ、俺も外の景色を眺めた。

雪。
移動中は曇っていただけだったが、いつの間にか雪が降っていた。風に吹かれることなく、静かに、はらはらと降りてくる。ひと粒ひと粒がまるで道行く人に「見て、見て」と無邪気に呼びかけているように思える。たくさんの雪を眺めたり、ひと粒が天から家の屋根まで落ちるさまを眺めたり。
「きれい……」
三浦がうっとりとささやく。いつの間にか互いの肩が触れ合っていた。そっと肩を抱くと、三浦が見つめてくる。瞳に緊張の色はなく、愛情に満ちているように思えた。
「ん……っ」
唇を重ねる。顔を横に向けてキスをしていたところから、徐々に向き合い、互いの背中や腰に腕をまわして抱きしめあう。雪が音を吸っているのか、家の外はさらに静かになっていた。互いの鼓動さえ伝わりそうなほどの静寂。三浦の長いまつげが揺れ、金の髪が流れ、すがるように俺の背中をさすり、唇と舌を愛情たっぷりに絡める動きひとつひとつに神経を集中させる。三浦のことをもっと知りたくて、貪るように身体を密着させる。
「んふぅぅ……んっ、ちゅっ、れるっ、ふぁっ、んっ、んふぅぅ……っ」
三浦がとっ、ととっと後ろにさがり、身体の向きを変える。無意識なのか、窓に背を向ける形になった。口づけに夢中になった三浦はそのことに気付いていないのか。ゆっくりと首を後ろに傾ける。窓に触れないように三浦の頭にそっと手を回すと、しんと冷えた窓の感触が手の甲を突き抜けた。
「ちゅっ、ちゅぴっ、れるっ、はぁぁ……ヒキ、オ……んっ、れるっ、んふぅぅ……っ」
三浦が夢中になって舌を絡め、艶めかしく身体を揺する。金の髪の毛先が窓に触れ、俺の手の甲も窓をすべる。三浦を抱きしめたまま後ろに下がって窓から離れると、ミニスカート越しに尻を揉んだ。
「んふぅ……っ？　あっ、やっ、んんっ、んっく……っ」
三浦が色っぽい声を漏らし、頬を朱に染めて人差指を咥え、喘ぎ声

をおさえる。いじらしい仕草にぞくぞくしていると、下腹部にぞくりとした感触が突き抜けた。三浦が手のひらを上向きにして、膨らんだ股間をそっとなでている。三浦は人差指を咥えたまま柳腰をくねらせ、熱っぽい上目遣いを向け、がちがちに張り詰めた肉幹をなでてくる。裏すじを爪でかりかりとこすられ腰が揺れると、三浦がうっとりと目を細めた。あまりの興奮でどうにかなってしまいそうだ。

「……三浦。……そろそろ、するか」

俺の言葉に、三浦の手が止まる。両手でそっと俺の腰を抱き、ぴったりと寄せてくる。膨らんだ下腹部の感触を味わうように身体を揺らすさまが恐ろしいほどに色っぽい。

「……うん」

愛情と、劣情と、興奮と、不安と、緊張と、期待。

さまざまな感情がまじりあった三浦の返事が、床にぽとりと落ちた。

続く。

（６３）

部屋の明かりを消して、ベッドに置いた間接照明を点ける。三浦が部屋に来るようになってから、このままではムードのかけらもないのではと思い急いで買ったものだ。小町に相談するのも難なので、相当必死でググった。淡い光が三浦には好評で安心した。

「……」

「……？」

俺が服を脱ごうとしていると、三浦がいっこうに動かないことに気付く。俺が脱がせたほうがいいのか……？　とおそるおそる近付くと、三浦が同じだけ遠ざかった。けっこうショック。比企谷菌を恐れたのかしら？

「……今日は、大丈夫。ってか、見ないで」

「え」

「あ、ごめん、えっと、その……後ろ向いてて」

真っ暗な中でするのか……？　と思いきや、どうやら脱ぐところを見られたくないらしい。たしかに今までも、脱衣のさまを見ないように言われることが何度かあった。大人しく指示に従って三浦に背を向け、いそいそと服を脱ぐ。

「もう、大丈夫……」

「ん、あい……よ……」

振り向いた瞬間、身体がぐっと強ばった。

――すでに何度も見てきた三浦の下着姿。そのどれもが魅力的だったが、今日は格段と魅力的だった。間接照明に照らされた下着は、可愛らしいピンクのフリル付きのものだった。パッと見は可愛らしさを前面に押し出しているが、よく見ればかなりきわどい。乳丘の頂を覆う布はうっすらと透けていて、下腹部を覆うショーツは鋭角に食い込んでおり、陰部の布も透けている。

少女の可愛らしさと大人の女性の色気を混ぜ合わせたような――強烈極まりない下着。

「……な、なんか言えし……」

三浦が恥ずかしそうに身をよじる。本当なら、胸や下腹部を手で覆って隠したいのだろう。それでもなんとか俺に見せようと、胸のうえに可愛らしく手を重ねている。間接照明の薄明かりではわかりづらいが、それでも三浦がめいっぱい恥ずかしがっているのがわかる。思わずごくりと喉を鳴らし、ぎちりと張りつめた肉竿がビンと跳ねた。
「バ、バカ、正直すぎだから……」
「俺にどうしろと……」
三浦があわあわと可愛らしく慌てる。頭をかりかりと掻いて、三浦の二の腕をそっとつかんだ。ビクッと震え、目を泳がせ、迷子になった幼子のような瞳を上目遣いで向けてくる。
「……その、なんだ、めちゃくちゃ似合ってる。可愛いし、うん、すげえエロい」
「……っ」
エロい、という言葉を発した瞬間、三浦の身体がびくりと震えた。白い素肌がひどく熱い。三浦は目を泳がせ、もういちど上目遣いを向けてくる。
「……ん、まあ、合格にしとく」
「光栄です」
三浦の言葉にちょっと苦笑いを浮かべる。審査する側がこれ以上ないほどテンパっているのだから、なかなかシュールな状況だ。
「三浦……」
そっと抱きしめると、三浦が背中に手を回してきた。かすかに震えている。それでも、キュッとすがるように抱きしめ返してくる。
「ん……っ」
顔を上げ、うっとりと目を閉じた三浦と唇を重ねる。唇を薄く重ね、徐々に深く重なり合わせ、唇の隙間に舌を這わせる。なかなか唇が開かないな……と思っていると、三浦が薄く目を開けた。いたずらっぽい目に、こんにゃろう……とちょっと力を込めて舌をねじ込む。
「んふぅぅ……っ？　んっ、んんっ、んんんん……っ」

三浦の口の中に俺の舌がぬるりと入り込むと、三浦の声が蕩けた。おそるおそる俺を抱きしめていた手が、積極的に背中をまさぐってくる。

じっくりと高まっていく熱量に脳が焼かれる。

両手の指をいっぱいに広げて、三浦の背中をまさぐる。かろうじて触れる程度のタッチで、円を描くようにゆっくりと。三浦の背中はしっとりとした熱を帯びていて、指を這わせるたびにビクビクと可愛らしく震える。すべすべの肌をなで、可愛らしいブラのホックの上をなぞり、またすべすべの肌をなでる。三浦が顔をかたむけ、ますます積極的に唇を重ねてくる。

三浦はこういった行為の際、言葉を口にする代わりに態度や仕草で昂ぶりを表す。今日はいちだんと……というよりは、今まででいちばんスイッチが入っていた。俺も冷静な思考が徐々にとろけ、極上の肢体を味わうことに夢中になっていく。

「んふぅぅ……っ、んっ、ちゅぴっ、はぷっ、んっく、れるっ、んちゅるっ、んんん……っ」

三浦の手が俺の背中から徐々にすべっていき、尻をなでてくる。慣れない感触にぞくぞくしながら、俺も同じように三浦の尻をなでる。きわどいショーツをそっとなで、不意を突いて瑞々しい尻肉に指を食い込ませる。三浦の声が俺の口内で跳ねた。ショーツに指を滑り込ませて引っ張り、陰部を食い込ませる。三浦の腰ががくがくと前後に揺れ、先走りの滴る肉槍の切っ先がへそに食い込む。

エロ……っと思っていると。

「んぐ……っ!?」

三浦の手がふたりのあいだにすべり込み、いきり立った肉槍にそっと触れた。竿の根本に指を当て、そのまま裏すじをつつっ……となぞってくる。尿道を突き抜ける快感に身体を震わせると、三浦がうっすらと目を開け、楽しそうに目を細めた。

「……ぷはっ。ヒキオ、興奮しすぎだし」

楽しそうにいいながら、三浦が両手を俺の下腹部に伸ばし、片手で玉袋をやわやわと揉み、もう片方の手で作った指の輪で竿をしごいて

くる。しごく力は少しだけ強く、まるで射精したときに残り汁を出すときのような手つきだ。実際、今は先走り汁が大量にあふれている。三浦がゆっくりと指の輪を往復させるだけで、へそに押しつけられた鈴口から大量のカウパー液が噴きこぼれる。
「……お前こそ」
「ん……あっ、ぅあ……っ」
卑猥なショーツに指を添え、割れ目に食い込ませる。ちゅく……と濃密な水音がした途端、三浦の腰が跳ねた。
「……ヒキオこそ、おつゆダラダラにしてるくせに」
「お……あ……っ」
俺の指に淫部をいじられながらも、三浦が楽しげに微笑む。瞳からはいつもの凛とした光が消え、その代わりにたっぷりと牝の欲情が浮かんでいる。へそに食い込んだ亀頭を離し、ねっとりと垂れた透明な糸を楽しげに眺め、また自分のへそにぐりぐりと押しつける。
三浦の視線が下に落ちて、血管の浮かんだ肉幹に釘づけになる。
「ヒキオ。ここ、座って」
とつぜん手を離したかと思うと、俺の肩をとんと押した。俺のすぐ後ろにはベッドがある。縁に座れということらしい。
「え？　いや、でも……」
「いいから」
「……はい」
有無を言わさぬ恋人の言葉に、情けなく従った。

×　×　×

三浦の指示に戸惑いながらベッドの縁に腰を下ろす。
興奮も高まったことだし、このまま下着を脱がせてベッドに……と思っていたので、ずいぶんとしどろもどろな反応になってしまった。
三浦が俺のひざを開き、股座にひざまずく。
「お、おい……？」
「いいの、あーしがしたいんだから……」
しっとりとした声で囁かれ、ごくりと喉を鳴らした。整った顔の目の前で、先走り汁が新たに噴きこぼれる。

「……よだれ、垂らしすぎだし。どんだけ興奮してんの？」
「……そりゃ興奮するっつうの」
三浦が髪をかき上げ、うっとりと肉竿を眺める。竿の根本に手を添え、鈴口を指でぴとぴとと触る。淡い快感に震える俺を、上目遣いで可愛らしく見つめてくる。可愛いしエロい。エロいし可愛い。間接照明も相まって、三浦の魅力があまりにも強烈なものになっている。
「ん……しょっぱい」
カウパー液をちろりと舐め、悩ましく眉をひそめる。下着姿を見せたときの羞じらいが消え、その代わりに恐ろしいほどの色気を醸しだしていた。
「……ちゅぴっ」
「ぐぅ……っ!?」
不意打ちで鈴口を吸われる。三浦が啜った量よりも、唇を離した直後に新たにあふれ出した量のほうが多い。三浦は唇をもによもにによと動かし、ゆっくりと飲み下した。
「……ほんとやらしい味」
ぽつりとつぶやき、カリ首を俺の腹に押しつける。竿の裏側を晒した状態で、三浦の舌が根本からカリ首にかけてねっとりと這っていく。
「お……おぉあ……っ」
十数センチの距離を何秒もかけて上り、下り、また上る。同じ動きのように見えて、途中で竿の裏側を固めた舌先でぐりぐりと小突いてきたりと小さな変化を加えてくる。一瞬たりとも油断することのできない焦れったい快感。
「あむ……っ」
時間感覚を忘れて口淫に浸っていると、玉袋を咥えられた。寝ぼけているかのように瞳を細め、口の中でころころと転がす。舌でぐりぐりしすぎるとちょっと痛いと伝えてからは、三浦はとても優しい舌遣いをするようになった。絶妙な力加減で吸い、シワのひとつひとつを伸ばすように舌を這わせる。たっぷりと精子を作ってね、と優しく訴えかけるような玉舐めに、興奮の波がじわりじわりと高まっていく。

「三浦……」
　じっくりと口淫をしてくれている三浦が愛おしくてしょうがなくなり、そっと耳に手を触れる。
「んん……っ！」
「え……っ？」
　三浦が跳ねるように口を離した。俺の手の感触に浸るように、虚ろな目で見つめてくる。金の髪をかき上げて耳の形をなぞっていくと、三浦は女の子座りをした脚に両手をはさみ、ぼうっとした表情で俺を見つめてきた。
「なんか……いつもより感じてないか？」
　耳はもともと敏感だったが、それにしても今は、まるで直接乳房や性器に触れているかのような反応だ。驚いていると、三浦が小さくうなずいた。
「うん……なんか、その、今日は……やばいかも」
　口内で一瞬のうちに生成された大量の唾液を、大きな音を立てて嚥下した。三浦は俺が遠慮なく喉を鳴らす音を聞いて、ゆっくりと顔を上げた。ぞっとするほど淫靡な笑みを浮かべる。今まで見たことのない恋人の顔におどろいていると、三浦は俺の内ももに手を添え、反り返った肉槍をぱくりと咥え込んだ。
「うぉ……っ？」
　唇をキュッと締めつけ、ゆっくりと竿にすべらせていく。熱く湿った口内にぬるりと咥え込まれ悶絶する。三浦は首をかたむけ、亀頭が喉奥にこつんと当たるまで呑み込んだ。苦しそうに眉をひそめ、それでも最奥まで肉幹を咥え込んだままで舌を亀頭や竿にねっとりと這わせてくる。波が引くように顔を引き、カリ首を上下の唇でキュッと締めつける。
「んっ、ちゅっ、ぢゅるっ、んっ、んっ、ん……っ」
　先ほどまでと違い、今度は同じ動きを丁寧に、丹念に反復する。先走り汁や自分の唾液を何度も嚥下し、何度も、何度も唇をすべらせ、舌を這わせる。耳をなでるたびに身体をぶるぶると震わせるが、それでも決して口愛撫をやめることがない。ぬっ、ぬるっ、と濡れた唇が往

復するたびに、心地良い快感が下腹部にたまっていく。様々な快感は興奮を高めてくれるが、いざ射精に至るとなると単純な快感のほうが向いている。
　三浦は丁寧に、じっくりと、俺を射精に導こうとしているのだ。ただの前後運動では飽きてしまうと思ったからなのか、ときおり口の動きを止め、俺の反応を伺うように上目遣いを送り、固めた舌先で鈴口を小突いてくる。俺ががくがくと痙攣すると、嬉しそうに内ももをすりすりとなでてくる。愛おしさがますます募っていく。
　確実に射精に追い立てようとしているが、けれど決して焦ってはいない。
「お……お……お……っ」
　三浦が俺の股座に座ってから、３０分経ったのか、１時間経ったのか、もはやわからない。それでも、なぜ射精していないのかわからないほどの時間が経った。
　ぐつぐつと煮込まれた射精衝動が、ゆっくりと込み上げてくる。
「三浦……も、もう、出る、出る……っ」
　金の髪をくしくしとなでてつぶやくと、三浦がこくりと小さくうなずき、唇をすべらせる速度を上げた。射精衝動が一気に現実味を帯びると、三浦の両手が玉袋を爪でかりかりとこすり、竿の根本をしごいてくる。あまりの快感に腰が引けると、竿の根本をしごく三浦の指にぎゅっと力がこもり、決して逃がしてくれない。三浦の細指の中で睾丸がキュッとせり上がった。
「ぐ……ぅぅぅ……出る、出る、出る、出る……っ」
　腹に力を込めてぶるぶると震えていると、やがて――腰が大きく揺れた。三浦の喉奥に亀頭が突き刺さり、狭い尿道を濃厚な精液が駆け上がり、三浦の喉奥を叩いた。
「んふぅぅ……っ、んっ、んぐっ、ごくっ、んぐっ、んっく、んふぅぅ……っ」
　三浦が目を白黒させながらも、懸命に精液を呑み込んでいく。細喉が鳴らす音の大きさから、精液の量と密度が伺える。今日いちにち、この夜のことを想像していた。そのうえでたっぷりと興奮に興奮を

重ねての射精だ。魂が抜けるかと思った。
「んむ……ちゅっ、ぢゅるっ、じゅろっ、ちゅっ、じゅるる……っ」
射精の脈動が終わると、三浦が丁寧に鈴口を啜り、竿をしごいた。もう出ない……と思ってからも数回脈動し、三浦の口内に最後の一滴まで射精した。
「……ぷはっ。……出しすぎだから、もう……」
口を離し、可愛らしく文句を言いながらもさりげなく竿をしごいてくる。鈴口に白濁が浮かぶと、上目遣いで見つめながら啜った。
「……三浦さん、エロすぎます」
「……そ」
俺の言葉に、三浦がそっけなく答えて顔をそらす。しかし竿をしごく手はそのままだ。そろそろ大丈夫です……。
長い射精の余韻にひとしきり浸ると、三浦の頭をぽんぽんとなでた。
「ありがとな。ほんとに気持ちよかった」
「ん」
金の髪をくしくしとなでると、気持ちよさそうに目を細めた。控えめに言うと死ぬほど可愛い。ちなみに控えないで言うと俺はもう死んでいる。
「それじゃ、今度は俺の番だな」
「え？」
「たっぷりお返しするから」
「え、いや、あーしは、その……」
俺の言葉に、三浦が目に見えて慌てた。この子はどんどん可愛くなっていくな……と思った。

続く。

（６４）

たっぷりお返しするから――という俺の言葉に、三浦は可愛らしく慌てた。

「あーしはもう、その、大丈夫だから……っ」

ぽしょぽしょとか細い声でつぶやく三浦の二の腕をつかむ。

「ひゃんっ!?　……ぁ……っ」

自分の喉から出た可愛らしい悲鳴に羞恥を覚えたのか、間接照明の薄明かりに照らされた頬が朱に染まる。

「初めてなのに、もう大丈夫ってことはねえだろ」

「う……っ」

「それに、夜は長いんだからな。じっくりしたい」

「……」

「というか俺ばっかり一方的に気持ち良くしてもらってて納得がいかん。覚悟しろよ」

「……」

俺が言葉を重ねるたびに、三浦がしおしおと縮んでいく。塩でもまいちゃったかしら？

「……へんたい」

上目遣いで、秘密めいた、睦言のような、甘ったるく、咎めるような声。

視界がぐらりと揺らいだ気がした。

「……今のは反則だぞ……。危うく押し倒すとこだった」

「……べつにいいんだけど」

「……」

「きゃ……っ」

そっと抱きしめると、三浦の身体は熱くて細かった。

×　×　×

三浦には、下着を着たままでうつぶせになってもらった。三浦はもう脱いでもいいのに……という感情を全力で表情に出していたが、あくまでじっくり三浦の身体をほぐしたいんだと説得したところ、しぶ

しぶ納得してくれた。
「ヒキオってさ」
「ん？」
　腕を枕にしてうつぶせになり、まるでビーチでオイルを塗ってもらおうとしているかのような三浦の腰にまたがったところで、ぽつりと声をかけられた。
「普段はそっけないのに、……エッチのとき、ねちっこいよね」
「うぐっ」
　うすうす自覚があったことをさらりと指摘され、なんだかよくわからないダメージを負った。そっかー。俺、ねちっこいのかー。
　ダメージの回復を待つこと、数秒。三浦は俺の返事を待つあいだ、暇なのか脚をぱたぱたさせていた。可愛い。
「……ねちっこさ上等」
　謎の開き直りを見せると、三浦がくすりと笑った。
「ま、きらいじゃないけどね」
　さいですか。
「きらいじゃないとのことなので、思う存分ねちっこくさせていただきますよ、っと」
　俺の言葉に、三浦がぴくりと反応した。顔を覗き込みたくなったが、いま覗き込むとどんなことをしてしまうか分からない。あえて想像の中で楽しみながら、背中にそっと指先を当てる。
「ん……っ」
　１０本の指先が触れただけで、三浦のすらりとした肢体が艶めかしく震える。右手と左手でそれぞれ円を描き、ブラよりも上の部分――肩甲骨周辺を丁寧に撫でる。指が触れるか触れないかのタッチで、甘やかな快感をすり込むように。
「ん……あっ、んんっ、んっ、んん……っ」
　まだ背中しか触れていないのに、三浦の反応はいつになく敏感だ。俺がまたがっている腰がうねうねとくねり、ぞくぞくする。
　今度はまたがる位置をずらし、ブラの紐をまたいで背中から腰にかけてなでていく。漏れ出る声が徐々に切羽詰ったものになっていく

ことにぞくぞくしていると、尾てい骨に触れた瞬間に三浦の腰が跳ねた。
「んくぅぅ……っ！」
三浦のひざ裏にまたがっていたため、自然と俺の目の前に三浦の尻が突き出される形になる。三浦は腕を伸ばしていて、まるで伸びをしている猫のように見えた。薄明かりではっきりとは分からないが、際どいショーツに染みができているのがわかる。このまま鷲掴みにしてめちゃくちゃにしたくなったが、かろうじてこらえた。
「ヒ、ヒキオっ、んっ、ぅあっ、そこっ、いいからっ、だいじょうぶだから……んぅぅぅ……っ」
尾てい骨周辺を徹底的になでると、三浦は尻を突き出したままぶるぶると身体を震わせる。自分がいまどれほど恥ずかしい体勢になっているかの自覚もないのかもしれない。ピンクの薄布が陰部に食い込んでいるさまは信じられないほど卑猥で、三浦が腰を妖しくくねらせるごとに、くぐもった濃密な牝の匂いが鼻腔をくすぐってくる。
いったん手を離すと、三浦はようやく重力を思い出したかのようにぺたりと沈み込んだ。今度は足先から徐々にのぼっていくと、太ももに触れた途端に先ほどと同じように三浦の尻がぐっと突き出された。
「ばか……だから、いいって、ばぁ……っ、あっ、んんっ、やっ、あぁぁ……っ」
食い込んだ薄布の周りを丁寧にさすると、瑞々しく張り詰めた尻肉が目の前で揺れる。
「ヒキオ……ばか、顔、近いって……ばか、もう、しらない……んんん……っ」
「……」
まずい。
楽しい。
このまま小一時間さすっていたいが、そんなことをすれば俺はまごうことなき変態になる。もうこの時点でもアウトかもしれないが。
あと、三浦にマジで殴られるかもしれない。
「……次、仰向けになってくれるか」

「へ……？　あ、うん……」
よほど疲れていたのか、三浦はへなへなと尻を下ろした。俺が身体をどかすと、横にころんと寝転がって仰向けになり、もぞもぞと移動して位置を調整する。いつもしっかりした印象のある三浦の横着した動き。三浦にバレないように、静かに悶絶した。
「よし。続き、やるぞ」
三浦の腰にまたがると、腕で口元を覆ってぷいと顔をそらした。なんでですのん？
「……ヒキオ、顔、すっごいやらしい……」
「……」
ちょっと凹んだ。
「……じゃあ、やめるか？」
そっと尋ねると、三浦はちらりとこちらを見た。そらした顔を戻し、今度は腕で目を覆い、首を弱々しく横に振る。なんでこうも『クる』仕草ができるのだろうかと思う。ぞくぞくしていると、三浦を責めてがちがちに勃起した肉槍をぺしぺしとはたかれた。可愛い。
「……いくぞ」
腕を顔からどかした三浦が小さくうなずくのを確認して、肩甲骨に触れる。
「うあ……っ」
三浦が甘い声を漏らし、俺にじっと見られていることを思い出してとっさに口をつぐむ。
「いつも見てるだろ。なんか今日は恥ずかしがりすぎじゃねえか？」
「……さっき言ったでしょ。……今日は、なんか、やばいの」
「……なるほどね」
「……答えかた、やっぱりやらしい」
なにかとやらしいと言われる俺である。
そっと手をすべらせていき、ブラの外側、乳房と胸の継ぎ目をそっとなぞっていく。
「あぁ……んっ、んっく、ふっ、んくぅぅ……っ」
本当はいったんお腹や脚をなでて……といった流れを考えていた

が、三浦の表情は想像以上に逼迫していた。これ以上焦らすとおかしくなってしまうかもしれない。
ピンクのフリル付きのブラは、頂を覆う布がうっすらと透けている。綺麗な乳頭はぷっくりと膨らんでいて、すでに限界まで張り詰めているようだった。
「あ……ぅあ……っ、んんん……っ」
乳房の外縁に触れ、ブラ越しに徐々に手をすべらせ、頂上に向かっていく。指がわずかに乳肉に食い込んだだけで三浦の腰が踊る。三浦は唇を引き結び、頭の横でシーツをしっかりと掴んでいる。
親指と人差指で、ふたつの膨らみをキュッとつまんだ。
「んはぁぁぁっ!?」
三浦の身体が跳ねた。スタイルの良い身体がギュッと反り返り、まるで俺が吊り上げたかのような形になる。びくん、びくんと激しく痙攣して、くたりとベッドに沈み込んだ。
「……本当にやばいんだな」
「やっ、んん……っ、わかってるなら手、離し……んくぅぅぅ……っ！」
乳頭を指でくりくりとつまむと、三浦は今にも泣きそうな表情を浮かべた。言葉に反して腰がくいくいとせり上がり、俺の肉幹にショーツをこすりつけてくる。たっぷりと噴きこぼれたカウパーがショーツにじんだ。興奮でどうにかなってしまいそうだ。
乳房から手を離し、三浦の股座に座って下腹部に手をすべらせると、三浦がハッと気付き、あわてて顔を起こした。
「だ、だめ、いまそこは……っ――――」
制止の声を流し、うっすらと陰毛が透けている薄布に指を沈み込ませる。ぐじゅっ……という卑猥な感触とともに、三浦の身体がふたたび跳ねた。三浦は背すじを仰け反らせ、通電したかのように痙攣する。快感のさざ波が下腹部から脳に駆け上がるかのように、しなやかな肢体が脈打つさまはどこまでも卑猥で美しかった。
「はっ、はぁぁぁ……っ」
あまりの快楽に思考が追いついていないようだった。下腹部に触れた俺の手をじっと見つめながら、腰をうねうねと淫靡に揺らしてい

る。
「この下着……すげえやらしいな」
「……っ」
ぐっしょりと濡れたことでより淫猥に透けている下着に触れると、三浦は顔を真っ赤にして泣きそうな顔を浮かべた。どこまでも嗜虐心をそそる顔。
ふと思いつき、ブラの紐部分を引っ張った。ただでさえ淫肉に食い込んでいる薄布を、より際どく食い込ませる。
「え……ちょ、やっ、何して……んんん……っ！」
三浦の声が震える。にち、にちち……と紐が食い込むと、三浦は牡を誘惑するかのようにかくかくと腰を揺らした。新たに溢れ出した愛液が布に染み込み、濃密な牝の匂いがあふれ出してくる。絶頂に達したのかそうでないのかは分からないが、三浦の表情は虚ろに、どこまでも色っぽくなっていた。
「はっ、はっ、はぁぁぁ……ヒキオの……へんたい……っ」
のろのろと上体を起こした三浦が、弱りきった顔で可愛らしくなじってくる。頬をつねられたが、いかんせん力がまったく入っていない。三浦はあぐらをかいた俺の脚に自分の脚を重ねていた。まるで対面でつながっているかのような体勢にぞくりとする。
「うお……っ？」
三浦の細指が、がちがちに勃起した肉槍を包み込んだ。
「あーしのこと責めて、こんなにおっきくしてんの？　ほんとやらしい……っ」
蕩けた表情と声にぞくぞくする。細指は竿にしゅるしゅると絡みつき、じわりじわりと快感を刷り込ませてくる。
「そうだな、お前があんまりエロくて可愛い反応するから、こんなになっちまった」
「な……っ」
思わぬ反撃に三浦が可愛らしく狼狽するなか、ぐっしょりと湿った薄布に肉槍の切っ先を押し当てた。
「うあ……っ」

「手、後ろについて」
「え……こ、こう……？」
　三浦が恐る恐る手を後ろにつく。三浦の問いにこくりとうなずき、俺も同様に後ろ手をついた。互いの下腹部を密着させたまま、上半身を後傾させる。だらしなくも、どこまでも卑猥な体勢。
　三浦が色っぽく喘ぎ、絶頂する姿をたっぷりと見続けたことで、肉幹はついさっきの射精を忘れたかのように力強く勃起している。朱く張り詰めた亀頭が薄布にぐいぐいと食い込むと、三浦は腰をひくひくと揺らした。上体を後傾させたまま腰を揺らしているため、まるでポールダンサーのようにも見える。
「ん……っ、ぅあ……っ。……こんなおっきいの、ほんとに入るの？信じらんないんだけど……」
「入るだろ。ていうか、絶対に挿れるからな」
「……っ」
　ぐっと腰を突き出すと、亀頭が膣口にわずかにめり込む。三浦は腰を引くかと思ったら、自分からも腰を突き出してきた。にち、にゅち……と卑猥な感触とともに、薄布を巻き込んだ亀頭がずぶりとめり込んでいく。
「……絶対に挿れるんだ？」
「ああ」
「……いま、挿れちゃう？」
　三浦がぼんやりと蕩けた笑みを浮かべ、ショーツの紐に手をかける。ふたりがつながるのを妨げているのはこの薄布一枚だけだ。これを取り除けばあっという間につながることができる。
　けれど――
「……いや、もっとじっくり準備してからだな。いま挿れても絶対楽しいと思うけど」
「……やっぱへんたいじゃん」
　三浦が可愛らしくなじってくる。表情と声音はどこまでも可愛らしいのに、下半身はまるで「ちょうだい、ちょうだい」とねだるようにねちっこくくねらせてくる。

背を丸めて、ブラ越しにふたつの乳頭をつまんだ。
「ひゃっ!?　……この……っ」
「ぐ……っ？」
三浦が身体を寄せ、下腹部をこすり合わせたままで俺の乳首をつまんできた。互いの興奮がさらに高まり、密着している下腹部の水音はどんどんいやらしくなっていく。ぐち、にゅぐ……と卑猥な音に耳朶を焼かれながら、至近距離で見つめ合い、ときおり舌を絡め合い、互いの乳首を指の腹でまさぐる。
「んちゅっ、れる……っ、……ヒキオの、立ってる」
「……三浦もな」
恥ずかしい指摘をしあいながらちらりと視線を下ろすと、ショーツの紐が片方外れていた。布が亀頭に巻き込まれ、ずぶずぶと膣に入り込んでいく。
「……紐、外れてるぞ」
「ん」
「いや、『ん』じゃなくて……」
「あーしはいつ挿れられてもいいし？　誰かさんのせいで……こんなに、ぬ、濡れてるから……」
「恥ずかしいなら言うなよ……」
俺を煽ろうとして撃沈している。控えめに言って死ぬほど可愛い。控えないで言うと俺はもう死んでいる。
三浦の乳頭をつまむだけでなく、手の指をいっぱいに広げて揉みしだく。三浦の表情はどんどん甘く蕩けていく。片方の紐が外れたショーツが卑猥にめくれて、ぐっしょりと濡れて肌に貼り付いた陰毛と、亀頭がめり込んだ薄桃色の小陰唇が露わになっている。
あまりに楽しい時間だが、このままではなし崩し的に挿入してしまう。今も軽く挿れているようなもんだけど。
「そろそろ、脱いでもらうか」
「……あと、どんくらい責める気？」
「……三浦がへとへとになるまで？」
「……へんたい」

両頬をつねられる。今度はさっきより力が入っていて、ちょっと痛かった。

続く。

（６５）

まずは三浦のブラを外すことにする。正面から抱きしめる形でしなやかな背中に手を伸ばすと、三浦は所在なさげに俺の首すじに顔をうずめた。金の髪の毛が耳をくすぐって、幸せなむずがゆさに身をよじらせる。

「ヒキオ、ホック外すの上手くなったよね」

手際よく外せたな……と思っていると、三浦がぽつりとつぶやいた。猛烈に恥ずかしくなる。ついでで肉幹までさわさわと触られていた。

「……そうか？」

極めて曖昧な返事をしながら、汗でしっとりと湿った薄布を外した。綺麗な桜色の乳頭はピンと立っていて、今までどれだけ興奮していたのかがよく分かる。三浦が顔を離し、ふたりで乳頭を見つめる不思議な状況。

「ん……っ」

乳頭にそっと指を触れると、三浦が悩ましく身体を揺らした。肉竿をまさぐる手の動きは止まらず、根元から亀頭の先まで丁寧に、劣情を塗り込むかのように撫でていく。

唇を重ねると、三浦は顔をくしゃりと歪めた。なんだか泣きそうな顔。とても綺麗だ。

「寝てくれるか」

「……うん」

子どものような声音で返事をして、こてんと寝転がる。おでこに腕を乗せ、しっとりとした瞳で見つめてきた。存在を確かめるように白くすべすべの頬を撫で、首をたどり、鎖骨をなぞり、乳房が形作る綺麗な円を撫で、お腹、腰骨へと指を滑らせる。三浦はもう、何をしても感じるというくらい敏感になっていた。

ぐっしょりと濡れ、内側の陰毛まで透けたショーツ。片方の紐はすでに外れている。三浦がくいと腰を上げてくれたので、それに合わせてショーツを横から引き抜いた。

「……っ」
陰部から薄布がはがれる瞬間、透明な糸が引いていたことにふたり同時に気付く。三浦が小さく息を呑む音が聞こえた。濃密な牝の匂いが鼻腔を叩き、肉幹に興奮を注ぎ込む。
「ばか、念入りにしすぎだから……っ」
顔をそらして、俺に聞こえないことを願っているかのような声量でささやく。三浦の言うとおり、秘裂はすでにぐっしょりと濡れていた。陰毛は雨のあとの草むらのように湿り、ぴんと伸びているものもあれば、ふにゃりと肌に貼り付いているものもある。
「う……っ？」
さて、どうやって責めるかな……と考えていると、三浦の手が肉幹を掴んだ。そのままくいくいと可愛らしく引っ張ったかと思うと、亀頭が薄桜色の粘膜にくちりと当たる。濡れた草むらというよりは、夏のぬかるみに手を置いたような感覚。熱くねっとりとした感触が敏感な亀頭から伝わり、全身がぶるりと震える。
「……あーし、すっごい濡れてるんだけど？」
三浦が羞恥に顔を真っ赤にしながら、カリ首を指でふにふにと押し、腰をくいくいと前後させる。そのたびに亀頭がかすかに小陰唇の中にめり込んでぞくぞくする。一応、俺たちは童貞と処女だ。しかしその前段階までを幾度となく経験してきた。三浦のこの場所は準備万端に思える。この誘惑も控えめに言って死ぬほど可愛い。
――けれど、もう少しこの時間を楽しみたい。
「そうだな。でも、もっと濡らしたい」
「……っ、……ほんと、ヒキオってねちっこい」
「うぐっ」
地味にダメージを受けた。
× × ×
体育座りをする三浦を後ろから抱きしめた。手を伸ばすと三浦が俺の手を握り、にぎにぎと遊ぶ。ときおり俺をちらちらと見ては、またにぎにぎ。ひたすら可愛い。
「んん……っ」

柔らかな首すじに顔をうずめる。肌をかすかに湿らせる汗を丁寧に舐めとると、三浦がひざをこすり合わせて小さく震えた。耳の形をたしかめるように丁寧になぞり、耳たぶを咥える。息をふーっと長めに吹き込むと、三浦のおとがいがわななき、くっ、くくっとせり上がった。男よりも分かりづらい喉仏を指でなぞりながら、耳に舌をずるりと入れる。空いた手は三浦の手を握ったままで、三浦は俺と繋いでいない手で俺の太ももをすりすりと撫でている。
「なんか、これ……ヒキオに食べられてるみたい……っ」
「……っ」
「やぁ……っ、また大きくなった……っ」
三浦の声は羞恥に満ちながらもどこか嬉しそうだ。
「……あんまり煽ると押し倒すぞ」
「あーしは大丈夫って言ってるけど？」
「……それは、そうだけども」
三浦のほうが男らしいまである。
気を取り直して、今度は両手で胸をそっと撫でる。外の縁をなぞり、5本の指先を外側から中心へとゆっくりと滑らせていく。三浦が唇をキュッと引き結び、俺の劣情をさらに煽るような格好になる。俺がごくりと喉を鳴らしても、反応する余裕さえないようだ。
人差し指と親指で乳頭をつまみ、ゆっくりとこする。
「はぁぁぁ……うっ、んっく、んぅぅぅ……っ」
三浦が俺の耳に唇を押し当て、色っぽい吐息混じりの嬌声を流しこんでくる。しっとりした背中に貼り付いた肉幹からは、飢えた獣のようにだらだらと先走りが垂れ落ちていた。
「気持ち良いか？」
「ん……気持ち、いい……っ」
とろとろに蕩けた声にぞくぞくする。両手を下に滑らせ、太ももから内ももにかけてゆっくりと何度も指の腹を滑らせていく。
「あっ、やっ、はやくっ、さわっ……んっ、あっ、はぁぁぁ……っ」
すらりと伸びた脚を艶めかしくよじらせ、俺の耳たぶにかぶりつい

て可愛らしく喘ぐ。肉幹を掴んでしごいてきたが、いつもより手付きが少し雑だ。よほど余裕がないのだと分かる生々しさにぞくぞくする。
「ヒキオ、もう、大丈夫だからぁ……っ」
「……っ」
余裕のない手つきで、けれど心の底から懇願するような声で囁く。
「……もう少しだけ」
「……ばか、変態、知らない、ばか、ばか……っ」
まずい。
楽しい。
三浦が幼子のように顔をくしゃりと歪めるさまが愛おしくてしょうがない。まごうことなき変態だな、俺。
とはいえこの体勢のままひたすらいじめると、さすがに泣いてしまうかもしれない。普段の三浦しか知らない人からすれば有り得ないと思うかもしれないが、三浦は意外とそういうところがある。
三浦の背中から身体を離すと、暖房を強めにしているにも関わらずひんやりとした。三浦の肌がどれだけ温かかったが分かる。
「仰向けになってくれるか」
頭をぽんぽんと撫でると、三浦が首だけ振り向いた。拗ねたような可愛らしい顔をして、自分の背中をすりすりと撫でている。いったい何を……？　と思っていたら、背中にまとわりついた先走りを探していたらしい。
「……ぬるぬるしてる」
「……うん、まあ、そうですよね」
ちょっと恥ずかしい。
三浦はちょっとした反撃に満足したのか、小さな笑みを作った。今日だけで、いったいどれだけこの子の可愛らしい一面を発見できたことだろう。

×　×　×

三浦に仰向けになってもらい、俺はお腹の横に膝を下ろした。あまりにも滑らかで白いお腹。同じ人間だということが信じられないと

改めて思う。
「ん……っ」
お腹をすりすりと撫で、リラックスしてもらう。丁寧に撫でていると、子宮の上の辺りで三浦がぴくっと反応した。
「やっ……ヒキオ、そこばっか、なでるな……っ」
子宮の上を丹念に、執拗なまでに撫でる。事実として、今日はこの場所に精液を注ぎ込む。しかも一度や二度じゃない。何度でも、精巣が空になるまで。三浦は俺の目を見て、くしゃりと泣きそうな表情を浮かべた。
「だ、め、あんま、なで、……ぅあっ！」
不意に三浦の腰が跳ねた。子宮の上をなでていただけで、軽く達したかのような反応を見せる。内ももをこすり合わせ、「もうやだ……っ」とつぶやく仕草がたまらない。
今日はまだ一度も手で触れていない場所に手を伸ばす。
「あっ、ぅあ……っ」
薄皮に包まれた肉芽に手が近付くと、三浦がか細い声を漏らした。ふたりのあいだに期待と不安が混じり合った空気が満ちる。左手の人差し指と中指でそっと皮を剥くと、朱いクリトリスが顔を出した。
右手の中指でそっと撫でると、三浦の全身が跳ねた。
「うあぅぅっ!? だめ、いま、そこ、だ、め……あふぁぁっ!? あっ、んっく、やぁ、また、イ……んくぅぅっ!!」
俺の指の動きは数ミリ程度なのに、三浦は感電したかのように激しくのたうち回る。切実な嬌声を上げ、頭の横のシーツを掴み、腰をあらゆる方向に揺らし、痙攣させる。まだ直接触れていないのに、膣口からとろとろと溢れ出した愛液がシーツに染みを作っている。
「はぁぁぁ……はーっ、はっ、はっ、……ぅあぁぁ!?」
膣口に中指をあてがうと、いとも簡単にぬるりと滑り込んだ。指を根元まで挿入し、柔らかくしなる膣肉をぐいぐいと圧迫する。
「うぅぅぅ……うぅぅぅぅ……っ！」
内ももをぶるぶると震わせながら三浦が喘ぐ。声を抑えようが抑えまいが、達していようがいまいが関係なく膣肉を抉る。クリトリス

に長めの息を吹きかけながら人差し指も挿入すると、三浦は声にならない悲鳴を上げた。我ながらひどいな……とは思ったが、三浦が本気で「やめて」と言わないから続けられているだけのことだ。本当にいやがることならやらない。三浦はまだ、この状況を楽しみ、溺れ、浸っている。
「んくぅぅ……この……っ！」
「うお……っ？」
ひざ立ちで三浦の下腹部を責めつづけていると、不意に三浦が顔を横に向けて身体を丸めた。まるで猫のようにしなやかに身体を動かし、玉袋に手を添えて肉幹をぱくりと咥え込んだ。
「ぐ……ぁ……っ！」
二本指を膣内に挿入したままで悶絶する。三浦は深々と咥え込んだ肉幹を口内でごろごろと転がし、鈴口からカリ首、竿の部分まで舐めしゃぶってくる。すべすべの頬がぼこぼこと波打ち、そのたびに尿道を快感が走り抜ける。けれど、首を動かせないためか三浦の口淫にも限度はあった。
「んふぅぅっ!?」
左頬を亀頭で膨らませた三浦が喘ぐ。挿入した二本指を根元から折り曲げ、柔らかくほぐれた膣肉をぐにぐにと押し込む。クリトリスはいま触れると過度に刺激してしまいそうなので、ぷっくりと膨らんだ乳頭ごと乳房を鷲づかみにして揉みしだいた。
「んくぅ……ふぅっ、ぅっ、んふぅぅ……っ！」
自分からも責めることで多少は楽になっているものの、三浦は何度も細かく達し、ときおり大きく身体を跳ねさせる。外はしんしんと雪が降る真冬だというのに、三浦も俺もたっぷりと汗ばんでいた。三浦は俺の何倍も汗をかき、甘ったるい匂いをまき散らしている。肉幹を咥え込んだ三浦の目がぼんやりと霞む。それでも舌は蠢きつづけ、肉茎を貪りつづける。
このままだともうすぐ出そうだな……と思ったとき、不意に三浦の身体の動きが止まった。絶頂に波打つことも、肉幹を舐めしゃぶることもなく、ぴたりと止まる。気を失ったのかと思ったが、どうやら単

にくたくたになっただけのようだった。腰を引いて肉竿を口から引き抜くと、唾液で白く濁った糸が何本も伸びた。思わずごくりと喉を鳴らす。二本指を膣内から引き抜くと、汗と愛液でぐしょ濡れになった下腹部がひくひくとわなないた。

「三浦……っ」

三浦の肩を掴んで上体を起こし、でろっとした唾液まみれの肉幹を目の前に晒す。

「ん……っ」

汗でおでこに前髪が貼り付いた三浦が、ぼうっとした表情のまま肉茎を咥え込む。もご、もご……と緩慢な動作でゆっくりと舐めしゃぶっていく。腰を引くと、肉幹の白い濁りが綺麗に消えていた。愛液まみれの二本指も差し出してみると、少しだけ眉をひそめながらも舐めしゃぶってくる。指で味わうフェラチオにぞくぞくしていると、そっと両手が伸びてきた。玉袋に手を添え、ぬらついた竿をしごいてくる。焦点の定まらない瞳がどこまでも色っぽかった。

「……三浦。そろそろ、挿れるぞ」

綺麗になった二本指を口内から引き抜き、そっと尋ねる。挿れていいか？　とは聞かないでおいた。三浦はこれまでに何度もオーケーサインを出していてくれたからだ。三浦は力の抜けた笑みを浮かべてこくりと頷く。

「もう一回確認するけど……ゴムは着けないで、中に出していいんだな？」

デートを始める前に聞いた衝撃的な言葉をもう一度確認すると、三浦は両手で愛おしげに肉茎をなで、泣きそうな笑みを浮かべた。

「うん。……ヒキオ、ぜったい抜かないでね？　……ヒキオの、あーしの中に、ほしい……っ」

「……っ」

身体中が興奮でざわめく。細胞のひとつひとつが喜んでいるような感覚。たまらず唇を重ねると、三浦はちろちろと舌を絡めながら、肉竿をまさぐり続けた。まるでぜったいに手放すまいとするかのように。

続く。

（６６）

何度も絶頂を繰り返し、くたくたになった三浦がぼんやりと見つめてくる。両脚を広げ、今にも重力に負けそうな速度で両手を下腹部に伸ばし、ぐっしょりと濡れそぼった女性器を広げる。出会った頃よりもぐっと大人っぽく、綺麗になった顔が仄かに羞恥に染まる。金の髪が汗で額や頬に貼り付いている。その目は虚ろで、けれど強い意志を持って俺を見つめている。

にじり寄り、淫裂に肉槍の切っ先をあてがう。陰部の周りに生えた恥毛は余すことなく肌に貼り付き、いったいどれほどの汗と愛液にまみれているのかを物語っている。濃厚な甘酸っぱい匂いは絶えず鼻腔を浸していて、今という時間を日常から完全に切り離していた。

「うあ……っ」

腰をわずかに押し進めると、薄桜色の小陰唇に亀頭がめり込んだ。三浦が艶っぽく喘ぎ、ぬち……っという感触とともに熱い潤みに包まれる。これから訪れる快感への期待をいやがうえにも高めてくれる。膣口は小さく、ひくひくと震えていた。

「行くぞ」

「うん……はっ、んんん……っ、んはぁぁぁぁ……っ」

腰をぐっと突き出し、亀頭を膣口にめり込ませる。

……あっつ……っ!?

二本指での愛撫を何度もやっていたためか、思っていたよりもスムーズに挿入することができた。しかし、それ以上に膣肉の熱さに驚く。ついさっきまで手の指で感じていた熱さも、性器で感じるとまるで違うものに思える。亀頭だけめり込んだ結合部を見る。朱い亀頭が薄桜色の粘膜の中に呑みこまれ、俺も三浦も震えている。

「三浦、大丈夫か？」

頭の脇のシーツを掴んで唇を引き結ぶ三浦に尋ねる。長い金の髪は海のように広がっていて、ぞっとするほど美しい。

「だい、じょうぶ……っていうか……っ」

「うお……っ？」

どこか逼迫した声音の三浦が、シーツを掴んでいた手を離して自分の内ももに手を添える。結合部を見つめてこくりと細喉を鳴らし、腰をくい、と動かした。
「もっと……奥まで挿れて……っ」
「……っ、わかった」
挿入は初めてだが、あくまで挿入『は』初めてというだけの話で。
俺も三浦も、奥まで繋がるという行為への期待感はどこまでも高かった。
腰を突き出す。身体を前傾させ、ゆっくりと体重をかけていく。決して逃がすことのないように。俺自身が決して逃げないように。
「んんんん……あっ、あっ、はぁっ、はぁぁぁぁ……っ」
ずぶっ、ずじゅっ、にゅぐ……っと肉槍が膣内にめり込んでいくと、三浦の声がより切なげに、熱く潤んでいく。竿の部分をにぢにぢと締め付けられる感触に悶絶する。膣内の熱と同様に、指で感じていた締めつけの感触とはまるで次元が違った。柔らかなうねりで根元がにぢ……っと締め付けてくることもあれば、慣れない行為による力みで急に竿全体がぎゅっと食い締められることもある。慣れと不慣れが混ざり合った感触はあまりにも気持ちが良くて、思わず腰を引いてしまいそうになる。それでも体重をかけ、逃げるなと自分に言い聞かせる。
「お……っ？」
「あ……っ」
肉槍をずぶずぶと埋め込んでいくと、こつんと奥に当たる感触があった。処女膜……というわけではなく、どうやら子宮口に亀頭が当たったようだ。処女膜を破って出血した形跡もない。俺と三浦はちょっとぽかんとした顔で見つめ合い、それから少しだけ表情を和らげた。
「奥まで入ったみたいだな」
「うん……ヒキオの、あーしの奥に当たってる……」
「……」
お腹をさすりながら腰をひくひくと動かす仕草が、尋常でないほど

にエロい。正直今すぐにでも激しく腰を振りたくなったが、さすがにこらえた。
「すぐに動かないほうがいいか？」
「ん、そのほうがいいかも。……ヒキオの、すっごいおっきいし」
「あの……三浦さん、さっきからものすごくエロいんですけど……」
「……言わなくていいから、そういうの」
本音をつぶやくと、ぷいと可愛らしく顔を逸らしてしまった。
しかし、たしかに時間は必要なようだ。挿入してすぐに動かすのは女性の負担になる、という情報を聞いたこともあるので、しばらくのあいだは腰を止めておくことにする。
「あ……っ、やっ、んん……っ」
形の整った乳房にそろりと手を伸ばすと、三浦が可愛らしく喘いだ。
「リラックスできるように触ってるだけだから」
「んん……触りかた、やらしっ、すぎるからぁ……っ」
乳房の外縁をそっとなぞり、かろうじて乳頭に触れないように撫でていると、案の定ツッコミを受けた。しかし膣内の力みが少しばかり取れたようなので、引き続き愛撫を行なう。
「あっ、やっ、あっ、あぁっ、はっ、はぁぁぁ……っ」
三浦の声から徐々に緊張が抜け、代わりに糖度が満ちていく。とろんと蕩けた目に見つめられ、膣内で肉幹がむくむくと膨らむ。
「やぁ……ヒキオの、おっきくなったぁ……っ」
「……っ」
甘ったるい声でつぶやき、腰をくねらせてお腹をさする。恐ろしいほどに蠱惑的な仕草に背すじがざわつく。
不意打ちでぷっくりと膨らんだ乳頭をつまむと、三浦の腰が糸で吊り上げられたかのように跳ね上がった。
「んくぅぅ……うあぁぁぁっ！」
「ぐぁ……っ」
おとがいも上がり、膣肉が強烈に締め付けてくる。思わず射精しそうになるほどの快感に歯を食いしばってこらえる。

「はぁ、はぁぁ、はぁぁぁぁ……っ」
三浦の吐息が震えている。膣肉は締めつけが増したが、決して力みは伴っていない。明らかにリラックスして、牡性器の感触を楽しんでいる。三浦の瞳がじっとりと湿り、くねくねと腰を揺らすのがたまらない。
「そろそろ動くぞ」
「きて、もう、やだ、がまん、できない……っ」
三浦の言葉に心が激しく波打ち、膣肉が風に吹かれた夜の森のようにざわめく。腰骨を掴んでゆっくりと腰を引くと、去っていくのを惜しむように膣肉に貪られる。ふたたびずぶずぶと押し込んでいくと、今度は決して逃がさないとでもいうかのように奥へ奥へと引きずり込んでいく。
「あっ、ぅあっ、やぁぁ……っ、な、に、これ、こんなの、……んあぁぁっ!?」
ずぶり、ずぶりと数回抽送を繰り返すと、三浦が汗ばむ身体を大きく波打たせた。今度は膣内だけでイったのだと分かると、嬉しさと同時に征服欲や嗜虐心が湧き上がる。
「三浦、ちょっと速度上げるぞ」
「え……っ」
三浦の腰を掴み、少しだけ持ち上げる。突き入れる角度を変えると――腰を振る速度を一気に上げた。
「うあぁぁっ!? あぐっ、ひっ、んくぅぅ……っ、やっ、だめっ、だめ、これ、またすぐ……うあぁぁっ!!」
へそ裏を亀頭でぐりぐりと圧迫された三浦の嬌声に、かすかな獣性が混じる。無我夢中で腰を振れば、性感の高まりきった三浦はたやすく果てる。イってもイっても止まらず、連続した波が三浦の身体を、脳を犯す。三浦が泣きじゃくりながら顔をぶんぶんと振る。頭をかきむしり、俺を止めようと両手を伸ばす。けれど俺は三浦の腰を持ち上げたまま激しい抽送をやめることなく続ける。結合部はいつの間にか白く泡立っていた。三浦が本気で、狂おしいほどに感じてくれていることが嬉しい。

「うぁうぅ……だめ、だめ、だめ、また、イク、イク、イク、イっ……うあぁぁ!!」
俺の手を掴んだ状態で三浦の全身にさざなみが走る。だめ、という言葉を何度も口にしているのに、イク前も、イっている最中も、ぐいぐいと恥骨をせり出してえげつないほどに密着してくる。三浦が何度も絶頂する姿があまりに色っぽく、綺麗で。いつ射精してもおかしくない逼迫した状況でも思わず見惚れてしまった。
抽送を止めて三浦の腰から手を離すと、三浦はまだ俺に持ち上げられているかのように腰をぐぐっとせり上げ、急に重力を思い出したかのようにベッドに沈んだ。ベッドのシーツにはいつのまにか大量の汗が染み込んでいた。三浦が魂の抜けたような顔で俺を見つめ、俺の脇腹からへそにかけてそっと撫でてくる。滑らかな指に俺の汗がまとわりつく。今が真冬だということが信じられないほど、ふたりとも汗をかいていた。
「ヒキオ……っ」
三浦が両手を伸ばしてくる。まるで幼子が甘えるように。無性に愛おしくなり、上から覆いかぶさってきつく抱きしめた。唇を重ね、舌でじゃれつき、互いの性器を貪ろうと腰を揺らす。にゅち、にゅこ、にゅぐ……と卑猥な感触が下腹部から全身に伝わり、心地良い怖気が何度も走る。
唇を離し、おでこをこつんと合わせると、自然と口が開いた。
「優美子」
「……っ」
ずっと呼んできた苗字とまるで同じ感覚で口にしたため、初め自分が何を言ったのか気付かなかった。目をぱちくりとさせている三浦を見て、初めて自分が発した言葉に気付く。
「あー、……気に入らなかったら苗字に戻すけど」
「べつにいいって。それより、もう一回呼んで？」
恥ずかしいイベントが発生してしまった。
「優美子」
「もう一回」

「優美子」
「もう一回」
「……優美子」
「もう一回」
「……勘弁してくれ」
　くたくたになってしまった俺とは対照的に、優美子は上機嫌でにこにこと笑っている。ある意味色っぽい表情よりもレアかもしれない表情。とんでもなく可愛い。
「……ヒキオ」
「え、三浦は変えてくれないの？」
「優美子」
「……優美子」
「よし」
「……いや、だから」
「……あーしはヒキオって呼びたいの」
「……了解」
　恥ずかしげにささやかれ、あっさりと屈してしまった。可愛いのだからしょうがない。
「ん……っ、あっ、あっ、あっ、あ……っ」
　自然と会話が途切れ、抱き合ったままで腰を振る。優美子は俺のゆったりとした抽送に合わせて腰を振り、快感を高めてくれる。キスをして、唇を離して見つめ合って、またキスをする。優美子の身体が何度も小刻みに強張り、軽めに達していることを示していた。無我夢中で腰を振り立てるのも楽しいが、こうやって抱き合って交わるのもすごく楽しい。
「ヒキオ……なんか、中でぴくぴくしてる。それにさっきより熱い……出そう？」
　優美子がうっとりと目を細めながらささやく。俺の背中を優しくさすり、慈母のような表情とは対照的にその腰はうねうねと妖しくくねる。表情や声、身体のすべてを使って射精を促していた。
「……ああ、もう出そうだ」

「ん、わかった。……いっぱい出して」
耳にぴったりと唇を付け、どこかいたずらっぽい声音でささやく。ぞくぞくとした快感が尿道を突き抜け、いよいよ射精欲求が膨らんでくる。抽送を小刻みで単調なものに変え、何度も何度も優美子の最奥を、子宮口を小突く。
「あっ、ぅあっ、んんん……きもち、いい……っ、ヒキオ……ヒキオ……っ」
優美子は短く切られた甘ったるい嬌声を漏らし、すらりとした両脚を俺の腰に巻き付け、愛おしげに締め付けてくる。逃がさない、ぜったい中に出してねという色っぽくも可愛らしい意思表示。睾丸がキュッとせり上がり、強烈な射精衝動が肉竿の根元まで込み上げてくる。
「優美子……もう、出る、出る、出すぞ……っ」
「ヒキオ……きて、きて、きて……ぅあぁぁぁぁぁぁ……っ」
どぶっ、びゅぶっ、びゅぶるるるる……っ。
狭い尿道で圧を高められた大量の白濁が、優美子の膣内にどぶどぶと溢れ出す。尿道をえぐるような濃度の精液。優美子は目を見開き、切なげな瞳で俺を見つめてくる。唇を重ね、きつく抱きしめあい、強烈な絶頂をふたりで味わう。ふたりとも身体が狂ったように震えた。互いの愛情を、快感を伝え合い、循環させ、さらに増幅させる。
激しい抽送の末の射精というわけではないが、高めに高められた性感により、睾丸から引きずり出される精液の射出はいっこうに止まらない。どくっ、どぐどぐ……という濃密な痙攣とともに、強烈な快感が頭蓋を浸す。射精の波が収まってからも、膣肉の締めつけで何度か精液が噴き出した。時間にすれば数分程度の時間。けれどこの時間は、今までの人生で一番濃厚なものだった。
「……ぷはっ。……はっ、はっ、はっ……」
唇を離し、ふたりとも激しく息を切らす。優美子の手はすがるように俺の背中をさすり続けていた。
「なか……すっごいあったかい……」
「……だな」

膣肉も、肉槍も、精液も、愛液も、たっぷりと熱をまとっている。それらすべてが今、とろとろに、どろどろに混ざり合っている。感慨深さとともに、結構な疲労感が襲ってきた。
「……いったん抜くか……って、うお……っ？」
さすがにいちど休憩を……と思って腰を引こうとすると、腰に巻き付いた優美子の脚にぎゅっと締めつけられた。
「……だめ、まだ抜くなし……っ」
可愛すぎか。
優美子がどこか拗ねた顔でささやくのがあまりにも可愛かったので、「はいよ」と答えてきつく抱きしめた。優美子は上機嫌そうに笑い、俺の背中をぺちぺちと叩いた。うーん、気絶しそうなくらい可愛い。
夜は長い。ちょっとくつろぎづらい体勢ではあるけれど、まずはゆっくり休むとしよう。

続く。

（６７）

しばらく抱き合っていると、さすがに汗が冷えてきた。俺を抱きしめてうとうととしている優美子に和みながら、そろーっとリモコンに手を伸ばしてエアコンの設定温度を上げる。ブオォ……と音が大きくなると、優美子が目をぱっちりと開き、じーっと見つめてきた。赤ん坊というか、子猫というか。いずれにせよ死ぬほど可愛い。

「……そろそろだいじょうぶ」

「おう」

優美子の手が背中からするりと離れる。ちょっと寂しいなーと思っていると、優美子の手がふたたび俺の背中をぺちぺちと叩いた。可愛すぎか。

ゆっくりと身体を起こし、結合部に視線を向ける。

……エっロ……。

密着しているため、ふたりが繋がっているところがどんな風になっているか気付かなかった。いつからかは分からないが、結合部は白く泡立っていた。恥毛がぺたりと貼り付き、挿入しているため未だに硬度の衰えない肉槍が深々と刺さっている。

「……ヒキオ、見すぎだから」

恥ずかしそうにぽしょぽしょとささやく優美子も、思いきり結合部を見つめていた。ほんのりと赤らんだ頬をこしょこしょとくすぐると、猫のようにそっぽを向いてしまう。可愛い。

「抜くぞ」

「……ん」

優美子が腕で口を覆って顔を逸らす。ゆっくりと肉幹を引き抜いていくと、「んっ、あ……っ」という生々しい嬌声とともに柳腰がくんっ、くんっと跳ねる。途中で何度か、名残を惜しむかのように膣肉できゅむきゅむと締め付けられた。

ぬぽんっ、という卑猥な感触とともに肉幹が膣口から抜ける。膣口が挿れる前よりも拡がっていて、優美子の呼吸に合わせてひくひくと動いている。数秒の時間差を置き、優美子がひときわ大きく痙攣する

と――ごぷり、と精液が溢れ出てきた。愛液が混じって少し薄まった卑猥な色。
「えっ……あっ、やぁ……っ」
もっと見たいと思い、優美子の内ももを掴んで脚を広げる。優美子は恥ずかしそうに身じろぎするものの、それ以上の抵抗は見せない。頭の横のシーツを掴み、唇を引き結んで悩まし気な視線を向けてくる。ぞくぞくする目。もっとめちゃくちゃにしたいという欲求が湧き上がり、肉槍の角度がぐぐぐぐと上がっていく。
「めちゃくちゃエロいな」
「言わなくていいから、バカ……」
罵る言葉には照れと可愛らしさが溢れていて、なおさら興奮してしまう。
「うお……っ？」
下腹部に甘い快感が走った。優美子が肉茎を根本から先端にかけてさわさわとまさぐっている。
「ヒキオ、まだおっきい」
「ああ、まあ……うん、そうだな」
「……もう一回……する？」
「え」
思わぬ提案に目をぱちくりとさせていると、優美子がころんとうつ伏せになった。のろのろした動きが可愛い。俺をちらりと振り返ったかと思うと、四つん這いになってゆっくりと尻を突き出した。
「お、おい……っ？」
程よく引き締まった白い尻と、精液の滲んだ卑猥な女性器。優美子が振り向く。その表情はありったけの羞恥に溢れているようにも見えるし、めいっぱい甘えているようにも見えた。
「ヒキオ……今度は後ろから、……して？」
「……っ」
今日だけでも優美子の新たな一面をいくつも発見してきたが……これはとびきりだった。戸惑う俺をせかすかのように、右手をそろりと伸ばして女性器を拡げる。精液と愛液の入り混じった卑猥な匂い

に目がくらむ。
「……わかった。ちょっと激しめにしていいか？」
尋ねると、優美子がくすりと笑った。
「どうせ我慢できなくなるでしょ？　……いいよ、好きにして。たぶん、大丈夫だから」
後半は消え入るような声で囁き、ゆらゆらと美しい尻を揺らす。ふたりの性液でぬらついた肉槍がビンと跳ねた。
尻肉に右手を添え、肉幹を左手で支えて白く泡立つ小陰唇を掻き分ける。にゅる……っという卑猥な感触とともに、亀頭が薄桜色の花びらの中にめり込んでいく。切っ先が膣口に当たると、優美子の身体がぶるりと震えた。
ゆっくり、ゆっくりと、腰を突き出した。
×　×　×
「あっ、あっ……んくぅぅぅ……っ！」
にゅる、にゅむ……とたまらない感触に浸りながら腰を押し進めると、先ほどとは対照的に、いともあっさり肉槍が根本まで埋まった。
「ぐぅ……っ」
あっさり埋まった代わりに、肉竿の根本から先端まで余すことなく締めつけられる。一度目と比べて膣肉はやわらかく解れていて、うねうねと悩ましくくねって食い締めてくる。びゅっ、ぶびゅ……っとカウパー液が溢れ出したのが分かった。
「はっ、はぁぁぁ……っ、おっきぃ……っ」
「ちょ、おい……っ？」
四つん這いになっている優美子が、色っぽいため息とともに身体をくねらせる。結合している感覚を味わうかのようにぐりぐりと下腹部を押しつけ、そのたびにねちっこい感覚が突き抜ける。
「この……っ！」
尻肉を掴み、ゆっくりと引き抜くと――亀頭が抜ける寸前で止まり、一気に最奥まで突き入れた。
「うあぁぁっ!?」
どすっ、と肉槍の先端が奥に当たる感触とともに、優美子の悲鳴じ

みた嬌声が耳朶を叩く。にぢっ、という膣ヒダの強い締めつけに下半身が痺れた。すべすべの尻肉に指を食いこませ、次々と腰を打ちつける。
「はっ、んはぁっ、やっ、これ、すご……んくぅぅ……っ」
優美子の声が喜悦に上ずる。痛がってはいないようだと安心すると同時に、もっともっと恋人をめちゃくちゃにしたくなる。腰を引くたびに、卑猥な液体にまみれた肉槍を目の当たりにしてごくりと息を呑む。結合部の卑猥な感触と、腰と尻肉が鳴らす乾いた打擲音。
「あっ……だめ、だめ、ヒキオ、待って……っ」
「ダメだ、やめないからな」
「やぁ……っ」
優美子の声が糖度を帯びる。膣肉がキュッと締めつけられ、しっとりと汗ばんだ背中が波打つ。首を左右に振って金の髪を振り乱す仕草にぞくぞくする。
「やぁぁ……やっ、イク、イっちゃう……あっ、あぁっ、あぁぁぁぁぁ……っ！」
優美子の声が途切れ、背すじが弓なりに反り返る。ぎゅち……っと強烈に食い締めてくると同時に、優美子の裸体がブルブルと痙攣した。不意打ちの収縮にカウパーがびゅるっと溢れ出た。
「……まだまだ」
「え……あっ、んくぅぅ……っ」
絶頂で打ち震える優美子はあまりにも綺麗で色っぽくて。激しい抽送をやめるどころか、もっともっとめちゃくちゃにしたくなってしまう。
がつっ、がつっ、がつっ、と何度も肉槍を突き入れる。ついさっき膣内にたっぷり射精したことを忘れたのかというほど、肉幹は力強く勃起している。
「やぁっ、あっ、やだっ、またっ、イっ、イクっ、イクっ、イクっ……ぅぅぅぅ……っ」
優美子がふたたび絶頂する。声はどんどん弱く、甘く、色っぽくなっていく。尻を突き出したままへなへなとベッドに突っ伏し、汗の

滲んだシーツをキュッと握りしめる。後背位をおねだりした辺りから、優美子のマゾの面がひときわ目立つようになった気がする。夢中で肉槍を抜き挿ししながら、どんどん間隔を狭めて絶頂していく優美子の艶姿に見惚れた。
「優美子……もう少しで、出そうだ……っ」
「あっ、んくっ、あっ、はぁぁ……出、るの……っ？　はぁっ、ぅあっ、うぅぅぅ……っ」
優美子の声はか細く、どこか幼くなっていた。短い言葉をやりとりしている間にも、ふたたび絶頂する。俺を少しでも早く射精に導くかのように、あるいは己の絶頂感を高めるかのように、ぶるぶると震える瑞々しい尻肉をぐりぐりとこすりつけてくる。互いの陰毛がこすれ合うさまは、信じられないほど卑猥だった。
「あ……っ？」
抽送を止めて優美子の手に触れると、可愛らしく呆けた声が聞こえた。シーツを掴んでいた手をそっと握り、手首を掴み、ぐっと引き寄せる。
「あっ、やっ、やだっ、これ、恥ずかしい……っ」
まるで手綱のように優美子の両手首を引いたことで、幾度もの絶頂の余韻が色濃く残る背中がぐっとせり上げられた。優美子は可愛らしく身をよじらせるが、やはりそれ以上の抵抗はしてこない。この子はどこまでエロくなるんだろう……と思いながら――抽送の速度を一気に上げた。
「うあぁぁぁっ!?　あっ、あぐっ、んっく、んくぅぅぅ……っ！」
がつっ、どちゅっ、ぐちっ、にゅぐっ、どすっ。
乾いた打擲音と卑猥な結合音が混じり合い、耳朶を犯す。優美子は数回突いただけで果てた。けれど、イっている最中も抽送は止めない。絶頂のたびに優美子の尻が強烈に押しつけられる。それが勃起を強め、優美子をさらなる快感で焼きつくしていく。
「優美子、イキすぎだぞ。大丈夫か？」
「あっ、かはっ、それをっ、言う、なら、腰、止めろし……あっ、あっ、やっ、また……ぅあぁぁ……っ」

可愛らしく咎めながらもふたたび絶頂する。もはや達するまでに数秒もあれば充分で、何度もイっているのかもしれないし、もしかしたらずっとイっているのかもしれない。優美子の凛とした声音で紡ぐ言葉がどんどん舌っ足らずになり、手首から先がばたばたと暴れてすがるように俺の手首に添えられる。白い肌にじっとりと浮かんだ珠のような汗が膣奥に突き入れるたびに揺れる。優美子の尻にぼたぼたと何かが垂れ落ちた。自分の汗だと気付くまでに数秒かかった。思考と視界が狭まり、ここがどこで、今は何月何日の何時で、どういった経緯でこの行為に至っているのか、何もかもが深い霧の中に紛れていく。むくむくと湧き上がる射精衝動。さっきの射精は愛情に満ちていた。けれど今は、愛情ももちろんあるが征服欲、独占欲に脳が焼かれている。優美子は息も絶え絶えといった様子で喘ぎ、達し、腰をぐいぐいとこすりつけてくる。この子がもっとめちゃくちゃに喘ぐ姿を見たい。もっと可愛くて、もっと色っぽい姿が見たい。肌の熱さを、滴る汗を、膣肉の蠢きを、手首の細さを、波打つ背中を、もっと味わいたい。

「優美子……っ！」

「はぁうっ、んっく、ヒキオ、ヒキオ、ヒキオ……っ！」

優美子の声に余裕はない。俺を呼ぶことしかできないような逼迫した声音。俺の声はなんだか泣きそうだった。色んな感情と、絶頂間近の脳を焼くような快感に頭がぐちゃぐちゃになっていた。

「ぐぁ……っ」

身体の奥底、精巣から白濁が湧き上がってくる。引っ込めようとしても、もう引っ込められない。じりじりと水位が上がっていくような感覚。射精するラインまでじりじりと焦らすように込み上げてくる射精欲求。優美子の手首をギュッと力強く掴み、歯を食いしばって腰を打ちこむ。

「優美子……もう、出る、出る、出る、出る、出る……っ」

「はぁぁぁ……いい、よ、いっぱい、出して……っ」

ばちゅんっ！　と最後に奥へ突き入れた瞬間――さらに奥へ抉り込もうとするかのように、何者かに押されたかのように、腰が前へ

ぐっと跳ねた。狭すぎる尿道を駆け上がる白濁の感触に震える。
「あ――あぁぁぁぁ、あぁぁぁぁぁ……あっ、あつっ、んっく、はぁぁぁ……っ！」
ぶびゅっ、びゅぶるるっ、どぶっ、ぶびゅるるる……っと、魂ごと引き抜くかのような勢いで精液が膣内に注がれる。鉄砲水のような量を、間欠泉のような勢いでたっぷりと注ぐ。優美子の白い肌にさざなみのような痙攣が走る。射精を手助けするかのように蠕動して、竿の根本から先端までたっぷりと貪っていく。気を失わないのが不思議なくらいの快感。全身をがくがくと痙攣させながら、濃密な射精に浸った。
「はっ、はっ、はぁぁぁ……っ」
一滴も残らず出し終え、優美子の手を解放すると、まるで関節という関節が溶けてなくなってしまったかのようにふにゃりとベッドに突っ伏した。俺もよろよろと倒れ、うつぶせになった優美子に繋がったまま重なる。
「……大丈夫だったか？」
優美子の肩にあごを乗せながら尋ねると、優美子がくったりとした顔を向けた。ぞっとするほど色っぽい顔。
「……うん」
「……すげえ気持ち良かった」
「……あーしも」
ってか……と、優美子が汗ばんだ金の髪の毛先をくりくりといじる。
「ヒキオ、ドSすぎだし……」
「イヤか？」
「……その聞き方はズルいから」
ぷいと顔を逸らし、反撃とばかりに腰をくねらせた。肉槍が心地良く締めつけられ、「う……っ」と声が漏れる。優美子が俺をちらりと見て、いたずら成功とばかりにニヤリと笑う。可愛すぎか……と悶絶した。

続く。

（６８）

うつ伏せで身体を重ねてしばらく休んだ。１０分ほど経った頃にようやく身体を起こし、優美子の膣から肉幹を引き抜く。

「ぅあ……っ」

優美子が瑞々しい尻をくいっと持ち上げ、艶めかしい声を漏らした。ほんの少し前までは経験がなかった優美子の中に2回も出した。愛情と独占欲が入り混じった感情に身体が震える。肉槍は半勃起といった状態で、精液と愛液で卑猥にぬらついていた。

今度こそ休むか……と優美子の隣に寝転がると、入れ違いに優美子が起き上がった。

「どうした」

「……キレイにする」

「え……うぉ……っ!?」

俺の脚を開いて股座に腰を下ろしたかと思うと、ふにゃりとした肉竿をぱくりと呑み込んだ。精液だけでなく、己の体液もまとわりついた男性器。優美子は一瞬眉をひそめたが、止まることなくゆっくりと舌を這わせていく。

「お……あ……っ」

優しくもどこか嗜虐的な責め。温かな口内で肉幹がぐりぐりと舐め転がされ、徐々に硬度が増していく。優美子は自分の口の中で起きた変化に可愛らしく目をぱちくりとさせ、初めはゆっくりと顔を左右に揺らし、徐々に規則的な上下動に変えていく。優美子の喉がこくこくと鳴り、精液と愛液が呑み込まれていったのだと知る。口でしてもらったことは何度もあるが、こういった事後にしてもらうのは初めてだ。優美子が感じているであろう戸惑いや興奮を一瞬たりとて見逃すまいと、金の髪をかき上げて熱心に口淫を続ける恋人を見つめた。

このまま射精するまで続けてくれるのかな……と思いきや、途中で唇が不意に離れた。唾液を塗り込まれた肉竿はひんやりと冷えていて、なんだか無性に寂しくなる。

「……あの、できたら最後まで……」

「……次に備えろし」
マジか。
「……優美子、エロすぎんぐっ」
鼻をつままれた。つまんだままぐいぐいと左右に揺らされる。やめてー、もげるー。
「……もうちょっと休憩したら、するから」
「……了解しました」
ぽしょぽしょと囁いた優美子が、隣に寝転がって寄り添ってくる。腕枕をすると、猫のように気持ちよさそうに目を細めた。可愛すぎません？
「うぐ……っ」
俺の二の腕におでこをくしくしとこすりつけながら、さりげなく肉幹をまさぐってくる。いつでも備えておけということらしい。優美子が相手ならいつでも勃つと思うんだが。
「ヒキオ」
「ん」
「……すっごい気持ちよかった」
「……俺もだ」
感想を聞くか迷っていたところ、優美子から先に言ってくれた。言葉にしてもらえたことでかなり安心することができた。
「布団、かけるぞ」
「ん……」
肉幹をさわさわと触ったまま、ちょっとうとうとととしている。可愛いしエロい。片手で布団を引き寄せてもふっとかぶると、心地良い密閉空間ができ上がった。優美子はあれだけ汗をかいていたのに、その匂いさえも良い匂いだなと思う。つむじに鼻をうずめてすんすんと鼻を鳴らしていると、恥ずかしそうに身をよじらせた。逃がすか……と追尾して良い匂いを嗅いでいると、肉幹の根本をキュッとつままれた。それでもめげずに嗅ぎ続けると、呆れたのか諦めたのか、「……スケベ」と可愛らしく罵って動きを止めた。いや、あなたのほうがよっぽどスケベだと思うのですが。

×　×　×

「ん……っ？」

気付くとうたた寝をしていた。３０分も寝ていないくらいだが、ずいぶんとすっきりした。優美子もすうすうと寝息を立てている。鼻をちょんとつまんでみると、不機嫌そうに眉をひそめて肉幹を優しく揉まれた。表情とやっていることのギャップに悶える。というかいまだに手を離してないんですね……。

窓の外に目を向ける。部屋に入ったときは雪が降っていて、途中で一度やんでいた。しかしまた降り始めたようで、先ほどよりも大粒の雪が深々と降っている。明日家を出たら、雪が積もっているだろうか。優美子はブーツが滑らないか不安だな……と、彼氏というよりは父親のようなことを考えてしまう。

「んん……っ」

優美子がもぞもぞと身じろぎして、重そうなまぶたをゆっくり上げた。目をぱちくり、ぱちくり。それからこしこし、こしこし。なんだこの可愛い生き物は。

「雪……」

「だな」

のほほんとした声で答えると、俺の腹をぺちぺちと叩いてきた。どうやら起きたいらしい。ふたりとも何だかんだで疲れていたので、ゆっくりと身体を起こす。優美子は窓の外をずっと見ているので、ふたりでのろのろと窓際に向かう。寝る直前に暖房をさらに強めていたので、裸でもさほど問題はなかった。

「きれい……」

同じ言葉を先ほども聞いた。聞いたが、あのときはまだ、優美子のことを三浦と呼んでいたし、何より優美子は処女だった。この数時間はあまりにも濃密だった。そっと肩を抱く。やっていることは先ほどと同じだが、今度は互いの素肌が触れ合う。優美子の肌はとても熱かった。

「ん……っ」

優美子がぶるりと震え、俯く。

「寒いか？」
「ん、大丈夫。……っ」
歯切れの悪い返事。もしかして……と思って二の腕をゆっくりとさすると、しなだれかかってか細い喘ぎ声を漏らした。ごくりと喉を鳴らす。優美子の二の腕からゆっくりと手をすべらせていき、背中をなぞる。優美子のおとがいが跳ね上がり、美しい肢体がぶるぶると震えた。形の整った乳丘の頂がピンと張り詰める。徐々に興奮が高まっていく優美子の美しい姿が、雪灯りと間接照明に照らされる。むくむくと興奮が湧き上がってきて、身体に熱が通い出す。
「あ……っ」
尻の谷間に中指をすべり込ませ、残りの指で尻肉を揉む。優美子の背が艶っぽく波打った。
「……ヒキオのへんたい」
「うぐ……っ」
可愛らしくつぶやき、反撃とばかりに肉幹を握ってくる。がちがちに勃起した肉幹をゆるゆるとしごかれると、鈴口からとぷりと先走り汁が溢れ出した。
尻の谷間をさすっていた中指が淫裂に達すると、くちりと卑猥な水音がした。優美子が窓辺に片手を付き、挑発するかのように腰を揺らす。くちゅ、くち、にち……っと卑猥な音を立てる女性器。空いた手は肉槍をしごき続けていた。
優美子が熱のこもった視線を向ける。自然に、とてもスムーズに唇が重なり、舌が絡められた。中指の先が小陰唇に埋まると、優美子が色っぽく眉をひそめた。ぬぷ、ぬぷ、ぬぷ……っとゆっくり指を抜き挿しすると、優美子が余裕なくぶるぶると震える。すがるように肉竿を掴み、「んぁ……っ、ぁ……っ」とか細い嬌声を漏らす。
唇を離し、優美子の後ろに回りこんだ。俺の行動に、優美子は両手を所在なげに肩の横で漂わせて戸惑う。可愛らしくも色っぽい仕草にぞくぞくしながら、瑞々しい尻肉を掴んだ。
「ここで……するの……？」
少しひそめられた声は、いつもより気弱でか細かった。

「真夜中だし、誰もいないだろ」
亀頭を女裂にあてがう。ぐっしょりと潤んだ小陰唇をかき分け、ぴたりと腰を止めた。
さすがに抵抗があるかなと思っていると、優美子は黙って俯き、腰をぐいと突き出した。俺が突き入れるより先に、膣口に亀頭がぬるりと入り込む。
「……ほんとに、エロすぎるだろ」
「そんな、こと、ない……っ」
背中を波打たせて説得力のない言葉をささやく優美子は、強烈に魅力的だった。

× × ×

尻を掴み、ゆっくりと腰を前後に揺する。窓の外の雪と、なめらかな背中を眺めながら。
「あっ、あんっ、あっ、あっ、あっ、んはぁぁ……っ」
3回目ともなると、優美子は慣れるどころか貪欲に快感を味わおうとしてくる。俺が単調な前後運動をするのに対して、優美子は窓辺に手をついてうねうねと尻を左右に揺らしてくる。目の前で描かれる卑猥な円。膣肉はやわらかくほぐれていて、ぐにゅりと突き入れるたびに、そしてぬるりと引き抜くたびに、心地良く食い締めてくる。
「すげえ泡立ってるぞ」
「バ、カ、そういう、のっ、言う、な……っ」
結合部は2回分の精液と愛液が混ざり合い、恐ろしいほど卑猥な光景を見せていた。にちゃ、ねちゅ……と、唾液をたっぷり絡めたキスをしているかのような音を立てている。力強く腰を打ちつけていない分、卑猥な水音が快く耳朶を焼く。
「はぁっ、はっ、んん……っ、だ、だめ、立ってらんない……っ」
「ダメだ」
「うあ……っ」
へなへなと上体を屈ませた優美子の尻をしっかり掴み、決して逃がさないというアピールをする。だらりと力が抜けた優美子の背中は気怠い魅力をまとっていた。

「ね、ほんとに、これ以上はぁ……っ」
優美子がよろよろと振り返り、今にも泣きそうな表情を浮かべる。あまりにも嗜虐心をそそる表情。
「わかった。……じゃあ、こうするか」
「うあぁぁっ!?」
繋がったまま、優美子の乳房を鷲掴みにして上体を起こす。なめらかな背中を美しく弓なりに反らせた形。
「これなら少しは楽だろ」
「そ、そうだけど……やんっ!? あっ、ぅあっ、あぁぁぁ……っ」
ぷっくりと膨らんだ乳頭をつまむと、可愛らしい嬌声が弾けた。それと同時に膣肉の締めつけも増す。優美子はすがるように俺の腰に手を添え、ひくひくと腰を揺らす。先ほどよりも余裕がなく、だからこそさらにぞくぞくする動き。
にゅく、にゅこ、にゅる、にゅろ……っ。
「あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あ……っ」
抽送を徐々に小刻みに、速くしていく。色っぽい嬌声を漏らして瑞々しい尻を揺らす優美子に見惚れる。窓枠の中に収まる白い背中は、まるで絵画の裸婦像を見ているかのようだ。
「ヒキ、オ……だめっ、あーし、もう、イク、イク、イっちゃう……っ」
「俺も……そろそろ……っ」
優美子の声も、俺の声も、かろうじて絞りだしたような声だった。射精の予感が力強く込み上げてくると――先に、優美子が限界を迎えた。
「んくぅぅぅ……っ!」
窓辺にいるからなのか、声を気にして唇を引き結んだ嬌声が響く。反り返った背中にギュッと力がこもり、膣肉が肉槍を引きちぎらんばかりに収縮し、食い締めてくる。何か言葉を口にする余裕もなく、歯を食いしばって限界を迎えた。
「んはぁぁぁ……あっ、はぁぁぁぁ……っ」
どくっ、どぐどぐっ、どぶぶぶ……っ。
遠慮のない量の精液が優美子の膣内に注がれる。優美子は達した

ことで吹っ切れたのか、さらなる快感を味わおうと肉尻を揺らし、にちにちと貪ってくる。強すぎる快感に肉槍を引き抜こうとすると、優美子が俺の手をぐっと掴んで引き止めた。喉仏をさらし、尿道に一滴たりとも残すことなく出し尽くした。

「……風呂、入るか」

「……うん」

繋がったままで会話をする。優美子は会話している最中も腰をゆらゆらと揺らしていた。この子、もしかしなくても果てしなくエロいんじゃ……？　と思ったが、今までを思い返すと行為を重ねるほどエロさが増してきた気がする。ということは、挿入を経験したこれからはますます……と思い、溢れる期待でぶるりと震えた。

日中の楽しいデートの記憶さえ遠のくほどの濃密な時間は、まだ続く。

続く。

（６９）

休憩を挟んだとはいえ、一晩で３回も交わればさすがにくたくただった。優美子に至っては俺の数倍はイっている。風呂に行こうと着替えているあいだも、うつらうつらとしているのが可愛らしかった。

「……大丈夫だな」

家に誰もいないのを確認する。小町には心底感謝しよう。真冬に全裸でうろつくのはつらいので、洗濯を前提に服を着て移動した。誰もいないと分かっているとはいえ緊張する。優美子がそれとなく手を繋いできたのがなんだか嬉しかった。

「あれ？　お風呂……」

脱衣所で手早く服を脱いで浴室に入ると、なみなみと溜まったお湯と温かな浴室の空気に優美子がこてんと首をかしげた。金の髪をくしくしと撫でると、気持ち良さそうに目を細めるのが可愛い。

「さっき準備しといた」

トイレに行った際にさりげなく準備しておいた。優美子が俺を見て目をぱちくりとさせる。新種の生き物か何かかと思われてるのかしら？

「……やるじゃん」

ちょっと恥ずかしそうにつぶやき、脇腹にぽこぽことパンチをしてくる。褒め方が謎だが激しく可愛い。

ふたりで入ると狭く感じる浴室に並んで立ち、シャワーを浴びる。優美子はうちのボディソープやシャンプーを気に入ってくれるだろうか……などと気にしていると。

「ん」

「ん？」

ふたりの肩から下に温かなシャワーのお湯が当たっている状態で、優美子が両手を広げてきた。言葉の伝達が少なすぎません？　と思いつつも抱きしめる。

「ヒキオ」

「ん、なんだ」
「なんでもない」
「呼んだだけか」
「うん、呼んだだけ」
楽しげにつぶやき、俺の背中をすりすりと撫でてくる。なんかもう気絶しそう。
優美子がじっと見つめてくる。おでこ同士がこつんとぶつかる。お湯がとても温かい。唇が重なる。お湯の飛沫が飛んで濡れた唇と唇。ふたりの顔の角度が徐々に変わる。優美子の唇は柔らかい。優美子は俺の唇をどう感じているんだろうか。
「ん……っ、ちゅっ、ちゅぴ……っ」
俺の背中に回した腕にいっそう力がこもり、小さな舌が控えめに唇を割り開いてくる。まるでスローモーションを見ているような感覚。ちろ、……ちろ、ちろ……っと、俺の感触をひとつひとつ確かめるような舌の動きがたまらない。愛情と劣情が、徐々に徐々に湧き上がってくる。
「んん……っ？」
優美子の手が肉竿に伸びた。さすがに元気がない肉竿を、いたわるようにふにふにと揉んでくれる。その感覚が非常に心地良い。
「……やわらかい」
唇を離した優美子が、皮を剥いて露わになった亀頭をぷにぷにと触りながらつぶやく。オ、オウ、オウ、と変な声を漏らして腰を引いてしまった。非常に情けない体勢である。
「さすがにあれだけ出したらな」
「ん、たしかにすごかったけど……」
自分の中に注ぎ込まれた精液の感触を思い出したのか、優美子が唇をもにょもにょとさせて顔を逸らす。恥ずかしそうに流し目を送りながら肉茎を揉んでくる仕草に興奮して、少しだけ硬くなった。
「……へんたい」
耳元でぽしょりとささやかれる。俺がごくりと喉を鳴らすと、いたずら成功とばかりに微笑んだ。勃起が細指の中でまた少し硬くなる。

「すげえ可愛いな、優美子は」
「へ……っ」
あ。
面と向かった状態で、思わずつぶやいてしまった。まるで小町を褒めるときのように気軽に、けれど小町を褒めるときよりも心を込めて(失礼)。
優美子が顔を逸らす。首が痛まない？　ってくらい逸らしてる。手の力がちょーっと強いですねー、急所なのでもう少し優しくしてもらいたいですねー。
「すまん、本音が出た」
「言わなくていいから……」
「それは可愛いって言葉を？　それともフォローのほうを？」
「フォローのほうに決まってるし……って、だから、言うなバカ……っ」
「ちょっと待て、そこはほんとにダメだっててててて」
肉竿を握る手に力がこもる。けっこう本気で訴えかけると、ようやく「あ……ごめん」と気付いてくれた。いたわるようにふにふにと触られ、また少し硬くなる。
「うあ……っ」
優美子の肩にあごを乗せて尻肉を揉みしだくと、耳元で甘い声が漏れた。じっくりとこねくり回すように、弾力に富んだ肉尻をこねくり回す。
「あっ、やんっ、ヒキオ、触り方やらし……あ」
「ん？」
優美子の甘い声が急に止まる。どうしたのかと顔を見ると高速で逸らされた。体調が悪いのかと心配したが、表情を見ると何か恥ずかしがっているようだ。内ももを隠すようにこすりつけている。
「……まさか……」
「……察しが良すぎるのやめろ、へんたい……っ」
掠れた声が強烈に可愛いが、察しが良いのをやめろという指令は斬新だと思いました。

優美子の中に出した3回分の精液。そのうちのいくらかは優美子がトイレに行ったときに処理しているだろうとは思っていたが、それでも子宮の内側に入った分はすぐに出てこないだろう。時間差で垂れてくるというエロ漫画でしか知らないような事態に優美子が陥っているとは――

「ヒキオ、なんか変なこと考えてない？」

「考えてない、考えてないです」

銃を突きつけてるのかな？　と思うほど剣呑な目つきで見られた。真っ赤になった顔は可愛らしいのに、雰囲気が超怖い。両手を上げて降参のポーズをとろうかと思ったが、本気で怒られそうなのでやめた。

「どうしよ、あーもう、ヒキオのが濃すぎるから……」

脚をもじつかせながら、さりげなくとんでもないことを言った。

「……見せてくれ、って言ったら怒る？」

「怒ってる」

頬にぐいぐいと手のひらが押しつけられる。掌底、ふたたび。

しかし、この衝動は中々抑えがたい。掌底にもめげることなくじっと見つめてみる。

「え、ちょ、なに、本気？」

じー。

「むり、むりむり、恥ずかしくて死んじゃうから」

じーー。

「……ほんとに、見たいの？」

じーーーーー……っ。

「……へんたい。知らないから」

勝った。何の勝負だよという話だが。

俺の頬を両手で挟み込み、恨めしく見つめながらぐにぐにと弄ぶ。数十秒近く弄ばれた。長い。最後はくすりと笑って「変な顔」と罵ってきた。あなたがやったんですけども……。

「……どうすればいいの？」

「んー、立ったまま脚を広げてくれるか」

「……ヒキオがこんなドスケベだなんて思わなかった」
「俺も優美子がこんなにエロいとはいててててて」
今度はなぜかおでこに掌底。首がもげそう。今日は掌底をよくくらうから掌底記念日。漢字5文字が並ぶとやたらと厳かになるね！
ほんと、なんなんだし……とぶつぶつ呟きながらも脚を広げてくれる。良い子だなーと変なところで感心してしまった。
すっと膝を下ろして優美子の太ももに手を添えると、「え……っ」とか細い声が聞こえた。
「そんな近くで見るの？」
「ああ」
「ほんとに？」
「冗談に見えるか？」
白くすべすべした太ももをすりすりと撫でる。じりじりと性感を煽る触り方。優美子の喉がこくりと鳴る。
「ほん……っと、信じらんない……っ」
怒っているというよりは今にも泣きそうな声でつぶやき、唇をもにょもにょとさせ、視線を泳がせ、やがてゆっくりと両手で顔を覆った。
「ん……っ」
艶っぽい声が漏れ聞こえ、瑞々しい肢体がぶるりと震える。
「うお……っ」
目の前でひくつく薄桜色の花びらの中から、こぷりと白濁が溢れ出してきた。脚を開いているため太ももを伝うこともなく、浴室の床に濃厚な精液がぼたっと落ちる。
「ばか、ばか、ほんと、ばか……っ」
優美子が両手で顔を覆ったままぶるり、ぶるりと震える。震えに合わせて精液が溢れ、ぼたっ、ぼたたっと浴室の床を叩く。手に伝わる太ももの温度が上がる。視線を上げると、双丘の頂がふっくらと膨らみ、張り詰めていた。羞恥にまみれる中でも興奮しているのだと分かると、どうしようもないほどに劣情が湧き上がる。
「……っ？　……なんで大きくしてんだし……へんたい、ドスケベ

……っ」
指のすき間からちらりと下を見た優美子が恨めしげにつぶやく。言葉を紡ぐあいだもお湯で湿った身体がぶるり、ぶるりと震え、精液が落ちてくる。我ながらどれだけ出したのかと呆れるほどの量。ほどなくして精液の流れは止まった。
「えーと、その、なんだ、……良いものを見れた。ありがとう」
シャワーで精液を洗い流しながらかしこまって礼を言うと、両手で髪をぐしぐしとかき回された。
「ヒキオ、立って」
「へ？」
「いいから早く」
「え、あ、はい……うお……っ？」
唐突な指示に戸惑いながらも従うと、入れ違いに優美子がひざまずいた。火照った顔の目の前にそそり立った肉槍が突き出される形。
「くぁ……っ」
いったいどうしたんだ、と言葉を口にする前に、亀頭がぱくりと咥えられた。
「んっ、んふ……っ」
優美子が俺の腰骨に手を添えて、ゆっくりと顔を前後に振る。亀頭がぬるりと呑み込まれ、顔を引いて朱い膨らみが抜け落ちる直前でまた呑み込まれる。唇がすべるだけで悶絶するほどの気持ち良さ。思わず腰を引こうとすると、両手に力を込めて押さえられた。
「んっ、んっ、んっ、ふっ、んふぅぅ……っ」
「お……あぁぁぁ……っ」
上目遣いで俺を見つめ、顔を傾けて徐々に徐々に深く呑み込んでいく。突然始まった口淫に激しく興奮して、肉茎は信じられないほど長く勃起していた。口内で熱く膨らむ肉幹の感触に優美子が色っぽく眉をひそめ、こら、暴れるなとたしなめるように舌でぐりぐりと亀頭とカリ首をねぶる。ゆっくりと顔を前後に振り、呑み込む深さが増していく。金の髪をそっと撫で、もっと奥まで咥えてくれと促す。手に力を込めても優美子はいやがらない。それどころかもっと力を込め

ても良いと言うように濡れた瞳で見つめ、熱い口内に剛直を呑み込んでいく。
「んっ、んぐっ、んんっ、ふぅぅ……ふぅぅぅ……っ」
顔を斜めに傾けた状態で、肉幹が根本まで呑み込まれた。口内でじっくりと舌がうねり、亀頭や竿が貪られる。優美子の頭に添えた手にぐっと力を込める。優美子は細い眉をくにゃりと八の字に曲げて、俺の腰に腕を回した。温かな口の中に肉幹が丸々と呑み込まれる。恐ろしく卑猥な光景にごくりと息を呑んだ。綺麗な顔を卑猥にすぼめた優美子が熱っぽく見つめてくる。舌は今もうねうねとうねっている。まったく動いていないのに、このまま射精してしまいそうだ――と思っていると。
「え……っ？」
肉竿を包み込む温もりが不意に消えた。優美子が口を離し、得意気に笑っている。
「イカせてあげない。さっきのお返しだから」
「……っ」
いたずらっぽく微笑まれ、心臓が心地良く跳ねると同時に悔しくもなる。優美子は俺を見上げながら竿の根本をゆるゆるとしごいてくる。心地良いが、決して射精に至らない焦れったい快感。透明なカウパー液がとぷりと溢れると、優美子が色っぽく目を細めてちゅるりと啜った。
「……優美子、そろそろ風呂に入るか」
「え？　……あ……っ」
優美子の肩を押さえてそっと立たせる。くるりと後ろを向かせ、そっと抱きしめて勃起した肉槍を尻の谷間にこすりつけた。
「あっ、ぅあっ、あっ、あっ……」
有無を言わせぬ俺の態度に、優美子がしおらしくなる。軽く握った手を肩の横で所在なげに漂わせる色っぽい仕草にごくりと喉が鳴る。
「……お風呂の中で、するの？」
「ああ、するぞ」
「……あーしは、いいよってまだ言ってないけど？」

「しないのか？」
抱きしめる腕に力を込め、今度は内ももの間に肉槍をずるりと入れる。湯で湿った柔肌に挟まれる感覚が心地良い。腰をゆるやかに振って淫裂を刺激すると、優美子が俺の腰に手を添えてぶるりと震えた。
「……する。ヒキオと、したい」
振り向いて泣きそうな顔を浮かべる優美子と唇を重ねる。
肉幹は、なぜ射精していないのかわからないほどに張り詰めていた。
続く。

（７０）

先に風呂に入る。湯の温度は少し温めでちょうどよかった。

「あーしはどうするといい？」

浴槽にもたれかかった俺に優美子が尋ねる。なぜ頬をむにむにとつまんでくるのか。最近この手のスキンシップが増えましたね……。可愛い以外の感想はないんだけども。

「ん、こう、俺の中に、すっぽりと？」

腕で輪を作り、しどろもどろに説明する。なんか変な空気になった気がする……と思っていると、案の定優美子が眉をひそめた。小町だったら「うへぇ……」とか言いそうな雰囲気。なんかごめんね！

「……べつに、それでいいけど」

なんだかんだで俺の意図は伝わったらしい。ぽそりとつぶやくと、いつの間にか用意していたゴムで手早く髪をまとめ、すらりと伸びた脚を上げて浴槽に入ってきた。

「ヒキオ、まじまじと見すぎだから」

「すまん、見たい」

「……はぁ」

あまりにもストレートな物言いだったためか、優美子は呆れながらも諦めてくれた。俺に背を向ける形で腰を下ろし、股座にすっぽりと収まる。

「なんか、その髪型は新鮮だな」

長い髪を後ろで束ねた優美子にぽつりとつぶやく。いつもは分かりやすいほどにギャルな見た目をしているが、髪を束ねるだけでこうも印象が違うのか。しっとりと濡れたうなじに目がいく。抱きしめていいものか迷って腕をさまよわせていると、優美子は俺の手首を掴んで自分のお腹に導いた。

「お風呂ではいつもこうしてるけど。そんなに違う？」

尋ねながら、優美子が背中をすりすりと押しつけてくる。心地良い摩擦。勃起したままの肉幹が華奢な背中にこすれる。

「ん。なんか、すげえ良い」

うなじに顔をうずめ、両手を乳房に乗せる。柔肌に指をそっと這わせると、優美子がおとがいを上げて震えた。
「ふーん。……お風呂以外でも見たい？」
「見たいかもしれん」
「どっち？」
「見たい、見たいです」
ふわっとした返答をしたら、すかさず手の甲をつねられた。軍隊の女上司かよと言いたくなるような対応だが、べつに痛くはない。
「ふーん」
優美子がいつものそっけない返事をする。けれど最近、優美子のそっけない返事にも種類があることに気付いた。今の「ふーん」は興味があるときとか、まんざらでもないときの言い方。今後が楽しみだ。
「……ヒキオ、あーしの匂い嗅ぎすぎだから」
「それほどでもないと思います」
「なんで敬語だし」
鼻を鳴らす俺を優美子が優しくたしなめる。俺の返事に呆れ笑いを返し、俺の手をふにふにと触り、頭をくしくしと撫でてくれる。うむ、どんどん寛容になってきているぞ……人をダメにするソファ並の安らぎだな……。
「優美子、そろそろ挿れたい」
囁くと、しろいうなじがぴくりと震えた。
「……うん」
消え入りそうな声で答え、優美子が浴槽の縁に手をついて腰を上げる。俺は浴槽にもたれかかったままずり下がった。
「……おっきすぎだから」
湯の中でも力強く存在を主張する肉槍を見て、優美子がぽつりとつぶやく。ぞくぞく、と期待が背筋を貫いた。
「ん……っ」
優美子が和式トイレを使うときのように腰を下ろす。瑞々しい尻肉と、綺麗なアナルが見える。その奥には薄桜色の粘膜と恥毛。ずっ

と見ていたくなるほど卑猥で綺麗な光景だ。
肉槍の切っ先に小陰唇が触れる。優美子の手が伸びて、人差し指と中指で肉茎を挟んだ。風呂の中なので音こそ聞こえないが、優美子が亀頭をゆらゆらと揺らすとにちゅ、くち……と卑猥な感触が伝わってくる。
「はあぁぁ……っ」
優美子が艶めかしく息を吐きながら腰を下ろすと、青筋立った肉槍が熱く潤んだ膣内にぬるりと呑み込まれた。ずぶ、ずぐぐ……とめり込んでいき、優美子の背中がぐっ、ぐぐっと反り返る。息を呑むほど美しい光景。やがて肉尻が俺の下腹部にぴたりと当たり、肉槍は子宮口をぐりぐりと押し込む形になった。
「ヒキオのへんたい……なんで、まだ、こんなにおっきぃんだし……信じらんない……っ」
浴槽の縁に手をついた優美子が、身体を前傾させたままぶるぶると震える。優美子がたまらず腰を上げれば、卑猥な結合部が見える。ふたりの陰毛が湯の中で控えめに揺れていた。
「優美子がエロいから、しょうがない」
「えっ、あっ、ちょっと、待っ、てっ、いまっ、だめっ……」
優美子のくびれた腰を掴み、ずん、ずんと突き上げる。もたれかかった状態では身体を素早く動かしづらいので、優美子の腰を引き寄せることで抽送の幅を広くした。ペースこそ速くないが、一定のリズムで優美子の最奥を突き上げる。
「あっ、んぁっ、はっ、あっ、んくっ、うんんん……っ」
縁を掴んだままで優美子が俯き、ぶるぶると震える。膣肉がキュウっと心地良く締めつけてきた。
「あっ、あんっ、あっ、あっ、あぁっ、あぁぁ……あぁぁぁ……っ」
一突きごとに優美子の声が蕩ける。正気が薄れる。ぞくぞくした快美感が尿道を貫く。
「いつでもイってくれ」
「あっ、やっ、そんなっ、すぐっ、イっ、イカっ、ない、し……んくぅぅ……っ！」

優美子がとつぜん尻をぐりぐりとこすりつけ、天井を仰いでぶるぶると震えた。膣肉がにちにちと締め上げてきて、熱い潤みが肉槍を包み込む。うねうねと蠢く膣ヒダ。あまりにも分かりやすく、あまりにも色っぽい絶頂。
「はあっ、はっ、はっ、……はぁぁぁ……っ」
ぶるぶると痙攣していた優美子が動きを止め、ぐったりともたれかかってきた。うなじに顔をうずめると、先ほどよりも体温が上がっている気がする。
「優美子、どんどんイキやすくなってないか？」
「……そんなこと、言わなくていいから……あ……っ？」
会話しながら乳房に手を添え、だらりと脱力した優美子の中で動きはじめる。優美子は俺にもたれかかって背を丸め、手は湯の中に投げ出していた。
ぬこ、にゅる、にゅこ。
「あっ、あっ、あっ、あっ、あっ……」
乳房をやわやわと揉みしだかれながら、優美子が天井を仰いで震える。
「優美子、気持ち良いか？」
耳元で尋ね、舌を挿し入れる。「んん……っ」と色っぽく囁き、悩ましく眉をひそませた。
「気持ち……良い……っ」
正直に答えたのが恥ずかしかったのか、上気していた頬がさらに赤くなる。
「あっ、あっ、あっ、あっ、あっ……ひぁっ!?」
右手を陰部に伸ばしてクリトリスの皮を剥くと、優美子が可愛らしい悲鳴を上げた。
「大丈夫、ちょっと触るだけだから」
「ちょっとって……それが一番気持ち良くなっちゃ、うんっ、だかっ、らぁぁぁ……っ」
クリトリスを優しくこすると優美子の声が蕩けた。投げ出していた両手で俺の右腕を掴み、すがるように力を込めて握りしめてぶるぶ

ると震える。
「だっ、め、ま、た、イク……イク、からぁぁ……っ」
「イっていいぞ、何回でも」
優美子に腕を掴まれたところで、指先にはなんの影響もない。抽送も続けているので、間違っても強く押すことがないように慎重に、慎重にこすりたてる。
「あっ、あっ、あんっ、んくぅぅ……ヒキオの、へん、たい……ぅあぅぅっ！」
可愛らしく罵った直後、優美子の身体がふたたび跳ねる。結合部の辺りで、何かが噴き出してお湯を揺らした。
「すげえ締めつけてきたぞ。もう1回イってみるか」
「は、はぁ……っ？　何言って……あっ、だめっ、だめっ、こするなっ、こすらないで、あっ、うっ、あぁうぅぅ……っ」
すりすりとクリトリスをこすりながら、子宮口に膨らんだ亀頭をぐりぐりと押しつける。左手で乳頭をつまむと、痛々しいほどにピンと張り詰めていた。
「あっ、ぅあっ、やだっ、だめ、また、ま……た……っ」
長くなった乳頭をこしこしとしごきたて、クリトリスをすりすりとさすり、膣肉をぐりぐりと抉る。
「イっ、く……イク、イク、イク、イク……うんんんっ！」
優美子が白い喉仏を晒し、まるで魚が海から跳ね出るかのように激しく痙攣した。お湯がばしゃばしゃと波打って溢れ出る。膣肉がにぢ、にぢぢ……と力強く締めつけてきた。
「あっ、あぁっ、あっ、あっ、あぁ……っ」
優美子がぼうっとした表情で俺を見つめ、くったりとしなだれかかってくる。半開きになった口の端にかすかに透明な液体が光っていた。
「すまん、やりすぎた。そろそろやめとくか。……くぁ……っ」
声をかけると、結合部からわずかにはみ出た肉槍の根本をきゅっとつままれた。
「ヒキオがまだ出してないじゃん」

優美子が焦点の定まらない瞳のまま、掠れた声でささやく。
「それは嬉しいけど……もうきついだろ？」
「大丈夫だし……」
でも、これ以上はのぼせるから……と言って、浴槽の縁を掴んでよろよろと立ち上がる。肉幹がぬるりと抜けると、すべすべの背中が打ち震えた。どうしたのかと思っていると、向かいの壁に手をついて、絶頂の余韻が色濃く残る肉尻を突き出した。
「……ここで、して」
目いっぱい甘えた懇願。愛液にまみれた肉幹が湯の中で跳ねた。

× × ×

焦りを抑えながらも立ち上がり、左手で優美子の尻をつかみ、右手で肉竿を支えた。優美子は壁に手をついて俯き、肉槍がねじ込まれるのを待っている。薄桜色の粘膜をねりゅ、ねちゅ……と掻きわけ、期待にひくついた膣内にずぶりと突き刺した。
「んあぅぅぅ……っ」
たっぷりと媚熱を孕んだ優美子の声。そのすぐ後ろで俺も悶絶していた。
「立ってられるか」
「だい、じょうぶ……やばくなったら、ヒキオが押さえてて」
壁についた手の指がぶるぶると震える。優美子が言葉を口にするたびに興奮が高まっていく。
「はぁぁぁぁ……あっ、んっく、んんっ、はぁぁぁぁ……っ」
ずん、ずんっ、ずんっと突き入れるたびに白い背中が波打つ。ふたりの揺れが水面に伝わり波紋を生む。
「優美子、気持ち良いか？」
「きも、ち、いっ、いい……んくぅぅ……っ」
湿り気を帯びた声がぷつぷつと途切れる。仄かに紅潮した肌を水滴が伝い、浴槽に張った湯にぽたぽたと落ちる。
「ぅあっ、あっ、はぁぁぁ……ヒキオ、のっ、すっごく、おっきくて、かたい……っ」
「……っ」

ぶるぶると身体を震わせながら振り向き、ぞっとするほど蕩けた瞳を向けてくる。
嗜虐の炎が思考を焼き、肉尻をつかむ手に力を込めた。
「んはぁぁっ!? あっ、やっ、そんなっ、はげしっ、あっ、んくぅぅぅ……っ!」
ばんっ、ばちゅっ、がちゅっ、と激しい打擲音が鳴る。優美子の背中が上下左右に揺れ、肉尻がぐりぐりと押しつけられる。肉幹をにぢにぢと締めつける感触に悶絶する。
「やっ、やだっ、やだやだ……またっ、イク、イっちゃう……ぅあぅぅぅっ!!」
子どものような幼い声を漏らして首を振り、直後に弓なりに反り返って痙攣する。膝が笑い、結合部からだらだらと透明な液体が溢れ出る。
「優美子、大丈夫か?」
「あっ、ぅあっ、かはっ、……きっ、聞きながらっ、あんっ、腰、動かすっ、なぁっ……あっ、あっ、あっ、あっ、あっ……!」
優美子をいたわりたい思いとめちゃくちゃに犯したい思いが、まるで二重人格のように両立する。優美子の艶姿も、香る匂いも、耳朶を打つ声や音も、全てがたまらない。
「はぁっ、あっ、あふぁぁ……ヒキオ、もっ、イキ、そう……っ? んくぅぅ……っ!」
優美子が首だけ振り返り、優しく尋ねながらふたたび絶頂する。愛おしさと劣情が溢れ出す。
「そうだな、もう、すぐ……っ」
自分の声は思ったよりも切迫していた。尿道から何度も先走り汁が溢れる感覚がしている。射精衝動がゆっくりと、確実に込み上げてきていた。
「いいっ、よ、いっぱい、出して、あーしの、なか……あっ、あっ、あっ、あっ、あぁぁ……っ」
優美子が円を描くように尻を揺らし、肉槍をぐにぐにと食い締めてくる。たんっ、たんっ、たんっとひたすら腰を振っていると、抗いよ

うのない射精感が駆け上がってきた。
「優美子、出る、出すぞ……っ」
「いいよ、ヒキオ、きて……っ、あっ、あっ、あっ、あっあっあっあっあっ――んはぁうぅ!!」
どぐん、と頭をぶん殴るような衝撃とともに、優美子の中へ大量の白濁を注ぎ込む。
「あはぁぁぁ……あつっ、熱い……っ」
優美子の声が悦楽に蕩ける。肉尻をきゅっと寄せ、膣肉が蛇腹のように波打ち、たっぷりと白濁を噴き出す肉槍を根本、真ん中、先端と締めつけてくる。瑞々しい尻肉に指を食いこませ、ぶるぶると震えながら、尿道に一滴とて残すことなく射精した。
「はぁっ、はぁっ、はぁっ、あっ、んはぁぁぁ……っ」
ゆっくりと肉幹を引き抜くと、優美子が蕩けた声とともにもう一度痙攣した。ぱっくりと開いた膣口がひくつき、間を置いて精液と愛液の混じり合った卑猥な液体がぼたぼたとお湯に落ちる。
「……優美子、エロすぎ。洒落にならん」
「……ヒキオだってエッチすぎるし」
優美子がよろよろと振り返り、俺の胸板に顔をうずめる。
「さすがに出し過ぎてちょっと痛いけどな」
半勃ちの肉竿をふにふにと触られて苦笑すると、優美子が顔を上げて目をぱちくりとさせた。
「またおっきくしたげよっか?」
「い、いや、さすがに遠慮しときます……」
いたずらっぽい笑みは強烈に可愛いが、これ以上イってても空撃ちになるのではと本気で思った。
このあとはごく普通に身体を洗い直し、シーツを替えて添い寝をした。
今日がクリスマスイブであるということさえ忘れるほどの、濃密すぎる夜だった。
「優美子、……おやすみ」
「……うん、おやすみ、ヒキオ」

ちょっと照れながらあいさつを交わしあう。
寄り添っていたらかえってお互い寝られないのではと思ったが、よほど疲れていたのか、優美子は数分としないうちにすぅすぅと穏やかな寝息を立て始めた。綺麗な寝顔だな……と見惚れているうちに、俺の意識も暗転していた。

続く。

（71）

昼までぐっすり寝ていて……ということもなく、ふだん通りに朝になったら目覚めた。よほど深く眠っていたんだろうか。

「んん……っ」

慣れない温もりに視線を向ければ、一糸まとわぬ優美子がもぞもぞと動く。温かい場所を求めているのか、ごく自然に俺の胸元に顔をうずめる。朝から盛大にニヤけてしまいそうだ。

そういえば……と、枕元に手を伸ばしてスマホを確認する。小町から何か連絡は来ているかを確認しておきたかった。

「……お」

ほんの数分前にちょうどメッセージが届いていた。

『拝啓お兄ちゃん』

『優美子さんともう、色々アレした頃かと思います』

慌てて辺りを見回す。監視カメラでも設置しているのかと思った。このトーク画面を優美子が見たら悶絶するに決まっているので、優美子の頭の後ろに腕を伸ばしてスマホの画面を見ることにする。

『小町は今日も友達と遊んで、夕方頃に帰ろうと思います。お父さんお母さんは昨日帰ったのか分からないけど、それとなく事情は話してるから気を利かしてくれてると思います。しばらくふたりきりでのんびりしてね！』

『すまん』

『たすかる』

あまりにもありがたい気遣い。あとで3つくらいは何でも言うことを聞かねば……と心に誓う。

「……おはよ。何してんの？」

優美子が目を覚まし、目をこしこしとこすって見つめてくる。俺の腕が目の前を横断している体勢なので、そりゃあ変なものを見る目にもなるだろう。

「うっす。小町から連絡が来てた。小町も親も、しばらく家にはいないらしい」

俺の説明で色々と察したのか、可愛らしく寝ぼけていた優美子の頬に可憐な朱が刷かれる。
「……なんか、家族公認みたいになってない？」
「……いやか？」
「……べつに、いいけど」
バツのわるそうにつぶやき、きゅっと抱きついてきた。死にそう。
「……ヒキオ、なんでおっきくなってんの？」
朝勃ちしていた肉幹に優美子の細指が絡みつく。甘ったるい声でささやきながら、俺の首や鎖骨にちゅっ、ちゅっと口づけをしてくる。想像を遥かに上回る甘えかたに悶絶すると同時に興奮して、白魚のような指が巻きついた肉幹がむくむくと大きくなる。
「生理現象だ、しかたない」
「しかたないの？」
「ああ、勝手になるもんだし……あとはまあ、優美子とこんな状態でいたら、そりゃまあ、うん」
「変なの」
変ですかね？
優美子が楽しげにくすくすと笑い、うっとりと目を閉じて唇を重ねてくる。
「ん……っ、ちゅっ、んっ、はぷっ、んふぅぅ……っ」
甘い息を漏らして唇をすり合わせ、たがいの唇をついばみ、舌先をちろちろとこすり合わせる。
「んふぅ……っ？　あっ、あんっ、んむふぅぅ……っ」
腕枕をした手で耳をまさぐり、空いた右手で背中と尻にそっと指を這わせる。優美子も負けじと空いた手で乳首をまさぐってくる。
「んっ、んぁっ、んふぅぅっ……ヒキオ、おっきくなりすぎだし。昨日あんなに出したの、忘れちゃったの？」
キスの合間に蠱惑的な挑発をしてくる。とぷりと溢れ出した先走り汁が細指に絡みつき、くちゅくちゅと卑猥な音が鳴る。
「俺だってびっくりだぞ。ひとりでしてたら絶対こんなことにならん」

「こんなことって？」
「あれだけ出すのもあり得ないし、今もこんな風に勃つなんてのもあり得ないってこと」
「ふーん」
そっけない返事のわりに、表情はどこまでも柔らかく楽しそうだ。あまりにも幸せな時間。じりじりと炙るように、興奮の熱が高まってくる。
「あっ、はぁぁ……ヒキオ、だめ、そこ……ぅあ……っ」
尾てい骨をすりすりと何度もなぞると、優美子の声がいっそう濡れた。耳朶に流しこまれる卑猥な声にぞくぞくして、肉幹がみちみちと張り詰めて血管が浮き上がる。
「優美子。脚、開けるか」
俺の言葉に優美子が唇をキュッと引き結ぶ。数秒だけ逡巡して、右肩を下にした姿勢のまま、左脚だけをゆっくりと開いた。たっぷりと潤んでいたのだろう、優美子が左脚を開いた瞬間にむわっと濃厚な牝の匂いが布団の中に満ちる。
「ぅあ……っ」
脚の付け根をまさぐると、優美子が俺の胸に顔をうずめた。手に絡み付く熱い液体の感触。割れ目に指を這わせると、にゅるにゅると卑猥なぬかるみが伝わってくる。
「指、挿れていいか」
ささやくと、優美子がうつむいたままでこくりと頷く。
「だいじょうぶ……ってか、今挿れられたらやばいかも」
「どういう意味で？」
聞きながら熱い膣内に中指をずぶりと挿入すると、優美子が目を見開いた。
「ぅあ……っ」
熱くうるんだ膣肉が中指をにちりと締めつけ、優美子の身体が大きく波打った。ベッドが大きく軋む音と、優美子の荒らげた吐息が耳朶に染み込む。
「ぼ、か……聞く前に挿れんむ……っ？」

唇を奪い、中指を根本から折り曲げて膣肉をぐにぐにと押し込む。挿入したときはかすかに残っていた強張りも絶頂した瞬間に霧散し、柔らかくなった肉ヒダを指で押すとぐっぷぐっぷと卑猥な音が鳴る。
「んっく、んふぅ……んっ、ふぅんっ、んむぅぅ……っ」
優美子が切なげに眉をひそめ、身体をうねうねと揺らす。肉竿から手を離し、代わりにぴったりと身体を密着させてくる。胸板に当たった乳頭はぴんとしこっていて、優美子が今どれほど興奮しているのかを如実に示していた。
「んちゅっ、へぁっ、いっ、イクっ、また……んくぅぅぅ……っ」
舌と舌をべったりと貼りつけた卑猥な状態でふたたび全身を震わせる。むわっ……と布団の中に満ちる甘酸っぱい匂い。優美子が開いた脚を閉じ、俺の手を太ももでみっちりと挟み込んだ。
「ヒキオの、ばか、朝からっ、こんな……んっ、あっ、あっ、あっ、あっ……」
今にも泣きそうな顔で見つめてくるのがたまらず、腕枕した左手で後頭部をつかみ、目を逸らせないようにして膣肉をかき回す。
「優美子、気持ち良いか？」
「うっ、うぁっ、聞かなくてもっ、わかるっ、で、しょ……だめ、だめ、だめ、イク、イク、イク、イク……っ」
目を合わせたままで優美子が果てる。絶頂する瞬間に綺麗な顔が強張り、がくんと脱力するさまはどこまでも淫靡で美しい。
このままあと何回かイカせるか……と考えていると、肉幹を両手でキュッと握られた。
「うお……っ」
「……あたしもしたいんだけど」
ぽつりとつぶやき、肉幹をくいくいと引っ張る。どうやら布団から出ろということらしい。可愛いけど、握ってる部分が部分なのでちょっと怖いです……。
そこ、座ってと指示され、ベッドの縁に座る。優美子は俺のひざをつかんで開くと、股座にぺたりと座り込んだ。
「ヒキオって、ほんと鬼畜」

「あんまりにも可愛いもんでな」
可愛らしい罵りにカウンターをくらわせると、絶頂の余韻でぼうっとしていた優美子の顔が真っ赤になった。羞恥をこらえて言った甲斐がある。
ほんと、信じらんない……とつぶやき、勃起肉をぺちぺちと叩く。血管の浮いた肉竿が左右にぷるぷると揺れるのはなかなかシュールだ。
「お返し……」
優美子がささやき、ぞくっとする笑みを浮かべる。
「うお……っ」
いきなり咥えるのかと思いきや、膝にねろりと舌を這わせた。
「んっ、ちゅっ、れるっ、んっ、……ヒキオ、ひくひくしてる」
「うっ、おっ、そっ、そりゃあっ、なっ……くぁ……っ」
俺のひざを愛おしげにすりすりと撫でながら、固めた舌先で内ももを小突き、そのままぐりぐりと左右に舐め上げ、舌の腹をたっぷり使って舐ってくる。焦らされるもどかしさと高まる期待に、心臓が直接叩かれているかのように激しく脈打つ。
「んっ、ちゅぴっ、あーしのこと、ちゅるっ、あんま、れるっ、簡単にイカせられると思わないで……っ」
もう片方の内ももを舐めながら、とんでもなく可愛いことをささやいてくる。
「おっ、おぁっ、おっ、おぉぉ……っ」
鼠蹊部を集中的に舐め上げられ、あごを上げてぶるぶると震える。右の鼠蹊部を舐めたら左の鼠蹊部へと移動し、徐々に肉幹へと近付いてくる。
「ヒキオ、出しすぎだから」
たっぷりと噴き出したカウパー液が陰毛を浸していた。優美子が困ったように笑い、玉袋をかぷりと咥え込む。
「んっ、ふぅぅ……っ」
竿の脇から瞳を覗かせ、うっとりと上目遣いを向けながらころころと口内で睾丸を転がす。強くすると痛がると分かっているからか、舌

遣いや頬のすぼめ方はどこまでも優しい。
「……ぷはっ。……ヒキオ、きもちいいんだ？　すっごいことになってる……っ」
　青筋の浮いた肉槍をうっとりと見つめる表情に見惚れる。凶悪な男性器と瞳を潤ませた恋人の顔が並ぶ、そのミスマッチさにひどく興奮する。
「う……お……っ」
　１０本の細指が肉幹をすりすりと撫で回し、亀頭にふーっと息を吹きかける。それだけで鈴口に透明な珠が浮き上がる。
「……ちゅるっ」
　噴き出した先走り汁を吸いこまれ身震いする。優美子は俺を見つめたまま、亀頭にちゅっと口づけをしてぬるりと亀頭を呑み込んだ。
「んふぅぅ……っ」
「おあ……あっ、くぁ……っ」
　朱い膨らみがぱっくりと呑み込まれ、カリ首が唇ににゅむにゅむと締めつけられる。ねろりと伸びた舌が興奮で膨らんだ亀頭をねろりねろりと舐め上げ、次々と溢れ出す我慢汁を嬉しそうにこくこくと嚥下する。
「……ヒキオ、感じすぎじゃない？　だいじょうぶ？」
　嬉しい気遣いをしながらも、まるで焼き鳥にかじりつくかのように肉竿を横から咥え、舌を這わせる。矛盾した仕草になおさら興奮する。
「ぐ……ぁ……だ、大丈夫、だとは……思う」
「……そ」
　そっけない返事を嬉しそうな声音ですると、亀頭を指で押さえてカリ首を横からじっくりと舐ってくる。肉幹は自分でも驚くくらい長くなっていた。きっと優美子の中に挿れているときも、こんな風になっているのだろう。
「んっ、ちゅっ、れるっ、はぷ、ぢゅる……っ」
　優美子が夢中になって肉竿をしゃぶる。こんな淫らな光景、少し前までなら妄想でさえ描くことができなかっただろう。

「うお……っ？」
左右からカリ首をたっぷり舐られて惚けていると、優美子が俺のひざをつかんでさらに押し開いた。ぱっくりと、無様なほどに脚を開いた状態。
「んむ……っ」
「ぉあ……っ」
無防備極まりない状態で、優美子が肉槍を呑み込んだ。ゆっくりと顔を傾けながら、唇を竿の上にすべらせていく。脚を開いているため、自分の性器が恋人に食べられるさまをはっきりと見てとることができる。
「んふぅぅ……んっ、ぢゅっ、ぢゅる……っ」
肉幹を根本まで呑み込むと、先走りと唾液を嚥下しながら唇を引く。精液を根こそぎ搾り取るように強烈に締めつけてくる。頬をすぼめた顔はどこまでも卑猥だ。
「んっ、んんっ、んっ、んっ……」
ふたたび根本まで呑み込む。陰毛に鼻をくすぐられたのか、可愛らしく眉をひそめた。唇を引き、また呑み込む。唇を引き、また呑み込む。
「んっ、んっ、んっ、んっ、んっ……」
口内抽送の速度が徐々に上がってくると、俺のひざを押さえていた優美子の手から力が抜けていく。自然と脚は閉じていく。優美子は女の子座りをした自分のひざの前に両手をつき、夢中で竿に唇をすべらせていく。
「おっ、おぁっ、優美子、それ、すげぇいい……っ」
「んふぅ……っ？　んっ、んっ、んっ、んっ……」
肉幹を半分咥え込んだ状態で見上げ、嬉しそうに瞳を細める。優美子は奉仕好きなのかもしれない……と思った瞬間にぞくりとして、温かな口内で肉竿がさらに硬く張り詰めた。
「んっ、ごくっ、じゅるっ、ぢゅるるっ、ぢゅろっ、んふぅぅ……っ」
綺麗な顔を卑猥にすぼめる優美子の顔を、たまらず内ももで挟み込む。優美子は俺の行動をまるで気にすることなく顔を前後に揺らし

続ける。陰毛がいつの間にかたっぷりと湿っていた。優美子の唾液が伝ったのだと気付き、背すじに悦楽の波が走る。
「優美子……そろそろ、出そうだ……っ」
閉じていた両脚を優美子の背中に巻きつけ、グッと引き寄せる。
「んふぅぅ……んっ、んっ、んっ、んっんっんっ……」
優美子が楽しげに鼻息をつき、口内抽送をより小刻みにしていく。速く動いても、唇の締めつけはどこまでも柔らかくて優しい。射精欲求がむくむくと心地良く湧き上がってきた。
「優美子、出る、出る……っ」
しっとりと汗ばんだ髪を両手でつかみ、根本まで呑み込ませた。ざらついた喉奥に亀頭がこすれた瞬間、高まりきった射精衝動が爆ぜた。
「んふぅぅ……んっ、んふぅっ、んっく、ごくっ、んふぅぅ、ごくっ、ごくっ、ごくっ……」
俺に頭を押さえられた状態で、優美子は顔を左右に振って口内のあらゆる場所に亀頭をこすりつけ、丁寧に舐りまわし、濃厚な精液をごくごくと呑み込んでいく。
「……ぷはっ。……いっぱい出た」
ようやく射精の脈動が終わり、尿道に一滴とて残すことなく搾り取ると、優美子が唇を離して惚けた声でつぶやいた。
「魂が抜けそう……」
「そんなに良かった？」
「ああ、ありがとな」
頭をくしくしと撫でると、気持ち良さそうに目を細める。
ふと、ぺたりと座り込んだ優美子がもどかしげに内ももをこすり合わせていることに気付いた。
「……するか」
「……うん」
手短に告げると、優美子は射精したばかりの肉竿をすりすりと撫でながら、照れたように頷いた。

続く。

（７２）

ベッドの縁に座った俺の股座に、優美子がするりと入り込んで背を向ける。カーテンから漏れる薄明かりがすべすべした背中と金の髪を柔らかく照らした。

「ん……っ」

優美子が手を伸ばし、肉幹を人差し指と中指で挟み込む。柔らかな淫肉はたっぷりと潤んでいた。亀頭を前後に揺らしてくちゅくちゅと卑猥な音を立て、首だけ振り向いて悩ましい流し目を送る。

「あ……はぁぁぁ……っ」

優美子がゆっくりと腰を下ろすと、熱く潤んだ膣内に肉茎が呑み込まれた。にゅく、にゅろ……っと卑猥な感触に包み込まれ、快感が尿道を伝って下半身を痺れさせる。

「きつくないか」

「ん、だい、じょうぶ……はぁぁぁ……っ」

悩ましい吐息を漏らしながら、肉幹をずぷりと根本まで咥え込んだ。互いの陰毛と陰毛がこすれる感触。ぞくぞくする密着感に俺も優美子も震える。

「うあ……っ？　あっ、やんっ、あ……っ」

後ろからそっと抱きしめて乳房に指を這わせる。優美子が甘ったるい声を漏らし、俺の腰をさわさわと撫でてきた。柳腰がくねくねと揺れ、肉幹が心地良く締めつけられる。

「今日、どっか行くか」

「え？　あっ、ぅっ、んん……ちょ、ちょっ、と……っ、触りながら、聞かないで……っ」

ふたつの乳頭を指の腹ですりすりと撫でながら尋ねると、優美子の背がくんっと弓なりに反り返った。ぞくぞくするような色っぽさに肉幹がさらに膨らむ。

「べつにいいだろ。で、どうする」

意地悪をしているのではないかと問われれば、まあ１００％意地悪だけれど。

「んん……ヒキオの、ばか、へんたいっ、ドスケベ……あっ、やっ、そっちは……っ」
右手でお腹を撫で、さらに陰部まで滑らせて恥毛をかきわける。優美子が恥ずかしそうに身をよじり、まるで咎めるかのように陰茎をきゅっきゅっと食い締めてくる。こんな可愛い反応をされて、続けないわけにはいかなかった。
「うあっ？　あっ、だめっ、いま、クリ、だめ、イク、すぐイクからぁ……っ」
包皮を向いて薄桜色のクリトリスを指の腹でこすると、優美子の腰が小刻みに動いた。泣きそうな顔で振り返る。唇を重ねると、きゅっときつく目を瞑って身体をぶるりと震わせた。
「んふぅぅぅ……っ」
右手と肉竿に伝う愛液の温かさ。今までも行為を重ねるたびに優美子の感度が上がっていると思っていたが、この一晩での変化はさらに著しいものだった気がする。何をしても感じる、感じすぎるとでも言える敏感さ。
「はぁっ、はっ、はぁぁぁ……っ」
「うお……っ」
いちど達してスイッチが入ったのか、優美子が積極的に腰を前後に揺すりはじめる。たっぷりと愛液の滲んだ結合部がぬちゃぬちゃと卑猥な音を立てる。
「今日はこのままでいい」
一瞬何のことかと思った。俺の質問への回答だと気付くまでに数秒かかる。
「このままって……ヤリまくるってことか」
「ち、ちがっ……！　いや、えっと、こ、この部屋にいれればいいって意味だから……っ」
優美子が俺の両耳に指を伸ばし、恥ずかしがりながらも卑猥な手つきでまさぐってくる。言葉と表情は初心なのに、仕草は淫らそのもの。徐々に射精衝動が近付いてくる。
「ここにいたら、どっちにしろヤリまくると思うけどな」

あえて恥ずかしい言葉をつぶやき、優美子の腰振りに合わせて俺もゆるゆると腰を振る。
「あっ、やっ、そっ、そうっ、かもっ、しれ、ないけど……あっ、あっ、あっ、あっ、あっ……んくぅぅ……っ」
ふたりの腰が限界まで密着した瞬間、瑞々しい肌がぶるぶると痙攣した。竿の根本を締めつける強烈な快感。背すじを伝う汗をちろりと舐めると、膣肉が強烈に締めつけてきた。
「ねえ……寝ていい？　もうフラフラなんだけど」
「ん、いいぞ。このまま後ろに倒れればいいか」
「うん」
優美子の脇に腕を通し、羽交い締めの形にして後ろに寝転がる。心地良い重みと密着感に目を細めた。
「ヒキオってさ、んっ、ほんと、あんっ、ねちっこいよね……んっ、あっ、ぅあっ、あっ、あっ……」
とんっ、とんっ、と腰を振ると、優美子が拗ねた声でささやいた。そのあいだも喘いでいるのが可愛らしくてしかたがない。
「そのほうが優美子も好きだろ」
「……っ、……調子乗んなし……んむ……っ」
振り返り、眉を可愛らしくひそめて唇を重ねてくる。ちろちろと舌を絡ませながら、細い肩を掴んでぬこぬこと抽送を重ねる。
「んはぁっ……れるっ、ちゅっ、ね……ヒキオ、気持ち良い？」
「ん、すげえ良いぞ。ていうかもう出そう」
「いいよ、いっぱい出して……っ」
細指が俺の耳をさわさわとまさぐる。気だるさをまとった交わりが幸せで、気持ち良くてしかたがない。俺の腰振りが小刻みになる。優美子の細喉が震える。
「やんっ……あっ、あっ、あっあっあっあっ……」
たまらず喉に吸い付き、舌を這わせながら腰振りを速める。優美子がベッドに足裏をつき、俺の腰の動きに合わせて艶めかしく尻を揺する。膣肉が収縮し、精を搾りとろうとしてくる。
「ヒキオの……すごい、かたい……あっ、あっ——はぁぁぁぁぁ

……っ」
びゅるっ、びゅぐっ、ぶびゅるる……っと、大量の精液が優美子の子宮口を叩く。優美子の背中がぐんと反り返って俺から離れ、膣全体が蠕動して肉幹の根本から先端まで貪ってくる。ふたりとも腰の動きは止まっているのに、一滴残らず搾り出された。
「ちょっと休憩するか」
「うん……、……」
「……まだしたいのか？」
ちょっと名残惜しそうにしながら腰を揺する仕草にぞくりとする。俺の質問に、優美子は羞じらいながらうなずいた。
「今度は、その……後ろから、してほしいかも」
「……はいよ」
甘ったるい声でおねだりされただけで、膣内で大人しくなっていた肉幹が硬度を取り戻す。
次が終わったら、さすがに本当に休憩しよう……と思いながら優美子の身体を起こし、よつんばいになった優美子の中に入り込んだ。

× × ×

夕方、優美子を家まで送ることにした。できればもう1泊してもらいたかったが、さすがに二夜連続で外泊はまずいだろう。真冬の夜気のなか、手を繋いでのんびりと歩いた。
「そんじゃな」
「うん」
家の前であいさつを交わすと、優美子がとててと歩み寄り、あごをくいと上げる。死にそう。
誰も見てないよな……と周りを確認してから、唇を重ねるだけの軽いキスをした。
「……ヒキオ、顔真っ赤だし」
「……寒いからだろ。ていうか優美子も真っ赤だぞ」
「……寒いからだし」
ぽすぽすとお腹をパンチされた。ブームなんでしょうか。毎回可愛すぎて死にそう。

見つめ合い、別れを惜しむ。金の髪をくしくしと撫でると、俺がプレゼントしたマフラーに恥ずかしそうに顔をうずめる。照れ隠しなのか、優美子もにょきっと手を伸ばして俺の頭を撫でてきた。優美子がプレゼントしてくれたマフラーに顔が埋まる。ちょっと力を入れすぎじゃないでしょうか。
「じゃあ、また明日。おやすみ」
そろそろ行かないとな……と思ってあいさつをすると、優美子が俺のコートの袖をちょんとつまんだ。その表情にはどこか決意が滲んでいて、後ろ髪を引かれて……というわけではないのだと気付く。
「……どうした」
「……もうすぐセンターだよね」
「ん、そうだな」
センター試験は年明けから間もなくに行なわれる。今日はクリスマス。本番までおよそ2週間だ。
「あーし、ヒキオと同じ大学に行きたい。もっと一緒にいたい」
「……っ」
はっきりとした意思を告げる優美子の顔は真剣そのものだった。心臓が急速に脈打ち、全身に血液が急速に送られる。
俺は志望校をある程度絞ってはいたが、優美子はまだぼんやりしていた。それでも、いっしょに勉強するようになってからの優美子の伸びは著しく、定期テストでも科目によっては上位数十名に食い込むようになっていた。志望校のレベルを考えればまだ厳しい面もあるだろうが、それは俺も同じこと。
「……そうか。……あー、その、なんだ……けっこう、ていうかかなり嬉しい。ありがとな」
顔が熱くなる。夜気よ、もう少し仕事をしてくれ。
「……うん」
優美子が照れながらも、嬉しそうに頷く。本当に可愛くて、綺麗で、魅力的な女の子だ。

俺だって、もっと近くに、一緒にいたい。
「……がんばるか」
「……うん」
無性に愛おしくなって抱きしめると、優美子は幸せそうに目を細めて俺の背中を抱きしめた。
「んむ……んん……っ!?」
もういちどキスをすると、優美子が唇の合わせ目を舌でなぞってきた。がっつりキスする気か……!? と慌てて唇を離す。優美子がちろりと舌を出していたずらっぽく微笑んだ。今まで決して見ることのなかった強烈に可愛らしい仕草に悶絶する。
「あー、その、なんだ……メリークリスマス」
「ぷっ……いまさら?」
「うるせえ」
「……メリークリスマス」
俺が拗ねると、なだめるように優しい声で囁き、優美子が抱きしめてきた。互いの肩にあごを乗せて、数十秒か、あるいは数分か、月の見える薄明かりの中で互いの温もりを確かめ合った。

× × ×

「おっすお兄ちゃん、首尾はどうですかな?」
家に帰ると、妹が変なテンションで出迎えてくれた。なんかにまにましている。両手でぐしゃぐしゃと髪をかき分けた。
「ぎにゃー! 女の子にそれはナシ! お兄ちゃんのノーデリカシー!」
「大丈夫だ、優美子にはこんなことしないから」
小町が目を見開いた。
「名前呼び!? ていうか今のノロケだよね!? ちょっと、なんかすごいことになってるじゃん! 籍は!? 籍はいつ入れるの!?」
「まだそこまで考えてな……あ」
まだ、という言い方に小町のにまにまがいっそう不快なものと化す。可愛いけど最高にうっとうしい。うっとうしいが……。
「……ありがとな、ほんと助かった」

小町のおかげで、本当に素敵な時間を過ごすことができた。それでも家族に礼を言うというのはどうにも恥ずかしい。小さくぽそりとつぶやくと、小町がにひっと良い笑みを浮かべた。
「どーいたしまして。ばっちりイチャつけたようで何よりです！」
「ああ、そりゃもうばっちりだぞ」
「あれ⁉　否定しない⁉　ていうかお兄ちゃん、ちょっと顔つきがキリッとしてるんだけど⁉」
案の定食いつかれ、このあとしばらく小町の質問責めにあった。優美子の名誉が守られる範囲で話すのが大変だった。

×　×　×

ようやく落ち着いて部屋に戻ると、優美子からＬＩＮＥが来ていた。なんぞやと思いながらトークルームを開く。
『ヒキオのバカ、出しすぎだから。まだ垂れてくるんだけど』
『おやすみ』
『メリークリスマス』
「……」
数えきれないほど射精しておきながら、ぞくりとするメッセージひとつでふたたび大きくなってしまった。

続く。

（７３）

年末も年末、大晦日。
俺と優美子は、朝からラブホテルに来ていた。
俺と優美子は、朝からラブホテルに来ていた。
大事なことなので２回言いました。
「……勉強しなくていいの？」
慣れない受付を済ませ、無難な部屋を選び、若干緊張しながら部屋に入ったタイミングで優美子がぽつりとつぶやいた。コートの袖をくいくいと引っ張ってくる仕草に悶絶する。優美子が着ているのはダッフルコートで、柔らかな印象が今の彼女にとても似合っている。
「さんざんやってるだろ。息抜きも必要だって」
「……ヒキオのドスケベ」
脇腹をぽこぽことパンチしてくる。可愛すぎて息を引き取りそう。
――クリスマスイブこそいっしょに一夜を明かすことができたが、さすがに年越しは互いの家族と過ごすことにした。小町は「優美子さんといっしょに年越しすればいいのにー」と言いながらも、なんだかんだで嬉しそうだった。
いっしょに年は越せないが、それならば夕方までは……ということで、朝からラブホテルデートを敢行した。誰にも邪魔されることのない場所を精査した結果だ。
ふだんのデートならば気にもしない人目だが、ラブホに入るとなると妙に緊張してしまう。そのため、自宅最寄り駅から数駅、そして駅からさらに徒歩１０分の、まず誰にも会わないであろうホテルを選んだ。
「……なんかここ、色がやらしいんだけど」
ラブホテルも様々なタイプがあるようで、このホテルでもビジネスホテルと言われても違和感のない部屋もあった。しかし俺たちが選んだ部屋はうっすらとピンクの壁に囲まれていて、いかにも、といった雰囲気。
「目的が目的だからな」

優美子の手をそっと握ってつぶやくと、優美子の身体が目に見えて強張る。そろりと流し目を送り、俺の手をふにふにと握り返す仕草が可愛らしい。
「んん……っ」
優美子がコートを脱ごうとしたところで唇を重ねた。柔らかな唇の感触をゆっくり味わう。優美子のくぐもった甘い声。この距離になって初めてわかる甘やかな匂い。うっすらと目を開け、ちろちろと舌を這わせてくる悩ましい仕草。すべてにぞくぞくする。
「んっ……ちゅっ、ちゅぴっ、んふぅぅ……ヒキオ……れるっ、んむふぅ……っ」
優美子がうっとりとした声を漏らしながら舌を絡め、俺のコートに手を伸ばした。ボタンをひとつひとつ外してくれる。俺のコートを脱がせると、優美子はキスを続けながらハンガーにコートをかけて吊るした。
「んちゅ……れるっ……はむっ、んっ、んふぅぅ……っ」
口腔に流れ込む甘ったるい唾液と嬌声に興奮を募らせつつ、俺も優美子のコートを脱がせる。可愛らしいダッフルコートを脱がせると、赤のタートルネックとミニスカート、タイツという服装だった。引き締まりつつも豊満な乳房と尻が主張した、たまらないスタイルの魅力が生かされた服装。
「んぁっ……へぁ……っ？　なにして……やぁ……っ」
優美子をゆっくりと壁まで押していき、股にひざを滑りこませた。そして左手で優美子の片手首を掴んで顔の横に押しつけ、右手で胸を揉む。
「あっ、ぅあっ、はっ、んむふぅ……んっく、んっ、ふぅぅ……っ」
瑞々しい弾力の乳房にふにふにと指を沈み込ませると、優美子のひざがかくかくと卑猥に揺れた。俺のひざを柔らかな内ももできゅっと挟み込む。タイツのすべすべとした感触が心地良い。
「んっ……んふぅぅ……ヒキオ、調子乗んなし……っ」
「うぐ……っ？」
俺の拘束を振りほどいたかと思うと、両手を俺のTシャツの中に滑

り込ませ、上着ごとずり上げた。ニッといたずらっぽく笑みを浮かべたかと思うと、両手で乳首をくりくりとまさぐってくる。
「くっ……ぅおっ、くぁ……っ」
情けないほどに身体がビクつく。反撃に両手で胸を揉むと、優美子は劣情で眼の下をねっとりと朱く染め上げた。かすかに開いた口から覗く赤い舌にぞくりとする。
「ヒキオ、かたくしすぎだし……」
乳首をいじっていた両手のうち片方が離れ、ジーンズの上からまさぐってくる。自分の手よりもずっと細くて華奢な手がすりすりと膨らみを撫でさすり、甘やかな快楽を流しこんでくる。
「優美子もたいがいだろ」
「ぅあ……っ」
滑り込ませたひざをぐいぐいと上に押し込むと、綺麗に整った眉がくにゃりと歪んだ。それでも優美子は俺の乳首と股間をまさぐる手を止めず、それどころか自分からゆっくりと腰を揺らして俺の太ももに下腹部をこすり付けてくる。タイツとジーンズを挟んでいても、優美子の淫裂の熱さが伝わる。
「んっ……ちゅっ、れるっ、ちゅぴっ、んふぅぅ……っ」
舌を絡めながら、優美子がチャックを開けてボクサーパンツ越しに肉幹をこする。がちがちに張り詰めた肉幹の感触にちょっと驚く仕草が可愛らしい。
「あんっ……あっ、んっく、ふっ、んくぅぅ……っ」
少し乱暴な手つきで乳房を揉みしだくと、優美子の視線がぐらりと揺らいだ。肉づきの良い太腿をぶるぶると震わせ、切なげに見つめながら股間をまさぐってくる。尿道から背すじへとぞわぞわと這いまわる悦楽に、パンツの中で先走り汁が次々と溢れ出す。
「ね、ヒキオ……」
耳元でささやかれ、ごくりと息を呑む。肉幹を両手できゅっと包み込み、ちろりと舌なめずりをする。今の仕草はわざとなのかそうでないのか分からない。どちらにせよ、信じられないほどの興奮を身を焼く。

「そろそろベッド行くか」
「ここでいい」
「え、ここって……うおっ？」
優美子がすとんと屈みこんだかと思うと、ジーンズとパンツを一気にずり下ろした。透明な糸を引く肉槍に優美子が息を呑み、うっとりとする。冬とはいえ、暖かい部屋で興奮したことで肉茎はじっとりと蒸れている。
「ん……っ」
肉槍の根本に手を添え、すん、すんと鼻を鳴らす。見ただけで劣情を煽られる光景に、新たなカウパー液が分泌される。優美子がきょとんとして、それから嬉しそうに鈴口にちゅっと吸い付いた。
「おぁ……っ」
鈴口にくっついた瑞々しい唇がそのまま滑り、朱く膨らんだ亀頭をぬるりと呑み込む。
「んふぅぅ……ヒキオ、すっごい苦しそう」
言葉でこそ心配しているが、実際はすごく楽しそうにつぶやく。熱い吐息が亀頭にじわりと染み込む。
「んっ、んふぅっ、んんんっ……」
優美子が顔をかたむけ、ぬる、ぬるりと肉竿を呑み込んでいく。ひざをついて俺の腰に手を添え、一心不乱に肉幹を貪ってくる。
「んっ、んっ、んっ、んっ……」
「おっ、ぉあっ、優美、子……っ」
小さな耳をまさぐると、優美子が色っぽく眉をひそませた。口淫に耽る自らの身体を悩ましげにくねらせ、挑発的な視線を向けてくる。
「んっ、ちゅっ、れるっ……ヒキオ、裏側弱いよね。ヒクヒクしてる」
「くっ、おぉ……っ、わりいな、変な声が出る……っ」
「べつにいいけど？　可愛いし」
さらりと恥ずかしいことをつぶやき、ふたたび肉茎を呑み込む。眼の下をねっとりと赤らめ、頬をすぼめて竿を締めつけるさまは恐ろしいほどに色っぽくて綺麗だ。
「んっ、んっ、んっ……気持ち良い？　んっ、んっ……」

「あっ、ああっ、すげえっ、良いっ……うぁ……っ」
ギュッと頬をすぼめて顔を引かれると、勝手に腰がついていってしまう。情けないくらいに気持ちよくなり、声が掠れる。優美子が嬉しそうに俺の腰を撫で、それから玉袋にそっと手を添えた。
「んちゅっ、れりゅっ、ぢゅるっ、はぷっ……んっ、んっ、んっ……。ヒキオのここ、キュッてしてる。出そうなんだ？　んっ、んっ、んっ、んふぅぅ……っ」
睾丸をやわやわともみほぐしながら、顔を前後に揺らす。唇をほどよく締めつけ、竿とカリ首を刺激してくる。
「ぐぅ……優美子、もう、出そうだ……っ」
一定のリズムで優しい口愛撫をされ、下腹部の奥底から射精衝動が込み上げてくる。俺の痛切な声に優美子は「ん」と短い返事をして、指で作った輪で竿の根本をしごきながら顔を前後に揺らす速度を上げる。熱い塊が尿道をじりじりとよじ上ってくる。優美子の金の髪をたまらず掴むと、汗でしっとりと濡れていた。頭をつかまれても優美子は気にすることなく顔を振り、竿をしごき、睾丸を揉みほぐし、俺を絶頂へと導いていく。
「イっ、イクっ、出る、出る、出る……っ」
腹筋がギュッと縮こまってぶるぶる震え、弾け飛ぶような開放感とともに優美子の口内へ大量の精液を注いだ。
「んふぅぅ……んっ、んっく、んっ、んっ、ぢゅるっ、じゅっ、んふぅぅぅ……っ」
射精前と同じように竿と玉袋を刺激しながら、たっぷりと噴き出した精液を呑み込んでいく。強すぎる快感に腰を逃がそうとすると、ぎゅっと頬をすぼめて逃がしてくれない。魂ごと引っこ抜かれるような射精に浸る。
「んっ、じゅるっ、ぢゅろっ、じゅぷ……っ」
「優美子、くぁっ、もう、出ないっ、て……っ」
射精の脈動が終わったあとも、優美子は「まだ残ってるでしょ？」とでも言わんばかりの視線を向けながらたっぷりと舐めしゃぶった。いたずら心に満ちた瞳の色。それでも射精したばかりで敏感になっ

ていることはよくわかっていて、舌と内頬による愛撫はとても穏やかで優しい。射精直後は萎んでいた肉幹が、優美子の唇が離れる頃にはふたたび力強く勃起していた。下手をすれば射精前よりも力強いのでは？　と思うほど。

「……優美子さん、エロすぎると思うんです……」

名残惜しむように亀頭をちろちろと舐める優美子の髪を撫でると、ぷいと顔を逸らされた。

「……ヒキオがわるい」

俺のせいらしい。

そろそろベッドに行くか……と思ったが、唾液と精液でぬらぬらと光る優美子の唇に興奮したので、もう少しだけ舐めてもらうことにする。

優美子の唇に亀頭をふにふにと押しつけてみた。

「んふぅ……っ？　はむっ、んっ、ちゅぴっ……ヒキオのスケベ」

美味しそうに亀頭を咥えながら、可愛らしく罵ってきた。

この後、射精までは至らないものの、２０分近くたっぷりと舐められた。途中から明らかに俺を焦らしているのがわかったが、優美子が浮かべるいたずらっぽい笑みがあまりにも可愛らしいので、されるがままになっていた。

続く。

（７４）

優美子にたっぷりと舐めてもらったところで、ようやく服を脱ぐことにする。といっても下半身はすでに裸になっているので、あとは上を脱ぐだけだ。早くベッドに行こう……と思っていると、優美子が唇を重ねてきた。

「んっ、んむっ、ふっ、んふぅぅ……っ」

顔を傾けて唇を密着させ、ねっとりと舌を絡めてくる。かすかに残っていた精液の匂いが優美子の唾液にまぎれ、ふたりの口内で撹拌されてうやむやになっていく。

「んちゅっ、れるっ、ヒキオ、脱いで、ほら……」

唇を離すと、優美子が俺の服を脱がせにかかる。瑞々しい唇の端に光る唾液の跡が生々しい。手早く裸になり、今度は優美子の服を脱がせにかかった。

「……エロ……っ」

タートルネックを脱がせると、優美子は赤のブラを着けていた。大人びた印象の彼女によく似合う、扇情的な服装。タイツと相まって、まるで下着ブランドの写真を見ているような気分になる。

「ヒキオ、こういうの好きそうだなって思って」

「んむ……っ？」

優美子が俺の顔を胸にうずめ、髪をくしくしと撫でながら囁いた。どうやらちょっと照れているようだ。

「ん……っ。ヒキオ、こら、やぁっ、んっ、んんっ……」

すべすべの背中を撫で、タイツ越しに弾力のある尻肉を揉むと優美子が艶めかしく身をよじらせた。

「濡れてるな」

タイツの上から下腹部をそっと撫でると、熱い染みが広がっていた。

「……ヒキオのせいだし」

「ちがいない」

あっさり返事をされたことが気にくわないのか、頭をぽこぽこと叩

いてきた。叩くというよりは撫でるといえるような優しい手つきに激しく和む。
優美子がタイツに指を引っかけ、ずるりと引き下ろした。
「……っ」
むわっ、と漂う性臭。たっぷりと舐めているあいだも興奮しつづけていたのだろう、タイツの中に押し込められていた牝の匂いは濃厚そのもので、優美子は恥ずかしそうに目を伏せた。
「前より濡れやすくなってるか？」
「言わなくていいから……っ」
フォロー、大失敗。優美子の手のひらに頬をぐいぐいと押される。首が変な方に曲がりそう。
ブラを外そうと背中に腕を回すと、優美子はびくっとして恥ずかしそうに身を縮こまらせた。可愛い。
「……」
「み、見すぎだから……っ」
ぷるん、という擬音がよく合いそうな弾力のある乳房がこぼれ出る。ぷっくりと膨らんだ乳頭は、下腹部の匂いと同様に優美子の興奮の度合いをありありと示していた。
「……下も脱がすぞ」
屈むついでに乳頭にちゅっと吸いつくと、優美子が全身をがくがくと震わせた。咎めるように両手でぐしゃぐしゃと髪をかきまぜられる。大型犬にでもなった気分だ。
「……ん……っ」
赤いショーツを脱がすと、よりいっそう濃密で甘酸っぱい愛液の匂いがした。陰毛は汗と愛液で肌にぺたりと貼りついている。優美子が恥ずかしげに腰をくねらせると、太ももを伝う愛液が薄明かりで鈍く光った。
「……早く、ベッド、行こ？」
よっぽど恥ずかしくなったのか、下腹部をじっと見つめる俺の頬をそっと撫でてくる。
「だな、行くか」

もう少しイジめてもいいかと思ったが、さすがに本気で怒られそうなのでやめておいた。

×　×　×

ベッドに上がると、ひざ立ちで向かい合った。吸い寄せられるように唇を重ねる。

「んっ……ちゅむっ、れるっ、はぷっ、んぁっ、んっ、あんっ、んふぅぅ……っ」

互いの唇と舌を貪りながら、俺は優美子の胸と下腹部に手を伸ばし、優美子も俺の胸板と肉幹をまさぐる。細指の優しくも卑猥な手つきにびくびくと震えてしまう。

「れるっ、ちゅっ、……ヒキオ、感じすぎだし。……あんっ、んっ、こ、こら……はぁぁぁ……っ」

竿にまで伝っている先走りを得意気に塗りたくっていた優美子の声が跳ねる。俺の指が割れ目にずぶりと沈んだからだ。

「優美子こそ、濡れすぎだろ」

「う、うっさい……あっ、あっ、あっ、あっ……っ」

じゅむ、じゅぶ……っと指の腹を小陰唇に沈めると、優美子の表情から正気が薄れた。かくかくと卑猥に腰を揺らし、嗜虐心を煽る目で俺を見つめてくる。

「ね、だめ、んっく、いき、なりっ、ぅあっ、そん、な……さわんないでっ、んんっ、あーし、んぅぅっ、ヒキオのこと、気持ち良くできない……っ」

上目遣いで懇願するように見つめてくる表情にぞくりとする。言葉の通り優美子の指の力は緩んでいて、俺を責めることがほとんどできていない。

「さっき気持ち良くしてもらったお礼だ。気にすんな」

「あっ、そん、なっ、んっ、あっ、やっ、あっ、んあっ、んぅぅ……っ」

普段の凛とした声が消えて、蜂蜜をぶちまけたような甘ったるい声に変化していく。支えを求めて俺の肩に両手を置き、下腹部をいじる俺の手をじっと見つめてくる。

「指、入れるぞ。……ぐっしょぐしょだな」

「言うなぁ……っ」
膣口に中指をあてがうと、柔らかな粘膜にあっさりと呑みこまれた。膣ヒダが熱く蠢き、にちにちと心地よく締めつけてくる。
「あっ、これっ、だめ、イっ、イク、すぐ、イク、ばか、イク、イっちゃうぅ……っ」
ずぶりと埋め込んだ中指をくにくにと曲げると、合間に可愛らしい罵りを挟みながら腰をがくがくと揺らした。
「いいぞ、いくらでもイってくれ」
ささやき、空いていた左手で優美子のあごをくいと上げる。目の前で見つめ合う格好になると、俺の意図を察した優美子の顔がボッと茹だった。
「ちょ、ちょっと、ヒキオ、待って、なにあーしの顔見てんの……っ」
羞恥にまみれた瞳を見つめながら、中指を根元から曲げて膣肉をぐにぐにと押し込む。
「わかってるだろ。このままイってくれ」
嗜虐心の赴くままに告げると、優美子がくしゃりと泣きそうな顔を浮かべた。そこに怒りはなく、あるのは羞恥と少しばかりの好奇心。
瑞々しい唇が震える。
「……ヒキオのドスケベ。……あっ、あっ、やっ、だめ、あっ、あっ、あぁぁっ、あぁぁぁ……っ」
綺麗に整った眉をくにゃりと歪め、唇をキュッと引き結ぶ。少しでも顔に出すまいと努力しても、優美子の腰が激しくがくつく。下腹部は愛液を滴らせ、膣肉はぎゅむぎゅむと妖しく締めつけてくる。
「やぁっ、イっ、イクっ、イクっ、イク……んんんっ！」
目と唇をぎゅっと閉じて、汗ばんだ肢体がグッと硬直する。固まったまま小刻みにぶるぶると震え、膣肉は中指をちぎらんばかりに締めつけてきた。
「……はぁぁっ、はっ、はっ、はっ、……ばか、どへんたい」
俺にあごを持ち上げられたまま、優美子が蕩けた顔で罵ってくる。少し余裕ができたのか、片手は俺の肩に乗せたままで、もう片方の手で肉幹をすりすりとなぞってくる。

「優美子の反応が可愛くてつい。後悔も反省もしてないぞ」
「それはしろし……」
可愛らしく睨んできた。「んっ……」と色っぽい声を漏らしたかと思うと、手首につつっ……と愛液が伝う。
「……あーしの弱いとこ、把握しすぎでしょ」
「優美子にも把握されてるからな。おあいこだろ」
俺の言葉に、優美子が目をぱちくりとさせた。そのあいだも肉幹をすりすりと撫でている。癒しの効果でもあるんですかね？
「……そうかも」
くすりと笑い、優美子が俺をぎゅっと抱きしめてくる。
「うお……っ？」
そのまま優美子が下になる形で倒れていく。慌てて腕を伸ばし、腕立てをするときの体勢になった。優美子がいたずら成功とばかりにくすくす笑う。強烈な可愛らしさに頭がくらくらした。
「ね、ヒキオ……入れて？」
きゅっと背中を抱きしめ、耳元でたまらない声でささやく。
「……おう」
耳にするりと指を入れて答えると、優美子は背すじをぴくんと反らし、「んっ……」と艶めかしい吐息を漏らした。

× × ×

「それじゃ行く……ぞぉ……っ？」
上体を起こし、正常位で挿入しようとすると。
優美子がそろりと伸ばした手で、自らの性器をそっと割り開いた。
「ほ、ほら、はや、く……入れて……っ？」
真っ赤になった顔、指で広げられたとろとろの粘膜、そしてその奥でひくつく膣口。あまりに強烈なおねだりに気絶しそうになる。
「……おう」
平静を装ったつもりだが、今にも裏返りそうだった。亀頭を小陰唇にぴとりとあてがうと、ぐっしょりと濡れた粘膜の熱さにごくりと息を呑む。
「はぁぁぁぁ……っ」

ずぶ、ずぶぶ……とゆっくり挿入していくと、女性器に指を添えたままの優美子の声が妖しく蕩けた。
「優美子、締めすぎだ……っ」
「うあっ、ちがっ、かっ、勝手に……んくぅぅ……っ！」
優美子が眉をきゅっとひそめ、両手を鼠蹊部にすべらせる。すらりと伸びた脚を広げ、男を受け入れる体勢。むわりと漂う愛液の匂いにくらくらしながら、自分の性器が膣肉に埋まるさまをじっくりと見続ける。
「あっ……ぅあっ、はっ、入った……？　奥まで……っ？」
「ああ、入ったぞ。……うお……っ」
肉幹が埋まると、優美子は竿の形をなぞるようにお腹を撫でた。艶っぽい仕草にぞくぞくしていると、膣ヒダがきゅむ、きゅむといたずらっぽく締めつけてくる。
優美子がむくりと上体を起こした。どうしたのかと尋ねる前に、その手が睾丸をそっとつまむ。
「いっぱい入ってる……」
ふにふにと優しく揉みながらぽつりとつぶやき、上目遣いで見つめてくる。
背すじがぞわりと粟立った。
「優美子、今のはダメだぞ……っ」
「きゃ……っ？」
優美子の華奢な肩を掴んで押し倒し、両手で乳房を揉みしだく。それと同時に、乱暴なほど荒々しい抽送を始めた。
「んっ、ぅあぅぅっ!?　あっ、かはっ、ひぐっ、ぅあぁぁっ!?」
乳房を愛撫する動きも腰の振りも荒々しい。それでも性感が高まりきった優美子の身体は快感として受け止めるらしく、俺の指と肉槍の動きに合わせて卑猥な嬌声を上げる。
「んぐっ、ひっ、やぁっ、ヒキオ、そんな、はげしく……んぅぅぅっ！」
俺の手首を掴んだところで優美子が喉仏を晒した。ばね仕掛けのように背すじを反り返らせ、肉槍を咥え込んだままぶるぶると痙攣する。

「わるい、続けるぞ」
「あっ、やっ、そんっ、なっ、んぁうぅ……んはぁぁっ!? あっ、ぅあぁぁっ!!」
重力を思い出したようにすとんとベッドに落ちた優美子の身体の中を抉る。ぐちゅ、どちゅ、ずちゅ……っと卑猥な結合音がして、優美子が顔をくしゃくしゃに歪めて喘ぐ。
「あぐっ、んぐっ、ヒキオ、やめっ、あっ、はぁぁぁ……っ！」
顔をぶんぶんと横に振りながらも、えげつないほどに恥骨をぐりぐりと押しつけてくる。言葉と挙動がまるで噛み合っていないさまにぞくぞくする。
「優美子。ここ、白くなってるぞ」
「……っ、言うなぁ……っ」
優美子がにちゃにちゃと白く泡立った結合部に視線を向け、声を震わせる。乳頭をつるし上げるようにキュッと上につまみあげると、優美子は弾けるように嬌声を上げた。
「はぁぁぁ……っ、こ、らぁ……やめ、そこ、あんま、いじんな……だめっ、ほんとに、いじらな……ぅあぅぅぅ……っ！」
腰の動きを止めて乳頭の側面を2本の指の腹でこすり、3本指で押しつぶすようにすると、優美子は乳頭への刺激だけで果てた。がくん、がくんと白いお腹が大きく揺れ、それからぶるぶると小刻みに痙攣する。
「はぁぁぁ……ヒ、ヒキオのばかぁぁ……っ」
怖いくらいに何度も達して、優美子が腕で目を覆って泣きじゃくる。どうしようもないほど愛おしくなって、もっと肌で優美子を感じたくて、細い背中を抱き寄せた。対面座位と呼ばれる体勢だ。
「ぅあっ……ヒキオ……ヒキオぉ……っ」
快感に蕩けきった優美子が唇を重ねてくる。それと同時に両手両脚を俺の巻きつけ、肌と肌、粘膜と粘膜をこれ以上ないほどにこすりつけてくる。
「んふぅぅ……ちゅっ、れるっ、はぷっ、ヒキオ、好き……好き……ヒキオ……っ」

「……っ」
目尻に涙をためた優美子が、めいっぱい甘えた声でささやいてくる。あまりの破壊力に脳が揺さぶられる。腰は軽く揺すっている程度だというのに、優美子が四肢を絡めつけて程よく力を入れてくるため、膣肉が心地良く締めつけられてどんどん射精欲求が湧き上がってくる。
「優美子……もう、出る、出る……っ」
「ヒキオ……イクの……？　いいよ、いっぱい出して……あーしも、イク、イク、イク、イク……っ」
耳元でささやかれ、互いに相手の首筋に顔をうずめる。優美子の匂いは汗と甘い匂いが混じっていて、限界寸前の性感がさらに高まった。
「ぐぅぅ……っ!!」
鈴口から白濁が噴き出す寸前に子宮口をどすっと突くと、優美子は俺を迎え入れるように全身できつく抱きしめてきた。狭い尿道を大量の精子が駆け抜け、鈴口から一気に噴き出す。
「うあぁぁ……っ、あっ、あっ、あっ、あっ、熱い……ヒキオの精子、いっぱい……っ」
「うぐ……っ!?　ま、待て、優美子、今動かすと……ぐぅぅぅ……っ！」
俺の耳にぴったりと唇を押し付け、媚熱のこもった声でささやきながら膣ヒダをきゅむきゅむと締めつけてくる。
「さっきのお返しだし。ほら、いっぱい出して？」
「いや、さっきのは優美子へのお返しで……お……おぉぉぉ……っ」
自身も達しているはずなのに、表情はとろとろに蕩けているのに。優美子は汗ばんだ肌を小刻みに痙攣させながら、腰をぐりぐりと円状に回してこすりつけてくる。射精の脈動が止まらず、どぐん、どぐんと精液が撃ち出されるたびに意識が遠のいた。
「はぁっ、はぁっ、はぁっ、はぁぁぁ……っ」
息を切らして余韻に浸っていると、優美子がいたずらっぽい笑みを浮かべ、肉竿の根元、真ん中、先端をキュッ、キュッと締めつけてきた。

「……いたずらが過ぎるぞ」
「いたずらが過ぎたらどうすんの？」
挑戦的な、それでいてどこか被虐的な笑みを浮かべてくる。
「……めちゃくちゃにする」
汗粒の浮いた背中を力強く抱きしめると、優美子はぶるりと身体を震わせ、泣きそうな笑みを浮かべた。
× × ×
夕方までたっぷりと交わり、シャワーを浴びてホテルを出た。手をつないで優美子の家の前まで送る。
「そんじゃ、俺はここで」
「入ればいいのに」
「いや、気まずすぎるだろ……」
優美子がくすくすと笑う。出会った頃には想像さえもつかなかった柔らかな笑顔。今年はもう、この笑みを見るのは最後なのだ。そう思うと、ちょっと寂しくなった。
「あー、その、なんだ」
「ん、どうしたの？」
俺がしどろもどろに切り出すと、優美子がこてんと首をかしげる。とてと俺に歩み寄り、急かすでもなく待ってくれるのが嬉しい。
頭をがしがしと掻き、ふぃーと深く息をついた。
「……来年は、いっしょに年を越せるといいな」
言った瞬間、大晦日の夕方の寒さを一瞬で忘れた。優美子も顔を真っ赤にしている。ふたり揃って寒さを忘却してしまった。
優美子がうつむく。しばし待っていると、俺の袖をきゅっとつまんだ。空いた手で俺の腹をぽこぽことパンチしてくる。やだ、逃げられなくしてボコボコにするスタイル……？
やがてパンチする手を止めると、袖をつまむ手はそのままに上目遣いを向けてきた。
「……うん。あーし、ヒキオともっと一緒にいたい」
卒倒しそうになった。
「……おう。えーと、なんだ、その、よいお年を？」

優美子が噴き出した。
「ちょっと凹むんですが……」
「ぷっ、くくっ、だって、急に、そんな使い慣れてない言葉……っ」
めっちゃウケてる。笑っていただけるなら何よりです……と遠い目をしていると、優美子の手が肩をとんとんと叩いた。
「よいお年を」
「んむっ？」
花が咲いたような笑みを浮かべ、唇を重ねてくる。驚いているあいだに唇が離れ、いたずら成功とばかりに微笑んだ。
「じゃーね。また来年。ってかまた明日？」
「だな」
明日は初詣に行く予定を立てていた。半日もすればまた会えるのだが、そのあいだに年が変わるというのはなんだか不思議な気分だ。
もう一度キスをすると、今度こそ優美子が手を振って家に帰った。
自分の言葉と、それに対する優美子の言葉を思い出して――帰り道は、ずっと顔が火照っていた。
あまりにも濃密だった一年が、ゆっくりと暮れてゆく。

続く。

（７５）

元旦。

「んじゃ、行くか」

「はいはーい」

お兄ちゃんと家を出ると、外の空気はとても澄んでいて、肌に刺さるように冷たかった。

「うひゃー、超寒いね」

「だな」

小町がマフラーに顔をうめると、お兄ちゃんも同じタイミングでマフラーに顔をもふもふとうめた。つい１週間くらい前に優美子さんからもらったマフラー。今まで家族以外からプレゼントされた経験がほとんどないお兄ちゃん――この言い方はとてもひどいけど、まったくもって否定しようがない――が、ここまで躊躇なく貰ったものを身に着けてるのがなんだか不思議な感じ。

優美子さんのことが本当に好きなんだなー、とニヤニヤしていると。

「……なに見てんだ」

「にゃー！」

不良みたいな喋りになったお兄ちゃんに頭をぐしぐしと撫でられた。ちょっと力が強い。せっかくセットした髪をものの数秒で無駄にされ、歩きながらこんこんと説教した。けれどお兄ちゃんは「はいはい、可愛い可愛い」と極めて適当に流しやがりました。小町自身が可愛いのか、はたまたお説教が可愛かったのか？　いや、お説教が可愛いってなんだろう。すごく斬新。

ぽてぽてと最寄り駅まで歩いて電車に乗ると、通勤ラッシュほどではないにしろかなりの人でごった返していた。

「……なんで年始からみんなして電車に乗ってんだ……帰りたい……」

「まだ乗って１０秒だけど」

返す刀（最近覚えた）で斬り捨てると、お兄ちゃんは「ぐ……っ」と

唸った。やだ、ホントに死んじゃうの？　お兄ちゃんが文句を言うのをやめて吊り革につかまったので、コートの袖をちょんとつまんで支えにする。お兄ちゃんは小町をちらりと見ると、「ん」とだけ答えて、あとは窓の外の景色を眺め始めた。なんだか熟年夫婦みたい。「ん」

「はいはい、お茶ですね」みたいな。

――今日はお兄ちゃんと優美子さん、小町で初詣に行く予定になっていた。ふたりで行こうとしていたので小町は別行動にしようと思っていたけど、お兄ちゃんと優美子さん、それぞれから誘われた。ふたりして小町のことが好きすぎるまである。まあ悪い気はしない……というか嬉しすぎるので、喜んで承諾した次第です。お兄ちゃんとは毎日顔を合わせてるからなんでもいいんだけど(ひどい)、優美子さんにはとっても会いたいのです。

最寄駅から数駅移動したところで電車を降りる。電車の中はちょっと不快な暑さだったので、外の寒さがちょっとだけありがたい。あ、やっぱり今のはウソ。３０秒で寒くなった。寒い！　寒いよ！

「思うんだが、みんな家の中に神社とかの写真を貼ってそこにお参りすればいいんじゃなかろうか。移動時間も省けるし、ごった返す人波に揉まれる必要もないし」

「あー、わかるわかるー」

「いっそ『は？』って言ってくれたほうが傷は浅くて済んだ……」

自分でもびっくりするくらい棒読みで答えると、お兄ちゃんが遠い目をした。視線の先にはちっちゃくて白い雲しかないんだけどねー。お兄ちゃんはあまりに戯言（たわごと）が過ぎるので、お兄ちゃんのせいで戯言という言葉を調べて覚えたまである。……たぶんだけど。

「……」

「ん、どうした。俺の顔に何かついてるか」

隣を歩くお兄ちゃんをじっと見ていると、信じられないくらいベタなことを聞いてきた。普段はあれほど王道を嫌うくせに。

「ん、べつに何も憑いてないよ」

「今なんか、違う漢字になってたような気がするんだが」

「んなこたあないよ」
適当にごまかすと、「はいはい、可愛い可愛い」と頭をくしくしと撫でられた。高校1年生にもなって兄に頭を撫でられるのってまあまあ恥ずかしいけど、いかんせんキライでもないのが困ったところ。
お兄ちゃんの顔をじーっと見つめて思ったこと。
優美子さんとお付き合いするようになってから、あるいはそれよりももうちょっと前から、お兄ちゃんの顔つきが少しかっこよくなった気がする。いや、かっこいいと言うと調子に乗っちゃうかな。少しはマシになった気がする。小町は何様なんだろう。
けれど、変わったのはたしか。やわらかくて、そして強くなったような、そんな感じ。
「あ、優美子がいるな」
誰かと寄り添うようになると、こんなに人って変わるんだな……と思っていると、お兄ちゃんのマフラーとよく似たチェックのマフラーを巻いた優美子さんが見えた。

× × ×

神社の前で合流した優美子さんは、相変わらず綺麗で、かっこよくて、そして可愛い。真冬の澄んだ空気に白い息を吐き出す優美子さんは、どこかの個展で飾られている一枚絵のように見えた。
「あけましておめでとう、優美子」
「優美子さーん！　あけましておめでとうございまーす！」
お兄ちゃんがすんなりと（でもちょっと照れつつ）挨拶したことに驚きながら、小町も続く。
「ん、……あけまして、おめでとう」
優美子さんは挨拶を返すなり、ちょっと恥ずかしくなったのかマフラーに顔をうめた。もふって。可愛すぎて卒倒しそう。
「ヒキオ。顔真っ赤だし。寒かった？」
「現在進行形で寒いぞ」
「ふーん？」
優美子さんが可愛らしく微笑み、手袋を着けた手でお兄ちゃんの頬をそっと撫でる。お兄ちゃんが気持ち良さそうに目を細めた。今ま

で見たことのないお兄ちゃんと優美子さん。あまりに自然な動作に、小町の反応が遅れた。「ほえ？」って顔をしてしまう。そして小町が事態を呑みこんだと同時に、お兄ちゃんと優美子さんもハッとした。
「バ、バカップルだー！」
「やめろ、大声はやめろ……！」
お兄ちゃんの声が珍しく荒くなる。もがもがと口を塞がれてしまった。優美子さんは不自然なくらい首を逸らしてる。耳が真っ赤なのはたぶん、寒いからではないんだろうなー。
「……結婚すれば？」
ふたりの呼吸が整いかけたところでぽつりとつぶやくと、ものの見事に揃ってむせた。ジャンプして着地しようとした足をぱしーんと払った感じ。すってんころりん。
なんだかこのふたり、ちょっと前よりもずっと可愛くなってるなーと思いました。

× × ×

神社の境内は人でごった返していた。背がそんなにおっきくない小町がお兄ちゃんと優美子さんからはぐれまいと頑張っていると、優美子さんも人波に押されてはぐれそうになっていた。
まずいなー……と思っていると、とつぜん手を掴まれた。大きくてけっこう逞しい手。手袋をしていても、お兄ちゃんだとすぐに分かった。顔を上げると、優美子さんも目をぱちくりとさせていた。
「……状況が状況なんでな」
優美子さんと小町、ふたりと手を繋いだお兄ちゃんがぽそぽそとつぶやく。優美子さんと目を合わせてくすりと笑うと、
「ヒキオ、今何ていったの？」
「ザワザワしてるからよく聞こえなかったよーお兄ちゃん」
「……ぜったい聞こえてただろ……」
お兄ちゃんの顔が赤くなった。可愛い。優美子さんとアイコンタクトして、くすくすと笑い合う。
ふと、本当になんとなくだけれど。
こんなやりとりを、この先１０年も２０年も続けていけるような、

そんな気がした。

×　×　×

混み合っているところを抜けると、お兄ちゃんはさすがに小町から手を離した。優美子さんからも手を離そうとしたけど、そこは小町が「は？　いや、そこは空気読めよ」顔をして（ひどい）、繋いだままにしてもらった。優美子さんもちょっと寂しそうにしていたので、繋いでいたほうが良いと思う。優美子さんって意外と甘えたがりなんだな……何それ可愛すぎて死んじゃう……。

朝から出店がたくさん出ていて、３人で好きなように食べた。優美子さんと小町があんこもちをモニョモニョと食べていると、お兄ちゃんが３人分の甘酒を買ってきてくれた。温かな液体が喉から五臓六腑に染み渡る感じ。

お兄ちゃんとふたり揃って「ほふぅ……」と息をつくと、優美子さんが思いきりむせて、それからしばらく笑いっぱなしだった。縁側でくつろぐおばあちゃんみたいな兄妹で笑ってもらえて何よりです……。

いざお参りだーと御手洗で手を洗うと、びっくりするくらい冷たかった。「うひゃー！　冷たい！」とはしゃぐと、お兄ちゃんと優美子さんが微笑ましく見守っていた。なんだかふたりの子供みたいな気分。

もう一回「やっぱり結婚しなよ」というと、ふたり揃って顔が赤くなり、冷まそうとしたのか慌てて手を洗い、水の冷たさにふたり揃ってビクーン！　と飛び跳ねた。なんだこの可愛い生き物たちは……。

大きな鈴をガランガランと鳴らし、３人で二礼、二拍手、一礼。３人とも、手を合わせている時間が長かった。

「お兄ちゃんと優美子さんは何て願ったの？」

「……そういうお前は？」

「小町はねー、『お兄ちゃんと優美子さんが幸せになれますように』って願っといたよ。これならふたりが志望大学に合格して、好きなだけイチャイチャできるでしょ？」

にひっと笑うと、ふたりは目をぱちくりとさせ、ほんのりと顔を赤

くして、ちらちらと互いを見やった。
「……あー、その、なんだ。ありがとな」
「おー、素直にお礼を言えるようになったんだねー」
「お前は俺を何だと思ってんだ……」
お兄ちゃんに頭をわしわし撫でられて「ぎにゃー！」と悲鳴を上げていると、優美子さんが照れながら微笑んだ。
「その……ありがとね、小町」
お兄ちゃんとふたり揃ってひざから崩れ落ちた。
ちなみにお兄ちゃんは「優美子が大学に合格しますように」、優美子さんは「ヒキオが大学に合格しますように」とお願いしていたらしい。ほんと結婚すればいいのに。

× × ×

お参りが終わると、3人でカフェに入った。暖かな空気にホッとしつつ、カフェオレを飲んでのんびりのんびり。
――やっぱり、本当に変わったなぁ。
今度はお兄ちゃんではなく、優美子さんをじっと見つめてそう思った。
優美子さんと初めて会ったのは、たしか去年、いや、もう一昨年の夏休みだった。あのときは「わー、パリピってこんな感じなのかなー」なんてことを考えたりしていた。金髪だし、クルクル巻いてるし。小町の根っこはお兄ちゃんと（不本意ながら）似ているところがあるので、きっとお兄ちゃんも似たような印象を抱いていたと思う。イジめられていた子――留美ちゃんだったかな？――のことをどうするかという話し合いをしていたときも、優美子さんはピリピリ刺々していて、どこか余裕のない印象だった。
けれど今は、そんな印象がウソみたいに和らいでる。人を跳ね除ける棘がすぽすぽと抜けたような、そんな感じ。綺麗なバラには棘があると言うけど、今の優美子さんは棘のなくなった、魅力剥き出しのバラだ。こうしている今もお兄ちゃんの口についたカフェラテの泡を拭いている。結婚すればいいのに。世話焼きなところとか、元々持っていたであろう魅力がよりいっそう強まった感じ。

要するに、優美子さんはすごく綺麗になった。ちょっと眩しいくらいに魅力的。
なんだか無性に幸せな気持ちになる。口元がむずむずする。
「？　小町、どうしたの？　あーしのことジッと見て」
「え？　あー、や、その……優美子さんって本当に綺麗だなって」
「な……っ」
「正確に言うと、『元々綺麗な人だったのに、さらに綺麗になった』なーって」
「……っ！」
優美子さんが目を見開き、顔を真っ赤にして慌てる。可愛い。ちょっと訳がわかんないくらい可愛い。
お兄ちゃんはどんな反応をしてるのかなーとチラ見すると、自分の恋人が褒められたのが嬉しいのか、あるいは照れてる優美子さんが可愛いと思ってるのか、はたまたその両方なのか分からないけど……なんだか色んな感情がいっぺんに顔に浮き出たような、奇妙なニヤケ顔になっていた。小町は引いた。優美子さんも引いた。お兄ちゃんはダメージを受けている！
ふたり同時に引かれて凹んでいるお兄ちゃんに、優美子さんがそっと席を寄せた。お兄ちゃんはまるでアメをもらって泣き止む子どものような表情をした。あー、これ今、テーブルの下でぜったい手を繋いでるよー。見つめ合っちゃってるよー。
「……比企谷優美子」
『!?』
「……あるいは、三浦八幡」
『!?』
ぼそっとつぶやき、ぷいとそっぽを向く。「はやく結婚しろし」という分かりやすいメッセージ。見えない角度でふたりが大いに慌てているのが、可愛くて仕方がなかった。
×　×　×
帰り道、お兄ちゃんと優美子さんを一歩後ろから眺めながら歩く。
本当にお似合いだなーと思っていると、

「小町、どうした」
「小町、どうしたの？」
ふたり同時に振り返った。似た者夫婦なんて言葉があるけど、ふたりはすでにその領域に達しているのかもしれない。
ふたりが同じ大学に合格して、好き放題イチャイチャして、早く結婚しますように……と祈りながら。
「なんでもないよ、お兄ちゃん、優美子さん」
にひっと笑い、ふたりの後ろをとてとてと付いていった。

続く。

（７６）

年明けは、センター試験に向けてたくさん勉強した。ヒキオが隣や向かいにいると、自然と頑張ることができた。不安で押しつぶされそうになっても、ちらりとヒキオを見れば気遣わしげに見つめてくれるのが嬉しくて。チラ見しては目を逸らすのを、何度も何度も繰り返してしまった。

今日の学校帰りは、『センター前はこれが最後』と決めてヒキオの家に来ていた。付き合ってから何年も経っていないのに、気付いたら週３回、あるいはもっと通っているかもしれないヒキオの家。他人の家というのは独特の雰囲気があって入りづらいものだけど、今はもう、その違和感もほとんど感じなくなっていた。

「今日は小町はいないの？」

「ん、遅くなるって言ってたな。色々と忙しいみたいだ」

「……そ」

我ながらそっけない返事をして、毛先をくりくりといじる。指先を見ると、小さく震えていた。

ヒキオのご両親は忙しいみたいで、まだ会ったことがない。なのであーしがヒキオの家に行くときは、小町がいるかどうかで雰囲気が大きく変わる。

「しばらくは、俺らしか家にいないってことだな」

「……わざわざ言わなくていいから」

ヒキオが手をつないでくる。握る力が外にいるときよりもほんの少し強くてどきどきしてしまう。

――小町がいないとき、ヒキオはいつもより少しだけ激しくしてくる。けっして乱暴ではない絶妙な加減で……あーしはいつも、すごいことになってしまう。

今日はセンター前最後と決めている。いつもよりねちっこそうだなぁ……と思うと、我ながら恥ずかしいくらいに身体の奥が熱くなった。

× × ×

ヒキオの部屋に入るなり、後ろでドアの鍵をカチャリと閉める音がした。あーしが逃げるわけないのに、逃げたいと思うわけがないのに。こうするとあーしが喜ぶとでも思ってるんだろうか。当たらずとも遠からずなのがちょっと腹が立つ。
「ん……っ」
まだコートも脱いでいないうちに、ヒキオが後ろから抱き付いてきた。ちらりと顔を見てみると、ずいぶんと余裕のない顔をしてる。普段はぼへっとしたり、小難しいことを考えたりしている顔。今はまるで、追い詰められたような、それでいて子どものようなわかりやすい表情を浮かべてる。外では遠慮がちなのに、ふたりきりになると途端に積極的になるというクセはだんだん強まっている。べつに外でも、もう少しくらいしたいようにしていいのに。
「早すぎだし。……もうちょっとこのままがいい？」
「……ん」
首筋に温かい息がかかる。子どもみたいな声だな、と思った。お腹に回された手をぽんぽんと撫で、首を傾けてヒキオの頬に自分の頬をくっつける。付き合ってから時間が経つにつれて、こういう時間がどんどん幸せに思えてくるようになってきた。
「うぁ……んっ、ちょっ、と、こら……っ」
しばらくのんびりしていると、お腹を抱きしめていた手がもぞもぞと動きはじめた。遠慮がちな動きがだんだんと大胆になって、下から胸を触ってくる。お尻に硬いものが当たってる。ヒキオが男であることをどうしようもないくらいに知らしめる感触。
「優美子……」
「んん……っ？　ちゅっ、れるっ、んふぅぅ……っ」
振り向くと、ヒキオと唇が重なった。あーしの口の中に舌がぬるりと入り込む。コートを脱ぐ時間くらい我慢しろし……と思うが、ついさっきまでのヒキオはまるで、待てをされた大型犬みたいだった。この正直さがなんだか微笑ましくて、そしてそれ以上にドキドキする。
「ちゅっ、ちゅぴっ、んっ、んぁっ、はぷっ、んっ、んふぅぅ……っ」
キスをしながら正面に向き直り、それぞれがコートを脱ぐ。ヒキオ

の唇を咥え、ヒキオに唇を咥えられる。コートはベッドにでも置こうかと思っていたら、ヒキオがいったん唇を離してハンガーにかけてくれた。こういうところは冷静なんだなーと微笑ましくなる。
「んふぅぅ……っ」
お互い制服姿になると、もういちど唇を重ねた。ブラウス越しに、あーしの胸を押しつぶそうとしているのかなって思うくらい力強く胸板を押しつけてくる。ヒキオの手が背中を抱きしめ、さする。厚手のコートでは伝わってこない感触がずっと鮮明に伝わる。あーしを大事にしながら、それでいて確実に追い詰めてくる手付き。安心するのに、気が付いたらもう戻れないところまで堕とされてしまうような、そんな感覚。
「んっ、んふぅぅ……っ？　ふぁっ、あっ、んっ、んっ、んくぅぅ……っ」
尾てい骨を両手できゅっ、きゅっと引き上げられると、腰が勝手にかくかくと前後に揺れてしまう。死ぬほど恥ずかしい。けど、気持ち良いからどうしようもない。ヒキオはあーしのことをじっと見てる。いつものことだ。少しでも気持ちの良いところを探ろうと、こういうことをするたびにまるで何かの研究者のように見つめてきて、あれこれ考えてる。それが嬉しくて、あーしはこれからいったいどうなるんだろうとちょっとだけ怖くて、そして何よりも――幸せ。
「んぁっ……あっ、やっ、そこはっ、はぁぁ……っ」
ヒキオの手がスカートの中に入ってくる。いつも短くしてるけど、ヒキオの家に入る前にもう少しだけ短くしておいた。ヒキオがスカートを見つめてごくりと息を呑む。気付いてくれたのかな。
「……優美子、これは反則だろ」
切実な声でヒキオがつぶやく。どうやら作戦成功みたい。
「んっ、あっ、はぁっ、あっ、あんっ、んっ、んん……っ」
ごつごつした指がお尻をくにくに、ぐにぐにと揉みしだく。ショーツがくいくいと食いこんで、くちゅ、くち……っと卑猥な音が聞こえてくる。死ぬほど恥ずかしい。けど、死ぬほどドキドキする。
「う……っ？」
ヒキオの膨らんだ部分をそっと撫でると、油断してたのか間抜けな

声が漏れた。
「ヒキオ、おっきくしすぎだし。……んんっ……」
お返しとばかりに尻をぐにぐにと揉まれて、腰がかくんと落ちそうになった。慌てて人差指の背を咥えて声を抑える。ヒキオの膨らみから手を離す気にはなれなかった。
「お……ぁ……っ」
チャックを開けて、がっちがちになっているものの裏側を爪でかりかりとこすると、ヒキオの腰ががくがくと揺れた。嬉しくて目を細めた瞬間、ヒキオの指がお尻の谷間に滑り込んで、あーしの中にずぶりと入ってきた。
「あっ、はっ、はぁぁぁ……っ。ヒキ、オ、やめろし……そこ、いま、だめ、だからぁ……っ」
「ぐ、ぁ……っ、それを、言うなら、優美子こそ、やめろっての……っ」
鼻がくっつくくらい近くで見つめ合いながら互いを触り合う。頭がおかしくなるくらい興奮して、今日学校で誰とどんな話をしたとか、いつ笑ったかとか、色んな記憶が溶け消えていく。目の前のヒキオのことしか考えられなくなる。指を咥える代わりにヒキオの乳首をワイシャツの上からくりくりと触ると、ヒキオがぎゅっと眉をひそめた。すごく色っぽい表情に、こくりと息を呑んでしまう。
腰を引くと、ヒキオの指が抜け落ちた。ごつごつした感触がずるりと抜け落ちて、がくんと倒れそうになる。
「ヒキオ、舐めたげる……」
ヒキオの前にひざまずいてそっと告げると、ヒキオが目を見開いた。自分でもこんな言葉が自然と出てくるのに驚いてる。ほんとにどうしちゃったんだろう、あーしは。
「……頼むわ」
ヒキオがぽつりとつぶやき、頭をくしくしと撫でてくる。思わず目を細め、大きな手の優しい感触に浸った。
× × ×
ヒキオは立ったままで、チャックの中に手を滑り込ませ、パンツを下ろす。

「おっきぃ……っ」
ぶるんと目の前に飛び出たものに、思わず声が出た。先っぽからはまるでよだれみたいに透明な汁がたっぷりと溢れてる。
「んっ、んんっ……」
吸い寄せられるように顔を寄せると、むせかえるような男の人の匂いがした。呼吸するたびに濃い匂いが鼻から染み込んできて、ぼうっとしてしまう。
「優美子……匂い嗅ぐの、ほんと好きだな」
「……っ」
ぽそりとささやかれた言葉に、かぁっと身体中が熱くなる。無意識に顔を寄せて匂いを嗅いでいた。恥ずかしくてしょうがない。
「……うっさいし」
言いながらも、匂いを嗅ぐのをやめられない。
「……ちゅむっ」
「うぉ……っ」
恥ずかしい思いをさせた仕返しに先っぽにキスをすると、ヒキオの腰がぴくんと跳ねた。口の中に広がる、しょっぱくて変な味。眉をひそめて口をむにゅむにゅとして、呑みこむ。クセが強いけど、きらいじゃない。それに……もっと濃くて変な味のものを知ってる。
ヒキオの腰に手を添えると、切なそうな顔で見つめてきた。身体の奥にキュンとくる切実な顔。上目遣いで見つめながら、亀頭をぱくりと口の中に入れる。
「お……あぁ……っ」
ヒキオが嬉しそうな声を漏らす。ただでさえ大きな亀頭がむくっと膨らみ、あーしの口の中をめいっぱい圧迫する。
ヒキオ、気持ち良くなってくれてるかな。
上目遣いで見つめながら、口の中で亀頭をねろねろと舐めまわす。パッと見はごつごつしてめちゃくちゃ凶悪に見えるけど、いざ舐めてみるとピクピクと反応して案外可愛い。ヒキオの表情がちょっと幼くなるのがまた好きだったりする。
「んっ、んっ……」

唇をぬるぬるとすべらせて、亀頭を呑みこんでは吐き出すのを繰り返す。カリ首に唇が当たるとヒキオの腰ががくんと揺れる。その反応が嬉しくて、唇でぎゅうっとカリ首を締めつけてみる。ヒキオのあごがぐっと上がって、ごつごつした喉仏が見えた。綺麗だな、と思いながら、カリ首を咥えて竿の根元をしごく。

「うっ、ぐっ、ぅあ……優美子、それ、やば……い……っ」

ヒキオの声が途切れ途切れになっていく。口の中で、指の間で、ヒキオのものが強烈に大きくなってくる。こんなに太くて長いものがあーしの中に入ってるなんて驚きだ。夢中になってしまうのもしょうがないよね、と自分に言い訳しながら口と手を動かす。

「んっ、ちゅるっ、れるっ……」

唾液といっしょにヒキオの汁を呑みこみながら、ブラウスのボタンを開ける。ブラを見せると、ヒキオが目を見開いた。口の中のものがびくんと震える。初めてしたときと反応が変わらないのがなんだか可愛らしい。

「んちゅっ、れるっ、はぷっ……いいよ、ヒキオ……んっ、んっ、んっ……いっぱい、出して……っ」

ほんとはもっと楽しみたかったんだけど……と思いつつも、あーしの声は自分でもびっくりするくらいとろとろになっていた。

「優美子……っ」

ヒキオの手があーしの頭をがしりとつかむ。あ、これ、逃げらんないやつだ……と思った瞬間、ショーツの中にどぷっと熱い液体が溢れた。恥ずかしいけど、きっと後でヒキオが喜んでくれる気がする。だってヒキオはドスケベのドヘンタイだから。

「んぐっ……んっ、んっく、んっ、んっ、んっ……」

あーしの頭を前後に動かしながら、ヒキオ自身も腰を振る。つながってるときよりも腰の振りはずっと遅いけど、それでも一回一回、あーしの喉奥をぐりぐりとこすってくる。あーしがえずかないギリギリのところを突いてくる。

「優美子、優美子……っ」

苦しさで意識が朦朧とするけど、ヒキオが切なそうに、気持ち良さ

そうに呼びかけてくれるのが嬉しくて。ヒキオの腰に手を添えて、眉をくにゃりと曲げながら、必死で顔を振る。
ヒキオの腰ががくがくと揺れ、あーしの頭をつかむ手に力がこもる。口の中でヒキオのものがむくむくと膨らんできた。
「優美子、出る、出る、出る、出る……っ！」
「んふぅぅ……っ」
ヒキオがぎゅっと目を瞑り、あーしの喉奥に亀頭をこすりつけた。どぶっ、と精子が溢れ出てくる。口と鼻の中いっぱいに変な味と栗の花の匂いが広がり、脳が甘くとろけた。
「んっく、んぐっ、んんんっ……んっ、んっ、んっ、んんん……っ」
奥に入れ過ぎだし、出し過ぎだし、濃すぎだし。このバカ。
ちょっとした不満は、精液といっしょに喉奥に消えていく。ヒキオが気持ち良さそうに、それでいてちょっとだけ申し訳なさそうにしているから許してやるとしよう。片手でヒキオの腰をぽんぽんとなでて、もう片方の手でヒキオのものの根元を優しくしごく。ヒキオは途中からあーしの頭を撫ではじめた。なんだか褒められているようで、すごく嬉しくなってしまう。
何度も何度も精子を噴き出して、ようやく止まる。カリ首を唇でキュッと締めながら根元をしごき、ちゅるちゅると残った汁を吸い取る。たっぷり時間をかけて掃除をして唇を離すと、ヒキオのものはあーしの唾液で濡れ光っていた。
「優美子……すげぇ気持ち良かった。ありがとな」
「……ん」
頭をくしくしと撫で、言葉でも褒めてくれる。ヒキオに褒められるのが嬉しくなったのっていつからだっけな……と思いながらヒキオのものをぺちぺちと指で弾いていると、「こらこら」と止められた。もうちょっと遊んでたいんだけど。
「次は俺にさせてくれ」
「……っ、……うん」
ヒキオの言葉に心臓がどくんと脈打つ。声音は優しいのに、拒否させるつもりのない声。ドキドキしすぎて頭がおかしくなりそうだ。

ちらりとブラの内側を見てみると、我ながら恥ずかしいくらいに立ってしまっていた。

続く。

（７７）

服を脱ごうとすると、ヒキオがびっくりするくらいジッと見つめてきた。

「……見すぎだし」

「ああ、すまんすまん」

「……」

ぴくりとも動かないまま謝られた。

「……ドスケベ」

言いながらヒキオのほっぺをむにむにとつまむ。

「むおおお……」

変な声でうなりながらも、ヒキオは決して動こうとしない。強情なところも含めて好きになったつもりだけど、こういう強情さはどうなんだろ……。キライではないんだけど。

「……べつにいいけど」

ぽそりとつぶやき、ヒキオに見つめられたままそっと服を脱ぐ。制服を脱いで下着姿になると、ヒキオがごくりと息を呑んだ。何回も見てるはずなのになぁ……と、ちょっと微笑ましくなってしまう。

下着を脱ぐと、一気に顔が熱くなった。乳首がぷっくり膨らんで、アソコは身じろぎしたらエッチな音が鳴っちゃいそうなくらい濡れてる。

「……ヒキオも、早く脱いで」

べつにまだ脱がなくてもいいんだけど、何か言わないと気がどうにかなりそうだった。ヒキオは「ん」と答えてためらいなく服を脱いでいく。男の人は裸になるのは恥ずかしくないんだろうか。ヒキオだけ？

立ったまま向かい合うと、ヒキオのほうが背が高くて、がっしりしてることがよくわかる。

「うあ……っ」

ヒキオが一歩近付くと、出したばっかりのはずのものがガチガチになっていた。お腹にぐいぐいと刺さってきて、腰が勝手にひくひくと

揺れてしまう。
「優美子、ベッドに寝てくれるか」
あーしがどうしようもないくらいに興奮していることについては触れず、静かに囁いてくる。耳に当たる吐息が熱くて、それだけで腰が抜けそうになる。
「……うん」
答えた声は、自分でもびっくりするくらいしおらしくなってしまった。あ、ヒキオのがピクンッて動いた。ほんとわかりやすい。
何回寝たかわからないベッドに仰向けになる。胸の上に手を重ね、脚はぴったりと閉じた。ヒキオがあーしの足をそっと掴む。指先が触れただけで、下半身がじんと甘く痺れた。
「優美子」
名前を呼ばれただけで、口の中につばが溢れた。こくりと呑み込み、そっと脚を開く。
「……ぐしょぐしょだな」
「い、言わなくていいからぁ……っ」
アソコに顔を寄せたヒキオがぽつりと呟く。恥ずかしさで頭がどうにかなってしまいそう。ヒキオの言うとおり、あーしのアソコはどうしようもないくらいぐっしょりと濡れていた。エッチな匂いがしているのもわかってる。わかっていても、恥ずかしいものは恥ずかしい。
「はっ、ふぁっ、あっ、はぁぁ……っ」
ヒキオの手が内ももをさわさわとまさぐる。優しくて、すごくエッチな触り方。こうすればあーしがリラックスして気持ち良くなるってわかってる。それが嬉しくて、ちょっと腹立たしくて、幸せ。
「うっ、くぅっ、はぅっ、んっ、んはぁぁ……っ」
ヒキオがあーしをじっと見つめながら、ひたすら内ももを撫てる。アソコに触れそうで触れないのがやらしい。ヒキオはほんとにやらしい。
「ね、ねえ、ヒキオ……っ」
掠れた声で囁くと、ヒキオが悪い笑みを浮かべた。

「どうした」
「わ、わかってんでしょ……は、はやく……っ」
　自分の声がこんなにとろとろになるなんて、少し前まではまったく知らなかった。
「早く……なんだ？」
「ば、ばかぁ……っ。早く、あーしの」
　言葉が途切れ、頭の中がバチバチと白んだ。
「あっ、かはっ……!?」
　ヒキオが不意打ちでアソコにキスをして、舌を這わせてた。ずっと期待して、焦らされてたところで急に舐められて、頭の中がぐちゃぐちゃになってしまう。
「ヒ、ヒキオ、だめ、だめ、そんなに、べろべろってすんなし、おっ、お願い、それ以上はだめ、やだ、やだ、やだぁ……っ」
　ヒキオの髪を両手でぐしゃぐしゃにしながらお願いしても、ヒキオは止めてくれない。びらびらの部分を舌で丁寧に舐めてたかと思うと、固めた舌先で穴をぐりぐりとほじくってくる。
「んくっ、ふっ、んぅぅぅ……っ!!」
　ヒキオの頭を太ももで挟み込み、全身をギュッと縮こまらせてブルブルと震える。たいした時間も経ってないのにもうイカされた。けど、イクまでの時間が数十秒だったのか、数分だったのか、時間感覚がもうあやふやになってる。
「イったのか？」
「う、うんっ、イった、イったからぁ……あっ、あんっ、んくぅぅ……っ！」
　ヒキオが顔を上げたからいったんやめるのかと思った。けれど、ヒキオはまたすぐに口をアソコにくっつけて、恥ずかしいくらいに溢れた液体を啜る。
「やぁっ、やだ、今、感じすぎて、だめ、だめだからぁ……っ」
　自分でも何を言っているのか分からないままに必死で身をよじると、ヒキオがあーしの太ももを両手でがしりと掴んだ。逃がしてくれないんだと思った瞬間、背筋がぞくりとした。

「んぅぅぅ……っ！　だめ、だめだめだめ、イク、イク、イク……っ！」
顔をぶんぶんと振って人差指を咥えると、ヒキオがじっと見つめてきた。獲物の状態を確かめるようなギラついた目。あーしに対して、優しくもぜったい容赦しないときの目。ぞくぞくした瞬間、あーしの身体が重力を忘れたみたいに波打った。
「うあぅぅぅ……っ!!」
頭が真っ白になって、身体が怖いくらいに痙攣する。ヒキオが押さえてくれてなかったら、ベッドから転げ落ちちゃうんじゃないかってくらい。アソコから溢れた液体をヒキオがためらいなく呑んでいく。
「うぁっ、やぁん、だめ、呑む、なぁ……っ」
恥ずかしくてしょうがないけど、それ以上にちょっと嬉しくなってしまう。あーしがヒキオのものを呑んでいるときも、同じように感じてくれているのかもしれない。
「優美子……っ」
ヒキオが濡れた口をぐいと拭って起き上がる。さっきよりもずっと硬く、長くなったものをアソコに押し当てた。
「あっ、はぁぁ……ヒキオぉ……っ」
ほんとにあーしの声なの？　ってびっくりするくらい、さっき以上にとろとろに蕩けていた。ヒキオが腰を突き出すよりも先に、両脚をヒキオの腰に巻き付けてグッと引き寄せる。
「うお……っ？」
間抜けで可愛らしい声が聞こえるのと同時に、硬くて太いものがにゆるりと入り込んできた。
「はぁぁぁぁ……っ」
背中が反り返ったまま、上を向いて深く息をつく。太すぎだし、硬すぎだし、長すぎ。なのに、これでちょうど良い、これがちょうど良いと思ってしまう。
「んんっ……ふぅぅ……っ」
足りない場所を埋められる感覚に、思わず温泉に浸かったときのような声が出てしまう。
「優美子……ちょっと、エロすぎ……っ」

ヒキオが切れ切れにつぶやいて、あーしの肩の横に手をつく。腕立てをするときのような体勢。声も表情も余裕がなくて、なんだか可愛い。
「べつに？　そんなことないと思うけど」
「うっ、くぁ……っ？」
からかうように笑いながら、ヒキオの乳首を指でくりくりといじる。ヒキオがしかめっつらになった。ちょっと色っぽくて、すごく好きな表情。ヒキオのものがあーしの中でむくむくと膨らみ、声が出そうになる。
「こ……の……っ！」
ヒキオが目をギラつかせて獰猛に笑う。あ、やば。スイッチ入っちゃったかも。
そう思った瞬間、ヒキオの腰が小刻みに動き始めた。
「あふぁぁ……っ!?　あっ、んぐっ、はぅっ、んくぅぅ……っ！」
腕立ての体勢であーしを見下ろしたまま、がちがちのもので中をぐりぐりとこすってくる。一番奥をドスドスと突かれるたびに視界が白む。イキそうなのか、イったのか、ずっとイキっぱなしなのかももうわからない。
「ヒキオぉ……中、にゅるにゅるしてるぅ……っ」
あとで思い出したら死ぬほど恥ずかしいだろうなって言葉が勝手に出てくる。ヒキオのガマン汁があーしの中をぬるぬるにしてるのが、ヒキオが感じてくれてるのが嬉しくてしょうがない。
「……っ、優美子、今日はほんとにどうしたんだ……っ」
「んぁっ、はっ、わっ、わかん、ないぃ……あっ、ふぁっ、あっ、はぁぁぁ……っ」
ヒキオの突きが激しくなって、あーしの声も途切れ途切れになる。本当になんでかは分からない。でも、どうしようもないほどに気持ち良くて、どうしようもないほどに幸せ。
「遠慮なく声を出していいからな」
「え……ぅあぁぁっ!?」
ヒキオが起き上がり、あーしの腰をつかんでがつんがつんと突き上

げてきた。腰を振る速度も上がってるのに、一回一回の突きがさらに強烈になる。
「あっ、かはっ……ぅあっ、はぁぁぁ……っ！」
弾けるように息を吐く。顔の横のシーツをつかんで、顔をくしゃりと歪める。ヒキオがあーしの顔を見て、中のものを大きくした。あーしの顔とか声とかにいちいち反応しちゃうのがやらしいけど、それが可愛い。
「優美子、もっと声っ、出して、いいぞ……っ」
「んっく、はっ、ぅはぁうぅっ！　はっ、はぁぁっ！」
ヒキオが途切れ途切れに囁くあいだも腰の動きは止まらない。ふたりが繋がってる部分ははしたないくらいに濡れて、白く泡立っていた。
「ひっ、ひぐっ、ヒキオっ、だめっ、これ以上はぁ……っ」
「んなこと言いながら脚を巻き付けてくるのはどこの誰なんでしょうねぇ……っ」
ヒキオの余裕のないツッコミで、あーしがヒキオの腰をぐいぐいと引き寄せていたことにようやく気付く。
「ひぁっ、そっ、んなのぉ……からだっ、かってにっ、動いちゃうんだからぁ……わかんないぃ……っ」
言い訳にもなってない言い訳を言いながら、腰を上下に振る。恥骨がこすれ合って、気持ち良さがさらに増す。ヒキオも気持ち良いらしく、眉がぎゅっとひそめられた。
「優美子……そろそろ、出そうだ……っ」
「んっ、あっ、はぁぁ……うん、出して、出しっ、てぇ……あっ、ぅあっ、はぁうぅぅぅ!!」
ぱんぱんぱん、と激しい音が鳴る。ヒキオのものがむくむくと膨らむ。ちょっと痛いくらい大きくなるけど、それがかえって気持ち良い。
「優美子、優美子……っ」
ヒキオが今にも泣きそうな顔をして腰を振る。
「ヒキオ……ヒキオぉ……っ」

あーしの顔も泣きそうになってるかもしれない。
「あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっあっあっあっあっあっあっあっ……」
絶頂に絶頂を重ねて、すごく大きな波が来そうになった瞬間――ヒキオが一番奥まで入れてぴたりと腰を止めた。
「あっ――んくぅぅぅ……んはぁぁっ!! はっ、はぁぅぅぅ!!」
精液がどぶどぶどぶ……っと溢れ出した瞬間、喉の奥から獣みたいな声が出た。
「ぐ……ぅぅ……っ!!」
ヒキオは苦しそうにしながら腰を振ってくる。お互い敏感になってるのに、ぐりぐりとこすりつけてくる。
「やっ、やだっ、やだやだ、ヒキオ、それ以上だめ、イってる、イって……あっ、はぁぁぁぁ……っ!!」
怖いくらいの快感に身体中がびりびりと痺れる。顔をぶんぶんと振ってもヒキオは止まらない。精液が一滴も出なくなるまで、ずっと動き続けた。
「ヒキオの、ばかぁ……っ、おかしくなっちゃうってぇ……っ」
「いや、俺をがっつり引き寄せたままで言われても説得力が……」
言われてハッとする。あーしの脚はヒキオの腰に巻き付いたままだった。
「……何のことか、ぜんぜんわかんないんだけど」
「うおぉ……っ!?」
言いながらくいくいと引き寄せると、ちょっと元気がなくなっていたヒキオのものがむくむくと大きくなった。
「……いいのか？」
「……うん」
顔を逸らし、短い言葉を交わし、チラチラと目を合わせる。
「あっ……はぁぁぁ……っ」
ヒキオがゆっくりと腰を振り始めると、簡単に頭の中が蕩けた。
× × ×
たっぷりとしてから一緒にシャワーを浴びて、ベッドで添い寝をしていた。初めの頃はかなり恥ずかしかったけど、最近はすっかり慣れ

てしまった。
ヒキオに腕枕をしてもらった状態でジッと見つめる。「ん？」とつぶやくヒキオは半目でうとうとしてる。
「……がんばろうね」
「んぉ？」
受験への決意を新たに……という意味で言ってみたら、ヒキオは意外そうに目をぱちくりとさせた。あーしはこういうことを言う柄じゃないとでもいうんだろうか。
「オウ、オウ？」
失礼なやつめーと頬をむにむにしてやると、オットセイみたいな声が出た。ちょっと気持ち悪いけど、可愛い。
「……ん、がんばろうな」
「え……んふぅぅ……っ？」
ヒキオが不意打ちで返事をしたかと思うと、あーしの頭を抱き寄せてキスをしてきた。
「んっ、んちゅっ、れる……あんっ、ふぁ……っ？」
気だるげに舌を絡めていたら、ヒキオの手が胸を触ってきた。軽く触れられただけなのに、身体の奥がきゅんと疼いてしまう。
「あっ、やんっ、んん……っ。……ヒキオ、まだ、したいの……？」
切れ切れに尋ねると、ヒキオがこくんとうなずいた。なんだか子どもみたいで可愛い。
「……ヒキオ、スケベすぎだし」
「……優美子もたいがいだろ」
言って、ヒキオの手が下半身にも伸びてくる。
「あっ、ぅあっ、はぁぁぁ……っ」
あとでもう一回シャワーを浴びなきゃ……と思いつつ、細めた目でヒキオをじっと見つめた。
ヒキオの言うとおり、あーしもだいぶエッチなのかもしれない。
続く。

（７８）

張り詰めた空気の中で迎えたセンター試験は、途中途中で手こずりながら、文系科目と理数科目の出来の差に愕然としながらもなんとか乗り越えた。試験後に優美子と合流すると、優美子もまずまずといった手応えだったようだ。

自己採点の結果は手応えとほとんど一致していた。どうにも分からず当てずっぽうで選んだ選択肢が当たるなどの運も相まって、英語と現代文はかなり良い点数をとることができた。優美子も思いのほか良い点数を取れたようで、「信じらんない……」とつぶやくさまがなんだか無性に可愛らしかった。

三者面談を行ない、同じ大学を目指すことが決まった。センター試験中心だった勉強を一気に二次試験対策に切り替え、赤本を中心として日々勉強を積み重ねる。

寒い日が続くが、徐々に日が長くなり、陽射しが少しずつ柔らかくなっていく。

２月の下旬、俺と優美子は二次試験会場にやってきた。

×　×　×

訪れた大学は、冬のせいか妙に寒々として寂しく見えた。キャンパス内を行き来する人が受験生なのか大学生なのかは、顔つきを見ればなんとなくわかる。俺たちと同じ受験生は、志望大学を訪れているというわずかな浮かれと、それ以上の緊張を顔に貼り付かせていた。

「けっこう広いね」

「だな」

並んで歩く優美子とは、腕が触れ合いそうで触れ合わないくらいの近さ。優美子は葉のない木々を眺め、そっと優しく息をつく。ほんのりと朱い顔の前で、白い息がふわりと舞った。

「ヒキオ、自信ある？」

「わからん。やってみないと何とも言えん」

「ん」

素っ気ない会話。けれど、俺と優美子の会話はいつもこんな温度感

だ。これで良いというよりは、これが良い。優美子が柔らかい表情を浮かべ、俺の手の甲をてしてしと叩く。周りをちらりと見回すと、ちょうど人通りがなかった。
手袋を外し、そっと手を繋ぐ。優美子がほうっと目を細めた。温泉にでも入ったような表情。
「優美子の会場、この辺りだったか？」
「ん、そうかも」
俺と優美子は志望大学こそ同じだが、目指す学部は違った。優美子は俺と同じ大学に行きたいとは言ってくれたが、その中でもきちんと自分の学びたい場所を選んでいた。
優美子がスマホに表示された受験案内をじっと見つめる。
「あ、ここだ」
比較的新しい棟の前で立ち止まる。入口の前には学部名と試験会場である旨が書かれた看板がどんと置かれていた。
「ん、そうか」
つないでいた手を離そうとすると、細指がきゅっと絡みついてきた。「お？」と間抜けな声を漏らしてしまう。
「どうした」
優美子はうつむいていた。震えているのは、寒さによるものなのか、あるいは別の理由からか。どうしたものかと辺りを見回す。いつ誰が通ってもおかしくない場所だ。
「あーし……大丈夫かな」
かすかに上げた顔には、不安がありありと浮かんでいた。
「大丈夫だ、大丈夫」
空いた手で優美子の髪をくしくしと撫でると、気持ち良さそうに目を細めた。
「……ありがと」
「ん。頑張れ。俺も頑張る」
「ん。がんばろ」
優美子が両手で俺の手をにぎにぎとして、柔らかな笑みを浮かべる。パッと離したかと思うと、まるで何事もなかったかのように駆け

出し、入り口の前でくるりと振り返って元気に、けれど控えめに小さく手を振った。ちょっと照れながら手を振り返すと、試験会場に優美子の姿がするりと消えた。
「……行くか」
ここまで来たら、頑張るしかない。
ちいさくひとつ息をついて、歩いて数分もかからないであろう自分の試験会場へ向かった。
× × ×
俺が試験を受ける場所は、優美子が入った棟よりもかなり古びていた。向こうはここ数年以内に改修工事をしたといった風だが、こちらは15年くらいは経っているのではなかろうか。
教室に着くと、一番乗りのようだった。高校と同じような並びの席についてしばらくすると、次々と受験生がやってきて空席を埋めていく。
席がほとんど埋まり、参考書をめくる音、カリカリと何かを書く音が静かに響く。イヤホンを着けて音楽を聴いている人もいる。俺は何度も復習した参考書のページを軽く読み返して時間をつぶした。
教室の前方のドアががらりと開く。メガネをかけた、落ち着いた柔和な雰囲気のスーツ姿の男性が現われた。
「皆さん、お疲れ様です。それでは、試験の説明に移ります」
あいさつもそこそこに、早速説明が始まる。机の上の荷物を整理する音で、教室内が少しだけ騒がしくなる。筆記用具や受験票などの最低限のものを残した机に、問題用紙と解答用紙が配られていく。
「……説明は以上です。時間もちょうど良いようですね」
試験官が腕時計を見てにこりと微笑む。受験生の緊張を少しでも和らげてくれようとしているのだろう。その心遣いがありがたかった。
「それでは――はじめ」
試験官の合図と共に、一斉に問題用紙をめくる音が響く。俺はいちど大きく深呼吸をしてから、ゆっくりと紙をめくった。
× × ×

えっと、この単語の意味ってなんだっけ……？

英語の長文問題を解いていると、思い出せそうで思い出せない単語に出くわした。文脈から考えられるならそうしたいけど、問題の都合上この単語の意味を思い出せないと解くに解けない。髪をくしゃくしゃとすると、長い金髪がひらひらと頼りなげに揺れた。

ちらりと時計を見ると、制限時間の半分ほどが過ぎていた。完璧とは行かないまでも、ペースとしては悪くない。焦るな、落ちつけ。

顔をしかめ、うんうんと考えていると、ふと――ヒキオと勉強していた日々を思い出した。隣に座る気だるげな彼氏の顔を思い出すと、ふっと頬がゆるむ。

「……あ」

リラックスした途端、思い出せずに悩んでいた単語の意味を思い出した。ヒキオの家で英語を勉強してたときに覚えたんだっけ、そういえば。まるで朝の濃い霧が晴れるかのように、ぼんやりとしていた長文の意味が掴めていく。

よし、行ける。まだまだ行ける。

安心したけれど、まだまだ問題は残っている。張り詰めすぎるな、油断するな。何度も自分に言い聞かせる。

あーしと同じく頑張っているであろうヒキオのことを考えながら、次の問題にとりかかった。

続く。

（７９）

大学の合格発表当日の朝。

「お兄ちゃん、ちょっとは落ち着きなよ……」

朝ご飯を食べながらずっとそわそわとしている俺を見て、小町が困ったように笑った。

「何を言っている……俺はいたっていつも通りだ……」

「お兄ちゃんは知らないかもしれないけど、それって『不安』っていう感情なんだよ」

「コレガ、不安……コレガ感情……」

「なんで急に片言……」

いつかのやりとりを思い出した。

「しかしアレだな、よくあれだけ平静を装えてたな、小町は」

卵焼きをもきゅもきゅと食べていた妹に話を振ると、「む？」とぴたりと動きを止め、そして「むぅ……」とちょっとご機嫌斜めな声を漏らした。

「……べつに、装ってたとかじゃないから」

茶碗を持ったままぷいと顔を逸らす仕草に苦笑する。総武高受験の結果発表日の、朝から合格発表にかけてのこの子の表情の変遷を思い出しての言葉だったが……妹の心を読んじゃいました☆と言わんばかりの兄の言葉が気に食わないらしい。

「お兄ちゃんだってさ、ひとりだったら別にそこまでそわそわしないでしょー？　フィアンセのことも気になるからそうなるんであって」

「んぐっ」

みそ汁を飲み込んだ直後の喉の奥で、変な音が鳴った。

「げふっ、げほっ、けぷこーん……お前、どこでそんな言葉を……」

「ごめん、前半が気持ち悪すぎてお兄ちゃんの言葉がぜんぜん入ってこなかった。なんて？」

けっこうひどくないです？　材木座に謝って……ほしくはねえな、べつに。

「……どこで、そんな言葉を……」

「ほほう？　『そんな言葉』とは？　ちょーっと小町にはわかんないなー、どれだろうなー。具体的に言ってもらわないとわかんないなー」
　なんでこの子、実の兄を言葉責めしてるのん？
「どれだろうなー。婚約者？　フィアンセ？　小町にとっての義姉？」
「そろそろさすがに怒るぞ」
　そわそわが吹き飛ぶレベルで顔が熱くなる。小町は片目をバチコーンと閉じ、舌をちろりと出して、ピースの形をした手をおでこに当てた。めちゃくちゃ腹が立つがいかんせん可愛い。
　ん……？　待てよ……？
　戸塚が同じことをしてくれたら、可愛すぎて俺は死ぬ……？
「お兄ちゃん、そこは優美子さんで妄想するところだよ……ほんとそういうとこキモいよ……」
「うぐ」
　心を読まれた上に本気でダメ出しされた。
「ま、お兄ちゃんがキモくなるのは自然の摂理だからしょうがないとして、ちょっとは落ち着いたみたいで良かったよ」
　にひっと笑い、ご飯の残りをカカカッと平成初期のＣＭばりにかき込む。言われてみればたしかに、数分前までのそわそわが綺麗に消えていた。小町の言葉の衝撃は色濃く残ってるけど。俺のキモさはもはや自然の摂理なのん？
「小町すごい……妹すごい……」
　まあなんにせよ落ち着いたことには感謝せねば、とうわ言のように讃えてみると、食器を重ねた小町が分かりやすいくらいどん引いていた。
「お兄ちゃん、そこは素直に感謝してほしいとこだよ……」
「……すまん、助かった」
「ん、良しとしましょう」
　小町はにひっと笑うと、台所にとっとこと向かった。
「ナーゴ」

「ん」
聞き慣れた鳴き声に下を見ると、愛猫カマクラがのっしのっしと俺の足元に近付いてきて、背中をくっつけたまますとんと腰を下ろした。
やだ、かわいい……！　と思い撫でようとすると、「あ、そういうのはいらないんで」とできる風のＯＬのごとく俺の手をするりとかわし、今度は小町の下へいった。「よーしよしよし」と小町が愛猫のもっちゃりした身体をわしゃわしゃと撫でる。なぜ君はいちど俺のところへ来たんだい……？　わたしは遊びだったの……？
×　×　×
和やかな朝食を終えて自宅を出ると、真っ直ぐに駅に向かった。自販機でほっとカフェオレを買い、ポケットの中で弄びながら電車に乗る。温かな車内でカフェオレをくぴりと飲み、ぷひーと息をついた。
数駅進んだところで、優美子が電車に乗りこんできた。今日はいっしょに発表を見に行くことにしていた。
「おはよ」
「ん、おはよ」
隣の席をぽんぽんと撫でると、優美子がするりと座った。以前プレゼントしたマフラーを今日も巻いてくれている。俺も巻いているけど、まあ、ペアルックとか、そういうんじゃないし？　べつに意識したとかじゃないし？
「……」
「……なに？」
優美子の後頭部をじっと見つめていると、分かりやすく怪訝な声で言われた。
「ああ、すまん。こういうの良いなって」
俺がちょいちょいと指差したのは、マフラーで長い金髪がふわりと盛り上がっている部分だ。女性の可愛いところとしてよく挙げられるものだが、少し前までは「へっ」としか思わなかった。しかし優美子が同じことをしていると、ただただ可愛くてしかたがない。
「ふーん、そ」

そっけなく答え、マフラーにもぞもぞと鼻をうずめてしまう。付き合う前ならショックを受けていただろうが、今はこれが照れ隠しなんだと分かる。小鼻が赤いのは外が寒かったからなのか、それとも恥ずかしいからなのか。考えるだけでも楽しい。

「……ん」

ちょん、と。他の人に見えない位置で、優美子が小指と小指をそっと絡めてきた。

「……合格してますように」

「……だな」

マフラーでちょっとくぐもった声音で紡いだのは、切実な願い。俺も同じ気持ちだった。

電車は一定のリズムで揺れて、俺たちを目的地へと運んでいく。

× × ×

合格発表の１０分前に大学に辿り着いたが、受験のときとは比べ物にならない人で溢れ返っていた。初詣の人混みを思い出してげんなりする。

人混みの最後列で優美子と待機していると、スーツ姿のいかにも大学職員といった人が数人やってきた。

「これより、試験合格者の掲示をいたします！　危ないので、押し合ったりしないようにして順番にご確認ください！」

貫禄のある４０代男性が言うなり、残りの職員がすばやく動き、設置された木の板に紙を貼りつけていく。周囲の空気が一気に熱を帯び、結果を心待ちにしていた人々がぞろぞろと前に詰め寄っていく。

「優美子の学部は……あっちか」

「うん。ヒキオは？」

「俺はこっちだな」

俺と優美子の学部の掲示は数メートルほど離れていた。こくりと頷き合い、いったんわかれる。

徐々に近付いてきて、具体的な数字が見えるようになってくる。しかし俺は意図的に視界をぼやけさせ、不意打ちで結果を見てしまわないようにした。あちこちから聞こえる歓喜の声。しかしそのすぐ横

で呆然と佇む人、「ウソだ……」と消え入りそうな声で呟く人がいる。心臓が痛いほどに高鳴る。早く結果を見ろ、じゃないとおかしくなってしまうぞと主張するかのような鼓動。

人混みの最前列にやってきて、受験票と照らし合わせる。決して見間違うことがないよう、視界を絞ってひとつひとつ確認する。

俺の４つ手前の人……受かってる。

俺の３つ手前の人……落ちてる。

俺の２つ手前の人……受かってる。

視線をゆっくりと滑らせるごとに、周囲の喧騒が遠のいていく。視界が掲示板に集中していく。

俺の２つ手前の番号の下をスローモーション再生しているかのようにゆっくりと確認すると、俺の１つ手前の人の番号があり、そしてそのすぐ下に――俺の番号があった。

「あった……」

まるで部屋でなくしものを見つけたかのような、感動が混じりつつもあっさりとした呟き。周りからすれば、俺が受かったのか落ちたのかも分からないだろう。

丸一年の受験勉強の結果が出たのだ。嬉しくないわけがない。嬉しいに決まっているが……それ以上に、優美子のことが気がかりだった。

横を見ると、人混みが少し和らいでいた。悲喜こもごもの表情を浮かべる人たちのすき間に見慣れた金髪を見つける。優美子は受験票を持ったまま固まっていて、結果がどちらだったのかが分からない。

優美子がこちらを見た。互いの視線が噛み合う。

どうだった？

目線で尋ねる。

優美子が小さく震えながら、人差し指と親指で小さな丸を作り、こくりと頷いた。全身の血が沸騰するような感覚に襲われたが、まだ俺の結果を優美子に伝えていない。自分を指差し、二本指で丸を作り、こくこくと頷く。優美子の顔がくしゃりと歪んだ。

人混みから抜け出し、正面から向かい合う。

「……受かったんだな、俺たち」
「……うん、よかった」
ふたりとも、胸の内に湧きあがる感情を言葉にする術を忘れてしまったかのようだ。言葉にしたいことがたくさんありすぎて、いっぺんに喉をせり上がってきて、そのひとつひとつに固く大きな思いがこもっているから、みんな詰まってしまう。
「……よかった」
優美子の消え入りそうなつぶやきが、ラグビー部が合格者を胴上げする威勢の良い声のなかではっきりと聞こえた。
「うお……っ」
優美子との距離が不意に縮んだかと思うと、するりと抱きついてきた。思考が一瞬止まる。あれ、ここって俺の部屋だったっけ？　と本気で考えてしまったが、冷静に考えるとここは合格発表の場で、人がたくさん、本当にたくさんいる。
これはさすがにまずいだろう……！　と優美子の身体を離そうとすると。
「よかった……ほんとに、よかった……」
「……」
消え入りそうな掠れた声に胸が締め付けられ、手が止まる。この一年間、どれほど頑張ってきたか。溢れ出す不安と向き合い、闘い続けた思いが今、実を結んだ。そのことが嬉しくて仕方がない。優美子が「よかった」と囁くごとに、眼の奥がぐっと熱くなっていく。
「……ああ、よかった。ほんとに」
金の髪をくしくしと撫でると、優美子が俺を抱きしめる腕に力を強める。小さな嗚咽の声。きっと俺のコートには温かな水が滲んでいるのだろう。
「……ん？」
ふと、周りから刺さる視線に気付く。そして俺は元々、抱きついてきた優美子を引き離そうとしていたことを思い出す。
『え、なに、カップル？』
『すげえな、カップル受験？』

『カップルで受かったのかー、良かった良かった』
「……っ」
まずい、まずい、まずい。
聞こえてくるのがおおむね好意的な声なのでまだ良いが、それがかえって恥ずかしい。顔が熱い。耳まで真っ赤なんじゃなかろうか。
「……ヒキオ？　どうしたの？」
俺の異変に気付いた優美子が顔を上げる。うっすらと涙の滲んだ顔がたまらなく色っぽい。部屋にいたら迷わず押し倒しているだろう。けれど今はそれどころじゃない。本当にそれどころじゃない！
『ヒューヒュー！』
優美子がぽけっとしていると、いかにもチャラそうな大学生らしき一団が古典的な茶化しかたをしてきた。なんだか戸部みたいで腹が立つ。
「……あ……っ」
戸部っぽい集団の声により、優美子はようやく現状を飲み込めたらしい。ゆっくりと顔が茹だって、唇をあわあわと動かす。彼女には珍しい表情。ひたすら可愛い。
「うお……っ!?」
優美子は言葉を発するよりも先に俺の手首を掴んで走り出した。人混みの中をするすると抜けていく優美子のあとを必死でついていく。背後で戸部っぽい集団が「お幸せにー！」と叫んでいた。おのれ、戸部……。
『はっ、はっ、はっ、はぁっ、はぁっ、はぁぁ……っ』
数分に渡りめちゃくちゃに走った結果、俺たちはひと気のない大学構内にたどり着いていた。中庭といった雰囲気の場所で、周りの棟内に人は見当たらない。辺りには鮮やかな色合いのベンチがぽつぽつと点在していた。
「お、おい、げほっ、優美子……？」
日頃の運動不足がたたって、肺が上手く機能してくれない。切れ切れで声を紡ぎながら顔を上げると、優美子がふたたび抱きついてきた。慣れない空間でもこうしていると妙に落ち着く。周りにひと気

がないことを確認すると、そっと抱きしめ返した。
「……ヒキオ」
「……ん」
「ヒキオ、受かったんだよね？」
「ああ、受かったぞ」
「あーしも受かった」
「ん、そうだな。……おめでとう」
「……ヒキオも、おめでとう」
背中にまわされた細腕がすがるように抱きしめてくる。
「……ヒキオ、ヒキオ、ヒキオ……っ。よかった、ほんとに、よかった……っ」
かすかに上ずった声が耳朶に染み渡り、眼の奥がふたたび熱くなる。衝撃に備えることもできないままに、俺の目からほろりと液体が溢れた。
「……ヒキオ、泣いてる？」
俺の反応がよっぽど意外だったのか、優美子がきょとんとしている。可愛い。
「……べつにいいだろ、こんなときくらい」
潤んだ視界の中にいる優美子の目尻にも、温かな涙が浮かんでいる。こんなときがあってもいいのだろう。
「……ん、そうかも」
優美子がくすりと笑い、そっと抱きついてくる。胸板にくしくしとおでこをこすりつけ、まるで家にいるときのように甘えてくる。正直卒倒しそうなくらい可愛いし猛烈に押し倒したいが、これから自分たちが通う大学でする行為ではないだろう。必死でこらえた。
「後期も受ける必要なくなったな……どっか旅行でも行くか」
じわりと滲んだ解放感から何の気なしにつぶやくと、優美子がぱっと顔を上げた。
「……行きたい。……ヒキオと旅行、行きたい」
「お、おう。おう？」
小動物のようにこくこくと頷く優美子の頬は、寒さと興奮が入り混

じってりんごのように赤くなっている。猛烈に可愛くて動揺する。予想外の食いつきに驚きつつも、とりあえず落ち着こうということでベンチに腰を下ろした。
「優美子、そんなに旅行が好きだったのか？」
考えてみれば、デートと言っても電車で数駅程度のところしか行っていない。これは盲点だった……と思っていると、優美子がちょっと困ったような顔をした。
「旅行が好きっていうか……」
「ん？」
奥歯にものが挟まったような言い方。リップの塗られた唇がもにょもにょと動くのが可愛らしい。首をくりんと傾げると、優美子はチェックのマフラーに顔をもふっと埋め、なぜか拗ねたような目つきで見つめてきた。
「受験期間はガマンしてたから……そのぶん、もっと一緒にいたいだけだし」
「……っ」
ぽしょぽしょと呟くなり、ぷいと顔を逸らしてしまう。昏倒するところだった。
金の髪をくしくしと撫でると、まるで子どものように顔をますますマフラーに埋めていく。ずぶずぶ。何なんだろうこの可愛い生き物は。
「……そうだな。どこに行くか……って、あ、その前に」
「え？」
スマホを取り出すと、優美子がリスのように目をぱちくりとさせた。
「まずは家族と、それから学校に連絡しないとな」
「あ……そっか」
すっかりふたりの世界に入ってしまっていたが、きちんと報告すべき人が何人かいる。優美子もスマホを取り出し、電話をかけ始めた。
俺はまあ、家に帰ってからゆっくり報告すればいいだろう。
というわけで、まずは小町と両親にそれぞれメッセージを送ること

にする。
あまりぐだぐだ書いてもしかたないので、手短に。
サクラサク。以上。
続く。

（８０）

合格祝いを兼ねた優美子との旅行は、話し合いの結果温泉に行くことになった。お互い貯金を切り崩し、二泊三日のがっつりとした旅行を楽しむことにする。親にも当然ながら旅行のことは伝えたが、いかんせん事情が事情なので、優美子のことも話す必要があった。

『あらそう。やるわねぇ、あんた』

どんなリアクションをされるか……と不安だったが、母はニヤニヤと笑って快諾してくれた。親指を立てる必要はなかったと思う。そのうちでいいから紹介してちょうだい、とあっさりした調子で言うと、コーヒーの入ったマグカップを持ってひらひらと手を振り、自室に戻っていった。

優美子にもどうだったかを尋ねると、彼女も母親に事情を話したようだ。快諾はしてもらえたものの、「どんな子なの？　性格は？　顔は？」と根掘り葉掘り聞かれて大変だったらしい。

「ちなみにだけど、その質問攻めには何て答えたんだ？」

「……言わない」

気になって尋ねてみたのだが、ぷいと顔をそむけられてしまった。ほんのり顔が赤いんですけど。え、なに、ホントに何て答えたの？

そんなやりとりも挟みつつ、気が付けば総武高の卒業式を終えた。それなりに濃密な日々だったと思う。きっとこれから何度も会う人もいれば、もう会うこともない人もいるだろう。前者が戸塚で後者は戸部かな！

２週間ほどの春休みの初め、冬の乾いた冷気が薄れ、春の温もりを微かに感じる日。

俺と優美子は、温泉旅行に出かけた。

×　×　×

移動は長距離バスを使うことにした。初めて使ったが、思いのほか快適だ。

「人、あんまりいないね」

「だな。時期によるのかも」

最後列の窓際で隣り合って座り、ぽしょぽしょと会話を交わす。今は高速を走っていて、振動もほとんどない。窓を見れば無機質な景色が次々と現われては消えていく。
ちらりと周りの席を見渡す。俺たちの隣はもちろん、前の席にも人がいない。ぽつぽつと乗った他の乗客は、一番近くても2列以上離れていた。
「ちょっと暑いな……」
「ん、そうかも」
バス内は暖房が少し強かった。コートを脱ぐと、優美子が受け取って畳んでくれた。
「あーしも脱ごっと。んっ……」
優美子の吐息が耳朶に響く。コートを脱いだ優美子は淡いクリーム色のタートルネックを着ていた。
「温泉……楽しみ」
「そうだな」
優美子がそっとしなだれかかってくる。肘掛けはどうやら動かせるようだ。優美子との境目を取り払うと、嬉しそうに目を細めるのが可愛らしい。
二の腕がふにりと触れる。安心する感触。幾度となく触れてきた柔らかさ。
近くに人はいない。その事実に、徐々にむらむらしてくる。
「んっ……あっ、んん……っ」
タイツに包まれた優美子の太ももをそっと撫でると、悩ましげに身をよじらせた。優美子が俺を見つめる。咎めるような、それでいて特に止める気のない、複雑な表情。瑞々しい弾力のある太ももに指を滑らせていると、優美子の細いあごがくっと上がり、白い喉仏が覗いた。
「ばか。……んっ」
顔をぐっと寄せての可愛らしい罵倒にガマンできなくなり、唇を重ねる。ごぉぉ……と絶えず聞こえるバスの音よりも、口腔に響く優美子の色っぽい吐息のほうが何倍も存在感が大きい。
「んっ、ちゅっ、んふぅっ、ヒキオっ、んっ、んふぅぅ……っ」

優美子が身をよじり、首に腕を回してくる。シートの背もたれが高いため、前の席からこちらの様子が見えることはない。小さな密室ができあがっている。
手探りでカーテンを閉めると、優美子の耳と瑞々しい乳房に触れた。
「あっ、んんっ、やんっ、だめっ、んっ、ちゅぴっ、れるっ、んふぅぅ……っ」
優美子が悩ましく身をよじらせながら、そっと太ももを撫でてきた。ぽんぽんと優しく触れたかと思うと、指の腹で媚熱を送り込むかのようにツッ、ツツッと緩慢な手つきでまさぐってくる。むくむくと膨らんでくる股間。ジーンズが張り詰め、痛いくらいになる。
優美子の手首を掴み、膨らみに触れさせた。
「あっ……ヒキオ、おっきくなってる」
秘め事めいた声にぞくぞくする。細指がゆるく波打ち、ジーンズ越しに焦れったい快感を送り込んでくる。
「うっ、お……っ」
優美子の身体をまさぐる手を止め、己の下腹部に添えられた細指の感触に集中する。
「ヒキオ、なんでこんなとこでおっきくしてんの？」
耳にぴったりと唇を押し付けて囁いてくる。この子には珍しい言葉責め。ごくりと喉を鳴らすと、優美子の目がいたずらっぽく細められた。
チャックが開けられ、中にすべり込んでくる。ボクサーパンツ越しに肉幹をこすられ、腰ががくがくと揺れてしまう。
「ヒキオの先っぽ、濡れてる」
耳の形を舌でなぞりながら囁いてくる。バスの音が徐々に遠のいていき、優美子の声ひとつひとつ、色っぽい仕草のひとつひとつに意識が集中していく。
さわ、さわ、さわ……と、じっくり時間をかけながら撫でられる。柔らかな快感に浸りながらも、バスの中でしてもらう訳にもいかないよなーとちょっと惜しく思ってしまう。休憩を含め、あと数時間はバス

の中だ。
向こうに着いたらたっぷりとやることをやるぞ……と意気込んでいると、優美子の手がボクサーパンツをずり下ろした。開いたチャックからみちみちと張り詰めた肉幹を取り出す。
「お、おい？　さすがに……っ」
「だって……ヒキオ、苦しそうだし」
可愛らしい言い訳をする優美子の瞳は濡れていて、俺と会話をしていても視線は勃起肉に縫い付けられている。
細指が肉槍に巻き付き、静かに上下する。
「お……くぁ……っ」
すりすり、すりすり、と。俺がどんな風に触られると感じるのかをよく分かったさすりかた。
「ヒキオ、すごい……んっ、ちゅむっ、んふぅぅ……っ」
うっとりとした声音。重ねた唇。舌も吐息もひどく熱い。先走りがとぷとぷと溢れ、細指が肉幹全体に塗り付けていく。
優美子が前髪をかき上げたかと思うと、そっと上体を沈めた。
「お、おい……待っ、おぉぉ……っ」
制止の言葉をかけるよりも先に、肉槍の切っ先がぬるりと呑み込まれた。瑞々しい唇にカリ首がぴっちりと締め付けられ、先走りに濡れ光る亀頭がねろねろと舐めまわされる。
「んっ、ちゅぴっ、れるっ、こくっ、ちゅっ、ぢゅるっ……んっ、んっ、んっ、んっ……」
玉袋をやわやわとまさぐりながら、ゆっくりと顔を上下に揺らす。頬をすぼめ、綺麗な顔が卑猥に歪む。出会った頃よりもグッと大人っぽくなった美しい顔が、俺だけが見ている状況で淫靡に形を変えている。その事実がたまらない。
「……ぷはっ。ヒキオ、気持ち良い？」
「……めちゃくちゃ気持ち良い。でも、無理はするなよ？」
「ん、大丈夫。出したくなったら出して」
「え？　いや、待て待て、さすがにそれは……」
バスの中で舐めてもらっている……というだけでも充分すぎるほ

ど刺激的だ。慌てて遠慮すると、優美子は玉袋をふにふにと揉みながら、しっとりとした上目遣いを向けてきた。
「大丈夫だって。ぜんぶ呑むから」
息を呑む俺の反応を見ることなく、ふたたび熱く湿った口に肉幹が呑み込まれる。
「んふぅっ、んっ、んっ、んっ、んっ……」
夢中で口淫に浸る優美子の横顔に見惚れる。ときおり前髪をかき上げ、横目で俺を見つめてくる。カリ首を唇でにゅむにゅむと締めながら肉竿の裏スジを爪でつつっとなぞってきた。「うぐ……っ」と唸ると、嬉しそうに目を細め、ゆっくりと唇を滑らせていく。仕草がいちいちエロ可愛い。
「優美子……っ」
金の髪をそっと撫で、小さな耳の形をなぞる。華奢な背中がひくりと波打つ反応にぞくぞくして、豊満な膨らみに触れる。
「……だめ」
「へ？」
指を波打たせて柔らかな肉感を楽しんでいると、不意に手首を掴まれた。目をぱちくりとさせると、優美子が顔を上げ、恥ずかしそうに見つめてきた。
「あーしを触るのは、もうだめ」
「だめって……それに、『もう』って？」
首をかしげると、どこか拗ねたような顔で可愛らしく見つめてくる。
「……ヒキオの舐めてたら、からだ、熱くなってきたから……今触られたら、声、ガマンできないし」
ぽしょぽしょと言い終えると、俺が言葉を返す前に肉茎をぱくりと咥え込んだ。照れ隠しにさらに恥ずかしいことをやっている気がするんですが……。
「んっ、んっ、んっ、んっ……」
優美子の顔が一定のリズムで上下する。根元まで呑み込み、亀頭から竿までねっとり、ぐりぐりと舌を這わせてくる。俺が腰をひくつか

せて呻いていると、ふたたび一定のリズムで唇をすべらせていく。いつでも出していいからね、と優しく語りかけるようにちらちらと見つめてくれるのが可愛らしい。
「……ヒキオ、ガマンしなくていいからね？　何回出したっていいんだから」
「それは嬉しいんだが……さすがに、向こうに行ったときには空っぽになってました、じゃ困るだろ？」
「……ん、そうかも」
　ほんのりと顔を赤らめ、ふたたび肉幹を咥え込む。旅館に行って何をするか、言葉にしなくともふたりとも分かりきっていた。
「んふぅぅ……んっ、んむっ、ちゅっ、ぢゅるっ、んふぅぅ……っ」
　悩ましい声が耳朶を焼く。バスの音に紛れるかすかな声。内頬がギュッと吸い付き、たっぷりと蓄えられた白濁をずるずると引きずり上げてくる。
「優美子……そろ、そろ、出そうだ……」
　そっと囁いた声は、自分でも驚くほど切れ切れになっていた。密かに行なわれる卑猥な行為に、思っていた以上に興奮していたようだ。
「ん……っ、いっぱい出して……ちゅっ、ぢゅるっ、んっ、んふぅっ、んっ、んっ、んっ、んっ……」
　唇の締めつけが強まり、首が上下する速度も増す。金の髪を梳くように撫でながらびくびくと腰を震わせ、射精する瞬間に頭をがしりと掴んだ。
「んっ、んふぅぅっ、んっく、んむっ、んふぅぅぅ……っ」
　喉奥にびゅるびゅると白濁を叩きつけられながら、優美子が顔を沈めていく。肉幹の根元まで呑み込み、内頬を竿にぴったりと貼り付け、亀頭を舌でぐりぐりと舐り回す。
「おっ、おぁっ、うぐぅ……っ」
　どこまでもねっとりとねちっこく、気付いたら魂まで抜かれてしまうかのような射精。誰に気付かれることもなく、尿道に一滴とて残すことなく、優美子の喉奥に精液が消えていった。
「んふぅぅ……っ」

優美子が口を離す。肉幹は唾液で陰毛まで濡れ浸っていた。ウェットティッシュで優美子の口元を拭くと、幼子のように目を細めた。可愛い。
「ヒキオも拭かないと……」
優美子がウェットティッシュを何枚か手に取ると、玉袋を包み込んだ。ひんやりとした感触にびくんと震えると、くすくすと可愛らしく笑った。
「ヒキオ、気持ち良かった？」
「ああ、うっく、すげえ、んぉっ、気持ち良かっ……あの、優美子さん？」
俺に答えさせておきながら、ウェットティッシュで亀頭をすりすりとまさぐってくる。ジト目で見つめると、優美子がくすくすと笑った。
「そ。良かった。……もう1回、する？」
「いや、さすがにやめとく」
「……なんでまたおっきくなってんの？」
「……そんなエロい目で見られたら、勃つに決まってんだろ……」
明らかにまだ舐めたいと訴えるような目。
「うあ……っ」
そっと太ももの奥に手をすべり込ませると、タイツの内側がじっとりと熱を孕んでいた。
「すげえ熱いな。濡れてるのか」
「……うん」
どこか幼い声音で素直に頷く。
「……向こうに着いたら、たっぷりお返しするからな」
耳元で囁き、タイツ越しに陰部を爪でかりかりとこする。瑞々しい唇をキュッと引き結び、悩ましく眉根を寄せた。
「んくぅ……っ、……ヒキオのドスケベ」
どっちがだよ……と答える前に亀頭にチュッとキスをされた。「ほら、早くしまって」と言われ、いそいそと半勃起した肉幹をしまい込む。

優美子が俺の肩にぽすんと寄りかかり、こめかみをすりすりとこすりつけてきた。
「……ほんと、楽しみ」
「……だな」
あらゆる意味を含んだ優美子の言葉に静かに答えて、金の髪をくしくしと撫でた。

続く。

（８１）

最寄り駅に着くと、そこからバスに３０分ほど乗った。街中はもう雪が解けていたが、山の中はまだたっぷりと積もっていた。見慣れない銀世界に思わずテンションが上がる。隣で控えめにはしゃぐ優美子が可愛かった。

温泉街の前でバスが停まり、そこからさらに5分ほど歩くと目的の宿が見えた。人の寿命など軽く超えるほどの年月を感じさせる重厚な造り。ふたりそろってぽかんと口を開けて見上げてしまった。

女将のとんでもなく丁寧な接客を受けつつチェックインを済ませる。昼ご飯は移動の合間に済ませたので、あとは夕食まで自由時間だ。

「当旅館には内風呂がございます。よろしければぜひご利用くださいませ」

女将が最後にそう説明してするりと部屋を出る。風情のある和室にぽつんとふたりきりになると、優美子がもぞもぞと近付き、脚を流してしなだれかかってきた。気絶しそう。

「ヒキオ、どうする？　温泉街に行ってみる？」

「んー、移動でけっこう疲れたからな……」

「ん、あーしもちょっと眠いかも」

ぽつぽつと会話しながら、互いの太ももをすりすりとこする。優美子の手首を掴むとぴくりと揺れた。股間に導くと、ジーンズ越しに爪でかりかりとこすってくる。

「あーし、内風呂入りたいかも。どんなのか気になる」

「いいかもな。じゃあ入るか」

「……うん」

当然のようにいっしょに入る提案をすると、優美子がほんのりと頬を赤らめてうなずく。ウブな表情にいやらしい手つき。喉を鳴らさないようにするのが精一杯だ。

「あ……っ」

スカートの中に手を入れてタイツ越しに下腹部に触れる。じっと

りと熱を孕んだ部分にそっと指を這わせると、優美子が色っぽく眉根を寄せた。
「うんん……っ、んっ、ふっ、んくぅぅ……っ」
爪でかり、かり、かりとこすると、優美子が人差し指を咥えて声を抑え、そっと脚を開いた。ジーンズのチャックを開け、パンツの中に手をすべり込ませてくる。
「あっ、あっ、ぅあっ、あんっ、ヒキオ……やだ、これ、ちゃんと、さわって……っ」
くにくにと指を押し込んでいると、瑞々しい唇を耳に押し当ててじっとりと熱を帯びた声で囁いてくる。タイツとショーツの上からでは焦れったいのだろう。
「それもいいけど、先に風呂にするか」
「え……」
「心配すんな、風呂でたっぷりするから」
「……スケベ」
ぽしょりと呟く声はとろとろに甘ったるかった。

× × ×

内風呂はかなり広く、浴槽も10人は入れるのではというサイズだった。加えて、まるで映画のスクリーンのような巨大な窓からは幽玄な雪景色が見える。浴室の端にスチームが付いていて、裸でも充分に暖かい温度に保たれていた。宿泊料金の手頃さから考えると、これはありがたいなとしみじみした。
「お待たせ」
優美子が少し遅れて浴室に足を踏み入れた。入浴のために髪をアップにしている。ふだんは見えないうなじが見えて、いつも以上に大人びていてたまらなく色っぽい。
「わぁ……すごい良い景色……って、んん……っ」
雪景色にほわっと表情を開く優美子を抱きしめ、唇を重ねた。たしなめるように眉根をちょっとだけ寄せたものの、すぐに抱きしめ返し、舌を絡ませてくる。
「んっ、ちゅっ、ちゅぴっ、れるっ、んっ、んっ……」

唾液が弾ける音が控えめに浴室に響く。温泉の湯気が絡んでしっとりした背中を撫で、きゅっと引き締まった尻肉を揉む。優美子の細指が迷子のように俺の背中をさまよい、それから自分のお腹に押し当てられた肉槍に手を添えた。
「はぁっ……へぁ……っ」
唇を離し、てろりと垂らした舌の腹をこすり合わせる。優美子が片手で竿をさすり、もう片方の手で玉袋をふにふにと揉みしだく。豊かな双丘の頂はぷっくりと膨らんでいる。下から掬い上げるように揉むと、優美子が色っぽく眉をひそめた。
「あっ……やぁ……っ」
下腹部の茂みに指を這わせると、優美子の身体ががくがくと震えた。
「めちゃくちゃ濡れてるな」
「い、言わなくていいから……あっ、ぅあっ、はぁうぅぅ……っ」
指を筋に沿って這わせ、膣口につぷつぷと指先を埋める。柳腰ががくがくと震え、優美子の身体の高度が徐々に下がっていく。
「椅子に座ってくれるか」
俺の意図を察したのか、優美子が赤らんだ顔を伏せた。
「……ドスケベ」
上目遣いで可愛らしく罵り、風呂椅子に向かう。感じすぎていたのか、ととっとよろけたので慌てて肩を抱いた。
優美子が椅子に腰を下ろすと、俺はひざをついて優美子のひざを掴んだ。
「ヒキオ……その、あ、洗わなくていいの？」
脚を開こうとすると、優美子がちょっとだけ力んで抵抗してきた。
「問題ない」
「ヒキオには問題なくてもあーしには……って、こら、んんん……っ」
太ももをすりすりと撫で、ふにゃりと脱力した瞬間にすばやく脚を開く。
むわっと蒸気が立ち上る錯覚が見えるほどの熱気。バスにいたときから濡れていて、それがずっとタイツの中に押し込められていたの

だから当然か。くらくらするほどの性臭に魅了されていると、優美子がもじもじと恥ずかしそうに身じろぎした。
「ば、ばか……ぜったい、変な匂いするし……っ」
「俺は好きだけどな」
優美子の反応を見る前に、くにゃくにゃとした花びらにちゅっと口づけをした。
「うあ……っ！」
跳ねた嬌声が浴室に響く。何度か口づけをして、花びらに舌を這わせていく。ねろ、ねろ……っと、優美子に舌の感触をつぶさに伝えるように丹念に、ねちっこく。
「はぁうぅぅ……っ、やっ、ヒキオ、んくぅぅ……っ！」
切なそうに囁き、太ももで俺の顔を挟んでくる。少しでも息を吸えば濃密な女の匂いが流れ込んでくる。優美子が身じろぎするたびに柔肌が頬を心地良く圧迫する。
花びらにまとわりついた愛液を丁寧に舐め取っていくと、優美子の肌にぶわっと汗が滲んだ。
「やっ、やだぁっ、ヒキオ、これ、だ、めっ……んくぅぅ……っ！」
優美子の声が妖しく跳ねる。腰がひくひくと揺れる。
「気持ち良いか？」
口を離し、指で膣口をくにくにと触りながら尋ねる。優美子は口元に手を当て、顔を逸らし、小さく頷いた。
ふたたび下腹部に口を付け、舌をねろねろと這わせる。
「うあ……あっ、あっ、あっ、あっ……」
優美子の声から徐々に羞じらいが薄れ、壊れてしまったかのようにかくかくと揺れる。愛蜜は舐めても舐めても止まることがない。
「ヒキオ……ヒキオぉ……っ」
細指が俺の頭を掴み、くしゃくしゃと撫でてくる。頭皮を指が這い回る感覚にぞわぞわする。すがるような、劣情を高めようとするかのような、庇護欲をそそる卑猥な手つき。
淫裂の上にあるクリトリスは皮を被っていた。指でそっと剥き、ちゅっと吸い付く。

「はぁうぅぅうっ!? あっ、やだっ、そこはっ、んはぁぁぁ……っ！」
優美子の声が一段弾む。かすかに残っていた余裕が消え失せ、獣性が混じってくる。
「イキたいときにイってくれ」
中指を膣内につぷりと入れ、膣肉をぐにぐにと押し込みながらぷっくりと膨らんだ肉芽に吸い付く。昂ぶりきった女体には強すぎるくらいの刺激。
「ひぐっ、あっ、はぁうぅっ、やぁっ、イっ、イク、イク、イク、イク、イク……っ」
優美子の腰ががくがくと震え、溢れ出した愛液が手首まで伝う。あまりにも淫猥な光景に頭がおかしくなりそうだ。
人差し指も同時に挿し込み、根本から曲げて膣肉をぐにぐにと押し込むと同時にクリトリスを強く吸った。
「うあ……んくぅぅぅっ！」
かろうじて抑え込んだような嬌声が弾け、浴室にわんわんと響く。顔を挟む内ももがぶるぶると震え、身体を丸めて俺の頭を抱きしめてくる。どぶっ、どぶどぶどぶっ……と大量に溢れる愛液と甘酸っぱい匂い。暖房のよく効いた浴室は、濃密な性臭をしっかりとこの場に留める。
絶頂で荒らげた息遣いと汗ばんだ肌、そして鼻腔を犯す愛液の匂いにたっぷりと浸った。
「……気持ち、良かった」
優美子がぽつりとつぶやき、髪をくしくしと撫でてくる。穏やかな声音だが、ずっぷりと咥え込んだ2本指を膣肉で今もきゅっきゅっと締めつけている。
「あっ、あんっ……ヒ、ヒキオ……っ？」
「物足りないみたいだからな。もう1回するぞ」
挿入した指をくにくにと押し込むと、優美子は俺の肩を掴んで身体を起こし、静かに腰を前後にグラインドしはじめた。まるで俺の上に跨っているときのようないやらしい腰遣い。
「んっ、ぅあっ、はっ、はぁぁぁ……っ」

控えめな声を発しながら、もっともっととねだるように腰を揺らす仕草がたまらない。
このあと、けっきょくもう2回イカせた。
「……あっ、はぁっ、はぁぁぁ……」
3回連続で果てた優美子の声はふわふわしている。可愛らしいしいやらしい。
「うぐ……っ？」
するりと伸びた手が肉幹を掴んだ。恋人の艶姿にがちがちに勃起した肉竿。優美子がぼうっとした顔で俺を見つめ、にゅこにゅことしごいてくる。
「身体、洗わないと……」
「あ、ああ、いや、その、うぐっ、これ、洗う気っ、あるのか……おぉぉ……っ」
思いっきり射精させようとしてるよね？　と見つめると、優美子はくりんと首をかしげ、今度は両手で肉竿をまさぐり出した。可愛らしいのにやっていることはえげつない。出してしまう前になんとか身体を離すと、唇を尖らせて上目遣いで睨んできた。可愛い。

続く。

（８２）

互いの身体を洗い合うことにした。

「んじゃ、俺から洗うぞ」

「う、うん……あ……っ」

優美子の後ろに風呂椅子を下ろして座ると、白くしっとりした背中に勃起肉がくいくいと当たる。優美子は艶っぽく喘ぎながら背中に手を回し、愛おしむように肉槍をすりすりと撫でた。

ボディソープを手に塗り付け、優美子の肩に手を添える。ゆっくりとした手つきで腕を洗い、鎖骨を洗い、乳房を手で包み込む。

「あっ、んんっ、ふっ、んふぅぅ……っ」

スチームの蒸気でしっとりとした肌はどこまでも美しくいやらしい。俺の手の動きに合わせて身体をぴくりぴくりとわななかせ、そのたびに肉槍と背中がこすれる。

「あっ……んくぅぅ……っ！」

乳頭をそっとつまむと、優美子のおとがいが跳ね上がった。首筋に口を付け、薄桜色の膨らみをこよりを作るように優しくしごく。

「あっ、あっ、やぁっ、ヒキオ……んっ、い、いたっ……」

ぢゅぅっ、とひときわ強く吸い付くと、優美子が苦悶の声を漏らした。

「……すまん、やりすぎた」

白い肌に残る内出血の跡。キスマークを思いきり付けてしまった。謝ると、優美子は流し目を送り、俺の手をそっと握る。

「……ん、だいじょうぶ。……ってか、ヒキオになら……」

「え」

「……なんでもないし。きゃっ！」

ぽしょりとつぶやかれた言葉に我慢ならず抱き寄せる。左手は右の乳房をつかみ、右手は内腿をさする。先ほど吸い付いたのは左の首筋。今度は右肩にあごを乗せた。

「……こっちも付けていいか」

「……っ」

耳元で囁くと、優美子が細喉をこくりと鳴らす。
ゆっくり首だけ振り向き、小さく、本当に小さくうなずく。
右の肩に、ちゅっと吸い付いた。
「んくぅぅぅ……っ！」
苦悶混じりの艶声が浴室に響く。内ももをさすり、乳頭をにぢにぢとつまみながら吸う。腕の中で優美子が暴れ、震え、やがてくったりと脱力した。
唇を離せば、そこにはもう一つの青い跡。優美子の身体をシャワーで流しながら、ぽつぽつと言葉を交わす。
「……ヒキオって、こういうことしたいタイプなんだ？　ちょっとびっくりした」
「……なんか、無性にしたくなったんだわ」
「ふーん。……『こいつは俺のもんだー』みたいな？」
「ん？」
「……」
「……」
「……な、なんか言えし……」
予想外の言葉に固まり、ブッこんでみた優美子が戸惑い、俺は徐々に恥ずかしくなって顔が赤くなり、耳まで赤くなった優美子に太ももをてしてしとはたかれた。気絶しそう。
「ふっ、んん……っ」
ボディソープを洗い流した後、陰部に手を添える。シャワーで洗い流しても小陰唇の中の熱はそのままだ。
「優美子のここ、ほんとエロいな」
「やぁっ、言うなし……んっ、ふっ、んふぅぅ……っ」
人差し指を咥えて色っぽく声を抑え、空いた手を背中に回して肉胴をしごく。先走りがとぷりと溢れると、白魚のような指が丹念に竿全体にまぶしていく。
人差し指を小陰唇に沈めては離すのを繰り返す。つぷつぷ、つぷつぷと。優美子の腰がかくかくと前後に揺れる。左手でつまむ乳房はぷっくりと膨らんでいた。

「ね、ヒキオのも……洗いたい」
「ん、たのむわ」
これ以上はまずいと思ったのか、優美子がぽそりとつぶやく。俺も一方的に責め続けるよりはころころと攻守が入れ替わったほうが楽しいし。
優美子は向かい合う体勢を選んだ。手にボディソープを付け、俺を見ると普段あまり見ないいたずらっぽい笑みを浮かべ、椅子ごと近付いて俺に抱きついた。
「んふぅぅ……っ」
背中をすりすりと撫でながら唇を重ね、ねっとりと舌を絡めてくる。人前にいるときはちょっと怖い印象のある優美子だが、ふたりきりのとき、特にこういった行為をしているときの彼女の表情はどこまでも柔らかく、可愛らしく、色っぽい。柔らかなお腹に勃起肉がぐいぐいと押し付けられる。
「うぐ……っ」
次はどこに来るんだろう……と思っていると、優美子は俺の背中に腕を回したままで首筋に吸い付いてきた。軽く舌で舐るのかと思いきや、ちがう。ぢゅうぅ……っと強く吸い付いてくる。かすかな痛みとともに、俺がさっき優美子にした行為を思い出す。
「……ぷはっ。……さっきのお返し」
ぽそりと囁き、舌をちろりと見せる。いつになく蠱惑的な仕草にくらりとしたが、本人も恥ずかしかったらしくすぐに顔を逸らした。可愛すぎません？
逆側にも強く吸い付き、今度こそ身体を洗い始める。細指が首や腕を丁寧に撫でていき、やがて反り返った肉胴にたどり着いた。
「うぁ……っ」
ぬるついた手でにゅりにゅりとしごかれ、思わず天井を仰ぐ。
「ん……っ」
その隙を突くかのように、優美子が乳首に吸い付いてくる。ちゅむちゅむと優しく口付けし、かすかに甘噛みをする。心地良い快感に腰が引けるが、そのたびに優美子の細指が肉茎をきゅっとつまむ。

「ゆ、優美子……そろそろ、舐めてもらってもいいか」
「んー、どうしよっかな」
優美子が可愛らしく焦らし、両手で肉竿をまさぐりだす。今日はどうしたんだ、いつもよりさらに可愛い。頓死しそう。
「いや、あの、ちょっと、本当に、これ以上は……うぐぅぅ……っ？」
まずい、と言いかけたところで竿の根元をキュッと握られた。いたずらっぽく目を細め、唇を寄せてくる。甘ったるく舌を絡めているあいだに、身体を包み込むボディソープが洗い流された。
「それじゃ、お風呂行こ？」
「お、おう……」
俺の身体をぺたぺたと触る仕草に悶絶しながら立ち上がった。

× × ×

なみなみと入ったお湯は俺たちが入った分だけざぶざぶと景気よく溢れる。ゆっくりと身体を沈めると、じわりと染み込むような心地よさに包み込まれた。
「気持ち良い……」
優美子が窓の外を眺めながらうっとりと囁く。以前よりもぐっと大人びた表情に引きつけられる。
「ん、なに？　……ふふ」
後ろから抱きしめると、優美子がくすぐったそうに笑った。やはりいつもよりも開放的になっているように感じる。ふたり旅がそうさせてくれているのだとしたら本当にありがたい。この子、可愛すぎます。
「……まだ硬い」
優美子が背中に手を回し、肉茎をすりすりと撫でる。
「期待してるもんでな」
「ヒキオのスケベ」
「あれだけエロく責められたらそりゃあな」
無言で竿をくにくにと揉んでくる。ちょっと恥ずかしくなったのか、逃げるように雪景色を眺めていた。
「ヒキオ、そこに座って」

ぽそりと囁いた言葉は湿り気を帯びていた。指を差した風呂の縁に座る。太ももと玉袋が心地良い温泉に浸かった状態だ。
優美子は俺の股座にすいすいと近付くと、いつものくせで髪をかき上げる仕草をした。アップにしているため手が空振り、思わずくすりと笑ってしまう。
「……見なかったことにしろし」
「可愛かったから忘れるのは無理だな」
内ももをぺちぺちと叩かれた。そろそろ気絶します。
「分かるけどな。俺もメガネをかけて勉強したあと、何もないのにクイッてしちまうから」
「それはドジすぎだから」
「自分のこと棚に上げすぎだろ」
くすくすと笑い合い、優美子の髪をそっと撫でる。とろんと蕩けた顔をぐっと引き寄せると、優美子は俺の内ももに手を添え、ためらうことなく朱く膨らんだ亀頭をぱくりと咥えた。
「んっ、ちゅるっ、れる……っ」
瑞々しい唇がカリ首をにゅむにゅむと締めつけ、熱い舌が亀頭に這い回る。鈴口をつんつんと小突かれて先走り汁が溢れ出す。うっとりと目を細め、こくこくと嚥下していく。
「お……ぅ……っ」
後ろ手をついて口淫に浸る。温泉に入りながら舐めてもらうという行為は想像以上にたまらない。大きな窓越しに雪の残る幽玄な山々を眺め、下を見れば髪をアップにした恋人が静かに自分の性器を舐めてくれている。
「ちゅっ、れるっ、はぷっ……ヒキオ、気持ち良さそう」
優美子が口を離し、右手で竿の根元をしごき、左手で玉袋を優しく撫でる。玉袋はお湯に浸かっているためちゃぷちゃぷと心地良い音を立てている。
「そうだな、くぁっ、なんか、ぅくっ、いつもよりもリラックスできて……お、おぉぉ……っ？」
俺の返事を聞く気があるのかないのか、優美子は朱い舌に亀頭を乗

せてれろれろと左右に揺らしてくる。舌の上にカウパー液がこぷりと溢れる。すかさず舐め取り嚥下する仕草があまりにも卑猥だ。
「……今日の優美子、可愛すぎるしエロすぎると思います」
「なんで敬語だし……。……ありがと。んふぅぅ……っ」
呆れたように笑い、小さな声でお礼を言ってふたたび咥え込む。手のひらに玉袋を乗せてすりすりと優しく撫でながら、空いた手で内ももや腹を撫でてくる。
「んっ、んっ、ちゅっ、ぢゅるっ、んふぅぅ……っ」
口をOの字に開き、頬をすぼめる表情がたまらなく色っぽい。
「うぁ……っ？　ゆ、優美子、それ、すげぇ良い……っ」
優美子が右頬に亀頭を含み、ゆるゆると顔を左右に振る。そのあいだも舌を竿の裏スジにぐりぐりとこすりつけてきて、甘やかな快感が尿道を駆け抜けていく。
「んふぅぅ……ヒキオ、いっぱいおつゆ出てる。気持ち良いんだ？」
嬉しそうに笑い、今度は左頬に亀頭を含む。細指に乳首をきゅっとつままれると、温かな口内で肉竿がびくりと震え、ふたたび先走り汁が噴き出す。
「んっ、んっ、んっ、んっ……」
俺の限界が近いことに気付いたのか、優美子が顔を規則的に前後に揺らす。玉袋に添えた手はそのままに、もう片方の手も竿の根元を包み込む。柔らかな両手に包み込まれ、瑞々しい唇がカリ首に引っかかるたびに射精欲求が込み上げてくる。
「ちゅっ、ちゅるっ、ちゅぴっ、んっ、んっ、んっ、んっ……っ」
勃起肉をすりすりと愛おしげに撫でまわしながら、上目遣いで見つめてくる。いつでも出していいから、というような優しい表情。
「優美子、もう、出る、出る、出る、出る……っ」
両手で金色の髪を撫で、小さな耳を撫でる。無性に優美子に触れたくなって、背を丸めて優美子の顔を引き寄せ、肉幹を根元まで呑み込ませた。ぷるんとした口蓋垂に亀頭が触れた瞬間、強烈な射精衝動が込み上げる。
「んふぅぅぅ……んっ、んっく、んふぅっ、んんん……っ」

どぶっ、どぶどぶどぶ……っと、勢いよく何度も何度も脈動し、鈴口から勢い良く白濁が噴き出す。熱くぬめった口の奥に流れ込んだ精液が、色っぽく眉をひそめた優美子の喉奥にこくりこくりと消えていく。じっくりと高められ続けた性感は想像以上だったようで、ゆったりとした安心感の中で大量に溢れ出した。
「はっ、はっ、はぁぁぁ……っ」
射精の脈動が収まり、荒らげた吐息をゆっくりと落ち着ける。金の髪をすがるように撫でた。優美子はぼうっとした表情のままでゆっくりと顔を前後に揺らし、亀頭を咥えて竿の根元をゆるゆるとしごく。びゅくっ、びゅるっと残り汁を噴き出すと、優美子は艶めかしい鼻息とともにそれらを呑み込んだ。
「……けほっ、けほっ」
「すまん、出しすぎた。だいじょうぶか」
「ん、だいじょうぶ。……ヒキオが気持ち良くなってくれるの、嬉しいし」
うっすらと笑みを浮かべ、肉竿をすりすりと撫でられて――
「……なんでまたおっきくなってんの？」
「いや、不可抗力だって……」
射精直後のくったりした肉幹が、一瞬で硬度を取り戻した。
「なんかもう、アレだ、うん、優美子、本当に今日はどうしたんだ。可愛すぎるんだけど」
「……べつに、どうもしないし」
照れたように顔を逸らすものの、肉竿をまさぐる手は止めない。会話するあいだも腰がひくひくと揺れてしまう。
でもまあ……と、優美子がぽつりと呟く。
「ヒキオと旅行に来れて、けっこう浮かれてる……かも」
可愛すぎか。
「可愛すぎか」
「え」
思ったことをそのまま口に出してしまうと、優美子は口をぱくぱくとさせ、肉幹をぎゅーっと握った。絶妙な快感に「おふぅっ!?」と変

な声が漏れてしまい、優美子が慌てて謝った。

続く。

（８３）

優美子がお湯に浸かっていた時間が長かったので、いったん休憩することにした。脱衣所に置いたドリンクを優美子に渡し、雪景色を眺めながらごくごくと飲む。水分補給をしているあいだも互いの身体をまさぐりあっていた。お湯が少し熱い気がしたので水を出しておいた。

「……なんか、変な感じ。こんな遠くに来て、ヒキオとふたりきりなのって」

「ん……そう、だな。たしかに」

優美子がそっと身を寄せ、ドリンク片手に雪景色を眺めてぽつりとつぶやく。人差し指と親指で竿をすりすりとしごかれると、少しずつ肉幹が大きくなってくる。もうじき繋がるな、という確かな予感にぞくぞくする。

優美子がふたり分のドリンクを脱衣所に戻し、とててと可愛らしく近付いて抱きしめてきた。柔らかで、瑞々しくて、しっとりした身体。

「ヒキオ。……その、どこで、する……？」

胸板にぴったりとくっつけられた唇と、骨に直接響く声にぞくぞくする。

「んー……せっかくなら入ったまましてみたい」

優美子の返事を聞かないうちに、きゅっと引き締まった尻肉をつかんで湯船に歩き始める。優美子がとっ、ととっと足踏みして、恨みがましい、けれどそれよりも遥かに可愛らしい上目遣いを向けてきた。

「……ヒキオってほんとスケベだよね」

「優美子もたいがいぉふぁっ！」

乳首をきゅっとつねられて変な声が出た。我ながら気持ち悪い声が浴室にワンワンと反響する。優美子さん、笑いすぎだと思うんです。顔を逸らさないでください。耳まで赤くしてプルプルされるとこっちは死ぬほど恥ずかしいです。

「あ、さっきよりぬるくなってる」

「これからすることがすることだからな。のぼせないようにしとい

た」
細指がたしなめるように肉幹をきゅっと握る。もう、痛いくらいに勃起していた。
「……なんでそういうとこにやたら頭が回んの？　ほんとスケベ」
「優美子と滞りなく好き放題したくてな。だめか？」
「……べつに、だめなんて言ってないし……」
ぽしょぽしょとつぶやく彼女が可愛くてしかたがない。アップにした金の髪をくしくしと撫で、そっと口付けをする。俺が湯の中であぐらをかくと、優美子は俺の肩に手を添え、脚を開いた。ゆっくりと腰を下ろすと淫靡なM字になる。
「んぅ……っ、ヒキオ、すっごい硬い……っ」
「優美子もすげぇ熱いぞ」
花びらを亀頭でかき分けると、湯とは違う潤みににゅるにゅると包み込まれた。じっとりと湿った瞳で見つめてくる。ふだんの強気で乙女な彼女からはまるで想像できないような女の顔。瑞々しい唇がかすかに開き、震える吐息を漏らした。
「あっ……はぁぁぁ……っ」
肉槍に手を添えてゆっくりと腰を下ろしていく。がちがちに勃起した肉槍がにゅるるる……っとたやすく呑み込まれた。柔らかな締めつけにため息を漏らす。
「はぁぁ……おっきい……っ、んん……っ」
己の中を穿つ男性器の感触をたっぷりと味わい、色っぽく眉をひそめて唇を引き結ぶ。
「声出していいぞ。誰にも聞こえやしねえし」
「だって……おっきな声出したらさっきのヒキオみたいに響いちゃうじゃん」
「おい……って、うお……っ」
くすくすといたずらっぽく微笑んだかと思うと、M字に開いていた脚を俺の腰にするりと巻きつけてきた。両腕も背中に回し、ぴったりと密着する。
「んっく、はっ、はぁぁ……ヒキオ、どうしよう、これすっごい気持ち

良い……っ」
　優美子がとろんと蕩けた顔を向ける。気だるげでひどく色っぽい表情。お湯の温かさと結合部の温もりが掛け合わさって、興奮と安らぎが同居したような不思議な感覚になっている。
　なんとはなしに、ふたり同時に巨大な窓の外に広がる雪景色を眺める。
「ホントに綺麗……」
「だな。来てよかった」
「うん」
　短くてそっけない会話が心地良い。ぽつぽつと言葉を交わしながら優美子の背中をさすり、髪を撫で、乳房をまさぐる。優美子も悩ましい吐息を漏らしながら俺の身体をまさぐる。下腹部をぴったりと密着させたままの気だるげなやりとり。
「ちょっと動かすぞ」
「ん」
　優美子が短く答え、ちゅっと唇を重ねる。動かすとは言ってもあぐらで下になっていてはさほど積極的に動くことはできない。なので、きゅっと引き締まった尻肉をわしりと掴んで優美子も動かすことにした。
「あっ、はぁっ、んっ、んっ、んっ……」
　優美子が俺の肩をすりすりと撫でながら、かすかに上体を弓なりに反らして喘ぐ。ゆるゆると前後に揺れるしなやかな肢体。いやらしい打擲音がしない代わりにふたりの身体から小さな波がいくつも生まれる。
「あっ、はぁっ、ヒキオ、これ、あふぁっ、きもちっ、いい……っ」
　優美子の唇から悩ましい吐息が漏れる。膣内はますます熱く潤み、柔らかく心地良く締めつけてくる。優美子がときおりぴたりと止まり、小さく痙攣する。
「優美子、イってるのか？」
「んんっ……き、聞かなくてもっ、わかるでしょ……あっ、あんっ……んくぅぅ……っ！」

肉尻をつかみながらぐっと腰を突き出すと、可愛らしい嬌声が耳朶を叩いた。
「一応聞きたくてな。それで、イったのか？」
「あっ、あんっ、こらっ、はっ、はぁぁ……っ」
ゆるゆると腰を振って優美子の中で出し入れを繰り返す。優美子が整った眉を八の字に曲げ、恨みがましく睨んでくる。快感に蕩けた顔で睨もうとするとかえって色っぽくなるな、と本人に言ったら怒られそうなことを思った。
「ほら、どうなん……っ!?」
優美子が不意に下に足をついてM字の形に戻った。動揺していると、俺の腰振りに合わせて優美子も前後に尻肉を振りはじめる。
「うっ……ぐぅ……っ」
激しさはなくともふたり同時に動くことで締めつけが格段に強まる。優美子はどこか勝ち誇ったような表情を浮かべながら、身体の痙攣をより強いものにしていた。
「あっ、んぁっ、そ、そうだって……さっきから、小さくイキっぱなしだから……っ。なのにヒキオはどんどん意地悪くなるし……あっ、はぁぁっ、……だから、おかえし」
ちろりと舌を覗かせる優美子があまりにも可愛く、蠱惑的で。
「この……っ」
獣性を煮詰めた声を漏らし、引き締まった尻に指を食いこませて乱暴なほど激しく腰を前後させる。
「はぁうぅっ!?　あっ、やっ、ヒキオっ、それっ、はげしっ、んくっ、はっ、はぁぁぁぁ……っ！」
じゃぶじゃぶとお湯が波打つ音と優美子の弾けるような嬌声が混ざりあう。膣内は溢れ出した愛液でぬるぬるになっていて、密着していないと抜け落ちてしまいそうだ。
「優美子……締めすぎ……っ」
「ヒキオが激しいからだって……はぁぁぁ……っ」
優美子がとろとろになった顔を近付け、唇を交わす。ぬこにゅこぬりゅにりゅ……っと卑猥な感触が尿道から伝わり頭蓋を焼く。

「優美子、そろそろ出るぞ……っ」
「はぁぁっ、んっ、んくぅぅ……っ」
唇を引き結んでこくこくとうなずく仕草が心臓を叩く。ぐぐぐぐと湧き上がってきた射精衝動に身体が強張り、たっぷりと潤んだ膣内に大量の白濁が噴き出した。
「はぁぁぁぁ……あっ、あつっ、んはぁぁぁぁ……っ」
優美子の身体がぴたりと止まり、ふたたび四肢を巻きつけてきてがくがくと痙攣する。膣肉が食いちぎらんばかりに締めつけてきて、ぶびゅっ、びゅるるる……っと遠慮のない量の精液が噴き出す。
ふたりの絶頂の波が収まると、かすかなスチーム音と荒らげた呼吸の音だけが聞こえた。窓の外はあまりにも寒々としていて、まるで自分たち以外誰もいなくなってしまったかのような感覚。
「……優美子、動けるか？」
「……うん。……ヒキオとしてると、ほんと気持ち良すぎておかしくなりそうなんだけど」
「おかしくなってもらって構わないんだけどな。ぜったいエロいし」
鼻をつままれた。むにむにと左右に揺らされる。
優美子が俺の肩に手を添え、脚をM字にしてゆっくり腰を上げる。ぱっくりと開いた膣口から白濁がどろりと溢れ、お湯にぷかりと浮く。
「あ……っ」
恐ろしいくらいの快感の証に優美子が惚けた声を漏らし、漂う精液をつんつんとつついてひょいとつまむ。
「……ほんと、濃すぎだし」
ほんのり赤面してつぶやき、湯船の端まで歩いて排水溝にぺいっと流す。ちょっと物がなしい気分になると同時に、お湯を弾く肉尻に目が行く。
「あ……ヒキオ、どうしたの？」
後ろから抱きつくと優美子がくすくすと笑った。
「あーしがいつもと違うって言ってたけど、ヒキオも変だし。なんかいつもよりかわいい。……あっ、ぅあ……っ？」

恥ずかしさをごまかすように太ももに肉槍を挟み込み、ゆっくりと前後する。
「……なんですぐ硬くなってんだし」
己の太ももの間からぴょこんと顔を出した亀頭をすりすりと撫で、呆れたように笑う。同い年なのにどこか年上のお姉さんのような雰囲気に鼓動が心地良く高鳴る。
「ヒキオ、もう1回する？」
「……たのむ」
ぽそりと囁くと優美子がくすくすと笑う。湯船の縁に手を付き、引き締まった尻肉を向けてくる。ほんのりと紅潮させた顔で流し目を送り、ふりふりと誘惑するように腰を揺らす。膣口からどろりとふたりの性液が流れ落ち、ごくりと喉を鳴らした。
肉槍に手を添え、ぐっしょりと潤んだ小陰唇をかき分けてずるりとねじ込んだ。
「あっ……はぁぁぁ……っ」
優美子が全身を震わせ、猫のようにきゅっと背中を反らす。よく手入れされた綺麗な背中と見事なくびれ。
「本当に綺麗だ」
尻肉をつかんでゆっくりと腰を振りながらつぶやくと、優美子が恥ずかしそうに振り向いた。
「あっ、んんっ、いまっ、そんなっ、ことっ、あんっ、言わなくてっ、はぁっ、いいっ、から……あっ、あっ、あっ、あっ……」
お湯混じりの打擲音が浴室内に響く。優美子は俺に合わせてゆるゆると腰を振り、俺が腰を止めると猫が「もっと構って」と甘えるかのように尻をぐりぐりと円状にこすりつけてくる。
「あっ、んんっ、ヒキオ……はっ、もっ、と……突いて……あんっ！」
震える声のおねだりが獣性に火を点ける。尻肉ににぢりと指を食いこませ、一撃一撃に力を込めて突き入れる。たぱんっ、たぱんっと卑猥な打擲音が鳴り、瑞々しい尻が細かに波打つ。
「優美子……っ」
もっともっと触れたくなって、優美子の上体を起こして乳房を揉み

しだく。お湯を弾く瑞々しさを持ちながら、力を入れればたやすく指が埋まる柔らかさに陶然とする。
「あっ、はぁっ、やっ、そこっ、んくぅぅ……っ！」
優美子の声が甘ったるく蕩けていく。身体を起こしたことで行き場のなくなった手がふらふらと宙をさまよい、顔の横で軽く握る色っぽい仕草にくらりとくる。
乳房をやわやわと揉み、ぷっくりと膨らんだ乳頭をきゅっと引き絞る。
「あふぁぁぁっ!?　あっ、やっ、あっ、あっ、あっ、あっ……」
優美子の身体が折れんばかりに反り返り、膣内の締めつけが痛いくらいに強まる。すらりとした肢体ががくがくと痙攣し、それでも尻をえげつないくらいにこすりつけてくる。
「優美子……そろそろ、出そうだ……」
「んっ、はぁうぅっ、出して……いっぱい……あっ、あっ、あっあっあっあっあっ」
乳首をぎゅっとつまんだまま何度も何度も腰を打ちつける。優美子の嬌声が壊れたように何度も漏れ出て、耳朶にずるりずるりと染み込んでいく。
みちみちと込み上げてくる射精欲求に腹筋が引き絞られ、内ももにぎゅっと力が入る。最後に一際力強く打ち付け、優美子の最奥にたっぷりと白濁を注ぎ込んだ。
「あっ……はぁぁぁぁ……っ、あっ、あっ、あっ、あっ……」
優美子が所在なげにしていた手を俺の後頭部に回し、激しく痙攣しながらも腰をこすりつけてくる。尻肉がひしゃげ、膣肉が柔らかく締めつけてくる。今日これまでの射精を忘れたかのように肉幹がどぐんどぐんと力強く脈動して、濃厚な白濁を優美子の子宮にたっぷりと注いだ。
「はぁ、はぁ、はぁ……っ。……ヒキオ、そろそろ上がんない？　あーし、さすがに限界なんだけど……」
「そうだな……すまん、やりすぎたか？」
「……だから、べつにそうは言ってないって」

繋がったままで優美子が振り向き、唇を重ねてくる。俺をフォローして優しく慰めるように頭を撫でてくれた。交わりの疲労感と伴って、心地良い眠気が襲ってくる。
「……上がったら、ちょっと休憩していいか。正直けっこう眠い」
「ふふ、ヒキオ、ほんとに眠そう」
優美子がくすくすと笑い、俺の頬をぺたぺたと触る。どこか母性を感じる仕草。見慣れない魅力に心臓が力強く跳ねた。
「それじゃ、上がるか」
「うん。……ぅあっ、んくぅぅ……っ」
ゆっくりと肉槍を引き抜くと、優美子の上体がくったりと伏せ、ぶるぶると震えた。色っぽい仕草にまたしたくなったがさすがにこらえた。

続く。

（８４）

ふたりともバスタオルだけ巻いた状態で和室に戻ると、丁寧に畳まれている浴衣の存在に気が付いた。
「どうする、浴衣に着替え……優美子？」
振り向くと、なぜか優美子が無性にそわそわしていた。おもちゃ売り場を見つけた子どものように見える。
「ヒキオ、先に着てみて」
「ん？　べつにいいけど……」
なにやらワクワクしつつも、それを必死で抑えたような表情が強烈に可愛い。湯上りの金の髪をくしくしと撫で、彼女が見ている前で浴衣を羽織る。パンツを穿くこともせず、そのまま着ることにした。浴衣はベーシックな縞柄で、『旅館　浴衣』で画像検索するといの一番に出てきそうだ。
「これで良いか……って、んん？」
帯を結んでくるりと振り返ると、優美子はなにやら目をぱちくり、ぱちくり。その頬はほんのりと赤く、湯上りにしてもちょっと赤すぎるくらいだ。
どうしたのかとじっと見つめると、優美子がハッとしてこほんこほんと可愛らしく咳払いをした。ぷいと顔を逸らし、金の髪の毛先を指にくるくると巻き付ける。
「……その、……けっこう、良いんじゃない？」
ちらちらと流し目を送りながら、ぽしょぽしょと感想を言う優美子が可愛すぎて。
「きゃっ。えっ、あっ、ちょ、ヒキオ……っ？」
思わず抱きしめてしまった。ふわりと良い匂いがする。
「すまん、可愛すぎた」
ついでに本音を包み隠さず言ってみると、俺の腕の中で優美子の体温がちょっと上がった。
「あ、あーしも着替えるから……」
俺の腰をてしてしと撫でて、優美子がするりと離れる。金の髪のす

き間からちらりと覗いた耳が赤くなっていた。
浴衣を手に取った優美子が、俺の視線に気付いてジト目で見つめてくる。
「……え、着替えるとこ見るの？」
「さっき優美子も見てただろ」
「う……」
こういう時の正論ってほんとずるいよね！　目には目を、覗きには覗きを。
優美子が呻き、しばし逡巡したが、けっきょく大人しく着替えることにしたようだ。巻いていたバスタオルをするりと脱ぎ、艶めかしく上気した裸体を晒す。ついさっきまでたっぷりと交わっていたというのに、ほんのわずかに時間を置いただけでもう見惚れてしまう。
優美子がするすると浴衣を身にまとい、帯を締めると、襟やら袖やらをちょんちょんと引っ張って微調整した。
「おお……」
思わず感嘆の吐息が漏れる。
和風美人という言葉があるが、金髪と浴衣というのもギャップがあってとても良い。そのうえ、豊満な胸の膨らみや背中からお尻にかけての豊かなラインが浴衣の上からでもよくわかる。
「……ヒキオ、見すぎだから」
見惚れていると、優美子がぽしょぽしょと恥ずかしそうにつぶやいた。とことこと控えめに近寄ってきて、上目遣いで見つめてくる。
「すまん、えーと……めちゃくちゃ似合ってる」
「知ってる。ヒキオ、すっごいガン見してるから」
うぐ……と唸ると、優美子がくすくすと笑った。浴衣姿に控えめな笑みというのもまた良い。きゅっと抱きしめると、優美子もするりと背中に手を回してきた。
「あっ、んん……っ」
背中から腰にかけてすりすりと撫でると、優美子が耳元で色っぽい声を漏らした。
「ヒキオのバカ。休憩になんないし」

「ちょっと撫でてるだけだよ」
「……濡れるんだってば」
ぽしょりと囁かれた言葉にどきりとして、優美子の顔をじっと見つめる。ほんの数十秒ばかり肢体をまさぐっただけで、優美子の目の下がしっとりと赤らんでいた。
「ほら、休憩しよ」
「ん、そうだな……おふぅっ!?」
膨らんだ肉幹をキュッとつままれて変な声が出た。我ながら抜群に気持ち悪い声だ。優美子が顔を逸らしてぷるぷるしている。そんなに？　そんなに面白かった？
「はー、ヒキオ、マジウケる」
「おっ、あっ、ちょ、こら……っ」
けらけらと無邪気に笑う優美子に膨らみの頂をこすられる。丁寧な手つきで焦れったい快感を与えられ、情けないくらいに腰が揺れる。
「……あんまいたずらすると、がっつりお返しするぞ」
「……どれくらい？」
「濡れすぎて着替えないといけないくらい」
「……ほら、休も？」
優美子がすばやく座椅子に座る。可愛い。
ふたつの座椅子を並べると、優美子がこてんとしなだれかかってきた。ごく自然に甘えてくれるのが嬉しい。
「さすがに疲れたな」
「ん……」
優美子の声がずいぶんと幼い。ちらりと横を見やると、目をこしこしとこすっている。内心で悶えつつ、優美子の髪をくしくしと撫でて肩を抱いた。
「ん……っ」
優美子が心地よさそうに息をつき、俺の胸板に頬をこすりつけてくる。間もなくしてすやすやと寝息を立てはじめた。優美子に釣られてくらりと眠気がくる。夕食までまだ少しある。それまでひと眠り

するとしよう。
窓の外を見ると、はらはらと雪が降っていた。もう3月なのにまだ降るんだな……と驚きながら、どこまでも静かな空間に安らぐ。聞こえてくるのは優美子の寝息だけだ。
金の髪に顔をうずめて、俺も目を閉じた。
× × ×
ふたりそろって目が覚めると、ちょうど仲居さんが夕食を持ってやってきた。長旅に加えてがっつり交わったこともあり、肉と山の幸がふんだんに盛り込まれた料理を見てごくりと喉が鳴った。優美子もよほどお腹が空いていたようで、料理を前にして「くぅ」と可愛らしくお腹が鳴った。俺と仲居さんがくすりと笑むと、白い頬にぽっと朱色が差した。俺も優美子も、いつも以上にたっぷりと食べた。
仲居さんに片づけてもらい、ふたたびふたりきりになる。今日の予定は何もない。あとはだらだらするだけだ。
座布団を枕にしてころんと寝転がると、優美子も同じようにして俺の隣に寝そべった。俺の腹をすりすりと撫でてくる。
「美味しかった……」
「だな。また来たいかも」
「ヒキオがそう言うなんてよっぽどかも」
「俺はどんな扱いなんだ……」
ジト目で見つめると優美子がころころと笑う。横向きになった彼女の笑みは気が抜けていて、それでいてどこか色っぽい。
優美子の頭の下に腕を伸ばして腕枕をさせる。優美子は気持ち良さそうに俺の腕に頬ずりをした。
「そういや、前聞いた話なんだけど……男は満腹になると性欲が減って、女の人は逆に増えるらしい」
「へえ、そうなんだ。じゃあヒキオ、今はムラムラしてないの？」
「今は、って言い方が気になるんだが」
「だって年中ムラムラしてるじゃん」
年中ムラムラて。ぜんぜん否定できないけど。
「まあ、まったくする気にならないってほどじゃあないけど……たし

かに満腹になると欲求が少なくなる感覚はあるな」
「ふーん、そっか」
優美子がぽしょりと囁き、俺の浴衣にするりと手をすべり込ませてきた。胸板をすりすりと撫でまわし、乳首をキュッとつまむ。甘やかな快感に身体が跳ね、肉幹がむくりと膨らんだ。
「やっぱりムラムラしてる」
「いや、そんなやらしいイタズラされたらしかたないだろ……」
呆れたように返すと、優美子が楽しそうに笑った。満腹で少し眠いような、それでいてたしかに劣情を催しているような顔。
「優美子は満腹になってムラムラしてるのか」
「んー……そうかも」
のんびりとした口調であっさりと認められ、心臓がどくりと跳ねる。顔を横に向けると、優美子がもぞもぞと近寄ってきた。お互いにいそいそと帯を外し、横を向いて唇を重ねる。
「ん……ふっ、ちゅっ、んふぅぅ……っ」
ちろちろ、ちろちろ、と舌を絡め合う怠惰な口付け。互いの伸ばした舌先をこすり合わせ、俺が優美子の舌を咥えて啜り、それから優美子が俺の舌を咥えて啜る。じりじりと劣情が高まる中、左脚を優美子の脚のあいだにすべり込ませた。俺の動きに応じて、優美子が右脚をこちらに伸ばして密着度を高めてくる。浴衣がめくれて艶めかしい太ももが露わになり、肉茎がさらに力強く張り詰める。
「ヒキオ、すっごいおっきくなってる……」
ねっとりと潤んだ声が耳朶を焼く。胸板を撫でていた優美子の手が下腹部に伸びて、肉槍を直接まさぐった。細指が肉槍をしごくたびに先走り汁が溢れ出て、それが丁寧に竿全体に塗りたくられていく。
優美子が艶っぽく目を細め、肉幹をずるりと引きずり出した。
「もう、がっちがちだし……あん……っ」
優美子の浴衣に手をすべり込ませて豊満な乳房をまさぐると、嬌声を漏らして色っぽく眉をひそめた。乳頭はぷっくりと膨らんでいて、どれほど興奮しているかがはっきりわかる。じっと見つめ合い、互いの敏感な部分をまさぐり合う。

「ヒキオ、満腹だと興奮しないんじゃなかったの？」
「優美子がエロすぎて死ぬほど興奮してる」
唇を重ねる。優美子が俺の上唇と下唇を順番に咥えてなぞり、俺も同じようにする。それから互いの歯列を舌でなぞり合う。互いの口を味わい尽くすような口付け。会話こそほとんどしていないが、静かに高まる興奮で神経が焼き切れそうだ。
「ね、舐めていい？」
耳元で囁かれてぞくりとする。うなずくと、優美子が起き上がって髪をかき上げ、俺の下腹部にしなだれかかった。肉竿をまさぐりながらうっとりと眺め、亀頭をぬるりと咥え込む。
「ん……んふぅぅ……っ」
横から肉竿を呑み込んだ優美子が、髪を耳にかけて口内で亀頭をちろちろと舐める。柔らかな唇がカリ首をにゅむにゅむと締めつけてくるのがたまらない。
「お……あ……っ」
呻くと、優美子が嬉しそうに目を細めた。竿の根元を押さえてゆっくりと亀頭から竿、竿から亀頭へと舌を這わせる。肉茎は今日何度も射精したことを忘れたのかと思うほどに張り詰めていた。
「ヒキオ……気持ち良さそう」
優美子がうっとりとした声で囁き、顔をゆっくりと上下させる。浴衣のめくれた下半身をもじもじとさせているのに気付き、そろりと手を伸ばして下腹部に触れる。
「うあ……っ」
切なげな声が漏れた。優美子の下腹部は熱く、ぐっしょりと濡れていた。恥毛をすりすりと撫で、淫裂を指の腹でくにゅくにゅと揉み込む。
「あっ、やぁ……っ。んっ、ぢゅるっ、んふぅぅ……っ」
優美子が身体を震わせながらも肉幹をしゃぶり続ける。太ももを押して脚を開かせると、浴衣がめくれて女性器が露わになる。濃厚な牝の匂いがむっと立ちこめて、優美子の口内で肉茎がむくむくと膨らんだ。

「ヒキオ、おっきくしすぎだし……んっ、んっ、んっ……」
咎めるような言い方をしながらも、その声はとろとろに蕩けている。優美子の口の中もとても熱い。頬をすぼめて肉竿にぴったりと吸い付き、静かに顔を上下する。左手を伸ばして優美子の浴衣をめくり、左の乳房を露わにした。片方の胸だけ露出した状態にひどく劣情を催す。肉槍がみちみちと張り詰め、優美子の喉を犯す。
花びらをまさぐっていた右手中指に少しだけ力を込めると、柔らかな膣肉にあっさりと呑み込まれた。
「優美子の中、ぐしょぐしょだな」
恥ずかしそうに眉をひそめる仕草にぞくぞくする。指1本でもきついくらいの膣肉は、それでいてどこまでも柔らかい。中指をうねうねと美味しそうにしゃぶりたててくる。指を根元から曲げて膣ヒダをぐっ、ぐっと押し込み、露出した乳房の頂を指の腹でくりくりとこする。
「んふぅぅっ、ふっ、んふぅぅぅ……っ」
肉竿を半分ほど咥え込んだ状態で優美子が止まる。熱く湿った口内で亀頭を舐め回してくるが、感じすぎてそれ以上の行為には及べないようだ。ぐちゅぐちゅ、くりくり、と敏感なところを丁寧にねちっこく責めると、優美子が色っぽく眉をひそめた。
「んっく……はぁっ、だ、め……っ、イク、イク、イク、イク……っ」
肉竿に手を添えた優美子が泣きそうな顔を浮かべ、うつむこうとする。
「イクところ、見せてくれ」
俺の言葉に優美子が目を見開く。戸惑っているあいだも愛撫はやめない。乳頭が張り詰める。膣肉がにちにちと締めつけてくる。肉感的な肢体の震えが増す。優美子の絶頂が近付いてくる。
「やぁっ、恥ずか、しい……っ」
「いいから」
一段低くした声で囁くと、優美子は唇をキュッと引き結び、じっと俺を見つめてきた。
「イっ、く……んくぅぅぅ……っ」

左脚を畳んで俺の右手を締めつけたかと思うと、目を合わせたまま果てた。汗ばんだ肢体をびくびくと波打たせ、大量の愛液が噴き出して手首まで濡らす。小刻みに痙攣しながらも竿の根元の裏側に吸い付いてきて、あまりにも卑猥な光景に先走り汁がたっぷりと溢れた。

しん、と部屋が静まりかえる。優美子の身体はまだ震えていた。

「ヒキオのばか……めっちゃはずいんだから」

「わるい、優美子のイキ顔が好きなもんでな」

正直に告げると、優美子が目をぱちくりとさせ、小声でもういちど「……ばか」とつぶやき、ちゅっと亀頭にキスをした。

「優美子、そろそろ寝室に行かないか。今度は俺が舐めたい」

言いながら、いまだに挿入したままの中指を小刻みに振動させる。ざらついた膣ヒダをくにくにと押し込むと、優美子が唇をきゅっと引き結んだ。

「はぁうぅ……んっ、んっく、……どうせ、だめって言ってもするんでしょ……はぁぁぁ……っ」

しなやかな肢体がかくかくと揺れ、とぷとぷと蜜液が溢れ出す。濃密な女の匂いに興奮がまるで収まらない。

「……わかったから。……布団なら、畳が濡れないで済むし」

優美子がぽそりと囁き、愛撫はもうやめなさいとたしなめるように俺の右手を太ももで挟み込んだ。

続く。

（８５）

寝室のふすまを開けると、広い部屋の真ん中に布団が一組だけ敷いてあった。用意してくれたのはさっき料理を持ってきてくれた仲居さんだと思うが、ちょっとわかりやすすぎやしないだろうか。

「……わかりやすすぎだし」

同じ感想を抱いた優美子に苦笑し、頭をぽんぽんと撫でる。

「あ、そうだ」

準備は大事、ということで踵を返し、冷蔵庫から飲み物を取り出しておく。５００ｍｌの水を４本。２人分だ。水分は大事。

優美子は俺が持ってきた水を見つめ、ぷいと顔を逸らしてしまった。

「……ヘンタイ」

可愛らしい罵りにくすりとする。

枕元に水を置き、行燈型の照明を点けてふすまを閉める。月に雲がかかっていて空は暗く、光源らしい光源は行燈型の照明だけだ。

「なんか、ドキドキする」

布団に脚を流して座った優美子が照れくさそうに呟く。浴衣はふたりとも前がはだけた状態だ。優美子のきゅっと引き締まった肢体に、行燈によって陰影が浮き上がる。影のできた顔はいつも以上に色っぽく、自然と喉が鳴った。

「ヒキオ、興奮しすぎだから」

あぐらをかくと、浴衣の間からにょきりと生えた肉棒を見た優美子がくすりと笑った。

優美子は呆れながらも髪をそっと耳にかけ、唇を重ねてくる。

「ん……っ」

瑞々しい唇と熱い舌の感触に浸っていると、細指がするりと伸びて肉竿を掴んだ。すりすり、しゅる、しゅるしゅる……と優しくいたわるような、それでいてとても淫猥なまさぐりかた。俺も優美子の乳房に手を伸ばす。

「んっ、ふぅっ、あっ、やんっ、あっ、んんっ、くっ、んふぅぅ……っ」

浴衣の内側に手をすべり込ませ、双丘の外縁からすりすりと撫でていく。ほんの数ミリずつじっくりと指の腹をすべり込ませていくと、優美子がたまりかねたように唇を離した。
「はっ、あっ、ぅあっ、……ヒキオのさわりかた、ほんとやらしい……あっ、あんっ……」
「いやか？」
「……わかってるくせに聞くなし」
肉竿をきゅっとつままれた。たしなめ方が可愛いしエロすぎる。
滑らせていた指がぷっくり膨らんだ乳頭に触れると、優美子の整った眉がきゅっとひそめられた。
「あっ、んくぅぅ……っ！」
「声、我慢しなくていいぞ」
「やぁ……はずかし……っ」
「こらえてるときの優美子も死ぬほどエロいけどな」
「な……んくぅぅっ!?」
左右の乳頭を同時にきゅっとつまむと、優美子の嬌声が一段甲高いものになった。晒された首筋にちゅっと吸い付き、ねろねろと舌を這わせる。
「あっ、あっ、やっ、やんっ、だめっ、イっ、ク、イっちゃう、またイっちゃうからぁ……っ」
鼻先が触れ合うほどの距離で優美子が可愛らしく喘ぎ、ちゅっ、ちゅむっと唇を重ねてくる。両手がすがるように肉茎を撫でてきて、なめらかな手のひらに次々とカウパー液が噴き出していく。
「何回でもイってくれ。優美子のイキ顔、エロくて好きだし」
目の前でじっと見つめると、優美子は睨むような、それでいて泣きそうな表情を浮かべた。唇をきゅっと引き結び、がくん、がくんと身体を揺らす。
「イっ……ク、イク、イク、イク、やぁっ、イク……んくぅぅ……っ！」
背を反らし、顔を逸らし、腕で口元を隠してぶるぶると震えた。ちらりと下を見ると、控えめな灯りでもわかるくらい布団が濡れている。ふと横を見るともう一組の布団が置いてあった。ただの予備な

のかもしれないが、寝るときはあっちを使う必要がありそうだ。
　優美子がぼんやりした顔で見つめてくる。寝起きの表情にも似ているが、今はどこか気だるげな色香をまとっている。髪をかき上げ、全身を上気させた優美子が息を荒らげるさまはたまらなく扇情的だ。
「ね、……このまましてると挿れてほしくなっちゃうから……」
　人差し指と親指で肉幹をすりすりとしごきながら、普段ならまず聞けない猫撫で声で囁いてくる。劣情がぐつぐつと煮えたぎる中で、優美子の言葉にはてと首をかしげた。挿れても問題ないのでは……と思ったところで、自分でさっき舐めたいと言ったことを思い出す。
「……ヒキオ。今、忘れてたでしょ」
「うぐっ」
　すぐにバレた。ちょっと腰を引いて距離をとろうとしたが、竿をきゅっと持たれているため逃げるに逃げられない。こんな取り押さえ方があるだなんて……！
「……すまん。お詫びに、より丁寧に舐めます」
「……そこは別に、丁寧にしなくていいし。普段からねちっこいんだから」
「今の言い方にムッとしたので、敏感な場所を徹底的に責めます」
「ちょ、ちょっと、それは……きゃっ」
　肩を掴んで押し倒すと、優美子が可愛らしい悲鳴を上げて目をぱちくりとさせた。枕に頭を乗せる形。浴衣が広がり、垂れることなく上を向いた瑞々しい乳房や陰毛のしっとり濡れた下腹部までよく見える。
「優美子、今日はいつもの5割増しで可愛く見える」
「いつもは可愛くないってこと？」
「言わなくてもわかるだろ」
「言って」
　旅行に来ているからだろうか。ふたりとも普段はこんなこっぱずかしい会話は……してるかもしれない。けれど、遠くに来たことで、いつもよりテンションが上がっていることは間違いない。
「いつもめちゃくちゃ可愛いし綺麗だしエロいけど、今日はいつもの

5割増しで可愛く、綺麗に、エロく見えます」
「……なんでパワーアップしてんだし」
優美子がぷいと顔を逸らす。行燈がすぐ目の前にあるため、頬や首筋の赤らみがよく見える。俺も顔が熱いのでおあいこといえばおあいこだが。
優美子の頭をくしくしと撫で、軽くキスをする。すぐに離れようとすると優美子が抱きしめてきた。浴衣の中に手をすべり込ませ、直接背中を抱きしめてくる。
「んっ、ちゅっ、んふぅぅ……ぁんっ、んっ、んふぅぅ……っ」
身体が密着して張りのある乳房がひしゃげているためか、優美子が鼻の奥で色っぽい声を鳴らす。たっぷり舌を絡めてから離すと、優美子はなぜかちょっと照れていた。
「……あーし、テンション上がってるかも」
「ん、そう見える」
「ヒキオもだけどね」
「……そうか？」
「そうだって。いつもより楽しそうだし」
「マジか」
「うん」
お互いのテンションを確認するというシュールなやりとりをしながら、優美子の足元に座る。ひざ裏をつかんで広げると、優美子は頭の横のシーツを掴んで小さく震えた。下腹部に顔を寄せると、濃厚な牝の匂いが熱気とともにむわっと立ちこめた。
「ここ、舐めてもだいじょうぶか？」
優美子の言葉が返ってくる前に、皮をかぶったままのクリトリスをちろりと舐める。
「んあぅぅっ!?　だ、だいじょうぶだけど……答える前に舐めるなし」
頭をてしてしと優しくはたかれた。
「さっき敏感な場所を徹底的に責めるって宣言しちまったからな。きちんと責めないと」
「一方的に宣言しただけでしょ……」

優美子が呆れながら、なぜか俺の耳に指を入れてしゅりしゅりと撫でてくる。ぴくぴくと反応すると、優美子がくすくすと笑った。楽しそうで何よりです……。
「あっ、んくぅぅ……っ」
クリトリスにちゅっと吸い付くと、優美子の声が甘く蕩けた。皮の上からちょん、ちょんと小突くだけでも、まるで瞬間的に電気を流されたかのようにびくびくと身体が跳ねる。
肉芽の横に中指と人差指を置いて、そっと剥く。薄桜色をした大きめのクリトリスが顔を出した。
「ね、ヒキオ、今、そこ、ほんとやばいから……ぅあっ!?」
ふっと息を吹きかけると、優美子の背すじがくんと反り返った。
「ほんとにやばそうだな。じっくり責めるとしよう」
「うぅぅ……ヒキオのヘンタイ……っ」
身体をくねらせながら罵ってくる仕草にぞくぞくする。嗜虐心を煽る行動だと優美子は気付いているんだろうか。
「あっ、あっ、あっ、あっ」
クリトリスに連続で強く息を吹きかけると、優美子が壊れたような声を漏らした。ぷっくり膨らんだ肉芽を親指でそっと撫でながら、ぐっしょりと濡れた花びらに口づけをする。
「んくぅぅ……っ！　あっ、やっ、だめっ、それ、気持ち良すぎるからぁ……っ」
「それ、ってどれのことだ」
「やぁ……調子、乗るなぁ……っ」
涙混じりの声にぞくぞくする。優美子は口でこそ抵抗しているものの、もっともっとせがむように下腹部を押し付けてくる。花びらを舌でなぞり、膣口にぐりぐりと押し込む。クリトリスへの慎重な責めは続けたままだ。
「あっ、やっ、だぁ……イっ、イク、またっ、すぐっ、イっ、あっ、ぅあっ、はっ、はぁぁぁ……んくぅぅっ！」
優美子の身体ががぐん、と強烈に波打つ。膣肉に埋め込んでいた舌がにぢりと締めつけられた。

「優美子、ほんとにエロい」
「言わなくていいから、ばかぁ……っ」
とろとろになった声で悪態をつきながら、優美子が上体を起こす。後ろ手をついて俺の顔に両脚を巻きつけてきた。
「むぉっ？」
予想外の柔らかな締めつけに間抜けな声を漏らすと、優美子はクリトリスに触れていた俺の手をぺちぺちと弾いた。
「口だけで……して」
唐突なリクエストに驚くが、言われたやり方のほうがお互い興奮する気がした。素直に手をクリトリスから離す……前にもう数回だけすりすりと撫で、優美子の嬌声を楽しんだ後で今度こそ離す。弾力のある太ももに手を添え、膣内をねろねろと舐めていく。
「あっ、んっく、ふっ、あっ、あんっ、あっ、はぁっ、はぁぁぁ……っ」
視界が濡れた下腹部で満たされているので顔は見えないが、優美子は明らかに感じていた。羞恥や抵抗の色が薄れ、積極的にぐいぐいと下腹部を押し付けてくる。かろうじて呼吸をするたびに濃密な牝の匂いが鼻腔に流れ込んでくる。意識が心地良く朦朧となっていく感覚。
「ね、ヒキオ、そこ、吸って、いいから……っ」
掠れた声で優美子が囁いた。目の前にはひくひくと震えるクリトリス。何度もイってさんざん敏感になっている状態でそんなことをしてだいじょうぶか……とは思ったものの、いつになく昂ぶった優美子が言っているのだから問題はないだろう。
肉芽を口に含み、ぢゅっと吸い上げた。
「うあっ」
ごく短い声が漏れ、優美子の身体が硬直した。直後激しい痙攣を起こし、また硬直する。
もう一度吸い付く。優美子は声も出さないままにもう一度震えた。もう一度吸い付き、ぐりぐりと舌で押しつぶすように刺激した。優美子は俺の顔を挟む太ももにぎりぎりと力を込めたまま、何度も達した。あるいはずっと達したままだったかもしれない。

「だいじょうぶか？」
　太ももの力が緩んだので顔を離す。優美子は俺の質問が聞こえていないのか、後ろ手をついたままでぼーっとしていた。ペットボトルを上気した頬にぺとりと当てると、よほど冷たかったのか「きゃっ？」と可愛らしい悲鳴が漏れた。
「だいじょうぶだけど……やばいかも」
「前半は体調がだいじょうぶってことか。後半は？」
「……あーし、今日、ほんとにエッチになってるかも」
「何を今さらむぉっ」
　鼻をつままれた。
「ヒキオ、立って」
「へ？　なんで……」
　とりあえず立ち上がると、肉竿をぱくりと咥え込まれた。俺が何か言葉を口にする間もなく、亀頭にねろねろと舌を這わせてくる。
「お……あ……ちょ、優美子……っ」
　よろけて後ろに1歩下がるが、優美子は頬をすぼめて吸い付いてくる。今すぐにでも口内射精してしまいそうだ。しても問題はないのだけれど、今は猛烈に優美子の中に出したい。顔をつかんでぐぐぐと引き離すと、優美子は最後まで内頬をぴったりと竿に貼り付けて抵抗した。
「さっきのおかえし」
「いや、さっきは優美子からねだってきただろ……」
「……それは気のせいだから」
　ぷいと顔を逸らす。思い出して恥ずかしくなったのだろうか。
「今日の優美子はいつになく積極的で最高だと思います」
「なんで敬語だし……」
　言いながら、俺が優美子の浴衣を脱がし、優美子が俺の浴衣を脱がす。相手の浴衣を脱がす間に唇、首筋、乳首とキスをしていった。きちんと取り決めをしたわけでもないのに、まるで「こうすることでお互い興奮が高まるよね」と確認するかのような行為。当然、ふたりとも劣情が高まりきっていた。

向かい合って座る。うつむいた優美子の顔は暗くてよく見えないが、まるですがるように肉竿をきゅっと握ってきた。
「……するか」
「……うん」
今までどころか今日これまでもたっぷりしているはずなのに、まるで初めてするときのような期待と緊張が漲っていた。

（８６）

「どうやってする？」

向かい合って座った状態で尋ねると、優美子はどういうわけかこちらに背を向ける形でころんと寝ころんだ。え、ここにきてボイコット？

「……色々、やってみたい」

どうやらボイコットではないらしい。

「ん、りょーかい」

横向きで寝ころんだ優美子を後ろから抱きしめる。左手を優美子の左ひざの裏に滑り込ませ、そっと持ち上げた。

「このやり方はあんま慣れないから、ちょっと押さえてくれてると助かる」

「……ん」

ぽしょりと返事をした優美子がそろりと指を伸ばし、亀頭をちょんとつまむ。そのままふにふにと揉まれてちょっと和んだ。

いつもと勝手が違う、いわゆる側位と呼ばれる体位。突き入れる角度も違うので、優美子の指の動きに従いつつ、ゆっくりと肉槍を挿入する。

「あっ……はぁぁぁ……っ」

優美子が背を反らし、たっぷりと吐息の混じった声を吐き出す。膣内はぐっしょりと濡れていて、熱くて柔らかい。徐々に肉茎を挿れながら、途中で何度か軽く腰を振る。ぬぷぬぷといやらしい音が鳴って、優美子の腰がひくひくと揺れた。

「優美子、痛くないか？」

「ん……だいじょうぶ。てか、気持ち良い……あっ、んっ、あぁぁぁ……っ」

くつろいだ体勢だからなのか、優美子はとてもリラックスしているようだ。

「女性は緊張と緩和で興奮するらしいな」

「ん、なに急に……あっ、んっく、んふぅぅ……っ」

肉幹が根本まで埋まる。優美子の艶めかしい肢体は絶えず小刻みに震えている。汗ばんだ背中をちろりと舐めると、ひざ裏を掴んでいる俺の手をすがるように撫でてきた。
「今日みたいに旅に出たりすると、慣れない土地に少なからず緊張するだろ。それでこうして部屋に来ると安心して濡れやすくなって……なんていう仕組みがあるらしい」
「……言われてみれば、そうかも」
と言っても、移動中のバスで舐めてもらったりもしてるわけだが……とは言えなかった。それでもやはり、旅館に到着してからのほうがやはり安心して互いの身体を味わうことができている。
「だから優美子もいつも以上に濡れやすいのかもな」
「……余計なこと言うなし」
膣肉がぎゅっと締め付けられた。変な声を出してしまうと、優美子の金髪がぷるぷると揺れた。どうやらウケたらしい。
優美子がなんとはなしに左腕を上げると、綺麗な腋が露わになった。滑らかな肌に吸い寄せられるように口付けると、優美子がびくりと反応した。構わずちろちろと舌を這わせる。かすかなしょっぱさが口内に広がり、慣れない行為による背徳感がちりちりと背すじを炙る。
「やぁ……どこ舐めてんの、ヘンタイ……っ」
優美子が可愛らしく罵りながらも身をよじる。けれどそれだけで、目立った抵抗も文句を言ってくることもない。
「んっ、んぁっ、あっ、はぁぁぁ……っ」
ちろ、ちろと腋に舌を這わせていくと、優美子の身体から徐々に力が抜けていく。代わりに膣肉が切なそうに引くつき、根本まで埋まったまま止まっている肉茎をにゅちにゅちと締めつけてくる。
「ね、ヒキオ……そろそろ、動いて？」
首だけ振り返って、まるで内緒のお願いをするかのように囁かれる。普段の彼女から想像もつかないほど可憐で甘ったるい声。この声を自分しか知らないという事実が、たまらなく嬉しい。
わかった、とかすれる声で返事をして、ゆっくり腰を振り始める。

「あっ、んっ、はぁうっ、んっく、んふぅぅ……っ」
体位が体位なので、あまり速く腰を振ることはできない。そのため、まるで愛液の粘り気や溢れ具合を確かめるかのようなねちっこい腰遣いになる。
「あっ、やっ、んっ、ねっ、ねぇっ、ヒキオぉ……これっ、すごっ、だめっ、あっ、あっ、あっ、あっ……」
首だけ振り向いた優美子の顔は泣きそうに歪んでいる。たまらなく色っぽい表情に嗜虐心がくすぐられた。より感じる場所を探ろうと抽送の角度を探っていると、ちょうどお腹の裏側を突いたところでひときわ大きく反応した。
「ぅあっ!? あっ、そっ、そこっ、んっく、あっ、はぁぁ……っ」
「気持ち良いか?」
尋ねながら同じ場所を責める。少し角度や突く強さが変わればそれだけで優美子の感じ方が変わる。慎重に探って、優美子の反応が一番大きいやり方を見つける。
「うぁっ、う、うん……あっ、そこっ、いっ、すごく……あっ、あっ、あっ、だめ、これ……イク、イク……うんんっ!」
優美子の身体がぎゅっと丸まり、それから弾けるように反り返った。優美子の後頭部がぐっと近付き、危うく頭突きをくらいそうになる。
「ここが特に良いみたいだな。それじゃこっちも責めてみるか」
左ひざ裏を掴んでいた手を離し、挿入したままで今度は優美子の下腹部に手を伸ばす。クリトリスにそっと触れると、優美子の身体が通電したかのように跳ねた。
「あっ、だめっ、今そこいじっちゃ、やぁ……んくぅぅっ!?」
肉芽を指でぐりりと押し込むと同時に、肉槍をお腹の内側にぐりりと押し込んだ。引き締まった身体ががくがくと波打ち、結合部にどろりと熱い液体の感触がする。肉槍は食いちぎられそうなくらいに締め付けられていた。
「まだまだいくぞ」
「やっ、今イったばっかだって……あっ、ぅあっ、はっ、はぁぁぁ

……っ」
抽送の速度を少しだけ上げる。優美子はクリトリスを愛撫されることでさらに反応が大きくなり、金の長い髪が布団の上でうねうねと揺らめく。まるで美しい蛇のような光景に見惚れながら、ぬちゅ、ぬちっといやらしい感触のする膣内に何度も何度も肉幹をねじ込む。
「イっ、イクっ、またっ、あっ、あっ、あっ、ぅあっ、んくぅっ！」
優美子がぎゅっと背を丸めて果てる。まるで過度の快感から自分を守るような行為。嗜虐心がちりちりと炙られる光景にごくりと喉を鳴らし、クリトリスへ加える圧を強める。
「ひぐぅぅ……やっ、やぁぁ……イっ、イクっ、また、イク……っ」
「もうイクのか？　さっきイってから1分も経ってないぞ」
「だって、やっ、気持ちよすぎっ、あっ、やだっ、ヒキオ、そこだめっ、トントンってしないでっ、だめっ、イク、イク、イク、イク」
本当に1分としないうちに優美子が果てる。じっとりと汗ばんだ肢体は、まるで平常時の感覚を忘れているかのように震えっぱなしだ。
優美子の膣から肉槍を引き抜く。カリ首が膣口から抜ける際にびくんと震えたが、言葉を発することはなかった。
「今度は後ろからさせてくれ」
優美子の腰を掴んで持ち上げ、その後ろに立つ。行燈型の照明の控えめな光を、優美子は頭から受ける形になっている。うつむいて表情はわからないが、陰影のできた彼女の背中と尻はぞっとするほどの艶を孕んでいた。
何も言わずによつんばいになる彼女を見て少し心配になったが、肉槍を花びらに押し付けるとねだるように腰をくねらせた。静かに荒らげた呼吸が、一刻も早い挿入を期待しているかのように見える。
ぐっと腰を突き出すと、肉槍はあっさりと膣内に入り込んだ。
「うあぅぅぅう」
理性がちぎられて捨てられたかのような、獣性混じりの喘ぎ声。両手で布団をぎちりと握りしめ、優美子の両手に吸い寄せられるようにしわが生じる。

「優美子、だいじょうぶか」
聞きながらゆっくりと挿入していく。側位に比べればずっと慣れている体位なので、一気に挿れてしまおうと思えば簡単に挿れることができる。けれど、今はこの焦れったい時間をもっと楽しみたかった。
「んっ、んっく、だい、じょう、ぶ……あっ、はぁぁぁ……ぜんぶ、入ったぁぁ……っ」
肉槍が根本まで埋まり、優美子の最奥をぐりぐりとこする。優美子は力の抜けた、それでいてどこか嬉しそうな声を漏らし、両ひじを布団につけた。くったりと脱力した背中と、根本までつながった結合部に影が差す光景に目を奪われる。
「……いつも楽しいとは思ってるんだけど、今日は本当に楽しいかもしれん」
ぽそりと囁くと、優美子がのろのろと振り返った。
「……やっぱテンション上がってんじゃん」
弱弱しい声でいたずらっぽく囁くと、膣ヒダがからかうように肉幹を締め付けてくる。蠱惑的な反撃にびくりびくりと腰がわなないて、膣内に先走り汁があふれる。
「んぅぅ……っ、ヒキオ、中、ぬるぬるしてる……っ」
「わかるもんなんだな」
「ん……っ。いつもより感じやすくなってるから、余計にそうなのかも」
少しだけ恥ずかしそうに呟き、大きくも引き締まった尻をふりふりと揺らす。遠慮なくがしりと掴んで、ゆっくりと腰を振り始めた。
「あっ、んっ、んっく、はぁっ、ぅあっ、はっ、はっ、はぁぁ……っ」
規則正しく嬌声が漏れる。自分が一突きするたびに細かく痙攣して感じてくれていることが嬉しくてしかたがない。尻肉を割り開き、ひくついた肛門を見つめる。
「やぁっ、そこ、見んなし……っ、あっ、んっ、あっ、あっ、あっ、あっ」
右手親指でアナルをふにふにと押しながら、左手で背中をつつっと撫でる。膣ヒダが柔らかく食い締め、足の指が丸まり、尻肉がぎゅっ

と寄った。
「あーし、ほんと今日どうしたんだろ……。感じすぎだし……ぅあぁうっ!?」
ふたたび尻肉を掴み、抽送の速度を一気に上げた。完全な不意打ちに優美子の声が可愛らしく上ずる。
「だっ、めっ、ヒキオっ、そんなっ、はげしくっ、すんなぁっ……イっ、イク、またイクからっ、イっ、く……んくぅぅぅ」
顔を枕に突っ伏し、汗ばんだ背中に痙攣のさざ波が走る。力尽きたのか、そのままずるずると上体を前に滑らせ、うつ伏せに寝ころんでしまった。俺は繋がったまま、腕立てのような体勢でゆっくりと腰を振る。
「ひぐっ、あっ、んくっ、ぅあぅぅぅ……バカっ、ヘンタイぃ……あっ、ぅあっ、んくぅぅぅ……っ」
斜め下に打ち下ろすようにどすどすと突く。優美子の中はもうぐずぐずに蕩けていて、何をしても感じ、どう責めてもたやすく達してしまうのではと思えた。
「すまん、ちょっと優美子がエロすぎるから止められん。もう少しで出そうだから、このまましていいか」
優美子が枕に顔を突っ伏したままでこくこくと頷く。行燈型の照明に照らされた背中にはぷつぷつと珠の汗が浮いていた。無性に触れたくなり、優美子に上から覆いかぶさる。優美子の背中は熱く、たっぷりとかいた汗に触れると不思議と心地が良い。
「……重いんだけど」
咎めるような口調で囁きながらも、俺と両手をつなぎ、指を絡めてくれる。ゆっくりとねちっこく腰を振ると、優美子は枕から顔を上げて気だるげに喘いだ。
「ヒキオ、そろそろ出そう？　おっきくなってきた」
「ああ、もうちょいで……うぐっ？」
この速度でこの角度ならあと少しで出るな……などと冷静に考えていると、肉槍が根本から締め付けられた。
「あの、優美子さん？　ちょっといたずらがエロすぎると思うんです

が……」
　不意打ちで計算が簡単に吹き飛ぶ。もういつ出してもおかしくないくらいだ。
「ヒキオのがよっぽどエロいし鬼畜だから。あーし、もう何回イったか数えらんないし」
「優美子が感じやすすぎるからだと思うけどな」
　つないでいた手をほどき、優美子の乳頭を左右同時ににちりとつまむ。
「うあっ」
　優美子がくんと背を反らして震える。離れた背中にすかさず密着して、ぎちりと抱きしめた。蜜肉が柔らかに痙攣する中で何度か抽送をすると、濃密な白濁が尿道をせりあがってきた。
「優美子、出る、出る、出る……っ」
　達したままの優美子の熱い膣内に大量の精液を注ぐ。どぐっ、どぐんっと強烈な脈動に意識が明滅する中、優美子の膨らんだ乳頭を指の腹でにちにちとこすった。優美子は声を発することもないまま、脚をバタつかせてはびんと伸ばすのを繰り返した。
　息を荒らげながら肉槍を引き抜く。たっぷり射精したはずなのに、愛液と精液で濡れ光る性器はまるで硬度が衰えていない。本当にどうしたんだろうな、今日は……と思う。
「……優美子。してもらっていいか？」
　うつ伏せでぐったりとしている優美子を横向きにして、顔の横にひざ立ちになって肉槍を差し出す。優美子は虚ろな目をしながらもすんすんと鼻を鳴らし、整った眉をちょっとしかめた。金の髪を耳にかけ、亀頭にチュッと口づけをしてくれる。
「ん……っ、ちゅぴっ、んっ、んふぅぅ……っ」
　ふたりの性液がまとわりついた亀頭をぱくりと咥え込み、口内でねろねろと舐めまわす。気だるげながら確実に快感を与えてくる口淫に腰がぶるぶると震え、内ももがこわばる。
　優美子は玉袋にそっと手のひらを添え、愛おしそうにふにふにと揉みながらたっぷりと舐めてくれた。瑞々しい唇が離れると、肉竿は優

美子の唾液で濡れ光り、硬度はさらに増していた。
「ヒキオ、元気すぎだから……。……まだまだ、するんでしょ？」
「いやか？」
「……その聞き方、ずるいんだけど」
肉竿を人差し指で左右に弾かれる。ぴこーんぴこーんという感じ。
「すまんすまん。……俺はまだまだしたいんだけど、優美子は？」
「ん……したい、ってか、する」
小声で囁いて、もういちど亀頭をぱくりと咥える。照れ隠しにしてはエロすぎないか……と思いつつも、今にも眠りそうな顔で肉槍を舐る表情に見惚れ、鈴口を舌先でぐりぐりとほじくられて悶絶した。

続く。

（８７）

仰向けになると、優美子が俺の腰にひざ立ちで跨った。何度もイったためか、その動きはまるで寝起きのように気だるげで、下がったまぶたが色っぽい。

「ヒキオ、かたい……」

優美子が肉竿を人差指と中指でちょんとつまみ、ぽしょりと呟く。行燈型の照明の控えめな光が、起伏に富んだ身体に艶めいた陰影を生んだ。

「んん……っ」

膣口に肉茎をあてがい、ゆっくりと腰を沈めていく。整った眉が悩ましげに歪む。膣内は柔らかくて熱い。にゅるにゅるとした卑猥な感触に根本まで呑み込まれ、心地良い重みで身体が布団に沈み込む。

「はぁぁ……っ」

俺の腹に手を置いて、優美子が悦楽混じりの息を深々と吐く。ぴったりと密着した下腹部でふたりの陰毛が絡まりあっていた。

「さっきはヒキオにやられっぱなしだったから、今度はあーしの番ね」

「ん、あいよ」

俺の手首を掴んでぷらぷらと揺らす。え、なんですのん？

「手で反撃するのも禁止」

「こういう風にか」

指先で乳頭をそっと撫でると、優美子が唇をきゅっと引き結んで顔を逸らした。膣ヒダがにちりと締まる。

「……すぐそういうことする。ヘンタイ」

「しょうがねぇだろ、優美子がエロすぎるのが悪い」

俺の腰を挟む太ももに力がこもり、肉幹が根元から締めつけられた。「うぐっ」と情けない声が出る。

優美子は俺の手を布団にぺいっと放ると、腰をゆっくりと前後に振りはじめた。

「んっ、んっ、ん……っ」

膣内をぴったりと埋める男性器の感触を確かめるような動き。蜜

肉はますます柔らかくほぐれ、角度を変えて抉ってくる肉槍を美味しそうに食い締める。
「ヒキオ、ぴくぴくしてる」
「そりゃあな。反撃もできないし」
「……掴みながら言うなし」
　気付いたら優美子の尻を掴んでいた。弾力に飛んだ肌に指が食い込む感触が心地良い。
「ヒキオ、あーしの身体触るの好きだよね」
「ん、優美子も俺の身体よく触るだろ。お互い様だな」
「……べつに、そんなことないし」
　会話しているあいだも俺の腹を撫でていることにツッコんでいいんだろうか。
「んっ、あんっ、んっ、んっ……」
　会話が途絶え、代わりに優美子の切迫した息遣いが耳朶を打つ。荒々しい打擲音の代わりに鳴る、ぬちゃぬちゃといういやらしい結合音。絡まり合ったふたりの陰毛に白い泡が付着する。
「優美子、俺も猛烈に触りたいんだけど……だめか？」
「……好きにすれば」
　呟く優美子の肌は熱くなっている。興奮が高まり、一方的に責めているだけでは我慢できなくなったのかもしれない。
　尻肉を指の腹でさわさわとまさぐり、それから乳房に手を滑らせ、下から掬うように揉む。下乳には汗が溜まっていた。
「うんんっ、あっ、あっ、あっ……」
　優美子が身体をしなやかに反らす。すがるように俺の手首を掴み、そのまま腰を前後に振る。優美子の顔に苦悶にも似た悦楽の色が浮かぶ。まだかすかに羞恥が混じった控えめな表情に背すじがざわつく。
「優美子、ちょっと強めに行くぞ」
「え……ぅあぅぅっ!?」
　乳房を鷲づかみにすると同時に下から強く突き上げた。優美子が白い喉を突き出し、小刻みに痙攣する。こちらまで伝播するような強

烈な絶頂の痙攣。陰影の浮き上がった肢体が果てるさまは、純粋に綺麗だなと思った。
「ぼ、かぁ……動けなくなったし……っ」
泣きそうな表情を浮かべ、俺の手首を甘えるように撫でてくる。指の甲にちゅっとキスをしてくる仕草は、まるで服従を誓っているかのようで嗜虐心をそそられた。
「ちょっと体勢を変えるか」
今にも崩れ落ちそうな優美子の腰を支え、上体を起こす。あぐらをかいて股座に優美子を座らせ、対面座位の形にした。
「んぅ……っ、深い……っ」
ますます密着が強まると、優美子がきゅっと眉間に皺を寄せ、四肢を巻きつけてきた。甘えるような可愛らしさと、牡を貪る牝としての本能が混じりあったような仕草。
「汗かいたな……」
布団の横に置いたペットボトルの水を飲む。優美子は俺の肩にあごを乗せてふにゃりと脱力している。可愛い。
ちょっとしたいたずら心で、水を口に含んで優美子を見つめた。意図を察した優美子は、抵抗する気力もないのかあっさりと唇を重ねてきた。口内の水を流し込むと、優美子がちゅるりと吸い込んで細喉をこくりと鳴らす。
「……足りないんだけど」
まさかの注文だった。しかし乗り気になっているのは嬉しいので、水を口に含んで優美子の喉に流し込む作業を何度も繰り返す。
自分が飲んだ分も合わせて、ペットボトルの水が半分ほどまで減った。ペットボトルを置いても、優美子はもっと飲ませろとせがむように唇をちゅっ、ちゅっと合わせてくる。え、なにこの子、可愛すぎません？
優美子の尻を掴んでゆっくりと前後に揺する。
「んっ、んっ、あっ、ぅんんっ……」
緩やかな刺激。優美子が耳元で吐息混じりの嬌声を漏らす。
「優美子の喘ぎ方って、やたらと可愛いしエロいよな」

「……言わなくていいから、ばか」
耳たぶをあむっと咥えられる。ふたりとも本当にテンションが上がっているなぁ、と思った。
ぬっち、くちゅ、にゅぐ、にゅる。
ふたりの吐息しか聞こえない静かな部屋の中で、いやらしい結合の感触に浸る。
「ね、ヒキオ……」
「ん、どうした」
「イっちゃいそう……」
「そうか」
尻を掴む手に力を込め、前後動を加速する。それに合わせてわずかながら腰を振る。
「あっ、ぅあっ、あっ、あっ、あっ、あっ」
優美子も四肢で俺を強く抱きしめ、腰振りに合わせてぐりぐりと下腹部をこすりつけてくる。
「俺もイキそうだ」
「んっく、あっ、ふぁっ、……じゃあ、いっしょにイこ？」
耳元で囁かれた掠れ声に背すじが甘く痺れる。膣内で肉茎が膨らんだのがわかった。
「あっ、あっ、あっ、あっ」
優美子が同じように喘ぎながらも、少しずつ声が上ずっていく。膣ヒダがぐねぐねと貪欲にうねり、射精欲求がみりみりと湧きあがってくる。
「優美子、出すぞ……っ」
「あーしも……ぅあっ」
ひときわ強く腰を打ちつけると、膣奥にこすりつけた亀頭から勢いよく精液が飛び出した。優美子は俺の背中に指が食い込むほど強く抱きつき、頬を頬をこすりつけて大きく震えた。
絶頂の余韻が収まっても、抱き合ったままだった。
「ヒキオ、出しすぎだから……。底なしなの？」
「いや、もうさすがにしんどいぞ……んむっ？」

優美子が唇を重ねてくる。気だるげに舌を巻きつけ、ゆっくりと唾液の交換をする。
結合を解くと、後ろ手をついて天井を仰ぐ俺の股座に優美子が腹ばいで寝ころんだ。硬度を失っててろんと垂れた肉竿をじーっと見つめている。
「ほんとだ、元気ない」
「今日はもう数えきれないくらい出したからな」
「たしかにそうかも」
淡々と会話を交わしながら、優美子が俺の太ももに両手を添え、ぐったりとした肉竿をぱくりと口に含んだ。
「んふぅぅ……んっ、ちゅっ、れるっ……」
「お……おぉぉ……っ」
ふたりの性液をたっぷりとまとった竿を、色っぽく眉をひそめながらねろねろと舐め上げていく。亀頭と包皮の間に舌を挿し込まれ、甘い快感に腰がかくかくと揺れる。
「んふー？」
温かな口の中で肉幹がむくむくと膨らむと、優美子が可愛らしい声を上げて目をぱちくりとさせた。優美子が俺を見ていたずら成功とでも言わんばかりに目を細め、硬さを取り戻した竿にぬるぬると唇をすべらせる。
舌が亀頭に巻き付き、カリ首を瑞々しい唇がにゅむにゅむと締めつける。
ぬぽんっ、と優美子が口を離すと、しっかり勃起した肉茎は唾液でてろてろと濡れ光っていた。
「……もう1回くらいできそうだけど？」
「誰かさんのおかげでな」
金の髪をくしくしと撫でると、優美子の目元がふにゃりと優しくなった。
「優美子は可愛いな」
「……急に言うなし」
「じゃあ宣言するといいのか」

「それはそれで恥ずかしいから……」
ウブな会話をしているが、優美子はそのあいだも裏スジに根元から先端にかけて丁寧にキスをして、固めた舌先で小突いている。穏やかな刺激に肉槍はますます張り詰めていた。
「それじゃ、もう1回するか」
「うん」
優美子が身体を起こし、ひょいと抱きついてくる。すべすべの背中を撫でながら、愛情をたしかめるようにキスを交わした。

続く。

（８８）

優美子が仰向けになり、そっと脚を開く。陰毛は汗と精液と愛液が絡みついて白く泡だっていた。

「……あんま見んなし」

「いや、その、なんだ……俺ら、本当にヤリまくってんだなって」

優美子がぷいと顔を逸らし、俺の腰をてちてちと蹴った。恥ずかしがりはすれどやめる気はないらしい。

「じゃ、いくぞ」

肉茎の根元を支えて膣口に切っ先をあてがう。腰をほんの少しだけ進めると、熱く柔らかな膣肉に亀頭がぬるんと埋まった。

「んっく、ふっ、んふぅぅ……っ」

優美子が白い喉を晒し、綺麗な首に筋を浮かべる。顔の横のシーツを掴んで、切なげな瞳でじっと見つめてくる。徐々に前傾して肉槍を挿入していき、膣奥に亀頭をぐりぐりとこすりつけた。

「はぁっ、あっ、んんっ……ヒキオ、なんでまだこんなに硬くて、太いんだし……あっ、あっ、あっ、あっ」

ゆっくりと抽送を開始すると優美子の瞳がぼやけた。うっすらと開いた口がひどく色っぽい。

優美子のひざ裏を掴み、腰を少しだけ持ち上げた。

「え……あっ、やぁっ、これ、恥ずかし……っ」

優美子の顔が羞恥で赤らむ。瑞々しい唇をきゅっと引き結び、ぬこっ、ぬこっと肉茎が侵入してくるたびに艶っぽく眉を寄せる。

「エロくてめちゃくちゃいいぞ」

「ばか、ほんとばか……っ、あっ、やんっ、あっ、んっく、ふっ、んぅぅ……っ」

結合部が丸見えの状態で、斜め下に突き入れる形。互いの下腹部が密着するたびに優美子の声が甘く蕩けていく。恥ずかしそうにしていても、顔の横のシーツを掴んで決して顔を隠そうとはしない。

「うぅぅ～……だめっ、ヒキオっ、まってっ、ほんとに……やぁんっ」

優美子が今にも泣きそうな顔で可愛らしく睨んでくる。

「痛いか？　それならすまん、すぐやめる」
「ちっ、ちがっ、そうじゃなくてぇ……あっ、はぁっ、はぁうぅ……っ」
　まるでおねだりしてもおもちゃを買ってもらえなかった子どものような表情。結合を解こうとくねくねと腰をよじるさまがかえって淫猥だ。
「痛くないなら続けるぞ……っと」
　抜けるぎりぎりまで優美子が腰をねじったところで、一気に膣奥までねじ込む。
「あぁうぅ……イっ、く……っ」
　優美子がしなやかな肉体を弓なりに反らせた。膣ヒダがにゅぢ……っと心地良く締まり、宙に浮いたつま先がぐっと丸まる。
「なんだ、イキそうだったのか」
「……言う前にイカせんなし。ばか」
　俺の手の甲をきゅっとつねる。まったく痛みのない、可愛らしい反撃に頬が緩む。
「ヒキオ。んっ」
　優美子が両手を伸ばしてくる。ひざ裏から手を離して抱きつくと、優美子が俺の背中をぺしぺしと叩くように撫でた。
「……次イクときはいっしょだから」
「……はいよ」
　そのつもりなら先に言ってくれよ……とも思ったが、優美子自身が思っている以上に感じやすくなっているのかもしれない。汗ばんだ金の髪を撫でゆっくりと腰を揺らす。
「んっ、んっ、んっ、んっ……」
　吐息混じりの嬌声が耳をくすぐる。柔らかな首筋に唇をつけ、じっとりと浮かんだ汗を舐めた。
「やぁっ、ヒキオのばか、ヘンタイ……っ」
　甘ったるい声でなじりながら、俺に四肢を絡みつけてくる。背中の筋肉をたしかめるようにさすり、俺の肩をちろちろと舐めてくる。俺とやってること変わらないですよね？
　ふたりの息遣い以外、何の音も聞こえない。外界から隔離されたよ

うな空間で、ひたすら優美子の身体と心を味わっている。その感覚がたまらなく幸せだ。
もう少しでイキそうだな……と思っていると、優美子が俺の頬をそっと撫でた。抽送はぬこぬこと気だるげに続けられたまま。
「ね、ヒキオ……」
「ん？」
優美子がおでこをこつんと当ててくる。まつ毛さえ触れ合いそうな至近距離。
「……好き」
それは、ほとんどが吐息で作られた声だった。けれど、今まで聞いたどんな大音声よりも、耳朶の奥の奥、脳の奥の奥を揺さぶった。
身体の最奥までつながっているのに、まるで優美子から告白して俺の返事を待っているかのように、真摯で切ない瞳で見つめてくる。
「……俺も、好きだ」
顔を逸らしてごまかすことをせず、まつ毛が触れ合いそうな距離のままで好意を告げる。優美子が目をぱちくりとさせ、それから嬉しそうに笑った。
「……こんだけのことしといて、ただの『好き』なの？」
「……顔赤いぞ、優美子」
「あーしが質問してんだけど」
優美子が巻きつけた脚にぎゅっと力を込め、ぐりぐりと恥骨をこすりつけてくる。肉体で繋がりながら、その手前の行為であろう恋慕の情を告げるというだけのことがどうしてこんなに恥ずかしいのか。
身体が発火したように熱い。ええい、ままよと開き直った。
「……大好きだ。つうか愛してる」
「へ……っ」
優美子の頬がぽわわんと赤らむ。赤面の向こう側って感じだ。熱でもあるんだろうか。
俺からとっさに顔を逸らし、せわしなく横目で見つめてくる。何だこの可愛すぎる生き物は。
「えっと、その、ちょっと、今のは予想外っていうか……」

「ほーん？　そうかそうか。それじゃあ、優美子さんのお気持ちは？」
「え……あんっ！　あっ、こっ、こら……っ、あっ、やんっ、あっ、あっ、あっ……」
羞恥やら何やらで優美子の顔がふやけているのを見つめながら、ぐっぐっぐっと腰を押し込む。逃げようと四肢が暴れるが、きつく抱きしめられて逃げるに逃げられない。まさに鬼畜の所業である。
「だ、め……っ、こらっ、イクっ、イっちゃうからぁ……やだぁ……いっしょじゃなきゃ……っ」
唇を耳にぴったりと押し当てられて囁かれる、とびきりの糖度をまとった言葉。色気と可愛らしさがぐつぐつに煮詰められた声に鼻血が出そうになった。
「……すまんすまん。それで？」
腰の動きをゆるめはするが、完全には止めない。おでこ同士をこつんとぶつけると、優美子の儚げな吐息が鼻腔をくすぐる。
伸ばした舌先でじゃれあっていると、優美子が「うぅ……っ」と恥ずかしそうに唸った。本当に恥ずかしそうだ。
「1回しか言わないから。ぜったい聞き逃すなし」
「すまん、もしかしたら聞き逃すかもしれん」
めっちゃ睨まれた。ちょっと恐かった。
「……ちゃんと聞くから」
真剣に囁く。
「……それはそれで恥ずかしいんだけど」
「俺はどうすればいいんだ」
禅問答のようなやりとりをしていると、優美子が深く呼吸をした。その表情は驚くほど柔らかく、穏やかだった。
「……あーしだって、ヒキオのこと、大好きだし、……ていうか、あ、あい、愛してるし……」
「……」
「……」
「……」
「……な、なんか言えし……っ」

俺がものの見事に固まっていると、優美子が泣きそうな顔で俺の胸板にとすとすと頭突きをしてきた。ハッと我に返る。
「すまん、ちょっと幸せすぎて頭が真っ白になってた」
「そんな大したことじゃないでしょ……」
「いや、大したことだっての」
「そ、そうなの？」
「優美子は、俺にさっき言われたときどう思った？」
「……すっごく幸せ」
「そういうことだ」
「……うぅ……」
「……可愛すぎません？」
「……うっさい」
照れ隠しに唇を重ねてくる。
「……優美子が可愛すぎてもう我慢の限界です」
「ん、いいよ……」
抱きしめ合い、ゆっくりと腰を振る。抽送に激しさこそないものの、優美子が俺に合わせて恥骨をこすりつけてくることでじりじりと快感が高まっていく。ふたりの体温がさっきまでよりも上がっている気がする。身体だけでなく、心でも深く交われたからだろうか。
「んっく、あっ、あんっ、ヒキオ……中で、おっきくなってる……っ」
くすくすと楽しそうに笑い、俺の耳をあむっと咥えてくる。膣肉はむぎゅっ、にゅむっ、と一定のリズムで心地よく締めつけてくる。安心感の伴った、心地良い絶頂の予感。
「優美子、そろそろ出そうだ……っ」
「ん……あーしもイキそう。……いっしょに、ね？」
とろんと蕩けた表情に射抜かれる。唇を重ねたまま、少しだけ腰を振る速度を速めた。
「んふぅっ、ちゅっ、へぅっ、ヒ、キオ……んっ、んっく、んふぅ……んむふぅぅ……っ」
ふたりの体液が、互いの肌と下腹部の境界線を曖昧にしていく。どろどろに溶けあうような感覚。本当に、本当に気持ちが良い。

キスをしたままなので、もう出そうだと伝えることができない。それでも優美子は俺の限界を察して艶めかしく腰をくねらせた。俺も、優美子の表情や身体の強張りから、彼女が限界に近いことがわかった。
「んっ、んっ、んむふぅっ……んくぅぅぅ……っ！」
優美子が色っぽく眉をひそめ、くぐもった喘ぎ声を上げる。俺の口内に響いた嬌声が頭蓋を揺らし、肉竿の根元から先端までを柔らかな膣ヒダがにゅぢゅりと巻きつけ締め上げる。
とぷっ、どぷっ、どぷどぷどぷ……っと鈴口から噴き出した精液が、優美子の膣奥に吸い込まれていく。優美子はぼうっとした瞳で、それでも俺を見つめ続けていた。
「はぁ、はぁ……ん？」
息を切らしていると、優美子にぽんぽんと頭を撫でられた。
「おつかれさま。いっぱい出たね」
「……どうも」
優しい言葉に羞恥心が湧くが、それ以上に心地が良い。この子にはかなわないなぁ……と思いながら、しばし絶頂の余韻に浸った。
数分ほどしたところで、身体を起こして肉竿を引き抜く。
「んっ……あんっ」
精を放ちきってくったりした竿を引き抜くと、弛緩した肉唇をめくり上げてぬるりと抜けた。優美子がその拍子に上げた色っぽい喘ぎにぴくんと反応したが、さすがにもう硬くはならないようだ。
「……今、ぴくんてしたよね？」
「バレてた……まあ、さすがに限界だわな」
「そっか」
ぷらんと力無くこうべを垂れた竿を、優美子が人差指でつんつんとつつく。え、なに、まだしたいの？
「……ほんとにもう限界？」
「優美子さん、底なしすぎません？」
ぽんと顔が赤らむ。
「……べつに、んなことないし……あんっ！」

膨らんだままの乳頭をつまむと、色っぽい嬌声が弾けた。こよりを作るように指の腹でこすると、優美子はへなへなと後ろに傾き、後ろ手をついた。
「んっく、ふっ、あっ、はぁぁ……っ」
羞じらうように身をよじらせながらも、決してやめてとは言わない。色っぽい反応とまだまだ求めてくるその仕草にムラムラしていると、さすがにもう勃たないと思っていた竿がむくむくと大きくなった。
「……ヒキオこそ底なしじゃん」
唇を震わせながら、優美子が可愛らしく挑発してくる。乳頭をちょっとだけ強めにつまむと、おとがいを跳ね上げてぶるぶると震えた。
「……汗かきすぎたし、風呂に行くか」
「そっちでするんだ？」
細指が竿をちょんとつまみ、こしこしとしごいてくる。
「……まあ、そりゃあな」
優美子の前に立ち、びんと大きくなった肉幹をぷらぷらと揺らす。優美子は竿の根元に手を添えると、鈴口をちろちろと舐めて亀頭をぱくりと咥えた。
「んっ、ふぅっ、んっ、んっ、んっ……」
瑞々しい唇がカリ首をこするたびに、尿道に甘い快感が突き抜ける。
風呂場でどういう風にしようか……と考えながら、金の髪をそっと撫でた。

× × ×

身体を洗うあいだもやることはやった。俺が1回イクあいだに優美子を5回ほどイカせると、ようやく満足したようだった。
もう一組の布団を引っ張りだし、裸で添い寝する。俺が腕を差し出すと、優美子はそれを枕にしてころんと寝転がった。さすがに疲れたようで、すでにうとうとしている。
「明日はあちこち見て回るか」

「うん……まだ、ぜんぜん旅行してる気分じゃないし」
「それもそうだな。旅館からどころか部屋から出てない」
くすくすと笑い合う。唇を寄せると、優美子が目を閉じながら応じてきた。眠いときの優美子の口調は少し舌っ足らずになっていて可愛い。行為のときとは違う甘みを帯びている。
窓の外を眺めながら、ふと、総武高最後の1年の濃密さを思い出す。1年生のときのことは大して覚えていない。2年生のときはあまりにも沢山の出来事があった。そして最後の1年は……気付けば、いつも優美子が隣にいた。
「……色々あったな」
「なに、どうしたの急に？」
優美子がくすくすと笑い、おでこをくしくしとこすりつけてくる。金の髪がふわふわと揺れ、シャンプーの良い匂いが鼻腔を心地良く撫でた。
「ちょっと感傷に浸っただけだよ。来月から一気に生活が変わるし」
「ん……そうだよね」
優美子が切なさと昂揚を混ぜ合わせたような表情を浮かべる。
俺と優美子は同じ大学に合格することができた。そうなると、どこに住むかという問題が出てくる。すでに候補はいくつか定めているが、正式決定するのはこの旅行の後だ。
「住むとこは、できれば近くが良い」
「大学の近くってことか？」
「……わざと言ってるでしょ」
とすとすと頭突きをされる。なめらかな背中に指を這わせると、優美子は唇を引き結んで震えた。
「まあ、俺も近くに住みたいけどな」
「大学の？」
「いや、優美子の家の近く」
「……」
あっさりと言ってのけた俺に、なにやら恨みがましい目を向けてくる。俺だってけっこう恥ずかしいんですけどね！

「いきなりいっしょに住むってのはさすがにまだハードルが高いしな」
なんとはなしに呟くと、優美子が目をぱちくりとさせ、時間差で頬がぽわぽわと赤らんだ。
「ヒ、ヒキオと、いっしょに……？」
「いや、その、まだ先の話だぞ？」
「で、でも、それでも……っ」
こっぱずかしいやりとりをしながら、ふたりとも環境が変わろうと時間が経とうと離れるつもりがないことに驚く。それがたまらなく嬉しくて幸せだ。
白い頬をそっと撫でると、優美子が猫のように目を細めた。ふにゃりと脱力した表情に、本当に変わったな、この子はと思う。
「……ヒキオ、なんか言いたそうだけど、なに？」
思ったことをまるで隠せていなかった。
「あー、いや、うん、なんでもない」
「……言えし」
俺の手をきゅっと握り、じーっと睨んでくる。こんな可愛らしいプレッシャーのかけ方が存在するだなんて……！
こほんこほんと咳払いする。
「……本当に可愛くなったし、綺麗になったなって。あとは表情がすげぇ豊かになった気がするなって思っただけだよ」
思ったことを丁寧に伝えると、優美子が目を見開き、口をぱくぱくとさせた。愛おしくなってキスをすると俺も顔が熱くなった。
「……ヒキオこそ、変わったし」
「へ、俺も？」
優美子が俺の胸におでこをくしくしとこすりつけ、照れくさそうに上目遣いを向けてくる。
「……なんていうか、男らしくなったって感じ？　あとはあーしのこと平気で褒めてくる感じがすっごいタラシっぽい」
「タラシ？　え、俺が？」
前半の褒め言葉に対する喜びを、後半のけなしが綺麗に打ち消し

た。
「……特に、その、してるときとか。いじわるなこともいっぱい言っていじめてくるし」
「……ムラムラさせるなっての。襲いたくなる」
下腹部がぴくぴくと反応してしまった。優美子が俺の背中をわしゃわしゃーと素早く撫でた。とつぜんのムツゴロウさん。
「タラシっつっても、褒めるのは優美子だけだけどな。つうか他の人なんて恥ずかしくて褒められねぇし」
ただし小町と戸塚は除く。
「……ほんとに？」
「ほんとほんと」
優美子がじっと見つめてきて、会話の合間合間に唇を重ねてくる。ちょっと可愛すぎやしませんかね。
「……けっこう、嬉しいかも」
「控えめな表現……」
「……すっごい嬉しい」
「可愛いやつめ」
「……ほら、また……」
優美子の頭をくんと引き寄せ、身体をぴったりと密着させて唇を重ねる。柔らかな肢体の感触が、今日だけでまたぐっと馴染み深いものになった気がする。心の距離も縮んだと思えた。
「ねえ、ヒキオ」
「ん？」
「……これからも、よろしく」
「……ん、こちらこそよろしく」
見つめ合い、ふたり揃って目を細め、もういちど唇を重ねる。
優美子と過ごす明日以降の旅行も、来月からの新生活も、楽しみでしかたがない。
今度はどんな褒め言葉を伝えて、この可愛らしい顔を赤面させてみようかと考えると……どうしようもないほどに胸が躍った。

お終い。

少し大人びた城廻めぐりは、ちっぽけな不安などたやすく包み込んでくれる。

（1）

季節は春。

高校生活最後の1年が始まってから、およそ2週間ほどの時間が過ぎていた。

理系と文系に分かれるクラス替えがあったものの、俺にとって大した影響は無かった。正確に言えば戸塚と一緒のクラスになれたので後はもはや何でも良かった。

受験の年ということである程度の緊張感や浮つきはあれど、3年目ともなれば皆さして動じない。新しいクラスメイトとそれぞれのペースで馴染んでいく空気感は、どこか熟達した雰囲気をも感じさせた。

――そんな中で、俺は。

「……」

皆が楽しそうにしている中、一人で声にならない小さなため息を吐き、そっと目を瞑る。

――傍から見ればまるで分からないが、俺の心には大きな穴が空いていた。

新しく入ってくる人がいれば、彼ら彼女らに道を譲るように出ていく人がいる。

そんな――様々な思いを抱えて総武高を出ていった人の中に、あの人がいた。

授業を受けている時、開けた窓から吹き込んだ風にノートをめくられ、なんとはなしに外を見る。

あの人も、今頃は授業中だろうか。1年生は授業が多いと聞く。あの人のことだ、きっと真面目に授業を受けているんだろう。もしかしたら最前列を陣取っているかもしれない。そう思うと、くすりと笑ってしまった。

カレンダーを見て、今日の日にちを確認する。
週末になれば――あの人に、めぐり先輩に会える。
二週間ぶりの逢瀬が、楽しみで仕方なかった。
×　×　×
めぐり先輩は、以前宣言していた通り――大学から程近く、且つ総武高からも比較的近い場所に引っ越していた。女性の引っ越しは何かと大変だろうと手伝いを申し込んだのだが……。
「あ、あ～……比企谷くん、厚意は嬉しいんだけど、大丈夫だよ。ありがとね」
「そんな遠慮しないでくださいって、そんくらいならいくらでも手伝いますよ」
「あ、その、あのね？　本当にそうしてくれるのは嬉しいんだけど……その、引っ越しの日はわたしの両親も来るの」
「……っ、い、いや、それでも、世話になった後輩って言えば比較的穏便に行けるのでは……」
「……後輩の男の子とお付き合いしてるっていうのはもう話してあって、二人とも比企谷くんに興味津々なの。お母さんはまだ良いけど、お父さんは……その、お母さんとはちょっと違う意味で興味津々というか……多分比企谷くん、大変な目に遭う気がするんだ」
「……それは、流石に、厳しいですね……」
「そうなの、ごめんね……。それと、引っ越してからしばらくはかなりばたばたしちゃうから、今の内に会う日を決めておかない？」
「わかりました、どれくらい空けますか？」
「う～ん……2週間くらい、かな？　あくまで目安だけど」
「に、2週……間……っ」
「そ、そんな悲しい顔しないで……」
などというやりとりがあり、引っ越しに立ち会えない上に2週間ものお預けをくらってしまった。俺とは違い、めぐり先輩の環境はあまりにも大きく変わる。無理をさせたくはなかったので、自分を無理やり納得させて彼女の提案に従った。
そして迎えた週末。めぐり先輩の現在の住居が近くにあるという

公園で待ち合わせていた。
「……あったけえな……」
腕時計をしきりに見やりながら、ふと呟く。春とはいえまだまだ暖かさと寒さが同居している日が続いていたが、今日はとても暖かい。冬の寒さもなく、かといって夏の暑さが頭を過ぎるでもない程良い天気。まるで、めぐり先輩が陽気を運んできてくれたかのようだった。
ふと背中に気配を感じて振り向くと、柔らかな風が吹いた。
「お待たせ」
めぐり先輩が少し浮き立った声音で挨拶をして、にっこりと微笑んだ。
「……お久しぶりです」
あまりにも素敵な笑顔と出で立ちに、動揺を隠そうとして妙に低い声になってしまった。
めぐり先輩は、白のブラウスにカーディガンを羽織り、淡い水色のロングスカートを履いて小さなバッグを両手で持っている。そして高校生の頃とても印象的だったおさげ髪はやめたらしく、艶やかな黒髪は下ろしていた。いかにも清楚なお嬢様といった印象で完璧に目を奪われて、ついさっきまではっきり見えていた周りの景色が全てぼやけてしまう。まるで視覚がめぐり先輩だけを見るように命令しているかのようだ。
「会いたかったぁ……」
あまりに可憐な姿にくらくらときていたのに、その上とても幸せそうに頬を緩めて微笑まれ、心臓を綺麗に撃ち抜かれた。俺だって会えてものすごく嬉しいのに、きっと今のめぐり先輩は俺よりもずっと嬉しそうな顔をしている。
「……お久しぶりです」
浮かれた声にならないよう必死で平静を装って答えると、めぐり先輩が不意に距離を詰めてきた。綺麗で可愛らしい顔立ちが目の前に迫り、思わず呼吸の仕方を忘れる。
「比企谷くん……しばらく会えなくて、ごめんね？」
「ああ……いえ、忙しかったでしょうし……」

顔を逸らして答えると、可憐な顔が更に近付く。吐息が鼻腔をくすぐって、身体がびくりと跳ねた。
「……お詫びに、好きなことしていいよ？」
煩悩がものすごい勢いで飛び出した。多分１０８０個くらい。
「ただし、常識の範囲内でね？」
飛び出した煩悩を物凄い勢いで回収した。
めぐり先輩は悪戯っぽい笑みを浮かべて、そっと俺の腰に手を添えている。
うーむ。
めぐり先輩……やはり小悪魔だな。
周りに視線を巡らせると、謀ったかのように誰もいない。恐らくめぐり先輩はこの状況が分かっていて言ったんだろう。しかしそれでもちょっと恥ずかしいのか、目の前にある顔はほんのりと赤らんでいる。俺を殺す気なんだろうか。

「……それじゃあ……」
どうするか数秒逡巡した末に、めぐり先輩の腰に手を回して抱き寄せた。きっとこれなら常識の範囲内に収まるだろう。
「あ……っ」
めぐり先輩が少し高い声を上げ、俺の胸に顔をうずめた。服と肌の柔らかい感触に陶然としていると、めぐり先輩が俺の腰に腕を回して抱きしめかえしてきた。きゅっと込められた力は決して強くなく、どこまでも優しい。春の優しい時間の流れが、もっと穏やかになった気がした。
「……ん？」
なんだか胸元がむずがゆい……と思って視線を下ろすと、めぐり先輩がおでこをくしくしとこすりつけていた。突然の小動物登場。
「……あ～、比企谷くんの匂いだ～……」
ぐらっと理性が揺らぐようなことを言って、顔を上げる。上目遣いで俺を見た顔は陶然としていて、さっきまでの小悪魔然とした表情はどこにもなかった。

目だけ動かしてひと気が無いことを確認して、そっと唇を重ねる。あまりの柔らかさと溢れ出す甘い匂いに溺れそうになるが、懸命に堪えてすぐに唇を離す。
「……もうちょっと……っ」
「え……んむ……っ？」
めぐり先輩が名残惜しそうに眉をひそめ、今度は自分から唇を重ねてきた。腰に回した手に力を込めて抱き寄せられ、思わず口内に舌を侵入させる。小ぶりな唇は容易く割り開かれて、朱い口内粘膜がぴとぴとと恐る恐る触れ合った。
「……ぷはっ。……えへへ……」
唇を離すと、めぐり先輩が照れたように笑った。正直この場で押し倒したい。
そういえば、今日の予定はめぐり先輩任せだった。内容をまだ聞いていなかったことに気付く。俺の顔を見て意図を察したのか、めぐり先輩がはにかんだ。
「今日はね？　街をぶらぶらしたいんだけど……その前に、わたしの家を見せたいなって思ってて。……どう、かな？」
おっと。
「……ぜぜぜ、ぜひ……っ」
「比企谷くん……声、裏返ってるよ？」
くすりと笑われてしまった。
めぐり先輩の家なんて死ぬほど見たいに決まってるが、その後に外に出るとなると今日はあれこれ出来ないか……と悲しく思っていると、めぐり先輩が何やらもじもじしだした。
「そ、それでね……？　お昼は外で食べて、夜は、その……うちでどうかなって……」
心臓が跳ねる。
「……ぜひ。……あと、俺は明日何も予定はありませんので」
めぐり先輩が目を見開き、頬を赤らめて目を逸らす。
「……そ、そっか……。わたしも、明日は空いてるんだ……」
「そうですか、それならゆっくり出来ますね」

「……うん……」
めぐり先輩の言葉はか細く、今にも消え入りそうだった。小さな手をきゅっと握ると、めぐり先輩の身体がびくりと跳ねる。細い指が絡んでくると、まるで心臓が直接何か細いものに縛られているような感覚になった。
めぐり先輩が歩き出して、ちらりと振り返る。
綺麗な瞳にはほんのりと媚熱が篭っていて――聞こえないように必死で抑えながら、小さく小さく喉を鳴らした。
続く。

（2）

めぐり先輩の新居は、セキュリティのしっかりしたマンションだった。

「お父さんは最初『危ないから女性専用マンションにしなさい』ってうるさかったんだけど……。わたしが渋ってたらお母さんと一緒になって理由を聞いてきて、迷ったんだけど結局比企谷くんのことを言ったの。そしたら普通のマンションを選べるようになったんだけど……その後が大変だったんだ」

入口で暗証番号を押して中に入ったためぐり先輩が、くるりと振り返ってちょっとだけ苦笑いを浮かべた。ああ、だから俺が引越しを手伝うのを止めたんだな、と納得する。

「……なんかすいません」

「君が謝る必要はないの！　ほら、行こ？」

めぐり先輩が腰に手を当てて前屈みになって俺をたしなめ、かと思えばにっこりと笑みを浮かべて俺の手を引っ張ってくる。心が気持ち良く振り回される幸せは、会えなかった時間の空虚さを容易く埋めていく。

エレベーターに乗り込みドアが閉まると、めぐり先輩は俺との距離をちょっとだけ縮めた。互いの手がちょん、ちょんと触れ合い、めぐり先輩がちらちらとこちらを見てくる。

「えへへ……」

あまりに可愛いもんで、思わず俺も笑ってしまう。

「ふはは……」

「……？」

めぐり先輩にきょとんとされた。

スベるより恥ずかしかった。

小町みたいになじってくれた方がまだ良かった……。

めぐり先輩の部屋がある４階に辿り着くまで、俺はずっと壁を凝視していた。めぐり先輩が不思議そうに俺の顔を覗き込み、頬を３回ほどつつかれた所で４階に到着した。

エレベーターのドアが開き、廊下を2人並んでとっとこと歩いていると、めぐり先輩が不意に振り向いた。
「比企谷くん、さっきのって……」
「……聞かないでやってください……」
素でぶり返されると中々にきついものがあった。
時間差の追及ってお笑いの高等テクニックですやん……。
自然な笑い方を追求しようと心の内で誓った。あくまで誓うだけだけども。

× × ×

「それじゃあ、どうぞ」
「お邪魔します……」
寝起きどっきりの挨拶くらい静かな声で断りを入れ、三和土で靴を脱ぐ。泥棒さながらに静かに移動する俺を見て、めぐり先輩がくすりと笑った。
廊下を抜けると、めぐり先輩の寝室兼リビングがあった。
「……良いっすね、この感じ」
「そう？　良かった」
俺のざっくりとした感想に、めぐり先輩はどこか安心したような声音で笑う。
引っ越ししてまだ2週間程度しか経っていないためか、部屋の中はまだまだ物が少なかった。ベッドとソファ、ローテーブルに勉強机。
一見するとさばさばとした印象を受けるが、それでもそこかしこに可愛らしい小物が置かれ、これから女子大生の部屋になっていくことが容易に想像出来て何だか楽しい。
ゆっくりと時間をかけて、以前の住人が住んでいた時の匂いが、俺もすっかり馴染んだめぐり先輩の匂いに少しずつ入れ替わっていくのだろう。
「ソファにどうぞ。結構気に入ってるんだよ？」
「それじゃ、遠慮なく……おおう」
もふっ、という感触と共に、予想の倍くらい心地良く身体が沈み込んだ。あれ、これって一時期話題になった人をダメにする系の家具

でっしゃろか……？

気持ち良いでしょ、もっとくつろいでいいよ、という天使の囁きがあったので、躊躇なく背もたれに身体を沈める。

……あかん……これ、ニートになってまう……。ヒキニートになってまう……。そしてトラクターにはねられて転生してまう……。

……。

す、す、スティー……ル……。

……。

「このまま1ヶ月くらいこうしてたい……」

「う、ううん……そんなにだらけた人を養いたくはないかなぁ……」

「……養う？」

めぐり先輩の優しいツッコミの中に紛れていたワードが引っかかり、顔をがばっと上げる。するとめぐり先輩は高速で顔を逸らした。めぐり先輩には珍しくえらく機敏な動きだったが、滑らかな黒髪から覗く耳が真っ赤になっていた。

「めぐり先輩、今のって……」

「……聞かなかったことにして……」

意趣返しに気付いたのか、めぐり先輩が拗ねたように眉をひそめてちょっとだけ俺を睨んだ。この人が可愛くない瞬間を探す方が大変だな、と思うくらい可愛かった。

ちょっと待ってて、お茶を淹れてくるから……と言って、めぐり先輩がキッチンに向かう。俺はその間、スマホをいじるでもなく、かといって本を読むには時間が短いからその選択肢もとらず、部屋をこれ以上じろじろ見るのは不躾かと思い視線を天井に固定させる。

つまり、引き続きだらけていた。

のへーん。

のほーん。

……。

「……行く川の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず……」

……誰もが知っている古典の一節を口ずさんで、俺は何をやってるんだろうという猛烈な虚無感に襲われた。

「お待たせ……って、比企谷くん？　そこまでだらけるのもどうかと思うんだけど……」
「……すいません」
家にいるときよりもだらけている俺を見て、ティーカップ２つを載せたお盆を持っためぐり先輩が呆れ笑いを浮かべる。これからこの家に来るようになったら、こんな雰囲気が続くのだろうか。めぐり先輩と一緒に過ごす時間が更に楽しみになった。
「はい、どうぞ」
めぐり先輩は俺に紅茶を渡すと、俺の隣に座った。
ふわりと香る優しい匂いは、益々この場所への愛着を湧かせてくれた。

×　×　×

紅茶を飲んで精一杯賛辞を送り、めぐり先輩が困ったように笑うのを見届けたところでふと静寂が訪れる。
「……大学はどんな感じですか」
ぽそりと呟いた質問に、めぐり先輩は紅茶の最後の一口を飲み干し、ティーカップをローテーブルに置いて「うーん」と可愛らしく唸った。
「高校までとはがらっと変わってて最初は驚いたけど……結構楽しいよ。色んな講義が受けられるし、部活やサークルもいっぱいあるし」
サークル、という単語にぴくりと反応する。
「サークルは決めたんですか？」
「うん、多分ここに入るかな、って所は決まってるよ。ボランティアサークルなんだけど」
如何にもめぐり先輩らしい答えに、思わず頬が緩む。
「子供たちのいる施設や老人ホームに訪問したり、色んなことをやってるみたい。わたしは新歓コンパで話を聞いただけだけど、もうわくわくしてるんだ」
可愛らしくも美しい顔が更に輝いたが、俺はめぐり先輩が発した言葉の一つが引っかかってしまった。
「新歓コンパって言うと……あの悪名高い新歓コンパですか……？」

「どこでそんな悪名がついてるの……。比企谷くんが心配するようなことは何もないよ？　外でお花見しながら、ソフトドリンクを飲んでお話するだけだから。大丈夫大丈夫」
「そうですか……」
「……？」
　俺の反応を訝しんだめぐり先輩は、俺の顔をじっと覗き込み、やがて何かに気付いたように目を見開いた。ほんのりと頬を赤らめたかと思うと、悪戯っぽい微笑みを浮かべる。
　めぐり先輩が距離を詰めて、二人の間のソファの生地が沈み込む。二の腕が触れ合うくらい近付くと、温かい手が重ねられた。
「……心配しなくても、ちゃんと『お付き合いしてる人がいます』って言ったよ？　最初のコンパで」
「……え……あ……そ、そうなんですか……」
「うん、そうだよ。お調子者の男の先輩が新入生みんなに恋人はいるのかどうかを聞いてまわってててね。わたし以外にも男女合わせて１０人くらいいたんだけど、同じように恋人がいる人は何人かいたなぁ」
「……そう、ですか……」
　心がふわりと軽くなり、同時に自分の狭量さにうんざりする。いつにも増してめんどくさい振る舞いをする俺を見て、めぐり先輩は微笑みを浮かべながら俺の頭をくしくしと撫でた。
　柔らかい手の感触に目を細めていると、おでこ同士がこつんとぶつけられる。ずっと大切に思っている女性の顔が目の前に来て、情けないくらいに鼓動が高鳴った。
「わたしのことばっかり心配してるけどさ、比企谷くんこそどうなの？」
「え、どうっていうのは……？」
「もう……そっちは新入生が入ってきたでしょ？　可愛い子に目移りしちゃわない？」
　めぐり先輩がどこか意地悪な声音で問うてくるが、俺は目をぱちくりとして答えに詰まった。めぐり先輩が言ったような事態は、ただの

一度も考えたことが無かった。
そのためどう答えたら良いか一瞬分からなくなってしまう。俺の反応が予想外だったのか、めぐり先輩も目をぱちくりとさせている。
互いの目がぱちくりとする。
ぱちくり。
ぱちくりぱちくり。
「……どうやって目移り出来るかが、まず分かりません」
瞬きの応酬の後にぽそりと呟くと、めぐり先輩のおでこがかぁっと熱くなった。恐らく顔全体が熱くなっているんだろう。
「え、あ、そ、そっか」
「はい、そんなの無理ですよ、無理無理。めぐり先輩から目移りするってどんだけ大変だと思ってるんですか」
「う、うぅん……君ってわたしが想像してたよりも一途だなぁ……って、自分で言って恥ずかしくなっちゃった……っ」
めぐり先輩がぱっと顔を離し、手でぱたぱたと顔を扇ぐ。容量を遥かに超えた幸せに我慢が出来なくなって、めぐり先輩を両腕で抱きしめた。
「わぷ……っ？」
可愛らしい声を漏らしためぐり先輩が、俺の胸板に顔をうずめる。
「……めぐり先輩は本当に可愛いですね」
「……調子に乗り過ぎだよ？　もう」
顔を上げて上目遣いで呟くと、めぐり先輩は身体をもぞもぞと動かして俺の正面に回り込み、背中に両腕を回して抱きしめてきた。身体の前後を心地良い柔らかさに挟まれて陶然とする。
あまりにも幸せすぎて、だいぶ暑くなってきてしまった。
少し窓を開けないと汗をかきそうだな……と思いながら、めぐり先輩の頭をくしくしと撫でる。気持ち良さそうに目を細めためぐり先輩が、ソファに身体を沈めてだらけている時の俺よりもリラックスしているように見えて、少し笑ってしまった。
俺が笑うのを見ためぐり先輩が、不思議そうにくりんと小首を傾げた。

続く。

（3）

ソファに座って抱きしめ合い、めぐり先輩の柔らかさや温かさをじっくりと味わう。

「……」

ふと、目の前にある綺麗なつむじに顔をうずめて、ゆっくりと息を吸った。シャンプーの良い匂いとしっとりとかいた汗の匂いが混じり、安心感と官能が鼻腔を満たして下腹部が微かに疼く。

すん、すんと鼻を鳴らしていると、めぐり先輩が上目遣いで見つめてきた。ちょっとだけ恥ずかしそうにもぞもぞと動いている。

「……比企谷くんは、わたしの匂いが好きなの？」

なんだか小動物みたいだな、と思いながら質問の答えを考える。

「……控えめに言って、死ぬほど好きです」

「……控えないで言うと？」

「……死にます」

「あ、そっちが残るんだ……」

めぐり先輩が困ったように笑った。それからどちらからともなくゆっくりと目を閉じ、顔を傾けて、二週間ぶりに唇を重ねた。

「ん……っ」

艶を刷いた吐息に心臓が跳ねる。長い睫毛が儚げに揺れて、背中にまわしている腕が小さく震えた。十分に知っているはずだと思っていた唇は、想定していたよりもずっと柔らかい。思い出は美化されるというが、この人の記憶に関しては実物が記憶を上回るらしい。

「んむ……あむっ、ちゅっ、ちゅぴっ……はむっ、んっ、ふぅぅ……っ」

めぐり先輩の舌が積極的に絡められて、互いの唾液がくちゅくちゅと混ざり合う。白のブラウス越しに柔らかな胸の感触がして、薄い生地の中にうっすらと下着が見える。

汗が滲んだ部分や濃厚な口付けで唾液が滴った場所は尚更下着が透けて見えて、視線がめぐり先輩の胸元を這う度に下腹部へと加速度的に血液が送り込まれていく。

「ちゅるっ、んっ、ちゅろっ、ちゅぴっ、ちゅぷっ、んっく、んむ……っ」

気が付けば両手の指を絡ませ、口だけでなく十本の指でも互いに快感を与え合っている。どちらかの指が動けば相手がびくりと震え、呼応するように舌での交わりも情熱的になっていく。
めぐり先輩は自分で気付いているのかいないのか、悩ましげに身体を揺らしこすりつけていた。腰が回すように揺れて、スカートの中のショーツと下腹部の膨らみが悩ましくこすれた。
「……ぷは……っ、だめ、だよぉ……この後、出掛けるんだよ……っ？」
長いキスを終えためぐり先輩は、ほんの数分前までの可愛らしくぽわぽわした顔ではなく、牡を欲する牝の顔になっていた。だめ、とは口で言いつつも、絡めた指は更に悩ましく蠢き、腰はゆっくりと前後に揺れている。
繋いでいた手をほどき、目の前で震える乳房にそっと触れた。
「ふぁ……あっ、んんっ、んくぅぅ……っ」
白のブラウスに指が沈み、めぐり先輩がおとがいを逸らして首から鎖骨にかけての白磁のような肌が覗く。人差し指の背を噛んで喘ぎ声を抑えようとする仕草があまりにもそそり、めぐり先輩の空いた手を掴んで股間に導いた。
「あっ、やぁっ、かた……い……っ」
反射的に呟いた言葉で更に恥ずかしくなったのか、耳まで赤くなってしまった。それでも下腹部に添えられた手から自分の手を離しても、めぐり先輩の白魚のような指がさわさわと膨らみを撫でてくる。
めぐり先輩に触られると、毎日こういった行為をしているにも関わらず毎回甘やかな快感が走る。ましてや今日は二週間ぶりに触れられたのだからたまらない。ゆっくりと乳房の柔らかさを楽しみながらも息を荒げていると、
「あっ、んっ、んくぅ……はっ、はぁぁ……っ、あっ、あん……っ」
「……っ？」
めぐり先輩の反応が、今までよりも明らかに違うことに気付く。衣服の上から緩慢に揉んでいるだけにも関わらず、まるで直接触れているような艶めかしい反応。
思わず目を見開いてごくりと喉を鳴らすと、めぐり先輩は今しがた

自分が出した声に気付いたのか、慌てたように顔を逸らした。
「めぐり先輩……大丈夫、ですか？」
痛くないですか、と聞こうとしたが、反応を見ればその質問が的外れなのは明らかだ。適切な言葉が浮かばずに曖昧な質問を投げかけてしまったが、めぐり先輩は悩ましげに眉をひそめながらもぎこちない笑みを浮かべ、俺の頬にそっと手を添えた。
「あはは……二週間ぶりだから、かな？　なんだか、余計に……っ。だって、その前まではほとんど毎日……っ」
めぐり先輩がまたしても自爆し、言葉尻が見る間に萎んで泣きそうな声になる。恥ずかしさのあまり茹だってしまっためぐり先輩に口付けをして、手の中に収まる心地良い乳房への愛撫を再開する。
「ふっ、んふぅっ、ちゅっ、ちゅぴっ、あふぅぅ……んっ、んくっ、ふぅぅ……っ」
めぐり先輩の表情が悦楽に蕩け、目尻がとろんと垂れた。顔を傾けてより深く唇を重ね、互いの舌をこすり合わせ、順番に相手の舌を啜る。
めぐり先輩の両手が肉竿に添えられ、人差し指の先で亀頭をかりかりとこすられると、たまらない快感の電流が尿道を駆け抜けた。
「……ぷはっ、はぁぁぁ……っ」
唇が離れると、めぐり先輩は脱力しきってこちらに寄りかかってきた。左手は首に回され、右手は変わらず亀頭をこすり続けている。
「あ……やぁっ、そこ……あぅぅ……っ」
スカートを捲り上げて尻肉を掴むと、小ぶりな双丘にたっぷりと指が埋まった。十本の指を波打たせ、二つの穴を晒すように尻肉を広げる。
「やぁっ、だめ、だめだったら……っ」
可愛らしい抗議をしながら腰をくねらせ、右手は窮屈になったジーンズのチャックを開けてパンツ越しに肉竿に触れてきた。ぞわぞわと駆けあがってくる興奮が際限無しに幸せを運んでくる。
掴んで広げた尻肉を戻すと――くちゅりといやらしい水音がした。
『……っ』

お互いに息を呑んだ音が重なり、震える瞳が見つめ合った。
「めぐり、先輩……っ」
「あっ、だめっ、今そこいじったら……あうぅんっ!? きゃっ、やだ、そっちの穴は……っ！」
ショーツの中に両手の人差し指を滑り込ませ、右手を膣口に、左手を菊孔に宛がう。ゆっくりと力を込めていくと、膣口にはにゅるりと第一関節が滑り込み、アナルには多少の抵抗はあれどそれでもゆっくりと同じく第一関節まで埋まっていった。
「だめっ、だめだよぉ……それ以上したら……あっ、くぅんっ、はぁぅっ、んくぅぅ……っ！」
めぐり先輩の表情に困惑と悦楽が入り混じり、くちゅくちゅといやらしい水音が何度も耳朶を叩く。めぐり先輩の快感が伝播しているかのように、肉茎がぴんぴんに張り詰めていく。
「めぐり先輩……だめですか？ 本当にだめですか？」
「うぅ……っ、そんな甘えた顔しないでよぉ……」
「めぐり先輩、ここ、すごい濡れてますよ？」
言いながら、両方の指をずぶりと根本まで入れた。
「うあ……っ!?」
めぐり先輩の澄んだ瞳が明滅して、華奢な肢体が歪な痙攣を見せた。
「――あうぅんっ!? あっ、ひっ、はぁうぅぅ……だめ、だめ、だめ、だめぇ……っ！」
首筋に顔をうずめてぶるぶると震えるめぐり先輩の膣肉と尻穴を、2本の指でゆっくりと舐る。指をちょっと折り曲げただけでも淫猥な反応が返ってきて、もう我慢の限界だった。
「めぐり先輩……めぐり先輩……っ」
ここまで来たら、もう止められない。
今なら、きっとめぐり先輩も許してくれるはずだ。
よし、このまま最後まで……と思っていると――不意に、顔を両手で挟まれた。
「もう～～～～……めっ！」

「……」
目の前には、頬にうっすらとした紅潮を残しながらも、いつものお姉さん然とした表情をしためぐり先輩の顔があった。ん、あれ、さっきまでのめぐり先輩は一体どこへ？
「このまましちゃったら、外に出掛ける余裕が無くなっちゃうでしょ？」
片頬を膨らませながら、頬にぐりぐりと圧力をかけてくる。可愛いし手も柔らかいしで一体どうしたら。
……。
……しかし、ダメか……ダメかぁ……。
「……ふぁい（はい）……」
「……そんなに落ち込まないでよ、もう……。……続きは、帰ってきたら……ね？」
めぐり先輩が小悪魔めいた、それでいて純粋でもあるという矛盾した魅力を湛えた笑みを向けて、上目遣いで囁きかける。
これは、反則だろう。
申し訳なさと、それでも譲る気は無いという頑固さも湛えた表情で、めぐり先輩がじっと見つめている。
静かに息を吸って、それをゆっくりと体内から吐き出す。
そして、少しぎこちなくて、力のない笑みを浮かべた。
「……はい」
「……ありがとうね」
めぐり先輩は安心したのか、花が咲いたような笑みを浮かべた。
この表情を見るためなら、俺は何でもしてしまいそうだ。
続く。

（4）

めぐり先輩に可愛らしく諌められ、未だにちょっと落ち込みながら出かける準備をする。

「……」

「……？」

ふと後ろを見やると、めぐり先輩が何か言いたそうな顔をしていた。

「どうしました」

「比企谷くん……その、ごめん、ちょっと先に出て外で待っててくれないかな？」

言葉を濁すめぐり先輩。何やらもじもじしている。視線を彷徨わせ、口元ももにょもにょと忙しなく動いている。可愛いけど一体どうしたんだろうか。

「大丈夫ですか？」

「な、何でもないから。大丈夫。とにかく外に出てて？」

俺が近寄ると、めぐり先輩が同じ歩数だけ遠ざかる。結構ショックだ。あと動きが地味に機敏。

「いや、心配ですよ。無理して出かけなくてもいいですから」

なおも近付くと、更に後ずさっためぐり先輩の背中が壁に当たる。

「いたた……」と唸るめぐり先輩を心配しつつも、更にじりじりと詰め寄る。もしめぐり先輩がデートのためにと体調不良を隠そうとしているなら、何としても顔色から判断して然るべき決断を下さねば……と思っていると。

「うぅ～……」

めぐり先輩がスカートの裾を掴んで俯き、何やら小動物のように唸った。

……んん？

「めぐり先輩？」

名を呼ぶと、めぐり先輩は意を決したようにバッと顔を上げ、しかしまたすぐに俯いてしまった。

そして、
「……し、下着！」
「え」
突然の３文字。
予想していなかったワードに思考が止まる。ぎゅっと握り締めためぐり先輩の手に視線を落とし、そして更にそこから下へと視線を滑らせると……。
「……あ」
綺麗で白い脚を伝う液体に気付き、めぐり先輩の状況をやっと察する。いやもうこれは察すると言うには遅すぎるか……。
「……うぅぅぅ……っ」
今にも泣き出しそうな声を聞いて、胸がきゅっと詰まる。
「ええっと……本当にごめんなさい」
どうしたら良いか分からなくなり、めぐり先輩の頭をぽんぽんと撫でる。
すると、めぐり先輩が僅かばかり顔を上げてくれた。
「……比企谷くんのばかぁ……っ」
「……っ」
涙目。
上目遣い。
か細い声。
……。
……えー……？
……これは……もう……。
「……襲ってもいいってことですか？」
「そんな訳ないでしょ！」
結構本気で怒られた。
「回れ右！」
「は、はい」
めぐり先輩の一声で、一応恋人と呼べる関係が、尻に敷かれる夫婦どころか軍隊の上官と部下のような関係に一瞬で変貌する。めぐり

先輩はこんな状況でもまだ声音に羞恥が混じっていて、怒られても可愛いと思ってしまうのだから手に負えない。
「ドア閉めるから、リビングから出てて！」
「イエス、マム」
「……」
「ごめんなさい、ほんとごめんなさい」
逃げるようにリビングを出た。怒られない内にドアを閉める。
無心になってしばらく待っていると、扉の向こうで微かに衣擦れの音がした。反応してしまう下半身を必死で諌めながらもうしばしの間待っていると、二人を隔てていたドアが静かに開いた。
別のブラウスとミニスカートに着替えためぐり先輩が、仄かに顔を赤くして両手に何かを抱えている。
「……せ、洗濯機は廊下にあるから……っ」
俺に質問されるのは恥ずかしかったのか、先にそんなことを言ってきた。
……流石にそこまで無粋ではないんだけれども。
俺の横をそそくさと通り過ぎて洗濯機に下着を入れためぐり先輩が、ちょこちょことこちらに寄ってきた。
そして、袖をちょんちょんと引っ張られる。
「……今度こそ、行こ？」
「……はい」
一つ一つの仕草が、俺を殺しに来てるのではないかと思うほどに愛くるしい。頬を緩ませながら返事をすると、めぐり先輩はちょっとだけ厳しい表情になってピッと人差指を立てた。
「……外ではエッチなこと禁止だからね？」
おっと。
……うーん……。
「……は……ぁぁ……いぃぃ……」
出来るだけ曖昧な返事にしてみた。
「え、それはイエスなの？　ノーなの？」

案の定追及される。
「よし、行きましょうか」
「……」
無駄に明るい声で話を無理やり切ってみたが、後頭部に感じる視線の圧が尋常でない。
「……とう」
「わわ……っ？」
くるりと振り返って抱きしめ、後頭部をぽんぽんと撫でると、めぐり先輩の態度が見る間に軟化していった。
よし、これならさっきの返事を曖昧に――
「……なーんかごまかされてる気がするんだけど……」
「よし、行きましょうか」
「……」
やっぱりごまかせなかった。抱きしめていた腕を離し、靴を履きにかかる。
先程よりも増した視線の圧を後頭部にがんがんと感じながらも、結局、最後まで返事はしなかった。
何故なら、久しぶりに会って更に素敵な女性になっているめぐり先輩に、何もしないでいられるほど俺は大人じゃないからだ。
２人とも靴を履いて部屋を出る。手を繋いで歩き始めると、「もう……しょうがないなぁ」と呆れたように笑ってくれた。
……アレな行為に及ぶことを認めてくれたのだろうか。
……ちがうか。

× × ×

マンションを出ると、春の暖かさがふわりと身体を包み込んだ。冬は冬で魅力があるが、春は植物などの生を感じさせる匂いが沢山あって何だか心が浮き立つ。
「風……気持ち良いね」
めぐり先輩が穏やかな声で呟き、そっと髪をかき上げる。その瞬間に強めの風が吹いて、艶やかな黒髪がふわりと躍った。目の前で起きた映画のワンシーンのような光景に視線が吸い込まれて固まってい

ると、めぐり先輩はくすりと笑って俺の手を取った。
「比企谷くんに教えたかった場所があるの。ちょっと歩くけど……いいかな？」
「……あ、いえ、はい、大丈夫……です……」
なおも惚けたままの俺を見て、めぐり先輩は目をぱちくりぱちくりとさせる。上目遣いで覗き込まれ、狭い部屋で全力でスーパーボールを投げたかのように心臓が激しく跳ね回る。
もう一度風が吹き、めぐり先輩の髪が舞う。髪の毛先に俺の視線が行くと、めぐり先輩は悪戯っぽく微笑み、前を向いた。まだ風が吹いている内に、先程と同様にそっと髪をかき上げ、俺の反応をちらりと流し目で覗いてきた。
「……」
今度は俺の反応を見るためにわざとやっている――そう分かっていても、俺は、心の底から見惚れていた。
「……比企谷くん？　どうしたのかな？」
「……え、あ、いや、その……まあ……」
「……ふふ」
めぐり先輩が満足げに頷き、再び手を繋ぐ。
手の温もりを感じながら、参ったな……と思い頬を掻く。
天使でもあり、女神でもあり、母でもありながら、更に小悪魔にまでなることが出来るのか、この人は。
「……無敵か」
「？　何か言った？」
思わず呟いた言葉に、めぐり先輩がきょとんとして尋ねてきた。
「いえ、なんでも」
俺の返事にきょとんと首を傾げつつ、繋いだ手をにぎにぎとされる。手のひらの柔らかさを堪能しながら、俺とめぐり先輩はのんびりと歩を進めた。
「あ、あそこだよ」
未だに落ち着かない鼓動を落ち着けようと静かに深呼吸していると、めぐり先輩が楽しそうに前方にある建物を指差した。

どうやらあそこが、お目当ての場所らしい。

続く。

（5）

めぐり先輩に連れて来られた先は、住宅街の中にひっそりと紛れているカフェだった。

「ここね、わたしの大学ではちょっとした穴場のお店として有名なの」

「へえ……そうなんですね」

店の入口に向かいながらめぐり先輩の説明を聞き、ふと要らぬ想像を巡らせてしまう。

大学の穴場。

カフェ。

雰囲気が良い。

良い感じに可愛くてふわふわした女の子がお茶を飲んでいる（偏見）。

以上の要素から鑑みるに、この店は出会いの場……とまでは言わなくとも、ナンパの温床になっていたりするのでは？

……。

「……大丈夫でしたか？」

「え？　なにが？」

「いや、その……」

ここでお茶を濁してしまうことは簡単だ。

しかし、今の俺はそんなことをすべきではない。

めぐり先輩と物理的な距離が離れてしまっている以上、みっともなくとも言いたいことは言って、聞きたいことは聞いておかなければ。

「……その、ナンパとか、されたりしないのかなって……」

緊張で口の中がぱさぱさになっていて、言葉尻はほとんど消え入るような声になってしまった。

めぐり先輩の顔をちらりと見る。

ぱちくりぱちくり……と不思議そうな表情で俺を見て、それから――向日葵のような笑みを浮かべた。いつか、白いワンピースを着て麦わら帽子をかぶっためぐり先輩と向日葵畑を見に行ってみたいと思った。

「大丈夫だよ、大丈夫」
「そうは言われてもですね……」
「……もう」
いつになく食い下がる俺に、めぐり先輩が呆れたような笑みを浮かべる。ドアの前に立つと、くるりと振り返った。
「大丈夫、っていう理由は入ればすぐ分かるよ」
めぐり先輩がぱちりとウインクをして、ドアを開く。これから訪れる夏を楽しみにさせてくれるような、涼やかなドアベルの音が優しく耳朶を包んだ。
「いらっしゃい。何名様だい？」
ドアを開けると、目の前に位置するカウンターの内側から野太い声をかけられた。
中年の、がっしりとした体型の女性店員。一目で「あ、この人が主人なんだな」と分かるような風格だ。
「こんにちは。今日も2人です」
「おや、あんたかい。ん、後ろのは……ははぁん、この間言ってた子かい」
「ちょ、ちょっと！　そんなこと言わなくていいですってば！」
「はっはっは。まあゆっくりしておいきよ。奥の席でいいかい？」
「はい、そこでお願いします」
「はいよ」
「……」
店主らしき女性とめぐり先輩の会話を聞いて、ついさっきめぐり先輩が大丈夫だと言った訳が大体分かった。
この店主、何て言うか口癖が「お残しは許しまへんで」だったり、豊穣の女主人という店で態度の悪い客を店から叩き出したりしてそうな体格と性格だ。
それでいてめぐり先輩との距離感は何だかとても温かくて、どこか母娘のように思える。
「……確かに、この店でナンパなんてしようもんなら一瞬で追い出されそうですね」

別の店員に案内された個室の席に座ると、深い納得と共に呟いた。
「ふふ、分かってくれたみたいで良かった」
比企谷くんなら、説明しなくても分かってくれるだろうなって思ったんだ……と、メニュー表を広げながら楽しそうに呟く。
「このお店ってね、なんだかとっても居心地が良いの。だからつい長居しちゃうんだ」
言いながら、めぐり先輩が窓の外に目を向ける。釣られて外を見ると、狭いながらもきちんと管理の行き届いた庭に様々な花が咲いていて、自然と頬が緩んだ。
……んん？
「……なんか、猫がすげえ多いですね」
「そうなんだよね、ほんと可愛い」
庭の中には、首輪を着けた様々な種類の猫が何匹も遊んでいた。ころころとじゃれあっている姿は正直死ぬほど可愛い。庭は隣の建物のかなり高い塀に囲まれていて、猫が道路に飛び出してしまう心配も無いようだった。
「あ、あれカマクラちゃんに似てない？」
「えっと……ああ、たしかに似てますね」
めぐり先輩が指差した先に、我が家の愛猫そっくりのふてぶてしい態度の猫がいた。子猫が花と花の間をすり抜けて楽しそうにじゃれあっているのを、身体を丸めて眠そうに見ている。子猫のうちの一匹がカマクラ2号（勝手に命名）にすり寄ると、カマクラ2号は薄目を開けて子猫を見つめ、しっぽで子猫の身体をしゅるりと撫でつけた。すると子猫は許可が下りたと思ったのか、カマクラ2号に寄り添って同じように身体を丸めて気持ち良さそうに目を閉じた。
「あ、やばい、ほんとに可愛いですね」
「でしょ、でしょ？」
めぐり先輩が喜色満面の笑みを浮かべる。庭の中で猫が戯れる画がこんなにも破壊力があるとは……恐るべし。
「ほんと可愛いなぁ……」
ちらりとめぐり先輩を見やると、窓の縁に両手を置いてとろんと蕩

けた目をしている。艶を刷いた表情とはまた違う優しげな表情に、強烈な母性を感じてどきりとした。
「この間ここに来た時も、庭で猫と遊んだんだよね……」
「あ、そんなことも出来るんですね」
「そうそう」
返事をしながら、めぐり先輩はひたすら庭を眺め続けている。
「……後で庭に行きますか？」
「え、いいの？」
めぐり先輩の顔がパァっと輝く。殺人的に可愛い。
「俺も愛でてみたいので。行きましょう」
「……嬉しいな、比企谷くんと来たかったから」
そっと手を重ねながらぽそりと囁かれて、心臓が穏やかに波打つ。
「え、そうなんですか？」
「うん。この店には大学で仲良くなった子と2回来たことがあるんだけど……比企谷くんと一緒に来てみたいなって思ってたの。こんなに早く叶うなんて思わなかったけど」
「……そう、です、か……っ」
はにかみながら紡がれる愛情いっぱいの言葉に、頭がクラクラとしてしまう。
目線をしばし泳がせた後、不意にめぐり先輩と視線が噛み合った。
めぐり先輩の頬はチークを塗ったようにほんのりと朱に染まっていて、両の瞳はどれだけ好意を注いでも全て受け入れてくれるような深い愛情を湛えている。
あれ、なんだかおかしな雰囲気になってるぞ。
これじゃまるで、この後キスでもするような――
「お2人さん、イチャつくのは注文してからにしてもらっていいかい？」
『ごめんなさい！』
ドア越しにかけられた野太い声に、2人ともビンッと背筋を張って答えた。こういう時こそ「イエス、マム！」と言うべきなんだろうか。
慌ててメニューを選び始めためぐり先輩とふと目が合うと、照れく

さそうに微笑んだ。
自分で開いたメニューの文字を追っている間も、めぐり先輩の色とりどりの笑顔が頭から離れなかった。
続く。

（6）

食事を終えると、俺とめぐり先輩はカフェの裏手の庭に出た。小さな空間は隣の建物の高い塀に囲まれていて、この店の一部からしか見ることが出来ない。寝転がると気持ち良さそうな芝生と、色とりどりに咲いた花、そして何よりねこ、ネコ、猫。

「わぁぁ……っ」

隣で満面の笑みを浮かべるめぐり先輩の反応からも分かる通り、ここは一つの可愛らしい楽園に思えた。

「遊び道具は色々あるよ。芝生は座っても寝ても問題無いからね」

店主の言葉の通り、庭に繋がるドアの前に置いてあったテーブルには猫と戯れるため様々な道具が置いてあった。

「よーし……」

めぐりん先輩がふんすと鼻息を吐いて、猫じゃらしと手鞠を持った。流石に同時に遊ぶのは厳しいだろうと思い、鞠を一旦預かる。

「じゃあ、じゃあ……まずはこの子と遊んでみよっと……！」

まるで子どもが、初めて来たファミレスでメニュー表を見てうんうん悩んで決めるかのような仕草。大人びたと感じためぐり先輩の幼い面は、ただでさえカンストを起こしている彼女への好感度を更に叩き上げる。

芝生の上をとてとてと歩いているちんまりとした子猫の下にゆっくり近付くと、するりとしゃがみこんだ。見えてはいけないものが見えてしまいそうになり、咄嗟に目を逸らす。

……。

深淵を覗いた時、深淵もこちらを覗いているのが事実ならば。スカートの中を覗いた時も、スカートの中がこっちを覗いているのだろうか。

……。

混乱するあまり、本当に意味の分からないことを考えてしまった。

俺が脳内で茶番を繰り広げている間に、めぐり先輩は子猫の前でねこじゃらしを取り出した。俺は手鞠を持った状態で芝生にあぐらを

かいて見守ることにした。
「ほーらほら」
『にゃー』
ぷるぷると揺れるじゃらしの先っぽを、子猫が興味深げにぺしぺしと叩く。
「か、可愛い……っ！」
物凄く愛らしい猫の仕草を見て、更に愛らしい反応をめぐり先輩が見せる。片手で口を押さえて感動していらっしゃる。
更に猫じゃらしをゆらゆらさせると、子猫の動きのキレと可愛らしさが増す。
「ほーらほら、にゃー、にゃー」
『にゃー、にゃー』
「にゃー、にゃ？」
『にゃー、にゃ、にゃー』
「にゃー！」
『にゃー！』
俺を殺す気だろうか。
めぐり先輩はだいぶテンションが上がっているのか、子猫と猫語で会話し始めた。多分だけどあんまり噛み合ってないのがまた可愛い。とにかく可愛い。
「……ん？」
ふと、身体が妙に温いことに気付く。
視線を落とすと、あぐらをかいた俺の足の上にいつの間にかやや大きめの猫が上がりこみ、ばっちりお休みモードに入っていた。俺の足に程好くすっぽりと収まるようで、一点を見つめたままゆっくりと目を開けたり閉じたりしている。おうふ……これ、俺が動けなくなるやつですやん……。
「……む」
更に、手鞠に興味を持った子猫が3匹ほど群がってきた。
『にゃー、にゃー、にゃー』
「おうおう、ほれ」

試しに手鞠をころろ、と転がしてみると、1匹の子猫がその上に飛びかかり、くるんと反転してしまった。転がった猫が体勢を整える間に、もう2匹の猫が手鞠をぺしぺしと蹴り合い始める。あれ、この子たちパスし合ってる……？　蹴鞠、蹴鞠なの？

「比企谷くん、人気者だねー」

猫じゃらしで戯れるのに満足したのか、めぐり先輩が楽しげに微笑みながら歩み寄って来た。一緒に遊んでいた猫も付いてくる。やだこの人、あっと言う間に虜にしてしまったのね……。

「よっ、と」

めぐり先輩が俺の隣に腰を下ろすと、猫じゃらしで遊んでいた子猫がめぐり先輩の太ももにすりすりと頭をこすりつけた。この子が♂だったらちょっと今後の対応を考えざるを得ない。

「良い天気だね」

めぐり先輩が呟き、ころんと仰向けに寝転がる。俺の足の上で猫鍋状態で寝ていた猫がするりと離脱したので、俺もめぐり先輩に習って寝転がった。途中まで建物に切り取られた空を眺め、流れゆく風によりさわさわと庭の花々がなびく音を聞く。

「気持ち良いね……」

「そうですね」

誰かと過ごす休日が、こんなに楽しいものだったとは。綿密な計画を立てて自分の行きたい場所を味わいつくす行為とは対極にあるような、ゆるくて緩くてゆるゆるの時間。せかせかとスピードを上げていた生活の流れが、急に穏やかになったような気がした。

「比企谷くん」

「はい、なんでしょう」

視線を感じたので横を向くと、めぐり先輩がこちらを見ていた。日を浴びて鮮やかに咲く向日葵のような笑みに、心臓が柔らかくとくんと脈打つ。

「比企谷くんと今日ここに来れて、ほんとによかった。ありがとね」

「……っ、……はい、こちらこそ」

裏表などない、そんなものを考えるのさえ無粋に思えるほどの、柔

らかな笑み。
ずっと、この人の笑顔を隣で見続けていたいと思った。
「めぐり先輩」
「ん、なあに？」
よし、ここは一つ、柄にもないなんて考えずに愛の言葉を……と思って静かに息を吸うと。
『にゃー』
「え……」
「あれ……」
ちょこん。
俺とめぐり先輩の顔の間に子猫が割って入ったかと思うと、２人の間をすっぽりと埋めるように座り込んだ。
『にゃー』
「……ふっ、ふふふっ」
「……はぁ」
めぐり先輩が堪えきれないといった具合に笑い出し、俺はため息混じりに笑う。
猫に視線を阻まれたまま、俺とめぐり先輩は手を繋ぎ、もう一度空を見上げた。
「むぐっ」
「あれ？　比企谷くん……あはは」
子猫が顔に乗ってきた。
めぐり先輩の楽しげな笑い声を聞きながら、「この子をどかしていいものか……」としばし悩むことになった。

×　×　×

カフェを出た後は、２人で大型書店に行って楽しんだ。たった２週間の間にも、俺とめぐり先輩それぞれのアンテナは種類の違う情報をいくつも受信していたようで、お互いが最近良いなと思っている作家やジャンルを紹介し合うのが純粋に楽しかった。
スーパーに寄って夕飯の買い出しをして、家に帰る。早速調理を始めようとするめぐり先輩を手伝おうとしたが、「今日は作ってあげた

いの。今度手伝ってほしいな」と言われて大人しく待つことにした。
めぐり先輩の料理はごく家庭的で、何を食べても安心する優しい味だった。俺が食べるのをにこにこしながら見守られるのは正直かなり恥ずかしかったけど。しかも微笑み方が母性たっぷりなものだから、何だか数年先の未来を垣間見た様な気がして余計に恥ずかしくなった。
食事の後は一緒に歯磨きをした。
さてこの後は……と内心ドキドキしていると、めぐり先輩に「別々にシャワーを浴びよう」と先制攻撃をくらった。心底残念そうな顔をしている俺を見てめぐり先輩は「ごめんね？　その、……この後の備えが必要でして……」と妙に恥ずかしげに囁いた。可愛いのでなんかもう何でもオーケーだった。

× × ×

「ううむ……」
シャワーを先に使わせてもらい、腰にバスタオルを巻いた状態でベッドの縁に座っている。めぐり先輩の寝室は程好く女の子をしている部屋で、番のように置かれたクマのぬいぐるみが可愛い。そして何よりほんわりと香る甘くて良い匂いが俺を落ち着かせてくれない。落ち着くんだけど落ち着かない。
ガチャリ、と浴室のドアが開く音がする。そこからドライヤーを使う音等々がしばらくの間聞こえていたかと思うと、寝室のドアがゆっくりと開いた。
「……入るね？」
「どうぞどうぞ……って、うお……っ」
めぐり先輩が。
あの、どこまでも純粋なめぐり先輩が。
淡いピンクの、ミニスカートほどの丈しかないネグリジェを着ていた。
上下の下着を着けておらず、薄いベールに隠された奥にうっすらと乳頭が見え、下腹部の茂みも仄かに見えている。
髪を下ろしためぐり先輩の表情はほんのりと上気していて、大人っ

ぽい艶を帯びている。俺の視線がよほど強いのか、もじもじと脚をこすり合わせる様がまた可愛らしい。
「ど、どうかな……？」
寝室の入口から歩み寄り、俺の隣に腰掛けためぐり先輩が震える声で問うてくる。頭のてっぺんからつま先まで余すことなく色香を纏った恋人の姿に、匂いに、声に、激しく心が揺れる。
「……本当に、綺麗です……」
「そっか、嬉しい。頑張ってみた甲斐があったな、えへへ……」
照れくさそうに笑うめぐり先輩が、不意に「きゃ……っ」と小さな悲鳴を上げた。
「どうしました……か……」
腰に巻いたタオルが、鋭い山を作っていた。
「……すいません。あまりに魅力的なもんで……」
「ふふ、大丈夫だよ。嬉しいから。……ほんとに……」
めぐり先輩の視線が、膨らんだ山に注がれる。その視線の熱量は、俺がめぐり先輩の艶姿に注ぐものとほとんど変わらない。
甘くて良い匂いが鼻腔を刺激する。
ごくりと喉を鳴らすと、つられたのか白くて細い喉がこくりと鳴った。

続く。

（7）

淡いピンクのネグリジェを着ためぐり先輩が俺の隣に座る。ベッドが沈み込むと同時に甘い香りがふわりと鼻腔をくすぐって、喉が鳴る音がベッドの軋む音に紛れた。
「……今日は楽しかったね」
「……そうですね」
めぐり先輩が穏やかな声音で囁きながら、そっと身体を寄せる。ネグリジェの薄い生地越しに柔らかな二の腕が触れて、ちりちりとした興奮が心の内に澱のように溜まっていく。
めぐり先輩は続きの言葉を発しようとしない。
俺も、何も喋ることはなかった。
「ん……っ」
めぐり先輩の太ももを撫でると、驚くほど温かくて、指が沈み込むほどに柔らかかった。めぐり先輩が甘い吐息を漏らして俯く。指の一本一本に神経を集中させて、出来るだけゆっくりとさすっていく。
「う……っ」
お返しとばかりに、めぐり先輩の指が俺の太ももを撫でてきた。柔らかな指がさわさわと肌の上を這う度に、下半身に血流が集まって膨らみの高さが増していく。
「あっ、ぅあっ、はぁっ、んんんん……っ」
俺の膨らみに熱っぽい視線を注ぎながら、指の動き一つ一つに反応して艶めかしい声を漏らすめぐり先輩が愛おしい。座った時はぴったりと閉じていた脚がゆっくりと開いて行く。
「あ……っ？」
太ももから手を離すと、右手でめぐり先輩の肩を抱き寄せた。そのまま手を前に持っていき、下から掬い上げるように柔乳を揉む。
「はぁぁぁ……っ」
左手も伸ばし、両手で薄手の生地越しに信じられないくらい柔らかな感触を味わい陶然としていると――ある事に気付いた。
「……めぐり先輩、もうこんなになってますよ？」

「え……やっ、やぁ……言わないで……っ」
めぐり先輩が視線を下に降ろすと、一瞬で首まで真っ赤に茹だった。
ふくよかな双丘の頂が、ぴんと張り詰めていた。
「俺も大概ですけど……めぐり先輩も興奮してるんですね」
「やぁぁ……やぁぁ……っ」
乳房を下から掬い上げて見せつけるようにすると、めぐり先輩がいやいやと首を振った。不意に嗜虐心に火が点き、耳元で囁く。
「めぐり先輩、ちゃんと見てください。自分の恥ずかしいところ」
「……うぅぅ……比企谷くんのいじわるぅ……っ」
目と声に涙を滲ませながら、可愛らしく睨んでくる。それでも俺の言うことを聞いて、恐る恐る自分の乳房に現れた興奮の証を見つめた。
「やだ……こんなにぷっくり……っ」
お願いしてもいない卑猥な実況をされて、思わず喉を鳴らした。ハッと気付いためぐり先輩がまた可愛らしく唸る。
めぐり先輩が少しでも羞恥を紛らわそうとしたのか、内ももをこすり合わせた。
くちゅり。
「あ……っ」
「え……やぁぁぁ……っ！」
下腹部で生じた卑猥な音に、めぐり先輩がぶんぶんと顔を振った。脚をもぞもぞと動かして、その度にまた新しく淫猥な水音が生じる。
「あぅ……あぁっ、うぅぅぅ……」
俺の腕の中のめぐり先輩の肌は、興奮と羞恥でたしかな熱を帯びていた。
ぞわりと背筋が粟立つ。
どうしても反応が見たくなり、両手の人差し指と親指で張り詰めた乳頭を同時につまんだ。
「――――あふぁぁぁっ!?」
「うお……っ！」

めぐり先輩の身体が、まるで電流が流れたかのように跳ねた。おとがいを上げて天井を仰ぎ、右手がシーツを、左手が俺の太ももを強く掴む。
脚をぴったりと閉じてぶるぶると震える様に見入っていると、不意にめぐり先輩の下腹部から甘酸っぱい匂いが漏れ出てきた。
ほんの2時間前までは聖母のような笑みを湛えていた人が、今は淫靡な色に染まった湿った息を吐き、目尻を垂れ下げて淫蕩な視線を向けてきている。
「ん、んぅぅ……っ」
絶頂の余韻がまだ残っているのか、震えているめぐり先輩が可愛らしく睨んでくる。力の篭っていない視線に思わずにやけてしまいそうになっていると、
「う……っ」
めぐり先輩の手が、腰に巻いたタオルの内側に滑り込んできた。タオルの内側で小さな手がもぞもぞと動き、ぎちぎちに張り詰めた肉竿をやわやわと撫でてくる。
「う……くぁ……っ」
指の腹で鈴口をくりくりと撫でられ、情けないくらいに腰ががくつく。俺の反応を見ためぐり先輩が、ひどく淫靡な笑みを浮かべた。
「おっきぃ……」
耳元で囁かれ、湿った吐息と言葉の温度にぞわりとする。くちゅ、くちゅ、と肉竿の先端から卑猥な音が立ってくると、先走りの汁を潤滑液にして5本の指が自由自在に肉竿を撫でさすっていく。
「んはぁ……っ！　はっ、んぅっ、あっ、あぁぁ……っ」
お返しとばかりに乳頭を指の腹でくしくしとこすると、めぐり先輩の柔らかな身体がびくびくと引き攣る。触っていないのに脚をゆっくりと開いていき、薄いヴェールの内側から立ち込める愛液の匂いが一層濃度を増した。
「比企谷……くん……っ」
「え……っ？」
めぐり先輩が切なげな表情を浮かべて、俺の肩をそっと押す。上体

を倒されて仰向けになると、めぐり先輩が余裕のない表情の中に淫蕩な笑みを浮かべた。
めぐり先輩が俺の腰に巻かれたタオルをめくり、ぎちぎちに勃起した肉竿を見つめるとこくりと喉を鳴らした。
俺の腰の横に膝立ちになると、足を崩してしなだれかかるようにして肉竿に顔を寄せる。
すー、はー、すー、はー、と何度も深呼吸を繰り返し、目の前にそそり立つ肉竿の匂いを堪能している。まるで羞恥心を忘れたかのような淫靡な振る舞いは、見ているだけで鈴口からカウパーが噴きこぼれた。
「ん……っ」
まるで吸い込まれるように唇を寄せて、上下の唇で柔らかく締め付けながら肉竿を飲み込んでいく。
「うぁ……っ」
横向きになった状態で咥えたため、めぐり先輩の左頬に肉槍の先端が浮かんで見える。
「んふぅ……ちゅくっ、ちゅぷっ、くぷっ、ちゅぷりゅ……っ」
右腕を俺の腰に回してしっかり固定し、肉竿をまるで飴をしゃぶるかのようにたっぷりと味わいながら、左手は睾丸をやわやわと揉んでくる。
「う……あぁ……っ」
腰も下腹部も柔らかい感触にたっぷりと包まれて、穏やかな快感の波が絶えず襲いかかってくる。
興奮で、頭がどうにかなりそうだった。
「んふぅ……っ？　んっ、ふぅっ、んんん……っ」
ちらりと見えていた左の乳房に手を添えて、感触を確かめるように揉みしだく。めぐり先輩がくぐもった喘ぎ声を漏らす度に、鼻息が陰毛を揺らした。
めぐり先輩は感じれば感じるほど、舌遣いや玉をさする手の動きがいやらしく気持ち良くなっていく。
乳房の感触をしばし楽しんだ後、ゆっくりと脇腹をさすった。そし

てそのまま徐々に手を下半身へとすべらせていき、熱い湿り気を帯びた場所に辿り着く。
婀娜っぽい流し目を送りながら、めぐり先輩が誘うようにゆっくりと左ひざを立てた。ネグリジェの短いスカート部分がめくれて、楚々とした恥毛が生えた淫部が露わになる。絶頂を経た淫裂は愛液でぐっしょりと濡れており、恥毛が白い肌に貼り付いている。
淫猥な下腹部に見惚れている間も、めぐり先輩は卑猥な口淫に耽溺している。このままではあっと言う間に果ててしまいそうだと思い、反撃を開始する。
右手中指を熱いマシュマロのような淫裂に這わせると、ずにゅっ、と一瞬で中指が膣口に埋まった。
「んふぅぅぅ……っ！」
めぐり先輩の肢体ががくがくと戦慄き、膣口から新たな愛液が溢れ出る。もっともっととせがむように膣肉が中指を締めつけてきて、たまらなくなってクリトリスの裏側のザラついた部分を指の腹でこすると、壊れた蛇口のように愛液がとぷとぷと溢れてきた。
「んっ、んぐっ、じゅぶっ、じゅぷ、ぢゅぷぢゅぷ……っ！」
俺の反撃に小さな絶頂を何度も迎えながらも、めぐり先輩はより一層激しい口淫を仕掛けてくる。
熱い唾液に肉竿を浸し、鈴口を固めた舌先でつつき、雁首を上下の唇で締め付け、左の内頬で亀頭全体をぐしぐしとこすり立ててくる。
「う……ぐぁ……っ！」
仰向けになったまま、興奮と快感でどろどろに蕩けためぐり先輩と見つめ合い、互いの性器を激しく愛撫する。互いにまるで蹂躙するかのような愛撫をしているのに、気持ちはどこまでも安心しきっていて穏やかなのが不思議だった。
「めぐり先輩……もう……っ」
下腹部から込み上げてきたマグマの奔流に抗うことも出来ず、歯を食いしばる。左手でめぐり先輩の頭を押さえつけ、道連れにするように右手の中指で膣肉を抉り、親指でクリトリスをぎゅっと押した。
めぐり先輩が目を見開いた直後、自分の視界が白む。

「――――んぐぅぅっ!?　んぐっ、ごぶっ、ごくっ、おご……ごくっごくっ、んぐっ、ごくっ、んっく、んふぅぅぅ……んふぅぅぅ……っ」
目に涙を浮かべながら、自らも絶頂を迎えながらも必死で白濁を飲み込んでくれる。鈴口から壊れたように精液が噴き出す間、めぐり先輩の口の温かな感触を感じながらひたすら膣肉をこすって、愛おしい人の肉体に深い絶頂を刻み付けていた。
「……はぁっ、はっ、はぁぁ……っ」
内頬に亀頭をこすりつけて残り汁を搾り出した後、ようやくめぐり先輩が肉茎から口を離す。亀頭と唇との間に幾筋も銀の糸が伸びて、この世のものとは思えぬほど淫靡な光景だった。
よろよろと上体を起こし、ベッドで本来寝る場所に移動する。俺があぐらをかくと、めぐり先輩は何も言わずに跨ってきゅっと抱きしめてきた。
「ん……ん……っ」
肉槍の裏筋に淫裂を自らこすり合わせ、どこまでも淫靡に表情が蕩けていく。
裏筋にたっぷりと愛液が塗りたくられたところで、めぐり先輩がぽそりと呟いた。
「……比企谷くん。……しよ？」
あまりに魅惑的で、あまりに優しくて、あまりに強制力のある言葉に。
「……っ、……はい……っ」
俺は、息を呑んで肯定することしか出来なかった。
続く。

（8）

ベッドの上であぐらを緩めた格好で座っている俺の股座に、淡いピンクのネグリジェを着ためぐり先輩が座っている。俺の腰に細い両脚を艶めかしく絡め、じっとりと湿った陰部を、ぎちぎちに反り返った肉茎の裏筋にこすり付けている。

――比企谷くん。……しよ？――

ほんの数分前に囁かれた言葉が、たった今聞いたばかりであるかのような生々しさを持って、何度も何度も脳内を反芻する。めぐり先輩は挿入の準備をしようとしているのか、自分から積極的に腰を前後させて陰部を刺激して、既に湿っていた淫裂を更に濃い愛液で溢れさせている。

「ん……ふぅぅ……っ」

おろした黒髪は汗でしっとりとしていて、めぐり先輩が腰を揺する度に甘やかな香りが漂ってくる。肉竿に直接加えられる刺激も相俟って、鈴口からは期待を滲ませた先走り汁が噴きこぼれていた。

「……んっ、……そろそろ、挿れちゃおっか」

「……っ」

おでこ同士をこつんとくっつけて、無邪気に悪戯をする子どものような笑みを湛えて――恐ろしいほど艶を帯びた言葉が紡がれた。

黒く澄んだ瞳に魅入られながら、隠すことも出来ずにごくりと喉を鳴らす。俺の目を見て肯定と捉えたのか、めぐり先輩は「んしょ……っ」と可愛らしい声を上げて、ベッドに足の裏をつけてゆっくりと腰を上げた。

「……そんなに、見ないで……っ？」

「いや……無理ですって、こんなの……っ」

俺の肩に手をかけためぐり先輩が、泣きそうな声で囁いた。めぐり先輩が着ているネグリジェは汗で更に透けていて、つんと張り詰めた乳頭がはっきりと浮かんで見えている。

その上M字に開いた脚の根本はネグリジェの薄布が開いていて、恥毛が控えめに生えた陰部からは甘酸っぱい匂いがたっぷりと溢れて

いた。
視覚と嗅覚をがつんと刺激されて、慣れたはずの行為に対して、まるで初めてであるかのように緊張してしまう。
「それじゃ、行くね……っ」
めぐり先輩が囁き、ゆっくりと腰を落としていく。
亀頭が熱く濡れそぼった小陰唇を押し開き、膣口にキスをする。めぐり先輩がゆっくりと腰を下ろすと、ぱっくりと開かれた膣襞に朱く膨れた亀頭が飲み込まれていく。
「んはぁぁぁ……っ」
「うぐ……っ」
じっくりと挿入していくことで、めぐり先輩の性器がいかに喜んで肉竿を欲しているかがありありと分かってしまう。少しずつ侵入して粘膜同士が接する面積が増える度に、何十何百という膣襞がうねうねと蠢いて肉竿を味わってくる。
「あ……あぁぁ……あぁぁぁぁ……っ」
おぞましいほどの興奮で俺が昂ぶるなか、めぐり先輩は身体の激しい反応とは対照的に、澄んだ黒い瞳からは徐々に光が失われているようだった。口はだらしなく半開きになり、まるで普段のめぐり先輩としてのスイッチを徐々に切りにかかっているように思える。
「あと、半分くらい……？　もう、比企谷くんのってほんとにおっき……あっ」
――喋るのに気をとられて、手が滑ったのかは分からない。
俺に分かったのは、肩に乗っていためぐり先輩の手がするりと離れ、腰がすとんと落ち、肉槍の切っ先が子宮口を思い切り突き上げたことだけだった。
「うぐ……っ!?」
俺としても予想外だった。久しぶりの行為で、しかもここまで散々高まりに高まる交わりを繰り返しておいて、突然肉竿全体がぎちりと締め付けられたのだ。
――限界がノック無しで訪れるのは、当然のことと言えた。
「――あふぁぁぁっ!?　んっ、ひぅっ、あぁぁぁぁ……あぁぁぁぁぁ

……っ!!」
　めぐり先輩の口の中に出したばかりとは思えないほど、尿道を通る白濁の感触は濃い。子宮に注がれるどころか打ち付けるかのような感触で、鈴口から溢れ出した精液が子宮内へと流れ込んでいく。
「あぁぁぁ……あっ、あぁっ、あぁぁぁぁ……っ」
　めぐり先輩は俺の肩を掴み直して壊れたように戦慄き、結合部から白く濁った愛液をこぷこぷと漏らした。魂が抜けそうな心地に浸っていると、結合部から精液と愛液の混じった液体がたっぷりと溢れ出てきた。
「あ……っ」
「あぶな……っ！」
　瞳の光がぼやけてしまっためぐり先輩が、ふらりと後ろに倒れ込む。慌てて抱きかかえると、俺の腕の中で力の無い笑みを浮かべた。
「えへへ……ごめんね？　……でも、比企谷くんったら……。そんなに気持ち良かった？」
　性器と性器で繋がったままで、身体を後ろに傾けためぐり先輩が微笑む。
「ほんとすいません……。……はい、その……ほんとに気持ち良かったです」
「そっか。……あれっ？　……もう……っ」
　射精の余韻もそこそこに、再びむくむくと膨らんできた肉茎の感触に気付いたのか、めぐり先輩が困ったように笑う。
「もっとしたいんだ？」
「……はい」
「……えへへ、わたしも」
　急に無邪気な笑みを浮かべためぐり先輩の言葉に、視界と世界がぐらりと揺らぐ。
　――この人の中に、もっともっと注ぎたい――
　そう思った瞬間、
「え……わっ、わわっ？　う、んん……っ、うそ、まだおっきくなるの……？」

めぐり先輩の膣内で、肉茎が更に大きさを増した。結合部から卑猥な液体がこぷりと溢れ出し、思わず凝視してしまう。
「ん……っ」
めぐり先輩が、両手を後ろに伸ばした状態でベッドに手のひらをつけ、後ろに傾いた体勢のままゆっくりと腰を揺すり始めた。
「う……ぁ……っ」
蕩けきった顔をしためぐり先輩が静かに息を荒げ、ゆっくりと腰を前後させる。肉竿がこすれる部分が次々と変わり、射精した直後だというのにまたすぐにでも達してしまいそうになる。
「……あ……うんん……っ！」
身体を支えようと細い腰に腕を回すと、快感に惚けためぐり先輩が目を見開いた。ぎゅっと膣肉を締めつけられ悶絶しながらも、今の自分の行動によって、クリトリスの裏側に亀頭がこすれていることに気付く。
「……ここ、気持ち良いんですね？」
「あっ、ぅあっ、あっ、あぅぅ……っ！」
ゆっくりと腰を揺すると、顔を真っ赤にしてぶるぶると震える。可愛らしくも色っぽい反応がたまらず、快感に染まった恋人の顔をじっと見つめながら静かに腰を振る。
「あっ、ぅあっ、だめっ、またっ、イ……んんん……っ!!」
ぎゅっと目を瞑って身体を縮こまらせ、繋がった部分を跳ね上げて激しく痙攣する。先程の絶頂時よりも強く握り込むような締め付けは、思考がどろどろに蕩けてしまうほど気持ちが良い。
「あっ、だめっ、わたしっ、イってる……イってるからぁ……っ」
顔をじっと見つめながら再び腰を振り始めると、めぐり先輩は耳まで真っ赤にしてびくびくと震え、感じている顔を見られまいと、手のひらをこちらに向ける形で顔を覆ってしまった。
「……ダメですよ、ちゃんと見せてください」
優しく諭すように言いながら、顔を隠した手をどかす。
「うぅ……うぅぅ……っ」
めぐり先輩は目を逸らしながらも、それ以上は顔を隠そうとはせず

……それどころか、こちらの動きに合わせて腰を揺すってきた。
「あっ、あんっ、やぁっ、こんなっ、わたし、こんな……っ」
興奮で昂ぶっている自分の行動がよほど恥ずかしいのか、腰を振りながら悔いるような言葉を漏らす。しかし言動とは対照的に、腰を振る動きは徐々に激しくなっていく。
「あぁぁ……あぁぁぁぁ」
少し速度を上げて子宮口を突くと、めぐり先輩はおとがいを上げて鳴いた。
「ひっ、あぅっ、うくぅぅ……ぅあぁぁぁ」
隘路のざらざらした部分に亀頭を当てて、円を描くようにじっくりと動かすと、結合部からぶびゅりと白く濁った愛液が噴き出した。
「あっあっあっあんっはぅっあっひっひんっあっあっあっあっ」
細かく、それでいて力強く突き上げると、壊れた人形のような声が何度も漏れた。おとがいを上げたままでいるため、白い喉がずっとこちらに晒されている。
腰の動かし方を変え、肉槍の突き入れ方を変える度に、めぐり先輩の膣内は違った反応を見せてきた。そのどれもが一瞬で精を搾りとりかねないほど、穏やかで苛烈な快感を与えてきてくれる。
「比企谷……くん……っ、もう、わたし、わたし……おかしくなっちゃうよぉ……っ」
「……っ！」
顔を戻しためぐり先輩が、目尻に涙を溜めた状態で――とんでもない台詞を言ってくれた。ゆっくりと射精に向かおうとしていた意識が一瞬で消え去り、柔らかな尻肉を力強く掴んだ。
「今のは反則ですよ、めぐり先輩。……もう一回出すまで、絶対止まりませんから」
「え……ぅあぁぁぁっ!?」
鐘を突くように、亀頭を力強く最奥に押し当てると、めぐり先輩が再びおとがいを上げて全身を激しく戦慄かせた。既に限界を迎えつつある恋人のことを省みずに、ただただ己の獣欲を満たそうと腰を突き立てる。

「いっ、あぐっ、ひぐっ!?　あぐっ、はぅぅぅ……うぁ……あうぅぅ……っ」
感電でもしているかのように、薄い生地に包まれた肢体ががくがくと痙攣する。これ以上の蹂躙を阻止しようとしているかのように、肉槍を強く強く締め付けてくるが、溢れ出す愛液が肉槍の往復を促してしまっている。
気が狂いそうなほどの快楽に浸りながら、腰を打ち付けた。
「あっ、あぐっ、ひっ、ひんっ」
何度も。
「ひぐっ、あぅぅっ、比企谷くん……比企谷くん……っ」
何度も、何度も。
「イってる……わたし、イってる、イってるからぁ……っ！」
何度も、何度も、何度も。
「めぐり先輩……俺ももう、出ます……っ！」
「あっ、うくっ、はぁぅぅぅ……っ」
俺の言葉に反応する余裕さえ無いのか、めぐり先輩は天井を仰いだまま、獣性を帯びた声で鳴き続けている。喉から搾り出された言葉の通り、めぐり先輩は背筋を弓なりに反らしたままびんと張り詰めていて、絶頂の波が続いているようだった。
どちゅっ、じゅぐっ、ずじゅりっ。
汁を噴き出しながらぶつかり合う、肉と肉の生々しい衝突音を聞きながら――下半身の奥から、尿道を伝って白濁が込み上げてくるのをはっきりと感じた。
「うぐ……っ！」
絶頂する直前。目の前には、めぐり先輩の白い喉と、薄い生地の中に透けて見える柔らかそうな乳房と、卑猥に濡れそぼった結合部が見えた。
「あ――――あぁぅぅぅっ!?　あぐっ、んはぁぁぁっ!?　ひっ、あつ……熱いよぉ……あぁぁぁ……あぁぁぁぁぁ……っ!!」
子宮口に押し付けた鈴口から、鉄砲水のごとき勢いで白濁を噴出させると、膣肉が肉槍をちぎらんばかりに締めつけてきた。脈動の度に

みちみちと締め付けてきて、一度の脈動で噴き出す精液の量が明らかにいつもよりも多い。
気持ち良すぎて、頭がおかしくなりそうな絶頂だった。
それはめぐり先輩も同じ、いや、俺以上だったようで――
「あ……っ」
儚げな声を上げためぐり先輩が、急に電源が落ちたかのように後ろに倒れ込んだ。
「うお……だ、大丈夫ですか……っ!?」
背中を支えながらゆっくりと仰向けに寝かせ、顔を覗き込む。
「ん……あっ、あぁ……っ」
絶頂の余韻がまだ続いているのか、びくりびくりと震えながらゆっくりと目を閉じていった。
「……これは……」
後で謝らないとな……と深く反省しながらも。
……すげえ気持ち良かった……。
めぐり先輩と過ごした、濃密にも程がある時間を脳内で反芻すると――膣肉に包まれた剛直が、凝りもせずに大きさと硬度を取り戻していた。
続く。

（9）

気を失っためぐり先輩の介抱をしたあと、ベッドに並んで寝ていると――気がつくと眠ってしまっていた。2週間ぶりの再会ということで、俺も舞い上がっていたのかもしれない。

「ん……っ？」

目を覚ますと、見慣れない天井に一瞬ここはどこだと驚く。しかし数秒でこれまでの経緯を思い出した。

「んん……っ」

柔らかな声が左耳に流れ込んできて顔を向けると、めぐり先輩が気持ち良さそうにこちらに寝返りを打っていた。身体を拭いただけで俺もめぐり先輩も裸で、長い掛け布団を2人の腹に共用で掛けていた。そのため距離が近い、というかぴったりとくっついている。

うんうん。

幸せ。

「んんん……っ」

めぐり先輩の手が俺の胸板に伸び、さわさわと撫でてくる。長いまつ毛がふるふると揺れて、長い黒髪がさらりと流れた。もぞもぞと動いたかと思うと、まるで子犬が安心する場所を求めるかのように、可愛らしいおでこを胸板にくしくしとすりつけてきた。

うんうん。

可愛すぎて死ぬ。

「ん……っ？　あっ、んん……っ」

決して起こさないように、左手で白い頬をそっと撫で、右手で黒髪を撫でる。めぐり先輩は気持ち良さそうに身をよじり、ふにゃりとした笑みを浮かべた。何か良い夢でも見ているんだろうか。

「……んん……もう、だめだよぉ、比企谷くん……っ」

「……」

夢の中でも俺はエロガッパ仕様らしい。

ちょっとショックだ。

しかしぐうの音も出ない。

このまま何時間でも撫でていられるな……と誇張なしに考えていると、ふとめぐり先輩の閉じた目が更にきつくつむられ、やがてゆっくりと開いた。
「……おはようございます」
俺の言葉に、めぐり先輩の可愛らしい目がぱちくりとする（可愛い）。
きょろきょろと視線を巡らせる。２人とも裸なのに気付いたからか、頬がほんのりと朱に染まった。
「……おはよう」
消え入りそうな声で返事をしたかと思うと、恥ずかしそうに俺の胸板におでこをこすりつけた。穴があったら入りたいと言うが、めぐり先輩がこの場で見出した穴は俺の胸板らしい。そう思うと無性に頬が緩んでしまう。
時計を見る。夕方くらいで、これから夕食の準備をすればちょうどいいくらいだった。夜はうちで……とめぐり先輩も言っていたことだし。
「……今から晩ご飯の用意をしますか？　それともうちょっとゆっくりします？」
小さなあたまをぽんぽんと撫でると、めぐり先輩は微かに眉根を寄せて「むむ……」と唸った。
「悩みどころだけど……もうちょっとこのままでいい？」
「いいですよ。あと8時間くらいでいいですか？」
「それだと深夜になっちゃうね……」
冗談半分のテイストで願望を口にしてみるも、苦笑混じりにさらりと流される。
「それも良いんだけどね……流石にお腹が空いちゃうと思うから……」
意外と提案を汲んでもらえていた。
俺とちらりと目が合うと、楽しそうに笑った。そして、もうちょっとだけ、もうちょっとだけ……と、どこか楽しそうに呟きながら毛布をかぶり、俺の胸に顔をうずめる。

ある意味だらしない姿ではあるのだが、休みの日にきびきび動く必要なんてない。それに、普段はぽわんとしながらもしっかり者の印象が強いめぐり先輩が、こんなだらけた姿を見せてくれるのはむしろ嬉しいばかりだ。

温かな感触に浸りながら、ふとこの後のことを考えた。

今日と明日は、久しぶりに2人でゆっくり出来る。

けれど、明後日からは、俺は受験生としての生活に戻り、めぐり先輩も大学生としての忙しい生活に戻る。

それがどうしようもなく歯がゆい。今日久しぶりに会うまでに募っていた様々な感情を混ぜ合わせたものは、幸せを感じれば感じるほど膨らんでいった。

「……めぐり先輩。俺が卒業したら、一緒に住めませんか？　……あ」

「え……？」

眠かったからだろうか、めぐり先輩を抱きしめて安心していたからだろうか。

気がつけば、頭の中に思い浮かべていた願望をそのまま口にしていた。

独り言のようにぽそりと呟いただけだったが、目の前にいるめぐり先輩にはしっかり聞こえてしまっていた。

「え、ええとですね……今のは……」

どうにかしてごまかそうとするが、そもそも今口にしたのは紛れもない本音だ。それをウソと言うのも気が引けて、どうしたらいいか分からずにいると。

「……いいよ」

「……へ？」

思わぬ返事に間抜けな声を漏らす。めぐり先輩はこちらをじっと見つめて、穏やかな笑みを浮かべていた。

「わたしも……比企谷くんともっと一緒にいたいなって思ってたの。大学生活は楽しいんだけど、やっぱり君がいないとなーんか足りないなって思っちゃって……。今日久しぶりに会えてすっごく楽しかったし、この後の時間もすっごく楽しみなんだけど……明後日からはま

た、すぐには会えなくなっちゃうんだなって思うと……なんだかすっごく寂しいなって」
「めぐり先輩……」
同じことを考えてくれていた――その事実が、俺の胸にどうしようもないほどの幸福感を生む。
「そ、それなら、本当に」
「ただし」
「へ」
「比企谷くんのご家族とわたしの両親、両方にきちんと説明する必要があるからね？」
おうふ、しっかり者ですね。
ますます惚れる。
「大丈夫です、うちの親ならこんな可愛くて素敵な人と同棲するなんて言ったら、ものの数秒で快諾してくれますから」
「か、かわ……すて……っ」
カワステ？
どこかの国の挨拶みたいになってしまった。
可愛い。
実際うちの親なら「相手に失礼がないかが心配だ」っていう別ベクトルの心配をするだろう。小町はニヤニヤニコニコしながら送り出してくれるに違いない。
「そうなると、後はめぐり先輩のご両親ですね」
「う、うん……」
俺が不意打ちで放った賛辞の言葉の余韻がまだ残っているのか、ぽわぽわと頬を赤く染めためぐり先輩が頷く。可愛い。
「お母さんは大丈夫だと思うけど……お父さんがちょっとね……」
「……ああ、たしかに」
俺が引越を手伝えなかったのも、めぐりんパパ……略してパパりんと俺を接触させないためだった。
パパりんはやめておこう。
語感が色々とアレだ。色々とアレ。

ぽりぽりと頬を掻き、ちょっとだけ考えを巡らせる。
俺の結論は、至極単純だった。
「いずれご挨拶もしなきゃいけないんですし、それなら今のうちに納得してもらうしかないですよね。早いに越したことはない」
「あ、挨拶……っ!?」
何気なく言った言葉に、めぐり先輩の顔と耳と首が一瞬で茹だってしまった。
「あ、いや……同棲するならそういうつもりじゃないと、めぐり先輩にも失礼だなと……めぐり先輩？」
天井を仰いだ先輩が、両頬を手で挟んで「ああ、もう……不意打ちだよぉ……っ」と可愛らしい声でぽそぽそと呟いている。
「もう……君って急にわたしのことをドキッとさせてくるよね。びっくりしちゃったよ、もう……」
こちらに向き直った先輩が、片頬を膨らませながら俺の頬をぷにぷにとつついてくる。オウオウとオットセイのような声を上げていると、どこか拗ねていた顔がふっと優しく緩んだ。
「でも……ありがとね？　そんな風に考えてくれてるのは、本当に嬉しいよ」
「……っ」
ふわりと、花が咲いた気がした。
「わわっ？　ふふっ……どうしたの？」
突然抱きしめてきた俺に、めぐり先輩は包み込むような笑みを向けて抱きしめ返してくる。
ああもう、とにかく勉強を頑張ろう。
そして、胸を張ってこの人の隣に並べるようになろう。
「……俺、頑張ります。待っててください」
「……うん、わかった。わたしも頑張るから」
「取り敢えず今年は週3で会いに行っていいですか？」
「う、ううん……それはちょっと、お互い大変だと思うなぁ……」
「じゃあ、週4は？」
「比企谷くん、君が今頑張るべきなのは？」

「……勉強です……」
「うん、よろしい」
頭を撫でられた。
いかん、あと3日間くらいこうしていたい。
なんにせよ、当面は勉強を頑張りながら……家族への相談と、めぐり先輩のご両親――というかお父さん――の説得をしていこう。
「めぐり先輩。何て言うかその……これからも、よろしくお願いします」
「……うん、よろしくね、比企谷くん」
おでこ同士をくっつけた状態で囁くと、めぐり先輩が花のような笑みを向けてくれる。
いつでも、いつまでも、この笑顔をすぐ隣で、目の前で見ることが出来るように。
やるべきことを、頑張っていこう。
今日、めぐり先輩に会うことが出来て良かった。
離れてしまってから悶々としていたものも、ことごとく霧散したから。
「……あと30分くらい、こうしてていい？」
「意外と長いですね……」
「う……だめ？」
「いいえ、大歓迎です」
「えへへ……ありがとう」

――少し大人びた城廻めぐりは、ちっぽけな不安などたやすく包み込んでくれる。

お終い。

（コミケ本）由比ヶ浜家で搾りとられ、川崎家で癒される夏休み。
夏コミＣ９４「川崎沙希はなんだかんだで身内に激甘である。」（１）

朝のまどろみが気持ちいい。
「……ん……っ」
ゆっくりと目を開け、のらりくらりと意識を覚醒させてゆく。カーテンの隙間から差し込む光が朝であることを穏やかに告げている。夏用の薄い掛け布団の柔らかな感触。エアコンの心地よい冷気がもぞもぞと布団から這い出た素肌を撫でていく。いつからそうなっていたのかは分からないが、横向きになって寝ていたようだ。
（……んん……？）
ぼんやりと視界を巡らせても、ここにいるはずの人がいない……と思っていると、胸や腹になにやらくすぐったさを感じた。
ちらりと視線を下に滑らせると、青みがかった黒髪がもぞもぞと動いている。甘くて柔らかな匂いが鼻腔をくすぐるのが心地良い。一糸纏わぬ姿で俺の胸板に顔をうずめ、張りのある豊満な乳房が腹に当たって艶めかしく形を変えている。
「……ん……ふぅ……っ」
耳朶を包む色っぽい声音。熱い吐息が胸板を撫でると、数時間前までたっぷりと交わっていたにも関わらず下半身に血液が集まってきてしまう。
「きゃ……っ？　……また、大きくなってる……」
俺が起きていないと思ったのか、むくむくと大きくなった肉幹を興味深げにそっと撫でてくる。今まで数え切れないほど細指でまさぐり、口で咥え、乳房で挟み、膣に挿れてきたのに、まるで子供のような好奇心を覗かせて、さわさわ、さわさわとまさぐってくる。声が漏れてしまいそうになったが、もう少し泳がせてみようと思う。
「ん……はっ、すご……硬くなってる……はっ、んん……っ、ちゅっ、

ちゅぴっ、れるっ……」
「……っ、……ぅ……っ」
細指をうねうねと波打たせながら肉幹をしゅるしゅるとしごき、乳首にちろちろと舌を這わせてくる。固めた舌先で何度も小突かれて、思わず吐息が漏れた。慌てて目を閉じる。あごの辺りに視線を感じる。起きたのかどうかを確かめているのだろう。静かに呼吸をして寝たフリを続けていると、ふたたび手と舌が動き始めた。
「んっ、ちゅっ、れる……っ、はぷっ、ちゅぴっ、あむっ、んふぅぅ……っ」
愛撫の動きにだんだん容赦がなくなっていく。初めは乾いた感触がしていた手のしごきも、先走り汁がこぷこぷと溢れることで滑りを増していき、にちにちと卑猥な音を立て始めた。人差指と親指で作った輪でカリ首を締めつけてにゅるにゅると回されると、腰がかくかくと前後に動いてしまう。瑞々しい唇が乳首に吸い付き、入念に、執拗なまでに舌を這わせてくる。発情のスイッチが入ったのか、俺が全身をがくがくと震わせていてもまるで意に介さない。
「あむっ、ちゅっ、ちゅぴっ、ちゅるる……はぁっ、んっ、れるっ、ちゅっ、ちゅりゅ……っ」
肉幹をしごく手の動きが速まる。にゅちにゅるくちゅにゅぐ……と卑猥な音と感触が聴覚と触覚を淫靡に焼き焦がす。むくむくと湧いてくる射精衝動に思わず腰を引いても、肉感的な身体をぴったりとくっつけて決して逃がそうとしない。俺が寝ている前提でこの行為に及んでいることを忘れているのだろうか。それとも俺が起きていても構わないと開き直っているのか？
さすがにこのままなされるがままに射精するのも悔しいので、青みがかった黒髪をぽんぽんと撫でた。
「おはよう」
「……っ」
俺の乳首を舐め、肉竿を劣情のままにしごいていた彼女――川崎沙希が顔を上げ、目を見開き、綺麗な顔立ちが一瞬で茹だった。この反応を見るに、どうやら俺が寝ている前提であることを忘れていたよう

だ。
さて、このあとはどうする？
たしなめるでもなく、笑いかけるでもなく、特になんの表情も浮かべずにじっと見つめてみる。
じー。
じー。
じーーー……。
「……」
沙希は、何も言うことなく俺の肉幹から手を離し、まるで初めから何も起きていなかったかのようにくるりと背を向けた。
や。
なんでだよ。
一方的に興奮していたことがよほど恥ずかしかったのか、新雪のように白い背中がふるふると震えている。小動物感がすごい。ちらりと覗く耳は真っ赤になっていた。むずむずと湧き上がる嗜虐心に口元が緩む。
「きゃ……っ」
すべすべの背中に抱きつくと、可愛らしい悲鳴が聞こえた。
「しばらく泳がせてみたんだが……いいものを見れた。ありがとな」
「あ、あんたねぇ……っ」
「ん？　俺はただ寝たフリをしてただけだぞ？　まさかあんなにエロいものが見れるとは思わなかった」
「……っ」
ぐうの音も出ないのか、ぴたりとくっついた肌が震える。よほど恥ずかしいのか、沙希の身体がほんのりと熱くなってきた。
さらさらの髪が流れているうなじにそっと顔をうずめると、沙希がぴくりと揺れた。心地良いくすぐったさと安心する匂いに包まれて目を細める。左手で沙希の頭をそっと撫で、首の下にまわしていた右手は豊満な乳房を羽根が触れるようにそっと撫でていく。
「ん……んん……っ」
先ほど俺を愛撫していた時とはまた違う、甘く蕩けた声。腕のなか

で柔らかな肢体の強張りが徐々にほぐれていき、すべすべした背中をそっと押しつけてくる。ゆっくりと、けれど確実に身も心も委ねてくる仕草にぞくぞくしてしまう。肉幹が硬度を増し、ふくよかな尻の谷間に埋まる。

「や……っ」

張りつめた牡性器の感触に気付き、色っぽい声を漏らして腰をくねらせる。逃げようとしているのかもしれないが、肉槍を優しく愛撫しているようにしか見えない。

「その動き、めちゃくちゃエロいぞ」

「……っ」

耳元で囁くとぴたりと動きを止める。しかし十秒と経たないうちに、恐る恐るといった様子でふたたび腰がねっとりと揺れはじめ、剛直を肉尻の谷間でしゅりしゅりと撫でてくる。ぞわぞわと下腹部を包み込む興奮でカウパー液が溢れ、透明な発情汁が綺麗な双丘を汚していく。

「……はっ、はぁっ、んっ……っ」

沙希の柔肌がじっとりと汗ばみ、下腹部からは甘酸っぱい牝の匂いが込み上げてくる。徐々に濃くなってゆく恋人の匂いに鼻腔が犯される。

うなじに顔をうずめ、乳房を撫でる手を止めてゆっくりと腰を振る。ずり、ずり、ずり……と豊満な尻肉の谷間に勃起肉を這わせ、我慢汁を塗り込んでいく。

「はぁぁ……あっ、うっ、あぁぁぁ……っ」

腕のなかで沙希が艶めかしく喘ぎ、揺れる。冷房が効いていても、徐々に体温が上がっているのがわかる。

「ん……？」

沙希が俺の頭をくしくしと撫で、くいくいと押してくる。顔を離すと、自分の髪をそっとかき分けてじっとりと汗ばんだうなじを晒した。自ら急所を晒すような行為が、さらに興奮を高めていく。

「んふぁぁぁ……はっ、あっ、あっ、あ……っ」

汗粒が見えるうなじの毛穴をひとつひとつ丁寧に、執拗なまでに舐

る。乳房に触れていた手は五本指をざわざわと波打たせ、不意打ちで乳頭に触れた。
「はぁうぅぅっ！　あっ、あっ、あっ、あっ、あぁぁぁ……っ」
触れたか触れないか一瞬分からないくらいのタッチであっても、沙希はまるで通電したかのように跳ねた。吐息を荒げ、うねうねと腰をくねらせて肉槍に尻をこすりつけてくる。先走り汁が遠慮なくぴゅるっ、ぷぴゅっと溢れ出てきて、互いの汗も混じり合う。
「……向き、変えるぞ」
「え……あ……っ」
沙希の肩を押さえてうつ伏せにする。脚を開いてうつ伏せになった沙希の身体には発情の気配が色濃く刷かれていて、豊満な尻肉の下にかすかに見える黒い茂みにぞくりとする。
すらりと伸びた脚を閉じ、太ももの上に跨る。沙希はぴくりと震えたが、枕を掴んで顔をうずめたままでなにも抵抗はしてこない。
「ん……うぅぅ……っ」
腰にそっと指を這わせる。じっとりと汗ばんだ背中は、春を間近に控えた雪原を思わせた。楕円を描くように恥骨の周りを撫で、そのまま楕円をすべらせるようにして徐々に首に向かっていく。
「あっ、あぁっ、あっ、あっ、あっ……っ」
触れているのは五本の指の腹だけ。それも羽根が触れるほどのかすかなタッチ。沙希はまるで俺の指先の感触に全神経を集中させているかのように、腰から背中にかけてゆっくりと撫でられるたびにぶるぶると震え、びくりびくりと腰を跳ねさせる。
くすぐったくなってもおかしくない触りかた。しかしすらりと伸びた脚の付け根から漂う発情臭は濃くなっていくばかりで、沙希が確かな快感を得ているのは明らかだ。艶っぽい反応にぞくぞくすると、天を衝くかのように勃起した肉槍の先端からカウパー液が溢れ、むっちりとした太ももにぽたりと垂れ落ちた。
汗ばむ極上の肢体が、背中に指を這わせるたびにがくがくと揺れる。びくりと上下に跳ねることもあれば、悩ましく、誘惑するように左右に腰をくねらせることもある。

穏やかな朝に過ごす、怠惰で情欲にまみれた時間がたまらない。
「ひぅ……っ」
首筋に舌を這わせると、沙希の声が一段と上ずった。舌先だけつけるのではなく、舌全体をぺたりと這わせていく。首筋、肩甲骨、腹の裏側と舐めていき、尻の谷間の少し上――恥骨にたどりつくと、発情汁を溢れさせていた下腹部が激しく揺れた。
「んくぅぅぅ……っ！　だ、だめ、そこ、だめ……っ！」
「だめって、なんでだ？」
意地悪く問いかけて、恥骨をもう一度ねろりと舐める。沙希が豊満な尻を突き出すように跳ねて、腰の下のシーツに広がる染みが見えた。
「んはぁぁ……っ、だ、だめ、だめなんだって、そこ、くすぐったいから……っ」
「くすぐったいならもう少し違う反応だと思うんだけどな……」
言いながら、腰骨をがしりと掴んでねろり、ねろりと丹念に恥骨を舐める。ちらりと覗く薄紅色の小陰唇がひくつき、とろりとろりと濃厚な愛液が溢れ出してくる。
「う……あっ、ちっ、ちがう、ちがうから……っ」
もはやなにを言っているのか、自分でも分かっていないのかもしれない。沙希は枕に顔をうずめ、こすりつけるようにして顔をぶるぶると左右に振っている。子どもが泣きじゃくるような仕草は可愛らしく、それと同時に燃え盛る嗜虐心に薪をくべていく。
「きゃ……っ!?」
沙希の両脚をぱっくりと開いて身体をかがめ、太ももの下に腕を通してがっちりと固定した上でふたたび恥骨を撫でる。脚が開いたことで肉花びらが外気にさらされ、なかにたまっていた濃厚な愛蜜の匂いが漂ってくる。
「やっ、やだっ、これ、恥ずかし……ひぁぁっ!?」
恥骨に吸い付き、ねろり、何度も何度も舐める。
「あぁぁぁ……あぁぁぁ……っ」
アナルを舐められているわけでもなければ、一番敏感な秘部を舐め

られているわけでもない。
　それなのに、沙希はおとがいを上げてぶるぶると震え、淫部からは際限なく愛液が溢れ出してくる。
「だ……め、イ、ク、イクから……それ以上だめ……だめ、だめだって、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……っ」
　獣性の混じった嬌声を遠吠えのように上げて、魅惑的な身体を弓なりに反らして絶頂に至った。ぷしゅっ、ぶしゅっ、と膣口から発情汁が噴き出し、シーツを汚していく。
「……すげぇな。尻を舐めただけでイったのか」
「はぁっ、はっ、はぁぁ……ばか、だめだって言ったのに……」
　沙希が顔だけ振り向いて恨みがましい目を向けてくる。咎めるように眉をひそめているが、じっとりと汗ばんで口を半開きにした顔は色っぽいばかりで、さらに興奮させようとしているとしか思えない。
「わるいわるい、あんまりエロいもんでついな」
「……っ」
　本音を言うと、沙希は耳まで真っ赤にして枕に顔をうずめた。膝から下をパタパタと揺らすのが可愛らしい。
　愛撫の仕方を勉強して日々試しているためか、沙希の感度は着実に上がっていた。そのうち、もっとささいな行為でも絶頂に至るようになるかもしれない。考えただけでワクワクする。
「……次、どうしたい？」
　恥骨をそっと撫でながら聞くと、沙希は豊満な肉尻を悩ましく揺らし、うつ伏せのまま淫部にそっと両手を伸ばした。むっちりとした尻肉をかき分け、薄桜色の小陰唇を割り開く。むわっと漂う濃厚で甘酸っぱい匂いに肉槍がびくりと反応した。匂いを嗅いだだけで鈴口からこぷりと我慢汁が溢れ、シーツにぽとりと落ちる。
「……っ」
　沙希は何も言うことなく、おびただしいほどの興奮で静かに震える淫裂を晒している。こちらから何も言うことなく自発的に行なったおねだり。恥じらいがたっぷりと混じった淫靡な仕草にぞくぞくする。

「……挿れるぞ」
むっちりとした太ももにまたがり、割り開かれた花びらに肉槍をあてがった。

（2）

熱く潤った粘膜壁に亀頭がぬちゃりとキスをして、本当にこんなところに入るのだろうかと不安になるくらい小さな膣口が、鈴口から溢れた先走りをちゅるりと吸い込む。

細い手首を掴み、手綱のように引っ張りながらゆっくりと腰を押し込む。青筋立った肉槍がずぶずぶと膣口を押し開き、膣道を満たしていく。にちにちと柔ヒダが締めつけてきて、ぞくぞくとした快感が尿道を突き抜けた。

「あ……あふぁぁぁ……っ」

沙希が背すじを弓なりに反らせて蕩けきった声を漏らす。今は少し苦しそうだが、すぐに慣れて獣のように喘ぎはじめるだろう。沙希が牝として目覚めていく様を見るのがまた楽しい。

ぐり、ぐり、ぐり……と、肉槍をゆっくりと押し込んでいく。熱い愛液でぬめった膣道をかき分けていくと、やがて亀頭が最奥にこつりと当たった。肉幹がまだ根本まで埋まっていなかったが、さらに腰を押しこむと膣全体が柔らかく蠢き、綺麗に根元まで呑み込んだ。

「はっ、はぁぁっ、はぁぁぁ……っ」

沙希が息を荒げる。手首を解放して、背中に覆いかぶさるようにして重なった。じっとりと汗をかいた背中と触れ合うと、挿入していることも相まって互いの身体の境界線が曖昧になる気がする。

「あっ、んん……っ」

腰を動かしたわけではないが、体重をかけたことで膣肉がきゅっと締まり、互いの官能が高まっていく。

「気持ちいいか？」

耳元で囁くと、沙希がくしゃりと泣きそうな表情を浮かべる。

「……そんなの、言えない」

「へえ？」

「あっ、んくぁぁぁ……っ!?」

ぷいと顔を反らしてしまった沙希の両腋の下に腕を通して下からがしりと肩を掴むと、腰をぐりぐりと押しこんだ。沙希が脚をバタつ

かせて淫靡に悶えると、にゅるにゅると穏やかに蠢いていた膣ヒダが苛烈なまでに収縮して肉槍を締めつけてきた。
「……か……は……っ」
沙希が全身をぶるぶると痙攣させ、苦悶と快楽の入り混じった吐息を漏らす。軽く達してしまったようで、結合部からとろとろと溢れ出す愛液が陰毛を浸した。
「ちゃんと言わないと、締め付けたままにするぞ」
言いながら、腕と腰に力を込めて肉感的な身体との密着度を高める。
「あが……かはっ、はっ、ひぁっ、やっ、だ、め……うぅぅぅ……っ」
ぎち、ぎち、ぎちと締め付ければ締め付けるほど、俺の身体とベッドに挟まれた身体ががくがくと痙攣して絶頂を訴えかけてくる。被虐的な快感になにより弱い、マゾにもほどがある極上の肢体にぞくぞくする。
「ほら、早く言え。気持ち良いか？」
命令口調で囁き、耳に舌をすべり込ませる。可愛らしい悲鳴を漏らして腰を引けば、決して逃さないという意思を示すために腰をぐりぐりと念入りにこすりつける。
「……いい」
「ん？　聞こえないぞ」
「……もち、いい……」
「もっとはっきり。なにが気持ちいいんだ？　いつもみたいに言ってみろよ」
「……あ、あんたの、お、おちんちん、が、硬くて太いおちんちんが、みちみちってあたしのなかを埋めてくるの……気持ちいいの……気持ちよすぎて、わけわかんないの……あふぁぁっ!?　あっ、はぁっ、あぁぁぁぁぁぁぁ……っ！」
開き直った沙希が恥ずかしい言葉を一気にまくしたてた瞬間、嗜虐の炎がぞくぞくと背中を駆け抜けた。一度だけ腰を引いて思いきり突き出す。獣欲で張りつめた亀頭が淫肉を抉り、子宮口をぐりぐりとこすると、結合部からごぷごぷと大量の愛液が溢れ出た。

「……よく言えたな。動くぞ」
「あ……あぁぁぁぁ……っ」
身体を起こし、快楽にざわめく尻肉を掴んで抽送を始める。肉厚な尻の谷間から肉槍を引き抜くと、大量の愛液でいやらしく濡れ光っていた。挿入前よりもがちがちに勃起した肉槍をふたたびずぶりと谷間に埋め込む。沙希は枕をがしりと掴んで顔をうずめ、くぐもった声を漏らしている。
「う……く……あぅ……あぉぉぉぉ……っ」
ずぶり、ずじゅ、にゅぐ……っと卑猥な音と感触に溺れながらゆっくりと抽送すると、くぐもった嬌声に徐々に獣性が混じっていく。
「枕を外すんだ。声が聞きたい」
「あ……ぅあ……っ」
俺の言葉に、沙希はうつむいたまま従う。枕を横にどかし、シーツを握りしめ、微かにあごを浮かせる。荒らげた吐息がはっきりと聞こえる。亀頭が抜ける寸前まで腰を引いて、沙希の呼吸音に耳を澄ませる。吸って、吐いて、吸って、吐いて……もう一度吸った瞬間に、全力で腰を突き入れた。
「んはあぁぁぁっ!?」
めいっぱい吸った息がすべて、熱く濡れた嬌声に変換された。尻肉を掴む手に力を込めて、抽送の速度を上げる。腰を押し付けるたびに、ずっちゅ、ぬぢゅ、にゅぶりゅ……と卑猥な打擲音（ちょうちゃくおん）がする。結合部は白く濁った本気汁がねちゃねちゃと泡立ち、沙希がどれほど激しい快楽に溺れているのかを如実に示している。
「あっ、かはっ、はぐっ、はっ、はぁぁぁっ！　あっ、んはぁぅぅっ！」
牝としてのスイッチが入ったのか、あるいは理性の糸が切れたのか、なりふり構わない喘ぎ声をまき散らす。ベッドに突っ伏したまま脚をバタつかせ、俺が腰を引けば名残惜しむように尻をうねうねとくねらせ、腰を押し付けるとえげつないほどに結合部をこすりつけてくる。

「ぐ……くぁ……沙希、出る、出る、出すぞ……っ！」
餅のような弾力の尻に指を食い込ませ、激しく腰を振る。ぐちゅ、ぐりゅ、にぢゅ、にゅぐ……っと卑猥な音がして、膣道は奥へ奥へと誘い込むように収縮して牡性器を貪ってくる。
「あっ、あぁぁっ、はぁぁっ、八幡……くっ、ひぐっ、あふぁぁぁっ！
あっ、ふあぁぁぁっ！」
互いの名を呼び合い、ギアがひとつ上がる。沙希はシーツをキュッと握り締めて腰を狂おしいほどに振り立て、貪欲に剛直を貪り喰らう。気絶しそうなほどの快感に押されながら、絶頂に向かって夢中で肉槍を突き入れる。にゅぢっ、にゅぢゅっと淫靡な音を立てる結合部から白く濁った愛液が際限なく溢れ、ギシギシと音を立てるベッドの上に甘酸っぱい発情臭が満ち満ちていく。
「……ぐ……ぁ……っ」
睾丸がキュッと引き上げられ、重なり重なったおぞましいほどの興奮でたっぷりと蓄えられた精液が上ってくる。狭い尿道を我先にと駆け上がり、子宮口にぴったりと押し付けた鈴口から一気に噴き出した。
「――――あっ、はぁぁっ、はぁぁぁぁぁぁ……っ。ひぐっ、おっ、おぉぉ、んくぅぅ……んふぁぁぁぁ……っ」
沙希がおとがいを跳ね上げ、狼の遠吠えのような嬌声を上げる。どぐん、どぐんと大きく脈打つたびに、子宮の中に遠慮のない量の精子が注ぎ込まれる。脈動のたびに意識が持っていかれそうになる快感のなかでも俺は腰をぐりぐりと押し付け、沙希も絶頂の痙攣にさいなまれながら肉尻をぐりぐりと押しつけていた。
たっぷり数十秒に渡ったふたりの絶頂の痙攣がようやく収まる。もうなにも出ない……と思っても、膣ヒダがうねうねと締めつけてくるとびゅるっ、ぷびゅるっと尿道に残った精液が子宮に注がれた。
「はっ、はっ、はっ、はっ……」
崩れ落ちるように沙希の背中に重なると、汗ばんだ手が頭をくしくしと撫でてきた。
「……比企谷。すっごい汗かいてる。一回シャワー浴びないと」

「……沙希もだろ。あと、呼び方。戻ってるぞ」
「……恥ずかしいから、このままでいい」
沙希がシーツに顔をうずめる。数えきれないほど身体を交わらせてきたというのに、こういった羞じらいが未だになくなっていないのが可愛くてしょうがない。
「ん……っ？　あっ、あんっ、こ、こら……っ」
手を潜り込ませて乳房に触れると、沙希は色っぽく喘ぎながらたしなめてきた。たっぷりと汗をかいた下乳を掬い上げるように揉むと、肉感的な身体が震えて膣肉がキュッと締まる。たっぷりと精を吐き出して半勃起状態になっていた肉竿がふたたび硬度を取り戻していく。
「……なあ、沙希。もう一回いいか？」
了承されるのを前提でゆっくりと腰を揺すると、沙希は「うぁ……こ、こらっ」と喘ぎながらもたしなめてきた。
「今日は大志たちと会うんだから……これ以上したら遅れちゃうでしょ？」
顔だけ振り向いた沙希が困ったように笑う。
「……そういえばそうだった。大志だけと会う用事ならすっぽかしてもいいんだけどな……」
「……いま、なんか言った？」
「ご、ごめんなさい、なんでもないです」
膣肉がにちりと締まった。怒りを表すためにエロいことをするって斬新ですね！　言ったら絶対もっと怒るから言わないけど。
ゆっくりと肉槍を引き抜くと、沙希は色っぽい吐息を漏らして小さく痙攣した。
「シャワー浴びないとな。立てるか？」
「ん、ちょっと手伝って」
「あいよ」
度重なる絶頂でくたくたになっている沙希の身体を起こし、先にベッドから下りる。くるりと振り返ると、沙希はぼーっとした表情のまま四つん這いでベッドから下りようとしていた。

沙希の目の前で、半勃起した肉幹がむくむくと大きくなる。
「……」
何も言わずに沙希の顔を掴むと、澄んだ瞳が一瞬で濡れた。
「だから、これ以上したら、遅れちゃうんだって……」
沙希の声が蕩ける。精液と本気汁がまとわりついて白く濁った肉幹の目の前ですんすんと鼻を鳴らし、四つん這いの身体をぶるりと震わせる。たしなめる言葉を口にしつつも、その視線は卑猥に濡れ光る肉茎に縫い付けられていた。
「あむ……っ」
「くぁ……っ」
細指がそそり立つ肉棒を前に倒し、艶っぽい唇が開き、亀頭をぬむりと呑み込む。とろけた瞳が上目遣いで見つめてくる。右目の下の泣きボクロも相まって、ぞくりとするほど色っぽい表情。沙希はうっとりと目を細めて竿の上で唇をすべらせ、唇と口内を蠢かせながらじっくりと味わっていく。己の恥ずかしい液体もたっぷりとまとわりついているにも関わらず、まるで極上の甘露を味わうかのように、幸せそうに瞳を細めている。
「……お……あっ……っ」
腰ががくがくと震えて思わず一歩下がると、沙希は綺麗に整えられた眉を八の字に曲げ、俺が下がった分だけ身体を乗り出した。ぶらぶらと揺れる玉袋を片手でそっと支え、いたわるようにやわやわと揉んでくる。たっぷりと精子を出すよう促すかのような愛撫にごくりと喉を鳴らす。
「んむ……ちゅっ、じゅるっ、れるっ、ふぅぅ……んふぅぅ……んぐっ、んっ、ふぅぅぅ……っ」
顔を傾けて肉竿を根本まで咥えた沙希の荒い鼻息が陰毛を揺らす。唇でカリ首や竿をにゅむにゅむと締め付け、口内では舌先が亀頭や鈴口を丹念に、執拗なまでに撫で回していく。ついさっき大量に射精したことを忘れたかのように、睾丸がきゅっとせり上がり、むくむくと射精欲求が湧き上がってくる。
「沙希……もう、出る、出る、出る……っ」

情けなく腰をがくつかせながらつぶやくと、沙希は肉幹を貪って卑猥に頬をすぼめながら、まるで女神のように優しく瞳を細めた。四つん這いから女の子座りに姿勢を変えて、左手で玉袋をやわやわと揉みながら右手で竿の根本をしごき、艶めかしい唇はカリのくびれをきゅむきゅむと締め付けたうえで固めた舌先が尿道口をほじくる。
「ぐ……ぁ……っ」
感触の違う快感が同時にいくつも襲いかかり、背を仰け反らせて痙攣する。湧き上がる射精感に尿道が疼き、大量の先走り汁が溢れる。そのすべてが沙希の細喉に消えていく。震えながら下を見ると、先はまるで淫魔のような淫らな笑みを浮かべながら亀頭をしゃぶっていた。目が合うと、濡れた瞳で見つめながら射精を促してくる。限界寸前で我慢していた下腹部が、沙希の表情を見た瞬間に決壊した。
「んふぅぅぅ……っ!? んっ、んっく、んぐっ、ごくっ、んふっ、ふぅっ、ふぅぅ……んふぅぅぅ……あむっ、ちゅぴっ、ちゅるっ、ちゅるるる……っ」
「お……おぉぉぉ……っ」
尿道を伝う感覚がはっきりと分かるほど濃密な精子が沙希の口内にたっぷりと注がれる。沙希はまるで清涼飲料水を飲むかのようにごくごくと美味しそうに呑み込み、脈動が止まっても念入りに竿の根本をしごき、執拗なまでに鈴口を舐め続けた。射精が完全に止まっても、沙希は濡れた瞳を細めたまま舐め続けた。
「はぁっ、はっ、はっ、はっ、はぁぁ……っ」
約束のことを忘れてしまったのか、肉竿をふたたび根本まで咥えこんでしまった沙希の頭を掴み、ゆっくりと引き抜く。卑猥なOの字にすぼめられた口の形にごくりと喉を鳴らした。
「……めちゃくちゃ気持ち良かった。ありがとな。……これ以上は流石に遅れるだろ?」
「……っ、急がないと……っ」
亀頭の裏側に手を添えて俺の腹に肉茎を押しつけ、顔を傾けてうっとりと裏スジを舐めしゃぶっていた沙希の頭を撫でて呼びかけると、まるで催眠術が解けたかのように目の光が戻った。

「沙希」
「ん、なに？」
「……エロすぎ」
「……っ」
「いでででで」
　裸のままで部屋を出る際にぽつりと告げると、首まで真っ赤にした沙希に二の腕をつねられた。
　このあと、まずは急いでシャワーを……と思ったものの、お湯を弾く瑞々しい沙希の肢体に見蕩れて思わず乳房を触ってしまった。最初はぺしっとはたかれてたしなめられたものの、結局キスをして、抱きしめ合い、舌を絡め、床に座って対面座位でたっぷりと交わってしまった。シャワーが床を叩く音を聞きながら、耳元で甘ったるい喘ぎ声を聞くのは恐ろしいほどに興奮した。
　そのあとはもう本当に準備が速かった。どうやって約束に間に合ったのか分からないというほど手際よく準備をして、予定時刻からほんの１０分遅れで家を出た。人間、本気になると瀬戸際でも間に合っちゃうんだなぁ……と学んではいけないことを学んだ気がした。

（3）

俺と沙希は高校二年生の時から付き合い、紆余曲折を経て、高校を卒業したあとは同じ国立大学に進学した。俺は文学部で沙希は理学部なので、全学部共通の講義以外は学ぶ内容がひとかけらもかぶっていない。

進学する時、俺は当然のごとく一人暮らしすることを考えていた。学生寮は他の学生と迂闊に顔を合わせるのが億劫なので大学近くのアパートを探していた。しかし沙希が引越し先をどうするかという話を聞いてみると、親の負担をなるべく減らそうと学生寮よりも安いボロボロのアパートに住もうとしていて驚いた。

自分の物件を見るついでに沙希が目星をつけていたアパートを見ると、間違っても女の子が住んでいい雰囲気のものではなかった。防犯もなにもあったものではない有様だ。

「それなら一緒に住んだら？　どうせ普段から超イチャイチャしてるんだから」

どうしたものかとうんうん悩んでいたところ、小町からこんな提案をされた。俺からすれば唐突極まりないが小町にとってはごく自然な提案だったらしく、同時刻に沙希は弟である大志から同じ提案をされていたらしい。

あとで聞いたところ、俺と沙希は普段から無意識にイチャついており、それを小町と大志が見て辟易していたらしい。妹と弟の本音に、俺も沙希もちょっとへこんだ。辟易するって普段あんまり言わなくないか？

いやしかし、親の了承だって取らないといけないし……とうだうだ言っていると、「それなら相談すればいいじゃん」と小町に背中を押された。背中を押すというか、崖から突き落とすというか。良くも悪くも容赦のない妹である。

沙希と付き合う前の俺ならば、同棲なんてためらいにためらって出来るかぎりためらって最終的にうやむやにしていたまであるが、沙希と過ごしている時の居心地の良さを思い出すと案外悪くないかもと

思った。沙希に聞いてみたところ、顔を真っ赤にしつつも「あたしも……別に……いいけど……」と頷いてくれた。青みがかった黒髪をわしゃわしゃと撫でると赤面した沙希が大いに慌てていた。愛い愛い。

ふたり揃った状態で、まずは俺の両親に相談した。引くほど歓迎された。母親は「あんたの面倒を見てくれるなら大歓迎よ」と笑顔で言い、父親は沙希を尋常でないほどに気に入ってしきりにお菓子を勧めていた。やだなぁ……これ絶対再来年になったら酒を勧めてくるやつじゃん……という顔を思いきりしていたら沙希にたしなめられた。

問題はこっちだ……と思いつつ沙希のご両親のもとへ。結果を先に言うと、意外となんとかなった。俺なりに考えた「いかにわたくしが川崎沙希さんを大事に思っているか」をつっかえつっかえ話すと、なぜか沙希とご両親が三人揃ってほんのりを顔を赤くして『も、もういいから……』と言われた。解せぬ。理由が分かった瞬間俺の顔が沸騰する予感しかしなかったので深く考えないことにした。

ちなみに沙希のご両親に挨拶に伺った時は、沙希の弟である大志と妹の京華もいい仕事をしてくれた。予め連絡はしていたもののまだ戸惑っていたご両親と話している時に通りがかった大志と京華が俺に挨拶し、京華にいたっては「はーちゃんだー！」と言って飛びついてきたのである。愛い愛いと頭を撫でてついでに頬のつっつきあいをしていると、沙希のお父さんがこほんと咳払いをして我に返った。お父さんからしてみれば寝取られの現場を見たようなもんだよな……違うか……。

大志は大志で俺に親しげに（＝なれなれしく）話しかけてきたことで、ご両親の警戒は一気にほぐれたようだった。「これで比企谷くんがなにか嘘をついていたら、私たちは一家総出で騙されたことになるねえ、はっはっは」と笑ったお父さんの目がまったく笑っていなかったのが死ぬほど怖かった。ホラーでしか見ないぞ、あの表情……。

と、まあ、こんな感じで。

俺と沙希は、大学入学と同時にマンションで同棲することになった。アパートに住もうとしていたのだが、それぞれの親に「そこは遠慮せずに」と言われ、程よい家賃のマンションを選ばせてもらった。

大学生になったらボロアパートに住んでみる……というのもひとつの味わいかと思っていたが、まあ、綺麗な方が良いよね！　圧倒的に！

実際、同棲生活を始めてみると思っていた以上に過ごしやすかった。お互い家事の分担をして、適度に干渉し、適度に放っておく。総武高にいた時もふたりでいる時はお互い好きなことをやっていることが多かったので、ほどほどの距離感は手慣れたものだった。

入学当初のストレスも同棲生活のおかげでかなり軽くなり、慌ただしい日々もどこか穏やかに過ぎていく。

そうこうしているうちに、俺と沙希は大学生活最初の夏休みを迎えていた。

×　×　×

「……はぁ、なんとか間に合った……。ったく、比企谷のせいだからね」

「いや、沙希だってノリノリだったじゃ……いえなんでもないですごめんなさい」

予定した電車になんとか乗り込んで話していると、俺の言葉に沙希が顔を真っ赤にしてプルプルと震えた。未だにこういったことを言葉にすると顔を真っ赤にするのが可愛らしい。

――付き合っていた当初はお互い苗字で呼び合っていたが、途中から俺は沙希と呼ぶようになった。といってもいきなり切り替えられるはずもなく、初めは十回に一回くらいの割合で沙希と呼んでいた。小町からは「ガチャみたいな確率なんとかならない？」とツッコまれ、ガチャはそんなに甘くないぞ、いかにSSRが出る確率が低いか……ということを力説したらドン引きされた。

沙希は未だに俺のことを苗字で呼ぶが、行為に及んでいる時に心身が昂ぶると名前で呼んでくる。大抵は自分がいま俺のことを名前で呼んだということに気付かないのだが、俺が目を見開いたりといった反応をするとハッと気付いて顔を真っ赤にし、ギュッときつく抱きしめてくる。可愛さの塊と化した沙希は凶器でしかない。普段名前で呼ばせようとすると照れ照れになってしまい、毎回下手な言い訳をし

て逃げていた。可愛いがそろそろ本当に名前で呼んでほしい。
つり革を掴みながら、隣の沙希をちらりと見やる。Tシャツにデニムのパンツというシンプルな格好だが、スタイルが良くて顔立ちも整っているためかなり目立つ。席に座っている男子高校生三人組がちらちらと沙希を見て、ほのかに顔を赤らめているのが見える。大人な対応を心がけて沙希と高校生のあいだに割って入ると、高校生三人組が舌打ちせんばかりのしかめつらを浮かべた。おっと、本気の恨みがこもってますねー。怖いなー、怖いなー……。
――大学生になって、沙希はより美しくなったと思う。進学や交際、成長、肉体関係その他様々な要因があると思うが、沙希の胸はより大きくなり、腰つきが丸くなったりと女らしさを増している。すらりと背すじの伸びたシャープな印象を持ちながらも、女性らしい魅力も兼ね備えていた。日ごとに美しくなっている気がして、一緒に住んでいるというのに未だにほぼ毎日見惚れている。
「……比企谷」
「ん、どうした」
沙希の正面に立つかたちで電車に揺られていると、うつむいた状態でぽそりと名前を呼んできた。か細い声に鼓動が心地良く高鳴る。
「その……ありがと。あたし、ああいうの慣れてなくて……」
「……ああ、気にすんな」
沙希の視線は俺の後ろの男子高校生たちに向けられていた。よほど安心したのか、ほんのりと頬を染めて上目遣いで見つめてくる。ここが家だったら抱きしめてお姫様だっこでベッドに運んで押し倒すまである。ちなみによくやってます。沙希が全力で恥ずかしがるのが可愛くて。
「……まあ、あいつらの気持ちも分かるけどな」
ぽそりとつぶやくと、沙希が目をぱちくりとさせ、口元をもにょもにょと動かした。
「……それ、どういう意味？」
「意味が分かってるからそんな反応してるんだろ？」
「……っ」

「いでででで」
脇腹をつねられた。けっこう本気で痛い。
×　×　×
ふたりで向かったのは沙希の実家だった。
今日は俺、沙希、小町、大志、京華の五人で一緒に夏祭りに行くことにしていた。久しぶりの帰省……というわけでもなく、俺は月イチ程度のペースで帰っていたし、沙希はもっとこまめに帰っていた。弟と妹が好きすぎだろう……と思ったが、俺も人のことは言えない。
「あ、お兄ちゃーん！」
沙希の家の前まで行くと、小町、大志、京華の三人が待っていた。小町と京華はすでに浴衣を着ている。凶悪なまでに可愛い。え、ちょっと待って、ほんと可愛いんですけど。どうでもいいが、大志はTシャツとジーンズだった。どうでもいいんだけどね。
「うっす。元気だったか」
「二週間前に会ったばっかりでしょ」
俺の言葉に小町が楽しげに笑う。よほど楽しみなのか上機嫌なのがまた可愛らしい。小町の浴衣は青地に鮮やかな花火が浮いている柄で、活発な印象ながらもどこか大人びた印象を与える。総武高二年生になった小町は少し背が伸びて、爛漫な魅力の中にも美しさをまとうようになった。要するに無敵である。
「どう、似合ってる？」
小町がくるりと回って見せる。はんなりとした振る舞いに思わずニヤけそうになった。
「すげえ似合ってる」
親指を立てて言うと、小町がにひっと笑った。
「お兄ちゃん、前よりも褒め方が板についてきたね！　合格！」
何に合格したのかは分からないが、お褒めの言葉を授かり光栄でございます。
「さーちゃん！　はーちゃん！」
同じく浴衣を着た京華が、満面の笑みを浮かべてとてとてと駆け寄ってくる。まず沙希に抱きつくと、沙希の表情が一瞬でバターのご

とく緩んだ。俺と目が合って慌てて表情を引き締めるが、「さーちゃん、さーちゃん！」と京華が嬉しそうにおでこをこすりつけてくるとまた表情が緩む。普段一緒にいられない分、愛おしさが増すのかもしれない。からかうのはやめておこう……と思っていると、京華がそうそうに沙希から離れた。ものすごくショックを受けている。

「はーちゃん！」

今度は俺にダイブしてきた。おっとー、成長しているもんでタックルが以前より強いですねー。油断してたのでちょっと腹に響きましたねー。

「はーちゃん！　ゆかた！　どう？」

俺からパッと離れたかと思うと、先ほどの小町を見て覚えたのかくるりと回ってみせる。京華が着ていた浴衣は青地に金魚が優雅に泳いでいる柄で、子供らしい可愛さに溢れている。

「ああ、すげえ可愛いぞ」

沙希と同じく青みがかった黒髪をくしくしと撫でると、京華は気持ち良さそうに目を閉じて口をむずむずと動かす。うんうん、可愛いなーと思っていると。

「やった！　じゃあはーちゃん、けーかのお婿さんになる？」

突然の上から目線である。しかも婿入り。

「はっはっは」

なにやら沙希の視線に圧力を感じるので、受け入れるでも断るでもなく極めて曖昧に笑ってごまかすと、京華はなにやら「むー……」とうなって頬を膨らませた。なに、フグなの？　外敵でもいるの？

「はーちゃん、はっきりしないおとこのひとはきらわれるよ？」

けっこうマジのダメだしだった。京華以外の全員が目をむく。この子、普段いったいどんな生活を送ってるんだ……。

「お、おう、ごめんな……」

謝りながら頭を撫でると、ほやんと気持ち良さそうに目を細めた。

「そうやってけーかをかいじゅうしようとする……」

怪獣？　と思ったが、どうやら懐柔の方らしい。

将来は間違いなく沙希同様美人になるであろう顔立ちに、すでに女

として目覚めつつある心。ううむ、将来が恐ろしい……。
それでもやはり根はまだまだ子どものようで、根気よくムツゴロウばりに頭をわしゃわしゃーと撫でていると、「むう……」と唸りながら抱きついてきた。この子可愛すぎません？
「……」
沙希とちらりと目が合うと、京華を見て和んでいるような、それでいてちょっと妬いているような、極めて複雑な表情をしている。
「お兄ちゃん、モテモテだねー」
小町がニヤニヤとしているのが腹が立ったので、頭をぐしぐしと荒っぽく撫でる。
「ちょ！　だめ！　セットが崩れる！　今の小町的にポイント低いよ！」と騒がれた。
「お兄さん、モテモテっすねー」
「誰だお前は。出てくるタイミングも遅すぎる。あと誰だお前」
「こ、心が折られる……」
この場にいたことを忘れるくらいのタイミングで話しかけてきた大志の心をブレイクさせていると、沙希から尋常でない圧力を感じた。
「あんたね……」
「ご、ごめんなさい……」
けっこう本気で怖かった。
×　×　×
「あ、そうだ。沙希さん、浴衣は持ってきてますか？」
小町の質問に対して、沙希はバッグと一緒に持ってきていた袋を持ち上げた。
「持ってきてるよ。着て移動するのは大変そうだったから、こっちで着ようかなって」
「それもそうですねー。お兄ちゃんは持ってきてる？　ほら、早く出しな」
「俺の浴衣は上納金かなにかなのか……」
ぶつくさ言いながら沙希と同じ袋を取り出す。「こういうところで

お揃いとかつわもの！」と小町に言われて顔が熱くなる。沙希の顔も一瞬で茹だっていた。
「それじゃ、あたしは家で着てくるよ。待っててもらえる？」
「はーい！　ほら、お兄ちゃんも早く」
「え、沙希の家で……？　いやしかし……」
沙希の家には何度か来ているが、着替えるためだけに入るってのもなんか変な気が……とためらっていると、小町が目を細めてしっしっと追い払うように手を振った。
「お兄ちゃん、そういうのいいから。ハリアーップ」
「ぐ……っ」
身も蓋もない言葉だが逆らいようもない。なぜ英語なんだ……とぶつぶつ言いながら沙希と一緒に家に入った。

×　×　×

沙希よりも早く着替え終わって家を出る。外で待っていた小町たちのもとへ行くと、三人が目を見開いておおーと唸った。
「お兄ちゃん、良いね！」
「お兄さん、渋いっすねぇ……」
「おとな……」
京華のコメントがなんとも解釈しがたいが、とりあえず評価は悪くないようで良かった。
「お兄ちゃんが選んだの？」
「いや、沙希が選んでくれた。麻の葉柄って言うらしい」
「へー、姉ちゃんやるなぁ……」
小町と大志がまじまじと見てくる。浴衣ってこんなにじっくりと評価されるものなのん？　なんだかムズムズするなぁ……と思っていると、京華がとっとこと歩いてきてにぱっと笑った。
「はーちゃん、かっこいい！」
「おぶっ」
太鼓判！　と言わんばかりに腹をぺしんと叩かれた。胸を叩くつもりだったのか、京華は俺の腹を叩いた手を見つめて「たりない……」とつぶやいている。リーチが足りないという意味なのだろうが、ここ

だけ切り取ると完全なる中二病なのでやめてほしい。材木座、元気にしてるだろうか……（さほど興味はない）。
俺の浴衣イジりが一通り終わったところで、沙希が家から出てきた。
「……っ」
一瞬、誰か分からなかった。
沙希の浴衣は白色で透け感のある生地に水色の花が咲く上品な柄で、すらりと背の高い彼女に尋常でないほど似合っている。そのうえいつになくきちんと化粧をしていて、ごくりと息を呑むほどの艶を備えていた。いつも通りポニーテールがぴょこぴょこと揺れているのを見て、かろうじて自分の恋人だと認識できたほどだ。
「沙希さん、綺麗……」
ぽかんとした声音で小町がつぶやく。大志と京華もこくこくと頷く。
「あ、あの……ど、どう……？」
絵画の世界の住人のような美貌をたたえた沙希が、妙に子供っぽい声で尋ねてくる。見た目と声のギャップにくらりときた。
「あ、ああ、すげえ似合ってる。本当に……綺麗だと、思う……」
言葉を紡ぐうちにどんどん恥ずかしくなって尻すぼみになる。溢れ出す感情がきちんと言葉に反映されない。こんなに綺麗な人が世の中にいるのかと感動さえ覚えているのに、喉から出てくるのはごくありふれた言葉だけ。無性に情けなくなる。
それでも沙希は、俺の言葉を聞いて嬉しそうに、花が咲くように笑った。
「……あ、ありがと……」
薄く、上品に化粧をした頬がポッと朱色に染まる。付き合ってから一年半は経つし、同棲してからも三ヶ月は経つというのに、初めて見る一面。まだまだ知らない彼女の一面があるのだと思うと、なんだかムズムズする。
「いや～……本当に綺麗です、沙希さん」
「うん、姉ちゃん、すごい……」

「さーちゃん、きれい！」
「う……あ、ありがと……」
俺と同じくポケーっとした三人が口々に褒めてくる。
「お兄ちゃんは幸せ者だねぇ……こーんな綺麗な人をお嫁さんにもらうなんて」
「な……っ!?　ちょ、ちょっと小町、あんたなに言って……!?」
沙希の顔が一瞬でりんご飴のように真っ赤になる。小町、と名前で呼べるようになったのはつい最近のことだ。小町は名前で呼べてなんで俺は……とは思うが、沙希のなかでもなにか基準があるんだろう。
「沙希さん、美人だし、スタイルいいし、優しいでしょ？　家族の面倒見も良くて、料理も美味しくて……」
小町が指折り数えていく。沙希は首まで赤くして「ちょ、ちょっと……っ！」と可愛らしく唸っている。りんご飴どころかもはやちょっとだけ言葉を覚えたりんご状態だ。
「笑顔がすっごく可愛いし……最近なんだか腰つきがより女性らしくなってるし……あと胸もひゃっ!?」
胸もひゃ？
見ると、耳まで真っ赤にして震えている沙希が、小町の両頬をアイアンクローのようにがしりと掴んでいた。掴んでいるほうも掴まれているほうも震えている。
「あんたねぇ……」
「ぴやああ……」
久しぶりに見るなぁ、このくだり……と思いながら、あらためて沙希の浴衣姿に見惚れた。

「由比ヶ浜母娘と過ごす夏は純粋に体力を使う。」（1）

朝のまどろみが気持ちいい。

「……ん……っ」

目を開け、ゆっくりと意識を覚醒させてゆく。カーテンの隙間から差し込む光が朝であることを告げてくる。エアコンの心地よい冷気が素肌を撫でていく。

……掛け布団の感触がない。

俺は寝相が悪いわけではないので、朝起きたら布団がベッドの下に……などということは今まで一度もなかった。それなのに、どういうわけがエアコンの冷気が全身の素肌を撫でていく。

「……ママ、急に来てこんなこと……ヒッキーに怒られちゃうよ？」

「うふふ、ヒッキーくんは優しいからだいじょうぶよ～」

……。

あまりひそめる気のない会話が聞こえてくる。いやな予感しかしない。

目を閉じたまま記憶をたぐり寄せる。

全裸で寝たことまでは覚えている。隣に結衣がいたことも。その時ふたりで布団をかぶっていたことも。ちなみに結衣も寝相はいい。というかだいたい俺にぴったりとくっついてすやすやと眠っている。とても柔らかいです、ありがとうございます。

しかし今は布団の感触がない。その代わりに、上半身は柔らかなものにすりすりとまさぐられ、下半身にいたっては尋常でないほど柔らかな感触に包まれている。

目を開けた。

「……なにやってんの？」

「あ、ヒッキー……おはよう」

「うふふ、ヒッキーくん、おはよう。お邪魔してます」

結衣がやや気まずげにぎこちない笑みを浮かべ、そしてもう一人、結衣の母親である由比ヶ浜マ――彼女が、にこやかに微笑んだ。ふたりそろって髪は明るい茶色で、可愛らしいお団子髪が揺れている。ふ

たりとも一糸まとわぬ姿で、暴力的なまでの魅力を放っている。
「……いやいやいやいや……」
状況を把握するなり、極めてなめらかに気絶しそうになった。
由比ヶ浜マ――彼女は俺の腰を浮かせ、豊満で柔らかいにもほどがある乳房で俺の下腹部を包み込んでいた。どうりで下半身が浮いているような気がしたわけだ。極上の柔肉のなかで肉幹ががちがちに勃起してしまっているのが感覚で分かる。俺の脚は彼女の背中に巻き付く形になっていた。
「く……お……ちょ、こら……っ」
結衣は俺の横に寝そべり、胸板をすりすりと撫で、乳首をちろちろと舐めていた。
「ヒッキー……ちゅっ、ちゅぴっ、ごめんね？　急にこんなこと……ちゅっ、ちゅぴっ、ちゅるるる……っ、ママが、ちゅっ、いきなり……ちゅっ、あむっ、あぐあぐ、ちゅぴ……っ」
ノリノリじゃねえか。
結衣さん、甘噛みするの好きですね。口で舐めてくれる時も毎回あぐあぐと可愛らしく噛んでくる。舌の感触に慣れてきた途端に甘噛みされると、全身がびくりと震えてしまう。わざとなのか天然なのか、いまだに分かっていない。
「ヒッキーくん、いっぱい気持ちよくなってね～……っ」
「ちょ、ちょっと……お……ぁ……っ」
彼女が乳房に手を添えてにゅむにゅむと形を変え、肉幹を柔らかく刺激してくる。竿の根本から先端にかけてなぞるように圧をかけられ、焦れったいような甘ったるい感触が肉幹を包み込む。
「朝からいきなりそれは……って、あれ……？」
いくら肉幹を乳房で挟まれているとはいえ、逃げようと思えば逃げられるだろう……と思って脚を開こうとしたら、ビクともしない。
「ヒッキーくんに逃げられたら楽しくないと思ってね～。……遠慮しなくていいのよ？」
「な、なんすかこれ、ぐぁ……っ!?」
両足首がバンドか何かで拘束されているようで、まったく動くこと

ができない。めいっぱい力を入れれば無理やりにでも拘束をほどくことができるかもしれないが、極上の柔肉で肉幹を挟まれ、上半身も結衣に責められているために上手く力が入らない。
「ヒッキーくん、気持ちいいかしら……？」
彼女の可愛らしい相貌が淫靡に歪む。結衣の姉と言われても信じてしまいそうな顔だが、牝としての本性を露わにするとぐっと年上の――魔性と言っても差しえないような妖艶さがにじみ出る。
彼女の乳房がうねうねと波打つたびに、朱く張りつめた亀頭がにゅるっ、にゅるるっと谷間から顔を出す。彼女はぴょこりと顔を出した亀頭を愛おしげに見つめると、まるで赤子にキスをするかのように優しく鈴口に吸い付いた。
「ちゅっ……ちゅぴっ、ちゅっ、ちゅぷっ、んふぅぅ……れる、れる、ちゅるる……んふぅぅ……っ」
「お……あ……っ」
柔らかな唇でカリのくびれをぴっちりと締め、優しく、それでいて執拗なまでに尿道口を固めた舌先でほじくる。びゅるっ、びゅるるっと溢れ出す透明なカウパー液が次々と細喉に呑み込まれていき、代わりに彼女の唾液が竿を伝い、陰毛を浸していく。亀頭をたっぷりと舐るあいだも柔肉がぐにょぐにょと蠢き、腰が情けないほどがくがくと揺れてしまう。
「ヒッキー……あたしも……」
結衣が耳元で、どこか拗ねたような声音で囁く。出会った頃よりも大人びた綺麗な顔が朝の光を遮ったかと思うと、瑞々しい唇が重なった。
「ん……ふぅっ、ちゅっ、れるっ、ヒッキー……ちゅむっ、んむふぅぅ……っ」
「ん……ぐぅ……っ!?」
ねっとりと伸びてくる舌が上下の歯列を丹念に舐めていく。口内粘膜が歯茎をなぞる感覚にぞくぞくとしていると、結衣の指の腹が乳首をさすってきた。下半身がびくりと震えると、肉槍が彼女の唾液でぬめった乳肉の中で動いてしまい快感がさらに高まる。足を拘束さ

れているだけでなく、上半身も快楽の逃げ場がないことに気付いて背筋がぞくりと粟立った。
「ちゅっ、あむっ、ちゅむ……ちゅぴっ、れるっ……うふふ、ヒッキーくんのおちんちん、ビクビクしてるわね……可愛い」
「ちゅっ、れるっ、ヒッキー……んっ、んっ、んふぅぅ……っ」
「んぐ……ぉあ……っ」
結衣がじっとりと上気した身体を重ねてきた。弾力のある釣鐘型の乳房が艶めかしくひしゃげ、結衣の口づけの熱量が増す。絡まる指がもっともっととすがるように甘えてくる。結衣のぷっくりと膨らんだ乳頭が俺の乳首にこすれて弾ける。乳鞠の谷間から覗く亀頭が執拗なまでに舐られ、睾丸と竿が乳肉にうねうねと揉みしだかれる。
エアコンは点いてるのに、三人ともじっとりと汗ばんでいた。俺からなにもしていなくてもふたりは興奮しているのか、甘酸っぱい匂いが鼻腔を悩ましく犯してくる。
「ぐ……ぅ……んぐ……っ」
限界が迫ってきても口で伝えることができない。腹にぐっと力を入れて細かくぶるぶると震えていると、唇を離した結衣が艶っぽく瞳を細めた。
「ヒッキー……もう出そうなんだ？　えへへ……いっぱい出してね……」
「えっ、ちょ……おわ……っ!?」
言葉にせずとも結衣には限界の予兆が伝わっていた。俺の耳にぴたりと唇をつけると湿った声で囁きかけ、つないでいた両手を離して乳首をくりくりとつまんできた。
「うふふ、こっちも頑張っちゃわないとね」
彼女が妖しく目を細めると、乳頭も乳輪も大きめのふわりと柔らかな乳房を互い違いに揺らしだした。谷間には唾液と先走り汁が混じりあった卑猥な潤滑液がたっぷりと溢れ、左右の乳房が交互に俺の腰をたぱん、たぱんと重量感たっぷりに叩いていく。カリのくびれをこすられる感触に悶絶し、玉袋がきゅっとせり上がる。
「ぐ……ぅぅ……出る、出る、出る、出る……っ！」

息も切れ切れに訴えかけると、姉妹のような母娘が嬉しそうに笑った。精巣から射精衝動が湧き上がり、濃厚な精液が狭い尿道を我先にと駆け上がる。張りつめた亀頭が乳房の谷間からにゅるんと顔を出した瞬間、鈴口から大量の白濁が噴き出した。
「きゃっ！　はっ、はぁぁぁ……すごいわぁ……こんなに……あっ、あっ、まだ出る……っ」
「ぐぅぅぅ……っ！」
噴水のように飛び出した白濁が彼女の顔を汚す。どぶっ、ごぶごぶっと射精の脈動が続くあいだも彼女は乳肉で肉竿をしごき続けた。視界が明滅するような絶頂がいつまでも続く。
「ヒッキー、すごいね……朝イチだから？」
ちょっと間の抜けたことをつぶやいている結衣も声音は熱っぽい。ぶるぶると痙攣する俺の乳首を執拗に指でこねくりまわし、眉をきゅっとひそめる俺を見て嬉しそうに笑っていた。
「はぁっ、はっ、はっ、は……っ」
命を削るような射精がようやく終わった。彼女の顔を見ると、前髪から眉間、鼻先、そして唇にべっとりと精液が付着し、乳房の谷間には白濁の水たまりができていた。
「こんなにいっぱい……ヒッキーくん、どんどん逞しくなってるわねぇ……」
彼女が片目を閉じた状態でうっとりと呟き、顔についた精液を指で掬って口に含み、谷間に溜まった白濁をぴちゃぴちゃと猫のように舐めていく。手の支えがなくなった乳房が柔らかく左右に開いた。あまりの重量に少々垂れている乳房はあまりにも生々しい。結衣よりも大きな乳頭がぷっくりと膨らんでいて、ごくりと息を呑む。
足首を拘束していたバンドが外されると心底ぐったりした。起きる前からたっぷりと刺激され続けたうえで射精させられたため、もはや起き上がる気力さえも起きない。
「ヒッキー、大丈夫？」
「大丈夫に見えるのか……って、おーい、結衣さーん？　何をしてらっしゃるんでしょうかー？」

俺を優しくいたわるような言葉をかけておきながら、白濁液がまとわりついた肉茎をぴちゃぴちゃと舐め始めた。
「んっ、んむ……っ。だって、ヒッキーの、ちゅぴっ、ここ、んふぅぅ……れるっ、きれいに、れるっ、しなきゃって、ちゅぷりゅ……思って……」
それらしい言い訳を呟くあいだも熱心に亀頭から竿の根本、玉袋と舌を這わせていく。ふたりを軽く説教しようとしたのだが、こんな状況で説教したらただの間抜けにしか見えない。
「結衣、ママも……」
「えー、ママはさっきいっぱい舐めたでしょ？」
「足りないわよ～」
「……」
俺をふたりの共有資源かなにかだと思ってらっしゃるのでしょうか。
このあと、結局ふたりに舐められてもう一度射精し、すっかり発情したふたりと繋がって一回ずつ射精した。朝からハードすぎると思うけれど、もはやこれが日常と化していて意外と平気になってしまっている自分に呆れる。

（2）

――由比ヶ浜結衣と付き合いはじめたのは、総武高二年生の時からだ。

結衣と名前で呼ぶまでにずいぶん苦労したのだが、結衣はいまだに俺のことをヒッキーと呼んでいる。ふたりきりの時ならまだしも、公衆の面前で呼ばれると周りがギョッとするからそろそろ変えてほしい。しかし本人が嬉しそうに呼んでくるのでたしなめづらい。

俺も結衣も、どの大学に行きたいという明確な意思はなかった。一緒に受験勉強をしていくうちに同じ大学を目指すことになり、晴れて合格することができた。

実家から通うことができる距離ではあったが、小町の「お兄ちゃん、まさか実家に居座るつもりじゃないよね？」という鬼のような叱咤激励（というか叱咤のみにしか思えない表情だった）と一人暮らしへのちょっとした憧れもあり、大学周りの物件をちまちま探し回っていた。

しかしこのことをカフェデートの際に結衣に報告すると、なにやら物言いたげに口をもによもによと動かした。

「どうした」

「あのね、えっと……一人暮らしってさ、経済的にやりくりすることが増えて大変じゃん？」

「まあ、そうだな。でもまあ、社畜になってからのことを考えると慣れとかないと……」

「社畜になることが前提なんだ……。主夫になるんじゃなかったの？」

「その夢は今でも捨てていない」

「あ、じゃああたしがバリバリ働けば……」

「……」

「……」

「……」

「……な、なんか言えし！」

てしてしと二の腕をはたかれた。可愛い。
「で？」
「え、あ、うん……その、あのね？　あたしも実家は出たいなって思ってるんだけど、一人暮らしは心細いかもー、なんて……」
「……ふむ？」
「だから、ね？　その……」
ヒッキーさえよければ……と今にも消え入りそうな声でつぶやき、コーヒーカップに添えた手をもぞもぞと動かし、上目遣いで可愛らしく俺を見つめ、お団子髪をくしくしと撫でた。ためらうさまがいちいち可愛い。
「……い、一緒に、住んだりとか、どうかなーって……」
「なるほど、隣の部屋ってことか。たしかに同じアパートなら安心だな」
「この流れでなんでそうなんの!?」
けっこうマジで怒り気味にツッコまれました。周りの客から「お、痴話喧嘩か？」という生温かい視線を向けられ、結衣がしおしおとしぼんだ。
「……ヒッキー、どう、かな……？」
コーヒーカップを頼りなげに持ち、ちらちらと、意思表示を日頃しない子どもが精一杯頑張って親におもちゃをねだるような、そんな表情をする。恋人としての愛情はもちろん、庇護欲までそそるこの仕草はずるい。
「……まあ、今もほとんど同棲みたいなもんだしな。いいんじゃねえか」
「え、本当!?　ていうか、い、今、同棲って……」
「……わざわざ言うな、恥ずかしくなってきた……」
「あ、ご、ごめん……」
ふたり揃ってうつむく。周りの客の視線がさらに生温かくなった。
――そんなやりとりがあり、お互いの家族に承諾を得ることにした。俺の家族は両親・小町ともに大歓迎で、すでに家に何度も出入りしている結衣のことがみんな好きでしょうがないらしく、「あんたの

面倒を見てくれるなら大歓迎」と母親が言い、父親が激しく頷いていた。
　小町は「結衣さん、料理以外で兄を支えてあげてくださいね！」とすこぶる可愛い笑みを浮かべて結衣を激励していた。結衣はけっこう本気でショックを受けていた。しょうがないよね、いまだにレシピの内容に三割くらいアレンジを加えるからね。
「今度ナツメグ買ってみようかなぁ……」とつぶやくだけで周りに動揺が走る人ってなかなかいないと思うんです。何をしでかすか分からない恐怖が常にちらつく……。
　結衣の家族のところにも伺った。結衣のお父さんは渋々、それはもう渋々受け入れてくれた。嫌われたかな……？　と本気で心配するほど渋々だったのだが、帰り際に呼び止められた。
「ヒッキーくん、だったかな？」
「比企谷八幡です……」
「うむ、そうか。では、ヒッキーくん」
「……なんでしょうか」
「二十歳になったら一緒に呑もう」
「え……？　あ、はい、よろしくお願いします……」
　呼び名が一家総出でヒッキーなのは納得がいかなかったが、結衣のお父さんに言われた言葉に安心した。いくら同棲すると言っても、一年後もまだ恋人関係が続いているかなど分からない。それでも結衣のお父さんの提案はなんだか無性に嬉しかった。
　そしてもう一人……結衣のお母さん――俺の通称由比ヶ浜マ――つまり彼女。説明文が長すぎるな。彼女は同棲については快く了承してくれたものの、結衣のお父さんが席を外したところで物憂げにため息をついた。
「そっか～……結衣とヒッキーくんがこのうちに来なくなっちゃうのね～……」
「……そうですね」
「……ママの欲求はどうしたら……」
「……ママ、そろそろさすがに……ね？」

子犬のようにシュンと眉を曲げる彼女に、結衣がまるで年上のお姉さんのように諭した。

――欲求不満がたまっていた彼女と俺が、なし崩しに結衣の公認を得て肉体関係になったのは一年以上前のことだ。

それからの生活は、よく志望校に合格できたな……と思うほど爛れに爛れたものだった。結衣のお父さんは年齢が上がるにつれて性に衰えが生じ、彼女が誘ってもほとんど応じてもらえず、応じたところで昔に比べるとあっさりと事を終えてしまう。彼女は年齢が上がるほどむしろ性欲が増しており、その溜まりに溜まった欲求がすべて俺に向いた。結衣も彼女に触発されたのか、日々可愛くなり、エロさが増していった。要は三人ともハマってしまった。

しかしその生活も、あくまで俺が結衣の家に出入りしていたからこそ成り立っていた。当たり前と言えば当たり前なのだが、彼女が俺の家に来たことはない。俺が結衣の家に行った時だけ彼女との行為に及んでいた。楽しくなかったと言えば大嘘になるが、さすがに俺と結衣が一緒に暮らすとなればこの関係もおしまいだろう……と思っていたのだが、彼女は俺と結衣の予想の斜め上を行っていた。

「……時々、そっちに遊びに行ってもいいかしら？」

『え』

ふたり揃って、ちょっと濁った声を漏らした。彼女は俺と結衣の表情を見て拗ねたような可愛らしい表情を浮かべたが、不意に雰囲気を一変させて微笑んだ。

「結衣とヒッキーくんがお互いを満足させることができるならいいけど……結衣ひとりでは大変なんじゃないかしら？」

「そ、それは……」

彼女の問いかけに俺も結衣も言葉を詰まらせる。たしかに、ふたりを相手にし続けたことで俺の性欲は若さを考慮しても尋常でないほどに増していた。

エネルギーは使わずにいるとどんどん腐って減っていってしまう。だからどんどん使ったほうが、かえって泉のように湧き出して循環していく。

いつか読んだ本でこのような趣旨の言葉が書かれていた。この一年あまりの時間で自分の肉体に起きた変化を考えると納得がいく。運動をしているわけでもないのに身体がタフになったのも、ふたりと日々たっぷりと交わっていたからだろう。
「……たしかに、ちょっときついかも……」
だからこそ、結衣の言葉の意味がよく分かる。ふたりを相手にしてちょうど良くなるほど精力が強くなっている俺を、結衣がひとりで相手にするのは大変だろう。
「あー、でもまあ……そこは俺がひとりでなんとか補えば……」
「そ、そんなのやだ！」
「……すまん、今のは本当にだめなやつだよな」
結衣と交わって、足りない分は自慰をして……ということにしようと思ったものの、結衣が強く否定した。「あなたとしただけでは満足できないので、僕は一人で自己処理します」と言っているのだ。自分の浅はかさを恥じて謝った。
「ヒッキーくんがこんなに逞しくなっちゃったのはママに責任があるわよね～」
「そうですね、全責任があるかと」
「ママが悪い」
「そ、そんなにはっきり言わなくても……」
彼女がちょっと凹んだ。珍しいので写真に撮りたいくらいだった。
――といったやりとりがあり、なんだかんだで彼女が俺と結衣が借りたマンションに顔を出すようになった。初めは俺と結衣がふたり揃っている時に遊びに来ていたが、いつの間にか結衣に頼み込んで合鍵を作ってもらっていた。
それからは俺と結衣のどちらかしかいない時にも遊びに来るようになり、俺とふたりきりになった時は当然のようにたっぷりと貪られた。結衣もエロくパワーアップをしているが、彼女も日に日に艶っぽく、さらに若々しくなっていた。もう俺としても「もはや姉妹でよくないか？」と言いたくなるレベル。
「最近綺麗になったってパパに言われたのよ～」と嬉しそうに話して

いたのだが、俺は心境が複雑すぎてまともな返事ができなかった。
大学に入ってからの生活は総武高にいた頃と比べて抑えられるどころかますます激しく爛れていた。大学生活も意外と悪くないとは思っているが、いかんせん自宅での情事が濃密すぎて、せっかくの新生活が霞んで見えた。思わぬ誤算だ。
そんなこんなで数ヶ月経ち、初めての夏休みを迎えた。「いっぱいデートに行こうね」と満面の笑みを浮かべた結衣に言われ、灼熱の屋外に出るのはダルいと思いつつもまんざらでもない気分だったのだが……。
――未知の楽しみが詰まった夏休みの初日に、まさか寝起きで襲われるとは思わなかった。

× × ×

濃密すぎる朝の時間を終えて、俺と結衣はリビングのソファに並んで座ってくつろいでいた。彼女は遊びに来ると毎回お茶を淹れてくれたりお菓子を差し入れしてくれたりしている。今日は朝ごはんを作ってくれていた。寝起きにハードすぎる運動をしていたため、信じられないくらい腹が減っている。
「ね、ヒッキー。海行こうよ、海」
スマホをとっとっ……と手際よくタップしていた結衣が楽しそうに身を寄せてくる。柔らかな二の腕が当たって思わず動揺した。
「……海、か」
「……今、めんどくさいなーって思ったでしょ？」
「そ、そん、な、こと、は、ない、です、よ？」
「……」
ジト目オブジト目、ってくらいのジト目で見つめられる。視線が頬に刺さる。ずぶずぶと。
はぁ……というため息が聞こえたかと思うと、二の腕がふにゅりとした感触に包まれた。Tシャツ越しだというのに果てしなく柔らかい。
「……ヒッキー、あたしの水着見た「超見たい」はやいな!?」
食い気味に答えると、結衣が困ったように笑った。

「……ヒッキーと海に行けるなら、あたし、けっこう頑張っちゃうよ？」
「……テスト勉強を？」
「そ、それは後期から頑張るから！」
　同じ学部に入った俺と結衣だが、単位の取得状況はほぼ同じなものの、成績の内訳を比べると笑ってしまいそうなほどの差が出た。端的に言えば俺が余裕で合格で、結衣は常にぎりぎり、といった感じ。テスト期間に俺が本気で教えていなかったら落としていた単位が確実にいくつかあるだろう。
　うー……第二外国語なんてわかんないよぉ……とテスト勉強の時のトラウマが蘇った結衣が犬のように唸る。下ろしている髪を手で梳くように撫でると、険しい顔から一転して気持ち良さそうに目を細めた。
「まあ、その、なんだ。別にいいぞ。どう頑張るのか楽しみにしてる」
「……っ！　うん……ありがと。頑張るね」
　結衣が向日葵のような笑みを浮かべてしなだれかかり、耳元でぽしょりと囁く。頭をくしくしと撫でると、うっとりとした瞳を向けてきた。
　このままちょっとキスでも……と顔を寄せると。
「ご飯ができたわよ～。……ごめんなさいね」
『……いや……べつに……』
　みそ汁の入った鍋を持ってリビングに入ってきた彼女が申し訳なさそうに謝り、俺と結衣はめいっぱい顔を逸らした。三人で行為に及んだことも数え切れないほどあるというのに、いまだにこうした初心なやりとりをしている。
　ほかほかのご飯の匂いが、気恥ずかしい空気に優しく染み渡っていった。

（3）

「そういえば、さっき海に行くって話が聞こえたけど……」
「ママはついてこないでね？」
「まだ何も言ってないわよ～……」

朝ごはんを食べて一息ついているところで、彼女がぽろりと話題を挙げた。結衣が居合切りかという勢いで食い気味に切り捨てると、彼女が苦笑いしてお茶を啜った。

ちなみに彼女が遊びに来た時は、毎回三人でのほほんとする時間がある。普通は同棲している彼女の親が来たら嫌に決まっているだろうが、なぜか俺も結衣もこの時間が嫌いじゃない。彼女の若いにもほどがある見た目と可愛げがそうさせているのかどうかは分からないが、俺も結衣もふたりきりの時とはまた違った意味でリラックスしていた。

「そうか～……海か～……」

彼女がわざとらしく間延びした口調でつぶやき、頬杖をついて俺を見つめてくる。

「……」

ちらりと視線を下にずらす。

彼女は今はTシャツを着ているのだが、どういうわけかブラを着けていない。薄布のすぐ下に夢のようなスライムが詰まっている。夢のようなスライムってなんだ。頬杖をつくために前傾したせいでスライムがひしゃげている。この言い方だとスライムをぶん殴ったみたいに聞こえるな。

「海か～……」

彼女の口調が実にわざとらしい。ふむ、海か。結衣は水着を着るという。ということはこの流れでいけば彼女も水着を着るのだろうか。いや、保護者枠でＴシャツにショートパンツ姿でパラソルの下でくつろぐだけかもしれない。それはそれで和むが、いや待て、娘の恋人に寝起きで仕掛けてくる人だぞ、そんな無難なことだけで済ませるわけがない。

ふむ。

『セクシー水着』とググった時に出てくるような水着を着た美人母娘……。

……。

「……ヒッキー？」

「お、おう、すまん、ごめんなさい、切腹でいいか？」

「誰もそこまで言ってないし……」

どこのＪＳ女流棋士だろうと思わんばかりの低い声に震え上がり、反射的に自決の方法を提示してしまった。結衣は苦笑しているが、『そこまで』と言っている時点で結構怒っている気がする。というか確実に怒っている。まだ目が恐い。

「ママも年だから……頑張って水着なんて着ちゃったら恥ずかしいわよね～、ヒッキーくん？」

「そんなことはまったくないと思います」

「即答だ!?」

俺の煩悩にまみれた迷いなき返答に結衣が目を見開く。まるで外敵から主を守る大型犬のように抱きついてきて、彼女を向いて可愛らしく唸った。二の腕が若スライムに包まれる。若スライムってなんだ。そうか、向かいにいるのはキングスライムなのか……。

それにしても、これ、このままだと雰囲気的にとってもまずい気が……と思っていると、彼女がくすりと笑って「結衣」と呼びかけた。

「な、なに……？」

ぎゅう、と抱きしめてくる。俺の二の腕がスライムと同化してきた気がする。

「ママから提案があります」

「む……」

ちょっと警戒を解いた模様。しかし相変わらず強く抱きしめてくる。俺の右腕がほんとスライムになってきている。

「もし海にママも連れていってくれたら、ヒッキーくんを誘惑するいろーんな手段を教えてあげる」

こ、狡猾ぅ！

彼女の言葉に結衣が目を見開いて固まる。固まっている時間が長い。どうやら同じ表情のまま高速で考えを巡らせているらしい。機械の検算を眺めているような、そんな気分。

待つこと十秒。

「……分かった。約束は守ってよ？」

「うふふ、もちろんよ～。……交渉成立ね」

あの、俺の意見は……。などと口を挟むか迷ったが、今までこのふたり（というか主に彼女）に引っ張り回されるがままになってきたので、今さら何か言えるわけもなかった。彼女の水着も見てみたいし、結衣とふたりきりで行くのもいい。外出自体は極めてダルいが、今まで結衣と付き合ってきたことで少なからず外出に耐性がついた。ヒッキー（本来の意味のほう）は日々進化しているのである。

このあと、彼女が帰るまで数十分にわたり場所や細かな日程についての話し合いが行なわれた。彼女が車を運転すると聞いて初めは本気で驚いたが、意外と得意らしい。周りで運転を嗜む大人の女性は平塚先生くらいしか知らないので、不思議な気分だった。

その場で次々と詳細が決まったが、どんな水着を着るかという話になった瞬間、「これは後日母娘で決めよう」という結論が下され俺が蚊帳の外になった。それもそうだろうなと思いつつ、俺は二の腕がスライムと同化したまま静かにお茶を啜っていた。彼女が淹れてくれるお茶はなぜか妙に美味しい。茶葉はうちに置いているやつなのに何故なのかしら……。

× × ×

毎日ちまちまと準備をしているうちに、あっという間に当日を迎えた。

「ヒッキー、準備できた？」
「ん、ばっちりだ」
「いつも通りだなー……」

俺の着替えを待っていた結衣が困ったように笑う。初めはちょっと気取った格好でもしようかと思ったのだが、そもそも気取った格好

というとジャケットくらいしか思いつかないし、ジャケットを着て海に行くなんて斬新な入水自殺にしか見えないだろう。そんなわけで、大学に行く時と変わらないTシャツとジーンズ姿に落ちついた。結衣のコメント通り、完全なまでにいつも通りである。

結衣はピンク色のタンクトップと半袖の白Tシャツ、それとショートパンツという格好だった。手首にはなにやら大きなリングを着けていてギャルギャルしい。しかしめちゃくちゃ似合っている。メイクもいつもより気合が入っていて、決してケバケバしくない絶妙なラインを保っている。さりげなく耳にピアスまでしていた。健康的な太ももが眩しい。上から下まで、頭がくらくらするほどの魅力に溢れている。

「ヒッキー、あたしの格好はどう？」
「青少年には毒だな」
「どういう意味だっ!?」

ぺちぺちと胸を叩いてくる。ついでに何故か抱きしめられた。

「……ヒッキーのエッチ」

ちょっと大きくなっているのがバレて、優しく咎められた。しかし俺の反応は下手極まるコメントよりも響いたらしく、結衣は嬉しそうにはにかんだ。

マンションを出たところで、ちょうど彼女の車が到着した。家族で乗るのにちょうど良いサイズの車だ。

「お待たせ～」
『わぁ……』

彼女の格好に、俺も結衣もふわっとした声を漏らした。

彼女はサングラスを前髪に上げていて、いつもよりも気合の入った、それでいてナチュラルなメイクをしていた。黒のタンクトップと白Tシャツ、それにショートパンツという格好だ。暴力的なまでに肉感を誇る双丘がこれでもかというほどにTシャツを押し上げていた。おまけに両手首には大きなリングを着けて、耳にピアスもしている。彼女の年齢だけ考えれば「若作り」だの「年相応でない」だの色々言われそうなものだが、いまだに結衣の姉なのではと疑うほど瑞々しい肢体と愛らしい顔にはこの格好が恐ろしいほど似合っていた。

「か、かぶりすぎだし……」

隣で結衣がぽつりとつぶやく。ああ、たしかに……。タンクトップの色とサングラスの有無の違いがあるだけで、あとはペアルックといって差しつかえないほど格好が似ていた。ますます姉妹にしか見えない。

「うふふ～、ちょっと恥ずかしいわね～」

彼女があまり照れてなさそうな表情で目を細める。

「それじゃあ、ヒッキーくんは助手席に座ってもらっていいかしら～？　ママ、話し相手がほしいのよ～」

「え……」

「ちょ、ちょっとママ!?　それなら別にあたしが助手席でもいいじゃん！」

「えー、運転は結構疲れるから癒しが欲しいのよ～」

「ヒッキーが癒し……？」

「おい、言動も表情も失礼極まりないぞ」

これ以上ないほど怪訝な顔で見られてちょっと傷付いた。

「……うん、まあ、でも、たしかに癒しといえば癒しかも……」

「待て待て、ちゃんと検討するな、余計に恥ずかしいから」

あごに手を当てて真剣に考え込まれた。

「結衣も気が向いたらヒッキーくんにいたずらしていいからね～」

「そ、そんなことしないし！」

さりげなく「結衣『も』」って言ったなこの人……。あと、俺の人権はいずこへ……？

この流れで俺が断れるはずもなく、けっきょく俺は助手席に座ることになった。

× × ×

予想通り、道中は何度もいたずらをされた。彼女にも結衣にも触られた。信号や渋滞待ちでいったい何度まさぐられたことか……。

そうこうしているうちに目的の海の駐車場に着いた。海水浴客用の更衣室は混んでいるだろうということで、車の中で着替えることにした。なぜか俺の着替えをふたりにガン見された。ついでに股間を触られた。

続いてふたりが着替えることになり、覗いていくかと言われたが丁重に辞退した。サンダルをつっかけ、灼熱の炎天下に身を投げ出す。拷問かってくらい暑い。焦げそう。ふたりが着替えはじめる前にトランクを開け、パラソルやらレジャーシートやらを取り出しておいた。

「あっつ……」

パラソルで日差しを防ぎながらうめくことしばし。

「ヒッキー、お待たせ」
「お待たせ～」
「う……お……っ」

ふたり同時にドアを開けて姿を現す。灼熱の空気に焼かれていることを一瞬忘れてしまった。

「えへへ……どう？」

――結衣が着ているのは紫がかった艶やかなピンクのビキニで、豊満な双丘に引き伸ばされてぱつぱつに張りつめた薄い生地をリングで繋いでいる。リングから伸びた紐は首に巻かれていて、下半身のビキニも両サイドが紐で結ばれている。可愛らしくも色っぽく、瑞々しい肢体の魅力を灼熱の陽射しのもとでこれでもかというほどに主張している。手首に着けているリングがさらに際立ち、ギャルっぽいエロさが醸し出されていた。

「うふふ、どうかしら～？」

――対して彼女の水着は、結衣よりもさらに攻めていた。紫を基調とした生地に花が咲き乱れたデザインのビキニで、リングで繋がれた胸の生地からそれぞれ別の生地が下半身のビキニにまで伸びている。下半身のビキニは両サイドが紐で結ばれていた。マイクロビキニのような露骨さはないものの、溢れ出す色香と年を重ねたことにより柔らかさを増した肢体の魅力を暴力的なまでに発揮していた。熟れた魅力を存分に見せつけておきながら、それでいて肌は若々しい。結衣と同様に手首につけたリングも相まって、美人ギャル姉妹にしか見え

ない。ちょっと色っぽすぎて、エロすぎて、なんだかよく分からない。

ふたり揃って俺ににこやかに微笑みかけ、感想を求めてくる。なにか言葉にするより先に、トランクをもう一度開けて二着のTシャツを取り出した。

「ヒッキー、どうしたの？」

「あら、これを着ろってこと？」

俺の行動にふたり揃ってくりんと首を傾げる。強烈に可愛い。

「ええと、その……海に行くまでは、それを着といてもらえると……」

可愛すぎるし、似合いすぎだし、エロすぎるしで、いくら海が近いとはいえその格好で道を歩くのは危険極まりないと思うんです。

心の内に溢れた褒め言葉と気遣いの言葉を全部すっ飛ばしての、現代文の問題で出ようものなら「こんなわかりづらい問題文で解けるわけがない」とクレームが殺到しそうな、言葉足らずにもほどがある言葉。

しかしそれなりに長い付き合いになったふたりには俺の意図を察してもらえたらしく、ぱちくりとしていた目を合わせ、にんまりとよく似た笑みを浮かべた。

「そっかそっか、それはしょうがないね」

「うふふ、大事にしてもらえてるわね～」

「いや、まあ、べつに……」

綺麗に意図を察してもらえるのは嬉しいが、それ以上に恥ずかしくなって慌てて顔をそらす。Tシャツを着て俺の両隣を歩くふたりはやけに上機嫌だった。

（コミケ本）比企谷小町ともういちど一線を越える。（1）

――夏――

「ほらほら、お兄ちゃん。どいてどいてー」

朝のまどろみに浸っていると、頬をぺちぺちとはたかれた。さしてんな可愛い声に起こされているのだろう。アレか、実はゆらぎ荘的な場所だったのかここは。

「お兄ちゃん、起きてるのは分かってるんだぞー。どいてどいてー」

益体もないことを考えているあいだも、可愛らしい声とともに頬をぺちぺちとはたかれ続ける。聞こえてくる声がだんだんいたずらっぽくなってきて、今度は頬を指でつついてきた。寝起きの声でオウオウとオットセイのような声を上げると、本格的なオッサン感がする。すごいぞ、自己嫌悪で目が覚めた。

「……小町、いつの間に？」

ゆっくりと目を開けてのろのろと起き上がると、キャミソールにホットパンツという健康的な格好の妹が楽しそうに微笑んでいた。すでに可愛い。すでにってなんだ。

「合鍵は持ってるからねー」

ローテーブルに置かれた鍵を指差してにひっと笑うと、二の腕をさすってブルリと震えた。

「お兄ちゃん、エアコン強すぎじゃない？　朝入った時『さむっ！』ってびっくりしちゃったんだけど」

「エアコンでキンキンに冷やした部屋で布団にくるまるのが人類史上最高の贅沢だろう」

「『だろう』ってさも当然であるかのように言うお兄ちゃんが信じられないよ……」

呆れたように笑った小町が、「ふむ、くるまる、ねえ……」とつぶやいたかと思うと、俺がかぶっている布団の中に潜り込んできた。とつ

ぜんの行動に鼓動が高鳴る。
「え、おい、こら……」
ためらう俺ににひっと笑いかけ、身体をぴったりとくっつけてくる。
「おー、たしかにこりゃ気持ちいいねー」
小町が仰向けの状態で布団を引っ張るため、俺まで強制的に寝かされる。触れ合う二の腕。久しく触れていなかったやわらかさに激しく動揺する。
「……これはまずいだろ、さすがに」
ぽそりとつぶやくと、小町がぷいと顔をそらす。かと思えば、今度は身体ごとこちらに向き直った。
「なーに？　やましいこと考えてんのー？　……あ……っ」
小町が布団の中で俺の腹をぺちぺちと叩き、すりすりとなでたところで――スウェットのズボンを押し上げる膨らみの存在に気付いてしまう。
「あー……その……ごめんね？」
小町が気まずそうに謝り、うつむいて顔を隠してしまう。ベッドから出ればいいものを、なぜか俺の胸に顔をうずめてしまった。
しばし無言の時間が流れると、小町が顔を上げた。
目が合う。
先ほどまでの和やかな空気とは明らかに違う。
「小町……」
顔を寄せると、小町が慌てて逆側を向いた。
「だ、だめだめ、それは、うん、さすがにね！　うん、うん……」
背中を向けたまま、ぽそぽそと、まるで自分に言い聞かすようにつぶやく。目の前まで来たのに、腕の中からするりと抜けてしまう。まるで逃げ水のような感覚。
「……ん、そうか、そうだよな」
淡い期待を砕かれてつぶやいた声が、思っていた以上に悲しそうなことに自分で驚く。小町が「う……」と気まずくうなるのを聞きながらごろんと背を向けた。見慣れた白い壁を意味もなく見つめる。

「お兄ちゃん……」
小町が寂しそうに、甘えるように囁き、俺の背中に抱きついてきた。反射的に振り返ると、小町はまた背を向けてしまう。かと思えばまたこちらを向いた。今にも泣きそうな顔をしている。
「……いったいどうしたいんだ、お前は……」
小さな背中を抱きしめて頭を撫でると、「うー、うー……」と可愛らしくうなりながら俺の背中をてしてしと叩いてくる。ツヤツヤの黒髪に顔をうずめると、甘くて良い匂いがした。
――小町の中で、そして俺の中で、いまだに整理のできない感情が渦巻いている。

× × ×

総武高を卒業すると、俺は実家を出てアパートでの一人暮らしを始めた。実家から通えない距離ではなかったが、電車で片道一時間半もかかるのでさすがに厳しいものがある。悩みに悩んだ末の決断だった。
小町は俺の部屋にほとんど毎週末遊びに来ては掃除をして、それが終わると昼食を作り、午後からは勉強していた。俺は掃除と昼食の礼に勉強を教える……ということになっている。
高校2年の時に小町と一線を越えてから、引っ越すギリギリまで何度も何度も身体を重ねた。この生活はふたりが離れても続くと思っていた。けれど、総武高卒業以来、俺と小町は一度もそういった行為を――それこそ、キスさえしていない。
「お兄ちゃん。そろそろこういうの、やめにしよっか」
総武高の卒業式も終わり、あと数日で引っ越すという日。いつものようにたっぷりと交わったあと、小町はまるでコンビニに買い物に行くかのような気軽な口調でぽつりと告げた。もちろん、初めは小町の言葉の意味がまったく理解できなかった。
「そうか、気絶するまでするのはさすがにきついか」
「そ、そうじゃなくて！　……もう……」
裸で毛布にくるまり、赤らめた顔の下半分を隠す仕草が可愛らしかったが……他愛のないやりとりを挟んだ中で、俺は小町の意図を汲

んだ。汲んだ上で、まだ諦めきれなかった。長年いっしょに暮らしてきただけあって、俺の表情から小町も複雑な感情を汲み取ってくれたようで。
「……これ以上入れ込んだらさ、ほんとにヤバいと思うんだ」
「……」
「お兄ちゃんは……さ。大学で彼女を作ってよ。あ、もちろん総武高の人とくっついてもいいんだからね！」
無理やり声の調子を上げてぎこちない笑みを浮かべる妹の姿が、今も脳裏に焼きついている。
その場ではうなずいたものの、やはり諦めきれなかった。小町と共に過ごす時間があまりにも当たり前になっていたからだ。関係が続いているならば一人暮らしも楽しめるかもしれないと思っていた。週末になれば家族の目を気にせず自由に過ごせるのだから。けれど、関係が終わりを迎えた状態で一人暮らしを始めるのは……。
考えただけで辛くなり、引越しを手伝ってくれた小町を連れてその日のうちに合鍵を作って渡した。今でこそ多少の傷は癒えているけれど、あの時は本当に、すがるような思いで小町に鍵を渡した。
正直、合鍵を渡したところで小町が来ることはないだろうと思っていた。そんなことをすればふたりの関係が曖昧なままずるずると続いてしまうのだから。
けれど、小町はほとんど毎週末、時間の許す限り俺の部屋に通っている。「お兄ちゃんはズボラだから、小町が定期的に面倒を見てあげないと」と大義名分を掲げるときの妹の顔は、いつも以上に明るく、いつも以上に影があった。
「もう、エッチはしちゃだめだよ？」
勉強中の小町とふと肌が触れた時、動揺する俺に小町がそっと囁いた。肩を抱きしめようと伸ばした手がすんでのところで止まった。ほんの数センチ動かせば触れる柔肌が遠い。温もりが遠い。小町との距離感が分からなくなった。
しかし、迷っているのは俺だけではなかった。俺は俺で小町と接するたびにムラムラと湧き上がる劣情と必死に闘っていたが、小町は小

町で、まるで欲求不満を訴えかけるようにスキンシップを頻繁にとっていた。不意に抱きついてきたり、じゃれついてくすぐってきたり。俺の身体に触れながらも「エッチはなしだからね！」と快活に笑う時は、可愛らしい顔に曖昧な陰りはなかった。

そんなことを言いつつも、俺がソファで昼寝をしているとこっそり俺の股間をまさぐっていたこともあった。バレないようにちらりと覗くと、今にも泣きそうな顔をした小町も自分の下腹部をいじり、「お兄ちゃん、お兄ちゃん……」と切なげにつぶやいていた。小町の両手を押さえ、押し倒し、理性が飛ぶまで犯したくなった。けれど、できなかった。

実家にいる小町と電話している時、我ながら情けないと思いつつも、我慢できずに自慰したこともあった。音声通話をしている時も抜いたし、ビデオ通話で顔を見ながら話している時に抜いたこともあった。小町は勘が鋭いのでバレやしないかとひやひやしていたが、どういうわけか怪しむ素振りを見せなかった。

俺も、小町も。

ふたりの関係性がどうあるべきか、いまだに迷い、悩み、答えを見つけ出せずにいる。

（2）

曖昧な関係が続いたまま、俺は大学で初めての夏休みを迎えた。初日なので盛大にだらけようと思っていた矢先に、小町が合鍵を使って入ってきた。小町はベッドから抜け出すと掃除を再開し、楽しげに鼻唄まで歌っている。今になって気付いたが、床に掃除機をかけるなら俺は寝たままでも良かったのでは……？　まあどちらにせよ掃除機の音で起きるんだろうけども。

小町が掃除をする姿をぬぼーっと眺め、「おーしまい！」と元気の良い声が聞こえたところでコーヒーを淹れた。ローテーブルで向かい合ってのんびりしようとしていたんだが、小町はごく自然に隣に座った。距離がなんだか近い。コーヒーの匂いに混じってかすかに良い匂いがする。

「ん？　……」

小町が何かに気付いて眉を寄せ、コーヒーカップを置いた。俺の二の腕に顔を近付け、くんくんと鼻を鳴らす。

「……におうのか？」

「うん。ちょっと汗くさい」

「うぐ……っ」

エアコンを点けていたとはいえ、布団にがっつりくるまっていれば汗もかくだろう。痛いところを突かれて悶絶していると、小町がにやはっと笑った。

「だいじょーぶだいじょーぶ。小町、お兄ちゃんの匂い好きだよ」

「え」

「あ」

「今の、もういっかい言ってもらっていいですか」

「小町は勉強することにします」

高速で逃げられた。ローテーブルの対面に移動し、カバンから勉強道具を取り出して課題を始める。切り替えが速すぎて、お兄ちゃんついていけません……。

すでに夏休みに入っている小町は大量の課題が出されたらしい。

俺も総武高で初めて夏休みの課題を受け取ったときは、思わず丁重に返却しそうになった。
「大学生ってさー、夏休みが二ヶ月あるんでしょ？」
「そうだな」
「理不尽だ！」
「大学一年生は去年、地獄のような一年間を過ごしたわけだからな。小町も分かるだろ、受験のキツさは」
「うぐ……。……めちゃくちゃエッチしまくってたくせに……」
「ん」
「なんでもありません」
　課題の途中で雑談も挟みつつ、のんびりと時間が流れる。俺は読書をしていたが、小町がときどきぶっこんでくる爆弾のおかげでまったく集中できなかった。

×　×　×

　昼食をとり、小町はソファで仮眠をとった。俺は当然のごとくどかされた。午後もしばらく勉強を頑張っていた小町だが、唐突にシャーペンを投げ出し、カーペットに大の字に寝転んだ。
「今日の分はおしまーい！　もうむり！　小町は限界！」
　勉強の終盤でなにやら顔をむずむずとさせていたが、どうやら猛烈に叫びたかったらしい。若干声が大きいので注意してね！　怒られるのは俺だからね！
　ふへー、と気の抜けた吐息を漏らす小町が、ソファでくつろいでいた俺の隣にとすんと腰を下ろす。俺が同じことをしたらどすんと音が鳴るだろう。こういう何気ないときに、女性の身体というものを実感する。
「はー……脳に糖分が足りないよ、お兄ちゃん……」
「そうか、じゃあハッカ飴でも舐めるか」
「なんで持ってんの……。そういうのじゃなくてさ、あとでミスド行こうよ、ミスド。近くにあるでしょ？」
「暑いから無理だな」
「じゃあ買ってきてー」

「俺はお前の体調を慮って言ったわけじゃないんだが」
　しばらく問答を挟み、けっきょくあとでふたりで行くことになった。小町のニュアンスからするにあと二十分もすれば行かされそうだが、俺としてはぜひとも夕方まで待っていただきたい。夕方になったからといって涼しい風が吹くというわけではないんだが、それでも真っ昼間よりはマシだ。ほんときついよね、夏。
「あー……学校はどうだ？」
　気遣わしげに尋ねると、小町はなぜか「うへぇ……」と言わんばかりの顔をした。というか実際に言っている。なんでですのん？
「お兄ちゃん、お父さんみたいな聞き方やめて……」
　色んな意味でへこんだ。
「マジか……」
「まあ、楽しくやってるよー」
　俺の凹みをさらりと無視して、スッとしなだれかかってくる。ごく自然な、兄に可愛らしく甘える動作。頭をくしくしとなでると猫のように目を細めた。
「お兄ちゃん、彼女できた……？」
　水のつぶのように小さく、どこか寂しげな声に心臓が跳ねる。
「いねえよ」
「そっか。ま、お兄ちゃんだしねー」
「うるせえ」
　くすくすと笑う小町の髪をぐしぐしと強めになでる。「ふぬー！」と変な声が聞こえて噴き出しそうになった。
「出来が良くて可愛いにもほどがある妹が通い妻してくれてるから、寂しくならねえんだよ」
　ちょっとお返しのつもりで本音を言ってみると、微笑んでいた妹の顔が見る見るうちに真っ赤になった。可愛い。
「そういうお前はどうなんだ」
「いないよ？」
「なんでだろうな」
「世話の焼けるお兄ちゃんがほっとけないからじゃない？」

「そうなのか」
「そだよ」
小町と目が合うと、くすくすと笑いあった。
やがて笑い声が止まり、会話もぷつりと途絶える。
ちらりと小町を見やると、キャミソールからちらりと谷間が覗いていた。身体を重ねていないあいだにぐっと豊かになった身体。思わずごくりと喉を鳴らすと、小町がびくりと震えた。
「あー、……お兄ちゃん、今のはダメだよ……」
「なんで？」
「反応しちゃうから」
背筋がざわめいた。
「……どこが？」
「……」
小町は俺の質問に答えず、ホットパンツから伸びた健康的な太ももをもじもじとこすり合わせる。焦れったい反応。悩ましい流し目。身体を重ねていないあいだもふたりの身体には変化が起きつづけている。特に、いま目の前にいる妹には。
もういちど、今度は小町に聞かせるためにわざとらしく喉を鳴らした。小町の澄んだ瞳が揺れる。小さな両手を太ももに挟み、せわしなく視線を泳がせた。
「お兄ちゃんは、さ……」
「ん」
急に小町の歯切れが悪くなった。なるべく穏やかに聞き返すと、眉をくにゃりと可愛らしく曲げ、内緒話をするかのような声音で質問の言葉を結い上げる。
「その……今は、ひとりで……してるの？」
心がざわつき、下腹部が反応する。小町がこの部屋に通うようになってからは、性的な話をいっさいしたことがなかった。いちどでも踏み込めば、何かが崩れるとふたりとも本能的に感じ取っていたのかもしれない。
しかし今、その見えない忖度の壁を小町が破った。窓を突き抜けて

聞こえていたセミの声が一気に遠のく。
「あー、まあ、毎日してるぞ」
「え、そんなに？」
俺の言葉に小町が目をぱちくりとさせる。
小町から踏み込んできたのだ。だったら俺も……。
「実家にいた時はもっとしてただろ」
「……っ」
ぐっと踏み込むと、小町の顔がくしゃりと歪んだ。顔をそらし、髪をかきあげ、気まずげに愛想笑いを浮かべ、それから艶と憂いを帯びた無表情を浮かべる。しなだれかかっている小町の肌が熱い。離れるタイミングを逃しただけなのか、それともわざとこうしているのかは分からない。けれど、俺も小町も、この会話でブレーキを踏もうとしない。常に相手の心を探りながら、ゆるいアクセルを踏んでいる――そんな感覚。
「小町は？　ひとりでしてたのか？」
「え？　ちょ、な、なに急に」
「同じことを聞いてるだけだろ？　で、してたのか？」
「え、えっと、あ、やー、そのー……」
理性がちりちりと炙られる。小町は何度も身体を離そうとしてはやめている。逃げたいのに、やめたいのに、逃げたくない、やめたくない。矛盾した感情が妹の胸のうちに渦巻いているのがよくわかる。俺も同じ気持ちだから。
小町が引いた一線。初めははっきりと、明確に、太く太く引かれていた線が、日に日に細くおぼろげになっていった。今はもう、蜃気楼のように気が付けば消えてしまいそうなほど儚げなものになっている。
小町の手首を掴んだ。成長しているとはいっても、男の俺とはあまりに違う、とても細い手首。小町の瞳が揺れる。掴んだ手をそっと俺の下腹部に導く。際どい会話を始めた時から勃っていた。小町が気付いていなかったとは思えない。わざと目をそらし、気付かないフリをしながらも危うげな会話を続けていたのだ。

「わ……っ」
やわらかな細指に肉幹が包み込まれる。ハーフパンツ越しとはいえ、数ヶ月ぶりに小町に下腹部を触られ、これだけで射精してしまいそうになった。
「だめ、だめだってばぁ……っ」
小町が言葉だけ取り繕って、泣きそうな上目遣いを向けてくる。肉茎を握る指がやわやわと波打ち、身体が震えた。俺の反応に小町はいっそう泣きそうになる。
「それで？　してたのか？」
「え？　あ、や、だから、その、なんというか、うーんと……」
小町は可愛らしく慌てながらも細指を動かす。言葉を紡いでいる小町と細指を蠢かせている小町が、まるで別の生き物のように思えた。
肩を抱き寄せ、おでこ同士をこつんとぶつける。お互いよほど高まっていたのか、小町のおでこの熱さは分からなかった。
「お、お兄ちゃん、これ、ヤバいよぉ……」
小町の瞳も声も濡れている。言葉でこそ咎めているが、まったく気持ちがこもっていない。言葉の字面よりも、熱く湿った吐息に本音が現れていた。
唇を近付ける。小町が泣きそうになりながら、観念したように目を閉じて顔を傾けた。
「んん……っ」
数ヶ月ぶりに重ねる唇。小町の唇は信じられないほど柔らかかった。悩ましい吐息が細い糸の形を成して耳朶にすべりこみ、脳を犯す。
「んっ……ぅお……っ」
細指にまさぐられている肉幹がびくびくと跳ね、思わず声が漏れ出る。初めはおどおどとしていた指の動きが徐々に積極的になっていく。
「んふぅ……っ？　へぁっ、んっ、んん……っ」
薄い唇を咥えると、女性らしさを増した肢体を震わせながら亀頭を

すりすりとなでまわし、竿の部分をしゅっ、しゅっとしごいてきた。身体が覚えている、という表現がしっくりくるような味わいかた。久しぶりすぎて、気持ちよすぎて、幸せすぎて、頭がおかしくなりそうだ。

「んん……っ？　ちゅっ、れるっ、はぷ……っ、んんっ、おにいちゃ、これ、らめ、んふぅぅ……っ」

舌を絡めると、小町がうっすらと目を開けた。ねっとりと唇を重ねながら、さらに身体を密着させてきた。二の腕に柔らかな胸の感触がふにゅりと当たる。

「んぐ……ぐ……ぅぅ……っ」

小町はボクサーパンツの中に手を滑り込ませ、肉幹を直接まさぐりだした。ハーフパンツ越しの焦れったい快感から、直接的な快感に一気に変わったことで気が狂いそうなほどの興奮に包まれる。

「ぐ……ぅお……っ」

腰がずるずるとずり落ち、猫背になっていく。小町はがくがくと腰を震わせる俺に身体をかぶせ、細指を肉幹に這わせながら妖しく目を細めた。

スイッチが入った、と一発で分かる表情に心臓が強く脈打つ。

「はぷっ、ちゅっ、れるっ、んふぅぅ……お兄ちゃん、お兄ちゃん……っ」

「んぐ……ぅぐぁ……っ」

小町がハーフパンツとボクサーパンツを同時にずり下ろし、肉幹を外気にさらす。ぶるんと反り返った肉槍の切っ先から先走り汁が飛び散り、小町が声を上ずらせた。俺の腰にひざ立ちでまたがり、露わになった肉幹を両手でにちにちとしごきながら唇を重ねてくる。俺は行くあてをなくした両手を小町の腰に添え、情けないほどがくがくと震えた。

「……ぷはっ。はっ、はぁっ、はぁぁぁ……っ」

数分に及んだ口づけが終わり、小町が荒く息をつく。興奮で霞んだ瞳は俺をじっと見つめ、十本の細指はカウパー液で陰毛まで浸っている肉幹を貪るようにまさぐっている。

「小町……もう、出そう、だから、止め、……ぐぁ……っ」
「あー、ヤバいなー……」
　小町はぼうっとした表情で独り言をつぶやく。そのあいだも指の動きは止まらない。玉袋を支えるようにやわやわと揉み、人差指と親指で作った輪でカリ首を掴んでくりくりとまわす。我慢汁がどぶどぶと節操なく溢れ出し、牡くさい匂いがふたりのあいだを満たしていく。
「お兄ちゃん、一人暮らしなんだよ？　お父さんもお母さんもカマクラもいないんだよ？　こんな場所でエッチしたら、絶対ハマっちゃうって。あー、どうしよ、もう……」
「……っ」
　小町の表情は熱に浮かされているようでいて、どこか冷めているようにも見える。カリ首を指の輪で刺激しながら根元をしごかれ、射精欲求がむくむくと湧き上がってくる。
「あーもう、どうしよ……お兄ちゃんのおちんちん、おっきすぎだよぉ……。どんだけ興奮してんのさ？　まったく……」
「ぐぅ……ぁ……っ」
　ここに来て初めて小町の意図に気付く。俺が射精するまで止める気がないのだと。
「こ……の……っ」
　細い腰に添えていた手をキャミソールの膨らみに伸ばす。
「ふぁ……っ」
　指に伝わる感触は、覚えていた感触よりもずっと深く、柔らかく、瑞々しかった。
「お前、ブラは……」
「あっ、んんっ、部屋着なんだし、いいでしょ別に……」
　上ずった声で尋ねると、小町はいたずらっぽい笑みを浮かべ、肉幹をしごく速度を上げた。がくんと腰を震わせると、妹の目が三日月のように細められる。
「お兄ちゃん、イきそうなの？　すっごいビクビクしてるよ？」
　小町がずいと顔を寄せ、小さな舌をちろりと伸ばしてくる。ぱくり

と咥えて啜ると、「へぁぁ……っ」と可愛らしくも卑猥な嬌声が漏れ出た。
「ん……くっ、うぁ……っ」
ねっとりとキスをしているあいだも、肉幹はしごかれ続ける。しゅるしゅる、にちにち、ぐちゅぐちゅ……と、細指の中で鳴る音は徐々に粘度を帯びて卑猥なものになっていく。小町としなくなってから少なくとも百回以上抜いたというのに、まるで何ヶ月も射精していなかったかのような感覚。
「小町……出る……っ」
「いいよ、出して、出してお兄ちゃん……っ」
小町が身体を起こし、両手をめちゃくちゃに動かす。指を波打たせたり、亀頭をなでまわしたり、乱暴なくらいの力でしごいたり。
「がっ……ぐぅっ、お……あぁ……っ！」
興奮しすぎて我慢汁をたっぷりと垂らしているため、何をされても気が狂いそうなほどの快感しか生まない。小町は自分自身が興奮しすぎていることに気付いたのか、途中でカリ首をつまみ、竿をしごく動きに変えた。細指にギュッと力を込めて、男性器の根元から精子を搾りとるような動き。身体の奥底から射精欲求が込み上げ、キツく目を閉じて歯を食いしばった。
「……ぐぅぅ……っ!!」
ギュッと眉をひそませた瞬間、ゼリーのような粘度の白濁が鈴口をかき分け、顔を上気させた小町の目の前で噴き出した。
「ひゃぁぁっ!? わっ、うわっ、わわっ、すご、すっごい、こんな……ひゃぁぁぁ……っ」
「ぐ……ぁ……あぁぁ……っ！」
狭い尿道で圧を高められた精液は凄まじい勢いで噴き出し、小町の手、腹、胸元、あごにまでかかる。どぶっ、ごぶっ、どぶどぶ……っと魂が抜けそうな勢いで精子が噴き出し、小町は興奮で目を見開きながら肉幹をしごき続けた。壊れたように身体が跳ね続け、射精の脈動が収まるころには小町の手が大量の白濁に覆われていた。
「お兄ちゃん、すごい……。昨日はしてなかったの？」

「……いや、昨日も抜いた……」
「それでこんなに出るんだ？　ふわぁぁ……」
小町が手の指を開くと、まとわりついた精液の糸がてろんと垂れた。卑猥な光景をうっとりと眺めたかと思うと、粘度の高い白濁の糸をぱくりと咥え、啜る。
「今日、泊まっていい？」
精液をこくりと嚥下した小町が、ぞっとするほど艶っぽい表情で囁く。
「……もちろんだ」
「……やった」
ぼそりと答えると、小町は淫靡な表情から一転して、子どものように無邪気な笑みを浮かべた。

（コミケ本）一色いろはは巧妙な策略をもって捻デレを篭絡する。

（1）

グラスの氷がからんと鳴った。
「せんぱ～い、聞いてますか～？」
「はいはい、聞いてるよ、聞いてます」
カウンター席の隣に座る後輩、一色いろはがふやけた声で話しかけてくる。ほろ酔いの顔に上機嫌な笑みを浮かべ、総武高にいた頃より長くなった亜麻色の髪がふわふわと空気を含んだ。
もう夜も遅いしおひらきにしても良いかと思ったが、一色の話はまだ終わりそうにない。仕方ないのでモスコミュールをもう一杯注文した。
「こないだバイトでちょーウザい客に絡まれてぇ～」
「その話、四回目だぞ」
「知ってます～。先輩がどんな反応するか見てみたくて～」
「試みが鬼畜すぎない？」
呆れていると、グラスを持った一色の頭がふらふらと揺れた。サラサラの髪が俺の二の腕にそっと触れ、心臓が静かに跳ねる。
「は～、先輩といるとホント楽でいいです～……。どうでもいい世間話とかしなくて済むし」
「俺がちょっとでもつまらん話をすると一瞬で斬り捨てるヤツとは思えないセリフだな……」
ジャブ程度のつもりで切り出した話題を「は？　やり直し」と素で返すいろはすほんと怖い。
それでいて俺が興味なさそうに聞いていると「リアクション薄いですよ？」とダメ出ししてくるのだ。鬱陶しいことこの上ないが、そんなやりとりもごく自然体でできてしまう。

もしかして俺ってドMなのでは……という疑いが払拭できずにいるのがなんだか怖い。
一色と目が合うと、ふにゃっと目を細めて笑う。酔ったときに見せる気の抜けた笑みは、元々の可愛さも相まって強烈に魅力的で。思わず目を逸らしてしまう。
「せんぱ～い、感謝してくださいよ～？　こーんな可愛い後輩が先輩を追っかけて同じ大学に入って、こんなふうにしょっちゅう呑んであげてるんですから～」
「どんだけ恩着せがましいんだお前は……まあ、可愛い後輩ってのは否定しないが」
「へ？　え、あ、えっと、その……」
そこそこ酒が進んでいたためか、普段口にしない本音がぽろりと零れてしまった。一色は一色でさらりと流せばいいものを、急にあわあわと慌てる。
亜麻色の髪の毛先をちょんちょんとつまみ、唇をもぞもぞとして、嬉しそうに、続きを促すように流し目を送ってきた。何なのこの可愛い生き物は？
「……今のは聞かなかったことにしてくれ」
一色がそれはそれは嬉しそうに口端を吊り上げた。良い笑顔すぎて腹が立つ。
「わっかりましたー！　可愛い後輩であるいろはちゃんはしっかり先輩の言うことをばっちり聞きます！」
「煽り方がえげつないんだよなぁ……」
ごまかすようにモスコミュールを呑むと、アルコールが回って余計に顔が熱くなった。
「んふふー……」
一色は鼻唄でも歌い出しそうなほど上機嫌だ。カルーアミルクの入ったグラスをゆらゆらと揺らし、コーヒーと牛乳が混ざり合うのを楽しげに眺めている。
呑みに誘われると、いつもこんな風にウザ可愛く絡まれる。鬱陶しいとは思いつつも、このやりとりが案外楽しいと思ってしまう。

――こうやってふたりで呑むのは、もう何回目だろうか。
『先輩、今日ヒマですよね？　だったら呑みません？』
一色は毎回、付加疑問文で失礼な聞き方をして誘ってきた。バイトが入っている日もあったが、そのときはバイト後に会いましょうと言われて呑んだ。
『わたしが誘ってるのに呑まないとかありえなくないですか？』
などと言わんばかりの態度だし、実際言われた。いろはす、遠慮なさすぎぃ！
一色は総武高にいた頃よりもぐっと大人びていた。それでいてあざとさはさらに研ぎ澄まされていて、外国人に『小悪魔』という言葉のニュアンスを説明したいときは一色を指差して「あんな感じです」と説明すれば事足りるくらいには小悪魔だ。ほんとプチデビル後輩。
「一色、呑みすぎだぞ」
「え～？　わたしたちの呑みはまだこれからですよ～？」
「打ち切りマンガの最後みたいなセリフを言うなよ……」
左下に「ご愛読ありがとうございました！」と書かれるパターンな。好きな漫画だったのになぁ……と何度思ったことか。あと余韻に浸る間もなく、ページの下に来週からの新連載のタイトルが書かれる無慈悲さよ。アンケートを出すのもコミックを買うのもほんと大事。
「先輩ももっと呑んでくださいよ～」
一色が陽気にけらけらと笑い、とん、と軽い体当たりをしてくる。ノースリーブのカットソーを着ているため、彼女の素肌が触れた。生々しい温もりと甘やかな匂いに理性がぐらりと揺れる。十数分に一回程度の軽いスキンシップにはまるで慣れることがない。
「一色、いつも思うんだが……お前って、呑むと、……」
「ん～？　なんですか～？」
「……いや、なんでもない」
言葉を引っ込めると、一色はこてんと首をかしげた。そんな風に誰とでもスキンシップをとるのか、などとみっともなくて情けないことはとても聞けなかった。
「ていうか先輩、せめて呑んでるときは名前で呼んでくださいって

言ってるじゃないですか～」
「別に承諾した覚えはないんだが……」
「つべこべ言わない！　屁理屈を言う男は社会に居場所はないですよ？」
「べつに今も居場所なんてないけどな」
　いつもの調子で軽口を返すと、一色が急に真面目な顔になった。
「それはウソです」
「え、お、おう、おお？」
「先輩、相変わらずめんどくさいキャラ全開ですけど、前よりずっと話しやすくなったじゃないですか。学部でもお友達と話してるのを見たことありますし、バイト先でもそれなりに上手くやってるんですよね？」
「あー、まあ、な、うん……そうかもしれん」
　奉仕部の活動で鍛えられたせいもあるのか、大学ではかつてほど孤立していない。ぼっちが好きなので大概ひとりで動いてはいるが、それでもたまに言葉を交わす友人と呼べるような存在は何人かいる。大学に入ってからできた友人なので、何気に大きな進歩かもしれない。
　俺が納得するのを見て、一色はふふんと得意気に笑った。カルーアミルクをくぴりと呑み、むふっと笑う。
「そんなわけで、先輩に居場所がないなんて言わせませんよ。……わたしだっていますし」
「そうだな、俺を引っ張り回す暴れ犬な後輩がいてくれるわけだな」
「わたしの扱い、ひどすぎません？」
　ぷっくりとあざとく頬を膨らませ、てしてしと二の腕を叩いてくる。スキンシップの間隔が少し狭まってきた。
「で？」
「ん、なに？」
「いつ名前で呼んでくれるんですか？」
「いや、だから……」
「で？」

にっこり笑顔で一文字発するだけで、人ってこんなに圧を与えられるもんなのか……。
これは逃げ場がないと判断して、こほんと咳払いをする。
「……いろは」
「……あ、は、はい、ど、どーもです……」
一色の顔がぽわんと赤くなり、きょろきょろとせわしなく目を泳がせる。
「いや、なんでだよ……」
年端もいかぬ少女のようなウブな慌てぶりに呆れるも、俺の顔もなんだか熱い。
「だ、だって、ほんとに呼ばれると思わなかったから……」
頬に手を当てて一色がぽしょぽしょと囁く。カウンターに置いたふたりの手が近い。
ふたりの間を満たす、甘ったるい空気。
本来は喜ぶべき状況なのだろうが、今は胸が高鳴ると同時にきゅっと締めつけられる。
「一色、そろそろ会計を――」
一色が俺の手を握っていた。そろりと這ってきた指が蠱惑的に、甘えるように絡まってくる。
「……先輩。今日も、付き合ってもらっていいですか……？」
牡の理性を揺らすためだけに特化した、とびきりの猫撫で声。何か答えるより先に、喉がごくりと鳴ってしまった。その音を聞いた一色が目を見開き、それからにいっ、と三日月のように目を細める。先ほどのウブな彼女はもう、どこにもいない。
「それじゃ、オーケーってことでいいですね？」
一色が口端をかすかに上げる。見えない糸が全身に巻き付いたかのように動くことができなくなり、唯一動くことの許された顔が、誘われるがままに小さく頷いていた。
× × ×
外に出て近くにホテルがあるか探していると、一色がそっと腕を組んできた。柔らかな温もりに触れて身体がびくりと震えそうになり、

動揺が伝わらぬよう無理やり抑え込む。
徒歩三分ほどのホテルが見つかり、そこにするりと入り込んだ。迷っていてもうやむやになどできないのだから、もはやためらう必要もない。
「……ここが良いです」
一色が空き室のパネルのひとつを指差した。派手な装飾のない、少しだけ照明がピンクがかった部屋。一色の人差し指が思いのほか細くて華奢なことに不意に気付いた。
ホテルまでの道のりも、エレベーターの中も、会話はほとんどなかった。けれど一色はときおり、すがるようにきゅっと抱きついてくる。理性がぐらぐらと揺れるのを懸命にこらえながら、部屋まで黙々と歩いて行った。
部屋に入り、各々のバッグを下ろす。一色がきょろきょろと部屋を見回した。
「パネルで見た感じよりも狭いですね」
「そうだな」
「でも、これはこれで安心感があっていいです」
一色がにこりと微笑む。イメージ的に「は？　狭いんですけど」などと言いそうなものだが、この子は日常のちょっとした不満に対してポジティブな見方をする能力に意外と長けている。
「先輩」
狭い窓から無機質なビル街を眺めていると、つんつん、と二の腕をつつかれた。振り返ると、一色がじっとこちらを上目遣いで見つめている。パンプスを脱いだ身体は毎回少し驚いてしまうほどに小さい。庇護欲をそそるサイズ感、とでも言えばいいのだろうか。
俺が返事をするよりも先に、首にするりと腕が巻きつけられた。華奢な身体つきに柔らかな感触。この子はどこまでも女の子なのだ、ということを強く強く実感する。
「ふふ、先輩……思ったよりもおっきくてドキドキしちゃいます」
「……そうか」
ほんのり酒気を帯びた吐息と、いたずらっぽさを含んだ甘い声。ほ

んの数文字の返事が上ずらないようにするのがやっとだった。
鼻先が触れ合いそうな距離で、デニムのタイトスカートに包まれた尻をふりふりと悩ましく揺らす。一色はうっとりと目を細めていたが、急に、少しだけバツが悪そうに目を逸らした。
「……先輩。今日も、練習ですからね？」
「知ってる」
「もー。そこは『練習だけでいいのか？』って返すとこじゃないですかー？」
「いやそれはねえよ……ていうかなんだ今のやたらめったら良い声は……」
他愛のない会話。ルーティンと化したやりとり。酔いが混じり、ホテルに入り、ふたりきりで抱き合った状況でも、まるで総武高にいた頃と同じような軽い言葉の応酬。それが照れ隠しであることは、お互い充分すぎるほどわかっている。
「先輩……」
一色が目を細めた。完全に閉じることのない目は、まるで俺がとつぜん消えるのを恐れるような、そんな幼い子どものような不安が見える。そっと背中を抱きしめると、一色は目をぱちくりとさせて嬉しそうに微笑んだ。
一色がもういちど目を細め、唇が重なる。
「ん……っ」
小さな鼻の奥で鳴る色っぽい声に身体が強張る。一色の唇と触れているときだけは、まるで何十倍もの神経が唇に集まったかのように感じる。一色が身をよじった拍子に触れ合う唇が少しだけ滑る。それだけで全身がひりつくような興奮に焼かれる。
一色が抱きしめる力を強める。俺も応じると、ふたりの身体がさらに密着した。サマーニットに包まれた胸は信じられないほど柔らかく、俺の胸板に合わせてふにゅりとひしゃげる。
「ん……ちゅっ、れるっ、んっ、んふぅぅ……っ」
顔を傾けて密着を強め、徐々に、徐々に舌を絡め合う。乾いた舌でつつきあい、徐々に唾液をまとわせ、口の中でねっとりとじゃれあう。

「んふぅっ？　んっ、へぅっ、んくぅぅ……っ」
いたずらで一色の舌を啜ると、彼女のひざががくがくと震えた。一色はどうやらキスに弱いようで、毎回自分から仕掛けておきながら腰砕けになっている。
「ぁ……せん、ぱい……っ？」
亜麻色の髪をそっと撫で、小さな耳の形をなぞる。徐々に手をすべらせ、首筋に指を這わせていく。一色がとろんとした瞳で見上げ、瑞々しい唇を震わせた。
「あっ、ふぁっ、せん、ぱい……もう、だめ、ですよぉ……っ？」
言葉ではたしなめているものの、その瞳はとろとろに蕩けている。愛おしさが込み上げて、それに比例するように虚しさが込み上げた。どろどろに混じりあった感情を振り払うようにもういちど唇を重ねる。
「んっ、ふっ、ふぅぅ……っ、こくっ、んっく、こくっ、んふぅぅ……っ」
一色の腰を抱いて上から覆いかぶさるように唾液を流し込む。戸惑ったのは初めだけで、あとは素直にこくこくと呑み込んでいく。髪や腰をさすると一色はそれだけでひくひく震え、身体を艶めかしくくねらせた。
「……ぷはっ。……先輩、キス、すっごく上手くなりましたね」
「誰かさんのおかげでな」
「へー、誰なんでしょうねー？」
白々しいことを言って笑う一色がどうしようもなく可愛らしい。
「うぐ……っ」
ジーンズを押し上げる肉竿に細指がそっと触れた。
「ふふ、おっきくなってますねー……今日も」
一色の声が湿り気を帯び、質感を持って耳朶にずるりと入り込む。女性の声はこうも変わるものなのかと戸惑う。
「先輩、これ、すっごいキツそーですよー？　だいじょうぶですかー？」
にんまりと目を細め、がちがちに膨らんだ肉茎を楽しそうに両手で撫でてくる。

「ぐ……ぁ……こ、こら……っ」
細指から送り込まれる焦れったい快感に腰が揺れる。嬉しそうに見つめてくる後輩に強烈な劣情が湧き上がり、サマーニットを盛り上げる双丘に触れた。
「うあ……っ」
両手で下から掬うように触れると、一色の唇から艶めいた声が漏れた。すぐに唇を引き結び、咎めるような表情で見つめてくる。肉竿をまさぐる指の動きはそのままだ。
「だめ、ですよぉ……っ？　わたしが、責めるんです、んんっ、からぁ……っ」
俺の手から逃れようと身をよじる仕草がかえって色っぽく、そろそろ本当にジーンズを脱がないとつらくなってきた。
「……俺のターンは来ないのか」
「そうですね、ずっとわたしのターンです」
「なんでそのフレーズを知ってるんだ……」
一色が俺の手首を掴んで引き離し、するりと腰を下ろした。ジーンズのベルトを外してチャックを下ろす。
一色がこくりと喉を鳴らす音が聞こえた。
数秒のためらいの後に、ジーンズとボクサーパンツが同時に引き下ろされる。勢いよく飛び出た肉茎は呆れるほどに勃起していた。ぐんと反り返った竿には何本もの青筋が浮き、亀頭はぷっくりと膨らんでいる。
「やぁ……っ、おっきぃ……っ」
一色の声が上ずる。羞恥や照れ、そしてそれ以上の興奮が見てとれる声音と表情。
男性器を凝視されているあいだにさっさとジーンズとパンツを足から抜いた。
「あ、上も脱いでもらえます？　じっくり見たいので」
「あいよ……ん？」
「早く早くー」
今この子、さりげなくすごいこと言わなかった……？　と首をかし

げつつ全裸になる。
「準備オッケーですね。それじゃあ……ん……っ」
一色が両手で肉竿の根元をそっと挟み、鈴口にちゅっと口づけをする。鋭い快感が尿道を駆け抜け、先走り汁がごぷりと溢れ出した。
「んふぅ……先輩、しょっぱいですよぉ……？　汗もかいてるしぃ……だめですよぉ……こんなの女の子の前に出しちゃあ……」
ちゅっ、ちゅぴっ、と音を立てて亀頭を舐めながら咎めてくる。カウパー液をためらいもなく舐め取り、嚥下し、さらにすんすんと鼻を鳴らしてうっとりと目を細めている。矛盾した言動と挙動に、炙るような愉悦が背すじを走る。
「先輩、ひくひくしてますよー？　かーわいい」
「言わんでいいから……っ？」
呆れ混じりのツッコミが止まる。一色はてろんと舌を垂らし、その上に肉竿を乗せてゆらゆらと左右に揺らしていた。信じられないほど卑猥で、けれど目が釘付けになる強烈な行為。舌の上に透明な我慢汁が噴き出し、一色が楽しげに呑み込んだ。
「先輩が感じてるときの顔、けっこう好きですよ？」
だから、もっと見せてくださいね……？
そう言わんばかりの笑みを浮かべ、一色が亀頭をぱくりと咥え込んだ。温かな口内の感触に浸る間もなく、ざらついた舌が亀頭に巻き付き、瑞々しい唇がぬるぬると竿を滑る。
「おぉ……ぁ……っ」
一色はずっと俺の顔を見ていた。少しでも気持ち良い舐め方を探るような健気な視線。
「んっく、んっ、ちゅっ、ぢゅるっ、ぢゅるるる……っ」
柔らかな唇がカリ首に引っかかるたびに悶絶する。ますます硬度が増した竿は透明な唾液で淫猥にぬめり光っていた。
「うぐ……っ？」
固めた舌先で鈴口にちょんちょんと触れられると情けない声が出た。一色が口を離し、にんまりと笑みを浮かべる。どこまでも可愛らしくて、ちょっとだけ腹の立つ顔。

「先輩って、ほんとここ弱いですよね～……」
　しっとりと囁くなりふたたび咥え込んでくる。瑞々しい唇でカリ首をにゅむりと締めつけ、鈴口を舌先でぐりぐりと念入りにほじくる。
「おっ、あっ、ちょ、一色、それ、やば……っ」
「……ぷはっ。だめでーす。名前で呼ぶまでやめませーん」
　いたずらっぽい笑みを浮かべ、ふたたび鈴口をほじくってくる。口淫に加え、左手が玉袋をふにふにとまさぐり、右手は爪で竿の根元の裏スジをかりかりとこすってきた。
「い、いろは、だめだっ、これ、立ってられない……っ」
　亜麻色の髪を掴む。腰を情けなく引いてしまい、今にも崩れ落ちそうだった。俺が話しているさなかも一色は亀頭を舐め続け、カウパー液がびゅるりと何度も何度も噴き出した。
「え～、どうしようかな～」
「せめて座らせてくれると助かるんだが……」
「え～？　そんなにじっくり舐めてほしいんですか～？　先輩のエッチ～」
　可愛らしく煽りつつもノリノリです、この後輩。
　とんとんと腰を押されベッドに腰を下ろすと、一色は俺の股座にすとんと女の子座りをした。
「先輩ってほんと舐められるの好きですよねー」
「……一色もこういうことするの、かなり好きそうだけどな」
「……」
　恥ずかしそうに睨まれた。どこをどう考えても事実だと思うんですけど……。
　一色は亜麻色の髪を耳にかけ、ふたたび肉幹をぬむりと咥えた。俺の内ももをいたわるようにすりすりと撫で、ゆっくりと唇をすべらせていく。
「んっ、んっ、んっ、んふぅぅ……っ」
　顔を傾け、少しでも奥まで咥え込もうとする。苦しいのか、ときおり眉間に縦の皺が浮かぶのがたまらなく色っぽい。

「うっ、くっ、ぅあ……っ」
蠱惑的ながらも優しい快感に呻き、亜麻色の髪をそっと撫でる。すると一色は、まるで親に褒められた子どものように嬉しそうに目を細めた。愛おしく思いながらも、なんで俺にこんな目を向けるのか、向けてくれるのかと複雑な気持ちになる。
「んっ、ちゅるっ、ぢゅろっ、ぢゅるるる……っ」
いやらしく啜る音が大きくなっていく。一色の唾液が睾丸にまで垂れてきた。反撃したくなって胸に手を伸ばす。
「お……っ？」
柔らかな乳房に触れる前に、一色に両手首を掴まれた。きゅっと眉を寄せて「メッ」とでも言うように見つめてくる。そして俺と両手をつなぐと、きゅっと指を絡めた。
「先輩、そろそろ出そうですか？」
「……ああ、もう限界だわ」
「はーい。……いっぱい出してくださいね」
俺が射精寸前まで高まっていることが心底嬉しいのか、一色は優しい声音で囁いてふたたび肉竿を咥え込んだ。
「んっ、んっ、ちゅぷっ、んっ、んふぅっ、んっ、んっ……」
手をつないだまま、一色がゆっくりと一定のリズムで竿に唇をすべらせる。瑞々しい唇がぬるっ、ぬるっと這い回るたびに唾液が竿を伝い、陰毛を浸していく。
「くっ、ぅっ、おぁっ、いろは、そこ、めちゃくちゃ気持ちいっ、くぁ……っ」
カリ首に唇が触れるたびに腰が揺れ、ベッドが軋む。一色はにんまりと目を細めると、カリ首を唇で締めつけて顔を傾けた。にゅるり、にゅるっと卑猥な感触とともにカリを締めつけられ、ねろねろと這い回る舌が亀頭や鈴口をたっぷりと舐る。
「んふー。先輩、もう『ほんと限界だー！』って感じですねー」
嬉しそうに囁き、震える俺を上目遣いで見つめてくる。俺が何か言葉にしようとすると、それを封じるようにふたたび肉幹を咥え込んだ。

「んっ、ちゅっ、ぢゅるっ、ぢゅるるっ、ぢゅるるる……っ」
一色が口をOの字に開き、頬をぎゅっとすぼめる。唾液の量が増え、淫猥に啜りたてる音が際限なく耳朶を叩く。小悪魔で、そしてどこまでも淫らな顔。ふだんキャンパスで見る一色の延長線上のような、あるいはまったくの別人のような顔。
「ぐ……うぅ……い、ろは……もう、出る、出る、出る……っ」
こらえがたい射精の欲求がむくむくと湧き上がる。内ももを力ませてぶるぶると震えると、一色は穏やかに目を細めて小さく頷き、ふたたび顔を前後にスライドさせていく。むやみに強い刺激を与えようとしないことが何よりありがたかった。
下腹部の奥底から込み上げる射精の予兆に歯を食いしばると、一色の温かな口内に精液が勢い良く噴き出した。
「んふぅぅぅ……んっく、んっ、ふっ、んふぅぅぅ……っ」
一色は一瞬だけ目をぱちくりとさせたものの、次々と噴き出す白濁を遠慮なく細喉に流し込んでいく。ごくっ、ごくっ、とまるで清涼飲料水を飲み干すかのように。
「おっ、おぁ……っ」
尿道に一滴とて残すまいと、一色がゆっくりと顔を前後に揺らす。強すぎず、けれど確実に最後まで濃厚な射精を促す口愛撫。愛おしさが湧き、亜麻色の髪をくしゃくしゃと撫でる。
「んふぅぅ……っ」
一色が猫のように目を細める。両手で肉竿の根元をいたわるように撫でながら、亀頭をねろねろと舐めまわす。大量のカウパー液と精液は、後輩の喉奥に残らず消えていた。
「……ぷはーっ。いっぱい出ましたねー」
「死ぬほど気持ち良かった。……その、ありがとな？」
「なんで疑問形なんですか……えへへ、どういたしまして」
ゆるゆると会話しながら、一色の耳をすりすりと撫でる。薄い唇がかすかに震えた。
「……毎回思うんだけど、ムリして呑まなくていいからな？」
「大丈夫ですよ、呑みたくて呑んでるんですから。……わたし、今すっ

ごいこと言いました？」
「言ったし、実際やってるんだよなぁ……」
「それもそうですねー」
　一色がへにゃりと気の抜けた笑みを浮かべ、耳をくすぐる俺の手首をあむあむと咥えた。
「……エラく上達してたな」
「そうですか？　やったー」
　素直に喜ぶ後輩の髪をわしゃわしゃとかき回す。
「ひゃっ……っ？　もー。まあ、このあとシャワー浴びるんでいいですけど……」
　口でこそぶつぶつ言いながらも、なんだかんだでされるがままになっている。案外許容範囲が広いんだよな……と思いながら、むーと頬を膨らませる後輩の表情に頬をゆるませた。
「先輩、どうします？　もうちょっとしましょうか？」
「え？　いや、もうだいじょう……」
　言葉が止まる。一色の手に包まれていた肉竿は、いつの間にかふたたびがちがちにそそり立っていた。一色がにんまりと目を細める。なんだか狐みたいだな、と思った。
「それじゃあ、今度は寝てもらっていいですか？」
「大丈夫だけど……一色は脱がないのか？」
「えー？　どうしよっかなー。……先輩は、わたしが脱いだほうが興奮します？」
「するに決まってるだろ。ぜひともお願いします」
「強い口調と敬語の組み合わせって斬新ですね……」
　一色が呆れたように笑い、サマーニットの裾に手をかけた。そんな何気ない仕草だけで、ぐびりと喉が鳴ってしまった。
　このあと、俺が寝転がった状態でもう二回抜いてもらった。三回目の射精をする頃にはもう、温かな口内と肉竿の境界線がすっかり曖昧になってしまっていた。
×　×　×
「はー、すっきりしました。先輩もどうぞ……って、あれ？　あれれー

？」
　バスローブを羽織った一色の肌はほんのりと上気していて、健康的な色気に下腹部が反応してしまった。俺の股座にすすすと腰を下ろし、むくむくと膨らんだ肉幹をつんつんとつつく。
「なんですかー？　可愛い後輩の湯上り姿を見て興奮しちゃったんですかー？」
「……そうだっつの。悪いか」
「あ、あれ？　先輩、今日は一段と素直ですね……。……よしよし」
　肉茎の表側をすりすりと撫でられた。なぜそこを褒める。
「……もう一回、します？」
「いや、さすがに疲れただろ」
「んー、わたしは平気ですよ。先輩のは舐め甲斐がなんでもないです」
「舐め甲斐がなんだって？」
「……ねちっこい男は愛想つかされちゃいますよー」
　可愛らしくぷいと顔を逸らしながらも、引き続き肉幹を撫でる仕草につい笑ってしまう。
「むー。何を笑ってるんですか、何をー」
「すまんすまん……っ!?」
　肉幹を半分ほどぬるりと呑み込まれ、変な声が出てしまった。一色がバスローブの前をほどき、よつんばいでにゅるにゅると唇を這わせてくる。
「ちょ、まて、いろは……お、おあ……っ」
　静かに顔が前後しはじめると、これはもう射精するまで止まらないな……と確信した。

×　×　×

　四回目の射精を終えると、一色は平然とした顔で「それじゃ先輩、シャワーどうぞー」と促してきた。へろへろになった俺に対して、一色はむしろ肌がツヤツヤとしていた。
　シャワーを済ませて歯磨きをしようとすると、すでに歯ブラシが片方使われていた。丁寧に歯を磨いて部屋に戻ると、一色が布団にもぐってスマホをいじっていた。バスローブは脱いでいるようで、すべ

すべの二の腕が覗いている。
「おかえりなさーい」
「……ん、ただいま」
恋人同士しか見えないんだけどなぁ……と思いながら、俺も裸になって布団の中に潜り込む。
「あとは寝るだけですねー」
「……だな」
一色がすすすと近寄り、ぴったりと身を寄せてくる。温かくて柔らかな人肌。細指が俺の首や胸板、腹や太ももを撫で、肉竿をさわさわとまさぐる。
「ひゃん……っ？」
お返しに尻をまさぐると、可愛らしい悲鳴が漏れた。一色の尻は小ぶりできゅっと引き締まっていて、信じられないくらいに触り心地が良い。
「あっ、んんっ、せん、ぱぁい……っ」
さわさわ、と慎重に撫で回すと、一色の声がとろとろに蕩けていく。瑞々しい唇が乳首にちゅっと吸い付いてきた。思わず変な声を上げそうになる。
尻の谷間にそっと指をすべり込ませようとすると、一色に手首を掴まれた。
「ダメ……ですよぉ？　これ以上は」
目を合わせ、優しく囁いてくる。興奮で強張っていた身体からふっと力が抜けた。
「……そう、か。そうだな」
「そうですよ。……襲ったら、言いつけちゃいますから」
今日はまだいちども口にしていなかった第三者の存在。いろはは気まずそうに目を逸らし、俺の胸に顔をうずめた。温かさは増したはずなのに、心臓が冷え固まる。全身に冷たい血液が巡り、心を仄暗い感情が満たす。
いっしょに泊まりはすれど、それ以上の行為には及ばない、及べない。

いつからこうなったのか、どうしてこうなったのか……後悔とも呼べる感情が、すうすうと穏やかな寝息を聞いているあいだもずっとぐるぐると渦巻いていた。

×　×　×

一色が同じ大学に入ってきたときは驚いた。総武高卒業後も何かと連絡はとっていたが、彼女の志望大学はずっとはぐらかされていたからだ。

入学すると、一色のあざとさはさらにブラッシュアップされた。軽くいなしているからあまりわからないが、相当数の男のアプローチを受けていただろう。

そんな彼女だが、同じ大学になってからはしょっちゅう食事や遊びに誘ってきた。

『先輩の灰色のキャンパスライフを、健気な後輩が彩ってあげてるんですよ』

そういって笑う一色の気持ちには、薄々勘付いてはいた。というか流石にあれだけ露骨にアプローチされて、気付かないわけはなかった。

それでも、どうしても一歩を踏み出すことができなかった。大学生になってますます魅力的になった一色いろはという女性が、俺の隣にいていいのかと。ずっと、ずっと迷っていた。

踏み出せないまま一年が過ぎ、俺は大学三年に、一色は二年生になった。

『わたし、もうすぐ誕生日じゃないですかー』

四月に入って間もない頃に言われた言葉。俺はとぼけつつも、実際は覚えていた。小町同様に家族のような親密さを覚え始めていた一色の誕生日を忘れるはずもなかった。

一色は成人祝いにふたりで呑みたいと言った。友達に祝ってもらったりしないのかと聞くと、「他の日に祝ってもらうんで大丈夫です」とのことだった。

バーで呑んでみたいとのリクエストを受け、数件のバーに当たりをつけて下見をした。慣れないにも程がある行為だったが、一色が喜ぶ

顔を思い浮かべると苦にはならなかった。
そして一色の誕生日、四月一六日にふたりで呑むことになった。一色はバーの雰囲気をすっかり気に入り、「よく見つけましたね」と珍しく尊敬した目で見てきた。「まあ、そこそこ通ってるからな」と慣れないウソをつくと秒でバレた。向かいにいるマスターも笑っていた。穴がなければ掘ってでも入りたかった。
一色は頬を緩めて「美味しいです」と言いながら、次々とカクテルを呑んだ。呑みすぎるなよとたしなめていたのだが、気が付くと上手いこと誘導されてするすると呑まされていた。
しばらくすると一色はほろ酔いになり、俺も今まで経験したことがないほど酔っていた。

『先輩。わたし、実は……』

そんな、ふたりとも酩酊した中で一色が話し出したことは、忘れたくても忘れられない。

――ちょっと前に彼氏ができたんです。
――同じ大学で、先輩と同じ学年の人でして。
――友達から無理やり紹介されて、口説かれて。
――初めはウザいなーって思ったんですけど、話しみたら意外と良い人で。
――気が付いたら告白をオーケーしちゃってたんです。

聞き慣れたはずの一色の声が、言葉が、まるで初めて聞いた異国の言葉のように聞こえた。あのとき、自分がどんな相槌を打っていたのかをまったく覚えていない。動揺が色濃く表れていたのかもしれないし、案外普通に受け答えしていたかもしれない。
ただ一つ覚えているのは、身体がまったく動かなかった、ということだけだ。一色の一言一言に凝固剤が混じっているようだった。言葉を聞くたびに少しずつ心と身体が固まり、金縛りにあったかのよう

にぴくりとも動けなくなっていた。
一色の話を聞きながら、そういえば年明けくらいから一色に誘われる頻度が少なくなっていたことを思い出した。そのときはさほど気にしなかったが、今になってそういうことかと納得して胸がずんと重くなった。
『……それでなんですけど。最近、彼氏と良い感じになってきて。そろそろキスとかしそうなんですよ。だけど、慣れてないなんてバレたら恥ずかしいじゃないですかー？』
いや、慣れてないとか知らんし……などと、いつもなら軽くツッコめたのだろうか。そのときは「そうか」としか言えなかった、気がする。その辺りも記憶も定かではない。
ぼんやりと話を聞きながら、一色は今までキスをしたことがあるのかとふと思った。慣れていないとぼかされたため、聞くに聞けなかった。
後になって思えば、のんびりと呑んでいたのが一時間半ほどで、一色のカミングアウトを聞いていたのが十分ほどだった。けれどその十分は、今までの人生でもっとも長い十分だった。
『先輩、このあとなんですけど……』
呆然とアルコールを喉に流し込んでいると、一色にくいくいと袖を引かれ、潤んだ目で見つめられた。ささやかなスキンシップ。彼氏がいると聞いたばかりなのに、こんなことで喜ぶ自分がみじめでしかたなかった。
このあとの細かい流れは覚えていない。一色は端的に言えば『キスやもっと深い行為の練習がしたい』とのことで、半ば自暴自棄になっていた俺は一色の誘いに乗ってしまった。
行為を終えるとそのまま泊まったが、添い寝はすれど一色と最後まですることはなく、それどころか彼女の身体に触れることも制限された。
初めていっしょに泊まった翌朝は、こんなことはもう二度としないと思った。けれど一色は俺を呑みに誘うたびに「練習がしたい」と誘い、俺もその誘いに乗り続けた。

一色の今まで見たことのない魅力的な表情、瑞々しい肌の温もり、そしてキスの心地良さ、咥えられる快感。これらを忘れることができず、ずっと抜け出せずにいた。

てっきりすぐにでも彼氏との関係が進展するのかと思ったが、スケジュールが合わなかったり一色の気分が乗らなかったりとかで、ウブな関係が続いているとのことだった。

『ウソだと思ってます？　それなら証拠を見せてあげますよ、ほら』

疑いを持ちはじめた俺に、一色は彼氏とのＬＩＮＥのやりとりを見せてきた。相手は『涼』というらしい。さばさばした会話の端々に互いへの愛情が感じられて、かすかに抱いていた淡い期待が打ち砕かれた。憎からず思っている後輩とその彼氏との会話を眺めると、俺はいったい何をやっているのかとますます自己嫌悪に陥った。

一色はいつ彼氏と一線を越えるのか。それまでずっと俺との関係が続くのか。そして一線を越えたとき、俺は一色のことを忘れられるのか。

ぐるぐると考えながらも数ヶ月が経った頃。

ベッドで添い寝する一色が、「先輩の家に泊まりたいです」と言い出した。

「……は？　いやいや、なんで？」

もうじき眠りに落ちるというところでいきなり意識が覚醒した。冷水をかけられるよりも効果が高いかもしれない。

「えー、なんでですかー？　別にいいじゃないですかー」

一色は平然とした顔で、むしろなんで俺が渋ってるのかと言わんばかりの顔をしている。

「むしろなんで渋ってるんですか？　可愛い後輩が家に行きたいって言ってるんですよ？」

というか実際に言った。いっそ清々しいな……。

「つうかなんで俺の家なんだよ。別にいいだろ、今の感じで」

今の感じ、という曖昧な言葉が、俺と一色の関係を端的に表していた。心の中で自嘲する。

「いいじゃないですかー。なんですか、汚部屋なんですか？」

「んなわけあるか。それなりに片付けてるっつの」
「じゃあいいじゃないですか」
もう少し理由を言えばいいものを、一色はぷりぷりと怒るばかりだ。追及しようかとも思ったが、きっと一色はのらりくらりとかわすのだろう。
頭をがしがしと掻いて、天井を見上げる。今日初めて入ったホテルは値段の割に案外新しくて広かった。気が付けば一色とホテルに入る行為がすっかり日常と化している。
「……しゃあねぇな。招いてやるよ」
「わー、エラそう」
「お前な……」
亜麻色の髪をぐしぐしと撫で回すと、「うひゃー」とはしゃいだ。え、なにその可愛いはしゃぎ方……。なんだかいつになくテンションが高いんですけど。
手を離すと、一色は俺の胸板におでこを当ててしおしおと縮こまった。
「もっと撫でてもいいんですよ？」
「そんな言い方でいいのか？　俺はべつに撫でなくてもいいんだが」
「ごめんなさい、撫でてください」
「お、おう、おお？」
思いのほか素直な言葉と態度に慌てる。
亜麻色の髪の中に指を入れる。ふんわりと空気を含んだ髪が、じゃれつくように指に絡み付いた。髪の毛だけでも一色なんだとわかり、ふっと口端が上がる。
「えへへ……」
一色がご機嫌な笑みを浮かべる。ふだん何かと面倒くさい後輩だが、素直なときや真面目なときは純粋に魅力的だな、と思う。
そして、そんな風にこの子に惹かれれば惹かれるほど、どうして一歩を踏み出せなかったのかと、強く強く後悔している。

（連載中）平塚静は元教え子との恋に思うがまま浸る。（1）

からから、と店の扉を開ける。
「へいらっしゃーい！」
店員の威勢の良い声が耳朶を叩き、濃厚なスープの匂いが鼻腔を浸す。ぐぅ、と鳴った腹の音も店内の喧騒にまぎれて消えた。
券売機で食券を買って店員に渡す。
「コナオトシで」
「ハリガネで」
相も変わらず男らしい注文だな……と思いながら――隣にいる平塚先生を見やる。今日の先生は黒のノースリーブブラウスにジーンズというシンプルな格好で、引き締まった身体によく似合っている。ラーメンを食べやすいようにしているのか髪をポニーテールにしていて、いつも以上に凛とした印象を受けた。
「ところで比企谷」
「なんですか？」
ラーメンを待ちながら雑談していると、平塚先生が急に改まり、真剣に切り出してきた。
「今日の私の格好はどうかね」
え、このタイミングで？
「……似合ってますよ。先生ってすげぇスタイルが良いんだなって改めて思います」
「お、おぉ？　う、うむ、中々ストレートな言葉だな……いつもひねくれる君とのギャップも相まって……な、中々良い一撃じゃないか」
武道の師範みたいなコメントが返ってきた。平塚先生の顔がぽっぽっと赤くなる。
「先生が『女性はちゃんと褒めるものだ』って散々俺を調教したおかげで俺もすっかりこういうのに慣れまぐぇっ」
脇腹に軽く手刀を繰り出され、変な声が漏れる。

「言葉遣いを選びたまえ……君を調教した覚えなどない」
平塚先生の顔がほのかに赤い。
「言葉遊びですよ、言葉遊び……や、でも、すいません。さすがに場所が悪いですね」
他の人がいる場で使う言葉ではなかったな……と反省しながら脇腹をさすっていると、平塚先生がふっと笑った。
「……君とこの店に初めて来たのは何年前だったかな」
「俺が今大学2年なんで……3年前ですかね」
「そうか……君がもう大学2年生……私も年をとったものだ」
「先生は変わってないですけどね。むしろ若返ってるように見えますけど」
よよよと白々しい泣き真似をする平塚先生にさらりとフォローを入れると、目を見開いてぴたりと固まった。
「……君は本当に成長したな。3年前はくそ生意気な煽りを入れてきたのに……」
「先生の年を考えるとそういう煽りもあんまり入れない方が」
ばきり。
騒がしいはずの店内で、その破壊音だけがやけに高らかに響いた。
「おっと、割り箸が折れてしまった。何か言ったか？」
「い、いえ、何でもないです……」
割り箸は割るものであって折るものじゃないと思うんです……。聖母もびっくりするレベルのまばゆい笑顔がなぜこの場面で登場するのでしょうか。
「でもまあ、先生がぜんぜん変わらないのは本当ですよ」
「へ？　あ、そ、そうか……？」
平塚先生がしきりに黒髪を耳にかける。横顔に平塚先生の照れ混じりの視線が刺さる刺さる。何だこの可愛い先生は？
入口に近いカウンター席だからか、ドアの向こうからじわじわと蝉が鳴く声が聞こえる。湯気の立ちこめる厨房では威勢の良いかけ声が飛び交う。包丁がまな板を叩く音、ちゃっちゃっちゃっと湯切りをする音。秩序立った荒々しい音が耳朶に心地良い。

「へいお待ち！」
俺と平塚先生の前に注文したラーメンが置かれる。濃厚な匂いはいっそ暴力的で、まるでスポンジに吸われる水のように空いた腹に染み渡る。
『いただきます』
表面に張った油膜にレンゲを差し込み、陰陽図のような模様を作るスープを口に含む。こってりとしたとんこつ主体のスープが味覚を強烈に叩く。空腹は思いの外強まっていたようで、口内に唾液が一気に溢れた。
続いて麺をいただく。細くストレートな麺は固めの食感で、濃厚スープが絡んだ味が何とも心地良い。
「うーん……うまい」
平塚先生が目を細めて唸る。なんだか以前よりも表情が柔らかくなった気がする。
「ん、どうした？」
「あー、いえ、なんでも」
俺の視線に気付いた平塚先生から慌てて顔を逸らす。どんな言い訳をしようが、今の俺は平塚先生に見惚れていたようにしか見えないだろう。というか事実見惚れていた。ポニーテールってなんだよ、綺麗なのに可愛いとか反則だろ……と思いつつ。
ラーメンを食べるときは毎回見ているはずなのに、いまだに見慣れないとはこれいかに。
――平塚先生は、総武高から異動した後も俺をちょこちょことラーメンに連れていってくれた。昼食だったり夕食だったりとタイミングはまちまちだが、それなりの頻度でこうしていっしょに食べている。
俺が3年になってから誘われるようになり、今は大学2年。かれこれ丸2年以上経つわけだ。1ヶ月に1回のときもあれば毎週末誘われることもある。俺の忙しさを考慮してくれてもいるが、なんとなく、平塚先生が寂しいときに頻繁に誘われているような気がした。
ちなみに平塚先生は、俺をラーメンに誘う際毎回めちゃくちゃ長い

ＬＩＮＥをよこす。いちいち答えるのが大変なのでスタンプで「ＯＫ！」とだけ返すと、かわいらしいクマがべそをかくスタンプが送られてくる。毎回それがちょっとツボだったりする。

ラーメンを食べたあとは缶コーヒーを飲みながらドライブをしたり海を眺めたりと、まるで恋人のようなこともよくしている。

平塚先生はラーメンを食べるときや人生について語るとききはものすごく大人びているというかもはや男らしいのに、愛だの恋だの好きだのという言葉が会話に少しでも出ると途端にしおらしくなる。そのギャップが強烈で、平塚先生に会うのが密かな楽しみになっていた。

けれど、ここ数ヶ月は平塚先生からのお誘いがなかった。前回行ったのは大学2年に進級したばかりの頃で、今はもう7月の末だ。

なんとなく、お誘いがなかった理由に察しはついている。その理由が理由なので、俺は自分から平塚先生を誘うことができなかった。

ちらりと横を見ると、平塚先生が無言でラーメンを啜っている。綺麗な唇に脂が乗り、麺を噛む際に引き結ばれる仕草が妙に艶めかしい。それでいて顔はうっとりとしていてポニーテールがぴょこぴょこと揺れるのだ。いくつもの魅力で同時にぶん殴ってくるような真似はやめてほしい。

「ふぅ……ごちそうさま。……おや？　どうした比企谷、いつもより食べるのが遅い気がするが……」

「……いえ、大丈夫です。すぐ食べます」

きょとんとする平塚先生から視線を切り、まだ半分近く残っていたラーメンを急いで食べた。

×　×　×

「そういえば比企谷、もうすぐ君の誕生日だったな？　何かする予定はあるのか？」

ラーメン屋を出て、平塚先生の車でドライブしているとふと切り出された。冷房の効いた車内で平塚先生と雑談をする時間は素直に楽しい。満腹感も相まってゆるゆるになった脳に缶コーヒーの糖分を流し込み、海を見ながら自分の予定を思い出す。

「……特に何も予定はないっすね。実家にいたら小町に祝ってもらってたんですけど」
　今は大学近くのアパートで一人暮らしをしている。小町からはお祝いのＬＩＮＥが届くことを祈るばかりだ。総武高の生活が楽しくてお兄ちゃんのことを忘れてやしないか心配！
「実家にいてもイベントはそれだけなのか……。いや、私も人のことは言えないがな。特に２０代半ばくらいからは１年がどんどん短く感じるようになって『あ、もう私この歳なんだ……』と思うようになって……」
「先生、辛気臭い話はやめにしましょう」
　車内に満ちていた心地良い冷気に瘴気が混ざり始めていた。ここって魔界だったかしら？
「しかし、そうか、予定はないのか……」
「どうかしました？」
「いやなに、今度の誕生日で君は成人する訳だろう？　それなら、せっかくだしいっしょに呑まないかと思ってな」
　平塚先生の提案に目を見開く。照れているのか、先生の横顔はほんのりと赤い。
「……いいんですか？　俺としてはありがたいですけど……」
　平塚先生は俺の中で大人の代表だ。酒を呑める歳になったお祝いにそんな人と呑めると聞いて、自分でも驚くくらいに舞い上がっている。
「食事やドライブで君とある程度話してはいるが、もっとじっくり話すのもありかと思ってな。……思ったよりも喜んでくれて良かったよ」
　いつものんびり話すときに使う駐車場に車を停め、平塚先生がにかっと笑う。
「……じっくり話すなら、静かな所がいいです」
　シートベルトを外し、顔を逸らして答えると、平塚先生がくすくすと笑った。
「君の言う事は一理あるな。しかし、じっくり話せる静かな場所か

……」

先生があごに人差指を当てて考え込む。

お酒が飲める静かな場所というとバーくらいしか思い浮かばなかったのだけれど――。

「それなら、私の家に来てみるか？」

「へ？」

思わぬ提案にきょとんとする。俺の反応を見た先生がわたわたと慌てる。ほんのり紅潮した顔が強烈に可愛い。

「あ、いや、その、なんだ、君との付き合いも長いし？　それに酒を飲むとなると私も運転ができないしな」

「いや、電車で移動すればいいんじゃあ……？　それか代行を使うとか……」

「い、いや、それはそうなんだが……」

誘い自体は嬉しいが、今はそれ以上に戸惑いが大きい。それに、ここ数ヶ月平塚先生に誘われていなかった理由を推測すると、先生の自宅に行くのはためらわれた。

先生はしばらくあーだこーだ言っていたが、やがてふっとため息をつき、シートに深く身を沈めた。どこかぐったりとした様子で顔をこちらに向ける。

「……君の成人祝いをしたいという気持ちは本物なんだが、私は私で君に話したいことがあるんだよ」

「……愚痴みたいなもんですか？」

「愚痴みたいなもんだな」

くすくすと笑い合う。自然に、とてもスムーズに生じる柔らかな空気に心が安らぐ。

「バーみたいな場所だと、店員に聞かれちゃいますもんね」

「うむ、そうなんだよ。テーブル席であったとしても、きっと私は声が大きくなってしまう。店員からすれば十把一絡げの話だろう。けれど私は聞かれたくないんだ」

「……俺になら話していいと？」

「そうだな、君になら話していい……というか、君にこそ話したいんだ。……だめか？」
　平塚先生がほんのわずかに身を乗り出し、じっと見つめてくる。ずるい。この人は計算でやっていないんだろう。普段はあんなに頼りになるくせに、どうしてこういうときにこんなウブな乙女のような破壊力が出るのか。
「……いいですよ。色々教えてください」
「……今の言い方、なんだか意味深に捉えてしまうんだが……」
「お酒のことと、先生の愚痴のことですよ。何を考えてたんですか？」
　平塚先生がぷいと顔を逸らしてジト目で見つめてくる。
「……君は成長して、タチが悪くなったな」
「失礼な」
　もういちどくすくすと笑い合う。
「それじゃあ、軽く打ち合わせをしようか。呑みたい酒があれば聞いておこう。用意する」
「ありがとうございます」
　スマホを取り出し、酒やつまみをググりながらあーだこーだ話し合う。
　成人すると言っても、ただ１９歳から２０歳に変わるだけのことだろうと思っていた。
　そんな何てことのない日が、平塚先生のおかげで心浮きたつ時間に変わることが、たまらなく嬉しかった。

　　続く。

（2）

8月8日、俺の誕生日。

友人と呼べるような存在が極限まで少ない俺にも、日付が変わると同時にいくらか連絡が来た。いの一番に送ってきたのが材木座だったのでなんとも言えない気持ちだったが、その直後に戸塚から連絡が来たので今までの人生が報われた気さえした。そのあとも午前1時頃までにかけてぱらぱらとメッセージが届いた。

『成人おめでとう。これで君も形式上とはいえ、大人の仲間入りだ。大変なことだらけだとは思うが楽しみたまえ。夜は楽しみにしているぞ』

そんなお祝いメッセージの中にするりとまぎれていた平塚先生の言葉。最後の言葉で心臓がどくんと跳ねた。わざとじゃなかろうか、いや、絶対わざとだろう。かつての先生、なおかつ美人で性格も合う（であろう）人の家で呑むという緊張が全身に満ちて、中々寝付くことができなかった。

結果、寝たのは朝の3時で起きたのは11時。ぐっすり寝てしまった。大学生の退廃的休日の典型例のような生活だ。

起きてＬＩＮＥを確認すると、小町からメッセージが届いていた。受信時刻は8時頃。

『ごめん、寝てた』

『お兄ちゃん、誕生日おめでとー！』

『じゃ、今日も奉仕部の活動があるから学校行ってきまーす！』

「……」

最初の言葉はまだ恋仲に至らないもどかしい関係の男女が使いそうな手口だし、肝心のお祝いが極めて手短……。忙しいことは良いことだけどね？　身体には気を付けてね？　そしてお兄ちゃんの誕生日をもう少し祝ってもらえると嬉しいです。

各々への返信を済ませたところでベッドから起き上がると、ぐう、と腹が鳴った。夜食もとらずに遅くまで起きていたので、エネルギーが枯渇しているらしい。

のろのろとした足取りでキッチンに向かい、冷蔵庫を開ける。今飲みたいとは思わない飲み物に、まるっと鎮座するキャベツ、豚肉、そしてなぜか冷凍ブロッコリー。
「……コンビニだな」
適当に作ろうと思えば作れるのだが、外の空気を浴びたくなったのでコンビニ飯に決定。決してフライパンを持つのが面倒だからとか、そういうネガティブな理由ではない。断じて。
１１時の時点で外の気温は３４℃だった。アスファルトの照り返しも相まって、外に出たのを瞬時に後悔した。
×　×　×
のんびりと本を読み、配信されたアニメをまとめて観て、ソシャゲを1章分進めたところで夜を迎えた。今日は平塚先生が俺の家の前まで迎えに来てくれることになっている。先生の家で呑むのだから俺が行きますよと言ったのだが、「構わないよ」と男らしい笑みとともに一蹴されてしまった。どうにもまだまだ、俺と平塚先生は教師と教え子という感覚が強い。当たり前ではあるのだけれど。そんな訳で、おとなしく厚意に甘えることにした。
アパートを出ると、見覚えのある車がするりと俺の前に止まった。スムーズなブレーキ。窓が開いて平塚先生が微笑む。うす、と軽く会釈してドアを開けようとしたところで、ちょっとした違和感に気付く。
「ん、どうしたんだね比企谷？」
「いえ……なんでもないっす」
平塚先生はこうやって送ってくれた際にいつも窓を開けるのだが、そのときは窓を全開にしていた。
けれど今、先生はどういう訳か顔しか見えない程度にしか開けなかった。窓を全開にしてのあいさつを今まで何度も行なっているので、些細ながらも違和感があった。
ドアを開けて乗り込んだ瞬間、疑念が一瞬で氷解する。
「ん、どうしたんだね比企谷？」
先ほどと同じ言葉。けれど平塚先生はくりんと小首をかしげ、どこ

かいたずらっぽい笑みを浮かべている。いつもの少年のような笑みとは違い、大人の女性であることを強烈に感じざるを得ない笑み。
「えっと、先生、その格好は……」
平塚先生の服装に、声が上ずらないわけがなかった。
白のノースリーブブラウスとタイトスカート。滑らかな二の腕や色香を感じるむっちりとした太ももに視線が吸い寄せられ、慌てて視線を逸らす。正しい視線の置き場所がわからない。
「……ふふ、わかりやすい反応をしてくれて何よりだよ」
口元に手を当てて、くすくすと笑う。いつもは男らしさと少女っぽさが同居したような面を見ているけれど、今日はこれ以上ないほど「大人の女性」という魅力を振りかざしている、ような気がする。シンプルながらも露出の多い格好はあまりに刺激が強い。
「……けっこう、というかかなり驚きました。先生でもそういう格好をするんですね」
ぽつりと呟くと、平塚先生は目をぱちくりとさせ、それから前を向いてこほんとわざとらしい咳払いをした。車が動き出す。シートベルトが豊満な胸を強調してしまっていることに気付き、また視線を不自然に逸らした。
「ま、まあ……いくら元教え子とはいえ、男性が家に来るのだからな。多少は気合も入れるさ」
強烈な色気ともじもじとしたウブな仕草が入り混じる。密室という状況も相まって頭がくらくらした。
「そ、そうなんですね。びっくりするくらい似合ってます」
「そ、そうかね。ならば、うん、何よりだ……」
だめだ、視界の右端で平塚先生がかすかに身じろぎするのが見えるたびに、猛烈に振り向きたくなる。
先生の家までは車で３０分ほど。
その時間は相変わらずゆるやかで楽しいものだったが、同時に気が気でなかった。
×　×　×
「さあ、どうぞ」

「お邪魔します」
　案内された平塚先生の部屋はすっきりと片付いていた。意外と言えばいいのか、予想通りと言えばいいのか。
　小ざっぱりとしたリビングにはソファとローテーブルが置かれていた。クッションなどの小物の色合いはモノトーンで理知的な印象を受ける。
　デスクに置かれたこじんまりとした観葉植物と、揚げパスタもといルームフレグランスからほのかに香るバニラの匂いが部屋に柔らかな印象を与えていた。
「このあいだ片付けをしたばかりでな」
　平塚先生がこほんと咳払いをする。
「もともと綺麗にはしてるんですよね？　大掃除したようには見えないので」
「まあそうだな。ビールの空き缶が多すぎて捨てるのが大変だったが」
　ダイニングキッチンの隅に置かれた大量のビール缶入りの袋を、苦労しながら片付ける平塚先生を想像して苦笑する。
「とりあえず休んでいてくれ。買っておいた酒とつまみを出してくるから」
「何から何まですみません」
「構わないよ、君の誕生日と成人祝いなんだから」
　いつもの優しい笑みを平塚先生がふっと浮かべる。けれど視線をほんの少し下げれば刺激的な格好が目に入る。いつもはパンツスタイルだからか、露出が増えただけでこうも強烈に理性が揺らぐのかと改めて動揺する。
「どうぞ」
　促されるがままにソファに座る。デスクに置かれたＰＣやペン、ソファの軋み、平塚先生が冷蔵庫へ向かう足音。何気ないところに先生の生活の息遣いを感じる。この人が学校以外での時間の大半を過ごしている場所。そう思うだけで心拍数がじりじりと上がる。
「待たせたな」

平塚先生がローテーブルに次々と酒とつまみを並べていく。ベタなものが呑みたいという俺の希望に合わせて、チューハイ、ハイボール、梅酒、ビールなどを用意してくれていた。つまみはチップスター、堅あげポテト、じゃがりこ、チーザ、柿の種などなど。
「生まれて初めて呑むお酒……という認識で合ってるかな？」
平塚先生がさりげなく隣に座る。車で並んだときよりもずっと近い距離感に身体が強張る。
「そうですね。俺は本当に初めてです」
大学に入学すると、『大学に進学するのが１８歳で、お酒を呑んでいいのが２０歳以上』という状況の歪さに気付いた。俺はサークルに所属していないので影響を受けなかったが、クラスメイトの話を聞くと、サークルの新歓時期はまだしも、夏合宿などの時期になると当たり前のように１年生も呑む空気らしい。お酒が苦手ならば断わってあっさり終わるが、呑もうと思えば呑める人が成人するまで断り続けるのは何かと大変なようだ。
「それでは、無難にチューハイから行こうか。ほろよいぶどうなんてどうだ」
「じゃあそれで。いただきます」
グラスを持つと、平塚先生が缶を開けてくれた。
「君に酌をする日が来ようとはな」
「俺もびっくりですよ」
くすくすと笑い合っていると、グラスを持つ俺の右手人差指と、缶を傾ける平塚先生の右手親指がちょんと触れた。少しばかりの、ほんの少しばかりの接触。
それでも、俺と平塚先生の身体はぴくりと震えた。互いにごまかしが効かないくらい、はっきりと。
「……こ、この距離ではな。多少触れ合うのも仕方ないだろう」
「そ、そうですよね、すいません」
「い、いや、私こそ、すまない……」
ふたりしてわたわたと慌てる。なまじふたりとも弁が立つので（俺の場合は屁理屈だが）、こういうときに口が先に動いてしまう節があ

るな、と今さらながらに気付いた。
「せ、先生はどうしますか？」
「ん、そ、そうだな……缶ビールをそのまま呑もう。昨日も呑んだしな」
「どんだけ呑むんですか……身体、大丈夫ですか？」
平塚先生に缶を渡しながら、ふと心配になる。のん兵衛の人が世の中に一定数いるのは知っているし、平塚先生もその一人なのかもしれない。どこかの知らない人がアルコールを大量に摂っていても何も思わないが、ずっとお世話になっている平塚先生に何かあったらと思うと気が気でない。
俺の真剣な声音に気付いたのか、平塚先生がふっと苦笑する。
「心配するな。それなりにセーブはしているさ。……しかし最近、ストレスで酒量が増えている気はするな……」
「セーブできてないじゃないですか……」
「あとできちんと話すさ」
「……根本的に酒量を減らすことはできないんですか？」
俺の言葉に平塚先生が「ふむ……」と考え込み、かしゅっと小気味よい音を立ててプルタブを開ける。
「そうだな、元々酒が好きということもあるが、やはり日々のストレスを解消しきれないがために呑んでいるという面も多分にある。何か良いストレス解消法があれば良いのだがなぁ……」
「ストレス解消法……」
ぽそりと呟いたところで、またしても豊満な膨らみに目が行ってしまう。慌てて顔を逸らしたところで平塚先生と目が合った。
「今日は、君の視線をいつになく感じるな」
照れといたずらっぽさが入り混じったような、ふたりの関係性を忘れてしまうような可憐で魅力的な笑み。こんな人が同じクラスにいたら秒で惚れて1ヶ月後に告白して一瞬でフラれただろうどうしたんだ俺は。
「……すいません、めちゃくちゃ見てました」
「お、おぉ？　急に素直になったな……酒でも呑んだのか……って、ま

だこれからか……」
平塚先生が頬に手を当て、もじもじと身を揺らす。これ以上可愛らしい仕草で動揺させないでほしい。俺はいったいどこまで心を許されているのかと考えてしまう。
「そ、そろそろ呑もうか」
「そ、そうですね」
何年もの付き合いがあるとは思えないほど浮ついた雰囲気の中、俺たちはぎこちない笑みを交わした。

続く。

（3）

「それでは、比企谷。誕生日、及び成人おめでとう」
「ありがとうございます」
『乾杯』
　俺はチューハイの入ったグラスを、平塚先生はビールの缶を手に持ち、そっと合わせる。平塚先生は滑らかな動作でぐびぐびっと煽り、ぷはっと男らしい息をついた。
「ほらほら、君も呑みたまえ」
「それじゃ……いただきます」
　チューハイを口につけ、そっと飲み込む。シュワシュワした炭酸が喉を駆け抜け、同時に甘さを感じた。それだけだ。
「どうかね？」
「……なんか、普通にジュースって感じっすね。ちょっと違和感があるんで、かろうじてアルコールってわかりますけど」
「まあチューハイはそんなものだろう」
「初めての酒にしてはあっけない気はしました」
「いきなり強いのを呑んで倒れるよりはよほどマシだろう」
「それもそうですね」
　くすくすと笑う平塚先生に和みながらちびちびと呑んでいく。おつまみに用意してもらった堅あげポテトを食べながら呑んでいると、ただただジュースとお菓子を楽しんでいるだけのような気分になる。
「やー、君と酒を呑み交わせる日が来たというのは感慨深いなぁ……」
　平塚先生がしみじみとしながら2本目の缶を……2本目？
「え？　先生……はやくないですか？」
「誰かと呑む酒はひとり酒よりも進むものだよ」
「それは人によるんじゃあ……」
「いいから君も呑みたまえ、ほれほれ」
　ほんのりと顔を赤らめた平塚先生が、グラスにぐいぐいとチューハイを注いでくる。鬱陶しいわ可愛いわで動揺するなか、不意に触れた細くて華奢な先生の手の感触に胸が痛いくらい高まった。

あんなにも頼りになった先生が、こんなにも繊細な手だったのかと今さらながらに気付く。最初の頃とか腹パン食らってたからそんなイメージがなかった。
なんとかチューハイの1本目を空にする。炭酸が多いので中々大変だ。
「いくら俺が元教え子といっても、先生の家に入れてもらえるとは思いませんでした」
俺の言葉に、ビールをぐいぐいと呑んでいた平塚先生の手がぴたりと止まる。
「……まあ、そういう気分になる日もあるさ」
「思いきり事前準備しましたよね」
「……私だって、提案したあとものすごく恥ずかしくなったんだからな」
「へ？」
「次はビールだ、ビールに挑戦するといい」
平塚先生が真顔でビールの缶を押しつけてくるので、それをすいっと避ける。
「先生の今のセリフを詳しく」
「……たいていのラノベ主人公は、ここで『え、えぇ～……？　今のっていったい、あ、ちょ、そんなに注がないでくださいよ～』みたいに押されるものじゃないのか？」
「いや、そもそも酒を注がれる主人公もあまりいないんじゃ……」
「何を言う。ファンタジーならいくらでもアリだし、そもそも最近は主人公の設定年齢が高めのものも多く出ているだろう」
平塚先生が話しながらぐいぐいと缶を押しつけてくる。いつの間にか2本目のビールが空になっていて、先生の息がちょっと酒くさい。そして距離が近い。
「先生ってそんなにラノベ読んでましたっけ？」
「……君との話題が増えるかなと思って最近読んでいた。あ、いや、元々たまには読んでたけどな？」
「前半部分をもう一度聞いていいですか」

「いいから、ビールを、呑みたまえ」
顔が酒気とは別の要素で赤らんだ平塚先生に和む。ふたりきりの空間なんてぜったいに緊張すると思っていたが、そもそもこれまで何回も食事やドライブに行ってるんだしな。意外となんとかなるのかもしれない。
「ビールは直接呑むに限る」
「はいはい、わかりましたよ……」
押しに負けてビール缶を受け取り、プルタブを開ける。先生がやけにワクワクした様子で見つめてくる。なんでそんな純粋な少女みたいな目を……と苦笑しながら、黄金色の液体を喉に流し込んだ。
「苦い、炭酸、苦いって、感じです」
「ふむ、まあ初めてはそんなものだろう。しばらく呑んでいれば慣れてやみつきになるぞ」
「別にやみつきになりたくは……ちなみに慣れるまでの期間は？」
「毎日晩酌するのを1ヶ月くらい続ければ慣れるぞ」
「なんですかそのストイックに堕落する生活は」
「たしかに、それもそうだな。私は大学で初めて呑んだとき先輩にそう言われて、実際にやっていたんだが」
「ちなみにそのときの先生の年齢は？」
「あの頃は若かったよ」
「ぼかし方が雑……。今だって若くて綺麗ですよ」
ぽろりと零した言葉に、平塚先生が目をぱちくりとさせる。
「……今日はどうした？」
「いつも頑張って褒めてるじゃないですか」
ぐびりとビールを呑む。恥ずかしさで苦みがよく分からない。
「頑張って、といま君が言ったように、いつもなら私がそれとなく促してやっと褒める感じだったろう？　今のはごく自然と……その、うん、良い感じだったぞ、とても良い」
「刃牙の渾身のボディブローを褒めるビスケット・オリバみたいなセリフはやめてくださいよ」
「……いくら私が元ネタを知っているとはいえ、照れ隠しでもその例

えをチョイスするのは悪手も悪手だぞ……」
「……ごめんなさい。でも、綺麗だと思ってるのは本当ですから」
平塚先生が目をぱちくりとさせる。可愛いなと思いながらふたたびビールを呑んだ。
「……やっぱり苦いです」
ごまかしがてら感想を言うと、先生がふっと笑った。
「いつかは慣れるよ。それに、ビールはのど越しを楽しむものだ」
「いや、だって口の中は通るじゃないですか……味覚をシャットアウトしないと」
「ふむ、君は屁理屈が過ぎるな……これは毎日呑ませて納得させるしかあるまい」
「怖いこと言わないでくださいよ……」
「まあそう言うな。ちゃんと毎晩付き合ってやるから」
「え」
「ん」
「今のは」
「冗談だ」
「……酒を呑んでますからね。こういうこともありますかね」
「う、うむ、そうだな」
「最近の研究だと、お酒を呑むことによって性格が変わるんじゃなくて、本来持っている性格がより強調されるらしいですね」
「何故それを今言った？」
平塚先生の顔が赤い。俺も顔が熱い。しばし無言でビールを呑む。先生が3本目のビールを、そして俺が1本目のビールを呑み干したのは同時だった。
「う……っ」
頭が軽くくらりとする。チューハイを呑んだときにはなかった感覚だ。
「一気に呑み過ぎたな。しばらく休むといい」
平塚先生がソフトドリンクとおつまみを勧めてくれる。ウーロン茶を飲みながら柿の種をかじると、いつもの日常に戻ったような気が

した。
「君はヒマなときは何をやってるんだ？」
「俺は……アニメ、漫画、小説、ソシャゲがメインっすね。あとたまにゲームもやりますし、ＹｏｕＴｕｂｅも観てます。あとはＮｅｔｆｌｉｘで映画を観たりもしてますね」
「……ものすごく充実したインドアライフだな」
「先生もそんなに変わらないんじゃないですか？」
「失礼な。いや、別に失礼ではないのか……？　まあ、君が挙げたものからソシャゲを除いてドライブを入れるくらいか。ドライブのときはなるべく最近の音楽を聴くようにしているな」
「ほとんど同じじゃないですか……」
　先生が４本目のビールを開ける。つわものすぎるだろ……他の選択肢は存在しないのか。
「なんていうか、先生くらいの世代だと、その人が高校生くらいのときに流行った音楽ばっかり聴いてる人が多い印象なんですよね」
「そういう人も一定数いるのは事実だな。たまに旧友とカラオケに行って同世代で固まると、大抵の場合微妙に昔の曲がよく歌われる。５～１５年くらい前の曲が多いな」
「生々しい話ですね……ゲームはしないんですか？」
　さりげなくかじったチップスターが美味い。初めて食べる種類だったので名前を覚えておく。
「ふだんはやらないが……ああそうだ、最近は私が子どもの頃に流行ったゲームのリバイバル版がアプリでよく出ていて気になっているな」
「あー、わかります」
　ＴｗｉｔｔｅｒのＴＬ上に『あの名作が復活！』などと謳われた広告をよく見かける。やったことはないがめちゃくちゃ流行っていたことだけは知っている作品が多い。
「しかし、いざダウンロードしてもな……仕事が忙しくてやるヒマがなくてな」
「１日１５分だけでもプレイしてみたりはしないんですか？」

「検討したさ。けどな、ある程度プレイしたならともかく、一番最初は世界観を掴むためにもある程度まとまった時間をとりたいのだよ」
「あー……すげぇわかります」
自由に戦闘できるようになるまでの長いくだりを途中途中で切るとかなりわかりづらくなる。小説をなるべくセクションの区切りまで読むようにしたいのと同じ心理なのだろうか。
「まったく、年々忙しくなるばかりだよ……」
平塚先生が愚痴をぽそりと呟き、ちょっと遠い位置にあったじゃがりこに手を伸ばす。
その瞬間、ノースリーブブラウスから先生の驚くほど綺麗な腋が目に入った。白くなめらかなくぼみに見惚れ、ウーロン茶をやけに大きな音を立ててぐびりと飲んでしまう。
「どうした？」
「い、いえ、なんでも……」
先生が首をかしげながらじゃがりこをぱくりと食べ、きょとんとした目でじーっと俺を見ながらしゃくしゃくと食べていく。可愛いなおい。こっちは新たな性癖をこじ開けられたことに動揺してるってのに。
ウーロン茶を飲み干したところで自分の状況を確認する。まだ多少アルコールは残っているが、もうくらくらはしておらず充分に冴えている。
「えーと、先生」
「ん、どうした？」
「聞きたかったことがあるんですけど……」
なるべくさらりと話し出すつもりだったが、思いのほか声音が深刻になってしまった。先生は俺の変化を感じ取り、ビールの缶を置く。優しくも真剣な目。なんだか先生と教え子の関係に戻ったような気がした。今はその関係がもどかしいのだけれど。
「先生、この間のラーメンは久しぶりでしたよね」
「……ああ、そうだな」
「俺、誘われない理由はなんとなく察してました。ていうか先生から

聞いてましたし。……俺から聞くのもどうかと思ったんですけど、気になって」
「なるほど、どうなったのかが気になると」
「そうです。……先生が上手くいくようだったら、もう誘ってもらえないかなと思ってました。先生が幸せならそれでいいか、とも思ってましたけど」
「おや、いつもスタンプひとつで返信する君らしくない可愛らしい本音じゃないか」
「からかわないでくださいよ……」
　平塚先生がいたずらっぽく微笑む。俺よりもずっと大人なのに、ころころと変わる表情はまるで少女のようだ。
「……そうだな、そろそろ話すか。私が愚痴りたい話題でもあったからちょうどいい」
「……聞かせてください」
「うむ、それじゃあその前に……もう1本空けていいか？」
「お酒はほどほどに……」
　苦笑する俺ににかっと笑みを返すと、平塚先生はふたたびビールの缶を開けた。
　この人、呑み過ぎじゃなかろうか。

　続く。

（4）

「何ヶ月か前に会ったとき、先生は言ってましたよね」
――同僚とちょっと良い感じになってるんだ。
あのとき、ほんのりと顔を赤らめて話す平塚先生がどうしようもなく可愛く思えて、それと同時にもやもやする気持ちも抱えていた。
「あのあと、どうなったのかなって」
平塚先生は大人だ。「良い感じ」という言葉を使う以上、もう何度かデートに行ったり、あるいはそれ以上のこともしているかもしれない。この数ヶ月間、何度も何度も想像しては振り払い、そのたびにまた想像してしまっていたこと。十重二十重の糸が心臓をぎゅっと締めつけるような、そんな痛み。
俺の言葉に、平塚先生は苦笑を浮かべる。ビールをぐいと傾け、ふっとため息をついた。
「……あのときは柄にもなく浮かれてしまったな」
「可愛かったですよ」
無言で小突かれる。胸板を握りこぶしでぽすんと。
「君もある程度察しているだろうが、同僚の彼とは何度もデートに行ったよ。前年度からよく雑談をしていて、春休みに初めてデートに誘われた。君とご飯を食べたりドライブをする以外で、週末が楽しみになるというのは久しぶりの経験だった」
さりげなく嬉しい言葉を言ってくれているが、茶々を入れないよう黙ってうなずく。
「彼は私と同年代でね。オタクな話はできないが気遣いのできる人で、いっしょにいて楽しかった。純粋にな」
自分以外の男の話を聞くのがこんなにつらいのかと、自分から聞いておきながら強く強く思った。話すのをやめてもらえませんか、などと自分勝手にも程があることが言えるはずもないのに。
「正直、ほとんど付き合っているも同然の関係だったと思う。彼から交際を申し込まれたらオーケーをする気満々だったし、むしろ私から言おうかとも思っていた」

平塚先生の言葉をきちんと受け止めながらも受け流そうとして、ビールのプルタブを開ける。先生は俺の行動にも気付かない。懐かしそうに思い出す先生の横顔を見るのが悔しい。ビールを一気に流し込む。口内を駆け抜ける苦々しさが、意外と今の心境に合っていた。

「私も年齢が年齢だからなぁ……。もしお付き合いすることになったら、結婚することまで考えていた。……でも」

先生の声音が強張る。美しい思い出を辿っていた瞳に、怒りの炎が灯ったように見えた。

「聞いてしまったんだ。同僚の女性たちの会話を」

――あの人、2年くらい付き合ってる人がいるのに○○先生を口説いてたみたいだよ。

――うわー、ドン引き。

――あの人の女遊びのうわさって、挙げたらキリがないくらいあるよね。信じらんない。

「ただの同僚の噂話ならくだらないと切り捨てていた。しかし、その話は聞き逃すわけにはいかなかった。彼に付き合っている人がいるのも知らなかったし、今口説かれていると噂されている先生の名前に挙がったのは私ではなかった」

平塚先生にとって一番になっていた人。けれど、その人にとって平塚先生は一番ではなく、それどころか何番なのかもわからない。

「……そんな人、本当にいるんですね」

ビール缶を握る手に自然と力がこもる。

「私も現実では初めて見たよ」

平塚先生がふっと苦笑する。今まで見たことのない疲れた笑み。

「すぐに、彼にそれとなく聞いてみたよ。そしたらすらすらと言い訳を言い始めて驚いたよ。今まで誠実に見えていた彼がとてつもなく薄っぺらく見えるようになってしまった。気が付いたらただただ頷いていた。彼からすれば、私は言い訳をそのまますんなりと信じていたように見えただろう。明確に失恋して、もう彼に興味を抱くことができなくなっていただけなのに」

同僚に相談したりしなかったからなぁ……と先生がつぶやき、ビールをぐいと傾ける。
「そんな訳で、今まではキラキラしていた週末が急にくすんでしまったわけだ。それでふと、君と気兼ねなく話す時間が恋しくなったんだよ。勝手だろう？」
「そんなことないです。……その、なんていうか、お疲れ様でした」
「ふふ、ありがとうな。……恋を失くす前に愛想をつかしてしまったから、ショックらしいショックはないんだ。けれど、むなしくてな」
俺がビールを呑んでいることに先生がここで気付く。
「もう大丈夫なのか？」
「俺も呑みたい気分なんです」
「ふふ、そうか」
ビール缶同士をこつんと合わせると、互いの爪と爪がかすかに触れた。心臓が淡く跳ねる。
先生がぐび、ぐびと勢いよくビールを喉に流し込む。その表情はとろんとしていて、様々な感情をアルコールでごまかしたいという願いが見えた気がした。
「どうして私はこんなに男運がないんだろうなぁ……」
ぽそりと自嘲気味に呟かれた言葉。いつも通りの愚痴にも聞こえるが、やはり先生は深く傷ついているのだとわかる。本当に平気なら、こんなふうに目を伏せて寂しそうにつぶやいたりしない。
なんでこんなに素敵な人が苦しまなきゃいけないんだ、と心から思う。
先生はこの数ヶ月のあいだに、一生の覚悟を決めるような恋をして、誰に言うでもなくその恋の行き場をなくし、深く傷ついていた。俺はそのあいだ、ただもやもやしていただけ。その事実がたまらなく悔しくて、自己嫌悪の波が何度も何度も押し寄せてくる。
せっかく先生は話してくれたのだ。それならば、この場でなんとか少しでも先生の心を癒したい。
「そんなの、男どもに見る目がないだけですよ」
ぽつりとつぶやく。いつか連れて行ってもらった夜のドライブで

口にしたのと同じ言葉。
　ちらりと先生を見やると、口をぱくぱくとしていた。物憂げな大人の女性が急にウブな少女に変わったような、そんな愛くるしい変化。
「き、君は本当にどうしたんだ？　そんな歯が浮くようなお世辞を……」
「俺はお世辞を言いません」
　曖昧に紡がれる先生の言葉をぴしゃりと跳ねのける。俺の心をごまかしてうやむやにしてほしくなかった。先生の頬が酒気とは別の朱を帯びる。
　ビールの缶を傾けると、滴がちろりと口の中に落ちた。いつの間にか呑み干していたらしい。
「俺はお世辞を言いませんから」
「わ、わかった。わかったから……っ」
　先生があわあわと手を突き出す。ふだんは凛々しく締まった表情が今は羞恥でふにゃふにゃだ。そんな先生を見ることができるのが嬉しい。
　先生の心をいっときでも惹きつけた男への嫉妬か、あるいは軽蔑か。ここ数ヶ月、そして先生の話を聞いてたまりにたまった感情をすべて吐き出してしまいたくなる。
　けれど、みっともない怨嗟の言葉を口にするよりも、今は目の前の女性に対する素直な思いを言葉にしたい。
「き、君はいつからそんな軽口が叩けるようになったんだ？」
「さあ？　先生の恋バナを聞いて口が軽くなったのかもしれないです」
「な、なんだそれは。ああもう、顔が熱い……」
「そうですね、真っ赤で可愛いですよ」
　先生が目を見開き、俺の二の腕をてしてしと叩いてくる。その口元はもにょもにょとしていて、ついさっきまで色濃くにじんでいた憂いはそこにない。たまらなく嬉しくなって、もっと口が軽くなる。
「先生は綺麗だし、可愛いし、魅力的です」
「う、うぅ……君にそう言ってもらえるのは嬉しいが……それでも貰

い手がいなかったらどうしようも……」
「じゃあ俺が貰っちゃいますか」
「え？　貰ってくれる？」
「え？　あ」
　先生を慰めるつもりだったのに、いつの間にかまるきり告白としか思えない言葉を口にしていた。
　先生は目をぱちくりとさせて俺をじっと見ている。顔は羞恥で真っ赤というよりは、ぽっぽとリンゴのように赤くなっている感じ。なんだその顔、超可愛いな。
　口が軽くなったといっても、ウソを言っているつもりはまったくない。そんな訳で俺も顔が熱い。超熱い。これはなんだかまずい。非常にまずい。
「……えぇと、ちょっと呑みすぎたみたいです」
　言い訳にもなっていない言葉に先生がにやりと笑う。
『最近の研究だと、お酒を呑むことによって性格が変わるんじゃなくて、本来持っている性格がより強調される』……とさっき誰かから聞いた覚えがあるなぁ。んん～？」
「梅酒をいただきます」
「ほう、いいじゃないか。呑め呑め」
　無理やり話を方向転換させると、先生はあっさりと乗っかった。酔っているためすぐに今の話題を忘れてくれたのかと淡い期待を抱いたが、いたずらっぽく笑う先生の顔を見るにそうではないらしい。
「呑んで呑んで、もっと本音で話そうじゃないか。君も、私も」
「へ？」
「……早く呑みなさい」
　グラスに注いだ梅酒に氷を入れ、俺の頬にぐいぐいと押しつけてくる。先生はいつの間にか梅酒と氷の入ったグラスをもうひとつ用意していた。
「さっきの話だけどな。君のキザったらしい言葉ですっかりどうでもよくなってしまったよ」
「奇遇ですね、俺もです」

「……なんだか楽しくなってきた」
「……奇遇ですね、俺もです」
先生が目を伏せると、まつ毛がとても長いことに気づいた。いつの間にか先生との距離が近い。先生が近付いたのか、あるいは俺から近付いたのか。
「とりあえず、仕切り直そうか。乾杯」
「乾杯」
――呑んで呑んで、もっと本音で話そうじゃないか。君も、私も。
ついさっき先生が発した言葉が、頭の中を何度も何度も行き交った。
続く。

（5）

平塚先生に告白としか思えない言葉を口にしてからというもの、先生の機嫌がすこぶる良い。それでいて上機嫌だ。言ってることが同じだった。「詳しい詳細はまだ未定です」くらい同じことを言っている。どうした俺、落ち着け。

「ふふ、君もすっかり大人になったんだな……しみじみするよ」

「しみじみするとか言ってる割にやってることがえげつないんですが」

遠い目をしながら器用に俺のグラスに梅酒を継ぎ足していく。

苦笑していると、ふと先生と目が合った。

数秒にわたり、無言のままで見つめ合う。

先生のグラスの氷がからんと鳴ったタイミングで、魔法が解けたかのようにふたりの硬直も解けた。

「は、はは、す、すまない……」

「い、いえ、俺こそ……」

先生は照れくさそうに顔を逸らしたものの、またちらちらと横目で俺を見てくる。なんですかねその小動物的な仕草は。いいんですか？　俺はギャップで簡単に死にますよ？

「こ、これ、ほんと呑みやすいですね」

先生が選んだ梅酒をするすると呑み干すと、とたんに世界がぐらりと揺らいだ。

「おっと」

やけに男らしい声とともに先生に肩を抱き寄せられる。目の前にある整った顔、左の二の腕に当たる柔らかな感触、お酒と甘い匂いが入り交じった香り。

ふたり同時に目を見開き、口を開いて何か言おうとして諦め、代わりに塊のような息を吐き出す。

「す、すまない、とっさに……」

「い、いえ、ありがとうございます……」

先生は俺の肩から手を離したものの、明らかにさっきまでと比べて

距離が近い。どちらかがちょっと揺れただけで互いの二の腕がちょん、ちょんと触れる。白のノースリーブブラウスを着ている先生の肌は驚くほどなめらかで柔らかい。
『あ……』
俺の左手小指と先生の右手小指が不意に重なり、ふたり同時に呆けた声を漏らす。先生はぴくりとしたが、逃げようとはしない。
ふと訪れた沈黙。何か話さねば……と思っていると、先生が口を開いた。
「……そうだ、もう私は君の先生ではないんだ。名前で呼んでくれてもいいんだぞ？」
「へ？　え、いや、それは……」
予期せぬ提案に身じろぎしてしまうが、先生は右手を近付け、薬指まで重ねてくる。薬指と小指が甘えるように巻きついてきて、心臓がぶん殴られたかのように高鳴る。
「ええっと……」
断るつもりはない。けれど、そんなにすぐ覚悟はできない。曖昧な言葉を漏らしつつ視線をうろちょろさせていると、先生が頬を赤らめながらもむふーと鼻息をついて目をキラキラさせている。少女マンガのヒロインになれます、その感じ。超可愛いなおい。
ふっとひと息ついて腹をくくる。
「……静さん」
ぽそりと名を呼ぶと、平塚先生――静さんの顔が、まるで桜が一気に満開になったかのように赤くなる。
「ん、んん、中々、うん、よろしい」
よく分からない口調でうんうんと頷いた静さんがぐいと酒を煽る。やっぱり可愛い。
ちょっとからかいたくなった。
「1回静さんって呼んでみたら案外平気でした。静さん、大丈夫ですか？　呑み過ぎないでくださいね、静さん」
「ちょ、ちょっと待て、私の名前をゲシュタルト崩壊させる気か……っ」

静さんが両手のひらを俺の目の前に突き出し、あわあわと慌てる。綺麗な手だ。これ以上いじめるのも難なので追撃はやめた。
会話が落ち着いたところで、ふたたびふたりの手が重なる。お互い酒も呑まず、つまみも食べず、何か言葉を交わすわけでもなく。ただただ沈黙の帳が下りる。けれど気まずくはない。
少しずつ重なっていく指の感触。静さんが恥ずかしそうに髪を手で梳き、ときおりちらちらとこちらを見てくる様子。艶やかな黒髪からふわりと漂う甘い匂い。ひとつひとつに昂揚する。楽しくてしかたがない。
「な、なんだか、暑いな……」
「あ、そうで……すか……？」
思わず間抜けな声が漏れる。静さんはわざとらしくつぶやいたかと思うと、ノースリーブブラウスをするりと脱いだ。ラフな黒のキャミソール姿。静さんの肌は驚くほど白く、なめらかな肩が丸見えだ。
そのうえ、豊満な乳房のラインがこれでもかと強調されている。今までだって静さんはラフな服装をしていることはよくあった。3年前は水着姿まで見ている。けれど、ふたりきりの密室で見るとなると話は別だ。理性を揺さぶる破壊力が強すぎる。
ごくり、と喉が鳴った。ごく自然に。
静さんがびくりと震え、俺の反応を窺うようにおそるおそる上目遣いを向けてくる。
「……静さん。ものすごく、色っぽいです」
たどたどしくも感想を漏らすと、静さんは目をぱちくりとさせ、ふっと頬をゆるめた。
「そうか、ありがとう」
とん、と肩にかかる柔らかな重み。
静さんがしなだれかかってきた。
「……一応、聞いておきたいんだが」
「なんですか？」
静さんが歯切れ悪そうに口をもにょもにょとさせる。何かすがるものを求めるかのように俺の手に指を重ねてくる。くるりと手を裏

返し、静さんの手をきゅっと握った。静さんがびくーんと森のリスのように跳ねる。この人はこんなにも可愛かったんだな、とあらためて思う。
「……雪ノ下や、由比ヶ浜とは、その……今も会ったりはしているのか？」
「へ？」
思わぬ話題に呆けた声を漏らしてしまう。けれど静さんの表情は真剣で、絡めた指が不安を表すようにふにふにと握ってくる。まずい、この人の何もかもが可愛い。
「今もときどき連絡はとったりしてますけど……まあ、会ってはないですね」
本当は、会おうと思えば会える。お互い大学生で、さほど遠くに住んでいる訳でもなく、やたらめったら忙しいわけでもない。
けれど、会ったらきっと、色々なことを考えてしまう。
それは俺にとっても、あいつらにとっても同じだろう。だからこそなのか、ふたりとも俺と積極的に会おうとはしてこない。あのふたりはしょっちゅう会ってるみたいですけどね！
胸がきゅっと締まる感覚に顔をしかめていると、静さんが俺の手をすりすりと撫でてくれた。いたわるような優しい手つき。
「……あまり聞かない方が良かったかな、すまない」
「いえ、大したことではないんで」
「君はいつもそうやって、自分自身をもだましてしまうきらいがあるな」
静さんがふっと微笑み、先生の顔になる。男女の空気感が霧散してしまったことが悔しくて、握っていた手にぎゅっと力を込めた。
「ひゃ……っ」
か細くて可愛らしい声が漏れる。静さんは口をぱくぱくとさせ、俺の真剣な顔を見て見る見るうちに顔を赤くしていく。先生モードから一瞬で乙女モードに切り替わった。
「静さんの言う通りかもしれないです。なのでもうちょっと、自分に正直に生きようと思います」

「へ……？　あ、ちょ、こ、こら……っ」
顔をずいと寄せると、静さんが目に見えて慌てる。人の目ってこんなに速く動くんだってくらいの速度でぎゅんぎゅんと揺れる。
「なんでこんな質問をしたんですか？」
「え、あ、そ、それは……」
静さんが目を逸らすが、決して逃げようとはしない。あと少し粘れば話してくれるという明確な予感にワクワクする。
「き……君に、想う相手がいないかの確認を、その、ね、念のため……な？　い、一応、と思って……」
言葉尻に向かうにしたがってしおしおとしぼんでいく静さんの声。
思うことはただひとつ。
「静さんは可愛いですね」
「んな……っ」
手を離し、梅酒をもう1杯呑む。明らかに顔が熱い。アルコールだけが原因でないことは充分すぎるほどにわかっている。
「……なんだか、さっきから君が調子に乗っている気がするんだが？」
静さんがむぅ……と睨んでくる。うーん、可愛い。
「そんなことないですよ。とりあえず呑みましょう」
「……うむ」
お酒を注ぐと、静さんはいとも簡単に俺への追及をやめた。チョロすぎる。

×　×　×

他愛のない話をしながらもスキンシップが増えていく。手が触れ、二の腕が触れ、静さんがときおり太ももをてしてしと撫でてくる。
「静さんの髪、綺麗ですよね」
ふと思ったことを口にする。
「そうか？　それほど日頃の手入れに気合を入れているわけではないが……」
「女性が言う『あんまり部屋の掃除してないから』と同じくらい信じられない言葉ですね」
「また君はそういう……ああ、でもそれはわかるな」

苦笑する静さんの長い黒髪をじっと見つめる。
「触っていいですか？」
「へ!?　え、あ、そ、そうか、髪か。うん、髪を触られるのはけっこう好きだぞ」
「え」
「あ、いや、その、女友達に触られたときにな!?　存外気持ち良くて……いや、その、ああもう、私は何を……あ……っ」
そっと髪に触れると、清流の水のようにさらさらと指のあいだから流れていく。
優しく頭を撫でる。静さんに撫でられたことはあったが、撫でるのは初めてだ。静さんの頭は思ったよりもずっと小さい。くしくしと手のひらを這わせるたびに庇護欲が湧いてくる。
しばらく撫でていると、静さんはくなりと脱力した。
「大丈夫ですか？」
「……ああ、すごく、気持ちが良い……」
思わず目を見開き、ぶるりと震えてしまった。静さんが自分の発言に時間差でハッとして顔を上げる。逃げようとする静さんの肩をとっさに掴んだ。想像していたよりもずっと華奢な感覚。耳元で聞こえる「んん……っ」というくぐもった色っぽい声。思わず喉を鳴らしてしまう。
静さんと目が合った。互いの鼻先が触れ合うほどの距離。人のまばたきをこんなにも間近で見たことはなかった。
俺がそっと顔を傾けると、静さんは目を細め、逆側に顔を傾けた。
ほんの数センチだけ顔を前に出すと、柔らかな唇に自分の唇が触れた。
ほんの数秒だけの、触れ合うだけのキス。
目を閉じた静さんのまつ毛がか細く震えるさまが、信じられないくらい綺麗だった。
口を離すと、静さんがおそるおそる上目遣いで見つめてきた。
「……ど、どうだ……？」
「……酒くさいですいてっ」

てしっと優しいチョップをおでこにくらう。照れ隠しだとは伝わっているようで、静さんは「まったく……」と困ったように笑っている。
「やり直しだ」
「それはコメントをって意味ですか？　それとも」
唇を塞がれて言葉が切れた。静さんは今度はうっすらと目を開け、見開いた俺の目をじっと見ていた。
「……キスも、コメントも、どっちもだよ」
「……柔らかいです」
「……端的でよろしい」
静さんがふっと微笑み、俺の背中に腕をまわした。俺も静さんを抱き寄せると、もういちど唇を重ねた。
「ん……んふぅ……っ」
互いに顔の角度を変え、より唇を密着させる。静さんはときおり目を開けて見つめてきては恥ずかしそうに目を伏せ、また見つめてくる。
「んん……っ？」
柔らかな唇の合わせ目に舌を伸ばすと、静さんはびくりとしながらもおずおずと唇を開いた。

続く。

（6）

ぴったりと閉じていた静さんの唇が、ほんのわずかに開く。その中にぬるりと舌を差し挿れると、静さんは驚いたように目を見開き、それから眩しそうに目を細めた。

「ん……ふっ、んふぅぅ……っ」

静さんの口の中はとても温かい。しばらく舌をさまよわせていると、静さんがおずおずと舌を伸ばしてきた。ちょん、ちょん、と異種族の交流かというくらいおずおずと触れ合う。

「んっ、んくぅ……んっ、ふぅぅ……っ」

静さんの息は静かで荒い。きつく目をつぶり、ときおり俺と目が合い、恥ずかしそうに目を逸らす。黒髪をそっと撫でると、真っ赤になった小さな耳が覗いた。

「ぷはっ。はっ、はぁぁ……ひき、がやぁ……っ」

切実で甘えるような声。静さんのこんな可愛らしい声は聞いたことがない。華奢な手をきゅっと握ると、静さんが森のリスのように飛び上がる。なんでこの人はこんなに可愛いのか。

「んむぅぅ……っ？　えぅっ、ちゅぴっ、ひゃぅっ？　んくぅぅぅ……っ」

静さんの舌をぱくりと咥えると、ひくひくとか細く震えて逃げようとする。華奢な手に指を絡めてしっかり掴み、決して逃がさない。

「は、はぁぁ……ひ、ひきがやぁ……っ。な、なんでこんなに、キ、キスが上手いんだ……っ？」

「初めてなりに頑張ってるだけですよ」

「……本当に初めてなのか？」

「証拠をどうぞ」

静さんの手を掴み、俺の胸板を触らせる。

「……すごく速いな」

「でしょう」

どくどくどくどく……っと早鐘を打つ心臓。さっきから興奮と緊張がいっこうに収まる気配がない。

「初めてなのはなんとなく納得したが……それにしても上手いのはなぜだ？」
「少しでも良い反応をしてくれるやり方を探ってるだけです。静さんは反応が良いんでわかりやすいですね」
「うぅ……っ」
　恥ずかしそうに眉をくにゃりと曲げる。否定しようもない、といった表情がたまらなく可愛い。
「静さんは本当に可愛いです」
「う、うぅ……き、君はさっきから調子に乗りすぎゅう……っ？」
　牛。
　不意打ちで唇を奪っておきながら、思わず噴き出しそうになってしまった。
　白くなめらかな二の腕を掴むと、静さんは慌ただしく目を泳がせ、それからすがるような目つきで見つめてきた。不安と期待が滲んだ目。ぜったいに優しくしようと硬く心に誓う。
「んむ……ちゅっ、へぅっ、ちゅぴっ、れるっ、あっ、あふぁぁ……っ」
　舌の腹をこすり合わせ、互いの舌を啜り合う。静さんの歯列をなぞっていくと、俺の腕の中で柔らかな肢体がくなくなと力を失っていく。
「は、はぁぁ……んっ、はふ、んっ、ふぅぅ……っ」
　静さんの身体が徐々に倒れていく。ソファに寝転がった静さんに覆いかぶさり、何度もキスをする。胸板に当たってふにゃりとひしゃげる乳房の感触に心臓が痛いほど高鳴る。
「……君は思ったより肉食らしいな」
　静さんが目元を腕で覆い、ぷいと顔を逸らしてどこかいじけたようにつぶやく。
「好きな人とこういうことができて、あんまりにも嬉しいだけですよ」
　小さなあごをつまみ、もういちど唇を重ねる。とろりと唾液を流し込むと、静さんはためらいがちにこくりと呑み込んだ。
「こんなに丁寧なキス、したことがないぞ……」
　はふはふと酸素を求めて口を開け閉めする。唇の端に唾液がきら

めき、キャミソールの肩紐の片方がズレていた。身体中の筋肉が強張ってしまうほどの色気。
「キスが好きみたいだったので。がっつりやってみました。どうですか？」
「……君は好きじゃないのか？　キスは」
「俺もけっこう好きみたいです」
　唇を重ねると、静さんから舌を伸ばしてきた。うっすらと目を開け、両腕できゅっと抱きしめてくる。ちろちろ、ちろ、ちろちろと緩慢に舌を重ねる。
「恥ずかしいことを言っていいか？」
「どうぞ」
「……何時間でもしていたくなる」
「……それ、俺も思ってました」
　顔を傾け、ぴったりと唇を重ねる。静さんの手が俺の背中を愛おしそうに撫で回す。
「んっく、ちゅぴっ、こくっ、ふっ、んふぅぅ……っ」
　静さんの舌の動きが積極性を増す。口内の唾液の量が増えてくる。ねちっこく舌を絡め、いったん口を離すとふたりのあいだに唾液の糸が引いた。
「ひき、がやぁ……っ」
　静さんは名残惜しそうにちろちろと舌を伸ばしてくる。たった数分で別人のように大胆になっていることに驚き、煮えたぎるほどの興奮に身を焼かれる。
「んっく、んっ、んっ、ん……っ」
　唾液を流し込むと、うっとりと目を細めて嚥下してくれる。
　細指が不意に俺のTシャツをめくり、すりすりと腹を撫でてきた。溢れ出す感情の行き場を求めるような仕草を見守っていると、その手がゆっくりと下にすべっていく。
「う……っ」
　股間に甘い刺激が走った。静さんの細指がジーンズの上から下腹部をすりすりと撫でている。

「大きいな……」
静さんは恥ずかしそうに、けれど熱のこもった声で囁く。逆手で肉竿の形をたしかめるようにすりすりと撫でる仕草にごくりと喉が鳴り、ふたりの荒らいだ吐息が重なる。
「静さん、めちゃくちゃエロいです」
「キスでさんざん私をいじめた君が何を言うか」
おでこをこつんとぶつけ、たしなめるようにちゅっ、ちゅっとついばむようにキスをしてくる。こんな可愛いたしなめ方がこの世に存在するとは。
「く……おぁ……っ」
肉竿を揉む手に力がこもり、きゅっきゅっ、ぎゅむっぎゅむっと淡い快感を与えてくる。
「本当に大きいな……。……入るかな」
「え」
「な、なんでもない……っ」
静さんが慌てて顔を逸らしつつもちらちらと見つめてくる。何この可愛すぎる生き物は……と様子を見守っていると。
「チャックを開けてみてもいいか……？」
「え？　あ、はい、どうぞ」
答えたところで、覆いかぶさった今の状態では静さんが動きづらいかと気付く。いったん起き上がってもらい、向かい合う形で座った。
静さんの手がチャックをつまみ、ゆっくりと下ろしていく。ちぃぃ……という金属音がやけに大きく聞こえた。
開いたすき間に細指がするりと入り込む。ボクサーパンツ越しに肉竿をきゅっとつままれ、生々しさを増した指の感触にびくりと腰を引いた。
「……こ、こんなに、太くて、硬くて、熱いのか……っ」
熱を帯びた声がずるりと耳朶に入り込む。静さんの指がせわしなく動き、肉竿の凹凸をたしかめるように根元から先端にかけてしゅるしゅると撫でていく。
「し、静さん、触り方がやらしすぎますよ……っ」

「そ、そうか？　でも、本当にすごい……っ」
静さんは顔を赤らめながらも爛々とギラついた目で肉竿を見つめている。
ソファに手を付き、前屈みになって肉竿をまさぐる。
「うわ……っ」
屈んだ拍子に黒のキャミソールがたるんで、深い谷間が露わになった。静さんは夢中で気付いていないのか何も言わない。
ごくりと喉を鳴らし、両手で掬うようにして豊満な乳房に触れた。
「うあ……っ!?」
柔肉にふにゅりと指が沈み込んだとたん、静さんが跳ねるように身体を起こした。
「ごめんなさい。いやでしたか？」
「うっ、くぅっ、き、気遣うなら、手を離して気遣いなさい……はっ、はぁうぅぅ……っ」
下乳をゆっくりと撫でるだけで静さんは唇を引き結び、色っぽく喘ぐ。はっ、はっと切なげな吐息を漏らし、たしなめつつも止めようとはしない。
「まったく、油断していたよ。君も性欲にまみれた若い男子だったな」
「人の股間を触りながら言うことではないですよね」
唇を塞がれた。
「んっ、ちゅっ、ぢゅるっ、んふぅぅ……っ」
静さんの舌が獰猛に蠢く。さらに積極性が増している。パンツに滲んだ先走りに気付くと嬉しそうに目を細め、にゅりにゅりと亀頭をこすってくる。お返しに乳房に指を沈め、ゆっくりと揉みしだく。
「ふっ、んっく、はぁっ、はぁぁ……っ」
静さんが顔を逸らし、手の甲を口に当てて喘ぎを押し殺す。
「どんなふうに触るのが良いですか？」
「ん……っ、そう、だな……思いきり揉まれるより、優しく撫でられたほうが好きかもしれない」
深い谷間に指を添え、直に乳肌に触れてそっと撫でる。
「あっ、あっ、それっ、すごく、いい……っ」

静さんが艶っぽく眉をひそめ、ふるふると震える。肉竿をパンツ越しに掴んでジーンズから引っ張りだし、両手で玉や竿を貪るようにさする。
「静さん……脱いでもらっていいですか？　静さんの身体、見たいです」
「……私も同じことを考えていたよ。君のこれを直に見てみたい」
予想以上の破壊力を持った返しに、細指に包まれた肉茎がびくんと跳ねた。

続く。

（7）

静さんの黒のキャミソールの裾を掴む。
「え、あ……き、君が脱がせてくれるのか？」
「え？　あ、すいません、そういう流れかなと」
なんだかわたわたしてしまった。
いかんぞ俺、こんなんでは……とちょっと焦っていると、静さんが唇を重ねてきた。じゃれつくように舌を絡ませ、くちゅくちゅと唾液が弾ける。拙い焦りが穏やかな劣情の波に押し流されていく。
「ゆっくり楽しもう。どうせ、その、なんだ、お互い、一人暮らしだし？　誰を気にする必要もないし？」
なんだこの可愛い生き物は。
ほんのりと頬を赤らめる静さんを見て安心する。あらためてキャミソールの袖を掴むと、静さんはもじもじとしながらもそろりと腕を上げた。
するりと脱がせると、一瞬、呼吸のしかたを忘れてしまった。
静さんが着用していたのは、黒のレース地のブラだった。艶やかな刺繍が施されていて、ところどころが透けている。初見でも、これは気合の入った下着だとわかる。
「何も言ってくれるな……」
今日どんな心づもりだったのかと考えながら見惚れていると、静さんはぷいと顔を逸らしてぷるぷると震えた。首筋まで赤くなっている。
「めちゃくちゃ似合ってます。綺麗だし色っぽいです」
ブラからはみ出た乳肉の量感に魅入られながら告げる。
「ほ、本当か……？」
静さんがおずおずと上目遣いで見つめ、俺の股間をそっと握ってくる。ウブな表情といやらしい手つきのギャップに理性がぐらつく。
「良かった。萎えていないようだな」
「さっきから勃ちっぱなしですよ」
そうか、と嬉しそうに頷くあいだも静さんは肉竿をにぎにぎとして

いる。完全に気に入ってらっしゃる。
タイトスカートのホックに手をかけると、静さんの喉がこくりと鳴った。あまり焦らすのは心臓に良くないよなと思い、するりと下ろす。
ブラと同様の、刺繍が施された黒のレース生地のショーツ。一見上品だが、ところどころが透けていてかなり際どい。
「あ、あまり、見ないでくれ……」
「すいません、それは断固拒否します」
「うぅ……」
大胆な下着姿になった静さんを遠慮なしに見つめる。こんなに理性の伴わない視線を女性に向けたことなど、今までの人生でただの一度もなかった。
しゃがみこんでじっくり眺めようかしら……と思っていると、にゅっと伸びてきた両手に頭をくしゃくしゃと撫でられた。
「き、君のも見せてくれなければ不公平だ……っ」
どうしよう、静さんがいつもの数百倍可愛い。
俺の方が経験が浅い（というかゼロだ）はずだが、静さんがテンパることでかえって冷静になっている。
「じゃあ、ささっと脱ぎますね」
野郎の着替えなんて見てもなーと思い、Tシャツを手早く脱ぐ。
「わ、わわ……っ」
静さんが豊満な胸の上に手を重ねて可愛らしく慌てる。靴下とジーンズも脱ぐと、あっという間にボクサーパンツ一丁の姿になった。
「い、意外と、たくましいんだな……」
静さんが一歩二歩と近付き、そろりと指を伸ばす。水面に雨の滴が落ちる映像をスローで眺めるかのように、すらりと長い指が俺の胸板に触れた。
すり、すり……と未開の地を探検するかのように動く細指が、乳首にちょんと触れた。
「うぐ……っ」

覚えのない淡い快感に思わず声を上げてしまうと、静さんが目をぱちくりとさせる。
「君はここが弱いのか……？」
「くっ、ぁっ、ひ、人に触られるのが初めてなんで……どうやらそうみたいですね……って、ちょ、静さん……っ」
両手の人差指と親指で挟み、優しくこすってくる。好奇心旺盛な少女のように目をぱちくりとさせていた静さんが、いたずらっぽい笑みを浮かべた。
「ふふ、さっきより大きくなってるぞ。……というか、まだ大きくなるんだな……」
静さんが両手を肉竿に添える。パンツの膨らみの頂には先走り汁がじわりと滲んでいた。
「俺も、ここまで大きくなったのを見るのは初めてです」
「そう……なのか……？」
静さんが上目遣いでちらちらと見つめながら、竿の根元から先端にかけてさわさわと両手でまさぐってくる。玉袋をいたわるように触り、何度も細喉を鳴らす。
「直接触りますか」
「……ああ、たのむ」
ボクサーパンツをずるりと下ろすと、反り返った肉槍が勢いよく下腹を叩いた。
「きゃ……っ」
静さんの愛らしい悲鳴にムラムラしつつ、急いでパンツを脱ぎ捨てて裸になる。
「こ、こんなにまがまがしいのか……」
血管が浮いた肉茎に目が釘付けになった静さんが掠れた声でつぶやく。
「俺もちょっとびっくりしてます。静さんに興奮しすぎみたいですね」
「ふふ、それは嬉しい限りだ」
静さんの手がそろりと伸びてきたところで、細い手首をがしりと掴

む。
「な、なんだ？　せっかくいいところだったのに」
　いいところで。
「先に静さんも脱いでください。そしたら触り合いしましょう」
「さ、触り合い……とんでもなく卑猥な響きだな」
　静さんがきゅっと唇を引き結び、目を逸らし、上目遣いで見つめてくる。なるほど俺を殺す気らしい。
「ぬ、脱がせて、くれるか……？」
　本当に殺す気らしい。
「もちろん」
　声が裏返るのを懸命にこらえつつ、静さんのブラのホックに手を伸ばす。フロントホックと呼ばれるタイプのため、比較的わかりやすかった。
　ぷちっ、とホックが外れた瞬間、解放された乳房がぶるりと大きく揺れた。
「うぉ……っ」
　声が漏れるのを我慢できるはずもない。レース生地のブラがぱさりと落ちる音がやけに乾いて聞こえた。
　ほんの少しだけ垂れた、量感たっぷりの乳房。乳頭は淡い桜色でぷっくりと大きく、乳輪は乳頭よりもさらに淡い色で、素肌との境界線が曖昧だ。
「そ、そんなに見るほどのものか……？」
「見るほどのものです。……先に下も脱がせますね」
　このままでは絵画鑑賞のごとく何十分でも眺めてしまいそうだったので、ぶんぶんと頭を振ってひざ立ちになる。大胆なショーツに指をひっかけ、ひと思いにずるりと下ろした。
　静さんの局部は生々しかった。
　ふっくらとした恥丘には小判型の恥毛が生えていて、大陰唇は肉厚でスリットがぴったりと閉じている。けれどそこから甘酸っぱい匂いがほのかに香る。理性をちりちりと焦がすような女の匂い。
「静さん……綺麗です」

「ほ、本当か？　みっともなくないか？」
「みっともない要素なんてどこにもないですよ」
本心から出た言葉だった。縦長のへその形さえも綺麗だ。
「ベッドに行きませんか？」
「あ、あぁ、そう、だな……」
静さんが俺の髪をくしくしと撫でる。静さんに撫でてもらうと、ふっと眠気が訪れるほどに安らぐ。愛情に満ちたこの人の手がずっと好きだったんだなと思う。
ベッドに向かうあいだのわずかな時間も、俺と静さんはちらちらと視線を向け、何度も目が合った。ふたりとも裸なのに、まるで中学生の恋愛模様を見ているかのようだ。
「静さん、どうしました？」
ベッドに上がった俺を見て、静さんが目をぱちくりとさせている。
「ああ、その……いつも自分が上がったときより、ベッドが軋む音が大きくてな……君は私より大きいんだなって」
そろりとベッドに上がった静さんの肩を掴む。
「静さんの言葉って、ひとつひとつが妙にムラムラするんですよね。わざとやってます？」
「わ、わざとじゃない、ほんとだ……っ」
静さんが泣きそうな、懇願するような目で見つめてくる。わざとでないのにこの破壊力というのは恐ろしいな……。
「んむ……っ？　はぁっ、んっ、ちゅぴっ、れるっ、んふぅぅ……っ」
唇を重ねると、静さんの舌が流れるように伸びてくる。舌の腹を触れ合わせ、側面や背をこすり合わせる。自分の口内粘膜の形を相手に覚え込ませるように。
静さんの二の腕にそっと触れる。しっとりとして柔らかいのに張りがある。年を重ねた色香と若々しさを半々ずつ持っているような、肉感的な肢体。
「んんっ、はっ、あぁ……ひきが、やぁ……っ」
静さんの唇が離れ、俺のあご、首へとゆっくりとすべり、ちろちろと舐めていく。あまりに艶っぽい仕草に固まっていると、静さんの両

手が竿に触れた。１０本の指が竿に絡まっただけでカウパー液がどぷりと溢れる。
「んっ、ふぅっ、君のものはすごいな……熱くて、硬くて、太くて、長い……っ」
肉茎の裏スジを根元から先端にかけてつつっとなぞり、指で作った輪で竿をきゅっきゅっと握り、亀頭を撫でまわして透明な粘液を竿全体に塗りたくっていく。情欲が羞恥を上回っているようで、その表情は酩酊しているようにも見える。
「静さん、エロすぎますって……っ」
量感たっぷりの乳房にそっと触れると、
「あん……っ」
かすかな、それでいてたしかな質量を持った嬌声が耳朶を浸した。
「静さんって敏感ですよね」
優しく撫でたほうが良いという先ほどの言葉を思い出し、乳肌にそっと指を這わせていく。外側から、円を描いて徐々に中心に向かうように。
「あっ、ふぁっ、んんっ、そんっ、な、こと、ない……あっ、はぁぁぁ……っ」
静さんはひくひくと震えながら、玉袋を手のひらで包んでもう片方の手で竿をにゅこにゅことしごいてくる。色っぽい表情と声、ひくつく乳房、男性器を愛でる細指。興奮しすぎて頭がおかしくなりそうだ。
ちょん、と指が乳頭に触れる。
「ひゃぁんっ！」
少女のような声を上げて、静さんがぷいと顔を逸らした。
「いや、ごまかせてませんから。本当に敏感ですね……」
「やっ、こらっ、あっ、そこ、ばっかり、触っちゃ……はっ、あぁぁ……っ」
人差指と親指の腹で乳頭をこすり、くにくにとつまむ。静さんは唇を引き結んではほどき、何度も塊のような吐息をもらした。
「ひ、き、がやぁ……だ、め、本当に、そこ、そんなに、いじらないで、

くれぇ……っ」
俺の肩にとんとあごを乗せ、途切れ途切れの弱々しい声で囁く。それでいて竿の根元をにゅこにゅことしごきながら、手のひらで亀頭をにゅるにゅると撫でまわしている。栓が壊れたかのように我慢汁が止まらない。
「ぜんぜん説得力がないですね……じゃあこっちならいいんですか？」
左手はぷっくりと膨らんだ乳頭をいじったままで、右手を静さんの脚の付け根に滑り込ませた。ぴったりと閉じた肉厚のスリットに中指の腹を沈めると、にゅむ……っとまるで温めたゼリーのような感触がした。
「うぁうぅぅ……っ!?　はっ、はぁっ、やぁんっ、あっ、あっ、あっ、あ……っ」
中指を沈めては離すのを繰り返す。ちゅぷちゅぷといやらしい水音がして、静さんの腰がかくかくと前後に揺れる。別の行為を想起させる動きがあまりにも卑猥だ。涙目で見つめてくる仕草も嗜虐心をそそる。
指を挿れてみるか、その前にもう少しじっくり責めるか……と考えていると。
「ひきがやぁ……これ、舐めても、いいか……？」
がちがちに張り詰めた竿を握りしめた静さんが、震えるように懇願してきた。かすかに開けた口からちらりと覗く紅い舌に鼓動が跳ねる。
「……ぜひ。お願いします」
乳頭をつまんでスリットに指を沈めながら答えると、静さんはおとがいを跳ね上げ、「ひぃんっ！」と甲高い嬌声を上げた。
続く。

（8）

俺が仰向けになると、静さんは俺の脚をひらき、そのあいだによつんばいでするりと入り込んだ。がちがちに張り詰めた肉茎を眺め、まるで少女のような緊張をにじませる。
「ほ、本当に、大きいな……。それに血管も浮いていて、たくましいという言葉がすごく似合う……」
静さんの吐息が亀頭に触れる。目の前でぴくりと揺れた竿に静さんが目をぱちくりとさせ、すんすんと鼻を鳴らした。猫が水を払うようにぶるりと身体を震わせる。
「に、匂いも、いやらしいな……」
「シャワー浴びてきますか？」
「い、いや、それはその、もったいないというか……」
両手でそろりと竿の根元を掴み、恥ずかしそうにごにょごにょと呟く。
「静さんは変態ですね」
「んな……っ。そ、そんなこと……ぅあ……っ？」
黒い髪をそっとかき上げて耳を撫でると、静さんは唇を引き結んで切なげに表情を歪めた。
「こういうことをするのは初めてだから……その、大目に見てほしい」
裏スジに鼻を近付けてしきりにすん、すんと匂いを嗅ぎながら、どこかばつの悪そうに囁く。
「そうなんですか。俺はてっきり大好きなものかと」
「そ、そんなことはない。今まではその、なんだ、頼まれても気がすすまなくてな。でも……君のものは無性に舐めたくなったんだ」
紅潮した顔の前で肉茎がびんと跳ねる。「ぅあ……っ」とかすれた悲鳴を漏らし、静さんがこくりと細喉を鳴らす。まるでエサを目の前にした動物のようだな、と思った。
静さんがゆっくりと口を開き、紅い舌をおそるおそる伸ばした。鈴口に浮かんだ我慢汁の珠に柔らかな粘膜がそっと触れる。
「うぐ……っ」

かすかに鈴口に触れられただけなのに、情けないほど大げさに反応してしまった。
「だ、大丈夫か？　痛くないか？」
「あー、いや、その……気持ちいいだけなんで大丈夫です。続けてください」
静さんはほっと息をつくと、黒髪をかきあげ、亀頭を磨くように舌をねろねろと這わせていく。鈴口と唇のあいだに引く透明な糸が生々しい。静さんは先走り汁をためらいなくこくりと嚥下した。
「しょっぱいな……」
「ムリに呑まなくていいですよ？」
「大丈夫だ。なんというかこう……クセになる」
「え」
「あ」
静さんはぶんぶんと首を振ると、何事もなかったかのようにふたたび舐めはじめた。照れ隠しにしてはエロすぎる。
「ん……っ、ちゅっ、はぷっ、んっ、れるっ、ふぅ……っ」
片手を竿の根元に、もう片方の手を俺の太ももに添え、亀頭やカリ首、裏スジに唇を這わせ、ねろねろと丹念に舐めていく。ちらちらと俺の様子を窺う目には、俺に対する気遣いと溢れ出る劣情が同居していた。
「はぷっ、んっ、ふぅぅ……っ。比企谷、どうだ、気持ち良いか……？」
聞きながら舌を左右に揺らして裏スジを舐められ、腰ががくがくと震える。
「めちゃくちゃ、うぐっ、き、気持ち、良いです……おっ、ぉあっ、ぅあ……っ」
鈴口をまるでカッコウのように舌で小突かれ、背中が反り返ってしまう。静さんは鈴口にキスをしながらにんまりと笑った。
「静さん、初めてにしては上手すぎないですか……？」
「……動画を観て日々勉強していたんだよ」
「それってただ好きなだけじゃぁぁぁ……っ？」
亀頭をぱくりと呑み込まれ、語尾が間抜けに伸びる。静さんはかす

かに荒い鼻息をつき、鼻の下が伸びたいやらしい顔で見つめてくる。温かな口の中でゆっくりと舌が蠢き、亀頭をどろどろに舐め溶かそうとしてくる。
「うっ、くぁっ、そ、その、感じ、口の中で舐めるの、めちゃくちゃ、気持ち良いです……っ」
静さんが嬉しそうに目を細める。玉袋に両手を添えて大事そうにふにふにと揉みながら、少しずつ舌を動かす速さを変えていく。ゆっくり舐められればそれと同じように腰が動き、速く舐められれば同じようにがくがくと腰が痙攣する。
「君は……ゆっくり舐められるのが好きなようだな」
髪をかきあげた静さんが艶っぽく笑う。なんだかこの数十分で、この人の色気が恐ろしいくらいに増した気がする。
「たくさん、気持ち良くなってくれ……」
うっとりした声音で呟き、静さんがふたたび亀頭を咥え込む。カリ首を唇でぴっちりと締めつけてしばらく亀頭を舐めると、ぬっ、ぬぬっとゆっくり唇をすべらせ、竿を呑み込んでいく。
「んっ、んっく、ふっ、んん……っ」
静さんの唇が少しずつ下へ下へと進んでいく。進んでは戻り、また進んでは戻り、徐々に、徐々に。
静さんが顔を引くたびに見える、唾液でぬらついた竿。
もどかしそうにくねる腰と揺れる肉尻。
頬をすぼめて鼻の下を伸ばした卑猥な顔。
普段の凛々しさとはあまりにかけ離れた姿。その強烈なギャップが脳を揺らす。劣情を煽る。本能を炙る。
「んふぅぅ……っ」
やがて根元まで竿が呑み込まれ、喉奥に亀頭がこつんと当たった。苦しいのか、静さんは眉をきゅっと寄せ、荒い鼻息で陰毛を揺らしている。黒髪をくしくしと撫でると、静さんは内頬を竿に貼りつけながらゆっくりと顔を引き、またゆっくりと呑み込んでいく。
苦しくないですか、とか。いったん休んでください、とか。気を遣う言葉はいくつも頭に浮かんだけれど。静さんのうっとりとした、そ

れでいてギラついた目を見ては止めるに止められない。
　静さんはベッドに両手をつくと、口だけで行為を再開した。
「んーっ、んっ、んっ、んふぅっ、んふぅぅ……っ」
　竿の半分まで呑み込み、もういちど半分まで呑み込み、それから一気に根元まで。ときおり顔を傾けたり、片頬に亀頭をすっぽりと収めたりと、まるで今まで蓄えた知識を存分に試すかのように次々といやらしい舐め方をする。
「静さん……エロすぎですって……っ」
　上体を起こし、夢中で舐めしゃぶる静さんの乳房に手を伸ばす。量感たっぷりの乳房は重力に任せていやらしく下に伸びていて、淡い桜色の乳頭は興奮でぷっくりと膨らんだままだった。
「んふぅぅ……っ？　あっ、はぁっ、ひき、がやぁ……んっ、ちゅぴっ、んふぅぅ……っ」
　乳頭をそっとつまむと、静さんは蜜が混ざったような声を漏らし、またすぐに竿をぬむりと呑み込んだ。
「んっ、んっ、んふぅっ、んっ、んっ、ん……っ」
　かつて自分を導いてくれた先生が、情欲のままに自分の性器を舐め貪っている。その事実がちりちりと脳を焦がす。悪いことなどしていないのに、強烈な背徳感を覚える。
「静さん……そろそろ、出そうです……っ」
「ん……そうなのか。だから大きくなったんだな、君のが」
　ふふ、と嬉しそうに笑い、カリ首の裏にちゅっとキスをされる。先走りがぴゅるりと噴き出してしまい、静さんが目をぱちくりとさせて楽しそうに笑った。
「遠慮なく出してくれ。ん……っ」
　柔らかな唇が亀頭を挟み、ぬるぬると呑み込んでいく。だんだんと慣れてきたのか、顔を動かす速度が上がっていく。劣情にまみれた表情を浮かべながらも、俺の反応を逐一見てくれることに愛情を感じる。
「おっ、ぁっ、静、さんっ、ぐ……ぅぅ……っ」
　ふるふると揺れる乳房に指を食い込ませ、内ももにぎゅっと力を込

める。出したい。出したいが、もう少しだけ楽しみたい。けれどやっぱり出したい。静さんははやくはやくと急かすように口内を狭め、ぢゅるぢゅる、ぢゅぽっ、にゅぽっ、ちゅぷ……っと淫猥な音を立てて竿をしゃぶる。身体が強張る。歯を食いしばる。首に筋が浮く。下腹部の奥底から強烈な射精の気配が現われ、抗いようがないほど大きくなる。静さんの頭をとっさに掴んだ。静さんは慌てるどころか俺を包み込むように優しく目を細め、顔を傾けて喉奥に亀頭をぐりぐりとこすらせた。

温かな口内で、どぐん、と勢いよく精液が噴き出した。

「お……ぁ……ぁ……っ」

言葉を発する余裕などない。目がくらむような快感。

「んっ、んっく、んん……っ。んっ、んっ、んふぅぅ……っ」

静さんは喉奥まで咥え込んだままねろねろと亀頭や竿を舐めまわしていた。細い喉が何度も苦しそうに鳴る音を聞いて、ふと我に返る。

「あ、し、静さん？　もしかして……呑んでくれてます？」

静さんが「んふー」とやけに可愛い返事をしてこくこくとうなずく。射精が止まっても、静さんが顔を何度か往復させると残り汁がぴゅるり、ぴゅるりと噴き出した。

「けほ、けほ……っ。……せっかくだからと思ってな」

可愛らしく咳き込みながらも満足気に微笑まれ、心底驚く。

「静さんは底無しにエロいですね……」

「底無しとはなんだ、底無しとは……あっ、あんっ、はぁぁ……っ」

こよりと作るように乳頭をつまむと、静さんが甘い声を漏らした。身体を起こし、ぺたりと女の子座りをして半勃起状態の竿をひょいとつまむ。

「友人からは『まずくて呑めたもんじゃない』と言われていたんだが……存外、いけるものだな」

「……や、ほんとに底無しじゃないですか」

「君も大概だろう？　もう大きくなってきたぞ」

細指の中でむくむくと膨らんでくる竿を見て、静さんがにんまりと

笑う。「これからも呑むからな」と言われたようなものだ。そんなの興奮するに決まっている。
「俺も責めていいですか」
乳房や腰のくびれ、むっちりとした尻、脚の付け根に指を這わせる。静さんは両手で竿をまさぐりながら、唇を引き結んでいやらしく身体をくねらせた。
「ん……それもいいが、私ももっと舐めたい」
思わず目をぱちくりとさせてしまった。
「静さん、どれだけ性欲強いんですか」
「舐めたいと言われた瞬間に反応する君だって人のことは言えないだろう」
滑らかな指できゅっきゅっと竿を握られ、「おふぅっ」と気持ち悪い声を漏らしてしまった。静さんが顔を逸らしてぷるぷるしている。だいぶ腹が立った。
「じゃあ……いっしょにしますか」
「へ？　あ、ああ、なるほど……そ、そうだな、それも良いかもしれない」
次の行為を予想したとたん、静さんが少女のようにはじらう。表情はウブな乙女なのに、凹凸がはっきりした身体と竿をまさぐる手付きはどこまでもいやらしい。次々と脳を揺らすギャップに戸惑いつつも、この人と行為に溺れることが心底楽しいと思えた。

続く。

（9）

「わ、私が上になればいいのか？」
「そうですね、その感じでお願いします」
　静さんがよつんばいで俺の上に来て、恥ずかしそうに尋ねてくる。ウブな仕草とは対照的に、豊満な乳房が重力で伸びてゆらゆらと揺れるさまが卑猥すぎる。
　静さんがよたよたと半回転する。
「う……お……っ」
　目の前にずいと現われた光景に、思わず息を呑んだ。
　小判型の陰毛が生えたふっくらとした恥丘。そして先ほど見たときは肉厚でぴったりとスリットが閉じていた大陰唇が、脚を開いたことにより内側のぬらついた粘膜を見せていた。陰部の上にはセピア色のすぼまりも見える。
「うぅ……ひ、比企谷……この辺で、大丈夫か……？」
　豊満な肉尻をふるふると震わせる仕草にぞくりとする。一番恥ずかしいところを晒しているのだから当然だろう。
「もう少しだけ後ろにお願いできますか」
　言いながら、なめらかな尻肌をそっと撫でる。「ひぅ……っ」と少女が怯えるような声に、背すじが妖しくざわめいた。
「こ、これで……いいか……っ？」
　よたよたと数センチばかり後ろに移動すると、むっちりと大きな尻の迫力がさらに増した。
「ぼっちりです。……すごいですね、色々と」
「い、言わなくていいからぁ……ひゃぁんっ!?」
　薄紅色の粘膜にふーっと息を吹きかけると、静さんの可愛らしい嬌声とともにむわっと甘酸っぱい匂いが跳ね返ってきた。
「ほら、尻を落としてください。静さんも舐めてくださいね」
「う、うぅ……っ」
　静さんがゆっくり、本当にゆっくりと尻を下ろす。徐々に迫りくる豊満な臀部。性欲と食欲が混ざり合ったような不思議な欲求が頭の

中で暴れていた。ただただ、目の前の秘裂にむしゃぶりつきたい。
顔が弾力のある柔らかさに包まれ、視界が埋まり、甘酸っぱい匂いが鼻腔を浸した。
「あっ……はっ、うぅ……うぅぅ……っ」
静さんが身をよじると、ぬらついた粘膜がぬちゃぬちゃと口周りを濡らした。少女のように恥ずかしがっていながらも、静さんの中はこんなにも濡れている。その事実がたまらない。鼻先は静さんのアナルにめり込んでいた。
「ひ、ひきがやぁ……だめ、これ、恥ずかしすぎて……あはぅぅっ!?」
縦筋をねろりと舐め上げると、静さんの声が一段と甲高くなった。溢れ出す愛液を舐めとるようにねろねろと舌を這わせていく。
「うっ、くぅっ、はぅぅっ、はっ、ひ、き、がやぁ……ばか、ばかぁ……あっ、あっ、あ……っ」
弾力のある肉尻がびくびくと震える。静さんの背中を抱き締めてにゆりにゆりと舐め上げていると、肉竿の根元をちょんとつままれた。
「わた、し、だってぇ……ん……っ」
「ぐぅ……っ」
肉幹が温かな口内にぬむりと包み込まれた。静さんが咥えるさまを見るのも興奮するが、まったく見えない状況で咥え込まれるのもたまらない。なめらかな背中や尻をすりすりと撫で、恥毛にあごをくすぐられながらどろどろの粘膜をかき分ける。
「んふぅぅ……っ？　あっ、そこっ、いっ、いいっ、はぁうぅ……ちゅぴっ、れるっ、ふぅぅぅ……っ」
舌先で膣口をほじくると、静さんの声がいっそう蕩けた。力を抜いて身体を預けてくる。太ももに、腹に、胸に、顔に。ありとあらゆる場所で静さんの柔らかさを感じる。
ほとんど何も見えない状態で夢中で舌を這わせていると、小さな突起を見つけた。
「んくぅぅっ!?　あっ、はぁっ、はぁぁぁ……っ」
つん、と軽く舌でつついただけで静さんが弾けるように喘いだ。肉

竿から口を離し、荒らげた息で陰毛を揺らしながらもどかしそうに竿をしごく。
「静さん、ここが気持ちいいんですか？」
小さな突起を舌先で軽く弾きながら問いかける。答えるまでもなく、静さんは「ひぐっ、ひんっ！」と切迫した声を漏らして腰を跳ね上げた。腰の辺りで豊満な乳肉がぐにゅぐにゅとひしゃげる。むっちりした尻をしっかりと掴んで抱き寄せ、逃げられない状態にして敏感な肉芽をちろちろと舐める。
「あぁうぅぅ……こ、のぉ……っ」
がくがくと痙攣しながら、静さんが肉竿をゆっくりと咥え込んでいく。俺の太ももを下から包み込むように抱きしめ、ゆっくりと根元まで呑み込んでいく。
「お……ぉあ……っ」
ぎゅっと頬をすぼめ、ねろねろと舌を這わせてくる。思わず口を離して呻くと、静さんが得意気にふりふりと尻を振った。ちょっと腹が立つわ可愛いわエロいわ恥毛がくすぐったいわで大混乱に陥った。
「んふぅぅ……んっ、んっ、んっ、ん……っ」
静さんは楽しげに鼻息をつくと、口内にたっぷりと唾液を蓄えた状態で顔を上下させはじめた。ぐっぽぐっぽといやらしい音が鳴る。唇と竿のあいだからこぼれた唾液が陰毛を浸す。唇がカリ首をめくるたびに腰が跳ねる。
「うぐ……し、静さん、それ、やば……っ」
反撃しようとクリトリスを舐めていると、静さんの唇がカリ首を包んでにゅちっと締め付けてきた。亀頭を磨くように舐め、ぢゅぞぞぞぞ……っと口の中の唾液の池を波打たせて啜り上げてくる。目がかすむような快感に腰が跳ね上がり、がくがくと痙攣する。
「こ……の……っ」
このままでは一方的にやられてしまうと感じて、肉芽をぱくりと咥えた。静さんと同じように、唇で締めつけ、舌でクリトリスを磨く。薄皮が向けた状態でちろりと舐めると、静さんの口が弾けるように離れた。

「うあうぅぅぅ、だめだ、皮、むいたらぁ……あっ、はぁぁぁ……っ」
静さんが陰毛の中に口をうずめて喘ぐ。ひくひくと尻が揺れ、突き出されては引っ込められる。だめと言われてやめるわけがなかった。クリトリスを舐め、淫裂をなぞり、またクリトリスをねぶる。
「イっ……く、イク、イク、イク……っ」
静さんの声が聞こえた瞬間、ハッと我に返って愛撫を止めた。
「へ……っ？」
可愛らしく呆けた声を漏らす静さんの身体を抱き締め、俺が寝ていたのと同じ向きで仰向けにする。静さんのお腹の横にひざをつき、呆気にとられている彼女の顔を上から覗き込んだ。
「静さんがイクところ、見たいです」
「へぇ……っ？」
目を見開き、頬を紅潮させ、胸の上で手を重ねて可愛らしく慌てる。幸福感と嗜虐心が混じりあった感覚を楽しみつつ、静さんの脚を開き、右手のひらを上にして膣口に中指をあてがった。
「舐めても舐めても溢れてくるんで大変でしたよ」
「そ、そんなこと、言わなくても……んはぁうぅっ!?」
ほんの少し指を進めただけで、狭い膣口の中にいとも簡単に中指が入り込んだ。膣内は熱くどろどろにほぐれている。
「あっ、んふぅぅ……っ」
静さんが目を見開き、雪のように白いお腹をひくつかせ、唇を引き結んで喘ぐ。第一関節まで埋まった指を、左右に揺らしながら少しずつ奥へと挿入していく。
「うっ、くぅっ、はっ、うぅ……っ」
静さんが右手の甲で口元を隠し、左手でシーツをつかんで腰をよじらせる。膣内の柔らかなところを見つけるたびに指を曲げてくにくにと押し込み、静さんが特段に感じる場所を探す。
「うぅっ、ひき、がやぁ……い、言っておくがな……わた、し……こんなに、濡れたこと、ないんだからな……？」
「そうなんですか？　……めちゃくちゃ嬉しいです」
素直な言葉を口にすると、静さんが口元を隠していた手をどかし、

肉竿をきゅっと握ってきた。愛情と庇護欲と嗜虐心が同時に湧き上がる。この人を、大事にしながらめちゃくちゃにしたい。
「静さん、どこが気持ちいいですか？」
シーツを掴んでいた手を掴み、頭の上に押さえ込む。その状態でずいと顔を寄せ、唇が触れそうなほどの距離で尋ねる。
「比企谷……ずいぶんとワルい顔をしているぞ？　ん……っ」
静さんがつっと頭を上げて唇を重ねてくる。ちろちろと舌を重ねるあいだも互いの指が動き、俺は温かな膣内を、静さんは勃起肉をまさぐる。
「んっく、はっ、んん……ぅあっ……あっ、そこ、奥っ、いっ、すごく……あっ、あっ、あ……っ」
根元まで挿れた中指の先で膣奥をくにくにと押し込むと、静さんが色っぽく眉をひそめた。目の前で喘ぐ表情を見るのはたまらなくて、細指に包まれた肉槍の切っ先からぶびゅりとカウパー液が漏れ出る。
「うっ、んんっ、あっ、はぁぁ……ひき、がやぁ……もう、だめ、イ、ク、イク、イク……っ」
静さんが切なげに目を細め、甘えるように俺の下唇をあむあむと咥える。静さんの身体の震えが伝わってきて、嗜虐めいた愉悦が背筋を駆けのぼる。
「いいですよ、ちゃんと見てますから。イってください」
膣奥を押し込みながら、親指でクリトリスをきゅっと押す。
「ひぐぅぅっ!?　んぐっ、だ、め、いっしょにしたらぁ……おかしくなる、あっ、あっ、あっ、あ……っ」
静さんが唇を引き結び、ぎゅっと目を閉じる。
「だめです、イクときはちゃんと目を開けて、俺を見てください」
「き、君は……とんでもない鬼畜だな……っ」
快感に染まりきった顔が引きつり、ぎこちない笑みが浮かぶ。
「ばか、本当に、君は、ばか……だ……あ、イ、ク、イク、もう、イク、イク、イクイクイク……ぅあぅぅぅ！」
静さんが目を見開き、真っ白な喉を晒す。シーツを上を妖しくくねっていた肢体がばね仕掛けのように跳ね上がり、背すじが弓なりに

反り返った。
「静さん、めちゃくちゃエロいです……っ」
指を食いちぎらんばかりに締め付けてくる膣内の感触にぞくぞくしながら、膣奥とクリトリスへの愛撫を続ける。見開いた静さんの目をじっと見つめながら。
「あぉぉぉ……だ、め、お、かしく、なる……ぁ……ぁぁぁぁぁぁ……っ」
静さんがタオルの水を絞るように状態をよじる。反り返った身体から痙攣のさざ波が消えない。丸まったつま先がシーツにしわを作る。膣口からどろどろと溢れてくる愛液が手首を浸し、肘にまで伝う。左手は俺の手をすがるように握り、右手は溢れた我慢汁をにゅりにゅりと亀頭に塗り込んでいた。
「……ぅ……ぁ……っ」
しばらくすると静さんの背中がベッドに落ちた。ぎしぎしとベッドを軋ませ、虚ろな顔で俺を見つめてくる。初めて見る女性の絶頂は、想像を遥かに越えて激しく、淫猥だった。
静さんの股座に腰を下ろしてあぐらをかき、脱力しきった身体を抱き寄せる。
「んむ……ふっ、んっ、ふぅぅ……んふぅぅ……っ」
唇を重ねると、静さんのほうから力なく舌を絡めてきた。両脚が甘えるように俺の腰に巻きつく。がちがちに勃起した肉槍がお腹に食い込んだ。
「んぐ……ぉ……ぁ、ちょ、静さん……っ」
俺の唇を咥え、舐め回しながら、乳首や肉竿を細指でまさぐってくる。虚ろだった目に徐々に生気が宿り、獰猛な獣欲の火が揺れ始める。
「ひきがやぁ……これ、ほしいなぁ……っ」
鼻先が触れ合った状態で、5本指を波打たせて肉竿を愛でながら囁いてくる。吐き出す息が桃色に見えそうなくらいわかりやすく発情した顔。
「お、ぁ……わかり、ました……。……そろそろ、しましょうか」

じっとりと汗ばんだ黒髪を撫でると、静さんはうっとりと色っぽい笑みを浮かべた。

続く。

（１０）

「ちょっと待っててくださいね」
いったんベッドを下りてバッグの中を探る。万が一のためにと、淡い期待を持っておいて良かった。
俺が長方形の箱の中からひとつのゴムを取り出すと、静さんはくすりと笑った。
「ちゃんと準備していたのか、えらいじゃないか」
「……べつに、最低限のマナーじゃないですか」
ちょっと顔が熱い。ついさっき目の前で達する顔を見せてくれたばかりだというのに、今はもういつもの先生としての顔になっている。
「着けなくていいぞ。そのままで大丈夫だ」
「へ？　……いいんですか？」
涼しい顔で言われて唖然とすると、静さんはぷいと顔を逸らし、ひらひらと手を振った。
「その、なんだ、まあ……備えはしているのは、君だけではないということだ。大丈夫だよ」
「……そういうものなんですか」
「そういうものなんだよ」
ベッドに上がり、座った状態で見つめ合う。静さんがきゅっと竿を握ってきた。いったん落ち着いていた肉茎がゆっくりと大きくなっていく。
「それに……君も、生でしたほうが良いだろう？」
静さんが薄い笑みを浮かべる。唇が描く弧にごくりと喉が鳴り、肉幹がみちみちと張り詰めていく。
「ん……ぇう……っ」
静さんが長いまつ毛を伏せ、自分の指にたらりと唾液を垂らした。その手で亀頭をにゅりにゅりと撫でまわされ、腰ががくがくと震える。
「準備万端、といったところだな」

「……静さんはどうなんですか？」
脚を流して座る静さんの下腹部に手を伸ばす。柔らかな肉に触れると、熱い汁が指を濡らした。指を沈めては離してを繰り返す。ちゅぷちゅぷ、ちゅぷちゅぷといやらしい音が鳴り、静さんが色っぽく眉をひそめる。
「準備万端、ですね」
「んっ、はっ、んん……っ、そう、だな……っ」
静さんが顔を寄せてくる。唇を重ねると、甘えるように朱い舌がじゃれついてくる。静さんの空いた手が俺の乳首に触れ、俺もお返しに膨らんだ乳頭を触れるか触れないかのタッチで刺激する。
「んんっ、はっ、はぁ……っ。……どうしたものか……」
「ん、どうしたんですか？」
静さんがぽーっとした目つきで勃起肉を見つめながらちゅこちゅことしごく。
「君とするのがどうしようもないくらいに気持ち良いし、楽しい……」
「あー……それは、うん、すげぇわかります」
軽口を交わし合いながら互いの身体に触れ、じっくりと味わう。初めての行為とは思えないほど素直に昂揚していた。
静さんの肩に手を添え、ゆっくりと押し倒す。
静さんはずっと俺を見つめている。すらりと伸びた脚を開いても、静さんは顔を逸らすだけで隠そうとしなかった。
薄桜色の粘膜は、溢れた愛液でてらてらと濡れ光っていた。肉槍の裏スジで粘膜をゆっくり、にゅり、にゅりとかき分ける。濡れた恥毛がカリ首の裏側をくすぐり、背すじに焼け付くような劣情が走る。静さんが指の甲を噛んでうねうねと腰をくねらせた。興奮しすぎて頭が爆発しそうだ。
「静さん、行きますよ」
形よくくびれた腰に手を添える。静さんがこくりとうなずいた。
「ああ、来てくれ……っ」
小さな膣口に切っ先をあてがうと、朱く張り詰めた亀頭がにゅむりと呑み込まれた。

「おぁ……っ」
こんな小さな穴に入るのかと驚きつつ、ゆっくりと挿れていく。
「うっく、はっ、うぅ……っ」
初めて味わう膣内の感触。肉槍が溶けそうなほど熱く、そしてキツい。腰を押し進めるたびに静さんが苦悶とも悦楽ともつかない表情を浮かべる。
「静さん、大丈夫ですか？」
肉茎が半分ほど埋まったところで尋ねる。
「はっ、んん……っ、き、君のものが思った以上に大きかったようだ。慣れるまで少し時間がかかりそうだ」
「抜かなくて大丈夫ですか？」
静さんは目をぱちくりとさせ、ふっと柔らかな笑みを浮かべた。
「大丈夫だよ。あくまでもう少し時間がかかるというだけだから。……ほら、もう少し奥まで、きて？」
静さんが俺の手に自分の手を重ね、三日月のように目を細める。ちろりと舌なめずりをして、肉槍を咥え込んだままゆっくりと腰をくねらせる。あまりに蠱惑的な仕草。
「静さんは……本当にエロいですね」
「君としてるときだけだぞ、こんな風になるのは……はぁうぅぅ……っ」
豊満な乳肉を指の腹で撫でながらゆっくりと挿入を進める。ただ進めるだけではなく、少し進めては止まり、引き返し、何度か往復する。静さんがベッドのシーツを強く握りしめた。唇を引き結び、ほどくたびに塊のような吐息を吐き出す。
「静さんの中、ほぐれてきましたよ。大丈夫そうですか」
「ふっ、んん……っ、あ、ああ、もう、すごく、気持ちいっ……あっ、あっ、あ……っ」
乳頭をつまみながら、肉茎を根本まで埋める。亀頭が膣奥にとん、と触れた。
「奥まで入りましたよ」
「ふふ……そうみたいだな」

静さんが俺の頬を撫で、根本まで埋まっていることを確かめるように俺の恥骨をすりすりと撫でる。
「ちょっと、気持ち良すぎて今動くと出そうです……」
「ほう？　そうなのか」
静さんはいたずらに笑ったかと思うと、不意に俺の腰に手を回して抱き寄せてきた。柔らかな身体に覆いかぶさって密着する。豊かな乳肉がいやらしくひしゃげた。
「君のものは本当に大きいな……。私だって大変なんだぞ？」
耳元で囁かれぞくりとする。
「大変……というと？」
静さんの唇がさらに近づき、ぴとりと耳に触れた。
「さっきから私の身体がな、『早く動いてもらえ、めちゃくちゃにしてもらえ』ってうるさいんだ」
俺が言葉を返す前に、静さんが両脚を俺の腰に巻き付けた。耳ににゅるりと舌が入り込んでくる。複雑な耳の形をたしかめるように、楽しむようににゅりにゅりと舌が這いまわる。
「ちゅぷっ、はっ、んふぅぅ……っ、ほら、勝手に腰まで動いてしまう」
湿り気たっぷりの静さんの声が脳を犯す。巻き付けた両脚に力を込めて腰をうねうねとくねらせ、恥骨をいやらしくこすりつけてくる。
「ちょ、ちょっと待ってください、静さん、やばいですって……っ」
この数分でさらに何倍も淫らになったかのように思える仕草と言葉。わずかな摩擦で達してしまうかもという危機感を抱くなか、こんなにねちっこく責められてはたまらない。
「ん～……？　なにがやばいんだ……？」
静さんが酩酊したようにとろりと目を細め、俺の唇を舌でなぞっていく。全身の血液が沸騰しそうだ。
「出そうなんですよ……」
「出したいときに出せばいいじゃないか。それでおしまいではないだろう？」
尻の谷間をつつっと指でなぞられ、情けないくらいに腰が震える。

「こんな状態で出そうになったら、抜くヒマがないですよ」
「抜かなくていいぞ。君はそんな心配をしなくていい」
どこか子どもを諭すような口調。ムッとしつつも、欲望に身を任せていいという誘惑はあまりにも強烈で。俺に拒むなどという選択肢はなかった。
「それじゃあ……遠慮なしで行きますよ。本当にいいんですね」
上体を起こし、静さんの腰を押さえて尋ねる。
「ああ、もう充分にほぐれたからな。……私のことを、好きにしてくれ」
全身の筋肉が発火した。
「うはぁうぅぅっ!?」
亀頭が抜ける寸前で一気に押し込むと、静さんはくんと弓なりに反り返って白い喉を突き出した。膣内は熱くどろどろにほぐれていて、素早い抽送もなんら苦にしていない。
しなやかな腰をやや持ち上げる形にして抽送を始める。
どちゅっ、ぐちゅっ、にゅちっ、にちゅっ。
「あっ、はぁっ、あぉっ、うっく、はっ、はぁっ、はぁぁ……はぁぁぁ……っ」
静さんが切なげに眉根を寄せる。煮えたぎるような歓喜と劣情が浮かんだ顔。結合部が白濁していく。ふたりの呼吸が乱れていく。
「うあっ、はぁっ、ひき、がやぁ……これ、すごい、きもちいっ……あっ、あぁうぅぅぅ」
静さんが汗ばんだ前髪をかき上げた瞬間、むっちりした身体に痙攣のさざ波が走った。長い黒髪が扇のように広がり、肉槍を食いちぎらんばかりの締め付けに我慢汁がびゅるりと溢れる。
「ぐぅ……静さんの中、めちゃくちゃ気持ち良いです……っ」
「ほんとか……っ？　あっ、はぁっ、うっく、ふっ、うんん……っ」
静さんが嬉しそうに目を細め、恥骨をぐりぐりとえげつないくらいにこすりつけてくる。限界に達するまでの時間を楽しもうと腰を止めれば、その分だけ静さんが「なんで休むの？」と急き立てるように激しく腰を振る。

「静さん、俺、そろそろ出そうです……」
下腹部の奥底から、ぐつぐつと煮えたぎるような性衝動が湧き起こる。静さんは優しく微笑むと、ふたたび俺の腰に両脚を巻き付けてきた。
「いいぞ……たくさん、出してくれ……あっ、はっ、はぁっ、はっ、はぁぁぁ……っ」
静さんの呼吸が荒らぐ。俺の呼吸も短くせわしなくなる。肉と肉がいやらしい汁を挟んでぶつかりあう。甘えるように締め付けてくる膣肉。今にも泣きそうな顔で見つめてくる表情。何もかもがたまらない。
「ぐ……ぅ……出る、出る、出る……っ」
膣奥ににゅぐりと押し込んだ瞬間、静さんが抱きしめてきた。いつの間にか汗だくになっていた身体が重なり合う中、狭い尿道を駆け上がった精液が勢いよく噴き出す。
「あ……はぁぁ……すご、い……あっっ、はっ、はぁぁぁぁ……っ」
びゅぐっ、びゅるる、ぶびゅるるる……っと、まるで何日も焦らされていたかのような遠慮のない量の白濁が身体から出ていく。静さんはぶるぶると痙攣しながらもきついくらいに俺を抱きしめ、腰をこすりつけ、耳の中をねろねろと舐めまわしてくる。気持ち良すぎて怖い。魂ごと引きずり出されそうな射精。
「はぁ、はぁ、はぁ……って、ちょっと、静さん……っ？　ぐ、ぁ……っ」
射精の脈動が止まっても、静さんは尿道に一滴とて残すまいとするかのように膣肉をきゅっきゅっと締め付けてくる。
「ふふ……一滴たりとて残さないからな」
実際に言ったよこの人。
身体の震えがなくなっても、俺と静さんはずっと抱き合っていた。耳元で聞こえる静さんの呼吸が心地良い。静さんの黒髪を撫で、手をつなぐ。静さんは楽しそうに目を細め、俺の手を握り返した。
「比企谷、どうだった？」
「気絶するかと思いましたよ……。初めてするときって、もっとなんかこう……黒歴史になるような失敗をするもんだとばかり思ってま

したから」
「君はまたそういう……っと、ああ、まあ……そうだな、そういうものかもしれない」
　静さんがくにゅっと眉をひそめる。
　密着したまま、いまだに硬度を保っている肉槍を膣奥にぐりぐりと押し込んだ。
「うぁっ、はっ、うくぅ……っ？　ひ、ひき、がや……っ？　急に、どうし……あっ、あっ、あ……うんん……っ」
　静さんの身体に痙攣のさざ波が走り、俺の腰を両足のかかとでじゃれつくようにこする。
「……べつに、なんでもないですよ」
　俺の拗ねた声音に静さんが目をぱちくりとさせる。
「……ああ、なるほど、そういうことか。……安心したまえ、おそらく、君ともう少しすれば、他の記憶なんてみな遠くへ行ってしまうさ」
　静さんが唇を重ねてくる。情けないところを見透かされた恥ずかしさで唇を閉じていたが、静さんが「ほれほれ、開けろ開けろ」と言わんばかりに唇の合わせ目を舌でなぞってきた。この人、いやらしいし可愛すぎるんですけど……。
「ん……ちゅぴっ、はっ、んふぅぅ……ぷはっ。……ふふ、君のものは本当にすごいな。ずっと硬いままだぞ？」
　静さんが嬉しそうに囁き、俺の首から尻の谷間にかけてつつつっとなぞってくる。
「くぁっ、おぁ……っ。静さんの中が気持ち良すぎるんですって。……あと、静さんが仕掛けてきたエロいやり方、ぜんぶやり返しますからね」
「おお？　それは楽しみだ」
「なんで目がキラキラしてるんですか……」
　呆れていると、静さんがまぶたを半分閉じた。数秒かけてゆっくりと腰で円を描き、じっとりと濡れた目で見つめてくる。
「それで、次はどうする？　このままもう一度するか？」
　ちろりと舌なめずりをして、俺の耳をねろりと舐める。

「そうですね……せっかくだから違う体位でもしてみたいかもです」
「ん、そうか。それなら……私が上になってもいいか？」
「いいですけど……ほんと楽しそうですね……」
「君は楽しくないのか？　言葉の割に私の中でぴくぴくしているが」
「うぐ……た、楽しいですよ……」
気恥ずかしさで乗り切れていない俺を、静さんはにまにまと笑って見つめる。
ころころと変わる顔に振り回されるのが、楽しくてしかたがなかった。

続く。

（11）

仰向けになると、静さんは俺の腰に跨ってひざ立ちになった。
「さてそれじゃあさっそく……ぅあ……っ」
静さんの脚のつけ根から垂れ落ちた液体が亀頭に当たった。精液と愛液が混じった、温かくていやらしい液体。竿を伝って陰毛を濡らすさまを、俺も静さんもじっと見つめていた。
「……とんでもなくいやらしい光景を見てしまったな」
「……ですね」
静さんが亀頭をつんつんとつつく。エロいいたずらはやめてほしい。
「それじゃあ、あらためて……」
静さんが足裏をベッドにつき、M字に開いた。熱く潤んだ淫裂を亀頭にあてがい、ゆっくりと腰を回す。
「一気に挿れてもいいんだが……こういうのも悪くないだろう？」
「は、初めてだからわかんないですよ……っ」
「……言っておくが、こんなことをするのは私も初めてだからな？」
ちょっとだけ拗ねた口調。まるで同世代の少女のような声に愛おしさが湧く。
「……好きなようにしてください。気が向いたら反撃しますから」
「お、言ったな？　……果たして反撃できるかな……？」
思わせぶりに囁き、ちろりと舌なめずりをする。ひざに手をつき、円を描きながらゆっくりと腰を下ろしていく。捕食という言葉がふさわしいような、あまりにも淫猥な動き。
「あっ、はぁぁ……これは、楽しい、なぁ……クセになりそうだ……っ」
静さんが塊のような吐息をつき、ひざをきゅっと握りしめる。膣内はぐつぐつに煮込まれたように熱く柔らかくて、にゅくにゅくと甘えるように食い締めてくる。
焦れったくも強烈な快感に歯を食いしばっていると、腰に柔らかな重みがかかった。
「はぁうぅぅ……ん、これ、比企谷のがぁ……奥までくるぅ……っ」

静さんの浮かべた笑みは、力なくふやけていた。視線がどこかぼんやりとしていて、すぐに動く様子はない。
「お……あっ、ちょ、静さん……なか、なかが……っ」
けれど、膣ヒダは違った。肉槍の根本、真ん中、先端とじゃれつくように食い締めてくる。まるで別の生き物のように蠢く感触に悶絶する。
「ひきがやぁ……っ」
静さんがひざをつき、ゆっくりと身体を倒してくる。俺の肩の横にひじをつくと、耳を塞いで唇を重ねてきた。
「んむっ、ふっ、へぅっ、んふぅっ、ぢゅるっ、ぢゅるるる……っ」
ヤブの中の小動物を食い荒らす蛇のように、静さんの舌が口内で獰猛に蠢く。
「んぐ……っ、ぅあっ、しずかさっ、んぐ……っ」
唇を重ねたまま静さんの腰が動き出した。ゆっくりと腰を上げ、下ろす。ゆっくりと上げ、下ろす。ぱちゅっ、にちゅっ、と水っぽい打擲音が鳴り、咥え込むたびに膣洞が蛇腹のようにうねって貪ってくる。
「はぁぁ……ひきがやぁ……んっ、んっふ、んむふぅぅ……っ」
静さんの顔が酩酊したかのように蕩ける。口を離したかと思えば俺の額に口づけをして、頬を舐め、鼻先をあぐあぐと咥える。顔が静さんの唾液にまみれ、そのあいだも肉槍は貪られ続ける。
「ふふ……さっきから何度も汁を出してるな……っ」
静さんが身体を起こし、うっとりと目を細めてお腹を撫でる。
「わかるもんなんですか？」
「ああ、先ほどよりも余裕が出てきたからか……君がぴくぴくしているのも伝わる。あっ、はぁ……っ」
会話を遮るようにカウパー液が噴き出し、静さんが豊乳を突き出して震える。
「はぁ……上になるというのは、こんなに気持ちのいいものなんだな……」
静さんがぺたりと女の子座りをして、身体を後ろに倒し俺のひざに

手を添える。薄紅色の粘膜の中に張り詰めた勃起肉が呑み込まれているのが丸見えになる、あまりにも卑猥な体勢だ。
「上になってるほうが深く刺さるんですか？」
「ん……君が上になっているときでも奥まで刺さってはいたよ。ぐりぐりとされたときは意識が飛びそうに……なんで大きくなったんだ？」
「そりゃそうですって……」
静さんが「？」と首をかしげながらきゅっきゅっと膣を締めてくる。可愛さとエロさで同時にぶん殴るのはやめてほしい。いや、やめてほしくはないけど。
「んっ、ふっ……こっちのほうが、体重をかけているぶん奥がぎゅっと押し込まれるんだ。その圧迫感が少しだけ苦しくて、それがまたたまらない……」
どこかぼんやりとした表情で囁き、腰をゆっくりと前後に滑らせる。裏スジがにゅくにゅくとこすられ、我慢汁がびゅるりと噴き出した。
「はは……これは良いな。延々とゆっくり動いて、君から搾りとり続けるのも楽しそうだ」
「それもうただの淫魔ですよ……」
静さんが黒髪を耳にかきあげて目を細める。婀娜っぽい仕草に心臓がわしづかみにされた。
「さて……そろそろ馴染んできたし、もうちょっと積極的に味わわせてもらうとするか」
女の子座りのまま、俺の乳首に触れてきた。
「うあ……っ」
「ん……っ、君の反応がそのまま伝わってくるのは嬉しいな」
どこか慈母を思わせるような優しい笑みを浮かべ、指の腹ですり、すりと乳首を撫でてくる。
「ひゃんっ！　あっ、はぁぁ……っ」
淡い快感に反射的に腰を突き上げてしまった。静さんが可愛らしい嬌声を上げ、ますます楽しそうに乳首を撫でる。

「おっ、ぁっ、うっく、静さん、そんなにいじんないでください……っ」
「おや、それは何故だ？　気持ち良いのなら触ってしかるべきだろう？」
「や、それはそうなんですけどぉぉ……っ」
　静さんの腰がゆっくりとグラインドする。根本まで咥え込まれた肉幹が前に後ろにと倒れ、熱く柔らかな膣壁ににゅぐにゅぐとこすりつけられる。
「んっ、ふっ、はぁっ、はぁぁ……っ」
　静さんの吐息が弾む。乳首をいじる手はそのままに、腰の動きが加速する。豊乳が揺れ、薄桜色の乳頭と乳輪が近付いては離れる光景はあまりにもいやらしい。
「おっ、ぁっ、静さんっ、あっ、うぐ……っ」
　強すぎる快感に腰をよじって逃げようにも、体重をかけて根本まで咥え込まれていてどこにも逃げ場がない。
「ははっ、ロデオみたいだなこれは！」
　俺の手を掴み、ぐりぐりと肉尻をこすりつけてくる。結合部から掻きだされた淫汁が空気を含み、互いの陰毛に白綿のようにまとわりついていた。
「ちょっ、と、……ああもう、調子にっ、乗りすぎですっ、よっ！」
　つないだ手をぐっと引き寄せ、全力で腰を突き上げた。
「うあぅぅぅ!?」
　静さんがおとがいを跳ね上げ、白い喉を突き出す。膣全体がにゅぢりと締めつけ、危うく射精しそうになった。
「あっ、はぁぁ……良い反撃じゃないか……それなら、私も遠慮せんぞ……っ」
　静さんの瞳に獰猛な色が宿る。あ、やば……と思ったがもう遅い。俺の手をぎりりと握り締めると、腰を前後にグラインドさせる速度を一気に上げた。
「うぐぅぅ……っ!?」
　にゅぢっ、にゅごにゅご、にゅぢゅり、にぢゅっ。
　蜜ヒダの中で肉槍が次々と向きを変え、あらゆる方向から食い締め

られる。静さんの楽しげに弾む息と、汁気の多い肉ずれ音が幾重にも連なって耳朶を打つ。
「はぁっ、あっ、ぅっく、ひきっ、がやぁ……どうだぁ……？　これなら反撃は……はぁうぅっ!?」
　限界が迫っていた。もう射精をこらえることはできそうにない。それなら一緒に……と全力で腰を突き上げる。
「あぐっ、はっ、はぁぁっ、ひぐぅっ！　あぅっ、はっ、はぁっ、ひきがやぁっ、ぅあっ、それっ、いぃっ、すごっ、あっ、はぁぁぁ……っ」
　静さんが腰を後ろに引いたら俺も引き、前に出した瞬間に突き上げる。柔らかな膣ヒダに裏スジをごりごりとこすられる。絞り込むような食い締めに我慢汁が噴き出す。歯を食いしばる。でも無理だ。内ももに力を込める。耐えられない。気を紛らわせる。静さんの艶姿から目を離すことなどできないししたくもない。
「静さんっ、もう、出ますっ、出るっ、出るっ、出る……っ」
「はっ、あぁっ、いいぞっ、出してくれっ、はっ、はぁっ、はっ、は……っ」
　静さんが泣きそうな顔で腰を振る。だらしなく開いた口が恐ろしいくらいに色っぽい。玉袋がきゅっとせりあがる。抗いようのない強烈な射精衝動が込み上げる。
「出……る……っ」
　かすれた声でつぶやき、めいっぱい腰を突き上げた。
「あ……はぁうぅぅ……ぅあぅぅぅぅ……っ」
　どぶっ、ごぶっ、どぶ……っと、濃厚な白濁が静さんの膣奥を叩く。まるで固体が無理やり尿道を通っているのかのような感覚。あまりにも気持ち良すぎて苦しい。折れそうなほど背すじを反らして喘ぐ俺に、静さんが陶然とした笑みを浮かべ――腰を振り始めた。
「うぐぅぅ……っ!?　まっ、待って、静さん、いまっ、だめでっ、す……おぁ……っ」
　突き出した俺の胸に手を添え、乳首をくりくりとつまんでくる。ギラついた目で俺を見つめ、もっと出せ、もっと出せとせがむように蜜肉を蠕動させる。
「はぁぁ……ひきがやぁ……あっ、はっ、はぁぁっ、はぁぁぁ……っ」

部屋の灯りを背に浴びて、静さんの顔に陰影が生まれる。ぞっとするほどの色気を称えた表情に見惚れた瞬間、もう残っていないと思っていた精液がびゅるりと噴き出した。

「うっ、ぁ……ぁ……っ」

十数秒か、数十秒か、あるいはそれ以上か。

俺は身体を反り返らせたまま、意識が飛びそうなほどの快感に震えることしかできなかった。

続く。

（１２）

ようやく絶頂の波が収まり、静さんがゆっくりと腰を上げる。カリ首が膣口で心地よく締め付けられ、抜ける寸前にひくんと腰が震えてしまった。

「はぁぁ……ずいぶんとたくさん出したな……」

静さんが俺の股座で脚を流す。色っぽいポーズに加えてさりげなく太ももを撫でられ、落ち着いたばかりの心臓がまたせわしなく動き出した。

「これ以上はさすがにキツいですけどね……」

２回立て続けの射精だが、量で言えば３～４回分は出した気がする。ほんと魂が持ってかれそう。

「ふむ……そうか？　まだ芯は通っているようだが……」

「いやまあそうなんですけ……ど……っ」

静さんが長い黒髪をかき上げてかがみ込み、半勃ちの竿をぱくりと咥えた。

「んふぅ……んっ、んっ、ん……っ」

「お……ぁ……ちょ……静、さん……っ」

舌が円を描き、じっくりと労わるように舐りまわされる。一日の終わりに風呂に入ったときのような感覚。亀頭と皮のあいだにぬるりと舌が差し込まれ、丁寧に丁寧に舐めほぐされていく。

「……ぷはっ。……どうやら、君のここはまだまだ元気のようだが？」

静さんが竿の根本を押さえ、鈴口を舌先でほじくりながら囁く。あまりにもわかりやすい挑発。

「そりゃ、こんだけエロく舐められたらそうなりますよ……」

こんにゃろめ、と静さんの肩をつかみ、ふたりの位置をくるりと入れ替えて押し倒した。

「きゃっ？」

静さんが可愛らしい悲鳴を上げ、目をぱちくりとさせ、それからにんまりと笑った。

「ふふ……まさか元教え子に押し倒される日が来ようとはな……」

やけに芝居がかった口調でつぶやいたかと思うと、顔の横についていた俺の手首にちゅっとキスをする。なんでこういう仕草がいちいちさまになるのかこの人は。
「ちょっとは仕返し……を……？」
たっぷり焦らしたりなんだりと色々考えていたら、静さんがいそいそと肉竿をつまんで淫裂にあてがった。くいくいと腰を揺らし、誘うように見つめてくる。
「……静さん。なんかとんでもない勢いでエロくなってません？」
「さあ、どうだろうな？」
涼しい顔で笑う静さんの中にずぶりと突き入れる。たっぷりと潤んだ膣肉は柔らかくほぐれていて、肉茎はあっさりと根元まで埋まった。
「うんん……っ」
静さんが細喉を突き出し、もっともっととねだるようにくねらせてくる。このま
までは根本まで挿れたまま射精してしまいそうだ。早めに攻めに転じることにする。
「あっ、はぁぁ……ひきが、やぁ……っ」
とん、とん、と抽送を始めると、静さんがすがるように俺の手首をつかんでちゅむちゅむと口づけをして、甘えるように腰をゆっくりと回す。
……やっぱり、俺が攻めるのはけっこう大変かもしれない。
その晩はけっきょく、疲れ果てて眠るまで交わった。
× × ×
「……うん……っ？」
眠りから覚めると、見慣れない天井に首をかしげ……るほど、時間は経っていなかった。つい数時間前まで及んでいた淫らな行為を思い出す。
……気持ち良すぎたんですけど。
なにこれ、相性の問題？　なんなの？
俺は初めてで、静さんもあまり慣れていない。普通ならもっとぎこ

ちなくなって、「あんまり気持ち良くなかったけど、慣れればきっと、ね！」とか励まし合うもんなんじゃなかろうか。
ハードなのは間違いない。静さんは淫乱という言葉がよく似合うほどにエロかった。
しかし、それも込みで楽しいと思えた。というか楽しすぎて不安になるまである。
「ん……っ」
すぐ隣で聞こえる色っぽい声に振り返ると、静さんが気だるげに目を覚ましたところだった。長いまつげが揺れるさまに見惚れる。
「んん……おはよう、比企谷」
穏やかな寝ぼけ顔に胸がきゅっと締め付けられる。昨夜から静さんの女性としての面を見せつけられすぎてくらくらしっぱなしだ。
「おはようございます、静さん」
どぎまぎしながら挨拶を返すと、静さんがふにっと目を細め、「ん」と答える。
「んー……まだ眠いな……」
ぽしょぽしょとつぶやき、もぞもぞと近付いてくる。互いに横向きで、おでことおでこをくっつける体勢。静さんは安らいでいるのだろうが俺の心臓はばっくばくですありがとうございました。
静さんがとろんと目を開け、子猫が甘えるかのように鼻先をこすりつけてくる。朝イチで殺しにくるスタイルらしい。
「んー……っ」
俺の唇をはむっと咥え、そのままゆっくりと密着させていく。気だるげに舌が挿し込まれ、俺も応じる。乾いた舌が徐々に潤っていき、じりじりと性感が込み上げてくる。
「比企谷、うで……」
「え？　ああ、はい、どうぞ」
伸ばした腕に静さんがぽすんと頭を乗せ、ふたたび唇を重ねてくる。
「ちゅっ、ちゅぴっ、ん……んむふぅ……はぷっ、んっ、ふぅん……っ」
静さんが甘えるようにすり寄ってくる。豊乳がふにゃりとひしゃ

げ、太もも同士がぴたりと触れる。静さんの両脚のあいだにひざをすべりこませると、静さんは嬉しそうに目を細めた。
「おあ……っ」
すでに張り詰めていた勃起肉を、細指がきゅっと包み込む。
「ふふ……朝から元気だな……あん……っ」
お返しに乳頭をさすると、蜜を練り込んだような声が耳朶を犯した。
「比企谷……したいか？」
根本から先端にかけて愛でるように撫でられ、先走り汁がとくとくと溢れる。
「明らかに静さんのほうがしたそう、なん、です、け、どぉぉ……っ」
粘液を竿中に塗りたくられ、ちゅこちゅことしごかれる。黙らせ方がエロすぎません？
「私はまだ動く元気がないから、比企谷がしたいようにしてくれ」
「……はいはい」
前半はウソで後半は本音か。起き上がると、静さんは横向きのままで、楽しげに流し目を送ってくる。この人がこんなにも色っぽくて綺麗だなんて知らなかった。もしかしたら昨晩だけでこれだけ魅力的になったのかもしれない。そう思うと背すじがぞくぞくする。
「ん……後ろからか」
肉尻をそっと掴むと、静さんが期待の滲んだ声で囁いた。
「ああ、腰は上げなくていいですよ」
「ん？　ということは、寝たまま……あっ、あはぁ……っ」
静さんの尻肉を割り開き、じっとりと濡れた花びらに亀頭を押し当てる。脚を閉じているので入口がわかりづらいが、静さんがくいくいとお尻を揺らして誘導してくれた。
ずぶぶ、という心地良くていやらしい感触とともに、肉槍が濡れた膣洞の中に埋まっていく。
「あ……はぁぁぁ……っ」
静さんが枕をつかんでねちっこく喘ぐ。いきなり挿入して大丈夫かと心配していたが、膣内は想像以上に熱く柔らかく濡れていた。

あっさりと根本まで埋まったところで安心して、つながったまま静さんの上に覆いかぶさる。
「はぁうぅ……これ、すごく良いな……っ」
「重くないですか？」
「んん……この重さも込み込みで好きだぞ……」
「なら良かったです」
静さんの髪に顔をうずめ、朝の気だるい空気に浸る。両手をつなぎ、緩慢に指を絡め、ときおり静さんの小さな耳をちろりと舐める。
「あっ、んん……動かなくていいのかぁ……っ？」
静さんがどこかもどかしそうに肉尻をこすりつけてくる。淫猥な仕草にぞくぞくして、身体中に力がみなぎってくる感覚がする。
「俺としては何時間でもこうしてたいんですけどね」
うなじに顔をうずめたままでゆっくりと腰を振る。激しさのない代わりにどこまでもねちっこく。静さんのお腹の裏側を肉槍でぐりぐりと刺激すると、静さんが「あっ、ぅあっ」と艶っぽく喘いだ。
「んっ、んっく、はっ、はぁぁ……っ。……私はべつに、君が激しくしようと穏やかにしようと、何時間でもつながったままでもいいんだぞ？　……大きくなったな」
「今のはずるいですって……」
もう少しゆるゆると突きいれるつもりだったが予定変更。上体を起こして静さんの腰を掴み、ずんずんと突き入れる。
「あっ、ふぁっ、んっく、はぅっ、あはぅぅ……これっ、すごくっ、いっ、いいっ、気持ち良い……っ」
静さんの声にかすかな獣性が灯る。たぱんたぱんと突き入れるたびに肉尻が波打つのがたまらない。ぬらついた膣洞から引き抜いた肉槍は、愛液と精液がどろどろに混じりあっていた。それをまたずぶりと突き入れ、また引きずり出す。
「うぅぅぅ……はっ、はぁうぅっ、あはぅぅぅ……っ」
静さんが枕を掴んでぶるぶると痙攣する。抽送に合わせてへこへこと肉尻を揺らす仕草がどこまでもいやらしい。じわりと汗の滲んだ背中に見惚れながら、何度も何度も突き入れる。

「静さん……そろそろ出そうです……っ」
じりじりと込み上げる射精欲求をこらえながらつぶやく。
「はぁうぅぅ……わかっ、た……出して、出してくれ……っ」
か細い声で囁き、両手をこちらに伸ばしてくる。手のひらを上に向けただらりとした伸ばし方。がしりと掴むとすがるように指を絡めてきた。劣情と愛おしさが同時に湧きだし、どろどろに混じりあう。玉袋がきゅっとせり上がり、内ももが強張り、首に筋が浮かぶ。
「出る、出る、出る……っ」
たぱんっ、と肉尻を波打たせた直後、大量の白濁が膣奥で噴き出した。
「はぁぁぁ……あっ、おぉ、あぉぉぉぉ……っ」
静さんの背すじが弓なりに反り返り、両脚がびんと伸びた。ぶるぶると痙攣し、肉尻をきゅっと締めつけ、脈動する肉槍を美味しそうに咀嚼する。
「ぐ……ぅ……っ」
肉幹を引き抜こうとすると、膣肉がにゅちにゅちと締めつけてきた。カリ首が抜ける寸前に膣口をきゅっと締められ、残り汁がびゅるりと噴き出した。
「はぁぁ……なんだ、挿れたままでもよかったんだぞ……？」
「魅力的ではあるんですけど、寝起きでするにはさすがにしんどいです……」
元の位置にごろりと寝転がる。静さんの視線に気付き、腕を伸ばす。静さんは頭をぽすんと乗せ、俺の頬におでこをうにうにとこすりつけてきた。
「……こういうのをな、ずっと、その、やってみたかったんだ……」
「え、可愛すぎません？」
「え」
「ん」
顔を逸らしたがもう遅かった。静さんがぽしょぽしょと「そ、そうか、ふふ、そうか……」と噛み締めている。顔が熱い。果てしなく熱い。

「……比企谷」
「ん、どうしました？」
「その……な？　もし比企谷がよければ、一晩限りじゃない関係になってもらっても……ひゃっ？」
抱きしめると、静さんが可愛い悲鳴を上げた。
「当たり前じゃないですか。……って、今思い出すと……ちゃんと言ってなかったですね、すみません」
「え、あ、う、うん、はい……」
静さんが耳まで赤くして目を泳がせている。なんだこの可愛すぎる女性は。
「静さんが好きです。……お付き合い、してくれますか」
「ひゃ、ひゃい……」
昨晩の乱れようとはあまりにも差がある、純朴にもほどがある反応。こんな可愛らしい返事をされて幸せにならないはずがない。
静さんがなにやらこほこほと咳払いをした。
「わ、私も……君のことを憎からず思っているぞ」
「ちょっと迂遠にもほどがありますね」
「うぐ……き、君のことが、その、す、好きだ」
「……ありがとうございます」
はっきり言われたら言われたで、顔がとんでもなく熱くなった。
「……その、これからよろしくお願いします」
「……あ、ああ、よ、よろしく……」
静さんは俺の胸に顔をうずめると、今にも消え入りそうな声で返事をした。

続く。

（１３）

お付き合いすることが決まったものの、静さんはいつも通り仕事で忙しいため中々会えずにいた。平日の夜でも静さんの家に行ってご飯を作って……といったことも考えてみたが、さすがに付き合って早々はそこまで踏み込めない。

そんなこんなで、俺の誕生日の翌週末の朝１０時。

静さんが俺の部屋に来ることになった。

「……これだけ掃除すれば大丈夫か……？」

嫌味な姑が５人いたとしてもここまで綺麗にはすまい、という勢いで掃除をした。元々さほど散らかしていなかったので、今ならルンバもグレるのではと思うほど綺麗になっている。

大学に入って少ないながらも友人はできたが、まだ誰も部屋に上げたことはない。なのにそんな自室へ、彼女になった元先生が来る。なんだこのギャルゲもかくやといったイベントは。

六畳一間のリビングとキッチンを隔てるすりガラスの引き戸はいつも締めているが、今日はそこを開け、それどころかトイレのドアまで開けてがんがんにエアコンを効かせている。ふとトイレに行ったときにそこだけ暑い、という事態を避けるためだ。

服装は家にいるのにジーンズというのもあれなので、ラフなパンツを穿いていた。

他に不備はないか、他にやれることはないか……と思っていると、ＬＩＮＥのメッセージ通知が来た。約束の時間の５分前だ。

『あと数分で着く』

端的な文とともに、俺の部屋番号が確認で送られてくる。オーケーのスタンプを送ると猫がふんにりと笑っているスタンプが返ってきた。可愛いなおい。

広くもない部屋と廊下をうろうろしていると、簡素な呼び鈴が鳴った。チェーンもロックも外してある。

「はい」

浮かれ顔でドアを開けたら勧誘だった……なんてことになれば来

世まで後悔する。なので無愛想と愛想のはざまの顔（つまり普通）でドアを開けると、
「あ、暑いな、今日は」
「あ、は、はい、そう……ですね……」
思わず目を見開き、ぴたりと固まり、しどろもどろに言葉を紡いだ。流れ込む真夏の空気など心底どうでもいい。それだけ、静さんの格好は衝撃的だった。
白のノースリーブワンピースにパンプス、そして麦わら帽子。ひまわり畑の似合うお嬢様のごとき格好。誕生日以前の先生しか知らなかったら、一瞬誰かわからなかったかもしれない。
「……一応確認なんですけど……静さん、ですよね？」
というか今もちょっと不安だった。静さんがむっと唇を尖らせる。
「見たらわかるだろう。それより、暑いんだが？」
「あ、は、はい、すいません」
むくれた静さんを玄関に招き入れ、ドアを閉めて鍵をかける。そのとたん、静さんの身体がぴくりと揺れた。
「ええと……すいません、その格好が意外だったので」
「うぐ……ちょっとチャレンジしてみたんだが……やはり似合わないか？」
「とんでもない。すげぇ似合ってます。綺麗です。本当に」
遅れて出てきた賛辞を述べると、静さんの頬がぽっと赤らむ。麦わら帽子を脱ぐと、艶やかな黒髪をそっと撫でた。
「ふ、ふむ……それなら何よりだ。……お、お邪魔、します……」
静さんが声を上ずらせながらパンプスを脱ぐ。自分のスニーカーとサンダルの横に誰かの靴が並ぶという光景を久しぶりに見た。ましてやそれが彼女のものだなんて。
「冷房が効いているな。助かる」
「それなりに気を遣ったんで」
狭い廊下を先導してリビングに入る。デスクにソファ、ローテーブル、ベッドだけの簡素な部屋。
「……なんというか、生活感がないくらい綺麗だな」

「……気合を入れすぎたんですよ」
ちょっと恥ずかしい。俺の返答に静さんが目をぱちくりとさせ、それからふふっと楽しげに笑った。
「そうか、楽しみにしていたのは私だけではないようだな」
静さんの視線はベッドに注がれている。シーツも替えてきちんと整えたベッドは、いつでも使えますよとアピールしているかのようだ。
「とりあえず、ソファでゆっくりしててください。いま麦茶を出しますから」
「ん、助かる。ああそうだ」
「？　なん」
ですか、という言葉尻と唇を奪われた。俺の頬をそっと愛おしむように撫で、唇の合わせ目をちろちろと舐めてくる。反撃する前に静さんの唇はあっけなく離れてしまった。
「……せっかく付き合えることになったのに、1週間近く会えなかったからな。とりあえずジャブ程度のあいさつだ。……なんで大きくなってるんだ？」
ラフなパンツにできた膨らみに、静さんが楽しげな笑みを浮かべる。
「や、俺だってすげぇムラムラしてるんですよ。それでいきなりあんなことされたら……って、ちょ、静さん……っ」
柔らかな両手で股間を愛おしそうに撫でてくる。ますます勃起が膨らみ、生地を押し上げて力強く上を向く。
「ふふ、楽しみだ。ああ、麦茶を出してくれるんだったな。このままでも平気か？」
「静さん以外に見られたら頓死もんの状態ですけどね……大丈夫ですよ」
盛り上がった股間に眉をひそめつつ。
あとでどんな反撃をしてやろうか……と考えながら冷蔵庫を開けた。

×　×　×

静さんに麦茶の入ったグラスを渡し、ソファに並んで座る。
「……すいません、狭くて」
「いいじゃないか、こういうのも乙なものだよ」
わずかに身体が揺れただけでも触れ合う距離。付き合うことになった夜は心底濃厚なものだったが、そのあと1週間近くも空けていると、あのときのことが夢だったのではないかと思えてしまう。先ほどのキスから、遠のいていた感覚が徐々に戻ってくる。
距離感に迷っていると、麦茶を飲み干した静さんが俺の太ももにそっと手を添えた。
「元気にしていたかね？」
「ああ、まあ、はい。いつも通りですね。夏休みなんで限界までダラけてます」
「お、おう……そうか。夏休みの学生に勤勉を強いることはできないが……そうも堂々と言われると……」
俺の太ももをすりすりと撫でていた静さんが、今度はぺしぺしと叩いてきた。可愛さで殺しにかかっている。
「というか、君はなんでうちに来てくれなかったんだね？」
「え、あ、やー、だって……静さん、忙しいでしょう？」
「夜に来ればいいだろう。泊まっていってもいいのだから」
「それも考えましたよ。でも、付き合ってすぐにそんな感じにしていいのか迷ってて……」
「私は君が来てくれることを望んでいる。あとは君が来たいと思ってくれればそれで問題なかろう」
「うぐ……そ、そう、ですね……おあ……っ」
細指が股間に触れる。細指の淡い感触に股間がむくむくと膨れる。
静さんがぴたりと寄り添い、量感たっぷりの乳肉が二の腕に当たってむにゅりとひしゃげた。
「……君はもしかして、本能のままに交わって余計な時間をとってしまうのではと考えているのか？」
「あー……はい、それも考えてました」
静さんとの行為の楽しさ、気持ち良さは尋常じゃない。たとえ静さ

んを気遣っていても、いざ目の前で乱れる静さんを見たら自重できる自信がなかった。
「……君に抱いてもらえないせいで、私はずっとムラムラしていたんだ。ひとりで1時間も2時間もいじっていたときもあったんだぞ？」
びきり、と股間が膨らむ。静さんの目がとろりと蕩けた。
「それだけ自分で慰めても、君としたときのほうがずっと、ずっと気持ち良かった。この1週間、私はずっと身体が疼いていたんだ」
「……それなら、遠慮しないで行ったほうが良かったですね」
「まったくだ。……ぁ……っ」
肩を抱き寄せ、胸の膨らみをそっと手で包む。ワンピースの生地は薄く、ブラの手触りが感じられた。
「はぁぁ……君に早く、触ってほしかった……」
勃起肉を撫でさする静さんの声はじっとりと濡れている。
「静さん……さっきから挑発しすぎじゃないですか？」
今日はふたりでゆっくりして、夕食までいっしょにとる予定だ。会って早々行為に及んでは体力が持たないのでは……と思っていたが。
「君は……したくないのか？　私はしたい」
乳房を包む俺の手の甲を蠱惑的に撫で、パンツの中に手をすべり込ませて直接肉幹を撫でてくる。
「う……ぉあ……っ」
「ふふ、もうたっぷりと濡れているじゃないか……」
細指がうねうねと波打ち、たっぷりと溢れたカウパー液を竿の根本まで塗りたくる。
「ああもう、これがずっと欲しかったんだ……っ」
俺の喉をねろりと舐め、肉竿を握った手をゆっくりと上下する。俺がびくびくと震えるのが嬉しくてたまらないのか、ますます身体を密着させて息を荒らげる。
「静さん、エロすぎですって……っ」
「抱いてくれない君が悪い」
言葉のひとつひとつの破壊力がとてつもない。ハリボテの理性を

たやすく焼き払ってしまう。
「今週の平日はタバコの量がいつもより増えてしまったよ……君とこれから長いことといっしょにいるのだから、できるのならやめてしまいたいのだがな……」
　静さんが俺のズボンに指をかけた。俺が腰を上げるのに合わせ、ズボンとパンツを同時にずるりと下ろす。我慢汁でねっとりと濡れ光る肉竿を見るや、静さんは俺にしなだれかかり、青筋の浮いた肉茎を美味しそうに咥えた。
「んふぅぅ……っ」
　亀頭を舐め溶かすような舌遣い。待ち望んだ心地よさと快感に、肉槍がますます充実する。
「ぅ……く、ぁ……っ。俺としてるときはタバコが減るんですか？」
「んぉ？」
　静さんが亀頭を咥えたままで小首をかしげる。エロいわ可愛いわで脳がぐらぐら揺れた。
「……ぷはっ。んー……そうだな、たしかに君としているときは日頃のストレスが吹き飛んでいく感覚があって、気付いたらタバコを吸っていなかった。これを代わりに吸っているせいもあるだろうがな」
　肉竿の根本に手を添え、亀頭をぢゅるるると啜る。腰ががくがくとわななき、新たな先走り汁が温かな口内にびゅるりと噴き出す。
「それなら、ずっと俺のを舐めてたら禁煙できるんじゃないですか？」
　静さんが目をぱちくりとさせる。唇を離し、きょとんとした目で俺を見つめながら竿をしごいた。
「おっ、ぁっ、ちょ、静さん……っ」
「ああ、すまんすまん」
　目を細め、固めた舌先で鈴口をほじくる。肉幹が射精したさに疼いている。
「冗談のつもりだったんですけど……」
「いや、名案かもしれない。タバコは私にも君にも害しかないが、この行為は私も満たされるし君も気持ちが良い。うむ……いいぞ、これはいい。ふふ……」

天啓を得たりとでも言わんばかりの笑みを浮かべ、嬉しそうに亀頭を舐めまわす。血液がみなぎった肉幹は、亀頭がつるつるに輝いていた。
「比企谷。具体的な提案なんだが……とりあえず、平日は1時間、休日は2〜3時間というのはどうだろう」
「……えっと、それは何の時間ですか？」
「もちろん、これの時間だ」
静さんが肉竿を咥え、ぢゅぶぢゅぶといやらしい音を立てながら頭を上下させる。
「おっ、ぁっ、ちょ、静さんっ、いったんやめ……お……ぁ……っ」
静さんの口淫がやまない。むくむくと湧き上がる射精衝動に内ももが強張り、足の指を開いたり閉じたりを繰り返す。
「んっ、んっ、んっ、ん……っ」
静さんは止めるどころかとどめを刺そうとしてくる。ぎゅっと頬をすぼめ、口の中でにゅろにゅろと亀頭を舐めながら顔を揺らす。唇がカリ首を弾くたびに腰が跳ねる。鈴口をほじくられると通電したかのようにぶるぶると痙攣する。我慢汁はエサを前にした大型犬のよだれのように溢れっぱなしだ。
「ぐ……ぁ……出る、出る、出る……っ」
静さんの頭を押さえ、根本まで咥え込ませる。静さんは抵抗することなく、それどころかますます積極的に亀頭を舐めまわし、最後の追い込みをかけた。白濁がせり上がり、喉奥めがけて勢い良く噴き出す。
「んふぅぅ……んっ、んぐっ、ふっ、んふぅんっ、んむふぅぅ……っ」
どぐん、どぐんと脈打つ感触で、自慰のときとは比べ物にならないほど濃い精液が出ていることがわかる。静さんは色っぽく眉をひそめ、ごくりごくりと細喉を鳴らした。
「……ぷはっ。はぁ、はぁぁ……っ。……と、まあ、このようにだ」
「え、さっきの話続いてたんですか？」
「続けるとも。……これだけたくましいものに私の口が満たされて、濃厚な精液を呑めるわけだからな……ぜひとも禁煙に協力してもら

いたい」
「いや、でも……何時間も舐められたらさすがに出なくなりますよ？」
「そこはほら、寸止めで数十分くらい楽しむから。私も口の中が充実していたほうが楽しいし」
「なんすかその生殺しはぁぁぁ……っ？」
　ぬるりと咥え込み、今度はゆっくりと労わるように舐めてくる。射精直後で敏感になっている状態でも耐えられる、口の温さを楽しめるような絶妙な口淫。
「……こういう状態ならどうだ？」
「……温泉に浸かってるようなもんすかね」
「そうそう、言い得て妙だな」
　静さんが嬉しそうに笑い、亀頭をねろねろと舐める。どんだけエロいんだこの人は……。
「まあ、静さんが禁煙するのはいいことですし……協力しますよ。お互い忙しい日は無理しないってことで」
「本当か？　ありがとう。君が疲れている日も来てくれていいんだぞ？　寝ている君のものをずっと舐めるのも一興だ」
「静さん、本当にエロすぎるんですけど」
「君のせいでこんなことになったんだ、責任をとりたまえ。……あ、いや、えっと……」
「……とりあえず、そういう話は保留にしましょうか」
「……取り下げじゃなく、保留でいいのか？」
「……黙秘権を行使します」
　夢見る少女みたいに目をキラキラさせながら竿をしごいてくる。可愛さとエロさを同居させられると脳が混乱するからもっとやってほしい。いかん、頭がメダパニだ。
「今日はお試しということで、もう３０分くらいしていいか？」
「３０分と言わず好きなだけしていいですよ」
「本当か？　よーし、それなら今度は……」
　うきうきとする静さんは、本当に爛漫な少女にしか見えなかった。

続く。

（14）

スマホで時刻を確認すると、およそ1時間が経過していた。
「んぶふぅぅ……っ。ぢゅるっ、ぇうっ、んっ、んふぅぅ……っ」
静さんは俺の股座でよつんばいになり、うっとりとした顔で肉竿を舐めしゃぶり続けている。いやらしく鼻の下を伸ばしながら顔を前後させ、鈴口から噴き出す我慢汁と精液を自身の唾液といっしょに呑み下す。
「静さん……もう、出ます、出る……っ」
温かな口内で肉竿が溶け落ちてないことを実感できるのは、もはや射精による脈動のときだけだった。
「んふぅぅ……んっ、んっ、んむふぅぅ……っ」
3度目の射精を静さんがうっとりと受け止める。女の子座りになって玉袋を優しく包み、顔を傾けて喉奥まで咥え込む。陰毛に埋もれる静さんの顔はあまりにも淫猥だ。とくとくと脈打つ肉槍を、静さんは愛おしそうに撫でさすった。
「……はぁぁぁ……っ」
「満足しましたか？」
「ん……そうだな、昼食後と夜に同じような時間を設けてくれれば満足できそうだ」
「どんだけ貪欲なんですか……」
静さんの胸にそっと触れる。
「あん……っ」
乳肉をふよふよと波打たせると、静さんがおとがいを上げて甘く喘いだ。
「そろそろ俺も責めていいですか」
「ん、そうだな……私も、君にめちゃくちゃにしてもらいたい」
静さんが立ち上がり、ノースリーブのワンピースの肩紐をはだけた。淡い白のレースブラに目を奪われる。静さんは俺の視線にくすりと微笑むと、ブラをそっと外した。量感たっぷりの乳肉がわずかに垂れ、ぷるんと形を保つ。乳頭はぷっくりと膨らんでいた。

「下着の色はワンピースに合わせてるんですね」
「それでも透けてしまうから、外を歩くときは上に一枚羽織っていたんだがな。……下、見たいか？」
こくこくこくこく、と鹿威しの早送りのごとく頷く。静さんは苦笑して、くるりと後ろを向いた。俺にくいくいと肉尻を突き出し、恥ずかしそうに振り返る。どうやらめくっていいらしい。
ごくりと喉を鳴らし、ワンピースの長いスカートをぺろりとめくった。
「……う……わ……っ」
ショーツはブラと同じ白色だった。けれどその形状はきわどく、肉尻がぷりっと見えてしまっている。Tバックというやつだ。
「こんなすごいのを穿いてここまで来たんですか？」
「……なるべく人目につかないように頑張ったつもりだ」
静さんがふりふりと尻を振る。そっと手を添えると肉感的な肢体がぴくりと震えた。
「ん……ぅあ……っ」
まるで隠せていない尻肉を優しく丁寧になでる。静さんの喘ぎが甘くなり、徐々に腰を突き出してくる。
「比企谷ぁ……どうする？　このまますするか？」
「え？　でも……汚れるんじゃないですか？」
「どうせ今日は外に出ないのだから構わないだろう？」
「……うちでずっと裸でいるつもりですか？」
「それでもいいし、君のシャツを着るのもいいな。……目を見開きすぎだろう」
くわっ、という感じになっていた。静さんが苦笑する。
「それで、どうする？　……君の好きなようにしたまえ」
尻肉に添えた俺の手を握り、ふりふりと蠱惑的に腰を振る。あまりにも魅力的な提案。二択を提示しているようで、その実、選択肢はひとつしか用意されていなかった。
「……ソファに乗ってもらっていいですか。背もたれに手をついて、こっちに尻を突き出してください」

静さんの目が見開く。細喉がこくりと鳴る。
「……君は本当にいやらしいな……」
自分のことを見事に棚に上げながら、静さんがソファにひざをつき、背もたれに手をつく。ワンピースのスカートをもういちどめくり、Tバックの紐をずらした。口でするあいだよほど興奮していたのか、薄紅色の粘膜はぬらぬらと濡れ光っていた。
「はぁぁ……はやく、はやくぅ……っ」
肉尻の谷間に勃起肉をあてがうと、静さんが物欲しそうに肉尻を振った。亀頭と花びらがこすれ、にちゃにちゃといやらしい音を鳴らす。
腰を押し出すと、張り詰めた亀頭が温かな膣内にぬるりと埋まった。
「はぁうぅぅぅ」
静さんのおとがいが跳ねあがり、肉感的な肢体がぶるぶると痙攣する。蜜洞はぐずぐずに蕩けていた。少しずつ侵入してくる肉槍にぴったりと吸いつき、もっとちょうだいとせがむように食い締めてくる。
「あはぁぁ……比企谷、きもち、いぃ……っ」
振り返った静さんの表情はすでに陶酔しきっていた。いつもは凛とした目がとろんと垂れていて、まるで男性器から酒気がしみだしているかのようだ。
「静さん、奥まで入りましたよ」
恥骨が肉厚の尻に触れる感触がたまらない。静さんの腰をさすり、根本まで埋まったままぐりぐりと膣奥をこする。
「あはぁうぅぅ、あんっ、それっ、好きっ、好きだ……あっ、あっ、あぁうぅぅぅ」
静さんが顔を沈め、小刻みに震える。ソファからはみ出た足の指がぴんと反り返ってはきゅっと丸まる。怖いくらいの快感に打ち震える女体に見惚れながら、ゆっくりと腰を動かす。
「あっ、あぉっ、はぁうぅ、あはぁうぅぅ……っ」
にゅっこ、にゅこっ、にゅろ、にゅろろ。

緩慢な抽送が楽しくてしかたがない。引き抜いた肉槍は愛液で濡れ光っている。
「静さんの中、気持ち良すぎですよ……っ」
上体をかがめ、たぷんと下に伸びた豊乳の頂をつまむ。静さんの肌は驚くほど熱かった。
「くひぃん!? あっ、うくっ、はぁうぅっ、それっ、きもちっ、いぃ……あっ、あはぁっ、はぁぁぁ……っ」
乳頭をさすりながらとんとんと肉槍を突き入れる。豊満な乳肉がふるふると波打ち、結合部がにちにちと白く泡立っていく。
「比企谷ぁ……もっと、めちゃくちゃにしてくれて、いいんだぞ……っ?」
静さんが振り返り、ぞっとするほど色っぽい笑みを浮かべる。肉尻を振り、自ら勃起肉を貪ってくる。
「こ……の……っ」
獰猛な嗜虐心が燃え広がり、身体中を満たす。
むっちりした腰をつかみ、ゆっくりと腰を引く。限界まで弓を引いて狙いを定め、ひと息で仕留めるかのごとく。
「あ……ぁ……っ」
亀頭が抜ける寸前でぴたりと止まると、静さんがか細い声を上げた。期待と不安がないまぜになったような声。
汗でワンピースが貼りついた身体に見惚れながら、一気に突き入れた。
「はぁうぅぅ!?」
静さんが、まるで首につけたリードを引っ張られたかのごとく背すじを反り返らせる。絶頂にぎちりと引き締まる感触に悶絶しながら、ふたたび腰を引いて打ち込む。
「あっ、あぉっ、はぁうぅ、あはぁぅぅ……っ!」
にゅぐっ、ぱんっ、ぱちゅっ……と卑猥な打擲音が鳴る。静さんの上体が徐々にずり下がり、むっちりした身体が不自然なほど痙攣する。それでも抽送はやめない。ぜったいにやめない。
「静さん、だめですよ寝ちゃあ」

両手首をつかみ、手綱のように引っ張る。強制的に上体を起こされた静さんがいやいやと首を振るなか、一心不乱に肉杭を打ち込む。
「あっ、くうっ、あっ、あっ、あっ、あっ、イっ、く、またっ、イっ、く……ぅあぅぅ、あぅぅぅぅ」
静さんの背すじがびんと伸びて硬直し、ぶるぶると痙攣する。肉洞はもうどろどろに溶けていた。どんな角度で、どれほどの強さで突き入れても、柔らかく受け止め、男根を味わい貪ってくる。
「ひきがやぁっ、ひぐっ、またっ、イクっ、あっ、あっ、あっ、あ……っ」
静さんが痙攣する。それでも止めない。
「な、なあ、ひきがやぁっ、もっ、ほんとにっ、あっ、またイクっ、イクイクイク……うんんん」
小刻みにイっているのか、イキっぱなしなのかどうかもわからない。
「ひきがやぁ……もうっ、だめっ、息できなっ、あっ、あぅっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ」
すがるように俺の手首を握り返し、白い背すじを反らす。激しい抽送と度重なる絶頂で静さんの呼吸は絶え絶えになっていた。俺も呼吸が荒い。心臓が痛む。ソファが壊れるのではと思うほど軋む。筋肉も軋む。本来ならとっくに射精していてもおかしくない。けれど何度も口でイカされたせいか耐えることができる。それでも射精しそうになる。もう少しだけこの人を貫いていたい。めちゃくちゃにしたい。だから歯を食いしばってこらえる。首に筋を浮かべて我慢する。内股に力を込めて耐え忍ぶ。
「ひきがやぁぁ、あぁぅぅぅ……っ」
静さんが振り返る。もはや何の力も入らないのか、振り向いた顔が突き入れのたびにがくがくと無防備に揺れる。静さんを限界まで追い込み、俺自身も極限まで追い込む抽送。肛門を締めて射精をこらえ、こらえ、こらえて――
「静さん、出る、出る、出る……っ」
もはや反応はなかった。「あっ、あっ」と壊れたように喘ぐ声と蜜肉の締め付けが、静さんにまだかろうじて意識があることを伝えてい

た。
どちゅっ、と強烈に膣奥をノックする。湧きあがる射精欲求に身体が強張った。
鈴口から白濁が噴き出す。
「あぉぉぉぉぉ」
うつむいた静さんが獣のような嬌声を上げる。
「ぐ……お、ぁ……っ」
射精の勢いが強すぎる。あまりにたくさんの白濁が狭い鈴口から我先にと飛び出そうとしてくる。カリ首から先の尿道が熱い。どぐどぐどぐと張り詰めた肉杭が脈打つ。静さんは身体をよじらせ、強すぎる快感に打ち震えていた。
上った山道が長ければ帰りも長いように、強すぎる絶頂の余韻は中々去らなかった。俺も静さんも、しばらくのあいだ微動だにできずにいた。
「……比企谷」
「……すいません、やりすぎました」
ゆっくりと肉槍を引き抜くと、静さんは背もたれに顔をうずめ、ぶるりと震えた。脚のつけ根からふたりの性液が溢れ、ソファにぼたりと垂れ落ちる。
「……いや、その、なんというか……良い。めちゃくちゃ良かったぞ」
「え、あ、そうですか？」
完全にやりすぎたと思ったので面食らう。
「できるなら毎日これくらいしたいところだ」
「それは俺が死ぬんで勘弁してください……」
「何を言う。慣れれば大丈夫だろう」
静さんがくるりと翻り、ソファに腰を下ろす。かと思えば前のめりになり、ぐったりと力を失った肉竿をぱくりと咥えた。
「んっ、んぢゅっ、ぢゅっ、ぢゅるるる……っ」
「おっ、ぁっ、ちょっ、静さん……っ」
まとわりついた愛液と精液を舐めとったあとも口淫は続く。上目遣いで俺を見つめながらゆっくりと顔を前後させ、亀頭を丁寧に舐め

しゃぶる。玉袋を愛おしげに撫でさする安心感も相まって、さすがに休憩をしないと……と思っていた肉竿がむくむくと大きくなった。
「ちょっ、うぐっ、静さん……っ？」
「せっかく大きくなったんだ。まだ私の服は汚れていなかったからな。思う存分汚すといい」
竿をちゅこちゅことしごきながら、くぱっと口を開けて鈴口を舌先でほじくる。あまりに扇情的な手淫。
「おっ、あっ、今出しても大して出ませんよ……っ」
「構わないさ。君に汚してもらえれば、それで充分に嬉しい」
にぃっ、と目を細めてのたまらない言葉に背すじが焼け付く。淡い射精衝動が込み上げ、ぎゅっと眉をひそめた。
「お、出そうだな。素晴らしい。ほら、出したまえ……っ」
肉竿が引っ張られて前かがみになる。静さんは肉竿をしごきながら、Tシャツをめくりあげて乳首に吸い付いてきた。
「おっ、ぁっ……も、もう……ぅぐ……っ」
びゅるびゅるびゅる……っと精液が噴き出す。明らかにさっきよりも勢いはないが、それでもまだこんなに出るのかと驚いた。
「ふふ……たっぷり汚されてしまったな。これでは外に出られないな」
「……ほんと、どんだけエロいんですか……」
呆れたようにつぶやくと、静さんはくすりと笑い、亀頭にちゅっとキスをした。
このあとはワンピースを洗濯にかけ、裸でたっぷりと交わった。いったんシャワーを浴びると静さんは俺のTシャツ1枚を羽織り、ことあるごとに誘惑をしてきた。もちろん拒否するわけもなく、一日中たっぷりと交わった。
慣れれば大丈夫、と静さんは言ったけれど。
これだけたっぷり搾られれば、否が応でも鍛えられて慣れそうだな、と思った。
ちょっとハードすぎるけれども。

続く。

（１５）

静さんに「いつでも家に来ていいぞ」と言われたことは、俺の中でとてつもなく大きな意味を持った。

俺は夏休みの暇な時間を持て余した大学生で。

静さんは凛とした魅力的な女性で、アレなところがある性格も俺にとっては心地いい。

そして何より、ふたりとも互いを求めている。

それらの要素が掛け合わさった結果、俺と静さんは付き合いたての高校生カップルもかくやというペースで会うようになった。

日曜夜は静さんが俺の部屋に泊まり、平日はほぼ毎日俺が静さんの部屋に泊まった。

今まで自慰をすると言ってもせいぜい一日に1回、多くて2回といった具合だった。高校生としては多いとは言えないが少なくもない程度だろう。

それが静さんと過ごしていると、平気で3、4、5回としてしまう。それでいてさらにムラムラしてくるのだから、いつか本で見た「エネルギーは使えば使うほど湧いてくるもの」という言葉は本当なのかもしれない。

ほぼ同棲では……と思えるような日々を送った週末、初めてふたりでデートすることにした。付き合う前であればしょっちゅうラーメンを食べに行っていたが、付き合ってから外出するのは初めてだった。

×　×　×

「あっつ……」

８月も後半に差し掛かった土曜日。容赦ない真夏の日差しが身体とコンクリを焦がす。街路樹にとまったセミが今こそ命の盛りなりと全力で鳴いていた。

待ち合わせ場所の駅前でスマホを確認する。待ち合わせ時間の２０分前に来たが、予定より1時間早く起きてしまったので目は冴えわたっていた。しゃっきりした頭の割に集中力はなく、ＬＩＮＥの通知

が来るだけでぴくぴくと反応してしまう。
「比企谷、待たせたな」
「あー、や、ぜんぜん……」
聞き馴染んだ声に振り返ると、
「……ぜんぜん……」
ぴたりと思考が停止して、同じ言葉を繰り返してしまった。直前の口の動きをなんとかそのままたどったような、そんな喋り方。
静さんはノースリーブのサマーニットにミニスカート、ミュールという格好だった。シンプルながらも豊満な身体のラインがくっきりと浮かんだ上半身、すらりと伸びた脚、そして何より、ちらちらとこちらの反応を窺う照れた顔。
「は、はは、すまない、さすがに無理があったか？　デートだからといって年甲斐もなく……はは……」
静さんがスカートの裾をしきりにくいくいと引っ張り、俺の視線に気付いて身をよじらせる。
「……大胆なのか恥ずかしがりなのかどっちなんですか……」
「す、すまない……見てほしいんだが、見てほしくないような……」
「……可愛すぎですって」
「……へ？」
「何でもないです、行きましょう」
「比企谷？　いま可愛すぎと言ってくれたな？」
「ばっちり聞こえてんじゃないですか……しかも付加疑問文……」
灼熱の陽射しと羞恥心が、顔の外側と内側から炙ってくる。
照れ隠しになにか言おうと振り向く。
静さんは艶やかな黒髪の毛先を指にくるくると巻き付け、上機嫌に笑っていた。無邪気な表情に力が抜ける。
「……似合ってます、すごく」
ここできちんと本音を言わないのは、彼女が俺に使ってくれた時間に報いていないような気がしたので、ぽそりと告げる。なるべく小さな声で。
静さんがぴたりと動きを止め、にいっと肉食獣のような笑みを浮か

べた。
「ふふ、君も成長しているようで何よりだ」
「全力で褒めちぎってやりましょうか」
「それは……嬉しいが、デートどころじゃなくなりそうだ」
「デートどころじゃなくなった場合はどうなるんですか？」
「私の家に行く」
「乙女なのか肉食なのか……」
「どちらも私だよ。さあ行こう」
静さんが俺の手をぱしりととって足早に歩きはじめる。
「え、あ、ちょ……」
慌ててついていく俺は、傍から見れば下手をすれば弟、あるいはいとこのように見えるかもしれない。そう思われるのは恥ずかしいし、静さんにも申し訳ない。
なので、
「お？　比企谷も乗り気じゃないか」
静さんに並んで歩くと、しっかり手をつないでなるべく悠々と歩くようにした。
「まあ……せっかく初めてのデートなわけですし」
「君からデートという単語を聞く日が来ようとは……」
「俺だってそれくら言いますって」
「どうかな？　私を誘うとき、『ちょっと買い物行きません？』という言い方だったろう？」
「……記憶にございません」
「裸のときはもうちょっと素直なんだがなぁ」
「静さん、今日の格好めちゃくちゃ似合ってます。可愛いです」
「う……ぐぐ……」
俺と同じくベッドの上以外は乙女な静さんの顔が赤くなる。けれど俺の顔も熱かった。つないだ手はどちらも熱くなっているのか、変化が起きているのかどうなのかがいまいちわからなかった。
×　×　×
静さんの提案で、今回のデートでは普段やらないことをやってみる

ことにした。
俺も静さんもひとりでの時間をいくらでも楽しめるタイプだ。
なのでふだんひとりでどんな感じで過ごしているかを確認しあったところ、ふたりして買い物は即断即決タイプだということがわかった。
ぼんやりと食材を買いに行くことくらいはあるが、服にしろ何にしろ基本的にすぐ決める。５～１０分くらいで店を出ることがザラなのだが、静さんも同じくらいの速度というのが驚きだった。アパレル店員も話しかけるヒマがないだろう。
そういったふたりの行動を鑑みた結果、試しに世の若き女子もすなるウインドウショッピングといふものを我らもしてみむとするなり。あのときのふたりの浮かれようを思い出して恥ずかしくなった結果、なにやらおかしな言い方をしてしまった。
店の商品をただ見て回る。それこそ秋葉原に行って好きなジャンルを眺めるならまだしも、汎用性抜群で老若男女に届けとばかりのこのショッピングモールでそんなことをして何が楽しいのか……と危惧していたが、結果としては普通に楽しかった。
商品を見る行為自体が……というよりは、商品を見ている静さんを見ることが楽しかった。
衣服、楽器、靴、本、その他諸々の店をのんびりとひやかす時間。静さんは思いのほかノリノリで、まるで箱入り娘が初めて外に出たかのようにあらゆるものに興味を示していた。家ではあれほど大胆なのに、デート中の彼女は本当にウブな少女のようにしか見えない。歪なくらいのギャップの破壊力はすさまじい。
「静さん、今日はいつになくテンション高いですね」
「そうか？　ふふ、浮かれているのかもな。……待て、今のはナシで頼む」
「手遅れですね」
といったやりとりもした。静さんの顔はほんのりと赤らみ、俺の顔も熱かった。
週末の賑わいを見せるフードコートで昼食をとってからもウイン

ドウショッピングを続け、ここを最後にしようと雑貨店に入った。女性向けのリーズナブルな商品が所せましと並んでいる。
「うーむ……普段はこういった場所にぜんぜん来ないからなぁ……」
静さんが腕を組み、ずらりと並んだネックレスを眺めている。むっちりした二の腕に目が釘付けになり、それを静さんに気付かれ、ひじで小突かれた。痛みでのけぞって危うく後ろの品物にぶつかるところだった。
「静さん、こういうのあんまり着けてる印象ないですね、そういえば」
そっと近づくと、静さんが俺の手を握った。誰からも見えない角度で、俺の手のひらをすりすりと指の腹で撫でる。
「たまには買うんだがね。じっくり買い物を楽しむ感覚がない分、本当にささっと決めてしまうからなぁ……コンビニと所要時間が大して変わらんのさ」
「それはすごいですね……」
ネックレスを眺めながら、むき出しの白い二の腕をふにふにと押しつけてくる。え、なにこの人、可愛すぎるんですけど。
「今日はただ眺めるだけのつもりだから、勉強するくらいのつもりで……お？」
静さんが手を離し、ひょいと手を伸ばした。
俺に背を向けてもぞもぞと何かしたかと思うと、
「これなんかどうだ？」
雫の形をしたターコイズブルーのイヤリングを耳に添え、どこかいたずらっぽくはにかんだ。
さらりと流れる黒髪、ほんのりと赤らんだ頬、そして淡い光を放つターコイズブルーのイヤリング。
「……それ、プレゼントします」
「へ？　あ、いや、私はそういうつもりではなかったぞ？　買うなら自分で……」
「いや、俺がプレゼントしたいだけなんで。バイト代もそれなりに貯まってますし。気にしないでください」
「あ、う、そ、そう、か……あ、ありがとう……」

静さんがしきりに髪を撫で、上目遣いで礼を言う。家にいたら迷わず抱きしめていた。
イヤリングを耳に添えた静さんはあまりにも綺麗だった。この場限りでこの光景が見れなくなるというのはあまりにもったいない。機会損失にもほどがある。そう思っての提案だった。
会計をする前に、静さんが店員に何か伝えていた。会計後、イヤリングは袋に包まれることなく、タグを外して静さんに直接手渡される。
「比企谷、店の外で待っていてくれ」
「ん、わかりました」
とんとんと背中を押す手のウキウキが伝わってきて、俺まで楽しくなってしまう。
数メートル先の自販機のラインナップを眺めていると、ためらいがちに肩を叩かれた。
「比企谷、ど、どうだ……？」
両耳にきらりと光る雫の形をしたイヤリング。静さんは半歩だけ俺と距離を詰め、上目遣いではにかむ。
「……家にいたら色々とやばかったです」
静さんが目をぱちくりとさせ、それからにやりと笑う。
「ほう？　それは具体的にどういう心理状況なのかな？　詳しく説明したまえ」
「そろそろ帰りましょうか」
「待て、逃がさんぞ」
すたすたと歩きだす俺の背中を楽しそうに、実に楽しそうにでしでしと叩き、俺の手を取り、「ほれほれ、どうなんだ？」といたずらっぽく問い詰めながらにぎにぎとしてくる。静さんは今この瞬間も俺を殺しにかかっている自覚はあるんだろうか。ちょっと説教してやりたい気持ちになった。

×　×　×

車の中でも静さんは上機嫌だった。鼻唄を口ずさみ、信号待ちでは俺の手の甲をすりすりと撫で、しきりにイヤリングに触れていた。プ

レゼントひとつでこれだけ喜んでもらえる姿を見ると、遥か昔の人が国を傾けるのも厭わぬほどにひとりの女性に入れ込む気持ちもわかる気がした。
　静さんのマンションの地下駐車場に着くなり、唐突にキスをされた。
「んむ……っ？」
　驚いたものの、密室でこんなことをされたらムラッとするにきまっている。周囲に誰もいないことを確認して舌を入れた。静さんは目を見開いたものの、すぐにうっとりと舌を巻き付け、俺の股間をすりすりと撫でまわした。
「今日は君との純粋なデートを楽しみたかったわけだが」
「そうですね」
「ぶっちゃけるぞ」
「どうぞ」
「ムラムラしてた」
「……」
「硬くなったな」
　静さんが下腹部の膨らみを嬉しそうにきゅっきゅっと揉む。
「普通に手をつないでいる分には良いんだがな。食事で満腹になったあととか、あとは雑貨屋で触れたときとか……正直、君のここを触りたくてしかたなかった」
「……静さん、エロすぎることを言ってる自覚あります？」
「もちろん」
　静さんがチャックを開け、細い指をするりと忍び込ませる。肉竿に優しく触られただけで先走り汁が溢れ、パンツに染みが浮かび上がった。
「私はどうやら、外ですることにも興味があるようだ」
　しゅるしゅるとパンツ越しに竿を撫でながら静さんが囁く。湿った吐息が耳朶に吹きかかり、肉茎の勃起は増すばかりだ。
「どんだけエロいんですか……まあ、やりたいなら付き合いますよ」
「本当か？　しかし、無理やり巻き込むのは避けたいな……ん……っ」

ノースリーブの腋の部分から指を挿し込み、ブラ越しに乳房をふにふにと揉む。静さんの目が甘く蕩けた。周りをちらちらと伺いながら、ついばむようなキスを何度も繰り返す。
「場所とか状況によりますけどね。スリルがありすぎる状況じゃなかったら、まあ、たぶん大丈夫です」
「そうか、ならば考えておくよ。……ここでこれ以上するのはさすがにまずいか」
「俺はいいんですけど、見られたら静さんが気まずいですよね」
「たしかにな」
静さんが困ったように笑い、肉竿をくにくにと揉んで名残惜しむようにキスをした。
車を出ると、静さんは辺りをきょろきょろと見回し、にっと笑って股間をすりすりと撫でた。
「また楽しみが増えたな……」
ちろりと舌なめずりする静さんの尻をそっと撫でる。静さんは唇を引き結んで「んっ」と甘く喘ぎ、ギラついた目で俺を見た。
「今にも襲いかかりそうですね……」
「こんな凶悪なものを持っている君が悪い」
エレベーターに乗るなり、静さんが遠慮なしに勃起肉を握り締めた。
このあと、力尽きるまで一晩中交わった。静さんは裸になってもイヤリングを着けていて、間接照明を浴びて昼とは違う妖しい輝きを帯びるイヤリングと、俺に跨ってねちっこく腰を振る静さんの艶姿にただただ見惚れた。

続く。

（１６）

とある夏の日のこと。

自宅のソファで寝転がってだらだら本を読んでいると、クッションに座って俺の腹を撫でながら動画を眺めていた静さんが急に立ち上がった。

「よし、海に行くぞ比企谷」

「え、いやですけど……」

カウンタータイプのボクサー並みの手際の良さで斬って捨ててしまった。静さんは俺がこんな食い気味で返事をすると思っていなかったらしく、テンション高めに拳を握り締めたままで「ん？」と首をかしげた。可愛いなおい。斬られたことに気付かない浪人みたいにも見えるけど。

「比企谷。今なんと言った？」

「いやですけど、って言いましたね」

「……」

「ちょ、露骨に落ち込むのやめてくださいって……」

流れるようにクッションに座り直し、ひざを抱えてしまった。へこみ方に時代を感じますよなどと言えば確実に事故るので下手なことは言えない。

「はぁ……そうかぁ……いっしょに行ってくれないのかぁ……」

「や、だって暑いわ人が多いわでぜったいめんどいじゃないですか。家にいた方がいいですよ」

「その意見には賛同しかしない。しないが、失った青春の１ページを取り戻したい」

「すげぇ真摯な顔だ……」

キリッ（半角カタカナ）みたいな顔をしてらっしゃる。

「本当にだめか……？　失った青春の１ページ……２ページ……３ページ……足りない……足りない……」

「怖い怖い怖い」

番町皿屋敷みたいになってるんですけども。

静さんが半袖のTシャツの袖をちまっとつまんでくる。絡み方は非常にめんどくさいが、それも含めてどうしようもないほど可愛く思えてしまう。あばたもえくぼとはこのことか。ちなみに漢字で書くと痘痕も靨な。なんか怖い。

「……わかりましたよ。いつ行きます？」

「おお！　乗ってくれるのか！」

静さんがぐっと身を乗り出してくる。目がキラキラしすぎてまぶしいええい離れろ可愛い鬱陶しい可愛い。大きなしっぽがふりふり揺れているさままで幻視してしまう。

「ちょ、そんな……」

近いですって、と言おうとした矢先、カットソーから覗く深い谷間に目が行ってしまう。ほぼ毎日触れて、もっと言えば数十分前も触っていた場所。

「ん……？　……ふふ、君は本当にわかりやすくていいな」

「いや、そんなこと……っ!?」

ハーフパンツの膨らみに手を添えられる。

「話し合う前に一度抜いておくか」

この人、エロいことをほんとサラッと言うんだよなぁ……。

けれど、それもまた良いと思ってしまう辺り、俺もだいぶ染まっているらしい。

×　×　×

数日後、静さんの車で海に行くことになった。静さんはTシャツにショートパンツというシンプルな姿だが、付き合うようになってから明らかに色気が増していてなんというか目に毒だし眼福だ。一瞬で矛盾する言葉を並べるくらいには混乱している。

海に行ったらすぐに遊びたい、という静さんの言により、ふたりとも家を出る段階で水着を着ていた。小学生のプール遊びガチ勢のごとく。

静さんの水着はまだ見ていないが、静さんが伸びをしたときなどにうっすらとそのシルエットが浮かび上がってしまう。静さんは俺の昂りを見透かすように、信号待ちのたびに股間を握ってきた。爽やか

極まる場所へ向かっているのにムラムラするとはこれいかに。
向かった先は最寄りの海水浴場だった。今日はひときわ気温が高いこともあってか、ビーチにはかなりの人がいる。
「比企谷、どうだね？」
「どうって……ビーチにいるだけでライフが削られそうですけど」
「君は相変わらずだな」
べしべしと背中を叩かれ、なぜか人差し指で背骨をなぞられた。
「ひゃんっ」と子犬みたいな声が出てしまい、静さんが顔をそむけてぷるぷるする。このひと最近俺で遊んでません？
「よっこいせ……っと」
車に積んでおいたビーチテントをえっさほいさと運ぶ。舗装された道路を歩く分にはさほど問題ないが、それなりに重いものを持って砂浜を歩くのは何かの苦役かと思ってしまった。
ビーチテントをふたりがかりで設営して、ひと息。
「このテントなら周りからも見えないからな。着替えるとしよう」
静さんが楽しげにテントに潜り込む。ビーチテントは周りから視界を完全に遮断できるフルクローズタイプだった。強烈な陽射しのほとんどを防いでいて、中は薄暗い。海に行くと決めた日に静さんチョイスで注文し、つい昨日届いたものだ。ありがとう密林さん。
着替えるロッカーはかなり混んでいると予想していた通り、明らかに行列ができていた。こりゃ楽でいいや……と思いながら、静さんに背を向けて服を脱ぐ。
海パン姿になったところでとんとんと肩を叩かれる。
振り向いた瞬間に唇を奪われた。
「んむ……っ？」
暗い中で細指が蠢き、俺の耳、首筋、鎖骨、胸、腹、股間とねちっこい手つきで撫でてくる。手のひら全体でじっくりと愛でるように膨らみをさすられ、海パンの中でびゅるりと我慢汁が噴き出た。
「……ぷはっ。驚いていないんだな？　少し意外だ」
静さんが俺の鼻先をあぐあぐと甘噛みし、唇をあむっとついばむ。理性を一瞬で蒸発させるほどの甘ったるくていやらしい仕草。

「……や、どうせそのうち仕掛けてくると思ってたんで。テントだってわざわざ周りから見えないタイプにしてる時点でなんとなーく察してましたよ」
更衣室が混んでいるのは事実だが、行列の進む速度を見ればさほど待ち時間は長くない。というかそもそも、着替えようと思えば車でもできる。
それなのにわざわざビーチテントを注文したことと、最近の静さんのエロさを合わせて考えればなんとなく予想がつく。
「ふむ。つまり君は私が襲ってくるとわかったうえでビーチテントに入ったわけだな」
「あー……まあ、うーん……どうですか……ね……っ」
滑らかな指が海パンのチャックを開けて中に入り込んだ。勃起肉を引きずりだして指を巻きつけ、にぎにぎと楽しそうに握ってくる。
テントの薄膜一枚の向こうでは、たくさんの海水浴客が楽しそうに遊んでいる。そんな状況で行為に及ぶなど、ほんの少し前までは想像さえしなかった。
静さんといる時間はまだ短いが、それでも許容範囲が広がる……というよりは捻じ曲がるくらいには影響しているらしい。
さて、どう反撃してやろうか……と思っていると、静さんが唇を離し、Tシャツとショートパンツを素早く脱いだ。
「どうだ？」
シンプルな三角ビキニ姿。肢体の純粋な美しさが問われる姿だが、視線が縫い付けられるほどに似合っている。薄暗い半個室のような状況で見ると妙に背徳的にも思える。
「……めちゃくちゃ似合ってます」
「ふふ、それなら良かった」
それじゃあ……とつぶやいた静さんが、日焼け止めクリームを手渡してくる。
「塗ればいいんですか？」
「いや、私も塗ろう。若いからと油断してはいけないぞ？」
静さんがいたずらっぽく笑い、俺の腰に両脚を巻きつけてくる。カ

ウパー液の溢れる亀頭がビキニに食い込み、ねっとりとした糸を引く。周りの喧騒が遠ざかり、鼓動が聞こえそうなほど高鳴る。
促され、両手で水を掬うような形にする。静さんが見せつけるように日焼け止めクリームをたっぷりと垂らした。
「塗るコツとかありますか？」
「難しく考えなくていい。私の肌に思うまま塗りたくってくれ。そうすれば自然といきわたるだろうさ」
「俺が全身まさぐるのを前提にしてるんですかね……」
「いつもそうだろう？」
静さんも自分の手にクリームを塗り込み、俺の背中に腕を回す。細指が楽しそうにまさぐってきたので、俺もそれにならってなめらかな背中にクリームを塗りたくる。
「ふっ、んん……っ、ふふ、相変わらずいやらしい手つきで何よりだ」
「クリームを塗ってるだけなんですけどね……。……ってか、ちょ……っ」
静さんが挑発的に下腹部をこすりつけてくる。外気に晒された肉茎がぎちぎちと張り詰め、これ以上はまずいと腰を引く前に唇を重ねられた。
「ん……ちゅっ、ぢゅるっ、んっ、ふっ、んむふぅぅ……っ」
顔がゆっくりと傾き、鼻先がこすれあい、柔らかな唇が密着する。静さんの指が胸板を撫でまわし、乳首を丹念に、執拗なまでにこねくり回してくる。俺もお返しに胸の露出した部分を撫でさすり、下腹部を包むビキニの中に手をすべり込ませて肉尻を揉んだ。
「んふぅぅ……っ？　へぁっ、あっ、はぁっ、ひきが、やぁ……んっ、んっ、ん……っ」
尻肉をまさぐられ、静さんがますます蠱惑的に腰をくねらせる。肉茎は早く楽になりたいと訴えるように張り詰めている。
静さんがビキニをそろりとずらした。亀頭に生温かくて柔らかな粘膜が当たる。
「ちょ、静さん……っ、それはさすがに……っ!?」
最後まで言い切る前に、静さんが肉槍の根本をつまみ、自ら腰を押

し出した。勃起肉が温かな膣肉の中に一瞬で埋まる。
「はぁうぅぅ……っ」
俺の腰に両脚を巻きつけたまま、静さんが白い喉を晒して薄く喘ぐ。いつもは遠慮なく上げる動物じみた声を懸命に殺しているのが色っぽい。静さんの中はぬるぬるを通り越してどろどろだった。そのくせ締めつけはキツく、甘えるようにきゅっきゅっと吸いついてくる。
「静、さん……っ、まずいですって……っ」
背すじを弓なりに反らせた静さんの腰を持って囁く。自然と肉槍が深くまで入り込んでしまい、静さんはますます気持ち良さそうに身をよじらせる。
「だ、大丈夫、だ……っ。声を殺しておけば、誰も気付きはしないよ……っ」
顔を傾けて微笑む静さんの顔が、ぞっとするほどの色気を孕んでいた。後ろ手をついたままでぐりぐりと腰を回し、えげつないくらいに下腹部をこすりつけてくる。行為をやめる気はさらさらないようだ。
「おっ、ぁっ、ぐっ、うぅ……っ」
あぐらをかいた状態での気だるげな抽送。家でなら誇張抜きに一時間でも繋がっていられる体位だが、状況が状況だけにあまり長い時間はかけられない。くびれた腰を掴み、扇情的な腰遣いに合わせて肉槍を突き入れる。
「あっ、ぅあっ、はっ、はぁぁぁ……っ」
静さんの恍惚とした声。薄暗いテントの中に甘酸っぱい匂いと生々しい湿り気が満ちていく。
「比企谷ぁ……気持ち、いいかぁ……っ？」
「ぐ……ぅ……めちゃくちゃ、いいですよ……っ。静さんは……っ？」
「私かぁ……？　私は……」
静さんが腰を上下に激しく振り始めた。肉槍の裏スジがごりごりとこすられるが、柔らかくたっぷりと潤んでいるため痛みはない。
「すごく、気持ちいいぞぉ……っ？」
「お、あ……ちょ、これ、やば……っ」

にゅぐにゅごにゅる。肉槍を根本までねじ込んだ状態で向きが次々と変えられ、射精欲求が下腹部の奥から引きずりだされる。
「はぁぁ……比企谷、大きくなってきたぞ……？　声を出さないようにな……？」
「ぐ、うぅ……それはこっちの台詞……お、ぁ……っ」
静さんが俺の腋に手を差し込み、親指で乳首をこすってきた。ちろりと舌なめずりする仕草に背すじがぞくぞくする。
「こ……の……っ」
ここまでやられっぱなしで黙っていられるわけがない。歯を食いしばり、腰を掴む手に力を込め、一突き一突きに力を込めて膣奥をねちっこくこする。
「はぁうぅぅ……っ、あっ、はぁっ、こっ、こらっ、そんなに激しくしたらぁ……っ」
にゅちにゅちと鳴る結合音に焦ったのか、静さんが慌てて起き上がって抱きついてきた。ぴったりと密着した状態でこれなら安心と微笑む静さんの肉尻を掴み、膣奥をさらに執拗に小突く。
「あっ、ぐっ、ふっ、こっ、こらっ、なんでっ、そんなねちっこく……うぅぅぅう」
静さんの肌からぶわっと汗が浮き出る。背中をすがるようにさすり、唇を重ねてきた。口内にはこぼれないのが不思議なくらいに唾液が溢れていた。舌を絡ませながら熱い唾液を啜り、背すじを反り返らせて唾液を流し込む。
「んむ……ぐっ、んむふぅぅ……っ」
静さんの手にぎりぎりと力がこもる。肉尻が扇情的に円を描き、肉槍の向きがぐりぐりと変えられる。射精衝動が込み上げ、膣奥をどすどすどす、とひときわ力強く突いた。
狭い尿道を我先にと駆けあがった白濁が勢いよく噴き出す。
「んふぅぅぅう……っ」
静さんが目を見開き、細め、全身を小刻みに痙攣させる。肉槍の根本から先端までみっちりと締めつけられ、目まいがしそうなほどの快感の中で幾度も脈動する。頭をがっちりと掴まれた。髪の毛に指を

挿し入れ、ずりずりとすがるように撫でられて背中が粟立った。
ふたりの絶頂の波が引くと、とたんに海の喧騒が戻ってくる。ここが海水浴場であることをようやく思い出した。静さんとの行為は夢中になりすぎて、ついつい今いる場所や時間を忘れてしまう。
「ん……たくさん出たな」
猫が甘えるように鼻先をこすりつけて嬉しそうに囁き、射精を終えた肉茎をきゅっ、きゅっと締めつけてくる。大人びた女性らしさと、少女のような無邪気な可愛らしさがごちゃ混ぜになった魅力にくらくらする。
結合を解くと、静さんは精液が溢れる前にビキニを元の位置に戻した。
「ふふ……君を感じながらビーチで遊ぶというのも乙なものだな」
「静さんの職業を忘れそうになるような発言ですね……」
「君以外にこんなところを見せてたまるか」
さらりとたまらないことを言って笑う顔はやけに艶々としていた。この人エロすぎでしょ……。
「日焼け止めは汗や海水でも落ちないタイプとあるが……それにしても汗をかきすぎたな。念のためもう一度塗るか」
「それは構わないんですけど……え、すぐ遊びに行くんですか？」
「？　当然だろう？」
「どんだけ元気なんですか……」
「むしろ君はなんで私より元気がないんだ」
むーと唇を尖らせ、半勃ち状態の竿をぱくりと咥える。
「んっ、んっ、ん……っ」
あぐらをかいて後ろ手をつく俺に、しなだれかかる形で気だるげにしゃぶる静さんがあまりにも色っぽい。
「……ぷはっ。ここはすぐに元気になるのにな」
「そりゃそうですって……」
「どうする？　もういちどするか？」
「さすがにその勇気はないです」
すぐに海で遊ぶか二回戦をするかというあまりにもスパルタな選

択肢。これ以上行為に及べばいつ周りに気付かれるかわからないので、おとなしく日焼け止めを塗りなおして遊びに出ることにした。

続く。

（17）

ビーチテントを出たとたん、海と人混みの音の洪水が耳朶を叩いた。家を出たら目の前で祭りをやってたかのような気分だ。
「来てから言うのも難ですけど、海って何すりゃいいんですかね」
黒ビキニに包まれた静さんをちらちらと見ながら尋ねる。色気の暴力とも言える見た目自体も気になるが、周りの目も気になって仕方ない。おいこらそこのパリピ、エロい目で見てんじゃねえぞ。ファーストブリットを食らいてえのか。ここで手を出す想定が俺じゃないというヘタレぶり。
「大人数で来てるわけでもないのだし、ただ散歩をしたり海に浸かっているだけでも楽しいんじゃないか？　……」
静さんがくすりと困ったように笑ったことで、人目を気にしすぎて話半分にしか聞けていない自分に気付いた。
肉付きの良い腕がするりと絡められる。
「お、え……静さん……？」
静さんは笑っていた。とても楽しそうに。
「心配するな、私は君のものだ」
ぐらり、と世界が揺らぐほどの破壊力。目を見開き、ぐびりと喉を鳴らしてしまう。
「君はわかりやすい捻くれ者だな」
「めちゃくちゃめんどくさい生き物じゃないですか……」
浜辺を歩きながら交わす会話。静さんの言葉を聞いていると自然と人の目がどうでもよくなってくる。この人の表情が、仕草が、言葉が、するりするりと身体になじんでいく。
「めんどくさいのは私も同じさ。君と深く接するようになって、自分のめんどくささをそれなりに自覚するようになったとも。長文メッセージを送るとそれに反比例するかのように君の返信が雑になる現象を通してな……」
「すげぇ根に持ってるじゃないですか……」
ぎりりと抱きしめられる。柔らかな胸に腕が挟まれて天国でしか

ないけれど。
「君は愛情の見せ方が分かりづらいが、それでも君の妹……小町と話していると君の生態がある程度掴めてきたよ」
「生態って……」
ぼっち目腐れ目科とかかしら。ちなみに世の中には意識高い目ろくろ回し科とか、先輩風びゅんびゅん目イキリマウンテン科とかもいる。この世は地獄だな……。
静さんはやたらと上機嫌に笑っている。しきりに胸を押しつけては俺の反応を楽しんでいるのがちょっと腹立たしい。けど悔しい、もっとやってくださいって思っちゃう！
「君は心の開き方が特殊で面白いな。普通なら仲が良い人に心を開くところだが、ふたりきりになったらろくに会話ができないような人と突っ込んだ言葉を交わすこともよくあったろう？」
「あー……うん、思い当たる節だらけですね」
総武高にいた頃を思い出してふっと笑ってしまった。素直な笑いとは到底言えない、困ったような苦笑い。
静さんは目をぱちくりとさせ、腕を組んだまま手をつなぎ、するりと指を絡めた。
「……そんな君だが、どうやら身内と認識している人にはずいぶんと素直になる節がある。心の距離がある程度近付いた人、とも言いかえることができるかな」
「……そう言われると割と普通に聞こえるんですけど」
「たしかにな。けれど君の愛情表現は迂遠難解複雑怪奇にすぎるからな。傍から見ていると仲が良いのかそうでないのか分かりづらかったりするのだよ」
「漢字を並べて盛大にｄｉｓられた感がすごい……」
「ありのままを述べたまでさ」
そういえばこれ、何の話だっけ……と思ったところで、静さんが口元をもにょつかせ、目を泳がせた。なんだこの人可愛いなと悶えていると、追撃するように上目遣いをしてくる。
「あー、その、なんだ……ちょっと遠回りをしてしまったが……君は最

近、どうやら私も身内のようなものと認識してくれている気がするんだが……間違いないかな？」
　こほんこほん、と咳払いして、めいっぱい取り繕った顔で尋ねてくる。それでいて頬は赤らんで声はうわずっているのだから、にやけないでいられた俺を誰か褒めてほしい。
「……静さんもたいがいめんどくさいですね」
「……さっき言っただろう、自覚はしてるとも」
「まあ、その認識で合ってるんじゃないですかね」
「む？　ほんとか？」
「何して遊びましょうか」
「ごまかし方が下手すぎるだろう……」
　明らかにウキウキとした様子で追及してくる。あんまりにも嬉しそうで反論もできない。なんだこのめんどくさ可愛い人は。
「む、あれは……」
　しばらく俺をからかっていた静さんが遠くを見やる。海で遊ぶための道具を貸し出しているようだ。
「浮き輪か……」
「浮き輪ですね」
　大人ふたりが浮き輪でぷかぷかしてもなぁ……と思っていると、静さんが俺の腕をきゅっと抱きしめた。
「ひとつの浮き輪にふたりで入るのはどうだろう」
「はい？」
「ひとつの浮き輪にふたりで入るのはどうだろう」
「や、聞こえてましたけど。って、あの、静さん？」
　静さんが貸し出し所に向かって突き進んでいく。この人、ちょくちょく俺の人権をないものとして扱ってらっしゃる気がするんですが……。
　有無を言わさず静さんが浮き輪を借りてきた。せめてゆとりのある大きな浮き輪を……と期待していたが、静さんが借りてきた浮き輪は思いのほか小さかった。ひとりなら悠々と入れる程度の大きさだ。
「これしかなかったものでな。さあ、行こう」

貸し出し所をちらりと見る。明らかにもっと大きい浮き輪があると思うんですけど……という言葉は呑み込んだ。この人が楽しそうにしているのを見ると、なんだかんだでまあいいかと思えてしまう。
「さあ、大海原へ旅立とう！」
「沖合で浮いてたらただの遭難ですよ……」
思った以上にテンションが高かった。

× × ×

足がつかない深さになったところで浮き輪に入ることにした。密着するのは予想していたが、まさかの対面だった。ぷかぷかと浮かぶ向かい合った男女。
「あの……静さん？　これはさすがに……」
傍から見れば、いや、傍から見なくともバカップルにしか見えないであろう構図。
「これは中々の青春だな……」
つぶやく顔がほんのり朱い。恥ずかしいならやめた方が……とは思うものの、それ以上に楽しそうだからたしなめるにたしなめられない。
「君はやたらめったらと気にしているようだが、そこまで目立ってはいないぞ？」
静さんがちょいちょいと辺りを指差す。たしかに、カップルでくつろぐ人もいれば、親子ではしゃいでいる人もいる。浮き輪人口が思いのほか多い。浮き輪人口ってなんだ。
「や、うん、目立たないのはありがたいんですけど……その、ね？」
先ほどから柔らかな膨らみがばっちり当たっている。燦燦と照り付ける太陽の下でも生理現象が止まることはない。つまり勃ってる。
「君の本能は実にわかりやすいな……」
静さんがにいっと目を細める。蠱惑的な笑みに喉を鳴らしてしまったのがバレた。
細指が胸板に触れ、するりと海に潜る。片手は乳首をまさぐりながら、もう片方の手は海パンの上から膨らみをこすってくる。
「静さん……エロいことをしないと気が済まないんですか？」

じりじりと高まる興奮に危機感を覚えつつちょっと毒づいてみるも、
「……君のなにもかもがたくましいのが悪い」
ちょっとだけ恥ずかしそうにつぶやく静さんの顔は、ベッドの上で見るときのそれで。
「なんだ、また大きくなったぞ？」
チャックが開けられ、海水の中で肉茎を優しく握られる。絡みついた指がきゅっきゅっ、きゅっきゅっと何度も締め付けてくる。海水の中ではぬめりが期待できないためか、いつもと愛撫の仕方が違う。焦らすような手つきにじりじりと劣情が昂る。
「ここでムラムラさせられても困るんですけど……」
「んー、それもそうだな……ところで比企谷、君はここでもっとくつろいでいたいか？」
静さんの目がギラついている。何を考えているかだいたいの見当がついた。
「あー……や、大丈夫です。暑いし」
「ふむ、それなら……あそこで、というのはどうだ？」
静さんが指差したのは岩陰だった。浜辺の端にあり、近くの浜で遊んでいる人もいない。
「……誰もいないなら、まあ、はい」
「君もすっかり私に毒されたようで何よりだ」
「自分で言うことじゃないでしょそれ……」
呆れながらも浮き輪から抜け、足をついて砂浜に戻る。チャックが開いたままなのに気付いて慌てて閉めた。危うく不審者になるところだった。
続く。

（１８）

ビーチからしばし歩いてたどり着いたのは、コの字型に切り立った岩陰だった。海水浴場からけっこうな距離があるためか人はおらず、引いては寄せる波音が淡々と響いている。
「ふむ、今は潮が引いているから使える、といったところか。地元の血気盛んなカップルが使いそうな場所だな」
「静さん、遠慮なくなりすぎじゃないですか？」
腰に両手をついてむふーと鼻息をつく静さんにぽそり。
「うぐ……す、すまない。ひ、引いてしまったか……？」
「ちょ、そんな目で見ないでくださいって……大丈夫ですから……っ」
今にも泣きだしそうな、それでいて静さんの年齢でもイタさを感じない絶妙なラインの潤んだ瞳。やめろよ、保護したくなるだろ……？
「向こうの浜からは……来ることはできないようだな」
「ですね、こっちからじゃないと入れないっぽ」
静さんが海パンをむんずと掴んだ。変なところで言葉を途切れて恥ずかしい。
「……相撲でも始めるんですか？」
細指がうねうねと蠢く。
「本当にそう思ってるのかね？」
すげぇ楽しそうだなこの人……。
岩陰から砂浜を見やる。海水浴場の喧騒は遥か遠く、といった感じだ。
「……どうぞ」
「うむうむ」
静さんが海パンのヒモをゆるめ、ずるりと下ろす。俺の足元にしゃがみ込むと、ぷらりと垂れた竿を見て口をへの字に曲げた。
「まだ小さいな」
「状況が状況なんで」
「ふむ……まあ、小さいのも好きだがね」
「そうなんですか？　うっ、ちょっ、おぁっ」

ふにゃりとしたものを人差し指でぴんぴんと弾かれる。頬杖をつきながら笑うのが可愛すぎるんですが。
「この柔らかさが庇護欲をそそるし、あとは……私の中で大きくなる感覚もたまらないな」
静さんが蹲踞の姿勢をとり、俺の腰に手を添えて肉竿をぱくりと咥えた。
「お……ぁ……っ」
温かな口の中で、長旅の疲れを労わるようにゆるりゆるりと舌が蠢く。
「ん……ふっ、んふぅぅ……っ」
じゃれつくように俺の腰をさすり、鼻の下を伸ばす静さんの顔はあまりに卑猥だ。黒ビキニが作る谷間が静さんの動きに合わせてふるふると揺れる。
「んふぅぅ……っ？」
いやらしい温もりに包まれて反応しないわけがない。口の中でむくむくと膨らむ肉茎に、静さんは嬉しそうに目を細めた。
「ん……ぷはっ。ふふ、たくましくなったな……」
ああそうだ、と静さんがこともなげにビキニをずらし、乳頭を露わにする。
「君だけ恥部を晒すのは良くないな」
「ここでそんな平等精神を発揮しなくても……」
「明らかに反応しておきながら何を言う」
すでにぷっくりと膨らんだ乳頭を見て、細指に包まれた勃起肉がさらに張り詰めていた。
「君は口ではひねくれているが、こっちは本当にわかりやすくていいな……」
竿の根本と亀頭をつまみ、裏スジを舐め溶かすように舌を這わせる。下から上へ。上から下へ。一挙一動を俺に見せつけ、ときに舌を揺らしながら。びゅるりびゅるりと噴き出すカウパー液が細指にまとわりついていた。
「さて……このあとはどうしたい？」

「へ……？　あっ、ちょ、おあ……っ」
顔を傾け、こともなげに勃起肉を根本まで呑み込む。喉奥に亀頭がこつこつと当たった。静さんがきゅっと目をつぶり、楽しげに目を細め、肉槍から口を離す。
「今の時点で人がいないとはいえ、そこまで長居をするべきではないと思っているんだよ」
「あー……たしかにっ、そう、ですね……っ」
「比企谷としていると平気で1時間2時間と経過するからなぁ……まったく」
「いや、それは静さんが止まらな……い……から……っ」
舌に亀頭を乗せて裏側をねろねろと舐められる。背中がつりそうなくらい反り返ってしまった。
「まあ、なんにせよだ……私たちは人目につかないようにしつつ、ある程度の性的満足を得なければならないわけだ」
「その言い方エロすぎません？」
「最近遠慮がなくなってきてしまってな……年齢のせいだろうか」
「いや、静さんはマジで若いですからね？　単純にエロいんですよ」
「む……そうか？」
嬉しそうに笑う顔は可愛いんだが、指を波打たせてしごくのはちょっとやめてほしいです。マジで出そう。
「さて……どうしたい？」
静さんがにんまりと笑って立ち上がる。岩の前でくるりと俺に背を向け、蠱惑的に尻を突き出した。むっちりした肉尻に黒ビキニを食い込ませ、ほらほら、と尻を振るあまりにもわかりやすい誘惑。ぐびりと喉が鳴る。牡の本能をかき乱すような求愛行動につられないわけがない。
「……まあ、しますよね」
はっきり言葉にするのがいまいち憚られる。静さんが何もかも察しているといった調子でにんまりと笑った。
「ふふ、その気になってくれて何よりだよ。……あん……っ」
勃起肉をビキニに押し付けると、静さんの唇から甘い喘ぎがこぼれ

た。男を的確に欲情させる甘え声。ビキニと亀頭のあいだに先走りの糸がぬるりと伸びた。
静さんがビキニに指を引っかけ、淫部を露わにした。熱く柔らかそうな淫裂は早くちょうだいと言わんばかりに濡れそぼっている。ビーチテントでの交わりの温度感をそのまま記憶しているかのようだ。
「ほら、そろそろ……ぁ」
静さんがぽそりとつぶやく。どうしたのかと思った矢先、薄紅色の粘膜から足元の砂へと精液がぼたりと零れ落ちた。
「う、んん……っ。さっき注いでもらった分が溢れたようだな……ぅあっ？」
くびれた腰を掴み、むき出しになった割れ目に肉槍を当てがった。静さんはそのまま挿れられると思ったのか細喉を鳴らしたが、膣口に入り込むすんでのところで軌道をずらし、竿の上側で割れ目からクリトリスにかけてこする。
「んっく、はぁっ、ひ、ひきがやぁ……っ。もう、準備はできて……あっ、はぁっ、はぁぁぁ……っ」
肉尻に添えた手の指がもどかしそうに尻肌やビキニを引っかく。静さんの言葉に答えることなく、丹念に、執拗なまでに何度もこする。割れ目の熱いうるみと肉尻の弾力が、幾度も幾度も劣情に火をくべる。
「静さん、挿れてほしいですか？」
「あ、当たり前、だろう……っ」
振り返った静さんの目尻に涙が浮かんでいる。焦燥感や劣情が入り混じった複雑な表情にぞくぞくする。
肉槍の切っ先をひくついた膣口にあてがい、尻に添えられた静さんの両手首を掴んだ。足の指でしっかりと砂を噛み、静さんの腕を手綱のように引っ張ると同時に腰を突き出す。
「うあうっ」
滑らかな背中が弓なりに反り返り、肩甲骨が寄った。汗の滲んだ背中は見惚れながら、膣奥に亀頭をこすりつける。

「あっく、ふっ、んっ、ふぅぅ……はぁぅぅぅ……っ」
　静さんが内股になり、ひざとひざをこすり合わせる。
「はぁぁ……こ、これは、なかなか……ぅあぅっ」
「とりあえず、喋る余裕がなくなるまで突きますね」
　海に来てからいいようにやられている気がしたので、そろそろ反撃したくなった。時間をかけたくないのは変わらないので、短時間で追い込むことにする。
「声は控えめでお願いします」
「それなら手は自由にしてくれ……ぅあぅぅぅ」
　腰を引いて一気に突き入れる。それだけで肉感的な身体に痙攣のさざ波が走った。
「もうイったんですか？　ほんとエロいですね」
「うぅぅ……鬼畜にもほどがあるだろう……ぅあっ、はっ、んっ、んふぅぅ……っ」
　突き入れるたびに肉尻にいやらしい波が生じる。静さんの手がなんとか抵抗しようとバタつくが、構うことなく抽送を続ける。
「うくぅっ、はっ、ん……はぁぅぅ！　ぁっ、ひきがやっ、ひきがやぁ……これっ、ほんとにダメだっ、このままだとっ、こえっ、んはぁぁぁ……っ」
　しなやかな背中が鞭のようにしなり、塊のような息が吐き出される。目に涙を浮かべ必死に首を振っているが、蜜肉は貪欲に蠢いて奥へ奥へと引き寄せてくる。
「うお……っ？」
　たっぷりと濡れた膣肉が不意に締まる。早く出して、早く出してと急かすような収縮。腰を引けばカリ首が撫でられ、突き入れれば根本が甘く締め付けられる。じりじりと高まる射精欲求。静さんの荒らげた吐息しか耳に入らない。
「はぁぁ……ひきがやぁ……出そうなんだな……？」
　静さんが身体を起こして唇を寄せてくる。両手を離して剥き出しになった乳房を掴み、夢中で腰を振る。
「んぐっ、ふっ、んふぅぅ……んふぅぅぅ……っ」

静さんが俺の手に自分の手を重ね、口内でめちゃくちゃに舌を絡めながら、むっちりした肉尻をこすりつけてくる。静さんの足がもどかしそうに暴れ、日陰のひんやりした砂が足にかかる。
小刻みでねちっこい抽送を繰り返す。
膣奥をぐり、ぐり、ぐりりと何度もこする。
射精欲求がじりじりと込み上げてくる。
静さんの唇をひときわ強く吸った。
濃厚な白濁が尿道をせり上がり、鈴口をこじ開け、膣奥目がけて勢いよく噴き出した。
「んふぅぅぅ!? んっ、ふっ、ふぅぅっ、ぇうっ、ちゅぴっ、れるっ、んむふぅぅ……っ」
静さんが目をうっとりとさせ、尻肉で円を描いてゆっくりと搾り上げてくる。強すぎる快感に腰を引こうとするも、静さんは逃がしてくれない。俺の手をしっかり握って竿の根本を締めつけ、根元まで挿入したまま残り汁ごと貪られた。
絶頂の脈動が収まってもキスが続いていた。波の音が徐々に耳に入ってくるようになる。静さんの爪が手の甲をかりかりと引っかく心地よいむずがゆさ。口内に溢れる唾液を啜り、啜られる。
「はぁ、はぁぁ、はぁぁぁぁ……っ」
唇を離しても、静さんは熱っぽい目で見つめて何度も唇を重ねてきた。俺の上唇を咥えてきたのでお返しに下唇を咥える。卑猥な舌の交尾。静さんはここがどこなのかを忘れたのだろうかと思いつつも、俺自身この時間がたまらなく楽しいと感じている。
ゆっくりと肉槍を引き抜くと、静さんがへなへなとしゃがみ込んだ。
「大丈夫ですか?」
「ああ……ちょっと腰が抜けただけだ……うっく、うぅぅぅ……っ」
静さんが顔を伏せ、ぶるぶると震える。直後、ずらしたビキニから覗くぱっくりと開いた膣口から、精液がぼたぼたと落ちた。
「こ、これはさすがに粗相だな……恥ずかしい……」
静さんが消え入りそうな声で呟くが、立ち上がる元気がないのか

しゃがみこんだままだ。
「あー、や、まあその……めちゃくちゃエロいんで、アリですね」
「……君は変態だな……」
静さんが苦笑し、よたよたとこちらを向く。半勃起状態の肉竿をためらいなく咥え、ぼんやりとした表情で舌を這わせる。緩慢な舌遣いが心地よく、温かな口内で肉茎がむくむくと膨らんでいく。
「……また元気になってしまったな」
静さんがウキウキした表情で俺を見つめ、唾液にぬめ光る竿に舌を這わせる。
「……これ以上はほんとにまずいと思うんで、そろそろやめときましょう」
「ふむ……そうだな」
静さんが竿の根本と玉袋を撫で、亀頭にちゅっと愛おしげにキスをした。
「腰が抜けたまま君に犯されるのも一興かと思ったんだがな」
「しましょうか？」
「え」
「冗談です」
「……」
「いっ、ちょっ、うお……っ」
竿をあぐあぐと甘噛みされた。痛くはないがヒヤッとする行為はやめてほしい。
「さて、海パンにしまうことはできるかな？」
「いじりながら言うのやめてくださいって……ちょ、くぁ……っ」
このあと、四苦八苦しながら海パンを穿いた。
続く。

（19）

灼熱の陽気の中ではしゃぎすぎたのは否めなかった。
俺も静さんもかなりへばっていたため、ビーチテントで休むことにした。静さんはエロいいたずらを仕掛ける元気もないようで、ぴったりと俺にくっついて寝息を立てていた。
しばらく休んでからテントを片付け、シャワーを浴びて更衣室で着替えた。
車の鍵を受け取り、トランクにテントを積んで待つことしばし。
「……ん？」
戻ってきた静さんの様子がおかしい。行きと変わらないTシャツとショートパンツ姿だが、なぜか顔を赤らめて胸を隠している。
「し、下着を忘れた……」
「小学生じゃないんですから……」
呆れつつも静さんが隠している部位に目が行ってしまう。
「ちなみに上下とも忘れた……」
「……」
視線がショートパンツのほうまですべった。言われてみれば、ショートパンツに包まれた下半身が行きで見たときよりも生々しい気がする。
「……まあ、車ですし、人に見られることはないんじゃないですかね？」
「そ、それもそうだな……」
静さんが恐る恐る胸を晒す。Tシャツを盛り上げている豊乳の頂がぽっちりと浮いていた。
「……まあ、うん、大丈夫です」
「……君は本当にわかりやすいな」
膨らみをきゅっと握られた。
車が発進する。来たときよりも人がまばらになったビーチを眺めていると、来たときの浮かれ具合とは違う、いくばくかの寂しさが胸をよぎった。

「何度も遊びに来れるほどタフではないからな、君も私も」
俺の心情を読んだかのように静さんが笑う。
「そうですね……遊びに行くのは一回で充分で……」
ちらりと横を見てぎょっとする。シートベルトが食い込み、より膨らみが強調された胸と浮き上がった頂に。
「……私が言うのもなんだが、君はもう少し性欲を抑える術を身につけたほうがいいな。家でなら歓迎するが、今は運転があるのでな」
「うぐ……す、すいません……」
あんたが言いますかね……とは思いつつも、静さんの顔を見てふと思う。
「……静さん、めちゃくちゃツヤツヤしてませんか？」
「おお、わかるか？」
静さんの肌の張りが尋常でないほどに良い。静さんは左手で頬をさすり、嬉しそうに笑った。
「やはり君と存分にするのは健康に良いな。タバコも減ったし」
「ああ……たしかに最近吸ってるとこ見ないですね」
以前はごりごりのヘビースモーカーだったことを思い出す。少し前に「君のを口にしていればタバコも減るかも……」などと冗談めかして言っていたが、案外本当なのかもしれない。
「職場にいるとクセで吸ってしまうことはあるんだがね。それでも同僚にタバコを吸わなくなりましたねと言われることが増えた。君のおかげだ」
鼻唄混じりに笑い、俺の肩を撫で、ついでに股間を揉んでくる。
信号で車を止めると、静さんが切なげに唇を引き結んだ。太ももをきゅっと寄せたのが視界の端に映った。
「どうしました？」
「……締めておかないと、君のが垂れてしまいそうでな」
囁く静さんの顔が、運転があるのだからとたしなめてきた先ほどとは明らかに違う。前は向いたまま目を細める仕草がぞくりとするほど色っぽい。
「チャックを開けていてくれないか」

「……いや、大丈夫ですか？」
「心配ない、信号待ちのときだけだから」
抵抗しても無意味なことは知っているので、おとなしくチャックを開ける。
次の信号で止まると、静さんがためらうことなくチャックの中に指をすべり込ませた。並ぶ車も対向車線で止まる車もいない。ボクサーパンツの上から肉茎をきゅっきゅっと握ってくる。
「うーん……参ったな、もうしたくなってしまった」
「さっきへろへろになってたじゃないですか……」
「あのあと休んだおかげですこぶる元気だぞ」
「子ども並みの回復力ですね……」
静さんの耳にそっと触れる。
「んっ」
静さんが唇を引き結ぶ。こちらをちらりと見て、耳に触れる手を掴んで自分の胸に導いた。
指をすべらせ、ぷっくりと膨らんだ頂をかりかりとこする。
「あっ、はぁぁ……っ」
湯気が幻視されるほど色っぽい吐息をついた直後、信号が青に変わる。
それからも信号で止まるたびに静さんは俺の肉茎をまさぐり、俺は静さんの耳や乳房、下腹部を撫でた。もどかしいし焦れったいのに、それがたまらなく楽しい。人通りが多くなると目の前を横断する人も現れ、ちょっとしたいじりあいもできなくなる。俺も焦れったかったが、静さんは俺以上にそわそわしていた。
静さんのマンションの地下駐車場に停まる。静さんの口数は明らかに減っていた。俺は俺でビーチテントを手早く抱え、ふたりで足早にエレベーターに向かう。
エレベーターのボタンを押してドアが閉まるなり、日常のあいさつのような自然さで唇を重ねた。
「んん……っ、ふっ、んふぅぅ……っ」
静さんの口の中はたっぷりと唾液で潤んでいた。興奮に興奮を塗

り重ねたように肌が熱い。もどかしげに俺の髪の毛に指を挿し入れ、耳をさすり、うなじから喉に指をすべらせる。
エレベーターが開いた。静さんが俺の手をつかみ、ずんずんと進んでいく。後ろ姿だけでも発情していることがわかる。誰もいないことを確認して、せわしなく鍵を開ける静さんの尻をそっと撫でた。静さんの背中がひくりと波打った。
部屋に入ってドアを閉め、ビーチテントを立てかける。
靴を脱いだとたんに静さんの両腕がするりと首に巻きつき、傾けた顔が近付き、唇が密着した。
「れるっ、ちゅぴっ、んっ、んむふぅぅ……っ」
エレベーターのときよりも明らかに積極的で、切羽詰まった口づけ。少しでも俺の身体を貪ろうとするように舌を絡め、唾液を啜る。
静さんの手がせわしなく俺のベルトを外し、パンツをずり下ろして肉竿を握った。十本指が竿に絡みついて我慢汁が溢れる。
「はぁっ、ひきが、やぁ……っ」
熱い吐息が鼻腔を撫でる。俺の喉に吸い付いて汗を啜るさまは淫魔のようにも吸血鬼のようにも見えた。
静さんのショートパンツのチャックを開け、前後から同時に手を突っ込む。割れ目はすでにおもらしをしたかのように濡れていた。肉尻の谷間まで伝っていた愛液をアナルに塗りたくり、濡れそぼった膣口に指をねじ込む。
「あはぁぅぅ……っ、はっ、はぁぁ……っ」
俺の肩に両手を添え、腰をがくがくと揺らす。切なさと期待の滲んだ顔があまりにも色っぽい。膣ヒダの中でことさら柔らかい部分を押し込むと静さんのひざが笑った。
「ひきがやぁ……っ」
静さんがちらりとベッドのあるリビングに目を向ける。俺は膣洞から指を引き抜き、肉尻を掴みながらリビングに向かった。
リビングのドアを閉め、互いに焦りながら服を脱ぐ。肌の露出が増えていく中でもできるだけ口づけをしていた。法で強制されているかのように、できる限り、できる限り。

ベッドに上がってひざ立ちになると、静さんがよつんばいになって肉幹を咥え込んだ。
「んふぅぅ……ぢゅるっ、ぢゅろろっ、ぇうっ、んむふぅぅ……っ」
頬をすぼめ、鼻の下を伸ばした卑猥な咥え顔。溢れていた先走りが残らず吸い取られ、温かな口内で新たにカウパーが噴き出す。帰り道から積み上げた興奮で頭が爆発しそうだ。たぷんと下に伸びた豊乳を支え持ち、乳を搾るように頂をこする。
「ふぅぅぅ……ふぅぅぅぅ……っ」
静さんの目が虚ろになる。背中にじわりと汗がにじむ。
最後に亀頭を一周するように舐ると、静さんがころりと仰向けになり、ぱっくりと脚を開いた。焦らす余裕はなかった。おねだりをさせて羞恥心を煽るゆとりもなかった。
開いた足のひざ裏を押さえ、ひくついた膣口にためらいなく肉槍を突き入れる。
「あおぉぉ……っ」
動物じみた声が耳朶を叩く。シーツをかきむしり、唇をひくつかせるさまに嗜虐心が加速する。膣奥を亀頭でぐりぐりとこすり、ゆっくりと腰を引く。弓を引き絞った狩人のような目で、泣きそうになっている静さんを見つめた。
歯を食いしばり、全力で腰を振る。
「あぐっ、ぉあっ、はぁうっ、いぅっ、んっく、んくぅぅ……ふっ、んはぁぁぁ……っ」
どすどすどすどす、と斜めに打ち下ろす容赦ない抽送。静さんが顔をぶんぶんと左右に振り、獣じみた嬌声と塊のような息を吐きちらかす。首に筋を浮かべ、汗ばんだ裸身をくねらせる。
気持ち良い。呼吸が苦しい。疲れきっている身体が興奮でごまかされ、もっと動けもっと動けと急かされる。
「はっ、ひぅっ、ひきがやっ、ひきがっ、やぁ……っ」
壊れそうなほど軋むベッドの音に紛れ、静さんのか細い声が聞こえる。手を離し、覆いかぶさって抽送を続ける。すらりと伸びた両脚が腰に巻きついた。細い腕が俺の背中を切なげに撫でまわす。

「静さんっ、もうっ、出ます……っ、思いきり出しますからね……っ」
「あぐっ、はっ、ひぅっ、だ、して……いっぱい……ぅあぅぅぅぅ……っ」
　めちゃくちゃに腰を振る。静さんの中はどこを突いても柔らかく、どこを突いても壊れたように喘いでくれた。
　射精欲求が込み上げる。ここにきて、静さんが顔をくしゃくしゃにして喘ぐ顔がもっと見たくなった。歯を食いしばって限界を先延ばしにする。けれどほんの一瞬だけ先送りにされた限界がまたすぐ迫ってくる。静さんの四肢に力が込められ、膣ヒダがうねうねと収縮した。
「ぐ……ぅぅぅ……っ」
　気持ち良すぎて、最後は何も言葉にすることができなかった。膣奥でぴたりと止まり、尿道を伝う感覚がはっきりとわかるほど濃厚な白濁を遠慮なく注ぎ込む。
「あぐっ、はっ、はぁぅぅ……はぁぅぅぅ……っ」
　静さんの全身に痙攣のさざ波が幾度も走る。汗だくの身体を互いに夢中で撫でまわす。耳元で聞こえる静さんの声は苦しそうで、けれどその何倍も幸せそうだった。
　絶頂の波が去る。点けっぱなしにしていたエアコンがごぅん……と冷気を吐き出す音が響いた。
「……比企谷、獣のようだったな」
「……すいません」
「いつも言っているだろう？　大歓迎だよ。はぁぁ……とてつもなく気持ち良かった……」
　静さんが俺の背中をぽんぽんと撫でる。全身全霊で攻めたというのに、静さんを攻めきれた感覚が湧かない。
「やはり外でするときよりも積極的になってくれるな」
「そりゃまあ、人目につかないですし……。外でするのはするので良さはあると思うんですけど」
「ふむ、それなら今後もちょくちょく外でするとしようか」
「えぇ……」

静さんが楽しげに笑った。
ついばむような口づけをしながら、のらりくらりと会話は続く。
「海に行きはしましたけど……なんか爽やかに楽しんだ記憶がほとんどないんですけど。失われた青春の1ページってこんなんでいいんですか？」
俺の質問に静さんは目をぱちくりとさせ、それからにひっと、見惚れてしまうほど綺麗な笑みを浮かべた。
「いいんだよ。君と過ごせたんだから、立派な1ページであることに変わりはない」
「……そうですか」
静さんから逸らした顔が熱い。
「比企谷はどうだ？　楽しかったか？」
「あー、まー、あー……そう、ですね。楽しかったといえば楽しかったです」
「君は面倒だなぁ」
静さんがくすくすと笑い、俺の頭をぽふぽふと撫でた。どうにもこの人に勝てる気がしない。
ふたりで過ごす夏が、ゆっくりと過ぎていく。

続く。

（２０）

うだるような夏の暑さがすっかり鳴りを潜めた頃。
俺は、静さんにひざ枕をしてもらっていた。
状況を説明したらさらに恥ずかしくなった。
「君はいつになったら落ち着くんだね？」
柔らかな太ももと手のひらに挟まれてずっともぞもぞする俺を、静さんが楽しげにからかう。
「いや、落ち着くわけないでしょ……」
「ふむ、それなら……こういうのはどうだ？」
Ｔシャツの上から乳首に触れられ、びくりと身体を震わせる。
「お、ぁ、ちょ……っと……っ」
「ん、どうしたどうした？」
乳首を指でまさぐりながら股間に触れてくる。びきりと張り詰めた山を愛おしむように手のひらでさすられ、ますます張り詰めてしまう。
「そういえば比企谷、君は車の免許を持っていなかったか？」
「うっ、く……っ、こ、この状況で普通に会話するって……どういう神経してんすか……」
「私はノーダメージだからな……ぅあっ」
顔に乗る柔らかな膨らみの頂をかりりとこする。ブラを着けていないから攻めやすい。
「……こら、反撃は禁止だぞ」
「なんすかその理不尽すぎるルールは……」
じぃっ、と見つめ合ったまま、互いの弱い場所を攻め合う。
静さんはしばし迷うように目を泳がせたあと、会話を優先させたいのか手を離した。俺も合わせて手を離す。
「免許は……まあ、そうですね、去年の夏にとりました。一応ですけどね、一応」
心のどこかでこの人への憧れがあったことは否めない。あの頃はこんな関係になるとは思っていなかったけれど。

「ふむ、そうかそうか……」
静さんがあごをさすりながら、ごく自然に股間の膨らみを握ってくる。え、なに、とりあえず握ると安心しちゃうの？　抱き枕的な？
「それなら、私の車を運転してみるか」
「……へ？」
思わぬ提案に目をぱちくりとさせる。握られっぱなしだとマジで言葉が頭に入らないので、手をぺしっとはたいて起き上がる。静さんは「これくらいいいじゃないか」と言わんばかりに唇を尖らせている。子どもか。いや、やってることは子どもじゃないんだけど。
「えっと……保険って年齢制限があるんじゃないでしたっけ？」
「なぁに、君に合わせて下げればいいだけだ」
「いや、わざわざそんなことしなくても……」
「君と付き合ってから生活費がだいぶ浮くようになったからな。これくらい安いものさ」
静さんがからからと笑う。保険費用がどれほど高くなるかはわからないが、たしかに俺と静さんは半ば同棲という形になっていて、そのうえ静さんはあれほど吸っていたタバコにほとんど手をつけなくなっていた。代わりに俺が搾りとられているんだが、それはそれで悪くないと思っている。サキュバスと同棲していると思えばいい。や、よくはないんだけど。
「……まあ、ちょっとした体験ってことで……」
「うむ、それなら早速手続きをしよう」
静さんがさっそくスマホをいじり出した。行動が早い。
俺が静さんの車を運転する……。
なんとも不思議な気持ちになりながら、窓の外の穏やかな晴れ空をぼんやりと眺めた。

×　×　×

数日後、無事に保険の適用年齢を変更できたということでドライブをすることになった。
静さんのマンションの地下駐車場で、これから自分が運転する車と対峙する。

フロントが面長な印象を受ける黒いスポーツカー。今までは「男前な車だな」くらいの印象しか持っていなかったが、自分が運転するとなると、とたんに得体の知れないものに思えてくる。軽自動車ならまだ気軽に乗れたんだが……。
「比企谷、そっちは助手席だぞ」
「へ？　……あ」
いつものクセで助手席のドアを開けようとしていた。いきなりやらからしてしまった。顔がひどく熱い。
さっさと運転席に乗り込もうとすると、きゅっと手を握られた。
「心配するな、私がついているから」
優しい笑みに見惚れる。しかしそれと同時に、これから運転しようとする男とそれを励ます女性という構図に気付き、
「……ありがとうございます」
礼を言いながらも、これは男としてどうなんだろうか……とうじうじしていると、ぐりぐりと頭を撫でられた。
「君は本当に可愛いな」
「……あのですね」
「いや、すまない。悪ノリが過ぎたようだ」
静さんがくつくつと笑いながら俺の背中を撫で、助手席に乗る。続いて俺も運転席に乗り込んだ。
「ふむ、左右が入れ替わっただけでずいぶんと新鮮なものだな」
「……ですね。なんか、すげぇ不思議な感じがします」
いつもは右にいる静さんが今は左にいる。ラーメン屋のカウンター席で同じことが起きてもなんとも思わないが、車内においては運転する人が変わるという大きな意味を持つ。
人の車を運転する――とだけ言えば簡単なことに思えるのに、今の俺にとっては大人になるための通過儀礼のように思えた。
「さてさて」
静さんがうきうきとシートベルトを着ける。今日の静さんはカットソーにカーディガンを羽織っていて、シートベルトがとてもいい働きをしてくれている。なるほど、右から見るとこうなるんですね！

「君は本当にわかりやすいな」
「……すんません」
バレてた。
「構わんよ。いくらでも見るといい」
余裕たっぷりにくすくすと笑い、ミニのタイトスカートと黒タイツに包まれた脚を優美に流す。毎日痛感していることではあるが、この人はどうしようもないほどに大人の女性だ。しかも俺のうぬぼれでなければ、静さんはお付き合いをしてからどんどん綺麗になっている。いっしょに街を歩くときに視線を感じることも多くなった。
「免許をとったのが去年ということだが……ペーパーなのかね？」
そっと太ももに手を添えられる。不安を和らげるための優しい行動なのだろうが、痛いほどに心臓が跳ねた。
「あー……ちょこちょこレンタカーで練習してました」
練習、という言葉を無意識に使ったことにハッとする。
「何を本番として想定していたんだね？」
「何を、って……」
静さんはにまにまと笑っている。尋ねはしているものの、俺の真意を――いつか誰かの前で運転する機会を想定していたのだろうということを、すっかり見透かしている。小さな見栄さえ見透かされて、どんどん自分の存在が小さく感じられる。
「比企谷」
隣にいるはずなのにやけに遠くに感じられた静さんが、俺の手をそっと握った。顔を寄せ、吐息がかかるほど近くで囁く。
「心配するな。車の運転くらいすぐに慣れるさ」
流れるような手つきで股間を握り、
「……それに、君はこっちで毎晩私をいじめているだろう？　自信を持つといい」
吐息のたっぷり混じった声で囁かれた直後、唇が重なる。ちろちろとじゃれつくように舌が絡み合い、そのあいだも勃起肉をゆっくりともみほぐされる。
静さんのおかげで男としての自信がどうのなどというのはどうで

もよくなったが、
「……あの、すげぇムラムラするんすけど」
代わりに、ドライブに行くどころではなくなってしまった。
「少しは不安が紛れただろう？　それじゃあ行こうか」
「あんた鬼ですか……」
「なんだ、ここでいちど抜くか？」
膨らみの頂を爪でかりかりとこすり、ちろりと舌なめずりをする。
なんでこうも的確に人の劣情を煽ることができるのか、この人は。
「……いや、今はやめときます。1回じゃすまなそうですし」
「はは、よく分かっているじゃないか。ドライブを延期させるところだった」
さりげなくすごいことを言って、
「さあ、行こうじゃないか！」
やけにテンション高めにびしっと前を指差す。海賊かな？　太陽を落としてそうですね！
薄暗い地下駐車場にまるで似合わない仕草がおかしくて、つい笑ってしまう。
「……まあ、気楽にやらせてもらいますよ」
「うむ、それがいいさ」
なんだかんだで肩の力が抜けたことにひそかに感謝しながら、シートベルトを着け、エンジンの点け方などを軽く教わり、おずおずと車を発進させた。

続く。

（２１）

静さんが見守る中で運転を始めて、いきなり盛大に戸惑った。
「……音、こんなにしないもんなんですね」
「ああ、そうだな。私もすっかり慣れてしまったが」
静さんの乗りこなすこのスポーツカーはわけがわからないほど音がしない。レンタカーで使っていた軽自動車との差がすごい。昔プレイをしたレースゲームのごとく走り出したくなる。
それと車体のサイズが掴めない。軽ならば問題なく行けるところでも、フロントが面長な印象を受けるこの車だと盛大にぶつけかねない。慎重に慎重を重ね、マンションの薄暗い地下駐車場をのろのろと進む。
「はは、ぶつけたところでさして気にしないよ。私も覚悟の上だ」
「や、そうは言っても……」
「なぁに、大学生の君に金銭的な償いなど求めはしないさ」
横顔に感じた視線がすべり落ちる。人の視線を、生まれて初めて触覚を伴って感じた気がした。
「……身体で払ってくれればいいとか言いそうなんですけど」
「ああ、その通りだな」
「堂々としすぎなんだよなぁ……」
この人ほんとサキュバスなんじゃなかろうか。アラサーサキュバスとか、今Ｔｗｉｔｔｅｒでマンガを描いたら普通にバズるだろ。本気でエロいやつでもいいしラノベくらいのほんのりエロでも可。
「君がろくでもないことを考えているのはわかる」
「あ、はい、ごめんなさい」
じぃ……っという視線が頬に刺さった。
駐車場を抜けて地上へ出る。助手席に乗っているときならば眩しいなーくらいにしか感じなかったのに、今はすさまじく不安だ。ずっと家で大事に育てられていたのに急に外の世界へ放り出されたような、そんな感覚。教習所でも初めて公道に出るときは死ぬほど緊張したが、今はそのときとは別種の緊張がある。

「この辺りは車の通りもほどほどだし、無理に飛ばす輩もいない。目的地もないんだしゆっくり慣らすといい」
「……了解です」
　あまり複雑な道に行くのはなぁ……などと思っていると、さっそく優しい言葉をかけられた。こういうところを見ると、この人は本当に先生なんだなと改めて感じる。
　サキュバスの先生って、エロくない？
「君も性欲が強くなったものだ。いや、元々持っていたものが剥き出しになったのか？」
「読心術でも使えるんですか？」
　恥ずかしいなんてもんじゃなかった。心の平穏を取り戻すべく、最近会っていない戸塚のことを考える。ああ、戸塚……。アンソロでがっつり出番があった戸塚……。
　いつもは歩くか、静さんの運転で通りかかる街並み。歩いているときの視線の高さ、助手席に座るときの視線の高さのそれぞれを経験してはいるが、運転席に座ると同じ信号で止まったときでも微妙に見えるものが違う。店の奥にあんな商品があったのか、とか。カフェのカウンターでマスターがコーヒーを淹れてるところまで見えるな、とか。ほんの少しの違いがなんだか楽しい。
「だんだんリラックスしてきたじゃないか。私も快適だぞ」
「快適……ですかね？　自分じゃ分かんないんですけど」
「教官のような言い方になってしまうが……アクセルもブレーキも穏やかだぞ。私の車を丁寧に扱ってくれて何よりだ」
　信号で止まったときに肩をぽんぽんと撫でられる。発車したときに比べれば幾分マシになったとはいえまだまだ緊張の滲む身体。慣れた柔らかな手のひらの感触に思わずびくりとしてしまう。
「おっと、すまない」
「いや、俺こそすんません、敏感になってるだけなんで……」
「感度三千倍というやつか？」
「なんでその用語を知ってるんですか……」
「君との性生活のために私なりに勉強しているのさ」

「それはありがたいんですけど、三千倍は勉強しなくてもいいんじゃないですかね……」
　静さんがこほんこほんとわざとらしい咳払いをする。どうやら自分で言っておいて恥ずかしくなったらしい。
「静さんの顔、いま赤くなってる気がします」
「……見なければわからんだろう」
「シュレディンガーの猫みたいですね」
　運転の邪魔にならない絶妙な範囲で腕をてしてしと叩かれた。危うく意識を失うところだった。や、本当に危ないなそれ。

×　×　×

　運転そのものは慣れてきて、流れゆく景色を楽しめるようにもなってきた。しかし、静さんが「そういう面」を期待しているのではないと分かっていながらも、「運転するときは男として見られたい」という欲が湧いてしまう。
　とはいえその気持ちを芽生えさせるための行動などまるでわからないので、さっき褒めてもらえたときのようにとにかく丁寧に運転を心がけるしかない。
「ふむ、すっかり慣れたようだな。上手いぞ」
　楽しげに褒めてくれる。ちらりと横を見やると、静さんは窓の外に目を向けていた。
「静さんが優しいおかげでなんとかなってます」
「ふふ、それなら何よりだ」
　横顔に視線を感じる。もういちどちらりと横を見やると、頬杖をついた静さんが俺を見つめていた。穏やかに目を細め、本当に楽しそうに。
「……あの、あんま見られると恥ずかしいんですけど……」
「彼氏が運転する姿を見るのも良いものだな、と思ってな」
　ぐぅ、と喉の奥で唸った声が、静かなエンジン音にかろうじて紛れた。
「どうした、黙り込んで」
「……わかってるでしょ」

「はて、なんのことだか」
「……てか、どんだけ見るんすか」
「ああ、すまない」
「……そういうこと言うときって普通見るのやめません？」
「はて、夜の君は謝ってもやめることがまずないと記憶してるんだが」
「やめてほしいんですか？」
「いや、そういうわけでは……って、なんで逆に攻められているんだ私は……」
信号で止まると、股間をきゅっと握られた。
「運転中に淫行はご遠慮ください」
「それならわざわざ煽るな」
会話が徐々に軽快になる感触。部屋で話すときとあまり感覚は変わらない。
「んー、……本当に、なかなか……さまになっているじゃないか」
静さんの声がほんのり熱を帯びる。
「……お褒めに預かり光栄です」
「どうしたんだね、そんなにかしこまって」
「いや、なんでも」
車という密室でふたりきり。いつもならとっくにもっと色々なことをしている。
褒められて浮かれた俺が迂闊なことを口にすれば、静さんに車を停めさせられ、今にも飛びかかられる気がした。いや、どこの猛獣だよと自分にツッコみたくなるが、その感覚はあながち間違っていないと思う。

× × ×

昼食をとったあと、替わろうかと言われたが運転を続けることにした。レンタカーを使っているときはまったく感じなかったが、今は不思議と運転が楽しくなってきていた。
静さんは俺の変わりように目をぱちくりとさせながらも、
「疲れたらいつでも代わるからな」
と笑った。

気ままに下道を走り続けると、人通りのぐっと少ない道に出た。信号で止まったときに対向車も後続車もいないような道。
「う……っ」
静さんの手が股間に伸び、細指がうねうねと波打つ。焦れったくもたしかな快感を刷り込むようないやらしい手つき。
信号が青に変わる。細指は股間から離れたが、代わりに内ももに触れて動かなくなった。動いてほしい、という淡い期待。
分かれ道が見えた。街のほうへは行かず、人の少ない道を選ぶ。
ふたたび信号で止まった。静さんの手がふたたび股間に触れる。期待で張り詰めてしまっていた。静さんがわずかに驚き、細喉をこくりと鳴らす。
信号が青になる前に、静さんの太ももに触れた。
「あ……っ」
唇の隙間から漏れるあえかな声。なめらかな指に包まれた勃起が力強さを増す。
信号が変わってふたたび進みだす。ハンドルを両手で握りなおすと、静さんが名残惜しんだのが気配で伝わった。
視界の端に広い駐車場が見えた。
「5分だけ停めます」
「へ？　あ、か、構わないが……」
駐車場の一角、周りに誰もいない場所に停まる。戸惑う静さんの太ももに触れ、内側にすべらせる。
「うんん……っ」
静さんが顔を赤らめ、お返しとばかりに俺の股間に触れてくる。
「脚、広げてください」
静さんが顔を窓の外に向け、おずおずと開いた。タイトスカートがずり上がる。タイツに包まれた脚ががに股になるさまは息を呑むほど卑猥だ。そっと触れた指を太ももから内もも、鼠径部、淫部へと這わせていく。
「はぁうぅ……っ」
ショーツとタイツの上から指を押し込むだけで、静さんの下腹部が

熱く、濡れているのが伝わった。
「静さん、興奮しすぎじゃないですか？」
「そん、な、こと……っ」
　顔を逸らす静さんの耳が赤い。タイツの上から陰部を爪でかりかりとこする。かくかくと小刻みに揺れる腰がたまらなくいやらしい。
「うぅぅ……うぅぅぅ……っ」
　静さんの手が急くように俺のジーンズのチャックを開け、パンツの中に指を入れてくる。たっぷりと溢れた先走りを竿に塗りたくられ、俺の腰もがくがくと揺れる。
「はぁぁ……とても硬くなってるぞ……」
「そう、ですね……。……そろそろ行きますか」
「へ……？」
「車が来そうなんで」
　静さんが熱に浮かされたような顔で辺りを見回す。実際、俺たちの近くに停まろうとする車がいた。
「……やめる気かね？」
「いや、そんな『マジかこいつ』みたいな目で見なくても……」
「みたいな、というか、そのままだぞ」
　俺の喉に鼻を押しつけ、すんすんと匂いを嗅ぐ。そのあいだも肉竿を揉む動きは止めない。
「ドライブはまだまだこれからですよ」
「打ち切りマンガの最終回みたいなセリフで逃げるな……」
　勃起肉をにぎり……と握られる。痛くは感じないぎりぎりの力加減。
「どういうつもりだ？　本音を言え」
　耳に舌を這わせ、吐息たっぷりの声音で囁かれる。この声だけでも射精してしまいそうだ。
「あー……その、運転に余裕が出てきてですね」
「……ふむ」
「ここに停まったのは勢いだったんですけど……このドライブに乗じて、静さんを徹底的に焦らしてみようかと」

「正直すぎだ、馬鹿者……っ」
「どうすりゃいいんですか……おっ、あっ、ちょ……っ」
亀頭を手のひらで撫でまわされ、新たなカウパー液がびゅる、ぶびゅるっと噴き出る。
静さんはパンツから手を抜くと、俺に見せつけるように手のひらを舐めた。
「……面白い。先に相手を襲ったら負けという勝負のわけだ」
「いや、そういうわけじゃ……」
ない、とは言い切れなかった。静さんの艶姿を見ていたら、俺の理性も歯止めが利かなくなる可能性は充分にある。
「……まあ、そういうことにしときます」
「わかった。覚悟しておくといい」
不敵に笑う静さんの脚のつけ根をかりかりとこする。
「ふっ、んん……っ」
人差し指の背を噛んで耐える静さんを見て気付く。
これ、静さんの理性を削ると同時に自分の理性も削られるヤツじゃないですかぁ……。

続く。

（２２）

先に相手を襲ったら負け、という奇妙な焦らし対決が始まった。
「ふぅ、それにしても暑いな」
車内は冷房がよく効いているにも関わらず、静さんが実に白々しいセリフをつぶやいてカーディガンを脱ぐ。ノースリーブのカットソーは真っ白な二の腕と深い谷間を露わにする。ちらりと横目に見ただけで思わず生唾を呑み込んでしまった。
「どうした？　顔が強張っているぞ？」
信号で止まるなり、股間を握りながらにんまりと笑って煽ってくる。ドライブをしながらの対決なので、あくまで安全運転を逸脱しない範囲での行動。それでも静さんの攻めは強烈に過ぎる。
「……これは襲ってるうちに入らないんですか」
「なぁに、この程度はただのスキンシップだよ、スキンシップ」
膨らみの先端を爪でかりかりとこすり、耳たぶをぱくりと咥える。いつもならとっくに押し倒しているタイミング。けれど信号はすぐに青に変わった。静さんがすげぇ楽しそうに笑ってますよ腹立つ。
「ふぅ、暑い暑い……」
白々しいにもほどがあるセリフが聞こえる。ちらりと横を見やると、静さんがカットソーをめくってちらちらと黒のブラを見せていた。すぐに視線を前に戻す。信号で止まってもう一度ちらりと見る。今度は乳頭を見せてきた。
「……言っておくが、私とてそれなりに恥ずかしいんだからな？」
「……良かったです、もはや痴女にしか見えなうぉっ」
チャックを開けられてパンツ越しに竿を掴まれた。
「……君以外にこんな痴態を見せると思うか？」
勃起肉の裏スジを手のひらでこすりながら、たっぷりと吐息の混じった声で囁く。
「……思わないです、はい」
「ならばよろしい。……しかし、車の中での攻防は限度があるな」
「たしかにそうですね。てか一方的に俺がやられてますし」

「はは、たしかにな」
もういちど股間を握られたところで信号が青に変わる。
「それなら一度落ち着いた場所に……お、ちょうどいい」
静さんが前方を指差す。ファミレスのチェーン店の看板が見えた。
「じゃあ夜もあそこで食いますか」
「そうだな。さほど混んでいないようだからちょうどいい」
「……何にちょうどいいのかは聞かないでおきます」
くすくすという笑い声を聞きながら、ゆっくりと車の速度を落とした。

× × ×

立地の関係なのか客は少なかった。お好きな席へどうぞと言われ、奥まった禁煙席に座る。俺たち以外の客は二組しかおらず、近くには誰もいない。
「君とはラーメンばかり食べているからな、こういった場所は久しぶりだ」
「ほっとくとマジでラーメンばっかですよね……俺でさえ心配しますよ」
すり、と何かがすねに触れる。
「……行儀悪いですよ」
「勝負のためだ、致し方ないさ」
タイツに包まれた静さんの足が甘えるようにすりついている。テーブルが小さいためか、対面に座る静さんとの距離も近い。ひと気のないこの場所では何でもし放題、といったところか。
「飲み物はどうします？　俺はコーヒーにしますけど」
「君は……最近、甘くないものをよく飲んでいないか？」
「いっしょにいる人がブラック大好きだから影響されてるんですよ」
静さんの頬がちょっとだけ赤くなる。可愛いなおい。
「それなら私も同じものにするか」
すりつける足がよりいっそうじゃれついてくる。飼い主大好き犬って感じだ。
料理も決めて店員を呼ぶ。注文しているときにすねをこすられて

変な声が出そうになった。
　間もなく届いた料理を口数も少ないままに食べる。それなりに付き合いの長い静さんとのあいだで気まずい時間が流れることはほとんどない。この人とは沈黙さえも楽しめる。けれど今は少し事情が違う。一刻も早く料理を食べ終えて、そのあとに待つ――何が起こるかわからない時間を迎えたかった。
　せっせと料理を食べ終え、皿も片付けてもらう。食後のコーヒーで一服しながら静さんをちらちらと見る。考えていることは同じなのか、何度も視線が噛みあった。
　静さんが椅子にもたれかかった。内ももに静さんの足が触れる。
「人がいないのは助かるな」
「……そう、ですね」
　柔らかな足裏が股間に触れる。周りを見回した。二組いた客のうち一組が会計をしている。新しい客が来る気配はない。
「……これも襲ってるうちには入らないんですかね」
「私が君を襲うというのが何を意味するか、君はよく知っているだろう」
「なるほど……」
　文字通り搾りとってきますもんね、静さん。
「慣れ親しんで部屋でくつろぐのも良いが、こうやって初めて訪れる場所の空気を楽しむのも良いものだな」
　至極真っ当なことを言いながら、静さんの足が股間をもみほぐす。足裏にこすられた肉茎がむくむくと膨らむ。
「あ……っ？　こ、こら……っ」
「お返ししてるだけですけど」
　俺も同じように椅子にもたれかかり、靴を脱いで静さんの内ももに足を置いた。徐々に内側にすべらせ、タイトスカートをめくり上げる。
「だ、誰かに見られるだろう……っ」
「心配しなくても大丈夫ですよ。不安ならカーディガンで隠せばいいじゃないですか」

「うぅ……っ」
攻めているときからは一転して可愛らしい声を漏らしながら、静さんがそそくさとカーディガンを腰にかける。それを確認すると遠慮なくスカートの中に足を挿し入れた。
「うあ……っ」
両脚の付け根に足裏をすりつける。
「……静さん、すげぇ濡れてます？」
指を曲げて割れ目に押し込む。タイツ越しにも関わらず、足裏にたしかな熱と湿りを感じる。
「……当たり前だろう、誰のせいだと思っている」
子供のように唇を尖らせ、俺の足をぐにぐにと揉んでくる。ちょっと、というかかなり痛いんですが。
「いつから濡れてたんですか？」
「……ずっとだよ」
「え」
「……うるさいぞ、何も言うんじゃない」
痛みを感じる寸前の力加減で股間をこすられる。お返しに割れ目を足裏でぐりぐりとこすった。
「あ……ぅぅ……ひき、が、や……これ、だめ、だ……っ」
「あし、ちゃんと開いてください」
静さんが目を泳がせ、やがてするりと足を引き、両脚を開いた。卑猥極まるあけっぴろげな体勢。
「うあぅぅ……っ」
無防備な割れ目に足裏をこすりつける。
「中、大変なことになってますね」
「い、言うな……頼むから……っ」
黒髪から覗く耳までもが赤くなっている。
「勝負はどうします？　俺はもうちょっと粘れますけど」
今すぐにでも襲いたい衝動はもちろんあるが、この焦れったい時間もまた楽しい。
けれど静さんは首をふるふると振り、

「……わ、私の、負けでいいから……早く、させてくれ……っ」
今にも泣きそうな顔で懇願しているのに、その瞳は獣のごとくギラついている。
「わかりました。そんじゃ会計しますか」
「手早く行こう、手早く」
数秒で身支度を整えた静さんが急かしてくる。どんだけしたいんだ……と苦笑しながら会計を済ませ、車に戻る。
「帰るまで我慢できます？」
「無理だ……っ」
細指がチャックを開け、パンツの隙間から肉竿を直接鷲掴んだ。
「……ここでするのはさすがにダメですからね？」
「それくらいわかっている……だから、早く、移動してくれ……っ」
内ももをこすり合わせ、人差し指の背を噛む仕草があまりに淫らで思わず見惚れる。
「……何を見てるんだっ、はやく……っ」
「あ、ああ、すいません」
その声も、膨らみをまさぐる指づかいもあまりに切実だった。
ひと気のない場所を探すと、遅くまで営業していてなおかつ駐車場の広い店があった。
「ここでいいですか」
「ありがとう、ここで頼む」
かろうじてまともな口調で喋っているが、本当に限界間近なのだろう。竿を執拗にしごかれて俺もまずいことになっている。
「いったん離してください。すぐ着きますから」
静さんが手を離す。安心してエンジンをかけた瞬間、静さんが我慢汁のまとわりついた指をねろりと舐めるのが見えた。
続く。

（２３）

広々とした駐車場に着く。なるべく周りに車のない場所に停めてエンジンを切った。しん、と耳に染み込むような静寂。数十メートル先の煌々とした店の灯りが、まるで対岸の祭りのように見えた。
「静さん、ここなら……んむっ」
シートベルトを外した瞬間に唇を奪われた。唇の合わせ目を舌でなぞられ、股間を握られる。唇の合わせ目を開くのと静さんがジーンズのベルトを外すのは同時だった。たっぷりと唾液の乗った舌が口内で蠢き、細指が手際よく肉茎を外に引きずり出す。腰を上げるとジーンズを足首まで引き下ろされた。
「んっ、はぁっ、んふぅぅ……っ」
静さんが口を離し、俺の唇を咥え、泣きそうな顔で見つめてくる。親指で鈴口をこすられてカウパー液が噴きこぼれた。
「はぁぁ……こんなに……かたく……っ」
唇を耳にぴったりと押しつけ、熱のこもった声で囁く。それだけで肉幹の硬度が増し、静さんの息遣いに喜悦が混じった。
「ここなら……大丈夫だな？　大丈夫だな？」
子どものようにきょろきょろと周りを見回しながらも竿をゆっくりとしごく。静さんがちろりと舌なめずりをした。何をしてもらえるかと期待するだけで脳が焼けるような興奮が溢れる。腰が震える。
「大丈夫ですよ、近くに車もないんでっ」
肉竿の先端を口に含まれ、語尾が間抜けに弾んでしまった。
「んん……ふっ、ぢゅる……っ」
もっと貪るように舐めるかと思いきや、静さんの舌遣いは緩慢だった。数秒に一回亀頭を舌でぬらりと撫で、両手は竿の根本と陰嚢を優しく労わるようにもみほぐす。ドライブの疲れを不意に自覚して、心地よい眠気と快感に包み込まれる。
「疲れているだろう？　シートを倒して楽になるといい」
「さすがに悪いですって……」
「私もじっくり舐めたいんだから気にするな」

「静さんはほんとエロいですね」
カリ首を唇で締めつけられ、「おふっ」と変な声が漏れた。咥えたまま笑いをこらえてらっしゃる……。
静さんの厚意に甘えて2段階ほどシートを倒す。静さんがしなだれかかってゆったりと竿を舐る光景を見入りながら、艶やかな黒髪をくしくしと撫でる。静さんは目をぱちくりとさせ、それからふにゃりと目を細めた。
「んー？　んふぅー……」
普段の凛とした表情からは想像もつかない、リラックスした可愛らしい仕草。しかしその口には肉竿が収まっている。可愛らしさと卑猥さのギャップに背すじがちりつく。
「はぁぁ……君のは本当に……何時間でも舐めていられるな……」
「静さんの場合、本当に閉店まで舐めそうですね……」
営業時間はまだ数時間はあるはずだが、静さんのエロにかける熱量は尋常ではない。迂闊に「どうぞ」などと言おうものなら、映画1本が終わるくらいの時間は平気で咥えてしまう。大歓迎ではあるんだが、腰が抜けかけるまで搾りとるのはやめてほしいんです……。
「君は私を何だと思っているんだね、まったく」
「いや……そんな、うぐっ、エロい顔して……ぐっ、説得力、ぜん、ぜ、ん……ぉあ……っ」
竿の根本をしごきながら、舌がぐるりと亀頭を一周する。温かな口の中で舐めまわされるのも格別だが、こうやって目に見えるところで舐められるのもたまらない。
「ふふ……比企谷は本当に感じやすいな」
「そうですかね？　……静さんも人のこと言えないと思いますけど」
柔らかくひしゃげた乳房の谷間に手を入れる。しっとりと汗ばんだ乳肉に指を這わせ、頂を軽くつまんだ。
「あ……んん……っ。あっ、はぁっ、んっ、んん……っ」
静さんが色っぽく眉をひそめて身体をくねらせる。息遣いに余裕がなくなり、竿をしごく手つきがせわしなくなる。
「ちょっ、静さんっ、そんなにされると出ちゃいますって……っ」

静さんが「おー？」と口を縦に広げて可愛らしく、いたずらっぽく笑う。
「たしかに、さっきからずいぶんと張り詰めているなぁ？　もうぎりぎりなのか」
静さんが見せつけるように舌で亀頭を磨き、ふたたびぱくりと咥える。深くまで呑み込み、唇でカリ首を弾き、鈴口に吸いついてふたたび奥まで。唇と頬がきゅっとすぼまっていて、動き自体はゆっくりなのにじりじりと快感が高まっていく。
「んー……んっ、んっ、んっ、ん……っ」
くぼんだ頬、伸びた鼻の下、唾液で濡れた肉茎。
街灯でぼんやりと見える淫らな光景に、思わずごくりと喉を鳴らした。
「んふぅ……ちゅっ、れるっ、ちゅっ、んっ、れるっ、んっ、んっ、んっ、ん……っ」
きゅっとせり上がった玉袋を撫でながら、徐々に小刻みな動きに変えていく。規則的な動きが安定した快感を生み、確実に絶頂へと追い立てていく。
「静さん……もう……お、あ……っ」
一瞬口を離し、楽しそうにカリ首を左右に揺らした舌で舐め、ふたたび咥え込む。ちゅっぽ、ちゅっぽ、くっぽ、くっぽ。唾液が弾ける音が耳朶を浸す。抗いようのない射精欲求が込み上げてくる。
「んふぅぅ……っ」
静さんの手がTシャツの下から忍び込んできた。細指が腹を撫でる感触にぞくぞくする。乳首を指できゅっとつままれ、口内で竿がびくりと跳ねた。限界寸前でこの刺激は強すぎる。身体の震えが止まらない。静さんは乳首を指の腹で優しくさすりながら竿を唇でしごき上げる。
「で、出る……出ますっ、出る、出る……っ」
静さんの頭を掴み、限界を迎える。喉奥目がけて白濁が噴き出した。
「んふぅぅっ？　んっ、んっく、んぐっ、んっ、ふっ、んふぅぅ……っ」

えずいてもおかしくない量と勢いにも関わらず、静さんはうっとりと穏やかな顔で精液を嚥下する。
静さんは射精のさなかも、射精が終わっても、玉袋を労わるように手のひらで撫で、乳首をまさぐり続ける。
くすぐったくなりすぎない絶妙な力加減でゆっくりと舐り、カリ首を唇で挟んで名残惜しむように引っ張り上げると、
「んんん……ぷはっ」
ようやく口を離し、薄い笑みを浮かべた。ごちそうさまでした、とでも言わんばかりの顔。
「静さん、毎回呑んでくれてますけど……大丈夫なんですか？」
「ん？　気にすることはないぞ、好きで呑んでいるんだからな。……ちょっと跳ねたな」
「そんなこと言われたらこうなりますって……」
手の中でぴくりと跳ねた竿を楽しげにさすられる。猛烈に恥ずかしい。
静さんはドリンクホルダーのお茶を勢いよく飲み、「ぷはーっ」とビールを一気呑みしたときのような声を上げて手の甲で口をぬぐった。
「これだけ元気ならすぐ行けるな？」
「え？　あ、はい、俺は大丈夫ですけど、静さんは……」
タイトスカートのホックを外し、レース地の艶めかしいショーツも脱ぐ。するりと俺に跨り、ひざ立ちになって肉槍と割れ目をこすり合わせる。
「もう充分だろう？」
ゆるゆると腰が前後に揺れる。花びらは愛液でたっぷりとぬめっていた。愛液が亀頭から竿を伝う。静さんの息遣いが甘い。
「すぐに出さないように……我慢するんだぞ？」
吐息混じりの声で囁き、俺の肩を掴む。鼻先がこすれるほどの距離で見つめ合ったまま、静さんがゆっくりと腰を沈める。肉杭が温かな膣洞に埋まっていく。
「あはぁぁ……っ」

あっさりと肉茎を根本まで呑み込んだ静さんが、M字に脚を開いて快感に浸る。へなへなと女の子座りになり、俺の腰を太ももでぴったりと挟み込んだ。
「ん……ふぅぅ……比企谷ぁ……きもち、いいぞ……っ」
「……俺もですよ」
静さんがしなりと首をかしげ、黒髪が艶やかに流れる。すぐに出さないようにと言われているが、膣ヒダの甘い締めつけと、限定的な密室で耳朶を撫でる静さんの艶っぽい声はあまりにも刺激が強い。少しでも油断すれば出してしまいそうだ。
「比企谷ぁ……んむ……っ」
甘えるように口づけをして、俺の頭を抱きしめる。俺も静さんを抱きしめ返す。イメージよりもずっと華奢な身体は抱きしめただけで庇護欲が湧きあがる。
「んっ、んっ、ちゅるっ、ちゅっ、ぢゅる……っ」
腰をゆるゆると前後に振りながら、静さんが唾液を啜り上げる。肉槍が前に後ろにと倒れ、ぴっちりと吸いついてくる蜜ヒダに絞り上げられる。
「ふふ……比企谷、どうした？　さっきから切なそうな顔をしているが」
「気持ちいいんですよ……わかっ、てる、ぉあっ、でしょ……っ」
「さて、どうだろうな……？」
鼻先をこすり合わせ、伸ばした舌先を絡め合う。ノースリーブのカットソーをずり下げる。フロントホックの透けたレース地のブラ。
「やらしすぎますって」
「君といるときは四六時中こういうことを考えてしまうものでな。つい気合が入ってしまうんだ」
「その言い方はずるいですね」
「だろうな。君は本当にわかりやすい反応をする」
ぴくりぴくりと跳ねる竿の感触に、静さんが笑いながら眉をひそめた。艶めいた反応にますますたぎる。
フロントホックを外し、ぷっくりと膨らんだ乳頭に吸いついた。

「うんん……っ」
静さんが喉を突き出して震える。けれど腰のグラインドは止まらない。乳頭を舌で転がしながら肉尻を掴み、前後の揺れに合わせて引き寄せては離す。
「あっ、はぁっ、比企谷ぁ……すご、く、いい……あっ、あっ、あっ……んふぁぁっ!?」
引き寄せると同時に不意打ちで突き上げると、静さんが弓なりにのけ反った。膣洞全体がぎりと引き締まる。
「ほら、もっと動いてくださいよ」
乳頭を固めた舌で弾きながら何度も突きあげる。静さんは「あっ、あっ」と壊れたような嬌声を漏らしてしばらくなすがままになっていたが、やがて俺を抱きしめる腕にぐっと力を込めた。
「はぁぁ……ひきがや、ひきがやぁ……っ」
髪に指を挿し込みながらキスをして、鼻を甘噛みし、喉に吸いつき、ねちっこく腰を振る。俺の身体を隅から隅まで味わおうとするかのような仕草。肉槍がさらに張り詰める。静さんはだらしなく頬をゆるめ、もっと、もっとちょうだいとおねだりするように腰をグラインドさせる。
「んっく、ふっ、んはぁぁ……大きく、なってるぞぉ……っ？　もう、出そうなんだな……っ？」
俺の耳に指を挿し込みで、くなりと首をかしげて囁く。言葉で返す余裕もなく、静さんを見つめながらこくこくと頷いた。
「はぁぁ……んっ、んっ、はぁうぅっ、はぁうぅぅぅ……っ」
ふたりの腰遣いで車がゆさゆさと揺れる。頬を伝った汗を静さんが舐めとる。俺も静さんの喉の汗を舐めとった。口づけをする。互いの汗を唾液で流す。ぐちゅぐちゅぐちゅと卑猥な肉ずれ音が耳朶を焼く。静さんが眉をひそめた。俺も眉間を寄せた。
「出る、出る、出る……っ」
歯を食いしばり、最後に一突き。静さんが折れんばかりに弓なりに反りかえった。
膣奥にこすりつけた亀頭から、尿道を伝う感触がはっきりわかるほ

ど濃密な白濁が噴き出す。尻の筋肉が脈動とともに痙攣した。一斉に鳥肌が立ち、盛りのついた牡のごとく、腰が勝手に振幅運動を繰り返す。
「あぉぉぉ……おっ、あぐっ、はぁっ、はぁうぅぅ……っ」
射精が終わっても静さんのねちっこい腰遣いは止まらない。根本から先端にかけてのなめらかな収縮により、尿道に一滴とて残すことなく搾りとられた。
絶頂の余韻が収まった瞬間、夜の静けさが戻ってきた。肌に染み込むような静寂。車の外は何もかも死に絶えたのではと思うほど。
「静さん……動けますか？」
後頭部をくしくしと撫でられる。静さんは気だるげに首を振り、
「……もうしばらくこのままでいさせてくれ」
ぽそりと囁いてキスをしてきた。
「わかりました」
「冷静な顔をしているわりに中で大きくなったんだが？」
「そりゃそうでしょう……」
静さんがくすくすと笑い、「とう」と可愛らしい掛け声と同時に膣肉を締めつけてくる。お返しに突き上げるときゅっと唇を引き結んだ。
「できることなら、今すぐ帰って一晩中抱いてもらいたいんだがな」
「……静さんってマジでエロいですよね」
「君のせいだよ。いや、おかげと言えばいいのかな？」
鼻先をこすり合わせて見つめ合ったまま、静さんがゆっくりと腰を回す。ぬち、にゅち……と結合部で卑猥な音が鳴り、遠くの街灯でぼんやりと見える静さんの顔が色っぽく歪む。
「……比企谷。目がギラついているぞ」
「後ろから突きたいなーなんて思ってませんよ」
静さんの唇が耳にぴったりと貼りつく。
「それは家に帰ってからのお楽しみだ。腰が抜けるまで犯してくれ。……あんっ」
下腹部に急激に血液が集まり、静さんが甘い声を漏らした。
「……すぐに帰りましょう」

「安全運転で頼むぞ?」
くすくすと笑う声に顔が熱くなる。せっせと後片付けをして、なるべく早く、けれど安全運転で帰宅した。
部屋につくなりキスをしながら服を脱ぎ、そのままベッドに向かった。
何時間も交わり、もう無理だ……と思った頃にシャワーに行った。浴室で静さんが「ん……っ」と甘い声とともに膣口から精液を漏らした瞬間に復活してしまい、呆れ笑いを浮かべながらもたっぷりと舐めてもらった。
シーツを替えて添い寝をすると、静さんが楽しげに甘えてきた。
エロいわ可愛いわで無敵かよこの人は……と思いながら、無事にドライブを終えた達成感と、一日中走り回った上にたっぷり交わった疲労感で、それはもう泥のように眠った。

続く。

（２４）

秋の虫の鳴き声がすっかり耳に馴染んだ頃、久しぶりに戸塚と会うことになった。

Ｇｏｏｇｌｅカレンダーを開くたびに鼻歌を歌っている俺を見て、静さんはそれはもう怪訝な目をしていた。しかし戸塚に関することならば俺のメンタルは無敵だ。もはや対粛清防御まである。

大学に入ってからも何度か会ってはいたが、今回は戸塚から「せっかくお互い成人してるんだから、お酒が呑みたいな」と言われた。

戸塚×お酒。

総武高にいた頃はまるで想像もつかない組み合わせだが、なるほどどんな感じになるか楽しみでしかないまずいテンションがちょっと高すぎる。

せっかく戸塚と呑むのなら落ち着いた場所がいいと思い、バーを提案してみた。

『わー、いいね！　八幡と行ったらゆっくり楽しめそう』

戸塚の乗り気な返信に盛大にニヤけると、静さんがまたしても渋面を作った。

当日の夜、バーの最寄り駅で待ち合わせをする。サラリーマンや学生がせわしなく行きかう中、俺は改札を抜ける前の戸塚をいち早く見つけた。

「（八幡！）」

ぱっと口を開けて俺を呼ぼうとしたものの、人前でそれはちょっといけないかーと口パクに変更してはにかむ戸塚。なるほど成仏しそう。

戸塚は改札を通り、ぱたぱたと嬉しそうに駆け足でやってきた。

「ごめん、待った？」

「いや、ぜんぜん待ってないぞ、うん、ぜんぜん」

やだもうこれただのカップルですやん……たとえ何万回とこすられたやりとりだろうと最高なもんは最高なんだよなぁ……。

今日の戸塚は、シャツにハーフパンツ、そしてキャスケットをか

ぶっている。シンプルでユニセックスな恰好。
「八幡？　どうしたの？」
「あー、その、なんだ……うん、似合ってるぞ」
くりんと首をかしげる戸塚（可愛い）にぽそりと告げる。
「えへへ……ありがとう」
ぽりぽりと頬をかいて嬉しそうに笑う戸塚。さて、楽しいデートの始まりだ（錯乱）。
「それじゃ行くか」
「うん。あ、地図見なくて大丈夫？」
「問題ない」
３０分前に来て、すでに目的地までの徒歩ルートを予行演習済みだ。戸塚と会うならばこれくらいが最低限のマナーというもの。
にぎやかな駅前から5分も歩くとひと気がぐっと減る。ちょっとおどおどする戸塚（可愛い）にちらちらと目配せをしながら歩いていると、間もなくして目的地のバーについた。看板が小さく、ともすれば見逃してしまいそうな入口。予行演習をしておいてよかったぜ……。
からん、と控えめなドアベルが鳴る。
「わ、わー……」
左後ろから可愛らしい驚嘆の声が聞こえる。
ずらりと並ぶ酒瓶。
落ち着いた色合いの内装。
背の高いカウンター。
きゅっきゅっ、とグラスを拭く音。
秘め事めいた話し声。
ふだんの生活ではまず触れることのない空気感。なるほど、戸塚のテンションが上がるのもうなずける。厚木の扉を一枚隔てただけで、まるで別世界に迷い込んだような気持になる。
「すごいね……わー……」
戸塚がぽしょぽしょと囁き、俺の袖をちまっと握る。戸塚ガチャとかないだろうか。バイト代数ヶ月分を溶かす覚悟でＳＳＲを狙いた

い。
　年季の入った木製のスツールに座る。
「わわ、高いね……よっ、よっ、と」
　戸塚が小声ではしゃぎ、お尻のポジションを整える。ハーフパンツから覗く綺麗な脚が折りたたまれるさまに視線がくぎ付けになり、慌てて引きはがした。
「八幡はこういうお店に慣れてるの？」
「いや、静さ……平塚先生と一回行ったことがあるだけだな……なんだよ」
　戸塚がにんまりと笑っている。今まで見たことがない顔。他の人がこういう顔をしたらぜったいに腹が立つんだろうが、戸塚がすると可愛さしかないな。
「仲がよろしいようで」
「……なんだよ、その言い方」
　にまにま顔の戸塚から視線を切ってメニューを眺める。
「ふぅ……」
　視界の隅で戸塚がキャスケットを脱ぐ。
「……髪、伸びたな」
「あー、そうだね。そろそろ切らないとなぁ」
　伸びた前髪をちょんちょんとつまみ、くにゃりと眉をひそめる仕草が愛らしい。俺としてはぜひこのまま伸ばしてもらいたいところなんですが。なんというか髪が伸びたことでより戸塚という人物の性別が曖昧になったというか、そもそも戸塚の性別は戸塚だよねとか、ありとあらゆる雑考が高速で脳内を駆け巡る。
「はー……えへへ、今日はいっぱい楽しもうね、八幡。……どうしたの？」
「ナンデモナイ……」
　破壊力を増した天使のはにかみ（ナイトモード）にやられ、しばしうつむいてしまった。
「八幡、ぼくにもメニュー見せて？」
「お、おう」

ふたりの真ん中にメニューを置くなり、戸塚がずいと顔を寄せる。ほのかに香る甘い匂い。痛い。心臓が痛い。あとドギマギしてる俺の振る舞いもぜったいイタい。
戸塚がメニューを眺めて「へー」とか「はー」とか可愛らしい声を漏らす。俺はそんな戸塚をじっと見つめる。ティッシュ配りのバイトを監視する人みたいな構図だ。
「ぼくはこれにしようかな……八幡は？」
「……俺も同じので」
メニューをまったく見ていなかったので極めて無難な選択をした。
「わぁ……これがカクテルかー」
届いたグラスに注がれた液体を見て、戸塚が目を輝かせる。細い部分を持ってささやかな乾杯をする。はにかむ戸塚につられて俺もぎこちない笑みを浮かべる。これってもはやデートでは？
「ん……っ」
カクテルを口に含む戸塚の唇から色っぽい吐息が漏れる。ガン見していたことがバレないように俺もカクテルを呑んだ。フルーティな味わいはたしかにおいしいが、戸塚のほんのり上気した顔に気をとられて味や香りを楽しむ余裕がない。
「八幡は最近、どんな感じなの？」
「まあ……うん、ぼちぼちだな。戸塚は？」
「ぼくもぼちぼち」
俺の言葉をマネてにひっと笑う。戸塚関連グッズをどこかしらの店のワンコーナーに設けたいな……。
「2年生になって講義の内容もレベルが上がったし、レポートも増えて大変だけど……けっこう楽しくやってるよ」
そういって浮かべる笑みはたしかに充実していた。
戸塚はいつかのマラソン大会前に話していた大学に無事合格し、今はスポーツ科学を学んでいる。
「戸塚はすげぇなぁ……テニスも続けてるんだろ？」
やりたいことに打ち込んでいるからか、戸塚は以前よりも魅力的になった。かっこよくなったような、より可愛くなったような、不思議

な感覚。
「うん。周りはすごい人ばっかりで大変だけど……毎日勉強になって楽しいよ。筋肉もちょっとついたし」
　戸塚が腕を曲げてむんと可愛らしい声を漏らす。
「すまん、ぜんぜんわからん……」
「えー？　じゃあ触ってみてよ」
　エロ漫画みたいな展開だな、とかぜんぜん思ってません、思ってませんから。
　じゃあ……とおそるおそる戸塚の二の腕に触る。
「ん……っ」
　ねえなんでそんな切なげな声漏らすの？　おかしくない？
　筋肉を確かめないことには手を離せないので、もみもみと軽くもんでみる。
「おお……たしかに、たしかに？　ついたような？」
「もー、なんであいまいなの？」
「や、だって前の状態をあんまり知らんし……」
　総武高にいた頃に同じイベントが発生した場合、理性が持ったか定かではない。今もぎりぎりだからね！
　もう……とぷりぷりとして頬を膨らませた戸塚が、なにやらちらりちらりと流し目を送ってくる。なんぞやと視線を向けると、細指が伸びた髪をさりげなくかき上げた。
　小ぶりな耳についていたのは、シンプルなイヤリング。
　どくん、と鼓動が高鳴り、冷たくて黒い血が全身を駆け巡ったような悪寒に襲われる。
　まさか、まさか……っ。
「と、戸塚、まさか、誰かに買ってもらったのか……？」
「へ!?　ち、ちがうよ!?　ちょっと興味があって、その……っ」
　なぜか脳裏にNとかTとかRとかのアルファベットが浮かんだが、戸塚は顔を真っ赤にしてわたわたとしたかと思うと、人差し指をくっつけて上目遣いで俺の顔を窺う。
「……その、に、似合う、かなって……。昨日、買ってみたんだけど。

ど、どう、かな？」
　不吉なアルファベット3文字が一瞬で吹き飛んだ。
「似合ってるに決まってるだろ」
「なんでそんなキリッてしてるの……？」
　なんなら同じ墓に入ろうとか言っちゃいそうだった。
　頬を赤らめた戸塚の「あ、ありがとう……」という控えめなお礼に悶絶していると、ふと楽しげな忍び笑いが聞こえた。斜め後ろを向けば、カップルが楽しげに会話をしている。よくよく見ればこの店は若いカップルが多い。
「八幡。平塚先生とはどんな感じなの？」
「まあ……普通だよ、普通」
「それじゃだめー。ちゃんと聞かせて？」
「うぐ……っ」
　戸塚がずいと顔を寄せてきらきらと目を輝かせる。静さんとのことは先日戸塚と電話した際にそれとなく伝えていた。この場で初めて発表するにはハードルが高すぎたからなんだが、戸塚はどうやら詳細を聞くのをとても楽しみにしていたらしい。
「まさか八幡と平塚先生がねー。まあ、たしかに仲はすっごく良かったと思うけど」
「そうか？　……あー、まあ、そうかも」
　思い出せば他の先生とはほとんど話したことがないし、なんならほとんどの生徒とも話したことがなかった。静さんには減らず口も叩けたし、バカな話も真面目な話もたくさんしていた。
　そっかー、俺は思った以上に静さんと仲良かったのかー、としみじみしていると、なにやら戸塚が妙に温かい目で見つめていることに気づく。
「どうした」
「八幡、すっごく優しい顔してる。……平塚先生のこと、本当に好きなんだね」
「へ」
　思わぬ指摘に、酒を一気呑みしたかのように顔が熱くなる。

「ねえねえ、ふたりきりだとどんな感じなの？」
「へ、あー、いや……ていうかなんでそんな俺たちのことが聞きたいんだ？　別に普通だと思うぞ、知らんけど」
　静さんの性欲に関してはたぶん並外れてるとは思うが、それ以外はきっと、たぶん、おそらく普通のはず。知らんけど。
　戸塚は伸びた髪の先をちょんちょんとつまんで、思わせぶりな上目遣いを向けた。
「その、お、お付き合いするって、どんな感じなのかなーって、興味があって……」
　ふわっとした物言い。「じゃあ俺と試しに付き合ってみる？」とあらゆる常識や倫理をぶん投げた妄言を吐きそうになった。
　そこからぽつぽつと、静さんとふだんどうしているかの話をした。日常の随所に卑猥な行為が混ざり込んでいるため、うまいこと避けるのに苦労した。戸塚はおかわりのカクテルを呑みながら、目を輝かせてふむふむと相槌を打ってくれた。本当に興味津々といった顔で聞いてくれるので、普段は壊死しかけている口の筋肉もフル稼働する。
「そっかー、平塚先生とうまくいってるんだね」
　ひとしきり話したところで、戸塚が満足げに笑みを浮かべた。
「そうか……？　まあ、そうだといいんだが」
「大丈夫だよ。……八幡は、心を許した人にはとっても優しいから。きっとこれからも上手くいくよ」
　そういってほほ笑む戸塚が髪をかき上げると、控えめな照明でイヤリングがきらりと光った。
　天使か、あるいは小悪魔か、大天使か、むしろ堕天使か。
「……そう言ってくれるのはありがたいな」
「えへへ、どういたしまして」
　何でもいい、戸塚は戸塚だ。
「八幡、もうちょっと呑む？」
「そうだな」
　もうやめてもよかったが、戸塚があまりに楽しそうなのを見て、ついつい俺も呑みたくなってしまった。

×　×　×

予定よりも1時間以上長く呑んでから戸塚と別れ、自宅に帰る。
「おかえり、遅かったな」
「ただいま……えっと、静さん？」
ソファで脚を組んでいた静さんがジト目を向けてくる。明らかに不機嫌なような……というよりは拗ねているかのような態度。
「えっと、帰りは遅くなるって連絡しましたよね……？」
「そうだな」
「えっと……？」
じゃあどうしてそんな顔してるんすかね……とは聞くに聞けない。
「……ずいぶんご機嫌じゃないか？」
「……へ？」
「君が戸塚と呑みに行ったことは知っているが、ただ単に友人と会っただけにしてはずいぶんと上機嫌な顔をしていると思ってね」
「そ、そうですか……？　まあ、戸塚ですし……」
静さんがぷいと顔を逸らす。
この態度の原因がなんとなくわかってくると同時に、いやでもそんなまさか……と自分の推測に疑念を抱く。
それでも、ものは試しということで、
「……妬いてます？」
できる限り小声で問いかけてみた。
静さんは目を見開き、顔を逸らし、缶ビールをぐいと呷った。
「……わるいか」
なにこの人、可愛すぎません？

続く。

（２５）

静さんが妬いてくれていることを嬉しく思いつつも、具体的に何に対して妬いているのかを知りたくなった。

「……えっと、俺のテンションが上がってることに妬いてるんですか？」

試しに問いかけてみると、

「……まあ、間違ってはいないな」

ソファで脚を組む静さんの隣に座る。いつもならごく自然にくっついてくるのだが、今日はいつもよりも距離が遠い。

「俺、日頃からそんなにテンション低いですか？」

「ああ、低いな。私は気にしないが」

「でも、ラーメンだとかなんだとかでそれなりにテンション上がってますよね？」

静さんがビールの残りを呷り、テーブルに勢いよく缶を置く。

「……君のテンションが上がるときはな、なんというか、あくまでひそかに浮かれているんだよ。それなのに、戸塚との呑みについて語る君はどうだ？　まるでこれからデートに行く乙女のように鼻歌まで歌っていた。君とはそれなりに深く付き合っている私が驚くほどに。小町ならばふつうに『お兄ちゃん、キモキモの実の能力者なの？』というくらいには」

「小町経由でｄｉｓるのやめません？　しかもそれ実際に言われたやつだし」

総武高でプロムの話が持ち上がる少し前、小町と川崎姉妹の４人で話したときに言われたフレーズだった。ボディブローのようにじわじわと響く罵倒だったのでいまだにはっきりと覚えている。

しかしまあ、なんというか。

「……色々とすいません」

静さんとどこかに行くときも毎回楽しみにしてはいるんだが、戸塚との呑みに備えているときのように浮かれていることはなかった。静さんからすれば「なんでお前の中でテンションが一番上がるイベン

トが戸塚との呑みやねん」とツッコみたくなる話だろう。
「……べつに、気にしないとも」
相変わらずふたりの距離は空いたまま。静さんだって自分が今どんな態度をとっているのかは充分にわかっているんだろう。わかっていても納得ができない、といったところか。
どうしたものかと考えた末。
とりあえず、静さんを抱きしめてみた。
「……は？」
耳元ですっとんきょうな声が聞こえ、それから、
「ふっ……くく、ふふふ……っ」
なにやら楽しげな笑い声が漏れた。
「ははははは！」
静さんがソファの上で転げる。やだ、ビールになにかやばい成分が入ってたのかしら……？
「いや、そんな笑わなくても……」
謝罪の意を込めて抱きしめるという、どんな往年のキザ男だよという行動をとってしまったぶん恥ずかしさもひとしおだ。具体的に言うと穴にダイブしたい。穴はなくても作る。
「いやー、すまない。君がいたって真面目なのはわかっている……わかっているんだが……くっ、くく……っ」
目尻の涙をぬぐって静さんが笑い、するりと顔を寄せた。唇が重なる。
「甘い酒の匂いがするな」
「そりゃまあ、それなりに呑んできたんで」
「君からそんな言葉を聞く日が来ようとはなぁ」
静さんがくつくつと笑い、髪を撫でてくる。頭皮を這う細指の感触にぞくりとした。
「おあ……っ？」
股間をそっと撫でられ、腰が跳ねる。静さんの視線がずるりとすべり落ちた。やわらかな手の中で肉竿がむくむくと膨らみ、静さんがじっと目を見つめてくる。わずかな手の動きと視線だけで、ふたりの

あいだの空気の色が変わった。
「……お詫びと言っちゃあなんですけど、今日は好きなことをしてください」
　静さんが目をぱちくりとさせ、
「ふむ……その心意気は嬉しいが、ふだんからやりたいことはやっているしな……あ、そうだ」
　さりげなくジーンズのチャックを開けてパンツ越しに竿を撫でていた静さんが、なにやらにんまりと笑う。
「使ってみたいものがあったんだ。とりあえず脱いでいてくれるか」
「へ？　あ、はい」
　静さんがいそいそと自分のバッグを漁るなか、せっせと服を脱ぐ。
「これなんだが」
　バッグから取り出したのは、透明な液体の入った容器だった。
「それは……美容液、ではないですよね。……まさか、ローション的なやつですか？」
　ふたりで行為に及ぶときにたまに使っているのだが、今まで見たことのない製品だった。
「これはアストログライドと言ってな、元ＮＡＳＡの職員が作ったもので、従来のローションに比べて乾くまでの時間が長いんだよ」
「へえ。……たしかに、油断するとすぐカピカピになりますもんね」
　静さんが意気揚々と服を脱いで裸になる。ソファに座る俺に跨り、下腹部と下腹部を密着させた。
「今日はこれを使って……たっぷりと気持ちよくしてやろう」
「……搾りとるの間違いじゃないですか？」
「そうとも言うな」
「否定しないんですね……」
　静さんが「ええと、タオルタオル……」と辺りを見回しながら竿を撫でる。さりげない会話をしているあいだもこういった卑猥な行為に及ぶのがたまらない。竿の根元に接している割れ目はじっとりと湿っている。
「そこに置いてるやつなら使って大丈夫です」

「おお、ありがとう。こぼれると面倒だからな」
静さんが俺の下にせっせとタオルを敷き、またぐらに座る。
すぐにローションを使うのかと思いきや、流れるように勃起肉の先を咥えた。
「んー……んっ、んっ、んっ、ん……っ」
とろりと目を細め、頬をへこませてゆっくりと顔を前後させる。温かな口内で這いまわる舌が亀頭を撫でまわし、腰がびくびくと跳ねてしまう。
「しょっぱいな。それなりに汗をかいたのか」
「まあ……けっこう歩きましたし、店の中も温かったんで」
「ふむ」
玉袋を手でさすりながら、カリ首をゆっくりと舐めまわす。今日一日でたまった汚れをこそげるように。劣情を刷り込むように。
鈴口から先走り汁がとぷりと噴きこぼれた。静さんが透明な雫をちろりと舐め、色っぽく目を細める。唇をすぼめて珠を啜り、口の中でこねくり回す。見ているだけで射精しそうなほどいやらしい仕草。
「……ふむ、いつも好きにやっているつもりだったが……どうやら無意識に抑えていたようだ。私は自分が思っている以上に……君のものを愛でるのが好きらしい。……おっと？」
ふたたび噴き出した先走り汁に静さんが目をぱちくりさせ、にいっと目を細める。
「……ふふ、楽しみだな」
「えっと……何をするつもりなんですか？」
静さんはにんまりと笑うだけで何も答えず、乳房を下から掬い持って勃起肉を挟んだ。
「おふぅ……」
生温かい感触に思わず声が漏れる。静さんはうっとりと目を細め、乳房を左右からもみくちゃにする。射精に近づけるというよりは、マッサージに近い快感。
「さてさて……では、君がかけてくれるか？　そのほうがやりやすい」
「これをですか？　……ええと……」

言われるがままに小さなローションを手に取り、静さんの胸の谷間と、ぴょこんと顔を出した亀頭に液体を垂らす。ひんやりとした粘液が勃起肉と豊乳のあいだを埋めていく。
静さんがちろりと舌なめずりをして、ゆっくりと乳肉を上下させはじめた。
ぬち、くちゅ、にゅち、にゅりゅ。
「お、おぉ……？　これ、は、たしか、にぃ……っ」
語尾が間抜けに伸びてしまう。静さんが説明したとおり、このローションは以前使っていたものと比べて明らかに伸びがいい。今までのものなら乾いてしまうくらい時間がたっても、人肌に温められたこの液体は依然としてぬめりけを保っている。
「ふふ、中々いいだろう……？　んっ、ん……っ」
静さんがほんのりと頬を上気させ、楽しげに乳肉をこねくりまわす。カリ首をはじかれるたびに腰が跳ねる。
「この行為はあまり強烈な快感はないのかもしれないが……その分、じっくり楽しめるという利点がある。君が感じている顔を見やすいというのもいいな」
「ちょっ、とっ、それっ、恥ずかっ、しっ……おっ、あっ、うぐ……っ」
強烈な快感はないといったが、それもやり方によるんだろう。竿全体を包み込んだ状態でもみくちゃにされれば心地よさが先行して、亀頭への攻めを重視されるとあっという間に射精してしまいそうになる。静さんは両者を絶妙に使い分け、俺を翻弄するのを楽しんでいるようだ。
「どうした？　もっと喋っていいんだぞ？」
「いや、この状態でしゃべるのは……おおぉぉ……っ」
ぱっくりと開いた鈴口を、伸ばした舌でこれ見よがしにほじくられる。
「ふふ……いつでも出してくれて構わないからな？」
慈母のような安らかな笑みを浮かべ、乳房をこねくり回す。透明な粘液が塗りたくられた豊乳も、上気した頬も、何もかもがいやらしい。
「この……っ」

せめてもの反撃をと、ぴんと尖った乳頭をつまむ。
「うあっ!? あっ、はぁぁ……こ、こらぁ……っ、今は、私っ、のっ、番……あっ、あっ、あ……っ」
人差し指と親指でこねくり回す。静さんの表情と声が見る間に蕩けるが、そのあいだも乳肉で刺激する動きは止まらない。色っぽく眉をひそめる顔に撃ち抜かれ、一気に射精欲求が高まる。
「静さん……もう、出そう、です……っ」
「ん……そうか。好きなだけ出してくれ」
乳房の上下動が激しくなる。たぱんっ、たぱんっと下乳が小気味よい音を鳴らす。乳頭はつまんだままだ。不意に静さんの肢体が震える。軽く果てても止まることなく乳愛撫が続く。歯を食いしばった。腹筋に力を込めた。内ももを力ませた。
できるだけ限界を引き延ばし、引き延ばし、引き延ばして……すがるように静さんの背中に両脚を巻きつける。
「出る、出る……っ」
折れんばかりに背すじを反らせ、勢いよく射精した。
「うあ……っ? あっ、はぁぁ……っ」
豊乳の谷間から顔を出した亀頭から噴水のごとく白濁が飛び散る。その勢いに静さんが目を見開き、それからうっとりと目じりを垂らした。
「はぁぁ……すごいな……」
血管が透けて見える乳肉に、どろりと濃厚な精液がたっぷりとこびりついていた。静さんが鈴口に浮いた白濁をちゅっと吸い、細喉を小さく鳴らす。
「片付けないと……って、静さん?」
後片付けをしないとなと思っていたら、静さんがふたたび乳肉を揺らしはじめた。射精したばかりの肉竿はいまだに挟まれたままだ。
「あの、なんでまだ続けてるんですか……?」
「今日は好きなだけやらせてくれるんだろう? ほれ、ローションを追加してくれ。私は手が離せないからな」
「マジですか……」

思わず独りごちながらローションを追加する。粘液と精液が混ざり合い、柔肉の谷間は恐ろしいほど卑猥な状態になっていた。
「とりあえずもう一回出すまで楽しませてもらうぞ。さすがにそのあとは洗ったほうがいいだろうから、風呂で続きをするとしよう」
「……静さんって、なんていうか……底無しですよね」
「わかりきったことだろう？」
「そうなんですけど……あらためて痛感したっていうか」
静さんがくつくつと笑い、まだまだ頑張れと言わんばかりに鈴口を舌でほじくった。

続く。

（２６）

駅の雑踏をすり抜けて入り口の柱に寄りかかる。ふう、と吐き出した白い息がふわりと漂って消えた。

「さむ……」

身を切るような寒さに縮こまる。雪国の出身だという大学の知人が「雪国の寒さはウェッティで、関東の寒さはドライな感じがする」と言っていて妙に納得したことを思い出す。湿度を伴わない冬の空気はなんというか容赦がない。いや、なら吹雪が平気かと言われたらぜったいやだけど。

金曜日の夜とあって駅前はごった返している。近くに大学がいくつかあるためか、サラリーマンだけでなく私服のウェイウェイした連中も楽しげにうろついていた。

「ずいぶんと冷え込むな」

耳に馴染んだ声に振り向く。トレンチコートに身を包んだ静さんが手をこすりながら歩み寄ってきた。軽快に鳴るパンプスの足音。背すじをぴんと伸ばした歩き姿は見とれるほど綺麗なのに、ちょっと照れながら身を寄せる仕草は甘える猫のようでとても和む。

「お疲れ様です」

「すまんな、遅くなった」

「いや、ぜんぜん待ってないですよ。５分くらいです」

「５分でも充分に寒かろうに。職場から真っすぐくればもう少し早かったんだが……」

「くつろげたほうが良いでしょ。気にしないでください」

静さんは仕事終わりにいったん帰宅して、着替えてから合流していた。今日は居酒屋に行くため、駅で合流してこのまま歩いていく予定だ。

「さりげないフォローが板についてきたな」

「素敵な女性に遜色ない男になるために頑張ってるんですよ、それなりに」

「……歯が浮きすぎて入れ歯になりそうだな？」

「静さん、顔赤いですよ」
「君こそ」
静さんは肘で小突いたかと思うと、俺が手を入れているポケットに自分の手をすべりこませてきた。手の甲に感じる冷たさに一瞬跳び上がるも、すぐに指が絡みあって慣れた感触に安心する。
日中とはがらりと変わった街並みをのんびりと歩き、目当ての個室居酒屋に到着した。雑居ビルの5階にエレベーターで上がっていると、途中で静さんがこてんとしなだれかかってきた。ほーん。可愛すぎか？
予約していた旨を店員に伝え、部屋に案内される。静さんがなんだかもじもじしているのではてと首をかしげると、ちらちらと俺を流し見て髪の毛先をいじった。
「……比企谷の名前で予約していると、なんだか照れるな」
「……まあ、たしかに、まあ、うん、そうですね」
顔が熱い。静さんが何を想像したのかを想像して顔が熱い。
落ち着いた色合いの木でできた廊下を靴下で進むと、予約した掘りごたつの部屋に案内された。いわゆるカップルシートというもので、ふたりが横並びで窓の景色を眺める形。正面には夜の街並みが広がっていて、思わず感嘆の声を漏らしてしまった。
「ほどよく狭いのがまた良いな」
「あー……たしかにそうですね」
ホームページで見た部屋よりも若干狭い感じがするが、大人数で呑むならまだしも今はふたりきり。並んで座ったらほとんどスペースがないこのくらいの広さのほうが良いのだろう。
「うんうん、これは良い部屋だ」
静さんがウキウキしながらコートを脱ぐ。ニットセーターにタイトスカート、それからタイツ。お付き合いを始めてからいっそう艶めかしくなった静さんの私服姿に思わず見入ってしまい、視線を逸らす。が、間に合わなかった。
「君はいつまで経っても性欲を隠せないな」
静さんが楽しげに笑いながら俺の頬をぷにぷにとつっつき、それか

ら俺のコートを預かってくれる。死ぬほど恥ずかしい。
静さんがごく自然に、肩や太ももがかすかに触れる距離に座った。家でくっつくときとはまた違う感覚になんだかそわそわしてしまう。ドアは俺の後ろにあり、廊下に耳を済ませれば店員のひそひそ声でのやりとりや、トイレはどこかと尋ねる客の声が聞こえる。
メニューはタブレットで入力できるタイプだった。店員と顔を合わせる回数をなるべく減らそうとしているのだろうか。ふたりきりのときは特にありがたい。ちなみに大人数でしかも大して気心のおけない人といる場合、俺は死んだ顔のまま率先して店員に注文をして料理も受け取る。それとなく会話を減らす術なら千葉県で誰にも負けない自信がある。
「今日の仕事はどうでした？」
飲み物とつまみを注文したところで尋ねる。
静さんは流れるように俺の太ももに触れると、
「何人かの女子生徒が私に懐いてくれているんだが、放課後に質問に来たかと思えばただの雑談になることが多くてな。今日も他の先生にたしなめられてしまったよ」
「やっぱり慕われてるんですね」
率直に思ったことだった。そんな先生だからこそ、俺は総武高にいたときもさんざん世話になり、そのあとも縁が切れず、こうして今隣にいる。
静さんは俺の言葉に目をぱちくりとさせ、それから何やら唇をにゅっとすぼめ、俺の太ももをてしてしと叩いた。
「可愛すぎるんですけどどうしました？」
てしてし、てしてしてし。
「……全入れ歯になってしまえ」
俺の二の腕に頭突きしながら怖いことを言ってきた。やってることは可愛いのに。
「君はどうなんだ？　大学2年生となればそれなりに忙しいだろう」
「あー……そうですね。まあ、受けてる講義は1年のときから多いですけど……もう少しすれば楽になるんじゃないかなって思ってます」

「安心したまえ、3年になればゼミが増えて講義のときより気が休まらなくなるぞ」
「ぜんぜん安心できないんだよなぁ……。情報は集めてるんで、あんま厳しいとこにはいかないようにしますよ」
大学の先輩の様子を聞くと、ゼミの選び先ひとつで明暗が分かれるようだった。がっつり学問をやりたいガチ勢は厳しいゼミに自ら飛び込む気のようだが、俺はそこまでする気になれない。ゆるいゼミを選びつつ、卒業に必要な単位を昨年度と今年度でだいたい取り終えて、悠々自適な大学生活を送りたい。
ちらりと静さんを見やる。
「……君の時間が多くなったところで、私と会える時間が増えるわけではないぞ？」
色々と見透かされていた。
「それでもいいですよ。今だって、静さんが空いてるのに俺が空いてないときがあるじゃないですか」
家庭教師のバイトから帰ってくるなり押し倒されることがよくある。字面にすると中々の事案だが、事実だからしかたない。
「君がそんな殊勝なことを言ってくれるとはなぁ……」
とん、と俺の肩にしなだれかかり、嬉しそうにぽしょりと囁く。顔が一気に熱くなった。
猛烈に静さんに触れたくなったところで、戸を控えめにノックされた。静さんがぴょいんと飛び跳ねる。可愛すぎか。
「ご注文の品をお持ちしましたー。まずは……」
俺が淡々と酒やおつまみを受け取るあいだ、静さんは自分の頬を両手でぺちぺちと叩いていた。
注文したものがそろったところで乾杯する。
「そういえば、最近同僚や生徒によく言われるんだよ。『肌艶が良くなったし、すごく元気になりましたよね』と」
「あー……それは俺から見てもわかります」
お付き合いが始まってからの数ヶ月で、明らかに静さんは綺麗になった。冗談かと思うほど肌の張りがすごい。

「タバコを吸わなくなったのも大きいが……それもこれも君のおかげだよ」
　ビールを景気よく喉に流し込み、俺の内もものきわどい部分を撫でてくる。
「若い、と言われることは今も嬉しくはあるんだがね、さほど執着しなくなったよ」
「そうなんですか？　年を重ねるごとに嬉しくなるもんだとばかり思ってましたけど」
「私もそう思っていた。けれど、今は君を喜ばせる身体でさえいられれば、問題ないと思えるようになった」
　アルコールが回ってきたのか、ほんのり頬を赤らめた静さんの手が股間をきゅっと握る。
「……さりげなくすごいこと言いましたね、今」
「だってそうだろう？　若かろうがそうでなかろうが、元気に互いの身体を貪りあえればそれが一番だ」
　たった数ヶ月で考え方がこうも変わるとは、自分でも驚きだよ……としみじみしながら股間を握ってくる。
　静さんが焼き鳥を豪快にかじった。唇が油で艶っぽく濡れ光る。
「……見すぎだ、比企谷」
　ビールジョッキを傾け、色っぽい流し目を送りながら細指を蠢かせる。
「女は酔ったときと満腹のときに性欲が高まるらしいな」
　細指がチャックをつまんで下ろし、カリ首をつまんで隙間からパンツの膨らみを引っ張り出す。
「男は逆なんですよね」
　声が上ずらないようにするのが精いっぱいだった。やわらかな指がカリ首をくにくにと揉み、パンツに先走りがにじむ。
「私がしっかりと君を興奮させればいいだけだろう？」
　耳に熱い吐息がかかる。思わずぐびりと喉を鳴らした。
「ふむ……手の中でゆっくりと育つ感触は、いつ味わってもいいものだな」

にんまりと微笑み、膨らんだ股間をぽんぽんと撫でる。
「帰ったらがっつりやるぞ。覚悟しておけ」
「……静さんこそ」
背中に腕を回し、腋の下を通って右の胸を掬うように揉む。
「うんん……っ」
甘い声を漏らし、内ももを悩ましげにこすり合わせる。タイトスカートがわずかにめくれ、タイツに包まれた太ももが露わになった。
「……んっ、くぅっ、こらっ、比企谷ぁ……っ」
右手で乳房に触れながら、左手で太ももをさする。スカートを少しずつめくりあげ、内もものきわどい部分を指で愛でる。静さんのおとがいがくくくと吊り上がる。そのあいだも細指はすがるように肉茎を撫でさすっている。
「……注文しますか？」
酒とおつまみがすでになくなっていた。静さんが震えながら首を振る。
「……しばらくは、いい」
視線が勃起肉に縫い付けられている。
「……これ、どうしたいですか？」
静さんが目を見開き、ちらりとドアを見やり、それからおずおずと上目遣いになる。
何か言葉にするより先に、ゆっくりと口を開けた。
ちろり、と舌を出す。引っ込めることなく、朱い舌をねろりねろりと揺らす。
暴力的なまでに淫猥な仕草。
膨らみの先端に、じわりとカウパーがにじんだ。
続く。

（２７）

目の前のテーブルをちらりと見やる。空になったグラスと皿。個室でなければ店員を呼び止めて片付けてもらうところだが、今はそんな心の余裕もない。

「比企谷……」

耳元でささやく静さんの吐息が熱い。パンツ越しに勃起肉を愛おしげに撫でさすり、劣情で目を潤ませている。

なめらかな黒髪をそっと撫で、頭をつかんだ。

最近ますます綺麗になった顔を、股間の膨らみに押し付ける。

「うあ……っ」

静さんは嫌がるどころか、俺の太ももをまさぐり、嬉しそうに鼻を鳴らした。

「んっ、ふぅっ……はぁぁ、いやらしい……匂い……っ」

掘りごたつから脚を出し、よつんばいで肉幹の匂いを嗅ぐ。突き出された尻を包むタイトスカートをめくり、タイツに越しに肉尻を撫でる。静さんの目が劣情でどろりと濁った。

「舐めてください」

静さんが今にも眠りそうな目で頷く。ベルトを外してパンツから亀頭だけ引きずりだし、カリ首の裏側に唇を押し付ける。

「んん……っ。はぁぁ……っ、ちゅっ、ちゅぴっ、んっ、ん……っ」

何度も口づけをして、それから舐め溶かすように舌を這わせる。へそに向けてびゅるりと噴きこぼれたカウパー液が舌に絡めとられ、細喉の奥に消える。

「ふふ……かたくしすぎだぞ……？」

いたずらっぽく笑い、パンツを引き下ろして肉幹を露わにする。亀頭を腹に押し付けて竿の根元から先端にかけてゆっくりと舌を這わせる。裏スジの凹凸のひとつひとつを確かめ、己の体液を塗り込んでいく。

「ちゅっ、んっ、んっ、んー……っ」

口淫に耽る静さんの顔は息を呑むほど淫らなのに、好奇心に満ちた

少女のようにも見えるから不思議だ。タイツに包まれた尻が悩ましげに揺れる動きに視線が引きずり回される。店のわずかな喧騒さえも遠のいていく。
静さんが肉竿を立て、大きく口を開いた。
「あー……むっ」
朱唇が亀頭を挟み込んだ。温かな口の中にゆっくりと肉茎が呑み込まれていく。鋭い快感に腰が浮いた。ジーンズをずり下ろされ、内ももを楽しげに撫でさすられる。
「んふぅぅ……んっ、ぢゅるっ、ぢゅるるる……っ」
玉袋を撫でさすり、舌で丹念に亀頭を磨く。腰が跳ねてしまえば、その分だけ静さんは抵抗することなく咥え込み、そこでまた亀頭を丁寧に舐る。
「お……ぁ……静さん、エロすぎですって……っ」
震える手を伸ばし、タイツを下げる。さすがに静さんも目を見開いたが、ずり下ろすことに抵抗はしなかった。
「うわ……っ」
露わになった下着に驚く。包む、という言葉が適切とさえ思えない。黒のTバック。むっちりした肉尻の谷間に紐が食い込み、なめらかな尻肌がむき出しになっている。
「んふー」
驚いたか、と言わんばかりに目を細め、顔を上下に揺らす。口内にたっぷりとたまった唾液がくっぽくっぽと水音を鳴らす。手のひらに包まれた玉袋がきゅっとせりあがった。
「仕事してるときから穿いてたんですか？」
「……さすがにそれはできない」
というか……と、何やら口をもにょもにょさせる。可愛らしい仕草だが、そのあいだも竿をゆるりとしごかれて全く気持ちが休まらない。
「こんな大胆な下着を身に着けていたら、一日中君とセックスすることばかり考えてしまうだろう。濡れるし、集中できないしで……とても仕事のときになぞ穿けないさ」

嬉しい言葉に肉杭の硬さが増す。静さんが目をぱちくりとさせ、嬉しそうに目を細めてふたたび咥え込んだ。
「んっ、んっ、んっ、ん……っ」
限界が近いことに気付いているのか、唇の締め付けをわずかに強め、規則的な動きを始める。
気持ちいい。本当に気持ちいい。だけど、この人の顔が色っぽくなるさまをもっと眺めたい。
「んふぅぅ……っ？」
ショーツの紐をくいくいと引っ張り、肉尻の谷間に食い込ませる。静さんの眉が艶っぽくひそめられた。口淫の動きが緩慢になった隙をつき、今度は紐をずらして割れ目に指を食い込ませる。
「んふぅぅ……っ！」
声を抑えるためなのか、静さんは肉幹を一気に半分近く咥え込んだ。割れ目はすでにぐっしょりと濡れていた。指をつけては離す。ぴちゃぴちゃと鳴る水音。静さんの顔が羞恥でほんのりと赤らむ。それでも静さんの唇と舌は蠢き、限界に追い立ててくる。
「静さん……もうすぐ出そうです」
黒髪を撫でるとかすかに汗ばんでいた。こくりと頷き、睾丸を撫でながらゆっくりと顔を上下させる。くっ、くくくっ、と白濁がせりあがってくる。
「んっ、ぢゅるっ、んふぅっ、ぢゅっ、ぢゅるるっ、ぢゅるる……っ」
いやらしくて、それでいて控えめな水音を鳴らしながら、肉茎を舐めしゃぶられる。高まる快感に背すじが反り返り、足の指が丸まる。
「出ます……出る、出る、出る……っ」
静さんが肉茎を根元まで咥え込んだ。ぶるりと震えた瞬間、白濁が勢いよく噴き出す。
「んん……っ、ふっ、んふぅぅ……っ」
喉奥を精液が叩く。尿道を通る感触で、どれほど精液が濃いのかがわかる。静さんが小刻みに震えながらも細喉を鳴らす。
射精の脈動が止まると、ちらちらと可愛らしい目配せをしながらゆっくりと顔を振った。過剰な快感を与えることなく、優しく搾り取

る唇の締め付け。
「……ぷはっ。はぁ、はぁぁ……っ」
口を離した静さんの顔からは少しも劣情が薄れていない。それどころかますますたぎっているように見える。
「めちゃくちゃ気持ち良かったです」
「ん、それなら良かった。……しかし、参ったな。もっとしたくなってしまった」
ゆるゆると竿をしごきながら、熱っぽい上目遣いを向けてくる。
「静さんがぜったい声を出すと思うんで、さすがにやめときましょう」
「……君こそ、それなりに声は出すだろう？」
唇を尖らせる仕草が可愛らしくてしかたがない。
静さんがひざ立ちになって黒髪をかき上げる。ショーツがずれてむき出しになった下腹部にごくりと喉が鳴った。
「今日はとりあえず、もう1杯だけ注文して……って、お、おい、比企谷……っ？」
人差し指を唇に当てつつ、濡れた割れ目に中指を挿し込む。たっぷりと潤んだ膣内で指を泳がせ、やわらかな膣ヒダに食い込ませる。
「んっ、く……っ、あっ、ひ、ひきがやっ、だめっ、だ、こんな、のぉ……っ」
両肩に手を乗せ、耳に唇を押し付けてくる。喘ぎを押し殺した吐息が脳髄まで染み込む。
静さんの腰がかくかくと揺れる。肩に指が食い込む。震えが大きくなる。
限界はすぐに訪れた。
「イっ……く……っ。イク、イク、イっ……んふぅぅぅ……っ」
俺の身体をきつく抱きしめ、声と痙攣を無理やり押さえ込む。膣肉の締め付けは強烈だった。指を食いちぎらんとするかのように収縮して、噴き出した愛液は手首まで濡らした。
「……すいません、どうしてもやりたくなって」
「……構わないさ、これくらい」
言いながらも頬をつねってきた。この程度で許されるならありが

たい限り。
　静さんがおでこに貼りついた黒髪をかき上げた。
「しかし、今ので余計にムラムラしてしまったな……。あと、ここにこもった匂いがいやらしすぎる。今度来たときにもう少し注文することにして、今日はもうお暇しようか」
　竿をしごきながら静さんがぽつぽつと話しているんだけれども、
「……えっと、静っ、さんっ？　あのっ、これっ、このままだと……出そうなんですけど……っ」
「ん～？　何か言ったか？」
　可愛らしく小首をかしげ、耳をちろちろと舐めてくる。
　反撃にふたたび下腹部をいじろうと手を伸ばす。即座に竿を握る手を引っ込めた。
「これ以上は本当に声が出てしまう……」
　ぽしょぽしょと囁いたかと思うと、すがるように竿を握る。
「帰ったら、たくさん抱いてくれ」
「……っ」
　くらりとするほどストレートなおねだり。
　間抜けなくらいぎこちなくうなずくと、静さんは楽しげに笑い、細指を波打たせてちろりと舌なめずりをした。

　続く。

（２８）

帰りの電車で座っているときも、静さんと指を絡めて手をつないだ。静さんはほんのひとときでも興奮を薄れさせまいとするように、俺をちらりと見つめては指の腹をそっとしごいた。コートを着ていなければ、下腹部の膨らみが周囲にバレてしまうところだった。

駅から出ると、いっそう厳しくなった夜気が肌を撫でる。けれど身体の芯に灯った熱はまるで冷めることがない。駅からマンションまでは歩いて１０分ほど。その時間がたまらなくもどかしく、たまらなく楽しい。

「あ、こら……っ」

コートの上から肉尻を撫でると、静さんが甘えた声でたしなめた。周りにひと気はない。静さんが腕を組み、俺のコートの中に手をすべり込ませた。歩きながら器用にチャックを開け、ボクサーパンツの中に細指を潜り込ませる。

「ずいぶん硬くなってるな……。それに、先が濡れているぞ？」

噴きこぼれた先走り汁を亀頭に塗りたくられ、思わず立ち止まる。

「……静さんもですよ」

タイトスカートの中に指を滑りこませ、下着の機能を果たしていないショーツの上から割れ目をかりかりとこする。

「んん……っ、く、ふぅぅ……っ」

がくん、とひざから崩れ落ちそうになる静さんの腋から腕を挿し込み、乳肉を掬って支える。静さんが泣きそうな目で弱々しく睨んできた。

「……君は本当に鬼畜だな」

細指で作った輪でカリ首を絞めつけ、耳をちろりと舐めてそっと囁く。声が震えているのは寒さのせいではないんだろう。

「寒いですし、早く帰ったほうがいいですよね」

「それならまずこの手を止めなさ……ぁっ、うんんっ、うくぅぅ……っ」

マンションに着くまで、静さんの押し殺した声が途絶えることはな

かった。

×　×　×

エレベーターに乗った瞬間、静さんの背を壁に押し付けた。目を見開いて固まる静さんのコートの前を開き、ニットセーター越しに胸を触る。

「はぁうぅぅ……っ」

よじった首に綺麗な筋が浮かんだ。ひざががくがくと震えるさまがあまりにもいやらしい。充分に興奮した今は強めの愛撫でも感じるようで、もみくちゃにすればするだけ静さんの声が、表情が甘くなる。

「ひ、比企谷……さっきから、鬼畜にもほどがあるぞ……っ？」

「静さんがエロいのが悪いです」

コートの前を開かれた。お返しとばかりに乳首と股間を爪でこすられる。静さんの部屋がある階までのほんのわずかな時間さえ惜しむように互いの身体を貪る。

ドアが開いた瞬間にふたりともコートの前を閉じた。誰もいないことを確認すると、静さんが俺の股間を掴んで歩き出す。

静さんはせわしない手つきで鍵を開けると、すばやく中にすべり込んだ。俺も入るとすぐさまドアを閉め、鍵をかける。

俺が動くより先に静さんが抱きついてきた。唇が重なる。

「ん……っ、ふっ、んふぅぅ……っ」

顔を傾けた静さんがためらいなく舌を伸ばしてくる。絡めようとする俺の舌をぐりぐりと押す。内頬や歯列を舐められる。お返しに同じことをすると静さんのひざが笑った。

「んっふ、ちゅっ、ぢゅるっ、ひき、がやぁ……はぁぁぁ……っ」

静さんの瞳がどろりと濡れている。髪の毛に細指が差し込まれ、ぞくぞくとした愉悦が背すじを駆け抜ける。

互いにコートを脱がせ合い、床に放る。いつもは丁寧に扱うが、今はそんな余裕がかけらもなかった。

「ひきがやぁ……っ」

囁かれた声はたっぷりと吐息が混じり、夜気で冷えた耳を溶かすよ

うな熱を帯びていた。
静さんがするりと腰を下ろす。タイトスカートの中を遠慮なく剥き出しにする蹲踞の姿勢。両手で勃起をこすられて腰がわななく。すばやくベルトを外してジーンズを下ろし、パンツの上からじっくりと撫でてくる。
「お……ぁ……っ」
膨らみの先端には先走りが染みていた。そこへ静さんが愛おしげにちゅっ、ちゅっと何度もキスをして、裏スジに鼻を押し付ける。
「はぁぁ……いやらしい匂いがする……っ」
俺の腰を両手で抱きしめ、睾丸から亀頭にかけてゆっくりと裏側の匂いを嗅いでいく。そのたびにもどかしげに揺れる腰遣いがあまりにいやらしい。
すぐにパンツを下ろすかと思いきや、静さんの手は両の太ももからパンツの中にすべり込んできた。
「おっ、おぉ……っ？」
不意打ちに間抜けな声が漏れてしまう。静さんはいたずら成功とばかりに楽しげに笑い、玉袋や竿の根元をさわさわとまさぐる。
「ふふ……さっき出したばかりなのに、まだまだ入っているな」
玉袋を手のひらで転がしながら目を細め、カリ首の裏側にキスをする。
「あの、静さん……そろそろ……」
「んー？　舐めてほしいのか？」
「いや、こんだけエロいことされたらそりゃそうでっ」
パンツをずるりと剥かれた。勢いよく飛び出た肉槍の先端を、静さんがためらいなく口に含む。
「んっ、んっ、んっ、ん……っ」
ぴっちりと締めた唇にカリ首を弾かれるたびに腰が跳ねる。静さんの鼻の下は、遠慮のない吸いつきによって卑猥なほど伸びていた。肉茎を引っこ抜かんばかりに引っ張られ、さらに鈴口を舌でほじくられる。カウパー液が次々と噴きこぼれて、静さんが大量の唾液とともに美味しそうに嚥下する。

「ふふ、どうした比企谷？　さっきからずいぶんと切なそうな顔をしているが？」
小生意気な反論でもしたくなるが、舌を左右に揺らしてカリ首の裏を愛でる艶姿に視線が引きずられ、思考がまとまらない。ドア一枚隔てた向こうはマンションの廊下だというのに、静さんは躊躇せずにぐっぷぐっぽと淫猥な水音を鳴らす。
「んっ、ちゅっ、ぢゅるっ、んっ、ふぅぅ……んふぅぅぅ……っ」
店でたっぷり搾り取ってから、まだ数十分しか経っていない。それなのに、静さんはまるで何日何十日に及ぶ渇きを潤すかのように口淫に耽る。
「静さん……ぉあっ、舐めるっ、のっ、ほんとっ、好きっ、ですよね……っ」
静さんは目をぱちくりとさせると、竿の根元をしごきながら口を離した。何を話そうか考えるあいだも固めた舌先で鈴口をほじくっている。この人エロすぎません？
「そうだな……正直、君のたくましいものを舐めるたびにどんどん好きになっている」
「……エロすぎですって」
艶やかな黒髪を両手で押さえて引き寄せる。静さんは抵抗することなく肉竿を口に含み、顔を傾けて徐々に奥へ奥へと咥え込んでいく。
やがて、亀頭が喉奥にこつりと当たった。
「んふぅぅ……っ、んっ、んぐっ、ふぅぅぅ……っ」
静さんは目じりにほんのりと涙をためながら、自分からゆっくりと顔を右に左にと倒す。俺の腰をキツく抱きしめ、肉竿を口全体で頬張り、愛でる。
「んんん……ぷはっ、はっ、はぁぁ……っ」
たっぷり数十秒に渡って喉奥まで咥え込み、ようやく離す。肉竿は湯気が見えそうな気さえした。竿と静さんの唇のあいだにてろりと唾液の糸が伸び、それがゆっくりと弓の形を描く。落ちる寸前に静さんが手のひらで受け止め、その手で竿の根元をしごきだした。

「おぁっ、静さんっ、それ、気持ちよすぎ……っ」
ほんの少しだけ握る力を強めた指の締めつけ。射精に追い込むことを目的にしているのが、静さんのいたずらっぽい表情からもわかる。
「たくさん出してくれ……」
うっとりとつぶやき、空いた手でぶどうの実のなりを確かめるように、玉袋を逆手で螺旋を描いて撫でさする。続けざまに亀頭をぱくりと咥え込み、温かな口内で舌が亀頭を何周も何周も回る。
「ぐ……うぅぅ……っ」
3ヶ所を同時に責められ、立っているのが不思議なほどに身体が震える。唇と指の隙間から見える肉槍は青筋を浮かべてがちがちに張り詰めている。
柔らかな手のひらに愛でられる玉袋がきゅっとせりあがった。
「静さん……出ます、もう、出る、出る……っ」
竿をしごく手と、亀頭を磨く舌にわずかに力が込められる。ほんの数秒後に、せりあがった白濁が亀頭の割れ目から勢いよく噴き出した。
「んふぅぅぅ……んっ、んっ、んっ、ん……っ」
静さんの目が三日月を描く。根元をゆるゆるとしごきながら、次々と噴き出す精液をためらいなく嚥下していく。そのあいだも玉袋はずっと撫でられていて、鋭い快感と安心感に挟まれたまますっかり搾り取られた。
「……ぷはっ。ふぅ……たくさん出たな」
静さんが満足げに笑う。俺の限界を察してか、さりげなく腰を支えてくれていた。
「さて、そろそろベッドに行こうか」
「……その前に、俺も反撃していいですか？」
肉尻をさすって囁くと、静さんの細喉がこくりと鳴った。
続く。

（２９）

静さんの手を引いて立ち上がらせ、ニットセーターをたくし上げる。黒レースのブラは乳頭がうっすらと透けており、Ｔバックのショーツに負けず劣らず卑猥だ。

「静さん、こんなエロいの着て居酒屋に行ってたんですね……」

「……ああ、君にバレたらどんなことをされるのかと期待していた」

この人は、どうしてこうも的確に人の劣情を煽るのか。

下着というにはあまりに頼りない薄布の上から、ぷっくりと膨らんだ乳頭をそっとつまむ。そのとたん、静さんの腰ががくりと落ちた。

「はっ、ぁぁ……比企谷……っ。ここだって、充分に危ないのはわかっているだろう？」

「そうですね、ドアの向こうは廊下ですもんね」

言いながらきゅっ、きゅっとつまむ。静さんが顔をくしゃりと歪め、すがるように唇を突き出してきた。重ねた瞬間にぬるりと舌が入り込んでくる。たっぷりと唾液の乗った舌。両手はごく自然に肉竿に触れ、さわさわとまさぐってくる。

「キスしながらだったら、なんとか……」

静さんがぽしょぽしょと囁く。可愛いなこの人。

黒レースのブラのホックを外し、量感たっぷりの乳房を掬うように持つ。外は凍えるような寒さなのに、下乳にじっとりと汗が浮いていた。

「こ、こら、あまり、汗をかいているところを触らないでくれ……」

「恥ずかしいんですか？　俺は好きですけど」

「うぅ……そういうことを言われると止めづらくはぁうぅっ!?」

不意打ちで乳頭を爪でこすった瞬間、静さんがおとがいを上げて鋭く喘いだ。慌てて口を手で塞ぎ、竿をぎゅーっと強く握られる。

「さ、触るときはちゃんと言え……あっ、あんっ、あっ、あっ……んむっ、んふぅぅ……っ」

唇を塞ぎ、左右の乳頭を爪でかりかりと弾く。静さんの目がどろりと蕩け、両のひざが何度もぶつかる。

ショーツの頼りない生地をずらし、中指を滑りこませた。たっぷりと潤んだ膣内にあっさりと根元まで埋まる。
「んぐ……んんんん……っ」
静さんの声が獣性を帯びた。膣ヒダを指の腹で撫で、ひときわ柔らかい部分を押し込む。ぐっぷぐっぷと膣内を撹拌する音を立てると、静さんの顔が快感と羞恥で一気に茹だった。
「んふぅぅっ、ひきが、やぁ……っ。うんんっ！　だめ、だ、声、出る……んふぅっ？」
膣洞から引き抜いた指を静さんの口に入れる。焦点の定まらない目をしたまま、中指の根元から先端まで舐ってくる。指の腹や、指と指の境目を舐められるとひどくぞくぞくした。
「比企谷ぁ……そろそろ、ベッドに行きたい……はやく、抱いてくれ……っ」
すがるような上目遣いは劣情と庇護欲と嗜虐心を同時に煽る。早く望む通りにしてあげたいと思うと同時に、もう少しだけいじめたくなる。
「もうちょっとだけ付き合ってください」
静さんの肩を掴み、くるりと半回転させる。「え、え？」と可愛らしく慌てる静さんを眺めながら、上がり框に腰を下ろした。
「こっちに尻を突き出してください」
静さんの背中がぴくりと揺れる。いちどだけちらりとこちらを振り返り、「うぅ……」と弱々しく唸ったものの、観念してドアに手をつき、自分でタイトスカートをめくり、薄布がずれて淫部が剥き出しになった肉尻を突き出した。
鼻腔を浸す甘酸っぱい匂いに頭が痺れる。吸い寄せられるように尻肌に指を這わせ、まずは肉尻に唇をつけた。
「あん……っ」
静さんの腰がぴくりと跳ねる。続けざまに何度もキスをする。静さんの肉尻がくっ、くくっと高度を下げる。はやく舐めてほしいと主張するように。
豊臀を指で割り広げ、ぐっしょりと濡れた花びらに口をつけた。

「んぐ……っ」
耳朶を打つくぐもった喘ぎ。手で口を塞いでいるんだろう。鼻先を会陰にぐりぐりと押しつけながら、舌を上下させて花びらを何度もなぞる。
「あっ、あぐっ、はっ、はぁっ、はぁぁぁ……っ」
静さんの肉尻が何度も跳ねては遠のくが、またすぐに戻ってくる。舌をめいっぱい伸ばして膣内に突き入れては抜くのを繰り返す。次々とあふれ出す愛液は何度啜っても止まることがない。
「んっく、んっ、んぐっ、ひきがやっ、これっ、ほんとにっ、こえっ、でる……んふぅぅ……っ!?」
皮に包まれたクリトリスに舌が触れた瞬間、肉尻がぎゅっと引き締まった。顔が心地よく圧迫される。それでも構わずに、昂った身体の中でもひときわ敏感な場所を舌先で右に左にと弾く。
「んくぅぅ……んぐっ、ふっ、んくぅぅぅ……っ」
内股になって震える静さんの太ももを撫でさする。肉感的な身体を隅々まで味わう行為が以前よりも楽しくなっている気がする。
「ひきがや……っ、だめだ、もう、イク、イク、イク……っ」
静さんの身体のわななきが大きくなった瞬間に口を離して立ち上がる。
「へ……っ？　あ、ど、どうして……っ」
戸惑う静さんの背後に立ち、肉槍を一気に根元まで突き入れた。
「あぐっ」
短い悲鳴を上げ、静さんの身体が痙攣した。口を手で塞ぎ、空いた手で乳頭をつまみながら腰を振る。肉尻が波打ち、触れていない乳房が揺れるさまがたまらない。
「うぐっ、んっ、ぐっ、んぐぅっ、んっ、んっ、ん……っ」
静さんの声に獣性が混じる。膣内はぬるぬるで、このまま1時間でも2時間でも挿入していられそうだ。だらりと垂れさがった手の先がぴくりぴくりと跳ね、俺の腰をすがるように掴んでくる。
「静さん、気持ちいいですか？」
尋ねた直後に唇を奪う。静さんは力なく舌を絡めながらこくこく

と頷いた。
ドア一枚隔てた廊下はいつ誰が通るかもわからない。音を立てることなく、代わりに奥へ奥へと丁寧に、ねちっこく突き込む抽送。斜めに突き上げる動きに合わせて静さんが腰を振る。静さんの手の爪が腰骨をかりかりとこする。
「はぁうぅ……っ？」
唇を離し、黒髪を手で流してうなじに吸いつく。生々しい甘い匂いと、舌に触れる汗。
「比企谷……っ、だめだ、ほんとに、声が、出る……っ」
静さんが俺の髪に口元をうずめ、切なげに囁く。顔を上げて唇を重ねた。俺も限界が近い。乳肉に十本指を埋め、音を立てぬまま抽送を激しくする。
「んくぅぅっ、ふっ、んっふ、んふぅっ、んふぅぅぅ……っ」
静さんが内股になって震える。膣肉が甘えるように締め付け、早く出せ、早くよこせとせがんでくる。
射精間近になって眉をひそめる。静さんも切なそうに眉を八の字に曲げた。いたずらで口を離すと静さんが目を見開き、ふざけるんじゃないとたしなめるように唇を奪ってくる。
限界が近づく心地よい感覚。身体中の筋肉が強張り、肉尻と腰の触れる部分が汗でぬめる。
「ぐぅぅ……っ」
出る、と声にすることもできぬまま、膣奥を亀頭でひときわ強く叩いた直後に限界を迎えた。
「んふぅぅ……んふぅぅぅぅ……っ」
荒らげた鼻息が顔を撫でる。静さんがぐりぐりと肉尻を押し付け、膣ヒダを蠕動させて肉槍の根元から先端まで甘えるように搾り取ってくる。犯していると言える体勢なのに、まるで自分が捕食されているかのように感じた。
絶頂の波が収まり、肉槍を引き抜く。いまだに勃起を保つ竿肌には、精液と愛液の混じり合った淫猥な汁がまとわりついていた。
「はぁぁぁ……っ。ああもう、こんなことをされたら……」

静さんがくるりと振り向いてシャツ越しに胸を撫で、爪で乳首をこすってくる。
「うぐ……っ。……こんなことをされたら、なんですか？」
「……ベッドで、思いきり声を出してセックスしたくなるに決まってるだろう？」
濡れた声で囁き、喉仏をねろりと舐め上げられる。すがるように、劣情を刷り込むように俺の尻を撫でまわし、にちにちと音を立てて竿をしごく。
「わかりましたよ。今度こそ行きましょう」
「よし、やっとだな」
静さんがウキウキしながら靴を脱ぎ、散乱する衣服を手際よく集めて廊下を歩きだしたかと思うと……不意にぴたりと足を止めた。
「ん、どうしました？」
静さんが首だけ振り返り、肉尻をぺたぺたと撫でて唇を尖らせる。
「……危うく垂れそうになった」
ムラッ。
「む、比企谷がケダモノの目をしている。廊下で押し倒される前に逃げるか」
からからと楽しげに笑って廊下を駆けていく。
さっきまでとのギャップが尋常じゃないが、こういうとこも好きなんだよなぁ……と思いながらも、
「……さむっ」
これ以上廊下にいると本当に風邪を引きそうなので、さっさと追いかけることにした。

続く。

（３０）

廊下から部屋に入ると、静さんがくるりと振り返って艶めいた黒髪を泳がせた。舌なめずりをしながらこちらを見つめ、卑猥な下着を素早く脱ぐ。

首に静さんの両腕が巻き付く。唇が重なった。

「ん……ふぅぅ……っ」

唾液のたっぷり乗った舌を貪欲に絡め、悩ましく身をよじらせる。ふたりの腹に挟まれた勃起肉を細指が包んだ。

「はぁぁ……さあ、はやく……っ」

まるで手綱のように竿をくいくいと引っ張っていく。静さんはベッドの縁に腰かけると、我慢しきれないとばかりに亀頭を口に含んだ。

「うんん……っ」

うっとりと目を細め、玉袋を愛おしむように撫でながら顔を前後させる。くっぽくっぽと鳴る淫猥な水音。カリ首を唇に弾かれ、ねろねろと這いまわる舌の感触に腰が揺れる。

「……ぷはっ。ふふ……いいな、とてもいい。牝を犯す気満々だ」

唾液にまみれた勃起肉をしごきながら、その切っ先にちゅっと口づけをする。

「静さん……なんかもう、肉食獣って感じですね」

「そうだとも。まあ、君との行為は……お互いがお互いを貪り、貪られているがな」

「あー……たしかにそうですね」

ぷっくりと膨らんだ乳頭を左右同時につまむ。静さんはきゅっと唇を引き結び、潤んだ上目遣いで見つめてきた。

「よつんばいになってくれますか」

「……わかった」

しおらしい返事をしてベッドの真ん中まで進み、くいくいと腰を揺らす。精液と愛液が混じり合った液体で、花びらは卑猥に濡れ光っていた。

量感たっぷりの肉尻に指を食い込ませ、肉杭の切っ先を花びらにあてがう。
「あは……っ」
期待に満ちた静さんの声が耳朶を焦がした。
腰を突き出す。男性器が温かな粘膜に包まれた。
「あおぉぉぉ……っ」
静さんのひじが崩れる。上体を突っ伏し、無防備にひくつくセピア色のすぼまりまで晒す。
「感じすぎですよ。大丈夫ですか？」
ぐりぐりと腰をこすりつけ、膣奥を執拗なまでに刺激する。静さんがひくひくと腰をしゃくらせると、結合部のすぐ上で肛門がひくひくと息づいた。
「はぁぁ……ど、どうやら、少々酒も回ってきたようだ……っ」
勃起肉を味わうように、肉尻をゆるりと左右に振る。
「あ、あまり、動けないから……好きに犯してくれ……んぐっ、あっ、あぐっ、はぁぉぉぉぉ……っ」
どすどすどす、と思いきり腰を振る。それなりに酒を呑み、そのあとに卑猥な行為に及んでいるのだ。俺もぐらりと脳が揺れるのを感じる。
「俺もまあまあきてるんで……ちょっとやり方を変えますね」
静さんの背中をくいと押す。「ふぁぁ……っ？」とやけに可愛らしい声を漏らし、静さんがへなりとうつ伏せになった。ひざをついた腕立てのような体勢でゆるゆると腰を振る。激しさを重視せず、膣奥を亀頭でノックし、丁寧に愛撫するための抽送。
「おっ、おぉっ、はぁぉぉぉぉ……っ」
静さんが顔を横に向け、ベッドのシーツを握ってひざから下をばたつかせる。
「気持ちいいですか？」
うなじから尾てい骨にかけてそっと撫で、親指に結合部の潤みをまぶして肛門にあてがう。
「うあ、ま、待ってくれ、そこ、は……うぅぅぅ」

親指の第一関節まで埋まると、膣ヒダの締め付けがぎゅっと増した。
「痛くないですか？　痛かったら抜きますから」
「くぅぅぅ……っ。そ、の、聞き方はぁ……ずる、い、ぞ……うぐっ、はっ、あぁぅぅぅ」
いちど腰を引き、肉杭を突き入れると同時に親指をさらに奥まで挿入する。静さんは全身を強張らせ、歯を食いしばって震えた。
「根元まで入りましたよ」
「ぅぅぅ……ぅぅぅぅ……っ」
静さんの手がシーツをかきむしる。膣ヒダは狂ったように締めつけてきて、先走り汁が幾度も噴き出す。
「だめ、だ、本当に……っ」
「だめなんですか？」
静さんが涙ぐんだ流し目を送る。
「これ以上されたら……もう、君のものを挿れてくれないと我慢できなくなる……っ」
ごくり、と喉が鳴った。
「……それはまた今度にしましょうか」
慎重に親指を引き抜くあいだも、静さんは「おっ、ぉっ、おぉぉ……っ」と獣じみた声を漏らしていた。
肉槍を引き抜き、静さんの肩と腰をつかんでくるりと仰向けにする。ぐったりとした身体は本当に力が入らないようで、劣情に潤んだ瞳は俺をきちんと捉えているのかもわからない。
ひざ裏を掴み、ぱっくりと開いたその中心に肉槍を突き入れた。
「ぅあぅぅぅ」
天井を仰いだまま静さんの身体が反り返る。
「さっきみたいに心配することもないんで、好きなだけ声を出してください」
酔いが回らないように気を付けつつ、斜め下に力強く突く。一回突くごとに腰を遣って膣奥をこする。抽送の一回一回で静さんを絶頂に追い込むよう、丹念に。

「はぁぁ……ひきがやぁ……っ」
「ん……どうしました？」
「……ぎゅってしたい」
「え、可愛すぎません？」
ひざ裏を掴んだ手を離して覆いかぶさる。静さんは四肢を巻きつけ、俺の耳に唇を押し付けた。
「はぁぁ……比企谷……んっ、あっ、はっ、んふぅぅ……っ」
温かくて湿った吐息が耳朶に馴染む。密着した状態でゆるゆると腰を振ろうとしたが――
「おっ、ぁっ？　ちょ、しずか、さん……っ？」
背中を爪が優しくこする。
身体と身体のあいだにすべり込んだ指が乳首を撫でる。
ひざ裏とひざ裏をこすり合わせ、ときおりかかとが尻を愛でる。
そして何より、恥骨をえげつないくらいにこすりつけてくる。
「ひきがやぁ……はっ、んっ、ちゅっ、ぢゅる……っ」
耳にずるりと入り込む舌。ぴちゃぴちゃと鳴る唾液の音が脳髄を犯す。
静さんは、全身を使って俺を貪っている。
そう気づいた瞬間、肉槍がぎちりと張り詰めた。
「ああもう、なんでこんなエロいんですか……っ」
静さんの顔の横に両肘をつき、汗の滲んだ髪を撫でながら腰を遣う。突き入れるときにかかとで促され、膣ヒダはうねうねと蠕動する。中も外も存分に味わうような愛撫に、アルコールの回った頭がぐらりぐらりと揺れる。
「ひきがや、ひきがやぁ……っ。中で膨らんでいるぞ？　出そうなんだな？　はやく、はやく出してくれ……っ」
唇を塞がれる。両手の親指で乳首をこすられ、とっさに身体を離そうとすると両脚でとらえられる。気持ち良すぎて苦しい。うまく息ができない。
「ぐぅぅ……っ」
眉をひそめて連打を速める。静さんは嬉しそうに目を細め、鼻息を

荒らげながら腰をしゃくる。ずちゅにゅぐにゅるにゅち。結合部で精液と愛液と我慢汁が混ざり合う。肌が触れ合う部分が汗でぬめる。互いの酸素を貪り、唾液を啜り、快感を与えあう。
出ます、という意思を伝えることも叶わないまま、大量の精液を注ぎ込んだ。
「んぐ……ぉ……んむふぅぅぅ……っ」
静さんは俺の頭を背中を抱きしめ、お疲れ様、とねぎらうかのように撫でてくる。けれど膣ヒダの動きは貪欲で、一滴とて残さぬようにうねうねと波打ち、搾り取ってくる。静さん自身も全身をわななかせていた。
絶頂が引いたあとも口づけと結合を続けた。汗の冷えが感じるようになった頃、ようやく口を離す。静さんがちょっとさみしそうに唇を尖らせたのが可愛すぎて気絶するところだった。
「うぉ……っ」
ぐらりと視界が揺れる。いよいよ酔いがまわってきたらしい。
「水とってきます……」
「無理はするな……しばらくこのままでいいから。というか、私がそうしたい」
「可愛すぎるんだよなぁ……。わかりましたよ」
互いに横向きになり、静さんが俺の二の腕にいそいそと頭を乗せ、上機嫌に笑う。表情筋が馬鹿になりそう。
「今日も楽しかったな……」
「まるで今日はこれで終わりみたいな言い方ですね」
「ほう？　君から煽るとは成長したものだ」
脱力した竿を握られる。
「……今のはなかったことにしてもいいですか？」
「ならん」
「なんですかその男らしい返事は……って、ちょ、おぉぉ……っ」
素早く身を起こした静さんが竿を咥え、ゆっくりと舌を這わせる。
「さすがに今すぐするとは言わんさ。これは労わっているだけだ」
「いや、気持ち良すぎてまた勃っちゃいますって……」

「それは何より」
にいっと目を細め、竿の裏側に舌を這わせる。俺の太ももをしっかりつかんでいるので、しばらく逃がしてくれそうにない。
どのタイミングで水を持ってくるかな……と考えながら、下腹部に走るねっとりとした快感に腰を震わせた。

続く。

（３１）

凍えるような真冬が通り過ぎ、寒くはあれど幾分過ごしやすくなってきた頃。

静さんの挙動に、何やら怪しいものが混じるようになってきた。

「……」

「静さん、なに観てるんですか？」

「あ、ああいや、なんでもない、なんでもないぞ」

ソファに座ってスマホを横にして、明らかに見てほしそうにちらちらと流し目を送っておきながら、いざ俺が来るとすぐに観ていた動画を消してしまう。

けれど毎回、その隠す仕草が少し……ほんの少しだけ遅い。なので俺は、漫画の見開きを記憶するかのように、一瞬だけ映った映像を強く記憶していた。

夜。外。女性。コートの前をはだけている。裸。

そして――羞恥の中に、たしかに興奮のにじんだ顔。

静さんが数日に渡ってチラ見せしては隠していた映像は、いわゆる野外露出ものと呼ばれるものだった。ジャンルとしてそういうものがあることは知っていたが、これまでは特に興味を持ったことがなかった。

けれど、静さんが興味を持っていると知れば、その行為に対する目の色が少なからず変わる。

まあ、静さんが仮にこういった行為に興味があるとしても……彼女の社会的立場を考えれば、容易に提案してしまうのは避けたい。

そう思いながら、静さんの動画チラ見せ行為（生まれて初めて口にするフレーズだ）がしばらく続いた、とある日のこと。

「比企谷……最近、暖かくなってきたな」

ソファに並んで座っていると、静さんがさりげなさゼロで切り出してきた。咳払いが可愛らしい。目線が泳いでる。なんだこの可愛い生き物は。

「……まあ、そうですね」

俺も目線が泳いでた。静さんがぴったりと太ももをくっつけてきた。彼女の太ももに手を乗せる。唇をきゅっと引き結ぶ仕草が艶めかしい。
「暖かくなってきたということは……夜に、外で、多少薄着になっても問題ないわけだな」
「……下手すぎません？」
さすがにツッコまざるを得なかった。静さんは人差し指に髪をくるくると巻きつけながら、股間をふにふにと揉んでくる。可愛らしい仕草と卑猥な指遣いを同時に発動するのはやめていただきたい。心臓がもたないから。
静さんがこほんこほん、とわざとらしい咳払いをして、それからちゅっとキスをしてくる。顔が熱い。静さんの顔も赤い。なんで自分からしたのこの人？　嬉しいからいいけども。
「君に……観てもらいたいものがあるんだ」
「映画の重要どころで聞きそうなセリフですね」
半勃起をきゅっと握られる。え、今のって俺が悪いの？
静さんは下腹部を揉みながらスマホを手に取り、最近見ている野外露出ものの動画を見せてきた。
「……興味が、あるんだが……」
動画は初めて観るものだった。公園の中で女性が裸になり、小声で会話しながら散歩している。
動画を観つつ、静さんの表情を窺い、考える。
「興味がある……なんて言ってますけど、実際はもう、やりたくてしょうがないんですよね」
「う……ま、まあ、その、なんだ……。……正確に言えば、君の前でやってみたい、という言い方が正しいかな」
頬を赤らめての上目遣い。手つきも見せている動画もいやらしいのに、どうしてこんなにウブな顔ができるのか。
「……どうだ？」
上目遣いをされて頷かないわけがない。きっと静さんはそれをわかっている。あれ、よく考えたらこの人って小悪魔なのでは？　や

だ、性獣なのに（言い方）小悪魔とか無敵じゃん……。
「ふふ……ありがとう。君なら受け入れてくれると信じていたよ」
静さんが俺の二の腕に頬をすりつけ、それから首にキスをしてくる。気絶しそう。
「ただ……やる場所は慎重に考えないとだめですからね」
「それはもちろん……あんっ」
ルームウェアのボタンを開け、豊かな谷間に指をすべらせた。入浴した名残で火照りを帯びた乳肌。やわやわと波打たせると、静さんのおとがいが、くっ、くくっと上がる。あらわになった喉に吸いつき、喉仏の辺りをゆるりと舐める。
「もういちどシャワーを浴びることになるが……いいのか？」
「金曜と土曜の夜はいつもそんな感じじゃないですか」
「ふふ……平日もよくある、の間違いじゃないか？」
「平日は確実に静さんから来ますよね……俺の気遣いの意味はどこへ……」
「睡眠時間が多少削れても、今まで以上に元気に働けているよ」
静さんの手がパンツの中に潜り込む。俺のルームウェアのボタンをあけ、乳首に吸いつきながらズボンを脱がせにかかる。
「今日はじっくり味わいたいな……」
「さっきもかなり舐めてましたよね？」
「君のものは何時間でも舐めていたいんだよ。……大きくなったな」
「そりゃそうですって……」
腰を上げる。静さんがズボンとパンツをいっしょにずり下ろし、剥き出しになった肉茎の先をぱくりと口に含んだ。

×　×　×

翌日、土曜の夜。
俺が静さんの車を運転して遠出することになった。かっこいいにも程がある車を大学生が運転するというのはいまだに現実味がないが、それでも多少は慣れてきた。
「ふふ……だいぶ板についてきたじゃないか」
助手席に座る静さんが、窓際にひじをついて楽しげに見つめてく

る。車の中で見せる大人びた笑み。いつもならつい見惚れて静さんにすかさず注意されるところだが、今日は別の理由でついつい視線を向けてしまう。
「しかし……なかなか緊張するものだな」
「車の外から見る分には誰も怪しみませんよ」
「それはそうなんだが……むぅ」
可愛らしい唸り声を漏らし、しきりにコートを触る仕草が可愛らしい。
――俺たちが向かっているのは、静さんの家から車で一時間以上かかる場所だ。
Ｇｏｏｇｌｅマップで調べた限りは近くに繁華街もない閑散とした場所だった。今日はここ数日の中でも特段に暖かいので、コートを脱いでもさほど問題はないだろう。
「コートを脱いだとたんに、その、だいぶ……なあ？」
信号で止まる。静さんはコートの中をちらちらと見て、気まずげに笑う。
「そうですね。じゃあコートのボタンを外しましょうか」
「え……っ」
「初歩ですよ、初歩。ある程度慣らしとかないと大変だと思うんで」
「うぐ……そ、それは、まあ、そうなんだが……」
すでに３０分以上運転していて、街からは離れている。横断歩道を渡る人はおらず、対向車線で車が一台停まっているだけだ。
静さんが身じろぎする。剥き出しになった太ももを撫でるとひくりと震えた。
「……まあ、服は着ているしな……」
ぽしょりとつぶやき、コートのボタンをあけた。
静さんが着ているのは、薄手のニットワンピースだった。スカートの丈が際どく、むっちりした太ももほとんどが露わになっている。
「うぅ……や、やっぱりこれは……恥ずかしいな……」
スカートの裾をつまんで呻くさまが可愛らしい。ブラもショーツも着用していないため、豊乳の頂がはっきりと存在を主張している。

「……まあ、ゆっくり慣れましょう」
家にいたら即座に襲ってしまうところだが、タイミングが悪く信号が青になる。
乳丘の頂を爪でかりりと引っかき、アクセルを踏んだ。
「あん……っ。……」
一瞬だけ愛撫されてすぐに相手にされなくなったからか、横顔に拗ねた視線（可愛い）が刺さる刺さる。
「もう少しで着きますから我慢してください。……うぐ……っ」
次の信号で止まると、すかさず股間を揉まれた。ジーンズを突き破らんばかりに張り詰めたところで信号が青に変わる。静さんがぱっと手をはなし、それはもう楽しげに笑った。
ちょっと腹が立ったので、内ももに手を添えて脚の根元にすべらせると、
「手……濡れるから……っ。今はかんべんしてくれ……っ」
消え入りそうな湿った声に、手を引っ込めざるを得なかった。
その後も、信号が止まるたびにいたずらの応酬は続いた。我ながらよく襲わずにいれたものだと心の底から思った。

続く。

（３２）

駅前の広々とした駐車場に車を停めて、歩くこと５分。

「ここか……」

Ｇｏｏｇｌｅマップを見て、目的地に着いたことを確認する。

たどり着いたのは、住宅街の中にひっそりと佇む小さな公園だった。周りは背の高い木々に囲まれていて、マンションの上階から双眼鏡でも使わない限り見えることはない。なおかつ公園の前の通りは小さなもので、昼間こそそれなりに人通りはあるだろうが、夜になると人っ子ひとりいない。家族で住んでいる人が多いのかもしれない。

「これなら大丈夫そうですね」

「あ、ああ、そう、だな……」

静さんが両手でコートの前をしっかりと閉じてつぶやく。いつもの凛とした立ち姿からは想像もつかない猫背。背中を撫でると「ひゃんっ」と可愛らしい声を漏らし、二の腕に頭突きをしてきた。はいはい可愛すぎて死にそう。

公園内は薄暗かった。小さな通りの街灯と、同じく通りにある自販機の光が公園内をかろうじて照らしている。

「人がいないか、念のため確認しましょうか」

「そ、そうだな、うん……」

コート姿で背を丸めた静さんは、一見すると寒さに震えているように見える。けれど俺はコートを車に置くくらいには余裕があるし、静さんの顔も火照っている。昼間は親子連れでにぎわうであろう空間で、ひりつくほどの熱を帯びたふたりが歩いている……という状況が不思議でしかたがない。

「人は……いないですね。じゃあ、コートを脱ぎましょうか」

静さんがぴたりと止まる。マンションのベランダを開ける音さえ聞こえそうなほど静寂に包まれた空間で、静さんの細喉の音がたしかに聞こえた。

静さんが俺の目の前に立ち、コートをするりと脱いだ。車の中で見るのと、夜とはいえいつ人が通るとも知れない公園で見るのとではま

るで感覚が違う。ふたりの間に漂う緊張感が一段と高まった。
「……コート、とりあえずこっちに置いときますね」
ベンチの背もたれにコートを置いた。静さんはうつむいて顔を上げようとしない。
かすかに風が吹き、街路樹がざわめいた。
「ひゃ……っ」
いつもならまず聞くことのないか細い悲鳴。静さんが自分の腕を抱いて縮こまる。
「寒いですか？」
抱きしめ、背中をさする。腕の中で静さんが色っぽく身をくねらせた。
「大丈夫だ……寒くはない。……寒くはないが……」
「恥ずかしいんですか？」
背中をさすっていた手を下に滑らせ、ミニスカート越しに肉尻を撫でる。
「うんん……っ。こ、こらぁ……はっ、んっく、ふっ、んくぅぅ……っ」
静さんの手が俺の背中と下腹部を撫でる。内股になってがくがくと震えるさまに息を呑む。元々感じやすい身体だったが、今日はことさら敏感になっている。薄布越しに尻を撫でるたびに胸元で甘く喘ぎ、熱い息を喉に吹きかけてくる。
「どんだけ興奮してるんですか」
ほんのりと蔑みを混ぜた声音。静さんがびくりと跳ね、「うぅ……」と泣きそうな声を漏らす。
スカートの裾をつまみ、果物の薄皮を剥くようにゆっくりとめくっていく。
「あっ、あっ、あぁ……っ」
ショーツも穿いていない、滑らかな豊臀が露わになる。
「寒くないですか」
「寒くない……むしろ、暑いくらいだ……っ」
静さんの呼吸がせわしなくなっている。俺の背中と下腹部を爪でかりかり、かりかりとこすり、寄る辺を求めるように胸板に顔をうず

める。
肉尻を両手でわしづかみ、谷間に指を這わせた。
「うぁ……はっ、はぁぁ……っ」
不意にくちりと鳴る音。両手の人差し指が、たっぷりと潤んだ熱い割れ目に触れていた。
「濡れすぎですって……」
「……今すぐ挿れてくれてもいいんだぞ？」
「それじゃここまで来た意味がないですよ。……じゃあ、ぜんぶ脱ぎましょうか」
風はやんでいた。静さんの息を呑む音がふたたび聞こえる。
その場で脱ごうとしていた静さんの手を引く。街灯が比較的届きながらも、通りやマンションの入り口からも遠い絶妙な場所を選ぶ。静さんはためらっていたが、俺の顔を見て抵抗するだけ無駄だと悟ったのか、両腕を交差させてニットワンピの裾をつかみ、一気にめくりあげた。
薄暗い中で見る恋人の裸は、ここが公園であることを忘れさせるほど強烈だった。
気温は１０℃台半ばといったところだろうか。真冬ほどの寒さではないとはいえ、夏のような軽装では確実に震えるような気温だ。
けれど静さんの身体に鳥肌は見られない。それどころかうっすらと、しかし確実に火照っているのが見て取れた。乳頭はすでに膨らんでいる。恥ずかしそうに身をよじるが、乳房も陰部も隠そうとはしない。
「……めちゃくちゃ綺麗です。あとエロい」
ニットワンピを手早くベンチに置き、静さんの頬にそっと触れ、耳を撫でる。それだけで静さんがひざから崩れ落ちそうになった。
「大丈夫ですか？」
「あ、あぁ、大丈夫だ……っ。あ、で、でも……やっぱりだめかもしれない……っ」
俺の肩をつかんで息を荒らげる。艶やかな黒髪から漂う甘い匂いも、上気した肌も、じっと見つめてくる濡れた瞳も、この人がどうし

ようもないくらいに女であることを突き付けてくる。下腹部が張り詰めすぎて痛い。本能が「早く犯せ」とがなりたてる。
「どんどん感じやすくなってませんか……？」
喉や肩、鎖骨、お腹と撫でていく。静さんは甘く喘ぎ、身をよじるばかりだ。
「はぁぁ……ひ、比企谷……これ、は、だめだ……っ。歩ける気がしない……っ」
内股になって縮こまる静さんの肩を掴んで立たせる。乳房をわしづかみにして、唇を奪った。
「んぶ……んっ、んぐ、ふっ、んふぅぅ……っ」
静さんは降参と言わんばかりに俺の肩をタップするが意に介さない。舌を啜り、膨らんだ乳頭を指でしごく。くぐもった喘ぎがより切実に、艶っぽく変わっていく。俺の肩を叩いていた手が続いて二の腕をつかみ、それから豊乳を絞る手に添えられる。それでもやめない。乳肉の頂を念入りにこねくり回した。
「……ぁ……ぁ……っ」
静さんの顔は蕩けきっていた。屈んで静さんの太ももに口づける。ほんのりと甘酸っぱい愛液が、おもらしをしたかのように伝っている。
「今日はただ歩くだけじゃないですからね。準備もしてくれたんですよね」
静さんが何かを思い出したように目を見開き、恥ずかしそうに顔をそむける。
「……ああ、準備したとも。……君は本当に変態だな」
ぽしょりとつぶやき、拗ねたようにキスをしてくる。肉尻を掴んでぐにぐにと揉みしだき、両手の人差し指を割れ目より少し上の肛門に這わせる。
「んくぅぅ……っ」
「道具を使うだけですし、まあなんとかなると思いますよ」
「それは……まあ、君のものよりは凶悪でないとは思うが……こんなところで、と、思う、と……はぁぅぅぅ……っ」

愛液をまぶした人差し指の先をアナルにつぷつぷと入れると、静さんが腰砕けになる。
「うおっ？」
準備をしようと手を離したとたん、静さんがすばやくしゃがみこんだ。固まる俺をよそにチャックを開け、パンツをずらし、外気に晒した肉茎をぬるりと咥え込む。
「んっ、んっ、んっ、ん……っ」
「うっ、くぁっ、ちょ、静、さん……っ」
静さんは何度か顔を前後させてすぐに口を離した。
「よし……これなら、君にいつ襲われてもおかしくないな」
いたずらっぽく笑い、肉茎をなんとかパンツにしまい込んでチャックを閉める。
「……襲ってほしいんですか？」
「どちらでも構わないさ。別に今日1回で終わることでもないし、君が獣になって、こんな場所で本能のままに私を犯すというのも一興だよ」
「静さんは……本当にエロいですね」
「元々素質はあったのかもしれないが……まあ、大半は君のおかげだ」
さ、準備をしてくれるか……と囁き、俺の股間をぽんぽんと撫でる。
今はいたずらっぽく笑っている静さんの顔が、このあとどんなふうに変わるのか……想像するだけで背すじがぶるりと震えた。

続く。

（３３）

――私のわがままに付き合ってくれるわけだからな。比企谷も何かしてほしいことがあれば遠慮なく言っていいぞ。

昨夜、野外露出の希望を静さんから聞いたときのこと。

少しだけ恥ずかしそうに、それでいてどこか嬉しそうな笑みを浮かべ、静さんはそんなことを話した。

とはいえ、野外露出に付き合うお礼にしてもらうこと……と考えても中々思いつかない。ちょっと遠出して前から行きたかったラーメンを食べに、などと言おうものなら静さんがとたんに白けるのが目に見えている。いや、喜びはするんだろうけども。ぜったいこの場で言うことじゃあない。

『ほらほら。何かないか？』

静さんは楽しげに俺の太ももを撫でさすり、それから下腹部をきゅっきゅっと握った。わかっていたことではあるが、どうやら追加プレイを要求されているらしい。追加プレイの要求という字面がすごい。

『いや、そんな急には……あ』

ふと、静さんが持っていたスマホの中の動画が目に付く。流しっぱなしになっていた野外露出動画の続きだが、その中でふと流れたシーンを見てピンときた。

『これなんてどうです？』

スマホを指差すと、静さんは。

『……君は、思った以上に変態だな』

耳元に唇を寄せて囁いた声音は、やはりどこか嬉しそうだった。膨らんだ股間をかりりとこすられ、腰が淡く跳ねた。

× × ×

「そろそろ始めますか」

「あ、ああ」

住宅街の中にたたずむ夜の公園で、一糸まとわぬ姿になった静さんがぶるりと震える。

「ちゃんと……綺麗にしたからな」
「わかってますって」
恥ずかしそうにつぶやく静さんに苦笑する。出かける前に「ぜったいに覗かないように」とさんざん念を押されたことを思い出した。よほど恥ずかしかったらしく、冗談でも「フリですか？」と聞ける雰囲気ではなかった。
「場所は……あそこでいいですかね」
すべり台を見つけたのでそこに向かう。昨晩観た動画と同じ状況だった。
静さんがすべり台のはしごの手すりを掴む。
「冷たくないですか？」
「ん……多少冷たいが、大丈夫だ。ひゃんっ」
うなじから尾てい骨にかけて指をすべらせると、静さんの口から可愛らしい声が漏れた。いつもなら恨めし気に（可愛く）睨んでたしなめられるのだが、今はそれどころではないようだ。首だけ振り向き、誘うように肉尻を突き出してくる。
「始めますか」
「あ、ああ……頼む」
バッグからローションを取り出す。普通のローションよりも割高ながら、乾いてもパリパリにならない優れものだ。静さんも気に入っている。
ローションを手のひらに垂らし、突き出された尻肉の谷間に塗り込む。
「ん……ふっ、ふぁっ、はっ、はぁぁぁ……っ」
静さんが誘うように腰をくねらせる。割れ目は愛液とローションが混ざり合ってどろどろだ。今すぐにでも挿入したい欲求をなんとか抑える。
中指を肛門にあてがった。静さんがびくりと震える。
「ふっ、ふっ、ふっ……」
緊張が伝わる息遣い。剥き出しになった肛門は遠くの街灯でわずかに見える程度だが、息遣いに合わせてひくひくと開閉している。

穴が膨らんだ瞬間、中指をぬるりと挿入した。
「うあっ」
白い肉尻が跳ねる。
「痛くないですか？」
「あ、ぅぅ……だい、じょうぶ、だ……っ。ふふ、君に普段からいじられている、か、ら、あおぉぉぉ……っ」
恥ずかしくなったので、これ以上喋らせまいと中指を根元まで挿れる。たしかに普段から――特に後ろから突いているとき、ひくついた排泄器に惹かれて指を挿れることが多かった。静さんは引くどころか喜々としてそれを受け入れてくれるものだから、調子に乗ってやめられなくなっていた。
「根元まで入りましたよ」
言いながら、親指を膣口に挿入した。
「あっ、ちょっ、こらっ、そっちは、ぁっ、あおぉぉぉ……っ」
こちらはよくほぐれている上に、愛液とローションでどろどろだ。一様に締めつけてくるアナルと甘えるように蠕動する蜜ヒダの感触を楽しむ。
「大丈夫ですか……って、聞くまでもないですかね」
ぐっ、ぐっ、と中指と親指で握りしめるようにしながら、空いた左手ですべすべの尻肌を撫でる。
「はぁうぅぅ……っ、こ、れ、はぁ……っ、だめ、だ……っ、君の、ものがっ、欲しくなって、しま、う、うぅぅ……っ」
静さんのひざががくんと折れる。左手で腰を持ち上げ、二本指での蹂躙を楽しむ。
「だめですよ、ちゃんとほぐさないと大変ですから」
「それはっ、わかっ、て、いるん、だ、が……はぁぁぁ……っ」
なめらかな背すじが反り返る。蜜肉と肛門が同時に締まり、しなやかな身体がぶるぶると震える。静さんの肌が熱い。
「……これなら大丈夫そうですね」
指をいったん抜くと、静さんはふたたび肉尻を高く上げ、続きを促すように腰を振る。どれだけ色っぽいことをしているのか、この人は

わかっているんだろうか。
指のぬめりをタオルで拭きとり、バッグから目当てのものを取り出す。
「本当に、入るんだろうか……」
「大丈夫ですよ」
手に取ったのは、ふさふさのしっぽがついたアナルプラグだ。注文すると間に合わないので、急遽昼間に買ってきた。明るいうちからアダルトショップにひとりで買いに行くのは中々勇気が必要だった。
「挿れますよ」
「……ん」
静さんが肉尻に手を添え、割れ目を開いた。ローションと愛液にまみれた割れ目が薄明りの中でもひどくいやらしく映る。
銀色のアナルプラグを、ぱっくりと開いた肛門にあてがう。
「ふぁ……っ」
「冷たいですか？」
「そう、だな……でも、これくらいなら……」
ゆるりとお尻を振って続きを促す。なんとなく尻肌にキスをすると、「ひゃんっ」と可愛らしい悲鳴が漏れた。
「どうした？　君も昂っているのか」
「……そうかもしれないですね」
あられもない恰好をした静さんが楽しげに笑い、俺が恥ずかしさから顔をそむける。顔が熱いんですけども。
気を取り直し、ふたたびアナルプラグを肛門にあてがう。先端の細い部分をぬるりと挿入して、そこからゆっくり、ゆっくりと穴を押し広げていく。
「お……おぉぉぉぉ……っ」
指とは比べ物にならない太さ。静さんの声が獣性を帯び、ひざとひざがこすれ合う。
「無理そうだったら言ってください」
「わ、かっ、た……はっ、はぁぁぁ……っ」
細指が尻肉に食い込む。静さんは懸命に呼吸を整えている。息遣

いに合わせて穴がゆるんだ瞬間を狙って少しずつ、少しずつプラグを押し込んでいき――一番太い部分を越えた瞬間、残りの部分がつるりと呑み込まれた。
「んはぁぁんっ!?」
嬌声が弾け、心臓を強烈に叩く。静さんはとっさに口を塞いだ。俺も冷や汗をにじませながら辺りを見渡す。物静かな住宅街は窓を開ける音さえも聞こえるだろうが、幸いにも誰かが不審に思って窓を開けることはなかった。
「すいません、最後は一気に行っちゃいました」
「いや、いいさ。私も迂闊だった。……しかし、これは……中々すごいな……」
自分の中に埋め込まれたものを見て静さんが苦笑する。
「しっぽ自体は可愛いですし、静さんはめちゃくちゃエロくて可愛いです」
「お、おう？　ふふ、どうした、そこまでストレートに褒めるとは……？」
静さんの言葉に、俺自身かなり昂揚していることに気付く。
一糸まとわぬ姿で、ふさふさの犬のしっぽをつけた静さん。
仮にしっぽとメイド服という組み合わせなら、ただただ可愛いと思っていただろう。しかし今はいやらしさと可愛らしさで同時に殴りつけてくる。そのうえ、しっぽを着ける生々しい過程を自分の手でこなしたのだ。思い出しただけでも下腹部に血流が集中する。
「……君も興奮しているようで何よりだ」
剥き出しになっている肉茎を、静さんが嬉しそうに握る。
「それじゃあ、ちょっと散歩しますか」
「……ほ、ほんとにするのか？」
「当たり前ですよ」
唇を奪う。静さんはためらいなく舌を出した。絡めてくる舌にはたっぷりと唾液が乗っている。片手で豊かな乳房を、もう片方の手で肉尻を鷲掴む。
「んぶ……っ、ふっ、んっ、んふぅぅ……っ」

プラグを埋め込まれた肉尻が悩ましげに揺れる。静さんの両手は宝物を愛でるかのように肉竿をまさぐっている。
「……ぷはっ。はぁぁ……っ。こんな格好で、公園を……歩き回るなんて……っ」
指についた先走りをちろりと舐め、静さんが顔を上気させて囁く。深夜とはいえ部屋の灯りはぽつぽつとついている。今はひと気がなくとも、コンビニに買い物に出かける人もいるだろう。
「楽しみですね」
艶やかな黒髪をくしゃりと撫で、耳に唇を当ててわざとゆっくり囁く。それだけで静さんは、ひざから崩れ落ちそうなほどに震えた。

続く。

（３４）

さして広くはない公園をゆっくりと歩く。

「うぅ……っ」

静さんがすがるように俺の二の腕をつまんでいる。裸のうえに、排泄器にはふさふさのしっぽがついたプラグを埋め込んでいる。誰かに見られたらいったいどんな顔をするのか、想像しただけでぞくぞくしてしまう。

「ど、どれくらい、歩くんだ……？」

「とりあえずぐるりと一周するくらいでいいんじゃないですかね」

普通に歩けば数分で一周できるが、かすかに吹いた風にさえ敏感に反応してしまう静さんの足取りは極めて緩慢だ。１０分、あるいはそれ以上かかるだろう。

「わ、わかった……ひぁっ」

背中を撫でる。静さんは俺の胸に顔をうずめ、身を任せてきた。

「いつになく従順ですね」

「だ、だって……もとから君のことを信頼しているのに……こんな場所で、裸になって、尻にいやらしいものを埋め込まれたら……もう、君にすがるしか、ないだろう……っ？」

上目遣いの、涙目。庇護欲と嗜虐心に同時に火を点けるような矛盾した魅力を持った仕草。

「それもそうですね」

首筋に吸いつき、両手で肉尻をわしづかみにする。

「あっ、あぐっ、はっ、はぁっ、はぁぁぁ……っ」

耳元で荒らいだ吐息が漏れる。もみくちゃにする尻肉の割れ目がくちくちと卑猥な水音を鳴らした。剥き出しの勃起肉を細指がすがるように掴む。

「歩きますか」

「……握ったままでいいか？」

「いいですよ」

答えてからちょっと後悔するくらいには、静さんの手つきはいやら

しい。すがるようににぎにぎとしたかと思えば、ゆるゆるとしごき、噴き出したカウパー液をもう片方の手ですくって嬉しそうに舐める。野外露出に興奮して足取りは遅いままなのに、手首から先は別の生き物であるかのように自在に蠢いている。
「どんだけエロいんですか」
静さんの肩をつかんで街路樹の陰に連れていき、乳頭とアナルプラグを同時に引っ張った。
「んくぅぅぅ……っ」
背すじを弓なりに反らせ、豊満な乳房と肉尻を同時に突き出す卑猥な姿勢。それでも肉茎から手を離そうとしない。
こよりを作るように乳頭をこねくり回し、アナルプラグが抜ける寸前まで引っ張る。限界まで膨らんだ穴。静さんがひざとひざをこすり合わせ、壊れたように身体を震わせる。その肌にはうっすらと汗が浮いていた。
「はぁっ、あぐっ、だめ、だっ、ひきが、やぁ……っ。こんなっ、こんなことされたら……はぁぅぅぅっ!?」
膣口に中指を根元までねじ込むと、静さんが両手でとっさに口を押さえた。蜜肉の中でもことさら柔らかい部分を押しながら、アナルプラグの抜き挿しを繰り返す。
「うぐっ、うっ、イっ、く、イク、イク、イク……うぅぅぅ」
蜜肉が中指をにぢりと食い締めた。むっちりした太ももに力強く手を挟み込まれる。
「はっ、はぁぁっ、はぁぁぁ……っ」
静さんがへなへなと座り込む。まるで立場をわきまえるかのような犬座り。ゆらりと顔を上げる。血管の浮いた勃起肉が顔を縦断していた。
「おおきい……すごく、太い……っ」
すんすんと鼻を鳴らして蕩けた笑みを浮かべる。
カリ首の裏側に朱い舌が添えられた。
「おぁ……っ」
淡い快感に腰が跳ねる。静さんはうっとりとしていた。犬のしっ

ぽが芝生に垂れている。
カリ首から竿の根元にかけて、尖らせた舌がつつっ、つつっと丹念に、執拗なまでに這う。張り詰めた亀頭の割れ目から我慢汁がこぼれでた。
「あんっ……もったいない……っ」
静さんが鈴口に愛おしげに口づけをして、透明な粘液の珠をちゅるりと吸い込む。そのまま流れるように亀頭を咥え込んだ。
「お……おぉ……っ」
唇がカリ首をぴっちりと締め、なめらかな舌が別の生き物であるかのように自在に蠢く。亀頭の表も裏も割れ目もくまなくねちっこく愛でられる。たまらず腰を引こうとすると、逃げてはダメだと訴えかけるように太ももを掴まれた。
「んんん……っ。んっ、んふぅっ、んっ、んっ、ん……っ」
鼻の下をいやらしく伸ばし、すぼめた頬の内側を竿に貼りつけ、頭を何度も前後に振る。
「静さん……っ、気持ち良すぎてっ、やばい、です……っ」
「んぢゅっ、ぢゅっ、ぢゅるるる……っ。はぁぁ……いつもよりかたくなってるぞ……？」
無防備に口を開き、舌に亀頭を乗せ、たばこを持つように人差し指と中指で竿をしごく。見ているだけで射精してしまいそうだ。
「普段とは違う静さんのエロいとこを見て、俺だって興奮してるんですよ……っ。……あ、やば、ほんとに出そうです」
静さんの艶姿に、触られていないあいだもずっと興奮して張り詰めていた。静さんはかぎ状に曲げた二本指で竿をこすこすとしごきながら、楽しげに目を細める。
「それじゃあこのまま出そうか」
「へ？　顔にかかりますよ？」
「大丈夫だ、しっかり口で受け止めるとも。まあ、君になら髪まで汚されても構わんのだがな」
さらりとたまらないことをつぶやき、肉茎の先端を舌に乗せる。五本指でせりあがった玉袋を包み込んで螺旋を描き、まるで葡萄の実の

なりをたしかめるかのように撫でさする。
「いつでも出してくれ……」
人差し指と中指に力がこもる。普通にしごかれるよりも加えられる力は少ないが、それでも暴力的なまでにいやらしい光景と非日常にいるという興奮で、抗いようのない射精欲求が込み上げてくる。
「静さん……出る、出る、出ます……っ」
舌に乗った亀頭の割れ目から勢いよく白濁が噴き出す。
「んふーっ！　んっ、んはぁっ、はっ、はぁっ、はぁぁぁ……っ」
静さんは舌と口内に勢いよく噴き出した精液をしっかり受け止め、脈動が止まったところでこくりと呑み込んだ。ふだんは口と膣の中で出すことがほとんどなので新鮮な光景だ。
「ん～～～……とても濃いな……うん、呑んだだけでイキそうになった」
ぬるりと竿を根元まで呑み込まれ、残り汁が噴き出す。
「おっ、ぁっ、ちょ、静さん……お、おぉぉぉ……っ」
あくまでお掃除だぞ、と意思表示するようなゆっくりとした前後動。それでも舌の蠢きと頬の締め付けは凄まじい。
呑んだだけでイキそう、という言葉を証明するように乳頭はぷっくりと膨らんでいた。
「んふーっ！　んっ、んんっ、んんんん……っ！」
左右の膨らみをつまんで指の腹でこする。静さんは顔を前後にすべらせながら穏やかに果てた。
「……比企谷」
「ん、どうしました？」
犬座りをしたままで、静さんが亀頭に何度もキスをする。
「散歩がまだ途中なのにすまないが……君のものがたまらなく欲しくなった」
「俺もです」
「よかった」
静さんが立ち上がる。流れるように肉茎に指を巻きつけ、ゆるゆるとしごく。

「どこでする？　このまま外でしてもいいが……声を抑えられないかもしれない」
「たしかにそうですね、とはいえ帰るのも我慢できそうにないし……あ」
　ふと目に入ったのは、小綺麗な公衆トイレだった。
「折衷案ってことで、あそこでするのはどうですか？」
「ああ……とてもいいな。よし、行こう。すぐに行こう」
　静さんが実に楽しそうに笑う。お尻の谷間に埋め込んだふさふさのしっぽが、静さんの気持ちに合わせて揺れているように見えた。

　続く。

（３５）

公園に設置されたトイレは、最近造られたのか思いのほか綺麗だった。静さんの後ろの穴に挿入したしっぽを引っ張りながら個室に入る。

扉を閉め、静さんと向かい合う。互いの吐息がやけに大きく聞こえる。普段使うときは何とも思わないのに、人がひとり増えるだけでこうも狭く感じるのかと驚いた。

「ど、どうしようか……君は、どうしたい……？」

静さんの声が興奮で上ずっている。剥き出しにした肉茎の裏スジを撫で、甘えるように喉をちろちろと舐ってくる。

「後ろ、向いてくれますか」

「……わかった」

ぎりぎりまで流し目を送りながら静さんが背を向ける。何も言わずとも腰を突き出し、肉尻に手を添えて薄紅色の粘膜を剥き出しにする。静さんは何も言わず、くい、くいと腰を揺らす。

「欲しがりすぎですよ」

亀頭を割れ目にあてがう。濃密な期待の滲んだ声が漏れた。竿の根元を持って切っ先を揺らすと、溢れた蜜がにちにちと卑猥な音を鳴らす。期待が体温を上げる。ふたりのため息が揃った。

腰をわずかに突き出す。温かなぬめりに亀頭が埋まった。

「うんん……っ」

静さんの脚が内股になり、ひざとひざがこすれ合う。亀頭が熱い。膣ヒダがもっと奥にきて、もっと奥にきてと誘っている。勃起肉も早く埋まりたい、埋まりたいと訴えかけている。

肉尻に手を添え、少しずつ、少しずつ肉杭を埋めていく。

「はぁぁ……あっ、はぁぅっ、はぁぁぁぁ……っ」

むっちりした尻が前後左右に触れる。腰を引いたときに現れた竿は愛液で濡れ光っていた。興奮しすぎて頭が爆発しそうだ。ただ女性器に男性器を挿入するというだけの行為に、何度も何度も及んでいる行為にこんなに興奮するなんて。ここが半分屋外であるというこ

とを忘れてしまう。
竿が半分ほど埋まった。背中に流れた艶やかな黒髪を横に流す。肩甲骨の窪みに影ができていた。
挿入をできるかぎりゆっくり楽しんでいると、不意に公園の前の通りで車のクラクションが鳴った。
「ひゃっ」
静さんが反射的に腰を後ろに突き出し、俺も思わず腰を前に突き出した。ぱんっ、と鳴るいちどきりの打擲音。肉槍が温かな膣ヒダに根元まで埋まっている。打ち付けられた尻肉から強張りが徐々に抜けていく。
「……ふふ、驚いたな」
「……そうですね」
何に対して鳴らしたのかはわからないが、クラクションの直後に発車音が聞こえた。もう近くにはいないだろう。
「静さん、気持ちいいですか？」
「……ああ、そうだな。とても、気持ちがいい……っ。動かなくてもイってしまいそうだ……っ」
首だけ振り向き、唇を突き出してくる。舌を絡めながらお腹をさする。いくら興奮しているとはいえお腹を冷やすのは得策ではなかったな、と行為の途中で反省してしまう。
「こら、他のことを考えるんじゃない」
頬を優しくつねられた。
「……よくわかりますね、ほんと」
「君のことだからな。一番よく見ているのだから、それくらいわかるさ」
自分で言っておきながらちょっと恥ずかしくなったのか、膣肉がきゅっと締まる。可愛いなこの人。
「動きますね」
「……ん」
自然と手をつないだ。静さんの手は温かい。
「んっ、んっ、ん……っ」

ゆるやかな抽送に合わせて静さんも腰を振る。たんっ、たんっ、という穏やかで規則的な打擲音。動きに激しさはないが、内側の蠕動は貪欲だ。隙あらば精液を搾り取ろうと締め上げてくる。ぬるま湯に浸かっているかのような感覚を味わいながら、淡々と抜き挿しを繰り返す。

「あっ、あんっ、あっ、はぁっ、比企谷っ、ひきがっ、やぁ……っ。もっと、激しく動いてもぉ……っ、いいんっ、だ、ぞぉ……っ？」

静さんが俺の手を乳房に導く。乳肌をさわさわとまさぐると、静さんがもっと強くしてくれとねだるように俺の手を握り込んできた。お望み通り十本の指を食い込ませ、少しずつ抽送の速度を上げていく。静さんの長い髪が、薄暗い個室の中で幻惑するように揺れる。

深夜の住宅街のトイレで、しっぽ付きのアナルプラグを埋め込んだ恋人とセックスをする。

非日常にも程がある状況は、思いのほか早い限界をもたらした。

「静さん……俺、もうちょっとで出そうです……っ」

「そうか、いつでも……っ!?」

静さんの声が上ずって止まる。

こつ、こつという革靴の音が男子トイレに入ってきた。

「あ～～……ダ～る～い～……」

どうやら酔っ払いが用を足しているらしい。肉茎を根元まで埋め込んだ状態で止まる。静さんとは鼻先がこすれあうほどの距離で、目を見開いた状態で見つめ合っていた。

「あ、どうもどうもー！　いや～、さっきまで飲んでたんですよ。夜風に当たろうと途中でタクシーを降りたんですが、ここはいったいどこだーって感じです。はっはっは！」

すぐに去るかと思いきや通話を始めてしまった。さっさと出ていってくれ……と願っていると、静さんが唇を重ねてきた。

「んんぅ……っ、ふっ、んふぅぅ……っ」

声を押し殺しながら舌を絡め、蜜ヒダで締めつけてくる。音を最小限に抑えた中で、最大限に快感を貪る行為。無理もない。生殺しも同然の状況だから。

しかしそれは射精直前だった俺も同じだ。口腔粘膜と膣粘膜の感触に、理性がぶちぶちとちぎれる。
「うあ……っ!? こ、こら、比企谷……っ！」
肉尻を掴んでゆっくりと抽送を再開する。静さんは限界まで声を絞り、耳元で囁いてくる。そんなことをされたら余計興奮するに決まっているのに。酔っ払いは俺たちに気付いていないようで、陽気に通話を続けている。その声はゆっくりと遠ざかっているが、まだトイレからは出ていない。それでも、話し声が遠のくにつれて徐々に抽送の速度を上げていく。
「やっ、めっ、あんっ、こっ、らぁっ、まだぁっ、だめだ、ろぉ……っ」
喘ぎ声が蜜を帯び、汗ばんだ背すじが見えない力に押されるかのように弧を描く。俺の耳元で囁くのを諦め、天井を仰ぐさまが息を呑むほど婀娜っぽい。
「ひきがやっ、ほんとに、だめだっ、もうっ、声っ、声がっ、で、る……がまん……できない……っ」
静さんが泣きそうな顔で振り向いた。燃え上がった嗜虐心が背すじを駆け上がる。
「大丈夫ですよ、もういなくなったみたいですからぁぁ……っ!?」
遠慮なく声を出してください、と俺が攻める気満々で情報を伝えた直後、静さんが俺の手を握り、えげつないくらいに肉尻をこすりつけてきた。
「本当にハラハラしたんだぞ……これは、お返しだ」
静さんが「むー」と可愛らしく唸り、それから不敵に笑う。
肉尻がぐりぐりと左右に揺れてこすりつけられる。蜜ヒダが蠕動して根元から搾り上げられる。それでいて、俺が腰を止めるのは許さんとばかりに肉尻をこすりつけてくる。その反動で鐘を鳴らすように抽送を続けてしまう。一突きするごとにあらゆる刺激を同時に受ける感覚。
「お……ぁ……ぐぅぅ……っ!?」
思わずうなった俺に対して静さんが挑戦的に笑った。ちょっと腹が立ったのでしっぽを引っ張る。アナルプラグが引きずり出され、肛

門が限界まで押し広げられる。
「はぉぉぉぉ……っ。ふっ、ふふっ、君はっ、本当に鬼畜だな……っ」
顔にじっとりと汗を浮かべながらも静さんが笑う。えげつない腰遣いは止まらず、限界に近付く速度は一向にゆるまない。
「静さんこそ、エロすぎですから……っ」
アナルプラグをふたたび埋め込み、静さんの両手首をつかむ。手綱のように引っ張り、全力で腰を打ち付ける。
「んくぅぅっ!? あっ、あぐっ、はっ、はぁぁっ、はぁぅぅぅ……っ！」
おとがいを上げた静さんの遠慮のない喘ぎ声。さすがに近所に聞こえてしまいそうだが、限界を目前にしては構っていられない。止めることなく一気に最後まで駆け抜けるつもりで、全身の筋肉を膨らませて静さんの中に打ち込む。
「ひきがやっ、だめっ、だっ、もうっ、欲しいっ、はやく私の中にっ、出しっ、て、くれ……っ」
ひざとひざをこすり合わせ、背すじを限界まで反らした静さんが切実にねだる。息が切れる。ここがどんな場所なのかもどうでもよくなる。目の前の、静さんの身体を無我夢中で味わう。あと少しだけ、あと少しだけ楽しみたい。だから腹筋を力ませた。肛門に力を入れた。内ももを引き締めた。
ぎりぎりまでこらえ、最後に一突き。
下腹部にたまった濃厚な疼きが狭い尿道を勢いよく駆け上がり、膣奥に噴き出した。
「はぉぉぉぉ……っ。あっ、あぐっ、ふっ、ふぅっ、んくぅぅぅ……っ」
静さんが内股のままでぴんとつま先立ちになった。打ち震える背中に汗が伝う。
（なんだ……これ……っ!?）
気絶しそうなほど苛烈な射精の脈動。なのにそのあいだも、この人をもっと犯したいと本能ががなりたてるかのように尿道が疼く。射精しているのにもっと射精したい、という矛盾した感覚。
「はっ、はぁぁっ、はぁぅぅぅ……っ」
脈動が止まっても静さんは肉尻をくねらせた。下腹部と下腹部を

こすりつけたまま、一滴も残らず搾り取られる。
「ぐ、うぅ……っ、静さん、もう出ませんから……っ」
「そう、なのかぁ……？　君はまだまだしたりないように見えるが……？」
蠱惑的に目を細め、いたずらっぽく唇を咥えてくる。上唇と下唇それぞれに舌が這い、ぞわぞわとした心地よい快感に包まれる。もう出ないと思っていたが、最後にもういちどだけ脈動した。
「あっ、んんっ、こらぁ……っ」
乳頭を爪でかりかりとこする。静さんが俺の首に腕を回して甘えながら身体をくねらせる。あまりにも色っぽすぎて目に毒とさえ思った。この艶姿を思い出したら、大学の講義中でも勃起してしまいそうだ。
腰を引く。半勃起状態の肉茎が、弛緩した肉唇を裏返してぬるりと抜ける。
「たくさん出してくれたな……あむっ」
静さんが腰を下ろし、蹲踞の姿勢になってためらいなく竿を口に含む。温かな口の中で舌が這い回り、凹んだ内頬が竿肌に貼りつく。亀頭と皮の間も丁寧に、執拗なまでに舐られ、口が離れる頃にはすでに硬度を取り戻していた。
静さんがうっとりとした上目遣いを向け、無言でゆるゆると竿をしごく。
「もう一回しますか？」
「そうだな。ああでも、私が遠慮なく声を出しすぎたからさすがに……くしゅん」
「は？　可愛い」
反射的に感想を口にしたあと、ハッと我に返って静さんを立たせる。静さんは顔を真っ赤にしていた。羞じらうポイントがずれているところもまた可愛い。
「さすがに冷えてきましたね。移動しましょう」
「ん……ホテルか？」
「そうですね、なんというか……このまま家に帰るのは、今日はもった

いない気がしますんで」
当初の予定でも、気分によってはホテルに行こうということになっていた。
「ふふ……そうだな。ホテルについたら……もっともっと、遠慮なく貪ってくれ」
「静さん、なんで一言一言をそんなにエロく言えるんですか……」
歩きながらもしごかれ続け、鈴口からびゅるりとカウパーがあふれ出す。それを静さんは指で掬い、人差し指と親指のあいだで伸ばして見せ、「おー」と呑気に感心してから口に含んだ。扇情的な仕草で肉茎がさらに硬くなる。
「んー……そんなにエロいか？　私は」
「わかって言ってるでしょ……」
勃起肉を握りしめて笑う静さんに、ため息まじりにツッコんだ。

続く。

（３６）

夜の公園での行為を切り上げて車に戻る。静さんはニットワンピースを着たがコートは羽織らず、アナルプラグも挿したままで助手席に座っている。

「こ、これは……中々恥ずかしいものだな……」

移動で車が振動するたびに静さんが艶っぽく身じろぎする。胸の膨らみには、尖った先端がくっきりと浮いていた。車とすれ違うとき、ライトに照らされるたびにびくりと震え、すがるように太ももに触れてくる。

「とりあえずスカートはまくっておいてください」

先ほどまでの獣欲に任せた行為の余韻で、我ながらとんでもないことを指示した。横顔に視線を感じる。信号で止まった。誰もいない交差点。静さんがこくりと息を呑み、スカート部分の裾に手を伸ばす。視界の端でむっちりした太ももが露わになる。ちらりと横を見やると、脚の付け根の茂みが見えた。

「き、君は、本当に鬼畜だな……っ」

「すげぇ嬉しそうに言いますね」

信号が青に変わった。アクセルを踏む直前に乳頭を爪でこする。

「うんんっ！」

甘い喘ぎが跳ねた。静さんが恨めしげに睨んでくる。

「生殺しはやめなさい……舐めるぞ？」

「脅し文句みたいな口調でエロいことといわないでください……」

ジーンズ越しに肉茎を爪でこすられながら車を走らせると、間もなくしてホテルについた。倉庫を改装しかかのような駐車場で、一台ごとのスペースが狭い。

「えーと、静さん？　バックで入るのはけっこう緊張するんで、手は放してもらっていいですか？」

「ならん」

「めっちゃかっこいいじゃないですかやだー……」

凛々しいにも程がある声だが、細指でチャックを開け、流れるよう

に肉茎を取り出している。静さんの車をぜったいにこすってなるものか……うわやっぱり舐めてきた……などと使命感及び性欲で思考をかき混ぜられながら、なんとかぶつけずにとめることができた。
「静さん、ほら、行きましょ……おぉぉ……っ」
　しなだれかかり、手の指を絡め、内頬を竿肌に貼りつけながらゆっくりと頭を振る。エンジンを止めてしんと静まり返る車内に口淫の水音が響く。
「んっ、んんっ、んっ、んふぅぅ……っ」
　カリ首を唇で弾かれるたびに腰が跳ねる。我慢汁は壊れたように何度も噴き出す。徐々に力が抜けてシートに身を預けたところでふと気付く。この人は今、俺をイカせる気はない。竿を半分以上呑み込まないし、いつもなら両手や視線をも使って俺の快感を高めてくるのに、今はそれをしていない。
「静さん、生殺しのお返しがえぐすぎます、よ……ぐぁ……っ」
　温かな口内から現れた肉茎は唾液でぬらぬらと濡れ光り、自分でも驚くほどに長くなっていた。
「ん、それじゃあ行こうか」
「そうですね……」
「ああ、君は出したままだからな」
「俺を前科者にしたいんです？」
「ここは無人の受付だろう？　大丈夫だ、私が握って隠すから」
「そういう問題じゃないんだよなぁ……」
　とはいえ静さんを止められるとも思っていないので、諦めて性器を出したままで車を降りる。ホテルの周りは真っ暗だが、それでも背徳感がすごい。
「こら、縮こまるんじゃない」
　理不尽なことをつぶやき、静さんが楽しげに両手で竿を握る。なるほど、両手ならすっぽり隠れるな……とだいぶ倫理観が狂った考えをめぐらせながらホテルの中へ。
「部屋は……まあどれでも良さそうですね」
「ソファはふたりが並んで座れるところがいいな」

「あー、たしかに」
どの部屋も作りはシンプルだが、ソファがひとり掛けのものとふたり掛けのものがある。
「ん、和室もあるのか」
「おー、ほんとですね。これにします？」
「そうだな。楽しそうだ」
何気ない会話をしているあいだも静さんは１０本の指を蠢かし、くちゅくちゅと音を鳴らす。
部屋を決めてエレベーターに乗り込んだ直後、静さんを抱き寄せて唇を重ねた。
「んふぅぅ……っ」
静さんが待ってましたとばかりに舌を伸ばしてくる。犬がじゃれつくように舌を絡め合う。スカートをめくってアナルプラグについたしっぽを引っ張った。静さんの目が色っぽく細められる。
エレベーターのドアが開き、部屋を探すあいだも静さんは上機嫌に笑い、俺の耳に口づけ、乳首をこすってきた。
部屋を見つけて中に入る。中は簡素な旅館といった感じの畳敷きで、右手に浴室や洗面台があり、奥の部屋に一組の布団が敷いてあった。
「ふむ、旅館とはまた違った趣があるな」
「他の部屋が全部洋室なんで、ギャップがすごいですね」
口づけをしながら、流れるように俺も静さんも裸になる。ぷっくりと膨らんだ乳頭に吸いつく。静さんが甘く喘ぎ、俺の頭を押さえて豊乳にうずめさせた。
「比企谷、ここに持ってきたバッグはなんだ？」
「ああ、これですか」
車を出るときにさりげなく持ってきたのだが、静さんは卑猥な行為に及びながらもずっとちらちらと気にしていた。
「テンションが上がったら使うかってくらいのつもりで、こんなのを用意してました」
和室の台に拘束バンドと極太のバイブを並べる。

静さんが目を見開き、喉をこくりと鳴らした。
「……すげぇ目がキラキラしてますね」
「え、あ、いや、そんなことはない。そんなことはないぞ？」
犬だったらしっぽをぶんぶん振ってそうな顔だ。
「ふふ、比企谷も中々の性癖を持っているようだな」
「いや、静さんの影響をかなり受けてますからね？」
そもそも露出のジャンル自体、静さんの日頃の言動の影響で食指が動いたのだ。こういう緊縛プレイも然り。だから俺は悪くない。社会が悪い。
「どう使うかによってなんとでもやりようはあると思うんで……」
言いながら静さんを布団に連れていき、よつんばいにさせる。アナルプラグについたしっぽをゆらゆらと揺らし、婀娜っぽい流し目を送ってくる。勃起肉を近付けると、じゃれるように人差し指でつんつんとつついてきた。この人ずっとエロ可愛いんですけど。
極太のバイブを割れ目に押し付ける。いきなり挿れるのは厳しいかと思ったのだが、すでに……あるいはずっと濡れていたのか、あっさりとバイブを根元まで受け入れた。
「はぁうぅぅ……っ、こ、これ、クリにも当たる、んだな……これは、なかな、かぁ……んくぅぅぅ!?」
スイッチを入れた瞬間に静さんが跳ね、枕に顔をうずめた。突き出された肉尻と、肛門に刺さったしっぽと、電子音とともに蠢くピンク色の極太バイブ。脳を直接愛撫されているかのように劣情が湧きあがる。
なめらかな肉尻を撫でつつ、ころりとひっくり返して頭の上で両手首を縛る。
「うぅぅぅ……ひきが、や、ひきがや、んくぅぅぅ……っ」
静さんが色っぽく身体をねじらせる。あまりにも無防備な姿。発すると吐息も滴る汗も、桃色の蒸気が見えそうなほどに婀娜っぽい。
「それじゃ、よろしくお願いします」
「へ……？　な、何を……ぅあっ」
静さんの胸を跨る形で、唇に肉茎をとんと乗せる。

「好きなだけ舐めてくださぅおぁっ」
最後まで言いきる前に亀頭を咥えられた。
「んっ、んっ、ん……っ」
頭の上で手を縛られた状態で、静さんが一心不乱に頭を振る。たっぷりと口内にたまった唾液の池がくっぽくっぽと音を鳴らす。
「ちょ、いきなりスイッチ入れすぎです、から……おぉぉぉ……っ」
カリ首を唇でぴっちりと締め、鈴口を舌先で執拗にほじくってくる。腰が壊れたように震えてしまう。温かな口を犯したいという欲求が強烈に湧いた。よっんばいになって静さんの喉奥めがけてゆっくりと腰を振る。
「んぐっ、おごっ、んぶぅっ、んっ、ふぅっ、んふぅぅ……っ」
目尻に涙を浮かべながらも懸命に舐めしゃぶる姿に、不意に射精衝動が込み上げる。
「エロすぎなんですって……っ」
いったん離れようとするも、唇がカリ首を絞めて離さない。なんでやめようとしているんだ、と抗議するような目でこちらを見つめ、敏感な亀頭を舐りまわす。
「わかりましたよ……じゃあ俺は、こっちを動かしますね」
後ろに手を伸ばし(背中がつりそうだ)、バイブの根元を握る。先端が抜け落ちる直前まで引き抜き、一気に押し込んだ。
「んくぅぅっ!? ふぐっ、んふぅぅぅっ!」
静さんの反応がいっそう大きくなる。目を大きく見開き、身体をバタつかせるが、それでも肉茎を口から離そうとはしない。口淫をやめるという選択肢が初めから用意されていないかのように。
「俺はこっちを好き勝手に動かしますんで、静さんも好きにどうぞ」
頷く顔が嬉しそう。この人マジでエロの化身だな……。
「んっ、んくぅっ、んふっ、んっ、んんん……っ」
静さんが目をぼうっとさせながら頭を振る。首が疲れるのもいとわず、本当に嬉しそうに肉茎を舐めしゃぶる。ときおり口を離し、裏スジをねっとりと舐め上げる。思わず性器がびんと跳ねると、「おっと……ふふ」と嬉しそうに笑って男性器を追いかけ、ふたたびぱくり

と咥える。
「んっ、んっ、んっ……あんっ！　あっ、あぁぁっ、そんなっ、急に、強く……うんん……っ！」
バイブの振動を最大まで引き上げ、静さんの反応がもっとも大きい膣奥を執拗にこする。
「静さん、気持ちいいですか？」
「んくぅぅっ、気持ち、いい、気持ち、いいが……っ」
いったん言葉を切り、一休みとばかりに竿をふたたび咥える。ちゅぽ、ちゅぽ、と音を鳴らし、鈴口にちゅっと口づけをして微笑む。
「どうせなら、自由を奪われたままで君に犯されたいものだな」
ごくり、と喉を鳴らした。
「まあ、このバイブでもこのままいじめられたら何度でもイくんだがな？　それでも君自身に可愛がってもらった方がひゃんっ!?　あっ、こら、だめ、いまっ、奥こすったら……んくぅぅ……はぁぅぅぅ……ぅあぅぅぅ！」
膣奥をとんとんと小刻みに突いた直後、静さんの腰がバネ仕掛けのように跳ね上がった。ロデオマシンに乗った気分だ。
「……比企谷。今のは意地悪だぞ」
「……ごめんなさい」
涙目でたしなめられてもっといじめたくなったが……さすがにやめておいた。
「さあ、はやく可愛がってくれ……」
縛られた両手の指でもどかしげに俺の胸板を撫で、てろりと垂らした舌で張り詰めた亀頭をこれ見よがしに舐める。
「わかりました。ちゃんと静さんが気絶するまで頑張ります」
「それは難易度が低いと思うぞ？　今日は興奮しっぱなしだし、ましてや今まで声を我慢していたからな。思う存分君に可愛がられたらきっとすぐに……ふむ、ワクワクしてきたな」
「爽やかに卑猥極まることを言えるってすごいですね……」
くすくすと笑い合ってから、膨らんだ乳頭をつまむ。
「あんっ。こら……あっ、あっ、あ……っ」

ぎりり、ぎり、ぎり、とゆっくりと乳頭を引っ張り上げる。静さんが唇を引き結び、口を開き、はっ、はっ、と荒い吐息を漏らす。
「胸だけでもイキそうですね」
「そ、う、だな……はぁぁ……ぅあっ」
手を離すと静さんの浮いた背中も落ちた。
「比企谷……意地悪が過ぎるぞ……早く挿れてくれ……」
おねだりする静さんの膣にはいまだにバイブが埋まり、うねうねと蠢いている。縛られたままの手で乳首を撫でられ、勃起肉がびくりびくりと跳ねる。
「わかりました。あ、縛ったままでいいですか？」
「そうだな。そっちの方が燃える」
「燃えるんですね……」
やっぱりこの人はエロの化身だな……と困ったように笑った。

続く。

（３７）

和室の布団で静さんが仰向けになっている。

頭の上で手首を縛られ、豊満な肢体を隠すものは何もない。膣に埋まったバイブは唸りを上げて生き物のように蠢き、しっぽのついたプラグは肛門にしっかりとはまってままだ。しっとり上気した肌と劣情のにじんだ顔が、行燈型の照明であえかに照らされている。

「比企谷……はやく……っ」

無防備に腋をさらした静さんがくいくいと腰を揺らす。うなずき、バイブを手に取った。

「うんん……っ」

ゆっくりと左右に揺らし、膣内をぐりぐりとこすりながら抜いていく。空いた手でクリトリスを皮の上からこすった。

「んくぅぅ……っ、あっ、だめっ、だっ、これっ、イっ、ク……っ」

泣きそうな表情を浮かべた静さんを見つめながら、クリトリスを強めに押すと同時に抜きかけのバイブを根元まで埋めた。

「ぅあぅっ」

静さんの背中がばね仕掛けのように跳ね上がる。肉芽から指を離し、即座にバイブを抜いた。静さんが口をぱくぱくとさせて戸惑いの目を向けてくる。それに構うことなく先走りの滴る肉槍の切っ先を割れ目にあてがい、一気に腰を突き出した。

「ひぐっ」

熱い泥濘に勃起肉が根元まで埋まる。触れ合った下腹部越しに痙攣が伝わる。静さんの内ももが不自然なほどぶるぶるとわなないている。

「静さん、痛くないですか？」

ぷっくり膨らんだ乳頭をつまみながら尋ねる。肉茎の根元に力を入れ、挿入したまま中で動かす。静さんが唇を引き結び、甘く喘いだ。

「んくぅぅ……っ。だ、大丈夫、だ……っ。というか、もう、だめだ、何をされても気持ち、い、ぅぅぅぅ」

乳頭を上に引っ張りながら、とんとんとんと軽く突き入れる。縛られた手の指がすがるように宙を掴んだ。
「手加減しないんで」
がんばってくださいね、という意思を含ませた。静さんのひざ裏に腕を差し込み、両脚をM字に開く。静さんがとろけた顔にたしかな喜悦を滲ませた。
深く息を吸い込み、斜め下への抽送を始める。
「うぐっ、あぐっ、ひっ、あぉっ、あぁぁぁ、あおぉぉぉぉ」
獣のような嬌声が耳朶を打ち、脳を揺らす。結合部は道具を使っていたときからたっぷりと潤んでいたが、今は本気汁で白濁して、打擲音に粘つきを加えている。
「静さん、感じすぎですよ。大丈夫ですか？」
挿入の速度と角度を変え、膣奥をねちっこく突くようにする。肌が離れるたびに白濁した糸がねっとりと伸びた。
静さんが身をよじらせ、酸素を求めるように口をはふはふと開け閉めする。
「だい、じょうぶ、だ……っ。もっと……っ。あ、でもキスも……」
なんだこの人、可愛いな。
息を荒らげながら唇を突き出してくる。ひざ裏に腕を差し込んだままだが、静さんの身体は柔らかく、そのまま前傾して唇を重ねることができた。
「ふぅぅっ、んっ、ふぅっ、ふぅぅぅ……っ」
縛られた手をもどかしげに動かしている。こっちのほうが興奮すると言っていたが、何かしたいことがあるのかもしれない。唾液の乗った舌を絡めながら手首の拘束をほどくと、両の手がすかさず乳首をこすってきた。
「うぐっ、おぁっ？　ちょっ、静さんっ、これっ、やば……っ」
「んー？　どうしたんだひきがやぁ……っ？」
三日月のように目を細めるさまは淫魔にしか見えない。俺が上体を起こすと、静さんはすかさず俺の腰に両脚を巻きつけてきた。
「ひきがやぁ……っ」

開けた口から蒸気が見えそうなほど熱を帯びた囁き。静さんの腰を持ち、夢中で腰を振る。静さんはぐずぐずに蕩けた割れ目をえげつないくらいにこすりつけてくる。蜜穴の中で肉杭が次々と向きを変え、竿の左右、表、裏スジと余すことなく貪られる。

抽送の衝撃で揺れる乳房に、ぼたりと汗が滴った。

「ふふ、ずいぶんと汗だくだな……っ」

甘く喘ぎながら、静さんが俺の頬をそっと撫で、指についた汗をちろりと舐める。何をしてるのかと恥ずかしくなったが、俺もやろうと思えば同じことができる。互いの体液を貪ることに何の遠慮も躊躇もなくなっているのが、少し嬉しい。

「静さん……っ、俺、そろそろ……っ」

息を切らしながら告げる。静さんがにぃっと目を細め、獰猛な舌なめずりをした。

「いいぞっ、はやくっ、来て、くれ……っ」

腰にかかとがこすりつけられる。全身の筋肉を膨らませ、夢中で叩きつける。

静さんは俺の前後動に合わせて上下に揺れる。

膣奥にねじ込んだ瞬間に静さんの腰が上がる。

俺が引けば静さんの腰が下がる。

着実に濃密な射精の予感が込み上げてくる。

歯を食いしばる。予感は止まらない。

首に筋を浮かべる。止まらない。

腹筋を力ませる。止まらない。

「静さん……っ。出ます、出る、出る、出る、出る……っ」

消え入りそうな声でつぶやき、限界までこらえてこらえて――爆ぜた。

尿道を伝う感触がはっきりとわかるほどの白濁が、温かな膣内に噴き出す。

「あぉ……おぉぉぉぉ……っ」

静さんのおとがいが跳ね上がり、折れんばかりに背すじが反り返る。汗ばんだ豊満な肢体が激しく痙攣する。膣ヒダが蠕動し、根元か

ら先端にかけてぎゅるぎゅると引き絞られる。一滴とて残さず搾り取ろうと、静さんの意思が、本能が、俺を貪り尽くす。
　ようやく絶頂の波が収まると、ぐったりと倒れ込んだ。ふたりの肌が汗でぬめる。
「ふふ……たくさん出してくれたな」
「えっと……そんな穏やかな感じで言うんだったら、腰動かすのやめません？」
　静さんは俺の腰に両脚を巻きつけたまま、ねちっこく円を描く動きをする。肉茎が柔らかな蜜ヒダに甘噛みされて、疲弊した身体に劣情の火が無造作に燃え広がっていく。
「静さんはほんとにエロいですよね」
　抱きしめあったままゆっくりと腰を振り始める。
「んっ、んくぅ……っ。ふふ、そういう、君、こそ……あっ、はぁうぅぅ……っ」
　静さんは嬉しそうに笑い、俺の汗だくの背中を愛おしげに撫でた。
　――このあとも行為は続き、ふたりとも力尽きるまで貪りあった。
　静さんは外での行為が気に入り、マンションのベランダでも危ういプレイをするようになった。
　エスカレートしすぎないように……と思いつつも、ヒリついた緊張感とそれに伴う快感に俺自身ハマりそうでちょっと怖い。というかもうすでにハマってるんだよなぁ……。

　続く。

▲ＮＥＷ！（３８）

季節はゆるりと巡り、４月を迎えた。
冬の刺すような冷気は鳴りを潜めたものの、夜はまだまだ冷え込む。三寒四温という言葉を使う時期は2～3月らしいが、それでも、春の陽気に惹かれて薄着になるにはまだ早い。
俺自身は大過なく単位を取得し、大学3年生になった。
そんな春の休日に、
「ふむ、今年もよく咲いてるな」
「ですね」
俺と静さんは、彼女の住むマンションのベランダから、公園に咲き乱れる桜を眺めていた。ベランダに椅子とテーブルを設置して、桜の下でやんやと騒ぐ社会人を遠目に見ながらくつろぐ。
静さんが缶ビールのプルタブを開け、一気に喉に流し込む。小気味のいい音を数回鳴らすと、静さんはテーブルに缶を置き、実に気持ち良さそうに声を漏らした。
「はぁぁ～……昼間から飲む酒は最高だな」
「そこだけ聞くと中々やばいですね……。まあ、たまにだから良いですけど」
苦笑しながら俺もビールをあおる。初めて呑んだときは「は？　一生呑まなくていいんだが？」とさえ思ったが、静さんがこうして美味しそうに呑むのを何度も目の当たりにして、俺も少しずつ呑めるようになってきた。ちなみに帰省した際にビールを呑むと親父に喜ばれ、小町からは「うへぇ……」とドン引きされた。ひどくない？
「君のおかげでずいぶん健康的な生活になったからな。たまにしか呑まない分、なおさら美味く感じるようになったよ」
缶の上部をつまんでぷらぷらと揺らしながら、静さんが楽しげに笑う。その頬はほんのりと朱い。機嫌が良くて、どこか色っぽい顔だ。
「別に俺は何もしてないですけどね。料理をがんがん作ってるわけでもないし」
「君がこうしてそばにいるだけで意味があるんだよ。分かるだろう

？」
まあ、そうっすね。
素直に答えるのも恥ずかしく、会釈で返す。並んで座る静さんが小さく笑い、俺の二の腕をつっつく。春の陽気は柔らかく、雲ははるか遠くで優雅に泳いでいた。
静さんはタバコを完全にやめ、お酒はこうして時々たしなむ程度になっていた。
本人曰く「やはりストレスが大きかった」とのことで、俺と過ごすと……正確に言えば、俺と日々交わっているとかなり心身が楽になるらしい。それは俺も同じだが、静さんはストレスフルな教職員だ。日々の交わりの効果は劇的で、彼女の生活習慣は見る間に健康的になった。
「この桜も、去年はひとりで見ていたからな。もはや懐かしいよ」
「あー……そういえばそうですね」
俺と静さんが今の関係になったのは、去年の夏のこと。たかだか1年前はまだ、ただの元教師と生徒の関係だったというのが信じられない。
穏やかな風が吹いた。静さんが気持ち良さそうに目を細め、長い黒髪を耳にかける。艶やかな黒髪が、陽光で海の水面のようにきらめいていた。
「ん？　どうした、比企谷？」
「あー、や、静さんって……そんなに髪の毛綺麗でしたっけ」
静さんが目をぱちくり、ぱちくり。
「嬉しいことを言ってくれるじゃないか。とはいえ、別に髪のケアはさほど意識していないぞ？　これも生活習慣のおかげかもしれないな」
静さんが髪の毛を手に乗せ、目の前に差し出してくる。息を吸うとほんのり甘い香りがした。
「君が好きな香りだ。多少は気を遣ってるんだぞ？」
「あ、前に言いましたねそういえば」
静さんがシャンプーを変えたとき、俺は「こっちの匂いのが好きで

す」と言ったことがあった。それから静さんはさりげなくずっとそのシャンプーを使っているらしい。
「可愛すぎません？」
「……君もずいぶんあけすけに言うようになったものだな」
静さんがぐびりと缶をあおる。顔が赤いのはアルコールのせいだけではないだろう。
「大学はどうだ？　ゼミが始まる時期だろう？」
「そうですね。……1年のときに受けてた講義で気に入ってるのがあって。その先生のゼミに行くことになりました。希望者があんまいなかったみたいで、すんなり通りましたね」
ゼミの先生は白髪の穏やかなおじいちゃん先生だ。声が小さく眠気を誘うので、講義では爆睡する人が後を絶たないが、俺はその先生が語る講義以上に深い内容に興味があった。
「ふむ、なんとなくで選んでいないのは良いな。楽しくなりそうじゃないか」
「そういう静さんは？　たしか今年は受験生の担任ですよね」
「ふふ、君の大学の名前を出されたら少し動揺してしまいそうだ」
いたずらっぽく笑う静さんの顔はどこかあどけなくて。いつもの顔つきとのギャップに見惚れてしまう。
「まあ、それなりにやるようにしますよ。就活もあるんで」
ごまかすように言うと、静さんは俺の反応に気付いているのかいないのか、意味深な笑みを浮かべる。
「私はおカタい仕事についたが、君はもっと自由に生きてもいいと思うぞ」
桜を眺め、何かを思い出すように目を細める。
「自由……って言っても、自由な身にはそれなりの代償がいるじゃないですか。つまり働きたくない」
ぐびりとビールをあおり、
「働きたくねぇ……」
「切実だな……」
思わず二度呟いてしまい、静さんが困ったように笑う。

「なんか昨年度まではまだみんな浮ついてたんですよ。のんびり大学生やってます感があって。でも3年生になった途端に……ゼミはまだいいんですけど、一気に就活だ公務員試験だって話が出るようになって。急に現実が見えてきたというか」
「わかるよ。その感覚も懐かしいな……」
　静さんはつまみを食べると、
「ワタシはたまたまこの仕事をずっと続けているが、別に誰かに強制されたものではない。たしかにストレスも多いが、それ以上にやりがいを感じているから続けているにすぎないよ」
　第一……と、俺の手を握り、じっと見つめてくる。真剣味を帯びながらも優しげな表情。恋人ではあるが、やはりこの人は俺の先輩なのだ。それも、ずっと。
「君がこれから会社に入ったとしても、そこでずっと働き続けることは本当に稀だろう？　職場に嫌気が差すこともあれば、会社自体が倒れることだって十分にあり得る」
「たしかに……そうですね。『ここに入れば安心』なんて場所はないんだなって、色々調べててあらためて思いました」
「そういうことだ。私の友人も当たり前のように転職しているしな。人生はそれなりに大変だが、思ったよりも何とかなる。なぁに、気楽に構えればいいさ」
　それに……と、静さんが言いよどむ。
「いざとなれば、その、なんだ。私だって大した稼ぎではないが、まあ、君を養うことくらいは……」
　どんどん尻すぼみになっていく言葉と、見る間に朱くなっていく顔。
「えーと……静さん？　今のは……」
　俺の追及を断ち切るように、静さんが缶ビールを勢いよく呑み干した。
「比企谷。冷蔵庫からビールを持ってきなさい」
「そんな命令初めて聞きましたけど……」
「うるさい」

唇を尖らせた静さんに股間を握られた。
「君は私をいじめるのが楽しいのか、馬鹿者」
「俺の性癖は静さんもよく知ってると思いますけど」
赤くなった耳を撫でる。静さんが唇を引き結び、くぐもった甘い声を漏らした。細指が波打ち、ズボンの中で肉茎がむくむくと膨らむ。
「ビール、持ってきますね」
「待ちなさい。やっぱり部屋に戻って呑みなおそうか」
静さんの目が濡れている。竿を握った手に力がこもっている。
「もう桜はいいんですか？」
「たっぷり堪能したから大丈夫だよ。これ以上ベランダにいるとやらかしてしまいそうだ」
「それなら、結構な頻度でやらかしてると思うんですけど……」
「あれは夜、というか深夜だろう？　それくらい分別はあるさ」
ズボンの中に手がすべり込み、パンツ越しに肉竿を握られる。お返しに人差し指で背中をなぞった。
「ん……っ」
静さんが甘く喘ぎ、猫のように背を反らす。婀娜っぽい流し目に喉がごくりと鳴った。

×　×　×

ベランダの花見セットを手早く片付け、部屋に戻る。お酒とつまみをローテーブルに置くと、静さんは手早く服を脱いだ。
「カーテンは閉めなくていいんですか？」
「なぁに、外からは見えないさ。なんなら窓に手をついて後ろからしてくれても構わんよ？」
俺も素早く裸になり、勃起肉を握らせる。
「そんなこと言われたら本当にしますけど。いいんですか？」
静さんが顔をそむけた。竿を握った指が物欲しげに動く。
「……エスカレートしそうだからやめておこう」
「……それもそうですね」
窓を開けて静さんの手首を手綱のように掴み、声を抑えるよう命令して突きまくる……なんていう想像をしてしまった。さすがにこれ

はまずい。
「静さん、座ってください」
「ん」
静さんはソファに座ると、流れるように脚を開いた。手にはちゃっかりビールを持っている。
「こういう退廃的な行為もたまにはいいだろう？」
「……ですね」
足元にひざまずき、静さんを見上げる。春の陽光を背に浴びながら、ビール片手に熱っぽい目を向けてくる。なるほど、たしかに退廃的だ。
静さんの脚はよく引き締まっている。ここ最近でさらに健康的に痩せた気がする。
内ももに口づけをした。
「うんん……っ」
甘い喘ぎが頭上から降ってくる。続けて何度か口づけをして、さらに舌を這わせる。静さんが脚を震わせ、内ももに筋が浮かぶ。
「ふぅぅ……んっ、ふっ、ふぅぅぅ……っ」
鼠径部のかなり際どいところまで唇をすべらせると、静さんがもどかしげに腰をくねらせた。ぱっくり開いた女性器に唇をつけるフリをして、今度は逆の内ももに。静さんは不満げに俺の頭を撫でたが、敏感な部位への淡い刺激でまたすぐに声が蕩ける。
太ももに指を食い込ませ、逃げられない状態にして――割れ目に唇をつけた。
「うあぅっ」
静さんの声が弾けた。粘膜はすでに期待でたっぷりと潤んでいて、舌でほじくるととめどなく愛液が溢れてくる。啜っては呑み込み、割れ目の下から上に、そして上から下へと舌を這わせる。
「はぁぁ……はぁぁぁ……っ」
静さんは逃げるように、それでいてもっともっととねだるように腰をくねらせる。唇を粘膜に押しつけ、固めた舌先を膣口に入れる。静さんの手が髪の毛に差し込まれた。切なげに頭皮を撫でてくる。

「ひき、が、や……はっ、うぅぅ……っ」
耳に指が挿し込まれ、静さんの声がくぐもって聞こえる。口の中に牝の匂いが充満した。歯に絡むしゃりしゃりした繊毛さえもいやらしい。一方的に愛撫しているのに射精してしまいそうだ。
いったん口を離し、割れ目の上にある、包皮をかぶったクリトリスに吸いついた。
「うぁうぅぅ!?」
突然の圧迫感。静さんが両脚を頭に巻きつけていた。むっちりした太ももに呼吸を塞がれる中、夢中でクリトリスを舐る。静さんが壊れたように腰をしゃくる。懸命に息を吸えば吸うほど、身体の中が静さんの匂いに満たされていく。
「ひきが、や……っ。私も、舐めたいっ。舐めさせて、くれ……っ」
率直な懇願に顔を上げる。今にも泣きだしそうな表情に一度は素直に応じかけたが、せっかくなので少しばかりいじめることにした。
静さんの太ももを掴み、ゆっくりと引き離す。内ももを押さえ、俺の愛撫を止めることができない状態にした。
「ひ、比企谷……っ?」
怯えと期待が入り混じった瞳を見つめながら、これ見よがしに舌を伸ばして肉芽を弾いた。
「んくぅぅ……っ」
静さんは全身を震わせながらも視線を逸らさない。見つめ合ったまま、固めた舌先で肉芽を右に左にと弾く。
「はっ、あぁぁっ、だっ、め、だっ、だめだっ、イっ、く、イクっ、イクっ、イっ――」
限界を迎える直前、クリトリスを口に含んだ。全体を圧迫するように舐り上げる。
「あぁぁぁぁ、あぁぁぁぁぁ」
すらりとしながらも肉づきの良い身体が悦びに打ち震える。それから全身の骨が抜けたかのようにぐったりと脱力した。
「じゃあ、舐めてくれますか?」
隣に腰を下ろし、豊かな乳房をまさぐりながら囁く。静さんがなん

とか返事を紡ごうとするのを、乳頭を軽くつねって遮る。
「お、遅すぎだ、ばかものぉ……っ」
頬を優しくつねられた。その直後に口づけをされ、流れるようにしなだれかかってくる。艶姿にすっかり反り返っていた肉茎の先端を、静さんはためらいなく口に含んだ。
竿の半分ほどを咥え込んだ状態でぴたりと止まったが、口の中の動きは獰猛そのものだ。別の生き物のように蠢く舌が、亀頭やカリを美味しそうに這いまわる。
「お……ぁ……っ」
頬を凹ませて吸いつかれ、腹筋がぶるりと震える。
「んっ、んっ、んっ、ん……っ」
静さんが頭を上下に振りながら、髪を耳にかける。先ほどベランダでも見た仕草なのに、どうしてこうも違いがあるのか。ぴっちり締めた唇がカリ首を弾くたび、鋭い快感が尿道を駆け抜ける。
静さんはよつんばいになっていた。剥き出しになった肉尻を、欲求不満を露わにするようにゆらゆらと振る。いやらしいな、と心の底から思った。背中に置いた手をすべらせ、肉尻の谷間に指を埋める。くちゅ、といやらしい音が鳴った。
「んふぅぅ……っ。んっく、ふっ、んむふぅぅ……っ」
口淫に余裕がなくなる。指は肛門、蟻の門渡りとすべっていき、女性器にたどり着く。指をつけては離す動きを繰り返すと、ぴちゃぴちゃと卑猥な水音が鳴った。静さんが羞恥で身をよじるのがたまらなくいやらしい。
「おっ、ぁっ？　静っ、さんっ、それ、やば……っ」
お返しだ、と言わんばかりに口淫が加速する。咥え込む際に顔を傾けることで締めつけの具合が変わり、思わず声が上ずってしまう。さらに片手で玉袋をさすりながら、もう片方の手で内ももをさすってくる。安心感と淡い快感、それから鋭い快感を同時に与えられ、艶っぽい嬌声を聞いていることも相まって、あっという間に限界が訪れる。
「静さん……出る、出ます……っ」
「んふー」

ちらりと送る流し目がやけに可愛らしくて和む。けれど割れ目に指をうずめると、その瞳はすぐさま劣情に染まった。
強張った内ももを撫でられ、限界直前であることを悟られているのが気恥ずかしい……と思いながら。
「出……る……っ」
温かな口の中で、限界を迎えた。
「んふぅぅ……っ。んっ、ふっ、ふぅっ、ふぅぅぅ……っ」
静さんは口の締め付けをわずかに弱めながら、頭の上下動と睾丸への愛撫を続ける。どくっ、どくっ、どくっ、と脈打つたびに細喉が鳴った。
「んー……ぷはっ。……はぁ、はぁ、はぁぁ……っ」
静さんが顔を上げ、口を半開きにしたままじっと見つめてくる。欲情した表情はそのままだった。いや、精飲したことでもっと露骨になっている。唾液で濡れ光る竿をゆるゆるとしごき、なめらかな身体を蠱惑的によじらせる。
「静さん、ベッド……に……っ」
流れるように俺の腰に跨り、脚をM字に開く。いまだに硬度を保っている竿を握り、ちろりと舌なめずりをする。
「すまない、我慢できないものでな」
湿った声で謝り、腰を落とす。肉杭が一気に呑み込まれた。
続く。

●ＮＥＷ！（３９）

「はぁうぅぅ……っ」

熱い泥濘のような蜜洞の感触。静さんはうつむき、色っぽく眉をひそめ、唇を引き結ぶ。互いの濡れた陰毛をにちりにちりとこすり合わせ、結合の感触を噛み締めてから、静さんは気だるげに髪をかきあげた。

「比企谷……」

胸板をそっと撫で、乳首をつまんでくる。鋭い快感に肉茎が張り詰め、静さんが「うんんっ」と色っぽく喘いだ。

「ふふ……君の反応はわかりやすくていいな……あんっ！」

お返しに乳頭をつまんだ。静さんは恨みがましく見つめたものの、やがて獰猛な笑みを浮かべ、腰を上下に振り始めた。

「んっく、ふっ、んんっ！　あっ、はぁっ、はぁぁぁ……っ」

互いの敏感な部位をまさぐりあいながらの交わり。静さんの半開きになった口から、蒸気を幻視しそうなほど湿った吐息が漏れ出る。

「はぁぅぅっ、ひきがっ、やぁ……んむふぅ……っ」

静さんが顔を傾けた。唇が深く重なる。むせかえるような性の匂い。舌の交わりはねちっこくて深い。上でも下でも互いの身体を貪っているという感覚に浸る。

ばちゅっ、にゅちっ、ぱぢゅっ。静さんの腰が打ち付けられるたびに、たっぷり溢れた蜜液が淫猥な音を立てる。

「ふふ……私の中で気持ち良さそうに震えているぞ？」

得意げな顔にちょっと腹が立った。

肉尻に手を添え、下ろした瞬間に掴み、それと同時に力強く腰を突き上げる。

「うはぁうぅぅ!?　あぐっ、はぁうっ、んくぅぅぅ……っ!?」

息つく間もなく突き上げ続ける。汗ばんだ肢体に小刻みな痙攣が走り、止まらなくなる。

「うぅぅぅ、待ってくれ、待ってくれひきがやぁ……あっ、あっ、あっ、ぅ……うぅぅぅぅ」

すがるように抱きつき、ひときわ大きく痙攣する。蜜肉が甘えるように締まった。
「少しは満足しましたか？」
「そうだな……ベッドに行く道中の分くらいは」
「マジで言ってます？」
どんだけエロいんだ……と思いつつ、静さんの身体を持ち上げて結合を解く。そのまま手を掴み、肉尻を掴んでベッドに移動する。
「よつんばいになってください」
「ん……ぅあっ」
おとなしく言うことを聞いた静さんを、ためらいなく後ろから貫く。肉尻を掴み、結合部とひくついた肛門を露わにした。
「気持ちいいですか？」
ひじをついて打ち震える静さんが、こくこくと弱々しく頷いた。
深く息を吸う。全身の筋肉をふくらませる。
そして、弓矢を構えるように腰を引き、力強く打ち込んだ。
「くはぁっ、あっ、ぅあっ、はっ、はぁぁぁっ！」
乾いた打擲音が打ち鳴らされるたび、静さんの嬌声が部屋中にはじけ飛ぶ。汗ばんだ背中に肩甲骨が寄った。静さんの息遣いに合わせて肛門が開いては締まる。開いた瞬間を狙って親指をねじ込んだ。蜜肉が一様に締まった。
「あぉぉぉ……っ」
嬌声に獣性が混じる。律動の速度をいっそう上げた。静さんの頭の高度が徐々に下がっていき、やがて完全に突っ伏してしまった。肛門から指を抜き、肉尻を掴んで前後動を繰り返す。力強さの代わりに、一回一回膣奥をねちっこくこするように。
「イっ、く、だめ、だ、また、イク、イク、イっ……く……うぅぅぅ」
小刻みに震え、肉尻を突き出して一瞬の硬直。それから全身に大きな痙攣のさざ波が幾度も走った。足がバタついてベッドが軋む。絶頂に浸る背中に指を這わせ、なおもゆるゆると腰を振る。
「……比企谷」
「はい」

「……ぎゅってしたい」
可愛すぎか。
「オッケーです」
全身脱力した静さんを仰向けにして、流れるように挿入する。両脚が巻き付いてきたが、さほど力はこもっていない。離れないでね、と甘えるようにふくらはぎやかかとでこすってくる。
「ひきがやぁ……」
とろりとした目で微笑み、両手をこちらに伸ばす。覆いかぶさって抱きしめ合い、唇を重ねた。唾液のたっぷり乗った舌を絡め合うあいだも、互いの腰は止まらない。密着した中でもできる限りこする部分を大きくして、ゆるくとも深い快感を与えあう。
「ちゅっ、ちゅぴっ、んむふぅぅ……っ。へぁっ、ひきがや……中で、ひくひくしてるぞ……？　出そうなんだな……？」
俺の頬に手を添え、愛おしそうに微笑む。静さんは口の中でも膣の中でも、俺の限界を的確に読み取る。それは俺も似たようなものだった。肌を重ね続けるという行為の不思議さを感じる。
「そうですね……そろそろ出そうです……っ」
鼻先をこすり合わせながら告げる。
「ん……っ。たくさん、出してくれ」
優しく抱きしめられた直後、巻き付いた四肢に力がこもった。同時に蜜ヒダが力強く蠕動し、もう少し先だと思っていた限界が一気に引きずり出される。
尿道を通る感触がはっきりわかるほど濃厚な精液が、膣奥にこすりつけられた亀頭の割れ目から勢いよく噴き出した。
「はぁぁぁ……はぁぁぁぁ……っ」
静さんは自身も果てながら、まるで温泉に浸かったかのような安らいだ表情を浮かべている。けれど密着した身体はどこもかしこもいやらしくくねり、絶頂に打ち震える肉槍から一滴残らず精を搾り取った。
絶頂の余韻が去り、全身の力が抜ける。
「ふふ、お疲れさま」

「毎回思うんですけど……なーんで静さんの方がイってるのに俺の方が疲れてるんですかね」
「そういう風に身体が出来ているんだろう。それに、そうでないと私が君の身体を味わいきれなくて困るからな。……今、中で反応したな」
「そりゃそうですって……」
楽しげに笑う静さんに頭を撫でられ、顔が熱くなった。

× × ×

ひとしきり交わり、シャワーを浴びてシーツを替え、ゆっくり寝転がることにした。昼寝するには遅い時間だが、たまには何も考えずうとうとするのも良いだろう。静さんは俺の二の腕に頭を乗せ、楽しげにおでこをこすりつけてくる。何この可愛い生き物は？
「そういえばなんですけど」
「ん？　どうした？」
なるべくさりげなく……と思ったが、発した声が思いのほか強張ってしまっていた。恥ずかしい。
ええい、ままよ……と、静さんの肩を抱く。静さんはほのかに頬を赤らめ（可愛い）、目をぱちくりさせている（だから可愛い）。
「静さん。俺が大学を卒業したら、いっしょに暮らしませんか」
ほんのり赤らんでいた顔が、ぼんっ、と一瞬で茹だった。
「え、あ、そ、そう、か……」
可愛らしくしおしおと縮こまり、
「そう、だな……そうだな。わ、私たちもそんな時期か。いやー、まあ、うん、そうだな、君が望むのであれば、うん、私も、その、なんだ、ええと……」
いつもの凛とした姿はどこへやら、ウブな少女のように黒髪の毛先をくりくりといじり、盛大に慌てる。
それからしばし沈黙したかと思うと、
「……はい、よろしくお願いします」
耳まで真っ赤にして、消え入りそうな声で答えた。やだ、同棲を通り越して結婚しちゃう！

「ふぁ……っ？　ひ、比企谷……っ？」
　思わず抱きしめてしまった。
「よかったです……」
「……ふふ、なんだ。私が断るとでも思っていたのか？」
「そういう訳じゃないですけど。それでも不安に思うのはしょうがないんで」
「それなら、別に今からいっしょに暮らしても……構わないぞ？」
「いえ、経済的にきちんと自立してからにしたいです」
　静さんが目を見開き、ふよふよと視線を泳がせ、甘えるように胸板に顔をうずめる。
「まったく……そんな凛々しい顔で宣言するとは……」
　ぶつぶつと呟きながらも、嬉しそうに抱きついてくる。
「ちょっと寝ますか。夕飯はどうします？」
「ん……そうだな、後で買い出しに行って、ふたりで作ろうか」
「わかりました。それじゃ、いったんおやすみなさい」
「ん……おやすみ」
　目を閉じた静さんの黒髪をそっと撫でる。
　――ふたりで過ごす日々は、それなりに大変なことがありつつも、それなりに楽しく、穏やかに過ぎていくのだろう。
　静さんとの何気ない日常は、これからもずっと続いていく。

　お終い。

（コミケ本）一色いろはは元捻デレな先輩によってチョロインと化す。

（1）

「メイクは舐められない程度にして、でも気合は入れすぎないように……」

冷たい夜風に、コートを羽織った身をすくめるようになった冬のとある日のこと。

いろはが洗面台の鏡と真剣ににらめっこながらメイクをしていた。並べてある道具をちゃっちゃと手に取り、ときに「いや、こっち」などとつぶやいて手際よく顔を仕上げていく。

元が綺麗なので、俺からすれば「そこまで気を遣う必要があるのか」としか思えないのだけれど。そういうコメントをするたびにぷりぷりと怒られるので、今日も今日とて黙っている。

「そんなに気が進まないのか、今日の呑みは」

いろはがバイトの同僚に誘われた呑み会に行くという話は事前に聞いていたが、先ほどから聞こえる独り言や、まるで浮かれた様子のないところを見ると心配になる。ふたりで出かけるときは、姿見の前で楽しそうにくるくると回り、俺と目が合ってハッとして「見ないでください」と恥ずかしそうに言ってくるのに。可愛すぎか。

「まあ……ちょっと、色々と、盛大に、めんどくさそうではあるんですよね」

メイクを終えたいろはが化粧道具をポーチにしまい、くるりと振り向いて苦笑いをする。うっすらとしたナチュラルメイク。化粧のことはさっぱりわからないが、たしかにすっぴんのときよりも綺麗になっていることはわかる。

「ん」

気の利いたコメントが浮かばないので、とりあえずサムズアップ。

「……まあ、今日のところはいいでしょう。デートのときに同じリアクションだったら実刑判決ですよ、実刑判決」
物騒なことを言いつつ、同じくサムズアップした手をこつんと合わせてくる。小さくて丸っこい手は同じ人間とは思えないくらい柔らかく、触れただけで安心する。
いろはがぱたぱたと身支度をしているあいだ、俺は何をするでもなく辺りを見回した。
俺の住んでいるアパートの部屋には、いろはが自宅から持ってきた衣服や、ふたりで買いに行ったクッションなど、彼女の私物がどんどん増えていた。
なし崩しで半同棲という形になっているが、いろははお互いにひとりでいる時間も大事にしているため、思ったよりもすんなりと今の生活を受け入れることができている。
「まあ……社会勉強だと思って行ってきます」
いろはが最後に身にまとったのは黒のトレンチコート。初めて見る姿だった。
「やけにかっこいいな」
思わず口をつく。齢二十にしてできる女感がすさまじい。
素直に褒めたつもりだが、いろはは「ありがとうございます」と言いながら苦笑する。
「先輩とデートするときはこっちにするんですけどねー」
クリーム色のダッフルコートを指差し、ついでに俺の頬をぷにぷにとつっついてきた。
「いや、なんでだよ」
「先輩は今日も可愛いですね～」
「話聞いてる？」
「聞いてます聞いてます」
言いながら鼻唄混じりに俺の頬をつっついてくる。雨垂れのごとく俺の頬を穿とうしているのかしら。やだ、リアルデビル……。
「今日はぶっちゃけ警戒してるんで、可愛さは出さないようにしようかと」

トレンチコートをばっと開く。痴女みたいだなと言いそうになって、本気で怒られそうなのでやめた。中はシンプルな白ブラウスとジーンズ。ふだんのフェミニンな格好と比べるとクールな印象がかなり強い。
そこまで可愛らしさを封じるほど警戒しているとなると……。
「なんかだんだん心配になってきた」
いろはがくすりと困ったように笑う。
「大丈夫ですよー。石橋を叩いて渡るつもりで準備してるだけです」
「ならいいんだが」
「慎重に慎重に、って感じです。叩いて叩いて叩き壊すつもりで」
「途中から急に怖くなったんだけど」
手のひらで頬をむにーと挟まれた。なぜ。
玄関まで送りに行くと、パンプスをとんとんと鳴らしたいろはがくるりと振り返る。
「先輩先輩」
「ん」
どうした……と聞く前に首に腕がまわり、くんと引き寄せられて唇が重なる。いろはの格好も相まって、社会人どうしの恋愛をしている気分になった。スウェットを着ている状態で思うことではないが。
「……思ったより恥ずかしいですね、これ」
「じゃあやるなよ……」
ぽっと顔が赤らむいろはの破壊力がすさまじい。と思ったら俺を見て「え？」とわざとらしく驚いた顔をする。
「してほしくなかったんですか？」
「聞き方がずるいだろ」
いろはがいたずら狐のように目を細め、後ろ手に組んでずいと顔を寄せてくる。
「えー、ちゃんと聞かないとわかんないなー？」
「なんで呑み会前に言葉責めが始まってんだ」
ぺしっとおでこを叩く。
「あたっ」

いろはが可愛らしい声を上げる。俺がすりすりとおでこを撫でると、いろはは縁側で日向ぼっこをする猫のように目を細めて気持ちよさそうに頬をゆるめた。やだ、家の外に出したくなくなるじゃない……。それはもはや半同棲どころか軟禁だな。
「ほれ、行ってこい行ってこい。迎えがほしかったら言えよ」
しっしっと手を振ると、いろはどういうわけか夢見るようにまぶたを下ろし、そっと胸に手を当て、おとがいを上げると、小鳥がおとぎ話を歌うようにつぶやいた。
「わたしは知っているのです。先輩がそう言いながら心配で心配でそわそわして、いてもたってもいられなくなって家の中を不審者のようにうろうろして、迎えに行きたくてしょうがなくなることをむぐっ？」
キスで口を塞ぐ。いろはの手首を掴んで抵抗できないようにしつつ。
「……これは思ったよりも恥ずかしいな」
ぽそりとつぶやく。いろははほんのりと呼吸を荒らげ、目は色っぽく細められていた。
「じゃあしないでくださいよ……」
「え、してほしくなかったのか？」
「ちょっと待ってください、なんですかこの意趣返しは！」
いろはが逃げるように玄関のドアを開ける。
冬の夜気がするりと家の中に流れ込み、反射的に身をすくめた。亜麻色の髪がふわりと空気を含んで揺れるさまに見惚れる。
「先輩は油断するとすーぐ反撃してくるんだから」
「俺にも反撃くらいする権利はあるだろ」
「え？　ないですよ？」
「真顔で言うのやめてくんない？」
俺の人権はどこへ。
いろはがべーと舌を出したかと思うとにへっと笑う。付き合うようになってから見れるようになった、気の抜けた優しい笑み。
「それじゃ、行ってきまーす」

「あいよ、行ってらっしゃい」
手を振りながらドアを閉める。顔が見えなくなったあとまでひらひらと揺れる手に、ふっと頬がゆるんだ。
ドアが閉まったあと、おでこをぺしんと叩いて天井を仰ぐ。
「……マジで恥ずい」
キスの意趣返しは思ったよりも恥ずかしかった。勢いですることではない。八幡、反省。閉まったばかりのドアをちょっと開け、冷気で頬を冷ます。すぐに全身余すことなく冷えたので、すかさず暖房の効いたリビングに引き返した。
「えぇと、さっき聞いた店の名前は……」
なんだったっけな……と考えていると、いろはからのＬＩＮＥの通知がぽこんと来る。忘れ物でもしたかとトーク画面を開いてみれば、店の地図のＵＲＬが送られていた。迎えに来てもらう気満々じゃねえか、と苦笑しつつ『りょ』と返す。
――現在、俺は大学三年生でいろはは二年生。
いろはが俺を追いかけて同じ大学に入ったと聞いたときは心底驚いた。なんやかんやあって今年の夏に付き合いはじめ、今の半同棲生活に至る。
プチデビル後輩に日々翻弄されつつも、俺の中でいろはは限りなく家族に近い存在になっていた。その感覚は妹である小町と似ているようでまるで別物で、あくまで恋人としてのものだ。
まどろっこしい言い方をしたが、要は自覚症状がはっきりとあるくらい、俺はいろはを大事にして、甘やかすようになっていた。今日の呑みもあの様子だと心配でしかたがない。
そわそわしていると、いつの間にかばっちり外出する準備を整えていた。いろははまだ居酒屋に着いてさえいないだろう。
「……早すぎるだろ……」
自分にツッコんだものの、今からまた部屋着に着替えるのも面倒なので、そのままソファに座ってソシャゲにいそしむことにした。ガチャなら無心で引ける。
×　×　×

「うー……さむ」
パンプスをこつこつと鳴らしながら、わたしはぽつりとつぶやいた。先輩が隣にいたら、冷たくなった手を先輩のポケットに突っ込んで「うわ、つめた」と驚かせることができるのに。とはいえ最近は先輩の気遣い力が上がってきて、外に出たらすぐ手をつなぐようになってくれたんだけど。うむうむ、調教は順調だ。
顔を上げ、ふうっと白い息を吐きながらついさっきのやりとりを思い出す。
「……先輩、心配しすぎだって」
顔に出してるつもりはなかったんだろうけれど、明らかに言葉以上にそわそわしてるのが伝わってきた。エサを目の前にした大型犬みたいに可愛くて、笑いをこらえるのが大変だった。
わたしと付き合いはじめてから、先輩は言葉遣いこそ変わらないものの、とんでもなくわたしを甘やかすようになっている。あれは先輩の妹であるお米ちゃんに対する振る舞いに似てる。
だけど、以前そんなことを言ったとき、先輩ははっきりと、
『大事にしてるって意味では同じだが、小町は妹として大事で、いろはは、その、なんだ、彼女として大事にしてるぞ』
なんて言ってきた。自分の攻撃力を自覚してほしいな、と思う。おかげでちょっと気持ち悪いどもりかたまでしっかり記憶しちゃったじゃないか。
先輩のせいで二〜三日にやにやが止まらなかったんだけど、「なんでずっとにやにやしてんだ？」と聞かれたときはけっこう腹が立ったのでいっぱいキスをしてやった。返り討ちにあった。だめだ、思い出したらまた顔が熱くなってきた。
夜道を行く車のライトに照らされる。いつも先輩が車道側を歩いてくれるから、自然と車道から先輩ひとり分開けた位置を歩いてる。すっかり先輩と歩くのが日常になったんだな、と思う。付き合ってまだ数ヶ月なのに、そんな認識の変化が嬉しい。
わたしは先輩にとって、もう家族みたいなものなのかもしれない。そう思うと顔がぽっぽと熱くなる。

今日これからの呑み会は憂鬱の極みだけど、帰ったら先輩にどう甘えてからかおうかと考えただけで、重い足取りがふわりと軽くなる。とりあえず今は手が寂しいので、あとでがっつり手を繋ごう。にぎにぎしちゃおう。ふふふ。

先輩に意味もなくスタンプを八十個くらい送ろうかな……と考えていると、目的地の居酒屋が見えた。店の前に何人かの女の子と、見るからにチャラい男たちがいる。ああ、もう気が重い。いやな意味で地に足が着く。

「こんばんは……」

「おー、君がいろはちゃん？　可愛いねー！　今日はよろしく！」

いきなり名前呼び。もうオーバーキルだ。先輩に聞いた言葉をこんなとこで思い出すなんて。

わたしが最後だったみたいで、すでに三人の女の子と四人の男が揃っていた。なんで男が全員ものの見事にチャラいの？　義務化されてるの？

店の中に入り、男女が対面する形で座るなりチャラ男たちが自己紹介を始める。

羽毛よりも軽い言葉遣い。

マッドサイエンティストの実験に巻き込まれたのかってくらい脱色した髪。

鎖骨を見せないと死ぬ呪いがかけられてるのかってくらい無駄に開いた胸元。

交通事故に遭って二十回転したのかってくらいのダメージジーンズ。

対面したチャラ男A、B、C、Dの印象はそんな感じ。

……評価がひどすぎるかもしれない。先輩のおすすめ本を読み過ぎたかも。他のジャンルのオススメ本も教えてもらおうっと。そういえば「同じ種類のモンスターはグループ攻撃の魔法で同時攻撃できる」って先輩から聞いたっけ。ベギ、ベギラゴン？

小さくため息をつくと、隣の女子が困ったように笑って「わかる」と目だけで頷いた。

今日の呑み会は、本来女子会になる予定だった。
バイト先のカフェでいっしょに働いている女の子に「呑もうよ」と誘われ、初めはその子やわたしの大学の女友達を含めて楽しい女子会になるはずだった。
だけど、同僚の子の大学の先輩がその話を聞きつけ、勝手に参戦表明。気付けば男女四対四の合コンのような形になっていた。同僚の女の子にはすでにがっつり謝られているのでもう気にしていない。今はただただこの時間を乗り越えるだけだ。頑張れいろはす。
そんな状況なので、わたしを含む女の子たちの表情は軒並み暗い。もっとも全員処世術には長けているようで、チャラ男たちにはバレない程度に笑顔を繕っている。隣の子と目が合うと、ふっと力の抜けた笑みをこぼした。わかるわかる、ずっと作り笑顔は疲れるもんね。
「今日はみんな、なんかかっこい感じだよねー！」
チャラ男の言葉に、そりゃあねと心の中でうなずく。わたしと同じく、残り三人もみんな可愛さや色気をいっさい出していない格好をしていた。一目見ただけで今日どんな気持ちで臨んでいるのかがわかってしまい、苦笑いがこぼれる。
女子の自己紹介が始まった。
「一色いろはです。彼氏がいます。よろしくお願いします」
最低限繕った声で、けれどはっきりとした交際宣言。女友達が驚いたのが気配で伝わる。
これで大丈夫だろう……と思っていたら。
「あー、だよねー。わかるわかるー」
「いろはちゃん可愛いもんなー」
なんであっさり受け入れてんだこの人たちは。あと名前で呼ぶな。脳内でベガロギン、じゃなくてベギラゴンを唱える。
そういえば、最近先輩が自分を呼ぶときの声が優しくなったなーと思い出す。あれはぜったい無自覚だ。嬉しいし、そんな先輩がもういちいち可愛い。
よし、気分がちょっと回復。
飲み物の注文が始まると、わたしともうひとりの女の子がソフトド

リンクを頼んだ。「えー、呑まないのー？」というチャラ男の言葉を最高の作り笑顔でごまかした。
「何のサークルに入ってんの？」
「学部は？」
「土日は何してんの？」
チャラ男たちは次々とわたしたちに質問を飛ばしてくる。浅くて特に何の面白みもない会話。
かと思えば、唐突に男同士で笑い出し、「そういえば～」と自慢話が始まる。
「こいつテニサーなんだけどさー、このあいだ二股かけて修羅場ってー」
「やめろって、それ秘密なんだから！」
肘で小突き合って笑うふたり。この世の地獄がここにある。
「え～、そうなんですか～？」
「すごーい」
この場でぜったいするべき話ではない武勇伝を話すチャラ男たちに、女子ふたりが取り繕った驚きの声を上げる。目が綺麗に笑ってないけど、それはわたしも同じだ。
チャラ男たちは薄っぺらい自慢話の合間で、「可愛いよね」とひたすら褒めてくる。
俺はすごいんだよ。君を可愛いと思ってるよ。だからホテル行こうよ。
チャラ男三段活用だ。地獄にもほどがある。すごくないし、可愛いと言ってくれるのは先輩だけで充分だし、温泉付きのホテルにひとりで泊まってくつろいでなよって感じ。
チャラ男たちの話を、ひとりで歩く街中の音のように聞き流しながら思う。
先輩ならわたしの話をいっぱい聞いてくれるのになー、とか。
むしろ先輩ももっと自分の話をしてくれていいのになー、とか。
そういえば、先輩に「女性はきちんと褒めるように」と言ってから、ぎこちないけどちゃんと褒めてくれるようになったなー、とか。

先輩がわたしを褒めるときって、頬を掻いて照れくさそうに、だけどちゃんと本音で言ってくれるから幸せで身体がむずむずするんだよなー、とか。

……わたし、先輩のこと好きすぎじゃない？

顔がぽっぽと熱くなっていると。

「あれー？　いろはちゃんどうしたの、顔赤いよー？」

「呑んでないのに赤くなってる。可愛いねー」

「あ、大丈夫です。なんでもないんで」

顔の熱さが一瞬で抜け落ちた。

ふとしたときに先輩との時間を思い出してにやけそうになるけど、さっきの感じだとこの場で油断した顔はできない。

テーブルの下でスマホをいじり、先輩にＬＩＮＥでメッセージを送る。

『ちょーっと思ったより大変な空気なので、迎えに来てもらっていいですか？　面倒な女でごめんなさい……』

そわそわしていると、先輩にしては珍しく数秒で既読がついた。

『なんだそのメンヘラ風味は。初めからそのつもりだったから気にすんな。すぐ行く』

心がぽっと温かくなる。ツッコミもしっかりしていた。「迎えがほしかったら言えよ」なんて言ってたくせに。なんだこの可愛い先輩は。

『きゃー！　素敵！　彼氏！』

『最後のは褒め言葉じゃなくてただの事実だな』

「あぅ……」

自分にしか聞こえないむにゃむにゃとした呻き。顔が熱い。先輩も顔が熱くなってそう。離れたまま共倒れって高度すぎると思う。

先輩が『ここで合ってるよな？』とＧｏｏｇｌｅストリートビューで店の入口を映したスクショを送ってきた。念入りだなぁ、どれだけ心配してくれてるんだかと余計ににやけてしまう。

すかさずオーケーのスタンプを送ると、

『わかった。今からウォームアップしとくわ』

との返事。いつもの軽口がこういうときは本当に心強い。
「いろはちゃん、誰とＬＩＮＥしてんの？　彼氏？」
「あー、そんな感じです」
幸せな時間に水を差されて、言葉の温度がすとんと落ちる。それでもチャラ男はわたしの変化に気付かずべらべらと話しかけてくる。
さっさと帰りたいなぁ……と思っていると、チャラ男たちの提案で男女隣り合って座ることになった。より深い地獄に下りた感覚。女子同士でアイコンタクトをしてうなずき、腹を括る。
「いろはちゃん、お酒呑まないの？　二杯くらい呑もうよ～」
「いえ、結構です」
お酒を呑ませようとするのをするりとかわし、なれなれしく触れようとしてくるのもするりするりとかわす。わたしに触っていいのは先輩だけだ。あとは一部の女友達。静電気帯電シートがあれば巻きたいなと思った。待てよ、そんな便利グッズがあったら電車の痴漢防止に役立つのでは……と思ったけど、普通に乗ってるだけで被害者が続出しちゃうな。
ああもう、イライラする。
先輩に八つ当たりべたべた（すごいネーミングだ）をたっぷりしようと心に誓いつつ、人生の中で指折りの無駄な時間をなんとか乗り切った。

×　×　×

居酒屋を出ると、案の定二次会に連れていかれそうになった。
「まだ呑み足りないっしょー？」
「なんか歌いたくない？」
「カラオケ行こうよカラオケ――！」
女性陣が帰りたい雰囲気を丸出しにしているにも関わらず、チャラ男たちの振る舞いがだんだん強引になっている。笑顔のまま腕を引っ張られ、友達が同じく笑顔のまま振り払っている。まったくなびかないわたしたちに業を煮やしているのかもしれない。これは本格的にやばそう。
どう逃げようか考えていると、視線の先に、髪がぴょこんと跳ねた、

気だるげで眠そうでナマケモノみたいにぬぼーっとした、とっても見慣れた姿が見えた。
「あ」
小さな小さな声を上げて、他の誰も気づいていないうちに駆けだす。ずっしりと重くなっていた脚がウソのように軽くなった。心がふわふわしてる。
「うおっ」
ハリウッド映画でしか見ないくらいの、体当たりみたいな抱きつき。先輩は驚きながらもわたしの身体を抱きかかえて、しっかりと受け止めてくれた。映画のラストシーンならこのままふたりでぐるぐる回っているところ。
「お、おい……？　……無事でよかった」
戸惑いながらも安心した声。わたしの方が安心してます、と変な対抗意識が湧いた。頭をぽふぽふとされて身体の強張りが抜けていく。思った以上に緊張してたんだなーと気付いた。
胸がほわほわとあったかくなって、この気持ちの責任をとりなさーいと背中をばふばふばふと叩くと「ぐっ、うぉっ、あの、いろはさん？　そんな晴れた日のベランダに干した布団みたいに……」と例えツッコミをされて笑ってしまった。
ほんのわずかな時間であっという間にできたふたりの世界。
ここってどこだったっけ……？　と思ったところで、
「あー、彼氏？」
「なんか冴えねぇな……」
脳内でぴしっと亀裂が入る音がする。何度冷や水を浴びせかけたら気が済むのか
。
「気にすんな、慣れてる」
先輩がわたしにだけ聞こえる、優しい声で囁いてくれた。けれどだめだ、今は、だめ。
「わたしがどうこう言われるのは気にしませんけど、先輩がバカにされるのは許せません」

「お、おい……？」
「先輩をからかっていいのはわたしだけです」
「それ今言う必要ある？」
先輩のツッコミを流しつつ、後ろを振り返る。先輩には見せたくない表情を浮かべて。
『う……っ!?』
わたしの顔を見たチャラ男たちがたじろぐ。女子三人は目をぱちくりとさせていた。
「わたしの彼氏を悪く言わないでください」
ほんの少し目を細めての真顔。そして淡々とした口調。けれどこれで、いくら鈍感なこの人たちでも明確な敵意を感じてくれているだろう。
ああもう、先輩がこんなことを言われるくらいなら、初めからきっぱり断っておけばよかった。あとでしっかり謝ろう……と思っていると、不意に、肩をくいと抱きしめられた。
「いろはがお世話になりました。それじゃ」
先輩がチャラ男たちを一瞥し、女子三人に丁寧にお辞儀をする。心の中でキャーキャーと黄色い声を上げてしまった。
「あたしたちもそろそろ帰ろっかー」
「そうだねー」
「おつかれさまでしたー！」
「え、あ、ちょっと……っ!?」
女子三人が次々とその場をあとにする。それぞれと目を合わせ、お互いにサムズアップ。お疲れ様でした。チャラ男たちはひとりひとりを追いかけるか、ひとりを複数人で追いかけるか迷っている。みっともないなーと思いながら、先輩と足早にその場をあとにした。
「先輩、ごめんなさい。迎えに来てもらったばっかりに、ほんとしょーもないことを言われちゃって……」
とぼとぼと歩きながら謝ると、先輩がわたしの頭にぽんと手を置いた。白い息を吐いて、ふっと笑みを浮かべる。相変わらずちょっと笑顔が下手だなぁ。そこがまた可愛くて好き。

「気にすんなって言ったろ。比較対象にされるくらい俺の彼女は魅力的ってことだ」
ほろり、と心に溜まっていたいやな気持ちがいとも簡単に溶けてしまった。ずるい。許しながら褒めてくるなんて。と思ったら、先輩もよく見たら照れてる。愛い愛い。
「先輩、顔が赤いですよ」
「寒いからだよ。いろはだって赤いぞ」
「寒いからですよ」
わたしも似たようなものだった。
ひと気のない道をぽてぽてと歩きながら空を見上げる。よく晴れていて、肌に刺さる冬の夜気に手先がかじかむ。
手を繋ぎたいなーと思っていると、冷えた手をぱしっと握られた。先輩が前を向いたまま、わたしの手を自分のコートのポケットに突っ込む。かじかんだ手があっという間に温まった。
「先輩、すごいですね。わたしもちょうど手をつなごうと思ってました」
「奇遇だな。需要と供給が一致したわけだ」
先輩の軽口にくすくすと笑う。先輩も軽く微笑んでいた。
信号で立ち止まると、先輩にぽすんとしなだれかかった。
「迎えに来てくれて嬉しかったです。ありがとうございます」
「……おう」
そっけない返事。だけどその声がちょっと上ずってる。見上げると、街灯に照らされた先輩の顔がなんだかひくひくしている。これはわたしの可愛さにばっちりやられてるな。いろはちゃんは知っている。
愛くるしいヤツめーと先輩のほっぺたをつっつこうとすると、信号が青になって先輩が前に進んだせいで空振った。それはもう見事に。
「……どうした？」
人差指を突き出して固まるわたしを見て先輩が首をかしげる。
「うぐ……」
ちょっと腹が立ったので、先輩のほっぺたを人差指でぐりぐりとし

てやった。それはもうドリルのごとく。

×　×　×

今日のいろはの可愛さは常軌を逸している。

帰り道をのんびりと歩いているが、呑み会で色々ため込んでいたのか、腕に抱きついてとにかくころころと甘えてくる。付き合う前から意外と甘えたがりなのは知っていたが、なんだか今日はいつもよりも幼い感じがする。さっきから表情筋が仕事をしてくれない。

「先輩、おうちで呑み直ししていいですか？」

「ん、呑んで大丈夫なのか？」

いろははむふーと楽しげに笑い、俺の二の腕に頬ずりをした。なるほど俺を殺す気らしい。

「だいじょうぶでーす。あっちではソフトドリンクしか呑んでなかったんで」

「なるほど。ならコンビニに……って、あの、いろはさん？　そろそろ……」

店が立ち並ぶ通りに近づいてきたが、いろははぴったりくっついたまま離れようとしない。

「えー、なんですかー？　はっきり言ってくれないとわかんないなー」

いろはさん、むふーと笑って実に楽しそうにニヤニヤしてらっしゃる。ええい離れろ、恥ずかしい。顔が熱い。

コンビニの煌々とした明かりが見えると、いろははようやく離れた。ふたたび俺のポケットに手を入れて、楽しそうにニヤニヤとしてくる。

「やけに嬉しそうだな」

「先輩と呑み直すのが楽しみなんですよー。……さっきまでがあんまりにも大変だったので」

「……がっつり労わらせていただきます」

「やったー」

どうやって労わろうか、とりあえず自分へのダメージを省みずに全力でお世辞抜きに褒めちぎろうかなどと考えながら、コンビニでお酒とおつまみを選ぶ。俺はいろはが好きなものを先に選び、いろはは俺

が好きなものを先に選んでいた。お互い手に持ったものを見てくすくすと笑い合う。なんだか俺も楽しみになってきた。これが深夜テンションか。まだ夜の九時だけど。
「ただいまー」
「はいよ、おかえり」
家に帰るといろはが当然のようにこの挨拶をする。一応君の家は別にあるんですけどねとは思いつつ、すっかりわが家と思ってくれていることが嬉しい。
お酒とおつまみをローテーブルに置いて手洗いうがいを済ませ、コートを脱いだところでいろはが抱きついてきた。甘い匂いがふわりと鼻腔をくすぐる。
「……お疲れさん」
亜麻色の髪をぽんぽんと撫でると、いろはは何も言わず俺の胸に顔をうずめ、おでこをぐりぐりと押しつけてくる。だいぶお疲れのご様子。
「休まなくて大丈夫か？」
「大丈夫です。寝る前にたっぷり甘えないと気が済まないんで」
「え、可愛すぎない？」
ぐりぐりの速度が増した。火を起こそうとしてるのかしら。
いろはがぱっと顔を上げる。出会った頃よりもぐっと大人びた顔。初対面のときは最大限に警戒した子だというのに、今はこの顔を見ると一番安心するのだから不思議なものだ。
「ん……っ」
唇を重ねると、いろはが鼻の奥で色っぽい声を漏らした。背中をさするとひくひくと身体がくねる。いろはの手がすがるように俺の髪や耳、首、背中を撫でてくる。
「ちゅっ、れるっ、はぷっ、あむ、んふぅぅ……っ」
互いの唇を咥え、舌をちろちろと絡める。しばらくじゃれつくと、今度は顔を傾けて唇をぴったりと密着させた。
「んっ、ちゅぴっ、はっ、んんっ、んふぅっ、ふぅぅ……っ」
白ブラウスにジーンズというシンプルな格好をした恋人が、徐々に

顔を蕩けさせて女としての表情をめいっぱい見せてくる。いろははとにかくキスに弱い。キスという行為そのものにも弱いし、キスをしながら他の場所を責められることにも弱い。
「……はっ、へぁっ、せん、ぱぁい……っ」
いったん口を離すと、いろはははふはふと酸素を求めるように口を開閉して、またすぐに唇を重ねてきた。ねろねろと舌が絡み合う。いろはの舌はどんどんいやらしく動くようになり、ふっくらとした胸をすがるように押し付けてくる。
「あっ、あっ、そこっ、やぁん……っ」
背中から尻に手を滑らせると、いろはが扇情的に腰をくねらせた。ジーンズの硬い生地越しに撫でただけでも柔らかな肢体がひくひくと反応し、いろはの口内の唾液の量が増していく。
「うぐ……っ」
いろは柔指が俺の下腹部に添えられた。膨らみを下から上へと何度もなぞられ、スラックスの中で肉幹がぎちぎちと張り詰めていく。
「えへへ……すっごい硬いですよ？」
いたずらっぽく微笑むと、俺の唇をちろちろと舐めながらブラウスとジーンズを脱いだ。シンプルな白の上下の下着。
「先輩と出かけるときはもっと気合を入れますから」
「知ってる」
胸板にとすとすとパンチを食らう。愛嬌たっぷりな仕草に悶絶した。
「先輩、これから呑むのを忘れてません？　だいじょうぶですかぁ？」
いろはの目尻がとろんと下がり、瑞々しい唇のあいだからてろりと舌が垂れる。舌の腹同士をこすり合わせ、ぱくりと咥えてずるりと啜る。
「へぅぅぅ……っ」
下着姿の身体が小刻みに震え、へなへなと崩れ落ちる。いろはは女の子座りになると、俺の股間に鼻先をくっつけて「ん～」と気持ち良さそうに鼻を鳴らした。
「いろはさん、エロすぎません？」

「先輩の調教の成果ですね」
「調教って言うな……」
鼻唄交じりにスラックスのチャックを開けるいろはの耳をそっと撫でる。
「ひんっ！」
甲高く喘ぎ、「うー」と唸りながら股間に頬をぷにぷにと押し付ける。
「……先輩のせいでほんと感じやすくなっちゃったんですからね？こういうのを調教って言うんですよ、調教って」
「……否めないな、うん」
いろはは「まったくもー」とぷりぷりしたかと思えば、スラックスを脱がせてがちがちに張り詰めた肉竿をパンツ越しににぎにぎとしてくる。
「先輩、ほんとにおっきぃですよね……」
熱を帯びた声で囁き、裏スジにちゅっ、ちゅっとキスをしてくる。柔らかな唇が、肉茎の形に合わせてむにゅりとひしゃげるさまにごくりと喉が鳴った。
「いろはさん、これから呑むのを忘れてません？」
「んー、覚えてますよー？　でもまあちょっとだけ……」
夢心地の声で呟き、いろはが俺のパンツに指を引っかけてするりと下ろす。勃起した肉槍が勢いよく飛び出し、愛らしい顔を睥睨するように力強く反り返る。
「あは……っ」
うっすらと口の端をつり上げた笑みをいろはが浮かべる。吐息が桃色に見えそうなほど、わかりやすいくらい欲情した顔。
「だめですよぉ？　こーんなエッチな匂いさせてたらぁ……」
間延びした声。亀頭にかかる熱い吐息。高まる期待感に身体が強張る。
「はむ……っ」
生々しく開いた唇が亀頭の先端に触れた瞬間、甘い快感が尿道を突き抜けた。するりと伸びた舌が鈴口をねろりねろりと舐め、それから

ゆっくりと唇が侵食してくる。上目遣いで俺の反応を窺いながら、じっくり、ねっとりと。
「んふぅぅ……っ」
亀頭をぬるりと呑み込むと、柔らかな唇でカリ首を締めつけ、唾液で溶かすかのように丹念に舐る。亜麻色の髪を撫でると、俺のひざ裏をすりすりと撫で、嬉しそうに目を細めた。
「んっ、んむふぅぅ……っ」
とぷりとぷりと溢れる先走り汁を舌で掬い上げ、もっともっとと欲しがるようにゆりゆりと舐め上げる。
「んっ、んっ、ん……っ」
きゅっと頬をすぼめ、ゆっくりと顔を前後させる。鼻の下が伸び、いろはの綺麗な顔が卑猥に歪む。この顔を見ることができるのは俺だけなのだという独占欲が背すじを炙る。
ちゅぽ、ちゅぽ、ちゅぽ……っ。
いやらしく唾液が弾ける音と、荒くなったいろはの吐息が静かな部屋に響く。いろははうっとりと俺を見上げ、太ももやひざ裏を愛おしそうに撫でている。
いろはは口でする行為が好きで、キスだけでなくフェラも好きだ。休みの日はほうっておくと何十分と舐めていたりする。最高でしかない。
じりじりと近づいてくる射精欲求に内ももが強張る。積極的に腰を振って温かな口内に肉槍をねじ込もうとすると、不意に口が離れた。
「え……っ」
「先輩、そろそろ呑みましょ？」
「……生殺しにもほどがあるんですが……」
それに、いろはも見るからに欲求不満だ。下着姿の身体を悩ましくくねらせ、亀頭にちゅっ、ちゅっと何度もキスをしている。
「たまには我慢してみるのも楽しいんじゃないかなーって。先輩がムラムラしながら呑んでる姿を見たらぜったい笑っちゃいます」
「それを言うならいろはだってぇぇ……っ？」

亀頭をぱくりと咥えられ、鈴口をにゅりにゅりとほじくられた。語尾が間抜けに伸び、俺が黙ったところでいろはが口を離して「むふー」と自慢げに笑う。
「遮り方がエロすぎるんですが」
「先輩の調教の賜物ですねー。……んぐ……んん……あぉ……っ」
小さな頭を掴んで喉奥まで肉茎をねじ込む。いろはが涙目で見つめるなか、ゆっくりと引き抜いた。口と肉幹のあいだに唾液の線がてろりと伸びる。
「じゃ、そろそろ呑むか」
いろはが名残惜しそうな、それでいてちょっと恨みがましそうな目で見つめてくる。
「……もっとしてくれていいんですよ？」
濡れた声音に肉槍がびんと跳ねる。が、今は耐えることにする。
「たまには我慢してみるのも楽しいんじゃないかなーって」
「うぅ……先輩が意地悪だ……」
「心配すんな、どうせあとでふたりとも大変なことになるから」
「すごい言い方しますね……でもま、間違ってないかも」
頭をぽんぽんと撫でると、いろはがぽしょぽしょと呟いた。鈴口にちゅっと吸いつかれるとカウパー液が溢れ、いろはが目をぱちくりとさせた。透明な粘液をちゅっと吸い、にんまりと笑う。
「まさか先輩がこんなに性欲が強いだなんて思いませんでしたよー？」
「さいですか……」
熱くなった顔を逸らすと、「可愛いヤツめー」とはしゃぎながら両手の人差指で竿をてちてちと弾かれた。卑猥すぎる遊びはやめてほしい。ぷらぷらと左右に揺れる自分のものを見ると、何とも言えない気分になった。

（コミケ本）雪ノ下陽乃もなんだかんだで捻デレである。

（1）

バイトを終えて外に出ると、二十一時を回ったにも関わらずじわりと粘つくような暑気が肌に貼りついた。夕方に振った久しぶりの雨のせいだろう。

Ｔシャツ一枚でこの不快感だ。満員電車に乗るサラリーマンはさぞや地獄だろう。やだ、就職予備校なんて揶揄される大学に入ってからさらに勤労意欲が減退してるわ……。

バイト先から徒歩五分の冷房の効いた駅に入り、ＬＩＮＥをチェックする。

「……あー……」

表示された名前に思わず呻くも、そもそもこの頻度でＬＩＮＥを開くこと自体がかつてはあり得なかった。すっかり習慣づけられてしまったというか、パブロフの犬というか。

メッセージが来たのはたった今。

『いつもの場所。十分待つ』

スパイの指令か、と言いたくなる。電車はあと一分でやってくる。そして『いつもの場所』とは隣駅から徒歩五分の場所にある。間に合うけど。間に合うんだけど、色々言いたい。でも怖くて言えない。有無を言わせぬ口調は上司や社長の命令というよりはもはや勅令だ。

はぁ……とため息をつきながら、目の前で停まった電車に乗り込んだ。

×　×　×

「おっそーい」

まぁまぁ急いで来たにも関わらず、理不尽極まる第一声。

すっかり通いなれたバーのカウンター席で、彼女――雪ノ下陽乃

は、唇を尖らせてぶすっと拗ねていた。子どもかこの人は。
「すいません、一応間に合ってたと思うんですけど」
「わたしが十分って言ったら、それすなわち三分ってことだから」
「言葉はわかりやすく伝えろって教えられませんでした？」
　呆れながら隣に座る。
　陽乃さんは仕事が終わってまっすぐ来たのだろう、ワイシャツにタイトスカートといういつもの格好だ。しかしワイシャツは第二ボタンまで外していて、危うい三角地帯に視線が吸い込まれそうになる。
「おや～？　そんなにそわそわしてどうしたのかな～？」
　すぐに視線を逸らしたつもりが、余裕でバレていた。
「……なんでもないです」
　めっちゃにやにやしてるよこの人……。ぜったい俺が来る直前にボタンを外しただろ……と思ったものの、この人の思考は深読みすればするほど確実に泥沼にはまる。何も考えない、何も考えない。
「じゃあ俺は……」
「あ、君のはこれ」
　俺の前にグラスが置かれた。いつも呑んでいるリキュールを頼む前に。
「今日はウィスキーの気分なの。だから君もウィスキーを呑みなさい」
「今時珍しいくらいのアルハラですね……」
「君がわたしに惑わされないのが悪い」
　陽乃さんが第二ボタンまで開けたワイシャツの襟をぴらぴらと揺らす。やめてやめて、深い谷間が見えるから。どうしても一回見ちゃうから！
「ほれ、じゃあ乾杯の音頭を頼むよ君ぃ」
　陽乃さんのウザがらみが今日は特にひどい気がするが、せっかくなのでノってやることにする。こういうノリもここ一年ですっかり慣れてしまった。
「えー、諸君の頑張りにより、今年度の我が社の業績は飛躍的に伸びました。今後いっそうの」

「あ、そういうのいいから。サラッとでいいよ」
「泣いていいですか」
　すげぇ楽しそう。人の不幸は蜜の味ですもんね！　ほんとシャーデンフロイデ……。
「とりあえずお疲れ様です。乾杯」
「かんぱーい」
　チン、とグラスを軽くぶつけ、ぐいと喉に流し込む。強烈なパンチを覚悟していたが、思いのほかフルーティで呑みやすい。
「カナディアンクラブって種類なの。呑みやすいでしょ？」
「ですね、美味いです」
「ばんばん呑んでいいからね」
「ぜったいリバースするでしょそんなの……」
　つまんないのー、と陽乃さんがヒールのつま先でふくらはぎをげしげしと蹴ってくる。地味に痛いからやめてほしい。あとタイトスカートから太ももが覗いちゃうからほんと自重して！
「比企谷くんとこのお店で呑むようになって……もう一年以上になるっけ？」
「店に通い始めてからはそれくら経ちますね。俺が呑み始めたのは最近ですけど」
　大学二年になり、今は八月の下旬。二十歳になって間もないのだが、この人にぐいぐいと呑まされるせいでそれなりに酒呑みになっている。ぜったい良くないと思うんですけど……。ソフドリで乗り切れていたあの頃がすでに懐かしい。
「俺が来るまでに呑んでました？」
　隣のグラスの氷がからんと鳴った。陽乃さんの顔はほんのりと朱い。
「ん～、二杯だけね。今日の仕事はいつもより早く終わったけど、比企谷くんはそれ言ってもバイト早く終わらせてくれないし」
「家庭教師を早く終わらせるのは無理でしょ……」
　傍若無人にもほどがある。
「……にしても、早く終わってもこの時間ってキツいっすね……」

陽乃さんの口ぶりからするに、仕事が終わったのは二十時くらいだろう。いつもは二十一を回り、遅いときは二十二時まで及ぶ。もっとキツい仕事だってあると言う人もいるだろうが、このご時世、ブラック度合いで競っても良いことなどない。
「そ？　まあ、なんとかやれてるよ」
「その割には酒の量が増えてる気が」
「君がもっと構ってくれたら、わたしのお酒も減るんだけどなー」
けらけらと笑いながら、俺の二の腕をてしてしと叩いてくる。細指の感触がTシャツ越しにやたらと生々しく伝わる。
「はー、たのし。君とこうやって不毛な話をするの、好きなんだよね」
「はいはい、ありがとうございます……」
陽乃さんが身体を傾けて楽しげに目を細める仕草に、かつて感じていた毒気はない。瞳の鋭さは和らぎ、薔薇から棘が抜け落ちて本来の色がますます輝いて見えるような、そんな感覚。素直に綺麗だと言わせなかった何かが今は削られて、全体的に丸みを帯びている。
「比企谷くん、またわたしに見惚れてる」
「自意識過剰じゃないですか」
「またそういうこと言う～」
耳をふにふにとつままれる。はぐらかし方はたしかに下手だった。たしかに、俺はこの人の暴力的なまでの美しさに見惚れていた。
陽乃さんの手がそっと太ももに触れる。心臓が淡く跳ねた。
「それで、教え子の女の子とはよろしくやってるの？」
「オッサンですかあんたは……」
陽乃さんが早く早くと先をせがむように撫でさする太ももは、ひどく敏感になっていた。口が渇き、ウィスキーを流し込んでさらに悪化する。
「男だって言ってるでしょ。てかそれ聞くの何回目ですか」
「新しい子を教えてるかもしんないじゃん。あ、同じのもう一つ」
俺がちまちまと呑む横で、陽乃さんがまたしてもグラスを空にしていた。
「……ほんとに大丈夫ですか」

「ん〜、大丈夫大丈夫。君もいるんだし」
「俺をタクシー扱いしないでください」
「それじゃあ送り狼？」
「するわけないでしょ……」
「ふーん……ほんとに？」
　陽乃さんの手が内ももまですべり、きゅっと握ってくる。手の位置がきわどい。
「わたしが前後不覚になって、ベッドで無防備に寝てても……君は襲ってくれないの？」
　とろんとしていた瞳が急に鋭くなった。目を逸らし、頭をがしがしと掻く。
「……そういう言い方はやめたほうがいいですよ」
「ふーん？」
　陽乃さんが意味深に笑い、甘えるように俺の内ももを撫でる。徐々に露骨になっているスキンシップを上手く拒むことができない。
「君はほんとおかたいねー。美人なお姉さんのいたずらにもっと乗ってもいいんじゃない？」
　陽乃さんがグラスを両手に持ち、テーブルにひじをつく。髪を耳にかけた拍子に、控えめな照明に光るイヤリングと嘘みたいに滑らかなうなじがちらりと覗いた。口元はグラスの琥珀色に遮られて見えないが、その目は愉快そうに笑っている。年々破壊力を増している蠱惑的な笑顔から視線を切り、グラスの中のウィスキーをじっと見つめた。
「陽乃さんを襲うとか、怖くて無理ですって。社会的にも精神的にも物理的にも」
「あははは、わたしは魔王かっての」
「わかってるじゃないですか」
　二の腕をてしてしと叩き、さらに俺の内ももをきゅっと握ってきた。「うひゃっ」と気持ち悪い声が漏れ、陽乃さんが顔を逸らしてぷるぷるする。楽しそうで何よりです……。
「今さ、君は『怖くて』無理って言ったよね？」

「……言いましたね」
「じゃあ、怖くなければ襲うの？」
「陽乃さん、あんまり呑みすぎないでくださいね」
「逃げ方が下手すぎるぞー」
陽乃さんがけらけらと笑い、
「それにしても、名前で呼ぶのやっと慣れてきたね。お姉さんは嬉しいぞ」
頭をわしゃわしゃわしゃーと撫でてくる。大型犬みたいな扱いはやめてほしい。
大学に入って陽乃さんに（無理やり）誘われるようになっても、俺はしばらく「雪ノ下さん」と呼んでいた。しかし、先日誕生日を迎えた際に名前呼びに改めるように告げられた。
酔いどれ魔王の言い分は「成人したんだから呼び方も変えるべきだよ」といったものだ。
元服と同じ考え方だとしても、自分の名前を変えることはあっても人の呼び方を変えるってなくないか……？　と思ったが、陽乃さんの俺に対する指示には理屈も整合性もあったもんではない。やだ、ぜったい上司にしたくないタイプ……。
そんなパワハラにより何度も呼ばされるうちに、自然と今の呼び方が身についてしまった。
陽乃さんがふたたびウィスキーを注文する。今度は別の種類にしたようで、グラスを傾けると「んー！」と目をきつく瞑って唸った。
「はー、美味しいお酒を楽しいオモ……後輩と呑めるなんて幸せ者だね、わたしは」
「今オモチャって言おうとしましたよね」
「してないしてない」
ジト目を向ける俺に対し、陽乃さんは目を逸らすどころかむしろぐいと顔を近づけた。ほんのりと赤らんだ美貌に身がすくむ。
「……比企谷くん、いつもより酔ってるでしょ」
「そういう陽乃さんこそ」
陽乃さんは鼻先が触れそうな距離まで近づき、するりと離れた。

「んー、たしかにねー。多少疲れてるのは否めないかも。明日は休みなのが救いかな」
組んだ両手をぐいっと前に伸ばす。肉感的な肢体にワイシャツが貼りつき、見えてはいけないものが見えてしまった。
「比企谷くん。今、見たでしょ」
「何のことでしょう」
「ブラ」
じいいい……っと岩をも穿ちそうな目で見つめてくる。
「……すいません」
このままでは心臓の活動が止まりそうなので、早々に白旗を上げた。
「うむうむ。ま、別に君に見られてもいいんだけどねー。オフィスではジャケット羽織ってるし。お姉さんの無防備なとこを見れるのは君だけだぞー」
俺の背中をばんばんと叩き、ウィスキーの残りをぐいと呑む。
「これおいしー。同じのもう一杯いいですか」
「ちょ……ほんとに大丈夫ですか？」
「だいじょーぶだいじょーぶ」
さすがに本気で心配するも、陽乃さんは不安極まるふわついた返事をして笑った。

× × ×

「ふらふらじゃないですか……」
店を出るなり、陽乃さんはやけに楽しそうに右へふらふら、左へふらふら。ものの見事な千鳥足なんですけど……。
「よ～し比企谷くん、締めのラーメン行こっか！」
「バーのあとラーメンに行く気にはなんないですって……」
陽乃さんは「行くぞー！　おー！」と腕を上げてはしゃいでいる。誰も見ていないのが救いだ。こんなに無防備で面白い陽乃さんを誰かに見られるのは忍びない。
「電車……は無理ですよね。それならタクシー呼びますから……って、陽乃さん？」

ぽすんと右腕にかかる心地良い重み。陽乃さんがしなだれかかり、今にも眠りそうにこっくりこっくりと頭を揺らしている。ていうかこれ半分寝てるな。
これはさすがに、タクシーに放り込んではいさよならと言うのも気が引ける。
「家まで送ります。タクシー呼ぶので」
陽乃さんがぴくりと揺れ、俺を見てにんまりと笑った。
「送り狼発動～……」
「しないですよ。送るだけです」
陽乃さんにお腹をぽすぽすと力なく殴られた。
タクシーはすぐにつかまり、ふらついた陽乃さんを中に押し込めて座る。
「どちらまで？」
「陽乃さん、住所言えますか？」
「ん～……」
陽乃さんが緩慢な口調で住所を告げる。タクシーがゆっくりと動き出すと、陽乃さんが重力のままにこてんとしなだれかかってきた。酒気混じりの甘い香りが鼻腔をくすぐる。
「ん？」
陽乃さんが俺の手首をつまみ、自分の右肩をとんとんと指している。
「……いやいやいや」
何を意図しているかはわかる。わかるが、さすがにそれは厳しい。理性へのダメージが著しいにも程がある。
「ん～……」
陽乃さんは目を閉じたまま不機嫌そうに眉をひそめ、俺の手首をぎゅっぎゅっと握ってくる。どこまでが酔いによる行動かわからない。わからないが、これ以上拒否できる空気ではない。
夜の街の景色が流れゆく中、陽乃さんの肩を抱き寄せた。
「うんん……っ」
耳元で漏れるあえかな吐息。陽乃さんの身体は意外なほど華奢で、

信じられないほど柔らかい。聞こえてしまうのではと心配するほどに鼓動が速まっていた。
陽乃さんは俺の行動に満足したのか、それ以上は何を望むでもなく、すりすりと猫のようにおでこをこすりつけてくる。
棘はなくとも魔王は魔王。
そう思って、分厚い皮で理性を幾重も包んで耐え忍んできたのに……現在進行形でその皮を一枚一枚剥がされている。それも力づくでなく、搦め手のような手段で。
「陽乃さん、着きましたよ」
「ん～……」
タクシーを降りたものの、陽乃さんはいまだにひとりで歩けそうにない。
「部屋まで送ります」
「おー、ほんとに送り狼だ～」
「気に入りすぎでしょそれ……」
呆れながらマンションの中に足を踏み入れた瞬間、急に感覚が鋭くなった。陽乃さんの息遣いやふらつく足取りを強烈に意識してしまい、動きがぎこちなくなる。
今までも冗談半分で誘われたことは何度かあったが、のらりくらりとかわしてきた。流されるな、流されるなよ……と自分に言い聞かせていると、不意に陽乃さんが立ち止まった。
「陽乃さん？　どうしました？」
「比企谷くん。わたしってまだ酔ってるよね？」
「……だと思いますけど」
陽乃さんが俺にぴったりとくっつく。落ち着きかけていた鼓動が跳ねた。
「それなら、さっきみたいに肩を抱いてくれてもいいんじゃない？」
「は？　……あー……」
さっきは意識があったらしい。考えてみればそりゃそうかという話だが。
「ここで拒否したらどうなります？」

「警備員を呼んで社会的に殺す」
「怖すぎるでしょ……」
なんで笑顔なんだこの人。
先ほどと同じように、陽乃さんの右肩を抱き寄せた。
「うあ……っ」
艶っぽい声を耳にした瞬間、背すじが甘くざわめいた。
「陽乃さん？」
「なんでもない。……行こ？」
華奢な身体は縮こまり、その声はしっとりと濡れていた。なるべく早く部屋まで送り届けたいが、この状況では急ぐに急げない。
「あは、比企谷くんに抱かれてる……んん……っ」
「言い方……」
俺の指が柔らかな二の腕にわずかに食い込むだけで、陽乃さんがひくひくと小さく震える。その反応の意味を深く考えてはいけない、と本能ががなりたてていた。
陽乃さんは部屋のドアを開けるまで手を離させてくれなかった。ワイシャツに手汗がじわりと滲み、バレやしないかと気が気でなかった。
「ただいまー」
「じゃ、俺はこれで」
陽乃さんが笑顔で俺の肩をつかむ。
「ワタシ、マダ、ヨッテル。オーケー？」
「オ、オーケー……」
なんで片言なんだこの人。
広々とした廊下を、陽乃さんのリクエストにより引き続き肩を抱きながら歩く。
エアコンを予約運転にしていたのか、リビングはひんやりとよく冷えていた。インテリアはモノクロで統一されていて、壁にはヨーロッパらしき街並みの絵画が飾られている。中性的な印象を受ける部屋の中で唯一女性らしさを強烈に感じるのは、ソファのサイドボードに置かれたルームフレグランス。ふわりと鼻腔を撫でる香りは甘く華

やかで、されどどこかに優雅さを窺わせる。緊張に強張っていた肩からふっと力が抜けた。
「……この匂い、気に入ってるんですか？」
いつかも嗅いだことのある匂いだった。陽乃さんはこてんと首をかしげ、俺の視線の先にあるものに気付いて「ああ、そうそう」と小さく笑う。
「よく覚えてるねー。一回しか見たことないでしょ？」
「なんとなくですよ。印象的だったもんで」
陽乃さんが俺の腕からするりと抜け、元気にうきうきスキップをしてソファにダイブする。いや、めっちゃ回復してるじゃねぇか。
「はー、やっぱ我が家は落ちつくねー」
ごろーんと寝転がって第三ボタンを外す。ナチュラルに何しでかしてくれてんだこの人は。
これ以上留まるのはまずい。
この部屋は妙にリラックスできる。趣味が合うのかもしれない、とか。ソファが柔らかそうだな、とか。陽乃さんの隣に座ったらめちゃくちゃ安らぎそうだな、とか。ありとあらゆる夢想、空想、妄想が疲労とアルコールで鈍った頭を殴り、蕩かし、幻惑してくる。
「落ちついたなら何よりです。じゃ、俺はこれで」
くるりと踵を返して立ち去ろうとすると、
「待って」
Tシャツの裾をつままれた。
「えっ……と……？」
引き止める力は弱い。帰ろうと思えば帰れる。けれど陽乃さんの声は切実で、振り払って部屋を出るには尋常でない疲労と罪悪感に苛まれる気がした。
陽乃さんのワイシャツからは、ボタンをゆるめたために、オレンジフリルの縁がちらりと見えてしまっていた。
「もうちょっと休んだらシャワーを浴びてくださいね。あとはおとなしく……」
股間がきゅっと締め付けられる。

陽乃さんに握られているのだと認識するまでに数秒かかった。
「逃げたらぎゅってするから」
「それはマジで勘弁してください……」
脅し方が怖すぎるだろ。
「わかりましたよ。逃げません。逃げませんから」
苦笑する俺の下腹部に、陽乃さんが鼻をくっつけた。冷静になりかけた脳が一瞬で固まる。
「んー……匂いってあんまわかんないんだね」
寝ぼけ眼ですんすんと鼻を鳴らす仕草は、無邪気にも蠱惑的にも見える。陽乃さんの大胆にもほどがある行動に思考が追い付かない。理性の地盤が不安げにぐらつく。
「えーと、陽乃さん？　そろそ」
首に腕が巻きつき、気付けば唇が重なっていた。陽乃さんが呑んだ酒の匂いが鼻腔を浸す。
「ん……んふぅ……っ」
陽乃さんが顔を傾け、唇が密着する。
ぐいぐいと引き寄せられ、陽乃さんの太ももを跨ぐ形でソファにひざをついた。
ねろりと伸びた舌に唇の割れ目をなぞられ、くすぐったさに耐えかねて唇を開く。
陽乃さんの舌が、獲物を見つけた蛇のように忍び込んできた。
舌と舌が絡み合う。
唾液と唾液が混ざり合った。
吐息が熱い。くちゅりくちゅりと鳴る水音が耳朶を焼く。
唇を離した。どれだけの時間口づけをしていたのかまるで見当がつかない。時間感覚がめちゃくちゃになっていた。普通に呼吸をするという行為がひどく新鮮に思えた。
息を整えるあいだも、今しがた味わった感覚が何度も何度も生々しく脳内再生される。
人の身体がこんなに柔らかいだなんて。
人の鳴らす音がこんなにいやらしいだなんて。

人の匂いがこんなにも濃厚だなんて……知らなかった。
「……ふふ、おっきくなってる」
陽乃さんが目を三日月のように細め、ジーンズにできた膨らみを嬉しそうにさする。
「……わかりました。わかりましたよ」
ここまでされて帰るわけにもいかない。陽乃さんの隣に座り、タクシーに乗る前に買ったミネラルウォーターを差し出した。
「残りますから、とりあえず水を飲んでください」
「心配してくれるんだ？」
「当たり前ですって」
陽乃さんが目をぱちくりとさせる。あれ、なんかおかしいこと言ったかしら……？
「比企谷くんはお兄ちゃんだねぇ」
「それ、素直に誉め言葉として受け取っていいんですかね……」
「褒めてるよ。今はね」
ずっと前に同じことを言われたときは、含みがあるどころの言い方ではなかった。けれど今、陽乃さんは無邪気に笑っている。
陽乃さんはミネラルウォーターをくぴくぴと飲みながら俺の腕に抱きつき、飲み終わると俺の太ももや股間の膨らみをまさぐってきた。
「……先に言っときますけど、俺、初めてなんで」
「だよねー。や、逆に経験あったらびっくりだし」
「失礼すぎません？」
陽乃さんがけらけらと笑う。二の腕に遠慮なく押し付けられる胸。深い谷間がむにゅむにゅと柔らかくひしゃげる。
「だって、君は高校はあんな感じだし、大学生になってからは夜はだいたいわたしといたでしょ？」
「呼び出しはもはや仕事の一種だと思ってましたね……」
大学に入ってから、俺は頻繁に陽乃さんに呼び出されるようになった。ゼミだの面倒な人付き合いだのに疲れたからと、俺が未成年で呑めないのも構わずバーに呼びつけ、かぱかぱと酒を呑み、俺とくだら

ない話をし続けた。
なんだかんだでこの人とふたりきりで話した時間はかなり長い。少なくとも週一回、多いときは週四回は呼び出しをくらっていた。体育会系にもほどがある。
理不尽な呼び出しに応え続けたのは我ながら驚きだが、このパワハラ上等な魔王様と過ごす時間がそれなりに心地良かったのかもしれない。
「同じ学部の女の子と話しても、わたしと比べちゃって物足りなくて……って感じにならなかった？」
「……んなことないですけど」
うそ。めっちゃあった。外見がどうこうではなく、知性的な意味での充実感というものがこの人は段違いなのだ。おかげで他の人と話したときのこれじゃない感が尋常じゃなかった。
ていうかこの人、そこまで意図してたのか。
「性格悪すぎません？」
「何を今さら」
「ですよね……」
「ですよねとはなんだ、ですよねとは」
むーと唇を尖らせ、股間をさすりながら喉にちゅっ、ちゅっと口づけをしてくる。美貌を愛くるしさでくるんで、そこに卑猥な仕草を足したような状態。暴力的な魅力にくらくらする。
陽乃さんが俺のあごをつまみ、くいと上げる。
「ね、もう大丈夫だから。……触って？」
しっとりした声で囁き、唇を押し付けてくる。甘えるように舌をくねらせ、猫が水を飲むようにぴちゃぴちゃと音を鳴らす。
「……どこから触るといいですか？」
「どこからでもいいよ。わたしのこと好きにしていいから。……ここ、すごいことになってる」
破壊力抜群の言葉に、ジーンズは痛いほど張り詰めていた。陽乃さんがくすくすと笑い、ぽんぽんとあやすように膨らみを撫でる。顔がすこぶる熱い。

「それじゃあ……」
まずは艶やかな黒髪にぽんと手を置く。
「お？　焦らすねー」
愉快そうに囁く陽乃さんの頭は驚くほど小さい。くしくしと、小さい頃の小町にしていたような手つきで優しく撫でる。陽乃さんの黒髪は濡れたような艶をしていて、傷みという概念を知らないかのようになめらかだ。
「どうですか？」
「ん……気持ち良い」
どこかとろんとした表情の陽乃さんに、思わずごくりと喉が鳴る。
「……ん？」
梳くように黒髪を撫でていると、陽乃さんのおとがいがかすかに震えていることに気付く。
肩を抱き寄せたときと似たような反応に首をかしげていると、
「ね、もっと……いろんなとこ、触って……？」
陽乃さんが顔を逸らし、黒髪を耳にかける。いろんなとこ、と言う割に部位を指定する辺りが陽乃さんらしい。
そっと触れた耳は、目で見るよりもずっと小さく、柔らかかった。
「あっ……ん……っ」
陽乃さんが瑞々しい唇をか細く震わせる。耳の形を人差し指と親指でじっくりとなぞるだけでぞくぞくする。こんなに耳に意識を集中させたことはなかった。陽乃さんは髪を触ったとき以上に恍惚とした表情を浮かべている。こんな無防備な彼女を見る日が来るとは。
「えっ、あ、両方は、ちょっと、恥ずかし……ぁ……っ」
両方の耳を同時に触る。陽乃さんが色っぽく眉をひそめ、唇をかすかに開いた。
「陽乃さん……なんか、めちゃくちゃエロくないですか」
「……思った以上に興奮してるみたいでなにより」
陽乃さんが股間の膨らみをつかみ、すりすりと撫でる。その瞳にいつもの鋭さはなく、俺に身を委ねきっているように見える。
「首とか、喉はどうですか」

「ん……触ってみて？」
　両手を下にすべらせる。両頬に手を触れたとき、無性に陽乃さんが欲しくなって唇を重ねた。陽乃さんの腕が首に巻きつく。くちくちと唾液を鳴らし、じゃれあうように舌を絡める。
「……脱線しました」
「いいよ。いくらでも脱線して」
　陽乃さんがふたたび唇を重ね、お返しとばかりに耳を撫でてくる。今まで感じたことのない、むずがゆいような気持ち良さ。身じろぎする俺に、陽乃さんはいたずらっぽく笑った。
「なんか楽しいね」
「まあ……そうですね」
　陽乃さんの喉に触れる。身体の中でもことさらに細く、脆い場所。壊れ物を扱うように慎重に、触れるか触れないかのタッチで、喉からうなじにかけてゆっくりと指を這わせていく。
「あ……はっ、はぁぁ……っ、気持ち、いぃ……っ」
　陽乃さんがソファをつかみ、悩ましく身じろぎする。あごの下を撫でたときの表情は、猫のようにごろごろと鳴くのではと思うほど油断していた。
「ね、触りながら好きなとこにキスしてもいいよ？」
「……それ、俺に断る選択肢あります？」
　下唇に触れていた俺の右手中指を、陽乃さんがぬるりと咥えた。
「おぁ……っ」
　生温かい感触に下腹部が甘く疼く。陽乃さんはいたずら成功とばかりに目を細めた。
「んふぅぅ……ちゅっ、ほら、はやくぅ……っ」
　指の腹をねろねろと舐りながら急かしてくる。陽乃さんの唾液がまるで媚薬のように脳を痺れさせる。自分の指がこんなにも性的快感を得ることができるなんて知らなかった。
　指を咥えられたまま、陽乃さんの髪をそっと撫で、小さな耳に口づけをした。
「んくぅぅ……っ」

陽乃さんがぶるぶると震えた。興奮を伝えようとするかのように俺の指を夢中で舐める。小さな耳は唇がこすれるだけで敏感に反応した。ねろりと舌を挿し込む。陽乃さんの身体が強張った。そっと髪を撫でると肉感的な肢体から緊張がほどけ、耳の形に沿って舌を這わせるとまたびくびくと痙攣する。

「……逆もいいですか」

「ん……じゃあ、こっちの指、ちょうだい？」

俺が返事をする前に、陽乃さんは左手の中指をぱくりと咥えた。今度は右手で髪を撫でながら耳を舐る。陽乃さんは幾度も震え、身をよじらせた。かすかに荒らげる吐息に巻き込まれるように俺の鼓動も跳ね上がる。

「……ね、比企谷くん。わたし……まだ比企谷くんに、首から上しか触られてないんだよ？」

力の抜けた、それでいて色濃く期待の滲んだ声。

「俺もびっくりしてます。陽乃さん、すごいですね。なんか色々と」

「わたし、感じやすいから」

「……どの辺がですか？」

陽乃さんが耳を差し出すかのように顔を傾けた。そっと触れる。瑞々しい唇が開いた。

「……ぜんぶ」

人差し指を唇に添えての、秘め事めいたひとこと。

全身の細胞が燃え立つような感覚がした。

（コミケ本）雪ノ下陽乃と過ごす爛れた年末。
（1）

目を開けると、俺の腕に頭を乗せた陽乃さんがあえかな吐息をこぼした。
無防備な寝顔と長いまつ毛に見惚れながら、枕元の間接照明を点けて小さくあくびをする。充実した疲労の名残を身体のそこかしこに感じた。
「ん～……」
もぞもぞと顔を近付けてきたかと思うと、俺の胸板におでこをくしくしとこすりつけてきた。あごをくすぐる黒髪の感触。普段のめんどくささとは対照的な、猫のような甘え方。
「ん～～……」
寒いのか、さらに身体をくっつけてきた。暴力的なまでに柔らかな肉感。この人が服を着るのは寒さから身を守るためでなく、道行く人の理性を守るためなのではとさえ思える。
「……おはよ」
陽乃さんが顔を上げる。頭があごにごりっとこすれて変な声が出そうになった。
「おはようございます」
目をきゅっと閉じ、猫があくびをするかのようにぷるぷると震える。
「今何時？」
「ええっと……八時ですね」
陽乃さんの細指が胸板をそっと撫でた。静かに、けれど着実に劣情を刷り込むような蠱惑的な手つき。
「んー、眠い……」
ぽしょぽしょと吐息混じりの声でつぶやくあいだも、陽乃さんの手

はいたずらっぽく這いまわる。鎖骨に口づけをされた。骨の硬さをたしかめるように唇がすべる。胸板を撫でる指は徐々に下へすべっていき、下腹部に触れた。淡い快感に肉茎がぴくりと反応する。
「したいんですか？」
「んー……どうだろ」
だいたいこういう質問はのらりくらりとかわされる。なんだかなぁと思いつつも、腕枕をしている手で陽乃さんの耳を、もう片方の手で背中をそっと撫でた。
「あん……っ」
耳朶を打つ濡れた声にごくりと喉を鳴らす。陽乃さんがこちらをちらりと見やり、もういちど鎖骨にキスをした。
小さな耳に指を挿し込み、背中の凹凸をたしかめながら指を這わせる。
「ふっ、んっ、んふぅぅ……っ」
腕の中で陽乃さんが悩ましく身じろぎする。柔らかくひしゃげた乳房の頂はぷっくりと膨らんでいて、陽乃さんが身をくねらせるたびにくにくにと向きを変える。背中に這わせていた手を腰まですべらせ、肉尻の谷間に中指を差し込む。
「うんん……っ」
陽乃さんの喘ぎが蜜を帯びる。元々感じやすい身体は近頃さらに感じやすくなっている。
陽乃さんが顔の位置をずらした。俺の乳首に吸いつき、膨らんでいた肉竿に細指を巻きつけ、一定のリズムで優しく握る。
「お……ぁ……っ」
陽乃さんの舌の動きはいやらしい。柔らかく蠢く舌で乳首をにゅろにゅろと愛でたかと思えば、不意に固めてぐりぐりとこする。細指の巻き付いた肉竿がびくりびくりと跳ね、そのたびに陽乃さんが勝ち誇ったように目を細めるのが可愛くも腹が立つ。
肉尻の谷間に潜り込ませていた手をさらに奥へ。中指が花びらに触れる。軽いまさぐり合いしかしていないにもかかわらず、陽乃さんの性器は熱く、たっぷりと濡れていた。

「……ねえ」
俺の喉に吸いつき、甘えるような短い言葉を囁く。
「なんですか？」
あえて聞き返し、お返しに喉に吸いついた。
「あっ、だめっ」
陽乃さんの声が跳ねる。余裕のなくなった声にぞくぞくとする。
「どうしました？」
わざとらしく尋ねながら、ほんのりと汗の浮いたなめらかな喉を舐める。陽乃さんが身をよじるが、その動きは弱々しく、どこかおもねるようだ。
「だめ……それ、すぐ……イクから……っ」
そんなことを言われたら、逆効果でしかないのに。
鎖骨からおとがいの下まで何度も舌を往復させ、固めた舌先で喉仏を愛でる。
「あっ、ぅあっ、イっ、く、イク、イク……っ」
頭上から降ってくる、限界を告げる声。ぶるぶると痙攣が走り、くなりと脱力する。
「……」
何も言わずに見つめてくる。細指は竿に巻き付いたまま。
「挿れますよ」
「え～、どうしよっかなー」
「いや、さっき……」
文句を言おうとしたが、「ねえ」の二文字を陽乃さんの意思の証明とするにはあまりに弱い。
ぐだぐだと話して性欲がしぼむのももったいないので、素早く起き上がって陽乃さんの身体をころりとうつむけにした。
「きゃー、犯される～……ぅあっ」
くびれた腰を掴み、ぬるりとした膣口に躊躇なく肉槍を突き入れる。陽乃さんの背中が綺麗に反り返った。肩甲骨が寄るさまはいつ見ても美しくていやらしい。
「はっ……ふっ……ふぅぅ……っ」

枕に顔をうずめた陽乃さんが荒い息をつく。肉茎がなじむまでしばらく待っていると、むっちりとした肉尻がぴくりぴくりと揺れる。早く動いてほしいという無言の訴え。
「動きますよ」
返事は期待せず、尻肉を掴んで腰を引き、突き入れる。また引いて突き入れる。あらわになった肉槍は白濁した本気汁で濡れている。
「うあっ、はっ、はぁっ、はっ、は……っ」
陽乃さんの荒らげた声。間接照明の淡い光に照らされた陽乃さんの艶姿をもっとしっかり見たい。終わったらまずはカーテンを開けるか……と腰を振りながら考えていると、陽乃さんが後ろに手を伸ばし、俺の手首をつかんだ。
「今、どうでもいいこと考えてたでしょ」
「……なんでわかるんですか」
腰の動きは止めていなかったのに……とちょっと本気で驚く。時間にすればせいぜい数秒だったんだけれども。
「わかるって。集中してるときの比企谷くんは獣みたいな目をしてるから」
「俺ってそんな本能丸出しなんですかね……」
陽乃さんが両手で俺の手首をつかみ、楽しげに肉尻をくいくいと上下に揺らす。
「ほらほら、集中して集中してー」
「はいはい」
お望みとあらば……と、陽乃さんの手首をつかむ。
「ぁ……っ」
か細い声にぞくぞくする。華奢な手首を手綱のように引き、膣奥をどすんと突いた。
「うあうっ」
陽乃さんが硬直する中、ためらうことなく腰を振る。互いの肌が密着した状態での抽送。どすどすといった音は鳴らず、代わりににゅるにゅると淫猥な感触が肉杭を包み込む。
「あっ、ぅあっ、はぁぁっ、はぁぁぁ……っ」

陽乃さんの背中に、霧吹きを吹きかけたような汗粒が浮く。俺に手首を掴まれた状態で、陽乃さんは十本の指を蠢かせ、甘えるように俺の手を撫でる。
「比企谷くん……っ」
消え入りそうな声で名を呼び、脚を曲げて足裏で俺の腰を撫でてくる。
「ああもう……っ」
寝起きだから、本当はもっと穏やかにするつもりだった。なのに気が付けば必死で腰を振っている。動きに激しさはないが、陽乃さんの最奥をこする腰遣いをしているので消耗が激しい。
「陽乃さん……そろそろ出しますよ……っ」
返事がない。陽乃さんの身体は小刻みに痙攣していて、蜜ヒダの締め付けはずっと強いままだ。もしかしたらずっと果てているのかもしれない。
「出ます、出します……ぉ、あ……っ」
鈴口から精液が噴き出す。初めはどっ、どっ、と勢いよく。それからとくっ、とくっ、と少しずつテンポを落としながら。
「はぁぁぁ……っ」
陽乃さんが枕に突っ伏したまま長い吐息を漏らす。蜜ヒダは柔らかく蠕動し、射精に喘ぐ肉茎を丁寧に搾る。腰を動かすことなく、尿道に一滴とて残すことなく搾り取られた。
全身から力が抜け、陽乃さんに覆いかぶさる。
「……重いんだけど」
口では文句を言いながらも、俺の手に指を絡めてきゅっきゅっと握ってくる。
「すいません、もうしばらくこのままでいいですか」
実際かなり体力が吸われていた。真面目なお願いが通じたのか、
「しょうがないなー」
陽乃さんが楽しげに笑ってゆるやかに腰を左右に振る。「おふっ」と変な声が出てしまい、陽乃さんは枕に顔を突っ伏してしばらくぷるぷるしていた。

×　×　×

しばらく休憩したあと、ようやく起き上がった。俺がカーテンを開け、陽乃さんがあくびをしながら観葉植物に水をあげる。「よしよし、きみは比企谷くんと違って素直でわかりやすいねー」と完全に俺に聞こえるように言ったので、一度もやったことがないが彼女の後頭部にてしっとチョップをした。どうなることかと思ったが、陽乃さんは楽しげに笑っていた。

コップ一杯分の水を飲み、ふたりでシャワーを浴びる。

「……いや、なんでですか」

部屋着でソファに座ったところで陽乃さんの姿に気付き、思わずジト目を向けてしまう。

「え、何か変？」

くすくすと笑う陽乃さんの恰好は、なぜか俺のワイシャツ一枚という状況。

いわゆる彼シャツ。

彼シャツだ。

わざわざ言い直すくらいには破壊力が強い。

「コーヒー淹れるからゆっくりしてて？」

「あ、はい……」

膨らみを想定していない胸元はきつそうで、その頂も透けて見えてしまっている。煩悩一色になっている俺をよそに、陽乃さんは俺の頭をくしゃりと撫でた。ちらりと覗く下腹部の茂みと、朝日が差し込むキッチンに立ったときの肉尻にごくりと喉を鳴らしてしまう。

「はい、どうぞ」

「え？　あ、はい、どうもです……？」

爽やかながらも色っぽい立ち姿をぼけっと眺めすぎて、思いきり反応が遅れた。

陽乃さんは立ったままカップに口をつけ、スズ……っと小さな音を鳴らした。「うん、上出来」と目を細め、俺をちらりと見る。

「誘ってるのはわかってるよね？」

カップを片手で持ち、もう片方の手で俺の頭を撫で、下腹部の膨ら

みを優しく踏んでくる。
「コーヒー飲んだら襲うんで大丈夫です」
陽乃さんがカップを傾けたまま目を見開いた。
「……君もずいぶんと遠慮がなくなったもんだね」
「毎日挑発されてたらこうなりますって」
「そっか」
「そうですよ」
陽乃さんは俺の股間を踏んだままカップを傾ける。足の指が艶めかしく波打ち、肉槍はパンツを突き破らんばかりに張り詰めている。
「ごちそうさまでした」
「はい、お粗末さま」
陽乃さんが俺のカップを手に取り、シンクに置いて水を入れる。
首だけ振り向き、流し目を送ってくすくすと笑った。
ソファから立ち上がり、後ろから抱きしめる。
「んん……っ」
俺の腕に手を添え、色っぽく眉をひそめて震える。
「痛くないですか」
「ん……大丈夫だよ、ありがと。ま、すっごい挿れてほしくなるんだけど」
密着したままでズボンとパンツを脱ぐ。陽乃さんは肉茎をつかむと、大事そうに愛でた。
「んふぅ……っ」
おとがいを人差し指で上げて口づけをする。朝の気だるい空気。陽射しがまぶしいのか、陽乃さんは目を半分閉じていた。口内に残るコーヒーの匂いを互いの唾液が押し流していく。
ワイシャツの上から乳房に触れた。豊かな乳丘の裾野に指を這わせ、陽乃さんに見せつけながらゆっくりと頂に向かう。
「ふっ……んっ、んふぅぅ……っ」
陽乃さんが人差し指の背を噛んで甘く喘ぐ。一挙一動が的確に劣情を煽り立てる。肉茎に添えた指でゆっくりとしごかれ、溢れた先走りで肉幹がぬめつく。

「んくぅぅっ！　あっ、はっ、はぁぁぁ……っ」
ふっくらとした乳頭をつまむと、甘い嬌声が跳ねた。おとがいが、くっ、くくっ……と快感に比例するように上がっていく。内ももをこすり合わせ、腰を下げる仕草があまりに扇情的だ。
「……君ってさ、ほんとに変態だよね」
唇を震わせながら囁く。俺の唇をちろちろと舐め、すがるように竿を優しくしごく。
「手、ついてくれますか」
「……ん」
陽乃さんがシンクに手をつく。突き出された肉尻は豊満ながら全くたるんでいない。牡の劣情を煽るのにあまりにも適した形と質量。ごくりと喉を鳴らし、花びらに肉槍を当てる。たっぷりと潤んだ膣内に一気に突き入れようとすると――
「んぉっ!?」
亀頭がにゅるりとすべり、竿がむっちりした太ももに挟まれた。陽乃さんがくすくす笑っているのを見て、意図的にずらされたのだと時間差で気付く。
「なんですかこの生殺しは……」
「世の中何もかも思い通りにはいかないんだよ……んん……っ」
そのまま腰を振り始める。案の定といえば案の定で、陽乃さんの内ももはあふれ出した愛液で充分すぎるくらいにすべった。亀頭が花びらをかき分けるたびに新たな蜜液が溢れるので、卑猥なぬめりと太ももの肉感をたっぷり味わうことができる。
「もう……生意気だぞ……っ？」
左手で俺の頭を抱き、もう片方の手のひらで太ももから覗いた亀頭を撫でまわす。
「ぐ……ぁ……っ、ちょ、それ、反則……っ!?」
たまらず腰を引けば陽乃さんが肉尻を押し付け、剥き出しになった亀頭を手のひらでこする。
「あれー？　どうしたのかなー比企谷くーん？　さっきからぴくぴくして可愛いけど……っ」

腰を引き、陽乃さんが肉尻で追ってきたタイミングを見計らって肉杭の角度を変え、柔らかな膣ヒダに一気に突き入れた。抵抗できぬよう白くなめらかな喉に吸いつき、シャツのボタンを開けて直に乳頭をつまむ。
「あっ、ぅあっ、あっ、はぁっ、んくぅっ、あっ、あっ、あっ、あ……っ」
陽乃さんの声が壊れたかのように余裕を失う。ただ、そうしているあいだも蜜ヒダはうねうねと蠢動して肉槍を食い締めてくる。
「陽乃さん、エロすぎですって……っ」
乳頭だけつまむのが我慢できず、豊かな乳房を揉みくちゃにする。行為中の陽乃さんはどこを触ってもわかりやすいほど大きく、そして色っぽく反応してくれる。十本指を乳肉に食い込ませ、波打たせながら、ぬるぬるの膣洞に何度も何度も突き入れる。
「あっ……はぁぁぁ……っ。ひきがや、くぅん……っ」
俺の髪に指を差し込み、蕩けきった顔を向けてくれる。無防備な顔を見せてくれる嬉しさと、はまり込んだら二度と抜けられそうな恐怖が同時に込み上げ、理性をかき乱す。
「陽乃さん……もう……出そうです……っ」
「ん……いいよ、たくさん出して……っ？」
耳にぴったりと唇を押し当て、嬉しそうに囁く。直後、にゅるりと舌が挿し込まれた。
「ほら、はやくぅ……」
俺の頭を撫でながら、もう片方の手で俺の手の甲をさすり、蜜ヒダが追い詰めるように、貪るように食い締めてくる。甘痒い射精欲求。一刻も早く射精してこの人の中を満たしたい。
「出ます……出る、出る……っ」
陽乃さんが俺の喉に吸いついた。それと同時に両手で俺の手を掴んで逃げられないようにする。どぐんどぐん、と身体全体が心臓になったかのような強烈な射精。冬の朝日が差し込むキッチンとは思えない淫靡な空気の中、陽乃さんがぴちゃぴちゃと音を立てて喉仏を舐る。
「おぉ……おぉぉぉ……っ」

射精が収まっても、陽乃さんは唇を離さず、手を放そうともしない。
しばらくのあいだ、陽乃さんにゆるやかに拘束されたまま立ち尽くしていた。
「はー、気持ちよかったー」
肉槍を引き抜くと、陽乃さんは「すっきり！」と言わんばかりに両腕を上に伸ばした。なんでこの人こんなに元気なのん……？
「陽乃さんは魔人かなんかですか……おぁっ」
するりと腰を下ろしてひざ立ちになった陽乃さんが、ためらいなく肉竿を口に含む。精液と愛液にまみれ、半勃起状態の肉茎。丹念に舌が這い回り、温かな口内でむくむくと膨らむ。
「よし、それじゃコーヒーもう一杯飲もっか」
「鬼畜すぎません？」
すっかり臨戦態勢になっているというのに。しかし陽乃さんは楽しげに勃起肉を人差し指でぴーんぴーんと弾くと、本当にコーヒーのおかわりを淹れ始めた。
今日も今日とて、俺は陽乃さんに振り回されている。

× × ×

陽乃さんとこうして過ごすようになったきっかけは、今年――大学二年の夏のことだった。入学当初からしょっちゅう彼女に呼び出されていたのだが、ある日珍しく酔いすぎた陽乃さんを家に送り届け……そこで関係が一変した。とは言いつつもしばらくは（主に俺が原因で）曖昧な関係が続き、なんだかんだで恋人関係になり、気付けば年末を迎えている。時間にすれば半年にも満たない期間だが、人生でも指折りの濃い時間を過ごしてきた。
近頃の陽乃さんは――元々綺麗だったことは充分わかりつつも――いよいよ人間離れした美しさに達している気がする。
街ですれ違った人は、老若男女問わず陽乃さんに目を奪われる。思春期男子に至ってはグループ全員で食い入るように見つめる。もともと破壊力の高い童貞スレイヤーともいえる容姿だったが、街行く人々の視線の熱量はここ数ヶ月で明らかに上がっていた。

「比企谷くん、さっきからわたしの顔見てどうしたの？　変態みたいだよ？　変態」
「みたい、って言ったあとに普通に変態呼ばわりするのやめてくれません？」
　昼食をとってソファでまったりしていると、頬を人差し指でぷすぷすとつつかれた。陽乃さんの顔をずっと見つめてしまっていたのは事実なので、小声で「すんません」と謝る。
「何考えてたの？」
「言いません」
「わたしがどんどん綺麗になってるなー、可愛いなー、エッチだなーって思ってたんだ」
「……」
「比企谷くんは可愛いなー。うりうりー」
　頬をぷすぷす、ぷすぷす、ぷすぷす。障子だったらマシンガンでも撃ち込まれたのかってくらい穴があきそう。
「ま、言わんとしてることはわかるよ」
「まだ何も言ってないですけど」
「はいはいそうですねー」
「真面目に取り合ってくれない……」
　陽乃さんが自分の頬をぺたぺたと触る。
「最近肌の調子がすっごい良いんだよね。体調によってある程度変わるんだけど、その水準がびっくりするくらい上がってるの」
　ほら、触ってみて？　と手を引かれ、ほっぺたに触れる。
「……たしかに」
　柔らかくて、もちもちと弾力がある。ちょっと引っ張ってみると楽しげに笑った。陽乃さんは意外とこういう行為に寛容だと最近気付いた。
「毎日誰かさんに可愛がってもらってるからねー」
　陽乃さんの手が太ももにそっと触れる。こういうとき、陽乃さんの行動はふたつにわかれる。ひとつは思わせぶりに撫でただけで猫のように離れるパターン。もはや魔人かってくらいあざとい。魔人は

たぶんあざとくないけど。
　そしてもうひとつは、遠まわしに誘惑するパターン。
「今日はなんも予定ないんですよね」
「そうだねー。外食もいいけど、君で……君と自由に遊べるからうちにいるのが一番だなー」
「君『で』って言ったのが思いきり聞こえてんですけど……まあ、うちが一番なのは間違いないですね」
　陽乃さんが話を続けながら俺の下を脱がせにかかる。たまに気まぐれで拒否すると、唇を尖らせて二の腕に頭突きしてくるんだけれど（可愛い）、今回は素直に腰を上げた。
「え、上もですか……」
　上着のボタンを外されて脱ぎ捨て、万歳をしてTシャツまで脱がされる。鎖骨に吸いつかれてぶるりと震えた。
「ん、とりあえずこれくらいで許してあげる」
「追いはぎかなんかですか？」
「比企谷くんはそれくらいがちょうどいいよ」
「俺に人権はなかった……？」
　陽乃さんがくすくすと笑いながら、ごく自然にしなだれかかってくる。肩にさらりと触れる艶髪の感触。
「男の人ってさ、普通こんなに出せるものなの？」
　半勃起した膨らみをさすりながら陽乃さんが尋ねる。
「他の人は知らないですけど……俺に関して言えば、陽乃さんとするようになってから明らかに回数は増えてますね」
「へー、そうなんだ？」
「ていうか増やせなかったら今頃干からびてますよ」
「あはは、たしかにね」
　耳たぶをぱくりと咥えられる。「んふー」という上機嫌な甘え声。勃起は細指の中で確実に育っていた。ボクサーパンツの膨らみにできた先走りの染みを陽乃さんが指先でくりくりと撫でまわし、目の前でちろりと舐める。
「んー……しょっぱい」

文句を言いながら嬉しそうな笑みを浮かべる。この人捻くれすぎじゃない？

「比企谷くん、こういうのも好きだよね」

「陽乃さんがエロすぎるからですけどね」

「今度逆痴漢でもやってみる？」

「その場合反撃しますよ」

「そしたらわたしは素直に叫ぶね」

「叫ばれる前に喘がせますから」

「……それはちょっと恥ずかしい」

珍しく言い負かした（？）と思ったが、どうやら陽乃さんの意識は完全に下腹部に向いているようだった。パンツの太もも側から指がすべり込む。自分の身体の中に入り込まれたかのような感覚にぞくりとする。

「また大きくなった」

パンツに潜り込ませた手で竿の根元や玉袋を丁寧に、執拗なまでに撫でまわす。どれくらい精子が残っているかを確かめるかのように。空いた手はずっと胸板を這いまわっている。

「陽乃さん……どんどんエロくなってません？」

平日は時間が限られるのである程度自制しているが、金曜夜から休日にかけて、予定がない日はとにかくすさまじい。時間と体力が許す限り身体を貪りあうのが常になっていた。

「一回ね、ほんとにセックス依存症なんじゃないかって思ったの」

「え」

目を見開く俺のパンツの縁に指を引っかけ、するりと脱がすと、

「でもね、チェックリストで調べるとぜんぜんそんなことないっぽいんだよね」

勢いよく飛び出した肉竿の先端をぱくりと咥え、俺の腹筋をたしかめながらもう片方の手でパンツを足首から抜く。

「君としかしたいと思わないし、別に君に『今日はだめですよぉ～』って言われたら切り替えられるしね」

「今の信じられないくらい気の抜けた裏声ってもしかして俺の真似で

すか」
「もちろん」
「悪意ありすぎません？」
　亀頭が温もりに包まれる。くぷっ、くぽっ、と音を鳴らし、口を離す。俺をじぃぃ……っと見つめながら、これ見よがしにちろちろと亀頭を舐める。噴き出したカウパーを美味しそうに啜り、小さな声で
「しょっぱい」とつぶやいた。嬉しそうな、それでいてどこか幼い声。
「仕事に行くときもちゃんと切り替えてるし」
「出かける三十秒前まで搾られてるときもあるんですが」
「ぎりぎりまで君としてたいけど、挿れられたらもう出かけるどころじゃなくなるからっていう健気な乙女心ですよ」
「健気……乙女心……？」
　あとで改めて意味を調べたい。
　まあ、ね……と囁き、竿の根元をゆるゆるとしごきながら鼻先を触れ合わせる。
「専業主婦になって、君にずっと調教されるのも楽しそうだけどね」
　ねろりと伸びてきた舌に自分の舌を絡める。細指が巻き付いた勃起肉がびきりと張り詰めた。
「毎日毎日たくさんして、君がムラムラしすぎて昼休みに帰ってくるようにしちゃうから」
　何をそんなばかな……と思ったが、この人の沼にハマったらあり得そうで怖い。はるのんの沼……やだ、ぜったい底なし沼じゃん……。
「今、ちょっといいかもって思ったでしょ」
「そんなことは、うん、ええと、ない、です、はい」
「前よりも欲望に素直になってくれたねー。お姉さんは嬉しいぞ？」
　ささやかな仕返しにルームウェア越しに尻を撫でると、陽乃さんは色っぽく眉をひそめた。
「こら、今は大事な話の途中でしょ？」
「え、どの口が……？」
　本気で驚いてしまった。
「君に触られるとしたくなっちゃうから、ずっとわたしのターンね」

「理不尽にもほどがある……」
「ちなみに君が在宅で働く場合、わたしは薄着でうろついてます」
「なんですかその新手の拷問は……。まあ、ちょっかい出されないように縛って放置プレイでもしますかね」
陽乃さんが目をぱちくりさせ、それからけらけらと笑うと、
「ほんとにしたかったらしてもいいよ？」
「え、じゃあほんとにやります？」
強気に攻めたとたんに陽乃さんの瞳が揺れる。
「おぁっ、ちょ……っ」
先走りですべりがよくなった竿をちゅこちゅことしごかれて悶絶する。
「……ま、検討しとこっかな。縛られるのはありだけど、放置はさびしいし」
「え、可愛すぎません？」
頬をむにーと引っ張られた。唇を尖らせてるところも可愛いと伝えたいが、両頬を引っ張られているので言うに言えない。
陽乃さんがルームウェアを素早く脱いだ。するりとしなだれかかり、肉竿を口に含む。
「ん……ふっ、んん……っ」
温かな口の中で舌が亀頭を何周にも渡って這いまわる。裏側も快感が強いが、表側は表側で慣れていないぶん快感が強い。
「君はどんどん調子に乗って……お姉さんは悲しいなー」
そんなことを言いつつも、陽乃さんの目は完全にスイッチが入っている。出勤前でもいったんこのモードに入ると、最低でも３０分は口を離してくれない。
「んー……やらしい汁、いっぱい出てる」
伸ばした舌がカリのくびれをなぞる。噴き出したカウパー液をちゅっ、ちゅっと吸い、うっとりと目を細める。
「陽乃さんだって……」
ふりふりと揺れる肉尻の割れ目に指をすべりこませると、くちゅりと卑猥な水音がした。陽乃さんがきゅっと眉をひそめ、快感をごまか

すように内頬に亀頭をすっぽりと入れる。
「ほら、早く舐めてください」
黒髪をくしくしと撫で、花びらに指をつけては離しを繰り返して水音を大きく鳴らす。
「んふぅぅ……ふっ、んっ、んっ、んっ、ん……っ」
陽乃さんがこちらに身体を向け、規則正しいリズムで顔を前後に揺らす。剥き出しになった乳房と花びらに指を添え、乳頭をまさぐりながら花びらに指を入れる。濡れそぼった膣ヒダの中でもひときわ柔らかい場所を指先で幾度も押す。
「んぐぅぅ……ふっ、んふぅぅ……っ？」
口を離して何かを言おうとしたが、俺から腰を突き出してそれを止める。陽乃さんは恨めしそうに見つめながらも、玉袋を手でさすり、すぼめた唇を竿にすべらせる。
「陽乃さん……もう、出そう、です……っ」
蜜洞に浸した指をぐっぷぐっぷと鳴らしながら告げる。うなずく陽乃さんの目は、快感と呼吸の苦しさが相まって虚ろになっていた。
ぴっちりと締めた唇でカリ首を弾かれる快感にしばらくこらえたところで、心地よい射精感が湧きあがってきた。
「出ます、出る、出る……っ」
乳頭を強くつまみ、膣ヒダを指でぐっと押す。温かな口の中に精液が勢いよく噴き出した。
「んぐぅぅ……っ。んっく、ふっ、んふぅぅっ、んふぅぅぅ……っ」
絶頂のさざ波が身体を駆け抜けるあいだも、陽乃さんは唇をすべらせる。噴き出した白濁はこぼすことなくすべて細喉の奥に消えた。
「はぁ、はぁぁ、はぁぁぁ……っ」
陽乃さんが唇を離す。亀頭と唇のあいだにわずかに白濁した糸が引き、それを陽乃さんはちゅるりと啜った。
「すげぇ気持ちよかったです……。あ、さっき何を言おうとしたんですか？」
乳頭と膣への愛撫を続けながら尋ねる。
「えっと……あっ、んんっ、こ、らぁ……っ」

甘え声を漏らして身をくねらせる仕草があまりに色っぽい。
「……せっかく舐めてるのに、こんなふうに気持ちよくされたら挿れてほしくなっちゃうって言おうとしてた」
「……それ聞いてたら、途中で押し倒してたかもしれないです」
「だよねー」
陽乃さんがくすくすと笑い、膣から抜いた俺の指をためらいなく咥え込む。にゅるにゅると舌が這いまわる感触に背すじが粟立つ。さりげなく乳首もさすられ、情けないほどに震える。
「もう一回くらいはできるよね？」
「もう一回したら夜まではしないですよね？」
「善処します」
「すげぇいい笑顔で言われた……これぜったいだめなやつだ……」
陽乃さんが鼻歌まじりに俺にまたがり、人差し指と中指を鉤状に曲げて竿をつまんだ。